星の海へ

ステルス兄貴

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無限に広がる大宇宙。そこには様々な生命の営みで溢れている。そして、次元の壁を越えると、そこには数々の可能性の世界が広がり、いくつもの宇宙が存在していた。

宇宙戦艦ヤマトと魔法少女リリカルなのはのクロスオーバーで、他の二次サイトに展示していたものをリメイクしました。

話の展開、一部設定についてＥＦ１２　１さんのご承諾・ご協力を頂いております。

目次

登場人物紹介　（宇宙戦艦ヤマト）　1
登場人物　（魔法少女リリカルなのは）　41
登場艦船　地球防衛軍・時空管理局　57
登場艦船　ガミラス　85
登場艦船　ガトランティス　106
登場艦船　暗黒星団帝国　デザリアム　117
登場艦船　ボラー連邦　128
プロローグ　136
一話　出撃準備　151
二話　冥王星海戦　開戦　165
三話　冥王星海戦　敗走　183
四話　遭難　199
五話　救助　217
六話　赤い地球　236
七話　高町の血を継ぐ者　前世では異世界の魔導師　251
八話　イズモからヤマトへ・・・ヤマト計画始動　273
九話　ヤマト発進　289
十話　それぞれの思いとそれぞれの戦い　良馬編　308
十一話　それぞれの思いとそれぞれの戦い　桜花編　326
十二話　それぞれの思いとそれぞれの戦い　ギンガ編　343
十三話　再建、復興　帰還と卒業　362
十四話　ギンガさんの純愛道　前編　380
十五話　ギンガさんの純愛道　後編　397
十六話　それぞれの秘密　415

十七話　束の間の平穏 437
十八話　暗雲 457
番外編　中嶋加奈江の回想録 478
十九話　離反 514
二十話　汚名返上 535
二十一話　遭遇 555
二十二話　すくね　奮戦 573
二十三話　好敵手 592
二十四話　テレザートのテレサ 617
二十五話　決戦だョ！全艦集合!! 640
二十六話　大和とヤマト 660
二十七話　土星圏　フェーベ会戦　索敵 681
二十八話　土星圏　フェーベ会戦　殲滅 700
二十九話　土星圏絶対防衛ライン 720
三十話　地球防衛艦隊壊滅 740
三十一話　敗残軍 757
三十二話　絶望からの出撃 780
三十三話　挺身隊 800
三十四話　テレサの愛・・・・ 821
三十五話　凱旋にあらず、英雄にあらず 840
三十六話　門出 857
三十七話　地球は再建途中　ガミラスは崩壊・消滅 876
三十八話　訓練から実戦へ　雷王作戦始動 895
三十九話　土星圏　遭遇するもの　遭難するもの 914
四十話　土星圏　蘇るもの　救助されるもの 936

四十一話　Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ・・・・もとい、お話をしましょう　前編 958
四十二話　Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ・・・・もとい、お話をしましょう　後編 976
四十三話　ガミラスの戦い 993
四十四話　アスタル破壊 1013
四十五話　太陽系赤道祭 1030
四十六話　α星の戦い 1053
四十七話　七色星団の戦い　クーギスの復讐 1077
四十八話　サイレンの魔女 1098
四十九話　悪魔の実験 1118
五十話　再会 1140
五十一話　シャンブロウへの誘い　ようこそ、大和ホテルへ 1163
五十二話　大和ホテルでの邂逅　前編 1183
五十三話　大和ホテルでの邂逅　後編 1202
五十四話　ジレルの女王 1226
五十五話　シャンブロウ海戦 1249
五十六話　星巡る方舟の旅立ち 1267
五十七話　マゼラン雲突入 1284
五十八話　対決、プレアデス 1304
五十九話　嵐の前の静けさ 1326
六十話　蛸壺・・・もとい、自動要塞ゴルバ出現 1347
六十一話　新たなる旅立ち 1371
六十二話　防衛軍は寄り道、管理局は迷走 1399
六十三話　帰還 1422

六十四話　もう一つの地球 ―― 1444
六十五話　２００年後の海鳴 ―― 1465
六十六話　ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ ―― 1487
六十七話　時には昔の話を ―― 1511
六十八話　組織の闇 ―― 1530
六十九話　クリスマス ―― 1545
七十話　向こうの地球の子孫たち ―― 1572
七十一話　年末騒動 ―― 1595
七十二話　悩みは深し管理局　でも、地球はそんなの関係ねぇ ―― 1615
七十三話　年明け論争 ―― 1641
七十四話　論争の余波と新たなる暗雲 ―― 1659
七十五話　法の舟は再び星の海へと船出する ―― 1673
七十六話　管理局、悪夢の幕開け ―― 1698
七十七話　管理局悪夢の日 ―― 1719
七十八話　それぞれの思い ―― 1745
七十九話　終戦 ―― 1765
八十話　嵐がやって来る・・・・ ―― 1791
八十一話　船は行く・・・・ ―― 1815
八十二話　武力制裁 ―― 1831
八十三話　布告なき戦争 ―― 1846
八十四話　敗戦 ―― 1867
八十五話　再建と陰謀 ―― 1886
八十六話　探査、解放 ―― 1904
八十七話　時を駆け抜けた聖王陛下（幼女） ―― 1922

八十八話　再会と回転寿司　1942
八十九話　バイキングレストランの悲劇とヴィヴィオのデバイス
1962
九十話　久しぶりの・・・・　1985
九十一話　船出　2001
九十二話　嵐は来る　2018
九十三話　地球占領　2036
九十四話　パルチザン結成　2059
九十五話　再会を信じて　2081
九十六話　レジスタンス活動　2102
九十七話　ミヨーズのあぎと・ティアナの決意　2124
九十八話　中間補給基地　2147
九十九話　白い花　2172
百話　狩人ミヨーズの最後　2195
百一話　亡命者　2215
百二話　交渉・不審　2233
百三話　ゴルバ再臨　2255
百四話　二重銀河へ・・・・　2275
百五話　手掛かりを求めて・・・・　2295
百六話　兵器製造プラント　2315
百七話　プラント破壊・救出　2334
百八話　褐色矮星・新たなる罠の予感　2353
百九話　侵入者　2372
百十話　侵入者2　2393
百十一話　サーグラスからの挑戦　2417

百十二話　司令部襲撃　435
百十三話　それぞれの覚悟　452
百十四話　正義とは？　476
百十五話　隠された星　492
百十六話　バース星　513
百十七話　疑惑の星　532
百十八話　サーシアの決意　554
百十九話　行動開始　573
百二十話　決着　593
百二十一話　重核子爆弾占領作戦　612
百二十二話　人工都市　633
百二十三話　二重銀河の崩壊　650
百二十四話　戦後処理　670
百二十五話　交信再開　690
百二十六話　交信日の夜の出来事　710
百二十七話　交信口論　731
百二十八話　様々な思惑　751
百二十九話　決断　770
百三十話　帰国準備　790
百三十一話　会合　809
百三十二話　帰国　829
百三十三話　鹵獲・返答　849
百三十四話　一段落　869
百三十五話　ギンガからの手紙　889
百三十六話　デバイス登録手続き　909

百三十七話　予兆？　――――――

百六十一話　元流刑惑星バース　410
百六十二話　暗雲バジウド星系　423
百六十三話　牙をむくボラー次元潜行艦隊　452
百六十四話　殲滅・亜空間襲撃艦隊　473
百六十五話　ガルマン・ガミラスへ・・・・　496
百六十六話　ガルマン・ガミラス建国紀元一周年　515
百六十七話　太陽の怒り　536
百六十八話　宇宙の巡礼者たち　558
百六十九話　惑星ファンタムへの道＆管理世界での出来事　583
百七十話　惑星ファンタム上陸　597
百七十一話　幻の正体を突き止めろ　619
百七十二話　ルダ王女　641
百七十三話　さらば幻の星・遺跡調査　664
百七十四話　スカラゲック海峡星団　アリゾナ発見!!　680
百七十五話　スカラゲック海峡星団会戦　701
百七十六話　シャルバート星の秘密　720
百七十七話　あの太陽を撃て　741
百七十八話　終息　760
百七十九話　管理局の闇　776
百八十話　訪問者　796
百八十一話　ミッドと地球での出来事　パートⅡ　815
百八十二話　八雲　就役　831
百八十三話　バース星へ・・・フェイトの士官学校生活　851
百八十四　バース星へのお届け物　871
百八十五話　バジウド星系哨戒任務　889

百八十六話　アルザスの竜伝説 ―― 909
百八十七話　敵輸送船団殲滅作戦 ―― 923
百八十八話　結婚相談・ディエチの捜査 ―― 952
百八十九話　ディエチの捜査そのⅡ ―― 972
百九十話　ディエチの捜査そのⅢ ―― 993
百九一話　救援任務 ―― 1439
百九十二話　救援任務そのⅡ ―― 1540
403

登場人物紹介　（宇宙戦艦ヤマト）

月村　良馬

この物語の主人公。

良介と忍との間に生まれた子供の子孫。

プロローグの時点での年齢は４～５歳。

良介から受け継いだ法術の力はこれまで産まれてきた子供たちの中では一番強い・・・・らしい・・・・。

世代を重ね、夜の一族としての血は少し薄くなったが、常人と比べ、身体機能はそれなりにある。

ガミラス戦役時は宇宙巡洋艦　三笠　の艦長として戦い抜き、ヤマト帰還後の地球復興時にはヤマト改級宇宙戦艦　まほろば　の艦長となる。

月村　忍

月村家の現当主であり、月村グループの総裁。

高校時代に海鳴の町に偶然流れ着いたある青年と交際を重ね、最終的には彼との間に子供を設ける。

夜の一族故、人間だった旦那とは死別し、百年以上生きている。

その後も自分達の子孫を見守り続けてきた。

忍にとって良馬は大孫だが、良馬にとって忍は大婆ちゃんというよりも、母親に近い存在となっている。

ノエル・Ｋ・エーアリヒカイト

とらハ３の設定同様、見かけは全く人間と変わらないが、その正体は自律して動く「自動人形」。

『エーディリヒ式』と呼ばれる戦闘及び護衛仕様で、動かなくなっていたものを忍が２年かけてレストアした。

ロケットパンチ等の武装だけでなく、味覚や食事行為など、殆ど人間と同様の機能を持たせた。

良馬にとって忍に次ぐ母親に近い存在。

リニス
プレシア・テスタロッサの使い魔であり、フェイト・テスタロッサの育ての親とも呼べる存在だった。
フェイトのデバイスであるバルディッシュの製作者であり、その名付け親でもある。
プレシアとの契約が切れ、自分が消える姿をフェイトに見せまいと、ランダム転移した結果、異世界（パラレルワールド）の月村家の庭に転移、良馬の法術により、命を長らえた。
ガミラスが地球に侵略してきた時、良馬共々防衛軍士官学校へ入校し、ガミラス戦役時は宇宙巡洋艦　三笠の軍医となり、ヤマト帰還後の地球復興時にはヤマト改級宇宙戦艦　まほろば　の軍医となった。

高町　恭介
平行世界（パラレルワールド）における高町なのはの子孫。
良馬の士官学校の同期生。
ガミラス戦役時には宇宙駆逐　冬月の艦長。
冥王星海戦にて、艦隊旗艦の　えいゆう　と　三笠　を撤退させる為、ガミラス艦隊に突入し、戦死する。
容姿　ゲームメーカーｋｅｙから販売されたリトルバスターズの登場キャラ棗恭介。

沖田　一
良馬、恭介と同じ、士官学校の同期生。
父は後にヤマト艦長に就任する沖田十三。
既婚者であったが、妻とは死別している。
ガミラス戦役時には宇宙駆逐　冬月の航海長。
冥王星海戦にて恭介らと共に戦死する。
容姿　アニメ機動戦艦ナデシコの主人公、テンカワアキト。

沖田　雫　（故人）

沖田一の奥さんで沖田十三の義理の娘。
ガミラス戦役時に命を落とす。
容姿　アニメ機動戦艦ナデシコのヒロイン、ミスマルユリカ

三木　幹夫
ＰＳ版宇宙戦艦ヤマト　愛の戦士　に登場したゲームオリジナルキャラ。
ガミラス戦役時には宇宙巡洋艦　三笠の副長で良馬と共に戦い、良馬を支えた。
ヤマト帰還後の地球復興時には良馬とは別の艦に異動となり、冥王星駐屯基地所属の宇宙巡洋艦　すくね　の艦長となる。
テレザートを目指すヤマトの護衛の為、『すくね』は冥王星基地よりヤマトへの援軍として送られるが、気流星団にて演習中だった彗星帝国のミサイル艦隊からヤマトを守るべく前面に立ちはだかり、すくねは轟沈し、三木自身も壮絶な戦死を遂げた。

ディアーチェ・Ｋ（コンドウ）・クローディア
ガミラス戦役時には宇宙巡洋艦、三笠の主計科長兼厨房長。
料理の腕はプロ並みの腕を持つ。
ヤマト帰還後の地球復興時にはヤマト改級宇宙戦艦　まほろばの主計科長兼厨房長となる。
容姿は名前の通り、魔法少女リリカルなのはＩＮＮＯＣＥＮＴのディアーチェ・Ｋ・クローディアをもう少し大人びた姿にした感じ。
魔法少女リリカルなのはＩＮＮＯＣＥＮＴのディアーチェ・Ｋ・クローディアのＫはキングスでしたが、このディアーチェには日本人の血を混ぜて、尚且つ、ヤマトシリーズでは、新撰組の方々の名前が多く使われているので、Ｋは新撰組局長、近藤　勇の近藤のＫを採用しました。

永倉　新一
ガミラス戦役時には宇宙巡洋艦、三笠の航海長。

ヤマト帰還後の地球復興時にはヤマト改級宇宙戦艦　まほろばの航海長となる。
容姿は薄桜鬼の登場キャラ、永倉新八。

井上　貫一郎
ガミラス戦役時には宇宙巡洋艦、三笠の機関長。
ヤマト帰還後の地球復興時にはヤマト改級宇宙戦艦　まほろばの機関長。
艦では乗員の父親的存在で頼りにされている。
容姿　漫画家　松本零士先生の原作、コスモウォーリア零の登場キャラ、海原武士。

沖田　十三
地球防衛軍艦隊歴戦の宇宙戦士にして優秀な物理学者。
沖田一の父親でもある。
冥王星海戦までの役職は地球防衛軍日本連合宇宙艦隊司令長官。
第二次内惑星戦争にて第二次内惑星戦争で勇名を馳せたほか、カ2号作戦（第2次火星沖海戦）において初めてガミラス艦隊を退けることに成功した為、英雄として尊敬を集めている。
宇宙戦艦ヤマト２１９９では、カ号作戦の際に一人息子を失っているが、この世界では、旧作同様冥王星海戦にて、息子の一を亡くした。
冥王星海戦後、宇宙戦艦ヤマト艦長となり、大マゼラン星雲の中にあるイスカンダルへと向かい、放射能除去装置を受け取り、地球へ帰還するも、宇宙放射線病にて地球を見ながら息を引き取る。

山南　修
ガミラス戦役時には宇宙戦艦　えいゆう　の艦長。
士官学校では、沖田提督の後輩にあたる。
八年前、ガミラスとのファーストコンタクト時も宇宙戦艦　えいゆう　の艦長を務めていた大ベテランの宇宙戦士。
ヤマト帰還後の地球復興時には艦を降り、士官学校の校長となる。

ガトランティス戦役後は残党軍相当の為、ガニメデ基地司令官となる。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９、２２０２の容姿ではなく、旧作の映画版、宇宙戦艦ヤマト　ヤマトよ永遠に　に登場した方の容姿。

古代　守
古代進の兄。ガミラス戦役において、護衛隊長として宇宙駆逐艦、雪風の艦長として参戦。
冥王星海戦時、艦隊司令、沖田十三の撤退命令を拒否し、ガミラスの艦隊に特攻をかけ、宇宙へと消えた。
死んだと思われていた彼はガミラス軍の捕虜となり、本国へ護送中、その艦もイスカンダル付近で遭難し、イスカンダルの女王、スターシアに救助され、一命をとりとめる。
その後、スターシアとの間で愛を育み、ヤマトが地球へ帰還する際も地球へは戻らずイスカンダルに残留した。

古代　進
古代守の弟。ガミラス戦役時には士官学校を卒業したばかりの新米士官。
同期生の島大介と共に士官学校卒業後は火星観測所勤務となっており、その人事に少し不満の様子。
白兵戦闘、パイロットスキルが高い。
ヤマト出航時には砲雷長となり、ヤマトに乗艦。
その後、病で指揮をとれなくなった沖田にかわり艦長代理としてヤマトを指揮する。
地球へ帰還後もそのままヤマト艦長代理として辺境パトロール艦隊旗艦のヤマトを指揮していた。
森雪とは婚約者の関係。

島　大介
古代進同様、ガミラス戦役時には士官学校を卒業したばかりの新米

士官で古代の親友でもある。
性格は血気盛んな古代と対照的な優等生タイプ。
普段は礼儀正しく温厚で人当たりが良いが、与えられた仕事に対する責任感は人一倍強い。
ヤマト出航時にはヤマト航海長となり、地球人類初のワープを成功させた実績を持つ。
父親も防衛軍の軍人で宇宙巡洋艦　村雨の艦長であったが、ガミラスとのファーストコンタクト時にガミラス軍の攻撃を受け、乗艦と運命を共にする。
イスカンダルからの帰還後はヤマトから空間輸送艦隊勤務となった。

美咲　七波
護衛艦で戦う少女達の奮闘を描いたアニメ作品「タクティカルロア」に登場したキャラクター。
本作品ではパトロール艦、畝傍の艦長と言う設定。
木星圏で実験をしていたワープ機関のデバイスをヤマト、まほろばへと届けに来た。
容姿は異なるが、声が物凄くティアナ・ランスターと似ていた。
容姿は原作であるタクティカルロアと同じ容姿。

ターニャ・L・コジマ
護衛艦で戦う少女達の奮闘を描いたアニメ作品「タクティカルロア」に登場したキャラクター。
本作品では新米士官と言う設定。
原作（タクティカルロア）同様、才色兼備の持ち主で、常に冷静な性格。
容姿は原作であるタクティカルロアと同じ容姿。

佐渡　酒造
中央病院に勤めている医師で沖田の主治医。

しかし、本業は獣医だったが、何故か動物相手では失敗が多く、逆に人間では失敗例があまりにも少ない。
名前どおり常時酒瓶を手放さないほど酒に依存しているが、本人曰く「浴びるくらい酔ってはいても、目は曇ってはいない」その証拠にアルコールを摂取した時の方が、手術の腕が良い。
ヤマト出航時はヤマトの軍医としてイスカンダルへの航海に参加。
イスカンダル帰還後は自営の動物病院と防衛軍の医務局を行ったり来たりしている。

土方　竜
宇宙戦士士官学校の校長で、沖田とは士官学校時代では同期だった。
良馬や古代、島の恩師である。
訓練等の苛烈ぶりから、「鬼の土方」「鬼竜」などの異名があり、土方が教官時代を務めた生徒たちは皆、土方を恐れている。
ヤマトが地球を出航後、日本連合艦隊司令官となり、ヤマトが地球へ帰還した後は防衛軍連合艦隊総司令官兼新造戦艦　アンドロメダ艦長となる。
白色彗星帝国の太陽系侵攻時には独断で地球艦隊を土星域に集結させ、バルゼー艦隊に勝利する。
その直後にワープアウトしてきた白色彗星に対しては、地球艦隊に拡散波動砲を斉射させて高速中性子ガスの除去に成功するが、その中から出現した都市帝国の攻撃によって地球艦隊は全滅し、アンドロメダも制御不能に陥る。
最後は、古代や良馬たちに通信で「生きて最後まで戦え」と言い残し、アンドロメダごと都市帝国への激突死を遂げる。

中嶋　源三郎
中嶋家の大黒柱。
地球防衛軍総務課、第五課に勤務する防衛軍軍人。
容姿は薄桜鬼の登場キャラ、近藤勇

良馬やリニスとは付き合いが長く、ガミラス戦役時には良馬が一時彼の下で働いていた為、二人に自宅を下宿先として提供する間柄。

中嶋　加奈江
源三郎の妻。
専業主婦であるが、近くの武術道場に通い、そこの師範代も務めている。
ギンガとは初対面の筈なのに何故かギンガの名前を知っていた。
その訳は、彼女は前世の記憶を持っており、前世ではギンガとスバルの母親であり、ゲンヤの奥さんであった、クイント・ナカジマが転生した姿。
容姿はギンガとスバルの母、クイント・ナカジマの髪を黒くした感じ。

中嶋　桜花
中嶋家の一人娘。
ガミラス戦役時の２１９９年現在で小学五年。
母の加奈江同様武術をたしなんでいる。
容姿はなのはｖｉｖｉｄの登場キャラ、アインハルトの髪の毛を黒くした感じ。

中嶋　ギンガ
次元漂流者だったギンガ・ナカジマがガミラスによって追い詰められている地球の現状と管理局からの救助が見込めない事から彼女は中嶋家に養子入りをした。
そして、この地球の為に何か出来る事は無いかと思い、彼女は防衛軍の士官学校へと入校した。
士官学校卒業後、ギンガは自分を助けてくれた良馬と恋人となり、２２０１年には宇宙戦艦　まほろば　の通信長に就任した。

高町　紅葉

高町家の長女。
兄、恭介を冥王星海戦で亡くし現在は天涯孤独の身であるが、戦災孤児育英法の適用を受け、源三郎と良馬が後見人となった。
高町の名の通り、死んだ母同様、魔法を使う能力を有する。
そのレベルはミッドではＳクラス並み。
母が死ぬ間際に託した自律人格形魔法制御媒体（インテリジェントデバイス）のルシフェリオン・暁を引き継いでいる。
容姿　魔法少女リリカルなのはＩＮＮＯＣＥＮＴの登場キャラ、シュテル・スタークス。
愛機　ルシフェリオン・暁
彼女が受け継いでいるのはデバイスだけでなく、加奈江同様前世の記憶を受け継いでいる転生者の一人。
前世の彼女はなのはたち同様、管理局の魔導師だったが、ある犯人を追跡中に子供を庇い瀕死の重傷を負い、そのまま殉職した。

藤堂　平九郎
地球防衛軍司令長官とヤマト計画本部長を兼任。
ガミラスの地球侵略に抵抗するとともにヤマトを秘密裏に建造し、最初は選ばれた人間を乗せる地球脱出計画を立案・策定していた。
しかし、イスカンダルから波動エンジンの設計図がもたらされたため、計画を変更してヤマトをイスカンダルへ向かわせる。
ヤマト艦長の沖田とは旧知の仲。

真田　志郎
宇宙戦士訓練学校を経て、地球防衛軍の技術士官となる。古代　進の兄、古代　守と同期で親友。
地球艦隊にとって最終決戦である冥王星会戦の時は富士山麓の地球防衛艦隊基地・第三ドックの技術長を務めていた。古代　守が艦長を務めていた駆逐艦『雪風』のを整備したが、この時同艦に地球への帰還性能を保証できなかったと悔やんでいた。
ヤマトでは、技師長兼副長を兼務する事となった。

イスカンダルからの帰還後はヤマトを降り、地上勤務の科学局局長となる。

森　雪

ヤマトの船務科、船務長。

情報・電測・船体消磁・通信・暗号・航空管制・電子機器整備等を統括する立場にある。

また佐渡医師を補佐する優秀な看護師でもある。

佐渡酒造に「大美女」と評されるほどの美貌の持ち主であるが、その性格は勝気で男勝り。

ヤマト乗艦以前は防衛軍司令部病院で看護師を務めていた。

イスカンダルからの帰還後はヤマトを降り、長官付き秘書となっている。

古代進の婚約者でもある。

ヴァルケ・シュルツ

ガミラス帝国の冥王星前線基地の司令官。

遊星爆弾で地球を攻撃し、地表に放射能を充満させ、人類滅亡まで一年を切るところまで追い込む。

冥王星基地攻略に踏み切ったヤマト対して反射衛星砲で対抗するもその衛星砲を破壊され、基地は水没し、艦隊を率いて脱出するも敵前逃亡となり、本国へ戻れない中、ヤマトに最後の戦いを挑み、敗北し戦死する。

２１９９ではガミラスの植民地惑星ザルツ星人でしたが、この世界では旧作の設定通り、ガミラス人。

ゲルフ・ガンツ

ガミラス冥王星前線基地副司令官として、司令官のシュルツを補佐する。

シュルツの命令の下、遊星爆弾による地球攻撃を指揮した。

反射衛星砲が破壊され、基地は水没。

シュルツと共に脱出するが敵前逃亡の為、本国には戻れず、シュルツと共に最後までヤマトと戦い、彼と命運を共にする。
２１９９ではガミラスの植民地惑星ザルツ星人でしたが、この世界では旧作の設定通り、ガミラス人。

スターシア・イスカンダル
イスカンダル星を統治していた王家の末裔で最後の女王。
ガミラスの遊星爆弾による放射能汚染で滅亡寸前となった地球へ、妹のサ―シアを向かわせ、超光速外宇宙航行が可能になる波動エンジンの設計図と、放射能の除去が可能になるコスモクリーナーＤをイスカンダルまで取りに来るようにというメッセージを送った。
ガミラスの捕虜となっていた古代進の兄、古代守を助け、彼に一目惚れをし、彼が地球へ帰る間際、守に告白。
守はスターシアの告白を受け、地球への帰還はせず、イスカンダルへの残留を希望する。

サーシア・イスカンダル
イスカンダル王家の第二皇女でスターシア・イスカンダルの妹。
姉であるスターシア・イスカンダルからの特命を帯び、放射能汚染で絶滅の危機に瀕していた地球人類への「イスカンダルへ放射能除去装置を取りに来るように」というメッセージと、ワープを可能にする波動エンジンの設計図を収めた通信カプセルを携えて地球へ向かっていたが、太陽系到達を目前に乗っていた宇宙船がガミラスの攻撃を受けて暴走してしまう。
火星への墜落直前に脱出艇で脱出するも、古代進と島大介に発見された際には火星の大地へ投げ出されており、右手でカプセルを握り締めたまま息絶えていた。
容姿は頭髪の長さ以外は姉のスターシアですら見間違えるほど、森雪に似ていた。

相原　義一

ヤマトの通信班長で第一艦橋に所属。
気の弱い部分もあるが、通信部門のスタッフとしては、その道のエキスパートである。
イスカンダルへの航海中、ドメルの策略により、ヤマトを脱走した事がある。
地球へ帰還後は古代と共にヤマト通信長の任をそのまま引き継ぎ、辺境パトロール任務に従事していた。

加藤　三郎
ヤマトの艦載戦闘機隊隊長。
直属の上官である戦闘班長の古代進に並ぶ熱血漢。
艦載機の操縦以外に戦闘員としての能力も高い。

南部　康雄
ヤマトの戦闘班・砲術補佐。
古代の補佐役も務めており、砲術の腕前は実は古代より上でオリンピックの射撃選手並み。
黒の太いフレームの眼鏡を掛けた顔立ちに、耳が見えないほど襟足を伸ばした髪型など温厚そうな容貌。
実家は良馬の実家、月村グループに匹敵する大企業、南部重工業公社であり、彼はそこの御曹司。
イスカンダルからの帰還後はヤマトを降り、別の艦での任務についている。

太田　健二郎
ヤマトの次席航海長で、島の補佐役。
しかし、航路計測や探査といった「操艦補佐」が専門であり、宇宙艦の操縦士ではないため、艦の操艦は行う事が無い。
やや太めの体躯や顔立ちに加え、頬に薄いそばかすを持つ、明るい熱血漢でもあり大食漢でもある。
南部・相原・加藤と共に、ヤマトの中堅を支える四人の中の一人。

イスカンダルからの帰還後はヤマトを降り、別の艦での任務についている。

山本　明夫
ヤマトの艦載機隊の副隊長。
隊長の加藤同様、エース級の腕前を持つ、凄腕のパイロット。
名前は２１９９の名前ですが、容姿は旧作の容姿で、片目が隠れる長髪の髪型。
ガトランティス戦役後、同戦役で戦死した加藤三郎に代わり、ヤマトのコスモタイガー隊の隊長を務めている。

山崎　奨
ヤマトの副機関長。
ガミラスと最初に接触して攻撃されて戦没した宇宙巡洋艦、村雨の機関長を務めていた。
イスカンダルからの帰還後はヤマトを降り、別の艦での任務についている。
ガトランティス戦役後、前任者の徳川が戦死した事により、ヤマトの機関長に就任する。

薮　助治
ヤマト機関室勤務の乗組員。
徳川の愛弟子であり、冥王星海戦では徳川と共に宇宙戦艦　えいゆう　に乗艦していた。
ヤマト計画発動後は師である徳川や上官である山崎と共にヤマトの機関科へ配属され、機関士を務める。
機関士として腕は一流だが、懐疑的な性格で、事あるごとに不安や疑問の声を上げる一面を持つ。
イスカンダルにて一部の乗員と共に森雪を拉致し、ダイヤモンド大陸へと立て籠もるが、大地震でダイヤモンド大陸はイスカンダルの海へ沈み、彼もその大陸と共に海へと沈んだ。

幕之内　勉
ヤマトの生活班炊事科に勤務する乗組員。
生活班炊事科チーフ。
大柄な体にサングラスをかけている。

平田　一
幕ノ内同様、ヤマトの生活班炊事科に勤務する乗組員。
古代　進や島　大介とは、宇宙戦士士官学校の同期生である。
見ただけで蕁麻疹が出るほどの虫嫌いである反面、メカフェチである。
そして紅茶の入れ方には拘りがある。

八神・リインフォース・シュベルト
百年以上続く老舗古本屋『八神堂』の現店主。
他にも剣術道場の師範も務めている。
旦那はガミラスとの戦争で戦死しており、母子家庭で二人の娘を育てている。
容姿　アギトとユニゾン時のシグナム。

八神・リンフォース・アギト
八神家の長女。
火憐と同じ、空手道場に通っており、火憐の妹分的存在。
明るく活発な性格。
容姿　なのはｉｎｎｏｃｅｎｔの八神　アギトと同じ。

八神・リンフォース・ルナ
八神家の次女でアギトの双子の妹。
姉のアギトと違い、内気な性格。
容姿　なのはｉｎｎｏｃｅｎｔの八神・リインフォース・ツヴァイの髪の毛を赤くした感じ。

グラーフ・シューバー
ガミラス軍の将校。
小マゼラン星雲にてパトロール中に管理局艦隊と遭遇。
管理局側の突然の停船命令と臨検命令に冷静に対処したが、管理局側が一方的に戦端を開いた為、管理局を侵略者として対処し、管理局艦隊を殲滅した。
容姿　宇宙戦艦ヤマト2に登場した時と同じ容姿。

高町　なのは　（ヤマトの世界）　故人
管理局では名高い白い悪魔、エース・オブ・エースと呼ばれている凄腕の魔導師だが、この世界はごくごく普通の一般人だった。
幼稚園を卒園後、私立海聖小学校に入学し、その後中学、高校へと進学し、高校卒業後、実家の喫茶店を継ぐ為、洋菓子職人育成の専門学校へ進学した後、フランスのパリへと渡り、そこで菓子職人の修業を行い、帰国後はパティシエールとして実家で経営している喫茶店『翠屋』を継いだ。

アリシア・テスタロッサ　（ヤマトの世界）　故人
プレシア・テスタロッサの娘でテスタロッサの長女。
身長が低い事からよく妹と間違われる。
もう一つの世界では幼くして死亡しており、その死が母親のプレシアに心を病ませた。
しかし、この世界では元気に存命していた様で、私立海聖小学校へ途中編入の後、中学、高校へと進学し、高校卒業後、理工系の大学に進学。
実家のホビー店を継いだ。

フェイト・テスタロッサ　（ヤマトの世界）　故人
アリシアの妹で、テスタロッサ家の次女。
姉のアリシアよりも身長が高いので、よく姉と間違われた。

アリシア同様、私立海聖小学校へ途中編入の後、中学、高校へと進学し、高校卒業後、大学の経済学部へ進学し、大学卒業後は姉妹で実家の家業のホビー店を継いだ。

八神　はやて　（ヤマトの世界）　故人

管理局では、夜天の書の主、奇跡の部隊、機動六課解の部隊長として名高い彼女であるが、この世界では幼少期に大学を飛び級で卒業しているほどの天才児で一時期関西に住んでいた為、彼女は普段関西弁で喋っていた。

両親を早くに亡くしたが、親類の者達と共に古書店・八神堂を経営すると共に、書店の地下でゲームセンターの経営もしていた。

しかし、二十代前半で突如、難病を患い若くしてこの世を去った。

はやて自身はしかし、二十代前半で突如、難病を患い若くしてこの世を去った。

新見　薫

宇宙戦艦　まほろば　の副長として赴任した女性士官。

真田同様、科学者肌の軍人でカウンセラーの資格を有している。

士官学校では、真田が在籍していたゼミ・研究室の後輩。

容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９の新見　薫と同じ。

フェイトの義母、リンディ・ハラオウンと声が物凄く似ている・・・・らしい・・・・

フェリシア・テスタロッサ

宇宙戦艦　まほろば　の砲雷長として赴任した女性士官。

士官学校ではディアーチェの後輩で彼女がフェリシアの監督生を務めた。

実家は昔から経営している老舗のホビー店。

容姿　なのはｉｎｎｏｃｅｎｔに登場したレヴィ・ラッセルを大人にした感じ。

坂井　健夫
宇宙戦艦　まほろば　の飛行長として赴任して来た士官。
加藤や山本同様、航空隊のエース。
容姿は機動戦艦ナデシコの登場キャラ、白鳥九十九をイメージしてください。

高町　桃華
翠屋のパティシエ兼オーナーであり、同時に恭介と紅葉の母親。
本編では既に故人となっている。
加奈江の良き相談相手だった。
ガミラスとの戦争が始まった初期の段階で既に旦那とは死別しており、桃華自身も病気により、この世を去った。

西郷　利通
防衛軍参謀長、藤堂司令長官の副官的位置にいる人物。
しかし、長官に比べると幾分か頭の固い所が有る。
司令部勤務の前は沖田や山南の様に宇宙戦艦の艦長職を務めていた。
容姿　ＰＳ版　ＰＳ２版　宇宙戦艦ヤマト　愛の戦士　暗黒星団帝国の逆襲　二重銀河の崩壊に登場した参謀長。

コズモダート・ナスカ
白色彗星帝国ガトランティスの軍人。
侵略の先兵である前衛艦隊の司令。旗艦高速中型空母に座乗し、地球防衛軍に様々な攻撃、破壊工作を行い、それで得られた情報を報告している。
本星の侵攻に先んじて太陽系第１１番惑星に前線基地を設置するために攻略艦隊を率いて、空間騎兵隊第１１番惑星派遣隊長・斎藤始率いる守備隊に対し、艦載機と装甲歩兵戦闘車隊による奇襲攻撃を行い、基地を破壊し、空間騎兵隊を全滅寸前まで追い込む。
しかし、改修によって強化された『ヤマト』の長距離攻撃に艦隊は

壊滅、起死回生を賭して潜宙艦隊で戦いを挑むが、またも返り討ちに合い、不用意にワープによる戦線離脱を計った為、ソーサナーの重力井戸に自ら陥り自滅する。

斎藤　始

第十一番惑星基地の地上守備に就いていた空間騎兵隊の隊長。

コズモダード・ナスカ提督率いる白色彗星帝国前衛艦隊に奇襲攻撃を受け、部下の大半を失ったところをヤマトに救出され乗り込むことになる。

柔道、空手、レスリングその他あわせて２３段の武道の達人。粗野で言葉の荒い大食いのバンカラ男だが、気風が良く、部下の信頼も厚い。

都市帝国突入戦では動力部に爆弾を仕掛ける為、一人動力部に残り、片手で機関銃を撃ちながら爆弾を動力炉へ取り付け、起爆させて戦死を遂げる。

新米　俵太

元はヤマトのドックの整備士兼清掃員であったが、人員不足の折、自らも志願してヤマトに乗ることになる。

乗艦当初は、レーダーを少し扱えるため、不在の森　雪に代わってレーダーの監視手を担当していたが、慣れないせいで失敗ばかりして敵の発見が遅れることが多々あった。

雪の復帰後、観察力や分析力に長けていることを真田に見出されて「技術屋タイプだ」と言われ、技術班へ異動となった。

小柄な体格に太い眉と眼鏡が特徴。

都市帝国戦では、敵艦載機発進口位置を探索中に直撃弾を受けて瀕死の重傷を負い、発進口の位置を報告して絶命した。

アナライザー

主に調査・分析を任務とする、等身大のロボットである。全体の大半が赤で占められ、頭部を中心にメーターが多数ついている。

足はキャタピラとなっている。電磁バリヤーやレーザー銃撃などに耐える高い耐久性を持つ。
ボディーはドームのある円柱に手足が生えた形で、昆虫のような「頭部」「胸部」「下半身」の３つに切り離し可能。顔はなく、頭部の３枚のフィンがある側が背中となっている。
切り離した際には制御系統が分断されるため、胴体部は切り離し前の動きをひたすら繰り返す。その接合部のサイズは共通であり、胸部抜きで頭部と下半身を直接つなげることも可能。完全分離状態では空中に浮遊する。
手首（腕）は伸縮可能、臀部にはロケットを内蔵し、推進が可能。また、腕部はロケットパンチの要領で飛ばすことも可能である。
話すときには特徴的な電子音が混じり、各部の計器が点滅する。
自分から沖田艦長に能力を売り込んで現場採用の形で無理やり『ヤマト』の乗組員となる。
イスカンダルへの航海途中で酒を飲む（浴びる）事を覚え、飲むと各部の計器を赤く点滅させながら酔っぱらう。

メーザー
デストール艦隊に所属する特別工作員。
ヤマトの航路閉塞作戦に従事するも、加藤と斎藤のコスモタイガーと交戦し、ヤマトの捕虜になる。
厳しい尋問にも一切の機密を漏らさず、隙をついてヤマトを脱走し、艦隊へ戻るも上官のデストールから帰還を拒否され、ヤマトに特攻し、戦死する。

デストール
ゴーランド艦隊副指令。
気流星団にて、長距離ミサイルの攻撃にて、『すくね』を撃沈する。
その後、ヤマトをサルガッソーへ誘い込むが、その時止めとして撃ち込んだミサイルのせいで、ヤマトにサルガッソー脱出のきっかけを作ってしまう。

ヤマトの航路封鎖作戦に従事していた部下のメーザーを捕虜にされてしまう。
命からがら、ヤマトから脱走したメーザーの帰還を拒否した。
ヤマトと正面決戦を行い、主砲の集中砲撃を受け、艦諸共爆死した。

アベルト・デスラー
大マゼラン星雲と小マゼラン星雲に跨る星間国家ガミラス帝国の総統。
傲慢で冷徹な統治者、反対者を躊躇なく粛清する冷酷な独裁者であるが、その行動は決して私利私欲のためではなく、危機に瀕した自国の繁栄・自民族の存続のためである。
ガミラスが惑星としての寿命が尽きようとしていたため、移住先として地球に狙いを定め、遊星爆弾等で地球侵略を開始、地球人類に絶滅か奴隷かの選択を迫った。
当初はヤマトを過小評価していたが、冥王星前線基地の壊滅など思いのほかの善戦を見せるヤマトに対して次第に関心を持つようになる。
ガミラス星での本土決戦で敗れ、その後、天井都市の総統府でガミラス星を脱出し、放射能ガスを使い白兵戦をヤマトに仕掛けるが、艦内工場で完成したコスモクリーナーの活躍により、撤退。
次いでデスラー砲をヤマトに向け発射するも空間磁力メッキで反射され、四散するデスラー艦と運命を共にしたかに見えたが、間一髪の所で艦から脱出、宇宙を仮死状態で漂流していた所を白色彗星帝国の手によって救出され蘇生医療を施され復活した。

ガデル・タラン
大マゼラン星雲防衛総司令官として、イスカンダルへ向かうヤマトに対してデスラー機雷による防衛線を構築し、航海を妨害する。
ガミラス壊滅後は白色彗星帝国へデスラーと共に亡命していた。
小マゼラン方面軍の残存艦隊を再編し、デスラーの副官としてヤマトへの復讐戦の立案策定を担当する。

デスラーがサーベラーの陰謀によって投獄された際には、戦闘機を駆って彼の救出を成功させている。
イスカンダル暴走時は別働艦隊を率いてイスカンダルの暴走を止めるべく、超質量採取の為、旧サファイア戦線跡へと向かう。
同宙域にて暗黒星団帝国の艦隊から超質量物質捕獲艦を守り抜き、イスカンダルの暴走を止める為に貢献した。

ミル
白色彗星帝国のサーベラーの配下。役職は監視艦隊司令。
サーベラーの命令でデスラー艦に同乗し、デスラー総統の行動を監視する役割を命じられ、デスラーを監視していた。
都市帝国壊滅後は何とか脱出に成功し、残党軍と合流する。
その後、艦隊を率いるも木星圏での戦いで、特攻命令を無視して土星圏へと退避。
土星圏にて次元転移してきた管理局の巡航艦テリオスを防衛軍の新型艦と勘違いして攻撃し、大破させるも、まほろば　の攻撃を受け、乗艦が爆沈し落命する。

ゴーランド
白色彗星帝国ガトランティスの提督にして、重装型ミサイル戦闘艦からなる帝国第一艦司令官。
禿頭に顎鬚を蓄えた容貌。
テレザート星へ到達しようとするヤマトの前に立ちふさがり、艦隊のミサイル攻撃でたびたび危機に陥れる。この艦隊最大の武器は「破滅ミサイル」と呼ばれる艦首部の超大型ミサイルであり、艦隊の一斉射によって地球型惑星を破壊できる威力を誇る。
波動エネルギーを奪われたヤマトを用意周到に待ち受け、破滅ミサイルによる攻撃で屠ろうとするも、真田　志郎の機転でエネルギーを回復したヤマトの波動砲を受け、破滅ミサイルや艦隊と共に消滅した。

ザバイバル
白色彗星帝国の将軍。地上戦のプロフェッショナルで、突撃格闘兵団ヘルサーバーを率いてテレザート星の地下大平原に大戦車軍団を展開していた。
筋骨隆々の身体に加え、顎鬚と頬髯が繋がった髭面が特徴。
腰にはストームバラベラム銃を帯びている。
テレザート星で圧倒的な戦力を展開し、ヤマトの空間騎兵隊を追い詰めていくが、勝利寸前で多弾頭ミサイルの攻撃によって大戦車軍団を失う。指揮戦車で逃亡するも斎藤始に追いつかれ、彼と1対1の肉弾による死闘を繰り広げた末にストームバラベラム銃を奪われ、射殺された。

ズォーダー大帝
白色彗星帝国ガトランティスの大帝。
太い眉毛と額から垂れた前髪が繋がる特徴的な容貌をしている。
白色彗星の進路上にある星々を征服し、銀河系にある地球に侵略を進める。
ヤマトとの戦いに破れて宇宙を漂流するデスラーを救出して蘇生させた後、ガミラスと軍事同盟を結ぶ。
要塞都市崩落後は超巨大戦艦、ガトランティスに移乗し、サーベラーを粛清した後、地球への憎悪を増大させ、ガトランティスによる無差別砲撃を地球へ加える。
しかし、宇宙の平和を願うテレサの力によってガトランティスと共に消滅させられる。

シファル・サーベラー
彗星帝国ガトランティスの総参謀長。
常に大帝ズォーダーの傍らに控えており、彼に代わって部下に指示を出してもいる。
白色彗星帝国の軍事力に絶対の自信を持っておりヤマトのことも特に問題視はしておらず、地球を過小評価していた。

また、デスラーを快く思っておらず、彼の監視役として艦隊司令ミルをつける。
デスラー追い落としの陰謀をゲーニッツと共謀する事に成功するが、即決裁判のために連行しようとした一瞬の隙を突かれ、デスラーとタランの逃亡を許す。
追撃のために艦隊を派遣しようとするが、ズォーダーがデスラーの決死の行動を理解したことにより、陰謀は失敗する。
挺身隊が都市帝国へ侵入した際には彼らを侮っており、隔壁を閉めるよう進言したゲーニッツやズォーダーに報告しようとしたラーゼラーを制止し、自分たちで始末すべく迎撃を指揮するが、多くの兵士を失ったうえに都市帝国の崩壊を招く。
それによって多くの戦死者が発生した事態はズォーダーの逆鱗に触れることとなり、超巨大戦艦、ガトランティスに移乗後、ズォーダーの手によって粛清される。

ラーゼラー
彗星帝国の支配庁宣伝軍事総議長。
官であるサーベラーやゲーニッツとも権力闘争を辞さない冷徹な官僚の一人。
遊動艦隊総司令のゲーニッツですら、支配庁の高官であるラーゼラーの決定は覆せていない。「勝利に必要なのは情報」という信念を持ち、サーベラーすら監視している。
地球艦隊による都市帝国砲撃の際、逃走するサーベラーから振り返られることもなく見捨てられ、自嘲ぎみに笑いながら崩壊する都市帝国の瓦礫の下敷きになり、死亡する。

ゲーニッツ
白色彗星帝国の最高幹部の一人。
遊動艦隊司令長官として、軍事の実権を握る。
土方と異なり、官僚上りの為、艦隊勤務、戦場経験はなく、自らは戦場へおもむかず、常に大帝ズォーダーの側に控えており、サーベ

ラーやラーゼラーと共に都市帝国の中央作戦室で侵略戦争の作戦計画・指揮に当たる。
帝国の全艦隊を統括するものの、支配庁の許可無しに艦隊を移動させる権限も無く、支配庁長官兼総参謀長のサーベラーに呼び捨てにされ、支配庁宣伝軍事総議長のラーゼラーにすら威圧を受けるなど、立場の弱さが目立つ。
都市帝国戦においては副司令長官のザイゼンと共に潜宙戦艦に乗って都市帝国から脱出する。

ザイゼン
白色彗星帝国の幹部の一人。
遊動艦隊副司令長官でゲーニッツは直属の上司。
バルゼーやゴーランドの様に艦隊勤務からの叩き上げで艦隊勤務経験のないゲーニッツの補佐を務める。
サーベラー、ラーゼラー、ゲーニッツの様に彗星帝国内の覇権争いには興味を持ち合わせていない。
都市帝国戦においてはゲーニッツと共に潜宙戦艦に乗って都市帝国から脱出する。
外見は宇宙戦艦ヤマト２２０２に登場した１８代目ゴーランドのザイゼンと同じ。
都市帝国壊滅後は残党軍を率いて防衛軍と徹底抗戦をするも木星圏にて地球艦隊の波動砲の一斉射撃を受け戦死する。

ゲルン
白色彗星帝国ガトランティスの提督。
バルゼー総司令率いる第一機動艦隊の、プロキオン方面に駐留する空母部隊の指揮官。
旗艦である大型空母に座乗し、土星空域で地球防衛軍連合艦隊と交戦する。
バルゼー直率の戦闘艦隊が連合艦隊と接触する前に多数の艦載機による先制攻撃を企図したが、艦載機の発進直前に、地球側の艦載機

の奇襲を受ける。
すぐさま迎撃機を上げようとするが間に合わず、対艦攻撃兵装を満載した攻撃機を格納庫に待機させていた空母は次々と爆沈していく。
奇襲を受けたことをバルゼーに報告するが、本隊からの救援は来なかった。
何の働きもできないまま敗北を迎えた無念を悔いながら自決した直後、旗艦は爆沈する。

バルゼー
白色彗星帝国ガトランティスの提督で、地球攻略の総司令として指揮をとる。
戦艦メダルーザで自ら指揮下の戦闘艦隊とゲルン提督指揮下の別動機動艦隊を率い、太陽系へ侵攻する。
太陽系侵攻時、第十一番惑星に兵站基地を設営するも、基地を発見したヤマトの波動砲で基地と守備艦隊は壊滅する。土星空域へ向かわせた大型長距離艦上戦略偵察機もワープアウトしたヤマトに偶然衝突されて撃墜されるが、ヤマト側はこのことに全く気づいていなかった。
土星決戦時、ヤマトを旗艦とする臨時編成の機動艦隊の奇襲攻撃を受けて機動艦隊を失うが、圧倒的に優勢な戦力を有する戦闘艦隊を率いて土星空域でアンドロメダの土方竜率いる地球連合艦隊と交戦する。
メダルーザの火炎直撃砲で連合艦隊へ大打撃を与えて戦局を優位に進めるが、土方の戦略的撤退により土星の環へ誘い込まれた後、多数の氷塊が漂う中で不用意に火炎直撃砲を発射したために水蒸気による乱気流が発生し、味方艦同士が衝突したところを連合艦隊に反撃され、壊滅する。
火炎に包まれる艦橋で「死して大帝にお詫びを」と呟き大勢の乗艦と共に戦死した。

テレサ

反物質を操る事の出来る超能力者。
美しい金色の髪に袖に玉飾りのある青いロングドレスを身に纏っている。
宇宙船としての機能も有する宮殿「テレザリアム」に住み、宮殿ごとテレザート星の地下洞窟に閉じ込められていた。
ヤマト航海長の島大介と幾度かの通信を介して彼へ想いを寄せるようになり、面した際には「戦乱に陥ったこの星の文明と人々を滅ぼしたのが自分であり、その罪の意識により力の使用を自粛している」と島に告白した。
愛する島とヤマトのためにテレザート星へ戻り、忌み嫌っていた自身の能力でテレザート星を爆発させ、白色彗星を道連れにしようとする。
結果として破壊には至らなかったが、軌道を逸らして速度も低下させ、後方に迫られていたヤマトの逃走時間を稼ぐことに成功する。
この際に死亡したと思われたが、実際にはテレザリアムで脱出しており、デスラー艦隊による被弾で宇宙に投げ出されて瀕死の島の前に現れ、自らの血液の大部分を輸血して彼の命を救う。
ズォーダーとの最終決戦にて万策尽きて超巨大戦艦への特攻を考えた古代たちに地球へ生還するように説得すると、島を古代に託して自身は自らの超能力のすべてを開放し、命と引き替えに超巨大戦艦を破壊する。

ガトランティス　一般兵
帝国の軍事力を担う兵士たち。
肌の色は緑で眉とこめかみが繋がっている容姿の人物が多く見られる。
艦隊勤務や要塞都市内部の警備など様々な広い分野で帝国を支えている。
水色のヘルメットに白手袋、上下一体のつなぎの様な水色の軍服を着用している。

ガトランティス　陸戦兵士
一般兵とは異なり、主に陸戦をこなす兵士たち。
区別するためか、一般兵とは軍服が異なる。
カーキ色のヘルメットに酸素マスクを着用し、上下一体のつなぎの様なカーキ色の軍服を着ている。
戦車や砲台、格闘戦に優れており、侵略戦における地上戦等で活躍しているものと思われる。
ザバイバル将軍麾下の部隊はテレザート守備隊としてテレザートへ派遣され、ヤマトの空間騎兵隊と壮絶な地上戦を行った。

ミーくん
ヤマトの艦医・佐渡　酒造の愛猫であり、飲み友達でもある。
最初のイスカンダルへの後悔ではヤマトに乗艦しておらず、下宿先の大家に預かってもらっていた。
彗星帝国戦役からはヤマトに乗艦した。
動物なのに笑顔がキュートであり、両手（前脚）で器用にかつ美味しそうに酒を飲み、右手を胸の前に当てる地球防衛軍式の敬礼をする等、およそ猫とは思えぬ愛嬌ぶりである。
斎藤が初めてのワープを体験し、ワープ酔いをしたにも関わらず、同じくワープ初体験のミーくんは酔わなかった事に彼のプライドを傷つけたのは誰も知らない。

空間騎兵隊
戦闘行動に際して宇宙船や飛行物体を使わず、直接惑星表面に降下して戦う部隊であり、海兵隊に相当すると定義される。
時に粗野なほど豪放かつ宇宙飛行に不慣れで船酔いならぬ宇宙酔いもするが、本領たる陸戦においては精強そのものである。
主な携行装備は対戦車ロケット弾・レーザーライフル・コスモガン・手榴弾等。
その中で斉藤始以下の中隊は第十一番惑星基地の駐屯部隊だったが、密かに地球侵略を狙う彗星帝国ガトランティス、コズモダード・

ナスカ率いる太陽系侵攻前衛艦隊の突然の攻撃を受け隊員の殆どを失う。
ヤマトへ救助された後、テレザート星でのザバイバル戦車軍団との戦闘や、デスラー艦上での白兵戦などの危険な任務の中で大きな犠牲を出しながらも果たし、都市帝国戦で隊長の斉藤始以下全員が戦死した。

徳川　太助
白色彗星帝国との戦いで戦死したヤマト機関長、徳川　彦左衛門の次男。
父の意思を継ぎ、宇宙戦士訓練学校の機関科に進み訓練校を優秀な成績で卒業したが、その後はヤマトへ乗艦するために操縦していたボートをヤマトに見とれて転覆させたり、波動エンジン始動中に閉鎖弁を開かず非常停止装置を作動させてしまうなどの失敗を続けていたため、機関長の山崎奨に「親父が泣くぞ！」と怒鳴られるのが常であった。相原　義一からは「徳川さんの倅にしちゃあ出来が悪い」と評されている。また、本人も優秀な機関長だった父といちいち比較されることに、苦痛にも似た疎ましさを感じていたようである。

北野　哲
宇宙戦士士官学校を首席で卒業。
雷王作戦の草案を士官学校在学中に立てた実績を持つ。
新人訓練航海の際、ヤマト乗艦を命じられ、航海班に配属され、新人乗組員でただ一人の第一艦橋勤務となる。
進時には緊張のあまり操縦桿を引けなかったり、戦闘演習時には主砲でコスモタイガー隊を撃ち落としそうになるなど、失敗が目立った。
しかし、木星、土星の実戦を経験し、宇宙戦士として成長をしている。

星名　透

宇宙戦士士官学校を次席で卒業した新人。
新人訓練航海で戦艦　まほろば　に乗艦を命じられる。北野同様、まほろば　では、新乗組員でただ一人の第一艦橋勤務となる。
原作では、保安部に所属していたが、この世界では、新人の士官として、北野同様航海科に所属している。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９に登場した星名　透と同じ、

山本　玲
銀髪ショートヘアーにアホ毛特徴の女性乗組員。火星移民三世で、紅瞳を持つ。
当初は航空隊を希望していたが、まほろば　への乗艦当時は主計科に配属された。
ヤマト航空隊隊長の山本　明夫の妹。
士官学校時代ではギンガの後輩であった。
ギンガの計らいで念願の航空科に転属できた。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９の山本　玲と同じ。

原田　真琴
まほろば　に乗艦を命じられた新人の衛生士。
茶髪のボブカット、アホ毛、巨乳が特徴で、おっちょこちょいな所がある。
しかし、衛生士としての使命感は強い。
まほろば　の乗艦後はリニスの助手的な立場である。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９の原田　真琴と同じ。

バトライザー
ヤマトに乗り込んでいる自律分析ロボット〝アナライザー〟の次世代型ロボット。
アナライザーの持つ機能の調査・分析、医療行為助手などの他に、戦闘機能も加えられている。
肩部と足の部分には、格納式の銃口が装備されている。

外見は次世代機と言う事でアナライザーよりも、簡易的な造りとなっているが、機能はアナライザー同様、優れている・・・筈・・・。
外見は松本零士先生の作品、コスモウォーリア・零に登場したバトライザーと同じ。

ヴォルケ・コルサック
元ガミラス冥王星基地司令官、シュルツの兄で、ガミラス銀河系侵攻軍第３０７哨戒艦隊（通称「コルサック艦隊」）の司令官。
ヤマトのイスカンダルへの航海時にはヤマトと戦う機会はなかった。
超質量を採取しに来たタラン艦隊の窮地を救う。
弟のシュルツによく似ているが、頭部や顎には戦傷があり、左眼にはレンズ式の義眼が埋め込まれている。
デスラーを盲目的に崇拝していたシュルツとは異なり、戦士としての矜持が高く軍令違反も気にかけない老将である。

ルーギス
暗黒星団帝国軍恒星エネルギー資源採掘艦隊・第二四師団右翼艦隊指揮官。
同師団左翼艦隊指揮官のクーギスの兄。
頭髪の無い爬虫類のような容貌で、一卵性双生児のように同じ顔。
また、傲慢で好戦的な性格。
右翼艦隊旗艦、戦艦エルドラＡで戦争エネルギー資源確保のために暗黒原子星へα星ベテルギウスのエネルギーを吸い込ませていた。
ヤマトから採掘を中止するよう打電されるが、これを無視して左翼艦隊旗艦、戦艦エルドラＢに乗艦するクーギスと共にヤマト　と　まほろば　に攻撃を仕掛けるも、まほろば　の拡散波動砲の前に敗れる。

クーギス
暗黒星団帝国軍恒星エネルギー資源採掘艦隊・第二四師団左翼艦隊

指揮官。
右翼艦隊指揮官であるルーギスの双子の弟。
兄のルーギス同様、頭髪の無い爬虫類のような容貌で、傲慢で好戦的な性格。
左翼艦隊旗艦、戦艦エルドラBに乗艦し、戦争エネルギー資源確保のために暗黒原子星へα星ベテルギウスのエネルギーを吸い込ませていた。
ヤマトから採掘を中止するよう打電されるが、これを無視してヤマトと交戦するも、返り討ちに遭い乗艦していたエルドラBから命からがら脱出するも、その戦いで兄であるルーギスを失う。
兄の仇を討つために七色星団で機動部隊を率いて再び戦いを挑むが、敗退する。
兄への詫びが最後の言葉となった。

メラ
デスラーの夫人であるが、ガミラス星人ではなく、不思議な力を持ちながらも滅んだとされる民族、ジレル人の生き残り。
「心が優しくていい女」とデスラーに評されているが、相手の心理を読み強力な幻覚を万光年単位の範囲で送り込む強力な超能力を持っている。
地球とガミラスの戦争当時、デスラーがスターシアに心惹かれていることに気付きデスラーに対して嫉妬し、またメラの能力を恐れたデスラーがガミラス領の辺境、サイレン星へと幽閉した。
ヤマトとの接触を危険視したデスラーが罪悪感を抱きつつも、味方艦隊に抹殺指示を出すが、艦隊はヤマトとの戦闘により全滅した。
しかし、彼女自身はヤマトとの接触前に自殺した。
容姿　ＰＳ版　宇宙戦艦ヤマト　英雄の軌跡　に収録されている『永遠のジュラ編』に登場したメラと同じ。

ジュラ
デスラーとメラとの間に生まれたデスラーの一人娘。

しかし、母親同様、特殊な能力を持つ種族だった為、母のメラと共にサイレン星に幽閉されていた。
だが、父であるデスラーのことを尊敬しており、彼も連絡の時には父らしい気遣いを見せている。
母の死後、『ヤマト』から譲られた設計図から作ったイスカンダル式の波動エンジン搭載宇宙船で宇宙を放浪していたが、ガミラス星の崩壊を知り、父と恩義のある『ヤマト』のどちらに加勢するか決心を付けられない状況ながらもデスラーを追うが、追いついた時には跳ね返されたデスラー砲によりデスラー艦が撃破された後であった。
その後の行方は不明となっている。
容姿　ＰＳ版　宇宙戦艦ヤマト　英雄の軌跡　に収録されている『永遠のジュラ編』に登場したジュラと同じ。

エルク・ドメル
ガミラスの名将で、ガミラス国民からは絶大な人気を誇る一方、その人気ゆえにデスラーの側近達の一部からは煙たがられている。
他者からは政争に巻き込まれることを心配されているが、本人は「政治に興味はない」と明言する生粋の軍人。
階級は上級大将、戦死後は元帥へ昇進。
小マゼラン方面で大きな戦果を挙げていたが本国に召還され、銀河方面作戦司令長官に任命の上、ヤマト討伐に当たることになる。
七色星団で決戦を挑むべくヤマトに挑戦状を出し、ヤマトは艦長の沖田十三の判断でそれを受諾する。
瞬間物質転送機を使った雷爆撃と秘密兵器ドリルミサイルによってほぼ勝利を手にしたかに見えたが、逆回転させられたドリルミサイルが止めを刺しに接近してきていた空母に命中し、形勢は逆転する。
味方の空母部隊を失い、敗北を悟ったドメルは、艦本体から分離させた独立戦闘指揮艦をヤマト艦底部に接舷させ、軍人としての責務を全うするため自爆を敢行し、戦死する。

ゴラン・ダガーム

アンドロメダ星雲からマゼラン方面に探査任務を受け、やって来たガトランティス軍人。
地球の年齢換算で４２歳。
出自は卑しい身分だったが、戦士としての叩き上げによって司令官まで上り詰めた男。
性格は非常に短気で怒りっぽく、自分よりも若い者、身長が低い者から命令されることを特に嫌う。
ジレル人の方舟、シャンブロウを巡る攻防戦でまほろばと戦い、破れ戦死する。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９　星巡る方舟に登場した容姿と同じ

フォムト・バーガー
元はドメル艦隊の幕僚の一人で頬に傷があるのが特徴的な容姿をしている。
ドメル幕僚団では最年少であり、性格は非常に血気盛んで直情的。師団が電撃戦を展開する際に先陣を切るドメル軍団の切り込み隊長を務めていた。
階級は少佐。
若さゆえか思慮が足らず軽率な面があり、調子づいてはドメルやハイデルンに窘められる事が多かった。
イスカンダルを巡る戦いの後、良馬の仲介によって七色星団での敵前逃亡は不問とされ、大勢の仲間と共に新天地への航海へと向かった。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９と同じ

ヴァンス・バーレン
ダロルト艦載の重爆撃機ガルント爆撃指揮官。臣民突撃兵団所属
ガミラスの老兵で、七色星団海戦で戦死したハイデルンの戦友。
ハイデルンと旧知の老兵で、かつてドメルの部下としてゴルニ戦役などで戦った。

バーガーの過去も熟知している。
階級は大尉。
年齢は地球年齢に換算して６５歳。
七色星団での戦いではガルントに搭乗し、ヤマトに対してドリルミサイルを撃ち込んだ。
しかし、その直後に玲に撃墜され、七色星団の雲海へ墜落する。
辛くもランベアに救出され生き延びておりバーガーやネレディア、メルヒとともに謎の惑星シャンブロウに囚われ、そこで救援信号を聞きつけた良馬たちと邂逅した。

ネレディア・リッケ
ガミラス帝国軍士官。第八警務艦隊の指揮官であり、同艦隊の旗艦、ミランガル艦長。地球の年齢換算で２８歳。
階級は大佐。
ガミラスの戦史に残る『チタベレーの戦い』に於ける戦功で、その若さでの女性士官としては異例の昇進を果たす。
バーガーとは同期の間柄。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９　星巡る方舟に登場した容姿と同じ。
ドメルと同じく体にフィットしたコンバット服＋マントを着用した女性軍人。
バーガーとは同年代かつ同期だが、過去の武勲により異例の昇進を果たしている。
妹・メリアの死以来、バーガーとは確執がある。
バーガーのことはファーストネームの「フォムト」と呼び、バーガーからは「ネレディ」と呼ばれている。
七色星団海戦を生き残ってなおヤマトや地球への復讐を断念しないバーガーに、ガミラス本星の攻撃中止命令を伝えて引き止める。
その矢先、謎の惑星シャンブロウに、バーガー、バーレン、メルヒとともに囚われるが、それは自身に化けたジレルの巫女レーレライであり、本物の彼女自身は自身が艦長を務めるミランガルに居た。

イスカンダルを巡る暗黒星団帝国との決戦後、新天地を目指す大航海への旅へと向かう。

ボドム・メイス
メガルーダの副長。
ダガームの八つ当たりの対象にされやすく、メイス自身あまりダガームに対して好印象を抱いておらず、機会があれば、彼を司令官職から引きずりおろそうと虎視眈々とその機会をうかがっている。
そしてシャンブロウの戦いにおいてようやくダガームを蹴落とす機会が来たと思ったら、彼はダガームの性格の全てを理解してはおらず、ゼーダに叱咤を受けたダガームの手によって粛清される。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９　星巡る方舟に登場した容姿と同じ。

イスラ・パラカス
ダガーム艦隊、前衛部隊指揮官。
ナスカ級空母キスカの艦長を兼任している。
ダガーム艦隊の切り込み隊長の役割を担っている軍人。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９　星巡る方舟に登場した容姿と同じ。

メリア・リッケ
ネレディアの妹で、バーガーのかつての恋人。　軍に入隊後、初めて配属された勤務地がガトランティスの急襲を受けバーガーの目の前で炎に呑まれ戦死した。
容姿　原作では、肌の色以外は桐生美影に酷似していたが、この世界では肌の色と髪の毛の色以外はギンガに似ている容姿をご想像下さい。
容姿はギンガ、髪の毛の色は赤。
肌はガミラス人と同じ青い。

レーレライ・レール
数少ないジレル人の一人で、ジレル人達のリーダーかつ、巫女。
容貌は、原作と異なり、肌の色は地球人と同じで髪の系の色も金髪。
顔にある模様、エルフの様に尖った耳は原作と同じ。
幼いころから幻視能力に長けており、その能力を使ってシャンブロウをボイド空間に隔離させ外部との交流を完全にシャットアウトしていた。
そして、シャンブロウの噂を聞きつけてやって来た者達を排除するために、幻視能力とフル活用して外部の者たちを排除している。
デスラー夫人のメラの事も把握していた模様。
ガトランティス艦隊が撃退された後、レーレライは方舟を起動、生き残ったジレルの民と共に何処へともなく新たな旅へと出た。

ヴェム・ハイデルン
ドメルと共に幾多の戦場をくぐり抜けてきた叩き上げの古参士官で、ドメル幕僚団の中では「親爺」的な存在。
七色星団海戦でドメラーズＩＩＩ世の艦長として行動する。
バーレンとは旧知の間柄で、七色星団海戦に際しての顔合わせにてゴルニ戦役以来久々に再会した。なお、隻眼も同戦役での負傷によるものである。
ドメルが敗北を悟って自爆を決意した際には離艦を指示されるが、他の乗組員たちと同じくドメラーズＩＩＩ世に残り、運命をともにした。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９と同じ。

ライル・ゲットー
航空隊のトップエースで、戦闘機パイロットとして一流の腕を持つ撃墜王。また、航空隊の指揮だけでなく、艦隊指揮も行っている。
性格は常に冷静沈着で、落ち着いた口調で話す。
七色星団海戦において、第一空母バルグレイに乗艦。空間艦上戦闘ＤＷＧ１０９　デバッケに搭乗し第一次攻撃隊（戦闘機隊）を率いて

出撃。
ヤマト航空隊と交戦し、ヤマトから引き離す。
しかし、加藤三郎との一騎打ちの時、僚機からバルグレイの撃沈を知らされた際の動揺で生じた一瞬の隙を突かれ、背後を奪われ被弾。
最期はドメルへの忠誠を叫びながら戦死した。

カリス・クライツェ
七色星団の戦いでは第三空母シュデルグに乗艦。
空間雷撃機ＦＷＧ９７　ドルシーラに乗り込んで、第三次攻撃隊（雷撃機隊）を率いて出撃する。
物質転送機によってヤマト至近にワープし、雷撃を仕掛けるが、ヤマト航空隊の思わぬ反撃を受け、護衛戦闘機すらいない状況で敵戦闘機隊を相手にすることになり、窮地に陥る。クライツェは本隊に増援を要請した直後に機体を撃墜され戦死した。
容姿　宇宙戦艦ヤマト２１９９と同じ。

ゼーダ
白色彗星帝国ガトランティス軍、アンドロメダ方面軍総司令。
ダガームの上官で、国家元首のズォーダーと本国を失い、アンドロメダ方面でのガトランティス軍の占領維持が困難になってきている現状を打開する為に技術惑星『静謐の星』の探索をダガームに命じ、マゼラン方面へ派遣した。
容姿　松本　零士　先生のアニメ作品『わが青春のアルカディア』に登場したイルミダス地球占領軍総司令　ゼーダと同じ容姿。

ガミラス軍一般兵
指揮官・下士官に従属する一般戦闘兵士。
前腕が黒色で他が茶色の戦闘用スーツに、黒の戦闘ブーツ、茶色のバイザー付きヘルメットを被る。

ガミラス軍下士官

司令官の下で兵士に戦闘指示を与えたり、士官の身の回りの世話をしたりする。
制服は縦に水色の太い線が入り、耳部に突起が付いたベール状の黒色ヘルメットに、色の上衣、黒の手袋・乗馬型ズボン・長靴である。
軍服の胸から腰にかけての六対、肩の部分に三対の黒の点線がある。

ガミラス軍将校
部隊を指揮する上級兵士。
緑の上衣に、黒か茶色の長手袋、黒の乗馬型ズボンに緑の長靴を穿き、将校によっては表地が黒で裏地が赤のマントを着用する者も居る。
軍服の胸から腰にかけての六対の黒い点線がある。
前線将校にはドメル将軍やネレディア大佐の様な終始つなぎ型の独自の戦闘服を着用する者も居る。

ガル・ディッツ
大ガミラス帝星航宙艦隊総司令官。階級は提督。
ガミラス軍の艦隊運営の最高責任者。
容姿は眉無しでモミアゲと口髭が繋がった顔立ちに、右眼を縦に一閃した傷痕が特徴。

デーダー
暗黒星団帝国マゼラン方面第一艦隊司令官。
容姿は水色の皮膚で、筋骨隆々の厳めしい容貌と体躯を持ち、頭髪はない。
ベテラン軍人として、暴走したイスカンダルを追跡するガミラス艦隊を追撃し、イスカンダルのマザータウンへと追い詰める。
戦闘においては、波動砲戦術を警戒し、イスカンダルを背負って盾に取るなど戦い馴れた面を見せる反面、粗野で猪突猛進的な自信過剰な部分もあり、忠告してきた部下を射殺したり、旗艦、プレアデスの

偏向バリアに頼りきり、オーバーロードの危険性を省みずにフル稼働させ、結局は破損させてしまうなど、残酷さや無謀さも際立っている。
頼みにしていた偏向バリアが使用不能となった所へデスラー砲が撃ち込まれ、乗艦と運命を共にした。

メルダース
暗黒星団帝国マゼラン方面総司令官で、マゼラン方面第一艦隊司令官デーダーの上司。
皮膚は灰色で、細面の頭部には毛髪が無い。
話し方は慇懃で、敵ながら見事な戦いぶりを見せた防衛軍側へ敬意を表している一方で、やや高圧的でもある。
また、警告した上で防衛軍を退去させようとするなど、無駄な交戦を避けようという一面もある。
しかし、ひとたび交戦の意思を見せた敵へは情け容赦のない苛烈な攻撃を行ってもいる。
イスカンダルの暴走を食い止めていたマイクロブラックホールを使ってゴルバが押さえ込まれ、ゴルバの唯一の弱点であるデスラー戦闘空母が離脱した後のα砲砲門破損孔を、波動砲で撃ち抜かれ、次々に内部誘爆を起こして爆散する中、メルダースは敗北を信じられないまま、ゴルバと運命を共にした。

メルダ・ディッツ
航宙艦隊総司令官ガル・ディッツ提督の娘。
外見は、真ん中分けの赤いセミショートヘアで、前髪からアホ毛が逆立った髪型が特徴的である。
正々堂々とした性格をしており、軍人の家系に生まれたことを誇りに思っている。
パイロットとしての腕も高い。
ゴルバ戦の後、デスラーの娘、ジュラの侍女に任命され、彼女もジュラが好きだったマゼランパフェの虜となった。

セフィリア・テスタロッサ
海鳴にあるフェリシア・テスタロッサの実家でもあるホビーショップの店長。
フェリシアの実母。
その容姿は、かつてフェイトをこの世に生み出した母と言える存在、プレシア・テスタロッサと瓜二つであるが、魔力を一切持たない一般人。

登場人物　（魔法少女リリカルなのは）

ギンガ・ナカジマ
原作同様、スバル・ナカジマの姉で１０８部隊所属の捜査官。
階級は陸曹（軍曹）
愛機　リボルバーナックル＆ブリッツ・キャリバー
その正体はクイント・ナカジマの遺伝子を元に造られた戦闘機人の実験体。
六歳の頃、クイントが所属するゼスト隊に救助され、ナカジマ家に養女として迎えられた。
八歳の頃、その母と死別し、十三歳の時に空港火災に巻き込まれ、執務官であるフェイト・テスタロッサ・ハラオウンに救助される。
長髪の楚々とした容姿ながら、人当たりの良い性格。
原作と違い、六課起動前から既に六課への出向の内定を受けており、ブリッツ・キャリバーも受け取っている。
１０８部隊での最後の仕事際、輸送船諸共次元震に巻き込まれ殉職認定された。
しかし、実際は死んでおらず、ヤマトの世界にランダム転移をして、防衛軍に保護されていた。

ゲンヤ・ナカジマ
原作同様、陸士１０８部隊部隊長。
スバルとギンガの父親。
階級は三佐（少佐）
妻のクイントを亡くしてからは男手一つで娘二人を育ててきた。
本人の気持ちの中では、二人の娘を局員にはしたくなかった。
先祖が地球の日本出身であることから、日系人であると言える。
クイントやギンガ、スバルと違い魔法を使うことの出来ない非魔導師。

クイント・ナカジマ
ゲンヤの妻でスバルとギンガの母親。
階級　准尉
デバイス　リボルバーナックル　ローラーブーツ
容姿　原作同様。
性格は明るく強い姐さんタイプ。
ギンガとスバルの使う格闘技法「シューティング・アーツ」の元々の使い手。
ゼストの部下の一人で、メガーヌとは同僚だった。
魔法術式・近代ベルカ式／魔導師ランク・陸戦ＡＡ。
戦闘機人に関する事件を追っていた最中で実験用の戦闘機人であったスバルとギンガの二人を発見し、彼女達の人権を尊重しようと娘として育てた。その後彼女達二人が自らの遺伝子を元に生み出されたことを知る。しかし、二人が物心ついたばかりのころに殉職する。

ゼスト・グランガイツ
時空管理局・首都防衛隊に所属するストライカー級の魔導師であり、スバル、ギンガの母クイントとメガーヌの上官。
レジアスとは互いに理想について語り合った親友の間柄で、「彼の正義になら殉じても構わない」と言えたほどの間柄だった。
「秘匿命令」によって戦闘機人事件を追っていた彼は、彼を本件から外したいレジアスに圧力をかけられたことで逆に捜査を急ぎ、機人プラントと目される「施設」の調査に向かう。
そこで戦闘機人と、後に「ガジェット」と呼ばれる機械兵器の大群による襲撃を受け、激戦の末に彼の部隊は全滅。クイントを含む多くの部下が死亡。
彼自身も部下をかばって負傷しながらも、戦闘機人と戦い、その後行方不明となり、殉職認定された。
しかし、スカリエッティからレリックウェポンとしての特性が強い

事に目をつけられ、レリックウェポンとして復活、メガーヌそしてその娘のルーテシアが人質になっていた為、彼の下に身を寄せていた。
スカリエッティやナンバーズからは「騎士ゼスト」と呼ばれていた。
ＪＳ事件の際、レジアスを暗殺したドゥーエを討ち、シグナムと壮絶なバトルの後、息を引き取った。

メガーヌ・アルピーノ
元ゼストの部下で、クイントとはよく行動を共にしていた仲の良い同僚であり親友だった。
魔法術式・近代ベルカ式／魔導師ランク・陸戦ＡＡ。
階級　准尉
インターミドル出場経験もあり、都市決勝でクイントと試合をしたこともある。
戦闘機人プラントへの突入捜査の際にナンバーズらと交戦し部隊は敗北その後行方不明。後に殉職認定された。
しかし、その実態はレリックウェポン候補者としてスカリエッティに捕えられていた。
ＪＳ事件後、管理局に保護されリハビリに励み、その後、更生教育を終えた娘のルーテシアと共にカルナージと呼ばれる自然世界へ移り住んだ、

レジアス・ゲイズ
首都防衛隊代表で、事実上の地上本部トップで、ゼストとは旧知の仲。
古くからの武闘派で、地上本部の武装強化や独立化を推し進めようとしている。
しかし、自らの理想と正義の実現への意識が高じるあまり、一向に問題の改善が進まない事に絶望し、裏で人造魔導士・戦闘機人の開発に関与しているという噂がある人物。
ＪＳ事件の折、管理局内にスパイとして潜入していたナンバーズのNo.Ⅱ、ドゥーエの手にかかり、暗殺された。

ラッド・カルタス
陸士１０８部隊の主席捜査官で副部隊長も兼務しているゲンヤの信任あつい部下でギンガの上官。
階級　二尉（中尉）

スバル・ナカジマ
原作同様、六課のＦＷ陣の一人でゲンヤの娘でギンガの妹。
階級　二等陸士（二等兵）
愛機　リボルバーナックル＆マッハキャリバー
前向きで能天気な人当たりのいいムードメーカーだが、意外と内気で気が弱いところもある。だが、一度決めたことは最後までやり通す一本気な面も持っている。
ギンガ同様、正体はクイント・ナカジマの遺伝子を元に造られた戦闘機人の実験体。
クイントやギンガ同様青い髪を持ち、髪型はショートカットにしている。
四歳の頃、クイントに保護されてナカジマ家の養女となる。
六歳の頃、母と死別。
十一歳の頃、空港火災に巻き込まれ、管理局のエースオブエース、高町なのはに救助され、自らも管理局員を志し、管理局員となる。
機動六課ではＦＷメンバーの一人を務め、六課解散後は特別救助隊に入隊しながら、姉であるギンガの名誉を回復する為の活動をしている。

ティアナ・ランスター
スバルより一つ年上で背も高い。髪はオレンジ色のツインテール。強気でプライドの高い性格だが、ドジを連発するスバルに憤りながらも世話を焼くような面倒見のいい一面がある少女。
階級　二等陸士（二等兵）
愛機　クロスミラージュ

十歳の頃、唯一の肉親だった兄ティーダ・ランスターとは死別している。
六課ではスターズ分隊の「センターガード」を務める。
六課解散後は執務官を目指す為、現在は執務官補佐としてフェイトの補佐をしている。
新人研修時、乗艦していた巡航艦、テリオスがガトランティス軍の攻撃に遭い遭難するも　まほろば　に救助される。

八神　はやて
時空管理局遺失物管理部機動六課の課長・本部隊舎総部隊長・中枢司令部（後方支援部隊）「ロングアーチ」のトップ。
階級　二佐（中佐）
愛機　シュベルトクロイツ　夜天の書　リィンフォース・ツヴァイ
幼いころに身寄りを無くし、足に原因不明の障害を抱えながらも「父の友人」を名乗る人物の庇護を受けながら一人で生活していた。
闇の書事件終結後、ヴォルケンリッターを伴って管理局に特別捜査官候補生として入局。
研修時代にゲンヤの１０８部隊に研修に来てそこで、ゲンヤと友好を深める。
機動六課解散後も管理局のエリート街道を走っている。

高町　なのは
原作同様、管理局を代表するエースオブエース。
階級　一尉（大尉）
愛機　レイジングハート・エクセリオン
九歳の頃、故郷海鳴で起きた、魔法に関する出来事から魔法少女になった。
中学卒業後に住居をミッドに移し、本格的に局員として時空管理局に就職した。
十一歳の冬頃に今まで溜めてきた無茶と負担のツケがまわり、任務中の僅かな反応の遅れから瀕死の重傷を負ってしまう。

一時は空を飛ぶことも歩くことすら不可能になる危険性もあったが、半年間の過酷なリハビリを経て回復した過去を持つ。
管理局では教導官を務めており、機動六課ではスバルとティアナが所属する「スターズ分隊」の隊長務めるのと同時にＦＷ陣の訓練教官も務めている。
機動六課解散後は教導隊に戻り、若き魔導師たちの先生を務める傍ら、機動六課稼働中に保護した少女、ヴィヴィオの母親となる。

フェイト・テスタロッサ・ハラオウン
元は、プレシア・テスタロッサの娘、アリシア・テスタロッサを元にして生まれたクローン。
母が海鳴で起こした事件、ＰＴ事件の後、リンディ・ハラオウンの養子になり、現在の名前になる。
現在は本局の執務官。
階級　一尉相当官　（大尉に値する権限を有する）
愛機　バルディッシュ・アサルト
親友の八神　はやてが設立した機動六課に出向という形で所属し、部隊付執務官として法務担当と広域捜査の主任を務める一方、「ライトニング分隊」隊長としてエリオとキャロを率いる。
機動六課解散後は執務官職に戻り、補佐のティアナの直属の上官となる。
ヴィヴィオの後見人の一人でもある。
新人研修時に乗艦していた巡航艦、テリオスがガトランティスの攻撃に遭い遭難する。
ティアナと共に　まほろば　に救助される。

キャロ・ル・ルシエ
竜と共に暮らし使役する少数民族「ル・ルシエ」（第六管理世界）の出身者。
強力な魔力を有するが故に、故郷の集落で危険視され、遂には村を追放され、各地を転々としていたところを時空管理局に保護され、事

情を知ったフェイトが保護者となって引き取った。
階級　三等陸士（三等兵）
愛機　ケリュケイオン
自立して生きていくことを望みフェイトの紹介で自然保護隊に入隊していたが、機動六課設立にあたり自ら転属を志願した。
おっとり天然気味の、可愛らしい性格。
機動六課解散後は同僚だったエリオと共に自然保護官としてミッドを離れている。

エリオ・モンディアル
新人フォワード四人の中ではなのはたちとの付き合いが一番長い人物であり、唯一の男性隊員。
階級　三等陸士（三等兵）
愛機　ストラーダ
その正体はフェイト同様、モンディアル家の病死した一人息子であるオリジナルのエリオ・モンディアルのクローン。
しかし家族に捨てられ、研究施設での非人道的な扱いから一時期は重度の人間不信に陥っていた。
フェイトによって救い出され管理局の保護を受けてからは幸せな日々を送れており、彼女には深い恩義を感じている。
機動六課解ではフェイトが分隊長のライトニングにキャロと共に所属。
解散後はキャロと共に自然保護官として他の世界でその任務についている。

ルーテシア・アルピーノ
メガーヌ・アルピーノとある人との間に生まれた娘。
ベルカ式ベースの召喚魔法を操る強力な召喚魔導士。
ＪＳ事件の際には、ゼストと共に「ＸＩ（１１）番のコア」を探していた。その訳は、母親であるメガーヌを起動させるのに必要なレリックがＸＩ番のレリックである為、自分には心が無いと思い込んで

おり、母親が起きれば心が生まれるというスカリエッティの言葉を信じ込んでいた為である。
ナンバーズからの面々からは「お嬢様」または「お嬢」と呼ばれる。
事件後は管理局に保護され、司法取引を受けたナンバーズと共に海上の更生施設にて更生教育を受けた後、母親であるメガーヌと共にミッドを離れ、カルナージに移り住んだ。

クロノ・ハラオウン
時空管理局に所属する局員でリンディ・ハラオウンの一人息子。
Ｌ級巡航艦、アースラの艦長を経て現在はＸＶ級次元航行艦、クラウディアの艦長。
アースラの元オペレータ、エイミィ・ハラオウン（旧姓リミエッタ）の旦那で二児の父親。
管理局での階級は提督クラス（恐らく准将）。
機動六課稼働時には六課の後見人を務めた一人。

ジェイル・スカリエッティ
人造魔導師製造計画「プロジェクトＦ」　戦闘機人製造に携わっていた科学者であり、多岐に及ぶ罪状で広域指名手配されている次元犯罪者である。
八神はやて曰く、「違法研究者でなければ間違いなく歴史に残る天才」
音声など、様々なデータこそ残っているものの逮捕歴はない。
その正体は最高評議会の手により、伝説の地、アルハザードの技術を持って生まれた人造人間。
高町なのはが十一歳の頃に大怪我を負うきっかけとなったガジェット（当時はアンノウン）も彼が製作した物。
新暦７５年に大型戦艦「聖王のゆりかご」を復活させて自らの野望を達成するために、レリックとヴィヴィオを狙い、自らが作り出したガジェットドローンや女性型戦闘機人集団「ナンバーズ」を送り込む。
科学者でありながらその戦闘能力は高く、手袋型のデバイスを使

い、フェイトを苦しめた。
だが、真・ソニックフォームに変化したフェイトのライオットザンバーの打撃で吹っ飛ばされ、その一撃であっさり気絶。
その後、管理局の司法取引を拒否し、彼に付き従う他のナンバーズ共々軌道拘束所へ留置される。

ウーノ
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
容姿はウェーブがかった薄紫の長髪をした女性で、生みの親であるジェイル・スカリエッティの秘書を務める。
彼の側近にして最大の理解者であり、実務だけではなく精神面からも支えている。
実務指揮を執るナンバーズのリーダー格だが、デスクワーク主体の機人であるため戦闘能力は低い。
初期に作られた戦闘機人だが、その体内パーツは妹達のデータを元にした最新の物へと更新されている。
ナンバーズの中で唯一固有装備をもっていない非武装タイプ。
ＩＳは隠蔽と知能加速の能力で「不可触の秘書（フローレス・セクレタリー）」。
ＪＳ事件後は管理局の司法取引を拒み、スカリエッティと共に軌道拘置所に収容される。

ドゥーエ
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
容姿は長い金髪と蠱惑的な顔立ちが特徴的。
主に潜入や諜報、暗殺を主体とした機人で、ＩＳ能力も任務に応じて姿を変える変装能力「偽りの仮面（ライアーズ・マスク）」。
ナンバーズの中で最もジェイル・スカリエッティの影響を受けており、さまざまな面で彼に似通う。
高い能力と仲間に優しく敵には冷酷に接する性格を持つらしく、クアットロからは「究極の戦闘機人」として尊敬されている。

最高評議会の秘書・メンテナンス担当として管理局に潜入。
聖王のゆりかごの起動と同時に正体を現し、不要になった彼等を抹殺する。
また最終決戦の最中にレジアス・ゲイズを暗殺するが、直後にその場に居たゼスト・グランガイツからの攻撃を受け「姉妹達と再会する」という願いを叶えることが無いまま絶命。
ナンバーズの中で唯一の戦死者となった。

トーレ
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
他のナンバーズよりも頭一つ分大きい長身なのが特徴。
豊富な実戦経験ゆえにナンバーズの実戦指揮を執っており、前線での独自行動も許されている。
厳格な性格で他のナンバーズを叱りつけることも多く、また無意味とするものに対してはかなり冷淡なところがある。
セッテの戦闘技術の師でもあり、機械の様な思考をする彼女を注意することもあった。
固有武装は、虫の羽に似たエネルギー翼「インパルスブレード」で、ＩＳは高速移動能力「ライドインパルス」。
ＪＳ事件後は管理局の司法取引を拒み、スカリエッティ、ウーノ共々軌道拘置所に収容される。

クアットロ
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
大きな伊達眼鏡と独特の甘ったるい喋り方が特徴。
幻惑等による敵の行動妨害を主体とする実働部隊の後衛だが、それ以上に参謀としての色が強い。
後衛同士のデェイチとは行動を共にすることが多くナンバーズの中でも最大の独自行動が許されている。
固有武装はステルス機能を有するマント「シルバーケープ」で、ＩＳは電子を操る「シルバーカーテン」。

性格はナンバーズの中でも最も陰湿なものであり、ＪＳ事件での決戦時、聖王のゆりかごにおいてヴィヴィオを操ると言うやり方に加え離れた場所からなのはを挑発して攻撃すると言う極めて卑劣な戦法を取った。
事件解決後はスカリエッティ、ウーノ、トーレ共々軌道拘置所に収監された。

チンク
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
容姿は小さな背と銀髪と右目の眼帯が特徴。
固有武装の「防御外套」シェルコートは、バリアはもちろんのことＡＭＦも張れるという高性能である。
ＩＳは手に触れた金属を爆発物に変え、自分の意志で爆破できる「ランブルデトネイター」。
主に固有武装である「スローイングナイフ」スティンガーを投擲して爆発させる戦法で戦う。
右目はかつて自分たちのアジトを急襲してきたゼストとの戦闘において失明した。
再生治療は可能だったが思うところがあったのか彼女はその傷をあえて治療せず、眼帯を着けたままの状態でいる。
姉妹の中では落ち着いた性格をしており、外見の割に一番大人な性格。
事件解決後は管理局の司法取引を受け、海上の更生施設へ入所、その際、ナカジマ家からの養子縁組の話を受けた。

セイン
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
水色の髪に愛嬌のある幼気な風貌の少女。
固有武装は指先に付いた極小のカメラ「ペリスコープ・アイ」で、ＩＳは無機物に潜行する「ディープダイバー」。
潜入と秘密工作に特化したＩＳ故に仲間内では非常に重宝されて

いる。
ナンバーズとしては稀に見る明るくポジティブな性格で、言動もかなり子供っぽい。その性格も相まって姉達と妹達の緩衝役をこなす。
だがマイペースな所があるためか妹達から姉扱いされていないことを気にしている。
事件後は管理局の司法取引を受け、海上の更生施設へ入所、その際、聖王教会から修道女見習いとしての身請け話を受けた。

セッテ
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
ロングヘアーでピンク色の髪をした少女で、額を防護するヘッドギアをつけている。
オットー、ディードに並ぶ最後発組で、極めて高いパワーを誇る。
性格は教育を行ったトーレの影響が強く現れていて、苛烈で一途。
ナンバーズ中でもっとも機械的で人間味が薄い。
ＩＳは固有武装であるブーメランブレードを制御するスローターアームズ。
事件後は管理局の司法取引を拒否し、生みの親であるスカリエッティや司法取引を拒否した姉共々第１７無人世界の「ラブソウルム」軌道拘置所へと移される。
後発組の中では唯一の拘置所収容となっている。
この時、トーレには捜査協力をして更正プログラムを受けることを提案されているが、自分の意思で拒否している。
また、刑期短縮の提案も拒否しており、その理由はトーレと同じく「敗者には敗者の矜持がある」という理由のためらしい。

オットー
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
容姿は散切りの茶髪に中性的な外見をしている。
攻防共に優れた後方支援型で、指揮もこなす。一人称は「僕」で、体型や服装故に性別が分かり難いが、れっきとした女性。

ディードとは同じ「素材」を元にした双子の様な関係であり、コンビを組んで行動する。その為、感情表現に乏しいが、ディードとだけは意思の疎通が出来ているらしい。
セッテ同様、名前とは裏腹に稼働は最後発組。
ＩＳは攻撃や拘束に使える光線を多数放つ「レイストーム」。
事件後は管理局の司法取引を受け、海上更生施設へ入所、その際、セイン同様に聖王教会からスカウトの話を受け、現在は教会の修道女見習いをしている。
ただし、支給される服装は何故か、男物ばかりで本人はやや困惑気味・・・。

ノーヴェ
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
少年的な雰囲気を纏っておりスバルに良く似た容貌を持つ。
その理由は、ギンガやスバル同様、彼女の誕生にはクイント・ナカジマの遺伝子が使用されており、彼女はスバルやギンガとは直接的な遺伝子上の「姉妹」にあたるためである。
固有武装はスバルのリボルバーナックルを模して作られた簡素な篭手「ガンナックル」と、マッハキャリバーを模して作られたナックルスピナーを備えるローラーブーツ「ジェットエッジ」で、ＩＳは黄色のウィングロード「エアライナー」も含めた格闘能力の総称で「ブレイクライナー」。
事件後は管理局の司法取引を受け、海上の更生施設へ入所、その際、チンク同様にナカジマ家からの養子縁組の話を受けた。

デェイチ
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
容姿は茶色の長髪を薄黄色のリボンで結わえている。
また両目に仕込まれた機器によって優れた望遠能力と解析能力を有し、それを併用した狙撃・砲撃による後方支援を役目とする。
寡黙で余り感情を表に出さないが、姉妹思いの温厚な性格。

ＩＳは、体内で生成したエネルギーを固有武装である大型の狙撃砲「イノーメスカノン」から砲撃として出力する「ヘヴィバレル」。
事件後は管理局の司法取引を受け、海上の更生施設へ入所、その際、チンク、ノーヴェ同様にナカジマ家からの養子縁組の話を受けた。

ウェンディ
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
容姿は赤い髪を後頭部でまとめた少年的な容姿で、ややノーヴェに似た外見をしている。
防御・射撃・飛行の三種をこなす前衛戦闘員で、同様の能力を持つノーヴェとコンビを組んでいる。
語尾に「～っス」とつく軽い性格で、自身の能力を用いる事自体に興味を示す。
ＩＳは「エリアルレイヴ」で固有装備のライディングボードを、盾のように使ったり、浮遊させて高速飛行移動を行う乗機としたり、砲撃をしかけたりできる。
事件後は管理局の司法取引を受け、海上の更生施設へ入所、その際、チンク、ノーヴェ、デェイチ同様にナカジマ家からの養子縁組の話を受けた。

ディード
ジェイル・スカリエッティが生み出した戦闘機人の一人。
容姿は栗色のストレートヘアで、順番的には一番下の妹にあたるが容姿はかなり大人びている。その為、双子の姉のオットーから羨ましい視線で見られる事も・・・・主に胸部の部分に・・・・。
優れた飛行技能と近接戦闘技術を持ち、最後の機人ということもあってその完成度は一際高い。
双子のオットー同様、感情の発露が乏しいがオットーとは意思疎通が出来る。
固有武装は赤い光を刀身とする双剣で、ＩＳはそれを用いた「ツインブレイズ」。

事件後は管理局の司法取引を受け、海上の更生施設へ入所、その際、セイン、オットー同様、聖王教会からスカウトの話が持ちかけられ、その話を受け、双子の姉達と共に今は教会にて修道女見習いをしている。

高町ヴィヴィオ

機動六課フォワード組が、休暇中の戦闘で保護した謎の少女。

身元不明だったため、六課が一時預かることとなり、その間は高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの2人を、「ママ」と呼び慕うようになる。

その正体は、古代ベルカ最強の兵器「聖王のゆりかご」の生体コアになった歴史上の人物「オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」のＤＮＡから生み出されたクローン。

公開陳述会の日、地上本部がスカリエッティの配下の戦闘機人により、襲撃に遭う中、機動六課の隊舎も同時に襲撃を受け、ジェイル・スカリエッティによって捕えられた。

その後、ゆりかごの生体コアとして改造・利用され、クアットロのマインドコントロール下に置かれたために、なのはの敵として立ちはだかる。

ＪＳ事件解決後、正式になのはに養子として迎えられ、高町の姓を名乗るようになった。

現在は一人の小学生として、Ｓｔ．（ザンクト）ヒルデ魔法学院に在籍し、魔法の勉強をする日々を送っている。

アルフ

明るくて勝気な性格をした、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンの使い魔。

大型の狼の姿をし、人間形態になることができる。

主人であるフェイトを心から慕っており、戦闘の支援から生活の身の回りサポートをこなしている。もともとはミッドチルダの山奥に棲んでいた狼の子供で、群れから置いていかれて死の淵にあったとこ

ろを、リニスの指導のもとフェイトの使い魔となることで救われたという過去がある。
ＰＴ事件後、新たに小型犬っぽい姿の「こいぬフォーム」を習得。魔力の燃費がいいらしく、後にザフィーラにも教えていた。
最近では、フェイトの傍を離れて無限書庫でユーノの手伝いや、海鳴のハラオウン家で家事をしている。

エイミィ・ハラオウン
元時空管理局通信主任兼執務官補佐で、アースラの管制官だった。
現在はクロノと結婚し、ハラオウン姓を名乗っている。
二児の母親で管理局を休職して海鳴市で育児に専念している。
子供の遊び相手や家事の手伝いでアルフが助けになってくれている。
遭難したフェイトの事を義母のリンディと共に物凄く心配していた。

セオドア・ロールス・ロイス（オリジナルキャラ）
ＪＳ事件にて暗殺された地上本部長、レジアス・ゲイズ中将の後任となった管理局高官。
昔は〝陸〟の出身局員ながらも〝空〟へと出向経験のあるエリート局員。
魔導師としても高ランクの魔導師であるが、はやてやなのはたちと違い、魔法に対してはそこまで強く依存はしておらず、管理局の魔導師至上主義に対して疑問を感じている。
管理局の高ランク魔導師としては珍しいタイプの高官。
容姿はアニメ「ストラトス・フォー」の登場人物、ロバート・レイノルズ

登場艦船　地球防衛軍・時空管理局

地球防衛軍
Ｍ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦
ガミラス戦役時前から地球防衛軍、宇宙艦隊で採用され、運用されて来た宇宙駆逐艦。
大型航空機と宇宙艦艇を折衷したような姿で艦橋は非常に低くて艦体と一体の構造で、第二次世界大戦期の大型爆撃機のキャノピーに似た形状を持つ。
艦首には左右に広がった板状の構造物があり、その端から上下横方向に三角形状の小型のフィンが合わせて六枚付いている。
艦後部両舷に水平尾翼があり、その付け根には上下に姿勢制御用の垂直尾翼が付いている。艦底部には増槽を二基懸架している。
推進ノズルを艦尾に一基備え、小型ノズルが、艦首の板状構造物後部の付け根部分に左右それぞれ一基ずつ、艦首から艦橋付近まで、艦底部に板状構造物があり、その後部にある一基、合計三基を備える。
全長　８０ｍ
武装　１２．７サンチ三連装高圧増幅光線砲×二基
１２．７サンチ対艦砲×二門
魚雷発射管×三門
ミサイル発射管×八門

Ｍ―２１７０１式宇宙巡洋艦
ガミラス戦役時前から地球防衛軍、宇宙艦隊で採用され、運用されて来た宇宙巡洋艦。
地球防衛軍の中核を成す艦で、Ｍ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦同様、多数の同型艦が建造されている。
形状は円錐または葉巻形で艦底部にはバルジのような張り出しがある。艦首には横方向に張り出したフィンと陽電子衝撃砲の発射口があり、艦尾にはＹ字型に尾翼が配置されている。
ヤマト就役後、生き残った艦には波動エンジンが換装され、ヤマト

の地球帰還後は宇宙戦士士官学校、宇宙戦士訓練学校にて練習艦として使用されている。

全長　１５２　ｍ

武装　２０サンチ陽電子衝撃砲×一門

２０サンチ連装高圧増幅光線砲×三基

魚雷発射管×四門

Ｍ―２１７４１式宇宙戦艦

対ガミラス戦役時、地球側の技術力の総力を結集して建造された主力艦。

しかし、圧倒的な科学技術力の差があるガミラス帝国の艦艇に対抗するには、攻防速いずれも不十分であり、多くの艦が撃沈された。

艦影は葉巻形で、外観の特徴として、艦首に四枚のフィンを十字型に、艦尾両舷に二枚のデルタ状のフィンを配置。

艦後部上面には大型垂直尾翼、後部下面には小型垂直尾翼を備える。

艦尾底部に大型の艦載機格納ハッチがある。

全長　２０５ｍ

武装　３６サンチ陽電子衝撃砲×一門

３６サンチ三連装高圧増幅光線砲×四基

魚雷発射管×八門

ミサイル発射管×十六門

対宙機銃多数

コスモゼロ

地球防衛軍の宇宙戦闘機で、正式名称は「零式宇宙艦上戦闘機」。大気圏内外で運用できる万能戦闘機である。

基本的に単座だが、後部に予備シートが収納されており、複座にも対応している。

艦上戦闘機として開発されたため、機首、主翼、垂直尾翼が折り畳み可能になっている。
武装は機銃が機首下面に四丁装備になった他、機首の穴は機関砲となっている。
全長　１６．９ｍ（格納時：１５．５ｍ）
全幅　６．８ｍ
主機　軸流式コスモエンジン（彗星五型二号）×一機
武装　パルスレーザー　四丁
　　機関砲　一門
　　ミサイル各種

１００式探索艇
探査目的の特殊艦載機。
電子偵察装備が充実しており、下部にレドームを持つ。
探査・調査目的の他に偵察任務や人員輸送など、戦闘以外のあらゆる任務に使用されている。
単発機で、単独での大気圏突入・離脱機能を有する。

宇宙戦艦　ヤマト
地球人類史上初の超光速恒星間航行用超弩級宇宙戦艦。
正式名称は、Ｍ―２１９９１式第１種宇宙戦闘艦。
旧日本海軍の大和型戦艦をベースにしたため、水上艦艇をそのまま宇宙に浮かべたような外観を有している。
艦体上部中央には同艦の塔型艦橋を改造した、上甲板からの高さが６０メートル以上に達する。
巨大な司令塔がそびえ、頂上部には艦長専用居室、その直下には操艦、索敵、戦闘、通信、構造維持、生命維持、調査分析、機関操作と言った艦の全機能を、艦長以下各班の責任者が集中管理するための第一艦橋、さらに下に航路策定並びに航海管制に機能特化した第二艦橋

（航海艦橋）が収まる。

司令塔真下の位置に艦底から突き出ている第三艦橋は、メインブリッジである第一艦橋のバックアップのためのサブブリッジである。内部設備は、重力下環境で船体が転覆したような状況を想定した上下対称構造になっている。

主砲を始めとする各種兵装は、艦体上部に集中している。その代わり、兵装を備えない下部は重装甲となっている。

大気圏内航行時の安定保持のため、左右両舷に収納式の巨大なデルタ翼型主翼を装備している。これは、尾部の三つある舵と併用して用いられる。艦底の尾部には二枚のベントラル・フィンがある。また、着水、潜水機能も有している。

全長　３３３ｍ
艦体幅　４３．６０ｍ
最大幅　６１．７７　ｍ（安定翼展開時：８７．７２　ｍ）
艦体高　９５ｍ
最大高　１００ｍ
主機関　ロ号艦本イ４００式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基
副機関　艦本式コスモタービン改（７４式推進機関）×八基・二軸
兵装　次元波動爆縮放射機（２００サンチ口径、通称：波動砲）×一門
主砲：四十六センチ三連装陽電子衝撃砲塔×三基（実体弾も射撃可能）
副砲：十五センチ三連装陽電子衝撃砲塔×二基（実体弾も射撃可能）
魚雷発射管×十二門（艦首及び艦尾両舷）
短魚雷発射管×十六門（両舷側面）
八連装ミサイル発射塔×一基（煙突ミサイル）
ミサイル発射管×八門（艦底）
１２．７センチ四連装高角速射光線砲塔×八基
８．８センチ三連装高角速射光線砲塔×四基

１２．７センチ連装高角速射光線砲塔×八基
７．５センチ連装高角速射光線砲塔×十基
７．５センチ三連装速射光線機関砲塔×四基
搭載機　零式５２型空間艦上戦闘機　コスモゼロ×二機
９９式空間戦闘攻撃機　コスモファルコン×三十六機
１００式空間偵察機、救命艇、上陸用舟艇　等

コスモファルコン
地球防衛軍が使用する宇宙戦闘攻撃機である。黄色と黒の大胆な塗り分け（下面は白）と、コックピット両脇に描かれた眼のマーキングが印象的な機体であり、宇宙戦艦ヤマトの２１９９年航海時の主力搭載機である。
この機体が開発される以前の地球製航空機は、ガミラス製偵察機を追跡することすら不可能であった。
ヤマト同様、イスカンダルからのオーバーテクノロジーにより、全ての性能が飛躍的に向上し、ガミラス軍と互角以上の戦闘が可能となった。機体外観は無尾翼デルタに属する。
主兵装は主翼付根付近にパルスレーザー砲を六門装備している。
２２０１年時には主力戦闘機の座をコスモタイガーに取って代られ、現在は訓練校等で練習機として使用されている。
全長　１７ｍ
全幅　７．９ｍ
武装　３０ｍｍパルスレーザー砲×６門
翼下ミサイル
胴体下部ミサイル弾倉

コスモタイガー
コスモファルコンの後継型として採用された地球防衛軍の主力宇宙戦闘攻撃機である。
機体外観の分類としては無尾翼デルタに属し、水平尾翼が無いのが

特徴である。
全長に対し全幅がかなり小さく、また二つのデルタ状垂直尾翼も極めて背が低い。
主翼は内翼と外翼で構成され、極めて小型、小面積である。
外翼には下反角がついている。機体設計が極めて優秀な設計となっている。
エンジンは二基搭載で、大気圏内外で両用可能。また本機はノンオプションのままの単体で地球重力圏及び月重力圏から宇宙空間への離脱が可能なほどの高推力を誇る。
補助ノズルを機首部に左右下一基ずつ計三基、底部には左右に縦に二基の計四基を配置している。
単座型は機首下にアンテナを一本備える。
固定武装として、機首部に３０ｍｍパルスレーザー機関砲を左右に四門ずつ計八門と主翼に１２．７ｍｍ実体弾機関銃を左右に五門ずつ計十門備える。
キャノピー後部にエアブレーキと噴射ノズルを一基備える。

全長　１７．４ｍ
全幅　８．２ｍ
全高　３．２ｍ
総重量　１８．５ｔ
乗員　１名
武装　３０ｍｍパルスレーザー機関砲×８門（機首）
　１２．７ｍｍ実体弾機関銃×１０門（翼内）
　翼下ミサイル

コスモタイガー　三座型
三人乗りのコスモタイガー。
内訳は機首キャノピーに二名、胴体背面の回転銃座に一名である。
機首下のアンテナが単座型の一本に対して二本である。

固定武装は背面に２０ｍｍ連装パルスレーザー旋回機関砲を一基備えるが、機首部の３０ｍｍパルスレーザー機関砲が左右三門ずつ計六門に主翼の１２．７ｍｍ実体弾機関銃が左右三門ずつ計六門に減らされている。

尾翼は引き込み式で、回転銃座の射界を妨げないようにしている。

全長　１７．４ｍ
全幅　８．２ｍ
全高　３．２ｍ
乗員　三名（キャノピーに二名、銃座に一名）
武装　３０ｍｍパルスレーザー機関砲×六門（機首）
　１２．７ｍｍ実体弾機関銃×六門（翼内）
　２０ｍｍ２連装パルスレーザー銃座×一基（胴体背部）
　翼下ミサイル

コスモタイガー　雷撃機型

機首が短く、胴体部両端のハードポイントに大型の宇宙魚雷を各１本、計２本懸吊する。さらに翼下には増槽とは形が異なる武装（何なのかは明言されていない）を計２発装備する。

胴体背面に装備された自衛用の２０ｍｍ２連装パルスレーザー旋回銃座以外の固定武装は無く、空戦は考慮されていない。

また、機首部のアンテナがない代わりに、対艦レーダー似の武装が取り付けられている。

機体は赤茶色系を基調としており、機首上面からキャノピー手前にかけて黒色に塗られ、機首・増槽・ミサイル先端、エンジンノズル部分が黄色となっている。

コスモタイガー早期警戒型

真田とトチローがコスモタイガー複座型を改良した機体。

機首部のアンテナを左右から上下にし、長さを伸ばして感度を上げている。
また、主翼の先端も矢印状のアンテナになっている。
機体の上部と下部には円盤状のレドームが取り付けられており、上部の方は必要があれば分離可能となっている。
武装は、機首や翼部の機関砲が減らされている一方、背面に三連装の回転砲塔を装備している。
コックピットの後部座席は後ろ向きになっている作りとなっている。

ドレッドノート級主力戦艦
ヤマトがイスカンダルからの帰還後、復興した地球防衛軍が建造した宇宙戦艦。
同型艦が世界の宇宙ドックにて多数が建造されている。
ガミラスのガイデロール級航宙戦艦の構造を基に開発されている。
艦影は紡錘形の艦体に、箱形の波動砲口を装備した艦首を持つ艦型で、ヤマトと同じ塔状艦橋、三連装主砲塔形式になっている。
新型波動エンジンを一基装備。
補助エンジンを艦後部両舷に一基、計二基を装備している。
また、補助エンジンとは別に、艦中間部両舷に艦の前方を指向した噴射口が一基、計二基、艦底前部のインテーク状の構造物の後方に推進ノズルが四基付属する。
艦橋内の窓枠の形状や座席レイアウトは、ヤマトやアンドロメダと大きく異なっており、スクリーンも小型のものが設置されている。
艦尾艦底にスリット状の艦載機発進口が並列に二つ存在する。
全長　３１０ｍ
全幅　４６ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基

補機　艦本式コスモタービン改（７６式推進機関）×二基
兵装　艦首拡散波動砲×一門
三連装衝撃砲（ショックカノン）×三基
六連装大型艦橋砲×一基
固定式四連装舷側砲塔×二基
対空パルスレーザー砲×十門
ミサイルランチャー×十門
搭載機　多数

戦略指揮戦艦　アンドロメダ
対ガミラス戦役後、再建復興した地球が新たに建造したアンドロメダ級戦艦一番艦にしてネームシップ。
地球防衛軍連合宇宙艦隊旗艦。西暦２２０１年に就役した最新鋭艦。
艦名はギリシア神話、星座、天体のアンドロメダに由来する。
本艦就役当時、地球防衛軍艦隊最大にして最強の１０万トン級宇宙戦艦で、ヤマト以上の巨躯と威容を誇り、強力な兵装を持ち、艦の自動制御化を進めている。
艦型は対ガミラス戦役時の主力戦闘艦等の紡錘形艦型の艦首に、箱形の波動砲口を装備した艦型で、ヤマト級（ヤマト型）戦艦の、塔状艦橋、三連装主砲塔形式が採用されており、先に就役していた主力戦艦と似通った特徴が見られる。
アンドロメダ級の特徴として、艦首の舳先に、突起状構造物「バウスプリット」（船首斜檣）を持ち、量産艦である主力戦艦との違いを際立たせている。
主機は対ガミラス戦役時、イスカンダルより技術供与されヤマト級戦艦に搭載されたものを、地球の技術陣が改良した、小型で高出力の新型波動エンジンを一基、補助エンジンを四基搭載し、ヤマト級より大型艦であるが、高速航行することが可能である。
兵装は艦隊決戦兵器である拡散波動砲を二門、艦首に並列（サイド・バイ・サイド）配置。強力な波動エネルギー増幅装置を持ち、その威

力はヤマトの二倍の威力がある。
主砲として三連装衝撃砲を四基、計十二門装備し、射程距離はヤマトの波動砲と同等である。
その他に五連装大型艦橋砲（艦橋と砲が一体になった物であり、ヤマト級戦艦の第二艦橋に相当する位置に配備）がある。
内部の主要通路はヤマト級と同様のオートウォーク式で、通路幅と天井も高く、住環境はヤマトより良好である。
艦の自動制御化を進めた事により、対ガミラス戦役時のヤマト級戦艦の１１４人の八割程度の９５名と少ない。
その理由は波動エンジンの制御や作動は、ロボットが行なっているため、機関部員は存在しない。また、主砲塔内部には、座席が無く砲術部員も存在しない。これは、レーダーからの情報を即時に分析、各パートに伝達、照準から射撃までの戦闘指揮を、中央でコントロールするためである。

全長　４４４ｍ
全幅　１１４ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基
補機　艦本式コスモタービン改（７６式推進機関）×十基・四軸
兵装　艦首拡散波動砲×二門
主砲：三連装５０．８ｃｍ衝撃砲×四基
五連装大型艦橋砲×一基
三連装対空パルスレーザー砲×二基
二連装対空パルスレーザー砲×二基
艦首ミサイル発射管×四門
対空ミサイル砲×八門
連装舷側砲×四基
搭載機　約三十機搭載可能
乗員　九十五名

０１式巡洋艦

防衛軍が新たに採用した量産型の宇宙巡洋艦。
主機関に波動エンジンを採用。艦隊決戦兵器である拡散波動砲を艦首に装備（装備していない型もある）。対ガミラス戦役時の地球防衛軍艦艇とは、あらゆる面で比較にならない性能を有している。
武装は、上述の拡散波動砲の他、艦前部上部甲板に連装衝撃砲を２基、下部甲板に１基装備。艦後部側面に３６０度旋回する、三連装衝撃砲を２基装備。これにより主砲は、前方に１２門、左右方に６門、上方に６門、下方に６門、後方に６門の指向が可能である。艦側面には宇宙魚雷発射管を４基（３連装×２・４連装×２）装備。艦後部上部甲板に８連装ミサイル発射管を装備。
艦型は、対ガミラス戦役時の地球防衛軍の艦艇と共通する紡錘―葉巻形の艦型を採用しており、艦橋のある艦中央部から艦尾がロケット型に絞られる形状が特徴である。
全長　１９０ｍ
全幅　３２ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基
兵装　艦首拡散波動砲×一門　（艦によっては未搭載型もあり）
主砲：二連装衝撃砲×三基
副砲：三連装衝撃砲×二基
三連装宇宙魚雷発射管×二基
四連装連射宇宙魚雷砲×二基
八連装重火器
二連装対空パルスレーザー砲×二基
搭載機　艦載機最大で三機搭載可能

パトロール艦
対ガミラス帝国戦役後、復興した地球防衛軍が新たに建造した量産型の６０００ｔ級（５９００ｔ）の軽巡洋艦。対ガミラス帝国戦役時の地球防衛軍艦艇とは、あらゆる面で比較にならぬ性能を有する。

艦型は、対ガミラス戦役時の地球防衛軍の艦艇と共通する紡錘―葉巻形の艦型で、同時期に建造された巡洋艦と同様の艦型が採用されている。

主機は波動エンジンを採用。艦後部にあるインテーク状の構造物上に艦の前方を指向した噴射口が片舷に二基ずつ計四基ある。

全長　１９０ｍ

全幅　３２ｍ

主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基

兵装　艦首拡散波動砲×一門

主砲：１５．５ｃｍ二連装衝撃砲×三基

三連装衝撃砲×四基

搭載艇　偵察機一機

連絡艇一機

護衛艦

対ガミラス戦役後の復興に伴い、拡大した物資輸送航路の護衛を目的として地球連邦政府が建造した量産型の護衛艦艇。

３５００ｔ級（正確には３６００ｔ）の小型艦で、艦体基本構造は同時期の駆逐艦と同一。主機関に波動エンジンを採用。対ガミラス帝国戦役時の地球防衛軍艦艇とは、あらゆる面で比較にならぬ性能を有する。艦首に艦隊決戦兵器である波動砲を装備している。

艦型は、対ガミラス戦役時の地球防衛軍の艦艇と共通する紡錘―葉巻形の艦型で、同時期に建造された巡洋艦、パトロール艦、駆逐艦と同様の艦型が採用されている。艦のサイズは、同時期の駆逐艦と同寸である。

武装は、艦隊決戦用の雷撃に特化した駆逐艦と異なり、輸送船の護衛用としてバランスのある武装を採用している。

艦後部には駆逐艦同様に小型の連装砲塔が四基、Ｘ状に配置されて

いる。
全長　１１５ｍ
全幅　１４ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基
兵装　艦首拡散波動砲×一門
二連装衝撃砲×三基
三連装宇宙魚雷発射管×二基
四連装連射宇宙魚雷砲×二基
二連装対空パルスレーザー砲×四基

輸送艦
資源輸送補給船団所属の２０万ｔ級タンカー。ガミラス戦役後に建造された大型船で、太陽系内の諸惑星から採掘される様々な鉱物資源を地球に輸送するための鉱物資源運搬船である。
後部に機関を備えた大型の円筒状船体を左右に繋げた三胴船形式で、中央船体前後に連結器が備え付けられており、宇宙空間を航行する際は何隻もが前後に連結される（その際一隻ごとに表裏につなげられる）。連結数は理論上無限大。また、航行の際には護衛艦によるエスコートを伴う。運行の自動化が進み、大型の割に乗組員は少数である。
基本的に非武装で各惑星と地球の往復がメインルートとなるが、その行動範囲は、まれに太陽系外まで及ぶこともある。
ヤマト退艦後、島大介が乗艦していたのもこのタイプの艦。
全長　３０２ｍ
全幅　３３６．７ｍ
基準排水量：１９８０００ｔ

０１式宇宙突撃駆逐艦
ヤマトがイスカンダルからの帰還後、Ｍ―２１８８１式宇宙突撃駆

逐艦に代わり新たなに設計、建造、採用した宇宙駆逐艦。
現存する地球防衛軍艦艇随一の速力を誇り、敵艦隊に肉薄して十六基の宇宙魚雷発射管からの雷撃を行う。
艦型は、対ガミラス戦役時の地球防衛軍の艦艇と共通する紡錘―葉巻形の艦型で、同時期に建造された護衛艦とほぼ同じ艦体をしている。

全長　１１２ｍ
全幅　１４ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基
兵装　四連装連射宇宙魚雷発射管×四基
　主砲：二連装衝撃砲×二基
　副砲：二連装衝撃砲×四基
　艦橋側面連装対空パルスレーザー砲×四基
乗員　四十五名

ドレッドノート級改級宇宙空母
主力戦艦の艦体後半部を格納庫と飛行甲板に改造した派生型で、純粋な空母ではない。
前半部は主力戦艦と同じであるが、後半部は最上部に発艦専用の飛行甲板とその下に格納庫、その下に波動エンジンを備えている。
艦橋後部も主力戦艦と異なる。
新型波動エンジンは、長方形型の墳進口で着艦専用口の下に設置されている。
補助エンジンは、艦尾両舷まで延びている台形型噴進口が二基、計四基。
飛行甲板には2基のエレベーターを並列に設置。
搭載機出撃の際は、エレベーターで最上部の飛行甲板に機体を上げて発艦させる。

主推進口の上には着艦専用口があり、直接格納庫に繋がっている。

全長　３２０ｍ

武装　艦首拡散波動砲×二門

３０．５センチ三連装収束圧縮型衝撃波砲塔×２基

六連装大型エネルギー砲（司令塔頭頂部）

四連装対艦グレネード投射機×２基（艦首両舷）

小型魚雷発射管×４門（艦首両舷）

中型魚雷発射管×８門（艦首両舷）

ミサイル発射管×８門（艦底）

短魚雷発射管×１２門（両舷）

多連装ミサイル発射機×１２基（両舷）

司令塔防護ショックフィールド砲×３基（司令塔前部および基部）

近接戦闘用六連装側方光線投射砲×２基（司令塔基部）

対空パルスレーザー砲塔×４基（司令塔および基部）

拡散型対空パルスレーザー砲塔×３基（司令塔基部および後方）

拡散型対空パルスレーザー砲塔×２基（艦尾両舷）

多目的ランチャー×６門（両舷）

戦闘衛星

ガミラスとの地上戦を想定して作られた無人の本土決戦兵器。

遂にガミラス相手に使用されることは無かったが、その後も地球の周回軌道上に展開しており、初めて使用された相手が地球から脱走を図るヤマトであった。

地球上に多数配備されていたが、月までの航路上にはさほど展開されておらず、ヤマトはその穴をついて地球圏から脱走した。

口径はヤマトの副砲サイズのモノもあれば、主砲サイズの大型など、様々な大きさのモノが存在する。

コスモクリーナー
イスカンダル星の所有する放射能除去装置。
イスカンダル星のスターシアから、「滅亡したくなければ、受け取りに来るように」のメッセージが地球に送られ、ヤマトはイスカンダルへと旅立つことになる。
イスカンダル星ではパーツ単位で引き渡され、スケジュールの関係上、地球への帰路の最中に真田　志郎により艦内工場にて組み立てられる。
その後、ヤマトにより地球へと運ばれ、放射能塗れの地球は元の姿を取り戻した。

ドレッドノート級主力戦艦　後期生産型
甲型
外見は主力戦艦とたいして変わらないが、白色彗星での失敗に学び、前線任務に耐えられるように各種の艦砲が強化されている。
それに伴い波動砲も従来の拡散型からヤマトと同型の収束型へ変更されている。
艦体の色は黒青い色をしている。
同型艦　蝦夷　ネヴァダ　ヴァンガード

乙型
外見は主力戦艦とたいして変わらないが、波動エンジンとバイパスの換装により、大型艦のネックである巡航速度を上昇させた戦艦。
波動砲も従来の拡散型からヤマトと同型の収束型へ変更されている。
艦体の色はアイボリーカラーとなっている。
同型艦　金剛　メリーランド　アイル・オブ・スカイ
丙型
外見は艦首部を除き、主力戦艦とたいして変わらないが、新型の積層装甲により、各部装甲部が強化され、乗員の生還率向上が図られた

艦種。
他の主力戦艦との外見上の違いは、波動砲は破口部を残し撤去され発射口は分厚い装甲板で塞がれており、艦首上部のフィン状構造物もなくなっている。
艦体色は灰色で、艦首が白となっている。
同型艦　アーカンソー　イリノイ　ロイヤルオーク

雪風・改
ガミラス戦役時に古代守が艦長を務めた宇宙駆逐艦雪風。
沖田提督が地球の命運をかけて望んだ冥王星会戦の折、提督を乗せた旗艦を逃がすため殿を務め、ガミラス軍の攻撃で操艦不能になり、タイタンに墜落し、放棄されていた雪風に波動エンジンを搭載し、各部を改良し蘇らせた艦。
原型艦の優秀な機動力そのままに、小型艦としては、トップクラスの能力が与えられている。
武装には駆逐艦が搭載できるギリギリの口径の連装式の砲塔を艦の上下に搭載し、従来の魚雷・ミサイル発射管も健在。
基本的に無人艦として運用されているが、勿論有人操艦も可能。
形状は艦首の板状構造物を始めとする基本形はゆきかぜから大きく変わっていないが、細部のディティールは大きく改変されている。
無人艦のため艦首の艦橋窓はなく、艦底部分はインテーク状構造になっている。
武装　ショックカノン連装ヤマト型砲塔×三基
突撃戦闘用連射ミサイルランチャー×四門
長射程空間ミサイル魚雷四連装ランチャー×二基
外装式大型決戦ミサイル×二発

二連砲塔戦車

地球防衛軍で使用されている軍用車両。

地球本土を守る直衛師団所属の主力戦車であり、多数が配備されている。

武装は連装主砲１基と、対空用の３連装小型ミサイルランチャー２基。

陸上部隊全体を率いる指揮車としても使用され、その際には３本のアンテナの真ん中に、赤い三角の旗を掲げる。

全長　１０ｍ

全高　３．６ｍ

武装　連装砲塔×１基

　　三連装対空ミサイルランチャー×２基

ボ〇太くん型戦闘スーツ

犬だかネズミだかよく分からない生き物の姿をしており、遊園地などのイベント会場で子供たちに風船を配っていそうな外見をしている。

外装を超アラミド繊維に変更したほか、指向性マイク・サーマルセンサー・暗視システムなどを組み込む戦闘スーツ。

月村グループ、真田志郎、大山敏郎（トチロー）の合作。

強力な戦闘スーツであるが、難点もあり、それは空を飛べない、その大きさ故、狭い場所の任務には適さない、またボイスチェンジャー機能をＯＦＦにするとシステムダウンしてしまうため、戦闘スーツ同士間の通信は可能であるが、それ以外ではインカムが必要となる・・・と言った難点がある。

操縦・戦術支援にはアナライザーやバトライザーが搭載しているようなＡＩ機能が補助する。

内部には六つのモニター画面が内蔵されており、サーモグラフィなどの各種探知システムも充実している。

防御面においても外装の上に防弾機能を持つタクティカルベストを装備することにより、さらに強化することが出来る。
また機密保持のため自爆装置も取り付けられている。
自爆装置を作動させると、強制的にハッチが開き、パイロットは脱出し、攻撃対象が存在する場合、本戦闘スーツはパイロット脱出後にその目標に向かって特攻することが出来る。

パトロール艇
太陽系内の定時パトロール用の機体として防衛軍が使用している宇宙艇。
外観上では中央ブロックを中心に、居住ブロックと三つの動力ブロックとが別々に分かれている防衛軍としては特殊な構造となっている。
通常の定員は四人であり、操縦席と副操縦席の後ろに機関士の席が二つあるが、一人～二人でも運航は可能。
不測の事態に備え武装が施されているが、それらはすべて正面に向けて固定式に装備されている。
艇自体に緊急事態が起きた際、乗員の脱出用に機首部下面に脱出カプセルの射出口があり、カプセルには操縦室の床から直接乗り移ることが可能となっている。
第二次イスカンダル航海後、ヤマトを降りた古代と北野が同型のパトロール艇の艇長を務めていた艇でもある。

全長　７５ｍ
全高　１９．５ｍ
全幅　４２．３ｍ
定員　四人
武装　連装レーザーカノン×二基
　大型ミサイル発射管×二門
　魚雷発射管×六門

高速連絡艇
西暦２２０２年当時の地球連邦で使用されていた宇宙艇。
非常時における地球連邦大統領をはじめとする連邦政府ＶＩＰの緊急脱出用として、防衛軍司令部の地下秘密ターミナルに格納されていた。
発進口は、付近にある森林公園にカモフラージュされている。
地球から火星の先の小惑星地帯まで、短期間で到達することが可能なほどの高速性をもつ。
暗黒星団帝国侵攻の際には本来の用途に使われる前に官邸が占拠または包囲されてしまったため、ヤマトの主要メンバーが地球を脱出する際に使用された。
全長　４５ｍ
全高　１５．６　ｍ
全幅　２６．６　ｍ

改彗星帝国高速駆逐艦ホワイトパイカー級
鹵獲した彗星帝国の高速駆逐艦を改修した艦。
防衛軍の駆逐艦に勝るとも劣らない高速巡行性能を持ち尚且つ巡洋艦並みの防御力を持つ。

改彗星帝国ミサイル艦ホワイトランサー級
鹵獲した彗星帝国のミサイル艦を改修した艦。
内部構造を完全に解明できておらず、元の艦よりも性能はやや劣るがそれでも充分に高性能の艦。
艦首に装備されている破滅ミサイルはミサイルの形をそのままに高性能のレーダーアンテナとなっている。

改彗星帝国中型空母ホワイトスカウト級

鹵獲した彗星帝国の中型空母を改修した艦。
主力戦艦をベースに改修した防衛軍の空母には火力・防御力は劣るもののそれを補って余る高速巡行性能を有する。

改彗星帝国巡洋艦ホワイトアーチャー級
鹵獲した彗星帝国の巡洋艦を改修した艦。
防衛軍の巡洋艦以上の高速巡行性能を持つ機動性から、防衛軍のパトロール艦並みの索敵能力を持たせたことにより、防衛軍のパトロール艦以上の性能を有する。

中型雷撃艇
西暦２２０１年以降の地球防衛軍で使用されている宇宙艇。
格納スペースがあれば戦艦、航宙母艦でも搭載・運用が可能。
防衛軍の艦載機同様、大気圏内外を問わず運用が可能な為、宇宙艦艇以外にも各惑星基地でも配備・運用されている。
武装は先端部上下にパルスレーザー機関砲を１２門、各部に多数のミサイル発射口を備える。
さらに先端部分そのものが大型ミサイルとなっており、強力な対艦攻撃力を持つ。
コックピットは縦列の複座式で、最大四人が搭乗できるが、一人でも運用が可能となっている。
全長　１５ｍ
武装
雷撃艇艦首大型ミサイル×一基
パルスレーザー砲×十二門
上部ミサイル発射口×二門
側面ミサイル発射口×十六門
下部ミサイル弾倉×二基

コスモハウンド

宇宙開拓の為に防衛軍が新たに製作した惑星探査を主目的とした探査・観測機。

デルタ翼を持つ大型機で、機内には小型のヘリコプターや雪上車などの各種車両を搭載するなど高い搭載能力と広いスペースを持つ。

そのスペースから探査・観測機以外にも救命艇としての使用も可能となっているが、医療機器は積んでおらず、重傷者や病人がいる場合には、別に救命艇を呼ぶ必要がある。

機内の構造は、最後部の機関ブロックを除いて上下二段式になっており、上段は前から上部コックピットおよび補助席、調査分析室、上部第二倉庫、下段は下部コックピット、観測室兼コンピューター室、下部倉庫、格納庫および乗降ハッチの順に仕切られており、航空機ながら機関に関して航空機関士を必要としている。

全長３９．４ｍ

武装　単装２５㎜パルスレーザー機銃　×二　（内一基は格納式）

改ドレッドノート級輸送艦・病院船

従来の連結型の輸送艦と異なり、防御力が高いドレッドノート級主力戦艦　後期生産型・丙型の船体を使用した輸送艦。

ドレッドノート級をベースにしているも武装は施されておらずその分、上部甲板部に箱型の船倉・居住スペースを増設しており多くの人員や物資を従来の輸送艦や通常のドレッドノート級戦艦よりも多く積載する事が出来る。

格納庫部分は本来のドレッドノート級と変わらず設置されているので、船倉として使用する他にも従来の格納庫として航空機等を搭載する事も可能である。

その為、輸送艦の他に医療設備に特化した病院船も建造されている。

ただし非武装の為、本艦の運用の際はこれまでの輸送艦同様、護衛艦の同行が必須となる。
搭載機数　１５機
搭載艇　内火艇　２機

惑星探査船
暗黒星団帝国戦役後に再開された宇宙開拓の為に建造された宇宙開拓省所属の大型宇宙船。
さまざまな探査機能を有しているが武装は皆無で護衛戦艦の随伴は必須となっている。
太陽の異常膨張に対して、新惑星探査のためアメリカ、アフリカ、ヨーロッパ、ロシアの宇宙開拓省支部の探査船が護衛戦艦と共に新惑星探査の為に出航した。

時空管理局
Ｌ級次元航行艦船
時空管理局が採用している巡航艦で多数建造されているが、初期に建造されたモノは老朽艦とされ、次々と廃艦処分されている。
ブリッジ下部に魔導砲塔を多数装備している他に特装砲「アルカンシェル」も搭載している。
その中でもアースラはＰＴ事件、その後の闇の書事件においてクロノ達時空管理局員の船として地球に派遣された艦。
また嘱託局員となった　高町なのは　はこの艦に乗り様々な各種研修・任務をこなした。
新暦７５年には老朽化と損傷の蓄積が進んでいたため廃艦処分になる事が予定されていた。

しかし、機動六課隊舎襲撃によって急遽六課本部として引っ張り出され、最後の奉公を果たした。

全長　１６５ｍ
全幅　５５ｍ
武装　魔導ビーム砲×十門
　　アルカンシェル×一門

ＸＶ級次元航行艦船

時空管理局が新たに採用している次元航行艦で、Ｌ級次元航行艦船を発展拡大させた艦。

Ｌ級同様多数建造されている。

ミッドで起きたＪＳ事件の際には衛星軌道上まで浮上してきた「聖王のゆりかご」に対するアルカンシェルによる砲撃を敢行、消滅させた。

クロノが艦長を務めるクラウディアもこの型の艦。

全長　３４７ｍ
全幅　１６５ｍ
武装　格納式魔導ビーム砲　多数
　　アルカンシェル×一門

ＳＸ級次元航行艦

管理局が建造した新たにＸＶ級よりも強力次元航行艦。

ＪＳ事件における聖王のゆりかごに感化されて管理局が製造に乗り出した。

ミッドを始めとする各管理世界の造船所で製造させた艦で、管理局史上最強の艦になる筈だったが、第二の地球における地球防衛軍、ガ

ミラス帝国、彗星帝国ガトランティス、暗黒星団帝国デザリアム　など外宇宙における星間国家が保有する宇宙戦闘艦と比べると性能が落ちる事から製造は現在建造されている艦のみで新たな建造は全てキャンセルとなった。

外見はガンダムＳＥＥＤ　ガンダムＳＥＥＤ　ＤＡＳＴＲＡＹに登場したクサナギ級宇宙戦艦

名前の由来は自動車メーカー、スズキから販売されているＳＸ４から。

武装に関しては原作におけるクサナギよりも劣るも大きさに至っては原作より勝る。

全長　３５０ｍ

武装　２２５ｃｍ連装高エネルギー収束魔導砲×２基

アルカンシェル（原作におけるローエングリンの位置に設置）×四門

Ｘ級巡航艦

管理局が旧式化したＬ級巡航艦に代わって建造した次元巡航艦。

ＳＸ級同様、ミッドを始めとする各管理世界の造船所で製造させた艦。

ＳＸ級と異なりこちらの艦は戦力維持の名目で建造が続いている。

外見は機動戦士Ｖガンダムに登場したリーンホースＪｒ。

しかし、原作と異なり、大きさと武装に関しては劣っている。

名前の由来は自動車メーカー、トヨタから販売したマークＸから。

全長１９０ｍ

武装　１５ｃｍ連装高エネルギー収束魔導砲×六基

アルカンシェル（原作における前部のＭＳ発射口）×一門

Ｒ級次元航行艦

管理局が新たな艦種として建造した次元航行艦。

防衛軍などでは駆逐艦・護衛艦に該当する艦種。
ＳＸ級　Ｘ級同様、ミッドを始めとする各管理世界の造船所で製造させた艦。
Ｘ級同様、戦力維持の名目でＸ級よりも数多く建造されている。
外見は機動戦士Ｖガンダムに登場したリーンホース。
試作艦であるクライスラーは機動戦士ガンダムＦ９１に登場したスペースアーク。
しかし原作と異なり大きさと武装は劣る。
名前の由来は自動車メーカー、スズキから販売されたワゴンＲから。
全長　１１０ｍ
武装　１２ｃｍ連装高エネルギー収束魔導砲×四基
　クライスラーは二基
　アルカンシェル（原作における前部のＭＳ発射口）×一門

ＬＳ級次元航行艦　ヴォルフラム
管理局がＳＸ級次元航行艦と並行して建造した次元航行艦。
しかし、建造コストがＳＸ級次元航行艦よりも高くなったため、一番艦であるヴォルフラム以降は建造されなかった。
ＪＳ事件の折、アースラを率いた元機動六課部隊長、八神はやてが艦長へ就任した。
外見は、ガンダムＳＥＥＤ　ＤＡＳＴＲＡＹ　に登場したミネルバ。
ただし、質量兵器の使用を禁じている管理局なので、原作と異なり、武装の数が減っている。
階級のＬＳ（エルエス）は、トヨタ自動車が展開する高級車ブランド「レクサス」のフラグシップセダンとして販売されているセダン（Ｆセグメント）から。
全長　３２０ｍ
武装　格納式アルカンシェル×一門
　２連装高エネルギー収束魔導砲×二基

４２ｃｍ３連装魔導副砲×一基
魔導ＣＩＷＳ×十二基

聖王のゆりかご
古代ベルカの遺産のロストロギア。
魔導兵器だが、同時に質量兵器としての側面も併せ持つ。
一度世界を滅ぼしたと言われるほどの火力を持つ全長数千メートルの巨大戦艦で、当時のベルカを支配していた聖王家（ゼーゲブレヒト家）の居城として使われ、聖王は生まれてから死ぬまでこの艦を中心に生活していたことからこの名前が付いた。
古代ベルカ時代においてもすでにロストロギアのようなものとして扱われていたとされ、そのルーツについてはあのアルハザードとの関連も疑われている。
凄まじい火力を誇り、さらにミッドチルダ上空にある２つの月から魔力供給を受けることでより強力な性能を発揮し、時空間攻撃すら可能になると言われている。
聖王たる人物が玉座に座ることで起動および浮上するが、艦橋に当たるコントロールセンターは別にあり、全体的な艦の制御はそこで行われ、聖王はあくまで艦を動かすキィーとしての役割しか与えられず、緊急時には艦の防衛機能が逆に聖王の肉体を支配し、最後まで侵入者を排除しようと戦闘を続行する。
加えて長期間聖王がこのゆりかごに繋がれているとそれだけで寿命が大きく削られるようで、過去にこのゆりかごに乗り込んだ聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトはそれが原因により若くして死亡している。
まだ世継ぎが居なかったゼーゲブレヒト家はこれにより、断絶し、聖王の血筋は途絶えた。
元は管理局のトップたる最高評議会が確保していたが、彼らを裏切ったジェイル・スカリエッティが私物化し、聖王のクローン体であるヴィヴィオを使って起動させ、ミッドチルダおよび管理局へ対抗するための切り札として使用される。

しかし、艦内へと侵入した八神ヴィータが艦の動力炉を破壊、高町なのはの活躍によって、ゆりかごのキィーである聖王のクローン体であるヴィヴィオが艦のコントロールから切り離されると艦全体の各機能が低下。

最後はクロノ・ハラオウン率いる時空管理局艦隊のアルカンシェルの一斉砲撃で消滅した。

登場艦船　ガミラス

ガミラス帝国軍

ガイデロール級航宙戦艦

ガミラス帝国軍宇宙艦隊が正式採用している主力戦艦。

艦容は魚を思わせる独特の生物的フォルムをしている。

艦首先端のアンテナ二本、艦首から大型３連装砲塔の間にあるアンテナ一本装備している。

多数の魚雷発射管とビーム砲塔を備え、高い攻撃力を具えるのと同時に、艦橋周囲に近接防御火器を多数配置して艦橋の防御力を高めている。

武装は、前甲板上部に大型三連装エネルギー砲塔二基、船体中央下部に中型三連装エネルギー砲塔一基、後部に小型三連装エネルギー砲塔四基、その他に艦首や艦底、艦尾などに魚雷発射管（固定式砲門との説もある）を多数を備える。

復興した際の地球防衛軍の主力戦艦（ドレッドノート級）のベースデザインにもなった艦。

全長　３５０ｍ

全幅　４２ｍ

全高　７０ｍ

武装　３３０ミリ三連装陽電子ビーム砲塔×三基（艦上二基、艦底一基）

２８０ミリ二連装陽電子ビーム砲塔×四基（艦尾）

近接防御火器（単装）×三十二基（艦橋側面）

近接防御火器（四連装）×六基（艦橋前方および後方）

魚雷発射管×十二門（艦首）

魚雷発射管×二十一門（艦底）

メルトリア級航宙巡洋戦艦

形状や兵装はデストリア級に類似しているが、全体的により重厚な

フォルムになっている。
ガミラス軍艦艇特有の目玉状の発光部は、両舷中央部に存在する。
また、デストリア級と類似した形状の艦橋のアンテナらしき構造物と煙突らしき構造物が存在する。さらに、艦舷部のヒレは先述の両舷中央の発光部よりも後方に展開しており、このヒレには牽引ビームの発射装置が備わっている。
後部甲板上に艦載機の格納庫を有しているほか、デストリア級と同様、艦橋が二つ存在する。

全長　２８３ｍ
武装　３３０ミリ三連装陽電子カノン砲塔×二基（艦橋前方）
２８０ミリ三連装陽電子カノン砲×四基（両舷）
２８０ミリ三連装陽電子ビーム砲×二基（艦底および艦尾）
魚雷発射管×六門（艦首）

デストリア級航宙重巡洋艦
ガミラス帝国軍宇宙艦隊の主力を担う艦艇の一つ。
魚、もしくは爬虫類に似た独特の生物的フォルムを持ち、基本兵装は艦首（目に相当する部分）に大型エネルギー砲二門、ガミラス式の無砲身三連装エネルギー砲塔が甲板部に艦首二基、艦尾一基の計三基、艦底部に二基、舷側部に三連装砲をセットにしたケースメイト式スポンソンが四基、両翼部に小型魚雷発射管左右各二門計四門、及び五連装エネルギー機関砲二基などがある。
航行する際には、メインエンジンのノズルが後方から見て時計回りに回転する。
艦橋が二つ存在し、放射状窓の部分が第一艦橋、その下の縦スリットの部分が第二艦橋である。
他の艦級と比較して魚雷発射管の数を減らした分、主機関の大型化が可能となり、ビーム兵器を多数搭載している。

全長　２７０ｍ
全幅　６３ｍ
全高　６８ｍ

武装　３３０ミリ三連装陽電子ビーム砲塔×四基（艦上三基、艦底一基）
２８０ミリ三連装陽電子カノン砲×四基（両舷）
魚雷発射管×四門（艦首下面）

ケルカピア級航宙高速巡洋艦

ガミラス帝国軍宇宙艦隊の主力を担う艦艇の一つで、デストリア級航宙重巡洋艦をベースにガミラス艦の中でも巡航性能を強化したタイプとされる。

特徴的な艦首の「目玉」の部分が左右で計四つある。武装は大型のガミラス式無砲身３連装砲塔上甲板に二基（艦首、艦尾に各一基）配置とデストリア級より少ないが、その分大口径で一門あたりの破壊力は高い。他に上甲板両舷に大型ミサイル発射管らしきものが二基とデストリア級同様、両翼部に三連装エネルギー機関砲二基を装備している。

全長　２４０ｍ
全幅　４７ｍ
全高　５０ｍ
武装　３５０ミリ三連装陽電子ビーム砲塔×三基（艦上二基、艦底一基）
魚雷発射管×十門（前方両舷六門、艦首下面四門）
六連装ミサイル発射機×一基（艦橋後方）

クリピテラ級航宙駆逐艦

ガミラス帝国軍宇宙艦隊の主力を担う艦艇の一つで、デストリア級航宙重巡洋艦をベースにガミラス艦の中でもエネルギー砲の数を減らし、その分ミサイルで武装したタイプの艦。

艦首にやや小ぶりな目玉型のエネルギー砲二門の他、それより小さい目玉状のミサイル発射菅を左右で計四門備える。

無砲身三連装砲塔を艦底部に一基装備し、艦後部には大型パルスレーザー砲塔を一基装備している。また、艦体後部舷側に四連装ミサ

イルランチャーハッチ各一基を備えている。
他に両翼部にも連装ミサイルランチャーハッチらしきモールドがある。
ガミラス艦艇の中で最も建造数が多く、高い機動性を有する雷撃戦主体の艦艇で、鮫のように敵艦に襲いかかる。
全長　１６０ｍ
全幅　３７ｍ
全高　３７ｍ
武装　２８０ミリ二連装陽電子ビーム砲塔×一基（艦底部）
１３３ミリ二連装陽電子速射砲塔×一基（後部甲板）
魚雷発射管×六門（前方両舷四門、艦尾二門）
ミサイル発射管×八門（艦橋前方）
四連装ミサイル発射機×二基（艦橋後方）

空間艦上攻撃機ＤＭＢ８７　スヌーカ
ガミラス帝国で使用されている主力艦上爆撃機。
主に同帝国の宇宙空母に搭載され運用される。
特徴のある中翼配置の逆ガルウィングに固定脚を装備した前輪式。
双発エンジンで、垂直尾翼二枚を斜めに配した無尾翼機。
大量の爆弾を搭載でき、主翼下に大型一発ずつ計二発と中型五発ずつ計十発の合計十二発、胴体爆弾倉に中型六発合わせて十八発搭載できる。
いずれの爆弾は投下後、推進器が発動してミサイルやロケットのように目標へ突進する。
また、機首にある二つの出っ張りはランチャーとなっており、小型の対艦ミサイルを八発ずつ、計十六発を搭載。
また、自衛用として後部機銃座にパルスレーザー砲二門、機首に１３ミリ機関銃を二門、翼に７．９ミリ機関銃十門を装備している。
全長　１８．２０７ｍ
乗員　二名
武装　航宙爆弾×五（翼下）

空対艦ミサイル×二（翼下）
七連装ロケット弾発射機×二基（機首）
連装レーザー銃塔×一基（機体上部）
１３ミリ機関銃×二門（機首）
７．９ミリ機関銃×十門（翼内）

ポルメリア級強襲航宙母艦
ガミラス帝国軍宇宙艦隊に所属する空母の一隻で、円盤型の艦体中央部から四方にブーム（支柱）を突き出したヒトデ型をしており、艦体上面にはドーム状の構造物が四つある。
ブーム下側の先端部にある四つの開閉式発艦口より、同時に多数の全翼型の高速空母艦載機メランカを発艦させることができる。
艦のスペースの関係上、艦載機は機体を横にスライドさせながら発艦口まで移動し、落下するように放出され、宇宙空間で方向を転換させるという変わった形式をとっている。
衛星軌道上などで停止している時でも、レーザー砲の部分を除き艦体が常に上から見て時計回りに回転しているが、艦載機を発進させる際には停止する。
推進力は四基備えた重力制御装置によって発生させている。
艦底中央部には、主砲である大口径レーザー砲が１門あり、地上にいる目標をこれでなぎ払う。
このほか、艦体上部に三連装ミサイル砲塔を備えている。
艦によってはミサイル砲塔ではなく、三連装リボルバー式対空レーザー砲塔に換装されている艦もある。
ヤマトのショックカノンで最初に撃破されたガミラス艦でもある。
全長　３８３．８ｍ
全幅　２９１．３ｍ
全高　５０．０ｍ
武装　大口径レーザー砲×一門
　三連装ミサイル×一基　または　三連装リボルバー式対空レーザー砲塔×一基

戦闘攻撃機ＤＷＧ２２９　メランカ
ポルメリア級強襲航宙母艦が搭載している戦闘機。
三日月形の全翼機で機首下面にデストリア級のような「目玉」状の発光部が存在する。
翼幅が極端に広いため、他の空母には搭載不可能とされ、ポルメリア級強襲航宙母艦が専用母艦となっている。
全長　１１．０ｍ
全幅　２７．３ｍ
乗員　１名
武装　１３ミリ機関銃×６
　　空対地ミサイル×６

偵察機ＦＧ１５６　スマルヒ
ガミラス帝国軍の高速偵察機。
六発の無尾翼機となっており、機首下面に「目」型の発光部が存在する。
また、主翼付け根上面には機銃らしき物がある。キャノピーは無く、補助翼や姿勢制御ノズルの類も無い。
小型の宇宙艇に匹敵するほどの高出力を持つ主機関と、翼端に装備した重力バランサーによる機体制御により、他の航宙機を圧倒する機動性を有している。
全長　１５．２ｍ
全幅　２５．８ｍ
乗員　２名

デラメヤ級強襲揚陸艦
艦首の肥大化した部分に戦闘車両を搭載する。ブリッジなどは存在せず、武装として艦首下部に連装陽電子ビーム砲塔、艦体に魚雷発射管を二門装備している。
艦首にはガミラス艦艇特有の発光部が存在する。戦闘を行うのみ

ならず、車両六両の輸送や空中投下も可能である。
土星衛星タイタンにて、コスモナイトを集積しようとしていたヤマト乗員（古代、雪）を捕虜にしようと搭載されていたサルバーＳ―ＶＩ型　重戦車を出撃するも乗員達が全員返り討ちに合い、そのまま放置されていた所を防衛軍が鹵獲した。
旧作の宇宙艦隊ヤマトでは艦影が円盤型であり、そのままタイタンに放置。
ヤマト２１９９では撃破されたが、この世界では地球防衛軍初のガミラス鹵獲艦となった。

サルバーＳ―ＶＩ型　重戦車
ガミラス帝国で使用されている軍用の陸上車両。
冥王星ガミラス軍基地所属のデラメヤ級強襲揚陸艦に搭載されていた車体は、土星衛星タイタンにて、コスモナイトを集積しようとしていたヤマト乗員（古代、雪）を捕虜にしようと、出撃したが、乗員達が全員返り討ちに合い、母艦であるデラメヤ級強襲揚陸艦と共に放置されていた所を防衛軍が鹵獲した。
車体前後に逆噴射用ロケットポッドを装備しており、強襲揚陸艦から空中出撃する際、噴射して着陸速度を落としている。
車体の防御力を強化するため、装甲に帯磁特殊加工（ミゴウェザー・コーティング）が施されている。
全長　１１．５ｍ
全幅　４．８ｍ
乗員　３名
武装　９９ミリ陽電子カノン砲×３門
　　１３ミリ車載機関銃×１門
　　７．９ミリ車載機関銃×２門

ノイ・デウスーラ
ガトランティス製の艦体とガミラスの造艦技術を合わせ持って作られたデスラーの新たなる戦艦で、残存ガミラス艦隊の旗艦でもあ

る。
左右にほぼ上下対称の扁平な艦体が広がっている。
正面からのシルエットはガトランティスのラスコー級などに近いが、扁平な部分は左右後方へと広がっており、上面からのシルエットは「Ｙ」のような形。
推進器やデスラー砲にワープグリットをまとわせて通常空間に維持することで、どんな空間のどんな影響も受けずに安定稼働が可能な波動制御機関を備える。
武装としては、艦首にデスラー砲を備えるほか、艦首左右に瞬間物質移送機を備え、艦底の電磁式パイロンにはゴストーク級ミサイル戦艦の超大型ミサイルを多数懸吊できる。
砲塔のほとんどは艦橋より後方に設置されており、三連装カノン砲塔を十六基、輪胴砲塔を大小十四基備えている。
艦橋構造物の後部（中央の推進ノズルの真上）には、格納庫が備わっている。
艦内にはガミロイドの制御システムも備わっており、運用・白兵戦様に多数のガミロイドが存在している。
全長　７６８ｍ
武装　ゲシュ＝ダールバム（デスラー砲）×一門
４８０ミリ四連装陽電子カノン砲塔×十二基（両翼部上下面）
３３０ミリ四連装陽電子カノン砲塔×四基（艦橋上部後方）
八連装速射輪胴砲塔×十二基
八連装高射輪胴砲塔×二基
破滅ミサイル×三十八発（最大）
瞬間物質移送機

ゲルバデス級航宙戦闘母艦　一番艦　ゲルバデス
戦艦と空母の両方の能力を兼ね備えた戦闘艦。
生産コストが高いためか、数多くの量産はされていない。
七色星団の決戦により撃沈されたダロルドの姉妹艦で、ゲルバデスは一番艦なのだが、就航したのは二番艦のダロルドが先だったため、

ゲルバデスは他のガミラス艦同様、深緑色の艦色をしており、その上から白、灰色、黒の迷彩色が施されている。
ダロルドが兵士たちから「赤い火竜」と呼ばれていた為、ゲルバデスは「緑の飛竜」と呼ばれている。
空間重爆撃機ＤＢＧ８８　ガルントは搭載しておらず、代わりに甲板中央部分にデスラー砲と瞬間物質転送機を装備している。
外見は星巡る方舟に登場したニルバレスにミランガルの迷彩色が施された感じです。
全長　３９０ｍ
全幅　６７ｍ
武装　２８０ミリ三連装陽電子カノン砲塔×四基（三番主砲塔は格納式）
１３３ミリ三連装陽電子カノン砲塔×四基
六連装ミサイル発射機×二基（艦橋後方）
遮蔽式上部砲戦甲板×二基
２８０ミリ三連装陽電子ビーム砲塔×各一基
１３３ミリ三連装陽電子ビーム砲塔×各二基
対空レーザー砲×各十六門
遮蔽式下部砲戦甲板×二基
１３３ミリ三連装陽電子ビーム砲塔×各二基
瞬間物質転送機

ガイペロン級多層式航宙母艦
ガミラス帝国が保有する宇宙空母。
艦の前方に突き出した発着甲板が三層に重なっている姿から三段空母と呼ばれる。
ただし正確には艦体後半部の最上層に着艦専用と思しき甲板がもう一層あり、さらにサブノズルの上にも着艦専用の甲板がある。
艦橋は小型のものを右舷後部付近に備え、左舷前部には迎撃レーダーを設置している。
推進ノズルは艦後部に大型のものが二基、艦底後部に小型のものが

三基ある。
発艦は各飛行甲板に2基ずつ設置された電磁式カタパルトで行い、着艦は第４甲板の後部から進入し、トラクタービームで減速させる仕組みとなっている。
構造上格納庫は有しておらず、機体は慣性制御された各甲板上に繋留されている。飛行甲板の側端には発艦の可否などが映る表示パネルがあり、カタパルトの後方にはブラストディフレクターが備わっている。
武装として砲身付きの１３３ミリ三連装陽電子カノン砲塔を右舷に二基、左舷に一基、艦底部に二基の計五基を装備し、４連装対空パルスレーザー砲を舷側後部に四基ずつ計八基を搭載しており、純粋な戦闘艦としての攻撃力は十分にある。
全長　４１０ｍ
武装　１３３ミリ三連装陽電子カノン砲塔×五基
　　３３ミリ四連装陽電子速射砲塔×八基

ブリウド　（緑）
かつて七色星団にて、ドメル将軍の機動部隊の一隻を担ったシュデルグの同型艦。
ガイペロン級多層式航宙母艦の中では初期型のもので、ガミラス艦隊の中では旧式な型に分類される。
他のガイペロン級多層式航宙母艦との違いは、シュデルグ同様最上甲板にはアングルド・デッキを持たない。
搭載機は空間艦上戦闘機ＤＷＧ１０９　デバッケを約六十機搭載している。

ガリウド　（紫）
七色星団にて、ドメル将軍の機動部隊の一隻を担ったバルグレイの同型艦。
ガイペロン級多層式航宙母艦の中では最新型に分類される。
バルグレイ同様、索敵装置設置のために、各飛行甲板の前端形状が

山形に改修されている。
最上甲板にはアングルド・デッキを有する。
艦載機は空間艦上攻撃機ＤＭＢ８７　スヌーカを約六十機搭載している。

レリウド　（青）
七色星団にて、ドメル将軍の機動部隊の一隻を担ったランベアの同型艦で、ガイペロン級多層式航宙母艦の中では中期型に属し量産された型。
最上甲板にはアングルド・デッキを有する。
艦載機は空間雷撃機ＦＷＧ９７　ドルシーラを約五十機搭載している。

超質量物質捕獲艦（特務作業艦）　ハ―ゲル
マイクロブラックホールの製造及び輸送を行う特務艦。
双胴の輸送型デストリア級航宙重巡洋艦を原型として建造され、元が非武装艦故、火力は乏しい。
その半面、運用理由により、艦の剛性／防御力は戦艦なみに高い。

空間駆逐戦闘機ＤＤＧ１１０　ゼードラーⅡ
ＳＲ―７１に似た単座無尾翼の三胴機となっており、エンジンは中央胴体に六基、左右の胴体に二基ずつの十発機になっている。
全長は１７．２ｍで、機首と左右の兵装ポッドに武装を有する。
長い航続距離と高い攻撃力を備えた重戦闘機で、ガミラスの本土防空、基地防空用に多数配備されていた。
全長　１７．２ｍ
乗員　一名
武装　７．９ミリ機関銃×二（機首）
　１３ミリ機関銃×二（主翼兵装ポッド）

４７ミリ機関砲×四（主翼兵装ポッド）
空対空ミサイル×三（主翼兵装ポッド）

空間格闘戦闘機ＤＷＧ２６２　ツヴァルケ
外見は第二次世界大戦末期のドイツ空軍のジェット戦闘機、メッサーシュミットＭｅ２６２　シュヴァルベに似ている。
機動性の高いガミラス帝国軍の主力戦闘機、各方面軍航空団のみならず、航宙艦艇の艦載機としても運用されている。
双発単座の後退翼機で、機首に小型のカナードとレーダーと思しきアンテナを有する。
ガミラス軍兵器に特有の発光部は機首下部に位置する。
主翼の付け根が胴体の中央部に位置しており、主翼にはゼードラーＩＩと同様に兵装ポッドを備えている。
武装は、主翼に１３ミリ機関銃を六門、機首及び兵装ポッドに３０ミリ機関砲を各二門ずつ、さらに、空対空ミサイルを左右兵装ポッドに三発ずつ装備しており、ゼードラーＩＩにも劣らない重装備だが、格闘性能は高い。
全長　１５．５８ｍ
全幅　７．５ｍ
乗員　一名
武装　１３ミリ機関銃×六（主翼）
３０ミリ機関砲×四（機種：二、兵装ポッド：二）
空対空ミサイル×六（左右兵装ポッド：各三）

ゼルグート級一等航宙戦闘艦
ガミラスが建造した重装甲艦。
多数建造されたが、一般的なガミラスの艦艇よりは建造数は劣る。
全長はヤマトの倍以上である７３０メートルにも及ぶ。
その巨体に違わぬ高い火力と防御力を有しており、正面装甲はヤマトのショックカノンをいとも容易く弾くほどの堅牢性を持つ。
ガミラスの名将、エルク・ドメルもこの艦を旗艦として使用してい

た。
またゼルグード級は戦艦としての機能の他に占領地に留まって要塞にするコンセプトも有していた。

ドメラーズＩＩＩ世
ゼルグート級の一隻でドメルの専用艦。
第六空間機甲師団（ドメル艦隊）の旗艦を務める。
「宇宙の狼」と称されるドメルの乗艦だけに、艦体色は「銀狼」を思わせる灰色を基調としたものであり、艦内は青みがかった銀色である。
艦長はヴェム・ハイデルン大佐。
七色星団海戦の折、艦橋部に物質移送機が追加装備される。
同海戦において、ヤマトとの一騎打ちに敗れ、艦橋部が本体から分離してヤマトの第三艦橋へと密着し自爆攻撃を行い自沈した。
指揮官であるドメル将軍と同艦艦長であるハイデルン大佐以下、全員が戦死した。

全長　７３０ｍ
全幅　１９５ｍ
全高　１１３ｍ
武装　４９０ミリ四連装陽電子ビーム砲×七基
３３０ミリ三連装陽電子ビーム砲×四基
艦首空間魚雷発射管×六門
艦尾空間魚雷発射管×七門
艦橋空間魚雷発射管×六門
艦底空間魚雷発射管×十五門

空間雷撃機ＦＷＧ９７　ドルシーラ
ガミラス帝国で使用されている主力艦上攻撃機。
主に同帝国の宇宙空母に搭載され運用される。
機影はスヌーカと同じように無尾翼機で、高翼配置の逆ガルウィングに主脚を備える点は似ているが、逆ガルウィングの角度も本機種の

方がきつく、主翼の車輪は引き込み式である。
胴体にも主脚を装備しており、それぞれ四輪ボギー式の前輪式。単発機であり、垂直尾翼は一枚。
コックピットは並列複座式の縦長である。
本機は垂直着陸が可能なＶＴＯＬ機となっている。
魚雷を包み込むようなボディをしており、宇宙魚雷２本を縦列に搭載する。
更に自衛用火器として球形四連装パルス銃座を胴体下（二本の魚雷の間）と、キャノピー後部、エンジンノズルの上下に合わせて四基、計十六門装備する。

全長　３０．６６　ｍ
乗員　三名
武装　Ｆｉ．９７型魚雷×二
　　四連装レーザー銃塔×四

空間重爆撃機ＤＢＧ８８　ガルント
ガミラス帝国の大型爆撃機で、七色星団の決戦に際してドメルが特別に開発した機体。
機長はヴァンス・バーレン大尉。
大型のエンジンを翼の付け根と胴体側面の間に１発ずつ、翼の先端に一基ずつ、計四発備えている。
主翼は厚さがかなり薄いうえ、アスペクト比が大きく、空母の甲板からはみ出るほどで、母艦の艦内に格納出来ないその大きさは艦上機の域を超えている。
主翼下には増槽と思しきものが左右一つずつある。
尾翼はＶ字型で、上下二枚ずつ角度の違うものが計四枚配置される。
七色星団の戦いでは、ヤマトの波動砲を封じる特殊兵器、ドリルミサイルを搭載する関係上、胴体下部に着陸脚は無く、主翼下に引き込み式の二軸ボギーを二つ縦列した主脚と機体後部のポットに二軸ボギーを設置した尾輪式となっている。

ヤマトの波動砲口にドリルミサイルを撃ち込んだ後、退避行動をとるが、機動性の低さと護衛機の不在が仇となり、ヤマト航空隊の攻撃を受け、イオン乱流の中へ墜落した。
その後、ランベアに無事回収され、機長であるヴァンス・バーレン大尉以下搭乗員たち全員もランベアに収容された後、機体は宇宙空間へ破棄された。

全長　５１．８ｍ
全幅　８３．３ｍ
乗員　四名
武装　特殊削岩弾×一

空間艦上戦闘機ＤＷＧ１０９　デバッケ　（ガミラスファイター）
ガミラス帝国で使用されている主力艦上戦闘機で、主に同帝国の宇宙空母に搭載され運用される。
機首部は横に膨れており、機体後方にデルタ翼の主翼を配置するなど、エンテ型のような配置になっている。
パルスガンを主翼に左右四門ずつ計八門、機首部四門あわせて十二門装備し、翼下にミサイルを計八発装備することが可能。
胴体に縦に配置した二輪の主脚を装備した前輪式。双発の単座機で、機体色はガミラス標準色の緑。

全長　１８．６ｍ
搭乗員　一名
武装
７．９ミリ機関銃×４（機首）
１３ミリ機関砲×６（主翼）
空対空ミサイル×８　（片翼に四発ずつ）

次元潜行艦
通常空間のみならず、異次元空間への往来・航行も可能な特殊戦闘艦艇。
ガルマン・ガミラスがガトランティスの潜宙艦を元に更に発展させ

た艦。
通常空間では、他のガミラス艦と同様の波動推進機で航行するが、次元潜航時は亜空間推進機で航行する。
また、異次元空間での推進エネルギー浪費を抑えるために備えられた多次元位相バラストタンクでエネルギー流出を抑えており、さらにそれを転用することで艦体の浮上や沈降を制御する。
セイルには、通常空間に露出させて周囲を視認するための次元潜望鏡が備わっている。また、その後方には超空間ケーブルで繋がれた索敵プローブが備わっており、これを通常空間に露出させて次元潜望鏡と同様に周辺の様子を探ることもできる。
艦の形状はドイツ海軍のUボートに近く、艦首亜空間魚雷発射管の後方はガミラス艦特有の目玉似の形状となっている。
ボラー連邦との戦いで、ボラーが鹵獲改造した管理局のXV級の次元航行艦を撃沈している。
武装
艦首亜空間魚雷発射管×6門
艦尾亜空間魚雷発射管×2門
99ミリ単装陽電子ビーム砲塔×1基（前甲板）
33ミリ連装レーザー機関砲×1基（セイル後方）
ミサイル発射管×8門（艦首上面）
空間機雷敷設装置×5基（後部甲板）

リンチェント級航宙駆逐艦　（駆逐艦）
ガルマン・ガミラスが建造したクリピテラ級航宙駆逐艦の後続にあたる新型の航宙駆逐艦。
艦体は、直線と平面および台形の組み合わせで構成されており、艦の前部と中央部分の間にくびれがあり、艦首先端は台形状の断面となっている。
武装はデスラーが彗星帝国に居た頃、同帝国より技術交換で得た回転速射砲塔を三基、艦橋前に固定式連装砲を一基、艦首部の上甲板には格納式の高圧直撃砲を装備して艦首の両舷には魚雷発射管を三門、

計六門あり、回転速射砲塔と連装砲との間にある傾斜部分には、並列し三つのミサイル発射口がある。
各戦線で艦隊の中核をなす艦で、ガルマン・ガミラスでは最も多く建造されている艦。
ガルマン・ガミラスでの建造艦は、艦体色はガミラス時に建造された艦とほぼ同じであるが、船体横に備わっていたガミラス艦の特徴とも言える『目玉』が備わっていない事がガルマン・ガミラス艦の特徴でもある。
全長　１２５ｍ（公式では２１３ｍ）
武装
高圧直撃砲×一基
回転速射砲塔×三基
固定式連装砲塔×一基
格納式連装エネルギー砲（固定式対空砲）多数
ミサイル発射管多数

ラム―ル級航宙巡洋戦艦（中型戦闘艦）
ガルマン・ガミラスが建造したメルトリア級航宙巡洋戦艦の後続にあたる新型の航宙巡洋戦艦であり、ガルマン・ガミラスでは主力戦闘艦の一隻であり、前線では艦隊旗艦として使用されることもある為、艦内には作戦室が備わっている。
艦型自体は、同時期に運用されているリンチェント級航宙駆逐艦の拡大版とも言える艦。
艦の前部と中央部分の間にくびれがあり、艦首先端部には台形状の高圧直撃砲の発射口がある。
艦橋は、側面から見て平行四辺形状の構造物を二つ積み上げ、さらにその上部には二等辺三角状の構造物を乗せた形態となっている。
武装は砲身付の三連装砲塔を、艦橋前部に背負式で二基、艦橋後部に一基、合計三基配置し、一番前にある３連装砲塔の手前には、回転

速射砲塔を一基設置している。
全長　３５２ｍ
武装
高圧直撃砲×一基
三連装砲塔×三基（艦首×二、艦尾×一）
回転速射砲塔×一基（艦首）
固定式連装砲塔×一基

ノイ・ゼラード級航宙戦艦　（大型戦闘艦）
ガルマン・ガミラスが建造した大型の航宙戦艦。
艦体は、主に直線と平面によって構成され、左右両舷から張り出した巨大なインテーク、艦底部やや前よりの、段々にくびれた部分が特徴。
武装は回転速射砲塔を艦体上部に四基、左右のインテーク上部にそれぞれ一基ずつの計六基を装備し、ラムール級航宙巡洋戦艦と同じ三連装砲塔を艦体上部に二基備えている。
艦首先端部には台形状の高圧直撃砲の発射口がある。
ガルマン・ガミラス本星とボラー連邦との激戦地である北部方面軍に主に配備されている。
全長　４５２ｍ（公式では４９２　ｍ）
武装
旋回砲塔×六基
三連装砲塔×二基
高圧直撃砲×一基
固定式連装砲塔×一基
ミサイル発射管（左右に三門）×六門

フォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦　（デスラー砲艦）
ガルマン・ガミラスが建造した航宙巡洋戦艦。
デスラー座乗艦以外でデスラー砲を備えた艦で、ノイ・ゼラード級航宙戦艦をコンパクトにした外見をしている。
デスラー砲を装備している艦で建造コストも高い為か、ガルマン・ガミラス本星のみに配備されている。
武装は艦首にデスラー砲を一門装備し、通常の武装には旋回砲塔を艦体前部に二基、艦橋の後部に一基、左右のインテーク上部にそれぞれ一基ずつの計五基、ラムール級航宙巡洋戦艦と同じ三連装砲塔を艦体上部に二基装備している。
全長　２８０ｍ　（公式では２３１ｍ）
武装
デスラー砲×一門
旋回砲塔×五基
三連装砲塔×二基

御召し艦　改・ゲルバデス級一等航宙戦闘母艦　ガミラシア

ゲルバデス級航宙戦闘母艦を元にガルマン・ガミラスが新たに建造した航宙戦闘母艦。
ゲルバデス級との外見上の大きな相違として、ガミラス艦艇特有の「目玉」が存在せず、艦橋の造りはゼルグート級一等航宙戦闘艦の艦橋部と似ている。
そして、この艦橋もゼルグート級一等航宙戦闘艦と同じく分離が可能で独立戦闘指揮艦となる。
艦首両脇には瞬間物質転送機を備えている。
また、戦闘甲板の内部には小口径ながらも格納式のデスラー砲を備える。
指揮能力を持ちながらゼルグート級一等航宙戦闘艦より小型で取

り回しが良く、ゲルバデス級と同様多機能で長期航海に向いているとの事で、御召し艦となる。
姉妹艦としてノイ・ドメラーズが建造中。

全長　４０２ｍ
武装
デスラー砲×一門
４８０ミリ四連装陽電子カノン砲塔×二基
４８０ミリ三連装陽電子カノン砲塔×二基
対空・対対艦ミサイル砲塔×十基
四連装対空砲塔×六基
３３０ミリ三連装陽電子ビーム砲塔×十二基
ミサイル発射器×十二門
陽電子ビームランチャー×十二基
近接防御機雷発射口×五十二門
魚雷発射管×四基
１３３ミリ三連装陽電子ビーム砲塔×四基

惑星破壊ミサイル艦
ガルマン・ガミラス帝国が建造した艦底部に、惑星破壊プロトンミサイルを吊り下げて運搬する特殊艦。
ミサイルの発射時には接合部を切り離してミサイルを発射する。
ミサイル以外の自艦の防衛兵装は、前甲板にガミラス時代の宇宙艦艇に使用されていた砲塔と同じ無砲身の三連装砲塔が二基あるのみ。
艦型は、同時期に建造されたリンチェント級航宙駆逐艦（駆逐艦）とラム―ル級航宙巡洋戦艦（中型戦闘艦）に類似する型となっている。
艦首の上が盛り上がっており、この前方には開口部があり、艦の中部から後部にかけて、腹のように大きくでっぱって円錐状の構造物がある。

艦尾にメインエンジンを一基搭載し、断面はリンチェント級航宙駆逐艦（駆逐艦）の様に台形であるが、ショックコーンはない。
艦体色は他のガルマン・ガミラス艦と同じ深緑色で艦首先端はオレンジ色をしている。
全長　３３６　ｍ（ミサイル装着時６４８　ｍ）
武装
惑星破壊プロトンミサイル×一発
無砲身三連装砲塔×二基

工作船
ガルマン・ガミラスが保有する工作船。
全長６００メートル級のプロトンミサイルを船体下部に搭載する事が可能な巨大艦船。
その艦種故か作業用に高い指揮通信能力を有する。
武装は艦首と両舷側にそれぞれ８連装と４連装のバルカンミサイル砲を装備している。
全長　９７３メートル
武装
８連装バルカンミサイル砲　十六門　左右に八基装備
４連装のバルカンミサイル砲　八門　左右に四基装備

登場艦船　ガトランティス

彗星帝国　ガトランティス

ナスカ級高速中型空母

白色彗星帝国軍に所属する高速・高機動を特徴とし、船体上部・首尾線方向に一枚の全通式飛行甲板を持つ中型の宇宙空母。

艦首両舷にオレンジ色の複眼状センサーを持ち、自衛用の回転速射砲塔を多数装備する。

白色彗星帝国軍・空母機動部隊の中核を成す艦艇で、多数の同型艦が存在する。

全長　３３４ｍ
全幅　７２．２ｍ
基準排水量　５１０００ｔ
兵装　八連装大型回転砲塔×二基
八連装対空回転砲塔×八基
四連装対空回転砲塔×二基
対空フェーザー砲×十二門
連装ミサイルランチャー×四基
主要搭載機　二十四機
艦上攻撃機デスバ・テーター
艦上戦闘機イーターＩＩ
大型長距離艦上戦略偵察機
Ｔ２陸上迎撃機

潜宙艦

白色彗星帝国が保有する宇宙戦闘艦。隠密・奇襲戦法を得意とする潜水艦に似た戦闘艦。

空間歪曲により、自らの姿を隠す事が可能だが、潜航中は異次元空間の中から攻撃する事は出来ず、攻撃時には通常空間へ浮上する必要がある。

武装は魚雷と小口径のフェーザー砲のみで、単艦ではあまり対艦向きの艦船ではなく、哨戒用または奇襲用の兵器に適している。

全長　１１８ｍ
全幅　４５．５ｍ
武装　艦首宇宙魚雷発射管×四基
　　艦尾宇宙魚雷発射管×八基
　　固定式フェーザー砲×十二門
　　対空フェーザー砲×四門

大型潜宙戦艦
潜宙艦隊の旗艦を務める大型潜宙艦。
通常の潜宙艦よりも大型でその全長は２００メートル以上ある。
上部構造物や艦後部の形状が大きく異なる。塗装は通常の潜宙艦と同様の漆黒。

艦上攻撃機デスバ・テーター
白色彗星帝国で使用されている主力艦上攻撃機。
主に同帝国の宇宙空母に艦載されている。
主翼を持たずその機影はカブトガニを模したデザインとなっている。
搭乗員は、コックピット内に主操縦士、副操縦兼通信士、爆撃航法士の三名。
さらに胴体内に攻撃操作担当の二名を必要とする。
操縦桿は実在の自動車のハンドルに酷似した円形である。
機体底部にある蛇腹式のシャッターから機体内に出入りするが、ここはミサイル発射口にもなっている。機体下部に二基、後部左右にそれぞれ一基ずつ噴射口を持つ四発機である。
固定武装は上面に設置された一基の回転速射砲塔、胴体前縁部のパ

ルスレーザー砲がある。
その他に機体下部左右に四発ずつ計八発搭載する大型ミサイルやマジックハンドで外部に放つ機体内ミサイルなど豊富な対艦対地攻撃能力を持つが空中戦には向いていない。
外部の八発の大型ミサイルは一斉射のみだが、機体内ミサイルは内部で再装填可能であり、ある程度なら連射が利く。
全長　１６．２ｍ
全幅　２１．８ｍ

大型長距離艦上戦略偵察機
白色彗星帝国で使用されている艦上偵察機。
主に同帝国の宇宙空母に搭載され運用される。
デスバ・テーターの強行偵察機型バリエーションで、全長、全幅、最大速度などの数値は同一である。
全身黒に塗装されている。上部の回転速射砲塔は残されているが、機体前縁のパルスレーザー砲やミサイル搭載機構は廃されており、代わり様々な探査装置を搭載。劇中では回転速射砲塔上に大型のレドームを装備していた。
全長　１６．２ｍ
全幅　２１．８ｍ

艦上戦闘機イーターＩＩ
白色彗星帝国で使用されている主力艦上戦闘機。
主に同帝国の宇宙空母に搭載され運用される。
円盤状の胴体に、機首と尾翼を取り付けたスタイルをしており、主翼を持たない。
武装は機首に３０ｍｍフェーザー機関砲を六門、胴体前縁部に１２．７ｍｍ光体機関砲を左右合計十六門装備。
ミサイル兵装の類は無く、対艦・対地攻撃には不向きである。
乗員数は一名だが座席の後ろには若干のスペースがあり、もう一名程ならば立ち状態で同乗することが出来る。

全長　１９．４ｍ
全幅　１２．７ｍ

ククルカン級襲撃宇宙駆逐艦
全身ハリネズミのように回転速射砲塔を装備した駆逐艦。
ガトランティスで正式採用されており、多数の同型艦が存在する。
その基本戦術は、高い機動性と数を生かし、敵艦に接近し、回転速射砲を撃ち込む近距離戦法をとる。
全長　１３２ｍ
全幅　５９．４ｍ
自重　４８００ｔ
兵装　八連装速射輪胴砲塔×八基
　　対空砲（高射輪胴砲塔）×十基　　量子魚雷噴進機×二基

ラスコー級突撃宇宙巡洋艦
彗星帝国ガトランティスで正式採用されている巡洋艦。
形はガトランティスで正式採用されているミサイル艦に似ている。
艦首と艦尾の形状はミサイル艦に近いが、それ以外の部分の形状は大きく異なっており、ほぼ別物である。また、装備・発砲しているのはミサイルではなく、彗星帝国艦の大部分が装備している回転速射砲塔を搭載している。
艦級名の「ラスコー」は、ガトランティス神話に登場する雷獣「ラスコール」が由来とされている。
全長　２４０ｍ
兵装　八連装速射輪胴砲塔×十二基
　　対空砲×六基
　　ミサイル発射管×十門
　　量子魚雷噴進機×二基

ゴストーク級ミサイル艦
白色彗星帝国のゴーランド提督の帝国第一艦隊の主力を構成する

大型戦闘艦。
塗装は艦体が淡緑色。外装式の大型ミサイル部が白色。
艦の外観は全身ミサイルというハリネズミのような重装ミサイル戦闘艦で、艦内にミサイル製造工場を持ち、中小ミサイル類の自給自足が可能になっている。
艦首その物が決戦兵器「破滅ミサイル」になっているのが最大の特徴であり、大出力を誇るテレサのメッセージをジャミングするなど、それなりの電子戦能力も有する。
少数であるが、艦載機搭載能力を有することも可能。

全長　３１２ｍ
全幅　１２６ｍ
乗員　９０名
武装　艦首破滅ミサイル×二発
　ブリッジミサイル×一発
　固定式ミサイル×二十八発
　大型ビーム砲塔×一基
　三連装ミサイル砲塔×四基
　三連装ミサイル・五連装ビーム砲塔×三基
　三連装ミサイル・三連装ビーム砲塔×一基
　五連装ミサイル砲塔×一基

破滅ミサイル
艦首上下に計二基備えられた外装式超大型ミサイルの名称。塗装は白色で発射後に内部より安定翼が展開する。
その威力は艦隊の一斉発射でテレザート星近隣の「恐竜惑星（プレオ）」を破壊するほど。

Ｔ２陸上迎撃機
白色彗星帝国で使用されている。
主に陸上迎撃戦闘機で、占領地の航空基地に配備されることが多い。

また宇宙空母にも搭載可能な機体でもある。
コックピット両脇の四門のフェーザー機関砲と主翼前縁部の八門の光体機関砲が主武装である。
胴体と左右主翼上にエンジンを持つ三発機で、加えて補助エンジンらしき物を尾翼上に備える。
複座式ながらそれぞれ分割されたキャノピーや半円形の主翼が外観上の特徴であり、一撃離脱戦法を得意とする。

全長　２１．６ｍ
全幅　１６．１ｍ
搭乗員　二名
武装　フェーザー機関砲×四門
　　光体機関砲×八門
　　大型ミサイル発射菅×三門

戦闘戦車
白色彗星帝国で使用されている軍用車両。
地上部隊の主力として多数が配備されており、占領地での現状維持や地上戦にて主に使用される。
武装は「１８８ｍｍ連装砲塔」１基。
対人対空用のレーザー機銃は通常装備しない。
テレザート星にも配備されており、空間騎兵隊はザバイバル率いる突撃格闘兵団ヘルサーバーと戦ったが、斎藤がヤマトに要請した多弾頭砲と空間騎兵隊の肉薄攻撃に敗れる。

全長　８．５ｍ
全幅　５．２ｍ
最大速度　１００　ｋｍ／ｈ
武装　１８８ｍｍ連装砲×一基

指揮戦車
白色彗星帝国で使用されている軍用車両。
地上部隊の主力として多数が配備されており、占領地での現状維持

や地上戦にて主に使用される。
その名前の通り、主に戦車部隊のフラッグ車として使用されており、通常の戦車と比べると一回り大きく強力な武装を持ち、通信能力も高い
主力戦車の定義項目の一つである旋回可能なフルクローズド砲塔を持たず、主砲である２００ｍｍ三連装砲は駆逐戦車のように固定、かつ車体右寄りにオフセット装備されているのが特徴である。
他に対人対空用として１２．７ｍｍレーザー機銃を一基装備している。
車体後方には三本のロッドアンテナがあり、うち一本に旗が掲げられている。
全長　１１．３ｍ
全幅　６．２ｍ
全高　３．８ｍ
最大速度　１５０　ｋｍ／ｈ
武装　２００ｍｍ３連装砲×一基（無砲塔固定）
１２．７ｍｍ対人対空レーザー機銃×一基

装甲歩兵戦闘車
白色彗星帝国で使用されている軍用車両であり、地上戦闘要員を輸送する歩兵戦闘車。
地上兵力のひとつとして複数が配備されている。
また、輸送艦によって運搬され、敵拠点攻略の際には上陸部隊を輸送する重要な役目を果たす。
戦闘戦車には及ばないものの武装は強力で、前部に対戦車ロケット砲を一門、対人対空用の３７ｍｍ連装レーザー機銃を装備。
このレーザー銃塔は複眼式照準器を備え、車体内からリモコンで操作される。
第十一番惑星攻略戦の際、多数が投入される。
ナスカ艦隊の圧倒的な援護の元に第十一番惑星基地に迫るが、空間騎兵隊の粘り強い抵抗と、救援に駆けつけたヤマトのコスモタイガー

隊の支援攻撃によって全車破壊されている。

全長　８．７ｍ
全幅　５．０ｍ
最大速度　１２０　ｋｍ／ｈ
武装　対戦車ロケット砲×一門
　　３７ｍｍ対人対空連装レーザー機銃×一基

カラクルム級戦闘艦

白色彗星帝国の艦隊戦力の中核を成す主力艦で多数の同型艦が存在する。

艦首が太く艦尾側が細く角ばった魚のような細長い艦体で楕円盤形船体と昆虫を思わせる有機的なディテールを特徴とするガトランティスの他の艦とは異質のデザインラインとなっている。

艦首両舷および艦底に四基ずつ備わったＴ字型のものをはじめとする無数のフィン状の構造物が見られる。

甲板中央には三連装衝撃砲を段々重ねした上にブリッジを載せた、パゴダ・マスト状の高くそびえる艦橋構造物、その背後にレーダーを連ねたマストを配置している。

艦体色は彗星帝国軍の標準色の黄緑色。

回転速射砲塔を標準兵装とする。前部に二基、後部に一基の大型砲塔を主砲として装備するほか、艦体各所に対空用小型砲塔を多数据え付けている。

艦隊決戦兵器として衝撃砲を艦橋基部に伸縮式の大型２連衝撃砲を一基、艦橋に三連式衝撃砲を三基縦列配置している。

この砲は、発射時は光線であるが、命中すると螺旋状の衝撃波に変化して攻撃対象物を包み込み破壊するもので、威力は高い。

全長　３８０ｍ
全幅　１０８ｍ
乗員　４５０名
武装　十連旋回砲塔×三基
　　舷側七連装旋回砲塔×四基

艦首七連装光体砲翼×二基
大型二連艦橋砲×一基
三連艦橋砲×三基

アポカリクス級航宙母艦
白色彗星帝国が保有する超大型空母。
多数の航空機を搭載可能で、その巨体は同国の高速中型空母を一回り以上も上回る。
船体色は白色で飛行甲板は彗星帝国軍の基本色の黄緑色。
上下対称の艦体構造をもち、上下甲板には並行してそれぞれ二本、計四本の全通式フライトデッキがある。
甲板にエレベーターは無く、艦載機は艦内から直接デッキへと滑り出して発進する。
艦載機の発進時には飛行甲板部分の船体を回転し発進させる構造を持つ。
その際、艦橋部分とエンジンノズル部のみは回転せず、そのままの状態を維持する。
防御兵器として、対空用の回転速射砲塔を多数装備している。
全長　４８０ｍ
全幅　１４５．５ｍ
武装　八連装回転砲塔×十四基
四連装対空回転砲塔×十二基
対空フェーザー砲×四十二門
連装ミサイルランチャー×四基
搭載機　艦上攻撃機デスバ・テーター
艦上戦闘機イーターＩＩ
大型長距離艦上戦略偵察機

メダルーザ級殲滅型重戦艦（火炎直撃砲搭載戦艦）　メダルーザ
艦前部甲板に大型の五連装砲塔を搭載し、さらにその下部には魚雷発射管を九門備える重武装の戦闘艦。

建艦数は少ない。
艦後部には主砲として輪胴砲塔を三基装備し、さらに中小火器を多数装備している。
艦載機が搭載可能で後部甲板上にＶ字形の飛行甲板をもち、十二機のデスバ・テーターが搭載している。
最大の特徴は双胴型艦体中央の艦首下部に装備している、艦隊決戦兵器である火炎直撃砲である。
地球防衛軍の波動砲や拡散波動砲の二倍の射程距離を持ち、艦首中央の底部にエネルギー弾の発射装置、左右に移送空間を展開する瞬間エネルギー移送装置により構成されている。
発射した超高熱エネルギー弾を瞬間エネルギー移送装置によって直接目標の至近にワープさせ撃破する。
ワープによる長射程を利用したアウトレンジ攻撃が可能であるうえ、その発射機構ゆえに弾道が存在しないため、回避は事実上不可能。

全長　５０５ｍ
武装　火焔直撃砲×一門
　転送投擲機×二機
　艦首大砲塔（五連装大口径徹甲砲塔）×一基
　八連装速射輪胴砲塔×三基
　二連装速射砲塔×二基
　八連装高射輪胴砲塔×十六基
　艦首魚雷発射管×九門
　量子魚雷噴進機×四機
搭載機　デスバ・テーター×十二機

白色彗星帝国要塞都市　ガトランティス
擬態と防御幕である、白色中性子ガス帯の中にある半球状の小惑星の上に都市が築かれている、直径１５ｋｍ、全高１０ｋｍの都市帝国。
都市帝国の赤道にあたる部分は回転して巨大ミサイルや光線を発射し、ガス帯の竜巻を放射して上部の都市部を防御する。
下部の半球状の小惑星部分には無数の防衛用の回転砲と艦載機の

発進口が配備されている。

テレザリアム

テレザートにて、テレサが住む宮殿。

彗星帝国によって鍾乳洞の最奥部に移動させ、テレサを幽閉されていた。

幽閉時は地底湖の上に浮かんでおり、訪問者は湖が裂けられて作られる道を通り、歩いて下部から乗り込む。

宇宙船としての機能も有しており、テレザート星爆破の際、テレサはテレザリアムにてテレザート星を脱出していた。

登場艦船　暗黒星団帝国　デザリアム

暗黒星団帝国　デザリアム

プレアデス級巨大戦艦

主に暗黒星団帝国の艦隊旗艦を務めている巨大な戦艦。

円盤型艦体の中央に、高くそびえる艦橋を配置する艦容で、艦首中央に艦載機発進口がある。

全長３６０メートル・全高３５０メートル・全幅３２８．７メートルの巨体を持ち、それに似合わず機動力に優れている。

塗装は黒色を基調とし、艦前部が赤色、艦載機発進口内部は橙色である。

武装は、艦前後に三連装主砲を二基、艦橋前部に三連装副砲を一基装備している。

また、戦艦ながら、ヤマト並みの艦載機も搭載可能となっている。

推進機関は、主機として本体艦尾に推進ノズルを装備し、補機は本体下部から吊り下げる形で二基を並列設置しており、両舷には大型のサイドスラスターを備える。

全長　３６０ｍ
全幅　３２８．７ｍ
全高　３５０ｍ
武装　三連装主砲×二基
　　三連装副砲×一基
搭載機　多数

巡洋艦

暗黒星団帝国艦隊の中核を成す艦。

全長２２０メートルで、同国の護衛艦より一回り大きい。

武装は3連装砲塔を前部に並列に二基と後部に一基の計三基装備し、大型・小型のミサイルを下部に各二発ずつ計四発懸架している。
左舷前部から戦闘用レーダーアンテナが突き出ている。

全長　２２０　ｍ
全幅　１６８．９　ｍ
全高　８５．６　ｍ
武装　三連装砲塔×三基
　大型ミサイル×二基
　小型ミサイル×二基
　ミサイル発射管×十四門

護衛艦

フリゲート艦である地球防衛軍の護衛艦とは異なり、主力艦艇として運用されている。
円盤型本体の中央に艦橋が配置される形状をしている。全長１０８メートルの小型艦で小回りが利くが、耐久力は低い。
武装は、格納可能な三連装主砲を艦橋構造物基部に一基装備しているほか、艦体両脇にリング状のビームを放つ光線砲二基を装備している。

全長　１０８　ｍ
全幅　９６　ｍ
全高　７５　ｍ
武装　三連装砲塔×二基
　光線砲×二基
　光弾機銃×十基

駆逐艦

艦体形状は卵形の円盤型をしていて、幅の広い方を船首としている。
艦体前方の船首寄りの部分に艦橋が立っており、周囲に武装を配置する。艦橋は低く、艦体後部に向けて湾曲した形状をしている。
円盤型の艦体に塔の様な艦橋がそびえたつという、暗黒星団帝国軍艦の基本デザインとは大きく趣を異にしているのが特徴である。
武装　二連装砲塔×三基
四連装空間魚雷発射管×四基
曲射機動ミサイル三連ランチャー
バラまき空間機雷投射器
対空砲座×六基（上部四、下部二）

空母
暗黒星団帝国が所有する主力空母である。
船体は木の葉形をしており、艦上全体が飛行甲板となっている。
艦橋や搭載艦砲などは艦首と左右両艦尾の三か所から延びるアーチ橋の上に作られているため、一種の中空構造となっている。
真上からこのアーチ橋部分を見ると、「Y」の字に見えるという独特の形状をしている。
エンジンノズルは左右両艦尾から外側に突き出るような形で存在している。
塗装は黒色を基調とし、船体のふちを橙色としている。
武装は三連装主砲を二基装備している。

戦闘爆撃機
暗黒星団帝国で使用されている大型艦上戦闘爆撃機。
全長は６０メートルにもおよび、同帝国の航空機と比べ、約２倍の

大きさを誇る。
主武装として機体上部に触手型の三門の光線砲を装備している。
超磁性体関節ギア採用によりフレキシブルに可動する。
正面の赤い部分がコックピットとなっている。
大柄な外観とは裏腹に機動性は高い。
全長　６０　ｍ
全高　１０　ｍ
全幅　５３　ｍ
搭乗員　四名以上
武装　可動式光線砲×三門
　三連装銃座×四基
　誘導爆弾

暗黒星団帝国主力戦艦
暗黒星団帝国が所有する主力戦艦。
帝国の多くの艦隊に配備されている。
ルーギス、クーギスの座乗するエルドラＡ、エルドラＢもこの同型艦。
プレアデス級を一回りスケールダウンしたものだが、円盤型艦体の中央に高くそびえる艦橋を配置する艦容で、艦首中央に艦載機発進口があるという同帝国の戦闘艦に共通する基本的なデザインを踏襲している。
ただし艦体形状は円盤型というより、蝙蝠型といった方が近い。
またメインエンジンがそれぞれ艦橋と艦底から三方に伸びており、真後ろからエンジン部分をみると「Ｙ」の字に見えるという独特の形状をしている
武装は、三連装主砲を一基、三連装副砲を八基装備している。
塗装は黒色を基調とし、船体のふちを橙色、艦載機発進口内部は赤色としている。

武装　三連装主砲塔×一基
三連装副砲塔×八基
速射ミサイル口
対艦ミサイルランチャー
対空砲座

暗黒星団帝国円盤型戦闘機
暗黒星団帝国で使用されている艦上戦闘機。
円盤状の胴体に、機首とメインノズルを取り付けたスタイルをしており、主翼を持たない。
武装は中央に設置された単装パルスレーザー砲座と、機体上面にあるボディマウント式の爆弾を装備する。
パルスレーザー砲座には座席は無く、機銃員は立った状態で乗り込むことになる。

ウラリア式制圧自動要塞ゴルバ
暗黒星団帝国のマゼラン方面総司令部を兼ねるマゼラン方面総司令官メルダースが座乗する移動型要塞。
形状は黒緑色で塗った蛸壺またはコケシの様な形状。
頸部に装備された全周式の回転する主砲α砲を搭載している。その威力は波動砲に匹敵する。さらに強力な偏向バリアーを装備しており、防衛軍の波動砲やガミラスのデスラー砲も通用しないほど、防御力が極めて高い。
また、直援の為の無人大型戦闘艇テンタクルスを多数搭載している。
諸元
全長（全高）１０８０ｍ
全幅　６３０ｍ
武装　大型空間重魚雷

α砲

無人大型戦闘艇　テンタクルス

自動要塞ゴルバに多数搭載された無人戦闘艇。

長く延びた４本の砲身に半円盤状の駆逐艦並みの船体は、真上から見るとイチョウの葉のようなデザインであることがわかる。無人であるために高い機動性を持つ。

主砲の射程は短いが、攻撃力は高い。

重核子爆弾・ハイペロン爆弾

暗黒星団帝国が地球侵攻に投入する超大型爆弾であり、大量殺戮兵器の一つ。

宇宙空間航行能力を持っており、自力航行によって太陽系外から地球までかなりの速度で航行が出来る。

表面は黒色で、だるまのような形態をしており、先端部分の赤く輝いている部分が起爆装置になっている。

巨大な構造物である爆弾の内部には、人間の往来が可能な通路、エレベーター、テラスなどが設置されており、多数の兵士が警備に当たっている。

下部には固定用のドリルが装備されている。

自己防衛機能として周囲に張り巡らされるバリアーは外部からの侵入を防ぐが、地中までは張り巡らされないため、これが弱点の一つにもなっている。

爆弾と言う事で起爆装置が設置されており、本星と爆弾の両方に起爆装置が内蔵された二重構造となっている。

爆弾側が破壊されても本星側が無事であれば、起爆が可能である。

また、本星側が先に破壊されると、爆弾側が自動的に起爆する構造にもなっている。そのため、先に爆弾側の起爆装置を解体してから本星側を破壊しないと、無効化できない。

中間子質量を破壊する一方、外傷を与えずに地球の自然を壊す事無く、地球人類の脳細胞のみを一挙に死滅させることが可能となっている。
起爆すると、内部に封入された重核子へ中性子ビームが照射され、高エネルギーのプラズマ状態となる。
このプラズマ化された重核子を超高エネルギー状態で炉内に閉じ込め、二重らせん構造の定常空間を維持すると、周囲の空間に歪みが発生してベータ変調された重力波が発生する。
その結果、これを浴びた生物は細胞核内部のＤＮＡが異常活性され、自己崩壊する。
起爆から死滅までのプロセスが設定されており、任意の生物を死滅させることが可能となる。

前線補給中間基地
暗黒星団帝国が保有する移動式の補給基地。
全長は１０キロメートル前後の大きさを誇る。
盤状の土台に水晶のような白く輝くクリスタル状の建造物があり、滑走路やドーム型のドックを備えている。
ドーム型のドックには七〇隻以上の艦船を収容でき、補給・補修が可能。
更に周辺の甲板でも補給が出来る。
周辺には無数の自衛用火器を備えている。
構造状の弱点として、排気口とドックが繋がっており、そこにはシャッターも砲台も装備されていない。

巨大輸送艦
暗黒星団帝国が保有する軍用輸送艦で全長５５０メートル・全幅１６３メートル・全高１５８．４メートルの巨大な艦。
敵惑星への上陸作戦を行う際の中心戦力で、戦闘爆撃機・パトロール戦車・掃討三脚戦車を搭載している。

上面に司令塔のようなキノコ状の突起物が３つ存在するが、実際のブリッジは前部下面の弧の部分。
また、下面には自艦防衛用の円形ミサイルランチャーも装備している。
各種戦車や航空機を戦闘可能状態で発進させることが可能。

掃討三脚戦車
暗黒星団帝国で使用されている軍用車両。
地球攻略部隊の主兵力のひとつであり、多数が巨大輸送艦によって運ばれた。
主武装として車体上部に装備された一門の可動式大型光線砲がある。
この光線砲の砲身には、同帝国のその他の兵器同様、「超磁性体関節ギア」が用いられているが、光線砲そのものが大型であるため、一基の発射基を二本のアームで支える構造となっている。
胴体下部にはＶＴＯＬノズルを持つ。
５０ｍを超えるその巨体は２０階建てのビルに相当し、細長い三本の歩行脚により、場所を選ばず活動出来る。
また、コックピットの要員は八人で、展望がよく、本体正面側１８０度を有視界で見渡すことが可能である。
地球戦車の砲撃にもビクともしない防御力を誇るが、ＶＴＯＬノズル部分が弱点。

パトロール戦車
暗黒星団帝国で使用されている軍用車両。
地球攻略部隊の主兵力のひとつであり、多数が巨大輸送艦によって運ばれた。
巡回・警護用の偵察戦車であるが全高は八メートルに達し、地球戦車からは見上げるほどの大きさである。
主武装として車体上部に装備された二門の可動式光線砲がある。

この光線砲は、砲身部分が触手、もしくは昆虫の触角を思わせるほど細長く、「超磁性体関節ギア」の働きによって、任意の方向に自由に振り向けることが可能である。
その他に三連装機銃座が一基、バルカン砲四門。
胴体下部にはＶＴＯＬノズルを持つ。
走行装置にキャタピラは使用されておらず、チューブレス金属ウレタンを芯にリフトメタルで固められた特殊タイヤが用いられている。

四脚歩行戦車
暗黒星団帝国が地球で新たに開発した軍用車両。
大型ゆえに狭い街中では機能しにくく、地の利を活かした戦術で対抗する地球のパルチザンに苦戦を強いられた掃討三脚戦車やパトロール戦車に代わり、地球占領軍が対パルチザン用に開発したもの。
対人・都市戦に特化した性能を追求した小型戦車。
スズメバチの頭部に似た車体に、昆虫の足を模した四本の脚を装備し、全高二メートル超以下に押さえられ、その乗員も一名と大幅に小型化・軽量化が図られている。
これにより本機は、狭い都市の中でも縦横無尽に動き回れる高い機動力とブースターを使わずとも瞬時に十数メートルもジャンプすることが出来る高い瞬発力を有する事となっている。
コックピットは車体中央に位置する。
その後方に複眼型センサーを装備している。
武装は昆虫の触角を模した双発メインビーム砲に顎部に配置したロケットランチャーと手榴弾投擲機である。
なお双発メインビーム砲には、地球で作られたためか、他の暗黒星団帝国の兵器と違い「超磁性体関節ギア」が用いられていない。

Ｄ型潜入工作特殊ロボ
暗黒星団帝国が開発したロボット兵の一体。

実際の身長は2メートル近くあるが、内部の機械関節を組み替えることで身長をある程度までは自在に変えることが出来る。
表面は白い軟質ゴムで覆われているが、ホログラムを薄く纏うことが出来るので、誰にでも変装することが出来る。
更に声に関しても老若男女問わず真似することも可能。
ただし衣服に関しては、ホログラムで再生することが出来ないので、実際に存在する衣服を着用する必要がある。
スカリエッティが生み出したナンバーズの№2、ドゥーエと似たような能力であるが、身長を自在に変えることが可能という点においてはドゥーエよりも優れた能力と言える。
また戦闘に関しても両腕、両足に鎌のような鋭い爪を生やし、高速で近接攻撃を仕掛けてくる。
軌道拘置場に収監されているスカリエッティを脱獄させる際にはリンディ、シグナム、ヴィータの三人に変装した。
そして同型の3号機はヤマト捕獲の命令を受け、ヤマトへと赴き、機関室からガスを流し込み、乗員の多くを昏倒させることに成功するも、いち早くガスに気づいた古代たち一部の乗員の反撃に合い破壊される。

α砲搭載実験戦艦
ゴルバのα砲搭と同じ砲塔を搭載している戦艦。
暗黒星団帝国でもα砲キャリア艦としての実験艦であるため、戦艦の船体を流用して建造スピードを早めたが、主武装がα砲なのでそれ以外の火力もあまり高くないため、戦艦と言うよりは砲艦に属する。

無限β砲搭載超弩級戦艦　グロテーズ
帝星近衛軍・黒色艦隊総司令官サーグラスの座乗の新型戦艦。
艦首両舷の開閉式ドームの中に無限β砲を二門装備している。
従来のＵＦＯの様な暗黒星団帝国の艦船とはデザインの共通点が

見られない上から見ると槍の穂先の様なスマートな形状になっている。

デザリアム星

暗黒星団帝国の本星。地球から４０万光年、大マゼラン星雲から約５７万光年の距離にある二重銀河のうち、白色銀河の中にある惑星。

２００年後（２４０２年）の地球に偽装し、惑星の外観はもとより、スフィンクスや万里の長城などの古代遺跡からルネッサンス時代から近代にかけての絵画や彫刻などの美術品まで忠実に再現していた。

しかし、サーグラス艦隊の爆発をきっかけとした誘爆で偽装が剥がれ、正体を現す。

中心核を球状の骨組が取り巻くといった、肋骨に囲われた心臓のような姿に赤い光が脈打つ、堅牢な装甲を持ったグロテスクな人工天体。

真田によれば、デザリアム星を構成する超金属は「波動砲をもっても決定的なダメージを与えられない」とのことであり、惑星の中心核からパイプを介してエネルギーが供給され、中心核内部に水晶都市が骨組の南北の両極に出入り口がそれぞれ存在する。

外部には収納式の大型砲を多数装備している。

そして内部にある水晶状の人工都市はガミラス帝国の天井都市のような大型ミサイルとなっており、極地の出入り口から敵が侵入した場合はこれで迎撃する。

登場艦船　ボラー連邦

アポストロ級航宙戦艦　（戦艦Ａタイプ）
ボラー連邦が保有する中でも主力・中核となる戦艦。
同連邦艦の中では最もポピュラーな量産型宇宙戦闘艦であり、本国の主力艦隊から属国の艦隊に至るまで、同連邦に属する宇宙艦隊にはかならずと言っていいほど配備されている。
艦首先端部が尖っている造りとなっている。
艦首部の伸縮式主砲や上甲板の格納式砲塔が主武装である。
また、格納式砲塔の両側には、格納式の対空砲が計六基装備されている。
太く短めな艦体の後端に小型で簡単な構造の艦橋構造物を配置し、その前に格納式砲塔を数基並べるという、ボラー戦艦の基本型ともいえる艦型である。
武装　伸縮式主砲（艦首部）×一門
格納式砲塔（上甲板）×三基
格納式対空砲塔（舷側部）×六基

ロスチラフ級航宙戦艦　（戦艦Ｂタイプ）
ボラー戦艦の別バリエーション。
アポストロ級航宙戦艦　（戦艦Ａタイプ）同様、ボラー連邦が保有する中でも主力・中核となる戦艦。
同連邦艦の中でも最もポピュラーな量産型宇宙戦闘艦であり、本国の主力艦隊から属国の艦隊に至るまで、同連邦に属する宇宙艦隊にはかならずと言っていいほど配備されている。
アポストロ級航宙戦艦　（戦艦Ａタイプ）よりもやや大型な造りで、アポストロ級航宙戦艦　（戦艦Ａタイプ）とは異なり、先端部が平らで角が丸みをおびたデザインをしている。舷側方向に向かって発砲出来る砲をもつ。

さらに下部に大型ミサイルも搭載している。
武装　格納式砲塔（上甲板）×二基
格納式砲塔（舷側部）×六基
下部大型ミサイル×一基

グラード級航宙母艦　（大型空母）
ボラー連邦の主力空母。
左右にヒレを広げたような艦容を持ち、艦首に艦載機の発進口を有する。
艦橋が艦最後尾に位置し、前方の甲板に砲塔を配置したボラー艦に多く見られる特徴を持つ。
艦隊旗艦として運用されることもあり、その際は艦体が赤く塗装されている。
武装　格納式砲塔×三基

ヴェトラーナ級航宙戦闘母艦　（戦闘空母）
ボラー連邦が保有している航宙戦闘母艦。
二つの半円を前後につなぎ合わせたようなシルエットをしている。
武装として、前部甲板上にボラー艦として一般的な板状の格納式砲塔を2基、前方の半円状艦体の左右に小規模の格納式砲を二基持つ。
先端部分の横長の開口部が艦載機発進口であり、同国の大型空母と共通性のあるスタイルである。
平べったい外観も共通点である。艦体下部にシャッター開閉式の艦載艇発進口がある。
武装　格納式砲塔
格納式小口径砲

ラザレフ級航宙戦闘艦　（スペースロック・デストロイヤー艦）
ボラー連邦が保有する宇宙戦闘艦。丸みを帯びた深海魚的な同国の艦艇とは異なり、細長く鋭角的でスマートな艦体を持つ。
艦橋構造物は潜水艦の艦橋の様な造りとなっている。
前部甲板上に、リボルバー拳銃のシリンダーの様な形のＶＬＳを装備しているのが特徴でそこから大型自己誘導魚雷スペースロックがこの艦の最大の武器である。
ビーム兵器は艦首部分に備え、他のボラー連邦の艦艇と同様、前方固定集中形式を踏襲している。
また、艦首とスペースロック発射管の間のくぼんだ部分には、爆雷発射口を計八門備えている。
武装　六連装スペースロック発射管×二基
　連装格納式砲塔×四基
　連装大型格納式砲塔×一基
　爆雷発射口×八門
　格納式対空砲座多数

バイオン　（ハーキンス艦）
ボラー連邦の第８親衛打撃艦隊司令ハーキンスが座乗する大型戦艦で同艦隊の旗艦でもある。
主艦体と、その下にある円盤型の艦体から構成される。
艦首と甲板上に各一門ずつ計二門の大口径砲をはじめ、六基の主砲と三十門近いミサイル発射管という強力な武装を備え、単純に搭載武装の数で言うならばボラー連邦の艦隊ではトップレベルの武装数を誇る。
武装　大口径砲（ボラー砲）×二門
　格納式砲塔×六基（主艦体上面×三、円盤部×三）

艦首方向ミサイル発射管（艦首部）×八門
艦首方向ミサイル発射管（円盤部）×六門
垂直方向ミサイル発射管（上甲板）×三門
舷側方向ミサイル発射管（側面）×八門
艦尾方向ミサイル発射管（円盤部）×四門

セヴァストー級航宙戦闘艦　（バルコム艦）
ボラー連邦が保有する大型戦闘艦。
艦橋前部に2門の伸縮式の砲を装備し、左右両舷には大型ミサイル発射口2門を備える。
艦首部分の横長の開口部は艦載機発進口であり、戦艦としてだけではなく、空母としての運用も可能。
やや平面的で平べったい深海魚のような艦体をしているのが特徴であり、この艦型は同国の艦としては戦艦よりも空母に近い造りとなっている。
ボラー連邦本国の第一主力艦隊の旗艦を務めているが、同型艦も存在し、主に艦隊の旗艦として使用されている。

武装　伸縮式砲×二基
　　大型ミサイル発射口（両舷）×二門

バイゼン　（ゴルサコフ艦）
ボラー連邦総参謀長ゴルサコフが座乗する大型戦艦であり、彼の専用艦でもある。
艦橋前部に一門の横長の大口径砲を装備、三基の主砲と多数のミサイル発射管を備える。
艦橋構造物に特徴があり、横に広がったその外観を持つ。

また、主推進ノズルの周囲に太いパイプ類がむき出しとなっている。

武装　大口径砲（ボラー砲）×一門
格納式砲塔×三基
艦首方向ミサイル発射管（艦首部）×六門
艦首方向ミサイル発射管（舷側部）×六門
垂直方向大型ミサイル発射管（上甲板）×一門
舷側方向ミサイル発射管（側面）×六門

ゼルハーゼ　（ベムラーゼ艦）
ボラー連邦首相、ベムラーゼ専用の御召艦。
純粋な戦闘艦ではなく、ベムラーゼの移動用の艦としての機能が優先されているので、戦闘能力よりも防御力が強い。
艦内には閣僚を集めて会議が開けるように大会議室が備え付けられている。

武装　格納式砲塔×四基
ミサイル発射管×六門

中型戦闘機　（Ａタイプ）　ＹａＧ２５
ボラー連邦で使用されている主力艦上戦闘機のひとつである。主に同連邦の宇宙空母に搭載され運用される
キャノピーは半埋没型。武装は機首部下面から突き出たビーム砲と、胴体側面にある６門のパルスレーザー砲を装備している。

中型戦闘機　（Ｂタイプ）　ＹａＧ９５

ボラー連邦で使用されている主力艦上戦闘機。
機首にコクピットを持つ細長い機体。
武装は機首部下面から突き出た大型レーザー砲と、背部に2門のミサイルランチャー。

ラジェンドラ
ボラー連邦の属国であり、流刑地でもあるバジウド星系第四惑星バース星の艦隊旗艦を務める大型戦艦。
艦長は同惑星の現地人であるラムが務めている。
その艦影は滑らかな曲線を多用した艦体ラインを持ち、比較的小型で後端に設置された艦橋、その前の格納式砲塔など、その外観はボラー連邦の戦闘艦の基本型とも言える。
艦体色は、艦隊旗艦を示すワインレッドで塗装されている。
同型艦は建造されていない。
武装　格納式砲塔×三基
　　格納式対空砲塔×八基
　　固定式副砲×一門

機動要塞ゼスパーゼ
ボラー連邦が所有する大型機動要塞。
無数の球体を連結させた形態を呈している。中央部の球体は、直径1キロメートルから2．5キロメートルにも達する。
周囲の球体はすべてが同じ大きさではなく、その内の3つは他より一回りほど大きい。
その大きい3つの球体にそれぞれ1門ずつ、決戦兵器であるブラックホール砲が設けられている。
これは一時的に小ブラックホールを発生させ、周囲の物質を全て呑み込んでしまうというもの。

ボラー連邦への武力制裁に赴いた管理局の艦隊はこの兵器の前にあえなく敗れ去った。
そのほかにも表面には無数の対空砲を備え、多数の航空機も搭載しており、また艦船の収容機能も有している。
装甲は、暗黒星団帝国のゴルバと同等と言える防御力を誇る。

ゾルヴァ　（バース星総督ボローズ専用艦）
バース星に居るボラー連邦の技術者とバース星の技術者が建造した宇宙戦艦。
ラジェンドラ号に代わる旗艦級の戦艦として建造されるもガルマン艦隊の襲来により、量産できず、ラジェンドラ号同様一隻のみの建造に終わる。
ボラー艦特有の滑らかな曲線を多用した艦体ラインをしつつ、艦首と艦尾部分にウィング状の構造を持つ。
ラジェンドラ号と異なり、艦橋は大型となっており、作戦室やＣＩＣ能力が上がっている事から作戦指揮能力も向上している。
武装
格納式砲塔×四基　（前部×三基　後部×一基）
ミサイル発射管×六基　（左右に三基ずつ）
格納式対空砲塔×十六基　（左右に八基ずつ）
下部大型ミサイル×一基

Ｂ型次元潜行艦
ボラー連邦が、時空管理局が保有している次元航行艦を鹵獲し技術調査をした後、建造したボラー連邦の次元潜行艦。
正式艦級名称は第２系列ベムーリン型次元潜行艦。
能力に関してはガルマン・ガミラスが保有する次元潜行艦と比肩を取らない性能を有している。
地球のＵボートに似ている船体のガルマン・ガミラスの次元潜行艦

と異なり本艦は地球の原子力潜水艦に似た丸みを帯びている船体をもっているのはやはりボラー特有とも言える。

全長　１５４ｍ
全幅　１８ｍ
武装
亜空間魚雷発射管　十門　（艦首左右に三門ずつ　船体後部左右に二門　艦橋後部に二門）
格納式砲塔　一基

スオロフ級航宙戦艦
ボラー連邦がガルマン・ガミラスのノイ・ゼラード級航宙戦艦（大型戦闘艦）の対抗策として建造した新鋭戦艦。
艦影もノイ・ゼラード級を意識している形状となっており、船体底部にはバイオン号（ハーキンス艦）の特徴でもある円盤型の下部艦橋を有している。
武装に関してはバイゼン号（ゴルサコフ艦）を参考しにしている。
全長　４５０ｍ
武装　大口径砲（ボラー砲）×一門
格納式砲塔×三基
艦首方向ミサイル発射管（艦首部）×四門
艦首方向ミサイル発射管（舷側部）×六門
垂直方向大型ミサイル発射管（上甲板）×一門
舷側方向ミサイル発射管（側面）×六門

プロローグ

猫は死ぬ前に姿を消す・・・

飼い主に自分の死に目を見せないために、猫は死ぬ前にどこかへ姿を隠すと言われている・・・

そして今、此処でまさに死を迎えようとしている一匹の猫が居た・・・

???Side

私の役目はこれで全て終わった・・・

あの子に私が知っている全ての知識を全て教えた・・・

あの子にはあの子の為の専用のデバイスも作り、それを与えた・・・

使いこなせるかは、全てあの子次第・・・

私はあの子を悲しませない為、一人、何処かへと転移し、其処を自分の最期の地と決めた。

あの子の成長した姿を見られないのは残念だけど、元々そういう契約なのだから、仕方がない・・・

プレシア・・・どうかあの子を・・・フェイトのことをちゃんと自分の娘として見てあげてください・・・

アルフ・・・どうか、フェイトを支えてあげて・・・

ああ、目の前が段々と暗くなってきた・・・体ももう動かず、眠くなってきた・・・

私は薄れゆく意識の中、願った。

主人であるプレシアの事。

娘の様に育てたフェイトの事。

妹のような存在であるアルフの事を・・・

そして、あのカプセルの中で永遠に眠り続けるであろうもう一人のあの子の事はきっと、きっと、大丈夫だろうと必死に思って・・・・・・・・

「猫？」

私が残されていった人達の事を思っていると、誰かが傍に来たようだ・・・・

でも、私にはそれが誰なのかは分からない・・・・

「坊ちゃま!!やっと見つけましたよ!!心配したんですからね!!」

それが、目を閉じた私が最後に聞いた言葉だった・・・・

???Ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

海鳴市の少し人里離れた場所にその屋敷は存在した。

広く大きな庭の中には小さいながらも、林も存在し、そこに住む人物がかなりの金持なのだと一目でわかる。

そんな屋敷の庭でメイド服に身を包んだ女性が声をあげて庭を走り回っていた。

「坊ちゃま～!!　良馬坊ちゃま～!!」

メイドの名前はノエル・エーアリヒカイト

この屋敷の当主月村忍に仕えるメイドである。

そしてノエルが名前を呼んでいる「良馬」とはメイドのノエル、そしてこの屋敷の主である月村忍にとって大切な人の名前だった。

つい先ほどまで、庭で遊んでいた筈の坊ちゃまの姿が見えなくなったので、ノエルは血相を変えて、その坊ちゃまを探している最中なのだ。

その坊ちゃま本人は、林の中で一匹の猫を見つけた。

「猫？」

彼が見つけた猫はぐったりと地面に倒れ、姿が半透明になっている。

「坊ちゃま!!やっと見つけましたよ!!心配したんですからね!!」

弱っている猫を見つけた彼の背後からノエルが声をあげながら近づいてきた。

「あっ、ノエル、猫、猫さんが・・・・」

「猫？」

ノエルが怪訝そうに見ると、彼の腕の中には半透明で今にも消えそ

うな猫の姿があった。
「坊ちゃま、その猫は、どうやらただの猫ではないようですね・・・」
「？」
　良馬はノエルの言う言葉の意味が分からないようで首を傾げる。
　そんな良馬にノエルは猫の正体を教える。
「その猫はおそらく誰かの使い魔の様ですね」
「つかいま？」
「ええ、魔術師のパートナーの様なものです。でも、長くは無いようですね・・・主との契約が切れて消滅しようとしているようです」
　既に消えかけている事からこの猫の使い魔としての寿命が短くなっている事をノエルは察する。
「えっ？猫さん死んじゃうの？」
　ウルウルと瞳をにじませながらノエルを見上げる。
「その・助ける方法が無いわけではありませんが・・・」
　ノエルはどうしたものかと思い、気まずそうに視線を逸らす。
「どうすればいいの？」
　猫が死なない方法があると分かった良馬はパァっと顔を輝かせる。
「・・・その・新たに契約をすれば助かるかと・・・」
「どうやって契約をするの？」
「・・・坊ちゃまの法術を使えば何とかなるかと・・・」
　ノエルが気まずそうに言うと、
「・・・」
　良馬も表情を曇らす。
　しかし、最終的に良馬は法術を使い、猫と契約を結んだ・・・
　良馬が猫と契約を結んだ後、良馬とノエルの姿は屋敷の中にある一室にあった。
　二人は部屋にある椅子に座っている。その二人の目の前には屋敷の当主である月村忍の姿があった。
「良馬・・・」
　忍の冷めた声が部屋に響く。
「は、はい・・・」

体をビクッと振るわせ、怯えた声で返事をする良馬。
「私はあれほど言った筈よね？無闇に法術を使っちゃダメって・・・・」
「・・・・」
忍のお説教の言葉に良馬は顔を俯かせる。
「ノエル・・・・」
「は、はい」
次に忍はノエルにお説教の矛先を向ける。
ノエルも忍の剣幕に怯えている。
「貴女にも言い聞かせた筈よね？良馬に法術を使わせないようにしっかりと面倒をみるように・・って・・・・」
「は、はい・・申し訳ございません」
忍がノエルに睨みをきかせると、ノエルはますます怯える。
「ノエルは悪くない!!」
突然良馬の大声が部屋に響く。
良馬は椅子から立ち上がり、声を上げる。
「ノエルは悪くない!!悪いのは法術を使った僕だ!!だからノエルは悪くない!!」
ノエルが忍に苛められていると思った良馬は目に涙を浮かべながら必死にノエルを弁護する。
良馬の態度に忍もノエルも一瞬唖然となる。
しかし、忍はいち早く再起動すると、良馬に尋ねる。
「そう・・それなら、どうして法術を使ったの？私と約束をしたのに・・・・」
「そ、それは・・・・」
良馬は視線を泳がせ、力なく椅子に座る。
「私に言えない様な事をしたの？しかも、法術を使って・・・・」
「・・・・」
「貴方の法術は特別な力なの・・それを狙う悪い人も居るのよ!?どうなの？良馬？答えなさい!!」
忍はこれまでに無いほど、大きな声をあげて、良馬に問う。
「そ、それは・・・・」

忍の大声を聞いて良馬は忍から視線を逸らす。
目には既に涙が浮かんでいる。
「それは？何なの？言いなさい!!」
「・・・・」
「し、忍様実は・・・」
ノエルがもう見るに見かねて良馬が法術を使った経緯を話した。
良馬が忍に話さなかったのは、只でさえ、使用を止められている法術を猫のために使ったと知れば更に怒ると思ったからだ。
しかし、ノエルから経緯を聞いた忍は良馬の頭を撫でた。
「まったく、それならそうと先にそう言えばよかったのに・・・・」
「もう、怒ってない？」
「ええ・そう、猫を助けるために使ったのね？でもね、良馬」
「はい」
「生き物を飼うと言う事は、命を預かり、命に責任を持つと言うことなのよ。途中で止めることは出来ないのよ。それだけは絶対に忘れないでね？まして使い魔となれば、それは、貴方の半身でもあるのよ。いいわね？」
「はい!!」
先ほどとは打って変わって良馬は嬉しそうに笑みをこぼした。
「それで？その猫は今、どこに居るの？」
「部屋で寝ているよ」
忍、ノエル、良馬は猫が居ると言う良馬の部屋へと赴く。
部屋にはノエルが用意したクッションの中で静かに眠る茶色い猫の姿があった。
「可愛いわね」
忍は笑みを浮かべながら眠る猫を見ていたが、心の中では別の事を考えていた。
「ん？ここは・・・？」
目を覚ますと、そこは見慣れない部屋だった。
「私は確かプレシアとの契約が切れて消滅したはずじゃあ・・・？」

辺りを見回すと、既に夜のようで、窓の外も部屋の中も真っ暗だった。
ただ部屋にあるベッドの中から人の気配を感じる。
それも自分とリンクしている。
どうやらベッドの中にいる人物が新たに自分と契約を結んだ人物なのだろう。
つまり、自分の新しいマスターと言う事になる。
目が暗闇に慣れてくると、猫は部屋の中を見渡した。
部屋の中には玩具や絵本が置いてあることから、新しいマスターは子供の可能性があった。
(上級使い魔である私と契約するなんて・・・でも、プレシアの時の契約と何か違うような違和感が・・・)
リニスは妹分のアルフと違い、上級使い魔に位置する。
上級使い魔は契約時とその後に供給する魔力が多い。
そのため、猫にはベッドで寝ている子供が自分と契約しているのが驚愕に値した。
しかも前まで、当然魔法での契約を行っていたが、現在自分とのリンクが魔力とは少し異なる感覚があった。
目覚めた猫がベッドをジッとみていると、部屋のドアが静かに開き、一人の女性が部屋の中に入ってきた。
その女性はベッドではなく、一直線に猫の下まで音もなく歩いてきた。
「ちょっといいかしら?」
その女性はクッションの上に座っている猫に話しかけた。
普通、猫に話しかけても猫は理解しないだろうが、その女性は今、クッションにいる猫が人の言葉を理解できると、最初から分かっているかの様に話しかけてきた。
猫の方もその意を読み取り頷くと女性と共に部屋を出た。
そして忍は自分の執務室に猫と共に入ると、
「その姿じゃ話し辛いから姿を変えてくれるかしら?なれるのでしょう?人の姿に・・・・」

と、言い放つ。
流石に猫に当たり前のように声をかけていると危ない人か寂しい人に見えて構図的には嫌だった。
「っ!?」
猫の方はいきなり忍からその様な事を言われて驚いたが、向こうも使い魔に関して覚えがあるものと判断して猫の姿から人の姿へと変えた。
忍の目の前には茶色い猫では無く、黒い上下一体のアンダーウェアーの上に白と茶色のロングコートを着て、頭にナースキャップの様な白い帽子をかぶった茶色い髪の女性が一人立っていた。
「はじめまして迷い猫さん。私はこの屋敷の当主、月村忍。貴女の名前は?」
人の姿に変わった猫を見ても忍は驚く様子もなく、早速猫に名前を尋ねる。
「私の名前は・・リニスです」
人の姿になった猫は自らの名前を明かした。
「そう、リニスって言うの・・・・」
「あ、あの・・・・」
「ん?どうしたの?」
「あ、いえ、その・・・・あまり驚かれないんですね」
リニスは忍の平然とした態度に驚かない理由を尋ねる。
「昔、近くの神社で貴女と似たキツネがいたから・・・・そう・・・・昔・・・・にね・・・・」
忍は昔（過去）を懐かしみながら呟く。
「はぁ・・・・」
リニスは既に忍が自分と同じ使い魔と既に面識があったので、あそこまで平然としていられたのだと一人納得し、本題へと入る。
「それでお話と言うのは?」
「良馬・・いえ、私達一族の秘密についてね。その前にまずは、貴女の事を教えてくれないかしら?その後、私達一族の事も話すわ」
「分かりました」

リニスは、魔法の事、使い魔の事、そして自分の前のマスター　プレシア・テスタロッサの事を忍に話した。
「そう、貴女も色々大変な思いをしたのね」
「・・・・」
「それじゃあ次は私の番ね」
続いて忍は約束通り、リニスに自分達一族の事を話した。
「まず、私達一族の事だけど、私達は外見こそ、普通の人間に見えるけど、人間であって人間じゃないの」
「?それはどういう事ですか?」
「私達は夜の一族と呼ばれる種族なの」
「夜の一族?」
聞いた事のない種族名を言われ、リニスは首を傾げる。
「分かりやすく言えば吸血鬼よ」
「きゅ、吸血鬼!?」
「ええ」
吸血鬼と呼ばれる種族名を言われ、リニスは首を傾げる。
管理世界にはそう言った吸血鬼と呼ばれる種族が存在している世界があるからだ。
しかし、文献で見た吸血鬼と今、目の前に居る自称吸血鬼と言う忍の外見からはあまりにも似つかわしくなかった。
「貴女が吸血鬼に対し、どんなイメージを持つかは大体分かるわ。太陽の光が苦手だったり、ニンニクや十字架、教会、銀が苦手・・・そんなイメージなのでしょう?」
「え、ええ」
自分の知る吸血鬼のイメージを言われ、首を縦に振るリニス。
「でも、残念。私達は貴女のイメージしている吸血鬼とは、少し違うタイプの吸血鬼なのよ。まず、普通の人と違う点だと寿命ね」
「寿命?」
吸血鬼に寿命なんてあるのかと思うリニス。
文献に記されている吸血鬼は不老不死と書かれているものがあったためである。

「一般の人間の平均寿命が七十～八十くらいだとして、私達、夜の一族の平均寿命はその二倍～三倍の寿命でね。実際私自身も百年以上生きているわ。まぁ、私は結構長く生きている方に分類されるわね」
夜の一族の平均寿命をリニスに教える忍。
その夜の一族の平均寿命を聞いたリニスは、
「ひゃ、百年!?」
思わず声をあげる。
それは忍の容姿が年齢と合わないためである。
彼女の容姿はどう見ても二十代後半の容姿・・・とても百年以上生きているとは信じられない。
「まぁ、実際こうして生きているのだから、これは信じてもらうしかないわね。もっとも血を飲まないと長生きはできないけどね」
そういって忍は手に持った輸血用パックをリニスにチラつかせる。
「は、はぁ」
「それと、吸血鬼と言えど、ちゃんと死ぬ時には死ぬのよ。事実、私の両親は天寿を全うする前に事故で死んだわ。それに良馬の両親もね・・・」
「・・・」
「次に人間離れした身体能力と、他者の記憶操作や霊感などを持っている事ね。誰かに見られでもしたら、私達は静かに生活できないもの」
「た、確かに・・・」
「それらを踏まえた上で、貴女に問うわ」
忍は真剣な表情でリニスを見つめる。
リニスもそんな忍同様真剣な表情で、忍を見る。
「私達が普通の人間でなくとも、あの子と一緒に居られる?良馬と貴女の話を聞く限り、貴女のマスターは良馬と言う事になるのだから・・・もし、命惜しさで良馬の使い魔をすると言うのならば、今この場で私が貴女を殺すわ。どんな手を使ってもね・・・」
一見脅しの様だが、忍の表情と内に秘めたる殺気から、忍が脅しで言っているのではないと分かる。

その証拠に部屋の空気がピリピリする。
しかし、リニスは既に死を覚悟した身。
今更、そんな安い理由で契約を続けようとは思わない。
「見くびらないで下さい。これでも私は使い魔の中では上級の使い魔だと自負しております。使い魔となった時点で何時死んでもおかしくない状況に居たんです。今更死など恐れませんし、マスターをそんな目で見る様な使い魔は使い魔ではありません!!」
リニスの真剣な表情を見て、忍はリニスの言葉に嘘偽りがないと判断した。
これでも百年以上生きており、なおかつ、実家は財閥と言う事でこれまで沢山の野心や下心を持った人間を見てきたので、人を見る目は十分肥えているつもりだ。
リニスの言葉を信じ、忍は殺気を引っ込めた。
「一応、その言葉を信じるわ」
「・・・・」
忍はリニスの決意を聞いた後、ノエルを呼び、深夜のお茶会と洒落込んだ。
「あの子は・・・良馬はさっきも言った通り、事故で両親を失っているのよ」
「・・・・」
カップを持ちながら哀愁漂う雰囲気で良馬の身の上を話す忍。
リニスは黙ってそれを聞いている。
「母親の代わりとなって育てているのは私とメイドのノエルの二人だけ・・だから、貴女が良馬の事を本当に思ってくれるのなら貴女に良馬のことを任せられるわ。良馬の事をよろしくお願いします」
忍は深々とリニスに頭を下げる。
「い、いえ、そんな!!マスターを守る事は使い魔の当然の義務です!!だから、頭を上げて下さい」
「ありがとう。でも、良馬は負けず嫌いで、周囲に迷惑や心配をかけてばかり・・そのくせ妙な所で律儀というか、他人を見捨てられない所があるの・・ホント、あの人そっくり・・貴女もこれから色々と苦労するか

もしれないわね」
　忍はクスッと笑みを浮かべる。
「男の子は少しヤンチャな方が可愛いんですよ」
　そんな忍に釣られてリニスもクスッと笑みをこぼす。
「それにあの子、死んだ私の旦那の力を孫達の中でも一番強く受け継いでいてね、正直、魔術を齧った事のある人（？）が近くに居てくれると助かるわ」
　忍の話を聞き、ここは何処かの管理世界なのかと思ったリニスは此処が何処なのかを聞いた。
　互いに色々話したが、此処が何処なのかまだ聞いていなかったからである。
「あの・・今更ながら失礼ですが、ここはなんという世界なのでしょうか？」
「？ここは日本の海鳴だけど？そう言えば、貴女はどこから来たの？イギリスのロンドン？それともロシア？あっ、それともイタリアのバチカン？」
　忍は今まで会ってきた魔術関係者の出身国と地名をあげる。
　しかし、リニスは、
「い、いえ私が前のマスターに仕えていたのは、ミッドチルダと言う世界です」
「ミッドチルダ？」
　聞いた事の無い地名に忍は首を傾げる。
　そこで、リニスは、管理世界の概念を忍に話した。
「成程、貴女の話し通りならば、この世界は管理外世界に属するわね。時空管理局なんて組織の名前は、聞いた事が無いもの」
「ですが、マスター（良馬）には魔法めいたものがあると・・・？」
「基本的、私達もそうなんだけど、魔術師と言う生き物は、おおっぴらに存在を明かしたりしないのよ。だからこの世界がその時空管理局に相手にされてこなかったのでしょうね。もっとも、話を聞く限り、そんな組織の傘下に入るつもりは私個人としてはゴメンだけどね」
「会った事があるんですか？その・・魔術師に？」

「何度か有るわ。私の死んだ旦那が生前、退魔の仕事をしていてね、そう言ったオカルトめいた事件を近くで見てきたから」
忍の話を聞き、この世界が密教の隠れ里のような世界なのだとリニスはそう認識した。
しかし、ここがどんな世界だろうと、こうして新しいマスターと出会えたのだから、文句は無い。
使い魔として、また母親として、そして魔術関係者の保護者として、やるべき事が多そうだ。
しかし、どれも使い魔としてはやりがいの有りそうな仕事ばかりだ。
こうしてリニスの新たな使い魔生活が始まったのであった。
部屋に戻ったリニスはベッドの中で眠る良馬の頭を撫でる。
「うぅ〜・おかーさん」
リニスに頭を撫でられた良馬は寝言を呟く。
良馬の寝言を聞いたリニスは一瞬唖然とするが、すぐに頬笑み、再び良馬の頭を撫でる。
「よろしくお願いしますね。ご主人様（マイマスター）」
眠る良馬を見つめるリニスの姿はまさに我が子を見つめる母親の様であった。
一方、リニスと別れた忍は自分の部屋で月明かりの中、一人、ウィスキーの入ったグラスを傾けていた。
リニスに夜の一族の事と良馬の事を話して、忍は昔に死に別れた旦那の事を思い懐かしんでいた。
テーブルの上にある写真立ての中には古ぼけた写真があり、その写真には若き日の頃の忍の姿と黒髪の青年の写真があり、二人は仲むつまじく腕を組み、カメラに向けて、笑みを向けている。
写真を見て、忍は口元を緩めた。

リニスが良馬の使い魔となってから暫くして、良馬、リニス（猫バージョン）、忍はノエルが運転する車で、ある場所へ出かけた。
ちなみに良馬はリニスが人の姿になれるということは知らないし、

リニスと言う名前もまだ知らない。
良馬達がやって来たのはこれまた良馬が住んでいる屋敷同様大きな屋敷で、広大な庭には、沢山の猫が住んでいた。
「相変わらず、すずかの家は猫天国ね」
忍が庭に居る沢山の猫達をみて呟く。
「いらっしゃいお姉ちゃん、良馬君、ノエル」
玄関先にはこの屋敷の主でもあり、忍の妹である月村すずかが良馬達を出迎えた。
「こんにちはすずかさん!!」
良馬が元気よくすずかに挨拶をする。
「こんにちは、良馬くん。あれ?その猫?」
すずかは良馬の頭の上に居るリニスに注目する。
猫好きのすずかならば、猫が気にならない筈がない。
「この前、家で拾ったの～」
「へぇ～その子、なんて言う名前なの?珍しい種類だね?」
すずかがリニスに興味がある様で、名前を聞いてくる。
さすがにリニスの種類までは分からないが、良馬は思いついた名前をすずかに伝える。
「う～んと・・・ド○リアさん!!」
今ここでリニスに名前を与えた良馬であったが、
「にゃ～にゃ～!!」
リニスは良馬のつけた名前に不満があるのか、首を振っている。
「あまり気にいってないみたいだよ?」
「えぇ～それじゃあ・・・・ザー○ンさん」
最初のドド○アさんにかなりの自信があったにも関わらず、却下になったのが少し不満の様子の良馬。
「うにゃ～」
またもリニスは良馬のつけた名前が気に入らない様子。
「じゃあ、フ○ーザ様」
「にゃ～」
その後も、リニスに新しい名前をつけて行くが、そのどれもがリニ

スには気に入らない名前ばかりだった。
((ネーミングセンスの無さもあの人そっくり))
次々と浮かんでくる名前を言っては却下される良馬の姿を見て、忍、すずか、ノエルの考えは一致した。
忍の旦那だった男もネーミングセンスが無かったことからリニスの名前を必死に考えている良馬にその姿が被った。
「良馬、『リニス』なんてどう?」
見るに見かねた忍が助け船を出す。
「ニャ!!ニャ!!」
リニスも変な名前をつけられるよりも既につけられている名前を呼んでもらう方が良かったため、必死に頷く。
「喜んでいるみたいだよ?」
リニスの様子を見て、すずかが言うと、良馬は渋々猫の名前を「リニス」と決めた。
猫の名前も無事に決まり、その後は皆でお茶会や他の猫と戯れた。
すずかの家の猫たちもリニスに興味があるのか近づいてきた。
中には少し目が怪しい猫もいた。
主に雄猫たちの目つきがリニスを見る目がヤバい。
その後、リニスはすずかの家の雄猫たちに追いかけまわされたが、事情を知らない良馬は、
「リニスは皆と仲良しさんになったんだね」
と微笑みながらリニスの様子を見ていたが、なんとなく事情を察した忍やすずか、ノエルは何とも言えない顔をしていた。
(帰ったら、慰めてあげないと・・・)
沢山の雄猫に追いかけまわされるリニスを見て、忍は今夜の酒と愚痴の相手をしてやろうと心で決めた。
しかし、それ以前にリニスが今日此処で純潔を散らさないかが心配だ。
そして当のリニスはと言うと、
(イヤーっ!!犯されるー!!)
(姉ちゃん、俺と楽しい事しようぜ!!)

（いや、俺とやろうぜ!!）

必死にすずかの家の雄猫たちから逃げ回っていた。

約一名（？）にとっては不幸だったこの日、ここには確かな平穏があり、大人たちはこの平穏がいつまでも続くものだと信じていた。

しかし、その平穏があまりにも過酷で地獄の様な現実に晒されようとはこの場に居る者・・いや、地球に居る者の中で誰一人として知る者は居なかった。

一話　出撃準備

無限に広がる大宇宙・・・・
静寂な光と闇に満ちた世界・・・・
そこには様々な生命が満ち溢れている・・・・
死んでいく星もあれば、生まれてくる星もある・・・・
そうだ宇宙は生きているのだ・・・・
我々の太陽系を含む大銀河系もまたさまざまな生命に満ち溢れているのだ・・・・
しかし我々の地球は今、その最期の終末の時を迎えようとしていた・・・・
海は蒸発しつくし、地上の全生命は死滅した・・・・
人類は僅かにその生存圏を地下に求めてほそぼそと生き延びているのだった・・・・
その地球をあざ笑いながら冷酷に見ている目が宇宙にある・・・・
我が銀河系を隔てること１４万８０００光年、大マゼラン雲の太陽系サンザー・・・・
その第八番惑星ガミラスこそ、今、地球を滅亡に追いやろうとしている悪魔の星だった・・・・

時に西暦２１９９年、地球は今、最後の時を迎えようとしていた・・・・

宇宙侵略を着々と進めてきたガミラス宇宙艦隊は、ついに太陽系へその魔の手を伸ばし地球に対して遊星爆弾による無差別攻撃を加え続けた。
地球人は地下都市を築き、必死に生き延びていたが、地球防衛軍の懸命の努力にもかかわらず、ガミラス宇宙艦隊は圧倒的に強力であり、地球人の絶滅か奴隷かを要求して情け容赦の無い攻撃を繰り返していた。

次第に戦力を失っていく地球防衛軍にとって最後の頼みは地球防衛艦隊であったが、強大なガミラス宇宙艦隊の攻撃の前に今や地球防衛艦隊は壊滅しようとしているのであった。
遊星爆弾による放射能の汚染は地球の表面はもとより地下をも着実に冒し始めていた。
もはや地球に健康な土地は無くなった。
人類は、ただその絶滅の時を待つだけだろうか？
明日への希望は無いのだろうか？

西暦２１９９年　地球　地下都市　地球防衛軍第三艦船ドック
第三ドックには地球防衛軍が正式採用しているＭ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦の一隻、駆逐艦、雪風がその翼を休めていた。
ドック内では技術者と作業員が艦の補修・整備をしている中、一人の技術者に話しかける男が居た。
「どうだ？・戦えるようになったか？・」
この男こそ、宇宙駆逐艦　雪風の艦長、古代　守その人だった。
「ん？・あ、ああ・・・」
守に話しかけられた技術者はどことなく曖昧に答える。
この技術者の名前は真田　志郎。
古代　守とは士官学校での同期で、親友の間柄だった。
彼はこの第三ドックの技術主任でもあった。
「そうか・・・・三日後には出発する。冥王星海戦だ・・・・これに負けたら地球はもう後が無い。どれくらいの艦が辿り着けるか分からないが、必ず冥王星基地を叩いてみせるさ」
真剣な表情で守は真田に今の地球の現状を話した。
「・・・・」
そんな守の話を真田も真剣な表情で聞いていたが、真田には何か守には言いだせない様な事情を抱え込んでいる様な姿だった。
しかし、守は真田の技術者の腕前を知っており、彼が一流の技術者でもあり、科学者でもあるので、彼の腕と言葉を信じた様子だった。
同じく地球防衛軍第七艦船ドックでは、防衛軍が正式採用している

M―２１７０式宇宙巡洋艦　三笠が補給・整備を行っていた。
その三笠の艦長室には、防衛軍士官へと成長した月村　良馬の姿があった。
そしてその傍らには、人の姿になったリニスの姿があった。
長年寝食を共にしている中で、いつまでも秘密にしておけることなど、たかが知れている。
あの日・・・すずかの家で開かれたお茶会の日からすぐ後にリニスが人の姿になれると言う事は良馬にバレた。
最初こそ、驚いていた良馬であったが、その後はすぐに、人の姿になったリニスに懐き、リニスを忍、ノエルに続き、三人目の母のように慕った。
当然、リニス本人も本当の母のように良馬を育てた。

「リニス、君は本当に良いのか?そりゃ、医務官である君が残ってくれると言うのは、心強いが・・・」
「構いません。私は、貴方の使い魔なのですから、どこまでもマスターである貴方と共に居ます」
良馬はリニスに退艦を勧めたがリニスは頑としてこれを拒否した。
そして、良馬と共に戦場へ向かう信念を曲げなかった。
「これがこの艦の負傷者のリストです」
リニスは良馬に一冊のファイルを手渡す。
それは三笠の医務官を務めているリニスが纏めたこの艦における負傷した乗員の名前が載ったリストだった。
リストは正確に纏まっており、いつ負傷したのか、そして現在における治療と負傷の具合などが書き込まれていた。
「ありがとう」
早速、リニスから受け取った負傷者リストに目をやる良馬。
「彼らも連れて行くんですか?」
怪訝な表所で尋ねるリニス。
医務官として負傷者を戦場へと連れて行く事に対し、反対の様子だった。

「いや、動いても支障がない軽傷者以外は全て退艦させる。恐らく彼らは納得しないだろうが、重傷の者に鞭を打つ様な事は出来んさ・・・・退艦してもらい、今後は治療に専念してもらうつもりだよ。藤堂長官と沖田提督には此方から伝えておく」

赤ペンで退艦させる者の名前に印をつけながらそう答える良馬。

確かに今は、一人でも人手が欲しい現状ではあるが、まともに動くことのできない負傷者を連れて行っても何もできないだろう。

ならば、彼らにはこのまま艦を降りてもらい、今後は治療に専念して、次の戦いに備えてもらおうと思ったのだ。

もっとも、次の戦いというものがあればの話であるが・・・・。

そして本来ならば、リニスも彼らの専属医務官と言うことで退艦させようと思ったのだが、先ほど断られてしまった。

負傷者の退艦リストが出来上がると良馬の下に一本の通信が入った。

「月村艦長、駆逐艦、冬月の高町艦長から通信が届いています」

「わかった。こっちに回してくれ」

「了解」

机の上にあるパソコンが通信画面に切り替わると良馬と同じ黒いジャケットタイプの艦長服を着た青年と防衛軍宇宙艦隊の群青色の制服を着た青年が映っていた。

「高町に沖田か。どうした？」

良馬は学友に話しかける口調で二人の青年に声をかける。

古代　守と真田　志郎が士官学校の同期で親友だったのと同様、良馬と画面の向こうにいる二人の青年、高町　恭介と沖田　一（はじめ）は士官学校の同期で親友の間柄だった。

「月村、お前のほうにも人事部から来たと思うがコレについて、少し話がしたくてな・・・」

恭介が一枚の書類を良馬に見せる。

「あぁーそれか、確かにうち（三笠）にも来たよ」

その書類には以下のような事が書いてあった。

『長男または家督を継ぐ者は、直ちに申告せよ』

それは人事部が出した合法的な退艦許可証だった。
「それで月村、貴様はどうする？」
「どうって？」
「お前は月村家の長男だし、実家は何代にも渡って続いてきた由緒ある家だ。お前の代で終わりにするわけにはいかないだろう？」
高町と沖田の二人は良馬に退艦を勧めてきた。
しかし、良馬は、
「馬鹿を言うな、艦長である俺が降りれば、誰がこの艦を指揮する？それにお前たちも同じだろう？　沖田、お前だって沖田家の跡継ぎだ。お前のルックスならすぐに再婚相手だって見つかる。親父さんだって、お前が出撃するのには反対したんじゃないか？」
一の父、沖田　十三は今回、出撃する艦隊の総司令を務める人物であり、一はその提督の一人息子だった。
「つい、さっきも高町にも同じようなことを言われたよ。でも、俺の惚れた女はこの世でただ一人、雫だけだ。それ以外の女と一緒になろうとは思わんさ・・・それに提督の息子だからと言って逃げたら沖田の家の名は後世までに卑怯者・臆病者の代名詞になるだろうよ」
この三人の中で、一は一番早くに結婚したが、ガミラスの遊星爆弾の攻撃により、一は妻を亡くしていた。
そして、一の言葉と態度から一は退艦などサラサラする気がない様子だった。
「高町、貴様も高町家の長男だろう？それに妹さんだってまだ小学生だ。肉親はもうお前しかいないのだろう？お前こそ、退艦するべきなんじゃないのか？」
次に良馬は、恭介に話を振った。
恭介の家族も妹一人を残し、遊星爆弾の無差別攻撃や病気により落命していた。
「俺だって冬月の艦長だ。艦長たるもの最後まで艦や乗組員を見捨てはしない。それにアイツはしっかり者だ。俺に万が一の事があっても、高町の家はアイツが立派に継いでくれるし、店だってきっと再建出来る筈だ」

三人は互いに退艦を勧めたが、既に選択肢は決まっていた。
退艦などしない。
最後の最後まで防衛軍軍人としての責務を全うしようと・・・
その後、三人は互いに書いた遺書の保管場所を伝えた。
全員戦死した場合は人事部が持っていくことになっているが、もし、誰か一人でも生き残った者が居れば、その者が遺書を遺族へ届けると言う事を決めた。
もっとも、沖田と高町は同じ艦なので、冬月か三笠のどちらかがと言った方が正しいだろう。
(マスターも・・・そして高町さんや沖田さんもみんな・みんな、死を覚悟しておられる。三人は、まだまだこんなにも若いのに・・・アリシアの時も・そして今回も・神は何故、何故、若い命を散らせるような無情な運命を課すのですか!?)
三人の男たちのやり取りをリニスはただ黙って見ていた。
そして、この世に神が存在すると言うのであれば、その神の無情を嘆いた。

三日後の出撃を控え、乗員にはそれぞれ一日ずつ最後の半舷上陸(休暇)の許可が下りた。
一日目は三笠副長の三木　幹夫、率いる乗員の半分が休暇となった。
ただ、重傷者についてはまだ受け入れ先の病院が決まらないので、三笠の医務室に居る。
「では、艦長・・・」
先頭の三木を始めとし、休暇で降りる乗員全員が良馬に敬礼する。
そんな彼らに対し、良馬も答礼する。
「ああ、皆、家族や親しい者たちとの一時を存分に楽しんできてくれ・・・思い残すことがないように・・・」
荷物を抱え、三笠を降りる乗員を良馬はその姿が見えなくなるまで、その場に立ち続け彼らを見送った。
そして次の日、半舷上陸二日目、休暇の最終日に、艦長である良馬

は副長の三木と交代し、艦を降り、リニスと共に地下都市にある月村の実家へと戻った。
もっとも艦長と言う立場から一番最後に艦を降りた為、時刻は既に夕方となっていた。
艦を降りた良馬とリニスは実家に戻る前に下宿先を提供してくれている中嶋家に寄り、挨拶をしてから実家の月村家に戻った。
地下都市にあるとはいえ、月村の家は他の地下都市の家よりも大きかった。
「ただいま、戻りました」
軍帽を脱ぎ、脇に抱え、良馬は、玄関ホールにて、自分が帰ってきたことを家族に伝える。
リニスは良馬の一歩後ろで付き人のように立っている。
「お帰りなさいませ、良馬様、リニス様」
ノエルが良馬とリニスを出迎える。
「忍様、良馬様とリニス様が戻られましたよ」
ノエルが奥にいる忍に良馬とリニスが帰ってきたことを告げる。
「お帰りなさい、良馬」
「ただいま戻りました。忍さん」
自分たちを出迎えた忍に良馬とリニスは静かに一礼した。
一度、部屋に戻り、軍服からポロシャツにジーンズといったラフな格好でリビングへと入った良馬。
リビングでは、ノエルがお茶の準備を行い、忍が椅子に座っていた。
良馬も静かに椅子に腰かけ、ノエルが準備をしているお茶を待つ。
やがて、二人の前に紅茶の入ったカップが置かれ、二人は互いにカップに口をつけ、お茶を一口飲む。
「明日、冥王星へ向け出撃します」
カップをソーサーへ置いた良馬がポツリと呟く。
「そう・・ですか・・・」
忍は良馬の顔を見ようとはせず、自分のカップの中の紅茶を見ている。
「防衛軍としては恐らくこれが最後の艦隊決戦になるかもしれませ

ん。しかし、現段階において、地球側が勝てる見込みは・・・・」
　良馬が今の地球の・・防衛軍の実情を話そうとした時、
「それじゃあ、今夜は良馬の出陣を祝って盛大に送り出さないとね。ノエル、手伝ってくれるかしら？」
「かしこまりました」
　そう言って忍とノエルは良馬の話を最後まで聞くことなく、台所へと姿を消した。
「・・・・」
　忍とノエルが去った後、良馬は一人、紅茶の入ったカップを見つめていた。
「やはり、後悔していらっしゃいますか？」
　台所で、夕食の準備をしている忍にノエルが語りかける。
「・・・・」
「あの時、良馬様を無理矢理にでも士官学校へ入校させない方が、良かったと御思いなのですか？」
「・・・・」
　ノエルの問いに忍はただ黙って黙々と料理の下拵えをしていった。
　忍は下拵えをするのと同時に、先ほど、ノエルが言った、良馬が士官学校へ入校を決めたその日のことを思い浮かべていた。

『地球以外に知的生命体は存在しているのか？』
　二十世紀から幾度となく議論され、地球人類が太陽系内とは言え、宇宙へと進出してからも引き続き議論されて来たこの話題は八年前、ついに終止符がうたれた。
『ガミラス帝星』と名乗る、外宇宙からの来訪者によって・・・・・
　外宇宙からの来訪者。
　この現実に地球人類は大いに沸きたった。
　地球人類が長い年月を重ね、開拓してきた宇宙開発事業・・・しかし、地球の科学にも限界があり、今まで行けた宇宙は太陽系のはずれ、第十一番惑星までであり、ガミラスはそれよりも遥か彼方の宇宙からやってきた。

ガミラス帝国と友好関係を築く事が出来れば・・・太陽系の外宇宙から来訪した彼らの宇宙船技術を導入出来れば、地球は大きく発展できるだろうと、当時の地球連邦政府の高官達はそう考えていた。
しかし、その夢は脆くも崩れ去った。
それも、地球人類がもっとも恐れていた最悪な形で・・・・
ガミラスは友好どころか、地球連邦政府に対し、無条件降伏と全地球人の奴隷化を要求してきた。
当然地球側としてはそのような要求は呑めるわけがなく、ガミラス側に拒否の姿勢を示した。
その後は、二十世紀に数多くアメリカやヨーロッパで上映された宇宙人による侵略戦争そのものだった。
ＳＦ映画では最後の最後で地球は宇宙人の侵略を防いだ形で終わる内容でも、現実は厳しく、そして残酷でガミラスによる一方的な虐殺でしかなかった。
地球がガミラスの放つ遊星爆弾の無差別攻撃にさらされ始めた頃、月村家に良馬とリニス宛ての手紙がそれぞれ届いた。
封筒には地球防衛軍士官学校の烙印が押され、忍は嫌な予感がしつつもその封筒の封を破き、中の手紙を見た。
手紙の内容を見た忍は、顔を強張らせた。
やがて、良馬とリニスが帰宅すると忍は良馬とリニスを呼び、手紙の内容について問いただした。
忍から手渡された手紙の内容を見た良馬は喜んだ。
手紙の内容は宇宙戦士士官学校の合格通知書だったのだ。
喜ぶ良馬に対して、忍は、
「良馬、それはどういうことなの!?」
と、宇宙戦士士官学校の入校について難色を示した。
「この手紙のとおりです。士官学校へ行き宇宙戦士になります」
「いけません!!」
宇宙戦士になるという良馬に忍は反対した。
「っ!?　な、何故です!?今、地球はガミラスの攻撃を受けて大変だというのに・・・・?」

「だからこそです!!」
「・・・」
「今の地球の科学力でガミラスに敵うと思っているの?宇宙に出てもむざむざ殺されに行く様なものじゃない!!私は、絶対に認めませんからね!!」
　忍が此処まで良馬が防衛軍軍人になるのを反対した理由は、ただ危険だからというわけではなかった。
　ガミラスの遊星爆弾による無差別攻撃は、忍が今まで見守ってきた自分の孫たちの命を奪っていき、その中には、忍の妹のすずかも含まれていた。
　常人よりも優れた身体機能を持つ夜の一族でも放射能や遊星爆弾には勝てなかった。
　中には良馬の両親の様に事故や病気で命を落とした者もいたが、現在、忍の直系として生き残っているのは良馬を残すのみとなっていた。
「じゃあ、忍さんはこのまま地球がガミラスに滅ぼされても良いって言うの!?こんな時だからこそ、夜の一族の力が必要なんじゃないの!?」
「そうは言ってないわ!!でも、貴方がそんな危ない事をしなくても良いって言っているの!!　貴方は月村の家の次期当主なのよ!?　それにリニス!!貴女も良馬が士官学校を受けるのを黙っていたの!?しかも貴女まで良馬と一緒に士官学校へ行くってどういうことよ!?」
　どうらや二人は忍に黙って宇宙戦士士官学校の入学試験を受けていた様で、
　リニスも良馬同様、宇宙戦士士官学校の入学試験に合格していた。
「わ、私は良馬さんの使い魔ですし・・それにマスターが行くというならば、私がお止めするわけにも・・・」
「使い魔ならば、主人が道を誤りそうになったらソレを止めるのも使い魔の役割でしょう!?」
　忍は怒りの矛先を良馬からリニスへと変えた。
「リニスは関係ないだろう!?大体忍さん、この手紙を見せたと言う事

は、勝手に封を開けたな!?　いくら身内でもプライバシーの侵害じゃないか!?　僕はいつまでも子供じゃないし、忍さんの人形でもないんだ!!自分の未来くらい自分で決める!!僕は宇宙に行きます!!」
「っ!?‥‥わかりました。どうしても行くというのなら、貴方とは家族の縁を切ります!!」
忍はそう言って部屋を後にした。
良馬との口論の後、忍と良馬の溝は深まり、月村家の空気は物凄く重く、悪くなった。
忍と良馬は互いに一切口を利かないし、顔を見ようともしない。
食事の時間ですら、互いに会おうとはせず、部屋で摂るか、時間帯を互いにずらしている。
そして、良馬が士官学校へ入校する前日の夜。
忍は電気もつけない自分の部屋にて、ウィスキーが入ったグラスを片手に持ち、死に別れた旦那の写真をジッと見つめていた。
(あの子が二度と生きて家に帰ってくることはないかもしれない。それでも、止めることは出来ないのね‥‥ホント、あの子は貴方そっくりね‥‥変な所で義理堅く、困った人を見捨てることができない‥‥やっぱり、あの子は私と貴方の血を立派に継いでいるわ‥‥わかっているのにね‥‥あの子は男の子だもんね‥‥男の子なんだからしかたがないよね‥‥)
その時、忍は何処か吹っ切れた顔をしていた。
翌朝、士官学校へ入校する為、荷物を持ち、月村家を後にする良馬とリニス。
見送り人はノエルのみで、忍は部屋から出てこない。
「それじゃあ、元気でね、ノエル」
良馬自身これが月村家との最後の別れになるのだと覚悟していた。
月村の家の当主は未だに忍であり、その当主である忍が自分と家族との縁を切ると言う事は、つまり勘当と言う事になる。
そうなれば、もう二度と、月村の家の敷居を跨ぐことはない。
でも、後悔はしていない。
それに自分は一人じゃないリニスが居てくれる。

心にそう言い聞かせながら良馬はノエルと別れを告げる。
「はい、良馬様もお元気で・・・・リニス様、良馬様の事をよろしくお願いします」
ノエルはリニスに深々と頭を下げる。
「ノエルさん・・・・分かりました。マスターの事はお任せください」
二人は玄関のドアを開け、門へと向かい歩いていく。
その時、
「良馬!!」
忍の声がした。
良馬が振り向くと、バルコニーに忍の姿があった。
「やるからには最後まで諦めずにベストを尽くしなさい!!そして、必ず生きて帰りなさい!!待っているから・・・・貴方が帰ってくるのを・・・・!」
忍の声援を聞き、良馬は一礼した後、無言のまま、忍に背を向け、歩き出す。
「いいんですか?良馬さん?忍さんに何か言わなくて?」
隣を歩くリニスが尋ねる。
「何か言えば辛くなる・・・・それに、男は簡単に泣いちゃダメなんだよ」
良馬はグッと拳を握りしめ、歩いていく。
(マスターも忍さんも互いに不器用な人なんですね)
リニスはそう思い苦笑しつつ、良馬と共に士官学校へ向かった。

あの日から幾月の年月が流れたが、戦況は一向に好転せず、地球はガミラスの猛攻の前に追い詰められていく。
そんな中、良馬は数々の戦場を渡り歩き、無事に生き残っては昇進を重ねていった。
やはり、常人よりも優れた反射神経や運動神経がものを言ったようだ。
そして、今地球の命運を賭けて、防衛軍最後の決戦が冥王星で行われようとしている。
良馬の出陣を祝う夕食会なのだが、雰囲気はまるでお通夜のように

暗く、空気は重い。
ノエルとリニスが無理にでもこの場を盛り上げようとしているが、あまり意味をなしていなかった。
出撃日当日、良馬とリニスは朝一で月村家を後にした。
玄関ホールには、ノエルと忍の姿がある。
「いってらっしゃいませ。御武運をお祈りいたします」
ノエルが深々と頭を下げる。
「ああ、それじゃあ・忍さん、ノエル・・・行ってきます」
良馬が忍に顔を向けると、忍は感極まって良馬を抱きしめる。
「例え卑怯者・臆病者と呼ばれても良い・・・必ず・・・必ず無事で生きて帰ってきなさい・・・良馬」
「忍さん・・・はい・・・」
「リニスも良馬の事、よろしくね」
「承知しました」
良馬も忍を抱きしめ返し、暫し抱擁した後、二人はノエルと忍に敬礼をし、月村邸を後にし、宇宙船ドックへと向かった
遠ざかっていく良馬とリニスの後姿を忍とノエルはいつまでも見ていた。
各艦が出撃準備を整えている中、良馬は先日リストアップした負傷者を退艦させる旨を艦内に放送した。
ギリギリで重傷者の受け入れ先は見つかったのだ。
ただ、放送を聞いた重傷者の中には驚き、悔しそうに顔を歪める者も居た。
やがてタラップの周りには退艦する負傷兵達が集まった。
「今回の出撃には、君達を加えない事になった。退艦する事は残念だろうが、此処は命令に従って潔く艦を降りてくれ。　以上だ・・・」
良馬のこの命令に悔しそうに顔を歪める将兵が何名かいた。
「右向け、右!!・・・前へ、進め!!」
号令がかけられ、負傷者達は次々と退艦していく。
そんな中、号令を無視して一人だけ艦長の前に駆け寄る負傷兵がいた。

「艦長殿！お願いです！退艦させないで下さい!!私も・・・私も一緒にお供させて下さい!!」
　退艦に立ち会った他の兵士に羽交い絞めにされつつその負傷兵は良馬に嘆願する。
「駄目でありますか!?自分は足手纏いでありますか!?」
「そうだ!!」
　悲願する兵に対し、良馬は声をあげ、堂々と負傷した兵を足手纏いだと宣言する。
　だが、その後のフォローも忘れない。
「気持ちは分かるが聞き分けてくれ。出て行く者達が地球の為ならば、残る君達も地球の為なのだ。まだまだ尽くして貰う事がある!!それに必ず死ぬとは限らない。また戻ってくるかもしれない。その時は傷を癒し、再び共に戦おう!!」
　その負傷兵の肩に手をポンと置き、生き残る重要性と完治した後、再び共に戦おうと言う良馬の言葉を聞き、その負傷兵は目に涙を浮かべた。
「うぅ～艦長殿～」
「では、諸君ごきげんよう!!」
　ちょっとした悶着がありながらも、全ての退艦者が艦を降りると、
「下艦者に対し、総員敬礼!!」
　艦上には三笠の乗員が全員出て、退艦者に敬礼を行った。
　手が動く者は答礼し、中には涙を流す者もいた。
　修理・補給、退艦者の退艦が終わり、いよいよ出撃する時が来た。
　出撃前に総司令官、沖田　十三が出撃する艦に放送で訓示を述べた。
「出撃にあたり、いまさら改めて何も言うことはない。ただただ諸君らの奮闘に期待する。地球防衛軍の軍人として、全地球市民の輿望にこたえるよう!!・・・以上だ・・・全艦出撃!!」
　さまざまな思いを胸に秘め、最後の地球防衛艦隊は決戦の地、冥王星へと出撃して行った。

二話　冥王星海戦　開戦

冥王星は太陽系外縁天体内のサブグループの代表例とされる、準惑星に区分される天体である。西暦２００６年までは太陽系第九惑星とされていた。

星の表面は異常に不均一で表面のうちカロンに向いた側はメタンの氷が多く、反対側は窒素と一酸化炭素の氷が多い。

軌道は、太陽系の惑星と比較するとかなり異常である。惑星は黄道面と呼ばれる仮想の平面にかなり近い面を公転しており、軌道の形は真円に近い。対照的に、冥王星の軌道は黄道面から大きく傾いており離心率が大きい。

そのため、冥王星の軌道の一部は海王星よりも太陽の近くに入り込んでいる。

太陽系　準惑星　冥王星　近海宙域

かつて、人類が未知の大陸と香辛料を求めて大海原へ旅立った大航海時代・・・・

そして石油と植民地を求めて覇権を争ったように星の海でもそれは同じだった。

星の海を渡る船も平和の使者、宇宙旅行を楽しむ観光客ではなく、太陽系の星の海を渡る船も武装した宇宙船だった。

西暦２１９９年八月・・・二十一世紀の初頭に太陽系の惑星基準からはずされたこの星から数十万キロ離れた星の海を航行する多数の飛行物体があった。

地球防衛軍宇宙艦隊が旗艦らしき大型の飛行物体を先頭に単縦陣で航行している。

そして、その周りには小型の艦艇が同じく単縦陣で航行していた。

更にその先を飛行していた小型艦では・・・・

ねぇ、兄ちゃん、
あの中のどこに、
お父さんと、
お母さんの、
星があるの？

宇宙突撃駆逐艦、雪風の艦橋で、艦長の古代守は星の海を見ながらそう呟いた。
「なんですか？今の？」
守の呟きを聞いた雪風の副長の石津　英二が守に訊ねる。
「ああ、弟がね、まだ小さかった頃、俺に言った言葉なんだ」
石津の問いに答える守。
「ご両親は確か、遊星爆弾で・・・・」
「うん・・・・銀河の星はこれまで産まれて生きた人の数と同じだけあるって言うけど、沢山あるよな・・・・」
「どこにあるんですかね？艦長のご両親の星・・・・」
「・・ああ・・・・君の奥さんの星もな・・・・」
守と石津は眼前に広がる星の海を見ながら互いにそう、呟いた。

その頃、宇宙巡洋艦　三笠　の厨房では、
「もうすぐ戦いが始まるぞ!!敵が来る前に飯を運べ!!モタモタするな!!敵は待ってはくれぬぞ!!」
「「「はい!!」」」
銀髪で前髪以外は先端に黒いメッシュが入り、緑色の瞳を持ち、白いコック服に身を包み、頭には同じく白いコック帽を被った女性が手を動かしながら他の厨房スタッフに指示をしている。
彼女の名前は、ディアーチェ・K（コンドウ）・クローディア。
この三笠の主計科長兼厨房長で、彼女の作る食事は美味いと他艦か

らも評価を受けている程の腕の持ち主だ。
その彼女達、厨房スタッフは戦闘前に配る食事、戦闘配食である握り飯を大急ぎで作り、弁当箱へ箱詰めし、各部署へ運んでいる真っ最中だった。
運ばれてきた戦闘配食を各部署の将兵達は皆、うまそうに食べていた。
もしかしたらこれが最後の食事になるのかもしれないという思いから、皆、米粒一つも残さず食べていた。
「ほれ、皆の者、戦闘配食だ。中身は我が握った特製おにぎりだぞ」
艦橋へは厨房長であるディアーチェ本人が届け、その一つを艦長である良馬へと手渡した。
「すまんな、厨房長」
良馬はディアーチェから渡された弁当箱の箱をあけ、手にはめていた白手袋を脱ぎ、中の握り飯を食べ始める。
「艦長、いよいよか・・・・」
ディアーチェは眼前に広がる星の海を見ながら間もなく決戦が近いことを悟る。
「ああ・・・もうすぐだ・・・・」
「艦長、戦勝後の赤飯を炊ける様、厨房スタッフ一同、祈っておるぞ」
ディアーチェはそう言い残し、艦橋から去っていった。
「戦勝後の赤飯かぁ・・・・楽しみですね、艦長。厨房長の作る飯は美味いですから。こうなったら絶対に生き残って食いたいですね」
そう言うのは三笠の操舵席で艦を操艦する永倉　新一航海長だった。
彼はすでに戦闘配食を食べ終えた様で、操艦作業を行っている。
「そうだな、必ず勝って、そして生き残って厨房長の赤飯をたらふく食うぞ!!」
「「「はい!!」」」
艦橋に笑い声が満ちた。
それはこれから戦を挑む空気でなく、とても和気藹々とした空気だった。

太陽系　準惑星　冥王星　宙域（防衛軍作戦宙域内）

地球防衛軍日本艦隊　旗艦　戦艦　えいゆう　艦橋内部

「沖田提督、当艦を含め、艦隊は全艦、冥王星作戦内宙域に入りました」

「うむ」

「レーダーに反応!!目標接近!!」

「右舷四時の方向より敵艦接近!!距離１０万宇宙キロ、速度、２７宇宙ノット!!」

オペレーターの報告を聞き、えいゆう　の艦橋に緊張が走る。

「電波管制解除、艦種識別確認!!急げ!!」

間髪いれずに、艦長席に座っている　えいゆう　艦長の山南　修が命令を下す。

その隣には、白ひげを生やした貫禄ある初老の軍人、地球防衛軍日本連合宇宙艦隊司令長官、沖田十三が仁王立ちしていた。

（出てきたな・・・悪魔〈ガミラス〉め!!）

「敵戦力判明!!ガイデロール級宇宙戦艦一、メルトリア級宇宙巡洋戦艦七、ケルカピア級宇宙高速巡洋艦八、デストリア級宇宙重巡洋艦・クリピテラ級宇宙駆逐艦合わせて五十七隻を確認!!更に後続の未確認艦も見込みあり!!」

（相手はこちらの三倍以上か・・・）

艦種識別確認をしたオペレーターの報告から予想以上に多い敵艦隊の出現に先程と比べ物にならない緊張が走った。

パネル画面には両生類または魚類を思わせる様な生物的フォルムで艦首の両舷には黄緑色に光る目のようなくぼみを持つ独特な艦影に濃緑色の塗装を施された艦船の群れが地球艦隊では考えられない程の高機動な動きを見せながら、地球艦隊に近づいてきた。

その動きは宇宙船ながらまるで星の海を泳ぐ宇宙生物のようにも見える。

そしてその数は地球艦隊を圧倒していた。

艦隊戦を知っている人間ならば撤退を指示する程の戦力差があっ

た。
　これが地球を滅亡へと追い遣らんとするガミラス宇宙艦隊だった。
　だが、そんな緊張を押しのけるように、沖田は低く、重みのある声で命令を下す。
「総員戦闘用意!!全艦第一種戦闘配置。変針面舵三十、全艦砲雷撃戦用意!!これより『回天・メ号作戦』を開始する!!」
　沖田は進撃を止めなかった。
　そして沖田の命令は各艦に伝達され、次々と艦隊旗艦である宇宙戦艦　えいゆう　の後に続いていく。
　沖田本人としては同航戦ではなく正面戦でやりたかった。
　と言うのも地球艦隊の一番攻撃力が高い武器は艦首に装備されている固定式陽電子衝撃砲である。
　これまでの地球とガミラスとの戦いで使用され、ガミラスもそれを使用させないようにこうして同航戦を挑んできたのだ。
　仮に此処で沖田が右舷九十度の反転を命じた場合、ガミラス艦隊を正面に捉えることができるかもしれない。
　しかし、転舵中の大きな隙を見逃すガミラスではない。
　沖田はその事を知っているからこそ、敢えて分が悪い同航戦を挑むしか選択肢がなかったのだ。
「おもか～じ」
　操舵手は復唱しながら舵を右へ傾けた。

　巡洋艦　三笠　艦橋
「ヒュ～相変わらずの高機動ですな～敵さんは・・・・さながら夜の湘南の町を走り回る暴走族の様だ」

　喩えは悪いが、航海長の永倉が敵の艦隊運動を見て、呟く。
「確かに、あの動き・・・今の地球艦隊では到底できない動きだ。」
　良馬の方も、敵の動きを見て、地球艦隊とガミラスとの科学技術の差を改めて思い知る。
「お?.艦長、旗艦、えいゆう　より発光信号です。〝全艦戦闘配置、コ

レヨリ作戦ヲ実行セントス。面舵三十、我ニ続ケ〃」
「よし、返信の発光信号を旗艦に送れ。総員、戦闘配置。面舵三十変針、えいゆう　に続け!!」
　永倉からの報告を受け、良馬は命令を下した。
「了解!!」
　永倉が舵を右へときると、三笠の船体がゆっくりと右側へと傾き始めた。
　良馬は会戦が始まる前に艦橋にいる乗組員を見回す。
　皆、覚悟が出来ている・そんな真剣な表情で良馬の事を見ている。
「さぁ、地球人の意地と誇りを敵（ガミラス）に見せつけてやろう!!」
　良馬は軍帽を被り直し、艦橋に居る皆を鼓舞する。
「「「おう!!」」」
　気合の入った声が艦橋に響いた。
（とはいえ、戦力差は戦艦などの大型艦で8・1、巡洋艦や駆逐艦などの中小型で約3・1、完全に劣勢だ。　しかもこれで最後の地球防衛軍連合宇宙艦隊・・・本来なら戦力保管である予備部隊程度、残しておいたほうがいいのだが、そこまでの余裕は地球にはないか・・・）
（それに陽電子砲が使えない同航戦・・・この時点で勝利は望み薄だな・・・）
　元々勝ち目の薄い戦であったが、目の前のガミラス艦隊の数を見せつけられ、良馬は戦力と戦術でのアドバンテージが既にガミラス側にあることからやるせない気持ちになる。

　駆逐艦　冬月　艦橋
「すごい数の艦船だ」
　冬月航海長の沖田　一が敵の艦船の数に声をあげる。
「宇宙船乗りとして・・・いや、軍人として、一度でいいからあれだけの艦隊を率いてみたいものだな」
　敵艦隊を見て、冬月艦長の高町　恭介は武者震いをしつつ、不敵な笑みを浮かべ、敵を見ていた。
「艦長、えいゆう　より発光信号です。〃全艦戦闘配置、コレヨリ作戦

ヲ実行セントス。面舵三十、我ニ続ケ〃」
「うむ、航海長、面舵三十、旗艦に続け!!」
「了解、面舵三十!!」
冬月も他艦同様、艦隊旗艦　えいゆう　の後に続いた。
恭介は艦長席に座り、やや不安そうな顔でキャノピー越しに味方艦隊を見回す。
（えいゆう　から送られた情報では、敵はこちらの三倍以上の戦力・・・開戦当時は此方側が数では勝っていたが、度重なる地球側の敗戦と遊星爆弾で人員も戦力も落ちていき、その間に敵は次々と本国から艦隊と物資を冥王星へと派遣してきた。それに敵の動きからして、緊急発進（スクランブル）にしてはあまりにも数が多い、おそらく待ち伏せでもしていたのだろう・・・そんな連中にこの戦力差で勝てるだろうか？）
元々の造艦技術にも差があるのに、今回は数の方でもガミラスが上、
誰もが一抹の不安を抱かずにはいられなかった。

戦艦　えいゆう　艦橋
「提督、敵艦より入電〃地球艦隊ニ告グ、無駄ナ抵抗ハヤメ、タダチニ降伏セヨ〃・・・返信はどうしましか？」
「〃バカめ!!〃と言ってやれ」
「は？」
「〃バカめ!!〃だ!!」
「は、はい!!此方、地球司令船、返信〃バカめ!!〃・・終わり、どうぞ・・・」
えいゆう　の通信士がガミラス艦隊の旗艦に返信を送ると、
ビュー
ビュー

ギュー

と言うノイズが通信スピーカーから聞こえてきた。

「うわ――――っ　おこった　おこった」

通信士は通信文を受け取ったガミラス人の怒った顔を想像し、そして苦笑した。

双方の通信のやり取りは地球艦隊の他の艦艇にも傍受されていた。

宇宙巡洋艦　三笠　艦橋

「戦う前に態々降伏を勧めるなんて、紳士的なのか、それとも余裕ぶっているのか？いや、単に我々を見下しバカにしているのかな？」

ガミラス側の通信内容が『降伏セヨ』と言う内容に良馬は、ガミラスの心情を考える。

「それで、沖田提督は何と返信した？」

「はい。えっと・・・〝バカめ!!〟・・・です」

「そうか、〝バカめ!!〟か・・・実に沖田提督らしいな」

良馬はやや愉快げに笑い、艦橋の乗員達も少し笑顔になる。

だが、その直後、

「敵艦、発砲!!」

敵からいきなり走ってきた赤色の閃光によってすぐに消えた。

敵の旗艦、ガイデロール級宇宙戦艦の主砲が　えいゆう　に向けて火を噴いたのだ。

幸い敵の砲撃は　えいゆう　の上甲板ギリギリの所を掠めていったが、旗艦の発砲に続き、ガミラスの後続艦も次々に発砲してきた。

「巡洋艦、夕凪　被弾し大破!!航行不能に陥った模様!!続いて、巡洋艦、鞍馬　被弾し爆沈!!」

えいゆう　のすぐ後ろを航行していた宇宙巡洋艦、夕凪と同じく宇宙巡洋艦の鞍馬が敵弾の餌食となり戦線離脱、その後大爆発を起こして撃沈された。

たった一回の一斉射で巡洋艦を二隻も失った事実により、まだ若いクルーたちの顔のに焦りの色が見え始める。
「艦長、反撃は!?」
「まだだ!!えいゆう(旗艦)から発砲許可は出ていない。それにまだ敵との間に距離がありすぎる!!回避行動をとりつつ敵艦に砲の照準を合わせ続けろ!!砲撃命令があるまで待機だ!!航海長!!頼むぞ!!」
「任せてください!!」
敵の絶え間ない砲撃に少し怯える乗組員に対し、喝を入れ、航海長へ信頼を寄せる良馬。
永倉も良馬の信頼に応えんと、見事な操艦技術で敵弾をかわしていく。
(くそっ、まだか!?)
とは言え、こうも激しい敵弾の雨の中、いつ敵のクリンヒット、ラッキーパンチがあるかわからない。
しかし、こちらの有効射程に入るまで主砲を撃っても意味がない。
良馬は焦る気持ちで艦隊旗艦の　えいゆう　を睨む。
えいゆう　の艦橋では、砲雷長がスコープ状の空間観測儀を覗き込む。
モニターには砲塔の狙いを示す色が表示されているが、右上には『圏外』の文字が表記されている。
地球艦隊は敵を有効射程圏内におさめる為、ガミラスは必中距離へ敵を捕捉する為、両艦隊は距離を縮める。
ただ、ガミラスは地球艦隊への発砲は止めずに距離を縮めてくる。
こちらは攻撃が出来ないが、敵からの攻撃を喰らうアウトレンジ攻撃下にある事は軍人としては屈辱的である。
それはほんの数分・・いや、数秒と言う短い時間でも、とてつもなく長く感じる。
えいゆう　の砲雷長の指はトリガーにかかっているが、掌はぐっしょりと汗で湿っていた。
やがて、モニターの『圏内』の文字が消え『捕捉』の文字表記に変わる。

砲雷長は今すぐにでもトリガーを弾きたい衝動を抑えて、
「敵艦、射程内に入った!!照準よし!!」
と叫ぶ。
「全艦、全砲門開けっ!!撃てぇ!!」
沖田は全艦に一斉射撃を命じた。

「えいゆう　より通達!!砲撃命令です!!」
「よし、主砲、撃ち方始め!!」
えいゆう　の発砲を皮切りに地球艦隊の艦船の主砲が火を噴いた。
幾つものエメラルドグリーンの光線がまっすぐガミラス艦へ向かった。
先程の撃たれっぱなしとは真逆の光景が広がった。

地球　地下都市　地球防衛軍司令部
冥王星海戦が始まったことは地球側でも傍受していた。
司令部の大画面には、三角形や矢印で地球艦隊とガミラス軍の行動が表記されており、連邦政府高官や防衛軍司令部の幕僚は固唾を飲んで、冥王星の光景を見ていた。
「あれが最後の地球艦隊だ。あの艦隊が敗れればもう、地球を守る力は残されていない」
防衛軍司令長官、藤堂　平九郎は手を組み、地球側の勝利を祈った。
「大丈夫。沖田提督は歴戦の勇士だ。必ず勝ってくれるよ」
「そうだとも藤堂君。沖田君を信じよう」
司令部の幕僚たちが地球側の勝利を何処か確信している様子で藤堂を宥めるが、
藤堂本人としては、根拠のない勝利だと言いたかったが、
幕僚たちの心使いに水を差したくはないし、少しでもポシティブな考えをしていないと、絶望の前に精神がおかしくなりそうなこの状況。
藤堂も他の幕僚同様に沖田の勝利を信じるしかなかった。
「すまない、沖田君・・・」

画面を見ながら藤堂はポツリと呟いた。
場面は再び冥王星宙域の戦場へと戻る。
地球艦隊が放ったエメラルドグリーンの光弾、全弾が寸分たがわずガミラス艦へと命中した。
何しろ、相手の数のほうが多く、しかも密集している・・つまり射撃の的が多い。
むしろ外す方がおかしい。
しかし・・・・
カンッ
コンッ
キンッ
宇宙空間なので当然音はしないが、擬音語にするならまさにこんな表現で出来る具合に地球艦隊が放った光弾は全てガミラス艦の分厚い装甲に反射され、宇宙空間に虚しく拡散し消えた。
地球艦隊が撃った光弾を受けたガミラス艦は無傷だった。しかも装甲板には凹みや歪みすら見当たらない始末である。
「くそっ、やっぱりこうなったか・・・・」
あまりにも散々な結果に落胆し、良馬の口からつい本音が漏れる。
艦橋要員も良馬同様苦虫を噛み潰したような顔をしていた。
苦戦はこれまでの戦いから予想されていた事だが、此処まで一方的とは認めたくなかった。
(考えてみれば、向こうは宇宙の遥かかなたからやってこられるほどの推進力を持ったエンジンを搭載した宇宙戦艦だ。それに比べ、こっちは本来の制宙権であった冥王星に来るまでに十日～二週間を費やすほどの性能のエンジンを搭載した宇宙船・・・こんな鈍足じゃあヤツらの船速についていけない。いや、そもそも比べるのが間違いだろうな)
良馬がガミラス艦と地球の宇宙船の性能について思考している間にも、お返しとばかりに撃ってくるガミラス艦の猛攻に味方は徐々に

撃ち減らされていく。

巡洋艦　焔　主砲制御室

ガミラス軍の攻撃を受けた巡洋艦　焔　は、大破し、既に航行不能となっていた。

その焔の主砲制御室では、

「おい!!坊主!!しっかりしろ!!死ぬな!!」

血まみれの少年兵を抱え起こしている古参のベテラン砲術兵が必死に声をかけている。

「うぅ・お母さん・・・お父さん・・・」

少年兵は地球にいる両親のことを思い、小さくそして苦しそうな声で、呟く。

そしてその言葉を最後にそのまま息を引き取った。

「くそっ、何故だ!?何故!?こんな子供が死ななきゃならない!?畜生ぉ!!ガミラスめぇ!!」

彼が死んだ少年兵の体を抱きしめ叫んだその瞬間、辺りが一際カッと光ったと思ったら・・・

ドゴオォッ

焔は大爆発を起こして宇宙の塵と化した。

宇宙巡洋艦、焔の他にも宇宙駆逐艦　秋月が被弾して航行不能になり、

「か、回避!!」

「ダメです!!間に合いません!!」

「うわぁぁぁぁぁぁぁー!!」

秋月の後ろを航行していた味方の宇宙巡洋艦　阿武隈と衝突して二隻は爆沈した。

「秋月、阿武隈、撃沈!!」

「艦と艦の間隔を開け!!」

僚艦が次々と沈んでいく中、ついに旗艦である　えいゆう　にも敵の光弾が命中し、各部に被害が出始めた。

幸い、えいゆう　は宇宙戦艦だったため、装甲が駆逐艦や巡洋艦と

違い厚く、ガミラス軍とは言え、敵巡洋艦の砲撃を数発くらっても爆沈することはなかった。

戦艦　えいゆう　艦橋

「艦尾損傷!!」

「シアンガス発生!!」

「レーザー砲の動力部に異常発生!!主砲が撃てません!!」

「なにっ!?」

主砲が発砲不能。

この報告に艦長である山南が声をあげる。

「技術班!!急ぎ!!主砲の応急修理を行え!!」

「りょ、了解!!」

戦場の中、主砲が使えなくなるなど射的上の的同様の事態である。

何としても主砲の動力を復旧させなければならなかった。

山南は急ぎ、動力室へ応急修理部隊を向かわせた。

えいゆう　の艦尾では、破口から空気が外へと漏れ出した。

「まもなく気密隔壁を閉鎖する。乗員は直ちに他のブロックへ避難せよ!!」

艦内放送が流され、乗員達は次々に避難していくが、破口からの空気の流失は物凄い吸引力で、逃げ遅れた乗員が必死に辺りの出っ張りをつかみながら避難しようとしていたが、

「待ってくれぇ!!」

無情にも隔壁は閉じられた。

えいゆう　の機関室では、外の戦闘の状況を把握することが出来ない状態だったが、機関士達は自分達の職務を必死に果たしていた。

「推力低下が止まらないよ。このままじゃ、エンジンが・・・」

そうぼやいたのは、藪　助治　機関兵曹長

機関士としては一流のベテラン機関士だった。

「ぼやくためじゃなく、どうするべきかのために頭を使え!!」

そんな藪に喝を入れたのが、彼の上官でもあり、この艦の機関長でもある徳川　彦左衛門　機関大尉だった。

「大丈夫だ!!この艦はあの沖田　十三の乗艦だ。沈まんよ・・・そしてわしらが沈めさせるものか!!」
徳川は自信満々に言うと機器を操作し、推力の回復へと務めた。
その間にも事態は地球側に不利な戦況が続いた。
「駆逐艦、太刀風　被弾し大破!!〝さらば〟を打電し続けています!!」
「巡洋艦、八雲より入電!!〝ワレ操舵不能〟」
「巡洋艦、叢雲は轟沈!!本艦の針路に入ります!!」
「回避行動!!」
オペレーターの報告を聞き、山南が　えいゆう　の航海長に回避行動を命令し、えいゆう　は急ぎ針路を変更する。
眼前には爆発を繰り返しながら航行不能に陥り、漂流する味方の宇宙巡洋艦、叢雲の姿が映った。
艦の傍には叢雲の乗員の死体が大勢漂っていた。
えいゆう　の艦橋員はおもわず目を背けたが、沖田だけはグッと握り拳を作り、眼前の光景を堪える様に見ていた。
(奴らにはこの艦では勝てない・・・・)
地球とガミラスの科学技術の差を痛感していると、
「戦闘宙域の傍を超高速で通過する物体があります」
「流星か?」
「いえ、エネルギー反応から見て宇宙船です!!識別不明!?ガミラスの物ではありません!!」
沖田が外を見ると流れ星の如く、一筋の光体が戦場を去っていった。
「外宇宙航行速度を出している。内宇宙で無謀な事を・・・・」
「不明船よりエネルギーの流出を確認!!損傷しているものと思われます」
「エンジンの暴走か、ガミラスの流れ弾にでも当たったのか・・・・だが、あの速度だと後数分で火星軌道に行ってしまうぞ・・・・」
この謎の宇宙船の出現は地球でも捉えていた。

地球　地下都市　地球防衛軍　司令部

「不明船は火星へ向け、自由落下中です!!」
「予想不時着地点は？」
「火星の極冠部です」
「誰か観測員はいるか？」
「士官学校を卒業したばかりの新人が二名います」
「誰だ？」
「古代　進と島　大介の二名です」
「使えそうか？彼らは〝例の計画〟のため、特殊訓練を受けていますから、多分・・・」
「よし、すぐに連絡を入れ、不明船の調査にあたらせろ」
「了解」
やがて不明船は火星へと墜落した。

火星は太陽系の太陽に近い方から四番目の惑星である。地球型惑星に分類され、地球の外側の軌道を公転している。
かつては地球化改造（テラフィーミング）により、赤い大地には緑が広がり、地球と同じように青い海が広がり、地球から沢山の人々が移民し、地球と同じ星となった。
しかし、第二次内惑星戦争によって海は干上がり、沢山の命が失われ、生き残った人たちも地球へ強制退去となった。
人は居なくなったが、完全に住めなくなったわけではなく、現在も極冠付近に小さな観測所があった。

火星　極冠付近　観測所
「此処（火星）に赴任して、こうして毎日赤い大地ばかり見ていると、此処が何処だか、分からなくならないか？古代」
宇宙食を食べながら火星の赤い大地を見ていた島　大介が相棒の古代　進に話しかける。
「・・・飛びたい」
「え？」
島に話しかけられた古代は心此処にあらずといった感じで茫然と

しながら火星の赤い大地を見ていた。
「じれてくるんだ・・・兄さんたちが冥王星で必死に戦っているのに、俺はただこうして毎日、赤い大地を見ているだけ・・・時折、自分に耐えられなくなる」
「古代・・・」
この古代　進は今、冥王星で戦っている駆逐艦　雪風　の艦長、古代守の弟だった。
古代と島が赤い大地を見ていると、
ドゴォォン!!
轟音と共に地面が揺れた。
「うぉっ」
「うわっ」
突然の揺れに二人はバランスを崩し、床に倒れた。
「な、なんだ?今のは?」
「地震か?」
二人が床から起き上がると、
「地球司令部より指令。不時着した不明船の正体を確認せよ」
地球司令部の命令を聞いた二人は、
「今のだぜ、きっと」
「冥王星の近くで今、戦闘中なんだ。どっちかの艦が墜ちたんじゃないか?」
「それにしちゃ、冥王星から距離がありすぎるぜ」
二人は宇宙服のヘルメットを被り、観測所に配備されていた１００式探査機で不明船が不時着した地点まで飛んだ。
不明船が着陸した地点上空まで行くと、一隻の宇宙船が煙を吐いていた。
「おっ!?島、アレだ。地球の物でもガミラスの物でもないぞ」
いち早く不明船の船影を見た古代はその形が見慣れた地球の物でもガミラスの物でもないことに気が付く。
地面へと着陸した古代と島は早速、不明船の調査を開始した。
しかし、宇宙船は墜落のショックで船首部は原型を留めておらず、

例えこの宇宙船に乗員がいたとしても生存者は居ないのではないかと思った。
「デザインもエンジンも見たことがない形だ」
改めて近くで墜落した宇宙船を見ると地球ともガミラスとも違うその船型をまじまじと見る古代。
「一体何処から来たんだ？」
この宇宙船の母星が気になる様子の島。
そして更に付近の調査を進めると、不明船の傍に救命ポッドのような物があった。
救命ポッドの方も調査するとそこには一人の女性が倒れていた。
女性は長い金髪の美しい人で手には何かを掴んでいた。

「古代、その人・生きているのか？」
島が怪訝な表情で古代に訊ねると、古代は生死を確かめる為、その女性を抱き上げる。
「いや、ダメだ・・・死んでいる・・・」
しかし、既に女性は息絶えていた。
古代が抱き上げると、女性が手に持っていた何かが地面に落ちた。
「なんだ？通信カプセルか？」
島が地面に落ちた通信カプセルらしき物体を回収する。
この出来事がその後の地球の未来に大きく影響する出来事だと言う事を古代も島もこの時には知る由もなかった。
その後、二人は通信カプセルを始めとして、宇宙船の残骸など資料として役立ちそうな物を回収して観測所へと戻った。
その際、宇宙船に搭乗していたと思われる女性の遺体は丁重に火星の地へと埋葬した。
本来ならば、彼女の体も重要なサンプルの一つでもあった。
遺体の保存ならば観測所の食糧庫ならば一定温度が保たれているので、保存も出来た。
何しろ、地球人が接触したガミラス以外の第三者宇宙人なのだから・・・・。

そして尚且つ、地球人類は未だにガミラス人の姿を見た事が無い。
そのため、第三者的な宇宙人の死体というのは、地球の研究者にとっては、是が非でも欲しいサンプルだろう。
しかし、古代と島はそれだからこそ、彼女の遺体を埋葬したのだ。
サンプルとして回収されれば、彼女の体は研究者たちが検視の後、解剖するだろう。そして、貴重なサンプルとしてホルマリン漬け・・・・美しい女性の身体を死体とは言え、そんな辱めを受けさせないための処置だった。
この不明船を調査したのは自分達二人なのだから、お互いに秘密にしておけば、詮索される事はないだろう。
古代と島の行動は軍人としては、間違った行動かもしれないが、人としては間違った行動ではなかったかもしれない・・・・。

三話　冥王星海戦　敗走

古代と島が火星で不明船の調査を行っている間も冥王星宙域では、いまだに地球防衛軍とガミラス軍の戦闘が続いていた。
しかし、状況はガミラス軍の一歩的な虐殺と言った方が正しいくらい、戦況は地球防衛軍が俄然不利な状態が続き、好転の見込みは未だに望み薄だった。
「駆逐艦　敷波　　不知火　島風　撃沈!!」
「巡洋艦　愛宕、爆沈!!同じく　伊吹　航行不能!!」
「駆逐艦　影島　沈黙!!」
味方が次々撃沈されていく中、良馬は、
「このまま一矢も報いぬままでは、死んでも死に切れないな・・・もっとも、死ぬ気などサラサラないけどな・・・通信長、冬月の高町艦長に打電!!〝之ヨリ抜刀シ、敵ニ切リ込ミヲ行ウ〟だ」
「了解」
良馬の命令を受けた通信長は早速、駆逐艦、冬月に打電する。
「航海長、頼むぞ!!」
「任せて下さい!!機関長!!エンジン全速で頼みます!!」
「お前さんらはどうしてもこの艦を壊したいようなじゃな?」
三笠機関長の井上　貫一郎が皮肉を込めつつ不敵に笑みを浮かべ、機器を操作する。
艦長も航海長も・・そして機関長も敵陣への切込みをやる気でいると、
「ちょっと待って下さい!!艦長!!それは命令違反なのでは?」
と、良馬に異議を唱える者がいた。
良馬が視線を向けると、そこにはメガネをかけ、肩にかかるくらいの黒髪をした女性士官がいた。
彼女の名前は、ターニャ・L・コジマ。
士官学校を卒業したばかりの新米士官で、この海戦には研修目的で乗り込んでいた。

研修目的の最中、命を落とす士官もいるので、彼女はある意味幸運だったのかもしれない。
新米士官と言っても士官であることにかわりなく、艦長への意見具申権もちゃんと存在する。
だからこそ、彼女は艦長の良馬に意見具申をしたのだ。
「コジマ君、確かに提督からは〝攻撃せよ〟との命令は受けたが、〝その場に留まり、ないし、戦列から離れるな〟と言う命令は受けていないが？」
「なっ!?それは詭弁です!!」
良馬の言葉に反論するターニャであったが、
「冬月より打電〝抜刀準備完了〟とのことです!!」
「よし、之より敵陣に切り込む!!総員衝撃に備えろ!!面舵一杯!!変針角度５０になったら、機関全速!!」
切込みの準備が出来た事で、ターニャの意見は半ば無視される形となった。
「・・・」
ここまで切込みの準備が進み、艦長を始めとし、乗員の殆どがガミラス艦隊への切り込みに賛成しつつある空気の中、新米士官の自分がこれ以上反対意見を述べても無駄だと思ったターニャが出来る事は不満そうな顔で良馬を見るだけしかなかった。
「コジマ君、立っていては危険だから、座席に座ってシートベルトをつけた方が良い」
良馬の行動にターニャはムッとした表情をしつつ、用意されていた座席に座り、シートベルトを着けて衝撃に備えた。
三笠　は　えいゆう　に発光信号にて〝我、敵陣二突入ス〟と打つと、冬月と共に戦列から離れ、敵陣へ切り込んだ。
案の定、えいゆう　の沖田は直ぐに三笠と冬月に通信を入れた。
「月村、高町!!無茶はするな!!隊列に戻れ!!」
「提督!!近距離攻撃でないと敵に歯が立ちません!!敵の懐まで援護をお願いします!!」
良馬の要請を聞いた沖田は、

（まったく、無茶をする）
と、思いながらも沖田は搭載されていたミサイルによる援護を行った。
やはりと言うか、当然と言うか、ガミラスは自分たちの隊列に突っ込んでくる愚か者（三笠）に対し、砲撃を集中させてきた。
だが、三笠はそれを紙一重で躱していく。
別に不思議なことではない。
船は横から見れば確かに大きいが、前に回りこんでみればわかるように正面は横と比べ、表面積が小さいため、被弾するリスクは大幅に軽減することができる。
更に、えいゆう　によるミサイルの援護も功を奏した。
「敵の弾幕を突破した!!光球に倣って敵の懐へ飛び込め!!高町!!行くぞ!!」
「おう!!」
突如、三笠の後ろから冬月が飛び出してきた。
冬月は三笠の後ろにピッタリとついてきたのだ。
つまり、冬月は巡洋艦である三笠を囮にし、その死角に隠れ、敵に接近してきたのだ。
敵陣の真っただ中へ入った二隻はそれぞれ、左右に分かれ、敵を攪乱しつつ、攻撃を行った。

宇宙巡洋艦　三笠　艦橋
「飛び道具しか持たない連中の密集隊形など、一歩踏み込まれてしまえば脆いな・・・目標、左舷前方のデストリア級宇宙重巡洋艦の艦橋部!!・・主砲撃て!!」
良馬の命令後、三笠の主砲がデストリア級宇宙重巡洋艦に向け放たれる。
デストリア級宇宙重巡洋艦は回避行動をとったが、密集隊形をとった中、慌てて回避したため、隣を航行していたケルカピア級宇宙高速巡洋艦に衝突し、両艦は大爆発を起こした。
「臆病者め!!当たってもご自慢の装甲で防げたのに。艦の装甲は分厚

くても連中、心の装甲は薄いようだな!!」
爆発をしている敵艦を見て、良馬は口元をニヤリと緩める。
その頃、冬月も同様の行動を行い、デストリア級宇宙重巡洋艦を二隻衝突させ、之を撃沈した。

宇宙駆逐艦　冬月　艦橋
「ふん、慌てた自分の愚かさを呪え!!」
恭介は爆発した敵艦を見ながら、冷たく言い放った。
「敵、クリピテラ級宇宙駆逐艦二隻接近!!」
「ミサイル管全門開け!!この距離なら有効弾を与えられるぞ!!」
「敵射程内に細く捕捉!!」
「撃て!!」
冬月は装備されている全てのミサイル管からミサイルを発射した。
「敵艦の撃沈を確認!!」
「その調子だ!!続いて砲撃を――」
続けろ、と言おうとしたそのとき、強烈な振動が冬月を襲った。
立っていた恭介はバランスを崩すが、近くの手すりにつかまり転倒を防ぐ。
「損害報告!!各部、状況知らせ!!」
被弾したな、と即座に判断した恭介はマイクを手に取り、艦内一斉放送で状況を確認する。
「艦尾マストに被弾!!されど航行に支障なし!!」
軽い損害に恭介は顔には出さなかったが内心で安堵した。
三笠とて、負けておらず、着実に敵を攻撃し、沈めにかかっていた。

宇宙巡洋艦　三笠　艦橋
「距離８５００、速度差＋２・・・軌道に乗った!!」
「ミサイル撃て!!」
三笠から放たれたミサイルは三笠の全方を航行していたケルカピア級宇宙高速巡洋艦を追尾し、やがて着弾すると、敵艦は爆発した。
地球防衛軍の光線はガミラスには効果がないがミサイルなどの実

弾に関しては効果がある。
　しかし、その実弾は射程距離が短いので、こうして近距離での戦闘をしなければならない。
「ミサイルの着弾を確認!!敵艦、撃沈しました!!」
「「「やったー!!」」」
　やられっぱなしの状態から敵を撃沈したことに艦橋では、思わず、喝采が出た。
　斬り込みに反対し、先程まで仏頂面だったターニャも口元を緩めている。
　更に両艦が動き回ることで、敵に混乱をもたらせた。
　ガミラス側としては当然迎撃してきたのだが、密集した艦隊の中を三笠と冬月は動き回ったため、ガミラス艦の中には間違って友軍の艦艇を誤射してしまう艦もいた。
「駆逐艦　冬月　より、入電」
「繋げ」
「月村、上手く切り込めたがどうやら此処までのようだ」
「ああ、敵さん早くも陣形を整えようとしている。相変わらず動きが素早い・・・長居は無用だ。戦列に戻ろう」
「そうした方が無難だな」
「航海長、転舵反転１２０度!!敵さんにありったけのジャミング閃光弾をプレゼントして離脱だ!!」
「了解!!」
　三笠と冬月はジャミング用の閃光弾を敵に向け発射し、敵艦隊を再度混乱させた後すぐに反転し、味方艦隊に戻ろうとした。
　その時だった・・・
「二時方向!!敵艦一隻、えいゆう　に急速接近!!速い!!」
　オペレーターからの報告にあわててレーダーモニターを見ると、確かに　えいゆう　の上方から敵駆逐艦が一隻接近している。
　これはまずい、と良馬は攻撃命令を下す。
　しかし、
「っ!?ミサイルを!!」

「ダメです!!今、撃てば　えいゆう　にも当たってしまいます!!」
そう、三笠のこの位置からでは敵にも当たるかもしれないが、えいゆう　にも当ててしまう危険があった。
すると、えいゆう　に接近する敵艦の後ろから味方の駆逐艦一隻が急接近する。
その直後、モニターから敵艦の反応が消える。
「味方駆逐艦が敵艦を撃破しました!!」
「誰の艦だ？」
「第十七号駆逐艦　雪風　です!!」
「古代先輩か・流石だ・・・」
「スペースイーグルの名は伊達じゃないって事ッスね」
守の見事な操艦運動と雷撃に感心する良馬と永倉だった。
そして三笠と冬月が　えいゆう　のいる宙域についたとき、三笠の乗員の目に旗艦である　えいゆう　の姿が映った。
「提督の艦が・・・」
「ひどい損傷じゃな・・・」
目の前に映る　えいゆう　は船体の彼方此方に穴を開け、そこから煙を出していた。
その光景を見た良馬と井上は提督の身を案じながら口を開いた。
その　えいゆう　の艦橋部では、もはや戦闘よりも艦の復旧作業で手一杯だった。
「第七、第八隔壁緊急閉鎖!!」
「主砲の動力はまだ回復しないのか!?」
「ターレットへの動力供給が出来ません!!」
復旧作業をすすめる中もガミラスの攻撃は容赦なく続けられ、ますます追い詰められていく。
そんな中、沖田が右腕を負傷した。
「て、提督」
沖田が負傷したのを見た兵の一人が心配そうに声をかける。
「わしは大丈夫だ」
「巡洋艦　氷雨　沈黙!!駆逐艦　初風、綾瀬　轟沈!!」

「我々の艦隊は後、何隻残っている？」
「ハッ、本艦以外に、巡洋艦　三笠　駆逐艦　雪風、冬月の計三隻であります!!」
　残存艦の数を聞いた沖田は目を閉じ、悔しそうな声で呟く。
「そうか・・・もうこれまでだな・・・撤退だ」
「提督、逃げるんですか!?」
　撤退に不満があるのか、兵の一人が声をあげる。
「このままでは自滅するだけだ。撤退する。進路反転１８０度!!残存艦に命令〝我ニ続ケ〟とな・・・」

　宇宙巡洋艦　三笠　艦橋
「艦長、　えいゆう　より撤退信号です!!」
「撤退だって!?」
　良馬が　えいゆう　に再び目をやると、確かに　えいゆう　からは〝コレヨリ、撤退ス。全艦、我ニ続ケ〟と発光信号を出していた。
　えいゆう　からの撤退信号を見て、良馬は悔しさのあまりグッと拳に力を入れ、歯を喰いしばった。
　旗艦（えいゆう）からの撤退信号は地球側の敗北を意味していた。
　地球の命運をかけた最後の戦いに敗れたのだ。
　その悔しさは当然だった。
　今回ガミラスに与えたダメージは冥王星に駐屯するガミラス軍にとってはかすり傷程度のものだろう。
　冥王星のガミラス軍が増援を求めれば、今回負わせたかすり傷さえもあっさりと回復してしまう。
　数多くの仲間を失いながらも相手（ガミラス）にはかすり傷しか負わせられなかった。
　その事実もまた辛いが、撤退命令が出た以上、この場に留まり、艦に乗っている大勢の乗員の生命を危機にさらしてはならないので、悔しいがここは素直に撤退するしかなかった。
「くっ・・・えいゆう　へ返信。〝了解〟と送れ・・・」
「わ、わかりました。　えいゆう　へ返信。〝了解〟」

「変針、反転１８０度。えいゆう　の左舷後方につけろ」
「了解。反転１８０度　えいゆう　の左舷後方へつけます」
三笠は反転し撤退行動を始める　えいゆう　へと続く。
だが、良馬はここでふと違和感を抱いた。
（近くに雪風と冬月の気配がない）
雪風とは先程すれ違ったばかりだし、冬月は常に三笠の傍に居た。
駆逐艦の速度を考慮に入れれば、今頃は既に反転して着いて来ている筈だが、どうもそれらしい気配が感じられないし、その艦影も見えない。
「観測員。雪風と冬月の現在地は？」
（何だろう・何か胸騒ぎ・何か嫌な予感がする・・・昔、父さんや母さんが死んだ時と同じような感じだ・・・）
良馬の両親はガミラスが地球へ侵攻してくる前に、宇宙船の事故で亡くなっていた。
その日、良馬の両親は、息子である良馬を忍に預け、結婚記念日を宇宙で祝うため、宇宙旅行へと出かけた。
玄関先で両親と別れた良馬は、幼いながらもこの時、もう二度と両親とは会えないような予感がしていた。
良馬は、必死に両親にしがみついて「行かないで」と、頼むが、両親や忍はこの時、両親から離れたく無い一心で我儘を言っているのだと思い、「すぐに帰ってくるから」と、説得され、両親を見送った。
遠ざかっていく両親の背中を良馬は、不安そうに・・・そして寂しそうに見つめていた。
その日の夜、良馬の両親が乗った宇宙船が事故を起こしたと連絡が入り、同時に両親が亡くなったと言う連絡も受けた。
そして今、この時と同じ胸騒ぎを感じた良馬はオペレーターに聞いた。
すると、驚きの答えが返ってきた。
「雪風　冬月、共に反転せず、まっすぐ敵艦隊へ突っ込んでいきます!!」

「なにっ!?」
　良馬はそのあまりにも驚愕な報告に目を見開く。
「えいゆう　が　雪風と冬月に通信を送っています!!内容は此方でも傍受出来、聞き取れますが・・・・」
「すぐに繋げ!!」
「りょ、了解」
「古代、高町、何をしとるか!?早くわしに続け!!」
　スピーカーからは沖田の大声が聞こえた。
「沖田さん、僕は逃げません!!」
「古代・・・・」
　守の撤退拒否の言葉に沖田にしては珍しく狼狽する。
「沖田提督、自分も古代艦長と同意見です」
「ここで撤退なんかしたら、死んでいった戦友たちに顔向け出来ません!!」
「高町、一、お前もか・・・・いいか三人ともよく聞け。ここで全滅してしまったら地球を守る者が居なくなってしまう。明日の為に今日の屈辱に耐えるのだ。それが男だ」
「沖田さん!!男だったら戦って、戦って、戦い抜いて一つでも多くの敵をやっつけて死ぬべきなんじゃないんですか!?」
　沖田の説得に反論する守。
　恭介も一も守と同じ考えのようだ。
「古代、高町、一、我々は死ぬために戦っているのではない。生きるために戦っているのだ。戦場に巣食う死に魅入られるな。生きてさえいれば人類にはまだ希望はある!!」
「でしたら、この作戦は何ですか!?軟弱な装甲に火器と物量で圧倒的な戦力差のある敵に挑む作戦の決定は?地球が我々に『死ね』と言っているようではありませんか!!」
　次に高町が沖田の言葉に反論する。
「古代、高町、一、分かってくれ」
　沖田は守と恭介、一を説得しているが、両艦は撤退をしようとしない。

この通信を聞いていた良馬は、頭に血が上った。
それは今にも怒りのあまりに軍帽を脱ぎそれを床に叩き付けそうな勢いだった。
いや、我慢できずに軍帽を床に叩き付けた。
(あのバカども!!出撃前に約束したのに!!まさか、こんな圧倒的な戦力差の中で徹底抗戦をする気なのか!?)
「通信長!!」
「は、はい」
良馬の怒気を含む声に思わず声が裏返る通信長。
「冬月に通信を繋げ!!」
「い、いや、しかし・・・・」
「いいから繋げ!!責任は全て俺がとる!!あのバカを引きずってでも地球へ連れて帰ってやる!!」
この時、良馬の脳内に公私混同という言葉はなかった。
「おい、コラァ!!バカ町!!アホ田!!テメェら何、寝言をほざいていやがる!?」
「つ、月村!?」
「良馬っ、お前・・・」
「月村、通信中に勝手に入って来るな!!」
通信を入れて開口一番に恭介に対し怒鳴ると、狼狽した恭介の声と沖田の叱咤の声が同時に聞こえた。
「提督、申し訳ありません。ですが、しばしの規律違反をお許しください。自分はどうしてもこのバカたちと話をつけ、地球に引きづっていかなければなりません」
「・分かった・よかろう」
「ありがとうございます提督。おい、バカ町!!アホ田!!貴様ら、先ほどの提督の言葉を聞いていなかったのか!?今日の屈辱に耐えて、明日への希望に繋ぐため、退くことも勇気だ!!それは決して恥ではない!!それは古代先輩、貴方も同じだ!!」
「それは分かっている!!」
普段は冷静な守から考えられないほどの怒号がスピーカーから聞

こえてくる。
その気迫に、良馬と沖田の声が一時静まる。
しかし、怯んでいるわけにはいかず、すかさず良馬が理由を訊ねる。
「だったら何故!?」
「月村、雪風は生命維持装置と機関に異常が出始めた。地球へ帰れる見込みは無い。ならば、雪風は戦線に留まり、えいゆう　と　三笠の撤退を援護する。真田の奴も頑張ってくれたようだが、どうやら限界があったらしい」
守はここに来て、雪風が完全に整備されていないことを・・・いや、出来なかった事を悟った。
恐らく資材不足のためだろう。
あの時、真田が、何かを言いたそうな表情をしていたのは、この事だったのだ。
しかし、守は真田の事を攻めるような事を言わなかった。
雪風を完全に整備出来なかった事は真田が一番悔しかった事だろうと、理解していたからだ。
「・・・バカ町、アホ田・お前らの方はどうなんだ?お前らも同じ理由なのか?」
「ああ、さっきの切込みの時に受けた傷が、今になって悪化してな・・・」
「残念だが、冬月も地球へ帰れそうにない」
切込みの際、冬月は被弾したが、その時は航行に支障がないと判断された被弾も、時間がたつにつれ、機関部に相当の被害を齎し、応急修理では直らない状態になっていた。
「それなら今すぐ、内火艇で脱出を・いや、三笠で冬月を引っ張っていってやる。だから・・・」
「無理だよ」
「っ!?」
良馬は何とか恭介達、冬月の乗員を助けようと、救助策を提案するが、恭介に否定された。
「内火艇の速度じゃあ、格好の的だし、収容するには三笠の速度を落と

さなければならない。牽引するのも同様だ。三笠を一度止めて牽引準備をしなければならない。そんな事、ガミラスの連中が攻撃をしないで見ていてくれると思っているのか？」
「・・・」
恭介の言う通り、撤退・しかも艦を止めて牽引を行おうとしている敵艦をみすみす逃がす程相手もバカではないだろう。
好機と言わんばかりに沈めにかかって来る。
そうなれば当然、冬月は元より三笠も撃沈されるのは火を見るよりも明らかである。
「俺たち、冬月の乗員の為に無事に帰れる筈の三笠の乗員まで危険に晒すわけにはいかない」
一のその言葉に二人は、いや、えいゆう　と三笠のクルー達は絶句するしかなかった。
確かに恭介の言う通り、冬月を牽引するにしてもガミラスがその牽引作業を黙って見ている筈が無い。
速度を落としたり、艦を止めれば、格好の的になる。
だからこそ、恭介達、冬月の乗員は覚悟を決めていた。
もう地球へ帰れないとわかっている。
もう自分達は助からないと分かっている。
だからこそあえて彼らは殿を務めるのだと・・・
えいゆう　と三笠に希望を・未来を託そうとしているのだと・・・
「沖田さん、月村・いや、えいゆう　と　三笠の皆さん、貴方達はこんな所で死んではいけない!!地球は、貴方達をまだまだ必要としているんです!!だから、絶対に生き延びてください!!」
「古代、それはお前も同じだ。今の地球にはお前や高町君、一のような若者の力がまだまだ必要なのだ」
沖田が再度説得を行うが、
「ありがとうございます提督。そのお言葉だけで十分です。お元気で、地球の事をどうかよろしくお願いします!!」
「高町!!妹は!?紅葉（くれは）ちゃんはどうする!?お前が死んだら・・・」

高町の両親や親戚は守の両親同様、遊星爆弾で全員、亡くなっており、恭介の唯一の肉親は妹の紅葉だけなのだ。
ここで恭介が死んだらその妹――高町　紅葉――は独りになってしまう。
良馬はやはり諦めきれず、恭介を再度説得する。
「出撃前に言ったとおりだ。良馬、妹をよろしく頼む」
確かに出撃前に互いに遺書のやり取りで、恭介から妹の事を頼まれていた良馬であったが、本音を言うと良馬自身も今回の戦いで戦死する覚悟していた手前、まさか、こうして自分だけが撤退し、生き恥を晒すとは思ってもみなかったし、冬月も撤退出来るものだと思っていた。
「高町・沖田・・・」
「さらばだ・親友（とも）よ・・・」
「達者でな・・・」
「っ!?・・さらばだ・・・親友・・・」
恭介と一の最後の言葉を聞き、良馬は拳にグッと力を入れ、親友たちに永遠の別れを告げた。
「死ぬなよ、古代、高町・・・一・・・」
そして沖田も遠ざかっていく雪風と冬月に最後の通信を入れた。
その言葉を最後に通信が途切れ、雪風と冬月は敵艦隊のほうへ直進していった。

宇宙駆逐艦　雪風　艦橋
「みんな・・・どうか赦してくれ」
通信を切った後、守は艦長として雪風のクルー達を地球へ帰すことが出来ないことに対し、詫びを入れる。
しかし、雪風のクルー達は泣き叫ぶことも、守に罵倒を浴びせたり、掴みかかる者も居らず、皆笑みを浮かべている。
「さぁて、奴等に一発、蹴りを入れに行くとしますか」
副長の石津がキャップを被り直す。
「よし、全砲門、ミサイル発射管開け!!」

守が最後の戦闘命令を下す。
雪風と冬月はガミラス艦隊へと突っ込んで行く中、
「～♪～♪～」
一人の乗員が宇宙船乗りの歌『銀河航路』を歌いだすと、それにつられて他の乗員達も歌いだした。

宇宙駆逐艦　冬月　艦橋
「冬月の友よ・・・これまで一緒に戦ってきたことを光栄に思う。しかし、赦してくれ、本艦にはもう地球に帰還する力は残されていない。ならば雪風と共に味方撤退の楯となろう。沖田提督や月村艦長、土方さんや山南さんが生きていれば人類の希望は残される」
守同様、恭介も艦内マイクにて、乗員に皆を地球へ帰すことが出来ないことに詫びを入れ、自分たちの行動が決して無駄死にでないことを告げる。
「我々は死に行くのではない。明日に命を繋ぐ為に行くのだ・・・来世でまた会おう・・・」
やがて雪風と冬月は敵の集中砲火を浴びながらも、互いにデストリア級宇宙重巡洋艦をそれぞれ至近距離で艦橋部を攻撃し、これを一隻ずつ撃沈した。
冬月は旗艦らしきガイデロール級航宙戦艦への体当たり攻撃を敢行するが、旗艦を守らんとするデストリア級宇宙重巡洋艦が割り込み、同艦に体当たりして爆沈した。
雪風はガミラス軍の攻撃を受け、爆沈はしなかったものの漆黒の宇宙の闇の彼方へと消えていった。

先程までスピーカーから聞こえていた銀河航路の歌声はこれから死に行くと言うのにまるで宴会で披露するかのように歌声には震えもなかった。
雪風の皆が歌いだすとそれを聴いて冬月の皆も同じように歌いだす。
そして銀河航路の歌声が切れたスピーカーからはザーと言うノイ

ズがうるさく聞こえてくるだけだった。
良馬は歯を食いしばり、目の奥からあふれてきそうなものを必死に抑えた。
「自分は無力だ」と彼は思った。
だが、今となってはもうどうにもならない。
高町も沖田も・・・冬月の乗組員も、守を始めとする雪風の乗員も、皆、自ら進んで殿役を買って出たのだ。
今更彼らの後を追いかけることは、彼らの思いを踏みにじることになり、折角無事に帰すことの出来る三笠の乗員の命を無駄に散らしてしまう。
良馬は床に落ちていた軍帽を拾い、目深に被りなおし、命令を下す。
「航海長、針路そのまま・本艦は　えいゆう　と共に現戦闘宙域より離脱する・・・」
「艦長・・・」
「後方の警戒を厳となせ、敵が追撃してくるかもしれない」
「りょ、了解」
「冥王星宙域を出たら、各自、交代で休憩に入れ、皆、疲れただろうから・・・」
クルー達が悲痛な表情で自分達の艦長を見つめる中、
「まずは、艦長がお休みください。ここは私にお任せ下さい」
副長の三木が良馬に先に休むように勧める。
「いや、しかし・・・」
「副長の言う通りッスよ。そんな辛気臭い顔されたんじゃ、操艦がやり辛いッスから」
「航海長・・・」
良馬が艦橋を見渡すと皆が、「どうぞ」と言う感じの目で見てくる。
「そうか・それじゃあすまないが、先に休ませてもらう」
良馬は艦橋を後にして、自室へ向かうがその足取りは重かった。
艦長たる者、皆の前では涙を見せぬ。

宇宙巡洋艦　三笠　艦長室

艦長室へ入った良馬はおもむろに軍帽と手袋を脱ぎ捨てると洗面所へと向かい蛇口を捻る。
蛇口からは勢いよく水が流れ出ているのを見ている中、良馬の脳裏には高町や沖田と過ごした士官学校時代や休暇、沖田の結婚式、そして共に駆け抜けた戦場での思い出が蘇る。
水を掌に掬うと彼は乱暴にそして勢いよく水を顔にかけた。
それは涙を誤魔化しているのか？
それとも無力な自分を攻めているのか？
どちらかは分からないが、彼は四、五回ほど水で顔を濡らすと両膝を床につけた。
今まで多くの仲間が死で行くのをこの目で見てきたはずなのに・・・・
今回の戦いだってそうだった。
しかし、言い知れぬ深い悲しみが良馬を包んだ。
だが、彼は再び立ち上がらなくてはならない。
彼は軍人であり、まだ生きているのだから・・・・
生きて居る限り戦いはまだ続くのだから・・・・

四話　遭難

第一管理世界　ミッドチルダ。
其処は管理世界発生の地とされる世界（惑星）
そして数多くの管理世界を管理・運営している世界（惑星）
その多くの管理世界の治安維持活動をしている組織が時空管理局、通称：管理局だった。
管理局の役割の中には、ロストロギアと呼ばれる過去に何らかの要因で消失、あるいは滅んでしまった世界や古代文明のテクロノジーで作られた遺産技術で、その中には使いようによっては一つの次元世界をいとも簡単に滅ぼす力、次元震引き持つこともある危険な物もあり、それら、ロストロギアの回収、管理・保管という仕事も担っていた。
そんな、時空管理局のビルのオフィスの一室に夜、電気もつけずに、一人の人物が誰かと電話をしていた。
「ああ、間違いない近日中に御宅の組織へ管理局がガサ入れをする。えっ？何故そんな事を教えるかだって？・・ちょっと御宅らに協力してもらいたいことがあってね」
「　　」
「ああ、確かな情報さ。なんてってそのガサ入れの指揮を執るのはこの私だからな・・それで協力してくれるのかい？」
「　　」
「ちょっと、目障りな奴が居てね。そいつを抹殺するのと同時に、死後、そいつの社会的地位もズタズタにしてやりたいのさ・・・成功すれば当然謝礼も払うし、今後管理局の情報も全て御宅にリークしてあげよう。御宅らにとっても悪い話じゃないと思うが？」
「　　」
「ＯＫ、ＯＫ。　交渉成立だ。それじゃあ、早速私の立てた策で進めてくれ、まずは・・・」
それから数時間後、

「そうだ、船はそのまま、使ってくれ、ただし中身は入れ替えおいてくれ、折角の美術品やロストロギアが失われるのは、余りにも惜しいからな。後はこっちで上手く処理する」
「　　」
「もちろん成功したあかつきには多額の謝礼と共に損失した埋め合わせとして船も一隻プレゼントしますよ」
「　　」
「ええ、それじゃあ頼みましたよ」
　そう言って電話を切ると、その人物は暗闇の中、口元をニヤリと緩めた。

　この人物が何処かの誰かと電話をしていた夜から数日後、
　ミッドの西部、エルセアと呼ばれる地域の治安維持を管轄とする陸士１０８部隊の隊舎の部隊長室にて、部隊長とその部隊に属する隊員が会話をしていた。

　時空管理局　陸士　１０８部隊　部隊長室
「機動六課ですか？」
「ああ、お前も知っているだろう？豆狸の八神を」
「確か、以前ウチ（陸士１０８部隊）に現場研修に来たあの八神はやてさんの事ですよね？」
「そうだ。アイツが近々一年の試験運用だが、自分の部隊を持つんだ。未だ二十歳にもなってねぇくせに、何を生き急いでいやがんだか」
　かつての教え子の事を思い返し、陸士１０８部隊部隊長ゲンヤ・ナカジマは溜め息交じりに呟く。
「は、はぁ・・・」
「その八神の奴からおめぇを貸してくれって頼まれたんだ」
「わ、私、ですか？」
「ああ、どうもスバルの奴もその部隊のＦＷ陣候補らしいんだが、即戦力としておめぇが欲しんだとよ。今、目星をつけている連中だと、身内のエース級と顔見知りのペーペーしかいねぇから、その間を埋める

奴が欲しいんだと」
「でも、良いんですか?例の窃盗団の事件もあるのに・・・」
１０８部隊所属の隊員ギンガ・ナカジマの言う窃盗団事件とは、
管理局局員であるゲンヤ・ナカジマが部隊長を務める陸士１０８部隊の管轄内で、最近、美術品やロストロギアの窃盗事件が多発していた。
しかも相手の手口が巧妙かつ俊敏でプロの窃盗犯でしかも犯人の人数は単独ではなく複数おり、似た様な事件が他の管理世界でも起こっている事から大規模なプロの窃盗団だと判明した。
「その件なら、さっき連絡が来てな」
「連絡?」
ゲンヤの言う連絡。
それは、
相次ぐ窃盗事件に頭を悩まされていたゲンヤに本局と呼ばれる陸士とは違う〝海〟と呼ばれる所属の局員から窃盗団の事件について合同捜査の話が持ち込まれたのだ。
その局員の話では、相手はあちこちの管理世界をまたにかける大規模な窃盗団で、〝海〟としてもその窃盗団の逮捕は管理世界の治安維持のため、急務だと話してきた。
「合同捜査ですか?」
「ああ、珍しく本局の連中が俺達、〝陸〟の連中と手を汲もうと言ってきた」
「確かに珍しい話ですね」
「だが、この話には何か裏がありそうでならねぇ」
本局との合同捜査ならば、窃盗団の逮捕が早まるかもしれない。
普通ならば喜ぶべき話なのだが、
その話に胡散臭さを感じたのは他ならぬゲンヤだった。
基本的に管理局の〝陸〟と〝海〟は仲が悪い。
〝陸〟はミッドチルダの治安維持活動を主にしており、〝海〟は他の管理世界の治安維持と管理世界になり得る他の世界の存在の捜索、または他の世界にあろうロストロギアの捜索のため、物凄い数の人材

を必要としている。
　そのため〝海〟は、〝陸〟の訓練校の新卒者や〝陸〟の部隊から優秀な人材を次々とヘッドハンティングし、〝陸〟は常に才能や高い魔力のある人材が枯竭している状態が続いている。
　また予算や必要な機材、局員の装備も同様の事が言え、ミッドの治安はお世辞にも良いとは言えない。
　ショッピングモールなど、人の集まりが多い場所では、反管理局のテロリストが自爆行為や爆弾テロを相次いで起こし、それにより、管理局員よりも一般人にその被害が多く及んでいる。
　さながら地球の中東並の治安である。
　そのくせ、〝海〟の局員達は〝陸〟の局員に対し、「自分たちの足元も綺麗にすることの出来ない、役立たず!!」と普段からそう罵っている。
　若い〝海〟の士官には「出資をケチって文句ばかり言う怠け者」と言う認識まで持つ者さえもいる。
　しかし、本当の理由は自分達、〝海〟が常に優秀な人材や多額の予算、最新の機材、装備を根こそぎ独占している事に連中は愚かにも気が付いていない。
　むしろそうしたモノが支給されるのが当たり前だと思っている。
　だが、〝陸〟に対しそうしたモノが支給されていない事を〝海〟の若い士官は知らないし、知ろうともしない。
　そうした経緯から、基本的に〝陸〟のお偉いさんや古参の士官は〝海〟の局員に対し、好感を抱いてはいない。
　そんな中、その〝海〟の局員が〝陸〟に合同捜査の話を持ち掛けたのだ。何か裏がると思うのは当然の事だった。
「それでその話を受けたんですか?」
「ああ・この際事件が解決するのであれば仕方ねぇと思っている」
　ゲンヤとしてもこの話に胡散臭さを感じつつも、これ以上自分の管轄内で事件が起きるのを少しでも防ぎたかった為、やむを得ず、ゲンヤはその合同捜査の話に乗った。
「そして本局で今回の捜査を指揮するお偉いさんがお前を指名してき

た。大変だと思うが、六課出向前の最後の事件（ヤマ）だ。頑張ってくれ」
「はい」
しかし、これがまさか、あのような出来事になるとはゲンヤもそしてギンガ自身も思わなかった。

本局の部隊と１０８部隊との合同捜査。
今回、被害が多発したのが、１０８部隊の管轄内だったので、その為、合同捜査本部が１０８部隊に設置され、隊舎にある会議場では、本局の捜査官や犯人鎮圧の為の本局武装隊の局員が占めており、１０８部隊からは部隊長のゲンヤと副部隊長兼捜査主任のラッド・カルタス、そしてゲンヤの娘であり、この部隊の所属捜査官、ギンガ・ナカジマの僅か三人だけだった。
合同捜査とは名ばかり、犯人グループを逮捕しても手柄は全部本局の〝海〟の連中が持っていくだろうと予想していたゲンヤとカルタス。
一方、ギンガには別の思惑があり、今回の検挙の指揮にあたる本局の執務官をジッと見ていた。
執務官の名はジュリオ・セレヴァーレ。
容姿はサラサラとした綺麗な銀髪に左右眼の色が違うオッドアイと呼ばれる瞳を持ち、その整えられた顔は一種の芸術品とも言える容姿をしていた。
ギンガがこの執務官をジッと見ていたのは彼女が、彼に一目惚れないし、以前から彼に恋心めいたモノを抱いている・・・と言うわけではなかった。
と言うよりもギンガはジト目で彼を睨んで嫌悪感さえ醸し出している。
実は、彼、ジュリオ・セレヴァーレは女性局員の中では有名な女誑しなのであった。
彼は自分の容姿と権力から今まで数多くの自分が気に行った女性局員と関係を持ってきた。

それは、婚約者がいようが、彼氏持ちだろうが、夫や子供がいようが、まだ成人していない様な少女でもお構いなしにだ。
そして新しい女が出来ると、前の女はボロ雑巾の様に捨てる様な奴で、彼に声をかけられ、手を付けられる前に退職するという女性局員もいるぐらいだった。
この様な問題ばかり起こす様な奴が何故今でも執務官の地位で居られるのかというと、彼は管理局上層部とのコネが強い一方で執務官・魔導士としては有能だったからだ。
しかも家柄も代々管理局のエリートを輩出している名門家。
才能さえあればそれが例え、それが年端もいかぬ子供だろうが、前科のある凶悪な犯罪者だろうが起用する。
それが管理局の現状だった。
そしてギンガ本人も以前、彼にしつこくナンパされ、関係を迫られたことがあり、あまりのしつこさにギンガは思わず、彼の頬を叩き、彼を罵った。
彼の女誑しの噂は既に陸の方でも有名でギンガもその噂を耳にしていた。
その後、彼の事を父、ゲンヤに相談し、ゲンヤは以前、１０８部隊に研修に来た八神　はやてにこの事を相談した。
八神　はやては、元々魔法の無い世界出身であったが、とある魔法に関連する事件に巻き込まれ、それ以降管理局に入局し、高い魔力から管理局でも重宝され、エリート街道を進み、その縁あってか、ジュリオとは別口で管理局上層部と聖王教会と呼ばれる組織とコネがあり、研修時代に教えを受けたゲンヤの相談を受け、ジュリオの事を上の方に報告し、彼は上から厳重注意を受けた。
しかし、厳重注意だけで、減俸や降格処分、懲戒免職などの処分は下されなかった。
その理由はやはり、管理局が魔力の高い魔導士を手放したくないからであった。
そんな彼が今回、自分達、１０８部隊との合同捜査の総指揮を執る。
何か思惑が有るに違いないと警戒するギンガだった。

（自分の有能さをアピールしたいのかしら？それともワザと失態を犯し、その原因を父さんに擦り付けようとしているのかしら？）
ギンガの思惑はある意味正しく的中していた。
ジュリオがまず、今まで盗難にあった被害の品、その時の犯人の手口を説明している中、彼自身もギンガの存在に気が付いており、心の中では、自分のプライドを傷つけたギンガに対する復讐心で一杯だった。
（あのアマぁ、見ていろよ。俺に恥をかかせたその罪、万死に値する。素直に俺のモノになっていれば、死なずにすんだのにな・・・まぁ、こうなったのもお前が悪いんだからな・・・この俺の寵愛を拒否したお前自身がな!!）
やがて、犯人グループの手口、推定人数等の説明が終わり、いよいよ今回の犯人グループ摘発の作戦が説明された。
「我々、本局が掴んだ情報によりますと、犯人グループは、この次元航行船の発着場より、輸送船を使い、盗品を他の管理世界へ持ち込み、それらを売買しているものと判明いたしました」
ジュリオの後ろにあるスクリーンに、次元航行船の発着場の写真と犯人グループが使用していると思われる次元航行能力を持つ輸送船の写真が掲載された。
「現在本局の別働隊が、密かに犯人グループがチャーターした輸送船の監視を行っています。それによりますと、犯人グループはすでに盗品の積み込みを開始している状況でして、時間的余裕は余り無いものと推察されます。そこで・・・」
再びスクリーンの写真が変わった。
今度はジュリオがたてた作戦内容が発表された。
それは、以下のような内容だった。
「まず、犯人グループがチャーターしている輸送船に局員を一名、コンテナの中に潜入させ、輸送船に送り込みます。そして、輸送船内部において、犯人の数と行き先を突き止めてもらいます。その後、本局の次元航行艦隊が輸送船に強襲接舷し、武装隊が犯人を鎮圧、逮捕いたします。尚、突入のタイミングから潜入した局員はしばらくの間、コ

ンテナ内部に待機しておいて下さい。コンテナから出るタイミングは此方から指示を出します」
　ジュリオは作戦の内容をスクリーンに映った作戦内容を指揮棒で指しながら説明していく。
「なお今回、輸送船に潜入してもらう局員ですが、１０８部隊のギンガ・ナカジマ陸曹に任命します」
「「なっ!?」」
　潜入する局員の名前にギンガがあげられ、１０８部隊の面々は一瞬フリーズする。
「続きまして突入部隊の指揮ですが・・・」
　ゲンヤ達の事を無視して話を進めていくジュリオ。
　そんなジュリオに対し、ゲンヤは、
「ま、待って下さい!!」
　突如、声をあげ、異議を唱える。
「何ですかな?ナカジマ三佐?」
　話の腰を折られ、ジュリオは少し不機嫌そうな顔でゲンヤを睨む。
「何故、潜入する局員が１０８部隊（うち）のギンガなのですか!?」
「これは合同捜査です。当然１０８部隊さんからも人材を提供してもらわなければ困ります」
「ですが!!」
「危険かもしれない役に娘を使いたくない・親としては当然の思いですが、仕事の最中で公私混同をしないで頂きたい。彼女も局員として入局したからには当然そういった危険も承知の筈・・・まさか、親が局員だから自分も局員になるなんてそんな安易な考えで、管理局に入局したわけではありますまい?」
「そ、それは・・・で、では、せめて潜入する局員の数をもう少し増やして貰いたい」
　ギンガ一人ではあまりにも危険だと言う事でゲンヤは潜入する局員の数を増やしてほしいと要請するが、
「潜入捜査は少数で行うのが基本です。人数を多くすれば、それだけ、犯人に気づかれ、作戦自体が失敗し、局員の生命に危険が及ぶ可能性

が高いですから」
と、ゲンヤの要請はあえなく却下された。
「ですが、やはり犯人を確実に確保するのであれば・・・」
しかし、ゲンヤとしても娘の命が掛かっていりため、必死だった。
だが、結果は覆ることはなく、潜入する局員はギンガ一人となり、増員も認めないという結果に終わった。

作戦開始前、１０８部隊にギンガとスバルの身体を定期的に診断してくれているマリエル・アテンザ技術官が訪れた。
ギンガとスバルのナカジマ姉妹は、見た目こそ、普通の人間だが、その実、父親のゲンヤとは血が繋がっておらず、ゲンヤの妻であり、既に鬼籍に入っているクイント・ナカジマのクローン体だったのだ。
どういう経緯でギンガ達姉妹が生まれた経緯は未だに不明だが、当時、ギンガとスバルが収容されていた研究所をクイントが所属していた管理局の武装隊が摘発し、ギンガ達を保護、その後の診断でギンガ達姉妹が自分（クイント）の遺伝子を元に造られたクローン体であることが判明し、クイントは二人を養子としてナカジマ家に向かい入れた。
それから二年後、クイントが所属する武装隊はまたも違法研究所の摘発を行うが、その情報が敵側に事前に漏れていた様で、その結果、摘発は失敗し、クイントを始めとする部隊の隊員全員が殉職するという悲劇的最後を迎えた。
ギンガは母の意思を継ぎ、管理局に入局し、妹のスバルは十一歳の時、空港で起きた火災事故にギンガと共に巻き込まれ、そこで現在も管理局のエースと呼ばれる高町　なのは　に救助され、自分も人を助ける仕事に就きたいと姉のギンガに続き管理局へと入った。
「ギンガ、コレを持って行って」
と、マリエルは待機状態のデバイスをギンガに渡した。
「コレは？」
「本当は六課に出向してから渡そうと思ったんだけどね。今回の任務が危険な任務だけに少しでも役立ってもらえればと思って」

「ありがとうございます」
ギンガは礼を言ってマリエルからデバイスを受け取った。
先程ゲンヤとギンガの話していた通り、ギンガは今年の四月から先程名前があがった八神　はやて　が新設する機動六課に出向が決まっていた。
はやてはギンガとスバルが巻き込まれた空港火災から災害現場に迅速に対応できる部隊、さらにレリックとよばれる古代遺物の回収・管理を主とし、それを狙う広域指名手配犯、ジェイル・スカリエッティの逮捕を目的とする試験部隊、機動六課の発足を目前にしていた。
そしてその六課の隊長陣の中には、空港火災でギンガを救助した執務官フェイト・テスタロッサ・ハラオウンもいた。
本来ならば執務官の下には執務官補佐がおり、フェイト自身も執務官補佐がいるのだが、フェイトの補佐であるシャリオ・フィニーノ一士は執務官補佐の資格以外にデバイスのメンテナンス資格を持っており、六課では執務官補佐ではなく、デバイスのメンテナンス担当となり、フェイトの補佐には顔馴染みであり、捜査官資格を持つギンガが抜擢されたのだった。
つまり、今回の任務がギンガにとって１０８部隊では最後の仕事と言うわけだった。
しかし、この時ギンガ本人も１０８部隊どころか管理局員としての最後の仕事になるとは思ってもみなかった。
マリエルから新型のデバイスを受けったギンガは用意されたコンテナの中へと入り、そのコンテナは窃盗団がチャーターしている輸送船に潜り込ませることに成功した。
ギンガはコンテナ内部で不安と恐怖を拭うように待機状態の新しいデバイス『ブリッツ・キャリバー』をギュッと握る。
やがて、コンテナがゴトっと少し揺れると、輸送船の機関音が聞こえてきた。
犯人グループが輸送船を出港させたのだ。
轟々と轟くエンジン音が響く中、身体にフワッとした浮遊感をギンガは感じた。

輸送船が漸く浮上し始めたのだ。
これで後は頃合いを見て、コンテナから出て、この船の行き先を突き止めれば自分の任務は達成されるのだが、ここからが大変なのだ。
コンテナから出ればそこには犯人グループが大勢いる可能性がある。
捜査会議にて、犯人グループの人数は聞いていたが、それはあくまで、推定の人数で、この輸送船に何人乗っているか正確な人数が分かっていないため、行先を突き止めるのも一苦労だ。
輸送船が浮上してどれだけの時間が過ぎただろう？
一向に本部からは連絡が入ってこない。
ギンガはやむを得ず、バリアジャケットをセットアップし、独断でコンテナの外へ出た。
コンテナが収納されている貨物室には見張り役はおらず、轟々と機関音だけが鳴り響いている。
ギンガは念の為、盗品を確認しようと、別のコンテナの中を開けると、そこには何も入っていない空っぽのコンテナがあるだけだった。
「えっ？空っぽ？そんな筈は・・・」
空っぽのコンテナを見てギンガは首を傾げた。
確かに捜査会議の時、盗品を積み込んでいるとあの執務官はそう言った。
それに配られた捜査資料でも窃盗団が盗んだ美術品やロストロギアはかなりの数だ。
そこで、ギンガは更に別のコンテナを開けてみると、そのコンテナもやはり何も入っていない空っぽのコンテナだった。
「おかしい・・・」
そう思いつつ、ギンガは貨物室にあるコンテナを片っ端から開けて調べた。
すると、貨物室にあったコンテナ全てが空で、盗まれた美術品もロストギアも一つも無かった。
一抹の不安とこの奇妙な状況に不審を抱きつつ、ギンガは貨物室を後にして、輸送船の上層部へと昇り始めた。

通路を警戒しつつ進んでいくとそこでも奇妙な事に気が付いた。
犯人グループのメンバーを誰一人、見ていないのだ。
これだけ船内を歩き回っても犯人の姿どころか人の話し声も聞こえない。
いや、周囲に人の気配さえ感じない。
今思えば貨物室でコンテナを調べている時も犯人達は見張りはおろか巡回にさえ来なかった。
だからこそ、貨物室のコンテナを全て調べる事が出来たのだ。
「まさかっ!?」
ギンガは慌てて輸送船のブリッジへと向かった。
ブリッジへ向かう途中、もはや足音など気にせず、走ったが、やはり、犯人グループのメンバーは誰一人現れなかった。
輸送船のブリッジへ駆け込んだギンガの目には、誰もいない無人のブリッジの光景が広がっていた。
航海機器に目をやると、航路は全て自動でセットされていた。
ギンガはこの摘発が事前に犯人たちに情報が漏れていただと気づき、急ぎ本部へ連絡を入れたが繋がらない。
「ど、どうして?船に乗る前はちゃんと使えたのに・・・」
渡された通信機が繋がらず、次にギンガはデバイスに搭載されている通信機機能も使ったが之もダメ。
この時、ギンガは『貰ったばかりのデバイスだからちゃんと設定されていないんだ』と思い次に輸送船に搭載されている通信機で交信を試みた。
ギンガは捜査官資格の他に二級通信士免許も有しており、この時ばかりは通信士資格をとっておいて良かったと思った。
早速通信機を操作するが、どのチャンネルを開いてもスピーカーからはガー、ピィーと言うノイズが聞こえるだけで、この船の通信機も使えそうにない。
「落ち着け、落ち着くのよ、ギンガ・・・」
必死に冷静さを取り繕うギンガ。
こういう時パニックになるのが最悪の状況を引き起こすのだと、父

や上司であるカルタスから何度も言われてきた。
幸いこの船にはギンガしか乗っていない為、犯人から襲われる心配はない。
それにこの作戦は次元航行艦による強襲が行われる作戦だ。
もうじき、味方の次元航行艦が来てくれる。
彼らに救助してもらいその時に犯人に此方の情報が漏れていた事を報告しよう。
そう思いギンガは味方の次元航行艦が来てくれるのを待った。
しかし、味方はいつまで待っても味方が来る気配が無い。
通信機が壊れ、こちらと連絡がつかない為、突入を渋っているのかもしれないと思い始めたその時、
グラッ
ドゴオオオオォー
突如、輸送船が異常振動を起こし始めた。
「な、なに?」
ブリッジの手すりに掴まりながら何が起きたのか不安げに辺りを見回すギンガ。
すると、船内に警報音が鳴り響く。
ギンガが慌ててブリッジにあるコンソールを操作すると画面に船全体を表した画像が表示された。
それによるとこの船の機関部にて、異常なまでのエネルギー反応が検出された。
「これってまさか、ロストギアの暴走時に起こる次元振動!?」
輸送船を襲う振動は益々、激しくなり、
「キャアッ!!」
遂にギンガはバランスを崩し、
「ぐっ・うっぅぅぅ〜・・・・」
壁に頭を強く打ち、そのまま意識を失った。
ギンガが乗った輸送船の後方に管理局の次元航行艦が一隻航行していた。
それは、本来犯人鎮圧・逮捕のため本局の武装隊が乗っている艦で

あった。
　その艦には武装隊の他に今回の作戦の総指揮を執っているジュリオとゲンヤが乗っていた。
　ゲンヤはギンガからの連絡を今か今かと待っていた。
　しかし、ギンガからの連絡は一向に入ってこない。
　やがて、オペレーターがある報告をしてきた。
「輸送船周辺に次元震反応を確認!!」
「何っ!?」
「範囲が広がっていきます!!」
「全速後進!!急いで輸送船から離れろ!!」
　ジュリオの命令を聞いたゲンヤは、
「ま、待ってくれ!!あの船にはまだギンガが・娘が乗っているんだ!!今すぐ接舷して救助を!!」
「無茶言わないでください!!そんな事をすれば我々まで次元震に巻き込まれてしまう!!死にたいんですか?」
「アンタが立てた作戦だろう!?このままギンガを見殺しにする気か!?」
　思わずジュリオの胸倉を掴むゲンヤ。
「お言葉ですが彼女からの連絡が未だに入ってこない以上、恐らく彼女は此方が指示を出す前に独断で動き犯人グループに見つかり交戦し、その結果近くにあったロストギアが魔力に反応に次元震を起こし始めたのでしょう。あれは彼女自身が招いた結果です」
「て、テメェ・・・・」
　この言葉をきっかけにゲンヤの我慢も限界で、後の処分何て関係ない。
　この生簀かねぇ執務官の面に思いっきり拳を打ち込んでやろうとした時、
「輸送船周辺の次元震反応止まりません!!次元震衝撃波来ます!!」
「総員衝撃に備えろ!!」
　艦長がそう叫ぶと、物凄い振動がゲンヤ達の乗る次元航行艦を襲った。

「うわぁ!!」
「ぬおっ!?」
立っていたゲンヤとジュリオもバランスを崩し、床に叩き付けられた。
「いてててて・・・はっ!?そうだ!!船は!?ギンガは!?」
ゲンヤは慌てて倒れていた床から起き上がると、ブリッジの窓から眼前にいるであろう輸送船を見た。
しかし、そこにはギンガ乗る輸送船の姿はなく、静寂と化した星の海があるだけだった。
「あっ・・・ぎ、ギンガ・・・」
輸送船の姿が無い事にゲンヤは膝から崩れ、目尻に涙を浮かべた。
「輸送船は!?」
ジュリオが慌ててオペレーターに輸送船の行方を尋ねると、オペレーターは申し訳なさそうに、
「あの規模の次元震ですから、恐らく巻き込まれて消滅したものではないかと・・・」
「そうか・・・」
オペレーターの報告を聞き、ジュリオは人知れず、口元をニヤリと緩めた。
「艦長さん、頼む!!どうか、周辺を捜索してください。ギンガは・娘はきっとまだ生きています!!我々の救助を待っているんです!!お願いします!!」
ゲンヤの方としてはギンガ（娘）の事を諦めきれず、この艦の艦長に何度も頭を下げ、ギンガの捜索を依頼するが、
「周辺には船影もエネルギー反応も感知できません。残念ですが、ご息女は、もう・・・」
艦長はすまなそうにゲンヤに残酷な現実を突きつけた。
艦長のこの言葉にゲンヤはガクッと項垂れた。
「誰か、ナカジマ三佐を部屋へ」
艦長の配慮でゲンヤは用意されていた士官室へと運ばれた。
妻に続き、娘までも亡くしたという失意のまま、ゲンヤはミッドへ

と帰還した。
それからすぐに、地上本部のレジアス・ゲイズ中将から、今回の案件は『捜査中に不慮の事態により行方不明』・・・すなわち、『未確認であるが、殉職として認定』、と言う処理が下された。

ミッドチルダ　首都　クラナガン　機動六課　隊舎
「う、嘘ですよね？八神部隊長・ギン姉が・ギン姉が殉職の認定を受けたって・・・ギン姉が死んだなんて・・・」
既に六課の隊舎入りしていた妹のスバル・ナカジマは部隊長の八神はやてからギンガの殉職認定ついて報告を受けた。
はやての言葉をスバルは驚愕した表情で聞いている。
「ホンマや・・・さっき、地上本部から直々に連絡が入ったから間違いあらへん」
深刻な表情ではやてはスバルに真実を教えた。
もっともはやて自身、直接その目で現場を見てきたわけではないので、本局と１０８部隊からの報告書に基づく事実であるが信憑性があるものだった。
しかし、報告を見る限り、ギンガの殉職・それは動かしがたい事実である。
「本局や地上本部からの報告書、ナカジマ三佐の話によると１０８部隊の管轄内でロストギアや美術品の窃盗事件が多発していてなぁ、その犯人グループは次元世界をまたにかけた大規模な窃盗団で、その逮捕のため、本局と１０８部隊が合同捜査を行って、犯人がチャーターした輸送船に潜入したギンガから連絡がつかなくなり、その直後、その輸送船の近くで次元震反応が起きて、ギンガはその輸送船諸共消滅したって・・・」
「うぅ～ギン姉ぇ・・・」
はやての報告を聞き、スバルは目に涙を浮かべた。
しかし、彼女の不幸はこれだけじゃ終わらなかった。
翌日、朝食の席で、食堂に設置されていたテレビで早朝にも関わらず、昨日の事件についての記者発表があり、その席には事件の総指揮

を執ったジュリオの姿があった。
スバルは茫然とした表情でテレビを見ていた。
姉を失った悲しみが抜けないまま、食堂に来たのは、ギンガ同様、スバルも真面目な性格の為、仕事はちゃんとしないと・・・と思い、まずは、朝食をという事で食堂に来たのだ。
チームメイトのティアナ・ランスターはそんなスバルの様子を心配そうに見ていた。
訓練校からの付き合いであったティアナでさえ、ここまで落ち込んだスバルの姿を見るのは初めてだったからだ。
やがてテレビの画面の向こうで記者会見が行われた。
記者たちは早速、ジュリオに今回の事件で局員一名が殉職したことについて、作戦内容が悪かったのでは?と指摘したが、それに対しジュリオは今回の事件に関し、作戦も途中までは全て順調で間違いなど何一つないと断言し、今回の作戦の失敗の原因は全てギンガの独断専行によるものだと、記者の前で堂々と宣言した。
その宣言にスバルは俯いていた顔をバッとあげ、憤慨した。
さらにジュリオはギンガを無能呼ばわりし、カメラの前で堂々とギンガの名誉を酷く傷つけた。
その様子はまさに死人に口なし状態だった。
事実その記者会見場で彼に反論する者は居なかった。
ゲンヤでさえ、この記者会見は寝耳に水で、今放送されているテレビ放映で初めて知ったのだ。
そして記者たちはギンガが遭難した現場を見ていない。
そのため、ジュリオが話す事が今回の事件の事実とマスコミはそう受け止めた。
ジュリオがテレビの中で、ギンガの事をぼろ糞言っている中、スバルは等々我慢できずに、
「違う・・・違う!!ギン姉は・・ギン姉は無能なんかじゃない!!全部出鱈目だ!!」
と、テーブルをバンッ!!と叩き、食堂に響く大声を上げた。
「スバル・・・」

「スバルさん・・・」
ＦＷ陣のキャロ・ル・ルシエとエリオ・モンディアルは大声をあげているスバルを心配そうに見つめ、スバルの訓練校からの相棒であるティアナは今のスバルの気持ちが痛いほど良く分かった。
彼女自身も十歳の頃、唯一の肉親であり、管理局員でもあった兄、ティーダ・ランスターが事件の捜査中、追跡中の犯人の手によって殉職し、葬儀の会場で、しかもティアナの目の前で当時の兄の上司達から散々「無能だ!!」「我が隊の恥だ!!」等と罵倒を受け、著しく名誉を傷つけられた。
その時の自分の姿が今のスバルと被って見えた。
ティアナは、激しく動揺し、大声をあげ、泣きじゃくりかけたスバルの頬を叩き、
「スバル、メソメソしている暇は無いわよ!!こうなったら、アンタがギンガさんの名誉を回復させるのよ!!」
「あ、アタシが・・・?」
「そうよ。此処（六課）で手柄を立てて、ギンガさんをバカにしたアイツを見返してやるのよ!!」
ティアナは未だにギンガの名誉を傷つけているジュリオを指さす。
「ティア・・・うん!!必ずギン姉の名誉を回復してみせるよ!!ギン姉は無能なんかじゃいって事をアタシが証明してみせるよ!!」
「だったら、いつまでもメソメソしている暇はないわよ。まずやるべき事はしっかりとご飯を食べること!『腹が減っては戦ができぬ』って、あんたのお父さんの口癖だったでしょう!?この後の訓練に備えて今は無理してでもお腹に入れなさい！」
「うん!!」
親友の叱咤を受け、スバルは無理矢理、朝食である特盛のパスタとサラダを掻き込んだ。
そして食べ終える頃にはスバルも幾らか落ち着きを取り戻した。
お互い似た者同士。
不器用ながらも此処（六課）で手柄を立て、家族の名誉を回復せんと、若きストライカ―達は、今日も前を進んで行く事だろう。

五話　救助

ミッドチルダ　西部地方郊外　公共墓地

蒼い空の下、郊外のとある一角に黒い服や管理局の制服を着た大勢の人が佇んでいた。

立ち並ぶ墓石の内の一つの前に、管理局の制服姿を着た壮年の男性と同じく管理局の制服を身に纏ったショートの青髪をした少女が居た。

青髪の少女、スバル・ナカジマは必死に涙を堪え、その父ゲンヤ・ナカジマも沈痛な面持ちだった。

親友に励まされてもやはりこの葬儀の場では、スバルの心は悲しみに暮れていた。

骨壺の中には遺骨どころか、一本の髪の毛はおろか、一片の肉片、骨の欠片さえ入って居らず、ただ『ギンガ・ナカジマ』と書かれた人型の紙切れが一枚入っているだけ・・・・。

母が眠るナカジマ家の墓に納骨され、母と姉の墓の前で涙を堪えていると管理局の本局と呼ばれる部署の制服を着た者達が侮蔑の言葉を墓に呟き始める。

「名誉の殉職には程遠いな」

囁くような声が、スバルの耳に障った。

その特殊な出生からスバルは目と耳は鋭かった。

それ故、小声のつもりだろうが静寂の中でそれは酷く耳障りに響く。

姉のギンガは自分同様地上部隊出身なのだが、姉は殉職した事件では本局との合同捜査だった故に今回の葬儀には地上部隊の局員の他にも本局の局員も参列していた。

「功を焦ってヘマをして死ぬとは何とも間抜けだな」

「全くだ。そんなに手柄が欲しかったのか？」

「それで、犯人を取り逃がしては元も子もないではないか」

「まぁ、今回のミスは〝陸〟のミスですからな、我々、〝海〟には何の影響もあるますまい」
「そうですな。これだから、〝陸〟の魔導士は質の悪い役立たず揃いばかりだ。だから、ミッドの治安がいつまで経っても改善しないのだ」
「そういえば、聞きましたかな？」
「何ですかな？」
「あの殉職した局員の母親：あの者も功を焦った挙句に殉職したらしいですよ」
「そうなんですか？」
「親子そろって間抜けも良い所ですな」
「全くですな、ハハハハハ・・・・」
本局の局員達は、此処が墓の前だと言うのに死んだ人間に侮蔑の言葉を吐き続ける。
それは自分の姉どころか母親までもを侮辱した挙句、死者を弔うこの場で笑みさえも浮かべている。
スバルにとって誰が何を言っているのかはもはやどうでもよかった。
ただ、彼らの心無い侮蔑の囁きが死者と自分達遺族を限りなく傷つけていることだけは確かだった。
スバルと共に葬儀に参列したティアナはかつて自分の兄の葬儀の際、兄の上官達から兄の誹謗・中傷を言われた事を思い出した。
今目の前で繰り広げられている光景はまさにあの時の再現そのものだった。
ティアナはスバルの姉と母親の死をバカにしている本局の連中に顔をしかめる。
それは、今、自分達が在籍している機動六課の部隊長、八神　はやて　も同様だった。
ゲンヤも本局局員の誹謗・中傷は当然耳に入っており、彼はギュッと下唇を噛み、爪が食い込むほど拳を強く握っていた。
（コイツ等が何処の誰だが関係ない。母さんやギン姉を悪く言う奴は

ボコボコにしてやる!!)
(あの世に送って、母さんとギン姉に詫びさせてやる!!)
(スバル、止めさない)
(止めないでティア!!コイツ等をボコボコにしないとあたしの気がすまない!!)
(あんたの気持ち、わからなくはないけど、ここであのクズ連中を殴ってもあんたの拳が汚れるだけよ。それにあんたのお父さんや八神部隊長にも迷惑がかかるでしょう?)
スバルは怒りのあまり、そのまま本局の局員連中に殴り掛かりそうな感じであったが、ティアナは必死に念話で宥めた。
帰りの車の中、はやて、スバル、ティアナは終始不機嫌であった。
墓地で別れたゲンヤも恐らく同様だろう。
「何なんですか!?あの人達!!ギン姉どころか、お母さんまでもバカにして!!」
本局の局員達の暴言に腸が煮えくり返る思いのスバル。
「全くや、あんな連中と同類とみなされると思うとメッチャ恥ずかしいわ」
はやても同様の思いを抱いていた。
しかし、この時彼女達は・・いや、管理局の全ての局員達は、後に本局の体制が、大きく崩れて行く事をこの時には知るよしも無かった。

場面は変わり、冥王星の戦闘宙域から撤退した、えいゆう　と　三笠　は無事に冥王星宙域を出た。
戦場に留まり、味方を逃す為、奮戦した雪風と冬月を血祭りにあげたガミラス艦隊はえいゆう　と　三笠　を追撃することなく、冥王星の基地へと帰還していった。
あれから良馬は、艦長室にあるベッドの上で横になりながらボンヤリと天井を見ていた。
そしてどれくらいそうした時間が過ぎただろう?
すると不意に
コン、コン

と、部屋のドアをノックする音が聞こえてきた。
休憩時間の終了を告げにきたのか、それともガミラスが追撃してきたのか、ともかく良馬は入室を許可した。
「どうぞ」
すると、入ってきたのは手にお盆を持ったディアーチェだった。
「艦長、食事の時間だ」
「食事か・・・・」
地球の命運をかけた戦いに敗れ、親友を失った今、とても食欲などわかない。
しかし、ディアーチェはこうして態々部屋まで持ってきてくれたのだ。無下に「食欲がないから下げろ」とは言えないのが良馬らしいところだ。
「赤飯？」
お盆の上には赤飯で出来たお握りが数個、置かれていた。
「言ったであろう。戦勝祝いに赤飯を出すと」
「戦いは此方(地球)の惨敗だ。大勢の戦友が死んだ・・高町も沖田も死んだ・・・・」
赤飯のおにぎりを見ながら良馬は呟く。
「今回の戦いでこちらも何隻かのガミラス艦を血祭りにあげた。そやつらは死に我らはこうしてちゃんと生きている。我らはそやつらの生存競争に勝利したのだ。これは立派な戦勝だ。高町や沖田には気の毒だったが・・・・」
「・・・・」
ディアーチェの言っていることは理解できるが、そう簡単にすべてを受け入れることは出来なかった。
「辛いかもしれぬが食べられるときには食べておけ、食えると言う行為は生きている者の特権だぞ」
そう言ってディアーチェは艦長室から出て行った。
「食べられることは生きている者の特権か・・・・」
ディアーチェの最後の言葉を繰り返し口ずさむと良馬は、赤飯のお握りを手に取り、それを口へと運んだ。

「・・・やっぱり、美味いな、厨房長（ディアーチェ）の作る飯は・・・」
良馬はゆっくりと味を噛みしめながら残りのお握りを食べた。
休憩時間を終えて、艦橋へ戻った良馬をクルー達は少し不安そうな表情で見た。
「皆、心配かけたが、もう大丈夫だ。皆を無事に地球へ連れて帰るのが今の僕の任務だ。戦いには、負けたが、我々はこうして生きている。胸を張って地球へ・・家族の下へ帰ろう。生きていれば次がある。次は必ず勝ってみせよう!!」
「了解」
「はい!!」
「アイサー!!」
「おう!!」
良馬の言葉に皆は不安げな表情から明るい表情になった。
（それにしても、ガミラスめ、あれだけの艦隊を展開しながらも追撃してこないなんて・・瀕死の狸など、もはや追撃する価値もないって事か・・・・?）
ガミラスの戦術に地球は完全に舐められているのだと思うと、少々腹が立った。
もっともガミラスが追撃をしてこなかったからこそ、えいゆう　と　三笠　は無事に地球へ帰れるので、何とも言えない気分だった。

それから、幾日かが過ぎ、
火星本星　極冠部　観測所
「火星観測所、収集した資料を持ち、冥王星域から撤退してくる戦艦にドッキングし、地球へ帰還せよ」
「了解しました」
火星観測所にいた古代と島の下に地球への帰還命令が下された。
二人は先日火星へ墜落した不明船から収集した資料を持参し、偵察機へ乗り、火星観測所を後にした。
火星宙域では冥王星から撤退してきた　えいゆう　と　三笠　が火星の観測所から不明船の資料を持参してくる古代と島が乗った偵

察機を待っていた。
　火星からの偵察機を待っていると、三笠のレーダーが火星の近くで、突如、空間歪曲反応を捉えた。
「艦長!!次元レーダーに反応!!空間歪曲反応です!!」
「何!?総員戦闘配備!!通信長、えいゆう　に通達!!『偵察機の収容を急がれたし』と!!」
「りょ、了解」
　やがて空間歪曲反応が収まると、そこには一隻の船が漂っていた。
「空間歪曲収まりました」
「周辺に何か変化はあるか?」
「レーダーに感あり、船が一隻、漂流しています」
「ガミラス艦か?」
　艦橋に緊張が走る。
　もし、ガミラス艦ならば、彼らはワープして此処まで追ってきたことになる。
　それはつまり、冥王星で追撃してこなかったのは、えいゆう　と三笠　を地球目前で撃沈しようという悪趣味なマネをしてきたと言うことになる。
　例え一隻でもこれがガイデロール級宇宙戦艦かメルトリア級宇宙巡洋戦艦だとすれば今の地球艦隊でも十分脅威となる。
　しかし、
「いえ、エネルギー反応から地球の物でもガミラスの物でもありません」
　意外にも突如、ワープしてきたのはガミラス艦ではなかった。
「如何いたしますか?」
「接舷して、臨検してみよう」
「臨検ですか?」
「ああ、もしかしたら負傷者がいるかもしれない。それに何者が乗っているのかも気になる」
「通信長、えいゆう　に再び通信、『空間歪曲反応近くに不明船アリ、我之より臨検を行う』と・・・」

「了解」
　三笠　が　えいゆう　に不明船の臨検を行う旨を伝えると、えいゆう　から、
「臨検を許可する。気をつけろ」
　と、返信があり、三笠は不明船へと接舷した。
「副長、暫く艦橋を頼む」
「えっ!?」
　良馬の言葉に三木は驚きの表情と声を出す。
「艦長？」
「臨検は俺が指揮を執る。手空きの者を武装させて、接舷ハッチの前に集合させてくれ」
　そう言って良馬は接舷ハッチの方へと向かった。
　宇宙服に身を包み、万が一を考え、手にはコスモガンを持ち、不明船内部へと入っていく良馬達。
「艦長らしいッスね」
　自ら進んで臨検の指揮にあたる良馬の行動を見て永倉が苦笑しながら言う。
「ですが、状況判断を優先せねばならぬ指揮官の行動とは思えません」
　根が真面目なターニャは良馬の行動に指揮官としては少々不満の様子。
「目の前に救える命があるならば、自分で手を差し出さなければ気がすまない性格なんじゃよ」
　井上が良馬の性格をターニャに伝える。
「この船内の空気成分は、地球の酸素と同じ性質だ」
　一方、不明船内部に入った良馬はまず、船内の空気成分を調査した。
　計測結果に驚きの声をあげる良馬。
「と言う事は、この船の乗員も我々と同じ人類と言う事ですか？」
「確証はないけどね。でも、もしかしたら昔の映画、『猿の惑星』に登場するような獣型の宇宙人かもしれないよ」
　そう言いながら、不明船の内部を調査していく良馬達。
　しかし、船内には人っ子一人の気配も姿もない。

同じく別働の調査班からも人の姿は確認できずとの報告が入る。
しかし、無人の船が独りでに動いてワープしてくるなんて信じられず、何処かにこの船の乗員がいると信じている良馬。
現にこの船の造りは無人ではなく、有人の造りをしていたからだ。
そこで、確実に人が居そうなブリッジを目指す良馬達。
ブリッジならば、この船の所属、そして行き先が突き止められる筈だ。
そう思い、ブリッジへと駆け込んだ良馬の目に映ったのは、ブリッジの床に倒れている長い藍色の髪をしている女性の姿だった。

「こちら、A班!!乗員らしき、女性を発見!!頭から出血しており、負傷している模様!!医務室は直ぐに治療体制を!!」
良馬は倒れている女性を抱き上げると、急ぎ三笠へと戻った。
三笠の医務室では、良馬から連絡を受けたリニスが医務室でスタンバイしていた。
「リニス、頼む!!」
医務室の寝台に救助してきた女性を横たえる。
「この服、まさか・・・」
リニスは、女性が身に着けている服に見覚えが有るようだった。
「どうした?リニス」
「あ、いえ、何でもありません。報告は後でいたします。艦長とは言え、患者は女性なので、医務室から退室下さい」
「あ、ああ、そうだったな。それじゃあ頼むぞ、リニス」
「はい」
良馬はリニスがこの女性の服を脱がせるのだと思い、急ぎ医務室から退室した。
良馬から救助者の治療を任されたリニスは早速治療を開始するのであったが、
「警戒しなくても大丈夫、貴女のマスターを治療するだけだから」
意識を失っている女性に話しかけるリニス。
それは警戒心を解くように語る。

すると、女性の服装が変わり、紫の半袖のジャケットに上下一体の白いアンダーウェアーの服装から茶地にダブルの四つボタンのジャケットに同じく茶地のタイトスカート姿に変わった。
そして首には紫色の水晶のようなペンダントをかけていた。
「やっぱり、バリアジャケットだったのね」
リニスは自分の予想通りだった結果に特に驚く様子はなかった。
(それにしても、この人、あの方にそっくりね)
寝台で眠る女性を見て、この女性が自分の知り合いに似ている事に少し疑問を持つリニスであった。
その後、リニスはまず頭の傷の治療にあたり、その後は他に異常がないかレントゲンで彼女の体を調べた。
当然、良馬の予想通り、服を脱がして・・・・
幸い彼女は頭の傷以外、特に目立った外傷もなく、後は自然に目が覚めてくれるのを待つだけであったが、もう一つ、リニスには調べることがあった。
(デバイスを使用できると言う事はこの人も魔導士・それも管理局所属の・それなら一体どれくらいの魔力を有しているか、一応調べる必要があるわね)
「バルニフィカス、お願い」
リニスは自身が首から下げている蒼い水晶のペンダントに魔力を吹き込むと、リニスの両手に蒼白い光が灯る。
そしてリニスその手で、寝台の上で眠っている女性の体に触れると、女性の体の上に藍色の球体が浮かび上がった。
リニスはその球体に触れ、目を閉じる。
この浮かび上がってきた球体こそ、魔導士の魔力の源・リンカーコアだった。
リンカーコアには魔導士それぞれの魔力の量などの情報が詰まっており、リニスはそのリンカーコアを調べることにより、この女性の魔力レベルを調べたのだ。
「えっ!?これって・・・・」
女性のリンカーコアを調べていたリニスが突如、驚きの顔を浮かべ

る。
（この人、骨や臓器にまるで溶け込むような・自然な形で彼方此方に機械の様なモノが埋めこまれているわ。過去に大けがでもしたのかしら？　いや、まって、確かフェイトを生むきっかけとなったプロジェクトＦＡＴＥの他にもう一つ、Ｄｒ　Ｊ・Ｓが提唱した論文が有った筈・もしかしてこの人・・・）
そして壊れ物を扱うようにリンカーコアを女性の体に戻した。
そう、この女性のリンカーコアは普通の魔導士のリンカーコアとは少し違う造りをしていたのだった。
更には普通のレントゲンでは分からないが、リンカーコアを調べるため、検査魔法を使用したところ、魔法に反応するかのように彼女の体には特殊な機械の様なモノがいたるところに埋め込まれていたのだった。
その後、リニスは医務室に常備されていた健診衣を着せ、女性が目を覚ますのを待った。

ギンガ　ｓｉｄｅ

「・・・う・・・こ、此処は・・・？」
目を開けると、目に入ってきたのは見知らぬ天井だった。
此処が何処なのか確認しよと、起き上がろうとしたら、頭にズキッとした痛みが襲った。
「っ!?」
私は痛みに顔を歪め、再びベッドに身を沈めた。
「あら？気が付いたみたいね？」
私の様子に気が付いた様で、人の声がして、誰かが私に近づいてきた。
その人物は黒いズボンに赤い十字マークが書かれている白衣を着ている女の人で、その女性の格好から医師だとわかった。
ただ、医師なのに頭にはナースキャップの様な帽子を被っている。
「はじめまして、私は軍医の月村　リニス。貴女は、さっきこの艦の艦長に救助されたのよ」

（艦ってことは次元航行艦の事よね？）
（って!?あれからどうなったんだろう!?）
（そうだ!!窃盗団は!?）
（それよりもこっちの情報が筒抜けだったことを父さんに急いで伝えないと!!）
「ところで、貴女の名前は？」
　焦っている私にリニスさんが名前を聞いてきたので、
「失礼しました。陸士１０８部隊所属のギンガ・ナカジマ陸曹です。あの・・・・」
「なんです？」
「急ぎ、１０８部隊のナカジマ三佐にお伝えしたいことがあるんですけど・・・・」
「・・・・」
　私が父と連絡を取りたいことを言うと、リニスさんは少し怪訝な顔をして、
「ナカジマさん、大変言いにくいことなんだけど・・・・」
「なんですか？」
　その後、リニスさんの口から衝撃的な一言が発せられた。
「此処は、管理局の次元航行艦じゃないの」
「えっ!?」
　リニスさんのこの一言に私は衝撃を受けた。
　ギンガ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「此処は、管理局の次元航行艦じゃないの」
「えっ!?」
　リニスのこの言葉にギンガは衝撃を受けた様で、そのまま体を硬直させた。
（管理局の次元航行艦じゃない？それじゃあ此処は・・・？っ!?まさか!?）
　ギンガは此処が管理局の次元航行艦じゃないという言葉を聞き、此処が、自分たちが追っていた窃盗団の船かと思った。

しかし、リニスのこの言葉で、別の意味で困惑した。
「此処は、地球防衛軍、宇宙巡洋艦、三笠の医務室よ」
(地球・防衛軍――？一体どういうこと!?)
ギンガ自身、管理局が認識している地球という世界については、いくつか覚えがあった。
父、ゲンヤの先祖も元は地球出身者であり、今度出向予定だった六課部隊長の八神　はやて、そして管理局のエース・オブ・エース、高町　なのは　も同じく地球出身者だったため、管理局内ではたまに地球の事が取りざたされていた。
その事は当然、管理局員であるギンガの耳にも届いていた。
しかし、聞いた話では地球はミッド程、宇宙開発技術は進んでおらず、ようやく、衛星である月にたどり着いたとか、宇宙ステーションを開発し始めたというレベルで、宇宙防衛を専門とする組織が存在していたなんて聞いていない。
「この制服とさっきの１０８部隊って事は貴女、管理局の関係者よね？」
リニスの問いにギンガの疑問はますます深まる。
「え、ええ、そうですけど・貴女は管理局を知っているんですか？」
「私も昔、ミッドに住んでいたから」
「そうなんですか!?」
思わぬところで同郷の人と会い、声をおもわずあげてしまうギンガ。
「それと、さっき貴女のリンカーコアを一応調べさえてもらったのだけど、貴女・普通の魔導士じゃないわね？」
「っ!?何故、そのような事を？」
初見で自分の正体を見破ったリニスにギンガは驚愕しつつ少し警戒した。
「これも昔の事なんだけどね、私がデバイスを作ってあげて、魔法の使い方を教えた子と貴女のリンカーコアの造りがとても似ていたのよ。その子は普通の魔導士じゃなかったから・・・だから、貴女ももしかしてと思って・・・」

すでにバレていてはもう言い逃れは出来ない。
ギンガは観念するかのように、
「はい・私は人造魔導士です。それも戦闘機人と言う・・・」
俯き、絞り出す様な声で自らの出生を語った。
自分達姉妹が母の遺伝子を元に造られたクローンである事を。
「そう・でも此処（地球）では、人造魔導士だろうが、魔導士だろうがそんなの関係ないけど、あまり自分が魔導士だと言う事を言い触らさない方が身のためよ。まして貴女は地球人からみれば異星人に当たるのだから。まぁ、私もそうだけどね」
「はぁ・・・」
「この後、艦長に事情を話してもらうけど、いいわね？」
「はい」
ギンガはこの後、暫しの休息の後、三笠の艦長、月村　良馬の事情聴取を受けることとなった。
救助された彼女に拒否権と言う選択はないのだから・・・。

リニスから例の不明船の乗員が話せる状態になったと言うので、良馬はその乗員が居る医務室へと向かい、医務室のドアを数回ノックした。
「どうぞ」
中からリニスの入室を許可する声がしたので、良馬は医務室へと足を踏み入れた。
医務室の中にあるテーブルの前には例の不明船から救助した女性が立っていた。
女性は茶地にダブルの四つボタンのジャケットに同じく茶地のタイトスカートを履いていた。そして頭に巻かれた包帯が痛々しい。
良馬は女性を見た瞬間、一瞬ギョっとした。
（髪の色を除くとあの人そっくりだ・・・）
救助したときは慌てていて顔をよく見なかったのだが、こうしてじっくり見ると、目の前にいる藍色の髪をしたこの女性は良馬の知り合いにとてもよく似ていた。

「艦長?どうかしましたか?」
「あっ、いや、何でもない」
リニスに声をかけられ平然を装う良馬。
(やっぱり良馬も驚きましたか・・・)
リニスには先ほどの良馬の行動が分かる気がした。
自分でさえも、この藍色の髪をした女性が自分の知っている知人と似ていた事に疑問をかんじたのだから、同じくこの藍色の髪をした女性に似た人物を知る良馬もこの人を見たら驚くのは当然の反応だろう。
「それじゃあまず、自己紹介からかな?」
「そうですね」
「はじめまして、地球防衛軍、宇宙巡洋艦　三笠　艦長の月村　良馬です」
軍帽を脱ぎ、自己紹介をする良馬。
「時空管理局、陸士108部隊所属、ギンガ・ナカジマです」
ギンガも良馬に対し、一礼し、自己紹介をした。
「こういう場を設けたのは、双方の情報交換と今後の方針について話し合いたいからだ。ナカジマさんもまた、此方に色々訊きたい事があるだろう?」
「はい」
互いに自己紹介をした後、情報交換をと言う事で、良馬はまずギンガに時空管理局とはどの様な組織なのかを問うた。
「・・・という様な仕事が主に管理局の仕事です」
「・・・」
ギンガの話を聞き、少しあきれ顔になる良馬。
「あの・・・」
「これは主観なのだが、時空管理局って随分と危ない組織なんじゃないのかな?」
「えっ?何故、そう思うのですか?」
ギンガには良馬が何故、管理局が危ない組織なのか理解できなかった。

「司法、行政、そして警察の役割が全て一つに集約された組織・・・それってつまり、管理局の局員が『お前は有罪だ』と言えば、例え無実の人間でも有罪になってしまうのではないか？」
「っ!?」
　産まれてこの方、研究所から母親に助けられ、外の世界を知って十一年・・・。
　魔法と管理局が当たり前のように存在する世界で生まれ、おまけに育ての両親が管理局員であった環境下で育ってきたギンガにとってこの指摘は衝撃的だった。
「そう・言われてみれば・・・」
　魔法も管理局とも全く関係ない第三者から指摘されて初めて管理局の存在に疑問を感じたギンガだった。
　次にギンガが何故、遭難したのか、その経緯について話した。
「・・・と、言う訳です」
「なるほど、リニスはどう思う？」
　ギンガが遭難した経緯について、元魔法世界出身者のリニスに意見を求める良馬。
「恐らく、あの次元航行船の機関部に何らかのロストロギアが仕掛けられていたのでしょう。そしてそれはある一定の時間が経つと、暴走状態になり、次元震を発動するようにセットされていたものと思われます」
「そうだろうね。調査に当たった部下からの報告で、あの船の機関室の破損が異常に大きかったそうだ」
「やっぱり、情報が漏れて・・・」
　ギンガが悔しそうに顔を歪める。
「その場合、管理局側に犯人と内通している人物がいる可能性がある な」
「管理局に!?」
　良馬の指摘に思わず声をあげるギンガ。
「ナカジマさんが参加したその作戦、その船に局員が内部に潜入ないし、突入しないと取れない作戦だ。まして、相手側の人間は最初から

誰一人乗っていなかったのだから・・・そうなると、一番怪しいのは作戦の立案をした奴だな・突入してきた局員の抹殺を企てたのかもしれない。もっともこれは推論だから真実かどうかは分からないけどね」
「まさか・・・」
ギンガには心当たりが無いわけではなかった。
(まさか、あの執務官が・・・)
ジュリオはプライドが高い人物であり、自分はそのプライドを傷つけたのだから、彼が自分に対し恨みを抱いても全くおかしくはなかった。
先程、良馬に指摘された事と言い、ギンガは管理局のあり方に疑問を抱き始めた。
「我々はナカジマさんを遭難救助者として保護します。地球に着くまで、艦内の一部は地球連邦の法律と地球防衛軍の軍規が適用されますが、居住ブロックでは堅苦しく考えず、普段どおり過ごしてもらって構いません」
「はい、ありがとうございます」
「ナカジマさんの方から訊きたい事は何かあるかな? 流石に軍の機密事項は話せないが、それ以外の事ならば可能な限り答えよう」
「ありがとうございます。では・・・」
(彼らもまた、ある程度情報を開示すると言っているのだから、私もここに来てから積み重なっていた疑問をぶつけてみよう)
そう思いギンガは地球防衛軍の組織についての歴史を聞いた。
良馬は口で説明するよりも見てもらった方が早いと言って、防衛軍が作成した記録映像をギンガに見せる事にした。
そして、
「・・・」
ザー・・・
彼女の正面には、砂の嵐と化したモニターの画面が光るだけ、
つい数分前まで彼女が見ていたのは八年前に始まった星間戦争、あるいは絶滅戦争の当事者にされた地球と人類が辿った運命と呼ぶに

は余りに苛酷で悲しい戦いを記録した映像。
最新のモノでつい、先日行われた冥王星海戦までの記録映像まで含まれていた。
これらの映像が創作されたものには見えなかったし、ブリッツ・キャリバーも同様の見解を示した。
特にギンガにとってショックだったのが、遊星爆弾による無差別攻撃だった。
たった一発で大都市を消滅させ、大勢の人々を一瞬のうちに消滅させる恐るべき大量殺戮破壊兵器。
当然、管理局では禁止されている質量兵器に類するものであるが、その破壊力と破壊規模は計り知れない。
しかもその後には人類には有害な放射能物質が大気を汚染し、人が住めない環境へと変貌させる。
そして、奮闘空しく次々と撃沈され、壊滅していく地球防衛軍の艦艇の姿。
良馬もつい先日行われた冥王星海戦で親友二人を亡くしたと言う。
こんな事は、管理局・いや、ミッドや他の管理世界には今まで起こらなかった事態だ。
もし、これがミッドだったら管理局はここまで戦えただろうか？
もし、他の管理世界がこのような事態になったら管理局はその世界を守るためにここまで奮戦しただろうか？
様々な思いを巡らせるギンガに、良馬は、
「少し疲れたご様子ですし、今日はここまでにしておきましょう」
「そうですね。ナカジマさんもよろしいですか？」
良馬の意見にリニスも賛同しギンガに訊ねる。
「は、はい」
「地球に着いてからのナカジマさんの身の振りは此方で手配しておきます。決して悪いようにはしませんので」
「はい、ありがとうございます」
「いえいえ、では、ゆっくり休んで下さい」
軍帽を被り医務室を退室する良馬。

「さっ、ゆっくりお休み下さい」
リニスはギンガを寝台の方へと案内する。
良馬は医務室を出た後、通信室へと入り地球へ通信を入れた。
「今回の戦いについては既に連絡が来ているよ。残念だったね。そして、お疲れ様」
通信相手はまず良馬に今回の戦いでの慰めと労いの言葉をかける。
「いえ、元々勝てる戦いとは思っていなかったので・・・・」
「しかし、君が生きて帰ってきてくれて嬉しいよ。家内や娘もきっと喜ぶだろう」
「はい、ありがとうございます」
「ところで、要件は何かな?もうすぐ地球へ帰ってくるのだろう?」
「はい。実は火星付近で不明船が突如、ワープアウトをしてきまして・・・・」
「不明船?ガミラスの艦ではないのか?」
「はい。その件で是非とも五課長にはお願いが・・・・」
「ん?何かな?」
良馬は通信画面の向こうの人物に経緯を話し、そこで救助したギンガの顔写真を通信画面の向こうの人物に見せた。
「・・・・」
通信画面の向こうの人物もギンガの顔を見て驚いた顔をする。
「それで、君の言う『お願い』とは?」
「地球において、彼女の身柄の安全のため、身請け人となっていただけませんか?彼女の容姿ならば、上手くごまかせると思うのですが・・当然、自分も協力します」
「まぁ、確かに写真を見る限りでは彼女とウチの女房は瓜二つの容姿だし・・・・」
「それに彼女は、肌の色や容姿は地球人そのものですが、我々地球人から見れば異星人です。この事を防衛軍の上層部の一部が知ったら、彼女の身に危険が及ぶ可能性があります」
「・・・・」
家柄上、月村家には様々な情報網が存在し、その情報には世界の軍、

政治、企業の裏情報が齎される事が多々ある。
　その中で、軍が厳重な緘口令を強いている今回のガミラスとの戦争の噂は、世間で知らされているガミラス側が一方的に地球へ侵略行為を行ってきたものではなく、地球側からガミラスへ先制攻撃を仕掛けたと言うものであった。
　しかし、いくら厳重な緘口令を敷こうが、限度と言うモノが有り、その僅かな隙間から情報が洩れ、月村で知られる事となった。
「俺も噂程度では聞いています。このガミラスとの戦い、先に戦端を開いたのは地球側である事を・・ですから・・・・」
「わかった。地球での彼女の事は私に任せなさい。藤堂長官にも此方から伝えておく。それに家内も恐らく反対はしないだろうからな」
「ありがとうございます。それと・・・・」
「ん？まだ何かあるのか？」
「高町が・・戦死しました」
「・・・・」
　地球へは大まかにガミラスとの艦隊決戦に敗れたとだけ、知らされ、具体的な地球側の被害、戦闘報告はまだ報告されていなかった。
「あの子の事もお願いします」
　良馬が言う彼女とは高町　恭介の妹、高町　紅葉のことを指していた。
「分かった。準備は此方でしておく。君の帰りを待っている」
　そう言って良馬は通信機の機能をＯＦＦにした。
　その後、ギンガが乗っていた輸送船は地球へ回航される事となり、良馬は輸送船の回航作業を指揮するため艦橋へと戻った。
　そしてギンガは未だに精神的、肉体的疲労から完全回復しない為、管理局の制服から再び健診衣へと着替え、寝台に横になるとすぐに眠りについた。

六話　赤い地球

火星観測所を後にし、偵察機で火星軌道にて待機している宇宙戦艦えいゆう　へと向かう古代と島。
ようやく肉眼で味方の戦艦を確認できたとき、近くには味方の巡洋艦一隻と火星で見た船とは形が違う、今まで見た事のない形をした宇宙船が一隻いるだけで、他の艦艇は見当たらなかった。
(兄さんの艦が居ない・・・)
(兄さんの艦はどうなったんだろう!?)
もしかしたら、途中で機関故障を起こし後方にいるのかもしれない。
兄の守ならば「先に行っていてください」と言い出しそうだ。
それとも周辺の警戒行動に出ているのだろうか?
それとも・・・
兄の身を心配しつつ、古代は偵察機を戦艦の下部のハッチから難なく着艦させた。
戦艦の格納庫では、古代達から資料を受け取ろうと、士官の一人が待っていた。
「此方が、火星に不時着した不明船からの回収物と資料です」
古代と島は火星で採取した資料を待っていた士官へと渡す。
「ご苦労だった」
資料を受け取った士官は労いの言葉を古代達に言うと、回収物を丈夫そうなトランクの中へと詰めていった。
「あ、あの・・・」
古代はその士官に恐る恐る声をかけた。
「ん?何かな?」
「あっ、いえ、ちょっと気になったのですが、あの味方の巡洋艦の近くにいる船は一体?その・見たこともない形だったので、少し気になって・・・」
古代は敢えて兄の乗った駆逐艦　雪風の事は聞かずに、先ほど、外で見た見慣れない形の船について聞いた。

「あの船は君たちを待っているときに突然現れたんだよ」
「突然ですか!?」
「ああ。三笠の月村艦長が調査をして、この後、地球へ回航するらしい」
そう言って士官が例の不明船の方を見ると、古代達も釣られて、不明船の方を見る。
そこでは三笠の乗員が船外作業用の宇宙服を着て、不明船の曳航準備をしているのが見えた。
「君たちも色々あって疲れただろう?部屋を用意してある。ゆっくり休みなさい」
そう言って士官は用意した部屋の番号が書かれた鍵を古代と島に渡し、トランクを抱え、格納庫から出て行った。
火星からの偵察機の収容と不明船の回航準備が終わった　えいゆう　と　三笠　は火星軌道を後にし、一路地球へと向かった。
「本艦はまもなく火星静止軌道を離脱し、地球への帰還軌道に向かいます」
地球へ帰還する艦内放送が流れる中、古代は用意されていた部屋のベッドの上で、兄の事を思っていた。
あれだけ、時間が過ぎても兄の乗った雪風は姿を見せない。
その結果がどういう事なのか、古代とて子供ではないのだから分かる。
しかし、同時に認めたくもなかった。
ガミラスの宇宙船と違い、現段階の地球の宇宙船では火星から地球の間でも幾日かの時間を要していた。
その間、ギンガは医務室から出ることなく、医務官のリニスか艦長の良馬がその話し相手になっていた。
そして、生きていれば当然腹も減る。
良馬はディアーチェに頼んで、医務室まで食事を持ってきてくれるよう頼んだ。
そして、
「ホレ、艦長、持ってきたぞ!!」

カートの上に食事を乗せたディアーチェが医務室へとやってきた。
「なっ!?」
ディアーチェの姿を見たギンガは驚愕した。
「は、はやてさん!?」
そして思わず、自分が知るディアーチェそっくりの人物の名を口にした。
「ん?はやて?誰だ?それは?我の名は、ディアーチェ・K（コンドウ）・クローディア。此処（三笠）の厨房長を務めておる。で?お主は?」
「し、失礼しました。私はギンガ・ナカジマと言います」
人違いだったため、ギンガはそれを詫び、改めてディアーチェに自己紹介をした。
（冷静に考えてみればはやてさんがこの場に居る訳ないわよね）
と、思うギンガだった。
「そうか、それでその『はやて』とやらはそんなに我にそっくりなのか?」
「は、はい、髪の毛と瞳の色・・・それに口調以外は瓜二つです」
「そうなのか?まぁ、世の中には自分に似た人間は三人はいるというからな。我もお前に似ている人物を知っておるぞ」
「そうなんですか!?」
「うむ。お主とはやはり髪の毛の色と声質が違うがな」
「へぇ～」
ギンガはこの世界にいる自分そっくりな人物に少し興味が湧いた。
それから食事時間となり、
「貴様は一体どれ程食うのだ!?もう、用意した御代わりの分は全部お前が食ってしまったぞ!?」
異世界に来てもギンガの持ち前の食い意地は健在であった。
「まぁそれだけ食べられれば問題ないだろう」
と、そのギンガの食い意地にディアーチェは驚くと同時に呆れたが、ギンガの食欲を見て、もう問題はないだろうと判断した。
ギンガの食欲を見て良馬もリニスもその様子に唖然とした。

そして、
（（ますますあの人そっくりだ））
と、地球にいるギンガそっくりの人物の事を思い浮かべた。

それから　えいゆう　と　三笠　は月軌道へと差し掛かった。
地球へはもう間もなくであった。

宇宙戦艦　えいゆう　艦橋
「本艦後方より飛来物が来ます」
その時、えいゆう　と　三笠　の後方から二つの飛来物が通り過ぎていった。
「エネルギー反応からみて遊星爆弾です」
それは冥王星、ガミラス軍基地から発射され、地球を青い星から赤く放射能まみれにした元凶・・・ガミラスの遊星爆弾だった。
「遊星爆弾、本艦の上方を通過、地球への落下進路をとっています」
「主砲は撃てるか？」
山南は焼け石に水なのは分かっているが、このまま黙って遊星爆弾の落下を見ているわけにはいかず、主砲による遊星爆弾の破壊に試みようとするが、
「遊星爆弾のあの速度では、今から主砲を撃っても、もう間に合いません」
「っ!?」
砲術手の言葉に山南は悔しそうに顔を歪める。
「ダメだ・・・もう今は防げない　我々には　あの遊星爆弾を防ぐ力は無い、あれが我々の母なる地球の姿だとはなぁ・・・」
沖田は　えいゆう　の艦橋から地球へと落下していく遊星爆弾を見て呟いた。
やがて二つの遊星爆弾は地球へ落ちると地表で大爆発を起こし、地球の表面を破壊するのと同時に有害な放射性物質を周辺にばら撒いた。
（見ておれ悪魔め・・・わしは命ある限り戦うぞ。決して絶望はしな

い。例え最後の一人になっても、わしは絶望しない・・・）
沖田は遊星爆弾によって赤くなった地球を睨み、拳を握りながら徹底抗戦の意志を固めた。

宇宙巡洋艦　三笠　艦橋
「いつ見ても嫌な光景じゃわい」
遊星爆弾による攻撃で赤くなった地球を見て、井上が忌々しそうに呟く。
「かつてロシアの宇宙飛行士、ガガーリンは宇宙から見た地球を見てこう言った。『地球は青かった・・・』、と・・・それがどうだい？今じゃ、火星の地よりも血の様に赤く痛々しい・・・まるで、地球が大量出血をして、痛がっている様だ」
同じく三笠の艦橋でも良馬が赤くなった地球を見て、辛そうに言う。
「確かに、俺なんて、この光景を見るたびにガミラスへの怒りが湧いてきますよ」
舵を握る永倉も良馬の意見に賛同する。
「これが地球・・・？」
医務室から地球の映像を見ていたギンガも赤い地球の姿を見て絶句した。
ギンガ本人も地球の姿は知っている。
管理局にある記録映像で何度かその姿を見た事があるからだ。
ギンガの知っている地球はミッド同様、青い海が広がる青く綺麗な星だった。
しかし、今、ギンガが見ている地球は海の水が無く、カラカラの赤い大地を晒す、見るも無残な姿を晒す星になっている。
これが本当に自分の知る地球なのかと疑うほど、違う姿だった。
地下都市にある艦船ドックへ入港した　えいゆう　と　三笠　の二艦。
ギンガが乗っていた輸送船も調査のため、別のドックへと回航されていった。

「艦長の月村だ。諸君、生きて帰ることないと思っていた地球（ホーム）だ。暫くは出撃する機会もないだろう。その間十分に鋭気を養ってくれ・・・諸君らと共に戦えて光栄に思う。以上」
艦内放送にて、乗員に労いの言葉をかける良馬。
その後、各部署事に下艦準備が出来た者はその部署の班長に報告し、次々と荷物を持ち、艦を降りていった。
良馬は艦長と言う役職柄、最後に艦を降りなければならないのだが、
「艦長、此処は私が残務処理をしておきますので、艦長は先に下艦して下さい」
と、副長の三木に下艦を勧められた。
「いや、しかし・・・」
副長の好意にはありがたいが、艦長の責務を放棄するわけにもいかない。
と、言っても後やることと言えば、各部署からの下艦者リストにサインするだけなのだが・・・。
「判子を押すぐらい自分でも出来ます。艦長は例の船の救助者の護衛や司令部へ報告書提出、そして・・高町艦長のご遺族の方や沖田提督との面会などやることが沢山あるじゃないですか」
「・・・」
三木にそう指摘されると、確かにこの後、良馬にはまだ色々とやる事があった。
「艦長いいじゃないですか、此処は副長の好意に甘えても」
「うむ、たまには人を頼ることも必要じゃぞ。艦長は何でも自分一人で片付けようとする気概があるからのう」
永倉と井上からも言われ、良馬はすまなそうに三木に残りの作業を託し、まずは、ギンガを病院へと連れて行く事にした。
そのギンガがいる医務室では、
「艦内設備の医療機器では、問題ありませんでしたが、念のため、病院で精密検査は受けておいた方がいいですよ」
と、地球に着く少し前にリニスにそう言われ、ギンガはリニスと共

に地球の医療施設へ赴くこととなった。
本来ならば、ミッドの様に戦闘機人専門の診断が必要なのだろうが、ギンガは今、医務官であるリニス以外、自分が戦闘機人だと、明かしていないため、通常の医療施設での診断をする事となった。
最も今の地球にはミッドと違い戦闘機人専用の医療施設など存在しないが、この地球の医療技術ならば、十分ミッドの戦闘機人専用の医療施設の代わりになるくらいの技術と設備はある。
リニスが荷物を纏め、医務室を出ると、そこにはトランクを手に持った良馬の姿があった。
「艦長。どうかされましたか?」
「あ、いや、その・・ナカジマさん、これから病院で精密検査を受けるのだろう?」
「えっ?ええ、そうです」
「それなら僕が車で病院まで送ろう。今は異星人と言うだけで、どんな目に会うか会わらないし、此処での宿泊先の人にも紹介したいし・・・・」
「艦長、残務処理は?」
「副長が買って出てくれたよ」
「そうですか、それではお願いします」
良馬、リニス、ギンガが三笠のタラップに向かって歩いていると、
「おい、青髪」
ディアーチェがギンガを呼び止めた。
「はい?」
「地球の食糧事情は今、逼迫しているからな、陸に上がっても馬みたいにバカスカ食うなよ。あっ、それとこれは餞別だ」
と、地球での食糧事情を話し、注意しつつ、ギンガにサンドイッチが入った包みを渡した。
「これは?」
「これから病院で精密検査と聞く、長い時間、検査やら、待合やらだと、腹も減るだろう?だから、我からの差し入れだ。有難く食えよ」
「あ、ありがとうございます。クローディアさん」

ギンガが両手でその包みを受け取ると、ディアーチェにペコリと一礼した。
「うむ、では達者でな。後、我の事はディアーチェでよい。ファミリーネームはどうも呼び慣れぬからな」
「はい。ありがとうございます。ディアーチェさん」
ディアーチェからの思いがけないサプライズにありがたみを感じ、ギンガは三笠から降りた。
ドックに用意されていた公用車を良馬が運転し、病院へ向かう途中、彼は防衛軍のオフィスに立ち寄り、出撃前、高町、沖田から聞いた二人の遺書を大事そうに懐へ入れると、公用車に戻り、病院へと向かった。
その頃、病院のとある診察室では、
「この傷で大事にならんかったのは不幸中の幸いとしか言えんぞ」
病院勤務の医師、佐渡　酒造が冥王星海戦にて負傷した沖田の手当てをしていた。
佐渡は沖田の主治医でもあった。
そして、医務室にはもう一人、沖田の手当てを見守っている人物がいた。
沖田と士官学校が同期で、今はその士官学校の校長を務めている土方　竜だった。
「なぁに宇宙一の名医がいるのだから心配はしとらん」
「いや、それ程でもあるがの」
沖田に褒められて満更でもない様子の佐渡。
「例の回収されたカプセルは直に解析が終了する」
「そうか・・・」
土方が火星で例の不明船から回収されたカプセルの状況を沖田に告げる。
そこへ、
コン　コン
と、医務室のドアをノックする音が聞こえてきた。
「誰じゃ？」

佐渡がドアの向こう側にいる人物に尋ねる。
「宇宙巡洋艦、三笠艦長の月村です。こちらに沖田提督がいるとお聞きしましたのですが・・・」
佐渡が沖田に目をやると、沖田は「構わんよ」とアイコンタクトをとり、
「入れ」
佐渡は入室を許可した。
「失礼します」
一礼し、診察室へ入ると、そこには良馬にとって予想外の人物がいた。
他ならぬ土方である。
「ひ、土方教官!?」
慌てて土方に敬礼する良馬だった。
「月村、お前も無事に帰ってきてくれて何よりだ」
土方は良馬に近づき、良馬の両肩をポンポンと叩き帰還を喜んでいる様子だった。
「は、はい。ありがとうございます」
「それで、わしに用とは?」
沖田が良馬に要件を訊ねる。
「あ、あの・・・」
良馬はスッと視線を動かし土方と佐渡を見る。
その様子からなるべく沖田だけに話したい要件なのだと、土方と佐渡は察したが、当の沖田本人が
「二人の事は気にせんでいい」
と、言ってきたので、
「はっ、ではこれを提督に・・・」
良馬は懐から一通の白い封筒を取り出し、沖田に渡した。
受けとった沖田は封筒を見る。
封筒の表には『沖田　十三　様』と筆文字の宛名が書かれており、裏を返すとそこには『沖田　一』と書かれていた。
「・・・」

「一からの・・・沖田提督へ宛てた遺書です。出撃前、小官と高町、そして一の三人で、もし、お互いに万が一の事があれば、遺書を直接ご遺族の方に渡してくれという約束事をしまして・・・」
「・・・」
ジッと息子（一）からの遺書が入った封筒を見つめる沖田。
「そうか・・・手間を取らせてすまない。態々届けてくれてありがとう」
「い、いえ、そんな・・・」
沖田は息子（一）からの遺書を懐のポケットにスッと入れた。
その姿には哀愁が漂っていた。
沖田とて軍人である前に一人の人間であり、父親だったと言う事だ。
「・・・」
そんな沖田を土方も佐渡もいたたまれなく、声をかけづらい状況の中、
「沖田提督!!」
と、突然診察室のドアが開き、そこから一人の青年が診察室の中へ入ってきた。
その後ろにはもう一人、彼と同年代の青年が立っていた。
彼らの服装は防衛軍宇宙艦隊で正式採用されている軍服から、彼らもまた宇宙戦士なのだという事がわかった。
「沖田提督、兄は・・・兄の船はどうなってのですか!?」
「君の名前は?」
沖田は突然診察室へ入って来た青年に名を訊ねる。
「古代です。古代　進です」
青年は沖田の前で、自らの名を明かした。
地球に帰還した宇宙戦艦　えいゆう　で古代は兄、古代　守が艦長を勤めていた駆逐艦　雪風　の行方を沖田本人に直接尋ねようと、えいゆう　の艦橋へあがったが、そこに沖田の姿は既に無かった。
艦長の山南の話では、冥王星海戦において、沖田は負傷し、そのため、山南が地球に帰還と同時に沖田を病院へと向かわせたと説明を受

けた。
「古代・・・・?・そうか、君は雪風の・・・・」
「はい、駆逐艦　雪風艦長、古代　守は俺の兄です。提督、雪風は・・・・兄の艦はどうなったのですか!?」
「・・・・君のお兄さんは立派で、勇敢な男だった・・・・しかし、彼はもう帰ってこない・・・・」
「っ!?」
「君のお兄さんを死なせたのはこの私だ。・・・・すまなかった」
沖田は古代に深々と頭を下げる。
艦隊司令官である提督が一新米士官に頭を下げる光景なんてとても信じられず、土方も佐渡も良馬も唖然としていた。
「どうして・・・・どうして!?・兄さんを連れて帰ってくれなかったんですか!?・貴方は他人を犠牲にしてまで生き残りたかったんですか!?」
古代は声をあげ、沖田に掴みかかろうとした。
「古代、止めろ!!」
すると、もう一人の青年、島　大介が古代を取り押さえるが、古代は島を振りほどこうとする。
そこで、その場にいた良馬も島と共に古代を取り押さえた。
提督が新米士官に頭を下げる何て異例な光景を見たが、更に此処で曲がりなりにも提督に私情で殴り掛かっては軍法会議モノである。
いや、既にこの時点で軍法会議モノである。
流石の古代も夜の一族の血を引いている良馬の常人離れした力の前では振りほどくことは出来なかった。
その後、その場にいた土方から古代は説教を受け、上官不敬及び暴行未遂で航空機格納庫の罰掃除を受けた。
本来ならば軍法会議ものだが、被害者である沖田本人がそれを了承したのだった。
佐渡の病室での一悶着の後、病院のロビーに戻ると、そこには既に検査は終わっていたのか、ロビーにある椅子に座り、ディアーチェから貰ったサンドイッチを食べるギンガの姿があった。
「あれ?・ナカジマさん、検査はもう終わったの?」

良馬は、先程行われたであろう検査の事を聞きながら、ギンガの傍に座る。
「はい。今、検査結果をリニスさんが聞きに行っています」
「そうか」
「あ、あの・・・・」
「ん？」
「お一つ如何です？」
ギンガが三笠を降りる直前、ディアーチェから貰ったサンドイッチを一つ勧めてきたので、良馬はその一つをご相伴に預かった。
貰ったサンドイッチを口に入れると、パンの味と中の具の旨味が口いっぱいに広がる。
（やっぱり、美味いな）
ディアーチェの作ったサンドイッチに舌鼓を打ちながら、食べ終えると、ギンガはもう少し食べたかったなぁ・・・という表情をしていた。
しかし、ディアーチェから地球の食糧事情を聞いていたため、贅沢は言わないギンガだった。
「おまたせしました」
やがて検査結果を病院の医師に尋ねてきたリニスがロビーに来た。
「結果はどうだった？」
「特に問題はないそうです。よかったですね」
「は、はい」
特に問題はないと言う検査結果にまずは満足の一同であった。
次に良馬はギンガにこれからの事について話をした。
まず、ギンガが所属している時空管理局と何とか連絡をつけるために、ギンガが乗ってきた輸送船は現在、機関部と通信設備を修理中でその経過は逐一、ギンガに知らせることとなっていた。
そして、地球に滞在中の宿泊先については、既に手配しており、これからその人と会うことになっていた。
ギンガの方も良馬が提示した件を了承した。
元々自分は管理局で言う次元漂流者なのだから、そこまで偉そうに

いえる立場ではない事はギンガが一番理解している。
やがて、病院のロビーに防衛軍地上勤務の証である濃緑色の軍服を着た一人の男性がやって来た。
「あっ、中嶋さん。こっちです」
良馬が手を振り、やって来たその男性に声をかける。
男性はギンガを見て、
「改めてみると、本当にそっくりだ・・・」
と、呟いた。
そしてその男性の声を聴き、ギンガの方も驚いた。
(この人、父さんの声とそっくり)
目の前の男性は、容姿は違うが、声に関してはギンガの父、ゲンヤ・ナカジマとそっくりの声だった。
「ナカジマさん、こちらは僕が下宿でお世話になっている防衛軍第五軍務課長の中嶋　源三郎さん。中嶋さんは今回、君に宿泊先を提供してくれる人で・・・って、二人とも同じ『なかじま』だと何かややこしいな」
「でしたら、私の事はギンガで構いませんよ」
「そ、そう?では、改めて、ギンガさん、此方、防衛軍第五軍務課長の中嶋　源三郎さん。地球滞在中は中嶋さんの家で過ごしてください」
「は、はい」
「中嶋です。月村君から話を聞いているよ。今回は色々と大変だったね」
源三郎はそう言ってギンガに右手を差し伸べる。
「ギンガ・ナカジマです。しばらくの間、お世話になります」
ギンガも自らの名を名乗り、源三郎と握手を交わす。
同じ「なかじま」と言うファミリーネーム、そして父、ゲンヤに似た声をもつこの男性にギンガは親近感を感じた。
「地球滞在中は家を自分の家だと思ってくれてもいい。女房や娘もその方が喜ぶだろう」
「い、いえ、そんな・・・」
源三郎の申し出にあたふたとするギンガだった。

病院を出た後、源三郎が運転する車で地下都市内にある中嶋家へ向かっている最中、ギンガは車から外の景色を見ていた。
（この星の人達は、地下にこんな広大な空間を造っていたんだ・・・）
ガミラスの遊星爆弾・放射能から逃れるため、地球人は地下を掘り進め、深さ１０～１５キロに及ぶ広大な地下都市を築いていた。
特に日本のそれは強固な耐震対策も施され、度重なる遊星爆弾の着弾や、大きな地震にもビクともしなかった。
外国の地下都市では、遊星爆弾の着弾で全滅した所や地震により陥没した都市もあった。
しかし、それらの出来事は地球に来たばかりのギンガは知る由もなく、ギンガはただ単にミッドはおろか、他の管理世界の中にもない地下深くにこんなにも巨大な都市を建築できるほどの技術、そしてその技術が生み出した地下の大都市などと言う代物とは初めて触れ合ったので、驚かない方がおかしかった。
それと同時に、地下都市の荒廃にも驚かされた。
ラジオでは暴動が起きた地区の情報が流れていた。
地球人類の最後の日は着々と迫っていた・・・。
やがて車は中嶋家に着いた。
「只今!!」
源三郎が玄関のドアを開け、帰宅を知らせると、家の奥からパタパタと足音がすると、
「おかえりなさい。お父さん」
一人の黒髪の女の子が源三郎を玄関で出迎えた。
ギンガが抱いた印象では落ち着いた物腰の少女だった。
「只今、桜花」
娘が出迎えてくれた事で源三郎も顔を綻ばせ、嬉しそうだ。
「・・・」
ギンガはその様子をジッと見ている。
「ギンガさん、この子は中嶋さんの家の子で桜花って言うんだ」
良馬はギンガに少女の名前と源三郎との関係を教える。
「ん？」

やがて、桜花が玄関にいるギンガの存在に気が付く。
「えっと・・・そちらのお母さんに似た方は・・・？」
ギンガの顔を見た桜花が、ギンガの容姿を見て、自分の母親にそっくりだと言う。
（皆が言う私にそっくりな人ってこの子のお母さんなんだ・・・一体どんな人なんだろう？）
ギンガが自分そっくりの人物といよいよ対面するのかと思っていると、
パタパタと家の奥からスリッパの音がしてきた。
そして、
「お帰りなさい。アナタ」
女の人の声が聞こえてきた。
「あら？」
「えっ!?」
玄関に現れた女の人を見て、ギンガも・・・そして、女の人も固まった。
「か、母さん・・・？」
ギンガの目の前に現れた女の人はギンガとスバルの母、クイント・ナカジマにそっくりの容姿を持つ女性だった。

七話　高町の血を継ぐ者　前世では異世界の魔導師

「か、母さん・・・？」
ギンガの目の前に現れた女の人はギンガとスバルの母、クイント・ナカジマにそっくりだった。
そしてギンガの目の前にいる女性もギンガの姿を見て驚いていた。
そりゃあ、自分そっくりの人物が目の前に居れば驚かない筈がない。
しかし、彼女は別の意味で驚いていた。
「・・・ギンガ？」
そして、彼女は小さくギンガの名前を呟いた。
それは、彼女以外に聞こえない程の小さい声で呟いたが、夜の一族の血を引いている良馬は常人よりも運動神経が優れているのと同時に聴力や視力も常人より優れていたので、彼女の呟きが聞こえていた。
「えっ？」
（なんで、ナカジマさんの名前を知っているんだ？初対面の筈なのに・・・）
良馬が彼女の呟きに疑問を感じていると、
「あっ、ごめんなさいね、学生時代の私にそっくりだったもので、驚いちゃって」
と、彼女は先程の驚いた顔を引っ込めて笑みを浮かべる。
「紹介しよう、私の妻の加奈江だ」
「はじめまして、中嶋加奈江です」
源三郎がギンガそっくりの女の人をギンガに紹介する。
「は、はじめまして。ギンガ・ナカジマです。しばらくの間お世話になります」
（そうよね、母さんが生きている筈がないものね）
ギンガは慌てて中嶋夫妻に一礼する。
それと同時に死んだはずの母親がこの異世界で生きている筈が無

い。
　ディアーチェ同様、この人も自分の母親のそっくりさんだと言い聞かせた。
「しばらく家に泊まるのですか？」
「え、ええ・・・・」
　桜花がギンガに問う。
「当分、桜花ちゃんの家に泊まる事になっている。仲良くしてあげてね」
　良馬が桜花に頼むと、
「はい、わかりました。ギンガさん、よろしくお願いします」
「こ、こちらこそ、よろしくお願いします」
　ギンガが泊まると知って桜花は深々とギンガに頭を下げる。
　ギンガも慌てて桜花に一礼する。
「それじゃあ、俺は源三郎さんと用があるからまた出かけるよ。リニス、ギンガさんの事をよろしく」
「承知しました」
「ギンガさん」
「は、はい」
「住み慣れない環境にいきなり放り込まれて、色々困惑しているだろうけど、此処の人達は皆、良い人達だから困った事があったら相談してね。此方としても出来る限りの事はするから」
「はい。ありがとうございます」
　そう言い残しギンガの事をリニスに任せ良馬と源三郎はもう一度出かけた。
　出かけた先は高町兄妹の住居となっている防衛軍士官用官舎。
「はぁ～」
　官舎へ向かう途中、良馬は深いため息をついた。
（彼女に・・・紅葉ちゃんに合わせる顔がないな・・・・でも、アイツからの最後の言葉を伝えるのは俺の役目だし・・・・何故、俺は生き残ってしまったのだろう？）
「・・・・」

車を運転していた源三郎はチラッと横目で良馬の様子を伺った。
（やっぱり、無理をしているな・・・月村の奴、深く背負い込まないといいが・・・）
源三郎は良馬のメンタルを気にしつつ、高町兄妹の住宅である防衛軍士官用官舎に着くと高町家の前で車を停めた。
表札には『高町』と書かれている士官用官舎。
いつまでも、憂鬱な気分に浸っている訳にもいかず、
ピンポーン
良馬は玄関のチャイムを鳴らした。

???side

新暦8×年　ミッドチルダ
あぁ・・・私らしくないミスだった・・・
まさか、事件現場に幼い子供が入り込んで来るなんて・・・
子供を庇って私は犯人のシューターをモロに喰らった。
あの野郎、殺傷設定でシューター撃ちやがって・・・
幸い子供と犯人は確保することが出来た。
でも、風穴が開いている私の体からは血がドクドクと流れている。
これじゃあ、病院までもたないな・・・
「「メグ!!」」
そこへ、私の名前を呼びながら血相を変えて近づいてくる男女の姿。
まったく遅いじゃないの・・・
もう、会えないと思ったじゃない・・・
でも、こうして最後に会えてよかったわ・・・
「メグ、しっかりして!!目を開けて!!メグ!!」
ギンガ、ちょっとそれは無理かな・・・私、凄く眠いの・・・
でも、大丈夫・少し休むだけだから・・・
ギンガ・・・アキラといつまでも幸せにね・・・

あぁ…私も…結婚…したかった…な…
そして、私の意識はそこで暗転した…

次に私が目を覚ましたのは病院だった。
助かったのかと思って自分の姿を見ると、身体の大きさが縮んでおり、容姿も全くの別人になっていた…と言うか赤ん坊だった。
これはネットの二次創作によくある転生と言うモノなのだろうか？
暇つぶしに見た時には「こんなことあるわけないじゃない」と鼻で笑っていたのに、まさかそのトンデモ体験を自分自身がこうして体験するなんて何という皮肉だろうか？
でも、折角こうして転生したのだから、第二の人生を楽しむことにした。
私が転生したのはあのエース・オブ・エース、高町なのは　と　機動六課部隊長を務めた八神はやての生まれ故郷である地球だった。
地球については私も実際に行ったことはないけどある程度は知っていた。
でも、私が生まれた地球は前世の私が知っている地球とはちょっと違っていた。
私の知っている地球は管理局みたいな宇宙船技術をまだ持っていない筈だった。
それなのにこの地球は普通に管理局の次元航行船並みの宇宙船技術を持っていた。
そんな地球に私はエース・オブ・エース、高町なのはと同じファミリーネームの家に生まれた。
最初はたまたまファミリーネームが重なっただけだと思ったのだが、家に伝わる昔の記録を見ると其処には前世で雑誌やメディアで何度も見た事のある顔があった。
（これって高町なのは!?）
古い写真に写っていたのは管理局では有名なあの高町なのはだっ

た。
でも、写真を見る限り彼女が管理局になっている様子はなかった。
彼女は今の私の家の実家の喫茶店でオーナー兼パティシエールとなっていた。
(どう言う事?あの高町なのはが管理局員になっていないなんて・・・やっぱり、同姓同名のそっくりさん?)
色々な疑問があったけど、当の高町なのは自身がもうずいぶん昔に亡くなっているので今更確かめようがない。
今の私の家族構成は両親に兄が一人いた。
前世では父と母、それから姉が一人いて、治療専門の使い魔一体居た。
この世界では管理局が管理外世界に認定していた通り、魔法技術は全くと言っていい程、存在していなかった。
でも、私の中には前世同様、リンカーコアが存在していた。
そしてこの後世の母にも・・・しかも母はミッドでは普及しているインテリジェンスデバイスを持っていた。
もしかして母はミッドから流れてきた次元漂流者なのかと思ったが、母のデバイスの謎の解明についてはもう少し先になってから判明した。
ミッドと違ってテロもなく平和な日常が続くと思ったのに、平穏なんてものは唐突に終わりを告げた。
ガミラスと名乗る他の宇宙の侵略者が地球に対して遊星爆弾とか言う隕石型の爆弾を雨の様に降らし始めた。
青かった地球の海は瞬く間に無くなり、大気には人体に有害な放射能物質が散布された。
遊星爆弾の攻撃で地上に住めなくなった人達は地下へと避難し始めた。
そんな中、母が死んだ・・・
遊星爆弾による放射線病という病気だ。
魔導師でも放射能物質には勝てなかったみたいだ。
前世では私の方が親よりも先に死んだけど、まさか、この後世では

親の死に目に遭うなんて・・・
前世の私の両親や姉もきっと悲しんだのだろう。
そして母は死ぬ間際、私にデバイスをくれた。
普通、デバイスの継承はあまりない事だが、このデバイス・ルシフェリオン・アカツキはデバイスながら、ミッドとは異なる技術で出来ていた。
ルシフェリオンに何処から来たのかを聞いたのだが、ルシフェリオン自身、どこから来たのかはもうとっくに忘れたらしい。
おぼろげに覚えているのは生まれ故郷にも管理局に似た組織はあったらしい。
ガミラスの猛攻で地球はどんどんと追い詰められ、私達も等々地下都市へ引っ越しを余儀なくされた。
食糧も配給制となり、喫茶店も営業が難しくなって長期の休業をする事になった。
でも、いつでも続けられるように秘伝のレシピ帳は大切に保管されている。
地下生活が続く中、兄が地球防衛軍に志願して士官学校へと入学した。
報道を見る限り、ガミラスの科学技術は地球どころかミッドでさえ、簡単に越えているのは素人目でも分かった。
もし、ガミラスがミッドに攻めてきたらミッドは戦えるだろうか？
地下生活が長く続いていくと食糧の配給制量も徐々に減って行き、各地で食糧や物資を巡って暴動が起きるようになった。
その最中、父が暴動に巻き込まれ死んだ。
両親が死に私の家族は兄だけになってしまった。
家は兄が軍人になった事で軍の官舎に住む事になり、他の人よりも食糧や物資に関しては幾分、融通が利いた。
でも、防衛軍と言う危険な仕事でガミラスと戦っているので、私の不安は付き纏っていた。
兄には軍人を辞めてもらいたいと言う気持ちがあったが、両親が死んでしまった今、私達が生きていくには兄に頼らなければならなかっ

た。
ミッドならば、今の自分の年でも管理局に勤める事が出来ただろうけど例え、デバイスと魔力を持っていてもこの世界ではなんの役には立たなかった。
もっとも今の私にはお母さんやおばあちゃんが代々伝えてきた喫茶店、翠屋の味を伝えようとするつもりがあったので、今更管理局に勤める気はサラサラなかった。
地球とガミラスとの戦争は好転することなく、地球が追い詰められていた。
そしてある日、兄はガミラスの地球攻略の根拠地である冥王星へ出撃していった。
兄が冥王星へ出撃してから数週間・・・・
地球が勝ったのか？
兄は無事なのか？
心配する日々が続いた。
そんなある日、家のインターホンが鳴った。
私は兄が帰ってきたのかと思い、応対に出た。

???ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「はい」
インターホンのスピーカーから女の子の声が聞こえた。
「月村だが、紅葉ちゃん。ちょっといいかな？」
「はい。どうぞ」
紅葉が玄関のドアに掛けられていたロックを外す。
そして二人は高町家の中へと入った。
「どうぞ、月村さん、中嶋さん」
「どうも」
「お邪魔します」
紅葉は良馬と源三郎に持て成しの為に紅茶を淹れて差し出した。

「月村さん、いつ地球へ？」
「今日だよ。それで、今日は君に話があってきたんだ。その・・・君には辛い話になるけど・・・」
「・・・」
この時、紅葉自身も良馬の話と言うのが分かったのかもしれない。
兄の恭介と共に出撃した良馬が帰ってきているのに、兄がこの場に居ない事からその結果、導き出される結論はただ一つ・・・
「君のお兄さんは・恭介は死んだ・・・すまない・・・恭介を連れて帰ることが出来なくて」
良馬は紅葉に深く頭を下げる。
「・・・」
兄の死を良馬から聞き、紅葉は顔を俯かせる。
「これは彼が君に宛てた遺書だ。君に受け取ってもらいたい」
良馬はテーブルの上に一通の白い封筒を置く。
封筒の表には恭介の筆跡で「高町　紅葉へ」と書いてあった。
「君は唯一の肉親であるお兄さんを亡くした。それにまだ未成年だ、『戦災孤児育英法』が適用される。私や月村君も喜んで君の後見人になるつもりだ。暫くしたらこの官舎も軍に返却しなければならない。そうなれば君は孤児院へ預けられることになる。私はそれだけは避けたい」
源三郎は戦災孤児育英法の手続き書類をテーブルの上に置く。
「す、すみませんが、いきなりの事でまだ混乱していまして・・・少し時間を下さい」
紅葉体と声を小さく震わせながら言う。
その様子から彼女が動揺している事が分かる。
「あ、ああ、そうだね。いきなりこんな話をされても驚くよね？」
「は、はい・・・その・・・今日・一晩、じっくり考えたいので・・・」
そう言いながら紅葉は立ち上がる。
「ああ、分かった。それじゃあ私たちはこれで・・・」
「はい」
源三郎と良馬はソファーから立ち上がる。

紅葉はフラッとした足取りで上にある自分の部屋へと戻って行き、源三郎と良馬は玄関に向かう。
源三郎がスリッパから下履きの靴に履き替えたところで、良馬は、
「中嶋さん、俺は残ります」
「ん？」
「今の状態の紅葉ちゃんを一人にしておくのはちょっと心配なので・・・」
紅葉は、元々自分の感情や欲求を外に出さず、ずっと固い表情の場合が多い子だった。
その原因は、物心つく前からガミラスとの戦時下と言う状況と家族の死がそれに拍車をかけていた。
そんな彼女だからこそ、世の中を悲観して自殺・・そんな事が良馬の脳裏を過ったのだ。
恭介は、妹はしっかり者だと言っていたが、それでも彼女はまだ年相応な女の子なのだ。
自殺はしないまでも、心を閉ざして精神を病んでしまうかもしれない。
同じように家族を亡くした戦災孤児達の中にはその様な子供たちがいるのを良馬は知っている。
彼女の為にもその事態は避けなさればならなかった。
「そうか・・・そうだな。女房やリニス君には俺から言っておこう」
「はい、お願いします」
源三郎は良馬を残し、自宅へと帰っていった。
源三郎を見送った良馬は再び、ロビーの上のソファーに座った。

そして、翌朝、
「月村さん。もしかしてずっと起きていたんですか？」
紅葉が部屋からロビーへと降りてきて、良馬に声をかけた。
良馬はジャケットと軍帽、手袋、スカーフを脱いだ状態で昨日からずっとソファーに座っていた。
良馬が帰らないで、家に居続けたのは紅葉自身も気配で何となく察

していた様だ。
「それは、君も同じみたいだけど？」
「・・・」
良馬の指摘通り、紅葉の目の下には薄っすらと隈が出来ており、彼女が睡眠不足だと言う事を物語っている。
しかし、目元が赤く腫れていないことから彼女が涙を流していない様子も同時に伺えた。
良馬はスッとソファーから立ち上がり、紅葉を抱きしめる。
「紅葉ちゃん、悲しい時は泣いても良いんだよ・・・」
「で、でも・私は・・・私は良い子でないと・・・我儘を言わず・泣いちゃ・・・」
紅葉は必死に涙をこらえているが、声は涙声で目には涙が浮かび始めた。
例え、前世では社会人であり、管理局員だったが、今は年相応の女の子・しかも最後の肉親を失ってしまった。
悲しくない筈が無い。
「我慢する事はない。君は家族を亡くしたんだ。泣くことは恥じることじゃないし、我儘でもない・・・むしろ、泣いてあげてくれ・・・恭介の為にも・・・だから、今は思いっきり泣きなさい」
この言葉が引き金になったのか、紅葉はこの直後、大声をあげて泣いた。
彼は紅葉が心を閉ざす事を瀬戸際で食い止めたのだ。
その後、思いっきり良馬の胸で涙を流した紅葉は、戦災孤児育英法の適用を受け、中嶋家と月村家がその後見人となった。

紅葉が戦災孤児育英法の適用を受ける少し前、
「・うっ・うぅ・・・ん～・・・」
中嶋家の客室でギンガは目を覚ました。
救助された三笠の医務室からこれまで何度も、「これは夢なんじゃないだろうか？」と、思った事が何度もあったが、現実は厳しく、目が覚める度にこれは夢ではなく、現実なのだと思い知らされる。

（スバルや父さんは今頃、どうしているのかしら？）
　ギンガがいつも思うのは遠い故郷に残してきた家族のことだった。
「おはようございます。マスター」
「おはよう、ブリッツ・キャリバー」
　ベッドの隣にある小さなテーブルの上に置いてある待機状態（紫水晶状のペンダント）である自分の愛機が挨拶をしてくる。
　ブリッツ・キャリバーはＡＩ機能が搭載されており、ある程度のコミュニケーションを事が出来る。
　今はこうして愛機が居る状況だからこそ、悲しみに飲まれることも発狂する事もないが、ギンガが不安な状況で居るのには変わらなかった。
「マスター、実は地球に着いてから、気になることがありまして・・・・」
「ん？どうしての？」
「実は・・・・」
　ブリッツ・キャリバーは、自らが抱いた違和感をマスターであるギンガに話した。
　それを聞いたギンガは、
「ブリッツ・キャリバー、もう一度、言ってくれる？」
　愛機からの報告に、ギンガは耳を疑った。
「はい、もう一度申し上げます。マスター、この星の大気には、広くそして多量のＡＭＦが含まれています。　この星に降り立った時から感知していたのですが、ＡＭＦの濃度が室内外とも大差ありません。
　つまり、この地球の大気全体にＡＭＦが多く分布している可能性が高いのです。故にマスターの魔力ランクはＡクラスからＣクラスにランクダウンしています。そして、桜花さんから、微力ですが、魔力反応があります。ランクはＣ―程です」
（昨日から感じた違和感はそれだったのか・・でも、このＡＭＦの充満化でＣ―ってことはミッドだとＢクラス並み・・確か、スバルとティアナがこの前Ｂクラス試験を受けていたから、ほとんどスバルたちと同じ魔力量か・・）
　ギンガは昨日、三笠から降りた時から、リンカーコアにちょっとし

た違和感を感じていた。
　それがこの地球上に広く散布されている魔導士には鬼門とされているＡＭＦ、効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化する、ＡＭＦ（アンチマギリンクフィールド）の影響だったのだ。
　しかし、ＡＭＦには放射能と違い、人体に有害な毒性はなく、魔導師も、魔法が使えないか制限される事以外は何の支障もない。
「でも、地球は、魔法文化は無いようだしね。生活に支障がなければ全く問題ないもんね。それにしても、この世界の地球は元からこういう空気だったのかな？」
　ギンガの言う通り、ここは管理世界でもないから、クレームなんかつけられないし、つけてもすげなく無視されるだけだ。
　しかし、ギンガの中で疑問は残った。
　管理局で今やエースと呼ばれている高町　なのはが地球出身者である事は管理局員の多くが知っている。
　彼女が魔法と出会うきっかけとなったＰＴ事件、闇の書事件の二つの事件。
　当時九歳の管理世界外出身の少女がその二つの事件を解決に導いたことは当時、ミッドではかなり騒がれた。
　彼女は九歳で既に魔力ランクがＡＡＡ＋という管理局でも数少ないＡランクを超えていた。
　それから十年たった彼女は今や最上級のＳランクに君臨しているが、当時、地球で起こったＰＴ事件、闇の書事件の際、地球の大気にＡＭＦが充満していたら、とてもＡＡＡ＋の魔力ランクなんて出せない。
　と、言うかＡＭＦが充満している状況でＡＡＡ＋なんて魔力を出せたら、それはもはや人間ではない。
　そのため、ギンガはいつＡＭＦが地球に充満されたのか気になった。
「マスターその事ですが、もしかしたら、ガミラスの影響かもしれません」
「ガミラスの影響？それってあの遊星爆弾の事？」

「はい」
　ギンガも三笠に乗っている時に地球へ落下していく遊星爆弾の姿を見ていた。
「おそらくガミラスの遊星爆弾には放射能の他にＡＭＦの成分が含まれているのではないでしょうか？」
「そうね、その可能性が一番高いわね。それにしても、人体に有毒な放射能の他に魔導師の弱点であるＡＭＦが含まれているかもしれないなんて・・・・」
　ギンガはこの世界の地球に降りてみて、ガミラスの科学力の高さと遊星爆弾の危険性を感じた。
　もし、あれがミッドに降り注げば、ミッドは二重の意味で、崩壊することになるのだから・・・・
「そういえば、桜花さんから魔力の反応があるのは、分かったけど、彼女の母親の加奈江さんはどうなの？」
「彼女の母親である加奈江さんからは、魔力の反応は感知できませんでした。恐らく桜花さんは非魔導師との間で稀に生まれる。魔力保持者なのでしょう。ですから本人も自身が魔力を秘めていると言う事は恐らく自覚できていないと推察されます。それに彼女の周囲からは魔力の反応はあってもデバイスの反応は一切ありませんでした」
「そう・・・・」
　ギンガは自分の母に似ている人物の娘が魔力を持っていたのだから、その母親も魔力を有しているのかと思ったのだがどうやらあてが外れた様だ。
　それに魔力を有している桜花自身が魔力の存在を認知していないのであれば、此方から事情を聞くまでもないだろうと判断した。
　朝食の席で、ギンガは良馬の姿が見えないことに気づき、源三郎に訊ねた。
　良馬は昨日の夕食の時にも中嶋家には帰ってこなかった。
「あ、あの良馬さんは？」
「月村は、昨日から野暮用で、まだ帰っていないんだよ」
「そうなんですか・・・・」

ギンガは良馬が艦長と言う職柄、報告書の作成や提出に時間がかかっているのかな?と、思っていた。
「良馬さんの事が気になるんですか?」
桜花が首を傾げてギンガに訊ねてくる。
「そ、そんなんじゃなくて、ただちょっと気になっただけよ」
ギンガは慌てて否定するがその頬はほんのりと赤い。
「はい、お待たせ」
そんな中、加奈江が朝食の乗った皿をテーブルの上に置き始めた。
昨日の夕食同様、食糧事情が切迫しているので、ミッドの様に特盛と言うわけではなかったが、ギンガの皿に盛り付けられている料理の量は少し多かった。
「あ、あの・・・・」
ギンガは自分の前に出された料理が乗る皿と加奈江を見比べる。
「えっ?あっ、私と似ていたから、沢山食べると思ったんだけど、多かったかしら?」
「いえ、そうではなく、良いんですか?その・・・・今、地球は食糧も少ないって聞いたので・・・・」
「食べられる内は思いっきり食べなさい。それに貴女はお客さんなんだから、遠慮することは無いわよ」
と、加奈江は言うが、ギンガとしてはあまりにも居た堪れない。
母に似た容姿はともかく、大食いだった部分も受け継いだ自分の体質がこの時は恨めしと思ったギンガなのであった。
中嶋一家+ギンガ、リニスが朝食を食べていると、電話が鳴った。
「はい、中嶋です」
加奈江がその応対に出ると、
「ええ、居るわよ。あなた」
加奈江は受話器を源三郎に渡す。
「ん?誰からだ?」
「月村君から電話」
「そうか・・俺だ・・・・うむ・・・・そうか、あの話を受けてくれたか・・・・うん、分かった。引っ越しや書類の手続きは此方で手配しよう。それで

近い内に来るのかい？・・・・分かった、そういう事なら早い方がいいだろう。それじゃあ待っている」
源三郎が電話の受話器を戻すと、
家族の皆が、源三郎に視線を向ける。
「お父さん、何かあったの？」
先程の電話の内容が気になったのか、桜花が源三郎に訊ねてくる。
「うん。月村君の友人の妹さんがこの前の冥王星での戦いでお兄さんを亡くして天涯孤独になってしまってね」
源三郎が良馬の友人の妹（高町紅葉）の事を説明すると、加奈江はもちろんの事、桜花も黙ってしまった。
例え、小学生でもこのご時世だ。大人たちの不安を敏感に察知している。
そして天涯孤独になってしまったその子の事を思い、加奈江も桜花も黙ってしまったのだ。
桜花としては大好きな父や母が死んで自分一人で生きていかなければならない事など考えたくもなかった。
「それで、その子はどうなるんですか？」
加奈江が源三郎に訊ねる。
「昨日、月村君と一緒にその子に戦災孤児育英法の適用を薦めてきてね、さっきの電話はその子が戦災孤児育英法の適用を受けるという知らせだったんだよ」
「あの・・・・」
「ん？何かな？」
源三郎が先程かかってきた電話の内容を話しているとギンガが質問してきた。
「戦災孤児育英法って何ですか？」
「戦災孤児育英法っていうのは、戦災遺児や孤児を軍人や裕福な家庭で養育する法で、十五歳までの養育期間中は政府から養育費が貸与される」
「何故、軍人なのですか？」
裕福な家庭と言うのであれば話は分かるのだが、そこに何故軍人が

含まれるのか疑問に思い軍人の部分について質問するギンガ。
「この戦時下のご時世、軍人の家庭が職としては最も安定しているからね。食糧事情も教育事情も・・・」
「はぁ～確かに・・・」
源三郎の説明に何処か納得するギンガ。
実は管理局にも似た様な制度は存在していた。
妹の親友、ティアナ・ランスターもそのミッドにおけるその制度を利用していた。
「でも、軍人ならば誰でも良いわけじゃ無いんだよ。階級は尉官以上でなければならないし独身の軍人は対象外で毎月保護観察日誌を提出し健康診断を受けさせなければならない」
源三郎は戦災孤児育英法の説明を解かりやすいギンガに説明する。
戦災孤児育英法にて、保護した児童を性的暴行や虐待から防ぐ為に、こうした管理を防衛軍は徹底していた。
「加奈江さん、それで・・・」
「分かっています。その子を家で保護をするのでしょう？」
「あ、ああ・・・」
「構いませんよ。こんなご時世ですもの。子供たちは地球の希望ですから。そしてその子供たちを育むのは私たち大人の当然の役目ですからね」
加奈江はニッコリと笑い新たに増える中嶋家の一員を喜んで受け入れた。
朝食が終わると源三郎はその子を迎えに行く為、自宅を出た。
桜花は例え、地球が戦時下でも学校はちゃんとあるので学校へと向かった。
救助者であるギンガは地球では仕事も学校もないので部屋にいた。
しかし、地球が危機に瀕し皆が苦労している中、自分だけがこうしてのうのうと過ごしていることにギンガはモヤモヤとした思いを抱いていた。
それから夕方になり、桜花が帰宅して少し時間が経った頃、
「マスター、極めて微弱ですが、魔力反応とデバイスの反応を確認。此

方に接近してきます」
と、ブリッツ・キャリバーが信じがたい内容を報告してきた。
「えっ？」
ギンガは思わず唖然とする。
この地球はＡＭＦが充満して居る筈なのに・・・
それにデバイス!?
地球にも自分やリニス以外にデバイス持ちの魔導師がいたのだろうか？
「まさか、桜花さんの他にまだこの世界にも魔力保持者が!?それにデバイスを持っているって事はやっぱり魔導師って事!?」
「反応は尚も此方に接近してきます」
ギンガが窓から辺りの様子を窺っていると中嶋家が所有している車が玄関前で止まる。
「マスター、魔力反応はこの家の前で止りました。魔力反応は現段階でＢＢＢクラス以上です!!」
「それじゃあ、あの車に!?それにこの状況下でＢＢＢクラス以上って言ったら、ミッドだとＳクラスじゃない!!」
ギンガが窓からジッと玄関前の様子を窺っているとまず車からは良馬が降り、後部座席のドアを開けるとギンガの顔は驚愕の表情になった。
「な、なのはさん!?」
車の後部座席から降りてきたのは妹の恩人であり、管理局のエースと名高い高町　なのはに似ている少女だった。
最もなのはと違い髪型と年齢に違いが見受けられる。
しかし、このなのはに似た少女が何者なのかギンガにとっては、十分に興味を引く人物だったので、ギンガは急ぎリビングへと降りた。
リビングにて、中嶋家のメンバー＋良馬、リニス、ギンガの全員が集合し、源三郎が紅葉を皆に紹介した。
「紹介しよう。今日から一緒に住むことになった、高町紅葉ちゃんだ」
「た、高町紅葉です。よ、よろしくお願いします」
少し緊張しているのか声が固い紅葉。

「よろしくね、紅葉ちゃん。私は中嶋　加奈江って言うの。　私の事はお母さんと思ってもいいのよ」
　加奈江が微笑みながら紅葉を迎える。
「は、はい」
「中嶋桜花ですよろしく」
「私は、此処で、お世話になっているギンガ・ナカジマです。よろしくね、紅葉ちゃん」
（っ!?ギンガ・・・どうして此処に・・・？）
　紅葉はギンガの顔を見て物凄く驚いていた。
（でも、なんか最後に見た時よりも若干若い様に見えるわ・・・どうして？）
　そして前世での死に際に見たギンガよりも目の前のギンガの方が若く見えた。
「えっと・・・どうかしたのかな？」
　自分の顔を見て驚いている紅葉に対してギンガは恐る恐る訊ねる。
「あっ、いえ、なんでもありません」
　紅葉の紹介を終えた後、源三郎と良馬は防衛軍司令部へ仕事に向かった。
　夕食の準備の時、紅葉はまだ小学生ながらも高レベルの家庭スキルを発揮した。
　桜花自身も普段から家の手伝いをしているらしく家事レベルは高かった。
　夕食後、ギンガは紅葉に少し話がしたいと言って部屋に紅葉を招いた。
「ごめんね、付き合わせちゃって」
「いえ、大丈夫です。それで話と言うのはなんでしょう？」
　自分の知る、恩人兼有名人と酷似した容姿の少女・・・しかも、このＡＭＦが充満している環境で、Ｂクラスの魔力を有している少女。
　それに桜花と違いデバイスを所持している。
　管理局員として気にならない筈がなかった。
　回りくどいことは止め、ギンガは率直に核心に突っ込んだ。

「紅葉ちゃん、貴女、魔導師なんでしょう？」
いきなり「貴女、魔導師でしょう？」と言われたら、普通は「何言ってんの？この人？」と、思われるかと思いきや紅葉は、
「魔法を使う人を魔導師と呼ぶのであれば、確かに私は魔導師になりますね」
と、動揺した様子もなく、淡々と答えた。
しかも自らが魔導師である事も認めた。
「私が魔導師かどうか、聞いてくると言う事はギンガさんも魔導師なんですか？」
（まぁ、知っているけどね）
知っている事実ながらも紅葉はあくまでも初対面のふりをする。
「ええ」
紅葉の問い返しにギンガは頷く。
「私は、その魔法のある世界で治安維持活動をしている仕事に就いているの。今回、その活動中に事故でこの世界に漂流して、そこを月村さんに助けてもらったの」
「魔法の世界・・ですか？」
（うん、知っているよ。私も前世ではその世界に住んでいたんだし・・・・）
紅葉は前世ではそのミッドにてギンガの同僚だったのだ。
しかし、ギンガは話の中で敢えて管理局で有名人となっているエース・オブ・エース、高町なのはについては話さなかった。
紅葉となのは・・この二人がどう関係しているのか、まだ分からなく、それになのはの事を説明しようにも、ギンガはなのはの写真等を持っていなかったからである。
紅葉自身もギンガに色々聞きたかったが、此処で話した所で信じてもらえないだろうから彼女も敢えてミッドについて何も聞かず、知らないふりをした。
「成程するとこの星も、もう一つのギンガさんが知っている地球同様、魔法文化はそのミッドチルダ程発展していないので時空管理局のカテゴリーでは管理外世界と言う事になるわけですね？」

「そういうことになるわね」
　そう言いながら、ギンガはポケットから紫水晶状のペンダントをテーブルに置く。
「私達、魔導師はこの『デバイス』と呼ばれるモノで魔法を制御しているの」
　すると、そのデバイスがチカチカと点滅し、話し始めた。
「初めまして、ミス、クレハ。私はギンガ・ナカジマのインテリジェントデバイスの『ブリッツ・キャリバー』と申します」
「初めまして。私は高町紅葉。よろしくね、ブリッツ・キャリバー」
　そう言うや、紅葉は首から提げていたネックレスを外すとテーブル上に置く。
　すると、銀色の細い鎖に繋がれていた大きな黒真珠がチカチカと明滅し、
「お初にお目にかかる。私は高町紅葉の自律魔法制御媒体（デバイス）、『ルシフェリオン・アカツキ』である」
　渋い中年男性の明瞭な日本語の声でそう言った。
「・・・・」
　名前と音声の多少ギャップがあり、ギンガがどうリアクションすればいいのか困っていると、
「ふむ、見たところ、名前と声が合わなくて驚いているようだが、私がこの星に来たのは４０年以上前で、最初の主（レディー）は今のマイレディの亡き母上なのだ」
「えっ!?」
　これには、ギンガも驚く。
　自分達の持っているインテリジェンスデバイスはその持ち主一人一人限定にカスタマイズされたもので、主（マスター）が死亡したり、何らかの理由で魔法を使えなくなると、他人には転用することができず、そのまま廃棄されてしまう。それがたとえ実子であっても例外ではない。
　ストレージの場合はＡＩが組み込まれていない為、メンテナンスによってはそれも可能である。

現に自分と妹のスバルは母の遺品であるリボルバーナックルを使用している。
ユニゾンデバイスの場合は適合者ならば、使用可能らしいが、現在確認されているユニゾンデバイスは、八神　はやてのリインフォースⅡのみである。
しかし、今、ギンガの目の前にあるデバイスはコミュニケーションをしている事から、ＡＩが搭載されているインテリジェンスデバイスに属する。
と言う事は、『ルシフェリオン・アカツキ』はミッドのデバイスとは多少、違う構造をしている様だ。
「無論、単に肉親で魔力を持っているからといって、無条件に継承されたわけではない。私が彼女を新たな主（レディー）と認めたからこそ、だ」
「そうなの!?」
ルシフェリオン・アカツキの言葉に自分やスバルが使っているリボルバーナックルもちゃんと自分をマスターとして認めているのだろうか？と思った。
声は出さずとも、もしかしたら不満を持っているかもしれないからだ。
「それで、貴公に問うが、お主は、レディーが魔導士とやらだと知って、どうするつもりなのだ？」
ギンガは一瞬絶句したが、すぐにその意味するところを理解した。
慢性的に人材不足である時空管理局にとっては、若くて優秀な魔導師は喉から手が出るほど欲しい人材だ。
実際、本局の執務官も捜査等で赴いた任地で将来有望そうな金の卵や原石を探してスカウトしてくることがある。
管理外世界の住民ながら管理局を代表するエース魔導師になった高町なのはや機動六課を発足した八神はやてがそのいい例だ。
しかし、それらを行うのは主に〝海〟の所属の局員であり、〝陸〟の所属の・・まして下士官のギンガにはそこまでの権限はなかった。
いや、それ以前に自分は救助者なのだから、そんな事を考える事さ

え失礼なのだ。
「私は紅葉を管理局にスカウトしたりはしない。それは約束するよ。ただ、大きな魔力反応があったから、少し気になっただけなのよ」
「了解した。どうやら失礼な事を聞いたようだ。すまぬ」
ルシフェリオンはギンガの言葉を信じた。
「ううん。ルシフェリオンの気持ちも分からない訳じゃないから」
時空管理局は、管理外世界の住民でも優秀な魔導師資質がある者はスカウトすることを厭わないが、この世界では、年端のいかぬ子供が軍隊や警察組織で働く事を法律で固く禁じている。
それに本来、管理世界の揉め事に管理外世界の人を巻き込むのは、気が進まなかったからである。
新暦６７年に起きた高町なのは（当時十一歳）撃墜事件がそのいい例だった。
その後、二人と二機はしばし談笑していたがギンガは年下の筈の紅葉がまるで同じ世代の同僚と話している様な感覚だった。
それと同時にある事に気づく。
「そういえば、ルシフェリオンのメンテナンスはどうやっているの？」
ミッドではデバイスのメンテナンスを専門に扱う部署があるがこの地球にその様な部署があるはずもない。
では、どうやってメンテナンスを行っているのだろうか？
それに自分も愛機を持っている以上、ここでのメンテナンス方法を聞いておかなければならない。
「今度、見せてあげます」
と、紅葉は微笑みながら言った。
後に、紅葉のデバイスのメンテナンス方法を見たギンガとブリッツ・キャリバーはその方法に驚愕することになった。

八話　イズモからヤマトへ・・・ヤマト計画始動

三笠　は　えいゆう　同様、フルメンテナンスとなり別命あるまでは乗員は休暇ないし、地上勤務となった。

そんな中、

「新型機？」

良馬は実家である月村家が所有する会社の一つ、『月村航空』から新型機が出来たので見に来てほしいと連絡があり、地上にある航空機格納庫へ向かった。

良馬は士官学校時代にパイロットコースも受講しており、航空機自体にもそして宇宙空間や空を飛ぶことも大変好きだった。

事実最初に軍に任官した時は、古代守同様、宇宙パイロットだった。

新型機が置いてある格納庫では、月村航空の社員が良馬を待っていた。

「これが・・・」

「はい、我が月村航空、南部重工そして揚羽電子、日本を代表する三社が共同開発した新型機〝コスモゼロ〟です」

良馬の目の前には新型機〝コスモゼロ〟が三機、置かれていた。

「対遊星爆弾用の迎撃機ですか？」

「いえ、艦上戦闘機に開発された機体で、この内、二機は近々完成する新型戦艦に搭載される予定だそうです。残り一機は、良馬さんが使って良いと、月村総帥から指示がきています」

「忍さんから？」

新型機を紹介された良馬は、その後、機体から離れた場所で社員の人からこの新型機のスペック等の説明を聞いていた。

そしてその格納庫では、先日の病院での沖田提督暴行未遂により、格納庫の罰掃除を命じられた古代と島がおり、格納庫の掃除をしていた。

この時、古代と島は良馬から死角の位置にいた為、互いの存在に気付かなかった。
「すまない、島」
古代は格納庫掃除を命じられてからは必ず一度はこうして島に謝罪の言葉をかけている。
島は暴行未遂の件には無関係なのだが、連帯責任と言う形でこうして罰掃除をする羽目になった。
「まぁ、いいさ。これはこれで、学生時代を思い出すし、詫びなら今度、何か奢ってくれ」
「ああ」
しかし、島は古代に文句も言わず、掃除に付き合ってくれた。
「ん？」
掃除をしていた古代がモップを動かしていた手を止めた。
「ん？どうした？古代？」
「これ、見たことのない機体だ・・・・」
古代の目の前には見慣れた１００式偵察機ではなく今まで見たことのない機体が置かれていた。
主翼と上下の垂直尾翼の十文字翼。機首部の両側面と下面の計三箇所に、姿勢制御用の噴射ノズルを持つ変わった機体だった。
「防空任務用の試作機じゃないか？」
地上の格納庫に置いてあると言う事は、対遊星爆弾ないし、対ガミラス地上部隊迎撃用の戦闘機かと思った二人だった。
古代は新型機が気になりながらも格納庫の掃除に勤しんだ。
その頃、防衛軍司令部では、
「ニューヨーク交信不能、エネルギーが尽きた模様」
「パリ、正午より沈黙」
「ケニア、パニック状態に陥っています」
「モスクワ、〝さよなら〟を打ち続けています」
「北京、リオデジャネイロ、出力低下、電波キャッチ不能」
「関東地区、放射能さらに０．５㎞降下」
司令部の通信室では世界各国の情報が寄せられているが、どれも絶

望的な知らせばかりであった。
そんな通信室の中を沖田　十三は只管歩き、一番奥の部屋を目指していた。
その奥の部屋では防衛軍司令長官、藤堂平九郎が待っていた。
「沖田君。例のカプセルだが、たった今解析が出来たよ」
部屋の中心にある解析機兼再生装置の中には古代達が火星で回収した例のカプセルがセットされている状態だった。
「そうですか・・・それで？内容は？」
「うむ、これから再生する・・・では、頼む」
「はい」
藤堂は部屋にいたオペレーターに再生するように伝えると、オペレーターは、コンピューターを操作してカプセルの内容を再生する。
カプセルは、最初は雑音で音声は聞こえてこなかったが、やがて、綺麗な女性の人の声が聞こえてきた。

親愛なる地球の皆さん・・・
私はイスカンダルのスターシア・・・
あなた方の星、地球は今まさにガミラスの手で、滅亡の淵に立たされています。
ガミラスの放射能によって、地球の全生物が滅びるのは後僅かに一年
彼らはそれを待っているのです
しかし、私どもの星には放射能除去装置、コスモクリーナーがあります
これを使う以外に地球を救う道はありません
しかし、残念ながら私がこれを地球に届けることはもう叶いません。
そこで私は、妹サーシアに超光速エンジン・・・波動エンジンの設計図を持たせました。
運良くこのメッセージがあなた方の手に渡ったら、このエンジンを組み立てて、イスカンダルへ来るのです。

私どもの星は、銀河系から隔てる事１４万８０００光年の彼方にあるマゼラン星雲にある恒星系サンザーの中にある惑星・・・。
私はあなた方が未知の苦難を克服し、ここへ来ることを信じています。
私はイスカンダルのスターシア・・・

スターシアと名乗る女性のメッセージが終わると、続いて通信室の大モニターに宇宙船のエンジンの設計図の様なモノが映し出された。
「沖田君、コレは？」
「光速を可能とするエンジンの設計図の様ですな・・・」
「信じても良いのだろうか？」
スターシアなる人物からのメッセージに藤堂は怪しむ。
相手は何の見返りも無く、ただイスカンダルと言う星に来れば、地球に充満する放射能を除去できる機械、放射能除去装置（コスモクリーナー）を渡すと言っている。
『無料（タダ）よりも高い物は無い』と言う言葉通り、何か裏があるのではないか思うのも無理はない。
もしかしたら、ガミラスの罠と言う可能性も捨てきれない。
しかし、沖田は、
「今は信じるほかないでしょう。この設計図のエンジンを大至急、製造してください」
と、スターシアのメッセージを信じた。
今の地球は正直に言って形振りなど構っている余裕はない。
地球に充満する放射能を除去する機械があるのであれば、是が非でも手に入れなければならない。
沖田は藁にも縋る思いから、スターシアのメッセージを信じたのだ。
沖田が藤堂にイスカンダル製の波動エンジンの製造を依頼した直後、
ウウウウウ～!!
ウウウウウ～!!

けたたましい警戒サイレンの音が鳴り響いた。
「どうした!?何事だ!?」
「非常警戒指令!!衛星軌道より侵入機を確認!!」
「エネルギー反応から見て、敵の偵察機と思われます!!」
「敵偵察機、防衛ラインを突破!!」
「くっ、こうも易々と迎撃態勢を急げ!!」
司令部では突然来襲した偵察機の対応に蜂の巣をつついたような騒ぎになった。
その騒ぎの中、土方は慌てふためくこともなく、ただジッと黙ってモニターを見ていた。
「敵偵察機の目標判明!!」
「どこだ!?」
「北緯３０度４３分　東経１２８度０４分、長崎県男女群島女島南方１７６ｋｍ・・・九州坊ノ岬沖の地点です!!」
（気づかれたか？）
敵偵察機の目標地点を聞き、土方は先程よりも目を細めモニターを睨んだ。
敵偵察機の知らせは格納庫でも放送されていた。
「・・・」
古代はガミラスが地球に来ているこの状況下、何もできない自分に無力さを感じ、そんな自分が許せないのか、顔を俯かせつつも、拳をグッと握った。
「古代」
そんな古代に島はヘルメットを投げた。
古代は島から投げられたヘルメットを受け取る。
「飛びたいんだろう？」
そう言いながら自分もヘルメットを手にした。
格納庫の整備員とパイロットの詰所にいた良馬の耳に航空機のエンジン音が聞こえてきた。
振り向くと、例の新型機の一機がエンジンを吹かして発進しようとしていた。

「試験飛行でもするのかな？」
「いや、一番機にそんな予定は無い筈ですが・・・？」
「えっ？」
　良馬はてっきりこれから試験飛行するのかと思っていたのだが、社員の話では今、発進しようとしている一番機には今日、試験飛行の予定はないと言う。
　良馬が首を傾げると、
「おい!!お前ら!!その機体から、降りろ!!そいつは・・・!!」
　近くにいた整備員が一番機のパイロットに怒鳴っているが、エンジン音で整備員の声はかき消されていた様で、一番機はそのまま格納庫から発進してしまった。
「あぁ～もう・・・!!」
　整備員は、「面倒な事が起きた」とでも言いたげな顔をしていた。
「どうしたんですか？」
　そこで、良馬はその整備員に事情を聞いた。
　元々試験飛行の予定がなかった一番機がいきなり発進してしまったのだから、何か不測の事態が起きたのかもしてない。
「どうもこうも、さっき此処で罰掃除をしていた新米士官どもが、ガミラスの偵察機が来たっていう知らせを聞いた途端、一番機で出て行っちまったんですよ」
「成程。それで、何か不味いことでも？一応アレは艦上戦闘機だから武装はついているのだろう？偵察機相手なら特に問題ないだろう？」
「それはそうなんですが・・・」
　整備員は何とも歯切れの悪い感じで言う。
「やはり何か問題が？」
「じ、実はあの機体、まだ整備途中でして、武装はおろか、飛行用のエネルギーも少ししか積んでいないんです」
「えっ？マジで・・・？」
「マジです」
　良馬は顔を引きつらせながら整備員に訊ねるが、整備員の方は至って真面目な顔をしているので、整備員が言っている事は間違いではな

いと言う事が分かる。
「すぐ、飛べそうな機体はあるか!?」
整備員の言葉に良馬は、先ほど飛び出していった新米士官たちを連れ戻そうと、整備員にすぐ飛べる機体は無いかと訊ねる。
「コスモゼロの零番機が整備・補給が完了しています。今日、良馬さんが試験飛行したがるかと思いまして」
「流石だ。後、予備のエネルギーカプセルも積んでくれ、鉄砲玉の様に飛び出していった新米君たちを徒歩で帰すわけにはいかないだろう?」
「分かりましたすぐに用意します」
整備員がエネルギーカプセルを用意している間に良馬はヘルメットを被り、コスモゼロ、零番機に搭乗した。
幸いここは航空機格納庫だったので、航空機用のエネルギーカプセルはすぐに用意出来た。
エネルギーカプセルを積み、良馬は、整備途中の機体で飛び出していった新米士官たち（古代と島）の後を追った。
その頃、格納庫から一足先に発進した古代たちはと言うと・・・・
「良い機体だ。今までのとは全然違う。これなら・・・・」
と、新型機、コスモゼロを称賛した。
「やっとお前らしくなったな」
と、後部座席から島が声をかけた。
この時、古代の表情は、今までの憂鬱感が漂う表情をしていたが、コスモゼロを操縦している古代の顔はまさに晴れ渡っていた。
「島まで来てくれることなかったのに」
「今の精神状態の古代一人を戦場に出すわけにいかないだろう?」
「ところで古代、坊ノ岬ってどこだ?」
「お前、特務航海科主席だろう?」
「日本の地理は宇宙船の操船には重要じゃないのさ」
どうやら島は宇宙海図の方は詳しくても、地球の地理にはあまり詳しくないようだ。
島の言葉を聞き、コスモゼロのコックピット内では笑い声が満ち

た。
「まぁ、行けばわかるさ。あと数分だ」
やがて、坊ノ岬近くにくると、
「レーダーに敵影を捕捉」
コスモゼロに搭載されているレーダーが敵の偵察機を捕捉した。
「いた!!あれだ!!」
やがて、肉眼でも敵の偵察機を確認できた。
「高速偵察機か・・・・やれるか?古代?」
「もちろんだ!!」
古代はスロットルを全開に吹かし、高度を上げ、敵偵察機の後方の位置出ると、敵偵察機もコスモゼロの存在に気づき、退避行動をとった。
「逃がすか!!」
古代はその言葉の通り、敵偵察機の後部に食らいつき、照準器で敵偵察機をロック（捕捉）し、武装のパルスレーザーのトリガー（引き金）を引くが、銃口からパルスレーザーが発射されることはなかった。
「あ、あれ?」
古代が慌ててシステムチェックをすると、メーターの一つに『銃撃不可』という文字が表示された。
「こいつ武装が乗ってない!!」
戦闘機なのに非武装状態だった事に古代はイラつく。
「お前らしくないミスだな」
島が古代を茶化す様に言う。
その間に敵の偵察機はオーバーブーストを吹かし、この空域からの脱出を図った。
「クソ、逃げられた」
古代は悔しそうに呟く。
しかし、敵偵察機の上方より、急降下してきたもう一機のコスモゼロからの攻撃を受け、敵偵察機は撃墜された。
「友軍機?」
「しかも、この機体と同じだ・・・」

古代達が敵の偵察機を撃墜したコスモゼロを見ていると、突然、古代達が乗っているコスモゼロが異常振動を起こし始めた。
「ん？あっ！システムエラーが出ている!!」
「は？」
島が後部座席からこの異常振動の原因を調べると、モニターの中心に「エラー」の文字が大きく表示された。
「すまん、この機体まだ整備途中だったみたいだ・・・・」
「島、オマエ―っ!!」
古代は絶叫しつつも、墜落だけは何とか避けた。
「硬着陸にはならずにすんだけど、こりゃ、怒られるなこりゃ・・・・」
何とか無事に不時着したコスモゼロを見ながら島が呟く。
大破とまではいかないが、不時着したコスモゼロは前輪の部分が拉げっており、左舷の翼部分も少し変形しており、修理が必要なのは明白だった。
「しかし、何でこんな所に敵の偵察機が・・・？」
古代がその場から少し歩き、小さな丘を越えると、
「あっ!?」
突然声をあげた。
「どうした？」
後を追った島も、古代が見ているモノを見て同じく声をあげた。
「あっ!?」
二人の目の前には、赤い土に埋もれた旧日本海軍の軍艦・・・それも超弩級の大型戦艦が静かに沈黙を保っていた。
二人が唖然としながら埋もれた戦艦を見ていると、先ほど、敵の偵察機を撃墜したコスモゼロが降りてきた。
パイロットはコックピットから出ると慌てて二人に近づいて来た。
「二人とも!!伏せろ!!」
近づいて来たパイロットはタックルするかのように二人を抱え込こみ、古代と島を強制的に地面に伏せさせる。
やがて、戦艦の主砲が動き出し、砲身から眩い光と共に青白い閃光が放たれると、それは一直線に空へと向かっていった。

すると、空の彼方で小さなオレンジ色の閃光と爆発音が聞こえた。
「い、一体何が・・・？」
「あの戦艦が何かを撃ったぞ・・・」
古代と島は何が起きたのか、理解できていない状況だった。
「ガミラスの空母がいたのさ・・・恐らく先程の偵察機の母艦だったのだろう」
「あ、貴方は？」
「失礼、月村だ。月村良馬と言う者だ」
「月村って、あの有名な月村グループの？」
島は月村と言う苗字に自分が思い当たる月村の名で間違いないかを尋ねる。
「まぁ、そうだけど、俺は俺、月村良馬の何者でもない」
「そ、それで、月村さん、今のは一体？あの艦が撃ったように見えたのですが・・・？」
「君たちは、防衛軍の軍人かな？そういえば、沖田提督の医務室であったね。所属は？」
格納庫で整備員たちが新米士官と言っていたが、念のため、確認をとる良馬。
「はい、特務空間戦術科の古代　進です」
「同じく特務航海科の島　大介です」
（古代・・・島・・・そうか、古代先輩の弟さんに、島中佐の息子さんか・・・それに特務科か・・・）
家柄上、様々な情報を知る良馬は彼らならば、話しても問題ないと判断し、まず、あの地面に埋まっている戦艦について話した。
「まず、あの戦艦だが、あれは、旧日本海軍の戦艦　大和　だ」
「やまと？」
「それって大昔に海に沈んだ戦艦の名前じゃあ・・・？」
「そう、地球連邦政府と防衛軍は、あの戦艦を使って新たな計画案を立てているのさ」
「新たな計画案？」
「それってどういう？」

「〝イズモ計画〟」
「〝イズモ計画〟？」
「ああ、ガミラスの様に地球以外にも知的生命体の存在が確認できたのだから、宇宙には地球に似た環境の星がある可能性もある。だから、あの艦で地球を脱出しようという計画だ・・・早い話、地球を捨てて宇宙へ逃げると言う事さ」
「地球を・・・・」
「捨てる・・・・」
　良馬から〝イズモ計画〟の話を聞き、再び唖然とする二人。
「そ、それじゃあ兄さんや今まで死んでいった人たちは・・・・」
「まったくの無駄死にって事になるね。俺もあの冥王星海戦で親友二人を亡くした」
「で、でもあの宇宙船一隻で地球にいる人を全員乗せるなんてとても無理なんじゃあ・・・？」
「そう、だから、あの艦に乗れるのは選ばれた人間だけ・・・そして君たちはその選ばれた人間だ」
「そ、そんなっ!?」
　本来、自分が選ばれた事に関しては喜ぶべきなのだろうが、大勢の地球の人たちを見捨てて自分たちだけで、地球を見捨てて、逃げ出すという事実を簡単に受け入れられない二人。
「近々、防衛軍司令部から詳しい事が通達されるだろう。それより、これ以上此処に長くいると放射能で体がボロボロになる。俺の乗ってきたコスモゼロには帰りに必要なエネルギーカプセルを積んである。一先ず帰ろう」
　良馬が停めてあるコスモゼロの下へ向かうと、二人もその後についていった。
　その後、エネルギーカプセルを入れ替えたコスモゼロ一番機は無事に格納庫へ帰ることが出来たが、古代と島は格納庫の整備主任にこってり絞られたのは言うまでもなかった。
「防衛ライン内の敵勢力は完全に排除されました」
「よし、警戒警報解除」

「了解」
防衛軍司令のモニターでは、先程行われていた戦闘の様子が映し出されており、ガミラス軍の空母を撃沈し、周辺に敵影が無いのを確認すると、警戒警報は解除された。
「こんなことでショックカノンの有効性を確認することになったが、迎撃判断は適切だった」
藤堂長官が今回の事態はやむを得ない事だったと呟く。
どの道、ショックカノンの試射もいずれ行わなければならないし、そのショックカノンがガミラス相手に通じるかも検証しなければならなかった。
結果は見ての通り、ショックカノンはガミラスの艦を撃ち抜いたことにより、有効性を証明した。
「ええ、ただ敵に此方の存在が知られたと見るべきでしょう」
土方が、今回の戦闘における短所を指摘した。

冥王星　ガミラス軍基地
地球に派遣した『ポルメリア』級強襲航宙母艦の撃墜は当然ガミラス軍基地でも把握していた。
「分析では、このスクラップに熱源反応と大質量の存在が感知されています」
「連中の脱出移民船の建造ドックか、本土決戦兵器か何かと言う事か」
ガミラス軍冥王星基地司令官、ヴァルケ・シュルツと副官、ゲルフ・ガンツは司令室のメインモニターに映る赤い地面に埋もれた戦艦の残骸を見ながら呟く。
「本国にはなんと報告をいたしますか？」
「報告はいい。強襲空母一隻が最前線で行方不明になることなどありふれた話だ。大きな戦果の前の小事となる。散った同胞には今は、堪えてもらわねばならん」
「では、此処へ艦隊を派遣しますか？」
「いや、動かぬ標的に物量を投じる必要はない。エネルギーの無駄だ」
「では、いかがいたしましょうか？」

「惑星間弾道長距離ミサイルの発射準備をしろ。総統閣下の許可が下り次第発射しろ」
「承知しました」
それから数日後・・・
良馬の言ったとおり、古代と島は防衛軍司令部の大運動場へ召集を受けた。
古代や島の他にも様々な部署から防衛軍軍人が召集を受けていた。
ただその中に、土方や良馬の姿はなかった。
「いよいよ、イズモ計画が発動するのか？」
「地球脱出船が完成したって事か？」
詳しい召集理由を知らされていない為、皆浮き足立っている。
そんな中、壇上の上に沖田十三が姿を現した。
「古代、沖田提督だ」
島の言葉を聞き、古代が壇上に目をやると、そこには確かに沖田十三の姿があった。
古代としては兄の件があり、沖田を未だに許しておらず、壇上の上の沖田を睨んでいた。
「諸君、今日集まってもらったのは他でもない。諸君らはイズモ計画の選抜者として、これまで特殊訓練を受けてきた者たちばかりである。その諸君に今日此処で正式に辞令を出す」
沖田の言葉を聞き、古代は例のイズモ計画が発動するのだと思った。
地球にいる大勢の人々を見捨てて自分たちだけで地球から逃げ出す計画・・・。
その計画に使用される艦の艦長が沖田であり、自分もその艦で地球と大勢の人々を見捨てて逃げていくのだと思うと、古代は胸糞が悪くなる気分だった。
しかし、次に発せられた沖田の言葉を聞き、一同は驚いた。
「一つ先に言っておく、今回発動される計画は、先に計画されたイズモ計画とは大きく変更されている」
「変更？」

一部の者たちは知っていたイズモ計画が変更される事に驚愕と戸惑いが生まれる。
地球を脱出する計画ではないとすると、一体どのような計画なのか？
一同は沖田の次の言葉を静かに待った。
「今回の計画内容は、周知の地球脱出移民を目的とした計画ではない。イズモ計画はこれより、ヤマト計画と名を変え、発展・吸収された。諸君らには次の音声映像を聞き、括目してもらいたい。これは先日の冥王星海戦中、火星に不時着したガミラスとも違う別の星の使者からもたらされたものだ」
（あのカプセルの事か・・・）
古代にはこれから流される音声の出所に心当たりがあった。
それは島も同じ様子だった。
そして、スピーカーとからスターシアのメッセージが流され、用意されたスクリーンにはスターシアの姿が映し出された。
スターシアのメッセージを聞いた古代と島はまさか、あの時のカプセルが地球を救うかもしれない重要な存在なのだと思わなかった。
メッセージを聞いた後、戸惑う者が多かった。
そりゃ、今地球全体を包み込み、地球の地下をも汚染している遊星爆弾の放射能を除去できる装置なんて眉唾物にしか聞こえないからだ。
しかも、その星に行けばタダでそれを渡すと言う。
司令部の幕僚同様戸惑いのも無理はない。
「メッセージにあったようにイスカンダル星からの技術供与を受けて我々は恒星間航行用のエンジンを搭載した宇宙船を完成させた。諸君らの任務はこの宇宙船に乗り込み、イスカンダルへと向かい放射能除去装置、コスモクリーナーを受け取り、地球まで戻る航海だ・・・これがヤマト計画の全貌だ!!」
ざわめく声は出さぬもやはり皆、戸惑いが隠せない様子だ。
「しかし、往復２９万６千光年の旅は、未だ地球人類が経験したことのない航海だ。それを地球人類絶滅前の一年以内に行わなければなら

ない。当然、ガミラスの妨害、未知の宇宙生物や宇宙気象の障害もあり、わしは諸君らの生命の安全を保障できない。故にコレは強制ではなく、志願制である」

太平洋戦争当時、日本軍は特攻隊を志願制と言って隊員を募集したが、その実情はほぼ強制に近いモノだったが、今回のヤマト計画においては、完全な志願制だった。

その根拠は沖田の次の言葉によるものだった。

「出向は明後日、〇六〇〇、坊ノ岬から出航する。遅れた者は残留希望者とみなす。以上だ」

沖田が、集まった者に敬礼をすると、皆は沖田に返礼をする。

やがて、沖田が壇上から姿を消すと、多少のざわつきが起こった。

続いて、ヤマトの各部門の責任者が読み上げられた。

もちろん、これはまだ仮の人事内定であり、ヤマトに乗艦したその時に、正式な人事となる。

もし、ヤマト出航当日にその者がヤマトに乗艦しなければ、即座に別の者がその部門の責任者にあてられる。

艦長　沖田　十三
技術班班長兼副長　真田　志郎
機関長　徳川　彦左衛門
機関長補佐　山崎　奨
次席機関長補佐　藪　助治
航海長　島　大介
航海長補佐　太田　健二郎
戦術班班長（砲雷長）　古代　進
次席砲雷長　南部　康雄
空戦隊長　加藤　三郎
副空戦隊長　山本　明夫
通信長　相原　義一
船務長　森　雪
主計科長　幕ノ内　勉

厨房科チーフ　平田　一

と、各部門の責任者の名前が読み上げられていく中、古代は自分がヤマトの戦術の班長に抜擢されたことに戸惑っていた。

九話　ヤマト発進

特別訓練を受けた軍人たちがヤマト計画の説明を受けていたその頃、冥王星のガミラス軍基地では、
「総統閣下のお許しが出た。超大型ミサイル発射準備」
「はっ!!」
基地司令、シュルツの命令の下、超大型ミサイルが発射体制に入った。
「超大型ミサイル、発射台に設置完了!!発射準備よし!!」
「目標、地球経度、北緯３０度４３分　東経１２８度０４分　沈没艦」
「発射秒読み始め!!」
「・・・・6・・・・5・・・・4・・・・3・・・・2・・・・1・・・・0」
発射装置が作動すると後部の推進口から閃光と轟音をあげて、大型ミサイルはガミラス冥王星基地を飛び立っていった。
「焦らず、迅速かつ正確に最善を期す・・・ガミラス軍人に失敗は許されない」
飛び立っていく大型ミサイルを見ながらシュルツはそう呟いた。

大型ミサイルの目標は地球・・・坊ノ岬沖・・・
戦艦　大和・・・

ヤマト計画の説明を受けた者たちは、その後、旅立ちの為の準備に取り掛かった。
荷物を纏める者
家族との別れを惜しむ者
友人や恋人と残り僅かな日数を過ごす者
など、様々であった。
「どうしても行くのか?」
防衛軍司令部のオフィスビルでヤマト艦長の沖田は自分の執務室で出発の為の荷造りをしていた。

その執務室には土方と何故か、土方に出頭命令を受けた良馬の姿があった。
そして、土方は荷造りをしている沖田に訊ねる。
「ああ」
「その身体でか？」
「・・・冥王星海戦で負った傷なら大したこと無い」
「俺の目は節穴ではない!!貴様とは一体何年の付き合いだ!!」
「・・・・」
沖田と土方のやり取りから良馬は沖田が冥王星海戦で負った傷以外にも身体に病を抱えているのだと察した。
しかし、その病がどんな病気なのか？
そしてその進行程度はどの程度なのかは、分からなかった。
この時、沖田の体は宇宙放射線病と言う病気に侵されており、とても２９万６千光年の長距離航海に耐えられる体なのか正直判断に困る状況だった。
沖田の身体の事を知っているのは彼の主治医である佐渡と旧知の間柄の藤堂の二人だけだった。
しかし、沖田との付き合いが長い土方は沖田の体について何らかの病気を患っている事を見抜いた。
当然、沖田の病気の事を知っている佐渡と藤堂は彼を止めようとした。
ヤマトの艦長を決める際、藤堂は沖田か土方のどちらかに決めあぐねいていたが、沖田本人の強い希望でヤマトの艦長は沖田となった。
しかし、土方は沖田をみすみす死なせたくない一心で、今こうして沖田の説得にあたっていた。
「俺に任せろ、引くのも勇気だ」
「土方、２９万６千光年の旅はわしの命を奪うことになるかもしれん。しかし、イスカンダルへの旅は命をかける価値は十分にあると思う。だからこそ、わしは行く!!行って必ず、地球へ帰ってくる」
「・・・・」
沖田と土方、二人の男が真剣な表情で互いの目を見る。

そして、
「そうか・・・そこまで言うのでは、もう何も言うまい」
「ありがとう」
土方は沖田の命を賭けてまでこの航海に志願する固い決意の前に等々折れた。
「月村、お前は良かったのか？」
次に土方は良馬に話題を振った。
「お前にもヤマトの副長の話が来ていたのだろう？何故、振った？」
そう、土方が言う様に実は良馬にもヤマト副長の内定が出ていたのだが、良馬はその話を断っていた。
故に先日行われたヤマト計画の説明会にも参加していなかったのだ。
「自分は、親友との約束がありますので・・・」
親友・・・それは沖田の息子、沖田一と高町恭介の事を指していた。
そして、その親友の一人、高町恭介から別れ際、「妹を頼む」と言われ頼まれたからには、良馬はその妹を放って地球を離れるわけにはいかなかった。
「まぁ、臆病風に吹かれたと思われても仕方がありませんが、自分は今、どうしても地球を離れるわけにはいきませんので・・・」
戦場で良馬と恭介のやり取りを聞いていた沖田は、事情を考慮し、ヤマトの副長を辞退する良馬の願いを聞き、真田に技師長と副長を兼務してもらったのだ。
「そうか」
土方もその辺の事情を考慮し、この後は何も言わなかった。
「沖田、必ず帰ってこい」
「うむ、地球の事を頼む。月村君もな」
「はい」
「アレの事もよろしくな、若いが故に少々血の気が多い奴でな」
土方の言う「アレ」とは古代の事を指すのだと沖田にはすぐに分かった。
「ああ」

「それともう一つ、伝えることがある。月村、報告しろ」
「はっ、冥王星宙域に展開している偽装式の偵察衛星が敵の動きを捉えました。大型の弾頭式ミサイルが一発、地球に向けて発射されました」
「遊星爆弾ではないのか？」
「はい。ロングレンジのピンポイント攻撃兵器です。地球到達時刻は明日の〇六〇〇・・・この予想時間から察するに、敵の攻撃目標は恐らく・・・・」
「出航は早められないのか？」
ここまでの良馬の報告を聞き、沖田も土方もガミラスの攻撃目標が何処なのかを察した。
「急がせてはいるが、それでも省けない工程はある。エンジンの動かない戦艦など、瀕死の狸同然だ」
沖田はまるで苦虫を噛み潰したような顔でそう呟いた。
言いたいことを言って、伝えることを伝えた土方と良馬は沖田の執務室を後にし、防衛軍司令部庁舎の通路を歩いていると、
「月村、三笠の状況はどうなっている？」
「整備、補修は間もなく終了します」
土方が三笠の状況を聞いて来たので、良馬は三笠の現状を土方に伝える。
「では、飛べるのだな？」
「は、はい」
この時良馬は、何か嫌な予感がした。
「そうか・それなら月村、ちょっと付き合え」
「は、はい？」
不敵な笑みを浮かべる土方にたじろぐ良馬だった。
ヤマト出航日、ヤマト乗艦の任を受けた者達は一人の欠員を出すことなくヤマトに集合し次々とヤマトへと乗艦していった。
人員の乗艦、航海に必要な機材、物資の搬入、エネルギーの充填・・・・。
出航に向けての準備は着々と進んでいたがそれと同時にガミラス

の大型ミサイルも着々とヤマトに迫りつつあった。
　出航作業が進められていく中、古代はヤマトの艦長室にいる沖田を訪ねた。
「何だ？」
「自分は何故二階級特進の上に戦術長を拝命したのですか？その資格が自分にあるとは思えません」
　古代はあの説明会から抱いていた疑問を沖田にぶつけた。
「経歴、能力、資質。お前を始めとした責任者の全員、わしがそれを見て十分責務を果たせると判断した・・・だが、人材の多くを失った結果の選任であるのも事実だ。本来お前が座る席の男もわしが死なせてしまった」
「え？」
「本来、ヤマトの砲雷長、戦術長になる筈だったのはお前の兄だった」
　沖田の言う通り、本来、ヤマトの砲術長は古代の兄である守で、古代は次席砲雷長、副長には良馬をあてる人事を沖田は構想していた。
　しかし、その構想は冥王星海戦で守や大勢の宇宙戦士達が戦死した事により変更を余儀なくされた。
「では、何故あのような無謀な作戦を実施したのですか？司令部や貴方が自分達に『死ね』と言っていると・・・皆、そう思ったに違いありません」
　沖田の脳裏に冥王星海戦にて、恭介が同じような事を言ったのを思い出した。
「戦場は常に命がけだ。敵の基地を殲滅せんとする気勢なしに作戦の成功はない。たとえそれが無謀だとしても、敵を討つ、地球を守る。その気持ちに濁りなどあるものか」
「・・・兄の意志は弟である自分が引き継ぎます。でも、それだけでなく、貴方と言う人を見るために乗艦させてもらいます」
　と、意気込んだ古代であったが後に徳川機関長から沖田が冥王星海戦において、一人息子を亡くしたことを知り、彼は多少、沖田に対する態度を改めた。
　電力が通り、レーダーが作動したヤマトのレーダーでもガミラスの

大型ミサイルを捕捉した。
しかし、肝心のエンジンがまだ始動しない。
乗員の中に焦りが生じ始めるが沖田の一喝をあび、冷静さを取り戻すと皆は、落ち着いて出航作業を続けた。
やがてミサイルが月軌道に差し掛かった時、ミサイル以外の存在をヤマトのレーダーが捉えた。
「月軌道に艦影を捕捉・・・これは三笠です!!」
雪の報告を聞き、沖田は月軌道の映像をモニターに出すように指示、第一艦橋の大型モニターには月軌道を航行する三笠の姿が映し出された。

宇宙巡洋艦　三笠　艦橋
「敵弾道弾の回転軸を狂わせ軌道を変える。全火器を一斉集!!」
三笠の艦橋で、土方が命令を下す。
「照準良し!!射撃準備良し!!」
「撃てぇ!!」
三笠の主砲とミサイルが一斉に発射され、ガミラスの大型ミサイルに全弾命中した。
残念ながらミサイル自体を破壊する事は出来なかったが、ミサイルの軌道をずらす事には成功した。
これでミサイルはヤマトへと行かないかと思われたが、ミサイルは暫く飛行を続けると、ミサイル本体に備えられていたスラスターにより軌道を自動修正した。
「ミサイル、軌道を修正しました!!」
「第二斉射急げ!!」
三笠が第二斉射の準備をしている中、
「高速プラズマの衝撃波来ます!!」
「総員対ショック体制!!何かに掴まれ!!」
衝撃波に備え、三笠は第二斉射を断念せざるを得なかった。
やがて三笠を物凄い衝撃が襲った。
「うわぁぁぁぁ!!」

「くっ・・・・」
その隙にミサイルは地球へと落下していく。
「すまん、沖田・・・」
今から全速で追撃しても間に合わない。
土方は悔しそうに沖田への謝罪の言葉を呟いた。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
第一艦橋のメインモニターには衝撃波から逃れる三笠の姿が映っていた。
「三笠、ミサイルの破壊に失敗!!」
「三笠、離脱していきます!!」
「土方・・・・月村・・・・」
「敵ミサイル、本艦への軌道変わらず!!ですが、着弾時間は一分五十秒遅れました」
ミサイルの動向を航海長補佐の太田が報告する。
「徳川君、エンジンの方はどうなっている?」
「充填率１０４％、いつでも火を入れることが出来ます」
「よし、波動エンジン始動」
「機関始動。フライホイール接続、室圧内１２０で安定」
機関長の徳川がエンジンの始動キーを作動させるとヤマトの波動エンジンがうなりを上げ始めた。
「波動エンジン回転数良好」
「船体起こせ、偽装解除」
やがて鉄屑姿だった戦艦　大和の表層部が剥がれ落ち始めるとその中から今までの地球型の宇宙戦艦とは違う形の艦が姿を現した。
「これが、あの赤錆びた沈没戦艦・・・・?」
モニターに映った自分達が乗艦している新型戦艦の姿を見た古代は信じられない様子だった。
「そうだ、かつての超弩級戦艦の躯を解き、蘇った姿・・・・宇宙戦艦ヤマトだ」
「ヤマト?」

「古代、ミサイルを迎撃する。主砲発射準備」
「は、はい」
沖田に言われ、古代は急いで主砲の発射準備を始める。
「発進準備完了」
ヤマトの舵を握っている島が沖田に発進準備が出来たことを伝えると、
「抜錨!!ヤマト発進!!」
「抜錨、ヤマト、発進します」
ヤマトの船体が地面から浮き上がると、陸とヤマトの船体を繋いでいたエネルギー伝導パイプが外されていく。
そして、後部のメインノズルが勢いよく噴射しヤマトは動き出した。
「ミサイル着弾まであと、５０秒」
「ショックカノン動力良し、側的完了!!」
「自動追尾装置セット完了!!」
「照準誤差修正右１度、上下角３度!!」
「目標、ヤマトの軸線に到達」
「発射!!」
「発射」
沖田の発射命令に古代は主砲の発射ボタンを押すと、ヤマトに三基ある、三連装四十六センチ砲から青白い九本の閃光がヤマトに迫りくるガミラスの大型ミサイルに向けて発射された。
ヤマトのショックカノンが命中したミサイルはたちまち大爆発を起こした。
ミサイルの爆発で物凄い熱量の爆炎と煙によりヤマトの姿は見えなくなった。

地球防衛軍　司令部
「高エネルギーの放射と爆発、衝撃波を観測」
「ヤマトはどうなった?」
「あの熱量と爆発です・・・恐らく溶けて蒸発してしまったかもしれま

せん」
「戦略の練り直しですな・・・」
　司令部では、ヤマトはミサイルの誘爆と衝撃波により溶けて蒸発してしまったのでは?と言う予測が立てられ、絶望感が司令部を包み込んだ。
「っ!?爆心地、近距離に飛行する物体アリ!!拡大します!!」
　しかし、爆炎の中から無傷のヤマトの姿が確認されると司令部では喝采が湧いた。
「ヤマトです!!」
「おおぉー」
「ヤマト、順調に飛行を続けています!!」
「頼むぞ・・・沖田君・・・」
　藤堂はモニター越しに遠ざかっていくヤマトに対して敬礼して、ヤマトを見送った。
　三笠はヤマトに並走し旅立つヤマトに対し発光信号を送った。
「貴艦ノ健闘ト航海ノ無事ヲ祈ル。生キテ帰リヲ待ツ」
　発光信号を送った三笠の乗員は皆、地球を離れマゼラン星雲の中にあるイスカンダルへと旅立つヤマトに対し敬礼をして、ヤマトを見送った。
　ヤマトは更に速度をあげ、イスカンダルへの長い航海の道へと旅立っていった。

　ヤマトが地球圏を離れていくのを見送っていた三笠に一本の通信が入った。

　宇宙巡洋艦　三笠　艦橋
「艦長、救難信号です」
「っ!?何処からだ?」
「月面からです」
「月面には確か、空間騎兵隊の演習基地が有った筈じゃ」
　井上が思い出したかのように言う。

「スピーカーに繋げるか？」
「はい。音声信号に接続します」
『此方月面、第七空間騎兵連隊。現在我が隊は、敵の攻撃を受け、月面に孤立せり、我が方の被害甚大。救援を乞う』
彼らは先日、ヤマトを偵察に来た強襲空母が搭載していた艦載機による攻撃を受けていたのだ。
月基地がガミラスの空母からの攻撃を受けたので、地球側はガミラスの空母の侵入を許してしまっていたのだ。
「確かに救難信号だ・・・航海長、針路変更。月面へ急行」
「了解」
永倉が針路を変え、月へと向かう。
「医務長」
「はい」
「たった今、月基地に居る空間騎兵隊から救難信号が入った。どうやら負傷者が多数いるようだ。至急、受け入れ態勢を取ってくれ」
「了解」
良馬は内線で医務室にいるリニスに負傷者の受け入れ態勢を取らせた。
やがて、三笠が救難信号の発信点へと着くと、駐屯していた第七空間騎兵連隊の将兵達は三笠へと収容された。
しかし、収容されたのは殆どが遺体ばかりで、連隊長も戦死していた。
第七空間騎兵連隊の将兵達を収容した三笠は地球への帰路へとついた。
その最中、

宇宙巡洋艦　三笠　艦橋
「間もなく月軌道を離れる」
「針路そのまま。機関、両舷半速」
「機関、両舷半速」
「おい!!何だ？貴様!?許可なく艦橋に立ち入る事は・・・」

「どけ!!話があんだよ!!」
艦橋への出入り口で何やら、騒ぎ声がした。
そして、艦橋へ空間騎兵隊の宇宙戦闘服を着た一人の大柄な男が手に沢山のタグを持って入って来た。
「アンタが艦長か!?救援がもっと早ければ、連隊は壊滅しなかった!!こっちの救難信号は受けていたんだろう!?何故もっと早く来てくれなかった!?」
男は艦橋に居た土方を艦長と間違えている様子で声を荒げる。
そして彼の持っていたタグは戦死した隊員のタグだった。
「艦長は俺だよ」
良馬は彼に自分が艦長だと教える。
「えっ!?じゃあ・・・」
男は自分が艦長だと思っていた人物が実は艦長でない事に気づき、唖然とする。
「地球防衛軍、士官学校校長兼日本艦隊総司令、土方大将だ」
沖田がヤマトの艦長になり、彼の役職であった日本艦総司令の座が一時的に開いてしまったため、その座を土方が引き継ぐ事がヤマト出航の日に決まった。
彼は一応土方が階級では上官に当たり、尚且つ艦長と間違えた事にすまないと感じたのか、姿勢を正して土方に敬礼した。
「ガミラスに勝利し、故郷に再び青い姿を取り戻す・・・我々はその任に着く特務艦護衛の為、展開していた」
土方は特に気にした様子も無く、三笠が月軌道に居た経緯を彼に話す。
「じゃあ、俺達はついでだったと言う訳ですか!?」
「そうだ」
「・・・さっきの艦か・・・何なんですか!?アレは!!」
彼も地球圏を旅立って行くヤマトの姿を見ていた様だ。
「こっちも命懸けで戦っているんだ!!聞く権利は有る筈だ!!」
「ヤマトだ」
「ヤマト?」

「そうだ、ヤマトだ・・・宇宙戦艦ヤマトだ。俺の親友の艦・・そして、人類最後の希望だ」
土方は彼にそう教えた。
後に彼・・空間騎兵隊第七連隊副連隊長、斎藤　始はヤマトに乗艦する事、また再び今回と似た様な経験をする事をこの時には知る由も無かった。

ヤマトがイスカンダルへの長い航海へと旅立って行ったその頃、ギンガの故郷であるミッドチルダでは、一つの騒動が起きていた。
本局の〝海〟と呼ばれる他の管理世界の治安維持、そして新たに管理世界になりうる世界の探査を目的とする本局、次元航行艦隊司令部では、今まさに蜂の巣をつついた様な騒ぎとなっていた。
「第５８探査部隊が突然連絡を絶ちました!!」
「どういう事だ?!」
「わかりません〝目標地点に到達これより調査を開始する〟の定時連絡を最後に連絡が途絶えました!!」
管理局が所有する次元航行艦隊の一つが連絡を絶ち遭難したのだ。

第５８探査部隊が遭難する少し前、大マゼラン星雲外縁部において、小規模の戦闘があった。
事の発端は、遭難した管理局第５８探査部隊が探査する宙域に転移を完了し、これより探査任務を開始しようとした時、探査部隊の前方に宇宙を航行する艦隊を発見した時まで時間を戻す。
第５８探査部隊の任務はその名の通り、新たに管理世界になりそうな世界の探索及びロストギアの探索だった。
第５８探査部隊の総数は旗艦のＸＶ級の次元航行の他、護衛として同型のＸＶ級の次元航行五隻、Ｌ級次元巡航艦十隻、探査船三隻の編成となっている。
しかし、本来管理局は艦隊を組んでの行動と言うモノは基本的に行っておらず、今回の編成は新人達の研修を兼ねての大規模な艦隊演習の様なモノだった。

「提督、目標地点に転移完了しました」
「後続の艦も全艦無事に転移を完了しました」
「うむ、本局への連絡は？」
「先ほど定時連絡をいれました」
　大マゼラン星雲外縁部に転移した第５８探査部隊は早速、探査任務を開始した。
　探査任務を開始した第５８探査部隊のレーダーが自分達以外に星の海を航行する船団を捉えた。
「提督、前方に艦影を捕捉しました」
「モニターに出せ」
「はっ」
　パネル画面には爬虫類、または両生類を思わせる生物的フォルムで黄緑色に光る目のようなくぼみなど、その独特的な艦影に濃緑色の塗装を施された艦船の姿が映し出された。
　一艦を除き、艦体には砲身はついていないが、明らかに武装と思しき物体が装備されている。
　それは、紛れも無く管理局がこの世から撲滅しなければと唱えている質量兵器に他ならなかった。
「通信員」
「はい」
「直ちに前方の艦隊に停船命令を出せ」
「えっ!?」
　提督の言葉に通信員は驚く。
　停船信号ではなく、その上をいく停船命令をいきなり出すとは思ってもいなかった為である。
　それ故に通信員は不安げに上官である提督へと問う。
「で、ですが、いきなり停船命令を出すと言うのは・・・」
「この次元の海（宇宙）は全て我が時空管理局の領海だ。その領海で質量兵器を持ち歩くなどもってのほかだ。直ちに停船命令を出し、臨検しなければ、秩序が乱れる。早くしたまえ!!」
「は、はい」

通信員はビクつきながらも前方を航行している艦船に停船命令を送った。
この第５８探査部隊を率いるヴィットーリオ・チェザーレ提督は管理局の中でも次元世界拡張・拡大派に属する局員だった。
次元世界拡張・拡大派は管理世界、管理外世界を問わず、すべての世界（有人惑星）は管理局の魔導師の手によって管理、運営されるべきだと言う主張を掲げ、もちろんその世界では質量兵器の存在などもっての外で、力は全て魔導師による魔力こそがこの世界に秩序と安定を齎すものだと主張している魔導士至上主義者の集まりと言ってもよかった。
一方、管理局の停船命令を受けたのは、グラーフ・シューバー准将率いるガミラス軍のパトロール隊だった。
「司令、前方に艦船反応があります」
「ん？どこの船だ？友軍か？」
「該当データにはありません」
該当データに無いと言う事は前方の艦隊は友軍でないと言う事になる。
最近、小マゼラン星雲において他の星系からの侵略が絶えず、グラーフ准将も前方の艦隊はその侵略者ではないかと思った。
「前方の不明艦より通信〝ダダチニ停船シ、当方ノ臨検ヲ受ケラレタシ〟・・・以上です」
大マゼラン宙域は本来ガミラスの領海であり、その領海内で友軍でもない不明艦からいきなり上から目線で停船命令を出され、更には『此方側の臨検を受けろ』などと言われれば、怒るか呆れるかのどちらかであった。
しかし、グラーフ准将は冷静に対処した。
「返信しろ、〝臨検ヲ拒否ス。当マゼラン星雲一帯ハ我、ガミラス帝星の領海デアル。当方ハ我帝星の領海ヲ侵犯シテイル。直ちに退去サレタシ〟とな」
「了解」
グラーフ准将の決断に若手の将兵は甘い判断なのではないかと思

う者いた。
　一方、ガミラスからの通信を受けた管理局側は、
「質量兵器にしか頼る事の出来ない野蛮人が!!我々管理局に『退去しろ』だと!?返信しろ!!我々が何者なのかを!!全く辺境の蛮族は我々、時空管理局の存在も知らぬのか!?これだから、野蛮人共は・・・これ以上此方の要求を拒否するようならば、あの辺境の蛮族共を殲滅しろ!!」
　ヴィットーリオはガミラスからの臨検の拒否と〝退去しろ〟という文面に激怒した。
　彼にしてみれば魔法を使えず、質量兵器にしか身の安全を守る術しかない、野蛮人で自分達魔導師よりも遥かに劣る劣等な存在に命令されたのだから、我慢がならなくて当然だった。
　ヴィットーリオはもう一度ガミラス艦隊に通信を送った。
　再び管理局から通信を受けたガミラスは、
「時空管理局?知らんな、そんな組織」
　初めて聞く組織の名から連中が、最近小マゼラン星雲に度々出没する侵略者ではない事が判明したが、領海侵犯は領海侵犯である。
　ガミラス側としては直ちに退去してもらう必要がある。
「通信内容からまるで自分達が神にでもなっているかのような内容ですね」
　幕僚の一人が管理局の電文を見て、呆れながら言う。
「前衛の一部を先遣させろ!!もし、相手が武力行為を行ってきた場合はこちらも相応の態度をとる!!」
　グラーフ准将はデストリア級宇宙重巡洋艦三隻を先遣に向かわせ、通信では退去を通達し続けた。
　ガミラスのこの行動に対し、ヴィットーリオは遂に武力により管理局の力を分からせてやろうと思い、先遣のデストリア級宇宙重巡洋艦に対し、無警告でアルカンシェルを撃ち込んだ。
　突然の相手側の武力行為に不意を突かれたガミラスは対処に遅れ、先遣のデストリア級宇宙重巡洋艦がその餌食になった。
「不明艦から高エネルギー反応!!」

「先遣隊全滅!!」
　先遣隊全滅の報は、一時グラーフ准将の座乗する艦の艦橋に戸惑いを与えた。
　一方、ガミラスの先遣隊を血祭りにあげた管理局側は高揚していた。
「見ろ!!あの無様な姿を!!これが管理局の力だ!!この次元の世界のすべてを統一し、管理する管理者の力だ!!」
　ヴィットーリオが、高笑いをしながら言うと、ブリッジクルーもそれにつられて、やはり管理局こそが、この世で最強の力を持った組織なのだと確信めいていた。
　しかし、その確信はすぐに吹き飛ぶ形となった。
「奴らの目的が侵略である事は明白だ・・・我が隊はこれより防衛行動に入る!!全艦ミサイル撃て!!先遣隊の仇をとるぞ!!」
　各艦より一斉にミサイルが発射され、その存在は管理局でもすぐに確認された。
「高速飛来物、我が艦隊に向け接近!!」
「迎撃しろ!!撃ち落とせ!!」
「ダメです!!数が多く、それにあまりにも速すぎます!!」
「飛来物、我が艦隊の前衛に命中します!!」
「シールド展開!!最大出力だ!!」
　管理局艦は即座にシールドを展開するが、ミサイルの数が多くシールドは徐々に弱まっていきしていき、遂にシールドは消失した。
　そして、ガミラス軍のミサイルは第５８探査部隊の前衛部隊に着弾し、星の海にオレンジ色の花を咲かせた。
「ミサイル着弾!!敵正面に突破口を形成!!」
「敵を分断する!!全艦、我に続け!!」
　グラーフ准将が座乗するメルトリア級宇宙巡洋戦艦を先頭に次々とガミラス艦は持ち前の高性能の機動力を駆使し、管理局艦隊に接近する。
　その機動力に管理局員は舌を巻いた。
　先程の先遣隊は相手の出方を窺うため、微速だったのだが、管理局

側はそれがガミラス艦艇の最高速度だと勝手に思い込んでいたのだ。
しかし、実際は管理局の次元航行艦以上の速度でガミラス艦は接近してくる。
「敵艦隊射程内に補足!!」
やがて、ガミラス艦が管理局の次元航行艦をその射程内に補足すると、
「バイスラックっ！（平らげろっ！）」
グラーフが攻撃命令を下すと、一斉にガミラス艦は砲撃を開始する。
「敵艦急速接近!!」
「敵艦からエネルギー反応多数!!我が艦隊向かってきます!!」
「更に高速飛来物我が艦隊に接近!!」
急接近してきたガミラス軍からは雨の様にショックカノンやミサイルが管理局艦艇に襲い掛かった。
ガミラス軍のショックカノンを数発喰らった管理局の艦艇は次々と爆発、撃沈されていく。
味方が次々と沈められていく様子をヴィットーリオは唖然とした様子でその光景を見ていた。
その姿には先ほどまで息巻いていた様子は微塵もない。
それは、ブリッジクルーも同じで皆、目の前の光景を見せつけられてアタフタとしている。
ヴィットーリオには目の前の出来事が信じられなかった。
質量兵器を使う蛮族にこれ程までの艦艇が建造できるのか？
何故、相手の方が速度も火力も上なのだ？
我々管理局の次元航行艦隊こそが、この次元の海（宇宙）最強の艦隊の筈なのに、何故あのような蛮族どもの艦に味方がこうも簡単に沈められていくのだ？
何故だ？
何故・・・
ヴィットーリオが現実逃避をしている間にも味方は次々と沈められ、そして・・・

「敵艦、本艦直上!!」
「敵艦、本艦をロックしています!!」
「提督!!ご指示を!!提督!!」
「えっ!?」
ヴィットーリオがオペレーターの報告を聞き、真上を見上げる。
見上げても当然敵艦の姿は映るわけもない。
グラーフ准将が座乗するメルトリア級宇宙巡洋戦艦の主砲がヴィットーリオの乗る次元航行艦をロックし、
「撃て!!」
発射命令を下すと。三連装二基の砲塔から赤い閃光のショックカノンが放たれる。
メルトリア級宇宙巡洋戦艦から放たれた六本の赤い閃光のショックカノンはまるで吸い込まれるかの様にヴィットーリオの乗る次元航行艦へと命中し、艦は大爆発を起こし宇宙の塵と化した。
ヴィットーリオ提督以下、全員が艦と運命を共にした。
旗艦を失った管理局の艦は烏合の衆となり、各自で逃亡を開始した。
しかし、逃亡の最中に味方同士で接触する艦、果敢にも反撃を試みて間違えて逃げ惑う味方を撃つ艦などが続出し、管理局の艦隊運動の練度の低さを露呈する結果となった。
その後もガミラス軍は敗走する管理局側に対し、容赦ない追撃を行い、結果、管理局第５８探査部隊は一艦残らず全滅した。
これが第５８探査部隊の遭難における事実だった。
彼らがここまで無様な結果となった理由は、管理局は発足以来、自分たちの他に次元の海（宇宙）を航行する船を有した世界（惑星）と接触した事が無かったためであった。
それ故、彼らは・・・いや、管理局は自分達の次元航行艦こそが、この世で最強の船だと信じ込んでいる慢心があった。
また十分な艦隊行動の演習と言うモノを行っておらず、すべて旗艦からの命令で動くため、旗艦を沈められてしまえばこの後、どのような行動を取れば良いのか分からなかった。

今回のガミラスとの戦闘もまさにその慢心が招いた結果だった。
だが、この事実が管理局史上表の歴史に刻まれる事は無く、第５８探査部隊は探査任務中に次元震ないしブラックホールへ吸い込まれたのではないかという結論に至り、管理局は真相を表に出す事はなかった。
しかし、この闇に葬られた出来事はこれから管理局が直面する新たな危機の序幕に過ぎなかった。

十話　それぞれの思いとそれぞれの戦い　良馬編

ヤマトがマゼラン星雲にあるイスカンダルへの長い航海へ旅立って行った後、防衛軍の人事にちょっとした異動があった。
防衛軍日本宇宙軍連合艦隊司令長官が沖田から士官学校の校長を務めていた土方になった。
沖田は言うまでもなくヤマトの艦長へ就任した為、地球には不在なので、その後釜には彼の同期であった土方に決まるのも別に不思議ではなかった。
その理由は土方が沖田同様、経歴、能力も申し分がない人物だったからだ。
しかし、今の防衛軍が有する艦船は非常に少なく、また艦隊行動を取るような大規模な作戦もなく、土方が艦隊を率いるのはまだまだ先の事になるだろう。
そして、空席となった士官学校の校長職には宇宙戦艦　えいゆう艦長の山南　修が校長職についた。
山南はこの戦争のご時世、人員が枯渇する中、新しい世代の人間教育をモットーに教育者としての仕事に就いていった。
ヤマトがイスカンダルへ向けての出航の際、ガミラスの大型ミサイル軌道変更作戦に従事した三笠は強烈な衝撃波を受け、再びドックへとその身を横たえ、別命あるまで待機となった。
三笠を一時降りた良馬は、作戦の指令があるまで、地上勤務となったがその辞令を受けた時、良馬は少し顔を青くした。
しかし、その様子に気が付く者は誰もいなかった。
だが、地上勤務をこなしていく内、良馬の異変に気が付いたのは良馬の下宿先の中嶋家の母、加奈江だった。
朝食の席で目に目に目の下の隈を濃くしていく良馬に違和感を覚え、ある日、加奈江は良馬に訊ねた。
「ねぇ、良馬君」
「なんでしょう？」

「良馬君、ちゃんと寝ている？」
加奈江の質問に、その場にいたみんなの視線が良馬に集中する。
みんなの視線は良馬を気遣っている。
「えっ？ええ・・でも、なんでそんな事を？」
「良馬君。この頃、目の下の隈が少しずつ濃くなってきているから・・・」
「だ、大丈夫ですよ。俺は軍人ですよ。体調管理ぐらいちゃんと出来ますから」
「そう？それならいいんだけど・・・」
加奈江は煮え切らない様子でこの話題を止めたが、他のみんなは未だに心配そうな目で良馬を見ていた。
その後も、良馬の目の下の隈はより一層色を濃くしていくが良馬は「大丈夫」の一点張りでみんなの心配を払いのけた。
事実、仕事に関しては何の支障もなく行っていたが一度、源三郎が強引に医者の下へ向かわせた。
医者からは「倒れないのが不思議なくらいです。睡眠薬を処方するので、それを使ってゆっくり眠ってください」と、診断された。
しかし、人間用の薬物では夜の一族である良馬にはあまり効果が無かった。

星が瞬く宇宙を三笠はガミラス軍の猛攻を受けていた。
味方の艦船は既になく、三笠ただ一隻がガミラスの弾雨の中に居た。
「味方艦、全滅!!残っているのは本艦だけです!!」
「取り舵１５!!針路２７３!!」
「取り舵１５!!針路２７３!!宜候!!」
永倉は良馬の指示通りのコースをとる。
しかい、ガミラスの猛攻の前には回避運動など意味をなさず、船体に次々と穴が開く。
「第２３ブロック火災発生!!」

「第８ブロック隔壁閉鎖します!!」
「機関室力３０％ダウン!!速度落ちます!!」
被害が機関室に及び、三笠の速度が遅くなり始めた。
動きが鈍くなった三笠はガミラスにとって絶好の鴨となった。
「直撃弾きます!!」
「回避!!」
「ダメです!!間に合いません!!」
永倉が必死に舵を動かすが、被弾し鈍足となった三笠は思うように上手く動かない。
そんな瀕死の三笠にガミラスのショックカノンが迫る。
そして、それは三笠の艦橋へ命中した。
「うわぁぁぁぁぁー!!」
良馬の眼前に広がる爆風と体を燃やし尽くす爆炎。
全身を獄炎に焼かれながら、良馬はもだえるが、それも一瞬の出来事、三笠は大爆発を起こし、宇宙の塵となった・・・・

「うわぁぁぁぁぁぁぁー!?」
良馬がバッと目を開けると、そこは見慣れた中嶋家の自分にあてがわれた部屋の天井が目に映った。
この日の夜も、良馬は寝室で悪夢に魘されていた。
良馬は使い魔のリニスや中嶋家の皆、ギンガや紅葉に悟られぬようにしていた。
もっとも目の下の隈はどうしようもなかった。
「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・」
寝汗をびっしょりかいた体をベッドから起こす。
顔を右手で覆い、呼吸を整えようとする。
すると、今度は、部屋に恭介や一、今までガミラスとの戦いで死んでいった部下や戦友の姿があった。
「っ!?」
慌てて、ベッドの隣にあるサイドテーブルの上にあるスタンドライ

トを慌ててつけると、部屋には恭介達の姿はどこにもいなかった。
そりゃ、宇宙で戦死しているのだから此処に居る筈はないのだが良馬の目にはしっかりと見えていた。
「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・」
身体はびっしょりと寝汗をかき、息を荒げた良馬はそのまま部屋に備え付けの冷蔵庫までフラフラとまるで夢遊病患者の様に近づくと冷蔵庫の扉の前でペタンと座り、冷蔵庫の中からアルコール度数が高い酒を取り出し急かす様に蓋を開け、それを一気に煽った。
「うっ・・・・うぷっ・・・・グビ・グビ・グビ・グビ・・・・」
(良馬さん、大丈夫かしら?)
中嶋家の夜の廊下をギンガは歩いていた。
深夜、トイレに行きたくなりその帰りふと良馬の事が気になったのだ。
目の下に隈を作ると言う事は、睡眠不足だと言う事だ。
それは夜、ちゃんと眠れていないと言う事を意味する。
今も起きているのだろうか?
気になったギンガはそっと良馬の部屋の前まで来た。
すると、中から、
「うっ・・・・ゴホっ・・・・ゴホっゴホ・・・・グッ・・・・ウェ・・・・」
良馬のむせる声と、吐き気を我慢しているようなうめき声が聞こえてきた。
ギンガがそっと部屋のドアを開けると、
「っ!?」
そこには無理矢理、酒を飲んでいる良馬の姿があった。
良馬の近くには既に沢山の酒瓶や缶が落ちていたが良馬はまるでアルコール中毒者の様に酒を飲むことを止めない。
しかし、飲みなれていないのか時折むせて口から酒を吐き出している。
それでも良馬は、酒を飲むのを止めようとしない。
「な、何をやっているんですか!?」
見るに見かねてギンガは良馬の部屋へ入り、手に持っていた酒瓶を

取り上げる。
「か、返してくれ、こうでもしないと眠れないんだ・・・」
弱弱しくギンガに酒を返してくれと頼み込む良馬。
しかしギンガは、
「ダメです!!」
ギンガは、良馬に酒を返さず、
「どうしてこんな無茶な飲み方を?」
何故良馬が飲みなれていなさそうな酒をこんなにも無理して飲んでいるのかを聞いた。
「酒でも飲んで無理矢理眠らないとみんなが来るんだ・・・目を閉じるとみんなが・・・みんなが俺を責めてくるんだ・・・『なんでお前は生きているんだ』って・・・」
良馬曰く、艦を降りると、どうしても眠れなくなるのだと言う。
その理由は、眠ると夢の中で今までガミラスとの戦いで死んでいった戦友たちが出きて、良馬を責めてきたり、乗艦している艦がガミラスの攻撃で撃沈される夢を見るのだと言う。
医者から処方された薬では自分の体質に合わず効かない。
故にアルコール度数が高い酒を飲んで無理矢理にでも酔いつぶれて眠るしか方法がないが、これも体質のせいなのかなかなか酔いつぶれる事が出来ない。
だからこそ、こんな無茶ぶりな飲み方になってしまう。
でも、眠るために無茶な飲み方をしなければならないのだと言う。
まさにマイナス循環に陥っていた。
「こんな飲み方をしていたら、眠るどころか、体を壊しちゃいますよ!!」
「でも、眠れないんだ・・・こうでもしないと・・・」
すると、ギンガがギュッと良馬を抱きしめた。
「一人で眠るのが怖いなら、私が一緒に寝てあげます」
「えっ!?」
ギンガのこの提案に流石の良馬も驚愕した。
「い、いや、でも・・・」

「さあ、行きますよ」
ギンガは強引に良馬の手を引いてベッドへと導く。
この時、良馬はギンガって見かけによらず、力が強いんだと思った。
同時に心が強い人物だと思った。
自分の知り合いが一人も居ない世界に放り込まれ、しかも、その世界は戦争中で、自分が居る陣営は敗色が濃厚。
そんな環境ならば、不安な筈がない。
恐怖を抱かない筈がない。
それにも関わらず、彼女はそのような素振りは見せない・・・・いや、もしかしたら、自分の様に一人の時には、泣いているかもしれない。
それでも、彼女はこうして他人に、気を配る事が出来る。
それに比べて自分はどうだろうか？
年下の彼女に此処までされて・・・・。
本当に情けない・・・・。
そう思いながらギンガに引かれて行った。
なんだか変な展開となってきたが良馬は今、ギンガと共にベッドの中にいる。
ベッドの中でギンガは良馬の事を包み込む様に抱きしめる。
「私の妹も昔は寂しがり屋の甘えん坊で、こうしていると安心して眠っていたんですよ」
そして、母が夜泣きをする子供をあやすかのように良馬の頭を優しく撫で始めた。
ギンガはこうした行為を昔、妹のスバルに何度もしてやった経験がある。
ナカジマ家は元々両親が局員のため、二人が定時上がりの時もあれば、夜遅くまで残業ということもなり、夜遅くなれば、スバルは一人で眠るのが怖いのか、よくギンガのベッドに潜り込んできた。
そんな時、ギンガはきまってスバルを優しく抱きしめ、頭を撫でた。
抱きしめられたスバルは姉のぬくもりに安堵し、やがて静かに寝息を立て、眠る。
ギンガの母、クイントが亡くなってからはそれが一層多くなった。

母に二度と会えない悲しさと寂しさ、そして辛さでスバルはほぼ毎夜ギンガの部屋に行き、ギンガに泣きついた。
本音を言うとギンガ自身も声をあげて泣きたかった。
しかし、姉と言う立場上、妹の前で泣くことはどうしてもできなかった。
その後、ギンガはスバルの姉でもあり、母親的な存在となっていった。
それはギンガから子供らしい一面を失わせる反面、女性らしさ・・・・母性本能を大きく成長させる要因となっていた。
ギンガに抱きしめられながら、横になっていると、昔、幼少期時代に忍やリニス、ノエルと一緒に寝た記憶と共に暖かい安らぎが良馬を包み込んだ。
すると、いつもの悪夢を見ることもなく、深い眠りにつくことが出来た。
久しぶりの熟睡なのだろう。
今、自分の腕の中では一人の青年が気持ちよさそうに眠っている。
その様子から相当無理をしていたのだと分かる。
漂流者として救助され、何もする事の出来なかった日々を送るギンガにとって、彼に安らぎと眠りを与えることが出来た事に満足なギンガも彼と共に眠りについた。

翌朝
「おはようございます。マスター」
リニスが良馬を起こしに部屋へと来た。
普段ならば、良馬が眠そうな声で返事をするのだが、この日は眠りが深いのか、なかなかベッドから出てこない。
「まったく、もう・・・」
リニスは良馬の部屋と入り、ベッドに近づく。
すると、
「えっ!?」

リニスは乾いた声をあげる。
ベッドには良馬以外にもう一人、他の人物が一緒に眠っていたのだ。
リニスはそれを見た瞬間、ピシっと固まった。
やがて、良馬が目を覚ました。
久しぶりに熟睡出来たのか目の下の隈も薄くなっていた。
しかし、熟睡出来た良馬が見たのは、顔を引きつらせているリニスの姿だった。
「ま、マスター・・・・」
「えっ!?り、リニス?」
「貴方と言う人は!!」
「ひぇ〜〜!」
起きたばかりだと言うのに良馬はリニスにお説教をされた。
「マスター、貴方だって年頃の男の人なのだから女の人に興味があると思いますが、救助者である女性をベッドに連れ込むとはどういう事ですか!?ギンガさんは別世界の人間なんですよ!!一歩間違えれば、地球とミッドで大問題になり兼ねないのですよ!!」
リニスが良馬にお説教をしていると、
「うっ・・・・う〜ん・・・・」
当事者のギンガが目を覚ました。
「ギンガさん、これは一体どう言う事なんですか?」
「こ、これは、その・・・・」
ギンガは目を覚ました後、リニスにお説教をされている良馬を見て、その弁護に回った。
そして良馬が夜な夜な魘され、睡眠不足に陥っている事を知ったリニスはそれが事実なのか良馬に問う。
「ええっと・・・それは・・・その・・・・」
良馬はリニスから視線をそらし、どうするどうやって誤魔化すか考えを巡らせた。
しかし、寝起きでこれまでの睡眠不足がたたっていい考えが思いつかない。

しかも、
「良馬さん、誤魔化したら・・・分かりますよね？」
ダークオーラ全開のリニス相手ではあまりにも分が悪い。
結局、良馬は洗いざらい話した。
「全く、貴方と言う人は、何故その事を私に言わなかったのですか？」
「そ、それは・その・・・リニスにあまり心配や迷惑をかけたくなくて・・・」
「黙っていて、それで体を壊された方が余計に心配しますし、迷惑です」
「・・・」
「それとも、私はそんなに頼りないですか？」
「い、いや、違う。リニスには感謝している。その・・・リニスは僕にとってお母さんみたいな存在だから・・・」
良馬の言葉はかつて自分がデバイスを与え、魔法を教えたあの子の事を思い出させる。
「ならばなおさら、私に頼って下されば良かったのに」
だからこそ、リニスは自分の事を頼って欲しかった。
「で、でも、これは俺が負うべき問題だし・・・」
あくまで今回の事は自分でカタを付けようとする良馬をリニスはギュッと抱きしめる。
「私は貴方（マスター）の使い魔なのですから、貴方（マスター）の負うべき事は私も一緒に償います。ですから、今度からはちゃんと言って下さいね？それとギンガさんにもちゃんとお礼を言いなさい」
「う、うん、分かった・・・ギンガさん」
「は、はい」
「昨晩はありがとう。久々に熟睡出来たよ。貴女のおかげだ」
「い、いえ、そんな・・・お役に立てて良かったです」
ともあれ、良馬の睡眠に関しての問題はこれにてかたが付きそうだった。
ただその後、
「ギンガさん、今日は私が良馬さんと寝ますのでご自分の部屋にお戻

りください」
「リニスさんには悪いですけど、良馬さんは、私の方が熟睡できるみたいですから、私が良馬さんと一緒に寝ます」
と、何故かリニスとギンガとの間で、良馬の争奪戦が行われていた。
リニスの言い分は、自分は良馬の使い魔なのだから当然良馬と一緒に寝るのは自分だと言う事。
一方、ギンガは自分と一緒に寝た方が良馬は熟睡出来ているのだから、良馬の事を思うのならば、自分が良馬と一緒に寝ると言いだした。
何故、ギンガがここまで良馬の事を気遣う理由は、良馬は自分の命の恩人だし、なによりギンガは良馬に対し、母性本能を著しく、くすぐられたためであった。
リニスとギンガ、どちらと寝たにせよ、良馬がこの後、夜魘されることが少なくなったのは言うまでもなかった。
しかし、その反面、必死に理性を働かせることにも繋がった。

ヤマトが無事に地球を発進し、イスカンダルへの長い航海へ向かった中、太陽系を抜ける前にヤマトは地球に対して、最後の通信を送ってきた。
乗員は地球に残してきた家族や恋人に通信を送り、地球に居る家族もヤマトに乗艦している乗組員も互いに涙を流し、家族との暫しの別れをした。
通信内容その他にも太陽系内でのヤマトの行動も報告された。
それによると、ヤマトは火星軌道の沖合で、地球人類初のワープを行い無事に成功し、一気に木星まで辿り着いた。
そして辿り着いた木星にて、浮遊大陸上にガミラスの基地を発見。
そこで、初めて艦首次元波動収束砲・・・通称、波動砲の試射を行い、ガミラス基地を攻撃したが、波動砲はヤマトの乗員が考えていた以上の破壊力を有しており、オーストラリア大陸程の浮遊大陸と木星の一部をその一撃で消滅させてしまった。
以後、波動砲の使用に関しては十分に配慮しなければならなかった。

ワープ航法、そして波動砲を使用したヤマトには機関部大きな負荷がかかり、機関に不具合が生じたため、修理に必要な宇宙金属コスモナイトの採掘を土星の衛星、タイタンにて行った。
そのタイタンで、採掘中にガミラスのパトロール部隊と陸戦となり、辛くも勝利、無事にコスモナイトの採掘を続けていた中、タイタンの雪原で不時着した宇宙駆逐艦、雪風を発見した。
雪風の船体は風穴だらけで、艦内に生存者はいなかった。
コスモナイトで修理を終えたヤマトは冥王星ガミラス基地の攻略に踏み切った。
沖田自身はなるべく戦闘は避けたかったが、冥王星ガミラス基地だけはどうしても見過ごす事は出来なかった。
ヤマトがイスカンダルへ向かっている最中に冥王星ガミラス基地からの遊星爆弾により、折角イスカンダルへ行き、放射能除去装置を貰って地球へ戻ってきても冥王星ガミラス基地からの遊星爆弾により人類が絶滅していました・・・なんて事になっては身も蓋もない。
よって、ヤマトは冥王星ガミラス基地攻略に関しては積極的だった。
ヤマトの乗員にしてみれば、冥王星ガミラス基地の攻略は、家族や恋人、友人の仇でもあった。
こうして冥王星ガミラス軍基地の攻略に踏み切ったヤマトであったが、冥王星ガミラス基地が設置した新兵器、反射衛星砲により、ヤマトは手痛い傷を負うことになり、乗員に少なからず死傷者を出す結果となったが、苦労の末、基地は攻略され、地球はようやく遊星爆弾からの脅威から解放された。
この事実に防衛軍、地球連邦政府の官僚、幕僚達は歓喜に沸いた。
そして、この知らせは臨時ニュースとして連邦市民にも知らされ、市民達もヤマトの幸先の良い知らせに歓喜した。
ヤマトは冥王星ガミラス基地の反射衛星砲によって受けた傷を第十番惑星のなれの果て、アステロイドベルトにて癒していたが、そこへ冥王星ガミラス基地から脱出したシュルツ率いるガミラス軍の残存艦隊が襲い掛かった。

しかし、真田の考案した反重力感応機によって周りの隕石（アステロイド）を防御シールドにし、ガミラスの攻撃を防いだ。
思いもよらない方法により、決定的なダメージを与えられないガミラスは、旧日本軍の十八番、特攻をかけてきた。
彼らは長い年月をかけて築き上げてきた冥王星の基地をヤマト一隻により破壊され、敵前逃亡をした身、もはや生きて再び母星の土を踏むことは出来ない。
残されているのは死のみ・・・・。
ならば、名誉ある死か不名誉の死か、そのどちらかであった。
しかし、艦隊はヤマトが纏ったアステロイドのせいで特攻に失敗し、味方艦同士で衝突したり、アステロイド自体に衝突して冥王星のガミラス艦隊は壊滅。
司令官のシュルツも「デスラー総統万歳!!」を叫び、座乗する艦でヤマトに体当たりを行うも、逆に船体にロケットアンカーを撃ち込まれ、突入針路をずらされ、小惑星に激突し、無念の戦死を遂げた。
以上がヤマトから送られた太陽系内における戦闘報告だった。
冥王星ガミラス軍基地、そこの駐屯艦隊を撃滅したヤマトは太陽系を抜け、未だ地球人類が行ったことのない未知なる星の海へ・・・・マゼラン星雲、イスカンダルを目指し旅立って行った。

ヤマトが旅立った後、ガミラスが再び艦隊を派遣し、冥王星基地を再建する可能性は十分にあり、防衛軍としては基地の再建は何としても阻止しなければならなかった。
そのためには、強力な宇宙艦隊の再建が急務であった。
幸い、地球側にはイスカンダルから送られてきた波動エンジンの設計図がある。
波動エンジン搭載艦（ヤマト）の実力はヤマトからの報告で既に明白となっており、これならばガミラスと十分渡り合える。
後は艦を建造するための資材とエネルギーの確保にあった。
ヤマトから送られてきた戦闘報告書により、土星衛星タイタンにおけるコスモナイトの鉱脈の位置は既に判明しているので、防衛軍は早

速、コスモナイトとその採掘ルートの確保にのりだした。
当然、良馬が艦長を務める三笠も動員された。
三笠は地球でも稼働できる数少ない宇宙船であるので、この任務に抜擢されるのは当然と言えば当然だった。
「それじゃあ、行ってきます」
「ええ、気を付けてね」
「冥王星のガミラス基地と艦隊はヤマトが撃破したと言うが、まだ残党が潜んでいるかもしれないからな、気をつけろ」
「はい」
中嶋家の玄関先で良馬とリニスは中嶋家の皆とギンガ、紅葉に別れを告げていた。
「良馬さん、そろそろ・・・」
中嶋家の前に迎えの車が来たのを確認したリニスは良馬に出発を促す。
「ああ、それじゃあ・・・」
良馬が家を出ようとした時、
「待って下さい」
ギンガが良馬を呼び止めた。
「コレを持って行ってください」
ギンガは待機状態のデバイスを良馬の首に下げた。
「コレは？」
「私の大切なお守りです。良馬さんが無事に帰って来れるようにと・・・」
「でも、大切な物なら君が持っていた方が・・・」
「危険かもしれない場所へ行く良馬さんだからこそ、持って行って欲しいんです」
「分かった。ありがとう」
良馬はギンガから待機状態のデバイス（お守り）を受け取って、車に乗り込み宇宙船ドックへと向かった。
ギンガが自分の大切な相棒（デバイス）をお守りと偽って渡した理由は、少し時間をさかのぼる。

あの夜の一件依頼、ギンガとリニスは互いにシフトを組みながら良馬と就寝しているが、ある日、ギンガは思い切って、良馬が夜、魘されていた事実を源三郎に打ち明けた。
すると、源三郎は、薄々そんな事なんじゃないかと思っていた。
そしてギンガに
「恐らくアイツは死にたいのだろう」
と、今の良馬の心中を察した。
「戦友や部下を大勢亡くしたのに自分一人が生き残っている事に罪悪感を感じているんだろうなぁ・・・だが、自分一人のエゴの為、三笠の乗員も道連れにすることも出来ず、親友から託された紅葉ちゃんの事もあって死ぬに死ねない原因なのだろう。そんな板ばさみ状態で奴は今、物凄く苦しんでいる」
「そんな・・・」
「だが、何とか奴に生きる糧を与えれば、奴は立ち直るだろう。紅葉ちゃんだけでは、まだまだ足りない様だ」
源三郎の話を聞き、自分を助けてくれた彼の為にも何か彼の役立ちたいと言う思いから、ギンガは彼に自分の大切な相棒（デバイス）を託したのだ。
待機状態のデバイスには母の形見であるリボルバーナックルも収納されている。
きっと母が彼の事を守ってくれるとそう信じていたのだ。

三笠は地球を出発すると、土星圏へと向かった。
土星は太陽から六番目の惑星で、太陽系の中では木星に次いで二番目に大きな惑星である。
平均半径は地球の約九倍に当る。
平均密度は地球の１／８に過ぎないため、巨大な体積のわりに質量は地球の９５倍程度である。
内部には鉄やニッケルおよびシリコンと酸素の化合物である岩石から成る中心核があり、そのまわりを金属水素が厚く覆っていると考えられ、中間層には液体の水素とヘリウムが、その外側はガスが取り

巻いている。
惑星表面は、最上部にあるアンモニアの結晶に由来する白や黄色の縞が見られる。金属水素層で生じる電流が作り出す土星の固有磁場は地球磁場よりも若干弱く、木星磁場の１／１２程度である。
外側の大気は変化が少なく色彩の差異も無いが、長く持続する特徴が現れる事もある。風速は木星を上回る１８００ｋｍ／ｈに達する。
土星の大きな特徴は恒常的な輪を持ち、９つが主要なリング状、３つが不定的な円弧である。
これらはほとんどが氷の小片であり、岩石のデブリや宇宙塵も含まれる。
その周りには多数の衛星があり、今回、三笠が向かっているタイタンは土星の衛星の中では最大で太陽系全体でも２番目に大きな衛星（一番は木星の衛星ガニメデ）であり、水星よりも大きく、衛星としては太陽系でただひとつ有意な大気を纏っている。
土星衛星タイタンに到着した三笠は早速、採掘用の重機を降ろし、採掘作業へと移った。
その最中、タイタンの地でガミラス軍のデラメヤ級強襲揚陸艦とサルバーＳ―Ⅵ型重戦車が発見された。
ヤマトとの陸戦の後、乗っていたガミラス兵は全員斃されたが、乗ってきた艦はそのままの状態で放置されていたのだ。
地球側としてはガミラスの技術を知る格好のサンプルでもあり、さらに強襲揚陸艦と言う事で艦内には収納スペースもある事から武装輸送艦としても使えると判断し、この艦を鹵獲した。
これが、地球人類がはじめて無傷で鹵獲したガミラス製の艦だった。
採掘作業と鹵獲したガミラス艦の調査が行われている中、良馬は三笠に搭載したコスモゼロで宇宙駆逐艦、雪風の不時着地点まできていた。
ガミラスの攻撃により、船体はボロボロになり、太陽の熱が届かないため、船体を厚い氷で覆われた雪風に対し良馬は黙祷を捧げた。
近くには古代が作ったとされる雪風乗員の墓と思しきモノもあり、

良馬はそこにも黙祷を捧げた。
三笠の収納スペース、そして鹵獲したガミラス艦にも採掘をしたコスモナイトやその他の宇宙金属を満載した船団はタイタンを後にし、一路地球への帰還行動へと入った。
そして、木星軌道を過ぎた時、先行していた鹵獲艦のレーダーが木星のアステロイドベルトから船団に接近してくる艦影を捉えた。
鹵獲艦は発光信号にて、護衛の三笠に不明艦接近の報を知らせる。
「流石、ガミラス製のレーダーだ、地球のモノとは性能が違う。それで？艦種は？」
「ケルカピア級航宙高速巡洋艦です!!数は・・・一隻です!!」
(冥王星ガミラス軍基地の残党の残党か・・・本星に帰る事も出来ず、孤立無援の中、こうしてゲリラ戦をしかけつつ、味方を待っているのか、それとも死なば諸共・・・か)
敵の心情を察するも真実は分からない。
兎も角、今、三笠の任務は無事この船団を・・・採掘した物資と鹵獲艦を地球へ届ける事。
しかし、ケルカピア級航宙高速巡洋艦一隻とは言え、今の船団には十分脅威であった。
「副長、此処は任せる」
「えっ？艦長？」
「俺はコスモゼロで出る。少しでも距離と時間を稼ぐ」
「し、しかし艦長」
「大丈夫だ、副長」
三木の制止を振り切り、良馬は格納庫へと向かった。
そして、対艦装備をしたコスモゼロで出撃した。
敵は当初、船団を撃沈しようとしたがコスモゼロが上手く相手を挑発し敵は船団よりもまずは先にこの目障りな艦載機（ハエ）を撃ち落す事にした。
しかし、良馬も古代　守と並ぶ優れたパイロットセンスを有しておりそう簡単に撃墜されることは無かった。
だが、船団から離すために挑発で撃った対艦用のミサイルもあと両

翼にそれぞれ一発ずつを残すのみとなった。
（くっ、このままじゃあ・・・）
ジリ貧になりかけている戦況に良馬は歯を喰いしばる。
そして、
「・・・高町・・・すまない。お前との約束はどうやら守れそうにない・・・」
そう、呟くと敵の艦橋へ猛スピードで突っ込んでいった。
突っ込んでいく間、良馬の脳裏に、過去の出来事が蘇る。
之が走馬灯と言うヤツなのだろうか？
そう思っていると、
「良馬さん!!」
ギンガの声が聞こえた。
此処いる筈のないギンガの声が・・・
その声を聞いた途端ハッと我に返る良馬。
目の前には敵巡洋艦の艦橋がある。
この至近距離・・・
しかも、場所が艦橋ならば・・・
「喰らえ!!」
良馬は装備されていた対艦ミサイルの発射ボタンを押し、操縦桿を思いっきり、左上へと捻る。
その直後、ミサイルは敵巡洋艦の艦橋に命中し、敵の巡洋艦は忽ち爆発と炎に包まれた。
「えっ？」
爆沈する敵の巡洋艦を見ていた良馬の下に、奇妙な通信が舞い込んだ。
通信の発信元は目の前で沈んでいく、敵の巡洋艦で内容は分からなかったが、ガミラス人の悲痛な叫び、嘆きが聞こえた。
おそらく故郷の両親や恋人の名前を叫んでいるのだろう。
これまでガミラス人は悪魔か獣、エイリアンの類だと思ってきたが、この時、良馬はガミラス人もまた人間なのだと知った。
爆沈する巡洋艦に敬礼し、良馬は無事に三笠へと戻った。

コスモゼロは最後のミサイル攻撃の衝撃で機体が少し変形して、応急修理となった。
コックピットから降り、整備員がコスモゼロの応急修繕をしている中、良馬はギンガから出発時に渡されたお守り（デバイス）をジッと見ていた。
あの時、確かにギンガの声が聞こえた。
それは間違いなかった。
しかし、ギンガのお守りは何も言わず淡い紫色の輝きを放っているだけだった。
その後、無事に地球へ帰還した良馬は敵艦の鹵獲、船団護衛と敵巡洋艦を撃沈した功績により、昇進した。

十一話　それぞれの思いとそれぞれの戦い　桜花編

夜の中嶋家の寝室にて、ダブルベッドに横になりながら加奈江が旦那である源三郎に話しかけた。
「ねぇ、アナタ」
「ん？何だい？」
「近々あの話をあの子にしようと思うの・・・・」
「・・・・」
加奈江の提案に源三郎は黙って聞いている。
彼女の言う「あの子」と言うのが、ギンガの事を指しているのは直ぐに分かった。
「勿論、断られるかもしれない。けど、もしかしたら、このままあの子の世界の人達（管理局の局員）が迎えに来ないかもしれないし・・・もし、そうなったら・・・・」
加奈江は最後の言葉をためらった。
もし、ギンガの世界の人達がギンガを救助しに来なかった場合、ギンガの身柄は防衛軍の情報局に拘束されるかもしれない。
そうなれば、薬物や暴力による拷問を受けるかもしれない。
いや、ただの暴力どころか性的暴行も受けるかもしれない。
そうなる前にギンガの身元をしっかりと証明させる必要がある。
そこで、加奈江はある事を思いつき源三郎に提案した。
「加奈江、君の好きなようにしなさい」
「いいの？」
「ああ」
「ありがとう」
源三郎の言葉に加奈江は微笑んだ。
こうしてギンガの知らない中、水面下である計画が動き出した。
そして、
「ねぇ、ギンガさん」
「はい？何でしょう？」

そしてある日、その計画は実行された。
加奈江は日中、桜花と紅葉が学校に行っている間にギンガに例の話を持ち掛けた。
「ギンガさん。その・・・よかったら家（中嶋家）の養子にならない？」
「えっ？」
加奈江の提案にギンガは固まった。
「私がこの家の養子に・・・？」
それはつまり、ミッドに帰る事を諦めると言う事・・・
ミッドに居るゲンヤやスバルの下に帰る事を諦めると言う事・・・
しかし、現状、管理局の救助が来る可能性は極めて低い。
でも、その可能性は絶対にゼロと言うわけではない。
だが、来ない可能性もある。
そうなったら・・・
ギンガが、返答に困惑していると、
「桜花も貴女に懐いているし様だし・・・あの子、今までずっと一人っ子だったでしょう？顔には出さないけど貴女が家に来て桜花はとっても喜んでいたのよ。あの子、貴女を本当のお姉ちゃんの様に慕っているの」
「えっと・・・でも・・・」
明らかにギンガは困惑している様子で加奈江から目を逸らす。
「ごめんなさい、急にこんなことを言われても混乱するわよね？・・・直ぐに返事を出さなくてもいいわ。ゆっくり時間をかけて考えてね」
「は、はい・・・」
困惑するギンガに加奈江は時間を与え、彼女からの返事を待つことにした。
それから数日後、ギンガと桜花の二人は加奈江に頼まれて配給される食糧を受け取りに出かけた。
ギンガは食糧が配給制になっている地球の現状を見て改めてこの地球が今、ガミラスの手によって追い詰められているのだと実感する。
その時、

「桜花姉ぇちゃん!!」
桜花に飛びつく一人の女の子が居た。
「ああ、アギトさん」
桜花は飛びついて来た女の子、アギトを抱きしめ、頭を撫でる。
「アギトさん、一人で来たの？」
「ううん、お母さんとルナと一緒に来たよ」
桜花がアギトに一人で来たのか訊ねるとアギトは母ともう一人の計三人で来たと言う。
そこへ、
「アギト、一人で駆け出しちゃダメでしょう」
アギトの母親らしき女性がアギトと同じくらいの女の子を連れてやって来た。
「なっ!?」
ギンガはアギトの母親ともう一人の女の子を見て、目を見開き驚く。
アギトの母親ともう一人の女の子の容姿が、
（シグナムさん!?リインさん!?）
ミッドにいる自分の知り合いにそっくりの容姿だったのだ。
「おや？桜花ちゃん。おつかいなのかい？」
「はい」
シグナムに似た女性は桜花に話しかける。
「ん？そちらの人は？」
シグナム似の女性がギンガに気づく。
「親戚のお姉さんで、最近こっちに越してきたんです」
桜花は予め設定していたギンガの素性をシグナム似の女性に話す。
ギンガと加奈江の容姿は似ていたので、親戚だと言う桜花の言葉もすんなりと受け入れている様子だ。
「お姉さん、此方は八神・リインフォース・シュベルトさん」
「初めまして。八神です」
「は、初めまして。中嶋ギンガです」
（八神ってファミリーネームもはやてさん達と一緒なんだ・・・）

シグナム似の女性、八神・リインフォース・シュベルトのファミリーネームが自分の知り合いと同じ事実に更に驚愕するギンガ。
「それで、この子はアギトさんでこちらの方がルナさんです」
桜花は赤髪の二人の女の子達をギンガに紹介する。
「ど、どうも・・・」
「よろしくです」
紹介された二人の女の子達はギンガにペコッと頭を下げる。
「二人は二卵性双生児で容姿は似ていないけど、姉妹なんだ。アギトが姉でルナが妹」
シグナム似の女性、シュベルトが自分の娘達の紹介をギンガにする。
「へぇ～」
「桜花姉ぇちゃんはこれから食べ物貰うの？」
「ええ、そうです。アギトさんたちはもう貰ったの？」
「うん」
「もらったよ」
アギトとリインそっくりのルナは貰ったばかりの食糧が入った袋を桜花とギンガに見せる。
「そう、家まで落とさない様に気をつけて持って帰るんですよ」
「はい」
「それじゃあ、私達はこれで・・・」
「あっ、はい。それじゃあ」
シュベルトはギンガと桜花にペコッと一礼し、挨拶を交わして八神家のみんなは配給された食糧を手に帰って行った。
そしてギンガと桜花も配給された食糧を受け取り、帰ろうとする中、
「ジジイ!!その食糧を寄こせ!!」
「ひ、ひぃ!?」
自分たち同様、配給された食糧を受けとった老人にいかにもチンピラと言った男たちの一人がその老人に蹴りを見舞う。
当然、突然蹴られた老人は為す術もなく体勢を崩して転倒する。

そして転倒した老人の手から受け取ったばかりの食糧が入った袋が離れる。
男たちは、それを悪人面の笑みを浮かべて拾う。
当然と言えば当然の話であるが、誰もがそれに非難がましい視線を向ける。
ただし、それも長続きはしない。
誰だって面倒事や痛い思いは御免被りたい。非難の視線を向けても、男達に一睨みすれば目を逸らしてしまう。
「そ、ソレを返してくれ!!家には身体の弱い婆さんが居るのじゃ・・・」
「ハッ、そんな事、俺たちは知ったこっちゃねぇよ」
「それに之は今、俺たちが拾ったんだぜ?大方何処かの誰かが、捨てて行ったんだろう?」
「そうそう。大体、之がお前のモノだって証拠はあるのか?どこかにお前の名前でも書いてあるのか?」
「欲しかったら、それ相応の対価を寄こしな」
下種な笑みを浮かべるチンピラ達。
あまりにも無茶苦茶なチンピラたちの行動と言論にギンガは段々腸が煮えくり返りそうになった。
地球が今、ガミラスのせいで大変な時に弱者を食い物にしようとしている彼らの行いにギンガが彼らに何かを言いかけた時、
「ふんっ!!」
桜花が食糧の袋を持ったチンピラに跳び蹴りをくらわす。
突然の予期せぬ奇襲に防御が間に合わず、食糧の袋を持ったチンピラはその場に倒れ、先程老人から奪った食糧を落とす。
すかさず桜花はそれを拾い、老人に持たせる。
「このクソガキがぁ!!」
蹴りを食らったチンピラは唸り声をあげて起き上がる。
しかし、桜花はそんなチンピラ相手に恐れることなく声をあげて言い放つ。
「貴方たち!!か弱いお爺さんから食い物を奪うなんて恥ずかしくないんですか!?　敬老の精神という言葉を知らないんですか!?」

ビシッとチンピラ連中に指をさしながら敬老の精神を問う桜花。
「うるせぇ!!俺たちゃいーんだよ、強いからな!!」
「弱い奴が強い奴に譲る、これは当たり前のルールだろうが!!」
「そっ、俺らは強いんだから弱い奴は大人しくしてりゃぁいーんだよ」
「ちげぇねぇ!それにこんな爺や婆が生きていても何の役にもたたねぇじゃねか。食糧や物資、酸素の無駄だ。だから俺たちが有効に使ってやろうとしているんじゃねぇか」
男たちは自分たちのセリフに気をよくしたのか、下品な笑い声を上げた。
しかし、
「ふん、貴方たちが何の役に立つんです?そのキモい顔と下種な笑い声でガミラスを不快にさせる事ですか?」
桜花にしては珍しく挑発的な笑みを浮かべる。
「このクソガキ!!こっちが下手に出てりゃ、つけ上がりやがって!!」
「少し痛い目に会わなきゃ分からねぇようだな!!」
チンピラたちが桜花に殴りかかろうとした時、
「憲兵さん!!こっちです!!」
桜花とチンピラ連中とのやり取りを見ていた他の人が憲兵を呼んできた。
「ちっ、覚えていやがれ!!」
「ぜってぇ後悔させてやるからな!!」
流石に国家権力には弱いらしく、負け犬の様な捨て台詞を吐きながらチンピラたちはその場から逃げていった。
ギンガは逃げて行ったチンピラ連中にアッカンベーをしている桜花に駆け寄って話しかける。
「大丈夫?桜花?」
「大丈夫です。あんな腰抜け連中にやられるようなヤワな鍛え方はしていませんので」
桜花は笑みを浮かべて手をヒラヒラ振りながらギンガに自身の健在っぷりをアピールする。
「そう?それならいいけど・・・でも、無茶しすぎよ。相手は桜花より

も大人で複数の男達なんだから」
「でもギンガさん、地球が大変な中、ああいう自分勝手な連中は我慢ならないんです。例えどんなに弱くても、理不尽に反抗する権利は誰にでもある・・・地球がガミラスと戦っているように・・・」
桜花はグッと拳を握りギンガの目をジッと見ていた。

とある廃墟地区の薄暗い部屋の中を、『ガンガンガン!』という何かを蹴る音が何度も何度も響き渡る。
そんな中、耳に不快感を残す音と共に、狂った様な怒声を上げる男の声が発せられた。
「チクショウ、あのクソガキィがぁ!!」
荒れているのは先程火憐に跳び蹴りを食らった男だった。
「り、リーダー物に当たるのは結構ですけど、壊さないでくださいよぉ〜」
自分たちのリーダーの荒れ方に手下連中もオドオドしている。
「うるせぇ!あんなガキに舐められたまんまじゃ、俺のメンツにかかわるんだよ!!」
辺り構わず怒鳴り散らすリーダー。
「そ、それなら、こういうのはどうでしょう?」
手下の一人が何か思いついたらしく、リーダーの男に耳打ちする。
「へぇ〜、そいつは良いや。あのガキには、しっかり礼をしねぇとなぁ・・・」
手下の提案を聞いた男はニヤリと笑みを浮かべた。

それから幾日かが過ぎ、
桜花は、防衛軍職員の託児施設に来ていた。
別に桜花が託児所でお世話になっているわけではない。
彼女はボランティア活動の一環で、ここで、子供達の面倒を見ているのだ。
そして、託児所で使う生活物資の買い出しに行く事になり、この託児所で預かっている八神家の姉妹、アギトも「自分達も手伝う」と言っ

てきた。
桜花は、近くの空手道場に通っており、桜花について行くと言ったアギトも桜花と同じ道場に通っていたのだ。
つまり、二人は姉妹（きょうだい）弟子と言う関係だった。
可愛い妹分の頼みを桜花は了承し、アギトと共に買い出しとへ出かけた。
その後姿を怪しい男たちがジッと見ている事を知らずに・・・・

それから何時間かの時間が過ぎ、
「せんせぇ～」
託児所にて、八神家姉妹の片割れのルナが託児所の職員に声をかける。
「どうしたの？」
「かれんおねぇちゃんとアギトおねえちゃんがまだかえってこないです」
ルナは少し不満げに訊ねる。
「そうね、少し遅いわね」
職員は時計をチラッと見る。
確かに買い出しに出かけたにしては帰りが少々遅い。
「あたし、おうかおねぇちゃんと遊ぶ約束したのにぃ～」
「もう少し待ってあげてね。お店が混んでいるのかもしれないから」
「ぶぅ～」
やっぱり不満の様だった。
しかし、家への帰宅時間が近づいても桜花とアギトが帰ってくることは無かった。
託児所から連絡を受け、源三郎が自宅に戻ると、そこには普段からは信じられない程、動揺している加奈江の姿があった。
ギンガと紅葉が宥めているのだが、効果が無い。
源三郎は加奈江を背中から抱きしめ、
「少しは落ち着け」
と、宥める。

「で、でも、桜花が‥桜花が‥‥あの子に万が一の事があったら、私‥‥私‥‥」
「大丈夫だ。アイツは俺とお前の子だ。必ず無事に戻ってくる。信じるんだ」
　その直後、電話が鳴った。
　加奈江は応対できる状態じゃないので、源三郎が電話に出た。
「はい、中嶋です」
「こちらは憲兵隊司令部ですが、中嶋源三郎、軍務課長でしょうか？」
「ああ」
「先ほど、御宅のお嬢さんと思われる女子と託児所の児童の二人が何者かに攫われる映像を設置されていたカメラが捉えました。また付近の住民に聞き込みをしたところ、車に連れ込まれるところも目撃されています。現在Ｎシステムにて、その車を追跡しております」
「引き続き捜査をお願いします」
「了解」
　源三郎は受話器を力なく元の位置に戻す。
「アナタ、桜花は‥‥？」
「‥‥どうやら誘拐されたみたいだ」
「「っ!?」」
　源三郎の言葉に加奈江だけでなく、ギンガと紅葉も驚愕した。
「営利目的なら身代金の要求がある筈だが、未だにそれがないとなると‥‥」
「まさか人身売買？」
　管理局で捜査官の仕事をしていたギンガが営利目的の誘拐以外の可能性を示唆する。
「‥その可能性も捨てきれないな‥‥」
「そんなっ!?」
（でも、本当に人身売買目的なのかしら？何か別な目的の様な気がする‥‥）
　ギンガは捜査官での経験からこの誘拐事件がただの人身売買目的の誘拐なのか、疑問視していた。

その頃、桜花とアギトはどことも知れない廃ビルに連れ込まれていた。
一面に小さな小窓があるだけの、他の面は堅いコンクリートがむき出しになった部屋。
おそらく使われなくなって久しいのだろう。チラホラとゴミやガラクタはあるが、それ以上のものはない。
「お、桜花姉ぇちゃん・・・・」
桜花と共に連れ去られたアギトは完全に怯えており、桜花にしがみついている。
「大丈夫だよ。私が、お姉ちゃんがちゃんと守るから。何があっても、守るから・・・・。だから、安心して・・・・」
「へっ、赤の他人なのに美しいねぇ～」
「全くだ。いったい、何をどうやって守るのかぜひ教えてほしいもんだ」
「くっ・・・・」
嘲りを多分に含んだ男の言葉に、桜花の口からは口惜しげな呻きが漏れる。
今、桜花の手首には縄がきつく結ばれており、拳を放つことも出来ない。
当然、縛られているので、蹴りを放とうにもバランスを崩すのも明白。なにより桜花は人質を取られている状況とほぼ同じなので、下手に動けない。
「よくよく見れば、ガキだがツラは悪くねぇなぁ・・・・」
「そういやそうだな、その筋で売ればいい値で売れそうだよなぁ」
「ああ、世の中には小さな女の子が大好きな変態が多いからなぁ」
下種には結局下種な考え方しかできない。
男達の舐める様な視線が桜花の顔と身体を舐る度、桜花は嫌悪感に身体を振るわせる。
彼らの言葉と視線から本能的に危険な物を感じる・・・・
「で、それはそうとして、このチビガキの方はどうするんだ？　予定じゃ、この前の生意気なガキの方だけだった筈だよな？」

「さぁて、どうするのかねぇ～」
「約束が違う!! 大人しくしていればこの子は解放する、そう言った筈よ!!」
「そうだったか？ なぁ、お前覚えているか？」
「いや、さっぱり。お前の聞き間違いじゃねぇの？」
「くっ、下種が・・・」
口々にそんな事をのたまう男達。悪意と嘲笑に満ちた言葉に不快そうに吐き捨てる桜花。
彼女は守る様にアギトを自らの背中の後ろに回した。
それが、今の桜花にできる、精一杯の反抗だった。
「どうも。だが実際、リーダーからはガキの扱いについて何も言われてねぇし、適当に売っちまえばいいだろ」
「そうだな」
「まっ、呪うんなら自分の迂闊さを呪うんだな。あの陰険で執念深いリーダーを怒らせちまった事をよ」
「全くだ。宥めるのも一苦労だったぜ。と・こ・ろ・で、まさか覚えてねぇって事はねぇだろうな？」
「・・・」
男の問いに、桜花は返事を返さない。
「だが、俺らとしてもさすがに同情するぜ。リーダーは嫌がる女を無理矢理ってのが趣味だからな」
「早いけど、大人の階段上る訳だ。まぁ、このご時世だ。死ぬ前に男を経験しておくのもいいんじゃねぇ～」
頼んでもいないのに、勝手にこの後の展開を話し始める男達。
その言葉を聞き、さしもの桜花も顔を青ざめる。
桜花の恐怖を煽って楽しむという意味では、それは実に効果的だった。
ただの苦痛にならいくらでも耐えられる。
歯を食いしばり、口を閉ざし、相手が望む反応など一切示さない覚悟が幼いながらも桜花にはあった。
それは、このガミラスの戦争が子供たちをその様な性格にしたのか

もしれない。
しかし、それとこれは話が別だ。
桜花とて女、それもまだまだ少女なのだ。男を知らず、恋も碌にしていない。
恋愛に関しては、まだまだ早い年頃だと思われるが、漫画・アニメ、ドラマなどで、その手の事に関しては幻想を持っている。
そんな彼女にとって、無理矢理散らされるというのは最悪の未来像だろう。
それも、こんな下種どもに・・・
やがて、いやにわざとらしい鷹揚な歩き方で一人の男が側近らしき二人組をひきつれ、やや遅れて幾人かの取り巻きと思しき男達が部屋に入ってくる。
まるで「自分は大物です」と主張するかのようなその歩き方は、状況が違えばいっそ笑いを誘っただろう。
それほどまでに様にならず、滑稽な姿だった。
男は桜花の目の前まで歩み寄ると、長く伸びた黒い髪を力任せに引きよせる。
「つっ!!」
「桜花姉ぇちゃん!!」
「よぉ、この前は世話になったな。今日はその礼をしようと思って招待したんだが、気に入ってもらえたか？」
桜花の頭を引き寄せ、顔の前で舌なめずりをする男。
「人生の一大記念イベントだ。ちゃんと記録（撮影）して、後で家族の下に届けてやるよ。　まっ、お前らが家に帰る日が来るかどうかは、この先のお前の頑張り次第だがな。ハハハハハ・・・!!」
一体何が可笑しいのか？
男とその取り巻きたちは下卑た笑い声をあげている。
この後に何が待ち受けているのか、その手の事に経験の乏しい桜花にも分かる。
あの汚らしい手で衣服を剥ぎ取られ、その後は、きっといい様に嬲られて奴隷扱いか、あるいは殺されるかだ。

どちらにせよ、このままでは二人が無事に家に再び帰る日は来ない。
「さぁて、今日までさんざん待たされたんだ。そろそろ、お楽しみの時間としようや。精々泣き叫んでくれよ、その方が燃えるってもんだからな。楽しみ方を教えるのは、その後だ。ククク、悔しいか？　怖いか？　お前の始めてもこれからも、全部、俺様のもんだ。それでこそ、あの日、俺が受けた屈辱を思い知らせてやれるってもんだ」
男はそのまま桜花を床に押し倒し、衣服を強引に破こうとする。
「いいねぇ、いいねぇ、やっぱり女を犯す時はこうでなくっちゃ。まっ、これで泣き叫んでくれりゃ言う事なしなんだが、そこは我慢するか。俺は寛容だからな。それに、気が強い女も嫌いじゃねぇ。その生意気なツラが涙に濡れて、俺に許しを請う所を想像するだけでゾクゾクするぜ・・・とりあえずは躾から始めると・・・」
「やめろ！」
悦に入った表情でべらべらしゃべる男は、「躾」と称して拳を振り上げる。
だが、その言葉と行動を制するように幼い子どもの声が挟まれた。
同時に、小さな影が男目掛けて突っ込んでくる。
「桜花姉ぇちゃんから離れろぉ!!」
「あぁ？　ガキが調子に乗ってんじゃねぇ、よっ！」
「ぐぇっ!?」
無謀にも頭から突っ込んで行ったアギトに、男の無造作な蹴りが突き刺さる。
男が蹴りを入れる瞬間に、息が合ったかのように桜花の身柄は別の男により押さえつけられる。
アギトの身体はまるでボールの様に撥ね、コンクリートの床に転がった。
また、あり過ぎる体重差を考えれば一撃で沈んだのは疑いようもない。
男達は誰もがそれを確信し、アギトの無謀に嘲笑を浴びせる。
だがここで、アギトのこの後の行動は皆の予想を裏切った。

「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ―――!!!」
「ちっ、コイツ、まだ動けたのか!!」
起き上がったアギトは再度男に向かって突っ込む。
しかし、彼は何らかの格闘術を学んでいるというわけではない。それに相手との体格差がありすぎる。
そうなれば、相手の乱雑な蹴りの餌食になるのは必定。
「鬱陶しいガキだ。ガキはガキらしく地べたを這いつくばっていろ!!」
「げほっ!?」
男は堅く握りしめた拳で横っ面を殴り、アギトの身体は床に倒れる。
「やめて!!　相手はまだ小さい子どもなのよ!!」
「知ったことか！　調子に乗ったこのガキの自業自得だろうが!!　いいか、覚えとけクソガキ!!　世の中はなぁ、強い奴が正しいんだよ！　勝った奴が正しいんだ!!　弱い奴らは強い奴の言いなりになって、媚売っていればいいんだよ!!お前みたいに正しい事が通ると思っているゴミクズを見ていると、虫唾が走るんだよ!!」
男は倒れているアギトの蹴りを入れようと足を振り上げる。
如何に雑な蹴りであっても、体重を乗せれば幼児の体ではアバラが折れ、内臓に重大なダメージを与えかねない。
それどころか、下手をすると背骨を折り、一生に渡る障害を負う可能性もある。
いやそれどころか最悪の場合は死んでしまうかもしれない。
「やめろ――――――!!」
桜花は叫ぶとともに自分の体を捻りながら自分の体を押さえていた男を振り払う。
そして、アギトの上に覆いかぶさり、蹴りを無防備な背中で受け止めた。
「ぐっ・・・・!!」
「桜花姉ぇちゃん!!」
「このっ、どいつもこいつも・・・おい、こいつをちゃんと押さえとけよ

!!つかえねぇ野郎だな!!」
「す、すみませんリーダー」
　自分の思い通りにならない状況に、男はまるで癇癪を起した子供のように喚き散らす。
「全く、私に構わず逃げる事が出来たはずなのになんで逃げなかったの？」
「桜花姉ぇちゃんを置いて逃げる事なんて出来ないよ・・・桜花姉ぇちゃんは大切な人だもの」
「痛いのに、辛いのに・・・がんばったね。カッコよかったよ」
「桜花姉ぇちゃんを守・れた・・・かな・・・？」
　アギトはそう言って意識を失った。
　意識を失ったアギトを静かに横たえた。
「・貴方たち!!もう許さない!!」
「へっ、ガキがなに強がりを言っている？見ろ、この状況を。お前が俺たちに勝てる確率なんざぁ、１％もねぇんだよ」
「うるさい!!例え試合に負けて、勝負にも負けてそれでも、自分に負けなきゃ、負けじゃない!!貴方たちの様なクズに身体は渡しても私の信念は奪わせないし奪えない!!」
「ほぉ～面白れぇ。だったら、その信念ってやつをズタボロにして、廃人にしてやるよ!!」
　対峙していた桜花と男。
　男は叫ぶと、ニヤついた笑みを浮かべながら、拳を振り上げ、桜花へと迫った。
「うるさい!!私が許さないって言ったら絶対に許さない!!・・・私は貴方たちみたいな奴らには絶対に負けない!!」
　迫りくる男に桜花は精一杯声をあげ、叫んだ。
　すると、桜花の身体の周りを青白いオーラの様なモノが桜花の身体を包み込んだ。
「な、なんだ!?」
　迫りくる男も桜花のこのオーラに戸惑い、接近するのを止める。
　他の連中も、見たことのない現象に戸惑い始める。

「ビビるんじゃねぇ!!こんなの下らないこけおどしだ!!野郎ども、やっちまえ!!」
オーラが出る前は自分で桜花を痛めつけようとした男だったが、自分たちが見たことのない現象をまのあたりにして、自分ではなく、部下の連中に任せるあたり、小物な男だった。
「「「う、うおぉぉぉぉー!!」」」
リーダーに命じられ、仕方なく、桜花へと迫る男達。
(なんだろう?力があふれる・・・)
一方、謎の青白いオーラに包まれた桜花は普段よりも何倍もの力が溢れてくる感覚がした。
「ふんっ」
桜花が思いっ切り腕を振ると先程まで桜花の手を縛っていた縄はあっさりと切れた。
それを見てたじろぐ男たち。
まぁ、それも無理もなかった。
大人の男の手で縛った縄を小学生の女子児童があっさりと腕を振っただけで、縄を切ってしまったのだから・・・
この時、桜花の身体に起きた現象は魔法世界でない地球では未知の現象化もしれないが魔法世界であるミッドでは結構メジャーな現象だった。
桜花の身体に起きた現象は身体強化と呼ばれる魔法で、ミッドにある名門校、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院では初等科一年生の体育の始めに習う魔法だった。
元々桜花の身体には魔導師が持つ、魔力の源であるリンカーコアが存在しており、桜花の絶対に負けたくないというこの状況下で鳴動したのだろう。
未だに身体の周りにオーラ（魔力）が漂っているのは制御が出来ていないためである。
「さあ、覚悟しなさい!!下郎ども!!」
魔力を纏った桜花が反撃の狼煙をあげようとした瞬間、
部屋の壁の一部が突如、爆発した。

「こ、今度は何だ！　何が起こった!?」
「わかりません、いきなり壁が吹っ飛びました!!」
誰もが混乱する中、埃とも煙ともつかない靄が掛かる。
やがて、粉塵が晴れるとそこにいたのは、
「遅れてごめん。助けにきたわよ、桜花!!」
ギンガであり、混乱する男達を無視して桜花に声をかけた。

十二話　それぞれの思いとそれぞれの戦い　ギンガ編

場面はギンガが桜花とアギトが監禁されたビルに突入する前に戻る。

源三郎は逐次、捜査にあたっている憲兵隊と連絡をとり、捜査の進展状況を聞いている。

そして、ある区画に設置されているNシステムに犯人が使用したと思われる車の目撃情報があり、それ以降この車の目撃はなく、源三郎はこの区画に桜花とアギトが居るものだと判断して、ギンガと紅葉に加奈江の事を任せ自らが桜花とアギトを探そうとした。

車に乗り込むと何故かギンガまでもが乗り込んできた。

「き、君はっ!?どういうつもりだ?」

「私も一緒に探しに行きます」

「し、しかし・・・」

「私はこう見えても元の世界では捜査官をしているんです。きっと、何かのお役に立てる筈です」

「君が?・・そうか、分かった」

源三郎としては、今は一人でも人手が欲しい為、ギンガの動向を許可した。

ギンガを乗せた車は最後の目撃情報があった区画へと向かった。

しかし、区画とはいえその広さは広大で憲兵隊も捜索隊を送ったが未だに発見できずまた監禁場所は別の区画なのではないかと他の区画にも捜索隊を送っている為、捜索隊の人数は多いとは言えない。

ギンガと源三郎も互いに分かれて捜索することにした。

彼女は源三郎と別れた後、周囲に人が居ないかを確認した。

(もう二度と使わないって決めたけど・・・人として生きるって誓ったけど・・・人として育ててくれた母さんと父さん、そしてスバルにも・・・でも、ごめんなさい。壊す事にしか特化しなかった大嫌いだった

こんな「力」でも、あの子の・・・あの人達のために役立つならきっと、私は誇ることができるから!!)
意を決して、長い間封じ続けてきた力のスイッチを入れ始めるギンガ。
意識して完全な形で発動する。
それによって何が起こるかは、ギンガ自身が一番知っていた。
これまで築いてきた自分、「人間」としての自分。
それを壊してしまうかもしれない恐怖はあるがそれに勝る物を得たのだから。
次元漂流した自分を暖かく迎えてくれたあの家族に家族の一員を失うと言う自分と同じ経験をさせたくない。
覚悟を決めたギンガは、禁忌を破る為に静かに目を閉じる。
次の瞬間、封じ続けてきた力と共に閉じた眼を開く。
開かれたギンガの目は普段のエメラルドグリーンの瞳から金色の瞳に変わっていた。
金色の瞳・・・それはギンガ達、戦闘機人が普段の常人モードから破壊と殺戮の為この世に生を受けた戦闘機人モードになった証でもあった。
しかし、理性を失い凶暴化するわけではない。
戦闘機人の大きな特徴は魔導士の鬼門であるＡＭＦでも戦闘機人独特の能力、ｉｎｈｅｒｅｎｔ　ｓｋｉｌｌ　通称ＩＳと呼ばれる能力を駆使し、敵を殲滅する事が出来る。
ギンガは再び、目を閉じ意識を集中する。
(桜花はリンカ―コアを有していた・・・それなら魔力反能がある筈・・・たとえＡＭＦが充満していても戦闘機人モードになればＡＭＦを無視して魔力を探知できる・・・)
(何処?・・・・何処に居るの?桜花・・・)
ギンガが意識を集中し、桜花の魔力を探す。
(っ!?見つけた!!待っていて!!桜花!!)
そして、桜花の魔力を探知するとその場に向けて一気に駆けだした。

源三郎や捜索隊に連絡をするのを忘れて・・・
やがて、桜花が監禁されていると思われるビルに到着すると、
（っ!?桜花の魔力が跳ね上がっている!?一体何が・・・？）
探知していた桜花の魔力が急に魔力レベルが上がったのだ。
「桜花!!」
ギンガは桜花の身に何か遭ったのだと思い、桜花の下へと急いだ。
そして、
「遅れてごめん。助けにきたわ。桜花」
邪魔な壁を壊して桜花の居る部屋へと飛び込んだギンガの目には身体の周りに青白い魔力光を身に纏った桜花の姿があった。
そして、床に倒れている小さな女の子（アギト）の姿も・・・
「ギンガさん？」
いきなり壁を突き破って来たギンガに男たちはもちろん、桜花も驚いた様子だった。
「貴方たち、覚悟はできていますね？生憎今の私は、心底頭にきていますので・・・ちょっと手加減は出来ませんよ」
「何訳の分からねぇことを言っていやがる？女一人が飛び込んで来て何が出来る？」
「よくよく見ればこの女もなかなか良い女じゃねぇか、そこのガキ共々、良い声で鳴いてもらおうか!!」
一人の男がギンガに襲いかかった。
しかし、
ギロッ
「っ!?」
ギンガがその金色の瞳で男を睨むと急にその男はピタリと固まる。
（な、なんなんだ？コイツ？女の・・・ただの一睨みなのに身体が動かねぇ・・・）
「て、てめぇ！　い、今いったい何しやがった!!」
「今見た通り、ただ睨んだだけよ」
「ふ、ふざけんじゃねぇ、んなハッタリにビビると思うんじゃねぇぞ!!
野郎ども、やっちまえ!!」

相変わらず、未知の相手や現象に自分ではなく、部下を先兵に使うリーダーだった。
しかし、戦闘機人モードになったギンガ相手に非魔導師の男達はあまりにも非力で、更に魔力で身体強化した桜花も加わり、誘拐犯は瞬く間に殲滅された。
まぁ、相手も丸腰の女一人と慢心していた事も一因であったが・・・
誘拐犯を殲滅した後、ギンガは源三郎に渡されていた携帯端末で源三郎を呼び、彼と憲兵隊が来た時には誘拐犯たちは、全員ボコボコにされた状態で床に転がっており、担架に乗せられ憲兵隊本部ではなく病院へと搬送された。
そして桜花を守ったアギトも・・・
その後、桜花は憲兵隊本部にて両親に今回の誘拐事件の原因の事について事情を聞かれ、老人の食糧を取り戻したことに関しては、何のお咎めもなかったが、その事を何故、黙っていたのかについてお咎めを受け、被害にあったアギトの親、八神・リンフォース・シュベルトと託児所へ詫びを入れにいった。
桜花はこの時、泣きながら土下座までしてシュベルトと託児所の職員の人たちに謝った。
幸い、アギトも命に別状はなく、託児所の子供達も桜花に懐いているため、出入り禁止にすると言うわけにもいかず、厳重注意だけで済んだ。
そして、ギンガも桜花の居場所を突き止めたのに何故、憲兵隊に知らせなかったのかと、源三郎と加奈江にお咎めを受けた。
この時、ギンガは昔、クイントから叱られた時と同じ感覚を受けた。

桜花たちの誘拐事件が解決してから、暫くして、
「加奈江さん」
ギンガが加奈江に話かけた。
「ん？何かしら？」
「私、あの話を受けようと思います」
「えっ!?本当に!?」

「‥はい」
「ありがとう!!桜花もきっと喜ぶわ!!」
加奈江は思わず、ギンガに抱き付いた。
ギンガが言ったあの話と言うのは、以前、加奈江から提案された、中嶋家への養子縁組の話だった。
「それともう一つ、お願いが‥‥」
「えっ?何?‥‥うーん‥‥でも、それは‥‥」
ギンガの言うお願いの内容を聞いた加奈江は少し困った表情をする。
「お願いします!!中嶋家の一員になり、地球市民の一員となるからには、私も地球の為に役立ちたいんです!!」
困惑する加奈江にギンガは、頭を下げてまで、頼み込む。
「‥‥」
そんなギンガに加奈江は困惑した表情を崩さなかった。

その日の夜、ギンガは源三郎と加奈江を交えて、話し合いが行われた。
議題内容は勿論、ギンガの中嶋家の養子縁組とギンガが言ったもう一つのお願いの件だった。
養子縁組の件については、問題なく源三郎も賛成してくれて明日にでも手続きに必要な書類を用意する事となったが、もう一つの案件に関しては源三郎も加奈江同様、すぐには採決を下せなかった。
取りあえず、ギンガの中嶋家の養子縁組の件については、そのまま話を進め必要な手続きを行い、ギンガは正式に中嶋家の養子となり、ギンガ・ナカジマと言う名を改め、中嶋ギンガとなった。
ギンガが中嶋家の正式な養子となった日の夜。
夕食の席にて、
「今日はみんなに重大な発表があります」
と、加奈江が中嶋家のみんな‥‥正確には桜花と紅葉にとある発表をする。
「ん?何?」

「中嶋家に今回、新しい家族が増えます」
「新しい？」
「家族？」
　加奈江の発言に首を傾げる火憐と紅葉。
「それは加奈江さんが妊娠したと言う事ですか？」
　紅葉が最も正解らしい意見で加奈江に質問する。
「残念だけど、桜花の弟か妹が出来るのは当分先ね・・・・」
「・・・・」
　加奈江の発言に源三郎は少し頬を赤く染める。
「それじゃあどういう事？ペットでも飼うの？」
「正解は・・・・」
「「正解は？」」
「正解は、この度ギンガ・ナカジマさんが桜花の正式なお姉さんになります!!」
「「・・・・」」
　加奈江の正解を聞き、暫し茫然となる桜花と紅葉。
「えっと・・・よろしくね、桜花」
　ギンガがよそよそしく桜花に挨拶をすると、
「「えええええー!!」」
　二人は驚きの声をあげる。
「ほ、本当にギンガさんが私の本当のお姉ちゃんになってくれるんですか？」
「え、ええ」
　目を輝かせる桜花にタジタジな様子のギンガ。
　桜花としては姉と慕っていたギンガが本当の姉となったので嬉しかったのだ。
　ギンガとしては桜花が自分を姉と認めてくれた事は嬉しかったのだが、その様子が故郷、ミッドにいるスバルに被って見えたので、ギンガとしては複雑な心境だった。
（ぎ、ギンガこの世界に住む!?一体どういう事なの!?）
　ギンガの中嶋家の養子入りを聞いて、紅葉は混乱する。

（ギンガはアキラと結婚する筈なのに・・・そもそもギンガから次元漂流したなんて話を聞かないし、一体どういう事なの!?）
そもそも前世で知る自分の同僚から次元漂流した話なんて聞いた事がない。
これだけの体験をしたのであれば、前世の自分に話す筈だ。
それなのにギンガは次元漂流した体験を話さず、異世界の地球の家に養子入りをしている。
この後、ギンガは再び次元漂流してミッドに戻ったのだろうか？
紅葉の疑問が解消されるのはまだ先の事だった。

そして、
「ギンガ、本当に行くのか？」
食後、桜花と紅葉は既に就寝している中嶋家のリビングにて、ギンガ、源三郎、加奈江の三人が話し合いをしていた。
そこで、三人はギンガが頼んだもう一つのお願いについて再度、話し合いをしていた。
「はい。以前、加奈江さんにも言いましたが、地球が大変な時に黙って何もしない訳にはいきません。ですから・・・」
「防衛軍士官学校に入校したい・・・と？」
「はい!!」
そう、ギンガが言ったお願い事とは地球防衛軍士官学校への入校であり、将来的には地球防衛軍軍人になりたいと言う事だった。
士官学校へ入学するには地球市民として正規の戸籍が必要だった。
そのため、ギンガはまず中嶋家へ養子入りをしたのだ。
ギンガ自身は内心、管理局が自分を探しに来る事などもう無いとどこかで感じ取っていた。
〝陸〟の・・・ましてや一下士官である自分を本局の・・・〝海〟の局員が必死になって探しに来るなんて、ほぼありえない。
自分が〝海〟の所属で魔力レベルがＳクラス以上か提督か左官、執務官クラスの階級ならば話は違うだろうが・・・
兎も角、管理局の救援が来る確率が物凄く低い今となってはいつま

でも救助者・引いては中嶋家の養子という立場で居ては、只のゴク潰しになってしまう。
まして、今の地球はガミラスとの戦時下・・・周りの人々が苦しい思いをしている中、自分は漂流者だから・・・別の世界の人間だから関係ないなどと言う真似はギンガには出来なかった。
ただでさえ、食糧事情が厳しい中、中嶋家の人達はちゃんと自分に衣食住を提供してくれる。
この人達のために、自分も何か出来ることをしよう。
自分にも何か役立つことは有るはずだ。
そう思ったギンガが真っ先に思い立ったのが防衛軍軍人だった。
それはこの世界の人達を守ろうと言うギンガの意志の表れだった。
研究所で生まれ、クイント・ナカジマが所属していたゼスト隊によって保護されるまでの六年間、一切外の世界と関わりを持たず、毎日毎日実験の日々・・・
そんな中、ギンガと妹のスバルは救われて家族を得た。
しかし、家族を得てもギンガとスバルの二人はこの時にも未だに夢と言うモノを持たず、新たに得た家族と言うモノと接してけば良いのかと戸惑う日々が続いた。
そしてようやく家族と言うモノに慣れ始めた頃に母、クイント・ナカジマが任務中に殉職し還らぬ人となった。
皮肉にもその出来事が・・・ギンガにとって母親を失うことにより、夢というか、人生における明確な目標は見つける事となった。
それは、「母の代わりとなり、自分が妹（スバル）を守る。母が自分達姉妹を救ってくれたように、自分も困っている人を助けるのだ」、と言うモノだった。
母（クイント）の様に強く、そして母（クイント）の様に優しい女性になりたいと目標を掲げ、ギンガは自らも管理局に入ったのだ。
妹のスバルは十一歳の時に巻き込まれた空港火災で、なのはの手によって救助された時に彼女もギンガと同じ思いを抱き管理局へと入った。
ギンガの困っている人を助けたいと言う思いは、例えミッドではな

い別の世界でも変わることは無かった。
しかし、ギンガの防衛軍士官学校の入学、引いては防衛軍への入隊に関して、加奈江は危険だからと言う理由で渋り、源三郎は加奈江と同じく危険と言う危惧の他にもう一つ、ギンガにスパイ容疑がかからないかが心配だったのだ。
中嶋家の養子となったがギンガは元々、別の星の住人だ。
しかも、彼女はその星で軍と警察を合わせたような組織に所属していた。
ギンガ自身、管理局は自分を探しに来る事はもう無いだろうと思いその事をギンガは他の誰にも言っていない。
源三郎はギンガのそんな事情を知らない。
その為、源三郎はもし、ギンガが所属する組織（時空管理局）がギンガを捜索してきた時、ギンガは地球に残るだろうか？と言う疑惑が残った。
いや、普通に考えれば漂流し救助が着たにもかかわらずソレを拒否し明日をも知れぬ星に留まるバカはおるまい。
ギンガが故郷へ帰れば、この星の技術や情報を報告するだろう。
そしてその組織（時空管理局）がガミラス同様地球に対して、侵略行為に及んだとすれば、地球はガミラスとその組織（時空管理局）との苦しい二正面作戦を展開しなければならない。
今の地球にはとても二正面作戦を展開する余裕はない。
そうなれば管理局がギンガを探しに来る前にギンガの暗殺を考える輩がいるのではないだろうかと、源三郎はそう思ったのだ。
しかし、ギンガのあまりにも真剣な眼差しと態度に中嶋夫妻は等々折れた。
生まれ育った故郷を・・そこに残された家族を捨ててまで、死に底状態の地球のために何かしようと行動するギンガの決意に胸をうたれたのだ。
そこで、源三郎はギンガにあらぬスパイ容疑がかからないよう、内密に藤堂長官に事の次第を話し、藤堂長官も中嶋夫妻同様、ギンガの決意に意を汲んでくれ、ギンガの身の安全を保障してくれた。

スパイ容疑がかからないように措置をしてくれたのだが、やはり危険な職に変わりなく、願わくば、ギンガが任官する時には、ヤマトが無事に地球へ帰還してガミラスとの戦争が終結してくれるか、後方の地上勤務に就くことを中嶋夫妻は願った。

翌日、源三郎が士官学校から入学用の願書を持ってきた。

身元請負人・保護者の欄には中嶋夫妻の名が記入され、受験生の欄にはギンガの名前が記入された。

ギンガは故郷、ミッドチルダにて、管理局の訓練校と捜査現場の場数を踏んできた経験から、途中編入となった。

そして今、ギンガが悩んでいるのが、どのコースを受験するかと言う事だ。

本来、ギンガが得意とする陸戦科の科目は任官後、空間騎兵隊に配属される科のみで、そこは、女性の受付を行っていない。

最も養子縁組とはいえ、正式にギンガの親となった源三郎は断じて、男だらけの空間騎兵隊へギンガを入隊させるのには反対の姿勢を貫いた。

士官学校への編入試験、書類の提出期限までまだ期間があったので、どの科へと進むかはもう少し考えることとなった。

ギンガが士官学校への入校準備を整えている頃、

タイタンから鉱物資源を満載し、更にタイタンにて鹵獲したガミラスの強襲揚陸艦とその護衛を務めていた三笠が地球へと帰還した。

地球へ運ばれたガミラスの強襲揚陸艦は技術調査された後、そのまま武装輸送艦として使用され、ヤマトが地球に帰還するまでの間、防衛軍の主力の一端を担った。

そして、地球へもたらされた鉱物資源を使い地球防衛軍は宇宙艦隊の再建を開始した。

しかし、一度運ばれてきた資源では新造艦を作る量には足らず、そこで現存する艦の改修へ着手した。

幸い、波動エンジンの設計図は地球（此方）にあり、既に波動エンジンを搭載した艦（ヤマト）の建造とその性能を証明出来、それは現在地球が採用している宇宙艦船のエンジンよりも遥かに性能は上で

あり、新たに即採用されたのは言うまでもなく、現存艦の機関の変換が順次行われた。
その中には当然、今回の護衛と運送任務を務めた三笠も含まれていた。
改修には三週間ほどかかると、技術部からの報告を受け、その報告を受けた後、司令部に出頭した良馬は今回の輸送、護衛任務での報告書を提出した後、敵巡洋艦を撃沈した功績により昇進したが、あの時、ガミラス艦から聞こえた乗員の悲鳴に関しての報告は敢えて行わなかった。
仮にしたとしても、恐らく軍上層部にてもみ消されるだろうと思ったからだ。
防衛軍上層部としては、ガミラスはあくまで人間ではなく、獣か悪魔の化身・・・そう思わせたかったのだろう。
報告書を提出し終えた良馬は、下宿先である中嶋家へと戻った。
リニスは途中、行く所があると言って良馬とは別れた。
玄関の戸は閉まっており、鍵を開け、声をかけても誰も応答が無かった為、みんな出かけているのかと思い再び鍵をかけ良馬は部屋で休むことにした。
司令部からの帰りの途中、源三郎と司令部内で会い、先に下宿先（家）に戻っている旨を伝えてあるので、強盗には間違われないだろう。
リビングを通り、自分の部屋へ向かおうとリビングに差し掛かった時、テーブルの上の書類が良馬の目に映った。
何気なく見ていたその書類の文字と内容を見た時、良馬は最初、目を見開き段々険しい表情となっていった。
司令部の庁舎から自宅へ帰宅中の源三郎は、昼間庁舎で良馬とバッタリ出会った時に、ギンガが家（中嶋家）の養子になった事を話し忘れたと、思ったが、別に急ぐ様な事はないし、地球に帰ってきたってことは、暫く地球に居るだろうから、その時に話せばいいだろうと思っていた。
そして、

「ただい・・・」
源三郎が玄関のドアを開け、帰宅したことを告げようとしたその時、
「これは!!一体どういう事だ!?ギンガ!?」
家の中から、良馬の怒声が聞こえた。
「ん?な、何だ?」
あの良馬が怒声を上げる事なんて滅多にないため、源三郎は当初、何があったのかと首を傾げた。
しかし、良馬が怒声を浴びせている相手がギンガだと言う事で、彼には何となく、想像がついた。
(ギンガの防衛軍入隊の件か?やっぱり・・・)
やれやれと言った感じで我が家の中へ歩みを進めていくと、リビングで案の定、良馬がギンガ相手に物凄い剣幕でギンガに食って掛かっていた。
加奈江や桜花、そして紅葉も間に割り込める状況ではなく、二人の成り行きをジッと窺っていた。
と言うか、普段の良馬から信じられないぐらいの怒気と声で少し怯えている。
「中嶋さんの家に養子縁組ってなんだよ!?それに防衛軍の士官学校へ入るだと!?一体どういう事だよ!?」
自分が宇宙へ行っている間にまさか、異星人であるギンガが中嶋家に養子入りをしているなんて良馬にとっては寝耳に水であった。
しかも、防衛軍士官学校へ入校すると言うのだから、良馬としてはそれが釈然としないと言うか我慢ならなかった。
それは、何となくだが自分たち防衛軍軍人が余りにも非力だから、無関係だったはずのギンガまでこの戦争に巻き込んでしまったのではないかと言う自己嫌悪的なモノが含まれていた。
最初は何故、こんな事をしたのか?という事情を聞き、その後は説得にあたった。
「ギンガ、冷静になって物事を見ろ!!『酒を飲んでも呑まれるな』って言葉があるように君は戦時下の地球に来てその空気に呑まれかけて

いるんだ。君がこんな死にかけの地球と生死を共にする事は無い!!」
「お言葉ですが、呑まれているからこそ、私は防衛軍に志願したんです!!確かに私は貴方達から見れば、異星人ですから地球の事に関しては部外者化もしれませんですが、だからってこのまま何もしないで居るなんて出来ません!!」
「だからって!!」
尚もギンガに食って掛かる良馬だったが、
この時の彼は冷静さを失っているように見えた。
そこへ、
「良馬、貴女に彼女の意志をどうこうする権利はないわよ」
「えっ!?」
聞き覚えがある声を聞き、振り返るとそこには忍、リニス、ノエルの姿があった。
「し、忍さん?それにノエルも・・・」
何故この場に忍とノエルが居るのかと思っていると、忍が再び口を開く。
「良馬、彼女の士官学校入りに関しては、貴方は口を挟む資格は無いはずよ。それは貴方自身が良く分かっている筈よね?良馬?」
冷たい笑みを浮かべ、良馬へと訊ねてくる忍。
「・・・」
忍に指摘され、良馬はバツ悪そうに忍から視線を逸らす。
それはかつて自分自身が忍の反対を押し切って士官学校入りをした為である。
(あの時の忍さんもこんな気持ちだったのだろうな)
ここに至って良馬はあの時、自分が士官学校へ行くと言った時、忍が猛反対した時の気持ちがようやく分かった。
それにギンガはもう中嶋家の住人なのだ。
幾ら下宿先の提供者の家とは言え、やはり中嶋家は月村家と何の関わりもない他所の家だ。
他所の家の家庭事情に口を出すのは余りにも野暮と言うモノだ。
自分の過去の事を持ち出され、他所の家の家庭事情と言う事ではも

はや良馬にギンガの士官学校入りを止める術はなかった。
渋々と言った様子で良馬はギンガの士官学校への入校の件についてこれ以上抗議はしなかった。
「それで？何で、忍さんが此処に？」
良馬は少しむくれる感じで忍が中嶋家に来たのかを訊ねる。
「良馬が昇進したってリニスから聞いて、そのお祝いに来たのよ」
「態々？」
「だって、これまで良馬が昇進した時も出来なかったでしょう？だから、今までの分も兼ねて、態々来たのよ」
「はぁ～分かりました。それでは、昇進祝い兼ギンガの新しい門出にお祝いをしましょう」
良馬は渋々であるが、ギンガの件を割り切って、忍の提案を受けつつ、昇進祝いを受け、ギンガの士官学校入りを認めざるを得なかった。
祝宴もそろそろ終盤に差し掛かった頃、
「そういえば、ギンガはどのコースを受験するんだ？」
良馬がギンガにそのコースを受験するのかを聞いた。
しかし、ギンガはどのコースを受けるか決めかねていた。
そこで、良馬とリニスが相談に乗った。
まず、良馬はギンガが前の組織でどのような事をしていたかを聞き、そして、ギンガの得意な事を尋ねた。
すると、得意な事は陸戦だと言う。
しかし、防衛軍の陸戦は女子禁制なので、次に保有資格について訊ねるとギンガはミッドで二級通信士の免許を保有している事から、良馬は通信科を薦めた。
通信科ならば、艦隊勤務だけでなく、地上でのオペレーター職もあるので、中嶋夫妻もソレを推した。
更にリニスが、医療科の応急処置コースも受けておいた方が何かと役に立つと言い、医療科の応急科を選択。そして最後にギンガたっての希望で航空科を選択した。
まぁ、通信員は時には艦載機に乗り、偵察員として活動する機会もあるので受けておいて損は無かった。

ギンガが受けるコースは通信科をメインに医療科、航空科の三つとなった。
「ああ、それと・・・」
士官学校の受験コースが決まった後、リニスがもう一つギンガにある提案をした。
その提案とは、
「パイロシューター!!」
「電刃衝!!」
「くっ・・・」
月村家所有の広大な試作兵器実験場にて、多数の閃光と爆発が起こっている。
空中には管理局のエース・オブ・エースと呼ばれる高町なのはとほぼ色違いのバリアジャケットを身に纏った紅葉と黒いインナースーツの上に白と茶色のコート、頭にはナースキャップの様な帽子を被ったリニスがいる。
そして地上にはバリアジャケットとブリッツ・キャリバーを装備したギンガがおり、空から降ってくる攻撃魔法をその機動力で逃げ回っている。
リニスがギンガにした提案、
それは、このＡＭＦの充満した環境の中での魔力トレーニングだった。
例え、魔法を使う事が無いかもしれないこの世界でも、日々の鍛練を疎かにしないようにとのことだった。
それにこの環境下の中で、鍛練をし続ければ魔力が上がる可能性も大いにあった。
そのため、ギンガはリニスの誘いを受け、このトレーニングに参加したのだが、元々二人は自分よりも魔力が上のため、この環境下でも容赦なく攻撃系魔法をぶっ放せるが、此方はＡＭＦの影響でバリアジャケットを展開するのにも一苦労であり、ギンガがこの環境に慣れるにはもう少し時間が必要だった。
そして、もう一つの理由が濃密なＡＭＦの環境下でリンカーコアが

異常に活発な動きと消耗を繰り返しており、その活動の結果、ギンガに多大な空腹感を齎している。
これはギンガが普通の魔導師ではなく、ギンガが戦闘機人という特殊な体質が拍車をかけていた。
食糧事情がひっ迫している今の地球でこの空腹感は厄介な事なので、リンカーコアの制御、之が主な理由でもあった。

ここで、時系列は少し時間を巻き戻し、場面は地球からギンガの故郷、ミッドチルダへと場所を移す。

第５８探査部隊が何らかの原因で遭難した事を受け、管理局は少数の艦船を遭難現場に調査兼救助へと向かわせた。
クロノ・ハラオウンが艦長を務めるＸＶ級の次元航行艦クラウディアもその中の一隻だった。
クラウディア以下三隻は第５８探査部隊が遭難した現場へと到着した。
ブラックホールや次元震に巻き込まれたのならば、その艦影は影も形もないだろうが、奇跡的に残存している艦がもしかしたらいるかもしれない。
いや、必ず居る筈だ。
それが、救助に赴いた者達の願いであった。
しかし、現場に来た彼らは驚愕した。
てっきり、第５８探査部隊はブラックホールや次元震に巻き込まれたのかと思っていたのだが、現場には管理局の次元航行艦を構成していたであろう艦船の残骸が漂っていた。
しかもその破損状況を見て、宇宙の自然現象で破壊されたものではなく、明らかに人為的に破壊されている。
「こ、これは・・・」
「どういう事だ？」
「ブラックホールや次元震に巻き込まれたのではないのか？」

宇宙を漂う友軍艦船の残骸を見て、救助隊の乗員は戸惑うばかり。
そんな中、
「ボヤボヤするな!!あの中にまだ生存者がいるかもしれんのだぞ!!すぐに救助作業を開始しろ!!」
『は、はいっ!!』
クロノがクルーを叱咤し、クルー達は慌てた様子で救助作業を始める。
しかし、皆の賢明な努力もむなしく第５８探査部隊には一人も生存者は居らず何とかブリッジの原型を留めていた艦の残骸からブラックボックスを回収する事だけは出来た。
クロノは今回参加した救助隊の艦幹部達と共に本局へ戻る前に回収したブラックボックスの記録を再生した。
すると、映像と音声には第５８探査部隊と大マゼラン一帯を支配するガミラス帝国と名乗る艦船のやり取りが確認できた。
その中で、管理局側が一方的にガミラスの領海を侵犯し、警告の為、接近してきたガミラス艦に対して無警告でアルカンシェルを放ち、コレを撃沈。
ガミラス側は管理局を侵略者とみなし、防衛行動の一環で第５８探査部隊を殲滅した事が分かった。
これはどう見ても第５８探査部隊の自業自得であり、非は管理局側にあるのが明白であった。
「・・・」
「こ、これは・・・!?」
「ハラオウン提督、本局へはなんと報告を・・・」
第５８探査部隊の遭難の真実を知った者達は戸惑った。
正直に言って、「見なければ良かった」・・・それが彼らの心境であった。
管理局側が一方的に戦端を開き、その結果返り討ちにあった事実をどう公表すればよいのか判断しかねた。
一歩間違えれば、管理局の大きなイメージダウンになりかねない。
しかし、これはクロノたち現場の人間に判断できる事態ではないの

で後の判断は、本局の上層部の手に委ねられた。
クロノは最後に本局の正式な発表があるまでこの映像の事実を他言無用とする命令も下した。
それと同時に管理局がこのガミラスに対し武力制裁等と言う愚かなマネをしない事を願った。
それは恐らく今回参加した救助隊のみんなはそう思ったに違いない。
クロノ達、救助隊が第５８探査部隊の遭難の真実を知り、困惑したのと同じように本局の上層部や〝陸〟〝空〟の幹部局員も今回の件の報告を受け困惑し意見が様々であった。
ガミラスに対し、報復せよ。
真実を公表しよう。
ガミラスとコンタクトをとり、会談の場を設けよう。
等の意見が出たが、最終的に下された判断は、
「第５８探査部隊は突如発生した次元震に巻き込まれ遭難。現海域はこの様な突発的な次元震が起こりうる可能性があるので、今後、この海域における探査は行わないものとする」
と、言う真実を闇に葬る事にした。
魔導師至上主義や管理世界拡大・拡張推進派の局員らは今回の判断に対して、「甘すぎる!!何としてでもガミラスに対し武力制裁を行わなければ、管理世界維持等の活動に支障をきたす!!」と発言したが、映像を見る限り、ガミラスの艦船は管理局の次元航行艦と比べ、速力も火力も段違いであると言われ、しかも今回の一件はどう見ても管理局側に非が有るのは明白である。
更にガミラスを攻略するのに一体何隻の艦船を犠牲にする気か？と穏健派と〝陸〟の局員から多数の反対意見が出た為、魔導師至上主義や管理世界拡大・拡張推進派の局員らは渋々ガミラスに対しての武力制裁を諦めた。
そして救助に赴いた者達には厳重な緘口令が敷かれた。
幸いガミラスはミッドの正確な位置を特定していない様子で、管理局に抗議も報復もしてくる様子が無かった。

真実を知ったクロノもこれで良いのかと思ったが、ミッド・・・ひいては管理世界や管理局に無用な混乱を招かない為、遺族には申し訳ないがやむを得ない事だと管理局の方針に従った。

十三話　再建、復興　帰還と卒業

三笠が機関の改修期間中、良馬は仕事をする傍らギンガの士官学校の編入試験の受験対策を教えたり、ギンガ自身もパイロット技術に関しては月村航空にあるシミュレーターを使い、リニスは紅葉と共にギンガにＡＦＭ状況下での魔導戦を教えた。

元々、フェイトにも魔法や戦闘技術を教えていたリニスなので魔法での戦闘を教えるのは上手かった。

最初は負け続きのギンガであったが回数を重ねる毎に段々と引き分けの回数、そして勝率も徐々に上がり始めた。

その結果、魔力レベルも、ＡＦＭ環境下にもかかわらず徐々に上がり始めた。

それは魔導師にとってこの劣悪な環境の中で、それに適応しようとするリンカーコアの成長なのだろうとリニスは語っていたがその成長には限りがあり、十分適応できたとリンカーコアが判断すればその成長は止まるとの事だ。

しかし、今のギンガの魔力レベルはミッドに戻ればＡＡＡレベルであり、ギンガとしては、十分に満足するレベルだった。

その理由は、元々地球は管理外世界にカテゴリーされているので、この世界で魔力が高かろうが低かろうが、そんな事は大して問題ではなかったからだ。

それに本来の目的でもあるリンカーコアの制御も出来た為、ギンガは地球に来た当初より、食事量が減った。（それでも常人よりは多い）

「そう言えばギンガさん、最近あんまり食べないよね？」

ギンガの食事量に気が付いた桜花がギンガに訊ねる。

「ああ、うん。そうね、ちょっと減っているかも・・・」

「具合でも悪いの？」

「具合・・・というか、体調は悪くないわ。ちゃんと食欲もあるんだけど、以前ほど食べようって気にならないのよ」

ミッドに住んでいた時であれば「物足りない」と思ったであろう食

事量。
だが、今はそれで充分満腹になるし、普段の生活や魔法の訓練でも特に体に違和感や異常を感じない。
ギンガの食べる量が減ったその理由は先ほどあげたリンカーコアの制御ができ始めているのと、加奈江の食事療法にあった。

防衛軍士官学校の編入試験の方は良馬との勉強の甲斐あってかギンガは見事、合格し宇宙戦士としての通過切符を手に入れた。
今後、防衛軍士官になれるかはギンガの努力次第であるが真面目なギンガの事だからたぶん大丈夫だろう。
ただ、ギンガが士官学校へ入学した時、校長が土方から山南に代わっており、その教育方針も教育方法も土方の頃と多少違っており、比較すると、山南の方が土方の頃よりも幾分楽なように感じたので良馬は少しギンガを羨んだ。
士官学校へ入校する傍ら、休日になれば実家へと戻りリニスと紅葉相手に模擬戦をする日が続いた。
それから暫くして、良馬は改修作業が終わった三笠に乗艦し、内惑星の資源輸送の護衛任務に再び就いた。当然、リニスも三笠へ搭乗するので、ギンガの模擬戦の相手は紅葉となった。
ただ、紅葉とはこの世界で初めて出会った筈なのにギンガは紅葉との模擬戦はずっと前から知っている同期の局員と模擬戦をしている様な感覚がした。
内惑星からの宇宙資源が小量ながらも着実に地球へと齎され、防衛軍は本格的に軍の再編へと乗り出した。
三笠を始めとするガミラスとの戦闘で運よく生き残った艦の機関改修はほぼ終わり、今まで採用されていた従来の地球型の機関は姿を消し、イスカンダルから齎された波動エンジン技術を地球独自で改良した地球製の波動エンジン、ロ号艦本イ４０１式次元波動缶へと変わった。
そんな中、防衛軍造艦局では、新たな艦船の設計が行われていた。
えいゆう　と同型のＭ―２１７４１式宇宙戦艦にとって代わって

艦隊の主力を構成する戦艦は、対ガミラス戦役時の主力戦闘艦（Ｍ―２１７４１式宇宙戦艦　Ｍ―２１７０式宇宙巡洋艦　Ｍ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦）などの紡錘形艦型の艦首に箱形の波動砲口を装備した艦型で、ヤマト級の塔状艦橋と砲身がついた三連装主砲塔形式が採用されている。

主機には新型波動エンジンを一機装備予定で、補助エンジンを艦後部両舷にそれぞれ一基、計二基を装備予定で、補助エンジンとは別に、艦中間部両舷に艦の前方を指向した噴射口が一基、計二基、艦底前部のインテーク状の構造物の後方に推進ノズルが四基付属する予定である。

量産式主力戦艦

諸元

全長　３１０ｍ

全幅　４６ｍ

主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基

補機　艦本式コスモタービン改（７６式推進機関）×二基

兵装　艦首拡散波動砲×一門

三連装衝撃砲（ショックカノン）×三基

六連装大型艦橋砲×一基

固定式四連装舷側砲塔×二基

対空パルスレーザー砲×十門

ミサイルランチャー×十門

搭載機　多数

空母は建造時間の短縮化のため、主力戦艦の設計図を基に艦体後半部を格納庫と飛行甲板に改造し、その下に波動エンジンを備え、艦橋後部も主力戦艦と異なる形をしており、主力戦艦の派生型として設計された。

飛行甲板には二基のエレベーターを備え、出撃する際はエレベーターで最上部の飛行甲板に搭載機を上げ発艦する主推進口の上には着艦専用口があり、直接格納庫に繋がっている。

主機は勿論波動エンジンだが、主力戦艦のものと形状が異なる。
長方形型の墳進口で着艦専用口の下に設置されている。
補助エンジンは、艦尾両舷まで延びている台形型噴進口が二基。
その他に波動エンジン下部には五基の半円型噴進口が付いている。
艦中間部両舷に噴進口をそれぞれ一基配置し、その後方にも噴進口がある。
兵装は艦隊決戦兵器である拡散波動砲一門を装備。
主砲の三連装衝撃砲（ショックカノン）は前部の二基となっている。
全長は飛行甲板と格納庫を保有しているため、主力戦艦よりも長い３４０ｍとなり、幅も一回り大きい。
これらの艦はその形状から、かつて旧日本海軍が保有していた航空戦艦　伊勢　日向　に近いもので純粋な空母ではなく、正式名称は主力戦艦改級戦闘空母と設定されたが、後に完成し乗艦した乗組員からが正式名称を略した戦闘空母　または　戦艦空母と呼ばれた。
搭載される艦載機は当初、現在ヤマトに搭載されている９９式空間戦闘攻撃機　コスモファルコンと零式５２型空間艦上戦闘機　コスモゼロでいいのではないかと検討されたが、コスモファルコンもコスモゼロも防衛軍は初めて着手した宇宙艦載機と言う事で運用して様々な不具合等が懸念されていた為、本格的な戦闘機開発も必要と言う事で新型の艦載機設計が行われた。
中型の戦闘艦である巡洋艦は対ガミラス戦役時の地球防衛軍の艦艇と共通する紡錘―葉巻形の艦型を採用しており、艦橋のある艦中央部から艦尾がロケット型に絞られる形状が特徴である。
主機関には当然波動エンジンを採用し、艦後部にあるインテーク状の構造物上に艦の前方を指向した噴射口が片舷に一基ずつ、計二基ある。
諸元
全長　１９０ｍ
全幅　３２ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基

兵装　艦首拡散波動砲×一門　（艦によっては未搭載型もあり）
主砲：二連装衝撃砲×三基
副砲：三連装衝撃砲×二基
三連装宇宙魚雷発射管×二基
四連装連射宇宙魚雷砲×二基
八連装重火器
二連装対空パルスレーザー砲×二基
搭載機　艦載機最大で三機搭載可能
空母同様、この巡洋艦の設計図は内惑星内のパトロール、輸送船団の護衛を主な任務とするパトロール艦、護衛艦の設計に流用された。
パトロール艦は、索敵を主な任務とするので、巡洋艦よりも武装は少ない。火力は前方及び側面に限定されるが、これは、艦底中央部と艦後部上面に各種探査装置類を装備し、情報収集と通信能力の強化した、パトロール艦の運用目的に則した配置となっており、武装は、艦隊決戦兵器である拡散波動砲を艦首に装備し、主砲は、１５．５ｃｍ二連装衝撃砲を艦体の前部に上面に二基、下面に一基を配置。艦首部分には、三連装魚雷発射管を片舷に二基ずつ計四基装備している。
大きさは巡洋艦と同じ設計となっている。
諸元
全長　１９０ｍ
全幅　３２ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基
兵装　艦首拡散波動砲×一門
１５．５ｃｍ二連装衝撃砲×三基
三連装宇宙魚雷発射管×四基
搭載艇　偵察機一機
連絡艇一機
護衛艦はその名前通り、物資輸送航路の護衛を目的とする艦であり、現在地球が行っている内惑星の資源輸送も、ヤマトが帰還し、地球が復興したあかつきには大規模になるものと、推察され、そうなれ

ば、海賊やテロ、ガミラスの様に異星からの侵略から輸送船を守る必要があるため、護衛任務を主とする艦の設計を防衛軍は依頼した。
設計には巡洋艦の設計を流用しているが、その艦の大きさは巡洋艦やパトロール艦よりも小さく、その大きさは駆逐艦並の大きさとなっている。
武装は、艦隊決戦用の雷撃に特化した駆逐艦と異なり、輸送船の護衛用としてバランスのある武装を採用している。
艦首には小口径ながらも、艦隊決戦兵器である波動砲を装備し、艦前部の方は、巡洋艦と同じ、武装配置となっているが、後部には小型の連装砲塔が四基、X状に配置されている。

諸元
全長　１１５ｍ
全幅　１４ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基
兵装　艦首拡散波動砲×一門
二連装衝撃砲×三基
三連装宇宙魚雷発射管×二基
四連装連射宇宙魚雷砲×二基
二連装対空パルスレーザー砲×四基

Ｍ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦にとって代わる予定の駆逐艦はシミュレートでは現在防衛軍が保有する艦船、そして設計された艦船の中では、防衛軍艦艇随一の速力を誇り、宇宙魚雷発射管を十六基装備、強力な雷装を持つ設計となっている。
戦闘方法は、その快足を生かして敵艦隊に肉薄し雷撃を行うという、ガミラス戦役時のミサイル駆逐艦と同様の戦闘スタイルを持つ。
主機関に、波動エンジンを採用しており、対ガミラス帝国戦役時の宇宙駆逐艦とは、あらゆる面で比較にならぬ性能を有するが、波動砲を装備していないのが、この艦級の特徴である。

諸元
全長　１５０ｍ

全幅　１４ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基
兵装　四連装連射宇宙魚雷発射管×四基
主砲：二連装衝撃砲×二基
副砲：二連装衝撃砲×四基
艦橋側面連装対空パルスレーザー砲×四基
乗員　四十五名
そして造艦局の技術者達が特に力を入れたのが、旗艦級の大型戦艦だった。
技術者たちは早速、出来上がった設計図を日本連合艦隊提督である土方の下へ持って行った。
「ほぉ～之が・・・」
技術者から受けっとった設計図を見た土方が思わず声をあげる。
受け取った設計図には旗艦級の戦艦の図と諸元が書かれていた。
諸元
全長　４４４ｍ
全幅　１１４ｍ
主機　ロ号艦本イ４０１式次元波動缶（通称：波動エンジン）×一基
補機　艦本式コスモタービン改（７６式推進機関）×十基・四軸
（機関は現在開発作業中）
兵装　艦首拡散波動砲×二門
主砲：三連装５０．８ｃｍ衝撃砲×四基
七連装大型艦橋砲×一基
三連装対空パルスレーザー砲×二基
二連装対空パルスレーザー砲×二基
艦首ミサイル発射管×四門
対空ミサイル砲×八門
連装舷側砲×四基
搭載機　約三十機搭載可能

乗員　九十五名
新造艦の諸元を見て、土方が気になった点はまず二つ。
新造艦の最大の特徴の一つ、兵装の艦首拡散波動砲×二門　と言う部分と乗員の数であった。
波動砲の威力は既にヤマトから報告を受け、その威力を知っている。
その波動砲を二門も装備し、しかも発射された波動砲は、波動砲制御室に設置された強力な波動エネルギー増幅装置により、広範囲に拡散し、敵を殲滅する。
予想される威力はヤマトの艦首波動砲の二倍の威力と推察された。
「しかし、乗員の数がヤマトよりも少ないな・・・ヤマト級戦艦の百十四人の八割程度の人数ではないか」
「しかし、それはやむを得ません。度重なる戦役による深刻な人的資源の問題がありました。乗員の育成は一朝一夕では行えませんから・・・」
「確かに、宇宙戦士一人の育成には少なくとも一年半以上はかかる。一人前となると、最短で二年から三年はかかるからな」
士官学校の校長を務めた経験のある土方だからこそ、人材育成の時間と労力の大変さはよく知っている。
「そこで人員不足を補う為、今後の艦船は波動エンジンや機関の制御や作動は全て設置されたロボットやコンピューターが行い、機関室には機関部員を置きません。また、武器に関しても同様で主砲塔内部には座席を設けず、砲術部員も置きません。攻撃においてはレーダーからの情報をコンピューターが即時に分析、各パートに伝達、照準から射撃までの戦闘指揮を中央でコントロールします」
これが果たして戦艦と呼べる代物なのか疑問は残るが、やはり人員不足の問題から仕方なく土方はこの自動管理方式を採用しこの艦の建造を許可した。
防衛軍が内惑星の鉱物資源の確保と軍艦の建造を行い、再建をしている中、
遂に地球の人々が待ちに待った日が来た。

ガミラスとの数多くの死闘を繰り広げ、ヤマトは遂にイスカンダルへ到達、そしてコスモクリーナーを持って地球へと無事に帰還した。
地球はギリギリの所で救われた。
しかし、ヤマトが帰還したその日、ある訃報があった。
その日の朝、農林水産省　食糧局局長室にて、一人の男がその部屋にある机の中から一丁のコスモガンを取り出し、自らの蟀谷に銃口を押し当て・・・
バキューン
引き金を引いた・・・。
「あっ!!」
秘書官がその部屋に入るとデスクに突っ伏す様に部屋の主である
その男は既にこと切れていた。
「何!?食糧局局長が!?」
「はい・・・護身用のコスモガンで、自決なさいました」
「局長は食糧の蓄えが残り少なくなったのを気にしていたからな・・・」
省内で、食糧局のトップである局長の死は瞬く間に知れ渡り、事件性が全く無いことから警察の方も『責任を感じての自殺』という事でこの件を処理した。
ヤマトからの通信はその数時間後に地球へと齎された。
あと数時間、ヤマトからの通信が早ければ・・・
あと数時間、局長が思いとどまってくれたら・・・
局長の家族や部下たちはそんな思いを巡らしていた。
ヤマトの帰還に地球の人々は皆歓喜し、ヤマトが帰還したこの日を世界共通の祝日にされるぐらいのものだった。
その偉業を達成したヤマト艦長の沖田十三は地球を目前に宇宙放射線病で亡くなった。
沖田以外でもこの航海でヤマト乗組員、百十四名の内、四十七名が戦死した。
そしてこの戦死者の中で、不名誉な戦死を遂げた者たちも居た。
ヤマトが苦難の末、ようやくイスカンダルへ到着し放射能除去装置

であるコスモクリーナーを受け取り、翌朝、地球へ向け出航しようとしていたその日の夜、一部のヤマト乗組員達が艦を脱走し、イスカンダルへの永住を宣言した。
しかも、人質もしくは自分達の子孫を残す為かヤマト乗組員の一人、森雪を拉致して・・・・
これらの行為はヤマトの仲間、そして地球に残る人々に対して許しがたい裏切り行為であった。
何故彼らがこの様な行動をとったのかと言うと、ヤマトの航海日数に関係していた。
当初、ヤマトの予定航海日数は地球～イスカンダル間を九ヵ月で終える予定だった。
だが、度重なるガミラスとの戦闘、宇宙気象等の影響で航海日数は遅れに遅れて地球到着がヤマト抜錨後の十一ヵ月掛かる見通しとなった。
その為、艦内では地球に戻っても既に人類は死滅しているのではないか？と言う噂が立ち始め、乗員達の中に不安が付き纏った。
やがて、疑惑は狂気へと変貌し、これまでの航海の中で地球人類が住めそうな唯一の星としてこのイスカンダルが選ばれ、彼らはヤマトを脱走し、イスカンダルにあるダイヤモンド大陸へと籠城した。
しかし、彼らは失念していた。
このイスカンダルもガミラス同様、年老いた星であった事を・・・・
彼らが籠城したダイヤモンド大陸は急激な地殻変動が起こり大陸は大きく避け、巨大な津波が起こった。
懸命の救助活動が行われるもこの災害の生還者は拉致被害者の雪のみであった。
ヤマト戦死者の中で、今回の脱走者達の名も加えられたのはせめてもの情けであった。
だが、この一件はヤマトの航海を汚す醜聞として封印され、また脱走者達の遺族や関係者の為、この事件がヤマト乗員の口から語られる事は無かった。
大勢の戦死者を出したヤマトであったが、その一方で、冥王星海戦

にて戦死したと思われていた宇宙駆逐艦、雪風の艦長でもあり、古代の兄、古代守がイスカンダルで生きていた。
彼は冥王星海戦の後、ガミラスの捕虜となり、本星に護送されている最中にその護送船がイスカンダルの付近で遭難し、イスカンダルの女王スターシアに救助され、彼は一命を取り留めていた。
スターシアは救助した古代守に一目惚れをしており恋焦がれていた。
また、守の方も自らを助け、献身的に自分を看病をしてくれたスターシアの事を愛していた。
ヤマトが地球へ帰還する日、スターシアはヤマトのタラップで、守に告白した後、泣きながらタラップを駆け降りていき、守はそんなスターシアの後を追いかけた。
そして、守は最終的に地球へは帰らず、スターシアと共にイスカンダルに残った。
互いに愛する者通しを引き裂くのは余りにも無粋である。
沖田は守のイスカンダル残留を許可し、弟の進も兄の守を笑顔で見送った。
防衛軍の再建と地球の復興が進められていく中、ギンガは主席・・・と言うわけではないが、それでも上位の成績で無事に士官学校を卒業した。
もし、途中編入でなければ主席で卒業できたかもしれないと源三郎は後にそう語っていた。
しかし、途中編入にも関わらず上位の成績で卒業したのだから大したものだろう。
士官学校を卒業したが任官先はまだ決まっておらず、ギンガは任官先が決まるまで待機を命じられ、士官学校の寮を後にし自宅である中嶋家へと戻った。
士官学校を無事に卒業し新たに地上に建てられた中嶋家に戻ったギンガは皆から歓待を受けた。
「ギンガ、士官学校卒業おめでとう」
「おめでとう。ギンガ」

「おめでとうございます」
「ありがとうございます」
「ところで配属先はもう決まったのか？」
卒業祝いの最中、源三郎がギンガに訊ねる。
「いえ、まだです」
「そうか・・・」
ギンガの配属先がまだ決まらないことを知った源三郎は顎に手を当てて、考える仕草をとる。
「あっ、父さん」
そんな源三郎を見たギンガが源三郎に声をかける。
「ん？なんだい？ギンガ」
ギンガに『父さん』と呼ばれて少し嬉しい源三郎。
なお、加奈江もギンガから『母さん』と呼ばれると、嬉しそうな顔をする。
「私の配属先がまだ決まらないのを良い事に強引に人事部に圧力をかけて、安全な後方勤務とかに回すのは止めてね」
ジト目をして源三郎に釘を刺すギンガ。
「あ、ああ・勿論だとも」
顔を少し引きつらせ、乾いた声を出す源三郎。
如何やら、ほんの少しだけ、ギンガが言ったように人事部に遠まわしで圧力をかけようかと考えていた様だ。

ギンガが士官学校を卒業した同じ頃、ミッドでもある部隊が解散を迎えていた。
それは八神はやてが部隊長を務めた機動六課であり、彼女の部隊はロストロギア関連の危険な任務を扱う古代遺物管理部の部隊で主にレリックと呼ばれるロストギアの回収を専門としていた部隊だった。
後見人にリンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン、カリム・グラシアを据えており、本局の上層部と聖王教会からの支援を得ていた。
噂ではあの三提督も影ながら支援をしていたらしい。

しかし、六課は正式な部隊ではなく、一年間という制限がある試験部隊だった。
何故こうなったのかと言う理由は六課の設置目的が、「最悪の事態が起こった場合に対応する部署の設立」というあやふやなものの為、大々的に優秀な人材を集めるわけにも行かなかったためである。
ギンガも本来、妹のスバルと共に１０８部隊からこの機動六課へと出向する予定だった。
その目的は、この部隊の隊長陣は八神はやての身内ばかりを中核にして、ＦＷ陣は、高町なのはと選んだ能力や将来性に優れるものの、出向者や訓練校を卒業したばかりで、実績や経験の乏しい新人達だった為、隊長陣とＦＷ陣との間の確執を防ぐ為、両方と繋がりのあるギンガがその中和剤の役割を果たす予定だったのだ。

ここで時系列は一年前の過去に時間を戻す。
新暦７５年　三月　ミッドチルダ中央区画　湾岸地区

ミッドチルダ中央区画　湾岸地区・・・此処は八神はやてが部隊長となる機動六課隊舎建設地区だった。
外装は既に完成し、後は内装のみとなっていた。
建設中の隊舎をはやてとシャマルは外から見学していた。
「なんや、こーして隊舎を見ていると、いよいよやなーってきになるな・・・」
「そうですね、はやてちゃん・・・いえ、八神部隊長」
それから二人は隊舎の敷地内を散策した。
「それにしても、いい場所があって良かったですね」
「交通の便は不便やけど、ヘリの出入りにはちょうどええ、六課にはええ隊舎や」
「何となく海鳴に似ていますものね」
シャマルが隣接する海岸を見ながら、はやての故郷、海鳴とこの場所が地形的に海鳴に似ている事を示唆する。
「そう言えば、そうやな」

はやては、新築の隊舎と海を見比べながら来月から始動する自分の部隊、機動六課に胸を躍らせていた。
しかし、その最中に自らの師でもあるゲンヤ・ナカジマの娘、ギンガ・ナカジマが任務中に殉職(管理局の正式記録ではそうなっている)してしまったが、はやては部隊の設置を戸惑うことなく、機動六課を設立し予定通りに六課は起動した。
そして試験運用期間の一年の間、様々な事があった。
起動した最初の月は、出動の機会は無く、訓練校と変わらず、教導官である高町　なのはと八神　ヴィータが、ＦＷ陣の訓練をする日々が続いた。
主に魔力効果を減少させるＡＭＦ状況下の戦闘訓練と敵の尖兵ともいうべきガジェット・ドローンと呼ばれる機動兵器との模擬戦闘が行われた。
この起動最初の月は平穏な一ヵ月だった。
翌月になり、ＦＷ陣に新たなデバイスが支給されたその日、機動六課は初出動を迎えた。
山間部を走るリニアレールにレリックが運び込まれていたのだ。
直ちに機動六課は出動し、レリックの回収へと向かった。
現場に向かう途中のヘリの中で、新人ＦＷ陣の一人、キャロ・ル・ルシエ三等陸士は不安にかられていた。
初めての現場と言う事もあるが、彼女は竜召喚士として類稀な素質を持って生まれたが、その力が強過ぎることを危惧した長老から故郷の集落を追放された経緯があり、魔法の使用に関して、消極的だったのだ。
そして、現場には、レリックを狙うガジェットと呼ばれる謎のロボットが襲撃してきた。
その襲撃により、同僚のエリオ・モンディアル三等陸士がピンチに陥った中、キャロの使役竜であるフリードリヒの完全制御に成功し、キャロは自分の殻を破る事が出来た。
その後、無事にリニア内にあったレリックは無事回収され、破壊さ

れたガジェットから一連のガジェットによる襲撃犯の黒幕が判明した。
黒幕は管理局が指名手配しているジェイル・スカリエッティと呼ばれる科学者であった。
犯人が分かり、六課のその後の方針はレリックの回収と共にスカリエッティの逮捕に決まった。
その後、八神　はやて、高町　なのはの故郷である地球でロストギア反応があり、六課のメンバーは地球へと向かった。
なのは、フェイトは中学校卒業後、嘱託から正規の局員となり管理局に就職し、居住も地球からミッドへ移したので久しぶりの帰郷となり、昔の学友と再会し懐かしんだ。
幸い地球で発見されたロストギアはレリックでもなく世界を破壊する程の危険物でもなく無事に回収された。
六課の稼働が進んでいく中、ＦＷ陣の一人、ティアナ・ランスターは焦りを感じていた。
彼女は殉職した兄の意志を継ぎ、将来は執務官になると言う夢を抱き、管理局へと入局したが周りが自分よりも魔力レベルが高い上司や相棒で囲まれており、更には自分よりも若く才能の開花が大いに秘められているキャロやエリオに嫉妬の様なモノを抱いていた。
そんな中、六課はホテル・アグスタにおいてロストギアのオークション会場の警備を依頼され会場警備を行った。
そしてオークションの最中、予想通りガジェットが突然出現しホテルへと迫ってきたので警護任務を任された六課の面々はその迎撃にむかった。
その中で、ティアナは焦りの余り相棒のスバルを誤射しそうになるミスショットをしてしまった。
その後、ティアナの焦りは益々募り、早朝訓練が始まるより前に起き、自主練をする日々が続き、後日、行われた模擬戦でティアナの危険行為になのは、オーバーキル並の方法でティアナを叩きのめした。
隊長陣とＦＷ陣の間に深い溝が生まれるかと思ったが、ＦＷ陣に隊長陣が経験した過去の出来事を知り、「強さ」の意味を知り、ティアナ

となのはは衝突することなく、無事に和解した。
夏の終わりにミッドの首都、クラナガンで一台の輸送トラックが突如ガジェットの襲撃を受けた。
現場に着いた捜査官が見たのは破壊されたガジェットの残骸と空になった生体ポッドだった。
その日、六課のＦＷ陣は久しぶりの休日を満喫していたのだが、キャロとエリオがマンホールの近くで両足にレリックの入ったケースを鎖で括り付けた少女を保護した事から事態は一変した。
今までガジェット以外姿を見せなかったジェイル・スカリエッティの軍勢・・・ギンガやスバルと同じ戦闘機人たち、ナンバーズとの戦闘に入った。
結局、この時は戦闘機人たちの逮捕もスカリエッティの詳しい情報も得られなかったが、レリックの回収と少女の保護は出来た。
後日、保護した少女に事情を聞くと彼女は自らをヴィヴィオと名乗った。
そして、彼女の正体は古代ベルカ時代の人物、「最後の『ゆりかご』の聖王オリヴィエ」のクロ―ン体「聖王の器」であった。
同じ、クローン体であるフェイトと彼女の親友であるなのはに保護され、検査入院していた病院で初体面をして、そこで懐かれたなのはとフェイトの二人はヴィヴィオの後見人となり事件解決のあかつきには、この子を養子にしようと思った。
しかし、九月に地上本部ビルで行われた公開陳述会にて、今までなりを潜めていたスカリエッティ一味は一気に攻勢へと出た。
公開陳述会が開かれた地上本部ビルと六課の隊舎が同時襲撃を受け、多くの局員が負傷しヴィヴィオはスカリエッティ一味に攫われてしまった。
ヴィヴィオを手に入れたスカリエッティ一味は古代ベルカの戦艦ゆりかご　を浮上させ、同時に地上に設置されていた砲台施設　アインヘリアル　を破壊した。
六課は破壊された隊舎の代わりに廃艦予定だった次元巡航艦アースラ　に司令部を置き、スカリエッティとの決戦に臨んだ。

その結果、なのはは無事にヴィヴィオを保護し、フェイトはスカリエッティを逮捕、ＦＷ陣はそれぞれ相手をした戦闘機人達との戦いに苦戦しながらも勝利し、彼女らを捕縛した。
復活した　ゆりかご　も管理局の次元航行艦隊のアルカンシェルの一斉射撃を受けて消滅した。
後にこの事件はＪＳ事件と呼ばれ管理局史上ミッドで起きた大規模テロ事件としてその名を後世の歴史に名を残した。
そしてこの事件を解決に導いた六課も奇跡の部隊として管理局の歴史にその名を残した。
その中で、スバルは姉であるギンガの名誉を回復しようとしたが、それについては、未だ賛否両論となっており、ギンガの名誉は未だに回復はしていない。
そして今日、機動六課の運用期間が終わりの日を迎えた。
終わりは六課らしいＦＷ陣対隊長陣との全力全開の模擬戦で終わりを告げた。
六課卒業後、ＦＷ陣はそれぞれの夢に向かって新たな一歩を歩んだ。
ティアナは執務官を目指す為、まずは執務官補佐として六課卒業後もフェイトの下で働く事となった。
スバルは〝陸〟所属の部隊の一つで、災害救助のエキスパートである特別救助隊からスカウトが来て、そのまま特別救助隊に入隊し、任務をこなすと同時にギンガの名誉回復のための活動を続けている。
キャロとエリオの二人は自然保護官となり、ミッドから離れた自然世界で暮らしている。
スカリエッティとその配下の戦闘機人、ナンバーズには管理局が司法取引を持ち掛けたが、スカリエッティ本人とナンバーズの内、ウーノ、トーレ、クワットロ、セッテの四人は取引を拒否しスカリエッティと共に刑務所へ服役した。
ナンバーズ唯一の死亡者であるドゥーエを除く、残りのナンバーズは皆、この取引を受け、海上隔離施設で更生プログラムを受けた。
プログラムの担当には１０８部隊とマリエル・アテンザ技術官が主

に担当した。
その理由は、１０８部隊の部隊長ゲンヤ・ナカジマが戦闘機人である娘を育てた経験からでゲンヤ自らがこのプログラムの担当に志願した。
マリエルの方はギンガとスバルの健康診断を何度も行ってきた事から、スカリエッティに次ぐ、戦闘機人の権威でもあったからである。
更生プログラムが終了した後、司法取引を受けたナンバーズの内、チンク、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディの四人はナカジマ家の養子となり、セイン、オットー、ディードの三人は聖王教会が引き取り、彼女達は教会の修道女となった。
そして、聖王のクローンであるヴィヴィオはなのはが養子として引き取り、フェイトもヴィヴィオの後見人となった。
一緒に過ごした時間と受け取った思い出があるなら、それはきっと「お別れ」ではなく、新たな旅立ちである。
終わりのない夢の途中ならば、きっとまた再会出来る。
駆け抜けた日々はまた会う日まで大切に抱きしめる。
愛しくて優しい宝物として‥‥。
六課の皆はそう思いながら新たな未来へと夢を抱いて旅立って行った‥‥。

十四話　ギンガさんの純愛道　前編

アステロイドが漂う宇宙空間を最近になって防衛軍で正式採用されたコスモファルコンの後続機、コスモタイガーが二機飛んでいる。
しかし、友軍同士の筈のコスモタイガー同士が互いに背後を取り合いつつ機銃で打ち合っている。
「そう言えば、配属先はもう決まったのか？ギンガ？」
「いえ、まだです」
ギンガに配属先を尋ねながら操縦桿を操作し機銃の発射ボタンを押す良馬。
そして撃ち込まれる機銃弾を回避しながらまだ自分の配属先が決まらない事を伝えるギンガ。
この二機のコスモタイガーにはそれぞれ良馬とギンガが乗っていたのだ。
両機は互いに背後を取って取られての攻防を繰り返しながら機銃で撃ち合っていた。
ギンガが乗るコスモタイガーが良馬のコスモタイガーの背後を取り、機銃で撃つが、良馬はアステロイドを巧みに使い撃ち込まれる機銃弾を回避し、スラスターを吹かし、スクロール状態を保ち、ギンガのコスモタイガーをいなすと再びギンガの機体の背後を取る。
「ロックオンサレマシタ」
「っ!?」
コックピットのコンピューターから警告を受けるとギンガはすかさず回避行動に入る。
だが、その直後、背後から機銃弾の雨が降り注ぐ。
回避行動を続けていたギンガであったが、機銃弾の一発がコスモタイガーの噴射口に当たると、そのままバランスを崩す、その隙を良馬は見逃さず、ギンガのコスモタイガーに機銃弾を撃ちまくる。
やがてギンガのコスモタイガーは火達磨となり、爆発した。
ビィー!!ビィー!!と言う電子音と共に目の前の画面には赤文字で

大きく『ＹＯＵ　ＬＯＳＥ』と表示された。
「あぁー!!また負けたー!!」
ギンガが悔しそうな声を出しながら頭部に着けていたヘッドギアを外し、コックピットから出る。
「ハハ、現役の軍人が士官候補生に負けるわけにはいかないからね」
ニッと笑いながらギンガの目の前に居た。
二人は月村家にあるパイロット養成用のシミュレーターで対戦を行っていたのだ。
任官前に勘を鈍らせる訳にはいかないので、良馬からの提案をギンガは受け、こうしてシミュレートによる模擬戦などを行っていた。
当然、リニスと紅葉との魔導戦も欠かさず行っている。
「むぅ～私だって、士官学校を卒業したので、もう立派な現役の軍人で、士官です!!・・まだ新米ですけど・・・・」
ギンガは頬を膨らませ、プイッと良馬から顔を逸らす。
その仕草がちょっと子供っぽいことに良馬は苦笑する。
「それじゃあ、もう一戦お相手いたしましょうか?新米君♪～」
「もぉ～バカにして!!今度こそ絶対良馬さんを撃ち落してやります!!」
「期待しているよ、ギンガ」
ギンガはもう一度ヘッドギアを装着して、シミュレート用のコックピットに座る。
今度こそはと言う思いを抱いて・・・・
そんなギンガの様子を見ながら良馬はフッと小さく笑みをこぼし、自らもヘッドギアを装着して、コックピットへと座った。
リニスと紅葉との魔法を使った模擬戦もそうであるが、管理局在籍時には体験した事のない、戦闘機による戦闘はギンガに新たな快感や思いを抱かせていた様で結構気に入った様子だ。
時に西暦２２０１年の事だった・・・・
デスラーは去った・・・・

古代守もスターシアも宇宙と言う無限の海の彼方へ消えていった・・・・

ヤマトは母なる地球へと帰った・・・・

そして時は流れた・・・・

沖田十三がヤマトとその乗組員達と共におし渡ったイスカンダルへの航海のことさえ人々はもう忘れようとしていた。

地球は今、本土の再建をほぼ達成し、その勢いを同じ太陽系の他の惑星へ押し広げようとしていた。

各惑星やその衛星にはそれぞれ基地が建設され、資源開発が急ピッチで行われていた。

また防衛軍の再建もほぼ達成し、十分な艦隊行動を取れるほどの艦船が揃い始めていた。

勿論、その性能はイスカンダルからの技術提供のおかげで、ガミラス戦役で使用していた艦船と比べるとかなり飛躍していた。

そのガミラス戦役を戦い抜いた艦船達は、損傷が激しい艦は解体され、まだ使えそうな艦は宇宙戦士訓練学校、士官学校の練習艦として、第二の艦船人生を送った。

その中には、良馬が艦長を務めた三笠も含まれた。

艦長として苦楽を共にし、共に戦った戦友だけに良馬は三笠が解体処分されなかった事にホッとした。

そして、良馬はギンガ同様、新たな配属先が決まるまで暫しの休息に入った。

その間、桜花と紅葉は名門校である私立天応中学へと進学していた。

桜花は持ち前の運動神経から体育推薦で合格し、紅葉は元々賢い子だったので天応中学の中でも難関である特別進学科へと進んだ。

ただ、昼夜関わらず受験勉強をしていたせいか視力を少し落とし魔導戦の時は眼鏡をしていないが、普段の生活時は上部のフレームがない赤縁の逆ナイロールの眼鏡をかけている。

ガミラスの遊星爆弾での攻撃で一度は焼失した月村の屋敷も今では焼失前と変わらない形で修復された。
休暇中、良馬は実家である月村の家と下宿先の中嶋家と実家を行ったり来たりの生活を送っていた。
ギンガの配属先も、もう間もなく決まりそうでギンガは残り少ない休息の時間を有意義に過ごしていた。
そんな中、ギンガにある変化があった。
ある日、良馬と紅葉が中嶋家のリビングで本を読んでいると、
「あ、あの・・・」
ギンガが声をかけてきた。
「ん？どうした？ギンガ」
「あ、あの、良かったら一緒に出掛けませんか？　その・・・たまには一緒に食事でも・・・」
ほんのりと頬を赤くし、告げたのは外食への誘いだった。
込められたのは初々しく、そして甘い感情。
淡い期待を孕んだ乙女の誘いを、良馬は、
「いいね、行こうか？」
「は、はい！」
と、ギンガの誘いを受けたが、
「それじゃあ、紅葉ちゃんも一緒に行こう」
「「えっ!?」」
その場にいた紅葉も誘った。
良馬のその行為に紅葉とギンガは揃って声をあげる。
「えっ？あっいや、良馬さん、此処は・・・」
ギンガの意図を何となく悟った紅葉は、良馬にギンガの意図を伝えようとするが、その場に本人は居てはどうも伝え難い。
「桜花も出かけないか？これから、皆で外にご飯を食べに行くんだけど・・・」
良馬は庭で空手の型を練習していた桜花にも声をかけた。
良馬が紅葉と桜花に声をかけた時、ギンガの表情が曇るが彼の視線は庭に居た桜花へと向けられていた為、気付く事もない。

豊かな胸の前で少女が手を固く握り哀しげな色を瞳に溶かした事を良馬は知らない。
しかし、良馬は気が付かなかったギンガの仕草を紅葉は見逃さず、ジッと気が付かないフリで見ていた。
「・・・」
ギンガから紡ごうとした声は出でる事無く。
虚しく無音を刻み、乙女は今日もまた自分の想いを胸の内に仕舞いこむ。
声をかけられた桜花は当然、一緒に行くと言い、四人は外に食事へと出かけた。

最初、ギンガが食事の誘いをしたのだが、会計の時、良馬が、「いい女は男に貢がせるもんさ」と、言って良馬が全て支払った。
その後も、ウィンドウショッピングをした四人であったが、ギンガは三人から一歩後ろを歩いていた。
その表情はどこか冴えない感じだった。
「・・・」
そんなギンガの様子を紅葉はチラッと見ていた。
茜色に燃え上がる夕焼けの空の下、四人は家路へと続く道を歩いていた。
先頭に良馬と桜花が並び、その後ろにギンガ、最後尾を紅葉が歩いている。
その日の空が美しき情景を描こうと頬を涼やかな風が撫ぜようと乙女（ギンガ）は物憂げな顔を俯かせている。
その理由は一つ。
今日の良馬とのやり取りである。
実は、彼女が今日の様に良馬を誘ったのはこれが初めてではない。
残り少ない休みの期間、彼女は今まで何度も彼を誘っては二人の時間を作ろうと摸索してきた。
結果は芳しくなく、成功した事はあまりない・・・と言うか、成功した事が無い。

その事を思い返し、少女は力ない溜息を吐いた。
「・・・」
そんなギンガの様子を紅葉はまたも後ろからジッと見ていた。
「はぁ～やっぱり今日も駄目だったかぁ・・・全く良馬さんったら、私の気持ちも知らないで・・・」
家に帰り、夕食と入浴後の後、ギンガは一人自室の机の上で頬をついていた。
そして、ギンガは誰にでもなく、独り言を呟く。
それは彼女が燻らせ続けている恋心のささやかな吐露。
そう、中嶋ギンガという少女は、月村良馬という男に恋をしていた。
自分より一回り年上の男で、間もなく任官する自分にとっては、先輩でもあり、階級上、上官にあたる男に恋心を抱いたのはたしていつ頃なのか？
それは、ギンガ自身にもそれは分からない。
敢えて答えるならば、いつの間にか、だろうか？
気付けば視線は彼を追い、胸の中には彼への想いが満ちていった。
最初は自分を助けてくれた命の恩人。
それから彼には世話になりっぱなしだった。
未知なる世界に一人ぼっちの中、彼は自分に新しい家と家族を用意してくれた。
そんな、彼に何かしたいと思っていたら、彼は、艦長と言う職務と戦友に死なれた現実の前に苦しんでいた。
彼を助けたい・・・湧き上がる思いの全てがそうさせた。
今、思えば、この時からギンガは彼に惹かれていたのかもしれない。
愛おしい。
この人が愛おしい。
癒してあげたい。
守ってあげたい。
彼自身が抱いて、戦っている不安や恐怖から・・・
そう、思い、自分は彼と一晩共にした。
最も、男女の営みがあったわけでなく、普通に添い寝しただけだ。

そして、先程まで苦しんでいた彼は、みるみるうちに静かに寝息を立てた。
その寝顔はとても穏やかであった。
彼の為に、もっと尽くしたい。
父（源三郎）から、彼が死に急いでいると言う事を聞き、自分が新たな生きる糧となりたかった。
これからも・・・・
「はぁ～」
改めて、ギンガが溜め息をついていると、
コン、コンと、部屋のドアをノックする音が聞こえた。
「はい？」
「紅葉です。ギンガさん、少しよろしいでしょうか？」
「え、ええ、どうぞ」
ギンガがドアを開けるとそこには両手に湯気が立った二つのマグカップを持った紅葉が立っていた。
「失礼します」
一言声をかけてから、紅葉はギンガの部屋の中へと入る。
そして手に持っていたマグカップの内、片方をギンガに渡した。
受け取ったマグカップの中にはホットミルクが入っており、温かな湯気を出していた。
「それでどうしたの？」
ギンガは紅葉からマグカップを受け取り、彼女が自分に会いに来た要件を訊ねる。
紅葉はマグカップの中のホットミルクを一口飲んだ後、
「ギンガさん」
「ん？」
ギンガも紅葉同様、マグカップの中のホットミルクを飲もうと、マグカップに口を付けたその時、
「ギンガさん。ギンガさんは良馬さんに惚れたんですか？」
紅葉の直球にギンガは、
「ゴホっ、ゴホっ・・・・」

飲んでいたホットミルクでむせた。
ギンガはマグカップをその場に置き、
「と、突然、何を言い出すのよ!?」
頬を赤く染め、声をあげる。
「えっ?違うんですか?」
一方の紅葉は首を傾げつつ、冷静な様子でホットミルクを飲んでいる。
「今日の・・・いえ、今までのギンガさんの行動からそうではないかと予測したのですが?」
「・・・」
紅葉の予想が当たっていたため、反論するに反論出来ないギンガ。
「こ、この事は・・・」
「大丈夫です。桜花と源三郎さんは気が付いていませんし、言いふらすつもりもありません・・・ですが・・・」
「ですが?」
「ですが、多分、加奈江さんと良馬さん本人は薄々勘付いていますよ。ギンガさんの気持ちに・・・」
「えっ!?」
紅葉の言葉に尚、戸惑うギンガ。
加奈江は恋愛などの事には人一倍勘が鋭そうだが、母親なので別に気にすることではない。
今、気になるのは良馬の気持ちなのだが恋愛感情を抱いている相手に自分の気持ちが薄々ではるが、気が付いていると言う。
では何故、彼は自分の気持ちに何らかのリアクションを起こさないのであろうか?
もしや、自分は彼のタイプではないのだろうか?
だから、彼は自分の気持ちに答えてくれないのだろうか?
彼は優しい人だから、直接自分に「嫌い」などと言えば傷つくと思い敢えて気が付かないフリをしているのだろうか?
そんなネガティブな考えしか浮かんでこないギンガは思わず顔を俯かせる。

「・・・・」
顔を俯かせるギンガに紅葉は、またホットミルクを一口飲んでから口を開く。
「・・・・これは、死んだ私の兄から聞いた話なんですが・・・・良馬さんの初恋の相手・・・実は加奈江さんだったらしいですよ」
「えっ!?」
またも驚愕の事実を聞き、俯かせていた顔をバっとあげるギンガ。
「まだ、良馬さんが士官学校を卒業したての頃に一時期、源三郎さんの下で働いていた時があり、下宿先に此処（中嶋家）を紹介されたらしいのですが、その時に加奈江さんに会って一目惚れしたそうです。まぁ、本人は否定していましたけど・・・・」
「そ、それで?」
ギンガは固唾を飲んで、紅葉の話に聞き入る。
「もちろん、良馬さんの初恋が実る事はありませんでした。加奈江さんは既に既婚者でしたから。しかし、その事を踏まえると、加奈江さんに似ているギンガさんならば十分に脈は有ると思いますよ」
「だったら、どうして良馬さんは、私の気持ちに答えてくれないだろう?」
「恐らく、ギンガさんは気になる・・・けれど、自分はギンガさんを加奈江さんの代わりじゃないかと言うと思いがあり、それが本当にギンガさんを愛しているのかと言う疑問を抱いているのかもしれません。まぁ、そこは時間をかけるしか確かめる方法はありませんけど」
「・・・・」
「それで、どうします?」
「えっ!?」
「だから、あくまで私の憶測ですが、良馬さんもギンガさんの事を気になっているようですが、今日の様に遠まわしで気を引くようでは効果が無いと思います。此処は直接良馬さんに告白してみてはどうでしょう?」
「・・・・」
紅葉は『直に告れ』と言うが、それが出来れば、苦労はしない。

「ギンガさんは間もなく任官、良馬さんも新たな配属地に赴きます。グズグズしている暇はありませんよ」
そう、紅葉の言う通り、良馬にも自分にも残されている時間は少ない。
配属先が異なれば休暇期間も異なるだろう。
特に良馬は以前から艦船勤務だったので、新たな配属先も艦船勤務になる可能性が高い。
本人もそれを強く希望している様子だし・・・・。
そうなれば、何時会えるか分からない。
その間にもし、良馬が他の女性を恋仲になったら・・・・。
そんな事、考えたくもない。
しかし、直接告るのも勇気がいり、そう簡単には出来ない。
ギンガが云々唸って考え始め、紅葉は、
「そ、その・・・頑張って下さい」
ただ、紅葉はギンガに告れとは言ったが、自分の知るギンガと目の前にいるギンガとの違いに戸惑う。
(ギンガが好きになったのはアキラの筈・・・それが何で・・・？いや、それよりも防衛軍の士官学校を卒業し、このＡＭＦが充満したこの環境の中で今の私やリニスさんと模擬戦を繰り返して来たギンガがミッドに戻ったとしたら、もっと強くなっている筈・・・)
そこで、紅葉は、
「あ、あの・・ギンガ・・さん」
紅葉は恐る恐るギンガに声をかけながら肩を叩く。
考え込んでいたギンガは紅葉に声をかけられて、肩を叩かれ思考の海から現実へと戻って来る。
「ん？・な、なに？・紅葉」
「あの・・・私、最近変な夢を見るんですけど・・・・」
紅葉は前世の事を夢としてギンガに話した。
アキラと言う男子局員の事、
メグと言う名の前世の自分が親友である事、
そして、夢の中のギンガがアキラと結婚をして女の子を出産した事

を・・・

しかし、ギンガはミッドに居る頃にアキラと言う名前の男子局員にもメグと言う同僚も全くの心当たりがないし、知らないと言う。

紅葉は話を変えて、ギンガにミッドでの事を訊ねると、八神はやてが機動六課を起動させた事は前世と同じだったが、ギンガはその稼働と同時に六課に出向予定だったと言う。

しかし、紅葉の記憶の中のギンガはアキラと共に夏頃に六課へと出向した。

六課への出向時期についても自分の知る歴史と異なる。

此処まで自分の知る歴史と異なると言う事は一体どういう事なのか？

ますます混乱する紅葉。

ギンガは根が真面目なので、嘘をつくとは思えない。

そんな時、紅葉は転生と共にもう一つ、ネットの二次創作である設定を思い出した。

それは平行世界・パラレルワールドと言うモノだ。

人は生きて行く中で数多くの選択肢にぶつかる。

その選択肢は一つしか選べない。

平行世界はその選択肢分世界が分かれる。

こっちを選んだ世界もあれば、あっちを選んだ世界もある。

もしかしたら、目の前にいるギンガも自分が転生する前のギンガではなく、前世の自分が知らない平行世界から来たギンガなのかもしれない。

目の前のギンガが自分の知らない平行世界から来たのであるならば、ギンガがアキラや前世の自分の事を知らないのも頷ける。

ギンガが自分の知らない平行世界から来たのであれば、この世界のギンガにも幸せになってもらいたいと紅葉はそう思った。

この世界のギンガの幸せを願いながら紅葉はマグカップを持ってギンガの部屋から出た。

それから暫くして、ギンガは良馬の部屋へと行き様子を窺った。

気づかれないようにドアを少し開けて部屋の中の様子を見ると、良

馬は机の上にパソコンのキーを打ちながら時折、パソコンの傍に置いてある書類の束に目を通したり、書類にペンを走らせていた。
待機中とは言え、新米士官である自分と違い現役士官である良馬には待機中とは言え、何かしら仕事が有る様だった。
執務中の良馬の姿を見た後、ギンガはそっと部屋のドアを閉めた。
仕事中に声をかけるのも無粋であり、何より告白したり、紅葉の話の裏付けを確認する勇気をギンガは持ち合わせていなかった。
ギンガはそっと足音を立てないよう自分の部屋へと戻っていった。
ギンガが自分の部屋の前に来た事に気が付かない良馬は一心不乱で執務を行っていた。
やがて、彼が報告書の最後の文字をキーボードで叩き終えたその瞬間。
「ふぅ～・・・」
報告書を纏め上げた良馬は疲労をたっぷりと溶かした溜息を吐いた。
夜の一族とは言え、体力が無限で疲労とは無縁・・・と言うわけではない。
長時間のデスクワークで指も肩もついでに長時間椅子に座り続けたお陰で尻も痛い。
肩と首を回せば、凝った筋肉に疲労感が染み渡る。
体重を背もたれにかければオフィスチェアが乾いた金属音と共に軋んだ。
ふと、机の上の置き時計に目をやれば、時刻は既に深夜を回っていた。
２０時頃から行った執務だったので自分が時間を忘れるほど仕事にのめり込んでいたのがよく分かる。
それを自覚すると、どっと疲れが押し寄せてきた。
そして、執務を終えると良馬は別の事を思った。
「それにしてもバカな事をやったな・・・彼女からの折角の誘いを断るなんて・・・」
それは仕事への不満ではなく、今日の・・・・正確には昨日の昼間、

自分がギンガに取った態度についての後悔だった。
紅葉は、空気を読める子だ。
ギンガと二人で出かけることに関しては特に口を出すことは無いし着いていくとは言わないだろう。
そして桜花はあの時、庭にいたから声を掛けなければ、おそらく気が付かなかっただろう。
最も、二人で食事に出かけたと知ったら後で何を言われる分かったもんじゃなかったが・・・・
まぁ、その時は後日に桜花を食事に連れて行けばそれで済むだろう。
いずれにしても、二人で出かけることに関して何ら問題は無かった。
それにもかかわらず、良馬は敢えて紅葉と桜花の二人に声をかけて四人で出かけた。
その理由はやはり、中嶋ギンガと言う少女の存在に他ならない。
彼女の告げた食事の誘いをできるだけ自然に断る為の方便だった。
良馬は、そうやってギンガと距離を置こうと常に心がけている。
理由は取るに足らないもの。
彼の胸の内で静かに・・・されど熱く燃える感情が為だった。
紅葉がギンガに伝えた通り、良馬はかつて、中嶋加奈江と言う女性に片思いをしていた。
忍やリニスとは少し違う感覚で、大きく自分を暖かく包み込んでくれる加奈江。
母性と同時に女性としての魅力を感じていた。
忍やリニスの場合は既に身内の女性として認識していた為、感情が揺れ動くことは無かったのだ。
しかし、自分と出会った当初から加奈江は既に既婚者であり一児の母だった。
不倫関係に持ち込み、当時上司であった源三郎の家庭を壊すわけにもいかず良馬の初恋は敢え無く終わった。
その後、謎の宇宙船で救助した少女が自分の初恋相手に似ていた事

に驚愕したが、当時の地球の状況から、良馬に恋愛感情を抱いている暇など無かった。
しかし、資源輸送の護衛任務での出撃の際、お守りだと言われて受け取った紫色の水晶のペンダント（待機中のブリッツ・キャリバー）から、確かにギンガの声がした時、秘めていた思いが再び芽生えた。
彼女が防衛軍士官学校へ入校すると聞いた時には、彼女をガミラスとの戦争で失うのが怖かった。
だからこそ、自分は彼女の士官学校の入校を反対した。
だが、その説得も忍の登場にて失敗に終わった。
その時、自分は彼女が任官する時にはこの戦争が終わっていて欲しいと願った。
そしてその願いが叶ったのか、彼女が任官する前にヤマトが無事地球に帰還し、ガミラスとの戦争は終り、地球は放射の脅威から救われた。
彼女と自分の新たな配属先が決まるまでのこの短い期間、戦争中と違い、ゆっくりと考える時間が出来てから、良馬のギンガに対する思いが日に日に膨れ上がっていった。
だが、良馬はその想いを成就させようとは思わなかった。
二十台も半ばの自分とまだ十代のギンガ。
年の差があり過ぎる。
そして、養子とは言え今のギンガは源三郎の娘なのだ。
防衛軍に任官してから、良馬は色々と源三郎には世話になった。
その彼の娘に手を出すというのは、どこか後ろめたいものを感じていた。
ギンガの思いを感じながら良馬はパソコンのメール機能を開きメールのチェックをした。
すると、忍からまたもやお見合いのメールが来ていた。
良馬は言わずと知れた月村の家に生まれた男児だ。その為、将来は月村の家の当主になる事になる。
そして月村と言えば、様々な分野で手広く商売をしている。
その為、忍は何としても月村の家を絶やしてはならないと次期当主

である良馬に良くお見合いを薦めてくる。
相手の方は、日本はもとより、世界各国の大企業や政治家、軍のお偉いさんのお嬢様方がほとんどだ。
しかし、良馬は今のところその全てのお見合いを断っている。
どうも、お見合い相手は、良馬自身よりも月村と言うブランド名を欲しがっているように思えたので良馬は、見合い・・・引いては結婚にどうしても踏み切れなかった。
その点、ギンガは月村の家名目当てで近づいてきた様子は全く無い。
そういう点においてもやはりギンガは魅力的な女性だった。
だが、年の差やギンガの家の問題の他にやはり自分の家の問題もあった。
忍は説得すれば認めるだろうが会社の重役が認めるかと言う問題もあった。
月村の次期当主と、防衛軍の一官僚・・・しかも養子の女性・・・難しそうだ。
それに自分は、容姿は人間だが分類は夜の一族と呼ばれる吸血鬼・・・化け物だ。
もし、ギンガが自分の正体を知った時、どんな顔をするだろうか？
きっと化け物と罵って恐れ戦くだろう。
だからこそ、彼女を傷つけない為にも自分は彼女から身を引くべきなのだ。
若干自己弁護も含まれているが、良馬にはそう言った様々な経緯があり、彼はギンガへの想いを胸に仕舞いこみ、ただ燻らせるに任せていた。
あの容姿と性格だ・・・きっと、彼女にもすぐ恋人が出来るだろう。
自分の様な人外（化け物）ではなく、れっきとした人間の男が・・・
彼女にふさわしい男が・・・
それまで耐えれば良いのだと自分には言い聞かせ、良馬はギンガと積極的にプライベートで関わらぬよう努め始めていた。
しかし、彼自身もまだ知らなかった。

ギンガ自身も魔導師である事を除いて、普通の人ではないと言う事に・・・・

取りあえず、忍にはお見合いに関しては、毎度の様に断りのメールを送り、良馬はベッドの中へと入った。

翌朝――――――

「おはようございます・・・・」

朝食の席である中嶋家のリビングに良馬は現れたが、その様子は完全に寝不足ですという事を体で表現していた。

目の下にはうっすらと隈があり、髪の毛もボサボサ・・・・

寝間着（パジャマ）のままで、足取りは少しフラついている。

その様子は、とても防衛軍の士官と言う格好ではなかった。

「随分、眠そうね？大丈夫？」

朝食のサラダ（特盛）が乗った器をテーブルに置きながら加奈江が訊ねてきた。

「ええ、夕べ遅くまで仕事を片付けていたので・・・・今日は非番なので、朝食後、また寝ます」

「軍人は体が資本なのよ。あまり無理をしないようにね」

「はい」

良馬と加奈江の何気ない会話なのだが昨夜紅葉から良馬の初恋の人が加奈江だと聞いたギンガは二人の様子が何となく違って見えた。

それは、夫の体を気遣う妻の様に見えた。

朝食後、紅葉と桜花は学校へと行き、源三郎は司令部庁舎へ出勤。

良馬はやはり、寝不足の為か朝食の進みが遅く眠そうにまだ紅茶を啜っていた。

「良馬君」

「はい？」

朝食で使った食器を洗いながら声をかける加奈江。

「私とギンガ、リニスさんはこの後、買い出しに行ってくるわね。カップは流し台に置いてといていいから」

「分かりました」
良馬が一人、リビングでのんびりと朝食をとっている間に加奈江たちは食器を洗い終え、買い出しに出かけて行った。
朝食後、再び寝ると言っても良馬は、流し台にカップを置いた後、洗面所へ行き、歯を磨き、顔を洗った。
そのまま、部屋へと行こうとしたが、自分が思っていたよりも体は疲労していたらしく、良馬はリビングのソファーに横たわった。
ソファーに横たわった途端、眠気が押し寄せそのまま目を閉じ深い眠りについた。

買い出しへ出かけた加奈江達だったが、ショッピングモールへ着いた時、加奈江はギンガに買い出しのリストを渡すと加奈江は、
「買い物が終わったら、先に帰っていて大丈夫よ」
と、言い残してリニスと共にショッピングモールの奥へと姿を消した。
ギンガが頼まれた買い出しは意外と早く終わり、彼女は、加奈江が言ったように、買い出しをした品を持ち、家へと戻った。
「あれ？」
買い物から帰り、家に戻ったギンガが発したのは疑問符の一声だった。
リビングの一角に鎮座するソファーの上に見覚えのある人間が寝そべっている。
格好は朝食の時に見た寝間着のまま・・・・
髪の毛も朝見た時と同じで梳かした様子はなく、ボサボサの状態の男、月村良馬の姿だった。

十五話　ギンガさんの純愛道　後編

ギンガの目の前には、朝食の席で見た時と変わらぬ姿の良馬がソファで横たわっている姿だった。
「良馬さん」
彼の名を呟き、ギンガは買い出しした品をテーブルの上に置き、そっと良馬が眠っているソファへと近寄る。
改めて彼の姿を近くで見れば、随分と酷い有様だった。
昨夜彼の部屋を覗いた時、彼は一心不乱に仕事をしていた。
自分が部屋に戻り就寝した後も彼はずっと仕事をしていたのだろう。
目元には隈が浮かび、彼の立てる寝息は静かだが、しかし深く連なる。
ガミラスとの戦争時、彼は酷い不眠症に陥って居た時があったが今はその様子は見られない。
彼の不眠症の改善に自分が役立てた時は嬉しかった。
良馬は恐らく部屋に戻ろうとしたが、その気力もなく此処で寝入ったのだろう。
「もう、こんな所で寝て、風邪でも引いたらどうするんですか？」
その場で膝を突いてソファの上で眠る彼の顔を覗き込み、ギンガは良馬に問うた。
もちろん答えを期待しての問いではなく、目の前の彼を見て自然と口から漏れた言葉だ。
少女は手を伸ばし眠る良馬の髪をそっと撫でた。
ボサボサではあるが良馬の髪は柔らかい髪質だった。
中性的で綺麗な顔立ち故、その姿は見方によっては女性にも見える。
「まったく、人の気も知らないで・・・・」
自分が抱く恋心など知りもせず、仕事に明け暮れて疲れ果てた男へと乙女は呟く。

そして、いつの間にかギンガは彼へと身を寄せていた。
子犬が主人に甘えるように寒さの中で温もりを求めるかのように吐息が掛かるほどギンガは良馬に顔を近づける。
静かに脈打つ鼓動が、柔らかな乳肉を通してギンガに伝わり、しかし彼女の中では鼓動は逆に早まっていく。
肌に伝わる彼の体温が、身体の芯まで響く彼の鼓動が、鼻腔に溶ける彼の匂いがその全てがギンガの心を甘く蕩かせていく。
もう、彼女はそれ以上自分の心を抑える事が出来なかった。
眠る良馬の肩に手をやり、より一層と身を寄せていく。
ゆっくりと・・・ゆっくりと・・・
何度か理性が制動をかけるが恋慕に脈打つ心がそれを砕き。
そして、遂に身は重なる。
「んぅ・・・」
眠る男の唇に艶やかに潤う乙女の唇が触れた。
それは少女が初めて味わう口付け（キス）という名の愛撫だった。
今までキスはおろか男性と付き合う経験もなかったギンガであるが、間近で感じた、愛する男の鼓動と熱が普段の清楚さが嘘のように彼女を大胆にさせていた。
夢や空想でしか交わさなかったファーストキスに乙女は夢中で溺れた。
唾液を貪る事も、情熱的に舌を絡ませる事もない稚拙な愛撫ではある。
されど、産まれて初めて味わう、愛する男との口付けは甘美で少女の心を甘く潤した。
ただ唇を重ねて、触れ合わせただけのキスにギンガは身じろぎする度に唇から淡い快感をもたらしギンガをどんどん蕩かせていく。
最初は戸惑いを感じていた筈の心はいつの間にか、もっと、もっと、と彼を求めていた。
求める心に身体は従順に応じて身を重ねる。
豊かで柔らかな乳房をより一層押し付け、唇を強く触れ合わせていく・・・・。

抑圧され、秘され続けた感情の発露は容易に納まってはくれず、しばしの時、ギンガは我を忘れて、時を忘れて、口付けに没頭した。
一体どれだけの時間を彼と繋がっていたのだろうか？
唇を重ね続け、いつしか息苦しさを感じたギンガは最初にした時と同じようにゆっくりと顔を離した。
音もなく身を離し、少女は今まで瞑っていた瞳を静かに開く。
そして、ギンガは見た。
「あッ・・・えっ・・・？」
しっかりと見開かれた、良馬の瞳がこちらを見据えるのを・・・

時系列はギンガが眠っている良馬にキスをする少し前まで戻る。
ギンガが自宅へ帰って来た時、良馬は夢現ながらも人の気配を感じ取り少しずつ意識を覚醒し始めた。
そこはやはり夜の一族と軍人と言う職柄故、気配を読み取るのが敏感だった。
やがて、その気配は自分へと近づいて来る。
大方、加奈江かリニスが自分に毛布でも掛けに来たのだろうと思ったが、良馬が感じた感触は毛布の感触ではなかった。
唇と胸板に心地良く柔らかい人の感触があり、さらには鼻腔をくすぐる甘い香りが覚醒を促す。
一体何なのだろうか？
そう思い、ゆっくりと目を見開けばそこには影があった。
目を凝らせばそれは人で自分に覆いかぶさっているという事が分かる。
しかも、その相手は自分と口付けを交わしていた。
その状況を理解した途端、あまりの事に一瞬思考は空白となって何も考えられなくなる。
良馬の思慮が真っ白に染まる中、彼の唇を味わっていた相手が唐突に離れた。
眠気眼のため、部屋に入る太陽の光に眩しさに一瞬目を細めるが、しかし視覚はすぐに相手を認識する。

目の前にいたのは、見知った少女の姿。
甘く芳しい香りを放つ青い長髪。
男の理想を描いたような豊かなプロポーション。
自分の初恋の相手同様の麗しいと形容して仔細ない美貌と、心を惹き込む程澄んだエメラルドグリーンの瞳。
中嶋ギンガという名の少女がそこにはいた。
「あッ・・・えっ・・・？」
自分を見つめる良馬の視線に気付き、ギンガは疑問符を零す。
まるで良馬が目を覚ました事が信じられないように少女はただ唖然とする。
まぁ、ギンガ本人からすれば、お伽話ではないがまさかキスをしただけで良馬が目を覚ますとは思ってもみなかったのだろう。
しかしそれは良馬の方だって同じだ。
夢現な状態から人の気配を感じそれが自分に近寄ってきたと思ったら、いきなり自分にキスをしてきた。
確認の為、目を開けてみれば、それはなんとギンガだった。
夢みたいな・・・いや、もしかしたら之は本当に夢なのかもしれない。
寝起きで未だ霞の掛かった思考の中、良馬はこれが夢幻ではないかと思い始めた。
だが、そんな彼の思慮など知らずギンガは頬を赤く染めて恥じらう。
「あ、あの・・・ち、違うんです。こ、これは・・・その・・・」
慌てて紡いだ言葉は上手く繋げられず、途切れ途切れになってしまう。
寝込みを襲うような形で愛しの彼と口付けを交わしてしまった事が恥ずかしくて、しかしそれをどう言い繕って良いか分からなくて。
乙女はただ頬を染め、上手く回らぬ呂律で言葉を零すばかり。
一方、良馬の方はこの現状が現実なのか？それとも夢なのか？判断に困っていた。
あの真面目が服を着ているようなギンガが寝込みを襲い、自分に口

付けを求めるなど、あまりにも現実離れした事象。
故にコレは夢なのではないかと思いつつも確かめてみよう・・・と、彼は判断した。
「あっ、えっ？　あ、あの・・良馬さん？」
ギンガのうなじと肩に手を回し、彼女の身を自分に引き寄せ、
「な、なにを・・・んぅッ!?」
突然、彼女の唇を奪った。
この状況が、夢なのか現実なのか、確かめる一番手っ取り早く、確実な方法・・・
それが、この現状だ・・・もう一度、ギンガと口付けを実行して試してみる。
良馬の考えた結論がそれだった。
なんとも馬鹿げた考えではあるが、寝不足なうえ、その状態での寝起きの思考回路に論理性を求めたところで詮無き事だ。
そして当たり前の事であるが、突然に口付けをされて腕の中のギンガは慌てる。
「んぅ・・・んぅぅ!?」
塞がれた唇から疑問符を零し、いきなりの事に身をよじる。
だが、彼はギンガを決して離しはせず、むしろより一層と力を込めて抱き寄せた。
ギンガの程よく実った乳房が、身の動きに応じて柔らかく形を変えて良馬の体に至高の感触を・・・
うなじに回した指には滑らかなで、柔らかい髪と心地良い肌触りを・・・
そして、重ねた唇からはどこか甘い味を伝えてくる。
良馬は現実と非現実の検証という最初の目的を忘れ、ひたすらにその味に酔った。
口付けで結ばれる唇には舌を挿し入れて、未だ驚愕の中で震えるギンガの口内を蹂躙。
舌と舌を絡ませて歯茎から頬まで舌の届く範囲全てを愛撫し、唾液を貪り、そして流し込んでは無理矢理味わわせる。

二人の唇の間からは舌を絡ませて、ピチャ、ピチャと唾液を交える水音が響き、辺りを淫靡に染め上げていった。
そうした時間がどれだけ過ぎただろうか？
最初は身をよじって戸惑っていたギンガが、やがてその動きを止め、彼の口付けの全てを従順に受け入れるようになった頃、ようやく長くそして短いキスの時間は終わりを告げる。
繋がっていた二人の唇は唾液が糸を引き、音もなく途切れる。
初めて経験し、そして味わった深い口付けの余韻に瞳をとろんと蕩かせたギンガは、それをどこか名残惜しそうに見つめていた。
一方、ギンガとの口付けで意識が覚醒した良馬は、静かに呟く。
「夢・・・じゃなかったか・・・」
覚醒した思考は、身に起きた事をようやく現実だと完全に認識した。
ギンガの乳房の柔らかさ、鼻腔をくすぐる甘い髪の香り、そして何より口付けの甘い味・・・
とても夢の中で味わえるものではなく、さっきまでの事が正真正銘現実に起きた事だった。
「えっ、えっと・・・」
彼は身を起こし、今までの事が現実だとしてこの後、どの様なリアクションをすれば良いのか困惑した。
ギンガが寝ている自分に口付けし、そしてさらに自分がまた彼女の唇を奪ったのだから無理も無い。
暫しの間、その場に生まれた沈黙と気まずい空気・・・。
沈黙を破る音が生まれる。
それは少女の紡ぐ声で、彼女の声は、今にも消え入りそうな小さな囁きだった。
「あ、あの・・・私・・・その・・・」
途切れ途切れの言葉を必死に濡れた唇から零し、ギンガは潤んだ瞳で熱い眼差しをこちらに向けてくる。
頬は、情熱的な口付けの余韻と羞恥心のため、がほのかに朱へと染めている。

無垢で一途な乙女の姿は、どこまでも愛らしく美しく、まるで神秘的な絵画に描かれている女神の様だ。
そして、乙女は意を決し、言の葉に思いを連ねる。
「あ、あの・・・・わ、私・・・・私は・・良馬さんの事が・・・・・・」
もはやここまで来たら、彼女が自分に何を想い、何を告げようとしているかなど考えずとも分かる。
夢のようだが、これは現実の話だ。
そう、夢の様だが、これは紛れもない目の前で起きている現実の事で、ギンガは今まさに、自分に愛の告白をしようとしている。
だが、それを良馬は遮る。
言葉を紡ぎだそうとしたギンガの唇にそっと手を伸ばし、指を添えて制止した。
「？」
突然の事に少女は眼を見開いて、視線で疑問符を投げ、首を傾げた。
何の意図があって、彼はこんな事をするのかと・・・・
対する彼はギンガの言葉を遮ると、身を動かした。
ソファの上から床に足を着け、その場で立ち上がる。
同じくギンガにも立ち、二人は正面から向かい合う形になった。
「ギンガ、それ以上は言うな・・・・」
彼の告げた言葉の意味が一瞬理解できず、ギンガは硬直する。
しかし、思考の奥底まで届いた残響は、確かに彼の言葉を認識した。
それ以外言うな・・と・・・・・・
その言葉の意味するところとは・・・・
普通に考えれば結論は一つしかない・・・・
それは、拒絶の言葉であった。
やはり駄目なのか？
やはり自分では彼の相手に相応しくなかった。
考えれば、自分は良家の家の出ではなく、地球の人間でもなく、まして普通の人ではない。
方や彼の方はこの世界では有名な良家の出身者・・・・。
どう考えても自分が彼に選ばれる訳がなかった。

悲しみが乙女の胸の内を、冷たく貫く、
「やっぱり・・・駄目・ですか?」
問う言葉と共に、ギンガの澄んだエメラルドグリーンの瞳を涙が濡らす。
しかし、彼女の悲しみと絶望はこの後の彼の言葉で、一転する。
「い、いや、違う・・・違うんだ・・・ギンガ・・・そうじゃない・・・」
ギンガが思った拒絶と思える先ほどの言葉の意味を彼は否定する。
否定した後、彼は幾度か言葉を飲み込み、気まずそうにギンガから視線を逸らす。
しかし、覚悟を決めたようにそっとギンガの肩に手を置いて彼女の瞳をまっすぐに見据えた後、告げた。
「その・・・まずは俺の方から言わせて欲しい」
彼女の肩に置いた手に、僅かに力を込め。
彼女を見つめる瞳に、熱い想いを込め。
そして、彼女に告げる言葉には万感の想いを込める。
「俺は・・・君を愛している・・・ギンガ・・・・・」
静かに、そして深く心に刻み込むように彼はギンガに愛を告げた。
それはくだらないプライドだったかもしれない。
だが、同時にどうしても譲れない事だったのかもしれない。
ギンガがこうして勇気を出し、自らに告白しようとしたのだ。
しかし、年下の少女から先に言われるのではない、
年上の男である自分から思いを先に告げねばならないという男としての意地だった。
良馬の口から『愛している』と言う言葉を聞き、またもギンガはしばし硬直する。
暫しの間、良馬の発した言葉の意味を把握するのに要し、
「えっ?」
思わず疑問符を零しながら少女は身を震わせた。
彼の言った言葉が胸の奥まで染み入って、切なく、そして温かくさせていく・・・。
何か言葉を告げようと唇を動かすが、言葉は出てこない。

驚きと喜びがギンガの心と身体を打ち抜き、自由を奪っているのだ。
そんな少女を、良馬はそっと抱き寄せた。
「俺は君の事が好きだ・・・だから・・その・・・良かったら君が俺の事をどう思っているか教えてくれないか？」
ギンガの返事なんて分かりきっているのに・・・
それにもかかわらず、どこか冗談めいた言葉で彼は問う。
自分の想いを吐露し、何より相手の想いを察したからこその余裕だろう。
良馬のその言葉に、ギンガは彼の服をぎゅっと掴みながら、身を寄せながら答える。
「私も・・・私も良馬さんの事が好きです・・・」
「ありがとう・・・ギンガ・・・」
彼女の背に回した手に少しだけ力を込めて深く抱き寄せ、呟くように告げた。
それから二人は、互いに体を寄せ合いつつ、ソファへと座り、お互いの思いが通じ合った幸せをかみしめていた。
しかし、良馬は、本人はまだ寝不足のためか、少しウトウトしだした。
寝不足とギンガへの告白が無事に実を結んだと言う事実に緊張が緩み、その反動で一気に眠気が襲い掛かってきたのだ。
（良馬さん、眠そう・・・やっぱり寝足りないのかな？）
自分がキスをして起こしてしまった事による罪悪感からギンガは、スッとソファから立ち上がり、床へ座ると、
「良馬さん、折角ですから此処で休みませんか？」
と、自らの膝の辺りをポンポンと叩く。
それは膝枕をしてあげると言うギンガの意思表示だった。
「えっ？でも・・・」
ギンガの突然の膝枕のお誘いに戸惑う良馬。
「嫌・・・ですか？」
ギンガが悲しそうな声を出すと、

「うっ・・・そこまで言われると・・・・」
恥ずかしいのもあるが、同時にやって貰いたい・・・・
そんな興味もあり、
「そ、それじゃあ、頼もうかな・・・・」
「はい」
先程の悲しそうな声とは打って変わってギンガの嬉しそうな返事を聞き、良馬はソファから立ち上がり、床に寝転ぶと、頭をギンガの膝枕の上に乗せた。
何時ぞや、ギンガと添い寝した時と同様、ギンガの膝枕はとても心地よく、良馬はあっという間に寝息を立て始めた。
ギンガが目を細め、笑みを浮かべながら良馬の寝顔を見ている中、その後ろで買い物から帰ってきた加奈江とリニスの姿があり、二人は初々しい様子の良馬とギンガの様子を見て、買い出しした品をその場にソッと置くと、その場を後にした。
リビングに入って二人の世界を壊すほど、二人は無粋ではなかった。
ただ、リニスの方はほんの少し複雑な気持ちだった。
それは良馬を幼いころから母親代わりとして育ててきた母性と彼を慕う女の一女性の本能がそうさせた。
夕食時、良馬とギンガは互いに節目がちになりながら夕食を食べていた。
そんな、二人の様子を見て紅葉は、昼間に二人の間に何があったのかを察したが、
桜花と源三郎の方は何があったのか分からず、二人の具合が悪いのかと思ったが、それは二人の口から同時に否定された。
その様子を見て、加奈江と紅葉は、もう息がピッタリなお似合いの恋人同士だと思い、源三郎と桜花は目をパチクリさせ、当の本人たちは顔をさっきよりも顔を赤らめ、俯いてしまった。
夕食後、中嶋家に居る皆は思い思いの事をし、夜の一時を過ごしていた。
源三郎と桜花は、親子二人でテレビを見て、紅葉は読書、加奈江と

リニスは夕食で使った食器類を洗いっている。
良馬は特に長居してテレビも見ることなくリビングから自室へと移動した。
その途中、通路でギンガとすれ違った。
ギンガはこれから風呂に入るのだろう。
彼女の手には、着替えとタオルを持っていた。
偶然とはいえ、交際し始めた二人にはこうした瞬間も気まずさが付きまとう。
しかし、時間が経てば、やがては克服される事だろう。
良馬がギンガの横を通り過ぎようとした時、不意にギンガが良馬の服の裾を掴んだ。
「ん？」
振り返ってみれば、そこには顔をほんのり、赤く染め、顔を俯むかせたギンガがいた。
「ん？ギンガ、どうしたの？」
良馬が何故、ギンガがこの様な行動をとったのかを訊ねると、
「あ、あの・・・この後で良馬さんのお部屋にお邪魔してもいいですか？」
か細い声で訊ねるギンガに対し、良馬は、
「えっ!?ああ、別に構わないけど・・・」
と、特に断る理由もないのでギンガの訪問を許可した。
「そ、それじゃあ・・・また、後で・・・」
そう言い残し、ギンガはそそくさと風呂場へと姿を消した。
「？」
この時、良馬はギンガが何故ソワソワしているのか分からず首を傾げた。
しかし、この後、ギンガが自分の部屋に訪ねてきたとき、その理由が判明する事となった・・・。

それから暫くして、
コン、コン・・・

と、良馬の部屋のドアを叩くノック音が聞こえ、
「はい、どうぞ」
良馬は、入室を許可する。
「お、お邪魔・・します」
良馬の部屋に寝巻き姿のギンガが部屋に入って来た。
この時ギンガは、後ろ手にドアを閉めた。
いつもならば、身に着いた丁寧さで後ろ手にドアを閉めると言う事はしない筈のギンガに少し疑問を抱く良馬。
それに先程通路で会った時もドアを閉めた後も妙にソワソワとしている様子で落ち着きがない。
「ギンガそれで一体どうしたんだ?」
「えっと、あの、その・・・」
ギンガは良馬の質問に顔を赤くして、俯きながらせわしなく指を動かしていた。
取りあえず、ギンガに落ち着いてもらおうと、ベッドの上にギンガを座らせ、自らもギンガの隣に座った。
「それで?どうしたの?なんか、ソワソワして落ち着かない様子だけど、どこか体調が悪いの?」
良馬は改めてギンガの来訪目的を尋ねる。
「あの・・・その・・・」
ギンガはベッドに座っても顔を俯かせ、せわしなく指を動かしていたが、やがて意を決した様子で、スッと立ち上がり、良馬の正面に立つと、キッと顔をあげ、
「良馬さん」
「ん?」
突然良馬の名を告げると、ギンガは良馬をベッドに押し倒した。
「っ!?な、何を?」
突然押し倒された良馬は自分の身に何が起きたのか一瞬わからなかった。
しかし、押し倒されたままの状態が少し続き、良馬はギンガに何故自分を押し倒したのかを問う。

「わかりませんか?良馬さんを夜這いに来ました」
「はぁっ!?よ、夜這い!?」
ギンガからの爆弾発言に思わず声が裏返る良馬。
「ちょ、ちょっと待ってくれ!!」
良馬は押し倒された状態から腕に力を入れて起き上がる。
この時ギンガは相当力を入れて良馬を押し倒していたが、夜の一族である良馬も戦闘機人に負けぬ程の力を有していた。
ギンガは戦闘機人である自分の力に普通の人がここまで対抗できるものなのかと思った。
良馬は何故ギンガがこの様な行動（夜這い）をとったのか理由を聞くため、最初の様にギンガをベッドに座らせ、自らもギンガの隣に座る。
「理由を聞かせてくれないか?ギンガ。そりゃ、俺たちはもう恋仲ではあるが、流石に早急すぎやしないか?いきなりこんな・・・」
昼間、恋仲となったばかりの二人だが、いきなりその日の夜に肉体関係まで事を進めようとは、確かに早急過ぎる。
「私・・・恐いんです」
「えっ?」
ギンガは、静かにそう呟く。
「良馬さんと恋人となった事・・・それは嬉しいんだけど・・・でも、不安なんです」
「不安?」
問い返す良馬の言葉に、ギンガは頷く。
「こうして恋人になった事が突然過ぎて・・・なんだか夢みたいで・・・それに・・・」
「それに?」
「中嶋家に養子入りをして、防衛軍の士官になりましたけど。もし・もし、故郷の家族や友人が来た時、私はそれらを跳ね除け、この世界に留まれるという自信がなくて・・・」
「・・・」
ギンガの不安は最もだ。

この世界で出来た家族と言っても所詮養子・血のつながりが無い家族だ。
そんな中、ギンガの故郷の本当の家族や親しい友人達がギンガを迎えに来た時、果たしてそれらを跳ね除ける事が出来るだろうか？
それは確かに不安を抱かない方がおかしい。
「だから・・・・」
「ん？」
「だから、貴方が好きでいてくれる証を・・・私がこの世界に留まれる証を私にください!!」
駄目ですか？　と、最後に問う言葉を加えてギンガは請うた。
少女が告げる儚く甘い懇願はどこまでも愛らしい。
愛する少女にここまで言われて、それを蔑ろに出来る彼ではない。
それに彼自身もギンガを手放したくはない。
ギンガのその言葉に、良馬も腹を決めた。
覚悟を決めた男は、もう一度顔を寄せてギンガにキスをする。
彼女の請いへの返答とばかりに、優しく唇を重ねるだけの口付け。
そっと顔を離した良馬は、耳元に静かに囁いた。
「分かった」
と、たったその一言の言葉だけを呟いた。

電気がついている中では恥ずかしいと言う事で電気の灯が消し、邪魔者が来ない様に部屋には鍵がかけられ、月明かりが差し込む良馬の部屋の中で、シュル、シュルと衣服を脱ぐ音が静かに響く。
ギンガが自ら纏っている寝間着を着崩している間、良馬はギンガに背を向けてベッドに座っていたが、心臓の鼓動は波を打つように速い。
それはギンガの方も同じで、小さく小刻みをしながら震える手で上着のボタンを一つ、一つ外していき、パサッと上着を脱ぐ。
次に寝間着のズボンと最後の砦であるショーツをゆっくりと下ろす。
衣服を取り払うごとに晒されるその肌の白さは扇情的とさえ言え

る。
「あ、あの・・・もう・・・こちらを向いても良いですよ」
「あ、ああ・・・」
ギンガの許しが出たので、良馬は振り向き、ギンガの姿を見る。
そこにいたのは、一糸纏わぬ穢れなき姿のギンガだった。
薄らと月明かりに照らされているギンガの姿はとても神秘的な姿だった。
ギンガの姿に良馬は本日何度目になるのか息を飲んで魅入られる。
白くまるでミルクを溶かし込んだかのように白く、染みもくすみもない瑞々しい肌。
腰まで流れるように伸びる青い髪も胸の大きさや肌の色に負けず劣らずに美しい。
男として産まれ落ちた者ならば一度は抱きたいと思い描く究極的に完成された身体。
「凄く綺麗だよ、ギンガ・・・」
愛する少女に、優しく囁いた。
ギンガは彼のその言葉に恥じらい、だがそれ以上に喜んで頬をより一層朱色に染め上げる。
生まれたままの姿となったギンガは、トスン、と、良馬の横に座る。
その後、一拍の静寂が場を支配し、暫しの間、無音の時が流れる。
互いの息遣いと触れ合った身体から伝わる鼓動が全てとなる世界。
どこかもどかしく、だが心地良い静けさ。
そんなしめやかさを破ったのは、隣に座る乙女だった。
「あ、あの・・良馬さん」
蚊の鳴くような小さな、しかし澄んだ声が、その内にたっぷりと恋慕を孕んで彼の名を紡ぐ。
「ん?・なんだい?・ギンガ?・」
今の良馬の心境は士官なり立てでガミラスと戦った頃と同じような緊張感が彼の心を支配していた。
しかし、良馬とて何度も修羅場を潜り抜けてきた男、此処は声と共になんとか心を落ち着かせ、彼はギンガに問うた。

だが、心落ち着いたのは一瞬。
次の瞬間、良馬の心はまた掻き乱される。
少女が俯けていた顔を上げたのだ。
今まで少し俯かせていた顔を上げ、ギンガが潤んだ瞳でこちらを見上げる。
そこに込められた万感の想い。
胸を焦がすような愛しさと恋しさの中に、不安と期待を孕み縋るような眼差は、まるでそれ自体が特別な魔力を帯びたような感じで良馬の身は再び硬直する。
だが彼のそんな内心など露知らず、乙女は言葉を連ねた。
「私、その・・・男の人とこういう事するの、初めてで・・・だから、えっと・・・」
連ねる言葉は恥じらいを宿し、だが確かにそこに期待を込めて。
彼を想う恋慕と共に、甘く蕩けるような声で囁かれる。
「優しく、抱いてください・・・」
それは過剰なまでに甘い請いだった。
彼女の請うた甘き誘いに彼は言葉でなく行動で応えた。
ギンガの肩にそっと手を回して抱き寄せて顔を寄せる。
二人は再び唇で繋がり、交わった。
そして、彼はそのまま動いた。
肩に回した手に力と体重を掛けギンガを優しくベッドの上に押し倒す。
ギシギシと言うベッドのスプリングの軋みとドサッと言うシーツに人が倒れる音が重なる。
その後、彼はギンガの身体にかぶりつき、ギンガの身体を貪るかと思いきや、そうではなかった。
彼の方は、正直言って今にでもギンガの身体に食らいつきたかったが、彼女の方は、男性との行為は初体験・・・不安や恐怖が無い訳ではない。
その為、彼はまず彼女のそう言った不安や恐怖を拭う事から始めた。

ギンガと濃厚な口付けをした後、今度は唇ではなく白くしなやかな首筋にキスを行う。
彼女の首筋への愛撫を行っていた良馬であったが、唐突にギンガの首筋を噛んだ。
しかし、噛んだと言ってもガブッと食いちぎるように噛みついたわけではなく、快楽を感じさせる甘噛みである。
ギンガの首筋を甘く噛んで、濡れた舌で舐め取る。
「これは私のモノだ」と言わんばかりに見せる吸血鬼である夜の一族の愛の洗礼行為だった。
首筋を攻めた後、良馬は時間をかけて彼女の不安を取り除く。
そして良馬の方も寝間着を脱ぎ、ギンガと同じ生まれたままの恰好となる。
「怖い？」
仰向けになっているギンガに対して膝を突いて身をベッドに沈めながら良馬が口を開いた。
「もし嫌なら、ここで終わりにしようか？」
良馬本人としてはギンガが拒むようなら無理に彼女と関係を持とうとは思わなかった。
ギンガ程の美女を抱けないのは残念だが、時間はまだある。
今日は止めて、いずれまた別の日に機会を設ければいい。
そう思っていたのだが、
「大丈夫です。このまま私の事を愛して下さい」
ギンガの決心は意外と固く、良馬の方も彼女から此処まで言われれば、引く道理はない。
良馬は了承の意とばかりに一度身を沈め、ギンガの唇にそっと口付けする。
短い：だが愛の込められた甘いキス。
そして、顔を離すと共に一言囁いた。
「分かった」
その後、二人は理性を捨て、本能の赴くまま身体を寄せて肌を交わして触れ合った。

それから二人は事を終え、互いにベッドに沈んでいる中、
「・・・すまない」
良馬はそっとギンガの頬を撫でながら開口した言葉は謝罪の言葉だった。
ギンガが求めてきたとは言え、途中からは理性がぶっ飛んでもう何も覚えていない。
だからこそ、自分は彼女を・・・男との関係が初めての少女を乱暴に扱った様な気がした。
しかし、ギンガはぐったりした身体をゆっくりと良馬へ絡ませ目を細める。
そしてとても幸せそうに微笑む。
「謝罪の言葉なんていりません。私は今、とっても幸せなんですから」
「ギンガ・・・」
「良馬さん。私は、もっと別に聞きたい言葉があります」
「ああ、分かっている」
ギンガが望む言葉・・・。
それは・・・
「ギンガ・・・愛しているよ・・・」
「はい・私も愛しています・・・」
良馬はギンガの顎先をくいと上げさせると顔を寄せていった。
意図を悟った少女は受け入れるように目を閉る。
そして、音もなく唇と唇は触れ合った。
それはまるで永遠の愛への誓いのようでもあった。

十六話　それぞれの秘密

海鳴市郊外に在る海の見える教会。
そこでは結婚式の準備が着々と進められていた。
純白のドレスを纏った蒼髪の少女いや女性が家族や仲間からお祝いを受けている。
しかし、当の本人は何故自分がこの場でお祝いを受けているのか？
何故、ウェディングドレス姿なのか戸惑っていた。
そんな中、
「綺麗だよ、ギンガ。まるで女神様みたいだ」
と、白いタキシード姿の良馬が花嫁姿の彼女を褒めた。
（え？　な、何々？　何で良馬さん、タキシードを着ているの？）
「さぁ、ギンガ、行こう」
そう言うと、良馬はギンガを抱き上げ、歩き出した。
（えっ!?ちょ、ちょっと待って！　良馬さん、お姫様抱っこなんてしなくても・・・って、何で私はドレスを着用済みなの!?それに何時教会に来たの!?）
余りにも突然すぎる目の前の事態に思考が追い付かないギンガ。
（も、もしかしてこれって、良馬さんとの挙式？でも、その間の記憶が・・・それにプロポーズの言葉だってまだ・・・）
ギンガが混乱している間にも式は進行していき、やがて祭壇で神父が誓いの言葉を述べると、良馬は、「誓います」と答え、いよいよギンガの番となった。
（えっと・・・この場合どう答えれば・・・そりゃ、良馬さんと結婚は嬉しいけど・・ええい、ままよ!!）
混乱しつつも好きだった人と結婚できると言うのであれば、ギンガとしては、文句は無い。
ギンガは反射的に誓いの言葉を問われると、
「誓います」
と、答えた。
次に神父が「では、誓いの口付けを・・・」と、述べると、

良馬がギンガのウエディングベールをゆっくりと持ち上げ、顔を寄せる。
ギンガも目を閉じ、良馬とのキスをする体制に入った。
その時、
「ちょっと待った!!」
バンッ!!
と、教会の扉が思いっきり開けられるのと同時に一人の少女の大声が教会中に響いた。
慌ててギンガが教会の出入り口の方へ眼をやると、そこには見慣れた少女がいた。
「ギン姉は・・・ギン姉は誰にも渡さない!!」
「す、スバル!?貴女、何で此処（地球）に!?」
そう、教会の入り口にいたのは、ミッドに居る筈のスバル・ナカジマだった。
しかし、ミッドに居る筈の彼女は何故か黒いタキシード姿でこうしてギンガの前に立っている。
ギンガが戸惑う中、スバルは爆音を響かせながらローラーブーツで祭壇のギンガまで駆け寄り、
「行くよ、ギン姉」
と、ギンガを抱きかかえる。
当然姿勢はお姫様抱っこだ。
「えっ!?ちょっ、待ってスバル!!」
ギンガの制止を振り切り、スバルはウィングロードを展開し、教会の窓を突き破り、ギンガを連れ、教会の外へと逃亡した。
「待って!!スバル!!」
「大丈夫、ギン姉はアタシが幸せにしてあげるからね」
「いや、そうじゃなくて、ねぇ聞いてってば!!スバル!!」
「子供は三人で家は海辺に白い二階建ての家を建てて、それで犬を飼おう。可愛い子犬を!!」
スバルはギンガの言葉には耳を傾けず、妄想を膨らませ、それを口にする。

「もう～、話を聞いてってば!!スバル!!」
ギンガが目を閉じ大声をあげ再び目を開けた時、そこにはスバルの姿はなく、何処かの家の部屋の中だった。
当然、今の自分はウェディングドレス姿などでは無かった。
辺りを見回し、ようやく現実に引き戻されたのだと理解した。
彼との結婚は嬉しいが、あのままスバルに邪魔されて滅茶苦茶されたと思うとちょっと残念でもあり、あれが夢で良かったとホッとする自分がいた。
改めて、部屋を見渡したギンガが肌に感じるのは朝の冷たい大気と朝日の光。
ここに来てギンガは、自分が一糸まとわぬ全裸姿なのだという事に気付いた。
状況を理解した瞬間、頬にほんのりと朱色が注す。
少女の脳裏に昨夜の事がありありと思い出されていった。
「・・・私、良馬さんと・・・しちゃったんだよね」
互いに契りを交わし、自分が純潔を捧げた事を少女はじっくりと噛み締める。
改めて自分の体を見てみれば、肉体に残る昨夜の残滓はしっかりと認識できた。
ベッドのシーツには自らが純潔を失った証があり、
自らの身体の首筋や胸には口付けされた後が・・・白い柔肌に朱色の幾つもの赤い跡を残し下腹部にある子を成すためにある女性特有の器官に目一杯注がれた彼の精の熱は未だに余韻を感じるような錯覚さえあった
ふと隣を見ると、未だに眠りからさめない良馬の姿があった。
これまで何度か良馬とは添い寝をしてきたことがあるが、その時は、年に見合わず、可愛く見えていたが、今は凛々しく見えた。
(できれば、もう少し見てたかったんだけど、また今度かな?)
ギンガは傍らでスヤスヤと寝息を立てる良馬の髪を優しく梳く。
指に触れる柔らかな黒髪の感触は心地よい。
しかし、このまま彼の寝顔を見ていたいが、早く起きないと、リニ

ス辺りが良馬を起こしに来る。
「良馬さん起きてください。朝ですよ」
「んん・・・・ギンガ？」
「はい。おはようございます」
先程とは打って変わって、いざ良馬と目が合うと、やはり、昨夜の事を思い出してしまい、頬を真っ赤に染めるギンガ。
そんな、ギンガの様子が愛おしく思ったのか、良馬は、微笑を以って、ギンガの髪を撫でた。
ギンガの髪の毛・・その一本一本の感触を確かめるように指を通し、優しい手つきで何度もギンガの頭を撫でる。
彼の愛撫に、ギンガはまるで飼い主に愛でられる子犬のようにうっとりと目を細めた。
その光景はとても神秘的で一枚の絵画の様であった。
ギンガは床に投げ出した下着と寝間着を身に着け、名残惜しい思いを抱きながらも良馬の部屋を後にして自分の部屋へと戻り普段着へと着替え朝食の準備をしている加奈江を手伝う為に台所へと降りた。
その際、
「あら？ギンガ、なんだか、昨日よりも綺麗になっていない？」
と、加奈江から質問を受けた。
「そ、そうですか？特に変わらないと思いますけど・・・・？」
「うーん、何て言えばいいのかな？一言では言えないけど、なんだか、昨日よりも少し大人っぽく見えるから」
「えっ!?」
加奈江の言葉にドキッとするギンガ。
「昨日、何か有ったの？」
ニンマリと笑みを浮かべ訊ねる加奈江。
「い、いえ。べっ、別にそんな事は・・・・」
「そう？私の勘違いかしら？」
「き、きっとそうです!!」
と、強引にこの話を打ち切った。
その後、二人は朝食の準備を進め、ある程度終了した時、

「それじゃあ、ギンガ。悪いんだけど、桜花と紅葉ちゃんを起こしてきてくれるかしら？後は、私がやっておくおから」
「は、はい」
ギンガは朝食の準備をしていた手を止め、桜花と紅葉へと部屋に向かう。
しかし、その歩き方はどこかぎこちないようだった。
（うぅ～なんか違和感があって、やっぱり歩き辛い・・・・）
（やっぱり、ギンガ、彼と・・・・）
ぎこちない歩きで桜花と紅葉の部屋へと向かうギンガの背を見ながら加奈江は確信めいた顔をする。
それは加奈江自身の体験から基づく結論だった。
中嶋家にいる全員が食堂であるリビングの椅子に着き、朝食が始まった時、昨夜同様、良馬とギンガの二人は終始顔を赤らめ無言だった。
そんな二人を加奈江はニヤニヤしながら眺めていた。
一方、源三郎と桜花は現状が理解出来ずに二人の様子を見て首を傾げていた。
「あっ、ギンガ、そこの醤油とって」
「は、はい、どうぞ」
「あ、ありがとう」
二人は醤油を渡す際に手が触れ合い更に顔を赤らめる。そのような感じで朝食は進んで行くのだった。
その行動で紅葉とリニスも二人が恋仲になったのだと確信した。
加奈江同様、前世でギンガとその恋仲である男性との仲を知っている紅葉も昨夜、二人の間に何があったのかを大体察した。
朝食が終わった後、良馬はギンガを呼び止めた。
「ギンガ、ちょっといいかな？」
「はい？」
「今日、ギンガは暇？」
「え、ええ。特に予定はありませんけど・・・・」
「それなら今日、ちょっとつきあってほしいのだけど、いいかな？」

「えっ!?は、はい、喜んで!!」
良馬からのお誘いをギンガは快く了承した。
まぁ、二人の関係を知れば、良馬のこの行為はデートのお誘いに見えるし、恐らく当事者であるギンガ本人もそう思ったに違いない。
部屋で寝間着から私服に着替えている良馬は、緊張した面持ちでワイシャツに袖を通していた。
(ギンガが、俺たちの事を知ればどの様な反応をするだろうか?)
良馬は、今日ギンガに自分達一族の事を話そうと決めたのだ。
ギンガには表面上の自分ではなく、自分の全てを知ってもらいたかったのだ。
その結果、ギンガがどんな反応をしても良馬は受け入れるつもりだった。
良馬が運転する地上車で公道を走っていると、
「良馬さん。その・・・今日はどこへ行くんですか?」
助手席に座っているギンガが行先を聞いて来た。
「俺の実家」
「えっ!?」
ギンガは今日これから行く場所を聞き、固まる。
(えっ!?えっ!?えええっ!?実家?良馬さんの実家!?それって・・・それって・・・もしかして、婚約の報告!?)
ギンガは一人、今日訪問する良馬の実家への訪問目的を考え、結論に至ると、内心でとてもあわふためいた。
(で、でもこれはいずれ通らないといけない事だし、それが早いか遅いかのちがいだものね、でも・・・うぅ~緊張してきた・・・そう言えば、良馬さんの実家ってどんな家なんだろう?確か、良馬さんは月村グループとかいう大企業の家系だって聞いたけど・・・)
ギンガはこれから向かう良馬の実家がどんな家なのか?そして訪問目的はなんなのか?
それを車内で想像しながら、車窓を見ていた。
やがて、車は海鳴市郊外にある月村家の屋敷へと着いた。
(ここが良馬さんの実家・・・)

車を降りたギンガは初めて見る良馬の実家をマジマジと見て、その大きさに圧倒される。
「ん？ギンガ？大丈夫？少し顔色が悪いみたいだけど？」
屋敷を見ていたギンガに良馬が声をかける。
「えっ!?は、はい。大丈夫です」
「そう？それじゃあ、行こうか」
（本当に入っちゃっていいのかな？）
良馬は特に気にする様子もなく屋敷の玄関口へと向かう。その隣をギンガが、緊張した面持ちで歩いている。
「ただいま」
「お帰りなさいませ、良馬様」
玄関先ではメイド服を着た一人の女性が立って良馬とギンガを出迎えた。
（メイドさんって本当に実在したんだ・・・）
今まで書物や二次元の産物だと思っていたメイドにギンガは目を丸くしていた。
「ただいま、ノエル。今日、忍さんはいる？」
「はい。ご在宅です。お隣の方は中嶋さんの家の方ですね？」
「ああ、今日は忍さんとギンガに伝えたい事があって此処へ連れてきた」
先程とは打って変わって真剣な表情で今日の帰省目的を伝えるとノエルも察した様子で、
「わかりました。では、忍様をお呼びいたします」
と、真剣な表情となり忍を呼びに行く前に良馬とギンガを応接室へ通すと忍を呼びに行った。
忍を待っている間、良馬は何食わぬ顔で紅茶を飲んでいるがギンガの方はガチガチに緊張していた。
やがて、応接室のドアが開き、長い黒髪の女性と先程玄関先で出会ったメイドのノエルが応接室に入ってきた。
「お帰りなさい。良馬」
「ただいま。忍さん」

良馬は、応接室の出入り口であるドアの前まで行き、忍を出迎える。
「それで、良馬。今日はどうしたの？」
「あ、ああ・・・忍さん、ちょっと・・・」
そう言って、良馬は忍と共に応接室を出た。
忍としては折角来たのに何故態々応接室を出るのかが理解出来なかった。
応接室を出る際、良馬はノエルに、「少しの間、相手をしていて」と、ノエルにギンガの相手を頼み、忍と共に通路へと出た。
通路に出た良馬は周りに誰も居ない事を確認し、改めて忍に今回の帰省目的を告げた。
「そう、あの娘に・・・」
「はい。この後、夜の一族の秘密を打ち明けようと思います」
忍はこれまで何度もこの様な場面を見てきた。
自分の子供や孫たちが大きくなり、やがて自らの人生のパートナーを見つけた時、相手に自分達一族の秘密を打ち明け、そして人間ではない自分たちを受け入れるか否かの試練を行ってきた。
中には当然、自分の好いた相手が人間ではなく吸血鬼だと言う事知り、化け物と恐れ慄いた者も居た。
そう言った相手には記憶改ざん処置を行ってきた。
失恋した子孫を見た時、忍はまるで自分の事の様に胸を痛めてきた。
「後悔は無いの？」
「ありません」
「あの娘が貴方の正体を知って『化け物』って言ってくるかもしれないのに？」
「はい」
「そう、貴方にとってあの娘はどんな存在なの？」
「ギンガは俺が守りたい、失いたく無いかけがえのない存在なんです」
良馬は忍の目を見てそう言う。
「その言葉に嘘は無いわね？」
「はい」

「どうやら、本気みたいね・・・良いわ。貴方の好きにしなさい」
「ありがとうございます。忍さん」
忍の言葉に良馬は頷くと、忍と共にギンガの待つ応接室へと向かった。
良馬と忍が通路で話している時、応接室ではギンガとノエルが降り、ソファに座っているギンガのすぐ隣にノエルが立っている状況だった。
(き、気まずい・・・何で?何で無言なの!?良馬さんが、『相手をして』って頼んだのに、さっきから無言で私の傍に立っているだけなの?・・・ここは、やっぱり私から声をかけるべきなの?いや、でもなんで?と、とにかくメイドさんに気の利いたセリフなんて言えないわよ。良馬さん早く戻ってきてー!!)
初めて見たリアルなメイドさん。
更にそのメイドさんが全くの無言・無表情でいれば気まずくもなる。
チラッとギンガが横目でノエルの様子を窺うとノエルは瞬きもせずにジッとその場に立っている。
それも微動だにせず・・・
ギンガがそのまま横目でノエルの事を横目で観察していると、
(この人、本当に人間かしら?)
と、ノエルの存在に若干の違和感を覚えた。
(私やスバルと同じ戦闘機人に似た気配があるのだけれど、完全にそうとも言い切れないし・・・う~ん・・・)
ギンガがノエルの存在に気になっていると、
「お待たせ」
良馬と忍が戻ってきた。
応接室の長いソファには良馬とギンガが並んで座り、その対面には忍が座っている。
「まずは、自己紹介からね。この前、中嶋さんの家で出会ったけど、あの時はごたごたしていて自己紹介できなかったからね。月村家の当主を務めている、月村忍です」

「な、中嶋ギンガといいます」
　良家の当主を前にギンガの緊張は最高潮になり、表情も言葉もかなり固かった。幸い舌を噛むことは無かったので、自分の名前はちゃんと名乗ることは出来た。
「それで、今日はどうしたのかしら?・突然、実家に戻ってくるなんて」
　先程通路で今日の帰省目的は知っている忍だが、ギンガの手前、敢えて知らないフリをして訊ねる。
「今日は、忍さんに一つご報告する事がありまして・・・・」
「あら?・何かしら?・」
　忍が今日の帰省目的を訊ねると、良馬とギンガは互いに見つめ合い、一度頷くと、
「実は・・その・・・・彼女とは結婚を前提に付き合おうと思っています」
「そう」
　あらかじめ良馬から聞いていたので、オーバーリアクションを取らない忍であったが、やはり、良馬からこうして改めて言われると、複雑な気持ちだ。
「それで、中嶋さん?・」
「は、はい」
「貴女は良馬の事をどう思っているのかしら?・まさか、月村家の財産目当て・・・・なんてことは無いわよね?・」
「そ、そんな!?・違います!!」
　ギンガとしては忍の言葉は余りにも心外で思わず声を荒げる。
「良馬さんは私の命の恩人であり、そして、私にとってかけがえのない大切な人なんです!!」
　ギンガは決して月村家の財産目当てでないと事を知ってもらうために忍に自分の思いを打ち明ける。
「そう・・でも、これから話す事を聞いても貴女は良馬の事をそう思えるかしら?・」
「どういう事ですか?・それは?・」
　忍はギンガに自分や良馬を含めた一族の秘密を打ち明けた。
「夜の一族・・・・吸血鬼・・・・」

忍から良馬の正体を聞いたとき、半信半疑であったが、忍が証拠と言わんばかりに古いアルバムを見せた。
そのアルバムを見て、ギンガは更に驚愕した。
アルバムの中にある写真に写っている忍は今の姿と大して変わっておらず、しかも写真の中には自分が良く知る人物たちも写っていた。
(なのはさん・・・フェイトさん・・・はやてさん・・・)
そう、ギンガが・・・いや、今や管理局の誰もが知るエース・オブ・エース、金色の死神、夜天の主と呼ばれる三人の女性たちの若き日の姿がそのアルバムの中に収められていた。
ページを捲るごとに彼女たちは成長していくが、忍は相変わらず、姿に大きな変化はない。
そして、アルバムを見ているうちに気が付いたことがあった。
(あれ?なのはさん達は管理局に勤めて居る筈なのにこの写真を見るとその様子が無い)
アルバムの中で、なのはは、実家の喫茶店のオーナー兼パティシエールになり、フェイトは一頭身ほど小さいフェイトとそっくりの女性と共にホビーショップの店長をやっており、はやてにいたっては、ヴォルケンリッターの皆と共に本屋を経営しており、そこの店主になっている。
(これはどういう事?)
良馬の正体にも驚いたが、自分の知る有名人たちが自分の知る歴史と違う流れを知り、ギンガは困惑の渦中にあった。
「それで・・・」
「は、はい」
困惑していたギンガに忍が声をかける。
「良馬が吸血鬼の一族だと知って、貴女はどうする?このまま、良馬と付き合う?それとも別れる?」
「そ、それは・・・」
未だ困惑が収まらない中、忍がギンガに問う。
そして、ギンガはまず、写真に写る有名人たちのことは後にし、ま

ずは目の前の事から整理する事にした。
「私は、例え良馬さんが、吸血鬼だろうと人間だろうと、関係ありません。私が抱く良馬さんを愛する気持ちに変わりはありませんから!!」
と、堂々と忍に宣言した。
ギンガのその宣言と彼女の目を見て、良馬同様、嘘偽りがないと判断した忍は二人の交際を認めることにした。
そして、
(良馬さんは、自分は普通の人間じゃないってことをこうして私に教えたんだもの。次は私の番ね・・・大丈夫、良馬さんなら、きっと受け入れてくれる筈・・・)
と、自らが普通の人間でも魔道師でもなく、戦闘機人という特殊な存在であることを明かすことにした。
「あ、あの・・・」
「何かしら?」
「その・・・私の方からも一つ、忍さんと良馬さんに伝えなければならないことがありまして・・・」
「何かしら?」
「もう、知っているかもしれませんが、私はこの星の人間ではありません。ミッドチルダという他の星の人間です。そしてその星の人間の中でも私は・・・」
ギンガはゴクッと生唾を一飲みした後、自らの正体を良馬と忍に明かした。
「私は・・・その・・・私は戦闘機人という存在なんです」
「戦闘・・・」
「機人?」
戦闘機人という言葉に首をかしげる良馬と忍。
「それってどういう事なの?」
「はい・戦闘機人というのは・・・」
ギンガは自分の知る知識の範囲内で戦闘機人とはどの様な存在なのかを説明した。
「そう、クローン体をベースに機械を融合させた人間兵器・・・」

戦闘機人の説明を聞き、忍とノエルはどこか興味ありげで、良馬に至っては特に関心がない様子。
しかし、説明をしたギンガの方は、もしかしたら良馬から嫌われるのではないかと、ビクビク、ハラハラした様子だった。
「りょ、良馬さん・・・その・・・」
ギンガが震えながら良馬に声をかける。
「俺は、ギンガがその戦闘機人？っていう存在だろうが、そんなことで嫌いにはならないよ」
「良馬さん・・・」
「ギンガ。今、君の目の前には吸血鬼に自動人形、周りには魔道師に使い魔、普通の人でない知り合いばかりじゃないか。多少機械が混じった程度などで、今更驚くには値しないし、ギンガが自分を人と信じ、俺がギンガを人間だと言えば、ギンガはもう一人の人間だ。中嶋　ギンガという俺が愛した一人の女性さ」
良馬はギンガの肩に手を置き、ギュッと自らに抱き寄せた。
完全に二人の世界にはまった良馬とギンガであるが、忍はそんな二人の様子を過去の自分と重ね、微笑みを浮かべて見ていた。
その後、ノエルの正体がただのメイドではなく、自動人形と呼ばれるアンドロイドということにもギンガは衝撃を受けた。それと同時に何故、彼女が自分や妹のスバルと似たような気配を持ち合わせていたのか納得がいった。
そして、ギンガは次なる疑問、管理局の有名人達が何故、管理局に就職せず地球で喫茶店、ホビーショップ、本屋の経営をしているのかを訊ねた。
忍はありのまま、過去に自分が見て体験してきたことをギンガに話した。
まず、管理局の白い悪魔・・・もとい、エース・オブ・エースの高町なのは　は、幼稚園を卒園後、私立海聖小学校に入学し、その後中学、高校へと進学し、高校卒業後、実家の喫茶店を継ぐ為、洋菓子職人育成の専門学校へ進学した後、フランスのパリへと渡り、そこで菓子職人の修業を行い、帰国後はパティシエールとして実家で経営している

喫茶店『翠屋』を継いだ。
次いで、金色の死神こと、フェイト・テスタロッサの姉である、アリシア・テスタロッサは私立海聖小学校へ途中編入の後、中学、高校へと進学し、高校卒業後、理工系の大学に進学。
そして、妹のフェイト・テスタロッサは姉のアリシア・テスタロッサ同様、私立海聖小学校へ途中編入の後、中学、高校へと進学し、高校卒業後、大学の経済学部へ進学し、大学卒業後、姉妹で実家の家業を継いだ。
夜天の主、八神　はやて　は、幼少期に大学を飛び級で卒業しているほどの天才児だった。一時期関西に住んでいた為、彼女は普段関西弁で喋っていた。
ただし、一人称は「うち」ではなく、「わたし」だったところが、少しエセっぽかった。
彼女は両親を早くに亡くしたが、親類の者達と共に古書店・八神堂を経営すると共に、書店の地下でゲームセンターの経営もしていた。
しかし、二十代前半で突如、難病を患い若くしてこの世を去った。
はやては早くに亡くなったが、古書店・八神堂は、はやての親類の子孫が今も立派に継いでいると言う。
忍の話を聞く限り、なのは達が管理局の仕事を平行しながらとてもパティシエールやホビーショップの経営、古書店の経営をする余裕などとてもない。
それにフェイトに姉が居る話なんて聞いたこともないし、第一、自分の知るフェイトの名前はフェイト・テスタロッサ・ハラオウンである。
更にははやては若くしてこの世を去っている。
自分の知るはやては健康体そのもので難病を患っている様子は無かった。
経歴も名前（フェイトのみ）も家族構成も何もかもが自分の知る管理局の有名人とは違っていた。
一方でギンガは管理局で記録されている地球で起きたＰＴ事件、闇の書事件の事を話すが、意外にも忍から帰ってきた返答は、

「そんな事、なかったわよ」
だった。
「以前、リニスと話した時も過去に海鳴で貴女が所属していた組織、時空管理局が関わった事例は存在していないわね」
「そんな・・・」
管理局の訓練学校の教科書にも載り始めたＰＴ事件と闇の書事件、この事件が今いる地球では起きていない。
その二つの事件そのものが起きなければ、管理局のエース・オブ・エース、金色の死神、夜天の主は誕生しない。
現に忍曰くなのは達にはその様な二つ名はつけられていないと言う。
しかし、ギンガの知る地球の歴史ではその二つの事件は確かに存在し、三人の女性たちは今や管理局の有名人・・・もしかしたら、吸血鬼とは言え、忍が非魔導師であるから知らないのかもしれないと思ったが、改めてなのは達の写真を見る限り、この世界のなのは達が魔法に関わりがある様には見えない。
これらの矛盾が混乱へ拍車をかけた。
そこに、
「あ、あの・よろしいでしょうか？」
今まで黙っていたノエルが話しかける。
「何かしらノエル？」
「恐らく、ギンガさんの知っている地球とこの地球はそれぞれ別の歴史を辿ったのではないでしょうか？」
「どういう事かしら？」
「昔読んだＳＦ小説の中にパラレルワールドという設定がありました」
ノエルは小説に載っていたパラレルワールドの定義を忍達に話した。
パラレルワールド・・・それは、ある可能性や選択肢によって世界（時空）を分岐し、それに並行して存在する別の世界（時空）を指す言葉で、並行世界、並行宇宙、並行時空ともいう。

そしてその世界の存在は「異世界（異界）」、「魔界」、「四次元世界」などとは違い、我々の宇宙と同一の次元を持つ世界となっている。
「つまり、ギンガの知る地球と今、私達が住んでいるこの地球は名称や人物が同じでもそれぞれ全く違った世界・・という事かな？」
良馬がノエルに確認するかのように尋ねる。
「はい。ギンガさんのお話を聞く限りではそう推論します」
「それじゃあ、ギンガの知る地球が後にガミラスの攻撃を受けない可能性もあるわけだね」
「はい。過去の歴史がかなり食い違っているので、その可能性も十分にあるかと・・・・」
「そうか・・・・」
ガミラスの攻撃を受けない可能性もある。
その言葉を聞き、良馬はどこかホッとした表情をしていた。
あの地獄のような体験を異世界の地球人たちには体験をしてほしくはなかったからである。
互いの秘密、そしてパラレルワールドの存在を知り、大きく視野が広がった経験をした二人は月村家を後にし、中嶋家に戻った。
戻る途中、ギンガは車の中で、互いの正体はもちろんの事、二人が交際していることは、義父や義妹（桜花）にはまだ内緒にしてほしいと言ってきた。
義母と紅葉はすでに二人が恋仲だということは知っているので、二人にはこの後、口止めをしてもらうつもりだ。
公表するのは地球や防衛軍の再建が十分になってからでも遅くはないと言う。
確かにギンガの父、源三郎には今は地球と防衛軍の再建の事を優先してもらおうと思った良馬だった。
後日、忍はギンガに戦闘機人について目を輝かせながら詳しく訊ねてきて、年に何度かの健診が必要な事を聞くと早速月村グループが所有している研究所に連絡を入れ、ギンガを連れて研究所へ向かった。
研究所へ着いた忍は早速、此処にある機材でギンガの身体のメンテナンスを出来るか、チェックし、その結果、何の問題もなく、ギンガ

の身体をメンテナンス出来ることが判明し、今のギンガの状態も知る必要があるので、そのままギンガの診断に入った。
診断の結果、ギンガの体に異常はなく、健康体そのものだった。
研究所を出る際、忍はギンガに人間の女性同様、妊娠・出産する事が可能なので、今後大いに期待していると耳打ちするとギンガの顔はたちまち赤くなった。
中嶋家に戻り入浴と夕食を済ませた各々はそれぞれ自由な一時を過ごしている。
源三郎は晩酌、桜花、ギンガはテレビを見ながら果物（特盛）を食べ、紅葉は読書。
リニスと加奈江はお茶を飲んでいる。
そんな中、良馬は以前から気になっている事とギンガと恋仲になった事を加奈江に報告しようと、加奈江に声をかけた。
「加奈江さんちょっと部屋で話したいことがあるんですが・・・・」
「あら？何かしら？」
加奈江の方は良馬の話が何となく察しがついているようで、快く良馬について来た。
「それで、話って何かしら？」
部屋に入った加奈江が開口一番で良馬に訊ねた。
と言っても、話の内容は十中八九知っているくせに・・・・
「単刀直入に言います。まず、ギンガと交際する事になりました」
「まぁ。それはおめでとう。母親の私が言うのもなんだけで、ギンガは良い娘でしょう？美人だし、気立ての良いしっかり者だし」
「は、はい」
加奈江の娘を自慢するテンションに若干引き気味の良馬。
しかし、養子であるギンガをここまで本当の娘の様に扱ってくれる中嶋夫妻には感謝している。
「そ・れ・で、どこまでいったの？」
「は、はい？」
娘の自慢が終わると、唐突に加奈江がニンマリした笑みを浮かべ、良馬に訊ねてきた。

「な、何がですか？」
「決まっているじゃない。ギンガとどこまでいったかって聞いているのよ」
「そ、それは・・・・」
良馬の脳裏に浮かぶのは、昨夜の出来事・・・・
とても、恥ずかしくて言えるわけがない。
まして、交際している娘の母親に・・・・
そんな良馬に加奈江は、
「ギンガ、良い身体していたでしょう？」
と、耳元で囁いた。
「っ!?」
何故、知っているんだ!?と言わんばかりにバッと加奈江の顔を見る。
確かに加奈江の言う通りギンガは良い体つきをしていた。
実年齢よりも豊かに実った乳房。
余分な贅肉など存在しないウエスト。
張り出した肉付きの良い尻。
むっちりとした太股のラインもまた男心をくすぐる究極的に完成された女体。
そんな極上の体を持つギンガと一晩事を構えたのだが、あの時はギンガからの突然のお誘いだったので、誰にも気づかれていない筈。
それにも関わらず、加奈江は何でも御見通しよと、言わんばかりの顔をしている。
「私も経験があるんだけど、今日の朝のギンガ、少し歩きにくそうにしていたから、まさかと思ったんだけど、今の良馬君の反応を見て、如何やら二人ともやっちゃったみたいね」
「・・・・」
良馬は顔を赤くし、加奈江から気まずそうに視線を逸らす。
「大丈夫、源三郎さんはこの事知らないし、来る時が来るまで、私も言うつもりはないわ」
「そ、そうしてもらえるとありがたいです」

「それにしてもまさか、こんな短期間でギンガと肉体関係を持つなんて、良馬君って意外と手が早いのね」
「・・・・」
「まぁ、貴方もギンガも年頃の男女なのだから分からない訳じゃないわよ」
加奈江の言う事が事実なだけあって反論できない良馬であった。
更にこの後、良馬は加奈江に「早く孫の顔がみたいだの」さんざんせかされ、からかわれた。
そして、ギンガについての報告が終わった後、もう一つ、以前から加奈江に訊ねてみたいことがあり、良馬は今日それを訊ねた。
「それと加奈江さん、以前からどうしても聞きたかったことがあるんですが・・・・」
「何かしら？」
「ギンガが初めて来た日、加奈江さん玄関口で小さくギンガの名前を呟きましたよね？あの時、加奈江さんにはギンガの名前をまだ教えていないし、源三郎さんも玄関先で初めてギンガを加奈江さんや桜花ちゃんに紹介した筈なのに・・・・」
「・・・・」
良馬のこの質問に加奈江はビシッと固まる。
「どうして、加奈江さんは紹介される前にギンガの名前を知っていたんですか？ギンガなんて名前、そうそうある名前ではありませんし・・・・」
ギンガを連れてきた初日の事を訊ねると、加奈江は先ほどまで浮かべていた余裕の笑み消し、無表情のまま、良馬を見つめている。
その加奈江の様子を見て、良馬も真剣な表情で、加奈江を見つめている。
「参ったなぁ～聞こえないと思っていたのになぁ～」
やがて、加奈江は突然、無表情の状態から表情を崩し、良馬から視線を逸らし、フッと哀愁が漂う笑みを浮かべる。
「加奈江さん、それで・・・・」
「ねぇ、良馬君」

「はい」
　良馬がもう一度訊ねる前に、加奈江が良馬に問う。
「輪廻転生って知っている？」
「輪廻転生？それって確か・・・・」

　輪廻転生・・・転生輪廻てんしょうりんね）とも言い、死んであの世に還った霊魂（魂）が、この世に何度も生まれ変わってくることを言う。
　主にヒンドゥー教や仏教などインド哲学・東洋思想において顕著だが、古代のエジプトやギリシャ（オルペウス教、ピタゴラス教団、プラトン）など世界の各地に見られる。
　輪廻転生観が存在しないイスラム教においても、アラウィー派やドゥルーズ派等は輪廻転生の考え方を持つ。

「・・・って、やつですよね？それで？その輪廻転生がどうかしたんですか？」
「・・・・良馬君」
「はい」
「これから話す事は信じても信じなくても良いわ。ただこの事だけはギンガや他の誰にも言わないでね」
「わ、わかりました」
「私、前世の記憶を引き継いで、生まれてきたの・・・そしてその前世での私は、ギンガの母親だったのよ・・・ギンガの故郷、ミッドチルダで・・・・」
「なっ!?」
　加奈江の話はあまりに突拍子もない事だった。
　加奈江はギンガの故郷、ミッドチルダで、同じくギンガが所属していた時空管理局の局員だったと言う。
　そして、所属していた部隊がある日、違法研究施設を摘発した時、そこの施設で当時、六歳のギンガと彼女の妹の当時四歳のスバルを保護した。

保護した後、二人を検査した結果、二人とも自分の遺伝子を元にして造られたクローン体であることが判明し、加奈江・・・前世ではクイント・ナカジマと言う名前で、クイントはその二人を養子として引き取った。
その二年後、またも違法研究施設を摘発したところ、その摘発は事前に情報が漏れていた様で、敵は万全の状態で迎え討ってきて、自分は返り討ちにあい、そこで死んだ。
しかし、死んだと思い目を開けた時、自分の身体は赤ん坊の姿になっており、この地球に生まれた。
そんな内容だった。
だが、加奈江も良馬もまさか、紅葉も前世では加奈江同様、ミッドチルダの魔導師だと言う事を知る由もなかった。
「・・・」
加奈江の話は終わり、良馬はどう判断すればよいのか、どうリアクションを取れば良いのか、わからなかった。
しかし、自分が知る地球と別の歴史を辿った地球の存在が分かった今、輪廻転生と言う現象があり得るのではないかとさえ思った良馬だった。
「それじゃあ、そういう事だから、くれぐれも他の人には言わないでね」
と、言い残し、加奈江は良馬の部屋を出て行った。
ただ去り際に、
「それからギンガの事、お願いね。あの子、意外と脆い部分もあるからちゃんとカバーしてあげてね」
「は、はい」
と、良馬に言い残し、今度こそ、良馬の部屋から去っていった。
(加奈江さんの話が本当なら、何故彼女はギンガに話さないのだろうか?やっぱり負い目を感じているのだろうか?)
加奈江が出て行った後、良馬は加奈江の心境を察する。
もし、本当に加奈江が前世でギンガの母親であり、一度死んだ後、転生して、新たに中嶋　加奈江(旧姓　本田加奈江)と言う一人の地球

人として生活している中、突然、前世の家族であった娘が目の前に現れた・・・。
加奈江としては嬉しかったろうが、同時に前世でまだ幼かった子を残したまま、先立ち、転生した後、こうして新しい家庭を築いている自分に対し、ギンガや故郷の家族に負い目を感じているのだろうか？
そんな彼女が、ギンガの前で、「前世の記憶があり、自分は前世では貴女の母親だったのよ」と、言える日が来るだろうか？
転生し、再び巡り合った母と子、運命的な出会いであるが、今は、少し時間を置いた方がいいだろう。
いつか、加奈江自身がギンガに打ち明ける日が来ると信じて・・・
それからすぐに良馬の新しい配属先が決まり、同時にギンガも防衛軍軍人として初の配属先が発表された。

十七話　束の間の平穏

無限に広がる大宇宙・・・
そこには様々な生命が満ち溢れている・・・
死にゆく星・・・
生まれ来る星・・・
生命から生命に受け継がれる大宇宙の息吹は永遠に終わる事は無い・・・
あのガミラスと地球の戦いも無限の時を刻む宇宙の広がりの中には、束の間の混乱に過ぎなかった・・・
時に西暦２２０１年・・・
ソレは、地球から約２３９万光年の彼方にあるアンドロメダ星雲の彼方からやって来た・・・・・
針路に有る邪魔な惑星や星共を吸い込み、ひしゃぎ、粉々に粉砕して進んで行く魔の巨大彗星・・・
またその一方、利用しうると思われる有人惑星に対しては、その何処からか強力な機動艦隊が飛び出して来ては　攻撃、侵略を繰り返し、彼らに従属する植民地として現地の人々を奴隷にしていったのである。
新たな脅威が宇宙を席巻していた。
地球・・そして時空管理局はまだこの事実を知らなかった・・・

ある日、良馬に防衛軍人事部への出頭命令が下った。
「月村、出頭しました」
人事課長に敬礼する。
「待っていたよ、月村君。君に新しい内示だ」
「はっ」
人事課長は一枚の書類を良馬に手渡す。
「これはっ!?」
手渡された書類を見た良馬は、思わず声をあげる。

その書類には、以下の文章が書かれていた。
『月村良馬。　貴君をヤマト改級戦艦、まほろば　艦長に任ずる』
（巡洋艦や駆逐艦、護衛艦はともかく、いきなり戦艦の艦長ってどういうことだよ!?しかもヤマト改級だって!?そんな戦艦一体いつ建造したんだ!?）
「あ、あの、これは何かの間違いじゃあ・・・自分は今まで巡洋艦の艦長を務めて来ましたが、いきなり戦艦の艦長と言うのは・・・しかもヤマトクラスの戦艦だなんて・・・」
良馬はてっきり、今まで巡洋艦の艦長を務めてきたのだから、今度も巡洋艦の艦長を務めるものだと思っていたので、いきなり巡洋艦から戦艦の艦長へのクラスアップに戸惑いが隠せない。
「いや、間違いではない。艦船が揃い始めたとはいえ、それを動かす有能な人材が今の防衛軍には不足しているんだ。それと、こっちが乗員のリストだ。後でちゃんと目を通しておくように」
「は、はぁ～」
「艦は今、第十七ドックに係留されている。早速、現場へ赴き、受領してもらいたい」
「わ、分かりました。　辞令、確かに拝命しました。月村良馬。戦艦まほろば　艦長に就任します。では、失礼します」
良馬は人事課長に敬礼し、部屋を退出した。
庁舎を歩いていると見知った顔の男女数人が歩いて来る。
周囲の者は続々と彼らに対して直立不動になり敬礼している。
良馬にとっても、彼らのうち一人は敬意を払うべき立場にある人間のためそれに倣う。
敬意を払うべき立場にある人間――――防衛軍司令長官、藤堂　平九郎が良馬に気付き、表情を幾分緩めながら答礼した。
その後を歩く、長官秘書の森　雪は柔らかな微笑を浮かべながら会釈してきた。
（今の人、確か古代君の婚約者〈フィアンセ〉の森雪さん・・・だっけ？そう言えば、近々結婚式をあげると聞いたな・招待所が来ていたし・・・）

近々古代家に嫁入りをする雪を見ながら、良馬は結婚式の招待状が来ていたのを思い出した。
雪とは繋がりがない良馬であったが、彼女の婚約者の古代とは面識があり、彼から良馬宛てに結婚式の招待状が来ていたのだ。
受領の予定時間までまだ余裕があったので、良馬は庁舎内に設けられているカフェへと入り、其処で時間を潰す事にした。
「うーん・・・」
カフェのテーブル席に着き、改めて先程受け取った書類に目をやる。
何度見ても変わりなく、自分に戦艦の艦長を務めろと言う内容だった。
「何、黄昏ているんだ?新艦長」
「っ!?」
突然、背後から声をかけられ、振り向くと、
「さ、真田先輩」
そこには、かつてヤマトの技術長兼副長を務め、現在は地上勤務(科学局局長)となった真田志郎の姿があった。
「へぇ~巡洋艦から戦艦の艦長か、昇進したな」
「ど、どうも・・・そう言えば、真田先輩は新造艦の建造計画にも参加したと聞きますが、どんな艦なんですか?」
良馬が今の防衛軍の艦の傾向などを訊ねると、
「君が乗艦予定の戦艦はほぼヤマトと似た形だ」と、言い、更に最近の艦船の傾向では人員不足の折、機械やコンピューター任せによる傾向が強く、とても戦艦とは呼べる代物ではないと言った。
「軍上層部や連邦政府の総意は、ヤマトが行ったイスカンダルへの大航海の成功は機械力の賜物と錯覚しているのさ。その結果生み出されたのが、今の防衛軍の艦船だ。血の一滴も通わないメカニズムの結晶さ」
と、まるで今の防衛軍や地球連邦政府を非難するかの様に吐き捨てる。
「月村、訓練航海に出たら、ダメコントレーニングをみっちりやってお

け、最後に頼りになるのは機械やコンピューターではなく、人の力だかなら」
「はい」
真田の言葉を深く肝に銘じた良馬だった。
良馬以外、軍の上層部でも一部人事の変更があった。
沖田から日本連合艦隊司令長官の座を引き継いだ土方が日本連合艦隊司令長官から防衛軍全艦艇の指揮権を持つ防衛軍連合艦隊司令長官に進歩され、更に近々進宙する新鋭戦艦の艦長も兼任するとの事だ。
防衛軍庁舎のビルを出た良馬は、公用車にて、今度自分が艦長を務める艦、ヤマト改級戦艦、まほろば　が係留されている第十七ドックへと向かった。
「防衛軍中佐、月村　良馬です。この度、戦艦　まほろば　の艦長の任を拝命し、艦の受領に参りました」
「お待ちしておりました。どうぞ、こちらへ・・・・」
ドックの技術者に案内され、艦船ドックへ行くと、そこには確かにヤマトに似た一隻の戦艦が鎮座していた。

確かに真田が言うようにヤマトに似ているが、そのヤマトよりも大きく、主砲の数もヤマトより前後一基ずつ多かった。
船体下部の第三艦橋の形状もヤマトの第三艦橋とは違い、旧日本海軍の伊号潜の艦橋を１８０度ひっくり返してくっつけた様な形状となっている。
ただ、両舷の対空防御装備はヤマトと比べると少なかった。
防衛軍の艦艇はヤマトと比べると全体的に対空砲の装備が少ない。
その理由は防衛軍の艦船は艦隊戦を重視しており敵艦載機の相手は自軍の艦載機にして貰い、艦船は敵艦船との砲雷撃戦を専門とする艦隊決戦思想故、対空兵器が少ないのだ。
それはこのヤマト改級の　まほろば　も例外ではなかった。
理由は兎も角、これから自分が艦長となり、指揮を執る艦の甲板に

立ち、聳え立つ艦橋を見上げると良馬は思わず武者震いがした。
艦内に入った良馬は早速、ドックの技術者と共に艦内巡検を行った。
やはり、この艦の艦長となるならば、艦内の詳細を把握しておく必要がある。
ゆっくり、散策するように艦内を歩き回る良馬。
時間をかけ、艦内巡検を終えた良馬は、艦長室へと入ると、技術者達と様々な打ち合わせを行った後、先程、人事部から渡された乗員のリストを見始める。
各部署の長を見ていくと、
航海長と機関長、主計科長、医務長は三笠時代同様、永倉、井上、ディアーチェ、リニスの四人だった。
ただ、副長、砲術長、は三笠の時と異なる人物だった。
(三木君とは違う部署になってしまったか・・・ちょっと残念だな)
三笠乗艦時代には副長の三木には色々世話になったし、気心が知れている仲なので、出来れば、艦の幹部クラスは三笠乗艦時代と同じにしてほしかったが、人事課長が言う通り、今の防衛軍は人材不足のため、優秀な人材を一箇所に貯めるような贅沢は出来ないのだろう。
むしろ航海長、機関長、主計科長、医務長の四人が同じだけでもかなり優遇してもらったと言うべきだろう。
そう思いながら引き続き乗員のリストのページを捲っていく。
案の定、乗組員の大半は士官学校や訓練学校を出たばかりの新人を中心とするメンバーなのだが、女性の乗員も増えている。
事実、まほろば　の副長も女性の士官だ。
ガミラス戦役における男性人材大量喪失の影響が強いせいなのだろう。
まぁ、中には先程、司令部ですれ違った雪がヤマトで見せた縦横無尽の活躍の実績もあるのだろう。
いずれは女性だけの乗員で運用される艦や女性の艦長や司令官も出てくるかもしれない。
そして通信科のページを開き良馬は、

「なっ!?」
思わず、目を大きく見開いた。
「おいおいおい・・・これは一体何の冗談だよ・・・」
良馬は、ストを持ったまま顔を引きつらせる。
通信科のページには以下の人事内容が書かれていた。
『通信科　通信長　中嶋ギンガ　少尉』
良馬が　まほろば　を艦内巡検している頃、
ギンガに「配属先が決定されたので、司令部人事課へ出頭せよ」と言う連絡が入った。
早速ギンガは人事課へと出頭し、辞令を受け取る。
「中嶋ギンガ少尉、出頭いたしました」
管理局時代から上官に対し、敬礼し慣れているギンガであったが、士官学校の制服に身を包んでいるためか、その姿はどこか初々しい。
何故、ギンガが未だに士官学校の制服を着ているのかと言うとギンガはまだ正式な配属が決まっておらず、地上勤務なのか宇宙艦隊勤務なのかが分からなかったため、ギンガは防衛軍の制服を支給されていなかったからである。
「中嶋少尉、之が貴官の配属先だ」
人事課の人間が一枚の書類をギンガに渡す。
「はっ」
早速受け取った書類に目を通すギンガ。
そして、その内容を見て、思わず目を見開く。
書類には、
『中嶋ギンガ少尉、貴君をヤマト改級戦艦、まほろば　通信長の任に命ず』
と、書かれていた。
(通信長・・・いきなり一部署の長って・・・)
良馬同様、初めての防衛軍任官で、いきなり通信科の長を務めよと言う辞令はギンガに戸惑いを抱く。
「君も士官学校から軍の実情を見たと思うが、今の防衛軍は人材が不足している。君は途中編入にも関わらず士官学校で通信科をはじめ、

多数の科目を選択し、その全てにおいて優秀な成績を修めている。通信長と言う職務は防衛軍が十分、君に務まる職務だと判断した結果なのだよ」
「は、はぁ～・・・」
「まぁ、配置転換も三日以内ならば受け付けるが、その期間よく考えてみてくれ」
　人事部の人はギンガに　まほろば　の通信長の任を降りる事も出来ると言う選択肢も与えた。
　しかし、根が真面目で責任感が強いギンガはその選択をせず、
「いえ、謹んで拝命します！」
　と、ギンガは　まほろば　の通信長になることを選んだ。
　この人事は防衛軍が自分を正当に判断し、自分の実力を見込んで、この役職を与えてくれたものなのだから、自分はそれに見合った成果で答えなければと意気込んだ。
　しかし、この時、ギンガはまさか自分が通信長を務める艦の艦長が自分の恋人である良馬であると言う事は知らなかった。

　艦を受領したと言ってもまだ乗員が乗艦していない状況なので、この日良馬は、下宿先の中嶋家に帰った。
「はぁ～まさか、ギンガと同じ部署になるとは・・・この人事まさか、中嶋さんが関わっているんじゃ・・・」
　まほろば　の人事を見て、何らかの形で源三郎が関わっているのではないかと勘繰る良馬だった。
（ともかく、ギンガ本人にはまだ黙っておくとして、後で中嶋さんに聞いてみるか・・・）
　皆が集まった夕食の席で、源三郎がギンガに配属先は決まったのかと訊ねてきた。
「はい。私は、まほろば　って言う宇宙戦艦に配属が決まりました」
「それじゃあ宇宙艦隊勤務なの？」
　加奈江が確認するかの様に訊ねる。
「はい。その戦艦で通信長をやる事になりました」

「えっ!?ギンガ姉さん、宇宙に行くんですか?」
「そうよ」
桜花がギンガに宇宙へ行くのかと問う。
ただ、ギンガが宇宙艦隊勤務と言う事で、源三郎は少し複雑な表情をしていた。
「いいなぁ~私も一度は宇宙旅行へ行ってみたいです」
「桜花、ギンガは旅行に行くわけじゃないのよ。でも、太陽系が安全になったら、昔みたいに宇宙旅行も再開されるはずだから、その時になったら連れて行ってあげるわよ」
「ホント」
桜花は今から宇宙旅行を楽しみしている様子だった。
「それで、良馬君はどこに配属になったの?」
加奈江が今度は良馬に訊ねてきた。
「あ、うん・・俺も宇宙艦隊勤務になりました・・・・希望通りに・・・・」
ギンガが居る手前、敢えて艦名は名乗らず宇宙艦隊勤務だと言う事だけを告げた。
良馬の返答から、また宇宙巡洋艦の艦長にでもなったのだろうと、中嶋家の皆はそう思い、良馬にどの艦に乗るのかまでは聞いてこなかった。
夕食後、良馬は源三郎に話が有ると声をかけ、二人で書斎へと入り、今回の人事について話した。
「それで、話って言うのは?」
「実は今日、俺も人事部に出頭命令を受けました。そこで、ギンガ同様、配属先の内示を受けました・・・それがこれです」
良馬は人事部から受け取った書類を源三郎に見せる。
すると、源三郎の表情が硬くなった。
「おいおい、こいつは・・・・」
「はい、ギンガと同じ艦の配属になりました」
「・・・・」
「当初は中嶋さんが、裏で工作したのかと思いましたが、夕食の時、ギンガが宇宙艦隊勤務になったと聞いて少し、顔を曇らせたので、中嶋

さんの仕業でないと分かりました」
「・・・月村よ」
「はい」
「父親の俺としちゃあ、ギンガには宇宙艦隊勤務については欲しくなかった・・・本来なら、ギンガが防衛軍士官になると言いだした時、お前さんみたく強く説得して止めさせるべきだったのかもしれねぇなぁ・・・」
（養子とは言え、加奈江さんも中嶋さんもちゃんとギンガの事を本当の娘のように見てくれているのか・・・まぁ、加奈江さんの話が本当ならば、加奈江さんは二度目だからな・・・）
良馬は中嶋夫妻が本来血のつながらない筈のギンガを実の娘の様に思っていてくれている事が有難かった。
「月村」
「はい」
「娘を・・・ギンガを頼む」
「了解しました」
翌日、中嶋家にギンガ宛の荷物が届いた。
中身を開くとそれは防衛軍宇宙艦隊勤務の為、ギンガに送られた地球防衛軍女性宇宙戦士用の制服と士官用ジャケットだった。
サイズの方は士官学校で身体検査を行ったため、既に数値は把握されていたので、着こなす事は出来た。
そこで、ギンガは早速袖を通してみた。
（うーん・・・ちょっとコレ、恥ずかしいかも・・・）
地球防衛軍女性宇宙戦士用の制服を着たギンガは、まじまじと今、自分が着ている制服を見て、頬を少し赤らめる。
女性用のこの服は体にフィットするデザインに作られており、制服を着ると、ボディラインがもろに出てしまうのがギンガにとっては玉に傷で、ソレを隠すためにジャケットが欠かせないのだが、この制服、実は簡易宇宙服の機能も兼ね備えているだけあって、極めて軽量かつ丈夫で、結構激しい運動にも対応できる等、実用性が高い感心な一品だった。

（まぁ、他の防衛軍の女性軍人達も着ているし、ようは慣れだよね、慣れ）
乗艦前にこの制服に慣れなければと思うギンガだった。
しかし、ギンガのその様子を見て、
（マスターのバリアジャケットも似た様なものではないだろうか？）
と密かに思うブリッツ・キャリバーだった。
ギンガは制服を着たまま、チラッとテーブルに目をやる。
そこには、制服と共に送られてきた一通の手紙があった。
まほろば　は、出航まであともう少し時間があるが、各パートの長は、訓練日程等の打ち合わせが有るため、指定された日時に　まほろば　へ出頭せよと言う内容がその手紙には書かれていた。
（初めての宇宙艦隊勤務だけど、艦長ってどんな人だろう？）
まだ見ぬ、自分が乗艦する艦長に思いを寄せるギンガだった。
ちょうどその頃、
「へっくしゅん!!」
「大丈夫ですか？」
「あ、ああ・・・」
防衛軍第十七ドックにて、まほろば　の物資搬入を確認していた良馬が盛大にくしゃみをした。
「風邪ですか？」
ドックの技師が心配そうに良馬に尋ねる。
「いや、幼少の頃から風邪はひいていないよ。軍人は身体が資本だからね」
夜の一族の生まれのせいか、良馬はこれまで、風邪やインフルエンザといった病気にはかからない体質だった。
もっとも一族の中には病死する者もいたが、基本夜の一族は結構丈夫な体質なのだ。
翌日、
「それじゃあ、行ってきます」
地球防衛軍女性宇宙戦士用の制服の上に士官用ジャケットを纏っ

たギンガが玄関先で家族に見送られていた。
良馬とリニスは昨日、搬入作業の為乗艦する艦に寝泊まりすると連絡がきて、今日ここにはいない。
恋人がいない日に防衛軍の制服の初披露となったので、ギンガは良馬に見てもらいたかったと言う思いもあった。
防衛軍の制服を家族に初披露した朝食の時、ギンガの制服姿を見た時、家族の皆は、
「素敵よ、ギンガ、とっても良く似合っているわ」
「うん、ギンガもこれで、晴れて防衛軍の一員だな」
「ギンガ姉さん、カッコイイですよ」
と、賛辞を浴びていた。
(うーん・・・この世界の人の美的感覚はミッドと違って少しズレているのかな?)
本来、女性用の宇宙戦士用の制服は女性軍人からクレームが来なかったからこそ、このデザインが採用され続けられている訳なのだが、着ている身としては未だに少し恥ずかしい。
ギンガとしては何故クレームが来なかったのか疑問に思う。
しかし、他の女性軍人は皆、恥ずかしがらずに着こなしているからには、この地球の人の感覚はミッドとは違うのだろう。
朝食時、ギンガはそんな事を思っていた。
ギンガは家族に見送られて、自分が乗艦する戦艦　まほろば　が係留されている第十七ドックへと向かった。
ドックの入り口の守衛に発行されたばかりの防衛軍の身分証明書を提示し、第十七ドックへと入る。
「これが、戦艦　まほろば・・・」
ギンガはドックに係留されている　まほろば　を見て、息を飲んだ。
今まで見慣れてきた管理局の次元航行艦よりも大型で艦影も独特のフォルムをしている。
「ん?その青髪・・・そこに居るのは、もしやギンガではないか?」
後ろから声をかけられ、振り向く。

そこには、ギンガ同様、地球防衛軍女性宇宙戦士用の制服の上に士官用ジャケットを纏ったディアーチェの姿があった。
「あっ、お久しぶりです。ディアーチェさん」
「うむ。しかし、その恰好・・・お前、防衛軍に志願したのか？」
「は、はい。ガミラスと地球の戦争の時、自分にも何か出来ないかと思いまして・・・・」
「そうか・・・それで、今日、此処へ来たと言う事は、お前もこの艦の配属か？」
「はい」
「部署は？」
「通信科です。ディアーチェさんは？」
「我か？我は、三笠の時同様、主計科だ」
「それじゃあ、乗艦したら、ディアーチェさんのご飯を食べることができますね」
「ああ、食糧事情も次第に改善されてきたからな、大いに期待するがいい!!」
期待しろと言いながら胸をはるディアーチェ。
そこへ、
「王様～!!」
「ぬおっ!?」
ディアーチェの背後から抱き付く者がいた。
「王様っ久しぶり～!!」
「ええい、うっとぉしい!!抱きつくでない!!青ひよこ!!」
ディアーチェは自らに抱き付いた人物を引きはがす。
ギンガはディアーチェに青ひよこと呼ばれた人物を見て驚く。
髪の毛は金髪では無く自分よりも明るい蒼色で、その人物の容姿は、かつてミッドで起きた空港火災の折、自分を助けてくれた人物にあまりにも似ていたからだ。
そして、月村邸で見たアルバムの中に写っていた人物ともよく似ていた。
「フェイトさん？」

思わず、ギンガはその人物の名前を口にする。
「ん？誰？」
ディアーチェに抱き付いていた人物がそこで初めてギンガの存在に気が付く。
「同僚だ。挨拶せい、青ひよこ!!」
「うん」
抱き付いていた人物はディアーチェに促され、ディアーチェから離れると、姿勢を正しす。
「はじめまして。ボクの名前は、フェリシア・テスタロッサ。まほろばの砲雷長をやるんだよ」
物凄くフレンドリーでギンガに自己紹介をするフェリシアと名乗る女性士官。
「は、はじめまして。中嶋　ギンガです。　まほろば　では通信長をやる事になっています」
ちょっと、フェリシアのテンションに押されながらも、自己紹介をするギンガだった。
「へぇ～お二人は士官学校の先輩後輩の仲だったんですか？」
まほろば　の通路をギンガ達は歩きながらディアーチェとフェリシアの関係を訊ねた。
すると、ディアーチェとフェリシアは先輩後輩の中で、ディアーチェがフェリシアの一期上の先輩だった。
「うむ、こやつは我が監督生として、色々世話を焼いてやったのは今になっては懐かしい思い出よ」
「と言う事は、ディアーチェさん、元は砲術科だったんですか？」
主計科のディアーチェが砲術科のフェリシアの面倒を見ていたので、それを疑問に思ったギンガがディアーチェに訊ねる。
「そうだ。我は砲術科と主計科の両方を受講していてな。まぁ、最終的には砲術科ではなく、主計科に進んだわけだが・・・」
ディアーチェが砲術科ではなく、主計科に進んだ理由として、元々彼女は、料理をするのは好きな方であった。
ガミラスとの戦争で食糧事情が逼迫していく中で、「誰かの為に」と

いうモチベーション。そして、代用品となっていく合成素材の食材でも料理人の腕次第では、本物の食材と変わらぬ味を出せるのだと証明したく、ディアーチェは砲術科のコースを途中で辞め、主計科一本に絞ったのだ。
「うん、あの時は、マジきつかった・・・・土方教官と王様のバブルパンチだもん」
「そのおかげで、今もこうして生き残れたのではないか」
「まぁ、その点に関しては感謝しているけど・・・・」
昔(士官学校時代)の辛く苦い出来事を思い出したようで、テンションが下がるフェリシアだった。
そんな二人のやり取りを見て、
(お世話って言ってもディアーチェさん、自分の事を王様って呼ばせているのは、それってお世話って言うよりも調教なんじゃあ・・・・)
と、二人の士官学校時代を想像して少し寒気がしたギンガだった。
もし、自分の先輩がディアーチェだったら、もしかして自分もディアーチェに調教されていたかもしれなかったからだ。
「そう言えば、フェリシアさんのテスタロッサってファミリーネーム・・・・」
ギンガはフェリシアがフェイトと同じファミリーネームから何か関係があるのかと思い訊ねると、
「あっ、うん。ボクの家は創業百年以上続く老舗のホビーショップでね、プラモや玩具だけでなく、すごくリアルな体感シュミュレーションゲームとかあるんだよ。今度、来てね~♪」
と、実家の店の宣伝をギンガにした。
「えっ、あっ、はい・・・・」
フェリシアの実家宣伝で彼女がこの世界のフェイトの実家、テスタロッサ家の子孫である事が判明した。
通路を歩いていくと、向かい側から、一人の士官が歩いて来た。
近づくにつれ、その士官が女性なのだと分かった。
彼女は自分達同様、地球防衛軍女性宇宙戦士用の制服の上に士官用ジャケットを着ていた。

唯一違う点をあげるとすれば、彼女は頭に水色の軍帽を被っていた。
ディアーチェとフェリシアが通路脇にそれ、その女性に対し、敬礼をし始めた為、ギンガも慌てて彼女たちに習い、通路の隅に立ち、敬礼する。
女性士官は返礼した後、通路を曲がっていった。
(今の人が艦長なのかな?)
と、ギンガはまだ見ぬこの艦の艦長が彼女なのかと思った。
そして、彼女を見て、ある事を思い出した。
「そう言えば、私、軍帽を被って来なかったんですけど、ディアーチェさんやフェリシアさんも被ってないですよね?って言うか持ってきていませんよね?」
ギンガは良馬やさっきの女性士官が軍帽を被っていた事に対し、自分は軍帽を被っておらず、しかも送られてきた制服の中には軍帽が入っていなかったため、軍の不備ではないかと不安に思った。
そして、同じく軍帽を被っていない二人に訊ねた。
今は被っていなくても実はトランクの中に入っているなどというオチではないと切に願った。
「宇宙艦隊の中で、軍帽を被るのは艦長と副長だけだ。稀に司令部の高官も被るがな。そして、今すれ違ったのはこの艦の副長だな」
と、ディアーチェが補足説明をする。
「えっ?何で今の方が副長だと分かったんですか?」
「通常、艦長の軍帽は白で副長は水色なんだよ」
と、今度はフェリシアが防衛軍の軍帽の種類について説明する。
確かに今すれ違った士官は水色の軍帽を被っていた。
「へぇ~そうなんですか」
「何だ?ギンガも軍帽を被るぐらいの地位を目指しているのか?」
「い、いえまだ新米の士官なので、そこまでの事は考えられません。今は、この艦の通信長という役職に全力で取り掛かるだけで、精一杯ですから」
やがて、三人は指定された　まほろば　の会議室へと入った。

会議室には先ほど会った軍帽を被った女性士官と数名の男性士官がいた。
暫くして、ギンガ達が入ってきたドアと別方向のドアが開くと、黒いジャケットタイプの軍服を着た人物と、白衣を着た女性が会議室に入ってきた。
「なっ!?」
ギンガはその人物の顔を見て、驚愕した。
「みんな、揃ったようだね?俺が　まほろば　艦長の月村良馬だ」
そう、会議室に入って来たのはギンガの恋人である月村　良馬とリニスだった。
「では、着任許可を出す前にそれぞれの役職、官位、姓名を名乗ってもらいたい」
良馬が、会議室に集まった面々を見渡しながら言うと、
「申告します。戦艦　まほろば　副長の命を受けました新見薫少佐であります」
と、先程、ギンガ達が通路ですれ違った水色の軍帽を被った女性士官が名乗りをあげた。
もし、ギンガが緑茶や抹茶を飲む際に、角砂糖やらミルクやらをこれでもかと放り込み死ぬほど甘くして飲む味覚が変わっている本局の緑髪の統括官と面識があったら、新見の声を聞き、その事についても驚いていただろうが、ギンガは、残念ながらその間違った日本意識と味覚を持つ、緑髪の統括官とは面識が無く、新見の声についてはスルーされた。
新見に続き、他の士官達もそれぞれ役職、官位、姓名を名乗り始めた。
「同じく、機関長を命じられました井上貫一郎機関少佐であります」
「航海長を命じられました永倉新一大尉であります」
「主計科長を命じられたディアーチェ・K（コンドウ）・クローディア大尉です」
「砲雷長を命じられたフェリシア・テスタロッサ中尉です」
「まほろば　航空隊隊長を命じられた坂井健夫大尉です」

「医務官、月村リニス中尉です」
皆が名乗りをあげ、後はギンガのみとなったが、ギンガは未だに自分の恋人が艦長であると言う事実が衝撃的で、まだ呆けている。
「ギンガ、おい」
ディアーチェがギンガの脇腹を肘で小突くと、ギンガは再起動を果たし、
「あっ、は、はい。通信長を命じられました中嶋　ギンガ少尉です」
と、慌てて艦長に敬礼し、名乗りをあげた。
その後の幹部会議にて、まほろば　の今後の訓練日程とその内容等が検討され、計画書を作成し、砲術長、通信長、機関長、航海長らは、まほろば　のそれぞれ受け持つ部署にて、装備されている設備点検、試験操作等を行い、それらの結果をレポートに纏め、艦長へ提出し、この日は解散となった。
「それじゃあ、艦長、お先に上がります」
「ああ、気をつけて」
各部署の長達が下艦していく中、
「艦長、私も先に降ります」
「ああ、ご苦労様、リニス」
「良馬さん、あの・・・・」
「ん？」
「ギンガさん、少し不機嫌ですよ」
リニスが良馬に囁くようにギンガの状況を教える。
「あぁ～やっぱり・・・・」
ギンガは艦長である良馬を待っていた。
その様子は何故自分が艦長であることを黙っていたのかと顔に書いてあった。
「艦を降りれば、貴方はギンガさんの恋人なのですから、ちゃんとケアーしてあげてくださいね。彼女、良馬さんが降りるまで待っているみたいですよ」
「わ、分かったよ、リニス」
「夕食が必要か必要ないかは早目に連絡をしてくださいね」

そう言ってリニスは艦を降りて行った。
リニスを見送った後も良馬にはまだ仕事が残っていたので、ギンガにはすまないと思いつつも、急いで残務処理に取り掛かった。
良馬は一人、今日の会議の内容と砲術長、通信長、機関長、航海長らのレポートを纏め上げ、司令部への報告書を作成していた。
報告書の作成を終え、艦長室から出ると、
「ギンガ・・・」
部屋の前にはギンガが待っていた。
「・・・」
「・・・」
まほろば　の通路を歩く二人は終始無言で気まずい空気が流れる。
「あ、あの・・ギンガ・・・」
その沈黙を破ったのは良馬だった。
彼は恐る恐るギンガに話しかけた。
「・・・」
しかし、ギンガは無言のまま。
「その・・・やっぱり怒っている？」
「・・・」
自分の恋人がいきなり上官と言う事実とその事実を自分に話さなかった事をギンガは不満に思っていた。
「そ、その・・・ゴメン・・・」
「・・・」
良馬が謝罪してもギンガはやはり無言のまま。
本来なら良馬が上官でギンガが部下なのに部下に謝っている上官の姿は何ともシュールであった。
「ギンガ、そんな怒らないでくれよ。そりゃ、黙っていたのは悪かったと思っているけど・・・」
「別に怒っていません」
ここでようやくギンガが口を開いた。
ギンガ自身がびっくりするくらいそっけない言い方。
口では怒っていないと言うが相当お冠の様子。

ギンガは頬を膨らませて不機嫌さをアピールしている。
「はぁ～」
しかし、そんなギンガの様子も可愛いと思いつつ、
「ギンガ」
良馬はギンガの手をギュッと掴む。
「な、なにを・・・んッ!?」
ギンガが言葉を紡ごうとしても出来なかった。
その理由は、抱き寄せられたと思ったらすぐに唇を奪われ、塞がれたからだった。
突然の事に驚いて強張るギンガの身体、でもそれは一瞬。
チロリと唇を割って進入してきた舌が柔らかに絡み合い、彼女の心を蕩かしていく。
強張る身体は徐々に脱力し、ギンガは彼に身体を委ねた。
腰に回った手が少女を抱き寄せ、少女もまた身体をギュッと押し付ける。
自分達二人以外誰も居ないため、遠慮なんてすることは無い。
二人はしばしの時を口付けに酔い痴れた。
そして、始まりと同じく唐突に終わるキス。
「ぷはぁ・・・」
まだ口に繋がる唾液の橋を、とろんとした目つきで見つめるギンガ。
「これで、許してくれる?」
そんな少女に彼氏からの問い。
甘いキスでのお詫びだった。
心が蜂蜜とチョコレートをかけた砂糖菓子の様に、甘い幸福感を味わいながら、でもまだちょっと素直になりきれない口調でギンガは答える。
「しょうがないですね」
そう言うと、今度はギンガが彼の顔を抱き寄せる。
そっと重なる唇、小さなキス。
たっぷりの愛情と共に込められたキス。

「これで許してあげます」
ギンガは微笑みながらそう言った。
やがて、まほろば　は補給・整備、乗員も揃い、処女航海兼乗員の訓練航海へと出発した。

十八話　暗雲

まほろば　が第十七ドックを出港する前日、中嶋家の良馬の部屋では本能の赴くままに互いの身体を求め合う二匹の獣がいた。
愛する男との情交・・・
身体を満たす深い快楽の余韻と熱・・・
「ギンガ・・・」
「良馬・・さん・・・」
見詰め合う時間は一瞬。
お互いの名を呼べば後は深く濃厚な口付けの時間が訪れる。
唇を重ね合わせ舌と舌がぴちゃぴちゃと淫靡な水音を奏でて絡み合う。
唇が離れ二人の間にかかる唾液の橋を見つつ視線をギンガに戻す。
「まだ、大丈夫？」
『何を？』などの質問は愚問である。
彼の眼差しと問いにギンガはコクンと頷く返答をする。
そうすれば、再び秘められた部屋の中で雌の鳴き声が響き渡った。
それから暫くして、
「ねぇ？　もっと・・・しましょう？」
今度は、彼女の方からの耐え難い悪魔的な誘惑があった。
彼女からの甘い誘惑に耐える必要など彼にはなかった。
思慮分別や理性などかなぐり捨てて、男は再び愛する女を貪り出す。
もう既に何度もこの様なやり取りを繰り返し、互いに性の快楽の絶頂を迎えても二人は何度も何度も身体を求め合う。
二人は何故、この様に何度も交じるのか？
その理由は至極簡単な動機だった。
明日から二人は同じ艦に乗り、星の海に旅立つからであった。
そうなれば二人は恋人の仲から上官と部下の関係に移る。
上官と部下の関係では、この様に互いの身体を求める事は到底無理

だ。
しかも環境は密閉された宇宙船の中・・・
男女の居住区は別々な構造となっている。
艦長と言えど、女性専用居住区にはよほどの非常時か緊急時でないと立ち入れない。
それに、二人とも根が真面目故、乗艦時には互いに公人として、上官と部下として、振る舞い、接するだろう。
だからこそ、その長い公人生活の間、求める事の出来ない互いの身体を今、こうして何度も何度も求め合っていたのだ。
初めての時はその場の勢いと言うか、雰囲気で、互いにそのままの状態だったが、今回はちゃんと避妊処置はしてある。
万が一、航海中に「出来ちゃいました」ではシャレにならない。
夜の一族と戦闘機人・互いに体力は常人以上の持ち主でもそれが無尽蔵と言う訳ではない。
既に何度抱いて抱かれたか忘れたが、お互いに疲れ果て、ようやく二人は眠りについた。
そして日が昇り始めた頃、ギンガが目を覚ますと、昨夜、隣で一緒に寝ていた筈の彼の姿はなく、ベッド脇にあるサイドテーブルには「先に行っています」と書かれた彼直筆のメモが残されていた。
艦長と言う立場から他の乗員よりも早く乗艦しなければならないのだろう。
その意図を察しながらも少し拗ねるギンガだったが、メモはもう一枚あり、それを見ると、
「ギンガの寝顔はとても可愛かったよ」
と、一言書かれており、ギンガは思わず赤面した。
そして、今度は自分がからかってやろうと心の中で誓った。
「それじゃあ、行ってきます」
「気をつけてね」
「いってらっしゃい」
朝食を摂り、防衛軍の女性用艦隊勤務の制服に着替えたギンガはトランク片手に中嶋家を出た。

必要な荷物は既に艦へ送ってあるので、手荷物はこのトランク一つとなっている。
やがて、まほろば　の乗員が揃い、いよいよ出港時間となった時、良馬が艦内放送を行った。
「総員に告ぐ、艦長の月村だ。これより戦艦、まほろば　は訓練航海へと出航する。諸君らの中には士官学校、訓練学校を卒業したばかりの者もいるだろう。故にこの航海の目的は一日でも早くこの艦に慣れ、一人前の宇宙戦士になってもらう事である。従って訓練は実戦形式にて行う。皆、新人と言う気持ちを捨て、ベテランの乗員のつもりで任務を遂行してもらいたい。以上」
良馬の訓示を聞き、士官学校や訓練学校を卒業した者達は驚いた。
てっきり、最初はベテラン乗員の近くで見学か講義かと思っていたら、いきなり現場入りなのだから。
「出航準備、総員配置につけっ!!」
出航準備と言う事で、乗員たちは駆け足でわらわらと自分達の部署の配置についた。
「補助エンジン動力接続」
「補助エンジン動力接続・・・スイッチオン。補助エンジン定速回転１６００、両舷推進力バランス正常・・・」
まほろば　の機関にエネルギーが注入され、始動すると、艦の中で、徐々に回転数を上げてゆく波動機関の音が聴こえてくる。
「天井ドーム開口」
第十七ドックの天井部を覆っていたドームがゴゴゴ・・・と言う轟音を立てながらゆっくりと開き始める。
「ガントリーロック解除」
「ガントリーロック解除します」
天井のドームが完全に開ききった所で、まほろば　の船体を固定していた拘束具を取り外す。
まほろば　はゆっくりと上昇し始め、大空を舞った。
「大気圏脱出十秒前・・・」
「宇宙空間航行モードに移行」

「宇宙空間航行モードに移行します」
まほろば　は青き空から漆黒の星の海へと移った。
星が輝く漆黒の海にて、まほろば　は訓練航海の任に就いた。
まほろば　が地球を発し、星の海で幾日も訓練に明け暮れて居る頃、かつて地球を救った英雄艦、宇宙戦艦ヤマトは退役することなく現在も現役であった。
最も今の地球にとって、艦隊の再編成が進んでいるとは言え、大型の宇宙戦艦を遊ばせる余裕なんてなかった。
しかし、地球を救ったにも関わらずヤマトは防衛軍連合艦隊旗艦の役目も日本連合艦隊旗艦の役目も与えられず、閑職とも言える辺境パトロール艦隊旗艦の役目が与えられていた。
だが、この閑職配置にヤマトの乗員は不平不満を漏らす事は無かった。
彼らにしてみれば、慣れ親しんだヤマトに乗れることだけでもありがたかったのだろう。それ故、艦隊の役職など二の次なのであった。
そして今、ヤマトは太陽系外周のパトロール任務の任期を終え、地球へと帰還する途中であった。
「まもなく冥王星宙域に入る。相原、地球到着は航海日程で立てた予定通りの日時だ。地球防衛司令部に報告しろ」
ヤマトの第一艦橋にて、ヤマト艦長代理を務める古代進がヤマト通信長、相原義一に命令する。
古代はイスカンダルへの航海の折、沖田が病で指揮を執れる身体でなくなった為、沖田から直々に艦長代理の任を任されていた。
その後、地球へ無事に帰還し、沖田が病死した後もその任は解かれておらず、沖田の他に解任権を持つ藤堂からも解任命令を未だに受けておらず、そのまま艦長代理の任を受け継いで、古代はヤマトの指揮を執っていた。
「了解、報告します」
古代の命を受け、防衛軍司令部へ通信準備をする相原。
しかし、彼は司令部へ回線を開く前に古代へと訊ねた。
「報告するのはソコ（防衛軍司令部）だけで良いんですか？」

「ん?他に何処が有る?」
司令部以外に帰還報告する場所など無いだろう?と思い古代は相原に訊ねる。
「雪さんには良いんですか?」
「バカ野郎、こんな話をもし沖田艦長が聞いていたらぶっ飛ばされている所だぞ。余計な事は考えず、さっさと報告しろ!!」
相原に茶化され、照れ隠しなのか少しムキになる古代だった。
「了解」
古代に怒鳴られながらもそれが照れ隠しなのだと分かっている相原は苦笑しつつ防衛軍司令部へ報告を入れた。
順調に地球への航路を辿っていたヤマトであったが、その途中でソレは起きた。
「六時の方向にデータにない未確認飛行物体を発見!!」
ヤマトのコスモレーダーがヤマト率いるパトロール隊の後方から接近してくる未確認飛行物体をキャッチした。
「なあに、どうせ迷子のスペースカーゴか何かだろう?気にするな」
と、古代は民間の輸送船だと思い当初は問題ないと判断したが、次のレーダー手の報告を聞き、真剣な表情となった。
「いえ、違います。速度二十一宇宙ノット、我が艦隊を追尾してきます!!」
「何!?パネルに映せ!!」
第一艦橋天井部に装備された大パネルにはカブトガニに似た艦載機の姿が映っていた。
その機影は現在、地球で採用された新型艦載機、コスモタイガーとは違うし、今まで確認されてきたガミラスのモノとも違う。
「距離二万!!国籍、認識番号、共に不明!!」
「万が一の事もある。相原、地球防衛軍本部に緊急連絡だ」
古代の中の宇宙戦士としての勘がザワつく。
相原はこの未確認飛行物体の接近の報を司令部に送るが、突然の通信障害で通信機が使用不能となった。
その間にもカブトガニは艦隊に接近し、最後尾の駆逐艦に向けて突

如、ミサイルを放った。
突然のミサイル攻撃に駆逐艦はなす術なく被弾した。
「こちら最後尾駆逐艦、疾風。敵ミサイルの攻撃を受け被弾!!」
友軍の突然の被弾報告に『ヤマト』の艦橋要員は動揺した。
しかし、被害は駆逐艦、疾風だけでなく、
「此方、パトロール艦、黒潮!!敵ミサイルを受け、艦中央部を損傷!!」
パトロール艦、黒潮も続いて被弾した。
やがて、ヤマトも敵ミサイルを数発受け、左舷後方部を被弾した。
古代はコスモゼロにて迎撃に上がるが、敵機の撃墜には至らず、しかも原因不明の入力エネルギーが飛び込み、ヤマトの通信機器が一時的とは言え、完全に使用不能となった。
古代はやむを得ず、ヤマトに帰還した。
その間にあのカブトガニの艦載機も何処かへと消え去った。
原因不明の入力エネルギーは通信回路の中を走り回り、通信機器はオーバーロードを起こし煙と火を上げ始めた。
相原は消化器を使い消火していたのだが、古代は「それ（消火器）じゃあ間に合わんぞ」と言って、何と通信機の配線自体を引きちぎり、これ以上艦の機能が低下するのを防いだ。
ヤマトが原因不明の入力エネルギーを受信した時、地球防衛軍司令部でもそのエネルギーを受信し、大変な騒動となっていた。
「エネルギーカウンターは!?」
「まったく作動しません!!」
「よし、エネルギーカット、全動力の起動を停止、再起動させろ!!」
「そ、それが止まらないんです!!」
「動力を切ったのにかぁ!?」
「はい、回路に入ったエネルギーがシステムの中を勝手に駆け巡っています!!」
宇宙艦艇の管制用に設置されている空間送受信機に突如巨大な量のエネルギーが飛び込んできたかと思うと、そのエネルギーは防衛軍のメインコンピューターの回路の中を駆け巡り、コンピューターは許容量を超え次々とショートしていった。

「動力回路の配線を全部切れ!!スイッチをＯＦＦにするんじゃない!!配線を引きちぎるんだ!!」
　真田はスタッフに古代同様、配線を物理的に切る様に命じ、エネルギーの暴走を防いだ。
(地上最強、最大のコンピューターを勝手に起動させるエネルギー・・・このエネルギーは一体何処から来たんだ?)
　真田は配線を引き千切りながら今回の原因不明の事態が何故起きたのかを考えた。
　ヤマトが謎のカブトガニからの襲撃を受ける少し前、予定通り訓練航海を続けていた　まほろば。
　その　まほろば　の艦橋で、
「そう言えば・・・」
　良馬が何かを思い出したかのように呟いた。
「今日は防衛軍連合艦隊旗艦の進宙式の日だった」
「そう言えばそうっスね」
「日本の現在時刻は・・・?」
　時計を見て現在の日本時間と新造艦の進宙式と時間を比較した。
「おっ?ちょうどこれからだし、ちょっと見てみようか?」
「そうっスね」
　訓練も現在は大休止の最中なので地球で行われる新造艦の進宙式の中継を見ても何ら問題はなかった。
　中継チャンネルを開くと、新造艦の進宙式の様子がパネルに表示された。
「へぇーあれが新造艦か・・・」
「いやー格好良いッスね」
　パネルに映る新造艦を見て、思わず感想が出る。
　雲一つない青く晴れ渡った空に花火が十数発打ち上げられ、開会の挨拶に地球連邦大統領のスピーチが始まった。
「全地球市民の諸君!!私は地球連邦大統領として今日、この記念すべき日にご挨拶を出来ることを無上の光栄とするものであります!!ガミラスとの戦いはもはや遠い過去です。　宇宙の平和、それを齎し

それを守るリーダーとなるのが我が地球であります。　地球はこれからも永遠に宇宙の平和を守るリーダーであり続けるでしょう。その名誉ある地位のシンボルとして私はここに最新鋭艦、アンドロメダの完成をご報告するものであります!!」

大統領のスピーチが終わると、観客からの拍手喝采が会場を包む。

やがて紐で吊るされたシャンパンが新造艦の左舷にある波動砲の発射口にぶつけられ、瓶が割れる。

そして久寿玉が割られ、船体を固定していたガントリーロックが外され、新造艦、アンドロメダが空へと舞い上がって行った。

アンドロメダの進宙式の様子を見ていたギンガは大統領のスピーチを聞いて、

(管理局の・・・本局の高官が聞いたら憤慨するわね)

と、内心でそう思った。

本局の高官・・・特に管理世界拡大・拡張派や魔導師至上主義の局員にしてみれば、「魔法も使えず質量兵器に頼る野蛮人が何を言うか!!」と言い出すだろう。

しかし、管理局が採用している次元航行艦の魔力炉機関や魔導砲、アルカンシエルと防衛軍が採用している波動エンジン、ショックカノン、波動砲装備の戦艦、どちらが強いかと言われれば実力的には防衛軍の艦艇の方が圧倒的に強力だろう。

だが、この事実に管理局が気づくのはまだまだ先の事であった。

一方良馬の方は、

(ガミラスとの戦いはもはや遠い過去・ねえ。そりゃあガミラスとの戦争は過去の出来事かもしれないだけど、親や兄弟、恋人や友人を亡くした人にとっては忘れられない事実なんだ・・・それに波動エンジン技術を手に入れたとしてもその技術が宇宙一とは限らないのではないだろうか?波動エンジン技術を手に入れる前の防衛軍も結構、浮かれていた所があったからな・勝って兜の緒を絞める・・・そんな精神でないと今度こそ地球は滅びるかもしれないな・・・)

真田同様、今の地球の現状を見て少し浮かれすぎじゃないかと思う良馬だった。

新造艦の進宙式が終わり、訓練を再開した　まほろば　にある通信が入った。
「艦長、非常通信が入っています」
「非常通信？」
「スピーカーに繋ぎます」
ギンガが手慣れた手つきで通信機器を操作する。
訓練航海当初は通信機器にまだまだ不慣れが目立つギンガであったが、訓練の成果か、今ではあたふたする事無く、機器を扱える。
やがてスピーカーからノイズ交じりの通信音声が聞こえてきた。
「此方、第十五・空間・輸送補給・・・護衛艦隊・・・未確認・飛行物体・・船団に・接近!!速度、船団プラス５０％右舷６０度、高度プラス２０度・・・多数・接近!!飛行物体の・・・形式は・・・ち・きゅう・・・の・・・・・・・・・・」
第十五空間輸送補給護衛艦隊の通信はそこで途切れた。
艦橋内に只ならぬ空気が流れる。
「副長!!」
「はい!!」
「第十五空間輸送補給護衛艦隊の予定コースと現在位置を示せるか？」
「予定コースは分かりますが、現在位置を示せるか分かりませんが、やってみます」
「たのむ!!」
「通信長、さっきの通信データを頂戴!!」
「は、はい!!」
ギンガは急いで先程届いた通信データを新見に転送する。
新見は通信が送られてきた方向と予定航路から第十五空間輸送補給護衛艦隊の現在位置を割り出した。
「艦長、第十五空間輸送補給護衛艦隊の現在位置が分かりました」
そう言って新見は第十五空間輸送補給護衛艦隊の位置をパネルで表示する。
「この青いラインが予定航路、そしてこの赤い光点が現在位置です」

「予定航路から随分とズレとるな・・・」
井上が現在の第十五空間輸送補給護衛艦隊の位置を見て呟く。
彼の言う通り、第十五空間輸送補給護衛艦隊の予定航路と現在位置はかなりのズレが生じていた。
それは最早、誤差のレベルを超えている。
「・・・通信長、第十五空間輸送補給護衛艦隊との通信回路は回復したか？」
「いえ、先程から何度も試しているのですが、未だ応答がありません」
ギンガは少し焦った表情で通信機器を操作している。
それは、第十五空間輸送補給護衛艦隊が何者かに襲撃を受けているかもしれないので、鮮明な情報が欲しいと言う焦る気持ちだったのかもしれない。
「通常通信がダメなら指向波を使ってコンタクトをとってみてくれ」
「了解」
ギンガは通常通信を止め、早速指向波を使って船団とコンタクトを取り始めた。
「航海長、訓練中止。本艦は、第十五空間輸送補給護衛艦隊救援に向かう」
「了解。コース変針」
永倉は先ほど新見が割り出した第十五空間輸送補給護衛艦隊の現在位置へ艦を走らせた。
「艦長、微かですけど、第十五空間輸送補給護衛艦隊からの感度があります」
指向波によってコンタクトを試みていたギンガが相手側の指向波を探知した。
「解読は出来るか？」
「う～ん・・・ちょっと・無理です・・・送っている方の出力が弱いので・・・それに内容も目茶苦茶です。恐らく送っている人に何かアクシデントが起こったのかもしれません」
「そのまま送り続けろ」
「了解」

ギンガは引き続き指向波を、第十五空間輸送補給護衛艦隊に送り続けた。
しかし、
「艦長、第十五空間輸送補給護衛艦隊の指向波が・・・・」
第十五空間輸送補給護衛艦隊の送る指向波に変化が出始め、指向波が表示されている通信席のパネルをギンガと共に見る良馬。
「反応がだんだんと小さくなっていく・・・・」
手動で行う指向波の反応が小さくなっていく、それはつまり指向波を送っている人間に何かが起きていると言う事を示していた。
やがて反応は・徐々に小さくなっていき・・・・・消えた・・・・。
「・・・・反応・・消えました・・・・」
「・・・・」
指向波を出していたギンガもパネルを見ていた良馬も互いに固まった。
指向波の反応が消えたとしてもまだ生存者がいるかもしれない。
だから救援を取りやめるわけにはいかない。
まほろば　は第十五空間輸送補給護衛艦隊遭難現場へと急いだ。
そこで、彼らが目にしたのは・・・・
「こ、これはっ!?」
「ヒドイ・・・・」
第十五空間輸送補給護衛艦隊所属の輸送艦と護衛艦がバラバラとなりデブリ化した姿だった。
「すぐに救命艇を発進!!生存者の捜索に全力をあげろ!!」
「りょ、了解」
坂井率いる航空隊が救命艇を出し、生存者の捜索に出た。
「通信長」
「は、はい」
「付近を航行している艦に現状を報告!!直ちに応援に来てもらうよう通達!!」
「りょ、了解」
良馬は　まほろば　だけではとても手が足りないと判断し、付近を

航行している艦船に応援を要請した。
救助活動を行っていると、付近を航行していたパトロール隊が到着し、協同で救助作業を続行したが、第十五空間輸送補給護衛艦隊に生存者はなく、艦内と周辺に漂っている乗員の遺体回収となった。
宇宙では必ずしも遺体が残る訳ではない。
故に収容できる遺体は収容し、家族の下、またはそれぞれの故郷の土に還してやるのが宇宙戦士としての礼儀であった。
まほろば　は大型の戦艦故収納スペースは駆けつけたパトロール艦よりも大きく広い。そのスペースを利用し、収容した遺体の保管場所とした。
遺体の収容作業が一段落した頃、良馬は艦内放送を入れた。
「諸君、艦長の月村だ。突然の出来事で困惑している者も大勢いると思うが、残念な事に第十五空間輸送補給護衛艦隊は全滅、生存者はいなかった・・・不幸にして任務の中で斃れた勇敢なる宇宙戦士達に黙祷を捧げたいと思う」
まほろば　はもちろん応援に駆け付けたパトルール艦の乗員も自分達の持ち場で起立している。
「総員、敬礼！」
良馬が自分の意思を伝えた後、新見の号令で　まほろば　とパトロール艦のクルーは敬礼、手が離せない者は黙祷を捧げた。
「弔砲一発!!」
砲雷長のフェリシアの号令一下、目一杯仰角をかけた　まほろばの主砲が火を吹き、続いてパトロール艦も主砲を放った。
弔砲モードで放たれた光の矢は短い距離を飛んで消滅した。
良馬は応援に駆け付けたパトロール隊の艦長たちにお礼を述べ、急遽、訓練航海を中止し地球への帰還針路をとった。
地球へ向かう途中、今回の出来事を地球の防衛軍司令部へと報告をしようとした時、
「ん？これは・・・？」
通信機を操作していたギンガの表情が強張る。
「ん？どうした？通信長」

「わかりません。原因不明のエネルギーが突然、飛び込んできて通信が・・・きゃあぁぁっ!!」
突如、まほろば　の通信機が火花と煙を上げてショートした。
「すごい入力エネルギーです!!通信機の回路が・・・・」
「焼け・切れたのか?」
「はい、でも修理は可能です。それに記憶装置が働いていたので音声信号は記録できました」
「そうか、それじゃあ地球に戻ったら科学局の真田先輩に見てもらう事にしよう。記録できた音声信号は記録メモリーに保存しておいてくれ」
「了解」
まほろば　は速度を上げて地球へ向かった。
地球の大気圏内に入った　まほろば　は無線電話にて、第十七ドックへ連絡を入れ、着陸態勢と整備・補給体制を整えてもらえるよう連絡をつけた。
なお、余談であるが、まほろば　よりも先に地球へ着いたヤマトは地球に着く寸前、テスト航海へ向かったアンドロメダと針路を譲る譲らないで、あわや接触事故寸前の一悶着を起こした。
この時、古代はまさか昔の恩師が衝突しそうになった新造戦艦の艦長だとは知る由もなかった。
何せ、相手は艦長が誰かと言う通信を送らなかったのだから・・・・
古代がこの新鋭戦艦アンドロメダの艦長が土方であると知ったのはこの日の夜になってからだった。
第十七ドックへ着いた　まほろば　の下には沢山の技術者やドックの職員が居り、その中の代表者と良馬が話をした後、収容した第十五空間輸送補給護衛艦隊乗組員の遺体を降ろす作業を手伝った。
ついでにお釈迦になった通信機器の修理も依頼した。
収容した遺体を降ろした後、良馬は艦内放送で、「突然のアクシデントで訓練航海を中断する事となったが、後日再開する。連絡はおってするので、それまで待機」と、命令し、まほろば　の乗員に短期間の休暇を与えた。

突然のイレギュラーとは言え、休暇を与えられた　まほろば　の乗員は喜んだが、それを代々的に表に表わす事はことなかった。
その理由は、大勢の同胞が死んでの休暇だったので、彼らを偲ぶためにも「休暇だ!!やったぜ!!」の様に口に出す事は、宇宙戦士として恥じる行為だったからである。
良馬は、第十五空間輸送補給護衛艦隊の遭難・救助の報告書の作成とギンガが録音した謎の音声信号の解析の依頼等、やるべき仕事が沢山あったが、今日は、それらの仕事を止め、ある場所へと向かった。

夕日で赤く染まる海。
海辺の小高い丘にその場所はあった。
防衛軍軍人からは『英雄の丘』と呼ばれるその場所には、地球を救い地球を目前で病死した沖田十三の立像を中心に、対ガミラス戦の戦没者や訓練中での殉職者の氏名が彫られた御影石板と慰霊碑が立つ場所だった。
もちろんイスカンダルまでの航海で戦死したヤマトの宇宙戦士達の名も刻まれている。
その慰霊碑の立つ場所で、沖田の銅像の下で酒を飲みながら夕日で赤く染まる海、そして復興した町を見ている人物がいた。
かつて沖田の主治医を務めた佐渡酒造であった。
「沖田艦長・・・ごらんなさい、あの超ハイカラな都市を・・・ガミラスと戦っていた頃がまるで夢のようじゃないか・・・苦しかったあの戦いも、今では歴史の一ページにすぎん・・・」
ガミラスとの戦い同様、地球を救ったと言う偉業を達成した沖田の存在も既に過去の存在となりつつあった。その事実に佐渡は思わず涙ぐむ。
そこへ、
「佐渡先生?」
「ん?」
佐渡は沖田とヤマトでのイスカンダルへの航海での思い出に浸っていると、突然呼ばれたので、声がした方を見ると、そこには手に花

束を持った良馬がいた。
「おぉ～月村君。久しぶりだな」
「はい」
佐渡に一礼し、挨拶をする良馬。
「今日はどうした？」
「ちょっと思う事がありまして・・・」
良馬はちょっと言葉を濁し、祭壇に花束を供える。
そこに、
「佐渡先生!!」
元ヤマトの乗員や現在ヤマトに乗艦している古代と相原、地上勤務の雪や真田が来た。
ヤマトの元乗員は乗艦していた艦が地球に着くとこうして英雄の丘に行き、無事に地球へ帰って来た事を報告しにくるのだ。
古代や雪、相原、真田の他にも島に南部、太田に徳川らのヤマト艦橋員らが英雄の丘にやってきた。
「おお！みんな、揃ったな！」
地球にいる大勢の人が沖田の事を忘れてもヤマトの乗組員だけは沖田の事は忘れる筈がなかった。
「古代!!」
「島!!しばらくだな。どうだい？空間輸送勤務は？」
「宇宙の運び屋だからな。退屈でしょうがないよ」
古代と相原は以前と同じヤマト勤務だが、その他の乗員は他の艦に勤務したり、真田や雪の様に地上勤務になっている者いた。その中で、島は輸送艦勤務だった。
「古代さん!!」
「古代さん、お久しぶりです!!」
「南部!!それに太田も!!二人とも、元気そうだな」
「ワタシモ、忘レテモラッテハ　困リマス」
古代に一言言ってきたのは、人間ではなく、赤いカプセル形の胴体に手脚があり、脚部にはキャタピラーで、手は人と同じ五本の指がついているロボットだった。

「アナライザー!!元気だったのか?」
古代にアナライザーと呼ばれたロボットは名前のとおり、主に調査・分析を任務とする、等身大のロボットで、ガミラス戦車を持ち上げるほどの怪力でそのボディは電磁バリヤーやレーザー銃撃などに耐える高い耐久性を持つ。
当初は、病院区画のロボットとして働いていたのだが、自分から沖田十三艦長に能力を売り込んで現場採用の形で無理やりヤマトの乗組員となり、イスカンダルへの航海を古代らと共にした。
「ワタシハ、永久ニ元気デス。オナツカシイデスネ、古代サン」
古代たちは良馬同様祭壇に花を供える。
「総員整列!」
佐渡の号令の下、古代らは横に二列並ぶ。
「偉大なる宇宙戦艦ヤマト艦長、沖田十三の霊へ敬礼!!」
古代らヤマトの乗員はヤマト式の敬礼、拳を胸にあて、佐渡と良馬は、通常の防衛軍式の敬礼をし、沖田やガミラスとの戦争で死んでいった宇宙戦士の霊に対して敬礼を捧げた。
やがて日は沈み辺りは暗くなる。
ヤマトの元乗組員たちは、久しぶりの再会を喜び、沖田の銅像の前で軽い酒宴が行われている。
良馬も古代らに誘われてご相伴に預かっている。
そんな中、テスト航海から帰って来たアンドロメダが彼らの頭上高く轟音を上げて飛び去っていった。
「新造艦のアンドロメダだ・・・・」
南部が飛び去って行った艦影から今のが新鋭戦艦のアンドロメダだと認識した。
「テスト航海から帰ってきたんだわ」
「すげぇな・・・・」
太田はヤマト並の大型戦艦を間近で見て驚きの声をあげる。
「地球も、あんな大戦艦の建造が出来るほど復興したんですね、古代さん」
相原が復興の象徴とも言えるアンドロメダを見て、ようやく地球が

復興を遂げたのだとしみじみした様子で古代に話しかける。
「・・・佐渡先生」
「ん？何じゃ、古代」
「地球は・地球はこれでいいんでしょうか？」
「なんでじゃ？」
「俺はこの頃、あの１４万８千光年ものヤマトの大航海が一体なんだったんだろうかと、よく考えるんです・・・沖田艦長をはじめ、大勢の乗組員の命を犠牲にして戦い抜いたあの航海は地球を救う・ただそれだけでした・・・今、地球は以前よりも富栄えています。　物質文明の極致といってもいいでしょう・・・地球を救うとは、こういう地球を造ることだったんですか!!こういう事のために沖田艦長は命をかけられたんでしょうか？　こんな地球に戻すために、俺たちはイスカンダルまで行ってきたんでしょうか？スターシアは、こんな地球にしようと思ってヤマトをイスカンダルまで呼んだんでしょうか？」
「・・・古代、なんかあったな？言ってみろ」
　佐渡は古代の様子がおかしいことから地球に着くまでの間に、何か思う事が有るのだと察し古代に訊ねる。
「気になることがあるんです・・・みんなも聞いてくれ。実は俺たちは地球に戻る途中、正体不明の飛行物体の攻撃を受けたんだ」
　ヤマトが謎の飛行物体の攻撃を受けたと言う報告は良馬の耳にも入っていた。
　しかし、彼がその報告を聞いたのはドックに入って第十五空間輸送補給護衛艦隊乗組員の遺体を降ろしている途中だった。
「な、なんじゃと!?」
「本当か!?古代!!」
　ヤマトが攻撃されたという知らせをこの場で初めて聞いた佐渡や島を始めとするヤマト元乗組員たちは驚いた。
「ああ・地球はまた、新たな脅威にさらされているのかもしれない・・・繁栄に酔っている場合じゃないんだ」
「・・・・」
　古代の言葉に良馬やヤマト元乗組員達は現状の地球について思い

当たるのか、様々思いをはせた。
良馬自身も輸送船団の壊滅をこの目で見て、その救助活動を行ったので、古代の言ったヤマトの襲撃を含め、新たなる脅威に関して否定的ではなかった。
英雄の丘での酒宴が終わった後、真田はこの後、行く所があるらしく、酒を飲まず、タクシーを呼び、英雄の丘からある場所へと向かった。
良馬もギンガが録音した謎の音声信号を解析してもらうよう真田についていった。
古代もこの後、用が有るらしいのだが、約束している時間にはまだ余裕があるらしく、酔いを醒ましてから向かうと言っていた。
良馬の場合は、飲んだ酒は小量であり、彼は体質上滅多なことがない限り酒には酔わないので、そのまま真田について行った。
タクシーの中で、良馬は、
「真田先輩」
「ん？なんだ？月村」
「実は、俺も気になる事がありまして・・・」
「なんだ？」
良馬は、第十五空間輸送補給護衛艦隊が遭難した事と、強力な通信エネルギーを傍受し、その通信を記録していた事を話し、記録した記憶媒体を真田に渡した。
「実はこっちでも少し気になる事があってな・・・わかった。解析してみよう。明日、科学局分析室へ来てくれ。古代達には俺から連絡をつけておこう・・・見せたいものもあるしな」
「お願いします」
良馬は真田の言う気になる事と見せたいものが気になりつつ、明日真田の下に行く事になった。
やがてタクシーが辿り着いた場所は地球防衛軍宇宙艦船の第一ドックだった。
このドックには先ほど上空を飛び去っていった地球防衛軍連合艦隊旗艦、アンドロメダが係留されていた。

タラップの下で警備していた警備兵に身分証明書を見せ、アンドロメダを訪れた要件を話すと警備兵の案内の下、二人は艦長室へと来た。
艦長室には艦長である土方が二人を待っていた。
「ひ、土方教官!?」
良馬は慌てて土方に敬礼する。
「ん?月村か?久しぶりだな」
「は、はい」
良馬自身突然の土方の出現に度肝を抜かれた。
てっきり造船所の技師が待っていると思ったからだ。
その後、真田と土方はアンドロメダのテスト航海の結果を検討し合い、良馬も後学のため、それに参加した。
三人が検討を続けて、もう間もなく終わろうとした時、
コン、コン、と艦長のドアをノックする音が聞こえた。
「誰だ?」
「ヤマトの古代艦長代理をお連れしました」
「入れ」
艦長室のドアが開くと、そこには警備兵と古代の姿があり、古代が艦長室へと入って来た。
「よぉ」
真田が古代に声をかけ、良馬は一礼する。
古代は真田と良馬が此処に居るのが意外らしく、少し驚いた様子だった。
やがて、古代は土方の正面に立つ。
「君がヤマトの艦長代理か?」
「そうです」
古代は地球付近でのアンドロメダとの一件で、少し不機嫌そうな声で肯定する。
「しばらくだな・古代」
土方は軍帽の鍔をクイッとあげる。
「土方教官・・・宇宙戦士士官学校の土方教官じゃないですか・・・まさ

か、教官がアンドロメダの・・・」
古代は此処で土方がアンドロメダの艦長だと知った。
古代は早速、土方から航路優先権の諍いのことで詰問され、古代は宇宙航空法の法律内容を言う。
宇宙航空法では洋上の海路と違い復路優先となっていた。しかし、艦隊旗艦にも航路の優先権があり、ましてアンドロメダは地球連合艦隊旗艦・・・つまり地球防衛軍が所有する宇宙艦艇の中でも最高峰の位置にいる戦艦なのだ。
土方がその旗艦優先権を主張すると、古代は此処で自分が指揮をしていた艦隊の僚艦は数隻が損傷している事実を伝えると、その報告は土方の耳にも入っていたがそれはヤマトが地球へ帰ってからのもので、何故あの時、その事実を伝えなかったと、逆に質問されたあげく、「いたずらに権利を主張するだけが艦を統括する者の態度ではない」と、言われ、古代は黙ってしまう。
しかし、古代に罰則は言い渡されず、この問題は不問とされ、「帰ってもよい」と言われ、古代は良馬と真田と共に帰る事にした。
その際、土方は「相変わらず頑固な男だ」と不敵な笑みを浮かべ古代を見送った。
「テスト航海の結果を調査しに来たんだ・・・どうだい？この艦は？」
真田が古代と良馬にアンドロメダの感想を聞く。
「天井も高いし、通路も広い・居住性は良さそうだ」
「確かに、まほろば　もそうですが、ガミラス戦役で使用していた艦艇と比べるとかなり乗員の生活環境は向上されている」
初めてアンドロメダに乗艦した良馬も古代と同じ事を思った。
「良すぎるのさ」
その後、アンドロメダの機関室、主砲制御室、艦橋を見学した。
新型の波動機関はヤマトよりもコンパクトにまとめられており、小型ながらも出力は大きく、整備も調整も皆、ロボットが行う設計になっている。
主砲の射程はヤマトの波動砲の射程と同じで、艦首拡散波動砲の威力はヤマトの収束波動砲の二倍の威力を誇る。

しかし、機能は全て機械化されており、機関室同様、主砲の制御も全てコンピューター任させとされている。
古代は真田の説明を聞き、アンドロメダを「化け物みたいな艦」と言い、真田はその訳を古代に話した。
防衛軍の上層部はヤマトの勝利を人の力では無く、機械技術と科学技術によってもたらされたもので、人の力はあくまでついでだと思い込んでいると、
そして、真田はアンドロメダの艦橋で「この艦では・・・敵に勝てない・・・・」
と、苦々しい様子で呟いた。

番外編　中嶋加奈江の回想録

ゼスト隊長が密かに内偵を進めていた戦闘機人製造プラントの一斉摘発・・・・。

戦闘機人・・・・それは、クローン体の人体に身体能力、そして魔法能力を強化するための特殊な機械部品をインプラントした存在の総称。

とある科学者が人造魔導士を誕生させる理論、『プロジェクトＦａｔｅ』と同じく提唱した理論で、発表当初は管理局の人員不足を解消できるかもしれないと言う事で持てはやされたが、やがて、『プロジェクトＦａｔｅ』同様、倫理的、人道的、技術的等の問題点からタブー視されて、表向きでは研究・開発は禁止されているが、現在でも裏の非合法組織では未だに研究・開発が進んでいるらしい・・・・。

二年前、私たちはとある研究所が今でも戦闘機人の違法な研究・開発を続けているとの情報を掴み、その研究所に一斉捜査をかけた。

その結果、私たちはその研究所で生まれたであろう二人の戦闘機人である少女たちを保護した。

その時、保護した二人の少女たちの容姿は幼い時の私に似ていた・・・・。

気になった私は、保護した二人を知り合いの科学・技術者であるマリエル・アテンザ（マーリー）の下に検査の為に連れて行った。

検査の結果、私は驚愕した。

何故ならば彼女たちのＤＮＡ配列が私のＤＮＡと一致したからだ。

つまり、この二人は私のＤＮＡを元に造られたのだ。

捜査を掛けた研究所は調べた結果、管理局とは何のつながりもない研究所だった。

しかし、その何のつながりもない筈の研究所で管理局員である私のＤＮＡと同じ戦闘機人が二人も誕生していた。

その事実から本当にあの研究所は、管理局とは何の関係も無かったのだろうか？と私は疑問に思った。

そもそも私のＤＮＡデータは何時、何処から外部に流出したのだろうか？

だが、それについては心当たりがあった。
私は管理局に入局してからはずっと局で行われている健康診断を受けてきた。
考えたくはないが、恐らく局で受けた血液検査から私のＤＮＡデータは、外部に流出したのだろう。
だとしたら、あの研究所に戦闘機人の製造を命じたのは管理局自体か若しくは管理局内に反管理局組織の内通者（スパイ）が居る事となる。
しかし、それは私の憶測にすぎず、確たる証拠はない。
私からの報告を聞いたゼスト隊長もどうやら私と同じ疑問を抱いた様で、「この件は一先ず俺が預かる」と言って、一部の局員以外知る事のない事実となった。
彼女たちの誕生も気になったが今は、保護した二人の少女たちの見受けを何とかしなければならなかった。
このままでは、彼女たちは研究資料として、今度は管理局の研究所で実験動物としての扱いを受ける恐れがある。
だが、私の心の中では既に決まっていた。
私は夫のゲンヤさんに事の真相を話した上で、彼女たちを自分たち夫婦の養子にする事を提案した。
私たち夫婦が結婚してから、もう随分経つけど、未だに子宝に恵まれないし、ゲンヤさんはもう若い訳では無い・・・
それにお互いに管理局の局員と言う事で、家に居る時間は多いとは言えず、結婚当初より共に家で過ごす時間は減り、当然肌を重ねる事も少なくなってきている。
こう言っちゃあ悪いが恐らくこの先、子宝にはもう恵まれそうにない。
それに彼女たちは私とＤＮＡが同じなのだから、遺伝子的には私の子供に変わりないのだから・・・
案の定、私の提案にゲンヤさんは快く了承してくれた。
ゲンヤさんも子供の事については私同様、悩んでいた様だ。
私は早速、ゼスト隊長にその旨を伝え、二人をナカジマ家の養子と

して向かい入れた。
そして私が養子縁組で必要な手続きとして、二人の名前を訊ねると、二人は怯えた様子で、
「タイプ・ゼロ・・・・ファースト・・・・」
「・・・・たいぷ・ぜろ・・・・せかんど・・・・」
と、自分たちの製造番号を答えた。
恐らく研究所内でも研究員たちからその様に呼ばれていたのだろう。
私はそんな二人にもう自分たちが戦闘機人であることを・・・・人間兵器であることを忘れ、一人の人として生きていくように言った。
そして私は二人にそれぞれ名前を授けた。
姉で、私同様青く長い髪を持ち、私の容姿を妹より多く受け継いでいる少女にはギンガ。
青いショートヘアーの妹にはスバルと名付けた。
二人を養子にしてから暫くしてギンガは妹を守る為、私が得意とするシューティング・アーツを教えて欲しいと頼んできたので、私はギンガにシューティング・アーツを教えたが、妹のスバルは傷つくのも傷つけるのも嫌だと言って、訓練には参加しなかったが、それ以外では「お母さん、お母さん」と、甘えん坊な子だった。
それから二年の歳月が経った・・・・
そして、私たちはまた新たな戦闘機人の製造研究所があるとの情報を掴んだ。
当然非合法の研究所だ。
ゼスト隊長は早速その研究所を捜査しようとしたが、そこを私たちの上司であるレジアス本部長がソレ（捜査）に待ったをかけた。
レジアス・ゲイズ本部長・・・・。
非魔導師ながらも将官、そして〝陸〟のトップにまで上り詰めたエリート局員で、ミッドの平和を何よりも考えている人・・・・
士官学校では、ゼスト隊長と同期生で士官学校卒業後も良好な関係を築いてきた二人なのだが、ここ最近、二人の交友関係の仲に亀裂が生じ始めている。

噂ではあるが、レジアス本部長が〝陸〟の管理局の人員不足を解消するために、本来違法である筈の人造魔導師、戦闘機人の研究を密かに後押ししていると言う噂を聞いた。
その噂を聞いて、まさか、私のＤＮＡをギンガとスバルが生み出されたあの研究所に持ち込み、研究・製造を依頼したのはレジアス本部長なのではないかと思った。
考えたくはないが、地上本部の本部長と言う彼の地位ならば、私のＤＮＡデータを外部に持ち出す事くらい簡単に出来る。
当然、ゼスト隊長もレジアス本部長の噂を聞いており、その真相を問いただしたが、レジアス本部長は曖昧に答えをはぐらかした。
そんなレジアス本部長の態度にゼスト隊長は業を煮やし「もう、勝手にさせてもらう」と言って今回の戦闘機人製造プラントの強制捜査を予定通りに行う事を私たちに伝えた。
私は何だか一抹の不安を抱きながらその任務にあたる事となった。
親友のメガーヌもレジアス本部長とゼスト隊長のやり取りを見て、私と同じ様に不安そうな表情をしていた。
捜査の前日、私はメガーヌに今回の捜査から外れる様に言った。
実はメガーヌは一児の母となっていた。
彼女は妊娠していたことを、私やゼスト隊長を含め、隊の全員に隠していた。
子を宿し、大きくなったお腹も変身魔法の要領で普通に見えるようにしていた。
つわりもなく、食事の志向も特に変化がなかったためまったく気づかれなかったが、さすがに隊舎の廊下で産気づけば誰でも気づく。
産気の際、陣痛の痛みで魔法が解けて、お腹が大きくなった彼女の姿を見た時は、一瞬フリーズしたが、他の同僚の声で我に返り、その後は急いでメガーヌを病院へ搬送した。
無事に出産を終えたメガーヌは子供の父親については頑として口を割らなかった。
しかし、長い付き合いである私にはなんとなく予想がついていたので、話したくないのなら聞かないと決め、それ以降私達の間でその話

題が出ることはなかった。
メガーヌの想い人は知っていたし、その相手が意外と酒に弱く、飲みすぎると記憶を失うことがあることも知っている。
多分その辺りを上手く利用し、誘導したのだろう。
メガーヌの娘、ルーテシアはまだ幼い。
管理局の任務に絶対の安全などなく、万が一メガーヌが命を落とすことがあれば、ルーテシアは孤児になってしまう。
ゼスト隊長もその点を心配しており、私同様、メガーヌを今回の任務から外そうとしたが、彼女はそれを受け入れなかった。
ギンガとスバルの時の様に簡単に決着がつくと思って楽観視していたのか分からないが、彼女は最後までこの任務から外れる事は無かった。
それでも、私自身はメガーヌにはやはり、今回の任務からは外れて欲しかった。
もし、私の身に何が有れば、彼女にギンガたちの事を見て欲しかったからである。
だが、反対にメガーヌから「貴女こそ、今回の件から外れた方がいいわ」と言われてしまった。
彼女も私と同じで、残される子供の身を案じており、それと同時に我が子の身を案じていた。
私がメガーヌに残ってもらい、万が一の事があったら、彼女にギンガとスバルの事を見てもらおうと考えていたのと同じようにメガーヌも同じことを考えていたのだろう。
ゼスト隊長も同じく私に今回の任務から外れる様に言ったが、私自身もこの任務から外れる事はしなかった。
その理由はやはり、ギンガとスバルの誕生に私のＤＮＡが使用されていた事が深く関係していた。
これから摘発する研究所にはもしかしたら、ギンガやスバルの様な境遇の子どもたちがいるかもしれないと思ったから・・・
そしてギンガとスバル同様、また私のＤＮＡを使用した戦闘機人の子供たちがいるかもしれないと思ったから。

ゼスト隊長もメガーヌもその事を考慮したのか、私にそれ以上今回の任務から外れる様には言わなかった。
そして、私はメガーヌと必ず生きて戻ろうと約束した。
様々な不安を抱えたまま捜査当日の日を迎えた。
その日、現場へ向かおうとする私をギンガとスバルは必死に引き止めた。
今思えば、この子たちには分かっていたのかもしれない。
私が生きてこの家に戻れなかった事を・・・
でも、行かない訳にはいかず、私はギンガとスバルに必ず帰って来ると優しく諭し、任務へと赴いた。
そして行われた戦闘機人製造研究所の強制捜査・・・。
だが、完璧な奇襲捜査にも関わらず、相手はまるでこの日、この時間、この場所で捜査が行われることを知っているかのように万全の迎撃態勢をとっていた。
研究所の全域には、ＡＭＦ・・・アンチ・マギリンク・フィールドと呼ばれる効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化するフィールドが展開されており、上手く力が出せない。
しかも出入り口は堅く閉ざされて脱出するのも不可能。
此処から出るには他の脱出口を探すしか方法は無かった。
そんな中、私はゼスト隊長と親友であり、同期のメガーヌとも離れ離れになってしまった。
通信を送ろうにも妨害電波まで流されており、通信も出来ない。
一人、また一人と仲間がガジェットと呼ばれる機械兵や待ち構えていた戦闘機人たちの手によって討たれていく。
そう言う私も既に致命傷を負っている。
手でお腹に開いた風穴を押さえるが、それは何の意味もなさい・・・。
指の間からは赤い血が絶えず流れ続けてくる。
力が抜け、体中が寒く、そして急激な眠気が襲って来る。
もう、痛みも感じない・・・
これが『死』と言う感覚なのだろうか？

「ゲンヤさん・・・・ギンガ・・・・スバル・・・・ごめんなさい・・・・お母さん・・・・帰れそうに・・・・ない・・・・わ・・・・ほんとうに・・・・ごめん・・・・ね・・・・」

私の脳裏にはエルセアの家に残してきた家族の事が思い浮かぶ。

ギンガにはシューティング・アーツの全てを教える事が出来なかった。

師匠としてそれは余りにも無念で仕方がない。

スバルは大丈夫だろうか？

あの子は優しい子であるが、甘えん坊で、寂しがり屋だ。

ギンガも普段はスバルの姉と言う立場で真面目に振舞っているが、私が居なくなった後、責任感で押し潰されないか心配だ。

ゲンヤさんも残されたギンガとスバルをちゃんと育てられるだろうか？

あの人、少し家事が苦手な面もあるし。

あぁーダメだ・・・・

物凄く眠い・・・・

重くなる瞼・・・・

私は目を閉じ、意識を失う前に、

ゲンヤさん・・・・ギンガ・・・・スバル・・・・

どうか、私の分まで生きて・・・・幸せに・・・・ね・・・・そして・・・・約束を破って・・・・ごめんね・・・・。

と、家族の幸せを願って私の意識はブラックアウトした・・・・・・

死より強いもの、それは、理性ではなくて、愛である。

トーマス・マン　より

それからどれくらいの時間が経っただろうか？

・・・・暗い・・・・それと何やら暖かい・・・・？

んんっ!?

体が・・・・押し流れる――――――!?

ま、眩しい…此処は一体どこ何だろう？

「生まれたか!?」

誰かが…？

男の人の声がする。

薄目を開けて見てみると、看護服を着た女性とスーツ姿の男性の姿が見える。

「加奈、よく頑張った!!見ろ、お前に似た可愛い女の子だぞ!!」

男の人が抱き上げ、ベッドで横になっている母らしき人の横に私を横たえる。

なるほど、さっきのは母親の胎内で、私は今、産まれた所のようだ。

えっ!?

ちょっと待って!!

私はさっき、死んだ筈…

それがなんで、今生まれた事になっているの!?

それにカナって誰？

私の母親はカナと言う名前ではなかった。

混乱していた私の意識は再び強い眠気によって薄れていった……。

それから暫くして私の立場が判明した。

今の私の名前は本田加奈江。

本田彰仁と本田加奈との間に生まれた本田家の長女…

しかし、私はただの本田家の長女ではない…

かつて仕事の合間、暇つぶしで読んでいたネット小説でよく目にした転生者というやつだ。

そして、生まれた世界はミッドチルダではなく、地球と言う星だった。

生まれ変わった私には、リンカーコアが無かった。

つまり、この世界での私は魔導師ではなく、非魔導師。
レジアス本部長やゲンヤさんと同じ、普通の人間となって生まれ変わった。
地球・・・
この世界（星）の名前はよく知っている。
夫だったゲンヤさんのご先祖様も地球と呼ばれる世界出身者であり、また本局に在籍していたグレアム提督の故郷であり、ギンガたちを保護した翌年、第９７管理外世界で起こったＰＴ事件、闇の書事件において事件解決の為に管理局に貢献したのは僅か九歳の現地に住む少女だった。
その少女が住む世界、第９７管理外世界も地球と言う名前だった。
しかし、私が今いる地球はミッドで噂されている地球とは随分と文明の発展力に差がある気がした。
だが、そんな事は、私は特に気にしていない。
何の因果か分からないが、死んだ筈の私は今、こうして生きている。
生きていれば、ゲンヤさんやギンガ、スバルとまた会えるかもしれない。
私はそんな可能性を信じてこの世界を生きて行こうと決めた。

私がこの世界（地球）に転生してから早十七年の歳月が流れた。
十七年経った私の容姿はどういう訳か、前世の私と同じような容姿をしていた。
ただ、日本人としての血が流れているため、前世では青かった髪は黒い髪だ。
それ以外は前世と同じ容姿だった。
ギンガもきっと十七歳になったらこんな感じになるのだろうかと思った。
あの子は、スバルより私に似ていたから・・・・。
しかし、未だにミッドに残してきた家族と会える兆しはない。

「ごきげんよう」

爽やかな朝にお嬢様挨拶がこだまする。
落ち着いた色合いのセーラー服にベレー帽・・・昨今珍しい清楚な制服。
私立、白百合女学館。
幼稚舎から大学までの一貫教育のある明治時代後期から現在まで続く伝統あるお嬢様学校である。
開校当初は華族専門の学校だったが、時代の波、そして戦争による敗戦で華族制度が廃止となり、こうして入学試験に合格した女子は誰でも入学が出来る学校となった。
受験時当時、特に「この学校に行きたい!!」と言う希望はなかったし、この学校は元々母や祖母の母校だったらしく、母が「祖母母娘、三代に渡って女学館で学ぶのがママの夢だったのよ～」と、言われ、親孝行目的もあったし、実家からも近いのでこの学校に入った。
前世では、高校生活と言うものを行わなかったから、個人的にも高校生活と言うものにも興味があった。
何故私が前世において高校生活を行っていなかったのかと言うと、ミッドの中学卒業後に管理局の訓練校に入った為である。
それに同じく前世では私の両親は早くに亡くなったので、この後世では、両親に親孝行と言うものをしたかった。
まぁ入学試験の時にはかなり、苦労したけど、私は何とか母の願いをかなえる事が出来、このお嬢様学校へと入学する事が出来た。
入学当初は初めてのお嬢様学校と言う事で戸惑いはした。
前世を含め、お嬢様とは縁が無かったし、私自身お嬢様と言う柄では無かったからだ。
しかし、入学してから半年も経てば慣れてくる。
入学時、幼稚舎・初等部・中等部から持ち上がりが殆どの中で私は外部入学者。
とは言え、一学年の人数は多く、初めて同じクラスになるような場合も多い。
学校に・・クラスに馴染めるか不安だったが、すぐに仲の良い友人も出来て、まずまずのスタートだった。

「ごきげんよう、本田さん」
「ごきげんよう」
高校に入って二度目の春が来た。
そして、この年、私はあの人と出会った・・・・。
☒春一番☒
この日は正に、その名に相応しい陽気。
しかし、天気は良いが、朝から風が強い日だった。
授業が終わり、他の学生も帰宅する姿がチラホラ見える。
かく言う私もその中の一人だった。
「きゃっ!!」
朝よりは風が弱まったと言え、時々突風が吹く。
皆、スカートと帽子を抑え、更に髪を抑えなければならない状況。
非常に歩き難いし、気を使う。
そう言う私も例外ではなく、髪が酷い状況だった。
強風に騒ぎながら友人達と別れ、自宅への道を歩く。
「あ～、もう髪がぐちゃぐちゃ。春が来るのは良いけど、風強すぎよ。この風、明日にはおさまっていればいいけど・・・・」
帽子とスカートを抑えながら歩いてはいるもののかなり歩き難い。
しかも片手には鞄を持っているのだから尚更だ。
「っ、キャ!!・・・・あぁーっ!!」
一瞬強風が吹きとっさに私は帽子を抑えようとしたのだが、反応が遅れてしまった。
被っていた帽子は風で飛ばされ、正面から歩いてくる人の方向に飛んでいった。
その人は一瞬驚いた様子でとっさに私の帽子を掴もうとしてくれたのだが、あと一歩届かず私の帽子は街路樹に引っ掛かってしまった。
「あぁ～、もう最悪!!」
私は帽子の引っ掛った街路樹を見上げた。

そんなに高くはないが、今の私の身長では届かない。手を伸ばしても無理だろう。
こんな時に魔法（ウィングロード）が使えたらすぐに取れるのに・・・・
今更ながら、非魔導師であるこの体が恨めしい。
そんな風に思いながら、私は困ったように街路樹を見上げ、立ち止まった。
だから、横から突然声をかけられた時、私は驚いた。
それも二重の意味で・・・・。
「すまない。突然の事で掴めなかった」
「えっ!?」
まさか、正面を歩いていた人が今もソコにいるとは思ってもいなかった 。
しかも、逆に謝られた。
そして、その人の声は、前世で私の夫だったゲンヤさんの声にとてつもなく似ていた。
「あっ、いえ、こちらこそスミマセン。気にしないで下さい」
私は平然を装いながらその人にそう答えた。
「いや、掴みそこねた俺もいけなかった。流石に君ではこの高さでは届かないだろう?」
そう言うと、その人はスルスルと木に登り、私の帽子を取ってくれた。
「ありがとうございます」
私は帽子を受け取り、その人にお礼を言った。
「いや、かまわない。今日は風が強いし、こういう事もあるだろう」
その人は今では珍しい詰襟の学生服を着ていた。
襟の部分には錨の形をしたピンバッチがついている。
自分より身長は高く、真面目そうで落ち着いた雰囲気のある人だった。
「今日は本当にありがとうございます」
と笑顔で御礼を告げた。

一瞬、彼が固まった気がしたが彼も微笑んでくれたので安心した。
あの後、二～三言程話し、私はその人と別れた。
互いに存在を気にしつつも引き留める事など出来ない。
（また会えるだろうか？）
ゲンヤさんと同じ声を持つ人・・・。
私は言葉に出さずとも、互いに胸に思いを秘めたまま、家へと帰った。

その後、あの人と会うことなく月日が過ぎ、初夏が近づいた。
学生の楽しみの一つ、夏休みが迫っていたのだが、その前に突破しなければならない関門があった。
期末テストと言う名の関門だ。

テスト、それは学生たちの怨敵!!
テスト、それは全ての学生達が見る共通の悪夢!!
テスト、それは大いなる祝福（夏休み）への道を阻む学生にとっては魔の断崖絶壁!!
苦しみ悶える難関（テスト）の前では武術の才など何の意味を為さない。
私達学生の宿敵を打ち破る為に必要なのは、脳に詰め込んだ情報量とその応用力。

・・・・と言う訳で、
私はその宿敵を打ち破り、一夏の休暇を勝ち取る為、学校の帰りに大型書店に寄る事にした。
大型書店だけあって品揃えも良く、目当ての参考書コーナーに向かう。
そして、お目当ての参考書を見つけ、手を伸ばすのだが、
「ん～ん・・・と、届かない・・・」
今の私の身長では届かなかった。
それでも、どうしても試験勉強には必要なので、私はその参考書を

必死に取ろうとした。
「ん～、もうっ！身長があともう、五cm欲しいっ！もう少し、棚を低くしてくれれば良いのにっ!!もう、皆が身長高い訳じゃないのよ!!」
参考書が取れずについつい愚痴ってしまう。
その時、
――――スッ
「えっ!?」
誰かの手が私の取ろうとした参考書に伸び、
「この本で合っているだろうか？」
私に差し出してきた。
私は驚いたままその参考書を取ってくれた人物を見上げているだけだった。
「えっと・・・・この本ではなかったか？」
黙っている私を見て、バツ悪そうに、その人は尋ねてきた。
「っ!?　は、はい。スミマセン。合っています。どうもありがとうございます!!」
私は慌てて本を受け取り、その人にお礼を言った。
「いや、俺の方こそ驚かせてしまったようだ。すまない」
「あっ、突然で驚いたのもあるんですけど・・・・えっと・・・・この前、帽子を取ってくださった方ですよね？それに驚いてしまって・・・・」
「あっ、あぁ、覚えていたのかい？」
「はい。あの時は助かりました。そして今回もありがとうございます!!」
その後、暫くその場で互いの事について話しをしていたが、他人の邪魔になるのではないかとの話しになり、どちらともなく、近くのカフェに移動した。
偶然にも再会した私達は、本屋から近くのカフェに移動し、互いの事について話をした。
「それじゃあ改めて、防衛軍士官学校三年の中嶋源三郎です」
「私立白百合女学館二年の本田　加奈江です」
互いに自己紹介をした後、話題は尽きず、時間は足りなかった。

二人は時間を忘れたかのように様々な事を話し、互いの連絡先を交換し、この日は分かれた。
（ナカジマ・・・ゲンヤさんと同じファミリーネーム・・・ゲンヤさんと同じ声に同じファミリーネームを持つ人・・・これは偶然なのかしら？）
私は源三郎さんとの出会いをただの偶然とは片付けられず、彼との出会いに運命的なものを感じた。
なお、余談であるがこの時、入った翠屋と言う喫茶店のシュークリームはとても絶品だったので、私は今後もこの翠屋に行こうと思った。

あれから源三郎さんと何度か会い、メールや電話のやり取りを何度も行った。
ただ、源三郎さんは防衛軍の士官学校の生徒故、そう簡単に会える訳ではなかった。
そんな中、私は期末テストと言う夏休み前の最大の難関に打ち勝ち、今は夏休みを謳歌している。
でも、源三郎さんと会えないのはやはり寂しい・・・。
そんな夏休み中のある日、私は気分転換に友人と二人で街へとショッピングへ出かけた。
翠屋でティータイムをし、百貨店で友人と水着やパジャマ、下着を見たり、アクセサリーショップに入り、アクセサリーを買ったり、私と友人は夏休みの一時を楽しんだ。
そしてその帰り道・・・
「よぉ彼女達～。俺達と遊ばない～？」
「面白いとこ知ってんだよねぇ～」
「俺達。退屈はさせないよぉ～」
見知らぬ男達に声を掛けられていた。
これが俗に言う『ナンパ』と言うものなのだが、連中の目つきや気配から下心が丸見えである。
「か、加奈江・・・」

友人はこの様な体験は無いのか、すっかり怯えて私の服を震えながら掴んでいる。
私の場合は、前世でこんな連中よりももっとおっかない次元犯罪者達を相手にしてきたので、怖いとは思わないし、魔法やシューティング・アーツは使えないけど、この世界に転生して「合氣道」「空手」「柔術」といったこの国独自の格闘技を学んできた。
当初は、両親に反対されたが、「護身のため」と言ったら、あっさりと了承してくれた。
それなので、
「はっきり言ってお断り。貴方達に付き合うような暇は無いのよ。さっ、行きましょう」
私は友人の手を引いて、男達を無視して通り過ぎようとしたが、
「そう言うなよ。楽しもうぜ～」
男の一人が手を伸ばしてきたので、
――パシンッ!!
「付き合う暇は無いって言ったでしょう!!はっきり言うけど馬鹿は馬鹿でもツマラナイ馬鹿を相手にすると疲れるのよ!!貴方達、自分がどれだけ間抜けで滑稽に見えるか理解していますか？」
私は男の手を払いのけて、拒絶の姿勢を貫く。
すると、言われた方は急激に頭に血が上ったようで、
「此のアマ！人が優しく言ってりゃぁ、つけ上がるんじゃねぇ!!」
「こっちが下手に出てりゃ図に乗りやがって!!」
激昂して、一人は殴りかかってきたが、
「てぇぇぇい!!」
殴りかかってきた男の手を掴んで、勢いのまま投げ飛ばす。
「このクソアマ！」
今度はナイフを取り出してきた。
「死ねぇぇぇぇぇ!!」
ナイフを持った男が私に来たが、
――ドガッ!!

突然、横から入って来た拳で、男はノックアウトされた。
「大丈夫ですか!?」
ナイフ男をノックアウトしたのは、源三郎さんだった。
「え、ええ。ありがとうございます・・・ほら、貴女もお礼を・・・・」
怯えきっている友人にそう促すと、
「あ、ありがとうございます」
怯えながらも友人は源三郎さんにお礼をいった。
「て、テメェ!!その制服、防衛軍の士官学校の制服じゃねぇか!!」
一人の男が源三郎さんを指さしながら、叫ぶ。
どうやら士官学校の制服は結構有名の様だ。
「士官学校の生徒が民間人に暴行していいと思っているのかよ!?」
「何言っているのよ!?これはどう見ても非が有るのは貴方達の方じゃない!!」
「そ、そうよ。ナイフまで取り出して・・・・」
友人も士官学校生の宗次郎さんが来てくれて、不安や恐怖が若干和らいでいる。
「へっ、そう言っていられるのも今の内だぜ。おい、行くぞ・・・・」
男の一人がニヤリと嫌らしい笑みを浮かべ、捨て台詞を吐くと、何故か男達はその場からあっさりと去って行った。
私はその後にあの男が言い残した言葉の意味を知る事となった。
それから暫くして、源三郎さんが士官学校を放校処分されるかもしれないと言う話を聞いた。
噂では、源三郎さんが一方的に民間人に暴行を働いたというものだった。
源三郎さんは処分が決まるまで寮の自室で謹慎させられていると言う。
私は事実を確認する為、士官学校へと赴き、その話を聞いて驚いた。
あの時、捨て台詞を吐いたあの男は何でもとある企業の社長の息子らしく、その男達が言うには、あの日、自分たちは仲間と共に街の中を歩いていたら、一人の士官学校の生徒がいきなり自分たちに金を出せと要求し、それを断ったら殴られたと証言した。

その金銭を要求し、暴行を働いたのが源三郎さんだと言うのだ。
余りにも無茶苦茶で出鱈目な話に私は憤慨し、あの時一緒に居た友人を急いで呼び、士官学校の教官達に事の真相を話した。
教官達も被害者面をしているあの男たちの証言全てを鵜呑みにしている訳ではないが、あの男の親の会社と言うのが、どうも軍需産業系の会社で防衛軍上層部の天下り先や何かと融通を聞かせているらしく、教官たちもそう簡単に逆らえないと言う。
このままでは、源三郎さんは士官学校を放校されてしまう。
悪いのはあの連中なのに、何故、源三郎さんがこんな酷い仕打ちを受けなければならない？
余りにも理不尽だ。
そもそもあの騒動の原因の一因は私でもあるのだ。
私は何とか、源三郎さんを救う事が出来ないものかと悩んだ。
しかし、一学生である自分にそんな事が思いつくはずが無く、
「はぁ～」
思わず溜息が出る。
魔法も無く、権力も無い今の自分は余りにも無力だ。
目の前にある好物の翠屋特製のシュークリームにもカフェオレにも手をつけずに、溜息ばかりが出る。
そこへ、
「あら？どうしたの？溜息なんてついて？」
翠屋のパティシエール兼オーナーである高町桃華さんが、声をかけてきた。
「桃華さん」
私はどうしていいのかわからず、桃華さんに相談した。
すると、桃華さんは、
「分かったわ。私に任せて、中嶋さんは私が何とかしてみるから」
と言った。
それから、すぐに源三郎さんの放校処分は撤回され、反対に源三郎さんを放校処分に追いやろうとしたあの男たちが、警察に捕まり、あの男の親の会社は買収され、社長・あの男の親は会社を解雇されたと

言う。
私は桃華さんにお礼を言って、どうやって放校処分を撤回させたのかを尋ねるが、桃華さんは、「お友達に凄い人がいる」というだけで、詳しい事は教えてくれなかった。
どんな手を使ったにせよ、源三郎さんの放校処分が撤回された事実に私は喜んだ。
それから色んなことがあったけど、私達は長い交際の末、結婚した。
そして、西暦２１８８年・・・・。
「おぎゃあっ!!おぎゃあっ!!」
とある病院内で産声が響き渡る。
「っ!?生まれたか!?」
そわそわと病院中を歩きまわっていた源三郎はたった今、産声の聞こえた分娩室に足を向ける。
分娩室へと案内された源三郎が見たのは、出産の疲れを見せない満面の笑みを浮かべながら、産声をあげる小さな赤子を抱えている加奈江の姿だった。
「見て!元気な女の子よ!」
その子が後に『桜花』と名付けられる源三郎と加奈江との間に生まれた子供の誕生した日だった。

前世においてゲンヤさんと何度か体を重ねた事はあるが、出産と言う体験はこれが初めてだった。
学校の授業で聞いてはいたが、これは思ったよりもきつい体験だった。
しかし、前世ではかなわなかった、お腹を痛めて生んだ我が子の誕生には言葉では言い表せない喜びがあった。
桜花が生まれて三年後の西暦２１９１年、地球はガミラス帝星と言う謎の宇宙人からの攻撃を受け始めた。
この世界の軍事において素人である私から見ても、ガミラスの科学技術力は地球やミッドをも凌ぐ力を持っていた。
そして地球はガミラスの猛攻と遊星爆弾によって次第に追い詰め

られていき、等々その居住域を地上から地下へと移した。
私たち地球人はそれでも何とか懸命に生き延びたが、それでも地球人類滅亡のカウントは止まることなく進み、地球は次第に追い詰められて行った。

ガミラスとの戦争から約四年が経った西暦２１９５年、私は源三郎さんの紹介でその人と会った。
「加奈江、彼が今度新人研修で、俺の下で働く事となった」
「つ、月村　良馬です。よろしくお願いします」
中性的な顔立ちの青年、月村良馬君とこの時私は初めて出会った。
良馬君は本来宇宙艦隊勤務であったのだが、今は一時的に地上勤務で源三郎さんの下で働くことになっているらしい。
桜花も良馬君に懐き、二人は兄妹の様な関係になった。
それから、良馬君の従姉のリニスさんって方も桜花にとって姉の様な存在となった。
こうした微笑ましい光景の中、地球はガミラスの攻撃により、どんどん追い詰められていった。
地上は元より地下をも着実に侵し始めた人体に有害な放射能。
食糧や生活必需品をめぐる事情によって引き起こされる暴動騒ぎ。
誰もが地球の未来に絶望し、狂気へと駆られている。
そんな中、私が高校時代からの親友であった桃華さんが、病気のため、この世を去った。
桃華さんの所には二人のお子さんがいた。
二人の事は気になるが、上のお子さんは良馬君と同じ防衛軍軍人の様で、収入面では問題ないので大丈夫だと言っていた。
それでも何か困った事があれば、力になると私は二人に言った。
それから更に四年が経った西暦２１９９年。
地球人類はまさに風前の灯火と言って良い状況下だった。
そんな中、良馬君は宇宙巡洋艦の艦長、高町さんの家の上のお子さんは宇宙駆逐艦の艦長となり、何度も宇宙でガミラスと戦い無事に

帰ってきてくれるけど、私はとても不安でならなかった。
そんなある日、
「こんにちは」
「はーい」
宇宙から帰って来た良馬君が家に来た。
元々、良馬君とリニスさんは、家を下宿として使用しているので、今日帰って来たと言う事は、暫くは地球に居ると言う事なのだろうか？
玄関で出迎えた私を良馬君は神妙な面持ちで見つめていた。
私はこの時、何か嫌な予感がした。
立ち話も何なので、リビングへと二人を招き入れる。
良馬君とリニスさんにお茶を出すと、良馬君が口を開いた。
「明日、冥王星へ出撃します」
「えっ!?」
つい最近、地球に帰って来たばかりなのにまた直ぐに出撃すると言う。
「それで、加奈江さんには預かっていただきたい物があります」
「何かしら？」
良馬君とリニスさんは無言でそれぞれ懐から白い封筒を取り出し、私の前に差し出した。
そこには筆文字で「遺書」と書かれていた。
「っ!?」
「もし、俺達が今度の戦いで戦死した場合、俺の親友・・・いや、その方々も来なかったら、加奈江さんか中嶋さんが忍さんに渡して貰えませんか？それと之は、中嶋家の皆さんに・・・もし、俺が帰ってきたら、捨てて構いませんが、帰ってこなかったら開いてください」
もう一通渡された封筒にも「遺書」と書かれていたが隅に小さく「中嶋家の皆さんへ」と書かれていた。
「・・・」
遺書を手渡され、私は何も言う事が出来なかった。
「それじゃあ、桜花ちゃん、元気でね」
良馬君は玄関先で桜花の頭を撫でている。

「う、うん・・・良馬さんもリニスさんも早く帰ってきてね」
桜花も何となくだが察しているのだろう。
良馬君とリニスさんがこれから何処へ行くのかを・・・。
もしかしたら、良馬君が帰ってこないかもしれないと言う事を・・・。
二人のやり取りを見て私は必死に涙を堪えた。
あの時、
前世でナカジマ家を後にした私を見送ったギンガとスバルはきっと同じ様な気持ちだったのだろう。
遠ざかっていく二人の姿を私達親子は二人の姿が見えなくなるまで玄関先で見送った。
それから数週間後・・・。
家の電話が鳴り、私が出ると、それは源三郎さんからの電話だった。
「はい、中嶋でございます」
「加奈江か？」
「はい・あの・・・どうかしましたか？」
「実は伝えたいことがニ、三あるのだが・・・」
「何でしょう？」
「先日行われた冥王星での戦いは地球側の惨敗だったそうだ」
源三郎さんが悔しげな口調で、冥王星で行われた戦いの結果を伝える。
「・・・」
やはりそうか、地球の今の技術では、ガミラスには勝てない。
それぐらいは曲がりなりにも軍人の妻をやっている私でもわかる事だ。
「それで、良馬君とリニスさんは？」
私は冥王星の戦いへ参戦した大切な人達の安否を尋ねた。
「無事だ。今、地球に向かっている」
「そう、よかった」
良馬君は何とか無事に地球へ帰って来るようだ。
私は良馬君が無事と言う事でホッと一息ついた。

「それと・・だな・・・」
源三郎さんが少し言葉を詰まらせる。
「何か他にも？」
「実は、火星付近でガミラスとは異なる宇宙船が突然ワープアウトして来たみたいでな、その船の乗員を月村君が救助したらしんだ」
「良馬君が？」
「ああ、それで、その船の乗員を家で預かりたいのだが・・・」
源三郎さんの声は少しバツ悪そうだ。
今は、ガミラスとの戦争状態で、例え、ガミラス人でなくとも、異星人と言う事で私が過剰な拒否反応をすると思ったのだろう。
「良いですよ。部屋はまだ余っているのだから、例え異星人の方でも困っている時はお互い様ですもの」
「そうか、そう言ってもらえるとありがたい。月村君は来週にも地球に帰ってくる予定だ。それまでには準備しておこう。もちろん俺も手伝うぞ」
「はい」
私が受け入れる姿勢を示したので安心したのか、源三郎さんの声は少し明るかった。
でも、その時の私はまさか、この出会いが、あんなにも意外なモノとなるなんて予想もしていなかった。
その日の夜、私は奇妙な夢を見た。

此処は・・・もしかしてミッドの地上本部？
私はテレビか映画でも見ているかのような感覚だった。
しかし今、目の前に広がる光景は前世で何度も見た事もあり、実際に来た事もあるミッドチルダ、クラナガンのシンボルとも言える時空管理局地上本部の内部だ。
ただ停電でもあったのか、辺りは真っ暗で非常灯もついておらず、薄暗い。
そんな暗い地上本部ビルの中で、戦闘を行っている者が居た。
前世で私が愛用していたリボルバーナックルと私のバリアジャ

ケットに似たデザインのバリアジャケットを纏うギンガと私が死んだ切っ掛けとなった戦闘機人研究所でゼスト隊長を破ったあの戦闘機人が戦っていたのだ。
（いけない!!ギンガ、戦闘機人相手に無暗に突っ込んでは危険よ!!）
私は思わず声を上げるが、ギンガには届いていない。
案の定、勝敗はややギンガが不利だった。
ギンガは相手の戦闘機人のＩＳ能力を知らずに戦いを挑み、最初の一撃でダメージを負い、その後は慎重になったのだが、相手に援軍が現れたのだ。
（ギンガ、逃げなさい!!その状況じゃ不利よ!!相手を捕まえるよりも自分の事を大切にしなさい!!）
ギンガに逃げる様に言ってもやはり私の声は届かない。
三対一の状況にも関わらず、ギンガは逃げる事も無く、尚、戦い続け益々追い詰められ、等々瀕死の重傷を負った。
そんな中、スバルがその現場に到着し、傷ついたギンガの姿を見て、怒りに我を忘れ、目は戦闘機人として稼働している事を示す金色となり、相手に襲い掛かった。
（スバル・・・）
姉（ギンガ）の為に怒る事は構わないが、あれ程忌み嫌っていた戦闘機人モードになったスバルに私は悲しんだ。
しかし、奮戦虚しく、スバルも重傷を負い、ギンガは攫われてしまった。
「返せ!!ギン姉を返せぇぇぇぇー!!」
破壊し尽くされたフロアーにボロボロとなったスバルの絶叫が響いた。
「ギンガ!!スバル!!」
私はそこで目が覚めた。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
嫌な夢だった。
その為か、寝息は荒く体は寝汗をビッチョリとかいていた。

（さっきの夢は一体何だったんだろう？・・・・予知夢？・・・・それともミッドのギンガとスバルの身に何か起きたんじゃ・・・・）
私は異世界にいるであろう娘達の事が心配になったが、確認の方法が無く、暫くは不安な日々を過ごした。
それから約一週間の時が経った。
良馬君とリニスさん、それに救助した宇宙船の乗員の方が家に来る日となった。
「只今!!」
玄関から源三郎さんの帰宅を知らせる声がした。
「おかえりなさい。お父さん」
桜花が源三郎さんを出迎えた様だ。
「えっと・・・・そちらのお母さんに似た方は・・・・？」
玄関から桜花の戸惑う声がした。
救助した人ってそんなに私にそっくりなのかしら？
まぁ、出迎えれば分かるだろう。
そう思い、私も玄関へと向かった。
「お帰りなさい。アナタ」
「えっ!?」
私は良馬君が救助して、桜花が私にそっくりだと言う宇宙船の乗員を見て固まった。
向こうも同じく、私の姿を見て固まっている。
「か、母さん・・・・？」
私の目の前にいる人物は、ちょうど、私と源三郎さんが出会ったころの私に似た女性で私の事を「母さん」と呼んだ。
もしかして、この娘は・・・・
いや、間違いない・・・・
この娘は紛れもなく・・・・
「・・・・ギンガ？」
私は思わず、小さな声で呟いた。
こんな奇跡の様な偶然は存在するのだろうか？
しかし、今の私はクイント・ナカジマじゃない。

中嶋源三郎の妻で、中嶋桜花の母親、中嶋加奈江なのだ。
「あっ、ごめんね、学生時代の私にそっくりだったもので、驚いちゃって」
私は驚愕した顔を即座に引っ込めて笑みを浮かべる。
「紹介しよう、私の妻の加奈江だ」
「はじめまして、中嶋加奈江です」
源三郎さんが私を紹介したので、私は今の自分の名前を言う。
「は、はじめまして。ギンガ・ナカジマです。しばらくの間お世話になります」
すると、相手の方も自己紹介するが、やはりこの娘はかつての私の娘、ギンガ・ナカジマだった。
もう、見る事は叶わないと思っていたギンガの成長した姿・・・できればスバルの成長した姿も見たかったが、こうしてギンガの成長した姿を見る事が出来て、私は嬉しさを感じた。
ギンガはしばらく家に滞在する事となり、桜花も顔には出さないが喜んでいるみたいだ。
良馬君は、他にやる事が有るのか、また直ぐに源三郎さんと一緒に家を後にした。
「改めて見ると、ホント、ギンガさんとお母さんはそっくりですね」
リビングで桜花がギンガと私を見比べて言う。
今の私の容姿は何の因果か？前世の私の髪の毛の色以外容姿がまるっきり同じなのだ。
一方、ギンガの方も同じような事を考えていた。
（母さんと同じ容姿・・・でも、名前も髪の毛の色も違う・・・それに母さんが生きているわけないじゃない・・・あの時、確かに母さんは死んだ筈だもの・・・）
ギンガは三笠で出会ったディアーチェとはやてが似ている事もあって、自分の母のクイントと加奈江は他人の空似という結論を出した。
翌日の朝食の席で、電話が鳴った。
「はい、中嶋です」

「あっ、加奈江さん？良馬です。中嶋さんに代わって貰えませんか？」
電話をかけてきたのは良馬君だった。
「ええ、居るわよ。あなた」
私は受話器を源三郎さんに渡した。
「ん？誰からだ？」
「良馬君から電話」
受話器を渡すと、源三郎さんは良馬君と話始めた。
会話の中には「手続き」「来る」等の言葉が混じっていた。
源三郎さんが電話の受話器を戻すと、
皆が源三郎さんの方に視線を向ける。
「お父さん、何かあったの？」
「うん。月村君の友人の妹さんが、この前の冥王星での戦いで、お兄さんを亡くして天涯孤独になってしまってね」
「それで、その子はどうなるんですか？」
私は源三郎さんにその子の事を訊ねる。
「昨日、月村君と一緒にその子に戦災孤児育英法の適用を薦めてきてね、さっきの電話はその子が戦災孤児育英法の適用を受けるという知らせだったんだよ」
ギンガが戦災孤児育英法について質問し、源三郎さんがその説明をする。それにしても、その子が戦災孤児育英法を受けてくれてよかったと思う。
恐らくその子の後見を家で務めるのだろう。
「加奈江さん、それで・・・・」
案の定、源三郎さんが頼み込む様な仕草をとる。
「分かっています。その子を家で保護をするのでしょう？」
「あ、ああ・・・・」
「構いませんよ。こんなご時世ですもの。子供たちは地球の希望ですから。そしてその子供たちを育むのは私たち大人の当然の役目ですから」
私はギンガに続き、その子も受け入れる事にした。
夕方になり、その子が源三郎さんと良馬君と共に家にやって来た。

「紹介しよう。今日から一緒に住むことになった、高町紅葉ちゃんだ」
「た、高町紅葉です。よ、よろしくお願いします」
「よろしくね、紅葉ちゃん。私は中嶋　加奈江って言うの。　私の事はお母さんと思ってもいいのよ」
私は微笑みながら紅葉ちゃんを迎えるが、これは私にとって痛恨の極みだった。
桃華さんが亡くなり、紅葉ちゃんとそのお兄さんが親戚の人の家に預けられた後、私はそこで安心しきって、紅葉ちゃん達のことをすっかり忘れてしまっていた。
まさか、お兄さんが亡くなる前に親戚の方々も亡くなっていたなんて。
いくらガミラスとの戦争で生活が苦しく大変な中でも、桃華さんの親戚の方々とも、もっと交流を深めておくべきだった。
これでは、桃華さんに合わせる顔がない。
そんな罪悪感が私の心の中に駆け巡った。
夕食の準備の時、紅葉ちゃんは私の事を手伝ってくれた。
勿論娘の桜花も手伝ってくれた。
ギンガは前世の私の遺伝子を受け継いでいるため、常人よりも多く食べる。
それはこの世界でも変わりなかった。
今の地球は、食糧事情が逼迫している。
ギンガにとってこの世界は住みにくいだろう。
だからこそ、私は少しでもギンガの胃袋を満足させるため、この世界独自の食事療法と言うものを行った。
それが、日頃からバランスの取れた美味しい食事をとることで病気を予防し、治療しようとする考え方、医食同源と言う考えだった。
月村さんから頂いている漢方薬を材料として使った薬膳は思いの外効果があった。
それに紅葉ちゃんと何かの訓練・・・恐らくリンカーコアの制御をしている様で、その効果もあった。
地球防衛艦隊が壊滅した冥王星海戦から、暫くして、防衛軍は大昔

の戦争で沈んだ戦艦を修理し、イスカンダルと言う星にある放射能を除去する機械を受け取るための計画を立案し、ヤマトと言う名の戦艦をイスカンダルへと向かわせた。
そんな中、源三郎さんや良馬君はヤマトに乗艦せず地球に残った。
そして、ある日、良馬君の様子がおかしかった。
日に日に目の下の隈を濃くしていく良馬君に私は訊ねた。
「ねぇ、良馬君」
「なんでしょう？」
「良馬君、ちゃんと寝ている？」
「えっ？ええ・・・でもなんでそんな事を？」
「良馬君、この頃、目の下の隈が少しずつ濃くなってきているから・・・」
「だ、大丈夫ですよ。俺は軍人ですよ。体調管理ぐらいちゃんと出来ますから」
「そう？ならいいんだけど・・・」
私はなんだか煮え切らないながらもこの場でその話題を打ち切った。
日に日に目の下の隈を濃くしていく良馬君であったが、ある日を境に目の下の隈を薄くしていった。
私は一安心したが、その反面、ギンガとリニスさんが互いにいがみ合っている様な気がした。
一体何があったのだろう？
ヤマトが太陽系を後にした後、良馬君は太陽系惑星の資源輸送護衛のため、暫く地球を留守にした。
そしてヤマトが冥王星にあるガミラス軍基地を破壊したため、地球は漸く遊星爆弾からの脅威が去った。
しかし、放射能の脅威は依然として地球に残っている。
その間、桜花と八神さんの所のお嬢さんを巻き込んでの誘拐事件が発生した。
ギンガもその件に首を突っ込んで、私は思わず二人を叱った。
どれだけ、心配しただろうか？

どれだけ八神さんに申し訳ないと思ったか？
後日、桜花共々八神さんの家にお詫びに行った時、桜花は本当に反省した様子で、その桜花を見て、八神さんは桜花の事を許してくれた。
桜花たちの誘拐事件が解決してから、暫くして、
「加奈江さん・・・」
「ん？何かしら？」
「私、あの話、受けようと思います」
「本当に!?」
「・はい」
「ありがとう!!桜花もきっと喜ぶわ!!」
以前、ギンガに話した中嶋家の養子入りの件をギンガは了承してくれた。
前世同様、この後世でもギンガを養子に入れるのは何となく不思議な感覚がしたが、それでも、私は嬉しかった。
しかし、その反面、ギンガにはミッドで待っているであろうゲンヤさんやスバルの下に還してられなくなる罪悪感もあった。
そしてギンガは家（中嶋家）の養子となったが、それと同時に防衛軍軍人にもなりたいと言ってきた。
何故、防衛軍軍人になりたいのか理由も尋ねて、ギンガの言い分も聞いたが、当然私も源三郎さんも反対した。
ギンガは私がいなくなった後も、こうした理由で管理局員になったのかと、思った。
しかし、あまりにもギンガの熱心な態度に遂に私たちは折れ、ギンガの防衛軍士官学校への入学を認めた。
だが、良馬君だけは最後までギンガの防衛軍の士官学校への入校に関して反対をしていたが、忍さんの登場によって呆気なく敗北し、ギンガは防衛軍の士官学校へ入校していった。
西暦２２００年になり、ヤマトが地球に帰って来た。
地球はギリギリの所で救われた。
地球が救われ、復興していく中、ギンガは無事に士官学校を卒業した。

しかし、すぐに配属先は決まらず、暫しの間自宅待機を命じられた。
その間、ギンガにある変化があった。
妙に良馬君の事を意識している様なのだ。
チラチラと良馬君の事を見ては、視線を逸らしている。
当然、その視線には良馬君も気が付いている。
だが、敢えてその事については触れていない。
ギンガが良馬君に送る視線・・・それは、恋する乙女の視線だった。
その仕草、その視線・私にも覚えは有る。
協力はしたかったが、恋愛に関しては当人達の問題なので、こればっかりは、何とも言えなかった。
私が見ても良馬君は、いい男だ。私としては、ギンガの恋愛が実る事を祈るしかできなかった。
ある日の朝食の席で良馬君は遅くまで仕事をしていた様で、髪の毛はボサボサで眠そうな顔をしている。
今日はリニスさん達と買い出しに出かけるが、良馬君は、朝食後に眠ると言う。
私はそこで、とある考えが閃き、今日一緒に買い出しへ出かけるギンガに買い出しが終わったら、先に帰って良いと言って皆で買い出しへと出かけた。
目立った協力は出来ないが、やっぱりきっかけを与えるぐらい良いかと思った。
その結果、ギンガと良馬君は上手くいった様子だった。
その翌日・・・
私が台所で朝食を作っているとギンガが来た。
そこで見たギンガは一皮むけた様に見えた。
「あら?ギンガ、なんだか、昨日よりも綺麗になってない?」
「そうですか?特に変わらないと思いますけど・・・?」
ギンガは特に気にしていない様だが、私にはそう見えた。
「うーん、何て言えばいいのかな?一言では言えないけど、なんだか、昨日よりも少し大人っぽく見えるから・・・」
「えっ!?」

私の感想にギンガはドキッとした様子。
そこで、私はカマをかけてみた。
「昨日、何か有ったの？」
「い、いえ。べっ、別にそんな事は・・・」
「そう？私の勘違いかしら？」
「きっとそうです!!」
ギンガが強引にこの話を打ち切った。
その後、朝食の準備も一段落ついたので、
「それじゃあ、ギンガ。悪いんだけど、桜花と紅葉ちゃんを起こしてきてくれるかしら？後は、私がやっておくおから」
「はい」
ギンガは桜花の部屋に向かう。しかし、その歩き方はどこかぎこちないようだった。
（やっぱり、ギンガ・彼と・・・）
私の経験からギンガは彼と・・・良馬君と体を重ねたのだと確信した。
その日の夜、
私は良馬君に呼ばれて彼の部屋で彼と二人で話をした。
「単刀直入に言います。まず、ギンガと交際する事になりました」
「まぁ～。それはおめでとう。母親の私が言うのもなんだけで、ギンガは良い娘でしょう？美人だし、気立ての良いしっかり者だし」
「は、はい」
「そ・れ・で・・どこまでいったの？」
「は、はい？な、何がですか？」
「決まっているじゃない。ギンガとどこまでいったかって聞いているのよ」
「そ、それは・・・」
「ギンガ、良い身体していたでしょう？」
「っ!?」
良馬君の反応で私の予想は間違いなく、彼は昨夜ギンガと事を交えたと思う。

彼の反応はとても初々しかった。
その後、彼は真剣な表情である事を私に聞いて来た。
「それと加奈江さん、以前からどうしても聞きたかったことがあるんですが・・・・」
「何かしら?」
「ギンガが初めて来た日、加奈江さん玄関口で小さくギンガの名前を呟きましたよね?あの時、加奈江さんにはギンガの名前をまだ教えていないし、源三郎さんも玄関先で初めてギンガを加奈江さんや桜花ちゃんに紹介した筈なのに・・・・」
「・・・・」
「どうして、加奈江さんは紹介される前にギンガの名前を知っていたんですか?ギンガなんて名前、そうそうある名前ではありませんし・・・・」
まさか、あの時、呟いたギンガの名が聞こえていたなんて予想外だった。
てっきり聞こえないと思っていたのに・・・・。
戦闘機人であるギンガならば聞こえていたかもしれないが、ギンガはその問題に未だに尋ねてこないところを見ると、前世の私とそっくりな今の私を見て、気が付かなかったのだろう。
しかし、良馬君には聞こえていた。
ここは、ごまかしようがないな・・・・。
「参ったなぁ～聞こえないと思っていたのになぁ～」
私は良馬君から視線を逸らした。
口元には自然と自嘲の笑みが浮かぶ。
「加奈江さん、それで・・・・」
「ねぇ、良馬君」
・
「はい」
「輪廻転生って知っている?」
「輪廻転生?それって確か・・・・」
そして私はこの世界に転生した経緯を良馬君に教えた。

「それじゃあ、そういう事だから、くれぐれも他の人には言わないでね」
良馬君がギンガに私の事をバラすとは思えないが、この世界にギンガがいる以上、無用な混乱は避けたかった。
今でこそ、ギンガは中嶋家の養子であるが、前世の記憶がある自分が居れば、気まずさと罪悪感が伴う。
ギンガやスバル、ゲンヤさんがミッドで私の居ない生活をしている中、私は源三郎さんと桜花の二人とミッドでの変わらぬ様な家庭を築いていた。
ギンガはきっと私を許さないだろう。
私はギンガに拒絶されるのが怖かった。
だからこそ、私は良馬君に口止めをしたのだ。
私はなんて卑怯な人間なのだろう。
本当、自分でも嫌になるくらいだ。
「ギンガの事、お願いね。あの子、意外と脆い部分もあるからちゃんとカバーしてあげてね」
私は罪悪感を感じながらも良馬君にギンガを託し、良馬君の部屋を後にした。
それから暫くして、ギンガの配属先が決まった。
地球防衛軍女性宇宙戦士用の制服の上に士官用ジャケットを纏ったギンガがとても凛々しく見えた。
「素敵よ、ギンガ、とっても良く似合っているわ」
「うん、ギンガもこれで、晴れて防衛軍の一員だな」
「ギンガ姉さん、カッコイイですよ」
桜花も目を輝かせてギンガを見ている。
我が娘ながら、立派だと思ってしまうのは決して親バカではないと思う。
そして、いよいよ明日に出撃を控えた日の夜、
夜中に唐突だが、私は喉が渇いたので、台所で水を飲んだ後、部屋に戻ろうとした時、良馬君の部屋からギシギシと何かが軋む様な音と声が聞こえた。

気になってドア越しに耳をたててみると、
ギンガの喘ぐ声が聞こえた。
ギンガが甲高い声をあげ、暫くは二人の荒い息遣いが聞こえたが、
呼吸を整えた後ギンガは、
「もっと・・・しましょう？」
と、良馬君を誘う。
そして、再びギンガの喘ぐ声とギシギシと軋む音がした。
それから私は暫く聞き耳をたてていたのだが、
之で何度目のやり取りだろうか？
良馬君とギンガが互いに何度も身体を求め合っていた。
何度も良馬君の身体を求めるギンガもギンガだが、それに付き合う良馬君も意外と絶倫だと思う。
私は良馬君もギンガも若いわねぇ～と思うのと同時に、孫の顔を見るのもそう遠くないなぁ～と思いつつ、二人の影響を受けたのか、少し体が火照ってきた。
ガミラスとの戦争も終わった事だし、そろそろ桜花の弟か妹を生むのも悪くないかなと思いつつ、私は部屋へと戻った。
その翌日、良馬君は朝、ギンガよりも先に家を出た。
彼が出る際私は、
「昨夜は随分とギンガとお楽しみだったみたいね？」
「・・・」
ニンマリと笑いながら、昨夜の事を聞く私に対し、良馬君は顔を赤くし俯く。
「ギンガの事、よろしくね」
「はい」
良馬君は軍帽を被り直し、家を後にした。
「それじゃあ、行ってきます」
「気をつけてね」
「いってらっしゃい」
次に朝食を摂り、制服に着替えたギンガがトランク片手に中嶋家を出た。

私は二人の無事を祈りながら、ギンガを見送った。
しかし、まさかこの年・・・
ギンガが防衛軍軍人になった年にまさか、あのような事が起こるとは、この時の私には知る由もありませんでした。

十九話　離反

防衛軍科学局分析室、そこには昨夜、就役したばかりの最新鋭艦、アンドロメダを見学した真田、良馬、古代の三人の姿があった。
「真田先輩、解析の方はどうでしたか？」
「その前にまず、コレを見てほしい」
真田は昨日良馬から渡された記憶媒体の解析結果より先に昨日、真田が言った『見せたいもの』から見せた。
真田がキーボードを操作すると、パネルには宇宙海図が表示され、その一点に光る点があった。
「これは、突然三日前から見え始めた光球だ。現在、太陽系外約１７０光年の位置にある」
「突然見え出した理由は？」
「加速して太陽系へ迫り、前面に発光ガスを伴った重力波が発生しているからだ。まぁパルサーとかクエーサーとか呼ばれている。電波星と同じパターンだ」
「クエーサー？でも、今まで確認されたクエーサーは赤色変化ばかりで地球から遠かって行くはずじゃあ・・・・」
「そうだ。遠ざかっていく物体のスペクトルは常に赤方向へずれる。だが、こいつは見ての通り、青方向にスペクトルが偏差している。これは歴史上はじめて発見された地球に近づくクエーサーなんだ・・・・拡大投影するぞ」
再びキーボードを弄り、めいっぱい光点を拡大するするとパネルには、
「これは彗星だ。しかもかなり巨大な・・・・」
パネルを見た古代が驚きの声をあげる。
古代と良馬の見ているパネルには巨大な白色彗星が映っていた。
「彗星状のクエーサーなんて初めてだよ。どんなものなのか想像もつかん。しかも前面に発生した恐ろしい重力波と高速中性子が針路上の遮るものを押し潰している」

「ですが、この巨大な彗星が例の通信と関係していると?」
　良馬がこの彗星とあの謎の通信が関連しているのかと真田に問うと、
「そうだな。アナライザー、例の記憶媒体の中身を再生してくれ」
　真田がアナライザーに解析した記憶媒体の再生を指示する中、古代は何の話だ?と首を傾げたので、良馬が古代に事情を説明した。
「デハ、再生シマス」
　アナライザーが解析されたデータを再生すると、最初はピィー、ガーと言うノイズの雑音しか聞こえなかったが、徐々に人の声がし始めた。
『・・・・今・・・・私達の・・・・・巨大な・・・・・・あなた方・・・・・・かも知れません・・・・・危機が・・・・・時間が・・・・・早く・・・・・・誰かが・・・・・この通信を・・・・・・早く・・・・・・立ち上がって・・・・・・・・・・』
「アト、再生不能デス」
　真田の腕をもってしても記憶媒体に記録された音声をこれ以上再生するのは不可能だった。
「これは!?」
「救いを求めているんじゃないですか?」
「そのようだな」
「発信源は分からないんですか?」
「ここのコンピューターでは限界があってな・・・ただ、エネルギーの強さと受信フィルターの消耗度から推測してかなり遠距離である事は間違いない。そして、発信された方角は、あの白色彗星が飛来してくる方向と奇妙に一致している」
「偶然にしては何か出来過ぎていますね。あの白色彗星と何か関係があるとみて良いでしょう」
「月村さんの言う通りです。それに俺達が攻撃を受けた未確認飛行物体とも無関係とは、とても思えない」
「古代君の言う通りならば早めに手を打っておくべきでしょう。もしこれが、宇宙の何処かで起こっている異変を誰かが知らせようとして

いるのならば・・・そしてその異変が地球に向けられているのであれば、尚更です」
「それにこの通信が途切れ途切れになっているのは遠距離のせいではなく、妨害電波の影響かもしれません」
古代は通信の感度が悪いのは妨害電波の影響だと主張する。
遠距離から来た通信だが、あそこまでの強大なエネルギー通信だ。遠距離と言う理由で感度が悪くなるとはとても思えない。
ならば、誰かが意図的に通信を妨害していると、古代は思ったのだ。
「妨害電波？」
「そうです。かつてスターシアの通信がガミラスに妨害されていたのと同じように・・・・」
「それじゃあ、その妨害者が危機の張本人で、地球を狙う新たな侵略者かもしれないと？」
良馬はイスカンダルへの航海には参加していないがガミラスの強さは知っている。
もし、古代の推測通り、地球がその侵略者に狙われているのだとすると、その侵略者はガミラスと同等・・・いや、それ以上の科学技術力と軍事力を持つ星間国家だと推測した。
「否定はできんな・・・よし、この事案を防衛会議に提出して検討してもらおう」
「はい、それとヤマトの改造も急がないと」
「そうだな」
良馬と真田は謎の通信、白色彗星、第十五空間輸送補給護衛艦隊の遭難事件の事を資料に纏め、更に真田はその件と同時に第三ドックに係留中のヤマトの改造作業に取り組んだ。
ヤマトはガミラス戦役時のまま、辺境パトロール任務に就いていたが、防衛軍の武器や造艦の技術力はヤマトが地球を留守にしている間、格段に進歩していた。
今回、ヤマトはそれらの技術を用いて大改装する事となった。
従来の主砲を取り外し、射程距離が延びた新型の砲塔に変え、動力部を縮小し、その余裕が出来たスペースには中型雷撃艇を搭載した。

そして、艦首のバルバスバウ(球状船首)の内部にはタイムレーダーを搭載した。
これは、有効エリア内で、過去に起こった事をパネルで見ることが出来る優れもので、敵を追撃する際に有効となる代物だ。
ヤマトの改装は順調に進んでいたと思えたが、その途中で待ったがかけられ、改装計画の一部変更・・・ヤマトの火器管制システムと機関制御システムをアンドロメダと同様の自動管理方式に切り替えよと言う、司令部から命令が下った。
古代はこの命令に不服で司令部へ殴り込みをかけ、藤堂長官に命令の撤回を求めたが、決定が覆る事はなかった。
その直後、地球全土は突然の大停電に陥った。
原因は金星のエネルギー集積システムが停止した事だった。
突然の停電で交通網は麻痺、リニア路線ではリニア同士の接触事故や脱線事故が起こり、火災や爆発を起こす建物もあった。
リニア以外の交通でも信号機能の停止に伴う事故が各所で多発した。
この停電で、改装中のヤマトの改装作業はストップし、それどころか、クレーンで吊り上げていた資材がヤマトに落下し、一部改装作業をやり直さなければならない部分さえもあった。
この時、日本は夜であり、突然の大停電で辺りは真っ暗闇になった。
古代は暗闇の中、車を走らせ、ヤマトや真田の事が気がかりで車内電話でヤマトが係留されている第三ドックへ電話を入れたが、繋がらない。
焦る気持ちを抑え、古代は車を第三ドックへと急がせる。
しかし、その途中、瓦礫で道が塞がれており、進むことが出来なかった。
古代が車から降り、道を塞いでいる瓦礫を睨みつつ、ふと空を見上げると、人工の明かりの灯らない夜の空をあのカブトガニが飛び去るのを目撃した。
「あれは!?あの時の・・・」
それを見て、古代はやはり地球は何者かの侵略を受けつつあるのだ

と確信した。
大停電は翌朝までには何とか復旧し、朝早くから瓦礫や事故車両の撤去作業が行われた。
そんな中、アンドロメダは金星へと出発した。
目的はテスト航海及び金星エネルギー集積基地の事故調査だった。
ヤマトは改修工事を再開し、遅れた分のスケジュールを取り戻さんと、機関部では徳川が作業員と共に作業を行っていた。
そんな中、真田と良馬が防衛会議用に纏めた資料が出来上がり、真田と古代はオブザーバーとして、良馬は第十五空間輸送補給護衛艦隊遭難の事件の救助者として防衛会議に参加した。
防衛会議は防衛軍司令部庁舎の会議室にて、防衛軍上層部と地球連邦政府高官との間で行われた。
「すると何かね？このままだとその彗星が地球に衝突する恐れがあるという事なのかね？」
彗星の資料を見た、政治家が防衛軍の幕僚に訊ねる。
「いえ、目下の所まだ詳しい針路は掴んでおりません。ですが、今のうちに対策を協議しておかねばと思い、この度、防衛会議を招集したわけであります」
防衛軍側は少々曖昧な答えとなる。
しかし、
「なあに、例え地球に接近しても先ごろ完成したアンドロメダをはじめ、波動砲装備の戦艦だけでも今や地球には数十隻、彗星の一つや二つ簡単に破壊してごらんにいれます」
軍の官僚の中で、参謀長の西郷は自信ありげに宣言した。
ヤマトの航海にて波動砲の威力は軍関係者ならば、ほとんどの者が知っている。
故に大型の彗星だろうと、防衛軍の波動砲搭載艦全てを当てれば、簡単に破壊できるだろうという自信が軍にはあった。
「大昔、ハレー彗星が接近したときにもそうした騒ぎがあったと聞きますぞ」
「はっきりとした針路が分からないのでは対策の立て様がないのでは

ないか?公表して悪戯にパニックを引き起こすことになりますし」
政府はこの事実に関し、公表せず秘匿・・・ひいては無視を決め込もうとしている。
「いや、古代艦長代理があえてこの資料を防衛会議に提出したのは地球だけの問題だけではないのだ。太陽系・・・引いては銀河系全体に関係する問題でもある」
政治家どものお気楽思考に藤堂は待ったをかけるように発言する。
だが、
「しかし、長官、こんな不確かな情報だけで、事実を公表するわけにはいかんよ」
政府の高官はあくまでもこの件を無視しようとする意向を改めない。
政府高官のこの発言に古代はムッとした。
「くだらん、ガミラスとの戦争も終わった今、地球に危機などありゃせん、ありゃせん」
「やれやれ、人騒がせな話はいい加減にしてもらいたいですな」
(平和ボケ、ここに極まれりだな)
政府高官のこの言葉と態度に良馬は無表情のまま受け流すが、熱血漢の古代はそうはいかず、遂にキレた。
「お訊ねします!!」
古代の大声は会議場に響いた。
「地球は宇宙の平和を守るリーダーではなかったのですか?」
古代はアンドロメダの進宙式で大統領がスピーチで言った言葉を言い返し、政府高官に問う。
アンドロメダの進宙式の様子は、古代はその日の夕刊で知った。そこには進宙式で大統領が演説したスピーチ内容も記載されていた為、古代はその内容を知っていたのだ。
古代はこのスピーチの内容と今の地球連邦政府の姿勢に矛盾を感じ、政府高官にこの言葉を問うた。
古代のこの問いに政府高官は少し顔を歪めた。
自分達より若い若造が何を偉そうなことを・・・・とでも思ってい

るのだろう。
「古代、やめろ」
　真田は古代を宥めるが、それでも古代の怒りはおさまらない。
「もし、地球人が真に、宇宙の平和と人々の共存を願うなら、あのメッセージの内容を真剣に分析し、解明して、宇宙の果てだろうと何処だろうと救済の手を差しのべるべきなのではなないのですか!?」
　古代の主張に藤堂はジッと目を閉じている。
「やめたまえ!!いつまで英雄気取りでいるんだ!!君はオブザーバーだ。防衛会議を批判する権利はない!!」
　一人の高官が古代を黙らせようと机を拳で叩いた後、古代を指さしながら古代に負けない程の大声で言う。
　その言葉に古代は黙って唇をかんだ。
　結局謎のメッセージ通信も白色彗星の件についても政府は一切公表せず、無視を決め込む形となった。
　次に良馬が遭遇した第十五空間輸送補給護衛艦隊遭難事件について話し合いが行われた。
　良馬が証人として、経緯を話した。
　当初は、ガミラスの残党の仕業ではないかと示唆されたが、現在の護衛艦の能力ならば、ガミラス艦と十分やり合える能力を有しており、残党と言う事で、そこまでの数ではないと推察され、現場にはガミラス艦の残骸は確認されていない事からガミラス残党の可能性は良馬自身が否定し、古代同様ガミラスとは違う他の星系からの侵略者の仕業ではないかと示唆する。
　しかし、この事件に関しても政府は未知の惑星の侵略者との仕業ではなく、ガミラス残党の仕業ではないのならば、反連邦政府のテロリストか海賊の仕業か単なる偶発的な事故だと言い、決めつける始末だった。
（防衛軍でさえ、まだまだ艦艇が必要な時期に海賊やテロリストが最新鋭の護衛艦を撃沈できる艦艇を用意できるとはとても思えない。防衛軍の艦艇がテロリストや海賊に強奪されたという情報も無い。それに輸送船と護衛艦十数隻が一斉に事故?それこそありえないだ

ろう）
　良馬は何とか、第十五空間輸送補給護衛艦隊の遭難事件の件から謎のメッセージ通信と白色彗星の件を結び付けようとしたが、失敗に終わった。
　この時、良馬は古代の時の様に政府高官や防衛軍上層部から生意気な若造が、と思われたが、発言を途中で止めさせられる事はなかった。
　良馬はこの件に関してはオブザーバーではなく、ちゃんとした発言権を有しており、なにより良馬は世界中の政財界と深い関わりがある月村の家の出身者故、政府高官も下手に黙らせることは出来なかった。
　遭難事件に関しては専門の事故調査委員会が設けられる事になったが、良馬や古代は防衛会議の様子から真面目に調査しないなと思った。
　古代や良馬の求めた結果とは１８０度違う形で防衛会議は終了し、三人は庁舎の休憩室へと入った。
「くそっ!!」
　古代は悔しさの余りに休憩室の壁に拳を叩き付けた。
「あいつら、最初からやる気が無いんだ。何が事故調査委員会だ。突然襲撃されたらどうなるんだ？しかも、それがガミラスを上回る敵だとしたら・・・」
「古代君、落ち着け。地球はようやくガミラスから破滅の魔の手を逃れ、平和を取り戻したんだ。新たな敵・・そんなモノの存在を認めたくない地球連邦の高官連中の気持ちもわからない訳じゃない」
「古代、月村、その事だが、先日の大停電の原因だが、どうも金星のエネルギー集積基地が破壊されたためだそうだ」
「「破壊!?」」
　大停電の原因がシステムのエラーやショートならば、特に気にも留めなかったが、原因が何者かによる人為的な破壊工作ならば話が違う。
「テロリストの仕業ですか？」
「アンドロメダの調査結果を待たなければはっきりした事は分からん

が・・・・」
「敵の攻撃を受けたのかもしれないな・・・もし、それがテロリストではなく、侵略者による攻撃だとしたら、相手は確実にガミラス以上の力を持っていますよ!!」
地球は今、冥王星までの宙域に無数の監視衛星やパトロール艦隊を周回させ警備にあたっている。
それらの防衛ラインを難なく突破し、更に地球をすり抜け、金星の基地を攻撃するのだから、その技術はガミラス以上のモノなのは明白だった。
休憩室が重い空気の中、
「月村良馬さん、月村良馬さん、至急、司令室へお越し下さい」
突然良馬の呼び出し放送が流れた。
「やれやれ、大方、政府や軍の上層部が煩い若造は宙（そら）に飛ばしてしまおうって魂胆だろうな」
良馬は軍帽を被り直し、この呼び出しの目的と政府高官連中の思惑を呟き、
「それじゃあ」
古代と真田に一声かけ、休憩室を出て行った。
良馬が休憩室を出て行った後、古代は真田に現在の状況でもヤマトを飛ばす事は出来るかと訊ねる。
古代の質問に真田は瞬時に古代が何をしようとしているのかすぐに察しがついた。
司令室に出頭した良馬にある命令が下された。
それは、良馬の予想通り、まほろば　は本日１８：００に出航し、訓練航海を再開せよと言う命令だった。
この状況下で地球を離れるのは悔しいが、自分は軍人である事から、良馬はこの命令に従った。
良馬は急ぎ　まほろば　の乗員に連絡を入れ、多少の混乱と出航時間のオーバーはあったが、まほろば　はまた地球を離れ、再び星の海へと飛び立った。
そんな、良馬の下に数日後、司令部からヤマト追討令が下された。

なお、今回は良馬とギンガの二人は出発前、肌を重ねてはいない。
最初の訓練航海に出た際、良馬とギンガは帰ったら、互いに身体を重ねようと約束をしたのだが、今回の地球帰還は突発的な出来事であったし、いつまで地球に滞在出来るか、滞在期間が不明であり、尚且つ良馬にはやるべき仕事が沢山あったためである。
本音を言うと、二人ともベッドの上で互いの身体を堪能したかったのだが、今回は事態が事態なだけに諦めた。
まほろば　が訓練航海に出てから数日後、
地球防衛軍司令部司令室にて西郷は藤堂にある事を報告する。
「長官、ヤマトに不穏な動きがあります」
「不穏な動き？」
「はい、現在、旧ヤマト乗組員が職場を放棄し、次々とドックに集結しています。ご覧下さい」
西郷がキーボードを操作しヤマトが係留されている第三ドックの映像をパネルに映すとそこには、旧ヤマト乗組員の制服を着た防衛軍軍人達がタラップを昇り次々とヤマトに乗艦していく姿が映っていた。
「おわかりでしょう!?直ちに退艦命令をだします!!」
「待ちたまえ、西郷君。あれは偉大な儂の友人の子供たちのようなものだ」
「しかし、これを放置すれば規律を維持する事は出来なくなります!!」
「う・・・む・・・・」
「いいですね？長官？」
「やむを得まい・直ちに退艦命令を出したまえ」
「はっ」
西郷はヤマトの乗員に退艦命令を出した。
しかし、ヤマトはこの命令を無視し、黙々と出航準備を進める。
そこで、司令部はドックの出入り口を閉鎖するもヤマトはゲートを吹き飛ばし、海中から出航していった。
次に司令部はヤマトに機雷攻撃と魚雷攻撃を仕掛けるが、藤堂の命令で信管は抜かれており、ヤマトは不発弾である機雷と魚雷攻撃の中

を止まることなく、進んでいった。
海中、海上でヤマトを止める事の出来なかった司令部は続いて地球の周りに配備されている無人戦闘衛星を起動、これでヤマトを止めようとしたが、ヤマトは戦闘衛星を破壊、月をすり抜けて地球軌道を脱出した。
ヤマトが敢えて月の傍を通り抜けたのは、月方向には比較的、戦闘衛星の展開数が少なかったからだ。
これは月には大規模な駐屯基地がある為、この方向にはそこまで多くの戦闘衛星は配備する必要はないと言う司令部の盲点だった。
更に月基地所属の艦載機部隊がヤマトに合流。
そのままヤマト艦載機隊となった。
この部隊を率いていたのはかつてヤマト航空隊に所属していた加藤や山本らの航空兵が多く、ヤマトが行くなら俺たちも・・・と言う思いの中、月基地を出撃しヤマトと合流したのだ。
この光景を見た西郷は憤慨する。
「月の艦隊は何をしている!?」
「衛星の破壊で防空ネットワークに乱れが生じています。出撃までには時間がかかるかと・・・」
艦載機は兎も角、艦隊となると出撃まで時間がかかる。
そんな中、戦闘衛星が破壊され、防空ネットワークに乱れが生じた事により月の艦隊の出撃は更に遅れる事となり、月の艦隊ではもはや、ヤマトを追いかけるのは無理だった。
「ぬうぅ～金星基地の土方艦長に連絡、直ちにヤマトを追尾させろ!!それと、ヤマトとアンドロメダの中間に位置し、合流できそうな艦は？」
「月村艦長の戦艦　まほろば　がその宙域で訓練航海中です」
「よし、月村にも至急連絡を入れろ!!」
「了解」
オペレーターは早速、アンドロメダ　と　まほろば　に通信を入れた。
そして訓練航海の　まほろば　に防衛軍司令部から緊急伝がは

いった。
「艦長、司令部からの緊急通信です」
「内容は？」
　良馬はギンガに電文を読むよう促す。
「戦艦、まほろば　は　アンドロメダ　と合流し、同艦と共にヤマトを追跡。太陽系への脱走を阻止すべし・・・以上です」
　次いで合流する座標と時刻が伝えられてくる。
　当然、艦橋要員は戸惑いと緊張を隠せない。
　まさか、あのヤマトが・・・という思いなのだろう。
　しかし、良馬はヤマトが何故そのような行動を取ったのか察しがついた。
（まぁ、あの平和ボケをして、危機感がまるでない政府や軍上層部連中を見れば無理もないか・・・）
　そう思いつつ、良馬は艦長席から立ち上がると艦内一斉放送で呼びかける。
「艦長の月村だ。たった今、入った艦隊司令部からの緊急命令を伝える。本艦はこれより総旗艦、アンドロメダと合流し、太陽系脱出を図るヤマトの脱走を阻止する。これは演習ではない。繰り返すこれは演習ではない。総員、気を引き締めて任務遂行にかかれ！」
　いきなりの戦闘、しかも相手はよりによってあのヤマト。
　ルーキーたちを中心に、乗員に戸惑いと不安が広がるであろうことは想像に難くないが、命令は命令だ。やれません、出来ませんでは済まされない。
　案の定、ベテランの永倉と井上も戸惑いが隠せない表情をしている。
「航海長、針路変更、面舵十五、機関全速」
「面舵十五、両舷全速、宜候っ！」
　良馬の指示を航海長の永倉が復唱し、操縦桿とスロットルを操作した。
　主機関の回転が上がり、まほろば　はぐんぐん増速した。
　新型の高出力機関とバーニア、スラスターだけに加速や回頭の速度

はガミラス戦役に使用していた艦と比べるまでもなく速い。
まほろば　は僅か二時間足らずで、アンドロメダとの予定会合宙域に到着。
しかし、会合宙域にはまだアンドロメダは到着していなかった。
「ふぅ～土方司令の雷を受けずに済みそうですね」
永倉が安心したかのように言う。
「ああ、基本十五分前集合が絶対厳守だからな」
そして、予定会合時刻のきっかり十五分前にアンドロメダも会合宙域に到着した。
「アンドロメダから発光信号・・・『我二続ケ・・我二続ケ』・・・以上です」
「うむ、通信長返信の発光信号を」
「了解」
通信長のギンガはアンドロメダに『宜候』と返信の発光信号を打ち、アンドロメダと　まほろば　の二艦はヤマト追跡に向かった。
一時間半程経った時、先行していたアンドロメダからヤマト発見の報が入る。
その直後、まほろば　のレーダーもヤマトの姿を捉えた。
艦の種類状、まほろば　も優秀なレーダーや通信機器を搭載しているのだが、やはり総旗艦だけあり、レーダーの性能はアンドロメダの方が一枚上手だった。
「総員戦闘配備、航空隊スクランブル発進用意!!」
艦内に警戒警報のアラームが鳴り渡る。
アンドロメダ　と　まほろば　は急速にヤマトとの距離を詰めていった。
程なくしてヤマトもこちらの存在に気付いたらしく、急に増速して小惑星帯に針路をとった。
「副長、君はヤマトの狙いをどう見る?」
まだ余裕があるのか、良馬は、ヤマトの行動を副長の新見に訊ねる。
「速度で我々に劣るのですから、ここはやはり、小惑星帯に入り、我々を振り切るつもりでしょう。彼らは一刻も早く太陽系からの脱出を

試みているので、小惑星帯に隠れると言うことはしない筈です」
「多少危険だが、やはりそれがベストだろうな・・・航海長、多少の無茶や船体に傷がついても構わない。ヤマトを見逃すな!!」
「了解」
　まほろば　はセミオート操舵にはせず、そのままマニュアル操舵のまま小惑星帯を航行している。
「通信長、アンドロメダに先行許可を申請」
「はい」
　アンドロメダの航海長がどんな人物なのかは知らないが、小惑星帯内でのオールマニュアル操舵では恐らくヤマトには追い付かないだろう。
　その理由として、艦長があの土方提督なので、船体をぶつけたり、擦れば強烈な叱咤がくると思い操艦には慎重になる筈、それ故に操艦を自動航行モードに置き換えるだろうが、フルオートやセミオートでの操舵は回避優先でスピードダウンは否めない。
　例え土方が先程の良馬の様に「多少船体が傷ついてもかまわない」と命令しても、乗艦している艦が総旗艦で船体に傷をつけてはならないと言う心理が働き、船体を傷つければ配置転換処分を受ける可能性もあると思い込むだろう。
　それ故、この小惑星帯でアンドロメダはヤマトを捕捉できないだろう。と、良馬はそう踏んだ。
　アンドロメダから許可の回答が来た　まほろば　は　アンドロメダ　を左舷から一気に追い越し、先行した。
　一方のヤマトも高速を保ったまま小惑星帯に突入した。
　障害物だらけの宙域をオールマニュアルで操艦にも関わらず、ヤマトの航海長である島も　まほろば　の航海長永倉も猛スピードの中、小惑星帯の中を航行している。
(航海長もだいぶこの艦に慣れたな)
　元々、操艦技術がずば抜けている永倉であったが、当初この艦の操艦には多少手こずった。
　その理由はやはり、まほろば　がこれまで永倉が操艦した事の無い

程の大きさの艦だったからだ。
しかし、今では十分な操艦が出来る所を見ると、彼は操艦技術に関して天才の部類に入るだろう。
まほろば　が猛スピードでヤマトを追跡して居る頃、まほろば　の後方を航行するアンドロメダでは、
「何をしている、もっと増速しろ！」
アンドロメダの副長が焦った声を上げる。
小惑星帯に入った途端、アンドロメダはヤマト、まほろば　に引き離された。それこそあっという間に・・・
正確には、ヤマト、まほろば　が速度を維持したまま小惑星を走り抜けているのに対し、アンドロメダはセミオート操舵のため、こういう障害物だらけの空間では自動航行システムが航行よりも回避優先と認識してしまい、減速してしまうのだ。
アンドロメダの行動は良馬の予想通りだった。
小惑星帯を航行中、艦橋部のアンテナ部分が微小惑星に接触したのか、ドーンという音響と衝撃が艦を震わせる。
「うわっ!?」
「・・・・・」
艦橋が揺れ、席から立っていた副長が床に転倒するが、艦長席の土方は腕を組み、瞑目したまま一言も発しない。
「艦長、ヤマトと　まほろば　は全速で小惑星帯をすり抜けて行きます!!」
航海長が二艦の動きを土方に報告するが、その反面、内心は悔しさで満ちていた。
あの二隻は明らかにフルマニュアルで操舵しながら速度を維持しているのに自分にはそれができない。
カタログデータではこのアンドロメダはヤマトをも上回る加速能力と軽快な機動性を持っている筈なのに、自分ではアンドロメダの性能を十分発揮できていないのが明らかだからだ。
しかし、彼の名誉のために書き記すが、仮にも総旗艦の航海長に抜擢される程であるから、彼も十分優秀な宇宙戦士なのである。

ただ実践と経験が不足しており、何度も修羅場の様な実戦で鍛えられた手練れの航海士二人を相手に回しては余りにも分が悪かったのだ。
「艦長、とてもこんな所は航行できませんよ」
副長が柄にもなく、弱音を吐く。
「ヤマトは？」
土方はオペレーターにヤマトの行方を訊ねる。
「見失いました。小惑星が邪魔でレーダーが上手く作動しません」
「艦長!?」
もしかしたら、このままヤマトを見失い、太陽系からの脱出を許してしまうかもしれないと焦った副長が土方に声をかける。
「慌てるな。二隻のペースに乗せられることはない。ヤマトの追尾は月村に任せて、今は確実に小惑星帯から出ることを優先しろ。アンドロメダの船脚なら十分間に合う。小惑星帯を出た後、ヤマトの前面に立ちはだかるのだ!!急げ!!」
「了解しました！」
土方の命令を聞き、航海長はいくらか落ち着きを取り戻し、小惑星帯を抜け出る事に専念した。
小惑星帯を抜け目の前に再び星の海が広がる。ここでようやく障害物レースは終わりをつげた。
「小惑星帯を抜けました！」
「艦の損傷は？」
「ありません！」
「よし、ヤマトの現在位置は？」
「本艦の前方、六宇宙キロ・速度を維持したまま、木星方面に向かっています」
「如何いたしますか？艦長？」
新見が今後の動きを訊ねてきたので、
「このままの速度と間隔を維持したまま追尾する。アンドロメダは？」
「レーダーには映りませんが、まだ小惑星帯の中と思われます！」

「わかった。ヤマトとアンドロメダの現在位置は逐次報告せよ」
アンドロメダの船脚は防衛軍ピカイチだ。恐らく大きく迂回してヤマトの前面に先回りするだろう。
それから暫くの間、まほろば　は　ヤマト　と着かず離れずの追跡を続けた。
ヤマトは時折、急転舵等で　まほろば　を振り切ろうとするが、永倉は彼我の間隔を保ったまま、まほろば　を　ヤマト主砲の有効射程ぎりぎり外につけ続けていた。
やがて、ヤマトの前方十二時の方向にアンドロメダが姿を現わし、ヤマトの針路を塞ぐように回頭する。
アンドロメダの動きを見て良馬も指示を出す。
「航海長。下げ舵二十、ヤマト後部の下腹につけろ」
まほろば　は　ヤマトの第三主砲搭の死角になる後下部につけた。
これでヤマトから　まほろば　に向けられるのは、後部発射管のミサイルと艦底部のミサイルだけになる。
その反面、まほろば　は　ヤマト　の機関部、第三艦橋、艦載機発進口を主砲、副砲、ミサイルで狙える位置になる。
卑怯、姑息と言われるかもしれないが、相手はあのヤマトなのだからこれくらいの戦術をとらなければ、此方は大きな被害を受ける。
アンドロメダに針路を塞がれたヤマトだが、ヤマトは速度を落とさず、また針路も変えずにアンドロメダへと直進し続け、まほろば　もヤマトの後下にぴったりつけて続航を続ける。
やがて、土方がヤマトに通信を送り始めた。
良馬はそれをギンガに傍受させ、聞いていた。
「古代、多くは言わん、戻れ。私がどういう男か、お前たちはよく知っているだろう?」
(ええ、それは嫌と言うほどにね・・・)
土方の発言に良馬はそう思ったが、彼以外にも同じ事を思った者は何人も居た筈だ。
「お断りします。あのメッセージについては土方司令もご存じの筈でしょう?あれは紛れもなく宇宙の危機を訴えているんです!!何も確

かめずにいて、危機が目の前に来てからでは遅すぎます！」
古代らヤマト側の乗員最初から譲歩する気はないようだ。
当然古代は土方の命令を拒否した。
士官学校で教官職を務め、古代の性格をよく知っている土方は古代のこの行動と回答は十分予想していたのだろう。別段気分を害した風もなく、再び口を開いた。
「否定はしない・・・が、ヤマト一隻で何が出来るのだ？悪い事は言わん。今なら私が今回の件を何とかしてやる。戻れ!!」
「お断りします！」
「・・・そうか分かった。ならば、仕方ない。我々は実力を以って行使する。いいな？」
「・・・残念ですが、仕方ありません。しかし、我々の考えは変わりません!!」
「・・・分かった」
そこで、通信が切れた。
（是非に及ばずか・・・やれやれ、古代君も土方さんも頑固だからな・・・）
良馬は目を瞑り、首を横に振る。
そして、目を見開くと指示を出す。
「全砲門開け！一番主砲はヤマトの艦載機発進口に照準を合わせろ!!二番主砲はヤマトのメインノズルを狙え!!三番砲塔はヤマトの第三艦橋をロック!!ミサイル発射管には対艦ミサイルを装填!!パルスレーザー砲スタンバイ!!航空隊はいつでも発進できるようにパイロットはコックピット内で待機・・・ぼやぼやするな、急げっ!!」
良馬の命令が慌ただしく艦内各所に指示が届けられる。
第一、第二、第三、主砲が動き、砲身に仰角がかかり、ヤマトを指向する。
「主砲、発射準備完了!!」
「全ミサイル発射管、発射準備完了!!」
「パルスレーザー砲、発射準備完了!!」
「艦載機隊、いつでも発進出来ます!!」

次々と戦闘準備完了の報告が届く。
初回よりも練度は上がっているとは言え、まだ満足できるレベルには程遠いが、仕方あるまい。
「艦長、このままではヤマトと本艦はアンドロメダの針路に交差、接触または衝突の恐れがあります」
新見が三隻の軍艦の現状と予想される事態を報告する。
「ヤマトの針路は？」
「速度と共に依然変わりません」
「ならば、本艦もこのままの針路と速度を維持」
「了解」
外見は冷静な様子の良馬も顔には薄らと汗を浮かべる。
多少は修羅場をくぐり抜けてきた自分でさえ、こうなのだから、任官したてのルーキーたちはさぞや生きた心地がしないだろう。
しかし、それはヤマトやアンドロメダの新人の乗員も同じだ。
否、一番しんどいのは土方以外のアンドロメダの艦橋乗員だろう。
そして、この状況下で一番冷静なのは恐らく土方ただ一人だろう。
「ヤマト、あと二十秒でアンドロメダに最接近。　本艦もあと三十秒でアンドロメダに最接近します」
まほろば　の艦橋乗員は皆押し黙り、手に汗握っている。
新見のカウントダウンの声だけがブリッジに響き渡る。
ヤマトはアンドロメダの艦橋直前を直進。やや経ってから　まほろば　も　アンドロメダの艦底部を通過した。
ヤマトがアンドロメダの目前を通過してもアンドロメダには何の動きもない。
攻撃を仕掛ける様子もヤマトの後を追う様子もなく、ただ静かにその場に鎮座している。
「アンドロメダに動きは？」
「ありません。攻撃命令も追撃命令も出ていません」
（やれやれ、そういうことか。土方さんも人が悪い）
土方の真意を認識し、良馬はフッと小さく口元に笑みを浮かべ、表情を緩めた。

「減速、左舷スラスター起動、上げ舵二十、面舵二十五、アンドロメダの右舷につけろ。警戒態勢解除」
まほろば　は良馬の独断でヤマト追跡を打ち切り、アンドロメダの横に着ける動きを見せ、アンドロメダの艦橋では、
「　まほろば　が追跡を・・・反転してヤマトを追え!!」
副長がヤマトを追跡とすると、
「待て!!」
土方がそれに待ったをかけた。
「し、しかし!司令・・・・!」
なおも言い募る副長だが、土方は頑としてそれを突っぱねた。
「行かせてやれ・・・沖田の子供達だ・・・」
土方はパネルに映り、遠ざかっていくヤマトをジッと見つめていた。
その後、土方は司令部に『我、遭遇予定地点二達スルモヤマトヲ確認シエズ』と言う通信を送り、さらに秘匿通信でヤマトに『航海ノ安全ヲ祈ル』と言う文を送った。
良馬もヤマトに『死ヌナヨ』と一言秘匿通信を打った。
(死ぬなよ・・皆・・・沖田艦長は死ぬことは教えなかった筈だぞ)
あの冥王星海戦で沖田は守と恭介に必死に諦めず、生き残ることを説いた。
きっとイスカンダルへの航海でもそれをヤマトの乗員に説いたはずだ。
土方同様、良馬も遠ざかっていくヤマトをジッと見つめていた。
かくしてアンドロメダと　まほろば　のヤマト追跡任務はこれにて終了したわけでが、それだけで、終わらせるほど、土方は甘い人物ではなかった。
先程の小惑星帯の近くまでくると、土方は、
「　まほろば　は確か訓練航海中だったな?」
「え?は、はい」
(何か嫌な予感がする・・・)
ヤマトが出撃していったあの日、同様なにか嫌な予感がした。

それはギンガを除く、艦橋乗員が感じた。
「アンドロメダもまだテスト航海日程が残っている・・・これより、アンドロメダと　まほろば　で大規模な模擬戦闘訓練を行う」
と言い出した。
しかも、
「諸君、喜べ。私自らが教導してやるからな」
とても、とても有難いお言葉つきで・・・・。
『ギャ――――!!』
土方の人となりと訓練の厳しさを知る乗員は顔を真っ青に染め、悲鳴をあげる。
年長者の井ノ上はそんな乗員らの姿を見て苦笑する。
一方、土方の事をあまり知らないギンガたちルーキーらは何故先輩たちが此処まで悲鳴を上げるのか不思議がっていたが、その理由は直ぐに判明した。
この模擬戦とその結果について、どんな目に遭ったのか、関係者の口は堅く、詳しい事は未だ判明していない。

二十話　汚名返上

火星～木星間にて、アンドロメダ　と　まほろば　の追跡を無事に振り切ったヤマトは木星宙域にて、参謀長である西郷が独断で出撃させた無人艦隊と遭遇し同艦隊を撃破し、木星の重力を上手く利用して加速、一気に冥王星宙域を抜け、第十一番惑星の近海まで来ていた。

なお、独断で無人艦隊を出撃させ、その艦隊をヤマトによって壊滅させられた西郷に対して、罰則は下されなかった。

その理由は、

無人艦隊で人的損害が無かったとは言え、友軍の艦船を手に掛ける辛さはヤマトの乗員たちはよく知っている筈。

その結果ヤマトの乗員も心に傷を負った筈だ。

その反面、防衛軍が実験兵器とは言え、多大な予算をかけて作った艦隊を撃破され、保有的にも財政的にも痛手を受けた防衛軍。

そう言った経緯から、今回の件は痛み分けと言う事で、藤堂長官はどちらにも処罰を下す事は無かった。

その頃、ヤマトは第十一番惑星近海まで進出していた。

第十一番惑星には大規模な駐屯基地はなく、まだ小さな観測基地があるぐらいで、艦隊や戦闘衛星、無人攻撃ステーション等は配備されておらず、地表に空間騎兵隊が基地の守備に就いているだけで、ヤマトにとっては何の妨害もなく、無事に通過出来る筈だった。

しかし、そこへ突如ＳＯＳ信号がヤマトに入った。

信号を逆探すると、そのＳＯＳ信号は第十一番惑星から発信されていた。

ヤマトは針路を変更し、第十一番惑星救援に向かった。

救援に向かったヤマトに何時ぞやのカブトガニが襲い掛かって来た。

この事実により、地球がガミラス以外の他の星間国家から侵略を受けている事がはっきりした。

カブトガニは見たところ艦載機なので、艦載機が居れば当然それを

搭載、運用する空母が居る。
ヤマトは襲い掛かって来たカブトガニを撃破し、残ったカブトガニは撤退していく。
周囲を警戒しながら第十一番惑星救援に向かった。
その第十一番惑星の基地は、コズモダード・ナスカ率いる白色彗星帝国ガトランティス、太陽系侵攻前衛艦隊の猛攻を受けていた。
ナスカは当初、ヤマトを一目見て、「ひ弱そうな艦だ」と、甘く見ていた。
しかし、ナスカの誤算は最初の邂逅時と異なり、ヤマトが改良工事を受けパワーアップしていた事、
ナスカ自身がヤマトを甘く見ていた慢心、
率いていた艦隊が強行偵察用の艦隊だった為、旗艦とする空母の他は機動性を優先した護衛の巡洋艦や駆逐艦しか連れていなかった事だった。
数の上ではナスカ艦隊はヤマトに勝っていたが艦船の火力と慢心から案の定、護衛の駆逐艦、巡洋艦の大半をヤマトとコスモタイガーの攻撃により撃沈され、ナスカが座乗する中型高速空母、エウレカもヤマトの砲撃を受け、中破した。
ナスカは急ぎ、艦を反転させ、残存艦と共に第十一番惑星宙域から撤退した。
ナスカ艦隊を退けたヤマトは第十一番惑星に降下、敵の地表部隊を撃破し斎藤始を隊長とする空間騎兵隊第十一番惑星守備隊の生き残りを収容した。
本来ならば生存者は地球へ後送されるのだが、現地指揮官の斉藤始以下、生き残った空間騎兵隊員はヤマトへの乗り組みを強硬に希望した。
如何やら、かつて地球を救った艦に乗艦できるなんて、この機会を逃したらもう二度とないだろうと思い希望したようだ。
意外とミーハーな所がある。
それに彼は、ヤマトを一度見た事が有る。
それはイスカンダルへと旅立って行く、ヤマトを今回同様、自分が

守備する月面の駐屯基地がガミラスの攻撃にあい、壊滅しかけた時だった。
あの時、イスカンダルへ向かって地球を離れていくヤマトを斎藤は破壊されかけた基地の見張り台から見ていたのだ。
空間騎兵隊生存者のヤマト乗艦の件に関しては、藤堂が許可を出した為、空間騎兵隊の生存者はヤマトと共にメッセージの発信源の星へ向かう事となった。
負傷した空間騎兵隊隊員を医務室に運んだ古代はそこで、地球に残ったと思っていた雪の姿を見て驚愕した。
負傷者の治療があらかた終了した後、古代は雪に役職と名前を訊ね、乗組員名簿に載っていない筈の雪にどうしてヤマトに乗艦しているのか?と問う。
そして、艦の規律維持の為、雪に退艦を命じた。
すると、雪は古代の言う事を真に受け、突然着ていたナース服を脱ぎ出し、宇宙服に着替え始めた。
しかも古代の目の前で・・・
幾ら古代が自分の婚約者とは言え、実に大胆な女性である。
古代が慌てて雪に何をしているのか?と問うと、宇宙遊泳をして地球に帰ると言い出したので、古代はまたもや慌てて雪の乗艦を認め、旧役職のヤマト船務長兼レーダー手の役職に就かせた。
あのままでは本当に雪はヤマトを退艦し、宇宙遊泳をして地球を目指していきそうだったからである。古代もまさか、本当に雪が宇宙遊泳をするとは思ってもみなかったからだ。
雪が落ち着いた所で、古代が雪に何故この様な危険な旅に紛れ込んだと問うと、
「私もヤマトの仲間の一人よ・皆が行くなら私も一緒に・・・古代君の傍に居たかったのよ・・・」
と、涙目でそう言って思わず古代の胸に飛び込む。
古代は飛び込んできた雪を優しく抱きしめる。
幸いその場には、古代と雪以外誰も居なかったため、二人の熱愛ぶりは他人に露見する事はなかった。

雪が正式にヤマト乗組員となった後、作戦室にて今後の航路設定の会議が行われ、メッセージの発信源の星が正確な位置はまだ不明だが、牡牛座ヒアデス星団の付近にあると判明し、航路は小犬座プロキオン、双子座ポルックス、カストル、牡牛座アルデバランを通る事となった。

敵の脅威が一時的であるが太陽系から去り、空間騎兵隊の生存者を収容したヤマトは早速、第十一番惑星宙域での出来事、回収した敵の残骸のデータを地球へと送った。

ガミラスとは異なる他の星間国家からの地球侵略・・・・。

古代や真田、良馬が恐れていた事が現実のモノとなったのだ。

当初、この報告を聞いた地球連邦政府高官や防衛軍幕僚はヤマトが苦し紛れに行った偽装だの出鱈目だの喚いたが、ヤマトが送って来た敵艦との戦闘映像と残骸のデータ、現場指揮官の斎藤の証言から、決定的な証拠となり、ヤマトに着せられた反逆者の汚名はそそがれ、地球はガミラスとは異なる新たな侵略者に狙われているとの見解で一致した。

新たな侵略者の存在が明らかになったすぐ後、西郷が藤堂の下に辞表を提出した。

理由は、古代らが懸命に新たな侵略者の存在を訴えていたにも関わらず、自分はその事に耳を傾けず、それどころか彼らの行動を妨害をし、戦闘衛星、無人艦隊等、防衛軍側にも物的、金銭的に大きな被害を出した責任を取るとの事だった。

しかし、藤堂は西郷の出した辞表は受け取らず、

「敵の存在が明らかになった今、君を辞めさせる訳にはいかん。此より軍、政府とも大荒れの嵐の中に投げ込まれる。辞めるのであれば、この難局を全て乗り切ったあとにせよ」

と、言われ、西郷は現在の職務を継続する事となった。

連邦政府、そして防衛軍が敵の存在を認め、防衛体制の見直しを行っていたある日、火星基地に居る良馬の下に新たに命令が下る。

「護衛・ですか?」

「そうだ」

画面の先にいる恩師兼艦隊最高指揮官の土方に良馬は問い返した。
まほろば　は現在、火星基地にて補給を受け乗員は短い休暇をとっていた。
ヤマトの報告から第十一番惑星基地は再建に時間がかかると判断され、地球が今、新たな侵略者の魔の手が迫っている中、第十一番惑星基地の再建は時間的余裕がないため、基地の再建は暫くの間休止し、太陽系内の防衛ラインの最前線を冥王星に設定した。
冥王星はかつて、ガミラスが駐屯基地を設け、地球攻略の拠点としていたがヤマトの活躍により、ガミラスの基地は大半が破壊され更に爆発における影響で起きた大津波によって飲み込まれた。
しかし、ガミラスの脅威が太陽系から去り、地球の再建が行われた中、津波の被害を免れたガミラスの施設の調査が行われ、その中でガミラスが設置した環境改造用プラントが発見された。
それらの技術により、地球の内惑星移植は格段に進歩した。
地球を滅ぼそうとした冥王星のガミラス基地の施設が今、地球の発展を手助けしている。
ガミラスにとっては何とも皮肉な結果となっている。
そして、良馬に下された命令はその冥王星駐屯基地に支援物資を輸送し、その後、第十一番惑星へと向かう調査隊を護衛せよと言うモノだった。
何故、従来の輸送船や輸送艦を使用しないのかと言うと、敵の存在が明らかになり、例の第十五空間輸送補給護衛艦隊遭難事件も侵略者の仕業ではないかとささやかれるようになった。
その事から、高速・重武装の戦闘艦艇を用いて、資源輸送を行う事とした。
そして、冥王星での物資揚陸後、第十一番惑星へ向かうその理由は、第十一番惑星の地上と周辺の宙域における戦闘では、敵の艦船や各種兵器の残骸が多数発生した。
地球側にすれば、未知の部分が多い新たな敵の詳細を知ることができ、更には貴重な宇宙金属も手に入る・・まさに宝の山である。
「ヤマトが敵の艦艇を殆ど沈めてくれたので、短期的な脅威は解消さ

れたからな。今の内に可能な限り敵の科学力を解析しておきたいのだ」
「分かりました。それで調査隊の規模はどの程度の物なのでしょうか？」
「工作艦、明石、その他に輸送艦五隻を冥王星駐屯基地に準備させている。冥王星で支援物資を揚陸後、直ちにそれらの艦艇を率いて第十一番惑星に向かってもらいた」
「了解しました」
翌日、まほろば　は冥王星への救援物資を満載し、火星基地を出撃した。
軍艦にも関わらず、物資を満載して輸送任務を行う。
（何だか、大昔に日本海軍が行った北号作戦の様だな・・・・まぁ鼠輸送よりはマシだろう）
昔の歴史を振り返りながら、良馬はそんな事を思っていた。
良馬が思った北号作戦とは、太平洋戦争（大東亜戦争）末期、１９４５年２月１０日から２０日にかけて行われた日本軍の撤収、及び輸送作戦で、南シナ海における連合軍の通商破壊作戦の本格化によって、日本の軍需・民需輸送船の損害が増大し、南方からの資源輸送が極めて困難となっていた。
また、シンガポールに在泊していた水上戦力が日本本土と切り離され、これらの戦力が本土防衛に参加できず遊兵化する恐れがあった。
そのため、これらの高速・重武装の戦闘艦艇を用いて、資源輸送を行うこととした。
この作戦の参加艦隊は、戦艦　日向、伊勢　と、軽巡洋艦、大淀、第二水雷戦隊の駆逐艦、朝霜　初霜　霞　で構成されており、旗艦は日向と定め、
艦隊司令官には松田千秋少将が艦隊の指揮を執り、艦隊は無傷で呉に到着し、輸送作戦は完璧な成功を収めた。
この作戦はまったく損害を受けずに完全な成功を収めたことで、キスカ島撤退作戦と同様に「奇跡の作戦」などと評される。
しかしながら六隻の軍艦での輸送でありながら、物資の量としては

中型貨物船一隻分に過ぎなかった。
専用の輸送船ではない以上は仕方ないことであるが、この程度の量の物資の輸送に成功したことを狂喜せねばならないこと自体が、当時の日本の窮状を示していたと言える。
一方の鼠輸送とは、太平洋戦争中に日本海軍が行った駆逐艦による輸送作戦の、当時の軍内部での俗称で、アメリカ軍に制空権を奪われた後、ガダルカナル島への増援部隊輸送・物資補給が低速の輸送船で行えなくなったために、高速の駆逐艦を利用して行った輸送方法を、前線部隊が揶揄して名付けた。
しかし、もともと輸送任務を想定していない駆逐艦なので、輸送効率は著しく低いものだった。
(今の地球は当時の日本の様に逼迫していないが、地球もそうならないと願うしかないな)
窓から輝く星々を見ながら良馬はそう思った。
その次の日、小ワープが可能な宙域は小ワープを行い、日程を大幅に短縮して冥王星に到着した。
ガミラス戦役時では考えられない日程の早さだった。
火星から冥王星までの航海で、ギンガはミッド出身の人間で初めて、超光速空間跳躍航行（ワープ）を体験した。
管理局艦船の次元跳躍航法とは全く異なるが、この世界ではヤマト以降に建造された艦は、超光速航行が普通に行われているという事実を知っていたが、こうして身をもって体験したのはこれが初体験であった。
(うぅ～・・・ちょっと気持ち悪いかも・・・)
ワープアウト後、ギンガは軽いワープ酔いを訴えた。
ギンガの他にもワープ酔いを訴える乗員が何名かいたが、皆二回、三回と小ワープを繰り返していく内、ワープ酔いを訴える乗員も少なくなった。
冥王星に着き、搭載してきた物資を揚陸している中で良馬は基地内で懐かしい顔を見た。
「あれ？三木君!?」

「月村艦長？」
「いやぁー久しぶり、元気だった？」
基地居たのは良馬が三笠乗艦当時、三笠の副長を務めていた三木幹夫だった。
「はい、艦長もお元気そうで」
「今、どこの所属なの？」
「冥王星駐屯基地所属、宇宙巡洋艦、すくね　の艦長を務めております・・・・あっ、あの艦です」
三木が指さす先には防衛軍が正式採用している０一式宇宙巡洋艦が停泊している。
「出航準備をしているようだけど、これからパトロール任務か訓練航海？」
すくね　の周りにはドックの作業員が忙しそうに作業をしている為、すくね　がこれから出航するのはすぐに分かった。
「いえ、援軍です。ヤマトの・・・・」
「ヤマトの!?」
三木の発言に良馬は驚いた。
敵の存在が明らかになり、謎のメッセージの正体を探りに行くヤマトに、藤堂が「ヤマト一隻では心もとないだろう」と言う事でヤマトに援軍の派遣を決めたのだ。
出来るなら自分がヤマトの援軍に行きたかったと、良馬は三木の話を聞いたときにそう思った。
「月村艦長は、この後また火星へ戻るのですか？」
「いや、この後冥王星を出航し、護衛任務だ」
「護衛？」
「ああ、三木君も知っているだろうけど、先日第十一番惑星基地が謎の敵に襲撃された。その調査隊の護衛さ」
「では、私も第十一番惑星までお供しましょうか？」
「しかし、君は一刻も早くヤマトに合流しなければならないのでは？」
「第十一番惑星までは同じ航路を辿りますから、そのついでです」
「そうか、ありがとう」

まほろば、すくね、調査隊の艦船と護衛艦三隻が出撃準備を行っている中、ヤマトに敗北したコズモダート・ナスカは後衛の艦隊と合流を果たしていた。
ナスカの心は穏やかではなかった。
一辺境の戦艦に此処までの大敗北を喫したのだ。
本国にありのまま報告をすれば、降格、左遷・・・下手をしたら、敵前逃亡罪で死刑になるかもしれない。
地球側も此方の前衛艦隊を発見、撃滅した事により、自分たちの存在に気が付いただろう。
自分たちの任務は本隊が来るまでに、地球側に悟られず、徐々に地球側の戦力を消耗させ、より多くの情報を本国へ送る事と共に第十一番惑星に基地を建設する事だった。
この不名誉を挽回するには、あの小賢しい田舎戦艦（ヤマト）を撃破し、第十一番惑星に対地球用の攻略基地を建設し、本隊が来るまで徹底抗戦を続けなければならなかった。
しかし、ナスカは地球が冥王星までを防衛ラインに設定し、第十一番惑星を事実上放棄している事を知らなかった。
「ナスカ司令、例の戦艦の針路が判明いたしました」
「なに!?どこだ？」
「ハッ、現在、ヤマトはこの宙域におり、このコースですと、プロキオン方面へ進む可能性が高いと言う事です」
航海参謀がヤマトの予測針路をモニターに表示し、ナスカに説明する。
「よし、コースさえ分かれば、先回りは可能だな。それよりも例の部隊はまだ着かんのか？」
「到着は本日、２３ガトランティス時間となっております」
「あの部隊が到着次第、艦隊を二手に分ける。機動部隊は引き続き、第十一番惑星攻略へ向かえ、そして私は例の部隊を率いて、ヤマト追撃に行く」
「了解しました」
そして、２３ガトランティス時となると、何もない宙域から突如、深

藍色の艦色をした潜水艦の様な艦が次々と姿を現した。
この艦隊こそが、ナスカが待ちわびた部隊、彗星帝国特殊次元潜行艇師団、通称「潜宙艦隊」だった。

ナスカは到着した潜宙艦の中でも一際大きい潜宙戦艦グラビートを旗艦に定め、ヤマト撃滅の準備にかかった。
一方、ナスカから第十一番惑星攻略を命じられた機動部隊の方は戦力的には余りにも貧相であった。
艦隊旗艦エウレカの搭載機は既に標準以下で護衛戦力も駆逐艦三隻、巡洋艦二隻の計五隻、ここにエウレカ自体を入れてもたった六隻、これで第十一番惑星を攻略しろというのだから無理があり過ぎる。
本国に頼んで増援を要請できないものかと思いつつも、現状で援軍を頼んでも、その訳を話さなければならず、訳を話せば無能者と言われ、現有戦力で職務を全うしろと言われるのがオチだろう。
機動部隊はこの貧相な戦力で第十一番惑星を攻略しなければならなかった。
率直な言い方をすれば、戦って死ねと言う事だった。
しかし、このまま何の戦果もなしに帰る事も出来ない。
ナスカは潜宙艦隊に絶対の自信を持っている様で、「あの田舎戦艦を片付けたら、直ちにそちらへ向かう」と言っていたが、その間に敵が来ないとも限らない。
ナスカがヤマトを沈めてから第十一番惑星へと侵攻したい所だが、時間が無い為、此方（第十一番惑星攻略部隊）が先発する事となった。
潜宙艦は特殊な艦故、出撃までもう少し時間がかかるとの事だった。
第十一番惑星攻略艦隊は、無謀とも言える戦いを挑むため、再び第十一番惑星へと向かった。
ガトランティス第十一番惑星攻略艦隊が第十一番惑星へと向かって居る頃、一足早く第十一番惑星宙域に着いた　まほろば　は早速周辺警戒のための哨戒機を彼方此方に飛ばし、調査船団に調査に入るよ

うに指示する。
調査隊の護衛には　まほろば　の他に、三木が乗艦する巡洋艦　すくね　と冥王星駐屯基地が新たに護衛艦三隻を手配してくれた。
作業と周辺の警戒を続けながら、まほろば　のパネルには無残な姿を晒す第十一番惑星基地と周辺宙域を漂う敵艦の残骸の姿が映し出されている。
「敵は徹底的に基地施設を破壊していったようですね」
「そのようですね」
新見がパネルを見ながら呟き、永倉が静かに応じた。
生き残った空間騎兵隊員がヤマトの乗り組みを強硬に志願した理由も少しは理解できる。
苦楽や寝食を共にした戦友が死んだ場所。
自らも死ぬような思いをした場所。
何時また敵が襲い掛かって来ないとも分からない場所。
そして、この破壊しつくされ、武器も食糧も満足にない廃墟で地球からの救助なんて待っていられない。
彼らが、一刻も早くここから離れたい気持ちはよく分かる。
破壊しつくされた第十一番惑星基地を艦橋員が見ていると、ブリッジ後ろのドアが開いて良馬が入ってきた。
「おはよう」
「「おはようございます」」
艦橋員と挨拶を交わし、良馬は艦長席に着き、作業進行と周辺で何らかの異常がないかを訊ねる。
「作業の方は順調に進んでいますが、何分、回収するモノが多いので、もうしばらくはかかります。周囲に敵影は今のところ、感知されていません」
「ああ・・ヤマトからの報告では、ここを潰した敵艦隊は空母を旗艦とする部隊だったらしい。そしてその部隊の大半はヤマトが片付けたようだが、旗艦らしい空母と一部の艦艇は逃走したようだ。その敵が再度、第十一番惑星に再度攻撃を仕掛けてくるかも知れない。十分に周囲の警戒を・・・・」

「了解」
まほろば　をはじめとする戦闘艦が警戒を強める中、調査船団は引き続き敵の残骸回収と調査が続けられている。
その中で、地上を調査していた隊が敵の装甲車と対人用の小型浮遊砲台をほぼ完全な形で手に入れ、宇宙空間では敵艦のブラックボックスらしき物や推進機関の主要部分らしき部品が回収されたと報告が入る。
基地の損害と人員の損失に比べればそれは微々たる成果かもしれないが、それでも収穫は収穫だ。
これから戦うかもしれない敵の情報なので、少しでも多く集めたかった。
順調に作業が進んでいく中、
「外宇宙境界面にワープアウト反応!!」
レーダー観測をしていた新見の緊迫した声が艦橋に響く。
「おいでなすったか・・・敵の艦種は?」
「後方に空母らしき艦船を一隻確認、前衛に巡洋艦、駆逐艦を合わせて五隻を確認!!」
「砲雷長、主砲発射用意!艦首ミサイル発射管、対艦ミサイル装填!対空戦闘用意!照準、敵前衛艦!!落ち着いて狙え!!」
「了解」
フェリシアは火器管制システムを操作する。
「通信長、直掩の艦載機隊の半数を攻撃態勢に、残りの半数を調査船団の護衛につけろ!!地上の調査隊には基地中央にあるシュエルターがまだ使用可能だ。そこに避難するに伝えろ!!」
「了解」
ギンガは通信機器を操作し、良馬の下した命令を伝達していく。
「火器管制システムオールグリーン!!主砲、ミサイル発射準備完了しました!!」
「撃て!!」
ブリッジに攻撃命令が響いた。

それから二時間後。

工作艦、明石は敵空母（エウレカ）の曳航準備に取り掛かっていた。護衛艦も二隻も明石と同じく敵駆逐艦の曳航準備を行っていた。

彗星帝国太陽系侵攻前衛艦隊の残存艦隊と調査護衛艦隊の戦闘は、まほろば　と三隻の護衛艦、三木が艦長を務める巡洋艦、すくね　の一斉射撃で、巡洋艦一隻と駆逐艦二隻を撃沈。

空母は残り少ない艦載機を全機発艦させ、まほろば　のコスモタイガー隊とドッグファイトとなったが、元々数が少ない事とカブトガニは如何やら機種として戦闘機というよりも爆撃機だったので、コスモタイガーと比べると、動きが鈍かったため、ドックファイトは地球側で有利に進んだ。

その空母も　まほろば　の主砲で艦橋を吹き飛ばされ、艦隊司令部は全員が戦死し、艦尾の部分も艦橋同様損傷を受け、航行不能となった。

敵の駆逐艦も艦隊が壊滅状態となり、反転して撤退しようと、脇腹を晒した所を　すくね　と護衛艦群が引導を渡した。

艦橋部と艦尾を破壊しつくされ、全長の三分の一を失った駆逐艦がそこに残った。

とは言え、上手い具合に爆発し粉々にならなかった大破状態の空母と駆逐艦の件を司令部に打電すると、「事情を許さば、拿捕曳航されたし」と返信があり、工作艦　明石　と護衛艦が曳航する事となったのだ。

曳航準備が行われている中、

「それでは、月村艦長。巡洋艦　すくね　はこれより、ヤマト　と合流を果たすべく、当宙域を離脱します」

すくね　は本来の任務であるヤマト護衛の任に就くべく第十一番惑星宙域を離れようとしていた。

「ああ、突然の戦闘に巻き込んですまなかった」

「いえ、ヤマトとの合流前のいい訓練になりました」

「すくね　の航海の安全を祈ります」

良馬が三木に敬礼をして　すくね　を送り出す。
「留守の間、地球をお願いします」
三木も良馬に返礼し、第十一番惑星宙域を後にして行った。

拿捕した艦艇や回収された残骸は徹底解析をするため、地球まで曳航する事なった。
しかし、大破状態のため、ワープは出来ず、曳航状態でワープを行うのは危険だと判断され、やむなく通常航行で地球まで曳航する事となった。
間もなく拿捕した艦船の曳航作業が終わると言う頃、ギンガは思いつめた表情をしていた。
「どうした？通信長。初めての戦闘で気分が悪くなったか？」
「いえ、体調の方は大丈夫です。ただ・・・・」
「ただ？」
「これでよかったのかという気持ちになって・・・・あの船の人達にも帰る故郷や家族、恋人がいたのかもしれないと思うと・・・・」
「・・・・」
「変・・ですよね？軍人なのに・・・・」
「通信長、俺達は地球防衛軍の軍人だ。俺達が負ければ、地球にいる家族たちに侵略者達の魔の手が伸びる。故郷に居る家族や大切な人達を守るため、戦いはどうしても避けられない。それは相手も同じ事なんだ・・・・」
「・・・・」
「通信長・・・・苦しめ」
「えっ？」
「なぜ戦うのか・・・・常に戦う事に苦しみを感じる限り、人間として成長していると言う事だ」
「は、はい」
ギンガはまだまだ宇宙戦士としては新米であるが、新米故にこれから先十分成長するだろうと思う良馬だった。
その後、鹵獲艦の曳航準備も終わり、まほろば　が護衛する調査船

団は通常航行で地球を目指した。
全艦波動エンジンを搭載している艦なので、航海日程も四日から五日の日程で、各惑星には警備隊を手配しているので、敵がこれらの艦船の奪還、ないし曳航の妨害をしてくる可能性も低かったため、調査船団は地球まで通常航行する事となった。
まほろば　が船団を率いて地球を目指している間、ヤマトに合流した　すくね　はプロキオン星系まで進出した。
プロキオン星系周辺では、電離ガスが恒星からの紫外線放射で赤、赤紫、白と発光しており幻想的な風景を醸し出していた。
小犬座α星プロキオン宙域はプロシオンとも呼ばれる宙域で、地球からの距離は約１１，４光年。
プロキオン自体は一等星で、明るく輝いているのが地球から肉眼でも見ることが出来る。
色は太陽と同様で黄色く輝いている。
その理由は太陽もプロキオンも黄色主系列星・・・つまり、若い訳でも年老いているわけでもない中間年齢の星と言う事になる。
通常このタイプの恒星は太陽系と同じように多数の惑星をもっている事が多い。
しかし、プロキオン星系には三つの無人惑星があるだけだった。
恒星の割に惑星が少ない。その理由は、プロキオンの上方にある白色わい星のためだった。
白色わい星は小さく暗いが、超重力の星で、プロキオンはこの白色わい星と連星系をなしていた。
プロキオンの主な惑星は強い潮汐作用で、そのほとんどが軌道を外れ、破壊されてしまったと考えられている。
そしてそれらの惑星の残骸は主なものはプロキオンか白色わい星に吸い込まれ、粉々にされ、小さな残骸はプロキオン星系の周りの電離ガスとなっている。
そのプロキオン星系にて、ナスカが率いている潜宙艦隊はそこでヤマトとの決戦におよんだ。
初戦はいきなりの遭遇から始まった。

プロキオン星系に入ってからすぐにヤマトは深藍色の艦色をした潜水艦の様な艦が至近距離にいきなり現れ、ヤマトに対して攻撃を仕掛けてきた。
向こうが攻撃してきた為、ヤマトは応戦しこれを撃破した。
そして回収された残骸からこの遭遇した艦が第十一番惑星を攻撃した艦隊と同じ装甲をしていた事から、この潜水艦に似た艦は同一の星の物だと判断した。
ただ、タイムレーダーの記録を遡って見てもこの不明艦の反応がない。
ワープでもしてきたのかと思ったが、ワープアウト反応もない。
一体この艦はどこからきたのか分からない中、真田はこの艦が潜宙艦と言う特殊な艦である事を見抜いた。

彗星帝国太陽系侵攻前衛艦隊　特殊次元潜行艇師団　旗艦　潜宙戦艦　グラビート　艦橋
ヤマトと潜宙艦との戦闘は当然ナスカの座乗する潜宙戦艦、グラビートでも確認できた。
「警戒にあたっていた第八潜宙艦小隊がヤマトに遭遇!!近距離の交戦の後、通信が途絶えました!!」
「ぬぅ～先走りおって!!此方の存在を教えてしまった様なものではないか!!だが、まぁいい。我々全てを見つけ出す事は出来まい!!ヤマトめ!!十一番惑星での屈辱を忘れてはおらんぞ!!今度の私の主力艦隊は、貴様らにやられたあの空母部隊ではなく、この素晴らしき潜宙艦隊だ!!待っていろ、ヤマト!!今度こそは!!」
ナスカは絶対の自信でヤマトに挑んだ。
しかし、ナスカは潜宙艦が確かに最新鋭艦の艦であるが、それは別の意味で言えば、彗星帝国でもまだまだ実験段階の試作艦である事を知らなかった。
姿が見えない相手に苦戦を強いられると覚悟したヤマトであったが、ヤマト通信長の相原義一の通信士としての経験と発案から、潜宙艦が潜んでいると予測された宙域にタキオン探信（ピンガー）を打つ

ことで、潜宙艦の位置を測定する事に成功した。
しかし、居るか分からない空間にピンガーを打つ事よりも亜空間を探知できる亜空間レーダーの開発も必要だと真田はこの時そう思った。
潜宙艦は潜水艦同様、確かに奇襲攻撃には持って来いの艦であったが、やはり潜水艦同様、搭載されている武器がミサイルと魚雷、短距離砲で位置を正確に突き止められてしまえば、戦艦とまともに戦う事は難しい艦だった。
やはり潜宙艦はまだまだ改良が必要な艦である事は明白であった。
位置を特定され、波動爆雷でいぶり出され、通常空間へ出た潜宙艦はヤマト　と　すくね　の砲撃とミサイルの餌食となった。
「潜宙艦隊・・・・全滅!!・・・・・残っているのは本艦だけです!!」
「まさか・・・・そんな・・・・まさか!!一度ならず二度までも!!・・・・・て、撤退だ!!」
次々と友軍の潜宙艦が撃破される中、ナスカは一時後退を余儀なくされ、後退した。
ナスカの乗艦、グラビートのワープ反応をヤマトは探知し、それが撤退だと知り、潜宙艦の脅威が去った事を察知したヤマトはプロキオン星系からの離脱を試みた。
その針路先では、白色わい星の近くを通る航路となった。
しかし、プロキオン星系からの脱出前にエンジンや船体メンテナンスを行うため、何処かドックになりそうな惑星を探していると、白色わい星の近くに惑星がある事が判明した。
その惑星は、プロキオン星系の旧惑星の一つが連星系の重力干渉で弾きだされ、白色わい星の重力干渉で捕捉されている惑星だった。
地球上に存在していたとされるアトランティス大陸やムー大陸同様それはあくまで仮説の域であったが、ちゃんと「ソーサナー」と言う名前も付けられていた。
ソーサナーの大きさは木星と同じ大きさをしており、傍には地球の月と同じくらいの大きさの衛星が一つあった。
ヤマトはその衛星を探査し、危険が無いかを調べた。

光学測定の結果、この衛星には宇宙鉱物資源が豊富にあると言う結果が出た。
修理するにも補給をするにも好都合だった。
後は、その衛星にどんな鉱物がどれだけあるのか念入りに探査する事となり、今度は光学測定ではなく衛星に直接無人探査機を降ろし調査を行った。
しかし、探査機の調査結果では何一つとして役に立ちそうな資源は無いと言う結果が出た。
その直後、ヤマトは突如ミサイル攻撃を受けた。
これはナスカが仕掛けた罠だった。
ナスカはソーサナーの衛星に鉱物が眠っている様に細工をし、ヤマトが衛星に立ち寄るように仕向けたのだ。
油断しきっているヤマトにミサイル攻撃を加え、機関部に損傷を与えた。
その結果、ヤマトはソーサナーの重力と白色わい星の重力バランスに捕まり、満足な操艦が出来なくなった。
しかも、この特殊な重力下で波動砲は使用不能となった。
真田曰く、元々波動砲の発射時にかかる反動は重力アンカーで反動を吸収しているのだが、すべての反動を吸収出来るわけではなく、今の状態で波動砲を撃てば、吸収しきれなかった反動でソーサナーの重力井戸に落ち、押し潰されてしまうと言う。
ヤマトは満足に動けないまま、ナスカが率いる潜宙艦と戦う事となった。
そこで、ヤマトはコスモタイガー　と　すくね　に救援を要請した。
コスモタイガー　と　すくね　は重力井戸に落ちぬよう戦闘を行い、潜宙艦を確実に撃破していった。
そして、ヤマト　も真田率いる技術班が応急修理を終えると、戦闘に参加すると形勢は一気にヤマト側へと向いた。
やがて、ナスカが座乗するグラビートも損傷を受け始めた。

潜宙戦艦　グラビート　艦橋

「ナスカ司令!!もう艦が保ちません!!」

グラビートの艦内では非常灯が点灯し、非常警戒音が鳴り響いている。

「バカな・・・こんなことが・・・動けぬ相手に負けるなど・・・」

ナスカは目の前の現実が信じられず、混乱しきっていた。

その間も艦の損傷は広がって行く。

「ナスカ司令!!」

部下の大声で我に返ったナスカは、

「わ、ワープだ!!て、撤退しろっ・・・!!」

と、またもワープによる撤退を指示した。

しかし、ナスカは失念していた。

此処が、第十一番惑星やプロキオン星系とは違う環境である事を・・・・。

強制的に・・・それも突発にワープ装置を起動させたグラビートに異常振動が起こり始めた。

「な、なんだ!?この振動は!?」

「重力井戸のせいで、ワープシステムがうまく作動しません!!」

グラビートの航海長が現状を報告する。

さらに航海長は、このままの状態が続くとどの様な事が起こる事も補足した。

「・・・このままでは・・・!!」

その間もグラビートには異常振動が続き、それは段々と大きくなった。

「このままでは、なんだというのだ!?」

「わ、我々の方がソーサナーの重力井戸に・・・」

ナスカたちはヤマトを仕留める筈だった罠に自分達が落ち込んでしまったのだ。

更に戦闘による艦の損傷も影響していた。

「な、なにぃ・・・!?な、なんとかしろ!!」

怯えながらこの期に及んで等々人任せにするナスカ。
その怯える姿はとても艦隊を率いる一司令官には見えなかった。
どうにかこの事態を乗り切り、助かる手は無いかと方法を探すグラビートの乗員たちであったが、もう既に手遅れだった。
「ダメです!!もう・・・間に合いません!!」
航海長が発したその言葉は事実上、自分たちの死を意味していた。
「あ・・・ああ・・・こ、こんな・・・バカな・・・た、大帝・・・!!」
グラビートは装甲板を剥がし、船体の彼方此方に火花や爆発を起こしながらソーサナーへ吸い込まれていき、やがて爆散した。
ナスカ率いる潜宙艦隊を倒し、ヤマト　と　すくね　はプロキオン宙域を出た後、次の目的地、双子座ポルックス宙域へ向け大ワープへと入っていった。
メッセージの発信源の星を目指して・・・・。
ナスカの潜宙艦隊が消え、ヤマト　と　すくね　がワープで去ったプロキオン宙域・・・
太陽系を出た途端、とてつもない技術力を持つ敵の襲撃を受け、前途に苦難の影を垣間見たヤマト　と　すくね　。
だが、この宙域に輝く星たちですら、彼らの未来を知らない。
騒がしい声がワープ機関の作り出すひずみの中へ消えた後、
小犬座の黄色い恒星プロキオン・・・・
美しい電離ガスの海・・・・
全てが何事も無かったかのように再び静寂の中へと還っていった・・・・

二十一話　遭遇

ヤマトが太陽系から出て謎のメッセージの送り主がいるとされる惑星を目指しているその頃、

第５８探査部隊遭難事件が起こった後も管理局は探査自体を止めたわけではなく、マゼラン星雲での探査を止めただけに留まっており、その他の星雲や宙域には管理局の次元航行艦が惑星探査を行っており、管理世界になりうる世界やロストギアの回収、指名手配となっている次元犯罪者の捜索を行っていた。

そして此処にも時空管理局の次元航行艦が星の海を航行していた。

牡牛座ヒアデス星団宙域

時空管理局ＸＶ級次元航行艦　ノア　ブリッジ

ノアの艦全体に衝撃が走り、ブリッジの照明が明滅する。

その衝撃で座席から放り出される局員もいた。

「右舷前部被弾！」

「障壁、効果ありません！全弾貫通！」

オペレーターの悲痛な報告に、まだ若いこの艦の青年艦長は歯ぎしりする。

ノアの後方からは艦底部がヒラメかカレイのような形をした高機動の小型艦（ククルカン級襲撃宇宙駆逐艦）とエイの様な艦底部、艦首に二本のアンテナ、またはミサイルらしき突起物を備えた中型の艦（ラスコー級突撃宇宙巡洋艦）が追撃してくる。

相手の武器は質量兵器のガトリングガンの様にエネルギー波を高速で連射してくる。

この速射技術は管理局では当然存在しない技術で、向けられている此方側としてはまさに脅威である。

管理局はこれまでの歴史の中、ここまで強力な質量兵器を搭載した宇宙艦との遭遇経験も戦闘経験もない。

それにより、ノアが今できるのは逃げの一手しかなかった。

「敵艦、左右から高速で接近!!本艦を包囲する模様!!」

「その後方に大型艦三隻を探知!!追尾してきます!!」
　小型艦と中型艦の後方には戦艦らしき大型の艦の艦影も確認できた。
（このままではダメだ。こちらは完全に嘲弄されている。一矢すら報えないのは無念だが、これ以上留まっては撃沈される・・・むざむざやられるよりは・・・）
　意を決したノアの艦長は此処で最後の賭けに出た。
「緊急次元転移！座標はランダムでかまわん!!」
「艦長！それは危険過ぎます！」
　オペレーターが驚いた声を上げるが、艦長は畳みかけるように命じた。
「このまま此処に居ては撃沈されるし、座標を選り好みして入力している間にも撃沈されるぞ！死にたくなければ緊急次元転移だ!!急げ！」
「は、はい！」
　ノアを包囲し、とどめの一斉射撃を放ったのは今まさに地球を侵略せんとする白色彗星帝国ガトランティスの艦船だった。
「目標、消滅！・・・・着弾直前に空間転移したものと思われます!!」
「よし、隊列を戻せ・・・逃げられはしたが、あの損傷ではワープしても助かるまい」
「了解」
　管理局の次元航行艦を瀕死の状態で追いやったガトランティス艦艇は去る時も隊列を乱す事もなく、去って行った。
（あの艦、時空管理局とか言っていたな。次元世界の管理云々を言っていたが、あんな貧弱な艦で宇宙にのこのこ出て、管理者などとは笑わせる。この宇宙は我々ガトランティスと大帝陛下によって秩序が齎されるのだ）
　ノアを攻撃していた彗星帝国の艦の艦長は管理局の存在を否定し、この宇宙を統一するのは管理局では無く自らが所属する星間国家ガトランティスだと信じてやまなかった。
　第十一番惑星での戦闘で勝利し、敵艦を鹵獲した　まほろば　の調

査船団は何事もなく火星宙域まで戻って来た。
艦橋当直の永倉は自動操舵に切り替えて、宇宙双眼鏡やレーダーにて周囲を警戒、監視していた。
すると突然、アラームが鳴りコスモレーダーに警告灯が点滅する。
「ん？・空間歪曲反応!!・しかも至近!!・やべぇ!!」
永倉は急いで自動操縦モードを解除し、手動操舵に切り替えた。
「曲がれ～!!」
必死に舵を右にきって、衝突回避に努める永倉。
その功あって、まほろば　は突然ワープしてきた不明船との衝突はギリギリ避けられた。
「艦橋!!・どうした?!」
突然の右舷回避に良馬が艦長室から艦橋に連絡を入れてきた。
「艦長、突然不明船が至近距離にワープしてきまして、右舷に緊急転舵しました」
「わかった、すぐ行く!・総員起こし!・警戒体制!」
艦内に緊急配置警報が鳴り渡り、休んでいた乗組員たちがわらわらと自分たちの配置場所に走る。
ほどなく艦橋に艦長以下の艦橋員、全員が揃い各部署の配置完了の連絡が届いた。
まほろば　を含め、船団は全艦停止した。
「本艦、左舷至近にワープアウト確認。大型宇宙船のようです。映像出します!」
映像を見た全員は少なからず驚いた。
あちこちから煙を噴き上げていることもさりながら、船体の形状がガミラスとも第十一番惑星で戦った艦船（白色彗星帝国軍）とも全く違い、何とも複雑な形状をしていたからだ。
「あ、あれはっ!?」
艦橋員が驚く中、ギンガだけは別の意味で驚いていた。
そんなギンガの様子に気が付き、良馬がそっとギンガの傍に寄り添った。
「どうした?・通信長。あの船に見覚えがあるのか?」

「は、はい・・・・」
　ギンガにとって今、パネルに映っている船は約一年半ぶりに見慣れている船であった。
「あの船は・・・・」
「あの船は？」
「あの船は・・・・時空管理局の次元航行艦です・・・・」
　ギンガが驚愕で少し震える声でパネルに映る不明船の正体を告げた。
「あの船が・・・・」
　ギンガがこの世界に来たのはミッドでもメジャーな輸送船だったのでこれが、ギンガが昔所属していた組織、時空管理局が保有する次元航行艦との初邂逅だった。
「完全に行き足が止まっているな・・・・救難信号は出ているか？」
「自動と思われますが信号が出ています。只今、解析を行っています」
　ギンガは驚愕から再起動し、管理局の次元航行艦から発せられている信号を解析した。
「判明しました!!これは、ＳＯＳ・・・・救難信号です!!」
「っ!?」
「ＳＯＳ？」
　ブリッジにどよめきが走るが、それが広がる前に良馬が指示を下す。
「とにかくあの船の救助が先だ!!坂井大尉!!」
「はい」
「航空隊は直ちに救命艇の発進準備!!医務班は緊急オペの準備!!不測事態に備えて総員艦内戦闘態勢!!」
　所属がどこであれ、遭難者は可能な限り助けるのが、海であれ宇宙であれ、船乗りの鉄則だ。
　それから程なくして、
「こちら坂井、救命艇発進準備完了!!」
　直ぐに救命艇の準備が出来た。
「よし、副長!!」

「は、はい」
「暫く艦の指揮を頼む」
「えっ？艦長は？」
「救助作業を指揮する」
「そんなっ!!艦長自ら!?もし、艦長の身に何かあったらどうするおつもりですか!?」
「だからこそ、副長の君がいるのだろう」
「わ、分かりました」
　渋々ながら了承した様子の新見。
「通信長」
「はい」
「君も一緒に来てくれ」
「えっ？私も・・・ですか？」
「ああ、通信員でもあるし、君は士官学校で応急医療科も専攻していたからな。彼方には負傷者がいるかもしれない。応急医療を学んだ君の知識を借りたい」
「分かりました」
　指示を終えると良馬とギンガは足早に艦橋を出た。
　救命艇が発進準備をしている格納庫へ向かっている中、良馬はギンガに訊ねた。
「ギンガ、あれは間違いなく、時空管理局の船で間違いないんだな？」
「はい、間違いありません」
「それじゃあ、艦内の配置とかも大丈夫か？」
「私は元々地上勤務だったので、そこまでは詳しくありませんけど、ある程度の艦内配置で良ければ何とか・・・」
　良馬がギンガを連れてきた訳には通信員、負傷者の応急処置の他に艦内配置に詳しいかもしれないと言う理由があった。
　地球防衛軍やガミラス軍、そして第十一番惑星で撃破した艦艇とも全く異なる造りの宇宙船に皆は戸惑っていたが、ギンガのさり気無い案内でブリッジらしい箇所を特定した。
　そこで近くの破口から接舷し船内に進入することにした。

「いいか、必ず複数で行動！無理はするなよ！何かあったら、すぐに連絡をしろ!!」
『了解！』
救命艇に乗った者たちはそれぞれ複数のグループに分かれ、艦内の捜索に当たった。

まほろば　艦橋
「艦内捜索が始まったようッスね・・・」
パネルで様子を窺っていた永倉が呟く。
「それにしても実に変わった形の艦ですね。一体どこから来たんだろう？」
フェリシアが次元航行艦を見て、感想を呟く。
たしかに、防衛軍の艦船は皆どことなく水上艦艇かロケットを意識して作られているため、管理局の次元航行艦の艦影が独創的な形と言うのも頷ける。
「あの船も防衛軍やガミラスと同じタキオン機関で動いているのでしょうか？」
新見が井上に訊ねる。
ワープしてきたと言う事は、相手の船も防衛軍やガミラスと同じ機関を搭載しているものだと思い、機関の専門家である井上に意見を聞いたのだ。
「それが、あの船からはタキオン反応が無いんじゃ・・・」
「それってタキオン機関：波動エンジンじゃ無いってことですか？」
「うむ、今の段階ではそれぐらいしかわからん」
タキオン機関でなく、ワープ、あるいは空間転移が可能な艦・・・
しかもそれはガミラスとも第十一番惑星で撃破した艦とも違う艦・・・
地球が今、謎の侵略者に狙われている中、新たな侵略者が出てきたのではないかと、艦橋員の中に不安が過ぎった。
「ともかくあの船の乗員から事情を聞けば、彼らが敵なのか分かるじゃろうて・・・今は艦長の報告を待つことじゃよ」

周りの空気を読み取ったのか、年長者の井上が皆を落ち着かせた。
一方、次元航行艦の救助と探査に入った良馬達は、艦内の様子を見て愕然した。
通路の彼方此方に血塗れで死んでいる乗員（局員）の姿。
天井や通路を構成している資材で押し潰されて死んでいる乗員（局員）の姿。
その中には手足や首が千切れている死体、内臓が飛び出ている死体、原型を留めていない死体さえある。
そこはまさしく地獄のような光景だった。
余りの悲惨な光景にギンガを始め、新人の乗組員たちは顔を歪めたり、吐き気を堪える者も居た。
（ガミラスと戦って居た時と同じだ・・・）
良馬にとってこの光景は自分がほんの少し前、体験した光景と似ていた。
「ともかく、生存者を探すんだ!!」
良馬が愕然としている皆に声をかける皆は艦内の捜索の為、艦内のあちこちに散った。
良馬はギンガの案内の下、ブリッジを目指した。
しかし、動力が止まってり、扉は開かず、しかも爆発の衝撃で変形しておりドアは開かない。
そこで、近くに落ちていた鉄パイプの様な金属棒で無理矢理こじ開けブリッジの中に入ると、そこもこれまで見てきた艦内の様子同様、酷いモノだった。
「大丈夫ですか?」
ギンガが、艦橋内で倒れている乗員に声をかけるが、残念な事に皆はこと切れていた。
そんな中、
「うっ・・・」
ブリッジクルーの中でも少し服装が違う、青年がうめき声をあげた。
恐らく服装からして、この青年が船長ないし艦長なのだろう。

「大丈夫ですか!?助けに来ましたよ!!」
ギンガが慌てて彼に駆け寄り、手にしていた救急キットを開ける。
「うっ・・お、俺は・・・も、もう・・・手遅れだ・・・」
青年は苦しげな声をあげ、自分は助からないとギンガに告げる。
「いえ、そんなことは・・・」
ギンガは何とかしてでもこの青年を助けようとするが、この青年が言う様にあまりにも出血が激しすぎる。発見が遅すぎたのだ。
しかし、ギンガは諦める事もなく、救急キットから止血に使う道具を使い、血を止めようとする。
「こ、これを・・・ミッドの・・・か、彼女に・・・」
青年はジャケットのポケットからペンダントを取り出し、ギンガに託すように渡す。
彼はギンガが防衛軍の軍人ではなく、管理局の味方だと思っているのだろう。
ギンガがペンダントを受け取ると、青年の手は力なく床に落ちる。
そして彼の瞼がゆっくりと閉じる。
「っ!?」
ギンガは即座に青年に対して心臓マッサージを行い、蘇生を試みる。
「しっかり!!しっかりして下さい!!」
ギンガは必死に声をかけ、グッ、グッ、グッ、と心臓マッサージを行うがそれは全くの無駄骨だと言う事は心臓マッサージを行っているギンガ本人が一番分かっている。
しかし、分かっているからこそ、この事実を・・・
目の前で人が死んだと言う事実を認めたくなかったのだろう。
「ギンガ・・・」
「っ!?」
良馬がギンガの肩に手を置き、軽く目を閉じて首を横に振る。
「・・・」
良馬の行動でギンガも冷静になりようやく現実を見た。
ギンガはがっくりと項垂れた。

「ギンガ・・・その・・・・」
　良馬はギンガそっと声をかける。
「大丈夫です・・・私は・・・大丈夫です・・から・・・・」
　ギンガは青年から託されたペンダントをギュッと握りながら震える声で言う。
「・・・・・」
　大丈夫とは言うが、とてもそんな様子に見えないギンガ。
　良馬は目の前で人が死なれて意気消沈しているギンガを支えて、彼女を救命艇へと戻した。
　その後の調査で、この船のクルーたちは残念ながら生存者は一人も居らず全員死亡していた。
　ギンガは　まほろば　に戻っても気分がすぐれないようなので、医務室につれていきリニスに任せた。
　ギンガをリニスに任せた後、良馬は、この不明船の事を地球防衛軍司令部に報告した。
「これが例の艦か・・・・？」
　藤堂と土方が見ているパネルには防衛軍、ガミラス、そして第十一番惑星を攻撃してきた艦とも違う形をした艦が映っている。
　各所から煙を噴いているが、パネルに映っている様子から爆発の恐れは薄いようだ。
　まほろば　からの報告で、搭載されている推進機関も我々防衛軍やガミラスとも異なる。
　第十一番惑星を攻撃した艦船と共にこの船も調査する価値は十分にある。
　ガミラス戦役時、冥王星海戦からの帰還途中、火星付近で突然ワープしてきた船と同じ機関を使用している可能性があり、あの時の船は機関の損傷が激しく調査不能だったため、今回は調査できるかもしれない。
「それで、生存者は？」
「月村の報告によれば乗員は全員死亡していました」
「そうか・・・それで、人種は？」

「送られた報告では、肌の色はガミラス人や第十一番惑星を攻撃してきた宇宙人とは異なり、我々地球人類と同じ肌の色をしていたとのことです」
「・・・・」
「それと、ネームプレートの他に乗員の何名かがカード状の金属板あるいは水晶らしき物を身につけていたようです。恐らく彼らの星の民族品かお守りのような物なのでしょう」
「そのネームプレートは読めそうなのか？」
「幸い彼らの言葉は地球の英語等に極めて似ているようです。名前もそうですが、所属機関や地名らしい表記も確認できました」
「そうか・・・・生存者がいなかったのが実に残念だった・・・・」
「はい。彼らの遺体は丁重に弔うよう手配をしておきます」
「うむ」
まほろば　はこの不明艦の乗組員の遺体を収容し、船体を曳航しながら地球への帰還航路についた。
地球への帰路の途中、良馬はギンガの居る医務室を訪れた。
「リニス」
「あっ、艦長。どうしました？」
「ギンガの様子はどうだい？」
「まだ、鎮静剤が効いていて眠っています」
リニスにギンガの状態を聞き、医務室のベッドに目をやるとそこには静かに寝息を立てているギンガの姿があった。
殺し殺される戦闘と母（クイント）の時とは違い、目の前で命の灯が消えた事を目の当たりにして、精神的に疲れたのだろう。
でも、ギンガはこの出来事を克服してくれるだろうと良馬は思った。
そうでなければ、自ら防衛軍に志願する筈はないのだから・・・・
特に魘される様子もないので、大丈夫だろうと判断した良馬は医務室の椅子に腰かけ、リニスに訊ねた。
「リニス」
「はい」

「リニスの見解から例の時空管理局が地球に対し、何らかの武力行為に及んだとして、地球は勝てるだろうか？」
未だに詳しい情報が入らない時空管理局に対して少し警戒気味の良馬。
今、地球は謎の侵略者に狙われている状況で更に時空管理局までもが地球に対し武力行為を行って来れば、地球は二正面作戦を取らなければならない。
しかし、復興したとは言え、防衛軍に二正面作戦を取れるほどの余裕はない。
波動エンジンでなく、ワープ機関を備えている艦船を有する時空管理局。
果たしてどのような相手なのか？
ギンガと同じ世界出身者でもあるリニスに例の時空管理局の次元航行艦のデータを見せ、意見を聞いてみた。
「そうですね・・・私がミッドに居たのはもう十年以上前ですから・・・その間に管理局の造艦技術も上がっているとおもいますが、このデータを見る限りでは、今の防衛軍の艦船技術の方が上回っています」
リニスの意見から予想される現在の管理局の次元航行艦と防衛軍の艦船スペックでは防衛軍の方が上だと言うが、現段階ではそれはあくまで予想に過ぎず、詳しい結果は地球に戻り、詳しい調査結果を待つしかなかった。
「出来れば、敵対はしたくないものだな。その時空管理局とは・・・」
良馬はベッドに眠るギンガを見ながらポツリと呟いた。
もし、管理局と戦うと言う事になれば、ギンガの故郷の人達と戦うと言う事であり、その中にはもしかしたら、ミッドにいるギンガの家族や知り合いと殺し合いをするかもしれないからだ。
「そうですね・・・」
リニスはそっと目を閉じ、良馬の言葉に同意した。
「もし・・・もし、管理局と防衛軍が戦う事になれば、リニスは戦えるか？」
「・・・」

良馬はあくまで可能性に過ぎないが、もし管理局が地球に対し武力行為を行ってくれれば、当然地球側としては之を迎え討たなければならない。
その時、ミッドで居住経験のあるリニスに戦えるかどうかを訊ねる。
リニスの中には不安要素があった。
それは他ならぬフェイトの事だった。
今、どこでどんな生活をしているのか分からないが、優秀な魔導師故、管理局と何ら関わりを持っていてもおかしくない。
いや、もしかしたらフェイトは管理局員になっているかもしれない。
もし、管理局と関わりを持っていたり、局員になっていれば、その先兵として戦場に出てくるかもしれない。
自分はかつての弟子であり、娘の様に育てたフェイトを殺すかもしれない。
否、敵対し、自分の前に敵と現れたのであれば、自分は防衛軍軍人として完膚なきまでに叩き潰さなければならない。
故にリニスの返答は・・・
「戦います。今の私は、防衛軍の軍人であり、貴方の使い魔なのですから」
と、迷いなく答えた。

まほろば　が地球への帰還航路を辿って居る頃、ヤマト　と　すくね　はプロキオン星系を抜け、次なる星系、双子座ポルックス宙域に来ていた。
ポルックスは黄みの橙色をした恒星で赤色巨星への転換期にある星で、絶対等級は1．0のふたご座の弟の頭にあたる星である。
太陽よりも赤く、巨大な恒星でポルックスの後方に位置するのがカストル。
こちらはポルックスよりも明るく若い星である。
この二つの星は地球から観測すると、並んで見える故、双子座と言

われている。
航路を検討した後、ヤマト　と　すくね　は双子座宙域へと突入した。
突入した宙域にはプロキオンと違い、惑星反応が全く無かった。
その事実に真田は少し腑に落ちなかった。
ポルックスは巨星へと成長過程の星であるが、重力バランスはそこまで不安定な星ではないためであった。
それ故、太陽の様に惑星を多数有していてもおかしくは無かったからである。
惑星の代わりにリング状のアステロイドがポルックスの周りを漂っていた。
それはかつて惑星を構成していた物の様であった。
ポルックス宙域を進んでいくと、ヤマトのレーダーがポルックスの近くに小惑星を感知した。
パネルに投影すると、その小惑星の周りには太陽電池の様なパネルが無数に取り囲んでいたため、それが人工物である事は直ぐに分かった。
ヤマト　と　すくね　が警戒しながら接近すると、突如、その小惑星から高エネルギー反応があり、それは　ヤマト　と　すくね　へと撃ち込まれた。
ヤマト　と　すくね　は間一髪でそのエネルギー波を回避した。
その威力は波動砲並で、射程距離は波動砲以上の射程距離があった。
この攻撃によりポルックスの近くにある小惑星が敵の要塞である事は明白となった。
調べた結果、この要塞には生命反応がなく、全てコンピューター制御の自動要塞である事、
先程、ヤマト　と　すくね　に撃ち込まれたあのビームは波動砲のようなタキオン収束砲でなく、光エネルギーを集めた光子砲だと言う事が判明した。
そして、ポルックスの周りに惑星が無い理由は全てあの要塞に破壊

されてしまった事が原因だと推測された。
ただ、光エネルギーを集める為、エネルギー源であるポルックス自体は攻撃対象外と設定されている様だ。
その後、真田が詳しくあの要塞を調べた結果、
あの要塞は全体を高密度の粒子バリアで覆っており、そのバリアを通り抜けられるのは光のみ・・・それ故、主兵装である光子砲はバリアを停止させることなく、自分を守りながら攻撃をする事が出来る。
それを考えると、非常に効率の良い兵器であると言える。
要塞を守るバリアも全く隙が無く、結論としてあの要塞はヤマトの搭載している武器では破壊不能と言う結果が出た。
しかし、どんなに強力な要塞と言えど、人が作った建造物故、必ずどこかに隙がある。
そしてその隙は、ある程度の大きさの物でなければ、要塞の砲台は反応せず、小さすぎるものには砲撃を行わず、超長距離と高エネルギーのため、エネルギーチャージに多少の時間がかかると言う事だ。
コスモタイガーならば、要塞砲に反応されないだろうが、コスモタイガーの装備では要塞のバリアを突破する事も要塞自体を破壊する事も不可能。
やはり、この要塞の相手を無理にする事なく通りすぎる事にした。
そこで、ヤマトはコスモタイガーの予備エンジンを搭載した特製デコイ魚雷を製作、ソレを使用し、この宙域を抜ける策をたてた。
デコイ魚雷は、ヤマト　すくね　の位置から反対方向へと飛び、ある程度の時間と距離になると、弾頭部からバルンダミーを膨らませて要塞の目をデコイへと向けてくれる。
デコイが要塞の攻撃を引き付けてくれている間、ヤマト　と　すくね　は要塞の横を堂々と通り抜け、ポルックスの宙域の離脱を図った。
要塞砲が複数では無く、一門しか装備されていなかった事も今回の要塞突破で幸いした事であった。
ポルックス宙域を抜け、次に双子の座のもう一つの星、カストル宙域へ進んだ　ヤマトと　すくね　の背後から何と例の要塞が追いか

けてきた。
その際、本来攻撃対象の筈の大きさであるアステロイドを攻撃せず、ヤマト　と　すくね　を追いかけてきた。
その理由としてカストルに近づくまで、恒星からのエネルギー供給が出来なくなる為、あの要塞は今、移動のみにエネルギーを使用していると真田はそう見解した。
だが、無駄撃ちをしてこないと言うだけで、航行と攻撃に必要なエネルギーは十分貯えられているため、油断は出来なかった。
急ぎ、双子座宙域を離脱しようとする　ヤマト　と　すくね　の前に今度はカストル方向からもう一個の同型要塞が現れた。
カストルにも同型の要塞が配備されていた。
敵はヤマト　と　すくね　を前後の要塞で挟み撃ちにする作戦に出たのだ。
破壊不能な要塞が二つも出現し、皆が絶望と苦戦を覚悟したが、雪が今、航行している双子座宙域と二つの同じ姿、同じ能力を有する要塞を見て、相打ちを出来ないかと提案し、真田が検討した結果、それは十分可能だと言う事が判明した。
問題は要塞の射撃タイミングと要塞同士を互いの射線上に移動させる事が重要となった。
すると、あの要塞は攻撃を行う前、ごく短い時間だが微弱なレーザー光で目標の位置、大きさを調べて攻撃を行っていた。
ヤマト　と　すくね　は二つの要塞の間を行ったり来たりして、要塞の攻撃を回避しながら、ポルックスに配備されていた要塞がカストルの要塞に近づくのを待った。
やがて、ヤマト　と　すくね　よりも大きな要塞は互いに　ヤマトや　すくね　よりも先に破壊すべき対象と認識し、お互いに光子砲を撃ち合い、要塞は消滅した。
コンピューター制御の要塞であったが、味方識別機能が搭載されていなかった事もこの要塞の欠点の一つだったのかもしれない。
強力な要塞の包囲網を片付けた　ヤマト　と　すくね　は無事に双子座宙域を抜ける事が出来た。

双子座宙域を出て次の大ワープまでの予定宙域までアステロイドが広がっており、敵の待ち伏せが予想されるので、古代は加藤と山本にコスモタイガーを使っての哨戒を命じた。
その哨戒には、予備機として搭載したコスモタイガーの複座式機体のテスト飛行も兼ねていた。
哨戒では、山本が複座式の機体に乗り、もう一人の搭乗員、新米（あらこめ）俵太が機体に乗る前に、空間騎兵隊の斎藤がこっそり機体に乗り、山本はてっきり新米が乗ったのだと勘違いし、発進した。
しかし、狭い機体の中、斎藤の事は直ぐにバレた。
今からヤマトに戻って斎藤を降ろして、新米を乗せてまた出撃では、時間的ロスが大きいため、やむを得ず、このまま哨戒を続ける事となった。
だが、山本本人にとっては今回の哨戒は複座式の試乗りが出来ると言うワクワクした気分から一気にテンションが下がった。
元々山本は空間騎兵に対し、あまりいい印象を抱いていないためだった。
脳筋で野蛮な山猿・・・そしてその部隊の斎藤はそう言った印象の最たる者だった。
そういう野蛮な山猿とこれ以上一緒の機体に乗っているだけでも山本にとっては苦痛だった。
幸い、この宙域には例の要塞も潜宙艦も敵艦隊も潜んでいる様子はなく、前方にある小惑星を迂回してヤマトに帰還しようとした時、山本の乗った機体に不具合が生じ、山本は目の前にある小惑星に緊急着陸を行った。
すると、その小惑星内部に人工物らしき入り口があった。
この事をヤマトに連絡を入れ様としたら、通信機が使用不能。
そこで、三人はこの施設を調べてみる事にした。
この要塞の内部は大規模な工場の様で、敵兵の姿はなく、代わりに警備ロボのようなロボットが内部をうようよしていた。
そして、この要塞はゆっくりとヤマトへと移動していた。
要塞の外見は武装されていないように見えるが、いきなり加速して

ヤマトに体当たりなどされれば、ひとたまりもない。
三人は要塞の動力部を破壊し、この要塞を止める事にした。
機械を動かしている動力パイプを辿りながら、警備ロボを撃破しつつ、動力炉を目指していた三人。
ようやく目当ての動力炉につくと、そこには今まで相手にしてきた警備ロボとは違う、戦闘用に改良された大型の作業ロボが襲い掛かって来た。
三人は協力して作業ロボを倒した。
「二人とも大丈夫か？」
作業ロボが爆発し、完全に脅威が無くなったのを確認した後、斎藤が加藤と山本に声をかける。
「なんとか・・・・」
「こっちもだ・・・・」
「へへっ、見直したぜ。中々骨があるじゃねぇか」
山本が空間騎兵を野蛮な山猿連中と思い込んでいる様に斎藤も戦闘機乗りは安全な装甲に守られながら戦えるヤワな連中だと思っていた。
しかし、加藤と山本は空間騎兵とは比較にならぬが、それでも宇宙戦士として立派にたたかった。
「そっちこそな。その図体は伊達じゃないって事か」
加藤がニッ笑みを浮かべ、斎藤に言う。
「へへっ・・・・まっ、そういうこったな。さて早い所、此奴を爆破しようぜ!!」
三人は時限爆弾を動力炉に仕掛け、コスモタイガーで要塞を離脱した。
やがて、爆弾が炸裂すると、要塞は内部で誘爆を起こし、粉々に砕けた。
帰還した三人の報告から、あの要塞工場は双子座に配備されていた例の光子砲要塞の建造するための工場だったと推察された。
そうなると、この宙域は第十一番惑星と違い、敵の前線基地というよりも新兵器の実験場のような役割をしていたと思われた。

しかし、そうすると、ポルックスとカストルは敵の実験の為に、自らの子供である惑星を破壊された事になる。
それらの惑星には何らかの生命体が生息していたのかもしれない。
いやもしかしたら、人類もいたのかもしれない。
だが、それを確かめる術はもはや存在しない・・・・
あの星系の生命の芽は完全に摘み取られてしまい、今後双子座の星系に生命が息吹くことは永久に無くなってしまった。
これは決して許される行為では無かった。
なお、報告を終えた斎藤と山本はかすり傷程度のケガを負っており、加藤から医務室で診てもらえと、言われ医務室で艦医の佐渡に処置をしてもらった。
その際、二人は互いを認め合い、男の友情が芽生えたと思ったら、また些細な事から口論と取っ組み合いに発展した。
まぁ、喧嘩する程仲が良いとも言う。
医務室で取っ組み合いをしている二人の姿を佐渡もアナライザーも呆れながら見ていた。

強固な無人要塞を見事な機転と戦術で撃破した　ヤマト　と　すくね。
だが、敵はその要塞を作るために、他の惑星を利用し、そこに息づく生命体さえも、滅ぼしてしまった。
その事を知り、さらなる闘志を静かに燃やすヤマトの乗組員たち。
そしてその戦いの最中、いがみ合っていた者同士の間に友情の様な何かが芽生えた。
しかし、そんな感情に浸っている暇はない。
ヤマトは一刻も早く前に進まなければ、ならないのだ・・・・・。
メッセージの謎を解明する為に・・・・・。

二十二話　すくね　奮戦

双子座宙域、そしてその後ろに広がるアステロイド帯を抜けて、次なる目的地である牡牛座アルデバラン宙域に向けて大ワープを行った　ヤマト　と　すくね。
しかし、大ワープ中に異常な振動がヤマトを襲った。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
「な、なんだ!?」
突然の振動に古代が声をあげる。
「イレギュラー発生!!航行用安全装置が作動しました!!」
太田がこの異常振動の原因を言う。
「このままじゃまずい!!強制ワープアウトするぞ!!」
島はこのままワープ状態を続けるのは危険と判断し、強制的であるがワープアウトを行おうとする。
そんな島に、
「大丈夫なんですか!?大ワープ航行中の強制ワープアウトなんて、初めてですよ!?」
南部が島に初めての試みに平気なのか?と、訊ねる。
「仕方ないだろう!!みんな、何かにつかまっていろ!!太田!!座標を送るから、減速ルートの確保を頼む!!」
「りょ、了解!!」
その後、一番大きな振動を最後にヤマトは強制ワープアウトを行った。
「つ、通常空間を確認・・・緊急ワープアウト・・・成功」
ヤマトは何とか無事にワープアウトに成功した。
すくね　の方もヤマト同様、強制的にワープアウトを行い、何とか無事にワープアウトを成功させた。
古代が三木に通信を入れると、三木は特に問題ないと伝えてきたので、古代は三木のその言葉を信じて通信をきった。
しかし・・・

ヤマトとの通信をきった　すくね　の艦橋では、乗員が焦りの表情をして機器を操作していた。

宇宙巡洋艦　すくね　艦橋

「どうだ?・・・・様子は?」

「ダメです・・・エンジンに大規模な破損が起きており、何度試しても出力のコントロールがおぼつきません・・・現状での航行はどうにか可能ですが、もうこれ以上の大ワープは無理ですね・・・修理も・・・おそらく不可能です」

すくね　は本来ならばドック入りをしなければならない程の損傷を機関に起こしていた。

戦艦よりも強度が劣る巡洋艦の方では、その影響がすぐに形となって現れたのだ。

「そうか・・・しかし、ヤマトには伝えられん・・・彼らの足手まといになってはならんのだ・・・・」

三木は自艦の状況をヤマトに秘匿した。

だが、この行為が後の三木達、すくね　の乗員の運命を決定付けた瞬間でもあった。

しかし、三木自身も・・・いや、この時点ではヤマト乗組員を含む皆がヤマトにも既に異常が出始めている事には気がつかなかった。

「それにしても妙な場所で足止めを食らっちゃいましたね・・・アルデバラン星域までは一直線で行けると思ったのに・・・・」

観測された宇宙海図を見ながら太田が少し戸惑いながら言う。

「仕方ないさ。宇宙には、地球からまだ観測されていない宙域が山ほどあるんだ」

南部が割り切った様に言う。

そして、ヤマトはこのイレギュラーの原因解明に入った。

その原因は、まだ地球から観測されていない二つの星とその間を流れる宇宙気流によるものだった。

地球から観測されていない星系なので、当然ヤマトの宇宙海図にも記載がされていない。

もし、あの時緊急ワープアウトをしていなければ、ヤマト　と　すくね　はあの星のどちらかに突っ込んでいたかもしれなかった。
ヤマトの乗組員たちにとってこの二つの星も宇宙気流も予想外のイレギュラーであった。
しかし、この宙域は暗黒ガスが多く、その影響で地球からは観測できなかったので仕方がなかった。
宇宙気流の中には物凄い流れのモノもあるが、ヤマトの推進力ならば、渡れるとヤマトの乗組員たちはこの時はそう思っていた。
しかし、暫く通常航行していたヤマトに異常が出始めた。
徐々にエンジンの出力が落ち始めたのだ。
それは先程の緊急ワープの影響が機関に出始めた事を物語っていた。
そこで、ヤマト　と　すくね　は気流圏の手前で停止、ヤマトは艦の総チェックに入った。
しかし、運が悪いことにその姿は今回の敵である彗星帝国軍に探知されることとなった。
ヤマトを捕捉したのはミサイル艦を主力とした彗星帝国軍第一戦闘艦隊、特殊ミサイル艇師団の分艦隊だった。
分艦隊を指揮するデストールは上官である艦隊司令のゴーランド提督に報告した。

彗星帝国軍第一戦闘艦隊、特殊ミサイル艇師団　旗艦　ミサイル艦
ルーベルグⅢ　艦橋
「ゴーランド提督!!先遣隊のデストール副司令より、ヤマトと思しき艦影を捉えたとの報告が入りました。どうやら、気流星団の前で停止している模様です」
「ヤマト・・・ナスカ艦隊から連絡のあったあの艦か・・・ふははは!!演習中の我が艦隊に出くわすとは運の悪い奴等だ。デストールの奴に下令!!まずは、挨拶代りにミサイルでもくれてやれ!!」
「はっ!!」
ゴーランドの命を受けた副司令官のデストールは早速ヤマトに向

けて長距離ミサイルの発射準備を行った。
ヤマトは自分たちがまさか敵に見つかった事を知る由もなく、一時、行き足を止めて艦の総チェックを行いその結果、艦の至る所に損傷がある事が判明した。
その原因はワープ空間を抜け出る際、艦全体に力の歪みがかかってしまったことが原因だった。
しかし、真田曰くこの程度で済んだのは幸運だと言う。
ヤマトはまず、足である波動エンジンの応急修理に取り掛かった。
修理の間、ヤマトは艦を動かす事が出来ないため、乗組員たちは敵が来ない事を祈り、そして願った、
しかし、そのヤマトは既に敵に探知されており、デストールはヤマトに向けて大型の長距離ミサイルを放っていた。
放たれたミサイルはヤマトのレーダーですぐに探知された。
ヤマトは修理中のため、動かす事が出来ない。
やむを得ず、ヤマトは砲撃によりミサイルを撃ち落そうとするが、エネルギー伝導管の異常で主砲を撃つことが出来ない。
当然、波動砲も発射する事が出来なければ、エンジンの修理中で動かすことも出来なければ、ワープする事も出来なかった。
絶体絶命のピンチの中、ヤマトの至近距離で空間歪曲反応があった。
ヤマトの乗組員たちは一瞬、敵かと思ったがそれは小ワープをしてヤマトの前面に立ちはだかった　すくね　のモノだった。

宇宙巡洋艦　すくね　艦橋
「ここは我々が食い止めます!!その間に艦の修理を!!」
三木はヤマトにミサイルの処理は自分たちに任せ、艦の修理を優先させるように伝える。
「しかし・・・」
スピーカーから古代の焦るような声がしたが、突如通信が途切れた。
「通信機器にも異常発生!!通信切れます!!」

その通信を最後に　すくね　の通信機にも異常が発生し、ヤマトとの交信も不能となった。
（この艦にはもう地球に帰還する余力すら残ってはいない・・・覚悟は出来ていますよ・・・古代さん）
三木たち　すくね　の乗員はこの時点で既に自分の死を覚悟していた。
すくね　は残り少ないエネルギーを全て火器管制システムにつぎ込み、ミサイルを撃ち落としていく。
しかし、ミサイルの数が余りにも多い・・・。
その間にも、すくね　のエネルギーはドンドン無くなっていく。
「エネルギー残量・・・５％・・・機関、停止します!!」
遂に　すくね　は機関を動かすエネルギーさえも底をついた。
「残る道は・・・一つだ・・・」
三木は真剣な顔で艦橋を見渡す。
「分かっているつもりです・・・」
艦橋員は誰もが三木のとる最後の手段を感じ取った様子で、乗員は全員覚悟が出来ている表情をしていた。
三木は最後の手段で、すくね　の艦体そのものを使い、文字通りヤマトを守る盾となった。
ミサイル着弾の瞬間、すくね　の乗員は全員、ヤマト　に向けて敬礼をした。
（月村艦長・・・すみません・・・どうやら、貴方と再び会えそうにありません・・・さようなら・・・月村艦長・・・地球の事を頼みましたよ・・・）
やがてミサイルは　すくね　の第二砲塔と艦橋下部の付近に命中し、すくね　は船体が真っ二つに割れ轟沈した。
艦長の三木を始めとして、生存者は一人も居なかった・・・。

宇宙戦艦　まほろば　医務室

（・・・さようなら・・・月村艦長・・・）

「ん？」
　三木の声が聞こえた様な気がした良馬は辺りを見回す。
「どうしました？」
　リニスが良馬の行動を疑問に感じたのか、訊ねてくる。
「い、いや・・・今、三木君の声が聞こえた様な気がしたんだけど・・・」
「三木さんの？」
「ああ」
「そうですか？私には聞こえませんでしたけど・・・」
「そ、そうか・・・気のせい・・・かな？」
　良馬は緑茶が注がれた湯呑に視線を移すがその心境はどうにも不安であった。
　それは両親の時、冥王星海戦の時の雪風と冬月が戦場に残った時と似た感覚であった。
（まさか、三木君の身に何かが・・・）
　良馬は三木の身を案じたが、彼が三木の事を知るのはもう少し先になってからのことだった。
「うっ・・う～ん・・・」
　それから暫くして、眠っていたギンガが目を覚ました。
「気分はどう？ギンガ？」
　リニスが寝起きのギンガに訊ねる。
「リニス・・・さん・・・私・・・」
「少し疲労が溜まっていた様ね、ギンガ」
「ギンガ・・・」
　良馬はベッドにいるギンガに声をかける。
「良馬さん・・・」
「初めての戦闘や救助で色々な体験をして、色々と思う事があるかもしれないけど、君は今後どうする？」
「どう・・とは？」
「軍を退役するか、艦隊勤務から外れて地上勤務に移るか、それともこのまま艦隊勤務を続けるかだ」
「・・・」

良馬の問いにギンガは黙ってしまった。
あの時の夜、良馬が何故、沢山のお酒を飲んでまで無理矢理眠ろうとしていたのか、今のギンガならばその行動が分かる気がした。
管理局の次元航行艦乗りたちも同じ気持ちなのだろうか？
ギンガがそう思っていると、
「悲しむ気持ちは分かる。でも、宇宙の海に一度出た者は、そこで命を落とす事を覚悟しておかなければならない。そして、残された者は、命を散らせて逝った者の心を明日に伝えていく義務がある・・・宇宙戦士の心は、その肉体が滅んでもなお、生き続けるものなんだよ・・・まぁ、これは土方さんの受け寄りだけどね」
良馬が、以前土方から教えられた宇宙戦士の心得をギンガに教える。
「それを踏まえて、もう一度聞く。ギンガ、君はこの後どうしたい？軍を辞めるにしても、配置転換を望むにしても、そしてこのままこの艦に居続けるのも全て君次第だよ」
「私は・・・最初、この世界の人のために役立ちたいと思い、軍に志願しました。でも、戦闘と目の前で人が死んで・・・正直怖いと思いました」
「うん」
「でも・・・」
「でも？」
「でも、私はこの艦を降りません!!」
ギンガはしっかりと意思を持った瞳で良馬を見る。
「私が軍を辞めたりすれば、それはあの人の死を無駄にする様なことに思えるんです。それに、あの人は私にこのペンダントを託しました。ミッドに居るあの人の大切な人にコレを渡すか、信頼できるミッドの人にコレを託すのは私の義務です。こうして管理局の艦と会えたのですから、宇宙に居ればきっとまた会える気がするんです!!だから、私は艦を降りませんし、軍も辞めません!!」
ギンガは今回の件でまた一歩、宇宙戦士として成長した。

その頃、気流星団にて、すくね　の尊い犠牲によって、機関修理を終えてピンチを乗り切った　ヤマト　は　すくね　の乗員に対し、黙祷を捧げ、再び歩み出した。
メッセージの謎を追って・・・・。
気流星団を航行中のヤマトに例のメッセージが入電した。
内容は鬼気迫る声で、「早く」「白色彗星」「助けて」　等の内容で、島は急いで向かおうと主張した。
古代は雪にメッセージの来た方向に何があるのか調べてもらうと、メッセージは宇宙気流の中から聞こえてくると言う。
真田はメッセージの内容と送信してきた方向から、どうも腑に落ちず、このメッセージが偽物なのではないかと、疑い始めた。
しかし、真田以外の者は特に不審を抱くことなく、真田の進言を聞かず、『ヤマト』は宇宙気流の中へと突っ込んで行った。
あまりにも気流の流れが激しいため、古代は針路を変更した方がいいのではないかと、島に言うが、彼は『大丈夫だ』の一点張りで気流圏内を突っ切ろうとする。
やがて、気流圏内を航行中、真田はこの気流の流れがおかしいことに気が付く。
その理由は宇宙気流で流されているアステロイドがまるで海峡のように形成されている事、
流されているアステロイドの移動ベクトルを計算した結果、左右両側のベクトルが中心に向かっている事の二点で、それはまるで集まっていると言うよりも、吸い寄せられている様だった。
そしてその中心には異常空間反応があった。
パネルに投影すると、そこにはサルガッソーの入り口があった。
サルガッソーは移動性のブラックホールの様なモノで、近くにあるモノをなんでも吸い込んでしまう。
別命『宇宙の墓場』と言われている危険宙域だ。
この宙域の危険性はイスカンダルへの航海にて、ヤマトの乗員はちゃんと理解している、
何故ならば、ヤマトはイスカンダルへの航海中、次元断層に落ちた

経験があるからだ。
そして例のメッセージはそのサルガッソーの中から送信されていた。
此処に来て、ヤマトは先ほどまで送信されてきたメッセージが偽物であり、これはヤマトをサルガッソーへ引き込むための敵の罠だと言う事も察した。
しかし、気が付いたときは既に手遅れで、ヤマトはサルガッソーの中へと引きずり込まれてしまった。
それを確認したデストールは、ゴーランドへその旨を報告した。

彗星帝国軍第一戦闘艦隊、特殊ミサイル艇師団　旗艦　ミサイル艦ルーベルグⅢ　艦橋
「ゴーランド提督、デストール副司令より通信です。どうやら、上手くヤマトをサルガッソーへと誘い込む事に成功した模様です。我々も現地に向かいますか？」
「放っておけ、デストールの艦隊も我々同様、かなりの重装備の艦隊だ。サルガッソーにはまり込んで身動きの取れない艦など、赤子の手をひねるよりもたやすく沈められるわ!!」
「はぁ・・・」
ゴーランドはヤマトの処理を全て副司令官のデストールに一任した。
デストールはサルガッソー内にミサイルを撃ち込み、ヤマトに止めをさそうとしたが、これがかえって、サルガッソーの中には出口もあるのではないかという推測を生む結果となり、ヤマトはサルガッソー無事を脱出した。
ヤマトがサルガッソーから、脱出できたのは、敵がミサイルを撃ってきた事と、出口の位置を知らせてきた本物のメッセージのおかげであった。
島はサルガッソーの中に落ち込んでしまったのは、自分の責任だと深く反省したが、サルガッソーからの脱出にて、名誉を挽回した。

彗星帝国軍第一戦闘艦隊、特殊ミサイル艇師団　先遣隊旗艦　ミサイル艦　ルーベルグⅣ　艦橋
「で、デストール司令!!ヤマトが・・・ヤマトがサルガッソーから脱出しました!!」
「な、なにぃ!!」
デストールがパネルを見ると、そこには、サルガッソーから無事に脱出し、通常空間を航行するヤマトの姿があった。
「い、いかがなさいますか?」
「・・・後退だ」
「は?」
「全艦後退だ・・・サルガッソーでヤマトを仕留められなかったのだ。ここで悪戯に戦闘を行い、艦隊を消耗させる訳にはいかん・・・この先の宙域にて、ヤマトの航路封鎖を行い、そこで艦隊決戦に望む」
「りょ、了解しました」
デストールは、サルガッソー内でヤマトを仕留める作戦に失敗したのを見て、現宙域を離脱した。
罠の一つを破られたので、後方に移り、そこで新たな罠を張り、ヤマトを待つことにしたのだ。
それにサルガッソーに近い宙域で戦闘をすれば、自分たちが逆にサルガッソーに落ちてしまうのではないかと思ったためであった。
宇宙気流を突破したヤマトに今度は本物のメッセージが入電した。
そのメッセージにはサルガッソーから無事に脱出したお祝いの言葉と、メッセージの発信源の星の名前と送信者の名前が判明した。
メッセージの発信源の星は、テレザート・・・。
そして発信者はテレサと名乗った。
テレザート・・・それが、ヤマトが目指す星の名前。
テレサ・・・それが、ヤマトが会いに行くべき人物の名前。
しかし、メッセージは肝心のテレザートの場所を聞く前に妨害電波によって遮られてしまった。
だが、メッセージが発信された方向は次第にはっきりと分かって来た。

方向さえ分かれば、後はその都度、修正を行い、テレザートを目指すしかなかった。
ヤマトはテレザートへ・・・テレサの下へとただひたすら急いだ。
そんな中、ヤマトの前方に例のカブトガニに似た艦載機一機が飛行していた。
古代は加藤と山本に出撃命令を出した。
加藤が出撃した後、山本がコスモタイガーに乗ろうとした時、斎藤が山本を殴り、山本が倒れている隙にコスモタイガーに跳び乗り、ヤマトを勝手に出撃してしまった。
加藤がカブトガニに対し無線で警告を入れると、カブトガニは突然攻撃をしてきた。
古代は加藤と斎藤に生け捕りにするように命令した。
加藤は上手く、カブトガニの機関部を撃ち、相手を航行不能にしたが、斎藤は第十一番惑星で部下や仲間を大勢殺された指揮官として、古代の命令には我慢ならず、既に航行不能に陥ったカブトガニに対し、機銃掃射を行い、その結果、カブトガニに乗っていた搭乗員三名の内、二名が死んだ。
しかし、機体自体は破壊されなかったので、加藤は牽引ワイヤーにてカブトガニをヤマトへと運んだ。
この出来事はヤマトの針路上で待機しているデストールの耳にも入った。
「デストール司令。ヤマトの針路封鎖作戦に従事していた第３０７号艇がヤマトに拿捕されました」
「なに!!」
デストールにとってこれは余りにも悪い知らせだった。
搭乗員が捕虜になり、ヤマトに此方の存在ないし、作戦内容を伝えたら、此方が不利になると考えたのだ。
「それで、捕虜になった者はいるのか？」
「そこまでは、確認できていません」
「・・・・」
デストールは現在、ヤマトが航行しているであろう、前方の宙域を

無言のまま睨んだ。
一方、ヤマトでは無事だった搭乗員の身体検査が行われた。
その結果、肌の色は地球人と違うがそれ以外では、この宇宙人（ガトランティス人）は全く地球人と変わらないタイプの宇宙人だと判明した。
その後、尋問が行われたが中々口を割らないこの搭乗員に対し電気ショックを浴びせると言うやや拷問まがいの尋問が行われたが、それでもこの搭乗員は口を割らなかった。
業を煮やした尋問官は佐渡に自白剤を打つ様に頼むが佐渡はそれを拒否した。
また、古代の方も搭乗員の口の堅さに敵ながら感服し尋問を取り止め、佐渡にこの搭乗員の面倒を頼んだ。
医務室にて佐渡は搭乗員に対して、酒を勧め、共に酒を飲みながら、互いの故郷の歌を披露し、両者は楽しく酒を飲み、佐渡はこの搭乗員が心を開いてくれたのだと思った。
やがて、佐渡と搭乗員は酒を飲み過ぎ酔いつぶれた・・・かのように見えたが、酔い潰れたのは佐渡だけであり、搭乗員は佐渡が眠ったのを確認すると医務室を抜け出した。
そして、自分が乗っていた飛行艇の所在を確認し、どうにかして飛行艇へ戻ろうとヤマト艦内を捜索していると彼はあっさり見つかった。
艦内には警戒警報が放送されたが古代は敢えてこの搭乗員を逃がしてやれ、と命令した。
搭乗員はヤマト乗員のロッカー室から宇宙服とコスモガンを手に入れ飛行艇の下へ戻ると、飛行艇を固定していたワイヤーをコスモガンで焼き切り飛行艇へと飛び乗るとヤマトを後にした。
そして搭乗員は、自らが所属する艦隊・・・デストール艦隊へと通信を入れた。
「デストール司令、デストール司令、此方特別工作員、メーザー!!デストール司令、応答を!!」
搭乗員こと、メーザーの通信はすぐに上官であるデストールの下へ

届いた。
「メーザー、何をしていた？」
　メーザーからの通信にデストールは冷たい声でメーザーに対して問うように答える。
「ヤマトを引っ張り出してきました!!直ちに戦闘配備を!!」
　メーザーはデストールの問いに答えると、
「ふふふふ・・・メーザー。一工作兵でしかない貴様が指揮官である私に命令をする気か？貴様はヤマトの捕虜になっていたのだろう？」
　デストールはメーザーの答えを嘲笑うかのように問い返す。
「し、しかし、私は機密に触れる事は一切・・・」
　メーザーが釈明をするも、
「メーザー、もういい!!どこにでも好きな所へ消え失せろ!!」
　と、デストールは捕虜となった自分の部下の帰還を拒み、この場から失せろと言い放った。
　この広大な宇宙に独りどこにも行くあてもなく彷徨う。
　それは事実上「死ね」と言っている事と同じだった。
「な、何故です?!」
「彗星帝国が捕虜になった者を甘い顔で迎え入れると思ったのか？」
「デストール司令!!」
「無駄だ!!規律は変えられん!!さっさと失せろ!!撃ち落されないのは俺からのせめてもの情けだ!!」
　上官から帰還を拒まれても諦めがつかないのか、メーザーは艦隊の周囲を飛び回った。
　デストールとメーザーの間でそのようなやり取りが行われている中、ヤマトはデストール艦隊に接近していた。
　そのやり取りを見た古代はメーザーに「自分たちは君を戦士として受け入れる用意がある」と通信で送る。
　しかし、メーザーは、その受け入れを拒否し、
「大ガトランティスに栄光あれ!!」
　ヤマトに特攻して戦死した。
　ただ、メーザーは艦橋への特攻コースではなく、途中で針路を変え

てヤマト左舷の側面へ特攻した。
あのまま艦橋へ特攻すれば、艦橋員に多数の死傷者を出し、ヤマトは機能的に致命傷を免れず、そこをデストールの艦隊が総攻撃をかけばヤマトは撃沈されていただろう。
では、何故彼はその行動を取らずに致命傷としては浅い側面へ特攻したのだろうか？
その理由は今となっては誰にも分からないが、もしかしたらあの行動はメーザーなりの敵に対する配慮だったのかもしれない。
すくね　の犠牲とメーザーの死・・・それらの弔い合戦だと意気込むヤマト。
主砲の射程距離に入った途端、デストール艦隊に猛攻を加えて中央突破をはかる。
その戦闘の中で一発のショックカノンが、
「直撃弾!!来ます!!」
「か、回避!!」
デストール座乗のミサイル艦へと迫る。
「だ、ダメです!!間に合いません!!」
デストールの眼前にはヤマトから放たれたショックカノンが迫り、
「ぐわぁぁぁぁぁぁー!!」
デストールが座乗するミサイル艦は木っ端微塵になった。

彗星帝国軍第一戦闘艦隊、特殊ミサイル艇師団　旗艦　ミサイル艦ルーベルグⅢ　艦橋
デストール艦隊の全滅の報は、後方に居たゴーランドの下に知らされた。
「ゴーランド提督、デストール副司令率いる先遣隊が全滅しました」
「なにぃ!!・・・・ふっ、ハハハハハハ・・・・・」
デストール艦隊の全滅の報を聞いたゴーランドは最初驚いている様子だったが、急に高笑いをしだした。
「提督？」
「気に入ったぞ、ヤマト!!ナスカの坊やデストールの若造では相手に

ならぬか。かくなる上は、このわし自らが相手になってやるわ!!この宙域に展開している全艦隊に攻撃命令を出せ!!目標、ヤマト!!本艦と直掩艦隊だけは気流星団の出口でヤマトを待ち構える。破滅ミサイルの発射準備を整えておけ」
「破滅ミサイル・・・!?しかし、提督、あのミサイルの威力は確かに強力無比ですが、まだ実戦では未使用の実験兵器です」
ゴーランドの副官は、ゴーランド艦隊の切り札と目される破滅ミサイルと呼ばれる大型のミサイルの使用をためらう。
「かまわん。もし、ヤマトが包囲艦隊の攻撃をくぐり抜け、我が艦隊まで辿り着いたなら・・・その時は、ヤマトこそが破滅ミサイルの威力を最初に味わう艦となるわ!!・・・・フハハハハッ!!」
ゴーランドは意気込んでヤマト撃破の作戦を展開しようとしていた。
しかし、そんなゴーランドの下へ、一通の通信文が届いた。
「ゴーランド提督。彗星帝国艦隊司令部から緊急通信です」
「緊急通信?内容は?」
「はっ、此方です」
通信員は恐る恐る通信文が書かれた紙をゴーランドに渡す。
通信文に目を通すゴーランドの顔が次第に険しくなっていく。
「なんだ!?この命令は!?何かの間違いではないのか!?」
そしてゴーランドは、通信文を渡してきた通信員に怒鳴る。
余程頭に来たのか、手に持っている通信文が書かれている紙はくしゃくしゃになっている。
「か、確認した所、間違いはありません」
「ぐっ・・・」
通信員は怯えながらもこの通信が間違いでは無く、正規なモノであると言う。
ゴーランドが呼んだ通信文には以下の内容が書かれていた。
『第一戦闘艦隊は直ちに気流星団における演習を中止し、テレザート宙域へ赴き、テレザート方面軍司令官の指揮下にはいられたし』
だった。

これが彗星帝国艦隊総司令、ゲーニッツの下した命令ならばゲーニッツに通信を入れてこの命令を撤回することは出来ただろう。
ゲーニッツは彗星帝国ガトランティスの艦隊総司令と言う役職についてはいるが、自らが戦場へと赴くことは無く、彗星帝国本体から各戦線に指示を送るだけの男なので、強い口調で、「現場の人間にしか分からない事がある」等と言えば、この命令を取り下げさせる事は出来たかもしれない。
しかし、今回の命令はゲーニッツではなく、国家元首である大帝からの命令故、ゴーランドは撤回を願い出るわけにはいかなかった。
「ぐっ・・・・ぬぅ〜・・・・」
ゴーランドは顔を悔しそうに歪め通信文の書かれた紙を握りつぶす。
「提督・どうなさいますか?」
副官が今後の艦隊方針を訊ねる。
「どうも、こうもない。大帝陛下、御自らのご命令では従うしかあるまい。全艦回頭、針路、惑星テレザート」
ゴーランドの命令の下、艦隊は艦首を回頭し気流星団から去っていった。
「ヤマトめ・・・・命拾いをしたな・・・・しかし、次に会う時がお前の最後だ・・・・」
ゴーランドは去り際、ヤマトに向けてそう捨て台詞をはいた。

ゴーランド提督の艦隊が撤退した頃、彗星帝国ガトランティスでは、艦隊総司令のゲーニッツが、ガトランティス議会総議長のラーゼラーに食って掛かっていた。
「ラーゼラー総議長!!貴官の提案はまったく信じがたい!!艦隊総司令の私を差し置いて、あのような男にヤマト討伐を任せるのだからな!!」
しかし、ラーゼラーはどこ吹く風の様子でゲーニッツをあしらった。
「戦いの基本は情報ですよ。あの男は我々よりもはるかにヤマトの事

を熟知している・・・それだけでも作戦を遂行する価値はあると思いますがね。では、私は失礼しますよ・・・」
そう言ってラーゼラーはその場から去っていった。
「ぬぅ～・・・ラーゼラーめ・・・調子にのりおって!!大帝も大帝だ・・・!!ラーゼラーのあのような作戦を了承するとは!!」
ラーゼラーと新たに発案され、実行に移されたヤマト討伐計画に思わず愚痴るゲーニッツ。
そこに、
「あら?ゲーニッツ・・・それは大帝に対する陰口かしら?」
と、冷たい女の声がその場に響いた。
その声を聞いたゲーニッツは思わず身体を震わせる。
ゲーニッツの前に現れたのは、彗星帝国植民惑星支配庁長官兼彗星帝国軍総参謀長のシファル・サーベラーだった。
彼女は女性ながらも彗星帝国で国家元首の大帝に次ぐ実質的なＮｏ．２の人物である。
「さ、サーベラー総参謀長!!い、いえ、陰口などとは・・・私は決してそんな・・・!!」
相手は彗星帝国の実質的なＮｏ．２の人物・・・。
艦隊総司令と言う立場ながら彼女の方が地位も権力も上で、彼女の機嫌を悪くすれば、艦隊総司令と言えど、冤罪をかけられ死刑にされるかもしれないと思ったゲーニッツは必死に弁解を図る。
「どうかしらね?・・・でも、お前の気持ちも分からない訳でもないわ。私もお前と同じ・・・ラーゼラーの作戦も、あの男の事も信用してはいないのよ・・・大帝はあの男の事をいたくお気に入りになられたようだけどね」
「やはりそう思われますか!?私の虎の子の一つであるゴーランド艦隊を総撤退させると言う暴挙ですからな・・・」
「そう言う問題ではないのよ。もっと頭を使いなさい、ゲーニッツ。この偉大なる彗星帝国ガトランティスの中核部にあの男の様な異分子をまぎれこませてはならない・・・それが重要なのよ。あの男は、いずれ帝国に害をなすに違いないわ・・・」

「さすがはサーベラー様。そこまで先を見通しておられるは・・・」
サーベラーの先見の目に対し感服したようにゲーニッツはサーベラーを褒めるようにして機嫌をとる。
「ゲーニッツ・・・ラーゼラーとあの男の事は私に任せてもらえないかしら？」
「それはかまいませんが・・・大帝をどう説得されるのです？大帝はあの男をいたく信用しておられます」
「でも、このままだと、お前の艦隊総司令と言う地位もあの男に奪われることになるかもしれないのよ？・・・私にお任せなさい。悪い様にはしないわ・・・ゲーニッツ」
サーベラーは微笑を浮かべ、ゲーニッツに対してそう言うが、彼女の微笑はまさに魔女の微笑と言っても過言ではなかった。
「はっ、これで気にやむことなく艦隊指揮に戻れますな、ハハハ・・・では、失礼します、サーベラー様」
ゲーニッツはサーベラーの言葉と微笑を信じ込んだ様子でやや上機嫌でその場を後にした。
去っていくゲーニッツをサーベラーは冷たい目で見ていた。
（ふん、無能め!!お前の立場など、どうでもよいわ。問題はあの男・・・大帝に気に入られ過ぎている・・・それが許せない!!大帝は・・・大帝は私だけのものなのに・・・!!）
サーベラーはただ単にあの男と呼ばれる男に対して嫉妬していただけであった。
しかし、彼女の嫉妬は腸が煮えくり返る程のモノだった。
女の嫉妬は恐ろしいモノである。

その頃、ヤマトはようやく気流星団の出口まで来た。
此処には、本来ゴーランド提督率いるミサイル艦隊が布陣していたのだが、既にゴーランド艦隊は撤退しており、何事もなく、通過する事が出来た。
気流星団を抜けていく際、古代は展望室から遠ざかっていく気流星団を見みながら思いに耽っていた。

古代が思っていた事・・・・。
それは他ならぬ、三木を始めとする　すくね　の事、敵ながらも勇敢に散って行ったメーザーの事だった。
古代がそれらの事に思いふけっていると、後ろから雪が来て、古代に声をかけた。
「・・・・」
「古代君・・・・」
「・・・・雪か」
「何を考えていたの？」
「・・・・」
「・・・・ごめんなさい・・わかっていたわ。三木艦長の事ね・・・・」
流石、古代の婚約者（フィアンセ）。
古代の表情だけで、今、古代が何を思っているのかを当てた。
「ああ・・・・でも、悲しんでいたわけじゃない。徳川さんの言った通りさ。三木さんは死んでなんかいない。あの人の信念と心は、俺たちの中に引き継がれていくんだ・・・・沖田艦長と同じように・・・・俺が生きている限り、俺の中では誰も死なない・・・・逆に俺が死んでも、また別の誰かの中に俺の心は引き継がれていくんだ・・・・」
「もう、死ぬなんて、そんな縁起の悪いこと言わないで・・・・ね？」
「ああ、ゴメン」
古代は苦笑いをしながら雪と共に遠ざかっていく気流星団を見つめていた。
再び航海の中、仲間を失いながらも、旅を続けるヤマト。
しかし、ただ失ったわけではない。
宇宙戦士の心は、死してなお、志を同じくする者の中に受け継がれてゆく・・・・。
母なる宇宙が無限の命を生み出し、永遠に広がっていくように・・・・。

二十三話　好敵手

小犬座プロキオン、双子座ポルックス、カストルを抜け、牡牛座アルデバランへと向かう途中、イレギュラーで地球からは観測されていない気流星団にて、援軍の　すくね　を失いながらも、ようやく牡牛座アルデバランを経て、ヒアデス星系へと到着したヤマト。

あとは、そこからテレサが待つとされるテレザートまであと少しまでの所に来た。

そのヤマトは現在、ヒアデスの灯台星系を航行していた。

この灯台星系の名前の由来は、ヤマトが勝手につけた名前であるが、それはこの星系の形をそのまま表していた。

ヒアデス星団は星や小惑星の数が多く大ワープは不可能で地道に星の間を潜り抜ける通常航行で進むしかなかった。

ヤマトがヒアデス星団への航路に選んだこの星系の形状は湾状で恒星系が三つ存在した。

そしてその星系は湾の岬や海峡の部分にあたる場所に位置していたため、この様な名前がつけられた。

ヤマトが二つ目の灯台星系へと差し掛かった時、ヤマトの周りを沢山の小さな発行体が飛んでいた。

それは宇宙ボタルと呼ばれるモノだった。

見かけは地球に居る蛍そっくりに発光するモノで、一見生物にも見える。

しかし、その実態は放射性のチリの一種と言われ、放射能の濃度が高ければ人体にとってそれは有害な物質となる。

その宇宙ボタルを新米が幾つか捕獲してヤマトの艦内に持ち込んだ。

そこを加藤と山本に見つかり、「念のため、艦長代理と真田技師長に見せておいた方が良い」と言われ、新米は真田の下へ宇宙ボタルを持って行った。

真田は新米と共に宇宙ボタルの放射能レベルを測定するため、ヤマ

ト艦内の研究室へと運び調査に入った。
そして調査した結果、この宇宙ボタルは放射性のチリではなく、特殊な発光性の宇宙バクテリアである事が判明した。
宇宙ボタルの正体がバクテリアである事が判明したが、これが安全なバクテリアなのか、それとも人体に対して有害なバクテリアなのかは、まだ確認できていない為、宇宙ボタルは艦内持ち込み禁止となったが、空間騎兵隊の斎藤も宇宙ボタルを艦内に持ち込んでおり、古代とアナライザーは斎藤に宇宙ボタルを捨てる様に言うが、斎藤は宇宙ボタルを捨てる気は無く、古代と斎藤が取っ組み合いを始めそうになった時、突如、ヤマト艦内の重力がゼロになった。
古代はこの原因を確かめるべく、苦労しつつ第一艦橋に戻り、真田に原因を聞くが、真田は第一艦橋にはいなかった。
真田の代わりに彼からこの原因を聞いた島が古代に原因を話した。
それによると、あの宇宙ボタルは放射性の有害物質はなかったが、その正体は鉄を捕食する特殊なバクテリアで、ヤマトの重力コントロール装置の一部がそのバクテリアによってダメージを受けた為であると判明した。
そして、艦内の重力がゼロと言う事は格納庫も当然重力がゼロと言う事で、コスモタイガーも発進不能と言う事態に陥った。
重力が無く、戦闘力が半減したヤマトに突如、どこからともなく艦載機部隊がヤマトの至近距離に現れ攻撃を行ってきた。
「レーダーはどうした!?捕捉しなかったのか!?」
古代はレーダー担当の雪に問うが、
「レーダーには、何も映りませんでした!!」
雪の答えは、攻撃を受けるその瞬間まで反応が無かったと言う。
「真田さん、重力装置の修理はまだかかりますか?」
島が真田に重力装置の修理状況を問う。
「幸い軽傷だ。もうすぐ終わる。だが、他の部分が心配だ。かなりの部分を食い荒らされているからな」
「真田さん、それよりも今、突然現れた敵から攻撃を・・・・」
古代がヤマトの現状を真田に報告する。

「ああ、俺もついさっき、確認した。俺の見る所、あれは潜宙艦の様に次元潜行していたわけではない。かといって、ワープとも違う。小型の艦載機にはワープ装置なんか積めんからな・・・考えられるのは・・・・・」

真田が突然現れた艦載機の出現原因の答えを言おうとした時、また も艦載機がヤマトの至近距離に現れ、再び奇襲攻撃を行ってきた。

「間違いない・・・あれは瞬間物質転送機で送り込まれてきているんだ。それにあの艦載機の形状・・・かつて七色星団で見たのと同型の艦上攻撃機だ!!」

真田の言う通り、突然ヤマトの至近距離に現れ、奇襲攻撃をしてきた艦載機は第十一番惑星から今まで戦ってきたカブトガニこと、ガトランティスの艦載機、デスバ・テーターではなく、ガミラスの空間艦上攻撃機ＤＭＢ８７　スヌーカであった。

「そんな、まさか・・・」

島が瞬間物質転送機とスヌーカからかつて自分たちが戦った星間国家の国家元首の名前が脳裏を過った。

「瞬間物質転送機・・・ドメル戦法・・・!?」

「ガミラスの艦載機!?そんなっ!?」

南部と太田が島の脳裏に過ぎった相手の戦法と名前を口にする。

しかし、この時点ではガミラスの残存艦隊が死亡した国家元首の敵討ちに現れたのかもしれないという可能性もあった。

そこへ、一通の通信がヤマトに入る。

「艦長代理、通信が・・・」

「どこからだ!?」

「そ、それが・・・」

相原が通信をしてきた相手の名前を見て、戸惑いが隠せない様子。

「どこからなんだ!!相原!!」

そんな相原に古代は相手の名前を早く言えと言わんばかりの大声で、通信源を訊ねる。

「で、デスラーです!!」

「なに!?」

通信を送って来た人物の名を聞き、古代は驚愕した。
瞬間物質転送機とスヌーカで相手がガミラスだと十中八九予想は出来た。
古代は他のヤマトの乗組員たち同様、デスラーの仇を撃ちに来たガミラスの残党かと思っていたが、通信を送って来たのが、そのガミラスの指導者だった事は十分驚愕に値した。
「デスラーが・・・・」
「生きていただって・・・・」
「バカな、奴は確かに死んだ筈じゃあ・・・・」
「とても信じられん・・・・」
艦橋の乗組員達も古代同様、デスラーが生きていた事がとても信じられない様子で困惑している。
そんな中、ヤマトのメインパネルに一人の男が映し出された。
「ヤマトの諸君、お元気かな?待っていたよ。また会えて光栄の至りだ」
艦橋の大モニターに映し出された男は紛れもなくガミラスの総統、アベルト・デスラーその人だった。
ガミラスの総統、デスラーは遊星爆弾で地球を赤い大地と放射能まみれの星に変え、地球人類をあと一年で絶滅に追いやるも、隣の双子星、イスカンダルの女王スターシアが、イスカンダルまで来るようにと妹のサーシアを地球へ使者として送った。
地球で初めて光速を超えた宇宙戦艦ヤマトは地球から１４万８００光年の彼方にあるマゼラン星雲、イスカンダルへと旅立った。
その航海の最中、ガミラスはいくつもの兵器を使い妨害するも、ヤマト艦長、沖田十三の卓越した指揮の前にことごとく破られていった。
そしてヤマトは等々、イスカンダルの目の前まで辿り着いた。
しかし、イスカンダルの双子星ガミラスはガミラス本星をヤマトとの決戦の場とし、ヤマトをガミラスへと引き寄せ、ヤマトとの決戦を行った。
濃硫酸の海に酸性雨、陸上砲台からの砲撃、次第に追い詰められて

行くヤマトは起死回生の手で一度濃硫酸の海へと入り、船体が溶ける前に海底火山脈を波動砲で撃ちぬいた。
その結果、ガミラスの地上にある火山という火山は連鎖反応で大噴火を起こし、陸上のありとあらゆる物を溶岩に飲み込んだ。
決戦前、ガミラスの天井都市に移り、指揮をとっていたデスラーは次に天井都市のビル群をミサイルにしてヤマトにぶつける作戦をとった。
当然、ヤマトも反撃し、無差別に天井部の都市に砲撃を行いその一発が天井都市の総統府に命中。
総統府は天井部から崩れ落ち、下に広がる濃硫酸の海へと落ちて行った。
流石のガミラス人でも濃硫酸の中を生きていられる筈がない。
この時、ヤマトの乗組員たちはこれでデスラーは死んだと思った。
そして、イスカンダルにて無事にコスモクリーナーを受け取ったヤマトは地球への帰路へとついた。
しかし太陽系に入ったその時、ヤマトの艦体に見慣れぬ艦が追突してきた。
それはガミラスの天井都市にあった総統府だった。
この総統府、実はただの建物ではなく、天井都市の総統府としての役割の他に総統専用の緊急脱出用の宇宙船でもあった。
デスラーはヤマトの艦内に放射能ガスを送り込み、白兵戦を仕掛けるが、艦内工場で完成されていたコスモクリーナーの力によって、放射能ガスは効力を失いデスラーは一端撤退した。
やがて、ヤマトが地球へ目前の距離まで来ると、デスラーはヤマトに対しデスラー砲（ガミラス式の波動砲）を放った。
ヤマトの乗組員達は真田以外の誰もが「もうだめだ」と絶望し、デスラー砲を撃ったデスラーは「勝った!!」と、思ったが、真田が密かに開発していた空間磁力メッキの力でヤマトはデスラー砲を反射、攻撃を凌いだ。
そしてデスラーは跳ね返ってきたデスラー砲の砲撃によって艦ごと爆死した・・・と、思われていたが、デスラーはこの時、間一髪で艦

外へとその身体を投げ、仮死状態のまま宇宙を漂流していた。
　そこを、彗星帝国の長距離偵察機に発見され、ガトランティス本国にて蘇生手術を受け、こうして再びヤマトの前に姿を現したのだ。
「デスラー!!貴様!!死んだ筈じゃあ!?」
　古代はこのデスラーが偽物かと一瞬思ったが、
「大ガミラスは永遠だ!!我がガミラスの栄光は不滅なのだよ・・・そしてこのデスラーもな・・・」
　パネル越しでも伝わってくる覇気と闘争心。
　それは紛れもなく、デスラー本人であると、直接対峙した古代には分かった。
「古代進・・・誉めてやろう。よくここまで来た・・・」
　デスラーは不敵に笑みを浮かべ、古代に語り掛ける。
「我々の中には沖田艦長の遺志が生き続けている。例え、どんな苦難にあっても、一歩も退くつもりはない!!」
「それにしても、すいぶんお楽しみのようだね・・・諸君の長旅をお慰めしようと思い、心ばかりの贈り物をした・・・早速受け取ってもらえたようで恐縮している。せいぜいお楽しみいただきたい。それでは、ヤマトの健闘を祈る・・・ふはははははは・・・」
　デスラーは不気味な高笑いを残し、通信をきった。
「デスラーめ・・・」
「宇宙ボタルはデスラーがまき散らしたものだったのか・・・それにしても、どうしてデスラーが生きて・・・」
「わからん・・・」
　何故、死んだ筈のデスラーが生きていたのか困惑したが、今はそんな事を悠長に考えている暇はなかった。
　デスラーは次々と瞬間物質転送機で攻撃機を送り込んでくる。
　一刻も早く、デスラー艦隊の位置を突き止め、デスラー艦ないし、空母を沈める必要があった。
　艦内が無重力で戦いにくい中、ヤマトは必死の抵抗を見せた。
　その間にバクテリアによって破壊された重力装置の修理が終わった。

修理完了直後、重力レベルを間違えて、身体に地球より重いGが働き、一時身動きが取れなくなると言うアクシデントも起こったが、重力が無事に元に戻ったと言う事で、コスモタイガーも発進可能になり、直ちに発進、ヤマトの直掩につき、次々と転移してくるスヌーカの迎撃にあたった。

ヤマトの予想以上の抵抗から、予想していた作戦時間の経過でデスラーは突然、艦載機部隊に帰還命令を出しこの宙域から撤退した。

その理由は、あまりこの宙域に長居をすると自らが放った宇宙ボタルの餌食になり、瞬間物質転送機はおろか、航行用の機関、攻撃用の火器管制システムが食い破られる恐れがあったためだった。

ヤマト側もガミラスの事情を察したが、追撃は行わなかった。

今のヤマトは艦体に宇宙ボタルを張り付けている状態で、デスラーを追いかけている余裕はなく、早く宇宙ボタルを除去しなければ、艦が虫食い状態となるためだった。

デスラーが撤退した後、真田と島は、白色彗星はただの彗星ではなく、デスラーと何か関わりがあるのではないかと疑ったが、未だに明確な確証が無かったため、口にはしなかった。

ヤマトは二つ目の灯台星系の主星の近くに、竹輪状の小惑星を発見し、之幸いとその小惑星の内部に入り、早速宇宙ボタルの除去作業を行った。

宇宙ボタルの除去作業が間もなく終了と言うとき、突然ヤマトは強力な磁力線につかまり、行動不能となってしまった。

ヤマトが行動不能になった瞬間、小惑星の周りに多数のワープアウト反応を感知、ワープ開けをした時、姿を見せたのは先ほど、撤退を行ったデスラーで、彼は多数のガミラス艦を率いて戻って来た。

デスラーはこの竹輪状の小惑星に罠を仕掛けていた。

当初の予定されていた戦闘時間の長期化もデスラーは読んでおり、こうして二重の罠を張り巡らしていたのだ。

「・・・ヤマトの諸君・・・私と君達の戦いも、いよいよこれで幕が降りる・・・もう、奇跡は期待しても無駄だ。誇りを持って、王者らしく死にたまえ・・・慎んで哀悼の意を表する・・・」

「デスラー・・・・」
ヤマトとの通信をきった後、デスラーは少し早いが祝勝の杯をあげた。
「諸君・・・・ヤマトの最後を祝し・・・・乾杯!!」
『乾杯!!』
デスラー艦に乗艦しているガミラス将兵達もデスラー同様、杯を掲げる。
「デスラー砲発射用意」
杯に入っていた酒を一飲みした後、グラスを叩き割るとデスラーはヤマトに止めを刺さんとデスラー砲の発射準備を行う。
ヤマトでは、何か打開策は無いかと真田が模索している中、宇宙ボタルの除去作業から戻った新米が、「波動砲を使えば、その反動で後ろにバックできるのではないか?」と真田に言うと、「それだ!!」と言って打開策を打ち出した。
真田が打ち立てた策は通常、波動砲を使用する時、その反動を重力アンカーで制御するが、その反動制御を全て無しにすれば、先程、新米が言ったように、物凄い反動で後ろへとバックする事が出来るのだ。
古代は早速波動砲の発射準備に取り掛かった。
一方、デスラーの方も着々と、デスラー砲の発射準備を整えてきており、デスラーは既に勝った気でおり、思わず笑みを浮かべていた。
そこへ、
「デスラー総統」
デスラー艦に連絡将校として乗艦していたガトランティス監視艦隊司令のミルが携帯型の通信機を持ってデスラーに話しかけてきた。
ミルは表向きは彗星帝国の連絡将校として乗り込んできたが、その実、総参謀長であるサーベラーから送り込まれたスパイあり、デスラーの行動を逐一本国のサーベラーに暗号電文で送っていたのだ。
そしてサーベラーはミルを使って、デスラーを蹴落とす機会を窺っていたのだが、そのチャンスが漸く到来し、それを行動に移した。
ミルの行動は全てサーベラーの策略の開始を意味していた。

「・・・ああ君か居たのかね？君のことなど、すっかり忘れていたよ」
　完全にミルの事をアウト・オブ・眼中だったデスラーはミルに話しかけられて、此処で初めて、ミルの存在を思い出した。
「なっ!?」
　デスラーの発言に少しムッした表情になるミル。
「失礼。それで何か用かね？」
「彗星帝国からデスラー総統宛てに伝令です。直ちに作戦を取りやめ帰還せよと命令が出ております」
　少しムッしながらも、ミルはデスラーに彗星帝国（サーベラー）からの命令を伝える。
「なに？」
　デスラーは突然の帰還命令に顔をしかめながらも通信機を手に取った。
「私だ・・・何の御用かな？」
「デスラー・・・直ちに作戦を中止して帰還しなさい」
「サーベラー総参謀長・・・御冗談なら後にしていただきたい。私は今、忙しいのだ」
「これは大帝のご命令なのですよ。大帝は・・・・・」
　サーベラーがまだ喋っている途中にも関わらず、デスラーは通信をきった。
「デスラー砲、発射準備完了!!」
「フッ、さらばだ・・・ヤマト」
　やがて、デスラー砲の発射準備が終わり、デスラーがヤマトの居る小惑星に向けてデスラー砲を撃つと、それとほぼ同時にヤマトも波動砲を撃ち、小惑星から脱出、デスラー砲が当たった小惑星は粉々に砕けた。
「くっ、惑星諸共消し飛んでいたものを・・・」
　デスラー砲が外れた事は直ぐに肉眼で捕捉出来、デスラーは悔しそうに顔を歪める。
　そこへ、
「デスラー総統、貴方は大帝の帰還命令に背き、ヤマトまで仕損じた!!

直ちに彗星帝国に出頭しなければなりません!!」
ミルが大声でデスラーに詰め寄ると、
「呼ばれるまでもない。此方から行かせてもらう。私の作戦に散々水を差してくれたそのお礼をたっぷりと言う為にな・・・・」
怒りで闘争心と殺気を露わにしたデスラーはミルの胸ぐらを掴むと、そう言い放ち、帰還行動に移った。
しかし、彗星帝国に戻ったデスラーはサーベラーの策略に嵌まり、敵前逃亡罪の罪を着せられ、幽閉されてしまった。
サーベラーの一連の動きを見たラーゼラーは、
(おやおや、食えない御方だ。デスラーを使う事を最初に私に持ち掛けたのは、貴女ではありませんでしたかね?それが、デスラー本人を貶める為の策だったとは・・・・さて、こうなれば私もこの後の進退を考えねばならないか・・・・)
と、自らの保身の為の思考を巡らせた。
しかし、幽閉されても尚、デスラーは内心で「ヤマトを倒すのは自分であり、彗星帝国ではヤマトに勝てまい」と、同盟国である筈のガトランティスとそろそろ見切りをつけようとしていた。
実は、ガミラスと彗星帝国とはある因縁があった。
それはガミラスがまだ大マゼラン星雲で覇を唱えていた時、小マゼラン星雲からマゼラン星雲へと侵入した彗星帝国軍と何度も衝突していた。
ガミラス側の討伐指揮官は、ガミラスの英雄で七色星団に戦死を遂げたエルク・ドメル将軍だった。
ドメルの電撃戦で彗星帝国軍は幾度も侵略に失敗している戦歴があり、彗星帝国では、そのガミラスの国家元首であるデスラーを快く思う者が居る筈が無かったが、彗星帝国の国家元首であるズォーダー大帝は武人としてデスラーの勇猛さと指導者としてのカリスマ性を評価していた。
その結果、デスラーは彗星帝国の軍上層部や政府上層部から煙たがられていた。
しかし、デスラー本人はその事を自覚しており、ヤマトに対して復

讐できるのであれば、誰とでも手は組んでも良いとその時は思っていた。
そしてデスラーは幽閉されてもなお、ヤマトへの復讐を諦めておらず、機会が来るのを待った・・・・。

此処で時系列は少し過去に遡る。
デスラーがヒアデスの灯台星系でヤマトと戦っている時、テレザート宙域に展開していたゴーランド提督は非常に不機嫌であった。
気流星団での演習宙域からヤマト討伐にかかろうとした時、ズォーダー大帝からの突然の異動命令でテレザート星に着いたゴーランドはデスラーの指揮下に着くように言われた。
テレザート方面軍の総司令官とはデスラーの事だったのだ。
彗星帝国の提督と言う地位でありながら異星人であるデスラーの指揮下につくという事は、ゴーランドにとって余りにも屈辱的な事であった。
しかし、大帝御自らの命令では従わない訳にはいかず、ゴーランドは渋々デスラーの指揮下に入ったが、そのデスラー本人があまりゴーランドの事を信用もしていなければ、期待もしていない様子で、その事でゴーランドの不快指数は益々募るばかりであった。
そんな中、デスラーがヒアデス方面へ出撃しゴーランドにはテレザート宙域での待機命令が出された。
ゴーランドはこのウサを晴らす為、艦隊の一部をテレザート宙域に残し自らは直掩艦隊を率いてテレザート宙域の近くで見つけた恐竜惑星へとハンティングに向かった。
恐竜惑星近海へと到着したゴーランドは艦に搭載されていた小型艇に乗り恐竜惑星へと向かった。
そして、恐竜惑星に小型艇で降り立ったゴーランド一行。
そのゴーランド一行に興味があるのか、または自分たちの縄張りを荒らしにきた敵対者だと思ったのか恐竜たちがゴーランドの傍に寄って来た。
ゴーランドはそんな恐竜たちに対して愛用している狩猟用の大型

連装式レーザーライフルで恐竜たちを次々と撃ち始めた。
レーザーライフルの銃撃を受けて、断末魔の悲鳴を上げながら絶命していく恐竜たち。
「ふぅーすっきりしたぜ」
「いつもながらお見事な腕前です。提督」
自分の近くに居た恐竜たちを狩りまくり、ウサを晴らしたゴーランドは満足そうな表情で小型艇に乗り込み自分の指揮する艦へと戻って行った。
しかし、空へと浮かび上がっていくゴーランドの小型艇を見ている人物がいた。
それは時空管理局の自然観察保護官であった。
この恐竜惑星の存在は管理局の方でも既に認知していた。
この星は、ミッドを始めとする近代管理世界では既に絶滅してしまった恐竜を始めとする多くの古代生物が生息しており、更にデバイスや次元航行艦の製造に必要な鉱物資源も多くある事が判明し、管理局は早速この恐竜惑星を自然保護管理世界と認定し、ここに自然観察保護官を赴任させていた。
六課卒業後のキャロやエリオがなった自然観察保護官の主な任務は保護対象の貴重生物達を密猟者から守る事やケガや病気になった古代生物の保護と治療にあり、その日もこの世界に駐在する自然観察保護官は恐竜惑星の彼方此方をパトロールしていた。
すると、ある自然観察保護官は担当のパトロール区域で多数の恐竜の死骸を発見した。
死骸をよく見てみるとその巨体には、レーザーで出来た銃創があり、これはケガや病気、恐竜同士の争いによって死んだのではないとすぐに分かった。
自然観察保護官はこれが人為的なモノでもしかしたら密猟者が近くに居るのではないかと思い辺りを見回すと小型の宇宙船の様な物が空に飛んでいくのを目撃した。
自然観察保護官は急いでこの惑星にある管理局の本部に連絡を入れ、本部はこの惑星の近くを航行している次元航行艦に連絡を入れ

た。

恐竜惑星の近くを航行していたのはクロノ・ハラオウンが艦長を務める次元航行艦クラウディアだった。

此処最近、このヒアデス星団近海では資源物資を輸送している次元航行船が消息不明になる事件が相次いで起き、更に調査・救助に向かった管理局の次元航行艦・それも最新のＸＶ級の次元航行艦が行方不明になる事件が多発しており、管理局では警戒を強めていた。

一番最近になって消息をたった次元航行艦、ノアは、消息を絶つ直前、正体不明の艦隊と遭遇し交戦中と連絡してきた。

管理局の次元航行艦には大口径魔導砲『アルカンシェル』や、少なからぬ小口径速射魔導砲も装備されていたが、それらを使う暇もなく撃破されたものと予想された。

そんな中、恐竜惑星こと、第１０２自然保護管理世界、プレオから密猟者が恐竜を多数殺して、逃亡したと連絡が入った。

一連の次元航行艦、次元航行船の行方不明事件に何か関係があるかもしれないと思ったクロノはプレオにある管理局の支部に連絡を入れると、急いで第１０２自然保護管理世界、プレオへと向かった。

恐竜惑星（プレオ）でのハンティングを終え、自身が将旗を掲げるゴストーク級ミサイル艦　ルーベルグⅢに戻ったゴーランドはテレザートへと帰るのかと思いきや、

「全艦!!戦闘隊形ＦＺ!!」

と、艦船が居ないにも関わらず、率いてきた他のミサイル艦に戦闘態勢をとらせた。

「全艦!!破滅ミサイル発射用意!!目標、恐竜惑星!!」

なんとゴーランドは先程、自分がハンティングを行っていた恐竜惑星に対して、艦首に装備されている超大型ミサイルである『破滅ミサイル』を撃ち込もうとしていた。

「全艦!!戦闘隊形ＦＺ配置完了!!」

「破滅ミサイル安全装置解除、発射準備良し!!」

「破滅ミサイル発射!!」

ゴーランドの命令の下、ミサイル艦隊からは二十数発の破滅ミサイルが恐竜惑星へと撃ち込まれた。
やがて、恐竜惑星は、何度も爆発を繰り返し、表面に幾つもの亀裂を作りながら崩壊していき、最終的には眩い閃光と共に宇宙から消え去った。
「見たか?俺の作戦を。間もなくヤマトもああなるのだ。ハハハハハ・・・」
ゴーランドは恐竜惑星を粉々にした破滅ミサイルの威力を見て、勝利を確信したかのように高笑いをした。
破滅ミサイルを撃ち込まれた直後、第１０２自然保護世界プレオの管理局支部はクラウディアに通信を入れた。
「クロノ提督!!プレオから緊急通信です!!」
「なに?!通信回線を開け!!」
「了解」
通信士がプレオからの通信回線を開き、パネルに映像を映すが向こうの通信状況が悪いのか、パネルには砂嵐の様な映像しか映らず、通信を送っている通信員の声も所々飛んでいる。
「・・・・こち・・・・プレ・・・・オ・・・・とつ・・・・ぜん・・・・ミサ・・・・攻撃・・・・受け・・・・惑星・・・・崩壊・・・・しつつ・・・・あり・・・・至急・・・・きゅうえん・・・・もと・・・・救援を!!・・・・求む!!・・・・」
その通信を最後にプレオとは通信が出来なくなった。
「これはっ!?」
「救援を求めているんじゃないですか!?」
クラウディアに研修乗艦している執務官であるフェイト・テスタロッサ・ハラオウンと六課卒業後、フェイトの下で執務補佐官を務めているティアナ・ランスターがクロノに訊ねる。
「事態は一刻も争うって事か・・・」
クロノは焦りで顔を歪めながら言う。
「全速前進!!針路をプレオに向けろ!!」
「了解」

クラウディアは全速でプレオへと向かった。
やがて、プレオのある宙域にクラウディアが到着すると、クルーの目の前には・・・・。
「そ、そんな・・・・」
「プレオが・・・・」
「こ、こんな・・・・」
「一体、何が・・・・」
「ひどい・・・・」
「・・・・」
そこにあるはずだった綺麗な緑と水、古代生物に満ちた惑星（世界）はもはや痕跡すら留めず、宇宙に無数の岩くれが漂うだけだった。
プレオには管理局の自然観察保護官の他、惑星資源開発の作業員や観光スポットとして整備するための開発業の作業員ら数千人の人間がいたのに彼らは自分たちが居た星もろともこの暗黒の虚空に命を散らされた。
「誰が、こんなひどい事を・・・・」
ティアナが痛憤の呻きを漏らし、クロノやフェイトの胸にも抑えがたい憤怒が込み上げていた。
プレオからの最後の通信では、「ミサイル」と言う質量兵器の名前がはっきりと聞こえた。
つまり、そのミサイルを所持していた者とプレオで、恐竜を密漁していた者は同一人物と推察され、クロノ達管理局の中では敵であるのだと認識された。
クロノは早速、プレオの事を管理局、本局の次元航行艦隊司令部に伝えた。
クラウディアからの報告を聞いた司令部の幕僚たちの驚愕は計り知れなかった。
直ちにクロノの下には犯人の捜索と可能ならば首謀者を逮捕するよう命令が下された。
しかし、現状では敵が何者なのか分からない。
まずは敵の正体を掴まなければならないが、質量兵器を多数搭載す

る艦艇を多く擁する武装勢力など、管理局至上初の事ではないかと思うフェイトとティアナであった。
ヒアデス星団を調査して早数日が経過したが、未だに敵の正体も手掛かりもつかめないままの状況が続いた。
「周辺空域に異常はないか？」
「ありません」
「そうか・・・」
クロノがブリッジで周囲の状況をオペレーターに訊ねるが、何の変化もない安全な航海が続いていた。
本来ならば喜ぶべき事なのだが、それは今の所何の成果がない事を物語っていた。
「せめて、敵の正体だけでも掴まないとな」
クロノには焦りの色が窺えた。
大勢の同僚や貴重な古代生物、鉱物資源がなす術無く無残に殺され、破壊されて失われたのだ。
彼らやその家族の為にも必ず首謀者を逮捕する。
その為にもまずはその首謀者を見つけてその正体を知らなければならない。
そんな焦りがクロノにはあった。
「艦長、間もなく第１３２管理外世界テレザートに近づきます」
クラウディアは何事もなく、プレオに隣接する惑星、第１３２管理外世界テレザートに接近しつつあった。
第１３２管理外世界、テレザート・・・此処にはおよそ十年前まで、ミッドをも凌ぐ高度な文明が存在しており、次元航行手段を手中にするのも間近と言われていた為、管理局はコンタクトをとるタイミングを測っていた。
もちろん、コンタクトが成功したらこの世界を管理世界入りさせる魂胆が管理局にあったのは、クロノを始めとするクラウディアのクルーたちは知らない。
恐らく高度に発達した科学技術をロストギアだとか質量兵器所持だとかで難癖をつけて、無理矢理管理世界入りをさせる計画だったの

だろう。
しかし、管理局がこの世界を管理世界入りさせる前にこの世界で大規模な内戦が発生した。
管理局はその事態をコレ幸いと思い、内戦終結後に「戦災復興」を名目にテレザートを管理世界へ編入させようと準備を進めた。
だが、管理局の思惑と違い、テレザートの内戦は次第にエスカレートした揚げ句、住民の全てが死亡してしまい、テレザートの文明は完全に滅んでしまった。
その報告を受けた管理局は住民が死んでしまっては管理世界に編入させても意味は無いと判断し以後テレザートはそのまま放置された。
ただテレザートが滅んだ直後、まだ廃墟には多くのロストギアが眠っているのではないかと言われ、遺跡発掘を生業とするスクライア一族がテレザートへと派遣され、現地をくまなく調査したが、あまりにも激しい内戦だった為か目ぼしいロストギアの類は一切見つからなかったと言う事実も管理局がテレザートを放置する要因の一つでもあった。
「操舵手、気を付けて進め。この辺は艦船のエネルギーを吸収するバキューム鉱石が多いからな」
「了解」
クロノは操舵手に細心の注意を払いながら操艦に努める様に指示する。
この辺りには詳しい原理や構造は分からないが艦船のエネルギーを吸い取る特殊な宇宙鉱石が多い。
その為、むやみやたらに動き回るとその宇宙鉱石にエネルギーを吸い尽くされ、航行不能に陥ってしまう。
それは魔導エネルギーで動いている管理局の次元航行艦も例外ではない。
クラウディアはゆっくりではあるが慎重にそして確実にバキューム鉱石の影響を受けることなく、テレザートへと近づいていた。
やがてテレザートの傍に来た時、クラウディアのレーダーが艦船ら

しき反応をキャッチした。
「艦長、本艦の位置から丁度、テレザートを挟んだ反対側に多数の艦船らしき反応があります！」
「なにっ!?　よし、慎重に近づいて解析するぞ！」
　オペレーターの報告を受け、クロノが指示を下した。
「ビンゴ・・・・かな？」
「そうあってほしいがね」
　クラウディアは注意深く、テレザートの反対側が望める位置に移動する。
　すると、すぐさまオペレーターが解析にかかり、ほどなく結果が報告された。
「エネルギー反応を二ヶ所で確認。テレザート付近で約三十隻を確認、いずれも大型艦です。さらに付近のアステロイド帯の中にも一つ反応があります。距離があるので詳しくはわかりませんが、此方も大型艦の模様！　それもかなりの高速で互いに接近しています！いずれの艦船もエネルギー反応は強大で、我々（管理局）が保有する次元航行艦の動力エネルギーを凌いでいます！」
「そんな・・・・」
「バカなっ!?」
「映像に出せるか？」
「手前の艦隊ならば。なんとか投影出来ます」
「よし、ただちにパネルに投影」
「了解」
　そしてパネルには白と黄緑を基調とし、艦の全体をまるでハリネズミの様にミサイルで武装した艦隊の姿が投影された。
「な、なんだ!?あれは!?」
「全身をミサイルで固めている・・・・」
「艦首には超大型ミサイルらしき突起物が二本・・・プレオを破壊した事と言い、一連の輸送船や次元航行艦襲撃の犯人は恐らくこの艦隊だろうな・・・ギリギリまで接近しろ・・・ただしいつでも次元転移出来る用意だけはしておけ・・・」

「了解」
クロノが怒気を含んだ口調で命令を下す。
人一倍正義感が強いフェイトも拳を固く握り締めた。
何としても彼らを逮捕したい・・・・。
しかし、余りにも数が違い過ぎる上、向こうは全身をハリネズミのようにミサイルで武装した戦闘艦。
一方、こちらはあくまで調査母艦的な艦船でまともに渡り会えるとは思えない。
この場に血気盛んな管理世界拡大派の局員がいれば、「あの艦隊に向けてアルカンシェルを撃ち込め!!」なんて言いそうだが、そんな事をすれば、何隻かは撃沈できるだろうが、その後は残存艦によるミサイルの雨霰の報復を受け、あっという間に此方が撃沈されるだろう。
そう考えると、この場に血気盛んな管理世界拡大・拡張派の局員が居なくて良かったと思う。
それと同時に、今の自分たちには、何も出来ないのだと自分たちの無力さを思い知った。
「それにしても、あのアステロイドに居る艦・早く、あそこを出なければ、バキューム鉱石にエネルギーを吸い尽くされてしまうぞ」
クロノがアステロイドに居る艦に対して呟いた。
あのアステロイドを構成するのは例のバキューム鉱石だったのだ。
「アステロイド帯に居る艦のエネルギー反応がどんどん下がっています!!」
「やはり、バキューム鉱石にエネルギーを吸い取られたか!!映像をまわせるか?」
「先程より、距離を縮めたので何とか・・・・」
オペレーターがアステロイドから出てきた艦の姿もパネルに投影すると、その艦はどういう訳か、艦の外側にバキューム鉱石を目一杯付着させた状態だった。
「い、一体何を考えているんだ?あの艦の乗員は!?あれでは、バキューム鉱石にエネルギーを吸い取ってくれと言っている様なものではないか!!」

と、クロノは呆れる様に言う。
やがて、ミサイル艦隊にも動きが現れた。
「手前のミサイル艦隊攻撃態勢をとりました!!」
オペレーターの報告を受け、クラウディアのブリッジ内に緊張が走る。
「ミサイル艦隊、ミサイルを一斉に発射しました。目標は恐らくバキューム鉱石を付着させた艦です!!」
オペレーターが緊迫した声を上げた。
無数の中小型ミサイルが奥にいる艦船を見舞う。
((逃げて!!))
と、フェイトとティアナは心の中で、ミサイルの雨に見舞われる船の無事を祈った。
「ミサイル、着弾します!」
「やはり、エネルギーを吸い尽くされて身動きが出来ないのか・・・」
誰もがあの艦が撃沈されると思った中、クラウディアのクルーたちは信じられない光景を目の当たりにした。
なんと、艦の周りを覆っていたバキューム鉱石がまるで意志を持っているかのように、張り付いていた艦から離れ、艦の周りをリング状にグルグルと回転し始めた。
そして接近してくる多数のミサイルをまるで、はたき落とすかのように動き回ったのだ。
やがて、ミサイルの第一波攻撃が終わると、そこには無傷の戦艦の姿があった。
あの回転したバキューム鉱石が全てのミサイルを叩き落したのだ。
その艦影は水上艦船を意識した造りで高く塔の様に聳える艦橋らしき構造物に煙突。
さらには、昔、地球の戦艦が使っていたであろう古めかしい砲身を持つ砲塔らしき兵装を装備した艦の姿がそこにあった。
「あ、あれだけの数のミサイルを全部叩き落したって言うの!?」
「信じられない・・・」
フェイトとティアナはさっき見た光景が未だに信じられず唖然と

していた。
「バカな!?」
突然オペレーターが声をあげる。
「どうした?」
「あの艦のエネルギーが回復しているんです。さっきまでバキューム鉱石によって、エネルギーを吸い尽くされる寸前だったのに・・・」
クロノが確認のため、エネルギー計測機を見ると、確かに先程までエネルギーが枯渇寸前だった戦艦のエネルギーが一瞬にして回復している。
あのバキューム鉱石の動きといい、瞬時にエネルギーを回復させた事と言い、分からないことだらけだった。
「ああっ!!」
またもオペレーターが声をあげる。
「今度はどうした!?」
「ミサイル艦から例の超大型ミサイルが発射されました!」
「なに!?」
プレオを破壊したと思われる例の超大型ミサイル（破滅ミサイル）があの戦艦へと発射された。
オペレーターの声に思わずモニターを見た。
「あのミサイルがプレオを・・・」
ティアナが嫌悪感も露わに呟く。
あれだけの大型ミサイルの飽和攻撃なら、プレオが消滅してもおかしくはないだろう。
第一波攻撃をバキューム鉱石の謎の動きで損害を受けなかったように見えたあの艦だが、今度はそのバキューム鉱石を周りに付着させていない。
さすがにあれだけのミサイル相手では持ちこたえられないだろう。
「何をしている!?逃げろ!」
思わずあの艦に向けるようにクロノが叫んだが、オペレーターからの報告は予想を完全に覆す内容だった。
「奥の艦のエネルギー反応が急激に増加!!エネルギー観測のゲージが

振り切れました！」
「何⁉」
急激なエネルギー増大、つまり何らかの超高エネルギー砲による攻撃だろう。
そしてクラウディアは今、ミサイル艦隊の真後ろにいる。
「いけない、クロノ!!」
「わかっている!!艦首下げろ!!スラスターがいかれてもいい！かわせっ!!」
クラウディアは急ぎ艦首を下に向けた。
直後、あの艦がいるあたりで眩い閃光が走ったかと思うと、膨大な光の柱が襲いかかって来た。
次の瞬間、艦尾部に大きな衝撃を受け艦全体が大きく震えた。
「うわぁぁぁぁぁー!!」
「きゃぁぁぁぁぁー!!」
「くっ、被害報告急げ!!」
「艦尾損傷!!第二装甲板までが剥離または損傷を受けました!!」
「第１５ブロックにて火災発生!!」
「推進力低下!!スラスターも上手く作動しません!!」
「消火と応急修理急げ!!」
被害報告を聞き、クロノは直ぐに指示を出していく。
クラウディアの損傷は小さくなかったが、次元転移は可能だ。
そこで、クラウディアは現宙域からの撤退をすることに決めた。
艦が万全の状態でもあの艦とやり合えるわけないのに損傷した状態であの場にいるのは危険と判断したのだ。
もし、あの艦が此方を敵と認識したらひとたまりもない。
「あのミサイル艦隊はどうなったの？」
フェイトがオペレーターに訊ねると、
「・・・い、一隻残らず消滅しました・・・空間転移の形跡も・・ありません・・・・」
「・・・・」
オペレーターからは信じられない報告が返ってきた。

「あれだけの艦隊をたったの一撃で消滅させたというのか!?あの艦は・・・」
「そんなっ!?」
「信じられない・・・」
クロノも信じられない口調だ。
事実ならば、先程あの艦が撃ったエネルギー砲はアルカンシェルとは比較にならない程の威力を持つ文字どおりの大量破壊殺戮兵器だ。
「全速で現空間を離脱、一番近い支部は?」
「第17管理世界です」
「よし、では、そこの支部に連絡。受け入れと修理体制をとって貰え」
「了解」
クラウディアが撤退を行っている中、
「艦長、あの艦は危険過ぎます!ご覧になられたでしょう?あの艦の砲撃の威力を!?ここは、直ちにあの艦に停船命令を出し、その上臨検するべきではありませんか!?それにノアもあの艦に撃沈された可能性があるかもしれませんのに!!」
一人の若い士官がミサイル艦隊を葬り去ったあの艦への臨検を主張するが、ブリッジの空気は冷ややかだ。
この士官は、ミサイル艦隊は数が多いため、奇襲する様な形でアルカンシェルを撃ち込もうと進言しなかったが、今は一対一。
数の内では互角でクラウディアが負けることは無いと思ったのだろう。
ティアナに至っては「何、寝言ほざいているの?このバカは?アンタ、そんなに死にたいの?」
と、口を開けばそんな事を言いそうなくらいの呆れ顔をしている。
「あれだけの艦隊を一瞬の間に消滅させた艦だ。それにあの超エネルギー砲の矛先がこちらに向いたらどうなるか、それぐらい君にも十分わかると思うが?」
クロノ自身も少し呆れた口調で言っている。
「あの艦はきっとあのエネルギー砲以外にも飛び道具は持っていると思う・・。それにクラウディアは今傷ついて、怪我人も出ている。ここ

は、船の修理を優先しましょう。ねっ？」
フェイトが宥めるような口調で言う。
「わ、わかりました・・・出過ぎたことを言い申し訳ありません」
「わかってくれたなら、それでいい。修理が済み次第またここに戻るが念の為、データ収集ポッドを置いていく」
クロノの指示でデータ収集用ポッドを置き、クラウディアはテレザート宙域を後にした。

第１７管理世界へ向かっている途中、休憩室にてクロノとフェイトは休憩していたのが不意に、
「今にしてみると、少しもったいないことをしてしまったかな？」
「何が？」
お茶（リンディ茶にあらず）を口にしながらクロノが残念そうに呟いた。
「ミサイル艦隊を一掃したあの艦の事さ・・臨検ではなく、一船乗りとして、あの艦の乗組員と話をしてみたかったよ」
「そうだね。でも仕方ないよ」
フェイト自身もクロノと同じ思いを抱いていた。
同じ武装をしている艦でもミサイル艦隊はともかく、あの艦にはなぜかさほどの不安は感じなかった。
むしろ、『どこかで見た様な・・・』と言う懐かしさもあった。
そう思うと、あの艦にノアが撃沈されたと思うのはいささか早急すぎる憶測だ。
憶測のままあの艦を拿捕しようとすれば、あのミサイル艦隊を消滅させたあの超エネルギー砲が自分たちに向けられるかもしれないと思うと少し背筋が寒くなる。
あの艦とコンタクトは取れなかったが、消滅したミサイル艦隊の隊内通信の傍受には成功しており、第１７管理世界についたらそこの支部で解析して貰う予定だ。
その後の解析結果で分かった事は、ミサイル艦隊はあの艦が発射した超高エネルギー砲撃で全滅したと確認された。

また、ミサイル艦隊内の通信の中に、何度となく『ヤマト』という単語が出ていたことも判明した。
流石にあのミサイル艦隊の乗員の悲痛な最後の叫び等は聞くに堪えられないので、解析を行った技術官の行為で、通信内容は紙に書かれて手渡された。
フェイトはジッと紙に書かれた『ヤマト』と言う部分を見ていた。
（ヤマト？）
一時期地球に住んでいたフェイトにはその言葉と発音は何度か耳にした事がある。
（あの艦はヤマトと言うの？）
しかし、フェイトが知る今の地球にあれ程の強力な宇宙戦闘艦を建造する技術などは存在しない。
これはどういう事なのだろうか？
たまたま日本語の『ヤマト』という発音に聞こえただけなのだろうか？
それとも明確に『ヤマト』と発音したのだろうか？
フェイトがその答えを知るのはもう少し時間が経ってからの事だった。

二十四話　テレザートのテレサ

ドメル戦法と共にヤマトの前に立ちはだかって来たのは、かつてヤマトとの死闘により死んだ筈のガミラスの総統、アベルト・デスラーだった。
デスラーの巧妙な作戦に危機に陥ったヤマト。
だがデスラーは突如、作戦を中止して艦隊を率いていずこへともなく撤退していった。
そしてヤマトは遂にテレザート星の位置を掴んだ。
テレザート・・・そこにはメッセージを送って来た謎の女性、テレサが待っている。
管理局が管理する星(世界)の一つを葬り去った謎のミサイル艦隊。
そのミサイル艦隊を一瞬のうちに葬り去った謎の戦艦。
様々な出会いが此処、テレザートで起ころうとしているのだった。

ここで、場面は管理局の次元航行艦クラウディアから宇宙戦艦ヤマトへと移す。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
ヤマトはテレザートの前に広がるアステロイド帯へと突入した。
序盤何事もなく進んでいたヤマトであったが、古代がヤマトの速度に違和感を覚え始めた。
「島、アステロイド帯に入ってから速度が落ちているんじゃないか?」
「うん・おかしい・・・徳川機関長、エンジンに異常はありませんか?エネルギーが徐々に落ち込んでいるんですが・・・」
ヤマトの速度の異常は操艦を行っている島も違和感を覚えていた。
アステロイド帯を航行中とはいえ、ここまで速度を落とした覚えがなくエネルギーメーターに目をやると、メーターの針は徐々に『減』の方へと落ちていく。
そこで、島は機関に何らかの問題が生じたのではないかと、機関長

の徳川に訊ねる。
「そんなはずはないんじゃが・・・機関部!!エンジンチェックせよ!!」
徳川は急ぎ、機関室に連絡をいれた。
「古代、ここは一度引き返した方が良いんじゃないのか?」
真田は古代に一度アステロイド帯から出ようと進言する。
気流星団の時の様に、「知らない間に機関部や艦の彼方此方に大きな損害を出していました」なんてシャレにもならない。
「しかし・・・・」
古代はここまで来て、引き返すのは・・・と、真田の意見に消極的だった。
「このまま突っ切った方が早いよ、古代。テレザート星は目の前なんだよ」
島の方も古代も近い意見で、ここで引き返すよりも突っ切る方が良いと意見する。
「・・・・」
古代が真田と島の意見、どちらを採用するべきが、悩んでいると、
「航海長、メインエンジン、補助エンジン、共に異常は見られないそうだ」
と、エンジンチェックが終わりどこにも異常が無かったことを徳川が島に伝える。
如何やら今回は気流星団の時の様に知らぬ間に機関が損傷していたと言う訳ではないらしい。
しかし、そうすると、疑問が残った。
「おかしいな・・・・」
徳川の報告を聞き、島は首を傾げた。
エンジンの異常が原因でないとすると何故ヤマトの速度が落ち、エネルギーが減ってきたのだろうか?
「真田技師長、隕石の分析が完了しました」
「よし、見せてみろ」
「はっ・・これです・・・・どうぞ・・・・」
そこに新米が真田に周辺の隕石の分析結果が書かれたレポート用

紙を渡す。
新米は真田に命令され、この周辺の隕石の成分を調べていた。
何か、有用な金属資源があるかもしれないと思われていたからだ。
「・・・・むっ!?・・・・これはっ!?」
真田はレポート用紙を見て声をあげる。
「古代、エネルギー減少の原因がわかったぞ!!この隕石群にエネルギーを吸い取られているんだ!!」
「えっ!?」
真田の言葉に古代は思わず、裏返った声をだす。
隕石が戦艦のエネルギーを吸い取る？
そんな馬鹿な事があるのかと、
「この辺りの隕石は全てバキューム鉱石で構成されているんだ。艦の推進エネルギーを吸い取っていく特殊な鉱石だ」
「なんてことだ・・・・」
天才科学者である真田が言うのだから、間違いはないだろう。
そこへ、
「未確認飛行物体確認!!」
レーダーがヤマトに接近してくる未確認飛行物体を捕捉した。
「くそっ、こんな時に!!パネルにまわせ!!」
パネルには先日気流星団の出口付近で撃破したミサイル艦隊と同型の艦の姿が多数映し出されていた。
「これは!?あのミサイル艦隊・・・・まだ残っていたのか・・・・」
「いや、待て。あの先頭の艦・・・・今まで遭遇して来たモノと同型だが、他のミサイル艦と比べると、より大型の艦だぞ!!」
「大将のお出ましってわけか・・・・」
古代は気流星団出口で撃破したミサイル艦隊の残存艦だと思ったがその推測は残念ながら外れていた。
真田が指摘した通り、形状は周りのミサイル艦と同型だが明らかに一隻だけ他のミサイル艦よりも一回り以上大型のミサイル艦が居た。
それは、遠近法とかの見間違いなどではなく、確かに存在した。
南部の言う通り、この艦隊の方が主力でむしろ、気流星団で撃破し

たミサイル艦隊の方がこの艦隊の前衛艦隊だったのだ。

彗星帝国軍第一戦闘艦隊、特殊ミサイル艇師団　旗艦　ミサイル艦
ルーベルグⅢ　艦橋

「ふっふっふっふ・・・ようやく来たかヤマト。さあ、来い!!このわしが沈めてやるわ!!」

ヤマトを捕捉したゴーランドは自らが座乗する大型ミサイル艦ルーベルグⅢの艦橋で覇気が満ちた様子で指示を出す。

「全艦ミサイル発射!!」

まずは小手調べと言った感じで、艦体にハリネズミの様に装備されているミサイルをヤマトに向けて放った。

敵艦のミサイルの発射は、ヤマトでも捕捉していた。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋

「敵艦より、長距離ミサイルらしきモノが発射されました」

「なに!?島、回避しろ!!」

「無茶を言うな古代!!このバキューム鉱石の中では思うように身動きが出来ないんだぞ」

島の言う通り、今、ここでむやみに動けばバキューム鉱石からエネルギーを吸い取られ、いずれは航行不能に陥ってしまう。

そんな中、

「古代!!反重力感応機を使うんだ!!」

と、真田が言い放った。

「反重力感応機と言うと、隕石や小惑星に撃ち込んでヤマトに引き寄せるアレですか?防御用アステロイドリングを形成する為の・・・ですが、真田さんアステロイドリングを作れば敵の攻撃は防げます。しかし、引き付けたバキューム鉱石から今以上にエネルギーを吸い取られてしまうんじゃあ・・・」

古代の言っている事はまさしく正論であった。

しかし、

「古代、今は敵の攻撃を少しでも防がなければならない時だ。俺を信

じろ!!」
　真田には何か策がある様子だった。
「わかりました」
　古代は真田の言葉を信じ、反重力感応機を射出、ヤマトの周りにはバキューム鉱石で作られたアステロイドリングが出来上がった。
　アステロイドリングはヤマトに接近するミサイルを全て叩き落とし、ヤマトは何とか敵のミサイル攻撃を耐え凌いだ。
　しかし、
「くそ、推進力がますます落ち込んでいく・・・・」
　バキューム鉱石を張り付けた反動でヤマトのエネルギーは減少の一途を辿る。
「古代、このままじゃ、エネルギー切れを起こして航行できなくなっちまうぞ!!」
「真田さん・・・・」
「・・・・そろそろいいだろう。古代、リングを解除しろ」
　焦る島と古代とは裏腹に真田は至って冷静だった。
「えっ!?」
「解除するんだ!!そうしてからアステロイド帯より脱出し、敵に攻撃を仕掛けろ!!」
「しかし、エネルギーが減少していて、とても・・・・」
「『俺を信じろ』と言っただろう?古代、大丈夫だ。波動砲だって使える筈だ」
　真田の言葉通り、リングを解除したその瞬間、減少していたエネルギーが徐々に回復し始めた。
　エネルギーが回復したヤマトは一気にアステロイド帯から脱出した。

　彗星帝国軍第一戦闘艦隊、特殊ミサイル艇師団　旗艦　ミサイル艦ルーベルグⅢ　艦橋
「ヤマト、推力吸収隕石（バキューム鉱石）群を突破してきます!!」
「あの隕石群の中を、まともにエネルギーを維持して抜けられる艦な

ど存在しません。恐らくヤマトは我々の前にフラフラの状態で現れるでしょう」
バキューム鉱石のアステロイド帯から出たヤマトを見たゴーランドは、
「うむ・・・よし、破滅ミサイルのロックを解除しろ!!」
いよいよ切り札である艦首破滅ミサイルの発射準備に取り掛かった。
「全艦!!戦闘隊形ＦＺ配置完了!!」
「破滅ミサイル発射準備!!」
「破滅ミサイル安全装置解除、発射準備良し!!」
「破滅ミサイル発射!!」
ゴーランドのミサイル艦隊からは、恐竜惑星プレオを破壊した超大型ミサイルがヤマトに向けて発射された。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
「ミサイル接近します!!」
「なんとでかいミサイルじゃ・・・・」
破滅ミサイルの大きさを見て、ヤマトの乗員たちの誰もがその大きさに驚愕した。
あのバカでかいミサイルを一発でも食らえば、流石のヤマトはひとたまりもない。
相手が切り札を出してきたなら此方も切り札を出すまでだ。
「波動砲発射用意!!ターゲットスコープオープン!電影クロスゲージ明度２０」
「タキオン粒子出力上昇」
「最終安全装置解除!!発射１０秒前！　対ショック・対閃光防御！」
艦橋要員は波動砲の発射の際、起こる閃光から目を保護するために、保護用のゴーグルをかける。
「・・・5・・4・・3・・2・・1・・・・波動砲、発射!!」
古代はスコープを睨みながら、波動砲のトリガー（引き金）を引いた。

その瞬間、艦首の発射口から眩い光と共に波動砲が発射された。
ヤマトから放たれた波動砲はまず迫りくる破滅ミサイルを飲み込み、次にゴーランド艦隊へと襲いかかる。

彗星帝国軍第一戦闘艦隊、特殊ミサイル艇師団　旗艦　ミサイル艦ルーベルグⅢ　艦橋
「ぬぉ!!ば、バカな!!」
ゴーランドは自身に迫る閃光と破壊されてゆく破滅ミサイル、そして味方艦を見て、目の前の現実が信じられなかった。
「か、回避!!」
「だ、ダメです!!間に合いません!!」
「ぬわぁぁぁぁぁぁぁー!!」
断末魔の叫びを最後に、ルーベルグⅢを含むゴーランド艦隊は宇宙から消滅した。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
ゴーランド艦隊を倒した後、
「どうして減少していたエネルギーが・・・・?」
島が突然のエネルギー回復の謎を口にする。
「エネルギーが回復しなければヤマトは今頃・・・・」
古代はエネルギーが枯渇したままの状態のヤマトの現在を想像した。
その結果はどう見ても、宇宙から消滅していたのは自分たちの方だったのは明白である。
「こんなこともあろうかと、アステロイドリングにエネルギー吸収装置をセットしておいたんだ」
真田がエネルギー回復のタネを教える。
「どういうことです?」
「つまりこういうことだ・・・・リングで相手の攻撃をさけつつ、エネルギーを吸い取る隕石から、ヤマトの中に逆にエネルギーを移し込んでいたんだ」

「そうだったんですか・・・ありがとうございます。真田さん」
「なあに、技師長として当然の事をしたまでだ」
古代はヤマトを救った真田に礼を述べた。
テレザート宙域を守備するゴーランド艦隊を葬ったヤマトはようやくテレザートへと着いた。
すると、テレザート星表面に青いドレスらしい服をまとたった若い女性が、祈るような姿勢で浮かび上がった。
「古代、アレを見ろ!!」
操艦をしていた島がいち早く女性の存在を見つけた。
「テレサだ!!」
「あの人が・・・・」
「私はテレサ・・・・私の居る所は・・・・惑星・・テレザートの・・・・重力砦・・・・鍾乳洞の・・・・奥・・・・・私は・・・・たった一人で・・・・・」
テレサと名乗る女性の姿はその言葉を伝えると、スゥーッと消えた。
「事態は急を要するらしい」
ヤマトは全速でテレザートへ向かい、早速着陸準備を開始した。
だが、テレザートの周辺をあれだけの艦隊で警備していて、肝心のテレザート本星にまったく守備隊が居ないと言う訳もなく、テレザート本星には、彗星帝国ガトランティス軍のザバイバル将軍率いる陸上部隊がいた。
地上部隊はまず、基地に配備されていた飛行場から迎撃戦闘機のT―2を発進させた。
T―2はコックピット両脇の四門のフェーザー機関砲と、主翼前縁部の八門の光体機関砲、大型ミサイル発射管を三門装備した戦闘機で、コスモタイガー同様、戦闘機にも対艦用の攻撃機にもなる戦闘機だった。
T―2の接近はヤマトのレーダーでも探知し、ヤマトの方もコスモタイガーを発進させ、迎撃にあたった。
続いて敵の陸上部隊は、かつて、冥王星に配備されていたガミラス

の反射衛星砲に匹敵する長距離砲台とミサイルによる攻撃を行ってきた。
古代は斎藤率いる空間騎兵隊を地上まで降下させ、敵基地の制圧を要請した。
斎藤以下空間騎兵隊の隊員たちは、第十一番惑星での借りを返す時が来たので、皆は気合い、士気共に十分だった。
斎藤達空間騎兵隊が地上基地を制圧している間、ヤマトはテレザートの宙（そら）で戦った。
テレザート星で行われたこの艦載機戦でヤマトは、少なからずの未帰還機と数機の被弾機を出したが敵のT―2を全て撃墜した。
宙（そら）での戦闘が終わった頃、斎藤から通信が入った。
砲台基地の制圧には成功したが、敵は今度、大戦車部隊で応戦してきたので、多弾砲塔の要請を受けた。
古代、真田、アナライザーは組み立て式の多弾砲塔をテレザートへと運びこれにより、ザバイバル将軍率いる戦車部隊を壊滅させた。
ザバイバルは味方の戦車部隊が壊滅したのを見て戦意を喪失し撤退を図るがそこを斎藤が追撃した。
やがて、斎藤はザバイバルに追いつき、二人の部隊長はテレザートの地表で一騎打ちを行った。
その結果、ザバイバルは斎藤によって討ち取られた。
ようやく敵部隊を完全に制圧した古代たちはテレサの待つ、鍾乳洞へと向かった。
「すっかり廃墟とし化しているけど、すごい巨大都市だ・・・」
古代はテレザートの廃墟を見渡しながら呟く。
「規模も凄いが、かつては現在の地球よりも進んだ文明があったにちがいない」
「どうしてこんな廃墟になっちまったんだ？」
「この徹底した破壊ぶりは戦争が原因としか考えられんな」
斎藤の疑問に真田は廃墟の破壊具合からテレザートが滅んだ原因を推察する。
「戦争・・・いつ頃のことなんでしょうか？」

「もっとしっかり分析・調査してみないと、はっきりした事は言えんが、それほど遠くない過去と思う」
「我々が戦ってきた相手に攻撃されたと言う事ではないのですね？」
古代はテレザートが滅んだ原因が戦争によるもので、もしかしたら、その相手が彗星帝国なのかもしれないと思い真田に問うが、どうやら真田の見解では違う様だ。
「テレザート星世界の最終戦争だったのかもしれねぇぜ」
「文明がいくら高度に発達しても、それに伴って人間の精神も進歩しない限り、最終戦争の危険は常にあると言う事だ」
テレザートの廃墟を歩きながら、人間論について語っていると、ようやくテレサが居ると思われる鍾乳洞へと着いた。
しかし、その鍾乳洞の中にも敵が潜んでいた。
暗い鍾乳洞、氷柱の様な岩肌の障害物、そこに潜む敵兵。
それらの障害をかいくぐり、ようやく古代たちはテレサの下へと着いた。
互いに名を名乗ると、テレサはその場に島が居ない事に少しがっかりした様子で、島は来るのを待つと言う。
テレサと島は何度も通信を行ってきた仲であったのだ。
そして、島が来ると、早速テレサは例の白色彗星について説明をした。
テレサの話によれば、あの白色彗星はただの彗星ではなく、宇宙を巡り軌道上の有人惑星を侵略、植民地化して全宇宙を我が物にしようとする彗星帝国であり、あの白い火の玉の様な高速中性子の嵐と高圧ガスの中に人口の帝国がある事、そして、彼らの目的が地球である事、あと四日でこのテレザートに向かっている事を話した。
しかし、テレサにもあの彗星帝国の弱点までは知らなかった。
だが、所詮は人間が作った物、どこかに必ず弱点があると言った。
テレサの話はそこまでだった。
話が終わった後、古代、真田、斎藤は帰ったが、テレサは島に残ってほしいと言う。
残った島はテレサからある秘密を教えられた。

その秘密は、なんとこのテレザートを滅ぼしたのは自分(テレサ)なのだと島に打ち明けた。
彼女の祈りの力は反物質を操る力があり、彼女はテレザートで繰り広げられる戦争を悲観し、早期の終戦を祈ったが、逆にその祈りがテレザートを滅ぼす結果となり、彼女が望んだ終戦は違う形で訪れた。
それ以降、彼女はこの力を使う事に深い悲しみを抱き、もう二度と使わないと自身に決めた。
そして、白色彗星側にも地球側にも味方にならないと言い残し、テレサはテレザートに残ると言った。

テレサからの情報は全て超収束タキオン通信で地球へと送られた。
地球の方では当初、白色彗星と一連の侵略者はなんの関わりもないと思われてきたが、テレサの情報により、彗星と侵略者が関連している事が判明してその事実は連邦政府と防衛軍上層部を驚愕させた。
藤堂は早速対策をたてるべく、艦隊総司令の土方と白色彗星の動きを観測していた天体観測所の倉田博士を呼んだ。
そして彗星帝国と交戦経験のある良馬も呼ばれた。
「倉田博士、白色彗星の地球到達まであと１００日と言うのは間違いありませんか?」
藤堂は彗星を観測していた倉田に確認をとる。
「はい。私の観測に間違いがなければですが・・・」
「うむ、現有の戦力で対処は可能かね?土方君?」
「いや、アンドロメダ級戦艦が少なくともあと五隻は必要です」
「建造ペースは早めているが・・・はたして間に合うだろうか・・・」
現在、地球は軍の要請を受け、南部重工、月村造船の宇宙艦建造ドックでは、昼夜問わず、交代制で戦闘艦の建造を急いでいた。
土方の提言により、アンドロメダ級の量産も始まったが、二番艦の建造が今、四割強から五割、更にアンドロメダ級を凌ぐアンドロメダ・改級の戦艦の建造も並行して行われており、土方の言うアンドロメダ級の量産が間に合うのか藤堂には少し焦りがあった。
地球には建造に必要な宇宙金属が足りないのもその理由の一つで

あった。
次に敵の艦船についての検討となった。
その件については、敵艦を鹵獲した良馬が説明を行った。
第十一番惑星で鹵獲した空母と駆逐艦は良馬の実家である月村グループの月村造船へと運ばれ調査が行われた為である。
「調査にあたった技師の話では、敵の艦船は非常に高い技術力のもとに建造されており、砲撃の連射性能は防衛軍やガミラスを凌いでいます。更に敵の装甲板ですが、地球や太陽系の惑星にはない、未知の宇宙金属で、この金属は防衛軍が今現在、使用しているタキオンレーダーのタキオン波を吸収しやすく、検証した結果、我々が現在使用しているレーダーには若干映りにくい特性を持っている事が判明しました」
「なるほど、だから金星基地や帰還途中のヤマト、それに第十一番惑星基地の発見と対応が遅れたのか・・・」
「はい。現在、技術開発部でこの装甲板を調査しており、反射しやすい電波の解析とレーダーの開発を急いでいます。次に火星付近で突如、ワープアウトしてきた不明船についてですが・・・」
良馬は彗星帝国の艦船説明の次に今度は管理局の次元航行艦について、説明をした。
「装甲板を調べた結果、あの船は彗星帝国の艦船ではなく、またガミラスの艦船とも違う結果がでました。同一の物で、２１９９年に冥王星海戦での帰還途中に同じく火星付近に突然ワープアウトしてきたあの不明船とも装甲板の材質と作りが一致し、あの二隻の船は同一の星系のモノで間違いありません。それと先日の方の船ですが、破口のエネルギー残量から、彗星帝国の艦船から攻撃を受けたものだと判明しました」
「それで彼らの技術はどれくらいの物なのかね？」
藤堂が次元航行艦の性能を尋ねる。
「機関についてはっきり言える事は、我々防衛軍やガミラスのようなタキオン粒子機関を使用しているのではなく、まったくの未知の機関を使用していることしか現段階ではわかりません。何分、二隻とも肝

心の機関部の損傷が激しいもので解析にはまだ時間が必要です。次に装甲板ですが、防衛艦艇のモノと比べるとかなり薄いです。ですが、あの船のクラスや型式が判明しませんので、楽観的な見解は禁物です」
「うむ」
「現在、搭載されていたメインコンピュターデータの復元を急いでいます」
「その不明艦についての処置は君の方に任せよう」
「はっ」
次元航行艦の処置は良馬に任せられ、再び鹵獲した彗星帝国艦艇の話に移った。
「長官この際、鹵獲した彗星帝国の艦船ですが、技術調査が終了した後は、修理改装して防衛軍艦艇に加えようと思っております」
土方が鹵獲艦船の使用方法を藤堂に提言する。
「艦隊運用の方は土方君に任せてある。好きにするといい」
本格的な防衛ラインや艦隊配置などの細かな設定は行われず、この日は解散となった。
その日の夜、中嶋家にある良馬の部屋で、良馬はギンガを待っていた。
良馬はギンガにどうしても聞きたいことがあったのだ。
やがて、
コン、コン、
と、部屋のドアをノックする音が聞こえた。
「どうぞ」
「こんばんは」
「待っていたよ、ギンガ」
ギンガに部屋にあるイスへ座るように勧め良馬はギンガに紅茶を淹れる。
「実は君に幾つか聞きたいことがあってね」
「聞きたいこと？何でしょう？」
「先日の火星付近での事なんだが・・・」

「・・・・」
　良馬が切り出した火星付近で起きた管理局の次元航行艦救助の事を聞き、ギンガは少し沈んだ顔をする。
「ごめん、嫌な事を思いださせてしまったね。でも、蒸し返すつもりはないのだが、どうしてもギンガ、君に確認し、訊ねたいことがあるんだ」
「大丈夫です。あの事は私なりにもう区切りはつけていますので・・・・」
　ギンガの様子を見ながらも、これから自分は更にギンガに対し、辛い事を訊ねなければならないと思うと、我ながらひどい奴だと思う良馬だった。
「それじゃあ、聞くけど、先日火星付近で遭遇し、救助した艦・・・あれは間違いなく以前、君が所属していた組織、時空管理局の艦で間違いないんだね？」
「はい。あれは間違いなく管理局・・・本局の〝海〟と呼ばれる部隊が正式採用しているＸＶ級の次元航行艦で間違いありません」
「管理局が使用する艦にはどのような種類が有るんだい？」
「大きく分けて二つです」
「二つ？」
「はい。先日私たちが遭遇した次元航行艦と次元巡航艦です。防衛軍の艦船に例えるなら、次元航行艦が戦艦、巡航艦が巡洋艦にあたります」
「空母や駆逐艦、護衛艦は存在しないのか？」
「はい。管理局は戦闘機と言うモノを有しませんから。航空機らしいものは地球でも同じ、ミッドの空を飛ぶ貨客用の飛行機と輸送ヘリぐらいです。管理局は基本的に魔法主義で質量兵器・・・銃刀等の所持は禁止していますから。もちろんビーム兵器も質量兵器に相当します」
「ミッドの人は皆、魔法を使えるの？」
「いえ、むしろ、魔法が使える人の方が少ないかもしれません」
　ギンガの説明を聞き、管理局とギンガの世界、引いては所属してい

た時空管理局について、疑惑を持つ良馬。
魔法が使える人間が少ないにも関わらず、魔法以外の武器の使用を禁止している時空管理局。
それで、魔力を持たぬ大勢の人たちを守る事ができるのであろうか？
魔法が使えると言う特権を優越して、魔法が使えない人からの反乱などを恐れるあまり、魔法以外の武器の保有を禁止しているのではないだろうか？
魔法の力を持たぬ人が多いのならば、その人達に武器が渡れば、魔導師は数において劣勢になる
それにあの艦の乗員の中に紅葉や桜花と同じくらいの少年、少女の遺体も含まれていた。
管理局が、警察か軍隊の様な武装組織ならばその組織が有している艦船ならば、客として乗っていたわけではないだろう。
となれば、管理局は魔法が使えれば、歳など関係なく、危険な任務や仕事に従事させていると言う事になる。
ガミラス戦役時、まだ１８～１９歳の若者を大勢失い、彼らを守る事が出来なかった良馬が言えた事ではないかもしれないが、あまりにも酷い職務体制であり、酷い組織の様にも感じる。
ブラック企業も良い所だ。いや、下手をしたらブラック企業よりも酷いかもしれない。
（昔、八神堂で読んだことのある小説「ゼロの○い魔」の様な世界だな・・・あの小説の作中にも高校生くらいの少年、少女たちが魔法を使えると言う理由で戦場へ送られる場面もあったし・・・それに魔法が使えると言う事だけで貴族と言う特権階級で魔法を使えぬ者を平民と呼び、好き勝手に振舞っていたからな）
ギンガの説明を聞き、良馬は管理局のあり方にますます疑問を感じた。
ギンガから先日遭遇した艦が時空管理局の艦だと確認をした良馬は、ギンガに今回のメインである内容を尋ねた。
「ギンガ」

「はい」
「以前。君に宇宙戦士を続けるか辞めるかを聞いたよね？」
「は、はい」
「実はギンガが眠っている時に、リニスにも同じような質問をしたんだけど・・・・」
「・・・・」
　良馬は質問の内容を一度区切り、ギンガに真剣な表情で訊ねる。
「ギンガは、もし、地球と管理局が戦う事になった時、ギンガは戦える？管理局と・・・・？」
「えっ!?」
　ギンガは良馬の質問の内容に体を硬直させた。
「あの・・・・それってどういう事ですか？」
　震える口調でギンガは良馬に訊ねる。
　防衛軍は自分の知らぬ間に、管理局と戦闘状態に突入したのだろうか？と、さえ思ってしまった。
「いや、あくまで可能性だけど、ギンガの話を聞く限り、時空管理局の仕事は本星であるミッドチルダの治安維持とロストギアと呼ばれる古代遺産の回収と管理世界と呼ばれる同盟国の治安維持だよね？」
「はい」
　良馬は敢えて管理世界を植民地とは言わなかった。
　仮にもギンガが以前所属していた組織であり、彼女の故郷でもあるためであった。
　しかし、ギンガの話から管理世界なんて聞こえはいい様に取り繕っても、管理世界＝植民地と言うイメージが拭えなかった。
「もし、自分たちよりも優れた技術を持っている者たちの存在を見つけた時、彼らはその存在を無視できるかな？」
「それは・・・・」
　ギンガにはその答えを否定する事が出来なかった。
　だが、おそらく管理局は自分たちよりも強力な力や技術を持つ世界と言うモノは絶対に認めないだろう。
　〝陸〟に所属していたギンガは、〝海〟のそう言った実態を何度も

見てきた。
その最たるものが、魔力を有した人員を次々と〝陸〟から〝海〟へと引き抜いていく行為だった。
優秀なモノは自分たちの懐に入れる。
それが不可能ならば、どんな犠牲を払ってでも、そのモノをこの世から消滅させる。
それが管理局の本質なのかもしれない。
ギンガが見る限り、防衛軍を始めとし、この世界で正式採用されている波動エンジンは管理局の〝海〟としては是が非でも欲しい技術だろう。
それにショックカノンに波動砲。
ギンガ自身もヤマトのイスカンダルへの航海記録を見てその威力には言葉が出なかった。
管理局の切り札とも言えるアルカンシェルなんて比べものにならない威力を持つ高エネルギー砲。
管理局の局員が波動砲や波動エンジンの性能を見たらどう思うだろう？
おそらくロストギアに認定または質量兵器所持の容疑をかけそれらを押収するだろう。
その後はこの地球を管理世界に加えようとする。
だが、そんな行為を防衛軍が許すわけがない。
地球連邦の大原則は、他の世界を侵略せず、他の世界からの侵略を許さず：である。
そうなればその先にあるのは、地球とミッド・・・防衛軍と管理局との戦争である。
防衛軍は管理局を侵略者と認定して、自衛の為に戦い、管理局は管理局で、防衛軍を自分たちに弓を弾く敵と認知し、正義の名の下、武力制裁、鎮圧に乗り出すだろう。
しかし、ギンガの見解では、管理局の次元航行艦では、防衛軍の艦船には勝てない。
自分の目の前で管理局の次元航行艦が防衛軍の波動砲の餌食にな

るかもしれない。
その中には、もしかしたら妹のスバルやその親友のティアナ、顔なじみの八神一家、命の恩人であるフェイトも含まれるかもしれない。
だが、良馬の言う通り可能性だが管理局の仕事上ありえない訳ではない。
現にこうして管理局の次元航行艦が偶然かもしれないが、太陽系に姿を見せたのだ。今度は、無傷の次元航行艦が現れるかもしれない。
そしてその結果、先程自分が恐れている未来が来てもおかしくない。
もし、そうなった時、自分は戦えるだろうか？
スバルやティアナ、フェイトやはやてをこの手で殺すかもしれない。
しかし、この世界の地球が管理世界入りしたら、桜花や紅葉は間違いなく管理局に徴兵される。
それは、当然自分もだ。
その一方、父や良馬は防衛軍軍人と言うことで、管理局に身柄を拘束され、刑務所に収監される事だってあり得る。
それに自分がこの世界に来たきっかけである例の窃盗団の事件。
あの事件が、管理局側の・・・ジュリオの仕組んだことだとしたら、今度は確実に自分の息の根を止めようとしてくるだろう。
「・・・」
ギンガは回答に困った。
「・・・」
ギンガが返答に戸惑っている中、良馬は静かに紅茶を飲みながらただジッと待った。
部屋にはチッ、チッ、チッ、チッと、置き時計の秒針を刻む音だけが聞こえる。
一体どれだけ、時間がたっただろうか？
長く待った様な気もするし、短かった様な気もする。
やがて、ギンガの中で答えが出た。
「戦います」

ギンガは、先程まで迷っていた瞳ではなく、あの時、同じ質問をした時のリニス同様、迷いのない瞳をしていた。
「私にとって、この世界はもう故郷なのです。それに私は防衛軍の軍人ですから、大切な人を守るために戦います。例えそれがかつて所属していた組織が相手でも・・・・」
「・・・・」
（すまない・・・ギンガ・・・・）
良馬は可能性とは言え、ギンガに辛い選択をさせた事に心の中で謝罪した。
重い話を終えた後、良馬はギンガがからお誘いを受けて部屋のベッドの上で良馬はギンガを押し倒し、やがて二人の影は一つになった。
仮とは言え、身内を殺すかもしれないと言う話をしたのだ。
ギンガとしてはそれを上回る事で忘れたかったのだろう。
それは良馬の方も同じで、可能性とはいえ、彼女に前の世界の自分の家族や親友を殺すかもしれない選択肢を突きつけたのだから・・・・。

ヤマトがテレザート宙域に滞在中、アンドロメダ星雲～テレザート星間のある宙域では、
「出力レベルアップ」
「了解、出力レベルアップ」
「出力１２０％」
「出力１２０％へアップ」
「動力弁２０～２５までをオープン!!スイッチオン!!コース右に１３度修正」
「了解、コース修正、右１３度」
テレザートに向けて、進撃中の白色彗星はそれまでの速度から一気に加速してテレザートへと迫った。
その速度は恒星間航行速度の数倍の速度であり、テレサが言った日数よりも数日早くテレザートへ到着する予定となった。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋

テレザートに居るヤマトに地球から通信が送られた。
「ヤマトがテレサから受け取った情報は、敵の細かい部分について尚不明のままだが、もうこれ以上、座して待つわけにはいかない・・・地球防衛軍としても全力をあげて白色彗星の阻止に起ち上がる事になった。ついては、ヤマトもその艦隊の一隻として、戦線に復帰してもらいたい・・・ただちに地球へ帰還してくれ」
「わかりました。ヤマトは直ちに地球へ帰還します」
「うむ、待っているぞ」
藤堂からの招集命令を受け、ヤマトはこれより地球へ向かい、地球連合艦隊へと合流する事となった。
島は出航する際、少し顔を頷かせた。
テレサから白色彗星が此処に来ると伝えられた時、島はテレサにヤマトへの乗艦ないし、テレザートからの脱出を勧めたが、テレサはイスカンダルのスターシアの様にテレザートに残る意思を曲げなかった。
スターシアも滅びゆくイスカンダルからの脱出は決して行わなかった。それはイスカンダルの女王としての誇りからくるものだった。
出航準備が整った中、新米が白色彗星の速度に変化が現れた事を真田に報告した。
真田の見解では白色彗星は翌日にはテレザートに来ると言う。
そんな速度では、ヤマトが地球へ向かう途中に追いつかれてしまう。
ヒアデス星団は沢山のアステロイドや小惑星等の障害物が多く、星団の宙域に居る限り、大ワープは不可能だった。
どんなに頑張っても白色彗星が現在の速度を維持する限り、ヤマトはどんなに頑張っても、追いつかれるしかし、ヤマトの皆は沖田艦長の鉄の意志を引き継ぐ様に諦めることなく、全速で地球を目指した。
ヤマトが必死にテレザート星系からの脱出を図っている頃、テレザートからある場所へ、通信が送られた。
その場所とは、例の白色彗星だった。

意外にも彗星帝国側はテレサの通信を受け、返答を行った。
相原がその通信を傍受し、スピーカーへと繋いだ。
「ズォーダー・・・直ちにテレザートへの進撃を中止しなさい」
テレサの口調には僅かながらも怒気が含まれていた。
「それはできん。旅は我が祖先の遺志だ。過去から未来永劫へとつづく、彗星帝国ガトランティスの心なのだ」
「貴方がたの論理はどうであれ、この様な行為は宇宙の営みを破壊するものです」
「さて、それはどうかな?」
「この宇宙に命を得た者は、皆等しく生きる権利を持っています。いかなる星も他の星によって破壊させられたり、侵されることがあってはなりません」
「テレサ、忠告は承っておこう」
ヤマトの乗員達はここに来て初めて彗星帝国の国家元首の声を聞き、名前を知った。
「この宇宙は、我がガトランティスの遠大な旅の為にある。全宇宙は我が故郷!!」
「それは違います。ズォーダー」
「テレサよ、宇宙の秩序は力によって築かれる。宇宙の法は私なのだ。この私の力こそが、全宇宙に調和と秩序を齎すのだ!!」
ズォーダーの信念はあまりにも独裁的で、簡単に言うと、自分勝手、自己中心的であった。
「愚かしい思い上がりです。ズォーダー・いいでしょう。貴方がこのまま侵略を続けると言うのであれば・・・」
「どうするというのだ?テレサ?」
「私の命に替えても・・・あなた方を阻止します!!」
テレサはその言葉を最後に、白色彗星との通信を切った。その時のテレサの顔は何かを決意した顔をしていた。
サーベラーはズォーダーとテレサとの通信のやり取りを聞き、憤慨し、彗星の速度を更に上げる様に命令した。
「我が帝国を阻止する・・・か。果てして出来るかな?テレサ、反物質

を操るお前の力は、確かに強大なものだ。しかし、その力でテレザートは滅ぼせても我が帝国を滅ぼせるかな?お前の身体そのものが反物質で構成されているというのならば、話は別だろうがな・・・」
テレサが操る反物質とは一体何か?
通常、身体をも含む、世界を構成する物質は『常物質』と呼ばれている。
それに対するもう一つの世界を構成する物質。
それが『反物質』である。
そして『常物質』と『反物質』が接触した時には『対消滅』と呼ばれる現象が起こる。
その現象はとてつもなく強大な爆発エネルギーが発生し、何もかもが消滅してしまう。
今までのテレサが見せた不思議な現象、そしてテレザートを滅ぼした力はその対消滅によるものだった。
彼女はその対消滅の力加減を調節できる能力を有していたのだ。
白色彗星はテレザートまでもう目と鼻の先に近づいた。
その時、テレザートに変化が現れた。
テレザートの星表面にテレサの姿が現れた。
その姿は大きく手を広げ、白色彗星を受け止めようとしているかのように見えた。
その直後、テレザートは白色彗星を道連れに自爆した。
テレサはヤマトがテレザート宙域を脱出する時間と距離を稼いだのだ。
テレザートの爆発による凄まじい閃光が晴れた後、そこには、何も無く、白色彗星はテレザート共に消滅。
地球は救われ、宇宙の平和を乱す危機は去ったかと思われた。
しかし、肝心の白色彗星は消滅せずに存在していた。
テレザートの自爆とテレサの力を受けた白色彗星の中にある要塞都市の一部を破壊するだけに終わった。
それはズォーダーの卓越した指揮によるもので、彼が愚鈍な国家主導者だったら、ここで彗星帝国の旅は終わっていただろう。

そう考えると、ズォーダーは無能な独裁者では無かった。
だが、地球側にとっては無能な独裁者であって欲しかった。
テレサの命をかけた行為は一見無駄に終わったように見えた。
だが、彗星のコースは大幅にズレ、要塞都市内の機関部に大規模な損傷を受け、彗星の速度も落ち、周りを取り囲む白色ガスも薄れていた。
テレサの命をかけた挑戦は白色彗星に大きな打撃を与えた。
それはヤマトにとっても地球にとっても計り知れない大きな助けとなった。
しかし、白色彗星は再び体制を建て直し、地球を目指して進むにちがいない。
地球と白色彗星との戦いはまだ続くこととなる。

二十五話　決戦だヨ！全艦集合!!

第１７管理世界の管理局支部にある次元航行艦ドックには先のテレザート宙域で損傷を受けたクロノ・ハラオウンが艦長を務めるＸＶ級次元航行艦、クラウディアがその身を横たえていた。
クラウディアはこのドックにて応急修理を終え、再びテレザートへ向けて出航しようとしていた。
「各部チェック終了、各システム、異常ありません」
「よし、管制塔に連絡。本艦は予定どおりの時刻にテレザートへ向け出発する」
「はっ!!」
第１７管理世界の支部長がクロノの報告を重視してくれた為か、クラウディアの修理は優先的に行われたおかげでこうして短時間で終了した。
「あの艦がまだテレザートに滞在してくれればいいんだが・・・」
艦長席に座ったクロノは不安交じりに言う。
「うん、そうだね」
クロノの横でフェイトもやや不安げに答える。
全身をハリネズミの様にミサイルで武装したあのミサイル艦隊が、消滅させられる前の艦隊内の通信でしきりに出していたあの『ヤマト』という名の艦。
小学校三年生の終わりごろから中学卒業までの約五年半の間、地球の・・・日本の海鳴で生活したフェイトにとってはとても偶然や聞き間違いで片付けることはできなかった。
確かに地球とミッドには似た様な文化や名前が存在するように、もしかしたら自分たちの知らない世界の艦が、たまたま自分が地球で知る艦の名前と同じだったのかもしれないが、あの艦のシルエットと艦名から地球以外の産物ではないとフェイトの中には確信めいたモノが存在していた。
その確信を得るため、フェイトはどうしてもあの『ヤマト』と名乗

る艦の乗員と話がしたかった。
所属する世界や組織の事、
何故あのミサイル艦隊と戦ったのか？
あのミサイル艦隊を攻撃した武器はどんな名前で、どういう原理なのか？
そして、どうやってバキューム鉱石を操作し、エネルギーが一瞬で回復したのか？
聞きたい事は沢山あったが、確実に言える事はあれだけの強力な艦船を建造し保有、運用できる国家なり組織なのだから、時空管理局や管理世界と同等かそれ以上の文明や科学力、そして軍事力を持っているのは間違いない。
高圧的な態度や言葉で挑発し、迂闊に相手を刺激して敵対するのだけは避けたいが、フェイトは何故か、あの艦の乗組員とはちゃんと話ができるという確信めいた予感を抱いていた。
出航予定時間となり、クラウディアは第十七管理世界を出発して全速でテレザート宙域へと向かった。
そしてテレザート宙域に入った頃、
「か、艦長!!テレザートに超大型の天体が亜光速で接近しています!!」
周辺の監視を行っていたオペレーターが緊迫した声をあげる。
「そんなバカな!!一昨日まではそんな天体は確認できなかったじゃない!?超大型の天体なら一昨日の時点で探知していてもおかしくない筈よ!!」
フェイトがオペレーターに観測ミスではないかと問うと、
「ですが、間違いありません。直径約６６００キロの超大型の天体で、周囲からは強力な電波と重力場を確認できます!!」
「パネルに出せ」
「了解」
クロノの指示に従ってオペレーターは捕捉した超大型の天体をパネルに投影した。
「こ、これはっ!?」
パネルには巨大な白色彗星の姿がいっぱいに広がる。

映し出された白色彗星の映像に誰もが声と顔色を失った。
「なんか・・この彗星・・・・」
「不気味と言うか・・・・」
「怖い・・・・」
経験の浅い新人乗組員や女性乗組員は白色彗星を見て心底恐怖しているような声を漏らして身体を震わせた。
フェイトやティアナも口にこそ出さなかったが、他のクルーたち同様、あの巨大な白色彗星から漂ってくる形容しがたい禍々しさと不気味さに冷汗を流していた。
「僅か二日で、こんな巨大な彗星が接近してくるなんて・・・・」
「こんな事ってあり得るんですか?」
ティアナが次元航行艦乗りとして天体などに自分たちより遥かに詳しいクロノに訊ねる。
「い、いや管理局の士官学校で習った天文学でもこんなことはなかったし、僕自身、あんな巨大な彗星を見たのは初めてだ・・・・あの彗星の存在は余りにも異常だ・・・・」
クロノでさえ、パネルに映し出されている彗星の存在は初めて見たと言う。
戸惑い、恐怖、不安、そんな思いを抱いていたクロノたちにさらなる情報がもたらされた。
「本艦より二時の方向、先日の戦闘艦、ヤマトを確認!!」
「なに!?間違いないか!?」
「はい!!間違いありません!!先日と同じエネルギー反応と艦影ですから」
クラウディアのクルーはあの艦を聞き間違いかもしれないが、本当の名前が判明するまで、仮名ながらもヤマトと呼んでいる。
「クロノ!」
フェイトがクロノの方へ顔を向ける。
「ああ、ヤマトに追いつけるか?」
クロノにはフェイトが何を言いたいか分かっていたようで、操舵手にヤマト追撃を指示する。

「やってみます」
次元航行艦のメイン機関である魔導炉が唸りをあげ、クラウディアはヤマトを追いかける。
「通信士、ヤマトに通信を送って呼びかけて！此方に敵対の意思はない事と私たちの所属・艦名を!!地球の英語と日本語の通信文は私が作るから、貴方は大至急ミッド語とベルカ語の通信文をお願い！」
「わ、わかりました」
通信士に通信を依頼したフェイトは自らもキーボードを叩いてヤマトに呼びかける英文と日本語文のメッセージを作り、通信士に渡した。
この時、テレザートから例の白色彗星へと通信が行われていたのだが、残念なことに次元航行艦の通信傍受器では両者の通信を傍受出来ず、通信士は気が付かないままヤマトへの通信文を作成していた。
通信文を作成している時、オペレーターが一段と緊迫した声を上げる。
「テレザートからエネルギー反応！急激に増大しています!!」
「強力な磁場発生！送受信ができません!!」
「何度でも呼び続けて!!」
テレザートからのエネルギー反応の影響か、クラウディアの通信機が一時的に使用不能になった。
その為、ヤマトへ通信が送れない。
「テレザートからのエネルギー反応が止りません!!このままでは、星全体が爆発、崩壊の危険があります!!」
「何らかの攻撃か？まさか、プレオを破壊した例のミサイルか？」
「いえ、その反応はありません。重力バランス変動による地殻崩壊でもありません！」
「では、一体・・・」
「テレザートの光学映像、出します！」
パネルに映し出されたテレザートの映像を見て、クラウディアのクルーはまたも驚愕した。
テレザート星全体が黄色い光に包まれていたのもさる事ながら、光

の中に金髪で青いドレスらしい服をまとたった若い女性が祈るような姿勢で浮かび上がったのだ。
しばらくその光景が続いたが、やがてその姿が消え、遂にテレザートに終局の時がやって来た。
あの白色彗星はテレザートに接近し、両者がぶつかり合う寸前、テレザート星が白色彗星を巻き込み大爆発を起こした。
「衝撃波が来るぞ!!全員何かに掴まれ!!」
唖然とする中、クロノの慌てた大声がクラウディアに響いた。

それから、八時間後・・・
テレザート星の大爆発から逃れるためクラウディアは緊急転移してその場から転移した為、ヤマトとコンタクトをとることはできなかった。
いや、それ以前にヤマトの速力はクラウディアを遥かに上回っており、到底追いつけるものではなかった。
結局、確認できたのはテレザート星の謎の大爆発。
星の表面に浮かび上がって来た金髪で青いドレスのような服をまとたった謎の若い女性。
不気味で巨大な白色彗星。
ヤマトの姿を捉えた不鮮明な光学データだった。
余りにも荒唐無稽で、情報不足が否めない出来事であったが、執務官としては一連の出来事を全て報告書にまとめる義務がある為、フェイトはクラウディアの艦内にある自分の部屋で報告書の作成を行っていた。
テレザートの爆発によって起きた衝撃波から逃れる為、緊急次元転移を行ったが、多少の影響を受け、またもやクラウディアの各部署には損傷個所が幾つも出た。
流石に第十七管理世界には戻れないので、クラウディアは別の管理世界へと赴く事となった。
折角、優先的に応急修理をしてくれたにも関わらず、出航したその日にボロボロの姿で戻り、「また修理してくれ」とは、クロノも言い辛

いのだろう。
星の海を見ながらフェイトはヤマトとは、またいつか逢える様な気がしてならなかった。

彗星帝国　ガトランティス　玉座の間
テレザートの自爆とも言える大爆発の影響により、一時的に針路を変更せざるを得なくなった白色彗星。
その事実にズォーダーは不機嫌さを露わにしていた。
「我が帝国は建国から一度たりとも軌道を変えた事は無い。今回の軌道変更はガトランティス有史以来の屈辱である。しかし、この広い宇宙で誰一人出来なかった事を成し遂げただけでもテレサには十分に敬意を表する。だが、この屈辱は徹底的に晴らさなければならない。ゲーニッツ!!」
「はっ!!」
「バルゼー艦隊の現在位置はどこだ?」
「はっ、銀河・太陽系外周の8．7光年の位置にあるシリウス恒星系まで進出し、待機しております」
床に埋め込まれたパネルに宇宙海図を開いて艦隊配置図をズォーダーに説明するゲーニッツ。
「よし、直ちにバルゼー艦隊に出撃を命じろ!!我が帝国も三倍に速度をあげ、地球へ進撃する。これより地球大攻略作戦を実施する!!」
大帝ズォーダーは高々と地球攻略作戦の開始を宣言した。
この瞬間、白色彗星の本格的な地球侵略作戦が開始された。

シリウス恒星系・・・
そこには、彗星帝国の大・中・小の戦闘艦を主力とする大艦隊が遊弋していた。
戦艦と思われる大型艦は全長３００ｍを超え、中型の巡洋艦クラスの艦も２００ｍ、小型の駆逐艦でも防衛軍の宇宙駆逐艦以上の大きさを誇っている。
その艦隊のほぼ中央にいる大型艦は、他の艦とは全く異なるフォル

ムを持っていた。
艦形は双胴型でエンジンも双発。
大きさは他の大型戦艦よりも更に一回り大きく、双胴型艦体中央の艦首下部に大口径の兵器らしき武装を装備しており、他の僚艦とは異なる戦術思想を持っていることは明らかだ。
その戦艦・・・バルゼー艦隊　旗艦　火炎直撃砲搭載戦艦、メダルーザの艦橋で、一人の男が全艦に命令を下した。
「大帝のご命令が下った。我が艦隊は総力をあげて太陽系へ突入し、地球軍を撃滅する!!」
この男こそ、この艦隊を率いる艦隊司令、バルゼー提督であった。
艦隊司令、バルゼー提督の命令一下、バルゼー艦隊はシリウス恒星系を出撃し、太陽系を目指し進撃を開始した。
さらにズォーダー大帝の命令はプロキオン恒星系に待機していたガトランティス、プロキオン方面軍にも伝えられ直ちに出撃。
バルゼー艦隊と土星圏での合流を目指し、圧倒的戦闘力をもって太陽系へ迫っていった。
一方、地球防衛軍も手を拱いてはおらず、連合艦隊司令の土方が先頭に立って様々な策を打っていた。
太陽系外縁部にパトロール艦隊を増派するとともに、冥王星、海王星、天王星の各衛星にける資源採掘、惑星開発を一旦中止させ、採掘した資源と軍属、民間人スタッフ、を地球に送り返させた。
大規模な移送船団が定期便の様に各惑星の衛星と地球を往復するため、通常の護衛部隊では手が回らず、護衛には内惑星防衛艦隊の水星・金星、月面常駐艦、地球本土防衛までもが駆り出された。
当然その中には、良馬が艦長を務める　まほろば　も含まれていた。
土方が民間人らを避難させたのは、単に人道上の理由だけでなく、資源輸送船団を護衛している護衛艦やパトロール艦も間近に迫っているであろう彗星帝国軍との決戦に投入する思惑があるからだ。
護衛艦、パトロール艦と言っても小口径とはいえ艦首にはちゃんと波動砲を装備し、砲撃能力は駆逐艦以上の力を有しており、パトロー

ル艦の索敵能力は戦場でも十分に役立つ。
敵艦隊の戦力規模がはっきりしない以上、戦える艦船は全て投入する。
土方の方針はまさに全力全開なのであった。
土方の命令を受け、太陽系外周にて、索敵任務を行っていた一隻のパトロール艦が居た。
その艦の名前は渦潮と言った。
渦潮は今度、士官学校を卒業する士官候補生たちを研修目的で乗せ、太陽系外周のパトロール活動を行っていた。

パトロール艦　渦潮　艦橋

「艦長、本艦は無事に太陽系を離脱しました」
「内宇宙巡航速度から外宇宙巡航速度に移行」
「了解、外宇宙巡航速度、宜候！」
渦潮の艦長は航海士に外宇宙用の速度で航行するように命じ、パトロール活動を行う。
「艦長、間もなく本艦は、シリウス星系の外周へ到達します」
「うむ、レーダー衛星、監視衛星の放出準備」
「了解」
パトロール艦の任務はパトロール活動だけではなく、搭載されたレーダー衛星や監視衛星を太陽系外にバラ撒き、敵の侵入経路と艦隊規模の情報収集も担っていた。
「艦長。やはり、敵は来るんでしょうか？」
「ああ、必ず来る。そうでなければ、第十一番惑星基地をあそこまで破壊したりはしないさ」
操舵をしながら航海士が艦長へと訊ねると、艦長は確信めいた様に言う。
そこにレーダーの観測を行っていた、士官候補生の椎名晶が報告の為、割り込んできた。
「艦長。お話し中、申し訳ありません。先程、第十四監視衛星が敵の艦影らしきものをキャッチしましたが、直後に反応が消失しました。お

そらく敵に破壊されたものだと思われます」
椎名晶は、間もなく士官学校の卒業を控えた士官候補生であり、彼女はギンガとも面識のある人物であった。
と言うのも、椎名が受講したコースが通信科をメインに航空科、医療科コースだった為、ギンガが士官学校で受講したコースと被り、ギンガと椎名の二人は先輩、後輩の仲だったのだ。
「なにっ!?」
椎名の報告を聞き、艦橋に緊張が走る。
第十四監視衛星は渦潮の現在位置からすぐ近くだ。
向こうの速力次第ではあるが、凡そ半日で敵艦隊に遭遇することになる。
「総員戦闘配置。敵さんは間違いなくここを通るぞ!」
「了解」
艦長の命令の下、渦潮の全乗組員はそれぞれの配置につき、敵との遭遇に備える。
「司令部に連絡。本艦は索敵行動に入る、と」
「わかりました!」
敵の規模が分からないため、敵艦隊に捕捉されれば、逃げきれるかどうかわからない。
士官候補生たちは、緊張と不安を抱きながら職務にあたった。
そして・・・
「ビンゴだぞ、諸君・・・」
艦長は一筋の汗を流し、無理矢理笑みを浮かべた。
渦潮はシリウス恒星系より太陽系へ侵入してくる敵艦隊の姿を捉えた。
しかし、その数は余りにも多く、長居しては此方が発見され、あっという間に撃沈されてしまうので、確認できた敵艦隊の陣容と侵入コースを伝え、即座に退避行動に移った。
渦潮からの通報は土星衛星タイタンの防衛軍司令部へと伝わった。
タイタンは土星の第六番目の衛星で、土星圏の衛星では最大の大きさを誇る。

その直径は約５１５０ｋｍで惑星である水星よりも大きい。
タイタンには宇宙艦船建造に不可欠な超金属コスモナイトの一大採掘地であると同時に、現在対白色彗星帝国との決戦に備え、地球防衛軍艦隊司令部が此処に将旗を掲げていた。
そのタイタン基地に齎された一本の電文が、地球防衛軍と連邦政府を震撼させた。
単艦でシリウス星系方面に索敵に向かったパトロール艦、渦潮が白色彗星帝国軍の大艦隊を発見したと言うのだ。
渦潮の報告では確認できた艦隊数だけでも、地球防衛軍の全艦よりも数が多く、さらに戦艦、空母は地球艦隊のモノよりも大型だと言う。
報告を聞き、連合艦隊司令長官である土方はしばし沈思黙考する。
そんな土方の周りでは、戦務幕僚たちが、今後の方針をどうするか、検討を行っている。
「ともかく、各惑星や衛星の艦隊に戦闘準備の命令を・・・・」
「内惑星艦隊はどうする？」
「火星基地に集結させるか？」
「いや、それよりは此処土星圏に集めた方が・・・・」
どうやら幕僚たちは、司令部の基本方針通り、冥王星、海王星、天王星、土星、木星、火星の各宙域に戦闘区域を設け、敵艦隊を分散的に迎撃しようとしているようだ。
彼らの検討議論の声がまるで聞こえていないかのように一人、土方は沈思黙考を続ける。
敵は戦闘艦だけでも地球艦隊の倍はある。
しかも地球艦隊の戦艦よりも大型・・・・
しかし、この陣容に土方は一つ気になる点があった。
シリウス方面から侵入してくる艦隊の中に空母が異常に少なかったのだ。
第十一番惑星での件から見て、敵の基本戦術はまず機動部隊による航空先制攻撃だろう。
それにも関わらず、艦隊に随伴する空母が余りにも少ない。
空母を中心とする機動部隊は別ルートから向かっているのかも知

れない。
　だとすると、敵はまず空母を使っての奇襲攻撃を行ってくるかもしれない。
　いずれにせよ、防衛軍司令部が想定している各惑星圏からの漸減戦は、彼我の戦力に差がなければ有効だが、これだけの戦力差があると、数の暴力で押し潰されるのは明らかであった。
　やがて、土方はモニターに映る太陽系内の戦力配置図を睨みながら、幕僚に指示を下し始めるが、その指示を耳にした幕僚は当惑の色を見せた。
「命令を下す。太陽系第一、第二外周艦隊の二個艦隊は一時間以内に合流、同じく第四、第五艦隊は第三艦隊と合流し、直ちに土星圏タイタン基地に集結させろ」
「そ、そんなっ!?」
「総司令・・・・」
「冥王星、天王星、海王星所属艦隊も全てこのタイタン基地へ集結させろ」
「お待ちください、総司令。司令部の許可なく、艦隊配置を変えるのは・・・・」
「そんな時間は無い直ちに命令を伝達しろ」
　幕僚の意見など聞く耳持たず、土方は命令を下す。
「しかし、それではあまりにも独断すぎるのではないでしょうか?」
「君たちは、私の戦務幕僚ではないのかね?そしてこれは私の命令なのだよ」
　土方のこの言葉が決め手となり、幕僚たちは各艦隊に土方の命令を伝達した。
(古代たちの意見をまとも取り合わなかった挙げ句がこの体たらくだ!ガミラスとの戦争中の方がまだ危機感があった。いつから地球はこんなに余裕ぶれる程強くなったんだ!?)
　土方は内心で連邦政府首脳と防衛軍上層部に呆れかえっていた。
　命令を受けた各惑星や衛星の駐屯艦隊は直ちに出撃し、土方の命令通りに土星圏タイタン基地へ集結し始めた。

冥王星、海王星、天王星基地に残っている基地職員も艦隊の集結と共に、基地の内部データを破棄、無人戦闘衛星や無人攻撃ステーションを自動迎撃モードに切り替えた後、基地から退避した。
地球の防衛軍司令本部では、突如自分たちの受け持ち区域から土星圏タイタン基地へ向かう艦隊の動きを見て混乱が出始めた。
オペレーターは各艦隊の旗艦に通信を入れ、元の配置に戻るように伝えるが、タイタン基地への集結は艦隊司令の土方からの命令なので、艦隊は土方の命令に逆らえない様で本部からの命令を無視する形で土星圏へと集結していった。
当然、地球の軍本部、特に参謀本部は土方の独断専行に憤激した。
「長官、土方総司令に中止命令を出してください!!」
参謀の一人が藤堂に土方を止める様に進言する。
その直後、
「土星圏、タイタン基地より入電です」
土星に居る土方から通信が入った。
「通信回路を開け」
参謀の一人がオペレーターに命令するとパネルに土方の姿が映った。
「土方総司令、これは一体どういうことだ!?」
長官よりも先に参謀は土方に訊ねる。
「長官、事後承諾になり申し訳ない。白色彗星の太陽系侵攻艦隊と思われる大艦隊が太陽系に向け、出撃してきましたので」
「その報告ならば受けている」
「土星軌道を絶対防衛線として地球防衛艦隊全艦を持ってこれを迎撃にあたります」
「越権行為だ!!作戦指示は軍令部から出すものだ!!」
「予想される大戦力を分析した結果、太陽系の広い範囲に戦力を分散配置するのは非常に危険です」
「戦力を集中する方がもっと危険だ!!敵の主力はその艦隊だけではない!!後から白色彗星の本体がやってくる!!」
「侵攻艦隊は地球艦隊よりも規模が大きい艦隊だ。戦力を集中するほ

か、勝利の見込みは無い!!」
「例え勝利を得ても味方も半数は失うだろう!?その戦力でどうやって戦うんだ!?どうやって地球を守ると言うんだ!?」
「この戦いに勝たなければ、地球は生き残る道は無い。白色彗星にはまた別の戦略を考えればいい」
「む、無謀だ」
「長官、御許可を頂けますかな?」
「君は指揮系統をなんと心得ているんだ!?」
「今は長官の決断が一番必要な時なのです」
　土方と参謀のやり取りを黙って聞いていた藤堂が此処で口を開いた。
「土方君、戦略上の大変更は防衛会議の決定が必要なのは君も知っているだろう?」
「のんびりと会議を開いている暇はありません。作戦を直ちに実行しなければ地球は壊滅的被害を受けます」
「もう少し、時間をくれたまえ・・・・」
「ご決断ください」
「・・・・」
「・・・・では、私の権限で作戦を実行させていただきます。地球の全艦隊は私の指揮下にあるのですから」
　そう言い残し、土方は長官である藤堂や参謀達の答を聞かず、通信をきった。
(市民が平和と繁栄に酔いしれるのはまだいい。しかし、地球連邦の政治家や軍人は本来危機意識を持っていなければならない。僅か一年・・・たった一年で、防衛軍上層部はこうも簡単に危機意識を失ってしまったというのか)
　土方は地球との通信をきった後、今の地球の現状を嘆いた。
　ガミラス戦役で常にピリピリしていた頃と違い、白色彗星帝国の侵攻艦隊が迫ってきていると言うのに、司令部の中には、「アンドロメダが居るのだから大丈夫」等と言う余裕さえも感じられた。
「そ、総司令!?長官、土方司令を罷免してください!!長官!!」

一方、地球の防衛軍司令部では、土方の越権行為に幕僚たちが藤堂に意見するが、当の藤堂は考えに耽った。
今、土方を罷免させてしまえば、後任の人事に会議を開き、連邦政府のお偉方に事情を説明し、後任に相応しい人間の調査を行い、検討し、そこでようやく、決まる。
その間に白色彗星帝国の侵攻艦隊が太陽系に来てしまう。
指揮官を失った状態の艦隊など、ただの烏合の衆と化してしまう。
そうなれば、地球は終わりだ。
危険かもしれないが、ここは土方に任せてようと決めた藤堂だった。
そんな時、
「長官」
参謀長の西郷が藤堂に話しかけた。
西郷も土方を罷免しろというのか？と思った藤堂であったが、西郷の話を聞き、一瞬目を見開いたが、
「・・・よかろう。西郷君」
西郷にある許可を出した。
「ハッ、ありがとうございます長官。では、準備が整いしだい現地へ向かいます」
「うむ、頼むぞ」
西郷は藤堂に何かを意見具申して、その具申が通ると、司令部のコントロール室を出て行った。
その後、藤堂は土方の提案を受け入れ土星圏を絶対防衛ラインに設定し、地球防衛軍全艦艇で白色彗星を迎え撃つ事となった。
「木星圏、ガニメデ、エウロパ、イオ、各衛星の航空機部隊は最短距離に居る第一、第二、第三、巡航空母艦隊のいずれかに合流。合流完了次第空母部隊は土星基地へ集結せよ！」
召集命令が太陽系内を駆け巡り、防衛軍の全ての艦艇はタイタン基地へと集結していく中、
冥王星からの軍属引き上げを行い、今まさに地球から艦隊集結地の

タイタン基地へ向かおうとする　まほろば　に便乗する人物がいた。
その人物とは・・・
「お待ちしておりました。西郷参謀長」
先程、司令部のコントロール室から退室した西郷だった。
まほろば　に乗艦した西郷を良馬は敬礼しながら出迎える。
「木星のガニメデまで、お世話になるよ。月村艦長」
「はい」
西郷は木星の衛星ガニメデに何か用が有るらしく、まほろば　に便乗者として乗艦した。
一名の便乗者を乗せた　まほろば　は土星衛星タイタンの前に木星の衛星ガニメデを目指し地球を飛び立った。

白色彗星側、地球側がそれぞれ、決戦に向けて準備を行っている中、彗星帝国本土の独房に幽閉されているデスラーの下にサーベラーが訪れた。
サーベラーはデスラーに彗星帝国が本格的に地球攻略作戦を実施した事を伝え、ついでにデスラーが執着しているヤマトも自分たち彗星帝国が撃沈すると伝える。
すると、デスラーは、
「ヤマトが撃滅されるとなれば、私は生きていても仕方がない。こんな場所で生き長らえるより、潔い死を選ぶ」
と、言いだした。
デスラーと付き合いの長い者ならば、あのデスラーがこんな事を口走るなんて・・・と、驚愕し、デスラーは何か策があるのだろうと思っただろう。
しかし、デスラーと付き合いが浅いサーベラーはデスラーが生きている事に疲れ、絶望し等々自分に根をあげたのだろうと思い、
「いいでしょう。では、今から即決裁判を行いましょう。出なさい、デスラー」
と、デスラーを独房から出した。
後は名ばかりの裁判でデスラーに死刑判決を言い渡して処刑場へ

と連行して処刑すればいいだけだった。
だが、デスラーはサーベラーの思惑に反し独房から出る時、一瞬の隙を突いて看守の持っていたライフルを奪いサーベラーを人質にして脱出を図った。
「な、何をするのです!!デスラー!!」
「そろそろお暇させていただく。大ガミラスの総統にはこの部屋は狭すぎるのでね」
「総参謀長!!」
「落ち着きなさい」
「物分かりがいいな。さっ、道案内をしてもらえるかね?」
デスラーはサーベラーの背中にライフルの銃口を突きつけ、歩み始めた。
「総参謀長!!」
「サーベラー総参謀長!!」
「何たることだ!!」
サーベラーを人質にしたデスラーの姿を見た衛兵たちは、声をあげるが、デスラーの行動を静観しているだけしか出来なかった。
下手にデスラーへ飛び掛かったり、不審な動きやライフルで撃てば、デスラーがサーベラーを射殺してしまうと考えられた。
脱走しようとしている罪人を捕らえるとは言え、その過程で彗星帝国の№2を殺してしまっては、国家元首であるズォーダーからどんな咎めを受けるか分からない。
そのため、衛兵たちは手を拱いていた。
「デスラーが逃げた!!」
「総参謀長を人質にしているぞ!!」
「デスラーをひっ捕らえろ!!」
デスラーは独房のある施設から外へと出た。
しかし、デスラーとしても長く外に居る事は避けたかった。
施設内と違い屋外では狙撃と言う危険性もあるからだ。
取り敢えず、エアーカーを奪取し逃亡を図ろうと考えた時、
「総統!!」

デスラー総統の副官を務め、デスラーの側近中の側近であるガデル・タランがまるでデスラーを迎えるかのように控えていた。
「タランか？」
「こちらへ、私がご案内いたします」
タランは自らが用意していたエアーカーにデスラーを案内した。
タランの運転するエアーカーは格納庫地区へと向かいそこに止めてあった彗星帝国が採用している戦闘機、イーターⅡにてタランとデスラーは彗星帝国を脱出した。
当然彗星帝国側も脱走者に手を拱いて逃がすわけにもいかず、デスラーとタランが乗ったイーターⅡの後ろからは追撃としてデスバ・テーターが二機追いかけてきた。
デスバ・テーターの攻撃をタランは巧みな操縦技術でかわしていく。
その頃、小マゼラン星雲に集結していたガミラス残存艦隊は、デスラー総統を救出せんがために密かに小マゼラン星雲を出撃し、白色彗星を追撃していた。
その中の一隻、グラーフ・シュパー将軍が座乗するメルトリア級巡洋戦艦が自分たちに接近してくる未確認飛行物体をキャッチした。
「おっ!?敵機だ!!全艦戦闘配備!!」
自分達の艦隊に接近してくるのは、間違いなくこれから砲火を交えようとしている彗星帝国の戦闘機だった。
「たかが、一機で突っ込んで来るとは、無謀な奴め!!全艦主砲発射用意!!」
ガミラス艦隊が接近してくるイーターⅡ一機に対し一斉射撃をしようとした時、
そのイーターⅡから通信が入った。
「待て!!私はタラン将軍だ!!この機にはデスラー総統も乗っておられるぞ!!」
「なにっ!?」
「確かにタラン将軍の声だ!!」
『デスラー総統・・・』

ガミラス艦隊はタランとデスラーが乗ったイーターⅡを守るかのような陣形をとり、彗星帝国へと接近した。
彗星帝国側も接近してくるガミラス艦隊をキャッチしていた。
「なに!?ガミラス艦隊が!?」
ゲーニッツは何故、ガミラス艦隊が接近してきたのか疑問に思い声を裏返した。
「直ちに戦闘艦を出し、迎撃しなさい!!彼奴等など一挙に踏み潰してしまうのです!!」
サーベラーが本土防衛艦隊の出撃を命じるが、
そこに、
「放っておけ」
ズォーダーが現れた。
「何故です!?デスラーは不敵にも我が彗星帝国から逃亡をしたのです!!この上ない恥辱ではありませんか!!」
「・・・恥を知らなければならないのはお前たちだ!!サーベラー、ゲーニッツ!!」
「ええっ!!」
「なっ!?」
突然大帝から罵倒されたサーベラーとゲーニッツは狼狽する。
そしてズォーダーはサーベラーとゲーニッツを睨みつけながらその理由を話す。
「デスラーはやはり、立派な男だった。戦場から敵前逃亡するような男ならば死を覚悟して脱出などしまい。まして、部下が決死の覚悟で出撃して来る筈がない!!あの男はヤマトと戦うために、脱出したに違いない・・・お前たちはわしをだました様だな?」
デスラーが幽閉された時、ズォーダーは、サーベラーとゲーニッツからデスラーがヤマトに恐れをなして敵前逃亡したと聞かされたので、デスラーが脱出をするまで、それを信じていた。
しかし、それは二人が示し合わせた虚偽の報告であった。
その根拠はデスラーとその部下達の行動で明らかであった。
最初に聞いた報告が虚偽であったと言う事実を知ったズォーダー

は、静かに憤慨した。
「本来ならば、処刑するところだが、時が時だ!!今回だけは見逃す!!二度と愚かなマネをしたら許さんぞ!!いいな!?」
そう言い残しズォーダーはその場を後にした。
現在彗星帝国は地球攻略作戦の作戦行動中であり、そんな時に彗星帝国の総参謀長と艦隊総司令の二人を処刑すれば、作戦全体と士気に大きな影響を及ぼすと思い、ズォーダーはこの二人の処分を見送ったのだ。
デスラーとタランを追撃してきたデスバ・テーターは司令部からの命令を受け、彗星帝国に帰還した。
その後もガミラス艦隊は彗星帝国の状況を窺っていたが此方を迎撃するための戦闘艦隊が出撃して来る気配が全く無い。
「どうしたんでしょう?艦隊が出撃する気配が全くありませんが・・・・?」
タランが動きを見せない彗星帝国に対して不審に思いデスラーに訊ねる。
すると、彗星の中から一隻の戦艦が出てきた。
当初は、戦艦が出てきた時は警戒を強めたガミラス艦隊であったが、その戦艦が段々と接近してくると警戒を緩めた。
「見ろ、あれは・・・」
白色彗星から出て来た一隻の戦艦・・・それは、彗星帝国がデスラーの為に造り与えたノイ・デウスーラだった。
「あれは・・・私の旗艦だ・・・」
デスラーとタランがノイ・デウスーラに乗艦すると、ノイ・デウスーラの艦内は無人であり、まるで主であるデスラーの下に帰って来たようだった。
「私は、まだ大帝の友情を失ったわけではない様だ・・・」
ズォーダーの行為にデスラーは感激した後、ガミラス艦隊に命令を下した。
「全速発進!!ヤマト撃滅せよ!!」
再び盟主を取り戻したガミラス艦隊は進撃を開始した。

目標はヤマトが居る太陽系・・・
そのヤマトはデスラーの追撃を知る由もなく、故郷である太陽系を目指していた。
前方にバルゼー提督率いる彗星帝国艦隊、
後方にガミラス艦隊と白色彗星本体を控え、ヤマトにとっては苦難の戦いが始まったばかりであった。
そして、地球防衛軍にも厳しい戦いが待っていた。

二十六話　大和とヤマト

テレザート星の謎の爆発に巻き込まれ、再び艦に損傷を追った管理局のＸＶ級次元航行艦クラウディアは一連の出来事を報告する為、母港であるミッドの本局へと帰還した。

ボロボロになったクラウディアの姿を見たドックの技師たちは一体何があったのかと、首を傾げた。

報告書については事前にフェイトとティアナが草案を纏めていたのでクロノはそれをチェックして自らの見解を追加して本部へと提出した。

提出された報告書と証拠物件の映像を見た管理局：特に〝海〟こと次元航行本部は文字通り震撼した。

そして今、解析結果を披露しながらの対策会議が開かれている。

クラウディア艦長のクロノ・ハラオウンは元より、報告書の草案を作成し今回の航海に同行したフェイト・テスタロッサ・ハラオウンもオブザーバーとして末席に着いていた。

クロノは同会議で以下の報告書を提出している。

第１０２自然保護世界プレオはアンノウンⅠからのミサイルによる飽和攻撃よって世界全体が崩壊させられた可能性が高く、常駐していた局員や施設作業に従事していた作業員は全員が死亡したと判定せざるをない。

これらの事を踏まえ、ヒアデス付近で多発した輸送船や次元航行艦の遭難事件はこのアンノウンⅠからの攻撃を受けて撃沈された可能性が高い。

第１０２自然保護世界プレオを攻撃、同世界を破壊したアンノウンⅠのミサイル艦隊は、敵対勢力と思われるアンノウンⅡの一隻の戦闘艦と交戦したが、アンノウンⅡの戦闘艦から放たれたと思われる超エネルギー砲の砲撃により、全ての艦が撃破された。

しかもたったの一撃で壊滅させられた。

アンノウンⅠが撃破される直前に、傍受した艦隊内の通信内容の中に『ヤマト』と呼ばれる固有名詞が何度も登場しており、これらを察するにこの『ヤマト』と言う固有名詞はアンノウンⅡの艦名を表すものだと推察される。
補足として、『ヤマト』と言う固有名詞は第９７管理外世界の日本地区においては幅広く知られており、古代に首都があった地域、第二次世界大戦の折、かの国が建造・保有した超大型の水上戦闘艦の名称でもある。
また、第９７管理外世界の宇宙開発は、まだ同一恒星系内に無人探索機を送り出して運用しているレベルであり、第９７管理外世界が建造・運用している可能性は極めて低い。

クロノ・ハラオウン提出の報告書より抜粋

次に会議室のスクリーンには、クラウディアが記録していたアンノウンⅠのミサイル艦隊とアンノウンⅡの戦艦との戦闘光景が映し出されていた。
アンノウンⅠのミサイル艦隊から放たれた大量の中小型ミサイルに対し、アンノウンⅡの戦艦は周りに吸着させていた鉱石をまるで操るかのようにしてミサイル攻撃を防いでいる。
おまけに吸着させていた宇宙鉱石はバキューム鉱石であり、本来ならばエネルギーを吸い尽くされるはずなのだが、アンノウンⅡは高エネルギー砲を撃てるほどの余裕があった。
そして、アンノウンⅡから放たれた凄まじいエネルギー量を持つ極大のビームがミサイル艦隊を飲み込んでしまった。
飲み込まれたミサイル艦隊は一隻残らず消滅してしまった。
映像に光学処理を施し、ゴーグルなしで見る事の出来る映像を改めて見直した管理局局員一同は驚嘆した。
眩い光の中でミサイル艦隊はまるで強い日差しにあてられたチョ

コレートかアイスの様にみるみるうちに溶けていき崩壊し消滅していった。
「このアンノウンⅡの艦船から放たれたエネルギー砲のエネルギー総量についてですが、何分、詳しいデータが採取できず推定となりますが、ＸＶ級が装備するアルカンシェルのゆうに十倍以上の威力があります。万が一これが本局に撃ち込まれれば、このミサイル艦隊同様、この一撃で本局は消滅するでしょう。なお、これはアンノウンⅠのミサイル艦が装備していたプレオを破壊した例の大型ミサイルを大量に撃ち込まれた場合も同じです」
クロノの報告に高官たちはやや懐疑的な表情だ。
今まで遭難した輸送船は当然武装はしておらず、ノアを含むＸＶ級の次元航行艦は相手が多数だからやられた。
同数ならば負けるはずはない。
というのが異議の根拠だ。
あのミサイル艦隊と次元航行艦は、一対一、あるいは同数の艦隊戦をしたわけではないのだからその言い分にも理はあろう。
しかし、以前第５８探査部隊と謎の艦隊（ガミラス艦隊）との艦隊戦を見たクロノは高官たちの意見にこそ懐疑的な顔をした。
「管理局、そしてアンノウンの艦船性能はひとまず置くとして、新たに遭遇したこの二つの勢力への対応を早急に決める必要があるでしょう」
伝説の三提督の紅一点、ミゼット・クローベルが静かに話す。
極めて強力な軍事力を持つであろうこの二勢力とどう向き合うかが、時空管理局の今後を左右するというのがミゼットの見解だ。
しかし、管理局高官の大半は何とかこの二つの勢力の技術の接収し、これらの本国を管理世界にいれようと模索していた。
かなりの強欲である。
「アンノウンⅠはプレオを破壊している事から、明確に此方を敵対してきていますから、管理局がとるべき態度は決まってくるでしょうが、アンノウンⅡに関しては、慎重に慎重を期するべきです。敵の敵とはいえ、管理局に味方するものと決め付けるのはいささか危険で

す。何より、我々はいずれの勢力の本拠すら掴んでいないんですから：万が一、アンノウンⅡとコンタクトをとる機会が訪れた時は、決して高圧的な態度や言動、無理な臨検、武力行為は控えるべきです」
と、クロノがアンノウンⅡ（ヤマト）との対処を意見すると、管理局の高官の一部は明らかに不快感を示した。
何故、管理局が・・・我々魔導師が、質量兵器しか使えない蛮族に媚びなければならないのかと、言った表情だ。
ならば、貴様らはあの威力を見ておきながら、迂闊に武力行為をする事が出来るのかと、クロノは問いたかった。
「では、我々管理局は早急にこの二つ勢力の本拠なり根拠地を掴む必要がありますな？」
と、〝海〟こと次元航行部隊の一提督が主張し、本局側の高官の大半は賛意を示すが、〝陸〟こと、地上本部側の高官は警戒感を露わにする。
次元航行部隊の活動強化は新たな人材を必要とするが、往々にしてそれは、〝陸〟と呼ばれる地上本部所属の人材を大量に引き抜くことで充当してきたからだ。
そのおかげで、自分たちの足元であるミッドの治安は未だに改善されておらず、反対に悪化の一途を辿っている。
「そちらの事情は認めるが、安易な人員の引き抜きに関しては、当方は承服できない。ＪＳ事件の余波で、各管理世界市民の管理局に対する信頼度はまだ戻ったわけではない。そんな中、安易に人材を引き抜かれては各世界政府からの不信感を募らせることになるしミッドの治安維持活動にも支障をきたす」
「何だと!?」
地上側の一言に〝海〟の一部高官が過敏に反応し、座は緊張する。
ミッドで起こったジェイル・スカリエッティを主犯とする大規模テロ、ＪＳ事件は時空管理局に対して、様々なダメージを齎した。
地上防衛の要となるアインヘリアルの破壊、地上本部のレジアス・ゲイズとスカリエッティとの癒着。
最高評議会の正体。

その最高評議会とスカリエッティとの繋がりとレジアス及び最高評議会メンバーの殺害。
更にスカリエッティの逮捕と共に何処から漏れたのか、管理局の高官たちが長年に渡って行ってきた様々な汚職や不正が明らかになり、管理局は各管理世界からの強い批判に曝された。
当初、本局はレジアスとスカリエッティが繋がっていた事をネタに地上の全ての権利を掌握しようと画策したが、汚職や不正を行い、摘発された局員の九割以上が本局の局員だった為、レジアス一人のネタでは全権掌握は無理と判断し、やむを得ず〝陸〟の全権掌握を断念せざるを得なかった。
管理局全体の暗部や不正がミッドの民衆や管理世界に晒され、管理局は著しく信用を失った。
その為、管理局は現在信頼回復のため組織改革が進められているのだが、一度失った信頼を取り戻すには時間がかかり、その間もミッドの各地や他の管理世界では反管理局勢力やテロリストたちが之幸いとその活動を活発化させている。
そんな中、新たな勢力への対処次第ではこの改革が止まってしまう・・・いや、下手をしたら管理局そのものの存在が崩壊してしまう可能性もある。
管理局を襲った〝嵐〟は、改革派・守旧派の区別なく破壊と殺戮を齎したのだから・・・。

報告会議を終えた後、フェイトは、はやてに連絡を取り、その日の夜、フェイトは自宅に戻る前にミッドにある八神家を訪れた。
プレオ、テレザートがあった宙域は機械観測による観測海域とされ、当分の間は一切の航行が禁止された封鎖海域になってしまった。
クロノの許可を貰い、フェイトは持ち帰った映像――ヤマトとミサイル艦隊の戦闘、テレザートと白色彗星、テレザートの自爆、ヤマトの不鮮明な画像等をはやてとヴォルケンリッターの皆に見せた。
その映像を見た時、はやてたちは報告会議に出席した管理局高官たち同様、驚きの色を隠せなかった。

プレオの残骸を見たはやてたちは正視できずにいたが、一様に憤りの表情を浮かべていた。
「管理局とは別の宇宙船技術を持つ連中か・・・今までＳＦ映画や漫画・アニメだけの産物だと思っていたのだが、まさか実際に目の当たりにするとはな・・・」
シグナムが苦い表情で呟く。
ハリネズミのように全身をミサイルで固めた大型戦闘艦群。
「本局はプレオを破壊したのはこの艦隊だと断定したよ」
ミサイル艦隊の映像を見せながらフェイトはプレオを破壊した一連の主犯と本局の動きを教える。
「見ていて、すげぇ腹が立つぜ!!・・・でも、こんな物騒なハリネズミが相手じゃ、ＸＶ級が殺られたのも解るな」
ヴィータが画面を睨みつけながら言った。
「でも、この艦隊も一瞬で全滅したよ・・・それも、たった一隻の戦艦相手に・・・」
フェイトがリモコンで映像の場面を操作すると、そこにはミサイル艦隊が別の戦闘艦・通称ヤマトの超高エネルギー砲撃で一隻残らず消滅する場面が出た。
「な、なんだよ・・・この砲撃・・・」
「高町のスターライトブレイカーや次元航行艦のアルカンシェルどころではないな」
「こんなん見せられたら、アルカンシェルが銀玉鉄砲にしか見えへんわ・・・」
「あの　ゆりかご　も、もしかしたら、一撃で墜とせたかもしれないわね」
ヴィータ、シグナム、はやて、シャマルが呻く。
管理局の次元航行艦に詳しくない局員が見ても、今の時空管理局の艦船ではこれらの戦闘艦相手に武力では歯が立たないだろう。
「こんな船がうろついていたら、テレザート海域が観測世界扱いになるのも無理ないわね」
シャマルが、仕方がないと言う口調で言う。

次にフェイトはテレザートに接近する白色彗星の映像を見せた。
「確かにフェイトちゃんの言う通り、ただの彗星には見えへんな」
「ああ、アタシもそう思うぜ」
「うむ、はっきりとしたことは言えんが、私もこの彗星からは禍々しい狂気を感じる・・・自然の物にはない感じだ」
はやて、ヴィータ、シグナムも白色彗星を初見した時のフェイト同様、この彗星がただの彗星とは思えないと言う結論に至った。
「フェイトちゃんやクロノ君たちはこの艦の名前が『ヤマト』と言う情報を掴んだんやな？」
最後にフェイトはミサイル艦隊と戦う姿ではなく、テレザートから逃げる様に去っていくヤマトの画像を見せた。
「うん。あのミサイル艦隊の通信で何度もその名前が出てきていた。私たちは何とか話をしたかったんだけど、白色彗星の出現やテレザートの自爆で、結局ダメだった」
フェイトはひと息ついて続ける。
「でも、あの艦・・・ヤマトは、多数の相手にも武器にも動じず、ただジッと待って機会を窺っていた・・・それは肉を斬らせて骨を断つような戦いだった・・・まるで日本のお侍さんみたいな戦い方・・・絶対に、敵に回したらいけないタイプだけど、こちらが誠実に接すれば、素晴らしい友人にもなり得る相手に思えた。でも、結局何もできなかった…ミサイル艦隊についてもヤマトの事も、何もわからずじまい・・・プレオに居た人たちを一人も助ける事が出来ず、テレザートの崩壊も止められず、この白色彗星の正体もつかめないまま、私たちは尻尾を巻いて逃げ帰って来ることしか出来なかった」
フェイトはグッと拳を握り、悔しさを露わにする。
「テスタロッサ、お前が責任を感じる必要はない。あんな強力な宇宙戦闘艦や艦隊との遭遇自体、今までの管理局の歴史にはなかったのだからな。むしろ、二度の調査で情報を得て、こうして無事に帰還したことこそ、十分称賛に値すると思うぞ」
「シグナム・・・」
シグナムはフェイトの肩に手を置き、フェイトを労う。

勿論、同席した皆が頷く。
既に多くの輸送船や次元航行艦が遭難している宙域で、二度小破したにもかかわらず、全員が無傷で帰還したのだから、十分に成功と言っていい。
それを咎める者は、口達者で、いざ実際に自分が出来るかと訊ねられれば、上手く誤魔化して逃げる腰抜けにすぎない。
「それで、はやて。ヤマトについてなんだけど・・・」
「フェイトちゃんに頼まれたモノ、ちゃんと用意してあるで」
フェイトがヤマトについてはやてに訊ねると、彼女は何冊かの本をフェイトに差し出した。
差し出された本は全て過去、地球で起きた二度目の世界大戦に関連する本ばかりであった。
フェイトが何故、今、はやての家に来たのかは、彼女にこの映像を見せるのと同時にヤマトについて訊ねるためであった。
はやては小学校時代からよく図書館へ通い詰めていた為、本には詳しく、こうした本などを集めるにはうってつけの人物であった。
本や資料については無限図書の司書長であるユーノ・スクライアでもよかったのだが、ヤマトは地球の艦と言う事で、生まれ故郷であるはやての方がより詳しく集められると思って、フェイトははやてに頼んだのだ。
「これや、旧日本海軍が建造した戦艦、大和っちゅう艦は・・・」
とある船の図鑑の一ページに描かれている大きな戦艦の写真。
塔の様に聳え立つ艦橋。
当時、世界最大の大きさを誇り、三基の三連装四十六センチ砲、二基の三連装十五センチ副砲、そして両舷には多数の高角砲と機銃で武装したまさに黒鉄の城・・・戦艦、大和。
就航した後、何度か改装を施されたらしいが、一般的に戦艦、大和と言われピンとくるのは、終戦末期の沖縄突入時の大和の姿だろう。
「うーん・・・確かに似ていると言えば似とるな・・・」
はやては戦艦、大和の写真と今回、クラウディアが遭遇し捉えたヤマトの画像を見比べて、この二隻が同一の物なのかを見比べる。

「でも、戦艦、大和って海に沈没しているんだよね？」
フェイトが第二次世界大戦の戦闘記録の本を見ながらはやてに訊ねる。
「そうやで、それに地球にはまだ、宇宙戦闘艦を作り上げる技術なんて持ち合わせておらん。だから、この大和とフェイトちゃんらが見たこのヤマトが同一の物なのか？と、訊ねられれば、答えは『ＮＯ』や」
「た、確かに・・・」
「それに戦艦、大和は今、真っ二つになって海に沈んどるんよ」
はやてが海に沈没した大和の状態が描かれた図鑑のページをフェイトたちに見せる。
「これじゃあ・・・」
「復元なんて無理だな」
東シナ海の海底に真っ二つに割れて沈んでいる大和。
その光景を見てフェイトとシグナムは諦めた様な口調で言う。
「それよりも私が気になったんはこの部分や」
そう言ってはやてはリモコンを操作し、映像を巻き戻す。
はやてが気になった部分は、ヤマトがバキューム鉱石を船体に付着させ、その後、アステロイドリングでミサイルを叩き落とすシーンだった。
「戦艦自体にレアスキルなんて備わっている筈がない。せやからこれは、この隕石にヤマトが何らかの仕掛けをしたと思うんや」
「うん、私もそう思う。でも、この付着させた鉱石はバキューム鉱石って言うの」
フェイトもあの時は、一体何が起きたのか、突然の事で分からなかったが、よくよく思えば、はやての言う通り、アレはヤマトが付着させた隕石に何らかの仕掛けをしたものだと考えればあの現象の説明もつく。
しかし、付着させた隕石が問題あった。
「バキューム鉱石？それって何だ？」
ヴィータがフェイトにバキューム鉱石の説明を求めた。
「バキューム鉱石って言うのは、クロノが言うには船の推進エネル

ギーを吸い取る特殊な宇宙鉱石の事なんだよ。そしてあのテレザートの近くにはそのバキューム鉱石が一杯あったの。だから、あんなにも沢山のバキューム鉱石を密着させたら、あっという間に船のエネルギーは吸い尽くされてしまう筈なのに・・・・」
「あのヤマトは、航行不能になるどころかその後、すぐに超エネルギー砲を撃てた・・・・」
はやてがフェイトが疑問に思ったことを口に出した。
「そんなことって可能なの？」
今度はシャマルがフェイトに質問する。
「分からない・・・・でも、何か仕掛けが有る筈・・・隕石を操ることの出来る仕掛けを施すぐらいの技術を持った艦なんだから」
「それじゃあ、マリエルかシャリオにこの映像を見せてそれが出来るか検討してもらってはどうか？」
ここで初めてザフィーラが口を開き提案してみた。
「いたのか!?　ザフィーラ!!」
ザフィーラの声を聞いたヴィータが驚愕の声をあげる。
その他の皆もザフィーラの存在に驚いている。
「最初から居たのだが・・・・」
完全に皆からアウト・オブ・眼中を食らっていたザフィーラはしょんぼりと項垂れた。
ザフィーラの存在の有無は、兎も角、彼の提案は一理あるので、翌日フェイトとはやては、マリエルの下を訪れ、映像を解析して貰いマリエルの意見を聞いた。
当初、この映像を見たマリエルも驚愕し、開いた口が塞がらず、固まるようにしてこの映像を見ていた。
しかし、マリエルでもこの隕石を操作する仕掛けについては分からなかった。
フェイトたちが遭遇したこのヤマトはあの戦艦、大和とはやはり無関係なのだろうか？
フェイトがその答えを知るにはもう少し時間がかかった。

場面はミッドから星の海へと変わる。
テレザート星域、ヒアデス星団を無事に脱出する事が出来たヤマトは、大ワープを行い、カイパーベルト近海にワープアウトした。
そのカイパーベルトでは、彗星帝国軍をいち早く発見したパトロール艦、渦潮が彗星帝国軍の艦艇に攻撃を受けていた。

パトロール艦　渦潮　艦橋

「機関部に被弾!!」
「なにっ!?損傷具合は!?」
「航行は何とか可能ですが、速度が少しずつ落ち始めました!!これ以上攻撃を受けると航行不能に陥るおそれがあります!!」
「くっ、通信士、まだ救援は来そうにないか!?」
「はい、ＳＯＳは打電しているのですが、未だに応答は・・・」
「ともかく、打ち続けろ!!航海士、針路をアステロイドのある場所へ迎え!!少しでも時間を稼ぐんだ!!」
「了解!!」
「技術班は機関部の応急修理を急げ!!」
渦潮の艦長は的確な指示を出しながら、何とか振り切ろうとしているが彗星帝国軍の攻撃は容赦なく渦潮に襲い掛かってくる。
士官候補生たちは悲鳴や泣き叫ばないが皆、顔を青くし不安と恐怖から戦っていた。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋

カイパーベルトに入ったヤマトに突如、ＳＯＳ信号が入電した。
「艦長代理、通信が入っています。これは・・・ＳＯＳです!!」
「何っ!?」
「スピーカーに繋ぎます」
「・・・・Ｓ・・・・・Ｏ・・・・ＯＳ!!・・・ＳＯＳ!!」
スピーカーからはノイズ交じりではあるが、確かにＳＯＳが聴こえた。
「・・・現在、白色彗星軍と思われる敵艦より襲撃を受け応戦中!!・・・・

ＳＯＳ!!ＳＯＳ!!大至急救援を!!救援を求む!!」
　そして、ヤマトのレーダーがＳＯＳを打電している渦潮の位置を特定した。
「ＳＯＳは防衛軍にも届いている筈だ。だが、間に合う距離にいるのは我々だけだぞ、古代」
「相原、返信を!!」
「了解!!此方宇宙戦艦、ヤマト!!此方宇宙戦艦、ヤマト!!今、貴艦からのＳＯＳを受信した!!これより救援に向かう!!」
「ありがたい!!此方パトルール艦　渦潮!!できるだけ急いでください!!機関部に損傷を受け、逃げようにもスピードが出ません!!今の状態で敵を振り切れるかわからないんです!!」
「了解、急行します」
　ヤマトからの救援を聞いた通信士は少しだけホッとした様子が声から分かった。
　つまり、事態は一刻も争うと言う事だ。
「彗星帝国め!!」
　南部は彗星帝国に対し、憤慨した声を出す。
「おそらく、彗星本体に先行する艦隊を太陽系に差し向けてきているんだ・・・先遣隊だな。彗星帝国との決戦の時は、そう遠くないかもしれんぞ」
　真田は渦潮を攻撃している彗星帝国の艦艇は先遣隊であり、彗星帝国との決戦が近い事を予見する。
「兎に角、急ぎましょう」
　ヤマトは渦潮の救援へと向かったが、その後方からも彗星帝国軍の艦艇が迫って来た。
「後方に反応!!これは・・・空母の反応です!!艦載機を展開し始めています!!」
　雪の言う通り後方から迫って来た敵艦の中には一隻の中型空母が含まれており、その空母からは対艦装備をしたＴ―２攻撃機が発艦し始めていた。
「コスモタイガー発進!!」

古代はコスモタイガーを発進させた。
「加藤は後方から迫る敵機の迎撃を!!山本は友軍の救援を頼む!!」
「了解!!」
コスモタイガーは発進後、それぞれ受け持った任務をこなす為、散開していった。

その頃、渦潮は依然と敵の容赦ない攻撃を受けていた。
既に飛び道具のミサイルは撃ち尽くし、後は前部に装備されている砲塔だけだが、機関部は被弾している為、エネルギー供給が上手くいかない。
その為、渦潮は戦闘よりも航行を優先していた。
当初、敵と遭遇した時、渦潮はミサイルにて敵艦を数隻、撃沈したがそれに憤慨した彗星帝国軍は血眼になって渦潮を追撃してきた。
友軍をやられてこのままおめおめ帰れるかと言った感じだった。
敵の戦力は駆逐艦二隻だったが機関部を損傷した渦潮にとって十分脅威な敵だった。
しかも渦潮は現在背後をとられている状態・・・防衛軍のパトロール艦はその任務故の構造の為、後部には砲塔の類を一切搭載しておらず代わりにレーダーやアンテナの類を搭載している。
故に背後をとられた渦潮は逃げの一手しか取れなかったのだ。
そこへ、ヤマトからの救援の通信が入ったのだから、まさに地獄に仏だった。
しかし、ヤマトの位置は渦潮の位置から離れている。
渦潮が撃沈されるのが先か、それともヤマトからの救援が先か、渦潮の乗員は生きた心地がしなかった。
その時、敵の駆逐艦一隻が爆発を起こした。
それは、ヤマトのコスモタイガー隊が敵の駆逐艦を攻撃したために起こった出来事だった。

パトロール艦　渦潮　艦橋
「コスモタイガーだ!!」

「友軍だ!!」
「助かったぞ!!」
　友軍のコスモタイガーを見た渦潮の乗員たちは声をあげて歓喜した。
（ふぅ～・・・何とか間に合ったか・・・）
　渦潮の艦長もホッと一息ついた。
　やがて、一隻となった敵の駆逐艦もすぐにコスモタイガー隊によって撃沈された。
　渦潮を救援したコスモタイガーは黄色いテールをしていた。
　ヤマトのコスモタイガー隊は隊によってテールの色を変えていた。
　加藤隊のコスモタイガーはオレンジ、山本隊のコスモタイガーは黄色のテール色をしていた。
　救援に来たコスモタイガーを渦潮の皆が歓喜しながら見ている中、椎名は皆よりも派手に喜びを表さなかったが口元を緩めてクスッと笑みを浮かべて見ていた。
　加藤が向かった後方の敵もT―2を迎撃し、母艦である空母もヤマトの砲撃により殲滅されカイパーベルトに彗星帝国軍の艦艇は全て消え失せた。
「敵の全滅を確認・・・周囲に敵影はありません」
「なんとか、間に合ったか・・・」
　古代は友軍の救援が無事に済みホッと息をついた。
「艦長代理、通信です」
　相原が渦潮からの通信回路を開いた。
「此方、パトロール艦、渦潮。何とか一命を取り留めました。貴艦に感謝いたします!!」
「此方、宇宙戦艦、ヤマト艦長代理、古代進。これより本艦は太陽系内周へ向かい、土星圏に集結中の防衛軍本隊へと合流します。貴艦も同行されてはいかがでしょうか?」
　古代は渦潮に対し、一緒に土星圏まで同行しないか?と、誘う。
「お心遣い感謝いたします。確かにこのままでは、パトロール任務を遂行できそうにありません。お言葉に甘え、ご同行させていただきま

す」
　渦潮の艦長は被弾したこのままの状態で、しかも単独でのこの宙域のパトロール任務は危険だと判断し、ヤマトと共に土星圏へと向かう事にした。
「味方か・・・すくね　以来ですね」
「すくね　の三木艦長たち・・・そしてテレサ・・・俺たちは彼らの命を救う事が出来なかった・・・今度は助けられて良かった・本当にそう思うよ・・・」
　古代は三木やテレサの事を思い出し、改めて救援が成功した事を喜んだ。
　その後、真田らヤマトの技術班が渦潮に乗艦し、機関部の応急修理を行い、ヤマト　と　渦潮　は太陽系内周へと入った。
　太陽系内周へと入ったヤマト　と　渦潮　は第十一番惑星近海へと近づいた。
「カイパーベルトを通過、まもなく第十一番惑星の軌道です」
　太田がヤマトの現在位置を報告する。
「ここまで来れば、地球の勢力圏だ。家の庭先へ帰って来たようなものだな」
「このままいくと、あと数日には地球艦隊と合流できると思います」
「相原、防衛軍本部に連絡しておけ」
「はい」
　古代の命令を受け、相原はヤマトの現在位置、地球艦隊との合流予定日時等を本部へ知らせる。
　地球の勢力下へと戻って来たと言う事で、みんなの顔には安堵の様子が見られる。
　そんな時、斎藤が古代を呼び、彼に第十一番惑星に立ち寄らせてくれと頼んだ。
　しかし、古代はこの時、斎藤の頼みを断った。
　今は一刻も早く土星圏の地球防衛軍本体との合流を急いでいる為、少しのロスも許されなかった。
　斎藤の頼みを断った後、古代は艦橋で思いに耽っていた。

其処へ島が古代に声をかけた。
「どうした?古代。何を考えているんだ?」
「島、十一番惑星に立ち寄ってくれないか?ほんの少しでいい」
「何を言うんだ、古代!!そんな余裕があると思っているのか?白色彗星だって接近してきているんだ。今は一分一秒でも早く地球艦隊と合流しないと・・・・」
「ああ・・・そうなんだが・・・・」
古代は力なく答える。
古代に第十一番惑星への立ち寄りを断られた斎藤は強硬手段に出た。
格納庫で整備中のコスモタイガーを奪おうとしたのだ。
当然、コスモタイガー隊の隊員たちはそんな事を許せるはずもなく、斎藤と取っ組み合いになった。
騒ぎを聞きつけた古代は格納庫へと行くと、斎藤に第十一番惑星への探査命令を出した。
当初、古代の命令を聞いた斎藤は困惑しつつも、第十一惑星に行けるなら・・と、整備が終わったコスモタイガーで第十一番惑星へと向かおうとしていた。
そこへ、佐渡が酒を持ってやってきて、「久しぶりに戦友と会うのだから、酒でも持っていけ」と、強引に酒を斎藤に持たせた。
斎藤が第十一番惑星へと向かっている間、ヤマトは何もしなかったと言う訳ではなかった。
新たに搭載したタイムレーダーにて周辺を探査し、通り過ぎて行った敵艦隊の規模と通過時間を測定していた。
しかし、目星しい情報は手に入らず今後も索敵活動が必要となった。
そこへ、地球の防衛軍本部からヤマトに通信が入った。
「古代、何故、ヤマトを停めた?」
藤堂は第十一番惑星近海で停泊しているヤマトにその停泊理由を訊ねてきた。
「決戦の時は近い・・事は一刻を争うのだぞ。見たまえ・・・・」

そう言って藤堂は土星衛星タイタン基地に集結している防衛軍本隊の映像をヤマトの乗員たちに見せる。
「我々は今、全力を挙げて態勢を整えつつある。目下、太陽系外周艦隊の全てをタイタン基地へ集結させている最中だ。最終的には地球連邦の全艦隊を集結させる」
スクリーンには、次々とタイタン基地へ続々と集結する地球防衛軍艦艇の光景が表示される。
「防衛軍の全艦隊をタイタン基地にですか？」
「土星軌道を絶対防衛線に設定し、敵の侵攻艦隊を迎え撃つのだ。地球全域にはすでに避難命令が出され、人々は地下都市へと避難を開始した。この決戦にはなんとしても勝たねばならん。急いでくれ古代!!地球はヤマトを待っている」
「はい」
藤堂はヤマトの到着を急がせて通信をきった。
「土星基地に全艦隊が集結か・・・」
島が余りにもスケールのデカイ話だと言わんばかりに言う。
「こりゃまた、思い切った事をするもんじゃわい」
徳川も島の意見と同様な様子。
「おそらく土方提督が提唱した戦略でしょう」
真田がこの作戦の立案者の名をあげる。
「土方さんが？」
「そうだ、古代。敵の規模は途方もなく巨大なものだ。すべての戦力を一局に集中せねば、勝利の見込みは無い」
「しかし、次には白色彗星本体が出てくるんですよ。いくら侵攻艦隊に勝てたとしてもその時に戦力が失われてしまっては元も子も・・・」
南部が今回の作戦大丈夫なのかと不安げに訊ねる。
「僕もそう思います。戦力は分散配置させた方が良かったんじゃないんですか？」
太田も南部の意見に同意した。
「まず、侵攻艦隊を倒さねば、地球が生き残る道は無い。白色彗星にはまた別の戦略を考えるしかないんだ。無謀にも見えるかもしれんが、

そうするしかなかったんだよ、土方提督は・・・」
真田の予想はピタリと一致していた。

その頃、第十一番惑星に到着した斎藤は、第十一番惑星を急襲してきた白色彗星帝国との戦闘で戦死した部下たちの墓へと来ていた。
「お前たち・・・此処にいたのか・・・」
墓と言っても、戦死者が使っていたであろう、ロケットランチャーやビームライフル、ヘルメットで作られた簡単な作りの墓標である。
「さぁ、お前たち・・・飲め・・・」
斎藤は部下の墓、一つずつに丁寧に酒をかけた。
そして、斎藤が部下の墓参りをしていると突如、大きな揺れが起こった。
「な、なんだぁ?じ、地震か!」
斎藤が辺りを見回していると、空には高速飛行物体が飛んでいった。
「こ、こりゃあ・・・!!」
突如、空を飛んでいった高速飛行物体を見ていると、其処からかビームライフルのビームが飛んできた。
「やべぇ!!」
斎藤がビームの飛んできた方向に目をやると、彗星帝国の兵士がビームライフルを構えながら、近づいて来た。
斎藤は両手をあげ、抵抗はしないというポーズをとると、兵士は尚も近づいてくる。
そして事もあろうに斎藤の部下の墓の上を歩いた。
それを見た斎藤は憤慨し、手で兵士が持っていたライフルを弾くと次に兵士の腹に蹴りを入れ兵士が吹っ飛ぶと、
「そこを土足で踏むんじゃねえ!!」
と、怒声で叫びホルスターからコスモガンを抜き、敵の兵士を射殺した。
戦死した部下たちの墓参りを終えた斎藤は急いでヤマトへと戻った。

第十一番惑星の空を飛んでいった高速飛行物体は彗星帝国軍の長距離ミサイルだった。
「ミサイル接近!!・・・・第十一番惑星からです!!」
「なんだって!!」
「十一番惑星は、すでに敵の兵站基地になっていたと言う訳か・・・・」
真田の言う通り、防衛軍が冥王星まで防衛ラインを引き下げたことにより、彗星帝国はナスカ艦隊が全滅した後、また新たに先遣部隊を送り、何の抵抗もなく第十一番惑星を占拠、そこに大規模な兵站基地を建設していた。
そして、第二次先遣隊は彗星帝国本体の地球攻略作戦が実施されるまで、防衛軍に悟られぬようにひっそりと息を潜めていた。
だが、ズォーダー大帝が地球攻略作戦の発動を宣言し、しかも至近距離にあのヤマトが来たのだ
基地の将兵たちはこの千載一遇の機会を見逃す手はないとヤマトに対して攻撃を開始したのだ。
ヤマト　と　渦潮　はミサイルを撃ち落としながら、第十一番惑星へと接近する。
斎藤を待つよりも此方から出向いた方が早かったからだ。
更にヤマト　と　渦潮　の後方からは敵艦も迫って来た。
ヤマト　と　渦潮　は大きく旋回し、敵艦を迎撃するが、斎藤の回収と敵の攻撃の回避は不可能。
故にヤマトは斎藤の回収を優先した。
その為、ヤマトの各部に被害を出し、多数の負傷者も出した。
だが、ヤマト　と　渦潮　もただでやられる訳にもいかず、斎藤を待っている間、波動砲のエネルギーチャージを行っていた。
そして、斎藤の帰還と同時にエネルギーが溜まり敵艦隊と第十一番惑星の敵基地に向けて波動砲を撃ちこんだ。
ヤマト　と　渦潮　の波動砲により、第十一番惑星の敵基地と艦隊は一瞬のうちに消滅した。
基地と守備艦隊との連絡が途絶えた事から、ヤマト　の攻撃を受けたものだと、彗星帝国側は直ぐに分かった。

白色彗星帝国軍　太陽系侵攻機動艦隊　旗艦　メダルーザ　艦橋
「バルゼー提督、第十一番惑星の兵站基地がヤマトの攻撃を受け全滅しました」
「なにっ!?」
「護衛にあたっていた第二十五戦闘艦隊も同じく連絡を絶ちました」
「・・ヤマトか・・・・・・」
この時からヤマトはバルゼーにとって取るに足らない辺境の田舎戦艦から小賢しい敵と認識を変えた。
ヤマトは第十一番惑星で負った傷を修理しながら、第十一番惑星軌道を抜けた。
探査任務（部下の墓参り）を終えた斎藤は医務室で佐渡と酒を酌み交わしていた。
「今日の酒はうめぇ・・・・」
杯に注がれた酒を一気に飲む斎藤。
「そうじゃろう、そうじゃろう!!さっ、呑め!!もっと呑め!!」
佐渡は斎藤の杯に酒を注ぐ。
「先生・・・・あいつは良い奴だな・・・・」
「誰の事じゃ？」
「・・・・艦長代理だよ」
「ん？そうか、そうか」
佐渡は嬉しそうに頷きながら自らの杯に酒を注いだ。
その頃、土星圏タイタン基地では地球防衛軍の艦艇が続々と集結していた。
「只今、第十一艦隊が到着いたしました。すでに第二十四艦隊はイアペトゥスに、第十五、十六艦隊はレアに配置完了。現在第六機動艦隊、第七巡洋艦隊がタイタンに向かいつつあります」
「うむ」
パネルにはタイタン、土星圏に集結してくる地球艦隊の光景が広がっていた。
地球艦隊と彗星帝国軍との決戦は間近に迫っていた。

地球艦隊とヤマトの新たな死闘が今始まろうとしているのだ。
そしてその背後には白色彗星が刻一刻と迫ってきているのだった
……。

二十七話　土星圏　フェーベ会戦　索敵

第十一番惑星にて、敵の兵站基地と守備艦隊を破壊した　ヤマト
と　渦潮　は、冥王星軌道へと到達した。
既に基地の職員は退避しているので、今は無人となっている冥王星。
しかし、その軌道を回っている戦闘衛星や無人攻撃ステーションは稼働しており、敵が通過した時、少なからずの損害を与える様に設置されている。
それが、確実に破壊される運命だとしても・・・・。
第十一番惑星での戦闘により、予定時間をロスした為、ヤマトは冥王星を通過した後、土星までの大ワープを行う事となった。
その時、ヤマトのレーダーが一瞬何らかの反応を捉えた。
「っ!!レーダーに今、なにか・・・・」
「どうした?雪?」
「レーダーに一瞬、反応が出た様に思ったんだけど・・・・消えてしまったわ・・・・ちょっと待って。記録をさかのぼってみるわ」
雪はタイムレコーダーの履歴を遡って、先程捉えた反応を調べる。
「何もなければいいんですけど、こういう時の悪い予感って当たっちゃうんですよね・・・・」
相原がフラグをたてるような台詞を吐く。
「見つけたわ!!微弱だけど、潜宙艦が空間潜航時に出すパルスよ!!ヤマトのコンピューターに潜宙艦の交戦記録が残っていたから、一瞬でも感知出来たのね」
雪が過去の履歴と先程の反応を照らし合わせた結果、先程捉えた反応は敵の潜宙艦の反応だと判明した。
相原の言う悪い予感は奇しくも当たってしまった。
「潜宙艦がこのあたりにか?敵の偵察隊・・・・いや、奇襲隊の可能性もあるな」
島がこの辺りに潜んでいる潜宙艦の目的を推察する。

確かに島の言う通り、潜宙艦の構造上、潜宙艦は偵察か奇襲攻撃には持って来いの艦艇だ。
ドイツのUボートによる群狼戦術しかり、第二次世界大戦の折、日本軍が真珠湾攻撃の際に行った特殊潜航艇による攻撃、アメリカの潜水艦による通商破壊同様、十分奇襲攻撃の可能性はあった。
「土星で待っている土方さんの下には潜宙艦のデータが無い!!もし、それが奇襲艦隊だとすると・・・・」
「まずいぞ、これは・・・・!!」
古代と徳川も敵潜宙艦の狙いが集結中の防衛軍への奇襲攻撃を危惧する。
「相原、急いで潜宙艦の分析データを土星へ転送するんだ!!」
古代は相原に防衛軍本体へ、潜宙艦のデータを送るように指示する。
「了解!!でも、ただでさえ、バカでかいデータです・・・・収束通信で送ってもかなりの時間がかかります!!」
「仕方がない・・・・艦載機を展開して警戒しながら進もう!!なんとか土星到着前に潜宙艦を発見して撃破しなければ・・・・相原、土星への通信を並行して、周囲を探針で探ってくれ!!」
「了解・・・・ふぅ〜いきなり忙しくなるな・・・・」
相原は土星へデータを送るのと同時に、以前プロキオン宙域にて探針で潜宙艦を探り当てたのと同様の方法で、潜宙艦の捜索にあたった。
渦潮　にも発光信号にて潜宙艦の存在を知らせる。
その結果、相原は次々と潜宙艦を発見し、コスモタイガー隊にその位置を通達して、コスモタイガー隊は潜宙艦を次々と撃沈していった。
コスモタイガー隊の雄姿は、渦潮でもパネルで投影されており、その様子をレーダー員見習いで、艦橋に居た士官候補生の椎名晶はその活躍ぶりをジッと見ていた。
「・・・・」
彼女の瞳には尊敬の眼差しが含まれていた。

カイパーベルトで助けられた時は、ゆっくりとその雄姿を拝む余裕はなかったが、今は艦の機能も正常に働き、何よりヤマトと言う頼もしい味方がいるので、コスモタイガー隊の働きを見る事の出来る余裕があった。
ヤマトが冥王星付近にて、敵の潜宙艦と交戦して居る頃、
「艦長、前方にガニメデ基地、着陸用ドックを確認」
良馬が艦長を務める　まほろば　は木星のガニメデ基地に到着した。
「ようこそガニメデへ」
基地管制塔からの通信が入る。
「こちら地球防衛軍、戦艦、まほろば。藤堂司令の命令を受け、西郷参謀長を乗せ、ただいま到着しました。誘導をお願いします」
「・・・ＩＦＦを確認・・・了解。第二ドックへの着陸を許可します」
「了解、戦艦、まほろば　第二ドックへ着陸します」
ギンガはガニメデ基地とコンタクトをとり、まほろば　はガニメデ基地の艦船第二ドックへ着陸した。
既に木星圏に駐屯している艦隊は土星のタイタン基地に向かっていたので、ドック内に艦船の姿が見えない・・・と、思ったら、まだ一隻だけ戦艦がドックに残っていた。
「西郷参謀長、ガニメデ基地に到着しました」
良馬が西郷のいる部屋へ行き扉の前で　まほろば　がガニメデ基地に到着したことを知らせる。
「うむ、今行く」
「さ、参謀長!!その恰好は?!」
部屋から出てきた西郷の姿を見て、良馬は声をあげる。
目の前にいる西郷はいつもの防衛軍司令部の幕僚が着ている深緑色の軍服ではなく、良馬が着ている宇宙艦隊の艦長が着ている黒いジャケットタイプの軍服に白い軍帽を被っていた。
「ん?この服装のことかね?見ての通りだ。私も今回の作戦では、一艦長として、戦場に赴く。既に長官の許可を得ている」
土方が独断で艦隊配置を変えた時、西郷は藤堂に自分も艦長として

前線に赴くのでその許可を出してもらうよう頼んでいたのだ。
「では、横に泊まっている艦は・・・・」
「私が艦長を務める艦だ」
そう言って、西郷は荷物を纏め、まほろば　を降り、横に泊まっている戦艦へと移乗していった。
その時の西郷の様子は、普段防衛軍司令部庁舎に居る時よりも、何だか嬉しそうと言うか、輝いていた。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「へぇ～あの参謀長殿が・・・・」
良馬が艦橋員に西郷が隣に泊っている艦の艦長を務める事を伝えると、永倉が意外そうに言う。
まぁ、確かに司令部の幕僚が好き好んで前線勤務を志願するなんて、珍しい事なので、永倉が意外そうに言うのも分かる。
「戦艦、薩摩より通信、出撃準備が整ったそうです」
宇宙戦艦、薩摩・・・・それが、西郷が艦長を務める艦の名前だった。
ギンガは良馬に薩摩の出航準備が出来た事を伝える。
「まほろば　の補給も既に終了しています」
新見が土星圏での戦いにむけて、まほろば　の最後の補給が出来た事を報告する。
「よし、では此方も出発するか・・・・出航用意!!」
「出航用意!!」
「機関始動!!」
「ガントリーロック解除」
「補助エンジン低速回転、微速前進」
まほろば　と　薩摩　はガニメデ基地を出撃、タイタン基地へと向かった。
「艦長、薩摩が通信を送っています」
タイタンへ向かっている中、まほろば　が、薩摩の通信を傍受した。
「薩摩が?どこに?」

「冥王星付近です」
「冥王星？あそこにはもう、誰も居ない筈だが・・・？」
「確認してみます」
ガニメデ基地を出撃直後、薩摩が冥王星付近へと通信を送り出した。
新見が冥王星付近に何があるのかを確認する。
「・・・確認できました」
「それで、薩摩はどこに通信を？」
「ヤマトです」
「ヤマト!?それは間違いないんだな？」
「はい、間違いありません」
「そうか・・・ヤマトか・・・帰ってきたんだ・・・」
ヤマトがテレザートから帰還した。
となれば、ヤマトの援軍に赴いた三木が艦長を務める巡洋艦　すくね　も帰ってきたことになる。
今度は三木と艦長同士で肩を並べて戦うのだと思う良馬だった。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
「これで・・・・全部か？」
古代が雪にもう敵潜宙艦が全滅したのか訊ねる。
「レーダー反応、空間歪曲反応ともにありません」
雪の報告では、この辺りに潜んでいた潜宙艦は撃破できたようだ。
「なんとか間に合った様ですね・・・・」
相原は潜宙艦のデータ送信を土星の友軍の下に送り終え、更に潜宙艦も全て撃破できたことに一息つく。
冥王星付近で敵潜宙艦を撃破したヤマトの下に通信が入った。
「艦長代理、木星軌道から通信です」
「木星から？・・・・繋いでくれ」
相原が通信回路を開くと、
「元気かね？諸君」
パネルには西郷参謀長の姿が映った。

「参謀長!?」
「また、俺たちの邪魔をしてくる気なのか!?」
古代と南部はヤマトがテレザートに向かう途中、太陽系内で参謀長がヤマトに対し、戦闘衛星や無人攻撃ステーション、更には木星圏では無人艦隊を差し向けてきた事から、参謀長がまた何らかの妨害をしてくるのではないかと警戒した。
「ははは・・・いや、安心したまえ。あのテレサと言う女性が伝えたかったこと・・・私なりにだが、理解したつもりでおるよ。もはや、ヤマトを責める気はない。それどころか、諸君に謝罪せねばと思っている・・・すまなかった・・・」
西郷はヤマトの乗員達に対し、頭を下げて謝罪した。
「そんな・・・参謀長の立場からすれば、謀反にあたる我々の行動を許す事は出来ません。あの時は、ああされるしかなかった・・・そう、理解しています」
「そうか・・・」
謝罪し、立場を理解した上で、ヤマトの乗員と西郷は和解した。
「それで、参謀長・・・どういったご用件でしょうか?」
両者が和解した後、古代は西郷に通信を送って来た要件を訊ねた。
「うむ、今度の事は、かつてのガミラス軍侵攻と同じく、地球の存亡がかかった一大事だ。防衛軍上層部が地球でぬくぬくと過ごしている訳にはいかん。地球本土の防衛は長官に任せて私も艦長として、戦線に赴くことになった。それを知らせておこうと思ってな。今、月村君の　まほろば　と共に木星のガニメデ基地を発った所だ。土星では肩を並べて戦う事になるだろう」
「参謀長自ら戦場へ!?そんな事をされてもよろしいのですか?」
防衛軍上層部の一員である参謀長が前線に立つと言う事で驚き、職務に影響がないのか訊ねる古代。
「こう見えても昔は君たちと同じ船乗りだったんだよ。彗星帝国の件が片付くまで、参謀長としての地位は返上だ。昔の血がうずくというか、な・・・土星では君たち同様、土方君の指揮下につくことになる。お手柔らかに頼むよ」

「はい」
「では、土星で会おう・・・」
そう言って、西郷は通信を切った。
良馬が見た西郷が何だか嬉しそうにしていたのは、昔懐かしい頃を思い出していたためなのかもしれない。
「参謀長・・・」
「あの参謀長がねぇ・・・信じられませんよ」
南部は永倉同様、参謀長が自ら前線に立つ事に意外性を感じていた。
「人は変わる。変わる事が出来るから人なんじゃよ。古代だって、ヤマトに乗りたての頃は沖田艦長に反発ばかりしておったじゃろう？」
「はは、その事は言わないで下さいよ」
古代にとっては、イスカンダルへの航海、そして沖田艦長との思い出は懐かしくも恥ずかしい思い出なので思わず苦笑する。
「でも、参謀長の言っていた『テレサの伝えたかったこと』って一体何だろう・・・？我々がテレサから聞いたのは白色彗星の事だけですよね？」
太田が西郷の言葉に疑問を感じ、首を傾げる。
「ああ・・・」
「あの不毛な大地・・・」
「えっ？」
島が突然ポツリと呟く。
「テレザートはそこに住む者同士が起こした戦争によって荒廃し、人も住めない星へと変わり果てていた・・・平和を祈るテレサですら、テレザートが崩壊に至る過程の一端を担っていたんだ・・・」
「・・・」
「俺たちにその惨状を見せ・・・いや、実際に俺たちをテレザートの大地に立たせ、争いがどれだけ無意味なのか理解される・・・白色彗星の事以外、テレサが伝えたかったことと言うのは、それなんじゃないかと俺は思う・・・テレザートの悲劇を繰り返さないためにな・・・」
「そうか・・・」

テレサの言葉と行為を独自ではあるが、解釈し、それを伝える島。
「こうして、今地球に住む者が一丸となって、平和を維持しようとしているんだ・・・・それも、全てテレサのおかげなんですね・・・彼女には感謝しても足りないですね・・・・」
相原も島の解釈に同意して、改めてテレサに感謝した。
その後、冥王星軌道を抜けた　ヤマト　と　渦潮　は土星圏まで一気にワープした。

ヤマトよりも先に土星圏タイタン基地に到着した　まほろば　と　薩摩　はタイタン基地から誘導された停泊地へと着陸する。
「これは・・・・」
「壮観な眺めじゃわい」
タイタン基地に集結した地球防衛軍主要艦艇の姿を見て、永倉と井上は声をあげる。
基地周辺とそのドックに身を休める艦艇の数は物凄いもので、その姿だけでも圧巻である。
（マリーさんが見たら、狂喜乱舞するかも・・・・）
集結した防衛軍の艦艇を見て、ギンガはミッドに居る知り合いの科学者の事を思った。
軍艦はその世界の科学技術の結晶とも言える。
その科学技術の塊である軍艦がここまで居るのだ。
軍人だけでなく、未知の技術を秘めた艦のオンパレードとなれば、科学者ならば興奮もするだろう。
しかし、土方が提言したアンドロメダ以降のアンドロメダ級二番艦以降の艦とアンドロメダ・改級の建造は結局この決戦には間に合わなかったが、現在も地球の造艦ドックで建造が行われている。
召集命令が太陽系内を駆け巡り、防衛軍の艦艇がほぼ終結完了したタイタン基地の近くに彗星帝国軍の強行偵察機が密かに接近していた。
この機体は彗星帝国軍で正式採用されている攻撃爆撃機デスバ・テーターを主体に機体色は潜宙艦と同じ漆黒色をし、武装を大幅に削

る変わりに高感度のレーダーと通信機器を装備している強行偵察機だった。
「こちら偵察艇Ｂ―２７。ただいま土星軌道に到達。地球艦隊まで１２００」
「まず己の敵を知ることだ！心して行け！」
「はっ!!」
バルゼーの命を受け、確実にタイタン基地まで距離を縮めていく強行偵察機。
その頃、バルゼー艦隊も太陽系へと突入した。
バルゼー艦隊の太陽系突入は防衛軍の監視衛星から周知される事となった。
「総司令、只今、監視衛星Ｍ１０３が敵艦隊の姿を捉えました」
「回路を繋げ」
パネルには彗星帝国軍の大艦隊が映った。
「艦隊の構成を分析しろ!!急げ!!」
「はい!!」
土方は監視衛星の映像から敵艦隊の構成を分析しようとしたが、防衛軍の監視衛星はたちまち、彗星帝国軍に発見された。
「敵、監視衛星発見!!」
「始末しろ!!」
バルゼー艦隊の一斉射を受け、監視衛星はいとも簡単に破壊された。
太陽系に入ってから、バルゼー艦隊は防衛軍が設置した戦闘衛星や無人攻撃ステーション、カムフラージュ砲台の攻撃によって、かすり傷程度ではあるが損害を受けていた。
更にヤマトが第十一番惑星で兵站基地を全滅させた影響で、急遽、後方支援の工作部隊を第十一番惑星へと戻し、基地の再建、更にその守備等で艦隊の数は当初の予定よりも減少し始めた。
防衛軍が設置した罠により、損害を被った艦も第十一番惑星へと戻している。
しかし、バルゼーは艦隊の速度を緩めることなく、土星圏を目指し

ていた。
　一方、タイタン基地に接近していた強行偵察機はというと、
「艇長、左舷後方に何かがワープアウトしてきます」
「なに？」
　突如、強行偵察機の左舷後方しかも至近距離に空間歪曲反応が現れた。
　やがて空間歪曲反応がおさまるとそこに現れたのは・・・・
「や、ヤマトだ!!」
「ヤマト!!」
　そう、冥王星軌道から土星圏までワープを行ったヤマトだった。
　突如、ワープアウトしてきたヤマトに強行偵察機は衝突され、偵察機は機体を真っ二つにされ爆発した。
　暴れ馬の様にヤマトは地球を飛び出して行った時と同様の派手な帰還ぶりだった。
「相変わらず、荒っぽい連中だ」
　その様を見た土方は苦笑したが、各艦隊の司令官や艦長、幕僚は、呆れ返る者、土方同様苦笑する者、眉を潜める者と反応も様々だった。
　ヤマトはタイタン基地の管制塔に誘導され、指定されたドックへと着陸したが、渦潮は士官候補生達を乗せていると事と完全な状態では無いと言う事で、第十一惑星での戦闘で負傷したヤマトの乗員とタイタン基地での退避員を乗せ、地球へと帰還して行った。
　連合艦隊司令長官の土方を議長に各艦隊の司令官や一部の戦隊司令官が召集され、敵艦隊を迎撃の最終作戦会議が行われようとしていた。
　その会議に良馬と古代も土方から出席を命じられ、会議場へ向かう途中、良馬は古代の姿を見つけて声をかけた。
「古代君」
「月村さん」
「お久しぶり、元気そうで何より」
「ええ、まぁ・・・・」
「それで、古代君、早速聞きたいことが有るのだが・・・・」

「なんでしょう?」
「すくね　は・・・・三木君はどうした?」
「・・・・」
　すくね　の三木艦長の事を訊ねられた古代は顔を俯かせる。
　良馬はヤマトがタイタンに帰還した時、ワープアウト反応が二つあったことで、てっきりヤマト　と　すくね　がワープアウトをしてきたのだと思ったが、ワープ明けをした時、姿を見せたのは、ヤマトとパトロール艦、渦潮　で、ヤマト　の援軍として向かった　すくね　の姿は見られなかった。
　その事で　すくね　はテレザートまでの航海中、撃沈ないし、廃棄されたものだと推察された。
　もし、廃棄ならば、すくね　の乗員も　ヤマト　に移乗しているだろうと思い、古代に三木の事を訊ねたのだ。
　撃沈か、廃棄か、その結果は・・・・
「・・・・戦死なされました」
　古代は重くそして辛そうに三木の・・すくね　の事を話した。
「そうか・・・・ヤマトを守って・・・・」
「はい。宇宙戦士らしいご立派な最後でした・・・・」
「古代君・・・・」
「はい」
「この決戦、何としても勝とう・・・・死んでいった三木君を始めとする大勢の宇宙戦士たちの為にも・・・・」
「はい」
(三木君、地球は必ず守るからな)
　今は三木の死を悲しんでいる時ではない。
　この後すぐに地球の命運をかけて、彗星帝国の侵攻艦隊と白色彗星本体との決戦が控えている。
　三木の死を悲しむのはこの決戦に勝った後だ。
　そう自分に言い聞かせ、良馬は拳にギュッと力を込め会議場へと向かった。

タイタン基地　大会議場

タイタン基地の大会議場には各分艦隊の指揮官や艦長ら艦隊の幹部が集まっていた。

「我が艦隊はこのタイタンの主力艦隊を中心として、前衛はヒペリオン、後衛はレア及びディオネ、そして予備軍は土星本星、カッシーニの隙間に配備する」

まず、土方が艦隊配置の説明をしたところから、作戦会議が始まった。

「何か質問は？」

作戦内容を一通り説明した後、土方は作戦内容に関して質問を受け付ける。

「敵艦隊の針路はどうなっているのでしょうか？」

一人の幹部が質問すると、

「太陽系に突入後は、まだ詳しい事は分かっておりません」

と、土方に代わり戦務幕僚の一人が答える。

「それでは、我々の裏をかくことをも考えられるわけですな」

「そうですな、もし、側面を突かれれば、この陣形では・・・」

と、陣形配置について論議が起こる。

艦隊幹部は敵の針路が不明な今、どこから敵が襲い掛かってくるか分からないので、不安な様子だ。

しかし、

「敵の針路は分かっている」

と、土方は自信満々で答える。

『えっ!?』

土方の答えに一部の中から驚愕した声が聞こえる。

「敵は必ず正面からくる。数においても戦力においても我々よりも遥かに勝る彼らが戦う前にして、逃げ隠れする程、腰抜けではあるまい。敵は正面からくる・・・我々は・・・これを叩く!!・・・では、質問が無ければこれまでだ諸君、各自各々の部署に就いてくれ」

土方が解散をかけると幹部たちは椅子から立ち上がり、それぞれの受け持ちの部署へと戻って行く。

ただ、会議散会後、土方から指名された数名はそのままタイタン基地の長官室への出頭が命じられた。
その中には良馬と古代も含まれていた。
司令長官室の前には、良馬と古代の他、第二艦隊航空戦隊司令の山口司令と第五艦隊航空戦隊司令のフレッチャー司令が立っていた。
四人の男たちが司令長官室へと入ると、そこには土方が待っていた。
「諸君らに来てもらったのは、他でもない・・・君達には、これより敵機動部隊への索敵及び奇襲攻撃を行ってもらいたい」
冒頭、土方はそう告げた。
「奇襲・・・ですか？」
「うむ、まずは之を見てもらいたい」
土方がパネルを操作するとそこには敵の陣容図が表示された。
「太陽系外周に設置された監視衛星から、敵艦隊の大まかな陣容は明らかになった。敵の旗艦と戦艦を中心とする戦闘艦隊・・・そして、別ルートで太陽系に突入してきた空母を中心とする機動部隊・・・しかも両艦隊の距離は相当開いている。問題はこの機動部隊だ」
土方は指揮棒で、機動部隊を指す。
すると、皆の視線は敵の機動部隊へ注がれる。
「我々の機動部隊とは比較にならん大部隊だ。敵は恐らくこの機動部隊を使い、艦載機による奇襲攻撃を行ってくるつもりだろう。敵艦載機の航続距離は長い、直接本体を叩かれれば、艦隊決戦を待つまでもない、我々は全滅だ。この決戦の勝敗は艦載機戦だ。どちらが先に制宙権を握るかによって勝敗が決まる。なんとしても、敵の機動部隊を叩き潰し、戦艦同士の砲撃戦に持ち込まなければならない」
土方の言葉に全員が頷く。
「つまり、我々の任務は、かのミッドウェー海戦の再現をすると言う訳ですね？」
フレッチャーが返した言葉に土方が我が意を得たりと頷いた。
確かに敵艦隊の陣形が、ミッドウェー島攻略を目指した南雲忠二中将率いる機動部隊と山本五十六率いる連合艦隊本体と似た様な陣形

であった。
　戦艦部隊と距離が開いている事と言い、旧日本海軍がミッドウェー攻略に四隻の空母を出撃させ、それを迎撃したアメリカ軍が三隻の空母を使用した事で、互いの空母の数も彗星帝国軍の方が多勢で地球側が少数と言う、戦力差も似ていた。
「そうだ。あのカブトガニが発進する前に空母を叩く。これがこの作戦の鍵となる。やってくれるか？」
　土方が四人の男たちに訊ねると、男たちは全員土方に敬礼をする。
　それは、自分たちに任せてくれと言う意志表示だった。
　そんな男たちに土方はフッと笑みを浮かべた後、返礼する。
　その頃の彗星帝国軍侵攻艦隊旗艦、メダル―ザでは・・・・
「提督」
「なんだ？」
「本隊から発進した強行偵察機が、提督との直接通信を終えてから、全く連絡がとれません」
「なにっ!?」
　つい先ほど、交信を行った強硬偵察機が行方不明となった事実にバルゼーは驚愕する。
　その強硬偵察機は、ヤマトがワープアウトした際、そのヤマトと衝突し消失した事など、バルゼーは知る由もない。
（敵の警戒網に捉えられ、撃墜されたのか・・・・？）
　バルゼーが連絡の途絶えた強硬偵察機の行方について思考を巡らせている時、
「バルゼー提督、空母艦隊司令、ゲルン提督より入電です」
　別ルートから太陽系へ入った空母艦隊の司令官、ゲルンから通信が入った。
　バルゼーは取りあえず、行方不明となった強硬偵察機の事は放っておき、これより地球艦隊に奇襲攻撃を行うであろうゲルンに作戦の最終確認をする事にした。
「よし、繋げ」
「バルゼー総司令、当艦隊はまもなく土星圏へと入ります」

「よろしい。君の艦隊は、第一警戒態勢に入れ・・・それと、私と君との交信も暫く絶つことになるだろう。その前に作戦を指示しておく。敵の主力は土星衛星タイタンにいる。土星空間に入り次第攻撃を開始しろ!!叩き潰すんだ!!一気にな!!」
「承知しました」
バルゼーとゲルンはそのやり取りを終え、通信を切った。
しかし、これが互いに最後の通信になるとはこの時二人は思いもよらなかった。
ゲルン機動艦隊が土星圏に接近する中、ゲルン提督率いる機動部隊を奇襲すべく、特別攻撃隊は出撃準備を行った。
出撃まであまり時間がなく、作戦の詳細は各艦隊が通信を行って決められた。
今回の作戦内容は、
偵察機隊の編成は、ヤマトのコスモタイガー隊(加藤隊、山本隊)とまほろば　のコスモタイガー隊の一個部隊を対艦爆装して出撃。
敵艦隊を発見し次第、偵察隊は空母を攻撃して艦載機発進を阻止。
その後は空域に留まり、制空戦闘を行う。
敵艦隊発見の連絡があり次第、各空母から攻撃隊と第2次制空戦闘機隊が出撃、敵空母を攻撃・無力化する。
航空攻撃が成功した後、特別攻撃隊全艦は前進し、砲雷撃戦に持ち込み、空母部隊を殲滅する。
戦況によっては、第三次、第四次、攻撃隊を発艦させる。
攻撃において護衛の敵艦艇は原則として無視し、空母を優先的に攻撃する。
等々――。
この急造機動部隊は、第２０任務部隊と命名された。
その艦船編成は、
遊撃戦隊
戦艦　まほろば
戦艦　ヤマト
第一航空戦隊

空母　ヨークタウン
空母　ワスプ
第二航空戦隊
空母　飛龍
空母　蒼龍
護衛艦八隻

急造ながらも、機動部隊、第２０任務部隊は敵機動部隊を求めて、タイタン基地をひっそりと離れていった。

まほろば　の作戦室では、良馬と航空隊のメンバーが集まり、今作戦の内容を説明した。

恐らく、ヤマトや各空母でも同様の会議が行われているだろう。

「予想される敵、機動部隊の針路はコレだ。我々はイアペトゥス、フェーベを迂回し、敵艦隊の側面に出るコースをとる。しかし、これはあくまで予想だ。敵が本当にこの針路をとるかは、分からない。だが、今は時間が無い、ここは、土方提督を信じて行動するしかない。坂井大尉」

「ハッ」

「君は、自分の隊を率いて、ヤマト所属のコスモタイガー隊と共に索敵活動に参加してくれ。ただし、敵に傍受されないように、敵を発見するまで、通信の使用は禁止する。もちろん、敵が先に此方を察知するのを防ぐため、レーダーの使用も禁止する」

「承知しました」

作戦内容を説明した後、良馬は艦橋に戻る時、通路の途中で永倉と井上と出会った。

「艦長」

「ん？」

「三木さんは・・・」

永倉と井上もヤマトが帰還した時、すくね　の姿が無かった事に不安を感じていた。

そして、タイタンで、古代と接触したと思われる良馬に訊ねてきたのだ。

「・・・・」
永倉の質問に良馬は無言のまま、首を横に振った。
「そうですか・・・・」
「もう一度、みんなで会って、酒を飲み交わしたかったのう・・・・」
永倉と井上は残念そうに言う。
「三木君の為にもこの戦い何としてでも勝つぞ。三木君の弔い合戦だ」
「了解ッス」
「うむ」
三人の男たちは勇んで艦橋へと戻った。
やがて、第２０任務部隊は土星衛星の一つイアペトゥスの軌道を通過した。
イアペトゥス通過を合図にヤマト　と　まほろば　は対艦装備の偵察機隊を発艦させた。
ヤマトはコスモタイガー隊の加藤隊と山本隊の他に複座式のコスモタイガーにアナライザーと共に搭乗した真田が参加した。
まほろば　は　航空隊隊長の坂井が隊を率いて索敵活動に参加した。
索敵範囲はイアペトゥス～フェーベまでの宙域とされた。
しかし、いくら捜索範囲が限定されているとは言え、あまりにも広大でしかもレーダーの使用は禁止、索敵は困難なものとなった。
「たく、レーダーも無線も使えないなんて、何時代だよ。大昔の零戦に乗っている気分だぜ・・・・」
坂井は索敵しながら、愚痴る。
それは、ヤマトのコスモタイガー隊も同じで、
「ちくしょう、レーダーなしか、目隠しして相手を見つけるなんて無茶苦茶だぜ」
「これじゃあ、太平洋で小魚一匹見つけるようなもんだな」
と、加藤も山本も愚痴りながら索敵していた。
一方、真田とアナライザーの方は、特に愚痴る事もなく、黙々と索敵活動を行っていた。

「どうだ？アナライザー？」
「何ノ反応モアリマセン。ボリュームヲ上ゲナイト無理カモシレマセンヨ」
アナライザーが探査波の感度を引き上げようか？と訊ねる。
「ダメだ、そんな事をすれば、敵に気づかれてしまうぞ。よし、もう少し足を延ばしてみるか・・・」
真田機は土星圏の辺境へと向かっていった。
索敵隊から未だに空母発見の報告が入らず、古代には焦りの色が窺えた。
その間、各空母では攻撃隊の発進準備が終わり後は出撃命令を出すだけであった。
「落ち着けよ、古代。敵はきっと近くに居る・・・今にきっと網にかかるさ」
島が古代を宥めた。
その頃、真田機は土星圏の一番外れフェーベに来ていた。
（フェーベか・・・土星圏の外れの星だな・・・）
「アナライザー反応は？」
「別ニ無シ」
土星圏の一番外れまで来て、反応がない。
もしや敵は既に我々よりも後方のタイタンに接近しているのでは？と真田の脳裏に最悪の事態が過ぎった。
古代が敵空母の発見の報が来ない事に焦りを覚えている頃、タイタンを飛び立った地球防衛軍本体の旗艦、アンドロメダの艦橋内でも土方は今か今かと敵空母の発見ないし敵空母部隊の撃滅の報を待っていた。
当然、ヤマトが索敵に失敗し、泊地がいきなり、敵機の襲撃を受ける可能性もあり、土方も気が気でなかった。
「第２０任務部隊からの連絡は無いか？」
「はい、まだ何も・・・」
副官の返答を聞き、土方は渋い顔をする。
「タイタン基地所属の直掩機を全部あげろ・・・それと万が一を考え、

ヒペリオン艦隊にはいつでも出撃出来るように命令、同時にヒペリオンとタイタンの戦闘衛星と攻撃ステーションを外縁部に移動させ、警戒にあたらせろ、それから当然艦隊には第一種警戒態勢を敷け」
「了解」
万が一の事を含め、土方は防空警戒を始めた。
その頃、真田はフェーベ周辺を念入りに索敵していた。
「反応は無いか?」
「相変ワラズ無シ」
(まずいな・・・ココまで来て居ないとなると・・・)
土星圏最果てのフェーベまで来て、敵がいない事に流石の真田も焦りの色が隠せなかった。
その時、
「ン?」
アナライザーの探査波が微弱な電波を捉えた。
「来タカナ?」
「どうした?アナライザー」
「近クデ、誰カ交信シテイマス」
「なに!?」
真田は操縦桿を動かし、アナライザーが交信電波を捉えた方角へと機首を向けた。
交信電波を捉えたのは、真田の居る位置と丁度反対側の位置だった。
フェーベの影から接近すると、其処に居たのは・・・
「いたぞ、アナライザー・・・あれだ・・・」
そこには、探し求めていた敵の機動部隊が居た。

二十八話　土星圏　フェーベ会戦　殲滅

敵の機動部隊を見つける為、アナライザーと共に索敵に出た真田。
土星圏最果てのフェーベ近海にて、アナライザーは微弱な通信波を捉えた。
アナライザーが探知した電波方向に行くと、其処には探し求めていた敵の機動部隊が居た。
真田は早速、ヤマトへと敵機動部隊発見の報告を入れた。
「敵空母部隊発見!!此方真田、敵空母部隊発見!!」
真田の知らせは直ぐにヤマトへと伝わった。
「真田機より入電、フェーベの北、３．０地点に敵空母部隊発見」
「よし、加藤、山本、それから　まほろば　の坂井隊に伝えろ!!いいか、敵の艦載機が出る前に空母を叩くんだ。それと、各空母部隊に攻撃機を発進させろ!!」
「了解」
相原は早速、索敵活動を行っているヤマト所属のコスモタイガー隊の加藤、山本、　まほろば　の坂井の隊に伝え、随伴している第２０任務部隊の空母部隊にも攻撃隊の発進命令が下された。
「ヤマトより入電、フェーベの北、３．０地点に敵空部隊発見」
ギンガがヤマトからの電文を読むと、まほろば　の艦橋は一気に湧き立った。
「よし、第一次攻撃隊発進!!目標、敵機動部隊!!」
まほろば　からは全てのコスモタイガーが発艦し、同じくヤマト、各空母からも次々と対艦装備をしたコスモタイガー隊が出撃していった。
一方、敵に先手を取られたと知る由もない彗星帝国軍のゲルン機動部隊でも、奇襲攻撃を行うべく、対艦装備をしたデスバ・テーターやＴ―２の発進準備が整いはじめていた。
「急降下爆撃隊発進準備完了しました」
第一次攻撃隊の飛行隊長が空母艦隊司令のゲルンに攻撃機隊の状

況を知らせる。
「よし、発進六十ガトランティス秒前!!いいか、合戦の露払いだ。地球艦隊を存分に叩きのめして来い!!」
ゲルンが攻撃隊に激を送る。
その時、
「提督!!」
「ん?どうした?」
「未確認飛行物体接近!!多数です!!」
ゲルンが座乗するアポカリクス級大型空母、ガンビヤ　のレーダーが此方に接近してくる未確認飛行物体を捉えた。
「何だと!?」
ゲルンが確認の為、レーダーパネルを見ると、そこには確かにオペレーターの言う通り、味方の機動部隊に接近してくる多数の小型機らしき反応が多数あった。
「ま、まさか・・・」
途端にゲルンの顔色が悪くなった。
本来、此方が地球艦隊を奇襲する側の筈なのに、逆に此方が奇襲される側になったのでは?と、ゲルンの脳裏にそんな考えが浮かんだ。
その考えは当たってはいたが、気づくのが遅かった。
「加藤隊攻撃開始!!空母を潰せ!!」
最初に現場へ到着したのは、ヤマトのコスモタイガー隊、加藤三郎が隊長を務める隊だった。
加藤隊はまず先頭を航行していたアポカリクス級大型空母に急降下爆撃を行った。
「うわぁぁぁぁ!!」
突然の急降下爆撃を受け、空母の艦橋は大混乱となった。
「き、奇襲です!!地球軍の奇襲!!うわぁぁぁぁぁ!!」
次に　まほろば　の坂井健夫率いるコスモタイガー隊が到着し、被弾した空母の艦橋部と甲板部に急降下爆撃を行い、攻撃を受けたこの空母は爆沈した。
「迎撃機を発進させろ!!急げ!!」

ゲルンが奇襲してきた地球軍側の艦載機を迎撃させようと、イーターⅡ戦闘機の発進を命じるが、
「だ、ダメです!!発進口の近くには対艦攻撃用のデスバ・テーターやT―2しかいません!!イーターⅡ戦闘機の発進には少し時間がかかります!!」
そう、彗星帝国軍は地球艦隊の奇襲用の攻撃機を出してから、護衛機を出そうとしていたので、発進口の傍には迎撃機となるイーターⅡがおらず、すぐには迎撃機を出せない状況だった。
まさか地球側が奇襲攻撃を仕掛けてくるとは思っていなかったゲルン機動部隊は直掩機を空母の周辺に展開していなかった。
そんな中、状況は更に悪化した。
ヤマトのコスモタイガー隊で山本明夫率いるコスモタイガー隊も戦場に到着したのだ。
徐々に悪化する戦況に、
「ならば、攻撃機隊を出して迎撃にあたらせろ!!」
デスバ・テーターやT―2とて艦載機であり、まったく対艦載機戦が出来ないと言う訳では無かったので、ゲルンはこれ以上被害が大きくなる前に機体を飛ばしてしまおうと考えた。
「りょ、了解」
対艦戦闘から対艦載機戦闘になったが、予定通り、ゲルン機動部隊は艦載機の発進シークエンスを開始した。
しかし、飛び立とうとしたデスバ・テーターの上方からコスモタイガーは機銃斉射を行い、その結果、飛び立とうとしたデスバ・テーターは飛行甲板上で大破し、装備していた対艦装備のミサイルや魚雷、爆弾が空母の飛行甲板で炸裂、飛行甲板で誘爆が起きたり、艦載機発進口にコスモタイガー隊のミサイルが命中し、飛行甲板に出ようとしていた機体がその爆発に巻き込まれ、装備していた対艦装備のミサイルや魚雷、爆弾が空母の格納庫内で誘爆し、そのまま爆沈する空母が多発した。
「飛行甲板を狙え!!一機も飛び立たせるな!!」
三隊のコスモタイガー隊は機動部隊の護衛を行っている駆逐艦や

巡洋艦には見向きもせず、空母の飛行甲板めがけて、攻撃を行ってきた。
「撃て!!たかが戦闘機だ!!叩き落とせ!!」
空母部隊は兵装されている対空砲火で迎撃し、ゲルンは意気消沈することなく、味方を鼓舞する。
そしてゲルンはここに来て、バルゼー率いる太陽系侵攻艦隊の本隊と連絡を取った。
「バルゼー提督、ゲルン提督より入電です」
無線封鎖していたゲルンから連絡が来たと言う事は、地球艦隊への奇襲が成功したのかと思ったが、最後の通信からあまり時間が経っておらず、奇襲が成功したにしても早すぎると思いつつ、バルゼーはゲルンとの通信回路を開いた。
すると、ゲルンからの通信は、バルゼーが望んでいたものとは１８０度違う内容で、本来地球艦隊を奇襲する側のゲルン機動部隊が地球側の奇襲を受けたと言うものであった。
「なにっ!?地球側艦載機の奇襲だと!?」
「は、はい。攻撃機発進寸前の出来事で体制を立て直せません・・・」
ゲルンの声は作戦に失敗した事、現在も敵の攻撃を受けていると言う事で少し声が震えている。
「むぅ・・・味なマネを・・・」
バルゼーは、地球側の奇襲攻撃に唸るような声をあげる。
「如何いたしましょう、司令?」
「ゲルン!!作戦に失敗とやり直しは許されない!!叩け!!護衛の艦隊を集結させて、蛆虫どもを追い払え!!」
バルゼーは、ゲルンにそう言って通信を切った。
自分の不注意で起きた不測の事態は自分で何とかしろと言う意味合いであった。
悪く言えば、バルゼーはゲルンの事を見捨てたと言う事である。
ゲルンとしては、バルゼー艦隊の全艦とは言わなくても一個分隊でも救援に回して欲しかった。
しかし、総司令であるバルゼーがああ言ったのだから、恐らく本隊

からの救援は来ないだろう。
ゲルン機動部隊はこの際、地球艦隊への奇襲と言う当初の目的を棄てて何としてもこの場を切り抜けると言う目標となった。
(デスラーから提供された地球のデータを軽視した報いか・・・・)
被弾し爆発を起こしていく友軍の空母を見てゲルンは後悔した。
ゲルンは地球軍の錬度も大した事はないと言うナスカの古い情報を真に受け、さらに艦隊数も此方が上だと言う事実に楽観視していた。
それはヤマトとの戦闘で戦死したナスカやゴーランドも同じであった。
しかし、デスラーは「ヤマトを・・・・地球を侮ってはならない」と、彗星帝国の軍人たちに常々忠告していた。
だが、当初からナスカの工作により、自分たちの存在を認知することの出来ない地球、エネルギー系統を破壊され、慌てふためく姿を見せた地球に対して彗星帝国の誰もが、恐るるに足らない敵だと認識してきた。
だが、今、自分の目の前で繰り広げられている状況は何だ?
少数ながらも敵パイロットの技量は高く、此方の対空砲火を易々とかい潜っては、飛行甲板に急降下爆撃や機銃掃射で滑走路に出たこちらの攻撃機や戦闘機を次々と屠っている。
考えれば、地球はガミラス相手にどん底に叩き込まれても、耐え抜き、そして遂には逆撃を喰らわせた。
敵を侮っていた事を後悔したが、まだ此方とて、すべての艦船が沈められた訳ではない。
そう、まだ我々は負けたわけではない。
空母、艦載機の数はまだ此方が優っている。
戦力ロスはまだ大した事はない。
それにこの戦力を見る限り、今の連中は強行偵察隊に過ぎない。
そいつらの母艦を見つけ出す事が出来れば・・・・。
「提督、敵の機動部隊を発見。ヤマト及び同型艦と思える戦艦、中型空母四、護衛艦八隻の機動部隊です」

ようやく、ゲルンがこの状況を挽回出来そうな情報が入った。
「よし、攻撃目標を敵本隊からそいつらに変更する！まだ健在な空母から攻撃機を出せ！返り討ちにしてやる!!」
しかし、ゲルン機動部隊が第２０任務部隊への攻撃命令を発令したが、
「敵機襲来!!大編隊です!!」
「むっ!?」
艦橋のオペレーターが敵攻撃隊接近を告げた事により、状況は更に悪化した。
加藤、山本、坂井の三つのコスモタイガー隊を撃墜する前に第２０任務部隊の第一次攻撃隊がゲルン機動部隊に襲い掛かって来た。
ゲルンの行動と決断はどちらも遅すぎたのだ。
タイタン宙域に展開中の地球防衛軍本隊のアンドロメダに第２０任務部隊から通信が入った。
「土方提督、第２０任務部隊より入電です」
「読め」
「はい、『７時０８分、偵察隊が敵空母部隊発見、同時刻第一次攻撃隊発艦、７時２３分、威力偵察隊第一波が敵機動部隊を奇襲。先頭の大型空母一隻に急降下爆撃を敢行、二分後の７時２５分、威力偵察隊第二波が到着、攻撃を敢行、第一波攻撃により被弾した空母を撃沈、続いて第一次攻撃隊も敵空母を攻撃中。敵戦闘機の妨害は僅か』・・・以上です！」
「そうか・・・」
第２０任務部隊の戦闘途中経過を聞き、土方の厳しい表情が僅かに綻び、艦橋員からも喜びの声が上がった。
序盤は上出来だ。
後は敵が浮き足立っている間にどれだけ戦果を拡大できるかだ。
作戦の要は制宙権を敵よりも多く、そして早く握る事だ。
それはつまり、敵の空母を相手よりも早く見つけ、敵攻撃機の発進を阻止することだ。艦載機を発進できない空母など、輸送船同然なのだ。

しかし、懸念としては敵の主力艦隊が空母部隊救出の為、第２０任務部隊に襲い掛からないかと言う事だ。
奇襲に成功したとは言え、敵の主力はかなりの数だ。
数ＶＳ数の戦いに持ち込まれれば、第２０任務部隊はあっという間に殲滅される。
土星圏の戦いは未だに予断を許さない状況だった。

第２０任務部隊本隊も一路フェーベ宙域に近づいていた。
既に第二次攻撃隊は全機発進し、攻撃を終えた第一次攻撃隊の出撃機が続々と戻って来ている。
「奇襲で浮き足立っている中でも第一次攻撃隊にもそれなりの被害が出ている。恐らく第二次攻撃隊はそれ以上の被害を受ける可能性もあるな・・・」
まほろば　の艦長席で各空母部隊の帰還状況を見て良馬は一人呟く。
ヤマトから出た真田機は無事帰還し、加藤・山本両隊や　まほろばの坂井隊は未だ全機が戦闘空域に留まって攻撃隊の援護を行っているが、被弾し、墜ちていく機体、煙を引いたり、傍目からもわかるほど、ヨタヨタしながらやっと飛んでいる機もいる。
機体は直ぐに作れても、それに乗り、機体を操る搭乗員の育成は一朝一夕では、出来ない。
初実戦を経験し、帰還した第一次攻撃隊の搭乗員の中には、思わず泣き出す者や極度の緊張でコクピットや後部銃座からなかなか降りられずにいる者もいた。
戦闘機乗りとして出撃し、生き残ったならば、次に来る新たな恐怖と戦わなければならない。
それは軍人全てに言える事なのだろうが、その恐怖を乗り越えて行く事で、軍人として大きく成長して行く事だろう。
時間を追うごとにゲルン機動部隊は無残な状況になっていった。
最初の奇襲攻撃で旗艦と先頭集団が被弾したため隊列が乱れ、次々とやってくる敵の攻撃機は対空砲火をかい潜り、空母だけに襲い掛か

かってきた。
直撃を受けたナスカ級の中型空母は次々と針路を外れたり、速度を落として落伍する。
そして、搭載していた攻撃機の燃料や弾薬に引火して大爆発を起こして四散するものも出ている。
指揮官からの命令が徹底されていたのだろう。敵は護衛の駆逐艦や巡洋艦には一切関心を示さず、空母だけを襲っている。
旗艦を含む大型空母は未だ全て残っているが、無傷の艦はなく、肝心の艦載機を出せる状態ではない。
敵の機動部隊を見つけながらもその敵に一矢報いことも出来ないこの歯がゆい状況・・・・。
ゲルンは悔しそうに歯を喰いしばった。
地球連合艦隊旗艦、アンドロメダには逐次、戦況報告が届けられていた。
「第２０任務部隊より入電、只今第三次攻撃隊が敵残存空母への攻撃を開始しました！」
「うむ」
通信士の報告に、土方は頷く。
第二次攻撃隊の攻撃を辛くもしのぎ切ったらしい敵空母が、反撃の攻撃隊を向けてきたというから、之が最後の攻撃となるだろう。
「第２０任務部隊も敵機動部隊に接近し、砲撃戦に持ち込む様です」
「・・・敵本隊に動きは？」
「針路・速度とも変わりません。真っ直ぐこちらに向かってきます！」
（機動部隊を切り捨てたか・・・一見冷徹に見えるが、指揮官としてはある意味正しい。混乱を最小限で抑え、艦隊戦で勝てると踏んでいるというわけか・・・となると、敵にも波動砲の様な切り札となる兵器を持っている可能性があるな・・・）
土方はまだ接触しないバルゼー艦隊の事を思っていた。
奇襲の機動部隊が攻撃を受けても救助の為、反転する気配もない。
元々数において相手が勝っているが、数の暴力以外に敵には波動砲の様な切り札となる決戦兵器を持っているかもしれないと土方は危

惧した。
　その頃、フェーベ近海の戦場では、
　ゲルンが座乗する旗艦　ガンビヤ　も既に被弾し、格納庫まで火が迫っていた。
　壊滅していく味方の機動部隊の姿が映るパネルをゲルンは唖然としながら見ていた。
「何の働きもせぬうちに・・・・残念だ・・・・」
「提督、格納庫に火が迫っています!!スプリンクラーも上手く作動せず、消火器、消火薬剤も使い果たしました。ですが、鎮火の見込みはありません!!このままでは危険です!!総員退艦命令を具申します!!」
　無念の表情で、幕僚の一人が既にガンビヤが消火不可能になった事を報告する。
　それはこの艦がもう長くない事を知らせていた。
「そうか・・・・」
　ゲルンは一瞬瞑目し、再び瞼を開く。
「総員退艦!!」
　遂にガンビヤに総員退艦命令が発令された。
「提督も脱出艇にお急ぎを・・・・」
　幕僚の一人がゲルンにも脱出を急がせる。
「私はいい・・・・」
「そ、そんなっ!?それでは、私も・・・・」
「ならん!退艦しろ、これは命令だ!!我が機動艦隊の戦闘は終わりだ。敗戦の全責任は司令官たるこの私にある。諸君らは残存艦をまとめてバルゼー提督率いる本隊に合流せよ。そして、この戦いで散った同胞に報いるだけの働きをしろ!!」
　これだけの失態を冒したのだ。本国に戻ったところで、あの冷血な女総参謀長（サーベラー）の手によって形ばかりの軍法会議の後、処刑場送りになるのは目に見えている。
　ズォーダー大帝から直々に死を賜るならまだしも、あの冷血女に裁かれる事がゲルンにとって屈辱以外の何物でもない。
　司令官の気迫に幕僚はこれ以上抗弁できないと悟り、敬礼してその

場から去って行った。
その後、ゲルンはホルスターに入った銃を手にして銃口を胸にあて、引き金を引いた。
バキューン
一発の銃声が艦橋に響いた。
「うっ・・・お・・・」
ゲルンの手から銃が落ち、ゲルンの身体自体も艦橋の床に倒れた。
「バルゼー司令・・・私は負けた・・・」
その言葉を最後にゲルンは息を引き取り、同時にガンビヤも大爆発を起こした。
まだ脱出中の大勢の乗員と共に・・・。
旗艦を失ったゲルン機動部隊へ止めを刺すかの様に戦場に第２０任務部隊本隊が到着した。
「火器管制システム起動!!艦内隔壁閉鎖!全艦砲雷撃戦用意!!」
「了解!!」
戦闘宙域に到着した良馬はすかさず、戦闘態勢入りを命じた。
敵の機動部隊はもはや、機動部隊と言えるようなものではなく、無傷の空母は既に存在しておらず、艦の各所から火炎や煙を噴き出している。
損傷しながらも、この宙域から撤退を図ろうとする空母、敵に一矢報いろうと勇敢にも、此方に向かってくる空母もいる。
護衛の駆逐艦や巡洋艦も空母同様、撤退しようとする艦、敵に突撃しようとする艦がおり、ゲルンが戦死してしまった事により指揮系統が完全に働いていない。
その光景は、一昨年までの自分たちの僚艦と同じ光景。
ガミラスに一方的に追い詰められていく地球艦隊と同じだった。
しかし、彼らが地球を侵略しようとしている敵には変わらない事から情けはかけられない。
「砲撃準備完了!!」
「撃て!!」
第２０任務部隊の全ての艦船からショックカノンとミサイルが放

たれた。
やがて、敵艦隊の中に巨大な火球がいくつも閃く――。
第２０任務部隊の艦船に捕捉され、砲雷撃で次々と爆発炎上し、やがて四散していく。
敢に立ち向かう護衛艦等も次々と第２０任務部隊の砲撃やミサイル、魚雷に斃されていく。
「まさか・・・・こんな・・・・こんな事が・・・・栄光ある彗星帝国ガトランティスがあんな辺境の蛮族共にぃ・・・・ぬわぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
こうして、第２０任務部隊は敵の機動部隊を壊滅に追いやった。
正直に言うと、この大破した彗星帝国軍の艦艇は全て曳航し、鹵獲したかったが、彗星帝国軍の侵攻艦隊本体との決戦が迫っている中、工作艦をこの宙域に呼び出して、近くの防衛軍基地に曳航する時間的余裕がなかったため、この宙域に漂う敵艦艇の鹵獲は断念せざるを得なかった。
「土方提督、第２０任務部隊より入電!!『我、敵機動部隊への奇襲に成功!!之を壊滅。喪失艦なし。されど、砲撃戦により、空母　ヨークタウン中破、未帰還機二十九機の損失。これより戦闘宙域を離れ、本隊に合流の予定』：以上です!!」
「そうか・・・・」
土方の表情が綻んだ。
まずはこちらが先手をとった。
これで少しは戦況を有利に進められると、土方は確信した。
「機動部隊、奇襲に成功!!敵機動部隊壊滅」
敵の機動部隊壊滅の知らせは地球の防衛軍司令本部にも知らされた。
その知らせを受け、司令本部に詰めていた幕僚や地球連邦政府高官はホッと息をつく者、味方の勝利に歓喜する者がおり、司令本部は活気に満ちていた。
「作戦の第一段階は成功の様だね？」
地球連邦大統領も司令本部に詰めており、今作戦の全体内容をあらかじめ、藤堂から聞いており、まずは前哨戦に勝利した事を改めて藤

堂に確認する。
「はい。しかし、敵は尚強大です。まだ油断はできません」
「うむ」
味方の勝利に喜んでいる幕僚や政府高官の中で、藤堂だけはまだ油断ならないと、言って表情を崩す事は無かった。
そう、まだ前哨戦に勝っただけであり、この先には、彗星帝国軍侵攻艦隊本隊と白色彗星本体との決戦が控えているのだから・・・
フェーベの戦闘宙域からタイタン宙域へと帰投する　まほろばの艦橋でも、作戦の第一段階が無事成功した事にホッとした様子と勝ったと言う事で明るいムードが漂っていた。
「奇襲作戦は大成功ですね、艦長」
新見が良馬に言う。
「ああ。しかし、敵の総数は未だに地球艦隊を上回っている。油断は禁物だ。ところで副長、白色彗星の現在位置は？」
「地球標準時、十三時に太陽系に突入しました」
（今は、敵の侵攻艦隊本隊との決戦に全てを賭ける時か・・・でも、何か嫌な予感がする・・・）
まだ姿を見せない彗星帝国軍侵攻艦隊の決戦に備えるしかない防衛軍だった。
しかし、その後には直ぐに白色彗星本体との決戦が控えている。
第２０任務部隊の将兵にとっては、連続三戦の内、最初の一戦目が終わったに過ぎない。
彼らにとっては長い日になりそうだった。
「艦長、連合艦隊提督より入電です。『諸君らの努力に感謝する。直ちに本隊へ帰還せよ。地球防衛艦隊提督・土方　竜』・以上です」
「よし、機関全速、本隊に合流するぞ。ヨークタウンの援護は十分に行え」
第２０任務部隊は一路、タイタン基地へと急いだ。
砲撃戦の中、敵弾を受けて中破したヨークタウンの艦載機は使用可能な機体は搭乗員と共に　まほろば　へ移乗し、残りの機体は全て廃棄された。

本隊到着後、ヨークタウンはタイタンのドックへと回航される事が既に決定された。
「なにっ!?全滅だと!?」
味方機動部隊の壊滅の報告は当然、侵攻艦隊総司令のバルゼーの下にも届いていた。
バルゼーはその情報に間違いがないのか改めてもう一度訊ねるが、
「はい。我が軍の空母は全て、地球軍の艦載機、空母部隊とヤマトを中心とする地球軍の艦船による砲撃で全滅し、ゲルン提督も戦死なさいました」
情報に間違いはなく、味方の機動部隊は全滅、指揮を執っていたゲルンの戦死も確認された。
「し、司令・・・」
幕僚の一人がこの事実に怯えたような声を出す。
「うろたえるな!!」
バルゼーは味方の士気が落ちぬように、声を張り上げる。
「機動部隊を失っても我々には火炎直撃砲がある。地球艦隊など恐れることはない!!速度をあげろ!!一気に蹴散らせてやる!!」
機動部隊を失い、敵に先手をとられたにも関わらず、バルゼーの顔は自信に満ちていた。
バルゼーの鼓舞により、彗星帝国軍は士気の低下を免れた。
そう言った点では、やはりバルゼーには指揮官としてのカリスマ性があるのかもしれない。
土星圏を舞台にした地球と彗星帝国との決戦、第二ラウンドはすぐそこまで、迫っていた。

ここで舞台は土星圏からミッドチルダに移る。

はやて　の家から戦艦大和に関する本を持ったフェイトはミッドにある高町家に戻った。
何故、フェイトがミッドの高町家に戻ったのかと言うと、彼女は

ミッドでは高町なのはと同棲しているのだ。
現在ミッドの高町家には、家主の　なのは　の他にフェイトとＪＳ事件の折、街中で保護し、その後養子縁組をした高町ヴィヴィオの三人で暮らしている。
夕食後、フェイトはリビングにあるテーブルの上にはやての家から持ち帰った本を読みふけっていた。
そこに、
「フェイトママ、それ何のご本？」
お風呂上りなのか、肩にバスタオルを掛け、パジャマを着て、髪の毛はほんのり濡れているヴィヴィオがフェイトに声をかけてきた。
「ん？お仕事に関係あるご本だよ。ヴィヴィオ」
「ふぅ～ん、どんなご本なの？」
ヴィヴィオが覗き込む形でフェイトが読んでいる本を見てくる。
「お船？」
ヴィヴィオの目には海上をテスト航行している時の戦艦大和の白黒写真が掲載されていた。
しかし、ミッドには海上戦艦と言う物は管理局の歴史史上存在するはずが無く、之が船なのかヴィヴィオには確信が無かったので、疑問形となったのだ。
「うん、これは、なのはママの生まれた世界で作られた昔のお船なんだよ」
フェイトが戦艦大和について簡単にヴィヴィオに教える。
「どうしたの？フェイトちゃん？」
そこに、ヴィヴィオと入浴していた　なのは　がやって来た。
なのは　もヴィヴィオ同様、髪を濡らし、濡れた髪にバスタオルを当て寝間着姿である。
「なのは・・・」
フェイトは、はやて　に話した先日のプレオとヤマトについて　なのは　に話そうか話さない方がいいか迷った。
フェイトが迷っている間に　なのはは、フェイトに近寄りヴィヴィオ同様に本を覗き込む。

「ん？これ、戦艦大和？」
流石、生まれ故郷で作られた有名な軍艦だけになのはは本に載っている軍艦の正体にすぐに気付く。
「あっ、うん。そう・・・・」
「どしたの？急に？」
なのはは、何故フェイトが急に日本の歴史に・・・しかも旧海軍の軍艦に興味を持ったのか疑問に感じた。
フェイトが六課時代の同僚、ルキノ・リリエみたいに艦船マニアになったのかとさえ思った。
「実は・・・」
フェイトは　なのは　にヤマトの事を話す事にした。
はやて　やシグナム達に教えて、なのは　に秘密にしておくと後になって涙目で責められそうだからだ。
下手をしたら、ディバインバスターを撃ち込んできそうだ。
「なのは、今から見せる映像は誰にも言わないって誓える？」
「えっ？」
フェイトの真剣な表情で　なのは　に訊ねる。
それは、親友のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンではなく、執務官、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンの顔をしていた。
フェイトの表情に少々戸惑う　なのは。
互いに　はやて　が立ち上げた試験部隊、機動六課の時代、寮に居る時フェイトは仕事の話を一切なのはにはしなかった。
そのフェイトが今、こうして執務官としてなのはに問うてきた。
「うん。分かったよ、フェイトちゃん。誰にも言わない」
なのは　もフェイトの親友の　なのは　ではなく、管理局員としての顔をして、フェイトの問いに答える。
フェイトは　なのは　にヤマトの映像を見せる前にヴィヴィオを寝かしつける様に頼んだ。
ヴィヴィオは最初、自分だけが除け者にされるのだと思い駄々をこねたが、なのはが優しく何度もヴィヴィオに言い聞かせ、ヴィヴィオは渋々自分の部屋へと行き、ベッドの中へと入った。

ヴィヴィオを寝かしつけた後、フェイトはなのはに例のヤマトの映像を見せた。
「・・・・」
映像を見た後、なのはは、目を見開いたまま、固まる。
それは、この映像を見た管理局関係者全員と同じリアクションだった。
「なのは?大丈夫?」
フェイトが　なのは　に声をかける。
「っ!?だ、大丈夫だよ」
「そう?・・・・それで、どうだった?」
「・・・・これ、本当にあった事なの?」
なのは　は教導隊所属と言う事で、プレオが破壊された事を知らない。
いや、なのは　だけでなく、今現在、プレオが破壊されたことは管理局でも一部の人間にしか知らされていない。
それ故、プレオがミサイル攻撃で破壊された事実にショックを隠せない。
しかし、この後、管理局はプレオが破壊されたことを公表しなければならないだろう。
プレオに居たのが、管理局の自然保護官のみだった場合は、殉職した局員の遺族のみに知らせ、プレオが破壊されたことを秘匿できたかもしれないが、今回プレオの破壊による犠牲者の中には、管理局の自然保護官以外にも惑星開発事業の作業員が多数含まれていたため、秘匿するのは難しく、秘匿すれば、また管理局のイメージダウンに繋がりかねない。
映像を見て、少なからずショックを受けた　なのは　の心中には、もしかしたら今後、ミッドや両親や親友が住んでいる地球がこのミサイル艦隊の攻撃を受ける可能性もあるかもしれない・・と言う、心配と同時にプレオを破壊したミサイル艦隊を一撃で消滅させたヤマトにも　なのは　は脅威を抱いた。
管理局の次元航行艦なんて話にならない攻撃力と航行能力を有し

た強力な戦闘艦。
　そのヤマトが所属している組織と管理局が敵対した時、自分の教え子もその戦火で命を落とすかもしれない。
　そんな先行き不安な未来を予想し　たなのは。
　そんな、なのは　の不安を感じ取ったのか、
「大丈夫だよ。なのは」
「え？」
「このミサイル艦隊が所属している組織とは話す余地はないけど、私はこのヤマトとは、話し合える気がするの・・・こっちに敵意がないってことを示して、ちゃんと話合いをすれば、きっと分かり合えると思うの。だから、なのは　は心配しないで、ねっ？」
「う、うん」
　なのは　は不安を抱きつつも、過去の例からきっと大丈夫だとフェイトの言葉を信じた。
　なのは　がヤマトの映像を見ていたその頃、
　ミッドの西部、エルセアにあるナカジマ家のリビングにて、家主のゲンヤ・ナカジマが一人で晩酌をしていた。
　手には昔、妻が亡くなる前に家族全員で撮った写真とつい最近に撮った写真の二枚があった。
　ゲンヤは目元を緩め、笑みを浮かべながらその写真を見ていた。
「クイント・・・ギンガ・・・スバルに沢山の姉妹が出来た・・・皆、最初は戸惑っていたが、今では本当の姉妹の様に仲が良いぞ・・・お前たちも向こう（天国）で仲良くやっているか？」
　殉職した妻と娘に語るゲンヤ。
　しかし、妻のクイントの方は殉職したことがはっきりと分かっているのだが、ギンガの方は、実は生きていると言う事実をゲンヤは知る由もない。
　そして、ゲンヤの言うスバルの姉妹たち・・・。
　それはＪＳ事件の後、管理局によって捕縛されたスカリエッティ側の戦闘機人たちの事だった。
　全部で十二人居た戦闘機人の内、一名が死亡し、後の十一人が捕縛

された後、管理局側から彼女たちに司法取引が持ち掛けられた。
その内、七名がその取引を受け海上にある厚生施設にて更生プログラムを受けた。
そしてその担当にゲンヤとスバルの二人が自ら志願して行った。
更生プログラムを受けた戦闘機人の中で稼働日数が最年長のチンクはこの二人がかつて、自分たちが壊滅に追いやったゼスト隊の関係者であると知ると、チンクは二人の前で土下座をして謝罪した。
その時、チンクは、
「自分の事はどう処分しても構わない。どんな処分も甘んじて受けるが、此処に居る妹たちはゼスト隊の事件には無関係なので、どうか、手は出さないで欲しい」
と、涙を流しながら妹たちの助命を乞うた。
そんなチンクの姿に他の妹たちもチンクに習い土下座をし、
「チンク姉を助けてほしい」
と、チンクの助命を乞うた。
助命も何も、元々処分や手を下すと言う選択肢はなかったので、彼女たちの行動にゲンヤとスバルは驚いたが、戦闘機人である彼女達にも自分たち同様家族愛がちゃんと存在しているのだと実感した。
スバルはチンクの肩を叩き、
「お母さんの事は、悲しい事だけど、貴女たちはこうして罪を認め、償おうとしている・・・復讐はまた新たな恨みを生む。そんなことは、お母さんはきっと望んでいない。だから、アタシたちは貴女を許します」
と言ってチンクの罪を許した。
その後、スバルは赤い髪をした自分にそっくりな戦闘機人ノーヴェともよく話をした。
彼女は姉妹の中でもチンクを一番に尊敬し大切にしていた。
スバル自身もギンガの事を自慢の姉だと思っており、更生施設の休憩スペースにて二人で姉自慢に花を咲かせる場面が多々あった。
でも、ギンガはもうこの世に居ない・・・。
公式では殉職扱いになっている姉・・・。

母親同様もう二度と会えない姉‥‥。
そんな姉の話をするスバルの姿にノーヴェは切ない思いを抱いた。
その後、更生プログラムが終了し、彼女たちの見受け先が決まった。
チンクとノーヴェの他にディエチとウェンディの計四人がナカジマ家の養子となり、セイン、オットー、ディードの三人がベルカ地区にある聖王教会と言う教会で修道女として引き取られた。
ナカジマ家に引き取られた彼女たちは、司法取引の条件通り、管理局の適材適所と言うべき部署に配置されるべく、それぞれ訓練校へと入校した。
元々司法取引の内容も管理局か教会に関係するものだったので、仕方が無かったが、全くの自由が無いと言う訳でもない。
チンクは訓練校卒業後、下士官候補生として、訓練校よりも更に上の養成学校へと進み、その後、要人警護を専門とする部署、警備課へと配属され、ノーヴェは姉のスバル共々救助隊へと入隊し、スバルとコンビを組み、休みの日にはジムへと足を運び、ストライクアーツと言う格闘技を始めたヴィヴィオのコーチをしている。
ディエチとウェンディの二人は捜査官として父、ゲンヤが隊長を務めている１０８部隊へと配属となった。
地上配置となった彼女たちの下には、当然優秀な人材を貪欲に欲する本局からのしつこい程のスカウトがきたが、彼女たちは皆、そのスカウトを断り続けた。
彼女たちが〝陸〟よりも給料も昇進スピードが早い〝海〟のスカウトを蹴り続けた。
その理由は、
「自分たちのせいで、ミッドに住む大勢の人達に迷惑をかけた。その人たちに償うためにも、自分たちは、ミッドを離れるわけにはいかない」
と、本局の人事部の人間に言い続けた。
(司法取引だから仕方ないとは言え、アイツらも管理局員になっちまったか‥‥)
妻と娘の二人が管理局員となり、そして二人とも殉職してしまっ

た。

そして新たな娘たちも管理局員になってしまった。

願わくば、スバルを含めてこれ以上新しい家族が失われない事を切に願うゲンヤだった。

二十九話　土星圏絶対防衛ライン

はやてたち、そして　なのは　に例のヤマトの映像を見せた翌日、
「そんなっ!!」
フェイトは義兄のクロノから、プレオ、テレザートが存在したヒアデス星団海域の封鎖が正式に決定したことを聞かされた。
封鎖された事で今後、管理局、管理世界の民間の次元航行能力を持つ船がヒアデス星団へ赴くことは無くなった。
「プレオ、テレザート共に消滅してしまったので、もう観測する必要性が薄くなったのと、あの海域周辺で大規模な宇宙戦争が発生しているからと上層部が判断したんだ」
「それはわかるけど・・・・」
尚も言い募ろうとする義妹（フェイト）を抑えて、クロノは続ける。
「それにあの近くで中規模な次元余震が発生したらしくて、観測機からのデータも届かなくなったんだ。その為、こちらからの通信もできなくなった」
「・・・・」
「気持ちはわかる。だが、あの海域では多くの人が亡くなった・・・そんな危険な海に今後も沢山の次元航行艦を送ってこれ以上の犠牲を増やすことは僕も賛同できない。だから、これはある意味正しい選択なんだよ」
フェイト自身だって、わからないわけではない。
しかし、漠然とその現状を受け止めろと言う事実にも納得できなかったが、義兄（クロノ）にそう言われては反論の余地がない。
人命はなによりも尊いものだ。
それを無視するようでは、かつてＪＳ事件後に摘発された人の命を何とも思わず、違法研究を続けてきたスカリエッティを始めとする研究者や局員たちと同じだ。
その一方で、あの海域に行かなければヤマトに会う事も出来ない。
フェイトの心情は複雑だった。

「それに、あのミサイル艦隊やヤマトの戦闘力を見せつけられては、プレオ、テレザートと同一次元の世界には手が出せないのが現実だ。こちらの艦船は基本的に治安維持用の母艦かパトロール任務の艦、反対に向こうは純粋な戦闘艦なんだから」
「・・・・」
「それに、あれだけの戦闘力を持つ艦船を開発建造するには莫大な費用と高度な技術力が要るけど、管理局はその二つとも工面できる目途はたってないんだ。ただでさえ予算面や人材面では、地上本部と冷戦状態なのに、これ以上造艦予算を増やして、地上の予算や人員を減らす様ならば、地上本部がクーデターを起こしかねない。それにミッドや管理世界市民の理解を得られるかどうかさえもわからないんだ」
クロノの言うとおり、予算面や人材面でＪＳ事件前から常に冷遇されている地上本部からの本局への反感は相当なものだ。
フェイトも管理局の仕事をするようになって、ある程度はわかってきていた。
〝陸〟・・・特に地上本部の局員に対する自分たち本局局員を見る目は決して優しいものではない。
フェイト　や　なのは　は本局が地上本部より上の存在なのだという意識は毛頭ない。
次元世界の平和のために働く同じ仲間だと思っているが、同じ本局所属者の中には〝陸〟所属の局員を見下す者も少なくない。
事実そういった現場を何度も目撃して気分を悪くしたこともある。
逆に〝陸〟側からも、自分たちが本局所属と知るや冷たくあしらわれたり、門前払いを受けて、悲しくなったことも一度や二度ではなかった。
特に六課時代は凄かった。
自分たちが地上本部の・・・〝陸〟の全権を奪いに来た本局の尖兵だと思われていたからだ。
事実、そういった思惑をもっていた本局の局員も居た。
しかし、彼らの目論見は彼ら自身の汚職と不正によって潰えている。

まさに自業自得の結果と言える。
「でも、管理局が未来永劫、次元世界の中心でいられると言い切れるのかな？」
フェイトがポツリと呟く。
「ん？それはどういう意味だ？」
クロノはフェイと（義妹）に聞き返す。
「言葉どおりの意味だよ。これまではどこの次元世界でも管理局の次元航行艦を超える能力を持った船もなければ、宇宙戦争なんかもなかった・・・でも、それは管理局が知らなかっただけで、実際は管理局の艦船を簡単に沈め、惑星を粉々にするミサイル艦やアルカンシェルさえ問題にならない威力のエネルギー砲撃を放つ宇宙戦闘艦が存在していた・・・一つの次元世界で起きた事が、他の次元世界で起きないとは誰も言い切れないよね？　もし、ミッドにあのミサイル艦隊が攻めてきたら、どれだけの被害が出るか・・・」
フェイトの言葉にクロノの脳裏には、あの第５８探査部隊をいとも簡単に撃破した深緑色の艦隊が思い出された。
フェイトも自分の主張が、現状では受け入られがたいことは重々承知だった。
ただ、あの艦・ヤマトを目の当たりにしてから、不安感を抑え切ることができないでいた。

ここで舞台はミッドから土星圏へと戻る。

時に西暦２２０１年。
刻一刻と迫り来る彗星帝国の進軍を阻止する為、ここ土星軌道には地球防衛軍の主要艦隊が集結していた。
艦隊総司令官である土方竜提督の乗る旗艦アンドロメダをはじめ、全ての艦船がここに集結し、絶対防衛線をしいていたのだ・・・・・・。
そして、その中には敵の空母部隊を撃破し、本隊へと合流した　まほろば　や　ヤマトの姿もあった・・・・・・。
これが、後の歴史に残る『土星圏総力戦』である。

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋
「敵艦隊接近!!現在、ヒペリオン軌道を航行中!!」
地球防衛軍は彗星帝国侵攻艦隊本隊の姿をようやく捉えた。
「全地球艦隊乗組員諸君に告ぐ!!決戦の時はきた!地球の興廃この一戦にあり!各員奮励努力せよ!戦艦部隊、マルチ陣形を取れ!これより拡散波動道の一斉射撃をもって、敵艦隊を正面から迎え撃つ!駆逐艦隊、陽動開始!敵を中央へ!!拡散波動砲の射程圏内へ引き付けろ!」
土方の命を受け、戦艦部隊は速やかに陣形を整え拡散波動砲のチャージを開始し始める。
「提督!!ヤマトの古代艦長代理より通信です!!」
「繋げ」
「提督、収束波動砲のヤマトでは広域破壊の任に参加できません。本艦も陽動任務の方に参加します!!」
「うむ、頼む!!だが、気をつけろ!!拡散波動砲に巻き込まれれば一巻の終わりだぞ・・・」
「了解」
ヤマトを始めとする第２０任務部隊は　まほろば　とヨークタウンを除いた空母部隊、巡洋艦　インディアナポリス　を旗艦とする第２３２水雷戦隊と共同して敵艦隊の陽動に参加する事となった。
まほろば　は収束波動砲、拡散波動砲の両方を撃てると言う事で、陽動ではなく、アンドロメダ本隊と合流し、敵艦隊の殲滅任務に当たった。
地球艦隊がバルゼー艦隊を捕捉しているのと同時に、バルゼー艦隊も地球艦隊の艦影を捉えていた。
白色彗星帝国軍　太陽系侵攻機動艦隊本隊（バルゼー艦隊）　旗艦　メダルーザ　艦橋
「バルゼー提督、地球艦隊が前方で隊列を組んでいます。レーダー反応の中には例のヤマトとおぼしき艦影も確認されています」

「ヤマトか・・・!!高速艇部隊、前進！一気に蹴散らしてやれ!!」
高速駆逐艦を中心とする部隊が地球艦隊めがけて接近してきた。
ヤマトと巡洋艦、駆逐艦を中心とする陽動部隊は接近してくる敵を迎え撃つかのような構えをとり砲撃とミサイル攻撃を開始した。
数で圧倒的に劣る敵に挑発され、敵艦隊は怒り狂ったかのようにヤマトへと接近してくる。
それに彗星帝国側としてもヤマトは多くの同胞を殺してきた仇でもあったため、彗星帝国艦隊は猛り狂ったかのように接近してきた。
頃合を見て古代はヤマトを反転させ、後退するかのようにみせる。
他の僚艦もヤマトの動きに合わせ、反転後退する。
それを見た敵艦隊は追撃を行い知らぬ間に拡散波動砲の射程圏内へと入って行く・・・・。
ヤマトと陽動に参加した僚艦はタイミングを図って小ワープをして拡散波動砲の射程圏内から離脱した。

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋
「陽動部隊、全艦離脱を確認！」
「拡散波動砲エネルギーチャージ完了!!発射準備完了！」
「拡散波動砲・発射！」
戦艦部隊から多数放たれた拡散波動砲はヤマトを追撃してきた敵艦隊を飲み込み一艦残らず消滅させた。
目の前で起こった光景に敵の指揮官バルゼーも戸惑いが隠せなかった。

白色彗星帝国軍　太陽系侵攻機動艦隊本隊（バルゼー艦隊）　旗艦　メダルーザ　艦橋
「な、なんだ!?・・・あの強力な兵器は!?」
「データにありません!!・・・ど、どうします？提督？」
「騒ぐな！まだ本隊全てがやられたわけではない!!戦力の上では、まだこちらが勝っているのだ!!全艦、砲門開け!!総力戦に突入するぞ！」

メダルーザを先頭に彗星帝国艦隊は退くことなく尚も進撃を続ける。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋

「すごいな・・・!!」

「あれが、拡散波動砲の威力か!!」

友軍の決戦兵器の威力を見た太田と南部も驚愕する。

「さすがアンドロメダだ!!」

相原も地球防衛軍が総力をあげて建造した戦艦の性能に舌を巻いた。

「感心している場合じゃないぞ・・・敵は全滅したわけじゃない。ここからが勝負どころだ!!」

古代が即座に乗員たちに戦闘中故、いつまでも拡散波動砲の威力に驚いている場合じゃないと促す。

まほろば　の艦橋でもギンガが、拡散波動砲の威力を見て、

(あの威力を見せられたら、管理局の艦船なんて話にならないわね・・・)

テスト航海中に　まほろば　の波動砲の試射の現場を目撃したが、こうして多数の戦艦を並べての波動砲の一斉射撃はそう簡単にみられる光景ではない。

地球防衛軍と管理局との艦船技術の差を改めて実感したギンガだった。

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋

「敵の艦隊前衛を完全に沈めましたが、敵は尚も接近してきます!」

「ヒペリオン艦隊に出撃を命令!敵を前後から挟み撃ちにする!!」

「了解」

バルゼー艦隊の背後にある土星衛星の一つヒペリオンから待機していた艦隊が出撃し、バルゼー艦隊の後方へと迫っていった。

土方はヒペリオン艦隊旗艦の戦艦、陸奥に通信を入れ、作戦内容を伝えた。

「ヒペリオン艦隊は側面から攻撃し、敵艦隊を攪乱せよ!!」
「了解」

地球防衛軍　ヒペリオン艦隊　旗艦　陸奥　艦橋
「目標!!右舷前方１０万宇宙キロ!!」
「全艦、主砲発射用意!!」
主力戦艦である陸奥を含め、ヒペリオン艦隊全艦がバルゼー艦隊への砲撃準備をしながら敵艦隊へと接近して行った。

白色彗星帝国軍　太陽系侵攻機動艦隊本隊（バルゼー艦隊）　旗艦　メダルーザ　艦橋
「提督！左舷後方に地球艦隊を発見！急速接近中です！」
「挟み討つつもりか？後衛の第二艦隊を迎撃に向かわせろ！」
「了解」
バルゼー艦隊の殿にいた戦艦部隊は反転し、接近してくるヒペリオン艦隊に向け、艦橋に備え付けてある大口径の衝撃砲を準備する。

地球防衛軍　ヒペリオン艦隊　旗艦　陸奥　艦橋
「距離５万５千宇宙キロッ!!」
「全艦砲撃開始!!」
陸奥の射撃を始めとし、ヒペリオン艦隊の全艦が一斉に砲撃を開始した。
しかし、腕が低かったのか第一斉射目は全弾外れてしまった。
そこから各艦は主砲を修正して砲撃を行う。
だが、敵艦隊からの反撃も始まった。
「こちら第二艦隊！各艦の衝撃砲発射準備完了!!」
「発射！」
バルゼーは不適な笑みを浮かべ発射命令を下す。
先頭を航行していた一隻の防衛軍駆逐艦が衝撃砲を受けて爆発四散した。
「全艦散開だ!!　個艦で之字運動を開始せよ!!全艦最大戦速!!」

ヒペリオン艦隊は白色彗星艦隊の主砲の射程距離の長さに若干の焦りを感じて、艦隊を散開させて個艦で回避航行と攻撃を開始した。
そしてようやく、ヒペリオン艦隊が放ったショックカノンも敵第二艦隊に命中し始めた。
「敵戦艦一隻撃沈!!」
「その調子だ!! どんどん撃て!!」
敵艦隊に損害を出す事は出来たが、相手との数が違いすぎる。
しかも艦種が相手は全て戦艦なのに対し、ヒペリオン艦隊は旗艦の陸奥以外戦艦は含まれておらず、ほとんどが、巡洋艦、駆逐艦、パトロール艦の中小艦艇で構成されている高速艦隊だった。
個艦による之字運動に白色彗星の第二艦隊は当初は混乱したが、次々とヒペリオン艦隊の艦艇に命中弾を出し始める。

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋
「敵艦隊、ヒペリオン艦隊との戦闘に突入しました!!ですが、敵は一部を残してそのまま直進してきます!!」
「機動部隊を失っているのだ、短期決戦を狙っているのだろう」
「ヒペリオン艦隊の戦況不利ッ!!」
「・・・・」
レーダー員の報告に土方は思わず拳を強く握りしめる。

地球防衛軍　ヒペリオン艦隊　旗艦　陸奥　艦橋
「ぬぅ・・・・」
衝撃砲の命中により艦内のあちこちで火災や電気がバチバチと火花を上げている。
「こ、こちらヒペリオン艦隊旗艦。本艦及び我が艦隊は・・・・うわぁぁぁぁぁ・・・・!!」
ヒペリオン艦隊司令のその言葉を最後にヒペリオン艦隊との交信は途絶した。

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋

「ヒペリオン艦隊壊滅！」
「くっ・・・・」
「提督、ヒペリオン艦隊所属の駆逐艦、時雨より入電。『ヒペリオン艦隊の残存は本艦のみ・・旗艦、陸奥は敵艦隊の集中砲撃により撃沈』・・以上です」
　アンドロメダの通信長は悲痛な顔と声で生き残った駆逐艦時雨からの通信文を読んだ。
「・・・・そうか、時雨には艦隊に加わるように伝えろ。全艦砲撃用意!!ヒペリオン艦隊の仇を討つ!!」
「了解しました。全艦砲撃用意!!」
　地球艦隊はアンドロメダを先頭に接近してくるバルゼー艦隊を迎え撃つ陣形をとった。

　白色彗星帝国軍　太陽系侵攻機動艦隊本隊（バルゼー艦隊）　旗艦　メダルーザ　艦橋
「地球艦隊の中央を突破する全艦隊集結せよ！」
　バルゼーは艦隊を密集させ、突撃陣形をとった。
「火炎直撃砲用意」
　バルゼーはメダルーザの切り札ともいえる火炎直撃砲の発射準備を整えさせる。
「瞬間エネルギー転送装置作動！」
「照準よし！」
「火炎直撃砲発射準備完了！」
「フフ・・・・発射」
　バルゼーは不敵な笑みを零しながら、発射命令を下した。
　そしてメダルーザの艦首にある発射口から莫大な量のエネルギー砲が発射された。

　地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋
「敵旗艦より発射反応あり」
「？」

オペレーターが敵の発射反応を捉えたが、距離がまだまだあるので、試射かと思ったが突然、アンドロメダの隣を航行していた味方の戦艦が大爆発を起こした。
「な、なんだ!?」
「前方から敵弾です!」
「弾道は!?」
「確認できません!」
（一体どういうことだ・・・？）

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「な、なんだ!?」
味方艦の突然の爆発は、当然　まほろば　でも確認でき、永倉が声をあげた。
「いきなり爆発しおったぞ!!敵の新兵器か!?」
「でも、弾道なんて見えなかったし、敵艦の主砲射程からもかなり離れている筈じゃあ・・・」
井上とフェリシアも現状を理解できずにいる。
「味方艦の爆発前、敵の旗艦から高エネルギー反応がありました!!なんらかの攻撃だと考えられます!!」
新見がタイムレーダーの観測結果を報告する。
（弾道が確認できない・・・しかし、敵旗艦からは高エネルギー反応が有る・・・波動砲ですら弾道は確認出来るのに・・・）
良馬は、敵の未知なる新兵器について思考を巡らし、
「副長!!敵旗艦で観測された高エネルギー反応・その観測をもう少し、詳しく測定してくれ!!」
「了解」
良馬は敵の新兵器の詳細を調べるため、観測結果をもう少し詳しく新見に調べる様に命令する。
「艦長、結果が出ました。敵旗艦が高エネルギー砲を撃つ直前、僅かですが空間歪曲反応も感知できました」
「空間歪曲反応・・・通信長!!」

「はい」
「ヤマトの真田技師長に通信を繋ぎ、敵の新兵器について、今のデータをヤマトに転送してくれ!!」
「了解」
　ギンガがヤマトに通信を送ると、すぐにメインモニターに真田の姿が映った。
「月村、データを解析したが、之は・・・・」
「何か心当たりがあるのですか?」
「うむ、之はガミラスが使用していた瞬間物質転送機と同じモノだ」
「ガミラスの・・・・?」
「ああ・実はテレザートへ向かう途中、ガミラスの総統、デスラーと戦う機会があった。恐らく彼は彗星帝国に保護ないし彗星帝国と同盟を結んでいるのだろう」
「では、ガミラス独自の技術も・・・・」
「うむ、恐らくデスラーの手から彗星帝国に瞬間物質転送機の技術が渡ったのだろう。しかし、物質ではなくエネルギー弾を直接転移させるとは予想外だった・・・・」
「それじゃあ、その兵器が敵の切り札・・・・」
「そうだ」
「しかし、ワープで撃ち込んでくる高エネルギー弾なんて、回避しようが・・・・」
「確かに回避は不可能だ。だが性質上、恐らくそう連射は出来んだろう。高エネルギー砲のチャージと瞬間物質転送機の作動だけでもかなりのエネルギーが必要になるからな。だが、あの艦を早く沈めなければ、此方の被害が増すだけだろう」
　真田の見解通り、あの新兵器が此方の切り札でもある拡散波動砲の射程をも上回るとは始末が悪い。
　しかも事実上回避は不可能。
　命中率１００％の強力な兵器。
　その威力は先ほどの味方艦を一撃で吹き飛ばしたのを見れば一目瞭然だ。

しかし、人間が作った物故、長所ばかりではない。
数少ない救いは一発撃った後、次弾を撃つのに時間がかかる事、一発の被害範囲が拡散波動砲や波動砲と比べ広範囲ではないことである。
一撃で沈められるのは先程の威力から見て戦艦1～2隻程度だろう。
それでも、手をこまねいていれば一方的に撃ち続けられて潰滅は必至だ。
アンドロメダ　と　まほろば　は周囲の量産型の艦船と形状が異なる。
その為、敵がいつ、アンドロメダ　や　まほろば　を狙って来るのか分からない以上、早めにあの艦を撃沈しなければならない。
「分かりました。では、この情報を直ぐに土方さんの下にも送ります!!通信長、聞いての通りだ。すぐに敵の新兵器の情報をアンドロメダに送れ!!」
「はい!!」
ギンガはすぐに敵の新兵器の情報を土方の下に送った。

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋
「成程、ワープで撃ち込んで来る高エネルギー弾か・・・」
「はい、ヤマトの真田副長の見解では、そう連射はできないようですが、早めに対策をしなければ此方の被害が増えます」
土方と良馬が敵の新兵器について通信をしているとまた例の敵超兵器によって味方艦が沈んだ。
「提督！敵の超兵器はこの艦隊を狙っています!!感知した熱反応は着弾点で約七万度!!いくらアンドロメダと言えども、さすがにそんな高熱を受ければひとたまりもありません!!」
オペレーターの報告を受け、土方は何か策は無いかと考える。
（止まれば狙い撃ちにされる・・・敵は拡散波動砲を撃たせないつもりか・・・）
「提督、このままでは!!」

（・・・・熱・・・・高熱・・・・そうかっ・・・・!!）
「提督!!」
「全艦、針路を土星のリングへ向けろ！敵は拡散波動砲を搭載している我々を狙っている！ならば、誘い出して決着をつけるのみ!!ヤマトと空母部隊は艦載機による艦載機支援を行え!!敵を土星のリングの中へ引きずり込むのだ」
　土方の命令を受け、程なくヤマトと戦闘空母から爆装したコスモタイガーが発進し、一路敵艦隊に向かった。
「航海長！いっときたりとも立ち止まるな！静止すれば、あの超兵器の的になるぞ！」
「りょ、了解」
　アンドロメダ以下の第一戦隊は急遽転進し、土星のリングへと全速で向かった。

　宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
「地球艦隊針路を変更し、土星本星まで撤退していきます!!」
　太田がアンドロメダ率いる地球防衛軍第一戦隊の動きを報告する。
　土方司令の反転命令を受け、地球艦隊は敵艦隊を引き連れる形で土星の環に向けて後退していく。
「形勢は全くの不利じゃな」
「凄い兵器だ。あのアンドロメダが、歯が立たないなんて」
　徳川と南部が不安げな声が上がる。

　白色彗星帝国軍　太陽系侵攻機動艦隊本隊（バルゼー艦隊）　旗艦
　メダルーザ　艦橋
「地球艦隊転進」
「後衛の第二艦隊合流しました。如何なさいますか？」
「決まっとる、追撃せよ。あの艦隊を逃がしてはならん!!」
「しかし、逃亡しているのは敵の一部隊のみで、まだヤマトを含む敵の巡洋艦や駆逐艦部隊は逃亡せず、我々の分艦隊と戦闘状態のままですが・・・・」

「ヤマトなどもうどうでもよい!!危険なのはあの広域破壊兵器を搭載したあの戦艦部隊の方だ!それ以外の敵は分艦隊に任せておけ!我々本隊はあの艦隊を追うのだ!!」
ヤマトもこれまでの事を踏まえると厄介な敵であるが、地球艦隊のあの拡散波動砲の威力を見せつけられては、今はヤマトよりも地球艦隊の戦艦部隊の方が厄介である。
バルゼーはヤマト一隻など、いつでも撃沈出来る為、今はヤマトよりも厄介なアンドロメダを始めとする地球艦隊の戦艦部隊の殲滅を優先した。
「はっ!!」
メダルーザ以下の主力艦隊は土星の環へと転進をしている地球防衛軍第一戦隊を追撃していった。
「さぁ、どうした?もう逃げ場はないぞ。ハハハハハ・・・もはや地球艦隊の壊滅も時間の問題だな」
バルゼーはこの時、既に勝利を確信していた。

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋
「現在位置、カッシーニの間隙・・・敵もリングの中に突入してきた模様です!」
アンドロメダ以下の主力艦隊は何とか土星のリングを通過した。
それまでに少なからずの被害を敵の転送砲で被害を受けた。
「よし、減速開始!!火器管制システム、ロック解除!!砲撃戦用意!」
「し、しかし減速しては狙い撃ちにされてしまいます」
「他に手はない・・・いいからやれ!!」
「りょ、了解」
アンドロメダは減速をはじめ、他の艦もそれに習い減速を開始した。

白色彗星帝国軍　太陽系侵攻機動艦隊本隊（バルゼー艦隊）　旗艦
メダルーザ　艦橋
「ようやく諦めたか・・・よし、とどめだ!この土星の輪と同じく宇宙

を漂う灰燼と帰すがよい」
　減速を開始した敵戦艦部隊を見てバルゼーは勝利を確信し、火炎直撃砲の発射命令をだした。
「火炎直撃砲、発射!!」
　しかし、勝利を確信して放った火炎直撃砲の弾道を確認することはできなかった。
　火炎直撃砲が発射された直後、メダルーザの至近距離で大爆発が起こった。
　そして、間髪入れずに周辺で激しい乱気流が発生。
　バルゼー艦隊は中央突破に備えて密集隊形をとっていたため、殆どの艦がこの乱気流圏内に入っていた。
　発射した一瞬の後、メダルーザは突然激しい振動に襲われ操舵困難に陥った。
「な、なにごとだ!?」
「火炎直撃砲、エネルギー転送システム破損!!火炎直撃砲発射不能!!」
「原因はなんだ!?」
「原因は・・・す、水蒸気爆発です!!」
「何ぃっ!!水蒸気だと!?ば、バカな!」
「提督!!気流の影響で艦のコントロールが上手くいきません!!」
「乱気流に流されて味方艦同士の衝突・接触が続発しています!」
　突然発生した気流に流され、前を航行していた艦が後続の艦に衝突、航行不能に陥る艦が多発した。
「機関全開!早く気流圏から脱出しろ!!」
　言われるまでもなく、メダルーザは機関をふかしてこの大乱気流からの脱出を図った。

　宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「い、一体何があったんでしょう?」
　突然、リング内でおこった大爆発を見て一体何が起きたのかを訊ねるギンガ。
「水蒸気爆発だ」

「水蒸気爆発？」
「そう、土星のリングの組成はそのほとんどが、大きな氷の破片で構成されていて、突然七万度なんていう超高熱で熱せられれば一瞬で昇華して水蒸気爆発が起こるのは当然だよ」
ギンガの質問に良馬が答える。▪
「さあ、敵の超兵器は封じた。ここから逆転するぞ!!砲雷長!!攻撃準備!!」
「了解!!」
まほろば　は他艦同様反転し、気流により混乱している敵艦隊に対し、砲雷撃戦の準備に入った。

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋
「提督!!敵の隊列が乱れました!!」
「よし！全艦集結反転１８０度！」
土方はこの敵の混乱を見逃さなかった。
敵の超兵器を封じ、なおかつ動きのとりにくいリング内に閉じ込めたことにより、戦況は地球艦隊に有利となりなった。
「反撃に出る！全艦、砲門開け！」
「主砲！発射準備完了！」
「発射！」
カッシーニで待機していた予備軍と合流した地球艦隊は水蒸気爆発により混乱したバルゼー艦隊に砲撃を加え、次々とバルゼー艦隊の艦艇を沈めていく。

白色彗星帝国軍　太陽系侵攻機動艦隊本隊（バルゼー艦隊）　旗艦　メダルーザ　艦橋
「地球艦隊が反撃に出ました!!」
「くそっ、火炎直撃砲はまだ使えんのか!?」
「大規模な破損が起きており。修理に時間がかかります!!それにこの気流の中では狙いがつけられません!!」
「くっ・・・・！」

バルゼーは思わず毒づいた。
（おのれ、あの敗走は火炎直撃砲を封じるための罠だったか！）
火炎直撃砲は確かに超長射程だが、艦が安定していなければ照準をつけられない。
ここに来てバルゼーは自分が土方の弄した罠にかかった事を悟った。
バルゼー艦隊の状況は最悪だった。
敵将の悪辣な罠にまんまと嵌められ、攻守は完全に逆転してしまった。
侵攻するにあたって敵地である土星の環の組成を詳しく調査していなかったリサーチ不足が招いた敗因だった。
「早くこの気流圏から脱出しろっ!!」
メダルーザはスラスターを全開させ乱気流からの離脱を図る。
僚艦もそれに倣うが、なかなか艦を安定できないまま、次々と地球艦隊の砲火の餌食となっていく。
やがて、バルゼーが座乗するメダルーザにも地球艦隊の砲撃が命中した。
「左舷破損!!」
「うっ・・・・くっ・・・・」
混乱の中、土星のリングを無事に出ることのできたのはメダルーザ以下一個分隊のみでしかも皆、中破程のダメージを受けている。
それでもメダルーザは火煙を噴きながら脱出に成功し味方の合流を図った。
しかし、それもつかの間の事で、側面から何本もの火線が伸びてきて隣を航行していた戦艦の艦橋が崩壊したかと思うと、次の砲撃で串刺しにされて轟沈した。
アンドロメダをはじめとする敵の主力は後方にいる筈。
「なんだ!?どうした!?」
「ヤマトです!!ヤマトからの長距離砲撃です!!」
「何っ!?」
スクリーンに映し出されたのは、ヤマトを含む小規模な艦隊の姿が

あった。
　迎撃に向かった分艦隊もヤマトと戦闘空母群、巡洋艦　インディアナポリスを始めとする巡洋艦群の波動砲の餌食になったのか、既にその姿は無かった。
　迂闊だった。
　地球の本隊に気を取られ、ヤマトの存在を疎かにしていた。
　後方からは敵の主力艦隊、前方にはヤマト率いる機動部隊。
　バルゼー艦隊は挟み撃ちの状態となった。
「提督、我が艦隊は八割以上の損害を出しました」
「補助機関停止！生命維持装置機能低下・・・提督、このままでは!!」
「不覚か・・・地球人の艦にここまで押されるとは・・・地球人をあなどっていたか・・・」
　どのみち、自軍の勝利は消えた。
　このまま戦場を脱出して、帝国に戻ったところで、あのいけ好かない冷血女総参謀長（サーベラー）によって、敵前逃亡罪の名目を突きつけられ、処刑場送りだろう。
　艦隊総司令のゲーニッツも恐らくは、自分を切り捨てるだろう。
　自分がゲルンを切り捨てたのと同じように・・・。
　しかし、同じ切り捨てると言ってもバルゼーの場合は戦略上の上でゲルンを切り捨てたがゲーニッツは恐らく自分の保身の為に切り捨てるだろう。
「提督？」
　黙りこむバルゼーに幕僚の一人が恐る恐る声をかける。
「もう、火炎直撃砲は役には立たん・・・かくなるうえは、敵を一艦でも多く道づれにしてやるわ！艦首を敵に向けよ！全艦、特攻準備!!」
　メダルーザ以下、残存艦は反転し地球軍の戦艦部隊へと向かう。

　宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「敵艦隊、反転してきます!!」
（あいつら、刺し違えるつもりなのか？）
　パネルを見ると、土星圏からの撤退を図るかと思いきや、敵艦隊は、

撤退せずにあくまで徹底抗戦をするつもりの様だ。
その意気は認めるが、侵略者共にかける情はひと欠片とてない。
「砲雷長!!回頭中の敵艦を狙い撃て!!情けは無用！全て討ち取る!!」
「了解！目標、回頭中の敵艦隊！」
「主砲、斉射三連！――撃てっ!!」
地球艦隊はバルゼー艦隊の残存艦に一斉砲撃を加えた。
しかし、敵もただ射的上の的になるつもりはなく、果敢にも反撃してきた。
その敵の攻撃が、西郷が艦長を務めている薩摩の艦橋部付近に命中した。
「艦長、薩摩が被弾しました!!」
観測をしていた新見が、薩摩が艦橋部に敵弾を受けた事を報告する。
「っ!?通信長、薩摩に回線を繋げ」
「了解」
ギンガは薩摩に通信を繋ぎ、良馬が西郷の安否を確認する。
「参謀長!!西郷参謀長!!」
「此方、戦艦薩摩!!艦橋と機関部に直撃を受けました!!火器管制機能停止!!コントロールも不安定です!!」
通信に出たのは艦長である西郷ではなく、薩摩の副長であった。
彼の報告では薩摩は艦橋以外に機関部にも被弾していた様だ。
「参謀長は!?西郷参謀長はどうなさいました!?」
「艦長・いえ、西郷参謀長は艦橋の被弾時に負傷なさいました。今、治療中ですが・・・くそっ!!それまで、この艦が持つかどうか!!とにかく、これ以上の戦闘続行は無理です!!このまま戦線を離脱します!!」
「了解!!」
戦闘艦の頭脳と言える艦橋部に被弾し、艦を指揮する艦長(西郷)までもが、倒れた今、薩摩にまともな戦闘が出来る筈が無く、戦線離脱もやむなしの判断だった。

白色彗星帝国軍　太陽系侵攻機動艦隊本隊（バルゼー艦隊）　旗艦

メダルーザ　艦橋

薩摩が戦線離脱をしても、炎上しながら突撃をかけてくるメダルーザを含むバルゼー艦隊、残存艦には地球艦隊から無数の火線が襲いかかった。

旗艦を守るように並航していた僚艦は次々と炎に包まれ、爆発四散していく。

メダルーザは一際強固な装甲を持つが、いくら装甲が強固でも多数の戦艦を含む艦砲を防ぎきることは不可能だ。

遂に敵戦艦からの直撃弾が装甲を食い破って艦内部で爆発と火災が発生。続けざまに撃ち込まれる敵弾で艦体をズタズタに切り裂かれていくメダルーザは断末魔の悲鳴を始めた。

艦橋内でも幕僚や運用クルーたちがバタバタと死傷している。

恐らく艦内の他の部署も似た様な状況だろう。

何がいけなかった？

一体どこで間違えたのだ？

出撃当初は、辺境の蛮族共の艦隊など簡単に蹴散らせると思っていたのに・・・。

現に空母部隊を失っても此方の戦力は地球より勝っており、追い詰めることは出来た。

しかし、それ以上考える暇を天はバルゼーに与えられなかった。

再び艦橋で猛烈な爆発が起き、

「ぐはっ!!」

バルゼーは爆風と衝撃で壁に叩きつけられた。

「くっ・・・うっ・・・ごはぁ!!」

ようやく起き上がるも体内から何かが込み上げバルゼーは口から大量の鮮血を吐き出した。

視界も意識も薄れていく・・・。

「死して・・・死して、大帝にお詫びを・・・」

誰にも聞こえない声を発するとバルゼーは意識を手離し息を引き取った。

その直後、メダルーザは爆散した。

三十話　地球防衛艦隊壊滅

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋

メダルーザを含む彗星帝国軍太陽系侵攻艦隊を壊滅させた直後、勝利の余韻を感じる間もなく、

「消エタ　消エタ　消エチャッタ!!」

慌てた様子でアナライザーが第一艦橋へ入って来た。

「どうした?アナライザー」

「何が消えたんだ?」

アナライザーの只ならぬ様子に真田と古代がアナライザーに訊ねる。

「イイカラ　早ク　新米サンノトコロヘ　行ッテ下サイ!!」

アナライザーの言うまま、古代と真田は新米がいる中央コンピュータールームへ向かった。

その中央コンピュータールームでは、

「おかしいな・・・」

新米がモニターを見ながら首を傾げていた。

そこへ、

「新米、何が消えたって?」

真田が新米に訊ねた。

「白色彗星です」

ヤマトは戦闘中にも関わらず、常に白色彗星の動きは観測を続けていた。

それはやはり、地球の本当の敵はバルゼー艦隊ではなく、白色彗星本体だからだ。

白色彗星の今後の動きが、これからの戦闘に大きく左右され、引いてはそれが地球の運命を決定づけると言っても過言では無い。

しかし、その白色彗星本体が突如、姿を消したと言うのだ。

「なんだって!?」

人工の彗星とは言え、姿が消えるなんてありえなかった。

驚愕の事実に古代は声をあげる。
「観測ミスじゃないのか？」
真田が新米のミスではないかと指摘する。
事実、新米はヤマト乗艦当時、今の技術班ではなく、レーダー要員として、ヤマトに乗艦していたのだが、旧型で慣れないヤマトのレーダーの取り扱いに敵の存在に後手後手に回ったことがあった。
しかし、技術班に所属してからはそうしたミスはかなり減っている。
だが、新米も人間故にミスはあるだろうと思い訊ねたのだ。
「いえ、そうじゃないと思うんですが・・・記録した映像を再生します」
しかし、新米は自分の観測ミスではないと思いつつ記録した映像を再生して、これが観測ミスなのかどうか、真田にも見てもらった。
新米が再生した映像には、白色彗星の姿は映っているのだが、次第に彗星の姿が薄く小さくなっていき、最後には完全にその姿は消えてしまった。
「本当だ・・・エネルギー反応まで消えている・・・」
「どういうことなんだ？」
原因は不明だが、白色彗星が消えたのは新米の言う通り確かに観測ミスではなかった。
その直後、
ドゴォォォンー!!
ヤマトを凄まじい衝撃波が襲った。
「な、なんだ・・・!?」
「これはただ事じゃないぞ、古代!!お前は早く戻れ!!俺は此処に残って白色彗星が消えた原因を調べねばならん!!」
「わかりました」
古代は急いで第一艦橋へ戻った。
それは突然現れた・・・・。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「超巨大質量のワープアウト反応を感知!!極めて至近です!!」
「なにっ!?」
　新見が叫ぶように報告した直後、艦に衝撃が走り針路を外れる艦が続出した。
「な、なんだ!?この振動はっ!?」
「い、一体何がワープアウトした!?」
「わ、ワープアウトしたのは・・・は、白色彗星です！速度、４０宇宙ノットで此方に接近してきます!!」
「っ!?」
　ワープアウト・・・。
　白色彗星が消えたのは観測ミスではなく、ワープした事によるものだった。
　迂闊だった・・・。
　彗星状の星間国家だから、移動も常に彗星の様にしか動けないだろうと思い込んでいた。
　しかし、ワープ機関を有する艦船を保有している移動型の星間国家なのだから、その本体にもワープ機関が備わっていても何らおかしくは無かった。
　幸い　まほろば　や　アンドロメダ　を始めとする第一戦隊は白色彗星のワープアウト地点から離れていたが、運なく白色彗星に吸い込まれていく艦も少なくなかった。
「ああ、ヤマトと空母部隊が・・・」
　艦橋に新見の悲鳴があがる。
「ヤマトと空母部隊、第２３２水雷戦隊が白色彗星に飲み込まれます!!」
「何!?」
　ハッとした良馬が仰ぎ見たメインモニターには、
　白色彗星に飲み込まれていく、飛龍以下の全ての戦闘空母とヤマト、巡洋艦、インディアナポリス以下の第２３２水雷戦隊の艦艇が映った。
「飛龍と蒼龍が・・・!!」

「ワスプとインディアナポリスも!!」
新見とギンガ息を飲みながら吸い込まれていく艦艇を見る。
（くそっ・・・・！）
良馬は歯を食い縛り、拳を握り締めて激しい憤怒を堪える。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
「一体何があったんだ!?」
古代が第一艦橋に戻ると、
メインパネルには白色彗星が映っていた。
「は・・・・白色彗星が・・・・!!」
「っ!?白色彗星が・・・・こんな距離に・・・・!!」
太田が、顔面白色になりながら、古代に事態を説明しようとしたが、余りの驚愕に上手く説明できなかった。
古代自身も何故白色彗星がこんな所にいるのか分からなかった。
「突然・・・・突然現れたんです・・・・!!」
太田に代わり、南部が、白色彗星がこの至近距離に現れた事を古代に説明する。
しかし、彼の声は突然の事態に声が震えている。
「・・・・ワープアウト・・・・白色彗星が消えたのは・・・・・こういう事だったのか!!」
ここに来て、古代も白色彗星が消えた原因が分かった。
「島!!舵を戻せ、艦位を維持するんだ!!このままでは、白色彗星に引きずり込まれるぞ!!」
古代が島に何としても白色彗星から少しでも離れろと指示を出す。
「あ、ああ・・・・機関長!!エネルギー増幅!!」
「機関室!!エネルギー増幅!!オーバーブーストが焼き付いても構わん!!」
島と徳川もヤマトを脱出させようと、奮闘する。
そこに、白色彗星の重力波に捕まった巡洋艦　インディアナポリスが　ヤマト　の左舷に衝突。
この衝突により、ヤマトは左舷に破口が生じ、火煙を噴き上げなが

ら艦列から脱落していった。
だが、インディアナポリスとの衝突により、ヤマトは何とか白色彗星の重力波から脱出できたが、空母部隊とインディアナポリス以下の第２３２水雷戦隊の艦艇は全て白色彗星に飲み込まれた。
そしてそのヤマトの方はと言うと・・・
「機関長、エンジンがやられました!!・・・・機関長・・・・!!・・・・うわぁぁぁぁぁぁっ!!」
機関室からは機関員の悲鳴がこだました。
「いかん!!波動エンジンが・・・・!!」
機関員の断末魔を聞き、波動エンジンに大規模な損傷を受けたと判断した徳川はエンジンの状況を確認する為、第一艦橋から機関室へと降りた。
「機関長、俺も行く!!」
真田も徳川の後を追った。
「島!!船をキープしろ!!」
古代は何とかヤマトの姿勢を制御しようと、島に現状を保たせようと指示を出すが、
「駄目だ!!操舵不能!!」
島は懸命に舵を操作するが、ヤマトは全く言う事をきかない。
更に、ヤマトの損傷は機関だけでなく、
「通信設備も大破!!友軍艦と連絡がとれません!!」
通信機を操作していた相原がヤマトの通信設備が使用不能に陥った事を報告する。
「こんな時に・・・・くそっ!!急いで修理を!!何としてでも友軍と連絡をつけたい!!」
「は、はい!!」
白色彗星のワープアウト時に発生した巨大な衝撃波の影響を受け、通信アンテナも損傷した。
相原は身に着けていたインカムを取り外し、早速、備え付けの修理道具を手にして通信機の応急修理に取り掛かった。
その間にもヤマトは手負いのまま宇宙の彼方へと落ちて行った。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「ヤマト、戦列を離脱していきます!!」
「っ!?通信長、ヤマトに繋げ、ヤマトの相原通信長を呼び出すんだ!」
「は、はい!!」
何とか、白色彗星の重力圏から逃れたヤマトであったが、戦列に復帰することなく、落伍していったヤマト・・・あのヤマトが損傷するや否や落伍していったのだ。
ただならぬ事態が発生したとしか考えられない。
「ヤマト!!応答してください!!ヤマト!!此方、戦艦　まほろば!!ヤマト、応答してください!!」
ギンガは何度もヤマトに通信を送ったが応答は無く、ヤマトの状況がわかるまでには、今しばらくの時間が必要だった。
そこへ、アンドロメダから集結指示を受け、地球防衛軍の波動砲搭載艦は波動砲戦フォーメーションを取るように指示が下された。
波動砲を搭載している　まほろば　も当然、このフォーメーションに参列したのだが、
(まずいな・・・もし、波動砲が白色彗星に効かなかった場合、この陣形じゃあ逃げ道が限定されるんじゃないかな・・・左右の端は兎も角、中央に位置する艦は白色彗星に飲み込まれるぞ・・・)
良馬はこの隊形に問題があるのではないかと思うが、白色彗星本体の対策を考える前に彗星本体がこうしてきてしまったのだから、対策を考える暇が無かったのだろう。
土方もまさか、彗星がワープしてくるとは予想もしていなかったのだから・・・。
艦橋員も皆顔を強張らせ、緊張した面持ちである。
真正面から対峙する白色彗星はあまりにも巨大で白く、禍々しい光を放っていた。
「砲雷長、波動砲へエネルギー充填・・・」
「りょ、了解・・・波動砲へエネルギー充填・・・」
良馬自身も緊張した面持ちで波動砲へのエネルギーチャージを砲

雷長であるフェリシアに命じた。
地球防衛軍の波動砲搭載艦は上下の二段横列隊形をとり、波動砲のチャージを行う。
その間にも白色彗星は地球艦隊へと近づいてくる。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
戦列から落伍したヤマトは、レーダーは何とか無事だったようで、地球艦隊の様子をキャッチする事は出来た。
「地球連合艦隊が白色彗星に総攻撃を開始するもようです!!」
雪が地球艦隊の動きを報告すると、
「なんだって!?」
古代は声をあげる。
先程まで、彗星帝国の侵攻艦隊本隊と戦って、間髪入れずに白色彗星本体と戦う事となったのだ。
補給を取る暇もなく、連戦で大丈夫なのかと言う懸念があった。
「雪、パネルにまわしてくれ!!」
「了解!!」
ヤマトのメインモニターには、接近して来る白色彗星に対して二段横列に隊形を組み、波動砲を撃ち込もうとする地球艦隊の姿が映し出されていた。

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋
「波動砲チャージ開始、総員、対ショック・対閃光防御!」
照準やエネルギー拡散点の調整はアンドロメダの中央コンピューターがやってくれる。
あとはアンドロメダからのカウントダウンに応じて全艦が波動砲のトリガーを一斉に引けば良いのだ。
いくら相手が侵略者とはいえ、人間がコンピューターの指示に従って大量破壊や殺戮をするなんて何とも皮肉だ。
まるで、機械が人間を操っている様だ。
土方は内心そう思いつつ、波動砲の発射準備を進める。

「発射１０秒前、９‥８‥７‥６‥５‥４‥３‥２‥１‥‥」
接近してくる白色彗星の光が強くなっていく中、カウントダウンの声が響く。
「‥０‥全艦、拡散波動砲発射ッ!!」
敵艦隊との戦闘や白色彗星の突然のワープアウトと言うアクシデントで少なからぬ犠牲を被った地球艦隊だが、波動砲搭載艦はまだ多数が健在であった。
それらの艦から動砲が一斉に放たれた。
辺りは波動砲の発射による閃光と波動砲が白色彗星に着弾した閃光でゴーグルを掛けていても目を細めるくらい眩しかった。
やがて眩い閃光が収まると、そこには薄らとガス帯を纏った白色彗星があった。
「まったく効いていない‥‥」
「バカな‥‥」
「あれだけの数の波動砲だぞ‥‥」
アンドロメダの副長を始め、乗組員たちの誰もが驚愕した声で言う。
アンドロメダをはじめとする戦艦、その戦艦を改良した戦闘空母はあのヤマトの波動砲よりも強力な増幅装置を搭載している。
当然、ヤマト改級の　まほろば　も例外ではない。
そのヤマトの波動砲よりも強力で、尚且つ多数の波動砲を食らっても消滅しなかったのだから、十分驚愕に値する事実だ。
土方も顔を引き攣らせている。
しかし、相手も全くの無傷と言う訳では無く、白色彗星を構成している白色のガス帯が消え去るとそこからラ○ュタの様な姿をした要塞都市が現れた。
「これが、白色彗星の正体か‥‥」
土方が‥‥いや、地球人類が初めて見た白色彗星の正体を見て、誰もが唖然とする。
ゴクっと土方が生唾を飲み込むと、
「全艦砲撃開始!エネルギーが尽きるまで、怒りを込めて撃ち尽くせ

！」
土方司令の号令下、地球艦隊は都市帝国に向けて苛烈な砲雷撃戦を挑んだ。
地球艦隊は都市帝国に向けて砲雷撃戦を挑むと、要塞都市は都市部と下部の中間地点にあるシリンダーの様な物を回転させ始めた。
するとそのシリンダーの上部から白色彗星周りを纏っていたガス帯と同じようなガスを噴射しだした。
地球艦隊の艦艇は上部にある都市部へと攻撃を行うが、そのガスバリアーのせいで砲撃もミサイルも全て無効にされてしまった。
そして、回転装甲帯からは大型ミサイルと大口径エネルギー砲を撃って来た。
大口径砲は戦艦をも一撃で轟沈させ、飛んで来るミサイルの中にはクラスター弾みたいな物を射出する物まであって、艦体をボロボロにされ爆沈する艦が続出した。
「面舵４０！急げ！」
まほろば　は要塞都市の攻撃よりもミサイル迎撃に徹していたが、転舵した直後、前方に閃光が走った次の瞬間、左舷に大きな衝撃が走り、爆発が発生した。
さらに、右舷と第一主砲搭付近にもミサイルが命中して右舷の傷が広がり、第一主砲搭は使用不能になってしまった。
今までは何とか上手く回避できたが、遂に　まほろば　も被弾する結果となった。
「右舷第六から第十ブロック被弾!!」
「第十五から第十八ブロックを閉鎖！」
「風呂場の残り湯を消火に回すんだ!!手空きの者は消火作業を手伝え!!」
外装は皆同じに見えるが、日本籍の宇宙艦の艦内には、基本的に男女ともに大浴場が設けられ、風呂の湯水は非常時における消火用水の用途を兼ねていた。
「破損部の応急修理急げ!!」
まほろば　の艦橋もあわただしく指示を出す良馬と新見が居た。

良馬と新見の指示は的確で、乗組員たちも常にダメージコントロールの訓練は日常茶飯事の如く行っていた為、まほろば　は何とか持ちこたえていた。
(やっぱり、あの時真田先輩に言われた通り、最後に頼りになるのは人の力だな・・・)
まほろば　の艦長に就任仕立ての時に真田に言われた事を良馬は忘れていなかった。
その結果が、今こうして生かされた。
しかし、こうした奮戦がいつまでも続くはずが無く、まほろば　は右舷にまたミサイルが二発命中・炸裂したことで、影響は機関室に及び針路と速度を維持できずに等々　まほろば　も落伍を余儀なくされた。
「艦長、火器管制システムに異常発生!!攻撃不能!!」
「機関推進力も低下し始めとる!!」
「操艦機能にも支障を出し始めました!!」
フェリシア、井上、永倉がそれぞれの受け持ち部署にて、まほろばの機能が落ち始めている事を報告する。
「くっ・・・反転１２０度・・・当戦線を・・・離脱する・・・」
良馬は悔しそうに拳を握り、小さく唸る様に撤退命令を出した。
まほろば　は火煙を噴き出しながら針路を一路木星圏に定め、木星方向へと撤退行動に移った。
その頃、まほろば　よりも先に戦線を離脱したヤマトはと言うと、

宇宙戦艦　ヤマト　機関室付近の通路
「メインエンジンに火が付いたら事だぞ!!」
真田と徳川はヤマトの波動エンジンの動力源に火が回って居ない事を祈りながら機関室へと降りた。
しかし・・・
「機関長・・・」
「エンジンに火が入るのは時間の問題だ・・・」
機関室の火災は徳川や真田が予想していたよりもはるかに酷かっ

た。
「こうなったら、伝導管を塞ぐしかない・・・・技師長消火班を!!」
徳川は機関室の制御盤の下へ向かい、隔壁を操作し、真田は技術班に応急修理と消火を命じた。
消火作業にはアナライザーの他に斎藤をはじめとする空間騎兵ら手空きの者たち全員が行った。
真田も備え付けの消火器で機関室の消火作業を行う。
しかし、焼け石に水だった。
しかも・・・・
「最悪だ!!隔壁もスプリンクラーも全部イカレとる!!」
「えええっ!!」
制御盤を操作していた徳川の口から最悪の言葉が放たれる。
防火用の隔壁も消火用のスプリンクラーも故障で作動しない。
まさに最悪の事態だ。
そして、これ以上の、最悪の事態を防ぐため、徳川はある決断をする。
「やむを得ん!!伝導管をぶった切る!!」
「えええっ!!それは危険です!!もし、一つでも間違えたら・・・・」
真田は伝導管を切断すると言うリスクを徳川に言う。
「だが、技師長、このままでは、ヤマトは消し飛ぶ」
徳川が伝導管を睨みながら言い、真田も緊張した面持ちでエネルギー伝導管を見る。
「何!?伝導管を切る!?」
真田は機関室の火災状況を第一艦橋の古代に伝え、
このままではヤマトが機関室から内部爆発をする可能性があるため、それを防ぐため、これからエネルギー伝導管を切る事を伝える。
「それしかない!!一か八かだ!!古代、全員を退艦させてくれ!!艦に居ては危険だ!!」
「わかりました」
真田からヤマトの現状を知った古代は、
「総員退艦せよ!!エンジンルームに火が迫っている総員直ちに退艦せ

よ!!加藤、山本!!出来るだけ多くの乗員を収容して艦を離れろ!!飛ばせる機体は全て使うんだ!!」
真田の進言を受け、ヤマト乗員に退艦命令を下す。
負傷者は優先的に救命艇へと割り当てられ、単座のコスモタイガーには搭乗員の他、小柄または痩せている乗員を乗せ、救命艇、中型雷撃艇、上陸用舟艇などのヤマトに搭載されている機体全てをフル活用し、乗員はヤマトを退艦していく。
乗員の退艦作業が行われている中、機関室では、徳川、真田、アナライザーがレーザーカッターで伝導管を切り取る作業を開始した。
乗員が退艦していく中、古代は最後までヤマトに残っていたのだが、退艦作業を見守る中、退艦した機体がヤマトの周辺から離れない。
このままでは万が一、ヤマトが爆発した時、発生した衝撃波に巻き込まれ機体そのものが巻き込まれ、破壊されてしまう。
そうなれば、当然搭乗している乗員もただでは済まない。
「何をしているんだ?!加藤、山本!!早くヤマトから離れろ!!」
このままでは、危険だと判断した古代は、退艦者の指揮を執っている加藤と山本に通信を送り、ヤマトからもっと離れる様に言うが、
「嫌です!!ヤマトを見捨てるわけにはいきません!!」
加藤らは古代の命令を拒否した。
「加藤命令だ!!早く安全な宙域まで離れろ!!」
古代はもう一度、加藤らに命令を下すが、
「嫌です!!」
加藤らは、頑なに命令を拒否し、ヤマトの至近距離から離れない。
やむを得ない、古代はヤマトを何としても爆破しないようにと機関室へと赴き、徳川らの手伝いをしようと、第一艦橋を降りようとした。
そこへ、
「古代君!!」
負傷者の退艦作業を行っていた雪が戻って来た。
「雪、まだいたのか!?」
てっきり、負傷者と共に退艦したと思った雪がまだヤマトに残っていた事に驚いた古代。

「古代君も早く」
「僕は、まだやるべきことが残っている。雪こそ、早くヤマトを降りるんだ」
「嫌よ、古代君も一緒に・・・・」
加藤に続き、雪までもヤマトの退艦に渋った。
「何をしとるんじゃ!!急がんと危ないぞ!!」
艦内を回り、負傷者やまだ退艦していない者が、居ないかチェックしていた佐渡が第一艦橋へと入り、イチャツイテいる？二人に声をかける。
「あっ、先生。雪を・・雪を頼みます」
古代は佐渡に雪を託すと機関室へと向かった。
「古代君!!」
雪は古代の後を追おうとするが、そこを佐渡に止められる。
「離して先生」
「落ち着くんじゃ雪、古代なら大丈夫じゃ」
佐渡は必死に軽いパニック症状を起こしている雪を宥めた。
機関室に来た古代は作業をしている真田に声をかけ、作業を手伝ったが、その最中に起きた爆発に巻き込まれた。
「古代!!」
真田がかけより、倒れた古代を抱き上げる。
「古代、しっかりしろ!!古代!!」
「うっ・・・・うっ・・・・」
古代は苦痛で顔を歪めるが、意識はしっかりとあった。
その頃、依然と要塞都市を攻撃しているアンドロメダはと言うと、

地球防衛軍　連合艦隊　旗艦　アンドロメダ　艦橋
艦隊旗艦、アンドロメダは一番先頭で攻撃を行っていた為、まほろば　よりもダメージは深刻で左右の両舷に多数のミサイル攻撃をくらい、艦橋にも二発被弾し、もはや艦の制御すらままならない状況となっていた。
特に艦橋への攻撃が致命的で、航海長、副長、砲雷長がその攻撃に

より、死傷した。
アンドロメダがここまでのダメージを受けながらも攻撃した都市帝国は、ガスバリアーにより無傷だった。
艦橋要員に多数の死傷者を出し、エネルギーも残り僅かなアンドロメダに勝機はなくなった。
しかも、運が悪いことに、航行用システムにも異常が生じ、艦の制御が行えず、真っ直ぐ要塞都市へと向かっていく
そんな中でも土方は、絶望やパニックを起こすことなく、冷静に戦力分析をし、その結果を通信で送った。
「そうか!!・・・ヤマト、まほろば!!生きていたら聞いてくれ!!彗星帝国を攻めるのはあの下の部分だった。我々はあの都市に目を奪われ過ぎていた・・・」
土方の通信は感度が悪いながらもヤマトに届いた。
しかし、肝心の彗星帝国を攻める部分については届いていなかった。
「ヤマト・・・・まほろば・・・・我々は負けた・・・・だが、古代、月村、お前たちは・・・・死ぬな・・・・・生きて・・・・生きて・・・・・最後まで・・・・・戦え!・・・・・・・・」
土方の最後の通信を古代は真田と徳川に肩を支えられながら聞いていた。
「地球の未来は君たちの肩にかかっているのだ!!月村、古代・・・・地球を・・・・地球を・・・・頼む・・・・諸君らと共に戦えたことを誇りに・・・・・・・・・・・」
「土方さぁぁぁぁぁ――――ん!!」
古代は聞こえていないにも関わらず、土方の名を大声で叫んだ。
「地球・万歳・・・」
土方のその言葉を最後に、アンドロメダは都市帝国の回転装甲帯部分に突っ込み土方提督以下全員が戦死した。
しかし、アンドロメダの特攻を受けたにも関わらず都市帝国は無傷だった。
その後、ヤマトは何とか消火作業を終え、内部爆発の危機を脱し、木

星圏を目指した。
ちなみに負傷した古代は目を離すとまた無茶しかねない為、医務室にて佐渡と雪の監視下に置かれていた。
「・・・・」
アンドロメダの最後は地球防衛軍本部でもモニターで映されていたが、誰もが顔を強張らせ、何も言う事が出来なかった。
アンドロメダが要塞都市に突っ込む少し前、土方の通信は　まほろば　でも傍受されていた。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「アンドロメダから全周波帯通信です！」
ギンガの緊迫した声がブリッジに響いた。
総旗艦からの全周波帯通信――。
宇宙戦士に、それが何を意味するか理解しない者はいない。
アンドロメダの・・・・土方総司令の命運が尽きようとしている――。
それでも、自分が斃れた後も戦い続けようとしている宇宙戦士たちへの最期のメッセージなのだろう。
「通信長、艦内全域に流れるように・・・・」
「はい」
良馬は、ギンガに艦内一斉放送で全員に聴かせるよう指示した。表情は変えず、艦長席コンソールの下で拳を強く握り締め、震わせながら・・・・。
まほろば　の艦内にはノイズや空電混じりながらも、土方の肉声が艦内に流れる。
それには、都市帝国のウイークポイントは要塞都市の下部にあること、生き延び、まだ戦う意思と気力がある者は、最後まで諦めることなく戦えということ。
最後に・・・・
ヤマトと共に地球を託されたことを・・・・
土方の通信を聞き、啜り泣く者、鼻を啜る者が大勢居た。
「・・・・」

良馬は立ち上がり、虚空に向かって挙手の礼をとった。
艦橋員をはじめ、重傷者以外の乗組員も各々の持ち場で敬礼を捧げた。
良馬は知っていた。
ガミラス戦時、士官学校の校長であった土方は送り出した教え子たちが次々と戦死していくことに自分と同じく苦悩し悲しんでいた事。
彼が肌身離さず持っていた黒皮の手帳には沖田同様、先に逝ってしまった教え子や部下の全員の名前が書いてあった事を・・・・。
彼自身の家族も沖田同様、既になく教え子に厳しくも愛情を持って接していた事を・・・
だからこそ、訓練生時代や部下として仕えた時、どんなに厳しい指導や罰直を受けても一度たりとも不満を持ったことはなかった。
リニスが育ての母であるならば、良馬にとって土方は父親の様な存在だった。
良馬は涙を流し、泣きたい気分であるが、艦長たる者、それをぐっと飲み込んで表情には出さない。
それに今泣くことはきっと土方も望んではいないだろう。
彼から言わせれば、
「泣いている暇なんてあるのか!?泣いている暇が有るなら戦え!!」
と、言いそうである。
そう、泣くのはあの侵略者共を叩きのめした後だ・・・・
今成すべき事は、あの白色彗星を叩きのめすこと・・・・
地球を救う事である。
そこれこそが土方をはじめとするこの戦いで散っていった宇宙戦士たちへの手向けなのだから・・・・
まほろば　も　ヤマト　同様、傷ついた残存艦と共に木星圏を目指した。
それは、防衛軍にとって最大の誤算であった・・・・
敵主力艦隊と見えた大艦隊も、その後に控える白色彗星にとっては、ただの露払いでしかなかったのだ・・・・

白色彗星の巨大な力は、地球の頼みとしたアンドロメダを一瞬のうちに葬り去ってしまった・・・・。
ここに、地球防衛軍連合艦隊は完全に壊滅し、地球の滅亡は決定したかに見えた・・・・。
時に西暦２２０１年・・・・・
この戦いにおける戦死者は、艦隊総司令である土方提督を始め、数千人にのぼった・・・
地球に奇跡は起こらないのか・・・・？
要塞都市は不気味に沈黙して地球を見つめている・・・・

三十一話　敗残軍

土星圏を舞台にした白色彗星主力艦隊（通称：バルゼー艦隊）と地球防衛軍連合艦隊の戦いは、地球防衛軍側に多数の犠牲を出しながらも、白色彗星の主力艦隊に勝利した。

しかし、突如出現した白色彗星本体には波動砲ですら歯が立たず、周囲のガスを取り払っただけにとどまった。

ガスの中から出てきた要塞都市に防衛軍は成す術無く破れ、旗艦であるアンドロメダは轟沈。

辛くも撃沈を逃れた防衛軍艦隊の残存艦艇は木星圏まで退避した。

木星の衛星の一つ、カリストは木星の第四衛星であり、西暦２００７年までに発見された衛星の中で内側から八番目の軌道を回っている。

名はギリシャ神話に登場するニュンペー、カリストーにちなむ。

カリストは太陽系に存在する衛星の中ではガニメデ、タイタンに次いで三番目に大きく、太陽系の全天体の中でも水星に次いで十二番目に大きい。

この衛星はガリレオ・ガリレイによって発見されており、そのためイオ、ガニメデ、エウロパとあわせてガリレオ衛星と呼ばれている。

比較的明るい衛星で、双眼鏡でも観察できる。

土星圏の衛星群に地球軍の基地が有る様に、当然木星圏の衛星群にも地球軍の基地が建設され、良馬が艦長を務める戦艦　まほろばは、このカリストへと落ち延びた。

その他の艦艇もそれぞれ、木星の衛星であるエウロパやイオへ無事に落ち延びた。

地上に建設された基地は彗星帝国の攻撃により、破壊されてしまっていたが、艦船の修理用ドックなどは、クレーターの影や地下に建設されており、無事で　まほろば　もカリストの地下、修理用ドックへその身を横たえた。

カリストに到着した時、まほろば　の誰もが戦いとアンドロメダの

撃沈と言う事実を目の当たりにして精神的、肉体的に疲労困憊していた。
　しかし、彼らに長々と休んでいる時間、悲しんでいる時間はなく、次なる戦い・・あの要塞都市との再戦の為、今は一刻も早く艦の修理と補給をしなければならなかった。
「副長、修理の進行状況は？」
　良馬が、新見に現在の状況を確認する。
「はっ、機関部の方は間もなく終了との事です」
「そうか」
「火器管制システムのチェックと損傷点検も終わりました」
　砲雷長のフェリシアが火器管制の現状を報告する。
「よし、大至急、保守作業にかかれ!!通信長、通信機能の方は？」
　良馬は、フェリシアに　まほろば　の武装修理を命じ、続いて通信長のギンガに通信機能の状態を訊ねる。
「アンテナの損傷が酷いので、送受信が出来るまでもう少し時間がかかりそうです」
「できるだけ急いでくれ。なんとかして早く地球と交信したい」
「はい」
「艦長、操艦機能は完全に回復できました」
　操艦システムをチェックしていた航海長の永倉は修理が完了した事を報告する。
「そうか・・・レーダーは修理できたし、後は通信だけだな・・・」
「艦長、彗星帝国は今どの辺りにいるんでしょう？」
　永倉が彗星帝国の現在位置を訊ねるが、
「そう焦るな。カリスト基地も通信アンテナや通信施設を破壊されたため、未だに地球との交信が出来ない状態らしい・・・」
「それじゃあ他の基地も？」
「恐らく似た様な状況だろう。それに基地にも　まほろば　にも負傷者が多数出ている。今、リニスたち医務官らが頑張ってくれている」
「そうですね」
「それよりも、航海長、副長。隣にある艦を見てみなよ」

「えっ？」
「あの戦艦ですか？」
良馬に言われ、永倉と新見が　まほろば　の隣に横たわっている艦を見る。
其処には、一隻の主力戦艦が横たわっていた。
そしてその船体には、白い文字で『薩摩』と書かれていた。
「っ!?あれは!!」
「薩摩!?あの艦は!?」
「うん。西郷さんが乗っていた艦だ。土星圏の戦線を離脱後、なんとか此処まで辿り着いたらしい」
「それで西郷のおやっさんは？」
永倉が西郷の現状を訊ねる。
「まだ意識を取り戻されていない・・・今、治療中だそうだ・・・」
「そうですか・・・」
永倉も新見も西郷を案じ、心配そうな顔をする。
そこへ、
「艦長!!通信機能が回復しました!!」
「火器管制システムも修理完了!!いつでもぶっ放せます!!」
ようやく通信機能と火器管制の修理が終わった。
後は傷ついた船外補修のみとなったが、艦の大きさから此方は少し時間がかかると報告を受けた。
「そうか。では、早速地球と交信をしてくれ」
「はい!!」
ギンガは早速地球との通信回路を開いた。
彼女自身も今の地球の状況が気になったのだ。
地球の状況は、地球に居る家族の安否にも繋がるのだから・・・。
「艦長」
「ん？」
フェリシアが不安そうな表情で良馬に声をかける。
「地球はこの先どうなってしまうんでしょう？」
「・・・」

フェリシアの地球の未来を不安に思う言葉はその場に居た全員の気持ちを代弁していた。
「・・・防衛軍の主力艦隊が壊滅してしまったからな・・・」
「ヤマトも行方不明ですし・・・」
「残存艦隊の戦力で彗星帝国と戦えるんでしょうか？」
「・・・」
様々な不安が漂う中、
「か、艦長!!」
地球と交信していたギンガが声をあげる。
「どうした？防衛軍本部と連絡はとれたのか？」
「そ、それが・・・地球が・・・地球が・・・降伏したそうです・・・」
「なっ!?」
「っ!?」
「なにっ!?」
ギンガの言葉にその場に居た皆が固まる。
「そんなっ!?」
「地球が・・・」
「それは本当なのか？ギンガ？」
「は、はい・・・まだ勧告を受諾してはいませんが・・・彗星帝国側は無条件降伏を勧告しているそうです・・・」
「艦長、これからどうします？」
「・・・」
地球側の無条件降伏に良馬はこの後、どうすべきか判断を即座に下せなかった。

良馬達が地球の無条件降伏を知る少し前・・・。
地球の防衛軍本部でも動揺と不安が渦巻いていた。
「アンドロメダが・・・」
「地球の残存勢力であの要塞都市と戦って勝てるのか？」
「無理だ・・・」
「ヤマトはどうなった？」

「行方不明らしいです」
「やられちまったんじゃないのか？」
「どうすればいい？」
「何か手は無いのか？」
　防衛軍幕僚が戸惑っている中、
「長官。大統領から通信が入っています」
「繋いでくれ」
　防衛軍の現状とこれからの対策を聞こうと、藤堂の下に地球連邦大統領が通信を送って来た。
「長官。地球防衛軍は全滅したのか？」
「残念ながら・・・・」
　地球防衛軍艦艇全てが全滅したわけではないが、木星圏に残存艦隊が居る事、各艦の通信機能と木星圏の基地の通信設備が使用不能な事に、防衛軍本部はどれくらいの艦艇が残っているのか把握しきれていなかった。
　その為、本部は、防衛軍は全滅したものだと思い込んでいた。
「この上は残った戦力を全て集結させ、防衛行動を・・・・」
「その戦力で守り切れるのか？」
　地球本土にある主な戦力はパトロール艦、護衛艦や駆逐艦、パトロール艇（巡視艇）の中、小型艦艇の他にガミラス戦役時に使用し、現在は士官学校や訓練校に練習艦として払い下げとなった旧式艦ぐらいしかなかった。
　その戦力ではとてもあの要塞都市と戦って勝てると言える戦力ではなかった。
「・・・例え最後の一人になろうとも私は戦う所存です。大統領、市民にはまだ敗戦を知らせないでください。今知らせれば、大混乱になります」
「もう遅い!!先程報道官が発表してしまった!!」
「なっ!?」
　大統領のこの言葉に藤堂は言葉をなくした。
　大統領と共に防衛軍と彗星帝国軍との戦いを観戦していた大統領

府の報道官が勝手に防衛軍壊滅の事実を記者発表してしまったのだ。
その為、地球の各地で市民たちは大混乱となった。
マスコミは各国の政府機関や関連施設に押し寄せ、これからの対策、詳しい情報、責任をとれ!!等と野次を飛ばした。
宇宙空港でも地球から脱出しようと、市民たちが押し寄せ、将棋倒しとなる惨事が起こった。
その他の交通機関でも同じような事が起こり、中には現状に悲観して自殺をする者も居た。
また高速道路や一般道でも逃げ惑う車で大渋滞が出来、その混乱の中、玉突き事故を起こし、其処から火災に発展する惨事が起きた。
地球市民が極度の恐怖によってパニック状態となっている中、中嶋家の加奈江と火憐、紅葉そして中嶋家に来ていた八神家の皆は、バルコニーからパニックになり逃げ惑っている人々を、冷静に見ていた。
「平和ボケも此処に極まれりね」
「まったくだ。ガミラスとの戦争時にはあそこまで取り乱したりはしなかった。全く情けない限りだ」
眼下で逃げ惑う人々を見ながら加奈江とシュベルトは呆れながら言う。
「お母さん」
「ん?どうしたの?」
加奈江とシュベルトが声のした方を向くと、子供たちが不安そうに見つめている。
「地球はどうなっちゃうの?」
「防衛軍は全滅したって・・・・良馬さんやギンガ姉さんは・・・・?」
二人の母たちは子供たちを抱きしめ、不安を拭い去ろうとする。
「大丈夫よ。ギンガも良馬君もきっと生きているわ。もうじき、地球に戻ってきてアイツらを追っ払ってくれるわ」
(そうよ、ギンガも良馬君もきっと生きているわ・・・・きっと・・・・)
地球の混乱状況をその元凶である彗星帝国の大帝ズォーダー以下の幕僚達はモニターにてその光景を眺めていた。

「あの騒ぎ様、慌て様・・・つくづく地球人が野蛮で愚かな人種であるよい証拠ですわね」
サーベラーが地球人たちの行動を見て嘲笑う。
「一気に捻り潰してしまいましょう」
ラーゼラーがズォーダーに進言する。
「まぁ、それは面白い余興ですわね」
サーベラーもラーゼラーの意見に同調する。
「いや、久々に出会った美しい星だ。潰してしまうには惜しい。全地球人を奴隷として膝まずかせるのも悪くはない。ゲーニッツ!!直ちに地球へ使者を送れ!!地球に無条件降伏を命じろ!!」
「ハッ!!」
ズォーダーは地球を潰さず、地球人の奴隷化を望み、ゲーニッツに使者を送る様に命じた。
ゲーニッツは直ちに一個小隊の艦船を地球へ使者として送った。
地球側も何もせず、彗星帝国の艦船を向かい入れる筈もなく、戦闘衛星と攻撃ステーションにて迎撃するが、彗星帝国軍の艦船の侵入を阻止する事は出来ず、逆にその殆どが破壊されてしまった。
上空に侵入した彗星帝国軍の艦は、防衛軍本部へ通信を入れた。
「長官、敵艦より通信が入っております」
「繋げ・・・」
「ハッ」
本部の大モニターには使者として地球へ赴いたラーゼラーの姿が映り、降伏勧告を地球へ迫った。
「我が全能なる大帝星、ガトランティス。大帝ズォーダーの命により汝ら地球人類に告ぐ!!生存か、絶滅か選択をする時が来た!!地球時間一時間以内に決定せよ!!汝らが生き残る道は大帝ズォーダーの御前に膝まずき、無条件降伏せよ。返答なき場合、我々は実力を行使する!!よいな・・・」
彗星帝国の使者（ラーゼラー）の通信を聞き、
「畜生!!バカにしやがって!!」
「こうなれば徹底抗戦だ!!」

「だが、勝ち目はないぞ」
「地球市民を道ずれにする気か!?」
本部でも様々な意見が飛び交う中、藤堂は大統領官邸へと赴き、返答をどうすれば良いかと指示を乞う。
「大統領閣下、事態は急を要します。ご決断を!!」
「待て、まだ話し合いの余地が有るのではないか?一度でもいい。打診してみてくれ。この事態を乗り切れるのであれば、私は名誉も誇りも捨てるつもりだ」
「・・・・はい」
大統領は彗星帝国相手に会見を申し込んだ。
しかし・・・・
「ハハハハハ・・・・和平交渉だと?たわけたことを」
ズォーダーは地球からの返信を嘲笑った。
「これ以上、猶予を与えてはつけ上がるばかり・・・・いっそ一思いに・・・・」
サーベラーはやはり地球を滅ぼす事をズォーダーに上申する。
だが、ズォーダーはやはり地球を諦めきれないのか、
「まぁ待て、サーベラー楽しみはゆっくりと味わうものだ。我々の力を今一つ見せつけてやるか・・・・手始めは・・あの星がよかろう」
ズォーダーは地球側の意思を完全に挫くため、見せしめのために月を目標に要塞都市に装備されている大口径の砲門で月を攻撃し始めた。
要塞砲の攻撃を受けた月は崩壊までは至らなかったが、月基地は完全に破壊され、表面に大きな亀裂を生じさせ、大爆発が起こり、赤く燃え上がった。
「月を!?」
「はい。敵要塞砲の集中砲火を受け、全体的に白熱化しております」
彗星帝国の月攻撃はすぐに大統領の下へと届けられた。
(見せしめか。次は地球を狙うと言う事か・・・・)
敵の行動を藤堂はいち早く読んだ。
そしてその意味も・・・・

「命運は尽きた・・・もはや・・・降伏するしかない・・・」
大統領は項垂れ、彗星帝国に対して降伏する事を決断した。
地球の夜空には太陽の如く、赤く燃える月が浮かび上がった。
ズォーダーの思惑通り、月への攻撃は地球連邦政府に降伏を選択させる決め手となった。
「ハハハハハ・・・地球人よ、分かったか？コレが大宇宙に君臨する私の力だ!!尚、私に刃向うも良い。だが、その美しい星をみすみす破滅させることもない。降伏まで二十四時間の猶予を与える。それが、私が貴様らに与える最後の情けだ!!」
ズォーダーは最早彗星帝国の勝利に揺るがない事を信じ、高笑いをした。
大統領は官邸に記者達を集め、彗星帝国に対し、無条件降伏をする旨を伝えた。
それはメディアを通じ、全世界に伝えられた。
当然、その通信は　まほろば　も受信していた。
「降伏だと!?冗談じゃない！」
「俺たちはまだ戦えるぞ！」
「降伏したって、利用価値がなくなれば皆殺しに決まっている！破滅を僅かに先延ばしにするだけじゃないか!!」
「あんな奴らの奴隷になるなんて真っ平御免だ!!」
連邦政府の無条件降伏決定に、軍部、特に前線の宇宙戦士たちは強く反発した。
それはこの　まほろば　の乗員も例外ではなかった。
「・・・」
「艦長・・・」
「通信長・艦内マイクを」
「は、はい」
良馬の冷静な態度と言葉にギンガは少し、戸惑いつつ艦内マイクを入れた。
良馬は艦内放送を通じて負傷者以外の全乗組員を食堂へと集めた。
作業中の乗員も一時作業を止めて集まる様に指示が来た。

集まった乗員たちは地球が彗星帝国に対し、降伏したことによる不安。
地球防衛軍主力艦隊の壊滅による戦力不足による不安。
地球に残してきた家族の心配等、決して明るい表情の者は居ない。
皆がそれぞれの不安を抱いている中、艦長の良馬が艦橋要員達と共に食堂にやって来た。
乗員は良馬がどのような用件で自分達を集合させたのか気になった。
もし此処で武装解除し、降伏すると言うのであれば、暴動が起きそうな、雰囲気でもある。
「皆・・・無条件降伏の事は既に聞き及んでいると思う・・・地球防衛軍主力艦隊は壊滅し、敵の都市要塞は今、地球へと迫っている。だが、我々はまだ生きている!!まだ戦える。・・・土方提督は最後に『死ぬな!!生きて戦え!!』と仰っていた・・・。此処で降伏してしまっては、土方提督やアンドロメダを始めとする多くの戦友たちの死が無駄になってしまう!!」
「・・・」
皆は沈黙し、良馬の言葉を聞いている。
「・・・俺は降伏を拒否する!!最後まで戦う!!」
良馬は連邦政府の意思に反し、徹底抗戦の意思を乗員全員に伝える。
「尚、之は連邦政府や司令部の意思に反する事だ・・・そして之は強制ではない。下艦したい者は下艦を許可する。戦力は極めて少ないが、ヤマトはガミラスとの戦争でもただ一隻でガミラスの妨害の中、イスカンダルまで辿り着いた・・・希望は決して無い訳ではない!!例えまほろば　一隻でも俺は行く!!」
良馬は地球が降伏を決定した時、自問していた。
また逃げるのか?と・・・
ヤマトの副長の話が来た時も、アンドロメダと共にヤマトを追撃した時も、行こうと思えば行けた・・・
しかし、良馬はどちらとも行けなかった。

いや、理由をつけて行かなかったのかもしれない。
だが、自分が行けば　すくね　を・・・三木を助ける事が出来たのかもしれないと、自分を攻めていた。
だからこそ、地球の危機にこのまま降伏していいのか?と、思い、今度こそ逃げないと決め、降伏を拒否する意思を固め、決断したのだ。
良馬が降伏の拒否を表明した時、
「一隻では・ないぞ・・・」
突如、まほろば　のスピーカーから聞き慣れた声がした。
「この声はっ!?」
「西郷のおやっさん!?」
食堂のモニターには先ほど意識を取り戻したばかりの西郷の姿が映し出された。
その姿は頭に血が滲んでいる包帯をしている痛々しい姿であるが、命に別状はない様だ。
「横にある薩摩を連れて行くがいい・・・薩摩の乗員も君たちと同じだ。降伏を拒否し、最後まで戦う覚悟でいる・・・残念ながら・・・私は指揮を執れる体ではない。君たちを見送る事しか出来んが・・・許してくれ」
「いえ、御無事なだけでないよりです。地球の事はお任せ下さい!!」
「月村艦長。無条件降伏をした地球を・・・長官を責めてはいかんぞ。勝ち目のない戦いを挑んで無益な血を流すよりも、屈辱に耐えながら明日の光を待つ方を選んだんだ。実にあの人らしい・・・」
「はい」
「参謀長命令だ・・・行け・・・地球を救うのだ」
「了解しました」
良馬を始めとし、まほろば　乗員一同は西郷に敬礼した。
まほろば　と　薩摩　の徹底抗戦の意思は固められたが、まだ作業が完全に終了したわけではなく、作業は急ピッチで行われた。
その間、下艦したい者は艦を降りるよう通達されたが、降りるものは居なかった。
しかし、ガミラスとの決戦・冥王星海戦の出撃前同様、重傷者だけ

は下艦を余儀なくされた。
作業を行っている　まほろば　の下に通信機能が回復したガニメデ基地から通信が入り、ヤマトの無事とガニメデ基地を出撃したと言う報告が齎され、皆は歓喜した。
まだ希望はあると・・・・
だが、そのすぐ後で、地球を目指すヤマトが、ガニメデ沖合にて、デスラー総統率いるガミラス残存艦隊と戦闘状態となった事が伝えられた。
ヤマトは木星圏をワープで離脱後、一気に彗星帝国に対して攻撃を仕掛けようとしたが、今まさにワープをしようかとした矢先にヤマトの周囲にガミラスの急降下爆撃機、スヌーカが多数ワープアウトしてきた。
これはガミラスの瞬間物質転送機から転移されてきたもので、艦載機の転移終了直後、ヤマトはガミラス機の猛攻を受けた。
ヤマトにとっては、力攻め一本やりの白色彗星艦隊よりも厄介な相手で案の定、ヤマトは苦戦を強いられた。
「くそっ！何もできないのか!?」
ヤマトとガミラス残存艦隊との戦闘が始まったと言う報告を聞き、良馬は苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。
まほろば　の修理、補給がまだ終わっていなので、出撃したくても出撃出来ない。
「通信長、ヤマトに通信は送れるか?」
「やってみます!!」
ギンガはヤマトと交信を試みる。
応援に行けないもどかしさに、皆歯ぎしりしながら戦況を案じていた。
ヤマトとしても、木星圏でガミラス相手にモタモタしていられなかった。
そこで、攻撃目標をデスラーが座乗する戦艦に絞り、波動砲にて、一気に決着をつけようと試みるも、デスラーも対ヤマト戦略を練っており、機雷を瞬間物質転送機にてヤマトの波動砲の砲門の至近距離に転

移させ、波動砲を封じた。
波動砲を封じられたヤマトは、次の策として小ワープにて、デスラー艦へと接舷白兵戦へと持ち込んだ・・・。
ギンガはヤマトへ通信を送り続けていたが、ガミラスが妨害電波を流している様で、ヤマトへの通信が届かなかったが、暫くすると、ヤマトと通信が繋がり、ガミラスとの戦闘経過の報告とヤマトの現状が伝えられた。
「デスラー総統は旗艦を移し、ガミラス艦隊と共に太陽系から退去。ヤマトは損傷したが、自力修復可能。戦闘及び航行に支障なし」
との通信が入ったため、皆一様にホッとしたが、続報に　まほろばの艦橋要員は凍りついた。
その内容とは・・・
「当艦航海長、島大介は白兵戦の途中、爆発に巻き込まれＭＩＡ。当面は当艦艦長代理・古代　進と技師長・真田　志郎が職務を、分析ロボットアナライザーが操舵を代行する。尚、ガミラス艦隊との戦闘により当艦の波動砲は使用不能」
というものだった――。
デスラー艦との接舷の際、ヤマトは波動砲の近くの機雷ごと、小ワープし、その機雷を誘爆剤として強引にデスラー艦と接舷した。
その時の衝撃でストライカーボルトが吹き飛んだ。
修理はとても応急修理で行えるものではなく、またガニメデ基地に戻り補修のやり直しでは時間がかかるとの判断で波動砲の修理は行わないものとされた。
また、ヤマト航海長の島大介に関しては白兵戦闘時、甲板にて、突入部隊の援護をしていたのだが、その際、敵の攻撃による爆発が起き、衝撃波を受け、艦周辺の重力派が届く範囲を抜け、宇宙へと放り出されてしまったのだ。
島の行方が分からなくなったのは戦闘終了後であり、古代としても当然捜索したかったのだが、その古代本人も白兵戦闘中爆発に巻き込まれ、右肩を負傷し、意識を取り戻したのはかなり時間が経ってからだった。

地球と親友・・・。
天秤にかけられるものではないが、古代は苦渋の決断で、島の捜索を諦め、ヤマトが応急修理終了後、地球へと向かう事を決めた。
勿論応急修理中、島の捜索も行われたが、応急修理終了までの間に島を発見する事は出来なかった。

一方、カリストでも　まほろば　と　薩摩の出撃準備は着々と進められていた。
各員が準備を進める中、良馬は拡散波動砲の使い方を考えていた。
ヤマトの生存は嬉しい誤算であるが、肝心の波動砲は使用不能。
それに　まほろば　と　薩摩　が搭載している拡散波動砲は「外」を制圧・破壊するための物であり、敵艦隊や地上基地の無力化には絶大な威力を持つが、都市帝国のような対要塞戦闘では、内部への致命傷を与えるのは、単艦では困難だ。
それにあのガスバリア・・・。
二隻の拡散波動砲で要塞都市のガスバリアを貫通させてどれだけのダメージを与えられるだろうか？
恐らく完全に破壊する事は無理だろう。
外部の建造物を一部破壊するだけで留まる。
もし、都市の重要拠点が都市帝国の中央部地下に作られていれば、折角の波動砲での攻撃も意味がない。
ならば、波動エネルギー弾の拡散開始点を、例えば都市帝国の内部に合わせてはどうか？
波動砲自体の出力は、エネルギー増幅装置のおかげでヤマトより上回っているから、拡散前の貫通力も理論上は上回っている。
内部で拡散させれば、拡散した波動エネルギーは例えは悪いが寄生虫の如く、敵の内臓を食い尽くし、寄生した相手を死に至らしめる。
ただ、問題は射程だ。
単なる拡散波動砲より敵との距離を詰めなければならないし、発射態勢中は一切無防備になるのだ。
単艦では極めて難しい。

味方艦の支援なしでは危険だろう。
とはいえ、今浮かんだ事も、此方が敗れれば元の黙阿弥であることはわかっている。
良馬は気持ちを出撃準備に切り替えた――。
良馬が要塞都市の戦力から現状の補修作業へと切り替え、指揮を執っていると、厨房から通信が入った。
「忙しい所を悪いな、艦長」
モニターに映っているのは船務科長兼厨房長のディアーチェだ。
「いや、構わないがどうした？」
「基地の連中から補給物資をタップリと貰ってな、出撃と戦勝の前祝に今日の献立は赤飯に上質な黒豚肉を使ったトンカツだ」
「随分豪華だな」
「出撃前にグルテンのカツレツじゃ味気ないだろうし、落ち込んでいる時は元気が出るものを食べるに限るだろう？」
「メニューは厨房長に任せるよ。みんなが元気出るのを作ってくれ」
「了解、任せておけ!!」
ディアーチェは嬉しそうに言った。
元々面倒見の良い性格であるし、なにより、自分の作った料理を「うまい、うまい」と言って食べる事に嬉しさを感じる彼女だ。
本心で嬉しいのだろう。
他の皆の役立つことに関して・・・・
徹底抗戦を望み、士気が高い様に見えた　まほろば　であったが、実際は空元気の様なものだった。
土星圏での戦闘と違い、圧倒的に劣勢な戦力で強大な敵にこれから立ち向かわねばならないのだ。
無理にでも自分を明るく、勇ましく繕っていなければ、絶望と恐怖で押し潰されてしまう。
そんな乗員たちにディアーチェの作る食事はきっと皆に活力を与える原動力となるだろう。
ここで舞台は地球圏を離れ、地球とテレザート宙域の間のとある宙

域に移る。
ここ最近、管理局の次元航行艦の遭難が多発した。
それによりヒアデス星団近海は封鎖されたのだが、ヒアデス星団手前は未だに封鎖はされていない状態であり、航行する事は可能だった。
そんな中、クロノが指揮するクラウディアに救援信号が入り、クラウディアは信号の発信源である宙域へと急行した。
発信源の宙域には僚艦のエスティマが機関を停止したままの状態で停船していた。
撃沈された訳ではない様子なので、クラウディアの乗員一同はホッとした。
外から様子を見る限り、特に外装に損傷はないが、内部で・・・艦を動かしている人間に何かあったのではないかと思い、クロノは武装局員らと共に、内火艇にてエスティマに接舷した。
「これは一体・・・」
「何が起きたんでしょう・・・？」
エスティマに乗艦したクロノたちはエスティマの内部の異様な雰囲気に戸惑う。
クロノたちを出迎えたのはどういうわけかエスティマの艦長でも副長でも乗艦している執務官でもない、船務長を務める士官だった。
取りあえず現状を確認するため、クロノはその士官にブリッジへ案内を頼む。
案内されたエスティマのブリッジでは、数人の局員が長靴、使い捨て前掛け、手袋とマスクを着けて、清掃作業を行っており、ブリッジにも艦長や副長などの艦の上級士官らの姿は見えなかった。
そして、ブリッジの床には大量の殺菌薬剤と洗剤が塗られ、同時に消臭剤も撒かれている。
エスティマのブリッジは薬剤の臭気の中に混じる、糞尿などの汚物の臭いも混じっており、正直に言って臭い。
連れてきた武装局員はマスクを着けていない為、全員この異臭に顔をしかめており、おそらく自分（クロノ）も無意識で顔をしかめてい

るだろう。
中には手で鼻をつまむ者、ハンカチで鼻と口を抑えている者も居る。
ひとまずクロノは事情を聴くため、悪臭が漂うブリッジから食堂へと移動した。
まず船務長に此の艦に一体何があったのかを訊ねると、彼は自分の船室にて事務作業をしていると突如艦内に衝撃が走り、ブリッジに連絡を入れても誰も出ないので、直接向かってみると、艦長以下のブリッジクルーと執務官、武装隊員たちがことごとく卒倒しているか腰を抜かしており、大半が失禁・脱糞していたというのだ。
機関もいつの間にか停止しており、艦を運用する局員も艦を動かすことができるような状態ではなかったため、オフシフトの通信科の局員を呼び出し、救援信号を出してもらったと言う。
船務長以外のオフシフト中だった局員たちも船室にいたところ、突然船務長から呼び出された為、ブリッジに行ったところ、艦長以下のブリッジクルーが全員床に倒れていたと証言した。
その後、オフシフト中だった局員全員で救難信号を発信し、倒れているクルーの介抱とブリッジの清掃作業をしながら救援を待っていたと言う。
「艦長たちに面会する事はできますか？」
クロノが船務長に艦長との面会を希望する。
「面会自体は可能ですが、精神的外傷を負っていますので、文字通りの面会だけで、恐らく事情は聴けないと思いますが・・・」
船務長は自分が見た艦長らの様子から当分彼らに事情を聴くのは無理だと説明したが、クロノはそれでも念のため、と面会を希望した。
そして、クロノは医務室にて艦長らと面会したが船務長の言うとおり、彼らはベッドに横になりながら魘される者、発狂寸前の者、意識を失い深い眠りにつく者と事情を訊ねても答えてくれそうな者は居なかった。
エスティマはクラウディアから艦を運航できるスタッフが派遣され、クラウディアと共に帰還する事とした。

最近多発している次元航行艦の遭難事件の中、この宙域にエスティマ一隻を残す訳にもいかなかった。
先日遭難したノアの最後の通信では、ノアは謎の敵艦隊の襲撃にあったことが判明しており、更に此処はあのテレザートからさほど離れていない宙域・・・・。
もしも先日のような艦隊と鉢合わせすれば二隻とも危ない為、クロノは帰還という決断を即決した。
エスティマと共に帰還途中のクラウディア、その艦長席にてクロノは、
(任務を放棄せざるを得ない程の精神的外傷とは、一体何があったのだろうか?しかも船務長が船室からブリッジに辿り着く僅かな時間で・・・・)
と、エスティマの艦長たちに一体何があったのだろうかと考えを巡らせていた。
やがてエスティマとクラウディアは近くの管理世界へと降り、そこでエスティマに何があったのか徹底解析が行われた。
その結果、以下の様な映像記録がエスティマのブラックボックスに残されていた。

当初、エスティマはヒアデス星団手前で此処最近多発している次元航行艦遭難事件の被害にあった僚艦の捜索を行っていた。
その捜索の最中、エスティマの横を追い抜いて行く宇宙船らしき飛行物体を発見した。
エスティマの横を通過して行ったその宇宙船は、管理局の次元航行艦や管理世界を航行している次元航行船とも異なる船型をしていた。
どちらかと言えば、脱出ポッドを大きくした様な形、または宇宙ステーションを個人が使用するぐらいに小さくした様な形の非武装船だった。
そして解析したところ、その宇宙船からは高レベルの魔力エネルギー反応が認められた。
恐らくその宇宙船の乗員の魔力レベルだと思われ、エスティマは直

ちにその宇宙船に対し停船命令を出した。
すると、その宇宙船はすんなりと停船命令を聞き、停船した。
艦長らは早速この宇宙船の拿捕を決定した。
その映像部分を見たクロノは顔をしかめた。
(ただ高レベルの魔力が感知されただけで、その船を臨検するとは・・・これでは、海賊やテロリストと同レベルではないか。いつから管理局はこまで偉くなったんだ?こうした傲慢な態度や強引なやり方が問題の引き金になるとは思わないのか?)
そう思いつつ呆れた。
これが地上でスピード違反をした車両という事ならばまったく問題はないが、現場は星の海・・・法定速度など存在しない空間である。
しかもエスティマが停船していた宙域は管理局が指定する管理区域ではない。
本来ならば、この船はエスティマの出した停船命令は無視しても一向に構わない筈だ。
しかし、あの宇宙船の乗員は律儀にエスティマの停船命令に従った。
やがてエスティマがその宇宙船に横づけされ、強制梭舷して武装隊員を送り込もうとしたところ、突然ブリッジの一角に金色の光球が出現し、光球の中から、一人の青いドレス姿で金髪碧眼の若い女性が現れた。
恐らく転移系の魔法を使い自分の宇宙船からエスティマのブリッジに現れたのだろうと、推察された。
「私はテレサ。何のご用でしょうか?ご用向きを伺います」
いきなり自分たちの艦に転移してきた女性に対し、呆気にとられるクルーを尻目に、女性ははっきりと名を名乗り要件を訊ねてきた。
(あっ、あの女性はっ!?)
クロノはテレサと名乗る女性に見覚えがあった。
(似ている・・・あのテレザートで見たあの女性そっくりだ!!)
テレザートが白色彗星と衝突して消滅する寸前、テレザート星の表面に浮き出た女性にそっくりの容姿をテレサはしていた。

（あの女性とテレサは何か関係があるのか？）
クロノがテレザートに浮かび上がったあの女性とテレサと名乗る女性は何か関係があるのかと思っている中、映像は進んで行く。
デバイスを向けようとした執務官や局員を艦長は余裕の笑みを浮かべて制しこの空間を航行している理由を訊ねると、
テレサと名乗った女性は、
「私の・・終焉の場に赴く途中です・・・ご用件はそれだけでしょうか？」
と、目的を告げた後、彼女は一言も話さなかった。
その間、テレサの全身からは詳細不明のエネルギーが発されており、その強度を測定すると、何とその強度は測定機器を測定不能にするぐらい凄まじいモノだった。
管理局員ならば、未知の強大な力を持つ人間を放置することはできない。
何としても本局へ連れて行き、しかるべき処置・・・つまり、難癖をつけて強引に管理局へ組み込んでしまおうとした。
この時、エスティマの艦長はかつて、リンディ・ハラオウンが第９７管理外世界にて発見し、民間協力者から嘱託局員、そして今では管理局では有名なエース・オブ・エースと言われる　高町なのは　以上の人材を確保できた。
これで自分の出世は間違いないと考えていただろう。
艦長はテレサに対して本局への任意同行を求めるがテレサはこれを拒否した。
すると、艦長はテレサに対し公務執行妨害だと通告し強引に身柄を拘束して本局へ連行しようと彼女をバインドで拘束した。
しかし、その直後にそれは起きた・・・・。
テレサの髪は逆立ち、彼女から発されるエネルギーが急激に拡大した。
そのエネルギー量は測定器を完全に破壊するほど凄まじいものであり、そのエネルギーの影響を受けた艦長、執務官と武装隊員は吹き飛ばされて壁に叩き付けられ、他のブリッジクルーも座席から吹き飛

ばされて床に転がると身動きがとれなくなった。
それはまるで金縛りか体の上から重石を乗せられているかのようにも見えた。
そしてテレサを拘束していたバインドは脆くも崩れ去っていった。
なお、エスティマのエンジンが停止したのも彼女が発したこのエネルギーの影響だった。
「手荒な真似をしてしまった事に関しては謝罪します。ですが、私は自分の終焉を他人に決められるわけにはまいりませんので・・・・」
昏倒している局員らに謝罪の言葉を発し、一礼しながら再び光球に包まれて彼女は再び姿を消した。
恐らくエスティマに来た時と同じように再び転移して、自分の宇宙船へと戻ったのだろう。
そして、エスティマの横にあった宇宙船は再び物凄いスピードでその宙域から離れて行った。
その後、すぐにブリッジに船務長が現れ、彼の証言通りの映像が流れた。
『・・・・』
クロノを含めたクラウディアの幹部局員はこの映像を見た後、暫しの間一言も言葉を発せなかった。
まさか、エスティマのブリッジクルーの昏睡の原因が、自分たちが引き起こした自業自得の結果だとは思いもよらなかったからだである。
もし、この場に本局の次元世界拡張・拡大推進派や魔導師至上主義の高官が居れば、このテレサという女性に公務執行妨害または公務非協力罪の罪状を着せて、広域指名手配をかけていただろう。
「自分の終焉って、あの人は自ら自分の命を絶つつもりなんでしょうか？」
長い沈黙の中、ようやく幹部の一人がクロノに訊ねる。
「あるいは自分の死期を悟って自らの故郷・・または思い出の地へと向かうところなのかも知れないな・・・・」
幹部の質問にクロノが応じ、さらに言葉を続ける。

「一つだけわかったのは、彼女の眼だ。あれは死を恐れず、覚悟をすっかり決めた者の眼だ。ああいう眼をした者を引き留めるのは、正直言って無理だ。ましてや測定器を破壊するだけの力を持つ者など、刺し違える覚悟を持っても不可能だ」

仮にテレサを指名手配犯にしたところで、彼女の力に及ばない自分たちがいくら頑張っても無駄だと思った。

管理局が誇るエース・オブ・エース、高町なのは、金色の死神、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン、夜天の主、八神はやて、その配下であるヴォルケンリッターの全員を束にしてぶつけてもあのテレサと言う女性には勝てないのではないかと思う。

そしてクロノは過去、テレサと同じ眼をした女性を思い出した。

あれは忘れもしない、十年以上も前の事・・・

第９７管理外世界で起きた、フェイト　や　なのは、ユーノと出逢った切っ掛けとなる大事件の主犯・フェイトの生みの親であるプレシア・テスタロッサ・・・

通信画面越しで見た彼女の眼も不治の病に体が侵されていたにも関わらず、テレサ同様、すでに覚悟が決まった眼をしていた。

プレシアとテレサの目的は全く違えど、何人たりとも干渉させない強烈な意思があるところは共通している。

「結局のところ、あの人と私たち管理局が解り合う余地はなかったんでしょうか？」

恐る恐る訊ねる幹部にクロノは、

「生まれてからずっと管理外世界で過ごし、管理世界も管理局の存在も知らなかった人間が、魔力やそれに準じる力があるから、いきなり管理局の元に来いと言われて、『はい、分かりました』というのは明らかに無理がある。普通ならば怪しみ抵抗するものだ。高町なのは、八神はやて　のケースは例外中の例外だ。あの様なケースがそう簡単にあるわけがない」

と、母（リンディ・ハラオウン）の発見はまさしく幸運中の幸運だと言い切るクロノだった。

そして心の中では、

（テレサは・・・彼女はどこへ向かったのだろうか？せめて、彼女が安らかに眠れるよう祈るしか出来ないか・・・）

と、テレサの冥福？を思い、祈ることしか出来なかった。

彼がテレサの最後を知るのはもう少し先になってからの事だった。

三十二話　絶望からの出撃

「大帝、もはや猶予の時間は過ぎました」
ゲーニッツがズォーダーに報告をする。
ズォーダーが提示した降伏勧告を受諾するか拒否するかの猶予時間二十四時間を過ぎたのだ。
「野蛮な愚か者ども故、決断もつきかねるのでしょう」
サーベラーはやはり地球を嘲笑うかのように言う。
「大帝ご裁断を・・・」
ゲーニッツがズォーダーに今後の決断を迫る。
ズォーダーが玉座から立ち上がり、地球への攻撃を開始する号令をかけようとしたその時、
「申し上げます!!」
「何事だ?」
「只今、地球連邦政府より入電しました」
幕僚の一人がズォーダー宛の緊急伝が入った事を伝える。
「読め」
「ハッ、『我々は貴下の勧告を受諾し、此処に貴下の帝国に対し、無条件降伏するものである。地球連邦政府大統領』・・・以上であります」
「フフフフフ・・・ハハハハハハハ・・・」
幕僚が読み上げた電文を聞き、ズォーダーはご満悦に高笑いをした。
ズォーダーのその様子にサーベラー、ゲーニッツ、ラーゼラーを含む官僚全員が少し引いていた。

ディアーチェ特製の赤飯とトンカツが振舞われ、皆は満足のいく食事を済ませた翌日、まほろば　と　薩摩　はカリスト基地にて、弾薬の補充と最終調整を行っていた。
防衛軍本部の動きは源三郎が逐次、秘匿回線にて　まほろば　へ情報を送っていた。

その情報では、地球連邦政府は、彗星帝国に対し、無条件降伏を受諾し、明日の日本時間午前十時にて、地球側の降伏使節団と白色彗星側が接触するとの最新情報が入っていた。
先行するヤマトは降伏式で地球が彗星帝国の降伏文章に調印する前に、着水、潜航し、コスモタイガーによる空爆と潜航したヤマトの魚雷攻撃による空海同時の直接攻撃をかけるつもりらしい。
攻撃方法を伝えた後、ヤマトは彗星帝国攻撃まで無線を封じる旨を伝え、それ以降ヤマトからの通信は無い。
また、降伏に反対する日本や中国、韓国、台湾、フィリピン等のアジア諸国、ロシアの極東部方面、マリアナ諸島方面に展開している各国の空軍部隊（コスモタイガー隊）の出撃可能機や、海軍の攻撃潜水艦も呼応するとのことだ。
出来れば海上にて決着がつけば良いのだが、そんな簡単な相手ではないだろう。
せめて、あのガスバリア発生装置を破壊できれば御の字だ。
最終作業は順調に進み、日本時間の夕方頃には終わった。
作業が終わり、艦内はひと時の静けさを取り戻していた。
カリストへの上陸は出来ないが、当直以外の乗組員はつかの間の休息に入っている。
どのみち、この先は地獄すら生温いことになるのだから、休める時に休まなければならない。
そして、いよいよ出撃時間となり、良馬は艦内一斉放送で　まほろば　の乗組員に呼びかけた。
「この先に待つ戦闘は、恐らく誰もが未経験の激しいものになる。それはあのガミラスとの戦闘以上のモノと思われる。全員が無事に地球へ戻る事は極めて困難になると思う・・・しかし、俺は絶望などしていない。共に戦いあった　まほろば　の戦友、僚艦のヤマト、薩摩の・・・そして地球にいる志を同じくする多くの戦友ならば、彗星帝国を倒すことも決して不可能ではないと信じる。皆、各々が胸に描いている未来を信じて戦おう！・・・以上だ」
艦橋で、それぞれの持ち場で、応！と掛け声が響き、敬礼が戻って

きた。
良馬も艦橋要員に返礼する。
「戦艦、まほろば　出撃!!」
良馬の命令に応じ、まほろば　の船体を固定していたガントリーロックが外され、まほろば　の巨体が上昇していく。
まほろば　に続いて、戦艦、薩摩もその身をカリスト基地から舞い上がらせる。
出撃した二艦にカリスト基地は発光信号で、他の衛星基地からは激励の電文が各艦に送られている。
地球防衛艦隊の最後の剣が地球に向けて・・・・
都市帝国に向けて進み始めた――。
カリスト基地を出撃した　まほろば　と　薩摩　の二艦は、予定通りの時間で地球に向かっている。
木星圏を抜けた後、ワープにて地球圏まで一気に距離と時間を稼ぐ予定だ。
「皆の者!!戦闘配食だ!!」
ディアーチェたち炊事班員がランチボックスに入った朝食を持ってきた。
警戒態勢なので艦内食堂は閉店。炊事班と医療班の手で臨時救護所に模様替えだ。
事前に和・洋・朝粥を指定できるが、やはり和食の注文が多かった。
飲み物はミネラルウォーターだ。
茶やコーヒーは利尿作用があるので、戦闘糧食には向かない。
各々、コンソールのテーブルを引き出して朝食を口にする。
口には出さないが、これが最後の朝食になるかもしれないと心しているのだ。
食事を摂っていると、地球にいる源三郎から連絡が入った。
使節団の団長は地球連邦首相、副団長は藤堂司令長官との事だ。
(藤堂長官が加わっているのは僥倖だ。反乱に等しい行為だが、少なくともあの人はわかってくれるだろう・・・)
良馬は源三郎からの調印式に参加する人員を見てそう思った。

降伏使節団と白色彗星帝国側の接触まであと僅かである。
日本や中国、韓国、台湾、フィリピン等のアジア諸国、ロシアの極東部方面、マリアナ諸島方面の地下格納庫には戦闘攻撃機が並び、空対地ミサイルの取り付けと最終整備を受けていた。
また、太平洋・日本近海には、日本・アメリカ・ロシア・中国・韓国海軍の攻撃潜水艦が、集結し、最後の補給、調整を行っていた。
これらの艦艇、攻撃機はヤマトと共に彗星帝国攻撃に参加するための降伏反対派の勇士たちであった。
宇宙艦隊の主力と月基地が壊滅しても、地球上には空軍・海軍の部隊がまだ戦力を有していたのだ。
「地球には、まだヤマトや宇宙艦隊以外にもまだ戦う力があることを、侵略者たちに見せてやる!!」
皆、思いは同じだった――。
その彗星帝国である男がゲーニッツに話しかけた。
「ゲーニッツ総司令」
「ん?なんだ?ザイゼン」
ゲーニッツに話しかけた男はザイゼンと言う男で、役職は彗星帝国艦隊副総司令・ゲーニッツに次ぐ、彗星帝国艦隊のNo.2にあたる人物だった。
ザイゼンは官僚上りのゲーニッツと違いゴーランドやバルゼーの様に艦船乗りからの叩き上げで副総司令という役職に着いた男で、ゲーニッツの副官・参謀の役割も担っていた。
そのザイゼンは、艦船乗りだった軍人だからこそ、抱いた不安をゲーニッツに相談した。
「地球攻略について一つ気がかりな事が・・・・」
「ん?何だ?」
ゲーニッツはザイゼンの言葉に首を傾げる。
「土星圏の戦闘において我々は全ての地球艦隊を撃滅したわけではありません。それに例のヤマトも行方不明と聞きます」
「ふむ、それで?」
「彼らが残存艦を纏め、我々に逆劇を仕掛けてくる事も十分考えられ

ると言う事です」
「ふん、敗残兵どもに何ができるというのです!?」
ゲーニッツとカンメルの会話の間にサーベラーが割り込んできた。
「太陽系内にはちゃんとあのゴミどもを駆逐するための警備艦隊も配置しているのですよね?ゲーニッツ?」
「も、勿論だ」
「ザイゼン副指令、貴方の抱く不安は最もかも知れませんが度が過ぎればそれは臆病と言えますよ」
「ですが、我々は既にナスカ艦隊、ゴーランド艦隊、ゲルン機動部隊、バルゼー艦隊を失っております。皆、地球を舐めてかかった慢心では無いですかな?」
「それはどれもこれもあの者たちの無能ゆえの失態でしょう?大帝陛下の神聖なる軍にあの様な無能者が居たこと事態、この帝国の汚点だったのよ。今回の事でその汚染物質が消えた事で帝国の繁栄は揺るぎないモノになったにすぎません」
地球艦隊の実力が予想以上に高い事は彗星帝国の花形とも言えるバルゼー艦隊やゲルン機動部隊が斃された事で証明されている。
それにヤマト一隻に　ナスカ、デストール、ゴーランドの艦隊とザバイバルの陸上部隊が撃破されたのだ。
ヤマトを完全に撃沈していないので、それぐらいの被害想定は容易に算出する事が出来た。
しかし、サーベラーはヤマトと戦った提督たち、そして、地球軍と戦ったゲルン、バルゼーが無能だったから地球艦隊に負けただけであって、帝国の力はその者たちが居らずとも盤石だと言う。
「ヤマトや地球艦隊の敗残兵どもについては大帝には私からお伝えしておきます」
「りょ、了解しました」
サーベラーが足早に去った後、
「・・・総司令、この一件、総参謀長殿に一任するのは不安過ぎませんか?」
ザイゼンはゲーニッツに問う。

「う、うむ・・・しかし・・・」
デスラーがいた時は、彼への反発で手を組んでいたサーベラーとゲーニッツだが、デスラーが出奔した後は、両者は以前の様に溝が深くなっていた。
デスラーが出奔する際、サーベラーとゲーニッツの二人はズォーダーから虚偽の報告を問責されており、処分こそ保留になっているが、このままでは征服事業が一段落するごとに大帝が行う指導部人事に引っ掛かり、降格あるいは粛清の対象になりかねない。
それに今回の地球攻略においては、過去最悪とも言える損失を出している。
あれだけ、自信満々で太陽系へと侵攻したバルゼーの敗死を大帝は、
「敵に地の利はあったが、その敵に勝る戦力と新兵器搭載戦艦（メダルーザ）を有しながらも、目の前の優勢に眼が眩み、むざむざと敵の罠に自ら嵌まった。実に愚かで無様である」
と不快を示していた。
これ以上、この地球攻略作戦で艦隊と人材を失えば、自分は間違いなく失脚する。
「ザイゼン」
「はっ!!」
「地球艦隊の残党については万全をつくせ!!戦力に不安があるようならば、アンドロメダ星雲にある他の植民地からも援軍の要請をしても構わん!!何としても地球艦隊は一隻残らず撃滅するのだ!!よいな?」
「承知しました」
地球との降伏調印までゲーニッツは気が収まらないと思ったが、彼の不安と不運はまだまだこれからだった。

彗星帝国の要塞都市は地球との降伏文章調印の為、地球の海へと降り立った。
その際、大きな津波が起こり、沿岸の町を大津波が飲み込んだ。
幸い住民は地下都市へと避難済みだったので、無人となった港湾施

設や停泊していた無人の船舶の被害だけで済んだ。
「とにかく生き残る事だ・・・そこから次の出発も始まろう・・・くれぐれも地球人としての誇りを捨てず、大役を果たしてもらいたい」
海に着水する彗星帝国の要塞都市を見ながら大統領は調印式に参加する藤堂と地球連邦首相に言った。
港には水上艦艇が用意され、調印式に参加する地球連邦政府、軍部高官はその艦船に乗り込んだ。
「出航準備・整いました」
艦長が藤堂らに準備が出来た事を告げる。
「うむ、出発しよう」
やがて、機関音を奏で艦が動き出した。
「大使が行くぞ・・・」
「降伏か・・・」
「もう、これで終わりだ・・・」
「なんて事だ・・・」
その光景をモニターで見ている地球市民はどの人も絶望に染まった顔色をしていた。
「そうか、降伏使節が来たか?」
「ハッ、代表は地球連邦政府首相他二名と聞いております」
ゲーニッツは警備艦隊の件についてはザイゼンに任せ、自らは使節団が接近している事をズォーダーに報告した。
「分かった。ゲーニッツ・客の接待はお前に任せる。敗軍の将だ。よろしくもてなしてやれ」
「心得ております」
たかが辺境の一惑星国家の調印式に国家元首たる自分が参加する程の事でもないと、ズォーダーは降伏調印式についてはゲーニッツに任せた。
その頃、地球へ密かに降下し、雲の中を航行するヤマトはコスモタイガーを発進させた。
そしてヤマト自体は魚雷の準備を行いつつ、使節団の艦に通信を送った。

「何!?ヤマトから入電?読め」
ヤマトからの通信に艦橋内の全員が驚いた。
その通信文は「これより彗星帝国に対し、奇襲攻撃を行う旨、至急戦闘海域より退避されたし」と言うものだった。
「いかん!!もう遅い!!」
首相は慌てて前を見る。
既に都市要塞とは目と鼻の先の距離である。
更に、
「都市帝国上空に友軍機!数、三十機以上!!高度三万五千・・・北方、南方からも機影多数接近!これは、ヤマト所属機、空自機(日本)、アメリカ空軍・海軍・海兵隊機に、ロシア空軍、中国、フィリピン、台湾、韓国、タイ、ベトナム空軍機もいます!!」
ＣＩＣにいたオペレーターが艦橋に報告する。
「海中ソナーにも反応多数!ヤマトの他に、海自(日本)、アメリカ、ロシア、中国、韓国、台湾、ベトナム、フィリピンの攻撃潜水艦が展開しています!!」
「長官、攻撃を中止させたまえ!!」
都市帝国周辺に次々と集結してくる戦闘機に戦闘艦艇・・・・。
彼らがこの後、何をするのかは目に見えている。
だからこそ、首相は防衛軍の長官である藤堂に攻撃中止命令を打電するように言う。
「無駄です」
しかし、藤堂は首相の頼みを断った。
「何!?」
「覚悟の行動でしょう。説得に応じるとは思えません」
「バカな!!我々が敢えて降伏の道を選んだのを忘れたのか!?」
「艦を反転せよ!!」
「長官!!」
「やらせてやってください。これが最後の・・・賭けなんです」
藤堂もやはり降伏には反対であり、ヤマトを含む、地球軍軍人の奮闘に期待した。

ヤマトは通信文を発進後、海中へと潜った。
その海域には事前の打ち合わせ通り、既に各国の潜水艦隊が集まっていた。
空では各国のコスモタイガー隊の艦載機が合流、雲の中で何時でも急降下爆撃の体制をとれるようにしていた。
一方、調印式を準備していたにも関わらず、肝心の地球側の降伏使節を乗せた艦が突如、反転した為、彗星帝国では困惑する事態が起きた。
「何!?降伏使節の艦が反転した!?」
「バカな!?この期に及んで何を!?」
「報告!!高度約三万に地球編隊を確認!!」
「お、おのれぇ～!!」
ゲーニッツはザイゼンの予想が現実のものになったと共に降伏を翻した地球側に忌々しさを感じた。
ヤマトが攻撃態勢をとる少し前、カリスト基地から出撃した　まほろば　と　薩摩　はワープにて、地球圏まで来ていた。
「艦内全システム異常なし」
「全兵装異常なし」
ワープアウト後、各部署から報告が入る。
ハード面は異常なし。医務室からも今のところ異常の報告はない。
ソフト面、特にメンタル面も問題ないようだ。
その　まほろば　にガニメデ基地より通信が入り、木星圏の近海にて、彗星帝国の艦隊が確認され、現在木星圏の各基地で修理補給中の防衛軍残存艦隊はこれの迎撃に当たると言う内容だった。
「第十一番惑星に居た艦隊か他の星系の艦隊を呼び寄せたな・・・」
通信内容を読んだ良馬は、木星圏に迫っている艦隊の推測をたてた。
挟み撃ちにされかねないが、此処は木星圏にいる友軍の残存艦隊に今は期待するしかなかった。
「都市帝国の様子は?」

「今の所、変化はありません！」
「よし・・・」
どうやら連中は完全に油断してくれているようだ。
やり方が汚いと言われようが、戦争に綺麗も汚いもない。
第一、宣戦布告もなく、地球側に奇襲をしてきたのは彗星帝国の方だ。
それに連中は地球人を奴隷か弾除けにして使い潰す気なのだ。
そんな奴らに払う礼儀なんかない。
良馬は内心で自嘲したが、負ければ全てが無に帰るのだ。
もう後に退けないことはわかりきっている。
表現の違いこそあれ、皆、考えることは似通っていた。
そんな思いと共に反攻の艦隊は地球に迫っていった。
蒼く澄んだ大空を三十数機のコスモタイガーが飛行している。
「こちらコスモタイガー隊、加藤。只今高度三万五千」
ヤマトのコスモタイガー隊隊長の加藤がヤマトに現状を報告した時、雲の切れ間から友軍のコスモタイガーが多数飛来した。
「おい、加藤。アメリカやロシア、韓国に中国、日本のコスモタイガーだぞ」
副隊長の山本が味方識別を確認する。
「恐らくは降伏に反対する奴らだろうな」
その時、航空機から通信がきた。
どうやら当たりであり、ヤマトの攻撃隊と同行したいとの事だった。
加藤は幸先がいいと思いながら同行を受け入れた。
「こちらコスモタイガー隊、加藤。これより急降下による都市帝国のてっぺんを攻撃す　る!!　行くぞ!!」
加藤は叫んで、操縦桿を倒して急降下に入った。
「コスモタイガー、都市帝国頂上部より攻撃を開始せよ!!」
ヤマトから攻撃命令が下り、コスモタイガーは急降下爆撃を開始した。
コスモタイガー隊は搭載していたミサイルや爆弾で都市帝国のビ

ル群を爆撃する。
ズォーダーを始めとして、彗星帝国幕僚達はモニターを介してその様子を見ていた。
「大帝、上空より地球側の攻撃が始まりました」
「うむ」
ズォーダーも地球側の奇襲攻撃に顔をしかめる。
「降伏を翻すとは何という恥知らずな地球人め!!」
サーベラーは怒りで顔を歪める。
その時、モニターの映像が乱れた。
「どうしたんだ?!」
ゲーニッツが機器の操作をしていたオペレーターに訊ねる。
「ハッ、都市帝国のコントロールセンターの一部が破壊された模様です!!」
「な、なにぃ!!」
「大帝!!都市上方で戦うのは不利です!!要塞都市を浮上させて、迎撃機を発進させては!?」
ラーゼラーが迎撃機の出撃を意見具申し、
「大帝その通りです。早くご判断を!!」
サーベラーもラーゼラーと同意見の様だ。
「うろたえるな、地球人があくまで戦うと言うのであれば、我が帝国の力を見せるまでだ」
奇襲攻撃を受けてもズォーダーは慌てることなく、毅然とした態度でいた。
その風格はまさに王者と言う名に相応しものであった。
その頃、海中では・・・
ヤマトと同じく各国の攻撃潜水艦が魚雷の発射準備を行っていた。
「コスモタイガー隊が急降下爆撃を開始します」
レーダーを見つめていた雪が古代に報告する。
「魚雷発射用意!!」
「一番発射用意完了!!」
「二番発射用意完了!!」

魚雷室から発射用意完了の知らせが届く。
「発射管ゲート開け!!目標、都市帝国・魚雷発射!!」
古代の命令に魚雷が発射された。
ヤマトと攻撃潜水艦から多数の魚雷が都市帝国の下部に向けて魚雷が放たれた。
魚雷を受け、都市帝国に地震の様な揺れが襲い掛かった。
「どうしたのですか?これは!?」
突然の揺れにサーベラーは何が起きたのか事態の説明を求めた。
「ハッ、都市の下部に魚雷が命中した模様です!!」
「海中の映像を出せ!!」
「ハッ」
モニターの映像が切り替わり、海中の映像が映し出された。
「何が映っているんだ・・・?」
ゲーニッツが唸りながらモニターの映像をのぞき込むと、
「むっ!?や、ヤマトだ!!」
其処には、多数の攻撃潜水艦と共に魚雷を撃つヤマトの姿が映し出された。
「小癪なヤマトめ!!」
サーベラーは苦虫を噛み潰したような顔でモニターに映るヤマトを睨んでいる。
そんな中、ズォーダーは、取り乱すサーベラーたち側近の醜態には関心を示さず、冷静にこの同時攻撃を分析していた。
(果たしてこれは偶然だろうか・・・?真上と真下から同時に攻撃を仕掛けてくるとは・・・)
(あのヤマトをはじめ、地球軍にもまだ、出来る者がいるということか・・・)
(やはり、あのガミラスを相手に屈しなかっただけのことはあるようだ。だが、我が帝国はガミラスほど甘くはないぞ・・・)
(宇宙唯一にして絶対の支配者たるこの私の慈悲を振り払い、なおも戦いを挑んできた以上、その罪はお前たち地球人全ての命で贖わせてやる)

「浮上用意!!」
ここに来てズォーダーも都市上方だけで戦うのは不利だと判断し、都市要塞を浮上させることにした。
ズォーダーの全く取り乱さないその姿を見て、うろたえていた側近たちも落ち着きを取り戻しつつあった。
地球側にとっての不幸はズォーダーが血筋をよりどころにするような単なる世襲君主ではないことだった。
都市要塞の浮上と共に回転履帯からガスバリアも噴射され、運悪くその空域を飛行していたコスモタイガーや攻撃を終え、退避行動を取ろうとしたコスモタイガーは噴射したガスバリアに接触しバラバラとなった。
同じく回転履帯の対空砲火も火を噴き始め、上空を飛行していたコスモタイガーは次々と撃ち落され始めた。
「全機、攻撃中止!!射程距離外へ退避せよ!!」
あまりに友軍機の被害に加藤は攻撃の中止命令を出し、コスモタイガー隊は一時、攻撃を中止し都市要塞から退避した。
都市帝国は海から浮上すると、瞬く間に地球の成層圏、重力圏を脱していく。
ヤマトは都市帝国を追って上昇し、宇宙へと向かう。
潜水艦群は、浮上してしまった都市帝国にはご自慢の攻撃能力は発揮できず、後はヤマトと航空隊に任せるしかなかった。
「ヤマト頑張れ!!」
「あんな要塞ふっとばしちまえ!!」
地球市民は、宇宙へ舞い上がって行くヤマトとコスモタイガーに声援を送っていた。
宇宙へ上がった都市帝国、それを追ってきたヤマトとコスモタイガー隊。
そこへ、援軍として追いついた　まほろば　と　薩摩。
「ヤマト!!コスモタイガー隊と共に既に都市帝国との戦闘状態に入っている模様!!」
「此方も攻撃に参加する!!コスモタイガー隊発進!!」

良馬が　まほろば　所属のコスモタイガー隊に発進命令を出し、まほろば　からはコスモタイガーが次々と発進していく。
そしてヤマトと共に戦闘に参加する事とコスモタイガー隊には、国籍、所属に関係なく、補修、補給が必要な機体は　まほろば　への着艦を許可する旨を伝えた。
都市帝国は、上部はガスバリアで守られ、その回転履帯に砲塔が上げられ、下部の小惑星部分にある艦載機射出口からは迎撃戦闘機のパラノイア戦闘機が射出され、コスモタイガー隊と激しいドックファイトを繰り広げている。
だが、パラノイア戦闘機の戦闘よりも都市帝国の対空砲火の激しさに、コスモタイガー隊は次々と撃ち落とされる。
「くそっ!!」
まほろば　のコスモタイガー隊隊長の坂井は、悪態をつきながらも、回転履帯へミサイルを撃ちこむ。
すると、命中した回転履帯に装備されていた砲台を破壊する事が出来た。
破壊された砲台の砲手には数名が負傷しながらも生きている者がいたが砲台の残骸と共に宇宙空間へ放り出される。
「う、うわぁぁぁぁぁぁー!!」
その中で、一人の砲手は必死に回転履帯にしがみついていたがやがて力尽き宇宙空間へと投げ出された。
坂井に習い、まほろば　のコスモタイガー隊は回転履帯に攻撃を集中し始め、少しでも敵の攻撃を黙らせようとした。
この敵の攻撃にズォーダーやサーベラーは、「小癪な敵」と言う認識しかしていなかったが、ゲーニッツとザイゼンは回転履帯が途中で止ってしまうのではなかと、ヒヤヒヤしていた。
テレザートの爆発の折、回転履帯の一部が崩れる被害があった。
応急修理でなんとなった中、今度はアンドロメダの体当たりを喰らったのだから、回転履帯への被害も当然あるだろう。
しかし、ゲーニッツとザイゼンの心配を余所にヤマト　まほろば　薩摩　の三艦は回転履帯の攻撃を免れるために、都市帝国の下部へと

潜る。
上部はあのガスバリアに包まれている。
あのガスバリアが有る以上、都市部にショックカノンもミサイルも通じない。
波動砲を使いたくても、波動砲のエネルギーを充填させる時間も余裕も恐らく相手は与えないだろう。
この状況で止れば射的場の的である。
良馬はやむを得ず波動砲による都市帝国攻略を諦めざるを得なかった。
「現在、敵艦載機編隊、我が防空戦闘機隊と接触し戦闘中です!!」
「地球艦隊、要塞都市の直下に向かいます!」
「小癪な虫けら共が!下部砲座を出して砲撃しなさい!!」
こめかみに血管を浮き立たせながら、サーベラーは対艦戦闘を命じた。
本来ならば、回転装甲帯砲やミサイルで迎え撃とうとしたが、地球艦隊は艦載機を発進させながら一気に艦首を下に向け、射界の外に出てしまった。
土星の時と同じ轍は踏まない。
だからこそ、武装が無いと思われる下部へと潜り込んだのだ。
しかし、都市要塞ガトランティスに隙は無かった。
下部の小惑星部分のクレーター部分からは無数の回転式の砲塔が出てきた。
回転式砲は長砲身なので、戦艦の装甲をも貫徹する威力を誇っていた。
「地球艦隊、下部に回り込んできます」
「砲撃開始!やっておしまいなさい!!」
「はっ!!」
長砲身を四本スクエアに配置した回転式砲からは、ビームの矢が地球艦隊に対し、雨の様に降り注いだ。
「都市帝国の下部から砲撃が始まりました!!」
まほろば　はもとより、ヤマト　も　薩摩　もその砲撃を当然受け

た。
「被害状況の把握を急げ！僚艦の状況もだ！」
「は、はい!!」
「左舷!!高射砲群被弾!!」
「ヤマトと本艦に敵砲撃が集中しています!!」
彗星帝国側としては今下部にいる三艦の中で一番彼らが恨みを抱いているのはヤマトだ。
故に回転式砲台の砲手はヤマトの方に攻撃を集中してきた。
しかし、まほろば　はヤマト改級の戦艦・彗星帝国の下っ端兵士にはどちらがヤマト　か　まほろば　なんて区別がつかない。
その為、自分たちに降りかかる火の粉を振り払う為、容赦なく攻撃をして来る。
「しつこい地球人め!!いい加減諦めろ!!」
都市要塞下部の回転式砲台の一つを預かる砲手は照準器に一隻の地球艦を捉えた。
煙を吐きながら執拗に抵抗する地球艦隊の中に一隻だけ他の艦とは全く異なる艦形をした艦がいる。
土星で見た量産型と思われる戦艦とヤマト、そのヤマトと似た戦艦であるが一回り大きい。
あの大きな艦が旗艦なのかもしれない。
「いい加減に沈め!!お前の・・お前たちのせいで俺たちは!!」
呪詛の声を上げながら照準装置を調整し、トリガーに指をかける。
ガトランティスには勝利しか許されない。
構造上、この砲座には負傷したから回収、交代・・・などと言う状況は存在しない。
被弾すれば、あっという間に砲手は宇宙空間へ投げ出されるかこの砲台と共にバラバラになるしかない。
文字通り生か死かのどちらかしかない。
生き抜くためには勝利を得るしかない。
つまり地球艦隊を殲滅しない限り、砲手はこの地獄の様な状況から抜け出せない。

更に敵前逃亡を防ぐため、出入用ハッチは内側から施錠されている。
砲手は恐怖とも戦いながら狂ったようにトリガーを引き、エネルギー弾を撃ちまくった。
「帰る・・・帰るんだ・・・絶対に!!」
(新居で帰りを待つ妻ともうすぐ生まれてくる子供の為にも俺はこんな所では死ねない!!死ねないんだ!!)
心の中で叫びながら、その砲手は狂気に取りつかれるかのようにトリガーを引き続けた。
まほろば　は右舷艦首の装甲に敵のビームを受け火花をあげながら、対空砲火を続けつつ航行をしていた。
「煙突ミサイル撃て!!」
まほろば　は直ぐに反応し、艦橋後部にある煙突ミサイル、薩摩は艦橋両舷にあるＶＬＳ、ヤマトは煙突ミサイルに搭載されているミサイルを一斉に発射した。
ミサイルは件の砲座近くに着弾して岩石や他の砲台を吹き飛ばし、隣接したあの砲手が担当していた砲台を砲手もろとも消し飛ばした。
しかし、砲台はこれだけに留まらずまだまだある。
三艦のミサイル一斉攻撃は一部の兵装を破壊しただけに留まった。
ヤマトの艦橋では、彗星帝国の攻撃を受けつつも、真田は冷静に現状を観察していた。
「このままじゃ、敵の餌食になるだけですよ」
戦況が進まない中、太田が声をあげる。
「くそぉっ!!」
古代も悔しそうに顔を歪める。
「デスラーの言ったウィークポイントはどこにあるんだ・・・?」
ガミラス艦隊との戦闘の最後に、デスラーは、
「真上と真下・・・脆いものよのう・・・」
と言い残していた。
デスラーは地球側に彗星帝国攻略のヒントを与えて去っていったのだ。

デスラーのヒントを元に彗星帝国の弱点はこの下部に有るのだと真田はそう踏んで都市帝国の下部が映し出されている艦橋の大モニターを睨むように見ていた。
ガトランティス人と言えども人間。
人間が造ったモノならば、必ず其処かに弱点が有る筈だ。
真田は技術者として、また科学者としてその信念は曲げずにモニターを見続ける。
モニターには、ヤマトと僚艦に攻撃をしてくる砲台とコスモタイガー隊と激しいドックファイトを繰り広げている敵の迎撃機の姿。
「艦載機・・・艦載機・・・そうか!!」
真田は敵の艦載機の姿を見て、声をあげた。
「真田さん?」
古代は突然声をあげた真田に首を傾げるが、真田はそんな古代の事を無視して、艦内マイクに向かって叫んだ。
「新米!!新米!!新米!!大至急あの艦載機の射出口を探れ!!」
「了解」
真田は中央コンピューター室(ＣＩＣ)にいる新米に指示を出した。
真田から指示を受けた新米は早速コンピューターを操作し、彗星帝国の下部を探査し始める。
「た、頼むぞ・・・データが出るまでは此処には命中しないでくれよ・・・」
ビクビクと怯えながらもコンピューターを操作する手は止めない新米だが、別の個所が被弾すると身を震わせた。
その時、少し髪が乱れた。
「どんな時でも身だしなみ・・・お婆ちゃんの遺言だ」
新米は手鏡と手櫛で乱れた髪を直す。
ピピピピピッ
と、検索結果が出た事を知らせるアラームが鳴る。
新米は慌ててコンピューター画面を覗き込む。
「よ、よし、分かったぞ」
彗星帝国の下部にある艦載機射出口の検索結果が出た。

新米は真田にその事を報告しようとした。
だが、その直後中央コンピューター室が被弾した。
「ぐわぁぁぁぁ!!」
爆風と衝撃波が新米達、中央コンピューター室に居た乗組員たちに襲い掛かる。
「ぐっ・・・ごほっ・・・」
衝撃波を受け、体を叩きつけられた新米は肋骨が折れ、肺に刺さったのか、口から大量の血と乾いたような呼吸をする。
「うっ・・・ぐっ・・・」
自分はもう助からないだろう。
しかし、探査して導き出したデータは何としても真田に伝えなければ・・・。
その強い思いで、新米は最後の力を振り絞り、艦内マイクで第一艦橋にいる真田に報告する。
「わ、分かりました真田さん・・・左四十度・・・ヤマトより二時の方向に射出口が・・・うわぁぁぁぁぁぁ!!」
新米が真田に射出口の位置を伝え終えた直後またも中央コンピューター室が被弾し、新米はまたもや弾き飛ばされ、等々力尽きた。
「どうしたんだ!?新米!?新米!?新米!?新米!?しんまぁぁぁぁぁい!!」
壊れかけた艦内スピーカーからは真田の悲痛な叫びが誰も答える事のない中央コンピューター室に響いた。
「雪、直ぐに中央コンピューター室へ!!」
「は、はい!!」
新米の叫びと爆発音、そしてそれ以降、彼からの応答が無い事から中央コンピューター室が被弾したと判断した古代は直ぐに雪を応急救助の為、中央コンピューター室へ向かわせる。
「・・・新米」
通信状況から恐らく新米がもう手遅れなのだと悟った真田。
「真田さん・・・」
「・・・大丈夫だ・・・それより古代、新米の残してくれたデータを無駄にするな」

「はい!!二時の方向にパネルチェンジ!!」
古代が表示されているモニターの映像を変える様に指示を出すと、モニターにはパラノイア戦闘機の射出口が映し出され、そこから新たにパラノイア戦闘機が出撃してくる映像が流れた。
「あれだ!!あの射出口を破壊して都市帝国の中へ飛び込み、動力源を破壊するんだ。それ以外に勝つ手段はない!!」
「はい」
古代が都市帝国の内部へ切り込みをかけようとした時、
「俺も行くぞ、古代」
空間騎兵の宇宙戦闘服を纏った斎藤が第一艦橋へと入って来た。
「敵の懐に飛び込むんだ。生きて帰れる保証はないぞ」
古代は斎藤に最終確認をとる。
出撃すれば死亡確率はヤマトに居るよりもグンと上がる。
それでもいいのか？　と・・・・
すると、斎藤の答えは、
「俺がそう簡単にくたばるとおもっているのかよ!?」
彼は笑い飛ばしながらそう言った。
そして、
「俺も行くぞ」
と、真田も都市帝国への切込み作戦に参加すると言ってきた。
「真田さん!?」
古代は真田の参加に意外性を感じたのか、驚いた顔をする。
「俺が行かなきゃ、メカの事はどうにもならんぞ」
確かに真田の言う事も一理あった。
「はい」
古代も真田の腕は知っていた。
一緒に来てくれるのであれば、これ程までに心強い人物は居ない。
古代は真田と斎藤と共に都市帝国へ切り込みをかける事を決めた。

三十三話　挺身隊

まほろば、ヤマト、薩摩、コスモタイガー隊と都市帝国との戦闘は地球側に好転の兆しが無いまま続けられている。
都市帝国の下部からは相変わらず容赦ない砲撃が続いている。
「くそ、しぶとい奴等だ!!」
とある砲台の砲手は悪態をつきながらもトリガーを引き続け、エネルギー弾を撃ちまくる。
しかし、地球艦隊は有効射程ぎりぎりのところにいる為、思うような戦果もない。
着実にダメージは与えられているのだが、未だ健在で、しかも指揮系統にも何ら混乱がみられない。
「これだけの砲火を集中しながら、なぜあの野蛮人共を撃破できないのです!?」
苛立つサーベラーはゲーニッツを詰問するが、彼は顔色一つ変えない。
「こちらの有効射程いっぱいの位置にいる為、威力が減殺されていることもありましょうが、地球戦艦の防御が予想以上に強固だったこともあるでしょう」
「おのれ、忌々しい劣等民族が・・・」
サーベラーは苦虫を噛み潰したような顔をして、戦況が進まない映像が映し出されるモニターを睨んだ。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「艦長、ヤマトからの通信です」
「繋げ」
都市帝国の下部にある砲台と戦闘中の　まほろば　に　ヤマトから通信が入り、モニターには古代が映る。
「これよりヤマトは都市帝国の内部に潜入して破壊活動をします。まほろば　と　薩摩の皆さんにはその支援をお願いしたいのですが

・・・・」
「古代君、君は死ぬ気か!?」
「死ぬつもりは毛頭ありません。ですが、危険なのは十分承知の上です」
「・・・・分かった、此方のコスモタイガー隊も応援に向かわせる・・・・死ぬなよ」
「ありがとうございます。月村艦長」
互いに敬礼し、通信を終える。
「艦長」
「ん?」
永倉が良馬に声をかける。
「艦長も行って下さい。艦長も元はパイロット だったんでしょう?今は一機でも多くの戦力が欲しいはずです」
「ちょっ!?航海長!!」
永倉の言葉に新見が声をあげる。
「艦長、まさか『行く』なんて仰いませんよね?」
新見が良馬を睨みながら訊ね、ギンガは不安そうに良馬を見る。
敵の心臓部に突入するのだ。
彼らの大半ないしほとんどは生還できないだろうことは容易に想像がつく。
「いや、航海長の言う通りだ。今は一機でも多くの戦力を投入して、成功率を少しでも上げたい・・・・副長、すまないが少しの間、艦を頼む」
「艦長!!」
「大丈夫だ。必ず生きて帰ってくるから」
そう言って軍帽とジャケット、スカーフ、手袋を脱ぐ良馬。
「良馬さん!!」
「艦長!!」
「では、艦を頼む」
そう言って良馬は、足早に艦橋を出て格納庫へと走って行く。
格納庫では、既にコスモゼロがスタンバイしている状態だった。
しかし、

「ん？複座？」
スタンバイしていたコスモゼロは複座型に調整されていた。
「整備長、これはどういう・・・」
良馬はコスモゼロの整備をした整備長に事情を訊ねようとしたら、
「私が整備長に頼みました」
「っ!?」
良馬が慌てて声のした方に顔を向けると、其処には普段の軍医の衣装から女性用の艦船乗りの制服に着替えたリニスが居た。
「り、リニス」
「まったく、貴方は何を考えているんですか!?艦長なのに敵陣の真っただ中に切り込むなんて・・・」
リニスは良馬の行動を軽率だとお説教をし始めようとするが、
「リニスだってそれを知ったからこそ、着いて来ようとしているんじゃないか？それに医務官が、負傷者が続出している中、抜け出していいのか？」
服装の違うリニスの姿を見れば、彼女も良馬と共に切込み作戦に参加しようとしているのは明らかであった。
「私のマスターは貴方なのですから、マスターが危険な所へと行くのであれば、それにお供するのは使い魔として当然の事です!!医務室はディアーチェさんたちが頑張って私の居ない穴を埋めてくれています・・・と、言うよりディアーチェさんが私に良馬さんの下に着いて行くように言っていましたから・・・」
照れ隠しなのか、良馬から視線を逸らしながら言うリニス。
「リニス」
「はい？」
「すまない・・・そして、ありがとう・・・」
「いえ・・・」
「リニス」
「はい」
「必ず、生きて戻って・・・そして奴等に勝つぞ!!」
「はい!!」

良馬とリニスを乗せたコスモゼロはカタパルトへと上がり発進シークエンスを開始した。
まほろば　からは良馬が乗るコスモゼロの他に補給や補修が終了した機体、まほろば　に搭載されていた予備機のコスモタイガーが次々に発艦して行く。
同様にヤマトの方でも補給し終えたばかりの機体、予備機のコスモタイガー（三座席タイプ）が次々と発艦した。
そんな中、
「俺たちを置いていくなんて、そんな野暮なことはしないよな」
「加藤・・・それに山本!!お前たち、大丈夫なのか!?」
補給の為、一時ヤマトに帰還した加藤、山本の両機は被弾し、パイロットである二人も負傷していた。
それにもかかわらず、二人は医務室へは行かず、簡単な応急処置をしただけで予備機に乗り、またもや出撃してきた。
「なぁに、これしきの傷・・・今のヤマトに比べたら、軽いもんだよ」
「二枚目は不死身ってね・・・」
二人は心配する古代に笑みと冗談を交え飛行を続ける。
そして、古代の目に　まほろば　から出撃したコスモタイガー隊が映り、その中には、良馬が乗るコスモゼロがいた。
「月村艦長!!貴方まで何故!?」
「古代君、今は地球を滅亡から救う事が第一優先だ。そんな時に、艦長だのパイロットだの関係ないよ。一人でも多くの戦力が必要だろう？」
良馬はニッと笑みを浮かべると、古代もつられて苦笑しつつも笑みを浮かべた。
突入部隊は間隔を取りながら、全機が集結し、敵艦載機の射出口目がけて一気に突っ込んで行く。
そこをパラノイア戦闘機が襲い掛かり、激しいドックファイトが起こり、更に迎撃機の猛攻を突破すると、今度は都市帝国の下部の砲台が突入部隊に襲い掛かる。
当然、まほろば、ヤマト、薩摩の三艦も援護射撃を行い、決死隊の

針路上の敵砲台を潰すが如何せん数が多い。
その中で、古代と真田が乗ったコスモゼロが敵砲台に狙われるが、そこを山本機が庇い山本機が被弾した。
「くそっ!!」
加藤が「仇だ」と言わんばかりにミサイルを撃ち、山本機を被弾させた砲台にミサイルを叩き付けた。
「山本ッ!!」
山本機の近くを飛行していた古代は被弾し、コントロール不能になった山本機に向かって叫ぶ。
炎上するコスモタイガーの操縦席で山本は古代に敬礼をして敵対空砲火に体当たりをした。
誰もが山本明夫の戦死を覚悟したが、山本は間一髪の所で機体からベイルアウトし、スペースパラシュートにて戦線を離脱した。
「あとは・・・あとは任せたぞ・・・」
脱出したが、自分はこれ以上戦闘に参加できないと悔しそうな顔で山本は都市帝国から離れて行った。
「古代君、大丈夫だ!!山本君は無事に脱出できたようだ!!」
良馬は一瞬であるが、無事に機体から脱出した山本の姿を確認していた。
その為、古代に山本の無事を伝えた。
「そうですか・・・よかった・・・」
山本の無事を伝えられた古代はホッとした。
「敵艦載機発進口の破壊成功!!」
「よし、全機突入!!」
ヤマト砲術長の南部が精密射撃により、敵の艦載機射出口の防御シャッターを破壊し、其処からコスモタイガー隊は都市帝国内部へと突入する。
「ヤマトから入電!挺身隊が都市帝国内部に突入しました!!」
ギンガがヤマトから受信した通信内容を艦橋要員に報告する。
「そうか、何とか無事に入り込めたか・・・」
「しかし、大変なのはこれからです」

「うむ・・・・」
敵のホームグラウンドに入るのだ。
当然敵も万全の迎撃態勢をとって居る筈・・・・。
（良馬さん・・・・）
突入部隊に参加した恋人（良馬）の身をギンガは案じた。
そこへ、
「ギンガ!!」
「ディアーチェさん?」
白い衛生士の服装に着替えたディアーチェが艦内通話をかけてきた。
「すまん!!人手が足りなくて困っている。ギンガは確か士官学校で、医務科も受講していたな?」
「は、はい」
「ならば手伝ってくれ!!」
「わ、分かりました」
「では、待っている」
そう言い残し、ディアーチェは通信をきった。
「副長、すみませんが、私は負傷者の応急手当にまわります」
ギンガは通信業務から外れるため、その旨を副長の新見に報告する。
「ええ、通信業務は私が兼任するからいってらっしゃい」
新見は快く通信業務を引き受け、ギンガは医務室へと向かった。
「うっ・・・・」
医務室へ入ったギンガは、一瞬眩暈を起こしそうになった。
医務室の床や通路には負傷者が沢山おり、其処に居る者は皆、血が滲んだ包帯をして、苦しそうな声をあげ、顔を歪ませている。
中には手足が千切れている者も居り、床には血だまりが出来、切断された手足も転がっている。
そこはまさに地獄絵図の様だ。
管理局時代では考えられない光景が今、ギンガの目の前にあった。
「来たか!?早く手伝ってくれ!!」

負傷者の返り血を浴びながらも応急処置をしていたディアーチェがギンガの存在に気が付き声をかける。
「は、はい!!」
ギンガも手術用の殺菌ゴム手袋と前掛け、マスクをつけ、負傷者の応急救護に取り掛かる。
応急処置をしながらギンガはある事に気が付く。
(あれ?そう言えばリニスさんはどこへ・・・・?)
そう、まほろば　の医務官を務めているリニスの姿が見当たらないのだ。
(艦内を回っているのかな?)
ギンガはリニスが艦内を回り、医務室へ運べない重傷者の応急救護をしているのかと思いつつ、ディアーチェにリニスの行方を訊ねた。
「ディアーチェさん、リニスさんは?」
「医務官か?医務官は今、艦長と共に敵陣に切込みをかけにいっている」
「えっ!?」
ディアーチェの予想外の言葉にギンガは手を止める程、驚いた。
「リニスさんが・・ですか?」
「そうだ。切込みとなれば、当然その先でも負傷者はでるだろう・・・・一人でも多く、生きて帰ってほしいからな・・・・」
ディアーチェは手を止めることなく、リニスを向かわせた理由をギンガに話す。
(うーん・・・・納得出来る様な、出来ない様な・・・・)
ギンガは応急救護コースを士官学校で受講していたのだから、自分の方を連れて行って欲しかったと思いつつ、負傷者の救護を再開した。

都市帝国内部へと辿り着いたコスモゼロとコスモタイガー隊。
次々と都市帝国内部に飛び込んでくるコスモタイガーに迎撃戦闘機が襲い掛かり、都市帝国内部でも激しい艦載機戦が発生した。
「古代、あそこが滑走路だ!!着陸しろ!!」

「了解!!」
敵戦闘機との戦闘中の間にも真田が飛行場の位置を見事に看破。
古代のコスモゼロに続いて、次々と敵の滑走路に強行着陸していくコスモタイガー。
そこへ、滑走路守備隊は彗星帝国軍で正式採用されているアストロレーザーライフルで迎撃にかかるが、迫り来る戦闘機と武装しているとは言え、生身の体の人間・・・・。
勝敗は目に見えている。
着陸しながらパルスレーザーを撃つコスモタイガーに滑走路の最前線にいた守備隊の兵士は次々と蜂の巣にされ斃れていく。
また滑走路の奥に居た兵士もコスモタイガーの体当たりとも言える強行着陸によって、コスモタイガーに轢かれる者も居た。
しかし、そんな決死隊もコスモタイガーの機体から降りると彗星帝国兵からのレーザー銃の熱烈な歓迎を受ける。
「くそっ・・・・」
「このっ・・・・」
普通のレーザーライフルの他、滑走路にはレーザー機関銃が設置された防御施設もあり、突入部隊は滑走路でいきなり足止めを食らったが、
「古代君!!真田さん!!此処は俺たちに任せて、君たちは動力炉の破壊へ行ってくれ!!」
良馬が応戦しながら古代らに動力炉の破壊を任せる。
「し、しかし・・・・」
そんな良馬の行為に古代は煮え切らない様子。
「コスモタイガーが無いと帰れないだろう!!」
「此処は俺たちが死守する!!だから行け!!」
「くっ・・・・」
「行こう古代!!」
「真田さん・・・・」
「彼らの行為を無駄にしてはいけない。それに何時までも此処で足止めを食らう訳にはいかない!!」

「分かりました」
古代、真田、斎藤他、ヤマトの戦闘班と空間騎兵隊の隊員たちはレーザーの雨を掻い潜り、一路動力炉を目指していった。
古代たち、動力炉破壊組が滑走路を後にしても守備隊は彼らを追わず、滑走に残りっている良馬たちに攻撃を行っている。
良馬は両手にコスモガンを持ち、壁や滑走路で破壊されたコスモタイガーや敵の戦闘機を蹴って跳んだりして、滑走路内を駆けまわりながら敵兵を打倒していく。
「くそっ、アイツは本当に地球人なのか!?」
良馬の人間離れした動きに敵の兵士は悪態をつきながら良馬を狙うが、ことごとく返り討ちにされていく。
「マスター。攻撃準備完了しました。何時でもいけます」
リニスは周囲に光の玉を無数に出していた。
良馬が派手に滑走路内を駆けまわっていたのは敵兵の目をリニスから逸らす役割も担っていた。
「な、なんだ!?アレは!?」
「俺が知るか!!」
「う、撃て!!アイツを撃つんだ!!」
両軍の兵は皆、リニスの周りに光の弾が無数に浮いている光景を見て唖然としている。
「今だ!!リニス!!やれ!!」
「バルニフィカス!!」
リニスの攻撃に察知し、ガトランティスの兵士は地球側の新兵器かと思い、ガトランティスの兵士たちが銃を構える。
だが、もう遅い・・・・
「安らかなる死を・・・プラズマバイオレット!!」
球体状だった玉が氷柱のように鋭くなり、
ズガガガガガッ!!
一斉に彗星帝国の兵士に襲い掛かった。
「ぎゃぁぁぁぁぁぁ!!」
「ぐわぁぁぁぁ!!」

「うげぇぇぁぁ!!」
リニスの攻撃魔法は次々と彗星帝国の兵士を撃ち抜き、至近で爆発を起こし、敵兵を死傷させていく。
勿論、殺傷設定にしてあるから辺り一面は大量の血や焼け焦げた死体、バラバラになった死体や内臓、千切れた手足や首が転がり、一命は取り留めたものの腕や足を無くしたり、全身を焼かれ、その激痛に苦しむ兵が居る地獄の様な戦場風景となった。
その頃、動力炉を破壊しに行った古代達は出合い頭に出現した敵兵を倒しながら着々と動力炉を目指していた。
しかし、その様子は監視カメラによってサーベラーたちにたちまち知れる事となった。
「あっ!?内部まで侵入してきたか!?」
「艦船乗組員も迎撃に回しなさい!何をやっているのですか!?」
「既に命じております!」
司令部は半ばパニックに陥っていた。
そもそも敵兵が直接上陸してくる事自体、彗星帝国は想定していなかった。
それだけ白色彗星・首都星要塞のガスバリアや防御力に対する自信が大きかったのだが、それが今回は裏目に出てしまった。
「飛行場管制室、応答が途絶えました!」
「おのれぇ～劣等人種の分際で～!!直ぐに近くの部隊も飛行場に回しなさい!!」
サーベラーは顔をどす黒く歪めながら報告を聞く。
しかも入ってくるのはどれも此方側が不利な情報ばかり。
辺境の野蛮人にこの首都を踏み荒らされるという、これ以上ない屈辱に、自棄酒か物に八つ当たりたい気分であるが、無論、そんな事で事態が改善するわけがない。
今は一刻も早くあの不逞の輩を始末することが先だ。
「サーベラー様、動力炉エリアに近衛兵の配置を大帝にご奏上下さい!!」
「そんな事ができますか!私に恥をかかせるつもり!?」

「っ!?」
「それに大帝をお守りする近衛を野蛮人との戦いに晒すわけにはいきません！」
「しかし、万一主動力炉を破壊されれば首都機能の大半が奪われます。此処はやはり大帝にご報告すべきでは？それに動力炉に通じる通路のシャッターを下ろしましょう！」
ラーゼラーがズォーダーに報告し、動力炉の区画に通ずる通路のシャッターを下ろそうとするが、
「お待ち、ラーゼラー。たかがあれしきの賊、袋の鼠同然ではありませんか。第六ブロックと第五ブロックへ兵を差し向けよ!!それから各エレベーター、階段、通路も警備を固めよ!!」
地球攻略作戦やデスラーの出奔騒ぎと多くの失点を重ねてきたサーベラーにとって、今回自分たちの神聖不可侵領域へ侵入してきた蛮族共の討伐はこれまで失点してきた汚名を雪ぐべく千載一遇の機会。
同じく失点を重ねたゲーニッツに功績を奪われぬ様、此処は自分が主導権を握り、この事態を解決に導けば、きっと大帝もお喜びになるに違いないと、思ったサーベラーはズォーダーには報告せず、自らが指揮を執った。
しかし、その中には『通路のシャッターを下ろす』と言う命令は含まれなかった。
これが後に、彼女自身の身を破滅させる事とはこの時のサーベラーは知る由も無かった。
動力炉を目指している古代たちは、都市帝国の地下層に居た。
「古代、ちょっと待て!!」
先行する古代を真田が呼び止めた。
「うーん・・・こっちだ・・・」
真田は手に電卓の様な端末を持ち、その画面を見て動力炉が、古代が今進もうとした通路ではなく、脇にそれている通路の先だと言う。
「なんだいそりゃ？」
斎藤が真田に持っている端末の正体を訊ねる。

「動力炉の位置を探るためのエネルギーカウンターだ」
真田の持っている端末は、ある特定のエネルギー反応を探知する小型のレーダーの様な機械だった。
真田の誘導の元、動力炉を目指して行く中、
「見ろ、エネルギー中継所だ」
そこは幾つものパイプがまるで蜘蛛の巣の様に張り巡らされた場所で、電灯も無く、薄暗い場所だった。
「しかし、どのパイプが動力炉に続いているんです？」
「パイプの流れを見ろ、あっちが動力源だ」
真田が指摘するパイプは中継所に存在する無数のパイプの中でも一番太いパイプがあり、その太いパイプが動力炉から直接エネルギーを供給され、此処から都市帝国の各部署へ伝達供給されているのだと言う。
「よし!!だったら行こうぜ」
斎藤が号令をかけ、一同は太いパイプに沿って進んでいく。
その様子を彗星帝国の兵士達は物陰から伺っており、ライフルを構え、待ち伏せていた。
そして、探照灯を一斉に照射し、古代らの目を一瞬くらませると、一斉射撃をしてきた。
「こっちだ！」
咄嗟に古代が脇にある通路へと逃げ込み、真田と斎藤も後に続く。
しかし、随伴していた空間騎兵隊員三人が逃げ遅れ、そこで射殺された。
「この分じゃ、どのエレベーターも敵に守られているな」
敵が待ち伏せをかけてきた事から、真田がこの先は敵の襲撃が多くなると予想する。
「階段じゃ敵の絶好の的になるぜ」
陸上戦闘の専門家である斎藤が階段で行く危険性を言う。
「途中、ゴンドラがあった。使えるかもしれない。行ってみよう」
手榴弾を待ち伏せしていた敵に向かって投げ、敵が怯んだ隙を見て、古代たちは中継所を後にし、来た道を引きかえした。

そして古代が見つけたゴンドラに乗ってみるとそれは残飯輸送用のゴンドラで、ゴンドラの中は生ゴミと腐敗臭でとんでもなかった。
「残飯輸送用のゴンドラか・・・」
斎藤は足元の広がる残飯の海に顔をしかめる。
「彗星帝国の連中も飯は食うみたいだな」
斎藤は足もとの残飯を見ながら軽口を叩く。
その言葉に若干緊張がほぐれた古代と真田だった。
そして真田は再びエネルギーカウンターで動力炉の位置を探る。
「この辺だな・・・」
「よし、あのパイプに飛び移ろう」
ゴンドラが近くにあったパイプの傍を通った時、三人はそのパイプに飛び移った。
流石の彗星帝国の兵士たちもまさか通路でもない所から侵入して来るとは思っていなかったようで、古代たちは敵兵に見つからず、動力炉のある区画まで無事に来る事が出来た。
もう間もなく動力炉だと言う所で、
「ぐあぁぁ!!」
敵兵の狙撃を受け、真田の左足が吹き飛んだ。
真田を狙撃した敵兵は古代と斎藤の二人によって斃された。
「真田さん!!」
「心配ない・・・お前も知っているだろう・・・俺の脚は義足・・・作り物だ」
「そうだったのかよ」
古代はイスカンダルへの航海の時、ガミラスの宇宙要塞爆破作戦時に真田の四肢が全て義手、義足だと知ったが、此処で初めて真田の四肢が義手、義足だと知った斎藤は驚いていた。
真田はガミラスとの戦争前・・・。
幼少期の頃、月の遊園地へ家族と遊びに来て居た際、姉と共に遊園地の遊具の事故に遭い、姉は死亡、真田自身は四肢を失った。
その時から真田は科学者、技術者を目指すようになった。
事故の前は画家を目指していたのだが、真田は姉を殺し、自らの四

肢を奪った科学技術力を恨み、「科学は俺の屈服させるべき敵だ」をモットーに科学を屈服させるべく科学者の道を選び、地球防衛軍の科学・技術者となったのだ。
　義足と言う事で、命に別状はないものの、行動不能となってしまった真田。
「俺は此処からは動けん。二人とも、此処から先は俺の指示に従って動力炉を爆破してくれ」
　真田は古代と斎藤の二人をオペレートしながら二人を動力炉へと導いた。
「この通路だな」
「間違いなさそうだ・・・・真田さん。動力炉の前に着いた爆薬はどうやってセットすればいいんだ？」
　斎藤が真田に爆薬のセット方法を訊ねる。
「場所は出来るだけ高い所が良い。起爆装置と爆薬を繋げるのを忘れるな。お前はそそっかしいからな」
「了解。行くぜ、古代」
「ああ!!」
　古代と斎藤は動力炉区画の最深部へと到達した。
「なに!?動力室へ入った!?」
　古代と斎藤が動力室へと到達したその報は、直ぐにサーベラーの下に入った。
　サーベラーにとっては、最も恐れた報告であった。
「まずい事になった・・・・だからあれほど私が申し上げたのに!!それを貴女は!!」
　ラーゼラーは自分の意見を聞かず、精鋭部隊を動力室の前に配備しなかった事、通路のシャッターを閉めなかったサーベラーを追求しようとしたが、サーベラーには全く聞こえておらず、ズォーダーが知る前にこの事態を収拾しなければならなかった。
「早く、大帝がおいでになる前に片付けなさい!!」
　報告を知らせてきた兵にサーベラーは命ずるが、
「何事だ？サーベラー」

運は彼女の味方にはならなかった。
「っ!?」
作戦室にズォーダーが姿を現した。
「わしが来る前に誰を片付けるのだ？」
しかも、ズォーダーは、先程のサーベラーの発言を聞いていた様だ。
「あっ・・・・あっ・・・・」
サーベラーは顔を真っ青にしてズォーダーを見た。
漸く目的地である動力炉を目の前に古代たちは上から敵兵の攻撃に足止めを余儀なくされた。
敵は動力室の上部にある通路からレーザーを撃ってきている。
下部にいる古代達は地理的に不利な状況。
しかしモタモタしていると来た道からも敵が来て、挟み撃ちに遭う。
「これじゃあ、とても向こうへはいけねぇ・・・・古代、頼む援護してくれ」
「分かった」
「俺が向こうについたらお前は帰ってくれ」
「なにっ!?」
斎藤のこの発言に驚く古代。
「向こうへ行ったらとても生きちゃあ帰れねぇ・・・・お前まで死んだらヤマトはどうなるんだ!?それに真田さんはどうする!?」
「斎藤・・・・」
「古代」
斎藤は古代の肩に手を置き、
「古代、俺はお前が好きだ。上手くは言えねぇが、俺より年下のお前を兄貴のように思っていた」
「うっ・・・・」
斎藤の言葉を聞き、思わず涙が流れる古代。
「泣きっ面なんて見たかねぇぜ。兄貴よ・・良い艦長になってくれよ・・・・行くぜ!!」
そう言って斎藤は動力炉めがけて、隠れていた通路を飛び出して

いった。
「斎藤!!」
当然敵の兵士たちは斎藤を狙うが、その隙に古代が敵の兵を狙撃していく。
「古代!!早く行け!!」
そして無事に斎藤は動力炉の前に辿り着いた。
斎藤は向かい側でまだ援護射撃をしている古代にヤマトへ戻る様に伝える。
「真田さんを連れてヤマトへ戻れ!!行け!!この野郎!!早く行け!!」
「くっ・・・・」
古代は後髪を引かれる思いで、その場から走り去り、真田の下へと向かった。
「真田さん!!」
「早いな。セットはもう終わったのか?」
「・・・・」
「っ!?斎藤・・・・」
動力炉から戻ってきたのが古代のみで其処に斎藤の姿が見えなかった事から真田は動力炉で何があったのかを察した。
動力炉爆破のため一人残った斉藤を残し、苦悩のうちに古代と真田は飛行場に向かって走り続けた。
時折現れる敵兵は殆ど反射的に射殺した。
斃した兵士の中には女性兵やまだ若い、少年兵もいたようだが振り返らずに駆け抜ける。
そして、ようやく辿り着いた飛行場もまた血と骸の溜まり場と化していた。
敵の守備兵も滑走路に残ったコスモタイガーのパイロットも殆どが物言えぬ状態と化している。
機体も大半が再び飛び立てる状態ではない。
古代はこの際、動けるのであれば敵の機体でも仕方ないかと思った。
「月村さん!!加藤!!無事か!?」

「こっちだ!!早く乗れ!!」
滑走路で帰りの分のコスモタイガーを死守していた良馬と加藤は無事な様子で未だに戦闘を行っていた。
「生存者は全員、近くに倒れている者を担げ!!」
良馬が声を張り上げ、近くで倒れている味方を一人でも多く連れて帰る様に言う。
それぞれが撤退準備をし、整った機体からこの場を後にしていく。
「乗ったか?発進するぞ?」
「頼む」
加藤は古代、真田を三座のコスモタイガーに乗せ、滑走路を後にしていく。
「それじゃあ艦長!!お先に!!」
坂井も負傷したコスモタイガー隊員を担ぎ、近くの機に乗り込む。
「ああ、まほろば　で会おう!!」
そして、最後に良馬とリニスだけとなり、
「リニス!!最後にとっておきをお見舞いしてやれ!!」
盛大な置き土産を残してやれと良馬はリニスに命じ、
「はい!!バルニフィカス、最大出力!!・・・サンダーレイジ!!」
リニスはＭａｘパワーで殺傷設定の攻撃魔法を放つ。
リニスが放った止めの一撃で滑走路は見る影も無くし、生き残っていた敵の兵士も全て物言わぬ屍となった。
当然綺麗なままで残った死体などは一体もない。
それは、戦死した味方の兵の死体も同様だ・・・。
またリニスも限界まで魔力を使い、技を放った後は山猫の姿に戻った。
山猫姿のリニスと彼女のデバイスを脇に抱え、良馬はコスモゼロに乗り、滑走を後にした。
一方、動力炉では、
「くそっ、もう少しだ・・・心臓には当てるなよ・・・」
斎藤が一人、動力炉の前で爆弾を仕掛けようとしていた。
敵の兵士はしぶとい蛮族兵に怒りを抱きながらただ一人その場に

残った斎藤に十数人が襲い掛かり、斎藤の体はたちまち銃創だらけとなる。
「うっ・・・くっ・・・うおっ・・・」
斎藤は最後の力を振り絞り、爆弾をセットした。
「よし、ＯＫだ・・・」
爆弾をセットした斎藤はその場に倒れる。
敵の兵士は斎藤に止めをさそうとしたのか、または生死を確認し来たのか、それとも斎藤が仕掛けた爆弾を除去しようとしたのか、兵士たちはライフルを構えながら斎藤に近づいてくる。
「ヤロウ・・・消えやがれ・・・」
近づいてくる敵兵を見て、ニヤリと笑みを浮かべながら斎藤は起爆スイッチを押した。
その直後、動力炉は眩い光に包まれ、大爆発が起こった。
『うわぁぁぁぁぁぁー!!』
斎藤に近づいて来た兵士たちは逃げ出す暇もなくその爆発に巻き込まれた。

宇宙戦艦　ヤマト　格納庫
ヤマトに無事に戻った古代は早速加藤に労いの声をかけた。
「加藤!!よく頑張った!!生きて帰って来られたのは・・・どうやら俺たちだけらしいな・・・」
確かに古代の言う通り、ヤマトの格納庫へ戻ってきた機体は古代たちが乗ったこの一機だけだった。
もしかしたら、まほろぼ　の方へと向かったのかもしれないが、ヤマト所属のコスモタイガーならば、ヤマトに戻って来る筈だ。
ヤマトに戻って来た機体が、古代たちが乗った一機だけと言う事は、やはり・・・
「・・・」
古代の言葉に何らリアクションを示さない加藤。
「ん？加藤？」
不審に思った古代が前の操縦席を覗き込むと、

「っ!?」
そこには息絶えた加藤の姿があった。
加藤がいつ、息を引き取ったのかは分からないが、彼は死に体ながらも古代と真田が乗る機体をヤマトに戻す為、おそらく最後は無意識の内に操縦桿を握っていたのかもしれない。
「・・・」
「加藤・・・」
加藤の死に顔は、血で汚れながらも満足そうな笑みを浮かべていた。
動力炉を失った都市要塞は瞬時にその機能を停止した。
回転履帯は回るのを止め、ガスバリアは薄れていき、最終的には消失した。
都市部のビル群はその全て明かりが消え、停電している。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「都市要塞のエネルギー反応が突然消失しました!・どうらや都市要塞の動力炉の破壊に成功した模様!!」
「やったー!!」
「よっしゃあ!!」
新見の報告を聞き、フェリシアや永倉は声をあげて喜んだ。
そこへ、艦橋のドアが開き良馬が帰って来きた。
「艦長!!」
「ご無事でしたか!!」
「都市要塞は?」
「全ての機能を停止した模様です」
「そうか・・・」
良馬はゆっくり目を閉じる。
(大きな・・・大きな代償だった・・・)
此処までの戦闘で地球側が出した代償はあまりにも大きすぎた。
彼らを悼むには、絶対に生きて勝利しなければならなかった。
「よし!!使用可能な武装で都市要塞を攻撃しろ!!」

まほろば、ヤマト、薩摩からは無数のショックカノンとミサイルが無防備となった要塞都市に降り注いだ。
地球ではその映像を見て、皆が歓喜の声をあげた。▪
崩壊していく彗星帝国ご自慢のビル群・・・・。
その内部ではまさに大混乱となった。
あれほど地球市民のパニック状態を見て、無様だの野蛮だのと言っていたガトランティス人が、今度は自分たちがその醜い醜態を晒す事となった。
上からは降り注ぐ瓦礫の雨・・・・。
彼方此方で起こる爆発。
その最中、
「ぐわぁぁぁっ!!」
ラーゼラーが瓦礫の下敷きとなった。
一瞬で押し潰されれば幾分、楽だったのだが、彼は運悪く両足の骨が砕かれ、下半身が瓦礫に埋もれた状態でまだ生きていた。
必死に逃れようと身体を動かすラーゼラー。
その彼の傍をサーベラーが走り去っていった。
「サーベラー・・・・総・・・・参謀長・・・・」
彼は救いを求めるかのように手を伸ばすがサーベラーは見向きもせず、通路を走り去っていった。
「フ・・・・フ・・・・フハハハハ!!ハーハハハハハハッ・・・・」
ラーゼラーは、突然体を動かすのを止め、狂ったかのように笑い出した。
いや、本当に狂ってしまったのかもしれない。
そして、壊れた様に笑うラーゼラーの下にまたもや爆発が起こり、彼の下には瓦礫の雨が容赦なく降り注いだ・・・・。
「終わった・・・・」
「長かった・・・・」
崩壊していく都市帝国を見て、誰もがコレで終わったかと思った。
しかし・・・・
崩壊していく都市帝国のビル群の下からソレは現れた。

「おいおい・・・・」
「嘘・・・だろう・・・・？」
爆炎の中から、禍々しい黒い影が姿を現した。
それは、地球の歴史史上見た事もない程の巨大な戦艦だった・・・・。

全宇宙は我が故郷・・・・。
不滅の大帝国ガトランティスに敗北はない・・・・・・。
愚か者よ。戦いはこれからなのだ・・・・。
大帝ズォーダーの胸に怒りの火が燃える。
はたして地球を守る術はあるのだろうか？

三十四話　テレサの愛・・・

「くそっ、奴らはマトリョーシカか!?」
「だとしたら、最凶最悪なマトリョーシカですね・・・」
メインスクリーンの向こうに現れたソレは、想像を遥かに超える、まさに最凶最悪なマトリョーシカだった。
都市帝国を止めるために払った犠牲は多大なものだった。
ヤマトの戦闘班、コスモタイガー隊と空間騎兵隊の戦死を含め、半数近い乗組員が戦死またはＭＩＡ。
艦載機も同様で、真面に跳べそうな機体は既に無く、皆補修が必要だが、もはやその補修に使う資材も艦内には殆どない。
まほろぼ、ヤマト、薩摩の三艦の砲雷撃で都市帝国は崩壊したと思われたが爆発と崩壊の光の中から現れたのは漆黒の要塞を思わせる超がつく程の巨大な戦艦。
全長はゆうに十キロ近くは有るだろうし排水量は推定するのもアホらしい。
武装に関しても細かい兵装を含め、どれ程の兵装を搭載しているのかも一々数えてられない。
まほろば　の艦橋は皆言葉を失ったが、他の艦や地球全体もそうだろう。皆、脳裏に絶望が渦巻いているはずだ。
でも、まだ諦めるわけにはいかない。
敵はまだ生きている。
良馬は己の心に喝を入れ、闘志の炎に風を送る。
使える火器は？
戦闘可能な乗組員数は？
現在の艦の状態は？
あんな規格外の化け物相手では波動砲しか通じないだろうが、あのハリネズミの様に武装された戦艦が波動砲のエネルギーチャージを待ってくれる訳がない。
どうすればいい？

何か…何か手はないのか――？

地球市民、まほろば、ヤマト、薩摩の乗員が誰しも絶望を抱いている中、その件の巨大戦艦では、

「ふっふっふっ・・・驚いたか地球人共め!!報告を・・・」

超巨大戦艦の中に設けられた玉座にズォーダーは座り、動かしたばかりの超巨大戦艦、ガトランティスの状況を訊ねる。

「はっ!!超巨大戦艦、ガトランティス・・・エネルギーチャージ率８０％から上昇中!!火器、機関部及びその他の各部、共に異常なし!!万全の状態です!!」

「ラーゼラー総議長とゲーニッツ艦隊総司令たちが乗り遅れた様ですが、大帝がお気になさるようなことではないかと・・・あのような輩は偉大なる大帝の率いるガトランティスには必要ありませんわ」

自分の事を棚に上げて、ズォーダーの機嫌を取り持とうとするサーベラー。

「地球がこれほどの反抗を見せるとは思いもしなかった・・・だが、全ては徒労だ!!生き延び、この宇宙を支配し、全ての上に君臨する事を許されているのはこのガトランティスだけなのだ!!」

「その通りですわ。今頃地球人共は、ブルブルと震えている事でしょう」

平然としつつも、ズォーダーのご機嫌取りに躍起になっているサーベラーだった。

「砲撃用意!!目標!!地球残存艦隊!!」

ズォーダーの怒りの炎はまさに　まほろば　や　ヤマト、薩摩に向けられようとしていた。

サーベラーの言うラーゼラーは都市要塞の瓦礫に埋もれて落命したが、艦隊総司令のゲーニッツはと言うと・・・

彗星帝国　潜宙戦艦　艦橋

「うーん・・・まさか、我らが・・・彗星帝国が辺境の一惑星に此処まで追い詰められるとは・・・」

グラビートと同型の潜宙戦艦にて崩壊する要塞都市から無事に脱出していた。
「ですが、なんとか命拾いはしましたな・・・この上はこの戦域を離脱し、第十一番惑星にある後方基地へ離脱しましょう」
副司令官ザイゼンがゲーニッツに助言し、
「うーん・・・この状況ではやむを得んか・・・」
ゲーニッツらはワープにて、地球圏から第十一惑星まで撤退していった。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「敵巨大戦艦、砲塔を回転させています!!」
「っ!!」
良馬背を冷たい刃が走った。久しぶりに感じる。
それはまさに死の予感。
「艦首を下げろ!!最大船速!!僚艦にも伝えろ!!急げっ!!」
まほろば　が艦首を下に向け、続いて前進を始めた時、頭上に凄まじいばかりの閃光と衝撃が走った。
巨大戦艦からの砲撃は熾烈を極めた。
咄嗟に回避行動をとっても更なる深手を負った。
もし、回避が遅れていれば、一撃で轟沈していただろう。
各部からの被害報告が入るにつれ、艦橋の空気は重くなっていく。
射撃可能な主砲は第二主砲だけ、艦橋下部に装備されている副砲、ミサイルランチャー、パルスレーザー砲もほとんどがご逝去遊ばした。
更に波動砲の発射口も被弾し、発射口が変形し、チャージは出来ても撃つことは出来ない。
そして人的被害は、戦死者が全体の三割を越え、重傷者を含めると半数近くが戦闘継続不能になっていた。
艦橋要員も皆負傷したが、幸い軽傷で済んだ。
一方、他の部署の無傷・軽傷者は総出で消火と応急修理作業に当たっていた。

ヤマトに至っては全ての武装が破壊され、乗組員の大半が戦死または負傷という有様。
そのヤマトの機関室では、機関長の徳川を含め、機関士たちが懸命に推進力維持の為の作業を続けていた。
「消火急げ!!」
「こっちだ!!早くしろ!!」
ある者は機関室に迫る火の消火作業を行い、
「補助電源を切れ!!そこは放っておけ!!」
徳川たちは機関出力を落とさないように維持するための作業をしていた。
その機関室にて爆発が起き、
「ぐぁぁぁー!!」
徳川はその爆発に巻き込まれた。
「うぅ・・・エンジン出力低下・・・しかし・・・航行に・支障・・・なし・・・」
死に絶えんとる体を引きずり、徳川は最後まで職務を全うしようと、レバーに手をかけ、そのままの状態で息を引き取った。
ガミラスとの戦争を始め、沖田十三と共に多くの戦いに身を投じて、戦い抜いた歴戦の老将、徳川彦左衛門は此処で斃れた。
「撃て!応戦だ!」
主砲制御室へと向かった南部は破壊しつくされ、その場で死亡または重傷により倒れている砲術員の姿を見てはじめてヤマトの主砲が使えないことを知った。
「くそっ、どの砲塔も使えないか・・・うわぁぁぁぁ!!」
南部が現状の悲惨さに対して、呟いた直後に爆発が起こり南部はその爆発に巻き込まれた。
しかし、彼は重傷を負うも奇跡的に一命は取り留めた。
航海長補佐の太田、通信長の相原は艦橋への被弾時に座席から放り出され、体中を強く打ち、太田は脳震盪を起こし意識不明、相原は肋骨をはじめとし、数箇所を骨折した。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

冥王星海戦時とは・・・ガミラスとの戦争時よりも段違いの戦力を得たというのに、この凄まじい損失は何なんだ？

相手はたった一隻なのに・・・・

ただの一隻なのに・・・・

敵と己に憤怒し、アームレストを握る手に力が入った。

良馬が思考を巡らせていると、新見の報告で我に返る。

「超巨大戦艦、地球に向かいます！」

何とか息を吹き返したレーダーで確認したのは、あの凶悪な超巨大戦艦が地球に艦首を向けた。

そして、艦低部から迫出てきた巨大砲が火を吹いた。

その砲火は余りにも大きく、肉眼で直接確認できたほどだ。

「地球が・・・・」

「くそっ・・・・」

当然その巨大な砲火が放つ傷も直接肉眼で確認できた。

超巨大戦艦は初弾が命中すると、一度砲撃を止めた。

「敵、超巨大戦艦から地球圏全域に、全周波帯通信が発信されています！」

「繋げ」

「了解」

新見が通信回路を開くと、メインモニターに一人の人物が映った。

緑色の皮膚に白い頭髪と眉が繋がっている独創的な髪型を除けば、地球人と大差ない顔立ちだ。

年齢に換算すると、土方か藤堂辺りに相当するだろう。

テレサがヤマトに提供した白色彗星帝国の情報にあった、彗星帝国ガトランティスの国家元首、大帝ズォーダー・・・・

王者らしい際立った覇気とカリスマ性を持ち、あのアンドロメダ銀河を完全征服したという。

そのズォーダーが勝ち誇った顔で傲然と口を開く。

「ハハハハハハ・・・・どうだ、わかっただろう!?宇宙の絶対者はこの全能なるわしなのだ！生命あるものはその血の一滴までこのわしのモ

ノだ！宇宙はすべて我が意志のままにある！ワシが宇宙の法だ！宇宙の秩序なのだ！よって当然地球もわしのモノだ！ハハハハハハ・・・」
ズォーダーの高慢な演説を聞いた　まほろば、ヤマト、薩摩の乗員はズォーダーを睨んだ。
しかし、自分たちに出来たのはただ睨むだけしかない。
攻撃しようにもミサイルは全弾撃ちつくし、砲撃しようにも砲塔は全損、エネルギーも残り少ない。
（違う！断じて違う！）
良馬は我慢できなかったのか、果敢にもズォーダー相手に啖呵を切った。
「違う!!お前は間違っている！お前は宇宙の真理と平和を消し去ってしまう存在だ！我々は諦めない!!断固として戦う！」
「よかろう。だが、慢心傷つきエネルギーすら底をついた貴様らがどうやって戦おうというのだ？」
「っ!?」
「まぁ、そこで大人しく地球が滅びる様を見ているがいい!!地球が滅んだ後、貴様らも後を追わせてやろう。じっくりと時間をかけていたぶってな。ハハハハハハ・・・・」
ズォーダーは高笑いをしながら通信をきった。
「フフフ・・・大帝、ご覧になられましたか？無駄だとも知らずにまだ逆らうつもりですわ。まるで知能の低い、獣同然ですわね」
「・・・・」
サーベラーは、先程のズォーダーと良馬の通信のやり取りを嘲笑う。
「サーベラー・・・・」
ズォーダーは、ゆっくりと玉座から立ち上がり、サーベラーへと近づく。
その表情はほぼ無表情であった。
サーベラーへと近づいたズォーダーは腰に下げていた剣を抜くと、
グサッ

何の迷いも、一片の躊躇もなくサーベラーの体に突き刺した。
サーベラーを一突きし、剣を引き抜くと、彼女の血が付いた剣を一振りし、血を拭う。
「た・・・大・・・帝・・・」
サーベラーは一瞬自分の身に何が起きたのか理解できなかった。
それは近くに居た幕僚や兵士たちも同じで、皆は呆気にとられた顔でサーベラーの最後を見ていた。
何故自分は敬愛する大帝から刺されたのか？
彼女はその理由を知る前に絶命した。
「今度の都市帝国崩壊の件・・・責任を取るなら、総参謀長であるお前であろう!!無能めが!!お前の独断のせいで多くの兵士たちが命を落としたのだからな!!」
絶命し斃れたサーベラーに向かってズォーダーはまるで虫けらを見るかのように言い放った。
この場に居る幕僚の中で、一番地位の高かった幕僚はサーベラー一人だった。
もし、此処にラーゼラーかゲーニッツが居れば、彼女は持ち前の口八丁で、どちらかに罪を擦り付け、切り抜けられたかもしれなかった。
「砲撃を再開しろ!!」
「はっ!!」
サーベラーを粛清したズォーダーは地球への砲撃を再開した。
超巨大戦艦、ガトランティスの下部から強大な大砲が姿を現すとその巨大な口径から放たれる莫大なエネルギー砲は地球へと降り注がれ一撃で小さな島を吹き飛ばし、町を一瞬のうちに消滅させていった。
「もはや・・・これまでか・・・」
半壊した宇宙軍司令部で藤堂は呟いた。
「艦長、艦内各部に誘爆が広がって危険だ!!負傷者も応急処置ではもう手におえん!!」
ディアーチェから艦の状況報告を聞き、
「・・・副長、現在の生存者は？」

「重傷者を含め、二十数名です・・・・」
「そうか・・・・総員退艦準備」
「艦長？」
「勘違いをするな、副長。戦いを諦めたわけじゃない。薩摩は健在か？」
「あちらの艦も中破しています。ですが、航行には支障がありません」
「通信機能は？」
「不安定ですが、短い通信でしたらなんとか可能かと・・・・」
「では、薩摩に退艦者の受け入れ態勢をとってもらえ・・・・総員退艦準備!!」
　何本もの白煙の尾を引き、ボロボロになった　まほろば　の艦内は慌ただしさを取り戻していた。
「副長、君は第一陣の指揮を執れ」
「はい」
「航海長は第二陣を」
「了解」
　こうして、慌ただしく乗員は退艦準備へと入り、内火艇、救命艇には次々と負傷者が運ばれる。
　内火艇や救命艇は水平離着陸が可能な機体だった為、ボロボロ状態の甲板からでも何とか発艦する事が出来た。
「井上さん・・・・」
「ん？何じゃ？」
「こんな結果になってしまって残念でたまりません」
　良馬は機関室にて負傷した井上に肩を貸しながら、格納庫へと向かっている。
「言うな。お前さんはよく戦ったよ」
「・・・・」
「地球はもう星として駄目かも知れぬ・・・・しかし、他の星に移住してでも生き残らねばならん!!生きていれば、いつかは仇をうてるかもしれん!!これからが踏ん張りどころじゃぞ」
「井上さん・・・・そうですね」

（ん？艦長？）
　良馬は井上の言葉を聞き、ニッコリと微笑むが、この時、井上には言い知れぬ不安感を抱いていた。
「艦長、これが最後の脱出艇です。早く乗ってください!!」
　フェリシアが脱出艇から身を乗り出して良馬に乗艇するように言う。
　脱出艇に乗った良馬は、艇内を見渡し、
「ん？ギンガとリニスは？」
　と、二人の行方を訊ねる。
「二人とも最初の便で脱出したのではないですか？あの便には重傷者が大勢乗っていましたし・・・」
「そうか・・・」
　フェリシアの予測に良馬は、どこかホッとした様子を見せ、
「井上さん」
「ん？」
「井上さんには色々お世話になりましたね」
「何を言うんじゃ？突然。なぁ、艦長。生き延びよう・・・どんなことがあってもな」
「え、ええ・・・」
　井上を担架の上に横たえて、良馬は脱出艇の操縦席でコンソールを弄り自動運転に設定すると、彼は脱出艇を飛び降りた。
「艦長！艦長！」
「あのバカ者が!!」
　フェリシアが『艦長！』と叫ぶが、自動運転に固定された脱出艇は操縦もきかず、井上とフェリシアに出来るのは敬礼し遠ざかる良馬の姿をただ見ているしか成す術がなかった。
　艦橋へと戻った良馬は艦長席へと座り操縦系統を艦長席へと移した後、針路を地球へ砲撃を行っているガトランティスへと向けた。
（誘爆が広がっている　まほろば　を一つのミサイルとして敵戦艦へと体当たりを行い、完全破壊は出来なくともせめてあの主砲だけは潰さなければ・・・）

残り僅かのエネルギーを機関へと流す為のバイパス作業を行いながら、ガトランティスを睨む良馬。
（政府の降伏命令に背き、大勢の地球市民を危険な目に合わせた・・・その責任は俺にある・・・）
（忍さん・・・ノエル・・・リニス・・・ギンガ・・・すまない・・・）
発進シークエンスを終え、後は艦を動かそうとした時、もう自分以外誰も居ない筈の艦橋に人の気配を感じた。
「っ!?」
まだ人が残っていたのかと思い、気配のする方向を見ると、其処には、
「ギンガ・・・それにリニスも・・・」
其処には山猫状態のリニスを抱いたギンガの姿があった。
「なんで・・・なんで・・・二人ともまだ残っている？」
震える声でギンガとリニスに訊ねる良馬。
「良馬さんならきっとこうすると思っておりました・・・」
「バカな・・・何故・・・何故そうも死に急ぐ・・・」
「それは貴方も同じですよ。マスター」
山猫状態だったリニスが人型モードになる。
ただ、最小限の魔力なので普段の成人ではなく、紅葉の様な少女モードであった。
「それに良馬さんが居ない地球に居ても何の意味もありませんから・・・」
ギンガの目には涙が浮かび始めた。
彼女には地球で待っている家族が居る。
それなのに、ギンガに先程の様な言葉を言わせてしまい、ギンガに対して罪悪感が生まれる。
「すまない・・・ギンガ・・・リニスもこんなダメなマスターに付き合ってくれてありがとう・・・」
良馬はギンガとリニスをギュッと抱きしめた。
「いえ、私には勿体ないくらい貴方は立派なマスターですよ」
「これからはずっと一緒ですよ・・・」

「ああ・・・ずっと一緒だ」
三人は共に死を覚悟した。
良馬は艦長席に座り、その後ろに新たに座席を設け、其処にはギンガが座り、リニスは再び山猫状態になり、良馬の膝の上に居る。
「両舷全速・・・目標、敵、超巨大戦艦・・・地球人の意地、連中に見せてやる!!」
良馬がレバーを引くと、まほろば　はゆっくりと動き出した。
既に焼き切れる寸前のエンジンは断末魔の様な轟音を立てている。
敵が地球攻撃に躍起になっている間にあの無数の砲塔の死角に入り、下部の巨大な砲塔を潰せれば・・・。
その頃、ヤマト　も　まほろば　同様に、乗員を退艦させ、隙を見て脱出艇から飛び降りた古代と古代の行動を読んで、退艦せずにヤマトに残っていた雪の二人を乗せて、体当たりを行おうとしていた。
その時、まほろば　の右舷前方に、黄金色がかった光球が出現した。
「待って下さい・・・」
突然脳内に女性の声が聞こえた。
「これは・・・?」
「念話?でも一体誰が・・・?」
突然聞こえてきた女性の声に戸惑う良馬たちであったが、モニターに突如、青いドレス姿で金髪碧眼の若い女性の姿が映った。
「貴女は・・・もしかして・・・テレサ?」
「この人が・・・」
テレザートに辿り着いたヤマトが地球へ送ったデータの中に今、モニターに映っている女性の事もあったが、こうして本物を目の当たりにしたのは、これが初めてなので、この女性がテレサなのか確認した。
「はい・・・地球の皆さん・・・ヤマトの皆さん・・・待って下さい・・・」
「テレサさん・・・生きていたんですね」
てっきりテレザートと共に死んでしまったかと思ったテレサが今、自分たちの目の前に居る。
雪はテレサに確認するかのように訊ねる。
しかも、

「はい・・・島さんを届けに参りました・・・・」
　木星圏でのガミラスとの白兵戦時にて行方不明となったヤマト航海長の島を連れていた。
「貴女が島を・・・・」
「島さんの命は取り留めました・後はあなた方の手で地球へ送り届けてください・・・・」
　テレサは目に見えて弱っていた。
　それは自分の血液を限界ギリギリまで島に輸血した為であった。
　テレサはヤマトの第一艦橋に転移し、そこで古代と雪に島を託した。
「ズォーダーとの決着には私が参ります・・・・あなた方が生きて地球へ帰る事が、地球の未来に繋がるのです。勝って帰るよりも負けて帰る事の方が、勇気が居る事なのですよ・・・・さようなら・・・・古代さん・雪さん・・・・地球の皆さん・・・・さようなら・・・・」
「テレサ!!」
　テレサはそう言い残し、ヤマトから消えた。

　超巨大戦艦　ガトランティス　艦橋　兼　王座の間
「フハハハハハ、アハハハハハハ。愚か者の地球人どもめ！死ぬがいい！滅びるがいい！ハハハハハハハハ・・・・・・」
　ズォーダー大帝は高笑いしながら主砲を撃ち続け、地球を破壊しつくしていると前方から眩い光を放つものが現れた。
「ん？」
　ズォーダーが目を凝らしてその発光体を見る。
　発光体の中心には青いドレスのような服に身を包んだ金髪の女性がいた。
　その女性の姿を見た途端、ズォーダーの顔からは先程まで浮かべていた余裕の笑みが消え、逆に脂汗が滲み出て顔色も悪くなる。
「テ、テレサ・・・・い、生きていたのか・・・・!?」
　ズォーダーがこの世で唯一恐れる反物質を操る能力を持つ女、テレサ・・・・。

テレザート星もろとも宇宙の塵にしたと思っていたズォーダーにとって彼女が生きていたことが凄まじい戦慄と恐怖を覚えさせる。
しかも彼女の表情はテレザートの時以上に怒りを露わにしている。
「こ、攻撃止め！反転１８０度！」
彼は震える声でこの宙域からの撤退を命令する。
ガトランティスは地球への無差別砲撃を止め、その巨体を反転させて全速で地球から遠ざかる。
しかし、テレサとの距離は一向に開かず、どんどん縮まっていく。
「どけ！」
ズォーダーはガトランティスの舵を取る操舵手を押しのけ、自ら舵を握るがそれは無駄な抵抗に終わり、テレサが自らの命と引き換えに放った膨大なエネルギーはガトランティスを飲み込む。
「うわぁぁぁぁぁぁぁー!!」
ズォーダーの絶叫と目映い閃光と共に超巨大戦艦ガトランティスは跡形も無く消滅した。
ガトランティスが消滅し、引き起こした閃光を見ながら自らの命と引き換えに地球を救ってくれたテレサに対し古代、雪、良馬、ギンガは敬礼を捧げた。

半壊した地球防衛軍司令部では、
「よく調べろ。ワープ反応はあるか!?」
「ありません！」
「映像を微速再生してみろ!!」
「はい！」
藤堂がオペレーターにあの超巨大戦艦がワープにて他の星系に脱出したのか、それとも完全に消滅したのかの確認を急がせた。
モニターには、黄金色の光を纏ったテレサと敵の超巨大戦艦がぶつかった映像がゆっくりと流れる。
そして、あの超巨大な戦艦がまるで硫酸に浸され、溶けていくかのように消滅していく映像が流れた。
「・・・非の打ち所がない、完璧な撃沈・・いや、消滅だな・・・」

「はい・・・・」
藤堂は深く息をつき、椅子に腰かけた。
超巨大戦艦消滅からすぐに木星圏で戦闘中だった彗星帝国軍の艦隊も第十一番惑星へと撤退を開始したと、ガニメデ基地から連絡が入った。
「大統領に報告を・・・・」
「はい」
オペレーターは早速大統領へ電話を入れ、敵の超巨大戦艦撃沈の報を入れた。
その三十分後に世界中継で大統領自らが会見を開き、地球の脅威は去った事を伝えると地球市民は歓喜の声をあげた。
地球中が歓喜の声をあげている中、藤堂は未だに顔を強張らせていた。
未だ地球の制宙圏には、彗星帝国の残党が存在している。
それらの艦隊がまだ存在している内は地球の脅威は完全に取り除かれていないのだから・・・・。
そして、またもや壊滅状態の地球防衛軍の再建等、色々課題が山積みとなっていた。
テレサの特攻により超巨大戦艦、ガトランティスは消滅し、地球はまたもやギリギリの所で救われた。
満身創痍となったヤマト　と　薩摩　は地球へと帰還した。
しかし、まほろば　の方は帰還途中、エンジンの方が遂に限界を超えた為、急遽、タグボートを要請し、地球へ無事に帰還する事が出来た。
時に西暦２２０１年、秋の事であった・・・・。
地球は再び静かな平穏を取り戻した・・・・。
しかし、そのために払った代償はあまりにも多く、大き過ぎた・・・・。
地球が今回の事を教訓とし、再び力をつけるには莫大な時間が必要となる事となった・・・・。

此処で舞台は地球近海からはミッドチルダに移る・・・

ミッドの北半球の一角にあるベルカ自治領首都、ザンクト・カイゼルブルグの郊外の丘に建つ壮麗な建物・そこは管理世界最大規模を誇る宗教、聖王教の総本山たる聖王教会本部がある。

其処には多くの修道女、神父、教会騎士がおり、その実力は時空管理局の武装隊に拮抗している。

更にあのＪＳ事件の際、逮捕された後、厚生施設で更生教育をした戦闘機人たちの内、セイン、オットー、ディードの三人もこの教会で修道女見習いとして此処に住んでいる。

その数多く居る教会騎士の中で、高い地位に君臨する一人の女性が居る・・・。

カリム・グラシア。

彼女は、穏やかな雰囲気を持つ二十代前半と思しき女性修道騎士であるが、とある先天的稀少資質（レアスキル）の持ち主で、教会内部のみならず、管理局からも注目されており、自身も管理局本局において将官待遇の権限を持つ。

そして彼女はあの奇跡の部隊、機動六課の後見人の一人でもあった。

そもそも、あの機動六課が生まれたのは、はやて　の希望の他にＪＳ事件を予知していたカリムの預言があったからだった。

ただあのＪＳ事件以降、彼女のレアスキル・・・数年先までに発生し得る物事を予想できてしまう、プロフェーテン・シュリフテンは発動する事が無かったのだが、

この日、その能力が突然発動した。

カリムは直ぐさま机上の便箋に〝預言〟を走り書きで記入していくのだが、書き終えた後、穏やかだったその表情は強張っていた。

「っ!?これは・・・!?」

彼女がペンを走らせた便箋・・・。

其処に書かれた予言には以下の言葉が書かれていた。

法の舟、星の海を行く時、
忌みし力により業火に覆われ焼かれる。
法と管理の番人、地の界の防人と出会いし時、
番人は己の力を知る・・・・。
されど、番人はその力を認めず、
番人たちは、更なる混沌の渦にのまれる。

カリムは急ぎ、自分の秘書兼護衛役である修道女、シャッハ・ヌエラを呼び、管理局の中でも交友が深い　八神はやて　にコンタクトをとった。
カリムのレアスキル、プロフェーテン・シュリフテン（予知能力）が発動したと知った　はやて　は　フェイト　と共にカリムの待つ聖王教会へとやって来た。
「カリム、預言が出たってホンマか？」
「ええ・・コレがそうよ・・・・」
そう言ってカリムは、予言を書き記した便箋を　はやて　と　フェイト　に見せる。
「・・・・」
はやて　と　フェイト　は無言で便箋に書かれた預言を読んでいく。
そして、読み終えた後、早速予言の解釈へと入る。
「この『法の舟』は管理局の次元航行艦だね」
「そうやね。そうすると当然『法と管理の番人』は管理局員・・・・管理局の事やな」
「『忌みし焔により業火』・・これはやっぱり・・・・」
「十中八九、質量兵器の事やろうな・・・・」
「ここ最近多発している管理局の次元航行艦遭難事件が関係しているのかな？」
「多分そうやろう・・・・でも・・・・」
「『更なる混沌の渦にのまれる』・・・・これはこの先、次元航行艦の被害がもっと増えるってことだよね？」

「うん。そうかもしれへん。それと・・・」
「『地の界の防人』・・・これはどういう意味だろう？」
「異世界の軍事勢力の軍人か・・・あるいは管理局みたいにそれに準じる組織の人間ということやろうね・・・」
「『己の力を知る』って、その軍事勢力かその人たちに会って、管理局は何かを知るってことかな？」
「今は何とも言えへんけど・・・なぁ、フェイトちゃん」
「何？」
「今度、新人の執務官と補佐官を中心に次元航行艦での遠洋研修があるんやろう？」
「うん。私もティアナも参加する予定だよ」
「あれ、延期した方がええんとちゃうか？」
　はやて　の言う研修にはベテラン執務官となった自分（フェイト）の他に六課卒業後、補佐官になった元六課、ＦＷ陣スターズ分隊所属のティアナ・ランスターらが参加する遠洋研修である。
　しかし、最近多発している次元航行艦の遭難事件。
　この不吉な予言。
　はやて　には何か嫌な予感がして溜まらなかった。
　その為、正規の活動ではなく、新人の研修である今度の航海はもう少し事態の収拾がつくまで延期にした方が良いのではと　はやて　は　フェイト　に提案した。
「そうだね。私からも義母さんに頼んでみるよ」
　と、フェイトは後日、研修について義母（リンディ）にこの事を伝え、リンディは本局にこの事案を提出した。
　しかし、リンディからの提案は、却下された。
　本局は次元航行艦の遭難が多発しているにも関わらず、
「多発しているからこそ、今は一刻も早く優秀な人材を育てなければならない」
　と、言ってきたのだ。
　更に今回フェイトたちが乗艦する巡航艦、テリオスもつい最近、大規模な人員異動があり、艦長を含めクルー全員が他の部署や他艦から

の異動メンバーで構成されており、クルーの育成も今回の研修に含まれていた為、どうしても延期は出来ないと言うのが理由だった。
　そこで、リンディらは研修の中止が出来ないのであれば、護衛の艦を着けて欲しいと要望を出したが、本局は、
「たかが、新人研修の為に、大事な艦船をそのような任務に就かせる余裕は無い」
「それに研修する海域は管理局の管理海域なので、敵の襲撃等ある筈がない」
　と、言う回答があり、テリオスは、当初の予定通り、単艦で研修に望む事となった。
　フェイトとリンディが不安を抱く中、予定通り研修は行われる事となり、研修の準備は進められた。
　そして、時は流れテリオス出航当日・・・
　研修に使用する次元巡航艦、テリオスが停泊しているドックにて、はやて、なのは、ヴィヴィオがフェイトたちの見送りに来ていた。
「すまんなぁフェイトちゃん。私の方でも今回の研修は延期にした方が良いと提案書を提出したんやけど、やっぱり却下されてしもうて・・・」
「気にしてないよ。それに今回の研修する現場は管理世界内の海域だから大丈夫だよ」
「・・・」
　フェイトは大丈夫だと言うが、はやてたちにはやはり一抹の不安が付き纏う。
「フェイトママ、いってらっしゃい。早く帰ってきてね」
　ヴィヴィオ　も　はやて　の不安を感じ取ったのか、フェイトに抱き付き、早く帰って来てほしいと願う。
「うん。私が帰ってくるまで、なのはママと良い子にして待っているんだよ。ヴィヴィオ」
「うん」
　フェイトはしゃがんでヴィヴィオと目線を合わせながら彼女の頭を優しく撫でる。

「フェイトちゃん・・・」
なのは　も　はやて　からカリムの予言の事を聞いており、やはり今回の研修には不安な様子だった。
しかも今回は親友のフェイトだけではなく、教え子のティアナも参加するのだ。
万が一にも二人の身に何かあったらと思うと心配と不安が尽きない。
なのは　は　はやて　以上に二人の身を案じ、不安で一杯だった。
「なのはは心配性だね。大丈夫、すぐ帰って来るから。それまでヴィヴィオの事、お願いね」
「う、うん・・・」
「フェイトさん、出航時間みたいです」
出航時間になり、ティアナがフェイトにその事を告げる。
「わかった。それじゃあ、行ってきます」
「いってらっしゃい」
ヴィヴィオが手を振り、フェイトとティアナを見送る。
「いってらっしゃい。ティアナも気を付けてね」
「はい」
二人はテリオスへと乗艦し、予定通り時空管理局所属の巡航艦、テリオスは新人研修の為、本局を出航していった。
しかし、これが新たなる悲劇と出会いのきっかけとなる事をこの場にいる誰もが予測をしていなかった・・・・。

運命と言う名の歯車は動き続ける・・・・。
人はただ・・・・
その動きの中に・・・・
身を委ねてしまう・・・・

三十五話　凱旋にあらず、英雄にあらず

タグボートに引かれ、まほろば　が地球に帰還したのは、敵の超巨大戦艦の消滅から約五時間後の事だった。
ドックには多くの市民やマスコミが詰めかけている。
声こそ聞こえないが、スクリーンに映る市民は皆明るい表情をしている。
市民のあの笑顔を守ることができただけでも、命令を無視して戦った価値はあるが、我々は勝ったわけではない。
地球防衛軍はやっと再建の目途がたったにも関わらず、たった一回の戦闘でまたもや壊滅に近い打撃を受けた。
元々数が少なかったとは言え、ガミラスとの戦争では八年～九年の歳月を要したが、彗星帝国との戦争では一年も経っていない中での今回の防衛軍の壊滅。
負けはしなかったが、これが勝利とはとても言えない状況だった。
しかし、後世の歴史の教科書には恐らく「勝利」と言う言葉が使われてしまうだろう。
ヤマトが命令違反を犯してまでテレザートに赴き、白色彗星帝国の情報を仕入れてもなお、これだけの被害を出してしまった。
もし何もしないままでいたら、地球人類は知らぬ間に彗星帝国に蹂躙され、彼らの手によって絶滅か奴隷化されていたはずだ。
我々地球人類は、何が誤っていたのかを真剣に省みて改善しないと次はもうないかも知れない。
宇宙艦船用ドックに着岸した　まほろば、ヤマト、薩摩　で最初に下艦したのは負傷者、その次に今回の戦闘で無念の戦死を遂げた勇敢なる宇宙戦士たちだった。
良馬、ギンガ、リニスの三人は　まほろば　から降ろされていく彼らの棺を身じろぎひとつせず、敬礼して見送った。
岸壁では、薩摩　まほろば、ヤマト　を下艦した乗員たちが家族や恋人、友人を見つけて再会を喜ぶ者がいる。

今回の戦闘において遺体すら還らない者が大部分なのだから、生還ともなれば喜びもひとしおだろう。
しかし、悲しみの表情で動かない者、泣き崩れる者の方が多かった。
良馬、ギンガ、リニスの三人はその光景を　まほろば　の甲板から見ていた。

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ・・・・

カーテンの隙間から朝の陽光が差し込んでいる。
アラームが鳴り始めてから約三十秒後・・・・
「うっ・・・・くっ・・・・んっ・・・・？」
もぞもぞと動く手がアラーム音を鳴らしている目覚まし時計に伸び、アラーム音を止めた。
「ん～・・・・」
良馬はまだ疲労感が残る身体を起こした。
そしてチラリと隣を見る。
そこには、毛布にくるまった長い藍色の髪をした女性・・中嶋ギンガが眠っていた。
あの後、良馬たちは生きて戻る事は無いと思っていた地球に再び戻った。
まほろば　が係留されたドックには、月村家の面々が迎えに来てくれた。
互いに積る話はあったが、良馬もギンガもリニスも今は休息を欲した。
そこで、三人は良馬の実家、月村家の屋敷へと向かい、休息をとる事とした。
ギンガは中嶋家へ送ろうとしたが、本人が良馬と一緒に居たいと言って、実家の中嶋家にギンガの無事を伝え、月村家へと向かったのだ。
月村家の大きな風呂で疲れを癒し、ノエルの心尽くしの手料理を食

べた後、寝室へと向かった。
夜、眠ろうとしてもあれだけの体験をして疲れ切った筈なのに良馬はなかなか寝付けなかった。
そんな良馬の下にギンガが訊ねてきた。
ギンガも良馬同様、なかなか寝付けなかったらしい。
それから二人はあたかも当然の様に体を重ね合った。
いつぞや、ディアーチェが言った、「食べる事は生きている者の特権である」その言葉も身に染みたが、今の良馬とギンガは、こうして体を重ね合う事で互いの温もり、生きている事を確認しあった。
そして良馬は此処でようやく土方を始めとする今回の戦いで死んでいった多くの戦友たちに涙を流した。
そんな良馬にギンガはあやすかのように良馬を抱きしめ、彼の頭を優しく撫でた。
心地よい温もりの中、ようやく良馬は眠る事が出来た。
目が覚めた良馬は、未だに眠るギンガの前髪をすく。
「んっ・・・・んぅ～・・・・」
ギンガは少し、身をよじるが起きる気配はない。
そんなギンガの様子に良馬は、クスッと笑みを浮かべ、もう少し見ていたかったが、そろそろ朝食の時間なので、ギンガを起こす事にした。
「ギンガ、起きて、朝だよ」
「・・んん？良馬・・さん？」
「うん。おはよう、今日もいい天気だよ」
寝ぼけ眼を擦りながら起き上るギンガ。
起き上がった為、ギンガの身体を隠していた毛布がスルっとその身から落ち、ギンガの美しい裸体を露わとさせる。
「っ!?」
その事に気が付いたギンガは慌てて毛布を手繰り寄せ、自らの身体を隠す。
「別に隠さなくてもいいじゃないか。互いに何度も見てきた仲なんだし・・・・」

「でも・その・やっぱり、そうマジマジと見られると・・・」
「やっぱりギンガは可愛いな」
良馬は、顎先をくいと上げさせると、顔を寄せていった。
その意図を悟ったギンガは受け入れるように目を閉る。
そして、音もなく唇と唇は触れ合った。
触れ合う時は一瞬で、されど心が繋がるのは無限の時にも思える。
時間はたったの数秒。
二人の音もなく唇は離れた。
朝食の最中、月村家に一本の電話が入った。
掛けてきたのはこの地球におけるギンガの父、中嶋源三郎からだった。
「明後日、ヤマトの幹部乗組員に対する査問会議を行うことになった。君も証人として出席するようにとのお達しだ」
「分かりました。でも、随分早いですね。それに軍法会議ではなく、査問会とは・・・」
最初のヤマトの脱走は兎も角、政府の降伏命令を無視して戦闘に持ち込んだ事から本来ならば自分も共犯でその査問を受ける身となって居る筈だ。
いや、ヤマトの脱走を見逃している点で、自分も共犯だったのだ。
同じくヤマトを追撃した土方は彗星帝国との戦いで戦死しているので、ヤマト脱走の件に関しては、自分が最高位となっている。
そう言う意味では当然出席もするし、処分は甘んじて受けるつもりでいたから一向に構わないが、彗星帝国との戦闘が一応終結してからまだ日が経っていない。
「まっ、大人の事情という奴さ」
源三郎は些か肩を竦める。
「軍は保有していた戦力の大半を失った。そのため、直ぐに再建に入らねばならない。そのためには、再建の足枷になり得る事は早々に片付けておかなければならないのだよ」
「はぁ・・・」
良馬は源三郎の説明に頷く。

確かに彗星帝国の国家元首であるズォーダーは斃れた。
しかし、彼らの支配域はアンドロメダ星雲にあると推定されており、新たな君主が地球に対する報復戦ないし仇戦を企てる可能性がある。
それに、彼らは第十一番惑星の兵站基地を再建し、そこに太陽系内の残存戦力を集結させている。
連中がいつ地球への反攻をしてくるか分からない。
それにガミラス、白色彗星帝国・・・そして、ギンガがかつて所属していた時空管理局・・・少なくとも三つの星間国家が存在したのだ。
今後も新たな好戦的かつ侵略的な勢力とぶつかり合う可能性も否定できない以上、戦力の再建は必須だ。
その為には今回の戦争の反省と教訓のフィードバックは欠かせない。
（ヤマト脱走の件に関しては、真相に近い部分が市民に知られており、軍上層部に対する批判が強くなっているため、上層部が古代君達を処断することは無いだろうが、メンツを潰されて収まりがつかないお偉方も居るだろうし・・・）
信賞必罰は軍の鉄則であるが、今、ヤマトの幹部を処分すれば、それこそ彗星帝国ではなく、連邦市民の手によって今の政府は倒れるかもしれない。
市民にとっては、政府は降伏を受諾した腰抜け、ヤマトは自分たちを絶望から救ってくれた英雄（ヒーロー）なのだから。
（まぁ、精々厳重注意と減俸ぐらいが妥当だろう。自分も手を貸していたからな・・・俺も何らかの形で償わないとな・・・）
そう思い、良馬は源三郎と今後の日程確認に入った。
源三郎と日程確認を終え、朝食を食べた後、良馬は軍本部に出頭した。
長官室前の通路では、既に古代も来ていた。
「月村艦長、古代艦長代理、どうぞ中へ・・・」
長官付秘書に呼ばれ、古代と共に長官室に入り、一連の戦闘の報告を行った。

「本来ならば、ゆっくり休ませてやりたいのだが、今は防衛軍の再建が急務なのでな。すまないと思っているが、来月には宇宙戦士訓練学校と士官学校の卒業を早め、卒業生たちを早期に任官させる。君達にはまた出てもらうことになりそうなのだ」
　藤堂の言葉に良馬と古代は頷く。
「それともう一つ話があるのだ。特に古代、君にだ・・・」
　藤堂は話題を変え、いくらか声を低くした。
「無許可発進、停戦命令を無視しての戦闘行為のことですね？」
「うむ・・・」
　古代の言葉に藤堂は頷く。
「あれは間違いなく私が主導しました。査問委員会でも軍法会議でも逃げるつもりはありません。ですから、早急な開催と厳正な処分をお願い致します」
　古代は甘んじて処分を受け入れる覚悟の様子である。
「それについては、ヤマト追跡時に虚偽の報告に関係した小官にも責任があります。土方司令亡き今、自分も相応の責任を負う義務があります。それに停戦命令無視での戦闘行為についても同じです」
　藤堂はしばし沈黙してから、
「その件については、二人とも知っているだろうが、明後日に査問会が開かれる。詳しい処分はその時に通達される」
　と回答した。
　後日、開かれた査問会では、藤堂をはじめとする防衛軍の上層部の他、地球連邦政府大統領を含む、地球連邦政府の高官までもが出席した。
　一戦艦乗組員が引き起こした事件の裁定に連邦政府大統領自らが関与するのは異例中の異例で、今までの防衛軍史上初となる事例となった。
　まぁ、それだけ今回のヤマトの地球脱走問題、防衛軍残存艦隊による徹底抗戦はデリケートな問題なのだ。
　呼ばれたのはヤマトの中で、古代と雪の二名。
　ヤマト脱走時の折、追撃した　まほろば　の艦長である良馬。

そして彗星帝国との徹底抗戦を行った薩摩の艦長や副長らが出席した。
午前中に一人ずつ聴聞を実施された。
その中で良馬は、ヤマト脱走事件についての質疑応答で、
「月村艦長は、ヤマトと交戦する意図はありましたか？」
と、質問された。
「命令に従うのが軍人の本分ですから、『やれ』と言われればやりますが、勝ち目は薄いと思っていました。カタログスペックだけならば、アンドロメダ、まほろば　は確かにヤマトの性能を上回っていたでしょうが、戦闘は機械やコンピューターではなく、人間がやるものです。ヤマトは元々長距離用移民船の為、その防御力は防衛軍艦艇の中でも随一のレベルです。更にその艦を動かすのは、あの大航海の経験者たちばかり・・・イレギュラーな事態への対応力は防衛軍一優秀といえましょう。翻って当時の　まほろば　の乗員は幹部を除く、大半は実戦未経験者で、計画していた訓練カリキュラムの半分にも満たない状態でした。それは共にヤマト追撃に出たアンドロメダも同様です。そんな状態でまともに戦っても勝てる見込みはありませんでした」
良馬は当時の乗員のレベルとヤマト乗員のレベルの違いを指摘し、艦船のカタログデータのみでは、実戦では役に立たない事を説明した。
次に、良馬はあの時共にヤマトを追撃した土方についての質問を受けた。
「土方総司令はヤマトと戦う意思はなかったと思いますか？」
「正直な所それは分かりかねます。土方提督の考えは土方提督にしか分からないでしょうから。ですが・・・」
「ですが？」
「ですが、土方提督は恐らくヤマトを撃沈する意図はなかったと思います」
「その根拠は？」
「ご存じのとおり、土方提督は最近まで宇宙戦士士官学校の教官と校

長を勤められ、古代進艦長代理やこの私も提督の教育を受けた一人です。課する訓練、教練には一切妥協を許さない人でしたが、厳しいカリキュラムを通じて、教え子ひとりひとりを実に事細かに見ておられました。土方提督は、古代進艦長代理を始め、ヤマトの第一艦橋要員の性格を知っているが故に、彼らの覚悟の度合いを量っていたのではと私は推察しています・・・まぁ、それが的を射ているかどうかは、私は土方提督ではないのでわかりませんが・・・」

その後、良馬は何故政府が彗星帝国に対して、降伏を受諾したにも関わらず、徹底抗戦をしたのか等色々聞かれた。

良馬は毅然とした態度で聴取に臨み、自分の意見と意思を貫いた。

関係者全員からの事情聴取を終え、その結果を委員会のメンバーで審議が行われ、そしてその日の夕方には裁定が出た。

処分内容はやはり良馬が思った通り、厳重注意と減俸による比較的軽い処分で、戦死者においては全員二階級特進とし、特進階級で遺族には遺族年金を支給する事となった。

減給カットされた分の俸給は戦没者遺児・戦争孤児育英事業基金に寄付するらしい。

「大人の事情だな」

裁定結果を聞いた良馬は源三郎と同じ一言を呟いた。

また、ケガを押して査問会に出席した西郷参謀長は、自らの浅慮が原因でこのような事態を招いた、と自らに対する懲罰会議開催を希望したが、大統領と藤堂司令長官が強く慰留したため続投が決まった。

但し、本人の強い希望もあって、厳重注意と委員手当全額＋俸給２０％を育英基金に寄付する事となった。

翌日、良馬は連邦中央病院へ向かい入院中の乗員の見舞いに訪れた。

その際、良馬は年長者の井上から二時間ほどこっぴどくお説教を受ける羽目となった。

「ん？あれは・・・」

病院の通路にて、良馬は見慣れた後ろ姿を見つけ声をかけた。

「おーい、古代君」

「あっ、月村さん」
振り返った古代の頬は少し赤く腫れていた。
「どうしたの？その頬・・・？」
「あっ、いや、あははは・・・」
古代は乾いた笑いで誤魔化している。
良馬は不審に思い、近くの病室を見渡すと、その病室には『真田志郎』と書かれていた。
（成程、真田さんに鉄拳制裁を食らったか・・・）
病室で何があったかを何となくだが、察した良馬だった。
その後、古代は佐渡に捕まり、良馬同様長々と佐渡の説教も受ける羽目になった。
その様子を看護師として非常勤していた雪は苦笑しながら見ていた。
病院を後にし、まほろば　がある月村造船第二宇宙船ドックへと来た良馬。
その月村造船では、以前よりも技師や作業員たちが忙しそうに造艦作業に追われていた。
しかし、月基地を始めとし、火星～第十一番惑星までの基地は彗星帝国に破壊されてしまい、資源採掘が現在行われていない状況下、造艦に必要な資材はあるのか、と言う問題に関しては、苦肉の策として木星～土星にかけての宙域に漂う防衛軍と彗星帝国の艦艇の残骸を回収し、それらの残骸から艦船の建造へとあてられた。
またあの巨大戦艦の無差別砲撃で建造中の艦船が少なからず破壊されており、それらの艤装予定品や部材等が余剰になってしまった為、それらの資材は取り急ぎ修復中の艦に流用されている。
更に以前良馬が第十一番惑星にて鹵獲した彗星帝国の空母や駆逐艦同様、損傷が軽いまま遺棄された旧白色彗星軍艦は接収して、詳しく調査が行われ改造した後、防衛軍艦艇の一部に組み込む予定だ。
敵国の艦艇だから嫌などと言っている場合ではない。
造艦技術者曰く、白色彗星帝国の艦は長距離侵攻作戦に使用されるので、居住性は地球艦より良好だと言う。

「おお、月村。来たか」
「大山さん」
　良馬が声のした方に振り向くと、其処には小柄で蟹股、瓶底眼鏡をかけた一人の男がいた。
　この男の名は大山歳郎。
　真田と古代の兄、古代　守とは士官学校の同期で真田と同じ技術者でもあった。
　しかし、真田を正統派な天才技術者と例えるならば、大山は奇才・奇抜な天才技術者だった。
　月村グループはこれまで何度か大山に様々な技術開発を依頼しており、その関係で良馬は大山と面識があった。
「何故此処に？」
「ああ、まほろば　の修理にあたっては俺も協力していてな」
　大山は自分が修理状況を説明すると言って技術者に代わり、良馬を案内した。
　大山は　まほろば　の修理状況の他に現在の防衛軍の状況を良馬に話す。
　それによると、アンドロメダ級二番艦、ネメシスの他にも後続のアンドロメダ級三番艦のアルデバラン以降の建造とアンドロメダ・改級の戦艦の建造も今現在進められているとの事だった。
　ただし、アンドロメダ・改級に関しては他艦への資材の流用の為、約半年は就役が遅れる見込みらしい。
　艦内巡検の最中、
「そうそう！お前が遭遇した、時空何とかの難破船、ありゃなかなか面白そうな船だな！」
「時空管理局ですよ。それで、どこまでの事が分かっているんですか？」
　白色彗星帝国との決戦直前だったこともあり、本格的な調査はこれからしいが、大山はかなり張り切っているようだ。
　まぁ、それは艦に関しての話で、
「しかし、紅葉ちゃんや桜花ちゃんと同じ位の子供が多く死んでいた

のは不愉快だったな」
と、時空管理局の組織としての在り方には不快感を露わにしていた。
「ええ、正直、信頼に値する組織なのか疑問な所です」
ギンガがこの世界に漂流した経緯やまだ義務教育中である筈の年齢の少年少女を危険な宇宙の任務に平気で就ける様な組織だ。
簡単に信頼を寄せる事が出来るのかはまだ判断出来ない。
そもそも地球連邦政府は未だにその時空管理局とは正式に交流を持っていなければ、コンタクトもとっていない。
時空管理局がガミラスや彗星帝国の様にいきなり地球連邦政府に対し、無条件降伏を迫ってくるとは思えないが、まだ得体の知れない組織故に警戒だけはしておいた方が良いだろうと思った。
「艦内の残留放射能を解析したんだが、解析の結果、彗星帝国の攻撃を受けていた様だ」
「やはり、彗星帝国が彼方此方の宇宙を征服していたと言う証明になった訳ですね」
「ああ、早いとこ、軍の艦船を揃えないとな、何時十一番惑星に居る連中の反攻があるか分からないからな」
「ええ・・・」
その後艦内巡検を終えた二人は、
「大山さんはこれからどうするんですか?」
まほろば　の修理は九割ほど完成したので、大山がこれ以上　まほろば　の修理に関わる予定は今のところ無い。
それ故、良馬は、この後の大山の予定が気になり、彼本人に訊ねた。
「この後はヤマトの方の作業だ。それが一段落ついたら、時空管理局の艦を調査、その後は土星のタイタンへ行く」
「土星へ?彗星帝国との最前線じゃないですか」
「まあな、だがこれも防衛軍の再編計画の一環だ」
「大変そうですね」
「確かにな。でも技術者としては、やりがいのある仕事だから俺は満足している」

「そうですか」
ニッと笑みを浮かべる大山に釣られて良馬も笑みを浮かべた。
良馬が　まほろば　の修理状況を確認した後、良馬の下に今後の予定の件についての話があると、出頭命令が出された。
長官室前には、何時ぞやと同じように古代の姿があった。
やがて秘書が長官室へと案内すると、藤堂が二人を待っていた。
「わざわざ何度も来てもらってすまない」
「いえ、これも軍人の務めで給料分ですから」
「うむ、来てもらったのは他でもない。君たちには艦の発進準備が完了し次第、練習任務に当たってもらいたいのだ」
「訓練校や士官学校の学生の卒業が早まるのですか?」
良馬は先日、藤堂から訓練学校、士官学校の学生達の卒業が早まる事は知っていたが、古代は今ここで初めて知った事実故、驚いている。
そして古代の問いに、藤堂は頷く。
白色彗星との戦闘で被った最大の被害は人材だった。
まだ再建途上だった地球防衛軍は、士方を始めとした多くの宇宙戦士を失ってしまった。
艦艇は造り直せば済むが、宇宙戦士（人材）の養成はそうはいかない。
ガミラス戦で絶対人口が減ったところに追い打ちをかけた今回の戦いで戦力を擦り減らした地球防衛軍は、当面の戦力を、艦艇を含めた無人兵器主体に転換し、並行して人材育成をやり直すことにした。
「時期が時期なのでな。繰り上げした卒業生を乗せて訓練航海に出てほしい」
とは言え、未だに彗星帝国の残存艦隊が太陽系内に存在している以上、宇宙戦士への育成は急務で、訓練宙域は地球～火星の間。
しかも、訓練時間はとてつもなく少ない。
僅かな訓練時間でその後直ぐに本格的な戦闘・・・・。
今年の卒業生達は中々ハードなスタートだと思う良馬と古代だった。

「工事の進捗状況はどうかね？」
「ヤマトは最低でもあと二週間程必要です」
「まほろば　の方はあと一週間程必要です」
「練習航海は半月後の出発予定だ。それまでに間に合わせてもらいたい」
「「はい!!」」
　藤堂からの命令を受領した良馬と古代は昼食を共にしながら今後の予定をすり合わせた。
「入院したヤマトの乗員は予定通りの日にちで退院出来るの？」
「ええ。来週には皆揃って退院だそうです」
　やや置いて、良馬は気掛かりなことを古代に訊ねてみる。
「・・・それで、島君の様子はどう？」
「ふっ切れたわけではないようですが、『気持ちは立ち治った。もう心配はいらない』と言っていました」
「そうか・・・」
　島もあの戦いでは色々なものを背負ってしまったようだ。
　形的には恋人と死別したようなものだった。
「月村さんの方は？」
「入院組は来週早々までに退院して復帰できる」
　その後、訓練内容の草案や何気ない日常会話をしていく中、良馬は古代にもう一つ気掛かりな事を聞く。
「そう言えば、古代君は森君と婚約中だったよね？」
「あっ、は、はい」
「もうすぐ結婚っていう時に今回の騒動に巻き込まれたけど、今後はどうするの？訓練航海が終わったら森君と式を挙げる？」
　古代と雪は婚約してとうに半年を過ぎた。
　白色彗星の事がなければ今頃はダダ甘な新婚生活を送っていた筈だった。
「いえ、ヤマトの皆にも話すつもりですが、雪と二人で話し合った結果、当分式は延期します」
「えっ!?」

てっきり今回の訓練航海が終わったら式を挙げると思っていた良馬に古代は延期すると言う意外な決断をしていた。
しかも、相手の雪もそれを了承していると言うのだから不思議だ。
「愛し合う者同士が一緒になる・・・・自然な形だと思うけどな・・・・」
「はい・・ですが俺たちは、会おうと思えばいつでも会えますから・・・・」
「そうか・・・・」
まぁ、恋愛は当人同士の問題だし、部外者がこれ以上口出しする権利は無いかと思い、別の話題に切り替えた。
島とテレサの事もあり、彼らなりに遠慮したのかもしれない。
「そう言えば、お兄さんの守さんはイスカンダルに住んでいるんだろう？」
「はい」
「これからどうするんだろうね？」
「兄さんとスターシアさんですか？」
「うん。他のイスカンダル人は皆死に絶えてしまったし、二人の間に子供が生まれていてもその子は、このままではいずれは独りっきりになってしまう。それに、今後イスカンダルが地球みたいな目に遭わないと断言できないでしょう？良し悪しは別として、睨みをきかせていたお隣のガミラス帝国はもうないんだ」
「確かにそうですが、スターシアさんがイスカンダルを離れるとは思えません」
古代も、それは気にかかっていたようだが、如何ともし難いという表情だ。
イスカンダル本星には、保有武力が全くと言って良い位無い。
それにあったとしても現状のイスカンダルで動かす事の出来そうなのは古代の兄、守一人だけ・・・・。
侵略を生業とする星間国家にとっては、イスカンダルはまさに絶好の獲物だ。
「せめて有事の時に使うホットラインくらいは敷設できないものかな。タキオン通信時差があるかもしれないが、難しくはないだろう？」

スターシアは地球の大恩人だ。
向こうが受けるかどうかは別にしても、何か変事があれば手を差し延べるのは当然の事であり、検討する価値はあるはずだ。
「そうですね。真田さんが退院したら相談してみましょう」
それからすぐに良馬と古代はイスカンダルに赴き、様々なイレギュラーに遭遇することになるとは、今の二人には予想もつかなかった。
そして、良馬は次にデスラー・・・ガミラスについて古代に訊ねた。
彗星帝国との決戦前、木星圏にてガミラスはヤマトに対して戦いを挑んで来た。
その後、何があってガミラス艦隊が去っていったのかを詳しく知らなかった。
ガミラスが太陽系から去ったのは良いが、それが永続的なものなのか、一時的なモノなのかが気になった。
一時的なモノであれば、ガミラスは戦力を整えた後、再度地球に対し侵攻してくる可能性があるからだ。
しかし、古代の話ではデスラーが去る際、自分は気を失っていた為、はっきりとこの目と耳で見聞したわけでは無いが、雪の話ではデスラーは流暢な地球語で、
「地球に対してもヤマトに対しても恨みは消えた」
と言い残して太陽系から去って行った。
デスラーのこの言葉を信じるのであれば、ガミラスは地球への侵攻を諦めたと言う事になる。
古代自身もデスラーのこの言葉は信用できると言っていた。
その後、来たるべき練習航海任務の打ち合わせを終えた良馬は、古代と分かれて早めに帰宅した。
「お帰りなさい。良馬さん」
良馬を出迎えたのはエプロン姿のギンガだった。
キッチンからは食欲をそそるいい匂いがする。
如何やらギンガはノエルと共に夕食の準備をしていたようだ。
「ただいま」
玄関でのやりとりは新婚の夫婦の様であった。

（古代君の言った意味が少し分かったかもしれないな・・・）
大切な人が傍に居てくれる。
結婚なんてあくまで形式上なんだと、そう思いつつ良馬はギンガがと共にリビングへと向かった。
食事の後、良馬はギンガに新たなる任務を・・訓練校と士官学校生を繰り上げ卒業させて訓練航海に出る旨を伝える。
また自分も含め、ギンガも昇進する事も伝えた。
良馬の報告を聞き、ギンガは再び良馬と共に艦に乗れることを喜んでいた。
翌日、最終調整を行っている　まほろば　へと向かうと、既に病院を退院した　まほろば　の幹部乗組員たちが来ていた。
早速、作業事務所の一角を借りてミーティングを実施し、今度の訓練航海のメニューの協議を行った。
基本的なことは古代と先日草案を纏め、それぞれ確認済となっているが、訓練は基本実戦同様に行うことで一致している。
木星圏、土星圏からは白色彗星軍の残党と戦うことだってあり得る。
困窮極まる状況下のため、一日でも早く一人前の宇宙戦士になってもらいたい。
となれば、自ずと、身体で覚えてもらうことになる。
かつて、ドイツで「兵は戦場で一人前になる」「実戦で大人になる」と言い残した軍人が居た。
今の防衛軍はまさにそこ言葉の通りになってもらわねば困るのだ。
そして、我々先輩世代がすべきは、彼らが一人前になる前に死なせないことだ。
しかも一人も脱落させずに・・だ。
これはとても難しい事である。
「新人もそうだが、あの白色彗星軍を相手にして生き延びた者は、より厳しく接して欲しい。彼らはあの激戦を生き残ったのだ。もう彼らは新人ではない。よって、中堅者としてのスキルをその身に十分つけてもらう」

良馬の最後のシメで皆は苦笑しつつも、訓練方針に同意した。
ヤマト、まほろば　の出航まであと僅かであった。

三十六話　門出

無限に広がる大宇宙・・・・。
この無数の星々の煌めきの中に様々な生命の営みがある・・・・。
愛・・・・
希望・・・・
野心・・・・
戦い・・・・
それは地球人類の営みと何ら変わる事は無い。
そして今、この大宇宙の一部で一つの戦いが終わった。
時に西暦２２０１年・・・・

宇宙の邪悪な侵略者、白色彗星の戦いの中で、ヤマトと戦ったデスラーは、古代進との間に芽生えた奇妙な友情に想い馳せつつ、新国家の建設を目指し、新たな故郷となる惑星を求め、大航海の途についていた。
双胴を思わせる外観と後方に寄せられた上部構造物群が特徴的であるガミラスのゲルバデス級航宙戦闘母艦。
一番艦であるゲルバデスを中心に多数のガミラス艦隊が宇宙を航行していた。
そのゲルバデスの艦橋では、
「只今より総統閣下よりお言葉をいただく。皆の者！清聴する様に!!」
と、デスラーの副官、ガデル・タランが全艦にチャンネルを開き、デスラーの演説が始まる事を伝えると、ガミラス帝国総統、アベルト・デスラーは一歩前に出て、口を開く。
「諸君、我々がガミラス大帝星を離れて、すでに二年あまり・・・だが、我々は決していたずらに宇宙を放浪していた訳ではない。大ガミラス帝国の再建、ガミラス民族の復興・・・この宿願を果たす為である」
演説するデスラーの声には長きに渡る航海にも関わらず、些かの疲

れも淀みもない。
「諸君、この宇宙は広大である。我々の新国家となるべき惑星は必ず発見されるであろう！故に、十分な戦力を増強し、来るべき日に備えなければならない。揺るぎなき本星を築き、周辺の星々をことごとく打ち従え、偉大なる我がガミラス帝国を、再びこの大宇宙の盟主とするのだ!!」
　力強く国家再興を宣言したデスラーは、ここでひと呼吸置いて再び口を開く。
「これより我が母なるガミラス星に立ち寄り、一目最後の別れを告げた後、新天地への大航海へと向かう。将兵諸君のこれまでの労苦に感謝するとともに、今一層の忠誠を期待する」
『総統万歳！（ガーレ・フェゼロン!!）』
　将兵たちがガミラス式の敬礼をしてデスラーに忠誠を誓う。
　デスラーが将兵たちの歓呼に応えて右手を上げると、歓声はピタリと止む。
　そして、デスラーは改めて口を開く。
「全艦、ガミラス星に針路を取れ！」
　ガミラス艦隊は一路、自分たちの故郷であるガミラス星を目指した。

　一方、地球では、ヤマト、まほろば　の訓練航海への準備が着々と整えられていく中、やはり白色彗星残党軍に対しての撃退作戦が発令された。
　そんな中、本日病院を退院するヤマトの第一艦橋要員たちは、病院の窓から復興していく街を見ていた。
「あれからもうひと月か・・・・」
　ヤマト通信長の相原がしみじみと激動のひと月を思い出す様に呟く。
「病院の窓から見ている時もそうだけど、復興ペースが上がって来たみたいですね」
「だが、アフリカの方はまだ酷いらしいぜ。直撃を受けた際、日本の十

倍以上の面積が消し飛んだそうだ」
日本は比較的に軽い被害で済んだが外国の方はこれ以上の被害を受けた。
テレビで見た情報を伝えるヤマト砲術長の南部。
「でも、テレサが居なかったら、もっと酷い事になっていたかもしれないだよな・・・」
ヤマト航海長補佐の太田がテレサの名前を口に出す。
(おい、太田、航海長の前じゃ、テレサさんの事は禁句だろう!!)
相原は空気読め!!と言わんばかりに太田に耳打ちする。
(あっ!!)
太田は慌てて口を閉じる。
「いや、いいさ」
しかし、ヤマト航海長の島はそこまで気にしていない様子。
「テレサは死んでなんかいない。生きているんだ・・・俺の中でな・・・俺の身体にはテレサの血が流れている・・・そしていつか、俺の子供達が、その血を世界中に広げていくだろう。テレサはもう・・・ひとりじゃないんだ・・・」
テレサの事で人として更に成長してひと皮むけた様子の島だった。
「みんな、退院おめでとう」
そこに、ヤマト生活班長兼レーダー手の雪が来た。
『雪さん』
更に、
「雪サーン、オヒサシブリデス!!」
分析ロボのアナライザーもやって来た。
「おいおい、アナライザー。久々に会ったって言うのに、退院したての俺たちには一言もなしか?」
相原がアナライザーの態度に不満を言う。
「フフン!!ヤロードモニ興味ハアリマセン!!ワタシダッテ、体中ニガタガキテ、修理ニ時間ガカカッテイタンデス!!」
アナライザーも自分が入院?していたんだぞ!!と言う。
そして、

「見テクダサイ、雪サン!!コノ新品同様ノボディー!!」
と、身体の彼方此方を回転させてアピールするアナライザー。
「えぇ?どこが、どう変わったんだ?」
と、茶化す南部。
まぁ、南部の言う事も最もであり、特にアナライザーの身体の部分で変化したところは見受けられない。
「ウルサーイ!!南部ノヤローハ眼鏡ヲ替エル必要ガアリマスネ!!」
「なんだと!?こいつ!!」
「元気そうね、アナライザーも」
そんなやり取りを雪は苦笑しながらアナライザーが変わりないことを確認する。
「ソレガ、私ハ元気ナノデスガ、佐渡大先生ガ・・・」
「ん?佐渡先生がどうかしたのか?」
島が心配そうに佐渡について訊ねると、
ドアが開き、其処から佐渡が現れた。
「うぃ～っ・・・ヒック!!まったく、しかし、もう・・・ヒック!!」
しかし、現れた佐渡は何だか悪酔いしている様子だった。
「にゃ～・・・」
その佐渡の傍らには愛猫のミー君もいるが、そのミー君も元気が無い様子。
「佐渡先生、どうしたんですか?」
太田が佐渡に何があったのかを尋ねる。
「実に許しがたい!!いくら復興が急務とは言え、酒を造る手間を省いてどうする!!まったく、この配給品の合成酒ときたら・・・」
そう言って佐渡は手に持っていた酒瓶を目にやる。
その中には、米から作られた純正の酒ではなく、科学薬品等で作られた合成酒が入っていた。
どうやら、配給された合成酒の質が余りにも悪くて悪酔いしたようだ。
そして、佐渡の愛猫のミー君も佐渡同様、酒を愛飲するのだが、やはり佐渡同様、合成酒の味が気に食わない様子。

「じゃあ、飲まなきゃいいじゃないですか」
と、相原はツッコミを入れる。
まぁ、相原の意見も最もである。
「飲まないぐらいなら、死んだ方がマシじゃ!!」
と、例え酒の質が悪くても酒は手放さないと、酒好きの意地を見せる佐渡。
「はは、冗談ですよ。はいこれ、真田さんからの差し入れです」
と言って、ちゃんと酒蔵で造った純正の酒を佐渡に渡す相原。
「おお～っ!!流石は真田君じゃ!!物事をよくわかっちょる・・・ん？そう言えば古代の奴はどうした？今日は皆の退院日なのに、来ないのか？それに真田君もおらんのう？」
と、相原から酒を受け取った佐渡はこの場に居てもおかしくない古代の姿が居なかったので、それを不思議に思い佐渡は古代と真田の行方を訊ねる。
「艦長代理は彗星帝国の残党軍を撃退するための作戦会議に出ています。そして技師長は一足早く、ヤマトに行きました」
太田が古代と真田の行方を佐渡に教える。
「作戦会議の方はもうそろそろ終わる頃だと思いますけど・・・・」
「しかし、まさか彗星帝国に生き残りが居やがったとはな・・・全く、ゴキブリ並にしぶとい連中だよ!!」
と、忌々しそうに呟く南部。
「また戦いが始まるって事か・・・・」
彗星帝国が太陽系内に存在して、地球と彗星帝国・その両者との間に停戦協定が行われない限り、地球と彗星帝国との間の戦闘はこの先も継続する事実をこの場にいる皆が改めて認識した。
その彗星帝国残存艦隊の対策についての会議が開かれている防衛軍本部の大会議では、
「――――と言う訳で、パトロール部隊がカイパーベルト外周部で中隊規模の艦隊を確認したそうだ。未だ敵の兵站基地となっている第十一番惑星で、高度の熱反応をキャッチしている」
「第一の目標は、我々の太陽系の共有財産である、この第十一番惑星を

取り戻すことだ。彗星帝国残党軍がここを失えば、太陽系への侵攻の足掛かりを完全に失うことになるだろう。だが、我々がまずしなければならんのは、土星圏に集結し、戦力を増強しつつある敵残存艦隊の一掃だ」

と、大モニターにて、彗星帝国残党軍と第十一番惑星周辺の宙域海図が映し出されている。

「各艦の作戦内容は配布した資料に明記してある。よく目を通しておいてくれ。以上だ・・・解散!!」

会場に居た将校たちが全員立ち上がり、敬礼して会議は終了した。

「雷王・・・作戦・・・?」

配布された資料の作戦名を見て古代は首を傾げつつ、中身を見た。

「ヤマト　と　まほろば・・それに数隻の主力戦艦のみで敵を中央突破、一点集中攻撃か・・・頭の固い防衛軍にしては、中々奇抜な作戦ですね」

古代は隣を歩く良馬にこの作戦の内容が今までの防衛軍の作戦とは違い、かなり奇抜性のある内容に意外性を感じた。

「それなんだけどね、古代君。あの作戦の草案は今度、宇宙戦士士官学校を繰り上げ卒業した新人君が立案した作戦らしい」

「新人が!?」

まさか、この様に奇抜な作戦が、士官学校を繰り上げ卒業したばかりの新人が考えた作戦とは、驚いたようで、思わず声が裏返る古代。

「まぁ、そう驚く事じゃないでしょう。実際、古代君も卒業したてで、ヤマトに乗って君は途中からは沖田艦長に代わり、そのヤマトを指揮していたじゃないか」

「はぁ・・・それにしても『雷王作戦』というのは少し物々しいですね」

「神話のゼウスからでも採ったんだろう。ゼウスは雷を持って万物に罰を与える神だからな」

「罰・・・ですか・・・」

古代としては何か思う事が有るのか、少し顔を俯かせた。

そんな二人の前に、

「おう、やっと会議が終わったか!!」

病院を出た佐渡達が古代の事を待っていた。
「皆さん、すっかり元気になりましたね」
良馬が前と変わらず、すっかり前回の戦いの傷から回復したヤマトの乗員に声をかける。
「あたりまえじゃ、地球一の名医がつきっきりだったんじゃからな！」
「いやぁー早く退院させろと言っても中々退院させてくれなかったんだ。この大先生は」
「まるで牢屋に入っている気分でしたよ」
と、島と相原が苦笑しながら病院生活を語る。
「罰当たりめ!!女の看護師に鼻の下を伸ばしていたのは何処のどいつだ？」
「ソウデス。相原ハ一生入院シタイト言ッテイマシタ」
アナライザーの暴露で良馬は苦笑する。
「さあ、機関長や加藤たちが待っとるぞ!!行こう英雄の丘へ!!」
古代たちは防衛軍本部から一路、英雄の丘へと向かった。
その途中、ヤマトから戻った真田も古代らと合流して皆で英雄の丘へと向かった。

英雄の丘・・・
そこには宇宙戦艦ヤマト初代艦長の沖田十三の銅像と共に御影石にはガミラス戦役や訓練・演習中の事故によって命を落とした宇宙戦士たちの名前が刻まれており、新たに、白色彗星帝国との戦争で命を落とした者たちの名も刻まれていた。
また近くには祈る姿をした女性のブロンズ像が立っており、これは、イスカンダルから地球へ命懸けで波動エンジン等の超技術を伝えたサーシア・イスカンダルを顕彰したものだが、像の基部には新たにテレサの名も刻まれた。
そして、土方の胸像も新たに設置されていた。
そんな英雄の丘に一人の青年の姿があった。
「親父・・・俺、無事に訓練学校を卒業出来たよ・・・」
青年は白色彗星戦役での戦死者の名前が刻まれた御影石に花束を

添え、自分が宇宙戦士訓練学校を無事に卒業した事を報告した。
「おや？君は？」
古代はその青年に声をかけた。
「は、はい!!元ヤマト機関長、徳川彦左衛門の次男、徳川太助です!!」
と、自らの名を名乗った。
「徳川さんの・・・そう言えばお父さんにそっくりだ」
真田はその青年の顔立ちに戦死した徳川の面影がある事に気が付いた。
「み、皆さんの事は、父からよく聞かされました!!じ、実は、僕も宇宙戦士訓練学校の機関部を卒業しまして・・・まだ配属先は決まっていませんが・・・」
「そうか・・・お父さんの跡を継ぐのか・・・」
「頑張れよ」
先輩たちは太助に声援を送る。
「は、はい!!では、失礼します!!」
初々しい様子でその場から去っていく太助だった。
「英雄の丘に眠る戦士の皆さん、今日負傷者全員無事に退院する事が出来ました。徳川機関長、加藤、斎藤・・・最後まで任務を全うし、不幸にして戦いに斃れた多くの友よ・・・我々は君達の事を決して忘れる事は無いでしょう。我々は諸君の高価な犠牲によって勝ち得たこの平和は永遠のものとして守り続けて行くことを誓います・・・宇宙戦士の霊へ黙祷!!」
その後、古代が御影石の前で弔辞を読み全員が黙とうし、
「黙祷終わり!!敬礼!!」
黙祷の後、敬礼した。
戦死した宇宙戦士たちへ近状報告した後、皆はその場で故人を偲び酒の席を設けた。
その最中、
「そう言えば、古代、雪、お前たちはいつ結婚するんじゃ？」
と、以前に良馬が思った疑問を佐渡が古代に訊ねてきた。
「そうだぞ。いつまでも婚約じゃあ死んだ連中もあの世でやきもきし

ているぞ」
島も二人の事が気になる様だ。
そこで、古代は以前良馬に話した通り、雪との結婚を無期延期にする旨を伝えた。
その事を聞いた良馬を除く皆はやはり、「何故だ？」と思った。
古代がその訳を話すと雪と共にリア充フィールドが展開された。
このフィールドは彼氏・彼女が居ない者には酷く有害なフィールドだ。
「でも、早く式を挙げてくれた方が僕も落ち着くんだけどなぁ～・・・」
と、意外にも相原が古代たちに早く式を挙げて欲しいと言う。
「何でお前が落ち着くんじゃ？」
佐渡が相原に質問する。
まぁ、佐渡の疑問も最もだ。
相原は古代、または雪の身内でもないし、まして雪の元カレでもない。
（まっ、諦めがつくってことだろうな・・・）
会話を聞きながら、酒の入ったコップを傾ける良馬。
「ソレハ・・・」
すると、アナライザーが突然雪に近づくと、
「コウイウコトデス」
雪のスカートを捲った。
突然スカートを捲られた雪は、
「アナライザー!!待ちなさい!!」
アナライザーを追い掛け回す。
「相変わらず、ロボットとは思えない思考回路を持つロボットだ」
雪とアナライザーの追いかけっこを見ながら良馬は呟き、
「あの癖は中々直らんな・・・」
佐渡は呆れたように呟く。
そして酒の席が進んで行く中、
「そう言えば、月村さんも彼女がいましたよね？」
と、古代が良馬に話題を振って来た。

「えっ!?」
突然自分に異性ネタの矛先を向けられた良馬は一瞬ギョッとした顔をする。
「どうなんですか?彼女とは・・・・?」
古代が詰め寄ってくる。
「へぇ～月村さんの彼女かぁ～」
「どんな人なんです?」
「やっぱり何処かの金持ちのお嬢さんなんですか?」
他の男連中も、興味があるのか詰め寄ってくる。
他人の恋愛事・・しかも良馬は南部同様、裕福な家の出身・・・
そんな良馬の彼女とくればどんな人なのか気になるのも無理はない。
「えっ!?・・いや、だから・・・・その・・・・」
皆から詰め寄られた良馬はタジタジ。
「どうした?突然の奇襲でうろたえるなんて、それで大丈夫か?艦長?」
「さ、真田さんまで!?」
異性関係に興味がなさそうな真田まで詰め寄ってくる。
「わ、分かりました!!話す!!話します!!」
それから良馬は、自分の彼女（ギンガ）の事を赤裸々に語り、真田と後輩たちの酒の肴にされた。
しかし、彼女の名前を出さなかったのは、良馬なりの最大の抵抗だった。
「ただいま」
英雄の丘で散々自分とギンガの関係を話す事になった良馬はドッと疲れた様子で玄関のドアを開ける。
「お帰りなさい。良馬さん」
「ああ、ただいま」
またも玄関で良馬を出迎えてくれたギンガ。
出迎えたギンガは良馬から僅かに酒の匂いがするのに気が付いた。
「お酒を飲んで来たんですか?」

「う、うん。古代君たちと一緒に英雄の丘でね・・・・」
「お夕食はどうします？」
「食べる」
「では、準備しますね」
　食堂にて待つ良馬にギンガは夕食の準備をして良馬は、ギンガが作った夕食を食べた。
　その後、入浴を済ませ、忍やノエルも思い思いの時間を過ごしている中、
「良馬さん、どうぞ」
　ギンガは良馬に紅茶を差し出す。
「ん？ああ、ありがとう。ギンガ」
　良馬は、ギンガから紅茶の入ったカップを受け取る。
「何していたんですか？」
　ギンガは覗き込むように机の上を見る。
　机の上には、便箋と万年筆が置いてある。
　どうやら、良馬は誰かに手紙を書いている最中の様だった。
「手紙ですか？」
「ん？ああ、違うよ。これはね・・・・」
「これは？」
「これはね、遺書だよ」
「なっ!?」
　さらりと物凄い事を言う良馬。
　なんと、今彼が書いていた物は誰かに宛てた手紙などではなく、遺書だった。
「そ、そんなっ!?良馬さん!!早まらないでください!!何が有ったのかは知りませんが、自殺なんて止めてください!!」
　ギンガは良馬が自殺するために遺書を書いていると思い、必死に自殺を止めようとする。
「えっ!?いや、違うよ、ギンガ。これは自殺するから遺書を残しているんじゃないよ」
「えっ!?」

しかし、良馬の口からは自殺を否定する言葉が出た。
「では、何故遺書なんかを？」
「ギンガ、俺たちは宇宙船乗りだ。甲板の一つ向こうは真空の宇宙・・・常に死と隣り合わせの状況なんだ。敵と戦って撃沈されなくても、宇宙にはまだまだ未知の出来事が起こるし、船のエンジントラブルだってそれは死を意味する」
「・・・」
「それに宇宙で死んだ時、必ずしも遺体が残る訳じゃない・・・だからこうして遺書と遺髪は出発前に残しておくのさ」
良馬の言葉を聞いて、ギンガは宇宙に出ても敵に自分の乗艦が撃沈されないかぎり大丈夫だと思っていたが、改めて考えると自分がこの世界に漂流した切っ掛けも次元震に巻き込まれた事だった。
あの時は運よく良馬によって救助されたが、普通ならば死んでいても可笑しくはない状況だった。
それにあの彗星帝国との戦いでも従軍した宇宙戦士の殆どが戦死してしまった。
自分が今、こうしているのはただ単に運が良かったからだ。
しかし、この先もずっとこの運が続くとも限らない。
良馬の言葉を聞き、ギンガは、
「・・・良馬さん」
「ん？」
「私も書きます」
「うん、そうした方が良いよ」
良馬は便箋と万年筆をギンガに渡した。
ギンガは時折「うーん」と唸りながらも遺書を認めた。
これから自殺するわけでもなく、遺書を書くと言うのはどうも実感しにくい。
勿論、死ぬつもりはサラサラないが、良馬の言う事は最もであり、また自分の体験からも、ギンガは頭を捻り、苦労しながらも遺書を書き上げた。
遺書を書き上げ、髪の毛の一部を切り、それらを束ねた。

そして書き上げた遺書と遺髪をギンガは忍に託した。
万一に自分の身に何かあったら之を自分の家族に届けて欲しいと言って・・・・。
忍の方も良馬がこれまで出撃するたびに遺書を預かって来たので手慣れているし、驚く様子もなかった。

翌日・・・・
南部重工、宇宙船ドック
南部重工の宇宙船ドックには英雄艦、宇宙戦艦ヤマトが堂々と鎮座していた。
「すっかり元通りになったなぁ」
「うむ、短時間でよく此処まで復旧出来たものだ」
復旧したてのヤマトに古代たちは来ていた。
彗星帝国との戦いでボロボロ状態だったヤマトは新品同様に整備されていた。
その状態にヤマトの乗員は感心している様子だ。
「おや？あれは・・・・？」
艦内を巡検中に島が機関室にて作業をしている乗員を見つけた。
「山崎さん」
機関室で作業をしていたのは、かつて徳川の片腕であった山崎奨だった。
山崎は、古代たちの姿に気が付いて作業を止め、古代たちに近づく。
「ずっとヤマトの整備を？」
島が山崎に訊ねると、
「はい。特に機関部の整備には手間取りまして・・・・皆さんの退院の出迎えに行けずに申し訳ありません」
「山崎さんはいつ退院を？」
「私は比較的軽傷だったのですぐに・・・・」
「山崎さんが居てくれるのでしたら安心だ」
真田も徳川同様、山崎の腕を認めていた。
「山崎さんには、次の航海から機関長として働いてもらう事になって

います」
古代が新機関長となる山崎を紹介する。
「これからもヤマトの事をよろしくお願いします」
「はい」
挨拶の後、山崎は再び機関整備の作業に入った。
続いて古代たちはヤマト艦載機の格納庫へと向かった。
此処でも彗星帝国との戦いでコスモタイガーの九割を無くしたヤマトは、新たな機体を搬入する必要があり、その作業を新たにコスモタイガー隊隊長となった山本明夫が作業を進めていた。
「古代・・・・皆!!」
「山本!!」
「久しぶりだな、山本!!」
「元気だったか?」
「ああ・・・・俺は前の戦いで、皆よりも先に戦線から離脱しちまったからな・・・・加藤の死に際を見てやれなかったばかりか、俺は・・・・」
「・・・・」
「山本君・・・・」
山本は彗星帝国との戦いでおめおめ生き延びてしまった事を少し悔いている様だが、防衛軍側としても、ヤマトの皆からしても山本が無事に生還してくれたことは何よりも喜ばしい事であった。
生き恥を晒して恥ずかしいと言うのであれば、その分の実績を立て、後輩の人材育成で補えばいい。
それが防衛軍とヤマトの皆の思いだった。
「心配するな。俺は大丈夫さ。こうしてヤマトに乗り、戦い続ける事が死んでいった加藤たちへの供養なんだ」
山本自身も皆の思いを分かっている様子で、
「コスモタイガー隊の隊長としてビシビシ鍛えてやる」
と、気合十分な様子だった。
ヤマトが新たに始動しようとしている時、月村造船の宇宙船ドックでは、
「奉る～畏み～畏み～・・・・・」

艦橋の一番奥、神棚の下にしつらえられた祭壇の前で、八束神社の宮司が祝詞を述べている。
海鳴市にある八束神社は月村の家とは、古い付き合いのある神社であった。
なんでも、忍が学生時代、そこの巫女さんが同じ学園の一つ下の後輩で、忍の夫と顔馴染みの仲だった為、神事においては、月村家は全て八束神社に依頼している。
そして現在、 まほろば では舟魂(ふなだま)を祀る儀式が執り行われていた。
祝詞を述べている宮司の後ろには、艦長の月村良馬以下の幹部乗組員と艦橋要員、ドックの技術者らが畏まった表情で立っていた。
舟魂・・・そんなオカルトめいた話を信じられるのかと言われがちかもしれないが、この慣わしは大昔の洋上船から続く伝統儀式でもあり、大航海時代の帆船の船首や船尾に取り付ける女神像がいい例である。
そして現に舟魂の目撃例が存在する事例も過去にある。
舟魂が離れると、その船は沈没すると言われている。
第二次世界大戦の折、トラック諸島で日本海軍の艦艇がアメリカ軍の空爆により、壊滅的打撃を受けた後、
「そういえば、ゆうべ白い着物を着た女が船から出て行くのを見た」
と証言する乗組員が、あちこちの船で続出した。
また舟魂のエピソードで有名な例として南極観測船(日本海軍では特務艦)として名をはせた宗谷がある。
宗谷が船団を組み輸送任務に就いている中、ある夜に他の船から白いモノが浮き上がり空の彼方へと離れていくのを宗谷の船員が目撃したと言う。
それはこの宗谷からも離れて行ったが、暫くしたら、また船に戻って来た。
その後、宗谷を含む船団はアメリカ海軍の潜水艦による攻撃で壊滅したが、宗谷は沈まずに帰還している。
そして、姉妹船や他の船舶が次々と撃沈されていく中、宗谷は何度

も敵の攻撃を受けながらも、奇跡的に終戦まで生き延びた。
また、瀬戸内海で謎の爆発事故を起こした長門級二番戦艦、陸奥でも、沈没の数日前から着物を着た女が艦内で目撃されていたと言う話もある。
当然、当時の日本海軍には女性の軍人など存在しないし、基本的に海軍の軍艦に女性は乗艦出来ない為、この女の正体は不明である。
故に舟魂は一概に科学的じゃないと言う理由で疎かには出来ない。
儀式自体は、時節柄簡素にしたため三十分程度で終わり、神社の関係者を見送ると、ドックの関係者を同乗させて試験航海に出発した。
アンドロメダの時は、大統領までもが出席をする華々しい進宙式兼試験航海であったが、地球が再建途中の影響により、アンドロメダ級二番艦ネメシスの進宙式は必要最低限の人だけで行われたのだ。
なお、ヤマトの第一艦橋に沖田艦長のレリーフが飾られているように、今回の航海から、まほろば　の第一艦橋には土方のレリーフが飾られた。
「エネルギー充填１００％」
「艦内システム、最終チェック」
「通信システム、艦内外とも異常なし」
「火器管制システム、オールグリーン」
「生活ブロックシステム、異常なし」
「レーダー異常なし」
「重力制御システム異常なし」
「ＣＩＣ、艦橋。全システム異常なし」
「うむ・・・機関長、機関始動・・・・・」
良馬が号令をかけ、機関長の井上が機関を始動させる。
「了解、補助エンジン始動」
井上が機関を始動させると、艦にゴゴゴゴゴゴ・・・と小さな振動と轟音が唸り始めた。
「補助エンジン圧力上昇・・・補助エンジン動力接続・・・補助エンジン定速回転１６００、両舷推進力バランス正常」
「ドック注水」

システムチェックを終え、機関が始動し始めると、乾ドックに大量の水が注水される。
やがて、乾ドックが水で満たされ、いよいよ発進となる。
「ガントリーロック解除」
まほろば　の船体を固定していた拘束具が外され、
「微速前進０．５！」
「微速前進０．５」
補助エンジンが始動し、まほろば　はゆっくりと動き出した。
ドックからそのまま海へと出る　まほろば。
「波動エンジン内エネルギー注入」
「補助エンジン、第二戦速から第三戦速へ！」
「波動エンジンシリンダーへの閉鎖弁オープン、波動エンジン始動五分前！」
「波動エンジン内、圧力上昇エネルギー充填９０％」
「補助エンジン最大戦速」
「波動エンジン内、圧力上昇エネルギー充填１００％」
「現在補助エンジンの出力最大」
操縦レバーを握りながらメーターと全面を見ながら報告をする航海長の永倉。
「波動エンジン内、圧力上昇エネルギー充填１２０％、フライホイール始動」
井上もメーター見ながら機器を操作する。
機関室では大きなタービンの羽が勢いよく回転し始め、まほろばの速度もぐんぐん上がる。
まほろば　は、アンドロメダ級の戦艦同様、基本的に機関員の常駐を必要としないフルタイム・マシナリーゼロ仕様なのだが、戦における不測の事態に対応する為、ヤマト同様に機関員も配置が可能であり、今回の新人研修でも訓練学校を卒業した新人機関員を配備する予定である。
特に白色彗星との戦闘で、アンドロメダの撃沈の理由の一つに自動化の行き過ぎが指摘されたこともあり、今後の新造艦は有人管制もよ

り考慮されることになりそうだ。
とは言え、それでもヤマトに比べれば少数の配置である。
しかし、今回のテスト航海では、機関員を配置しておらず、現在はドックの技術者が機関室に居り、大山がチューンしたエンジンの性能を検証している。
「波動エンジン点火１０秒前・・・・９・・・・８・・・・７・・・・６・・・・５・・・・４・・・・３・・・・２・・・・１・・・・」
カウントダウンが始まり、
「フライホイール接続・・・・点火！」
波動エンジンに火が入り、
「まほろば、発進!!」
「まほろば、発進します!!」
良馬の指示に永倉がスロットルハンドルを大気圏内発進位置まで押し込んだ。
後部両舷の補助エンジン、メインの波動エンジンの噴射口から勢いよく火を噴いた　まほろば　は轟音と水柱を立てながら海上から離水する。
そのまま空へと舞い上がり、
「大気圏内航行、主翼展開」
まほろば　の両舷から翼が広がる。
「大気圏脱出十秒前・主翼収納」
対流圏から成層圏に入り、エンジンを地球大気圏突破モードに切り換えると、両舷に広がっている翼は、まほろば　の艦内に収納し、まほろば　は尚も増速していく。
やがて、まほろば　は地球の重力圏を抜けた。
「地球重力圏を抜けました」
「全機関、空間出力に切り換えます」
永倉と井上が現状を報告する。
「直ちに艦体の損傷状況を確認せよ」
良馬の指示で、大気圏突破時の空気抵抗と高熱で、艦体やレーダー、主砲などに損傷が生じていないかを確認する。

その結果は僅か十数秒で結果が出た。
「艦の損傷を認めず」
艦の状況を確認した副長の新見が報告をする。
艦橋にホッとした空気が流れる。
造船所の技師たちはいい仕事をしてくれたようだ。
何事もなく帰ったら、関係者にはお礼を言わなければ。
地球を離脱した　まほろば　は月軌道の沖にて、火星までのワープテストを行い、火星沖にあるアステロイド帯の演習場にて、各火器の動作試験を行い、最後に波動砲の試射を行い、帰りも火星軌道から月軌道までワープで戻り、その日の夜に地球へ帰投した。
技術者たちは、今日の試験結果のデータを纏め、今後の造艦への資料とした。
月村造船宇宙船用の大型艦係留台座に艦が固定され、艦が地上待機当直体制に移るのに先立ち、艦長訓示が行われた。
「艦長の月村だ。皆、今日はお疲れ様。試験航海は無事終了した。予定どおり、明後日には新人乗組員を迎え、本艦はヤマトと共に訓練航海に出る。本来ならば白色彗星との戦いでの疲れをゆっくり癒してほしいところなのだが、大半の仲間と戦力を失った現状では、それも叶わないことを申し訳なく思う。生き残った我々にかかる期待は大きく重いものがあるが、白色彗星との戦いを生き延びた諸君ならば、必ず応えられると確信している。明日を信じて、皆一丸になって力を尽くそう！」
「はいっ!!」
「了解!!」
「アイ・サー!!」
最終チェックの後、艦内は入港当直態勢に移り、少数の当直者を残して消灯になったが、艦長以下の幹部乗組員らのミーティングは夜が更けるまで続いた。

三十七話　地球は再建途中　ガミラスは崩壊・消滅

訓練航海の出発日。
宇宙戦士訓練学校・士官学校の卒業生たちが、それぞれ配属された乗艦に向かおうとしていた。
ヤマトに乗り組むのは、士官学校を主席卒業した北野哲を含む、士官学校・訓練学校卒業生の航海部、戦闘部・砲術科の卒業生合計二十九名。
訓練学校を卒業した徳川太助を含む、機関部卒業生三十名。
飛行科の卒業生五十四名の計百十三名が乗り込む。
彼らはそれぞれ内火艇に分乗し、沖合に錨泊しているヤマトに乗り組む予定となっている。
一方、まほろば　の方は、士官学校を次席卒業した星名透以下の新人七十五名が乗艦した。
まほろば　の方は桟橋に接岸している為、こちらは徒歩乗艦となった。
そして、まほろば　所属の飛行科の新人たちは　まほろば　飛行隊の隊長を務めている坂井の引率の下、木更津航空基地から合流する事になっている。
乗艦した新人たちの中で、代表の星名が艦長の良馬に申告をする。
「申告します！星名透以下、戦闘部、航海部、機関部、技術部、船務部・医療科卒業生七十五名、まほろば　乗り組みを命ぜられました！」
卒業生代表である星名の申告と敬礼に、良馬は答礼し、指示する。
「乗艦を許可する。卒業生は直ちに指定された居住区の部屋に荷物を置き、指定の制服に着替え、十五分以内に各配属先で着任を申告しろ」
「了解しました」
「星名君、君は艦橋勤務だ。着替え終わったら、艦橋へ上がって来い」
「はっ!!」
緊張した面持ちで星名が駆け出して行く。

一方、ヤマトの方では、
ヤマトに一番先に近づいている内火艇は宇宙戦士訓練学校の機関部卒業生を乗せた内火艇だった。
「新しい乗組員がやってくるわい」
「昔の古代君たちを見る様だわ・・・・」
ヤマトのウィングデッキから佐渡と雪が新人たちを乗せてヤマトへ近づいて来る内火艇を見ながら呟く。
これからヤマトへの乗艦を控えた新人たちは海上に浮かぶヤマトを見て、興奮している。
何せ、地球を二度も救った英雄でもあり、彼ら宇宙戦士にとってヤマトはまさに憧れの艦でもあった。
その艦にこれから自分たちは乗れるのだから、興奮するのも無理はない。
「これがヤマトだ!!」
「まるで海に浮かんだお城だな、まったく」
新人たちがヤマトに見とれていると、
「ハッ!?」
ヤマトに見とれていたため、内火艇はヤマトの至近距離に来ていた。
彼らの目の前にはヤマトの分厚い装甲板がある。
「ウワッ!!」
内火艇を操船していた太助は慌ててハンドルを切るが、急ハンドルをきった為、内火艇はバランスを崩し、転覆した。
幸い内火艇がヤマトにぶつかる事は無かったし、乗っている新人たちも全員海に投げ出されたが、怪我人や行方不明者、死者を出す事も無かった。
「何たることじゃ先が思いやられるわい」
と、必死に泳ぎながら転覆した内火艇の底にしがみついている新人たちを見て、佐渡は呆れ、雪は苦笑していた。
出発前に余り幸先の良いとは言えない出来事であったが、死傷者や行方不明者が出なかった事だけは奇跡と言うしかなかった。

ヤマト機関部の乗った内火艇転覆の様子は、まほろば　の方でもモニターを通して伝わっており、
「・・・・」
「・・・・」
「・・・あれは機関部の連中じゃのう」
「どうやらそうみたいです・・・・」
呆然とする者、額を抑える者、反応は様々だ。
井上は同じ科の後輩たちの恥かしい光景に顔を少し引きつかせている。
ギンガも反応に困りながらも井上に答える。
「・・・・」
良馬も苦笑しながら、
（山崎新機関長も就任早々苦労するな・・・・）
と、この先苦労しそうな山崎を労うが、出発したら此方側もヤマトの心配をする余裕はないだろう。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋
「申告します！徳川　太助以下、機関部卒業生三十名、ヤマト乗り組みを命ぜられました！」
機関部代表の太助はびしょ濡れ姿でヤマトの第一艦橋へとあがり、古代に乗艦申告する。
「徳川、何だ？その恰好は？」
びしょ濡れ姿の太助に山崎は一体何が有ったのかと訊ねる。
「実は、兵員輸送艇が転覆しまして・・・・」
徳川が申し訳なさそうに何故、自分がずぶ濡れになっている訳を話す。
「馬鹿者!!それでもヤマトの機関部員か!?」
「以後気を付ける様に」
「はい。気をつけます」
びしょ濡れ姿の助けに山崎は叱咤し、古代は注意を促す。
「申告します!!」

そこへ、士官学校を主席卒業した北野が乗艦申告をしに来た。
「北野哲以下戦闘部、航海部、砲術部卒業生合計二十九名、ヤマト乗り組みを命ぜられました!!」
「よし、全員を部署につかせろ!北野、お前は第一艦橋勤務だ」
「はい!!」
古代が北野に命じていると、
「へっくしょん!!」
太助が盛大にくしゃみをした。
「徳川、早く着替えて来い。そのままだと風邪をひくぞ」
島が徳川に早く着替えて来いと促す。
「は、はい」
太助は大急ぎで更衣室へと向かった。
これから訓練航海だと言うのに、風邪を引かれて早々にダウンされてはかなわない。
走り去っていく太助を見て、
「徳川さんの息子さんにしては出来が悪いな」
と、相原が呆れる様に言うと、
「お前だって新人の頃はああだったんだぜ」
と、南部に突っ込まれる相原。
まぁ、彼は最初のイスカンダルへの航海時、ヤマトを脱走して、宇宙遊泳をして地球に戻ろうとした事が有るので、あまり人の事は言えない気がする。
「なあに、一航海すれば、一人前になるさ」
と、島は新人達の成長に期待している様子だった。
続いて、
「申告します。坂本茂以下、飛行科卒業生五十四名、ヤマト乗り組みを命ぜられました!!」
太助と入れ違う様に飛行科の卒業生を代表して坂本茂が乗艦申告をしに来た。
「よし、全員を格納庫へ集合させ、コスモタイガー隊隊長である山本の指示を仰ぐように」

「はっ」
坂本は敬礼し、その場を後にした。

宇宙戦艦　ヤマト　コスモタイガー格納庫
古代の指示により、坂本以下の飛行科卒業生たちはヤマトのコスモタイガー格納庫へと集合した。
「申告します。坂本茂以下、飛行科卒業生五十四名、ヤマト乗り組みを命ぜられました！」
第一艦橋で古代に乗艦申告した内容と同じ事を坂本はコスモタイガー隊隊長である山本に報告する。
「坂本？そうか、お前が坂本か。お前の事は聞いているぞ。なかなかいい腕を持っているらしいな」
山本が坂本の噂を聞いており、坂本を褒める。
「でなきゃ、ヤマトに配属されたりしませんよ」
坂本は自信満々で答える。
「鼻っ柱の強い奴だ。へし折られない様に気を付けるんだな。よし、新入り共!!俺がコスモタイガー隊隊長の山本明夫だ・・・ん？お前、女か？」
山本は新人のコスモタイガー隊の中で女性の新人が居るのに気が付いた。
「椎名晶です。よろしくお願いします」
「アキラ？へぇ～・・俺の妹と同じ名前だな」
「ええ、彼女とは士官学校の同期でライバルでもありました。でも、知りませんでした。玲のお兄さんが・・・エースパイロットの山本さんが性別にこだわる人だったなんて」
「こいつ、揃いも揃って生意気な新人ばかりかよ・・・まぁいい・よく聞け、新人ども!!いざ戦いとなれば、俺達は最前線に飛び出さなきゃならない。文字通り宇宙に『飛び出す』んだ。そのためにも、訓練は厳しいモノにする。覚悟しておけ!!」
「望むところですよ」
「ええ」

「その元気がいつまで続くか試してやるさ」
ノリがまさに体育会系なヤマト航空隊だった。
各部署での申告報告が終わると、新人たちは訓練校・士官学校の制服からヤマト乗員の制服へと着替える為、順次更衣室にて着替えを行う。
勿論、女性用の更衣室もちゃんとあるので、椎名ら女性の乗組員はそこで着替える。
彼らはヤマト乗員の証である錨模様が大きく描かれている制服へと次々と着替えていく。
「よう、似合うぞ」
「やっと之を着れたかぁ・・・」
ヤマトの制服は他の防衛軍艦艇の制服とは異なる為、この制服を着れる事は、正式にヤマトの乗組員となった証でもり、宇宙戦士としては一種のステータスでもあったのだ。
「でも務まるかな?」
期待と不安を抱える新人たちに古代は艦内放送を通じて、この後の予定を伝える。
その内容がいきなりの出航と本格的な実戦形式の訓練に新人たちは戸惑いながらも出航配置へとついて行った。
「ふふ、張り切っておるわい古代の奴」
古代の艦内放送を聞き、佐渡は医務室の自分の居住スペースにて、酒の入ったコップを傾けながらニッと笑みを浮かべていた。
一方、まほろば　の方では、
星名が艦橋で良馬に申告をしてから各部署から新人の着任報告が届き始めた。
リニスが軍医長を務める医務室では、
「原田真琴衛生士以下、三名。まほろば、乗り組みを命ぜられました!」
茶色い髪で、おかっぱ頭（ショートボブ）でアホ毛が特徴的な女性新人隊員、原田真琴が着任の挨拶をする。
「着任を許可します。この艦の乗員の生命は私たちの尽力によって生

死を分けます。皆さん、全力で、最後まで諦めずに任務をこなしてください」
『了解!!』
原田以下の新人がリニスに敬礼すると、リニスも返礼する。
新人たちが乗り込んで、十三分程で全新人乗組員の着任が終わった。
「遅いな、せめて十分以内に揃わないと・・・」
良馬は着任終了時間の報告を聞き、呟く。
最初は命じた時間の八割以内で揃わなければならないのだが、
「次からは五分前集合を新人全員に徹底してくれ」
「わかりました。直ちに・・・」
良馬の命令に新見が直ぐに対応した。
「ヤマトの方も新乗組員の着任が完了した模様です」
「よし、予定通り１０：０３時に出航する。通信長、艦内のスピーカーの電源を入れてくれ」
「了解」
ギンガに指示すると、良馬は艦内マイクを手に艦長席から立ち上がる。
「新乗組員諸君。艦長の月村だ。本艦及びヤマトはこれより訓練航海に出発する。今航海の目的はただ一つ。諸君らに一日も早く一人前の宇宙戦士になってもらうことだ。故に、訓練は全て実戦同様にて行う。各チーフ、パートリーダーの指示に従い、十分に注意して訓練に臨んでほしい。出航は三十分後の１０：０３だ。総員直ちに出航配置につけ！」
良馬の艦内放送を聞き、艦内は、
「いきなり出航とは驚きだなぁ・・・」
「先輩の動きを見たり、のんびりと講義かと思っていたぜ・・・」
まほろば　の新人たちもまさかいきなりの出航に戸惑っていた。
「ボヤボヤするな!!お前ら!!出航配置につけ!!」
「は、はいっっ！」
各部署で、新人たちがチーフ（班長）に叱咤されながらわらわらと

出航配置についていった。
「星名君」
「は、はい」
　艦長の良馬に話しかけられ、緊張した面持ちで返事をする星名。
「星名君、君が出航の指揮を執れ」
「っ!?じ、自分がでありますか!?」
　まさかいきなり指揮を執れと言われ、戸惑いしまくる星名。
「君は士官学校を優秀な成績で卒業したんだ。それに近い将来はこうした指揮を当たり前に執らなければならない。心配せずとも、ちゃんと皆でバックアップはする。だから今のうちに慣れておいた方が良い」
「は、はい」
　元々今回の航海は新人の研修が目的だったので、反対意見等は出なかった。
　緊張した面持ちで席に着く星名。
「星名」
「は、はい」
「深呼吸して肩の力を抜け」
　隣に居る永倉がガチガチに緊張している星名にアドバイスをする。
「は、はい・・・・すぅー・・・・はぁ～・・・・」
　星名は目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をする。
　そして予定時刻の１０：０３に　まほろば　は離岸し、離水海域へと向かう。
「補助エンジン動力接続」
「補助エンジン動力接続・・・・スイッチオン。補助エンジン定速回転１６００、両舷推進力バランス正常」
「微速前進０．５」
　ゆっくりと離水海域へと向かう　まほろば。
「波動エンジン内エネルギー注入」
「補助エンジン、第二戦速から第三戦速へ！」
「波動エンジンシリンダーへの閉鎖弁オープン、波動エンジン始動五

分前！」
「波動エンジン内、圧力上昇エネルギー充填９０％」
「補助エンジン最大戦速」
「波動エンジン内、圧力上昇エネルギー充填１００％」
「現在補助エンジンの出力最大」
「波動エンジン内、圧力上昇エネルギー充填１２０％、フライホイール始動」
「フライホイール始動」
「波動エンジン点火１０秒前・・・・９・８・７・６・５・４・３・２・１・・・・」
「波動エンジン接続・点火」
「まほろば、発進!!」
まほろば　は幾分ヨタヨタしながらも予定海域に到達し、その後は宇宙を目指し、上昇していった。
ヤマトの方も１０：０３に予定通り錨を上げ、まほろば　同様離水海域へ向かい出航する。
しかし、ガチガチになった新人がポカを連発し、離水に四苦八苦していた。
太助が閉鎖弁をオープンするのを間違って非常制動装置を起動させ、ヤマトを止めてしまったり、発進指揮を任された北野がガチガチになってなかなか離水せず、制限区域ギリギリになってようやく離水する有り様だった。
そんな不安が入り混じる航海の中、医務室の佐渡は、
「大丈夫なんか？この艦は？何だかヨタヨタしとるようじゃぞ」
と、艦の動きに不安を抱きながらも愛猫のミー君と共に酒を飲んでいた。
まほろば　は高度二万でいったん水平飛行に移り、木更津航空基地から発進するコスモタイガー隊と合流し、その後月軌道にてヤマトと合流し訓練に入る予定だ。
「後方、七時の方向に飛行編隊を確認。友軍機です」
「星名君、味方識別確認はした？」

星名が飛行編隊接近を報告したが、味方識別確認がない事を良馬は指摘する。
「も、申し訳ありません！味方識別信号、確認しました。木更津航空基地より発進したコスモタイガー隊です」
「いくら地球圏内とは言え、もう訓練は始まっている。ちゃんと味方識別の確認は行うように」
「も、申し訳ありません。以後、気をつけます」
「うん。ただ実戦でやり直しはないからね」
「はいっ!!」
叱る時は厳しく、しかしいつまでもネチネチと言わない。これが宇宙戦士流だ。
「通信長」
「はい」
「接近するコスモタイガー隊と通信回路を開け」
「了解」
ギンガがコスモタイガー隊と通信回路を開くと、
「此方、まほろば航空隊隊長、坂井健夫以下飛行科卒業生四十五名。まほろば　への着艦を許可されたし」
スピーカーからは　まほろば　にてコスモタイガー隊の隊長を務めている坂井の声がした。
「通信長、返信：『着艦を許可する』：だ」
「了解」
ギンガは坂井に着艦許可の通信を送ると、コスモタイガーは次々とまほろば　へと着艦していった。
やがて、飛行科の卒業生代表が艦橋へと申告をしに来たのだが、その代表の新人の顔を見た時、星名を除く、艦橋内に居た者たちがギョッとする程、驚きの表情を浮かべた。
「か、加藤…」
「い、いや：彼は確かこの前の戦いで戦死した筈じゃあ…」
艦橋に来た代表の新人は、彗星帝国との戦いで戦死したヤマト、コスモタイガー隊隊長、加藤三郎と瓜二つの顔をしていた。

「申告します。加藤四郎以下飛行科卒業生四十五名、まほろば　乗艦を命じられました」
「し、四郎？それじゃあ、君は・・・」
「はい、加藤三郎は自分の一つ年上の兄です」
「お、弟っ!?」
　四郎の弟発言で納得した皆であった。
「それにしてもお兄さんと瓜二つだな」
　一つ年下の弟と言うが実際は双子の弟と言った方が正しい。
　それほど、四郎は加藤と瓜二つの容姿をしていた。
「声までそっくりだ・・・」
「昔からよく間違われました」
　本当に一つ年下の弟なのか？
　双子の弟の方が正しいのではないか？
　と思う艦橋のメンバーだった。
「ま、まぁ兎に角。君たちの着任を許可する。今後も訓練に励み、腕を磨いてくれ」
「はっ!!」
　加藤は敬礼し、その場から去って行った。
　やがて　まほろば、ヤマトの両艦は、月軌道を過ぎ、ワープテストを行う宙域へと入った。
「総員に告ぐ、これより本艦はヤマトと共に火星宙域へ向けてのワープに入る。新乗組員は、これが初のワープ体験となる。くれぐれも事故が無いように十分に気を着けてくれ!!」
　良馬が艦内放送を入れ、まほろば　の乗員はワープ時の配置についていくが、新人たちは不安げな様子だった。
　一方、ヤマトの方でも乗員たちはワープ配置についていく。
　その中で、太助が機関室に備え付けられた椅子に座り、シートベルトを着けながら、
「ワープって一瞬気を失うそうだぜ」
　と、隣に座った同期の新人機関員にワープ中に起こる現象を言う。
「そのまま元に戻らなかったらどうするんだ？」

太助からワープで気絶する事を不安に思った新人が太助に訊ねると、
「お前の泣き言を聞かずに済むから助かるよ」
と、他人事な返答をした。
「ちぇっ」
太助から他人事な返答をされた新人が少しムッとした顔をした。
とは言え、ヤマト　と　まほろば　に乗艦した新人は皆、ワープ初体験なので、不安や戸惑う気持ちは当然だった。
「ワープ5秒前・・・・4・・・・3・・・・2・・・・1・・・・ワープ!!」
まほろば　と　ヤマト　は火星圏へ向け、ワープした。
ワープ終了後、両艦は早速座標位置の確認、艦の損害点検へと入ったが、新乗組員の中には初めてのワープによるワープ酔いを訴える者が多数おり、医務室は最初のワープでいきなり仕事をする羽目となった。
この後、まほろば、ヤマトの両艦は火星沖のアステロイドベルトにて、一大訓練を行った後、対彗星帝国残党軍との最前線である木星圏、土星圏へと向かう予定となっている。

一方その頃、故郷であるガミラス星へと向っていたデスラー一行は、ガミラス星のある大マゼラン銀河・サンザー星系まで来ていた。
「総統、艦隊はマゼラン星雲に入ります」
「そうか・・・・十八ヶ月と二十三日ぶりだな、タラン」
デスラーは艦橋に設置された玉座に座ると、静かに目を閉じ、一時過去への思い出に浸る。
「私は諸君ら全軍に指令する!!このガミラス本星そのものを持って『ヤマト』の前に立ち塞がれ!!」
デスラーの脳裏にはかつてヤマトと雌雄をかけて戦ったガミラス本土での一大決戦の出来事が蘇ったのであった。
「ガミラスをこの目で見るのも最後かもしれぬ・・・・そして・・・・あのイスカンダルも・・・・」
デスラーは自らの故郷の星に想いを馳せるのと共に、双子星である

イスカンダルとその星の女王スターシア・イスカンダルの事も思い出す。
（スターシア・・・私はいつも君を忘れた事は無かった・・・）
（今の私にこよなく懐かしい人は君だよ・・・スターシア・・・）
デスラーの心の中にはあのイスカンダルの女王スターシアの姿が寸分変わらず蘇ってくる。
「マゼラン星雲太陽系サンザー、ガミラス星まであと三十六宇宙キロ」
オペレーターの報告を聞き、デスラーは過去の思い出から現在に戻り、玉座から立つと、ゆっくりした足取りで艦橋前部へと移動する。
次第にデスラーの目には懐かしい故郷の星と愛しい人が住む星の姿が見えてきた。
何事もなく、ガミラスを見た後、新天地への大航海へと向かう筈のガミラス艦隊であったが、オペレーターの次の発言でその予定は全て一転してしまった。
「ガミラス星付近にて艦船のエネルギー反応を探知!!」
「何っ!?」
「友軍艦艇か？」
「エネルギー反応は友軍反応とは異なります。むろん地球の艦船とも彗星帝国の艦船とも違います!!」
「パネルに回せ!!」
「了解」
ゲルバデスのメインモニターには、円盤型の艦がガミラスの周辺に多数存在していた。
その形状は今までガミラスが戦ってきた星間国家とは見た事もない形状をしていた。
以前グラーフ将軍が撃退した時空管理局と言う治安維持組織の艦とも違う。
さらに、
「ガミラス星内部でも多数の熱源反応を確認!!映像映します!!」
別のモニターにはガミラス星の地表に採掘用のドリルを打ち込む作業船団の映像が映し出された。

作業船団はガミラスの地下資源『ガミラシウム』を採掘している様だった。
外敵にガミラス本星を蹂躙されたのはヤマトに続いてこれが二度目だ。
しかし、ヤマトはこちらの挑戦に応え、たった一隻で突入し、満身創痍になりながらも互いに死力を尽くし戦かった。
だが、今デスラーたちがモニターで見ている連中は地球人たちと比べる事すらおこがましいく図々しい連中である。
連中が行っている行為は明らかな盗掘行為である。
あの連中は自分たちが留守中、勝手に故郷の星へと無断で侵入し、自分たちの故郷の地下資源を盗もうとする空き巣連中である事は明白であった。
この映像を見たデスラーは怒りを露わにし、
「許せん!!我らの母なる星を傷つけるとは・・・全艦戦闘配備!!密集隊形で続け!!非武装艦は後方へ退避!!」
デスラーは引き連れている武装艦艇に戦闘準備を命じると、先陣をきってガミラス星へと接近していく。
「主砲発射準備!!」
「戦闘甲板開け!!戦闘用意!!」
ゲルバデスの飛行甲板が反転しそこからは副砲である無砲身連装フェーザー光線砲塔が四基、無砲身連装フェーザー光線砲塔、多連装ミサイルランチャーがそれぞれ二基出現した。
またガイペロン級多層式航宙母艦（空母）　ブリウド　ガリウド　レリウド　の三隻も１３３ミリ三連装陽電子カノン砲塔が五基、３３ミリ四連装陽電子速射砲塔を八基備えていると言う事で、戦闘に参加する事となった。
「全艦攻撃準備完了!!」
「撃て!!」
デスラーの命令一下、ガミラス軍の将兵たちは、盗掘者への怒りと憎しみを込めて連中に叩き付けた。
ガミラス軍からの一斉射を受け、多くの円盤が爆沈していく。

突然不意を突かれた盗掘団連中は大混乱に陥った。
その中の一隻が何処かへと通信を送った。

マゼラン星雲某宙域・サンザー星系外縁部・・・・。
其処には、今ガミラス星でデスラー率いるガミラス艦隊と交戦中の円盤と同じ型の艦やそれを更に発展大型させた艦がいた。
その中でも一際大きく、強力な武装をした円盤に通信が入る。
「デーダー司令!!」
「何事だ?」
デーダーと呼ばれたスキンヘッドで顔は白灰色、服装は白い全身タイツに紺色の手袋とブーツ、そして黒いマントといった、地球ではファッションセンスを疑う服装の男が突然の通信に声をあげる。
「緊急事態発生!!ガミラス星にて作業中、正体不明の敵の攻撃を受けました!!今なお護衛艦隊は交戦中です!!」
「なにぃ!?」
突然、作業中の作業船団の奇襲に思わず声が裏返るデーダー。
「未確認ですが、旧ガミラス帝国の艦という情報も・・・・」
「・・・面白い。よし、すぐ援護艦隊を差し向ける。それまで戦闘を支えるのだ!!」
「はっ!!」
デーダーは巡洋艦を中心とした高速部隊を自らの艦隊から割き、ガミラス星へと援軍として派遣した。
「これでいいのだ・・・・」
デーダーはこれで全ては終わると思っていた。
しかし、事態はそう簡単にはいかなかった。
本星を勝手に蹂躙されたガミラス艦隊の怒りは凄まじく、次々と作業船団とその護衛を務めていた戦闘艦艇、更にはデーダーが援軍として差し向けた巡洋艦を中心とする援軍までもが、全滅すると言う事態となった。
だが、事態はさらに深刻化する事となった。
被弾した大型作業船がガミラス星へと墜落し、採掘したてのガミラ

シウムに誘爆した。
ガミラシウムは、宇宙船のエネルギー源となる地下鉱石で地球に例えるならば、石炭と似た様な鉱石だった。（ただし石炭と比べると、とつてもない量のエネルギー源を含む。）
その強力なエネルギー源の鉱石が大量に採掘されていた場所に宇宙船が墜落したのだ。
結果、誘爆によるエネルギー量は凄まじいものとなり、ガミラスの地殻は大きく裂け、そこから大量のマグマが噴き出てきた。
「マグマが噴き上げてくるぞ!!全艦反転上昇!!」
「対ショック準備!!急げ!!」
ガミラス艦隊は大急ぎでガミラス星から離れる。
誘爆は治まる動きを見せず、ガミラス星全体へと広がり、最終的にはガミラス星は大爆発をし、宇宙から消滅してしまった。
ガミラス艦隊に降り注ぐガミラス星の破片・・・。
しかし、そのどれもが細かく砕けていたため、艦に大きな損害を与える程の被害は無かった。
ガミラス星が大爆発を起こし、消滅した光景をデスラーは、最初は唖然として見ていたが、やがて崩れ落ち、
「ガミラスが・・・我々の母なる星が消えてしまった・・・例え滅びゆく星であったとは言え・・・こんな残酷な結末を迎えるとは・・・この目でそれを見る事になろうとは・・・」
デスラーは目の前の現実に打ちのめされていた。
タラン以下の重臣や将兵たちも力なく項垂れ、瞑目する者もいれば嗚咽を堪える者もいた。
ガミラスは老朽化した星で、星としての寿命が尽きようとしていた。
そんな中、自分たち、ガミラス人が移住できそうな星を探している中、彼らは地球を見つけた。
しかもおあつらえ向きにファーストコンタクトをとろうとしたガミラスに対して地球側はいきなり攻撃してきた。
ガミラス側はこの出来事を最大限に利用する事にし、地球人類を遊

星爆弾で滅ぼした後、ガミラス製のコスモクリーナーで地球をテラーフォーミングして移住しようと計画した。
イスカンダルにコスモクリーナーが在ったように当然、お隣のガミラスでもコスモクリーナーを製造する技術は存在していた。
しかし、そのガミラスの地球移住計画もヤマトとの戦いで全ておじゃんとなった。
そして、今回の大航海は再び第二のガミラス星を探す旅となったのだが、その別れ際に自分たちの故郷は粉々になってしまった。
だが、事態はガミラス星の消滅だけには留まらなかった。
「総統!!イスカンダルが軌道を外れていきます!!」
先程まで静止していたイスカンダルが急に動き始めたのだ。
「っ!?」
(っ!?‥‥私とした事が、何たる失態だ!!)
デスラーは自分を罵った。
ガミラスとイスカンダルは共にサンザー(太陽)を公転する二連惑星‥‥。
どちらか一方が消滅すれば、互いの引力バランスが失われ、もう片方は簡単に軌道から外れる。
そして、イスカンダルもガミラス同様、星としての寿命はもうないも同然の老朽化した星‥‥。
地殻等もボロボロで地震が頻発し、イスカンダルの大陸の多くは既に海に没している。
そんなボロボロの状態で宇宙を漂流し続ければ、星自体が崩壊するか、他の星と衝突してしまう。
いや、それどころかサンザー(太陽)に吸い寄せられてしまう危険もある。
そうなったら、スターシアは‥‥
「追え!!イスカンダルを追うのだ!!」
デスラーは反射的に勢いよく立ち上がり、急ぎ全艦にイスカンダルの追跡命令を下す。
こうしてデスラーとガミラス艦隊のイスカンダル追跡劇が始まっ

た。
「タラン」
「はっ」
「この状況を地球に・・・・古代に知らせろ・・・・」
「はっ!!」
デスラーはガミラス星の消滅とイスカンダルの暴走の件を地球へと打電した。

時を同じくしてサンザー星系外縁部・・・・
「マゼラン方面軍総司令、メルダース長官が出ました!!」
「うむ」
モニターにはデーダー同様、スキンヘッドに全身白タイツ、黒マントを来た男が写った。
「どうしたのだ?デーダー」
「はっ!!突然、正体不明の敵の攻撃を受け、戦闘中にガミラス星が大爆発を起こしてしまいました」
デーダーはガミラス星での出来事をモニター前の上官に報告をする。
「なに?」
「作業船団はガミラスと共に爆発で全滅。護衛艦隊も大半が撃滅されたもようです・・・・」
「イスカンダルはどうなっている?」
メルダースは失った作業船団や護衛艦隊よりもイスカンダルの方が気になる様子。
「軌道を外れ、太陽に引き込まれ始めました」
「太陽・・・・サンザーにか!?」
「この二つの星は二連星ですから、一方が無くなったせいで自転と公転を支えている微妙な均等が失われたためと思われます・・・・」
「うむ・・・・ただちに追跡するのだ。イスカンダルを失ってはならん。イスカンダルの地下に眠る『イスカンダリウム』は我が帝国が現在遂行中の宇宙間戦争に必要なエネルギー変換鉱石・・・・採掘できずに帰

還することは許されん」
「承知しております・・・が、長官、考えてみればこの事故は我々にとって有利に働くかと・・・」
「なに？」
　メルダースは、イスカンダルが暴走し、イスカンダリウムが手に入らなくなる恐れがあるにも関わらず、イスカンダルが暴走して有利になると言うデーダーの言葉を聞き、不機嫌そうになるが、
「イスカンダリウムはイスカンダルの固い地殻の奥に眠っております。それ故に我々はまず先に地殻内部が露出しており採掘を行いやすいガミラスから同種の鉱石であるガミラシウムを採掘していた次第・・・イスカンダルがこのまま落下を続けますと、いずれサンザーの潮汐力によって星の表層が剥げ落ち、地殻は吹き飛んでしまうでしょう。その後、マントルと核だけとなったイスカンダルを星系外へ曳航すれば、労せず莫大な量のイスカンダリウムを手に入れる事が出来ます」
「ふむ・・・」
「ガミラシウムは失いましたが、純度の高いイスカンダリウムをより多く手に出来れば、聖総統閣下にもご満足いただけるかと・・・」
「なるほど、面白い。では、手始めにその謎の艦隊とやらを蹴散らせ!!何としてでもイスカンダルを手に入れるのだ!!」
　メルダースはデーダーの追加報告を聞き、不機嫌から一転し、満足したように納得して、イスカンダルを追跡するのと同時に、ガミラス星で自分たちの作業の邪魔をした謎の艦隊（ガミラス艦隊）を撃破せよとデーダーに命じた。
「はっ!!」
　デーダーは敬礼し、通信をきった。
　こうしてデーダー率いる艦隊もイスカンダルを追撃する事となった。

三十八話　訓練から実戦へ　雷王作戦始動

火星宙域　沖合　訓練指定宙域

艦内に起床ラッパの放送が鳴り響き、ベッドで寝ていた乗員たちは一斉に飛び起き、素早く隊員服へと着替え自分達の持ち場へと走っていく。

「総員、配置完了」

「時間は？」

「七分三十六秒」

第一艦橋にてこの報告を聞いた良馬は、少々不満そうな顔をした。

「なんとか五分代まで短縮出来るようこの訓練は続けましょう」

「了解」

新見も良馬の意見には賛成した様子だった。

起床後の配置集合の後、順次交代で朝食、小休止の後、戦闘訓練へと入った。

「全機、続けっ！」

「「了解！」」

「各小隊、フォーメーションを崩すな！」

坂井が新人パイロットたちに注意を促す。

火星宙域の沖合に存在するアステロイドベルト帯にて、古代自ら操縦するコスモゼロ、垂直尾翼と尾部が黄色く塗られた山本の搭乗するコスモタイガー、坂井が操縦する垂直尾翼と尾部が青に塗られたコスモタイガーが、坂本、椎名、加藤らの新人が乗るコスモタイガーと共に小惑星帯に突入していった。

その一方で、

「標的用無人ロケット発射」

まほろば　と　ヤマト　からは多数の標的用のロケットが発射され、いずこかへと飛んでいく。

暫くするとロケットは逆噴射して時間差を付けて、まほろば、ヤマトへと戻ってくる。

それを撃ち落すのが戦闘の基本的訓練であった。
「主砲、射撃用意!!」
「はいっ!主砲発射用意!」
「目標前方二十七宇宙キロ!!」
良馬が砲戦準備を命じ、新人の砲術員が操作パネルに向かい、星名が目標までの数値を読み上げる。
「ロケットの中には攻撃をしてはならない味方のロケットもあるので味方識別を怠らないように」
「はいっ!!」
訓練航海初日に良馬に味方識別の件を指摘されたため、星名はセンサーを必死で操作し敵と味方の識別を行った。
「敵、第一波左舷上方３３０度から接近!!」
敵を探知した星名が砲術長のフェリシアに報告する。
「航海長、右、十五度転換」
「了解、右、十五度転換」
永倉が操縦桿を操作し艦首を右へと回頭させる。
まほろば　の全主砲が左方へと旋回する。
「ショックカノン動力接続・・・・測敵完了・・・・自動追尾装置セット完了」
「誤差修正右一度、上下角三度」
「目標本艦の軸線に到達」
「発射」
フェリシアの命令が主砲管制室に届くと、管制室のチーフが発射ボタンを押す。
まほろば　から放たれたライムグリーン色の光線が標的ロケットへと吸い込まれるように向かい命中する。
「目標の破壊を確認!!続いての目標を捕捉!!距離・・・・」
星名が標的ロケットの撃破を確認した後、またセンサーを操作して次の標的ロケットの接近を知らせる。
艦橋やＣＩＣで　まほろば　の目と頭脳のようなやり取りが行われている中、艦内の他の部署でも様々な訓練が行われている。

「第三ブロック被弾！応急修理隊！至急応急修理せよ！」
「急げ！」
「早くしろ!!」
消火器や修理道具・資材を抱えた修理班が被弾箇所へと急ぐ。
被弾箇所へと着いた修理班は消火活動と修理作業を行う。
「お前ら訓練学校で何を習ってやがった。応急パッキンの当て方が逆だ！グズグズしているとお陀仏だぞ！」
修理班のチーフが新人の間違いを指摘する。
「機関に異常振動！推力低下！」
「波動エンジンチェック急げ！」
「りょ、了解」
機関長の井上は直接機関室にて、新人の機関部員の指導にあたっている。
ヤマト以降の防衛軍の戦闘艦艇では、機関メンテナンスは機関室にあるメンテナンス用のロボットも搭載されているが、いざという時は直接人の手で行えるよう機関の非常時訓練に組み込まれている。
これは前回の白色彗星戦役の経緯が大きく関係している。
無人の機械制御故、機関に深刻なダメージを受けた時、本来応急処置を擦る筈の機械さえも作動せず、撃沈または大破した艦が続出したからだ。
「主電源停止！補助機関へ動力接続！エネルギー伝導管のチェックを急げ！」
井上は老体ながらも年の差なんて感じさせない程、機関室を走りながら機関員たちに指示を下していく。
医務室では負傷者に見立てた人形や負傷者役の乗組員を使い、応急救護の演習が行われた。
「その薬はこっちの負傷者に!!」
「この傷の場合、包帯の巻き方は・・・」
「それは戦死者役の人形よ!!戦死者は遺体袋に収納し、臨時の遺体保管場所へ運んで!!」
リニスも額に汗をかきながら、原田らの新人衛生士たちに指示を出

していた。
訓練は、初日こそ新人たちのポカが続発したが、ヤマトの坂本と北野のパンツ一丁艦内マラソンが効いたのか、日を追うごとに少しずつ形になってきた。
「訓練終了。時間、地球標準時、十九時三十五分！」
「五分遅れか・・・」
「まぁ、初期の頃の十分遅れに比べると練度は確実に上がっているよ」
通信にてヤマトの古代と良馬は今日の訓練の総合評価を下す。
「ふぅ～・・・今日も疲れた～・・・」
ギンガは一息つきながら食堂にて、夕食の日替わり定食が乗ったお盆を持ちながら、空いている席を探す。
食料供給システム、Ｏｒｇａｎｉｃ　Ｍａｔｅｒｉａｌ　Ｃｙｃｌｅ　Ｓｙｓｔｅｍ通称オムシス（Ｏ．Ｍ．Ｃ．Ｓ）と合成食料の普及により、地球の食糧事情は、次第に改善されて来た為、当然ギンガのお盆に乗っている料理の量は物凄く、新人たちは未だに見慣れないのか、唖然とした表情をしている。
若い新人たちは食べ盛りの年頃なのだが、その新人たちでも完食できるか分からないぐらいの量の食事量を女性であるギンガが平然としながら食べようとしているのだから、驚きもする。
もしこの光景をヤマト副長の真田が見たら、
「無駄なカロリー摂取は愚かな行為だ」
とでも言っていただろう。
しかし、彼女の場合いくら食べても本人の体型は変わらないと来たものなのだから、ギンガを除く他の女性乗員としては羨む体質だ。
空席を見つけ、その席に座りギンガが食事をしていると、
「あ、あの・・通信長・・・」
「ん？」
「少し宜しいですか？」
主計科の隊員服を着た一人の女性隊員がギンガに声をかけてきた。
「えっと・・・もしかして、玲ちゃん？」
ギンガが首を傾げながら、恐る恐る訊ねる。

「はい。お久しぶりです先輩」
褐色の肌をして、銀色の髪をした、ショートヘアで目の色が赤い女性隊員、山本玲がギンガに敬礼をする。
士官学校時代、ギンガは通信科の学科をメインに、応急医療科と飛行科の学科も掛け持ちで受けていたので、当然後輩の知り合いも多い。
その中で、今ギンガに声をかけた山本玲は航空科の後輩の一人だった。
「ホント、久しぶり。あっ、髪切ったんだ」
ギンガが士官学校時代に見た玲は、前髪が目にかかるギリギリで後ろ髪は肩より少し下まで伸ばしていた。
しかし、今、目の前に居る玲は髪を全体的にショートカットにしている。
「あれ？でも、玲ちゃん。飛行科に進まなかったの？椎名ちゃんはそのまま飛行科でヤマトの方に配属されているのに・・・・」
後輩の一人、椎名晶もギンガの後輩なのだが、二人とも同じ名前なので、椎名の方は「椎名ちゃん」 玲の方は、「玲ちゃん」と呼んでいるギンガだった。
そしてギンガとしては玲が飛行科に進まなかったのが意外で仕方なかった。
士官学校時代から彼女は椎名同様、坂本や加藤等の男性陣とタメを貼れるぐらいの腕の持ち主だった。
それが任官した今は飛行科ではなく、主計科の所属となっている。
「いえ、本当は私も航空隊配属を望んでいました」
「なら何で主計科に？」
「何かの手違いで主計科に配属されました・・・でも、恐らく兄が裏で手をまわしたのかもしれません」
「お兄さん？」
「はい。ヤマト、コスモタイガー隊隊長の山本明夫です」
「ヤマトの？」
「はい・・・恐らく兄は、私を危険な目に合わせないように、私の配属先

を飛行科から主計科に変更させたのだと思います」
「でも、玲ちゃんは・・・」
「私は・飛びたいんです・・・」
玲はグッと唇を噛みしめながら呟く。
「それで玲ちゃんは、どうしたいの？」
ギンガは玲を向かいの席に座らせた。
此処は先輩として後輩の悩みを聞いてあげなくてはと、お姉さん肌のギンガは玲の相談に乗る。
「その・・・先輩は艦橋勤務なので、艦長と顔を合わせる機会が多いと思いまして・・・」
玲の頼みはギンガの口から良馬に玲の配置転属の許可を貰いたいと言うものだった。
艦長には乗員の配置を転属出来る特別権限があるのだ。
本来、ヤマトの乗艦予定の無かったアナライザーがヤマトに乗艦出来たのもこの特別権限からくるものだった。
彼女は士官学校の先輩であるギンガを仲介して自分の転属を艦長に進言してもらおうと思ったのだ。
「それだったら、私よりも、艦長に直接伝えたらどうかしら？」
「えぇぇっー!!む、無理ですよ!!」
玲にしては珍しく、声をあげ、手をあたふたとふる。
「大丈夫よ。艦長は話せば分かってくれる人だから。それよりも、玲ちゃん」
「はい？」
「・・・腕は衰えてないよね？」
ギンガは少し挑発するような目つきと仕草で玲に訊ねる。
「っ!?それは、愚問ですよ、先輩。今の私の腕ならば先輩にだって勝つ自信はありますから」
ギンガからの挑発を玲は堂々とした態度で返す。
「それなら、まず玲ちゃんの腕を確かめさせて貰おうかな」
と、ギンガは夕食を早々と食べた後、シュミレーションルームへと行き、玲と艦載機によるシミュレーションの模擬戦を行った。

結果は、玲の言う通り、確かに玲の腕は衰えておらず、以前よりも腕は上がっており、五回戦中、二回は玲の勝ちだった。
ギンガと玲はその記録映像を手に良馬の下へと向かい、事情を話した。
「そうか・・・それじゃあ、直接今度は君の腕を見せてもらおう。ヤマトの山本隊長にはこっちで話をつけておくから」
「ありがとうございます!!艦長」
「ただ・・・」
「ただ？」
「・・・今回の航海で予備機がなくてね・・・君の機体は旧式だが、俺が使用していたコスモゼロになってしまうが、それでも良いかな？」
「構いません。飛べるのであれば・・・」
「そうか。まぁ、旧式とは言え、今でも古代君が愛機として乗っている現役機だから見かけだけの問題だけどね・・・」
「はい。お願いします」
その後、良馬はヤマトと通信回路を開き、山本と話し合いをした結果、最終日に行われる、ヤマト　と　まほろば　のコスモタイガー隊で行われる模擬戦で俺（山本）を納得させることが出来れば、飛行科の所属を認めると言う事だった。
玲も山本（兄）からのこの条件を飲んだ。
そして、模擬戦前に玲は良馬のコスモゼロに乗り、訓練飛行を行った。
「坂井君、君から見てあの新人さんはどう見る？」
良馬は訓練飛行をしている山本機を見ながら隣にいる坂井に玲の感想を訊ねた。
「腕はいいな。後は度胸だろうな、俺たち航空隊は敵艦の真っただ中に突っ込むからな・・・一応、今日の模擬戦で、その覚悟を見極めるつもりさ」
坂井は山本機を見ながらそう答える。
「そうか・・・くれぐれもケガの無い様に頼む」
「ああ」

こうして、訓練飛行を終えた後、休息と機体の整備の後、飛行隊の模擬戦が行われた。
結果はほぼ互角で、彗星帝国との戦いを生き抜いた山本と坂井のほぼ一騎打ちとなり、互いに残弾とエネルギー切れにて引き分け。
新人たちは当然、バタバタと訓練用の特殊ペイント弾を食らい、愛機をペイント塗れにしていた。
それでも玲は最後の方まで食いつき、何とか山本を納得させる事が出来、晴れて飛行科へと転属できた。
これが後に、『緋眼のエース』と呼ばれる戦闘機乗り、山本玲の誕生の瞬間でもあった。
やがて、訓練日程を終え、木星圏へ・・・彗星帝国残党軍との戦闘宙域へと向かう日を迎えた。
「総員に告ぐ。艦長の月村だ。皆、これまでの厳しい訓練によく耐えてきた。これより本艦とヤマトは木星圏、ガニメデ基地へと出航する。皆も知っているだろうが、現在木星圏と土星圏は彗星帝国残党軍との最前線である。本艦とヤマトは木星圏にて、友軍と合流した後、残党軍一掃の作戦、『雷王作戦』に参加する。皆、これまでの訓練の成果を十分に発揮してもらいたい・・・諸君の奮闘に期待する!!」
艦内放送を終えると、艦橋要員が皆、良馬に敬礼する。
良馬は彼らに答礼し、改めて命令を下す。
「目標、木星圏ガニメデ基地!!まほろば、発進!!」
「機関全速!!」
「コース、木星圏ガニメデ基地!!宜候!!」
まほろば　と　ヤマト　はエンジンを吹かし、木星圏へと旅立って行った。
この時、遥か彼方の星界で盟友の星が危機を迎えていようとは、彼らにはまだ気づく術がなかった・・・

木星圏　カリスト軌道
「木星圏、カリスト軌道に到達。ガニメデ軌道上に地球防衛軍戦艦を三隻確認」

「味方識別信号を確認!!」
「識別信号グリーン・蝦夷　アイル・オブ・スカイ　メリーランド　の三隻です!!雷王作戦の同行艦に間違いありません!!」
　星名がガニメデ軌道上で停泊している戦艦を確認し、味方識別を行い、それらが雷王作戦に同行する味方艦である事を再度確認して報告する。
「ガニメデ基地より入電しました。『そのまま三艦に合流し、フォーメーションを整え、待機せよ』・・・・以上です」
「よし、ガニメデ基地に『了解』と返信」
「わかりました」
　ギンガは早速ガニメデ基地へと返信を送り、
「航海長、減速」
「了解、減速開始!!重力アンカー始動!!」
　良馬は永倉に指示を出し、永倉は制動をかける。
　まほろば　は姿勢制御ブースターを吹かし、徐々に速度を落とす。
　やがて、まほろば、ヤマトは停泊している三隻の戦艦と並ぶようにして停止する。
「しかし、これだけの短期間によく艦船の建造が間に合いましたね・・・・」
　永倉が隣に並んでいる戦艦を見ながら呟く。
「これまでは、宇宙船の建造に必要な特殊金属や宇宙鉱物などの希少資源が不足していたんだけど、今は彗星帝国の艦船の残骸から、地球は無数の金属資源を得る事が出来た・・・・簡単に言えばリサイクルによって戦艦を作っているわけだ」
　良馬が造船所の技師から聞いた話をして、短期間での戦艦の建造のタネを教える。
「敵の残骸のおかげでこれだけ早い再建が叶ったわけですか・・・・彗星帝国側にしてみれば皮肉ですね、本来自分たちの作った艦によって自分たちが討たれる訳ですから・・・・」
　フェリシアが皮肉を込めて呟いた。
　出撃命令がガニメデ基地から出されるまで待機していると、ガニメ

デ軌道上に今度は剥き出しの波動エンジンを積んだ無人の作業船がガニメデ基地に向け、航行していた。
「な、永倉先輩、あれは何でしょう？」
　星名がその異様な姿の作業船を見て、永倉に訊ねる。
「なんだ？ありゃ？剥き出しの波動エンジンの様だが・・・・」
　永倉も良く分からない様子。
「あれは恐らくＨＷＶＥＤ搭載型の波動エンジンじゃよ」
　流石機関に詳しい井上が作業船に積まれている波動エンジンの正体を教える。
「火星のフォボスと木星のガニメデ基地とで共同開発中だときいておる」
「詳しいっすね」
「これでも機関屋じゃからな」
　永倉の言葉に当然だと言わんばかりに言う井上。
「ＨＷＶＥＤってなんですか？」
　今度は星名が井上に質問する。
「確か、ハイパー・ワープ・ボヤージ・エクスペリメンタル・デバイスの略じゃ」
「それってどんな機能なんです？」
「超ワープ航法を行うための実験デバイスじゃ」
「そんな事が可能なんですか？」
「うむ、理論上ではな・・・・じゃが、実験結果は散々で一度目は完全に暴走し爆発、二度目はワープに成功したが、艦内に数十Ｇと言う強力な重力が計測され、有人使用が見限られたそうじゃ」
「何か、怖いッスね・・・・」
　自分の身体に数十Ｇの重力が加わった場面を想像したのか、永倉は体を震わせる。
「じゃが、人は何時か克服するじゃろう。何度も実験と失敗の連続を重ねて人は技術を進歩させてきたんじゃからのう・・・・」
　井上の話を聞き、この地球の完全技術の高さを思い知らされるギンガだった。

自分がミッドを離れてから幾年月があるとしても、恐らく管理局の次元航行艦の建造技術ではとてもマネ出来ないだろう。
「ガニメデ基地より入電」
「パネルにまわしてくれ」
「了解」
パネルにはギンガが良く知る人物が映し出された。
(あっ、山南校長・・・)
「ガニメデ基地の山南だ」
パネルにはかつて戦艦　えいゆう　の艦長から士官学校の校長となった山南修が映っていた。
山南は白色彗星との決戦後、士官学校の校長からこのガニメデ基地の司令官に転属となっており、次期連合艦隊総司令の内定も受けていた。
そして、士官学校の校長職には、同じく士官学校で、今なお教鞭をふっている榎本　勇がその職に就いている。
「戦艦、まほろば艦長の月村です」
「ヤマト艦長代理の古代です。山南司令、作戦の準備状況はどうですか?」
「うむ、まずは作戦内容を再確認しておこう。これが敵の勢力だ・・・」
山南が基地のコンピューターを操作し、現在の敵の勢力図を映し出し、説明を始める。
「見ての通り、既にわが軍の駆逐艦隊の展開は終了している。ヤマト、まほろば　を中心とする戦艦部隊はここでワープアウト直後にそのまま中央突破を図り、敵の指揮系統、すなわち敵の旗艦を一気に叩く。その後、指揮系統を失って混乱する敵に対し全方位より駆逐艦隊が止めを刺すわけだ。中央突破をした戦艦部隊はそのまま直進し、戦闘圏外へと離脱、敵の退路を塞ぐ形をとる」
「・・・」
良馬も古代も黙って山南の説明を聞く。
「重要なのは最初の一手だ。知っての通り、彗星帝国の艦船は非常に高い技術力のもと建造され、砲撃能力は我々防衛軍を凌ぐ」

確かに彗星帝国の艦船は皆、回転式砲塔を採用しており発射速度に関しては防衛軍よりも早い。
「また、残党とは言え、敵勢力の方が数で勝っていると言う点も否定できん。指揮系統が維持されたままなら、後続の駆逐艦隊は全滅の憂き目に遇う可能性も否定できん・・・・」
「承知しております」
「まさしく、雷神ゼウスの放つ雷光の如く、一撃で旗艦を沈める事・・・・これがこの作戦の要だぞ」
「はい」
「了解」
「よし、他の三艦の発進準備が整い次第、土星圏へ向け出撃してくれたまえ・・・・では、健闘を祈る」
そう言って山南は通信をきった。
「戦艦、アイル・オブ・スカイ　より入電、三艦とも出航準備が整った様です」
「よし、全艦出撃!!五分後に第二船速へ加速!!十五分後に土星圏へのワープを開始する!!副長」
「はい」
「敵艦直前へのワープ航路の計算を任せる」
「了解」
「全艦出撃!!」
まほろば、ヤマト、蝦夷、アイル・オブ・スカイ、メリーランドの五隻の戦艦はガニメデを出撃した。
木星、ジュピターはギリシャ神話の雷神ゼウスを指す・・・・。
五隻の戦艦部隊はまさに木星から放たれた雷の矢となったのだ・・・・。
しかし、艦隊が土星圏に向かう前に、この木星圏に多数のワープアウト反応が現れた。
「っ!?・・・・敵の・・・・残党軍の艦隊です!!」
「なっ!?」
突然の出来事に艦橋はやや騒然となる。

まさか土星圏に集結している敵艦隊が木星圏まで出張ってくるとは予想外だった。
残党軍は土星圏に展開していた防衛軍の駆逐戦隊の包囲網をワープで強硬突破し、木星圏の近くへと侵攻してきた。
だが、作戦を中止するわけにもいかず、山南はこの木星圏にて雷王作戦を実施する事に決めた。
敵も恐らく背水の陣なのだろう。
山南は土星圏に展開していた包囲艦隊を至急木星圏に急行させたが、それでも到着まで時間がかかる。
戦艦部隊は包囲艦隊が到着するまでこの木星圏にて粘る事となった。
残党艦隊は左右両翼に高速駆逐艦隊を展開し、中央に旗艦であるアポカリクス級空母と護衛のミサイル艦数隻を展開している。
しかし、空母と言っても艦載機は積んでおらず、全ての艦載機は第十一番惑星の防空任務のためにあげられており、完全に艦種の役割を果たしておらず、ただ大きいと言う理由で旗艦に選ばれただけである。
この艦隊を率いているのは、ゲーニッツと共に崩落する都市帝国から命からがら脱出した彗星帝国艦隊副総司令のザイゼンだった。
ザイゼン自身、この戦いはどう転んでも此方が負けると踏んでいたが、ズォーダーを始め、多くの同胞の命が潰えたこの星系・・・・。
その原因となった地球に対し、せめて一矢報いたいとこの戦いに身を投じたのであった。
左翼側の駆逐艦隊には　まほろば　のコスモタイガー隊があたり、右翼側にはヤマト所属のコスモタイガー隊が対応した。
戦艦部隊は作戦通り敵旗艦を短時間で沈めるため、波動砲のチャージを開始する。
やがてエネルギーチャージが終了すると五隻の戦艦から波動砲が放たれる。

彗星帝国残党軍　旗艦　アポカリクス級空母　艦橋

「ざ、ザイゼン提督!!地球艦隊から高エネルギー砲が!!」
「か、回避!!」
「駄目です!!間に合いません!!」
「こんな・・・こんな・・・まさかっ!?・・・・ガトランティス万歳!!」
放たれた波動砲は中央部に展開していた敵艦隊を跡形も無く消滅させた。
地球軍の戦艦から放たれた高エネルギー砲の威力を見て、兵士たちに動揺が見られる。

残党軍　後衛　副司令官座乗　ゴストーク級ミサイル艦　艦橋
「ふ・・・副指令!!我が方の旗艦が・・・轟沈を!!」
「ザイゼン提督も戦死した模様!!」
「艦隊に混乱が生じています!!このままでは・・・!!」
艦隊司令が戦死し、しかも戦死の原因が強力な兵器によるものだという理由が指揮系統の混乱に拍車をかけた。
「なんという・・・なんという電光石火の攻撃だ・・・!!」
副指令は事態の深刻さを認識し、暫しの間今後の艦隊運動を考えた後、結論を出した。

「・・・・・特攻だ」
「えっ!?」
「混乱する指揮系統をまとめるには一つしかない!!我々が先導して特攻し、他の艦に今何をすべきかを伝えるのだ!!」
「しかし・・・それでは・・・!!」
「後のことは十一番惑星に残っている本隊がなんとかしてくれる・・・今、我々がなすべきことは木星圏の地球軍勢力を出来る限り消耗させる事!!　敵を倒さぬままで退却することは断じて許されん!!　彗星帝国ガトランティスの兵士として、誇りと共に潔く散ろう!!」
「は・・・はい・・・!!」
戦艦部隊は当初の目的どおり、敵旗艦を沈めたのを確認し、敵戦列後方へ離脱するための行動をとった。

しかしここで敵艦隊は思わぬ行動に出た。
それを最初に察知したのは　まほろば　に乗艦した新人の星名だった。
「ん？・・・・これは・・・・!!か、艦長!!て、敵艦隊が転進を開始しています!!」
「なに？」
敵艦隊は早々に混乱した動きを立て直した。
「敵艦隊の一部はガニメデ基地に向って突っ込んできます!!」
敵のこの突然の動きを見て、一番驚いたのはヤマトの新人士官の北野だった。
彼は士官学校を主席で卒業し、卒業間近で今回の雷王作戦の草案を立案した秀才だった。
「そ、そんな・・・・指揮系統の混乱がそう早く収まるはずはないのに・・・・」
敵の指揮系統の余りにも早い立ち直りに北野は驚愕するばかりであった。
一体どういう命令で・・・・どういった方法で此処まで早く事態を立て直せたのか？
それは、北野には分からなかった。
しかし、まさか敵が『全艦特攻だ!!』と言うバカげた命令で立て直せたと言う事実を北野には予想もつくはずもなかった。
「相原!!包囲艦隊の到着はまだか!?」
古代が通信長の相原に訊ねる。
「だめです。到着まで最低でもあと五分かかります」
「これが実戦だ・・・・紙の上で計算して立てた作戦通りにはいかないんだよ、北野」
「・・・・・・」
古代の言葉を聞き、改めて実戦の困難さを実感する北野。
戦場ではまさに何が起こるか分からない。
今回の戦いは北野を含め、新人たちにはよい経験となっただろう。
「全艦、戦闘態勢を崩すな!!包囲艦隊の到着まで何とか耐え切るぞ!!

敵をガニメデ基地に向かわせるな!!我々に引き付けるんだ!」
　戦艦部隊はガニメデ基地と敵艦隊の間に割り込んで砲撃戦を開始した。
　両翼の高速駆逐艦隊もコスモタイガー隊を振り切り戦艦部隊に特攻をしかけようとするが、後方からコスモタイガーの対艦ミサイル攻撃、前方からは戦艦部隊の砲撃とミサイルが容赦なく襲い装甲の薄い駆逐艦隊は次々と撃沈されていった。
　そんな中、包囲網を突破して一隻のゴストーク級ミサイル艦が　まほろば　に突っ込んできた。
「せめて、この艦だけでも!!」
　それはこの艦隊の副司令官が乗るミサイル艦だった。
「だ、ダメだ・・・避けきれない・・・・」
　まほろば　と　ミサイル艦との距離が近すぎて回避が間に合わない。
　このままでは、まほろば　はミサイル艦の特攻を受けてしまう。
　そのミサイル艦では、
「大ガトランティスに栄光あれぇぇー!!」
　副司令官が祖国の栄光を叫ぶ。
「砲雷長!!ロケットアンカー発射!!」
「えっ!?」
「奴の横っ腹に打ち込め!!」
「は、はい!!ロケットアンカー、発射!!」
　まほろば　の艦首にあるロケットアンカーが勢いよく飛び出すと、特攻して来るミサイル艦に突き刺さる。
　ロケットアンカーが打ち込まれた為、ミサイル艦の突入針路が狂い、ミサイル艦自身の推進力と　まほろば　の推進力とで綱引き状態となるが、やがて、まほろば　のアンカーチェーンが千切れ、ミサイル艦は近くのアステロイドの小惑星と衝突して爆沈した。
　それから五分後、敵艦隊の後方、左右に土星圏から到着した駆逐艦隊が砲雷撃戦を開始し敵残存艦隊は殲滅された。
「戦闘宙域に反応!!包囲艦隊の到着です」

新見がコスモレーダーで捉えた包囲艦隊の反応を見つけ報告する。
「なんとか切り抜けたようじゃな・・・」
井上がホッとした様子で呟く。
「ええ、新乗組員たちもよく頑張ってくれた」
良馬は新乗組員に労いの言葉を掛ける。
「それにしても、敵が特攻をかけてくるとは思わなかったですよ。敵にしても早々に撤退を開始すれば、包囲艦隊到着前に大部分が離脱出来た筈なのに・・・」
敵の特攻に疑問を抱くフェリシア。
「地球をあんなふうにした奴らです。当然の報いですよ」
星名は怒気を含んだ声で宇宙に漂う彗星帝国艦艇の残骸を見ながら言う。
「月村艦長、古代艦長代理、よくやってくれた。これより防衛軍は第十一番惑星へ大部隊を派遣する」
山南司令より通信が入り、敵の大部隊が壊滅した今、土星～地球圏に展開していた艦隊が全て集結次第、第十一番惑星へ出兵することが伝えられ、まほろば、ヤマトには土星圏の拠点防衛の任務が与えられ、まほろば、ヤマトの二隻は補給と補修の後、土星へ向った。
また、蝦夷、アイル・オブ・スカイ、メリーランドもヤマト、まほろば　とは別ルートにて土星圏を目指した。

此処で時系列は少し時間を巻き戻し、
彗星帝国の残党軍旗艦が撃沈され、副司令官が特攻を命じた所まで戻る。
木星圏にワープアウトしてきた残党軍の後衛艦隊を率いていたのは、元彗星帝国監視艦隊司令のミルだった。
彼は彗星帝国において監視艦隊司令官と言う役職だが、ミルはゲーニッツ同様、実際は艦隊指揮をとった経験は無かった。
しかし、数少ない艦隊司令官職と言う事でミルもこの戦いに駆り出された。
「み、ミル分艦隊司令。副司令官より特攻命令が・・・」

オペレーターが副指令からの命令をミルに伝える。
（特攻だと!?くそっ、あの崩れる都市帝国から命からがら逃げてきて生き残ったと言うのに、こんな所で・・・・）
「ミル分艦隊司令・・・・」
「て、撤退だ」
「えっ!?」
ミルの言葉に驚きの声をあげる。
「で、ですが、命令は・・・・」
「木星圏の地球軍兵力の消耗は確かに重要だ。しかし、貴重な艦艇を失うのも問題である。此処は、副司令官殿に任せ、予備隊の我々は土星圏まで後退する」
「は、はいっ!!」
ミルが率いる彗星帝国残党軍、後衛艦隊、旗艦の戦艦一隻、ミサイル艦二隻、巡洋艦四隻、駆逐艦四隻は、地球艦隊に特攻をかけている味方を囮にして木星圏から撤退した。
イレギュラーが起こるも無事に彗星帝国の残党艦隊の殲滅という作戦の主目標は達成され、防衛軍側の被害も軽微で済んだ。
雷王作戦の第一段階の報告を受けた藤堂は残務処理と次の作戦のために必要な補給計画の見積書に目を通していた。
彗星帝国残党軍の討伐が順調に行われ、まほろば、ヤマトの両艦が土星圏を目指している中、防衛軍司令部にある長官室にいた藤堂の下に通信文を持った西郷が入室した。
「長官。奇妙な電文を受信しました」
「どこからだ？」
「そ、それが・・・・デスラーからの電文です」
「デスラーから!?・・・・間違いないのか？」
「はい、何度もチェックしましたので間違いありません」
「それで内容は？」
「はっ、ガミラス星が正体不明の敵に襲撃され爆発。その反動でイスカンダルが軌道を外れ暴走し、遂にはワープしてしまったとのことです」

「あのイスカンダルが・・・・」
「イスカンダルのワープアウト地点は銀河系の外れ方位２５の空間だそうです」
「・・・・」
「しかし、電文の発信源があのデスラーですから何かの罠かもしれませんが・・・・」
「うむ・・・・」
西郷の推測は一理あったが、あのデスラーがイスカンダルを出汁にして、ヤマトを罠にかけるとは考えにくかった。
ヤマトを撃沈するのであれば、あの白色彗星帝国との決戦の最中、その機会は十分にあったからだ。
藤堂はヤマトの乗員の意見を聞いてみようと、デスラーの電文をヤマトへと送った。

三十九話　土星圏　遭遇するもの　遭難するもの

地球防衛軍が木星圏で彗星帝国残党軍と激しい砲火を交えて居る頃、
時空管理局所属、次元航行艦、テリオスも新人研修の真っただ中にいた。
その最中、
「艦長、本部より緊急伝です」
「うむ」
通信士から本部より発せられた緊急電文を読むテリオスの艦長の表情は険しいものとなった。
そこへ、フェイトがブリッジにやって来た。
フェイトは艦長の険しい顔を見て、艦長に話しかける。
「艦長、どうかしましたか？」
「ハラオウン執務官、之を・・・」
そう言って艦長は先ほど自分が読んでいた緊急伝が書かれた紙をフェイトに手渡す。
「・・・これはっ!?」
緊急伝の内容を見たフェイトは思わず声をあげる。
その紙には、
『管理局、第３７探査部隊消息不明』
と言う内容が書かれていた。
（カリムの予言はこの事を指していたのかな？）
と、出発前に聖王教会の知り合いから読ませてもらった予言の内容を思い出した。
フェイトはこの緊急伝に書かれている第３７探査部隊消息不明事故があの予言なのだと思った。
「どう思いますか？」
「・・・今回の研修、予定を繰り上げた方が良いかもしれませんね」
既に研修の主だった内容は終了しており、残りの部分に関しては本

局のシミュレーションで行っても十分差支えがない為、遠洋での研修はこれで打ち切った方が良いのではないかと言う提案をフェイトはした。
「そうですね・安全を考慮して此処までにしましょう」
フェイトの提案にテリオスの艦長も賛成し、艦内放送にて事情を説明し今回の研修を繰り上げて、今日で研修を終了とし、テリオスは本局への帰還航路へとついた。
しかし、その帰路の途中で突然、非常を知らせるアラームがテリオスのブリッジに鳴り響いた
コンソールを操作したオペレーターが緊迫した声を上げる。
「本艦周辺に次元震感知！震度ＡＡＡクラスです!!」
「何っ!?」
「次元震、約三分後には本艦到達します!!」
「いかん!!通常空間に一時転移してやり過ごす!!転移用意!!」
「了解!!」
突然の次元震により、テリオスは通常空間に待避した。
乗り切れない程の次元震ではないが、万が一艦に損傷やトラブルが起きては大変なので艦長は退避をする選択をした。
この時はテリオスに乗っている者たち全員が、次元震及び次元乱流が収まればまた通常航路に復帰し、何の問題もなくミッドに戻れるとばかり思っていた。
だが、破綻は唐突に訪れた・・・・。

時系列は少し時間を戻し、まほろば、ヤマトの両艦が土星圏手前まで来た時、地球からの緊急伝が入った。
その電文の発信者がなんと、あのガミラスの総統のデスラーでその内容が、
『ガミラス星が爆発・消滅したことでイスカンダル星が軌道を外れ暴走したため、イスカンダル星に住んでいるスターシアと古代守を共に救って欲しい』
と、言うものらしい。

「確かにデスラーからの通信なのか？」
「間違いありません。何度も確認しましたから・・・」
古代の問いに相原がデスラーからの通信文である事に間違いない事を伝える。
イスカンダルには古代の兄、古代守が女王スターシアともに暮らしていた。
しかし、ヤマトは現在作戦行動中で命令もなく勝手に戦列から離れる訳にもいかない。
だからといってイスカンダルが危機に晒されようとしている中、何もしないという訳にもいかない。
ガミラス戦役からのヤマト乗員はイスカンダルへ行くべきだと主張しているが、艦を預かる古代としては私情で動かすわけにもいかなかった。
更に今のヤマトは彗星帝国の残党軍一掃の作戦行動中・・・
その最中、無断でイスカンダル救援へ向かう事は出来ない。
今回の件はあくまでイスカンダルの危機なので、前回の白色彗星の時の様に地球が新たな侵略者に狙われているかもしれないので、その真相を確かめる為、テレザートへ向けて脱走した時とは訳が違う。
無断でイスカンダルへ救援に向かえば、人としては正しい行為かもしれないが軍人としてそれは間違った行為となる。
「古代、すぐ行こう！守とスターシアを救いに・・・」
真田も親友・そして地球の恩人の危機にイスカンダル救援を主張する。
「・・・」
古代は決断を下せないまま一度、艦橋を降り、自室のベッド脇に置いてある写真立てに手を伸ばす。
「兄さん・・・」
古代の視線の先には、防衛軍の艦長服に身を包んだ兄、古代守の写真が入って居り、古代はその写真をジッと見ていると、ドアをノックする音が聞こえた。

古代は咄嗟に写真立てを毛布の中に隠す。
「誰だ？」
「私よ」
一声かけた後、古代の部屋に雪が入ってきた。
「古代君、早く行ってあげないと・・・」
「私情で艦を動かすわけにはいかない」
雪は真田同様、イスカンダルへ向かうべきだと主張するが、古代は正式な命令も出ていない現在、勝手に任務を離れてイスカンダルへと向かう訳には行かないと言う。
白色彗星戦役時には命令を無視してテレザートを目指した古代であったが、今回は地球の命運にかかわる事では無いので、命令を無視してまで、イスカンダル救援へ向かうか向かわざるべきかを悩んでいた。
古代とて、イスカンダル・兄の守や義姉であるスターシアの事が気になっているが、今はまだ太陽系内にいる彗星帝国の残党軍の方が地球にとって脅威なのだ。
地球・そしてイスカンダル・・・古代の心境はまさに板挟みであった。
そんな古代に雪は、
「私情じゃないわ!!地球はイスカンダルに大変な恩があるのよ!!」
と、強く説得する。
「・・・・・」
「あのコスモクリーナーが無かったら地球は放射能に覆われて私たち地球人は滅んでいたわ。このヤマトだってスターシアさんの協力があったからこそ建造出来たのよ。何を迷っているの？古代君」
古代が俯き雪の説得を聞いていると艦内放送が入り、古代は第一艦橋へと戻った。
五分後には両艦の首脳陣が艦橋に集まり、受信内容について合同協議が始まった。
「まず、古代君はこの通信をどう思う？」
良馬は、スクリーン先の古代に問う。

固有名詞こそないが、宛先はヤマト・・・そして古代だと言うことは明白であった。
しかし、送り主がデスラーであることがまずこの通信の信憑性を賛否両論させる結果となっている。
現在、地球とガミラスは正式に終戦条約を結んでいない為、事実上の休戦状態。
地球防衛軍は再建が端緒についたばかり。
古代曰く、デスラー総統はもう地球やヤマトに戦争を仕掛けてくるとは考え難いと言うが、最悪の場合、罠という可能性もゼロではない。
しかし、その一方で、イスカンダルがデスラーの言うとおりの状態なら、地球としても到底見過ごす訳にはいかない。
まずはこの通信の信憑性を確かめる必要がある。
このメンバーの中というより、地球人でデスラー総統と直接相対したのは古代と雪だけ・・・。
信憑性を判断できるとすれば地球上では、この二人しかいない。
しかし、古代は躊躇しなかった。
「この内容は信用できると思います」
古代の言葉に雪も頷く。
「何故、そうと言い切れる?」
「方法の是非はともかく、デスラーはガミラス民族の存続を最優先に考える人物です。地球に対して行った事は明らかに許されない事ですが、先日の戦闘で、デスラーは、敵だった俺の前で、白色彗星に身を寄せていたことを含めて、自らの過ちを認めました。地球の歴史を振り返っても、一国のリーダーが自ら過ちを認めるということは、そう簡単にできるものではありません。ましてや敵対していた相手の前で・・・デスラーは確かに独裁者であり絶対君主ですが、同時に誇り高い武人であり、自らを省みる度量も兼ね備えています。ですから、私はこの通信の内容を信じます」
古代の言葉に雪も頷く。
「そうか・・・わかった」
良馬は、デスラーからの電文の内容が真実に近い事を地球防衛軍本

部へと伝える。
すると、本部から返信が来た。
藤堂もデスラーの通信を信じ、まほろば、ヤマトにイスカンダル救援を命じた。
しかし、太陽系からイスカンダルへ向かう方法が一番の課題となった。
いくらヤマトがイスカンダルへの道のりを知って、今回はガミラスの妨害もなく、ワープ航法の技術があると言っても今の地球のワープ技術では限界があり、イスカンダルのある宙域に辿り着いたとしても、その時には全てが終わっている可能性もある。
それはイスカンダルの消滅・・・・
引いては今、イスカンダルに居るスターシアと古代守の死を意味していた。
「その件については、大丈夫だ。山南君、説明を・・・・」
「はっ。デスラーは我々が超長距離ワープ技術を持っていない事を知っている。その為だろう・通信の末尾に圧縮されたデータとして、超ワープ機関の概念図がつけられていた」
「デスラーが!?」
「おそらくガミラスでも最高の軍事機密に属するものの筈だ・・・・」
デスラー（ガミラス）の行為に驚く古代と良馬。
「幸い、ガニメデ基地には、すぐに改修に取り掛かれる新型の第二次世代型の超ワープ実験デバイスがある。まだ有人テストは完了していないが、ガミラスの技術を組み合わせれば、実用可能な連続ワープ機関として使用できるかもしれん」
「成程、確かにそれならば可能ですね・・・・山南司令、テストの完了予定は何時頃なんですか?」
「うむ、改修点は多そうだからな、残念ながら、未知数としか言いようがない。だが、そのまま旅立つよりははるかにましな筈だ。ヤマト、まほろば　の両艦は、イスカンダルへの旅立ち準備を行いつつ、予定通り土星圏までの宙域確保の任務を続行してくれたまえ。此方はその間に総力をあげて超ワープ実験デバイスの改修に取り掛かる」

「了解しました」
　こうしてヤマト、まほろば　の両艦は土星圏宙域確保の後、イスカンダル救済へ向かう事が決定した。

　宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「通信長」
「はい」
「艦内マイクを・・・」
「どうぞ」
「乗組員諸君、艦長の月村だ。皆、木星圏で初めての実戦を経験し、乗り切ったようで、新人の皆はこれで晴れて宇宙戦士の仲間入りとなった。本艦とヤマトはこの後、土星圏の宙域確保の任務を行う。その後、突然ではあるが、イスカンダルへの遠征任務につくことになった」
　良馬のイスカンダルへ向かうと言う言葉に新人は戸惑った。
「これはガミラスのデスラー総統よりもたらされた情報だが、ガミラス星が突然爆発・消滅した」
　更に地球の宿敵とも言えるガミラス星の消滅と言う事にも・・・
「ガミラス星が消滅した結果、重力バランスが崩れ、二連星の片割れであるイスカンダル星が本来の軌道を維持できず暴走し始めた。諸君らも知っての通り、イスカンダル星・ガミラス星ともに、星としての寿命は尽きかけており、星自体がいつ崩壊するか予断を許さない状況だ。今更言うまでもないが、イスカンダルのスターシア陛下は地球に生きるもの全ての恩人である。連邦大統領は、アンドロメダの進宙式にて、『地球は宇宙の平和を守るリーダーである』とおっしゃった・・・地球の恩人の危機に駆け付けずにいて、『平和を守るリーダー』と、名乗る事すらおこがましい。故に我々は土星圏の宙域確保の任務の後、ヤマトと共にイスカンダル救援へと向かう」
　そして、一息入れ、
「なお、今回のイスカンダル救援任務の際は、ガミラス軍との共闘も考えられる。ガミラスとデスラー総統に対しては、これまでの宿縁から、絶対に許せないと思う者が多いだろう」

ガミラスの事を話す良馬の脳裏にも、遊星爆弾で命を落とした大叔母であるすずか、冥王星海戦で散った恭介や一・・・・大勢の戦友たちの顔が次々と浮かんでくる。
「だからこそ敢えて言う。デスラーを・・・・ガミラスを許せとは言わないが、恨みや憎しみを決して表には出すな。我々がガミラスを恨んでいるのと同じように、ガミラスもまた、祖国を焼野原にし、家族や友人、恋人を大勢殺したヤマトを始めとする我々地球人を憎み恨んでいるだろう。だが、今回のイスカンダル救援任務はそんな負の感情を表に出していては互いに足を引っ張る形となり、間違いなく失敗する。辛いかも知れないが、イスカンダルを救う為だと割り切ってくれ・・・・もし、どうしてもガミラスとの共闘が我慢できないと言う者は、退艦を許可する。以上だ・・・・」
良馬は艦内放送を終え、艦橋を見渡す。
艦橋要員は皆、覚悟を決めた目で良馬を見ている。
どうやら艦橋要員の中には退艦する者は居ないようだった。
まほろば、ヤマトはイスカンダル救援の前にまずは土星圏の宙域確保があるので、そちらを先に片付ける事とした。
(そう言えば、大山さんが土星圏に向かっていたが、如何していただろうか？無事に木星圏まで避難できたのだろうか？)
良馬は、先日ドックで会った大山が土星圏に仕事で向かうと言う話を思い出し、大山の身を案じた。

「土星圏へ到着しました。予定航路との誤差は０．００２・・・・充分に許容範囲です」
「波動エンジン異常なし」
「艦の損傷も認めず」
「星名も操艦がだんだんと手慣れてきたじゃねぇか」
「は、はい!!ありがとうございます」
永倉が星名の腕が上がってきたことを褒め、星名は嬉しそうだった。
そしてふと、星名が窓の外を見ると、

「っ!?・・・・あ・・あ・・・・ああ・・・・!!」
突如、彼は震えた声を出す。
「どうした?」
「外を・・・・外を見てください!!」
永倉が艦外へと視線を移すと其処には沢山のデブリが漂っていた。
「地球連合艦隊と彗星帝国の決戦跡か・・・・」
デブリの山は防衛軍艦艇、彗星帝国艦艇の残骸の山だった。
未だに全てを回収できずに、土星圏を漂っているのだ。
「これが・・・・前の戦いの・・・・」
「ああ・・・・土星圏を絶対防衛ラインに設定した土方提督が立てた作戦プランだった・・・・」
永倉が星名に土星圏での戦いを大まかに語る。
(土方さん・・・・)
良馬はその話を聞きながら、土方の最後を思い出していた。
「ほんの一ヵ月前の事なのに何だか、随分昔の様にも思えてくるぜ・・・・」
「でも、私たちはあの尊い犠牲を無駄にせず、そして決して忘れてはなりません」
永倉の言葉にギンガが、いくら年月が経とうとも、あの戦いの事を・・・・。
あの戦いで戦死していった大勢の宇宙戦士たちの事を忘れてはならないと言う。
センチメンタルな空気となったが、直ぐに作戦任務の為、雰囲気を切り替え、土星圏を注意しながら航行する　まほろば　と　ヤマト。
「まもなくタイタン軌道に到達します。周囲に敵影なし」
新見が周囲に敵影が無い事を報告する。
「敵影なし・・・・うーん・・・・此処に集結していた艦隊は全部木星圏に出張って来たのでしょうか?」
星名が良馬に質問する。
「いや、まだ安心するのは早いよ。土星圏が重要拠点なのは、敵も味方も同じはず・・・・何せ、土星の衛星群には、豊富な量の宇宙金属資源や

デブリの山が有る。敵が無防備のまま放置しておくわけがない」
良馬は、この土星圏には必ず敵が潜んでいると断言する。
そして、それは直ぐに現実のものとなった。
「どうやらその様です。今、敵影を複数確認しました」
「っ!?総員戦闘配置!!」
「ん？・・これはっ!?・・・・艦長!!」
良馬が戦闘配置を命ずると、ギンガが良馬に声をかける。
「どうした？」
「微弱な通信信号を敵方向からキャッチしました!!信号が弱くて、音声受信が出来ませんが・・・・」
「敵の通信波を傍受しているんじゃないのか？」
「いえ、信号の種類が二つありまして、一方は・・・防衛軍のものです!!」
「もう一方は？」
「・・・わかりません。ですが、彗星帝国でもガミラスの通信波でもありません」
「敵方向から味方の？それにもう一方からもガミラスでも彗星帝国でもない通信・・・」
「レーダーでも捕えました。通信波は衛星タイタン付近からです!!」
新見が通信場所の特定をした。
それは、何と土星衛星タイタンの近くからだった。
「タイタンから？」
「しかし、土星圏は、今は敵の勢力下・・・なんでそんな所から防衛軍の通信が？」
「防衛軍の生き残りがタイタンにいるのか・・・？それとも敵の罠か・・・？」
井上が通信者の正体が、味方が救援を求めているのか、それとも敵が占拠したタイタン基地から通信を送っている敵の罠なのか、疑問視する。
「敵も今の通信を傍受しているかもしれません。通信が味方からならば、敵をタイタンに近づけてはなりませんし、逆に敵の罠であれば、

我々がタイタンに近づくのは得策ではありません。ですが、どちらにせよ、今は目の前の敵を倒さなければ、話になりません。タイタンに近づかず、そして同時に敵をタイタンに近づけないようにして戦えば・・・・」
　星名が指揮官らしい最もな意見を述べる。
「おっ？いっちょまえに指揮官らしい口ぶりだな」
　永倉がそんな星名にニッと笑みを浮かべながら語り掛ける。
「あっ、いえ・・・そんな・・・・」
　星名は出過ぎたマネをしてしまったと、思ったが、
「上出来って事だ。気にするな。むしろ、胸をはっていいくらいだぜ」
「は、はい」
　両艦は戦闘宙域に突入した。
「通信長」
「はい」
「もう一方の通信が何者からなのか、探査してくれ」
「了解」
　戦闘を行いつつ、良馬はギンガにもう一方の通信の配信者の正体を探らせた。

　土星圏
　ここで、時系列は冒頭に戻る。
　次元震の影響で通常空間へ浮上した管理局の巡航艦、テリオス。

　時空管理局　次元巡航艦　テリオス　ブリッジ
「通常空間を確認!!」
「現在地を確認せよ」
「そ、それが・・・・」
　艦長が現状を確認する様にオペレーターに命ずる。
　すると、オペレーターが気まずそうに口よどむ。
「どうした？」
「次元震の余震の影響か、機器が上手く作動しません」

機器を操作していたオペレーターが次元震の影響で機械が故障した事を報告する。
「なにっ!?すぐに修理にかかれ!!」
「りょ、了解」
早速修理作業にはいるオペレーターの姿を見ながらフェイトはふと窓の外を見る。
そこにあったのは・・・・
「あれはっ!?もしかして・・・・土星?」
フェイト目には小、中学校次代を地球で過ごした折、理科の教科書に載っていた。
太陽系の惑星の中で唯一変わった形をした惑星、土星の姿が映った。
「応急修理で何とかしましたが、やはり帰還後、念のためドックの技師に見てもらった方が良いかもしれません」
応急修理が終わったのか、オペレーターが艦長にそう報告する。
「うむ、分かった。では、早速現在位置の測定を急げ」
「了解」
オペレーターが現在地の測定をしようとした時、
テリオスのレーダーが此方に高速接近する船影を捉えた。
「後方に複数の艦船反応!高速で接近してきます!」
艦長の表情が強張った。
友軍艦艇にしては速度があまりにも速すぎる。
「接近してくる艦船に所属と目的を質せ!総員警戒配置だ。急げっ!」
「はっ!」
操舵士と通信士が艦長の指示をすぐさま実行した。
フェイトの顔にも緊張の色が窺える。
「接近中の艦船、此方の呼びかけに応じません!」
通信士が悪い報告をする。
続いて観測員が、映像データが取れたことを知らせ、ディスプレイに映し出した。

「あ、あれはっ!?」
「宇宙・戦艦!?」
ブリッジの全員が愕然とした。
その中でもフェイトは見慣れた艦影があるのを見つけた。
それは以前、義兄のクロノと共にテレザートで見たあのミサイル搭載艦だった。
「なんで・・・なんで、プレオを破壊した艦がこんな所に・・・?」
フェイトが小さく呟くがその声は誰の耳にも入らなかった。
「大型艦は推定で全長３００ｍ以上。中型艦も約１３０ｍ以上。いずれも巡航速度が速く、このままでは追いつかれます!」
観測員が推定データを読み上げる。
艦長は苦渋の表情を浮かべながら、今出来ることを指示する。
「総員戦闘配置に切り換える。全砲門スタンバイ!本部に緊急電を送れ!」
「はい!!」
ブリッジが騒然としている中、フェイトはディスプレイに映る艦船を睨みつけていた。
(あれは間違いなく、プレオを破壊し、私たちがテレザートで見た艦と同型の艦・・・)
そして、以前自分たちが見た艦影と今、目の前に映っている艦が同型だと言う確信を得ると、
「艦長、あの艦船ですが、以前プレオを破壊し、クラウディアがテレザートで遭遇した、ミサイル艦隊と同じ勢力のものだと思います」
艦長がフェイトの方に振り返り、質問する。
「その話は私も聞いています。だとすれば、一連の遭難事件の犯人と言うことですか?」
「その可能性は十分考えられます」
フェイトの話を聞き、艦長はしばし考えた後、決断した。
「反転だ。艦首を接近してくる艦船に向けよ!アルカンシェルの発射準備をしろ!!」
接近する艦船が敵対行動をとる可能性が高いならば、相応の対応を

とるしかない。
次元震で緊急転移は使えない。
何としても自力で活路を切り開くしかないのだ。
しかし、その決断は、あまりにも遅すぎた。
「敵艦発砲!!」
「障壁展開!全員、何かに掴まれ!」
ブリッジにいたフェイトも手近な物をしっかり掴んだが、一瞬後に襲ってきた衝撃は皆の予想を上回るものだった。
直撃らしく、全員が吹き飛ばされた。
「被害状況を報告しろ!」
頭から血を流しながら席に戻った艦長が被害状況を把握しようとした。
「アルカンシェル全壊!艦首部、大破しました!!」
「アルカンシェル使用不能!!」
もたらされた報告は悲観的なものだった。
防御障壁を簡単に破られて直撃弾を浴び、最大の武装だった魔導砲『アルカンシェル』は敵の先制攻撃で破壊され、艦の前半分は機能を失っていた。
「敵艦左右に展開しつつ接近!包囲されますっ!」
観測員が最悪の報告をもたらした。
次元航行艦は本来、それぞれの次元世界に赴いて次元犯罪の取り締まりやロストロギア探索及び回収の司令部機能や輸送等のために建造されたもので、艦船同士の砲撃戦をするために建造されてはいない。
時空管理局の歴史上、宇宙空間での艦船同士の戦闘がない訳ではないが、敵方の艦船も管理局が保有する次元航行艦と大差ない武装だった為、殊更戦闘に特化した艦船を建造する必要がなかったのだ。
しかし、一連の次元航行艦の遭難事件が続く中、クロノをはじめ、テレザート宙域での対艦戦闘を目撃した者、クロノの意見に賛同した局員らは対艦戦闘用に特化した艦艇の必要性を訴える者も出始めていたが、未だにＪＳ事件に伴う時空管理局内部の混乱で管理局は新型艦

船の建造に遅延が起きていた。
艦体前半部を大破したテリオスは火煙を噴き出しながらも、左右に障壁を展開して被害の拡大を防ごうとした。
フェイトが最も恐れたのはプレオを破壊したあの超大型ミサイルだった。
しかし、敵はそのミサイルを使用せずに、ビーム砲を物凄い連射速度で撃って来た。
これはこの艦隊を率いているミルが、現状では補給が見込めないミサイルを決戦前に無駄な消費を防ぐ為にミサイル艦に攻撃に関してはミサイルは極力使用するなと命令していた為であった。
「障壁展開しました!」
「敵艦さらに発砲!」
次の攻撃は先程よりも距離が近い分、貫通力は十分以上にあった。
しかも敵はそのビーム砲は物凄い連射速度で撃ち込んでくる。
管理局の艦の障壁はその連射速度に耐え切れなかった。
それ故に、折角張った障壁も何の意味もなさず、先程とは比較にならない凄まじい衝撃と爆発がブリッジを襲い、クルーは全員が吹き飛ばされ、薙ぎ倒された。
「フェイトさん!!」
フェイトが意識を失う前、自分の名を呼び、自分に覆いかぶさろうとしたオペレーターの姿が目に映った。

「うっ・・・ぐっ・・・」
一時の失神からフェイトは意識を回復した。
(意識はある・・・目も耳も大丈夫・・・身体の痛みもそこまでは重傷じゃない・・・大丈夫みたいだ・・・)
被弾による衝撃で投げ飛ばされたが、視力、聴力は問題なく、身体の彼方此方は痛いが、骨折はしておらず、出血もかすり傷程度で大したことはなく打撲だけの様だ。
起き上がろうとしたフェイトだが、そこにオペレーターの女性局員が覆いかぶさっていた。

「だ、大丈夫!?」
フェイトがオペレーターの女性局員に声をかけると、
ヌチャ・・・
ねっとりと粘性のある液体がフェイトの手に着いていた。
「えっ・・・?」
それは真っ赤な血で、その血の主は他ならぬ、今自分に覆いかぶさっているオペレーターの女性局員が出している血であった。
「しっかり!!しっかりして!!」
フェイトは慌てて声をかけ、身体を揺するが、オペレーターの女性局員はフェイトの言葉に答えず、ぐったりしている。
その身体の下は血の海と化していた。
当然フェイトの服にも彼女の血がべっとりと付着している。
迫り来る瓦礫と衝撃からフェイトを庇い、彼女の背中や腹部には金属片が深々と突き刺さっており、血はそこから流れ出ている。
呼吸はしているので、生きてはいるが、彼女は内臓を損傷している。
腹部の損傷は、放置すれば胸部のそれよりも死亡率が高い。
特に大動脈と大静脈の損傷ではまず助からない。
十年前に起きた　高町なのは　墜落事件時も彼女は大動脈を外れていたから一命をとりとめたのだ。
もし、あの時、大動脈に致命傷を受けていたら、恐らく　なのはは助かっていなかったか体に重い後遺症を残していただろう。
それにあの衝撃だ・・恐らく肋骨も何か所か骨折しているだろう。
「ふぇ・・・イト・・さん・・・?」
オペレーターの女性局員は弱々しく声を出す。
「よかった・・・まっていて、直ぐに救急箱を・・・」
「わ、私は・・・もう・・・」
「そ、そんな事は無いよ!!諦めないで!!」
フェイトは必死に声をかける。
「フェイト・・・さん・・・怪我は・・・?」
「大丈夫、貴女が庇ってくれたおかげで、怪我は大したことないよ。貴女も直ぐに手当てを・・・」

「・・・そ、そう・・・ですか・・・よ・・・よかっ・・・た・・・」
「しっかりして!!目を開けて!!」
オペレーターの女性局員はゆっくりと目を閉じ、二度と目を開けることもフェイトに声をかける事もなかった。
「・・・」
人の死を眼前で見たフェイトは何も言えず、ただ唖然とする。
フェイトの周囲・テリオスのブリッジは原形を留めぬまでに破壊つくされ、あちこちから煙や火花が飛び散っているブリッジの姿があった。
そしてその周囲には手足が変な方向に曲がったり、身体の彼方此方が千切れて息絶えているブリッジクルーの姿があった。
「フェイトさん!」
背後からの声に振り向くと、バリアジャケットを展開したティアナが煤まみれの姿で此方に駆け寄って来た。
彼女の手足にもかすり傷があり、小さな出血が見られる。
「ティアナ?」
唖然としていたフェイトはティアナの声で我に返る。
「フェイトさん、怪我は!?」
「私はなんとか・ティアナは・・・?」
「私も大丈夫です。ここで動けるのはどうやら私たちだけのようですね・・・」
「ティアナ、この子の治療を・・・」
「フェイトさん・・・残念ですがその人は・もう・・・」
ティアナは唇を噛みながら悔しそうに言う。
「・・・」
魔法は確かに凄い力であるが、万能ではない。
そんな事は今までの経験から分かって居る筈だ。
フェイトは自分に喝を入れるように言う。
「ティアナ、他に生存者がいないか、すぐ確かめて。ここは私が引き受けるから」
「は、はい!!」

ティアナは急いで生存者を探しに出た。
へたり込みたいのはフェイトも同じだった。
何が、管理局の将来を担うエースだ。
目の前で同僚が死に、今も自分を含めて部下のティアナも危険な状態である事は変わりない。
(私は何もできない・・・)
(私は無力だ・・・)
そんな中また着弾したのか、艦全体が突き上げるような衝撃に襲われる。
ティアナどころか自らの命の危機なのだが、フェイトには何もかもが他人事のように思えた。
一方、艦内に他の生存者を探しに行ったティアナは・・・
「どうして・・・どうして、こんな・・・こんな事にっ!」
瓦礫を避けながら他の生存者を探し求めているが、ことごとく息絶えているか、心肺停止状態になっている。
生存者を探す為、艦内を走っているティアナは涙を流す。
つい先刻まで談笑していたクルーが、もう物言わぬ骸と化している。
これ程大量の死に直面したのは初めてだ。
できるなら全員助けたかった。
しかし、最早叶わない。
せめて、まだ生きていると思われる者だけでもと蘇生措置を施すが、息を吹き返す様子はない。
諦めきれない。
へたり込みたい。
泣きわめきたい気持ちを必死に抑え、手遅れだったクルーの蘇生を諦め、ティアナは艦内を駆けずり回り、生存者を探すが、結局他の生存者は見つからず、フェイトのいるブリッジへと戻る事にした。
ブリッジに戻る途中、通信室の通信機が反応をしていた。
通信室で息絶えている通信士はテリオスが襲われた直後に救難信号を送り、その後、通信士が息絶えても自動で救難信号は送られてい

た。
「これはっ!?」
そしてその通信は何処かに受信されており、何者かが此方に通信を送っている様子だった。
ブリッジの通信機能は既に破壊されていたが、もう一つの通信機能はまだ生きている。
救援が来てくれたのかもしれない。
ティアナはフェイトにこの事を知らせようと急いでブリッジへと駆け戻った。
「フェイトさん!」
ティアナの叫ぶような声に、フェイトは我に返った。
「ティアナ、生存者はいたの?」
「いえ、残念ながら・・・・」
「そう・・・・」
フェイトは残念そうに顔を伏せる。
「それより、此方が発信した自動救難信号に対する応答があります!」
まさか、こんなところを航行している宇宙艦船が他にいるというのか?
もしかして管理局が・・・・友軍が、味方が来てくれたのだろうか?
それとも偶然この周辺を哨戒していたのだろうか?
どちらにせよ、このままでは死を待つだけだ。
一途の望みをかけて、フェイトはティアナと共に床の残骸を避けながら通信室に向かった。
あれだけの攻撃を受けたにも関わらず、通信室の通信装置は奇跡的に動作していた。
しかし、通信士のクルーはコンソールに突っ伏すように息絶えており、フェイトはクルーを座席からおろし、胸の上で手を組ませた。
フェイトはしばし瞑目して頭を垂れてから、通信機に向かった。
通信機からは多少のノイズがあるが、明瞭な女性の声が聞こえてくる。
「こちら、地球防衛軍所属、宇宙戦艦、まほろば。貴艦からの救難信号

を受けた。応答は可能でしょうか？可能ならば返答をされたし、繰り返す――」
それは何処かで聞いた覚えのある声であったが、今のフェイトにはそれが誰だったのかを思い出す余裕はなかった。

ここで時系列は再び時間を少し巻き戻す。
木星圏での戦いで艦隊司令官であるザイゼン提督らを半ば見捨てる様にして土星圏まで辿り着いたミル分艦隊。
このままおめおめと第十一番惑星基地に帰る訳にはいかない。
帰るにはそれなりの戦果を上げなければならない。
そんな中、土星衛星タイタンの付近にて、待ち伏せを行う事にした。
土星圏は地球側も欲している事は知っているし、我が軍（彗星帝国）としても資源確保の拠点として土星圏は何としてでも押さえておきたい宙域である。
もしかしたら、土星圏確保のために援軍を送ってくれるかもしれない。
そんな思いを抱いてデブリの中に隠れていたが、ミルの期待は裏切られた。
土星圏に来たのは、援軍ではなく、彗星帝国にとっては、宿敵とも言えるヤマトとそのヤマトよりも大型の戦艦だった。
更に自分たちの後方・・・タイタンの近くにて、何かが通常空間に浮上する反応を捉えた。
映像で見てみると、其処には今まで見てきた地球の戦闘艦とは違う艦が浮上してきた。
ミルはこの浮上してきた艦を地球軍の新型艦だと思い込み、あの新鋭艦を沈めれば、十分な戦果として、十一番惑星基地へ戻れると思い、自分が座乗する戦艦とミサイル艦に突如、出現した地球防衛軍の新鋭艦と思しき艦（実際は管理局の次元航行艦）に攻撃命令を下した。
そして巡洋艦と駆逐艦には、ヤマト攻撃を命じた。
完全に巡洋艦と駆逐艦は貧乏くじである。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

ギンガはタイタンの方向から送信されている防衛軍でないもう一方の通信波を解析していたが、それが漸くわかった。

「艦長、この救難信号ですが、先日の『時空管理局』の難破船と全くの同一パターンです」

「わかった。此方からも呼びかけるんだ！」

「了解」

（やれやれ。また、時空管理局か・・・）

何故こんな所にと言う疑問が浮かぶが、まずは現場を確認するのが先だ。

「坂井隊長!!」

「はい」

「コスモタイガー隊緊急スクランブル!!彗星帝国残党軍に襲われている艦がある!!直ちに救助に向かってくれ!!」

「了解!!対空・対艦戦闘装備の許可を願います」

「許可する!!通信長!!」

「はい」

「ヤマトに打電!!ヤマトはタイタン方面の防衛軍通信波の発信源へ向かってもらい、当艦は、もう片方の通信発信源に向かう旨を打電しろ!!それから管理局の艦にも救援に向かうと通信を送れ!!」

「はい!!」

ギンガはヤマトに打電した後、管理局の艦にも救援へ向かう旨を通信した。

管理局艦に通信を送ってから約数分後、

「管理局艦から応答がありました。音声信号です！」

ギンガが入電した音声信号をスピーカーへと繋ぐ。

「こちら、時空管理局所属、次元航行艦、テリオス。所属不明の数隻の艦船の攻撃を受け、艦は大破し、航行不能状態です。救助をお願いします!!」

管理局の艦からの応答は意外に若い女性の声だった。

声を聞く限り、緊迫してはいるが、まだパニックに陥らず、落ち着

いていられるようだ。
「了解。現在そちらの現場に最大船速で急行しています」
ギンガはこの女性の声を聞き、「まさかっ」と思いつつもそれを表に出さず、忠実に職務を全うした。
「機関長、機関全速!!」
「機関全速!!」

次元巡航艦　テリオス　通信室
一方、通信を受け取ったテリオスのフェイトは、救助が来たことに安堵しつつも、通信機の向こうから聞こえてきた声の内容に耳を疑った。
『地球防衛軍』――？
どういうことなのか？
そもそも、第９７管理外世界こと「地球」に、宇宙戦艦を運用する組織など存在しない筈・・・。
と言うよりも、宇宙戦艦を建造できる技術力さえ無い・・・。
「フェイトさん？」
一瞬思考が停止したフェイトを、ティアナが現実に引き戻した。
気を取り直したフェイトは通信装置に向き直り、応答を始めた。
応答してくれた艦が本当に地球の船なのかはともかく、自分たちを救助しようとしているのは事実だ。
このままここにいても、待っているのは確実な『死』しかない。
生き延びるためには、あの艦――地球防衛軍――に賭けてみるしかない――。
フェイトはそう決心した。

四十話　土星圏　蘇るもの　救助されるもの

「こちらの搭載機が貴艦と貴艦を攻撃している艦を確認しました。これより該当の艦に即時攻撃中止を要求し、従わなければ武力行使を行い、貴女方を救助しますので、今しばらく待っていて下さい」

ギンガがテリオスに通信を送り、

しばらくして、

「例の艦はこちらの通告を拒否し、攻撃してきた為、攻撃指示を出しました。衝撃が伝わるかも知れないので、念のため、何かに掴まっていて下さい」

と連絡があったかと思うと、一際重く強い衝撃を感じた。

これはテリオスが被弾したのではない。

別の艦が大きな損傷を受けたか、大爆発した衝撃波がテリオスに届いた為だろう。

何度か艦を揺さぶるような衝撃に見舞われたがこの艦でないことだけは確かだ。

少しして一際重い衝撃による振動が走りそれっきり衝撃波は絶えた。

やがて、

「貴艦を攻撃していた敵艦は全て排除しました。本艦も貴艦を直接視認しています。これより救助に向かいます。貴女方のいる位置は何処ですか？」

と、フェイトたちの現在位置を訊ねてきた。

フェイトが生存者は全員ブリッジ近くの通信室に居る事を伝える。

場面はかわり、地球側視点となる。

坂井率いるコスモタイガー隊はまず、左舷にいるミサイル艦の一隻に集中攻撃をかけた。

管理局の艦を攻撃していたのは、ミサイル艦二隻、戦艦一隻の計三隻。

そこでまず、自分たちに近い艦から攻撃を開始した。
彗星帝国の艦はコスモタイガー隊に気づき、管理局艦への攻撃を一時中止し、コスモタイガー隊の迎撃に映るがブリッジへの一発が艦首脳部を全滅させたのか、そのミサイル艦は突然左に転舵するや針路上にいた僚艦に斜めに衝突。
二隻とも爆発して四散した。
「な、何をやっているんだ!!」
この醜態にミルは思わず声をあげ、
ミルが声をあげるのと同時に、
「何をやっていやがる・・・」
と、衝突爆散した敵を見ながら坂井は呆れながら呟いた。
続いて、コスモタイガー隊は残る戦艦に攻撃を開始するが艦主要部の装甲は頑丈だった。
しかし、コスモタイガーの攻撃は艦橋構造物に集中。
最も脅威な艦橋砲の大半を破壊し、早くも戦闘力の過半を喪失させた。
「敵、ミサイル艦二隻撃沈!!残るは旗艦らしき戦艦のみです!!」
「ヤマトの方でも敵と交戦を始めました」
即座に良馬は艦砲による撃滅を決意する。
「よし、最大戦速で前進する!」
「了解!」
戦闘宙域に入ると、流石に戦艦相手に新人ばかりのコスモタイガー隊では撃沈に至らない様だが、あの艦橋に装備されている大型砲は破壊できた様子だ。
しかし、敵も死に物狂いで迎撃している様なので、コスモタイガー隊を退避させ、死にかけの戦艦に引導を渡してやった。
「主砲一斉射!!撃て!!」
まほろば　から放たれたショックカノンが敵戦艦に命中する。
「まさかっ!!こんな・・・こんな所で・・・私がぁぁぁぁぁぁぁぁー」
ミルは叫びながら、爆散する乗艦と運命を共にした。

「敵勢力完全に排除」
「よし、管理局艦の救助に入れ。コスモタイガーは引き続き周辺警戒を続けろ」
「了解」
程なくして救命艇が　まほろば　を発進し、テリオスへと接近する。
そのテリオスではやはり諦めきれないのか、ティアナは心肺停止状態のクルーに対し、半泣きで蘇生措置を続ける。
しかし、そんな彼女の肩にフェイトの手がポンッと置かれた。
「・・・」
振り返ったティアナにフェイトは無言で首を横に振った。
フェイト自身も自分を庇ってくれたオペレーターの女性局員の事も未だに完全には踏ん切りがついていないがこの場でいつまでも悲しみに暮れている暇はない。

「敵は排除されたみたい・・・これから助けが来るって・・・」
目を真っ赤にしたティアナも頷き、蘇生措置を諦め、若い操舵士の手を胸の上で組ませた。
そこで初めてティアナは気付いた。
自分たちを助けようとする者の身元をまだ知らないことを・・・
よって、ティアナはフェイトに誰が救助に来るのかを訊ねた。
もしかしたら、管理局の友軍が救助に来てくれたのかもしてないと思ったからだ。
その質問にフェイトは、
「正直、私も混乱している。相手は『地球防衛軍』と名乗っているんだ」
「地球・防衛軍?・・・でも、地球は・・・」
ティアナも以前六課に所属していた頃、地球へ行ったことがある。
その時に見た地球には宇宙防衛をする組織も、宇宙戦闘艦を建造できる技術も無かった。
「ひょっとしたら、私たちが知っている地球とは別世界なのかも知れない・・・」

ティアナの疑問にフェイトはそう答えた。
それから数分後、
「おーい!!誰か?誰かいないか!?誰か!?生きていたら返事をしてくれ!!」
通路の奥から人の声が聞こえた。
その声を聞き、ティアナはフェイトと視線を合わせて頷き合うと、
「こっちです!!」
と、叫んだ。
通信室に入ってきたのは、赤いヘルメットに手袋とブーツを身に着け、上下共に空色地に赤いライン、左胸に白い錨マークが入った服を着た男性だった。
男性はヘルメットのバイザーを上げ、フェイトとティアナに挙手礼をして名乗った。
「地球防衛軍所属、戦艦　まほろば　乗員の星名透です。救助を求めたのは貴女方ですか?」
「はい。時空管理局所属、執務官、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです。危険な中での救助活動に感謝します」
フェイトは頭を下げて礼を述べた。
「同じく執務官補佐のティアナ・ランスターです」
ティアナも救助に来た星名に頭を下げた。
「細かいお話は後にして、まずはお二人を私たちの艦にお迎えします。よろしいですね?」
「はい。お世話になります」
星名がフェイトとティアナの二人を誘導する。
今回の救助において、本来は良馬が前線指揮を執ろうとしたのだが、その指揮を星名が志願して来たのだ。
新人の成長の為、良馬は星名の志願を受け入れ、星名に救助の指揮を命じた。
もし、星名が志願しなければ、ギンガの時同様、良馬が現場で指揮をしていただろう。
ヤマトの古代同様、良馬は、やはり根っからの前線で戦う戦士なの

だろう。
救命艇の接舷ハッチに向かう途中、星名の元へ、艦内の人命検索に散っていった者たちから次々と報告が入ってきたが、いずれも生存者はなし。
その報告を聞きながら、フェイトは表情を暗転させ、力なく項垂れていく。
そして、フェイトとティアナの生存者二人を乗せた救命艇は、まほろば　へと向かう。
管理局・管理世界以外の宇宙船をこうしてマジマジと落ち着きながら見たのが初めてのティアナはその大きさと存在感に圧倒された。
(ヤマト!?・・・・ううん、違う・・・・ヤマトよりも大きい・・・・)
それは、フェイトも同様で更に　まほろば　の艦影がテレザートで見たヤマトとそっくりであるが、そのヤマトよりも大型である事、戦う為だけに生まれた艦をこうして目の辺りにして今後の管理局の未来に一抹の不安を抱いた。
まほろば　に収容されたフェイト・テスタロッサ・ハラオウンとティアナ・ランスターの二人は即座に医務室に搬送された。
そこで、フェイトは予想外の人物と再会する事なった。
「医務長、此方が救助者のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンさんとティアナ・ランスターさんです」
星名が医務長にフェイトとティアナを紹介し、その医務長が振り向くと、
「っ!?」
フェイトと　まほろば　の医務長は目を大きく見開き、固まった。
そして、
「・・もしかして・・・・リニス・・・・?」
「フェイト・・なんですか?」
震える口調で互いを確認するかのように、お互いの名前を言い合う両者。
そこに、
「医務長、検査機器の用意が出来ました」

と、原田が検査の用意できたと、報告が入った。
「は、はい。原田さん、すみませんけど、此方の二人の検査と治療をお願いします。私は他の負傷者の手当てをしますので・・・」
「わかりました」
リニスはまるで逃げるかのようにフェイトの前から去る。
「リニス・・・」
その姿をフェイトは寂しそうな瞳で見ていた。
星名は気まずそうにリニスとフェイトの様子を見ていたが、此処に居ても自分が出来ることは無さそうなので、原田に一言告げた後、医務室を後にした。
フェイトとティアナの二人はまず、外傷、内臓損傷の有無等の検査を受けた。
なお、この時、二人は管理局の制服から健診衣へと着替えていた。
テリオスから救助された時、フェイトはオペレーターの女性局員の血がついたままの状態で、ティアナは煤で汚れていた状態で互いに不衛生な状態だった為である。
医務室にて検査を受けた二人が驚愕したのは、医療部門が大幅に機械化・省力化されていた事と乗組員の同胞ではないはずの自分たちの検査が、あまりにも迅速に進められていったことだ。
設備面では戦艦にも関わらず、そのレベルは明らかにミッドチルダの大病院や時空管理局本局付属の総合病院をも凌いでいる。
さらに驚いたのは、まるで自分たちが地球人であるも同然の治療だったのだ。
検査の結果、打撲傷の治療のみを受けたフェイトと軽い火傷の治療を受けたティアナは休息の為に原田の案内の下、女性士官用の予備室へと案内された。
内装には全て不燃・難燃材を使用しているらしく、時空管理局の次元航行艦に比べるとシンプルさは否めないが贅沢はいえない。
いや、管理局の艦よりもシンプルなのは装飾よりも機能を優先した造りとなっているためなのだろうとフェイトは推測した。
部屋にある机の上にはさりげなくミネラルウォーターのボトルと

タオル、おしぼりが置かれていた。
「あの・・フェイトさん・・・」
「何？ティアナ」
「・・・フェイトさんはあの医務長さんと知り合いなんですか？」
　ティアナは自分たちが来たこともない艦で先程あったばかりの医務長がフェイトと知り合いみたいに見えた。
　それは医務長こと、リニスも同じだった。
「・・・まだ、確信はないけど、あれは間違いなく・・リニスだった・・・」
「えっ？」
　フェイトが医務長の名前を呟いた様だが、ティアナにはその肝心の名前の部分が聞こえなかった。
「私たち、これからどうなるんでしょう・・・？」
　ティアナが不安げに呟いた。
「・・・」
　それは、フェイト自身にも分からなかった。

「これで、最後か？」
　遺体が納められた棺の蓋を閉じた　まほろば　の乗員が辺りを見回しながら呟く。
　フェイトらの生存者が救助された後、まほろば　の乗員はテリオスの艦内に残された遺体の収容作業を行っていた。
　このまま弔われず艦内に残しておくのは忍び難いと良馬はそう思い、木星からの実験デバイス到着まで、管理局艦に残されていた乗員の遺体収容となんとか今回の事態を管理局に知らせる為にギンガの立ち合いの下、通信機やブラックボックスの回収を行った。
　ギンガが乗って来た貨物船や以前遭遇した管理局艦とは違い、テリオスの通信機器は何とか生きており、之ならば少し改造すれば通信ポッドとして使えそうだとギンガはそう言った。
　遺体回収作業は思ったよりもスムーズに終わり、実験デバイス到着前に艦内にある全ての遺体を回収する事が出来た。
　しかし残念ながら、破孔から艦外へ吸い出された遺体に関しては収

容不能となっていた。

一方、タイタン方面へと向かったヤマトはと言うと・・・

敵の巡洋艦、駆逐艦を撃破したヤマト。

まほろば　からも交戦中の敵艦隊を全て殲滅したと通信が入り、まほろば　は彗星帝国の艦船に襲われていた艦の救助作業中だと言う。

「ふぅ・・・これで全部でしょうか？」

北野が一息つきながら言う。

「大丈夫・・・みたいだな。艦長代理、敵反応全て消失です」

太田が古代に周辺宙域の敵を全て撃破した事を報告する。

「皆、ご苦労だったな。相原、タイタンの方はどうだ？」

古代は皆に労いの言葉をかけ、相原にタイタンの状況を訊ねる。

「はい、再び通信波をキャッチしました。今度はちゃんと受信出来ています。今、パネルに回します」

相原が受信した信号をパネルは映す。

するとそこには防衛軍の作業服を着て頭には作業帽を被り、瓶底眼鏡をかけた男が映し出された。

「やっとここまで来たな、ヤマト」

「お前は・・・大山・・・!!大山歳郎じゃないか!!」

そう、タイタンから通信を送っていたのは土星圏へ出向していた大山からだった。

「久しぶりだな、真田」

「誰です？」

古代は真田と親しく話すこの大山という人物と面識が無く、大山がどのような人物なのかを真田に聞く。

「大山歳郎。士官学校時代の俺の同期だ」

「っ!!」

「つまり古代のお兄さんとも同期ということですね？」

「そういうことだ。それにしても大山。どうしてお前がタイタンに？」
「ん？知らなかったのか？俺は、此処に堕ちて氷漬けになっていた雪風を掘り出していたんだよ」
「兄さんが乗っていた艦を・・・」
「そうだ。M―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦・・・眠らせておくには惜しい艦だよ。で、掘り出した雪風に波動エンジンを搭載して新しく生まれ変わらせようと思ってな。知っているだろうが、タイタンはコスモナイトをはじめとした鉱物資源が豊富で作業をやりやすい。これも防衛軍の再編計画の一環さ」
　大山は何故、技術士官である自分が最前線である土星圏に来ていたのかを話す。
「だが、作業中に彗星帝国残党軍が土星圏を占領しちまったから基地の建造が放棄され、俺だけが置いてきぼりにされちまってな・・・」
　そして、未だに避難せずに、土星圏にいた訳も話した。
　早い話、彼は脱出船に乗り遅れてしまった訳だ。
「つまり、細々と作業を進めていたのは俺一人と機械だけって訳だ。まぁ、一人でやるのは楽しかったがな。敵にもエネルギー探知されにくいし、何よりも集中出来る」
　置いてきぼりを食らったにも関わらず、その事に関しては一切めげず、むしろポジティブな考えで雪風の改造を一人で行っていたと言う大山。
　これが普通の人ならば、敵地に一人：孤立無援状態。
　パニックを起こしていても不思議ではないが、そこは奇才、大山歳郎。
　そんな逆境など何処吹く風の様だった。
「雪風を改造？・・・・そうかお前ならできるだろうな。なにしろ学生時代から、雪風の設計に噛んでいた一人なんだからな」
　雪風を改造したと言う大山の言葉に真田は納得する様に言う。
「へへ、今度の雪風・改はすごいぞ。完全なる自動化システムを搭載した無人艦に仕上げてある」

大山は自慢するかのように、改造した雪風の大まかな説明をする。
「無人艦？お前らしくないな、大山。血の一滴も通わないメカニズムの結晶など・・・」
自動化システムという言葉を聞いて真田は顔を顰めた。彼は２２００年以降、防衛軍が打ち出した人の手ではなく機械に頼る自動管理方式に否定的で当時就航した連合艦隊旗艦のアンドロメダに対しても「これは戦艦などではない。戦闘マシーンだ」と言った経緯がある。
「ずいぶんな言いようだな真田。だが、お前の貧弱な想像力の中で俺が手に掛けた艦を勝手に解釈してもらっちゃ困る」
「それはどういう意味だ？」
大山の言葉にちょっとムッとする真田。
「人間が機械を屈服させるんじゃない。ましてその逆でもない。人間と共に助け合うメカニズム。俺が造ったのはそんな艦だ。『科学は人間の幸せのためにあるということを確かめたい』そう言って科学者になったのはお前だろう？真田」
「相変わらず口が達者な奴だな」
「そう言うお前もな・・・ところでイスカンダルのことは俺も聞いたよ。この雪風・改と共に俺も同行させてもらう」
「そうか・・・お前も来てくれるのか」
「ああ、守に生まれ変わったこの艦を見せて、渡してやらなきゃならんからな」
「はい。ありがとうございます、大山さん」
「『トチロー』でいいぞ、古代。お前の兄貴もそう呼んでいた。よし、それじゃ今から雪風・改を始動させる・・・驚くなよ!!」
暫くするとタイタンからヤマトに向って一隻の駆逐艦クラスの小型艦が接近してきた。
確かに面影はガミラス戦役に使用されていたＭ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦の面影も若干留めていたが、奇才、大山が設計しただけに奇抜な艦影をしていた。

「これが生まれ変わった雪風・・・」
パネルに映し出されたゆきかぜを見て古代が呟く。
雪風・改はヤマトとドッキングし、唯一の乗艦者である大山はヤマトへと移乗した。

その頃、まほろば　に救助されたフェイトたちの下に原田から検査結果があり、フェイトとティアナは特に問題はないと診断された。
管理局の艦から救助された二名の名前を知ったギンガは奇妙な運命の巡り会わせを感じずにはいられなかった。
今回の管理局の救助者は自分と面識のある人物。
自分はどうするべきか？
会って話すべきだろうか？
それとも会わずにいるべきだろうか？
ギンガとしては自分がミッドを離れた後、ミッドに残してきた家族の事も気になった。
医務室前でウロウロしていたギンガ。
彼女は現在、知り合いが医務室に居ない事を知らず、救助者は今も医務室に居るのだと思い、医務室前に来ていたのだ。
そこへ、
「どうした？ギンガ」
「うひゃっ!?」
突然背後から声をかけられ、ギンガは思わず変な声をあげてしまう。
「りょ、良馬さん」
ギンガに声をかけたのは艦長の良馬だった。
「ど、どうして此処に？」
「一応、救助者の容体をリニスに聞こうと思ってね。ギンガは？」
「えっと・・・私は・・・」
ギンガの様子から、恐らく今回救助した管理局の乗員が昔の知り合いなのではないかと思い訊ねる良馬。

「もしかして、昔の知り合い？」
「っ!?」
　良馬の問いにビクッと体を震わせるギンガ。
　その反応を見れば、一目瞭然だった。
「顔を合わせ辛かったら、無理にでも会わなくても良いんだよ」
　良馬はそう言いうが、艦内生活の中ではいつかはバレそうな気もするため、
「いえ・・・大丈夫です・・・」
　と、フェイトたちに会う事を決心したギンガ。
「そう・・・」
　ギンガと共に医務室にドアを開け、医務室に入る良馬。
　其処には、
「うーん・・・」
　頭を抱えて、考え込んでいるリニスの姿があった。
「リニス？」
「あっ、はい」
　リニスは良馬が来たら直ぐに反応した。
「どうしたの？」
「・・・」
　良馬の問いにリニスは顔を伏せる。
（まさか、リニスもか？）
　そう思い、先程ギンガにした質問をリニスにする良馬。
「リニスもあの人たちと知り合いなの？」
「えっ？ええ・・・ん？『も』って事は？もしかしてギンガさんも？」
「は、はい・・・」
　ギンガはリニスにミッドに住んで居る頃の事を話した。
　十三歳の時に空港火災に巻き込まれ、その時にフェイトに助けられたこと、妹のスバルがティアナと訓練学校の同期でその頃からずっとパートナーを組んでおり、自分とは顔見知りである事。
　そして、八神はやてが立ち上げた六課に出向した際にはフェイトが自分の上司になる予定だった事を良馬とリニスに語った。

そして、リニスは自分がフェイトに魔法を教え、デバイスを作り、そのデバイスを彼女にあげた事を話した。
フェイトに関してはリニス、ギンガ、どちらとも顔見知りの存在だった。
「だったら、尚更会った方が良いんじゃないかな？」
良馬がギンガとリニスの話を聞き、命の恩人、昔の教え子なのだから会ってあげるべきだと言った。
ギンガもそうだが、リニスも暫し考え込んだが、良馬の言う通り、自分が別れた後のフェイトの事も気になった為、フェイトに会う事にした。
何よりもフェイトのファンリーネームが「テスタロッサ」から「テスタロッサ・ハラオウン」に代わっていた事が気になった。
チラッと見て会っただけだが、立派に大人に成長したフェイト。
最後に会った時は、「リニス～リニス～」と、アルフ同様、自分の後ろをついて歩いて来たあの少女のフェイトが、ああして一人の女性として成長していた。
それならば、結婚していても可笑しくは無い。
フェイトは結婚し、ファミリーネームが変わったのだと思ったリニスだった。
こうして三人は事情説明と奇妙な展開ながらも再会を行う為、フェイトとティアナの居る部屋へと向かった。

用意された部屋でこれからどうなるのか？
と、不安にかられていたティアナ。
そして、この艦にどうしてリニスが何故いるのかと考え込むフェイト。
そこに、
コンコン
部屋をノックする音が聞こえた。
「は、はい」
「少しよろしいでしょうか？」

部屋の外からは、ややアルト調の声が聞こえ、てっきり女性の乗員が来たのかと思った二人。
まぁ、今後の事で話し合い等もあると思い、フェイトは「どうぞ」と言って、来訪者を部屋に招いた。
「失礼します」
部屋に来たのは軍帽を被り、黒いスラックスのズボンに黒いジャケット、白い手袋と同じく白いスカーフを首に巻きつけた青年だった。
「初めまして、地球防衛軍、宇宙戦艦　まほろば　の艦長を務めています月村良馬です」
二人に敬礼しながら自己紹介をする良馬。
当然ながら、ティアナは一瞬驚いた。
仮にも戦艦を預かる身であるから、かつて地上本部の本部長を務めていたレジアス中将の様な厳つい年上の人物なのかと思ったのだが、今、自分たちの目の前にいる艦長はどう見てもフェイトと同年輩に見えた。
もっとも、フェイトの義兄であるクロノ・ハラオウンも目の前に居るこの艦の艦長と同じくらいの年頃よりも若い年頃でアースラ艦長になったのだから、フェイトは余り驚くようなそぶりはなかった。
「じ、時空管理局所属、執務官のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」
(この人、うちの砲雷長そっくり・・・それにテスタロッサと言う名も・・・)
良馬はフェイトと名乗る女性と　まほろば　で砲雷長を務めるフェリシア・テスタロッサの二人が髪と瞳の色を除けばそっくりな事に驚いたがその事を表に出す事は無かった。
一方、フェイトの方も、
(月村・・・すずかと同じファミリーネームなんだ・・・)
と、良馬の苗字と地球に居る親友の苗字が同じ事に意外性を感じていた。
「同じく、執務官補佐のティアナ・ランスターです」

慌ててフェイトもティアナも立ち上がり敬礼しながら、自己紹介をした。
そして、一息つき、
「この度は救助していただき、ありがとうございました」
「ありがとうございました」
と、深々と頭を下げる。
「いえ、一度遭難事故が起きたら、全ての仕事を中断し、いかなる困難を冒してでも遭難者を助けに行くのが、船乗りの務めです。それが星の海でも変わりません」
応えた良馬はフェイトとティアナに着席を進めた。
相向かいに座る良馬とフェイト、ティアナ。
「こういう場を設けたのは、双方の情報交換と今後の方針について話し合いたいからだ。君たちもまた、我々に色々と訊きたい事があるだろう？」
「はい」
頷くフェイト。
「あ、あの・・・」
フェイトはまず、この地球が自分たちの知る地球なのか疑問に思い、良馬に訊ねる。
「今は西暦何年ですか？」
「今年？」
「はい」
「今年は西暦２２０１年だよ。もっとも後一ヶ月ほどで２２０２年になるけどね・・・」
「・・・」
良馬から今年の年号を言われ、フェイトは絶句する。
（２２０１年!?確か今年、地球は２００Ｘ年の筈・・・私たちは、二百年以上の未来に来た事になるの!?）
絶句するフェイトを尻目に、良馬は、
「我々地球防衛軍は、君たち二人を救助者として保護します。まほろば　と現在作戦行動中の僚艦、ヤマトの艦内は地球連邦の法律と地球

防衛軍の軍規が適用されますが、堅苦しく考えず、普段どおり過ごしてもらえば構いません」
と、フェイトたちの待遇を言う。
(ヤマト!?)
一方、フェイトは良馬の口からテレザートで聞いた宇宙戦艦の名前が出てきたことを聞き逃さなかった。
更に、良馬はさり気無くそこに付け足す。
「・・・ただ、艦内では魔法の行使は遠慮してほしい」
「なっ!?」
「っ!?」
良馬の最後の発言を聞き、二人は固まった。
(イマ、コノヒトハナニヲイッタ?)
良馬の言葉に、フェイトとティアナは文字どおり凍り付いた。
管理世界の住人ではないはずの彼の口から出た『魔法の行使』と言う言葉。
管理外世界の住民に魔法の存在を知られてはならない。
管理局員なら誰でも知っている。
もし露見した場合は本人を現地協力者にして監視下におくか、記憶を消すか、身柄を拘束して管理世界に住まわせるかの選択しかない。
(ど、どうしよう・・・)
今、ここにいる管理局員は自分とティアナだけ・・・
(助けてくれたこの人たちに、恩を仇で返す事なんかできない。それに・・・)
目の前にいる良馬は腰の辺りにホルスターに入った拳銃らしきものをぶら下げているし、一見隙だらけに見えるが、その内に強烈な威圧感が感じられる。
フェイトは執務官としてそれなりの経験を積んできた。
経験に即した本能が声高に主張する。彼らを敵に回すのは危険極まりない事だと・・・
それに艦長である彼に何らかの危害を加えれば、この艦の乗員は自分たちを救助者から襲撃者に変え、それなりの手段を講じるだろう。

不審な挙動をしようものならどんな目に遭わされるかわかったものではない。
「分かりました」
フェイトとティアナは自らが置かれた立場から、自分達には管理局の法律をこの場で強引に行使する事は不可能だと判断し、良馬の言葉に従った。
「それと、執務官殿はもう気づいているのだろうけど、この艦にはお二人の知り合いが乗っている様なので、紹介します」
「っ!?」
「？」
良馬の言葉にフェイトは身体をビクッと震わせるが、ティアナは首を傾げた。
「どうぞ」
良馬が声をかけると、部屋に二人の女性士官が入って来た。
「っ!?」
ティアナも入って来た二人の士官の内、一人の士官を見て、目を大きく見開いた。
「地球防衛軍、戦艦　まほろば　所属、医務長の月村リニスです」
「同じく、地球防衛軍、戦艦　まほろば　所属、通信長の中嶋ギンガです」
二人は良馬同様、フェイトとティアナに敬礼しながら自己紹介をした。
「リニスに‥ギンガ‥‥？」
「そんな‥‥どうしてギンガさんが此処に‥‥？」
「大きくなりましたね。フェイト‥‥」
「お久しぶりです。フェイトさんティアナ‥‥」
リニスとギンガはフェイトとティアナに再会の言葉をかけた。
フェイトとティアナの二人は、暫くは唖然とした表情でリニスとギンガの二人を見ていた。
その後、緊張も和らげる意味で互いに離れ離れになった後の事を話した。

フェイトはリニスが消えた後、母であるプレシア・テスタロッサが、娘のアリシア・テスタロッサを蘇生させる為、伝説の地、アルハザードを目指す為にジュエルシードを求めた事、最後はアリシアの眠るポッドと共に虚数空間へ落ちて行った事を話した。
管理局の歴史ではこの事件をＰＴ事件と呼ばれ、その事件のあらましを聞いたリニスは、顔を伏せた。
（やはり、プレシアは諦めきれなかったのね・・・）
自分の意思を最後まで曲げなかった事に関しては立派であったが、その意思をもっと別の方向に・・・フェイトに・・・新たに出来たもう一人の自分の娘に向けて欲しかった。
プレシアは決して悪人ではなかった。
アリシアが生きている頃のプレシアの事をリニスは知っていた。
プレシアは仕事で忙しい合間の中、精一杯アリシアに愛情を注いでいた。
それが、アリシアの死によって愛情が狂気へと変わってしまった。
そして過去にしがみ続け、アリシア以外の者が目に入らなくなっていた。
新たに自分の娘と生み出したフェイトもアリシアの記憶を植え付けても、フェイトはフェイトで、アリシアにはなれなかった。
その事実がプレシアの心を完全に壊してしまったのだろう。
「プレシア・・・」
リニスは、ポツリとかつてのマスターの名を呟く。
「リニス・・・で、でも、今は大丈夫だよ。沢山の友達も出来たし、家族もね」
フェイトはリニスを励ますかのように、ＰＴ事件以降の現状を話す。
リンディ・ハラオウンに養子として引き取ってもらい、ＰＴ事件と闇の書事件の後、自分には沢山の友達や守るべき大切なモノが沢山出来た事を・・・
「リニスは私と別れた後、どういう事があったの？」
と、今度はフェイトがリニスに何が有ったのかを聞く。

リニスは、プレシアとの契約が切れた後、消滅する姿をフェイトとアルフに見せないようにする為、ランダム転移した結果、偶然この世界へと流れ着いた。
そこで、良馬と新たに契約し、今は良馬の使い魔となり、彼と共に防衛軍に入隊し、この艦の医務長を務めている事を話した。
何故、防衛軍に入隊したかは後で詳しく話すとフェイトにはそう言った。

一方、ギンガはティアナと話していた。
「ギンガさん・その・・・次元震に巻き込まれて死んだと聞いたのですが・・・・」
ティアナが恐る恐るギンガに訊ねる。
今、目の前にいるのが本当にかつて、自分のパートナーを務めていたスバル・ナカジマの姉であるギンガ・ナカジマなのか疑問に感じたからだ。
「確かに次元震に巻き込まれたけど、死んでなかったわ。あの後、私はこの世界の火星の近くに飛ばされて、そこで良馬さんに救助されたの・・・・」
「だったらなんでこの世界の軍に所属しているんですか?」
ティアナは救助されたのであれば、別にこの世界の軍に所属しなくてもそのまま民間人でいられた筈。
それを何故態々軍に任官したのかが分からなかった。
もしかして、無理矢理徴兵でもされたのか?と思った。
「それは・・・・後で話すわ・・・・」
ギンガもリニス同様、何故軍に任官したのかを後で話すと言う。
「それよりもギンガさん、この世界ではその・健康診断とか大丈夫なんですか?」
と、ギンガの身体について問題ないのかを聞く。
ティアナはミッドで数少ない、ナカジマ姉妹の実情を知る人物でギンガと妹のスバルがただの人間でない事を知っていた。
ミッドでは、ちゃんとした検査設備があり、ギンガとスバルは定期

的にその設備がある施設にて検診を受けていた。
　この戦艦を見る限りでは、この世界の地球の医療技術レベルもかなり高いと思うが、それでもミッドと何かと勝手が違うだろうから、ミッドと同じレベルの検診を受ける事が出来るのかを訊ねた。
「ええ、問題は無いわ。良馬さん・・艦長の実家は手広く商売をしている財閥でね、その中にミッドで受けていた検診設備に似た設備を持つ施設がちゃんとあって、そこで、定期的に受けているから大丈夫よ」
「でも、宇宙艦勤務だと長い間に地球を離れるしその点は大丈夫なんですか？」
「今の所、問題ないわ。それに少なくともこの艦の医務室にも同じような設備が整っているから」
「そうですか・・・・」
　ティアナは一安心すると同時にこの世界の地球の技術レベルに感心した。
「私の殉職認定を受けて気になったんだけど、スバルは元気かしら？」
　今度はギンガがミッドに残してきた妹の身を案じ、ティアナにその様子を訊ねる。
「え、ええ。当初はギンガさんが死亡したと言う事に相当参っていましたが、今は何とか持ち直しました」
「はやてさんの部隊、機動六課はどうだった？」
「訓練の時なんかは、訓練校の時の様に暴走したりもしましたが、仕事ではちゃんと任務をこなしていましたよ」
　と、ティアナはその後も六課の時に経験したＪＳ事件についてのあらましと結末を教えた。
　それによると、逮捕したスカリエッティの配下の戦闘機人の内、四人がナカジマ家に養子として迎え入れられたと言う。
　そして、母クイント・ナカジマが所属していた部隊の全滅の真相も浮き彫りとなった。
　母の追っていた戦闘機人事件を自分が解決に導けなかったのは残念であったが、妹のスバルがその意思を継ぎ、解決に一役買ってくれた。

きっと、母も喜んでいる事だろう。
ティアナの話を聞き、そう思ったギンガ。
そして、戦闘機事件・ＪＳ事件の結末をティアナから聞かされた。
「そう・・・レジアス中将が・・・」

ギンガも地上部隊に所属していたから当然レジアスの事は知っている。
そのレジアスがスカリエッティと裏で繋がりを持っていた事は、あまり喜ばしい事でなく、その関係が有った為、ゼストはレジアスに疑惑を持ち、結果、自分が隊長を務める部隊の全滅を招いたあの事件を起こしてしまった。
そしてその結果、ギンガとスバルの母、クイントは殉職してしまった。
しかし、中将が地上の・・・ミッドの平和を願っていた事は、ギンガも良く知っていた。
中将の願いは決して間違いではないが、その方法が間違っていたのだ。
そのレジアス中将もＪＳ事件の折、スカリエッティが管理局に潜入させていた暗殺者の手にかかって斃れて、現在は他の者が地上本部の本部長を務めていると言う。
六課卒業後、自分（ティアナ）は執務官補佐となり、スバルは特別救助隊にスカウトされて、現在はその隊に所属していると言う。
スバルは訓練校卒業後、一時ティアナと共に救助隊に所属していた経験もあり、そして自分も大きくなったら、救助隊隊員となって困った人を助けたいと空港火災の後に言っていたので、今のスバルは夢を叶えたんだと一安心したギンガだった。
父、ゲンヤは相変わらず１０８部隊の部隊長を務めている。
自分がミッドを離れていてもミッドに残してきた家族が無事に暮らして居る事を知り、満足だった。
ただ、ティアナは管理局の公式発表でギンガが殉職した後、彼女の名誉が著しく傷つけられ、今もゲンヤとスバルがギンガの名誉回復の

為の運動をしている事は黙っていた。
今のギンガを見れば、彼女はもうこの世界の軍人で・・・新しく持った家庭で、満足な生活を送っている様子なので、余計な葛藤を生むのは避けるべきだと思ったのだ。
(フェイトさんにも後で言っておこう・・・)
ティアナはフェイトにスバルたち、ナカジマ家の皆がギンガの名誉回復の為の運動をしている事をギンガには黙っている様にしておくことを伝えようと思った。
フェイトとリニス、ティアナとギンガが互いに離れ離れとなった後の状況を確認できた後、いよいよ本題である今後の事についての話し合いが行われた。

四十一話　Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ・・・・もとい、お話をしましょう　前編

「では、改めて・・・」
ギンガ、良馬、リニスがそれぞれティアナ、フェイトに対面する様に座り話し合いが行われた。
「これは、あくまで互いの立場などを理解し合うことが目的で、取り調べや尋問の類いではないことを予め宣言する。また、それぞれの組織の機密事項については答える義務はない・・・ということでいいかな？」
「はい」
良馬の言葉に皆が頷いた。
「では、まずハラオウン執務官にお尋ねしますが、執務官とはどういう職務を？」
と、良馬がフェイトの職務について質問をした。
「簡単に申しますと、時空管理局が管理する世界で発生した犯罪のうち、特に凶悪犯罪だったり、規模が大きい事件の捜査を担当するものです」
フェイトの職務を聞き、良馬が頷く。
以前遭難し、曳航した管理局の艦から回収した資料で下調べはしたが、彼女の言っていることはそれと合致している。
（執務官は多分古代君たちと同世代だろう。補佐官はどう見ても十七、八・・・と言う事は、彼女たちは魔導師としても優秀なんだろうな。けど、時空管理局は魔導師でないと出世できないのかな？）
と、内心そう思った。
それはある面、当たっていた。
そして今度はフェイトが質問してきた。
「何故、月村艦長は魔法の存在を知っていたんですか？」
まず、フェイトが質問内容は、やはり管理外世界の住人である良馬

が魔法の存在を知っていた事が気になっていたからだ。
「リニスやギンガが居たと言う事もあるけど、まずは、之を見て欲しい・・・実は、我々地球防衛軍は既に時空管理局の艦に一度接触しているんだ・・・」
　良馬の話を聞き、フェイトとティアナは揃ってギンガを見る。
「あっ、ギンガの乗っていたのは民間の貨物輸送船だったから、管理局の艦には、分類されていないよ・・・えっと・・・あっ、コレだ」
　そう言って、タブレットを操作し、ある艦船が映った画像をフェイトとティアナに見せる。
「っ!?」
「これはっ!?」
「・・・ギンガにも確認をとって貰ったのだけれど、この艦は君たちが所属する時空管理局の艦で間違いないかな?」
「は、はい」
「間違いありません」
　タブレットに写っていたのは、以前遭難して行方不明となっていた管理局の次元航行艦、ノアであった。
　その痛々しい姿にフェイトは俯いたまま答えた。
　ティアナも悲痛な表情になっている。
「以前、太陽系内に突然現れた艦で、その時も君たちが乗っていた艦同様、激しく損傷しており、救助を行ったのだが、残念ながら、この艦には生存者が居なかった」
「・・・」
　ノアの乗員全員が殉職していた事実を知り、いたたまれなくなるフェイトとティアナ。
「救助作業が終わり、本国に曳航してこの艦のコンピューターを調べたら、時空管理局に関する資料が散乱しているのを発見したんだ・・・無論、資料の収集・解析は自分が命じて行われたのだから、管理局や魔法の情報流出は君たちの過失じゃない」
「は、はい」
　力なくフェイトも頷いた。

ギンガやリニスが居たとはいえ、防衛軍側としたら、管理局は未知の組織である。
その未知の組織についての情報収集は当然の事だろう。
自分たち、管理局がその立場にあれば同じ事をするだろうから、目の前の彼らを責めるのは筋違いと言うものだ。
ただ問題は、もし本局がこの事を知ったらどんな事になるのだろうかと言う事である。
ノアの船体は曳航された後、月村造船のドックで調査の為に解体されたが、機関部やアビオニクス等重要部分は白色彗星帝国軍との激突前に地球の技術本部に搬入されていた。
「我々の話は一旦置くとして、君たちから訊きたい事はあるかな？軍の機密事項は話せないが、それ以外の事は可能な限り答える」
「ありがとうございます。では我々、管理局でもそうなのですが、地球防衛軍の方も人材不足なのですか？」
と、フェイトとは良馬の見ためと役職が釣り合わない事に疑問を感じてこの質問をしたのだ。
恐らくティアナも同じ事を思っているだろう。
「我々の地球は、九年前からガミラスと言う異星人に攻められて、地球の総人口が半分以下に激減してしまってね・・・・それは当然、防衛軍も例外ではなかった…ほんの十年前なら艦長は早くても三十代後半、司令官は若くても四十代半ばが普通だったんだよ・・・・でも、戦争で上も下もバタバタ戦死していって人材が少なくなってからは年齢にこだわってはいられなかった・・・・」
「・・・・」
良馬の話を聞き、黙り込むフェイトとティアナ。
戦争と言う理由ならば、目の前の光景も納得できる。
若手でも才能と技術があれば、どんどん抜擢するということなのだろうが、目の前の彼らはそんな悲惨な戦争をくぐり抜けてきたのかと知り、フェイトは沈黙してしまった。
「あの・・・・」
今度はティアナが恐る恐る質問をしてきた。

「リニスさんとギンガさんは何故、防衛軍に任官しているのですか？」
まぁ、リニスに関してはマスターである良馬が防衛軍に志願したから使い魔であるリニスも共に志願したと言う理由で分かるが、元管理局員のギンガが防衛軍に任官しているのはティアナとしては解せない様子だった。
「リニスとギンガがこうして防衛軍に任官しているのもその戦争が原因なのだが・・・・」
良馬は二人が防衛軍に任官している理由を話していいものかと視線をフェイトとティアナ二人から逸らし、リニスとギンガに移す。
すると、
「フェイト、ティアナさん・・・・私たちが経験した戦争・・・・映像ではありますが、それを見る勇気はありますか？」
「えっ!?」
「戦争の・・・・映像ですか・・・・？」
リニスがフェイトとティアナの二人にガミラス、そして白色彗星帝国との戦闘記録映像を見るかと訊ねる。
「ギンガはそれを見たの？」
「はい・・・・ガミラスとの戦争をこの目で見てこの身で体験し・・・・彗星帝国との戦争に関しては私も防衛軍士官として、その戦いに参加しましたから・・・・」
「・・・・」
二人はしばし黙り込んだが、
「お願いします」
と、もう一つの地球が辿った歴史を見る事にした。

「・・・・」
フェイトとティアナの二人は俯いて身を震わせていた。
彼女らの正面には、ブラックアウトしたモニターの画面がある。
つい数分前まで彼女たちが見ていたのは、約十年前に始まった星間戦争、あるいは絶滅戦争の当事者にされた地球人類が辿った、運命と呼ぶには余りにも苛酷で悲しく、残虐な戦いの記録・・・・。

最初は西暦２１９２年に始まるガミラスの遊星爆弾による地球本土爆撃の映像からだった。
ニューヨーク、パリ、モスクワ、ロンドン、ベルリン、北京等、世界の主要都市が宇宙から降り注ぐ遊星爆弾によって被爆、壊滅していき、多くの生命が消えていく・・・・。
海もすっかり干上がり、水深１０００メートル台の海底も露になり、青い地球の姿はみるみるうちに赤茶けた大地へと変わり、そこには地球生物には有害な放射線がまき散らされている。
（これが、未来の地球の姿だと言うの・・・・？）
（これが、宇宙戦争で死んでいく星の姿・・・・）
地球とは縁が薄いティアナは、死の星と化しつつある惑星の姿に衝撃を受けていた。
それは恐らくフェイトも同様だろう・・いや、一時的とは言え地球に住み、親友が住んでいる星だからこそ、ティアナよりも衝撃は大きい。
そして、これらの映像が創作されたものには見えなかったし、自分たちの愛機、バルディッシュもクロスミラージュも同様の見解を示した。
声を失ったフェイトたちだったが、さらに驚愕する事実を告げられた。
ガミラス帝国軍の遊星爆弾が日本に初めて着弾したのが、よりにもよって〝海鳴市〟だった事がフェイトを打ちのめしていた。
今、リニスとギンガが住んでいる地球が自分の知る第９７管理外世界の・・・・地球の未来が辿る歴史だと決まった事ではないが、フェイトがよく知る人たちの子孫が犠牲になったとしたら・・・・。
（こんな映像、はやてとなのはにはとても見せられないよ・・・・それにすずかやアリサにも・・・・）
この世界の地球と第９７管理外世界が同一の星か否かは分からないが、地球をミッドに継ぐ第二の故郷と思っているフェイトはひどく動揺する自分と闘っていた。
映像は地球が徐々に荒れていき、人類が地下に追い詰められていく光景に変わる。

地球防衛軍も懸命に迎撃するが、科学技術力の差はいかんともしがたく、奮闘空しく壊滅していく地球防衛軍の宇宙艦隊。
絶望的な戦況の中で数多の人々が命を落とし、宇宙戦士たちも星の海に散華していく・・・・。
良馬はガミラスが地球に遊星爆弾を降らせる頃、防衛軍へと志願し、リニスも良馬の使い魔と言う事で共に防衛軍に志願したが、これはあくまで形式状のもので、リニス自身も自分の住む地球を守りたいが為に防衛軍に志願したのだ。
そして士官学校卒業後、良馬は最前線で戦い続け、リニスも医務官として、戦場で傷ついた多くの宇宙戦士たちの命を救うと同時に多くの死を看取って来た。
空しく散っていった戦友である宇宙戦士や同胞たちにどんな思いを抱いていたのか、共に映像を見ていた良馬とリニスの表情からは窺えなかった。
そして、西暦２１９９年の冥王星海戦を最後に地球防衛艦隊は事実上壊滅し、地球の命運は決したかと思われた。
しかし、その事態を激変させたのは、絶望の縁に立たされた地球にもたらされた、波動機関ことタキオン粒子を応用した超高エネルギー機関を始めとする数々のオーバーテクノロジー・・・・。
地球から約十五万光年離れたマゼラン星雲の中にあるイスカンダル星から、何の見返りも求めず、命懸けでそのデータを地球にもたらしたイスカンダルの王女サーシア・イスカンダルと彼女を送り出し、ヤマトを待ち続けた姉のイスカンダル女王、スターシア・イスカンダルには驚愕したが、一年も経たずにそれを実体化し、地球脱出艦に搭載した地球人たちとぶっつけ本番で出発し、少なからずの犠牲を出しながらも成功させたヤマトの偉業には言葉もない。
しかも、タキオンテクノロジーを応用した超高エネルギー砲こと〝波動砲〟を地球独自に開発した事と波動砲が一撃でオーストラリア大陸と同じ大きさの浮遊大陸を破壊したのには怖れを抱かずにはいられなかった。
（（テレザートで見たあの光はこの波動砲かもしれない））

と、予測をするフェイトとティアナ。
一撃でオーストラリア大陸と同じ大きさの浮遊大陸を破壊する威力を持ち、アルカンシェルが比較にすらならない程の威力と破壊力を持つ質量兵器。
そんなものの存在、管理局側にすれば到底容認できないだろう。
ヤマトは約十ヶ月の航海の中、ガミラスや宇宙気象等の様々な妨害を潜り抜け、１１４名中４７名の戦死者を出しながらも、無事にイスカンダルへと辿り着き、放射能除去装置コスモクリーナーを持って地球へと帰還した。
ヤマトがイスカンダルへ向かっている間、地球でも各惑星からの資源開発が行われようとしていた。
それもイスカンダルからの波動エンジンと土星衛星、タイタンで鹵獲したガミラスの強襲揚陸艦のおかげだった。
その最中、ギンガはこの世界の中嶋家に養子入りをして、良馬やリニスの様に防衛軍に志願した。
この映像の地球が今後、ミッドチルダや各管理世界が迎えるかもしれない可能性の一つである事実に二人は戦慄した。
「あの・・・大丈夫ですか?フェイトさん、ティアナ」
ギンガが心配そうに二人に声をかける。
自分も救助された時にガミラスとの戦いは同じ映像を見たが、見た当初は、やはりフェイトたち同様言葉をなくした。
「ご、ごめんギンガ・・・」
「何て言ったらいいか、言葉が見つからなくて・・・」
二人は顔色を青白くしたまま俯く。
しかし、地球防衛軍側からの説明はまだ続く。
つい最近の出来事であり、ギンガも参戦したあの白色彗星帝国との戦争が・・・。
ガミラスとの戦争の映像を見て終わった後、フェイトはギンガ自身の事を思った。
(私はティアナと一緒だけど、ギンガはこの世界に次元漂流した時は、

一人ぼっちだった・・・)
突然、自分の知らない世界に放り込まれ、当然そこには知り合いなど居る筈もなく、また漂流した世界は、管理局や当時の地球よりも科学技術が進んだガミラスとの戦争の真っただ中だった。
戦時中の世界に突然一人ぼっちで放り出されたギンガはどんなに不安だっただろうか?
どんなに怖かっただろうか?
今のギンガを見る限り、そのような不安や恐怖といった感情は感じられないが、漂流当時はきっとそんな思いが強かっただろう。
声を上げて泣きたかっただろう。
それに比べ、自分たちは、まだマシな方なのだから、くよくよしてられない。
と、自分を奮い立たせた。

モニターの映像の場面は変わって西暦２２０１年・・・。
つまり今年の夏頃、第三外周艦隊の一員として太陽系外縁部の警備についていたヤマトは、地球への帰路の途中に謎の敵からの襲撃を突如受ける。
同じく味方艦の数隻も同様の被害に遭う。
また第十五空間輸送補給護衛艦隊も遭難信号を発した後、通信が途絶した。
良馬が艦長を務める　まほろば　が現場に到着すると、そこには残骸と化した第十五空間輸送補給護衛艦隊の姿だった。
この謎の敵の襲撃に相前後して確認された謎の警告通信と地球に近づく巨大な白色クエーサー・・・。
これこそが白色彗星帝国ことガトランティス帝国の本体だった。
たった一年も満たない短い平和にどっぷり漬かり、事の重大さを全く理解しない政府・軍の上層部に業を煮やした旧ヤマト乗組員のメンバーたちは改装工事中のヤマトを奪取して、宇宙へと飛び出した。
脱出したヤマトは地球圏にて、戦闘衛星や無人攻撃ステーション、無人艦隊を撃破して太陽系からの離脱を図った。

そこを竣工間もない宇宙艦隊総旗艦アンドロメダと、まほろばがヤマトを追尾し、アステロイド帯でラリーの様な追尾戦、続いてはチキンレースまがいのニアミスまでした後、アンドロメダ艦長兼防衛艦隊総司令、土方竜の独断でヤマトは見逃されたという。
これにはフェイトもティアナも驚く。
自分の組織に疑念や不信を抱いても、大抵は我慢したり、妥協してしまうものだ。
しかし、目の前の彼らは反乱行為を冒してまで飛び出していった。
この行動は組織人としては許されない行為だ。
もはや反乱もいいところだ。
撃沈されてもおかしくは無いし、文句も言えない。
だが、ヤマトの乗員以外にも事態を深刻に捉えていた人が意外と多かった。
良馬もその一人であった。
組織人としては彼らを認めることはできないが、人として彼らを全否定することができるのか？
時空管理局と地球防衛軍は違うのだ。
別の世界で生きる自分たちの定規で彼らを測ることができるのだろうか？
しかし、藤堂司令長官や土方提督など、ヤマトを理解する上官も少なからずおり、ヤマトはその後、大した追撃を受けることなく太陽系を離れ、一路テレザート星に向かう。
（（テレザート!?））
その名はフェイトとティアナにとっても馴染み深い星の名前だった。
ヤマトの汚名が雪がれたのは、第十一番惑星にて、ナスカ司令率いる白色彗星帝国、太陽系侵攻前衛艦隊と交戦し、その戦いに勝利して、明確に地球を狙う侵略者の存在が明らかとなってからだった。
その後もヤマトはテレザートへ向けての航海を続けるが、その途中、友軍の　すくね　と共に小犬座プロキオン宙域にて、第十一番惑星での雪辱を果たそうとナスカ司令率いる潜宙艦隊と遭遇した。

ナスカはソーサナーにて、罠を張るも返り討ちに遭い、形振り構わずその場から撤退しようとしたら、逆に白色わい星の重力井戸に捕まり、自滅すると言う末路を辿った。
双子座宙域では、彗星帝国が建造したと思われる二基の宇宙要塞との戦闘がおこった。
この宇宙要塞が搭載していた要塞砲の威力も波動砲並の威力があり、この要塞の存在は管理局としても十分脅威かと思われたが、この要塞は全て無人のコンピューター制御で、例え自走出来てもシステムが簡易型だったのか、敵味方（ＩＦＦ）の判別がプログラミングされておらず、双子座のポルックスとカストル以外の一定の大きさの物は破壊する様にプログラムされており、この要塞も互いの要塞砲で自滅すると言うお粗末な展開を迎えた。
当然フェイトとティアナはこの要塞が持つ要塞砲の威力にもド肝を抜いた。
そして、アルデバラン前の宇宙気流が走る宇宙気流帯で僚艦　すくね　は　ヤマト　を守るために、自らがミサイルの楯となり、沈んだ・・・。
三木を始めとし、乗組員全員が戦死した。
すくね　の撃沈シーンでは良馬とリニスは顔を伏せた。
共にガミラス戦役を乗り切った戦友の最後に胸が痛んだ。
ギンガ、フェイト、ティアナの三人も友軍を助ける為、自ら進んで犠牲となった　すくね　の三木艦長ら乗員たちに哀悼の意を表した。
すくね　の犠牲を払いながらもテレザートを目指すヤマトはヒアデス宙域にて、ヤマトへの復讐に燃えるデスラー率いるガミラス残存艦隊の攻撃を堪え、テレザートを守護する白色彗星帝国のゴーランド提督率いるミサイル艦隊を叩き潰し、ヤマトはテレザートに迫る。
いつの間にか、フェイトとティアナは身を乗り出していた。
「あっ、あの艦は?!・・・・フェイトさん!!」
「うん。私たちを襲ってきた艦と同型の艦・・・それにプレオを破壊した艦・・・・」

「あれは、彗星帝国ガトランティスの艦船だ」
「ガトランティス・・・ですか？」
　良馬はフェイトに自分達を襲ってきた艦船の所属を教える。
「そうだ。こいつらがつい先日、地球を侵略しようとしていた敵・・・そして君たちの船を襲った連中の艦なんだが、君たちも前から奴らと戦っているのか？」
「はい、数ヶ月前から、しばしば管理局の艦船が襲われたり、駐在していた局員もろとも世界を・・・惑星を壊滅されたりしています」
　良馬の問いにフェイトもまた敵だと言い切った。
　その瞳にはガトランティスに対して明確な敵意が含まれていた。
　ヤマトはミサイル艦隊主力の熾烈な攻撃を、反重力感応機を使い艦の周りにアステロイドリングを形成してミサイル攻撃をやり過ごすと敵艦隊を波動砲で掃滅してしまった。
（やはり、あそこで私たちが見たヤマトは今、まほろば　の近くに居るあの艦だったのか・・・）
　フェイトは自分の予感が当たっていたことに、安堵とも驚きともつかない長い溜め息をそっとついた。
「で、この巨大な白色彗星が、ガトランティスの本土。我々が連中の国を白色彗星帝国と呼んだ由縁だ」
「えっ？」
　良馬は、理由はすぐにわかると言いながら映像の再生を続けた。
（やっぱり、あの彗星はただの彗星じゃなかったのね・・・）
　ティアナはあの不気味で巨大な白色彗星が自然の物ではないと判断した。
　ヤマトはテレザート星を占領していたガトランティス帝国軍の地上部隊を殲滅し、地下に幽閉されていたこの星唯一の生存者、テレサを解放した。
　テレサの容姿を見て、フェイトとティアナは、
（この人はっ!?）
（あの時、テレザートで見たあの女性そっくり・・・）
　フェイトとティアナはテレザートと白色彗星がぶつかり合う寸前、

テレザートの表面に浮かび上がって来た女性とテレサがそっくりだと思った。
「ヤマトからの資料では、テレザートは今の地球よりも優れた文明を持っていたが、大規模な内戦が起き、星全体が壊滅してしまったらしい」
「はい、それについては管理局にも資料がありました」
「・・・あの星を全滅させたのは自分だと、テレサはそう言ったらしい・・・」
「テレサ自身が・・ですか？」
「ああ・・・本当にそれが事実なのかは分からないが、少なくとも之を見れば、納得してもらえると思う」
　映像は、テレザート星が自爆し、白色彗星がスピードダウンを余儀なくされたところだ。
「この爆発は、テレサの祈り・・・つまり莫大な思念エネルギーによってもたらされたものらしい」
「・・・」
（やっぱり、あの時、テレザートで見た女性はテレサだったんだ・・・）
　テレサの力は大魔導師だった母、プレシア・テスタロッサはおろか、ミッドチルダの歴史上に名を残した大・名魔導師やヴィヴィオの元となった聖王オリヴィエや覇王イングヴァルトら古代～近世ベルカの諸王ですら、これほどの力はないだろう。
「ガトランティスの危険を訴える超空間あるいは次元跳躍通信も彼女自身が先天的に持ち合わせた思念エネルギーを用いたんだと思う。テレザートの内戦の時も平和の祈りをしていたようだが、精神の制御ができずに暴走してしまい、地表の全てを灰塵にしてしまったことを心底悔いていたと聞く」
　映像を見てあまりにも常識外れな出来事にフェイトもティアナも頭の中がいっぱいになった。
　そこで、少し心の整理をつける為、休憩となった。
「ふぅ～」

ミネラルウォーターを一口飲んだ後、一息をつくフェイト。
「大丈夫ですか？フェイトさん」
ティアナが心配そうにフェイトに声をかける。
「ええ、大丈夫よ。ティアナの方は？大丈夫？」
「はい・・・・それにしても遭難してから非現実めいた事ばかりですね」
「そうね・・今も夢かＳＦ映画を見ているかの様よ・・・・」
「はい・・でも、あの映像に遭ったことはこの世界では実際に全部現実にあった事なんですよね？」
「・・・・夢かＳＦ映画ならどれだけ楽な事だったか・・・・」
「そうですね・・・・」
休憩なのに一段と疲労感を覚えたフェイトとティアナだったが、記録映像はまだまだ続く様だ。
管理局員として、執務官として、フェイトもティアナも全てを見なければならないと言う使命感の様なモノも疲労感と同時に感じていた。
フェイトは鋭気を養うかの様にミネラルウォーターを一気に飲み干した。
休憩を挟んで見せられた記録映像は、この白色彗星帝国自体の補足説明となった。
これは要塞都市ガトランティスの瓦礫を調査した際に入手した情報で彼らのこれまでの旅の記録（侵略日誌）でもあった。
「次の映像は彗星帝国がこれまで何をして来たのかを知る記録映像だが、正直言って胸糞が悪くなるような映像だ・・・・見る覚悟はあるかな？むろん強制はしない」
「いえ、大丈夫です・・・・見ます」
「私も見ます」
良馬は先に断りを入れてから、彗星帝国の映像を見せると言い、内容が軍人としてとても許容できる内容でない事から、強制はせず、フェイトたちが「見ない」と言えば、とばすつもりであったが、フェイトたちは「見る」と言った。
フェイトたちにとっても敵（白色彗星帝国）を知る絶好の機会だと

思ったからだ。
そして、映像がスクリーンに映し出された。
宇宙を我が物顔で進む白色彗星。
その針路上にある小さな星は粉々に砕かれ、有人惑星があれば、彗星の中から艦隊が出撃し、その惑星を攻撃、侵略していき、その惑星を従属する植民地化していく。
ある有人惑星では、住民全てが奴隷とされ、豊富にある鉱山資源の採掘を強制的にさせられていた。
作業は昼夜問わず、休みなしで行われ、その際、事故や病気・怪我、老いや飢えで体力が低下した者、動けなくなった者たちは手当や休みを与えられることなく、監視をしていた兵士が射殺していく。
また、別の有人惑星では、ナスカ級高速空母から出撃したデスバテーターがミッドや今の地球と同等・・いや、それ以上の近未来都市の空を縦横無尽に飛びかい、対空陣地、都市部に爆撃を敢行する。
星を脱出しようとする非武装の宇宙船や逃げ惑う人々に対しても爆撃や機銃斉射を行う。
これはもはや戦争ですらなく、ただの虐殺に他ならない。
「・・・」
良馬にあらかじめ「胸糞悪い映像だ」と言われたが、まさにその通りであった。
管理局の歴史の中でもここまで酷い戦争の歴史は無いし、管理世界の住人に対してもここまでひどい扱いはしていない。
フェイトとティアナの二人は無意識に拳を作り、ギュッとその拳に力が入る。
やがて、その白色彗星は本格的に地球へと侵攻を開始し、次の映像は土星圏を舞台に地球防衛軍とガトランティス、太陽系侵攻艦隊の主力部隊との決戦映像となった。
(ヤマトも十分強力なのに、これだけの艦船がそろったら戦闘力は桁違いなんだろうなぁ・・・)
フェイトは土星圏、タイタン基地に集結した防衛軍の艦船を見て防衛軍の力を測りかねていた。

（あれだけの艦船をこんな短期間で揃えるなんて・・・マリエルさんやシャリオさん、ルキノさんが見たら狂喜乱舞するだろうな・・・）
ティアナはギンガ同様、土星圏に集結した防衛軍の艦船を見て、知り合いの技術者たちと艦船マニアがこの映像を見た時のリアクションを想像した。
一方、集結している艦船を見てフェイトは、
（管理局はいずれ大きな組織改革を迫られるかもしれない。その時、それを認め、実行しなければ、ガミラスやガトランティスの様な・・・侵略と破壊を楽しむような凶悪な連中に食い荒らされて滅びの道を辿る事になる・・・）
と、胸中に冷え冷えとした予感めいたものが沸き上がって来るのを抑えられなかった。
映像は続き、ヤマト、まほろば　を中心とした機動部隊が彗星帝国の機動部隊とのやりあいから、この土星圏を舞台にした地球攻防戦は幕を上げた。
その結果、敵の空母は殲滅する事が出来たが、地球側も参加した艦載機とパイロットの約三割を失った。
そして味方の空母も撃沈までは至らないが、ヨークタウンが戦線離脱する程の損害を受けた。
そして、敵機動部隊殲滅後、双方の主力艦隊同士が激突した。
主力艦隊同士の決戦でフェイトとティアナが驚いたのはまず、アンドロメダ以下の主力戦艦部隊の拡散波動砲の一斉射撃だった。
（ヤマト一隻でも強力なのに、あれだけの数の戦艦の波動砲を受けたら・・・しかもヤマトが収束型なのに対し、映像の戦艦部隊はすべて拡散型・・・）
（あんな強力なエネルギー砲を受けた敵の方がなんだか可哀想に思えるわ・・・）
と、拡散波動砲の威力を映像越しに見たフェイトとティアナだったが、敵は更にそれよりも強力な兵器で応戦してきた。
映像の中で、突然地球の戦艦が爆発をした。
波動砲を撃った反動で、エンジントラブルでも起こし爆発したのか

と思ったが、
「敵の旗艦は、人工的に物質移送空間を作り、そこに高エネルギー砲を叩き込んできた。回避は事実上不可能。命中率は１００％を誇る強力な兵器だった」
と、良馬は補足としてこの時の敵旗艦メダル―ザの切り札とも言える『火炎直撃砲』の説明をした。
ガトランティス艦隊の空間転移砲は緒戦で絶大な威力を発揮し、地球艦隊は僅か数分の間で一割強の戦艦を失った。
波動砲の威力に驚き脅威を抱いたフェイトとティアナだったが彗星帝国のこの兵器にも当然同じような脅威を抱いた。
あんな兵器を搭載した艦とまともに戦えるのか？
管理局がもし、あんな兵器を搭載した艦と戦うとしたら、当然アルカンシェルを使うだろうが、敵が射程に入る前に一体何隻の艦と乗員を生贄にするのだろうか？
しかし、現に良馬やリニス、ギンガが自分たちの目の前に居るということは、あの艦に勝ったという事だ。
一体どのようにして勝ったのか、六課時代にＦＷ陣でセンターガードを務めていたティアナとしてはそれが気になった。
「敵の決戦兵器は射程が極めて長く、正確な命中率を誇るかわりに照準がデリケートだったようだ。この時、艦隊司令を務めていた土方提督はそこにつけ込む戦法をとった」
地球艦隊の土方提督は敗走を装って全艦隊を土星の環の中、カッシーニの隙間まで艦隊を後退させ、潜ませていた予備部隊と合流した。
一方、追撃してきた敵艦隊は土星の環の中であの転移砲を放った。
その結果、土星の環を形成していた無数の氷塊が一瞬で蒸発して水蒸気爆発を誘発。
水蒸気爆発の影響で大規模な乱気流が発生し、その気流に飲まれ、メダル―ザを含めて敵艦隊は全て操艦不能に陥り、味方同士で衝突したり、地球艦隊の砲撃を受けて壊滅した。
「おそらくこの時の敵の司令官は『これで勝った』と慢心していたんだ

と思う」
良馬の意見からティアナもそれに同意した。
圧倒的優位は人の思考を鈍らせ、緊張感と警戒心を大いに緩める。
その結果、敵艦隊は地球艦隊のどんでん返しを受けたのだ。
気流圏から何とか脱したメダル―ザは、既に満身創痍の状態で、切り札となる火炎直撃砲も使用不能状態で、最後はアンドロメダに特攻をしようとするも地球艦隊の一斉射撃の前に撃沈され、敵艦隊の司令官バルゼー提督も艦と運命を共にした。
「でも、本当の戦いはこの後からだった・・・」
敵艦隊には勝ったが、その直後に白色彗星が土星圏へワープアウト。
戦闘空母ら一部の艦が飲み込まれてしまった他、ヤマトも味方艦と衝突し、大ダメージを被って戦線離脱を余儀なくされた。
アンドロメダ以下の波動砲装備の艦は白色彗星に対する拡散波動砲一斉発射を行ったのだが、周囲のガス帯を取り去ることしか出来なかった。
(あれだけの波動砲が効かないなんて・・・)
(どんだけ、堅いのよ・・・)
艦隊ならば全滅をしても可笑しくは無い程の拡散波動砲を受けながらも傷ついていない様子の要塞都市ガトランティスを見て、思わず冷や汗が流れるフェイトとティアナ。
白色彗星の中から現れた要塞都市ガトランティスに戦いを挑んだ地球艦隊であったが、結果は散々で、旗艦アンドロメダは敵要塞のミサイル攻撃を受け、操艦不能に陥り、要塞都市に特攻し爆沈。
土方提督以下乗組員全員が戦死した。
しかし、アンドロメダの特攻を受けても要塞都市に決定的なダメージを与えられなかった。
波動エンジンに波動砲を装備した地球艦隊ですらこの有り様では、管理局の艦ではアルカンシェルを撃つ前に強力な重力圏に引きずり込まれてしまうし、例え撃てたとしても波動砲と比べるとその威力は話にならない。

恐らく全ての次元航行艦をかき集めてもガス帯を取り払えるかどうかも怪しい。
（ギンガさんやこの人たちは、どうやってこんな化け物と戦ったって言うの？）
ティアナは瞬きをするのも忘れ、モニターの映像に見入った。

四十二話　Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ・・・・もとい、お話をしましょう　後編

記録映像は続いていき、フェイトとティアナはモニターを夢中になって見ていた。

土星圏では太陽系に侵攻して来たバルゼー提督率いる太陽系侵攻機動艦隊本隊、通称バルゼー艦隊との決戦には勝利した地球艦隊であったが、その直後に白色彗星が土星圏にワープアウトしてきた。

戦力の要であるヤマトは白色彗星の突然のワープアウトと味方艦との衝突で戦線を離脱する程のダメージを負う。

アンドロメダを始めとする地球艦隊は白色彗星に対して拡散波動砲の一斉発射を行うが、白色彗星の防御力は地球側の予想を遥かに超えており、拡散波動砲の一斉発射を受けても周囲のガス帯を取り払う事しか出来なかった。

白いガス帯から出てきた要塞都市ガトランティスへ地球艦隊は果敢に攻撃するが回転履帯から発せられる分厚いガスバリアで地球艦隊の攻撃は通じず、逆にミサイルと砲撃で地球艦隊はアンドロメダを失う被害を出した。

土星圏での要塞都市の戦いに敗れた地球艦隊は木星圏へと退避した。

そして木星圏で補給、修理を受けたヤマトと地球残存艦隊は地球連邦政府が発表した無条件降伏に反対して、徹底抗戦の意思を見せた。

まほろば　よりも先に地球へ向かったヤマトにガミラスのデスラー総統が立ちふさがった。

瞬間物質移送機を駆使した〝ドメル戦法〟でヤマトを追い込んだが、ヤマトは小ワープでデスラーの旗艦、ノイ・デウスーラに接舷、移乗して白兵戦を挑んだ結果、デスラー艦は大破。

その後、デスラーに心境の変化があったらしく、ヤマトや地球との和解と白色彗星帝国の弱点を匂わせる言葉を残して退去し、ガミラス

艦隊を率いて太陽系から立ち去っていった。
そして映像はいよいよ彗星帝国との最終決戦となる。
降伏調印式が始まる前に上空からはコスモタイガー隊が急降下爆撃を行い、海中では、ヤマト以下、周辺各国の攻撃潜水艦が魚雷を要塞都市ガトランティスの底部へと叩き込む。
突然の奇襲を受けたガトランティスであったが、すぐに態勢を立て直し、激しい対空砲火とミサイルでコスモタイガーを撃ち落し、ヤマトと戦線に参加した　まほろば　薩摩にミサイルや砲撃を加えてくる。
このまま戦闘が長引けば、なぶり殺しにされる。
そこで、状況打開のためにガトランティス帝国本星に上陸・突入し、動力炉を破壊した。
作戦には成功したはいいが、突入部隊の八割強を失い、支援にあたった艦載機部隊にも多大な犠牲を出した。
ヤマトの戦闘機隊も生還したのは当時副隊長だった山本の一人だけだった。
突入隊員は、全滅・つまり死ぬことを承知でありながら自ら志願して出撃していったという事実にフェイトとティアナは愕然としていた。
飛行場は防衛軍の突入隊員とガトランティス兵の屍で半ば埋まり、双方の将兵たちの血がまるで沢のようにチョロチョロと流れていたという。
想像するだけでも恐ろしい光景だ。
この時、リニスは生涯初めて殺傷設定の魔法を魔力が擦り切れるまで放ちまくったと言う。
それは魔導師である二人には狂気の沙汰で、フェイトに関しては、「あのリニスが人を殺すなんて・・・」という思いがあった。
フェイト自身、これまでの魔導師生活の中で殺傷設定の魔法を使ったことなんてない。
それが自分に魔法を教えてくれたリニスが殺傷設定の魔法を異星人とは言え人に向けて放ったのだから驚愕に値する。

ティアナはあまりの凄惨な光景に「こんなの戦闘じゃない！」と叫びたかった。
おそらくスバルやエリオ、なのはやキャロが見ればそう叫んでいたに違いない。
反対に管理局の魔導師至上主義の局員が見たら、「なんと野蛮な連中だ」と、鼻で笑っていただろうし、一般の局員から見れば、彼らは完全にイカれた狂戦士化にしか見えなかっただろう。
彼らの行動を割り切れるのは精々シグナムたち、ヴォルケンリッターの面々ぐらいだ。
しかし、フェイトとティアナの二人は、地球防衛軍の軍人はそこまでしなければならなかったのだ、と自分たちを無理矢理にでも納得させるしかなかった。
地球側としては降伏調印を反故にしてまでの戦闘行為は、まさに背水の陣であった。
負ければガトランティスに滅ぼされるのは目に見えていた。
故に同胞を：地球に居る大切な者を守る為、彼らは己の命を賭けて戦ったのだ。
動力炉を破壊され、機能を停止した要塞都市が　ヤマト　まほろば　薩摩　の艦砲射撃やミサイル攻撃で破壊されていくと今度はその中から漆黒の巨大戦艦が現れた。
（まだ生きていたの!?）
絶望を通り越して、連中のしぶとさに呆れたティアナ。
まるでハリネズミのように武装した巨大戦艦の一斉射で、ヤマト、まほろば　は大破した。
そして巨大戦艦は地球へと針路を向け、その巨大な砲身で地球に狙いを定めた。
「ハハハハハハ・・・・・・どうだ、わかっただろう!?宇宙の絶対者はこの全能なるわしなのだ！生命あるものはその血の一滴までこのわしのものだ！宇宙はすべて我が意志のままにある！わしが宇宙の法だ！宇宙の秩序なのだ！よって当然地球もわしのものだ！ハハハハハハ・・・・・・・」

彗星帝国ガトランティス元首ズォーダーの言葉を聞き、フェイトとティアナは明らかに不機嫌な顔となった。
管理局の上層部でも同じような事をほざいている輩がいる。
この場合、同族嫌悪という言葉が当てはまる二人だった。
(管理局の上層部にも似たような事を言っている連中もいるけど、管理局の戦力とガトランティスの戦力を比べたら、ネズミが飢えたドラゴンに戦いを挑むようなものね・・・勿論ネズミは管理局の方ね・・・)
ティアナは自分が知る限りの管理局の戦力を集めたとして、ガトランティスに戦いを挑んでも負けるな・・・と言うイメージしか思い浮かばなかった。
そして、巨大戦艦はその巨大な砲で地球を砲撃し始めた。
「ひどい!」
巨大戦艦の無慈悲な攻撃に、フェイトは思わず声をあげ、ティアナも顔をしかめる。
だが、そんな巨大戦艦も最期はテレサと刺し違える形で呆気なく消滅してしまった。
テレサの力は確かに凄まじいものだ。
もし、彼女が自分たちの前に現れたら、説得して保護するだろうが、それが彼女自身の為になると断言できる自信はないし、なのはの様に魔法を使ってのＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩをしたとしても、テレサに勝てる姿が想像できない。
「この映像もかなりの部分をショートカットしたものだ」
映像が全て終わり、二人の周りには重い空気が漂っている。
ミッドや他の管理世界が此処までの窮地に陥ったら、自分たち、管理局の局員は死ぬ覚悟で、そして相手を殺す覚悟で此処まで戦えただろうか?
管理する他の管理世界がガミラスやガトランティスの様な侵略星間国家から襲撃を受けたら、その世界の為に命をかけて戦えるだろうか?
そんな疑問を自問するフェイト。
だが、答えは自ずと出ている。

しかし、その答えは認めたくはないモノだ。
ミッドが侵略されれば、管理局は早々にミッドを放棄し、他の管理世界に遷都するに決まっているし、他の管理世界が侵略されれば、その世界をあっさりと切り捨てる。
映像の様な強力な星間国家と戦えば、管理局は一気に戦力と貴重な人材を失う。
だから、犠牲を少なくする為にミッドを捨てるか、侵略された世界を見捨てるしかない。
でも、そんな事をすれば管理局は一気に信頼を失うかもしれない。
そうならない為にも、地球連邦と同盟を結ぶことが出来ればどれだけ頼もしいことだろうか？
だが、その為には、管理局には様々な改革が必要である。
だからこそ、自分は生きて見届け見極めなければならないと、心に決意するフェイトだった。
「あの・・・・」
「ん？何かな？」
ティアナは恐る恐る良馬に声をかけた。
「良馬さんは、大切な人たちを根こそぎ奪っていったガミラス帝国や彗星帝国を憎んだことはありますか？」
「・・・憎しみがなかったとは言わない。でも、ガミラスの巡洋艦を仕留めた時だったか、通信機から敵艦の乗員たちの絶叫が聞こえてきたんだ・・・言葉自体はわからなかったが、あれは故郷の母親か大切な人の事を言っていると直感したんだ。それでわかったよ。連中も俺たちに近いメンタリティを持っている人間なんだ、とね・・・・」
良馬の言葉にフェイトはかつて、ＰＴ事件の折、なのはと敵対していた時の事、闇の書事件でヴォルケンリッターたちと戦った事、ＪＳ事件の折、逮捕した戦闘機人たちの事を思い出した。
（この世界の地球の人たちは、皆、あの戦争で、何かしら大切な人を失ったんだろうね。そして今回の白色彗星帝国との戦争でも・・・・）
（ここの人たちは、強い・・・だからこそ、決して敵にはしたくないわね・・・・）

ティアナはつくづく、この地球の軍人たちの屈強さを噛みしめる。
それはハード面でもソフト面である。
ハード面ではこの世界では、艦載砲は元より拳銃に至るまで、光学兵器が普及している。
管理局の言う「質量兵器禁止」自体が意味をなしておらず、彼らからすればお笑い草か戯言、呆れる事でしかないだろう。
それに、この部隊の戦闘力の高さは自分たちも目の当たりにしている。
さっきの映像で見た「波動砲」に至っては言葉が出ない。
その波動砲は、地球防衛軍では戦艦は元より、護衛艦クラスの小型艦艇にまで搭載されているという。
今、此処に居る二隻だけで、ＸＶ級の一個艦隊位は簡単に瞬殺されてしまうのではないか？
防衛軍と全面対決なんてすれば、僅か一日で管理局の次元航行艦全てが波動砲の餌食になっても不思議ではないと思うティアナ。
次にソフト面でも、地球防衛艦隊の生き残りとなった彼らは圧倒的に優勢な都市帝国相手に一歩も退くことなく戦い、夥しい犠牲を出しながらも、ついには逆転してみせた。
翻って自分たちはどうだろうか？
常に管理局（味方）の手厚いサポートと支援があり、相手方より劣勢な状況で戦闘を続けたことはないし、人員の三割が戦闘続行不能になれば部隊壊滅と判断される。
せいぜい、ＪＳ事件の決戦時ぐらいに似た体験をしたぐらいだった。
第一、自分たちは故郷が滅ぶという心配をすることがない。
と言うか、そんな心配を抱いたこともないし、する必要もなかった。
それは、ミッドの・・・管理局のこれまでの歴史から、管理局が保有する次元航行艦よりも優れた艦船を持つ世界（惑星国家）と遭遇していない為、管理局はもとより、ミッドの住人全てが、そう思っている共通認識であると言っても過言ではない。
事実、ミッド出身の自分も六課時代までそんな心配を抱いてはいな

かった。
しかし、地球防衛軍が全滅すれば地球の人たちは間違いなく命脈を絶たれていた。
だからこそ、彼らは大部分の戦力を失っても、死兵と化してでも戦ったのだ。
良い悪いは別にして、彼らと自分たちでは戦闘の質も覚悟も違う。
彼らは殺し殺される覚悟で戦っている。
到底自分たちの及ぶところではない。
次に、フェイトたちによる時空管理局についての説明が行われる。
実際のところ、地球防衛軍側はノアから回収した資料である程度の事は把握しているのだが、フェイトたちの説明は事前に得た情報と概ね合っていたので、良馬がフェイトたちに質問攻めにする事はなかった。
彼我の世界観の違いは大きく、一言で言えば、時空管理局側の世界観はさしづめ折詰重箱のようなものだ。
反対に地球防衛軍側の世界観は一つの宇宙空間というもの・・・・
まあ、どちらが正しいとか誤っているとかの問題ではないだろう。
「そういえば、君たちの出身を聞いていなかったが、二人とも『ミッドチルダ』の出身かな？」
「はい、共にミッドチルダ出身です。ですが、私は小学三年の冬から中学卒業までは地球に一時住んでいる時期がありました」
良馬の出身地を訊ねる質問にフェイトが肯定の返事を返した。
リニスやギンガから次元世界や管理局の事、ノアから押収したデータ、記録からある程度は次元世界や管理局の事を理解していたが、たとえ住む世界が違い、魔法が使えようが、人間とて数多の動物の一つに過ぎず、自然や宇宙の力に比べれば、人間の力など微々たるものでしかない。
世界が異なるというが、フェイトたちと話してみた限り、彼女たちのメンタリティは自分たちとさほど変わらない。
だが、管理局の態勢・・・ノアの犠牲者の中に物事を多面的に見ることができない年頃の子供を危険が多い前線任務に投入した時空管理

局。
ミッドチルダが次元世界とやらの「中心世界」と言う考え方・・・。
それはまるで自分たち、魔法の使える人間が神にでもなったつもりでいる傲慢さを感じる。
目の前に居るフェイトたちは兎も角として、彼女たちの属する組織に対しては好意的になるのは正直困難ではないかと思う良馬だった。
「それで、今後についてなのだが、我々は特別かつ緊急の任務を帯びての作戦行動中だ。申し訳ないが、君たちの仲間が此処に到着するのをのんびりと待っているわけにはいかない」
地球側からすればもっともなことで、自分たちが彼らと同じ立場ならばそうするだろう。
「だが、君たちが乗っていた艦から通信機器を回収し、それらを通信ポッドとし、近くの宙域に設置し、何とか管理局とは、コンタクトをとるつもりだ」
「はい。よろしくお願いします」
フェイトとティアナは揃って良馬に頭を下げた。
暫くの間、まほろば　に乗艦し、彼らと行動をする事となったフェイトたちにリニスは軍支給品の着替えと艦内制服、ヘルメットとジャケット、気密手袋、ブーツなどの装備一式を持ってきた。
「今回の任務は、今日以上に激しい戦闘もあり得ます。この制服は簡易宇宙服の機能もあって、ヘルメットとこの気密手袋とブーツを着用すれば、ある程度宇宙空間でも活動できます。危機管理のためにも着替えておいて下さい」
と言われ、フェイトとティアナは、この艦が紛れもなく戦闘艦であることを実感させられた。
その時、艦内通信装置（内線電話）の呼出音が鳴った。
ギンガがそれに応対すると、厨房のディアーチェからで、食事の準備をするので、その注文をお願いしたいという。
ギンガがその事をフェイトとティアナに伝える。
正直、喉を通らない気分なのだが、これからの事態に立ち向かうには、腹が減っては戦にならないともいう。

備え付けのテーブルの引き出しにメニュー表が有るとの事で早速メニュー表を取り出してフェイトたちに見せる。
フェイトは消化の良い中華がゆを頼み、ティアナは野菜のサンドイッチを注文した。
あれだけの惨事を体験し、人の死を目の当たりにして、戦争映像を見たのだ。
当分二人は、肉料理やトマトソースを使った料理は喉を通らないだろう。
食事を注文した後、ギンガは思い出す様にして、フェイトとティアナに言う。
「ああ、フェイトさん、ティアナ」
「何かしら？」
「何でしょう？」
「此処（まほろば）の厨房長は、はやてさんにそっくりな方なんですよ」
「えっ!?」
「はやてさんに？」
「はい。それと砲術長はフェイトさんにそっくりな方で、厨房長は砲術長の士官学校の先輩にあたる人なんです」
「そんなに？」
「まぁ、実際に会ってみれば分かると思います。私自身も初めて会った時、はやてさんとフェイトさん本人かと思いました」
ギンガの言うはやてにそっくりな　まほろば　の厨房長とフェイトにそっくりな砲術長・・・・。
その二人にも興味が湧いたフェイトとティアナであった。
食事が来る前、一度、良馬は部屋を退室し、フェイトとティアナはリニスとギンガのレクチャーの下、今着ている検診衣から渡された防衛軍の制服に腕を通した。
当然、救助者なので、二人にはコスモガンは支給されていない。
（うーん・・・ちょっと恥ずかしいわね・・・）
ティアナは女性用の防衛軍の制服がボディースーツっぽいデザインである事にちょっと羞恥した。

フェイトにそっくりだと言う砲術長は後日として、厨房長との邂逅は意外と直ぐに訪れた。
着替えが終わった後、少しして、
「ほれ、食事だぞ!!」
先程、フェイトとティアナが注文した食事を持ってきたはやてにそっくりな厨房長こと、ディアーチェ・K・クローディア。
「っ!?」
「っ!?」
その姿を見たフェイトとティアナは目を見開く。
はやてとそっくりと言うから、当初は声か料理の腕が良い程度に思っていたのだが、ディアーチェの姿を見て、そのままの意味だったと思い知らされる。
今、自分たちの目の前に居るディアーチェとはやてとは、髪の色と瞳の色が違うだけで、容姿も声もそっくりだった。
二人は思わず、
「「はやて!?（さん!?）」」
声を揃えて、ディアーチェにそっくりで、自分たちの知る人物の名を口にする二人。
「ん?・ギンガも初めて会った時に我を『はやて』と間違えたが、お主ら

もか？」
　ディアーチェは呆れる様な様子で言う。
「そんなに我とそのはやてとか言う者は似ているのか？」
「え、ええ・・・・」
「物凄く・・・・」
　フェイトとティアナは、ただディアーチェの言葉に頷くしかなかった。
「我はそこの金髪が青ひよこに似ていた事に驚きなのだが・・・・」
　ディアーチェはディアーチェで、フェイトが自分の士官学校時代の後輩に似ていた事に驚いていた。
「青ひよこ？」
　ディアーチェの言う『青ひよこ』と言う単語にティアナはチラッとギンガを見る。
　確かにギンガの髪は藍色で青と言えば青っぽくは見えないが・・・・
　ギンガはティアナの視線に気が付いた様で、
「ああ、ディアーチェさんの言うその『青ひよこ』って言う人がこの艦の砲雷長を務めている人なの」
「そ、そうなんですか・・・・」
（後輩を『ひよこ』って・・・・）
　後輩をひよこ呼ばわりするディアーチェとひよこと呼ばれ、反論しないフェイト似の人を想像し、その人の性格が何となくスバルと同族なのかもしないと思った。
　スバルも訓練校や六課でよくバカをやってはティアナに「馬鹿スバル」と言われていたし、髪の色も青・・・・
　スバルと同じような性格を持つフェイトさんなんて、管理局にいるフェイトファンの人はどう思うだろうか？と、想像を膨らませるティアナだった。
　しかし、「アホの子のフェイトさんも良い!!」とか言われて受け入れられそうだ。
　ディアーチェははやてと容姿が似ているが、料理の腕もそっくりで、ディアーチェの作った食事はとても美味く、フェイトとティアナ

の緊張をほぐすには十分な効果があった。

時間は少し進み、フェイト達が所属する時空管理局では・・・

（これは一体、何の冗談だ？）

クロノ・ハラオウンは先ほど入って来た報告に自分の気が遠くなる思いだった。

自分の義妹のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンが乗った巡航艦、テリオスが新人研修のための航海に出てから少しして、

「第３７探査部隊が消息不明」

その報告が入った。

聖王教会のカリム・グラシアのレアスキルの事は自分も知っていた。

その中で、つい最近彼女のレアスキルが発動したことも、友人の八神はやてから聞いていた。

その内容は次元航行艦乗りとしては、看過できない内容だった。

しかし、上層部はその予言を軽視した。

そして、何ら変わることなく、日々が流れていたのだが、そんな中でのこの探査部隊の消息不明事件。

管理局全体が大騒ぎになる中、すぐさま捜索隊が出動し、最後の通信にあった位置まで行くが、そこで彼らは、探査部隊の残骸はおろか、何も発見することが出来なかった。

数日にわたる広範囲で大規模な捜索にも関わらず、探査部隊の痕跡は全く見つからず、管理局は、第５８探査部隊の時と同様に突如発生した次元震またはブラックホールに巻き込まれ、消滅してしまったという結論を出した。

そんな中、捜索を止め、本局へ帰還中のクラウディアに更なる凶報が舞い込んだ。

義妹を乗せ、新人研修に出航した巡航艦、テリオスが行方不明になったという知らせだった。

本局へ帰還途中でありながらも、クロノはテリオスの航跡と座標の検証の一方で捜索隊の編成を進め、次元震の鎮静化で大まかな座標が

算出できた段階で、自らが指揮をとり、クラウディアを含むＸＶ級次元航行艦三隻で慌ただしく、現場へ急行した。
それから実に三昼夜をかけてようやく現場に到着したのだ。
だが、現場についてみると、そこにはやはり何もなかった。
テリオスは次元震をさけるため、転移したと思われるが、その転移先が次元震の余波の影響で特定することが出来なかった。
そこでクロノはフェイトと精神リンクしているフェイトの使い魔であるアルフがいる海鳴の実家ハラオウン家に連絡を入れた。
フェイトの状態を知るにはアルフの存在は持ってこいだったからだ。
もし、フェイトの身に何かあれば、アルフの身にも何かしらの変化が有る筈だ。
「誤報・じゃ、ないんだよね？」
フェイトの遭難の報告を聞き、エイミィ・ハラオウンは夫（クロノ）に弱弱しく訊ねる。
テリオス遭難の件についてはリンディの耳にも入り、彼女もフェイトの身を案じている。
「そうあってほしいと、今でも思っているがね・・・」
夫（クロノ）のジョークセンスのなさをよく知るエイミィは、この時ばかりは彼の生真面目さを恨めしく思った。
「それで、アルフの様子はどうだ？」
アルフはフェイトの使い魔であり、万一フェイトが重傷を負えばアルフの体にも何らかの変化が現われるし、フェイトが命を落とせば、主（フェイト）と運命を共にすることになる。
「今のところ変わった様子はないけど・・・」
「そうか。でも、しばらくはアルフから目を離さないでいてくれ」
「分かった」
クロノ自身は、妻のエイミィから、フェイトの使い魔であるアルフの健康状態には何ら変わりないと聞いていたため、フェイトが生きている可能性が高いと確信していた。
次にクロノは、フェイト（義妹）の親友である　八神はやて　と

高町なのは　に事の真相を話した。
「そんなっ!?」
「それは本当に間違いないんやな・・・?クロノ君」
「残念だが、事実だ・・・テリオスは『巨大な次元震を回避する・・・』と言う連絡を最後に、消息を絶った・・・その後、一切の応答がなくなったし、シグナルもロストした・・・遭難現場にも言ったが、船体はおろか、残骸の欠片も影も形も無かった・・・」
　クロノの報告を聞き、当然二人ともショックを隠せなかった。
「フェイトちゃん・・・ティアナ・・・」
「なのはちゃん!!」
　よろめき、倒れそうになった　なのは　を　はやて　が慌てて支える。
　はやては、「また覆すことが出来なかった」と悔しそうにつぶやいていた。
　そもそも六課の時もカリムの予言の中に管理局への襲撃めいたものが含まれていた。
　それがいつとは分からなかったが、知っていると、知っていないとでは、対処時に大きく違うと思っていた。
　だが、現実はそんなに簡単ではなく、九月に開かれた公開陳述会の日に、スカリエッティ側の襲撃を受け、地上本部ビルと六課隊舎を同時襲撃され、ヴィヴィオを攫われると言う後手、後手にまわり、最後は何とかスカリエッティとその一味を逮捕出来たからいいものの、完全にこれははやての・・機動六課の戦略的負けと言ってもよかった。
　そして今回の件・・・。
　はやては六課の時同様、管理局・・・次元航行艦隊に何らかのアクシデントが発生するのではないかというカリムの予言を知っており、様々な手を尽くした。
　第３７探査部隊が消息不明になったときは、カリムの予言はこの事を指しているのだと思った。
　だが、現実はどうだ?
　第３７探査部隊もフェイトとティアナが乗ったテリオスまでもが、

消息不明になってしまった。
　自分の無力さを痛感せざるを得なかった。
「だが、絶望の結論は時期尚早だ。エイミィの話では、アルフの体調に異変は出ていない・・・・」
「そう・・・・」
　アルフの様子を聞いた　はやて　と　なのは　は、僅かに表情を緩める。
　フェイトとシンクロしている使い魔のアルフの身体に大きな異変がない以上、フェイトの身に重大な危機は起きていないと言っても過言ではないのだ。
　フェイトが無事ならば、ティアナも無事かもしれない。
　今後も管理局ではテリオスの捜索は何とか続ける様に頼んでみると、クロノはそう言って通信をきった。

　クロノからフェイトたちが乗った次元航行艦が行方不明になったと言う報告を聞き、はやては辛そうだったが、それはなのはも同じである。
　今は内々で抑えられているが、いずれは公表され、世間が知ることとなる。
「はぁ～」
　なのはは、家路を辿りながら、これからの事に思いを馳せていた。
　映像を見た後、なのは　と　はやて　はそれぞれフェイトと特に親しかった人、ティアナが親しかった人に連絡を入れる事となった。
　エリオとキャロには、はやて　が伝えることになり、そしては　なのは　は・・・・。
「フェイトちゃん、ティアナ・・・・」
　地球のハラオウン家にいるアルフは、ひどく落ち込んでいるものの、特に変わりないと聞いているので、フェイトは何とか脱出できたかも知れない。
　しかし、ティアナはどうなったのか？
　アルフの体調に変化が無いと言う事でフェイトは生きているかも

しれない。
それならば、ティアナも生きているかもしれないと言う希望を抱いたが、時間が経つにつれ、その希望も薄れて来た。
敵対魔導師相手ならば、フェイトはもちろん、ティアナもそう簡単に負けるようなことはない。
しかし、宇宙空間では・・・以前フェイトに見せられた映像のような戦闘艦艇に襲撃されたら・・・・？
ＸＶ級次元航行艦を簡単に撃沈する艦艇が存在することは、あの映像で証明済だ。
もし、フェイトが乗った艦がそんな目に遭っていたら・・・・？
それに生きているかもしてないフェイトがいつミッドに帰れるのか全然わからない。
今、こうしている間もフェイトやティアナは、どうしているのだろうか？
なのは自身もくじけそうな状態で、一人きりの時は涙が滲んでしまいそうになる。
しかし、今日はもっと辛い役割を果たさなければならない。
一人娘――養女だが――ヴィヴィオにフェイトたちが遭難したことを伝えなければならない。
フェイトをもう一人のママと慕っている彼女には余りにも酷だろう。
でも、たとえ娘が泣きじゃくっても伝えなければならない。
私は彼女の母親なのだから・・・・
そう意気込んでいたが、
もう一人、この事実を伝えなければならない人が居た・・・・。
訓練校、六課と長い時間をティアナと共に相棒として駆け抜けてきた彼女、スバル・ナカジマにも伝えなければならない。
姉（ギンガ）を次元震の事故で失い、今度は親友までも・・・・。
きっと、彼女もヴィヴィオ同様泣きじゃくかもしれない。
でも、彼女にも伝えなければならない。
なのはは、娘とかつての教え子のメンタルケアーを考えながら、ど

のようにして、伝えるべきかを考えながら、重い足取りで家に続く道を歩いて行った。

四十三話　ガミラスの戦い

フェイトら管理局組との話し合いも終わった頃、木星から超ワープに必要な実験デバイスを曳航してきたパトロール艦が接近してきた。
「艦長、木星のガニメデ基地より、ワープ機関の実験デバイスが到着しました。曳航してきた艦の艦長から通信が入っております」
「繋いでくれ」
「はい」
パネルには茶髪でボブカットの髪型をした女性士官が映し出された。
「地球防衛軍、ガニメデ基地所属パトロール艦、畝傍艦長の美咲七波です。第二世代型のワープ機関実験デバイスをお届けにあがりました」
パトロール艦、畝傍の美咲艦長が要件を伝えると、
「えっ!?」
良馬とギンガは要件よりも美咲艦長の声を聞いて驚いた。
「あ、あの～どうかしましたか？」
「い、いえ。何でもありません。態々ご苦労様です」
良馬はお茶を濁し、体裁を整えた。
（この人・・・声がティアナ（さん）にそっくり・・・）
先程、話し合いを行っていた管理局執務補佐官のティアナ・ランスターと今、パネルに映っている美咲艦長は、容姿は似ていないが声だけは二人ともそっくりだった。
目を閉じて、同じセリフを言われたら、恐らく人間の耳では判別できないだろう。
第二世代型のデバイスを受け取り、早速設置を開始する。
デバイスの設置に関しては、ヤマトの大山や真田ら技術班が中心となって進められた。
その間、イスカンダルまでの航路設定がヤマト、まほろば　の両艦で話し合われた。
ヤマトがイスカンダルへ向かった航路データがあるので、どの宙域

が危険地帯かは既に把握されている。
しかし、事態は一刻も争う為、安全な迂回ルートばかりはとれない。
そこで航路はオリオンのα星、七色星団を経由しながらの連続ワープ航路となった。
しかし、この航路を通るには連続ワープ機関の必要が不可欠だ。
次にそのデバイスの調整を行っている真田は浮かない顔をしていた。
真田によると、改修した第二世代型のデバイスにはある欠陥があった。
第一世代型は正確なワープが出来たが、艦内に人間では耐えられない加速度がかかり、第二世代型は、ガミラスの技術によりその点は改善された。
だが、エネルギー干渉で衝撃を和らげる分、正確なワープが出来なくなった。
送られてきたデータは完全なものではなかった・・・・。
元は完全なデータであったのであろうが、肝心な部分がノイズで掻き消されてしまっていたのだ。
恐らくイスカンダルから地球に届くまでの間に恒星などの出すノイズの影響を受けてしまったのだろう。
元々１４万８千光年という距離は通常ならば通信が不可能な距離だ。
だからスターシアは、波動エンジンの設計図をメモリーに入れ、妹のサーシアを使者として地球へ向かわせたのだ。
詳細を聞きたくてもイスカンダルまで送信できる通信設備は地球にはない。
短距離ならば使えるのだが、長距離の連続ワープとなると、その誤差がどれくらい出るのか測定不能で、ワープアウトした所が隕石群や恒星にぶち当たったら、それこそひとたまりもない。
だが、真田は技術者魂に火が入ったのか、何としてでも使用可能にして見せると言った。
地球とガミラスの技術を合わせれば、連続ワープ機関は理論上十分

に実現可能なのだ。
真田は大山と共にデバイスを使用可能までに改良しようとしたが、大山はワープデバイスの搭載、波動エンジンの改良は可能だが、それでは時間がかかるので間に合わない。
それならば、引っ張ればいいと言う。
大山は、まず初期型デバイスを搭載した無人艦を正確な座標にワープさせ、その次にそれが作り出す空間歪曲口に同調させた第二世代型搭載艦を送り込む曳航方式を採用させればいいと説明した。
幸い先導する無人艦には雪風・改がある。
雪風は元々古代守が艦長を務めていた艦。
必ず嘗ての主であった守の下まで連れて行っていってくれるだろう。
真田は科学者・技術者としては超がつくほど優秀であったが、機械ばかりに頼る無人艦に対して苦手意識を持った為、雪風・改の存在を忘れていた。
その為、大山の提案した曳航型と言うアイディアをすっかり失念していた。
方針が決まり、早速大山の立てた曳航型ワープ機関が設置され始めた。
その間、まほろば、ヤマト　の両艦において、メディカルチェックが行われた。
この航海は訓練ではなく実戦だ。
しかも長距離の・・・
途中で白色彗星の残党軍との交戦もあり得る。
従って、体調が特に悪い者には下艦を命じ、また、精神的に遠征任務に耐える自信がない者も同じく下艦を命じた。
己の状態を客観的に把握するのも宇宙戦士の能力だ。
無理をした挙句に潰れ、仲間に迷惑をかけることは絶対に許さないが、事前に申し出て下艦した者を低く評価するようなことはしない。
と、良馬は新人にそう確約した。
そして、今回のイスカンダル救援では、ガミラスとの共闘もある。

ガミラスと一緒に戦いたくないと不満を持つ者にも下艦を命じた。
下艦を希望する者は、艦長、副長、医務長、船務科長また各部署のチーフのいずれに申告せよと放送を入れた。
良馬は、フェイトとティアナの二人にも事情を説明し、下艦するかどうかを確認したところ、二人ともイスカンダルへの航海に同行すると言ってきた為、同行を許可した。
もしかしたら、イスカンダルまでの途中で管理局の艦と遭遇する可能性もあるからだ。
今、地球に戻ればギンガの時の様に中嶋家か月村家はフェイトとティアナを預かってくれるだろう。
しかし、それでは確実に管理局との接触は無い。
此処は僅かな可能性に賭けて、星の海で管理局と出会える事を願うばかりであった。
それにフェイトとティアナの二人も実際に自分の目で見て、体験したかった。
管理局ではない、宇宙船同士の戦いを・・・・
それらを見聞することによって、きっと何かが変わる・・・そう確信していた。
メディカルチェックが一通り終わり、下艦者はそのまま畝傍に移乗し、ガニメデ基地へ帰還する予定となった。
そして、ヤマト、まほろば　の下艦者の他にテリオスの乗員の遺体も畝傍に移送された。

地球側が着々とイスカンダルへ救援準備を行っている頃、
マゼラン星雲サンザー星系では・・・
暴走するイスカンダルを追尾しているガミラス艦隊では、デスラーがイスカンダルのスターシアとコンタクトを取ろうとしていた。
「タラン・・・スターシアはまだ出ないのか?」
しかし、通信環境が悪いのか、なかなかイスカンダルとの通信が繋がらない。
「もうしばらくお待ちください・・・出ました」

「・・・・・・ちら・・・・・・・ダル・・・・・・こちらは、イスカンダル・・・・・そちらは・・・・・・・？」
　ようやくイスカンダルとの通信が繋がった。
　通信当初はやはり通信環境が悪いため、通信内容にノイズが混じったが、やがて正常な通信が可能となった。
「スターシア・・・私だ。ガミラスの総統、デスラーだ」
「デスラー・・・・生きていたのですか？」
　ガミラスがヤマトとの決戦に敗れ、その決戦の中、デスラーは死んだものだと思っていたスターシアはデスラーからの通信に驚いていた。
「スターシア、これ以上イスカンダルに居る事は危険だ。私の船に移るがいい」
「・・・・」
「私を信じてくれ。私は隣の星の友人として君を救いに来た。これは、星を統治する者同士としての友情だ・・・・」
「ありがとう・・・・デスラー。貴方からこのような厚意を示して頂けるとは思いませんでした・・・・でも、私はこの星から離れる訳にはまいりません」
　スターシアはデスラーからの誘いを断った。
　当初は、全宇宙支配を目論み、守（夫）の故郷をめちゃくちゃにし、使者として地球から此処（イスカンダル）まで向かっていたヤマトの航路を妨害しまくったデスラーからの誘い・・・何か裏があるのではないかと思ったが、
「何故だ？このままでは、イスカンダルはサンザーに引き込まれてしまう。太陽に飲み込まれてしまえばどうなるか・・・それこそ火を見るより明らかではないか」
　どうやらデスラーは本気で自分たちの事を心配している様子だった。
「私はイスカンダルに生まれ、イスカンダルで生きてきました。この星が有る限り、離れる訳にはまいりません。おわかりでしょう？デスラー。ガミラス星の最後をご覧になった時の貴方の気持ち・・・・私

も同じです・・・・」
「デスラー・・・・僕たちはもう、この星と運命を共にする事に心を決めている。もし万が一、君が弟の進に会う事があったら伝えてくれ・・・・『古代守はイスカンダルに残り、スターシアと共に・・・・本当に幸せだったと・・・・』・・・・」
今度はスターシアの代わりに古代の兄、古代守がデスラーと通信を行い、スターシアも自分も、イスカンダルと運命を共にする。
つまり、イスカンダルを枕に死ぬ事を言って弟の進に伝言を頼み、通信を切った。
「総統・・・どうなされますか?」
「イスカンダルを追い続けろ」
「はっ!!」
デスラーの命令一下、ガミラス艦隊は引き続きイスカンダルを追う。
イスカンダルを追う中、デスラーはガミラスから避難したガミラス市民を乗せた避難船団を小マゼラン星雲へと離脱させた。
この先もあのガミラス星を破壊したあの艦隊が襲い掛かってくる可能性もあり、非武装の避難船団など、格好の的となってしまう。
デスラーは幕僚の一人、ネルン・キーリングに避難船団護衛を命じ、彼にゼルグート級一等戦艦一隻(船団護衛旗艦)、メルトリア級航宙巡洋戦艦十隻、ケルカピア級航宙高速巡洋艦四隻、クリピテラ級航宙駆逐艦三隻を与え、もし、あの敵が避難船団に襲い掛かってきたら、何が何でも市民を死守しろと言明した。
避難船団は、ダール・ヒステンバーガーが指揮を執り、キーリングが指揮する護衛艦隊に守られ、小マゼラン星雲方面へ離脱していった。
イスカンダルのマザータウンの宮殿では、守がコンピューターにより、イスカンダルの動きを観測していた。
「サンザーを中心とする軌道の幅が狭まってきた・・・サンザーに引き込まれてしまうまで後どれくらいの時間が残されているかまでは分からないが・・・」

「脱出するなら、今の内ね・・・」
「何を言うんだ、いきなり。僕たちは・・・」
「でも守・・・せめて私たちの・・・」
スターシアは、少し顔を伏せながら、ある方向へと視線を向ける。
守もスターシアの視線を追うかの様にスターシアが見ている方向へと視線を向ける。
そこにデスラーから再び通信が入った。
「スターシア・・・・今からイスカンダルに向かう。私の言う事を聞いてくれ」
「デスラー・・・」
「もう一度言うぞ、スターシア・・・・早く私の船に乗り移るのだ。聞こえないのか、スターシア!!」
「スターシア・・・脱出するなら、君も一緒だ」
「・・・」
「スターシア、時間が無い。早くするのだ!!」
「いいえ・・・貴方の方こそ、此処から立ち去って・・・!!」
そう言ってスターシアは通信をきった。
スターシアはイスカンダルから動くつもりはなく、デスラーは自分がイスカンダルから動かない限り、ずっと後を追いかけ続けるだろう。
そうなれば、デスラーもサンザーに引き込まれてしまう。
いや、彼だけではない。
彼を指導者として支持するガミラスの多くの人々も巻き添えにしてしまう。
だからこそ、デスラーには自分の事は諦めて、引き返して欲しかった。
「私の言う事を聞くのだ、スターシア!!」
デスラーの叫びが空しくゲルバデスの艦橋に響いた。
しかし、スターシアと守の意志が固く、サンザーへと吸い込まれそうになっているイスカンダルから脱出しようとはしなかった。
スターシアの説得に失敗したデスラーであったが、このままイスカ

ンダルを見捨てる等と言う選択肢は無く、彼は次なる一手を打つことにした。
「・・・タラン」
「はっ」
デスラーが突然タランに話しかけた。
「遊星爆弾の原理を憶えているか？」
と、地球を赤く放射能塗れにしたあの遊星爆弾について訊ねた。
「遊星爆弾・・・と言われますと、地球侵攻作戦で使用したあの遊星爆弾でございますか？」
「そうだ」
「あれは、まず小惑星の前方にマイクロブラックホールを作ります。そして、マイクロブラックホールの質量誘導により小惑星に運動エネルギーを加え、遊星爆弾とする・・・っ!?」
タランは遊星爆弾についての説明でデスラーが何を考えているのかが察しがついた。
「まさか総統はマイクロブラックホールでイスカンダルを牽引すると・・・!?」
「その通りだ、タラン。イスカンダルを救う方法は、もはやそれしかない」
スターシアは梃子でもイスカンダルを離れないだろう。
このままでは、イスカンダルはサンザーに引き込まれてしまう。
ならば、動いているイスカンダルを安全な宙域まで引っ張ればいい。
「しかし、総統、現在我々はマイクロブラックホールの材料となるべき超質量物質を有しておりません」
「かつてのガミラス領だった旧サファイア戦線跡には、まだ超質量物質が多数残っている筈だ・・・タラン、お前が行くのだ」
「そんなっ!?・・・このタランに、総統を残して行けと申されるのですか!?此処に留まっていればいつ敵の攻撃を受けるやもしれません!!その事を考えると、旧サファイア戦線跡に向かわれるのは総統の方がよろしいかと思われます。敵はどうやらイスカンダルが目的の様で

すから、後を追ってきたりはしない筈です」
タランはデスラーの身を案じ、少しでも敵の危険が少ない方を薦めた。
「ならん!!私は此処に留まり、イスカンダルを見続けなければならんのだ。イスカンダルはガミラス星と共にサンザーの太陽を回る二連星だった・・・いわば、我らは兄弟!!そして、その一方・・・我々は母なる星を失ってしまった・・・残る一方から例え一時たりとも眼を離したくはないのだ・・・」
だが、デスラーもスターシア同様、イスカンダルの近くからは離れたくないと言う。
「しかし・・・」
タランが心配しているのはイスカンダルの動きもそうだが、敵は明らかにイスカンダルを狙っている。
恐らくガミラシウムと同じ構成のイスカンダリウムを狙っているのだろう。
その為、敵が来るのは十分わかっている。
それを防ぐ為の戦力を心配しているのだ。
ガミラスからの避難船団護衛の為、かなりの数の艦船をその護衛に当ててしまった。
もちろんこれが正しい判断だと言う事はタランも十分理解している。
それでも、今の残存兵力で不安が解消されるかと問われるとそれは、否である。
「此処に残る戦力の事なら心配するな・・・既にマゼラン一帯に、我が軍に合流する呼びかける通信を放っていたのを忘れたのかね？マゼラン各地に広がるガミラスの生き残りたち・・・屈辱の日々を耐えきって来た我らが同胞は必ず・・・必ず此処に集結してくれる筈だ」
しかし、デスラーは同胞たちを信じている様で心配無用だと言う。
「・・・」
「タラン・・・お前にしか頼めぬのだ」
「分かりました」

デスラーのこの言葉が決め手となり、タランは旧サファイア戦線跡に向かう決心をつけた。
「ふふふふふ・・・」
「総統？」
「皮肉なものだな、タラン・・・地球を我がガミラスのものとするために造り出した遊星爆弾の技術がイスカンダルを救うかもしれないとは・・・」
「総統・・・」
「旧サファイア戦線跡へと向かう準備を!!頼んだぞ、タラン。無事に帰って来てくれ」
「総統こそ、御無事で・・・このタラン、必ずや任務を果たして帰ってまいります!!」
ガミラス式の敬礼をデスラーにして、旧サファイア戦線跡へと向かう準備を進めるタラン。
そしてタランはガイデロール級航宙戦艦、カンプルードⅢに移乗し、超質量物質捕獲の為にデストリア級重巡洋艦を二隻くっつけた様な艦、特務艦、ハーゲルを連れて、旧サファイア戦線跡へと向かった。

（頼むぞ・・・タラン）
見送くるデスラーはタランに全幅の信頼を寄せて、遠ざかって行くタランたちの姿が見えなくなるまで、タランたちを見送っていた。
イスカンダルの位置から旧サファイア戦線跡までは距離が有ったため、タランは艦隊をある程度イスカンダルから離すと、ワープにて旧サファイア戦線跡に来た。

マゼラン星雲　旧サファイア戦線跡
「減速終了、座標誤差許容範囲・・・タラン様、旧サファイア戦線跡です」
「何時訪れても美しいな・・・此処は・・・」
タランは外に広がる旧サファイア戦線跡を見て呟く。

「死に絶え・・・もはや輝く事も叶わぬ無数の黒色矮星・・・そしてそれらが放出した星間ガスから生まれたばかりの若く青い恒星たち・・・まさしく、宇宙の死と再生を垣間見れる場所・・・」
「黒色矮星・・・超質量物質星の走査を開始します」
「超質量物質捕獲艦、ハ―ゲル、磁力ケージの展開準備完了です」
ハ―ゲルは早速、超質量物質捕獲の準備を始める。
「うむ・・・友軍への呼びかけは行ったか？」
超質量物質捕獲の準備が進めている報告を聞きながら同時にこの付近の宙域にいるかもしれない友軍への参軍要請の状況を聞く。
「はっ・・・この宙域に到着直後より召集をかけておりますが・・・反応はありません・・・このサファイア戦線跡には超質量物質以外の資源はほとんどありません・・・恒星は若すぎ、居住可能な惑星もありません。この一帯では、我々の同胞は生き残っていないのかもしれません・・・」
「・・・」
「タラン様？」
オペレーターの報告を聞き、タランは黙り込んで、外の景色を睨むように見ている。
その様子にオペレーターは恐る恐る訊ねる。
「たった二年前・・・たった二年前にはガミラスはマゼラン一帯を・・・そして銀河系の三分の一を手中に収める大帝国だったのだ・・・」
「・・・」
「それが今ではかつて勝利を収めたこのサファイア戦線跡においてさえ、ガミラスの灯火一つ見る事はできんのか・・・」
「・・・」
帝国の繁栄と落日を経験したガミラスの将兵たちは、皆黙ってタランの呟きに耳を傾ける。
そこへ、
「タラン様、手ごろな黒色矮星を発見しました。大きさ、比重共に申し分ありません」
と、調査していたハ―ゲルからちょうど良い黒色矮星があったと連

絡が入った。
「超質量物質の採取により、星が崩壊する危険性はないか？」
「はっ、問題ありません」
「うむ、いくら死に絶えた星とは言え、その星が経てきた悠久の歳月には敬意を表さねばな・・・よし、目標の黒色矮星に接近!!超質量物質捕獲艦ハ―ゲル、磁力線ケージ開放!!重力臨界制御、開始!!」
「磁力線ケージ開放!!」
「重力制御、開始!!」
　ハ―ゲルが黒色矮星に接近し、作業を開始した。
「ハ―ゲル、超質量物質捕獲開始しました。磁力線を縮退してマイクロブラックホール化を開始します!!縮退完了まで２１時間!!」
「焦らず、かつ急いで作業を進めよ。縮退に失敗しては元も子もないが、我々が少しでも遅れれば、それだけイスカンダルに・・・そして総統閣下の身に危機が迫るのだ!!」
「はっ!!」
　ハ―ゲルが作業を進める中、
　タランが座乗するガイデロール級航宙戦艦ガンプルードⅢのレーダーが艦船の反応を捉えた。
　オペレーターは、最初は友軍かと思ったが、そのエネルギー反応を見て、顔色を変えた。
「た、タラン様!!」
「どうした？」
「レーダーに反応が!!パネルに映します!!」
「・・・敵・・・敵だと!?この旧サファイア戦線跡にか!?」
「敵のエネルギー放射パターンは、ガミラス星を破壊した艦隊のものと一致します!!」
　接近してくる艦船は友軍のものではなく、あのガミラス星で無断でガミラシウムを採取し、今なおもイスカンダルを狙っているあの謎の艦隊であった。
「奴らめ!!・・・サンザー星系だけでなく、マゼラン一帯に勢力を伸ばしてきているのか・・・!?」

「敵が加速を開始!!気付かれました!!」
「いかん、縮退作業中のハ―ゲルは動かせんぞ!!それどころか、縮退作業中のマイクロブラックホールに被弾でもすれば・・・・」
「だ、大爆発を・・・・!!」
「総員、戦闘配置につけ!!敵も超質量捕獲艦の存在に気付いているはずだ!!何としてでもハ―ゲルを守り通すのだ!!」
「しかし、戦力が違いすぎます!!」
　確かにオペレーターの言う通り、戦えるのはこのガンプルードⅢと搭載している僅かな数の艦載機のみ・・・・。
「だが、引く分けにはいかん・・・・!!サンザーで待っておられる総統閣下のためにも・・・・ガミラスの盟友イスカンダルのためにも・・・・引く訳にはいかんのだ!!」
　だが、事態はさらに悪化した。
「我々の後方に、更にワープアウト反応!!敵の援軍と思われます!!」
　敵が後方にも表れたのだ。
「挟み撃ちかっ!!」
　タランは拳を握り、苦虫を潰したような顔で言う。
「ワープアウトしてきた艦隊より入電・・・・た、タラン様・・これは!!」
　通信兵が入電してきた文を読んで声をあげる。
「降伏の勧告なら受けぬと答えよ!!」
　ガミラス軍人として、祖国を滅ぼした敵にむざむざ降伏などしない。
　降伏するくらいならば、一人も多く敵を道連れにしてやると、意気込んでいたタラン。
　しかし、
「いいえ!!・・・・読み上げます!!『我、貴艦ノ召集ヲ受信セリ!我、長キ屈辱ニ耐エコノ時ヲ待ツ!』『我等全テ、再ビ偉大ナルガミラスノ旗ヲ掲ゲラレル事ヲ誇リニ思ウ!!』」
　後方の艦隊のエネルギー反応は友軍のもので、味方識別信号も送って来た。
「識別信号確認!!タラン様!!後方の艦隊は友軍です!!」

てっきり後方の艦隊も敵で挟み撃ちかと思ったが友軍が駆けつけてくれた事にガンプルードⅢの艦橋は歓喜に満ちた。
「・・・返信しろ・・・『我等もまた、貴君を誇りに思う。ガミラスに・・・栄光を!!』」
「はいっ!!」
「勝機は我等に有る!!数の上では、以前不利だが、数だけにものを言わせる烏合の衆など、我等の敵ではない!!ガミラスの鋼の如き強き意志、彼奴等に思い知らせてやるのだ!!」
友軍の戦力は、デストリア級航宙重巡洋艦一隻、ケルカピア級航宙高速巡洋艦一隻、クリピテラ級航宙駆逐艦三隻と言う少数だが、ガミラス側の士気は大いに高まっていた。
「タラン様!!小型のエネルギー反応多数!!敵が展開した対艦爆撃機と思われます!!」
「むぅ・・・小癪な!!ハ―ゲルには一機たりとも近づけるな!!残らず撃ち落とすのだ!!」
ガンプルードⅢからは搭載していた空間駆逐戦闘機ＤＤＧ１１０ゼードラーⅡが全機発艦し、ハ―ゲルの直俺についた。
艦隊は爆撃機の母艦となる空母を撃沈するため、出撃した。
艦載機を発艦させるには、小惑星やアステロイドベルトが少ない宙域が好ましい。
タランはこのサファイア戦線跡の宇宙海図を見て、どこに空母が潜んでいるのかを検討した。
そこに目についたのが、アステロイドとアステロイドの間に、障害物の無い宙域があった。
(空母を展開出来る宙域は此処だ!!)
タランは敵の空母が潜んでいるであろう宙域へ、針路を向けた。
その間に敵の駆逐艦と巡洋艦がまるで行く手を塞ぐように展開し、タラン艦隊を攻撃してきた。
「小癪な!!蹴散らせ!!」
敵の艦隊はどうやら戦艦を配備していないようで、敵艦隊はタラン艦隊に決定的なダメージを与えられない状況下にいた。

一方、ハ―ゲルの方も直俺のゼードラーⅡが奮戦し、敵の対艦爆撃機を近づけなさせない。
またハ―ゲル自身も全くの非武装と言う訳ではなく、
防御力は、戦艦並みに高く、艦砲は備えていなくとも対空砲は備えているため、敵の爆撃機もそう簡単にハ―ゲルを撃沈させる事が出来ない。
やがて、敵の迎撃艦隊網を突破した、タラン艦隊が敵の空母を捉えた。
「全艦!!空母のみに砲火を集中せよ!!他の艦には構うな!!」
タランの命令一下、各艦艇は空母の傍にいる護衛艦を無視し、空母のみにショックカノンとミサイルを浴びせた。
戦艦を含む多数の艦艇のショックカノンとミサイルを浴びた敵の空母は瞬く間に火達磨となった。
タランが敵空母を撃破した直後、
ハ―ゲルの周りに居た敵の爆撃隊は急に針路を変更して、ハ―ゲルから離れて行く。
味方の空母の窮地だと思い、離れたのか、それとも空母の仇打ちに行ったのか、敵の行動は不明だったが、何時引き返してハ―ゲルを再び襲うか分からないため、ゼードラーⅡは敵の爆撃機を追っていく。
敵の爆撃機を追い掛け、ゼードラーⅡとハ―ゲルとの間が有る程度開いたその時、
「敵機!!本艦直上!!急降下!!」
ハ―ゲルのレーダーが、自艦に接近する敵機の姿を捉えた。
「バカなっ!?敵機は別方向に言った筈・・・」
ハ―ゲルの艦橋で動揺が広がり、
「タ、タラン将軍にすぐに救援を求めろ!!」
「は、はいっ!!」
ハ―ゲルはすぐにタランに救援を求めた。

ガイデロール級航宙戦艦　ガンプルードⅢ　艦橋
「なにっ!!ハ―ゲルの至近距離に敵機だと!?」

「はい!!別方向から突然現れたようです!!」
「まさか、あの空母は囮か!?」
タランはこの時、敵の空母はあの一隻ではなく、もう一隻いたのではないかと、悟った。
やはり、味方の戦力が少ない分、索敵に穴があった。
「敵機!!ハ―ゲルに接近!!」
「くそっ、こいつら囮かよ!!」
ゼードラーⅡのパイロットたちは今、自分たちが追撃している敵の爆撃機が囮なのだと知ると、急いでハ―ゲルの直俺に戻ろうとした。
しかし、敵の爆撃機が爆撃機にも関わらず、まるでゼードラーⅡを足止めするかのように、戦いを挑んできた。
「くそっ!!こいつら!!」
ゼードラーⅡのパイロットたちは、本来艦載機戦向きの機種ではないにも関わらず、艦載機戦を挑んできた敵爆撃機のパイロットたちに苛立ちを覚え、歯ぎしりしながら敵の爆撃機を撃ち落としていった。
しかし、ハ―ゲルに迫る敵の新たな爆撃機を撃ち落とすには間に合わない。
一方、タランの方も、
「急げ!!」
ハ―ゲルからの救援を聞き、タランの方も急ぎ、ハ―ゲルの下へ急行しようとしたが、先程撃沈した空母を護衛していた護衛艦隊と此処まで来る途中に遭遇した迎撃艦隊の残存艦がタランたちを足止めするかの様に立ちはだかった。
「ええい、どこまでも小賢しい奴らだ!!」
敵の動きにタランも憤慨したが、目の前の敵艦を沈めない限り、ハ―ゲルの下へ向かえないため、早急な敵艦の撃沈を行う事となった。
「何をしているのかは、分からないが危ない芽は早めに摘み取るに限るぜ!!」
敵の爆撃機のパイロットはハ―ゲルに照準を合わせながら、ニヤリと笑みを浮かべた。
敵の爆撃機のパイロットが爆弾装のハッチを開け、後は発射ボタン

を押すだけとなったその時、
ババババババ・・・・
ダダダダダダダダ・・・・
何処からともなくレーザ―が飛んできて、敵の爆撃機を攻撃してきた。
「ぐわっぁぁぁぁ・・・・」
突然の奇襲により、ハ―ゲルを奇襲しようとした敵爆撃機の第二陣を撃墜していった。
「何事だ?」
自分たちを奇襲してきた敵の爆撃機が更に別方向からの奇襲により撃墜された事に戸惑うハ―ゲルの乗組員。
すると、彼らの目には、
「友軍機だ!!」
「味方だ!!」
そう、味方の戦闘機、空間格闘戦闘機ＤＷＧ２６２　ツヴァルケが映った。
ツヴァルケは次々と迫りくる敵の爆撃機を撃ち落していく・・・・
「どういう事だ!?敵の艦載機は引き離した筈だぞ」
一方、第二陣の爆撃機を発進させた敵空母では、突然の敵機の奇襲により味方の爆撃機隊が壊滅状態となった報告を聞き、艦長が憤慨していた。
そんな中、
「敵艦!!本艦に急速接近!!」
「なに!?」
オペレーターの報告に驚く艦長。
しかし、時既に遅し、空母の近くには、褐色のガイデロール級航宙戦艦一隻、同じく褐色のゼルグート級一等航宙戦闘艦一隻、メルトリア級航宙巡洋戦艦一隻、デストリア級航宙重巡洋艦三隻、ケルカピア級航宙高速巡洋艦一隻、クリピテラ級航宙駆逐艦三隻の艦隊が迫って来た。
新たなる敵の援軍に空母の艦長は慌てふためいた。

当初は此方の方が、数が優っていたのだが、敵はそんな事はお構いなしに味方の艦船を次々と沈めていき、いつの間にか此方側が劣勢になっていた。
そんな中、さらに敵の援軍が現れたのだ。慌てるのは当然であった。
「た、退却だ!!」
「しかし、まだ艦載機隊を収容していませんが?」
艦長はまだ味方の艦載機部隊に撤収命令を出していないにも関わらず、この宙域から撤退しようとする。
「バカか?貴様は!?連中が狙っているのは我々なんだぞ!!艦載機の連中を待っていたらあっという間に撃沈されてしまうぞ!!死にたいのか!?貴様はっ!?」
空母はまだ戦闘宙域で戦っている味方の爆撃機隊を見捨ててこの宙域からの撤退を図るが、
「ぜ、前方から敵の更なる増援です!!」
「なにっ!?」
逃走を図る空母の前に更にガミラスの援軍、ケルカピア級航宙高速巡洋艦が一隻、デストリア級航宙重巡洋艦二隻が立ちはだかった。
「何故探知できなかった!?」
艦長はオペレーターに「居眠りでもしていたのか?」と、物凄い剣幕で訊ねる。
「アステロイドに上手く隠れていた模様です!!」
前方のガミラス艦は空母に対し、一斉射撃をしてきた。
「回避!!」
空母は被弾しながらも針路を変更し逃げ回る。
だが、
「前方にも敵艦隊!!これはっ!!」
「どうした!?」
「これは、先程友軍の空母を撃沈した敵の主力艦隊です!!」
「なっ!?」
後方から自分達を追い掛けてくる敵は、上手く空母を誘導して、タ

ランが率いる主力部隊の射線に誘導していたのだ。
「攻撃来ます!!」
タランが率いる主力部隊、援軍として現れたガミラス艦隊。
この二艦隊の集中砲火により、
「あ・・・あ・・・こ、こんなバカなぁぁぁぁー!!」
艦長の絶叫を最後に空母は爆散し、宇宙を漂う残骸となった。
敵艦隊を殲滅したタラン。
「敵の全滅を確認」
オペレーターの報告でこの宙域にいた敵の完全殲滅を確認後、
「よし、ハ―ゲルの損傷を調べろ!!」
「はっ!!」
そしてハ―ゲルに被害の確認をとった所、
「超磁力線ケージ、超質量縮退装置共に正常に稼働中。幸運な事に目だった損傷は見受けられません」
「そうか・・・よし、縮退作業を継続させろ。だが、警戒態勢は崩すな・・・それと、援軍艦隊に物資を補給してやれ」
「はっ!!」
ハ―ゲルを守るようにこの宙域に集まったガミラスの戦闘艦艇がハ―ゲルの傍に寄り添う。
その中に、先程ハ―ゲルのピンチに馳せ参じた艦載機隊の母艦であろう、一隻のガイデロール級航宙戦艦が接近してきた。
その艦の色はタラン自らが乗艦する同じガイデロール級航宙戦艦よりも艦齢が古そうに見えた。
そんな中、
(総統閣下は無事だろうか?そして、ヤマトは・・・)
と、タランがサンザー星系に残して来たデスラーと地球側の動向を思案していると、
「タラン様」
「何だ?」
「援軍に来た友軍艦艇から通信が入っております」
「繋げ」

「はっ!!」
　通信を送って来たのは例の褐色のガイデロール級航宙戦艦からだった。
「貴官はっ!?」
　モニターに映った指揮官の顔を見て、タランは声をあげる。
「第３０７哨戒艦隊司令官、ヴォルケ・コルサックであります」
　モニターに映った司令官の顔は、かつてガミラス軍冥王星基地司令官、ヴァルケ・シュルツにそっくりの男だった。

四十四話　アスタル破壊

「貴官はっ!?」
「第３０７哨戒艦隊司令官、ヴォルケ・コルサックであります」
　モニターに映る老勇士の士官はタランにガミラス式の敬礼をしながらモニターにその姿を映していた。
「まさか、貴官が生きていたとは・・・・」
　タランは驚いた様にコルサックへと語り掛けた。
　元ガミラス軍冥王星基地司令官、ヴァルケ・シュルツにそっくりな男、ヴォルケ・コルサックはシュルツの兄であった。
　容姿は、弟のシュルツによく似ているものの、頭部や顎には戦傷とみられる大きな傷が見られ左眼にはレンズ式の義眼が埋め込まれているのが彼と弟のシュルツと異なる最大の特徴である。
　シュルツはデスラーに盲目的な忠誠を誓っていたが、コルサックはそうではなかった。
　彼は、孤高を保つ戦士であった。
　それは、心の中に凶暴な獣を有する程の・・・・。
　その為、ガミラス司令部は彼の危険性を危惧しており、故に彼を左遷とも言うべき部隊に配属させた。
　彼が指揮官を務めている第３０７哨戒艦隊は退役寸前の老兵ばかりの寄せ集め部隊であった為、ガミラス司令部もヤマトのイスカンダルへの航海時には、彼の部隊には特に期待しておらず、逆に軽視しており、更に彼の担当宙域をヤマトがイスカンダルへ向かう航路からも外していた。
　本来ならば、期待をしていなかったコルサックをヤマトにぶつけて彼を殺すのも一つの手では?と言う意見も出たが、万が一にもコルサックがヤマトを撃沈したら、彼の発言権を強めると言う意見もあり、コルサックはヤマトと戦う事は無かったのだ。
「総統閣下のご命令を受け、老体に鞭を打ち、馳せ参じました」
「『老体に鞭を打ち』と言うが、貴官の覇気は昔とちっとも変わらない様子みたいだが?」

「このコルサック、体は老いても魂はその最後まで戦士でございます」
「そうか、それは心強い」
タランの言う通り、現状のガミラスでは、一人、一艦でも同胞は心強い戦力となる。
実際、コルサックは老いたことを忘れさせるような戦士としての闘気を帝国が衰退した今でも有していた。
「我が祖国・そして盟友イスカンダルの件については、既に承知しております。これより、第３０７哨戒艦隊はタラン将軍と共にイスカンダル追跡の任につきます」
「うむ、頼むぞ」
「ザー・ベルク!!」
コルサックはガミラス式の敬礼をして通信を切った。

タラン艦隊とコルサック艦隊がハ―ゲルを護衛しつつ、超質量の縮退作業が進められていなく中、イスカンダルに付き添っているデスラーの方では・・・・。
「イスカンダルの様子はどうだ？」
「表面温度が急激に上昇しています。恐らくサンザーに近づいているためと思われます」
「スターシアと古代守は宮殿内にいる。まだ無事の筈だ・・・」
イスカンダルの宮殿は一種のシェルターでもあり、様々な自然環境の変化にも耐えられる様に作られている。
その為、気温の急激な変化が有ったとしても、宮殿内の温度は一定に保たれているため、宮殿内に居れば、無事の筈である。
（まだなのか・・・タラン・・・）
デスラーは使いに出した腹心の到着を今か今かと待つ。
その時、
「大変です総統!!」
オペレーターの一人が声をあげる。
「今度はどうしたと言うのだ？」
「イスカンダルが、サンザー星系第五番惑星アスタルの軌道に入りま

した!!不幸な事に、アスタルの現在位置はイスカンダルの落下針路から０．２７しかずれておりません。このままでは、イスカンダルとアスタルが・・・・」
「衝突すると言うのか・・・・アスタルと衝突してしまえば、いかに宮殿と言えども・・・・」
デスラーの脳裏に最悪の惨事が過る。
そんな時、デスラー艦隊の後方に艦隊反応が現れた。
「後方に敵艦隊が出現!!」
「性懲りもなく、また現れよったか・・・・全艦、再び戦闘配備を整えよ!!」
デスラー艦隊を・・・・イスカンダルを追い掛けてきた黒い艦隊・・・・。
暗黒星団帝国第一艦隊、旗艦　プレアデスの方でも、イスカンダルとアスタルの衝突は察知していた。

暗黒星団帝国　第一艦隊、旗艦　プレアデス　艦橋
「デーダー司令!!イスカンダルが太陽系サンザーの第五惑星アスタルの軌道に・・・・このままでは、第五惑星と衝突してしまいます!!」
オペレーターが慌てて報告するが、
「かまわん。取るに足らん敵と同じく放っておけ」
と、デーダーは冷静に静観していた。
「しかし司令、このままイスカンダルが衝突してしまえば、イスカンダリウムの採掘が・・・・」
「心配いらん・・・・このまましばらく放っておくのだ。これでいいのだ」
「はぁ・・・・」
デーダー艦隊はデスラー艦隊を攻撃する事もなく、イスカンダルとアスタルとの衝突を防ごうともせず、静観していた。

ガミラス艦隊　総旗艦　ゲルバデス　艦橋
「総統・・・・どうしたことでしょう?敵は我々と一定の距離を保ったままで射程距離内にさえ入ってこようともしません。まるで静観して

いるようです」
　オペレーターは敵の動きが読めず、恐る恐るデスラーに報告する。
「どういうことだ・・・？敵もイスカンダルがアスタルの軌道に接近していることは知っていよう。我がガミラス星を採掘していたことから考えるに、あの連中はイスカンダリウムを欲しているのではないのか？イスカンダルとアスタルが衝突してしまえば、イスカンダリウムの採掘が不可能になってしまう筈だ」
「それは総統・・・大変申し上げにくい事なのですが・・・」
　士官の一人がデスラーに報告する。
「イスカンダリウムはイスカンダル星の深部に存在する鉱石です。対して、イスカンダルの表層地殻は硬度の高い珪素結晶やダイヤモンドなどの採掘には適さないものばかりです。アスタルは小さな惑星のため、衝突が起こってもイスカンダル地殻が吹き飛ぶ程度にとどまるでしょう・・・おそらく敵は衝突を放置し、邪魔なイスカンダルの地殻のみをはぎ取ろうとしているのでは・・・？」
　この士官の言う通り、アスタルはイスカンダルよりも小さい惑星で重力も当然イスカンダルよりも弱い。
　よってイスカンダルがアスタルに接近しても重力干渉でイスカンダルが止まると言う事は無かった。
「ぬぅぅ・・・なんという奴らだ!!それで我々を攻撃してくることもないのか・・・イスカンダルの危機を見過ごしてまで我々と戦う事はないと見越している・・・いや、それ以上に、我々など眼中にないと言う訳か・・・このデスラーを侮辱しおって・・・」
「アスタルとイスカンダルの距離、あと９００宇宙キロ・・・!!」
「私は・・・どうすればいいのだ・・・アスタルにはいかなる生命も生息していない・・・だが、我が母なる星ガミラスを失っただけではなく、同じ星系に属する兄弟ともいえる惑星をもう一つ失えと言うのか・・・この手で・・・この手で破壊しろというのか・・・」
「総統・・・このままではイスカンダルが・・・」
「やむをえん・・・全艦、アスタルへ艦首を向けろ!!アスタルを・・・アスタルをイスカンダルと衝突前に破壊する。ただし、イスカンダルへ

の被害を最小限に食い止めるのだ!!」
　デスラー艦隊はアスタルへと針路を向けて進撃する。
　それを見ていたデーダーは、
「ふふふ・・・・イスカンダルを守る為、アスタルを破壊しようというのだろうが、そうはさせんぞ。この機に乗じ、目障り極まりない貴様らを叩き潰してやるわ。アスタルと共に宇宙の塵となるがいい!!前衛艦隊を差し向けろ!!」
　デーダーが配下の艦隊に進撃を命じると、艦隊はデスラー艦隊に向けて進撃した。
　当然の敵の動きはデスラー艦隊でも察知していた。
「総統!!敵艦隊の一部が攻め込んできました!!」
「邪魔だてしようというのか・・・・許せぬ・・・・!!」
「総統、デスラー砲によるアスタル破壊のシミュレートが完了しました!!出力を絞って発射せねば、アスタルはおろか、イスカンダルにまで壊滅的な被害を与えかねません・・・・計算によれば、通常の１２プラスマイナス２％の出力で、最低限の被害に食い止められることができます・・・・ただ・・・・」
　シミュレートを行った技術士官は最後に言葉を濁らせた。
「ただ・・・・どうした？」
「この出力では、アスタルを破壊するために、最低三発のデスラー砲を命中させなければなりません。ご存知の通り、デスラー砲をチャージしている間、本艦は無防備状態になってしまいます!!その間に敵の攻撃を受ければ・・・・」
「死を恐れていては何も始まらん!!時間が無いのだ!!実行に移すしかあるまい。全艦、戦闘配備!!本艦はデスラー砲の発射準備だ!!」
「ハッ!!」
　デスラーが座乗するゲルバデスは早速デスラー砲をアスタル破壊の為、出力調整が行われ、チャージが行われた。
　その間、僚艦は敵をゲルバデスに近づけまいと、ゲルバデスの周りを囲むような配置をとった。
　敵は左右両翼から巡洋艦、駆逐艦を展開し、後方には部隊の旗艦ら

しき空母が攻撃機を展開させている。
デスラー艦隊の空母も艦載機を展開し、左右の艦隊は僚艦が対処し、敵の空母は艦載機部隊にゲルバデスの護衛には三隻のガイペロン級多層式航宙母艦がついた。
アスタル周辺の宙域でガミラスと敵艦隊のショックカノンとミサイルが応酬し合う中、デスラー砲のチャージが終わった。
「デスラー砲、チャージ終了!!発射準備良し!!」
「デスラー砲・・・発射!!」
ゲルバデスから一発目のデスラー砲が放たれた。
デスラー砲は吸い込まれるようにアスタルへと命中した。
「一発目、命中です!!アスタル破壊まであと二射撃!!」
観測していたオペレーターからの報告で一発目は問題なくアスタルへと命中した。
「よし・・・次弾のチャージを急がせろ!!」
「ハッ!!」
ゲルバデスは二発目のチャージに取り掛かった。
チャージをしているゲルバデスの後方では、デバッケがゲルバデスに接近しようとしている敵の爆撃機と激しい戦闘をしていたが、敵の空母は戦闘機を積んでいない様で、直掩の護衛機はおらず、艦載機戦の戦況はややガミラス側が有利な展開となっていた。
そんな中、二発目のチャージが完了し、アスタルに二発目のデスラー砲が撃ち込まれた。
「二発目命中!!アスタルの地殻とコアに変動を確認!!」
二発目のデスラー砲を受けたアスタルは星全体に罅割れが生じ、罅の間からマグマの姿も確認できた。
「あと一発・・・あと一発だ・・・急げ!!次弾をチャージするのだ!!」
「了解!!」
ゲルバデスは最後の三発目のチャージに取り掛かった。
やがて、チャージが完了し、アスタルを破壊する為の最後のデスラー砲がゲルバデスから放たれた。
三発目のデスラー砲を受けたアスタルは地表で何度も大きな爆発

を繰り返し、やがて、大きな閃光と共に星としてのその生涯を閉じた。
「こうするしか・・・・こうするしかなかったのだ・・・・許せ・・・・アスタル・・・・」
この手でガミラスの兄弟星を葬ったデスラーは消滅したアスタルに黙祷を捧げつつ、謝罪した。
アスタルを破壊した後、デスラーも敵残存艦隊の掃討に参加した。
「アスタルの墓標に、彼奴らの爆炎を弔いの灯火として捧げるのだ!!」
『オオっー!!』
デスラー艦隊の士気は高まった。
そうなれば、後は一方的なワンサイドゲームだった。
敵艦は次々と沈められて行き、残った空母もスヌーカとドルシーラの艦爆と雷撃により沈められた。
敵艦隊を全滅させた後、
「総統閣下、通信が入っております!!」
「繋げ・・・・」
「はっ!!」
「総統!!タラン、只今戻ってまいりました!!」
旧サファイア戦線跡に超質量物質を採取しに行ったタランが帰って来た。
「タラン!!無事だったか!?」
「はっ!!サファイア戦線跡にて敵と交戦するも、援軍との合流により辛くも勝利・・・・無事、超質量物質の捕獲に成功しました!!」
「よし・・・・直ぐにマイクロブラックホールを設置しろ。イスカンダルを停止させるのだ!!」
「わかりました。マイクロブラックホール起動!!イスカンダルを質量誘導し、サンザーから引き離すのだ!!」
「はっ!!」
ハーゲルがイスカンダルへと接近し、マイクロブラックホールを起動させる。
すると、イスカンダルはマイクロブラックホールの影響を受け、暴走を止めた。

マイクロブラックホールの影響でイスカンダルが停止した事は、イスカンダルに住むスターシアと守にもすぐに分かった。

イスカンダル　マザータウン　王宮

「動きが止まった・・・さっきの爆発といい、一体どうしたと言うんだ？」

突然イスカンダルが止まった事に戸惑う守。

しかし、スターシアには何故イスカンダルが突然止まったのか、察しはついた。

今のイスカンダルが自然に停止する筈はない。

これは明らかに人為的に止められたもの・・・・。

そんな事をする人はこの広い宇宙の中でただ一人しか居ない・・・・。

「デスラー・・・・」

スターシアは、その人物の名を口にする。

「デスラー？どういう事だ？スターシア」

「彼が止めてくれたのです。この星の暴走を・・・・」

「デスラーが俺たちを？」

守としては、かつて自分の故郷である星を放射能塗れにした人物がイスカンダルに対し、何故ここまで世話を焼くのかが分からなかった。

しかし、イスカンダルの暴動が止まったのは事実だった。

こうして、イスカンダルがサンザーへ落下する事は免れた。

だが、問題はまだ半分解決しただけに過ぎなかった・・・・。

まだイスカンダルを狙う敵が居る・・・・。

ソイツらを倒さぬ限り、まだイスカンダルの危機は去っていなかった・・・・。

デスラーがイスカンダルの暴走を止めたその頃、

まほろば　の医務室では、リニスがフェイトの包帯を新しいモノに取り換えていた。

その最中、

「ねぇ・リニス・・・・」

「ん?・なんですか?・フェイト」
　おもむろにフェイトがリニスに声をかけてきた。
「月村艦長は、緊急の任務って言っていたけど、ヤマト　と　まほろば
　はどこへ向かおうとしているの?」
　フェイトはヤマト　と　まほろば　の行き先を訊ねた。
「あっ、もし、行き先も軍事機密とかなら無理に言わなくていいから」
　フェイトはあくまでも少し気になった程度の事でもし、ヤマト　と
　まほろば　の行き先が軍事機密に当たるのであれば、当然リニスに
は守秘義務があるので、フェイトに対して無理に言う必要はない。
　リニス自身もそれを承知していた。
　しかし、どの道ヤマト　と　まほろば　がイスカンダルに到着した
ら何処へ向かっていたのかは分かるのだが、とりあえずリニスは曖昧
に答えた。
「そうですね・・・まだ詳しい行先は教えられませんが、ヤマト　と
まほろば　はマゼラン星雲へと向かっています」
「マゼラン・・星雲・・・・」
　マゼラン星雲と聞き、フェイトは顔色を少し悪くする。
(マゼラン星雲って以前、５８探査部隊が消息を絶って、テレザートや
ヒアデス星団同様、航行禁止にされた所じゃない!!)
「どうかしましたか?・顔色が少し悪いですよ。フェイト」
「その・・・・危険じゃないかな?」
　フェイトがマゼラン星雲に行くのは危険ではないかと危惧する。
　彼女がマゼラン星雲へ行くのが危険ではないかと危惧する理由は、
以前管理局内で行った第５８探査部隊がマゼラン星雲にて宇宙気象
により遭難した事を知っていたからだ。
　しかし、それは表向きの理由で本当はガミラス艦隊に撃沈されたの
だが、真実を知るのはごく僅かの者のみで、フェイトもティアナも知
らなかった。
「まぁ、危険はありますが、ヤマトが一昨年イスカンダルまでの航海し
ており、その航海データがあるので、危険な宙域の場所は分かってい
るので大丈夫ですよ。それに今回はガミラスからの妨害はありませ

んから」
　確かにイスカンダルまでの途中に次元断層などの危険宙域はあるが、今回の航海では、その宙域の位置も既に知っているので、それらの危険宙域は避けて行く航路を立ててある。
　難所と言えば、精々流れの早い宇宙気流ぐらいの突破と七色星団の銀河系入口側のイオン乱流くらいだ。
　それよりも危惧するのは、彗星帝国の残党とガミラス星を破壊した謎の艦隊と起こり得る戦闘だ。
（本当に大丈夫かな？）
　安全だと思われていた研修でイレギュラーな次元震を受け、更には星間戦争に巻き込まれ、遭難した現状がコレだ・・・・
　宇宙では絶対に安全とは言えない環境なので、フェイトが不安視するのも分からない訳ではなかった。
「フェイトさん、食事が出来たみたいです」
　そこへ、ティアナが食事の準備が出来たと声をかけに医務室へとやって来た。
　彼女の手にはディアーチェから受け取った岡持ちがあり、その中には医務室へ来る前に頼んだ注文の料理が入っていた。
「あっ、うん。ありがとう、ティアナ」
（食事か・・・そう言えば、私や　はやて、にそっくりな人が居るなら、なのは　とそっくりな人も居るのかな・・・？）
　フェイトが自分　と　はやて　にそっくりな人がいるのだから、なのはのそっくりさんも居るのではないかと思ったが、
（流石にそこまではないか・・・）
　フェイトはそんな事ないと否定した。
　しかし、後にフェイトは驚愕する事となる。

「はっ、はっくちゅん!!」
　地球の・・海鳴市にある私立、天応中学の教室にて、高町紅葉がくしゃみをした。
「どうしたの？紅葉？風邪？」

「い、いえ。違います」
「もしかしたら、誰かが紅葉の噂でもしていたんじゃない？」
「そうかな？」
と、天応中学の教室では、いつもと変わらない学生風景があった。

食事が終わり、リニスが淹れてくれたお茶を飲んでいると、
「本艦は十五分後にワープに入る。各員、部署にて待機せよ。繰り返す・・・・」
艦内にワープ準備を知らせるギンガの声が流れる。
イスカンダル目指しての第一回目のワープが行われるのだ。
第十一番惑星が未だに白色彗星帝国の残党に占拠されているので、まほろば　とヤマト　は土星圏から一気に太陽系外へとワープを行い、第十一番惑星を通過する事にしたのだ。
「ワープ・・・・ですか？」
「はい」
フェイトは地球生活経験もあり、地球で製作されたＳＦ映画の中で、ワープと言う現象が描かれているものは見たことがあるが、体験するのはこれが当然初めてである。
「あの・・・・ワープって何ですか？」
ワープの事を知らないティアナはリニスに質問する。
ＳＦ映画などによく登場する言葉であるが、詳しい事は知らない。
そのため、どのような現象なのかを聞いたのだ。
「要約すれば、超光速航行による空間転移と考えて下さい」
光より速く航行する――。
時空管理局艦船の次元航行とも異なる空間転移航行技術。
リニスの説明を聞きティアナは息を飲んだ。
危険はないが、身体には若干の負担がかかるという。
「では、お二人は部屋にお戻りください」
リニスはフェイトとティアナに部屋に戻る様に指示する。
「ええ。そうさせてもらうわ」
二人は部屋を出ようとした時、

「あっ、そうだ。フェイト」
「ん？何？リニス」
「コレを持って行ってください」
　リニスはフェイトに錠剤入った瓶とミネラルウォーターのペットボトルを二つ渡した。
「えっと・・・・これは？」
「酔い止め薬よ」
「酔い止め!?」
　渡された錠剤の正体に思わず、声が裏返るフェイト。
「最初だと、多分ワープ酔いをするかもしれないから・・・・」
　リニスはこれまでの新人とワープから初めてのワープ体験の場合、慣れていないとワープ酔いをするので、こうして念の為、フェイトとティアナに酔い止めの薬を手渡した。
「酔うんですか？・・・・宇宙戦艦の中で・・・・星の海なのに・・・・」
「ええ。でも、気分が悪くなるのは最初の一回目だけだと思うから。回数をこなしていく内に慣れますよ」
「はぁ～」
　ティアナはどこか煮え切らないというか信じていない様子だった。
　経験のした事のないワープ・・・・。
　光より速く航行する事で酔う事が有るのだろうか？と言う半信半疑だったのだ。
　何か問いたげなティアナにフェイトは念話で、
（ティアナ、郷に入っては郷に従え・・・・悩んだら負けだよ）
　と、アドバイスをした。
（は、はい・・・・）
　本来のツッコミ属性の為か、やっぱり煮え切らないティアナであった。
「あっ、それと・・・・」
「ん？まだ何かあるの？」
「ええ、この先、フェイトとティアナさんのお世話はこの子が担当する事になるわ。入ってらっしゃい」

リニスが声をかけると、
「皆サン、コンニチハ」
棒読みの様な電子言葉の挨拶をしながら、医務室に入ってきた赤い物体にフェイトとティアナは文字通り目を丸くした。
その物体は、カプセル形の胴体に手脚があり、脚部にはキャタピラーがあり、手は人と同じ五本の指がついていた。
「バトライザー、挨拶を・・・・」
「ハイ。戦艦　まほろば　所属、自律分析ロボットノ〝バトライザー〟ト申シマス。以後、ヲ見知リオキ下サイ」
と言いながら、右手を下に出して目上の者に対する礼をとった。
「わ、私はフェイト・テスタロッサ・ハラオウン。よろしくね、バトライザー」
「ティアナ・ランスターです」
フェイトとティアナはぎこちないが、バトライザーと握手を交わした。
「ヨロシクオ願イシマス。フェイトサン、ティアナサン」
自己紹介を終え、フェイトとティアナはバトライザーの案内の下、部屋へと戻った。
部屋へと戻るため、通路を歩いきながらフェイトは辺りを見渡す。
やはりこの艦は地球の船としか思えないことだらけだ。
最も自分の知る地球よりも高度な科学技術であるが・・・・
言葉がスムーズに通じているのもさながら、先程見たメニュー表に書かれていた食事のお品書きや飲料物の名称は地球、そのものだ。
今のところ待遇は悪くない。
むしろ良好と言えよう。
しかし、これから先何が自分たちを待ち受けているのか分からない。
兎も角、今は間もなく体験するであろうワープという空間転移航行が無事に済むことを祈るしかなかった。
「ワープ準備完了!!」
ワープの為、機関出力をあげると足元から新たに微かなノイズと振

動が伝わってきた。
（これが、タキオン粒子エネルギー・・・）
重力制御が完全なのか、加速Ｇは殆ど感じない。
ヤマト　や　まほろば　のような宇宙戦艦に限らず、この世界の艦船の最大巡航速度は光速の９９％だという。
ワープについては、少し前にリニスから基本的な説明を受けていた。
それによると、ワープの時間は実質一分足らずで、負傷者がワープを体験しても危険はないと聞いているが、やはり緊張は隠せない。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「ワープ!!」
「ワープ!!」
眩い閃光と共に　ヤマト、まほろば、雪風・改は土星圏から第十一番惑星の外縁部、ヘリオポーズ手前まで一気にワープした。
「ワープ終了」
「現在位置と艦の損傷チェックを急げ、僚艦の状況はどうか？」
「ヤマト、雪風・改、共にワープアウトを確認」
「本艦の現在位置、ヘリオポーズの手前、誤差０．００２５。十分に許容範囲です」
ヤマト、まほろば、雪風・改の三隻は無事にイスカンダルに向けての第一回目のワープを終了した。

宇宙戦艦　まほろば　女性士官予備室
「うぅ～・・・」
「大丈夫？ティアナ？」
「うぅ～・・・ぎぼぢわるい・・です・・・」
フェイトの問いに顔を青くして、手で口を抑えながら答えるティアナ。
「だから、ちゃんと酔い止めを飲めば良かったのに・・・」
ワープを無事に終えた　まほろば　の女性士官予備室にて、ティア

ナはワープ酔いを訴えていた。
ティアナは本当にワープという現象で酔うのかと不信に思い、リニスに渡された酔い止めを飲まない状態で初ワープを経験し、リニスが指摘した通り、初めてのワープに酔ってしまったのだ。
そんなワープ酔いしているティアナをフェイトは呆れながらも背中を摩り介抱していた。
フェイトはリニスに言われた通りちゃんと酔い止めを飲んでいたので、酔ってはいなかった。
ティアナを介抱しつつ、フェイトは初めて体験した超光速空間跳躍航行に驚いていた。
管理局艦船の次元跳躍航法とは全く異なる技術が、この世界では超光速航行が普通に行われているという事実を現職の管理局局員では、フェイトたちが初めて体験したのだ。
補足として、ギンガは初ワープの時、既に防衛軍軍人だったので、ノーカンである。
最もミッド出身者であるならば、ギンガがワープの初めての体験者となる。
フェイトはワープを終えティアナを介抱しながら、ふと思案する。
管理局とは異なる次元航行を有する地球連邦を始めとする多数の星間国家・・・・。
(私たち管理局は、この世界とどんな風に付き合ったらいいんだろう・・・・?)
まず、遭難の原因となった彗星帝国ガトランティス・・・・
本国と国家元首は斃れたが、彼らにはまだ残党が生き残っているらしい。
しかし、そんな彼らに管理局が救いの手を差し伸べるにはあまりにも危険で、結果は論外である。
弱っていた所を助けた犬が実は狂犬で自分たちが噛みつかれかねないし、ガトランティスを援助しようものならば、地球連邦は管理局もガトランティス支援国として敵とみなすだろう。

それに自分たちに襲い掛かってきた輩でもあるし、まほろば で見た地球とガトランティスとの戦いの映像を見ると、とても管理局の傘下、または同盟国に収まる相手ではない。
むしろ、ミッドや管理世界を自分たちの植民地にしようとするだろう。
次にガミラス帝国・・・。
彼らとはまだ直接見たわけではないが、此方も話を聞く限りでは、管理局の下風に立つとは思えない。
そして、地球連邦も他所の国家や勢力からの支配や管理を受け入れない。
(当然、管理世界入りを受け入れる訳がないわね)
しかし、ガトランティス、ガミラス、地球連邦、管理局が一番手を出してきそうなのは、残念ながら地球連邦だろう。
元々地球はグレアム元提督、なのは、はやて、など管理外世界にも関わらず、高ランクの魔力保有者がいる。
もしかしたら、この時代の地球にもいるかもしれない。
加えてこの艦船建造技術・・・。
管理局・・・特に本局の管理世界拡大・推進派と言われる高官連中がこの地球の存在を知れば、否が応でもこの地球を管理世界に入れようとするだろう。
もしそうなれば、彼らは管理局を侵略者と見なし、命懸けで管理局に刃を向けてくる・・・。
管理局側も当然迎え撃つだろうが、管理局の艦船がガトランティスの艦船にあっさり殺られている以上、そのガトランティスと同等の戦闘能力を有する防衛軍の艦船に管理局の艦船は勝ち目がない。
何より、管理局の戦闘に〝殺し合い〟の定義は存在しないのだ。
(地球防衛軍や地球連邦まで敵に回したら、管理局はこの世界から撤退するしかない)
その為に、フェイトは地球連邦、地球防衛軍を警戒するという選択はとうに放棄していた。
そして、管理局局員ではあるが、この艦に乗っている以上、管理局

法は忘れようと心掛けた。
（管理局は井の中の蛙だと言う認識を忘れないようにしないとね・・・・）
常に謙虚な姿勢でいなければ、無用な軋轢を生じさせる。
もし、それが生じれば、それは管理局の滅亡を意味しているかもしれないのだからだった・・・・。
ヘリオポーズ付近を航行中、ヤマト、まほろば　の主計長、通信長の両名が通信で話し合いを行っていた。
「通信状況はどうでしょうか？」
雪が相原とギンガに訊ねる。
「今の所、問題なく使えます」
「此方も同じです。感度良好、問題ありません」
相原とギンガはヤマト、まほろば　の通信状況は良好だと言う。
「クローディアさん、まほろば　の物資の準備状況はどうですか？」
「此方のＯ・Ｍ・Ｃ・Ｓは正常に動いておる。二十四時間の連続投入は可能だぞ。其方はどうだ？」
「ヤマトの方も大丈夫です・・・・では、予定通り、ヘリオポーズ付近で『太陽系赤道祭』を行いましょう。皆さん、もうひと頑張りです。頑張りましょう。そして赤道祭を成功させましょうね」
「はい」
「了解」
雪がこの場に居る皆に赤道祭を成功させる為、頑張ろうと声をかけ、この場は解散となった。

四十五話　太陽系赤道祭

赤道祭・・・・。
それは、かつて地球の大海原を行き交う船が赤道を越える際、航海の安全を祈って行われるイベントだった。
内容は各国様々であったが、派手なバカ騒ぎは万国共通の出来事だった。

「太陽系赤道祭？」
「ええ、地球の洋上船は昔、赤道を越える際に航海の無事を祈っていたそうです。あのヤマトもイスカンダルでの航海の際、行ったそうですよ」
リニスがこれから行われる太陽系赤道祭の事をフェイトとティアナに説明した。
事前に良馬に許可を得ており、フェイトたちが参加する意思があれば、参加しても良いと赤道祭参加の許可をもらっていたので、リニスはこうしてフェイトたちを太陽系赤道祭へ誘いに来たのだ。
太陽系赤道祭の事を聞いてティアナは、
（恩人である星が危機なのに、お祭りって・・・・大丈夫なのかしら？）
イスカンダルの危機にも関わらず、呑気に祭りを開こうとしている防衛軍側の行動に疑問・・・・と言うか、呆れを感じている。
しかし、自分たちは救助者であるので、その事をティアナは口にしなかったが、
「でも、恩人の星が大変なのに、呑気にお祭りなんてやっていて良いの？」
と、少々天然な所があるフェイトはティアナの思っていた疑問を口にした。
（フェイトさん、自分たちが救助された者だって言う自覚は無いんですか!?）
フェイトの恐れを知らない行動にドキッとするティアナ。

「確かにフェイトの言う通りかもしれないけど、ヤマト　も　まほろば　も本来は新人訓練の為の航海だったの・それに、厳しい訓練と木星圏、土星圏での実戦を経験し、この先も恐らく戦いは続くと思うわ。だからこそ、太陽系から出る前にガス抜きをしようって事になったのよ。イスカンダルまでの航海の為に鋭気を養えって意味も含まれてね」
「へぇ・・・・」
　リニスの説明を聞き、感心しているフェイト。
　そう言えば、自分たちも新人研修の為に今回の航海に参加していたのだが、こう言ったイベントは予定には計画されていなかった。
（ちゃんと、クルーに関しての気遣いもしているんだ・・・・）
「それで、艦長から許可は得ているんだけど、フェイトたちも参加してみない？赤道祭に？」
「えっ!?」
「私たちも!?」
　リニスの誘いに戸惑うフェイトとティアナ。
　こういう場合、スバルならば即答で、
「行きます!!」
　と、言っていただろう。
　かつてのパートナーのそんな姿が容易に想像できるティアナであった。
　二人の戸惑っている様子を見て、リニスは、
「こういう異文化を見聞するのも、後々いい経験にもなるわよ」
　と、言われて二人は太陽系赤道祭に参加する事となった。
「それにヘリオポーズじゃ、もう一つやる事があるのよ」
「他にも？」
「ええ、テリオスの通信機器とブラックボックスから作った通信機を設置する予定なのよ。それで、何とか管理局とコンタクトをとれれば良いんだけど・・・・」
「それは感謝するけど、でも、何でヘリオポーズなの？」
「太陽系内だとまだ彗星帝国の残党が居て危険だし、ヘリオポーズを

越えると、地球側からの通信状況が悪くなるのよ。太陽系外縁部のヘリオポーズなら彗星帝国の残党は来ない筈だから」
「なるほど・・・・」
こうして、ヘリオポーズでは太陽系赤道祭の他にも管理局とのコンタクトも含まれた。
しかし、管理局を待つのは太陽系赤道祭が行われている時間内だ。
それを過ぎたら、ヤマト、まほろば　はイスカンダル救援任務の為にこの宙域を後にする。
出来れば、管理局と早々にコンタクトがとれ、太陽系赤道祭中に管理局が迎えに来てくれれば、一番良いのだが・・・・。
しかし、迎えに来たら来たで、管理局側は此方に訊きたい事が山程あるかも知れないが、此方にはそれに付き合う義務も義理もない。
もし、万が一、向こうが此方の指示に従わなければ武力行為も辞さないと脅して来たら、防衛軍側も自衛のために行動せねばならない。
そうなれば、折角救助したフェイトたちを今度は本当に宇宙の藻屑にしてしまう可能性もあるので、それだけは勘弁してもらいたい。
願わくば、話の分かる人物が乗った管理局の艦船が来て欲しいものだとリニスはそう思った。
記憶媒体にはまず、フェイト、ティアナの二人が無事な事を記録する。
次にフェイトがテリオスに何が起こったのかを説明して、通信機にその記憶媒体がセットされた。
後はヘリオポーズの手近な小惑星にこの通信機を設置して起動するだけである。
管理局とのコンタクト準備が進められて行く中、太陽系赤道祭の準備も進められて行った。
太陽系赤道祭のメイン会場となるのは、まほろば　の乗員が普段使用している展望食堂だ。
まほろば　はヤマトよりも一回り大きく、内装もヤマトを凌ぐ充実さを持っていた。
その為、会場はヤマトよりも広い　まほろば　の食堂となったの

だ。
太陽系赤道祭時には、まほろば　と　ヤマト　は接舷ハッチをドッキングさせ、ヤマト、まほろば　との間の行き来は可能となるが、フェイト、ティアナの二人に関しては、その行き来が制限される。
まぁ、当然の処置だろうと二人は特に不平や文句を言う事はなかった。
赤道祭の最中、雪風・改は周囲の哨戒任務を務めていた。
比較的大きな祭りと言う事で、ヤマトでは厨房長の幕ノ内と平田らの厨房スタッフが宴会料理を作り、同じく、まほろばの厨房でも、
「トムヤンクンには普通の醤油ではなく、ナンプラーを使え!!そこ!!スープが煮立っておるぞ!!焦がさない様に注意しろ!!」
「は、はい!!」
「チキン揚がりました!!」
「よし、こっちへ持って来い!!最後の仕上げをするぞ!!」
と、ディアーチェが檄を飛ばしながら宴会料理を作っていた。

ヘリオポーズ　とある小惑星
「よし、此処で大丈夫だろう。起動させるぞ・・・・」
一方、管理局とのコンタクトをとる為に通信機を小惑星に設置している方も真田が応援に駆け付け、問題なく通信機は設置され無事に起動した。
（後は、この通信を管理局の艦が受信してくれれば良いのだが・・・・）
通信機を設置し終えた真田らは太陽系赤道祭の会場である　まほろば　へと向かった。
まほろば　の食堂では、普段の八人掛けのテーブルが並んでいるのだが、今回はヤマトの乗員も来るので、食堂の椅子はある程度の数を休憩用として食堂の隅等に置き、その他は撤去されている。
まぁ、人数が人数なので、立食形式となっているのだ。
食堂のテーブルには白いクロスがかけられ、ヤマト、まほろばの厨房スタッフが腕によりをかけた料理が並んでいる。
準備が整い、いよいよ太陽系赤道祭の開催である。

グラスを持った良馬が食堂に集ったヤマト、まほろば　の乗員を前に開宴の挨拶を行う。
古代か真田がやった方が良いのではないのかと思った良馬であったが、会場の艦の艦長と言う理由でこうして開宴の挨拶をする事になった。
キィィインというマイクのハウリングの後、
「皆、厳しい訓練、そして木星圏、土星圏での戦闘、お疲れ様でした。この先もまだまだこうした戦闘は続くと思う。しかし、今はゆっくり英気を養ってもらいたい。そして、必ず我々の恩人であるイスカンダルを救おう!!」
良馬がグラスを掲げ、
「これより太陽系赤道祭を始める!!乾杯!!」
『乾杯!!』
会場に居る男女が明るく大きな声を上げた。
それは、ホントに此処が宇宙戦艦の中なのかという疑問を抱くぐらいとても楽しそうな雰囲気となった。
乗員たちはそれぞれ、好みの料理に舌鼓をうったり、仲の良い者同士で話に花を咲かせたり、酒好きなものは早速酒をカッ食らっている。
イレギュラーながらも、太陽系赤道祭に参加する事になったフェイトたちは、ソフトドリンクの入ったグラスを片手に祭りを楽しんでいるヤマト、まほろば　の乗員たちを眺めている。
「皆さん、楽しそうですね・・・・」
「そうね・・・・」
(スバルだったら、すぐにこの場に溶け込めたのかもしれないわね・・・・)
ミッドにいる親友（？）の性格を今は羨むティアナだった。
会場の中を進んでいくと、
「フェ、フェイトさん・・・・」
「ん？どうしたの？ティアナ」
「あ、あれ・・・・」

ティアナが信じられない物を見たかのように少し震えながら指をさす。
フェイトはティアナの指をさす方向に目をやると、
「えっ?・・・・何・・・・アレ・・・・?」
フェイトとティアナの視線の先・・・・其処には・・・・
ヤマトの医務長である佐渡が普段と変わらない様子で酒を飲んでいた。
それ自体何の問題もなく人間がお酒を飲んでいる光景に変わりない。
問題なのは佐渡の周りで繰り広げられている光景だった。
「どうじゃ?・お前さんも飲まんか?」
と、佐渡はバトライザーに酒を勧めている。
「機能障害ヲ起コス可能性ガアリマスノデ遠慮シマス」
しかし、バトライザーは佐渡からの酒を断った。
「なんじゃ、つまらない奴じゃのう。ホレ、お前さんの先輩であるアナライザーを見てみろ」
佐渡の傍ではヤマトの自律分析ロボット〝アナライザー〟が酒を頭（?）から浴びている。
本人?にしてみれば、酒を飲んでいるつもりなのだろう。
やがて、
「ヒック、ヒック」
と言う、言葉を発しながら各部の計器が赤く点滅している。
どうらや、酒に酔っている様だ。
バトライザーもそうであるが、アナライザーも人間とのコミュニケーションは全く問題ない様子。
二体のロボは非常に優秀な自律ＡＩを搭載しているのだろう。
「フェイトさん、あれは一体何なんでしょう?」
ティアナは顔を引き攣らせながら、酒を浴びているロボット（アナライザー）を震える手で指さす。
「私に聞かないでよ、ティアナ。私自身も軽くパニクっているんだから・・・・」

酒を頭から浴びているロボット（アナライザー）を見て、必死に冷静を取り戻そうとしているフェイト。
「ヒック、ヒック」
しゃっくりの様な声を出しながら、各部の計器が赤く点滅しているロボット（アナライザー）
それを見て、フェイトとティアナは、
「フェイトさん、私の見間違えでなければ、あのロボット・なんだか酔っぱらっている様に見えるんですが・・・」
「奇遇ね、ティアナ・・・私もそう見えるわ・・・」
目の前に広がるロボットが酒を浴びて酔っぱらっていると言う非現実的な光景に二人は、暫く釘付けになっていた。
もし、この光景をマリエルが見たらきっとあのロボットを解体してその性能を確かめたいと言うだろう。
挨拶を終えた良馬が会場内を歩いていると、「えええっ～!?」と言う悲鳴？の様な声が聞こえた。
何事かと思ってその場に行ってみると、其処には紺色でガチガチのイギリス式メイド服を着た原田と同じく黒のイギリス式メイド服を着たギンガが居た。
「どうしたの？二人ともその恰好は？演芸大会にでも出るの？」
祭りだし、何らかの演芸の様なイベントも開催されるだろう。
良馬はてっきりその演芸大会に原田とギンガが参加するのかと思っていた。
「あっ、いえ、これは・・・」
メイド服姿のギンガが顔を赤く染めて俯く。
その姿にドキッとする良馬。
「これはヤマトの航海長補佐の太田さんが『赤道祭と言えば仮装に決まってんじゃん』って言うから、通信長とこの格好をしてきたんです!!」
と、何故自分とギンガがメイド服で来たのか、理由を話す原田。
（いや、ハロウィンじゃないんだからさ・・・）
と、心の中でツッコム良馬。

しかし、祭りとは言え、普段の制服姿の乗員の中、メイド服姿ではどう見てもただのお調子者だ。
「原田君、ギンガ・・・それは、多分太田君に担がれたね」
と、原田とギンガが太田に騙された事を伝えると、
「んもぉおおおお!!太田さんどこいったのよぉ!!」
と、原田は再び声をあげ、辺りを見渡し、自分を騙した太田を探す。
しかし、肝心の太田の姿は見えない。
恐らく事前に危機を察して姿を眩ませたのだろう。
そんなやり取りをしている原田たちより少し離れた場所で、
(あ、危なかった・・・)
と、猫耳カチューシャに肉球手袋を着けた玲が大きな鈴の着いた首輪を手に持ち、自分も危うく騙されるところだったとホッと息をついていた。
しかし、猫耳カチューシャと肉球手袋を着けている時点でアウトだと思う。
「ま、まぁ、とりあえず楽しもうよ。折角のお祭りなんだしさ、それに二人とも良く似合っているよ」
「は、はい」
「ありがとうございます」
ギンガはやっぱり恥ずかしいのか俯いたままであるが、原田の方は褒められて嬉しい様子。
其処に、
「お?原田君も通信長も良くお似合いじゃないか」
と、永倉の声がした。
「航海長・・・その恰好・・・」
ギンガが自分たちの近くに来た永倉の恰好を見て、若干顔を引き攣らせて、声を震わせる。
原田の方は「助かった〜!!」と言う安堵の表情を浮かべる。
「永倉君・・・君もか・・・」
永倉の姿を見て良馬は少し呆れた感じで言う。
良馬たちの傍に来た永倉は、普段の防衛軍の制服ではなく、袴姿に

浅葱色のだんだら羽織りを着ている。
その姿は、幕末にその剣椀を振るい、京都の治安維持活動をしていた剣客組織、『新選組』の恰好をしていた。
「どうです？艦長？似合いますか？」
永倉は新選組の恰好をしているにも関わらず、何故かポージングはボディービルダーの様なポーズをとる。
「あ、ああ・・・とても良く似合っているよ・・・違和感が無いくらいに・・・」
「そうですか。いや～自分もこの衣装は何故か、しっくりくるんですよ～」
良馬は少し顔を引き攣らせながら、永倉に似合っていると伝えた。
開宴の挨拶をした時には気が付かなかったが、会場には制服ではなく、違ったコスチュームを着た者がちらほら見えた。
どうやらそれは新人乗組員の様で、他の先輩方が制服なのに対し、場を間違えたみたいに少し恐縮している様にも見えた。
その中には、男なのにメイド服を着せられた星名の姿もあった。
（太田君・やってくれたな・・・）
太田の悪戯に頭を抱えそうになるが祭りが進めばそんな空気はなくなるだろう。
フェイトとティアナが会場の隅で料理や飲み物を飲食していると、
「なんだ？折角の祭りなのに壁の花か？」
と、ディアーチェが二人に声をかけてきた。
「ディアーチェさん・・・」
「・・・その私たちは防衛軍の軍人じゃありませんからどうも手持無沙汰で・・・」
「祭りの時ぐらいそんな事は関係ないと思うのだがな・・・そうだ、何時ぞや言っていた金髪にそっくりな青ひよこを紹介しよう。ついてまいれ」
ギンガとディアーチェが言っていたフェイトそっくりの　まほろば　の砲雷長を紹介すると言われ、二人はディアーチェの後をついて行った。

「うまうま～♪」
やがて、一つのテーブルで水色の髪の女性士官が料理を凄い勢いで食べているのが見えた。
「おい、青ひよこ」
ディアーチェが声をかけると、
「ん？あっ、王様!!」
ディアーチェの声に反応し、水色の髪の女性士官が振り返ると、
「っ!?」
「フェイトさんそっくり・・・・」
事前に言われていたが、いざ、こうして自分たちの目の前に本人が居ると改めて驚かされる。
「およ？」
水色の髪の女性士官も自分の姿に似ているフェイトの姿を見て首を傾げる。
「ねぇ、王様。この僕にそっくりの人は誰？」
と、彼女もフェイトの事が気になる様子。
「この前、土星圏で戦闘に巻き込まれた者たちだ」
「あぁ～」
ディアーチェに言われ納得している様子。
「ホレ、自己紹介せい・・・・って、その前に・・・・」
ディアーチェは彼女に近づき、
「料理を食うのは良いが、口の周りをあまり汚すな!!」
と、言いながら、ナプキンで彼女の口の周りを拭いていた。
（ディアーチェさんって結構世話好きなのね・・・・）
（私がはやてにやられているようで、何だか恥ずかしい～）
ディアーチェの行動をみて、ティアナは彼女が世話好きなのだと思い、フェイトは自分そっくりの人物が　はやて　そっくりな人物に口の周りを拭いてもらっている光景に自分たちの姿を重ね合わせた様で赤面している。
「では、改めまして、宇宙戦艦　まほろば　の砲雷長を務めております。フェリシア・テスタロッサです。よろしく」

水色の髪の女性士官こと、フェリシア・テスタロッサがフェイトとティアナに敬礼しながら自己紹介をする。
（テスタロッサ・・・）
（容姿もそうだけど、名前もフェイトさんにそっくりね・・・）
フェイトは昔の自分の苗字が一緒な事に戸惑いを感じティアナは容姿と名前がフェイトに似ている事に驚いていた。
「は、はじめまして。フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」
「ティアナ・ランスターです」
戸惑いと驚きを感じながらも二人はフェリシアに自己紹介した。
「それにしても、フェイトはホントに僕とそっくりだね～それに名前も御先祖様とほとんど同じなんて凄い偶然だ」
と、フェリシア自身もフェイトの存在に驚いている。
「御先祖様？」
フェリシアの言った御先祖と言う言葉に首を傾げるフェイト。
「うん。僕の家の御先祖様にフェイト・テスタロッサって言う人がいたんだよ」
「なっ!?」
自分と同じ名前の人がかつてこの世界に存在していた事に驚愕するフェイト。
それにフェリシアの容姿からもしかしたら、彼女の言う御先祖様のフェイト・テスタロッサはこの世界の自分で、今、目の前に居るフェリシアは、自分の子孫なのではないかと思った。
フェイト同様、ティアナもフェイトと同じ考えを抱き、
（フェイトさん・・・この人、もしかしてこの世界のフェイトさんの・・・・・）
と、念話にてフェイトに確認をとる。
（う、うん・・・多分ティアナが考えている通りだと思うよ・・・）
フェイトはまだ少し動揺しながらもティアナに念話で話す。
しかし、まだ完全な確証があるわけではない。
確認するには彼女からもう少し詳しい話を聞かなければならないだろう。

「あの・・・・」
「ん？」
「その・・・フェイトさんについて詳しく聞きたいのですが・・・」
「うーん・・・僕よりもお母さんか、艦長の身内の忍さんなら詳しく知っていると思うよ。実家か艦長の家なら昔の記録映像とか写真があるかもしれないよ」
「そ、そうですか・・・」
フェリシアからそう言われ、少しがっかりしたフェイト。
やはり、この世界に存在した同姓同名の人物に興味があったのだ。
それにもし、彼女がこの世界の自分の子孫ならば、はやて　や　なのは　の子孫も居るかもしれないと思ったからだ。
もし、居るのであれば会ってみたいなと言う思いがフェイトにあった。
それはティアナも同じ様子だった。
最初は壁の花で手持無沙汰なフェイトとティアナであったが、フェリシアと知り合いそこから彼女とディアーチェの二人と話に花を咲かせ、料理に舌鼓をうっている中、会場の一角で、演芸大会が始まった。
新人乗組員たちが折角コスプレをしているのだから、何か芸でも披露できればと思い、始まったのだ。
それを見ていたフェリシアが、
「フェイト」
「はい？」
「ちょっと協力して」
「はい？」
フェリシアは、『私、何かを企んでいます』と言う感じの笑みをフェイトに向け、フェイトは戸惑っている中、フェリシアは、フェイトの返事を聞かずにそのままフェイトの手を握り、彼女と共に会場を後にした。
「大丈夫でしょうか？」
ティアナは少々不安になり、ディアーチェに訊ねる。

「心配するな。問題ないだろう」
ディアーチェはティアナの問いに問題ないと答える。
それから暫くして、演芸が開かれている舞台で、
「困った悩みをズバッと解決！強くて凄くてカッコイイ！そう・・・それがこの僕、雷刃の襲撃者（レヴィ・ザ・スラッシャー）!!」
フェリシアは防衛軍の制服から、ふた○はプ○キュ○のキュ○ホワイト風の衣装を身に纏って舞台に立っていた。
「「「

もはや遊園地やデパートの屋上等の会場で行われるヒーローショーだ。
「うぅ〜・・・お、お待た・・・せ・・・」
プシューと言う白い煙が晴れ其処に居たのは同じく、ふ○りは○リ○ュアの○ュアブラック風の衣装を身に纏っていたフェイトだった。
「フェイトさん・・・」
茹蛸の様に顔を赤く染め、身体をもじもじとくねらせているフェイトの姿は管理局の敏腕美人執務官として凶悪犯と対峙している管理局執務官、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンと同一人物とは思わせない姿だった。
そんな上司の情けない姿を見たティアナはもはや彼女の名前以外何も言えなかった。
「やっと来たね、フェイト!!さあ、フェイトも名乗り名を上げよう!!」
「えええぇ!!?な、名乗り名なんて無いよ!?」
「大丈夫、大丈夫・・・ゴニョゴニョ・・・」
フェイトの耳元でフェリシアが囁く。
「・・・って、言えばいいよ。さあ、フェイト!!」
「〜〜〜〜〜っ!!うぅ〜・・・」
顔を真っ赤にさせているフェイト。
「ほら、フェイト。皆が待っているよ。さぁ、ズバッとサラッと言ってみよう!!」
フェリシアの言葉に、目を瞑って羞恥耐えていたフェイトだが意を決した様に
「ら、雷神の如くササッと登場！立ち塞がる悪には容赦なく死の鉄槌を下す!!わ、私こそが正義の象徴、雷光の死神!!フェイト・テスタロッサ・ライトニング――――っっっっっ!!!!!」
顔を赤くし、ポージングをしながらもうヤケクソ気味に叫ぶフェイト。
「「「

この瞬間、男子たちの更なる咆哮により艦が揺れた。
比喩的表現じゃなくマジで揺れた。
「キタコレキタコレ!!!時代がうねりを上げてキタヨコレ――――!!!!」
「ペアルックという事は・・・禁断の百合々関係か!!?」
「ありがとう!!この様な至福の光景にカチ合わせてくれて本当にありがとう!!!!」
二人のヒーローショー?で、会場は大来に盛り上がった。
と、言うよりもフェイトとティアナは今の所、最低限の乗員にしか顔を見せていないにもかかわらず、誰もフェイトの存在を気にしていない様子だった。
「ふぅ～酷い目に遭ったよ・・・」
あれからフェイトは舞台で、フェリシアとデュエットしたり、悪乗りで悪役をやった乗員を倒す殺陣等を披露する羽目になった。
キュ○ブラック風の衣装のまま、ティアナとディアーチェの居る場所まで戻った。
「お疲れ様です。フェイトさん」
「ご苦労だったな」
ティアナとディアーチェがフェイトに労いの言葉をかける。
舞台から降りても、周りの乗員がチラチラとフェイトの姿を窺う。
「いやー!!大成功だったね、フェイト!!」
其処へ今回の元凶であるフェリシアも合流した。
もちろん服装も舞台で着ていた○ュアホワイト風の衣装のままである。
「悪乗りしすぎだぞ!!青ひよこ!!」
ディアーチェがフェリシアに注意する。
「うーん、本当は王様と一緒にやるつもりだったんだけど、王様よりもフェイトの方が僕とそっくりだったから急遽、フェイトにしたんだけど、やっぱり僕の目に狂いは無かったね」
ディアーチェの注意も何のその、先程の舞台の盛り上がりに満足な様子のフェリシア。

「あ、あんな恥ずかしい事を我にさせるつもりだったのか!?」
もし、この場にフェイトが居なかったらと思うと、ゾッとしたディアーチェであった。
それと同時に生贄になったフェイトに感謝した。
「やあ、楽しんでいるかな?」
と、そこへ良馬が二人の様子を見に来た。
「あっ、月村艦長」
フェイトは先ほどの舞台を見られたと思い、赤面し俯く。
そんなフェイトに代わってティアナが、
「あの・月村さん、その人たちは?」
と、良馬の傍に居る一組の男女の事を訊ねる。
「ああ、この際丁度いい機会だから紹介しておこうと思ってね」
と、男女に自己紹介をするように促す。
「私は、宇宙戦艦ヤマトの艦長代理の古代進です」
「同じくヤマトの船務科長の森雪です」
ヤマトの関係者だと知り、先程まで俯いていたフェイトもバッと顔をあげる。
そして、その顔ぶれにフェイトとティアナは少なからず驚いていた。
あの戦艦の幹部と言う事から、レジアス中将かナカジマ三佐の様な年配者だと思っていたら、目の前にいるヤマトの艦長代理や船務科長も良馬同様、予想以上に若かった。
二人の年齢はどう見ても、どう見てもフェイトと同年代にしか見えない。
まほろば　の幹部も若いがヤマトの幹部も若い事が分かった。
ただ、全体的に言えるのは、それぞれ同年代の管理局員と比べると、こちらの顔ぶれの方が精悍な面構えをしていた事だった。
「フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです。時空管理局次元航行本部所属執務官をしております」
「ティアナ・ランスターです。ハラオウン執務官付きの補佐官を務めております」

フェイトとティアナも古代と雪に自己紹介をする。
そして、ティアナが古代に質問をした。
「あの、素朴過ぎる疑問で申し訳ありませんが、代理って、ヤマトの艦長は空席なのでしょうか？」
「ヤマト艦長代理の件ですが、イスカンダルへの初航海の任務中に初代艦長が病に倒れられ、当時戦闘班長をしていた私が艦長から指揮権を委譲されました。艦長はその後亡くなりましたが、以来、兼任を解かれていないからです」
古代の回答を受け、ティアナとフェイトは納得した。
「あの・・・」
続いてフェイトが古代に質問をした。
それは自分がヤマトと思しき艦と初遭遇した時の事だった。
「そうか、あの時レーダーの隅に映ったのは君たちの艦だったのか・・・」
古代によれば、テレザート星が自爆する直前、レーダーの隅に艦影が映った記録があると言う。
テレザートの爆発から退避したこともあり、すぐ反応は途絶えてしまったが、あの艦影が管理局の艦ならば納得もいくというものだ。
フェイトも得心した表情になる。
「あと、あの時バキューム鉱石を艦の周りに着けていましたが、その後で直ぐにエネルギー回復したのは、あれはヤマトの独自機能なんですか？」
「うーん、それは軍事機密の一つになるから詳しい事は言えないけど、あれは、ヤマトの機能ではなく、装備の一つだよ。その装備品さえあれば、防衛軍のどの艦艇でも、あの時の現象は起こせる」
「そうなんですか・・・」
フェイトが長く疑問に思っていたあのバキューム鉱石群での現象はヤマトの独自機能ではなく、装備品と言う事だけ分かった事でも一つの収穫であった。
それに折角の祭りなのだから互いに機密にかかわるような事は聞かず、世間話をしたのだが、その中で、フェイトたちは、雪が艦長代

理の古代と婚約していると知って驚いた。
職場恋愛は構わないが、軍艦という特殊な環境でのそれはどうなのかと思ったが、乗組員や前艦長、果ては軍司令長官も公認の仲なので、誰も問題にしないのだと言う。
まぁ、自分の義兄（クロノ）と義姉（エイミィ）も考えてみれば、似た様な環境だったと、思い出したフェイトだった。
（古代さんと雪さん、フェイトさんの今の服装を完全にスルーしているわね・・・やっぱり防衛軍の人って管理局とは一味違うわね・・・）
と、ティアナはフェイトの衣装にも華麗にスルーした古代と雪のスキルを心の中で褒め称えていた。

時系列をほんの少し戻して、
会場がフェリシアとフェイトのヒーローショー（？）で盛り上がって居た頃、別の場所では・・・
「コラ太田!!逃がさないんだからね!!」
と、遂に原田に捕まった太田が「助けてくれ～」と喚いているが、酒を飲み、完全に据わった目の原田が「観念しりよぉ～太田～」と首根っこを掴んで、ズルズルと引きずる様にして何処かへ連れて行く。
其処に先輩、後輩の礼儀は存在していなかった。
引きずられていく太田は、「ぼ、僕はもういいですよ～」と、冷汗を流している。
今の原田は完全に肉食獣と化しているので、嫌な予感しかしない。
しかし、キッと目を鋭くした原田は「太田、酒注げって言っているだろうがぁ!!」と空のグラスを突き出した。
太田は更に逃げようとするも、たまたま近くを通りかかったヤマト、砲術長の南部とぶつかり、体勢を崩してしまった。
「な、南部さん助けてぇ～」
「な、何で俺まで・・・」
「オォー南部か。ちょうどいいお前も付き合え!!」
「えっ？」
こうしてたまたま通りかかっただけの南部までもが巻き込まれた。

「アタシはこれでも気にしているんだ～・・・・」
「はぁ～・・・・」
　原田はどっかりと床に胡坐をかきながら、グラスに酒を注ぎ、太田と南部は正座の姿勢で原田の前に座らされている。
「能天気でおバカな子だと思われているんじゃないかって。アタシだって悩み事とか真剣に考えたりする事とかあるのにさぁ～『真琴ちゃんはいつもニコニコしていていいねー』とか言ってくれちゃって・・・・ったくどいつもこいつも分かっていない!!」
（（絡み酒かよ!?））
　酔っ払っている原田の様子に対して同時に心の中でツッコム南部と太田。
　原田の愚痴を聞かされ、何故他艦の乗員の愚痴を聞かされなければならないのかと、テンションが下がる太田と南部。
「陰気で暗いナースなんて誰も喜ばないだろう?なぁ、そうだろう?太田!!」
「はぁ～・・・・まぁ～・・・・」
「くそ、何で俺まで・・・・」
「なんだ!?その生返事は!?顔で笑って心で泣いているって知らんのか!?」
　と、更に原田の愚痴に付き合わされる太田と南部の二人だった。
「地球との交信はヘリオポーズを通過しますと出来なくなります。交信を希望する乗員は手続きを済ませ、メイン通信室にて、番号札を受け取って下さい。尚、交信は一人三分から五分以内とさせていただきます」
　太陽系赤道祭と同時に地球にいる家族との通信も行われ、新人乗組員たちは交代で地球に居る家族や彼女、彼氏と交信を行った。
「地球との交信は間もなく終了となります。交信希望者は直ちにメイン通信室までお越しください」
　ヘリオポーズの終焉まで来たヤマト　と　まほろば。
「まもなく、ヘリオポーズを通過いたします。それをもって太陽系赤道祭は終了となります。繰り返します。まもなくヘリオポーズを通

過いたします。それをもって太陽系赤道祭は終了となります」
楽しい時間と言うのは直ぐに終わるモノである。
宴もたけなわ、まもなく太陽系赤道祭の終了時間が迫っていた。
太陽系赤道祭の中、残念ながら管理局とはコンタクトが取れなかった。
良馬はその事をフェイトに伝えた。
「申し訳ない。何とか赤道祭の最中に管理局とは、コンタクトを取りたかったのだが・・・これより我々は軍務に戻るが、管理局とコンタクトが取れなかった以上、君たちにもこの先の航海に同行してもらわなければなりません」
良馬が管理局とコンタクトをとれなかった事をすまなそうに言う。
まさか、この宙域にフェイトたちを放り出して行く訳にもいかない。
「いえ、其方も本来は任務の最中の様ですので、構いません。私たちが防衛軍と同じ立場でしたら、きっと同じ行動をしていたでしょうから」
「それに航海への同行を求めたのは此方ですから、私たちはきにしていません」
と、フェイトとティアナは防衛軍側に何の落ち度もないと言う。
「無論、任務が終わったら、もう一度、此処へは立ち寄ります。申し訳ないが、了承してほしい」
「はい」
「わかりました」
フェイトもティアナも管理局員・・・任務と言う職務の大事さは良く知っている。
まして、今回は自分たちの恩人を救援に行く任務であるのだから、むしろ自分たちよりも優先すべき任務だった筈・・・
これ以上自分たちのせいで時間を潰させる訳にはいかず、フェイトは首を縦に振るしかなかったのだ。
しかし結構重要な場面にも関わらず、フェイトの着ている衣装は未だにキュ〇ブラック風の衣装だったので、その衣装がこの場の空気を

ぶち壊していた。
しかし、良馬はあえてその事については触れなかった。
良馬としては、フェイトがその衣装を気に入ったものだとばかり思っていたからだ。
そして太陽系赤道祭が終わった後になって・・・
「フェイト、何時までその服を着ているつもりですか？」
「へぁっ!?」
と、リニスに言われるまで気が付かなかったフェイト。
彼女の生涯にまたもや黒歴史が一ページ追加されてしまった。
ヘリオポーズを通過し、ヤマトの乗組員たちは自艦へと戻り、ドッキングは解除され、太陽系赤道祭は終わりを迎えた。

ヤマト、まほろば、雪風・改がヘリオポーズを通過し、オリオンのα星へと向かって行った頃、
「・・・ん？何だ？これは!?」
三艦とは一足違いでヘリオポーズ付近を航行していた管理局の次元航行艦が通信ポッドの通信波を受信した。
「すぐに本局へ連絡しろ!!」
「はい!!」
通信ポッドの通信内容は管理局本局へと届けられた。
本局でその内容を見たクロノは驚きを隠せなかった。
義妹を乗せた艦を襲ってきたのは、以前プレオを破壊した艦隊と同一の星間国家のもので、その艦隊に襲われていた所を助けてくれたのは、地球防衛軍と言う組織であった事、
その組織にはテレザートであのプレオを破壊したミサイル艦隊を撃破したヤマトも所属している事、
そして、その地球防衛軍が存在する世界は、自分たちの知る地球・・・第９７管理外世界から約２００年も経過していると言う事、
など、驚愕する事実ばかりであった。
拉致された可能性もなくはないが、フェイトたちはそう簡単に拘束されるようなことはないはずだ。

何よりも記録映像のフェイトとティアナは拘束された様子もなければ、無理矢理台詞を言わされた様子もない。
むしろ問題は、地球防衛軍とどうやってコンタクトを取るかだ。
フェイト曰く、現在乗艦している　まほろば　と同行しているヤマトは別任務の途中だという。
ならばその任務を果たすのを優先するのが当然だ。
今、考えられる唯一の方法は彼らが帰路に此処を通るのを信じて、何らかの通信端末を残していくか、管理局の艦がここに留まるしかない。
前者は通信を受けてからここに来るまでの時間がかかり過ぎる。
後者も現実的ではない。
何時、テリオスを襲った艦の仲間が此処に来るか分からないし、襲ってきたら自分たちには勝ち目がない。
そこでクロノは消去法で前者をとるしかなかった。
連絡さえ取れれば、身柄返還交渉もできる。
現状ではこれが最善だ。
今は、親友の安否を心配している彼女たちに連絡を入れるしかなかった。
ミッドチルダ、首都クラナガン郊外にあるなのはとフェイトの家で、早朝、目を覚ました高町なのは　は、隣にヴィヴィオが寝ているのを見て軽く息をついた。
すやすやと寝息を立てているヴィヴィオだが、寝顔にも悲しみが表れていた。
目元は泣き腫らし、頬には涙の跡もついている。
あの後、なのはは愛娘に事実を伝えたが、案の定ヴィヴィオは大泣きだった。
泣きじゃくるヴィヴィオを抱き締めているうちに、なのは自身も涙を抑えきれずに泣き出してしまった。
今日明日は母娘一緒にいてあげなくては、と思っていると、胸元のレイジングハートがチカチカと点滅している。
「おはよう、レイジングハート。何かあったの？」

「おはようございます、マスター。スバルさんから伝言が入っております。ともかくご覧になることをお勧めします」
と、レイジングハートは伝言メッセージを早く見るように急かす。
(スバル・・・あの子も私と同じような心境なんだよね・・・いや、ギンガとティアナの件を考えると、私よりも傷ついているよね・・・)
そう思いつつ、メッセージを再生してみる。
再生された映像のスバルもやはり、ヴィヴィオや自分同様泣いていたのだろう。
目元は泣き腫らしていた。
「おはようございます、なのはさん。ヴィヴィオの様子はどうでしょうか?早速ですが、クロノ提督からの最新情報です。事が事だけに、クロノ提督から伝えられた内容だけ言いますね・・・フェイトさんとティアの二人は、近くを通りかかった第三者の艦船に救出された可能性が高くなりました」
「っ!?フェイトちゃんたち無事だったんだ!!・・良かった・・・」
二人の無事が確認出来たと言うスバルの言葉を聞き安堵する なのは だったが、次のスバルの言葉を聞き、安堵から一転驚愕へと変わった。
「それで、フェイトさんたちを助けた船なんですが、地球防衛軍と言う組織の戦艦らしいんです。色々思うところがおありでしょうが、まずは取り急ぎお伝えしました」
「ふぇ!?」
(フェイトちゃんたちが救出されたらしいのは確かに希望を抱かせる事なんだけど、救出したのが地球防衛軍!?)
「ふえぇぇぇっ――――!?」
娘が寝ていることを忘れてしまい、大声を出すなのはだった。
そして、同じくミッドの八神家でもスバルからのメッセージを聞き・・・
「なんやてぇー!!」
と、はやての大声が八神家に響き渡った。

四十六話　α星の戦い

時空管理局・本局　次元航行艦司令本部。
その一室には高町なのは・ヴィヴィオの母娘、スバル、シグナム、ヴィータにグリフィス・ロウランの六人が詰めていた。
いずれのメンバーも非番だった為、此処に来たのだ。
ヴィヴィオに至っては、なのはが珍しく学校を休ませて此処に連れてきた。
生存が絶望視されているテリオスの他の乗組員の家族とは別フロアの部屋なのは仕方ないところだ。
さらに、展開されている通信ウィンドウにはフェイトの被保護者のエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエ、そして　八神はやての顔が映っていた。
「フェイトちゃんたちが生きている可能性が高いのは嬉しいんやけど、よりにもよって、助けてくれたらしいのが『地球防衛軍』とはなぁ・・・・」
「でも、私たちの故郷以外に次元の海の中で『地球』が存在するなんて信じられないよ・・・・」
「まあ、そろそろクロノから連絡があるだろう。ある程度状況証拠も揃っていれば有り難いが・・・・」
『・・・・』
エリオとキャロは涙ぐんでいるが、フェイト生存の可能性が高くなったことに一縷の希望を掴んでいるようだ。
それは此処に顔を見せている者に限ったことではない。
皆が顔を合わせてから、大体三十分位経っただろうか、新たな通信ウィンドウが開き、緊張した面持ちのクロノが現れた。
「「『クロノ（君）（提督）!!』」」
いきなり大勢から詰め寄られ、一瞬ギョッと驚いたクロノだが、すぐ気を取り直し、皆を諭す。
「皆の気持ちはわかるが、少し落ち着け。現在わかっている事は全て話すから」

そう言って、フェイトたちが記録録画した映像をその場にいる皆に見せた。
フェイト、ティアナの二人が自分たちは無事だと説明した映像を見て、
「映像を見た限りじゃ、フェイトちゃんたちは大した怪我はしていないと思うし、脅迫されて無理矢理言わされているようにも見えない。私は、フェイトちゃんたちが地球防衛軍という人たちに救出されたと信じるよ。クロノ君」
「そうか・・・なのはが言うなら、きっとその通りだろう」
クロノの表情も僅かに緩む。
「じゃあ、フェイトママたちは助かったの？なのはママ？」
元気を取り戻したヴィヴィオ　に　なのは　は、
「まだはっきりとは言えないけどね。フェイトママもティアナもきっと助かっているよ」
よかったーと声を上げたヴィヴィオ　に　なのは　は表情を改めて言い聞かせる。
「でもね、ヴィヴィオ。フェイトママたちは良かったけど、他の大勢の人たちは助からなかったの・・・他のみんなは悲しい思いをしているから、喜ぶのはこのお部屋の中だけにしようね？」
「う、うん・・・」
ヴィヴィオもなのはの言う言葉の意味を理解したのかシュンとする。
フェイトの報告では、まほろば　に生きて収容されたのは自分を含めて僅か二人・・・
他の乗員の家族たちの悲嘆を思うと喜びを表情に出すことは憚られる。
「それで、テスタロッサたちを襲った犯人の目星はついているのか？」
テリオスを襲撃した下手人の正体を質すシグナムにクロノは、『まずはこれを見てくれ』と別の映像を出した。
クロノが端末の再生スイッチを入れた。
再生されたのは、先日遭難したテリオスが所属不明の艦船に襲撃さ

れた時の艦内外の映像とブリッジの音声信号だ。
通信ポッドにフェイトらの五体満足な姿の映像と共に遭難したテリオスに何が起きたのか状況を説明する為に同じく添付されていたものだった。
前半のテリオスが攻撃を受ける場面では、皆表情を憤怒と苦痛に歪めていた。
しかし中盤、地球防衛軍の艦船や宇宙戦闘機が敵艦に攻撃を始める映像に変わると、一同は画面に釘付けになる。
そして、火達磨になった敵艦が高エネルギーの束に串刺しにされ、次々と爆発していった時は、皆一様に声を失った。
やがて、攻撃が終わると、そこには大小無数の金属片と艦体をへし折られて漂う大型艦が映し出されていた。
皆は当初、これは作られた映像なのではないかと思ったが、
しかし、
「これはとても作られた映像ではなく、まさしく本当にあった出来事だ」
と、事前にチェックしたクロノのお墨付きがあり、各々が所持しているデバイスもフィクション映像ではないという見解を出している。
「テリオスを嬲り殺しにした艦隊をろくに反撃させないまま撃破するとは・・・」
シグナムが呻くように呟いた。
「まだ断言はできないが、これは以前、テレザートで見たミサイル艦隊と同じ勢力の艦だと思っている」
「あの時の艦か・・・」
はやてたちは以前、フェイトからテレザートにて全体をミサイルで武装した艦がヤマトと名乗る艦の超エネルギー砲を受けて消滅した映像を見せてもらっている為、下手人の正体を理解できた。
そして、撃破された艦船の残骸が宇宙を漂っている映像を見ていたなのはは、急いで両手を使いヴィヴィオの両目を覆った。
画面にはテリオスを襲撃したらしい敵艦の乗員らしい死体とテリオスの乗員らしき人の死体が漂っていたからだ。

それも手足や身体が変な方向に曲がり、身体が裂けて内臓がはみ出ている状態や上半身と下半身が分かれている状態など、とても子供には見せられない状態で・・・
エリオとキャロも思わず目を閉じてウィンドウから目を背けている。
大人たちですら顔を歪める有様であるのだから、流石にこれは子供の教育上よろしくない。
なのははヴィヴィオにトラウマを植え付け無い様に両目を手で塞いだのだ。
クロノはしまったという表情になり、慌てて映像を切る。
なのははヴィヴィオと共に部屋を退室し、はやてもエリオとキャロに退室を命じた。
「す、すまん・・・」
子供には辛い映像を見せてしまった事にクロノは謝罪する。
「フェイトさんたちが生きていた事に関しては嬉しい事ですが、どうやって地球防衛軍に救助されたのでしょう？」
スバルがクロノに質問する。
彼女らは、フェイトたちが無事と言う報告を聞いただけで、そのどのような経緯があったのか知らないし、フェイトも肝心な部分が抜けているのか自分たちが無事と言う事だけで、救助された経緯を映像の中では話していない。
「考えられるのは、この艦隊がテリオスを襲撃している所にヤマト、まほろば　の両艦が通りかかり、戦闘の結果撃破された・・・というところだろう」
クロノの仮説に在室の一同は無言で頷いた。
ヴィヴィオ、エリオ、キャロ、なのはの四人が退室したのを確認した後、クロノは映像を再生する。
やがて、大破したテリオスの近くに一隻の艦船が姿を現す。
その艦は艦首に巨大な発射口らしき大きな口を開け、三連装の砲身着き砲塔が前に三基、後ろにも二基を装備した水上艦を意識して造られた様な艦影をしており、大きさはゆうにＸＶ級を凌ぎ、その姿はま

さに戦う為だけに生まれてきた生粋の戦闘艦と言う印象を惜しげもなく出している。
テリオスはブリッジに直撃弾を受けた為、艦内の様子はサウンドオンリーになってしまっている。
しかし、会話の内容からフェイトとティアナ幸いは軽傷で済んだようだ。
その後、地球防衛軍に救助され彼らの艦、まほろば　に収容されたのはほぼ確実になった。
そして、通信ポッドの最後の映像はこのポッドが設置されていた小惑星から離れていく三隻の艦の姿だった。
一隻は先程見た大型戦闘艦、もう一隻も同じくタワー状の艦橋、煙突らしき構造物、三連装の砲身つきの主砲と副砲を装備した水上艦に近いフォルムの艦。
もう一隻は、葉巻状の船体に砲身がついた連装式の砲塔や長く伸びているアンテナを着けた小型艦。
「それで、どの艦がヤマトなんでしょう？」
スバルが首を捻るがシグナムが即答した。
「ヤマトに関しては恐らく海鳴で暮らしていた頃、映像や写真で見た戦艦大和に似たフォルムをしているあの艦だろう・・・・」
シグナムはヤマトと思しき艦を指さす。
「私もそう思うわ」
はやてもシグナムの予想に賛同する。
「そうなると、消去法で、あのＸＶ級よりも巨大でヤマトに似た艦が、まほろば・・・・」
「それじゃあ、まほろば　と同行しているヤマトっちゅう船は、テレザートでミサイル艦隊を消滅させたあのヤマトと同一の船なんか？」
「可能性は大だ」
「信じる、信じない、は別として、この謎の敵艦を保有する勢力と地球防衛軍は、我々より格段に進んだ科学技術と軍事力を持っていることは間違いないですね？」
グリフィスがクロノに問うように言う。

「ああ、本局や〝海〟の上層部には信じようとしないお歴々もまだ居るがいい加減現実を認識してもらわないとな・・・」
クロノがやれやれと言った感じで言う。
ただこの時、そんな技術力と軍事力を持った勢力を管理局がこのまま野放しにしておく訳がないと言う疑念をこの場にいた誰もが持たなかった。
それほど、フェイトたちの生存や目にした現実が凄まじかったのだ。
「私らは・・・管理局は知らぬ間に『井の中の蛙』になっとったんとちゃうやろうか？」
クロノに続いてはやてが一人、ポツリと呟く。
「主・・・」
「はやて・・・」
「日本の義務教育の中で宇宙のことも一応は学んだはずやのに・・・管理局に入って、宇宙（次元の海）は無限の空間であり未知の空間が広がっている事をすっかり忘れとった・・・私ら管理局は宇宙（次元の海）を全て見通していた訳やないのに・・・」
「耳が痛いが、はやての言うとおりだな。でも、差し当たっての最優先事項は、テリオスを襲った敵について知る事と、何とかフェイトたちとコンタクトを取ることだ」
「何か当ては有るんですか？クロノ提督？」
グリフィスがクロノに訊ねる。
「明確なあてはない。だが、恐らくヤマト　と　まほろば　は任務を終えた後、母国へ帰る途中に此処を通る可能性も十分考えられる。打てる手は可能な限り打っておかなければな・・・しかし、フェイトたちが救出されたのは確実だし、救出した地球防衛軍も戦闘力は兎も角、思想的に危険なところはなさそうだ」
「だが早期に　まほろば、ヤマトないし、地球防衛軍と連絡をとり、テスタロッサたちの身柄返還要請をしなければ・・・」
シグナムがクロノを見たが、クロノは厳しい表情を崩さない。
「残念だが、彼らの本拠地である地球の位置すら判らない。現時点で

は、すぐに連絡をとるのは不可能に近い。近々、我々も通信ポッドのあった付近を捜索して、何か手がかりが無いか調べる事になっている。それにこの通信ポッドには次元通信ブイを残しておく。フェイトかランスター補佐官ならわかるパスワードを入力したから、回収されれば連絡がとれるだろう」

クロノは今後の予定をはやてたちに伝える。

「でも、通信ポッドがある場所は、本局から二、三日かかるんですよね？例え、連絡が取れたとしても、ヤマト　や　まほろば　はその場で待っていてくれるでしょうか？もし、彼らの本国から至急戻れと命令されていたら、当然そちらを優先すると思うんですが・・・」

スバルが最もらしい疑問をクロノにぶつける。

そう、ヤマト　と　まほろば　は地球防衛軍の所属であり、時空管理局が彼らに指示・命令をする権利はない。

むしろ、こちらの要請より地球防衛軍司令部の指示・命令が優先されるのは至極当然だ。

だが、そんな当たり前の事を理解し、納得しない管理局の高官も居るだろう。

「まぁ、それは当然だろうな。立場が逆であれば我々もそうする。でも、連絡手段があれば、フェイトたちや地球防衛軍とも話ができるし、座標がわかれば迎えに行ける。しかし、まずは話ができなければ何も始まらないんだ」

クロノの言葉に全員が頷いた。

「フェイトたちが助かっているってのは良いけどよぉ、一連の遭難事件については本局や〝海〟のお偉いさんたちはどう考えてんだ？」

今度はヴィータがクロノに質問する。

ＪＳ事件解決以降、管理局の次元航行艦や各管理世界間を往来する輸送船の遭難や消息不明の事件が多発しており、管理局はその殆どを突発性の宇宙気象や次元震の影響と発表してきたが、それもそろそろ限界が来ている。

今回のテリオスの件を含め、恐らく遭難した次元航行艦や消息不明となった輸送船は、いずれも所属不明の敵勢力に襲撃されたと見て間

違いはないだろう。
まぁ、中には本当に宇宙気象の影響を受けて、遭難した船もあるだろうが・・・。
ヴィータの質問にクロノは、
「さすがに皆、青くなっていたよ。管理局が誇るＸＶ級がこうも簡単にやられたかと思ったら、その襲撃した連中も地球防衛軍の艦の前に碌な抵抗も出来ずに全滅した。しかも、その大きさは大型艦では、管理局の艦船を凌ぐかほぼ同じ大きさにも関わらず、加速力、機動力とも段違いに優れており、武装も極めて高熱量の光学兵器が主体だ」
と、クロノの説明にまたも頷く一同。
「しかも、短時間で高エネルギー波を連射している・・・管理局の艦船はおろか、あの『聖王のゆりかご』ですら穴だらけにされて撃沈されてしまうだろう。あと・・・」
『あと？』
クロノが濁した『あと』と言う言葉を皆がオウム返しすると、彼は深刻な表情を浮かべる。
「あと、困ったのは次元航行艦の艦長の中に遠くの世界や探査任務を渋る者が出始めていることだ」
遠征の調査任務に出た二つの探査部隊が消息不明となっている現状から、遠征任務を忌避する局員が居ても不思議ではない。
度重なる次元航行艦の喪失と多数の乗組員の殉職・行方不明は管理局の〝海〟に深刻な打撃を与えていた。
また、管理局屈指のエースであるフェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官も遭難し、管理外世界の宇宙船に救助されたらしいが現在も連絡不能と言う事実がその打撃を加速させていた。
時空管理局が最新最強と喧伝しているＸＶ級次元航行艦をあっさり撃破できる強力な宇宙戦闘艦とそれを運用できる軍事組織が管理局のコントロールを受けずに存在する事が明らかになれば、管理世界全体に衝撃と不安をもたらし、管理局への不信感を募らせるだけでなく、反管理局組織や次元犯罪者に要らぬ勢いを与えかねないからだ。
「次元世界探査は兎も角、遠くの管理世界に行かないというのは現地

の治安維持上も良くない。こちらの方は影響が甚大だよ。どんなに強い魔導師でも宇宙空間で乗っている次元航行艦をやられてしまってはどうしようもないからね・・・」
(次元世界の法と正義の守護者、管理者などと気取っている内に底無し沼に踏み込んでしまったのかも知れないな・・・管理局は・・・)
クロノは暗然と呟いた。
「正直、信じたくない気持ちですが、現実から逃避して対応を誤れば、我々も同じ運命に見舞われることになるでしょうね・・・」
グリフィスもポツリと呟き、皆は頷いた。
その頃、別フロアにある大会議室にはテリオスの乗組員の家族が集まり管理局からの説明を受けていた。
こちらは生存がほぼ絶望的であるため、あちこちで怒号や泣き声が上がっていた。

その頃、星の海では・・・
まほろば　に収容されたフェイトたちには、通常航行中は医務室や展望室を含む生活区画内での自由行動が認められていた。
フェイト、ティアナの二人は、太陽系赤道祭以降、食事は会場であった艦内の大食堂で乗組員と一緒にとるようになった。
きっかけは、やはり太陽系赤道祭でのフェリシアとの共演である。
改めて、フェイトの顔を見た乗員たちは、最初は驚いていた。
しかし、少しずつだが打ち解けつつある。
人見知り?をするフェイトや警戒感が強いティアナにとっては、珍しい事だが、何時までも人見知りをしていたり、警戒してはそれこそ、怪しまれるので、割り切ったと言う部分もある。
まぁ、大抵彼女たちが食事をする際は、フェリシア、リニス、ディアーチェ、ギンガ、良馬のいずれかの幹部乗組員が同席して、それとなく目を光らせている。
「それにしてもこのO・M・C・Sって凄いですね」
ティアナがO・M・C・Sの事を褒め称える。
管理局の艦で長期航海に出ている場合、やはり食糧貯蔵の関係か

ら、日が経つにつれ、食事はレトルトや缶詰、味気の無い宇宙食へとなって行く。
しかし、このO．M．C．Sは新鮮な食糧を無尽蔵に製造してくれるある意味ロストロギア級の機械である。
「そうね・・・ねぇ、ディアーチェ。この機械の原理ってどうなっているのかな？」
フェイトが同席していたディアーチェにO．M．C．Sの原理を訊ねた。
厨房責任者のディアーチェならば、O．M．C．Sの原理を知っていると思ったからだ。
「・・・知らない方が幸せだと思うぞ」
と、O．M．C．Sの原理についてノーコメントの見解を示した。
まぁ、軍艦の装備なのだから、O．M．C．Sも軍事機密の一つなのだろうとフェイトとティアナはそう思った。
管理局の艦船もそうだが、ヤマト、まほろば　の乗員も比較的若者が多く、四十代以上はヤマトの医務長の佐渡と機関長の山崎、まほろば　では機関長の井上ぐらいである。
大部分はフェイトと同年代か年下で、訓練学校を卒業したばかりの十八歳という者も少なからず乗り組んでいた。
話に聞いたヤマトの初航海も古代ら乗組員の多くが、当時十八～二十代で、実戦経験が少ない者たちや実戦の経験が全くなかった者も居たと言う。
そして太陽系赤道祭にて、お酒を浴び、酔っぱらうと言うロボットにしては、あり得ない行動をした分析ロボットのアナライザーは当初、ヤマト乗り組みの予定はなかったのだが、出発直前に押しかけて、当時のヤマト艦長、沖田十三に直訴した。
普通ならば、許可など出す筈はないのだが、何と沖田艦長は、その場でアナライザーに対し乗艦許可を出したと言う。
しかも即決で・・・
前代未聞の大事業を手探りで成し遂げようとするのだから、杓子定規に規則を振りかざすだけではダメで、人間として懐が大きい人でな

ければヤマトの艦長は務まらなかったのだろう。
その状態で往復約三十万光年の航海を成功させたのだから、彼らのスキルやメンタル、当時の艦長の統率力は称賛に値するとフェイトは思った。
管理局ではとても真似出来ない。
イスカンダルを目指すヤマト　と　まほろば、雪風・改はヘリオポーズを過ぎ、オリオンのα星近海へ進出していた。
オリオンのα星・・・その星は、ペテルギウスと言われ、別命、『オリオンの願い星』と言われ、昔の人は地球から見たこの星にいろいろな願いをしていた。
M型の赤色超巨星で、変光星でもあり、星自体の形状が変化する脈動変光星、中でも半規則的に変光するＳＲＣ型に分類されている。
かつて、この宙域においてガミラスはこの周囲に強力な磁力線バリアを張り、ヤマトの航路を遮断しつつ、逃げ道をα星の存在する宙域一本に絞り、ヤマトの後方からガス状生命体を送り込りこんだ。
ガス生命体は、ガミラスがミルベリア星系で発見された原始的なガス状生命体を兵器開発局が改良して作り上げた生物兵器で、物質を変換・同化・吸収して無限に増殖する特性を持っていた。
デスラーは、このガス生命体によって食われるか、それともα星のコロナ溶鉱炉で溶けて消滅するかの選択をヤマトに迫ったが、ガミラスのミスは、このガス生命体が生命体とは言え、知的部分が全くなく、見境なく餌に喰らいつく性質しか持っていなかった為、ヤマトよりも質量エネルギーが大きい、α星へと食らいつこうとし、自らα星のコロナ溶解炉へと突入して燃え尽きたと言うガミラスにとっては無様な醜態を晒した。
ガミラスが崩壊した今でこそ、α星の周囲を囲っていたあの強力な電磁バリアは機能を停止している為、今回は最初のイスカンダルへの航海の時の様にα星の真上を通る危険な航路をとっていない。
そんなα星近海でヤマトの艦橋では、最初のイスカンダルへの航海の事を思い出したのか、
「オリオンα星ペテルギウス・・・最初の航海の時、ここでデスラーの

放ったガス生命体に襲われたんだったな・・・」
「そうだな・・・今となっては懐かしい思い出さ」
島と古代は昔の思い出に耽りながら目の前で太陽のように燃えるα星を見ている。
ヤマト、まほろば、雪風・改は此処でワープを行い次は一気に七色星団まで行く予定だった。
その為、現在は機関の総チェック中であった。
「総員に告ぐ、艦の機関チェックが完了次第、ヤマトは七色星団までのワープに移る。総員、ワープ準備!!」
古代が次のワープ予定地点を確認し、艦内放送を流す。
「古代君・・・ちょっと待って!!」
ワープ準備をしようとした時、レーダー担当の雪が古代に『待った』をかける。
「どうした?」
「α星の向こう側に、大きなエネルギー反応があるのよ・・・」
雪がコスモレーダーでα星付近に異常なエネルギー反応を発見した。
「α星の重力レンズ効果で星が放出するエネルギーが屈折して見えているのでは?」
北野がただの自然現象ではないかと訊ねる。
「それが、エネルギー源が動いているのよ。もうすぐα星の陰から出てくるわ・・・」
雪の報告どおりα星の陰から黒いモヤの塊が出てきた。
「な、なんだ・・・あれは?」
「黒い・・・モヤのような・・・ガスのような・・・」
「ま、まさかガス生命体の生き残りじゃあ・・・」
ヤマトの艦橋がざわつく。
確かに見た目は最初の航海時に見たガス生命体と変わらないからだ。
そこで、真田が空間スキャナーを使い謎の黒いモヤの正体を探る。
本当にガス生命体の生き残りなのか?

それとも未知の宇宙物質なのか？
そして、結果が出た。
「むぅ、すごいエネルギー密度だ・・・ただし、生命反応は感じられん。これはガス生命体ではない。これは・・・暗黒物質で出来た原始星そのものだ！」
「どういうことです？真田さん？」
「たかが二年でこれだけの自然現象が起こるはずが無い・・・あきらかに人為的なものだ」
真田がこの異常な現象を人為的だと突き止めた時、太田がレーダーで捕らえた艦影を発見した。
そしてその艦隊から強力な磁力線が暗黒物質とペテルギウスに向け放射されていることも確認できた。
「採掘しているんだ!!あの艦隊はペテルギウスからエネルギー資源を抜き出そうとしているんだ!!古代、これは一大事だぞ!!」
真田の仮説によるとこのままペテルギウスのエネルギーが抜き出されれば、ペテルギウスは予定よりも早く超新星化しハイパーノヴァと呼ばれる大爆発を起こすと考えられ、ペテルギウスがもし、ハイパーノヴァを起こせば地球にもその被害が及ぶと言う。
しかも壊滅的な被害を齎す程の・・・
その迷惑な採掘行為を行っていた相手のエネルギー波長パターンがデスラーから送られてきたガミラス星で無許可に資源採掘を行っていた艦隊と同じものだと判明した。
つまり、今、目の前に居る連中は、他の星系の生命体の事など、意にも介さない、傲慢な資源盗掘集団と言う事になる。
問題なのは、地球から、１４万８０００光年から離れたマゼラン星雲にいた敵と思しき艦隊が太陽系のすぐそばまで居ると言う事は、相手の勢力は想像以上に広がっていると言う事になる。
古代は相原にエネルギー採掘をしている艦隊に対し警告を送るよう指示した。
それと同時にいつでも戦闘が行える臨戦態勢を命じた。
ペテルギウスにて、エネルギー採掘を行っていたのは円盤を思わせ

る艦影の艦で、その甲板上には砲身着きの砲塔を備えている事から、れっきとした戦闘艦である事が窺える。

暗黒星団帝国　巨星エネルギー資源採掘艦隊・第二十四師団　左翼艦隊旗艦・戦艦エルドラB

「クーギス司令、星系に突然出現した謎の艦隊より電文を受信しました。現在、翻訳中であり、翻訳終了まで６５メルを要します」

「うむ、続けよ」

通信士は電文の翻訳を続ける。

「プラント稼働３２％に到達。熱核エネルギーから暗黒質量へのエネルギー変換、順調です」

オペレーターが採掘状況を報告する。

「うむ、これだけエネルギー変換率が高い恒星も珍しい。わざわざ銀河系の辺境まで出向いた甲斐があるというものよ。これで本隊が例のイスカンダリウム採掘に成功すれば、我が帝国の戦闘資源は事実上無尽というわけだ!!」

「クーギス司令、電文の翻訳が終了いたしました」

「読み上げよ」

「はっ」

通信士が母国語に変換した電文を読み上げる。

『貴艦ハ星系ノ平穏ヲ脅カシテイル。採掘ヲ続行スレバ、ハイパーノヴァノ可能性ガ大。即時二恒星カラノエネルギー採掘を停止スル事ヲ求ム』

と、内容はこのままエネルギー採掘を続ければハイパーノヴァが起こる可能性があるので、ただちに採掘作業を止めろというものだった。

「フハハハハ・・・兄上どう思う?」

その電文の内容を聞くと、クーギスは高笑いをし、右翼側に展開している双子の兄に通信を入れる。

暗黒星団帝国　巨星エネルギー資源採掘艦隊・第二十四師団　右翼

艦隊旗艦・戦艦エルドラＡ
　弟から通信を受け取った右翼艦隊司令のルーギス。
「無視するわけにもいくまい。反応からするとちゃんと武装した艦隊のようだぞ」
　その言動から採掘を中止するのかと思ったクーギス。
「では兄上はこんなたわけた通信を聞き入れると？」
「ふっ、まさか・・・ちょうど採掘任務で退屈していた所だ。ちゃんと相手をしてやろうではないか。勿論、言葉ではなく力でな・・・」
「フハハハハ、それでこそ兄上よ」
　ルーギスとクーギスの両艦隊はまずジャミング電波を流してきた。
　そして、左右両翼から接近してくる。
　しかもエネルギーの放出パターンにも変化があり、砲門を開いている。
　これは明らかな敵対行動であった。
　防衛軍艦艇の長距離レーダーはジャミングの為、使用不能、近距離レーダーに切り替える。
　そしてタイムレーダーを使い、ジャミングされる前に探知した敵の配置図を探知すると、左右にそれぞれ十二隻ずつ、計二十四隻。
　数の上では圧倒的に不利である。
　そこで、雷王作戦同様まず敵旗艦を撃破し、敵艦隊の指揮系統を混乱させ、残る敵艦隊を撃滅する戦法をとることにし、エネルギー反応から敵旗艦らしい戦艦を探知する。
　するとエネルギー反応から敵艦隊には二隻の旗艦級戦艦が存在した。
　それから察するに、どちらかの艦隊旗艦が潰されても、もう片方が全ての指揮を引き継げる。
　デスラーから送られてきた交戦データから、推測すると敵の武装はガミラス、彗星帝国、地球防衛軍と同等レベルの強力なものだった。
　指揮系統を混乱させないまま接近戦を挑んだら、たちまち蜂の巣にされてしまう恐れがある。
　なんとか、二つの旗艦をほぼ同時か、一気に叩かなければならない。

戦力を分散すべきか、集中して各個撃破すべきか・・・・。
「本艦は、はこれより正体不明の艦隊と交戦状態に入る!!総員戦闘用意!!繰り返す!!」
総員配備を下令する良馬の声とともにアラームが鳴り響き渡る。
「・・・・」
フェイトはティアナと共に、医務室で緊急一斉放送を聞いた。
戦闘になったら、自室か医務室にいるよう彼女たちは指示されていたからだ。
医務室などがある居住エリアは最も防御力が高い。
そしてフェイトたちは今、ペテルギウスに迫っているハイパーノヴァの事も知らされていた。
その件については、フェイトとティアナも採掘をしている艦隊に怒りを覚えていた。
管理局のロストギアの回収にも強引な手段も行われていたが、他の星系の生命を無視してまでの強引なエネルギー採掘は管理局でも行わない。
それを平然と・・・しかも当たり前の様に行っているあの艦隊に怒りを覚えるのは局員以前に人として当然の感情であった。
しかし、地球防衛軍、ガミラス、ガトランティスを含め、またも脅威となる星間国家が現れたのではないかと不安も抱くフェイトだった。
フェイトが不安を抱いている中、
(エンジンの音が甲高くなった・・・・?)
室外の音が殆ど遮断されている医務室だが、フェイトの耳には回転数が上がった波動機関の音が届いていた。
(速度を上げている・・・これから戦うから・・・・?)
流石は元次元航行艦の艦長の義兄を持つだけはある。
聞き慣れた管理局の艦船の魔力炉の運転音とは違う・・・管理局の艦船とは根本から異なる、戦うためのエネルギーを生み出す心臓音・・・・。
ズシンという衝撃が続けざまに伝わってきたのはそれから間もな

くの事だった。
防衛軍は結局、戦力を二分する作戦をとりクーギス艦隊をヤマトが受け持ち、ルーギス艦隊を　まほろば　が受け持つ事となった。
敵の艦隊・・・左右どちらか、または両方なのか、空母が居た様で、そこからは敵の戦闘機が出迎えるかの様に来襲してきた。
敵戦闘機の対処は　まほろば　と　ヤマトのコスモタイガー隊、雪風・改が引きうけ、艦隊は一路、敵艦隊へと進撃していく。
その中で、ヤマトの速度が急に落ちた。
「おい、どうした、北野!!スピードが落ちているぞ!!」
古代が北野に訊ね、北野は慌ててシステムをチェックするが、異常らしい異常は見つからないし、自分もミスをした覚えはない。
「そっちじゃありません。古代さん。機関部です!!」
機関長の山崎がスピードの落ちた原因が機関部のミスである事を瞬時に見抜いた。
「何をやっとる徳川!!この大事な時に!!」
山崎が機関室の太助を叱咤する。
「すみません!!レ、レバーを間違えまして・・・!!」
「ば、ばかもん!!」
やがて、ヤマトは直ぐに速度を元の巡航速度に上げた。
一方、まほろば　の方はルーギス艦隊を捕捉していた。
敵はアステロイドの向こう側に展開していた。
そして、この角度から波動砲を撃ってもペテルギウスに影響のない角度に居た。
まほろば　としては好都合であったが、敵にとっては運が悪い位置だった。
「波動砲へエネルギー注入・モードは収束から拡散モードへ移行・・・」
「了解、波動砲へエネルギー注入開始。パイパスチャージャーへと接続、チャージを加速中!!」
アステロイド帯のおかげで敵の砲撃は来ないし、波動砲の射程は敵

の主砲の射程外だった。
この世界での宇宙戦艦同士の戦いを医務室のモニターで見ていたフェイト、ティアナ、の二人は息を吸うのも、瞬きをするのも忘れたかのようにモニターをジッと見ていた。
そこに、
「フェイト、ティアナさん、これを・・・」
と、リニスが二人に閃光ゴーグルを渡す。
「ゴーグル？」
渡されたゴーグルを見て、フェイトたちは首を傾げる。
「どうやら、まほろば　は波動砲を撃つつもりです。念の為、目を保護する為に着けて下さい」
と、リニスも原田もゴーグルをつける。
モニターをつけていなければ、窓のない医務室でゴーグルをつける必要もないのだが、今はモニターをつけている。
そのモニターには今まさに　まほろば　が拡散波動砲を撃とうとしている映像が流れている。
モニター越しに波動砲の発射時に発する際に起こる眩い閃光で目を悪くする可能性があるので、リニスはゴーグルを配ったのだ。
リニスの説明を聞き、二人は急いでゴーグルを着けた。
やがて・・・・
「波動砲、発射準備完了!!」
波動砲の発射準備が整った。
今回波動砲のトリガーを引くのは新人の星名だった。
星名は緊張した面持ちでトリガーを握る。
しかし、エネルギー調整は機関長の井上がやってくれるし、照準は砲雷長のフェリシアがやってくれる。
後は彼がやるのは艦長の発射命令がでたら、トリガーを引くだけであるが、やはり初めて波動砲を撃つのだから緊張して当たり前である。
「波動砲発射!!」
良馬の発射命令を受け、星名は波動砲のトリガーを引いた。

すると、艦首の発射口から眩い閃光と共に拡散波動砲が発射された。
「ば、バカな・・・バカなぁぁぁっ!!」
ルーギスの断末魔と共にエルドラAを含む、ルーギス艦隊は一瞬の内に消滅した。
ルーギス艦隊の消滅は直ぐにクーギスにも伝わった。
「兄上・・・兄上ぇぇぇぇぇ!!」
クーギスの絶叫がエルドラBの艦橋にこだました。
「・・・・」
拡散波動砲の威力をモニター越しとは言え、今この場で見た二人は言葉がなかった。
ヤマトの波動砲や土星圏での戦いで拡散波動砲の映像を見たが、やはり、「凄い」の一言しかうかばない。
波動砲の威力をまじまじと見たティアナは、あれは夢なのではないかとさえ、思ってしまう。
(相変わらず恐ろしい破壊力ね・・・・)
(あんな兵器を持つ勢力と敵対したら・・・・)
フェイトとティアナの脳裏には、拡散波動砲を受けて壊滅する管理局の次元航行艦の姿が浮かんだ。
まほろば　が敵艦隊の一方を撃破してからヤマトの方も、
「艦首波動砲・発射!!」
波動砲にて、敵艦隊を撃破した。
しかし、またもや機関部のミスで出力調整に不備があり、敵艦隊を全滅するには至らなかった。
「く、クーギス様!敵の超エネルギー砲が本艦に・・・うわぁぁぁぁぁー!!」
クーギスの乗るエルドラBの船体の脇を波動砲が掠め船体の一部が消滅、融解した。
「動力五%へ低下!!クーギス様、これ以上は艦が持ちません!!」
「おのれっ!!おのれぇぇぇっ!!」
「クーギス様、脱出艇で離脱を!!」

「こんな奴等に・・・こんな奴等ごときに・・・!!」
「クーギス様!」
「・・・っ、残存艦に連絡!無念だが、ここは撤退だ!」
クーギスは沈みかけるエルドラBから近くの巡洋艦に移乗し戦線を離脱した。
そしてクーギスら乗組員たちが退艦した後、まるで待っていたかのようにエルドラBは爆沈した。
戦闘終了後、敵の残存艦隊を　ヤマト　も　まほろば　も追わなかった。
元々の任務は敵の殲滅ではなくイスカンダルの救援で、α星での戦闘はエネルギー採掘を止める事だった。
敵が去ったこの状況でα星からのエネルギー採掘を中止させることが出来たと言うことで、α星での戦闘は終了したのだ。
これ以上無駄な戦闘を続ける必要はなかったのだ。
しかし、
「古代、大変だぞ」
「どうしました?」
「あの、暗黒物質・・・あれはどうも、敵のエネルギープラントらしいのだが、敵が居なくなった直後から暴走を開始した様なんだ」
「なんですって!!」
「徐々に軌道がズレ、ペテルギウスに近づきつつある。このままではいすれペテルギウスにぶつかってしまうぞ!!」
「でも、元はペテルギウスのエネルギー物質なんでしょう?それが元に戻るだけじゃないんですか?」
と、太田が真田に質問するがそう簡単な事では無い様だ。
「いや、あれだけの高圧縮エネルギーが一気にペテルギウスに戻れば、それこそハイパーノヴァが起きてしまう!!」
それならば、波動砲で撃てばよいのではないかと思うがそれもダメであった。
真田曰く、
「相手は高密度なエネルギーの塊だ。波動砲で吹き飛ばすのはあまり

にも危険だ」
との事だ。
もはや打つ手は無かった。
「疲れたなぁ・・・」
ペテルギウスの戦闘後、ヤマトの機関室では戦闘後の機関の修理、総チェックが終わり、新人の機関員たちが皆ヘトヘトになっていた。
中には機関室の床で大の字で寝ている者も居た。
「ああ、疲れたよ・・・親父はガミガミうるさいしなぁ・・・」
「それはそうと、聞いたか？α星の事・・・」
「ああ、大爆発を起こすんじゃないかって事だろう？どうなるんだろうなぁ？」
新人の機関員たちがα星について話していると、
「ん？何の話だ？」
太助が訊ねて来た。
「あれ？聞いてないのか？実は・・・」
新人の機関員が太助にα星の事を話すと、太助は大急ぎで艦橋へ走って行った。

敵のエネルギー採掘プラントはあと二時間で重力均衡点を突破する。
プラントは本格的にペテルギウスへの落下を開始した。
このまま此処にいては、ハイパーノヴァの衝撃波で甚大な被害を受けてしまう。
ペテルギウスでハイパーノヴァが起きたとしてもその影響が地球に届くのは５００年以上先だと言う。
それだけの時間が有れば、人類が地球を脱出する時間は十分にある。
５００年後、もしかしたらそこに居るかもしれない自分たちの子孫に迷惑をかけてしまうと言う後悔とハイパーノヴァを防げなかったと言う悔しさを抱きながらワープにてこの宙域から撤退しようとした時、

太助が突然第一艦橋に飛び込んできて、
「山崎機関長!!ちょっと、どいて下さい!!」
と、機関長席から強引に山崎をどけると、必死に機器を操作し始めた。
「なんなんだいきなり、お前は!!非常時だってのに!!」
太助の行動に思わず声をあげる山崎。
「非常時だからですよ!!頼みますからカミナリもゲンコツも後にして下さい!!」
と、ヤマトのメインコンピュータにアクセスし、イスカンダルでの航海時、父が残した航路データを引き出し、かつてこの宙域に残されていたガミラスのバリア装置へエネルギーを送り込みバリア発生装置を稼働させ、でプラントを鳥籠の様に囲んだ。
やがてあのプラントはバリア装置にエネルギーを吸い出され、消滅してしまうだろう。
そして、バリアも再びエネルギー切れを起こして機能を停止する。
ヤマトの出力やガス生命体ですら、抜け出せない強力なバリアだ。
あのプラントがペテルギウスにこれ以上、接近する事はもうないだろう。
地球がハイパーノヴァからの脅威から救われたと言う事に、まほろば、ヤマトの乗員たちは喜んだ。
その知らせを聞き、この世界の地球とは縁も所縁もないフェイトたちもホッと胸をなでおろした。
しかし、ガミラス星の崩壊原因を作ったあの艦隊が太陽系付近にまで浸出していることから、今回のイスカンダル救援の任務はそう簡単には終わらないだろうし、また新たな脅威が地球へと向けられているのではないかと、不安に思う古代や良馬であった。
徳川前機関長の残した遺産ともいうべきデータ・・・・
それに気づいた息子の太助・・・・
まさに徳川親子二代が地球をハイパーノヴァの危機を救ったと言っても過言ではなかった。
その立役者の太助はと言うと・・・・

「はぁ～・・・・」
機関室で何やら落ち込んでいる様子だった。
そこに、
「よう、英雄。えらく元気が無いじゃないか？」
と、大山が声をかけてきた。
「あっ、トチローさん。いえ、戦闘中にエンジン出力超でえらくヘマをやらかしたもんですから・・・・すぐに親父みたいにはなれないもんですね・・・・」
「まぁ。代わりに大手柄を立てたんだから良いじゃないか・・・・おおっと、いけね」
大山は誰かの気配を感じたのか、その場から隠れた。
「徳川!!今回の仕事ぶりは何だ!?」
其処に、現れたのは機関長の山崎だった。
「は、はい!!申し訳ありません!!」
「・・・・と、まぁ、本当ならゲンコツの一発でも食らわす所なんだが、今回はよしとしよう。バリアの件はご苦労だったな」
と、山崎は、戦闘中での太助のミスを不問にし、反対に今回の功績を労った。
「はぁ、でもあれは僕の手柄と言うより、親父の手柄ですから・・・・」
「いや、お前の手柄さ。いいか、機関員に求められるのは一体何だ？正確さ？技術力？それらは確かに必要だ。だが、重要なのはそれだけじゃない。本当に大切な資質とは、そんな時でも、臨機応変に動ける事なんだ・・・・何せこんな気分屋のエンジンと付き合っていかねばならんのだからな」
「・・・・」
山崎と太助はヤマトのメインエンジンを見上げる。
「あのデータはわしも閲覧した事があった・・・・本来ならば。気づいて当然の事だったんだ。真田副長や森レーダー長だって過去の交戦記録を調べれば掴めたのかもしれん。だが、臨機応変に考え、実際にあの答えを見つけ出したのはお前だけだったんだ。もっと自信を持て、そして頑張って親父さんに追いつき、追い越すんだ・・・・いいな？」

「は、はい・・・ありがとうございます!!」
　上官から褒められ、少しは自信がついた様子の太助。
「よし、来い。祝いに佐渡先生の所でパアっと飲むぞ」
「えっ？でも、僕はまだ未成年ですよ」
「じゃあ、ソフトドリンクでも飲め」
「そりゃ、不公平ですよぉ～」
「うるさい!!大体、お前の機関員としての技術力は２０点以下なんだぞ!!よく訓練学校を卒業できたもんだ」
「そ、そんなぁ～」
　と、結局山崎に注意されつつも、太助は彼と共に佐渡の居る医務室へと向かった。
「まっ、俺がしゃしゃり出るまでもなかったか」
　機関室を後にする二人を見ながら大山はそう呟いた。

四十七話　七色星団の戦い　クーギスの復讐

ミッドチルダ　西部地方　エルセア　ナカジマ家

ティアナたちが乗った巡航艦テリオスが行方不明になったと言う知らせをなのはから聞いた時、スバルは現実を受け入れられないかのように「嘘だ!!」を連呼しながら、泣き喚いていた。

母を幼いころに亡くし、母親代わりとなり、自分を育ててくれた姉も任務中に次元震に巻き込まれ殉職し、今度は親友までもが生死不明となった。

スバルの悲しみは物凄く深いものだった。

そんな悲しみに浸るスバルの下にクロノからティアナの生存が確認されたと言う知らせが来た時、スバルの反応は素早かった。

画面に食いつくかの様に迫り、クロノに真意を聞いた時、モニターの向こうのクロノはドン引きだった。

そして、ティアナが生きている映像を見せると、これまでの絶望と悲しみが一気に吹っ飛んだ。

クロノはまだやり残した仕事などがある為、スバルは　なのは　やはやて　に　ティアナとフェイトの生存の連絡は自分がいれると言ってなのはたちに連絡を入れた。

ティアナたちの生存が確認された後の昼食の席で、スバルは本来の食欲が戻っていた。

テリオスが遭難したと連絡を受けた時、スバルは食欲も無くし、普段の食欲が嘘の様であった。

食欲が戻り特盛の昼食を食べている中、

「スバルも何とか、元の調子に戻ったようだな」

と、皿の上の特盛の昼食を食べているスバルを見て新たにナカジマ家の養子となったチンクがスバルの様子を見て、ホッとした表情をした。

チンクはＪＳ事件において時空管理局と敵対した戦闘機人の一人で、事件後に逮捕された後、管理局の司法取引を受け海上隔離施設に収容されて更生教育を受けその後、ナカジマ家に養子として迎えられ

新たなスバルの姉となった。
チンクの他にも、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディの三人がスバルの新たな姉妹として、ナカジマ家に養子として迎えられた。
スバルが本来の調子を取り戻した時、彼女は何があったのかを訊ねるとスバルは、先日遭難したティアナたちが地球防衛軍と言う組織の艦船に救助された事を打ち明けた。
「地球って言えば、パパりんのご先祖さんや高町教導官、八神二佐の出身地っスよね？そこは、そんな強力な宇宙艦船を持っていたんっスか？」
特徴的な口調で聞いてくるのはナカジマ家の末娘のウェンディだ。
「ううん。私が知っている地球――第９７管理外世界――には、そんな技術はないよ。私も六課に居た頃、一度地球に言った事があるから・・・どうやら、なのはさんの故郷の地球とは、別世界の地球みたい。時代も２００年近くの未来らしいし」
「もう一つの地球ねぇ・・・ＸＶ級より段違いに強い戦闘艦とそれを運用できる新たな世界と軍事組織が存在していたってことか・・・管理局はどう付き合うつもりなのかね？」
砕けた口調でそう言ったのは、赤髪にスバルそっくりな容姿で、スバル同様、特盛の昼食を食べているノーヴェだった。
「管理局としては、まずは〝地球防衛軍〟にコンタクトをとる方針らしいけど、上手くいくのかな？」
スバルは昼食を食べる手を止めて空を見る。
「何はともあれ、皆元気で帰って来て欲しいものだな・・・」
チンクがぽつりと呟く、ナカジマ姉妹一同が頷いた。
そして、スバルはチラッとリビングの一角に視線を移した。
スバルの視線の先には、日本の家屋によくある仏壇があった。
なのは、はやて　と同郷の先祖を持つナカジマ家では、普通のミッドの家とは少し違った風習があり、この仏壇も　なのは　と　はやての故郷では珍しいモノではないが、ミッドでは珍しい分類に入る。
そして、その仏壇には容姿の似た母と子の遺影が飾られていた。
母の名前は、クイント・ナカジマ。

かつて、自分と自分の姉をある研究所から助けてくれた人物であり、自分と姉の母親となってくれた人だった。
そして、姉のギンガ・ナカジマ。
任務中に突然起きた次元震に飲まれて殉職した姉・・・・。
母と違い、遺体さえも残らなかった姉・・・・。
当初は、何処かで生きているのではないかと言う希望も抱いたが、もう一年以上も経った現状では生存の可能性など無い。
何時しか、スバル自身もギンガの死を受け入れていた。
しかし、未だにギンガの名誉は未だに回復には至っておらず、ギンガの生存は見込めないが、せめて彼女の名誉だけは回復しようとスバルの戦いは今も続いている。
そして、今回の親友とかつての上司が巻き込まれた遭難事故。
その報告を聞いた時、姉が殉職した遭難事故が脳裏を過ったが、生存の知らせが入った時、スバルはきっと亡き母と姉が助けてくれたのだと思った。
そしてスバルの思いはある意味当たっていた。

▪

その頃、ナカジマ姉妹の会話の中で渦中の人となったフェイトとティアナは・・・・
「七色星団ですか？」
「はい」
ティアナと共に朝食をとっているフェイトは同席したギンガから、今後の行動予定を聞かされ首を傾げた。
フェイトと同じくティアナも首を傾げている。
ヤマト、まほろば　はこの後再びワープを行い、一気に七色星団と呼ばれる星系まで行くのだと言う。
「あの・・七色星団ってどんな所なんですか？」
七色星団についてティアナがギンガに質問する。
「私も実際に其処に行くのは今回が初めてなんだけど、そこはヤマトとガミラスの古戦場跡みたい。互いの同胞の未来を賭けての・・・・」
「そうなんですか・・・・」

「・・・・」
ティアナとフェイトは息を飲んだ。
『互いの同胞の未来を賭けて』と言うのだから、きっとその戦闘は凄まじいモノだったのだろう。
ガミラスの地球侵攻と冥王海戦はしっかりと見たが、ヤマトのイスカンダルへの航海記録は所々省略して見ており、その省略された部分には七色星団の決戦も含まれていた。
自分たちの隣にはヤマトが無事な姿で航行しているのだから、最終結果は容易に想像がつくが、かなりの被害を出したのだろうと察しはついた。
「ヤマトの戦闘記録では、ガミラスの司令官、ドメル将軍が率いていた機動部隊は全滅し、将軍も最後には自らが乗艦していた艦をヤマトの艦底部に密着させ、自爆したそうです」
「・・・・」
率いていた味方艦が全滅した時点でもはや勝敗は分かっていた筈だった。
それにも関わらず、ドメル将軍は撤退せずに自らの命を賭けてまでヤマトを沈めにかかった。
これだけの気概を持つ局員が果たして管理局に一体何人いるだろうか？
あのクロノ提督でさえ、そんな行動を起こせるか微妙な所である。
「七色星団の戦闘で、ヤマトからも沢山の死傷者を出したそうです。イスカンダルまでの航海中の戦死・ＭＩＡ者の過半数が七色星団での決戦で出たそうですよ」
その七色星団では略式ながらも宇宙慰霊祭を行うのはその戦闘に参加した者や戦友にとっては至極当然の事だろう。
フェイトとティアナは理解したように無言で頷く。
ドメル将軍率いるガミラス機動部隊と短くも凄惨な戦いを繰り広げたのは一年半余り前、その頃の自分たちは六課に在籍しており、ちょうどファーストアラートの頃だった。
（なのはさんの訓練にギリギリついて行くのがやっとで、スカリエッ

ティのガジェットを相手にして居る頃、この世界の軍人さん・・・ヤマトの乗員は、命を賭けて戦っていたのね・・・私たちの任務とは雲泥の差ね・・・）

毎朝有ったなのはの訓練、そして六課に在籍した時の初めての任務。

あの頃の自分たちにしてみれば、厳しい訓練に難しい任務だったが、命の心配はしなかった。

（でも、この人たちのこの世界の戦闘は・・・）

なのはのスターライト・ブレイカーや次元航行艦のアルカンシェルを遥かに上回る破壊力の高エネルギービームやミサイルが飛び交い、敵を完全に破壊し殺戮する。

〝相手を傷付けずに制圧する〟ではなく、質量兵器を使って〝敵を殺し叩き潰し、殲滅する〟互いに命を賭けた戦闘だ。

厳しくても非情になりきれないかつての上官（なのは）、バカ正直すぎる親友（スバル）。

もし、二人が今この場にいたら、防衛軍の人たちと色々と意見がこじれそうだと思うティアナだった。

（地球連邦は管理局と競う事はしないが、管理局の下には絶対に立たつことはないわね・・・）

独立した国家なら至って当然なのだが、管理世界の場合、管理局基本法が各世界の法律や憲法よりも優位にある。

（私たちにとっては管理局法が一般的なものだけど、地球連邦から見ると、一治安組織の規則が国の憲法や法律より優位にあるのは、それだけでも警戒されてしまうかも知れないわね・・・この世界の地球を無理矢理管理世界に編入させようとするバカが居ない事を祈るしかねいわね・・・でも、それは無理かもしれないけど・・・）

ティアナは本局の高官が今後、この地球や防衛軍側に対してバカな事をしないか心配であった。

一方、フェイトはギンガからの伝え聞きだが、そのドメルというガミラスの指揮官が態々ヤマトに挑戦状を送ったことも驚いたが、ヤマト艦長の沖田十三がそれを承諾し、態々指定された戦場へ赴いた事に

は更に驚きを禁じえなかった。
ヤマトは一日でも早くイスカンダルへ到着しなければ、ならなかった筈・・・
極力戦闘による時間的なロスは回避したかった筈だ。
それに戦闘を行えば、乗員に多数の死傷者を出すのは明白だ。
しかも相手が指定して来た戦場ならば当然其処には罠があると見るべきだろう。
そこまで分かっているのであれば、ドメル将軍からの挑戦を無視して、航路を迂回すると言う選択肢もあった筈だ。
その点をギンガに訊ねると、ギンガ自身もイスカンダルの航海へ同行したわけではないので、明確な答えは出せなかった。
そこに、良馬が通りかかるのを見たギンガは、自分よりも軍籍に居た良馬ならば、何か分かると思い呼び止めた。
そして、良馬にドメルと沖田艦長の人となりを聞いてみた。
「確かに、ドメル将軍の挑戦を無視し、航路を迂回すると言う選択肢もあっただろうけど、古代君たちから聞いたドメル将軍の人となりを聞くと、彼は例え挑戦を無視してもどこまでも追ってきただろうね。だからこそ、沖田艦長はドメル将軍の挑戦を受けたのだと思う。それに、中間点のバラン星を越えた時点で、ガミラス人が地球への移住を計画しているのではないかと言う予測がヤマトの中であったみたいなんだ」
「地球へ・・・・」
「移住ですか？」
「ああ、ガミラス星は星としての寿命が尽きかけていた・・・だから、デスラーは同胞を滅亡から救う為に遊星爆弾を使って、地球を攻撃していた・・・ドメル将軍は大勢のガミラス人の・・同胞の未来を背負っていた・・・一方、沖田艦長とヤマトは地球人類の未来を背負っていた・・・共に大勢の同胞の運命を背負う者同士、逃げるわけにはいかなかったんだろうね」
「・・・・」
良馬の言葉を聞き、フェイトとティアナは難しい表情をする。

「あっ、でも、これはあくまでも推測だからね。もし、本当の事が知りたかったら、古代君に聞いた方が早いかもしれない」
「は、はい」
「分かりました」
　そう言って良馬は去って行った。
（管理世界の中には、編入する際に強引な手段で無理矢理編入させたケースも多々ある。その世界の人たちは、未だに管理局を侵略者として恨んで、テロ行為や反管理局活動を行っている・・・管理局はそう言った人たちをテロリスト、犯罪者として取締り、その世界の未来を担う子供たちに対しては魔法、管理局の存在意義の素晴らしなさど、宣撫策を打っているけど、それは管理局の意に沿う形での事態収束で、洗脳あるいは思考操作じゃないのかな？）
　フェイトはガミラスと地球との戦争の話を聞き、無理矢理管理世界に編入された世界の情勢を考えていた中である事にハッとした。
（っ!?洗脳!?管理局が・・・私たちが侵略者・・・？）
　思わず脳裏を過ぎった『洗脳』『侵略者』と言う言葉にフェイトは慄然とした。
　管理局の外に出て、管理局よりも強力な星間国家の存在の渦中に身を置き、様々なモノが見えてきて、管理局の存在に対して、考えさせられるフェイトだった。
「銀河系方面の出入り口は宇宙乱流の流れが激しいので、多少揺れるかもしれませんので、なるべく乱気流帯の通過中は、部屋から出歩かない方が良いかもしれません」
「分かった。ギンガ」
（リニスさんから酔い止めを貰っておこう・・・）
　宇宙船内でも酔う経験をしたティアナは揺れると言うことで今度は船酔いするかもしれないと言う思いから、この後、医務室に言って酔い止めを貰おうと心に決めた。
「次のワープで七色星団だ。あの辺りは、元々ガミラスの領地だ。デスラーの指示が伝わっていないガミラス軍と遭遇する可能性もある。ワープ後は警戒態勢を一ランク上げて航行する」

ガミラス軍はデスラーの元に集結しつつあるものの、これから集結を図る部隊、あるいはデスラーから離反した者たちがいるかも知れない。

七色星団は航海の難所ではあるが、今回の航海でヤマト、まほろばが通過するようにイスカンダルまでの最短ルートである。

デスラーの下へ集結中の艦ならば、多少無理をしてでも急ごうとするかもしれない。

そういった者たちが、多くの同胞の命を奪ったヤマトとその友軍艦艇の姿を見て平静でいられる保証はない。

ましてヤマトは、極めて不本意ながらガミラスの首都バレラスを破壊つくし、地下のマグマに波動砲を撃ち込んで大規模な地殻変動を誘発、ガミラス星の寿命を更に縮めてしまったのだから・・・・

この一件は当時のヤマト乗組員にとっては一大痛恨事として残っている。

バレラスを破壊した後、古代や雪も互いに涙を流して悔いていた。

しかし、ヤマトをガミラス本星に誘い込んだのはデスラー本人でもあるし、この場合は本当にやむを得なかったのである。

そして、もう一つの気がかりなのが、α星で遭遇したあのエネルギー採掘艦隊の残存艦隊。

あの艦隊を全て撃滅したわけではない。

もし、あの連中が増援を呼び、ヤマト、まほろば　に対してリベンジ戦を仕掛けてくる可能性も十分にあった。

何しろ、地球側にとっては迷惑極まりない行為でも、連中にとっては貴重なエネルギー資源の確保を邪魔され、多くの同胞を殺され、エネルギー採掘プラントまで無害化、消滅されてしまったのだから恨んでいても可笑しくはなかった。

七色星団は、大マゼラン銀河の先端に位置するタランチュラ星雲を構成する一角で、七つの縮退星で形成されている。

宇宙ジェットの噴出が観測されており、イオン乱流が吹き荒れ、レーダーにも障害が発生する嵐の「雲海」である。タランチュラ星雲

内で最も危険な宙域であり、航路を見誤ると、イオン乱流の渦にのまれ、脱出不能に陥るか、乱流に流され、七つの縮退星のいずれかに吸い寄せられてしまう。
それが、この七色星団を難所と知らしめる事実であった。
やがて、その七色星団に着くと、
ズシンと言う衝撃と、荒波にでも揉まれた様に艦が揺れる。
ヤマトの航路記録通り、外はイオン乱流が吹き荒れ、嵐の雲の様なものが次から次へとヤマト、まほろば、雪風・改を薙いだ。
星雲の各所で青い稲妻が不気味に光っている。
電離ガスの濃度が高く、レーダーも遠距離レーダーを始めとするセンサーも役に立たず、早々に光学モードへと切り替える。
やがて、イオン乱流の層を抜けると夜空の雲海の様な宙域へと出る。
此処から先は今の高度を保って行けば、凪いだままの宙域が続く。
ただし、高度を下げたりすれば、たちまちイオン乱流に流される。
「ここが・・・・」
「七色星団・・・・」
ようやく凪いだ宙域で外を見る余裕が出来たイスカンダルの航海の未経験者の乗員たちは外の光景を見てどよめきが起きていた。
まほろば　の乗員は元より、ヤマトの乗員も大半はここを訪れるのは初めてだ。
ヤマトの現乗員でもイスカンダル行きの経験者は、第一艦橋メンバーと佐渡、山本ら二十名に満たない。
α星同様、イスカンダルへの航海を経験した古代たちも凪いだ七色星団を見て、過去の思い出に浸る余裕が出来た。
彼らの脳裏には、瞬間物質転送機を駆使し艦載機を転移させ、ヤマトを苦しめ、止めにヤマトの波動砲の発射口にドリルミサイルを撃ち込んで来たガミラスの知将、エルク・ドメルの姿であった。
かつて、ヤマトの艦長、沖田は七色星団の決戦後、気心が知れていたヤマト前機関長の徳川にふと、この様な言葉を呟いたと、彼（徳川）の日記に記されていた。

『徳川君、わしは心底思うよ。あのドメルのような男と、敵同士ではなく、味方として出会えていたらとな・・・』
沖田は敵ながらもドメルの能力を評価し、ドメルと敵対していた関係を酷く残念がっていた。
「つい昨日の事のように思い出せますよ・・・」
通信長の相原が呟く。
「勇敢な・・・相手だった・・・」
古代も沖田同様、ドメルの能力と勇猛さを評価していた。
「古代、感慨にふけるのもいいが、まず先に周囲をチェックしておいた方がいいぞ」
と、敵襲の危険もあると言う。
島の言う事も最もだと思い古代は雪に光学モードであるが、周囲の警戒を厳とするように伝える。
敵襲の危険・・・
それは、奇しくも的中する事となった。
「フフフ・・・我々の方が一歩先んじていたようだな。貴様らのワープ航路を計算し、この場所へとやってくることはすでに割り出せておったのだ。艦隊集結が間に合うかどうかだけが心配だったが、どうやら杞憂だったようだな・・・まぁ、奴らの貧弱なワープ装置ではこれが限界というところか・・・」
α星の戦闘から命からがらに離脱したクーギスが前回の汚名を晴らすため、そして双子の兄、ルーギスの仇を討つため、空母を中心とする機動部隊を率いて布陣していた。
「クーギス様、本艦を含め、全空母の攻撃機の準備が整いました」
「よし、艦載機の射出シークエンスに入れ、レーダー妨害開始」
「了解、艦載機射出シークエンス開始。レーダー波妨害タキオン波、放出」
「待っておれ、兄上。あの小ざかしい者どもを、真の恐怖を味あわせながら葬り、兄上の元へ下僕として送り届けてやろう」
発艦していく艦載機を見ながら、クーギスは兄の仇を既に討てたように呟いた。

クーギス艦隊の妨害波を受け、ヤマトの空間スキャンは機能を停止して、レーダーもノイズが多量に入りこちらも機能が低下した。
レーダーの異常に気づいたのがレーダー担当の雪だった。
「あら？」
「どうした？」
「空間スキャンが中断してしまいました・・・なんだが様子がおかしいわ。コスモレーダーもノイズが多量に入って機能が低下しています」
「真田さん。レーダー機器の方は大丈夫ですか？」
「うむ、異常はないようだが・・・雪、とりあえず中断した空間スキャン画像をパネルに出して見てくれ」
「了解」
メインパネルに先程までヤマトがスキャンしていた七色星団の宙域図が表示されるが、そこにはおかしな様子は特に見られない。
「これだけ恒星が密集しているんです、恒星磁場の影響ではないんですか？それに元々此処はレーダーの映りが悪くなる場所ですし・・・」
七色星団の特色から今回のレーダー異常は自然現象ではないかと太田が指摘する。
「いや、念には念を入れておいた方がいい。相原、まほろばの月村艦長と連絡を取ってくれ」
「了解」
「月村艦長、先程から此方のレーダーに異常をきたし始めたのですが、其方はどうですか？」
「こちらも同じです。映りが悪くなりました」
まほろばのレーダーはヤマトのレーダーよりも優秀なモノを搭載している。
その　まほろば　のレーダーまでもが感度が悪いとなると只野自然現象かもしれないが、やはり不安が拭いきれない。
「此方の解析データをそちらに送るので、まほろばのＣＩＣシステムで更に細かく解析してもらえませんか？」
「分かりました。すぐに取り掛かります」
ヤマトから送られてきたデータを時間軸にそって巻き戻して再生

していく。
「ん?・ストップだ!・止めてくれ!」
ある時間軸の画像を見て良馬が待ったをかけた。
「左上・・・・左舷前方の宙域を拡大してくれ」
新見が良馬の言われた宙域を拡大していくと人工的なエネルギー反応が探知された。
「これはっ!?」
「反応は薄いが、おそらく周囲に立ち込める暗黒ガスのせいだろう。エネルギー反応はα星で遭遇した敵のものと一致している」
「やはり敵は待ち伏せをしていたわけですか・・・・?」
「この時点から四秒後に反応が消失しています。もしかすると先程からのレーダー異常も・・・・・」
「うむ、敵のレーダー妨害だと見て間違いないだろう。空間スキャンの実行が少しでも遅れていれば完全に奇襲を受けていたところだ」
スキャンデーターのエネルギー反応の解析の結果、艦隊の前方に小さなエネルギー反応が多数観測され、その結果これが敵の艦載機であり、敵は空母を中心とした機動部隊であるということが分かった。
良馬は急ぎ、この解析データをヤマトに送った。
それと同時に、艦載機隊に緊急スクランブルをかけた。
まほろばからデータを受け取ったヤマトの方でも、慌ただしくなった。
「古代、艦載機が飛び立っているということは、敵はもう攻撃態勢にあるってことだ。いや、それどころかもうこちらに進軍してきている可能性も高い」
島の指摘を受け、
「総員戦闘配置!・対空攻撃に備えるんだ!・コスモタイガー隊全機、迎撃準備!・いいか、敵のジャミングのため、レーダー範囲が通常よりも狭くなっている。周囲に注意しながら進め!!」
『了解!!』
古代も対空戦闘とコスモタイガー隊に緊急スクランブルをかけた。
コスモタイガー隊全機がヤマト、まほろば　の前面に展開し、敵の

艦載機を迎え撃つ。
「艦載機反応多数!!エネルギー反応から、爆撃機の大編隊と思われます!!」
敵艦載機はエネルギー反応から爆撃機の編隊であることが分かった。
爆撃機と言う事で、対艦載機戦闘には不向きであるが、如何せん数が多い。
コスモタイガー隊はドックファイトをやりながら機体に搭載されている小型のレーダー衛星を射出、セットし、レーダー範囲を少しでも拡大させようとし、同時に敵のレーダーも妨害させようと、タキオン阻害チャフをばら撒いた。
すると、まほろば、ヤマトの居る位置から左舷側面の方向から爆撃機の別働隊の反応があった。
「くそ、正面の連中は囮かよ!!」
敵は最初からこの側面部隊が主力で、始めから側面からの攻撃を重点においていた様だ。
「山本!!そちらの囮連中は任せても大丈夫か!?」
坂井が山本と連絡をとり、囮部隊の対処を任せても大丈夫かと問う。
「囮とはいえ、数が多いが、何とかしてみよう」
「では、側面の連中は此方で何とかしてみよう」
「ああ、任せた。此方もこの連中を片付けたら、応援にまわる」
坂井、率いるまほろば所属のコスモタイガー隊が別働隊の対処に向かった。
「坂本、椎名、いくぞ!!撃墜されるんじゃねぇぞ!!命を落とすな!!敵を墜とせ!!」
山本は気合を入れ直し、正面の敵艦載機隊に向かって行った。
「加藤、玲、此方も行くぞ!!遅れるな!!そして撃墜されるなよ!!」
「了解!!」
まほろばのコスモタイガー隊は側面に現れた別働隊の対処に向かった。

クーギス艦隊の艦載機は数に物を言わせヤマトに攻勢をかけるが、戦闘機ＶＳ爆撃機の戦いなので、クーギス艦隊の艦載機は次々と撃ち落されていく。
「えええぃ、まだ撃沈できんのか！」
撃沈どころか未だヤマトに接近出来ない状況にクーギスは苛立ち始める。
「そ、それが敵艦載機の迎撃網は厚く突破が困難なようです」
「くそっ」
「く、クーギス司令！敵の艦載機からレーダー妨害物が散布されています。こちらのレーダーも機能が低下しています」
「小癪な。直掩の艦載機を攻撃機体の護衛につけさせろ。さっさとあの小うるさいハエ共どもを叩き落すのだ！」
「りょ、了解」
直掩機の護衛のもと攻撃機隊はまほろば、ヤマトへと向かった。
「ヤマトよりコスモタイガー隊へ!!新たな艦載機反応を感知!!ジェネレータ反応大!!高出力機です!!注意してください!!」
その直掩機の反応を雪は捉え、コスモタイガー隊に注意を呼びかけた。
今度現れた艦載機反応は、今まで感知してきた艦載機反応とは異なっていたからだ。
「来やがったか・・・今度のヤツは動きがケタ違いだな・・・全機に警告！おそらく奴らはエース級だぞ、気をつけろ！二機以上一組になって迎撃しろ!!」
坂井は爆撃機を後回しにして先に護衛機を相手にした。
「艦をもう少し前に出せ!!大山さん!!雪風・改をお借りしてもよろしいですか？」
「ああ、構わんぞ」
大山から雪風・改の指揮権を貰った良馬は雪風・改と共に艦を前に出した。
コスモタイガー隊が艦載機を相手にしている最中、まほろば　と雪風・改は敵本隊を叩くため、索敵を行いながら進撃していた。

ヤマトはコスモタイガー隊と共に正面にいる敵爆撃機と敵戦闘機の殲滅にかかった。
敵艦載機の来襲方向やレーダー衛生からの情報を頼りに進んでいくと、敵は左舷前方にあるアステロイドの反対側に布陣していることがわかった。
ヤマトとコスモタイガー隊は敵戦闘機と爆撃機の殲滅を目標とし、まほろばの方は・・・・
「拡散波動砲発射用意。敵本隊を一気に殲滅する」
波動砲による敵本隊の殲滅にかかった。
「了解。波動砲へエネルギー注入!!」
まほろば　は敵のレーダー機能が低下している隙をついて波動砲の射程まで接近し、発射準備を整える
「波動砲発射準備完了!」
「波動砲発射!」
まほろば　から拡散波動砲が発射された。
「く、クーギス司令!前方から高エネルギー反応が!う、うわぁぁぁぁぁぁぁ――――!!!」
クーギスが前方を見ると、眩い光が広がる。
「おのれ、おのれっ!おのれぇぇぇぇぇっ!・・・・兄上・・・・すまぬ・・・・」
敵への恨みと、仇をとれなかった兄に対しての謝罪を口にしたクーギスは轟音と眩い閃光の中、艦と運命を共にし、その他の艦隊もまほろばの拡散波動砲の前に消滅した。
敵もこの特殊な状況下故、密集していたのが仇となった。
後衛に配備されていた予備部隊は指揮系統を失い、更に拡散波動砲の威力を見て恐れをなしたのか転進を開始した。
撤退していく敵艦に北野は追撃を進言したが、古代はそれを却下した。
理由として今のヤマトの任務は敵の殲滅ではないためだった。
そんな古代の命令に北野はどこか納得していない様子だった。
今回の一番の功労者はコスモタイガー隊のパイットたちであった。

そして負傷者も一番多かった。
ヤマト、まほろば　の技術班は総手で、艦の修理を行った。
山本は医務室にて負傷した隊員たち一人一人を見舞った。
その中で敵の戦闘機との戦闘で撃墜されかけた坂本と椎名が医務室で意気消沈しているのを見て、
「いいか、怖いモノ知らずというのと強いというのは全くちがうだって事を憶えておけ。俺たち戦闘機乗りはキャノピーの外はすぐに真空の宇宙が待ち受けているんだ。隣り合わせにある死を実感できない奴なんか、この仕事は務まらないのさ」
と、怖いもの知らずと強さとの違いを教えた。
そして去り際に「尾翼のマークが増えなくてよかった」と呟いて医務室を去って行った。
二人が尾翼のマークのことを医務長の佐渡先生に聞いた。
「どういうことですか?撃墜マークが増えなくて良かったって?」
普通戦闘機のパイロットならば、撃墜マークが増える事ならば喜ばしい事の筈なのに、それが増えなくて良かったと言うのは、坂本も椎名も解せなかった。
「あぁ～、山本がコスモタイガーの尾翼に着けているマークの事か・・・・ありゃ、撃墜マークなんかじゃない。かつてのガミラスとの戦い・・・・そして、白色彗星帝国との戦いで失った仲間たちの数じゃ・・・・」
と、佐渡から尾翼のマークが、撃墜マークではなく、今までの戦いで戦死した仲間のパイロットのことだと知った。
「・・・・」
その事実を知った二人は何ともいたたまれない思いになった。
「戦争なんて不条理なもんでな・・・・酷いときには一日に何十人もの仲間を失う事だってある・・・・じゃが、戦いを続けていると死を悼む間隔までが段々と麻痺して来るんじゃ・・・・そして、やがては共に戦い散って行った仲間の事までも忘れてしまう・・・・」
「・・・・」
佐渡の言葉を二人は黙って静かに聞いている。
「山本は、それを忘れんように、ああやって自分を戒めておるんじゃ

…自分の強さを失わないように…」
「強さ…？」
「さっき山本が言っておったじゃろう。怖いモノ知らずと、強いと言うのはまったく違うとな…本当に強いって言うのは、命の重さを知っている者の事じゃよ…戦闘機乗りに限らずにな」
今回の戦闘、そして山本と佐渡の言葉に一皮むけた様な坂本と椎名であった。
そして古代と島は北野に個人的に話し合い、白色彗星の残党軍とは何か？
暗黒星団帝国とは何か？
を問い、そしてガミラスとは何かを聞いた。
北野の答えは自分の故郷を滅茶苦茶にした『敵』であり、断固戦うべきだと主張した。そして、今回のイスカンダル救援任務もガミラスからの通信と言う事で、未だに不審がっていた。
そんな北野に島は語った。
「北野、俺たちも初めての旅立ちの頃は、地球の為に戦い、ガミラスへの雪辱を晴らす事が正義だと思っていた。だが、本当に戦う事が正義だろうか？そもそも、正義のための戦いとは何だ？お前も沖田艦長やテレサの事は聞いているだろう。沖田艦長は決して『戦え』と教えてくれたわけじゃない。困難に耐え、それでも道を信じて進むことが、幸せにつながるんだと言う事を教えてくれたんだ…戦う事は、その手段…選択肢の一つでしかない」
「…」
「そしてテレサは、死を賭して我々に本当の愛の在り方を教えてくれた…」
「島先輩…」
「我々、地球人は、これからも学ばなきゃいけない…沖田艦長の鋼の意思を…そして、テレサの教えてくれた宇宙の愛というものを…地球人だけが全てなんじゃない。宇宙に住む者は皆、同じ兄弟なのかもしれないんだ…」
「…」

島や佐渡の言う言葉は、地球側の新人たちの胸に響く言葉であったが、管理局の高官、高ランクの魔導師の局員にとってはきっとお笑い草なのだろう。
局員に正義とは何だと聞けば、それは、管理局の決めた法であり、引いてはその法律の番人である管理局そのものだと言うだろう。
そして、その管理局に背く相手は常に敵であり、悪である。
そんな敵には容赦なく徹底的な力を持って自覚させ強引に従える。
それこそがこの世に存在する正義の全てだと言うだろう。
最も全ての局員がこの様な答えだとは限らない。
なのは　や　はやてたちなど、元は管理外世界出身の者や今回のフェイトとティアナみたいに様々な経験と出会いを体験した者たちは、多少はそのような考えに疑問を持つ事だろう。
そして、古代がなぜ残党軍との戦いで北野の立てた作戦が採用されたのかを語った。
北野は自分の作戦が採用された真実を聞き、自分の考えがすべて正解ではなかったことに気づかされ、今後自分はヤマトで・・・・防衛軍で良い指揮官になれるのだろうか悩み、考えることとなった。

ヤマトで新人のコスモタイガー隊が意気消沈しているのと同時に、まほろばの方でも似た様な状況だった。
「・・・・」
「どうした？元気が無いな」
「あっ、主計長」
玲に声をかけたのはかつての自分の上官であったディアーチェであった。
「ホレ、気分を落ち着かせる為にも、飲め」
そう言ってディアーチェは一杯の暖かいレモンティーの入ったカップを差し出す。
「ありがとうございます・・・・それに、私の我儘も許していただいて・・・・」
「まっ、ギンガの熱心な頼みもあったからな・・・・航空科は厳しい所だ。

あの彗星帝国との戦いでは、多くの戦闘機乗りが星の海に散って逝った・・・・」
「・・・・」
ディアーチェの言葉に黙って耳を傾ける玲。
事実、自分の兄も彗星帝国との戦いで九死に一生を得た。
あの決戦の状況では、誰が死んでもおかしくはない状況だったのだ。
兄は、親友だったヤマト、コスモタイガー隊の隊長で、自分の同期生の兄でもある加藤三郎の死に深い罪悪感を感じており、ガミラス・そしてあの戦いで散って逝った仲間のためにも自分は精一杯戦うと言っていた。
「もし、辛くなったらいつでも戻って来い」
と、ディアーチェは、戻ってきてもまた暖かく迎えてやると言うが、玲は首を横に振り、自分も兄同様、宙（そら）で精一杯頑張りますと言った。
クーギス機動部隊との戦闘と言う予想していた戦闘が終わり、七色星団は普段の姿を取り戻していた。
撤退していった残存艦が再び援軍を連れて此処に戻ってくる前に予定されていた慰霊祭が行われた。
「勇敢に戦い倒れたヤマト乗組員、そしてドメル将軍以下、勇敢なるガミラス軍将兵の皆さんにご報告します・・・あれから地球とガミラスとの戦いは続きましたが、ドメル将軍が最後の言葉で仰ったガミラスと地球の双方は今でもちゃんと未来を歩んでいます・・・」
弔辞の言葉を述べる古代の声がヤマト、まほろばの全ての部署に放送される。
ヤマトはもちろんの事、まほろば　の乗員も自分の持ち場で起立し、静かにその言葉に耳を傾けながら、弔辞の言葉を聞いている。
「総員、敬礼！」
古代の弔辞が終わるや、真田の号令で、ヤマト、まほろばの乗員は敬礼し手が離せない者は心の中で黙祷を捧げた。
フェイト、ティアナも黙祷を捧げた。

ヤマト　と　まほろば　の舷側からは白い花束が宇宙空間に放たれる。
「弔砲、一発！」
良馬の号令一下、目一杯仰角をかけた　まほろば　の第一主砲が火を吹き、続いてヤマトの第一主砲も火を吹く。
やがて、二艦から放たれた光の矢は短い距離を飛んで消滅した。
「これにて、慰霊祭を終了する。三十分後にワープを行い、本日中に大マゼラン雲近海に入る。全艦、ワープ準備にかかれ！」
慰霊祭終了を告げた良馬は直ちにワープ準備を下令した。
そして、ヤマト　と　まほろば　は大勢の宇宙戦士達が眠る七色星団を後にした。

マゼラン星雲　サンザー星系　某宙域

暗黒星団帝国　第一艦隊、旗艦　プレアデス　艦橋
「デーダー司令」
「なんだ？」
「第二十四恒星エネルギー資源採掘艦隊からの連絡が途絶えました」
「何い？」
オリオン方面へと向かわせた分艦隊が行方不明になったという知らせは、デーダーに一瞬の驚愕を与えた。
「恒星からのエネルギー採掘ですから、恐らくエネルギー採掘中に何らかの事故が起きたものと思われます」
デーダーの部下はエネルギー採掘中にα星のコロナに巻き込まれたのだろうと推測した。
実際、最後の連絡は、「これより、エネルギー採掘を開始する」の通信で、その後は何の連絡もなく、定時連絡もないからだ。
まさか、防衛軍との戦闘で撃滅されたのだとこの時のデーダーたちには、知る由もなかった。
「ぬぅ～役立たず共め・・・まぁいい。イスカンダリウムさえ、手に入れれば、恒星からのエネルギーなど、比べるべくもない」

デーダーは最後まで、第二十四恒星エネルギー資源採掘艦隊の真相を知る事もなく、只の事故だと思っていた。

かつて、ドメル将軍と死闘を演じた地、七色星団・・・・

そこで、彼らを待ち受けていたのは、兄の復讐に燃えるクーギス率いる機動部隊だった・・・・

尽きぬ敵機の来襲・・・・

視界と一歩間違えれば、死へと直結する七色星団の特殊な宇宙環境・・・・

様々な障害が絶え間なく、新乗組員たちを襲った・・・・

そして、その戦いが終わった時、

宇宙戦士として、

そして人間として、一回り成長した彼らの姿があった・・・・

また、フェイトとティアナもこうした戦いを見て、管理局の在り方を改めて考えるのであった・・・・

四十八話　サイレンの魔女

私はジュラ・・・
空間を全速で飛ぶ私を見る者がもし、いたとしたら
それは、断続するグリーンの炎の尾を引いた流星だと思ったに違いない・・・

私はジュラ・・・
地球人が教えてくれたイスカンダルの波動エンジンが後尾の隔壁の奥で鈍い・・・
そして快いうなりをあげていた・・・
大マゼラン雲から銀河系まで、１４万８千光年の距離がある・・・
それでも私はどうしても行かねばならない・・・
母なる銀河のふところに、あの・・・
あのヤマトが帰り着く前に・・・
私はしばしまどろむ・・・
ヤマトに追いつくまでのあいだ・・・
私の母が残してくれた記憶端子を、私の脳中枢に接続して・・・
こうして眠ればヤマトと私と・・・
そして私の母のあいだに起こった今までの物語を・・・
夢の中でみることが出来るだろう・・・・・
眠り、そして夢から醒めた時・・・
私は再びヤマトに巡り合うのだ・・・
私はジュラ・・・

私はジュラ・・・
私にはわかっていた・・・
デスラー（父）の心も、母の心も・・・
母はデスラーを憎みながら、それでも彼をひたすら愛し・・・
そして、けなげな地球人たちも愛していた・・・

あの鋼のような沖田艦長の・・・・
生きて故郷の土を踏むつもりのない決意も、母は知っていたのだ・・・・
やがて、デスラーのガミラス星はヤマトとの戦いに敗れ・・・・
ヤマトは、放射能除去装置コスモクリーナを持って地球への帰路についた・・・・
そう・・・・私の父、デスラーが最後の戦いを生き残り、ヤマトを追っている事も知らずに・・・・
だから、私もヤマトを追ったのだ・・・・
・・・・でも、ほんとうはどうしてヤマトを追ったのか、その理由は私にもわからない・・・・
ヤマトを追い、デスラー（父）の事を知らせようとしたのか・・・・
デスラーの・・・・父の船を追って、共にヤマトと戦おうとしたのか・・・・
自分の心なのに、その心は永久にわからない・・・・
私がヤマトに追いついた時・・・・
夢から醒めた時・・・・
幸か不幸か、最後の戦いは既に終わっていた・・・・
・・・・・・・
私は父にも、ヤマトにも間に合わなかったのだ・・・・
父の船はその影もなく、目の前に広がる銀河が・・・・
そして彼らの星、彼らの母なる地球へと帰ってゆくヤマトだけが遥かに見えていた・・・・

私はジュラ・・・・
空間を全速で飛ぶ私を見る者がもし、いたとしたら・・・・
それは、断続するグリーンの炎の尾を引いた流星だと思ったに違いない・・・・
私はジュラ・・・・
父を愛し、地球人を愛した宇宙の娘・・・・

私がこれからどこへ行けばいいのか、教えてくれる者はいない・・・
私はジュラ・・・
その信ずるままに、ガミラスの栄光と共に死んだ、偉大なデスラーの娘・・・
私はジュラ・・・

七色星団にて敵の妨害があったが、何とか無事に七色星団を通過してマゼラン雲近海まで来たヤマト　と　まほろば。
此処からは通常航行と小規模のワープにてイスカンダルへと向かう予定となっていた。
マゼランに入ってからはあの円盤状の艦船からの襲撃もなく、順調なペースである。
（ようやく此処まで来たか・・・・・）
古代はマゼラン星雲入り、ようやくイスカンダルがもうすぐなのだと思いつつ、最初のイスカンダルへの航海で、この付近であったある出来事を思い出した。
（そういえば、あの娘と会ったのもこの近くか・・・元気にしているだろうか？）
今回の予定航路には入っていないが、この付近にある、旧ガミラス領ユークレシア孤立星系・・・その第一番惑星〝サイレン〟・・・
その惑星に幽閉されているような生活を送っていた一組の母子がいた。
彼女たちはジレルと言う星の出身で、名前を母親の方はメラ、その娘のジュラと言った。
母親のメラは他人の頭の中の考えを感知する能力を有していた。
それは、例え百万光年離れていても指向性増幅器の力を使えば大群衆の一人一人の頭の中の考えを正確に読み取ってしまうほどの能力だった。
その上、相手の性格や経験に合わせて幻影まで見せる事が出来た。
そんな彼女の能力を恐れたからこそ、デスラーは彼女をこのサイレ

ンの星に幽閉したのかもしれない。
娘のジュラはガミラスとの混血の為か母親の能力をそこまで強くは引いていない様子だったが、何が切っ掛けでその能力が開花するか分からない為、母親のメラと共にサイレンの星に幽閉された。
ヤマトがイスカンダルへ向かう途中、メラはヤマトに幻影を送り込んだ。
そして、普通の人間ならば逃げ出す所をヤマトは幻影の原因であるサイレンの星へと向かってきた。
ヤマトのサイレン星接近の報告にデスラーは慌てた。
メラの口からガミラスの機密情報が漏れると思ったからだ。
その反対にデスラーはメラにヤマトの詳細なデータを要求したが、メラはそれには決して応じなかった。
デスラーは直ちにサイレンの星付近の艦隊をヤマトに差し向けるが、何分小規模な艦隊だった為にヤマトのサイレン接近を防ぐ事は難しいと判断してある決断を下した。
それは、ヤマトの接近をどうしても防げない様ならば、ヤマトではなくサイレンの星を破壊・つまりメラとジュラを抹殺せよと言う命令だった。
命令を下した後、デスラーは苦渋の決断だったと項垂れた。
例え、厄介な能力を有していても自分が一度は愛した女であり、その女の間に出来た子供は紛れもなく自分の娘なのだから・・・・
しかし、デスラーの命令は実行される前に艦隊はヤマトとの戦闘で全滅し、サイレンの星は破壊されずに済んだ。
ヤマトが降下する直前、メラは自らの命を絶った。
それは、彼女なりにデスラーに見せた誠意なのかもしれない。
ガミラス、そしてヤマトの詳細なデータを持っていたのはメラただ一人だった。
メラが自らの命を絶ったのは自分の頭の中にあるガミラスの詳細データをヤマトに渡さないための行動だった。
そして、自分よりもスターシアに心を奪われ、自分から心が離れていく夫に対しての最大限の抗議だったのかもしれない。

残されたジュラにヤマトの乗員はイスカンダル製の波動エンジンを組み立てた小さな宇宙船を造り、それをジュラに与えた。
サイレンの星にはもうジュラ一人になってしまった。
その為、その宇宙船を使って父の居る星へと向かうように言ったのだ。
ジュラは自分の父がデスラーである事をヤマトの乗員には言わなかった。
一人サイレンの星に残ったジュラに後髪を引かれる思いを抱きながらも、ヤマトはイスカンダルを目指し、サイレンの星を後にした。
(無事に父親のいる星に辿り着けただろうか?あの娘は・・・・?)
と、星の海を見ながらジュラの身を案じる古代だった。

宇宙戦艦　まほろば　女性士官予備室
「・・・・ナ・・・・・ティ・・・・ア・・・・・ティアナ・・・・・」
就寝中、ティアナは誰かに名前を呼ばれ目を覚ました。
フェイトが自分を起こしたのかと思ったが、隣のベッドにフェイトの姿がなかった。
「?」
誰も居ない部屋から自分を呼ぶ声・・・・。
空耳かと思っていると、
「ティアナ・・・・ティアナ・・・・」
電気が消えた暗い部屋の中からまたもや自分の名を呼ぶ声がしてきた。
しかも、それは男の声だ。
男性乗員の誰かが自分に不埒な行為をしに来たのかと思ったが、女性専用居住区画は出入り口に厳重なロックがある為、そう簡単には男性乗組員は入って来ることはできない。
ならば、この声は誰の声だろうか・・・・?
それにこの声は何処か聞き覚えのある声だった。
「ティアナ・・・・」

暗闇に目が慣れてくると、暗がりにボゥっと一人立っている男の姿が段々と浮き彫りになって来た。
警戒しつつ、その男が何者なのか正体を確かめようとしていると・・・・
「ティアナ・・・・」
「っ!?に、兄さん・・・・?」
其処に居たのはティアナの死んだ兄、ティーダ・ランスターだった。
「そんなっ!?どうして・・・・?なんで、兄さんが此処に・・・・?」
死んだ筈の兄が今、自分の目の前に居る事に困惑するティアナ。
これは夢なのではないかと思っていると、
「ティアナ・・・・寒いぞ・・・・俺は今、とても寒い所に居る・・・・死ぬとこんなに寒い世界を彷徨うとは思わなかった・・・・此処は、上も下もない・・・・始まりも終わりもない、寂しい所だ・・・・このままでは、いずれお前も此処に来ることになってしまう・・・・帰るんだ・・・・ミッドチルダに・・・・すぐに・・・・」
ティーダはそう言い残し、スッと消えてしまった。
「兄さん!!」
ティアナはベッドから飛び起き、兄に駆け寄ろうとしたが、ティアナの手は空を切った。
其処には当然兄の姿は無く、ティアナ一人だけであった。
「・・・・はぁ～精神的に参っているのかしら?・・・・リニスさんに睡眠薬でも貰って来よう・・・・」
ティアナは生死にかかわる遭難をして、慣れない環境下に置かれた事によって自分でも知らない内に精神的に疲労して兄の幻覚を見たのだと思いリニスに睡眠薬でも貰おうと部屋から出た。
医務室へと向かっていると、通路の先に再びティーダの姿が目に入った。
「兄さん!!」
ティアナは再び現れたティーダの傍に寄ろうとすると、ティーダは踵を返して走り出していく。
「待って!!兄さん!!兄さん!!」

ティアナが必死にティーダの後を追いかけていくがその距離は縮まらず、やがてその姿は消えてしまった。
「ティアナ」
そこへフェイトが、先程ティーダが走り去っていった方向からやって来て、ティアナに声をかけてきた。
「フェイトさん・・・今、オレンジ色の髪をした男の人が通りませんでしたか？」
「えっ？男の人？ううん、誰も来なかったよ」
「そう・ですか・・・」
「ティアナ、大丈夫？顔色が悪いけど・・・？」
「少し、精神的に疲れているのかもしれません・・・リニスさんから薬でも貰ってきます」
顔が青白く、少し足元がふらついているティアナ。
そんなティアナが心配でフェイトも医務室について行く事にした。
フェイトとティアナ、二人が医務室へ向かっていると、
「うえ～ん・・・うえ～ん・・・」
子供の泣き声が聞こえてきた。
「っ!?そんなっ!?バカなっ!?」
フェイトは通路の先で信じられないものを見た様に驚愕の表情を浮かべる。
「フェイトさん？」
突然表情を変えるフェイトに戸惑うティアナ。
如何やらティアナには子供の泣き声もフェイトには見えているモノも見えていない様だ。
それは先程、ティアナが見えていた兄、ティーダと同じ様に・・・
そして、フェイトには見えていたモノ・・・
それは・・・
「フェイトママ・・・」
通路の先に居たのは、ミッドに居る筈のヴィヴィオだった。
「ヴィヴィオ・・・そんな・・・ミッドに居る筈の貴女が何で此処に・・・？」

（えっ!?ヴィヴィオ?）
フェイトが呟いたヴィヴィオと言う名前に反応するティアナであったが、当然何処にもヴィヴィオの姿は見えない。
しかし、フェイトにはヴィヴィオの姿が見えている様だ。
フェイトが慌てて泣きじゃくるヴィヴィオへと駆け寄り彼女を抱きしめようとすると、
「フェイトさん!!」
ティアナが慌ててフェイトを呼び止める。
「っ!?‥‥私‥‥今‥‥」
フェイトが正気に戻ると、其処にはヴィヴィオの姿は当然無かった。
「私もティアナの事を強く言えないね‥‥」
自嘲めいた笑みを浮かべるフェイト。
彼女もティアナ同様、リニスに睡眠薬でも処方してもらう事にした。
二人で医務室へ向かって行くと、ギンガとバトライザーとすれ違う。
「お二人とも顔色が良くないようですけど、どうかしましたか?」
「い、いえ大丈夫です」
「少し疲れただけだから‥‥」
と、無理に笑みを浮かべてその場から去って行くフェイトとティアナ。
「やっぱり、慣れない航海生活で精神的に疲れているのね」
ギンガが、二人の心中を察する。
九死に一生を得て、慣れない艦での長期間にわたる航海生活、極度の緊張下で過ごしていた為、肉体的疲労よりも精神的疲労が本人たちの知らぬ間に蓄積されたのだろう。
「人間ハ色々ト悩ミ、故障シテ不便デスネ」
「貴方もネジ一本が緩んだだけで故障の原因になるのよ、バトライザー」
ギンガはフェイトとティアナの二人の精神的疲労を少しでも緩和

する為にホログラムによるメンタルマシーンを使う事を決め、シミュレーションルームへと向かう。
そこで、ブリッツ・キャリバーに記録されていたミッドの記録をメンタルマシーンにセットしようとしていたら、背後に何者かの気配を感じた。
「誰!?そこに居るのは!?」
ギンガが慌てて振り向くと、其処には沢山の白い手が自分に迫ってくる光景が目に入った。
「きゃぁぁぁぁー!!」
シミュレーションルームの外で待っていたバトライザーにギンガの悲鳴が聞こえ、部屋の中に入ると其処にはギンガが倒れていた。
「ギンガサン、シッカリシテ下サイ」
バトライザーがギンガの身体を揺するが、ギンガが目を覚ます気配はない。
「私ガ何カシタト思ワレルノモ心外デス・・此処ハヤハリ、リニス先生ノ所二運ビマショウ。ソウシマショウ」
そう言って、ギンガを抱き上げるとバトライザーは医務室へと向かった。
バトライザーよりも先に医務室に到着したフェイトとティアナは医務室を覗くと、そこには異様な光景が広がっていた。
「あぁ・・・プレシア・・・アリシア・・・」
リニスが涙を流しながら、既に亡き大事な人たちの名前を呟いていた。
しかし、それは絶望に染まった涙ではなく、もう二度と会えない大事な人と再会する事が出来た歓喜の涙のであった。
そして誰も居ないにも関わらず、まるでそこに人が居るかのように抱きしめる仕草をしていた。
「リニス!!しっかりして!!リニス!!」
フェイトが、慌ててリニスに駆け寄り声をかける。
「アリシア?」
「ううん、私はフェイトだよ。リニス・・・」

「・・・・」
「リニスさん・・一体何が見えていたんですか？」
　ティアナはリニスが見ていた幻影を訊ねる。
「私はかつてのマスターのプレシアとアリシアの姿が・・・・」
「・・・・」
　リニスの見ていた幻影を聞き、気まずそうな顔をするフェイト。
「ティアナさん、さっき『見えていた』って言いましたが、もしかして貴女も幻影を？」
「はい。死んだ兄の幻影を見ました」
「私はミッドに居る筈のヴィヴィオの姿を見ました・・・・」
　リニス、フェイト、ティアナの三人が幻影を見たと言った中、
「リニス先生、大変デス。ギンガサンガ」
　と、気を失っているギンガを抱きかかえたバトライザーがやってきた。
「ギンガさん!!」
「何があったの？バトライザー」
「分カリマセン。ホログラムノプログラムチェックヲ行ッテイタノデスガ、何カ恐ロシイモノデモ見タノデショウカ？私ガシミュレーションルームニ入ルト気ヲ失ッテイマシタ」
「恐らくギンガさんも幻影を見たのではないでしょうか？」
　と、ティアナはギンガが気を失った原因を述べる。
　とりあえず気を失ったギンガを医務室のベッドに横たえる。
「バトライザー、他の乗員には何か異常は無い？」
「此処ニ来ルマデノ間デ、特ニ異常ハ認メラレマセンデシタ」
「幻覚を見たのは私たちだけって事だけでしょうか？」
「艦長は大丈夫かしら？」
　リニスは良馬の事が心配になり、ギンガの事をバトライザーに任せると急いで艦長室へと向かった。

　宇宙戦艦　まほろば　艦長室
　その頃、良馬は艦長室の寝台にて仮眠中だったのだが、

「良馬・・・・」
「月村・・・・」
突然、何処からともなく自分を呼ぶ声に良馬は、目を覚ます。
「っ!?」
良馬の目の前には、ガミラス、そして白色彗星帝国との戦いで死んでいった大勢の戦友たちの姿があった。
「ひ、土方さん・・・・高町、沖田・・・・三木君・・・・」
震える声で、目の前のかつての恩師や戦友たちの名を告げる良馬。
すると、土方たちは良馬を睨みながら訊ねてきた。
「月村、何故お前は生きている？」
「僕たちを殺しておいて何故生きている？」
「恥ずかしくないのか？」
「自分だけ生き残って英雄になりたいのか？」
「お前も大勢の部下を殺してきたじゃないか・・・・お前は英雄じゃない・・・・人殺しだ」
「責任を取って死ぬべきだ・・・・」
「そうだ、死ぬべきだ」
「死ね・・・・」
「死ね・・・・」
「死ね・・・・」
「死ね・・・・」
ガミラス戦から艦を降りた時と同じように戦友たちからの非難を浴びる良馬。
ギンガやリニスのおかげで見る事の無くなった筈の幻影が再び良馬の前にその姿を現した。
しかし、良馬は取り乱す事もなく、黙って戦友たちの非難の言葉を聞いている。
そして、
「俺は貴方たちを忘れたわけでもなければ、一人英雄になるつもりもない・・・・ただ地球を守りながらその時がくるのを待っているんだ・・・・本当の英雄は地球を守り、死んでいった貴方たちの方だ・・・・」

顔を俯かせ、自分は英雄などではないと言う良馬。
そこに、
「艦長!!」
リニスが艦長室へと飛び込んできた。
リニスの後にはフェイトとティアナも入って来た。
すると、先程まで目の前に居た戦友たちの幻影は綺麗さっぱり消えていた。
「幻覚？」
「はい、私、フェイト、ティアナさん。そして恐らくギンガさんも・・・」
「他には？」
「いえ、今の所、幻覚を見たのは、艦長を含め、五人だけです・・・皆、死んだ人や悲しい幻覚ばかりでした・・・艦長は？」
「これまでの戦いで戦死したみんな・・・土方さんや三木君・・・高町や沖田に会ったよ・・・そしてみんなに『何故お前は生きているのか？』と、言われたよ・・・」
自嘲めいた笑みを浮かべながら先程自分が見た幻影を話す良馬。
「・・・」
良馬が先程見た幻影の事を話すと、リニスが気まずそうな顔をした。
「それよりもこの幻覚の原因を調査しなければな」
「そうですね」
原因を調査すると言っても、他の乗員は幻覚を見ている様子は無く何故、自分たちだけが幻覚を見たのか分からない。
そんな中、ティアナが、
「あの・・・幻覚を見たのは魔力を有した人だけの様な気がするんですけど・・・」
と、幻覚を見た人間の共通点をあげた。
確かにティアナの言う通り、幻覚を見たフェイト、ティアナ、ギンガの三人は魔導師で良馬は法術の力を持つ術師でリニスは魔力を有する使い魔。
皆、異能力者ばかりであった。

「何か異能力者のみに幻影を見せる特殊な力の様なモノが　まほろばに働いていると言うのか？」
「それについては、心当たりがあります」
と、フェイトのデバイスバルディッシュが言葉を発する。
「何なの？バルディッシュ？」
「魔力をモヤ状に変換した様な変な力がこの艦を包み込むかのようにある方向から流れてきます」
「その方向を解析出来る？リニス」
「やってみます」
フェイトからバルディッシュを借りたリニスは早速ＣＩＣへと向かい、そこで解析を行い、異能者のみに幻覚を見せる特殊なモヤ状の魔力が来る方向を突き止めた。
「解析できました・・・方位、右４５、度・・・距離、２８宇宙キロです」
「その方向に惑星はある？」
「ちょっと待って下さい・・・解析度を目一杯にします・・・あっ、ありました!!惑星反応です!!」
「その映像をモニターに表示して」
「了解」
リニスが機器を操作し、モニターにモヤ状の魔力を放つ惑星の姿を映し出す。
其処に映し出されたのは一つの惑星と太陽らしき星の二つの惑星の姿だった。
「大きさ、質量共に火星程の大きさの星です」
「右にあるのは？」
「小さな太陽の様です。その他の惑星は確認できません」
「太陽一つに惑星一つの太陽系か・・・」
「なんか、寂しい太陽系ですね」
「ヤマトの航路データからあの太陽系について何かわからないか？」
「調べてみます」
リニスが更にメインコンピューターに記録されていたヤマトのイスカンダルへの航海記録で、あの星の事が無いか調べてみた。

すると、一件ヒットする事項が出てきた。
ヤマトの記録では、あの星の名前は『サイレン』と言う名前の星であり、その星にはかつて幽閉されていた一組に母子がいた。
母は相手の心理を読み強力な幻覚を万光年単位の範囲で送り込む強力な超能力を持っていたらしい。
しかし、ヤマトが到着する前に母は自らの命を絶っていた。
自殺の原因は不明。
子供の方はそのような能力は確認されず、また父が誰なのかを言わなかったが、自分たち親子はこの星の出身者ではない事を伝えてきた。
ヤマトの乗員はその子が自分たちの生まれた星へと返す為にこの星に放置されていた壊れかけの船を改修した。
その後、この子がどうなったのかは不明。
と言う内容だった。
ヤマトの航海記録が正しければ、あの惑星には今は誰も居ない筈・・・・
それにも関わらず、まほろば　に居る異能力者たちは幻影を見た。
となると、あの惑星に幻惑を見せる何かがあるのかもしれない。
もしかしたら、α星、七色星団で交戦したあの敵の新兵器かもしれない。
今は異能力者たちだけで済んでいるがそれがやがて　まほろば、ヤマトの乗員全員に広がるかもしれない。
良馬は急ぎヤマトへと通信を入れた。
良馬は　まほろば　の一部の乗員が幻覚を見てその幻覚の原因が例のサイレンの星に有ると説明した。
勿論幻影を見たのが、異能力者たちである事は伏せて・・・・
説明を聞いた古代は、「あの星にはもう誰も居ない筈なんだが・・・・」と、首を傾げた。
その事については、良馬もヤマトの航海記録から知っていたが、誰も居ない星だからこそ、α星、七色星団で交戦したあの敵がサイレンの星に基地を築き、そこで、幻影を見せる装置ないしそれに類似する

新兵器が設置されている可能性も示唆した。
古代もイスカンダルでの航海経験から、良馬の意見も一理あると納得した。
そこで、サイレンの星の調査は　まほろば　が行い、ヤマトはそのままイスカンダルへ向かってもらう事にしてもらった。
良馬は乗員にサイレンの星に敵の新兵器が設置されている可能性を説明し、一時、ヤマトから離れサイレンの星を調査する旨を伝えた。
なお、その間、フェイトとティアナは医務室で待機してもらった。
一時戦列から離れてサイレンの星へと向かう　まほろば。
その近海に差し掛かった頃、まほろば　のレーダーが艦影を捉えた。
すぐさま、あの円盤の敵が現れたのかと思ったが、
「あっ、あれはっ!?」
モニターに映ったのは意外なモノだった・・・・。
医務室に居たフェイトたちに突如、呼び出しがかかった。
「ハラオウン執務官、ランスター執務官補佐は直ちに第一艦橋へお越しください。繰り返します・・・・」
「なんでしょう?」
突然の呼び出しに少し戸惑うティアナ。
「分からないわ。でも、何かが有ったみたいだから行ってみましょう」
「はい」
フェイトとティアナは呼び出しに応じ、第一艦橋まで上がって行った。
二人が呼び出しを受ける少し前、ギンガも目を覚まし、二人と共に第一艦橋へと上がった。
「どうだ?副長」
「間違いありません」
モニターを見ていた良馬が新見に訊ねる、彼女は肯定する返答をした。
そこへ、
「ハラオウン執務官、参りました」

「ランスター執務補佐官、参りました」
と、呼び出しに応じたフェイトとティアナが艦橋に来た。
「ギンガ、もう大丈夫なのか？」
「はい。それで何が有ったんですか？」
「ああ、実は・・・管理局の艦隊が現れた」
「えっ!?」
「管理局の艦隊が!?」
管理局（友軍）の艦船が現れたと言う言葉を聞き、フェイトとティアナは思わず目を見開く。
「本当に管理局の艦なんですか？」
「あ、ああ・・・これなんだが・・・」
先程捉えた管理局の艦の映像を大モニターに表示すると、
「っ!?」
「・・・」
フェイトとティアナは見慣れた管理局の艦の艦隊を組んでいる光景をその目で見た。
「間違いありません」
「あれは・・・確かに時空管理局の次元航行艦と巡航艦です」
二人とも震える声でスクリーンに映る艦船が管理局の艦船だと肯定する。
「そうか・・・」
しかし、フェイトとティアナには一つ解せない事があった。
マゼラン星雲近海は突発性の次元震が起こる為、ここら辺での探査は見送られてきた筈だった。
それにも関わらず管理局の艦が今、自分たちの目の前に居る。
自分たちが次元漂流した後、本局がマゼラン星雲近海の探査を再び開始させたのだろうか？
だが、自分たちを含め、良馬、ギンガ、リニスが幻影を見た近海で魔法に関しての専門組織である管理局が現れたのは間が悪い。
もしかしたら、先程の幻影は管理局がこの宙域で新兵器の実験でもしていたのではないかと思われたら、かなり気まずい。

しかも、幻影を見たのが異能力者たちと言う事でその可能性も十分にあった。
「応答は？」
「それが、先程から何度も通信を送っているのですが、一向に返答がありません」
そう言って新見は再び管理局艦とコンタクトを取ろうと、管理局艦に通信を送り続けていたが、ギンガが艦橋へ上がったので、新見に代わりギンガが通信を送ったが、やはり管理局からの返答はない。
それどころか、
「エネルギー反応らしきモノを探知!!管理局艦発砲!!」
「回避!!下げ舵２０!!取り舵１５!!」
「了解!!下げ舵２０!!取り舵１５!!」
此方（まほろば）に向けて、突然無警告で攻撃を仕掛けてきた。
幸い討ってきたのはアルカンシェルではなく、標準装備されていた魔力砲（マジックカノン）だった。
威嚇射撃だったのか、放たれた砲撃は　まほろば　の右上を通過して行った。
「・・・」
突然、味方（管理局）から攻撃を受け、呆然とするフェイトとティアナ。
「管理局艦、更に発砲!!」
管理局艦はまたもや　まほろば　に攻撃を仕掛けてきた。
「総員、戦闘用意!!」
良馬は自衛手段の為、まほろば　に戦闘準備整えさせた。

サイレンの星、近海で突如現れた管理局の艦・・・
まほろば　と　管理局艦との間で始まった戦い・・・
管理局は何故、まほろばからの通信に応えず、いきなり攻撃してきたのか？
管理局には何か目的があるのか？
しかし、事態はそう簡単なものではなかった・・・

またその頃、別の宙域では、
まほろば　が突然現れた管理局艦に発砲を受けた頃、マゼラン星雲寄りの銀河系某宙域で、一つの戦闘が行われようとしていた。
いや、これは戦闘と言うより一方的な虐殺に近いモノであった。
「提督、前方に艦船反応を発見いたしました」
「艦船？して、所属は？」
「はっ、艦影、エネルギー波長より前方の艦船は時空管理局所属の艦船かと思われます」
「時空管理局？・・・・ふんっ、以前、銀河方面軍から報告が有ったあの軟弱な羽虫共か・・・・」
「如何なさいますか？」
「知れた事、戦舟がこうして出会ったのだ、それをただ黙って見過ごすは愚の骨頂なり」
「承知しました」
一方、この艦隊に狙われた管理局艦隊では・・・
第１２４探査部隊の旗艦　サイオンのブリッジでは、艦の幹部たちが上機嫌であった。
「提督、大収穫でしたな」
「ああ、まさかあんな辺境の田舎世界にこれ程のロストロギアがあったとはな」
彼らは航行が禁止されているマゼラン星雲の探査を密かに行い、その中でとある管理外世界（有人惑星）にて、その世界における重要文化財等の宝物を一方的にロストロギアと認定し、それらを根こそぎ回収（強奪）してきたばかりであった。
艦の幹部たちはこれで本局へ戻れば、自分たちの昇進は間違いなしと確信していた。
そんな彼らにソレは突如、襲い掛かって来た。
「ん？」
レーダー担当のオペレーターが艦隊前方に重力変動を観測した。
「前方に重力変動・・・提督!!」

「なんだ?」
オペレーターが提督にこの重力変動を報告しようとしたその時、ブリッジから見える宇宙空間の一画がグニャリと歪むとそこから白熱化した高エネルギー波が出現。
サイオンの左舷を航行していた味方艦を飲み込んだ。
飲み込まれた味方艦は一瞬で爆沈した。
当然脱出者も居なかったので、生存者はいない。
「な、なんだ!?何が起こった!?」
突然の攻撃（？）に上機嫌だった幹部たちに緊張が走る。
「前方、射程外の距離に艦影多数探知!!」
「何だと!?どこの連中だ!?」
「エネルギー波長から以前、クラウディアから報告が有った例のプレオを破壊した艦隊と同一のモノです!!」
スクリーンには横一列に陣形を組む黄緑と白を基調とした艦船の姿が映し出されていた。
その陣形はまるで管理局の艦隊を通せんぼしているかの様だった。
（プレオを破壊したのは確か、質量兵器を有する蛮族共・・・・此処で連中を撃破すれば、更なる恩賞が得られるかもしれないな・・・・）
サイオンの提督は欲を出し、前方の艦隊に攻撃を命じた。
「蛮族共め!!反撃だ!!」
管理局艦は艦に搭載されていた魔導砲を放つが、相手は此方の射程外に居る為、当たらない。
すると、攻撃を行っている管理局艦隊・サイオンの右舷側の正面の一画が先程の様にグニャリと歪むと、そこから再び白熱した高エネルギー波が管理局艦に襲いかかる。
「艦隊損耗率、九割を越えました!!」
「そんなバカな!!」
「野蛮人共にこんな技術が・・・・い、いや、信じられん・・・・」
「ど、どうしますか!?提督」
「て、撤退だ!!大至急この海域から離脱する!!転移準備!!」
「はっ、はい。全艦に告ぐ・・・・」

「全艦では無い」
「は？」
「本艦はこのまま転移するが、その他の艦は此処に留まり援護せよ」
「つまり、撤退が成功する様に犠牲になれと？」
「命令だ。直ぐに伝達をしろ」
　此処に来て漸く相手が自分たちに敵う相手では無いと悟ったサイオンは残った味方を犠牲にして自分たちだけ撤退準備を始めるが、その行動は余りにも遅かった。
「急げ!!早くしろ!!」
　未だに転移準備が出来ない事態に苛立つ提督。
　前方の艦隊は接近する事も無く、また此方に攻撃して来る様子も無い今が撤退するチャンスなのだ。
　第１２４探査艦隊の味方艦は大半が撃沈されてしまったが、ロストロギアを大量に回収できたこの艦さえ戻れば、昇進は自分たちだけのモノだ。
　彼らは何としてでも生きて本局へ戻りたかったのだが、その願いはかなう事は無かった。
　突如、サイオンの前方の空間がユラリと歪んだかと思ったら、其処から灼熱の炎の様な高エネルギー波が迫って来た。
　サイオンのクルーが最後に眼にしたのは自分たちに迫る地獄の様な業火であった。
　高エネルギー波を受けたサイオンは他の艦艇同様、溶ける様にして爆発し消滅した。
　後に残ったのは、彼方へと消えて行く様なエネルギー流の尾と攻撃をした艦の艦橋にて「思い知ったか、管理局の羽虫共」と豪快に高笑いをする不気味な男の声だけであった。

四十九話　悪魔の実験

旧ガミラス領・サイレンの星近くに突如出現した管理局艦隊。
その管理局艦隊は　まほろば　からの通信には一切応えずに無警告で　まほろば　に発砲してきた。
「管理局艦、更に発砲!!」
「総員、戦闘用意!!」
良馬は自衛手段の為、　まほろば　に戦闘準備整えさせた。
「月村艦長、ですが・・・」
フェイトはやはり目の前で味方の艦が沈められるのは見たくないのか良馬に声をかける。
「ハラオウン執務官、貴女の言いたい事は分かる。しかし、このままでは、貴女自身の身にも危険が迫っているんです。お辛いかもしれませんが・・・」
「・・・」
良馬の言葉を聞き苦悩するフェイトとティアナ。
「ハラオウン執務官」
そこへ、ギンガがフェイトに声をかけた。
しかし、フェイトの事をフェイミリーネームと役職名で呼んだのは今のギンガはフェイトの知り合いのギンガ・ナカジマ(中嶋ギンガ)ではなく、宇宙戦艦　まほろば　通信長の中嶋ギンガとして、声をかけたからだ。
「艦長の事を分かってあげてください・・・艦長は乗員全員の生命の安全を守る義務があるんです。その中には、当然、ハラオウン執務官、ランスター補佐官の御二方も含まれるんです・・・ですから、どうか・・・」
ギンガからも説得されたが、まだ完全に諦めがつかない様子のフェイトたち。
そこへ、
「ただ、主砲の必中距離まで接近し、その間にもし管理局側が通信に出れば、まだ、話し合いの余地はありますから」

良馬が妥協案をフェイトとティアナに言う。
「・・・はい」
「・・・分かりました」
良馬の言葉にフェイトとティアナは力なく返答する。
しかし、これで少なくとも、ただ一方的な戦闘にはならない可能性も出てきた。
フェイトとティアナは管理局艦が　まほろば　の主砲の必中距離に入る前に通信に答えてくれることを祈った。
管理局艦の攻撃を回避しながら、主砲の必中距離まで管理局艦隊へと接近する　まほろば。
ギンガも必死で管理局艦に呼びかける。
そして、主砲の必中距離手前で、
「っ!?管理局艦との通信が繋がりました!!モニターに表示します!!」
フェイトとティアナの祈りが通じたのか、管理局艦と通信が繋がり、指揮官らしき人物がモニターに表示された。
「あっ、貴方は!?」
指揮官らしき人物の顔を見て、フェイトは思わず声をあげた。
モニターに表示された人物それは・・・
「ぎ、ギルド提督!!第３７探査部隊指揮官のギルド提督ではありませんか!?」
フェイトがモニターに表示された人物の名前と官職を言う。
モニターに表示された人物は、フェイトたちがまだテリオスに乗艦中に本局から知らせが来た行方不明となった第３７探査部隊の指揮官だった。
知らせがきた時、フェイトは第３７探査部隊の指揮官の顔写真と名前は見ていたので、今、自分たちがモニターで見ている人物が行方不明となった部隊の指揮官である事に驚いている。
(それじゃあ、あの艦隊は・・・行方不明になっていた第３７探査部隊・・・)
フェイトとティアナはモニターから　まほろば　の周囲に展開している管理局艦を見渡し、今、自分たちを攻撃している艦隊が行方不

明になった友軍なのだと自覚した。
しかし、何故行方不明になった部隊が自分たちを攻撃してくるのかが分からない。
そこで、フェイトはもう一度モニターを見て、指揮官であるギルド提督に話しかける。
「提督、何故攻撃をするのですか!?それに行方不明になっていた貴方たちが何故此処に居るのですか!?お答えください!!」
声を上げ、ギルド提督に訊ねるフェイト。
「・・・・・・・」
しかし、ギルド提督は何も言わない。
「提督!!なぜ黙っているのですか!?」
ティアナもギルド提督の行動が分からず、フェイト同様にギルド提督に訊ねる。
またもや、無言かと思いきや、
「・・ハラ・・・・オウン・・・・・執務官・・・・・・・?」
「えっ!?」
すると、ギルド提督は、途切れ途切れではあるが、声を発した。
「ハラオウン執務官・・・・・?」
「そ、そうです!!フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです!!」
「ハラオウン執務官・・・・わ、私は一体?」
「ギルド提督、一体何があったんですか?」
どうやら、ギルド提督は、正気を取り戻した様子なので、フェイトは一体提督たちの身に何があったのかを訊ねる。
「・・・・た、確か、あの時、円盤の様な艦隊から突然攻撃されて・・・・助かったのか私は!?・・ウッ・・・・アッ・・・・ガッ・・・・グワァ・・・・!!」
突然ギルド提督は苦しそうに頭を抱えると、通信回線が寸断されてしまった。
「通信・切れました・・・・」
「一体何が・・・・?」
「レーダーに反応、サイレンの星の周回軌道上に人工衛星らしき物体

をキャッチしました」
新見がサイレンの星近くに人工衛星の存在をキャッチし、報告する。
「モニターに表示してくれ」
「了解」
モニターに表示された衛星は蜘蛛の様な形をした人工衛星であった。
「あれは、管理局の？」
「いえ、管理局や管理世界で採用している人工衛星の中にあの様な形の物はありません」
良馬があの人工衛星は管理局の物かと訊ねると、フェイトはそれを否定した。
「ガミラスの物とも違う・・・・むろん、地球やガトランティスの物とも形が異なるな・・・・」
今まで遭遇してきた星間国家の人工衛星とも形が異なる。
「あの・・・・通信中に気づいた事があったんですが・・・・」
新見が恐る恐る意見をする。
「何だい？」
「通信中、あの指揮官の頭に真新しい手術痕の様な傷があったんですが、あの指揮官はつい最近、頭に怪我を追って手術した事があるんですか？」
「いえ、私の知る限りではギルド提督が頭部を手術したと言う事実も記録もありません」
新見が、ギルド提督が以前頭部を負傷し手術経験が有るかとフェイトたちに訊ねるが、またもフェイトはそれを否定した。
「もしかすると・・・・」
フェイトの回答を聞いて新見は顎に手を当て考える仕草をとると、
「通信長」
「はい」
「あの衛星から何か電波の様な物は出ていないかしら？」
「確認します」

新見はギンガに衛星の逆探知を行わせた。
「確認できました!!詳しい解析は出来ませんが、あの衛星から何らかの特殊な電波が出されています!!」
「その方向は?」
「それが・・・・」
「どうしたの?」
「それが・・・・衛星の出している電波は全て管理局艦隊へと流されているんです」
「やっぱり・・・・」
「どういう事です?」
「もしかしたら、彼らは洗脳されているのかもしれません」
『洗脳!?』
新見の推測に艦橋にいた全ての物が驚愕する。
「はい。恐らく彼らはあの衛星から発する特殊な電波に反応して何者かに操られているのではないでしょうか?その受信機が頭部に埋め込まれているとしたら・・・・」
「では、頭の手術痕はその為に・・・・?」
「はい。それにあの指揮官は通信の中で『円盤の様な艦隊から突然攻撃されて』と言っていました。もしかしたら、その『円盤の様な艦隊』があの衛星を設置し、彼らの頭部に受信機を埋め込んだのかもしれません」
「何て奴等だ・・・・」
永倉はまだ姿を見せない黒幕に怒りを露わにした。
永倉だけでなく、フェイトやティアナの管理局組も同じ様子。
「許せない、人の事を何だと思っているの・・・・?」
ギンガも同じで、特に彼女の場合はフェイト同様、他の人とは少し違う特殊な生まれ故か、生命に関しては人一倍気を遣う。
それに『洗脳』と聞いて、誰よりも不快感を出していたのも彼女だった。(←まぁ、原作では、敵の手に落ちて、洗脳され敵の手駒にされてしまったし、もしも、ギンガがこの世界に次元漂流しなければ、原作同様の運命をたどっていただろう)

「航海長、針路変更」
「えっ!?」
「目標はあの人工衛星だ。衛星を破壊し、管理局艦隊にかけられた洗脳を解く」
「了解」
「砲術長」
「はい」
「間違っても管理局艦には攻撃するな。彼らは自分たちの意思で此方に攻撃を仕掛けている訳ではないのだからな」
「了解」
まほろば　は針路を変更し、一路、管理局艦を操っているであろう人工衛星へと向かう。
フェイトとティアナは、管理局艦の皆が洗脳されていた事実に関しては、あまりいい気分ではないが洗脳が解ければ彼らも正気に戻るし、撃沈されずに済む。
彼らを助け出したら、一緒にミッドへ帰れると思っていた。
管理局艦隊からの攻撃を障壁と巧みな操艦で回避しながら　まほろば　は管理局艦を操っている人工衛星を目指す。
まほろば　の波動エンジンと管理局艦の魔導機関では速力差があり、まほろば　はあっという間に管理局艦を振り切った。
そして、
「主砲の射程内に衛星を捕捉!!」
衛星がようやく　まほろば　の主砲の射程内に入った。
「よし、撃て!!」
「主砲発射!!くらえ!!」
砲術長のフェリシアが、人工衛星目がけて主砲を放った。
衛星はバリア等の自己防衛機能や砲やミサイル等の迎撃機能を持ち合わせていない普通の人工衛星だったので、まほろば　の主砲を防御する術はなく、いとも簡単に破壊された。
「命中!!」
「やった!!」

「衛星の破壊に成功しました!!」
「これで管理局艦にかけられた洗脳も解かれる筈です」
人工衛星を破壊し、管理局艦の洗脳を解いた事により、艦橋にはホッとした空気が流れた。
フェイトとティアナも一安心の様子。
しかし・・・・
「っ!?レーダーに反応!!」
「なにっ!?」
突如、サイレン宙域の近海に多数の艦船がワープアウトしてきた。
「あっ、あれはっ!?」
ワープアウトしてきた艦船は全て円盤の様な形をした艦船。
それはα星と七色星団で交戦した艦船と同じ型の艦だった。
「まさか、あいつらがあの衛星を!?」
「敵艦隊、管理局艦に接近していきます!!」
「ま、まずいっ!!」
突如、ワープアウトしてきた艦隊は　まほろば　には目もくれず、洗脳が解けたばかりの管理局艦の方へと向かい、
そして・・・・
管理局艦に向けて次々と発砲していった。
装甲が地球艦隊の艦よりも貧弱な管理局の艦ではとても耐えきれず管理局艦は次々と沈められて行く。
しかも、突然洗脳が解けたので、恐らく中の乗員はその殆どが昏倒しているのだろう。
反撃や回避する様子もなく、まさに射的場の的の様に撃沈されていく管理局の艦。
「洗脳が解けた途端に、攻撃して、沈めるなんて・・・・」
「酷い・・・・」
「・・・・」
味方（管理局）の受けた余りにも酷い仕打ちに、フェイトとティアナは共に唇を噛んで、その悔しさを露わにする。
「敵艦隊此方に向かってきます!!」

管理局艦を片付けた敵艦隊は攻撃目標を　まほろば　に変更して迫って来た。
「戦闘用意!!航空隊スクランブル発進!!」
「えっ!?」
「艦長？」
「時空管理局と地球連邦は、互いに交流は無いが奴らがした事は余りにも人としての道を外れすぎている！それにアイツらを野放しにしていれば、今回の様な実験をまた繰り返すだろう」
「そうですね。それに敵が攻撃して来るのであれば、これは立派な自衛行動ですしね」
新見も良馬の行動を裏付けして、迎撃は正当なモノだと言う。
友軍でもなければ、同盟国でもない筈の管理局の仇を討とうとしている良馬たちにフェイトとティアナは感謝しつつも、今の自分たちには何も出来ないのだと、無力感を味わった。
「通信長」
「はい」
「ハラオウン執務官とランスター補佐官を医務室に・・・精神的に辛いモノを見てしまったので、ゆっくり休ませてやってくれ」
「分かりました」
ギンガがフェイトとティアナを医務室へと案内していく。
その際、ティアナが振り返り、
「月村艦長・・・必ず・・必ず勝って下さい」
と、味方の仇を必ず討ってくれと頼んだ。
「ええ、必ず勝ちますよ」
良馬は「必ず勝って、フェイトたちが抱いた無念を晴らす」と言って、二人を見送った。
敵の戦力は、高速駆逐艦三隻、護衛艦六隻、そして旗艦らしい巡洋艦が一隻の小規模艦隊であったが、敵はその機動力を生かし、一撃離脱戦法を繰り返してきた。
しかし、まほろば　の方も、航空機隊を展開し、周りを固め、遠方の敵は、まほろばの武装で、近距離の敵には航空隊が応戦し、敵艦船

を次々と沈めていく。
　そして、最後に旗艦らしい巡洋艦が回頭し、この宙域からの撤退を図ろうとしたが、
「逃がすか!!」
　フェリシアの精密な遠距離射撃により、沈められた。
　ギンガの付き添いの下、医務室へ辿り着いたフェイトとティアナの顔色は優れない色だった。
「どうしたんですか?二人とも?」
　そんな二人にリニスが訊ねる。
　医務室に居たリニスは艦橋での出来事を知らなかった。
「うん・・・実は・・・」
　フェイトはリニスに艦橋で見た事を話した。
　行方不明になっていた部隊に遭遇した事、
　その部隊がα星、七色星団で遭遇した星間国家の艦隊によって洗脳されていた事、
　その洗脳が解けた直後に敵に襲撃され全滅した事、
　それらの事実を話している時のフェイトは顔を俯かせ、声にも覇気がなく、ティアナも気まずそうな表情をしていた。
　そんな彼女らにリニスは、
「フェイト、ティアナさん」
「はい」
「・・・はい」
「此処での戦闘をよく見ておきなさい」
　と、言い放った。
「えっ!?」
「それってどういう・・・?」
　リニスの発した言葉に戸惑う二人。
「管理局の力を簡単にはね退ける勢力が実在した・・・それも、単なる犯罪組織ではなく、星間国家の宇宙軍隊が・・・魔法文化がない以外は、管理局より科学力も軍事力も上回っている。今後、管理局はそう言った星間国家との外交と管理局自体の改革を余儀なくされるで

しょう・・・・」
「・・・・」
「今のままでは、確実に管理局の未来に待っているのは破滅・・・だからこそ、此処での見聞の経験を生かして、ミッドに戻ったら貴女たちが先頭に立って今後の管理局を導いて下さい」
（されど、番人は認めず、）
（管理の世界と番人達は、更なる混沌の渦にのまれる）
リニスの言葉を聞いた後、フェイトの脳裏にカリムの予言の一説が浮かぶ。
テリオスをいとも簡単に破ったガトランティス、その艦隊と互角に渡り合い全滅させた地球防衛軍の戦艦
恐らく彼らの本国の地球でも、多数の戦艦やそれに類似する戦闘艦もある筈。
彼らの戦いぶりは、時空管理局の世界運営に強い疑問符、あるいは『Ｎｏ』を突き付けているかのように映った。
だからこそ、リニスの言った「此処での戦闘をよく見ておきなさい」の言葉の意味を理解したフェイトとティアナであった。
敵勢力を排除した後、　まほろば　はサイレンの星へと降下を開始する。
人を洗脳する人工衛星を設置した奴らなのだ。
あの幻影ももしかしたら、そうした類の物で、このサイレンの星に基地かそう言った施設を建設・設置しているのかもしれないと思い、もし、そのような施設があれば、破壊するつもりでいた。
サイレンの星の大気圏内を航行している　まほろば。
その　まほろば　に、
アナタたちは、ダレ？
と、女性の声が聞こえた。
ハッとして良馬は辺りを見回すが、誰もそのような台詞を言ったようにも思えないし、他の誰にも聞こえていない様子。
しかし、艦橋員の中で、ギンガには聞こえていた様で良馬同様、辺りを見回している。

「ギンガ、今の声、もしかして君には聞こえた？」
「は、はい・・・確かに女性の声で・・・」
「・・・もしかしたら」
　良馬は医務室へと内線を入れた。
「リニスか？」
「はい」
「さっき女性の声で、『誰か』と、聞かれたのだが、君には聞こえたか？」
「はい。私の他にもフェイト、ティアナさんも聞こえた様です」
　謎の女性の声は幻影を見たメンバーに聞こえた様だ。
「良馬さん、これは恐らく念話の一種だと思われます」
　ギンガが、この女性の声について見解を述べる。
「念話？・・・あのテレパシーみたいなやつか？」
「はい」
「ギンガ、この念話を送っている人物が何処から念話を送っているか、突き止められるか？」
「此方からも念話を送って聞いてみます」
　ギンガは全周囲に念話を飛ばした。
　自分たちの正体が地球防衛軍である事、
　幻影を見て、この星の近くに来た事、
　そして、この星の近くで何者かが洗脳実験を行っており、このサイレンの星にもそいつらの基地か施設があるかもしれないと思いこの星に降りた事、
　そして、先程、念話を飛ばした人物に正体と今、何処に居るのかを訊ねる。
　すると、
「返答がありました」
　どうやら、相手はギンガの念話に答えてくれた様だ。
　念話を飛ばしてきた人物の名前はジュラと言う。
　それによればジュラと言う人物は今、この星の南に位置する神殿に居ると言う。

ギンガはジュラに尚も念話を行い続け、
自分たちは敵意が無い事を説明する。
やがて、まほろば　が南の山間部と山間部の間に広がる平地の中で、ポツンとひっそり佇む神殿を発見した。
「この神殿の構造・ガミラスのモノに似ているな・・・」
神殿を見た良馬が呟く。
かつて、冥王星を占拠していたガミラス。
ヤマトの活躍でその基地は破壊されたが、辺境地に残されていたガミラスの基地、施設を防衛軍は占領した経緯があり、この時にガミラスの建築物を良馬は見ていた。
その時に見た建築物と今、目の前にある神殿は何処となく造りが似ていた。
良馬は調査隊を結成し神殿の調査へと向かった。
その中には先程までジュラと念話をしていたギンガも含まれていた。
誰も居ない神殿の中、
人はおろか、防衛システムや警備ロボの類も見当たらない。
神殿内は長い間、手入れがされていないのか通路は埃塗れになっていた。
ギンガは絶えずジュラと念話を行い、ジュラが神殿の何処に居るのかを訊ね、何気ない振りで皆をジュラの下へと誘導する。
そして、ジュラが居るとされる部屋のドアまで来た。
恐る恐る扉を開けると其処は薄暗い部屋で沢山の電子機器の様な物が置かれていた。
部屋の中に入っていくと、其処には大きな冷凍睡眠カプセルの様な物があり、その中に、水色のドレスを来た一人の女性が眠っていた。
ギンガが念話で、カプセルの中で眠っている女性に、「貴女がジュラなのか？」と、問うと、カプセルの中の女性は「自分がジュラだと」言った。
そして、ギンガは彼女に起きる事は出来ないのか？と訊ねると、
自分はもう一人ぼっちなので、このまま此処で永遠に眠るつもりな

のだと言う返答が帰って来た。
彼女の孤独を瞬時に理解し、自分もクイントに助け出される前、そして、この世界に次元漂流した事を思い出し、ならば自分たちと一緒に来ないかと、訊ねた。
ジュラは当初、戸惑っていた。
いきなり見知らぬ人に来ないかと問われ、そう簡単にホイホイついて行くほど、警戒心が無い訳ではない。
そこで、ギンガは自分も別の世界から次元漂流し、救われた経緯を話した。
そして、地球の中嶋家に養子として迎えられて新たな家族を得て過ごしている事をジュラに話した。
やがて、ジュラはギンガの話を聞きギンガたちと共について行く事を決めた様で、コールドスリープを解除した。
ジュラはギンガに付き添われて、神殿を後にして、まほろば　へと乗艦した。
良馬はジュラがギンガに思いのほか、懐いている様子だったので、ジュラの事はギンガに一任させた。
ギンガの方も快く了承した。
ただ、ギンガは通信長としての任務もあり、常にジュラの傍に居る事は出来ないため、ギンガはリニスにも応援を頼んだ。
そして、同じく遭難したフェイトとティアナにも彼女と仲良くやってほしい旨を伝えると、リニス、フェイト、ティアナも快く引き受けてくれた。
ジュラ自身、昔のスバルの様に極度の人見知りと言う訳ではなく、最初はぎこちなさもあるが徐々に打ち解けるだろうとギンガはそう思った。
医務室にて、ギンガはジュラと向き合うように座り色々と事情を聞いた。
良馬もオブザーバーとしてその場に出席した。
その中でまず彼女は昔、ヤマトと出会ったことが有ると言った。
これには流石に良馬たちも驚いた。

そして、ヤマトの出会いのエピソードを聞いている中で、彼女の母親があのサイレンの星の大地で眠っている事、
そして、一度父を追いかけて宇宙へと出たが、間に合わずに、母の眠るサイレンの星へと戻り、母と共に永遠の眠りにつこうとしていた事が分かった。
そして、ギンガがジュラの父の事を訊ねると、
ジュラは父の名前を出すのにかなり躊躇していたが、やがて意を決したかのように、父の名前を言った。
「私の父は・・・・アベルト・・・・アベルト・デスラーです・・・・」
「「「・・・・」」」
ジュラの父の名前を聞いた時、リニスもギンガも・・そして良馬も固まった。
そして、
「「「えええええっー!!」」」
医務室が揺れる程の声を出した。
「本当に貴女は、あのデスラーの娘なんですか!?」
「は、はい・・・・地球の皆さんには、父が大変ご迷惑をかけた様で・・・・申し訳ありません」
ジュラは深々と頭を下げる。
「い、いえ・・でも、肌の色が・・・・それに耳の形も・・・・」
ガミラス人は地球人やガトランティス人と違い青い肌をしているのが特徴だが、ジュラは肌の色が地球人と同じ色をしている。
それに耳の形も本に出てきたエルフと呼ばれる種族のような長い耳をしていた。
「私の肌の色や耳は母譲りなんです・・・・母の肌の色もあなた方地球の方と同じ色をしていましたから・・・・」
でも、これでジュラが父の名前を言うのに躊躇した理由が分かった。
ならば、ジュラには知る義務があるだろう。
「ジュラ、実は貴女のお父さん・・デスラーは・・・・生きているの」
「えっ!?」

父（デスラー）が生きていると言う事実を知り、ハッと顔を上げるジュラ。
そして、ギンガは自分が知っている範囲で、今、マゼラン星雲で起きている事をジュラに教えた。
デスラーが何故生きていたのかを知らないが、しかし、彼は現実に生きており、ヤマトの乗員が何人も彼の姿を見ている。
そして、ガミラス星の消滅とイスカンダルの暴走を地球に知らせてきたのは他ならぬ彼自身である事をジュラに告げた。
「父が・・・生きている・・・」
死んだと思われた父が生きている事実を知り、ジュラは安堵の表情を浮かべる。
「フェイトさん、あの人のお父さんは、ガミラスの総統だそうですよ・・・」
「ええ、そうみたいね・・・」
医務室にて、ギンガとジュラの会話を聞いていたフェイトとティアナもジュラの父があのガミラスの総統デスラーだと知って驚いている。
しかし、艦内にはガミラスによって家族や恋人、友人を亡くした者も大勢いる。
彼女がもし、デスラーの娘だと知れると後々不味い事になる。
男性乗組員から性的暴行を受ける恐れもあるし、その他にも乗員から私刑を受ける事だって十分にあり得る。
「ギンガ、リニス」
「はい」
「何でしょう？」
「彼女がデスラーの娘だと言う事は、今後他言無用とする」
良馬が二人に釘を刺す。
「はい」
「分かりました」
二人もジュラの父がデスラーだと知った時の乗員の反応を察したようで了承した。

「フェイトさんも、ティアナさんもよろしいかな？」
次に良馬は、フェイトとティアナにも同じことを言った。
「はい」
「勿論です」
フェイトとティアナも同じ女性として、ジュラの父の件がバレた時、彼女の身に何が起きるのかを察した様子で、この件についてはギンガとリニス同様他言無用と決めた。
ジュラを　まほろば　に乗せた後、このユークレシア孤立星系での幻影騒動は幕を下ろしたが、管理局側には多数の犠牲者を出した結果となり、
この星系を離れる前に此処で散っていった管理局員の為、黙祷をする時間が設けられ、フェイトとティアナは展望デッキにて、此処散った局員たちに黙祷を捧げた。
ジュラもこのサイレンの星で眠る母に黙祷を捧げ、まほろば　はこのユークレシア孤立星系から別れを告げた。
ユークレシア孤立星系を後にし、ヤマトを追いかける　まほろば。
そんな中、医務室では、
「それにしてもフェイトさん、凄い事になりましたね」
「うん、未だに現実とは思えないんだけどね」
「でも、私たち一国の国家元首の娘さんと同じ船に乗り合わせているんですよね？」
チラッと横目で見る二人。
其処には、リニスと会話を楽しんでいる様子のジュラの姿。
「フェイト、ティアナさん」
其処に、リニスが二人に声をかける。
「二人とも、ジュラさんに挨拶をしてはいかがでしょう？これから航海を共にする仲間なんですから」
リニスに勧められ、フェイトとティアナはジュラに挨拶をした。
「は、はじめまして。時空管理局所属執務官のフェイト・T・ハラオウンと申します」
「同じく、ハラオウン執務官の補佐をしております、ティアナ・ランス

ターと申します」
「初めまして。私は・ジュラです」
自己紹介をするフェイトとティアナにジュラは柔らかく微笑みかけてきた。
その様子はやはり王族特有のオーラが漂っていた。
ヴィヴィオも同じくクローンとは言え、一応王族なのだが、ヴィヴィオとは異なるオーラがジュラからは漂っていた。
少し話をしていたのだが、ジュラはこれから、メディカルチェックを受けるというので、フェイトたちは自室に引き上げた。
「マスター」
自室に戻るとフェイトのデバイスであるバルディッシュがフェイトに話しかけた。
「何?バルディッシュ」
「先ほどのジュラさんですが、やはり強力な魔力反応がありました。ランクはＡランクオーバーＡＡ。リンカーコアは全く損耗しておりません」
「そう、やっぱり」
ユークレシア孤立星系、サイレンの星の近くで見た幻影から彼女が高ランクの魔導師としての素質がある事を既に見抜いていたフェイト。
「ティアナはどう思う?ジュラさんが高ランクの魔力保有者であることを管理局に報告すべきだと思う?」
フェイト自身が関係した、ＰＴ事件や闇の書事件で、管理外世界にも天才的魔導師資質を持つ者が少なからず存在することが判明した結果、時空管理局は管理外世界からも魔導師を積極的にスカウトする方針をとっていたのだが、
「フェイトさん。私は報告すべきではないと思います」
ティアナは局員としては少々異端的な発言ではあるが、ジュラの事は管理局には、黙っておいた方が良いと言う決断をした。
「・・・続けて、ティアナ」
フェイトはティアナにその理由を訊ねる。

「はい、率直に言いますと、魔導師素質者の管理局入りは自由意思ということになっていますが、実際にはかなり強引で執拗な勧誘が行われており、少なからず管理局は反感を買っていると聞いています。それにこの先にあるイスカンダルではジュラさんのお父さんが待っているんです。死んだと思われていた父親との再会を私たち管理局が妨害する権利はありませんし、それにそのような事をすれば、ガミラスの怒りを買う事になります。そうなれば、ミッドは・・・」

ティアナの言う事も最もである。

家族愛については、フェイトは人一倍気にする方である。

それは幼い頃の自分の家庭事情が関係する。

父親と再会できそうな所に、高ランクの魔力を有している・・・そんな一方的な管理局側の理由で、折角再会出来る家族との仲を引き裂くのは人としてどうかと思うし、相手はあのガミラスの国家元首の娘。

もし、あのデスラーが自分の娘が管理局に連行と言う事態を拉致だと認識したら、ミッドに遊星爆弾の雨が降り、たちまちこの世界の地球の様に、管理世界に住む人類は絶滅の一途を辿る事になる。

ガミラス軍の艦船もこの地球防衛軍の艦船同様、管理局の次元航行艦では歯が立たない。

そもそも自分たちは救助された立場なのだから、ジュラを勧誘する権利なんて最初からなかった。

ティアナの考えを聞いたフェイトは微笑を浮かべた。

「うん。私もティアナと同じ考えだよ。ジュラさんにはイスカンダルでお父さんと再会してもらって家族で過ごして貰おう。だから、バルディッシュ。ジュラさんの魔力データは記憶しないでおいてね」

「それがよろしいかと。マスター」

「クロスミラージュ、あんたもね」

「了解です」

バルディッシュとクロスミラージュも積極的に同意したため、フェイトとティアナはこの件を封印した。

サイレンの星を出て数日・・・

まほろば　は未だにヤマトにおいついていない。
そんな中、ジュラの下にはギンガがよく訪ねる機会が多かった。
ギンガはジュラからガミラス語、そしてジュラの母、ジレル星人の言葉、ジレル語のレクチャーを受けていた。
元々士官学校にて通信科に在籍していた頃からギンガは様々な言語のスペシャリストになりたいと思い、様々な言語を学んでいた。
それにこの先、ガミラスとの邂逅が予測される中、少しでもガミラス語のマスターとその翻訳機の製作に勤しんでいた。
フェイトとティアナも個人的なのか？それとも執務官、執務官補佐官としてこの先、必要と感じたのか、ギンガと共にガミラス語、ジレル語のレクチャーを受けていた。
また、リニスはジュラの幻影を制御する為、彼女専用のデバイスの製作に取り掛かった。

そんな中、ワープを後一回行えば、ヤマトに追いつける距離だった為、ワープの準備を行っているその時だった。
「右舷、四時の方向から高熱源体反応、急速接近！」
艦橋内に緊張が走った。
「艦種は特定できるか？」
新見に訊ねる良馬に新見がややあってから答える。
「お待ち下さい・・・識別コードはガミラスのモノではありません!!これはガトランティスです!!モニターに表示します」
モニターに表示されたのは、カブトガニの様な機体・・・つい最近まで、自分たちが戦ってきた相手・・・ガトランティスの主力艦載機、デスバテーターだった。
「対空戦闘用意!!」
良馬はすぐに指示を出す。
何故ガトランティスの連中が此処に居るのか？
そんな疑問が一瞬浮かんだが、連中は宇宙をまたにかける放浪星間国家。
国家元首と本国であるガトランティスが滅んでもその残党が今も

太陽系に存在している様に、宇宙の各地に植民地を持つ彼らがこのマゼラン近海に艦隊を派遣してきても可笑しくはなかった。
やがて、デスバテーターからはミサイルが一斉に発射された。
「敵機、ミサイル発射!!」
「対空戦闘始め!!」
まほろば　からは、迎撃ミサイルやパルスレーザー、副砲が掃射され、デスバテーターのミサイルや機体自体へと襲いかかる。
迎撃網にかかり、爆発を起こすミサイルとデスバテーターの機体。
威力偵察だったのか、まほろば　は大した被害を受ける事も無くこの事態を脱した。
しかし・・・・
「レーダーに感あり!!艦影五!・・・・いえ、後方に更にワープアウトを確認!!艦数、次々と増えます!!」
艦橋のスクリーンには、後方の状況が表示されており、次々とワープアウトをしてくるガトランティスの艦影が表示される。
そして、
「敵艦隊最後尾に大質量のワープアウトを確認!!」
「大将のお出ましか・・・・」
最後にワープアウトをした旗艦と思しき艦を見て、良馬を含む艦橋員は驚愕と同時に、顔色を悪くした。
「あっ、あの艦は・・・・!?」
「間違いない・・・・」
「あの時の同型艦だ・・・・」
最後にワープアウトして来た艦はこれまでワープアウトして来た通常のガトランティス艦と違い、双胴船の様なシルエットをしていた。
それは紛れも無く、土星圏にて地球連合艦隊と激戦を行ったガトランティス太陽系侵攻艦隊、旗艦メダルーザと同型の艦影だった。
メダルーザに防衛軍は苦戦を強いられたにも関わらず、またもやその同型艦が出現した。
あの艦相手では土星圏と同じく苦戦が強いられるのは確実であっ

た。
　戦わず、話し合いが出来るのであれば、それに越した事はないが、先程のデスバテーターからの攻撃を見ると素直に話し合いに応じてくれる可能性は低そうだ。
「艦長、ガトランティス艦より通信が入っています」
「繋いでくれ」
「はい」
　通信回線を開くと、平和の大使とはとても思えない風体の男が映った。
　身長二メートル以上の巨体で、鋼の様な屈強そうな体に中世ヨーロッパ風の甲冑を身に纏い、袖無しのコートの様な上着を羽織り、腰には柄の入ったファルシオンの様な刀剣をぶら下げ、左手には刃渡り一メートルは有りそうな両刃のバスターソードを杖の様に床に刺している。
　オールバックの髪を後頭部で一つに纏め、戦傷なのか、顔の右半分には鍵爪でつけられた様な傷跡があり、畏怖を抱かせる面持ちをしていた。
「地球人よ、よく聞くがいい。我が名はゴラン・ダガーム。ガトランティス、マゼラン方面遠征軍提督なり」
　相手の名乗りに対し、良馬はスクリーンに向け、毅然とした態度で応じた。
「地球防衛、宇宙戦艦　まほろば・・・艦長の月村良馬です。当方に戦闘の意志はない。即刻攻撃を中止されたい」
　しかし、良馬の意見にダガームは「何を勘違いしている？」といった表情をし、言い放った。
「戦は武門の誉れ、兵を退くなど腑抜けの所業。この状況で和睦などあり得ぬ!!既に戦端は開かれた!!一度抜かれた刃は相手を斃すまで納めぬものなり!!」
「予告なく攻撃を仕掛けて来たのは、其方の方だろう。当方は自衛手段の為、応戦したに過ぎない。我々は先を急ぐ航海の途中だ。無駄な戦いをするつもりはない」

「笑止!!その様な弱腰の者にその艦は分不相応なり!!地球人よ!!我が軍門に下り、艦を明け渡すべし、さすれば生命は保障するものなり。返答はいかにっ!?」
ダガームの提案は交渉と呼べるものでは無く、テロリスト同等、高圧的で一方的な自分たちの要求を押し付けてくるものであった。
ダガームと良馬のやり取りは医務室のモニターでも表示されており、ガトランティス側の一方的な要求にリニスたちも苦虫を噛み潰したような表情をしてダガームに対し、嫌悪感を抱いた。
(あれで交渉しているつもりなの?一方的な押し付けじゃない。でも、管理局でもロストロギアの回収や管理世界編入に当たっては同様の事が行われているのよね・・・)
(同族嫌悪ってこういう事かしら?)
フェイトもティアナも管理局側から一方的にロストロギアを渡せと言われてきた他の世界の住人の気持ちが分かるような気がした。
交渉の余地は無く、降伏か?戦闘か?
そのどちらかしか選択肢は残されていない様だ。
はたして良馬はどの様な決断を下すのであろうか?

五十話　再会

「最後に勝敗を決めるのは、人の力だ!!」
「ガーレ・ドメル!!（ドメル万歳!!）」
「プレゼントだ！受け取れぃ！」
「こちら第三次攻撃隊、更なる攻撃の要を認む!!我が隊は敵機と遭遇、これと交戦中!!」
「天はこの手でヤマトを沈めよというのか・・・・ならば天命に従うのみ！」
「こんな結末、認められるかよぉ!!」
「どうやら、全員命令違反で軍法会議送りですな」
「我がガミラスに栄光と祝福あれ」

あの戦いから、約一年と半の時が経とうとしていた・・・・。

突如、まほろば　の前に現れたガトランティス艦隊。
しかも旗艦はあの火炎直撃砲搭載艦。
その艦隊司令官は　まほろば　に対して一方的に艦の明け渡しを要求してきた。
交渉の余地は無く、降伏か?戦闘か?その二択を迫られた良馬。
彼の選択は・・・・。
「断る」
当然、拒否の姿勢をとった。
つまり、戦闘を選択した。
元より、ガトランティスに屈するつもりなど毛頭ない。
艦橋に居る皆が頷き、ダガームを睨む。
すると、彼は良馬たちを小馬鹿にした表情で、
「ガハハハハハ・・・・よくぞ申した!!戦はそうでなければ楽しくない!!で、あれば、汝らには名誉ある死を贈ろうぞ。汝らが信じる戦死者の

集う魂の国へと逝くがよい!!ハハハハハハ・・・」
不気味な笑いと共にダガームの姿がスクリーンから消える。
「来るぞ!!総員、戦闘配備!!」
まほろば　の艦内には警戒警報を知らせるアラームが鳴り響き、乗員たちはそれぞれの配置へと着く。
ダガーム艦隊はナスカ級空母と左右に二隻ずつ計四隻のラスコー級巡洋艦を前衛に配置しており、前衛部隊指揮官イスラ・パラカスはナスカ級空母キスカにて、指揮を執っていた。
「あの艦を沈めるは、我等がキスカ航空戦隊よ!!他艦に後れをとるな!!」
『おおぉー!!』
パラカスの指揮の下、ラスコー級巡洋艦は、キスカを守る様に進撃し、キスカ自体も進撃しながら、艦載機の発艦シークエンスを開始する。
前衛部隊の進撃と共に、ダガームの本隊も進撃を開始する。
「科学奴隷として使えそうな技術者のみ生かせ!!それ以外の者は全て皆殺しじゃ!!女とて容赦なく殺せ!!」
『おおぉー!!』
ダガームは各艦に通信を送り、彼の通信を聞いた将兵たちは声を上げる。
彼らは殺戮を行う事に喜びを感じ、士気を上げるのだ。
それがダガーム艦隊の流儀であった。
ただ一つ意外なのは、こういう輩は女子供を捕まえ慰み者にするのが通例なのだが、彼らはそれを行わず、命そのものを奪う極悪非道な連中だった。
「あの艦・・・まほろば　の艦長首をあげた者にはたんまりと褒美を出すぞ!!」
ダガーム艦隊の各艦はメインエンジンを吹かし、全速で　まほろばへと迫った。

ダガーム艦隊　前衛部隊　旗艦　空母キスカ　艦橋

「艦載機、発進準備完了!!」
「よしっ、直ちに発艦させろ!!」
「はっ!!」
キスカの方も艦載機の発艦準備が整い、デスバテーターが次々と格納庫から飛行甲板に移動する。

宇宙戦艦　まほろば　第一艦橋
まほろば　では、敵の前衛空母が今まさに艦載機を発艦させようとしている光景を捉えた。
「艦長、此方も艦載機で迎撃しますか?」
新見がコスモタイガーを出撃させるか訊ねる。
「いや、この近距離での出撃は危険だ。発艦中に撃ち落されてしまう。それよりも後部砲塔へエネルギー伝達及びミサイル発射準備」
「了解。後部砲塔へエネルギー伝達及びミサイル発射準備」
「副長」
「はい」
「この宙域で逃げ込めるような惑星が無いかを捜索してくれ」
「了解」
「砲雷長、後部主砲で空母の甲板上を撃て!!狙いは甲板の上に居る艦載機だ」
「艦載機ですか?」
「ああ、此方の射程内で堂々と発艦準備をするのが悪い」
「ですが、直接空母本体を狙った方が効率なのでは?」
良馬が何故空母本体では無く、空母の甲板を狙うのか理解しかねたフェリシア。
その訳を良馬が説明しようとした時、新見が惑星を発見し、それを報告した。
「艦長、近くに浮遊惑星があります」
「よしっ、航海長、針路変更、惑星方向へ転舵」
「了解、針路変更」
まほろば　の艦首を惑星方向へ向け、全速で惑星へと向かう。

「えっ？艦長、逃げるんですか？」
「逃げる」
　フェリシアの質問に良馬は躊躇なく答える。
「このままこの宙域に留まっていれば、あの戦艦（『メガルーダ』）が搭載している例の転移砲・火炎直撃砲で此方が沈むのは確実だ。だから時間稼ぎの為、空母の甲板を撃ち、損傷させて、あの空母に連中の足止めをしてもらう」
「成程」
　空母を沈めない訳を聞き、納得した様子のフェリシア。
　確かに土星で見たあの戦艦（『メダルーザ』）の砲撃・火炎直撃砲の威力は強力だ。
　短時間で・・・しかも一撃で防衛軍の主力艦が次々と沈められ、土方提督も一時、土星の環まで後退し、敵を誘い込んで自滅させた戦法をとった。
　正直に言ってあの戦艦（『メダルーザ』）を真正面から相手をするなど、自殺行為に等しい。
「後部砲塔、ショックカノン測的完了、目標敵空母甲板」
「撃ち方始め!!」
「撃ち方始め!!」
　まほろば　の第四、第五砲塔からショックカノンがキスカの甲板向けて放たれ命中。
　出力を絞り、艦体そのものを狙っていないと言っても甲板には爆装した艦載機がおり、次々と誘爆。
　発艦用設備を破壊し、整備員を艦外へと放り出す。
　突然の砲撃を受け、キスカは行足を止める。
　護衛の艦もそれぞれ回避行動を取り、足並みが乱れる。
「よしっ、今だ!!最大船速!!逃げろ!!砲雷長、ついでに煙幕弾と機雷を連中にプレゼントしてやれ!!」
「了解!!」
　まほろば　からのスモーク弾をもろともせず、突っ込んで来るダガーム艦隊だったが、その艦隊にスモークの次は自走式機雷が襲い掛

かる。
仕方なくダガーム艦隊は機雷の除去の為、スモークに向けて発砲するが、スモークの中で発砲したせいで、誤って味方を撃つ艦も居た。
だが、全体の統率がとられていないダガーム艦隊はスモークを大きく迂回した駆逐戦隊が思ったよりも早く　まほろば　に追いついて来た。
「副長、惑星の解析を急いでくれ!!」
「は、はい」
駆逐戦隊は射程内に入るや否や砲撃してくる。
しかし、狙いは雑であった。
だが、「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる」かのように、何発かは　まほろば　に着弾した。
「艦底部に被弾!!」
「技術班!!応急修理を急げ!!」
「後部砲塔!!続けて撃て!!」
フェリシアが第四、第五砲塔へ発射命令を出し、敵の行足を止めようとする。
互いに高速で移動している為、正確な射撃は出来ず、被弾し落伍した艦もいれば、当たり所が悪く爆散する艦もいた。
「あれだけの被害を出しても何故追撃を止めない!?」
味方の犠牲をもろともせず、追撃して来るダガーム艦隊に良馬は思わず舌打ちをする。
ガミラスでさえ、此処までの追撃などしない筈だ。
どうやら、この艦隊の連中は人命を軽視した戦い方をする連中の様だ。

ダガーム艦隊　旗艦メガルーダ　艦橋
まほろば　の思わぬ行動にダガーム自身も思わず舌打ちをした。
「なかなかやりおるではないか。しかし、我が艦隊からは逃れられぬぞ!!火炎直撃砲用意!!目標、まほろば!!」
ダガームの命令でメガルーダは速度を落し、安定した体勢をとる。

火炎直撃砲を正確に打ち込むには安定した態勢でないと撃てないのだ。
それは土星圏で対峙したバルゼーのメダル―ザも同じで、突如発生した水蒸気爆発とその気流により、正確な射撃が不可能となり、そこへ防衛軍の砲撃を受け、火炎直撃砲を封じられた。
最もそれはバルゼーの慢心が招いた結果でもあった。
しかし、この場には水蒸気爆発や気流を生む、氷のアステロイドは無く、絶好の射撃体勢が取れた。
だが、火炎直撃砲を使用する事で、ダガームは当初の狙いであったまほろば　と技術者の捕獲と言う事を諦めた。
「火炎直撃砲、発射準備!!着弾予測地点周辺の艦艇は退避せよ!!」
オペレーターが各艦に火炎直撃砲着弾予測点の座標を送り、退避を促す。
メインスクリーンには前方の惑星へ逃げ込もうとしている　まほろば　の映像が表示されていた。
「星を盾に逃げると見える・・・ふん、臆病者が!!」
まほろば　の行動を見てフンと鼻で笑うダガーム。
そして着々と火炎直撃砲の発射準備が進められて行く。
そんな中、
「グリアデが突出し過ぎています。提督、このままでは照準にズレが生じる可能性があります」
照準を担当している砲手から意見が入る。
突出している味方の巡洋艦グリアデにも先程の退避命令は届いている。
だが、やっとのことで　まほろば　に張り付いたのだ。
しかも周りには自分以外誰もいない。
自分たちに褒美の絶好のチャンスが来たのだ。
グリアデの乗員は皆そう思っていたに違いない。
こういった所が集団ごとに統括された艦隊の欠点である。
友軍は味方でもありライバルなのだ。
故にチャンスが到来すれば、味方を出し抜いてでもそのチャンスを

モノにする。
「グリアデめ、功を焦りおって・・・」
ダガームは唸るが、決してグリアデが悪い訳では無い。
これはダガーム艦隊の本質そのものに問題があったのだ。
「如何いたしましょう?このままでは、グリアデを巻き込んでしまいますが・・・?」
「構わぬ」
副官のボドム・メイスが指示を仰ぐと、ダガームは即答する。
「えっ!?そ、それはどういう事でしょうか?」
ダガームの言葉の意味が分からず、その真意を訊ねるメイス。
「我がガトランティスの栄光の輝きを彼奴等に見せてやれ」
「まっ、まさか・・・提督・・・」
ダガームの言葉の意味を理解したメイスは震える声で言う。
彼は味方艦諸共　まほろば　を火炎直撃砲で屠ると言うのだ。
「火炎直撃砲発射!!」
ダガームの命令が下され、メガルーダの艦首からは灼熱の炎が放たれた。

メガルーダから火炎直撃砲が発射される少し前、
まほろば　は全速で前方の惑星へと逃げていた。
追撃して来るのは敵の巡洋艦一隻。
ガトランティスの容赦ない追撃を受け、「しつこい」と思いつつも、動きを止めればあの火炎直撃砲の絶好の的になる。
故に止まる事は許されなかった。
その時、
「敵旗艦に高エネルギー反応と微弱ながら空間歪曲反応を確認!!」
新見の報告を聞き、艦橋内に緊張が走る。
彼女の報告は、防衛軍にとってトラウマとも言うべき、あの最悪な兵器、火炎直撃砲が発射体制に入った事を知らせるモノだった。
「っ!?来るぞ!!下げ舵一杯!!取り舵１５!!急げ!!」
少しでも今の航路からズレなければ、あの灼熱の炎に飲み込まれ

る。
「了解!!下げ舵一杯!!取り舵１５!!」
永倉もあの火炎直撃砲の威力を知る為、今の航路から少しでもズレて回避、もしくは少しでも被害を減らそうと回避努力を行う。
やがて、まほろば　を追いかける敵巡洋艦の更に後方の空間に波紋が浮かび、グニャリと歪むと中心に向かって光が収束した。
次の瞬間、その中心に巨大な炎の塊が現れ、敵巡洋艦諸共　まほろば　に襲い掛かって来た。
超高温と灼熱の炎のエネルギー波は近づくだけで敵の巡洋艦を消失させ、その爆炎さえも跡形も無く飲み込んだ。
そしてその炎は　まほろば　をも飲み込もうとしたが、事前の回避行動と敵の巡洋艦の影響で照準が少々狂ったのか、直撃を免れた。
しかし、まほろば　の右舷側を通り過ぎていった炎のエネルギー流は　まほろば　の波動防壁を消失させ、右舷側の装甲の一部を融解させた。
そして、艦内ではゴゴゴゴゴゴ・・・と物凄い振動が襲い掛かり、乗員は必死に何かに掴まった。
「や、やっぱり、火炎直撃砲か・・・」
灼熱の炎の脅威が去り、自分たちの予測が外れていなかった事を認識した良馬たち。
出来れば、外れて欲しかった。

宇宙戦艦　まほろば　医務室
まほろば　の医務室にて、初めて火炎直撃砲の威力を目の当たりにしたフェイトたちは冷や汗をびっしょり掻いていた。
「あ、あれが・・・」
「火炎直撃砲・・・」
火炎直撃砲の存在は救助された時に映像を見て、その存在を知っていたが、こうして生でその威力を見ると、波動砲とは別の意味で脅威であった。
「何なのアレ・・・」

ジュラ自身も初めて見た火炎直撃砲に驚いている。
「物凄い熱量でしたよ・・・」
「確か高エネルギー弾を転移させて相手の至近距離に直接打ち込む兵器でしたよね？」
「波動砲の威力もすごかったけど、こっちも凄い威力ね」
「まほろば　の人は過去に経験があるから、今の攻撃は回避できだけど・・・」
「もし、何も知らなかったら・・・そして、あんなモノが直撃すれば・・・」
「　まほろば　の装甲と言えど、簡単に融解していたわね・・・それにしても・・・・・」
「え、ええ・あいつら、射線上に味方が居たのに構わず撃つなんて・・・」
フェイトとティアナも味方諸共吹き飛ばそうとした敵艦隊の司令官の愚行に嫌悪感を抱いた。

宇宙戦艦　まほろば　第一艦橋
「敵の後続艦接近!!」
火炎直撃砲を逃れた　まほろば　に止めをさそうと敵は再び艦隊戦へと切り替えて来た。
しかし、艦隊を差し向けると言う事は、火炎直撃砲は暫く撃っては来ない筈。
もし、敵の司令官が味方の艦、全てを犠牲にしてまでも此方を沈めようとするのであれば、話は別だが・・・・
「艦長、惑星の解析が終了しました」
此処で漸く前方の惑星の解析が終わった。
それによると、前方の惑星は大きな空洞惑星となっているらしい。
(惑星サイズのサンゴ礁の様なモノか・・・しかし、逃げるには持ってこいの星だな。障害物が多い星ならば攻撃もしにくい筈だ)
「敵を引き付けつつ前方の惑星へ降下、空洞を利用して敵を振り切る!!」

まほろば　はエンジンを吹かし、惑星へと全速で降下して行く。
惑星は年老いた星の様で表面には水も木も無く、大きな穴を彼方此方に開けている星で、表面を見る限り人工構造物は確認できず、この星は無人惑星の様だ。
穴の大きさはとても大きく　まほろば　でも余裕で通り抜ける事が出来た。
その上をビームが通り過ぎていく。
ビームは　まほろば　に命中することなく、惑星を構成する鉱物に命中する。
すると、着弾点が爆発を起こし、大岩が降り注ぐ。
敵艦も　まほろば　を追って次々と降下して来る。
しかし、艦隊行動を取るにはこの惑星の内部は余りにも不向きだ。
個々で障害物を回避しつつ　まほろば　に攻撃を仕掛けてくる。
「くそっ、こんな状況下でもお構いなしかよ!!」
永倉が毒づきながら操艦レバーを握りながら前方を睨む。
まほろば　もただ攻撃を受けるだけでは無く、反撃を行う。
反撃を受け、墜落する艦、爆散する艦がいる中、後続艦の反応が漸く消えた。
追撃艦を振り切ったようだ。
だが、その直後、今度は上から大きな爆発が起き、まほろば　目掛けて岩が降って来た。
「くそっ、此処からいぶり出す気か!?」
ガトランティス艦隊は空洞内の追撃戦は不利と判断した様で岩盤を崩し、まほろば　の動きを止めようして来た。
「これ以上、下層を航行するのは無理か・・・やむを得ない航海長、上昇だ」
この星を出ると火炎直撃砲で沈められる恐れがある。
しかし、このまま下層に居ると瓦礫で押し潰される。
そこでこの星の最上層を航行しようとしたら、敵の巡洋艦が待ち構えていた。
「ＶＬＳ開口!!ミサイル撃て!!」

煙突ミサイルから多数のミサイルが巡洋艦めがけて放たれる。
迫る煙突ミサイルを回転輪胴砲で撃ち落していくが、全てのミサイルを撃ちおとす事はかなわず、命中し墜落して行く艦もいたが、それでも連中は諦めない。
ミサイル攻撃を免れた巡洋艦と駆逐艦は　まほろば　と並走し、ビームを撃って来る。
互いに砲撃戦をしながら惑星の中を進んでいくと、突如、惑星の中にある穴からニュルリと大きなイカまたはタコの様な姿の生き物が大量に出て来た。
穴から出てきたイカまたはタコの様な生き物は　まほろば　と敵の巡洋艦と駆逐艦を追って来る。
その姿は　まほろば　のレーダーでも捕えていた。
「後方より、未確認飛行物体接近!!」
「敵の援軍か?」
「いえ、この反応は艦船反応ではありません!!未確認飛行物体増殖しつつあり!!左右から針路を塞ぐように接近してきます!!」
周囲を確認すると、まるで大海原を泳ぐように体を発光させながら
まほろば　と敵艦の後ろからイカかタコの様な姿をした軟体生物様なモノが迫って来る。
この軟体生物の様なモノが無害な物体とは無縁な事は敵艦の様子を見れば分かる。
敵艦は　まほろば　よりも迫り来る軟体生物の様なモノに対しビームを発砲している。
軟体生物の様なモノは砲撃にも怯むことなく敵艦へと接近し、船体全部に軟体生物の様なモノが付着すると、敵艦は墜落し、爆発・炎上した。
やがて、軟体生物の様なモノは　まほろば　の船体にも吸着し、破損した箇所から触手の様なモノを艦内に突っ込んで来た。
この様子から明らかにこの軟体生物の様なモノな物体は鉱物ではなく、生命体である事がわかる。
実際、この軟体生物の様なモノを分析した新見からは「生体反応が

ある」と報告を受けた。
「宇宙生物か・・・」
「破損個所から生物が侵入!!」
「艦長、波動エネルギーが低下しとるぞ!!」
火炎直撃砲を回避した際、生じた傷から触手を差し込み　まほろばのエネルギーを吸い始めた宇宙生物。
このイカまたはタコの様な宇宙生物かつてテレザート宙域に点在していたバキューム鉱石の生物版の特徴を持っている様だ。
「まずいぞ、艦長このままエネルギーを吸われ続けられたら、十分足らずで航行不能になるぞ!!」
「こんな時に・・・」
思わず苦虫を潰したような表情になる良馬。
先程、敵艦が墜落したのはエネルギーを全て吸い尽くされたからだ。
「このままじゃ墜落しちまいます!!艦長、ローリングしてあのイカ共を振り落します!!」
永倉が操縦レバーを操作し、艦を回転させる。
これだけの大型艦が回転すれば、遠心力も相当なモノなのだが、宇宙生物は小さいモノは幾つか取れたが、大型のモノはそのまま食いついたままだった。
「くそっ、全然取れねぇ・・・艦長どうしますか?」
この軟体生物の様なモノが生物である以上、星を離れれば、気圧や空気の問題から死滅する可能性はある。
しかし、星の外へ出れば、ガトランティス艦隊が待ち受けている。
あの火炎直撃砲や飛行甲板を修復した空母が艦載機を展開させて来る事も考えられる。
それならば・・・
「総員ワープ準備!!」
良馬の下した命令に艦橋要員はギョッとした表情になる。
今まで惑星内でのワープなんてあのヤマトでさえ、実例が無いのだ。

しかし、このままエネルギーを吸われ続けたら、航行不能になり、まほろば　は敵艦に拿捕あるいは射撃の的にされて沈む。
それよりは危険な賭けではあるが、ワープでこの星からの脱出をした方が生存の可能性はある。
「宇宙生物は波動エネルギーを吸っています。であれば、ワープ進入時の極性反転で排除できるかもしれません」
新見がシミュレートで理論的な裏付けをする。
「うん・・・・航海長、カウントダウンは省略!!タイミングは全て航海長に一任する!!」
「了解!!機関長出来るだけエネルギーをワープ機関へと回して下さい!!」
「分かった!!シリンダーがぶっ飛んでもエネルギーは供給してやる!!」
「総員に告ぐ!!本艦はこれより敵艦及び宇宙生物の突破の為、ワープに入る!!全員対ショック姿勢をとれ!!」
良馬は　まほろば　に艦内放送を流し、乗員に注意を促す。
良馬の放送を聞き、医務室では、リニスや原田たちは負傷者が横になっているベッドにベルトを巻き、負傷者がベッドから落ちない様に固定する。
「惑星内でワープなんて・・・・」
「大丈夫なんでしょうか?」
ティアナとジュラが放送を聞き、不安そうに言う。
「二人とも、ここは月村艦長を信じよう」
フェイトはティアナとジュラを励ますが、それでもやはり不安の色は拭えなかった。
「ワープ可能エネルギー保持限界点まであと十秒・・・・九・・・・八・・・・七・・・・」
井上がカウントダウンを行い、そしてワープの条件が漸く整い、
「ワープ!!」
永倉がワープ機関を作動させ、　まほろば　の前方にはワームホールが出現し、まほろば　はその次元の裂け目へと入って行く。

取り付いていた宇宙生物は時空の裂け目に削ぎ落とされるかのように　まほろば　の船体から振り落とされ、それでも頑張って張り付いていたモノは、通常空間と異次元の間に生じる圧力によってすり潰された。

まほろば　の姿はそのまま亜空間へと消え、惑星軌道上には目標をロストしたダガーム艦隊が残された形となった。

折角の大物を取り逃がしたダガームの怒りはすさまじく、たまたま近くに居たメイスを殴りつけ、

「怒髪衝天!!」

両手を上げてウガッー!!と叫んだ。

此処で時系列は　まほろば　がダガーム艦隊の攻撃を受ける前まで遡る。

かつて、七色星団にてヤマトと雌雄を決したドメル機動部隊。

その中で第二空母と称されたガイベロン級多層式航宙母艦のランベアは七色星団の戦いで撃沈はされなかったものの、酷く傷ついた状態であった。

一時はヤマトの砲撃を左舷側の艦首に受け、七色星団のイオン乱流の雲海へと沈んだが、乗員の必死の努力で何とか推力を回復させ、命からがら七色星団宙域から脱出できた。

しかし、その際、艦長のルタン・ベスター大佐が戦死してしまい、現在はドメル幕僚団の中で唯一の生き残りであるフォムト・バーガー少佐が艦の指揮を執っていた。

そんな彼は今、ランベアの艦長室にて片膝を立てて椅子に腰に掛け、机の上に置いたホログラム発生装置の映像（ホログラム）を見つめていた。

士官としては行儀が悪いが、生憎とフォムト・バーガーと言う男はこういう男なのだ。

ホログラムには、一人のスカートを穿いたガミラス人の少女が映っていた。

長く美しい赤い髪を藍色のリボンで結い上げ、そして自分と同じ青

い肌を持つ少女が笑みを浮かべながら語り掛けていた。
「えっ!?ミランガルと同じ部隊なんだ。じゃあ、姉さんと一緒だね♪～」
「メリア・・・」
勿論ホログラムに話しかけてもホログラムの少女は記録された内容以外の事は話さない。
だが、漂流している現状では部下の前では強く振る舞わなければならない。
彼が弱音を吐けるのは、このメリアと呼ばれたホログラムの少女の前だけであった。
彼は、ドメル幕僚団では最年少であり、性格は非常に血気盛んで直情的。
師団が電撃戦を展開する際に先陣を切るドメル軍団の切り込み隊長を務めていた。
何故彼は、自分の死を恐れずに戦場を駆け巡れたのかと言うと、若くして守るべき大切なモノを失っていたからだった。
直情的な性格のバーガーは己の無力を人一倍憎んだ。
尊敬する上官であったドメル、「親爺」と慕っていたハイデルンは共に乗艦していたゼルグート級一等航宙戦闘艦、ドメラーズⅢにてヤマトとの戦いでイオン乱流へと誘い込まれ、艦は大破、最後は艦橋部分を切り離し、ヤマトの艦底部に張り付き、自爆して落命。
戦友であったゲットーとクライツェはヤマト所属の航空隊と激しいドックファイトの結果、撃墜され戦死。
長い間、共に数多の戦場を駆け巡った家族の様な仲間たちをヤマト一艦の為に失った。
命からがら七色星団から脱出したが、これは明らかにガミラスの軍規に照らし合わせると、敵前逃亡罪だ。
七色星団の戦いの後、ガミラスはヤマトと本星で決戦を行い、その後に敗れた。
一時、デスラー総統の死亡説も流れたが、デスラー総統は存命し、小マゼランにて、ガミラス残存艦に集結命令を下した。

集ったガミラス残存艦隊はデスラーと共にヤマトへ復讐戦を行うが、最終決戦の中、デスラーは古代と・・・地球と和解し、新天地を求める大航海へと入る。
その前に、最後に生まれ故郷のガミラス星を見る為、再びマゼラン星雲へ一年半ぶりに帰って来た。
ガミラス残存艦隊がマゼランへ接近した時もデスラーは再び招集命令をかけていた。
最初の招集命令の時は、ランベアの修理がまだ終了していなかった為、受信出来なかったが、これまでガミラスがあちこちの小惑星に建造した補給基地の廃墟を転々としながらランベアは艦の修理と物資の補給を行ってきた。
そして二度目の招集命令は受信でき、バーガーはその招集命令に応じた。
敵前逃亡罪で裁かれれば死刑になると分かっていたが、今となっては惜しむ命でもない。
自分一人の命で何とかランベアの他の乗員の命だけは助命してもらおうと思っていた。
ランベアの乗員はその多くが老兵か、まだあどけなさが残る少年兵たちばかり・・・。
せめて少年兵の彼らだけは親御さんの下へ帰してやりたかったのだ。
ただ唯一の未練としてはヤマトに・・・地球に対し、一矢報いる事が出来なかったことだろう。
しかし、機会があれば、其れを行いたいとバーガー本人は今でもそう思っている。
「ねぇ、フォムト。今度姉さんと一緒に・・・」
ホログラムの少女が其処まで言った時、彼はホログラムのスイッチを切った。
ブザーが鳴り、「伝令であります!!」と、扉の外で少年兵の声がしたからだ。
扉を開けると、まだまだガミラス軍兵士のカーキ色の軍服が似合わ

ない一人の少年兵が立っていた。
「バーガー艦長代理」
「少佐でいい・・・なんだ？」
「バーレン大尉殿が艦橋へお越し下さいとのことです!!」
「分かった」
バーガーは伝令の少年兵と共にランベアの艦橋へと向かった。

ガイベロン級多層式航宙母艦　ランベア　艦橋
「バーガー少佐殿をお連れしました」
「わざわざすまんな」
艦橋には、七色星団の戦いにおいて、ヤマトの波動砲の発射口にドリルミサイルを撃ち込んだ空間重爆撃機ＤＢＧ８８　ガルントのパイロット（機長）を務めたヴァンス・バーレン大尉がバーガーを待っていた。
彼自身もバーガーやランベアの様に、ヤマトにドリルミサイルを撃ち込んだ後、母艦（ゲルバデス級航宙戦闘　ダロルド）への帰還途中で、ヤマトの航空隊の攻撃を受け、機体が損傷した状態でイオン乱流の中へ墜落した。
しかし彼らはあの戦いとイオン乱流の中、辛くも生き延び、ランベアへ収容され、以降バーガーと共に艦の運営に当たっていた。
「仕方ねぇよ。艦内電話が使いたくても配線が彼方此方切れちまって使えねぇ状態なんだから」
ランベアは今、艦内の一斉放送は出来るが、個室同士を結ぶ艦内電話は使用不能で、復旧させるには一度ドック入りか、修理に使う資材を調達する必要があった。
艦内には寝ている者も居たので呼び出しだけで一斉放送を流すわけにもいかなかった。
「それで、何かあったのか？」
「友軍艦艇が接近しとる」
「友軍？」
「ああ、第八警務艦隊じゃ・・・停船命令も出とる」

「数は？」
「十二隻じゃ、内二隻はゲルバデス級じゃぞ」
「ゲルバデス級？」
　バーガーは第八警務艦隊のその艦種に引っかかるのを覚えた。
「艦名は？」
「ミランガルとニルバレスじゃよ」
　艦名を聞いたバーガーは肩を落とす。
「ったく、よりにもよってアイツの艦かよ」
「うむ、確かミランガルの艦長は、リッケのお嬢ちゃんじゃったな」
　バーガーとバーレンはミランガルに乗艦する第八警務艦隊司令兼ミランガルの艦長を知っている様子だった。
　発光信号を打ちながらランベアへと接近するゲルバデス級航宙戦闘母艦のミランガルを見ながらバーガーは呟いた。
「爺さん、ミランガル相手じゃ仕方がねぇ停船だ。あっちの方が足は速ぇからな」
「そうか。お前さんがそう言うのであれば、そうしよう」
「アイツが来たら、艦長室へ通してくれ」
　バーガーはオペレーターに指示を出すと、ポケットに手を突っ込んで艦橋を後にした。
　ランベアが機関を停止させると、甲板はダークグレー、艦体は赤、黒、灰色の迷彩色が施されたゲルバデス級航宙戦闘空母、ミランガルがランベアの左舷側に接舷した。
　周囲にはミランガルの同型艦ニルバレス他、デストリア級航宙重巡洋艦、ケルカピア級航宙高速巡洋艦、クリピテラ級航宙駆逐艦がランベアを包囲する様な陣形で停止した。
　そして接舷したミランガルから発進した一艇の内火艇がランベアの甲板へと着艦し、そこからガミラス式の船外宇宙服を着た人物が一人、ランベアの甲板へと降り立つ。
　やがて、その人物はランベアの艦長室へと向かった。
　バーガーが待機していた艦長室のドアがノックの後、開かれ、彼は予想通りの人物が着た事で口元をフッと緩めた。

「やっぱりお前か、ネレディア」
「久しぶりね、フォムト」
切れ長の瞳、長いまつ毛、細く高い鼻筋が通り、ネレディア・リッケ大佐は軍服でなければ、ファッションモデルと言われればそれを信じてしまうぐらいの美貌の持ち主であった。
短く切った赤紫色の髪でもその美貌を損なわせないのは、彼女の立ち振る舞いに優雅さと気品があるからだ。
彼女はバーガーと同い年で地球年齢に換算すると今年で二十八歳になり、彼とはガミラスの士官学校でも同期の間柄であった。
それにも関わらず、女性士官でバーガーよりも階級が上なのは、異例中の異例であり、その訳はガミラスの歴史の中で『チタベレーの戦い』と呼ばれる戦場において大きな武勲をたてた為であった。
ネレディアは、バーガーに改めてデスラーからの集結命令、そしてヤマトを含む地球艦船との戦闘行為の中止命令を伝えた。
バーガー自身もその命令は受けていたが、やはりこうして改めて伝えられると、釈然としない。
そんな様子のバーガーを見て、ネレディアは呆れる様子で言う。
「不服そうね」
「当たり前だ。どうして連中との戦いをやめなくちゃいけねぇんだ？」
「貴方も軍人でしょう？それなら上官の命令には従う義務があるんじゃない？ましてやこれは総統からの命令よ」
「それは時と場合によるだろう!!それに軍人以前に俺は男だっ!!」
ふぅ～・・・と、ネレディアが小さく息を吐く。
そこへ、艦長室のドアがノックされた。
「入ります」
先程の伝令の少年兵がお盆を持って入って来た。
お盆の上にはカップが二つ乗っかっていた。
「どうぞ」
少年兵はネレディアにカップを差し出す。
「ありがとう」

ネレディアは少年兵に礼を言う。
バーガーもお盆の上のカップを取り、少年兵にアイコンタクトで部屋から出ろと伝える。
「失礼します」
役目を終えた少年兵は艦長室から出て行った。
彼はそのままランベアの艦橋へと戻る。
「どうじゃった？」
艦橋にてバーレンが少年兵にバーガーの様子を訊ねる。
「少佐殿は物凄い剣幕でした」
「ふん、だろうな・・・」
バーレンには大体の予想はついているみたいだった。
「ミランガルの艦長はとても綺麗な方でした・・・」
少年兵ははにかみ、僅かに頬を赤く染めた。
「やはり、リッケの嬢ちゃんだったか・・・」
少年兵の様子を見て、ミランガルの艦長は自分の予想通りの人物だった事に思わず昔を懐かしむ様な目をするバーレンだった。
「嬢ちゃん？」
少年兵はバーレンの「嬢ちゃん」と言う言葉に首を傾げた。

「でも、総統はヤマトと・地球と和睦をしたのよ。貴方が不服だろうとなかろうと既にガミラス軍からのヤマト、地球への攻撃は禁じられた。これは総統からの厳命で従わなければ反逆罪よ。それにただでさえ、貴方は七色星団からの敵前逃亡罪も適用されるかもしれないのに・・・」
艦長室ではネレディアが引き続きバーガーを説得していた。
「だからこそだ。どうせ、死ぬなら、連中に一矢報いて仲間の仇をとる」
バーガーは握り拳を大きく振って力説する。
「・・・相変わらずね」
「な、何？」
二人の様子、そしてネレディアのこの一言でバーガーとネレディア

・・・どちらが大人なのかよくわかる。
軍人は合法的に人殺しを許される職業である。
それ故に暴走しない様に規律はしっかりと定められている。
例え、停戦命令が下るほんの僅か前に親や恋人が殺されても停戦命令が下されれば即時に戦闘行為を止めなければならない。
命令を無視すれば、軍人は賊へと成り下がる。
そしてその刃を政府へと向ければクーデターの要因となる。
だからこそ軍隊内には軍人を取り締まる軍人・「警務」「憲兵」と言う部署があるのだ。
戦争となれば、互いに殺し殺され、恨みと仇の数は増えていく。
しかし、どこかで妥協しなければ、延々と殺し殺される戦争が続く。
そして軍人はただの殺戮者となる。
これはガミラスの士官学校でも初期の段階で習う事で、当然バーガーも教官から教えられた・・・と言うか、知らないまま士官学校を卒業する事は不可能だ。
「馬鹿な所は変わっていないって言う意味よ」
ネレディアはガミラス軍の大佐ではなく、旧友を見る温かな表情で言う。
彼女の表情に自分も少々熱くなり過ぎていたと、自覚した様で、気まずそうに彼女から視線をそらし、
「馬鹿は生まれつきだ」
と、まるで照れ隠しの様に言った。
「此処(艦長室)に来るまで艦内の様子や乗員の顔を見てきたわ。乗っているのは、老兵やさっきみたいなまだまだ若い少年兵ばかり・・・皆、七色星団の戦い以降宇宙を漂流し、疲れ切っている。皆が貴方の様に元気なわけじゃないのよ」
「そんな事は分かっている」
「空母と言っても艦載機は本来の搭載機分の半分以下、弾薬も食糧も底をつきかけている・・・そんな状況で戦えるの？大勢の乗員を貴方の私怨の為に巻き込むつもり？」
「俺だってアイツらを家族や仲間の下に帰してやりたい。でも、それ

と同時に仇も討ちたいんだ・・・・ドメル閣下もハイデルンの親爺もゲットーもクライッツェも皆・皆、ヤマトに・地球人に殺されたんだ」
バーガーは痣が出来るのではないかと言うぐらいの力で自分の膝をギュッと握る。
そんな様子のバーガーをネレディアは彼の左頬に残る傷を見ながら呟く。
「また・・・あの時みたいに？」
その人言を聞き、バーガーは「そ、それは・・・」と、口ごもる。
これ以上説得してもラチが明かないと思ったネレディアは作戦を変更した。
「とりあえずこの宙域から離れましょう」
突然話題を変えられたバーガーは顔を上げる。
「この宙域は魔女が住む海よ」
「魔女？ああ、宇宙に住む魔女がその美しい歌声で、船乗りを惑わしてその魂を喰らうってヤツか？馬鹿馬鹿しい」
「でも、実際にこの付近の宙域で過去に何隻もの船が行方不明になっているのよ。中には軍艦も含まれているわ」
「下らねぇ、そんな御伽話を信じているのは宇宙に出た事のないガキぐらいなもんだろう。そんな話を信じてガミラス軍人なんてやってられっかよ」
そう言い放ったバーガーであるが、その瞬間、彼の耳に聴こえてくる音に「なんだ？」と椅子から立ち上がり周囲を見渡す。
音のする方向を探ろうとしたが、その音は全方位から聴こえてくる様だ。
次第に聞き慣れてくると、それは女の歌声であった。
少年兵辺りが、故郷の母親か恋人を思い、曲を流しているのか？
それとも何かの誤作動か？
いずれにせよバーガーは、この迷惑な艦内放送を止める為、艦長室にあるマイクで艦内に放送を流した。
「こら!!艦橋!!変なモンを流すな!!」

「い、いえ!少佐殿此方は何も流していません!!」
艦内の全員が聴こえるスピーカーからビクつく少年兵の声がした。
「だったら、何処の部署で此奴を流しているのか調べろ!!何だ!?この歌は?」
「う、歌・でありますか?その様なモノは聴こえませんが・・・・」
「何を言ってやがる!!現に女の様な声が歌を歌って・・・・」
バーガーが其処まで言うと、彼の手に握られていたマイクをネレディアがスッと掴む。
そしてバーガーからマイクを取り上げ、真剣な目で彼に言った。
「何も聴こえないわよ。フォムト」
「お前まで何を言っている!?」
「しっかりして、本当に何も聴こえないわよ」
「な、んだと・・・・」
ネレディアの表情から彼女が嘘を言っている様には見えない。
しかしバーガーの耳には確かに女の歌声が聴こえおり、その声は次第に大きくなっていく。
やがて、危険を知らせる警報音が艦内になり始めた瞬間、周囲の空間が歪んでいくような感覚がバーガーを襲った。

五十一話　シャンブロウへの誘い　ようこそ、大和ホテルへ

突如、現れたガトランティス艦隊から攻撃を受けた　まほろば。
ガトランティスが誇る強力な兵器、火炎直撃砲を搭載した戦艦から逃れる為に逃げ込んだ惑星にはエネルギーを吸う未知の宇宙生物が多数潜んでいた。
ガトランティス艦隊、そして宇宙生物から逃れる為に前代未聞の惑星内でワープを行った　まほろば　だった。
まほろば　は何とか無事にワープアウトした。
航海長の永倉が目を覚ますと、彼は一時、まほろば・そして自分の身に何があったのか、理解できなかったが、次第に意識が戻っていくと、何があったのかを理解した。
まほろば　の艦内は電灯が落ちており、辺りは薄暗かった。
電力が落ちていると言うのに非常電源が働いておらず、非常灯もついていない。
薄らと見えて来た自分の視線の先には、まほろば　の操舵桿が見えて来た。
反射的に彼は操縦桿を握った。
そして、その操舵桿から伝わって来る反応に違和感を覚えた。
「ん?・舵が・・勝手に流されている・・・」
操舵桿を握りながら、ふと窓の外を見ると、彼は更に困惑した。
通常ワープアウトをすれば、別の宙域へと移動する。
だが、今自分の目の前に広がる光景は星の海ではなく、辺り一面灰色の雲か霧がかかったような奇妙な光景が広がっていた。
やがて、自分以外の艦橋員たちも意識を取り戻し始めた。
「大丈夫か?・みんな?・」
良馬が艦橋員の安否を確認する。
「は、はい・・・・」

「何とか・・・」
「大丈夫です」
どうやらみんなにケガは無いようだ。
「各部、被害チェックを急げ」
次に良馬は　まほろば　の各箇所に被害が無いか、乗員にケガはないかを確認した。
まほろば　の各箇所にも被害は特に無く、乗員にも怪我人等は出なかった。
フェイトとティアナ、ジュラも特に異常は無いとの事だ。
「航海長、現在位置は？」
良馬は永倉に今の位置を訊ねる。
「そ、それが・・・分かりません」
「えっ？」
窓の外には星の海では無く、一面灰色の空間が広がり、皆は永倉同様困惑する。
そんな中、まほろば　の艦内の電灯が灯り、今まで停止していた艦内の機能も作動し始めた。
しかし、現在位置は不明のまま・・・
すると、まほろば　はまるでどこかへと呼び寄せられているかの様に勝手に動き始めた。
「どういう事だ？舵が効かない・・・オートパイロットは切って有る筈なのに・・・」
永倉は操舵桿を握り必死に艦の制御を取り戻そうとするが、舵はウンともスンとも言う事をきかず、何処かへと向かって行く。
乗員たちは戸惑いながらも現在位置の確認、突発的な事態に備え、周囲の警戒を怠らない様に警戒態勢を強めていた。
この状況でパニックを起こせばそれはより事態の悪化を招くのは訓練学校や士官学校で基礎として習う事である。
現在位置の特定をしていた新見が良馬に報告をする。
「艦長、星が一つも観測できません」
新見がコンソールを何度も操作するが、モニターに表示されるのは

『観測不能』と言う文字だけである。
「レーダーはどうだ？」
「・・・此方もダメです。周囲に反応なし・・・周りに反射するモノが何もありません」
レーダー画面も反応が無く、真っ白な映像のみ。
良馬は当初、この空間はヤマトがイスカンダル及びテレザートへの航海の途中で紛れ込んだ次元断層と言う場所なのではないかと思った。
しかし、ヤマトの記録にあった次元断層の記録と現在の状況が少々異なる事から此処が次元断層なのだろうかという疑問も生まれる。
「艦長、操艦機能は全くダメです。マニュアルモードにも切り替わりませんし、非常停止機能も言う事を利きません」
「機関長、エンジンはどうだ？止められるか？」
「こっちもダメじゃ、エンジンを止めようとしても制御できん。フライホイールが勝手に動いとる」
「・・・」
まほろば　は勝手に動いているが、故障している訳でも暴走している訳でも無さそうだ。
まるで外部からハッキングでも受けて操作されているみたいだった。
「此奴は一体何処へ行こうとしているんだ？」
様々な手段を試したが、それが全てダメと言う事で永倉は半ば諦め状態でシートに体を預ける。
「艦長、此処はヤマトが何度か落ちたとされる次元断層と言う場所なんですか？」
ギンガが不安そうに良馬に訊ねる。
「最初はそう思ったが、もし此処が次元断層ならば、他にも沢山の宇宙船が難破して居る筈だ。だが、周りにはその反応も無く、更に次元断層では時間の流れも通常の空間とは異なるし、時空の性質も違う・・・その為、エンジンのエネルギーも吸われ航行不能になる・・・でも、まほろば　のエンジンにはその様子は全く無い・・・故に此処が次元断

層とは言えない」
「それじゃあ此処は・・・」
「分からない・・・次元断層なのかもしれないが、我々の知る次元断層とは多少異なる性質の・・・未知の次元断層なのかもしれない・・・」
宇宙にはまだまだ未知な空間が多く存在する。
明確な答えが出ないまま　まほろば　は進んでいく。
そして・・・
「なっ、なんだ?あれはっ!?」
前方の様子を窺っていた永倉が声をあげる。
灰色一色の空間に漸く星の様なモノが現れた。
その星はまるでコマの様に水平に自転し、北極と南極と思しき場所から強烈なピンクの光を上下に放ち、北半球、赤道、南半球の位置それぞれ一つずつピンクのリングを持ち、赤道のリングは物凄く巨大で、地球であれば、月軌道まで到達するぐらいの大きさがあり、こんな奇妙な形の星は今までの天文学では観測されない全くの未知の星であった。
そんな奇妙な星へ　まほろば　は向かって行く。

宇宙戦艦　まほろば　医務室
医務室でもこの奇妙な空間にフェイトたちは困惑していた。
「此処は一体何処なんでしょうか?」
「分からない・・・」
フェイト自身も次元航行艦乗りの義母（リンディ）や義兄（クロノ）からもこんな次元があるなんて聞いた事がない。
フェイトとティアナが不安に、ジュラは何やらソワソワして落ち着かない様子だった。
「どうかしましたか?ジュラさん」
ティアナが心配そうにジュラに話しかける。
「あっ、いえ・・・その・・・何だか、この空間に入ってから妙に懐かしい様な気がして・・・」
「懐かしい?」

「は、はい・・・何だか母と同じ様な力を感じるんです」
「ジュラさんのお母さんの力・・・」
身体に異常があるわけではなさそうだが、ジュラはその後も何だか落ち着かない様子であった。

宇宙戦艦　まほろば　第一艦橋
「どうやら、目的地はあの星のようじゃのう・・・」
井上がスクリーンに表示された奇妙な星を見ながら呟く。
新見とギンガはこの奇妙な星を解析しようとコンソールを操作している。
「　　」
「ん？」
そんな中、良馬は何かが聴こえたような気がして辺りを見回す。
「どうしました？艦長？」
フェリシアが心配そうに良馬へ声をかけた。
「あっ、いや、何でもない」
良馬は（空耳か？）と思いつつ前方の星をジッと見た。
やがて、まほろば　は惑星の地表へと降下し始めた。
惑星の表面には多くのガスが対流している。
この惑星が地球や火星の様に地殻を持つ惑星なのか？
それとも木星の様にガス状惑星なのか？
現時点では判断がつかない。
どこまでも続く分厚い雲を通り抜け、ゆっくりと降下して行く　まほろば。
まほろば　の船体が雲に触れるとまるで水面の様に波紋が広がる。
「惑星地表を確認。現在の高度、推定四千二百。惑星表面は何らかの液体で構成されている模様」
惑星表面の液体を調べたくても今の　まほろば　は完全に操艦機能を外部に乗っ取られているため、液体のある場所へ向かって調べる事も出来ない。
まほろば　の乗員に出来ることはセンサーや計器を読み取り、少し

でもこの惑星の情報を得ようとする事しか出来なかった。
やがて、メインノズルの噴射が抑えられ、大気によって　まほろばは自然と減速して行った。
次第に速度を減速していく　まほろば　のレーダーに大きな光点が表示され、ピンと警告音が鳴る。
「レーダーに感あり!!前方に巨大浮遊物です!!」
新見の報告に全員が前方を注視するが、白く濁ったガスの為、見通す事が出来ない。
しかし、視界が段々と晴れていくと　まほろば　の前方に巨大な柱の様な構造物の影が見えて来た。
操艦レバーはゆっくりと前方へ倒れ、まほろば　は緩やかな角度をとって減速し、柱へと接近して行く。
「あ、あれはっ!?」
「十字架?」
防衛軍が所有している戦艦の中でも大きな部類に属する　まほろば　が芥子粒程の大きさ位にしか見えない位、巨大構造物の全体を把握するのは難しい。
しかし、何とか巨大構造物が十字に重なっているのを何とか確認でき、フェリシアは、思わず口にする。
「どうやら此処が目的地の様だ」
まほろば　の様子を見て、良馬が呟く。
その　まほろば　は巨大な十字架の下層へ向かって誘導されて行く。
近づくと益々その大きさを実感される。
遥か下面に広がる星は不気味な雰囲気があるが、ガスでは無く、地表面を持ち表面に液体を保持する地球と同じようなタイプの星の様だ。
木星の様に強力な重力を有している訳でもない様だが、少々重い物質で出来ているにしても大気が存在する惑星に置いてこれだけの巨大構造物を浮遊されている事に　まほろば　の乗員は畏敬の念を抱かずにはいられなかった。

（この中に大きな飛〇石でもあるのかな？）
フェリシアは昔見たアニメ映画で巨大な城を空に浮かべる程の力を持つ〇行石がこの巨大な構造物の中に入っているんじゃないかと思った。
謎の招待者はこの壁に刻まれた文字を見せたいのか、ゆっくりと壁を右側にしながら飛行させ、まほろば　のサーチライトが「読め」と言わんばかりに自動点灯させる。
しかし、壁に刻まれている文字は地球の文字でもなく、ミッド、ガミラス、ガトランティスなどの星間国家の文字とも違う文字だった為、解読は不可能だった。
やがて、艦首バーニアが吹き、急制動をかけると、ロケットアンカーが射出され、アンカー部は霧の中へと消えていく。
しかし、鎖の部分がピンっと張っている為、恐らく何処かに突き刺さったのだろう。
まほろば　をこの巨大な構造物の下に呼び寄せた謎の招待者はその後、何のリアクションも起こさない。
通信が入る様子も無く、まほろば　から様々な周波数で通信を送っても感度は無いし攻撃して来る様子も無い。
そこで、この惑星を探査する事になった。
この巨大な十字架は明らかに人工建造物であり、此処まで　まほろば　を誘導して来たのは外部の何者かによる意思だ。
ならば、下面に広がる惑星の何処かに誰かが住んでいるのかもしれない。
まほろば　に搭載されている上陸用舟艇にて、この惑星の探査が開始される事になった。
上陸用舟艇は、惑星降下用の艦載内火艇で衛星軌道上の艦船から敵地である惑星に降下することを前提に設計されており、艇体には装甲が張られそれなりの武装も施されている。
下部にキャタピラを装備し不整地の疾走が可能となっている。
人員や物資輸送の双方を効率よく行えるように、大きさの割には、カーゴルームは広く、内側の壁面にはロングシートの座席がある。

乗降扉は艇正面にある。艇内レイアウトはカーゴルームが前、操縦席が後部上方にあるという独特なもの。
操縦室は四人乗りであり、パイロットは後部の専用扉から乗降する。
なお、カーゴルームと操縦室はつながっておりカーゴルームからの乗降も可能である。
探査に向かうのは、上陸用舟艇のパイロットとして加藤、通信員としてギンガ、探査・分析要員としてバトライザー、そして良馬もこの探査に参加した。
当初、この探査に良馬が参加する事に皆は反対したが、まほろばは今、動くに動けない状態。
そんな状況では、艦の指揮など執る事も無く、ただ待つ事よりも実際にこの奇妙な惑星を直に見に行きたいと言う彼の知的好奇心でもあった。
良馬と付き合いの長い永倉と井上は良馬らしいと苦笑したが、新見は最後まで良馬が探査へ赴く事に対して渋っていた。
この場にターニャがいれば、恐らく新見と同じ事を言い、同じ様な表情をしていただろう。
まほろば　から発進した上陸用舟艇は惑星の重力に引かれて降下して行く。
巨大構造物には出入り口らしきものは無く、やはりこの惑星に招待者の手掛かりがあると思った探査班のメンバーは惑星への降下を開始して行く。
かなりの高度を降りて行くと、その先には何らかの液体を貯めた水面が現れた。
「惑星表面ニハ生命反応ハ感ジラレマセン」
探査・分析をしていたバトライザーが良馬たちに報告する。
この惑星には他に人工構造物は見つからず、それどころか山や谷、森といった自然物も見つからない。
表面は生物の息吹が全く感じない余りにも無機質な空間だった。
「人が住んでいる訳じゃないのか・・・よし、水中も探知してみよう」

「了解」
加藤は操縦桿を前に倒し、上陸用舟艇は水面に接近し、やがて、水の中へと潜航して行く。
水の中にもやはり魚を始めとする水生生物の存在が確認出来ない。
潜航して行くと、次第に辺りは暗くなっていき、艇内は機器の明かりだけが灯り不気味な感じだ。
「深度五十・・・五十五・・・」
バトライザーが深度計の数値を読んでいく。
そんな中・・・
「　　」
（ん？歌・・・？）
ギンガの耳に何かが聴こえて来た。
それは女性の歌声であったのだが、良馬と加藤にはその歌声が聴こえていない様子だった。
ギンガは念の為、センサーにて、この歌声が何なのか確かめようとしたが、センサーには何の反応が無い・・・
つまり、この歌声は自分にしか聴こえていない事になる。
その瞬間、突然機体が激しく振動し始めた。
コンソールには幾つもの警告ランプが点灯し、モニターには危険を知らせる『Ｗａｒｎｉｎｇ』の表示が点滅しながら警報音を響かせている。
「どうした？この警戒音はなんだ!?」
「分かりません。突然、操縦不能になって・・・」
加藤は必死に艇のコントロールを取り戻そうと操縦桿を握る。
だが上陸用舟艇は一向にコントロールを取り戻さず、この惑星に吸い寄せられた　まほろば　同様、何処かへと誘導されて行く。
「航法コンピューターガ外部カラハッキングヲ受ケテイマス。コノママデハ危険デス」
バトライザーも警告するが、上陸用舟艇は速度を変える事無く沈降して行く。
まほろば　から「状況を知らせ」と言う通信が入り、ギンガが此方

の状況を知らせたが、まほろば　の方では、此方からの通信が受信出来ていない様子。
やがて、まほろば　からの通信も受信出来なくなった。
原因は惑星表面の大きな変化があった。
今まで液体で覆われていた惑星表面が突如、灰色の壁に覆われたのだ。
それと同時にあの巨大構造物にも変化が現われた。
最下層部の下部が惑星へと伸びていき、惑星表面を覆っていた壁と連結した。
それはまるでこの惑星と巨大構造物が一つの機械の様であり、良馬たち、探査隊をその内部に飲み込んだみたいだった。
救助に行きたくても今の　まほろば　は相変わらず、操艦不能で動くことが出来ずに行くに行けない状況の為、皆が出来ることは探査隊のメンバーの無事を祈ることぐらいしか出来なかった。
一方その頃、探査隊の方は必死に上陸用舟艇のコントロールを回復させようとしたが、一向に事態は改善しない。
「現在の深度は?」
良馬の問いに操縦桿を握る加藤は「計器が読めません」と叫ぶ。
コンソールにあるモニターは相変わらず点滅を繰り返し、時々表示される数値も『深度九百六十』と全くあてにならない数値が表示される。
「いくら装甲が有るとはいえ、このまま沈殿して行けば、いずれは安全潜行深度を越えて、圧潰するぞ」
「それは分かっていますが、操縦桿が・・・・」
ギンガは　まほろば　に通信を入れるが　まほろば　からは一向に通信が入らない。
沈殿して行く上陸用舟艇の先に明るい水色に光る場所が見えて来た。
この水中が海だと仮定すれば明るいのは人工物の証明しか考えられない。
地下都市、海底都市等の人工建造物があり、明るくなっているのだ

ろう。
上陸用舟艇はその光に向かって急加速していく。
「このままじゃ、ぶつかる」
加藤はこの光の先に構造物があり、其処に衝突するのかと思った。
それは良馬とギンガも同じ考えだった。
「全員、ショックに備えろ!!」
良馬が叫ぶ。
やがて上陸用舟艇は光の中に飛び込むと・・・・
バシャ――――――ン!!
「えっ?」
探査隊は水音と目の前の光景に唖然とした。
上陸用舟艇は先程まで海の底へ沈殿していたと思ったら水面を出て空を飛行していた。
そして、眼下には広大な熱帯雨林の様な森広がっていた。
「海底に海と森が広がっていたのか・・・・」
「一体どんな構造をしているんだ?この星は・・・・」
こんな目茶苦茶な構造の星なんて常識を逸している。
しかし、現にこの目茶苦茶な星は存在し自分たちは其処に居る。
いつの間にか操縦機能も回復しており、上陸用舟艇はこの目茶苦茶な星の熱帯雨林の上空を飛んでいる。
「まるでアマゾン見たいですね」
加藤が眼下の熱帯雨林を見ながら呟く。
「確かに・・・・」
自然物は存在したが、鳥や動物、人間の姿は確認出来ない。
「あ、あれは何でしょう?」
ギンガがキャノピー越しに何かに気がつき指さす。
その先には直径が何十キロもありそうな巨大な大木が見えた。
大木は周囲の熱帯雨林の樹木とは比較にならない程の大きさで、熱帯雨林の中心にキノコ雲が立っている様にも見える。
皆が巨大な樹木に目が向いていると、ピピピピピ・・・・と、通信の受信音が鳴った。

やっと　まほろば　との通信が繋がったと思い、ギンガが操作すると、それは　まほろば　からの通信では無かった。
「艦長、ガミラスからの救難信号です」
「ガミラスからの？」
「はい。発信から何日が経っているのか、向こうの状況は詳しくは分かりませんが、間違いありません。この信号パターンはガミラスのモノです」
「どうしますか？艦長」
「・・・救助に向かう」
「えっ!?でも・・・」
ガミラスへ救助に向かう事に加藤は少し不満な様子。
「ガミラスと地球は和解したんだ・・・昨日の敵は今日の友だ。それにガミラスが我々よりも先に遭難していたとすると、この惑星の情報を我々よりも持っているかもしれない」
「は、はい」
上陸用舟艇が熱帯雨林の上空を飛んでいると、やがて蛇行する一本の川へと出た。
救難信号は川上から発せられている様だ。
加藤の操縦する上陸用舟艇は光点目がけて飛行する。
先程までの操縦不能状態とは随分差がある。
「発信点近ヅキマス。高度ヲサゲテクダサイ」
水面擦れ擦れを飛んでいくと、信号はジャングルの中から発せられており、上陸用舟艇は飛行モードから地上走行モードへと移り変わり、発信点目指して進んでいくが、その途中で土壌の関係から、これ以上は進めなくなり、バトライザーに留守番をさせ、良馬たちは徒歩で信号の発信点を目指した。
熱帯雨林の空気成分は地球のモノと変わらず、放射能等人体に有害な物質は計測されなかった為、三人はヘルメットを脱いだ。
亜熱帯特有の気候で少し蒸し暑い。
そんな中、良馬と加藤は探査キットと非常食等が入ったサバイバルキットを背嚢に詰め、コスモガンを片手に持ち、ギンガは携帯用の通

信機、救急キット、サバイバルキットを背嚢に詰めて発信点を目指す。
（やっぱり妙だ・・・・此処は海底の筈なのに、こうして川や森がある・・・・それにこの惑星の近くには恒星は無かった筈なのに、まるで太陽と同じような光がさしている）
周囲を警戒しつつ、この星の環境に疑問が深まる。
そんな中、
「やっぱり・・・・此処・・来た事が有る・・・・」
「えっ？」
ギンガはポツリと呟く。
「私、此処に来た事が有ります!!」
ギンガは昔の記憶を呼び戻し、幼少期の頃の思い出とこの場所を重ねた。
まだ自分がナカジマ家に養子に来たばかりの頃、家族で旅行へと行った第六管理世界・・・・アルザス・・・・
元機動六課ＦＷ陣のキャロ・ル・ルシエの生まれ故郷である世界・・・・
その世界へ家族でキャンプ旅行に来た時の森と目の前に広がる森があまりにもそっくりだった。
無論、良馬と加藤は驚くしかない。
ギンガの故郷はミッドチルダと呼ばれる魔法文明が発達した世界であり、此処がその魔法文明が発達した世界とはとても思えず、また加藤の方はギンガが異星人と言う事実を知らないので、地球から離れたこんな訳の分からない星にギンガが以前来た事が有るなんてとても信じられない。
疑惑を抱きつつも、三人は信号の発信点へと向かった。
先頭に加藤が歩き、その後ろを良馬、ギンガが歩く。
そんな中、良馬がギンガに話しかける。
「ギンガ、さっき此処に来たと言っていたが、此処がミッドチルダと言う訳じゃないよな？」
「ええ、此処はミッドチルダではありませんし、管理局が今まで観測したどの管理世界でもありません・・・・」

当然のことながら、ギンガは此処がミッドチルダではないと言い、その他の管理世界でもないと言う。
此処が以前、自分たち家族がキャンプ旅行に来たアルザスならば、幻獣生物が沢山居る筈だが、この森からは鳥の鳴き声一つしない。
しかし、ギンガは以前この熱帯雨林へ来た事が有ると言う。
「ギンガはどういう経緯で此処に似た熱帯雨林へ来たの？」
「昔、家族で他の世界へ旅行しに来た時です」
ギンガが此処に似た世界へ来た理由を話した時、
「艦長!!見て下さい!!」
先頭を歩いていた加藤が何かを見つけた様だ。
急ぎ、加藤の下へと行くと、其処には信じられないモノが鎮座していた。
「な、何だ？あれは・・・？」
「救難信号はあそこから出ています」
ギンガがハンディースキャナーを向けて確認する。
「で、でもなんであんなモノが此処に・・・」
今、三人の目の間に鎮座していたのは『やまと』だった。
しかし、『やまと』と言っても自分たちの知る宇宙戦艦ヤマトでは無く、旧日本海軍が建造した洋上時代の戦艦大和だった。
（何だか、前にも同じような光景を見た事があるな・・・）
海とはかけ離れた場所に鎮座している戦艦大和を見て、デジャヴを感じる良馬。
彼はガミラス戦役時代に蒸発した海の底で眠っていた戦艦大和を古代たちと見た事があったので、デジャヴを感じるのも当然と言えば当然だった。
「行ってみるしかないな」
密林に鎮座している黒鉄の城を見つめながら良馬は決意を固めた。
ガミラスからの救難信号はあの大和から発せられている。
「で、ですが艦長、この森林地帯に戦艦大和なんて・・・何かの罠かもしれませんよ」
「虎穴に入らずんば虎子を得ず・・・もし、この星に　まほろば　を誘

い込んで者がいるとしたら、あの大和の中に居る可能性が高い」
確かに此処まで歩いて来て人工建造物はあの巨大な十字架以外はこの大和だけである。
ならば、この惑星の住人があの大和の艦内に居る可能性も十分あり得る。
この星を出る手懸かりになりそうなのは、あの大和ぐらいしかない今、この現状を打開する為に、調査隊のメンバーは戦艦大和へと向かった。
近づけば近づく程、奇妙な光景だった。
旧日本海軍が建造した超ド級戦艦大和は静かに森の中に鎮座していた。
((何でこんな所に?))
調査隊のメンバーはそんな疑問が浮かび上がるが、解答は出る筈も無い。
周りに海も無ければ、超ド級戦艦が通れそうな大きな河川も見当たらない。
大和は其処にあるのが当然と言わんばかりにジャングルの中に存在していた。
此処がかつて海で地殻変動等によって水が干上がった。
と言う無理矢理な仮説も考えたが、大和の風化具合から、この大和が此処に存在してから、どんなに多く見積もっても半年以内だ。
その証拠に艦全体は苔も生えていなければ草木にも覆われていない。
大和の至近距離まで行くと、其処には降ろされたままのタラップがあり、それを上がり、甲板へと出てみると、デッキの板材は腐食している様子は一切見受けられない。
周囲に人の気配無いが場所を海へと移し人員と燃料を積み込めば動かせるのではないかと思うぐらい完全な形で残されていた戦艦大和。
良馬が艦橋を見上げると、見慣れたヤマトの姿とはちょっと違うが、類似している箇所は見られる。

「艦長、此処から入れるみたいです」
入り口を探していた加藤が、艦橋下部にあった開いたままのハッチを指さしながら報告する。
コスモガンのエネルギー量と安全装置が外れているかをチェックした後、
「・・・行くぞ」
良馬たちは戦艦大和の内部へと入った。
艦内も外と同じように人の気配は無く、非常灯の赤い灯りがボゥっと灯っており、何だが不気味である。
そんな中、ギンガにある変化があった。
(少し体が重たいような・・・魔力が練りにくい・・・この中もＡＭＦが充満されている様ね・・・)
大和艦内には地球同様、ＡＭＦが充満しており、魔力の精製が上手くいかない。
頼れるのは、ホルスターに収まっているコスモガンと体術だけだとギンガは警戒しつつ通路を進んだ。
やがて通路を進んでいくと、一つの水密扉へと辿り着いた。
警戒しつつ、良馬がその扉のドアノブを握ると鍵は掛かっていない様で、ドアノブを倒し、ゆっくりと開けると其処には信じられない光景があった。
「なっ!?」
「何だ?此処・・・?」
「まるで、ホテルみたいですね」
扉の向こうには戦艦には不釣り合いな部屋・・・ヨーロッパ風のレトロなホテルのロビーとなっていた。
そこは天井が高く、ガラス張りになっており、窓の外には白い雲が流れている。
高級なホテルを意識して作られたのか、大理石の床に釣り合う様な高級なカーペット、柱は年季の入った大理石製の柱で中央に立つと、左右対称のシンメトリーとなっていた。
またガラスケースの中には戦艦大和に関する資料や写真、小さな模

型が展示されており、壁には幾つもの絵画が飾られていた。
上層部へ行くにはジャンバラの二重扉がついたこれまたレトロなエレベーターのみだ。
エレベーター扉上部にある半円形の文字盤には十一の数が表示され、時計の様な針は四を指していた。
ロビーの電灯は灯っていたのだが、エレベーターには電力が供給されていない様で、ボタンを押してもエレベーターは起動しない。
此処にも人の居る気配、居た様子は無いが、ゴミ一つ落ちておらず、埃も溜まっておらず、荒廃している様子も無い。
フロントにある呼び出しボタンを押せば、フロントの奥の方からホテルマンが出てきても可笑しくない雰囲気である。
「入ったのは間違いなく戦艦なのにどうして中はこんな・・・」
大和の中と外のギャップの違いに周囲を見渡す加藤。
「ここのホテルのオーナーは『大和ホテル』を意識して作ったのかな？」
「『大和ホテル』？何ですか？ソレ？」
「当時、日本では最先端の設備を有していた戦艦大和はその充実した艦内設備により、軍人たちからはそう呼ばれていたらしい。なお、姉妹艦の武蔵は『武蔵旅館』と呼ばれていた」
「へぇ～・・・」
良馬の雑学に加藤は思わず相槌を打つ。
「でも、これは揶揄であり、褒め言葉では無かったんだよ」
「何故です？」
「戦艦と言うのは文字通り戦いに行くための船だ。しかし、大和も武蔵も出撃の機会は恵まれず、トラック島の泊地に留まったまま時間を潰していた時間が長かったからね。他の艦が戦い、傷つき、沈んでいく中、強力な力を持つ筈の大和、武蔵は戦うことなく、泊地でのんびりと停泊していた。それが、他の軍人たちには我慢できなかったんだろうね」
「成程」
良馬が加藤に大和に関する雑学を教えていると、

「艦長、ガミラスからの救難信号が消えました」
ギンガの報告を受け、彼女が持っていたハンディースキャナーを覗き込むと、モニターには先程まで表示されていた救難信号の反応が消えていた。
「どういう事でしょう？」
「もしかしたら、此処まで誘い込むのが目的だったのか・・・？」
「それじゃあ、これはガミラスの罠ですか？」
「いや、そう考えるのは早計だ。現に我々はガミラスからの攻撃を受けていない。これが罠なのか、それとも此処へ誘い出す目的があったのかは、もう少し調査をしないとわからない」
若干不安そうな表情の加藤とギンガに良馬は指示を出す。
「とりあえず、此処（大和ホテル）をベース（拠点）に周囲の調査から入ろう。ジャングルの中には他に人工物は無かったから、人が居るとしたらこのホテルに居る可能性が高い」
「はい」
良馬は指示を出した後、改めてホテルのロビーを見渡した時、彼はふと違和感を覚えた。
（ん・・・？でも、このホテル・何だか前に来た事が有るような気がする・・・）
ジャングルの中でデジャヴを感じたギンガの様にこのホテルにデジャヴを感じる良馬。
その時、背後から誰かの視線を感じ、咄嗟に振り向いた。
其処には壁にかかった女性の肖像画が飾られていた。
（絵？・・・変に緊張し過ぎかな？）
絵の中の女性がジッと良馬を見ている様に感じたのだが、所詮は絵だ。
周囲を警戒しながら進んで来たので、緊張でそう見えたのかもしれないと思い、良馬はその絵から視線を逸らした。
その直後、異変が起きた。
「艦長!!ドアが!!」
先程自分たちが通って来た水密扉のドアが独りでにバタンと音を

立てて閉まったかと思ったら、ドアは消え、代わりに大きな横長の絵画がかけられた壁が前から此処に有りましたと言わんばかりの自然さで其処に存在していた。
どういうトリックなのか分からないが、良馬たちは此処に閉じ込められてしまった様だ。
ギンガが急ぎ通信機で　まほろば　に無線を入れるが、スピーカーからはピィー、ガァーとノイズ音しか聴こえない。
続いて上陸用舟艇のバトライザーにも連絡をとるが、やはり通じない。
「艦長、無線機も使用不能です。まほろば　ともバトライザーとも連絡がつけられません」
「そうか・・・・」
良馬は冷静に先程ドアがあった壁を調べた。
映画やお芝居のセットまたは忍者屋敷の様に回転構造になっているのではないかと思い、壁を叩くが感触は何ら変哲もないコンクリートの壁だった。
「状況は不明だが、退路を断たれた様だ」
「やはり、ガミラスの罠だったんでしょうか？」
「・・・・とりあえず、手分けをして出口を探そう」
良馬と加藤が話している時、
チリリリリリ・・・・
ベルの音がロビーに鳴り響く。
良馬と加藤の間に一気に緊張が走る。
何処でなっているのかと周囲を見渡すと、音は止む。「何だったんだ？」と、二人が戸惑っていると、フロントの所ですまなそうな笑みを浮かべたギンガが、
「す、すみません。ベルを鳴らしたら誰か出てくると思って・・・・」
ギンガの行動にやや呆れる良馬と加藤。
しかし、もしこの場にギンガの妹であるスバル・ナカジマがいれば、恐らく彼女もギンガと同じ行動をしていたに違いない。
そして、相棒のティアナから「何やっているの!?バカスバル!!」と

ツッコまれていたことだろう。
緊張から一転した時、何処からかピアノの音がした。
「この音って・・・・」
「ピアノ？」
「その様だ」
「ピアノの音が聴こえるって事は其処に誰かが居るってことですよね？」
「自動演奏するピアノもあるが、此処で何もせずに待っているよりはマシだな。行ってみよう」
三人はピアノの音が聴こえる方へと向かった。
しかし、そこで彼らは意外な人物と遭遇する事となった。

五十二話　大和ホテルでの邂逅　前編

ピアノの音色を聴き、その音色の下へと向かう良馬たち。
通路を歩いていくとピアノの音は次第に大きくなっていく。
やがて、木製の扉が現れその扉を開けるとその先はラウンジになっていた。
壁沿いにつけられた通路を歩いていくと、その先は折れ曲がって階下へと続く階段になっていた。
此処もフロントロビー同様、ヨーロッパ風の作りになっており、赤い絨毯が扉下の通路から階段の下まで続いていた。
(此処は・・・ラウンジ・なのか・・・?)
良馬は片手にコスモガンを持ちながら壁を背に下へと降りて行く。
階下にも赤い絨毯が敷き詰められており、石造りの大きな部屋で奥にはレンガ造りの暖炉があり、パチパチと音を立てて火が燃えていた。
部屋の中心部には革張りの高級そうなソファーにマホガニー製のテーブル、黒光りするグランドピアノが置かれている。
そして、其処には肩を大きく露出させた赤いドレスを着た女性がピアノを弾いていた。
ソファーには若い男とハンチング帽を被った老人が向かい合わせで座っている。
(あの肌の色・・・間違いないガミラス人だ)
ピアノを弾いている女性と二人の男性の肌の色を見て、彼らがガミラス人である事が確認できた。
しかし、彼らは軍服ではなく、クラシックなスーツを着こなしている。
更にもう一人、ガミラス人の青年がフロアをせわしなく歩き回っている。
彼もガミラスの軍服ではなく、オールドファッションな服装をしている。

このラウンジにいるガミラス人は全部で四人の様だ。
その様子はまるで雪山のロッジの様な光景だった。
猛吹雪で足止めをくらった登山者かスキー客がピアノの演奏に耳を傾けながら煙草を吹かしていると言った風景だ。
遭難信号を出していたのは恐らく彼らなのだろう。
やがてソファーに座って煙草を吸っていたガミラス人の男性が紫煙を吐き、人の気配に気がついたのか、此方に視線を向けて来た。
そこで、良馬と視線が合った。
「おい、メルヒ。お客さんだ」
そう男は叫んだ。
そして、ピアノの演奏も止まる。
良馬たちの姿を見て、メルヒは足を止めて不機嫌そうな表情で良馬たちを睨む。
「どうやら、助かった様じゃの」と、老人は嬉しそうに言うが、メルヒは舌打ちをし、「助けが来たと思ったら、異星人かよ」と蔑んだ。
「この際、何だって良いさ」
ソファーに座っている男はだるそうに言う。
「遭難信号を出していたのはあなた方ですか？」
良馬はガミラス人たちに救難信号を出していたのかを問う。
「ああ・・・」
ソファーに座って煙草を銜えていた男が頷きながら肯定した。
（翻訳機なしで言語を交わしている・・・？）
声をかけた良馬自身、翻訳機もなしに相手の言語が分かる事に疑問を感じた。
そんな中、
「あれ？俺の銃が・・・」
加藤は先程まで手に持っていた自分のコスモガンがいつの間にか消えている事に気がついた。
しかし、異変はそれだけでは無く、
「か、加藤君、服が・・・」
ギンガが驚愕した表情で加藤を見る。

其処には、防衛軍の軍服ではなく、私服を着た加藤の姿があった。
「えっ？そう言う通信長こそ・・・」
「えっ？」
ギンガも慌てて自分の服装を見た。
すると、加藤同様、自分も地球で休日の日に過ごしている様な私服姿になっていた。
それは良馬も同様で、いつの間にか手に持っていたコスモガンは無く、服装も私服姿になっていた。
更に、まほろば　から持ってきた探査キットや通信機の類が無くなっており、背嚢の中に有るのは救急キットと非常食のみとなっていた。
（とりあえず、地球人である事は伏せた方がいいかな）
階段付近に居た加藤とギンガもラウンジへと降りて来た。

タバコを吸っていたガミラス人の男性は階段を降りてくる新顔の客たちをソファーの背に両手を乗せたまま見ていた。
「貴方たちは何処から来たの？」
ピアノを弾いていたガミラス人の女性が此処へ来た新顔の客に何処から来たのかを微笑みながら訊ねる。
良馬は流石に「地球から来ました」とバカ正直に言う訳にはいかなかった。
「何処から来たかって聞いてんだ!!さっさと答えろ!!」
メルヒは尋問の様に強い口調で問いただす。
メルヒこと、クルム・メルヒ少尉はフォムト・バーガーの部下の一人で、あの七色星団の戦いで生き残った一人でもあった。
七色星団の戦いでは、ランベア搭載のスヌーカのパイロットの一人として、バーガーと共にガミラス史上初、瞬間物質転送機によるヤマトへの急降下爆撃を行った。
その時、ふと新顔の客の中に居る女（ギンガ）の顔を見て、タバコを吸っていたガミラス人の男性は唖然として手に持っていた煙草を落しかけた。

「・・・メ、メリア」
声にならない呻き声と共に腰を浮かす男性。
自分の目の前に居た女(ギンガ)の容姿がネレディアの妹であり、かつて自分の恋人であったメリア・リッケと容姿が瓜二つだったのだ。
違う点と言えば、肌の色と髪の毛の色だけであった。
(いや、メリアがこんな所に居る訳がない)
その事は誰よりも自分がよく知っている。
しかし、かつての恋人と似た容姿を持つ女性が居た事で、感情が少し和らいだ。
「まぁいい。突然こんな事になったんだ。困惑するのも無理はねぇ」
「少佐、良いんですか!?」
メルヒは自分たちが何処から来たのかも言わない無礼な連中に納得出来ない様子。
「かまわねぇよ。とりあえず、自己紹介ぐらいはしとこうか。俺はバーガー。フォムト・バーガー少佐だ。何処から来たのか言えなくても名前ぐらいは言えるだろう?偽名でも良いからよ」
「・・・良馬・月村　良馬です。出身地は・・・ザルツと言う星です」
バーガーは先程偽名でも良いと言ったので、良馬は名前に関しては本名を名乗ったが、出身地の星に関しては出鱈目な星の名前を出した。
此処で馬鹿正直に地球人ですと言えば、無用な軋みを生み出すと思ったからだ。
加藤もギンガもその辺は良馬と同じく空気を読んで、良馬が出鱈目な星の名前を出しても突っ込む事は無かった。
もしスバルがこの場に居たら、あっさりと良馬が地球人だと言う事をバラしそうだった。
「ツキムラか・よろしくな」
バーガーはぎこちなくも笑みを浮かべた。
良馬の言葉を理解出来た様子からバーガーたちも翻訳機なしで此方(地球)の言語を理解出来る様子だった。
そして良馬は加藤とギンガの二人をバーガーたちに紹介した。

（へぇ～あの女、ナカジマっていうのか）
無論ギンガがメリアと名乗らない事は百も承知であったが、バーガーの心の中の騒めきは収まらなかった。
良馬たちが名を名乗ったので、バーガーもメルヒ、バーレン、ネレディアを紹介する。
互いに自己紹介が終わると、良馬は自分たちがこのホテルへ訳を話すが、
「我々はあなた方が発した遭難信号を受信して此処まで来たのですが、このホテルのロビーで突如、入り口が消失してしまって・・・・」
ミイラ取りがミイラになる感じとなり、すまなそうに言う。
バーガーは暖炉に歩み寄り、薪を二、三本くべる。
「それじゃあワシ等と同じじゃな。ワシ等もこのホテルの中に入ってすぐに入り口が消えてしまったからな」
バーレンがこのホテルに足止めになっている訳を話す。
それによると、彼らも自分と同じ様にこのホテルに足止めされていたみたいだった。
「それじゃあ、このホテルは出口がないんですか？」
ギンガが不安そうに訊ねるとネレディアが上品な仕草で歩み寄った。
「色々試したんだけどね・・・みんな徒労に終わったわ。私たちは此処に四日間閉じ込められているのよ」
ネレディアは、自分たちはこのホテルから出る為にありとあらゆる事を試したが無駄に終わった事を告げる。
彼女の話を聞きながらバーガーは暖炉の中の赤々と燃える炎をジッと見つめていた。
「せっかく救出に来てくれたのにすまねぇな。俺達の遭難信号のせいでこんな事に巻き込んじまってな」
バーガーもすまなそうに暖炉から視線を良馬たちに向けて言う。
「で、でも外に出られないホテルなんて・そんなモノある訳が・・・・」
加藤がこの非日常的な現象に疑問を投げかける。
「じゃあ試してみな。時間ならたっぷりあるからよ」

メルヒが小馬鹿にした様に言う。
「扉から出られないのなら、窓から外に出れば済むだろう」
そう言って加藤はタックルする様に近くにあった窓へと走る。
不思議な事に窓はまるで加藤を飲み込むかのように開いた。
窓の外は真っ暗で何も見えないが、加藤は窓の外へと飛び込んで行くと、直ぐにラウンジから飛び出していった勢いのまま別の窓からラウンジの中へと飛び込んできた。
ラウンジへと飛び込んだ・・と言うか、ラウンジに戻って来た加藤は一瞬自分の身に何が起きたのか、理解できない様子であったが、辺りを見回して、此処は先程自分が飛び出していったラウンジだと気づくと首を傾げた。
「あ、あれ？」
「だから言っただろう。俺たちも色々やったって」
メルヒが呆れる様に言った。
その後、良馬たちはバーガーたちと話し合い、明日から出口の捜索を共同で行う事になり、この日は解散となった。
ネレディアがギンガを部屋へと案内する。
「此処は部屋だけは沢山あるから好きに使って良いわよ」
「ほぇ～・・・・」
ギンガは高級そうなホテルの部屋を見て唖然としているが、気を取り直して客室内を歩き回っているギンガをジッとネレディアは見ている。
やがて、ギンガは客室のテーブルの引き出しから一冊の本を見つけた。
「やっぱりちゃんとしたホテルには客室に本が置かれているんですね」
嘗ての故郷・・ミッドでも一流ホテルのアグスタにあるスイートルームにも様々な本が置かれていると言うのを聞いた事があった。
ギンガが本をテーブルの中から取り出すと、ネレディアがギンガの傍に寄り、本のタイトルを覗き込む。
「へぇ～懐かしい。コレ、子供の頃によく読んだわ」

「えっ!?コレを・・ですか?」
ギンガは不思議そうな表所を浮かべながらネレディアを見る。
「ええ。『さびしい魔女』」
「えっ!?」
ネレディアから本のタイトルを聞いたギンガは戸惑ったが、それ以上は深く突っ込まなかった。
「どんな話なんですか?」
ギンガがネレディアに本のタイトルである『さびしい魔女』がどんな内容の話なのかを訊ねた。
「確か・・・」
ネレディアはギンガに『さびしい魔女』の内容をかいつまんで教えた。
それによると、『さびしい魔女』は以下の様な内容だった。

むかし、むかし、ある所に不思議な力を持つ白い少女がいました。
少女は何時も独りぼっち・・・。
そこで、少女は友達を探す為、旅に出ました。
やがて、白い少女は青い国へと辿り着きました。
白い少女は、其処で友達を探しました。
しかし、青い国の人々は誰も友達にはなってくれませんでした。
白い少女は、悲しく・・・そして寂しさのあまりに叫びました。
「どうして友達になってくれないの!?」
すると、青い国の人々はこう言いました。
「お前の力は人々を惑わせる悪魔の力だ」
「お前は魔女だ!!」
「お前の様な魔女に誰が友達になるものか!!」
青い国の人々は白い少女の力を恐れ、彼女を魔女と呼び忌み嫌いました。
少女はその言葉に傷つき、家から出なくなりました。
やがて、青い国の人々は白い少女を殺そうとしました。
それを憐れんだ神様が白い少女に白い船を与え、青い国から逃がし

ました。
神様から貰った白い船に乗った白い少女は、遠い遠い国へと旅立って行きました。
まだ見ぬ明日と言う国へ・・・・
希望と言う名の船に乗って・・・・

「・・・・」
ギンガはネレディアから『さびしい魔女』の内容を聞き、自分もこの物語に出てくる白い少女に対し、親近感の様なモノを感じだ。
ミッドに居た時・・・・。
母（クイント）に救い出される前から、自分は普通の人じゃない・・・・。
機械と混じった体の化物だ・・・・。
母（クイント）に救い出された後もそのジレンマに苛まれたていた。
でも、母や父・・・・周りの人々のおかげで、自分は化物じゃない。
クイント・ナカジマとゲンヤ・ナカジマの娘なんだと胸を張って生きていけた。
遭難し、今の地球へ流れ着いた時も、自分の周囲には自分を暖かく迎えてくれた人が居た。
でも、この白い少女の周りには誰も居なかった・・・・。
ギンガにはこの白い少女の気持ちが痛い程理解できた。
「何だか悲しいお話ですね」
「ただの作り話よ。子供に優れている人を外見だけで虐めちゃダメって言う事を教えようとしたんじゃないかしら？」
「そうなんですか？でも、何となく遠回しと言うか、分かりにくい教訓な様な・・・・」
「そう？まぁ、いいわ。それじゃあね、また明日」
「はい。おやすみなさい」
「おやすみ」
ネレディアはそう言って部屋から出て行った。
「・・・・」

ネレディアが部屋から出て行くと、ギンガはテーブルの上にある本に視線を向け、首を傾げた。
ギンガの視線の先にある本には『盲目の少女』とタイトル書きされた本が有ったからだ。
ギンガの部屋から出たネレディアは、客室の一室の扉が開かれているのを見つけ、その部屋へと歩み寄る。
その部屋にはバーガーが居り、彼は椅子に座りながら、ゴムボールを窓の外へ投げている。
すると、窓の外から先程投げたボールが帰って来る。
まるで誰かが投げ返したかのように・・・
「ストレスの解消法かしら?」
「まあな・・・」
ネレディアがバーガーに声をかけても彼は振り向くことなく、ボールを投げては窓の外から戻って来るボールをキャッチする。
「・・・すげぇ似ていたよな・アイツ・・・」
一人キャッチボールをしていたバーガーはゴムボールを投げながら扉の前に立つネレディアにぼんやりとした口調で話しかける。
「え?何の事?」
ネレディアには、話の主旨が分からない様子。
「いや、あのザルツ人のナカジマって女だよ」
バーガーは過去を振り返るかのように呟く。
「誰に似ているの?」
「・・・いや、いい。忘れてくれ、俺の勘違いだったようだ」
ネレディアが分かってくれなかった事でバーガーはこの話を打ち切った。

翌朝、七時頃、このホテルに閉じ込められたガミラス人と地球人全員がラウンジへと集まった。
此処に集まった理由は大きく二つある。
まず一つは食糧問題である。
四日間このホテルに閉じ込められていたバーガーたちは既に食糧

が尽きており、良馬たちが持ってきた非常食が今は唯一の食糧であった為、それを均等に分ける必要があった。
しかし、飲み水に至っては幸いな事に問題なく、ラウンジの横にあるバーのビール樽の中に大量にあり、幾ら消費しても翌日にはどういう訳かいつの間にか補給されていたと言う。
おかげで、喉の渇きからは何とか逃れた。
もう一つは、全員の今日一日の予定確認であった。
朝に予定確認をし、夕方に夕食と共に報告会を行う。
こうする事でホテルからの脱出の糸口を掴もうと考えたのだ。
まず、バーガーたちが四日の間で調べ上げた事が良馬たちにも公開された。
テーブルの上にはバーガーが書いたホテルの見取り図がある。
「このホテルは全部で十一階だが、ロビーにあるエレベーターは故障中なのか全くうごかねぇし、四階には五階へと続く階段さえもねぇ・・勿論、下に行く階段もだ」
「これだけ大きなホテルなら何処か壁を壊すか、隠し通路みたいな所はないんですか？」
ギンガがバーガーに質問する。
「それもダメだ。壁は全て堅い棒で叩きながら歩き回ったが、脆い箇所も隠し通路の様な場所も無かった」
「となると、残るは天井か床か・・・」
見取り図を見ながら考え込む仕草をとる良馬。
「おや？そう言えば、お前さんたちの連れのもう一人はどうしたんじゃ？」
バーレンが加藤の姿が見えなかったので、彼の行方を訊ねた。
「ああ、彼なら先程トイレに・・・」
良馬が加藤の行方をバーレンに伝えようとした時、
「うひゃぁぁぁぁぁぁー!!」
加藤の悲鳴と共に何かが崩れる音がした。
「な、なんだ!?」
「今の声は!!」

「加藤君の声よ」
ラウンジに居た皆は、急ぎ声がした方へと向かう。
すると何をどうしたらこうなったのか分からないが、加藤が床に出来た大穴の前で尻餅をついていた。
「一体どうしたの？」
「つ、通路を歩いていたら、床が脆くなっていたみたいで・・・・」
そして加藤が落ちそうになった穴を皆で覗き込むと、
「これって地面じゃねぇか？」
バーガーは驚いた様な声を出す。
床下に開いた穴には土色の地面が見えていた。
この穴の部分は他のコンクリートでも装甲板の様な堅い素材では無く土の地面だった。
（あの戦艦大和の外装は張りぼてなのか？）
外は戦艦大和の外装をしていたのだから、その艦艇部が地面な訳がないのだが、現にこうして床に空いた穴は装甲板ではなく、土の地面となっている。
「ホテルの壁は壊せなくても此処から穴を掘り進んでいけば、外に出られるかもしれない」
良馬たちは穴を覗き込んだ後、直ぐに行動に移した。
キッチンや倉庫から穴掘りに使えそうな道具とバケツをかき集め穴の下に戻って来る。
そして、ローテションを組み交代で穴を掘る作業を行う事になった。
ただ、ギンガとネレディア、バーレンの三人は掘削作業から外れ、残土の運搬処理係りとなった。
当初、バーレンは「年寄りだと思って特別扱いはするな!!」と、不満を零していたが、大した道具も無い中での掘削作業は結構体力を使う作業なので、バーガーがバーレンを説得した。
上官でもなく、ガミラス人ですらない良馬から指示をされるのは普段のバーガーだったら、我慢ならない筈だったのだが、何故か良馬から指示をされても大して気にはならなかった。

最もメルヒは不満そうな顔をしていたが・・・
早速掘削作業が行われ、集めたバケツに次々と残土が収められて行く。
穴の中は湿気が含まれており、掘削した周囲から崩れると言う事は無く、ホテルに閉じ込められているメンバーにとってはこの穴が唯一の希望となった。
確実に脱出できる確証はないが、希望が有るのと無いのとでは、全く違う。
他に脱出の手段も手懸かりも見つからない為、皆はこの穴に希望を抱き、一心不乱で掘削作業を行った。
作業は思ったよりも捗り、二日目にはホテルの床から梯子を降ろさなければならないくらいに深く掘り進められ、続いて横穴を掘る段階へと進んでいた。
客室からはスタンドライトと延長コードが運び込まれ、暗い穴の中を明るく照らす。
一丸となって作業をしている内に、かつての敵同士と言う認識は消えていた。
例え、生まれた星が違い、国家間がいがみ合った仲でも個人と接して居れば見方も変わって来る。
しかし、メルヒはやはり選民思想が強いのか、未だに良馬たちとは一歩距離を置き、毛嫌いしている様だ。
そんな共同生活が一週間過ぎた。
まほろば　はどうしただろうか？
こんなに時間が経っても捜索隊の第二陣を送って来ないとなると、見捨てられたのかもしれない。
食糧ももう残り少なくなっている。
ギンガは枕元に置かれた紙に線を一本書き足す。
日にち感覚を失わない為に、ギンガはこうして記録を取っていた。
一週間の内、六日間を縦線で示し、七日目を横線でしめる。
そして、今日横線が入った。
憂鬱な気分を少しでも忘れようと、ギンガは以前見つけた『盲目の

少女』とタイトル書きされた本を手に取り、表紙を開いた。
少女は生まれてすぐに病気で視覚と聴力を失い、言葉が不自由になった。
少女の両親は娘の将来を不安に感じ、盲学校の女性教師を少女の家庭教師として雇った。
教師は決して少女を甘やかす事無く接し、少女はその度に反発し、一向に言う事を聞こうとしなかった。
ある日、教師と少女が散歩をしている時、教師は井戸の水を桶に汲み、少女の手を握り彼女に水を触らせた。
そして、掌に指で何度も文字を書いた。
その行為に少女はモノには全て名前が有るのだと知り、感動した。
光も音も無い世界に少女は初めて光の存在を知った感覚を覚えた。

ギンガが本を読んでいると、彼女の耳に小さく女性が囁く様な声が聞こえた。
「っ!?誰!?」
ギンガが部屋を見渡すが、辺りには人の気配はない。
そこで、部屋の扉を開け、通路に出ても誰かが居た形跡はない。
しかし、ギンガには確かに聞こえたのだ。
「こっち・・・かしら・・・?」
ギンガは部屋を出て通路へと出る。
そして辿り着いた先は最初にこのホテルのフロントロビーであった。
すると、そこには良馬の姿があり、彼はロビーに飾られていた一枚の肖像画をジッと見ていた。
それは、最初にこのホテルに来た時、ギンガが視線を感じたあの女性の肖像画だった。
「良馬さん」
「あっ、ギンガか」
ギンガに声をかけられ、振り向く良馬。

「どうしたんですか?こんな所で?」
「声が聞えてね」
「声?ですか・・・?」
「ああ」
良馬はギンガと同じく声が聞えてこのロビーに来たのだと言う。
最もその声の主の言葉は何と言っていたのか分からなかったが・・・・
そして声の主を探しているその最中、この肖像画がどうしても気になったのだ。
「でも、ただの絵ですよ?」
「そうなんだけど、この絵・・・何だか生きているみたいに感じたんだ」
「・・・・」
確かに良馬の言う通り、肖像画に描かれている女性は絵にしてはかなりリアルで瞬きや会話を振って来ても可笑しくないレベルの精巧さだ。
しかし、所詮絵は絵で会話をしなければ、瞬きもしない。
良馬とギンガロビーにあるソファーに座り、先程聴こえた声について話し合った。
それによると、ギンガは女性の声が聴こえ、その声の言葉はジレル語だったと言う。
ギンガは此処に来る前にジュラからジレル後を習っていたので、謎の声の内容を知る事が出来た。
「ジレル?それってジュラさんのお母さんの祖国の?」
「はい」
「それでその人は何って言っていたの?」
「確か『飢えは争いを引き起こす』・・・でした」
「飢えは争いを引き起こす・・・・」
「あっ、でも、もしかしたら私の聞き間違いかもしれません。お腹の空き過ぎで空耳が聞えたのかもしれませんし・・・・」
ギンガが慌てながらそう言うが、お腹が減っている最中、その様な話をすると、

クゥゥ～
脳と身体は綿密に連携している為か、ギンガのお腹が鳴った。
「あぅ～」
お腹の音を聞かれ、ギンガは顔を赤く染め、俯く。
そんなギンガに良馬は、
「コレ、少ないけど」
そう言って自分の分の非常食である乾パンをギンガに渡して来た。
「でも、これは良馬さんの・・・・」
「大丈夫だから・・・・その・・・・いざとなれば、自分の血で何とかなる体だし・・・・」
「・・・・」
ギンガも良馬が夜の一族と呼ばれる吸血鬼の末裔である事を知っている故、其処で変なリアクションは取れなかった。
ロビーからラウンジへ向かう途中、良馬はジレル人について考えた。
ジュラの母親は純血のジレル星人であったが、ヤマトがサイレンの星へ辿り着く寸前で自殺した。
ガミラス領にジレル星と言う星は冥王星ガミラス基地のコンピューターには記録されていなかった。
ならば、ジュラの母親のメラは一体何処から来たのだろうか？
「ギンガ、管理局が管理する世界で『ジレル』と言う星はあった？」
「いえ、私の知る限り『ジレル』と言う名前の管理世界はありません」
時空管理局が管理する星の中にもジレル星は無かった。
ジレルの民は何処に住んでいて何処から来たのだろうか？
そんな思いを抱いていると、
「面白い話をしているわね」
と、ネレディアが近づいて来た。
どうやら、さっきの話を聞かれた様だ。
「ネレディアさんはジレルと言う星、聞いたことありませんか？」
ギンガがネレディアにジレルの事を訊ねた。
ガミラス人ならば、自分たちよりもジレルに詳しいと思ったから

だ。
「ジレルの民は不思議な力を使う種族だったけど、残念ながら彼らは既に滅んだ種族よ」
「えっ!?」
「滅んだ?」
ネレディアの言葉に唖然とする良馬とギンガであった。
そして、ジレルの民について語ったネレディアが怪しげに微笑んだ事に気がつかなかった。

突如、ガトランティス艦の襲撃を受け、艦内には警戒音が鳴り響き、煙が充満し、彼方此方で爆発が起きている。
通路には非常灯が灯り、「退避しろ!!急げ!!」と、乗員の叫び声が辺りに木霊すし、既に息絶えた乗員の死体や天井部にあるパイプや壁の装甲板が崩れ、配線やコードが千切れ、そこからバチバチと火花を発している。
非常消火装置も作動せず、隔壁も閉まっている箇所と故障の為か、作動していない個所がある。
先程の攻撃が此の艦にかなりのダメージを与えた証拠である。
そんな中を、若き日の頃のバーガーは宇宙服を身に纏い通路を必死に走っていた。
彼は避難する為に走っているのではなく、ひたすら艦の居住区に向かっていた。
しかし、艦内エレベーターも使用不能になっており、やむを得ず、点検用の梯子をよじ上り漸く目当てのフロアへと辿り着いた。
通路に散乱する瓦礫をどけながら、彼は自分の大切な人の名を叫ぶ。
「メリア!!」
しかし、幾ら呼んでも答えず、探せど姿は見えない。
それでも彼は名前を叫び続け、探し続けた。
「メリア!!どこだ!?返事をしろ!!」

すると、
「フォムト!!私は此処よ!!」
返事が返って来た。
声のした方へ視線を向けると、そこには天井から降って来た瓦礫に体を挟まれ動けなくなっているメリアの姿があった。
しかし、どうやら生きている様だ。
バーガーは生まれて初めて神とやらに感謝した。
「メリア、待っていろ!!直ぐに助けるからな!!」
だが、バーガーが彼女の下へ走り出した瞬間、それを阻むかのように隔壁が閉まり始めた。
「ば、バカ!!止めろ!!」
彼は咄嗟に叫びながら被っていたヘルメットを取り、隔壁扉に投げつける。
ヘルメットは上手い具合に扉の間にスッポリと入り込み、その間に出来た隙間から必死に手を伸ばす。
「まだ閉めるな!!中にはまだメリアが残っているんだ!!」
彼は大声で叫ぶが、当然反応は無い。
無線機を持っておらず、彼の叫びは艦橋へと届かない。
その間にも隔壁の扉が閉まって行き、挟んだヘルメットはミシミシと音を立て始めた。
「メリア!!メリア!!」
隔壁扉の隙間から伸ばしたバーガーの手も骨を砕くかのような痛みが襲うが、彼は手を引っ込めようとしない。
メリアを助ける事が出来れば腕一本ぐらい失っても構わない。
腕を失い義手になって予備役、退役になっても良い・・・
「・・・フォムト」
メリアも瓦礫の中から必死に手を伸ばす。
二人の距離が離れているため、当然互いの手が触れ合う事は無かった。
メリアが口元を僅かに動かして何かを呟き、健気に微笑んだ瞬間、ズドーンとメリアの背後に大きな大爆発が起こり、そこで生じた爆炎

がメリアとバーガーに迫る。
爆炎の炎がメリアを飲み込み、衝撃波がバーガーを吹き飛ばす。
その際、飛んできた破片の一つがバーガーの左頬を深く引き裂く。
爆発で生じた衝撃波で吹き飛ばされたバーガーは通路の奥まで吹き飛ばされた。
全ての障害物が無くなった隔壁は無情にも閉じられ、そこで爆炎は防がれた。
扉が閉まり、爆炎の炎に巻き込まれたメリアがどうなったのかその結果は火を見るよりも明らかであった。

「うわぁぁぁぁー!!メリア!!」
バーガーはハッと目を覚ました。
其処は、メリアを失った艦ではなく、自身が閉じ込められたホテルの中にある自分の部屋のソファーの上だった。
顔も体も寝汗でびっちょりと濡れており、自分がさっきまで魘されながら眠っていたことが窺える。
そこへ、
「大丈夫ですか?」
と、女性の声がした。
その声を聞きバーガーは、一瞬「メリア!?」と、声のした方へと視線を向けると、其処に居たのはメリアでは無く、彼女と瓜二つの容姿を持つ、ザルツ人のナカジマと言う女だった。
掘削作業で疲れたバーガーは部屋のドアを閉めずに、ソファーへ横になって眠ってしまったのだ。
「な、何がだ?」
バーガーは、姿勢を直して不機嫌そうに顔の汗を拭いながら訊ねる。
「いえ、廊下を歩いていたら、叫び声が聞こえたので・・・大丈夫ですか?バーガーさん」
(メリアはもうこの世に居ない・・・アイツはただ顔がそっくりなだけ

だ・・・)
「あ、ああ・問題ない・・・すまねぇな、大声出しちまって」
そっぽを向いたバーガーは「行け」と言わんばかりに、右手を振る。
「そうですか・・・では、おやすみなさい」
ギンガは一礼し、その場から去って行った。
「ふぅ〜・・・・」
ギンガが去り、バーガーはどっかりとソファーに座り込む。
彼の脳裏には再び過去の出来事が過ぎった。
「メリアは何処!?何処なの!?」
「・・・・」
「貴方が傍に居て何でこんな事になるのよ!?教えてよ!!フォムト!!」
味方に救助された後、バーガーはメリアの姉であるネレディアに問い詰められた。
その時、彼女に言われた言葉が未だにバーガーの耳に残る。
バーガーは衝撃波で吹き飛ばされ、意識を失ったが、その後、他の乗員の手によって救助され、一命を取り留めたのだ。
(・・・メリア、俺は人を憎む事しか出来なくなっちまったよ)
バーガーはゆっくりと目を閉じ、左頬に残った傷を撫でる様に触った。

五十三話　大和ホテルでの邂逅　後編

「くそっ、寝ていられるか!!」
メルヒは空腹の為、イラつきながらベッドから飛び起きた。
非常食の量は日に日に減り続け、ここ最近は殆ど水だけで生活している状態だった。
掘削作業を行えば、当然腹は減る。
しかし、食べ物は無い。
空腹の為、寝ても直ぐに目を覚ましてしまう為、満足に疲れもとれずにストレスと空腹感が溜まっていく。
どこまでも続く労働に減り続ける食糧、不眠、知らぬ星の異星人との共同生活等により、メルヒは疲労困憊し、判断力も鈍り、些細な事にイライラを感じる様になっていた。
自分たちガミラス組がこのホテルに閉じ込められて既に十日以上の日時が過ぎている。
メルヒの精神力は限界に近づいていた。
朝、メルヒが朝食前にラウンジへと降りると、ソファーにはあのザルツとか言う星の女とバーレンが向き合う形で座っており、何かを話しているのが見えた。
(あの爺さん、なに異星人なんかと親しげに話しているんだよ、)
その姿にメルヒは階級が上のバーレンに対しても腹立たしさを感じた。
一方、そんな事を思われているとも知らずにバーレンはギンガからの質問を受けていた。
それは、バーガーについての事だった。
「・・・そんな事があったんですが、その・・・メリアさんって誰なんですか?」
ギンガは先日、魘されていたバーガーの様子と彼が口走ってした『メリア』と言う名前が気になり、事情を知っていそうなバーレンに訊ねたのだ。

バーレンはギンガの質問に答えてくれた。
「メリアと言うのはリッケの嬢ちゃん・・・ネレディアの妹で、アイツの恋人の名前じゃよ」
「恋人・・・」
「ああ、今は少々ひねくれちまっているが、昔は物凄く真面目で礼儀正しい性格の若者だったんじゃ・・・フォムトの奴は・・・」
「そうだったんですか・・・」
今のバーガーの様子から考えられないのか、少々驚愕の様子のギンガ。
「ネレディアとフォムト、メリアの三人は幼い頃からずっと一緒でな、ネレディアとフォムトが軍に入り、それを追う形でメリアも軍へ入った。そして、フォムトとメリアの乗った艦がガトランティスの襲撃を受けた時、メリアだけが戦死しちまって、それ以降、フォムトは変わってしまった・・・まるで自分の満足の行く死に場所を探すかのような・・無茶な戦い方をするようになった・・・」
「恋人が死んでしまったから・・・?」
「うむ・・・」
ギンガは胸に手を当てた。
バーレンの話を聞き、自分の恋人である良馬もガミラス戦役時、似た様な状況だったと思いかえしていた。
「フォムトの奴は目の前で恋人を救えず、メリアの死を目の当たりにしちまってのう・それ以来・アイツはずっと、メリアの死を引きずっておる。あの時、もっと自分が早く駆けつけていれば、いや、自分が軍に入らなければ・・・とな・・・」
「・・・」
親しい人を失う気持ちはギンガにも分かっている。
彼女も自分を救い、人として接し、自分たち姉妹を家族として受け入れてくれた母（クイント）の死を幼いときに経験している。
「戦いで恋人を失い、その上、苦楽を共にした大切な仲間たちを失い、信頼できる上官であるドメル将軍も失った」
「ドメル将軍!?」

ギンガもドメルの名前は知っていた。
ヤマトを幾度となくピンチへと追いやったガミラスが誇る名将、エルク・ドメル。
「うむ、ガミラスの命運をかけた七色星団の戦いで、ドメル将軍は戦死し、同時に沢山の仲間も失った。今、フォムトの中にあるのはヤマトと地球に対する恨みだけじゃな」
「そ、そうですか・・・」
ギンガは顔を引き攣らせながら、話題を地球から逸らそうとした。
「あ、あの・・ジレルって言う星の人たちの事は何か知りませんか？」
続いてジレル星人の事を訊ねた時、
「何、異星人なんかと仲良く、くっちゃべっているんだよ？バーレンの爺さん」
二人の様子を見かねたメルヒが割って入って来た。
ギンガは不機嫌そうな様子のメルヒを見上げた。
「このお嬢ちゃんがフォムトの事を心配している様子なんでなぁ」
バーレンは優しく笑みを浮かべる。
フンっとメルヒは面白く無さそうに鼻を鳴らして腕を組み、
「ジレル人は魔女だ。人の心中を覗き込んで、ソレを幻影に映す化物だ。総統も一時はその魔女に心を奪われそうになったが、その強く鋼のごとき精神力で魔女の誘惑に打ち勝ち、その魔女を辺境の星へと追放したのさ」
メルヒはジレル星人について語った。
ギンガはあのネレディアが聞かせてくれた話の内容を思い出した。
それと同時に、
（人の心は読むに至らないけど、幻影魔法はミッドの魔導師も出来るんだけどな・・・）
妹（スバル）の親友である執務官補佐の顔が脳裏を過った。
「そのジレル人はもう滅んでしまったんですよね？」
「ああ・・・あっ、でもその魔女の娘が居たって噂を聞いたことがあるな・・・でも、まっ、女一人じゃ滅んだも同然だな」
メルヒが思い出したように言う。

そこへ、残りのメンバーもラウンジへとやって来て朝食が始まった。
最も朝食と言っても非常食の在庫はほぼ無く、水を飲みながら今日の予定確認をするぐらいである。
しかし、そんな状況下でも皆、諦めている様子も無く、またいざこざを起こす様子はなかった・・・この日までは・・・
良馬や加藤、バーガーは今日まで掘り進んだトンネルの状況が書かれた地図を見ながら話している。
その様子を見て、メルヒは段々と嫌気が差してきた。
(何でこいつらはこんなにも必死になっているんだ?少佐も少佐ですよ、こんなザルツ何て訳の分からない星の連中とつるむなんて・・・)
「・・・と言う方向性で、メルヒさんは十時から採掘作業をお願いします」
加藤がメルヒの予定を伝えた時、
「うるせぇよ!!こんな事をしても無駄なんだよ!!ム・ダ!!穴なんか掘っても出れねぇんだよ!!俺たちは此処から出られずに飢え死にするしかねぇんだよ!!」
メルヒが度重なる飢え、疲労、不眠によるストレスで等々キレた。
彼の態度と言葉でラウンジに緊張が走る。
加藤は一瞬で熱くなりメルヒを睨んだ。
「何、諦めているんだよ!!実際に地面に続く穴があって、トンネルは確実に掘り進んでいる!!もう少ししたら、此処から出られるかもしれないじゃないか!!」
「あぁ~そうかい、そんなに穴がほりたきゃ、お前たちザルツ人でやれ!!
絶望しかけているメルヒにバーガーが冷静に諭す。
「メルヒ、諦めるな。何が有ってもあきらめるんじゃねぇ。『ガミラス軍人は可能性を信じ、目の前のなすべき事をする。そして最後まで諦めない』以前あの方にそう言われた筈だぞ」
上官のバーガーからそう言われ、立ち尽くすメルヒ。
「『最後まで諦めない』・か・いい言葉ですね」

良馬が微笑みながらバーガーの先程の言葉を褒めると、彼は照れた様子で、
「これは俺の言葉じゃねぇ・・・尊敬する上官から教わった言葉だ」
「俺も尊敬する上官が似た様な言葉を言っていたよ・・・『命ある限り戦へ』『決して絶望はしない』・・・その人たちはそう言っていたよ・・・まぁ、怒ると怖い上官でしたけどね・・・でも、良い上官でしたよ」
「そりゃ、お互いにおっかなくて尊敬する上官に会えたってことだな」
「ええ」
この時、良馬は沖田と土方を・・・
バーガーはドメルとハイデルンを思い出していた。
そして互いに似た様な上官を持ったことに共感を覚えたのか、互いにハハハハ・・・と笑いあった。
（どうしてこんな事になっているんだ？）
自分（メルヒ）は一等ガミラス市民でガミラス軍の士官なのに・・・
そして、目の前の上官（バーガー）も同じ筈なのに・・・
その上官がザルツなんて訳の分からない星の連中と楽しそうに話している。
笑っている・そんな上官を見ていると、自分だけが浮いている存在に見える。
自分だけがまるで異常者ではないのかと思える。
「自分は少佐を尊敬しています。しかし、これ以上コイツらと一緒に居るのは、もう耐えられません。では・・・」
メルヒはガミラス式の敬礼をバーガーにすると、そのまま回れ右をしてラウンジから去って行った。
「メルヒ!!」
バーガーがメルヒを呼び止めるが、彼は歩みを止める事無く、階段をズカズカと登り、ラウンジから通路に通ずる扉をバンッと開け、そのまま通路へと出て行った。
「くそぉぉぉ!!」
通路に出たメルヒは悪態をつく。
とりあえず一人になりたかった彼は今の時間帯、誰も居ない客室前

の通路へとやって来た。
当たりようも無い怒りを彼は通路の壁にぶつけた。
しかし、堅い壁には当然ヒビも入らず、隠し通路の類も現れず、ただ、自分の拳に痛みが走るだけだった。
メルヒ自身もこんな態度をとるのは恥ずかしい事だし、情けない事だと自覚はしている。
しかし、心がそう思っていても言葉や態度は心と反比例してしまう。
「くそっ、どうすりゃあ良いんだよ!!」
悪態をついているメルヒ。
そんな中、彼は突如、空気の流れを感じた。
(ん?なんだ?)
「こ、これはっ!?」
気になったメルヒが風の来る方向へ行ってみると、其処には今朝・いや、ほんのさっきまで無かった筈の上の階へ続く長い階段があった。
その階段の中間にはネレディアが座っており、メルヒを冷やかな目で見ている。
しかし、判断力が落ちているメルヒにはネレディアの異常な様子に気がつかない。
「メルヒ・・・貴方が悪いんじゃないわ・・・お腹がすいているのでしょう?・・・いらっしゃい」
暗い階段に座るネレディアは、ジッとメルヒを見つめながら彼を誘った。

メガルーダ　艦橋
ダガームは停船中のメガルーダの艦橋に居た。
追い込んだ惑星で　まほろば　はその惑星内でワープを行った。
その為、彼は　まほろば　を見失いこの宙域で待機していたのだ。
これで　まほろば　は逃げ切れたのかと言うとそうでは無い。
ワープを行えば、必ず空間航跡が残る。

そしてその航跡をトレースする技術はちゃんと存在するのだ。
それはガトランティスにも備わっていた技術であった。
しかし、今回　まほろば　が行ったワープは特殊なケースで、まほろば　が地表近くでワープを行った事とダガーム艦隊が周囲を広範囲で破壊した事で星間物質が大量にばら撒かれ、その影響でトレースに時間が掛かっていたのだ。
「ええい!!まだ見つからんのか?」
イラつくダガームは持っていた長剣を床に突き刺す。
ダガームの長剣はガキンっ!!と言う音と共に火花を散らして剣先が床に食い込む。
メガルーダの床素材が決して脆い訳では無い、ダガームの腕力が異常なのだ。
「く、空間トレースはもう間もなく終わります」
オペレーターが怯えながら答える。
作業にあまり時間をかけると、この艦では命に係わる問題となる。
気が短いダガームはソファーの様なキャプテンシートから立ち上がると、トレース作業を行っているオペレーターの下へとノッシノッシと歩み寄る。
オペレーターは冷や汗を流し、恐怖で絶叫したいのを我慢しながら、コンソールを操作する。
ダガームの足音がまるで今から自分を処刑する死刑執行人が迫って来る様な間隔である。だが、それはある意味当たっていた。
コンソールを操作する指は小さく震えているが、間違えたりすれば、それだけ自分の命の時間を縮めることになる。
周囲の者たちは固唾を飲んで成り行きを見守る。
此処で進言などすれば、忽ち首と胴が泣き別れとなるのは目に見えている。
残酷かもしれないが、この様な状況下では誰もが他人よりも自分の命優先となってしまう。
ダガームが剣の柄に手をかけた時、
「あ、アンドロメダ方面総司令部より入電!!ゼーダ総司令です!!」

通信兵が伝令を伝える。
「むっ!?ぬぅ～・・・通信回路を開け」
流石に伝令の意見は腐っても軍人故、ダガームもその通信兵を斬る事無く通信回路を開くように指示する。
ましてや、通信を送って来た相手は自分の上官からなので、無視するわけにはいかなかった。
オペレーターは九死に一生を得た。
彼は、ゼーダに感謝しつつこの貴重な時間を無駄にしない様に作業を急いだ。
通信回路が開かれると、床の一部が一瞬歪むと、その中心に一人の男性のホログラムが浮き上がる。
「ダガーム、報告を聞こう」
ホログラムの男性、ガトランティス軍アンドロメダ方面総司令官、ゼーダが重みを含む声でダガームに訊ねると、彼は姿勢を正して現状を報告する。
「そ、それが・・・未だに『静謐の星』に関する情報は未だ何も掴めず・・・」
「愚か者が!!何の為、お前に最新鋭艦を預け、マゼラン方面へと遠征させたと思っている!?」
自分よりも若い上官に怒鳴られ、ダガームの肩が震える。
「で、ですが総司令。それに代わる獲物を発見し、現在追跡中であります。かの獲物は我がガトランティスの大仇、地球の戦艦にございます。彼奴等の戦略砲の技術が手に入れば、我が軍は一層の力を手に入れる事が出来・・・」
上半身を傾け丁重に説明するダガームの姿は、まるで鞭を掲げる調教師に頭を下げるサーカスの熊の様に見えた。
メダルーザやメガルーダが装備している空間転移装置は言うまでもなく、ガミラスの瞬間物質転送機の技術が流用されている。
これは一時的とは言え、デスラーがガトランティスと同盟を組んでいた頃、その時に彼らと技術交換をしたものだ。
ガトランティスはガミラスの瞬間物質転送機の技術を得て、代わり

にガミラスはガトランティス艦艇の主砲である回転速射砲塔、潜宙艦の技術を得ている。
なお、そのガトランティスは潜宙艦の技術を得る切っ掛けは、ある船を拿捕したのが切っ掛けだった。
ミッドでは行方不明扱いとされているが、民間の次元航行船をガトランティスは拿捕していた。
その技術をガトランティスは調査をしてそこから潜宙艦を造り上げた。
しかし、ガトランティスはデスラー砲・・・波動砲の技術は得ていない。
デスラーがガトランティスに身を寄せて居た時、彼の為に与えられたノイ・デウスーラの建造に至っては、ガトランティスは資材を提供しただけで、設計、建造したのはガミラス人の技術者たちだった。
そして、デスラーが幽閉されていた時、ガトランティスはまだ波動砲の威力を知らず、特に脅威を抱いていなければ、興味も湧かずそのままノイ・デウスーラはドックに係留されていたままで、技術調査等は行わなかった。
波動砲の前に消滅したゴーランド艦隊も艦隊から本国へどの様な戦闘経緯があったのか、報告される前に艦隊全てが波動砲の前に消えた為、ガトランティスは波動砲の威力を知る事は無かったのだ。
波動砲と類似したデスラー砲の威力も、使用された空洞惑星内の戦闘当時、ノイ・デウスーラに監視役として乗艦していたミルもその威力を見ておきながら、本国への報告を怠っていた。
何も彼が職務怠慢と言う訳ではなく、この時、彼は上官であるサーベラーからデスラーの監視を命令されていた為、デスラー砲の威力まで目が行かなかったのだ。
その後、土星圏で行われたバルゼー艦隊と地球防衛軍との戦闘で地球艦隊の波動砲の威力を此処で初めて知ったが、既に後の祭りであった。
この時、波動砲に類似したデスラー砲を搭載したノイ・デウスーラは既にガトランティスを出奔し、建造データは残されていなかった。

そんな中、波動砲を装備した地球の戦艦と遭遇したのだ。
彼はこの時、波動砲の技術を手に入れられるかもしれないと、上官であるゼーダに進言するが、彼の報告はゼーダにより一刀された。
「黙れ!!私が命じたのは技術惑星である『静謐の星』の発見と確保だぞ!!お前は現在、我が帝国が置かれている状況を貴様は理解していないのか!?既に偉大なるズォーダー大帝陛下と本国は無く、アンドロメダ方面での領地の維持にも困窮している我が帝国が再び威厳を取り戻すには、強大かつ優れた技術の確保が急務なのだ!!余計な浅知恵など巡らせるな!!貴様は言われた通りの事をすればよいのだ!!分かったな!?」
ゼーダは波動砲よりも優れた技術とされる『静謐の星』の確保を優先した。
容赦ない追及にダガームはただただ耐えた。
「も、申し訳ございません」
「もし、貴様が定められた期日以内に『静謐の星』を発見できぬ時は、その命を持ってあがなえ。良いな?」
「ははっ!!」
完全に頭を抑えられているダガームは低頭平身を貫き通すしかなかった。
「うむ、吉報を待っているぞ」
ゼーダのホログラムはそう言い残して消えた。
直後に、
「若造がぁ!!調子に乗りおって!!」
ダガームは大剣を振るい、先程までゼーダのホログラムが映っていた床に大剣を投げつける。
重々しい金属音と共に、剣先の一部が床に突き刺さる。
ダガームはこう見えてもプライドが高く、そのくせ自分よりも身長が低い者や若い者から指図されるのが一番嫌いであった。
怒り狂い肩で息をするダガームがオペレーターの方へと振り向くが、彼はこの通信の時間を最大限に利用でき、
「提督、トレース完了しました。追尾可能です!!」

オペレーターを睨みつけつつ、彼は命令を下した。
「よし!!では直ちに　まほろば　を追跡する!!」
ダガームはマントを翻し、キャプテンシートにドッカリと腰を据える。
しかし、ダガームの命令を聞いた副長のメイスは一抹の不安を抱き、ダガームに訊ねる。
「し、しかし、総司令の命令は『静謐の星』の発見です。この際、まほろば　は捨て置いてもよろしいのでは？」
ギロッとメイスを睨むダガームは、
「わしは偉大なる大帝陛下の臣下!!若造の小間使いではないわ!!全艦、空間跳躍（ワープ）の陣を敷けぇい!!航跡データに従い直ぐに飛ぶのだ!!」
メガルーダ以下、ダガーム艦隊の艦艇は　まほろば　を追い、次々とワープを行っていった。
そして、ワープアウトをした宇宙空間は灰色一色の妙な空間であった。
ダガーム以外の者たちは此処が何処なのか？
ワープ装置に異常が出て、自分たちは異次元の狭間に来てしまったのでは？と、オロオロした。
そんな中、強烈なピンクの光を放つリングを持った不気味な星が彼らの前に現れた。
だが、ダガームにしてみれば、ソレは不気味な星ではなかった。
彼は自分の幸運に一人感激し、口角を吊り上げ、笑った。
「『静謐の星』は『薄鈍色の空に輝く』とある。これぞまさに僥倖!!まさに天佑神助!!地球の艦を追いかけて来てみれば、我、宝の星を見つけたり!!ガハハハハハ・・・」
メガルーダの艦橋に彼の大声が響いた。
ガトランティス艦隊の出現は　まほろば　でも、更には惑星の下部へ降下し、待機していたミランガル以下のガミラス艦隊も補足していた。
「蛮族共が・・・」

そのミランガルの艦橋では、何故か大和ホテルに居た筈のネレディアの姿があった。

その頃、大和ホテルでは・・・
朝食の後、ギンガは一人でフロントロビーへ来ていた。
何故、ギンガがこのロビーに一人で来たのかと言うと、朝食の時間が終わりに差し掛かる頃、彼女はまた声を聴いたのだ。
フロントロビーの隅では、水漏れでも起こしたのか、水溜りが出来ていた。
それを見つけたギンガはその水溜りの近くにしゃがみ込んだ。

壁のかたわらで、
わたしはおまえにひとこと話そう。
わたしのいうことを聞きなさい。
わたしの教えに耳をかたむけなさい。
『シュメルの洪水神話』（粘土板）における記述より

「水・・・」
ギンガは目を閉じ、薄く広がる水面に手を浸け、指を使って何度も文字を水面に書く。
（少女は、目も見えず、耳も聴こえず、残された触覚によって光を見つけた・・・）
水の中で手を広げたギンガは感覚を研ぎ澄ます。
元々シューティングアーツを嗜んでいたギンガは集中する事が得意だったので、今の彼女には周りの音は一切聴こえず、目も閉じているため、完全な闇の世界にギンガは居た。
すると、今までただの大理石の床だと思っていた床石に凹凸があるのを発見した。
その凹凸をなぞるかのように触って行くと、それがやはり文字となっている事に気がついた。
（文字・・・これは、ジレルの言葉!?）

床に刻まれていた凹凸はジレル語の文字であった。
事前にジュラからジレル語の手ほどきを受けていたギンガは床に彫られたジレル語の言葉を読んでいく。
「目は闇を映し、耳は沈黙を聞く。闇を真実とし、沈黙に呑まれし者は、互いの疑心が自らの身を滅ぼす」
更にギンガは手を動かして周囲に彫られた文字も何と書かれているかを探った。
そんな中、床一面に突如、ジレル語と思われる文字が書かれた魔方陣が現れた。
だが、今のギンガは脳が視界に頼っていなかった為、気づかなかった。
辺りにＡＭＦが充満していた事も影響していた。
ＡＭＦが充満していた状況下で現れた魔方陣故、視界で見なければ気がつかなかったのだ。
「十一層に辿り着きし者は、真の世界を見出せるであろう」
そこで目を開けたギンガ。
彼女が目を開けた直後に魔方陣も消え、ギンガは先程このロビーに魔方陣が張り巡らされていた事に気がついていない。
「十一層・・・それって十一階って事かしら？でも、四階以上は・・・」
ギンガが考え込んでいると、
チンッ!!
と言う電子音がした。
「えっ!?」
ギンガが音のした方へと視線を向けると、其処には今まで動かなかった筈のエレベーターが稼働しており、扉が開いた。
それはまるでギンガを誘っているかの様だった。
ギンガは唖然とし、息を飲んだ。
しかし、このまま此処で呆けていたら、再びエレベーターが停止してしまうかもしれない。
十一階に行けば何か手がかりが有るかもしれない。
ギンガは意を決して、エレベーターの中へと入ると十一のボタンを

押した。
すると、格子状の扉がゆっくりと閉まり、ゴトッと小さく揺れると、エレベーターは動き出した。
「十一階まで行けるのかしら？」
動き出したエレベーターの中で辺りを不安そうに見渡しながらギンガは呟いた。
扉の上には半円形の数表示があり、今の階数を表示する針が等々四の数字を越えて、五・・・・六・・・・七・・・・八・・・・と、右に傾いていき、このエレベーターが上に上がっている事を表示する。
やがて、針が右一杯に傾き、十一の数字を示すと、チンっ!!と言う音と共にエレベーターは停止した。
そして再びギンガを誘うかのように格子状の扉がゆっくりと開いた。
十一階は真っ暗で周囲が良く見えない。
扉を越えてエレベーターの中の灯りで照らされた部分に出て、辺りを窺っていると、カシャンとエレベーターの扉が閉まる。
「なっ、何っ!?」
ギンガが慌てて振り向くと、エレベーターのゴンドラは下へと降りて行った。
此処に誘い出されたのか？
それとも・・・
ギンガの中に不安が過ぎる。
それは、あの時この世界に来た時のきっかけとなった出来事・・・・。
管理局員として最後の仕事となった本局共同での捜査で、罠となっていた輸送船に詰め込まれた時と同じ不安感だ。
だが、退路が断たれた以上、先へ進むしか道は残されていない。
真っ暗な空間の中にポツンと浮かぶ小さな部屋が有り、そこには梯子が見えた。
梯子のある部屋へと入ったギンガは、上を見上げる。
そこは、更に上部へと続くエレベーターホールの様な正方形にくり抜かれた空間が二階分程続いていた。

「ここは一本道・・・『ここを上がれ』って事ね・・・良いわよ・・・行ってあげる!!誰の誘いか分からないけど乗ってやろうじゃない!!」
ギンガは両手で軽く両頬を叩き、梯子に手をかけて一歩一歩登って行く。
金属製の梯子を上る度、カツンカツンと鳴る金属音。
やがて先に見えていた光は次第に大きくなっていき、十畳程の部屋の床に出た。
ギンガは手や服についた汚れや埃を払いながら周囲を見渡す。
前面に並ぶガラス窓からは外に広がる熱帯雨林のジャングルが見渡せた。
室内には速度受送機や双眼望遠鏡、方位を示す羅針盤等が設置されていた。
それぞれの機器の周囲には各部へ指示を出す為にある、金管楽器の様な口のパイプである伝声管も見える。
「もしかして此処は大和の艦橋かしら?」
ギンガは今、外から見えていた時に見えていた戦艦大和の前部艦橋の最上部に来ていた。
窓から外を見ると、電波探信儀と呼ばれていたレーダーアンテナと主砲射撃用の測距儀が見えた。
隙間を風が吹く度にヒューと小さな音を立てている。
「確か外で見た時にはこの上にも階が有った筈・・・」
この艦橋を見渡しても『真の世界を見出せる』様な要素が有りそうもない。
そこでギンガは横にある扉から外へ出た。
「キャっ」
流石に十階以上の高さがある為、風は強く、リボンで纏めてある髪が大きく煽られる。
ギンガは手すりをしっかり持ちながら、露天となっている防空指揮所へ通じる階段を上がって行く。
やがて防空指揮所へと着くと、其処には先客が居た。

それは、先程四階の通路で上へと続く通路を発見し、ネレディアと共に此処（防空指揮所）へとやって来たメルヒであった。
彼は左手に紙袋を大切に抱えて、右手に持っていたモノを口へと運ぼうとしていた。
そんな彼の様子をギンガは大きく目を見開いて、信じられないと言う表情を浮かべる。
ギンガが唖然としてメルヒを見ていると、その視線に気がついたのか、メルヒがギンガの方へと視線を向ける。
しかし、彼の目は虚ろで血走っており、正常には見えなかった。
最も正常ならば、今彼が手にしているモノを食べようだなんて思わない。
「コレを奪いに来たな・・・コレはお前らには渡さねぇ」
メルヒは右手に持っていたモノを紙袋へと戻すと、彼の腰には何処から持ってきたのか、ガミラス軍が正式採用しているコスモガンが納められているホルスターがあり、彼はコスモガンをホルスターから引き抜き、その銃口をギンガへと向けた。

時系列はギンガがロビーにあるエレベーターへ乗り込んだ直後へと戻る。
バーガーとバーレンがラウンジで休憩していると、良馬と加藤が慌てた様子で飛び込んできた。
良馬はフロントに掛かっていたあの絵が気になりもう一度見に行ったのだ。
その時、動かなかった筈のエレベーターに乗り込むギンガの姿を見た。
急ぎ、自分も後を追おうとしたが、エレベーターは一基しかないので、エレベーターで追いかけるのはあまりにも時間がかかる。
そこで、別ルートを追いかけることにしたのだが、その前にこの時間帯掘削作業をしていた加藤を呼び、ラウンジに居たバーガーたちに声をかける為、ラウンジへと来たのだ。
四人は急ぎ最上階を目指した。

その最中、
「あれ？もう一人の人は？」
加藤がメルヒの行方を訊ねる。
「朝飯の後、ラウンジには来なかったがのう」
バーレンがメルヒは朝食以降ラウンジへ姿を見せなかった事を伝える。
「部屋で寝ているんだろう。疲れていた様だから今は寝かせてやれ」
バーガーがメルヒは部屋で寝ているのだろうと予想し、今は起こさないでおこうと言う。
ラウンジから客室の通路に着いた良馬たちは、今朝まで無かった筈の階段を見つけた。
「階段？」
「そんな、朝はこんな階段は無かった筈なのに・・・・」
「兎も角、登ってみよう」
良馬たちは階段を駆け上がって行った。
すると、風景はレトロな高級ホテルから一転し、鋼鉄とパイプだけの武骨なモノへと変わった。
「何だ？此処は？」
「大昔の洋上戦艦の艦橋の様だ」
如何やら此処は戦艦大和の第一艦橋の様だ。
しかし、ギンガの姿は見当たらない。
すると、
バキューン
一発の銃声が聴こえた。
「あの銃声は？」
「モルドラＰ―８８の銃声だ!!」
バーガーは先程聴こえた銃声はガミラス軍が正式採用している銃のモノだと言う。
銃声の聴こえた方向の扉から外へ飛び出し、良馬とバーガーは屋外に設置されていた階段を駆け上がる。
やがて大和の防空指揮所に着くと、其処には大きな紙袋を足元に置

いたメルヒがギンガの首を後ろから締め上げ人質にとっていた。
　そして銃口は良馬へと向けられていた。
「メルヒ!!」
「く、来るな!!これは俺たちの食糧だ!!お前らザルツ人にやる分はねぇ!!」
　メルヒはチラッと足元に置いてある紙袋へと視線を移すが、血走った目で良馬を睨む。
　そして今の彼の様子からメルヒが正常な判断力を失っている事が窺える。
「で?その食糧は此処に置いてあったのか?」
「そうだ!!肉や新鮮な食べ物がいっぱい入っていた!!コレは俺が見つけたんだ!!だからこれを食う権利は俺たちガミラス人にある!!」
「生鮮品が何の貯蔵機能の無い環境下で腐らずに置いてあると思うのか?それも一週間以上も・・・」
　良馬が言う通り、この大和の艦橋には冷蔵庫のような食糧を貯蔵できる様な箇所は無く、どう考えても生鮮品が有るとは思えない。
　しかし、
「うるせぇ!!あるったら、あるんだよ!!そんな事言って俺から食糧を奪うつもりなんだろう!?浅ましい連中だぜ!!」
　メルヒは良馬の意見を否定し、あくまでもここに生鮮品が有るのだと主張する。
「そ、それは・食べ物なんかじゃない・・・」
　首を絞められてギンガは苦しそうに言う。
　ＡＭＦが広がり、魔法は使用できず、更にここ最近は食事を摂っていない為、力が出ない様だ。
　もし、普段の彼女ならば、魔法を使えずとも持ち前の格闘術でメルヒを返り討ちにしていたに違いない。
「うるせぇ!!黙れ!!コイツを撃ち殺すぞ!!」
　メルヒはギンガの頭部に銃口を押し当てる。
「何で彼は銃を?」
「分からねぇ。俺たちがホテルに入った瞬間、持っていた銃は消えち

まったはずなんだが・・・」
　良馬はバーガーに小声でメルヒが何処から銃を持ちだしてきたのかを訊ねるがバーガーもメルヒが何処から銃を調達して来たのか心当たりがない様子。
　その時、メルヒの背後からネレディアがゆらりと音も無く現れた。
　目の前で人質と銃を突き付けている者が居るのに慌てる様子も無い。
「何を言っているの?バーガー、ツキムラ・貴方たちも銃を持っているじゃない」
　ニヤリと笑みを浮かべながらバーガーと良馬にそう指摘する。
　二人が慌てて自分たちの腰の辺りを見ると、其処にはいつの間にかコスモガンが入ったホルスターを身に着けていた。
　バーガーはホルスターからメルヒの方へと視線を向け、
「メルヒ!!いい加減にしろ!!食糧が見つかったのなら、分ければいいだろう?俺たちもザルツの連中から非常食を分けて貰って生き延びたんだ!!」
　メルヒを説得するが、正気を失っているメルヒは、ギンガの頭部に銃口をグリグリと押し当てながら叫んだ。
「少佐こそ目を覚まして下さい!!なんでガミラス人の俺たちが異星人なんかに食糧を分けなくちゃいけないんですか!?貴方もバレラスで教えられたでしょう?『ガミラス人の赤子一人の命は異星人千人分の命に匹敵する』って・・・そんなのガミラスじゃ、常識だったじゃないですか!!」
　ガミラスでの常識を語るメルヒが悪い訳では無い。
　バーガーもそうであるが、彼らは幼いときからその様に教育されて来たのだ。
　ガミラスに負けた星間国家に住む住人の生殺与奪は全てガミラスの自由であると・・・。
　ガミラス人は他の異星人などよりも高貴な人間で、その高貴なガミラス人が生き残る為には、他の異星人など何人、何万人も死んでも構わないと言う選民的な考えだ。

最も管理局にも同じような考えを持つ輩は存在するが・・・
「メルヒ・もう止めろ・・・そう言う事を考えるのは・・・ザルツ人だって人間なんだ・・・撃たれれば傷を負うし、当然苦痛も感じる・・・下手をすれば死んじまうんだぞ」
バーガーは哀しそうな目でメルヒを説得する。
それはたとえ異星人であってもかつての恋人そっくりの女が再び自分の前で死ぬのは見たくなかった。
しかし、その行為が逆にメルヒを孤独に追い込み、
「うわぁぁぁぁー!!」
自棄を起こさせた。
メルヒがギンガのこめかみに銃口を押し当て、銃の引き金を引こうとする。
良馬とバーガーが息を飲む中、ネレディア一人だけが涼しい顔をしている。
その時、
「止めろ!!」
「っ!?」
突如、上から黒い影が降って来てメルヒの体と衝突した。
それは別ルートから防空指揮所へ登って来た加藤がメルヒに急降下をかけたのだ。
突然、加藤からの急降下体当たりを喰らい、その衝撃でメルヒは思わず銃を手放してしまう。
彼の手から離れた銃は、クルクルと甲板を回りながら、下の甲板へと落下していった。
そして、メルヒの体は食糧が入っていた袋に当たった。
袋は取り入れ口が塞がれておらず、中身が防空指揮所の床へとぶちまけられたが、その中身を見て、ネレディアとギンガ以外の者たちは息を飲んだ。
袋から出て来たのは食糧などではなく、沢山の人の頭蓋骨だった。
メルヒはそれを食糧だと思い込み、それを食べようとしていたのだ。

しかし、ギンガには袋の中身が食糧ではなく、頭蓋骨に見えていた為、先程彼女は頭蓋骨を食べようとしていたメルヒを信じられない表情で見ていたのだ。
そして、ギンガは彼に袋の中身が食べ物ではなく、頭蓋骨だと教えようとしていたのだ。
「な、なんじゃこりゃ!!」
今まで頭蓋骨が入っていた袋を食糧が詰まった袋だと思い込んでいたメルヒ自身も慌ててバーガーたちの下へと駆け寄る。
袋に詰められていた沢山の頭蓋骨を見て、彼も正気を取り戻した様だ。
全員が袋に詰められた頭蓋骨に視線が集中している中、ただ一人、ネレディアだけが不気味な雰囲気を醸し出していた。
「地球人とガミラス人は共存なんて出来ないわ!!」
突然のネレディアの言葉にバーガーは困惑する。
此処に居るのはザルツ人であって地球人ではない筈だ。
「ネレディア。突然どうした?」
バーガーは親友までもが発狂してしまったのかと思った。
一方、良馬たちは何故自分たちが地球人とバレたのかと思ったが、自分たちが地球人である事に変わりないので、口をつぐむ。
「私たちは騙されて居たのよ。コイツらはザルツ人なんかじゃない。地球人で、あのヤマトの仲間・・まほろば　と言う名の艦の乗員で、ツキムラはその艦の艦長よ」
ネレディアはまるで探偵が犯人を突き止めた様な口ぶりで言う。
良馬は余計な混乱・・引いては自分たちの身の安全の為、嘘をついた事を少なからず後悔した。
「コイツらはドメル将軍を殺し、私たちの故郷、ガミラス星を滅茶苦茶にしたヤマトの連中と同じ地球人なのよ!!」
「ほ、本当なのか?ツキムラ?」
「・・・ああ・・俺たちはザルツ人じゃない・・・・地球人だ」
バーガーの問いに良馬は頷く。
良馬の言葉にバーガーはゆっくりとその手を腰の銃へと伸ばし、グ

リップを握る。
一方の良馬の方もバーガー同様、銃のグリップを握りしめる。
バーガーにとって、地球人は尊敬するドメル将軍や親爺と慕っていたハイデルン、戦友だったゲットーやクライツェの仇・・・・
良馬にとっては、ガミラス人は大叔母のすずかや戦友であった恭介や一の仇・・・・
しかし、良馬の脳裏には此処で彼らを殺して何になる・・・・
今回のイスカンダル救済任務ではガミラスと共闘する可能性が大いにあった。
自分も乗員に向かってガミラスとの共闘が納得できない者は退艦しろと言ったではないか・・・・それを此処で覆すのか？
と、自分に言い聞かせていた為、銃を抜くに抜けず、グリップから手を離す。
「コイツらはバーガー、貴方の大切な人たちを殺し、私たちを騙していた浅ましい連中なのよ!!さぁ、バーガー撃ちなさい!!」
ネレディアは興奮した様にバーガーを煽る。
「君たち、ガミラス人から見たら、俺たち地球人は大勢の同胞の仇だ。だが、それは俺たち地球人からも同じ事が言える・・・・でも、許し合わなければ、負の連鎖は永遠に続く・・・・良いぞ、バーガー、俺を撃て!!」
「良馬さん!!」
「艦長!!」
良馬の言葉を聞き、ギンガも加藤も慌てる。
しかし、良馬は二人を手で制する。
「俺を撃ち、それで君の戦争が終わると言うのであれば、構わない・・・・でも、地球人全員を殺さなければ怒りが収まらないと言うのであれば、俺は君を全力で止めてみせる!!」
ジッとバーガーから視線を逸らさない良馬。
そして、良馬から視線を逸らさないバーガー。
両者が真剣なまなざしで対峙している中、
「みんな、撃ち殺しなさい!!バーガー!!コイツらは地球人全員!!大勢の同胞の仇なのよ!!」

ネレディアがまたもやバーガーを煽る。
彼女の言葉を聞き、バーガーは顔をしかめて、「チッ!!」と舌打ちをすると、ホルスターから素早く銃を抜いた。
ギンガと加藤は良馬が撃ち殺されるかと思い、良馬本人も撃ち殺されるものだと思ったが、バーガーは銃口を良馬ではなく、意外にもネレディアへと向けた。
『えっ!?』
バーガー以外の皆が戸惑う。
それは銃を向けられたネレディアも例外では無い。
「さっきからギャーギャーうるせぇぞ!!だいたい誰だ?テメェは!?」
ネレディア本人以外の全員の視線が彼女に向けられる。
「な、何言っているのよ!?私はネレディアよ。一体どうしたって言うのよ?バーガー」
彼女の声から、ネレディアが明らかに動揺しているのが分かる。
「何の猿真似かしらねぇが、化けるにはもっと正確にやるべきだったな」
「な、何っ!?」
「最初から変だと思ったよ。突然俺のことを『バーガー』なんて呼びやがったんだからなぁ。あのなぁ、ネレディアは俺の事を昔から『フォムト』って呼ぶんだよ。決定的だったのは、ナカジマを見た時だ。自分の死んだ妹に瓜二つの奴が現れたにも関わらず、お前は何のリアクションも起こさなかった」
「っ!?あの時か!?」
偽ネレディアには、心当たりがあった。
それは、良馬たちがこのホテルに来た時、バーガーがネレディアにギンガの事を訊ねて来た時の事だった。
あの時、バーガーはギンガの事を『似ているよな?』と訊ねたにも関わらず、ネレディアは『誰に?』と聞き返した。
例え異星人であったとしても、肌の色が違うだけで妹と瓜二つの容姿を持つギンガに対して姉として何のリアクションを起こさなかったのは余りにも不自然だった。

「そこまで分かっていてどうして？」
「黒幕はお前だって分かっていたんだが、何を狙っていたかが分からなかった。本当なら、俺たちを簡単に殺せた筈だ。それにも関わらずお前は何日も俺たちを殺さなかった。お前には俺たちの死に様に何か理想の形があるんだろう？そうじゃねぇと自分の恨みは晴れねぇよな？」
　ニヤリと笑みを浮かべながら偽ネレディアに訊ねるバーガー。
「それに此奴らがザルツ人じゃねぇって事はとっくに気がついていたぜ」
「えっ!?そうなのか？」
「ああ。最初に会った時にな・・・メルヒの奴は気がついていないみたいだったが、切っ掛けはツキムラたちから貰った非常食だ。あの非常食の袋に書かれていた文字が地球の言語だったからな」
　バーガーはニッと微笑みながら良馬たちが地球人である種明かしをした。
　如何やらバーガーたち、ガミラスの士官の一部は地球の言語を研究していた様だ。
　これも恐らくドメルがバーガーたちに命じて教育したのだろう。
　そして、良馬に銃を受けなかったのは、以前、バーガーが尊敬するドメル将軍から教わった「復讐とは心が弱い者が行う愚かな行為だ」と言う言葉の意味がこのホテルで良馬たちと過ごしていく内にバーガーは理解したのだ。
　皆が偽ネレディアと対峙していると、彼女は寂しそうに呟いた。
「どうやら、ネレディアの記憶を読み間違えたようね・・・」
　そして、視線を熱帯雨林の方へと向ける。
「・・・それと・・・どうやら、招かざる客が来た様ね」
　その時、空の一角が赤くなるとまるで遊星爆弾が落下したような衝撃と爆発が起こった。
　灼熱の炎は川を蒸発させ、その大量の水蒸気と水が戦艦大和へと迫って来た。

五十四話　ジレルの女王

▪

「い、何時の間に・・・・？」

バーガーはフロントロビーに立っていた。

周囲にはメルヒ、バーレン、良馬、ギンガ、加藤の姿もある。

確か、自分たちは十一階の防空指揮所で大量の水と水蒸気に巻き込まれた筈なのだが、一瞬の内で防空指揮所から四階のフロントロビーへと移動していた。

まるで魔法でも使ったかの様に・・・・。

そして、着ていた服も皆、この大和ホテルに入った当時の各国家の軍服へと戻っていた。

だが、ホテルの方は来た時と違った様相をしていた。

いや、この様相こそがこのホテルの本当の姿だったのかもしれない。

白い大理石だった床は古代文字が彫られた黒曜石の様な石の床に変わっていた。

エレベーターもフロントも光の粒子となり消えて遺跡の様相と変わっていった。

そして、部屋の隅の方には沢山の白骨化した死体が山の様に積み重なっていた。

謎の遺跡に白骨死体はいかにも古代遺跡の様相を醸し出すが、出来ればそれはフィクションの世界であって欲しかった。

メルヒがその白骨死体に近づき、死体を確認する。

「っ!?此奴らガトランティスの連中です!!」

白骨死体が身に着けていた軍服とヘルメットを見て、この大量の白骨死体がガトランティスの軍人である事を確認した。

確かに白骨死体は以前、良馬たちがガトランティス本国で突入した際、滑走路で戦ったガトランティス軍の兵士と同じ軍服にヘルメットを着けていた。

偽ネレディアは良馬たちから離れ、ロビーの中央部に佇んでいた。

「これは、君がやったのか？」
　良馬が偽ネレディアに訊ねると、
「この星の力を利用しようと乗り込んで来た者たちの末路よ。私から誘ったのではない。それに私が直接手をかけた者は一人も居ない」
　偽ネレディアは一人も殺していないと言うが、
「嘘つけ!!こんな沢山の死体が転がっているじゃねぇか!!」
　偽ネレディアの言葉をメルヒは否定する。
「外との連絡手段と出入り口を遮断しただけよ。貴方たちの様にね・・・たったそれだけの事で、彼らは互いに疑心暗鬼になり、食糧、金品・・・あらゆる欲望に取りつかれ、殺し合ったわ」
　偽ネレディアは良馬たちにこの大量の白骨死体たちが生きていた時の事と、その末路を冷やかな目で語る。
「なっ?そんな事、当たり前だろう!!こんな所に閉じ込められれば誰だって・・・」
「貴方たちガミラス人が魔女と呼んだジレルの民ならば、お互いの心が読み取れるから、仲間割れなんて事はしないわ」
　バーガーの反論を抑えて偽ネレディアが静かに、しかし、力強い口調で言う。
「ジレルの民・だと?」
　訝しそうに呟くバーガー。
　そんな中、偽ネレディアの姿が変化した。
　髪は床に着く程に伸び、ジレル人特有なのか、ジュラ同様、美しい金色の髪、雪の様な真っ白い肌にエルフの様な長い耳・・・。
　服は黒いマーメイドスタイルのドレスとなり、顔には薄紫色で紋章の様な模様が現れる。
　顔立ちは聡明で悲しみを背負った未亡人の様だ。
　そして、その容姿はホテルのフロントロビーに飾られていたあの肖像画の女性だった。
「我が名はレーレライ・レール。この星は我等ジレルの聖地・・我が始祖、アクエリアスの作りし天の船、シャンブロウ」
　レーレライ曰く、この星は星では無く巨大な宇宙船である様な言い

方だ。
「やっぱりこの文字はジレル語だったんだ・・・」
ギンガは柱や床に彫られている文字を手でなぞる。
「魔女め!!手の込んだことをしやがって、それよりも本物のネレディアは何処に居る!?事と次第によっちゃ、ただじゃ済まさねぇぞ!!」
今まで一緒に居たネレディアはこのレーレライの変装と言う事になる。
ならば、本物のネレディアは今何処に居るのか?
バーガーは本物のネレディアの安否が気になり、レーレライにネレディアの行方を訊ねる。
「彼女は最初から此処に連れて来て居ない。あの紫の船から連れて来たのは貴方たち三人だけ・・・」
良馬はサイレン宙域でジュラが見せた幻影を思い出した。
「幻影を見せたのか?」
「・・・」
良馬の問いにレーレライは答えなかったが、恐らく当たっていたのだろう。
「・・・以前、ヤマトがイスカンダルへの航海の途中、幻影を見せられると言う事例があった・・・もしかしてそれも貴女方が?」
ジュラの母、メラがレーレライの差し金でイスカンダルへ向かう途中のヤマトに幻影を見せたのかと良馬が問うと、
「それは、ガミラスの男に心を奪われし、一人の女の所業・・・我等ではない。我等は故郷滅亡に際し、一握りの者は巡礼の為にこの地に有り、滅びを免れ、それ以降この地に留まり続けている」
「成程、ジレル人はこの次元の狭間でひっそりと生存していた訳か・・・」
良馬たちはレーレライの説明を聞き、絶滅したと言われるジレル人がこうして生存していた事に納得した
その間、ギンガは周辺にある石碑を見ながらブツブツと呟いていた。
それは明らかに石碑に彫られた文字を読んでいた。

ギンガのその行動にレーレライは驚いた様子で、
「ソナタはその文字が読めるのか？」
と、ギンガに問う。
「あっ、はい。ジュラさん・・・・ジレルの血を受け継いでいる方からジレル語を教わりまして・・・・」
「・・・・そうか、最初、ソナタが来た時から不思議に思っていた・・・・ソナタたちには不思議な力を感じた・・・・」
レーレライはギンガと良馬に自分と似た力を感じ取っていた。
「それは・・・・」
ギンガは一度口ごもり、チラッとバーガーたちを見た後、覚悟を決めてレーレライに言う。
「それは、私も貴女と同じ魔女だからです」
「なっ!?」
「っ!?」
ギンガの魔女発言にバーガーとメルヒは驚いていた。
「正確には魔導師と呼ばれる存在です」
ギンガはＡＭＦが展開する中、集中し小さいながらも手の平の上にシューターである魔力球を出現させる。
「魔導師・・・・ソナタの故郷にはソナタと同じ力を持つ人間が居るのか？」
「いえ、ごく一部です」
（ミッドや管理世界には沢山存在しているけど、管理局がこの人たちの事を知ったら、きっと利用しようと考えるでしょうね・・・・）
元局員のギンガから見てもレーレライ、ジレル人の魔力レベルはすさまじいモノだ。
まさに高魔導師のバーゲンセールと言っても良い。
そんなジレル人を管理局が知ったらそのまま野放しにしておくわけがない。
だからこそ、管理局にはジレル人の事を知られる訳にはいかなかった。
「俺も・・実は普通の人間じゃないしな・・・・」

「どういう事だ?ツキムラ」
「見かけは普通の地球人に見えるが、ガミラスにもいるか分からないが、俺は夜の一族・・・吸血鬼族の末裔だ・・・そして、法術師でもある」
良馬も法術で身体の周りにオーラを出す。
それは先祖・忍の旦那譲りで虹色のオーラだった。
「キュウケツキ・・・ホウジュツシ?」
ガミラスには吸血鬼も法術もない為か、バーガーもメルヒも首を傾げている。
「・・・そうか・・・宇宙にはまだまだ私の知らない事が沢山あったのだな・・・」
レーレライは自分たちジレル人以外にも魔法、魔術と言った類のモノを使える種族が存在していた事に驚いていた。
そんな中、ギンガは、「えっと・・・どこかに・・・」と言いながら周囲を見渡す。
やがてお目当てのモノを見つけた様子で、ギンガは透明ガラスで出来たコンソールの様なモノの前に立ち、
「コレね・・・」
手慣れた手つきでコンソールを操作する。
すると、パネルにジレル語らしき複雑な絵文字が浮かび上がる。
いくつかの段取りを行うと、何らかの別の動力が作動し、機械音らしき音が鳴り響きだした。
そして、その機械音は次第に大きくなっていく。
ロビーに積まれていたガトランティス兵の死体は消え、キラキラと光る粒子に辺りは包まれ始める。
その粒子はコンソールの前に立つギンガも包み込もうとしていた。
「ギンガ!!」
「ナカジマ!!」
良馬とバーガーがただならぬ雰囲気を感じ、ギンガに声をかけるが、本人はまるで何かに憑りつかれたかのように目が虚ろになり、喋り始めた。
「銀河に蒔かれた種・・・数多の種族、この地に集い七日の後、心を一つ

と成せ。輝く光輪に入りて、手を携えよ、同じアクエリアスの遺伝子を持つ銀河の同胞よ。さすれば封印は解かれん」
　ギンガがパネルに表示されている言葉を喋っていると、壁が光り輝き、魔方陣の様なモノが床に出現し、ギンガを中心として三つの輪が現れる。
「全てのヒューマノイドは一つの種族から・・・って事か・・・三つの輪・・・それぞれの種族が一つずつ輪に入れば、キーは解除されると言う訳か・・・」
　良馬が先程、ギンガが呟いた言葉を解釈すると、
「ツキムラ、終わりにしようぜ」
　そう言ってバーガーは輪の一つに入る。
「ああ。さぁ、貴女も・・・」
　良馬も頷いて、躊躇しているレーレライへ手を伸ばす。
「わ、我は安息の地を捨てて旅立つ事など・出来ぬ」
　レーレライは俯き、顔が前髪で隠れる。
　そんな彼女の手を良馬は優しく包み込む。
「希望を持ち、明日を信じよう。滅びを待つ今日でなく、一歩踏み出し、未来へ希望を繋げる明日の方が良い」
「・・・我等の明日・・・ソナタは地球人の月村と言ったか？」
「ああ・・・地球人の月村良馬だ」
「ガミラスのフォムト・バーガーだ」
　バーガーは少し照れくさそうにレーレライへと手を伸ばす。
　二人の手を掴んだレーレライは輪の中へと入る。
　彼女はその時、生まれて初めて感じる感情に手を震わせた。
　自分たち種族を魔女と罵り、その為多くの同胞が迫害された後、殺されていくのを見てきてこの世に信じられる者など存在しないと思っていた。
　事実、この閉鎖空間で七日間耐え凌いだ者は居らず、その事実が彼女の思いを裏付けていた。
「我が名はレーレライ・・・レーレライ・レール。数少ないジレルの民の生き残り・・・我らの事を覚えておいて欲しい・・・」

例え、他の種族から魔女と罵られてきてもやはり、ジレル人も人間・・・そのメンタリティーは他の人間と変わらず同じであった。
悲しみを癒す優しさに触れ、彼女の目からは無意識に涙が流れた。
ギンガは三人の他種族の姿を笑顔で見て、上を向き、
「星巡る方舟・永き眠りより今、目覚めん」
ギンガがそう呟いた瞬間、その言葉はまるで始動キーだったかのように、光は三人だけでなく、この部屋全体を包み込み、心地よい鐘の音がした。
「我らの起源・・・時は巡る・・・旅立ち・・・種の保存・・・再生・・・誕生・・・ヒトのカタチ・・・」
ギンガがそう言い終えた瞬間、光は周囲へ一気に拡散していき、ギンガはまるで糸の切れたマリオネットの様に倒れるが、床に倒れる前に加藤が支えた。
周囲へ散った光は上空で二重螺旋となり、まるで空へと舞い上がる竜の如く登って行く、やがて光は高く大きく広がり、爆発するようにいっそう強く輝いた。
その眩しさで皆は目を閉じ、そして目を開いた時、周囲にあった物は全て消えていた。
ホテルのロビーもそこにあった高そうな家具もエレベーター、ガトランティス兵の死体、ラウンジ、客室・何もかもだ。
そして皆はいつの間にか戦艦大和の甲板に居り、良馬、バーガー、レーレライの三人は手を繋いだままの体勢だった。
「ありがとう・・・レーレライ」
良馬は自分たちを信じてくれたレーレライに礼を言う。
「・・・私も信じよう。希望を持ち、新しい明日を・・・未来を・・・」
レーレライの声も先程までの悲壮感が漂っている声ではなく、若干明るい声となっていた。
彼女も明日への希望を見出した様だ。
そして、其処に居る全員が互いに顔を見合わせて頷く。
全ての幻影は消え失せ、目の前には広大な熱帯雨林が広がっている。

だが、其処は最初に此処へ来た平和な光景では無く、大和の防空指揮所で見た爆発と森林の彼方此方で火事が起きている。
木々は炎に飲み込まれ、強力な攻撃に大地は抉れ、崩壊して行く。
そんな中、攻撃の一発が大和の近くに着弾する。
「この攻撃・・・ガトランティスの奴等か!?」
赤く灼熱のエネルギー弾は紛れも無く、まほろば　がこの星へ来るきっかけとなったメダル―ザ級の戦艦からの攻撃であった。
「蛮族共め!!この星を破壊する気か?」
バーガーも横に立ち、その様子をいまいましそうに見つめる。
良馬とバーガーは互いに顔を見合わせ頷く。
二人の中では同じ答えに行きついたからだ。
ガトランティスを倒す
方舟惑星、シャンブロウに対して無差別攻撃をするガトランティスに対する思いは一つだった。
明日への希望を掴み取る為、連中の暴挙を許すわけにはいかなかった。
その時、轟音をとどろかせてバトライザーが操縦する上陸用舟艇が浮上して来た。
「ミナサン、オムカエニキマシタ」
上陸用舟艇からバトライザーの声がした。
「よし、戻ろう!!」
比較的に広い、後部甲板へ着陸した上陸用舟艇へ向かってレーレライを除く皆が走って行った。
レーラライは遠ざかっていく皆をジッと見つめていた。
大和を発進した上陸用舟艇はバーガーたちが乗って来たランベアの内火艇が停めてある所へと赴き、バーガー、メルヒ、バーレンの三人はその内火艇でランベアへと戻って行った。
そして、良馬たちを乗せた上陸用舟艇も　まほろば　へと戻って行く。
メガルーダの火炎直撃砲の攻撃を受け、シャンブロウは崩壊して行

く。
それを防ぐ為、これよりガミラス軍と共闘し、ガトランティス艦隊を撃滅する為に　まほろば　へと戻っている最中、良馬たちは驚愕の事実を知った。
「七時間!?」
「俺たちが上陸してから七時間しか経っていなかったのか!?」
加藤が確認するかのようにバトライザーに訊ねる。
「ハイ」
「どういう事なんでしょう?」
バトライザーの解答に困惑する良馬たち。
確かに大和ホテルの中では、一週間以上の日々を過ごした筈だ。
それにもかかわらず、ホテルの外では、七時間・つまり、ホテル内の一日がホテルの外では、一時間しか時は流れていなかった。
詳しい原因や理論は分からないが、このシャンブロウでは、一部の空間が時間の流れ方とは違う様だ。
やがて、上陸用舟艇は　まほろば　に着艦し、ガミラスの内火艇はランベアへと降りた。
しかし、ランベアに降りたのはバーレンだけで、バーガーは、バーレンに自分が不在の間、ランベアの指揮権を譲渡した。
少佐であるバーガーの次に階級が高いのは大尉のバーレンであり、彼は七色星団やゴルニ戦役と言った歴戦の前線士官であり、十分に指揮官としての素質はあった。
バーレンをランベアに降ろし、バーガーとメルヒを乗せた内火艇はミランガルへと着艦した。
そして各艦は発進準備に取り掛かる。
あれ程、自由がきかなかった舵が今では嘘の様に問題なく作動する。
惑星表面に打ち込まれたアンカーも収納されている。
良馬とギンガは艦橋を目指し、加藤はパイロット待機室へと向かった。
やがて、艦橋に上がって来た良馬とギンガの姿を見た他の面々は唖

然とした。
「ど、どうしたんですか?その恰好・・・」
皆を代表するかのように新見が良馬とギンガに訊ねて来た。
確かに密林地帯を調査したのだから服が汚れるのは不思議では無い。
しかし、その汚れ方が結構凄かった。
同じくパイロット待機室にて加藤も坂井や玲から同じ質問を受けていた。
「説明は後でするよ。それより状況は?」
「はい、ガトランティス艦隊は惑星軌道上に待機しており、我々が浮上して来るのを待っている様です。陣形は不明。現在は例の長距離転移砲にて惑星表面を艦砲射撃しています。ですが、いずれは艦船または艦載機を進撃させてくるでしょう」
新見が状況報告をする。
「いかがいたしますか?艦長」
「・・・勝算が無い訳では無い」
「えっ?」
「この惑星の近くにはガミラス艦隊が居る。彼らと共闘すればあるいは・・・」
「・・・信頼できるのですか?」
「その点については大丈夫だ。我々はそれだけの信頼関係を一週間で築き上げてきた」
「一週間?」
良馬の言葉の意味が分からない様子で首を傾げる新見。
「だが、艦長、ガミラスとの共闘は良いがまずはあの大砲を黙らせないと厄介じゃよ」
井上が敵の火炎直撃砲の対処をどうするのか?と、訊ねる。
確かにあの火炎直撃砲は厄介だ。
馬鹿正直に正面から戦いを挑めば、あっという間に的にされて撃沈される。
土星圏の様に氷の輪に誘い込んで、水蒸気爆発を狙いたいが、シャ

ンブロウには土星の輪の様な氷のリングは存在せず、敵も恐らく土星圏での戦法は学習しているだろうから同じ手はきっと通じないだろう。
「あっ、その点は問題ありません。敵のロングレンジ攻撃の対処は目星がついています」
新見が『我に策アリ』という感じで言う。
「マジっすか!?副長!?」
永倉が少し興奮した感じで尋ねる。
「ええ、ただし敵に二発以上撃たせなければなりませんし、有効性を上げるために偵察機を飛ばし、敵の弾道をトレースする必要がありますけど・・・」
「分かった直ぐに準備させよう。ギンガ頼む」
「分かりました」
ギンガがパイロット待機室に連絡を入れると、玲がコスモゼロにて偵察を行うと言う。
コスモゼロならば、ステルス性にも優れており、速度も問題ない。
まほろば　から出撃したコスモゼロは早速偵察活動を行い、データを　まほろば　へと送る。
「コスモゼロからデータが来ました」
今まで惑星近辺までしか届かなかったレーダー波がコスモゼロのレーダーと直結されたことで、飛躍的に広がり、シャンブロウへと迫るガトランティス艦隊の姿をモニターに表示する。
モニターに表示された艦影は、ラスコー級宇宙巡洋艦とククルカン級宇宙駆逐艦、そして一隻のナスカ級宇宙中型空母で、あの火炎直撃砲搭載艦の姿は見当たらなかった。
しかし、攻撃を今なおシャンブロウへと行っている事からレーダー範囲外の宙域にいるのだろう。
敵の機動部隊は前衛に巡洋艦と駆逐艦を三角の陣形を展開し、その後方に空母と直掩の駆逐艦、巡洋艦を展開している。
また、まほろば　のレーダーはこの近辺にいるガミラス艦隊も同時に補足していた。

ガミラス艦隊は　まほろば　の現在位置から丁度反対側に停泊しており、ゲルバデス級戦闘空母のミランガル、ニルバレスの二隻を中心にガイペロン級多層式航宙母艦のランベア、デストリア級航宙重巡洋艦、ケルカピア級航宙高速巡洋艦、クリピテラ級航宙駆逐艦、十数隻が発進準備を整えていた。
恐らくミランガルの艦橋ではバーガーが良馬同様、惑星内での出来事を話し、まほろば　との共闘を提案している事だろう。
良馬は、ガミラスとガトランティスの戦力不足を痛感する。
(なんでいつも艦隊戦をする時は、自軍の戦力が敵より劣っているんだ!?)
ガミラス、ガトランティス、そして今回新たにペテルギウスやサイレン宙域で遭遇した円盤型の艦隊も数では此方を圧倒していた。
自軍よりも戦力差のある敵に挑むため、艦橋員らは敵の陣営を見ながら短い時間ながらも作戦計画を立て始めた。
「前衛の機動部隊だけなら、何とか五分の戦いは出来るかもしれないが・・・」
「ですが、あまり敵に時間を与えますと、制宙権を取られてしまいます」
「しかし、最初の邂逅時よりも空母は後方に位置していますね」
「発艦準備中に此方の砲撃を受けたんだ。相手も敵前での発艦に慎重になったんだろう」
「この陣形を見ると前衛と機動部隊は一定の距離を保つように指示が来ているのではないでしょうか?」
確かにガトランティス艦隊はゆっくりではあるが、機動部隊は前衛艦隊から着かず離れずの距離を保って行動している。
空母という艦種は搭載している艦載機の燃料、爆薬を集積するいわば動く補給基地であり、例え装甲を張っても戦艦の強度と比べるとやはり劣る。
そこで、空母を配置するのは、艦隊の後方と言うのが定石であるが、あまり敵との間を取り過ぎても、艦載機が敵に到達するのに時間がかかり、燃料の過剰な消費と言うリスクがある。

こうした空母の弱点を補うべく、ガミラスでは、戦艦でもあり、空母でもあるゲルバデス級戦闘空母を建造し、防衛軍でも似た様な空母を建造した。
しかし、防衛軍側は正規空母のノウハウの途上と言う事で戦闘空母になったが、ガミラスは空母運用の困難から実験として建造した。
だが、こういった実験艦はどっち着かずで何かしらの欠点を抱えると言う事が多い。
実際、防衛軍の戦闘空母もガミラスのゲルバデス級の戦闘空母も戦艦としての攻撃力はあるが、その分空母としては搭載機が通常の正規空母よりも少ないと言う欠点がある。
結局の所、空母の運営は弱点を抱えつつ、損失を考慮して人海戦術と大量生産で補うしかない。
そして、現在の局面では、ガトランティスは「シャンブロウを攻撃していればいずれ敵は慌てて出撃して来る。出て来たところで艦載機を飛ばせばいい」と思っているのだろう。
「敵空母は、まほろば　の攻撃を受けて、能力が低下している・・・そう考えて良さそうだな・・・」
ガトランティス側の慎重さと慢心に漬け込む隙が有るのではないかと思う良馬。
「通信長、航空隊に直ちに出撃命令。発艦後は上空で待機。それとガミラスとの通信回路を開いてくれ」
「は、はい」
ギンガに指示を出した後、良馬は再び敵の陣形が表示されているモニターを睨むように見つめた。
「航空隊は直ちに発進せよ!!繰り返す航空隊は直ちに発艦せよ!!発艦後は別名あるまで上空待機!!尚、敵はガトランティス艦艇であり、ガミラス艦は敵にあらず!!」
出撃命令が出てパイロット待機室に待機していたパイロットたちは隣接する格納庫へ走り、振当てられた愛機へと搭乗していく。
やがて、発進シークエンスが終了すると、コスモタイガー隊は次々と発艦して行った。

艦内放送が流れ、まもなくガトランティス艦隊と戦闘が予想される中、フェイトとティアナ、ジュラは用意された部屋での待機を命じられた。
ペテルギウス、七色星団、サイレン宙域同様、部外者である自分たちに出来ることは何もない。
分かっているが、分かっている分、自分たちの無力さを痛感させられた。
そんな中、シャンブロウから戻ったバトライザーがフェイトたちの部屋を訪れた。
「フェイトサン、ティアナサン、ジュラサン。間モ無ク戦闘ガ開始サレマス。念ノ為、ヘルメットト気密手袋ヲ着用シテクダサイ」
バトライザーはフェイトとティアナ、ジュラに安全の為にヘルメットと気密手袋を着ける様に促す。
「う、うん」
「分かった」
「はい」
フェイトとティアナ、ジュラはバトライザーの指示の下、気密手袋を腕に着け、ヘルメットを被った。
そして、戦闘状況が表示されるであろうモニターを凝視した。
まほろば　は機関を始動させ、ゆっくりと上昇する。
その　まほろば　をまるでエスコートするかのようにコスモタイガー隊は編隊を組んで上昇して行く。
やがて、左舷側から　まほろば　同様、雲を割いて上昇して来る艦が複数あった。
言うまでもなく、それはガミラス艦隊だった。
まほろば　とガミラス艦隊は並走し、陣形を組む。
停戦状態とは言え、一昨年までは互いに殺し合いを行っていた仲だ。
そんな間柄でかなりの近距離まで近いてきたのだから、緊張するのは当然であった。
しかし、バーガーたちを信頼していた良馬とギンガは表情が柔らか

かった。
恐らくミランガルに居るバーガーも同じだろう。
まほろば　でコスモタイガー隊が発艦したのと同じく、ガミラス側も次々と艦載機を発艦させていった。
ミランガルとニルバレスからは空間格闘戦闘機ＤＷＧ２６２ツヴァルケが次々と発艦していく。
また、ガミラス艦隊の最後尾に位置するランベアからは七色星団の戦いを生き残った空間艦上戦闘機ＤＷＧ１０９　デバッケと空間艦上攻撃機ＤＭＢ８７　スヌーカが次々と発艦していった。
スヌーカはランベアに残っていたなけなしの爆薬を装填しての出撃であった。
バーレンはランベアを次々と発艦していく艦載機を見て、当初は自分も出撃をしようとしていたが、そこを少年兵のパイロットらに止められた。
バーレンはバーガーから此の艦の指揮権を一時的に預かった身なので、ランベアに残って指揮を貰わねば困る。
ガトランティスとの戦闘は自分らに任せて下さい!!
等と言われ、渋々と言った様子で彼らを見送った。
七色星団の戦いではまだまだ新米のひよっこだった新兵たちも今では一人前のガミラス兵であった。
かつて、ドメルがバーレンに言った『兵は戦場で一人前になる』の言葉通り、彼らはもう新米のひよっこではなく、一人前の立派なガミラス軍人へと成長していた。
ランベアにはこの他にも空間雷撃機ＦＷＧ９７　ドルシーラが搭載されていたが、機数が少ないのと、ドルシーラの主力兵器とも言えるＦｉ．９７型魚雷をランベアは搭載していない為、発艦は見送られた。
三隻の空母とは言え内二隻は正規空母ではなく、残る正規空母のランベアも本来の搭載機分よりも少ない機数しか搭載していなかった為、ガミラス側の航空戦力は決して多いとは言えない。
良馬は、コスモタイガー隊と一緒に飛行するガミラス航空隊の姿を

ジッと見つめる。
ガミラス戦役から今日まで、考えられない光景だった。
地球防衛軍とガミラスが共闘するというのだから・・・
コスモタイガー隊と　まほろば　の艦内に良馬は一つの命令を下した。
「これより本艦は、ガミラス艦隊と共闘し、ガトランティス艦隊を撃滅する!!」
艦橋にも　まほろば　の艦内にも、そしてコスモタイガー隊のコックピット内にも緊張が走った。
その時、まほろば　の艦橋の近くを一機のツヴァルケが翼を振りながら通り過ぎていった。
コックピット内にはバーガーの姿があった。
「バッ、バーガー少佐?!」
てっきりガミラス艦隊の指揮を執るものだと思っていた加藤は目を見張った。
バーガーは良馬と通信で作戦内容を聞き、「誰かが前線で指揮を執らなければ、そんな作戦は無理だ」と言ってガミラス艦隊の指揮権を良馬に任せ、自らは航空隊の指揮を行うべく、こうしてツヴァルケに乗り、部下のメルヒと共に出撃したのだ。
ミランガルの艦橋ではそんなバーガーを見ながら、「本当に馬鹿なんだから・・・」と、微笑むネレディアの姿があった。
バーガーもガミラス艦隊全艦へ通信を入れ、
「お前らを仲間の下へ帰してやる!!俺を信じてついて来い!!」
と、味方を鼓舞し、それを聞いた兵たちは、『ザー・ベルク!!』と口々に答えた。
こうして地球、ガミラスの歴史上初の共闘が行われようとしていた。

その頃、メガルーダは、主戦場から離れた後方に布陣していた。

メガルーダ　艦橋

「ガハハハハ・・・火炎直撃砲の優位はその射程距離にある!!態々前線へ赴かなくとも前衛艦隊が発見した敵艦のデータを元にその地点へ火炎直撃砲を撃ち込めばよいのだ!!」
ダガームは直掩の駆逐艦数隻だけを残し、高見の見物を決め込んだ。
このように主戦場から遥か後方に身を置く司令官と言うのは昔から存在したが、その行動に問題が無い訳ではなかった。
「ですが、其れでは前衛艦隊を囮・引いては捨て駒にするのではないでしょうか?それでは味方の士気に影響が・・・」
副官のメイスが意見するが、それを聞き入れるダガームでは無い。
「連中の駆除などあくまでついでだ!!我々の目的は宝の星の取得である!!」
ダガームの言葉にメイスが余りにも解せない点があった。
「では、何故その宝の星を傷つける真似をしているのですか?」
「フンっ、腰抜け共がどこかに隠れおって、わしの前に堂々と出て来ぬからよ!!ならば、星ごと焼き払い、いぶり出す他あるまい!!」
ダガームは鼻を鳴らしながら言う。
「な、何を言っているのですか!?」
彼の滅茶苦茶な考えにメイスは狂気を感じる。
口ではガミラスと　まほろば等どうでもよいと言って宝の星・シャンブロウを入手すると言いながら、実際は、シャンブロウは二の次で、ガミラスと　まほろば　を何としても撃沈したがっている。
その為ならば、折角見つけた宝の星であるシャンブロウを破壊しても良いと考えている様にも思える。
マゼラン方面遠征軍司令官・一司令官の身でありながらまるで一国を治める独裁者如き彼の所業にもうこれ以上ついて行けないと判断したメイスは人知れず艦橋を後にした。
このまま彼の横暴な振る舞いを許しておけば、ダガームは本当にシャンブロウを破壊してしまう恐れがある。
そうなれば、自分はアンドロメダ方面総司令のゼーダからダガーム共々処刑されてしまう可能性がある。

冗談では無い!!
あんな獣の様な野蛮で知性の欠片の無い無能な男と共に心中なんて真っ平御免だ!!
そんな思いがメイスを突き動かしていた。
艦橋を後にした彼は通信室にて、密かにある場所へ通信を入れた。
メイスが艦橋を後にした事に気がついていないダガームは、
「まだ敵を捕捉出来んのか!?」
スクリーンを見ながらイラつく様子でオペレーターに訊ねる。
しかし、敵が発見しにくいこの状況を作り出したのは他ならぬダガーム本人なのだ。
「か、火炎直撃砲を撃ち込んだ事により惑星内から星間物質が大量に舞い上がり、それによって大気圏内をレーダーで捕捉しにくい状況になっておりまして・・・」
怯えながらオペレーターは敵を捕捉しにくい状況を説明する。
「貴様はわしが悪いとでも言いたいのか!?」
まさしくその通りなのだが、オペレーターは『はいそうです』と言える訳がなかった。
ダガームは長剣を杖のようにして立ち上がった。
その時、スクリーンに光点が幾つか現れた。
またもや命拾いをしたオペレーターはその反応を見逃さずにダガームに報告する。
「敵機接近!!」
それはメガルーダのレーダーが捕捉したのではなく、前衛艦隊のレーダーが捕捉したモノがデータ送信されてきたのだ。
「なにっ!?艦載機だと!?艦隊では無いのか!?」
「は、はい・・エネルギー反応が艦船よりも小さいことから間違いありません」
ダガームは撃破しても対して武勲を誇れるとは言い難い艦載機など興味が無かった。
故に彼は、
「ふんっ、ハエ共(敵艦載機)の処理は前衛のパラカスに言って処理さ

せろ」
　手を二、三回振って厄介払いの様な仕草をとる。
「りょ、了解」
　オペレーターは指示通り、前衛のパラカスに対処する様に通信を入れる。
　メガルーダから命令を受けたパラカスのナスカ級空母、キスカからは次々とカブトガニこと、デスバ・テーターが発艦していく。
　その映像をメガルーダのキャプテンシートからふんぞり返りながら見るダガームの気持ちは未だに晴れない。
「ガミラスの青虫共と　まほろば　はまだ見つからんのか!?」
　オペレーターは慌てて前衛艦隊に確認の通信を送る。
　ダガームの剣がオペレーターの体を刻む前に、
「て、敵艦隊出現!!惑星から上昇してきました!!位置は前衛艦隊の前方!!エネルギー反応、艦影、共にガミラス艦隊と　まほろば　で間違いありません!!」
　オペレーターは冷や汗をびっしょりかきながらダガームに報告した。
　スクリーンには、惑星表面から浮き上がって来る十数隻の艦影が映し出されていた。
　その艦影はガミラス艦隊と　まほろば　で間違いなかった。
　ガミラス艦隊と　まほろば　は勢いを殺す事無く、パラカス率いる前衛艦隊へと迫って行く。
「ふんっ!!ガミラスの青虫共め!!わしの力に恐れをなして、敵と手を組むか?だが、雑魚が幾ら集ろうが無意味なり!!火炎直撃砲発射用意!!目標、前方敵艦隊!!弱腰の青虫共を　まほろば　諸共宇宙の藻屑にしてやる!!」
　ダガームの命令を受け、メガルーダは起動し始める。
　そして、彼は不敵にニヤリと笑みを浮かべた。
　その頃、玲が乗ったコスモゼロは搭載されていたレーダー衛星を周囲に散布し、衛星は敵艦隊の位置を克明に捕えていた。
　そして、まほろば　のコスモタイガー隊はキスカのデスバ・テー

ターの姿を捕捉した。
「お出迎えだ!!いいか、お前ら、下手に武勲を立てようと思うな!!生きて帰る事だけを考えろ!!」
坂井がコスモタイガー隊全機に通信を入れる。
バーガーとメルヒが乗ったガミラスのツヴァルケ隊は、コスモタイガー隊の後方を飛んでいた。
すると、ツヴァルケ隊はゆっくりと大気圏内へと降下し消えてしまった。
新人のコスモタイガー隊乗員の中には、「所詮はガミラスか・・・」と、彼らの行動に落胆と裏切られた気持ちを抱いた者も居たが、加藤はガミラスには何か作戦があるのだと思い、坂井も
「機体の性能も戦法も違う者同士が一緒になっても編に混乱を招くだけだ」と言って今は目の前の敵に集中する様に伝えた。
「おっ?もう、ロックオンが出来るのか?」
モニターに表示されたロックオンの表記を見て、坂井が意外そうに呟く。
まだ敵機は目視では確認できていない。
通常の多目的ミサイルの発射距離ではない。
これは玲が設置したレーダー衛星による機能であり、設置された衛星から敵の情報が逐次コスモタイガー隊へと送られていた。
これにより、コスモタイガー隊の多目的ミサイルは全て誘導可能となっている。
「玲とレーダー衛星に感謝だな。お前ら!!まだイスカンダルを見ずに、死ぬなんてつまらんぞ!!全機初っ端からミサイルを全部ぶっ放せ!!敵にはまだ俺たちが見えていない!!最初から全力全開で行くぞ!!」
坂井がコスモタイガー隊全機にそう告げると、各機から『ラジャー』と返答があった。
そしてコスモタイガー隊から一斉にミサイルが放たれた。
コスモタイガー隊から発射されたミサイルはシャンブロウへと進撃していくガトランティスの艦載機、デスバ・テーター部隊へと向かって行く。

上方から突如現れ、自分たち目がけて降り注ぐミサイルを受け、デスバ・テーター隊は次々と被弾し、墜落して行った。
突然のミサイル攻撃を受け、デスバ・テーター隊は大混乱となり、滅茶苦茶な回避行動をとる内に味方と衝突する機体も居た。
その混乱を見逃すまいと、コスモタイガー隊が襲い掛かった。
コスモタイガー隊がキスカのデスバ・テーター隊とドッグファイトを繰り広げている中、まほろば　とガミラス艦隊は巡洋艦と駆逐艦で構成された敵前衛艦隊に接近しつつあった。
良馬は敵艦隊を睨みつつ、ギンガに向かって命令を下す。
「通信長、ガミラス警務艦隊司令、ネレディア大佐に連絡、まほろばを中心に単横陣に!!」
ギンガが通信を送ると、まほろば　の右舷にはネレディアが座乗するミランガルが左舷にはニルバレスが並び、その外側にそれぞれ、デストリア級航宙重巡洋艦、ケルカピア級航宙高速巡洋艦、クリピテラ級航宙駆逐艦が並び陣を組む。
ガミラスとの合同で演習なんてした経験も無く、時間も無かったため、複雑な陣形をとるのは難しいので、良馬は艦船を横一線に並ぶ単横陣を選んだのだ。

ガミラス軍　第八警務艦隊　旗艦　ミランガル　艦橋
「全艦!!戦闘隊形!!」
「戦闘甲板開け!!全艦、戦闘隊形!!」
ネレディアが命令を下すと、ミランガル　ニルバレスの飛行甲板の部分が回転し、そこから多数の砲塔を装備した戦闘甲板が姿を見せる。
戦闘甲板を出したミランガル　ニルバレスの二隻は既に空母の姿では無く、戦艦としての姿をしていた。
まほろば　とガミラスの混成部隊の指揮権は良馬が執る事になっていた。
先程、バーガーと連絡をとった良馬は、作戦を説明すると共に艦隊指揮権をバーガー、ネレディアの双方から受け取っていた。

本来ならば、艦艇数が多い、ガミラス側で警務艦隊の司令官であるネレディアが執るのが普通なのだが、警務艦隊のネレディアは艦隊戦の経験が多い訳では無い。
警務艦隊は主に友軍の憲兵業務を行っていた為だ。
バーガーは艦隊戦の経験は豊富なのだが、今回は敢えて艦載機部隊の指揮を執る方を選んだ。
その為、こうした変則的な形となった。
何より、この指揮官のメンバーの中で火炎直撃砲搭載艦との戦闘経験があるのは良馬だけだったのも要因の一つだ。
まほろば、ガミラスの混成艦隊の前に三角陣を組むガトランティス前衛艦隊が迫り、両者の距離は徐々に狭まって行く。
「両翼を広げ!!艦の間隔を大きく!!両翼は少し前進し、中央は速度を落し、緩いアーチを形成!!」
各艦は艦首バーニアを吹かし、減速し、陣形を組んでいく。
流石は練度の高いガミラス軍、少々難度のある艦隊運動をこなし、まほろば　を中心に弓型の陣形を組んだ。
「全砲門開け!!目標、敵艦隊先端部、指定座標へピンポイント攻撃準備!!」
まほろば　の前甲板にある第一、第二、第三主砲、第一、第二副砲が狙いを定め、ガミラス各艦艇もそれぞれの主砲、副砲の照準を敵艦へと向ける。
「敵艦隊先端部、指定座標へ照準固定!!」
「敵艦隊射程圏内へ突入!!」
「全砲門撃て!!」
「発射!!」
発射命令はガミラス艦隊へも通達され、混成艦隊の砲塔から一斉にショックカノンが敵艦隊に向け放たれた。
混成艦隊から放たれたショックカノンは接近し引かれ合い、やがて一本の太いビームとなり、敵艦隊の先端部へと迫って行く。
収束したショックカノンは敵艦隊の先端部へと命中し、敵艦が一時に四、五隻が吹き飛んだ。

ガトランティスはなまじ艦隊を密集させていたのが、被害を大きくしたのだ。
「砲雷長。座標を移動させて繰り返し、敵中央部にピンポイント攻撃を続けろ」
「了解。全艦へ通達・・・」
フェリシアがポイントの修正情報を各艦へと送り、
「てぇぇぇっ!!」
再び混成艦隊の各艦から放たれた光が収束し、敵艦隊へと向かうと、そこで幾つもの爆炎が上がった。
こうしてシャンブロウ上空にてガミラスとの混成艦隊とダガーム艦隊との決戦の火蓋が切って落とされた。

五十五話　シャンブロウ海戦

敵の混成艦隊が一斉射撃を行い、その攻撃を受けて前衛艦隊の味方艦艇が撃沈されていく様をダガームは苦虫を噛み潰したような表情で見ていた。

そして、怒りに任せ、長剣の剣先を思いっきり床に叩き付ける。

「ええいっ!!何をやっておるか!!火炎直撃砲発射用意!!」

ダガームは状況を打開すべく、ダガーム艦隊の切り札を用意させる。

「火炎直撃砲発射用意!!目標!!前方敵艦隊!!」

オペレーターがダガームの命令を復唱し、停船しているメガルーダは火炎直撃砲の発射準備を行う。

そこへ、

「で、ですがこの状況下では前に　まほろば　を狙った時の様に惑星の引力の影響を受けてしまいます」

何時の間に艦橋に戻っていたメイスは忠告した。

「構わん!!あれだけ艦船が並んでおるのだ!!どれかに当たるだろう!!撃ち続けていれば敵を殲滅出来る筈だ!!」

「そんないい加減な・・・」

其処まで言いかけてメイスはダガームに睨まれたので、それ以上の発言は出来なかった。

その間にも兵たちは火炎直撃砲の発射準備を進めて行く。

「薬室内圧力上昇」

「相対着弾地点座標入力」

「エネルギーダンパー起動」

彼らにとっては副長のメイスの言葉よりも上官であるダガームの命令の方が優先される。

それは何もダガームがメイスよりも階級が高いと言う理由だけでは無い。

彼の命令に背けば、どうなるかは知っており、彼らは自分の命がか

かっている為、兵たちはダガームの命令を熟していくしかないのだ。
「火炎直撃砲準備完了!!着弾地点に友軍艦艇はおりません!!」
オペレーターは最終宣告を行いあとは引き金を引くだけであった。
「火炎直撃砲発射!!」
そしてダガームは火炎直撃砲の引き金を引いた。
メガルーダの眼前に生まれた灼熱の高エネルギーはすぐに消失、艦首に装備されている転送機によって空間を越えて転送された。
火炎直撃砲が発射されてダガームは口元をニヤリと緩め前衛艦隊と混成艦隊が戦闘を行っている宙域が表示されていたモニターを見ていた。
突如宇宙空間がゆらりと揺らぎ、リングが生まれる。その中心へ光が収束すると巨大な灼熱の高エネルギー波が形成されて混成艦隊へと迫って行く。
しかし、メイスの言った通りメガルーダが放った火炎直撃砲はシャンブロウの重力影響を受け、まほろば を狙った火炎直撃砲の高エネルギー波は大きく右側にズレ、其処を航行していたクリピテラ級航宙駆逐艦に迫ったが、直撃は免れ、船体をかすった程度で済んだ。
「チッ、外したか」
ダガームは初弾が外れた事に思わず舌打ちをした。
それと同時に解せない事もあった。
「しかし、どういう事だ?火炎の出現を確認してから、幾らスラスターを噴かそうとも、火炎直撃砲の砲撃からは逃れられない筈だが・・・・?」
そのダガームの疑問を観測していたオペレーターが報告する。
「それは、やつらの後退スピードのせいかと思われます」
「後退スピードだと?」
「はい。現在、敵艦隊は全速で後退をしております。火炎直撃砲を奴らの前方に照準して発射していては、実際に火炎が現れたポイントからはかなりズレてしまいます」
「つまり、臆病者が全速で逃げている故、当たらないと申すか?」
「そうなります」

火炎直撃砲がかわされた後も、混成艦隊からの攻撃で前衛艦隊への被害が再び増す。
「敵からの攻撃で前衛艦隊に再び着弾!!被害多数!!」
「ええいっ!!悪戯に損害を増やしおって!!パラカスの奴は何をしている!?数は前衛艦隊の方が優っている筈だろうが!!同じように此方も艦隊を横に広げて応戦させろ!!」
ダガームの命令は直ぐに前衛艦隊へと伝えられ、前衛艦隊は陣形を正三角形から混成艦隊と同じように横一列へとなり、混成艦隊を追って行く。
相変わらず、混成艦隊への攻撃は行われ、沈む艦がいるが、陣形を変える前よりは被害は減っており、逆に反撃を行い、混成艦隊には被害が出始めた。
「フンっ、いちいち命令を下さなければ、この程度の事も分からんのか？」
ダガームは自分の部下の不甲斐なさに呆れた。
もっと優秀な部下がいれば、敵艦隊などあっという間に殲滅出来たモノを・・・と思っていた。
「臆病者が!!その逃げ足で命拾いしておると言うのであれば、今度は逃げれない位置へと撃ち込んでやる!!火炎直撃砲第二波発射用意!!目標、敵艦隊後方!!」
火炎直撃砲の特性の一つはその速射性と狙撃性にある。
波動砲やデスラー砲は、威力は高いが、高速で移動する敵に対しては狙撃する事は出来ない。
しかし、火炎直撃砲ならば、敵の移動先が分かれば高速で移動する目標でも捕捉できる事が可能である。
しかも波動砲、デスラー砲と比べると、速射性も上である。
「火炎直撃砲発射準備完了!!」
「火炎直撃砲発射!!」
メガルーダから火炎直撃砲の高エネルギー波がワームホールの中へと撃ち込まれた。
そして、放たれた高エネルギー波は突如、混成艦隊の前に現れた。

しかし、今回もシャンブロウの重力影響の為か、まほろば から外れ、隣を航行していたニルバレスの至近距離に現れた。
ニルバレスはバーニアを噴かして回避しようとしたが、出現ポイントが余りにも近すぎた為、逃れる事が出来ずに、その灼熱の炎に焼かれた。
「ニルバレスが沈んだ!!」
「くっ・・・」
爆沈するニルバレスを見て、ミランガルの艦橋員はうろたえ、ネレディアは思わず顔を歪ませる。
警務艦隊の主力の一隻であるニルバレスの損失は混成艦隊にとっては大きな痛手であり、なにより敵が此方の火炎直撃砲の対策に気がつき、別の手を打ってきた事が更に混成艦隊に不安を抱かせた。
「ガッハハハハ!!小賢しい策では戦いに勝てんぞ!!このまま全艦沈めてやれ!!」
勝ち誇ったダガームが火炎直撃砲を更に撃ち込もうとした時、
「提督、ゼーダ総司令より緊急電です」
メイスがダガームに話しかけて来た。
この時、彼の口元は僅かに緩んでいた。
何故このタイミングでゼーダからの緊急電が来たのかと言うと、ゼーダの命令を無視し、暴走したダガームの行動をあの時、艦橋から抜け出た時、ゼーダに密告したのだ。
メイスは常々ダガームを陥れ、自分が彼に変わってこの艦隊の司令官職を狙っており、遂にそのチャンスが来たと思いそれを実行に移したのだ。
一方、自分の楽しみの時間を若造の司令官に邪魔された事にダガームは「チィッ!!」と舌打ちをして、通信に応じた。
自分よりも若く、姿を見るのも嫌な相手であったが、上官である以上、敬意は示さなくてはならない。
「これは、これは、総司令官閣下。緊急とはいかなる御用件でありましょうか?」
「メイスから報告を受けたのだが、例の星を発見したそうだな?」

ゼーダは表情を変える事無く、ダガームに淡々と訊ねる。
ダガームは密告された事を知り、メイスを睨みつける。
だが、既にメイスの手によって詳細がゼーダに知られてしまっては今更、白を切るのも不可能なので、正直に答えた。
「御意、発見には大変苦労をかけましたが、ようやく・・・・」
シャンブロウの発見は全くの偶然であったが、印象を良くしようと成果を大きく、大げさに報告した。
しかし、ゼーダはそんな言葉に意を返さず、
「ならば、即時攻撃を中止したまえ」
と、冷静に命令を下した。
だが、戦の勝利に強いこだわりを持つダガームにとってはその命令は納得しがたいものであった。
「これは異なことを総司令官閣下。某はガミラスの青虫共を血祭りにあげ、大帝陛下を始めとする大勢の同胞の仇である地球の戦艦を手土産として手に入れられる機会をみすみす・・・・」
ダガームは戦闘続行に正当な理由をつけようとするが、
「馬鹿もん!!」
ゼーダは一喝してダガームを黙らされた。
「私が貴様に与えた命令は件の星を見つけ、アンドロメダ方面へ回航させる事だ!!ガミラスや地球の連中などと戦争ごっこなんぞしおって!!終いにはその星を火炎直撃砲で傷つけるとは何事か!!」
ゼーダの言う事は正論であり、ダガームは反論する事が出来なかった。
「し、しかし、ガミラスは、一時は同盟を組んでいたとは言え、今はその同盟もなく、彼奴等は小マゼランを巡っての宿敵であり、地球は我等にとっては大仇であります。目の前に敵が居れば、戦い、そして勝利するのは戦士としての本懐というもの!!」
尚もダガームはこの戦闘を正当化しようとするが、ゼーダは呆れた表情でダガームを見る。
「ふんっ、所詮は獣同然の野蛮人か・・・・」
ゼーダは呆れるように言い放つ。

「なっ!?なんだと!!」
ダガームの手に持つ剣が怒りのせいか小刻みにカタカタと震えている。
しかも口調までもが普段通りになっている。
しかし、ゼーダはそれを知りつつも尚、語り続ける。
「貴様を今回の遠征軍司令官に推したのは恐れを知らぬその勇猛さを買っての事だったのだが、貴様は戦士ではなく、ただの獣同然の野蛮人の様だな。それでは、折角与えた新鋭艦も宝の持ち腐れだ。こんな事ならば、司令官にはメイスかパラカスにしておくべきであった・・・貴様の様な獣が私の部下であった事こそ、私の最大の恥辱だ」
ゼーダの言葉はダガームを怒らせるには十分すぎる言葉であり、
「うらぁぁぁぁ!!」
野獣の様な大声をあげ、ダガームは長剣を振り上げると、それを一気にゼーダの姿が映るホログラム投影機に振り下ろした。
すると、ゼーダの姿は消え、ホログラム投影機は煙と火花をあげて壊れた。
しかし、彼の怒りは収まらず、
「ふんっ!!」
続いて長剣を横一線に振るう。
すると、メイスの首と胴は切り離された。
メイスは痛みを感じる事無く一瞬で絶命した。
一刀両断にされたメイスの体がドサッと床に倒れ、メガルーダの艦橋の床は血だまりが出来、血液独特の臭いが漂った。
しかし、艦橋に居た兵たちは誰一人、動揺する者は居なかった。
彼らはダガームの怒りに触れた者の末路を知っていたからだ。
「ふんっ、密告などと姑息なマネをしおって!!勝利の美酒が不味くなるではないか!!」
ダガームは長剣に着いた血を振り払い、キャプテンシートの隣にあるテーブルの上に置いてある酒瓶を手に取ると、そのまま酒をガブガブと煽る。
彼は既にこの戦闘に勝利したと確信していた。

別の意味で、彼はバルゼー同様、慢心していた。
まぁ、そう思うのも確かに頷けた。
戦力では相手は十数隻で此方は数では勝っている。
火炎直撃砲を撃っていれば敵艦を吹き飛ばせる。
まほろば　を撃沈する事は出来なかったが、照準は次第に近づいており、もはや撃沈は時間の問題だ。
それに火炎直撃砲の直撃がなくとも前衛艦隊の被害を無視して行けば、いずれ数に物を言わせて包囲殲滅するのは簡単な筈。
どの道、勝利は自分のモノになるのだ。
ここらで一気にカタをつけるか。
そう思い、ダガームは全艦に下令する。
「前衛艦隊は包囲網を狭めて攻撃を強化、パラカスには艦載機を全部出せと命令しろ!!」
通信士がダガームの命令を機動部隊に伝え、前衛艦隊は命令通り、包囲網を狭め、パラカスが座乗する空母キスカでは、残りの搭載機の発艦準備が始まった。
その時、観測士がレーダーの異常を報告した。
「提督!!レーダーに異常が!!強力な電波妨害（ＥＣＭ）を受けています!!」
「なにっ!?どういう事だ!?」
スクリーンに目をやると、電波妨害の為、映像はノイズが走り何も映らなくなった。
「原因は近くを飛行する敵機によるものだと判明しました」
オペレーターはコンソールを操作して調整を試みるがノイズを除去する事は出来なかった。
「ふんっ、既に勝敗は決しておるわ!!彼奴等め、今更こんな小細工等何になる?」
電子妨害を受けていてもダガームには余裕が有った。
ＥＣＭとて万能ではない。
敵の妨害電波に対して此方も妨害電波を流せば、中和出来るのだ。
ただ、相手が使用している妨害電波の周波数を特定するのに少し時

間がかかるだけなのだ。
その時、ダガームは獣的勘で不吉なモノを感じ、前方の窓を睨む。
そこには敵機と思しき銀色の艦載機が此方に向かって接近して来た。
機影からして友軍機でもガミラス機でもなかったので、まほろばの・・・・地球の艦載機だと言う事が分かった。
これは索敵活動をしていた玲が乗るコスモゼロであった。
「敵機だと!?どうして奴等に我々の居場所が・・・・?」
「ち、近くに索敵機が居るのでしょうか?」
メガルーダは今、敵のレーダー範囲外に居る。敵が索敵機を飛ばして此方を探している可能性も十分考えられるが、この広大な空間で多数の索敵機を飛ばせる程の余裕が敵に有るとはとても思えない。
ならば、偶然にも運悪く見つかってしまったと言う事か?
「そんな事はどうでもいい!!前方から迫る敵機を撃ち落せ!!」
「ですが、レーダーが作動していない今、連動しての射撃は不可能です!!」
「構わん!!手動で撃て!!気合で何としてでも撃ち落せ!!」
その間にも敵機はメガルーダに迫り搭載されていたミサイルを切り離した。
コスモゼロから発射されたミサイルはメガルーダの艦首付近で左右へと分かれ、艦首部に命中した。
艦首からはオレンジ色の爆炎と煙が上がり、艦体が揺らいだ。
しかし、超弩級戦艦であるメガルーダはたった二発の対艦ミサイル如きでは沈む事は無かった。
ミサイル攻撃をした敵機（コスモゼロ）は、機体をロールさせながら、艦橋近くを通り抜け、パルスレーザー掃射を行いながら艦尾方向へと去って行った。
当然、ミサイル攻撃同様、パルスレーザーの攻撃でもメガルーダにとっては蚊に刺された程度の損傷にしかならなかった。
しかし、被害はある意味甚大であった。
その報告を受け、ダガームは驚愕することになる。

「提督!!」
「なんだ？」
「先程の敵機の攻撃で艦首の転移装置が全損!!火炎直撃砲が使用不能です!!」
「なっ、何だと!?」
先程の敵機は最初から艦首の転送機のみを狙って攻撃してきたという事実を知り、ギリッと苦虫を噛み潰したような表情をするダガーム。
切り札の火炎直撃砲が使用不能と言う事実により、自軍の勝率はガクッと落ちた。
ゼーダに無礼な態度を取ってしまった以上、このまま手土産なしにアンドロメダ方面へと帰れる訳がない。
しかし、火炎直撃砲が無くともメガルーダにも武装は施されており、艦数ではまだ此方が優っている。
味方が何隻沈められようとも生き残れば、勝者であり、正義なのだ。
(まったく、どいつもこいつも不甲斐ない連中め!!)
心の中で部下たちに毒づき、ダガームは命令を下す。
「火炎直撃砲が使えなくとも問題ない!!わしが貴様らにガトランティス戦士の本当の戦いと言うモノを教えてやる!!機関全速!!敵艦隊へ向かって全速前進!!」
ダガームの命令の下、メガルーダはゆっくりと動き出した。
「行くぜ!!全機、俺に続け!!」
玲のコスモゼロが行ったＥＣＭ攻撃はバーガーが隊長を務めるガミラス航空隊の攻撃開始の合図でもあった。
電子妨害はガミラス航空隊も影響も受けており、やりにくい戦場ではあるが、そこは歴戦の軍人であり、ドメル艦隊の切り込み隊長バーガー。
彼は自らが先頭に立ち、士気を高めていく。
かつて、ドメル将軍から彼は「厳しい状況でも現有戦力で臨機応変に対応しろ」と何度も言われ続け、その度に様々な劣勢な状況下を想定したシミュレーションを行ってきた。

「全員、センサーをあてにせず有視界の攻撃を行え!!いいか、ビビって敵が豆粒みたいな距離でミサイルを撃っても当たらんぞ!!照準器一杯に敵の姿が映るまで近づけば必ず当たる!!わかったな!!」
　各機からは『了解』と返答があった。
「警務艦隊の艦載機隊の奴等にそんな芸当が出来ますかね？」
　バーガーの隣をメルヒが乗るツヴァルケが飛行してバーガーに訊ねる。
「しゃあねぇだろう。数が足りないんだから」
　バーガーはそう言うが、ガミラス航空隊の士気は高かった。
　特にニルバレス所属のツヴァルケ隊の士気は凄かった。
　彼らは戦死した仲間と撃沈された艦の仇を討つため、乗艦と仲間を失った悲しみを怒りに変えて敵艦隊へ向かって行ったのだ。
「では、少佐、自分は空母を叩きます」
「了解だ。空母さえ潰してしまえば、多少は有利になるだろう」
　ガミラス航空隊がシャンブロウの大気圏から飛び出して行く。
　バーガー率いるガミラス航空隊は大気圏に潜んでおり、良馬たちが前衛艦隊を自身に引き付けてガミラス航空隊から目を避けさせてくれたおかげで、こうして敵の機動部隊に接近する事が出来た。
　眼前には巡洋艦と駆逐艦を護衛艦とする空母が居る機動部隊が居る。
　ガミラス航空隊は敵機動部隊の真横から接近していた。
　もし、敵のレーダーが正常に機能していれば、あっという間に探知されていただろうが、電子妨害のおかげで探知されずに接近する事が出来た。
　しかし、いつまでも気づかれないと言う訳では無く、敵もガミラス航空隊の存在に気づき、ビームを撃ちこんで来た。
　敵の第一斉射で数機の艦載機が撃墜された事に戸惑いが生じた。
「電波妨害が効いていない!?」
「これじゃあ近づけないぞ!!」
　不安と戸惑いの為、編隊は一時、乱れそうになったが、
「騒ぐな!!電波妨害はちゃんと効いている!!連中は当てずっぽうで

撃っているだけだ!!撃たれるか撃たれないかは運次第だ。でもな、下手に編隊を乱すと当たっちまうぞ!!」
バーガーの言葉に編隊は何とか崩壊を免れた。
「こうなったら、一撃離脱方式をとる。全機、目の前の敵艦に飛び込み、俺の指示で一斉に対艦ミサイルを撃ち込め!!チャンスは一度っきりだ!!」
「対空砲火は俺たちが引き付けてやる!!心配するな!!デバッケ隊!!俺に続け!!」
メルヒはランベアに搭載されていたデバッケ隊を引き連れて先頭を飛行する。
バーガー自身も自らの機体を先頭に置いたまま、飛行を続ける。
既に各機の照準器には敵艦船がロックオンされた状態だが、まだ司令機であるバーガーから発射命令が下されない。
誰かが一人撃てばつられて皆も撃ってしまいそうな状況下・・・・。
いくら当てずっぽうでも『下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる』の言葉通り、被弾し撃墜される機体が増えて来た。
敵弾が至近距離を通過すると、機体がビリビリと揺れた。
やがて、敵艦との距離を知らせる「ビィー」と言う警戒音が鳴り響いた。
「よし、全機ありったけのミサイルを敵に撃ち込め!!」
ガミラス航空隊からは一斉にミサイルが発射された。
ガトランティス艦艇からは狂ったようにビームを撃ち、迫るミサイルを撃ちおとそうとする。
撃ち落されるミサイルはあったが、ミサイルの数が多すぎる。
ミサイルは次々とガトランティス艦船へと命中して行く。
スヌーカーが放った対艦ミサイルは特に効果的で、駆逐艦は辺り所が悪ければ、一撃で撃沈する成果をあげた。
そして、メルヒが狙った空母キスカでは、今まさに追加のデスバーテーターの発艦準備中だったのか、飛行甲板には多数の機体が展開されており、そこにミサイルが命中したため、燃料と爆薬に引火し、艦体を滑るかのように炎が包み込む。

自分の目標である空母を攻撃した後、上空をパスしたが運悪く、そこに一隻の駆逐艦がおり、ビームを放った。
そして、メルヒはその攻撃に自ら当たりに行くような形となり、被弾した。
機体は大きく揺れ、制御もままならない。
「メルヒ!!脱出しろ!!」
墜ちていくメルヒの機体に向かってバーガーが叫ぶ。
「・・・少佐・・・自分には・・・運が無かったようです・・・・・・」
満足そうにメルヒは微笑む。
そして、彼の機体はグラリと機首が下がり急速に編隊から落伍し始め、爆発した。
「メルヒ!!」
バーガーはまた一人、大事な部下を失った。
しかし、彼は取り乱す事無く、航空機の指揮を執り続け、本来の作戦通り、深追いを避けて　まほろば　のコスモタイガー隊への合流を目指した。
尊い犠牲を出しながらもダガーム艦隊の機動部隊は壊滅し、残存艦は被弾しつつも航行可能な艦は数隻程度であった。
「此方コスモゼロ、山本。敵旗艦の転送装置の破壊に成功」
玲からの通信に　まほろば　の艦橋は湧き立った。
「流石っすね、副長。敵艦の位置を割り出すなんて」
永倉が新見の策が成功した事に彼女を褒める。
「それほど難しいことじゃないわ。あの転送砲のデータはある程度土星圏の戦いであったし、あとは測量の応用ね」
「測量・・・ですか？」
永倉が今回の策と測量がどの様な関係があるのかを訊ねる。
「ええ、だから敵に二発以上撃ってもらう必要があったのよ。一発目は軸線上を捜索し、二本目の交差点に敵が潜んでいる可能性が大きですから」
ワームホールから出た火炎直撃砲はそのまま後方へと飛んでいく。
そこで、出現後の飛翔距離を逆算して二つの線が重ねるポイントに

発射点を求めたのだ。
そこへ玲のコスモゼロを向かわせて電波妨害を行い、ピンポイントで敵旗艦の転送装置のみを破壊した。
敵の転送砲を封じ、機動部隊を壊滅させた混成艦隊。
残るは敵旗艦と残存する敵艦のみ・・・・。
低かった勝率は上がったが、それでもまだ油断はできない。
「この機会に敵旗艦を叩く!!全艦、機関反転全速前進、まほろば　を中心に密集隊形!!」
後退していた状態から艦隊は一転し、前進する。
前衛艦隊とメガルーダの火炎直撃砲により、ニルバレス以下、数隻の艦艇を失い。
ミランガルも多少被弾したが、俄然無傷な艦艇も存在する。
敵は此方が未だに後退していると思い込んでおり、前進して来る。
それは此方の必中距離に自ら飛び込んで来ると言う事だ。
「全砲門開け!!目標前方敵艦隊!!」
「主砲発射!!」
混成艦隊からの一斉射撃を受け、またもや宇宙の塵と化した。
「敵陣突破!!」
密集隊形をとった混成艦隊は敵前衛艦隊を中央突破した後、周囲に砲撃とミサイルをまき散らしながら進んでいく。
火炎直撃砲は使用不能、機動部隊は壊滅、中央突破をされ、ダガーム艦隊は真面な連携がとれずに混乱していた。
しかし、敵を攻撃すると言う行為そのものは、止める事無く、散発的ではあるが、混成艦隊へ向け、攻撃しようとする艦が多かったが、この時彼らの動きが自分で自分の首を絞める結果となった。
戦闘艦が一番の隙を見せるのは回頭する時である。
被弾面積が大きい、側面を晒し、速度を落すからである。
中央突破され、後ろから混成艦隊を追おうとし、回頭しようとする。
そこへ、混成艦隊の後部砲塔から発射されたショックカノンとミサイルが襲い掛かる。
「艦長、ミランガルから通信です」

「ミランガルから?スクリーンに投影してくれ」
「ツキムラ艦長、貴官の艦隊指揮は中々の腕だな」
「偶然上手くいっただけです。それに自慢の優秀な部下が大勢いますから」
「そうか・・・」
「ですが、まだ勝った訳ではありません。最後まで油断せずに行きましょう。ネレディア大佐」
「うむ、そこで提案なのだが、敵は左右に分かれ我々を追撃して来るだろう。例え、敵の旗艦に肉迫しても後ろから追いつかれれば挟撃される。故に殿は我々が務めよう」
「しかし、敵の数はまだ相手が上ですが、大丈夫ですか?」
「お気遣い感謝するツキムラ艦長。だが、我々も誇りあるガミラス軍人。たかが二倍の戦力の敵相手に遅れはとらんさ」
　ネレディアは気高い笑みを見せた。
「分かりました。本艦は敵旗艦との戦闘に入ります。ネレディア大佐には殿をお願いします」
「ああ、ではな、ツキムラ艦長。後でまた会おう」
「ええ・ご武運を・大佐」
「貴官もな・・・」
　良馬とネレディアは互いに敬礼し合って通信をきった。
「機雷投下準備」
　良馬はネレディア率いるガミラス艦隊が少しでも優位になるように離れる際、援護を忘れなかった。
「機雷、投下準備完了!!」
「投下!!」
「機雷、投下します!!」
　まほろば　から投下された機雷は当初は大きな樽の様なモノに詰められていたが、ある程度の時間が過ぎると、その樽から放出され、広範囲にばら撒かれる仕掛けとなっていた。
　機雷はガミラス艦隊前方・つまり敵艦隊の針路上にばら撒かれた。
　この機雷はただの機雷としても使用できるが、電波で敵艦の接近を

捉えると自動でバーニアが点火し、敵に向かって行き、また熱源モードにセットすれば、噴射ノズルから発せられる高熱を探知してその熱源に向かうことも出来、レーダー波を探知したり、時間が来ると爆発する時限式にも調整可能な機雷だった。
今回は熱源探知モードと通常の機雷モードの二つのモードにセットされており、まほろば、ガミラス艦の機関パターン以外でセットされていた。
『シ・エ・ン・カ・ン・シャ・ス・ル』
と、ミランガルから発光信号が送られ、ガミラス艦隊はガトランティス艦隊へ、まほろばはメガルーダへと向かって行った。
ネレディアは　まほろば　の作ってくれた機雷原を前に残存艦艇を集結させ、半円形の陣形をとった。
敵の数が少数で自軍の戦力が多い場合、射線が十字砲火出来る様に包囲する。
反対に守備側の場合は、円陣を組み、全方位からの攻撃に対処できるようにする。
まほろば　が敵の旗艦、メガルーダへ向かった後もガトランティス艦隊はガミラス艦隊へと迫って行く。
当初は中央突破を図られ、混乱したガトランティス艦隊も態勢を立て直し始めた。
ダガームやパラカスの指示が無くとも各分艦隊司令の命令が届いたのだろう。
ガトランティス艦隊は左右から迫り、ガミラス艦隊を包囲しようとする。
しかし、彼らは　まほろば　の残した置き土産に気がついていない。
それはダガームがシャンブロウに対して行った火炎直撃砲による艦砲射撃が原因であった。
周囲には星間物質が大量に漂っており、敵艦以外は無視していた。
そして、一隻のガトランティス艦が機雷原に突入すると、機雷が作動し、ガトランティス艦へと向かう。

急速に接近して来る物体をキャッチしたガトランティス艦は直ちに迎撃を行う。
やはりガトランティス艦の射撃性能は早く、弾頭部を撃ち抜かれた機雷は次々と爆発して行くが、この機雷原は飽和攻撃も狙っており、周辺の機雷も次々と連動し、ガトランティス艦隊へと向かって行く。
敵に撃ち抜かれる機雷も多かったが、全ての機雷を撃ち抜くことは出来ずに、敵艦の懐へと飛び込み敵艦を沈める機雷もあった。
「今だ!!敵の混乱に乗じて砲撃を行え!!」
ネレディアが全艦に砲撃命令を下す。
ガトランティス艦隊は目の前のガミラス艦隊よりも自分達に迫って来る機雷の対処に目が奪われてしまった。そこをネレディアは見逃さず、一艦、一艦を着実に沈めにかかった。
しかし、多勢に無勢で、ガミラス艦隊も奮闘したが、被害は出る。
ミランガルも敵弾を何発か食らい、艦橋にいるネレディアの下には逐次被害状況が入る。
他艦に比べたら、装甲は厚いが、無傷と言う訳では無い。
このまま被弾し続ければ、航行不能か撃沈される。
(思ったよりも敵の数が多かったか・・・しかし、奴らを　まほろばの下へ行かせる訳にはいかんのだ。例え、本艦が沈もうとも・・・)
ネレディアには自分が成すべきことが分かっていた。
命令系統を司令官一人に集中させているガトランティス艦隊は総大将を失えば、瓦解する。
だからこそ、自分は此処で一分一秒でも長く、敵を足止めしなければならない。
それこそが、まほろば　を救い、引いてはこの戦への勝利に繋がるのだ。
ミランガル率いるガミラス艦隊が奮戦していると、
「敵艦ミサイル発射!!」
「本艦への直撃コースです!!」
ミランガルへの艦橋目がけてミサイルが接近して来た。
「迎撃!!」

すぐにミランガルはパルスレーザーで迎撃するが、ミサイルは既に迎撃網の内側へと迫っていた。
「迎撃不能!!当たります!!」
「回避!!」
「駄目です!!間に合いません!!」
(フォムト・・・・)
死を覚悟したネレディアの脳裏に過ぎったのは妹が愛した男・・・・そして、ネレディア自身も愛した男の姿であった。
ミサイルは前甲板を高速ですり抜け、艦橋へと迫る。
艦橋員はその場に伏せて直撃を覚悟する。
その時、横から黒い影が横切り、ミサイルと衝突した。
凄まじい衝撃音と衝撃がミランガルの艦橋を襲い、揺れるが、ミランガルの艦橋事態は無事だ。
「フォムト!!」
ミランガルの艦橋とミサイルの間に割り込んだのは一機のツヴァルケであった。
多数のツヴァルケが出撃したが、ミサイルに体当たりをしたのは、誰のツヴァルケなのかネレディアは直ぐに分かった。
こんな無茶で馬鹿な事をするのは一人しか居ない・・・・。
軍に入り、妹が死んでから一度も流していない涙がネレディアの頬を伝う。
こんな事になるなら、自分の気持ちを伝えておくべきだった。
ネレディアは通信士のコンソールへと走り、マイクのスイッチを入れて叫ぶ。
「フォムト!!フォムト!!返事をして!!私を一人にしないでよ!!」
彼女の悲痛な叫びは全艦に伝わり、将兵たちの涙を誘った。
皆は、ネレディアが初めて見せる女性としての姿と愛する人に対する気持ちに心を打たれた。
暫しの沈黙の後、
「・・・・ネ・・・・ディア・・・・ネレ・・・・ア・・・・ネレディア」
ノイズ交じりであるが、スピーカーから照れくさそうな声が聴こえ

てきた。
艦橋の窓には、爆発の影響を受けてパイロットスーツを黒く汚したガミラス兵が一人、漂っているのが確認出来た。
ヘルメットのバイザーが下ろされているが、それが誰なのかネレディアには直ぐに分かった。
こみ上げる感情を爆発させて笑みを浮かべたネレディアは全面窓まで走り漂うガミラス兵に向かって手を振る。
「フォムト!!生きていてくれたのね!!」
「自爆は好きじゃねぇからな・・・直前で脱出した」
ヘルメットごしだが、バーガーはニッと笑みを浮かべる。
「あ、ありがとう・・・フォムト・・・生きていてくれて・・・」
ネレディアは涙を流し、彼の生存を心から喜んだ。
「また生き残っちまったな・・・だけどな・・・」
「だけど何?」
「だけど・・・今は恥ずかしくて死にそうだ・・・」
バーガーは艦橋に向かってクイクイと手を向ける。
ネレディアが振り返ると、艦橋員が皆、ネレディアとバーガーの先程のやり取りを見て、温かい目で二人を見ていた。
彼女はここに来て、今のやり取りを全艦放送で流してしまった事に気がつき、顔を羞恥で真っ赤に染めた。
「バッ、バカ!!」
彼女の照れ隠しの叫びがミランガルの艦橋に響いた。

五十六話　星巡る方舟の旅立ち

シャンブロウでの戦いはガミラスと　まほろば　の航空隊の活躍で敵の機動部隊は壊滅し、残存艦隊はネレディア率いるガミラス艦隊が引き受ける形となった。
その最中、ネレディアが乗艦するミランガルにミサイルが接近する。
ミランガル・ネレディアの窮地を救ったのはバーガーが操縦するツヴァルケだった。
機体はミサイルに当たり木端微塵となるが、操縦していたバーガー本人は間一髪で機体から脱出して無事だった。
ミランガルの上空にはガトランティスの機動部隊を壊滅させたガミラスのツヴァルケ隊、デバッケ隊、スヌーカ隊と　まほろば　のコスモタイガー隊が駆け付け、敵艦隊を壊滅すべく、攻撃をかけて行き、その隙にバーガーはミランガルへ収容された。
「まほろば　接近してきます!!」
「むっ!?」
オペレーターの報告にダガームは顔をしかめる。
地球の戦艦は前衛艦隊と機動部隊を壊滅させ、メガルーダの火炎直撃砲を封じたのだ。
そして今度はこのメガルーダ本体を沈めに来た。
(この、化け物め!!)
圧倒的に不利な状況にも関わらず、気づけば友軍艦艇はその数を殆んど無くした。
思えば、地球はあのガミラスの猛攻から僅か一隻の戦艦でガミラス帝国を崩壊へと導き、そして大帝陛下御自ら率いるガトランティス本星をも退けた。
ただの辺境の田舎蛮族共では無かった。
「くっ、残存艦艇を集結、反撃させろ!!」
此処に来てダガームは自らが狩人から狩られる獲物になったので

は?と、思い始めた。
ダガーム艦隊は支離滅裂となっており、戦場から逃亡する艦も出始めた。
今、メガルーダの直掩にいるのは二隻の駆逐艦のみ。
まほろば　は大きく迂回してメガルーダの後方から接近して来る。
ダガームの命令を受けて、まほろば　に接近して来た敵の駆逐艦に対して、まほろばは第一主砲からショックカノンを放つ。
被弾した艦は操艦機能を失い、落伍して行く。
もう一隻の駆逐艦は右舷側から迂回して　まほろば　に接近して来た。
まほろば　は右舷側のミサイル発射管からミサイルを一斉に放つ。
ミサイルは敵の駆逐艦を囲むように接近して命中する。
煙と爆炎を出しながら、ミサイル攻撃を受けた駆逐艦は爆沈した。
「何をしている!?落とせ!!落とさんか!!」
ダガームが腕を振るいながら、命令する。
メガルーダの後部砲塔が火を吹くが、副砲クラスの砲の為、まほろば　を撃沈する事は不可能で、命中しても　まほろば　は速度を落とすこと無く、メガルーダへと迫って来る。
まさに、肉を切らせて骨を切るような姿勢だった。
鬼神の如く自分たちに迫って来る　まほろば　に　メガルーダの艦橋員は恐怖を抱き、震え上がる。
ここで何とか反撃し、まほろば　に決定的なダメージを与えなければ、士気が下がると思ったダガームは、
「おのれ!!もはや拿捕など、どうでもいいわ!!此処で宇宙の藻屑にしてやる!!転送機など無くとも火炎直撃砲はまだ使えるのだ!!」
火炎直撃砲の発射コンソールの下へ走り寄ったダガームはそこに居た砲手を殴り飛ばして強引に退かせると、コンソール下部にあったレバーを思いっ切り引っ張る。
「メガルーダに死角なし!!」
それは、火炎直撃砲の発射口本体をパージさせる緊急レバーであった。

メガルーダの下部に装備されていた筒状の火炎直撃砲砲塔部が火を吹き、メガルーダから分離した。
「沈め!!まほろば!!」
ダガームは用のなくなった火炎直撃砲の本体をミサイルとしてまほろば　へぶつける策をとった。
火炎直撃砲の砲塔はクルクルと回りながら、まほろば　へと迫って行った。
まほろば　目がけて発射された砲塔本体を見てダガームは、
命中だ。これで勝った!!
と、勝ち誇った笑みを浮かべた。
しかし、彼の思惑とは違って　まほろば　は衝突直前に艦を右側にロールし始め、火炎直撃砲の砲塔本体の回転に合わせるようにギリギリの所を通り抜けて行く。
ダガームの策は、まほろば　の左舷の船体にかすり傷をつける程度に終わった。
まほろば　にかすり傷をつけただけで終わった火炎直撃砲の砲塔は何もない宙域で爆発し、消滅した。
「なっ!?避けただと!?」
ダガームは焦りと一撃必勝の攻撃をかわされた事で歯をギリギリと食いしばりながら悔しがる。
速度を落さず、火炎直撃砲の砲塔を躱した　まほろば　は　メガルーダのすぐ後ろに迫っていた。
「必中距離・・・捕えたぞ!!ロケットアンカー打て!!照準、敵艦右艦尾!!」
「了解、目標、敵艦、右艦尾、ロケットアンカー発射!!」
その瞬間、まほろば　からまるで大きなクジラに対してモリを打ち込むかのように巨大な鎖をジャラジャラと音を立てながら　まほろば　のロケットアンカーがメガルーダの艦体に打ち込まれた。
その衝撃は凄まじいモノでメガルーダの乗組員たちは次々と転倒する。
「なっ、何事だ!?」

ダガームは周囲に何が起きたのか問うが、理解できる者は居なかった。
まほろば　と　メガルーダは鎖で繋がれた古代ローマのグラディエーターの様な形となっていた。
互いに鎖で繋がれており、どちらかを斃すまで距離を取る事も自由に動き回る事も出来ない。
しかも　まほろば　はアンカーの鎖を収納し始め、ジワジワと距離を縮めて来た。
「まほろば、急速接近!!」
「ぶつかるぞ!!」
迫り来る　まほろば　にますます怯えるメガルーダの乗組員たち。
「うろたえるな!!艦首大型砲にて、まほろば　を討つ!!仰角上げ!!発射準備!!」
双方とも遠心力にて、壁に引き付けられるが、それでも何とか耐えながら射撃準備を行って行く。
メガルーダの前部甲板には火炎直撃砲に次ぐ大口径五連装砲塔がある。
いくら、まほろば　の重装甲と言えどもこの至近距離でこの大口径の一斉射撃を受ければ、無事では済まない。
まほろば　の主砲も仰角上げで照準をメガルーダへと狙う。
しかし、動きはメガルーダの方が　まほろば　よりも早かった。
「最後に勝つのはこのわしだ!!メガルーダは負けぬのだ!!」
ダガームは今度こそ、まほろば　を沈められると思ったが、勝利の女神は彼には微笑まなかった。
メガルーダの大口径五連装砲塔が　まほろば　に狙いをつけようと砲身を上げ始めた時に、まほろば　の艦橋周辺に装備されたミサイルランチャと三連装の第一、二副砲、パルスレーザー砲が火を噴いた。
撃沈には至る傷は負わなくとも、メガルーダの各所に被害が起き、ケーブルや回路が切れ、艦橋の各所に火花や煙が出る。
その影響でメガルーダの大口径五連装砲塔の管制システムにも影響が出た。

砲身の仰角を上げる事が出来なくなったのだ。
「このメガルーダが地球の蛮族共の戦艦なんぞに負ける訳にはいかんのだ!!主砲撃て!!」
メガルーダの大口径五連装砲塔から発射された五本のビームが発射される。
だが、仰角の角度が足りなく命中したのは五本中一本だけで、しかも　まほろば　の艦尾にあるカタパルトをかすっただけだった。
そして、ダガームの抵抗もここまでであった。
死神が鎌を振り上げるかのように　まほろば　の前甲板にある三連装の第一、第二、第三主砲が仰角を上げ、メガルーダに狙いをつけていた。
「照準良し!!射撃用意良し!!」
「撃て!!」
「発射!!」
まほろば　の第一、第二、第三主砲が一斉に火を噴き、メガルーダの艦体を貫く。
「ぐっおおおおおお・・・・・・!!」
装甲が破れる凄まじい音に続いて大きな爆炎と衝撃波がダガームを始め、メガルーダの乗組員たちを襲う。
「こんな・・・こんな馬鹿なぁぁぁぁぁぁー!!」
ダガームの絶叫と共にメガルーダは爆沈した。
しかし、至近距離での大型戦艦の爆発は凄まじいモノで、まほろばはその爆炎に巻き込まれた。
「敵旗艦轟沈!!」
メガルーダの撃沈はミランガルの方でも確認できた。
「まほろば　はどうした!?」
ネレディアは　まほろば　の所在を確認する。
「あれだけの爆発です・・・爆発に巻き込まれて消滅しまった可能性も・・・」
オペレーターが気まずそうに意見を述べる。
しかし、メガルーダの爆炎を切り裂くように　まほろば　は爆煙の

中から出現した。
「旗艦撃沈」の知らせは瞬く間にガトランティスの残存艦艇に知らされ、直ちに戦闘行為を止め、ワープにて撤退していった。
戦闘が終わると、周囲の幻想的な空間が崩れ去っていき、普段見慣れた星の海の姿となる。
そして、目の前には巨大なイカの様な構造物が浮いていた。
それはとてつもない大きさで　まほろば　や　ヤマトはおろか、あのガトランティスの巨大戦艦よりも大きかった。
周囲は白い骨組みによって内部は透明に透けており、見方によっては網目構造を持つ横倒しになった電波塔の様にも見える。
良馬たちが調査したシャンブロウ自体もこの巨大な構造物の一部で星一つ自体が人工建造物だったのだ。
この壮大な『方舟』と言って良い超巨大な宇宙船は古代アクエリアス文明：古代ジレル星人の遺産とも言うべき代物であったが、推進機関も構造も作られた年代さえも分からない。
恐らく『聖王のゆりかご』よりも古い物であると推察される。
フェイトとティアナも息を飲んで、モニターに映る超巨大な構造物を見ていた。
「あんな巨大な船が存在するなんて・・・・」
「間違いなく、ロストロギアクラス・・ううん、ロストロギアなんて一言で片づけられないそれ以上の代物ね・・・・」
今までの管理局、管理世界の歴史上には無い程の巨大な宇宙船・・・・機能は分からなくともその見た目だけで、あの『方舟』がロストロギア級以上の代物。
管理局員ならば、是が非でも調査を行い、回収したい代物だ。
しかし、今の自分たちにその権限が無いのは百も承知している。
長い間、ガミラスにも管理局にも見つからなかった代物だ。
恐らくこの先も管理局には見つかる事は無いだろう。
フェイトとティアナはジュラの時と同じように、あの『方舟』について報告するつもりはなく、それぞれのデバイスにもあの『方舟』の情報は記録しないように指示した。

「あれが、母の故郷・・・」
一方、ジュラは初めて見た母、メラの故郷をジッと瞬きもせずに見ていた。
戦闘の終結が、戦いの終わりを意味するわけではない。
混成艦隊の各艦はこの戦闘における遭難者たちの捜索・救助に取り掛かった。
戦いが終わった宙域には轟沈せず、比較的原型をとどめているガミラス艦艇の残骸もチラホラあった。
またバーガーの様に機体から脱出したパイロットも居るかもしれない。
コスモタイガー隊とガミラス航空機隊は生存者の捜索に入った。
その他にもガミラスからは内火艇、まほろば　からは救命艇、上陸用舟艇など飛ばせる機体を全て使用して大規模かつ広範囲の捜索、救助活動を行った。
加藤も必死でメルヒの捜索を行った。
あのガトランティス攻略作戦の際、玲の兄、山本明夫は被弾した機体から命からがら脱出し九死に一生を得た。
今回の戦いでもバーガーが同じ様な行動をとっている。
なので、メルヒも機体が爆発する寸前にベイルアウト（脱出）しているかもしれないと言う期待を抱いていた。
しかし、大規模な捜索にも関わらず、メルヒは発見されなかった。
収容されたガミラス軍の負傷者たちの内、輸血用の血液などの問題により重傷者はミランガルを始めとするガミラス艦へ、止血などの軽い手当で処置できる軽傷者たちは　まほろば　で手当てを受けた。
初めて地球の戦艦に乗ったガミラスの将兵たちは物珍しそうにあたりを見回していた。
本音を言えば、フェイトとティアナは実際にガミラス人と言う人種をこの目で見たかったが、自分たちが医務室へ行ってもやることはなく、却って邪魔になってしまうので、用意されていた部屋で待機していた。
それに今後の航海でガミラス人と接触する機会はある筈なので、今

回は見送った。
　捜索、救助活動が終わった後、良馬はミランガルのネレディアに通信を入れた。
「捜索活動は粗方終了したようですね、ツキムラ艦長」
「はい・・・あの、ネレディア大佐」
「なんでしょう？」
「あのガトランティスを相手に共に戦えた事を誇りに思います。それと同時に今回の戦いで散って逝った勇敢なるガミラス将兵たちに対して哀悼の意を表します」
　まほろば　の艦橋員全員が敬礼し、
「ありがとう・・・私からも我々ガミラスと戦い散って逝った勇敢なる地球の将兵たちの魂が地球へ戻らんことを心から祈る」
　ミランガルの艦橋員もガミラス式の敬礼をして、ガミラスとの戦いで散って逝った宇宙戦士たちに黙祷した。
　それは地球とガミラスがお互いの気持ちを尊重し合えたと言う事だ。
　こんな日が来るなんて　まほろば　の乗組員たちは思ってもみなかった。
　かつて、自分たちの故郷である地球を滅ぼそうとしたガミラスと共闘しお互い戦死した将兵たちの死を悼む等と言う時が・・・・。
　フェイトとティアナは第三者的な立場であったが、ガミラス、地球の宇宙戦士たちの為に黙祷をささげ、間接的に関係のあるジュラも同じく黙祷し、戦死者たちの御霊の安寧の眠りを祈った。
　ミランガル　と　まほろば　は流石に作られた星が異なる為、互いに接舷ハッチを接続させることは出来なかった為、かなりの至近距離で停船している。
　甲板では技術班と甲板部が今回の戦闘でダメージを受けた箇所の応急修理をしている。
　イスカンダルへ行けば、そこでは新たにα星、七色星団で戦ったあの円盤型の艦隊との戦闘も予想されるなか、艦の状態は万全にしてお

かなければならない。
応急修理が行われている中、ネレディアは、まほろば　を訪れた。
ダガーム艦隊との戦闘でバーガーも負傷したが、軽傷の為、まほろば　で治療を受けている。
心配になったネレディアにバーレンが気を利かせて、「見舞いに行ってやれ」と言ってこうしてバーガーの様子を見に、まほろば　へとやって来た。
まほろば　に来たネレディアを出迎えたのは艦長の良馬だった。
(改めて見ると、レーレライさんが化けていた姿と同じだ・・・・)
記憶の内容は兎も角、容姿は大和ホテルで見たレーレライが化けていた姿と瓜二つだった。
最も今、目の前に居るネレディアがオリジナルなのだから、似ていて当然だ。
良馬はネレディアをバーガーの居る医務室へと案内する。
幸いネレディアは翻訳機を携えていたので、会話に支障はなかった。
あのホテルで良馬たち地球人とバーガーたちガミラス人が翻訳機なしで会話が出来たのはレーレライの魔法によるものだったのだろう。
「それにしてもあの艦を倒す事が出来たのが、今でも信じられません」
良馬はあの火炎直撃砲搭載艦、メガルーダを倒す事が出来たのが未だに信じられなかった。
「私もです・・・・ただ・・・・」
「ただ？」
「ただ、あの艦隊を倒す事が出来たのはいいが、このままイスカンダルで行っても良いモノだろうかと思って・・・・」
「えっ？」
「フォムトは七色星団からの敗残・・いや、敵前逃亡をしたことになっている・・・・我がガミラスの軍規では敵前逃亡は死刑だ・・・・もしかしたら、総統がフォムトを処罰するかもしれない・・・・」
「・・・・」

他の星の軍律に口を挟む権利は良馬にはないが、それでも共にあのホテルで過ごし、ダガーム艦隊と戦った仲間でもある。
「自分には他軍の軍律に口を挟む権利はなく、それをすれば当然内政干渉でありますが、彼は共に戦った仲間です・・・もし、デスラー総統が彼を処断すると言うのであれば、自分はバーガー少佐を亡命者として地球で保護する所存です」
「・・・」
「しかし、今のデスラー総統ならば、バーガー少佐の事もきっと免罪してくれると思います。今のガミラスにはバーガー少佐の様な方は必要な人材の筈ですから」
「そうだと良いんですが・・・」
良馬の言う事も最もであるが、確実な確証があるわけでは無い。
バーガーはあの星の探査から帰って来た時、ヤマト、地球へ対する復讐心は一切なく、ネレディアは半日の間に一体彼にどんな心境の変化があったのかと疑問に思ったが、彼がこうして地球と協同したのもあの艦隊に勝てた要因の一つである。
そして、先程の戦いで死んでしまったかと思ったバーガーは生きて自分の下に戻って来てくれた事には感謝しているが、戦いがこうして終わると、彼の処遇についての事にネレディアは一抹の不安を抱くのも無理はなかった。
一方、まほろば　の医務室にて治療中のバーガーはと言うと・・・
「へぇ～地球の艦も大したもんじゃねぇか」
バーガーは手当てを終えて、医務室近くの通路にある椅子に座りながら初めて見る地球の宇宙戦艦の内部を見渡しながら感嘆の声を漏らした。
祖国であるガミラスと比べると科学力が劣ると言われていた地球の宇宙戦艦の設備もガミラスと勝るとも劣らない程のレベルであった。
あれほど憎んでいた筈の地球なのだが、あのホテルでの共同生活とダガーム艦隊との戦いを通じて地球に対する憎悪と復讐心はいつの

間にか消えていた。
だからこそ、あの戦いに勝つことが出来たし、今こうして地球の宇宙戦艦を冷静な目で見る事が出来ている。
バーガーはそんな自分に思わず苦笑してしまう。
「これもあいつらのおかげだな・・・・」
バーガーがポツリと呟いた時、
「バーガーさん!」
自分の名前を呼ぶ声がした。
発音に若干の違和感があるが、それは間違いなく、自分たちの世界の言葉だった。
そしてその声の主は聞き覚えのある声だった。
「ナカジマか」
「良かったです。御無事で・・・・」
やって来たのは、メリアと瓜二つの容姿を持つ女性、ギンガだった。
ギンガは士官学校時代に医療科も受講しており、応急処置ぐらいは出来るので、こうしてリニスたち医務班を手伝いに来た。
その最中、彼女はバーガーの姿を見つけて声をかけたのだ。
「ナカジマ、お前ガミラス語が話せるのか?」
「はい。覚えたてでまだまだ下手ですけど」
「確かに、発音が全然だめだな、それじゃあまるで、言葉を覚えたてのガキと同じレベルだぜ」
ニっと不敵な笑みを浮かべながらバーガーはギンガのガミラス語に対する意見を述べる。
「むぅ〜」
バーガーの皮肉にギンガは頬を膨らませる。
「そうむくれるなって。かわいい顔が台無しだぞ」
そう言いながらバーガーは椅子から立ち上がった。
その際、懐から彼が肌身離さず持っていたメッセージカプセルが零れ落ちた。
「それはもしかして、メッセージカプセルですか?」
「ん?なんだ?コイツを知っているのか?」

「はい。士官学校時代にイスカンダル製のメッセージカプセルの画像を見た事があるんです・・・・大切な物なんですね。肌身離さず持っているなんて」
「ああ。こいつは形見みたいなもんなんだ・・・・」
そう言ってバーガーはカプセルを開ける。
すると、
『ねぇ、フォムト。今度姉さんと一緒に夜景を見に行かない？あそこの夜景、ガミラス星で見る夜景と違って、とっても綺麗なの』
カプセルが映し出すホログラムにはギンガそっくりのガミラス人の女性が映し出され、記録されたメッセージを話し始める。
「えっ!?私っ!?」
ギンガは思わず自分にそっくりなガミラス人の女性を見て目を見開き驚く。
「こいつはメリア。俺の恋人だった女だ・・・・」
「あっ・・・・この人が・・・・」
大和ホテルで、バーレンから聞いたバーガーの恋人・・・・
「バーレンさんから聞きました・・・・ガトランティスとの戦いで戦死なさったって・・・・」
「・・・・ああ・・・・俺はこいつを守ってやれなかった・・・・助けられなかった・・・・コイツは俺の目の前で死なせちまった・・・・」
「バーガーさん・・・・」
「でも、今回はちゃんと守れた・・・・お前もネレディアも大勢の仲間もな・・・・ただ、今回も守れなかった奴も居たがな・・・・
「・・・・」
戦いである以上、味方全員を守り通して、敵だけを倒すなんて事は出来ない。
今回の戦闘でメルヒやニルバレスを始めとする大勢の仲間が死んだ事には変わりない。
「それでも、バーガーさんのおかげで、助かった人も居るんです。敵に勝つことが出来たんです。バーガーさんは十分頑張りましたよ!!」
「ありがとうな、ナカジマ・・・・まぁ、またメリアの所には逝き損なっち

まったけどな」
「それはきっと、メリアさんが、『まだ来てはダメ』って言ったんですよ」
ギンガが微笑みながらバーガーに言う。
彼女のその姿に、一瞬バーガーはメリアがそう言ったかと錯覚しそうになる。
「フッ、そうかもな」
バーガーは思わず口元を緩めた。
軽傷者の手当てが粗方終わった頃、良馬の案内の下、ネレディアが医務室へとやって来た。
「フォムト・怪我は・う、嘘・・・」
医務室に入ったネレディアはギンガの姿を見て目を見開き固まる。
そして、
「め、メリアッ!!」
ネレディアはギンガに駈け寄ると、彼女を抱きしめる。
「えっ?あ、あの・・・」
突然、ネレディアから抱きしめられたギンガは困惑する。
「ネレディア・ソイツはメリアじゃねぇ・・・」
「えっ?あっ、ごめんなさい。貴女があまりにもメリアに・妹に似ていたから・つい・・・その驚かせてしまったわね」
「そんなにそっくりなんですか?」
良馬は未だにメリアの姿を見ていないので、そのメリアと言う女性とギンガがどのくらい似ているのか気になった。
そこで、バーガーが先程、ギンガに見せたメッセージカプセルの中に記録されていたメリアの姿を良馬に見せる。
「っ!?た、確かにギンガとそっくりだ・・・」
肌の色と髪の毛の色が違うだけで、メリアの容姿はギンガとそっくりだった。
もし、レーレライが大和ホテルでギンガを見た時、今のネレディアの様なリアクションをして、バーガーの呼び方も読み取っていたら、きっとバーガーもレーレライの変装だと見抜けなかっただろう。

ネレディアはその後、改めてギンガに断りを入れ彼女を抱きしめた。
目の前にいるのは、妹ではないのは分かっている。
それでも妹を失ったあの時間をまるで埋めるかのようにネレディアはギンガを抱きしめ、ギンガもネレディアを抱きしめた。
ギンガ自身もネレディアの気持ちはよくわかる。
彼女自身、幼少の頃に母親であるクイントを失った中、次元漂流したこの世界で母、クイントにそっくりな人物と出会い、今はその人物の下で養子ながらも家族となっている。
たとえ異星人であってもこうして妹とそっくりな人物と出会えたのだから、ネレディアもきっと感極まるほどの嬉しさがあったに違いない。
「ありがとう、ナカジマさん」
ネレディアはゆっくりと惜しむ様にギンガから離れる。
「いえ、少しでもお役に立てて良かったです」
この広い大宇宙で、同じ容貌を持つ者と出会える事には何か意味のあってのことかもしれない。
ミッドの八神はやて、地球のディアーチェ
同じくミッド在住のフェイトと砲雷長のフェリシア
声だけはそっくりなティアナと七波
故人であるが、サーシア・イスカンダルと森雪
クイントと加奈江
そして、メリアとギンガ・・・
ここまで立て続けに似たもの同士が出会う奇跡もかなり珍しい事なので、何か不思議な力が働いたとさえ錯覚する。
捜索、救助活動、そして負傷者の手当てが終了し、ネレディアはミランガルに、バーガーはランベアへと戻って行く。
ニルバレス所属の艦載機隊はミランガル、ランベアにそれぞれ収容され、ガミラス艦隊と　まほろば　は出航準備が整った。
ガミラスの残存艦艇、ミランガル、ランベア　ケルカピア級航宙高速巡洋艦一隻、クリピテラ級航宙駆逐艦三隻そして地球防衛軍戦艦、

まほろば　の混成艦隊は本来の任務、イスカンダル追跡の任務へと移る。
そして巨大な『方舟』の方も分析不能なエネルギー源を使用した推進機を使って加速を開始する。
その居住区にはレーレライたち生き残りのジレルの民の姿があった。
彼らは失いかけた種の保存の為、あてもない未知なる旅へと出発しようとしている。
古代アクエリアス文明は宇宙の各地に蒔いた生命の種に一体何を期待していたのだろうか？
『方舟』にどんな希望を乗せたのだろうか？
それは誰にも分からない事であった。
半分ジレルの血を受け継いでいるジュラにも母の故郷の人たちと共に旅立つかを訊ねると、彼女はやはり、父の居るイスカンダルへと行くと言って、母の故郷の人たちの旅立ちを見送った。

ジレルの民の新たな旅立ちを見送り、シャンブロウ宙域を後にした混成艦隊はイスカンダルを目指していたが、その時、まごろば　のレーダーが艦隊の反応を捉えた。
「レーダーに反応!!」
「っ!?」
艦橋内に緊張が走った。
もしかしたら、ガトランティス艦隊が援軍を引き連れて戻って来たのかもしれない。

「艦種特定急げ!!」
「はい!!」
新見は急いで接近する艦隊の艦種を調べる。
「艦種識別・・・ガミラス艦隊です!!」
接近して来たのはガトランティス艦隊ではなく、ましてやあの円盤の艦隊でもなく、先程まで協同をしていたガミラスと同じ陣営の艦隊

であった。
「スクリーンに投影しろ」
「了解」
　モニターに表示されたのは、これまで見た事の無いガミラスの超弩級戦艦の姿だった。
「で、でけぇ・・・・」
「まほろば　の1．5倍ぐらいはありますよ・・・・」
　表示された超弩級戦艦を見て、思わず永倉と星名がその戦艦の感想を言う。
「あれは、恐らくヤマトの交戦記録に残っていた、ドメル将軍の旗艦と同型の戦艦だ・・・・」
　良馬が以前見たヤマトの航海記録から接近してくる戦艦がガミラスの新造艦ではなく、既に存在していた戦艦だと説明する。
「詳細戦力判明、超弩級戦艦二隻、ガイデロール級航宙戦艦一隻、メルトリア級航宙巡洋戦艦五隻、ポルメリア級強襲航宙母艦二隻、ケルカピア級航宙高速巡洋艦七隻、デストリア級航宙重巡洋艦、クリピテラ級航宙駆逐艦合わせて二十一隻を確認!!」
　戦力分析をしていた新見が接近するガミラス艦の詳細な戦力を報告する。
「総員戦闘配備!」
　すかさず良馬が戦闘配備指示を出した。
　戦闘配備についたとはいえ、ガミラスとは休戦状態だ。
　こちらから攻撃するわけにはいかない。
　同じガミラス艦隊と行動を共にしているので、いきなり攻撃を仕掛けてくるとは思えない。
　しかし、もし接近中のガミラス艦隊から一方的に攻撃を受ければ流石の　まほろば　の方もタダでは済まない。
　特にあの超弩級戦艦二隻が厄介だ。
　ガミラス艦隊は速度を変えず、隊形も変えずに接近してくる。
　しかし、ガミラス艦隊は接近するだけで攻撃してくる様子は無い。
（この距離でも攻撃隊形に移らない・・・・デスラーの命令が届いている

のか?それとも此方もガミラス艦隊と行動を共にしているからか?
まさか、ゼロ距離射撃でも敢行するつもりか!?)
良馬がそう感じ、艦橋内に緊張が続いている中、
「ガミラス艦から通信が入っています!」
通信長のギンガが声を上げた。
「繋いでくれ」
「はい」
やがてスクリーンに、一人の男が映し出された。
見るからに歴戦の老兵然とした人物で、眉無しでモミアゲと口髭が繋がった顔立ちに、右眼を縦に一閃した傷痕が特徴的だ。
「私は大ガミラス帝星航宙艦隊総司令官、ガル・ディッツだ。貴官が艦長か?」
「地球防衛艦隊所属、宇宙戦艦、まほろば、艦長の月村良馬です」
ガミラスの猛将と邂逅した良馬たち。
この邂逅が吉と出るか凶と出るかまだ良馬たちには分からなかった。

五十七話　マゼラン雲突入

「私は大ガミラス帝星航宙艦隊総司令官、ガル・ディッツだ。貴官が艦長か？」
「はい。地球防衛艦隊所属、宇宙戦艦、まほろば　艦長の月村良馬です」
　良馬を睨むような視線を送りながら、ディッツが問う。
「貴官らが何故、我が母星の領域に我々の友軍艦艇と行動を共にしている理由を聞かせてもらいたい」
　下らぬ事をぬかしたら、この場で討ち果たしてやるぞというところか。
　まぁ、当然だろう。
　デスラーの知らせを聞き、ガミラス艦隊と行動を共にしていると言っても、こちらは正式にデスラーからガミラス領内の航行許可を得て航行している訳ではない。
　つまり、我々は堂々とガミラスの領海内で侵犯行為を行っているのだ。
　しかも、ガミラス軍の総司令官の目の前で・・・・
「ディッツ総司令官、我々はデスラー総統からの緊急電を受けた軍司令部の命令を受け、暴走したイスカンダルの救援に最短ルートで赴く途中、ここに通りかかった。ガミラス領を領海侵犯したのは、事実であるが、我々地球の恩人であるイスカンダルの危機を見過ごすわけにはいかず、我々はどうしてもイスカンダルへ向かわなければならない。そちらに正当な理由があるのは百も承知だが、もし、武力によって我々を止めると言うのであれば、こちらも自艦防衛として其れ相応の覚悟で望む所存です」
「・・・・」
「・・・・」
　両者はしばらくメンチを切り合うように互いから視線を離さなかったが、やがてディッツは僅かに表情を緩めた。
「・・・そうか。実は我々も総統のご命令を受け、イスカンダルを追跡

する途中に立ち寄ったところだ。総統から、ヤマトとその友軍との戦闘は禁じられているので、我々も貴官らと戦うつもりはない」
彼らも我々と戦う意思はないようだ。
ディッツの言葉を聞き、艦橋内にホッとした空気が流れた。
医務室では、画面越しとは言え、生で見るガミラス艦隊に艦橋員よりも、緊張した面持ちでフェイトとティアナはモニターを見ていた。
「あれがガミラス艦隊・・・」
「あの戦艦なんて、この　まほろば　よりも大きいですね・・・」
フェイトは、まほろば　と航行しているガミラス艦隊を見て、緊張を解き、今度は複雑そうな顔でガミラス艦隊を見ている。
かつて敵対した者と和解するのは、フェイト自身と高町なのはやヴォルケンリッター。
最近ではＪＳ事件後のナンバーズ（一部を除く）やルーテシアたちで経験済みだが、この世界の地球はガミラスによって滅亡寸前まで追い込まれたという。
一方、ヤマトはイスカンダルへ行く為、結果としてガミラスの首都を破壊し尽くしたという。
互いの母なる星を破壊したのだから、自分たちよりも遥かに重苦しい話だ。
それに伴う犠牲も半端ない数の筈だ。
「どうしました？フェイト？」
リニスがフェイトに訊ねた。
「リニス・・・ガミラスと地球・・・互いに同胞の仇同士だったんだよね？」
復讐戦が勃発しても何ら不思議ではないのに、緊張状態ではあるが、爆発する様子はない。
ガミラス戦役の時とは、大きく技術進歩した地球防衛軍の艦船。
特に波動砲の威力は自分もこの目で何度か見たが、『凄い』の一言だ。
射程内に上手く誘い込めば、あの艦隊も全て薙ぎ払えるのに・・・
それにも関わらず、まほろば　にはそんな気配は全くない。

その事をフェイトがリニスに訊ねると、
「もちろん、互いに言いたい事は山ほどあるでしょうけど、でも、自分の言い分ばかり主張しても何も始まりませんから・・ヤマトの皆さんも、ガミラスの方も自らの故郷の存亡を賭けて戦い、ひとまず決着はついたのですから、敵対した者を全否定し続けたら、いつまで経っても平和は来ないでしょうから・・・」
その後も両者の話が進み、ディッツ艦隊と　まほろば　はイスカンダルまで同航することになった。

良馬が艦長を務める宇宙戦艦　まほろば　とガミラス軍総司令官ディッツ率いる艦隊は、ほんの一ヶ月余り前までは敵対していた者同士という、何とも奇妙な呉越同舟で、共にイスカンダルへの合流を目指していた。
まぁ、イスカンダルの前にヤマトとの合流が先であるが・・・
「通信長」
「はい」
「秘匿通信でディッツ総司令に繋いでくれ」
「えっ？」
「ジュラさんの事をディッツ司令に話しておきたい」
「分かりました」
ガミラス軍の総司令と言う役職ならば、デスラーの娘の存在は知っている筈だと思い、彼女の生存を知らせておこうと思ったのだ。
「何とも妙な気分ですねぇ・・・まぁ、彼方さんも同じなんでしょうが・・・」
操舵桿を握りながら、永倉が隣を航行しているガミラス艦隊を見ながら、呟く。
「そうじゃな、今まであの艦影は敵だと言う認識があったからな・・・」
井上も肯定する。
「ディッツ提督、向かいの地球艦より秘匿通信です」
「秘匿通信？兎も角、繋いでくれ」
「了解」

まほろば　からの秘匿通信にディッツは当初、首を傾げたが、取りあえず　まほろば　からの通信に応じた。
「態々すみません。ディッツ総司令」
「いや、構わん。それで何の用かな？」
「実は、先程立ち寄ったサイレンの星にて、ある人物を　まほろば　に収容したのですが・・・・」
「ある人物？・・・・っ!?」
良馬が、モニターの前に呼んだ人物を見て、ディッツは目を見開いた。
「お久しぶりです。ディッツ提督」
「じゅ、ジュラ様」
ディッツは慌てて頭を下げる。
やはり、デスラーの娘と言う事で、艦隊総司令のディッツもジュラの事は知っていた様だ。
「サイレンの星で、メラ様がお亡くなりになり、そしてジュラ様の行方が分からなくなり、私もジュラ様の身を案じておりました」
「ご心配をおかけしましたディッツ提督・・・ですが、私はこうして無事に生きています」
ジュラの生存にホッとした様子のディッツ。
そして、良馬は、何故ディッツに秘匿通信をしたのか、理由を話した。
それは、いくら地球とガミラスとの星間戦争が終わっていても未だにガミラスに対する遺恨があり、それらの負の感情からジュラを守るためだと説明した。
その件に関しては、ディッツも理解した。
それを踏まえ、ディッツはジュラに自分たちの艦に移乗しませんか？と問うと、ジュラはその勧めを断った。
理由は、ギンガを始めとし、気兼ねなく話せる同性がいるためであった。
ディッツもジュラの意見を受け入れ、良馬にジュラの事を「くれぐれも丁重に扱うように」と、ジュラの身柄を良馬と　まほろば　に託

した。
ただ、ディッツが良馬にジュラの事を託す際、内に殺気を秘めていた。
それは、くれぐれもジュラ様に不埒な事をするなよ。
もし、ジュラ様にかすり傷でもつけて見ろ、タダではすまさん。
等の思いが含まれていた。
良馬は、蛇に睨まれた蛙の様に冷や汗を流しながら、「は、はい・・・・」と返事をした。
(ディッツ提督の覇気、土方提督と同等だ・・・・)
ディッツ提督と土方提督が同類だと思った。
まほろば　とガミラス艦隊はヤマトが航行しているであろう宙域に向けてワープを行った。
ワープアウトをした際、ヤマトでは即座に警戒された。
何せ、ワープアウトが一隻では無く多数あったかだ。
まほろば　がヤマトを追いかけてきて、ワープアウトをしたのならば、ワープアウトは一つなのだが、今回ヤマトの周辺で観測したワープアウト反応は、四十に近い数値だったからである。
しかし、ワープアウトした艦影の中に　まほろば　が含まれていた事で、ヤマトは早速まほろば　に通信を入れ、確認に入った。
良馬は、古代にサイレンの星、シャンブロウ宙域で起きた事を話した。
ただし、ジュラの件は除いて。
ヤマトの乗員にもガミラスに家族や恋人を殺された乗員が大勢いるので、ジュラの件はまだ内密にしておこうと思ったのだ。
そして、古代とディッツは互いに通信をして、相互理解をした後、全ての艦艇は一路イスカンダルを目指した。
二年前は何ヶ月かけて来た１４万８千光年を、今回の航海では僅か一週間強でやってきた。
地球の波動エンジン技術が格段に進歩した事とガミラス側のワープ機関の譲渡、ガミラスの航路妨害もなく、既に海図も確立されている事が航海日程の短縮にも繋がっている。

しかし、果たしてこれは進歩といえるのだろうか？
退歩していないと誰が断言できるのか――？
ヤマト、まほろば、雪風・改、そしてディッツ、ネレディアのガミラス艦隊。
この奇妙な形の混成艦隊は間もなくイスカンダルに追いつくと思われるところまで来ている。
その理由は各艦のセンサーに近くに恒星系がない宙域にも関わらず、地球型惑星の重力反応を捉え、なおかつ反応が少しずつ強くなっていることも、イスカンダル星である可能性を高くしていた。
そして、先日ガミラス星の地下資源を盗掘し、α星、七色星団、サイレンの星で遭遇したあの艦隊の本隊も同様にイスカンダル星を追跡している可能性が高い。
何故、あの艦隊がガミラスの資源を採掘していた理由が分からず、その点を良馬はディッツに訊ねた。
ディッツによれば、ガミラスとイスカンダルの両星のマントル～外核にはそれぞれ「ガミラシウム」、「イスカンダリウム」という高放射性エネルギー鉱石が豊富に存在し、その鉱石は長距離宇宙航海や戦闘用のエネルギー源になるという。
イスカンダルの場合はガミラスが常に隣で睨みを利かせてきたため、イスカンダルが侵略を受ける事は無かった。
しかし、ヤマトとの戦いでガミラスは滅び、イスカンダルの用心棒はいなくなり、しかも鉱石を大量に含み、なおかつ、穴だらけで採掘しやすいガミラスは無人状態。
盗掘屋にとっては格好の穴場だったのだろう。
しかし、まさかのデスラーの一時帰国でその目論見は外れ、採掘は失敗しその採掘惑星であるガミラスが消滅した今、同種のイスカンダリウムだけでも確実に採掘しようと考えてもおかしくはないだろう。
「通信長、ヤマトに打電してくれ」
「はい」
良馬はある意見文を書いた紙をギンガに渡し、ギンガはその紙に書かれた文面をヤマトに打電した。

それから暫くして、まほろば、ヤマトからコスモタイガーが数機発艦した。
マゼラン星雲に入り、あの艦隊がいつ襲撃して来る事も予想できるし、この先で布陣をしている可能性もあるため、早期警戒・偵察機の任務を帯びて、発艦した。
あの艦隊は地殻を貫ける設備と作業用艦船を持ち込むだけの力、そして太陽系と目と鼻の先のα星まで進出してきた事から、かなり大規模な事業体・・・それも国家クラスの規模だと推測される。
それに採掘しているエネルギー物資が全て戦闘用のエネルギー源と言う事から、あの艦隊の本星が慢性的なエネルギー不足で枯渇している訳ではなく、採掘したエネルギー源を戦争利用しようとしている事が窺える。
戦力再建途上の地球防衛軍としては、極力戦闘は避けたいところだが、あの艦隊が地球の恩人であるスターシャ・イスカンダルと古代守の身に危害を加えようとするならば、実力で排除してでも二人を救出するしかない。
しかし、問題はスターシアが素直にイスカンダルを離れるかどうかである。
実際にスターシアと面識がある古代と雪の話から推察するに、彼女は自分の命を落とすことになっても、イスカンダルを離れるようなことはないように思える。
事実、ヤマトがイスカンダルに到着した際、沖田はスターシアに一緒に地球へ来ないかと、誘うが、スターシアはイスカンダルの女王としての務めとして、その誘いを断った経緯がある。
それにスターシアにぞっこんな守もスターシアと離れる事をよしとしないだろう。
美しい夫婦愛なのだが、救助しようとしている此方側にとっては厄介な事だ。
上手い具合に二人の間に子供でも生まれていれば、話は違ってくるだろう。
通常、親は子より先に逝く。

それは当たり前の摂理なのだが、幼子を一人残すのは余りにも忍びなく、子供が生まれていれば、その子は地球人でもあるし、スターシアには母親としての責務、守には父親としての責務がある筈だ。
例え子供が産まれていなくてもいい・・・スターシアが妊娠中でもそれは同じ事が言える。
親の都合で子供まで死に追いやられるなど、断じて認めない。
最悪、人道的措置との名目で、家族全員強制的に拉致してでもイスカンダルから連れ出してやる。
恐らく古代や真田も同じような事を考えているに違いないだろう。
良馬がイスカンダルにいる二人の事を考えていると、哨戒機からの連絡が入った。
「イスカンダル近海に艦隊らしき反応を感知！艦隊又は船団と思われる！」
艦橋に緊張感が走った。
敵艦隊発見の通信は当然ディッツ艦隊にも伝わっているはずだ。
「総員戦闘配置!!」
新見が当直外の乗組員にも配置命令が出し、
「通信長、偵察隊に打電、敵艦隊の詳細戦力を確認せよと!!」
「了解!!偵察隊へ!!十分注意の上、艦隊編成を確認されたし!!」
ギンガが敵勢力の詳細データを取集する様に偵察隊に呼びかける。
ガミラス艦隊ならディッツから合流を呼びかけてもらう。
「艦長、前方に地球形惑星の存在を確認。不鮮明ですが投影できます」
「投影しろ」
「はい」
星名がスクリーンの映像回路を開いた。
「おお・・・」
「うわぁ・・・」
艦橋に嘆声が漏れる。
距離があり、恒星からも遠いため暗く、解像度も良くないが、青い海の中に南北に走る陸地は、映像で見たイスカンダル星に他ならないだろう。

それは、フェイトたちも同じであった。
「この星が・・・」
「イスカンダル・・・」
自分たちの知るどの管理世界よりも目の前に広がる星は青く美しく神秘的だった。
「綺麗な星ですね・・・」
「うん。この映像を見る限り、星としての寿命が尽きかけているというのが信じられない」
地球に高度な宇宙用推進機関をもたらしたのは目の前のイスカンダル星だという。
また、地球上から致死量の放射能を短期間で一掃したという「コスモクリーナー」もこのイスカンダル星の機械だ。
管理局員のフェイトたちから見れば、この星の技術レベルは明らかにロストロギアレベルの技術だ。
いや、管理局の視点では、ヤマト　や　まほろば　自体が動くロストロギアレベルである。
そう言った点で言えば、イスカンダルは管理局員の自分たちから見ても、十分ロストロギアの宝庫だ。
何故、これまでの管理局の歴史でイスカンダルの存在が知られていなかったのがおかしいくらいだ。
ロストロギアならば、本来は時空管理局員として放置しておけないが、波動エンジンは地球防衛軍にもガミラス軍にも広く普及しているのでは、回収なんか不可能だ。
第一、自分たちは地球防衛軍に助けられ、世話になっている身だ。
(いくらロストロギア回収とはいえ、正規の手続きを踏まずに干渉したら、管理局は侵略者と見なされてしまうわね)
地球防衛軍の宇宙戦士は、太陽系赤道祭で知り合った経緯から、普段は気のいい人ばかりだが、侵略者には容赦しない。
古代をはじめ、ここの乗組員たちの姿勢を見てもよくわかる。
平和を維持しようとする思いは管理局員も防衛軍軍人も変わりないが、ハード面もソフト面も違いがあり過ぎる事も事実であった。

そういう人たちが唯々諾々と管理局に従うとは思えないし、イスカンダルに手を掛ければ、ガミラスはもとより地球防衛軍をも敵に回してしまうだろう。
管理世界でさえ、管理局に反感を抱く人が少なくないのに、基本的にまだ管理局にとって未知な部分が多く、かつ危険極まりない軍事勢力が複数存在するこの世界で敵を増やすことは愚の骨頂ではないのか？
（そもそも、この世界にはこの世界のルールがあるはず。管理局がそれを無視して踏み込む権利があるのかしら？）
管理局の枠から離れた今、第三者的な位置で自分の所属する組織について、ティアナはふと思う。
敬愛する兄の殉職、親友の姉の・・ギンガの葬儀を目のあたりに際し、管理局側が示した反応に失望と反発を覚えた事がある彼女は、口にこそ出さないが、目の前の直属の上司や、かつての直属の上官ほどは管理局に心酔していない。
自分が管理局員、執務官を目指すのも、兄の夢であった執務官への道を継ぎ、兄の死をバカにした連中を見返してやろうと言う事だった。
しかし、ガミラス、地球防衛軍、ガトランティス等管理局よりも高度で強力な科学技術、軍事力を有している星間国家相手に管理局は何処まで相手が出来るのだろうか？
その中で、時空管理局執務官と言う役職がどんな役に立つのだろうか？
今、目の前に居る上司の執務官は全くと言って良い程、肩書のみの存在である。
月村艦長は基本的に親切だし、こちらの話にも最後まで耳を傾けてくれる。
親友の姉であるギンガが防衛軍に入隊したのはそう言う事も一因なのかもしれない。
とはいえ、耳を傾けてくれるのと賛同を得るのは全く別問題で、しっかり反論されてバッサリと斬られてしまうこともあるのだが、こ

ちらの考えや思いを一旦は受け止めてくれる事は率直に嬉しい。
と、すると管理局の士官局員、特にミッドチルダ出身の高ランク魔導師の中には、自分の意見や考えを相手に押し付ける者が少なからず存在し、周囲を省みない行動や言動が周囲の反発を招いた挙げ句、事件解決に手間取ったり冤罪事件になった事例は多数存在する。
冤罪事件においても管理局は決して自分たちの非を認めないか、責任転嫁ばかりを繰り返してきた。
(同年代の管理局士官には勘違いしている人が結構いるのに・・・やっぱり何度も死線をくぐり抜けた人たちは違うのかな?)
ティアナは、フェイトら元機動六課の隊長達と同年代の管理局士官を思い浮かべて考え込んだ。

「偵察隊より入電!!敵、戦力判明!!旗艦らしい超弩級戦艦一、戦艦十、巡洋艦二十二、護衛艦五十一、駆逐艦五十六!!艦影はガミラス・白色彗星帝国いずれにも該当せず・・です!!」
流石本隊だけあって、数は今まで遭遇してきた艦隊よりも規模が大きい。
表示を切り替え、偵察隊がキャッチした敵艦隊の映像へと切り替わる。
そこに映っていた艦影はα星、七色星団、サイレンの星で見たあの艦隊と同型の物ばかりである。
「敵艦隊の一部、イスカンダル星へ降下を開始しました!!」
「っ!?全艦全速!!航空隊、全機発進準備!!」
奇妙な混成艦隊はイスカンダルへと急速に接近した。

混成艦隊がイスカンダルに着く少し前、
「デーダー司令!!イスカンダルが・・・イスカンダルの落下が停止いたしました!!」
「何ぃ!?」
オペレーターの報告に声をあげるデーダー。
暴走していた惑星が突然停止するなんて、普通ではありえない事だ

からだ。
「イスカンダル近辺に超重力反応・・・マイクロブラックホールか何かによる重力干渉と思われます」
　オペレーターが観測データからイスカンダルの停止原因を報告する。
「むぅ・・・小生意気な・・・だが、イスカンダルの落下を止めてくれたことには感謝しよう。我々が直接手を下して停止させる手間が省けたというものだ。そして、今度は貴様らがザンザーの灼熱の炎へと落下する番だ!!全艦、進軍開始!!あのハエ共を今度こそ叩き落とすのだ!!」
　デーダーの命令一下、艦隊は加速を開始し、ガミラス艦隊へと迫って行った。
「敵艦隊が接近してきます!!敵の総攻撃と思われます!!接触まであと３５分!!」
　当然、敵の動きはガミラス側も察知していた。
　敵の動きを報告するオペレーター。
「ぬぅぅ・・・」
　敵の総攻撃の報告を聞き、デスラーは苦虫を潰したかのような顔をする。
「総統、このままでは、我が艦隊は・・・」
「全艦・・・イスカンダル星への降下準備をとれ・・・」
「大気圏突入準備!!急げ!!」
　デスラーの命令を聞き、ガミラス艦隊は急いでモードのチェンジを行う。
「総統、大気圏突入モードに移行するまでの時間は約２０分・・・その間、我々は完全に行動不能になります。もし、敵が進軍を加速すれば、無防備状態を突かれてしまいますが・・・」
「信じるのだ・・・タラン」
「ハッ」
「我らの進む道に・・・ガミラスに・・・栄光を!!」
『栄光を!!』

乗員はガミラスの勝利を信じ、大気圏突入準備を継続させた。
一方、ガミラス艦隊を追撃するデーダーは・・・
「敵艦隊、先程より動きを完全に停止しています」
「敵もようやく諦めたと見える・・・いや、それとも上面から刺し違えるつもりでいるのかな？」
突然動きを止めたガミラス艦隊の意図がつかめないデーダーであるが、
「フフフ、どちらとて構わん。蹴散らすのみだ!!全艦加速!!一気に殲滅するぞ!!」
と、力によるごり押しを敢行するデーダーであった。
「敵が・・・加速を!!総統!!」
「・・・」
「敵の到着時刻と我々の大気圏突入モード移行の終了時間が重なります」
「天は・・・天はどちらに味方するのでしょうか？」
「愚問だぞ・・・タラン・・・」
「交戦可能距離まで、あと１２０宇宙キロ!!」
「各砲門、エネルギー充填開始!!」
「あと・・・８０宇宙キロ!!」
「・・・」
「あと５０宇宙キロ!!敵艦隊、依然動きません!!」
「ふはは、覚悟を決めたか!!・・・全砲門、敵旗艦に向けよ!!」
追う者と追われる者。
緊張した時間が過ぎていく。
一秒がこれほど長く感じた事は恐らくデスラーたちにとって初めての経験だろう。
そして、
「た、大気圏突入モード移行完了!!」
タッチの差でガミラス艦隊の大気圏突入モードの移行が終了した。
「敵の砲撃可能距離まで、あと１５宇宙キロ!!」
「総員戦闘態勢!!全艦、第二戦速!!」

「全艦、第二戦速!!」
「イスカンダル大気圏へ突入開始!!」
ガミラス艦隊は次々とイスカンダルへと降りていく。
「司令、敵艦隊が突然、イスカンダルへの降下を開始しました!!」
一方、デーダーの方でもガミラス艦隊がイスカンダルへの降下を開始した事は予想外の行動だった。
「何ィ?」
「ここからでの砲撃では、大気圏表層通過時にビームが減衰し、威力が落ちてしまいます!!」
「小癪な・・・追え!!敵が逃げるなら追い詰めるのみ!!追うのだ!!」
「しかし、現在ほとんどの艦が宇宙戦闘モードに固定されています!!現状で大気圏突入可能な艦は、後続の予備隊・・・全体の三分の一程に過ぎませんが・・・」
「かまわん!!それだけいれば充分だ!!今すぐ降下し、逃げ場を失った敵共を一掃するのだ!!そしてついでにイスカンダル地表にある目障りなあの街も一気に掃討してやれ!!」
「はっ!!」
デーダーは大気圏突入が可能な予備隊を直ぐにイスカンダル地表へと降下させた。
「総統閣下!!敵が分散し、一部が大気圏降下体制に移りました。我々を追撃してく模様です!!」
「このまま降下し、マザータウンの周りの海へ着水しろ!!敵は必ずマザータウンをも狙ってくる筈・・・命を賭けて、マザータウンを死守せねばならん!!」
「こ、後方より敵が急接近!!予想外の速度です!!」
「デスラー機雷を打ち上げろ!!」
ゲルバデスからは、デスラー機雷が入ったポッドが多数射出され、ポッドはある一定の高度まで上がると、自然に割れ、そこからは無数のデスラー機雷が散布された。
突然散布された機雷を回避する事が出来ずに、敵の高速駆逐艦二隻と護衛艦三隻がデスラー機雷の餌食となった。

「機雷だ!!」
「危険だ!!回避!!」
「速度を落せ!!」
ガミラス艦隊は、機雷によって追撃してくる敵の足を鈍らせる事に成功した。
「敵艦より、機雷が射出された模様です!!」
追撃していった予備隊からの報告を読み上げるオペレーター。
「ええい、何から何まで小癪な奴らめ!!突入部隊に打電!!一刻も早く機雷原を突破し、一艦残らず撃滅するのだ!!」
「はっ!!」
予備隊は機雷に向けて主砲を撃つが、如何せん機雷の数が多く、中々機雷原の突破に時間がかかっている。
その間にガミラス艦隊はマザータウン近くの海へと着水体制をとっていた。
「海面までの距離あと２０００!!」
「全艦、対ショックに備えろ!!着水するぞ!!」
大きな波しぶきを立て、ガミラス艦隊は次々とイスカンダルの海へと着水していった。
「全艦着水完了!!」
「各部、閉鎖!!全艦、上方の敵に備えろ!!」
ガミラス艦隊の各艦は砲塔の全てを最大仰角まで上げて、上からの敵襲に備えた。
「まだ機雷原は突破できんのか!?」
機雷原の手前でイスカンダル大気圏まで降下した予備隊の旗艦である戦艦で艦長が部下に声を荒げながら訊ねる。
「も、申し訳ありません。如何せん機雷の数が多すぎて・・・」
部下の方は恐る恐る答える。
「ならば、艦載機隊を先行させ、あの街を廃墟と化せ!!」
プレアデスを始めとする戦艦からは次々と艦載機隊が出撃していった。
小型の艦載機ならば、機雷原の穴を問題なく通る事が出来た。

しかし、戦闘機では、対艦戦闘は不向きなので、戦闘機隊はマザータウン施設の破壊に向かいった。
装備されていた、小型爆弾でも、無防備の都市に対してはそれなりの被害を出す威力はあった。
「宮殿上空に向かう敵機を撃ち落せ!!スターシアと古代守を守るのだ!!」
ガミラス艦隊は対空砲を都市爆撃に向かう敵の戦闘機に対して、撃ちはじめる。
「デスラー・・・」
「俺たちの為にデスラーが・・・あのデスラーが・・・くっ、俺たちは、こうして見ている事しか出来ないのか・・・!!」
宮殿の外で繰り広げられる戦闘に、スターシアは嘆き、守は何も出来ない自分に対し、悔しそうに歯を喰いしばる。
「総統、機雷源が完全に突破されました!!敵艦隊が侵入してきます!!」
「撃ち落せ!!ガミラスの怒り、その全てを込めて応戦するのだ!!」
「まだあの小うるさいハエを叩き潰せんのか!?」
デーダーは戦闘開始からかなり時間が経っているにも関わらず、未だにガミラス艦隊を殲滅出来ない事に苛立っていた。
「ええい、役立たず共め!!もうよい!!私が直接指揮を執る!!大気圏突入モードへの移行は完了したか!?」
「はっ、全艦、移行完了しております!!」
「右舷大隊、左舷大隊前へ!!左右から突入し、敵を包囲しろ!!艦載機隊は先行してあの目障りな都市を破壊しろ!!どうやら敵はあの都市を死守したい様子だからな・・・その希望の芽、先に摘み取ってやるのだ!!」
右舷大隊、左舷大隊の戦艦より、艦載機隊が射出されていく。
「敵もさるものとはいえ、瀕死の状態に変わりない!!一気に叩き潰すぞ!!」
中央を先に突入した予備隊、そして左右をそれぞれ、一個大隊が包囲する陣形でガミラス艦隊へ迫っていくデーダー艦隊。
「軌道上の敵部隊、さらに分離!!中央の本体は動かないようですが、左

右から大部隊が突入してきます!!」
「更に、艦載機部隊の増援を確認!!マザータウンへと向かっています!!」
「総統!!各部隔壁に禱殿損傷が出ています。残念ですが、これ以上交戦を続行しては、艦が持ちません!!」
デスラーの下には戦況不利な報告が次々と入ってくる。
「もはや・・・もはや、これまでと言うのか?・・・・マザータウンを!!スターシアと守を!!イスカンダルを見殺しにしろと言うのか・・・・!!」
デスラーにしては珍しく、手詰まりになり、諦めかけていた。

此処で場面はイスカンダルからミッドへと変わる。
時空管理局、本局　大会議場。
テリオス遭難事件にて、地球防衛軍が設置した通信ポッドのあるヘリオポーズへと行き、次元ブイを設置した、クロノ・ハラオウンが艦長を務めるクラウディア。
自分たち、管理局が此処に来たと言う証を残して、クラウディアは本局へと戻り、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン、ティアナ・ランスターニ人の生存、テリオス遭難の真相と通信ブイの設置をこれまでの映像と記録と共に報告したのだ。
今回の会議には三提督の他にも〝海〟、〝空〟、〝陸〟の上層部局員が集まっていた。
度重なる次元航行艦の喪失と多数の乗組員の殉職・行方不明、管理局からの離職は管理局の〝海〟には深刻な打撃を与えていた。
また、管理局屈指のエースであるフェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官も遭難し、管理外世界の宇宙船に救助されたらしいが、現在も連絡不能であることは、ミッドチルダの住民も驚愕した。
しかし、一般には地球防衛軍等の事は伏せられ、単に管理外世界とだけ発表されていた。
時空管理局が最新最強と喧伝しているＸＶ級次元航行艦をあっさり撃破できる強力な宇宙戦闘艦とそれを運用できる軍事組織が管理局のコントロールを受けずに存在する事が明らかになれば、管理世界

全体に衝撃と不安をもたらし、管理局への不信感を募らせるだけでなく、反管理局組織や次元犯罪者に要らぬ勢いを与えかねないからだ。
クロノの報告を聞き、表情は様々だが、共通するのは驚愕と当惑であった。
「テリオスを襲ったのが、ガトランティス帝国で、ハラオウン執務官らを救助したのが、地球防衛軍らしいというのが解ったのはいいが、戦闘力が圧倒的に違う。これでは対処のしようがないな・・・・」
次元航行部隊の佐官が首を横に振りながら呟いた。
「ハラオウン提督、地球防衛軍という組織と第９７管理外世界の関連は確認できないのか？」
一人の高官がクロノに質問する。
「私が居を構えている第９７管理外世界には、間違いなくここまでの宇宙戦闘艦を建造できる技術もなければ、地球防衛軍なる組織も存在していません」
クロノが自分の知る地球と地球防衛軍の根拠地とされる地球との違いを明確に報告する。
「宇宙戦艦・・・スペース・バトルシップ・・・・ですか？」
「はい。文字どおり、宇宙空間で艦船同士の戦闘を第一目的とした戦闘艦です。恐らくテリオスを襲撃した艦もそれに類似する物でしょう。正直、信じたくない気持ちですが、現実から逃避して対応を誤れば、我々も同じ運命に見舞われることになります」
三提督の紅一点、ミゼット・クローベルの問いにクロノが頷く。
「確かに強力そうな砲身だ。アインヘリアルをも上回りそうだが、そんな砲を何門も搭載しているのか？」
「はい。しかも、執務官らが救助されたこの　まほろば　に関しては大きさも我々が所有しているＸＶ級よりも大型です、更にテレザートにて確認されたヤマトの大きさもほぼ、ＸＶ級とほぼ同じ大きさです」
以前、クラウディアがテレザートにて記録に成功したヤマトの映像が再生され、次にテリオスを襲っているガトランティスの艦艇が　まほろば　の放つビーム（ショックカノン）により串刺しにされて爆発

炎上する動画が再生された。
「今の段階では、地球防衛軍、地球連邦と第９７管理外世界の関連性は不明です」
「だとすれば、第９７管理外世界の事は置いてもよかろう。話をややこしくするだけだ」
　三提督の法務顧問相談役、レオーネ・フィルスが複雑になりかける話をリセットした。
　このまま話が行けば、第９７管理外世界を管理世界に編入せよと言い出す輩が出そうだからだ。
「ガトランティス軍は血に飢えた獣みたいなものだ。どう考えても、コンタクトを取るべき相手は地球連邦・地球防衛軍だろう」
　続いて、三提督の武装隊栄誉元帥のラルゴ・キールが言う。
「元帥、お言葉ですが、そんな危険な質量兵器を使う連中を相手にするのですか？」
　本局の高官の一人が非難する口調でたしなめる。
「その通りです!!テリオスを沈めた連中は危険だが、奴らをあっさりと片付けてしまった地球防衛軍とやらの艦はもっと危険だ！しかも、更に強力な大量破壊兵器もあるというではないか！」
　そう主張する管理世界拡大推進派の提督にレティ・ロウランが反論する。
「些か早計に過ぎませんか？地球防衛軍が好戦的なだけならば、戦闘はともかく、テリオスの救助作業まではしないでしょう。しかも自分たちの身元も明かしているんです。これは、ハラオウン執務官らの身柄を我々に返す気があるのでは？」
「ロウラン提督の言う通りだ。それに肝心のハラオウン執務官らの身柄は向こうにある。返してもらうには、いずれ地球防衛軍ないし地球連邦政府と交渉する他ないのではないのかな？」
「さよう。その時、向こうが高圧的な態度でくるのか、友好的な態度なのか、中立的な態度でくるのかはわからないが、こちらが『お前たちは危険な存在だ』というような態度で接したら、全てが無駄になりかねない。現時点で、明らかにガトランティスとまともに渡り合える戦

力や技術を有しているのは地球防衛軍のみであり、母体である地球連邦本国がどこにあるのかもわからないんだからな」
　レオーネとラルゴは、防衛軍側とコンタクトを取る気でこの話を終えようとしたが、
「だからこそ、地球連邦のある世界を特定して、その世界を直ちに管理世界に編入し、彼らの技術をロストロギア指定し全て接収するべきです!!」
　ここで空気の読めない高官が居た。
　この高官は元々、管理世界拡大推進派に属する高官ゆえの発言であった。
「ソレはどんな名目なのですかな?管理局と戦闘状態にない惑星国家に対して?」
「テリオスは地球連邦とガトランティスの戦争に巻き込まれたんです!当事者に謝罪を求めるのは正当な権利な筈です!」
「その代償が一世界の主権か?多くの人命が失われた事に怒り、手を下したガトランティス側に謝罪させるのは当然だが、救助した防衛軍側に対する礼がそれとはな・・・管理局は一体いつから礼儀知らずの侵略組織に成り下がった?」
「何だと!?」
　慎重策を求める〝陸〟〝海〟〝空〟の士官と管理世界拡張を求める〝海〟〝空〟の士官が口論を始めた。
　フェイトとティアナの身柄がまだ彼方にあるにも関わらず、強硬な手段をとり、牙を剥かれてはかなわない。
　もし、そんな事になれば、彼女らの生命にも危機が及ぶ可能性もある。
　第一、地球防衛軍の総戦力も根拠地である彼方の世界の地球の正確な座標さえ分からないのだ。
　〝魔法文化がない世界を軽んじる空気が蔓延していては、いずれ管理局は存亡の崖に立たされる〟
　管理局はまさに改革の時を迫られていたのかもしれない。

五十八話　対決、プレアデス

艦隊司令官のデーダーは身じろぎもせず、戦況を見守っていた。
ガミラス星のガミラシウム採掘を邪魔した艦隊は、小癪にもイスカンダルにもやってきて我々の前に立ちはだかっているが、戦況は俄然、此方が有利だ。
ガミラス艦隊を追い詰めたデーダー艦隊。
しかし、内心は苛立っていた。
それは未だにそのガミラス艦隊を殲滅できていなかったからだ。
そんな時にプレアデスのレーダーが艦船の反応を捉えた。
「デーダー司令、後方より接近中の艦船があります!!」
「なにっ？あそこ（海上）にいる連中の一味か？」
「大部分の艦艇はあの敵艦隊と同型艦ですが、うち三隻は全く異なる形状とのことです！」
そこへ、一通の通信が入った。
「デーダー司令、後方から接近中の艦船より入電です!!」
「読み上げろ」
「はっ、『貴官ラノ行動ハ、いすかんだるノ平穏ヲ脅カスモノデアル。タダチニ戦闘行動ヲ中止シ、コノ星系ヨリ退去サレタシ』・・・以上です」
「何だと!?小生意気な連中め!!後衛の部隊を迎撃に当たらせろ!!それと、連中がそこの勢力に属する奴等なのかを問いただせ!!」
「はっ!!」

此処で、視点を防衛とガミラス軍の混成艦隊へと戻す。
「敵艦隊の一部、イスカンダルへ降下を開始しました!!」
「っ!?全艦全速!!航空隊、全機発進準備!!」
奇妙な混成艦隊はイスカンダルへと急速に接近した。
「通信長、前方の艦隊へ打電してくれ!!『貴官ラノ行動ハ、いすかんだるノ平穏ヲ脅カスモノデアル。タダチニ戦闘行動ヲ中止シ、コノ星系

ヨリ退去サレタシ』と」
「了解」
ギンガは良馬の言った文を前方の艦隊へと送った。
すると、
「前方の艦隊より、高速駆逐艦隊がこちらに向かってきます!!その後方に旗艦らしい大型一隻を確認!!」
「前方の艦隊より入電!!『貴官らの所属国家とあの星に近づく目的を説明せよ』・・・・以上です」
その後、二～三回通信での応酬が行われたが、向こうはどこまでも高圧的で、自分たちの正体を明かさず、こちらの所属を聞き出そうとする。
無論、此方側としてはそんな要求に応じる必要はない。
ましてや自分たちの所属を明かさず、戦闘行為も止める様子もない輩ならば、尚更だ。
「敵艦隊、こちらに高速接近！」
どうやら、彼方は話し合い等応じず、殺る気満々のようだ。
「敵艦発砲！」
「主砲、斉射三連!!まずは旗艦らしい大型艦を仕留める！」
「了解、主砲、斉射三連!!射撃用意!!」
「ヤマトも射撃準備を始めました」
「主砲発射準備完了！」
「撃てっ!!」
まほろば、ヤマトの前部主砲から放たれた火線は、接近してくる敵艦隊へと吸い込まれていく。
そして、その狙いは外さず、敵の大型艦を貫いた。
此方からの長距離射撃を受け、しかも旗艦と思しき、艦が撃沈されると、残る艦の隊列が乱れ始めた。
其処にディッツ提督から通信が入った。
「奴らは我々が始末する。貴官らは一刻も早くイスカンダルへ行け!!」
「了解しました」

陣形を乱す敵艦隊にディッツ艦隊が襲いかかった。
駆逐艦では、到底、餓狼のごときディッツ艦隊を防げまい。
凄惨な殺戮劇を横目に見ながら、まほろば　と　ヤマト、雪風・改は一路イスカンダルに向かう。
「偵察機より入電!!イスカンダル大気圏上に艦隊を確認!!マザータウン方向に向け降下中との事です！」
「コスモタイガー隊、対艦攻撃準備！準備出来次第発艦せよ!!」
デスラーたちはマザータウンを死守しているようだ。
スターシアと古代守の二人を救出するには、まずマザータウンの周りに居る敵を一掃しなければならない。
「ディッツ艦隊、敵艦隊を撃滅しました!!すぐにこちらに向かうそうです!!」
やはり、猛将と言うだけあって良馬が予想していたよりも早い。
「コスモタイガー、全機装備完了しました！」
「よし、全機発進!!」
まほろば　からは、坂井率いるコスモタイガー隊とヤマトからはコスモゼロに乗った古代と山本率いるコスモタイガー隊が次々と発進。
古代機を先頭に、マザータウンに向かっていった。
まほろば　が戦闘配備になった時点で、フェイトとティアナ、ジュラは医務室から自室に移動していた。
二人は先程から言葉が出せずに、無言のままモニターを見ていた。
虚空に浮かぶイスカンダル星、急接近してくる円盤形戦闘艦と、それに対するヤマトと　まほろば　の砲撃、一撃で爆散する円盤形艦艇、逃げ惑う羊に襲いかかる狼のごときガミラス艦隊・・・・。
自分たちの世界の戦闘とは次元が違う。
飛び交う光学兵器や質量兵器と艦載航空機。
閃光とともに艦船が砕け散る度、あの光の中で数十から数百の人命が消えていくのだ。
α星、七色星団、サイレン宙域、シャンブロウで宇宙戦艦の戦いを見てきたが、やはり何度見ても自分たちの知る管理局内で見てきた価値観が根底から覆されていく。

戦争、戦闘には死が伴う。
こんな簡単な事すら自分たちは忘れていた。
六課を始めとして、これまで管理局での経験全ての戦闘行為が甘っちょろいとは思わない。
ＰＴ事件の時も、闇の書事件の時も、そしてＪＳ事件の時も、自分は命懸けに任務に望んで来た。
しかし、それらは地上での出来事・・・・。
だが、ここは真空の宇宙空間・・・・。
宇宙では地上での常識は通用しない。
未知の宇宙気象や現象が起こり得る空間故、管理局でさえ宇宙で起こる現象を全て解明できているわけでは無い。
モニターの向こうで行われている戦闘では続けざまに放たれる光学兵器はミッド式の砲撃魔法を遥かに上回る速度。
今、目の当たりにしたヤマト、まほろば　の砲撃もたった一門の砲撃でも高町なのはのスターライト・ブレイカー、次元航行艦に装備されているアルカンシェル、ミッドに設置されていたアインヘリアルの威力を大きく凌いでいる。
時空管理局の次元航行艦はレーザー核融合と魔法のハイブリッド機関だが、地球防衛軍やガミラス軍の艦船は、魔法に頼らない同系列の、少なくとも管理局の艦船より数世代先行した推進機関を使用しているのは間違いない。
（波動エンジンというのはこれほどまでに強力なの・・・・？）
ティアナが管理局の艦と防衛軍、ガミラスの波動エンジン搭載艦との違いについて考えを巡らせていた。
そして、ヤマト、まほろば　らの地球防衛艦隊に、管理局の次元航行艦隊が一方的に撃ち沈められる様を想像して慄然とし、頭を強く横に振った。
（この世界では、ガトランティスやガミラスより、地球の人たちの方がきちんと話し合いの場を持てるはず・・・・）
時空管理局がこの世界の星間国家と対立したり、無理矢理従属させようとしたら、間違いなく大量の血の代償を支払わされる。

そんな危険なこの世界で、味方というか、友誼を結べる存在があるとすれば、地球防衛軍と地球連邦くらいしかないのではないか？
フェイトもまた、ティアナと同じ事を考えていた――。
「デーダー司令、後方の艦隊へと差し向けた味方部隊が壊滅状態です!!」
「敵は二手に分かれ、三隻がこちらに接近中！残りは我が船団と交戦中！」
「何だと!?」
デーダーは思わず舌打ちした。
その後の部隊の状況も、短時間のうちに急速に悪化の一途を辿り、
「味方部隊全滅!!」
「ええい、小賢しい真似を！」
「分派した敵艦から艦載機が発進しました。こちらに向かってきます！」
「全艦、陣形を密集させろ、対空砲火を濃密にするのだ！」
ここで浮足立っては元も子もなくなる。
まずは海上に居座る敵艦の処理が先だ。
デーダーは、後衛の被害にはある程度目をつぶる事にした。
「コスモタイガー隊、敵艦隊後衛に接触。戦闘状態に突入、攻撃を開始しました！」
「うん」
良馬は報告を聞き、頷く。
どうやら、第一関門は無難にくぐり抜けたようだ。
とは言え、コスモタイガー隊の目標はあの艦隊ではなく、マザータウンとガミラス艦隊に取り付いている敵編隊の排除なのだ。
コスモタイガー隊は敵艦隊後衛に対艦ミサイルを撃ち込むとそのままフライパスし、マザータウンに向かった。
「味方護衛艦部隊に多数の被害!!」
「つくづく小賢しい奴らめ！」
デーダーは毒づいた。
海上の連中とは異なるシルエットの敵艦から発進した戦闘攻撃機

は、こちらの後衛艦隊に向けて対艦ミサイルを全弾発射し、そのまま我が艦隊の対空砲の射程外を通り過ぎ、海上の敵艦隊に向けて飛び去った。
対空戦闘のため、後衛艦隊を密集させていたのが結果として裏目に出てしまった。
敵編隊が放ったミサイルは、忌ま忌ましくも、密集した後衛艦隊を左右に分断するかのようにほぼ一直線に着弾し、被害を与えてくれたのだ。
小勢ながらなかなかどうして、こちらの神経を逆撫でてくれる。
「通信参謀、あの艦載機の所属する艦の通信を傍受分析し、所属を探れ！」
「はっ！」
海上にいる艦隊は、どうやらガミラス星に元々住んでいた連中らしいが、あの艦は、敵艦隊と同盟こそしているが、かなり異なる勢力なり国家なりに属しているようだ。
データーは通信参謀に件の敵艦の分析を命じた。
どんな小勢でも、ひょっとしたらとんでもない強力な勢力がバックについているかも知れない。
過大評価以上に避けなければならないのは過少評価だ。
コスモタイガー隊は敵艦隊本隊をフライパスし、マザータウンへと迫る。
攻撃目標はガミラス艦隊を攻撃しようとしている艦艇と艦載機群。
まほろば　のコスモタイガー隊は、デスラー機雷を突破した敵の艦隊に向かい、ヤマトのコスモタイガー隊は、敵、艦載機隊に襲い掛かった。
「七色星団に居た奴らに比べれば、楽なもんだな。坂本、椎名、お前らは大丈夫か？」
敵艦載機を撃ち墜しながら、坂本と椎名に訊ねる山本。
「相手は宇宙戦闘用の艦載機みたいですからね、大気圏内なら此方に分があります・・・この前の様にはいきませんよ」
「同感です。山本隊長こそ、油断して撃ち落されない様にご注意を!!」

「全く、いつまでたっても口数の減らない奴等だぜ」
軽口を叩きながらも忠実に任務をこなしていくコスモタイガー隊だった。
マザータウン周辺の敵を一掃し、帰還行動をとる。
マザータウンから戻って来たコスモタイガーがヤマト　と　まほろば　をフライパスする。
何機かは煙の尾を引いているが、一機も欠けることなく戻ってきた。
損傷機には教導隊機が随伴しているが、パイロットは負傷しておらず、どうやら大丈夫のようだ。
しかし、万が一の為、被弾した機には帰還命令を出した。
「デーダー司令、イスカンダルへ突入した部隊が援軍の艦載機部隊により全滅しました!!敵の内、降下しているのは艦載機だけのようですが、大気圏内での戦闘は此方に不利だと思われます」
「ぬぅ～侵攻中の左舷大隊、右舷大隊に転進を命じろ!!こうなれば、戦力を全て集結し、この軌道上で片をつけてやる!!艦載機部隊にも出撃を命じろ!!」
「地表に居る敵はどうされますか?」
「地表に居る敵とて、いずれ飛び立たねばなるまい。のこのこと上昇して来たところを迎え討てば良いわ!!」
デーダーの命令でイスカンダルの大気圏内を侵攻中だった左舷大隊、右舷大隊は停止し、宇宙戦闘モードへと移行しながら上昇したが、突然の転進命令で、直ぐには集結が出来なかった。
そこで、コスモタイガー隊への追撃はプレアデスが搭載している艦載機隊が行った。
「敵艦載機、接近します!」
「対空戦闘用意!!全対空火器、照準追尾始め!」
「了解」
良馬が対空戦闘準備を指示。
副砲、対空パルスレーザー砲が仰角をかけ、ミサイル発射管の蓋が開放された。

「敵機、射程内に補足!!」
「対空戦闘始め!!」
良馬の号令一下、ヤマトと　まほろば　が対空戦闘を開始し、無数のパルスレーザー砲とミサイルが発射された。
対空ミサイルは命中を狙ってはいない。
近接信管で炸裂し、極超音速でばら撒かれた榴散弾が目標を襲う。
ミサイルの洗礼を免れた敵機にはヤマト　と　まほろば　のパルスレーザー砲の掃射が降り注ぎ、死角を突こうとした敵機には再反転したコスモタイガーが襲いかかった。
意外に強い対空砲火と迎撃機に鼻白んだ敵機の一部は、いったん後方に離脱して体制を立て直そうとしたが、そこへ別の砲火が襲った。
ディッツ艦隊がようやく追いつき、主砲と対空ミサイルを撃ってきたのだ。
「母なるガミラスの仇に情けは無用！一機たりとも生かして帰すな！」
ディッツ艦隊の怒りの砲火は、雨のごとく敵機に降り注いだ。
「敵艦隊、反転上昇していきます！」
幕僚の報告に、デスラーは額の汗を拭った。
やはりヤマトは来た・・・・。
艦影こそまだ確認できないが、コスモタイガー編隊の先頭を切るコスモゼロを駆っているのは、間違いなく古代進だ。
一瞬緩んだ緊張をすぐに引き締め、デスラーはすぐさま指示を飛ばす。
「戦闘可能な艦は集結せよ！各部の修理も急げ!!」
「はっ！」
敵艦隊はヤマトに向かったようだが、こちらを忘れては困る。
我々にとどめを刺さず、背中を見せたことを必ず後悔させてやる。
デスラーは不敵な笑みを零した。
「敵編隊撤退！入れ代わりに艦隊が接近してきます！」
「対艦戦闘用意！コスモタイガーを全機戻せ！隔壁閉鎖確認！」
敵将は本気で我々を潰しに来たようだ。

まほろば　の医務室では、リニスや原田らの医療班が、治療に使う薬や包帯、怪我人を運ぶ担架を準備して、何時でも動けるようにしていた。
先程艦内放送で「対艦戦闘用意」が告げられた。
間もなく宇宙戦艦同士の殴り合いが再び始まろうとしているのだ。
そこへ、自室に居た筈のフェイトたちがやって来た。
やはり、モニターで見ているだけではどうにも手持ち無沙汰となり、何か自分たちにも出来ないかと思ってきたのだ。
「あの・・・リニス先生？」
「ん？何かしら？」
ティアナがリニスに質問する。
「ヤマトを含めた地球防衛軍の艦船は、敵方より少ない数で戦ってきたのですか？」
「ええ」
リニスが肯定の回答をよこす。
「ヤマトはイスカンダルまでの航海の時は、一隻で２９万６千光年の旅をしたし、冥王星海戦の時は、防衛軍が三倍以上の数のガミラス艦隊に戦いを挑んだわ。白色彗星の時も同じだったわね・・・この時も、再建したてだったから、２１９９年当時よりも最も数が多かったわ。それでも敵である白色彗星の艦隊の方が数は地球艦隊よりも多かったわね。だからこそ、地球艦隊は、地の利を活かした戦法で数の問題を少しでも和らげた。それでも、あの都市帝国によって全滅寸前までに撃ち減らされ、死兵同然で戦って、ギリギリの勝利を掴んだのよ」
「そう・ですか・・・」
敵より多数の戦力で臨むのが戦術の基本であり、少数で多勢に挑むのは下の下だ。管理局ではそう学んできた。
しかし、戦力が整わないうちに敵が来ては仕方ないだろう。
ただ、目の前のリニスや原田たちは、うろたえることなく、特に緊張した様子もなく、平然とその時を待っている。
自分たちが六課に配属され、ファーストアラートの時は、現場に向かう途中のヘリの中で緊張しっぱなしだった。

その前に行ったBランク試験の時も同じだった。
ホテル・アグスタの時は、周りのコンプレックスと緊張からミスショットをした。
つい最近では、執務官補佐官試験でも同様だ。
(映像に出てこない過去に、もっと辛く悲しい思いをしてきたのかも・・・)
先日見せてもらった映像はダイジェストだ。
実際にはもっと血生臭い修羅場も存在したはずだ。
(正直、想像がつかないな・・・)
しかし、ヤマトや地球防衛軍は、決して諦めることなく、絶望的な状況に立ち向かい、奇跡的な逆転勝ちをおさめてきたという。
(地球防衛軍の戦いぶりを見れば、奇跡を起こしてきた所以がわかるかも知れない)
そう思うティアナの背後にある医務室の壁に掛けてある薄型スクリーンに映った宇宙空間が光芒で満たされた。

イスカンダリウム採掘のため、マザータウンに着水したガミラス艦隊相手に優位な戦闘を展開していたデーダー率いる暗黒星団帝国軍・第一機動艦隊であったが、新手の敵艦隊(ディッツ艦隊&ヤマト、まほろば、雪風・改)にイスカンダルへ突入した部隊及び、本隊後衛にまで被害が及んだことを看過できず、艦隊司令官のデーダーは、反転して新たな敵艦隊を叩くことを決断した。
そして、ようやく艦隊の集結が終了した。
イスカンダルの軌道上でまさに一大決戦が始まろうとしていたのだ。
「これより、本艦隊は、イスカンダル軌道に集結した敵艦隊との交戦に移る!!イスカンダル地表のデスラー率いるガミラス艦隊は大きな被害を受け、直ぐには動けそうにない。しかし、デスラーはあれだけの艦隊で此処まで持ちこたえてくれたんだ。その努力を無駄にするな!!」
古代が士気を上げるために皆を鼓舞する。

「ですが、気を付けた方が良いですよ。何せあれだけの大艦隊です。それにこれまでの交戦データに無い艦も居る様ですし・・・・」
南部の言う『交戦データに無い艦』とは、プレアデスの事を指していた。
「うむ、南部の言う交戦データに無い艦・・・・恐らく旗艦とおぼしきこの大型艦が問題だな。とてつもない量のエネルギー反応を持っている。どう思う、大山？」
真田はプレアデスの異常なエネルギー反応について大山に意見を求める。
「波動砲の様な超兵器を積んでいるか・・・・あるいは強力な偏向バリア搭載艦か・・・・推測なら幾らでも出来る。だが、実際に戦ってみんことにはどうせわからんのだ。今から心配していてもしょうがないさ。気楽に行け、気楽に」
「気楽にいけと言われましてもね・・・・」
太田が少々弱気な様子で言う。
「兎も角、イスカンダルにいるスターシアさんや守さん、そしてデスラーを守るのが先決だ。砲火がイスカンダル方向に向かないように注意して戦う必要があるぞ」
島がイスカンダルへ流れ弾が落ちないようにと慎重論を唱える。
「そうだな」

暗黒星団帝国　第一艦隊　旗艦　プレアデス　艦橋
「デーダー司令、全艦集結完了しました」
「フフフ・・・・今までの分の借り、たっぷりと返してやるわ!!全軍、進撃開始!!」
デーダーが開戦とも言える命令を発した。
その時に、
「あの・・・・デーダー司令・・・・申し上げ難いのですが・・・・」
幕僚の一人がデーダーに声をかけた。
「何だ!?」
気分が乗って来たところに水をささされ、不機嫌そうな声をあげる

デーダー。
「我々は既に、イスカンダルにいる同じような小規模の艦隊により、予想を遥かに上回る被害を受けております。敵が小規模とは言え、油断してかかるのは禁物かと・・・・」
「・・・なるほど、崇高なるご意見、ありがたく承ろう。すると君は、このデーダー率いるプレアデス艦隊があのハエ共に負けるとでもいいたいわけか？」
デーダーが意見を述べた幕僚を睨みつける。
「いえ、あの、はは・決して・・・・・そんなわけでは・・・・・」
デーダーの睨みに怖気づく幕僚。
そんな幕僚にデーダーは・・・・・・
バン!!
腰のホルスターから銃を抜き、その幕僚を射殺した。
「臆病者めが!!」
床で死んでいる幕僚にデーダーはまるでゴミでも見るかのように言い放つ。
デーダーの行動にプレアデスの艦橋内に居た乗員も皆、唖然としている。
「何をしておる!!命令が聞こえなかったのか!?全軍、進撃開始だ!!」
モタモタしている乗員にデーダーは声をあげる。
「りょ、了解!!」
デーダーの声を聞き、我に返る乗員たち。
乗員たちは大慌てで各艦に命令を伝達し、艦隊は進軍を開始した。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「敵艦隊、前進してきます!!」
「敵艦隊前衛との距離、１２０００!!」
「主砲、射撃用意!!」
敵の巡洋艦、護衛艦、駆逐艦が高速で距離を詰めてくる。
「月村艦長」
其処に、古代から通信が入った。

「どうした？」
「まほろば　に拡散波動砲の発射を具申します」
「拡散波動砲を？」
「はい、急接近する敵艦に対して、拡散波動砲を撃ち、撃ち漏らした敵を我が仕留めます!!幸い、接近する敵はイスカンダルの射線上に居ませんので、拡散波動砲を撃っても問題はありません!!」
「分かった。拡散波動砲、発射準備!!」
「拡散波動砲、発射準備!!」
「波動砲チャージャーに接続!!チャージを加速します!!」
　古代の戦略プランにより、まず敵艦隊を十分に引き付け、そこをまほろば　が拡散波動砲を放ち、続いて撃ち漏らした敵は、ヤマトとディッツ艦隊の一斉射、次いで、ガミラスのデストロイヤー艦が得意とする中・近距離の砲雷撃戦に持ち込む作戦だ。
「距離、１２０００！・・・・１００００！・・・・」
「拡散波動砲、発射準備完了!!」
　敵の巡洋艦が撃ち始めるが、まだ至近弾はない。
「９５００！」
　距離は一万をきり、やがて至近弾が出始める。
　戦艦はともかく、装甲が薄い駆逐艦にはボチボチきつくなる距離だ。
「距離、９０００！」
「艦首、拡散波動砲、発射!!」
　まほろば　から拡散波動砲が放たれ、拡散波動砲は接近する敵艦隊を包み込むように覆い、敵艦を次々と血祭りにあげていった。

　暗黒星団帝国　第一艦隊　旗艦　プレアデス　艦橋
「な、何だ!?今の攻撃は!?」
　味方の前衛部隊を一瞬の内に壊滅させた敵の兵器に驚愕するデーダー。
「て、敵はタキオン波動砲を搭載している様です!!」
「ぬぅぅぅぅ～プレアデスを敵とイスカンダルを結ぶ線上に移動させ

ろ!!イスカンダルを背にしておれば、そうそう敵も撃ってはこれまい!!」
プレアデスは、味方を見捨てるような形で、一隻だけ安全圏へと退避した。
「主砲撃ぇっ!!」
続いて、ヤマト、ディッツ艦隊の艦船からら放たれた光の束は、拡散波動砲から逃れた敵艦隊へと突き刺さる。
着弾地点で幾つもの爆発の閃光がきらめいた。
拡散波動砲、ヤマト、ディッツ艦隊からの一斉射撃で動揺したか、戦術を転換したかはわからないが、敵艦隊両翼に動きが見られる。
「包囲に転換したか・・・だが遅い!全艦、敵艦隊に楔を打ち込め!!」
不敵に笑うディッツの号令一下、デストロイヤー艦が突撃を始めた。
「侵略者共と地球の若造共にガミラスの電撃戦の真髄を見せてやれ!」
ディッツ艦隊は敵艦隊左翼の包囲攻撃隊形が完成しないうちに襲いかかった。
たちまち敵艦が続けざまに火を噴き、爆発する。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「見事な手綱捌きですねぇ」
永倉が感嘆の声を漏らす。
「あ、ああ・・・冥王星基地の艦隊よりもさらに手強いな。ディッツ提督が冥王星基地司令官でなくて良かったと思うよ」
「ど、同感です」
良馬と永倉はやや顔を引き攣らせながらガミラスの電撃戦を見ていた。
「ガミラスの連中も意地を見せておる!!此方も頑張らなくてはな、艦長」
井上が良馬に声をかけ、
「え、ええ。そうですね。敵艦隊右翼に攻撃を集中しろ!」

「はいっ！」
ガミラス艦隊に負けじと、ヤマト、まほろば　は砲雷撃戦を行い、雪風・改は雷撃戦を展開する。
ビームの奔流は複数の敵艦を串刺しにして爆散させる。
魚雷は薄い装甲を食い破って炸裂し、艦を内側から食い破った。
敵の中堅を務める巡洋艦部隊も前衛の護衛艦、駆逐艦部隊と同様の運命を辿っていた。
沈没を免れても、主機関が損傷して隊列から脱落したり、艦橋への直撃弾で首脳陣が壊滅し、有効な指揮がないまま僚艦と衝突して共に轟沈する艦も続出する。
しかし、一方的な殺戮劇はそう長く続くものではない。
敵艦隊の後方から太い光芒が走り、ガミラスのデストロイヤー艦が次々と炎上・爆発する。
これは敵戦艦部隊からの主砲によるものだった。
さすがに業を煮やしたらしい。
「敵艦隊後方から敵の戦艦部隊が接近してきます!!」
「ディッツ艦隊は後退を始めました」
敵戦艦の攻撃を受けるが、潰走にはならず、反撃して追い縋る小型艦を沈めながら撤退してみせる辺りは、なかなかの手腕だ。
流石、名将は引き際を心得ている。
（見事な撤退戦だ。戦術実技の生きた教材そのものだな）
良馬はディッツの艦隊運用の見事さに惚れ惚れした。
「敵戦艦、有効射程距離まであと1分３０秒です！」
「砲撃用意!!」
ヤマト、まほろば　が前に出て、ガミラス艦隊も超弩級戦艦とガイデロール級航宙戦艦を前に出して応戦する。
「バラバラに撃ってもダメだ。全ての火線を集中して相手に叩き込むんだ。照準急げ！ヤマトの砲術長にもそう伝えろ!!」
「はいっ！」
精密射撃を得意とし、砲術に関するエキスパートである南部の事だし、既に照準を絞り込んでいるかも知れない。

敵戦艦がこちらに目標を変えたようだ。何本かの火線がヤマトと　まほろば　の間を抜ける。
「有効射程距離です！」
「狙点固定！」
「よし、主砲斉射三連。撃てっ!!」
良馬の号令とともに、ヤマト、まほろば　両艦の主砲が轟然と火を噴く。

医務室では、モニターに表示されている戦闘状況にフェイトとティアナは見入っていた。
「・・・・」
「凄い・・・・」
ガミラスの電撃戦を見て、二人とも言葉を失っていた。
敵艦船の数が多く、大型の戦艦まで登場してきたにも関わらず、ヤマト、まほろば　そして同航しているガミラス艦隊は浮足立つことなく迎撃して蹴散らしにかかっている。
「戦艦の装甲は巡洋艦や駆逐艦よりも厚いから火線を集中しての精密射撃・・・・」
「いかに早く確実に相手の弱点をつかみ、攻撃を集中させて無力化する・・・これも数で劣って来た防衛軍の戦術の一つね」
「なるほど」
(相手のウィークポイントを素早く見抜いて、正確に多くの弾丸を撃ち込む、か・・・・)
射撃型魔導師のティアナは思うところが多々あるようだった。
「敵旗艦、撃ってきましたっ！」
「くそっ、アウトレンジされたか・・・・」
主砲の有効射程では、図体の分、あちらの方が有利のようだ。
橙色をしたビームの束はヤマト、まほろば　の脇を通り過ぎた。
そして、三射目でヤマト、まほろば　を捉えた。
「ヤマト、右舷に被弾!!本艦も左舷中央部に被弾しました!!」
ズシン！

ドーン！
いきなり凄まじい震動が艦を襲い、フェイトたちはイスに座ったまま前後左右に揉みくちゃにされた。
（直撃を受けた!?）
モニターを見る限り、敵艦とはかなり距離が有った筈なのに、衝撃がさほど変わらないのは敵艦の攻撃エネルギーが強いからだろう。
フェイトとティアナは思わず顔を見合わせる。
「左舷中央部に被弾!!メディカルは現場に急行せよ!!」
原田たち、衛生士は救急箱や担架を持って現場に行き、リニスは手術着に着替えスタンバイする。
しかも焦っている様子は全くない。
（この位の被弾は慣れっ子だということ!?）
フェイトたちは唖然としたが、同時に僅かながら緊張を緩めた。
「主砲一番二番、撃っ!!」
「十一時方向から接近!!」
「っ!?両舷、ミサイルランチャー撃て!!」
敵の旗艦（プレアデス）はどうやら、ヤマトを狙い、他の戦艦部隊が総出で　まほろばとディッツ艦隊を押さえ込むつもりだろう。
「一歩たりとも退くなっ！臆病風に吹かれた者はわしが撃つ！」
被弾に揺れる旗艦の艦橋に仁王立ちになったディッツが、味方を鼓舞するように号令する。
既に少なからぬ被害を受けていたが、ディッツ艦隊の小型、中型艦艇は敵艦隊の猛攻をはね返し、既に敵の中型、小型艦の大半を葬り去り、あるいは戦闘不能に追い込んでいた。
まほろば　の方も、既に三隻の戦艦、十隻以上の敵中小型艦を撃沈または戦列から落伍させていた。
とは言え、むろん無傷では済まず、小口径砲の被弾でここかしこから煙を噴いているが、曲がりなりにも地球防衛軍が作った新鋭の大型戦艦。主砲等の重要部分は傷一つなく、戦闘力は落ちていない。
「敵旗艦の様子は？」
「イスカンダルを背にヤマトと撃ち合いをしています。しかし、強力

な偏向バリアを張っているためか、ヤマトが不利です!!」
良馬の問いに新見が答える。
スクリーンで見ると、ヤマトは艦体のあちこちから盛大に煙を噴いている。
波動砲や主砲は無傷のようだが、このままではジリ貧だ。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋
ヤマトの四十六センチ、ショックカノンの直撃を受けたプレアデス。
しかし、プレアデスは全くの無傷だった。
「そんなバカなっ!!主砲がまるで効いていない!!」
南部が信じられない物を見た様に言う。
実際、今まで対峙してきた艦船の中でヤマトの主砲に対し、無傷だった艦船は居なかったし、旗艦らしい大型戦艦以外の艦船にはちゃんと効果があるので、驚くのも当然である。
「やはり、敵は偏向バリアを張っているのか・・・・」
真田が、敵戦艦が無傷な理由を述べる。
「しかし、艦の周りにバリアを張っているなら、どうして相手は攻撃を出来るんですか?通常、バリアを張っていたら、攻撃は出来ないんじゃあ・・・・?」
太田が真田に質問する。
「恐らく、相手のビーム砲は自分たちの張っているバリアをすり抜けることが出来るのだろう。相手のビーム砲とヤマトのショックカノンは、ビームの性質は違うんだ・・・だから、相手はバリアを張りながら攻撃が出来、反対に此方がいくら主砲を撃ってもバリアで防がれてしまうんだ」
真田はプレアデスの武装がかつて双子座宙域でみたガトランティスの無人要塞と似た構造をしているのだと推察する。
「いくらバリアが強力でも波動砲ならば」
相原が主砲ではなく、波動砲を撃てば相手を撃沈できるのでは?と、意見具申するが、

「駄目だ、今波動砲を撃てば、イスカンダルを巻き添えにしてしまう。敵はイスカンダルを背にして、此方に波動砲を撃てないようにしている」
古代が波動砲を撃てない理由を説明する。
「何て卑怯な奴だ」
主砲は相手にダメージを与えられず、切り札の波動砲も封じられたヤマト。
八方塞がりの中、
「あの・・艦長代理」
北野が古代に声をかける。
「何だ？」
「思ったんですが、相手のバリアがエネルギー偏向型なら、もしかすると、実弾に対しては無力なのかもしれません。魚雷やミサイルによる実弾攻撃なら、効果があるんじゃないかと・・・・」
「なるほど・・・どう思います、真田さん？」
「うむ、可能性はあるな」
「よし、艦砲攻撃を控えろ!!実弾によるミサイルと魚雷による攻撃を優先させろ!!雷撃戦だ!!」
ヤマトはショックカノンによる砲撃戦を止め、艦首魚雷と煙突ミサイル、艦底ミサイルによる雷撃戦を敢行した。
ズシン！
ドーン！
ヤマトからの魚雷とミサイルを食らったプレアデスに衝撃が走る。
「な、何だ!?どうしたと言うのだ!?」
「敵はビーム兵器から実弾による雷撃攻撃に変更した様です!!」
「何っ!?何故、バリアが効いていない!?」
「本艦に搭載されている偏向バリアは、ビーム兵器には有効ですが、実弾による攻撃には、効果が薄いモノと思われます」
「おのれぇ～野蛮人共めぇ～」
デーダーは苦虫を噛み潰したように顔をしかめる。
そこへ、

「レーダーに反応!!イスカンダル地表に居る敵が上昇してきました!!」
「何ィ!!」
イスカンダルの海に着水していたデスラー率いるガミラス艦隊本隊が大気圏を抜けてきたのだ。
「全艦、雷撃戦用意!!」
プレアデス対策は既にヤマトからデスラーに通信で送られていたため、デスラーは直ぐに砲撃でなく、ミサイルと魚雷攻撃をプレアデスに仕掛けた。
そして・・・・
「で、デーダー司令!!敵のミサイル攻撃により、偏向バリア装置が大破いたしました!!」
「な、なにっ?!早く何とかしろ!!直ぐに修理に取り掛かるのだ!!」
「それが、バリア装置にかなりの負荷がかかっていた様で、被害が凄まじく。もはや原型を留めぬ程、破損していまして・・・・」
「ば、馬鹿者っ!!」
自らの判断ミスから招いた事なのに、バリア装置が使い物にならなくなった責任を部下に丸投げするデーダーであった。

ゲルバデス　艦橋
「敵旗艦、エネルギー反応が大幅に低下しています!!」
「恐らくバリア装置に重度の破損が出たものと思われます」
「よし、止めは私が刺す。デスラー砲発射用意!!」
「デスラー砲発射用意!!射線上の友軍艦艇に退避勧告を送れ!!」
ゲルバデスから射線上の友軍艦艇へ退避勧告が送られた。
「デスラーから通信です!!敵旗艦に向け、デスラー砲を撃つため、射線上の友軍艦艇は直ちに退避せよとの事です!!」
「直ちに回避行動を!!」
友軍艦艇は、攻撃しながら後退して行き、友軍艦艇全てがデスラー砲の射線上から退避した。
そして・・・・

「デスラー砲・・・・発射!!」
ゲルバデスからプレアデスめがけてデスラー砲が発射された。
「て、敵の波動砲が来ます!!」
デーダーもまさか、イスカンダル方向から波動砲が迫って来るとは思ってもみなかった。
「か、回避しろっ!!」
「ダメです!!間に合いません!!直撃です!!」
「ぐあああああああっ――――――!!」
デスラー砲がプレアデスをその眩い閃光と共に飲み込んだ。

「敵旗艦の撃沈を確認!!」
新見が報告し、良馬は頷く。
そして、
「通信長、敵残存艦に通告。『これ以上の戦闘は望まぬ。即刻現宙域から立ち去れ』とな」
敵の残存艦に向けて戦闘停止を勧告した。
しかし、残存敵艦には通じなかったようだ。
「敵残存艦、散開してこちらに突撃してきます!」
デスラー砲が集束型だったから、散開して反撃しようというのだろう。
しかし・・・・。
「やむを得ない。敵艦隊を掃討する!拡散波動砲、発射用意!」
「了解!エネルギー充填開始!」
「敵艦、拡散範囲内に捕捉!!拡散計測完了!」
「拡散波動砲発射準備整いました!!」
「撃て!!」
良馬命令一下、艦首から放たれた光の柱は、敵残存艦群の手前で無数の波動エネルギー弾に分離、突撃してくる敵艦に襲い掛かった。
殆どの艦は回避し切れず、波動エネルギー弾に襲われて大火球と化した。
辛うじて難を逃れた艦は尚も突撃をかけてきたが、手ぐすね引いて

いたディッツ艦隊とヤマトにより全て討ち取られてしまった。
「敵艦全て撃沈しました！」
「ふぅ～終わったか・・・」
周囲に敵影の存在が完全になくなり、皆はホッとした様子だった。
後は、イスカンダルにいるスターシアと守の救出となったが、これはある意味敵艦との戦闘よりも手強いだろうと思う、古代、真田、良馬の三人であった。

五十九話　嵐の前の静けさ

マゼラン星雲　某宙域

デーダー艦隊の全滅はマゼラン方面総司令官のメルダースの下に定時連絡がない事、艦隊のシグナルが全てロストした事から直ぐに察しがつき、彼は本国の国家元首に通信を入れていた。

彼の心情は非常に心苦しいものだった。

ガミラス星の消滅によるガミラシウム採掘の失敗と同鉱物資源の採掘不能に続き、突然介入してきた艦隊により、デーダー率いる第一機動艦隊まで全滅させられたというのだから気が重くならない筈が無い。

「お待たせ致しました。聖総統がお成りです」

若い女の声が国家元首の到着を告げる。

「せ、聖総統・・・誠に申し訳ありません・・・デーダー旗下の我が遊動艦隊が不覚にも全滅した模様です」

「全滅だと？」

「はっ、ガミラス星において遭遇した敵に加え、新たな敵が現れたとのことで・・・・」

メルダースは少し声が裏返り、冷や汗をかきながら状況報告を行う、

「新たな敵？して、その正体も分からぬと言うのか？」

「あっ、いえ、判明したしました。ガミラス星の敵は旧ガミラス帝国の生き残り・・・新たな敵の方は銀河系宇宙のはずれ、第３０等級太陽系の惑星、地球に所属する戦闘艦でございます」

「地球か・・・ふふ・・・いずれ見る事もあるだろう。・・・それにデーダーは尊大で自分の力を過信しすぎる男・・・敗れ去ったとて驚くにはあらたん・・・ところでイスカンダリウムはどうなっておる？」

聖総統なる人物は、臣下であるデーダーの死を悼むことなく、イスカンダリウムについて訊ねる。

「あっ、はい。かくなる上は、私がこのゴルバをもって小癪な敵共を撃

滅し、必ずや採掘を完了して御覧に入れます」
「うむ、吉報を待っているぞ」
「はっ」
臣下の礼を取り、通信が切れた後、メルダースは振り返って幕僚に命じた。
これ以上の失敗は許されない。
イスカンダリウムの採掘を行わなければ、自分は生きて祖国へは帰れない。
状況はまさに崖っぷちであったが、メルダースにはその状況を覆せる程の自信があった。
「これよりゴルバは速やかにイスカンダルに赴き、イスカンダリウム採掘の条件を整える。　機関最大、全速力でイスカンダルに向かえ！」
「はっ！」
特異な（地球人視点）形状をした機動要塞が加速してイスカンダルを目指す。
イスカンダルをめぐる争乱はまだ終わっていなかった――。

イスカンダルを監視する傍ら、船外では艦の損傷修理作業が行われている。
まほろば　の被害は被弾箇所付近で食い止められていたため大した事はなかったが、ヤマトは敵旗艦の砲撃を一身に受けた結果、一部は地球で本格的修繕が必要なものもあり、まほろば　の資材と工作班メンバーも助っ人として加わっていた。
しかし、両艦とも死者や後遺障害を伴う重傷者等の大きな人的損害がなかったことはまさに幸運だった。
「ありがとうございます。手伝ってもらっちゃって」
医療班メンバーに混じって負傷者の手当てを行うフェイトとティアナ、そしてジュラに、原田が礼を言った。
「いえ。危ない所を助けていただいた上、寝食の面倒まで見ていただいているんですから、この位の事は当然です」

「そうです。困ったときはお互い様ですよ」
フェイトとティアナはそう返し、ジュラはコクコクと頷いて負傷者の治療を継続した。
戦闘中、何度となく被弾した時は顔色をなくしていたたが、すぐに落ち着きを取り戻したティアナとフェイト、ジュラは負傷者の手当ての助力を申し出て、戦闘終了後こうして負傷者の手当ての手伝いをしている。
ジュラは、医療班の説明を聞きながら、負傷者の手当てを行っているが、覚えは良い方で、本当に初めてなのかという疑問さえ浮かぶほどだ。
なお、ジュラは今、医療班の女性スタッフが着る白い看護師の制服を着用して救護を行っている。
地球防衛軍艦船の艦内は地球連邦の領土・・・つまり時空管理局の権限外なので、魔法は使えないのだが、執務官やその補佐官は、仕事柄魔法以外の蘇生術や救命救急術もマスターしているので、問題なく負傷者の介抱を手伝えるのだ。
フェイトとティアナ、ジュラに傷の手当てをしてもらっている乗組員は、あからさまに嬉しそうな表情を浮かべていた。
フェイトとティアナの容貌や話す言葉は地球人そのものなので全く違和感がなく、しかも容姿端麗だから、新たな花を添える恰好になった。
ジュラもエルフ耳であるが、神秘的な雰囲気と美女と言う容姿からやはり、人気があった。
それにジレル人特有の能力に関してはリニスが製作したデバイスにより制御されており、彼女が無意識で力を解放する事は無かった。
「被弾箇所の応急修理、完了しました」
「ヤマトの方の応急修理もあと十五分で終了する見込です」
「周囲に敵艦の様子は無いか？」
「今の所ありません」
「引き続き、警戒を続けてくれ」
「了解」

敵があれで諦めたとは考えにくい。
新たな艦隊を派遣してくる可能性は十分あった。
イスカンダルを巡ってもう一悶着は避けられないだろう。
だからこそ、一刻も早くスターシアと古代守を救出しなければならない。
敵艦隊を撃滅できても、二人を救助出来なければ、ここまで来た意味がない。
良馬や古代、真田らヤマトの首脳陣はそれを思い、表面は平然としながらも内心は焦慮を募らせていた。

ヤマトは合流したデスラー艦隊旗艦ゲルバデスと通信を交わし、古代はデスラーと久しぶりの再会とあの艦隊の目的を訊ねていた。
「デスラー・・・・」
「古代・・・・必ず来ると思っていたよ」
「デスラー、彼らの目的は一体何なんだ？」
「我々の星にある地下物質の採掘に来たようだ」
「地下物質？」
「ガミラシウムとイスカンダリウム・・・・それだけでは何の役にも立たぬが、濃縮すれば強力なエネルギーを発する鉱石だ・・・・そしてそれだけではなく、恒星からの放射エネルギーを変換する際の触媒として非常に優秀な役目を果たす事が分かっている」
「二つの星に同じ物質があるというわけか？」
「我々の星は同じ組成で出来ている双子星だからな。遥かな太古、我々二つの文明はこれらの鉱石がもたらすエネルギーで栄えたと伝えられている」
デスラーの説明から、ガミラスとイスカンダルが地球以上の技術力を持っている事から、十分にその説は有力な説であると推測される。
「だが、それらの採掘は星の寿命を更に極端に短くする・・・・そのため、我々ガミラスも、そしてイスカンダルもここ数千年来、採掘は行ってこなかったのだ・・・・」
やはり、有用な資源の採掘にはそれなりのリスクが付き纏い、それ

はガミラスもイスカンダルも例外ではなかった様だ。
そして、何故あの艦隊がイスカンダルを狙うのかを聞いた後、次に真田はデスラーに何故イスカンダルが暴走せずに止まって居るのかを聞き、マイクロブラックホールによる潮汐力干渉によるものだと説明した。
マイクロブラックホールによる潮汐力干渉・・・。
それは、地球を放射能塗れにした遊星爆弾と同じ技術・・・。
その点を大山に指摘され、デスラーはバツ悪そうに口を閉ざした。
タランに旧サファイア戦線跡に向かわせた時もデスラーは同じことを口にしていた。
被害にあった地球人から皮肉を込められて言われれば、気まずくなるのも当然だ。
しかし、これらの事は一時的のしのぎに過ぎず、根本的な解決にはならない。
仮にイスカンダルのあった軌道に戻しても、ガミラスとの重力バランスが無いため、また暴走してしまう。
そのため、イスカンダルにはこの先どんな天変地異が起こるか分からない。
故に、どうしてもスターシアと守をイスカンダルから連れ出さなければ、ならなかった。
デスラーも既にスターシアたちに対し、何度となく脱出し、こちらに移乗するよう説得したが、ダメであったと古代に伝えた。

宇宙戦艦　まほろば　第一艦橋
「艦長、ヤマトとデスラー艦隊の間に回線が繋がりました」
良馬が頷くと映像が繋がり、スクリーンにはヤマトの古代とこれまでは写真でしか見なかったデスラー総統が映し出された。
艦橋の空気がピンと張り詰め、息を呑む者もいる。
つい最近までの敵国の指導者がそこにいるのだから、平静を保つのは至難の業だ。
「デスラー、紹介する。俺の先輩で、兄の後輩である月村艦長だ」

古代がデスラーに良馬を紹介した。
「お初にお目にかかります。デスラー総統。宇宙戦艦、まほろば　艦長の月村良馬です」
挙手して軽く自己紹介した。
デスラーは応えるかのように右手を挙げて軽く頷く。
「大ガミラス帝国総統アベルト・デスラーだ」
良馬とデスラーは挨拶も簡単に済ませ、古代とデスラーとの間で情報交換がなされる。
古代らもイスカンダルにこのまま留まるのは危険だとして、スターシアたちの説得にまわった。
ヤマトがイスカンダルへの通信回路を開いている間、良馬はもう一度、デスラーに通信をいれた。
しかも秘匿通信で・・・・。
「何かな？月村艦長。こっそりと恨み言でも言いに来たのかな？」
「そんな姑息な事はしません」
心外だと言うのは、総統の御息女の事です」
「話と言うのは、総統の御息女の事です」
良馬の口から娘（ジュラ）の事が出た時、ピクッとデスラーの眉が動いた。
「・・・・会ったのか？」
「・・・はい。サイレンの星で・・・・そして現在、御息女は当艦にて保護しています」
「・・・・」
「この件が終わりましたら、御息女に会ってあげて下さい。彼女も総統に会いたがっていましたから・・・・」
「うむ、分かった・・・・」
この時、デスラーはほんの僅かだけ、ガミラスの総統ではなく、一人の父親としての顔をした。
「艦長、イスカンダルと回線が繋がりました。ヤマトにも接続します！」
デスラーと秘匿通信中にギンガから連絡があり、秘匿通信をきり、

ヤマトのメンバーたちと共にイスカンダルに残るスターシアと古代守の説得に当たる事にした。
　まほろば　の艦橋にあるメインスクリーンの画面が三分割され、古代　守とスターシアが加わった。
「進か・・立派に成長したな・・・それに月村も戦艦の艦長に就任したのか、おめでとう」
「ありがとうございます。古代先輩」
　守に戦艦の艦長就任を言われ、礼を言う良馬。
「ん？・そう言えば、沖田艦長はどうした？」
　守はヤマトの艦長席にヤマト艦長の沖田の姿が見えない事に気づき、沖田の事を訊ねる。
「・・・沖田艦長はイスカンダルからの帰りに・・・地球を目前に宇宙放射線病で・・・」
　古代は沖田が不在な理由を守に伝える。
「・・・・そうか」
　守はあの時のイスカンダルでの別れが沖田との今生の別れとなった事に表情を曇らせた。
「兄さん、スターシアさん！・早くイスカンダルから脱出してヤマトに避難を!!沖田艦長だってこの場に居たらきっと同じ事を言っています!!」
「・・・・」
　そして、古代は本題へと入り守とスターシアにイスカンダルからの避難を促す。
　確かに沖田艦長ならば自分たちに避難を促すだろう。
　冥王星海戦の時にもそうだったように・・・
　しかし、
「進、俺たちのためによく此処まで来てくれた・・だが、もうこれで、充分だ。お前たちの方こそ地球に帰ってくれ」
　守もスターシアもイスカンダルから避難する様子は見せない。
「古代、なぜ脱出しないんだ!?」
　続いて、古代と真田が守とスターシアに脱出を勧め始めた。

「すまない真田」
「相変わらず頑固な奴だな、お前は」
　更に大山も説得役に参加した。
「トチロー?お前まで来てくれたのか・・・・」
　守としてはヤマトが来たのだから、進と真田は予想内だったが、まさか大山までもがヤマトに乗っていたのは予想外だったようで驚きの声を出す。
「スターシアさん、お願いです。地球の人達は貴女方を待っているんです。貴女方から受けた御恩を私達は忘れたことがありません」
「ありがとう、雪さん・・・・貴女方のお気持ち、とても嬉しく思います」
「あんたがスターシアか・・・・『嬉しく思います』だって?そりゃ、あんたはいいさ、イスカンダルに残るがいい。そこの女王様だそうだからな」
「トチロー」
　大山の王族に対する無礼な発言に守は少し、不機嫌そうな声を出す。
「俺は言わせてもらうぞ、古代」
　しかし、当の大山はそんな事はお構いなしだと言う態度で発言を続ける。
「なぁ、女王様。確かにイスカンダルは今、停止して小康状態を保っている。だが、今回の事件の影響でこれから先どんな天変地異がその星を襲うか分からないんだぞ。そんな星にどうして留まり続けなきゃならない?」
「・・・・」
　大山の質問にスターシアは暫し無言であったが、
「・・・・それが・・・・しきたりなのです」
　と、自分が滅びゆく星に留まる理由を話し始めた。
「ふん、しきたりか・・・・そんなものはなぁ、穿き潰した猿股みたいにポーンと捨てちまえ」
「分かってくれ、トチロー。例え滅びゆく運命にあろうとも、イスカンダルが滅びる瞬間まで、俺とスターシアは此処に居る。ガミラスとの

戦いで地球が瀕死の危機になった時、お前たちはどうしていた？諦めずに地球に留まっていただろう？」
「・・・・」
守の問いに大山も黙ってしまった。
確かに今のイスカンダルとガミラスの攻撃を受け、放射能塗れになった地球は状況が似ていた。
「分かってくれ・・・俺はもうイスカンダルの人間なんだ」
と、スターシアとのおしどり夫婦ぶりをまじまじと見せる守。
その心情はよしとしよう・・夫婦は運命共同体なのだから・・・
だが、此処で諦めきれずに良馬は抱えていた最大の疑問を口にした。
「あの・・古代先輩」
「なんだ？月村？」
「古代先輩は、約一年半、イスカンダルでスターシアさんと暮らして居たんですよね？」
「ああ、そうだが？」
「・・・お二人の間にお子さんは生まれましたか？」
「なっ!?」
「・・・・」
良馬のストレートの質問に守とスターシアは赤面した。
まほろば　の艦橋メンバーもヤマトの艦橋メンバーも若干顔を赤くしている。
恐らくデスラーも唖然としているだろう。
「どうなんですか？生まれましたか？」
しかし、良馬は周りの視線を気にせずに追撃する。
「そ、それは・・・・」
「どうなんですか？」
「あ、ああ・・・生まれた・・・双子の・・娘がな・・・・」
守は自分とスターシアとの間に子供が生まれた事を告げる。
『っ!?』
それを聞いた良馬、ヤマト、まほろば　の艦橋メンバー、そしてデ

スラーは驚きより納得した表情になり、同時に攻め手を見つけた顔つきになった。
「ほほう・双子ですか？それはおめでとうございます」
「あ、ああ。ありがとう・・・・」
「・・・・」
「なんてお名前ですか？」
「サーシアとユリーシャだ」
「へぇ～」
　良馬はスッと目を細め、守は気まずそうに視線を逸らし、スターシアは相変わらず顔を赤く染めたままだ。
「ならば尚の事、娘さんたちが成人し、無事に巣立つまで、先輩には父親として、スターシアさんには母親として果たすべき義務がある筈なのでは？」
「そ、そうだよ、まさか自分の娘たちまで一緒に死なせる気なのか!?兄さん!!」
「私がこのような事を言う資格はないかも知れぬが、君たちはイスカンダルの未来を託する者として、サーシアとユリーシャを産んだのではなかったのかね？」
　デスラーも加勢する。
　守とて、一応、二児の父親なのだ。
　既に絶滅危惧人種であるイスカンダル人の未来を担うかもしれない子供たちも自分たちのしきたりのためにむざむざと殺す事は本意ではない様だ。
「古代、帰って来い！スターシアと子供たちと一緒に！」
「スターシアさん、貴女は地球のために十二分の好意を示して下さいました。地球は、貴女と娘さんを歓迎します！　ですから!!」
　真田に続き、雪も涙ぐみながら説得に加わる。
「・・・・」
　二人ともさすがに苦しげな表情になる。
　まだ乳飲み子であろうサーシアとユリーシャを人質にする形なのは心苦しいが、人命には変えられないし、サーシアとユリーシャの二

人を孤児にするわけにもいかないのだ。
ましてやまだ生まれたての赤子を殺すなど論外である。
守もスターシアも弟や友人たちの気持ちが痛い程解っているから、話題をふった良馬を責めない。
「守、私はどうしたら・・・」
スターシアが苦しい胸中を吐露する。
彼女はイスカンダルが暴走中、一度はデスラーの説得に応じようかと思った事があった。
それは、自分と愛する人との間に生まれた我が子たちを心配する故の事だった。
フェイトとティアナは医務室の椅子に座り、リニスが淹れたお茶を前に艦橋から流れてくる映像を見ていた。
(いいのかな、部外者の私たちまでブリッジの映像を見ちゃって・・・)
まだ警戒体制なのに艦橋の映像が映し出されため、二人は慌てて退出しようとしたが、
「良いですよ。ちゃんと艦長から許可が出ているし、百聞は一見に如かず。これも異文化コミュニケーションの一環じゃないかしら?」
確かにリニスの言うとおり、初遭遇の世界の姿を見て知るのも管理局員の仕事だ。
(お兄さん、か・・・)
ティアナは、古代兄弟から目を離せなかった。
その理由は、リニスから聞いた古代艦長代理の身の上に関係していた。
両親はガミラスとの戦争で亡くなり、肉親は兄一人しかいないのは、かつての自分と同じ境遇だからだ。
そして同じく義兄がいるフェイトをチラッと横目で見ると、
「・・・」
フェイトは少し頬赤く染め、守を見ていた。
(えっ!?フェ、フェイトさん!?)
フェイトの態度を見て、少し動揺するティアナ。
何しろ、彼女はポォーっとした表情で、頬を薄らと赤らめて守を見

ている。
その様子はまさに恋する乙女であった。
(あ、あの、なのはさん一途なフェイトさんが、異性を見て顔を赤らめている!?でもまぁ、その気持ちも分からない訳ではないわね)
ティアナは納得した様な表情をした。
年頃のフェイトの下には、管理局のエリートやミッドを始めとする各管理世界の官僚からのお見合いの話や交際を申し込む異性が大勢いたりするが、フェイト自身、その全てを断っている。
何しろ、彼女と関係を持ちたがっている異性はその殆どが、管理局員ではエリート家系のハラオウン家の名声やフェイトの容姿、体目当ての輩が多い。
それに比べて、防衛軍軍人の人たちは、まさに質実剛健の言葉が似合う人たちであった。
そして今、フェイトの目の前にあるモニターの中に写る一人の男、古代守は質実剛健、家族愛に満ちている男であった。
家族愛については、フェイトは幼少期の出来事で人一倍に敏感で何よりもその大切さを理解している。
滅びゆく星に妻を残したままいかず、妻と共に運命を共にする守の姿はまさにフェイトにとって理想の男性像に見えた。
しかし・・・・
(フェイトさん、初恋は実らないモノですよ。守さんは既にスターシアさんと夫婦じゃないですか・・・略奪愛と言うモノは確かに世間には存在しますが、相手があの女王陛下では無理ですよ)
と、フェイトの初恋は実らないな、と予測するティアナであった。
ちょうど、その頃、ミッドでは・・・・
そのフェイトの義兄であるクロノは、眉間にシワを刻みながら記者会見用の資料と原稿を確認していた。
義妹の遭難に加え、本局・・・特に〝海〟の局員の離職や転属により、その皺寄せが自分に振り降りかかり、無限図書館程ではないが、通常の事務仕事の三倍〜五倍に仕事量が増え、毎晩徹夜同然の仕事環境で家族に会えず、ストレスも疲れに拍車をかけている。

しかし、それが中間管理職の悲しく辛い立場なのだ。
今回、管理局が記者会見を開く事になったのは、巡航艦テリオスの遭難と義妹ら救出の詳細がマスコミにすっぱ抜かれたからだ。
たちまちテレビや雑誌記者等のマスコミがミッドを走り回り、高町なのは、八神はやて、スバル・ナカジマらフェイト、ティアナの友人や旧機動六課隊員達にまで取材の申し込みが殺到したり、フェイトが後見人になっている高町ヴィヴィオまでマークされる事態に波及した為、遂に管理局も記者会見を開かざるを得なくなったのだが、一連の対応に当たってきたクロノ・ハラオウンが記者会見に出る代わりに、それ以外の管理局員や家族への取材を自粛させることになった次第だ。
クロノが、眉間にシワを刻みながら記者会見用の資料と原稿を確認する二時間前、クロノは記者会見用の資料と原稿を上司に見せ、ダメ出しを食らい、その上司を相手に声を荒げていた。
「あれもダメ、これもダメじゃ、会見の意味がないじゃありませんか!?ＪＳ事件の余波で管理局への信頼が揺らいでいるのに、これ以上情報を隠蔽したり、改竄すれば、余計に他の管理世界からの不信を募らせるだけです！」
普段は穏やかなクロノの豹変ぶりに、流石の上司も譲歩を余儀なくされた。

時空管理局・ミッドチルダ地上本部ビル
同じ時空管理局でも、地上本部の反応は〝海〟〝空〟とは微妙に違っていた。
「だから言わんこっちゃない。こういう事態は予測できていたのにな・・・中途半端な武装しか持たず、まともに戦えない次元航行艦なんか、何十隻造っても金を下水に流すようなものだ！」
ＪＳ事件で前地上本部長の故レジアス・ゲイズと、主犯とされるジェイル・スカリエッティの関係が暴露されて面子を失った地上本部にすれば、ある意味で本局に対し、内心でいい気味だと思う者も少なくなかった。

レジアス・ゲイズの後を受けてミッド防衛長官に就任したセオドア・ロールスロイス中将は、陸戦魔導師ながら航空武装隊に出向した経歴の持ち主で、容姿は地球の英国紳士と言う言葉が似合う人物であるが、その見た目とは裏腹に本局からのヘッドハンティングに対しては完全移籍を断固拒み通した硬骨漢として知られていた。
彼自身も秘密主義、魔導師至上主義の本局には腹を立てていたが、まずは記者会見を見てから対応を決めることにしていた。
彼自身も若かりし頃はエース級と言われた魔導師であったが、本局局員ほど魔法の力を信奉してはいなかった。
「魔法なしの強力な軍事勢力は、今まで遭遇しなかったのがむしろ不思議なくらいだ。対応を誤れば、管理局自体が滅ぶという事を、本局の連中は解っているのか？」
と、ロールスロイスは暗然と一人呟いた。

ミッドチルダ南部郊外・八神邸
八神家では久しぶりに全員が揃っての夕食を囲んでいた。
ザフィーラは狼姿で床に座っている。
とはいえ、皆の話題はどうしても「あの」話題になる。
「クロノ君の所にも、フェイトちゃんたちの情報はあれからは全然入っとらんそうや・・・」
「そうなの・・・」
「なのはの奴も大分堪えているみたいだ。ヴィヴィオも夜泣きする事が増えたって、なのはの奴が心配そうに言っていたぜ」
折角、皆が揃った夕食にも関わらず、はやて、シャマル、ヴィータの三人の顔色は優れない。
「次元航行艦の乗組員から直に聞きましたが、相次ぐ航行艦の喪失で、乗組員たちの士気に悪影響が出ており、本局の内勤や航空防衛隊、地上本部へ転属を志願する者や管理局を退職する者も出てきています」
出張任務から帰ったばかりのシグナムが本局の現状をはやてたちに言う。
「まぁ、無理もないやろ。管理局ご自慢の次元航行艦が、あんなにも一

方的に撃破された事例は、管理局史上初めてやからな。しかも、どこで襲われるか皆目わからん。フェイトちゃんたちを助けたヤマト　まほろば　だって、恐らくは任務中でたまたま通りかかっただけやろな・・・ほんまに運が良かっただけなんや・・・フェイトちゃんたちは・・・」

はやての言葉にシグナム、シャマル、ヴィータの三人が頷く。

「どんなに優秀な魔導師でも、真空の宇宙空間では生身では戦えへんし、一連の事件で、次元航行艦の戦闘能力が思った程でないことが明るみに出てしもうたんや。航行本部は真っ青やで」

そう言い終えて、はやてが長い嘆息をついた。

「そういえば、フェイトさんたちを助けたのが『地球防衛軍』の宇宙戦艦だというのは発表されていないですね？」

少女モードの融合型デバイス、リインフォース・ツヴァイ（リィン）が疑問を口にした。

一般向けプレスリリースでは、『地球防衛軍』等については一切触れられておらず、管理外世界の宇宙船とだけ発表されているからだ。

それにはシグナムが答える。

「テリオスを沈めた奴らにせよ、テスタロッサ達を助けた地球防衛軍のヤマト、まほろば　にせよ、今の管理局の手に負える相手ではないからな。そんなことが明るみに出たら、管理局への信頼が揺らいだり、反管理局勢力や次元犯罪者たちを勢いづかせかねん。対応を誤れば、管理局の〝海〟が壊滅する可能性すら出てきたんだからな」

「「「・・・」」」

一同の脳裏に、いつか見た、ヤマトの超高エネルギー砲によって消し飛ぶ次元航行艦隊が浮かんでいた。

「でも、正直に言ってこれ以上、管理局が今回の一連の騒動を隠し通すには限界やろうなぁ・・・ミッドのマスコミの連中も薄々、テリオスの遭難事件に関して、色々勘づいてきているし・・・」

「まったく。しつこい連中だったぜ・・・」

自分の後を追い掛け回してまで取材をしようとしてきたマスコミの事を思い出したのか、ヴィータが顔を歪めた。

場面は再びイスカンダル及びイスカンダル軌道上へと移り変わる。
更に時系列は少し遡る。
医務室のモニターにデスラー総統と古代守＆スターシア夫婦が同時に現れた時、フェイトとティアナは息を呑んだ。
地球人以外の異星人・・・
しかも、国家元首と王族の人間の姿。
まず、肌の色が違うガミラスのデスラー総統の第一印象は、全身から闘気が溢れ出ている人物。
（名前や国家元首名からして、アドルフ・ヒトラーのような人物かと思ったけど、この人はむしろ織田信長に近いかも知れない）
確かにデスラーのフルネームは、地球の歴史上、２０世紀の世界を第二時世界大戦と言う破壊と殺戮の世界に変え、犠牲者５５００万人と言う人類を狂気に導いた男、アドルフ・ヒトラーの名前に似ており、この世界の地球を人類絶滅まで一年と追いやった人物から当初、フェイトとティアナかなりの危険人物だと思っていた。
武力による、天下ならぬ宇宙制覇を夢見る野望家。
本来ならば、古代や良馬たち地球防衛軍にとっては、今なお不倶戴天の仇敵同士なのだろうが、自分となのは、スバルやノーヴェの様に何度もぶつかり合い、互いの思いを理解したからこそ、対等の相手として認め合い、敵対関係を解消したのだろうか？
管理局の局員的には、デスラーのような武断主義かつ独裁的な人物は言うまでもなく危険人物だ。
それこそ、スカリエッティなど問題にならず、デスラーの前では、スカリエッティさえもただの小物の小悪党レベルに成り下がっている。
しかし、良馬や古代たちにデスラーは管理局にとって危険だから付き合うな、とは言えない。
そもそも、そんな事を言う資格など、自分たちにはないし、地球と管理局は国交を結んでいる訳ではないからだ。
それに彼らは命懸けで、デスラーに対等の存在だと認めさせたのだ。

デスラーの事を人聞きで表面上しか知らない自分たちが介入できるはずもない。
かと言って、管理局の次元航行艦でガミラス艦隊と渡り合えるかと言えば、それは、『ＮＯ』である。
ガミラス艦と管理局の次元航行艦が戦えば、冥王星海戦で成す術なく、撃沈されていった波動エンジン未搭載の地球防衛軍艦艇と同じ末路を辿る事になるだろう。
実際、第５８探査部隊がその末路を辿っている・・・しかし、第５８探査部隊の件に関してはフェイトとティアナは未だに知らない。
そしてもう一人、古代守と寄り添うスターシアに対しては、まさに神々しいオーラを放つ人物・・・その一言である。
それは、ヴィヴィオのオリジナルである古代ベルカ時代の聖王オリヴィエと同列の人物と言う印象だった。
イスカンダルの女王だというが、古代たちの接し方を見る限り、彼女は女王と言う肩書よりも、一人の人間に対して敬意を払っていると思えた。
あのデスラー総統でさえ、スターシアには一目も二目も置き、イスカンダルには決して手を出さなかったと言う。
ガミラスがイスカンダルを植民地化しようとするのであれば、戦う術もないイスカンダルは一日で陥落する事が出来る。
彼らの技術力であれば、それは可能な筈なのに、ガミラスはそれを一切しなかったと言う事は、歴代のガミラス総統もイスカンダルに対しては十分な敬意を払っていた事が窺える。
（フェイトさん、この人は・・・）
（うん、この人はとても強い・・・）
ティアナも同じ印象を持ったようだ。
彼女も、決して力の前には絶対屈しないだろう。
スターシアは、ヤマトのメインエンジンの設計資料を地球に届けるために、唯一の肉親だった妹のサーシアを失ったという。
もちろんそれだけではないのだろうが、白色彗星帝国との戦いの傷がまだ癒えないにも関わらず、片道約１５万光年をものともせずに彼

女たちを救いに来た古代や良馬たち地球防衛軍の人たち・・・。
国家再建を一休みし、命懸けで彼女たちを正体不明の敵から守ろうとしたデスラーの気持ちは十分理解できた。
（この人たちは、単なるメリット・デメリットでは動かない）
管理局から言えば、ただの「愚か者」「馬鹿者」の一言で片付けられてしまうかも知れないが、いざという時に踏ん張れるのは大抵こういう人たちなのだ。
さっきまでの戦いも正にそうではないか。
数の劣勢を意に介さず、敵を殲滅してしまった。
（つくづく、この人たちの世界は敵に回せない・・・）
対等の友人としてなら、これほど心強い存在はないが、管理局の論理を押し付けようものなら、どんな目に遭うかわかったものではない。
そう思い、ティアナはこの先の展開が気になり、スターシア、守のイスカンダル側と古代らヤマトのメンバー及び良馬地球側の説得に耳を傾けて、一瞬でも目が離せないとモニターに釘付けとなり、
フェイトの方は、之ほど、神々しく、人として強い人物、スターシアを娶った旦那の古代　守の事が気になったようで、守の姿をジッと見ていた。
そんな中、良馬から爆弾発言があった。
「あの・・・古代先輩」
「ん？なんだ？月村？」
「古代先輩は、約一年半、イスカンダルでスターシアさんと暮らして居たんですよね？」
「ああ、そうだが？」
「・・・お二人の間にお子さんは生まれましたか？」
「なっ!?」
「・・・」
良馬のこの質問が悲壮でシリアスな空気をぶち壊した。
しかし、この質問がある意味転機となった。
「あ、ああ・・・生まれた・・・双子の・娘がな・・・」

「・・・・」
二人の間に娘・しかも双子の娘が生まれていた事を知った古代たちの説得は、デスラーまで加わり、俄然激しさを増した。
流石に自分がお腹を痛めて、愛する人との間に生まれた娘たちまでイスカンダルの崩壊に巻き込む事にはスターシアも葛藤していたようで、思わず弱音を口にした。
「もうひと押しだね」
「そうですね」
フェイトたちも固唾を呑んで画面に見入っていたが、突如、イスカンダルからの通信が切れた。
「ん？何かあったんでしょうか？」
突然切れたイスカンダルからの通信にティアナは何か嫌な予感がした。
その時、艦内に緊急警報が流れた。
「後方より巨大構造物接近!!総員戦闘配備につけ！繰り返す・・・・」
「まったく、こんな時に無粋な連中ね」
リニスが椅子から立ち上がり、治療着を手にする。
「全くだよ！これじゃあクロノと同じだよ!!」
「そうですね、少しは空気を読みなさいよね!!バカスバルじゃあるまいし・・・・」
フェイトたちも心の中で毒づきながら立ち上がり、原田ら医療班員と共に包帯等のチェックを始めた。
ただこの時、

時空管理局　本局　某提督　執務室

「へっくしょん!!」
「風邪ですかクロノ提督？」
「いや、大丈夫だ。誰かが噂でもしているのかな？」
フェイトの義兄クロノが大きなくしゃみをした。
ただこのくしゃみが世間からＫＹと呼ばれている所以なのか偶々なのかは、定かでは無い。

また、ミッドの特別救助隊の隊舎でも、
「へっくち!!」
青髪の女性隊員が盛大にくしゃみをした。
「な、なんだ!?あれはっ!?」
突如、イスカンダルからの通信が切れたと思ったら、混成艦隊の至近距離の巨大な物体が出現した。
「レーダーはどうした!?捕捉しなかったのか?」
あんな巨大な物体が至近距離に突然現れたにも関わらず、レーダーは捕捉できなかったのかと、良馬が新見に訊ねる。
「突然・・・突然現れました!!ワープアウト反応も感知できません!!恐らく空間偽装して接近してきたのかもしれません!!」
新見が突然現れた巨大物体を捕捉できなかった理由を話す。
「此方がイスカンダルに気を取られていた隙に・・・」
星名が声を震わせる。
「それにも関わらず、アイツは一切攻撃を仕掛けてこなかったなんて・・・」
ギンガはあの巨大な物体が不意打ちや奇襲が出来る絶好の機会をみすみす逃してまで、攻撃せずに、堂々と姿を現したことに疑問を感じた。
「態々奇襲などせず、堂々と姿を現すのは随分紳士的だが、違った視点から言うと、不意打ちや奇襲などせず、此方を容易く撃滅できると言う自信のあらわれなのだろう」
良馬が推測ではあるが、相手が奇襲してこなかった理由を述べると、
「随分、舐められたものですね」
と、永倉が突然現れた巨大な物体に対し、睨みをきかせる。
一難去ってその後にもっときつい難局というのは白色彗星帝国の時がそうだったが、今度もまたそのようだ。
推定一キロ以上あるその巨大な物体・・・敢えて言うなら横倒しにした蛸壺に近い形状をした要塞は、ヤマト、まほろば、ガミラス艦隊

とイスカンダルの間に割って入る位置につくと、スラスターを吹かせ、起き上がった。
「おおー蛸壺が立った!!」
フェリシアが、蛸壺の動きに声をあげた。
そして、立ち上がった蛸壺は程なくして、頭頂部を更に迫り上げていった。
恐らくその部分が司令塔なのだろう。
「わはははは、はははははっ!!あーっはっはっはっはっ!!」
その蛸壺・・・もとい、ウラリア式制圧自動要塞ゴルバの司令塔にある司令官席では、司令官であるメルダースが防衛軍とガミラス軍の混成艦隊を見下ろしながら不敵な笑い声をあげていた。

六十話　蛸壺・・・もとい、自動要塞ゴルバ出現

「地球の戦艦よ、お見事な戦いぶりだった」
　比較的落ち着いた男の声が響いたかと思うと突然映像回線が開かれ、モニターには一人の人物が姿を現した。
「・・・・」
　モニターに現れたのはこれまで見たことがない顔立ちの男性らしき人物。
　一応、人の形はしており、その顔面にはちゃんと両の眼、鼻、口もある。
　しかし、髪の毛が一本も生えていないスキンヘッドと白粉を塗りたくった様に白い肌にまるで悪魔系ビジュアルバンドみたいな黒い眼元の色合い・・・・。
　２０世紀のオカルト、ＵＦＯブームの時に最も有名な宇宙人とされた『グレイ』と呼ばれる宇宙人に似ている人物だった。
「私は暗黒星団帝国・マゼラン方面軍総司令官のメルダースだ」
「お前たちがイスカンダルを攻撃したのか？」
　古代がメルダースに噛みつくような口調で訊ねる。
「そうだ。イスカンダルは、我ら暗黒星団帝国が略取する!!我々の目的はイスカンダルの地下物質に含まれるイスカンダリウムだ!!これ以上余計な邪魔立ては許さん!!」
　メルダースは堂々とイスカンダルを侵略すると宣言した。
　メルダースの通信は医務室でもモニターされていた。
「・・・・」
「何てことを!!」
　ティアナは憮然とした表情になり、フェイトは憤りの声を上げる。
（力が全てだというのか!?この暗黒星団帝国も・・・!!）
　これまでの見聞で艦艇の性能は地球防衛軍やガトランティス、ガミラス等とほぼ同レベルにあるようだ。
　つまり、管理局の艦船では太刀打ちできない。

何としてもミッドに戻らねばならない理由がまた一つできてしまった。
（ここまで堂々と率直に言われると逆に清々しいな・・・）
良馬がメルダースを直視しながら口を開いた。
古代は様々な経験をして、だいぶ丸くはなったものの、まだ成人したてであり、本質はまだまだ熱血漢のままである。
しかも肉親が絡んでいては、平静ではいられまい。
それはガミラス側も同じだ。
母星消滅の原因の一端が今、目の前に居るのだ。
懸命に爆発を抑えているのだろうが、相手の本音を聞かないまま早々に決裂するのはまずい。
そこで、家柄上、社交辞令で鍛えられた良馬がメルダースの相手をした。
「小官は、地球防衛軍、宇宙戦艦　まほろば、艦長の月村良馬です。メルダース司令にお聞きしたい」
「なんだ？」
「イスカンダルの地下資源はイスカンダルに住む者がまず使うなり管理する権利がある筈です。採掘にあたり、貴官はイスカンダル住民代表者：この場合、女王のスターシア陛下になりますが、彼女の同意は取り付けたのでしょうか？それに採掘したイスカンダリウムを何に使用するのか、差支えなければ、ご説明を願いたい」
良馬の問いにメルダースは小馬鹿にした表情を浮かべ答えた。
「住民と言っても、もはや女王夫妻の二名しか住んではいないではないか。そんな事に何の意味があると言うのだ？」
メルダースは如何やら古代守とスターシアの間に双子の赤ん坊が生まれている事を知らない様子。
まぁ、仮に知っていてもイスカンダルの住人が二人から四人に変わるだけで大した変化はない。
「人数の多少の問題ではありません。たとえ一人だろうが、そこで生活している者がいるのなら、使用目的を説明し、十分議論して、互いにメリットがある形で同意した上で採掘すべきだと言っているので

す。それとも、使用目的を言ったら拒否されるから無断で採掘しようとするのですか？」
　メルダースの意見に対し、良馬もすかさず反論する。
　二人のやり取りをモニターで見ていたフェイトたちは表情を変えた。
（フェイトさん、何か遠まわしに管理局のロストロギア収集の事を言われているみたいですね）
（うん、私もそう思ったところ。なんか耳が痛いよ）
　時空管理局のロストロギア収集にあたっては、所有者に対しては誠意を尽くし、金銭的補償を含めた説得や現場周辺の住民とのトラブルを避ける事が義務づけられているが誤解や説明不足等からトラブルになり反管理局の感情を持たれてしまったケースも少なからずある。
　管理外世界の場合に至っては管理外世界と言う理由だけで強奪同然に持ち出されるケースもあった。
　フェイトもそう言う現場に居合わせた経験があり、現地の住民たちから怨嗟の目を向けられ、小さな子供から『ドロボー!!帰れ!!』『俺たちの世界から出て行け!!』と言われ、投石された苦く辛い記憶を思い出した。
「それとイスカンダリウムの使用についてだな・・・本来は貴公らに説明する義務はないのだが、まあ、我が艦隊を撃破した手際に敬意を表そう」
「それはどうも」
「イスカンダリウムは現在、我が帝国が進めている宇宙間戦争に必要なエネルギー触媒なのだ」
「成程、宇宙間戦争ですか・・・して、その戦争は余所から攻められてやむにやまれず戦争をしているのですか？それとも、敵対する星間国家を攻め滅ぼすためですか？」
「滅ぼすつもりはない。我が帝国の傘下に入ってもらうためだ。そのために我々にはイスカンダリウムがどうしても必要なのだ。それさえ手に入れば、イスカンダルには用は無い。お前たちは即刻立ち去れ!!」

メルダースは、『何当たり前の事を言っているんだ？お前は？』という表情をしながら言う。
「ふざけるな！どこの宇宙かは知らないが、戦争のためのエネルギー源なんかを採掘させてたまるか！」
そこに古代が憤りの声を上げた。
まぁ、あの直情家なら当然か・・・・
「そうか・・・あくまで邪魔立てしようというのならば・・・お前たちが救おうとしている、イスカンダルのあの二人に攻撃を開始する・・・・」
メルダースはイスカンダルのスターシアたちを人質にして、ヤマト等をこの宙域から追い出そうとした。
「それでも我々と戦おうと言うのか？この自動要塞ゴルバと・・・・十分間だけ猶予を与える。その間に立ち去れぃ!!」
向こう側も此方との戦闘を望んでいない様にも思えるが、このままみすみすイスカンダリウムを暗黒星団帝国に採取させる訳にはいかない。
デスラーたちの方はどうであろうか？
今の所、ガミラス艦隊に動きは無い。
（暴発しなければいいが・・・・）
良馬は未だ動きがないガミラス艦隊をチラッと見る。
そのガミラス艦隊旗艦ゲルバデスの艦橋では、デスラーが怒りを露わにしてゴルバを睨んでいた。
「ゴルバ・・・・あれが我がガミラスを破壊した敵艦隊の母艦か・・・・タラン!!」
「はっ!!」
「我が母なる星、ガミラスの恨みを晴らす時が来たぞ!!全艦、ゴルバに向けて突撃せよ!!」
デスラーの命令一下、ガミラス艦隊は母星の仇を討つべく動き始めた。
「ガミラス艦隊に動きがありました！」
「何!?」
やはりデスラーの怒りは限界点を超えていた様だ。

「ヤマトからデスラー総統に制止の通信を入れていますが・・・」
「ダメか？」
「はい」
（やはり無理か・ともかく我々はやることをするだけだ・・・）
「戦艦と空母からは艦載機が発進しています!!」
新見が驚いた声を上げて報告する。
ガイペロン級多層式航宙母艦のブリウドからは、空間艦上戦闘機ＤＷＧ１０９　デバッケ、ガリウドからは空間艦上攻撃機ＤＭＢ８７　スヌーカ、レリウドからは空間雷撃機ＦＷＧ９７　ドルシーラが発艦し、ポルメリア級強襲航宙母艦からは、戦闘攻撃機ＤＷＧ２２９　メランカが発艦し、ゼルグート級一等航宙戦闘艦、ガイデロール級航宙戦艦、メルトリア級航宙巡洋戦艦からは、空間駆逐戦闘機ＤＤＧ１１０　ゼードラーＩＩと空間格闘戦闘機ＤＷＧ２６２　ツヴァルケが発艦し始めている。
ランベアとミランガルも同様に艦載機隊を発艦させている。
「デスラー!!早まるな!!」
古代はデスラーの行動を止めにかかった。
「ヤマトよ・・・古代よ・・・忘れたのかね？ここから地球までの距離は１４万８千光年・・・だが、大宇宙を席巻しようとする者たちにとっては、それは僅かな距離でしかない。放っておけば、君たちの美しい星、地球にも、こやつらの魔の手は直ぐに伸びて来よう・・・」
確かにデスラーの言う通り、奴らはペテルギウスまでその魔の手を伸ばしてきていた。
デスラーの言う事は間違いではない。
「もう一度言う。お前は忘れたのか？あの白色彗星帝国の電光石火の侵略を？・・・お前は忘れたのか？・・・・我がガミラスと地球との血塗られた戦いを!?古代、ヤマトの義務は地球を・・・地球に住む全生命を守る事ではなかったのかね？宇宙の平和こそが、ヤマトの意思ではなかったのかね？」
デスラーからヤマトの存在意義を問われ、ヤマトの乗組員たちは皆、黙ってデスラーの言葉に耳を傾ける。

「私は行くぞ。ヤマトの意思と同じように、私と我がガミラスの意思は、我らが兄弟星、イスカンダルを守る事だからだ!!」
「デスラー・・・・」
デスラーの言葉を聞き、改めてヤマトの存在意義を認識させられると、ヤマトの乗組員たちはデスラーと共にゴルバと戦おうと言う決断を下した。
勿論、まほろば　の乗員も同じだった。
「ふふふふ・・・・向かってくるか、このゴルバに!!身の程知らずの愚か者めが・・・・」
メルダースは不敵な笑みを浮かべ、混成艦隊を待ち受ける姿勢をとった。
「敵要塞より、艦載機多数が発進してきます!」
ゴルバからは艦載機反応があった。
しかし、ゴルバの下部から出てきた艦載機の反応は異常だった。
「ちょっと待って下さい!!これは・・・・艦載機にしては大きすぎます!!エネルギー反応、大きさ、共に駆逐艦サイズですよ!!」
「なんだって!!」
「自動要塞ゴルバの手足・・・・暗黒星団帝国が誇る自動攻撃艇テンタクルスだ!!この偉大なる手にからめとられ、永劫のもとに還るがよい!!」

メルダースは射出したテンタクルスの性能に絶対の自信を持っており、此方の勝利が揺るがないモノだと信じていた。
ヤマト、まほろば　の二艦もコスモタイガーを緊急発艦させ、ゴルバの艦載機隊と戦闘にはいった。
テンタクルスはコスモタイガーとゼードラーⅡ、デバッケ、ツヴァルケの戦闘機隊が相手をし、その間を縫ってメランカとドルシーラがゴルバに対して水平雷撃を行う。
そして、ゲルバデスに搭載している瞬間物質転送機にて、ゴルバの直上へと転移したスヌーカがゴルバに対し急降下爆撃を行う。

しかし、折角の命中弾もゴルバの分厚い装甲で無効化されてしまった。
「攻撃が全て跳ね返されている・・・・」
「な、なんて要塞だ・・・・」
ゴルバの余りにも分厚い装甲を見て、フェリシアと星名は驚愕する。
「恐らくさっきの戦艦と同じ偏向バリアをはっているのだろう・・・・しかも、何倍も強力なモノを・・・・」
「それじゃあ、また雷撃戦を仕掛けますか？」
「いや、無駄だろう・・・・あの要塞の装甲が余りにも厚すぎる」
良馬がゴルバを睨みながら、プレアデスと同じ戦法は使えないと言う。
実際にレーザーではない実弾攻撃を行っているスヌーカ、ドルシーラ、メランカの攻撃を受けてもダメージが全くないのだ。
「それに艦長、ゴルバの装甲は砲座やミサイルランチャー部分を除いて、接合部分が見当たりません」
ゴルバの装甲表面をサーチしていた新見が結果を報告した。
あんな巨大構造物を一切接合部分無しでどうやって建造したのか解らないが、少なくとも地球よりは優れた技術であり、直線部分がほとんど見当たらない程の分厚い装甲ゆえ、命中しても弾かれてしまう。
形は変だが、確かに防御に適した形状をしている。
しかも駆逐艦サイズのあの攻撃艇・・・・。
まるで全身が武器の塊の様な機体で、パイロットが乗るスペースが有るのかと言う疑問さえ湧いてくる。
そんな中、
「うわっ!!」
まほろば　の第一艦橋がテンタクルスの攻撃を受け被弾し、航海長の長倉が負傷する。
「大丈夫か!!航海長!!」
「消火器を持ってきてくれ!!くそっ!!」

永倉は負傷した手の傷口をもう片方の手で抑えながら言う。
「操舵席のパネルがイカレちまったか・・・!!星名!!操舵機能をそっちに渡すぞ!!」
「りょ、了解」
「くそ、こんな時に・・・」
永倉に変わって星名が、まほろば　の操舵を行った。
ゴルバ本体には損傷を与えられないが、ゴルバの艦載機隊には多数の被害を受けていた。
「何をやっているのだ・・・」
指揮官席のメルダースは苛立ちを隠せずにいた。
迎撃に発進させたテンタクルスの損耗が予想以上に高い。
パイロットの腕もそうだが、地球、ガミラス艦艇の対空砲火、対艦砲火も激しい。
「α砲発射準備!!」
「はっ!!α砲発射準備!!」
ゴルバは自身の切り札を出そうとしていた。
「敵要塞に高エネルギー反応!!二万・・・三万五千・・・五万!!どんどん上がっています!!」
新見がゴルバに高エネルギー反応を見つける。
「気をつけろ!!その数値が確かなら、波動砲クラスの超破壊兵器かも知れんぞ!!」
良馬が警戒を促す。
「敵要塞に超収束エネルギー反応!!・・・反応が強すぎてどの部隊を狙っているのか分かりません!!」
新見がゴルバから超収束エネルギー砲の発射を探知した。
「全部隊、現在地より全速離脱!!急げ!!」
良馬が全艦に離脱を告げる。
「α砲発射準備完了!!」
「発射!!」
その瞬間、ゴルバから超収束エネルギー砲が発射された。
敵要塞から放たれた超高エネルギー砲は、テンタクルスと共にガミ

ラス艦隊へと襲い掛かった。
直撃を受けたガミラス艦が次々と爆発四散していく。
「被害状況をまとめろ！」
「損傷のひどい艦は放棄。総員退艦させろ！艦長もだ!!」
「・・・・」
タラン以下の幕僚が友軍の被害状況把握に奔走する中、デスラーは敵要塞、ゴルバを睨み付けていた。
「な、何て威力だ・・・・」
「あれが・・・・敵要塞の主砲!!」
α砲の威力を見て、ヤマト、まほろば　の乗員は唖然とする。
「どうだね？我が暗黒星団帝国の誇るウラリア式自動要塞ゴルバの主砲・・・・α砲の威力は？フフハハハハハハっ!!」
テンタクルスに次ぐゴルバの切り札を出し、メルダースは高笑いをする。

宇宙戦艦　まほろば　第一艦橋
「アイツら、味方諸共吹き飛ばしやがった」
永倉が味方である筈のテンタクルス諸共攻撃を仕掛けてきたゴルバに対し、驚きと怒りを露わにしたが、
「待って下さい」
其処に新見が待ったをかけた。
「あの攻撃艇・・・・近・中距離に特化した性能を持つ攻撃艇なのですが、あの動きから見て恐らく完全自動制御の攻撃艇だと思われます」
「それじゃあ、あれは無人？」
「はい。人が乗っていない分、加速度による重力が無視されているので、機動性が高く、明らかに近距離では此方が不利でしょう」
無人なので、人的被害は無い。
だから、敵はテンタクルスごとあの大口径の主砲を撃てたのだ。
しかもパイロットが乗って居ないのであれば、無茶な操縦も平気で行える。
ゴルバがテンタクルス諸共α砲を発射した理由とテンタクルスの

特異な動きの理由が判明した。
「ガミラス艦隊、後退します！」
ゴルバに向かっていたガミラス艦や艦載機が一斉に後退する。
当然、コスモタイガー隊もガミラス艦載機隊と共に一時後退する。
代わって前進してきたのはデスラー座乗の戦闘空母、ゲルバデスだった。
空母の飛行甲板の一部が下降したかと思うと、横になった円筒状の物体が迫り出してきた。
「ガミラス艦隊から、デスラー砲発射の注意勧告です！」
ギンガがデスラーからの通信内容を報告する。
白色彗星帝国が建造したノイ・デウスーラより口径は小さいが、集束率はヤマトの波動砲を上回っているため、あるいはゴルバに致命傷ないし、ゴルバを破壊できるかもしれない。
やがて、デスラー砲の砲口に閃光が煌めき、光の剣が暗黒の要塞に真っ直ぐ伸びていく。
すると、ゴルバ全体が白く光ったかと思うと、デスラー砲のエネルギー弾を中和するように鈍く発光し、やがて、何事もなかったかのように佇むゴルバの姿がそこにあった。
「総統、デスラー砲が・・・・」
「ゴルバには何の変化もありません」
「くっ、デスラー砲が・・・・我がデスラー砲がまったく効かぬとは・・・・」
デスラーもタランもガミラス艦隊の切り札であるデスラー砲がゴルバに致命傷どころか、傷一つつけられなかった事実に唖然とする。
「ハハハハハハ・・・・そんな石ころの様なエネルギー弾がこのゴルバに通用すると思っているのか？」
今のは、波動エネルギーを中和する特殊フィールドかバリアのようだ。
デスラー砲が通じなかったと言う事は、恐らくヤマト、まほろばの波動砲でも通じないだろう。
「砲口をイスカンダルへ向けろ!!」
メルダースは遂にイスカンダルへの直接攻撃を開始しようとした。

α砲の砲口がイスカンダルへのマザータウンへと狙いをつけ始める。
地表を吹き飛ばしても自分たちが欲するイスカンダリウムはイスカンダルの近く深くにある鉱物資源・・・故に地表に存在する宮殿を吹き飛ばしても自分たちの採掘計画には何ら支障はない。
「さぁ、これがイスカンダル人の最後だ。よく見ていろ」
α砲の砲身を守っていた装甲カバーが開かれその照準がイスカンダルのマザータウンへと向けられた。
後は引き金を引くだけとなった。
「スターシアが・・・スターシアがやられる・・・」
「総統・・・」
「タラン!!このままあの砲門へ突っ込め!!」
ゲルバデスが猛スピードで発射される寸前のα砲の砲門へ接近する。
「あの愚か者め、砲門に突っ込むつもりか?主砲発射を急げ!!」
デスラーの行動をいち早く理解したメルダースはα砲の発射を急がせるが、
ズドーン!!
ゲルバデスはα砲が発射される前に砲門へと突っ込んだ。
「敵艦!!三番砲塔に接触!!」
「三番砲塔大破!!α砲、発射不能!!」
「敵艦の艦首がエネルギー解放弁に食い込んでいます!!」
デスラーの決死の特攻により、α砲の砲門一つを傷つける事に成功した。
「古代!!私ごと撃て!!私の艦ごと波動砲で撃つのだ!!」
デスラーが古代に大声で叫ぶ。
「デスラー・・・」
「ゴルバのウィークポイントはこの砲門だけだ!!此処に向けて撃つしかない!!」
確かにデスラーの言う通り、ゲルバデス諸共、収束波動砲で撃てばゴルバはそこから内部爆発を起こし、真っ二つになり破壊できるかも

しれない。
しかし、だからと言って古代はそう簡単に決断は下せなかった。
デスラーは今や憎しみを越えて得た盟友でもあるのだ。
「何をしている!?早く撃て!!」
「確かにデスラーの艦ごと撃てば、あの堅牢な要塞でも波動砲は通用するだろう。いくら強固な偏向バリアとは言え、砲撃する時はその部分のバリアを解除しなければならない筈だ。今、デスラー艦が突き刺さっている砲門は敵の唯一のアキレス腱なんだ・・・・」
真田もデスラーごと撃てば、ゴルバを破壊できるかもしれないと言う見解を出す。
「出力、上限をキープ、波動砲は何時でも撃てます」
山崎が波動砲の発射準備は整っていると古代に報告する。
後は、古代が波動砲の引き金を引くだけであった。
「しかし、デスラー・それではお前が・・・・」
波動砲をまともに食らえばどうなるかは火を見るよりも明らかである。
古代とデスラーのやり取りをモニターで見ているフェイトとティアナはチラッとジュラの様子を窺う。
ジュラは顔を青白く染め、モニターをジッと見ている。
死んだと思われていた、父が生きており、折角再会できると思ったのに、目の前で母に継ぎ、父までもが目の前で死んでしまうのか?
「ちょっと待って下さい!!デスラー総統!!」
そこへ良馬がデスラーに通信を送る。
「貴方だってこの後まだまだやらなければいけない事が有る筈でしょう!?それを!!」
やらなければならない事、それはガミラスの復興もあるが、何よりも娘との再会が有る筈だ。
ジュラはデスラーと再会する事を待っているのだ。
「月村・あれもメラと私の娘だ。きっと私の事を分かってくれている筈だ」
「そんなっ!?」

デスラーの言う通り、まほろば　に乗っているジュラにはデスラーの心が分かっていた。
大切なモノを守るためならば、自らの命を賭けてでも守り通そうとするデスラー（父）の心が・・・・。
そして・・・・
「早く撃て!!古代!!」
デスラーは躊躇している古代に声をあらげ、波動砲を撃つように促す。
「デスラー・・・・すまん・・・・」
古代もイスカンダルをこのままみすみす敵の手の中に落とす訳にはいかず、苦渋の決断を下す。
「波動砲、発射準備!!」
波動砲の発射準備が整えられて、いよいよカウントダウンが始まる。
「9・・・・8・・・・7・・・・6・・・・5・・・・4・・・・3・・・・2・・・・1・・・・」
古代が波動砲の引き金を引こうとした時、
「止めて!!」
突如、モニターにスターシアの姿が映し出される。
「戦闘を止めて下さい・・・・イスカンダリウムが欲しければ、差し上げます・・・・」
「スターシアさん・・・・」
「古代さん、これからこの星を脱出して、ヤマトに向かいます。救助をお願いします」
あれだけ説得に応じなかったスターシアが突如、イスカンダルを放棄すると言い出したのだ。
地球側の面々とデスラーとしては嬉しい事であるが、その反面ゴルバに屈し暗黒星団帝国にイスカンダリウムが渡ってしまうと言う事で複雑な心境であった。
「良いのかい？スターシア？」
スターシアの決断にこれで良かったのかと問う守。
「何処に居ても貴方と一緒なら私は幸せよ・・・・貴方の生まれた星、地

球へ参りましょう・・・支度をしてきます」
この時、守はスターシアの気が変わったのだと思い込んでいた。
しかし、愛しの妻が付き従うのであれば、それでも構わないと守はスターシアと娘たちと共に地球へ帰るのだと思った。
スターシアの仲介で戦闘は停止され、ゴルバに突き刺さっていたゲルバデスは後進し、砲門から艦首を引き抜いた。
ゴルバも後退していくゲルバデスには攻撃を仕掛けなかった。
そしてスターシアは眠る我が子たちが乗った乳母車を押して宮殿の展望台へと昇って来た。
この展望台はただの展望台ではなく、緊急避難用の宇宙ロケットでもあったのだ。
そしてその展望台には既に守が待っていた。
「私たちは何処に居てもいつも一緒よね？」
スターシアの声は少し震えていたが、それは生まれ故郷であるイスカンダルを離れる為、それを悲しんでいるのだと思った守。
「もちろんだよ。スターシア」
スターシアは守に乳母車を託すと突如、踵を返し元来た通路を走って行く。
「スターシア、何処へ行くんだ!?」
慌てて守が後を追おうとしたが、隔壁が閉じられてしまった。
「スターシア!!開けてくれ!!スターシア!!」
守が体当たりをしても当然、隔壁はビクともしない。
そうしている間にも脱出宇宙船でもある展望台が宇宙へと打ち上げられた。
「スターシアアア

ます！」
「艦長、ヤマトが迎えを出すとの事です！」
「そうか・・・」
イスカンダルから脱出船が確認された事で、ヤマト　と　まほろばの艦橋に少し安堵感が漂う。
しかし、完全に不安が拭えた訳ではない。
この不安が完全に拭えるのは、スターシアの存在を確認できてからだ。
あのロケットに守とサーシア、ユリーシャが乗っているのは間違いないだろう。
大きな問題は、イスカンダルの女王であるスターシアがあの宇宙船に乗っているか、イスカンダルに残っていないか、だ。
守が進んでスターシアを残す事はあり得ないが、スターシアが先に守と子供たちを乗せた後、支度をしてくるとか言っていきなりロケットを発射させてしまう可能性は十分にあった。
イスカンダリウムを渡すと言うスターシアの条件をのんだ為か、ゴルバも静止しており、ガミラスやヤマト、まほろば、そしてイスカンダルからの脱出船を攻撃する気配はない。
あのメルダースと言う人物は意外と紳士な一面を持っている様だ。
その間にもヤマトの上陸艇がロケットを曳航してきた。
どうやらそのまま格納庫まで入れるようだ。

宇宙戦艦ヤマト　格納庫
エアロックが閉じられて艦内空気が流入し、コンディション・グリーンに変わったところで、プシュ、という音と共にロケットの側面ドアが下がってきた。
その奥から、地球防衛艦隊の旧艦長服姿の古代守がサーシアとユリーシャが乗った乳母車を押しながら、降りてきた。
「兄さん!!」
古代や真田、雪はヤマト艦載機格納庫へと向かうと兄たちを出迎える。

当然この時、古代たちはスターシアも一緒に居るものとばかり思っていた。
しかし、
「兄さん・・・スターシアさんは？」
古代は守の隣にスターシアの姿が見えない事に不安を感じ、兄にスターシアの行方を訊ねる。
「・・・」
古代の問いに守は沈黙を貫く。
「そんな・・・!?スターシアさんは・・・イスカンダルに・・・？」
雪が守の様子からスターシアがイスカンダルに残ったのだと察した。
「何故だ？古代？何故、スターシアは・・・」
真田もスターシアの行動が理解できずに、守に問う。
「・・・」
真田の問いにも守は何も言わなかった。
「スターシアさん・・・」
古代も義姉であるスターシアの行動が理解できずにいた。
出迎えに行った古代たちと守、サーシア、ユリーシャの面々は第一艦橋へと上がった。
「その赤ちゃんたちは・・・」
相原がいち早く、守の押している乳母車に気づく。
「ひょっとして、スターシアさんとの？」
「スターシアさんは？」
艦橋の乗員たちもこの場にスターシアの姿が見えない事に不安を感じていた。
そこに、デスラーと良馬から通信が入った。
デスラーもスターシアがちゃんとイスカンダルから脱出出来たか気になった様だ。
「デスラー・・・月村さん・・・」
「古代、スターシアはどうした？」
「ちゃんと脱出は出来た？」

「それが・・・・彼女は・・・・」
「やはりそうか・・・・彼女はイスカンダルの女王・・・・母星が採掘で傷つけられ、ましてやイスカンダリウムが戦争に利用されるぐらいならば・・・・」
「っ!?」
　デスラーのこの言葉を聞き、スターシアが何をしようとしているのか察した古代と良馬。
「まさか、スターシアさんは・・・・イスカンダルごと敵を!?」
「そんな・・・・イスカンダルを自爆させる気なのか!?」
「・・・・どうすれば・・・・どうすればいいんだ?」
「だからあの時、私ごと撃てと言ったんだ。あの巨大な要塞を倒すにはそれしかなかったのだ!!」
　デスラーはイスカンダルとスターシアが死ぬくらいならば、自分がその身代わりとなっていれば良かったのだと、後悔の念を古代にぶつける。
「巨大な要塞・・・・巨大・・・・巨大な質量・・・・そうか!!方法はまだあるぞ!!」
　デスラーの言った『巨大な要塞』の言葉から真田が何か思いついた様子。
「デスラー!!イスカンダルの動きを止めているのは、マイクロブラックホールだと言ったな!?それは今でもそこからコントロール出来るのか!?」
「無論だ・・・・むっ・・・・そうか!!」
　真田の言葉を聞き、デスラーも何かに気づいた様子。
「マイクロブラックホールを一体どうするんですか?」
　古代がイスカンダルを止めているマイクロブラックホールの使い道を真田に訊ねる。
「考えてみろ。いくら小さなサイズとは言え、惑星一つを止める事が出来るだけの超質量を持つブラックホールだ!!だが、同じ星系どころか、イスカンダル付近に居る我々にはその重力影響は出ていない・・・・恐らく、重力場を上手く絞ってイスカンダルのみに重力波を向けてい

るからだろう」
「左様、重力制御はガミラスの誇る技術の一つだからな・・・そして、その重力波はあのゴルバにも向ける事が出来る」
ブラックホールを生成する事が出来、尚且つ、その生成したブラックホールをコントロールできる技術・・・そしてそれを行う事が出来る特殊艦ハーゲルも管理局側から見れば、十分なロストロギア級の艦船である事は明白であった。
フェイトとティアナはこの場に管理局の次元航行艦が居なくて本当に良かったと胸をなでおろした。
話を聞いている限り、管理局が関われる技術レベルをとうに超えているからだ。
もし、この場に管理局の・・・しかも、管理世界拡大推進派の局員が乗った次元航行艦が居ようものならば、ハーゲル、波動砲を搭載するヤマト、まほろば、それに類似するデスラー砲をもったゲルバデス、完全無人艦である雪風・改、さらにはゴルバまでもロストロギアと認定し、接収しようとする言動と行動に移した筈だ。
そんな空気を読めない行動に出れば、一分も持たぬ内に、蜂の巣にされてしまい、ガミラス帝国、地球防衛軍からはガトランティスや暗黒星団帝国同様、管理局は無法な侵略者と言う認識を持たれてしまう。
そうなれば、管理局はたちまち破滅の一途を辿るだろう。
「ゴルバは今、デスラーの特攻した砲門をイスカンダルに向けたままでいる。恐らくあの砲門はもう損傷して使えんだろう・・・もし、使えるのであれば、さっきデスラーの艦ごと撃っている筈だからな。イスカンダル方向に構えている砲門はあの一つだけ・・・つまり、マイクロブラックホールの生む重力場でゴルバの動きを止めれば、イスカンダルは安全だと言う事だ」
「でも、どうするんですか？敵の動きを止めるだけでは、解決にはなりませんよ」
南部が真田に質問する。

「いや、敵はその後、きっと我々を狙ってくる。全てのエネルギーを飲み込むブラックホールを攻撃しても無意味だと言う事は相手も直ぐに分かるだろう。となれば、敵は必ず、我々かブラックホールのコントロールを握っているデスラーを狙って来る筈だ」
「成程、そして攻撃を仕掛けてきたときに敵の砲門を狙う訳ですね？」
「そうだ。だが、敵の砲撃を躱し、尚且つあのゴルバの砲門へと接近しなければならん。敵は動けないながらも弾幕を張って応戦して来る筈だ。操舵が全ての鍵を握っていると言ってもいい・・・・」
「しかし、まほろば　は航海長の永倉さんが負傷しているみたいです」
相原はギンガから、永倉が負傷した件を聞いていた。
モニターに映る永倉の腕には薄っすらと血が滲んだ包帯が巻かれている。
あの腕ではとても精密な操舵は不可能だ。
まほろば　の戦力外は混成艦隊側としては痛い戦力外通知である。
何しろ、現状では波動砲を撃てるのがヤマト　と　まほろば　の二艦のみなのだから・・・・
確実にゴルバを葬る為には、ヤマト　と　まほろば　のダブル収束波動砲は必須であった。
「・・・・星名、お前がやるんだ」
「えっ!?ぼ、僕がですか!?」
「腕をケガしちまったんだ。俺が予備操舵席に座っても、こんなザマじゃあ、操舵レバーを握れん。いいか、お前がやるんだ」
永倉は血が滲んだ包帯が巻かれた腕を握りながら星名に言う。
「し、しかし・・・・」
かなりの大役に星名は戸惑いがちだった。
「自信を持て、お前なら出来る」
そんな星名を永倉は励ます。
「永倉先輩・・・・分かりました。星名、まほろば　操舵の任につきます!!」
星名は　まほろば　の操舵の任に着いた。
「取るべき道は決まったようだな・・・・だが、マイクロブラックホール

の重力場をゴルバに向けると言う事はその間、イスカンダルを支える力が失われると言う事を意味している。イスカンダルは再び落下を開始し、そのままにしておけばやがてはマイクロブラックホールの影響外まで離れてしまうだろう・・・そうなれば、もはやイスカンダルの落下を再度止める事は不可能だ。我々がゴルバを止める事が出来るのはイスカンダルが絶対制止圏を越えるまでの短い時間・・・恐らく地球時間で十分ほどしかないだろう」

マイクロブラックホールは一つしかないため、ゴルバとイスカンダルの両方を支えておくことは出来ない様だ。

「十分・・・その間、敵はブラックホールを制御しているそちらをまず狙って来る筈だ。十分の間、耐えきれるか？デスラー？」

「愚問だ。ガミラスとイスカンダルは双子星・・・ならば、私とスターシアは兄妹も同然。すでに捨てる覚悟だったこの命を賭けて、ブラックホールを維持しやろう。それよりも古代、月村。お前こそ、十分の間にゴルバを倒す事が出来るのかね？」

「わからない。だが、お前はそう信じている。そうだろう？」

「最後まで絶望しない、諦めない・・・それが沖田さんと土方さんの流儀でしたからね。教え子の俺たちがそれを出来なければ、お二人からキツイ雷を喰らう事になりますからね・・・是が非でもやってみせます」

「フッ・・・時は一刻も争う。すぐに準備を進めろ、古代、月村」

こうして対ゴルバ戦第二ラウンドが準備され始めた。

「総統、本当によろしいのですか？敵が真っ先に狙うのは恐らく本艦です。ならば総統閣下だけでも、他の艦に避難されては・・・」

タランはデスラーの身を案じ、他艦への移乗を具申する。

「かまわぬ」

しかし、デスラーはそれを拒否した。

「し、しかし・・・」

「くどいぞ、タラン。さっき古代は信じているのかと私に問うた・・・私の答えは一つだ。私はヤマトを・・・古代を・・・地球を信じる」

「はっ」

「重力波ベクトル転移、カウント開始します!!」
　こうしてカウントが始まり、
「重力場転移開始!!」
「転移開始します!!」
　イスカンダルへ向けられていた重力波がゴルバへと向けられた。
　突如、ゴルバに異常な振動が起こったと思ったら、
「うわっ!!」
「うわぁぁぁぁぁっ!!」
「な、何事!?」
　メルダースは指揮官席の背もたれに押し付けられる。
　座席に座っていなかった乗員は壁に貼り付けられる。
「こ、後方より・・・・強力な・・・・重力場がゴルバに向かって・・・・照射されています!!おそらく・・・・イスカンダルを・・・・曳航・・・・していた・・・・例のブラックホールからの・・・・ものと・・・・思われます!!」
「艦内・・・・人工・・・・重力、中和・・・・開始!!」
　重力が中和され元に戻ると、壁に貼り付けられていた乗員がバタバタと床に落ちる。
「おのれ、おのれぇっ!!どこまでも邪魔立てしようというのか!!」
　メルダースは怒りを露わにして声を荒げて吠える。
「メルダース様、ゴルバ内の重力は何とか中和できますが、ゴルバ全体に向けられている重力場は防ぎようありません!!」
「動けぬと・・・・此処に釘付けだと言うのか!?ええい、ならば、あの小賢しい艦を・・・・ブラックホールをコントロールしている艦を沈めるのみ!!テンタクルスは射出出来るか?」
　真田やタランの予想通り、メルダースはまず、ブラックホールをコントロールしているゲルバデスに狙いを定めた。
「はい。ゴルバ内の重力は中和されていますから、カタパルトから最大出力で撃ち出せば、重力場から脱出できるかもしれません。ですが、同時に複数射出するのは危険です。一度に一隻ずつが限度かと・・・・」
「ええい、無いよりはマシだ!!テンタクルス射出開始!!あのいまいま

しい艦を沈めるのだ!!ゴルバの砲塔も全て開け!!動けずともここからそのまま彼奴等を蜂の巣にできるだけの力がある事を思い知らせてやる!!」
怒りの為に冷静さを欠いたせいかメルダースは、α砲の砲門をカバーしている装甲板を全て開けて混成艦隊を攻撃しようとした。
この判断が自らの身を滅ぼすとも知らずに・・・・。

混成艦載機隊はゴルバから射出されてくるテンタクルスの迎撃へとあたった。
テンタクルスは無人の性能故か近くにいるモノ、自らに攻撃を仕掛けてきたモノを追い回すプログラミングされていのかブラックホールをコントロールしているゲルバデスを狙う事はなく、混成艦載機隊とドッグファイトを繰り広げている。
デバッケ、コスモタイガー、ゼードラーⅡ、ツヴァルケらの戦闘機隊がテンタクルスを引き付けている間に、対艦用の大型魚雷を抱いたドルシーラ、対艦ミサイルや対艦爆弾を抱えたスヌーカとメランカが被弾し、航行能力が劣ったテンタクルスに襲い掛かる。
一機ずつしか射出できない為、空戦はやや混成艦隊側が有利に進んでいる。
テンタクルスの迎撃を混成艦載機隊に任せ、ディッツ提督が率いるガミラス艦隊はゴルバのα砲射程のギリギリを時計回り、反時計回りを行いつつ、無駄とは分かりつつ、ゴルバに向けて、砲雷撃戦を仕掛ける。
「星名、いいか。この航路を保ち続けろ!!少しでもずれたら、あの大砲をくらって一瞬でお陀仏だぞ」
「は、はい」
「波動砲は拡散モードからヤマトと同じ収束モードへ切り替えろ」
「了解」
ディッツ艦隊が時間を稼いでいる中、ヤマト、まほろば　は、波動砲の発射準備をしながら、ゴルバを狙撃出来るポイントまで密かに移動していた。

また、奮戦していたのはディッツ艦隊だけではなく、
「老いても腕は衰えずと言う所を若造共に見せつけてやれ!!」
老将、コルサックも自らが指揮する艦隊を鼓舞して戦った。
そして・・・・
「波動砲、発射準備完了!!」
「波動砲・・・・発射!」
古代とフェリシアが波動砲の引き金を引いた。
ヤマト、まほろば　の艦首にある波動砲の発射口からゴルバの砲門へ向け、波動砲が発射された。
二つの波動砲は互いに混じり合うかのような流線を作り、やがて一つの巨大なエネルギー波となり、ゴルバへと迫る。
ヤマト、まほろば　の波動砲を受け、ゴルバ全体に警報音が鳴り響いた。
「こ、これはどうしたことだ!?」
「メルダース長官!!砲門を・・・・砲門を狙い撃ちされました!!」
「主砲から動力部にかけて次々と誘爆が広がっています!!」
「誘爆だと!!ば、バカなっ!!このゴルバが・・・・無敵の自動要塞ゴルバがぁっ・・・・!!」
メルダースは目の前の現実が信じられなかったが、その間にも誘爆は広がり・・・・
「うがあああぁぁぁぁっっっっっ――――――!!」
ゴルバは内部爆発を起こし、消滅した。
「ゴルバ・・消滅しました」
「脱出者の形跡はあるか?」
良馬がゴルバからの脱出者の有無を訊ねた。
しかし、
「ありません」
ゴルバから人員の脱出は確認されなかった。
それはメルダース以下、ゴルバの乗員全員の死亡を意味していた。
元々マイクロブラックホールで動きを止められていたのだ、マイクロブラックホールの引力を振り切るには、有人の艦艇では凄まじい重

力が生じる為、脱出も不可能だったのだろう。
ゴルバが消滅し、テンタクルスは機能を停止する。
そして直ぐに重力波はイスカンダルへと再び照射され、イスカンダルの軌道は再び保たれた。
それは、マゼラン星雲サンザー星系に平穏が訪れた瞬間だった。

六十一話　新たなる旅立ち

ゴルバを撃破した後、イスカンダルをサンザー星系の安定軌道上まで、曳航した混成艦隊は、戦いによって傷ついた艦の修理に追われていた。

青い空とどこまでも続く海・・・

マザータウン近くの海にはヤマト、まほろば、ゲルバデスが並んで停泊しており、その周辺にはガミラス艦隊の艦艇も停泊している。

「修理は順調だ。イスカンダルは物資が豊富だからな。後、あと半日でもあれば、飛び立てるだろう」

修理作業を指揮していた真田が皆に修理状況を報告する。

修理に使用しているイスカンダルの物資はちゃんとスターシアからの使用許可をとっている。

「船の修理と言うことならば」と、言う理由でスターシアはイスカンダルの物資の採掘と使用を許可してくれた。

修理に関してはこの後、第二の故郷を探す為、大航海へと向かうガミラス側の艦艇が優先的に行われ、ヤマト、まほろば　の技術班の人員もガミラス側の艦船の修理の手伝いをしている。

「ご苦労様です。真田さん」

「あとは、兄さんたちをマザータウンまで送って行くだけか・・・」

「すまん、世話をかけるな」

「いいですよ、兄さん」

敵の脅威が去り、サンザーへの落下の事態が回避出来た為、守がイスカンダルを離れる理由がなくなり、またスターシアと子供たちとの平穏な生活が戻る筈であったが、そこにスターシアから通信が入った。

「スターシアさん・・・」

「スターシア、敵は消えた。僕もすぐに戻るよ」

「いえ、守・・・貴方はそのまま地球へ帰って・・・」

突如、スターシアは、守にイスカンダルを離れ、地球へ帰ってくれ

と言う。
「っ!?」
スターシアのこの発言を聞いて、狼狽する守。
半ば三行半を押し付けられた様な形であるから、狼狽するもの当然である。
「何故だ!?どうしてなんだ!?スターシア!!」
「兄弟星、ガミラスを失ったイスカンダルは何時崩壊してもおかしくない不安定な状態・・・そんな状態の中で娘たちを育てる訳には・・・だから、守・・・貴方は地球で・・・安全な星で・・・私たちの娘を育てて下さい・・・」
「スターシア・・・」
「貴方と一緒にその子たちを守り、育ててあげられなくてごめんなさい・・・でも、私はイスカンダルの女王・・・ここを離れる訳にはいかないのです。例え、この星と共にこの身が滅びたとしても・・・」
「・・・」
やはり、スターシアの信念はこの宇宙に存在するその物質よりも固いのかもしれない。
「守・・・たとえ遠く離れていても私たちはいつも一緒です。貴方の傍には私たちの娘・・・サーシアとユリーシャが・・・」
守が我が子たちに視線を向ける。
「サーシア・・・ユリーシャ・・・私の可愛い娘たち・・・お父さんと一緒に地球で・・・いい子で居るのよ・・・そして、地球の人たちに可愛がってもらうのよ。私は何時でも貴女たちを見守っているわ・・・」
何だか、スターシアの尻に敷かれている守であった。

そして、此方でも再会した親子が居た。
「父様・・・」
「ジュラ・・・」
ジュラを連れて、良馬と彼女のデバイスを製作したリニスはデスラーの座乗するゲルバデスを訪ねていた。
それからデスラーとジュラは互いに抱擁し、互いに生きていた事に

喜んでいた。
　そして、デスラーがメラとジュラをサイレンの星へ幽閉した最大の理由であるジレル人の特殊能力に関してはリニスが製作したデバイスによってジュラのジレル人としての能力は制御することが出来ている旨を彼女のデバイスの製作者であるリニスから説明をした。
　科学技術では地球を凌ぐガミラスでも魔術、魔法と言ったオカルト分野に関してはまだ未発達だった為、リニスのデバイス技術はガミラスにとっては新たな技術であった。
　リニスからの技術がもたらされた事で、今後ジュラのデバイスはガミラス独自の技術を盛り込まれていくかもしれない。
　そして、ジュラの世話役にはディッツ提督の娘、メルダ・ディッツが任されることになった。
「月村・娘が・・・ジュラが世話になったな」
　デスラーは良馬とリニスに礼を言った。
「いえ・・・あの・デスラー総統・・・総統に一つお願いがあります」
「ん？なにかな？」
　良馬はデスラーにある頼みごとをした。

　ヤマトのＣＩＣでは、大山が床で胡坐をかきながら、ガミラス艦と交信していた。
「・・・・ルマツ・バク・カシ・ケル・ルマ・・・・えっと・・・・ルマウ・ユ・ジニ」
　大山は慣れないガミラス語を喋っている。
　そして床には何やら計算式が書かれた大量の紙がある。
「トチローさん・・・何やっているんです？」
　そこに島が通りかかり、大山が何をやっているのかを訊ねる。
「おお、航海長、今、ガミラスの技術者と話している所なんだが・・・ええいっ!!くそっ!!向こうの技術者にも翻訳機を渡しておけってデスラーに言っといてくれ。まどろっこしくてかなわん」
「それは、もう古代の奴が手配していたと思いますが・・・一体何を話しているんです？」

「敵をやっつけたのは良いが、イスカンダルにイスカンダリウムが有る限り敵は何度もイスカンダルにやって来るんじゃないかと思ってな」
「確かに・・・・そう言われればそうですね」
「そこでだ、ガミラスの物質縮退技術をもってすれば、イスカンダリウムの組成自体を変化させられるんじゃないかと思って計算してみたんだ。無害な星間戦争に地用されない様な安全な物質にな・・・・」
「そんな事が出来るんですか？」
　島が驚いた感じで大山に訊ねる。
「計算上ではな・・・・あとは、その公式を相手に教えてやるだけなんだが・・・・それがどうもなぁ・・・・」
「トチローさんなら大丈夫ですよ・・・・おっと、もうこんな時間だ。それじゃあ頑張って下さい」
　そう言って島はＣＩＣを後にした。
「語学は専門じゃないんだがなぁ～・・・・」
　確かに真田同様、理系の塊である大山に文系科目は苦手の部類に入る。
　大山がやれやれと言った感じでいると、
「今、翻訳機が届いた所だ。手間をかけてすまなかった」
　と、地球語に変換されたガミラスの技術者の声がスピーカーから流れ出した。
「ふぅ～・・・・神は俺を見放さなかったか」
　と、一安心した大山だった。
　これで、効率は大きく上がる。
　そう思っていたら、
「カミ？・・・・紙で組成変換が出来るのか？」
　大山の独り言を勘違いするガミラスの技術者。
　彼の独り言はどうやら向こうのガミラスの技術者に聞こえていた様だ。
「いやいや、今のは独り言だ。いいか、今から説明するからちょっと待て・・・・ズズズッー」

そう言って、ガミラスの技術者にイスカンダリウムの組成変換を伝える前に、大山は手に持っていたカップ麺のスープを飲み干した。
「・・・すまんが、今の単語は翻訳出来なかった・・・どういう意味だ？」
先程の大山の独り言を聞き取れた様にガミラスの通信機器はかなりの精巧品らしく、大山がカップ麺のスープを啜った音まで拾っていた。
「やっぱり、見放されたかなぁ～・・・」
大山はガックリと項垂れたが、直ぐに気を取り戻して、ガミラスの技術者にイスカンダリウムの組成変換の説明を行った。
それからすぐにイスカンダリウムの組成変換が行われ、イスカンダリウムは無害な物質へと変換された。
これで暗黒星団帝国がイスカンダルを狙う理由は消えた。
ガミラス艦隊が出航準備を行っている中、デスラーの娘、ジュラの身柄をデスラーの下に送り届けた良馬はギンガを連れて今度はランベアを訪問していた。
目的は勿論、バーガーに別れを言う為であった。
そのランベアにはネレディアの姿もあった。
そこで四人は互いに言葉を交わし、握手をする。
七色星団にて敵前逃亡罪が適用されそうになったバーガーであるが、先程良馬がデスラーの下にジュラの身柄を返した時、良馬はデスラーにバーガーの助命を乞うたのだ。
デスラーは良馬の頼みを聞き、バーガーの七色星団の戦いにおける敵前逃亡を不問にした。

まほろば　の食堂ではゲルバデスから、まほろば　へと何故か戻って来たジュラの姿と彼女の世話役となったメルダの姿があった。
ジュラはこの後の長い航海に備えて航海前にある事をどうしてもやっておきたかった。
それは・・・
「ほれ、ご注文のマゼランパフェだぞ」
ディアーチェがジュラの前にパフェが入ったパフェグラスを置く。

ジュラは、まほろば　に保護されて、このマゼランパフェと出会ってから彼女は必ず毎食のデザートにはこのマゼランパフェを注文していた。
この次、マゼランパフェを食べられるのは、新しい新天地を見つけ、その後地球とガミラスが国交を結んでからになる。
それがいつの日になるのかはまだ分からない。
だからこそ、今のうちにマゼランパフェを食べておきたかったのだ。
それが、ジュラが長い航海前にやっておきたかった事だった。
勿論、世話役としてジュラと共に　まほろば　へやって来たメルダにもマゼランパフェは提供された。
ジュラは目を輝かせながらスプーンを持ちマゼランパフェを食べ始める。
「・・・・」
しかし、メルダの方はジッとマゼランパフェが入った容器を見ている。
「ん?・メルダさん・・・食べないんですか?・おいしいですよ」
ジュラはパフェを食べないメルダに対して食べないのかと問う。
「あっ、いえ・・・その・・・・」
メルダが戸惑いながら、傍に居たディアーチェに、
「あ、あの・・これは本当に食べ物なのか?」
と、ディアーチェにマゼランパフェが食べ物なのかを問う。
と言うか、今、目の前でジュラが満面の笑みを浮かべて食べているのだから、食べ物に違いない。
しかし、ガミラスにはこうしたパフェなる食べ物は存在しないみたいで、メルダとしては食べるのに少々戸惑っていた。
「マゼランパフェ・・まほろば、ヤマトでは人気のスイーツだぞ」
自慢気にディアーチェはメルダにこれは食べ物だと教える。
「食べないの?」
「あっ・・・・いえ・・・・」
ジュラが食べているのに自分が食べないと不敬に当たるので、メル

ダは恐る恐るスプーンでマゼランパフェを一口掬い、口へと運ぶ。
「どう？」
「・・・・」
味を訊ねるジュラにメルダは一瞬固まったかと思ったら・・・・
「こ、こんな食べ物が宇宙にあったなんて・・・・」
メルダは震える声で一言そう呟くと、
「私は今、モーレツに感激している!!」
メルダはジュラの目の前だが、一心不乱マゼランパフェを食べ始めた。
軍人家系の家とは言え、そこに居たのは紛れもなく、年相応の女子の姿だった。
ジュラはメルダもこのマゼランパフェが気に入ってくれた様子に嬉しそうに微笑むと自分もマゼランパフェを食べる。
食べ終わった頃には彼女たちが居たテーブルの上には空になったパフェグラスが大量にあった・・・・。

イスカンダリウムの組成変換が終わり、良馬とギンガがバーガーとネレディアに別れを告げて居る頃、デスラーが座乗するゲルバデスの修理は間もなく終り、デスラーと古代は互いの艦の甲板上で話し合っていた。
「古代・・・・」
「デスラー・・・・」
「イスカンダリウムの組成変換か・・・・星の不安定さは変わらないが、少なくともあの連中がイスカンダルを狙う事は無いだろう。お前は優秀な仲間を持っているな。心底羨ましいぞ」
「デスラー・・・・君はこれからどうするつもりなんだ？」
「我が宿願は、ガミラス帝国を復興させる事だ。だが、今はそのガミラス星も既に無い・・・・」
デスラーには故郷を失ったためか哀愁が漂っていた。
「デスラー・・・・」
「心配はいらん。またいつの日か、必ず新たなる大地となる星を見つ

けて見せる。たとえ幾年この宇宙を流離おうとも・・・この宇宙にいるガミラスの生き残りを集結させて・・・見たまえ、彼らの顔を・・・」
そう言ってデスラーはゲルバデスの甲板を見る。
デスラーに釣られて古代も同じく視線をゲルバデスの甲板へと向ける。
「我々は一度ならず、お互いの血を流しながら戦った・・・だが、今や彼らは過去にしがみ付いていない・・・お前の仲間たちにも、我が兵士たちにもその瞳に映っているのは、ここから無限に広がっていく未来・・・そうではないかね？」
デスラーの言う通り、ゲルバデスの甲板で修理作業を行っている防衛軍兵士にもガミラス兵士にも憎しみの感情はなく、互いに助け合っている姿だった。
「これは、別れではない・・・これは、ガミラスと地球、そしてイスカンダルの新たなる旅立ちの時なのだよ・・・」
「デスラー・・・」
デスラーの言葉に古代は感銘している様子。
「古代、いつの日かまた会おう・・・」
デスラーは古代に再会の言葉を残し、古代の前から去って行った。
去って行くデスラーに対し、古代は無言のまま敬礼し、彼を見送った。
やがて、ガミラス艦艇は全て修理、補給を終えて、新たな大地となる星を求めての大航海の途へと旅立って行った。
その中でランベアの艦橋では、
「また会えるかしら？あの娘たちに・・・」
イスカンダルから浮上していく中、ネレディアはバーガーに通信を入れ訊ねる。
「さあな。でも、いつかその内、また会えるだろうさ・・・この広い、星の海でな・・・」
バーガーはメッセージカプセルを取り出し、蓋を開いた。
メリアの映像の次にインプットされた最高の戦友たちの姿・・・その姿を見て、彼は再びこの広い宇宙のどこかで彼らと再会できる確信

を得た気がした。

ガミラス艦隊を見送り、ヤマト、まほろば　の方は修理作業が継続されており、その中で、両艦の幹部達は、帰りの航路について話し合いをしていた。

帰りにはヘリオポーズに一時立ち寄り、管理局と再度コンタクトを試みて、太陽系では、未だに第十一番惑星は彗星帝国の兵站基地になっているので、ヘリオポーズを通過後、地球の制宙圏である土星圏まで一気にワープする。

地球に帰る際も、暗黒星団帝国の追撃、太陽系に近づいたら、彗星帝国の待ち伏せも推測され、土星圏に辿り着くまで、油断は許せない状況が続く事となる。

帰りの航路についての話し合いが終わるころ、良馬が真田と古代に守の事を訊ねた。

「そういえば、古代先輩は、娘さんたちと一緒に地球へ戻るんですよね？」

「ああ・・・」

「その予定ですけど・・・」

真田と古代は守が双子の娘のサーシアとユリーシャと共に地球へ帰還する事を肯定する。

「お二人は結婚式って挙げたんでしょうか？」

「・・・」

良馬疑問に沈黙する真田と古代。

「多分・・・」

「していないでしょうね・・・」

守がイスカンダルに留まった当時には当然、守とスターシアの二人だけ・・・

すると、祝福してくれる人、立会人は当然いない。

二人はこの後、暫くは離れ離れとなる。

それならば、離れる前に祝福して、形ある記念の思い出を残したらどうだろうか？

「それなら・・・」
　良馬がある提案をしたら、
「良いですねそれ!!」
「うむ、確かに」
　古代と真田はその提案に乗った。
　そして、それは実行に移された。
「・・・えっと・・・今、何て言った?真田、進?」
　守は額を手で抑えながら真田と弟（古代）に訊ねる。
「だから、結婚式だ。ケ・ッ・コ・ン・シ・キ」
「だから、誰の!?」
「『誰の』って、兄さんとスターシアさんの結婚式に決まっているでしょう!!」
　兄（守）の問いに弟（古代）はさも当然のように答える。
「馬鹿言うな、俺たちはとうに夫婦だぞ。今さら式を開く意味があるのか?」
　結婚式の話を聞き、守にしては珍しく狼狽えている。
「意味は大ありだぞ、古代。お前たち、人前で結婚式を挙げてないだろう。それにお前はこれからスターシアと離れ離れになるんだ。離れる前に形ある記念を残しておけ」
「それにスターシアさんにも地球の文化に触れてもらう良い機会じゃないか兄さん」
「・・・」
（弟と親友の言うことはもっともなのだが・・・）
　その時、予想外かつ決め手となる言動をとった者がいた。
「守、皆さんのお気持ち、お受けしましょう」
「スターシア・・・」
　今回の結婚式の主役であるもう一人の当事者たるスターシア本人だった。
　実は良馬が守とスターシアの結婚式の提案をした後、古代と真田は守に、雪がスターシアに提案をしに行ったのだ。
　彼女の言葉を聞いて、真田と進は会心の笑顔を浮かべた。

スターシアがやると言ったからには、守は断る理由が見つからず、イスカンダルを離れる前にスターシアとの結婚式を挙げることにした。
スターシア本人も愛する夫と子供たちと分かれる前に何か思い出を残したかったのだ。
メインスクリーンの真田がグッと親指を立てる。
「スターシアがＯＫしてくれだぞ」
「分かりました。では、早速アレの準備の方をよろしくお願いします」
「うむ、最高のモノを仕上げて見せよう」
真田は自信満々の表情で言った。
やはり、結婚式にはあれが欠かせない・・・・
「それで、彼女たちはどうする？」
「今、ギンガが説明をしに行っています。折角の祝宴ですから、彼女たちにも参加してもらうつもりです」
真田の言う彼女たちとは、フェイト、ティアナの事を指していた。
「結婚式・・・ですか？」
「スターシア陛下と古代守さんの？」
フェイトとティアナはギンガから齎された話に絶句する。
明日の出航前にイスカンダルの宮殿にて、スターシアと守の結婚式を執り行う。
二人は夫婦なのだが、まだ正式に式を挙げていないため、結婚式を挙げるのは別に不思議ではない。
だが、フェイトとティアナが驚いたのは式に出席するどころか、手伝ってほしいと言うのだ。
「でも、私たちでいいのかな？」
フェイトの方はまだ戸惑いがちの様で、ギンガに聞き直してくる。
「はい。古代艦長代理からは『是非』と言っていましたから・フェイトさんたちの参加には異論はありません」
「そう言う事でしたら・・・」
「参加させていただきます」
実際、フェイトとティアナは太陽系赤道祭にも参加したし、こうし

た御目出度い式なのだから、一人でも多く参加してもらい、スターシアと守の事を祝福してもらいたかった。
それに具体的な内容を聞くと、結婚式には欠かせないあの役回りがあった。
女性に生まれてきたからにはこれも一つの経験。
ましてや、ささやかながらも一惑星国家の女王陛下の結婚式の手伝いなど早々出来るものではない。
否、むしろ望むところだ。
時空管理局員ではなく、一人の人間、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン、ティアナ・ランスターとして全力で取り組もう・・・・。
と、気合を入れる二人であった。
ヤマト、まほろば　の技術班、航海班を中心として、艦の補修を行い、砲術班、機関班は砲塔を始めとする火器、機関の整備を行い、主計科、生活班は明日行われるスターシアと古代守の結婚式準備を行っていた。
その中で、明日の結婚式に参加するフェイトとティアナはヤマトを訪問していた。
訪問の理由は両艦の一部の幹部クラスを中心とした、結婚式実行委員会との打ち合わせの為であった。
「・・・・」
そして、二人は打ち合わせの会場となっている部屋のデスクの上に鎮座している二つのリングに目を奪われ絶句していた。
「良い出来ですね」
良馬がリングを見て、その出来具合を褒める。
「まぁ、真田さんのお手製ですから、当然と言えば当然ですけどね」
さも当然の様に言う古代にフェイトは恐る恐る訊ねる。
「あの・・・・これ、ダイヤ・・・・ですよね？」
「ああ、これはイスカンダル産のダイヤだ」
ダイヤの出所を答えたのは、真田だった。
「リングは・・・・ネオ・コスモナイトですか？」
良馬がリングの組成を真田に訊ねる。

「ああ、雪風・改に備蓄されていた物を少し分けてもらった」
「ダイヤも良いカット具合だ・・・地球のモノと比べるとかなり上質なダイヤですね」
「ああ、品質では地球産の１０カラット分以上に相当するな」
「「そんなに!?」」
　フェイトとティアナも驚きの声を上げたが、見てみるかと、真田からケースごと手渡され、まじまじと見てみると、確かに今まで目にしたダイヤとは根本的な何かが違うように思えた。
（こんなダイヤ、地球でもミッドでも見た事ないよ・・・）
（私もです・・・）
　心が躍るというより、癒される輝きというべきか。
「驚くべき原石だよ。どの部分を調べても組成と品質がほぼ一定しているんだ」
「かなりの反則品質ですね」
「ああ・・・だが、こんな上質のダイヤでもイスカンダル人から見たら、その辺の石ころ同然なのだがな・・・」
　真田は苦笑しながら地球では希少なダイヤでもイスカンダルでは何の価値も無い石ころだと言う。
「そんな、石ころを乗っけただけのリングを送って大丈夫でしょうか？」
「まぁ、スターシアにとっては石ころなのだが、送ってもらう相手と気持ちによってこのリングはスターシアにとっては、十分な価値があると思うが？それにちゃんとカット加工しているしな」
「確かに・・・」
「そうですね」
　良馬と真田、古代が明日の結婚式で使用する結婚指輪について話している中、フェイトとティアナは未だにその結婚指輪に釘付けであった。
（ホントに反則だよ、このダイヤ。今まで見てきた宝石が石ころ同然じゃない・・・）
（そんな反則なダイヤが此処（イスカンダル）じゃ、ただの石ころ扱い

…)
フェイトとティアナの中で宝石に対する価値観が変わっていった。
もし、管理局がイスカンダルを見つけたら、イスカンダリウムではなく、このダイヤモンドを採掘する鉱山惑星に指定しそうで不安になる。
万が一、管理局があの暗黒星団帝国同様、スターシアを強制的に排除してイスカンダルを管理局所有の鉱山惑星にしたら、暗黒星団帝国の艦隊と同じ末路を辿る事になるだろう。
管理局の艦船では暗黒星団帝国よりも簡単に壊滅させられてしまう。
だが幸いなことにマゼラン星雲は航行禁止海域に指定されているので、管理局がこのマゼラン星雲に来る事がない。
それが本当にせめてもの救いだった。
「あの…」
「ん？何かな？」
「このリング、どこで加工したんですか？」
ティアナが真田に訊ねた。
リングにせよダイヤにせよ、加工と研磨の精度が半端ではない。
宝石にはまだ縁が薄いティアナでもわかるほどの代物、否、業物だからだ。
「ああ、それはヤマトの艦内工場で加工したのさ」
「この艦（ヤマト）で、ですか!?」
ティアナが信じられない表情をしたが、真田の説明でなるほどという表情になる。
管理局の艦船の中には加工できる工場施設など存在しない。
だから、回収されたロストロギアも倉庫みたいな所に一時保管され、詳しい解析などは本局へ戻ってから行われる。
「ヤマトは単独で長距離長期間の行動をするための艦だからな。ある程度の生産設備は不可欠なのさ。それに、今の地球防衛軍の艦船もヤマトほどの規模の作業スペースは設けていないが、ある程度の物資を生産できる艦内工場を有している」

「へぇー・・・・」
ティアナは唖然としながら真田の説明を聞いていた。
まほろば　にも当然、ヤマト並みの艦内工場は存在するが、今までの航海でフェイトもティアナもそうした場所には無縁だったので、今回初めて知った。
「そういえば、衣装の仮縫いは済んだんですか？」
もう一つ重要なアイテムについて訊ねる良馬に真田は、
「ああ、雪がモデルを買って出てくれているからな。今はデータの再入力中だ。男性衣装の方は古代本人がやっている」
雪とスターシアの背丈、体型は似ていたので、スターシアのウェディングドレスは雪がモデルとなり仮縫いをして、守の方は守自身が行っている。
当初、守の礼服は軍人なので大礼服にするかそれともタキシードのどちらにするかを訊ねた所、守はタキシードの方を選んだ。
「あの・・・もしかして、ウェディングドレスや礼服の縫製もヤマトで？」
「ああ、そうだよ」
半ば呆然としながら訊ねるフェイトに真田はさも当然の様に頷く。
（何なの!?この艦は!?）
思わずツッコミそうになるフェイトたちに良馬が捕捉をする。
「まぁ、ヤマトが凄い艦だと言うのは分かるけど、真田さんも十分凄い人ですよ。大抵の事は『こんなこともあろうかと』の一言で片付けるんですから。それと・・・」
良馬は小声で真田の凄さをフェイトとティアナに教える。
（両肘膝から先が義手義足で、その上、それで設計製造から戦闘機の操縦や白兵戦までこなしたり、義手義足に爆弾を仕込むなんてスカリエッティを上回るマッd・・・もとい、スーパーサイエンティストじゃないですか!?）
ティアナは真田があのスカリエッティを越える人物だと認識したのと同時に真田がミッドに・・・スカリエッティ陣営や反管理局側のテロリストに居なくて良かったと安堵した。

（ティアナ、もうツッコむ気が失せたよ、私・・・）
と、フェイトとティアナは、心の中で真田志郎を歩くロストロギアと認定したのである。
同様に真田とは違う着目点を持つトチローも真田と並ぶほどのスーパーエンジニア
であった。
ヤマト　と　まほろば　の厨房では、明日の宴会料理とウェディングケーキの準備が進められていた。
主役たる夫婦の意向で、ウェディングケーキ自体のサイズは抑え、全乗組員の口に入るよう、同じ材料で配布用のケーキも作られていた。
ウェディングケーキの基礎になるスポンジ部分が焼き上がったら、あとはデコレートをするだけ。
ケーキのデコレートに関してはディアーチェがプロデュースすると言う。
味に関してはギンガたち、女性乗務員が監修を務めた。
その中には当然、甘いモノ好きのフェイトとティアナも含まれていた。
式場の飾り付けの一部も、真田からの図面を元にヤマト、まほろばの艦内工場で次々と製作されていった。
「すまない、スターシア。悪乗りする連中ばかりで・・・」
守は自分のタキシードの仮縫いが終わった後、自分たちの結婚式にかこつけてお祭り屋と化した同期生や弟、後輩たちのことをスターシアに謝るが、愛妻は黙って顔を横に振った。
「私は大丈夫よ、守。それに、進さんたちはつい先日、多くの仲間を亡くされたのでしょう？お祭り気分になりたい気持ちは十分理解できるわ。それに、ここの人たちが私たちの結婚を心からお祝いしてくれているのは本当なんだし、こういう賑やかな雰囲気は、生まれてこの方知らなかったから・・・」
スターシアと妹のサーシアが生まれた時、イスカンダルの人口は、両親を除けば年老いた使用人が数人だけになっていた。

故にここまで大勢の人たちから祝福を受ける事など無く、スターシアとしても初めての経験であったが、こうしたバカ騒ぎも悪くはないと思っていた。
「スターシア・・・・」
それに明日にはしばらくの間、離れ離れになる二人・・・・。
だからこそ、一緒に居られる時間を一分一秒無駄にはしたくなかった。
やがて、二人は自然な形でお互いの唇を重ね合わせ、守はスターシアをベッドに押し倒した。
そして、二人の影は一つになって重なった・・・・。

「えっ!?俺がですか!?」
「そうだ、お前以外に誰がいるんだ?」
明日の結婚式の最終打ち合わせの中で良馬が思わず声をあげる。
「真田さんか古代君がやるんじゃないんですか?」
良馬はてっきり真田か古代がやるものばっかりだと思い、何故自分がやるのかを訊ねる。
「役職ではヤマトの副長の俺より、艦長であるお前の方が上だろう?」
真田は、年齢はともかく、役職では良馬の方が上だと言って逃れ、
「そ、それは・・・・古代君だって同じだよね?」
良馬は少し狼狽えつつ、古代に振る。
「えっと・・・・自分はあくまで『代理』ですから・・・・それに兄さんの身内でもありますし・・・・そもそも今回の発案者は月村先輩じゃないですか」
「うっ・・・・」
守の身内言う事と、今回の結婚式の発案者と言う口実で上手く逃れる古代。
「あまり、柄じゃないんだけどな・・・・こういう役は本来、沖田さんか土方さんにこそやってもらいたかったよ・・・・」
「・・・・」
良馬のボヤキに思わず黙る真田と古代。

「艦長」を「船長」に置き換えればそう珍しい事ではない。
職務権限として認められているからだ。
自分はその資格には程遠いとしか思えないが、引き受けた以上、後に退くつもりはない。
フェイトとティアナ同様、明日の結婚式で大役を務める事になった良馬であった。
その夜、フェイトとティアナは明日の結婚式の事を思い、中々寝付けず、医務室から睡眠導入剤を貰いに行った。

翌日、イスカンダルは絶好の晴天に恵まれ、まさに結婚式日和であった。
「さて、ティアナ、そろそろ行こうか・・・？」
フェイトは鏡の前で管理局の制服のチェックをしているティアナに声をかける。
勿論、この制服も、デバイスに残っていたデータを基に　まほろばの艦内工場で作られたものだ。
「は、はい」
フェイトに促され、二人は部屋を後にした。
二人は今日の挙式で重要な役を務めることになっているのだ。
そして、事前に教えられた道を通りイスカンダルの宮殿を目指す。
「この街はすごいですね・・・ミッドの文明を始めとするどの管理世界よりも科学技術が進んでいますよ」
無人タクシーに乗り、イスカンダルのマザータウンの街並みを見渡しながらティアナが呟く。
しかし、街には人っ子一人の姿も無く、ゴーストタウンと化していた。
「そうだね・・・でも、イスカンダルにはもうスターシア陛下しか居ないんだよね・・・」
滅び去って行くイスカンダル文明にフェイトは寂しそうに呟いた。
やがて宮殿に着き、ある一室のドアをノックした。
「失礼します。フェイト・テスタロッサ・ハラオウンとティアナ・ラン

スターです」
「どうぞ」
中からスターシアの声が聞こえた。
「失礼します」
一礼して入室した二人は顔を上げて部屋の主がいる方を見た。
「「っ!!?」」
極めてシンプルな白いドレスに身を包んだスターシアに、二人は息を飲み込んだ。
(確かに、豪華にする必要なんか何一つないよ（わ）ね・・・)
ウェディングを纏ったスターシアを見たフェイトとティアナは全く同じ感想を抱いた。
スターシアと守の意向を汲んだ真田と雪が用意したのは、これ以上はない程簡素なデザインのミルキーホワイトのドレスだったが、かえって良く着映えした。
純白ではなくミルキーホワイトにしたのは、スターシアが既に二児の母親であることの証だ。
(内から醸し出す雰囲気が違うから、シンプルなドレスがよく映えるんだ・・・)
スターシアから放たれる神秘的なオーラに圧倒されながらも、フェイトは分析した。
「とても良くお似合いです。スターシア陛下」
と心からの賛辞を口にするフェイト。
「ありがとうございます。フェイトさん」
フェイトの賛辞にスターシアはニッコリと微笑む。
それは、まさに聖母の微笑みであった。
(母親になっても内に秘めた誇りとカリスマ性は全く色褪せないのよね、この方は・・・)
ティアナは同意しつつも、内心で舌を巻いていた。
こういうタイプの人物は、ミッドはもちろん、自分たちが赴いた世界にはいなかった。
(この部隊の人たちといい、スターシアさんといい、色々な意味ですご

い人たちの集まりだ・・・）
管理局員でここの人たちと色々な意味で（魔法抜きで）渡り合える人はかなり少ないのではないか？
魔法文明もなく、思想も当然違うのだから、比較する事自体がおかしいのだろうが・・・
フェイトとティアナは同じことを考えていた。
そこにドアがノックされる。
「失礼します」
入室の声をかけ、部屋に入ってきた良馬はすぐに姿勢を正し、スターシアに向けて挙手の礼をとった。
（（地球防衛軍の敬礼や挙動に比べると、管理局のそれはいかにも緩くて遅い（わ）ね））
敬礼一つにしても、ただの治安維持組織と正規軍ではこうも違うのか？
フェイトとティアナは率直にそう思った。
良馬は艦長制服姿で、胸部には数々の略章や勲章、金色の参戦飾緒も付けて腰には重力サーベルをぶら下げていた。
「月村艦長、今日はよろしくお願いします」
「こちらこそ。我が身に余る大役ですが、全力で務めましょう」
スターシアの挨拶に軍人らしい口調で応えた良馬だった。
「月村さん、何か、緊張していません？」
ティアナが良馬に訊ねてきた。
「うん・・・発案したのは良いが、まさか結婚式の司式までするとは予想外だったよ」
と、良馬本人はそう言うが、
「いいじゃないですか。非公式とはいえ、初めて地球人とイスカンダル人の結婚式を取り仕切った艦長になるんですから」
「うん・・・まぁ、そうなんだけど・・・でも、非公式とはいえ、女王陛下の結婚式の司式というのは前代未聞にして空前絶後だろうなぁ・・・」
と肩を竦め、ティアナたちも苦笑しながら頷いた。
そして、腕時計を見て時間を確認すると、

「式の開始まであと一時間だ・・・それでは自分は先に式場で待っています」
と、スターシアに敬礼しながらそう伝えて花嫁控室から立ち去った。
その頃、厨房では、
「うむ、問題ない。完成だ!!」
ディアーチェがウェディングケーキ最終チェックを終えてサムズアップすると、ケーキ作りを手伝っていたヤマト、まほろば　の両艦のスタッフが沸いた。
宮殿内の式場では、真田の指揮で床、壁、天井に飾り付けがなされ、急拵えには見えない祭壇も設置された。
「ノリノリだな、皆」
「まあな・・・」
手持ち無沙汰の新郎と真田がその一角におり、新郎である守が苦笑しながら、参加者たちを見ている。
「お祭りはお祭りとして楽しまなければな。生き残った者たちは・・・」
そう言った真田の顔が一瞬曇った。
その意味するところを知っているから、守も無言で頷く。
地球防衛軍は再建半ばで白色彗星帝国との、短期間だが激烈を極めた戦闘で、人的・物的に多大な損失を被った。
特に人的損害は、有人艦の増備を削って無人艦に切り換えざるを得ないところにまで深刻化していた。
弟たちは弱冠２０歳そこそこで最早中堅として扱われ、真田や良馬の生き残った世代は本来ならベテランが座るポストに就かざるを得ない。
そういう中で自分は地球に帰るのだから、恐らく自分も地球に帰れば、防衛軍に復隊しなければならないだろう。
イスカンダルから地球までの航海期間中が自分にとっての休暇の締め括りなのかも知れない。
そう守は思っていた。

防衛軍に復隊する事に関しては特に嫌悪が有る訳ではないが、自分以外の雪風の乗員遺族たちには申し訳ない気持ちがあった。

やがて、式の時間を迎えた・・・・。

フェイトは新郎の介添で守と共に入場し、古代は新婦の介添でスターシアと共に会場に入場した。

古代もフェイトもカチコチに緊張しているのがその表情と動きで分かった。

新郎新婦が式場に入場し、祭壇の前まで来て式は始まった。

会場に司式たる良馬の声が響く――。

「汝、古代　守よ・・・貴方はスターシア・イスカンダルを妻とし、良き時も悪き時も、病める時も健やかな時も、命尽きる時まで妻を愛し慈しむ事を誓いますか？」

良馬が婚姻の誓いを守るに問うと、

「誓います」

タキシードを着た守が力強く答える。

良馬は古代の誓約に頷き、次いでスターシアに向き直る。

「汝、スターシア・イスカンダルよ・・・貴女は古代　守を夫とし、良き時も悪き時も、病める時も健やかな時も、命尽きる時まで夫を愛し慈しむ事を誓いますか？」

「はい、誓います」

スターシアも婚姻の言葉に誓いの言葉を述べた。

式場の席にはサーシアを抱いた雪とユリーシャを抱いたギンガ。

そして、ヤマト　と　まほろば　の第一艦橋乗員が座っている他、執務官服のフェイト・テスタロッサ・ハラオウンとティアナ・ランスターも顔を見せていた。

その後ろの座席にもヤマト、まほろば、両艦の乗員たちが座り、みんなは守とスターシアの結婚を祝った。

（スターシアさん、本当に綺麗ですね）

（うん、本当にね・・・ヴィヴィオもいつかは誰かと結婚して、ベルカの教会で式を挙げるのかな？）

フェイトは自分が後見人を務めるヴィヴィオも何時かは誰かを好きになり、こうしてスターシアや守の様に結婚するのかと思った。
ヴィヴィオもクローンとは言え、スターシアと同じ王族の血を継いでいる。
きっと彼女の花嫁衣裳も似合うだろう。
夫婦の誓約が終わったのを見て、ティアナが席を立ち、前に進んだ。
両手で持つ飾り箱にはペアのリングが光っていた。
この役、日本では男児が受け持つ事があるのだが、当然ながら作戦行動中の宇宙戦艦に子供が乗っているわけもなく、最年少のティアナに白羽の矢が立った次第だ。
新郎の介添役を務めたフェイト同様、ティアナもガチガチに緊張していた。
これは、ある意味凶悪な次元犯罪者と対峙する時や全力全開のなのはと模擬戦で対峙するよりも心臓に悪い。
「では、指輪の交換を・・・」
まず、守が指輪を手に取り、スターシアの左手薬指にはめる。
次いで、スターシアが少し慣れぬ手つきで指輪を手にして守の左手薬指に通した。
その様をティアナは間近で網膜に焼き付けるように見入っていた。
指輪交換の終わり、ティアナが下がると式場の雰囲気が微妙に変わる。
心なしか、参列者の目つきが変わり、緊張感が漂い始めた。
「・・・それでは、新郎新婦の御二方・・・誓いのキスを・・・」
地球の習慣・風俗に初めて触れるスターシアはともかく、守は皆から注がれる。
二人っきりの時は兎も角、此処まで大勢の人達に見られるキスはやはり恥ずかしいのだろう。
守が戸惑っている。
フェイトとティアナは、周囲が目を血走らせ、鼻息を荒くしている様に唖然とした。
だが、ここで雪とギンガに抱かれていた愛娘たちが無邪気な笑みを

浮かべながら盛大な拡散波動砲を放った。
「チッチュ、チッチュ」
「チューチュー」
この一言で、緊迫しかかっていた式場の雰囲気は解けた。
「えっと・・・古代先輩、娘さんたちもああ言っていますし・・・此処は男らしく腹を括って下さい・・・」
良馬が守にキスを促した。
「あ、ああ・・・」
スターシアは訳がわからずパチクリしていたが、守がベールを上げると状況を悟ったのか、眼を閉じた。
そして、二人の唇は重なり合った。
「おめでとうございます。古代先輩、スターシアさん」
「おめでとう古代」
「おめでとう兄さん」
「おめでとうございます。スターシアさん」
『おめでとうございます!!』
みんなが守とスターシアに賛辞の言葉と共に拍手を送った。
挙式はつつがなく終わり、今は写真撮影に移っていた。
新郎新婦二人だけの写真。
守とスターシアがそれぞれ、愛娘たちを抱いた写真。
そこから、始まり、その後は親しい者たちとの撮影が始まった。
ティアナもクロスミラージュをカメラモードにして盛んにシャッターを切っていた。
「フェイトさん、ティアナ」
自分たちを呼ぶ声に、ティアナがクロスミラージュから顔を外すと、スターシアと一緒に写真に収まっていたギンガが手招きしている。
どうやらスターシアたちと一緒に写れという事らしい。
「よ、よろしいんですか?」
「その・・・私たちが写っても・・・?」
「ああ、遠慮無用さ」

フェイトとティアナが恐る恐る訊ねると守は構わないと言う。
そして、緊張を隠せないまま、フェイトとティアナも夫婦と一緒に写真に収まった。
「よし、ブーケ・トスやるぞ～！」
女性陣たちにはお待ちかねの時間、ブーケ・トスとなった。
雪をはじめ、参列していた両艦の女性乗員たちが集められ、さらにフェイトとティアナも手招きされて参加した。
誰が、スターシアのブーケを取ったのかはご想像にお任せする。
ブーケ・トスを終え、出席者全員による集合写真だ。
写真に写った者は皆、自分なりの笑顔を浮かべていた。
フェイトとティアナの二人も当然写真を受け取った。
写真撮影を終えた一行は、宮殿の大広間に設けられたパーティーコーナーに場を移した。
簡素だが飾り付けをした展望室にテーブルが並び、夫婦がつく「上座」には、燭台とともに、大きな枕形のケーキが鎮座していた。
言うまでもなくディアーチェら　まほろば　の厨房員たちが中心になって作った自慢の一品だ。
ケーキカットが終わると同時に、ケーキは出席者に振舞われた。
当直等によって出席できなかった者に関しては、ちゃんと、後でデリバリーされる予定である。
「では、御二人の結婚を祝し・乾杯」
『かんぱーい!!』
真田の乾杯の音頭でパーティーは始まった。
ただ、この後、出航を控えているため、出されたのもノンアルコールビールやソフトドリンクと、軽食だけだが、あちこちで笑い声が響いていた。
スターシアは、フェイト、ティアナ、ギンガ、リニス、原田たち女性陣と談笑し、サーシアとユリーシャはというと・・・・
「なかなか板についているぞ。お二人さん！」
「羨ましいね」
「ヒューヒュー」

乗員たちに冷やかされ、戸惑った表情の古代と雪に抱っこされていた。
その様を、守と真田は面白おかしそうに眺めている。
そして、フェイトは金髪の双子であるサーシアとユリーシャを見て、
（私にもあの二人みたいな可能性があったのかな？）
と、二つの地球があるのだから、もしかしたら、亡き姉、アリシアと平和に暮らして居た世界がこの世の何処かに有るのかもしれないと思っていた。
フェイトはサーシアとユリーシャの二人を自分たち姉妹に置き換えて見ていた。
「真田・・・・」
「ん？何だ？古代？」
真田に守は真剣な表情で話しかけた。
「俺は地球に帰って少し落ち着いたら、雪風の乗組員の家族を訪ねようと思う」
「そうか」
真田は絞り出すように言う、
「よりによって、艦長の俺が生き残ってしまったからな。それをやり残したままじゃ、いつまでも俺の中のあの戦争が終わらないんだ。たとえ遺族から罵倒されたとしても、これだけはやっておきたいんだ」
「古代・・・お前がそうしたいなら、俺たちは何も言わん。だが、お前たちが笑顔でいる事。これが死んでいった部下たちへの何よりの手向けなんだ。それを忘れるなよ」
真田が守の目を真っ直ぐ見て言う。
「・・・・」
その様を、フェイトとティアナは少し離れた所で見ている。
「大切な人を失った悲しみは、世界共通だよね？」
「はい」
「それに、信頼できる仲間たちがいる事もね」
「・・・そうですね」

唯一の肉親だった兄ティーダを失ったティアナにすれば、訓練校、初めて配属された救助部隊、そして機動六課時代にパートナーだったスバルを筆頭に、師匠格のなのはやフェイト、チームメイトのエリオやキャロら、機動六課のメンバーは紛れもなく大切な仲間で、その思いは今も変わらない。
しかし、失ったモノの多さでは、ここにいるメンバーたちはその比ではないだろう。
ガミラスとの戦争では、遊星爆弾は貧富、老若男女、国籍、人種を問わずに降り注ぎ、人類を含む地球の生物の過半が消え、生き残った者も、家族や友人等、大切な存在を全く失わなかった者はいないのだ。
(この世界に比べれば、私たちの世界はだいぶ平和よね)
フェイトとティアナは平和の概念の違いを痛感した。
やがて、パーティーはお開きの時間となり、いよいよ守とスターシアには、別れの時間が来た。
「さようなら・・・・守・・・・」
「さようなら・・・・スターシア・・・・」
守はヤマトの第一艦橋でメインモニターに映るスターシアに別れを告げる。
「だが、いつか・・・・いつかきっと、この星へ戻ってくる・・・・必ず・・・・必ずだ・・・・」
「ええ・・・・待っているわ・・・・守・・・・」
「兄さん・・・・」
「古代・・・・」
古代と真田は神妙な顔で守を見ていた。

「メインエンジン始動!!地球へ向け発進!!」
ヤマト、まほろば、雪風・改は、イスカンダルの海を浮上し、一路地球を目指し、出航していく。
離れていくイスカンダルを守はヤマトの展望室から愛娘たちと共にイスカンダルの姿が見えなくなるまで見ていた。

某星系内にある某惑星
「聖総統閣下・・・メルダース長官率いるマゼラン方面軍からの通信が途絶しました」
聖総統と呼ばれる人物に、一人の側近がマゼラン方面軍の状況を報告しに来た。
「途絶だと？」
「は、はい」
側近は体をビクッと震わせて答える。
「ゴルバの通信設備に何か事故でもあったのか？」
「い、いえ・・・その・・・大変申し上げ難い事なのですが・・・」
「何があった？申してみよ」
「は、はい。此方で調査した所、メルダース長官座上のゴルバのシグナルもロストしておりました・・・恐らく破壊されたものかと・・・」
「何ィ!?それで、イスカンダルは!?イスカンダリウムはどうなった!?」
「急ぎ、偵察艦を派遣し、イスカンダルのエネルギー調査をした所、イスカンダリウムは、我が帝国のエネルギー変換に適さない物質に組成変換されていたとの事です」
「・・・そうか・もうよい、下がれ」
「はっ」
報告をしに来た側近を下がらせ、聖総統は一人、思案する。
メルダースの最後の通信から彼が小癪な敵と交戦したのはほぼ間違いない。
故にゴルバは宇宙気象によって破壊もしくは遭難したのではなく、交戦した結果破壊されたのはほぼ確実だろう。
（たかが、３０等系の田舎蛮族だと思っていたのだが、彼奴等もなかなかの技術を持っているではないか・・・我が帝国のエネルギー採掘の邪魔立てをしてくれた礼を含め、例の計画を実行に移すとするか・・・）
地球人類の知らない所で、またも新たな企みが進められている事を、地球人類はこの時、知る由も無かった・・・。

六十二話　防衛軍は寄り道、管理局は迷走

ミッドにある高町家では、今日もなのはとヴィヴィオ、二人だけの夕食だった。
「ねぇ、なのはママ」
「ん？何？ヴィヴィオ」
「フェイトママを助けてくれた『ちきゅうぼうえいぐん』って、管理局より強いの？」
子供らしい純粋な質問をヴィヴィオはなのはにする。
地球防衛軍の存在は、先日、クロノが行ったテリオス遭難事件の記者会見にて、ミッドチルダ全体に知れ渡っていたのだ。
管理局は、第９７管理外世界とは別世界の「地球」の宇宙軍事組織に所属する「スペース・バトルシップ」と説明し、通常空間における戦闘力は、魔法なしにも関わらず、時空管理局のあらゆる次元航行艦船を大きく上回っていることを認めた。
テリオスを襲った謎の大小宇宙戦闘艦と併せて映像が一般公開された時、ミッドチルダの市民からは、次元世界探査を一時休止せよとの声が上がったほどで、第９７管理外世界（地球）出身の　八神はやて　は記者会見の放送を見た後、
「まるで次元世界の黒船来航やな」
と、呟いていた。
「――あのね、学校では怖がっている子もいるんだけど、きっと『ちきゅうぼうえいぐん』の人は、とってもつよくて優しい人たちだと思うんだ。だからその人たちとお話すれば、きっとお友達になれると思うの」
夕食の手を一時止め、ヴィヴィオは学校での同級生の地球防衛軍の印象を話し、次に自分の考えを　なのは　に言う。
「うん・そうだね」
ヴィヴィオの言葉に　なのは　は頷きながら言った。
地球防衛軍を始めとする未知の宇宙戦闘艦については、管理局員で

も二つの見方に分かれた。
戦闘艦自体もさりながら、地球防衛軍の戦闘艦から発進した宇宙戦闘機は主翼と尾翼を持ち、光学兵器と質量兵器を併用し、ミッドチルダをはじめとする管理世界の大気圏内でも使用可能と推察できた。
そんな戦闘機がこの世界に姿を現したら、管理局の航空魔導師は、低空域での空中格闘戦以外ではまず対抗できない。
それに、戦闘機にせよ宇宙戦艦にせよ、魔導師や空戦魔導師でなくても、訓練された者が扱えば十分な性能を発揮できるから、空戦魔導師を含む魔導師は要らなくなる。
そうなっては、魔導師の優位性が根底から覆され、時空管理局そのものが根底から覆されてしまう。
その為、魔導師・・・特に高ランク魔導師や空戦魔導師の一部からは不安の声が上がり始めていた。
それは、彼らの権力と地位の崩壊を意味していたのだから、必死になるのも当然だった。
一方、非魔導師や低ランクの魔導師、飛行属性の無い魔導師の管理局員たちは、内心、「ああいう戦闘機のような高い性能のハードウェアを使いこなせば、高ランク魔導師や飛行属性の魔導師に頼る事なく、慢性的な人材不足も改善されるのではないか？」と考える者、「かの戦闘機は成層圏と宇宙空間のどちらでも使用可能なので、それらの技術を応用すれば、次元の海開拓や調査等の行動範囲は飛躍的に伸びるのではないか？」と指摘する技師も出始めた。
そんな中で、なのは自身は戸惑っていた。
今の仕事に誇りを持って、管理局に従事しているが、管理局のみならず、少数の高ランク魔導師と大多数の低ランク魔導師と非魔導師との間に見えざる大きな壁と深い溝を感じるようになっていたからだ。
魔法と管理局と関係を持った九歳当時には特に感じなかったが、年齢を経て様々な体験を経て、娘を持つ身となってそれをひしひしと感じるようになった。
その大きなきっかけとなったのが、機動六課時代におけるティアナとの確執であった。

将来、管理世界各地で魔導師と非魔導師に分かれて、戦争が起こったら・・・。
ヴィヴィオには、今通っているザンクト・ヒルデ魔法学院のクラスメイトに仲良しの友人がいるが、非魔導師の友人もつくってほしいと願っている。
娘がどんな道を歩むにせよ、一部の高ランク魔導師に見られるような、低ランク魔導師、非魔導師の人たちや管理外世界の人々を見下す様な魔導士至上主義者にはなってほしくない。
自分だって完成には程遠い人間だ。
魔力のランクと、人間としての出来、不出来は全く関係ないのだから・・・。
そう思いながら、なのは　は残っている夕食を口にした。

宇宙戦艦　まほろば　第一艦橋
「艦長、マゼラン雲宙域を完全に抜けました」
位置観測をしていた星名が良馬に外洋宙域に出た事を告げた。
報告を聞き、良馬は頷き増速を命じる。
「よし、宇宙間巡航速度へ速力をあげろ」
「了解。宇宙間巡航速度へ速力上げます」
並走する　まほろば、ヤマト、雪風・改の三艦の主機関の回転が上がり、速度は光速の九割を超えた。
地球へ戻る前に管理局とのコンタクトをとる為に、まほろば、ヤマト、雪風・改は再びヘリオポーズのある小惑星へと赴かなければならない。
タイミング良く管理局からのお迎えが来ていればいいが、そうでなければフェイトたちを地球まで連れていくしかない。
地球には、先日一隻遭難した時空管理局艦船ノアとギンガが乗って来た管理世界製の輸送船がある。
何方の船も機関にかなりの損傷を受けており、修復は不可能であるが、幸いな事に通信機器は生きていたので、それらの艦船から通信装置を取り外し、修理して管理世界直通の通信機とする。

これがうまく動作すれば連絡がとれる可能性があるし、当方の遠距離宇宙通信のレベルアップにも貢献する。
何だかんだ言っても、彼女たちも早く故郷であるミッドチルダとやらに帰りたいだろう。
そして、ヘリオポーズのとある小惑星にて、まほろば、ヤマト、雪風・改の三艦は停止した。
ここまでの航海の途中、イスカンダルの地下資源を狙っていた暗黒星団帝国との遭遇はなかった。
また、ガトランティスの残党との遭遇も同様になく、無事にヘリオポーズまで辿り着くことが出来た。
三艦の周辺には警戒用のコスモタイガーが旋回している。
通信機に何か変化はないかと調べた真田とギンガが新たにこの通信機に手が加えられた痕跡を発見し、一度管理局が此処に来たことを裏付ける証拠となった。
そして、真田はギンガと共に　まほろば　へと向かい、回収した通信装置に手を加えた。
「よし、いいぞ」
促す真田に頷いたギンガがしばらくコンソールを操作していたが、回線が繋がったらしく、話し始めた。
「こちら、地球防衛軍所属、宇宙戦艦まほろば。時空管理局次元航行本部、聞こえますか？　繰り返します・・・」
モニターの画面が明滅し、画面にオペレーターらしい緊張した面持ちの若い女性が映った。
「こちら、時空管理局・次元航行本部。受信感度良好です」
「こちら、宇宙戦艦まほろば。小官は通信長の中嶋です。早速で申し訳ありませんが、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官に代わります」
ギンガがモニターの向こうのフェイトに合図を送った。
なお、対応に出たオペレーターは管理局では死んだ筈になっているギンガの顔を見ても驚く様子は無かった。
元々ギンガが〝陸〟出身の管理局員と言う事とこのオペレーター

がギンガとは面識が全く無かった事から完全にスルーされたのだ。
　ギンガとしては無用の混乱を避けるため、これで良かったのだと思った。
「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です。ランスター補佐官と共に、襲撃されたテリオスから救助され、現在スペース・バトルシップ・まほろば　に乗艦しています。突然で申し訳ありませんが、クロノ・ハラオウン提督に取り次いでもらえますか？」
「っ!?は、はいっ！少々お待ち下さい！」
　オペレーターはフェイトたちの件に関しては、さすがに驚いていたようで、目を大きく見開いていたが、直ぐに我に返り、クロノを呼ぶ。
　それから少しして画面が切り替わった。
「本当に、フェイトなのか？」
　クロノも目をパチクリさせている。
「うん、私だよ。ごめんね、心配かけて」
「いや、元気な様子で安心したよ、フェイト。ランスター補佐官は今、居るのかい？」
　フェイトが横にずれ、ティアナがモニターの前に出る。
「ご無沙汰しております、クロノ提督。幸い私も大した怪我はなく、元気に過ごしていると、皆に伝えて下さい」
「いや、こうして君たちの姿を直接見て、声が聞けたから、僕もひと安心したよ。この事は皆にも伝えておくから、安心してほしい」
　ヤマト　と　まほろば　の艦橋員たちもこのやり取りを見ていた。
　フェイトの義兄だというクロノ・ハラオウンが提督という上級な役職とは裏腹に随分と若いことに良馬も内心で些か驚いていたが、まあ、組織が違うのだから仕方ないか・・と割り切った。
　その後、フェイトはイスカンダルへの航海の途中で行方不明となっていた第３７探査部隊の件について話した。
　第３７探査部隊が暗黒星団帝国と名乗る星間国家に部隊ごと拿捕され、乗員全員が洗脳され、まほろば　がその洗脳波を出している衛星を破壊すると、まるで用済みと言わんばかりに、暗黒星団帝国の艦艇は無抵抗だった第３７探査部隊の艦艇を一方的に沈めた事、それに

より、生存者は誰一人として居ない事を包み隠さずに話した。
その時のフェイトはとても辛そうであった。
フェイトの話を聞いたクロノはさすがに息を飲んだ。
そして、フェイトの話が事実であると言う裏付けの為に良馬は、サイレン星近海での戦闘記録映像をクロノに見せるように指示を出した。
味方の次元航行艦や巡航艦が一方的に沈められて行く様子を見て、クロノはギリッと歯を喰いしばった。
そして、その敵討ちかのように次々と敵の小型艦を沈めていく艦載機、対艦戦闘では、単艦ながらも、圧倒的に敵の火力に勝る　まほろば　の攻撃力と防御力・・・。
その姿はさながら、動く要塞の様でもあった。
テリオスが遭難した時の状況も事前に確認したクロノであったが、二度見ても防衛軍の艦船技術の高さを見せつけられた。
フェイトたちとモニター越しではあるが、再会したクロノは、次に艦長と話がしたいと言うので、良馬はそれに応じた。
「宇宙戦艦まほろば、艦長の月村良馬です」
「時空管理局次元航行本部所属、クロノ・ハラオウンです。危険な中にも関わらず、義妹たちを助けていただいた事、心から感謝します」
「船乗りとして当たり前の事をしただけですから、どうぞお気になさらず」
さらに、フェイトたちの現状について話し、そして今後についての話し合いが行われた。
管理局とコンタクトをとる。
これでやっと問題の半分が解決したのだ。
そしてもう半分・・・フェイトたちを時空管理局側に返した時にこの問題はやっと終結する。
「自分たちは軍の命令を受けての作戦行動中で、一刻も早く目的地に到着するよう命じられていますから、この空間に長く留まる事はできません。単刀直入にお聞きしますが、そちらからこの空間までの所要時間はどの位ですか？」

良馬の問いにクロノは、
「率直に言って、最短で五十時間。二昼夜を要します。残念ながらその近海に管理局の艦船は航行していないので・・・」
と、言いにくそうに答えた。
クロノの言う時間ではかなりかかりそうだ。
「そこまで掛かるとなると、申し訳ありませんが、其方のお迎えを待つのは無理ですね。一度我々の本星に戻り、その後、具体的な話をするのが現実的だと思いますが、どうでしょう？」
良馬の回答は向こうも予想していたのだろう。
内心はともかく、表情に不平不満の色はなかった。
「確かに、月村艦長のおっしゃる通りです。我々が其方の立場でもそうするでしょう。それで、今回のような通信ポッドを設置しました。これはそのまま、そちらの任意の場所までお持ちになって下さい。それに接続してこちらをお呼び下さい。その後、具体的な事を詰めましょう」
「そう言っていただけるとありがたい。なるべく早くそちらへ帰せるよう、こちらも努力します」
「はい・・・んっ？」
良馬とクロノがそこまで話し合ったところで、クロノに通信が入ったようだ。
「月村艦長、大変申し訳ありませんが、もう少しだけ時間をいただけるでしょうか？」
「何かあったんですか？」
「あっ、いえ、ハラオウン執務官とランスター補佐官の元同僚が、どうしても一言彼女たちに話したがっておりまして・・・」
済まなそうに言うクロノに、良馬は
「ええ、良いですよ」
と、苦笑しながらも快諾した。
「ティア～!!」
画面に映ったのは青みがかった髪のボーイッシュな十六～七歳位の娘。

感情豊かなのだろう。既に顔は感動の涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっていた。
「スバル!?」
即座にティアナが反応し、ティアナの反応にギンガもピクッと反応した。
「ディア～、よがっだよぉ～～」
画面向こうの彼女はもう大号泣である。
それは年頃の乙女がするような顔では無い。
「ちょ、ちょっと、バカスバルッ！やめなさい、もうっ!!恥ずかしいじゃない・・・」
始めは元気よくスバルを咎めていたように見えたティアナも感極まったのか、一緒に泣き出してしまった。
ひとしきり泣いた後、ティアナ、フェイトと話している内に幾らか落ち着きを取り戻した様に見えたスバルだが、突然ポケットからティッシュを取り出すと、派手な音を立てて・・・
「ふん、チーン!!」
鼻をかんだ。
その行為は先程の表情同様、年頃の乙女がやるような事ではない。
「「・・・」」
フェイトもティアナもスバルの行為に唖然とし、先程までの重い空気は完全に吹き飛ばされた。
「スバル・あんたねぇ～・・・思いっ切り恥ずかしくて痛過ぎるわよ！何やってんのよっ！もうっ!!」
ティアナが声を荒げながらスバルにツッコミ、ギンガはモニターの死角で額に手をあて、我が妹ながら恥ずかしいと言う思いと共にスバルが元気そうで安心した。
そして、スバルを見た良馬は、
(彼女がギンガの妹さんか・・・ギンガとしては複雑な心境だろうな・・・)
と、ギンガの心中を察した。
「ティアナ、落ち着いて。ほ、ほらスバルも挨拶をして」

ツッコミに荒ぶるティアナをフェイトが落ち着かせて、スバルに挨拶を促す。
「す、すみません・・・」
「し、失礼しました・・・では、改めまして。ミッドチルダ港湾特別救助隊所属、スバル・ナカジマ一等防災士であります！」
艦長というからには、管理局では間違いなく佐官か提督クラスの階級だ。
ガチガチで敬礼するスバルに良馬は答礼した。
「地球防衛軍、宇宙戦艦　まほろば　艦長の月村良馬です。よろしく、ナカジマ一士」
「あ、あのっ！私の友人と先輩を助けていただき、ありがとうございます！」
「いや、申し訳ないことに、まだそちらに帰れる段階じゃないんだ。一旦我々の本国に戻ってから、改めてハラオウン提督と相談することになるが、必ず君たちの元に帰すから、もう少し待っていてほしい」
「私も組織の一員ですから、事情は理解しているつもりです」
良馬の説明を聞き、いつの間にか先程とはうって変わってスバルの表情が真剣なものに変わっていた。
スバル・ナカジマの突然の鼻かみ行為という突然のハプニングがあったものの、地球防衛軍と時空管理局のファーストコンタクトはつつがなく終了しようとしていた。
「それでは失礼致します。先程は大変見苦しい事をしてしまい、申し訳ありませんでした！」
先程の醜態を詫びるスバルだが、
「謝ることはないさ。気持ちは十分にわかるよ」
と、良馬にフォローされてティアナ共々ますます恐縮してしまったスバルであった。
その後、連絡先等についての確認を行い、管理局側の窓口はフェイトの所属先である次元航行本部のクロノ・ハラオウンが担当。
地球側は基本良馬が担当するが、彼は艦隊勤務故、連絡がとれた時に地球にいない場合はこの世界におけるギンガの養父、中嶋源三郎が

担当する事となり、彼の顔写真をクロノに見せた。
「それと、ハラオウン提督。提督のご家族達が我々の地球にいる間の身元保証人ですが・・・」
一時的とはいえ、フェイトたちは地球（２２０１年の）で生活することになるわけだが、こちらの地球でも成人（満１８歳以上）として認められるフェイトはまだしも、ティアナはまだ未成年であり、誰かしら後見する者が必要である。
「小官の実家で引き受けます」
と、良馬の実家、月村家が引き受ける事となった。
その件に関しては、ヤマト、まほろば　の乗員は納得がいく様子だった。
その後、いくつかの意見交換を終えて通信を終えた。
管理局との通信を終えた後、
「真田さん、ギンガ・・・」
真田とギンガに声をかけた時、良馬の顔は軍人としての表情をしていた。
「何だ？」
「何でしょう？」
「念の為、あの通信ポッドを調べておいてくれませんか？」
「えっ？それはどういう事ですか？」
「通信を切っても、妙な電波やエネルギー波みたいなのが出ていないとも限らないしね・・・ロストロギア絡みで、管理局の連中にこそこそと太陽系内を動かれては正直うざったいし、それに今の太陽系ではまだ彗星帝国の残党軍がウヨウヨ居る。そんな中で戦闘に巻き込まれでもしたら大変ですし、その件に関して管理局がこちらにいちゃもんをつけてこないとも言い切れないので・・・」
「成程」
「た、確かに・・・」
良馬の考えを聞き、確かに管理局ならば、それぐらいの事をやりかねないと思う真田とギンガであった。
個人と組織は全く別個に扱う。

フェイトとティアナ、そして先程話したクロノ・ハラオウンとスバル・ナカジマに関しては悪い印象はないが、先日救援した時空管理局の次元航行艦ノアの乗組員の遺体の中に制服姿の十代前半にしか見えない子供たちが少なからず含まれていたことは防衛軍側からしてみれば管理局に対する不信感を植え付けるには十分だった。

故に管理局との接触はあくまで人道上必要だからであり、それ以上でも以下でもないのだ。

良馬の言ったロストロギアの発言に関してもテリオスやノアから回収したデータ資料で、魔法文化がない世界（有人惑星）にこっそり入り込んでその星（世界）で活動して、現地住民を巻き込んだ厄介事の記録を見たからだ。

そして、管理局が用意した通信ポッドを調べた結果案の定、逆探装置の様な物が仕掛けられていた。

これが、あのクロノ提督の指示なのか、それとも別の人物の指示なのかは分からない。

少なくとも一士と言う階級からギンガの妹のスバルの指示では無い事は確かであった。

しかし、フェイトたちには悪いが、現時点において時空管理局に好感を持つ事は極めて困難な状況だった。

管理局が地球連邦や防衛軍側を魔法も碌に使えない蛮族だと思いナメていたのか？

それとも管理局側はこれで隠しているつもりだったのか？

あるいは、防衛軍・・・と言うよりも、真田の技術者・科学者としての腕が管理局の予想よりも上だったのか？

理由は分からないが、兎も角、管理局が防衛軍側をナメている事は確かなようだ。

どの道、管理局の団体さんをこのまま地球や太陽系へと案内し、不法侵入され影でコソコソされてはたまらない。

そこで、この逆探システムに関しては真田とギンガはある細工を施した。

舞台は再びミッドへと移す。
「ス～バ～ル～（さ～ん）・・・・」
「あ、あはははは・・・（涙）」
モニター越しのスバルは、元上官とその娘の視線に冷汗たらたらであった。
その理由は・・・
「スバル（さん）だけフェイトちゃん（ママ）たちとお話したなんてずるい!!」
で、あった。
決して、スバルに過失があったわけではない。
防衛軍側と連絡がとれた時、クロノを除けばすぐ連絡をとれたのはスバルだけしかいなかった。
なのは　は仕事中でヴィヴィオは学校の授業中と言うタイミングの悪い時間に防衛軍側からコンタクトをとって来たのだ。
まさか、二人が来るまで待っていてくれとはクロノもスバルも言えなかったのだ。
向こうも作戦行動中だったみたいなので、ほぼ私的な理由で待ってもらう訳にはいかなかったのだ。
なのは　もそんな事は百も承知で、フェイトと話せなかった八つ当たりに過ぎないことは十分解っている。
しかし、
「解っちゃいるけど割り切れない!!」
と言うのが心情である。
「と、兎に角、フェイトちゃんたちと何を話したか、詳しく言ってくれれば許してあげるよ」
と、なのは　が態度を軟化させたため、スバルはフェイトたちや地球防衛軍の士官と話した事を改めて報告して一緒に送られてきたフェイトたちと防衛軍側の乗員と一緒に写った写真を見せたところ
なのは　は安心したのか涙目になっていた。
「よかった・フェイトちゃん、ティアナ・・・」
「うん、よかったね、なのはママ」

その後、スバルは今後の防衛軍側とのコンタクトの予定など、クロノから聞いた内容を　なのは　に話して、なのは　は防衛軍側のコンタクト予定日は全て仕事をＯＦＦにしようと自らのシフト表を確認した。
通信ポッドにとある細工を施した後、真田はヤマトへと戻ろうとしたが、その際、
「そうだ、良かったら、君たちもヤマトに来るかい？」
と、フェイトとティアナをヤマトに招待した。
「えっ!?でも・・・・」
「良いんですか？」
ティアナとフェイトは恐る恐る真田に訊ねる。
「まほろば　同様、重要区画には立ち入ることは出来ないが生活ブロックならば、問題ない。良いだろう？月村？」
「ええ」
と、良馬も納得している様子なので、
「それじゃあ・・・・」
「お世話になります」
と、フェイトとティアナは、復路の方はヤマトにお世話になる事となった。
ギンガはヤマトの方に通信でこの件を送り、古代も真田同様、重要区画を含め、生活区画のみの立ち入りならば、許可すると言う条件を出して、フェイトとティアナのヤマト乗艦を許可した。
真田と共にヤマトへ向かうフェイトとティアナは顔には出さなかったが、二人とも内心はウキウキしていた。

その頃、時空管理局本局会議室では、防衛軍側と漸くコンタクトがとれたと言う事で、緊急会議が行われた。
そこでまず、地球防衛軍が所有する戦艦の艦長（良馬）及び収容されているフェイトとティアナの二人とクロノ・ハラオウン提督で行われた会談映像が再生された。
その中で、管理局側が衝撃を受けたのは、やはり第３７探査部隊行

方不明の真相であった。
そして、悪魔の実験とも言うべき行為を行った暗黒星団帝国と　まほろば　との戦闘記録映像、更には、少し時間を遡ってペテルギウス、α星で行われたヤマト、まほろば、雪風・改の三艦の戦闘映像も同じく管理局を驚愕させるには十分だった。
特にα星での戦闘の折、まほろば　が放った拡散波動砲の威力を見た局員は唖然とする者、気難しい表情で見る者と様々な表現をしていたが、共通の認識は驚愕と脅威だった。
やがて、記録映像は終わり、意見陳述へと移った。
そして、次元航行本部の一提督が発言した。
「ヤマトにせよ、まほろば　にせよ、あまりにも戦闘力が高すぎる！特にあの広範囲の殲滅砲（拡散波動砲）は脅威です!!此処はやはり、両艦を直ちにロストロギアと認定して接収すべきだ！」
何人かの高官が賛意を示すかのように頷く。
これらは全て管理世界拡大推進派・魔導師至上主義の局員だ。
この意見に対し、〝陸〟を始めとする管理局の穏健派の局員は「まだ、諦めていないのか此奴らは？」と冷ややかな視線を送り、反論する者も居た。
「お言葉ですが、接収できるのですか？今の我々に？」
「何だと!?」
「それは、どういう意味だ!?」
発言したのはクロノの母親であり、フェイトの義母であるリンディ・ハラオウンだ。
「ＸＶ級をいとも簡単に撃破したガトランティスの戦闘艦艇を数で劣勢だったヤマト、まほろば　はそれを難なく撃破したのです。あの二隻を接収するのに一体何隻の次元航行艦と何百人の乗組員を犠牲にするつもりですか？それに地球の戦力はあの二隻だけではないんですよ。当然、彼らの本国にはあの二隻と同等の戦闘艦艇が多数配備されているものと考えるのが普通でしょう？それら全ての戦闘艦艇を管理局は接収出来るのかしら？」
リンディの指摘は正しかった。

地球防衛軍は無人艦も含めた艦艇の新造と改修を急ピッチで進めていたが、その中には鹵獲した白色彗星帝国軍の艦艇に加え、アメリカはアンドロメダ級に匹敵する独自枠の大型戦艦アリゾナ級の建造を決め、既にその建造を開始していた。
またヨーロッパ各国やロシア、中国にもそれと同じ動きが有る。
そして、日本もアンドロメダ級に継ぐ、アンドロメダ・改級戦艦の就役が間もなくと言う所まで来ていた。
また、アンドロメダ級二番艦以降の建造も行われている。
反論を試みようとした提督の機先を制するように、地上本部、本部長のセオドア・ロールスロイスが発言した。
「あれだけの戦闘艦艇を建造し、複数保有・運用するだけの科学力、技術力、軍事力があるのなら、本国防衛の戦力、周辺近海における警戒網も相当なものでしょう。我々魔導師が忌み嫌う質量兵器を使うことも躊躇しないでしょうな。ましてや、何度も侵略されていたのなら、一般市民も含めて侵略者への敵愾心は強いはずです。一般市民から向けられる敵意と憎悪に若年者が多い本局の武装隊員が耐えられますかな？パニックになって現地の一般市民を無抵抗のまま虐殺する様な事態が起こったら一体どうするのですか？」
ロールスロイスは現地で起こるかもしれない暴行と虐殺を危惧するが、まぁ、そんな事態が起これば、管理局は事実を捏造し、現地の住民が局員に対し、暴行を働いたので、やむを得ず、鎮圧した等と言う既成事実を発表するだろう。
いや、それ以前に管理局の局員が地球へ地上戦に持ち込む事が出来るのか疑問な所だ。
管理局は未だに地球連邦のある地球の位置を把握していないのだ。
「それに、地の利は向こうにあるんです。例えば、地下都市に誘い込まれて逃げ道を塞がれ、毒ガスなり大量の水等を流し込まれたら、いかな高ランクの魔導師とて持ちませんよ。もし、彼らの地球を侵略なさるなら、本局の局員だけでやっていただきたい。我々〝陸〟は、そんな馬鹿げた茶番に大事な部下を一名たりとも貸し出す気は毛頭ありません!!」

と、万が一地球連邦と戦争になった場合、〝陸〟は一切、人材面等の協力は行わないと明言した。
しかし、管理局が地球に対し侵攻した場合、恐らく防衛軍は侵攻して来た管理局の艦艇を返り討ちにし、逆にミッドへと侵攻し、ミッドはヤマト　や　まほろば　を始めとする地球防衛軍艦船の手によって焼野原となり、都市と言う都市は全て廃墟の様に灰燼に帰すだろう。
地球連邦、地球防衛軍が侵略者に対して一切の妥協も容赦もない事は、ガミラス、ガトランティス、暗黒星団帝国との戦いを見て分かる事だ。
それどころか、本局に例の波動砲を直接撃ち込まれる恐れだってある。
しかし、
「我々を侵略者呼ばわりするおつもりかっ!?」
局員の中には自分たちが侵略者ギリギリ手前であると言う事を自覚していない者が多い。
「こちら(管理局)の都合だけで管理世界入りやその世界の宝物を勝手にロストロギア認定して、ろくすっぽ説明もせずましてや対価も支払わず、強奪同然に収集するやり方を、侵略や略奪以外に何と表現するのかな?是非ともお教え願いたい」
ロールスロイスはドヤ顔で拡大推進派の局員らに訊ねる。
「なっ!?」
彼の言葉に拡大推進派の局員は絶句する。
だが、他の〝海〟と〝空〟の高官の中にはロールスロイスの言い草に激昂しかかる者もいたが、〝陸〟と穏健派の高官は図星かとばかりに、彼らに冷めた視線を送っていた。
「そこまでにしたまえ!!」
沸騰しかかった雰囲気を制したのは三提督の一人であるキール元帥だった。
「まだ、地球防衛軍の我々に対する態度が全くわからない以上、こちらから不用意に動く事は挑発になりかねん。ましてや、向こうの戦力の

方が上ならなおさらだ。それに、彼らはハラオウン執務官たちの身柄を必ず此方へ返すと言っているのだから、我々はその言葉を信じようではないか。誠意には誠意で応えるのが人としての礼儀というものだろう」

大部分の出席者は頷き、納得していない者も三提督の言葉に反論し、噛み付き、その言葉を撤回させる度胸の有る者はない。

そのため、管理世界拡大推進派や魔導師至上主義の局員も達も渋々ながら同意した。

会議終了後、管理世界拡大推進派、魔導師至上主義の局員達はまるで苦虫を噛み潰したような顔で会議場を後にしていく。

その者たちの考えはあの様な危険な質量兵器を所有する世界は管理局によって管理、運営されるのが正しいのだ。

そう言う考えが、彼らの中にはあった。

彼らが、とはる一室へと入った時、

「ぶ、部長！」

モニターを見ていた技術員が首を傾げ、しばらくキーボードを操作してから、困惑の声を上げる。

「どうした？」

「大変です!!これをっ!!」

部下に呼ばれた上司は面倒臭そうに顔を上げた。

「防衛軍に積み込まれた次元通信ポッドからの信号が突然異常になりました!!」

部下が指し示したモニターを見た上司は顔色を変えた。

「な、何だ、これはっ!?」

モニターには、正常ならばポッドの位置座標軸、つまり地球防衛軍の　まほろば　の正確な位置座標を示しており、計画では第９７管理外世界とは異なる、Ａ．Ｄ．２２０１年の地球の座標を突き止められるはずだった。

ところが、座標軸信号が突然不規則な動きを始めたかと思うと、デフォルメされたニコちゃんマークがアッカンベーをしている顔が画面を埋め尽くした。

「こ、これは一体・・・?」
苦り切った表情の「部長」はしばらく自らキーボードを操作していたが、
「や、やられた・・・」
彼は、歯をギリギリと喰いしばる。
「我々が思っていた程、連中は甘くはなかったようだな・・・」
と、もう一人の局員が呟く。
管理局は騙すつもりが逆におちょくられた結果となった。
その部屋に居た局員はクロノには内密に次元通信ポッドを改造しろと命じた目の前に居る自分たちの上官をチラッと見て、
(だから言わんこっちゃない。下らん小細工をするからさ)
と小声で毒づいた後、ウィルスの有無を確認したが、特に異常は無かったため、その事を上司たちに報告した。
報告を聞き、通信ポッドに細工を施す様に命じた上役の局員は、
(おのれ、質量兵器しか使えぬ蛮族共め!!俺に恥をかかせやがって!!この借りは必ず返してやるぞ!!)
と、勝手に防衛軍側を逆恨みしていた。

ヘリオポーズを通過して、ようやく地球との交信可能宙域へと入ったヤマト　と　まほろば　は早速地球との交信を試みた。
「ハッキング形跡無し、セキュリティ、異常なし・・・回線接続確認・・・地球との通信回路、繋がりました」
ギンガが地球との通信回路を開くと、艦橋のメインモニターには藤堂司令長官が映り、ヤマト、まほろば　の艦橋員は起立し、藤堂長官に対し敬礼した。
「ヤマト、まほろば、無事に戻って来たか」
「はい」
「状況を聞こう」
「はっ、我々は現在、ヘリオポーズ近海に来ています。現在までの行動結果を報告します」
良馬と古代から、遭難した時空管理局次元航行艦と襲撃した白色彗

星軍残党との接触と戦闘、生存者の救出。
ガミラス艦隊との合流、暗黒星団帝国軍との戦闘、古代守とスターシア、サーシア、ユリーシャの救出等を順に報告し、スターシアはイスカンダルへ残った事、
そして先程、ヘリオポーズにある小惑星に残してきた通信機によって時空管理局とコンタクトをとった事を報告した。
流石に暗黒星団帝国軍の事は軽々しく扱えないため、詳細は後日行うことで合意した。
そして、イスカンダルから地球への帰路の途中の守が藤堂の前に現れた。
「長官、またお世話になります」
「うむ。よく決心してくれたな。帰還を心より歓迎する」
藤堂と守は短い会話した後、守に代わって前に出たのは、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンとティアナ・ランスターだ。
地球防衛軍の最高指揮官が相手ということで二人とも緊張は隠せないようだ。
藤堂を前にして踵を揃え敬礼した。
「時空管理局・次元航行本部所属執務官、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンと申します。この度は危ない所を助けていただきましたこと、心より感謝致します、藤堂長官」
「ハラオウン執務官の補佐官を務めております、ティアナ・ランスターです。防衛軍の皆さんには大変良くしていただいております」
藤堂もフェイト達に答礼する。
「地球防衛軍司令長官の藤堂平九郎です。この度は我々の地球と彗星帝国のいざこざに巻き込まれ、とんだ災難に見舞われた様で・・・・亡くなった方々には、心からお悔やみを申し上げる」
「ありがとうございます」
表情を曇らせた二人に労るような視線を向け、
「君たちにも不便と不安をかけてしまうが、月村艦長の言うとおり、故郷に帰すよう手段を尽くす。今暫く我慢して待ってもらいたい」
と、フェイトとティアナとの会見を締めた。

ヘリオポーズから彗星帝国が哨戒ラインを設定していると思われる第十一番惑星近海までは、ヤマト、まほろば、雪風・改は通常の巡航速度で地球を目指す事となっている。
その間、フェイトとティアナは、特に不自由な思いをする事無く、ヤマトでの艦内生活を送っていた。
予てから地球防衛軍の宇宙戦士達の身体能力の高さに驚いていたフェイトとティアナは、彼らに追いつきたいとばかりにトレーニングルームに行くことが増えていた。
トレーニングルームは立ち入りが許可されている生活エリアにあるため、フェイトたちも自由に使えるのだ。
トレーニングルームに向かったティアナと分かれて部屋に戻ってきたフェイトは何気なく、今自分が着ている女性用戦闘服に視線を向けたと思ったら、いきなりその服を脱ぎだした。
そして、
「これをベースに、真・ソニックフォームのジャケットを組み直してみようかな？バルディッシュ」
「畏まりました、マスター」
と、ベッドに先程脱いだ服を置いた。
この服はボディラインがもろに出てしまうのがフェイトたち女性陣にとっては玉に傷で、上にジャケットが欠かせない。
フェイトたちも最初に着用する際は恥ずかしがっていたのだが、今ではもう慣れた様子。
そして、この服はパイロットスーツや簡易宇宙服の機能も兼ね備えているだけあって、極めて軽量かつ丈夫で結構激しい運動にも対応できる等、実用性が高い感心な一品だった。
しかも腕や脚はフルカバーされているので、これをモデルにすることで、真・ソニックフォームの特色である高機動性を維持しながらこれまで露出されていた腕・脚部の防御力を上げるのにはうってつけだ。
それ以外でも、管理局の次元航行艦乗りには是非とも採用してもら

いたいぐらいだ。
フェイトはバルディッシュをサーチモードにして、ベッドの上に広げてある服の採寸を始めた。
そして、採寸が終わり、新たなバリヤージャケットの草案を練り始めた。
採寸が終わった後、喉が渇いたので服を再び着用して食堂に何か飲み物を貰いに行った時、
「ん？あれは？」
通路で、オロオロした様子の守がフェイトの視界に入った。

ヤマトの生活区にある高官用ゲストルーム。
古代守一家三人はこの部屋で起居していた。
守はヤマトに乗艦中、役職は無いため、在室していることが多かったが、時折展望室や食堂に父子揃って姿を見せており、サーシアとユリーシャはヤマトの乗員たちに愛嬌を振りまき、彼女たちはすっかりヤマトの小さなプリンセスになった。
サーシアとユリーシャの身辺の世話は主に森雪がしていたが、雪は第一艦橋員でもあるので、常にサーシアとユリーシャの二人に付きっきりと言う訳にはいかず、そんな状況を知ったフェイトが子守の手伝を申し出たのだ。
ヤマト乗艦当初、ティアナも一度、チャレンジしてみたが、ティアナの釣り目が怖かったのか、サーシアに大泣きされ、気の毒なくらいしょげてしまった。
「はい、終わりました」
サーシアとユリーシャのおむつを替えていたのは守でも雪でもなく、フェイトだった。
現在雪は勤務時間のため、第一艦橋に居る。
そのため、サーシアとユリーシャの面倒は守が見ているが、やはり男手では母親のようにはいかなかった。
突然泣き出してしまった娘たちの対処にオロオロしていたのだ。
そこへ、運よくフェイトが通りかかり、対処したと言う訳だ。

「すまない、助かったよ」
守は手際よく、おむつ交換を行ったフェイトに礼を述べた。
「いえ。姪と甥たちの世話で多少経験があるだけですから・・・・」
フェイトが頬を染めて応える。
(やっぱり、フェイトさん守さんに・・・・でも、相手は既婚者・・・・まさか、フェイトさんに限って略奪愛をするとは思えないけど・・・・でも、相手があのスターシア陛下じゃ、いくら、フェイトさんでも勝ち目は・・・・)
と、途中でフェイトに会い、ゲストルームへ一緒に来たティアナは上司の珍しい姿に感想を持ちながらも興味津々の表情になる。
サーシアは母親と共通である金髪ロングの容貌が幸いしたのか雪とフェイトにはすぐに懐いた。
ユリーシャの方はサーシアよりも好奇心旺盛で人懐っこい性格なのかティアナにも泣くことなく接しており、現在もティアナの腕の中に居る。
ただ、好奇心が旺盛すぎると言うか怖いモノ知らずなのか、ティアナの頬を叩いたりしている。
他にも佐渡の愛猫のミーくんやアナライザーもユリーシャの興味対象となっていた。
後日、漸くサーシアがティアナの顔を見ても泣かなくなり、笑顔を見せた時、ティアナは思わず感動の涙を流した。
しかし、おむつ替えなどの実際面をやってみると、やはり身近に幼な子が居り、子守経験が有る分、雪よりもフェイトに一日の長があった。
雪はフェイトがいる分、レーダーの監視や生活班長の仕事に集中できるのだが、近い将来にサーシアとユリーシャの叔母になる身としては複雑で同い年のフェイトに負けていられないとばかりに競争を挑んだ・・・わけではなく、率直にフェイトに教えを乞うた。
優れた宇宙戦士は、自分より高い力量を持つ者は率直に称賛を贈り、教えて貰うか技術を盗み取って、自分のものにするものだ。
そう言う点においては、雪は紛れもなく優秀な宇宙戦士だと言う事

なのだろう。
ヤマト　と　まほろば　が地球まで帰還するのはもう間もなくである。

六十三話　帰還

第十一番惑星近海まで来たヤマト　と　まほろば、雪風・改は、此処から一気に土星圏までワープし、彗星帝国の哨戒網を通り過ぎようとしていた。
「ワープ準備完了!!」
「周囲に敵影なし!!」
「よし、ワープ!!」
「ワープ」
ヤマト、まほろば、雪風・改は彗星帝国に捕捉される前に第十一番惑星近海をワープで切り抜けた。
土星圏までワープして来たヤマト、まほろば、雪風・改の三隻は土星圏に入り次第、直ぐに防衛軍のタイタン基地に味方識別信号を送った。
彗星帝国艦艇の残党と間違われて攻撃されてはたまらない。
「艦長代理、第六内惑星警備艦隊旗艦、香椎の村瀬艦長から、守さん宛に入電です。『トッテオキノ酒ガアルカラ、ジカンガアッタラ飲モウゼ』：以上です」
古代が相原からメッセージシートを受けとった。
「後で俺が持って行く」
「やれやれ、気が早い奴だ」
真田が苦笑しながらパトロール艦の艦長として警備任務についている同期生の名を挙げた。
今は亡き、土方竜が訓練生から「鬼竜」と言われるほど徹底的に鍛え上げた２１９０年卒業組は「華の９０年マフィア」と言われるほど優秀な人材を輩出し、対ガミラス戦の終盤には古代守を皮切りに駆逐艦艦長や航空隊隊長に抜擢される者が相次ぎ、生き残った者は白色彗星戦の頃には戦艦を始めとする各艦種の艦長や部隊長、基地司令になるものも出ていた。
しかし、白色彗星戦役でもかなりの者が戦没し、宇宙艦隊や基地勤

務者の生存者は、任官時の三割強にまで減ってしまったが、生き残った者はより重要なポストを任されるようになっていた。
守はこの航海の途中で、沖田の他に教官だった土方がガトランティスとの戦いで戦死した事にはやはり心を痛めていた。
「これから同じような電文がどんどん入って来るからな、覚悟しておけよ。相原」
「はい」
と、古代の言葉に相原は苦笑した。
「華の９０年マフィア」・その中でも「スペース・イーグル」の異名を持つ古代守の存在は一際輝いていた。
その古代守がイスカンダルから帰ってくる。
生き残った同期生はもちろん、彼の指揮下で戦ったことがある元部下たちは揃って彼の帰還を喜んだ。

ミッドチルダ首都・クラナガン、時空管理局・航空戦技教導隊　隊舎
教導隊の隊舎食堂で、教導官・高町なのは　は特別な事がない限り受講生に混じって食事をとるようにしている。
それはやはり六課での経験で、下の者たちと積極的に混じって言葉を交わさないと、分かるモノも分からないし、伝わらないと言う事を学んだからだ。
初めてフェイトやヴィータと出会った当初は言葉にしなければ伝わるモノも伝らわらないと思っていたのだが、目指していた教導官になってからは何時の間にかスポ根に登場する監督みたいに言葉にしなくても訓練を続けていけば自分の伝えたい事を理解してくれると思っていたのだが、六課時代におけるティアナとの一件でそれが間違いだと気づいた。
そのため、こうして生徒である受講生たちと一緒に昼食の席を共にしているのだ。
そして受講生たちの話題は専ら、先日その存在が公表された「地球防衛軍」の宇宙戦艦（スペース・バトル・シップ）ヤマト　と　まほ

ろば、それに搭載されていた戦闘機の事だった。
「大きさはほぼＸＶ級やそれ以上の大きさの上に、噂じゃあ一隻でアインヘリアルを上回る火力を搭載しているらしいよ」
「正気の沙汰じゃないわよ。もし、そんな艦船と戦う事になったら・・・・」
「高町教導官の『スターライト・ブレイカー』ならダメージを与えられるんじゃないか？」
などと主張する受講生を横目に、なのはは黙々と食事を続けていた。
管理局は魔法をベースにした戦闘を行っており、これまでは管理局を明らかに上回る武力や魔法が通じない組織等の存在を想定していなかったため、管理局・特に〝海〟は対応に苦慮しているのだ。
ヤマト　と　まほろば　の艦首にはアルカンシェルを上回る戦略砲（波動砲）がある。
つまり、地球防衛軍の・少なくとも戦艦クラスにはあれが標準装備されているということだ。
そして、地球出身者の　なのは　は『戦艦』の意味を知っていた。
自らの主砲弾の直撃にも耐える防御力と相手を破壊できる強力で圧倒的な攻撃力を持ってこそ、『戦艦』を名乗れるのだと。
つまり、自分の『スターライト・ブレイカー』も恐らく地球防衛軍の戦艦には通用しない。
撃った所でかすり傷一つもつける事は出来ないかもしれない。
「高町教導官？」
先程から黙っている　なのは　に一人の受講生が声をかけた。
「えっ？あ、はい。何かな？」
「地球防衛軍は、教導官の出身世界とは違う世界の地球の組織なんですよね？」
「うん。そうみたい」
「管理局と地球防衛軍は仲良くやれるんでしょうか？」
不安そうに受講生は娘（ヴィヴィオ）と似た様な質問をして来た。
それはなのは自身の疑問でもあるのだが、教え子を不安にさせるわ

けにはいかない。
「少なくとも、地球防衛軍はフェイトちゃ・・・ううん、ハラオウン執務官たちを救出して厚遇してくれている。今は地球防衛軍を信じるしかないよ。機動六課時代の教え子（スバル）が　まほろば　の艦長さんとお話ししたんだけど、魔法を使わない事以外は、私たちと変わらない人たちだったって。だから、こちらが構えたら、向こうも疑心暗鬼になるよ。まずは相手を信頼することが平和の第一歩なんだから。ねっ？」
「は、はい」
　なのは　の言葉を聞き、受講生は少し不安から解放された様子であった。
　しかし、時空管理局と地球防衛軍の関係は、なのはたちが願う通りにはなかなか進展しなかった。
　次元航行本部の一角、クロノ・ハラオウンのオフィスにはシグナムとカリム・グラシアの義弟、ヴェロッサ・アコース査察官がいた。
　話題は無論、管理局・特に本局を揺るがしている地球防衛軍を含む未知の軍事勢力についてだ。
「それにしても、クロノは頭痛が絶えないねぇ～心中お察しするよ」
　飄々とした口調で話すヴェロッサにクロノは苦い表情になったが、否定はしなかった。
「お歴々の中には　ヤマト　や　まほろば　をロストロギア指定して接収しろとおっしゃる御仁もいらっしゃるとか？」
　本局内で流れる噂の真意をシグナムはクロノに訊ねる。
「無茶苦茶な話さ。艦船は運用する人間次第で敵にも味方にも変わり得るというのに・・・それが出来なければ、優秀な艦船もタダの鉄の塊さ。しかも、下らない『小細工』をした挙句、見抜かれて逆にからかわれているんだからな。全く持って情けない話さ」
　クロノが言う「小細工」は、〝海〟の一部の高官らが、まほろばの現在位置と更には彼らの故郷であるもう一つの地球の位置座標を探ろうとしてクロノが用意した次元通信ポッドに内密で逆探知機をセットしたら、逆に防衛軍側からおちょくられた事を指していた。

その件が明るみになった時、次元世界積極拡大派や魔導師至上主義の高官たちは不機嫌になったが、慎重派に属するハラオウン親子とレティは内心で舌打ちした。
まだ対立するかもわからない相手に下手なちょっかいを出して、本当に敵に回したらどうするつもりなのか？
相手はとんでもない戦闘力を持つ宇宙艦船を複数保有するれっきとした宇宙軍なのだ。
しかも、向こうにはまだフェイトたちがいるのを知っていてやっているのか？
と、彼らの行動に呆れるどころか怒りさえも抱いた。
彼らの軽はずみな行動で向こうに居るフェイトたちにスパイ疑惑をかけられれば、ミッドに帰国するどころか、向こうの軍刑務所に収監されてしまう恐れもあるのだから・・・・。
更に自分がファーストコンタクトをとった後、あの小細工が判明したのだから、あの小細工を指示したのが自分だと思われたかもしれない。
クロノにとって濡れ衣を着せられたのでいい迷惑であった。
「彼らはヤマト　や　まほろば　の桁外れの破壊力が欲しいのだろう。一隻でアインヘリアル三基分以上の火力にアルカンシェルを軽く凌ぐ破壊力の戦略砲（波動砲）を持つんだから、反管理局勢力に睨みをきかせるには十分に持ってこいだろうからな」
シグナムが最もらしい意見を言う。
（睨みだけならともかく、侵略行為に走らなければ良いが・・・・）
クロノはシグナムの意見を聞き、管理局がガトランティスの様に侵略行為を率先して行わないか危惧した。
大抵の場合、力を得た者はそれを使ったり、試したりしたいと思うものである。
そして、その欲求が度を超えれば力に呑まれ、力を振るう為に闘いを望むようになってしまう。
やがて、その先に待つのは多大なる犠牲と積り積もった恨みと憎しみ。

そして全てが無となる破滅だけだ。
「案外、彼方さんは管理局の存在に疑念を抱いて、ああいう対応に出たのかも知れないね」
「どういう事だ？ヴェロッサ？」
自分の組織に対しシビアな事を口にするヴェロッサにクロノが訊ねる。
しかし、それと同時に無理はないと思う。
そして、ヴェロッサはクロノの疑問に答える。
「確かシグナム、君の主やなのは君の出身世界では、子供が表向き軍や警察組織で働く事は禁じられているんだろう？彼らが君の世界の人たちと同じメンタリティを持っていて、ノアやテリオスの艦内を捜索したのなら、十代前半の魔導師を働かせている時空管理局に対して強い疑念、あるいは不信感を抱いたとしても不思議ではないさ。ましてや生死を司る職業軍人ならね」
「っ!?」
ヴェロッサが言ったのは、ノアとテリオスの殉職者に十代前半の少年、少女が武装隊員として含まれていたことだ。
防衛軍の人たちがノアとテリオスの艦内を捜索した際、まだ十代そこそこの幼年局員らの亡骸を見た可能性は十分に高い。
十年に及ぶ管理局勤めのせいで、主であるはやてと共に地球に住んでいたにも関わらず、地球人が持ち合わせている子供に対する基本的な倫理感を忘れていたことに、シグナムは愕然とした。
「彼らは、既に魔法の事も掴んでいるかも知れないな」
クロノがポツリと呟く。
「どういう事だ？クロノ？」
「ノアとテリオスの捜索の時に、魔法関連の資料も回収された可能性があるということさ。案外、管理局の影の部分の情報も知られたと言う事さ」
シグナムの疑問に答えたのはヴェロッサだった。
「まぁ、あくまで可能性だけどね。侵略者を何度も返り討ちにした軍隊なら、相応のずる賢さや用心深さも持ち合わせているんじゃないか

な？」
「・・・」
クロノもシグナムもヴェロッサの言葉に何も言えなかった。
もしも彼らの地球や太陽系内の惑星・衛星にロストロギアの存在が明らかになったり、次元犯罪者が逃げ込んだら、厄介な事になる。
容易に回収はできないし、それどころか、けんもほろろに追い返されてしまうのでないか？
次元犯罪者の場合でも身柄の引き渡しに関しても時間がかかり、またどこかへ逃亡してしまう可能性もある。
そうなれば、管理局側も黙っては見ていないだろう。
何かしらの責任や制裁措置を防衛軍側に取ろうとするのではないだろうか？
クロノは自身が座乗するクラウディアがヤマトの波動砲の閃光に飲まれる場面を・・・
シグナムはミッドの空を防衛軍のあの戦闘機（コスモタイガー・コスモゼロ）が蹂躙し、地上に対し絨毯爆撃をする場面を想像して、互いに戦慄した。
そこへ、
Ｐｒｒｒｒｒ・・・
と、オフィスの通信機が外線を知らせるコール音を奏でた。

此処で時系列はクロノのオフィスに外線がかかってくる少し前に跳ぶ・・・
ミッドチルダ極北地区・ベルカ自治領、聖王教会本部にて、時空管理局理事官（少将待遇）を兼ねる騎士、カリム・グラシアは、いつものとおり、午後のティータイムの時間を楽しんでいた。
ティーカップに注がれた紅茶の香りを愛でていたその時、突如、彼女の稀少能力（レアスキル）「プロフェーティン・シュリフテン」が発動した。
カリムは急いで紅茶の入ったティーカップを置き、机上のペンを手に取り、メモ用紙に預言を書き記していった。

「こ、これは一体・・・どういう事・・・？」
ペンを置いたカリムはメモ用紙に書いた走り書きを公文書用の便箋に清書していく。
清書し終え、書かれた内容を一読した。

正義に溺れし、法の番人
星海を行く戦船と出逢う・・・
驕れるまま船出する番人の船
自らが招きし愚かな所業にて、業火の中へと焼け沈む・・・

清書し終えた直後に再び彼女の稀少能力（レアスキル）が発動した。
こんな短時間に二度も発動するのは今までの人生の中でこれが初めての出来事だ。
兎も角、カリムは二度目の預言も書き記し、再び公文書用の便箋に清書した。
「・・・」
二つ目の預言を見て、カリムは言葉を無くした。
二度目の預言には、以下の様な言葉が書かれていた。

星海を行く法の番人の船
独裁を司る者の宝物（ほうもつ）を強奪せんとす
独裁を司る者は、怒り狂い、強奪せし法の番人を業火の彼方へ滅する
報復せし法の番人は、独裁の地へと赴く
されど番人は漆黒の闇へと飲まれる.

「ダメだわ。これ以上は解らない。それにしてもこれは・・・」
法の番人とは時空管理局。
星海を行く戦船とは、先日フェイトたちを助けた「地球防衛軍」の

宇宙戦艦ヤマト、まほろば　の事を指しているのだろう。
　地球防衛軍といえば、先日、フェイトが自分たちの無事を報告してきた時、クロノ・ハラオウンやスバル・ナカジマとも直接会話したまほろば　の艦長は、現在の管理局にはいないタイプの士官だという。
　預言の前半はいいだろう。
　しかし、後半のそれは穏やかではない。
　それに二つ目の預言も内容からして、不吉な単語ばかりである。
　管理局の〝海〟が暴走した挙句、自業自得で壊滅的な打撃を受けるということか？
「早急にクロノ提督と話し合う必要があるわね」
　いずれにせよ捨て置く事はできない。
　そう思ったカリムは手元の鐘を鳴らしてシャッハを呼んだ。
「お呼びですか？騎士カリム」
「シャッハ、直ぐにクロノ提督と連絡を取って・・・・それと騎士はやてにも連絡を取って、此処に来てもらって頂戴」
「承知しました」
　カリムの慌てている様子からシャッハは急ぎ、クロノとはやてに連絡を取った。

　それから暫くして聖王教会本部の一室にはカリムとシャッハに加え、カリムの呼び出しに応じたクロノと　はやて　の姿がいた。
　その席で、カリムが自分のレアスキルが二度も断続して発動した事を告げると、一同は表情を引き締め、「預言」の内容に聴き入った。
「星海を行く戦船はやっぱし、ヤマトか　まほろば　の事やろうなぁ・・・・現にフェイトちゃんたちは、今ヤマトに乗っとる。まさに預言どおりや」
「でも、『驕れるまま船出する番人の船』って・・・・それは、やはり・・・・」
　クロノが戸惑った声を上げるが、はやてがすかさず応えた。
「クロノ君、残念やけど、管理局・・特に本局の一部が傲慢になっとるのは事実や。機動六課は地上部隊とはいえ本局主導やったし、それも含

めて、本局万歳、魔法万歳、地上本部はバカばっか、魔法を使えない奴は魔導師に従え、と思うアホどもが増殖しとるんよ・・・それはクロノ君自身も分かっとる筈やで？」
「・・・」
クロノ自身、昔の事で思う事が有るのか、黙り込んだ。
そして、
「確かに、管理局は、管理外世界やそこに住まう人たち、非魔導師を下に見ているんだろうなぁ」
と、自嘲めいた様に呟く。
自分や　なのは　は管理外世界の生まれだ。
到底看過できるものではない。
「もちろん、魔法文化がない事以外では、管理世界の住民と何ら変わらない人間同士ということを解っている者もいるが、やはり、魔法を使えないという一点だけにこだわって、未だに管理外世界や管理世界の住民でも非魔導師や低ランクの魔導師を格下に見る者も少なくないんだ・・・中には人間とも見ていない者も居る…情けない事にね」
「・・・」
そして、はやて　たちは二つ目の預言の解釈へと入った。
「独裁を司る者・・・これはどう考えても、言葉の通り、独裁者の事やな・・・」
しかし、管理世界において当然独裁者は存在しない。
むしろ、見方を変えれば管理局自体が独裁者と見ている世界さえもある。
「となると、やはり何処かの管理外世界か、まだ発見されていない未発見世界の独裁者と言う訳か・・・」
『独裁を司る者の宝物を強奪せんとす』・・・これは、その独裁者の持ち物の中　に、ロストロギアがあり、管理局がそれを強引に押収しようとした・・・そう言う解釈だろうか？」
「恐らく・・・」
カリムがクロノの解釈に頷く。
『独裁を司る者は、怒り狂い、強奪せし法の番人を業火の彼方へと滅

する』・・・これって、その独裁者の所有するロストロギアを押収しようとした局員がこの独裁者に捕まって殺される事なんやろうか？」
「・・・」
　はやての解釈に思わず黙りこくるクロノとカリム。
「だが、もし局員が他の世界で殺された場合、管理局がその世界に対して報復を考えるかもしれない・・・それが、この・・・」
「『報復せし法の番人は、独裁の地へと赴く』・・・やな・・・でも・・・」
「『されど番人は漆黒の闇へと飲まれる』・・・か・・・管理局はこの独裁者が治める世界に戦いを挑んだが、結果は負けた様な文章だな」
「つまり、その独裁者の世界は、管理局よりも高度な技術をもっとるわけやな・・・少なくともヤマト　と　まほろば　が所属する地球やガトランティス並の・・・」
「管理局はやはり、慢心していたのだと、今回の件で改めて思い知らされたよ」
「けど、そんな出来事があったにも関わらず、それを学ばないアホ共が多すぎや・・・そのアホ共にしてみれば、ヤマト　と　まほろば、白色彗星帝国、暗黒星団帝国とやらの艦は管理局の思惑をひっくり返した艦やね。ヤマトらの存在が明らかになって、ＸＶ級はおろか、今度、就役する新型艦も就役前で役立たずの烙印を押されたんやから・・・」
　はやて　はやれやれと言った感じで呟く。
　管理局が自信を持って就航させる予定だった新型次元航行艦はより長期間の行動を可能とした艦船だが、通常空間での航行性能と抗堪性はＸＶ級よりいくらか増した程度で、当然、ヤマト　や　まほろば　を始めとする地球防衛軍、ガミラス帝国、白色彗星帝国、暗黒星団帝国らの艦船とまともに渡り合えるものではなかった。
　より高出力の魔力炉や武装を開発し、地球防衛軍の艦船や白色彗星帝国の艦に負けない艦船の開発が待ち望まれていたが、これらの宇宙戦闘艦の航行性能は、管理局の艦船より数世代先を進んでいる上、それらの艦船の残骸さえも未だに回収されていないため、一番知りたかった動力部の詳細は全く不明なため、管理局の技術部の技師や造艦部の技師も頭を悩ませた。

「いくら情報が欲しいといっても、クロノ君や向こう（地球防衛軍）の人たちを騙すようなやり方は流石にアカンやろう。それで逆にコケにされとるんやから、ホンマにアホばっかやで・・・フェイトちゃんたちを助けたんは誰やと思てんねん」
〝海〟の一部がクロノに無断で、通信ポッドに細工をした挙句、逆におちょくられたニュースはたちまち局員中に広まり、常に〝海〟の局員からバカにされ続けてきた〝陸〟では笑いのネタになっていた。
はやてはクロノ同様、本局の所属とはいえ、一部の上層部連中が行った今回の小細工には苛立ちを隠せなかった。
フェイトたちが置かれている現状を知りながら、未知の強敵と互角以上に戦い、味方になってくれるかも知れない勢力にまで難癖をつけるような真似をして、管理局は一体何がしたいのか？
自分から敵を作るような行為をして何が正義か？
自らが法律を破る様な真似をして、何が法の番人か？
それだけではない。
管理局はそれらの相手に小細工を仕掛け、見破られ、バカにされ、自らが誇る艦船も羽虫の様に沈められて行く・・・・。
とんだお笑い草で滑稽である。
防衛軍に小細工をした高官と是非共Ｏ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩしたい。
全力全開でラグナロックをぶつけてやりたい。
はやては心底そう思っていた。
「とはいえ、増長や慢心している者は自分が増長や慢心しているなんて考えもしないから余計に性質が悪い」
「そうやな」
「そうですね」
クロノの憮然とした呟きに、はやてとカリムも同調した。
特にはやても六課発足当時はクロノの言う『自分が増長しているなんて考えもしない』と言う部類に属していたと自覚はあった。
本局の上層部のみで基盤を築き上げたせいで、肝心の地上本部との連携はまったく取れず、スカリエッティのテロ行為に対して、常に後手に回り、挙句の果て、地上本部の襲撃と六課の隊舎の崩壊を許し、多

数の負傷者を出し、ヴィヴィオを敵の手中に奪われてしまった。
そうした経緯の為か、はやてたち機動六課の幹部はスカリエッティを逮捕し、事件を収拾させたが、昇進は全て見送られたのだ。
そして、ＪＳ事件を経験した事で、はやては己の技量の限界を悟った。
その為、今は一からのやり直しをしている最中だ。
局員全員がこうして、自分の間違いや己の技量を自覚すれば良いのだが、正義と言う言葉に浸透し、その言葉に酔っている局員が多い管理局には、今は無理な話なのかもしれない。

はやてたちが聖王教会にて話し合いを行って居る頃、クラナガンのあるアパートでは・・・・。
スバル・ナカジマ、シャリオ・フィニーノ、ルキノ・リリエの三人が旧交を温めていた。
こうして三人が揃うのは機動六課解散式以来なのでかなり久しぶりである。
スバルは六課卒業後、特別救助隊にスカウト入隊し、隊舎の近くのアパートに一人暮らしをしていた。
最初に出会った時は、それぞれの近況報告が行われたが、シャリオとルキノの関心事は何と言っても生存が確認されたフェイトたちの事だ。
シャリオとルキノがスバルの下を訪れたのは、スバルが防衛軍とのコンタクト時にフェイトらと直接会話をした為であった。
そこで、スバルはマッハキャリバーに保存しておいた映像を見せる。
但し、クロノの指示で、あくまでスバル自身がフェイトたちや地球防衛軍側と話をした部分だけだが・・・・
冒頭の鼻垂れ大泣きスバルにシャリオ達は大爆笑したが、ティアナがもらい泣きしたところでは、二人とも目を赤くした。
まほろば　の月村艦長と話す場面では、二人は一言も発さずに見ていた。

丁度、スバルと月村艦長との会見が終わった時、昼食の為に注文したデリバリーサービスが来た。
しかし、その量はとても、女性三人が食べる量を遥かに超えており、料理を運んできた店員さんは、本来、三人前なら使わないはずの多人数用カートを押して、スバルの部屋に料理を運んで来た。
「そう言えばさ、フェイトさんたちはこれからどうするんだっけ？」
ルキノが昼食の手を止めて、スバルに確認するかのように訊ねる。
「ふん（うん）。『ハマト（ヤマト）』とひっしょ（一緒）に、向こうのちくう（地球）にひく（行く）っへ（て）」
ルキノの問いにスバルは口に料理をパンパンに詰め込んだままの状態で答えた。
そのため、何を言っているのか分からない。
彼女の前には一人前とはとても思えない量の料理があるが、スバルはそんな一人で食べきれるのかと？と思われるような量の料理を平然とした顔で食べていた。
「スバル、話したい気持ちはわかるけど、口の中に物を入れたまま喋るのはやめようよ・・・」
シャリオがスバルに注意する。
「んぐ・・・ゴクン・・・フェイトさんたちはヤマトに乗ってもう一つの地球に帰るみたい。管理局の船はまる二日かかるし、向こうは作戦行動中みたいだからね」
スバルは口の中を空にして、ルキノの質問に答える。
「そっか・・・じゃ、しばらくは向こうの地球に滞在するんだね」
「うん、そうみたい」
「ティアナ、向こうの地球で地球防衛軍の艦船プラモデル買って来てくれないかなぁ。管理局の艦船の模型は作り飽きちゃったよ」
ルキノはまだ見ぬ地球防衛軍の艦船に想いを寄せる様に言う。
その証拠に彼女の目は煌めいていた。
「「ルキノ・・・」」
そんなルキノにスバルもシャリオも少し引き気味だ。
艦船マニア、ここに極まれり・・・。

しかし、技術肌のシャリオも向こうの地球の科学技術に興味が無いと言えば、それは嘘になるので、ルキノとは別の意味で、防衛軍の艦船には興味があった。
「でもさ、本局は大騒ぎだろうね」
〝陸〟所属のスバルが少し声を低める。
「うん。グリフィス君の話だと、特に〝海〟は大騒ぎみたいだって」
「そうなんだ？」
「管理局の艦船襲撃事件や遭難事件が相次いでいるところに、フェイトさんたちまで遭難しちゃったからね。転属願いを出す局員や管理局を辞める局員、遠くの世界への任務を渋る艦長さんも少なくないみたい」
「いくらフェイトさんでも、宇宙空間で乗っている艦がやられてはどうしようもないもんね」
本局所属のシャリオとルキノが本局の現状を語り合っていると、
「まるで、なのはさんの世界で起こった黒船来航と同じだね」
と、大量の料理を全て平らげたスバルがポツリと零す。
「「黒船？」」
「うん、家のお父さんの遠いご先祖様・・・つまり、なのはさんとはやてさんの世界の歴史の中で、御先祖様やなのはさんの故郷の国は昔、鎖国状態だったんだけど、ある日突然、異国の軍艦だった黒船がやって来て、それを皮切りに激動の時代を迎えて、二百五十年以上続いていた体制は対応できずに、僅か十五年足らずで崩壊したんだって」
「「・・・・」」
スバルの話を聞き、二人は言葉が出ない。
「当時の人の目には凄く大きくて不気味に映ったらしいよ」
「そ、それって、時空管理局も同じ運命を辿るかも知れないってこと？」
シャリオが震えながら言う。
「地球防衛艦隊と管理局の次元航行艦隊が戦うような事が今すぐ起きるとは思わないけどね。対応を誤れば、管理局の『終わりの始まり』になることだってあるんじゃないかなぁ」

スバルにしちゃ、珍しく真剣な表情で言う。
「でも、脅威が地球防衛軍とは限らないんじゃないかな？」
ルキノも話に加わる。
「まほろば　とはきちんと話ができたけど、同時にもっと好戦的、支配的な世界があることも明らかになったしね」
「うん、だとすれば、一番話が通じそうな地球防衛軍とは仲良くしといた方がいいんだよね」
三人は同時に頷いた。
「でも、グリフィス君の情報じゃ、本局の一部の局員が防衛軍側になんかちょっかいを出したって聞いたけど・・・・」
ルキノがグリフィスから得た情報をスバルとシャリオに話す。
「それって大丈夫なの？」
「もし、防衛軍がそれに対して抗議して来たりして、フェイトさんたちに変な疑いがかかったりしないかな？」
スバルとシャリオが不安そうに聞く。
どうやら彼女たちの耳にはあの噂がまだ入ってきていない様子で、ルキノからの情報に驚いていた。
「うん。恥ずかしい話だけど、ちょっかいを出したんだけど、逆に防衛軍側におちょくられたらしいよ」
「・・・・」
「仕掛けた局員は、憤慨していたらしいけど、グリフィス君曰く『これは管理局側の自業自得』だって言っていたよ」
「防衛軍側からは、特に抗議らしいモノは寄せられていないの？」
「うん。今の所はないみたい」
「それって、管理局は抗議するまでに値しない存在って事なのかな？」
管理局の将来に一抹の不安を抱く三人であった。

ここで視点は防衛軍側へと移る。
土星圏を抜けて通常航行で一路、地球を目指す、ヤマト、まほろば、雪風・改の三隻。
長い船旅の中で、漸くサーシアもティアナに慣れてきた頃、

フェイトは雪とティアナにおむつ交換を教授したりしていた。
雪は近い将来の為、ティアナはようやく慣れてきたサーシアともっと親睦を深めたいためにこうして雪と共に子守のスキルを上げているのだ。
そして、その他にも・・・・
バキューン
バキューン
ティアナの姿はトレーニングルームに隣接する射撃場にあった。
守は地球に帰還後、防衛軍に復隊するので、勘を取り戻すためにこうしてトレーニングは欠かせないのだが、射撃スキルも取り戻すために射撃場へと赴いたのだが、ティアナも射撃と言う事から興味が湧いたのか古代に頼み込んで守と共に射撃場へと足を踏み入れたのだ。
当初、古代はどうしたものかと直ぐには承諾できなかったが守からも頼まれて、渋々と言った感じで許可を出した。
守にエスコートされながら射撃場へと行くティアナをフェイトは羨ましそうな目で見ていた。
この世界に来て初めて・・・・いや、生涯初めて手に持った質量兵器・・・・。
防衛軍が正式採用しているレーザー銃・・・・コスモガン・・・・。
出力設定を調節すれば、相手を殺す事無く、相手を気絶させることが出来る質量兵器・・・・。
ティアナに貸し出されたのは、最低出力しか出せない訓練用のコスモガンであった。
(まぁ、当然の処置よね)
と、渡されたのが訓練用であったが、今の自分の立場上から当然の処置だと納得した・・と言うか、この待遇でさえ、異例中の異例なのだから、文句は言えない。
そして、ティアナは手の中にあるコスモガンをジッと見つめる。
(この銃が管理局・・管理世界に出回れば、管理局の人員不足は解消されるかもしれないけど、犯罪の数も増えるかもしれない諸刃の剣ね・・・・銃だけど・・・・最もそれ以前に管理局がこの銃の使用を認める訳

がないわね）
コスモガンの銃口を的に向け、ティアナは引き金を引いた。
管理世界でも横行している質量兵器と言えば、地球でも馴染みの火薬を使用する質量兵器が主流であり、今、ティアナが持っているレーザーを放つ銃なんてＳＦ映画か漫画・アニメの世界の産物だと思っていたティアナにはある意味衝撃的な出会いであった。
火薬の銃と違って撃つ際の反動は無いがクロスファイヤーシュートやシューター等の誘導魔法弾と違い、飛ぶのは一発ずつで銃口から向かうのは一直線上のみ・・・。
いかに的へ上手く当てるのかは全て射撃者の腕次第と言う訳だ。
ある程度、的に向かって射撃をした後、射撃場を見渡すと隣のハンガーに居た守の姿がない。
「あれ？古代さん？」
ティアナが声をかけながら、射撃場を歩くと、
バキューン
バキューン
バリバリ
バキューン
コスモガンの銃声の他にフェイトの電撃の様な音が聞こえてきた。
それは、射撃場と隣接している部屋から聞こえてきた。
ティアナがその部屋を覗いてみると、守が訓練用のコスモガン片手にガジェットの様にフワフワと宙に浮く球体にコスモガンを撃っている。
すると、別の球体からは守に向けて電撃が放たれる。
守はその電撃を交わしながら、先程、自分に電撃を放ってきた球体をコスモガンで撃つ。
そんな事の繰り返しであったが、ティアナは之がアグレッサー（仮想敵）を使っての実戦形式の訓練なのだと言う事が直ぐに分かった。
それから暫くして、その部屋から出てきた守に訊ねるとやはりティアナの予想通りの回答が出た。
この部屋はティアナの予想通り、アグレッサー（仮想敵）を使って

の実戦形式の訓練を行う部屋であり、幾つかのターゲット兼攻撃してくる球体を設定された時間内に球体から放たれる攻撃を回避しつつ球体に攻撃をすると言う内容だった。
守から話を聞いたティアナは早速、チャレンジしたが、まだコスモガンに慣れないためか、設定時間前に球体から放たれた電撃を浴びてゲームオーバーとなった。
しかし、ここでそう簡単に諦めるティアナではなく、この日以降、ヤマトが地球へ帰る日まで、ティアナの姿は最低一日に一回はこの射撃場で見かける事となった。

木星圏へと辿り着いたヤマト、まほろば、雪風・改の一行は続いて火星までのワープを行う事にした。
「防衛軍司令部より、火星までのワープ許可が出ました！」
「では、十分後に火星圏までのワープを行う。総員、ワープ準備」
「了解、総員ワープ準備!!」
良馬の指示を受け、永倉や井上が艦のチェックを命じる。
それは、ヤマトでも同様のチェックが行われており、フェイトとティアナは慣れた手つきで固定椅子に座りベルトを締めた。
「それにしても、地球や月軌道ならわかりますが、何故火星に行くんでしょうか？」
ヤマトや　まほろば　の性能なら、太陽系はもはや庭のようなもの。一気に地球圏に戻ってもおかしくないのだが、火星に何の用があるのか、疑問に思うのは当然だ。
「ソレハ、デスネ」
と、ティアナの疑問に答えたのは、ヤマトでフェイトとティアナの世話役となったバトライザーの兄弟機であるアナライザーであった。
初めの頃はその存在やあまりにロボット離れした言動に度肝を抜かれていたフェイトたちだが、いつの間にか日常風景として受け入れていた。
慣れと言うのは恐ろしいモノである。
「火星ハ、すたーしあサンノ妹サンガ、オ亡クナリニナッタカラデス。

遥カ彼方いすかんだるカラ、文字ドオリ命懸けデ、何ノ打算モナク、波動えんじん等ノ設計図ヲ、地球ニモタラシテ下サイマシタ・・・ソノ方ノオ名前モ、さーしあサントオッシャルノデス」
流石に最後はアナライザーも声のトーンを落とした。
「そうだったんだ・・・」
アナライザーから訳を聞き、わざわざ火星に立ち寄る理由も十分理解できる。
「ワープ三分前・・・」
古代の艦内放送の声が流れ、彼女たちは無言になった。
そして、十分後、ヤマト、まほろば、雪風・改の前方には火星の赤茶けた大地が接近していた。
「目標上空まで、あと五分です」
距離観測をしていた星名が告げる。
「それじゃあ、副長。少しの間、艦を頼むよ」
「はい」
良馬は暫しの間、艦の指揮権を副長の新見に任せて火星へと向かった。
「コスモタイガー、発進せよ」
良馬が艦橋から出ていったのを見送ると新見は上空警戒のため、両艦からコスモタイガーの発進指示を出す。
ほどなく両艦から上陸艇が一機ずつ発進し、コスモタイガーを従えるように火星の地表へと向かう。
まほろば　の上陸艇には良馬と坂井が乗り、ヤマトの上陸艇には古代兄弟と森雪が乗っている。
「地表の映像・出ます」
ギンガがメインスクリーンに、地上からの映像を展開した。
赤茶けた大地にやや傾いてそそり立つ脱出カプセルと、遠くには宇宙船の残骸。
そして、カプセルの傍らに２ｍ程の盛り土と墓石が建てられ、墓石には、
『地球の全生命の恩人ここに眠る』

と、刻まれていた。
サーシアの墓・・・それは、ヤマトがイスカンダルから帰還した後、古代と島の告白の後、所在が判明した。
当時はサーシアの遺体を地球の研究者から守るために火星の地に彼女を葬った事を黙っていたが、イスカンダルから帰還後、二人は藤堂に火星での出来事を話した。
当初、二人は重い処分を覚悟したが、藤堂は二人の思いを組むのと同時に、当時の地球ならば、サーシアの遺体を研究用の検体にする事は明らかであったため、二人には厳重注意だけで済ませた。
その後、サーシアの墓の所在は正式に発表され、ちゃんとした墓地に整備された。
ヤマト、まほろばの殆どの乗組員がその場に起立する。
ヤマトの展望室にはフェイトとティアナ、佐渡、アナライザーが立ち、メインモニターに見入っていた。
守の娘のサーシアとユリーシャはそれぞれ、フェイト、ティアナの腕に抱かれている。
墓前に雪が花を供えると、一同は頭を垂れる。
同時にヤマト、まほろば　の両艦のクルーも一斉に黙祷。
サーシアとユリーシャを抱いているフェイトとティアナは静かに目を閉じ、故人に黙祷を捧げている。
そして、いつもは無邪気なサーシアとユリーシャも、周囲のただならぬ雰囲気を察したか否か神妙な表情でモニターに映る自分たちの叔母の墓に見入っていた。
（こういう人たちが世の中に本当にいたんだ・・・）
何のメリットもないだろう事に命懸けで取り組んだイスカンダルの王族姉妹・・・。
（英雄と言う称号はこういう人たちにこそ相応しい称号よね）
自分たち、旧機動六課のメンバーはミッドチルダを守った英雄たちと賞賛されているが、この姉妹の壮絶な「実績」はスケールが違い過ぎてとても比べようがないし、イスカンダル王族姉妹の前では、あの三提督でさえ、ギリギリのラインではないかと、フェイトたちは心底

そう思った。
フェイトたちを乗せたヤマト一行が地球に到着するのはもう間もなくであった・・・・。

六十四話　もう一つの地球

火星でスターシアの妹のサーシアの墓参りをし、赤い大地の星、火星を後にしたヤマト、まほろば、雪風・改の一行・・・・。
地球まで後もう少しだ・・・・。
そんな中、フェイトとティアナはヤマトのゲストルームにて、今日もスターシアと守の娘であるサーシアとユリーシャの子守を行っていた。
フェイトたちが子守をしていると、
「マスター・・・・」
フェイトのデバイスであるバルディッシュがフェイトに話しかけた。
「何？バルディッシュ」
「実は・・・・」
バルディッシュはフェイトに語り掛ける。
「それ本当!?バルディッシュ!?」
バルディッシュの言葉を聞き、フェイトは思わず声をあげる。
「はい。イスカンダルでお目にかかったスターシア陛下ですが、魔力反応がありました。ランクはSないしオーバーSクラス・・・・間違いかと思い、ずっと黙っておりました。申し訳ありません。そして、サーシア王女とユリーシャ王女からもそれとなく魔力を感じます」
「そう、やっぱり・・・・」
フェイトも、スターシアから発せられていた神々しいオーラに違和感を感じていたのだが、それが裏付けられたことを認識した。
「ティアナはどう思う？スターシア陛下や皇女殿下たちが魔力保有者であることを管理局に報告すべきだと思う？」
「いえ、ジュラさん同様、私は、スターシア陛下については報告すべきではないと思います。勿論サーシア王女、ユリーシャ王女に関しても同様です。今回、地球防衛軍と行動を共にして分かりました。スターシア陛下がSクラスの魔力保持者だと知ると管理局は必ず、イスカン

ダルへ赴き、スターシア陛下を管理局に勧誘する筈です。それどころか、イスカンダルの技術をロストロギア認定するでしょう・・・実際にイスカンダルにはあのダイヤを始めとする希少な鉱物資源がありますから・・・・」
「うん・・・管理局なら、そうするだろうね」
「でも、私から見たスターシア陛下は不屈の信念を持っている方です。管理局の勧誘をそう簡単に乗るとは思えませんし、管理局もそう簡単に諦めるとは思えません。となると、管理局はイスカンダルの技術と共にスターシア陛下を強引にミッドへ拉致する可能性もあります」
「・・・・」
ティアナの言うスターシアの拉致・・・・。
フェイト自身はティアナの言うその言葉を否定は出来なかった。
「もし、管理局がスターシア陛下を強引にイスカンダルから拉致したら・・・・」
ティアナはそこまで言って言葉を詰まらせた。
「ティアナの言いたい事は分かるよ」
フェイトはティアナが何を言おうとしたのか察した。
再建途中にも関わらず、イスカンダルへと赴いた地球防衛軍。
新天地を目指さなければならないにも関わらず、命を賭けてまでイスカンダルを救おうとしたデスラー総統率いるガミラス帝国。
下手にイスカンダルに手を出せば、自分たち管理局があの暗黒星団帝国の艦隊とガミラス戦役時の地球と同じ末路を辿るのは容易に想像がついた。
「バルディッシュ。スターシア陛下と、サーシア王女、ユリーシャ王女の魔力データは記憶しないでおいてね。イスカンダル星の座標もね」
「そうですね。それがよろしいかと」
「クロス・ミラージュもお願いね」
「承知しました」
バルディッシュもクロス・ミラージュも空気を読んだのか、積極的に同意したため、フェイトとティアナはこの件を封印した。
フェイトとティアナがスターシア、サーシア、ユリーシャの魔力に

ついて、他言無用を貫く姿勢を決めている中、ヤマトの艦内工場で、真田は守に一丁のコスモガンを手渡した。
「これは？」
「お前の銃に決まっているだろう」
「？」
真田は、さも当然という表情で守に言った。
しかし、守は真田の言う事が理解できなかったのか首を傾げている。
「ん？何だ。聞いてなかったのか？一昨年の航海でタイタンに降りた時、お前の弟が雪風の近くで拾ったのさ。そのままあいつが持っていたんだが、今回のイスカンダルへの出撃が決まった時、俺が預かって整備しておいたんだ。こんなこともあろうかと思ってな」
「まったく、お前らは・・・」
守は苦笑しながら真田からコスモガンを受け取った。
現役軍人に戻った以上、作戦行動中はコスモガンの携行が義務付けられているからだ。
射撃場では、そこにあった訓練用のコスモガンを使用していたため、実感が薄かった。
そのため、コスモガンの入ったホルスターを腰に巻いた守は久しぶりの重みに懐かしさを感じた。

宇宙戦艦　まほろば　第一艦橋
「艦長、あと二時間で月軌道です」
「ん、通信長、司令部に連絡だ。地球到着時間は日本時間１９時２０分で宜しいか、とね」
「わかりました」
良馬の指示を受け、ギンガは司令部と到着時刻を調整する。
通常の任務とは異なり、ヤマトにはイスカンダルから帰還した守の他にスターシアの血を引くサーシアとユリーシャが乗っており、到着に際しては藤堂司令長官ら軍高官らが出迎えに立ち会うため、彼らのスケジュール調整も不可欠なのだ。

またそれだけではなく、フェイトとティアナの当面の滞在先の案内も行う必要もある。
守、サーシア、ユリーシャはともかく、フェイトら時空管理局組については、魔法や次元世界等のデリケートな問題も抱えているため、良馬や古代、真田らの幹部は守と相談して彼女たちの身分を、
『イスカンダルに不時着し、保護されていた遭難者』
と言う立場にしておくつもりだ。
そして、その件に関しては、フェイトたちにはこの後で話をして、守と口を合わせる様にしてもらう予定だ。
守、サーシア、ユリーシャの三人に表舞台に立ってもらい、フェイトたちはその陰に隠す形で公には公表しない事にした。
「司令部より回答。港内整理のため、地球到着は２１時にしてもらいたいとの事です」
「分かった。２０時を以って当直任務を解除。総員入港配置とする。全艦に伝えてくれ」
「了解」
良馬の命令を受け、ギンガが艦内に放送をかけた。
地球防衛軍司令部からの命令は　まほろば　だけでなく、ヤマトにも伝わっていた。
「総員に通達。日本時間２０時を以って当直配置を解除。総員入港配置とする。地球到着は日本時間２１時。繰り返す・・・」
相原の声で地球帰還時刻が告げられ、艦内の空気が変わった。
一ヶ月余りの重大任務もようやく終わり、無事に故郷へと戻れたためか、新人たちには緊張の中にも高揚感が漂う。
フェイトとティアナの二人は宛がわれた部屋で荷物の整理をしていた。
最も荷物と言っても、テリオスから着の身着のままで脱出したため、携行してきたのは身分証明書を兼ねた執務官手帳とそれぞれの愛機であるデバイス、あとはヤマト、まほろば　が融通した官給品ぐらいだ。
特に女性特有の物品は、雪一人しか正規の女性乗組員がいないヤマ

トではストックに余裕がないため、女性の乗組員が多数乗っている
まほろば　から　ヤマトへストックを融通したものだ。
「いよいよこっちの世界の地球なんだね」
フェイトは少しウキウキしている様子で言う。
しかし、その反面、不安もあるがティアナの前ではそれを表だって見せてはいない。
「ええ・・・宇宙戦争で地上の様相が激変していると言われていますけど、地表は一体どんな状況なんでしょうね？」
ティアナは第９７管理外世界とは異なるもう一つの「地球」への到着を控え、緊張は隠せないようだ。
「私たち、地球ではどう扱われるんでしょう？」
ティアナが少し不安げに言う。
こちらの地球にも魔法文化はないようだが、ノアの一件で、地球防衛軍サイドは管理局の機密事項を含めた資料も回収して調査しているだろう。
ティアナの不安そうな様子にフェイトも僅かにだが、自身が抱いている不安を表にさらけ出す。
「ノアの犠牲者にもエリオやキャロみたいな子供の局員が少なからずいたからね・・・それに、この世界は私たちの知っている地球同様、十八歳未満の子供が軍や警察等の仕事についたり、関係した教育を受けるのを禁止している。管理局に好印象を持つとは思えないね。ヤマト　や　まほろば　の人たちはともかく、他の地球防衛軍の軍人さんや地球連邦政府の政治家さんたちがどう出るのか。正直わからない・・・」
フェイトの言う通り、人が多く所属している組織ならば、当然一枚岩と言う訳ではない。
それは、自分たちの所属する時空管理局も同じである。
本局と地上本部に別れ、更には本局の〝海〟にも管理世界を広げようと主張する管理世界拡大推進派とそれらの活動を自粛すべきだと主張する穏健派が存在する。
自分たちがこの地球でどのような立場に立たされるのかはまだ

フェイトたちには想像もつかない。
しかし、分かっている事はガミラスや白色彗星帝国との戦争をくぐり抜けてきたこの世界の地球の「実績」を考えるとここの地球が時空管理局の保護や干渉を受け入れるとは到底思えない。
ギンガから聞いた地球連邦の基本方針は、
『地球連邦は他の星の人類を支配しない。そして支配されない』
同盟関係を持つならば、あくまで対等の関係を保つというものだ。
また、管理世界での世界観、「次元世界」についても航海中に良馬や古代、真田に説明する機会があった。
彼らは耳を傾けてくれて、少なからず質問も受けたこともあり、一定の理解は得られたようだが、地球連邦がその世界観を導入する見込みは薄そうだ。
ましてや、管理局の傘下・管理世界入りになるなんて絶対にあり得ない。
「君たちの世界観は理解できるし、その考え方も尊重する。しかし、我々がそれに同調することは全く別問題だ。ましてや君たちの組織や世界に従属する義務は全くない」
というものだった。
フェイトもティアナも予想していた解答なので、別に失望はしなかったが、対等に付き合う事を果たして管理局が承知するだろうか？という懸念が残った。
自分たちよりも優れた技術をもつ世界が管理局の傘下に入らない事を魔導師至上主義の局員や管理世界拡大推進派の局員がそう簡単に認め、諦めるだろうか？
しかし、管理局が強引にこれから向かう地球を無理矢理従属させようとすれば、地球側は管理局を侵略者と見なして頑強に抵抗されるだろう。
少なくとも、艦船の戦闘力は段違いで管理局の艦船ではあっという間に潰滅してしまうだろう。
白兵戦でも、白色彗星帝国の都市要塞内部の戦闘のように、地球防衛軍の兵士が死兵化して突っ込んで来たら、魔法頼みの管理局武装隊

員では抑えきれず、たちまち屍山血河が築かれよう。
地上戦において戦うのは歩兵だけではなく、自分の知る第９７管理外世界でも普通にある戦車と言う地上兵器最強の戦闘車両も当然これから向かうもう一つの地球にも存在する筈だ。
しかし、管理局にはその様な戦闘車両は正式に採用されていない。
精々、地上戦における指揮を執る為の指揮車両と暴動鎮圧用の放水車両ぐらいだ。
それに個人装備の銃火器も、ライフルはおろか、拳銃までパルスレーザーという高エネルギー光学兵器が主力だという。
しかも驚いたことに、彼らが装備しているハンドガンは９０年近く前に制式採用されたものだということ。
もちろん改良が重ねられているだろうが、これは純粋にこの世界の地球の技術によるもの。
イスカンダルやガミラスから齎されたオーバーテクノロジーに目が奪われがちだが、図面の形だけで提供された波動エンジンを短期間で実体化し、使いこなしてみせたのは、紛れも無くこの世界の地球の科学・工業力に裏打ちされたものだ。
それに波動エンジンが齎される前の防衛軍艦艇でさえ、管理局の次元航行艦と十分に渡り合える強さを持っている。
(進歩した科学は魔法と同じだと言うけど、管理局はヤマトが登場する前の地球防衛軍にも敵わなかったんじゃないかなぁ・・・？)
(喧嘩しても勝てない相手なら、関わらないようにするか、仲良くするしかないわよねぇ・・・もし、管理局と地球防衛軍が戦争する羽目になったら、私、ギンガさんみたく、この地球に亡命しようかしら・・・？いや、マジで・・・)
フェイトとティアナはしみじみと思うのだった。
その時、部屋のドアがノックされる。
「森です。少し時間を貰えるかしら？」
「え、ええ・・どうぞ・・・」
フェイトが入室の許可を出すと雪が部屋に入って来た。
雪の話の内容は、自分たち時空管理局員の扱いについての提案だっ

た。
時空管理局という組織形態や魔法という力の存在は現在の地球連邦や地球防衛軍にとってもデリケートな問題で、市民に公表できるものではないため、表向きは宇宙で遭難してイスカンダルに不時着し、スターシアに保護されていたことにするのはどうか、というものだ。
守は既にその件に関しては、了承済みとの事だ。
スターシア絡みの人物なら、肩身が狭い思いをすることもないだろうという事らしい。
少し考えて、その申し入れを受けたフェイトとティアナは、お礼を言うべく、その足で守がいる部屋へと向かい、彼に礼を述べた。

防衛軍軍人の官舎の一角、この世界におけるギンガの実家である中嶋家。
その家の台所にはこの家の主である中嶋源三郎の妻、中嶋加奈江と良馬たち月村家と中嶋家が後見人を務める少女、高町紅葉が夕食の準備をしていた。
そして、リビングのソファではギンガの義妹であり、源三郎と加奈江の娘である桜花がテレビを見ていた。
「ねぇ、母さん」
「ん？どうしたの？」
テレビを見入っていた桜花が台所に居る母に声をかけてきた。
「今日、義姉さんたち地球に帰ってくるんでしょう？」
「ええ、父さんが言うには今日の夜に帰ってくるらしいわよ」
「そっか・・・」
ギンガが帰ってくると言う事実に桜花は嬉しそうだ。
紅葉はソファーの上で読書をしていたが、桜花の見ていたテレビの音が耳に入った。
テレビでは、今回のヤマト、まほろば　のイスカンダルへの航海の事で、ガミラスと共闘した件について軍事ジャーナリストや評論家が意見を交わしていた。
今回のイスカンダルへの航海・・・初めは新人達の訓練航海の予定

が、なし崩し的にイスカンダルへの救援任務となり、そこで、何とガミラス軍と共闘して未知の敵艦隊を破り、イスカンダルを救ったと言う。
　世論調査では、ガミラスとの共闘には、賛否両論というよりも否定的な見方が多く、紅葉自身もガミラスを許す事はまだできていないが、何時までもガミラスを憎んでいても家族が還ってくるわけではなく、イスカンダルの救援という目的は同じなのだから、個人的感情とは切り離そうと努力している。
　ただ、今回の件で、紅葉は何となくだがこれから自分の周囲が俄かに忙しくなるという予感を覚えていた。
　胸元に下がるネックレスの先にある、亡き母から守り石として受け継いだ黒真珠の様な石に視線を向け、呟く。
「これから忙しくなりそうね。ルシフェリオン・・・・」
（それは、レディーの勘か？）
　紅葉の脳裏に渋い男性の声が聞こえた。
（ええ・・・）
　紅葉も心の中で語り掛ける様に答えた。
　その後、夜の21時過ぎに、中嶋家に連絡が入り、ギンガは今日、家には戻れないと言う連絡を受けた時、桜花は物凄くしょんぼりしていた。

　ヤマト、まほろば、雪風・改の三隻は月軌道を通過し、地球圏に戻った。
「あ、あれは・・・・？」
「一体・・・・？」
　荷造りを終えたフェイトとティアナは、スクリーンに映し出された光景に我が目を疑ったが、それに答えたのはアナライザーだった。
「アレハ、彗星帝国ノ本拠地・・都市要塞ノ下部デスヨ。フェイトサン、ティアナサン」
　フェイトたちが見たのは虚空に浮かぶ巨大なお椀状の物体・・・・都市帝国の基礎を成していた小惑星部分だった。

ヤマト、まほろば　の決死隊の突入で動力炉を破壊され、巨大戦艦が離脱した後も、この小惑星は破壊されることなく、大量の艦船等の残骸や兵士、都市要塞に住んでいた大勢の住民たちの遺骸と共に月軌道の近くを公転し始めていた。
岩盤は極めて堅固で、掘削し破壊するにも手間がかかるため、地球防衛軍は巨体を応用した防御要塞やドック等への改築を模索していると言う。
もし、これが成功したら、地球は巨大な移動要塞を手に入れる事となる。
しかし、それが実現する目途は未だに立っていない。
だが、地球に人類が生きている限り、それはいつか実現するだろう。
「あれが、白色彗星帝国の本拠地だったんだ・・・・」
フェイトが宇宙を漂うお椀を見て呟き、
「・・・・」
ティアナは言葉を失っていた。
(古代さんや真田さん、良馬さんたちは、本当にあの中に突っ込んでいったんだ（のね）・・・・)
(リニスはあそこで沢山の人を殺した・・・・あのリニスが・・・・でも、そうしないと自分達が殺されていたのよね・・・・)
突入部隊の内、生還率はほんの一割程・・・・。
ヤマトの戦闘機隊と空間騎兵隊は全滅という、凄惨極まる死闘にも関わらず、白色彗星帝国を止められなかった。
残党とはいえ、白色彗星帝国軍の攻撃を肌身で体験したフェイトたちは全身が総毛立つのを覚えた。
私たちが同じ立場になった時・・・・ミッドや管理局が管理する世界が何処かの侵略者に侵略されたら、自分たちは地球防衛軍の宇宙戦士達のように膝を屈する事なく戦えるだろうか？
まぁ、最初の内は、管理局の勝利を疑わずに戦うかもしれないが、いざ戦って見て相手が防衛軍や彗星帝国、ガミラス、暗黒星団帝国の様な強力な艦艇を有して居たら、管理局の次元航行艦隊はあっという間に壊滅してしまう。

それでも、管理局は諦めずに尚も戦い続けるだろうか？
・・・いや、無理だ・時空管理局はここまでの事態は全く想定していない。
格上の敵相手に戦った事がない管理局が殺し殺される覚悟なんか持っているわけがない。
時空管理局・特に〝海〟は、次元世界の法と秩序の守護者と自ら誇ってきたが、この世界に関わるのなら、自分たちは新参の弱小勢力に過ぎないと自覚し、一から学ぶことを始めないといずれは数多の管理世界を巻き込んで崩壊してしまう。
フェイトたちは肝が冷えていくのをはっきりと感じていた。

地球に近づくにつれ、モニターに夜の日本の地表の様子が無数の明かりの数となって見えるのだが、
「アナライザー、地上は何であんなに暗いの？」
フェイトはアナライザーに地球の地表について訊ねる。
フェイトが疑問に思った訳は、かつて彼女は何度も大気圏上に停泊していたアースラから見た、第９７管理外世界の夜の地上はもっともっと明るかったためであった。
それにもかかわらず、同じく地球を名乗るこの星は地球連邦の首都だという東京地区こそ一目でわかるが、他の地区の明かりは比べものにならないほど少ない。
ギンガによれば、地球は今、緑と海は回復しつつあるもののまだ遊星爆弾によるクレーターやクレーター湖沼が方々に見られるという。
ガミラスとの戦争から再建を果たした地球に連戦する形で今度は彗星帝国との戦争が始まり、地球は再び廃墟の星と成り果てしまった。
初の核被爆国で、地震大国でもある日本は対策をとるのが早く、他の地域より相対的に人的損耗率が少なかったとはいえ、第９７管理外世界と比べ、ここまで人口が少なくなってしまったのか？
フェイトたちは、もう一言も発することができなかった。
そこに、

「本艦は３０分後に大気圏に突入する。総員、最終チェックにかかれ!!総員、入港準備!!」
と、艦長代理である古代の声が響いた。
そして、三十分後、ヤマト、まほろば、雪風・改は地球大気圏へと突入した。
「誘導信号受信。データ転送。星名君、確認を・・・」
「了解しました・・・確認完了、異常ありません」
「周辺空域、異常なし」
照明を落とした艦橋内に確認の声が響く。
此処からは地上の司令部管制の誘導で基地に降りるのだ。
まほろば　同様、ヤマトも入港体制をとった。
「着水三分前。総員、対ショック防御」
相原の声が流れる中、乗組員はそれぞれの席やジャンプシートに腰掛けシートベルトを装着する。
フェイト、ティアナがジャンプシートに腰掛けシートベルトを装着する。
サーシアとユリーシャは乳母車へと乗せて、その乳母車を動かないようにベルトで固定する。
「着水」
舵を握る島の声が響いて数秒の後、ヤマトの巨体にズシン、ズシンと衝撃が走り、ほどなく止む。
「着水完了。各部、浸水の有無を確認せよ」
真田の声が響いた。
「島君もなかなかやるな」
守が弟の親友の腕前に感心したように言う。
気象と海面状況は薄雲ながら風は弱く、波浪注意報も出ておらず、ヤマトは順調に地下軍港の入口に向け、約１５ノットの速力で海面を航行した。
フェイトの前にあるモニターには、ヤマトの上空を越えて近くに着水する　まほろば　の映像が映った。

星の海でもそうだが、やはりヤマトは元々は海上艦と言うことで、水の海でもその姿は様になっていた。
勿論、ヤマトをベースに造られた　まほろば　も水の海が似合う。
海上を進んでいくヤマト、まほろば　を見て、これが戦う船の姿なのだと、改めて実感するフェイトとティアナ。
二人の今までの認識では、戦う船と言えば管理局の次元航行艦と巡航艦：そして、あの『聖王のゆりかご』だった。
しかし、『聖王のゆりかご』はあくまでイレギュラーで、それを稼動状態にしたスカリエッティは、そのノウハウを未だに頑として明かしていない。
一連の次元航行艦撃沈事件続発で焦る時空管理局、特に〝海〟は、スカリエッティと共に軌道刑務所に収監されているウーノ、トーレ、クアットロら初期に稼動開始したナンバーズ（クアットロと同時期に稼動開始したチンクや、セイン以降の中～後期稼動開始組はゆりかごの整備に全く関わっていない）に、『聖王のゆりかご』のノウハウを提供すれば刑期を大幅に短縮する等の司法取引を持ち掛けているが、彼女たちは嘲笑するだけで、管理局は未だに『聖王のゆりかご』については何も得られずにいる。
また、聖王教会に『聖王のゆりかご』の建造資料の提出を求めているが、何分、古代ベルカの遺産とも言うべき代物なので、聖王教会にも資料が少なく、しかも当時のベルカは大きな戦乱の真っ最中だったため、『聖王のゆりかご』の設計図などはその戦乱で消失してしまっており、詳しい物は残ってはいなかった。
フェイトは、『聖王のゆりかご』は確かに巨大な船だったが、防御力があまりにも貧弱で、この世界の艦船の火力の前では紙切れ同然で容易に破壊されてしまうだろうと読んでいた。
古くてもあのシャンブロウの様な物凄い技術で作られた舟ならば、話は違って来るだろうが、あの方舟の様な舟を管理局が作るのは一体どれくらいの時間がかかるか見当もつかない。
（――『聖王のゆりかご』がどんなに強力でも、結局のところ、私たちの世界で大昔に設計された艦。どんなに大きくても老いた鯨は若い

鯱の群れからは逃げ延びることはできない・・・先々を考えるなら、地球防衛軍から技術供与してもらうのがベターよね。でも、子供を危険な任務に投入する組織だと警戒されているだろうから、それは難しいわね）

ティアナは、『聖王のゆりかご』の技術を得ようと奔走している〝海〟の上層部を思い浮かべ、内心で冷笑しながらも、地球防衛軍も容易にタキオン機関技術を管理局に提供してはくれないだろうと、溜息をついた。

管理局が防衛軍の様に専守防衛を掲げるような組織にならない事には防衛軍からのタキオン技術の提供はなされないだろうと予見して・・・・。

ズシンと軽く突き上げるような衝撃の後、まほろば　は地球の海へと着水した。

「着水完了」

「艦体に異状なし！」

星名の報告を皮切りに、艦橋員が各々の入港準備の作業に入り、副長の新見がそれを統括する。

まほろば、ヤマトは波を掻き分けながら海面を進みやがて、防衛軍の軍港へと入港し着岸した。

雪風・改は近くの防衛軍施設の空港へと着陸した。

「接舷完了」

「艦内電源、地上出力に切換確認。機関室、メインエンジン停止作業に移れ」

着岸した　まほろば、ヤマトは火の入り続けたエンジンを止めてようやくその身を休める事が出来た。

左舷搭乗口下からボーディングタラップが迫り出し、地上に達するや行き交う作業用車両に混じって、白いリムジンタイプの防衛軍公用車がタラップ下に着く。

公用車の後部席にいた人物が降りるのと、良馬がタラップから地上に降り立つのはほぼ同時だった。

良馬を出迎えた人物それは他ならぬ、地球防衛軍長官、藤堂平九郎

その人であった。
「長官、ただいま戻りました」
「ご苦労だった」
短い会話を交わし、藤堂と共にヤマトの下へと赴く。
ヤマトからも乗降タラップが地上に伸びている。
その下では西郷以下の軍幹部が勢揃いしている。
ヤマトの上甲板や主砲塔上には、作業中以外の乗組員たちが登舷礼式のため並び、港内に停泊している他の艦艇にも登舷礼式のため「総員上甲板」がかけられていた。
やがて、
搭乗口に古代守が立ち、挙手の礼をする。
タラップを降りる守に続き、眠っているサーシアを腕に抱く雪とユリーシャを抱く古代が守の後に続いた。
守は藤堂の前に立ち、改めて敬礼する。
「古代守、只今帰還しました」
「うむ。待っていたよ、古代」
「はっ」
「長旅で流石に疲れただろう。今はゆっくり鋭気を養ってくれ」
「はい」
藤堂が自ら先導し、迎えの車両に守を案内し、その後に古代と雪が続く。
藤堂たちがリムジンに乗り込むと、車は発車した。
リムジンを見送った後、良馬は　まほろば　に戻った。
そして、総員下艦の前に艦長訓示を行った。
「今次航海は、新人諸君の練習を目的としていたが、突然の予定変更でイスカンダル救援に変わり、大マゼラン雲まで往復三十万光年に及ぶ遠征と、未知の敵・暗黒星団帝国軍との交戦やガミラス軍との共闘という、極めて異例で厳しい任務の中、イスカンダル星防衛に成功し、スターシア陛下、我らが戦友・古代守先輩、そしてサーシア、ユリーシャ両王女殿下を御救い出来、尚かつ本艦及びヤマトともに全員が生還したことは最大の成果だ。本艦はこれより修繕作業に入り、諸君はしば

しの休暇となるが、新たな脅威の存在が明らかになった以上、有事となればすぐ出撃できるよう、心身を整えてもらいたい以上だ」
その後、乗組員は荷物を纏め順次下艦していった。
乗員が下艦していく中、ドックには多数の救護車がやって来る。
乗員の下艦が終了すると防衛軍の公用車ではない、黒塗りのリムジンがドックへやって来た。
救護車には今回の航海で負傷した戦士たちが乗り、ドックに来た黒塗りのリムジンの運転席には月村家のメイドのノエルが居り、助手席には良馬、後部座席にはフェイト、ティアナ、ギンガ、リニスが乗り込んだ。
そして車は良馬の実家である海鳴の街にある月村家へと向かった。
夜のとばりが落ちた海鳴の街・・・。
フェイト自身も夜の海鳴の街をこれまで何度も見てきたが、今自分が見ている海鳴の街はかつて、自分が住み、見慣れてきた海鳴の街とは異なる。
自分が知る海鳴の街と違い、目の前に広がる海鳴の街は所々に夜の闇が覆っている。
それは全て戦災によるモノなのだと、直ぐにフェイトには分かった。
やがて、車は月村家の屋敷へと到着した。
フェイトの目の前には、自分が知る海鳴の親友が住んでいる屋敷と寸分たがわぬ姿の屋敷があった。
「おっきい・・・」
ティアナは初めて見る月村の屋敷を見て圧倒されていた。
「どうぞ」
良馬が玄関のドアを開けると、
「ようこそ、月村家へ」
と、月村家当主の忍がフェイトとティアナを出迎えた。
「っ!?」
忍の姿を見て、フェイトは驚愕の表情をした。
(すずかのお姉さん!?でも、この世界の地球って、私たちの知る地球か

ら確か２００年後の筈なのに何でこの人は今ここに!?）
　フェイトとしては、親友の姉が２００年先の未来に存在している事に物凄く疑問を感じていたが、
（あっ、でも、私やフェリシアみたいに、すずかか忍さんの子孫って言う線もあるかも・・・）
　と、目の前に居る親友の姉そっくりの人物が親友かその姉の子孫だと思っていたのだが、
「初めまして。月村家、当主の月村　忍です」
　と、自己紹介したら、フェイトは再び混乱の渦の中へと飲まれた。
（忍？しのぶ？シノブ？な、何で、目の前にいるこの人は名前までもがすずかのお姉さんと同じ名前なの!?何故なの!?それに車を運転して来たあのメイドさんもすずかの家で見たメイドさんとそっくりだし・・・）
　フェイトが混乱している中、
「は、初めまして。ティアナ・ランスターです。この度はお世話になります」
　と、ティアナが忍に自己紹介をしていたため、フェイトも、
「初めまして。フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです。ランスター補佐官共々お世話になります」
　と、慌てて忍に自己紹介をした。
「フェイト・・・」
　忍はフェイトの名前を聞き、何か思いが有るような顔でフェイトの名前を呟いた。
「あの・何か？」
　フェイトは、恐る恐る忍に訊ねる。
「あ、いえ、何でもないわ。それより、長旅で色々疲れたでしょう？お夕食とお部屋の準備は整っているわ。どうぞ、ゆっくりしていってね。ギンガさんも今日は家に泊まっていく？」
　と、忍はまずフェイトとティアナに持て成す用意が整っている事を伝え、次にギンガに今日、家（月村家）に泊まっていくかを訊ねる。
「えっと・・・はい・・・お世話になります」

ギンガは良馬の事をチラッと見て、今日は家に帰らず、此処（月村家）に泊まっていく事を忍に伝える。
「それじゃあまずは、お部屋へ案内するわね。ギンガさんはいつもの部屋を使って頂戴。泊まる用意は出来ているから」
「はい」
と、忍はフェイトたちを部屋へと案内する。
良馬も自分の部屋へと戻り、着替えを行った。
そしてギンガも着替えの為、月村家で用意されている部屋へと向かった。
「此処が二人の為に用意したお部屋よ。好きに使って頂戴ね」
外見の屋敷の姿同様、用意された客室は一流ホテル並に広く豪華だった。
「着替えとかも一応、用意したけど、今度買に行った方が良いわね。取りあえず今日はこれで我慢してね」
と、用意されたのは上質な布で作られた寝間着はフリルの付いたネグリジェ、下着も同様のフリルが付いている可愛らしい下着だ。
着替えの服も寝間着同様、上質な布で作られたレディース服の数々・・・・。
「・・・・」
用意された服を見て、唖然とする二人。
（あ、あの・・フェイトさん・・・・この服、本当に着ても良いんですか？私にはちょっと・・・・）
（だ、ダメだよ、ティアナ。折角用意して貰ったんだから、着ないと失礼に当たるよ）
（で、でも・・・・）
と、それなりにドレスなどを着こなしたことがあるフェイトと違って、ティアナは今までの人生の中で無縁だった高級なレディース服の前にタジタジ。
（で、でも、やっぱり私には分不相応ですよ）
（そんな事ないよ。ティアナだってきっと似合うよ）
と、念話でそんなやり取りをしていると、

「決めかねている様なら、私がコーディネートしてあげよっか？」
忍が中々着替えないフェイトとティアナの行動を勘違いしたらしく、服を選んであげると言う。
「あ、いえ・・・・」
「決めかねていたとかじゃなくて・・・・」
「うふふふ、良いの良いの、お姉さんに任せなさい」
と、何故か手の動きが怪しい忍がフェイトとティアナに迫り来る。
「あ、あの・・・・」
「忍さん？」
「うふふふ・・・・」
「「アッ――――――!!」」

「むっ？何だ？」
「フェイトさん・ティアナ・・・・忍さんの餌食になったわね・・・・」
良馬は突如、聞こえてきた二人の女性の悲鳴に首を傾げるが、ギンガの方は思い当たる節があるのか床に視線を向けて、二人に「ご愁傷様」と小さく呟いた。
着替え終わり、食堂に来たフェイトとティアナは魂が抜けた様なボーっとした様子だった。
着ている服はとても良く似合うのだが、その表情はややミスマッチであった。
「あ、あの・・フェイトさん、ティアナ大丈夫？」
ギンガが声をかけると、
「ひゃい!!」
「へぁっ!?」
「えっと・・大丈夫？二人とも？」
「え、ええ・・・・」
「大丈夫です」
フェイトとティアナは何とか再起動をはたした。
それから夕食後、皆は思い思いの行動を取った。
フェイトとティアナはお風呂に入ろうと屋敷の廊下を歩いていた。

「それにしても、大きな屋敷ですね・・・月村艦長のご実家」
ティアナが辺りを見回しながら言う。
「そ、そうだね」
フェイトはやはり、この世界の忍と自分の知る親友の姉と面影、名前が重なる事が気になっていた。
そんな二人が通路の一角に差し掛かった時、思わず足を止めて、スッと通路の端にその身を隠した。
二人の視線の先にはギンガと良馬の姿があった。
「あれはギンガと月村艦長・・・？」
「何をしているんでしょうね？」
反射的に隠れてしまったが、何故か二人にはこの行動が正しかったのだと本能がそう告げていた。
フェイトとティアナの視線の先に居る二人は暫しの間、見つめ合っていたのだが、突如・・・
「んっ・・・」
唇を重ね合わせた。
「っ!?」
二人の行為にフェイトとティアナは思わず息を飲んだ。
それから二人は暫くの間、唇を重ね合わせ、舌を絡める濃厚なキスを行っていた。
やがて、互いの唇を離すと、ギンガは頬を赤く染め、とろんとした目つきで良馬を見つめる。
そして、良馬はギンガに何かを耳元で囁くと、ギンガは顔を赤く染めて、小さく頷いた。
ギンガが頷くと、二人は手を繋ぎながら通路を歩いて行った。
勿論手の繋方は互いの指と指を絡め合う俗にいう恋人繋ぎであった。
「あわわわわわ・・・ま、まさか、ギンガと月村艦長が・・・」
「私たち、すごいものを見てしまいましたね・・・」
と、フェイトとティアナも顔を赤く染めていた。
もし、この場にこういった、ゴシップネタが大好きな嘗ての上司兼

親友の豆狸こと、八神はやてとギンガの妹スバル・ナカジマが居たら、良馬とギンガの後をつけていたに違いない。
そして、フェイトもティアナもそれに流されていただろう。
しかし、この場には彼女たちは居ないため、フェイトとティアナの二人は出歯亀行為と言う野暮なマネをする事は無かった。
こうして、様々な思いが交差する夜の中、フェイトたちのもう一つの地球での生活が始まろうとしていた・・・。

六十五話　２００年後の海鳴

フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは、あてがわれた月村家の部屋で目を覚ました。
チラッと隣を見るとティアナはまだベッドの中で眠っている。
布団をはだけながら上半身を起こすと、
「寒っ・・・」
部屋の中の冷たい空気に身を震わせた。
そして、枕元の時計に表示されているデジタル時計の日付を見る。
「そっか、こっちの地球は冬だったんだ・・・」
ミッドの方は初夏であったが、こちらの地球は２２０１年１２月も半ばになっていた。
カーテンの向こうは既に日が昇り始め、明るくなっている。
フェイトは窓際に歩み寄り、カーテンを開けた。
昨日は夜の為、よく見えなかったが、第９７管理外世界はもちろん、管理世界の大都市でも見たことがないデザインの高層建築物が林立している。
中には最上部にクレーンが据え付けられた建設中の高層ビルも見られる。
そして、そのビルの狭間からフェイトも第９７管理外世界で見慣れた雪を被ったコニーデ型の山・富士山が望めた。
ただ、自分の知る第９７管理外世界の富士山とは些か趣を異としている。
フェイトはすぐその理由に思い到った。
（確かガミラスの遊星爆弾が着弾した影響で噴火したんだよね・・・）
ガミラス戦役時、富士山の麓に着弾した遊星爆弾の爆発による振動は富士山直下のマグマを刺激し、山頂や宝永山で噴火を起こした。
噴火は一年余り続き、永年の風雨による侵食の影響で、主峰たる剣が峰の標高が３７７０ｍになっていたが、コスモクリーナーによるリテラフォーミング後に再計測したところ、３７８０ｍに戻っていたの

に加え、大沢崩れも溶岩によって埋め尽くされていた。
ただ、宝永山付近は今も有毒な亜硫酸ガスの噴出が続き、現在も立ち入り禁止が続いているという。
「時代は違うけどここは紛れもなく地球で、日本なんだよね」
窓の外の景色を見ながらフェイトは呟いた。
「うっ・・ううん・・・」
フェイトが窓の外を見ていると、ティアナが身をよじりながら目を開けた。
「あっ、おはよう。ティアナ」
「おはようございます。フェイトさん」
「ティアナ、先にシャワーを浴びて良いよ。眠気覚ましにもなるでしょう?」
「すみません、そうさせてもらいます」
まだ寝ぼけ眼のティアナにフェイトはシャワーを勧めた。
ティアナがシャワーを浴び終えると入れ替わる様にフェイトもシャワーを浴びた。
「うーん・・・やっぱり着慣れないです」
ティアナは自らが身に着けている高級なレディース服に未だに慣れない様子であった。
着替えが終わると、部屋をコンコンと、ノックする音が聞こえ、
「はい」
と、フェイトが応対する。
「ハラオウン様、ランスター様、朝食の準備が出来ました」
と、メイドさん（ノエル）が朝食の用意が出来たと知らせに来てくれた。
「あっ、はい。今行きます」
メイドさんの案内の下、フェイトとティアナは食堂に続く通路を歩いていく。
食堂では、既に良馬とギンガが待っており、二人は昨夜の事を思い出し良馬とギンガの姿を見て僅かに顔を赤らめた。
その証拠に良馬は少しげっそりとしているのだが、ギンガは物凄く

血色が良い顔色をしていた。
　それらの要素から昨夜、二人の間にナニがあったのか容易に想像が出来た。
「どうかなさいましたか？」
　と、その様子を見たメイドさんがフェイトとティアナに声をかけてきた。
「あっ、いえ。何でもありません」
「・・・・」
　慌てて何事もないかのように振舞う二人だった。
　朝食後、良馬は艦を預けてあるドックの技師たちとの打ち合わせの為、ドックへと赴いて行った。
　ギンガはこの世界の実家である中嶋家に戻る訳だが、戻る前にフェイトとティアナに幾つか伝えることがあったので、二人の部屋へと赴いた。
「それで話って、何かな？ギンガ」
「まずは、フェイトさんにコレを預けたくて・・・・」
　と、ギンガはフェイトに一つのペンダントを手渡した。
「コレは？」
　ギンガから手渡されたペンダントは所々、焼け焦げていて変形していた。
「ノアの乗員の遺品です」
「っ!?」
　ギンガから「ノアの乗員の遺品」と聞いて、衝撃を受けるフェイトとティアナ。
「コレを着けていた人は、『ミッドに居る彼女にコレを渡してくれ』と言って私にコレを託した後に亡くなりました。フェイトさんがミッドに戻ったら、この人の大切な人に渡してもらえませんか？」
「うん。分かったよ」
　フェイトはバルディッシュにペンダントを収納した。
「それと、この世界には・・・・」
　ギンガの話を聞き、フェイトとティアナは驚愕の表情を浮かべ、耳

を疑った。
「えっと・・・ギンガ、もう一度言ってくれるかな？」
「はい。この地球の大気にはＡＭＦが含まれています。それも広大で大量の・・・・」
「バルディッシュ、本当？」
　フェイトは念の為、自分の愛機に尋ねる。
「はい。ギンガさんの言う通り、この星の大気中に広くＡＭＦが含まれています。この星に降り立った時から感知していたのですが、ＡＭＦの濃度が屋敷の室内外とも大差ありません。つまり、この地球の大気全体にＡＭＦが分布している可能性が高いのです」
「クロス・ミラージュ、あんたも同じ結論？」
　ティアナもカード状態である自らの愛機に尋ねる。
「私も同じ結論です、マスター。そしてマスターとフェイト執務官の魔力ランクはミッドに居る時と比べ、二、三段程ランクが低下しています」
　更にバルディッシュが補足した。
「まほろば　や　ヤマトの艦内にいる時から違和感は感じていました。地上ほどではありませんが、艦内の循環空気中にもＡＭＦがそれなりに含まれていましたから。しかし、ここの大気自体にＡＭＦが含まれていたとは予想外でした」
「しかし、この地球はフェイトさんが知っている地球同様、魔法文化はありませんし、放射能と違って人体には無害なので生活には一切の支障がありませんので、ご安心下さい」
　ギンガの言う事は最もであり、管理外世界で大っぴらに魔法は使えない。しかも、自分たちは、救助者の身である。
　そんな、自分たちが管理外世界のこの世界で大っぴらに攻撃系の魔法を使用したら、管理局は侵略者だと完全に思われてしまう。
　それに放射能と違い、ＡＭＦ自体に毒性はなく、魔導師も魔法が使えないか制限される事以外は生きていく内で何の支障もない。
　ましてや、ここは管理世界でもないから、クレームなんかつけられないし、つけても無視されるだけだ。

「それにしても、元からこういう空気だったのかな？」
フェイトがこのＡＭＦが充満して居るこの地球の空気に疑問を持った。
少なくとも自分が知る地球には空気中にＡＭＦは充満して居ない。
だからこそ、ジュエルシードの時も闇の書の時もフェイトもなのはもヴォルケンリッターの皆も全力全開で魔法が使えたのだ。
恐らく何らかの環境変化が地球にあり、この様な空気になった筈だ。
そう言う点はギンガもこの地球に来た時に同じ疑問を感じた。
「恐らく、ガミラスとの戦争の影響ではないでしょうか？」
そこで、ギンガが自分なりの見解を述べた。
「戦争って、ガミラスの遊星爆弾？」
「はい。偶然にも放射能と一緒にＡＭＦが散布されたか、あるいはヤマトがイスカンダルから持ち帰った放射能除去装置に放射能を除去する機能と共にＡＭＦを散布する機能があったのかも知れません」
「私はギンガさんの意見に同意します」
「マスター、私も同じです」
と、フェイトとティアナの愛機たちはギンガの意見に賛同した。
フェイトも、ティアナもギンガの意見が、一番可能性が高いことを認めざるを得ない。
「そうだね、ギンガの言うとおりかも知れない。それに、ここは管理世界ではないんだから、ＡＭＦがあろうとなかろうと、此処に住まう人たちには何の問題もないし、管理局がケチをつける権利はないよね」
まぁ、この世界では時空管理局執務官の肩書には何の意味もなく、自分たちは何の権力もない異邦人なのだ。魔法が使えなくても致し方ない。
自分たちにとっての最優先事項はミッドに帰る事なのだから・・・・。
そう思っていたのだが、
「ですか、ギンガさんの魔力ランクはミッドに居た頃と比べると上がっている様に思えますが？」
と、バルディッシュがギンガに質問をして来た。

「えっ!?そうなの!?」
フェイトは思わず声をあげた。
このＡＭＦが充満する地球でどうやって魔力をあげたのか？
何故、あげる必要があったのか気になったからだ。
「えっと・・・その・・・私は身体的問題で・・・」
「あっ・・・」
ギンガは言葉を濁らせたが、ティアナはナカジマ姉妹の正体を知っているため、詳しい事は知らないが、きっとソレが関係しているのだと察した。
ギンガはこれ以上、喋るとボロが出そうなので、実家に帰る事にした。
「そ、それじゃあ、私はこれで・・・」
そそくさした様子で部屋を後にし、この世界の実家である中嶋家へと戻って行くギンガであった。
ギンガのよそよそしい様子にフェイトは首を傾げた。
それと同時にやはり、魔力アップした理由は兎も角、方法は聞きたかった。

ギンガが部屋を出てから少しして、
「極めて微弱ですが、魔力反応を確認。接近してきます」
「え？」
バルディッシュの報告を聞き、二人は一瞬、唖然とするが、
「ギンガさんが忘れ物でも取に来たのかしら？」
と、ティアナは、接近してくる魔力の持ち主がギンガではないかと予測するが、
「いえ、ギンガさんとは別の魔力反応です」
クロス・ミラージュの捕捉を聞き、再び唖然となる。
「まさか、この世界にもギンガやリニス以外の魔導師が!?　ＡＭＦがあるのに？」
ティアナがサーチモードにしたクロス・ミラージュを手に、窓際から下を覗き込む。

「誰なのか解る？クロス・ミラージュ？」
「やってみます」
窓にはレースのカーテンを引いているので、外から見られる心配はない。
それから約２０秒後、
「特定できました。下の歩道・・・この屋敷の前です」
とクロス・ミラージュが言い、カシャ、カシャとシャッター音が鳴る。
クロス・ミラージュが最大望遠で取った画像を見た二人は驚愕の表情になった。
「な、なのは（さん）!?」
画像に映っていたのは、二人にとって親友／師匠の数年前と瓜二つといっていい少女だった。
髪は艶やかな程の黒でヘアスタイルは、なのはの髪をショートカットにした髪型で目はやや猫のような釣り目であったが、その容姿は紛れもなく、高町なのは、その人であった。
なのは似の少女は友人らしきもう一人、別の少女と誰かを待っている様子だったが、その待ち人を見て、フェイトとティアナはまたも驚愕する。
何と、彼女たちの待ち人はギンガだった。
友人と思しき少女がギンガに詰め寄って何かを言っている様子で、ギンガはそれに対し、乾いた笑みを浮かべている。
やがて、三人は屋敷を後にして行った。
「確認してきますっ！」
クロス・ミラージュを手にしたティアナは、脱兎の如く部屋を飛び出していった。
しかし、脱兎の勢いで部屋を飛び出したティアナだったが、着慣れない服のせいか速く走れず、屋敷の外を出た時には、既にギンガたちの姿はバスの中にあった。
「くっ・・・」
ティアナはあと一歩の所で、間に合わなかったのだ。

（髪型に髪の色、瞳の色が違うけど、あの顔立ちは間違いなく、なのはさんだった・・・何より、魔法文化がないこの世界で魔力を持っているだけでも驚きなのに、それこそなのはさんによく似た子が魔力持ちだなんて、偶然でも物凄い一致よね・・・？あっでも、容姿だけなら、まほろば　のフェリシアさんやディアーチェさんも同じか・・・）

「マスター、あの少女の魔力ですが、現状でＢクラス以上です。それに友人と思われる少女にも微弱ですが魔力反応がありました」

「ＡＭＦで魔力が削がれているこの世界でＢクラス以上って、ミッドならＳクラス・・・旧六課の分隊長・副隊長クラス並みなんて、とんでもない資質の持ち主よ!?」

クロス・ミラージュの報告に思わず声をあげるティアナ。

ここが管理世界なら即管理局にスカウト声をかけているかも知れない。

いや、理由を何かしらつけて、強引に管理局に入局させ、従事させている筈だ。

「慢性人手不足」な時空管理局としては喉から手が出る程欲しい人材なのだから・・・。

（でも、ここは管理外世界も同然だし、私たちが干渉する権利はないわよね・・・？）

管理局員の人事評価には、本来の職務での業績に加え、有望な人材獲得の実績も含まれる。

たとえばリンディ・ハラオウン。

クロノの母であり、数々の次元世界で難事件を解決した伝説の次元巡航艦アースラ艦長で、自らも優秀な魔導師・・・。

現在は統括官と言う事で、第一線は退いたが、前線における発言力は未だに失われてはいない。

その理由には、第９７管理外世界におけるＰＴ事件、闇の書の事件を解決させた一端を担い、更にフェイト、なのは、はやて、守護騎士たちという極めて優秀な魔導師を入局させたという実績も含まれているのだ。

その基準に従うのなら、目の前に居たなのはに似たあの少女はまさ

に金の卵。
管理世界なら、あの位の年頃の管理局員は少なくない。
自分も・・・そして、かつて自分の相棒だった少女も先程見たなのは似の少女と同じ年の時には管理局に入局していし、あの少女のオリジナル？とも言うべき、高町　なのはは九歳の時に管理局の関係者になっていたのだから・・・
しかし、ここは管理世界ではない・・・
そして、聞き及ぶところでは、満十八歳に満たない者は軍や警察組織やそれらの教育機関に入ることも禁じられている。
『郷に入れば郷に従え』
この世界（地球）での諺だ。ここで時空管理局の規則、管理世界の法律は一切通用しない。
もし、強引にスカウト何てしたら、怪しい輩と思われるかスパイ容疑をかけられて、身柄を拘束されるかもしれない。
挙句の果て、無理矢理ミッドに連れて行こうとしたら、それは完全に誘拐未遂・・・。
完璧に犯罪行為だ。
そしてそれは、本来ならば、法を司る管理局員にならざる行為だ。
しかし、過去にそう言った事例は何件か存在する。
だが、その様な犯罪を行った局員は裁かれる事無く、逆に管理局に優秀な人材を連れてきたと言う事で称賛された。
でも、自分はそんな犯罪行為をしてまで、功績を立てたくない。
ティアナにはあの少女を管理局にスカウトするつもりは毛頭なかったが、魔導師としての純粋な興味で、彼女の事を知りたいという好奇心が沸き上がっていた。
（せめて、あの子の名前だけでもわからないかな・・・？）
容姿だけでなく、豊富な魔力資質もあの人と同じ・・・
単なる偶然とは思えなかった。
（ギンガさんと親しい仲の様だったから、また会える機会が有るわよね）
ＡＭＦの影響で、距離があるフェイトとの念話は使えず、追跡しよ

うとしたターゲットがバスに乗って行ってしまっては、これ以上の尾行は不可能。
次のバスに乗っていくにしても、ギンガたちがどのバス停まで行くのか、ティアナには分からなためだ。
それにこの通りにはタクシーが通る気配もないし、今は地球の通貨を持っていない。
ティアナは今回は諦めて踵を返して屋敷へと戻った。

ルシフェリオン視点
ふむ、如何やら引き返した様だな。
悪意や敵意は感じなかったが、余りしつこいならレディーに注意を促すところだった。
この世界で魔力を持つ者はマイノリティなのだ。
あの女、レディーに魔力があると知って尾行したのか？
それとも別の誰かと間違えたのか？
いや、屋敷から出てきたと言う事は、ギンガ嬢に何か用でもあったのか？
いずれにせよ、初めて見る顔だ・・注意しておくに越した事はない。
私は、レディーの守り石として、彼女の魔力管制と守護を、今は亡きレディー　――紅葉の母上殿――から仰せつかったのだからな。
ルシフェリオンは、紅葉に悟られないように、自らの役割を改めて認識に意気込んだ。

「そっか・・・ギンガと一緒に・・・」
「はい」
戻ってきたティアナから報告を聞いたフェイト。
「容姿だけじゃなくて、魔力保持量も・・・それで、デバイスらしき物は持っていた？」
「すみません、そこまでは解りませんでした。何分、追いついた時には、ギンガさんとバスの中でしたので・・・」
「そっか・でも、ギンガと一緒って事は、彼女はギンガの知り合いだっ

て事だね。それなら、また会う可能性は十分あるよ」
フェイトはティアナを労った。
それと同時に、
(そう言えば、この地球では、彼女位の年頃の子たちは、ガミラスとの戦争の最中に幼少期を送ったんだよね・・・)
と、心の中で、この世界におけるエリオやキャロ、ヴィヴィオと同い年の子供たちの境遇を察した。

時空管理局本局大会議室
この日の議題の一つが、位置座標未定のまま仮登録されることになった『第二の地球』に関しての扱いである。
これまでの管理外世界は、知的生命体がいても、魔法文化がなく、次元世界に進出する手段も持っていない、いわば、どの管理世界よりも技術水準が下回っている世界だった。
しかし、今回議題に上がった第二の地球は、魔法文化こそないものの、管理世界とはかなり異なる高度な技術により恒星系間及び近隣銀河系への移動手段と極めて強力な宇宙軍事力を有するため、これまでの管理外世界の範疇には合わず、時空管理局、特に〝海〟はその扱いに苦慮していた。
〝海〟の、次元世界拡大推進派の本音は、是非ともこの第二の地球には積極的に干渉し、管理局体制に組み込み、その世界の科学技術、宇宙船の造船技術を根こそぎ接収したいのだが、座標がわからない上に今の管理局の次元航行艦船では、戦闘すればあっという間に壊滅するのが目に見えているので、如何ともし難いのが本音だった。
そして、まず問題にされたのは、今回、防衛軍とのコンタクトに使用された通信ポッドの内部にクロノ・ハラオウン提督に内密で通信ポッドに逆探知機を仕掛けた件について、穏健派の局員が逆探知機を仕掛けた次元世界拡大推進派の局員に何故、この様なマネをしたのかと追求した。
すると、彼らの言い訳は、「位置座標が分かれば、ハラオウン執務官らを迎えに行く事も出来るだろう」と、それらしい事を言うが、それ

でも相手を欺いて逆探知機を仕掛けて位置を突き止めようとは、相手との信頼関係を蔑ろにして反対に相手との関係を悪化させてしまう恐れがある。
　そうなれば、ハラオウン執務官らの待遇にも変化があり、スパイ疑惑がかけられ、身柄を拘束されてしまうかもしれない。
　その事を考えなかったのかと、問うと、
「彼らはハラオウン執務官たちの身柄を必ず返すと言っているのだから、執務官らの身柄の安全は保障されているのだから大丈夫でしょう？」
「その通り、万が一、執務官らが拘束される事態になれば、それこそ、地球防衛軍は我々管理局に敵対する組織だと言うなによりの証明になるではないか」
　等の発言を聞き、穏健派の局員も、
「ハラオウン執務官らの身柄を返還し、その言葉を信じると言うのであれば、尚の事、逆探知機などを設置する意味など無いではないか!!貴官の言葉は矛盾しているのではないか!?」
　と、声を荒げ発言すると、会場はたちまち魔導師至上主義派、管理世界拡大推進派と穏健派の局員らの口論が飛び交い騒然とした。
「やめんか!!」
　騒然とした会場を鎮めたのは、武装隊栄誉元帥のラルゴ・キールだった。
　流石は、武装隊からの叩き上げと言うべきか、キールの一喝で、先程まで騒然としていた会場は、凪いだ海の様に静まり返った。
　その後、三提督の進行の下、会議は再開されると今回、通信ポッドに細工を指示した局員、細工を行った局員に関しては厳重注意と一ヵ月の減俸処分が下された。
　懲戒免職にならなかった理由は防衛軍側も管理局側の逆探知機の存在を知りながら、抗議を入れなかったためである。
　そして、処分を受けた局員は、防衛軍によって懲戒を免れたのだが、逆に彼らは防衛軍が此方の策に気が付かなければ、自分たちは処分を受ける事は無かったのに、と益々防衛軍に対し、恨みの念を募らせた。

そんな局員達に冷ややかなのは、同じ〝海〟でも、レティ・ロウランやクロノ・ハラオウン、リンディ・ハラオウンら穏健派の局員と〝陸〟の局員だった。
そして、穏健派の局員たちは今回の処分が甘すぎると内心思った。
「第９７管理外世界における世界観は『次元世界』ではなく、『宇宙』です。恐らくは第二の地球の世界観も『宇宙』と考えるべきではありませんか？それを、いきなり他所者である我々が次元世界観を押し付けても、それは精神への侵略と解釈されかねません」
「では、連中は次元世界観を受け入れないと言うのか!?」
声を張り上げる拡大推進派の高官に、〝陸〟の一高官は、
「世界観の自由は管理局憲章で保障されているでしょう。我々の価値観を押し付けた挙句、敵に回したらどんな事になるか想像してみればよろしい。かの世界が二度にわたり、外宇宙からの侵略にさらされたのならなおさらでしょう。貴方がたは侵略者として彼らの憎しみを買いたいのですか？」
そう言われては、流石の拡大推進派の高官もぐぅの音が出なかった。
まだ一回のコンタクトのみでは、情報不足等もあり、防衛軍とのコンタクトを繰り返しながら、今後の対応と慎重に取ろうと言う何とも優柔不断な結論に至ったのだが、レティ・ロウランやハラオウン親子ら穏健派の局員らは、フェイトたちが帰ってくれば、後は此方からは一切、手を出さないようにしようと、決めていた。
下手にちょっかいを出せば、それこそ身の破滅だ。
自分よりも強力な相手に何の根拠も無く勝てると思い込んで、喧嘩を吹っ掛けようとしている拡大推進派の連中は、頭や精神がどうかしているとしか思えない。
しかし、その思い上がりでさえも、彼らは気づかないし、管理世界の拡大を唱えている高官連中である彼らが、自ら前線に立つこともないし、更には彼らの家族や身内が傷つくこともない。
彼らの掲げている管理局の正義や次元世界の平和、安定、統一、管理等の言葉は、全て戦争やテロで生命を落としたり、肉親を失ったり

したことのない人間の言う幻想であり、ありもしない祖国愛や正義、使命感をあると見せかけて他人を欺き、他人の犠牲の上に自らの利益を築こうとする人間にとっては魅力的な思想である。
しかし、人間の行為のなかで、何がもっとも卑劣で恥知らずか？
それは、権力を持った人間、権力に媚びを売る人間が安全な場所に隠れて戦争や紛争を賛美し、他人には愛国心や犠牲精神を強制して戦場や危険な任務の地へと送り出すことなのだが、それに気づかない局員が余りにも多すぎる。
『管理局＝正義』『正義＝何をしても許される』 と言う心理思想が管理局：管理世界には強く根強いている。
管理局は一体あのＪＳ事件で何を学んだのだろうか？
そして、管理局はこの先、どのような道を進んでいくのだろうか？

場所はミッドから変わって、管理局が座標位置を探ろうした第二の地球、海鳴市にある繁華街では・・・
「ゴメンね、リニス。本当は別の仕事とかあったんじゃない？」
フェイトがすまなそうにリニスに言う。
「大丈夫ですよ、フェイト。これも任務の一環ですから」
しかし、当のリニスは笑みを浮かべて特に気にしていない様子。
リニス、フェイト、ティアナが海鳴市の繁華街に来た理由は、フェイトとティアナの服を買うためである。
そして、リニスはガイド兼二人の護衛として、フェイトとティアナに同行していた。
イスカンダルから帰還した古代守とその娘、サーシアとユリーシャは守の弟、古代進とそのフィアンセの森雪、士官学校の同期生、真田志郎が相手をしている。
「それにしても、本当に私が知っている地球とは大分違うなぁ・・・」
フェイトが辺りを見渡しながら、自分の知る海鳴りの街との違いを呟く。
「そんなに違いますか？」
リニスはフェイトの知る地球を知らないため、その違いをフェイト

に訊ねる。
「えぇ・・・一時的とは言え、私たちが住んでいた地球との二百年の差はやっぱり凄いよ」
「六課に所属していた時に来た地球はやっと月に人間が行けたり、月と地球の間に宇宙ステーションが完成したレベルでしたからね」
ティアナも一年半前の思い出から地球の印象を言い、改めて未来の地球の技術に驚いていた。
「宇宙への進出はこちらの地球が上でも重要な歴史的建築物や名所は遊星爆弾で壊されました。それに、数多くの動植物も絶滅してしまいましたし・・・」
ガミラス戦役時の遊星爆弾が原因で地球上の重要な歴史的文化財は殆どが失われていた。
それでも、地球人類はそれらの重要な文化財の復元作業は行ったが、絶滅してしまった動植物に関しては、手の打ちようがない。
「・・・」
フェイトとティアナはいたたまれない思いになった。
しかし、あれだけの艦船技術を持っているこの地球ならば、他の分野の科学技術もミッドより優れている筈。
現に医療技術においては、無針の注射器など、まだミッドで試作段階の品を既に実用化している点においても医療技術がミッドより優れているのは明白である。
それならば、クローン技術もある筈。
絶滅した動物の遺伝子等はサンプルとして保管されていても可笑しくはない。
ならば、その遺伝子を元に絶滅動物をクローン技術で復活させる事ぐらいは出来るのかもしれない。
だが、その様な事を行わないと言う事はこの地球はクローン技術に関してはミッド同様規制を強いているのだろう。
「さて、暗い話は此処までにして、ショッピングを続けましょう」
「あっ、はい」
「そうだね」

リニスの言葉にフェイトとティアナは、頷き、海鳴の街を歩き出した。
三人はまず、洋服屋へと入り、そこでティアナは今来ているワンピースからＴシャツとジーンズ、ジャケットと言う動きやすい服を購入し、早速その服を着た。
そして、再び街の中を歩いていくと、
「ん？」
街中でフェイトがある一点を見て声をあげる。
「どうしました？フェイトさん？」
「あれ・・・」
フェイトが指をさす先には、大きな看板を掲げた之はまた５，６階建ての大きなビルがあった。
掲げられている看板には『ＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａ』と書かれていた。
テスタロッサ・・・
そのフェミリーネームは、フェイトにとって忘れる事など出来ない特別な意味を持つフェミリーネームであった。
「・・・」
フェイトがジッとその店の看板を見る。
（フェイトさんって、ホビー好きだったっけ？）
看板をジッと見ている上司の姿にティアナは首を傾げる。
「此処は、フェリシアさんの実家が経営されているお店なんですよ」
と、リニスがフェイトとティアナに補足する。
「へぇー」
ティアナはリニスの補足を聞き、感心した声をあげる。
「・・・」
しかし、フェイトの方は未だにジッとビルを見ている。
自分とそっくりな容姿を持つフェリシア。
その上、『テスタロッサ』と言う自分の昔のフェミリーネームを持つ彼女・・・。
最初、出会った時、フェイトもティアナも、もしかしたら、彼女は

この世界における自分の子孫か関係者ではないかと思っていた。
「えっと・・・フェイトさん？」
「フェイト・・・その・・・入ってみますか？」
微動だにせずにビルをジッと見ているフェイトにリニスとティアナが恐る恐る声をかける。
「えっ!?」
自分に声をかけてきた二人の声を聞いてフェイトは、自分が軽く現実逃避をしていた事に気づき、慌てて反応する。
「えっと・・・何かな？」
「だから、お店に入ってみますか？」
リニスにもう一度、同じことを言われ、
「あっ・・うん・・・そうだね」
と、無意識的に返答した。
「じゃあ行きましょう」
リニスを先頭にお店の中に入っていく、フェイトとティアナ。
（やっぱり、フェイトさん。ホビーに興味があったんだ・・・ルキノさんの艦船マニアがうつったのかしら？）
やはり、ティアナは勘違いをしていた。
店内は外観同様、広く、各フロアーごとに販売ジャンルが分けられており、更には飲食用のフードコートまで完備されている。
「凄い・・・」
店内に入ったティアナはお店の規模に驚き、率直な感想を呟いた。
フェイトとティアナが店内を見回していると、
「あっ、フェイト」
「何？リニス」
「此処の店長さん何ですが・・・」
リニスがこのお店の店長の事をフェイトに伝えようとした時、
「あら？リニスさん？」
と、リニスは声をかけられ、声がした方を振り向き、フェイトとティアナもつられて振り向く。
「っ!?」

振り向いたフェイトは目を大きく見開いた。
何故ならば・・・。
「いらっしゃい。リニスさん」
「こんにちは、セフィリア店長」
リニスは、フェイトの様子に気が付かないのか、声をかけてきた人物と話をしている。
彼女の「店長」と言う言葉から、今、リニスに話しかけて来た人物はこの店の店長だと言う事が分かった。
では、何故、フェイトがこの店の店長の姿を見て、目を大きく見開いて驚いたのかと言うと・・・。
「か、母さん・・・」
フェイトはこの店の店長の姿を見て、ポツリと呟いた。
そう、フェイトたちの今、目の前に居るこの店の店長・・セフィリア・テスタロッサは、かつてフェイトを産み出した母・・・そして自身のオリジナルであるアリシア・テスタロッサの母、プレシア・テスタロッサと瓜二つの容姿だったのだ。
「あら?そちらの方々は?フェリシアにそっくりな方もいるわね」
と、セフィリアもフェイトとティアナの存在に気が付いた様子。
「あっ、此方は月村さんの知り合いで、ハラオウンさんとランスターさんです」
リニスはセフェリアにフェイトとティアナの二人を紹介した。
その際、リニスは二人を月村の知り合いとして紹介した。
まさか、他の星の治安維持組織の人と言われても、一般人であるセフィリアに言ってもそう簡単には信じてもらえないだろうし、無用な混乱は少しでも避けた方が良いと思い、月村家の関係者だとリニスはセフィリアに紹介した。
「あら?そうなの?初めまして。このお店の店長を務めておりますセフィリア・テスタロッサです」
フェイトとティアナに一礼し、自己紹介をするセフィリア店長。
「初めまして。ティアナ・ランスターです」
「・・・」

ティアナはセフィリアに挨拶をしたが、フェイトの方は、まだセフィリアの姿を見て唖然としている。
「フェイト？」
「フェイトさん？」
「あっ・・は、初めまして。フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」
「テスタロッサ？貴女の名前にもテスタロッサの姓が入るの？」
「は、はい」
「へぇー凄い偶然ね」
セフィリアは、フェイトの姓の中に「テスタロッサ」の姓が入る事に嬉しそうな様子だった。
「それで、今日は何をお求めでしょうか？」
セフィリアは、フェイトたちに今日は何を買いに来たのかを訊ねる。
「えっ・・・あの・・・その・・・」
セフェリアに訊ねられ、フェイトは狼狽する。
元々、このお店に用が有って来た訳ではなく、店の名前が気になって来たのだから・・・。
まさか、その事実を店長の居る前で言う程、フェイトは図太い神経を持ち合わせていない。
そこで、
「あの・最近、新しい体感ゲームを入荷したって聞いて、それを見に来ました」
狼狽しているフェイトにリニスが助け舟を出した。
「ええ、入荷してありますよ。では、ご案内しましょう。こちらへどうぞ・・・」
と、セフェリアの案内の下、リニス、フェイト、ティアナの三人は最上階にあるゲームコーナーへ向かった。
ゲームコーナーに向かっている途中リニスは、
（フェイト・・・）
と、念話でフェイトに話しかけた。
（リニス・・・あのセフィリア店長って・・・）

（ええ、プレシアと瓜二つの容姿でしょう？私も初めてお会いした時には驚きました。でも、彼女はプレシアではありません）
（本当に？本当に？母さんじゃないの？）
フェイトとしてはほんの僅かな希望に賭けたかった。
虚数空間に落ちた母が何らかの現象でこの地球へと来たのではないかと言う奇跡に・・・・。
しかし、リニスはそれを否定した。
（はい・・・・彼女からは魔力を一切感じないでしょう？）
リニスにそう言われ、魔力を探るフェイトであったが、確かにリニスの言う通り、セフィリアからは、魔力の類は一切感じられなかった。
大魔導師と言われたプレシア・テスタロッサならば、魔力を感じる筈だ。
その事から、目の前にいる母そっくりな女性は、プレシア・テスタロッサではないと言う事が証明された。
フェイトに関しては、それが何とも複雑な心境だった。
そして、最上階のゲームコーナーに着いた三人は、
「こ、これは・・・・」
「凄い・・・・」
「これがゲーム？」
ゲームコーナーの一角に設けられた新作の体感ゲームを見て、驚いた。
新作の体感ゲーム・・・・。
それは、プレイヤー自身が身体を動かし、３Ｄ立体映像のキャラクター（アバター）を操作する体感シュミレーションゲーム・・・・その名も『ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ』と言う。
「じゃあ、このゲームの説明をするわね」
セフィリアはＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの概要を説明し、
「そしてこれが、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬに必要な機器ね」
と、一枚のカードと電子辞書の様な端末をそれぞれフェイトとティアナ、リニスに手渡す。
「カードの方はアバターライセンス。プレイヤーである証でそれぞれ

のデータを記録するカードね。端末の方はブレイブホルダ。カードデッキを保存する機器よ」
　セフィリアは三人にカードと電子辞書の様な端末の説明をして次にゲームをプレイする際に必要なアイテムの製作に移った。
「それじゃあまずは、ハラオウンさん」
「は、はい」
　自分の母そっくりの人物に呼ばれ、昔のトラウマ？が再発したのか、緊張するフェイト。
「このカードローダーの此処にライセンスカードを入れて」
「は、はい」
　フェイトはセフィリアに言われるまま、カードローダーにライセンスカードを差し込むと、画面に身長、体重、年齢、性別を入力するようにと指示が書かれたページが出てくる。
　フェイトが全ての項目に数値と性別を入力すると、続いて画面はカメラモードに変わる。
「数値と性別を入力すると、次に顔をトレースするカメラに切り替わるから、動かないようにね」
「は、はい」
　やがて、カメラが、
　カシャ
　フェイトの顔を撮り終えると、
　一枚のカードがカードローダーから出された。
「はい、ソレがハラオウンさんのアバターカードよ」
　出されたカードをフェイトが手に取ると、其処にはバルディッシュを手に持ったフェイトの姿があった。
「コレって・・・」
「それは、パーソナルカード、またの名をアバターカードと言って、一番の基礎になるカードよ。ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬでは、カードの強さが、自分の操るキャラクター・アバターの性能に関わってくるわよ」
「はぁ・・・」
　フェイトは再び自分のアバターカードに視線を移す。

すると、フェイトの名前の隣に「Ｎ＋」と表記されていた。
「あの、此処に書いてある「Ｎ＋」って何ですか？」
「それは、強さを測る為のカードランクよ。ランクは下からＮ、Ｎ＋、Ｒ、Ｒ＋、Ｓ、Ｓ＋になっているわ」
「へぇ・・・・」
「Ｎ＋クラスは、最初から最低限だけど防具、武器を装備しているわ。当然、ランクの高いカードと組み合わせると、アバターの性能も上がり、ゲームを有利に進められるわ」
「ランクを上げるにはどうすれば？」
「カードの合成と、経験値を稼いで行く事ね。まぁ、まずは実際にプレイしてみるのが、一番ね」
そして、ティアナとリニスもフェイトと同様に自分のアバターカードを作り、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイしてみる事にした。
ミッドには無い体験感覚のゲーム故、フェイトとティアナは期待に胸を膨らませていた。

六十六話　ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ

偶然、海鳴の街にあった昔の自分と同じ名前のホビーショップに入ったフェイトたち。
其処で待っていたのは、フェイトのかつての母、プレシア・テスタロッサと瓜二つの容姿を持つ店長と新型の体感シミュレーションゲーム、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ。
店長の勧めでこの新型ゲームを体験する事になったフェイトたち。
その先に彼女たちを待ち受ける展開とは・・・・。
「それじゃあみんな、位置に着いたかしら？」
「はい、大丈夫です」
フェイトたちはＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬを体験するため、今、人一人が入れる大きさの大型シミュレーターの中に居る。
「それじゃあ・・・・ブレイブシュミレーター・・・・作動」
セフィリアが装置を作動させると、フェイトたちはフワッとした無重力に似た感覚となる。
「なんか・・不思議な感覚ね・・・・」
まほろば、ヤマトで体験したワープとはまた違う感覚だ。
「それじゃあ、ステージ設定の操作はハラオウンさん。貴女にやってもらおうかしら」
「わ、私ですか!?」
「ええ、ちょうどチームデュエルのときのリーダーが入る機体に入っているし」
「このシミュレーターってそういう位置づけなんですか!?」
わたわたと慌てだすフェイトを見て苦笑するセフィリア。
「大丈夫、ちゃんと操作のレクチャーはするから」
「は、はい」
「それじゃあ、ディスプレイにプレイヤー人数を『３』と入力して、モードはフリートレーニング、ステージはそうね・・・・最初だし、雲海上空って入力してみて」

「は、はい・・・・えっと・・・・プレイヤー人数、『３』・・・・モードはフリートレーニング・・・・ステージは・・雲海上空・・・・これでいいのかな？・・・・ん？これはなんだろう？」
ディスプレイの下にもう一つ項目があり、選択肢に『Ｙｅｓ』『Ｎｏ』と書かれていた。
「えっと・・・・とりあえず・・『Ｙｅｓ』で・・・・」
フェイトは最後の項目についてセフィリアに訊ねることなく『Ｙｅｓ』を選択した。
「設定できました」
「それじゃあブレイブホルダーを胸の前にかざして・・・・それじゃあ行くわよ」
「ブレイブデュエル、スタンバイ・・・・プレイヤースキャン開始・・・・アリーナ上にアバター生成・・・・ダイブ・・・・コンプリート」
機械の喋る声を聞きながら、意識が何処かに吸い込まれるような感覚の後、
「ダイブ完了・・目を開けてもいいわよ」
セフィリアの声がして、三人が目を開けると、其処は・・・・
「な、なにこれー!?」
「雲の上の様ですね」
「・・・・」
三人は雲海の上に居た。
飛行属性のあるフェイトに関しては、特に不思議ではないが、飛行属性の無いティアナに関しては、誰かの助力を借りずに飛んでいる状態なので、驚愕の余り、唖然としている。
「今、ハラオウンさんたちの視点と痛感を除く感覚は、シミュレーションの中のアバターとリンクしている状態よ。だから、風を肌で感じたり、物を握った時の感触も感じる筈よ。後は、時間が来るまで遊んで構わないから」
その後、三人は自分たちが持っているデバイス？から、自分たちの属性や操作方法を聞き、シミュレーション空間を満喫していた。
そして、一通り、楽しんだ頃・・・・

突然現れた空中ディスプレイに何かのメッセージが表示され、警告音のような音が鳴り響いた。
「な、なに？」
「何が有ったの？」
突然の事態にフェイトとティアナは少し慌てている様子。
メッセージの内容には『ＨＥＲＥ　ＣＯＭＥ　ＮＥＷ　ＤＵＥＬＩＳＴ　』と書かれていた。
「どうやら、乱入者のようね」
「「乱入者!?」」
警報音の正体に思わず声を揃えて驚くフェイトとティアナ。
本来ならばトレーニングモードではプレイ中に他のプレイヤーが乱入することはできない。
実は、先程フェイトが最後に押した選択肢・・・あれは、『乱入可能。挑戦者求む』の項目だった。
あの項目で『Ｙｅｓ』を選択すると、フリートレーニングモードだろうが誰かが乱入すると同時に対戦モードに切り替わってしまうのだ。
そうこうしているうちにディスプレイから落雷のような光空間内に降り注いだ。
轟音と共に煙が広がり、その中に人影がうっすらと見える。
辺りを覆っていた煙が晴れていくにつれ、乱入者の姿がはっきりと見えるようになってきた。
乱入者の人数は三人・・・
三人の内、一人はフェイトたちと同じくらいの年齢の女性であるが、後の二人はスバルよりも少し年下ぐらいの年齢の少女たちで、三人とも目元を隠すかのようにバイザーを着けている。
しかし、それ以前に目を引くのが三人の衣装だった。
同い年くらいの女性は髪に藍色のリボンを着け、紫の半袖のジャケット、白いズボンに銀色の装甲を腹部、腰部、脚部などに身に着けて、両腕には頑丈そうな装甲ナックルを着け、両足には、ローラーブーツを履いていた。

中学生くらいの少女の内、黒髪のツインテールの少女は、前ボタンを全開にしている白いフロックコート状の上着を着て、その下に黒いアンダーシャツ、下は水色のハーフパンツを履き、装備は先ほどの女性と同じく、両腕には頑丈そうな装甲ナックルを着け、両足にはローラーブーツを履いている。
そして、最後の一人は、自分の親友でもある高町なのはのバリアジャケットの色違い。
手に持っているデバイス?らしき物も、なのはの愛機、レイジング・ハートの色違いの杖を持っている。
仮想空間とは言え、まさかこの世界でなのはそっくりの少女と対峙するとは思ってもみなかった。
(まさか、この乱入者って・・・)
リニスにはこの三人の正体に察しがついた。
一方、相手側も・・・
(フェイトさんにティアナ!?それにリニスさんも!?どうしてここに!?)
(あれはっ!?ハラオウン執務官にランスター補佐官!?なんであの二人がこの世界に居るのよ!?)
三人の内、二人はフェイトたちの姿を見て表情には出さないが内心驚いていた。
「フェイトさん、リニスさん。相手のステータスは、私たちよりも上ですよ」
ティアナは目の前に表示された乱入者の情報を見て驚いた。
対戦相手のランクは全員が自分たちよりも二つランクが上のR+。
既に二つ名も設定されていた。
なのは似のバリアジャケットを纏った少女は　カードランク　R+　通り名　星光の殲滅者（シュテル・ザ・デストラクター）
ギンガ似のバリアジャケットを纏った女性は　カードランク　R+　通り名　鋼の戦乙女（シュタール・オブ・ワルキューレ）
スバル似のバリアジャケットを纏った少女は　カードランク　R+　通り名　疾風の不死鳥（シュトゥアム・フェニックス）

高レベルプレイヤーの乱入に困惑するフェイトたちに乱入者の三人は、一斉にフェイトたちに襲い掛かった。
フェイトにはあのなのはのバリアジャケットに似た服の少女、シュテル・ザ・デストラクターが、
ティアナにはかつての相棒、スバル・ナカジマに似た服の少女シュトゥアム・、フェニックス。
そして、リニスには管理局員時代のギンガのバリアジャケットを着た女性、シュタール・オブ・ワルキューレがそれぞれ相対した。
「パイロシューターッ！」
少女がそう高らかに宣言すると先ほどと同じ真紅の光弾が少女の周りに付き添うように出現する。
「シュートッ！」
少女の合図とともに計五発の光弾がフェイトに向かって飛翔する。
（なのはのアクセルシュートとそっくり!?）
フェイトは少女が放ってきたシューターを避け、自身もシューターを放ち、之を迎撃する。
だが、これだけでは終わらない。
「シューターだけに気をとられては困りますよ」
「っ!?」
フェイトは上空を見上げる。
その目線の先には、先ほどから相対していた少女が浮かんでいる。
しかし、少女が両手で持つ杖は先端部分の形状が先ほどまでとは変化していた。
今までは丸みを帯びた、まるで魔法少女が持っている杖のようだったのに対し、現在は先端が二股に分かれた、槍のような形状へと変化している。
（ますますなのはのレイジング・ハートにそっくり!?）
と、相対している少女の戦闘スタイルがミッドに居る親友と被る。
「屠れ灼熱の尖角・・・」
二股の穂先へ、赤い光が収束し始める。
「ブラスト・・・」

「っ!?まずい!!」
それを見たフェイトもすかさず、自分が持つ武器を少女へと向けた。
「プラズマ・・・・」
フェイトの掛け声と共に手に持っている武器に放電現象と共に金色の光球が先端へと収束し始める。
そして、二人の収束していた光が一定の大きさ以上になったその時・・・・。
「ファイアーッ!!」
「スマッシャー!!」
二人のほぼ同時の掛け声により光線・・・・もとい砲撃が放たれた。
二人の杖から放たれた砲撃は真正面からぶつかり合い、先ほどの光弾同士の衝突とは比べ物にならないほどの爆風と煙が辺りに撒き散らされる。
そして、煙が晴れるのを待つ前に、紅蓮の砲撃が煙を突き破るようにフェイトへと向かって放たれた。
「複数連続で!!」
フェイトは驚きの声を上げて、高速瞬間移動にてその光球を交わした。
一方、ティアナの方も苦戦をしていた。
初プレイと慣れない・・・・と言うか、初めての空中戦と言う事もあり、上手く対処が出来ないのだ。
(くっ、この子。スバルと同じタイプの戦闘スタイル・・・・それなのに何で・・・・どうして・・・・)
スバルとは管理局の訓練学校時代から何度も模擬戦をして来た。
それ故、対処法は知っている筈なのに何故自分はこうも苦戦をしているのか?
ティアナにはそれが理解できない。
「クロスファイヤー・シュート」
ティアナが銃を撃つとオレンジ色の光弾が対戦相手の少女・・フェニックス目掛けて飛翔する。

フェニックスは空中に出来た道、ウィングロードの上を疾走。
縦横無尽に空色の帯状魔法陣が張り巡らされていく。
そしてそれはティアナの放った光弾を防ぐ楯にもなった。
子供相手に大人気ないかもしれないが、ティアナはこれがバーチャルゲームだと言う事を忘れて、マジで相手を潰しにかかった。
「このっ!!」
ティアナはバインドで対戦相手四肢を拘束し、近接砲の構えをとる。
見る見るうちにフェニックスの目の前がオレンジ色の輝きで染められていくが、フェニックスは焦ってはいる様子はない。
「はぁっ!!」
その場で重心を落とし、右足でウィングロードを踏み込むと一息に左足を振り抜く。
すると、左足を拘束していたバインドは引きちぎられ、ティアナの鼻先を鋭い前蹴りが通り過ぎる。
蹴りの軌道上にあった発射直前の魔力は蹴りあげられ、二人の頭上で爆散した。
その間にフェニックスは残るバインドを破り、ティアナへと接近する。
だが、今度はティアナの方から間合いを取り、追撃を掛けようとするフェニックスを牽制すべく魔力弾が両者の間を飛び交う。
機先を制されたフェニックスは追うに追えず、自身もまた距離を取り、仕切り直しを図る。
(び、びっくりした・・・いくらゲームとは言え、何?あの化け物じみた動きは?)
バインドで拘束した時点で詰み・とまではいかないにしても、一発大きいのを入れられると踏んでいただけに驚きもひとしおだ。
フェイトとティアナの二人がシュテルとフェニックスとの間で壮絶な戦闘を行っている中、
リニスとワルキューレは戦闘を行うことなく、対峙していた。
「はぁ～・・・何やっているんですか?ギンガさん」

と、リニスがやや呆れた様子でワルキューレに話しかける。
すると、
「あっ、やっぱりバレていましたか・・・」
と、ワルキューレ・・もとい、ギンガはバイザーを取り払い、素顔を晒した。
「それで、何故、紅葉さんや桜花さんとゲームを？」
リニスはワルキューレ（ギンガ）の正体以外にも他にもメンバーであるシュテルとフェニックスの正体までも見破り、理由を訊ねてきた。
「実は、昨日地球に帰って来たのに、実家に帰らなかった事で桜花がへそを曲げてしまって・・・」
「それで、今日は彼女たちに付き合っていると言う訳ですか？」
「はい。開店と同時に来て、もうずっとプレイし続けて・・・」
「今では、Ｒ＋まで一気にレベル上げをしたと・・・」
「ええ。でも、前日は少し寝不足なのでそろそろきつくなってきました」
「成程、昨夜は、マスターとお楽しみだった訳ですね」
「あぅ・・・」
リニスが茶化す様に言うと、ギンガはたちまち顔を赤く染める。
「ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやっていると言う事は、ギンガさんたちもここに来ているのですか？」
「はい。フェイトさんたちもここに？」
「ええ・・・」
「あの、紅葉や桜花の事はフェイトさんたちには・・・」
「恐らくバレて居るでしょうね。特に紅葉さんはこのＡＭＦの中でもかなりの高ランク魔力を保持していますから・・・今日、貴女を迎えに屋敷に来ていたでしょう？」
「はい」
「恐らくその時に紅葉さんの存在には気づいている筈です」
フェイトたちも同じ店に居ると言う事実にギンガは少し表情を曇らせる。

「フェイトさんたちは紅葉や桜花を管理局に勧誘するでしょうか？」
「・・・・」
ギンガの質問に対し、リニスは黙り込む。
昔のフェイトならば、その様な事はしないだろうが、自分がフェイトの下を離れて約十年・・・・それだけの年月があれば、人を変えるには十分の年月だ。
まして、今のフェイトは管理局の執務官と言う立場にある。
目の前に高ランクの魔導師が居れば、是が非でも管理局に入れたい筈だ。
ジュラやサーシア、ユリーシャの場合は、王族や国家元首の娘と言う事でフェイトたちも勧誘を断念せざるを得なかったかもしれないが、紅葉は一般人で、しかも後見人が居るとは言え、天涯孤独の身・・・・。
管理局の法律を盾にフェイトたちが無理矢理ミッドに連れて行く可能性が全くない訳では無い。
「リニスさん」
「はい」
リニスが考え込んでいると、ギンガはリニスに話しかける。
「リニスさんはフェイトさんの知り合いの様ですけど？」
「ええ、フェイトの愛機であるバルディッシュは私がフェイトに造り与えたデバイスです・・・・それに、魔法の知識も私がフェイトに教えました」
「実は私も、十三歳の頃に、空港で起きた火災事故に巻き込まれた時、フェイトさんに助けられました。でも・・・・」
「でも？」
「でも、いくらフェイトさんでも、紅葉や桜花を無理矢理ミッドに連れて行こうとするのであれば。たとえフェイトさんやティアナであっても私は全力で紅葉と桜花を守るつもりです」
ギンガは昔の命の恩人であろうとも、ミッドに残してきた妹の親友であろうとも、今の大事な妹と妹分を管理局の法律を盾にして無理矢理ミッドに連れて行こうとするのであれば、完全に敵と見なし、排除

すると言い放った。
「・・・その時は・・・私がフェイトに引導を渡します」
リニスも、もしフェイトがそんな人攫いの様な真似をするのであれば、自分がフェイトを排除すると言った。
リニスとギンガは話し込んでいる中、フェイトと紅葉、ティアナと桜花の勝負もいよいよ大詰めを迎えようとしていた。
フェイトはバインドで四肢を拘束され、紅葉は詠唱始める。
「集え、明星(あかぼし)。全てを焼き消す焔となれ！ルシフェリオン・ブレイカー！」
「ひっ!?」
フェイトの眼前に太陽の様な灼熱色のブレイカーが迫り、
ドカーン!!
フェイトはバインドをブレイクする暇もなく、灼熱色のブレイカーが命中した。
一方、ティアナの方も、迫りくるフェニックスに向け、大量の誘導弾を放つが、相手は誘導弾の流れを読み、間合いに入ったものだけを打ち落としながら高速で接近し、誘導弾への対処を終えたフェニックスは、残りが接近する前にティアナ目掛けて拳を突き出していた。
「ディバイン・バスター!!」
「うわぁぁぁぁー!!」
ティアナもフェニックスの空色のバスターにより、吹き飛んだ。
フェイト、ティアナが負け、丁度プレイ時間も終了となり、フェイトたちの初ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬは残念ながら、黒星で終わった。
「・・・」
バーチャルなのでアバターには痛感は感じないので、痛くも痒くも無かったし、そもそも攻撃を受けたのは、自分たちの身体ではなく、仮想の存在であるアバターであり、本体であるフェイトたちの肉体には何の外傷も無かったし、身体に痛みを感じることもなかった。
しかし、体験した事は今でも脳裏に焼き付いており、フェイトはなのはと海鳴で決戦を行った時の事を思い出し、昔のトラウマを思い出したのか、顔色が悪く、少し震えている。

ティアナは自分よりも年下相手に負けた・・・しかも、かつての相棒と同じ戦闘スタイルの相手に負けた事が悔しいようだ。
二人の周りの空気はドヨーンと重く暗い。
「ふ、二人とも元気を出して。たかがゲームで負けただけじゃない。ねっ？」
リニスが二人を励ますが、相変わらず二人の纏う空気は重い。
どうしたものかと、リニスが考え込むが、その時、彼女の視界に時計が映った。
時刻は既に昼時を越えている。
「と、とりあえず、お昼にしましょう？ねっ？此処のフードコートのご飯、結構美味しいのよ」
リニスの提案に、二人は頷いた。
ゲームに負けてもお腹はすいた様だ。
三人はビルの中にあるフードコートへと向かい、そこで昼食を摂る事にした。
フードコートは既に昼時を過ぎていると言うのに中々の混雑で、人数分の空席を探すのも一苦労だった。
フェイトたちが空いている席を探していると、その視線の先に顔見知りの顔を見つけた。
と言うか、テーブルの上に乗った大量の料理を・・・
それは、成人男性でも食べきれるか分からないくらいの量なのだが、テーブルの前の椅子に着いているその人物は平然とその大量の料理を食べている。
リニスは此処に来て自分の愚かさを呪った。
（し、しまった!?ギンガさんたちがここに居る事は分かっていたのに、来てしまった・・・）
ギンガたちが開店と同時にずっとこの店でＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやっていると言う事は、先程ゲーム最中に聞いたばかりではないか。
朝からずっとＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやっていたならば、今の自分たち同様、このビルのフードコートで食事を摂る事も簡単に予測でき

た事ではないか。
　案の定、フェイトは既にターゲットをロックオンしている。
　そこで、リニスはギンガに念話で語り掛ける。
（ギンガさん、ギンガさん!!）
（リニスさん!?）
（すみません、フェイトたちが今、貴女の後ろに居ます）
（えっ!?何やっているんですか!?このままじゃ、紅葉と桜花の二人と鉢合わせしてしまいますよ!!）
（それについても申し訳ありません。既にフェイトは貴女たちに狙いを定めています）
（っ!?）
　こうなれば、偶然を装ってこの場をやり過ごすしかない。
　食事最中に席を立てば不自然であるし、なによりこの場で堂々と魔法を発動させることも、魔法について訊ねてくることは無いだろうと踏んだギンガであったが、念の為、紅葉に念話で、もし、魔法について訊ねられても、知らん顔していて欲しいと頼んだ。
「あれ？もしかしてギンガ？」
　そこに、フェイトも偶然を装ってギンガに話しかけてきた。
「ふぇ、フェイトさん？どうして此処に？」
「ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬって言う体験ゲームをしにきたの」
「ギンガたちは？」
「わ、私たちもです」
　フェイトとギンガのやり取りの中、この世界におけるギンガの新たな妹、桜花がフェイトに聞き返す。
「義姉さん、お知合いですか？」
「えっ？ええ・友人のフェイトさんとティアナさんよ」
「初めまして、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」
「ティアナ・ランスターです」
（やっぱり、ハラオウン執務官にランスター補佐官本人!?）
　紅葉は顔には出さず、前世での有名人がどうしてこの世界に居るのか驚いていた。

（ゲームとは言え、ハラオウン執務官に収束砲を撃ち込んじゃったからな・・・やっぱり怒っているのかな？）
　そんな紅葉とは裏腹に事情を知らない桜花はフェイトに声をかける。
「お姉さんたちもＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬやっていたんですね。私たちも朝からずっとプレイし続けてＲ＋クラスまでいきました」
　と、胸を張って言う。
「えっと・・・貴女は？」
　桜花に名前を訊ねるフェイト。
「これは失礼。私は中嶋桜花と言います」
「よろしくね、桜花」
（この子からも魔力を感じる・・・）
　桜花に挨拶をしつつもフェイトは桜花からも魔力がある事を感じ取った。
「それにしてもフェイトさんはここの店長さんの娘さんとそっくりですね」
「そ、そうかな？」
「ええ、髪の毛の色以外はホント、そっくりです」
　桜花とフェイトが話していると、
「貴女の名前は何ていうの？」
　ティアナが紅葉の名前を訊ねる。
「た、高町紅葉です・・・」
　紅葉もフェイトたちに自己紹介をして頭を下げる。
（た、高町!?　この子の苗字（ファミリーネーム）が？）
　フェイトとティアナは気が遠くなりそうになりながらも、内心の動揺を辛うじて抑え込んだ。
「私はフェイト・テスタロッサ・ハラオウンよ。こちらこそよろしくね」
「私はティアナ・ランスターです。よろしくね」
「はい。ハラオウンさん、ランスターさん」
「フェイトでいいよ、紅葉」

「私もティアナでいいわよ、紅葉」
「わかりました。フェイトさん、ティアナさん・・・」
「よろしく」
皆が自己紹介をしている中、

ルシフェリオン視点
ふむ、魔導師の一人は今朝レディーを追いかけていた者、もう一人はその先輩か上官といったところか・・・
。
レディーを見て、随分驚いているようだが、誰かと似ているのだろうか？
見たところ、魔導師としてのスキルもかなり高いな。
特に年長の金髪の方は、レディーと同等の魔力量だ。
それに、二人とも自律型魔力運用媒体（デバイス）を持っているな。
悪意は感じないが、取り敢えず留意しておこう。
ルシフェリオンは、紅葉の服の下からフェイトとティアナを注視していた。

「紅葉もＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやっていたの？」
「はい。桜花とギンガさんの二人と一緒に・・・」
ティアナが紅葉にＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイしていたのかを訊ねた。
「それじゃあやっぱり、星光の殲滅者って・もしかして・・・」
「私の二つ名です。Ｒ＋ランクになった時の特典で、二つ名の名乗れるようになったので、皆で考えて設定しました」
（容姿と言い、魔力と言い、なのはさんそっくりなんだけど、何で殲滅者なんて物騒な二つ名の付けたのかしら？）
と、ティアナは紅葉のセンスを疑った。
そこへ、
「どうだったかしら？ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬは？」
セフィリアが皆に感想を聞きに来た。

「楽しかったです!!」
「はい、今までにない経験が出来ました」
桜花と紅葉は今まで体験した事の無い体感シミュレーションゲーム満足した様子。
一方、フェイト、ティアナもあの体感シミュレーションゲームに関しては、別の意味で驚かされ満足している。
痛感を感じること以外には、殆ど現実と変わらない架空の世界・・・・。
六課時代に隊舎内の敷地にあった最新のシミュレーションシステムも凄かったが、アレは実際の自分たちで行うため、事故やケガを負う可能性もあった。
しかし、このＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬは、アバターを使用しての体感シミュレーション故、ケガの心配はない。
ミッドで・・特に訓練校にはこのシステムを是非導入したいと思った二人だった。
ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの感想を言いながら、食事をしていた皆であったが、先に食事を摂っていたギンガたちの方が早く食べ終わり、
「それじゃあ、フェイトさん、ティアナ、リニスさん。私たちはこれで・・・・」
と、席を立った。
「あっ・・・・」
フェイトにしてみれば、もう少し、紅葉と話をしたかった様だが、ボロを出す前に、退散する事にしたギンガたちであった。
ギンガたちが店を出て、それを急いで追うのも不自然な為、フェイトは次にリニスに紅葉の事を訊ねた。
「リニスはあの紅葉って子と親しいの？」
「えっ？あっ、はい。紅葉さんはマスターが後見人を務めている戦災孤児です」
「戦災・・・・」
「孤児・・・・」
「紅葉さんはガミラスとの戦争で家族を亡くしました。身内の方は一

人も居ません」
「そうなんだ・・・」
あの年で天涯孤独・・・。
小さい頃に両親を亡くし、そして自分を育てて来てくれた兄も亡くし、天涯孤独となったティアナも紅葉の心境に親近感を抱いた。
またフェイトもＰＴ事件で生みの親であるプレシアを失い彼女も天涯孤独の身となった。
その後、すぐにハラオウン家から養子縁組の話が来たが、やはりただ一人の身内を失った寂しさがあり、ティアナ同様、紅葉の置かれた状況に親近感を抱いた。
もし、此処が管理世界であれば、自分はキャロやエリオの様に紅葉に対し後見人または養子縁組をかっていただろう。
「でも、今は先程の桜花さんやギンガさんたち、中嶋家の下で楽しく生活されています」
リニスは此処で紅葉の身の上を話、フェイトがどう出るのかを試した。
高ランクの魔力を持つ紅葉を天涯孤独だと言う理由で管理局にスカウトするのか、それともしないのか？
もし、するとしたら、当然彼女の意思を尊重するのか？
それとも、治外法権である筈のこの地球で、管理局の法律や執務官と言う立場を盾に強引にスカウトするのか？
無意識にリニスの警戒感が高まる。
「ねぇ、リニスも気づいているよね？紅葉の魔力素質に・・・？」
「ええ」
フェイトもリニスも真剣な表情でティアナも緊張した面持ちである。
「フェイトは紅葉の事をどう思っているのですか？」
「・・・」
「管理局へスカウトをするのですか？」
「・・・」
リニスの問いにフェイトは沈黙を保っている。

やがて、
「本来なら、高魔力保持者は管理局の目の届くところが管理局の決りなんだけど・・・」
「・・・」
「私はそれ以前に、彼女の事をもっと知りたいだけ・・・それを踏まえて、彼女に知ってもらいたい・・・管理局と言う組織がある事を・・・それでもし、管理局の仕事に興味があるなら、スカウトをしたいと思っている」
「そうですか」
フェイトの言葉を聞いて、やはりスカウトはしたいが、そこは本人の意思を尊重すると言う。
だが、現状を見る限り、紅葉が管理局のスカウトに応じるとは思えない。
これでもし、フェイトが強引にスカウトしてくると言うのであれば、やはりフェイトたちがミッドに帰るまで、紅葉に会わせない事、必要とあれば、記憶操作でも施して、紅葉の事を忘れさせようと思ったリニスであった。
店では若干気まずい雰囲気があったが、フェイトたちは無事に必要なものを買い揃え、月村家へと戻った。
その道中にて、
「あら？」
リニスが何かに気付いた様子で声をあげる。
「どうしたの？リニス」
「あれは・・・」
リニスは向かいの歩道を指さす。
其処には、私服姿の永倉と原田の姿があった。
「あれって確か・・・」
「医務室に居た原田さん」
フェイトとティアナは　まほろば　に乗艦していた頃の記憶からリニスが指さした女性が誰なのかを思い出した。
「それじゃあ、あの男の人は・・・？」

「あの人は、まほろば　で航海長を務めている永倉さんです」
リニスが男性の事をフェイトとティアナに教えると、
「あの二人、お付き合いしていたんですか？」
と、ティアナがリニスに質問する。
ティアナがそう思うのも無理も無く、二人の姿は恋人繋ぎをしており、口で言わなくてもその様子から自分たちはカップルですと物語っていた。
「原田さんはこの前のイスカンダルの航海から、まほろば　に乗艦されてきたんですけど、永倉さんがお付き合いしていたなんて知りませんでした」
リニスもまさか、原田と永倉が男女の仲とは知らなかった。
原田と永倉はそのまま人ごみの中へと姿を消した。
三人は此処で声をかけるのも野暮と言うモノであった為、二人をそのまま見送った。
（でも、管理局の局員と防衛軍の人を比べると、凛々しさや精悍さは防衛軍の男性の方が上よね）
永倉と原田を見送った後、ティアナは心の中でそう思った。
それは、やはり古代兄弟を始めとする前線勤務の軍人と触れ合ったためである。
管理局の男性局員が全員ブ男と言う訳ではないが、自分たちの大切なモノを守るためには自らの命を省みない勇敢さでは、圧倒的に防衛軍の軍人が上であり、そう言った勇ましい面が管理局員よりも防衛軍の方が男性さをより引きたてているのかもしれない。
永倉と原田の二人と出会った後、引き続き海鳴の繁華街を歩いていると、今度は、
「あれ？」
ティアナが向かいの側にある公園にいる人物を見て、声をあげる。
「どうしたの？ティアナ」
「あそこに居るのって・・・・」
ティアナが指をさした方向をフェイトとリニスが示された方に視線を送ると、そこには・・・・。

「あら？アレは・・・・」
「確か星名さん・・・・」
そこに居たのは、フェイトとティアナが最初に出会った防衛軍軍人、星名透だった。
彼は誰かと待ち合わせをしているのか、腕時計を気にしつつ、辺りも気にしている。
そこへ、
「星名!!」
小柄でツインテールの女の人が星名に声をかけた。
「ゴメン、待った？」
「いや、今来たとこだよ」
星名はそう言うが、彼がかなり前から公園で待っていたのは明白だった。
しかし、彼女の体面を思ってなのかデートでの待ち合わせの決まり文句を言う。
「それじゃあ、行こうか、百合亜ちゃん」
星名と百合亜と呼ばれた女の人は手を繋ぎ、そのまま人混みの中へと消えていった。
「・・・・」
二人の様子を見ていたフェイトとティアナは、無言のまま・・・・
（やっぱり、管理局員よりも防衛軍軍人の方がモテるのかしら？）
ティアナはそんな事を思っていた。

月村家へ戻り、入浴と夕食を済ませた後、フェイトとティアナは応接室へと向かった。
その応接室では、忍とノエルが既に待っており、テーブルには、沢山のアルバム。
そして、映写機とスクリーンが設置されていた。
「わざわざ用意してもらってすみません」
フェイトが忍とノエルにコレらのアルバムや映像記録を用意してもらった事に対し、礼を言う。

「そんなに苦労もなかったから気にしないで・・・それよりも、本当にいいのね？」
「はい」
忍とノエルが用意したアルバムと映像記録。
それは、過去にこの世界の地球の海鳴での記録だった。
自分の知る過去とは違った歴史かもしれない記録が今、目の前にある。
管理局に報告するつもりは勿論無い。
これはあくまで、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンの個人的な事なのだから・・・。
そしてティアナもこの世界の過去に興味があるのか、こうして同席しているのだ。
何故、フェイトが忍に過去のアルバムや映像記録を用意してもらったのかと言うと、依然フェリシアが言った「自分の子孫の事なら、母か忍がよく知っている」と言う言葉を思い出し、出かける前に忍に用意してもらったのだ。
もっとも、昔の記録映像やアルバムと言っても皆、月村家の主体で記録された映像や写真の為、海鳴市の全てが記録された訳では無いが、この世界における高町家、八神家、そしてテスタロッサ家の事がより正確に分かるのは、この家に保管されている記録しかないと思い、フェイトは忍に頼んだのだ。
「それじゃあ、何処からの記録がいい？」
膨大な記録の中から、忍はフェイトにどこの年代からの記録を見るのかを訊ねた。
「西暦２００Ｘ年○月からの記録からお願いします」
フェイトはまず最初に、母（プレシア）の頼みで海鳴市にばら撒かれたジュエルシードを探した時の年と月を選んだ。
「２００Ｘ年の○月・・・ちょうど、あの人が海鳴に来た頃の記録ね」
「あの人？」
忍の言う『あの人』と言う言葉に首を傾げるティアナ。
「それじゃあ、ノエル。お願い」

「はい、スタートします」
ノエルが映写機を操作して、スクリーンに映像が流れた。
やはり、月村家主体の記録映像とあって、最初の映像には今でも自分の知る海鳴で暮らして居る親友の一人、月村すずかと何故か今、自分の傍に居るこの家の主、月村忍とそのメイドのノエルの姿が多く記録されている。
ティアナも記録映像を見ている中、忍とノエルの事が気になった様子で先程からチラチラと忍とノエルを見ている。
二人はこの記録映像を見た後、その件について訊ねようと心に決め、再びスクリーンを見た。
やがて、月村家の日常には一人の男性が登場した。
彼は身寄りもなく、剣の修業の為、全国を放浪し、たまたまこの海鳴へとやって来た。
当初、ティアナは木の枝を剣に見立て、いきなり道場破りを行った彼の所業に呆れていた。
フェイトもティアナも「これは無いわ～」と呟いていた。
映像が進んでいき、ある場面にて、フェイトとティアナは息を飲んだ。
それは、海鳴市の何処かの道端なのだろう。
其処には地に伏せている一人の男性の姿があった。
その男性は頭から血を出して倒れている。
闇夜の雲の陰より差し込む月光は青年と倒れている人間を明確に映し出し、場を演出していた。
一瞬幻かと思ったが、目の前の光景はあまりにリアルだった。
彼の足もとに居る狐もその場の空気に恐怖しているのか怯える様に鳴いている。
その場に居合わせた青年も混乱していたが、元々一般人の彼がこのような現場に出くわして混乱するなという方が正しい。
再び男性の方をみれば明らかに誰かが背後から何か鈍器のような物で一撃して倒したのだろう。
後頭部から夥しい血が流れており、横顔を血で染めている。

被害者は男性で着ている服装はジャージであり、荷物の方は竹刀袋である。
これほどまでに状況証拠が揃っていればおのずと答えが出てくる。
この男性は剣道家であるということだ。
その事から、恐らく倒れている男性が先程、映像に出ていた道場の関係者である事は容易に察しがついた。
しかし、何故、彼は此処で倒れているのか？
幕末の京都ならば、辻斬りなどが横行していたが、今の安寧の世でその様な事がそう簡単に起きるのだろうかと、疑問に思うフェイトとティアナ。
そして、青年はその場に落ちていた凶器らしき木刀を手に取った時、運悪く通行人にその姿を見られてしまい、犯人と勘違いされた。
逃げる青年を匿ったのが他ならぬ月村忍だった。
その後、彼は自らの汚名を雪ぐ為、忍の協力の下、真犯人を探し求めた。
そして、
「やっと見つけだぜ、辻斬りヤロウ!!」
「はぁはぁはぁ・・・侍君、足、速いよぉ～」
白装飾で白い布で顔を隠した真犯人に青年と忍が犯人に向かって叫ぶ。
まさにサスペンスドラマでは、いよいよ物語の終盤、一大クライマックスを迎えているような場面で場違いな声がした。
「お、おにいちゃんたちは・だ、誰ですか？」
血まみれの男性の近くに幼い少女が居た。
少女は怯える様子で訊ねる。
確かにいきなり白い布を顔に被り、木刀を持った男性らしき人物に襲われかけていたのを助けてくれた事は事実であっても、それが必ずといって、自分の味方だとは限らない。
その為に彼女は、自分を助けてくれた男性とその友達であろう女性に震える感情の中で声を出して聞いたのだ。
「名乗ってなかったな。俺は・・・だ・・・テメェのせいで、散々な目に

あったからな、テメェをボコボコにしてから警察に送り届けてやる」
肝心な青年の名前の部分だけは何故か映像がぶれて彼の名前は聞けなかった。
彼は、対峙する相手に木刀を向けて名乗り出した。
青年が堂々と名乗ると、対峙する男は何故か面白そうに笑って言った。
「ふっ、まさかこのような場で出会えるとはな・・・・」
「うん?・・・・って、その声!?」
青年が目を見開く中、その男はゆっくりと顔を覆っていた布を取り外していく・・・・。
映像を見ているフェイトとティアナは驚いた、その通り魔の正体と青年の名前を聞いた少女の姿に・・・・。
そして、犯人の正体は青年が道場破りをした道場の師範で自らの教え子たちや罪も無い人々を傷つけていた事にも・・・・。
やがて、ティアナが震える声でフェイトに訊ねた。
「フェイトさん・あの子って・・・・どう見ても・・・・」
「え、ええ・幼い頃のなのはよ・・・・」
かつて海鳴で対立し、次に再会した時には味方として出会った少女・・高町なのはの姿が其処にあった。
(なのはさん、昔はちゃんと年相応な可愛さがあったんですね)
現在のなのはと映像に映っているなのはを比べ、ティアナは今のなのはに対して失礼な事を思っていた。
「いけしゃあしゃあとよく言ってくれるな、このジジイ!・お前のせいで俺が濡れ衣着せられたんだぞ!!」
連続通り魔の容疑者にして、青年に屈辱と濡れ衣を着せた真犯人。
「因果応報とはこの事かも知れんな、まさか君がこの場所に現れるとは」
青年は既に木刀を持ち、構えていた。
真犯人の道場の師範も青年の構えに気付き直ぐに隙の無い構えをしている。
特にフェイトは剣術を戦闘に使うタイプなので、犯人の構えに隙が

無い事が直ぐに分かった。
「持ち方が様になっているとは」
冷徹な目の輝きに揺れを浮かべて、青年の手元を見て言う。
確かに最初、道場破りをした時と犯人と対峙している時とでは、明らかに構えが違う。
「ノエル，倒れている奴を見てやれ、息があるなら救急車だ」
少しの沈黙後。
「はい、承知しました」
「忍はガキの面度を見ろ、警察は後回しだ」
ノエルとしては人の命に係わることなので直ぐにその命令に従うが、忍は青年の言葉に不満である。
それは映像を見ていたフェイトとティアナも同じである。
「どうして警察を呼ばないの？侍君。犯人が目の前にいるんだよ？」
「犯人が何の関係もない赤の他人だったら、このまま警察に突き出してもいいんだがな、こいつが犯人だってなら話は別だ!!牢屋へ送る前にあの時の決着をつけてやる!!」
忍は青年の強い意志とその言動に負けたようで、最後にこの様な言葉を言い残した。
「侍君らしいね。分かった‥良いよ‥存分に戦いなよ、貴女もそこは危険だよ。こっちにおいで」
忍の呼び声に事態の成り行きがわからないなのはは困惑している様子。
「で、でも‥‥」
おろおろしていたなのはであるが。
「ちょっと君!!あの人は‥‥侍君に任せて、私たちは下がった方がいいわよ!!」
なのは　は忍の下には行かず、あろうことか犯人と対峙している青年の足元に駆け寄った。
忍は声をあげ、なのはに注意を促すが、なのは　はその注意を聞かず、頑としてその場を動こうとはしなかった。
そして映像の中のなのはが犯人に向かって声を上げた。

六十七話　時には昔の話を

月村家にて昔の記録映像を見ていたフェイトとティアナ。
その映像の中で、まだ幼い頃の高町なのはの登場と当時、海鳴で横行していた辻斬り事件の犯人の正体に驚愕した二人。
そして、二人はこの後のなのはの行動に更に驚愕する事となった。
やがて、映像の中のなのはが犯人に向かって声を上げた。
「どうして・・どうしておじいちゃんがこんな事をするの!?どうして!?」
その言葉を聞いたフェイトとティアナは少しだけ困惑した。
過去になのはと対決したフェイトにとってこの言葉はある意味仕方が無い事である。
そして、かつて模擬戦でコテンパンにされたティアナも力を行使する前にこうして話し合おうとするなのはの姿に困惑した。
『説得・話し合い＝戦闘』という印象が強いフェイトとティアナにとっては当たり前の事でありその説得・話し合いを受けた身としては、思い出したくもない記憶の一部であるのは言うまでも無い。
「美由希君の妹さんか・・・この男が勝つ事を祈ることだ、でなければ私は君も手にかけなくてはならん」
辻斬りの犯人は青年に勝ったら、この場に居る人間全員を口封じするつもりだった。
「分からないよー!・おじいちゃんはおにいちゃんやおねえちゃんにも優しかった!みんな、みんな、おじいちゃんが好きだったんだよ!それなのに、それなのに・・・」
なのははフルフルと身を震わせて言う。
彼女にとって、この犯人は自分にとって優しいお爺さん的な存在だったのだろう。
それが、今までの起きた辻斬り事件の犯罪者である事が判ったのだ。
もうこれ以上人を傷つけるのは止めてほしいと思いながら説得す

るのは当たり前である。
彼を止めるにはそれしか選択肢がない状態なのだから・・・。
そんななのはの説得に対して犯人は、
「全ては正すためだ・・・」
「えっ!?」
犯行理由を語った。
「時代が変わり、この国は誰もが平和に過ごせる豊かな国となった、だが、同時に腐敗への幕開けでもある。今後の国を担う若者たちの堕落ぶりは目を覆うほどだ。髪・目・耳・服。自分の目ではなく、画面の向こうの情報だけを信じる情報社会に毒される者たちのなんと多いことか。自分の主張すらまともにできず、社会に不適格な者が続出している！無論、このような事で大きな変化が訪れるとは思っていない、しかし、これは誰かが行い、正せねばならんのだ!!誰かが今の時代が過ちだと教え、世間に知らしめなければいかんのだ！」
犯人の動機から見て、この老人が己の欲望を満たす為の快楽や自らの力を試す為、平穏な日常に刺激が欲しいと言う訳では無いようだが、管理局員である自分たちから見てもそのような理屈で人を傷つけ、殺して良いという事は在ってはならない事実である。
「ふざけるな!!そのような理屈で!!人の命を一体何だと思っている!?」
思わず、椅子から立ち上がり声をあげるフェイト。
映像に映る人物は既に二百年以上前の人物であるが、フェイトにとってはどうしてもスクリーンに映る老人が・・その犯行動機が許せなかった。
「フェ、フェイトさん落ち着いてください」
興奮するフェイトをティアナが慌てて宥める。
「ご、ごめん・・・」
ティアナから宥められてフェイトは椅子に腰を下ろす。
「そんな・若い人にだっていい人はたくさんいます！髪の毛の色を変える人が何で悪い人なんですか!?良いか悪いかなんて、そんなのお爺ちゃんが決める事なんてないのに!!」

なのはも犯人の動機が余りにも無茶苦茶なのだと理解した様で、犯人の動機を批判する。
なのはと犯人との会話が続いていた時に青年がなのはの頭にポンっと手を置いた。
「おにいちゃん・・・？」
不思議そうに見つめるなのはに微笑み、青年はなのはを自らの後ろに下がらせた。
「ごちゃごちゃと奇麗事をほざいているけどよぉ、結局はむかついたんだろう？」
青年は思った事をそのまま犯人に向かって言った。
「どんなに奇麗事をほざいても、お前のやっている事はただの犯罪なんだよ!!下らねぇ御託を並べて、テメェを正当化してんじゃねぇぞ、こら!!」
これはどう、考えても完全に挑発行動以外の何者でもなかった。
しかも、言って来たのが、自分よりも格下相手に言われたことに腹が立ったのか、
「黙れ！何も知らない小僧が!!」
激怒し、犯人は木刀を振り上げて襲い掛かってきた。
相手は青年よりも年老いているとは言え、剣の腕では格上。
当然、青年は殆ど防御に回っているが映像で見る限り、剣速はかなり早い部類に入る。
時間が経つに連れて次第に追い詰められている、それでも木刀と木刀のぶつかり合う音が聞こえている
それを数えると大抵八回程度で一度は止まり再び音が聞こえるという現象が起きている。
死中に活を求めなければ、勝てないのだが、全く攻撃できる余裕はない。
次第に防御が追いつかなくなり、遂には右肩に相手の突きを受け、負傷してしまう。
更に青年の木刀までもが相手に折られてしまった。
絶体絶命のピンチであったが、そこへ更なる登場人物が来た。

なのはの兄と姉である高町恭也と高町美由希の二人だ。
二人の突然の登場で、仕切り直しとなった死合・・・
青年はノエルから新しい木刀を受け取り、構える。
勝負は互いに一撃を放つのみとなった。
そして、勝敗は青年に軍配が上がった。
その後、駆け付けた警察によって犯人は逮捕され、青年は病院へと担ぎ込まれた。
それから、映像は日常風景へと戻っていった。
その中で、フェイトはある疑問を感じた。
それは、なのは、アリサ、すずかの通っている小学校の名前だ。
自分も小学三年生の頃から中学三年生まで同じ学校に通っていた為、間違える筈がない。
自分たちが通っていたのは、『私立聖祥大付属小学校』だ。
しかし、この映像に映っている、なのはたちが通っている小学校の名前は、『私立海聖小学校』と出ており、着ている制服も自分たちが着ていた『私立聖祥大付属小学校』の制服と若干違っている。
また、運動音痴で有名だったなのはであるが、この映像のなのはは、兄や姉から剣の手ほどきを受けており、普通の運動に関しては、自分たちの知るなのは同様運動音痴なのだが、剣術に関しては、一日の長があった。
特になのはが繰り出す左片手平突きの威力を見たフェイトは大変驚いたのと同時に、
(凄く綺麗・・・)
と、剣術を披露するなのはに憧れの眼差しを向け、
そして、ティアナも、
(なのはさんって剣術が上手かったんだ・・・でも、何で今はやっていないんだろう?)
と、この世界のなのはと自分の知るなのはの区別がつかなかった。
当然、ティアナの知るなのはは、剣術の手ほどきなど受けていないため、映像の様な、左片手平突き等出来る訳がない。
それから一年の歳月がダイジェストで流れ、なのはたちは小学四年

生に進級した。
（あ、あれ？ジュエルシードは!?闇の書は!?何であの事件が起きていないの!?それに私が出てきていない!!）
フェイトはひどく狼狽した。
なのはとの出会いのきっかけとなったＰＴ事件が起きなかったのだ。
それにはやてとヴォルケンリッターたちとの出会いのきっかけになった闇の書事件も起きていない。
「っ!?」
やがて、映像が流れていく内、フェイトは目を大きく見開いた。
通学の登下校の際、なのはたちの中に小学生の頃の自分の姿が映っていた。
しかも驚いたのは、映像の中に自分よりも少し身長の低い、自分に似た容姿の少女の姿も一緒に映っていた。
彼女は、なのはたちに『アリシアちゃん』と呼ばれ、映像に映る自分も彼女の事を『姉さん』または『アリシア』と呼んでいた。
（フェイトさんにお姉さんっていたのかしら？）
フェイトの姉と言う人物に疑問を抱き、チラッとフェイトを見ると、フェイトは明らかに動揺していた。
（アリシアが生きている!?そんな・・・そんなバカな事が・・・）
フェイトの姉・・いや、オリジナルとされるアリシア・テスタロッサは、フェイトがこの世に生み出される随分前にこの世を去っている。
だからこそ、その姉とも呼ぶべき存在が映像の中で映っている自分と同じ様に仲良く並んで歩くなんて事は不可能な筈だった。
フェイトの動揺がおさまらない内に映像が進んでいき、すずかが贔屓にしている古書店と言うお店が出てきて、そこの店主がはやてだったことにもフェイトとティアナは驚いた。
なのはたちと同い年にしか見えないはやてであったが、映像の中の彼女は飛び級をして１０歳で既に大学を卒業している才女であった。
それに店の従業員の中には、ヴォルケンリッターの面々の他に闇の書事件おいて、消えた筈の彼女の姿もあった。

（八神部隊長が本屋の店主!?どう言う事!?）
ティアナははやてが本屋の店主をしている事に驚いた。
一方、ここまでの映像を見て、フェイトは、この地球は自分たちの知る地球とは完全に違う世界なのだと判断した。
（ティアナ、この地球の歴史は私たちの知っている地球とは違う歴史を辿ったみたい・・・）
（そんなっ!?そんな事ってあるんですか!?）
念話にてフェイトはティアナにこの地球と自分たちの知っている地球は別世界だと告げる。
ティアナは当初、信じられなかったが、実際、映像の中のはやては管理局には入っておらず本屋の店主をしていたのだから、フェイトの説が正しいと思わざるを得ない。
そして、フェリシアやセフィリア、紅葉がこの世界における自分たちテスタロッサ家と親友の高町家の子孫である事も分かった。
途中ではあったが、この地球の歴史が別の地球である事を十分に理解したフェイトはノエルに映像を止めてもらった。
ティアナの方はもう少しみたいなと言う顔をしていた。
そこで、ティアナはアルバムを見て、映像の続きの補足をした。
その中で、ティアナはこの世界のなのはたちの未来を断片的であるが、知る事となった。
なのはは、翠屋の二代目パティシエールとなり、やがて結婚し、子供を設け、ごくごく平凡な生活を送り、天寿を全うした。
フェイト、アリシアのテスタロッサ姉妹も大学進学後、実家のホビーショップを継ぎ、二人ともそれぞれ結婚し、天寿を全うした。
ただ、フェイトとアリシア、どちらがセフィリア、フェリシア親子の直系の子孫なのかは分からなかった。
はやてに至っては残念ながら、天寿を全うすることなく、若くして重い病気にかかり、この世を去った。
亡くなったのも自分の知るはやてと年齢が近いが、少なくとも自分が知るはやては、元気そうで、病気で亡くなることは無いだろう。
しかし、この事実を果たしてフェイトやなのは、そしてはやてに教

えるべきだろうかと悩んだティアナであったが、話すのは止めておいた。
この世界のフェイトたちは自分の知るフェイトたちではないし、はやてに至っては若くして亡くなったのだから、あまり気分のいい話ではないだろう。
なお、目の前に居る月村家当主である忍はあの辻斬り犯を倒した青年と結婚していた。
映像を見終わった後、フェイトは忍とノエルに何故、容姿が変わらないのか？
何故、二百年近い年月を生きているのかを訊ねた。
すると、忍は以前、リニスに話した月村家の秘密をフェイトとティアナに話した。
二人が魔法を使う魔導師である事、
異世界の治安維持を行う組織、以前ギンガが務めていた時空管理局の局員であると言う事を事前にリニスに聞いており、忍は自分たちの事を話したのだ。
話を聞いた当初、ティアナは信じられないと言う表情をしていたが、忍が補足の為、アルバムを見せて、その信憑性を裏付けた。
(忍さんやすずかが吸血鬼だったなんて・・・まさか、私の知るすずかもそうなのかしら・・・)
この地球と自分の知る地球はそれぞれ異なる歴史を辿っていた。
だからこの世界の忍やすずかは吸血鬼だが、自分の知るすずかは吸血鬼ではないかもしれないと思いつつもやっぱり吸血鬼なのではないかと言う不安があった。

それから数日後・・・
ヤマト、まほろば　がイスカンダルからの航海に帰還した三日後、良馬、古代兄弟、真田、更にフェイト・テスタロッサ・ハラオウンとティアナ・ランスターは地球防衛軍本部に出頭した。
無論、イスカンダル救援作戦及び、時空管理局艦船遭難事故についての報告と情報交換のためである。

イスカンダル救援作戦の報告中、フェイトとティアナは別室で待つことになり、良馬たちは、先に長官室に通された。
部屋には藤堂の他に数人の司令部幕僚、地球連邦政府関係者数名が待っていた。
また、司令長官秘書である森雪も当事者の一人として同席を命じられた。
互いに敬礼を交わし、報告と質疑応答が始まる。
一連の経過は航海日誌と任務詳報、戦闘詳報が帰還翌日に提出されており、それを元に進められた。
ガミラス軍との共闘についてはある程度の予想がされており、
当時としては最善の方策だったとしてさほど問題にはされなかったが、暗黒星団帝国軍や白色彗星帝国軍残党との交戦、さらに時空管理局なる組織との本格的な接触については司令部としても放置できないのか、幕僚や政府関係者からの質問が相次いだ。
まず、暗黒星団帝国関連では太陽系の目と鼻の先まで進出してきた事、そして、イスカンダルではイスカンダリウムを強引な手段で採掘しようとした事から、交戦はやむを得なかった事と判断されたが、
彼らの目的が、他の星系に住む生命体の存在など気にせず、強引なエネルギー採掘を行い、そのエネルギー採掘はそこに住む生命体の生活に危険を及ぼす採掘で、その採掘したエネルギーの使用目的が星間戦争である事から、彗星帝国同様、侵略を生業とする侵略星間国家である可能性が大な為、今後警戒が必要な事、
更に、採掘しようとしたペテルギウス、イスカンダルのエネルギー採掘作業を妨害し、ましてや、その艦隊を全滅させた事から、今後、彼らの報復あるいは太陽系への侵攻の可能性は否定できないと予想された。
「君たちなら嫌というほどわかっているだろうが、ガミラスとの戦争で、全ての分野で君たちくらいの、働き盛りの世代の数が一番少ないのだ。この人口減少と防衛軍を始めとする全ての職の人材不足があと２０年は続くと言われている現状では、有人艦船の建造もままならない。しばらくは無人艦艇も併用していくことになるだろう」

西郷の説明が終わるとともに、いくつかの艦艇の三面図がスクリーンに投影された。
「試作段階だった無人艦は、現在運用されている主力戦艦や巡洋艦をベースにした無人艦を建造したが、来年には全く新しい無人艦艇の建造が始まる」
藤堂が新たな無人艦の説明を行う。
「上からクレイモア級自動戦艦、カットラス級自動巡洋艦、ダガー級自動駆逐艦だ。有人艦に関しては、各国ごとに戦艦を建造し、次世代主力艦開発の参考としているが、その第一陣として、アメリカが建造を再開した大型長距離戦艦アリゾナ級が来年の春頃に竣工し、同型艦も三艦が就役する。ヨーロッパではイギリスのプリンス・オブ・ウェールズ級、ドイツのビスマルク級、ロシアのノーウィック級がそれぞれ四隻、中国では定遠級が二隻いずれも来年中には竣工する予定だ。いずれも7～8万トン級で、ヤマト同様、長期間の行動を想定した大型戦艦だ」

艦船ステータス
クレイモア級自動戦艦
新型エンジンや武装により、性能は有人の戦艦を凌駕するが、コントロールは有人艦、または地上基地からの操作に依存する。
艦首には、収束波動砲と拡散波動砲を装備する二つのタイプがある。
波動砲以外の兵装も四連装51cm衝撃砲を装備している。

カットラス級巡洋艦
艦の外観は紡錘―葉巻型の変形に分類される。
無人なので艦橋は無い。
その代わり送受信アンテナが設置されている。
艦首下側に外付け式（外装式）の収束波動砲を一門装備している。

その他の武装としては旋回式の三連装衝撃砲塔（ショックカノン）を艦前半部の上下に2基に装備している。
艦後部上側には固定式の連装衝撃砲を後ろ向きに装備している。
舷側には固定式衝撃砲、パルスレーザー砲を装備。

ダガー級自動駆逐艦
有人駆逐艦の特徴である先端が丸まった紡錘―葉巻形の艦型形の船体とは大きく変わり、細長い四角錐を基調とした船体をしている。
またメインエンジンノズル部にあるインテークの形状が、有人駆逐艦の様に円形ではなく、横に広がったかまぼこ型の大型インテークを上部のものより小型で扇型のインテークを下部に有していて、一見すると小さな翼が生えている様に見えるのがデザイン上の特徴となっている。
武装は中口径主砲と平行発射ミサイル、艦尾ミサイルを装備している。

アメリカ戦艦　アリゾナ級
基本構造はアンドロメダ級戦艦に近く、艦中央部のバルジ、補助機関と安定翼のX型配置、艦橋後部の多目的センサーマスト、船体下部の補助機関ナセルなど、艦底から艦後半部にかけて共通の特徴がある。
艦首は主力戦艦、艦橋形状はヤマト級戦艦と細部は異なるが、これまでの地球防衛軍の艦艇の折衷形の艦型である。
波動エンジンを一基装備し、補助機関はアンドロメダ級と同じく四基備えている。
兵装は艦首波動砲を一門装備。主力戦艦同様に、発射口中央部に縦に仕切板がある。

主砲として、三連装衝撃砲を艦前部上面に二基、艦後部上面に一基、計九門を装備。
副砲として、対白色彗星帝国戦役時の巡洋艦と同様に船体中央の両舷面に装備し、艦尾以外の艦後方も広く射界に含んでいる。
船首にはヤマト級と同様のミサイル（魚雷）発射管と思われる台形のラインが両舷で十二門ある。
対空兵装は、艦橋付近の両舷に、連装対空パルスレーザー砲を3基、計１２門装備する。
同型艦　ペンシルヴァニア　アイオワ　ミズーリ

イギリス戦艦　プリンス・オブ・ウェールズ級
艦型は、対白色彗星帝国戦役時の主力戦艦に基本形に、艦尾は０１式巡洋艦に近い形状をしている。艦首が衝角のような長い突起形状をしているのが特徴的である。船体のカラーリングは主力戦艦とほぼ同様である。
武装は、艦首波動砲の他、連装衝撃砲を艦前部上面に三基、後部上面に一基を装備している。
同型艦　キングジョージ五世　デューク・オブ・ヨーク　ハウ

ドイツ戦艦　ビスマルク級
対白色彗星帝国戦役の主力戦艦級を基本形とし、艦底部はヤマト級戦艦の艦影の推進部はスマートな直角な艦型を採用し、艦橋はヤマト級戦艦、主力戦艦級の形式を合わせ持った様な形状をしている。
この、従来の地球防衛軍艦艇の集大成的な艦型は、同時期に登場するアリゾナやプリンス・オブ・ウェールズに見られる共通の特徴である。

兵装は艦隊決戦兵器である波動砲を小口径ながらも六連装となっており、艦首の船首楼付近に装備。
その他の武装は主砲　三連装エネルギービーム砲を三基、四連装艦首ミサイルを二基、舷側多連装レーザー砲郭を四基装備している。
同型艦　ティルピッツ　アドミラル・グラーフ・シュペー　アドミラル・シェーア

ロシア戦艦　ノーウィック級
ノーウィック級は、対白色彗星帝国戦役の主力戦艦級を基本形とし、艦底部は　ヤマト級戦艦、艦尾の推進部は巡洋艦の艦型を採用。また艦橋は　アンドロメダ級戦艦の形式を採用している。この、従来の地球防衛軍艦艇の集大成的な艦型は、同時期に登場するアリゾナやプリンス・オブ・ウェールズに見られる共通の特徴である。
兵装は艦隊決戦兵器である波動砲を一門艦首に装備。
その他の武装は全て格納式になっている。
同型艦　クニャージ・スヴォーロフ　アルハンゲリスク　レトヴィザン

中国戦艦　定遠級
基本構造は従来の主力戦艦に近い構造で、艦首は主力戦艦、艦橋形状は、細部は異なるが、カットラス級自動巡洋艦に似た構造となっている。
波動エンジンは、一基装備し、補助機関はアンドロメダ級と同じく四基備えている。
兵装は艦首波動砲を艦首に二門装備し、上部に左右三連装の格納式の砲塔を一基ずつ、計二基。両舷の左右に格納式の副砲を一基ずつ、計二基。下部に左右三連装の格納式の砲塔を一基ずつ、計二基。

上部前部にミサイル発射管を多数装備している。
同型艦　鎮遠

「それは私も耳にしましたが、日本は？」
真田が藤堂に質問した。
「日本では、アンドロメダ級二番艦、アンドロメダ・改級戦艦が年明けには就役する。ヤマトも近代化改装と、新型の戦艦、大型の重巡洋艦、大型防空駆逐艦も現在、設計中で設計出来次第、建造を開始する」
ふむ、と一同は頷いた。
「それはまた破格な艦ですが、白色彗星帝国との戦訓は導入されるのでしょうか？」
良馬が彗星帝国戦役時での懸念を口にする。
新生・地球防衛軍の象徴たるアンドロメダが呆気なく失われた原因の一つが、過剰なまでの自動化だったからだ。
「完璧ということはありえないが、一層の自動化を進める一方、マニュアルオペレートの余地を大幅に拡大した。そのデータには君が艦長を務める　まほろば　が大いに役立ったよ。今後の新型艦船もそれに準じた設計とするが、現在運用している有人艦も近代化改装し、同じ対策をとる予定だ」
藤堂の説明を聞き、良馬も納得した。
「これらの艦は、君たちも耳にしている、検討中の宇宙移民計画に備えたものでもある。しかし、いくらカタログデータが優れていても、それを動かす者の技量が低ければ張り子の虎だ。そう言う意味では、人材育成や白色彗星帝国軍残党の掃討等には君たちの世代が中心になって進めてもらわねばならないことが山積しているのだ。頼んだぞ」
藤堂長官が締め、一同は直立して敬礼した。
小休止を挟み、次は、新たに接触した『時空管理局』について意見交換が行われる。

「彼女たちと話す前に、君たちが地球に戻って来るまでに、土星圏でまほろば　が接触し、後に此方で回収されたテリオスという難破船を解体調査した結果わかったことを君たちに知ってもらい、情報と意見交換を行った上で、我々の認識を共通なものにしておきたいのだ」
「わかりました」
話が進むにつれ、古代たちの表情は厳しく、憮然としたものになっていった。
過日、土星圏において彗星帝国残党軍と交戦し、大破した時空管理局次元航行本部所属Ｌ級航行艦テリオスの船体と乗組員の遺体を検視した最新状況が良馬や古代たちに知らされたのだが、内容は皆を渋面化するのに十分過ぎる程で、ツッコミ所がテンコ盛りだった。
以前、接触したノア同様、収容された遺体の中に、満十五歳に満たない者が多数含まれていた。
うち一人名は、身分証明書と艦内のカレンダーを照会したところ満九歳。
魔導士ランクとやらではＡＡＡクラスという。
回収された管理局の資料では、その位の年頃で魔力ＡＡＡランクは天才の範疇に入ると言う。
「天才なればこそ、きちんとした人間教育を施してから任務に当たらせるべきだ。それを才能が有るからと言って、直ぐに前線勤務につかせるなんて理解不能だ」
真田が首を振りながら言う。
「一体、時空管理局は何がしたいのか全然わかりませんよ」
古代が呆れたように言う。
「俺が言えた義理ではないが、年端もいかない子供を危険な前線任務に就かせている時点でまともに付き合うなんて無理だろう、この組織」
守が嫌悪感を示しながら言う。
子供が含まれていたことは皆知っていたため覚悟はできていたが、一同が精神を摩耗するのはこれからだった。
解析に当たっていた幕僚が古代たちに説明を行う。

「解析の結果、このテリオスと言う艦・・・実は、しばしばダーティミッションにもついていたようです」
「ダーティミッション？それってつまり・・・」
「公には出来ない汚れ仕事って事か・・・」
ダーティミッションの意味についてその意味を察した守が呟く。
管理局の整備員が決して無能と言う訳では無いが、テリオスのメインコンピュータを整備員が丁寧にメンテナンスを行わず、普段通りのマニュアル整備をしていた為、テリオスに残されていたダーティミッションの記録がそのまま残っていた。
防衛軍は、未知の組織である時空管理局所属の艦と言う事で、徹底的に調べあげた結果、今回の件が防衛軍側に明るみになった。
「それでは、此方をご覧ください」
幕僚の一人が機器を操作して、映像を再生する。
それを見た一同の顔に程度の差こそあれ、憤怒の色が浮かぶ。
反管理局勢力の殲滅任務。
それならば百歩譲って分からない訳では無いが、その作戦内容が、大勢の無関係の住民もろとも魔導砲『アルカンシェル』と呼ばれる広域砲を無警告で砲撃し、何も知らない住民諸共テロリストを消滅させたこと。
管理世界入りを拒否した世界にも同様の殲滅作戦を実施し、多くの非戦闘員を虐殺した映像。
ロストロギアとやらの回収では強奪・強盗同然の回収も少なくない。
更に管理外世界に属する、魔法文化の無い世界における現住民への略奪・暴行、魔力素質者の拉致。
また、管理世界においても魔導師資質が高い子供を強引に管理局へ入局させる強引な勧誘と引き抜き・・・。
拒む保護者に対しては圧力をかけて、社会的・経済的に追い込み、その子供を管理局に入局せざるを得ない状況に追い込む。
そして、今後の任務に支障をきたす程の重傷を追えば、まるでボロ雑巾の様にその者を懲戒解雇する・・・つまり、強引に引き抜いたくせ

に、使えなくなったら即捨てる。
組織には必ず暗部があるというが、これはあまりにも酷い。
時空管理局は次元世界の法と正義の守護者？
これらのような行為をしていて平然と自らを正義と名乗る。
余りにもお笑い草なブラックジョークだ。
嘲笑ってもいいだろ？
連中は高ランク魔導師が支配する魔法階級制度の社会を作りたいだけなのではないだろうか？
それによって自分たちが欲しいと思ったモノはどんな手段を使用してでも手に入れる傲慢。
非魔導師は魔導師に従う社会を形成し、質量兵器の撲滅と銘打って非魔導師から戦う力を取り上げようとしているのではないだろうか？
要は自分たち、魔導師よりも強力な力、優れた力を持たれると自分たちの地位が揺らぐのでそれを防ぐために魔法以外の戦う力を奪っている。
直に話した限り、フェイトたちは純粋に住みやすい社会づくり、治安維持に貢献したいようだが、自分たちの所属する組織の裏の本音を知ったら、果たしてどうするつもりだろうか？
次に根拠地であるミッドチルダで流されていた番組の映像データもあった。
其方も再生してみると、スクリーンには十歳前後と思しき三人の少女が映し出され、その姿に一同は唖然とする。
「ハラオウンさん？」
「それに紅葉ちゃん？それにディアーチェも・・・」
古代、そして良馬が少女達の姿を見て、目を見開く。
「金髪の少女の名前はフェイト・テスタロッサ。今回保護したハラオウン執務官本人だ。そして紅葉ちゃんに似た栗髪の少女は高町なのは、ボブカットの少女は八神はやてといい、テスタロッサ嬢以外は、時空管理局が第９７管理外世界と呼称している『地球』の生まれで、しかも海鳴市に住んでいた・・とある」

「高町って・・・・」
驚きの声を上げる一同に幕僚が更に続ける。
「そして、その三人のつい最近の写真がこれです」
映し出された画像は二十歳前後の女性の姿。
顔立ちからみてもあの三人の現在の姿だろう。
内、フェイトについては今さら言うまでもないが、その姿はフェリシア。
八神はやてと言う女性については、髪と瞳の色以外はディアーチェにそっくりだった。
ギンガやフェイト、ティアナの三人がディアーチェを始めて見た時、「はやて」と呟いたのも分かる。
高町なのは　は航空戦技教導隊所属の教導官で階級は一等空尉。
八神はやては特別捜査官職にある二等陸佐で、三人とも魔導師ランクはオーバーSクラスと言う。
「艦から回収した記録では、三人は満九歳の時から時空管理局に所属し、魔導師として様々な事件を解決した・・とあります。そして、この三人は時空管理局の若きエースとして、マスコミに取り上げられることも多いようです」
「言っちゃあなんだが、多分管理局の広告塔、あるいはプロパガンダの意味合いもあるんだろうな」
良馬は眉間を押さえていた。
他の皆も渋い顔をしている。
あんな年端もいかぬ子供たちに幼い頃から危ない橋を渡らせないと平和を維持できないのだろうか？
時空管理局と言う組織は・・・・。
大人たちは普段何をしているのか？
ピーターパンが住むとされるネバーランドじゃあるまいし・・・・。
大人の局員が少ないのか？
フェイトたちにとっての幸運は、ノア、テリオスの両艦に機動六課の資料がなかった事だろう。
そして、六課に出向予定のギンガが六課の詳しいメンバーもまだ知

らなかった事もだ。
　まだ十歳にしかならず、それも自ら保護責任者を務めている子供二人（エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ）を危険が伴う任務に就かせていたと知ろうものなら、良馬も怒気が寛容を上回っていたかも知れないのだ。
　ひと通り資料に目を通した。
　重苦しい空気が漂う中、藤堂が口を開いた。
「時空管理局への対応について、君たちの意見を聴きたい」
　まず良馬が応える。
「ハラオウン執務官たちの事は別にして、こちらから必要以上のアクションを起こす必要はないと思います。向こうがコンタクトを求めてきた場合、緊急を要しないものは管理世界政府と地球連邦政府との協議にすべきであり、時空管理局と我が軍が直接コンタクトを持つ事は可能な限り避けるべきでしょう」
　管理局が何らかのいちゃもんをつけてこないとも限らない。
『餅は餅屋』の言葉通り、政治はその道の専門家に任せようと言う。
「なるほど。しかし、時空管理局は魔法に頼らない武装を質量兵器と称して禁じている。当然、我々が使用しているショックカノンや波動砲、コスモガンは、彼らが禁じている質量兵器にあたるだろう・・・もし、彼らが我々に武装解除を要求してきた時はどうする？」
　それには守が一言だけ答えた。
「一通り主張させた後、沖田艦長に習い彼方には『馬鹿め』の一言で回答してやればいいんです。第一、彼らが主張する次元世界とやらに我々が従う必要は全く、更に我々の地球は彼らの言う管理世界ではないのですから。友達付き合いしたいというならともかく、高圧的に管理局に従えと要求してくるのであれば、管理局を侵略組織と認定し、それに相応しい対応をすればいいだけです」
　守の言葉に良馬、古代らは頷いた。
『それに相応しい対応』・・・それはつまり、管理局を侵略組織とみなした場合は管理局の艦を撃沈すると言う事を意味していた。
　勿論、遭遇したから即攻撃と言う訳ではなく、降伏勧告または地球

連邦内の領宙域からの退避を勧告し、それでも従わず逆に武力行為を行ってきた場合だ。
良馬としては、確かに管理局は信頼に値する組織ではない。
それでもフェイトやティアナとはこうして知己を得る事が出来たし、彼女たちは、信頼は出来そうだった。
願わくば、管理局との武力衝突だけは起きて欲しくないモノだと思う良馬だった。

六十八話　組織の闇

防衛軍が日本を含む各国で行われている宇宙戦艦の建造計画、そしてテリオス、ノアに密かに記録されていた管理局の暗部を見て、フェイトとティアナの身柄を管理局へ返還した後、今後の管理局への対処方法を協議し、小休止が行われ、休憩後にフェイトとティアナが呼ばれ、意見交換が行われた。

それは、フェイトたちが想像していたような事態・・・地球防衛軍側による高圧的な尋問同様の事情聴取にはならなかった。

しかし、会議はどこか後ろめたさを含む重苦しい雰囲気のまま解散になった。

暴言や罵倒が飛び合う吊し上げのような事にならなかったのは、良馬と古代が、

「惻隠の情を持って接してほしい。彼女たちも彗星帝国の被害者なのだから」

と言う主張を司令部側に申し立てたのもその要因の一つだ。

時空管理局に対する認識は別の認識として、先方にもそうならざるを得ない事情があるだろうし、波動砲クラスの大量破壊兵器を時空管理局は保有しておらず、イスカンダル救援作戦時の波動砲の威力に彼女たちはかなりの衝撃を受け、脅威に感じても不思議ではなく、魔法文化に対する我々の印象とこの世界の軍事力に対する時空管理局の印象には何の違いもない、等と説明。

いささかヒートアップした議論になったが、藤堂長官の口添えもあり、良馬らの意向に沿ったものとなった。

しかし、フェイトたちとの質疑応答の間も会議場は重い雰囲気だった。

フェイトとティアナも人員が変わっていたとは言え、テリオスがダーティミッションに参加していたとは知らず、管理外世界への無警告でアルカンシェルを撃ち込み、その世界に住む大勢の無関係で無抵抗の住民へ対する虐殺行為、魔法文化の無い管理外世界における住民

への略奪・暴行、魔力素質者の拉致などの違法行為を目の当たりにしてショックを受けた。
また管理局の人材不足からの理由で、まだ年端もいかない子供の魔導師まで危険な任務に投入する理由を問いただされた時は、流石にフェイトたちも苦しげだった。
もう一つの地球――第９７管理外世界――で六年間暮らしたフェイトはその地でのルールも知っていたから、自分たちを見る目が厳しいものだろうとは覚悟していたが、その事実を知るのは、今この場ではティアナのみで、防衛軍側でその事実を知る者が居ないため、その件に関しては、咎められることは無かった。
そもそもフェイトもティアナも人事課の人間ではないので、管理局への人事に対する意見はそこまで強くは言えない。
ノア、テリオスに残されていたデータに関しての質問、管理局の組織運営等の質問は終わり、残りはフェイトとティアナをミッドに帰す事のみとなり、管理局とのコンタクト時のみ来てもらう事でフェイトとティアナは月村家に帰った。
「・・・・」
屋敷へ帰る道中の車の中で、フェイトとティアナは黙ったままであった。
その理由はやはりテリオスがダーティミッションを行っていた事とその内容だった。
反管理局勢力の殲滅任務・・・・
管理世界入りを拒否した世界への虐殺とも言える制裁処置・・・・
無抵抗、無関係の人間に対してアルカンシェルを撃ち込んでの大量殺戮をした事・・・・
魔法文化の無い世界における住民への略奪・暴行、魔力素質者の拉致・・・・
これでは、ガミラスや彗星帝国、暗黒星団帝国のやり方と何ら変わりないではないか・・・・
これらの事は本来管理局の法律で禁止されている事ばかりであった。

それを管理局は平然と行い、行った者は処罰される事無く、その事実は闇へと葬り去られているか、罪に問われる所か称賛される始末・・・。

管理局員は自分たちが作った法は守らなくても良いと言う暗黙の掟でもあるのだろうか？

自分たちの知らない所で法の番人、正義を語っている管理局が裏では平然と違法行為行っていた。

この世界へ漂流してから余りにも驚く事が多すぎた。

それと同時にフェイトとティアナの中で管理局が掲げる正義と言うモノが揺らぎ、曇って来た。

それどころか管理局の存在自体に対しても疑問点が湧いてきた。

特にティアナは、兄の葬儀の際、兄の上官からぼろ糞に言われた事、機動六課活動始めの際、親友の姉（ギンガ）の葬儀にも同じ光景を見た経験から、目の前の上官やその親友たちと違い、元々管理局に対して忠義なんてものは感じていなかった。

それ故に、管理局の掲げる正義に疑問を感じたのだ。

（私、このまま管理局に在籍していていいのかしら？）

今は執務官補佐であるが、今後もこのまま管理局に在籍して居たらいずれ自分にもあの映像にあったみたいな汚れ仕事を上層部が命じてくるかもしれない。

その時、自分はその命令に従う事が出来るだろうか？

無抵抗、無関係の者に対してデバイスを向け、引き金を引くことが出来るだろうか？

しかし、兄の死後、夢を抱いて来た執務官までもう少しなのだ。

ティアナの葛藤はこの後もまだまだ引きずる事になる。

（まさか、管理局があんなことをしていたなんて・・・）

そしてそれはフェイト自身も同じで、自分も管理局上層部から映像で見た様な汚れ仕事を命じられるかもしれない。

いや、自分だけではない。

はやてやなのは・・・エリオやキャロがあの様な汚れ仕事を命令されるかもしれない。

そうなった時、彼女たちのメンタル面は大丈夫だろうか？
事実が公になった時、管理局は命じた者には責任を取らさず、実行した者たちに責任や罪を着せて処罰するつもりではないだろうか？
ティアナ以上にフェイトには守るべきモノ、大切な者たちが沢山ある。
またフェイトとしては自分が所属する組織の闇を守に知られた事についてもそれなりにショックを受けていた。
彼女の葛藤：悩みはティアナ以上だった。

それから数日後・・・

時空管理局・次元航行本部
コンソールに着信を知らせるシグナルが点灯し、アラームが鳴る。
オペレーターがすぐに回線を繋ぐと、画面にはフェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官とティアナ・ランスター補佐官が映っている。
「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官及びティアナ・ランスター執務官補です。クロノ・ハラオウン提督は在室中でしょうか？」
二人の後ろには、先日の通信の時にも同席していた戦艦の艦長（良馬）も居た。
「た、只今お繋します」
オペレーターは慌ててクロノに通信を繋いだ。

ハラオウン提督執務室
「やあ、二人とも元気そうだな・・・もうそっちの地球に降りたのかい？」
「うん。三日前にね」
転送ポートが使えない以上、次元航行艦で迎えに行かなければならない。
しかし、肝心のフェイトたちが居る地球の座標を管理局は知らない。

フェイトとティアナのデバイスには現在位置の座標が記録されているかもしれない。
だが、管理局と地球連邦政府は正式に国交を結んではいない。
まだ知らぬ未知の組織に自分たちの座標をそう簡単に教える筈もなく、フェイトとティアナが居る地球へ迎えに行く事も困難な状態だった。
今はこうして通信により、近況を伝えるしかない。
口頭でも伝えられなくはないが、それを行えば自分たちにスパイ容疑がかかるのではないかとフェイトとティアナもちゃんと理解しているので、それはしないし、自分たちの置かれている待遇は決して悪いモノではないし、防衛軍は自分たちの身柄をミッドへと返還するつもりでいる。
ならば、下手な事はせずにその時を待てばいいだけの事だ。
今は、管理局との交信が行われているこの貴重な時間を有意義に使う事が先決だった。
「ねぇ、クロノ・・・実は・・・」
フェイトは先日、防衛軍との話し合いの中で見たテリオスが行ったダーティミッションや管理局の暗部とも言うべき、管理局が行ってきた違法行為の内容を話した。
「いや・・・そんな・バカな・・・管理局がその様な事を・・・」
彼女の話をクロノは当初は信じられなかった。
と言うのもどれもこれも管理局の法律で禁止されている事ばかりで、そのような公式記録は管理局のどこにも存在しないからだ。
テリオスのメインコンピューターに暗部行為の記録が残っていること事態が不思議なくらいだった。
しかし、ＪＳ事件後には管理局の不正が公になっている事からあり得ない事ではないと思うクロノだった。
だが、公式記録がなければ調べることもできない。
フェイトが見た映像を証拠に提出して関係者に尋問しても公式記録ではないことから証拠能力は『無し』と判断されそれらの違法行為を行った関係者を裁くこともできない。

ここまで酷い事をしておいてその者たちは罪に問われる事もなく平然としている現状にクロノとしてはなんとも歯がゆい事だった。
その後、フェイトとクロノ・双方の情報を交換してから、良馬も話に加わった。
フェイトとティアナが公式記録に残されていない管理局の暗部の記録を防衛軍との話し合いの中で見たと言う事は、良馬を含め、防衛軍関係者に管理局の暗部、違法行為が知れ渡っている事になる。
恐らく目の前に居る艦長も管理局の暗部の事を知っているだろう。
しかし、それにもかかわらず、彼は管理局員である自分やフェイトたちの前で嫌悪感を出す事無く、こうして対応してくれているし、フェイトたちの待遇にも今の所、変わった様子がない。
管理局の場合、此処までの対応が出来るだろうか？
クロノはそう思った。
しかし、人間が運営する組織である以上、１００％クリーンな組織など存在しない。
互いに心が読めるジレル人ならばもしかしたら、可能かもしれないが、防衛軍とて人間が運営する組織故、闇は当然存在する。
あのガミラスと地球との戦争・・・その発端となった出来事がまさにそれだ。
それに防衛軍が過去に事故として処理した案件の中にも、もしかしたら組織の闇である陰謀が含まれていたかもしれない。
軍艦の建造に至っても軍と政府の官僚、企業との癒着が存在しているかもしれない。
防衛軍、管理局、それら組織の闇は深く、その犠牲となった人の数は正確には分からない程である。
これら一切は組織の闇として公式な記録も証拠もなく、また一般には決して出る事もなく、市民や末端の組織人には一切知られることは無かった。
しかし、今回管理局は運が悪く、他の組織にそれら闇の所業がバレてしまい、そこから一部の同じ組織の人間にバレてしまった。
「重ね重ね有難うございます、月村艦長」

「いえいえ、船乗りの務めというだけですから、お気になさらず。それよりも、今後の話をしましょうか、クロノ提督」
良馬が持ちかけたのは、定期的にこういう通信のやりとりをする必要があるということ。
「そうですね、おっしゃるとおりです」
今後はあの世界・第二の地球の関係が管理世界や時空管理局の動向に大きく関わってくるかも知れないのだ。
フェイトたちにもう一つの地球を見せておくのも決して無駄ではあるまい。
とは言え、お互い常に連絡を取り合う事は大事だ。
クロノは良馬の提案を受けることにした。
「ところで、月村艦長、差し支えなければお聞きしたいのですが・・・」
「軍機に関わらない程度で良ければ構いませんが・・・」
クロノは、ヤマトと遭遇してから、ずっと持ち続けていた疑問を口にする。
「ヤマトをはじめとして、地球防衛軍の艦船はどのような動力源を採用しているのですか?」
(やはりそう来たか・・・)
クロノからの問いに良馬は予想通りの問いだと思った。
彼ら管理局側としたら、知りたいと思うのは当然だろう。
彼らの艦船技術と防衛軍の艦船技術では、此方側の方が上だ。
詳細はともかく、波動機関やタキオン粒子の存在はこの世界の子供だって知っているし、ヤマトが建造されて以降、高校や大学では物理の授業でタキオン理論も教えているから、特に秘密にすることではない。
「・・・ハラオウン提督は、タキオン粒子をご存じですか?」
「無限に加速する物質という概念は知っていますが・・・まさか、そのタキオン粒子は実在するのですか!?」
「基本技術はイスカンダルから齎されたものですが、現在は我が軍の宇宙艦艇の大部分や一部の宇宙船舶に搭載されています」
「そうですか・・・しかし、そんな事を我々に話してもよろしいのです

か？」
「既にタキオン粒子の存在は此方の世界では、子供も知っていますし、基本理論は高校の理科の授業で教えています。それに、もっと進んだ技術を持っている軍事勢力も存在しますからね」
良馬はタキオン粒子の基本理論と彗星帝国の艦艇の大まかな説明をし、通信に関しては週に一度、フェイト、ティアナの現状報告を兼ねて定時連絡をすることで合意し、通信を終えた。

通信を閉じた後、クロノは「ふぅ～」と溜息をついた。
フェイトたちの顔色は良さそうだ。
向こうの待遇は真っ当な様子で身柄を拘束されている訳でもなさそうだ。
二人については取り敢えず大丈夫だ。
しかし、管理局が行ったダーティミッションについては看過できなかった。
それに地球防衛軍艦船の動力源が、まさかタキオン粒子とはあまりにも意外だった。
どこの管理世界でも、実用化どころか、まだ理論すら確立されていない未知のエネルギー理論・・・・。
それもそうだ・・管理世界は医学等の一部の分野以外では、科学技術はさほど進歩していないのだ。
その医療技術すら、ミッドは地球連邦よりもレベルが下なのだ。
回復魔法、治癒魔法があるから別にいいじゃないか・・・・そう指摘する魔導師も居る。
しかし、魔導師とは言え人間であり神ではない。
治癒魔法とて、限界はある。
現に死んだ人間を生き返らせる魔法は存在しないし、なのはも十一歳の頃の大怪我の際には長期間の入院と懸命なリハビリで回復したのだ。
（次元世界の平和の為と言う名の名目で質量兵器の禁止が科学技術、医療技術の進歩の芽を摘んでしまっているというのか？）

あの白色彗星帝国軍の様に強力な軍事的脅威に対抗するには、現行の次元航行艦が全く役立たずと言うのはいやというほど今回の件で思い知らされた。
それに、地球側から提供された白色彗星帝国軍の兵器情報には宇宙戦闘機や大型攻撃機も含まれていて、これらの艦載機は、宇宙空間はもとより大気圏内でも行動可能という。
宇宙空間を飛行するのだから恐らくは速度は、超音速で飛行できるだろう。
有人とは言えスカリエッティの航空型ガジェットドローンとは訳が違う。
とてもじゃないが、あんな兵器が相手では、なのはやシグナムといったエース級の空戦魔導師でも対抗できない。
バリアジャケットを纏っているとは言え、フェイトですら音速のスピードなんて出せない。
ましてや空気が薄く気温が低い成層圏や真空の宇宙においての戦闘なんてもってのほかだ。
それも一対多数では・・・・。
「やれやれ、上にどう説明したものか・・・・」
今回、防衛軍側が再び通信を送って来た事から、この後また本局で報告会議が行われるだろう。
クロノは、今の映像を記録したディスクを手にすると、一つ溜息をついて立ち上がった。

それから、数時間後・・・・

時空管理局本局・次元航行本部　会議場
クロノ・ハラオウンはフェイトたちからの連絡映像データを本局の高官たちに見せていた。
しかし、ダーティミッションの部分については編集しカットした。
どうせ見せたところで管理局上層部は否定するだろうし、それどころかダーティミッションの部分を防衛軍側の策略だと言いだしかね

ない。
　もし、それが元で管理局のはねっかえりが向こうの地球へ戦端を開きかねないと思ったからだ。
「タキオン粒子だと？　馬鹿な!?管理世界のどこも実証はおろか理論すら確立されていないのだぞ!!」
「ブラフだ!!ブラフに決まっている！」
「その通りだ!!魔法文明の無い、管理外世界の連中にそこまで高度な技術が扱えるわけがない!!」
「そうだ!!その通りだ!!」
（これだよ。これだから嫌だったんだ・・・）
　次元世界積極拡大派、魔導師至上主義の高官たちの反応は、クロノの予想どおりの反応で、彼は思わず溜息をついた。
（大体、管理外世界だからと言って、我々よりも技術が劣るとは限らないだろう？）
『いい加減現実を受け止めろよ』と言いたげにクロノは次元世界積極拡大派、魔導師至上主義の高官たちを見た。
　実際にガミラス、ガトランティス、防衛軍、暗黒星団帝国は魔法技術を持っていないに世界にもかかわらず、管理局の次元航行艦相手に勝利しているではないか。
　最も防衛軍は管理局の艦と戦ってはいないが、これまでの実戦映像から管理局の次元航行艦よりも性能が優れているのは確かである。
「しかし、現実には彼らの艦船の方が管理局の艦と比べると遥かに強い。タキオン粒子云々は別にして、かの世界の探査は慎重に行うべきです。下手をすれば、ノアやテリオスの二の舞ですぞ！」
　唯一の救いは以前に比べると慎重な意見が増えてきている。
　これだけ次元航行艦がやられていれば、嫌でも現実的にならざるを得ない。
　だが、それでもまだまだ慎重論を唱える局員は全体の四割ほどである。
（管理外世界、管理世界云々は兎も角、タキオン粒子のブラフというのは当たっているかもな。今の我々の艦船ではお話にならないからな

…『下手にちょっかい出したら死ぬぞ』と遠回しこちらへ警告したんだろう）

管理世界拡大推進派の意見を聞き、うんざりする一方で、クロノは冷静に現状を分析していた。

以前よりは現実的な意見が増え、この映像を三提督にも見せるべきだという意見が出て、過半数がその意見に賛成したため、途中で握り潰されることはなくなった。

また、「第二地球」の座標は未だ不明であり、しかも、第二の地球の太陽系には、彗星帝国の残党軍が存在し、安全度が低く時期尚早の意見が多く、フェイトたちの身柄の返還及び調査に関しては、当面は見送りとなったため、クロノは胸を撫で下ろした。

強行して先方に発見されれば領海侵犯で拿捕抑留。

それどころか最悪撃沈されても仕方ないのだ。

勿論、彗星帝国の残党に見つかって撃沈される恐れだってある。

だが、もし防衛軍の手によって撃沈されれば、管理局はそれを理由にして第二の地球討伐の大義名分とうって第二の地球へ侵攻するかもしれない。

しかし、現状では管理局の次元航行艦全てを向かわせても、恐らく防衛軍には、勝てないだろう。

それに、フェイトたちが第二の地球に居る限り、そんな真似は出来ない。

しかし、その反面、フェイトたちがミッドに帰還したら、第二の地球に対して何らかのリアクションをとる可能性もあると言う事だ。

クロノとしてはそのリアクションが第二の地球との戦争の引き金にならない事を祈るだけであった。

「…」

クロノは渋い顔をして会議室を出た。

「ハラオウン提督、ちょっといいだろうか？」

会議室を出たクロノに、数人の提督たちが声をかける。

クロノに声をかけたのは皆、次元世界拡大には慎重な意見を持つ者ばかりだった。

「さっきの映像、もう一度見せてほしいのだが・・・」
「ええ、いいですよ」
クロノは僅かに顔を綻ばせて頷いた。

その日の夕方、クロノは旧六課の隊長陣を中心にフェイトたちからの近況報告通信が届いたと連絡をした。
クロノからの連絡を受けて、高町なのは、シグナム、ヴィータ、グリフィス・ロウラン、ルキノ・リリエの五人が本局の一室に集まった。
「すまないな、皆。それぞれ忙しい身なのに・・・」
入室するやクロノが詫びるが、皆は顔を横に振る。
「全然平気だよ、クロノ君。フェイトちゃんたちの事だもん」
「私は任務でミッドを離れていたからな。遭難後のテスタロッサの通信を見るのは初めてだ」
「フェイトたちがちゃんと飯食っているのか、よーく確認しねーとな」
「この前の通信では元気そうでしたから、多分大丈夫だと思いますけど・・・」
「また別のタイプの防衛軍の軍艦も見れるかもしれませんし・・・」
「・・・ま、まぁ、兎に角見てくれ」
クロノは今日、入ったフェイトたちの映像を見せた。
映像では、フェイトたちが第二の地球へ無地に辿り着いた事、そこでの降りた第二の地球での生活状況等を語っていた。
やがて、映像は終わった。
なのはとルキノは目を潤ませ、シグナムたちもとりあえず安心した様子だ。
「予想以上に明るい表情だったな」
「ああ、向こうでの待遇も悪くねぇーみたいだ」
ここでルキノが率直な疑問を口にした。
「ところで、この通信はどうやって行われたんでしょう?確か、捜索隊が置いていった通信ポッドが細工されていることがバレて、逆におちょくられたんですよね?」
「あ、ああ・・・」

クロノが苦い顔つきで気まずそうに肯定する。
「その話は私も聞いた。全くつまらん小細工をする奴らだ。だが、向こうの方が一枚上手だったようだな」
「ああ。向こうにはかなりできるエンジニアか科学者が乗っていたようだ。本来ならば、相当頭に来ているだろうに、それをおくびにも出さず、ちゃんと通信させてくれているんだからな。全く、とんだ失礼なことをしてくれたよ。今は逆探知装置は取り外されたみたいで、向こうの通信技術とノア、テリオスの通信機器の部品を使ってこちらとの通信が可能となっている」
クロノが思わずぼやきを口にした。
この他にも管理局が過去に行ったダーティミッションのあるのだが、クロノはこの場でもそれを口にする事はなかった。
やはり、無用な混乱や疑心は防ぎたかったからだ。
「管理局では想像できねーけど、宇宙戦艦同士の殴り合いって、一体どんな戦いなんだろうな・・・」
ＪＳ事件の際、『聖王のゆりかご』に引導を渡したのは、管理局の次元航行艦隊のアルカンシェルの一斉射撃だった。
だが、それは宇宙戦艦同士の戦闘と言うよりも、静止した『聖王のゆりかご』に対して次元航行艦隊がアルカンシェルを撃ち込んで終わった為、その様子はさながら射撃訓練の様な形であったため、本格的な宇宙戦艦同士の戦闘と言うモノを経験した者はこの場には居ない。
クロノはテレザートにてゴーランド艦隊とヤマトの戦闘を目撃したがあくまで目撃は目撃で実戦経験とは少し違う。
「これまでは生存者がいなかったが、テスタロッサたちが戻れば、その一端だけでもわかるだろう・・・それにしてもタキオン粒子とはな・・・」
シグナムが考え込むように呟く。
「あの艦長が嘘を言っているとは思えませんが、もし事実だとすれば、管理局の艦船と向こうの世界の艦船では、少なくとも通常空間では絶望的な性能差がありますね」

グリフィスが管理局の次元航行艦と防衛軍の艦艇を比べる。
「しかも、ノアとテリオスの残骸を調査されたようですから、相当な所まで調べられたかも知れませんね」
ルキノの発言を聞いてクロノはドキッとする。
管理局きっての艦船マニアとしての興味・・・だけではなかった様だ。
「まぁ、あの時は互いの存在を認識していなかったからな。不審な遭難船として調査されても文句は言えないさ。我々が向こう（地球防衛軍）の立場なら、そうしているからな」
クロノとしてはテリオス、ノアについての話題はさっさと終わらせたかった。
「でも、純粋な軍事技術、戦闘能力は向こうの方が上なんですよね？・・・もし、次元航行能力を持った軍艦を防衛軍が建造して向こうと戦闘状態になったら・・・そして、艦隊単位であの戦略砲（波動砲）を撃たれたら、本局・ミッド自体が消滅しますよ」
ルキノが場面を想像したのか顔を青くして言う。
「極論すればそうなるな。ヤマト一隻のあの戦略砲で、本局は簡単に焼け落ちるだろうな・・・何せ、ヤマト一隻の戦略砲で、プレオを破壊したミサイル艦隊を一撃で消滅させたのだからな。だからこそ、向こうとは事を構えたくないんだ。だが、それを分からない全次元世界管理に意欲を燃やすお偉方もいるんでね、全く困ったものだよ」
クロノがやれやれといった様子で呟く。
「世界が違うとはいえ、地球の人がそんな事をするとは思えないけど・・・」
地球に対する希望、否、願望を口にするなのは。
たとえ住む世界が異なっても地球人がそんな事をするとは思いたくなかった。
そんな彼女の意見にクロノは、
「それは僕も同じさ。でも、戦争はちょっとした行き違いからでも始まるからな。ましてや管理局は、向こうの地球の座標を掴むためとはいえ、挑発するような事をしているからな・・・ホント、困った事をし

てくれたよ」
クロノの苦悩が解決するのは、果たしていつになるのやら‥‥。
それは、誰にもわからない。

六十九話　クリスマス

「「温泉？」」
「ええ」
クリスマスが迫るある日の夕食の席で、忍がフェイトとティアナに提案をする。
良馬、ギンガ、リニスの三人は、長期休暇は取れなかったが、幸いクリスマス期間の数日間と正月は休みをとる事が出来た。
そして、クリスマスの休みには、月村家が所有する山奥の温泉宿を貸し切って、そこへ知り合いを集めて皆でクリスマスを祝おうと言う話だ。
（温泉か・・・）
フェイトにとって温泉は、少なからず縁がある。
母（プレシア）の命令でジュエルシードを探している時、フェイトとアルフは温泉街にジュエルシードの反応があったため、その温泉街へ探しに行った。
アルフはそこで温泉を満喫したが、真面目な性格のフェイトは温泉には入らずにずっとジュエルシードを探していたため、温泉には入っていない。
その後も、管理局員になってからは、仕事と学業の二束の草鞋であり、温泉に行く暇は無く、中学を卒業後はミッドに家を移し、その後はずっと仕事一途に生きてきた。
六課時代に地球へ戻った時もみんなで入ったのはスーパー銭湯であり、温泉では無い。
フェイト自身、温泉に興味がない訳では無い。
正直に言って、先日の防衛軍本部での会談は、二人にとって決して居心地がいいものではなかった。
本来なら庇護下にあるべき十歳そこそこの少年・少女を武装隊員にして危険な前線任務に投入することを何とも思わず、それを普通に行っている時空管理局に対して地球防衛軍本部の軍人たちの目は厳

しく冷淡で、中には露骨な嫌悪の目を向けてくる者もいた。
管理局には管理局なりの事情があるのだが、地球防衛軍側の認識を改めさせるほどの説得力はなく、フェイトたちはいたたまれない思いをしたが、それがこの世界の常識なら受け入れるしかないのだ。
防衛軍側も管理局側の事情を全く考慮していない訳では無いが、それでも年端のいかぬ少年、少女を危険な任務に投入し、自分たち大人は安全な場所から偉そうに指示を出す管理局の体制がどうしても許せなかったのだろう。
とはいえ、それで自分たちの待遇が悪くなることはなく、行動が規制されることもなかった。
むろん、許可なく軍事施設の立ち入り禁止、撮影・録音禁止の場所等はあるが、それは自分たちに限ったことではなく、当然の処置だと理解している。
それに週一とはいえ、本局と交信もさせてくれるのだから、寛大といえば寛大だ。
どうやって次元通信装置を運用しているのか等、知りたい事は山ほどあるが、軍規に触れる部分もあるため、聞く事はかなわないだろう。
ヤマト、まほろば　の乗員たちも恐らく時空管理局には不快感を持っているだろうに、それをおくびにも出さず、個人的なバッシングは一切しなかった。
自分たちにとってはありがたい事には違わないが、そんな事をして睨まれないのだろうか？
その件を守に聞いてみたが、
「あいつらはもう十分睨まれている」
と笑って言った。
先の白色彗星帝国との戦闘に先立ち、古代たちはヤマトで軍命令に反逆してまで発進し、良馬はヤマトの反逆を知りつつ、防衛軍の命令を無視して、阻止行動をとらず見逃した。
問題にならない筈が無いのだが、結果としてヤマトの強行発進がなければ彗星帝国にあっさりと地球は敗れていたことが証明された事と防衛軍の壊滅的人手不足のため、上層部も彼らを粗略には扱えない

のだ。
　フェイトとティアナを後見とする月村家も良馬は上記の防衛軍の人材不足理由から、無下に扱えず、更に各国の政界や企業と太いパイプを持つ月村家を簡単に敵に回す真似は出来ず、その為フェイトたちにも簡単に手を出せないのだ。
「確かにあの人たちには感謝しても足りないけど、それで変に意識することはないと思うし、それはあの人たちも望んでないと思うな。それよりも、今後の事の方が大事だよ。ティアナ」
「そうですね・・・」
　管理局員として、防衛軍の様々な技術も興味に尽きないが、魔導師として無関心でいられないのが、自分たちと同じく月村家が後見人を務める高町紅葉の存在だ。
　この世界の地球を覆うＡＭＦならぬ「ＡＭＡ（アンチ・マギリング・エア）」の中で、自分やなのはと同等・・・いやそれ以上の魔力資質を持つ少女。
　しかも高町姓で、なのはと容姿まで似ており、「もう一人のなのは」と言ってもいい存在だ。
　自分たちが何時までこの地球に滞在するかは詳しい日程は分からないが、仲良くなるに越した事はないし、何より彼女には魔導師資質があるので放置してはおけない。
　本人は自分にその資質があるのを知っているのか？　術式は？　デバイスは？
　ひょっとしたら管理局が存在を把握していない未知の魔法なのかも知れないのだ。
「でも、あの子が魔導師だったとしても、周囲にその事を知られていなければ何のことはないんですけどね」
「そうなんだけどね・・・」
　友人と一緒の時の様子を見ていても別段何の問題はない。
　魔導師であることを知られていないか、そもそも本人が知らないままなのかはわからない。
　管理局規則では管理外世界で魔導師資質がある者の存在を把握し

た場合、管理世界からの不法渡航者でない、つまりその世界で生まれ育ち、魔法の事を知らないでいる者に対しては、基本的には干渉しないことになっている。
　但し、魔法を悪用したり、その恐れがある者については、たとえ管理外世界の住民であっても、一時的に身柄を拘束した上で、記憶の一部と魔力を永久封印する魔法医学的措置を施す事がある。
　まぁ、紅葉についてはそういう懸念は限りなく低そうだ。
「まずは、彼女と馴染む事が肝心だよ。管理局員としてではなく、一人の人間として、ね」
「はい」
　クリスマスにある温泉旅行には、その高町紅葉も参加する予定だ。
　これを機に、自分たちがこの地球を去るまでに、彼女と親しくなりたいと、思うフェイトとティアナだった。
　温泉旅行前日、紅葉と桜花が月村家に泊まりに来た。
　勿論、桜花が居るのだからギンガも一緒に泊まっている。
　夕食の時、紅葉はノエルと共に夕食の手伝いをした。
　そして、
「お口に合うかわかりませんが・・・・」
　遠慮しがちに言っていた紅葉が作ったおかずを食してみたフェイトとティアナは、
（（何だか敗北感を感じるなぁ（わ）・・・・））
　との感想を抱いていた。
　高町紅葉の料理の腕は、弱冠十三歳という年齢を割り引いても十分以上なレベルだった。
　ガミラス、彗星帝国との戦争の余波の中、オムシスの復旧で、食糧生産は何とかまかなっているが、生鮮の方は、まだ肉類は大豆や小麦グルテン等が混じっており、決して潤沢ではない食材でこれだけのものを作ってみせたのだから・・・・
　翻って、フェイトとティアナは長期間、あるいは遠隔世界の捜査任務に就くことが多く、自分で調理する機会は少ない。
　食べるモノと言えば、外食かコンビニなどのレトルト食品やインス

タンス食品ぐらいなものだ。
　仕事ゆえ仕方ないのだが、自分たちより明らかに年少で、しかも無二の親友／上官及び師にあたる存在と酷似した容姿の少女となると、我が身と照らし合わせないわけにはいかなかった。
「ねぇ、紅葉」
「何でしょう？」
　夕食後、紅葉とノエルが淹れた紅茶やココアを飲みながら、桜花とギンガはボードゲームをして、忍、ノエル、良馬、リニスが明日の旅行の予定を立てながら、歓談し、紅葉は読書をしていたが、ここでフェイトが核心に迫ろうと紅葉に話しかけた。
「紅葉、少し貴女に話があるのだけれど・・・・」
「いいですよ」
（まぁ、大体予想は出来るけどね）
　紅葉は、フェイトの案内の下、フェイトとティアナの部屋へと来た。
　もちろん、フェイトたちの行動は月村家の皆に筒抜けになっており、万が一紅葉の身に危険が迫れば、突入する構えをとっていた。
「単刀直入に聞くけど、紅葉・・・貴女、魔導師なんでしょう？」
　フェイトの問いに紅葉は動揺した様子はなく、淡々と答えた。
「そうですね・・・以前、ギンガさんからも同じ質問を受けましたが、魔法を使えるのが魔導師だとするならば、確かに私は魔導師ということになりますね。御二人もギンガさんや私同様魔導師なのでしょう？」
「ええ」
　紅葉の問い返しにフェイトとティアナも頷く。
「私たちは、その魔法で次元世界の治安維持活動をしているの」
　ティアナが自分たちの仕事を簡単に纏めた言葉で紅葉に説明する。
「確かギンガさんも元はその治安維持組織で働いていたんですよね？」
（やっぱり、前世同様、目の前のハラオウン執務官もランスター補佐官も管理局員だったわね・・・）
「そうよ・・・ミッドチルダ・それが私たちの組織がある星（世界）の名前なの」

「ミッドチルダ・・・」
（知っているけどね・・・）
前世が管理局員だった紅葉は当然、管理局があった世界の事も知っているが、それを表に出す事無く、キョトンとした振りをする。
「ええ」
「それじゃあ、フェイトさんとティアナさんもデバイスをお持ちなんですか？」
とりあえず、話題を変えようと紅葉は、自分やギンガが魔力制御の為所持しているデバイスを彼女たちも持っているのかを訊ねる。
「ええ、持っているわよ」
そう言いながら、フェイトはポケットから金色の三角形をした金属を、ティアナはカード形をした金属を取り出してテーブルに置く。
すると、そのデバイスがチカチカと点滅し、紅葉に話し始めた。
「初めまして、私はフェイト・テスタロッサ・ハラオウンのインテリジェントデバイス、バルディッシュです」
「私はティアナ・ランスターのインテリジェントデバイス、クロス・ミラージュです」
「初めまして。私は高町紅葉。宜しくね、バルディッシュ、クロス・ミラージュ」
そう言うや、紅葉は首から提げていたネックレスを外すとテーブル上に置く。
すると、鎖に繋がれていた黒真珠の様な石がチカチカと明滅し、
「お初にお目にかかる。私は高町紅葉の自律魔法制御媒体（デバイス）、ルシフェリオン・暁である」
渋い中年男性の明瞭な日本語の声でルシフェリオンはフェイトとティアナ、それぞれのデバイスに名乗った。
「・・・」
魔法少女が持つデバイスには大凡ミスマッチな声であるが、突っ込まない方がいいのだろう――。
目の前の黒真珠はフェイトたちが思っていた以上に洞察力が優れているようだ。

「以前、ギンガ女史にも説明したのだが、私の声が合わなくて驚いているようだが、私がこの星に来たのはもう四十年以上前で、最初の主（レディー）は彼女の亡き母親なのだ」
「えっ!?」
これにはフェイトたちが驚く。
彼女たちの持っているデバイスは一個人限定にカスタマイズされたもので、主（マスター）が死亡したり、何らかの理由で魔法を使えなくなると、他人には、たとえ実子であっても転用することができず、そのまま廃棄されてしまう。
しかし、目の前のルシフェリオンは違うようだ。
「無論、単に肉親で魔力を持っているからといって、無条件に継承されたわけではない。私が彼女を新たなレディー（主）と認めたからこそ、だ」
「そ、そうなの？」
ティアナが気圧されたように呟いた。
そこへ、ルシフェリオンから質問が飛ぶ。
「これも以前、ギンガ女史に問うたのだが、お主らは、レディーが魔導師とやらだと知って、どうするつもりなのだ？」
これにはフェイトとティアナも一瞬絶句したが、すぐにその意味するところを理解した。
慢性人材難である時空管理局は、若くて優秀な魔導師は喉から手が出るほど欲しい人材だ。
執務官も、捜査等で赴いた任地で金の卵や原石を探し、スカウトしてくることがある。
管理外世界の住民ながら、管理局を代表するエース魔導師になった高町なのはや八神はやてがそのいい例だ。
「その事なんだけど・・・ねえ、紅葉・貴女、管理局に来るつもりはない？」
フェイトは、紅葉に管理局へ来ないかと訊ねた。
「・・・残念ですが、固辞します」
紅葉は、フェイトの誘いを即座に断った。

（また管理局になって次元犯罪者に殺されるのは御免だからね）
「理由を聞いても良いかな？」
「私には夢があります」
「夢？」
「はい。私の夢は、翠屋の再建です」
紅葉は前世では管理局員で次元犯罪者との逮捕劇最中、命を落とした。
この後世でも再び管理局員になって前世と同じ様な最後を遂げるのは正直御免だ。
それに今の自分には実家の翠屋を再建し、継ぐことが指名なのだ。
管理局に再び入るつもりは毛頭ない。
「翠屋・・・」
高町なのはの実家が経営している翠屋・・・。
（この世界にもあったんだ・・・）
翠屋の事を知っているフェイトは、この世界にも翠屋が有った事に意外性を感じた。
「私のお店は母と父、そして祖母が切り盛りしていました・・・ですが、ガミラスとの戦争で、私はお店も家族も失いました」
「・・・」
「だからこそ、私は家族との思い出があるあのお店を・・・翠屋を再建したいんです・・・翠屋は二百年以上前から続いていたお店なんです・・・ガミラスとの戦争前は、お店の中には絶えず、海鳴の人々の笑みがありました。だから、いつの日か、私の作ったお菓子やお料理で再び海鳴の皆に笑顔を届けたいんです」
「そう・・・わかった。そう言う事なら、もうこれ以上、紅葉を管理局にスカウトしたりはしないよ」
フェイトがそう言って、ティアナも頷く。
（やっぱりこの子は、なのはの子孫ね、この年でしっかりと未来のビジョンを抱いている）
フェイトは紅葉の強い意志を見て間違いなく紅葉はなのはの血を継いでいる娘だと思った。

時空管理局は、管理外世界の住民でも優秀な魔導師資質がある者はスカウトすることを厭わないが、この世界は管理局より遥かに強い戦力を持っているし、子供が軍隊や警察組織で働く事を法律で禁じている。
それに紅葉自身がこの地球でやりたい事が有るなら、管理世界の揉め事に管理外世界の人を巻き込むのは、やっぱり気が進まないからだ。
フェイトの親友であり、ティアナの師たる高町なのはは自分の意思で管理局に手を貸したのだからまだ良いだろう。
彼女は両親も兄姉も皆健在で、出身世界は政治や戦争、紛争等の様々な問題を抱えているものの存亡の危機には至っていない。
しかし、同じ姓で容姿も似ている紅葉が生まれ育ったこの地球は一度ならず二度も外宇宙からの侵略によって存亡の崖っぷちに立たされた上、彼女の家族はガミラスとの戦争で全員落命した。
そういう過酷な環境で生きてきた彼女がこの世界に嫌気がさしているならばまだしも、当の紅葉にそういった様子は全くない。
むしろ、自分と同じ境遇の人々を救済したいと思っている。
良馬や忍たち、月村家の皆、紅葉がお世話になっている中嶋一家ら、紅葉の身近にはいい大人たちが沢山いるのだろう。
(兄さんが亡くなった後、私の周囲にはあの人たちみたいな大人はいなかったなぁ・・・)
ティアナにとって紅葉の環境が少し羨ましく思えた。
「バルディッシュ、お願い」
フェイトが言うや、バルディッシュが点滅し、三人の前にウィンドウを展開する。
ウィンドウに映っているのは三人の若い女性の姿があった。
紅葉も僅かに瞠目し、その三人、特に左サイドポニーの女性を凝視する。
サイドポニーの女性は、髪と瞳の色を除けば紅葉が成長したらこうなるような容姿。
(八神二佐に高町一尉・・・)

「この二人は私の親友の『八神はやて』と『高町なのは』って言う人たちだよ」
　フェイトは、なのは、はやて　との出会いから先日までの事をかい摘まんで話し、ティアナが補足する。
「・・・・」
（へぇ～ハラオウン執務官と八神二佐たちの出会いってそんなことがあったんだ・・・・）
　その間、紅葉は一言も発することはなかった。
　その頃、デバイス同士も念話形式での会話をしていた。
　バルディッシュが訊ねる。
「ルシフェリオン、貴方はどの世界からどのようにしてこの世界に来たのですか？」
「ノーコメントだ。マイ・レディーから問われていない事をレディー以外の者に先に話すつもりはない・・・一つだけ言わせてもらえば、時空管理局と似たような魔法による治安維持組織が存在していた世界だな」
「『存在していた』とは？」
　過去形のように語るルシフェリオンに、今度はクロス・ミラージュが訊ねた。
「最後まで見届けたわけではないが、その組織は瓦解した。一握りの高ランク魔導士による、普通の魔導士や魔力を持たない者への支配の度が過ぎてな・・・遂に大規模な武力反乱を招いた。高ランクの魔導師と言えども、多勢に無勢だった様だな。自己矛盾を曝すようだが、魔法など単なる付属物に過ぎぬのにな。そんなものが人間の価値を決めると考えた愚物共の何と多かったことか。製造されたばかりで、仕えるべき主がいなかった私は、その時起きた時空震に巻き込まれて偶然この星に来た。それだけの事だ」
「元の世界に戻りたいと思ったことは？」
「ない」
　バルディッシュの問いにルシフェリオンから即答が返ってくる。
「では、貴方のレディー共々、時空管理局に来ると言う選択肢は？」

「ミス・高町は類い稀なる魔導師資質をお持ちです。管理局に入局すれば十分通用すると思いますが？」
物は試しと言わんばかりにバルディッシュとクロス・ミラージュがフェイトたち同様、ルシフェリオンにも管理局への入局を勧める。
「決定権を持つのはレディー自身だ。そもそもお主らの世界と地球連邦は正式な交流がない。物事の順序を間違えるなよ」
と素っ気ない。
「此方からも問うが、バルディッシュ」
「なんでしょう？」
「お主のマスターの親友である高町なのは嬢や八神はやて嬢も管理外世界出身なのだろう？何故、本来は異世界の組織である筈の時空管理局に身を置くようになったのだ？」
それに対してバルディッシュがＰＴ事件や闇の書事件をかい摘まんで説明したが、ひととおり聞いたルシフェリオンは「そうか」と答えるに留まった。
結局、紅葉は管理局への入局の意思は示さず、ルシフェリオンも自分の主である紅葉が管理局に入局しなければ、ルシフェリオンも入局せず、主である紅葉に管理局への入局を勧める事は無いだろう。
次の日、ノエルが運転するマイクロバスで、良馬、忍、フェイト、ティアナ、ギンガ、桜花、加奈江、紅葉の面々は月村家が所有する温泉宿へと向かった。
守、サーシア　ユリーシャたちにも声をかけたのだが、守たちは古代、雪、真田、島らのヤマトの親しい乗員たちとクリスマスを祝うと言う事で今回の誘いを辞退した。
一行が温泉宿に到着すると忍が宿の受付を行う。
その後、部屋割りを決めて、夕食までそれぞれ好きに過ごす事にした。
桜花と加奈江は温泉街の名物料理やお菓子を食べる歩くために、温泉街へと向かった。
その他のメンバーは宿の温泉へと向かった。
「へぇ～初めて来たけどこれは凄いな」

良馬は、男湯から露天風呂の扉を開ける。
そして、目の前に広がる壮大な露天風呂の景色に思わず声をあげて、露天風呂へと近づく良馬。
そこへ、
「きゃあっ!?」
「ん？『きゃあ』？」
良馬の耳に聞き逃せない声が聞こえてきた。
（今のって、間違いなく女性の声だよな。しかも何か聞き覚えのある感じの声だったけど・・・・）
「だ、誰ですかっ!?」
「ん？その声・・・・」
謎の声の主が、良馬に何者なのかを訊ねてくる。
湯気で良く見えないけど、うっすらと見えるシルエットは間違いなく女性だ。
（あ、あれ？　ここって確か男湯の筈じゃあ・・・？　何で女の人が？）
そんな風に混乱していると、次第に湯気が薄くなり、シルエットだった女性の顔が見えてきた。
そして、湯気の向こうにいたのは・・・・
「ぎ、ギンガ!?」
「りょ、良馬さんっ!?」
タオルを体に巻いただけのギンガだった。
「りょ、良馬さん。何で此処に!?」
「えっ!?ちょ、ちょっと待って!!ここは男湯だろう!?どうしてギンガが!?」
「そんなっ!?私、女湯からこっちに来たんですけど・・・・」
「い、いや、俺も男湯から来たんだけど・・・・」
どうやら随分と混乱しているらしく、互いに男湯だ女湯だと主張を繰り返す。
互いに主張し合った後、良馬たちはあるひとつの結論に辿り着いた。
というか、お互いの言い分が正しいなら、それ以外に結論なんて無

いんだが。
「混浴・・・」
「だったんですね・・・」
　良馬は男湯から、ギンガは女湯から入ってきた以上、つまりはそういう事なんだろう。
　そうでなきゃ、男湯と女湯が同じ場所に繋がっている説明がつかない。
（ま、まぁ・・入って来たのがギンガでこの場合は良かったのかな？）
　ギンガの場合は、これまで何度も身体を重ね合わせて来た仲のため、ギンガの裸体を知らない訳では無い。
　忍やノエル、リニスの場合も家族なので、小さい頃から何度もお風呂に入った仲なので、彼女たちの裸も知らない訳では無い。
　しかし、フェイトとティアナは違う。
　もし、彼女たちと鉢合わせをすれば、かなり気まずい思いをしただろう。
「あ、あの・・・」
「ん？」
「と、とりあえずお風呂に入りましょう？　このままじゃ、お互い風邪ひいちゃいますよ」
「ん？　あぁ、そうだな」
　言われるまま、とりあえずギンガと一緒に湯船につかる良馬。
　どうやら言い合いをしている間に思った以上に体が冷えていたらしく、じんわりとしたお湯の温かさが体に心地いい。
「ふぅ～・・・」
「はぁ～・・・」
　生き返るようなお湯の温かさに、思わず声が漏れてしまう。
「そう言えば良馬さん」
「ん？」
「私の裸・・見ましたね」
「い、いや、見てない。湯気越しにちらっと見えたかもしれないけど・・・」

良馬は見えていないと言う。
実際に湯気の影響で大して見えていなかった。
湯気越しに肌色がちょっと見えたくらいだし、なによりギンガは良馬の声が聞こえてすぐにタオルを巻いただろうしな。
仮に見えていたとしても、肩とかそんなところだと思う。
アタフタしながらもギンガの質問に答える良馬。
なお、ギンガは長い髪をタオルで纏めている。
お湯に髪がつかないようにという配慮らしい。
「そうなんですか‥ちょっと残念、見られていたら後で何か奢って貰おうと思ったんですけど‥‥」
「何、黒いこと考えているんだ？君は‥‥」
「えぇ～？　だって、女の子の裸を見たら、それくらい当然じゃないですか？」
苦笑しながらギンガの頭を軽く小突き、ギンガは楽しそうに笑って良馬の肩を叩く。
「いや、でも、ギンガ。君の裸は何度も見たし、君だって俺の‥‥その‥‥」
互いの裸を知らない訳ではないのだが、こうして口にしてみると本人を目の前にして言うとやはり恥ずかしい。
しかし、その反面、互いの裸を見慣れた仲だからこそ、こうして湯に浸かっているのだ。
「‥‥」
でも、ギンガの方もやはり恥ずかしかったのか顔を赤くして頷く。
それから数分後、何とか気持ちを取り直した良馬とギンガは露天風呂から出ることなく、まったりと湯船につかっていた。
「此処のお風呂、空が良く見えますね‥‥夜になればきっと星が綺麗でしょうね‥‥」
「露天だし、少し標高が高い場所にこの宿は建っているからね‥‥」
空を見上げて呟くギンガに、良馬も空を見上げながら言う。
「でも、星空なんて、宇宙に出れば、嫌と言うほど見れるじゃないか」
良馬としては、星の海をギンガよりも長く航海しているため、星空

なんて見飽きている。
「それはそうですけど、こういう場所だと何か雰囲気が違いませんか？」
「そう言うもんかな？」
「ええ、そう言うモノですよ」
良馬はギンガに言われ、大空を見上げる。
「それにしても、気持ちいいですねぇ」
ギンガが良馬の右肩に頭を乗せて、クスクスと笑いながら頬ずりしてくる。
タオルに纏められた髪が少しだけ零れ、ギンガが頬ずりするのに合わせて良馬の肩をくすぐり、そのむず痒さに彼は少しだけ身じろぎした。
「ギンガ、一応君も女性なのだから、少しは恥じらいを持ちなさい」
「持っていますよ？　だから、ちゃんとこうしてタオルで体は隠しているじゃないですか」
「いや、そうじゃなくて、行動そのものに、もうちょっと恥じらいを・・・まぁいいや別に・・・」
恐らくギンガがこうした行動を取るのは良馬の前だけだろうからギンガに言っても徒労に終わるだろう。
暫く二人で露天風呂に入っていた二人であったが、他の誰かが露天風呂に入ってくる気配はない。
何時しか、二人は互いに向き合う位置となり・・・良馬は、ギンガを右手で押さえつけ、顔を寄せる。
そして、空いている左手で顎を持って、ギンガの顔を上に向けさせ、良馬もギンガに顔を寄せる。
元々近かった距離が更に縮まり、お互いの吐息が感じられるくらい近くなった。
そして・・・
「んっ・・・」
二人の唇は重なり合った。
ギンガと良馬が露天風呂でイチャついている頃、

フェイトは露天風呂へ・・・今まさにギンガと良馬がイチャついている現場へと向かっていた。
露天風呂の近くまでやってきた時、風呂場の床に人が倒れていた。
それは・・・

「っ!?ティ、ティアナ!?」
そこに倒れていたのは、ティアナだった。
ティアナは、顔を真っ赤にしてブルブルと身体を痙攣させながら床に倒れていたのだ。
何事かとフェイトは彼女の名前を呼びながらティアナに駆け寄り、倒れていたティアナを抱き起す。
「ど、どうしたの?ティアナ!?のぼせちゃったの!?しっかりして!!」
「・・・」
「えっ?何?」
フェイトに助けだされ起こされたティアナは消え入りそうな声でブツブツと何かを呟く。
それはとても小さく、耳に届かなかったフェイトは問い返しながら口元に耳を近づけた。
「だ、ダメ・・・」
「ダメ?何がダメなの?ティアナ」
「外・・・外・・・」
「外!?外に何があるの!?」
「外を・見ては・・・いけません・出ては・いけません・・・リア充・・・死ね・・・」
そう言ってティアナはガクッと意識を失った。
ティアナは一体外で何を見たのだろうか?
その原因をフェイトは疑問に思い気になった。
「外を覗いたらダメって、ティアナは言っていたけど・・・」
嫌な予感は感じている。
しかし、怖いもの見たさという言葉があるように、何故ティアナがこうなったのか原因をどうしても見て見たいという気持ちは大きく、

フェイトはその誘惑に勝てなかった。
フェイトは、再びティアナを床に横たえると、『露天風呂』と書かれた看板の隣にある扉を少しだけ開き、外を覗き見る。
そこで彼女が見た光景は・・・・
「フェ、フェイト!?どうしたんですか!?それにランスターさんも!?」
露天風呂に続く扉の前でフェイトが顔を真っ赤にしてピクピクと痙攣しながら倒れていた。
フェイトの近くにはティアナも倒れている。
「お二人とも、どうしたんですか!?のぼせたんですか!?」
リニスが倒れていたフェイトを抱き上げる。
「・・・・」
「えっ?何ですか!?」
ティアナの時と同じようにフェイトも何がブツブツと呟いていた。
しかし、よく聞こえなかったリニスは自らの耳をフェイトの口元に寄せる。
「合体・・・・」
フェイトが苦しそうに呟いたのはその意味不明な言葉。
「はい?合体?」
「ギンガと・・・・月村艦長が・・・・合体・・・・」
『合体』と言う言葉の意味をリニスに伝えたフェイトは、その言葉を最後にガクッと意識を失った。
フェイトの最後の言葉の意味を理解したリニスは、
「はぁ～あの二人はもう・・・・」
やや、呆れた顔をして、フェイトを脱衣所まで運び、ティアナはノエルが運んだ。
「・・・・」
ジトー
「・・・・」
ジトー
温泉から上がったギンガは、脱衣所にて意識を取り戻したフェイト

とティアナのジトーっとした視線に晒された。
「えっと・・・」
気まずそうにギンガはフェイトとティアナに声をかける。
「ギンガさん。何か妙に肌が艶々ですね？」
まずはティアナがギンガへ軽いジャブを打ち込む。
「そ、それは、あの温泉の効能じゃないのかな？」
「それにしては随分疲れている様にも見えるけど？」
続いてフェイトまでもが攻勢に出る。
「お、お風呂って言うのは、案外体力使うんですよ・・・」
ジトー
「あぅ・・・」
ギンガの言い訳らしい言葉に更にジト目をきつくするフェイトとティアナ。
そんな三人のやり取りが理解できない紅葉と、ギンガの自業自得だとこの一件に対して、静観を決め込んだリニス。
もう一人の当事者の良馬は、これまた妙な事に温泉へ入った筈なのだが、「少し疲れたので、夕食まで休む」と言って部屋へと戻って行った。
ジト眼でギンガを睨みながら、ティアナは、
（そう言えば、ギンガさん何か前より綺麗になった感じがする）
改めてギンガを見てそんな思いを抱いた。
以前から美人ではあったのだが、局員時代のギンガと比べると、それに磨きがかかったように思う。
化粧や服飾に変化があったわけではないが、些細な表情や仕草にそれを感じていた。
それはフェイトも感じており、
（ギンガ・局員の時よりも何だか凛々しくなったなぁ・・・やっぱり、ギンガの様子を見ても、分かる様に管理局よりも防衛軍の方が訓練は厳しいんだろうな…その厳しさが有るからこそ、凛々しく強いんだろうな・・・）
と、ギンガの纏う雰囲気が局員の時よりも洗練されているように見

えた。
　フェイト、ギンガ、ティアナ、リニス、紅葉の五人が遊戯室へと行くと、其処には卓球台が置いてあった。
「あっ、卓球台がある」
　フェイトが卓球台を見つけた。
「いいですね！折角ですからやりましょう！」
「やるんなら罰ゲームきめましょう」
「いいわね！それじゃあ、アレをやりましょう。アレ！」
「アレ？」
「ほら、お題に答えて球を打つアレ」
「古今東西？」
「そう、その古今東西」
　ゲーム内容が決められて行き、そして、後は罰ゲームの内容を決めるだけとなった時、
「それじゃあ、罰ゲームは、私のルシフェリオンをゼロ距離で受けるで、どうでしょう？」
　紅葉が罰ゲームの内容を言うと、四人がピシっと固まる。
「それって・・・・ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの中で？」
　フェイトが恐る恐る訊ねる。
「いえ、月村家の地下には魔導競技用の闘技場があるので、そこで・・・・」
　紅葉の言う罰ゲームは、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬのアバターではなく、本人で受けると言うモノだ。
　彼女としては別ゲームを受けるのがフェイトかティアナの場合、改めて釘を指す意味合いも含まれていた。
「競技用の闘技場って・・・・」
「ありますよ。私とギンガさんも、そこでリニスさんに魔法を教授されましたから。ねっ、リニスさん、ギンガさん」
「え、ええ・・・・」
「そ、そうね・・・・」
「それじゃあ、それで決りですね」

紅葉の強引なやり取りで罰ゲームが決まった。
有無を言わせない強引な所など、なのはに似ていると、フェイトとティアナはそう思った。
そして、罰ゲームの内容を知った四人は・・・・
(((絶対に負けられない!!)))
と、心の中で闘志を燃やした。
「それじゃあ、三回ミスしたら罰ゲーム・・・・お題は・・・・地球に関する事で問題ないですか？私はその・・ミットチルダの事は分からないので・・・・」
本当は知っているが、ここで知る筈もないミッドについて知っている素振りを見せると怪しまれるので知らない振りをした。
「え、ええ。私は大丈夫よ」
「私も一通りの事なら・・・・」
フェイトとティアナはお題が地球に関する事で問題ないと言って、ゲームが開始された。
審判は罰ゲームを執行する紅葉が行うため、お題が地球に関する事になったのだ。
「では、第一回戦・・お題は・・・・海王星の衛星の名前!!」
「えっ!?」
お題を聞いて、フェイトは慌てる。
「はじめ!!」
カッ
「プロテウス」
カッ
「ネレイド」
カッ
ギンガとリニスは防衛軍軍人の為か、太陽系の惑星にある衛星の名前は訳もなく、答える。
「トリトン」
カッ
そして、ティアナまでもが、普通に答えた。

「えっと・・・えええ――・・・・?」
フェイトは答えられず、ラケットを空振りしてしまう。
「ちょ、ちょっと待って!!問題難しくない!?それにティアナ、何で貴女まで、こんなマニアックな事を知っているの!?」
フェイトは、ティアナに何で海王星の衛星の名前を答える事が出来たのかを訊ねた。
「えっと・・・まほろば　に乗っている途中で折角ですから太陽系の惑星や星について勉強をしていたので・・・」
ティアナは、答えられた理由を話す。
自分もやっておけばよかったと言う思いと、ティアナに裏切られたと言う思いが交差するフェイト。
「第二回戦!」
一回戦目は負けたが、後の勝負に負けなければ、良いと意気込むフェイト。
「お題は・・・第二次世界大戦中に登場した戦艦の名前!!国は問いません!!では、スタート!!」
カッ
「『武蔵』」
カッ
「『アイオワ』」
カッ
「『大和』」
コッ
「言われた!!」
またもフェイトが空振りをした。
大和に関してはヤマトを調べる際、フェイトも知っていたので、唯一答えられそうな艦名だったのだが、同じくヤマトに乗艦していたティアナに先に言われてしまったフェイト。
今回は順番が悪かった。
「ねぇっ!!ちょっと!!皆で打ち合わせしたの!?」
「いえ・・・」

「そんな事は・・・・」
「していませんよ・・・・」
連続で難問を出され、二回連続で、空振りをしたフェイトは思わず声をあげる。
少し見苦しい態度である。
しかしあと一回、あと一回、失敗したらフェイトは紅葉のルシフェリオンをゼロ距離で食らう。
彼女としては形振りなんて構っていられない。
「さ、三回戦目は私にお題は決めさせて!!」
「良いですよ」
こうして、三回戦目はフェイトが決めたお題で始まった。
(もう後は無い・・なんとしてでも勝たないと!!)
「地球の国旗で『星』のマークがある国の名前!!アメリカ!!」
コッ
「オーストラリア」
カッ
「パプアニューギニア」
カッ
「中国」
コッ
「・・・・」
ティアナが答えた後、フェイトはまたもや答えられず、ラケットを振る事を出来ず、ゲームは終わった。
(アメリカと中国しか知らないし・・・・なにもんなのよ!?この人たち・・・・もういいよ・・・・私で・・・・)
半ば自棄になってフェイトであった。
後日彼女は罰ゲームを受ける事になる。
夕食時間になり、大広間にて、今回の旅行のメンバーが集まった。
「様々な偶然と巡り合わせで、様々な面々がこうして一堂に会することになりました。直接のきっかけは凶事でしたが、何事も命あっての物種です。我々生き延びた者は、不幸にも命を落としてしまった人た

ちの分まで、たとえ無様でも、前を向いて生きていきましょう。皆さん、かなりお腹空いていると思うので、以上！乾杯!!」
『乾杯!!』
良馬の音頭で乾杯し、一同は箸を取った。
「日本育ち」のフェイトは器用に箸を使い、ミッドで地球の日本料理を口にしているティアナも支障なく箸を使っている。
食事が済み、デザートのクリスマスケーキにも舌鼓をうった後、桜花と紅葉がゲームコーナーに行くと言ったので、ティアナも一緒に向かった。
フェイトを含む大人組はリビングでコーヒーや茶を手にしながらしばしの歓談だ。
フェイトへの質問はミッドチルダでの暮らし向きや機密に触れない程度での「執務官」の仕事の事だった。
しかし、フェイトの災難はこのクリスマスの後に降りかかった。

後日、月村家の地下にある魔導競技用の闘技場にて・・・・。
「ば、バインド!!」
フェイトの身体を紅葉はバインドでガッチリとホールドして逃げることが出来ない様にした。
「逃げないようにです。では、いきますよ!!疾れ明星!!すべてを焼き消す炎と変われ!!」
紅葉が詠唱を唱え、ルシフェリオンからはガチャン、ガチャンとカートリッジがロードされる。
「えっ!?ちょっ!!カートリッジをロードまでするの!?」
フェイトの質問には答えず紅葉は発射準備を整える。
そして、
「・・・真！ルシフェリオン！ブレイカ――――ッ!!」
ルシフェリオンの先端から放たれる収束砲撃。
それは、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの時に食らったルシフェリオン・ブレイカー以上の収束砲撃だった。
「い、いやぁぁぁぁぁぁー!!」

フェイトの絶叫と共に彼女の身体は灼熱の様な収束砲撃に飲み込まれた。
目の前の惨劇にティアナはガタガタと体を震わせた。
海鳴で、なのはそっくりの少女にバインドを掛けられて、至近距離から収束砲撃を食らう・・・。
名前の通り、これがフェイトの運命なのだろうか？
そしてフェイトに新たなトラウマの一つが生まれた瞬間でもあった。

おまけ
仰天メンテナンス

温泉宿で宴もたけなわになった頃、
「♪～」
紅葉は、リニスとノエルの客室で鼻歌を歌いながら、旅館の人に頼んで用意してもらったハリオールの用意をしていた。
ハリオールの他に客室にあるテーブルの上には、ティーポットやワイン、ブランデー等の酒類と耐熱使用のタンブラーも置いてある。
そしてギンガのデバイス、ブリッツ・キャリバーとリニスのデバイス、バルフィニカスも置いてあった。
「く、紅葉・・・？」
「はい？」
「何・・・やっているの？」
目の前の光景にフェイトとティアナは顔を引き攣らせ、彼女たちの愛機も目まぐるしく点滅して、共に混乱している事を如実に示していた。
「ルシフェリオンたちの定期メンテナンスです」
「メンテナンスって・・・それが!?」
ティアナが上擦った声でツッコむ。
「信じられない・・・」
フェイトも声が少し裏返って言う。

それほど、紅葉とルシフェリオンたちがしている事は、フェイトやティアナら、ミッドチルダの魔導師から見ると余りにも「非常識」だった。
ギンガとブリッツ・キャリバーもこの世界に来た時、始めてこのメンテナンス方法を見て、仰天したのは言うまでもない。
用意されたティーカップにはチェーンから外されたルシフェリオンが入れられ、そこに紅葉がティーポットを使い紅茶を注ぎ、少量のブランデーを淹れる。
ルシフェリオンの他にもギンガのブリッツ・キャリバーも耐熱タンブラーに入れられて、其処にホットラムを注ぎ、リニスのバルフィニカスもホットワインが入ったグラスの中に入っている。
「郷に入っては郷に従えと言うからな。実に心地好いぞ!!地球の酒は!!君たちもどうだい？」
と、ルシフェリオンはバルディッシュとクロス・ミラージュを誘う。
「い、いえ・・・」
「我々は・・・」
バルディッシュとクロス・ミラージュもやんわりと断る。
もしバルディッシュとクロス・ミラージュが八神はやて、シグナムの愛棒であるリィン（リィーンフォース・ツヴァイ）やアギトの様なユニゾンデバイスであったならば、顔を引き攣らせていただろう。
「そうか・・・？むっ!?レディー・・・もう少し、ブランデーを足してもらいたいのだが・・・」
「あんまり沢山はダメだからね」
そう言って紅葉は、ティーカップの中に少量のブランデーを追加で垂らす。
「ふぅ～・・・」
まるで温泉に浸かるかのような声を出すルシフェリオン。
黒紫色の筈のルシフェリオンは明紫色に点滅している。
（アナライザーといい、ルシフェリオンといい、何なんですか!?　この世界は。訳がわからないですよ!!）
（ティアナ、悩むのはミッドに帰ってからにしよう・・・）

フェイトたちはこの世界に来て以来、最大の衝撃にそれ以上の言葉を口に出来なかった。
「兄上。兄上もどうですか？気持ちいいですよ～」
ルシフェリオンに続き、バルフィニカスもバルディッシュを誘う。
バルフィニカスがバルディッシュを「兄上」と呼ぶのは、この二機はどちらともリニスが製造したデバイスだから、先に造られたバルディッシュは、バルフィニカスの兄機となるからである。
「いえ、ですから・・・」
バルディッシュがまたもや断ろうとしたら、
「あれあれ？怖いんですか？兄上ともあろう方が？」
バルフィニカスがバルディッシュを挑発する。
「ムッ、マスター。私も入ります!!」
「えっ!?バルディッシュ？」
「弟にあそこまで言われては、兄として黙っている訳にはいきません!!」
バルディッシュは、バルフィニカスの挑発に乗り、ホットワインが入っているカップに自らを入れてくれとフェイトに頼む。
フェイトはバルディッシュを恐る恐るバルフィニカスが浸かっているホットワインの入ったグラスの中へと入れる。
ホットワインが満たされたグラスへと入ったバルディッシュは、
「はふぅ～・・・確かにコレは最高ですねぇ～・・・」
バルディッシュは赤く点滅しながら、普段の凛々しい声が嘘の様に甘い声を出す。
「切り替え早っ!!」
愛機の行動に思わずツッコミをいれるフェイト。
「・・・あの・・マスター・・・・」
すると、クロス・ミラージュもソワソワした感じの声でティアナに話しかける。
「何？クロス・ミラージュ？まさか、アンタも・・・」
「はい、私もチャレンジしてみたいです」
クロス・ミラージュもバルディッシュの様子を見て、自分もチャレ

ンジしてみたくなった様だ。
「あんたねぇ～」
ティアナは自分の愛機の流されやすさに思わず額を押さえる。
そしてティアナがルシフェリオンの入っているブランデー紅茶入りのティーカップに入れる。
「うーん・・・確かにコレはいい気分です～」
「そうだろう？」
バルディッシュもクロス・ミラージュも最初は、「信じられない」と言っていたにもかかわらず、リラックスモードに入る。
「・・・」
この様子に、フェイトもティアナも何も言えず、ただ唖然と見ているだけであった。
しかし、この旅行の後日、デバイスを起動する機会があり、その時に使用した際、ミッドで通常メンテナンスを行った時よりも精度が上がっていた事に二人は驚愕しつつも、この滅茶苦茶なメンテナンス方法に何も言えず、軽い頭痛を覚えた。
更に二人が困惑したのは、この仰天メンテナンス以降、二機のデバイスはこの仰天メンテナンスを二人に要求し続けて来た事だった。

七十話　向こうの地球の子孫たち

時空管理局本局

この日、とある一室に集いたるはクロノ・ハラオウン提督、高町なのは一等空尉と高町ヴィヴィオ、スバル・ナカジマ一等防災士、エリオ・モンディアル二等陸士、キャロ・ル・ルシエ二等陸士の六人だ。

エリオとキャロは自然保護隊の長期休暇をとり昨夕から任地の管理世界からミッドに戻っており、ミッドに滞在中は高町家に逗留しているのだが、つい最近になって確認された第二の地球で、現地の軍に保護されているフェイトたちからの定期通信日に重なったため、なのはたちと共にこうして本局にやってきたのだ。

指定された時刻まであと五分を切ると、クロノ以外の皆は緊張を隠せずにソワソワし始めた。

その時、スクリーンが明滅して、通信が入った事を知らせるアラームが鳴った。

やがて、画面が再び切り替わり、フェイトとティアナの姿が映り、その少し後ろに立つ等身大サンタクロース人形と雪ダルマの人形が映し出された。

あちらの地球がクリスマスシーズン故の仕様なのだろう。

・・・と、この時、管理局側の皆はそう思っていた。

「フェイトちゃん!!ティアナ!!」

「フェイトママ!ティアナさん!」

「「フェイトさん、ティア（さん）！」」

なのは以下のミッドチルダ組はフェイトたちの姿を見た途端、もう涙声になっていた。

「なのは、ヴィヴィオ、エリオ、キャロ、スバル・・・」

フェイトとティアナも、画面に映る近しい者たちの姿を見て、双眸に涙を溢れさせた。

双方とも泣くのが先に立って、なかなか話にならなかったが、なの

はたちの付き添い役であるクロノとフェイトたちの後ろの等身大サンタクロース人形と雪ダルマの人形――実はその中には良馬とリニスが見守っていた。
（この人・・・・）
画面に映る二人・・・・フェイトがなのはと呼んだ女性の存在に内心驚いていた。
「なのは」は、瞳と髪の色以外は紅葉の数年後といっていい容貌をしていた。
（あの人がなのはさん・・・・やはり、髪型と瞳以外は紅葉さんそっくりですね・・・・）
リニスも画面の向こうのなのはを興味津々で見ていた。
ただし、良馬もリニスも殆ど身じろぎしておらず、画面の向こうの面々は、まだこちらにまで関心は向いていないようだ。
十五分位経った頃だろうか、双方とも落ち着いたようだ。
「そう言えば、月村艦長の姿が見えないが、どうなさったんだ？今日は留守なのか？」
向こうの世界におけるフェイトたちの身元引受人である以上、彼には直接話したいこともあるのだが・・・・
良馬の行方を訊ねるクロノに、フェイトは苦笑しながら話す。
「ううん。さっきから私たちと一緒だよ」
「一緒って、どこにも・・・・はっ!?ま、まさか・・・・」
クロノはもしやと思い、視線をフェイトたちの後ろに鎮座しているサンタクロース人形と雪ダルマの人形に移した。
その視線を受けるのを待ち構えていたかのように、突然サンタクロース人形と雪ダルマの人形が動いた。
帽子を脱ぎ、顔を覆っていた白鬚を外すと良馬が現れ、雪ダルマの人形の頭の部分をスポッと取ると茶髪にショートボブの女性が現れた。
「え？・ええっ――――――!?」
「・・・・」
なのはたちはもとより、クロノも呆気に取られた。

「いや、驚かせて済まない。こっちはクリスマスシーズンでね、緊張を和らげるためにちょっとしたサプライズを・・と思ったのだが・・・・」
　ものの数秒でサンタクロースから地球防衛軍の艦長服姿になった良馬が笑みを浮かべながら軍帽を被る。
　隣では、医師なのか白衣を着た女性も笑み浮かべている。
（てっきり人形だと思っていたのに、ずっと微動もせず、気配を消して立ち続けていたの？この人たちは!?）
　なのはは元より、スバル、エリオ、キャロも驚きを隠せずにいる。
（いや、正規の軍人なら、屋内戦闘等のために自分の気配を消す訓練は当然受けているだろうな）
　一時の驚きから真っ先に我に返ったクロノは冷静に分析した。
（しかし、サンタクロースや雪ダルマに扮してこの場にいたとは予想外だったが・・・・）
「ハラオウン提督にナカジマ一士以外とは初めてだったね。地球防衛軍所属、宇宙戦艦まほろば艦長の月村良馬です」
「同じく地球防衛軍所属、宇宙戦艦まほろば軍医、月村　リニスです」
　良馬とリニスはさっと挙手の礼をしてみせた。
「リニス医務官とは初めてですね。小官は時空管理局・次元航行本部所属、次元航行艦クラウディア艦長、クロノ・ハラオウンです」
　クロノはリニスに向かい、答礼する。
　その様子を見て我に返った、なのはたちも居住まいを直し、踵を合わせて直立した。
　相手は階級こそ言わなかったが、大型艦の艦長ならば佐官か提督クラスであり、違う組織とはいえ、自分たちより上官に相当する人物である。
「時空管理局所属・航空戦技教導官、高町なのは一等空尉です！」
「同じく、自然保護隊所属、エリオ・モンディアル二等陸士です！」
「同じく、自然保護隊所属・キャロ・ル・ルシエ二等陸士です」
「同じく、ミッドチルダ港湾特別救助隊所属、スバル・ナカジマ一等防災士であります!!」
　エリオとキャロの自己紹介を受けたリニスと良馬は内心で嘆息す

る。
　時空管理局には彼らなりの事情があるのだろうが、未来を担わせるべき子供を危険な任務に就かせ、あまつさえあんな惨い最期を遂げさせた事実には不快感を禁じ得ない。
　遺族には手厚いケアーを行っているのだろうか？
　が、それを表情には出さずに彼らを見遣った。
　さらに…
「さっ、貴女もご挨拶なさい」
　と、なのはに促されたヴィヴィオも、
「た、高町ヴィヴィオです！ザンクト・ヒルデ魔法学院初等科一年生です!!」
　と、子供らしく元気な声で自己紹介してペコリとお辞儀したが顔を上げるや言葉を続けた。
「あ、あの・・・フェイトママとティアナさんを助けてくれて、ありがとうございました!!」
　お礼を言うとヴィヴィオは再び頭を下げる。
「どう致しまして、リトル・レディー。遭難した船を助けるのは船乗りの掟だからね」
　拙いながらも、懸命に自分なりの礼を言う少女に、良馬はまた言葉と敬礼で応じた。
　なのはもまた、画面の向こうに映る月村　良馬に妙な親近感みたいなものを感じた。
（月村・・・すずかちゃんや忍さんと同じ苗字・・・それにこの人達が住んでいるのも私たちと同じ海鳴に住んでいる・・・）
　クロノから見せてもらった戦闘記録映像では、ヤマト、まほろばがガトランティス帝国の艦隊を相手にした戦闘は短時間ながらも苛烈かつ一方的であったことが判明し、なのはたちは戦慄を禁じ得なかった。
　ただ、実際に相対してみると管理局で囁かれている好戦的な人物という印象は感じられなかった。
　何より、年少である自分たちを軽んじた様子はなく、ヴィヴィオに

対しても対等に応じたあたりは、道理を弁えた人物なのだろう。
ただ、人形に扮したりと、変わった一面も持ち合わせているようで、案外そちらの方が地なのではないだろうか――？
等と思いつつ、なのはは良馬とリニスの二人と相対する。
「先程ヴィヴィオも申し上げましたが、私たちのかけがえのない友人たちを助けて下さいましたこと、本当に有難うございました・・・・」
と頭を下げると、スバルたちもそれに倣った。
良馬は軽く頷くが、
「しかし、生存者より犠牲者の方が圧倒的多数だったのは事実だった・・・・当事者として、ご遺族にはお悔やみ申し上げる」
と、なのはたちに頭を下げた。
フェイトたちも思わず俯いてしまったため、話題を変える事にした。
フェイトとティアナは先日街のホビーショップでプレイしたＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬについて話した。
ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬについては何ら軍機に触れる様なものではなく、単なるアーケードゲームなので、フェイトたちが話しても問題は無かった。
フェイトからＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの話を聞いるスバルは目を輝かせて、フェイトとティアナを羨んでいた。
しかし、それはスバルだけでなく、なのはたちの方もそれは同様だった。
「良いなぁ、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ面白そう!!」
「ヴィヴィオもやってみたい!!」
ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬとクリスマスを過ごした温泉街での話をしていく内、時間は容赦なく過ぎ、規定の時間になる。
「では、次回の定時連絡は、八日後でよろしいですね？」
「はい。次回はこちらの上司も立ち会わせたいのですが、よろしいでしょうか？」
「ええ、構いませんよ」
「ありがとうございます。では、また次回に・・・・」

通信を切り、良馬たちは部屋を後にした。
喫茶スペースに向かう途中、フェイトたちは途中、お手洗いへ立ち寄った。
彼女たちの戻りを待っている時、リニスが話しかけてきた。
「難しい顔をしていますね。マスター」
「ああ・・・さっき少し話した、あの高町なのはという女性・・・彼女に何とも言えない違和感を抱いてね・・・」
「・・・」
ノアとテリオスから回収した資料の中でも何度か触れられていた〝エース・オブ・エース〟〝管理局の白い悪魔〟等と物騒な二つ名もある人物。
紅葉とそっくりな存在・・・。
しかも、魔法文化が存在しないはずの地球生まれに関わらず、有り余る魔力資質を持っているあたりも紅葉と同様だ。
しかし、九歳から管理局の魔導師として活動していたという記録を見た時は、もう開いた口が塞がらなかった。
彼女の実績は大したものなのだろう。
管理局が言うところの『次元世界』において、数多の事件や次元犯罪の解決に貢献してきたので、エースと言われるのも頷ける。
十代半ばには航空戦技教導官として後進の戦闘魔導師の育成にもあたってきたという。
時空管理局、特に主流を占めている本局とやらでは、高町なのはとフェイト・テスタロッサ・ハラオウン、それに、なのはと同じく海鳴市出身という八神はやての三人がいれば、世界の二つや三つは簡単に救えると豪語している動きももあるようだが――。
フェイトやティアナたちは、自分の生まれ育った世界を守るのだから良いだろう。
しかし、高町なのはの切り札という、魔力集束砲撃『スターライト・ブレイカー』は、果たして彼女が生まれ育ったもう一つの地球の平和や安定に寄与できているのか？
そういう事に関しては、管理局の豪語には懐疑的にならざるを得な

い。
時空管理局は、管理外世界には基本干渉しないという建前だ。
つまり、向こうの地球で外宇宙からの侵略や戦争が起きようと時空管理局は不干渉。
違った見方をすれば『高みの見物』で、高町なのはや八神はやては、管理局員である以上、故郷や同胞に何の手を差し延べてはいないということだ。
つまり、救えるかもしれない力を持っていながら、故郷で戦争が起きても決して手を差し伸べず、同じ地球人のである被災者に対して「可哀想」と言って見ているだけなのだ。
それは、自分たちの所属している管理局が、管理外世界での魔法使用は「原則として」禁止されているからだ。
もっとも、抜け穴もちゃんと用意されているようだが・・・・
彼女たちには彼女たちなりの思いがあるはずだ。
それは勿論、尊重する。
しかし、良馬は・・・・いや、良馬たち、地球防衛軍軍人たちは自分たちの過去の痛みや失策を加味してこう考える。

自分たちの世界を守れない、あるいは守ろうとしない連中が、他人の世界を守りきれるわけがないだろう。

それが、こちらの地球が、二度の星間戦争で嫌というほど思い知らされた現実と教訓だ。
「それに・・・・」
「それに?」
「いや、以前、忍さんから見せてもらった昔のアルバムの中に、高町なのはという同姓同名の人がいたから・・・・しかもその人の容姿が先程通信をしたあの人とそっくりだった・・・・」
「あっ・・・・」
リニスも覚えがあるため、良馬との抱く親近感に気が付いた様だ。

クロノたちが防衛軍側と定期連絡をしている頃、
同じく管理局本局の一室では、五、六名の局員らが集まり、会議を行っていた。
「良いのですか？このままで・・・・」
「良い訳があるか!!」
「その通りだ。管理外世界の蛮族共が、まるで我々管理局と同等の様な振る舞い・・・今、思い出しても虫唾が走る!!」
「あの蛮族共の小細工のせいで、我々の輝かしい経歴に傷がついたのも事実だ!!」
ここに集まっている局員は、襟章や肩章からみて、提督や将官クラスの人物であり、その中でも、彼らは時空管理局の〝海〟でも管理世界拡大推進派、魔導師至上主義と言われるグループに属しており、時空管理局の管理こそが平和を実現するものと信じて疑わない局員たちだった。
以前は「最高評議会」から密かに手厚く支援を受けていたのだが、ＪＳ事件の混乱の最中に最高評議会が「暗殺」されると逼息を余儀なくされ、更迭・左遷される者も少なくなかった。
そして、以前に自分たちが、最初に仕掛けた通信ポッドの小細工を防衛軍側に見破られ、逆におちょくられた事が発覚し、その件に関して厳重注意処分を受けた。
その事を完全に逆恨みした彼らは、何とか防衛軍側を出し抜きたいと思っていた。
その現状を打開するための方策の一つが第二の９７管理外世界の事技術の入手だった。
そこで、今度は通信ポッドに細工をするのではなく、直接次元航行艦を派遣し、第二の地球の座標を特定する事にした。
極めて不愉快ながらも、彼らの軍が持つ宇宙戦闘艦船の戦闘力は管理局の艦船のそれを大きく上回っている。
しかし逆に見れば、あれだけの技術は魅力的だ。
あの技術を手中に収め、魔導兵器と組み合わせれば、管理局の戦力は画期的なほど強化できる。

彼らはそう考えていたのだが、この時彼らはそれが自分たちの組織を危機に晒す事態になることを予想できるはずもなかった――。
「しかし、誰を派遣するのだね？これは極めて危険な任務だが？」
「丁度いい人物が居ます」
一人の局員がキーボードを操作すると、空間パネルの上に一人の人物の顔写真と経歴が映し出される。
「彼など如何でしょう？」
表示された人物は以前、ゲンヤの指揮する部隊陸士１０８部隊と共同で窃盗団を追いかけ、ギンガを輸送船諸共消滅させる作戦を執った執務官、ジュリオ・セレヴァーレであった。
「うーむ・・・だが、良いのか？もし、此奴が任務を成功させては・・・」
「良いではないですか。彼が成功すれば、第二の地球の位置、引いては連中の技術を根こそぎ接収出来る。万が一、失敗すれば、また新たな駒を送り込めばいい・・・それに、ここ最近、彼の不正にはそろそろ手を焼いておりまして、ほとほと困り果てていましてねぇ・・・」
「確かに・・・」
「我々時空管理局は正義の組織でありますが、そのイメージに彼は相応しくありません」
「うむ、君の言う通りだ。我々管理局は次元世界と法の守護者であり、クリーンな正義の組織なのだからな・・・」
「では、早速手配を行いましょう」
「そうしてくれ」
ジュリオ本人の知らない裏で何やら物騒な事進んでいた。

それから数時間後・・・
「ジュリオ・セレヴァーレ。参りました」
「おぉ。良く来てくれた。セレヴァーレ君。早速だが、君に特別の任務を行ってもらいたいのだが・・・」
「特別な任務・・ですか？」
「うむ、君も既に知っているだろうが、例の第二の地球についてだ」
「はい。存じております。小憎らしい事に我々管理局に小細工を仕掛

けて来たとか？」
「その通りだ」
「これは明らかに我々管理局に対しての挑発行為に他ならない」
　実際は管理局が防衛軍に小細工を仕掛けたのだが、管理世界拡大推進派の高官はそれを認めず、反対に返り討ちにした防衛軍側の陰謀だと吹聴していた。
「我々管理局は彼奴等に何らかの報復処置をとらなければ、次元の世界の平和・・・ひいては管理局の尊厳に関わる事だ」
　ジュリオも管理世界拡大推進派の高官の事を聞いて頷いている。
「しかし、残念ながら、その小憎らしい連中の根拠地の座標が分からんのだ。そこで君に次元航行艦を率いてもらい、かの世界の座標を掴んできてもらいたい」
「自分が・・で、ありますか？」
「無論、危険な任務だと言う事は承知している。しかし、成功すれば、より大きな権限と地位を得られる。そして、君の名は英雄として管理局の後世の歴史に刻まれる事だろう」
「・・・」
　より大きな権限、より大きな地位・・・
　英雄として後世に名を残せる・・・
　これは余りにも甘く軽やかな響きであるが、それと同時に危険な誘惑でもある。
「君は悔しいとは思わないかね？あの管理外世界出身・・・蛮族である高町なのは　や　八神はやてがどんどんと有名になっていき、本来ならば、崇高な管理世界であるミッドチルダ出身者である君が未だに彼女たちほど有名でないことに・・・」
「このままでは、君の地位も近い将来彼女たちに奪われるのではないか？」
　ＪＳ事件前は権力を欲しい侭に振っていた彼もＪＳ事件後、管理局の上層部に捜査のメスが入れられ、彼の女性問題について、幾つもの指摘がされた。
　ＪＳ事件前ならば、いくらでも揉み消す事が出来たのだが、ＪＳ事

件後はそう簡単にいかなくなり、過去の問題を掘り起こされ、近々には降格・・・いや、懲戒処分を受け、逮捕される危機が彼にはあった。
「まぁ、君がどうしてもこの任務を引き受けられないと言うのであれば、誰か別の者に代わって貰うつもりなのだか？」
（代わりの人・・・駄目だ、譲れない、これは俺の得た機会だ。そうだ、あの管理外世界出身の八神はやて・・・高町なのは・・・アイツらは将来俺の地位を奪い取る危険な芽だ・・・だからこそ、この任務に成功し、より大きな権限、より大きな地位を得て、危険な芽は早めに摘んでおかなければ・・・）
　この任務に成功すれば、過去の問題など些細な出来事であり、それ以上に巨大な権力と地位、名誉が手に入り、それにより自分の地位は確たるモノになるだろうと、彼は判断した。
　そして、彼は・・・。
「分かりました。その任務は、是非とも私にお任せ下さい!!」
　と、ジュリオは提示された第二の地球の探索任務を引き受けた。
　その様子を管理世界拡大推進派の局員達はほくそ笑んで見ていた。
（ふん、単純な男だ。ちょっとプライドをつついてやれば、簡単に踊ってくれる。プライドほどの能力も無いくせにな）
　一人の高官は彼を見て、そう思っていた。
　その反面、
（ふんっ、老害共め危険と分かっていて逃げ腰か・・・そんな弱卒は管理局には不要だ。さっさとそのたるみきった尻を乗せている椅子から退けよな・・・）
　ジュリオ本人も目の前に居る高官に対してもあまり良い印象を抱いておらず、下剋上を狙っていた。
　今回の第二の地球の探査が成功すればそれも出来るだろうと彼はそう判断した。
「では、早速君の乗艦する艦を手配しておこう。準備出来次第連絡は追ってする」
「ハッ」
　ジュリオは敬礼し、その部屋を出て行った。

それから数日後、
ジュリオの下に「艦の準備が出来た」と言う連絡が入った。
「今回君が乗艦してもらう艦は、間もなく完成するＲ級の０番艦、クライスラーを率いてもらう」
「Ｒ級？０番艦？・・ですか？」
「そうだ。近々就役予定のＲ級の試作艦ともいうべき艦だ」
自分に任務を下した管理局の高官の説明を聞き、ジュリオは、
（おいおい、こんな危険な任務に試作艦だと？ふざけやがって）
と、内心毒づく。
「まぁ、試作艦とは言え、就役するＲ級と何ら性能に関しては問題ない。むしろ、試作艦だからこそ、高コストの装備も備えられている」
「は、はぁ・・・」
（本当かよ？嘘くせぇなぁ・・・）
危険な任務と言うのに自分にあてがう艦が試作艦と言う事でかなり疑り深くなる。
「乗員も既にリストアップしてある」
「物資と乗員が揃い次第、出発してくれ」
「ハッ」
ジュリオは艦が停泊しているバースへと向かった。

「捨て駒とは言え、アレに付き合う連中も運の無い奴等だ」
ジュリオが去って行った扉を見ながら一人の高官が呟く。
「構いません。集めたのは、局員の中でも管理外世界において、現地住民に対して、略奪暴行などの悪行をしまくるような屑と低魔導師や非魔導師等の替えが効く捨て駒連中ばかりですから」
「そうか、ならば問題は無いな。ハハハハハ・・・」
と、クライスラーに乗せられる屑局員は兎も角、低魔導師、非魔導師の局員をまるで取り換えが効く機械部品の様に言いながら薄ら笑いをする高官だった。
そんな思惑を知らず、ジュリオの方も、通路を歩いていく中、
（ふん、あの能無しのゴク潰しどもが、今は、大人しく命令を聞いてや

るが、いずれ、俺が上の地位についたあかつきには高町なのはや八神はやて同様、早々に処分してやる。所詮貴様らは俺の引き立て役でよいのだ。この任務が終わったら階級も将官へいっても可笑しくはない。いや、なるべきなのだ。そして、総参謀長・統括官になり、管理局を動かす・・・そうだ、その役はこの俺にこそ相応しいのだ。この俺、ジュリオ・セレヴァーレがな・・・)

彼は通路を歩きながら薄気味悪い笑みを浮かべていた。

こうして様々な思いを抱きながら、次元航行艦クライスラーは・・・驕れるまま船出する番人の船は、第二の地球を目指して出航していった。

ここで時系列は、地球側へと移る。

管理局との定期通信を終え、喫茶スペースに居た時、唐突に緊急警報のアラームが鳴り響いた。

「緊急連絡!プロキオン回廊付近にて、白色彗星帝国軍艦艇複数の反応を確認。太陽系内への侵入を図る模様。総員、第一級警戒態勢!!本土防衛隊は緊急スクランブル!!繰り返す・・・」

放送に聞いた休憩中の本部職員が色めき立ち、持ち場にとって返し始めるが、若年者の中には慌てている者もいた。

「うろたえるな!一旦止まって深呼吸してからいけ!」

実戦経験者の高級士官が若年者を叱咤する声が響く。

フェイトとティアナも不安そうに周囲を見回っている。

しかし、良馬とリニスはそんな喧噪を横目にティータイムを続け、カップの中を空にしてからおもむろに立ち上がった。

「やれやれ・・・連中も少しは空気を読んでもらいたいものだ」

そう呟きながら軍帽を被る。

「ぼやいていないでちゃんと仕事はして下さい。マスター」

「分かっている。これも給料の内だ・・・」

「月村艦長、ヘリの用意が出来ています!!お早くヘリポートへお越しください!!」

若い防衛軍隊員が伝令内容を言う。
地上車で管理局と通信を行っている隊舎から　まほろば　が停泊しているドックでは、交通渋滞や信号の影響で到着が遅れる。
そのため、空から行く事になった。
フェイトとティアナをこの場に残していく訳にはいかないので、良馬は忍に連絡をいれ、ノエルが二人を迎えに来る事になり、二人はノエルが運転する車で帰る事になった。
軍本部のヘリポートを発進したヘリには、良馬にリニスが乗る。
リニスと並んで座っている良馬は、一見したところ緊張した様子はないが、目は猛禽類のような――雰囲気をまとい、手にした端末に指を走らせている。
リニスは目を瞑り、静かに席に座っている。
ヘリの席で良馬が手にしている端末には、彼が艦長を務める　まほろば　の各種情報――乗組員の帰艦、弾薬や物資の搬入等の状況がリアルタイムで表示されており、画面をタッチして送信し、当直の士官に指示を伝える。
やがて、ヘリは　まほろば　が停泊しているドックへと到着した。
基地では地上係留の艦艇の間を人員や作業車両が走り回り、上空をコスモタイガーや哨戒機が旋回している。
良馬たちが乗ったヘリが着陸すると、既にワゴン車が待機しており、良馬たちが乗り込むやすぐに発車した。
車はヘリポートから艦が停泊している地下ドックへと向かう。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「皆、お待たせ」
良馬が艦橋に入るや、新見以下の艦橋員が敬礼で迎えた。
答礼し、現在の状況を確認する。
「全機関異常なし、艦内システムオールグリーンです」
「乗組員は全員揃っています」
「艦の整備状況は？」
「装甲板の交換作業は全て完了。内部工事の一部は中断できませんの

で、技術者及び作業員が十五名同乗中。警戒態勢までは作業を続行します」
井上機関長、新見副長が矢継ぎ早に現状を報告する。
「わかった。現在は発進態勢での待機命令だが、出撃命令が入った場合は十分以内に発進できるようにしておけ」
「了解!!」
メインスクリーンには矢印や三角形で太陽系内の艦隊や部隊の展開状況と白色彗星艦隊の予想進路が表示されている。
白色彗星艦隊はカイパーベルトを通過、第十一番惑星へと向かっている。
あのまま第十一番惑星へ暫く駐屯するのか？
それとも補給を受けてすぐに出撃して来るのか？
今後の状況から目が離せない状況だ。
地球防衛軍側の方は、火星、木星の艦隊、及び警備艦隊らが土星圏タイタンに移動した。
「司令本部より入電！『まほろば　はタイタンへ向け出撃し、討伐艦隊と合流せよ』・・・以上です」
ギンガからの報告を聞き、良馬は頷き、
「本艦は十五分後に発進し、タイタンに向かう。総員、出航配置につけ!!」
乗員が足早に出航準備を行っていく。
そして、十五分後・・・
「ホーサー（舫い綱）解除!!」
「ホーサー（舫い綱）解除」
「微速前進０．５」
「微速前進０．５・・・」
新見が出港指示を出し、操舵席に座る航海長の永倉が復唱しながらスロットルを開いた。
なお、隣のバースに居るヤマトは、最近になって大規模な近代改装を行い始めたため、今回のスクランブルに関しては、出撃不能とされ、

待機状態が続いている。
「出港水路へ進入・・・」
「波動エンジン内エネルギー注入」
「補助エンジン第二船速」
バースを出撃した　まほろば　は海へと出た。
北西の季節風で波高くうねる海上を、ピッチングを繰り返しながら増速していく。
「メインエンジン内圧、臨界。フライホイール始動！」
「フライホイール始動」
機関室では、フライホイールのシリンダーが轟音を上げ、回転する。
「波動エンジン点火十秒前・・・九・八・七・六・五・四・三・二・一・・・波動エンジン、接続、点火」
「離水、上昇！まほろば、発進」
轟音と振動と共に　まほろば　の巨躯が夥しい飛沫と水柱とともに、夕陽を背にしながら、空へと舞い上がった。
「大気圏を抜けました」
「波動エンジン、大気圏外出力に切り換え」
「艦内外とも異常ありません」
乗員が艦の状況を報告する。
「月軌道を通過後、木星圏のアステロイドベルト外まで一気にワープする。総員、ワープ準備」
「了解」
まほろば　は一路、月軌道を目指した――。

時空管理局本局
とある一室に管理局の士官たちが集まっていた。
「それで、クライスラーは、予定通りに出発したのだな？」
「はい、約４４時間で太陽系の外縁部に到着、その後、太陽系内に進入。通信を傍受する等して、例の第二の９７管理外世界の本星の座標を特定。然る後に工作員を送り込みます」
「うむ。しかし慎重にやるようにな。魔力のない蛮人共とはいえ、今

の管理局の艦隊戦力では、到底奴らの艦隊に勝ち目はないのだからな・・・実に小憎らしい蛮族共だ」
「それは強く言い含めてあります」
「うむ。まずは己の敵を知らないことにはどうにもならないからな。しばらくは情報収集に徹するように」
「心得ております」
彼らは自分たちが送り込んだ捨て駒からの吉報を待ち続けた。

ミッドチルダ北部・ベルカ自治区、聖王教会本部
執務室にいるのはこの部屋の主たるカリム・グラシアと秘書官兼護衛のシャッハ・ヌエラの二人と来訪者である八神はやてとヴィータ、リインフォース・ツヴァイ（リイン）、そして高町なのはのメンツだ。
はやてたちがここを訪れた用件の一つが、第二の９７管理外世界の現地軍に保護されているフェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官とティアナ・ランスター補佐官となのはたちが直接会話した通信映像に関することだ。
彼女たちの前に映し出されているのは、フェイトとティアナ、彼女たちの後ろに立つサンタクロース人形と雪ダルマ人形だ。
「この人形は、地球の『クリスマス』に因んだものですね？」
「はい、そうなんですが・・・」
シャッハの問いに対するなのはの答えは些か歯切れが悪かった。
何故かと言えば――。
「「えっ!?」」
サンタクロース人形と雪ダルマ人形が突然動き出したかと思うと、あっという間に二人の高級士官らしい若い男と女医らしき女に早変わりしたからだ。
「ず、随分変わった登場をする方々ですね・・・」
カリムが顔を若干引き攣らせながら言う。
「リインもびっくりしたです」
「それもありますが、それまでは微動だにせず、完全に人形になりきっていました。軍隊の訓練を受けていないとあそこまではできません。

管理局員であそこまでできる人はそうそういないでしょうね・・・私の知る限り、出来そうなのは騎士シグナムぐらいでしょうか？」
「成程、厳しい訓練と実戦をくぐり抜けてきた、れっきとした軍人ということですね」
シャッハの言葉にカリムは頷きながら言う。
男性士官は「月村良馬」、女医は「月村リニス」と名乗った。
「月村？すずかちゃんと同じ苗字やな」
はやてがなのはと同じ印象を抱く。
「この男性の士官の方が、フェイトちゃんたちを直接救出した宇宙戦艦の艦長で、女医さんの方はその宇宙戦艦の軍医さんらしいです」
「そうですか、この方たちが・・・」
（御二人とも、私と同世代だと思うけど、何度となく死地を通り抜けてきたという顔つきね。同年輩の管理局員で、ここまで精悍な顔つきの人はそうそういないわね）
まじまじと映像に見入るカリム。
その後、フェイトとティアナが過ごしている地球での日常風景が流れ、
「このＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬっちゅう体感ゲームは面白そうやな」
「ああ、確かに・・・」
はやてとヴィータもＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬに興味津々の様子だった。
「向こうの地球は艦船技術の他に、ゲームの技術もミッドより優れている様ですね」
カリムもＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの印象から第二の地球の技術力の高さを感じる。
日常風景の映像を見ていく内に、なのはの目が大きく見開かれた。
定期連絡の時は、話を聞いただけで、詳しい映像は後で見てねとフェイトに言われたので、あの時の定期連絡の場に居たなのはも実際に映像を見るのはこれが初めてだったのだ。
なのはが、大きく目を見開いたのは、このＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬのゲーム機が置かれているホビーショップの店長の姿を見た時だった。

「プレシア‥さん‥‥?」
「プレシア?」
「誰です?」
「‥‥フェイトちゃんの生みの親とも言うべき人で‥‥海鳴で起きたＰＴ事件の主犯とされた人物です」
「っ!?」
なのはの口からプレシアの正体を聞いた他のメンバーは驚愕する。
管理局の関係者ならば、ＰＴ事件の事は知っている。
「そんな人が何でこの世界に居るんや?」
「確か、ＰＴ事件の主犯は、虚数空間に落ちて死亡扱いされた筈じゃあ‥‥」
はやてとシャッハが事実を知るなのはに訊ねると、なのはは首を縦に振る。
一体どういう事なのか?
その場の誰もが、困惑する中、
「ふむ、どうやら、彼女はプレシアと言う女性ではなく、向こうの世界のテスタロッサの子孫だそうだ」
と、シグナムがプレシアにそっくりな女性の正体をフェイトが補足として書き記したメモを見つけ、なのはたちに説明する。
「テスタロッサ‥‥それって向こうの地球にもフェイトちゃんが存在したって事?」
「恐らくそうなるな」
シグナムの説明を聞き、神妙な面持ちをするなのはたち。
そこにヴィータが一石を投じた。
「フェイトの子孫が居るなら、あっちにもなのはやはやての子孫がいるんじゃねーの?あっちの世界にも海鳴っていう町があるんだろう?」
「そうやった。ちゅうことは、もう一人のなのはちゃんや私が向こうにいてもおかしくはないやろな。フェイトちゃんの子孫に当たる人があの年頃なら、きっと年少キャラやで‥‥」
はやてとヴィータの脳裏に、スターライト・ブレイカーとも異なる

砲撃魔法を放つ、漆黒のなのはが思い浮かぶ。
（（黒い悪魔や［だぜ］・・・））
文字通り、悪魔の姿をイメージしたはやてとヴィータ。
「はやてちゃん、ヴィータちゃん。二人とも、今すっごく失礼なこと考えてない？」
ジト目ではやてとヴィータを睨むなのは。
「そ、そんな事ないぜ。なぁ、はやて」
「そ、そうやで!!なのはちゃん」
なのはの視線を受けて慌てて否定するはやてとヴィータであったが、あながち二人の予想は外れていなかった。
映像が進んでいくと、つい最近、向こうの地球であったクリスマスの映像へと変わった。
そこで、はやて、なのは、シグナム、ヴィータたち、地球の文化を知る者たちが感じた疑問は、「何故、クリスマスを温泉宿で祝うのか？」と言う事だった。
しかし、その事についてはフェイトとティアナは、補足説明を加えていないので、分からなかった。
そして、その温泉宿の映像から二人の人物が話題に上がった。
まずは、何と言っても高町紅葉だろう。
彼女は髪の色と髪型、瞳の色を除けば、今、此処に居る高町　なのはの中学生時代と変わらぬ背格好なのだから・・・
「・・・」
案の定、紅葉を見たなのはは先程、プレシア・テスタロッサと瓜二つのホビーショップの店長を見た時以上に何も言えなかった。
なお、ギンガについてはフェイトとティアナに訳を話して写真や映像に写らないようにしてもらっていた。
「こ、これは・・・」
「うーむ・・・」
他の皆も紅葉の容姿を見て驚いている。
「まさか・・・居るかもしれないと思っただけなのだが・・・」
「本当に居るとは・・・」

（まさに・・・）
（（黒い悪魔や［だぜ］・・・））
紅葉の容姿を見て先程脳裏に浮かんだ黒いなのはの姿が再び脳裏に過ぎるはやてとヴィータだった。
「こ、この娘の事、フェイトちゃんとティアナは、何か言っているのかな？」
ここに来て、なのはは紅葉についてフェイトとティアナが何か記していないかを訊ねる。
「残念ながら、この娘については、テスタロッサもランスターも何も言っていない」
「そう・・・」
直ぐにでも紅葉について知りたかったなのはは、残念そうな顔をした。
フェイトは意外とおっちょこちょいな所があるので、紅葉について明記し忘れたのだろう。
「ま、まぁ、この娘については次の定期連絡の時にフェイトに訊ねれば良いじゃねぇか？」
ヴィータがなのはに次の定期連絡まで待つように言うと、
「うん、そうだね」
なのはは渋々と言った様子で次の定期連絡まで待つ事にした。
「それにしても、この娘は、高町一尉とそっくりですね」
カリムが改めて紅葉となのはを見比べる。
「名前はまだ分からないですけど、恐らくこの娘が・・・」
「あの世界のなのはちゃんの子孫かもしれへんな」
はやてが紅葉をなのはの関係者だと推測した。
「それにしても・・・この娘・・・」
はやてが紅葉の顔をまじまじと見て、呟く。
「ん？どうしたの？はやてちゃん？」
そんなはやてになのはが訊ねる。
「いや、このなのはちゃんにそっくりな子が向こうの地球のなのはなのはちゃんの子孫に間違いないと思うんやけど・・・この子・・・」

「ん？」
なのはが首を傾げる。
「中学時代のなのはちゃんよりも賢そうや・・・それにおっぱいもきっとなのはちゃんよりも成長しそうやで」
「なっ!?」
はやての衝撃の一言になのはは衝撃を受ける。
はやてがそう思ったのは、なのはと違い、眼鏡となのはよりもやや鋭い釣り目、落ち着いた雰囲気がそう思わせたのだろう。
「ひ、酷いよ！はやてちゃん!!私だって理数系の科目は成績良かったもん!!そ、それに胸だって平均サイズぐらいあるもん!!」
と、なのはは頬を膨らませて反論した。
「このなのはちゃん似の娘も気になるけど、私が気になるのはもう一人・・この人や・・・」
そう言ってはやては、写真に写る一人の女性を指さした。
「この人が何か？」
カリムがこの女性についてはやてに訊ねる。
「この人、ナカジマ三佐の死んだ奥さんとそっくりなんや」
はやてが写真に写る女性について語る。
ＪＳ事件の最中、はやてはゲンヤから妻のクイント・ナカジマが追っていた戦闘機人事件のあらましを聞くと同時に、クイントの顔写真を見た経緯があり、当然彼女の容姿は知っている。
その時に見たクイントの容姿とこの写真に写る女性の容姿は髪の色を除いて、瓜二つだった。
「それじゃあ、向こうの地球には、私やフェイトちゃんの子孫の他にもスバルの子孫も住んでいる事になるのかな？」
なのはがもう一つの地球にはミッドの住人である筈のスバルたち、ナカジマ家の子孫が存在するのかもしれないと推測を立てた。
「かもしれへんな」
それは、ある意味当たっており、外れていた。
まさか、この写真の彼女がゲンヤ・ナカジマの死んだ奥さん・・・クイント・ナカジマの転生体であることは流石に予想外であった。

そして、なのはが気になった、向こうの地球の自分の子孫、高町紅葉も平行世界における元管理局員である事も・・・

なのはたちは引き続き、フェイトが送った映像を見続けた。

七十一話　年末騒動

木星圏　アステロイドベルト外縁部
宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「艦長、全作業、完了しました」
新見の報告を受け、良馬は頷いた。
木星圏において輸送艦と合流し、物資を積み込んだ　まほろばは、これより土星圏、タイタン基地へ向かい、そこで討伐艦隊と合流する。
「本艦は、これより土星圏タイタン基地へ向かう。取り舵２０、進路２５５、全速前進！」
「了解。取り舵２０、針路２５５、全速前進」
良馬の命令を永倉が復唱し、舵を左に切る。
まほろば　は艦首を土星圏に向け、増速した――。

土星圏・衛星タイタン、地球防衛軍土星圏司令部

現在、対彗星帝国戦における太陽系防衛の要衝であるこの基地に次々と地球軍の艦船が降下、あるいは上空に停泊している。
大部分は紡錘形をした巡洋艦以下の中・小型艦で、戦艦は　まほろば　の他に蝦夷、メリーランド、アイル・オブ・スカイ、薩摩、比叡そして臨時艦隊旗艦のアンドロメダ級二番艦ネメシスの七隻が停泊していた。
先程、まほろば　が補給を行った木星圏、ガニメデには山城、扶桑、榛名、加賀、ネヴァダ、ドレッドノート、金剛の七隻の戦艦を中心とする第二次防衛ラインが展開していた。
今回の戦いにはヤマトにも是非来てもらいたかったが、無いモノ強請りをしても仕方がない。
防衛軍は現有戦力で今回の事態を乗り越えなければならなかった。

此処で舞台を土星圏からミッドチルダへと移す・・・・

時空管理局　本局　次元航行本部

管制室は俄かに慌ただしさを増していた。

「ええいっ、クライスラーとはまだ連絡が取れんのか!?」

提督の制服を着た高官が苛立った声を上げる。

「は、はい、こちらの呼び出しに全く答えません」

オペレーターが困惑した声を上げる。

（いくら何でも、いきなり攻撃を仕掛けてくるとは思えないが・・・・）

クライスラーからの定時通信で、第二の９７管理外世界恒星系――太陽系――の外縁部に到達したと連絡があったのはミッドチルダ標準時間で一昨日の昼前・・・・。

連絡が途絶えて既に二昼夜近くになるが、あれから全くこちらからの呼び出しに応じないし、クライスラーからの定時連絡も入らない。

クライスラーは、先日、まほろば　がヘリオポーズに設置した次元通信ポッドから発信された信号をキャッチして接近。

一旦回収して、ポッド内の通信記録を解析し、第二の９７管理外世界の本星、つまり、この世界の地球の座標を特定しようとしたのだ。

そして、めでたくもその座標位置を掴み、

「目的地の座標特定に成功。これより本星付近に向かう」

と連絡してきたのが最後だった。

「まさか、拿捕あるいは撃破されたのか!?」

「そんなはずはない！クライスラーには、試作段階とは言え、最新の光学障壁魔法システムを搭載していたんだぞ！」

「わからんぞ。そもそも魔法なしであんな強力な艦船を保有しているんだ。こちらの魔法を見破る術を持っているかも知れないぞ」

「向こうにクライスラーの行方を確認させる事はできないのか!?」

「そんな事、出来る訳ないだろう!!無断で彼方の領海に侵入しているのだ。下手に文句なんか言ったら、逆につけ込まれるぞ!!」

「そのとおりだ。大体、向こうにはあのハラオウン執務官たちが保護されているんだ。彼女らの身にも危険が及ぶかも知れないんだぞ!!

そうなってみろ、あの統括官が黙っていない・我々の出世の道も閉ざされてしまう・・・」
「くっ・・・」
件の高官たちは顔から血の気が引いていくのを感じていた。

ここで舞台は再び土星圏へと戻る。
土星圏　衛星タイタン軌道周辺

宇宙戦艦　まほろば　艦長室
「艦長、お忙しいところ申し訳ありませんが・・・」
「構わないよ、どうした？」
まほろば　の艦長室で執務をしていた良馬の下にギンガからの艦内通信が入る。
「地球にいるヤマトの真田技師長から、艦長宛に通信が入っております」
「真田さんから？わかった。繋いでくれ」
一体何事かと思う良馬のノートパソコンのモニターに真田と大山の顔が映し出された。
「真田さん。それに大山さん・何かあったんですか？」
「実は、例の通信ポッドなのだが・・・」
「通信ポッド？それってあのヘリオポーズに設置されているあの通信ポッドですか？」
「そうだ。時空管理局との定期連絡用に設置されているあの通信ポッドだ」
「その通信ポッドがどうかしたんですか？」
「誰かが故意に操作した形跡がログを見てわかった」
「操作？・・・っ!?まさか、その操作した誰かって・・・」
通信ポッドを操作した「誰か」に察しがついた良馬。
まぁ、防衛軍があんな場所に行って一々通信ポッドをいじる必要性は全くないし、そんな暇も無い。
そうなれば、あの通信ポッドを弄る「誰か」は考えるまでもなく・・・

「そう、次元世界の法と正義の守護者様御一行。時空管理局だろうな」
大山が管理局に対して皮肉を込めて言う。
「しかし、何故管理局が通信ポッドを？」
管理局がフェイトたちを迎えに来たとは考えにくい。
それならばクロノ・ハラオウンが事前に連絡してくるだろうが、前回の定時連絡ではその様な事は全く言っていなかった。
「連中、正義の味方を気取る事に飽きて、空き巣にでも鞍替えして、地球に来たのかねぇ～？それともお忍びの観光か？」
大山が再び管理局に皮肉を込めて呟く。
「まぁ、その事は何とも言えないが、問題は、彼らがポッドに表示された『座標』を馬鹿正直にそれを真に受けたかどうかなんだが・・・・」
真田が顰めっ面で言う。
「座標？どういう事です？確かあの通信ポッドに表示される座標は太陽の反対側の座標を出すように調整していたんじゃあ・・・？」
「そうなんだが、どうも、あのポッドの回路図をチェックしていたら、とんでもない事が判明した」
「とんでもない事？」
良馬の問いに真田は少し考え込むようにしていたが、顔を上げてある事実を告げた。
「どうもあのポッドは急ごしらえで製造された物みたいでな、安定性が今一つの様で、ログを解析してみて、その時表示された座標を調べてみたんだが・・・・」
「・・・・」
ひと呼吸ついて、真田は告げた。
「最新の座標位置は太陽系のど真ん中を指していた・・・・そして、その前は木星の本星だった・・・・」
「太陽系のど真ん中？木星の本星？それって・・・・」
「・・・・」
太陽系のど真ん中、つまりそれは太陽の・・それも中心核付近ということ。
そして、木星の本星は紛れもなく太陽系最大の惑星、木星を指す。

「えっ？マジ・ですか？」
「・・・・」
「ああ・・・マジだ・・・・」
真田に代わり大山が肯定する。
飛んで火に入る夏の蟲とは正にこれ也・・・・
はたまた、蟻地獄に落ちた蟻の如し・・・・
良馬と真田の顔には、いつの間にかじっとりと汗が出ていた。
それに比べ、大山は普段通りの表情だ。
「だとしても、どうにもなるまいよ。あれには、勝手に弄るなと警告文を大きな文字で、しかも分かりやすい場所に貼ってあったんだ。こっちに連絡すればどこかで待ち合わせるなりできたんだからな。それをしないで勝手な事をした管理局側の責任・・自業自得だろう。船は一瞬できれいさっぱり燃え尽きちまったか、木星の強力な重力圏に捕まり、脱出不能となり、超重力で押し潰されたか液体メタンの海に落ちて一瞬で凍りついたかのどちらかだろう。乗組員やその家族には気の毒な事だがな」
大山は防衛軍側に何の落ち度はないと言う。
「そう割り切るしかないな・・・・」
真田も大山の言葉を聞き、防衛軍側に今回の件については、責任は無く、気にするなと言う。
時空管理局はこの事でこちらを責める事はできない。
仮に管理局側が文句をつけてくれば、時空管理局側が地球連邦の領海を侵犯したと言い返せばいい。
他国の領海に無断侵入した艦船は拿捕抑留、または撃沈されても文句は言えないのだ。
それに今から捜索をかけても手遅れなのは目に見えている。
「こんな事が表沙汰になったら、ハラオウン執務官たちの立場が一層悪くなることくらい想像できない程、管理局は無知なのか？」
良馬は真田と大山たちは画面を挟んで溜息をはいた――。

地下都市・横須賀区

白色彗星帝国軍残存艦隊が太陽系に侵入した報せは直ちに全市民に伝えられ、地下都市への避難指示が出された。
それは異邦人たるフェイト、ティアナも例外なく避難させられることになった。
当然、守とスターシアの娘、サーシアとユリーシャも同じだ。
ＶＩＰたるサーシアとユリーシャは地球防衛軍が寄こしたＳＰの他に守の弟の進と婚約者の雪が付き添い、中島一家、そして高町紅葉、フェイト、ティアナにも一緒の部屋が宛がわれた。
泣き出す赤ん坊も少なくない中、サーシアとユリーシャはすやすやと寝息を立てていた。
（将来大物になるよ）と、古代兄弟は、そう思って外の騒動など何処吹く風の様に眠る双子の赤ん坊を見守っていた。
「皆、整然と避難しているんだね」
続々と地下都市に避難してくる人波を見ながらフェイトがぽつりと言う。
「ガミラスや彗星帝国との戦争以来、避難慣れしているからでしょうか？」
苦笑混じりに紅葉が答える。
白色彗星帝国の来襲後、放置され荒れ始めていた地下都市は整備が再開された。
備えあれば憂いなしというわけだが、地球防衛軍主力艦隊が壊滅した影響も多分にある。
（それにしても、いつの間に私たちの分まで用意してあったのかしら？）
全ての地球連邦市民には地下都市への避難に備えて防災非常袋が支給されていたが、地球に来てまだそんなに日数が経っていないフェイトたちの分も用意されており、その手回しの早さに、ティアナは舌を巻いていた。
一方、フェイトは初めて来た地下都市を目の当たりして、初めて地下都市を見た時のギンガ同様、地下都市の存在とその大きさに驚き、窓の外の地下都市を見回していた。

（軍人だけじゃない。戦争をくぐり抜けた市民の人たちも逞しくなったんだ・・・）
　避難してくる市民の中には老人を背負う若者もいるが、それも一人や二人ではなく、明らかに赤の他人の老人を背負ったり、手を引いている者、荷物を持ってあげる者も多かった。
（戦争で、人々の考え方も色々と変わったのかな？）
　フェイトがふと思った事はかなり的中していた。
　ガミラスの攻撃は老若男女・貧富の区別なく襲いかかった。
　その結果、尊敬される基準などが大きく変わり、つてもて囃されていたセレブの「メッキが剥がれた」結果、一転して嘲笑と侮蔑の対象に変わったりしており、自己中心主義の言動をとる者や企業等は軽蔑され倒産へと追い込まれるようになった。
　しかし、そんな中でもそれを改めない輩も一部は存在したがそれはほんのごく一部であった。

土星圏　衛星タイタン軌道　臨時艦隊旗艦　ネメシス　艦橋

　アンドロメダ級二番艦、ネメシス・・就航は来年の頭になるかと思っていたのだが、ギリギリで今年中に就役する事が出来た。
　外見はガトランティス戦役で戦没したアンドロメダと瓜二つであるが、波動砲はヤマトと同じ収束タイプの波動砲となっている。
「・・・」
　山南はネメシスの艦橋にあるメインスクリーンに投影された味方の艦艇を示す白点と、白色彗星残党艦隊を示す赤点を見比べていた。
（向こうの針路があからさま過ぎる・・・）
　白色彗星帝国艦隊の戦術は大軍にものを言わせた力攻めが多く、その結果、ヤマトや防衛軍艦艇の波動砲の餌食になったり、土方の偽敗走にまんまと嵌められて全滅したりと、地球人の目から見て大雑把過ぎた。
　数だけを恃むことなく、巧みな戦術でヤマトを追いこんだデスラーやドメルの方が戦術家としては、二枚も三枚も上手だったと言えよ

う。
（いい加減、白色彗星帝国の連中も学んでいるはずだ）
向こうには空母がいるとはいえ、その数はたった一隻だ。
しかも例の大型空母ではなく、ナスカ級の中型の空母。
数が少なくなったとはいえ、対空火器を強化した地球艦隊を全滅させるには犠牲が大きすぎる。
それに、彗星帝国側も援軍が来たと言っても、以前地球に攻めて来た時よりもその数は極めて少ない。
よって今まで通り、数に物を言わせる戦術はとれない。
更に土星圏へ接近する艦艇は空母の他は駆逐艦、巡洋艦を中心にした中・小艦艇ばかりだ。
（連中のこの動き・・・陽動、ではないのか？）
山南の考えと同じ考えが浮かんだ者が居た。
（連中の目的は地球艦隊を誘い出すことで、本命は地球本星への報復攻撃ではないのか？確か彗星帝国には、大型ミサイルを搭載したミサイル艦が有った筈・・鹵獲した艦にはその大型ミサイルは搭載されていなかったが、搭載されていたと思われる発射口はかなりの大きさだった・・・あの大きさのミサイルならば、一発で一都市は壊滅させられる。ましてや艦隊単位で発射されたら・・・）
「通信長」
「はい」
「急ぎ、ネメシスの山南司令に繋いでくれ」
良馬はギンガに山南に通信を繋ぐように指示を出す。
そこで、良馬と山南との間で協議が行われた。
「本当の馬鹿でなければ、いい加減学ぶ」
その事から、連中の本命が地球への大型ミサイルでの攻撃ではないかと言う結果になり、
「月村君」
「はい」
「君は直ぐに地球へと引き返したまえ。我々はここで引っかかったふりを通す」

「了解しました」
まほろば　は直ちに地球へ向かう針路を取った。
「急げ!!土星圏を抜け次第、ワープを行う!!」
良馬は、急ぎ艦を反転させ、地球へと向かった。
まほろば　の他に山南は戦力の一部を割いて　まほろば　と共に地球へと同行させた。
しかし、貴重な戦艦は同行させる事は出来ず、巡洋艦長良と彗星帝国鹵獲駆逐艦二隻、駆逐艦五隻を　まほろば　の援軍として地球へと向かわせた。

艦船ステータス
改彗星帝国高速駆逐艦（ホワイト級）
地球防衛軍が白色彗星帝国の駆逐艦を鹵獲し、改造した艦艇。
特徴であった回転速射砲塔が撤去され、代わりに地球防衛軍標準装備の砲身を有した中口径主砲、対空機銃、上方発射ミサイルを装備している。

まほろば　を中心とする別働隊が土星圏を離れた後、カイパーベルトを哨戒中のパトロール艦、渦潮がシリウス方面から太陽系へと迫る彗星帝国の別働隊を発見し、追尾していた。
渦潮は一定の距離を保ちながら、位置を英文モールスで随時発信していた。
送信した信号が何故モールスにしたのかは、白色彗星帝国軍による傍受を警戒したためである。
トン・ツーの二パターンだけというローテク通信なら、傍受されても、白色彗星帝国にはその意味まではわかるまいということである。
「敵さんは気がついていないんですかね？」
「モールスなんてローテクを使うとは思っていないんだろうなぁ。いや、そもそも連中はモールスの存在自体を知らないのかもしれない」

渦潮の艦長と副長がそんな会話をしているとレーダー、センサーを監視していた観測士が緊迫した声を上げた。
「敵艦隊、ワープに入ります！ワープ明けの位置を解析します！」
彗星帝国別働隊は太陽系内に入ると突如、ワープをし、第十一惑星、土星圏を通過した。
「急げよ」
「了解!!」
「通信長」
「ハッ!!」
「次の通信は平文で打て!!敵艦隊のワープ明け位置を打電し次第、本艦もワープすると!!」
「了解」
ほどなく、ミサイル艦隊のワープ明け位置の解析が終わった。
その後、渦潮も急ぎ、追尾の為、ワープに入った。
渦潮から通信を受けた防衛軍司令部は、防衛軍の主力を土星圏に張り付かせたまま、ミサイル艦隊を迎撃すべく、他の艦艇を月軌道外縁に集結させていた。
この空域に集結を命じられたのは、哨戒任務から捻出したパトロール艦や輸送船団護衛を一時的に切り上げた護衛艦群もあった。

火星圏ではパトロール艦、畝傍が防衛軍司令部からの緊急伝で、周辺警戒を行うとと共に　まほろば　を中心とする土星圏からの討伐艦隊の到着を待っていた。
「敵は本当に来ますかね？」
「彼らが馬鹿でなければね」
畝傍の艦橋で副長兼航海長のターニャと艦長の美咲七波が言葉を交わす。
突如、狭い艦橋にアラーム音が鳴り響く。
すぐに観測士がコンソールを操作し、艦長席の美咲に顔を向ける。
「七号ブイに艦船反応アリ!!」
「味方識別信号を確認!!」

「了解!!・・・・反応レッド!!敵艦です!!」
「数と戦力は？」
「艦種、彗星帝国軍、ミサイル艦、数、十二隻、駆逐艦五隻速力２８宇宙ノットで地球に向かっています！」
「月軌道に集結した艦隊も火星圏に向け出撃しました」
戦場は月から火星の間の宙域になる。
美咲とターニャが予想される戦場の検討をしていると、
「後方よりワープアウト反応を確認」
「敵か!?」
「いえ、識別信号グリーン・・・・土星圏から引き返してきた友軍艦艇です」
ワープアウトをしてきたのは、良馬率いる討伐艦隊の別働隊だった。
畝傍は　まほろば　を中心とする討伐艦隊の別働隊と合流、さらに追尾して来た渦潮もその戦列に加わった。
合流した討伐艦隊の別働隊は敵を追尾する形で敵艦隊へと針路を向けた。
「敵主力隊、海王星軌道を通過しました。土星圏の主力艦隊との接触まで、あと五時間！」
「ミサイル艦隊は依然針路を変えず地球に向かっています」
「各部のチェックを急げよ。いざと言う時に使えませんじゃたまらんぞ」
井上が機関室に指示を出し、その他の部署も最終チェックに入る。
彗星帝国残党軍と地球防衛軍の戦闘の時が刻一刻と迫っていた。
「ヒペリオン宙域で主力艦隊と敵本隊が戦闘に入りました！」
土星圏で白色彗星残党軍と地球防衛主力艦隊との戦闘が始まったようだ。
まほろば　を中心とする別働隊も間もなく戦闘状態に突入する。
全ての艦艇は砲門に仰角をつけて、まほろば　の格納庫では、対艦ミサイルを搭載したコスモタイガーが出撃態勢を整えて発進命令を

待ち受けていた。
関心を土星圏に向けておいて、地球にあの艦首大型ミサイルを撃ち込もうという腹だろう。
やがて、敵艦隊、防衛艦隊が予定戦闘宙域に突入し、
「コスモタイガー隊全機発進！」
「了解。コスモタイガー全機発進せよ！発着口開け！」
戦闘開始のゴングはコスモタイガー隊の発艦から始まった。
宇宙戦艦　まほろば　コスモタイガー　格納庫
「コスモタイガー、全機発進！繰り返す、コスモタイガー全機発進せよ！」
着艦口のエアロックが開かれる。
「よし、行くぞ!!」
そう言うや坂井はキャノピーを閉じ、チーフメカニックにサムアップしてみせる。
チーフは頷くや、リニアカタパルトのスイッチを入れた。
その瞬間、坂井機は勢い良く発進口に消えた。
反対側のリニアカタパルトからもコスモタイガーが撃ち出されていく。
発艦したコスモタイガーは小隊ごとに隊列を組むや、敵艦隊へと向かっていく。
「面舵３０、全速前進！」
「了解。面舵３０、全速前進！」
艦隊もコスモタイガーに続いて敵艦隊に艦首を向ける。
「コスモタイガー隊は確認後、直ちに攻撃せよ！」
「有効射程まで後四分!!」
「敵艦隊確認。全機攻撃開始！　あの大型ミサイルを絶対に撃たせるなよ！」
コスモタイガー隊は翼を翻し、艦隊の前方中央に、アンテナの数が多いミサイル艦を発見。旗艦と判断して襲いかかった。
「コスモタイガー隊、攻撃開始しました！旗艦らしいミサイル艦に命中弾を確認！」

「よし。こちらも砲雷撃戦用意だ！」
コスモタイガー隊からの通信が入ったようで、先制攻撃は成功したらしい。
艦隊もあと一分強で射程距離の宙域にまで接近している。
その時、前方に大きな閃光が広がる。
「加藤機、敵艦同士が衝突・爆発したのを確認しました！」
「こちらも全砲門と発射管を開け!!ミサイル艦を主砲で叩く！」
ギンガの報告を受けた良馬は即座に砲雷撃戦の指示を出す。
コスモタイガーの攻撃は完全な奇襲になったらしく、突然攻撃された敵艦隊は、早くも隊列を乱し始めた。
この間にも他の艦艇が続々と集結していた。
その中には、かつて、ガミラス戦役で良馬が艦長を務め、その後練習艦となった三笠の姿もあった。
その他にもガミラス戦役で使用されていたＭ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦もいた。
三笠を含めたＭ―２１７０式宇宙巡洋艦やＭ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦は、ガミラス戦で殆ど失われたが、ヤマト就役時まで生き延びた数隻は波動機関への換装や艦体の強化等の改装を施され、地球防衛艦隊の再建期を支えた後に士官学校や訓練校の練習艦になっていたが、艦隊が壊滅した現在の防衛軍戦力不足を補うため、再就役したのだ。
「背に腹は代えられん。使える者は親でも使う」
今の地球防衛軍には、戦力を出し惜しみできるような余裕などないのだ。
ロートル艦隊は戦闘空域より低高度に位置し、敵艦隊の大型ミサイルを迎撃する構えだ。
「今のところ、こっちのペースのようだな」
「はい」
しかし、油断は出来ない。
物事は順調な時ほど、落とし穴に気づくのが遅れるものだ。
「通信長、空間ソナーを打ち出せ。伏兵がいるかも知れない。例の潜

宙艦がな・・・」
白色彗星軍には潜空艦がある。
戦艦はともかく、ロートル艦や巡洋艦以下にとっては命取りになりかねない。
「わかりました。空間ソナー、用意します！」
ギンガは通信インカムを外し、索敵用のヘッドフォンを着ける。
ほどなく、まほろば、畝傍、渦潮から全方位に空間ソナーが打ち出された。
「・・・っ!?反応がありました!!」
「方位と距離は？」
「方位１５０・上下角＋３８度、数７!!」
「っ!?空間照明弾射出!!」

ギンガが補足した方向に照明弾が放たれる。
其処には、漆黒の潜宙艦が潜んでいた。
幸いその中に潜宙戦艦は居なかった。
「砲雷長!!砲撃用意だ！それと三笠に警戒を要請しろ！」
「わかりました！」
こちらを無視してミサイル艦の前方を塞ぐロートル艦隊を狙おうとしたのは妥当な判断だが、そうは問屋が卸さない。
「砲撃準備完了！」
「撃てっ!!」
まほろば、畝傍、渦潮が主砲を放ち、潜宙艦を見舞う。
装甲がなきに等しい潜宙艦は掠っただけでも穴を穿たれ、火の手が上がった。
たちまち五隻の潜宙艦が炎上・爆散したが、残る二隻は炎に包まれながらも、ロートル艦隊へと向かっていく。
しかし、その潜宙艦も　まほろば　のコスモタイガー隊、山本玲と加藤四郎が対艦ミサイルをお見舞いして沈める。
「敵潜宙艦、全て撃沈しました！」
確認されている潜宙艦は撃沈されたが、ギンガは戦闘が終了するま

で周囲の警戒を怠らなかった。

「敵艦より大型ミサイル発射の発射を確認しました。数八!!」

新見が声を上げる。

集結した地球艦隊の十字砲火を浴び、急速に数を減らしていた敵ミサイル艦隊のうち数隻が、苦し紛れに艦首大型ミサイル（破滅ミサイル）を放ったのだ。

「慌てるな。大型ミサイルはコスモタイガー隊と駆逐艦に任せて、此方は敵艦隊を潰すことに専念するんだ」

良馬は敵艦隊の殲滅を指示した。

大部分のミサイル艦は地球艦隊の十字砲火で被弾し、行動力を減殺されていたが、針鼠の如く装備した中小型ミサイルを放って抵抗を続ける。

これらのミサイルも巡洋艦以下の艦船では脅威だ。

故に　まほろば　はその火力を存分に発揮し、突出して敵艦隊の注意を引き付け、その間に巡洋艦、パトロール艦が砲撃の連射とミサイルによる雷撃を加える。

無論、まほろば　も敵に向けて砲雷撃を行う。

破滅ミサイルにまず立ち向かったのは、まほろば　から発艦したコスモタイガー隊だ。

「エンジンを狙え!」

坂井隊がミサイルの推進部にパルスレーザーの掃射を加えた。

何本かのミサイルが後部を炎に包まれ、軌道を外れていく。

撃ち漏らしたミサイルにはM―２１７０式宇宙巡洋艦、M―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦が砲雷撃を行い、ミサイルを爆発させた。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「敵大型ミサイル、全弾破壊しました!」

「残りの敵艦は?」

「ミサイル艦四隻ですが、満身創痍で戦闘継続は困難と思われます」

「通信長」

「はい」
「敵残存艦に降伏勧告を打電しろ」
「わかりました」
ギンガは敵艦隊へ降伏勧告を送る。
しかし・・・・。
降伏勧告への回答は、残存艦のミサイル全弾発射だった。
「くっ・・撃て・・・・殲滅しろ・・・・」
良馬は苦渋の決断をするかのように呟き、ミサイルが到達する前に、全艦から十字砲火が放たれ、残存ミサイル艦は大火球となって爆発四散した。
「敵艦隊・・全滅です・・・・」
「被害状況確認を急げ」
新見が艦の被害確認を指示する。
まほろば　が突出して敵の注意を引いたため、巡洋艦以下の僚艦の被害は大したことはなく、ミサイルも戦艦の装甲を破るほどの破壊力はなかったが、アンテナやパルスレーザー砲などの被害は無視できない。
「信号弾を撃て。引き続き周辺監視を続ける」
まほろば　から集結指示の信号弾が打ち上げられ、周囲に展開していた艦船が集まってきた。
近づいてくる艦の中には、煙の尾を引いている艦が数隻見受けられる。
先制攻撃と十字砲火が効いたのか、沈没艦はなかったが、何隻かは被害を受けているようだ。
そして、それは　まほろば　も同様だ。
（やれやれ、またドックにとんぼ返りか）
主要部はほぼ無傷だが、アンテナや外部の第一装甲板等は要交換だ。
戦力再建途上での一時戦線離脱はやはり痛い。
工廠や造船所の技師や作業員には悪いが、休めるのは大晦日と元日だけになってしまうようだ。

「土星の山南司令より入電・あちらの方も戦闘が終わったそうです」
「そうか・警戒態勢解除。コスモタイガー隊へ帰還命令を」
「了解」
ギンガがコスモタイガー隊を呼び寄せ、コスモタイガーは格納庫にて整備班が整備を始め、搭乗者にはディアーチェたち、厨房スタッフが心づくしの差し入れを振舞った。

パトロール艦　畝傍　艦橋
「まほろば　はだいぶ傷ついているわね」
畝傍の艦橋にあるメインスクリーンに映る　まほろば　を見ながら、艦長の美咲は一人呟く。
白色彗星帝国軍にすれば、降伏せず最後まで牙を剥き、首都たる都市帝国を陥とした地球防衛軍の戦艦は憎んでも余りある相手だろう。
それだけに集中攻撃を浴び、外回りはだいぶ傷ついていた。
（まぁ、まほろば　が敵の注意を惹きつけてくれたおかげで、私たちはこうして無事なのだけれど・・・・）
その時、
「どうぞ、艦長」
副長兼航海長のターニャが、コーヒーの入ったカップを差し出す。
「ありがとう、副長」
美咲は礼を言ってカップを手にし、口元に運ぶと、また思考の海に飛び込んでいった。
ターニャは一礼して自席に戻る。
長時間にわたる緊張から解き放たれた艦橋には、僅かに寛いだ雰囲気が漂っていた。
「艦長、防衛軍司令部から入電です。横須賀基地へ帰還し、そこで整備・補給を受けよとの事です」
警戒態勢が完全に解除され、艦橋には明るい空気が漂った。
その要因の一つに、予想外だったが、地上で新年を迎えられることが大きかった。
火星圏に集結した別働隊は地球への帰還針路をとり、地球へと向

かった。

地下都市・新海鳴地区

「市民の皆様にお知らせ致します」

地下の大空間に案内放送が流れ始め、避難した人々は耳を澄ませた。

放送は続く。

「太陽系内に侵入した白色彗星帝国の残存艦隊は、先程、地球防衛艦隊が撃滅しました。繰り返しお伝えいたします・・・・」

放送を聞き、人々はどっと湧き返る。

当面、地球への脅威はなくなったのだ。

土星圏に侵入してきた白色彗星軍の艦隊も土星圏に集結した防衛軍の主力艦隊の波動砲攻撃で八割方殲滅されたとのことだ。

人々の表情も明るさを取り戻した。

それはフェイトとティアナも例外ではなかった。

此処で舞台はミッドチルダへと移る。

時空管理局本局

会議室では、R級次元航行艦、クライスラーの行方不明事件の検証中であった。

クライスラーの派遣は管理世界拡大推進派の一部の局員が極秘に進めた事なのだが、クライスラーに乗せた乗員に問題があった。

今回のクライスラー派遣が露見したのはその乗員たちが大きく関係していた。

クライスラーに乗っていたのは大きく分けて二つ・・・・。

管理外世界で現地住民に対して、略奪暴行を行う屑局員と、管理局に入局したものの、魔導センスが無い非魔導師と魔力があるが、デバイスを起動させるギリギリの魔力しか持たぬ低魔導師の局員。

屑局員の方は、給料の支給日にキャバクラやギャンブルにつぎ込み、翌月の給料日かボーナスの支給日まで金に困る生活をしていた。

そんな金に困る生活でも、キャバクラ等に行っては、店への支払い

をツケにしたり、親は元より、身内を始め彼方此方から借金をする。
酷い者は闇金にまで手を広げていた。
当然、給料やボーナスが支給されても支払う事などせずに、ギャンブルと酒に金をつぎ込み、更に借金を膨らませていく・・・・
そんな奴の下に危険であるが、成功すれば、昇進と多額の賞与を支給するなどと言われれば、その事を黙っている筈がない。
詳しい任務内容まで知らされていなかったが、金を借りた人やツケを貯めている店に対し、「もうすぐ、臨時収入が手に入る。そうすれば、借金も店のツケも全部払ってやるよ」等と豪語していただろう。
一方、非魔導師と低魔導師の局員に至っては、魔力が無い、魔力ランクが低いと言う事で、昇進に程遠く、給料も安い。
そこに危険ではあるが、任務に成功すれば、昇進と多額の賞与支給の話が舞い込めば、その事を家族や身内に話したに違いない。
または、非魔導師と低魔導師と言う事で、命令に逆らえず、その鬱憤を誰かに話した者も居ただろう。
兎も角、そのような経緯からクライスラーの無断派遣が数多くの局員にバレ、こうしてクライスラーの行方と何故無断で派遣したのかと言う追及の場となったのだ。
「地球防衛軍に問いただすべきです。でないと乗組員の家族は納得しません！」
クライスラーの派遣には無関係だが、派遣した者と同じく管理世界拡大推進派に属する若い佐官が発言し、同意する声が相次ぐ。
「しかしだ・・・そもそも何故、クライスラーをあの世界に派遣した？同じ名を持つ世界でも、八神二佐や高町一尉の故郷とは訳が違うのだぞ？」
慎重派の高官が問い質す。
「クライスラーの派遣が誤りだとおっしゃるのですか？次元世界安定の障害になり得る世界の様子を探るのは当然のことでしょう！」
「かの世界には我々の所有する艦ではどうにもならない戦闘艦船が複数存在するんだぞ！無断で接近すれば領域侵犯で拿捕抑留。撃破されることだってある。ましてや、向こうにはハラオウン執務官たちが

保護されているんだ。向こうを刺激すれば、本局は貴重な人材を失いかねないんだ！貴官らは、向こうを信じて待つとおっしゃった三提督のご意向にも背いたんだ!!」
慎重派の高官は語気を強める。
（はぁ～、余計な事をしてくれたものだ・・・どうしたものか・・・）
論争を見遣りながら、クロノ・ハラオウンはたちを吐く。
あの通信ポッドの細工に気づいたぐらいだ。
恐らくクライスラーの派遣にも当然気づいただろ。
自分たちの領海内に許可なく無断で艦船を派遣したのだ。
防衛軍にとっては領海侵犯されたのだから今度こそ、防衛軍側は黙っていないだろう。
そう考えると彼方の世界に居る義妹たちの待遇に変化があるかもしれない。
クロノの心配事は益々深刻なモノとなっていった。

七十二話　悩みは深し管理局　でも、地球はそんなの関係ねぇ

時空管理局・本局　喫茶スペース

「それ、本当なの!?はやてちゃん!?」

「うん、クロノ君から聞いた情報やから間違いあらへん。クライスラーは第二の地球に向かって、向こうの太陽系の外縁に達して、『地球の座標を掴んだ』との通信を最後に、連絡を絶ったそうや・・・〝海〟では、地球防衛軍に拿捕か撃破されたと見とる」

「そ、そんな・・・」

なのはもはやても沈痛な表情になっている。

「あれだけの艦船を運用しとるんや。太陽系のあちこちに哨戒網を敷いていても何ら不思議やあらへん。ましてや向こうは管理世界じゃないんや。黙って入り込めば当然領海侵犯で捕まるか、撃沈されるやろな」

「それで、向こうの地球（地球防衛軍）には確かめるの？」

「一部のお偉いさんは防衛軍に問い質せと言うとるけど、たぶん無理やろな」

はやては呆れたという口調で返す。

「そんなっ!?どうして？」

なのはにしては、こちらの艦船が防衛軍によって撃沈または拿捕されたかもしれないのに何故、その事を問いださないのか理解できなかった。

「なのはちゃん、そんな事言うたら、管理局はそちらの領域を侵犯しましたと認めるようなもんやで、逆にこっちが問い詰められてまうし、フェイトちゃんたちにも悪影響や。まったく、何考えとるんや、〝海〟の上の連中は・・・いや、もしかしたらもう悪くなっとるかもしれへんで・・・」

はやてはなのはにクライスラーの行方を防衛軍に問いただせない理由を説明し、深く溜息をついた。

そして、彼の地にいる親友たちの身を案じる。
「向こうに管理世界の常識を押し付けようとしたってせせら笑われるだけやのにな。何でわからんかなぁ・・・」
「でも、私たちは次元世界の平和を守るためにいるんだよ。話し合えば、向こうだって分かってくれるかも知れないよ。それに質量兵器は危険だし、新たな争いを生む元になるし・・・」
異議を唱えるなのはだが、はやては構わず、
「なのはちゃん、同じ地球でも、あっちは星間絶滅戦争を戦い抜いた人たちやからな。話し合いはできても、質量兵器全廃なんか絶対応じんやろ。私ら魔導師に魔法を捨てろと言うような事やからな。それに管理局があの世界の地球を防衛軍に代わって守れると思うとるのか？」
「・・・」
はやての言葉を聞き、なのはは、手元のミルクティーに視線を落とした。
さすがに「できる」と即答する程、なのはは脳天気ではない。
確かに彼女の言う通り、防衛軍でさえ、苦戦を強いられたガミラスや彗星帝国に対し、防衛軍以下の艦船技術しか持ち合わせていない管理局では不可能だ。
仮に彼らの技術全てを接収しても、管理局の規制でその全てが採用されるとは限らない。
なのはの脳裏に先日画面で言葉を交わした良馬の顔が思い浮かんだ。
管理局員とは眼の光からして違っていた。
あれは、表面上は好青年であるがその内に秘める本質は肉食獣や猛禽類であり、なによりその眼が本質を語っていると、なのははそう思った。
そう、それは自身の兄、高町恭也と同じような雰囲気だ。
一方、はやての方はクライスラーの一件を聞き、カリムの預言が脳裏を過った。
（まさか、あの時の預言の一つが之かいな・・・すると、もう一つの預言

が起きる可能性も十分ある訳やな・・・後でカリムに会って話をせな・・・あの世界では、管理局は弱小勢力だと自覚せんと死ぬで。それを海のお偉いさんは分かっとらんのかな？）

緊張した面持ちでカップに入った紅茶を飲むはやてだった。

ミッドチルダ　西部地方　エルセア　ナカジマ家

リビングのテーブルでは、五人の男女が食卓を囲んでいた。

壮年の男性は世帯主のゲンヤ・ナカジマ。共に食事をしているのは、チンク・ナカジマ、デェイチ・ナカジマ、ノーヴェ・ナカジマ、ウェンディ・ナカジマ。

皆、養女ではあるが、戸籍上はゲンヤの娘である。

内、一人は、女性はおろか男性でもそうそう見られない量の料理が山盛りならぬ山積みになっていた。

食卓を囲む皆の表情は、一様に冴えわたっているとは言い難いものだった。

それは娘たちの料理の腕や食事の量が原因ではない。

ゲンヤは時空管理局三等陸佐で、首都クラナガン警護の一翼を担う陸士１０８隊を預かっている立場上、管理局内部の情報に触れる機会は少なくない。

「気になるか？ティアナ嬢ちゃんたちの事？」

娘たちの内、赤髪のショートカットの髪型でナカジマ家の次女であるスバルに似ている少女、ノーヴェと同じく赤髪でパイナップルの様な髪型のウェンディに話を振る。

「うん。向こうで元気にしていると解ってはいるけど、やっぱりね・・・」

「スバルも結構気にしていたッス」

「あの嬢ちゃんたちのことだ。ただ無為に向こうの世界で日々を送るはずはないさ」

敏腕で鳴らした執務官とその補佐官だ・・あの世界の「生きた」情報を収集して帰ってくるはずだ。流石に向こうの軍事機密等については無理だろうが・・・。

「そうだな。父様の言う通りだ。相手をよく知らないことには対応しようがないからな」
銀髪で右目に眼帯を着けたチンクが相槌を打つ。
彼女は見た目が小さくナカジマ姉妹の中でも一番下の娘に見えるが、実は、本来の長女であるギンガが鬼籍に入っているため、このナカジマ家の中では一番上の娘に当たる。
「〝海〟はどう考えているのかな？地球防衛軍の艦船を接収しに行くなんてバカな事しなきゃいいけど・・・・」
ディエチが今後の管理局の対応に危惧する。
「あれだけの戦闘力を持っているんだ。〝海〟としては喉から手が出る程、向こうの技術を欲しがる連中は少なくないだろうよ。同じ艦でも一隻でアルカンシェルを遥かに凌ぐ火力は、管理局から見れば非常識も甚だしいからな」
ディエチの懸念に、ゲンヤは地球防衛軍の宇宙戦艦に管理局が抱く不安感を口にした。
「でも、自分たちの世界を守るためにあれだけの戦闘力が必要不可欠だとしたら、これまであの世界を知らなかった管理局があれこれ干渉する権利はないのだろうか？」
チンクが第二の９７管理外世界の立場を口にする。
彼らは、タキオン機関の設計図こそ外の世界から提供を受けたが、機関自体の製造や艦船の建造は自分たちの手で行った。
それは自分たちの手で作り上げたに等しい戦力だ。
しかも彼らはそれらの技術を更に向上させる為、日々様々な実験と努力を重ねている。
それらの技術を管理局が横からかすめ取る権利など存在せず、それをやれば向こうの地球は管理局を侵略者か窃盗組織だと認識するだろう。
最も管理局に限らず、技術の接収に唯々諾々と応じるとは思えない。
「そこなんだよなぁ。〝海〟の連中が恐れているのは・・・あの世界のみならず、ガトランティスの奴等の技術が流入して、反管理局勢力や

無理やり管理世界にされた世界にそれが渡る事さ。そうなれば、今の管理局の戦力では手に負えなくなり、管理世界から離脱するところもあるだろうさ」
　ゲンヤがやれやれと言った様子で言う。
「それか、他の管理世界が、ガトランティスの様な強力な侵略世界に侵略される事も恐れているんだろうな。もしそうなれば、管理局にその世界を救う力は無い。そうなれば、当然管理局はその世界を切捨てて、そこに住んでいる住人たちを見捨てる。それは管理局の信頼と存続に関わるだろう・・・まっ、時空管理局の元でこそ、世界の平和は保たれる――。そう考える者が意外に多いからな・・・特に〝海〟には・・・」
「地球連邦や地球防衛軍の人たちにすれば、ハードもソフトも弱い連中がでしゃばるな、と言いたいのかもな」
　ノーヴェも防衛軍と比べると管理局は貧弱だと自覚はしている様だ。
「戦闘に対する考え方が根底から違うからな。あの地球が俺のご先祖さんの故郷――第９７管理外世界――と似た歴史を歩んできたのなら、戦闘とは相手を殺すか自分が殺されるかだ。万が一、管理局と地球防衛軍が戦闘状態になったら、向こうがこっちに来ることが出来ない代わりに、管理局が攻め込んで来るのを手ぐすね引いて待ち構えるだろうな。あのヤマト　や　まほろば　をはじめとする強力な宇宙戦艦と質量兵器がな。よしんば降下に成功しても、今度は地上軍の待ち伏せと、住民からの敵意と憎悪が待っているだろうな」
「「「・・・」」」
　ゲンヤが口にする「住民からの敵意と憎悪」の一言に姉妹は言葉が出なかった。
　自分たちは以前、次元犯罪者として指名手配されていたジェイル・スカリエッティの一味としてテロをはじめとする犯罪活動をして、敵意と憎悪を浴びてきたが今は更生して普通の一般人として生活している。
　それが、武装隊員としてかの地球に派遣され、住民…特に子供たち

から罵声と石礫を投げつけられたら、憤怒よりも悲しくなってしまうだろう。
スバルが向こうの軍人と話す機会があり、彼女曰く、「自分と話した人は、話がわかる人たちだったが、それでもいざとなれば、こちらを殺す事をためらわないだろう」と言っていた。
ナカジマ家の皆はこの時点ではクライスラーのことは知らなかったが、その艦が第二の地球の座標測量に向かい、消息不明になったと知った時は、共に長嘆息することになった――。

時空管理局　本局　クロノ・ハラオウン　執務室
「やっぱり本当なの!?　クロノ君?」
「ああ・残念だが、本当だよ」
相向っている十年来の友人からもたらされた報せに、なのはは愕然とし、はやては額を押さえて長嘆息した。
あれから喫茶ルームを出たなのはは、クライスラーの一件が本当なのか、クロノに直接訊ねに来たのだ。
「そ、そんな・・・」
なのははソファーから腰を浮かせ、声を上擦らせる。
なのはは元々喜怒哀楽がはっきりした性格だが、そのただならぬ様子に、隣のはやても訝しがった。
「どないしたん?なのはちゃん?」
「・・・クライスラーには・・・私の教え子が二人・・・乗っていたの・・・」
戦技教導官であるなのは、教え子は、大半が各世界に配属されている武装隊員だが、中には次元航行艦配属の武装隊員もいて、今回行方不明となったクライスラーにも低魔導師であるが、なのはの教え子が含まれていた。
なのは曰く、その二人の教え子は、六課時代のティアナ同様、自分たちの魔力ランクに対し、負い目を感じていたが、その点は、六課で培った教導方法でカウンセリングを組み込みながら、なのははその二人に魔法を教えて行った。

二人は、自信を持った様子でその後もなのはの教導を受けて、部隊に配置された時には、なのはに、満面の笑みで報告して来た時、なのはは思わず、涙を流したのを今でも覚えている。
当然、その二人も艦もろとも行方不明なのだ・・動揺するなと言う方が無理だろう。
絶句し、暗い表情で、ソファーに腰を下ろしたなのはに代わり、はやてがクロノに訊ねる。
「それで、本局ではどう考えているん？」
「向こうの太陽系内に侵入した結果、地球防衛軍のスクランブルを受け、領域侵犯の現行犯で拿捕されたか、あるいは・・・考えたくはないが、攻撃を受けて沈められた可能性もある」
「領海侵犯かぁ・・・また余計な事してくれたなあ。〝海〟の上の連中は・・・」
はやても表情を暗くする。
「あくまで仮定の話だがね。仮にクライスラーが太陽系に無断侵入したのなら、地球連邦は怒るだろうし、管理局への印象は悪くなるだろうな・・・いや、既に悪いのが尚、一層悪くなるだろうな」
クロノは自嘲気味に言う。
既に管理局は向こうの地球の座標を掴もうとして、次元通信ポッドに小細工をした揚句、逆に見破れ、おちょくられるという醜態を演じた。
あれだけでも、向こうからしたら、不愉快極まりないはずなのだ。
しかし、今度の件は通信ポッドの件とは違い、実際に艦を領海内に侵入させてしまっている。
不愉快所の騒ぎでは無い。
「相手があの人たちだから話ができるんやろうけど、向こうだって、ああいう話せる人たちばかりではないんやろなぁ」
「そりゃあそうだろう。人である以上、様々な性格の持ち主がいる訳だし、まして彼らは国防に関わる人たちなのだから・・・組織だって一枚岩ではない管理局同様にね」
「そうやな」

恐らくは向こうの地球でも、魔法はファンタジーかオカルトの類だろう。
フェイトたちが魔導師とわかれば、化け物扱いする者だっているはずだ。
ましてやフェイトは出自が出自だ。
今、フェイトたちを預かっている良馬たちは、彼女とティアナが魔導師であることを知っているようだが、フェイトの出自まで知っているのだろうか？
その時点では、向こうがフェイトの出生の事情を知っており、高魔力の魔導師資質を持つ少女まで存在していることなど、誰も思いもしなかった。
「信じたくはないけど、カリムの預言が現実のものになり始めとるのと違うやろか？」
長嘆息しながらはやてが呟く。
「それって、管理局が傲慢になっているっていう事なの？」
「管理局の皆が皆、傲慢なわけじゃないけど、魔法が万能だと思い込んでいる者も少なくない。特に若年の高ランク魔導師にはその傾向が強い。君も教え子の中にそんな子が居なかったかい？」
「・・・・」
クロノの言葉を聞き、なのはは、今まで教えて来た新米局員の中にそんな性格の教え子が居なかったと言えばそれは嘘になる。
「彼らの多くは管理世界出身で、管理世界の事しか知らへんし、当然魔力ランクが高いから管理世界では、ちやほやされる。その結果、今の境遇が当然だと思い込み、部下への最低限の気遣いすらできず、非魔導師や低ランクの魔導師、管理外世界を見下す局員になるんよ」
「はやての言う通りだ。そしてその局員が任務に赴いた先で地元の局員や住民を見下すような言動をとって、トラブルになるケースがここ最近になって増えている。管理外世界なんて報告されていないだけでもっと酷いだろうな」
「その結果、本局の魔導師＝傲慢というイメージが定着しつつあるんや。次元航行艦船の遭難で本局が慌てているのを、自業自得とかいい

気味だと思っとる人や実際に口にしておる人もおるし、私ら本局所属の魔導師に皮肉を込めて「お貴族様」と呼ぶ局員もおる。一握りの高ランク魔導師と大勢の低ランク魔導師や非魔導師の溝は明らかに年々深くなっとる。何とかせんと、管理局はいずれ内と外から崩されてしまうで・・・もし、クーデターでも起こされたら、いくら高ランクの魔導師でも完全には防ぎようがないやろうな・・・」
「・・・」
はやては六課解散後、特別捜査官として各世界を回ることもあり、現地の局員を指揮することも少なくない。
それゆえに、本局局員と各世界の地元局員との軋轢に悩まされることもしばしばだった。
一方、戦技教導官のなのはは、基本的にミッドを離れることはないため、他の管理世界の実情については必ずしも正確に把握しているわけではない。
「ミッド以外では、そんなに酷くなっているの？」
「そうや。それに加えて、強力な軍事勢力との相次ぐ接触に次元航行艦の遭難、喪失が続いとる。魔法や次元航行能力以外では管理局の戦力なんか話にもならん」
「〝海〟としても今後の方針を手探りで探している状態さ」
「地球防衛軍と組むことはできないのかな？質量兵器云々は別にしても、一連の軍事勢力の中で、まともにお話が出来るのはあそこしかないよね？」
なのはは思い切って地球防衛軍との提携を口にしてみる。
質量兵器の問題はあるが、彼らの主要兵器はエネルギー光学兵器であり、純粋な質量兵器とは言い切れない。
それならば、あるいは可能かもしれないと思ったのだ。
「その場合、向こうは対等の付き合いを求めてくるやろな。それは極めて当然やろう。でも、こっちのお偉いさんたちがそれを認めるかが問題や」
地球連邦との同盟関係・・・三提督や〝陸〟、穏健派の局員は問題ないだろうが、魔法至上主義、管理世界拡大推進派が多く在籍する本局

の〝海〟、若手の佐官や提督クラスは一部を除けば、同盟では無く、かの地球の管理世界編入を主張するだろう。
それは管理局の歴史を見ても今日まで対等な同盟関係を結んだ世界は無く、関わるとしたら、管理以外の方法しか選ばない。
第９７管理外世界（地球）は管理局の歴史の仲でも稀中の稀なケースであり、あの世界の地球は第二の地球と異なり、宇宙戦闘艦を建造する技術も無ければ、管理局が欲する様なロストロギアも存在しない。
故に管理局はなのはたちの故郷の地球を管理世界に置いていない。
しかし、管理局の管理下に置く・当然そんな要求を地球連邦がのむ訳がない。
もし、管理局が強攻策、武力行使をとったら、待っているのは魔導師たちの屍山血河、次元航行艦の残骸の山だ。
仮に地球出身の自分たちがこの地球に派遣されて戦っても結果は変わるまい。
向こうは殺すつもりで迎撃するのだから。
反対に自分たちが殺されてしまう。
「・・・」
はやての言葉を聞き、なのはも俯いてしまった。
「いずれにせよ、しばらく次元世界探索はやめるべきやろな。これ以上の艦船と人員の喪失は管理世界の治安維持に悪影響しか齎さないで。クライスラーの一件がカリムの最初の預言なら、もう一つの預言も実際に起こるかもしれへんからな」
「そうだな」
はやての意見にクロノは賛同し、
「そうだよね・・・」
これにはなのはも賛同した。
なのは自身、もうこれ以上、教え子たちが死んでいく思いはしたくなかったからだ。
しばらくは既存の管理世界の治安維持に努めるのが最善だ。
その考えは正しいのだが、〝海〟の管理世界拡大推進派とっては、

その考えは弱腰でしかなのだが、これ以上強硬策をとれば、それは結果として傷口を広げることになる。

今後の運営方針に暗雲が立ち込め管理局から場面は、管理局の連中が必死にその位置を探ろうとしている地球へと変わる。

太陽系へ侵入した彗星帝国軍残党艦隊との戦いを終えた　まほろば　は横須賀基地の地下ドックへと傷ついたその身を横たえていた。

敵ミサイル艦の攻撃を一手に引き受けたため、外部装甲板はひどい凸凹が生じた箇所もある。

すでに一部では取り外し作業が始まっていた。

その最中、艦内では全乗組員がそれぞれの持ち場についていた。

既に艦内の大掃除も終わり、後は艦を工廠側に引き渡すだけだ。

大部分の乗組員は明日から四日間の休日である。

そのため、乗員たちは少しでも早く終わる様にと大掃除もかなり気合を入れて取り組んでいた。

やり残しや、大雑把にやれば、班長にどやされ、更に罰掃除を追加されるからだ。

艦長席から立ち上がった良馬は、艦内一斉放送回線を入れた。

「諸君、様々な事があり過ぎたと言っても過言ではない２２０１年も間もなく終わろうとしている。無事に、と言える状況にないのは、ここにいる全員が肌で感じているだろう。白色彗星帝国との、短いが激しい戦いで多くの仲間の命が失われたのは悲しむべきことだが、悲しむ時間はない。諸君も知っての通り、今回のイスカンダルへの航海の途中で遭遇した暗黒星団帝国という新たな敵対的星間国家の存在が明らかになり、我々は今後の備えと軍全体の再建、そして人類社会の再建を続けていかなければならない。来年も多忙な年になる事は間違いないだろうが、この年末年始は心身共にゆっくりと休息し、年明けには全員が元気な顔で本艦に揃ってほしい・・・以上だ」

新見以下の艦橋員全員が敬礼し、良馬が答礼する。

工廠の担当者と引き継ぎを済ませ、最後に下艦した良馬は、帰り際

振り返り、まほろば　の艦橋を振り仰ぐ。
（就役してから僅か数か月なのに、もう歴戦艦になったな・・・）
白色彗星帝国との戦闘で壊滅した地球防衛艦隊の再建が端緒についたばかりの防衛軍にとって、まほろば　は虎の子の宇宙戦艦の一隻なのだ。
暗黒星団帝国という新たな脅威の存在が明らかになったとはいえ、宇宙戦士の養成が間に合わないのだ。
かつて旧日本海軍、連合艦隊司令長官、山本五十六はこう名言した。
「百年兵を養うは、ただ平和を護る為である」
しかし、今の防衛軍は百年兵を養う余裕はなく、一年で兵を養わなければならない。
ましてや人材不足は軍に限らない。
ほぼ全ての分野で同様の問題が持ち上がっている。
この人材難が解決するのには、少なくとも後、二十年以上を要すると言われている。しかもそれは、外宇宙からの侵略が無い事を前提とするものである。
また、暗黒星団帝国もさりながら、今は時空管理局との関係も厄介である。
ノアやテリオスの艦船技術を見る限り、彗星帝国や暗黒星団帝国よりも戦力では劣る彼らではあるが、
「次元世界」の平和と秩序の維持のために、質量兵器は廃絶しなければならない。
ノア、テリオスから回収した資料の中に書かれていたこの一節を見た時は呆れて開いた口が塞がらなかった。
当初、彼らの指す質量兵器とは、実弾銃砲やロケット弾みたいな実弾系の兵器の事を指すのかと思いきや、魔法によらない兵器全てを意味するものと知った時は、管理局の魂胆が見えたも同然だった。
時空管理局が「管理」している世界でも、魔力を持たない住民の方が遥かに多いようだ。
またそれは彼らの根拠地であるミッドチルダも例外ではない。
ということは・・・

違った見方をすれば、少数派の一部の魔導師が世界を支配する、ということにも捉えられる。
そんな事は決してない、とフェイトやティアナたちは思っているだろうが――。
彼女たちには伝えていないが、既に地球防衛軍は、時空管理局を要注意思想勢力と位置づけている。
彼らの世界観について正邪を論じるつもりはないが、自分たちの価値観を我々に押し付けようとするならば、突っぱねるだけだ。
フェイトたちを救助し、身元を引き受けているのは人道的見地からの特例措置であり、彼女たちの身柄を返還したら、基本的にこちらからはアプローチはしない方針だ。
むしろ、地球連邦はこのままフェードアウトするつもりだ。
それに、地球防衛軍は地球連邦政府の一防衛機関に過ぎず、政府の承認なしに動くことはできない。
地球連邦の基本方針は、あらゆる星間国家と対等な外交関係を結び、支配は一切しない、そして受容しない。
彼らが同盟を求めてくるのであれば、それは地球連邦政府と管理局：ミッドチルダの政府との間で幾つもの協議がなされ、互いに条件を出し合って決めるモノだ。
反対にもし、自分たち地球の独立を侵そうとするのであれば、断固戦い、その意図を挫く。
こんな事を考えたくはないが、万一そんな事になったら、フェイトたちや紅葉の様な子供の魔導師に向けても躊躇なく、銃口を向けてトリガーを引かなければならないだろう。
地球に居る大切な人や守る人のためには鬼にもなるし、悪魔にも魂を売ってみせるが、それでも子供を殺すのは強い罪悪感がある。
（もっとも、都市帝国には無差別砲撃を加えたからなぁ・・・今更、悔いるなんて虫が良すぎるか・・・）
都市帝国の残骸の調査の映像を見た時、その中に非戦闘員である年端もいかない子供や女性の遺体が漂っているのを目にした時はさすがに堪えた。

彼らの遺体は即座に収容して丁重に葬ったつもりだが、後味の悪さは残る。
顔も知らなかった都市帝国の住民の遺体でさえ落ち込んだのだから、直に触れ合ったフェイトたちと殺し合うのには流石に堪えてしまうだろう。
「こっちも向こうも平和なのが一番なんだがな・・・」
そう口に出した良馬には哀愁の雰囲気があった。

その頃、月村家の屋敷では、ノエルが夕食の準備をし、フェイト、ティアナ、忍が和気藹々と談話していた。
「年末・・・」
「カウントダウンパーティー？」
防衛軍の各基地で大晦日深夜から元日未明にかけて行われているという恒例行事の存在を忍から聞いたフェイトとティアナは目を丸くした。
現役や予備役軍人のみならず、退役軍人や家族、さらには戦没者・殉職者の遺族も参加できるという。
「ええ。ガミラスとの戦争の最中でも続いていたんですよ。去年はヤマトの帰還もあって、それはすごいお祭り騒ぎだったのよ」
「そうなんですか・・・でも、それって今年もやるんですか？」
「確か今年って白色彗星帝国との戦いでは、軍人さんが大勢亡くなった筈では？」
忍にフェイトとティアナが問う。
時空管理局の常識では、多数の殉職者が出た場合はこの手の行事は自粛する。
彗星帝国との戦いでは管理局では信じられない程の戦死者を出した筈だ。
それにも関わらず、今年もそんなお祭り騒ぎをやるのか、疑問に思ったのだ。
「大勢亡くなったからこそ、盛大にやるのよ。今回も参加できた人は、参加できなくなった人の分まで精一杯生きる義務があるからね」

「へぇ・・・・」
「そうなんですか・・・・」
「それに、板子一枚隔てた向こうは死の世界だから、宇宙戦士にとっては、この地上にいる時こそが生きていると実感できると、良馬はよく言っていたわ」
「・・・・」
(帰りたくても帰れなかった人たちが・・・・生きたくても生き抜くことが出来なかった人が大勢いたんだよね。この世界では・・・・)
管理局の艦船は、ある意味、地上の延長みたいなところがあるが、ヤマト　や　まほろば　は明らかに星の海を行く船だった。
ヤマト乗組員の制服のデザインは、地球の海上艦船の錨をモチーフにしたものだったし、まほろば　でも胸の部分や艦長、副長制帽には錨のマークが用いられていた。
(そう言えば、「板子一枚下は地獄」という、船乗り達の言い伝えがあったな)
フェイトは、昔の地球の船乗りを象徴した諺を思い出していた。
「でも、そのパーティーって私たちが参加してもよろしいのですか?」
正式な家族でない自分たち，防衛軍の関係者でもなく、まして連邦市民でない自分たちまで参加してもいいのか、とティアナが訊ねるが、
「大丈夫よ、それにお祭りは大勢いた方が楽しいから」
忍はフェイトたちが参加してもノープロブレムだと言う。
(お祭りか・・・・)
フェイトとティアナは、ヤマト、まほろば　が共同で行ったヘリオポーズでの赤道祭、イスカンダルで執り行われた古代守とスターシアの結婚式を思い出した。
(フェイトさん・何か、すごいお祭りの予感がするんですけど、どうしましょう?)
(うん・ヤマト　と　まほろば　の人たちもお祭り好きだったけど、その倍以上の人たちが集まるんだからね)
常に死と隣り合わせた仕事に携わっている人たちだからこそ、さぞ

や派手なお祭り騒ぎになりそうだ。
フェイトとティアナは開かれる年末パーティーに期待を感じながらも、一抹の不安を抱かずにはいられなかった。
しかし、参加しないという選択肢はなかった。

そして、パーティー当日、大晦日の朝。
この日は朝からそれなりに忙しかった。
朝早くから、中嶋、月村、古代家合同の餅つきがあった。
この地球におけるギンガの養母である中嶋加奈江の容姿はスバルとギンガの母親、クイント・ナカジマと瓜二つであったが、魔導師ではなかった。
とは言え、加奈江の秘密を知っているのは今の所、良馬だけだった。
しかし、以前スバルからクイントの写真を見た事のあるティアナは最初、加奈江の顔を見て驚いた。
年始年末に餅を食べるという地球の習慣は、フェイトは地球で生活していた時に知っていたし、ティアナも地球人の祖先を持つスバルの実家に呼ばれた折に知り、蒸したもち米を臼と杵という木製の道具を使い、全て人力で搗くことも、フェイトはなのはの実家で、ティアナはスバルの実家で実演していたから、それ自体には驚かなかった。
杵を持ち、餅を搗くのは良馬でこねるのは月村家のメイドのノエルが行った。
フェイトもティアナも餅つき事態は目にした経験があり、ティアナもその情景の音を『ペッタン、ペッタン』と記憶していたが、目の前の光景は、『バン！バン！バン！』だった。
フェイトとティアナが唖然とする前で、良馬が物凄い勢いで餅を搗き、ノエルが物凄いペースで餅をひっくり返す。
搗き手が若いからだろうが、それにしても恐ろしくパワフルな餅つきだった。
しかも、互いに表情を変えず、黙々と良馬は杵で餅をつね、ノエルは黙って餅を捏ねる。
二人の息はまさにユニゾンデバイスの如く、息が合っていた。

その後も古代兄弟が杵で餅をつく光景もあり、その様子を見た双子の赤ちゃんたちはキャッ、キャッと笑っていた。
人力の餅つきはここでも珍しい光景なのか、近所の子供たちも集まってきて、忍と加奈江がその子たちやその家族に黄粉餅や餡子餅、お汁粉やお雑煮を振る舞っていた。
横須賀基地で２３時から行われるという年末パーティーに先立ち、月村家の屋敷では皆で年内最後の夕食会が開かれた。
テーブルの中央にはローストビーフや大きな鶏肉を使用してのローストチキンの包み焼きが鎮座していた。
その他にも周りには、様々な料理が立ち並んでおり、どれも美味そうであった。
そして、料理の他にも数多くの酒類やソフトドリンクも並んでいた。
夕食会が始まり、各々が食べたい料理、飲みたい飲み物を手に談笑しながら、時間が過ぎてゆく。
加奈江の料理を食べたフェイトとティアナは、一体どんな魔法をかけているのか、と思ってしまう程に美味しいものだったらしく、顔を綻ばせていた。
その中でもローストチキンの包み焼きを口にしたフェイトとティアナはギョッとしながら、皿の上のローストチキンの包み焼きを見る。
「パリパリの皮にふっくら焼き上がったお肉・・・・」
「ほのかに付いている風味・・・・表面にはごま油を塗っているみたいね」
「それだけじゃ、ありませんよ。お肉の中には、香草やキノコ、蒸した野菜も入っています」
「お肉の旨味がしっとり上品に行き渡っていて、本当に美味しいわ」
フェイトとティアナは昇天する様な気持ちでローストチキンの包み焼きを食べていた。
男性陣は料理を肴に既に酒で宴会モードになっていた。
ここに居る男性陣は皆お酒が強い様で、

ビール、ワインのボトル、日本酒の一升瓶が次々と空になっていく・・・・。
まぁ、それ自体は一向に構わないのだ。
何せ、自分が無理矢理飲まされている訳では無いのだから・・・・。
しかし・・・・。
「あ、あの・・守さん・・・・そ、それは一体・・・・？」
料理を食べていたティアナが、一時その手を止めて、恐る恐る守の飲んでいる酒について訊ねる。
「ん？・ああ、之かい？・之は、マムシ酒というお酒さ」
真田、弟の進、良馬、ギンガの養父の源三郎と円陣を組んで酒を酌み交わす守が手にしていた一升瓶には、蛇の死骸と酒らしい液体が入っていた。
はやてやなのはから、地球の一部の愛好家に伝わっている一種の自家製酒と聞いたが、その時のティアナが受けた衝撃が如何に大きいものだったか、おわかりいただけるだろうか？
ミッドチルダや管理世界にもちゃんと酒は存在するし、果物等を漬けた果実酒等も存在するが、動物の死骸？・を漬けた酒類は存在しなかった。
「・・・・」
地球での生活経験があるフェイトでさえ、マムシ酒をこうして直に目にしたのはこれが初めてだったようで、顔が強張っている。
一升瓶に『翠屋』のステッカーが貼られていたのが何とも気になるのだが、更に驚いたのが、肴として皿に乗っている料理の中に虫があったことだ。
「そ、それは・・・・何ですか？」
ティアナは更に顔を引き攣らせて皿の上の料理を訊ねる。
フェイトも無言であるがティアナ同様、顔を引き攣らせている。
皿の上には芋虫の様な形状をした虫の料理とバッタの様な虫の料理が置いてあった。
「蜂の子とイナゴの佃煮だよ」
良馬がフェイトとティアナに料理の正体を説明し、蜂の子を臆さず

に食べる。
また、良馬と酒を飲み交わしている男性陣も平気な顔で蜂の子やイナゴを食べている。
(うぇぇぇぇ～・・・・)
流石に本人たちの前で気持ち悪がっては失礼なので、二人は念話で、気持ち悪がった。
(フェ、フェイトさん・この時代の地球の方々は虫を食べないといけないくらい追い詰められたんでしょうか?それとも、宇宙戦士は・・・防衛軍の軍人さんは訓練でこの様なモノにも耐える訓練が施されたのでしょうか?)
(わ、私に聞かれても分からないよ～)
これが地球の文化というモノなのか?
それとも、ガミラスとの戦争で、食糧難を経験したため、食べられるモノならば、虫でも食べるくらい逞しくなったのか?
それとも防衛軍の訓練の一環の賜物なのだろうか?
兎も角、異邦人の自分たちが論評することではないだろう。と、思いフェイトとティアナは何も言わなかったし、関わるのを止めた。
だいぶ時間が過ぎ、加奈江と忍が年越しそばを作り始めるのと同時に、酔い醒ましのコーヒーを雪とノエル、紅葉が淹れて持って来た。
良馬は、ノエルからコーヒーを受け取り、フェイトとティアナは紅葉からコーヒーを受け取ったが、雪からコーヒーを受け取った古代兄弟と真田は引き攣った笑顔だった。
その理由をフェイトとティアナは知らず、首を傾げていた。
そして、コーヒーを飲んだ三人は顔を引き攣らせながら、無理にコーヒーを飲んでいる様だった。
(古代さんたちコーヒーが嫌いだったのかな?)
その時はそんな、思いを抱くティアナだったが、後日、雪の淹れたコーヒーを飲んで、あの三人が顔を引き攣らせながら、コーヒーを飲んでいた理由が判明した。
そして、パーティーの開催時間の少し前に一同はパーティー会場である横須賀基地へと移動した。

公序良俗に反しなければ何でもあり、階級も一切関係なし。
大晦日深夜から元日早暁にかけて、地球防衛軍の各基地で行われる年末、年越しパーティーは、軍人やその家族を招いて行われるが、徹底した無礼講で知られる。
公序良俗や法令に反しなければ大抵のことは許され、上官・部下すら無関係だ。
ゆえに、日頃パワハラやセクハラをしている上官などは、ここぞとばかりに『復讐』される事すらあると、良馬から聞かされたフェイトとティアナは引き攣った笑みを浮かべた。
パーティー開始の挨拶に立ったのは、藤堂長官だ。
最も、本部でも同様のパーティーが行われているので、モニター越しではあるが、普段の謹厳実直な顔はなく、
「諸君、死んでいった者の分まで、思う存分楽しむのだ！」
と、拳を振り上げて力強く開始を宣言し、『おーっ！』という戦士達の喚声が大講堂に響き渡る。
長官に呼応して振り上げられたのは拳だけではなく、戦死した者たちの写真も見受けられた。
写真を掲げずとも、それを懐に入れて参加した者も少なからずおり、息子や娘に先立たれた親らしき人たちもちらほら見受けられた。
（フェイトさん、何なんでしょう？この光景は？）
（わ、私にも分からないよ、ティアナ・・・）
開始から僅か数分にして、大講堂はあっという間にカオス空間へと化した。
あちこちで酒盛りが始まったのはいいとして、どこから調達したのか首を傾げるようなコスプレに興じる者もいる。
当然、まほろば　所属の衛生士、原田真琴もコスプレをしており、何故か永倉もそれに付き合わされている。
まぁ、コスプレぐらいなら大目に見ても良いが・・・・
「・・・・」
（この人が何を考えているのか、全然わかんないよ・・・）

模擬店で貰ったコーヒーを手にフェイトは内心でぼやきつつ、右隣にいる犬だかネズミだかよく分からない茶色の生き物の着ぐるみで、緑色の帽子を被っており、赤い蝶ネクタイを締めている。
その中に居るのは、何と良馬その人だった。
また・・・・
「・・・」
(ギンガさん、貴女もですか・・・)
ティアナの左隣にはフェイトの右隣に居る犬だかネズミだかよく分からない生き物の色違いの着ぐるみが居り、色は黒と灰色のまだら模様で、角付きの軍用ヘルメットとタクティカルベストを装備したバージョンの着ぐるみがいる。
此方の着ぐるみの中にはギンガが入っていた。
パーティーの最中、フェイトとティアナの二人に「ふもっふ」、「ふもふも」、「もっふる」と言葉をかけて来た着ぐるみを見た二人はドン引きした。
そして、二体の着ぐるみが二人にタブレットを渡し、再び「ふもっふ」や「ふもふも」、「もっふる」と言葉をかけると、タブレットに恐らく翻訳されたであろう言葉が表示される。
そしてその中で、今、この着ぐるみの中に入っているのが、良馬とギンガだと分かったのだ。
最初にそれを目にしたフェイトとティアナは忍に訊ねずにいられなかった。
「ああ、あれは、防衛軍でテストしている『アーマージャケット』の試作機よ。ウチ(月村)の企業が作ったの。それで、良馬とギンガさんにはテストパイロットを務めてもらっているのよ」
「「はい!?」」
あれがアーマージャケット!?
フェイトたちは己が耳を疑った。
どう見てもテーマパークやイベント会場にいる着ぐるみにしか思えないのだ。
「一見ただの着ぐるみだけど、真田さんや大山さんが製作には協力し

てくれたから、性能は折り紙付きよ」
「「そ、そうなんですか・・・（汗）」」
忍の言葉を聞き、フェイトとティアナは納得した。
あの真田や大山が製作に協力しているのなら、絶対ただの着ぐるみであるはずがない。
パワードスーツ機能はもちろん、防弾防刃、耐レーザー対策。さらに宇宙服機能くらいは備えているはずだ。
魔法を無効化する機能も仕込まれていると言われても、真田と大山ならあながち冗談には聞こえない。
管理局ではこんなエンジニアは危険人物と見なされ即刻逮捕されるだろう。
全てが規格はずれな人物だ。
あのスカリエッティなんかより・・・
（地球防衛軍は懐が深いわ・・・）
ティアナは感心半分、呆れ半分で溜息をついた。
時空管理局はハード以前に人材でも負けている。
こんなイカれた人たちが守る世界を管理下に置こうなんてしたら、管理局は間違いなく自滅する。
本局の管理世界拡大推進派が暴走しないことを、フェイトたちは切に願った。
しかし、既に彼女たちの願いはかなわず、既に管理世界拡大推進派の連中が動いていた事をフェイトとティアナは後日知る事になった。

２２０１年１２月３１日２３時５７分、地球防衛軍・横須賀基地
大講堂
新年まで三分を切った時、大講堂の照明が落とされた。
それまでのカオスが嘘のように講堂全体が静まり返る。
常軌をはずれた乱痴気騒ぎを繰り広げていた戦士たちは酒杯を置き、姿勢を正して起立した。
そして、大講堂に声が流れる。
「今年、その職に殉じ、また白色彗星帝国との戦闘で倒れた宇宙戦士達

よ・・・・。私達はあなた方の分まで、地球の独立と宇宙の平和のために戦い続けます。地球は何人をも管理も支配せず、またいかなる者からの管理と支配も許さないことをここに誓います。宇宙戦士の御霊に、総員敬礼ッ!!」

ザッ!

参加していた戦士たちはその場で敬礼。家族は頭を垂れて黙祷した。

フェイトとティアナは忍や紅葉達に倣って黙祷を捧げた。

(いかなる支配もせず、そして許さない、か・・・・)

この地球が時空管理局の管理下に入ることはありえない、と解ってはいたが、ガトランティス暗黒星団帝国など、極めて強力で凶悪な軍事勢力の存在が明らかになり、管理局側にも被害が出ている以上、この地球まで敵にまわすことは自殺行為だ。

(地球連邦や地球防衛軍と、手を取り合うことはできないのかな(かしら)・・・・)

ここにいる人たちは、いざとなれば死兵になってでも侵略者に立ち向かう凄まじき戦士たちだが、こういう姿を見ていると、実に愛すべき人たちだ。

大多数の管理局員と何ら変わるところはない。

この地球と管理局が共存できる落としどころは必ずあるはず――。

しかし、それにはまず、管理局側の大きな改革と譲歩が不可欠となる。

フェイトとティアナはそこまで思い至ったが、周囲の数字を読み上げる声で現実に呼び戻される。

年明けまで残り三十秒を切っていた――。

カウントダウンの声が一層大きくなり、ゼロを唱和した一瞬の後、会場は輪をかけたカオスを呈した。

『~♪~~♪~』

酒瓶や酒杯を片手に歌を打っている者たち・・・・。

ここまでは、よく宴会等で見られる光景なのだが、謹厳実直な人物

とフェイトたちも認識しているヤマトのあの山崎機関長が女性職員と『マイムマイム』を踊ったり、別のフロアでは、パイ投げ合戦が起きたりしていた。
「・・・・」
（この人たち、頭の中に虫が沸いているんじゃないの!?）
生来（？）のツッコミ気質が復活したティアナだが、それを聞いた者がいるとすればこう答えただろう。
全くもってその通りだと――。
しかし、もし、この場に嘗て自分の相棒を務めていたスバルが居れば、あっという間に彼らと波長を合わせ、このカオス空間の中に上手く溶け込んでいただろう。
そう考えると、今この場に彼女が居なかった事にホッとするティアナだった。
居れば、自分はツッコミ所が多くて精神的疲労が半端なさそうだからだ。
『古代艦長!!』
大勢の男性陣の声で呼ばれた守はその方向を見やって目を丸くした。
「おお、お前たち!!元気だったか!?」
『はいっ!!』
男性陣は守の周りに集まり、握手を交わすなどしていた。
中には感極まって号泣する者も居た。
フェイトたちも目を丸くしていたが、横に茶色い着ぐるみ（ボ〇太くん）もとい、良馬が来たため、彼らが誰なのか訊ねる。
「彼らはかつて古代先輩が艦長を務めていた駆逐艦雪風の元乗員たちさ。冥王星海戦の出撃前に怪我や家を継ぐ立場で古代先輩が強制的に艦から降ろしたんだよ。彼らは自分たちだけ生き残ってしまったとずっと苦にしていたんだよ」
と、タブレットには表示され、音声では「ふもふも」、「もっふる」と何を言っているのか、分からなかった。
「そ、そうでしたか・・・」

感動的な場面なのだが、その着ぐるみ姿と音声のせいで台無しだった。
しかし、それを切り替えて、守の生還を喜ぶ元雪風の乗員たちと守の方へ視線を向けたフェイトはしんみりした気持ちになる。
今まで自分が参加して来た作戦で生還者が自分一人だったことはないし、一緒に参加した局員や魔導師が殉職したこともない。
強いてあげるならば、今回のテリオスの件で仲間の死と言うモノに直面したぐらいだ。
しかし、こちらの世界での、かつてのガミラスとの戦争では、次第に損耗率が高くなり、ヤマト就役直前の冥王星海戦では、出撃した地球軍艦艇の内、地球へ帰って来たのは僅か二隻だけ・・・。
幸運と不幸な偶然が重なって地球に帰ってきた守も雪風の部下を全員死なせてしまったという悔いと苦しみはあるだろう。
「艦長か・・・」
次元航行部隊所属である自分も将来的には義母のリンディや義兄のクロノ同様、次元航行艦を指揮する可能性がある。
管理局の次元航行艦と地球防衛軍の宇宙戦闘艦では用途も性格もかなり違うが、乗組員の命を預かり、モチベーションを保ち続けなければならないことは何ら変わりなかろう。
(こちらの世界にいる間に、艦長としての心得とかを月村艦長や守さんに聞いておこうかな)
この世界で戦闘艦の艦長に求められるものや、どんな気持ちで戦っていたのか、聞けるものなら聞いてみたいと、フェイトは切に思った。
その後、フェイトとティアナは例のパイ投げ合戦の会場へ良馬とギンガの手によって引き摺られて行き、更衣室で待ち構えていた女性隊員たちの手によって、強引にジャージに着替えさせられ、合戦の舞台へと立った。
会場に立った二人に待ち受けていたのは、自分たちに容赦なく飛び交って来る大量のパイ・・・。
二人はたちまち全身がパイ塗れになると、ティアナが等々理性と言う名のリミッターを外し、単色の目で「あはははははは・・・」と

声を荒げながらパイを投げていった。
彼女が投げているのは間違いなくパイなのだが、一瞬パイが鉈に見えたり、ひぐらしの鳴き声が聞こえた様な錯覚をフェイトは感じた。
「ティアナ・・・」
フェイトは最後まで理性を保ち続けたが、彼女が出来た事と言えば、このカオスと化した会場とリミッターを解除したティアナ（部下）を、パイ塗れのまま呆然としながら見ているだけだった。
パイ投げの次にフェイトはフェリシアに捕まり、赤道祭の時と同じくペアのコスプレ衣装を着せられ、舞台の上に立たされ、デュエットをさせられたりした。
パーティーが行われている会場の片隅で、元雪風の乗員たちと涙の再会を終えた後、守は真田と忍にそれぞれに、真剣な表情で何かを言っていたのだが、それは当の本人たち以外気づく者は少なかった。

七十三話　年明け論争

日本時間・２２０２年１月１日（元旦）　ＡＭ　０９００時
コンコン・・・
月村家のフェイトとティアナが使用している部屋のドアがノックされ、
「失礼します。おはようございます。ハラオウン様、ランスター様」
ノエルが控えめにドアを開け、ベッドに倒れ伏しているフェイトとティアナに声をかける。
「お、おはようございます」
まずティアナが目を覚まし、のろのろと起きかけたが、ノエルの姿を見て、慌てて身を起こした。
「まもなく朝食のお時間でございます」
「は、はいっ、すぐ行きます！」
ノエルが部屋を離れた後、ティアナは隣のベッドの中で沈没しているフェイトを起こしにかかった。
「フェイトさん、朝ですよ・・・もうすぐ朝ご飯の時間ですって・起きてください」
「うぅ～ティアナぁ～・・・先にシャワー浴びていていいから、それまでもう少し寝させてぇ～・・・」
「は、はい」
ティアナにシャワーの順番を譲り、二度寝をしようとするフェイトは、薄れゆく意識の中で昨夜の顛末を思い返した。
（・・・良し悪しは別にして、あんなカオスなパーティーは、管理局じゃありえないよね・・・）

地球防衛軍の年越しパーティーは午前三時まで続いた。
子供や家族連れは１時過ぎには皆帰宅したが、残った血気盛んな者達はさらにボルテージが上がり、フェイトとティアナは二体の〇ン太くんらに連れられて、彼方此方の模擬店やイベント会場を回った。

二人はあまりの異様な光景に何度も気が遠くなりかけた。
ただ、その頃にはティアナも理性を取り戻しており、パイ投げの際に見せた単色の目の色ではなく、ちゃんと目の中の光を取り戻していた。
フェイトしてはティアナのダークな一面を見てしまった様な感じだった。
彼女が闇落ちしてしまったら、あの単色の目をして「あはははは・・・」と壊れた様な笑みを浮かべながらクロス・ミラージュを乱射して来るのかもしれない。
個人的には銃よりも鉈の方が似合っていそうだが、それでも怖い。
そして、最後に・・・
「あ、あの・月村艦長、それは何ですか？」
フェイトは着ぐるみを脱いだ良馬が飲んでいる明紫色の液体について訊ねる。
その印象は、アニメで出てきそうな毒薬っぽい色の液体だったからだ。
「ん？これは、ヤマトの佐渡先生特製のヤマトカクテルだよ」
「カクテル・と言う事は、それはお酒なんですか？」
「うん、そうだよ」
良馬が飲んでいる液体についてフェイトに説明すると、
「どうじゃ？お嬢ちゃんも一杯？」
と、カクテルの製造者、佐渡医師がフェイトにカクテルの入ったグラスを渡して一杯勧める。
「は、はぁ～・・・」
フェイトも仕事付き合いで何度かお酒を飲む機会があったので、全く飲みなれていない訳では無い。
それに色は毒薬っぽくても、ああして良馬や佐渡が普通に飲んでいるのだから、少なくとも毒では無いだろう。
そこで、一口グラスに口をつけ、恐る恐るカクテルを飲んでみる。
すると、口の中に甘くフルーティーな感覚が広がる。
それはこれまで経験した事のない味だった。

不味いか不味くないかと聞かれれば、不味くはない‥むしろ美味しい部類に入る。
そこで、フェイトはそのままグラスを傾け、カクテルを飲み干すが、
「あっ、でも気をつけて、口当たりは良いけど、このカクテル、アルコール度数が非常に高いから‥‥」
と、良馬がヤマトカクテルの注意点を述べたのだが、それは一歩遅く、フェイトはヤマトカクテルを一杯飲んで酔い潰れた。
あのカクテルを飲んだ後の事は、全く覚えていない‥‥一体何時頃帰宅したのか？どうやって帰って来たのかもさっぱり思い出せないフェイトだった。
（うぅ～恐るべし、地球防衛軍‥‥）
時空管理局の物差しで彼らを量ろうなんて、どだい無理なのだ。
戦闘では狂戦士（バーサーカー）、死兵するのも辞さないだろう彼らは、騒ぐ時も狂戦士だった。
頭のネジどころか脳味噌そのものを遥か彼方の宇宙の果てにでも飛ばしてしまったかのように騒ぎまくったのだ。
（一体、あの人たちの身体のつくりはどうなっているのかな‥‥？）
そこまで考えたところでティアナが部屋に戻ってきた――。
台所では紅葉とノエルが湯気を上げている雑煮にかかり、ギンガと忍、桜花はお節の箱や皿、箸をテーブルに並べていた。
なお、お節料理は中嶋夫人と紅葉、ノエルの合作である。
良馬は小皿に数品のお節料理を取ると、リビングの一角に設けられた仏壇に供えると線香を点け、鈴を叩いて合掌する。
仏壇には月村家、高町家のそれぞれの位牌とちょうど１０年前、２１９２年の正月に翠屋の店先で撮影した、両家が一同に会した写真が立てられていた。
「おはようございます」
そこへ、フェイトたちが来たようだ。
良馬も踵を返して台所に向かった。
（そう言えば、昨夜は大酒したはずなのに、もうケロッとしているよ、月村艦長は‥‥）

二日酔いの様子が全く無い良馬の姿を見て、不思議に思うフェイト。
良馬にしても、昨夜は相当深酒したはずなのだが、よほど強肝臓なのか、それとも夜の一族の血を引いているためなのか、二日酔いしている様子は見られなかった。

ここで場面は地球からミッドチルダへと移る。

ミッドチルダ　八神家
「・・・」
今、はやての目の前にあるテレビ画面では、時空管理局本局・次元港第一埠頭の映像が流れており、その埠頭にはピカピカの新造艦が係留されていた。
全体のシルエットはこれまでのＸＶ級次元航行艦と違い、一際シャープなデザインとなっている。
ＳＸ級次元航行艦第一番艦、キャデラック
時空管理局が誇る最大最強の次元航行艦である。
本日は三提督をはじめとする管理局各部門の高級士官や近隣管理世界の政府高官やＶＩＰを招待した就役式典である。
管理局員の出席は原則として一佐以上の者に限られており、クロノやレティ、リンディはもちろん、ミッド地上本部のロールスロイス中将も出席していた。
はやてとなのはの下にも特例で今回の式典への参加の話も来ていたが、はやてもなのはもそれを辞退した。
本来なら出席資格がない筈の彼女たちに何故この話が来たのかと言うと、簡単に言えば、プロパガンダのためだった。
ミッドチルダを巻き込む、歴史的な大規模都市型テロ事件を解決に導いた奇跡の部隊「機動六課」の余光はまだ健在なのだろう。
しかし、はやてもなのはも客寄せパンダになるつもりはないし、管理局の派閥争いに巻き込まれるのも御免なので、クロノに頼んで今回の話は辞退し、こうして自宅のテレビで式典を見ているのだ。

テレビの中のキャデラックは、時空管理局の威信を体現する艦だった。
しかし、管理局の若きエース、ハラオウン執務官まで遭難する程、度重なる次元航行艦襲撃事件の結果、「地球防衛軍」に救出されたハラオウン執務官からの報告がもたらした、管理局を遥かに上回る軍事勢力、ガミラス帝国、彗星帝国ガトランティス、暗黒星団帝国、地球防衛軍――の存在は時空管理局、特に〝海〟こと次元航行本部に深刻な打撃を与えていた。
これらの勢力の大型戦闘艦には、ＸＶ級では全く歯が立たず、この最新鋭のＳＸ級ですら、正面対決では到底敵わないだろうというのが、次元航行本部の冷徹な結論。
つまり、ＳＸ級はデビュー以前から、戦闘艦としての評価は二流、ないし三流というものだった。
故に、本来は華やかであるべきキャデラックの就役式典は、どこか白けた空気が漂っていた。
更に管理局はＳＸ級に先立ち、新鋭のＸ級とＲ級を建造させていたが、これらの艦艇も当然、ＳＸ級同様に二流、ないし三流と言う残念な評価が下された。
しかし、計画当時、建造当初、管理局はまるで地球の大航海時代の幕開けの様に勢いづいていた。
ＪＳ事件が終わり、もう管理局の存在を脅かすモノなど無いと、高を括っていたら、この有様だ。
（やっぱ、行かんで正解やったな）
白けた空気が流れる式典映像を見て、はやては心底今回の話を辞退して正解だったと思った。
はやてと共にテレビで新型艦、キャデラック就役のニュースを見ていた守護騎士たちも厳しい表情だ。
「これだけの立派な艦船でも、彼らには敵わないのかしら？」
同じく式典映像を見ていたシャマルが呟く。
シャマルの言う「彼ら」とは、地球防衛軍とガトランティス、ガミラス、暗黒星団帝国の事を指しているのだと八神家の皆は直ぐに分

かった。
「艦の技術、戦闘能力の差もそうやけど、ガミラス、ガトランティス、暗黒星団帝国、地球防衛軍・これらの艦に乗っているのは本物の軍人さんや。当然殺し殺される覚悟は持っているやろうし、まほろば　の月村艦長さんを始めとして、同年輩の管理局員とは面構えが全然違うてたもんな。必要とあらば、自らの手を血で染めることも厭わん人たち、私らも含めて管理局にはいてへんやろ？」
　はやては先日、クロノが見せてくれた映像を思い出したようだ。
「管理局は、半端な覚悟であの世界に手出したら、火傷どころやすまへんで、きっと焼け死ぬで・・・・」
　クライスラー遭難の一件はまだ一般には発表されておらず、管理局内で戒厳令が敷かれている。
「クロノも頭痛が絶えねーみてぇーだな」
「〝海〟の上層部も、地球防衛軍とどう付き合うのか結論が出せんうちにクライスラーの一件やからな・・しかも通信ポッドの時と同様にコッチ（管理局）が防衛軍側にちょっかいを出したようやからな」
　ヴィータが口火を切り、はやてが応じる。
「そうね。管理局が主張する『質量兵器全廃』に向こうの地球が応じるとは思えないけど・・・・それ以前に管理局があの地球を管理下に置くのは無理じゃないかしら？」
「確かに、向こうにすれば、独立を守るのに必要な力だからな。仲間を悪く言うつもりはないが、管理局の魔導師の殆どは、戦闘に際して殺し殺される覚悟は持っていないだろうさ。万一地球防衛軍と戦闘になったら、管理局は多くの人材と次元航行艦を無駄に失う事になるだろう。それも再起不能になるぐらいの・・・・」
　シャマルとシグナムも口を開いた。
　管理局の全戦力を投入できれば、あるいは勝てるかも知れないが、そんな事をすれば、人材も艦船も殆んど無くした管理局はミッドも・・・・そして他の管理世界の治安を守れなくなり、どの道瓦解する。
　第一、そこまでして向こうの地球を制圧する必要があるのかも極めて疑問だ。

また、各管理世界政府が大勢の人材が死ぬと分かっていながら、そんな作戦を容認するとも思えない。
向こうが侵略してくるような動きを見せたのならまだしも、向こうの地球もミッドチルダの正確な位置を把握していないので、手を出してくる気配は全くないのだ。
「向こうの地球は、フェイトさんたちの身柄をこちらに返した後、管理局にどう接してくるつもりなんですかねぇ？」
リィンフォース・ツヴァイ（リィン）が疑問を呈した。
今はフェイトたちを保護しているから、細々ながらやり取りが持たれているが、太陽系内にまだガトランティスの残党軍が存在しているので、その件が片付いたら、クロノがクラウディアで迎えに赴くことになっている。
そして、フェイトたちを見送った後、地球防衛軍は管理局にどう接してくるのか？
「多分、そのままフェードアウトやろなぁ」
はやてがフェイトを見送った後の防衛軍、地球連邦政府の行動予想を口にする。
「管理局は所帯こそ大きいけど、地球防衛軍と比べれば総じてハードもソフトも貧弱や。遭難したノアとテリオスを調査すれば、管理局の裏の顔もわかるやろからな。彼方さんとしては、『積極的に付き合いたくはない』っちゅうことになるんやないかなぁ・・・それはともかく、明日は向こうとの定期通信の日や。まずはフェイトちゃんたちの様子を見るのが先やで。明日はシグナムも行けるんやろ？」
「はい」
はやての言うとおり、明日は待ちに待ったフェイトたちとの定期連絡の日なのだ。
今まで都合のつかなかった自分たちもようやくフェイトたちと話せるし、防衛軍側と初めてコンタクトを取れる。
明日の定期連絡の日を楽しみにしていた八神一家であったが、まさかこの時、あの様な事が起こるとは、この時は夢にも思っていなかった・・・・。

そして迎えた翌日の定期連絡の場にて・・・・

八神はやて　ｓｉｄｅ

なんでや・・・？

なんでこんな事になっとんねん？

この人は元々次元世界拡大推進派に属しているから懸念はしとったが、まさか開口一番に喧嘩を売るとは・・・・。

ほら、ヴィヴィオもすっかり怯えとるやないか。

全く大人気ない人やで・・・・。

こんな事なら、真面目な話、定期連絡前にシャマルのコーヒーと手作りの茶菓子でも差し入れさせとくんやったわ・・・・。

はやてが後悔しつつ、モニターをチラッと見ると、

何やろか？何や向こうの人たちの眼差しが怒るどころか、何か可哀相なモンを見る眼になってきとるわ・・・・。

そして、それにも気づかんこの人は、ホンマモンのアホや・・・・

うわぁ～フェイトちゃんとティアナ、めっちゃ肩身が狭そうや・・・・。

全く、こんな人と同族と思われる私らまで、恥ずかしいやんか・・・・。

自らも肩身が狭い思いをしつつモニターから視線を逸らした。

時空管理局　本局

モニターの向こうにいるのは良馬、リニス、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン、ティアナ・ランスターの計四名。

こちらにいるのはクロノ・ハラオウン、八神はやて、シグナム、シャマルにヴィヴィオ。そして次元航行本部の提督の一人、サミュエル・ギルフォードの計六名だった。

本来ならば、なのはも出席する予定だったが、急遽、仕事が入り、今回の定期連絡には欠席している。

そして、今回の定期連絡では、フェイトたちの現状を報告し、クロノが迎えに行く時期を決めるための会談だったのだが、開始早々、ギ

ルフォードがいきなりクロノを押し退けてクライスラーの行方を良馬に問い質し始めた。
しかも相手を見下す様な高圧的な口調で・・・。
ギルフォードは良馬と年齢的には近く、恐らく同年輩だろうが、良馬の役職が戦艦の艦長で階級が佐官、管理局では、次元航行艦の艦長と同じという事で一佐か二佐に相当する事を良い事に、自分の持つ提督という肩書を最大限利用して、あたかも自分が良馬の上官であるような口調で話し始めたのだ。
相手に舐められてはいけないとの一心かも知れなかったが、モニターの向こうの二人は何の感銘も受けていないようだ。
逆に呆れられている。
だが、ギルフォードの言動により、管理局は地球連邦の領海内に無断で艦を侵入させた事を認めた事になる。
「・・・クロノ提督、先日お話した上司と言うのは彼の事ですか?」
良馬は冷静な態度と声なのだが、防衛軍側が管理局に対して、不快感を示していると、瞬時に判断したクロノ。
事実、クロノは良馬に名前を言われた時、背筋に冷たいものが走り、ビクッと体を震わせた。
「い、いえ違います。その上司はまだ仕事が終わっていないらしく、後から来ます」
「・・・そうですか」
ギルフォードの事を無視し、良馬は冷めた目と声でクロノに彼が先日の通信で立ち会わせたかった上司なのかを訊ねる。
もし、クロノが「ええ、そうです」と言えば、良馬がクロノに対する見方も変わったかもしれない。
「おい!!私の話を無視するとは貴様!!いい度胸だな!?高々佐官クラスの分際で!!」
無視された事に腹が立ったのか、ギルフォードが声を荒げる。
(馬鹿が!!)
(ドアホ!!)
ギルフォードの態度と言葉に心の中で毒づくクロノとはやて。

「・・・先程から何度も言う様に、こちらの太陽系に時空管理局籍の艦船が進入してきたのを確認したのは、ノアとハラオウン執務官らが乗艦していたテリオスの二隻だけです。ただ、一週間前でしたか、あの通信ポッドを何者かが操作した形跡はありました。それが何者かはわかりませんが・・・」

十中八九、通信ポッドを操作したのがギルフォードの言う管理局の次元航行艦、クライスラーだと分かっているのだが、明確な証拠がないため、防衛軍側は、クライスラーの名前を一切出さない。

「第一、時空管理局がこちらの太陽系に一体何の御用がおありで？ハラオウン提督が用意された通信ポッドにはこちらの司令部との通信回線を後付けしました。それを使って連絡をいただければ、出迎えるなり、それなりの対応をしますが、それすらもなかった上に、太陽系内に張り巡らせた此方の哨戒網でも感知しなかったのですから、何の対応も出来ませんし、していません」

「いえ、正確には、当時は取り込み中で、そちらまで手が回らなかったというのが現実でしたね」

無視された挙句、素っ気なく答えた良馬とリニスの態度にギルフォードはますます不機嫌さを隠さない。

「手が回らなかったとは、一体どういうことだ!?貴様らは我々時空管理局を無視したというのか!?」

噛み付くように言うギルフォードにまたも良馬は素っ気なく答える。

「無視も何も、ちょうどその頃、我々は、太陽系に侵入してきた彗星帝国、ガトランティス軍の残党軍を迎撃していたのですからそちらまで手が回りませんでした・・・」

「迎撃だと!?」

この言葉にギルフォードだけでなく、内心で呆れ返っていたはやてたちもピクッと反応した。

「はい。偶然にも件のポッドのある宙域から侵入してきた陽動部隊と、時間差で地球を直接攻撃するミサイル艦隊の二手に分かれての侵攻でした」

そう言うや否や、良馬はテーブルの上の端末を操作する。
「証拠にこれからその時の戦闘映像をお見せしましょう。ただ、十五歳未満の方は見ない方がよろしいかと・・・」
良馬はチラッとヴィヴィオを見る。
「分かりました。シャマルはヴィヴィオを頼むわ」
はやてがシャマルに頼んで、ヴィヴィオを一時退室させる指示を出す。
「承知しました」
シャマルがヴィヴィオの手を引いて部屋を後にした。
それを待って映像が再生される。
土星圏で戦闘を行う防衛軍主力艦隊とガトランティス残党軍艦隊。
そして火星圏にて、砲火を交える　まほろば　を中心とする別働隊とガトランティスのミサイル艦を中心とする艦隊。
その中で、飛び交う大出力のビームに宇宙戦闘攻撃機やミサイル等の質量兵器。
広がる大火球の中では艦船が砕け散り、数多の命が消えていく。
「「「・・・」」」
はやてたちは言葉もなく映像を見る。
(これじゃ、管理局の艦船はお呼びもかからんわな・・・それに案の定、地球防衛軍にも中、小型で、かつ快速の艦船も仰山あるやないか)
ヤマト　や　まほろば　のような宇宙戦艦でさえ、驚くような機動力を持っているというのに、中型艦（巡洋艦）や小型艦（駆逐艦と護衛艦）はそれ以上に軽快な動きをする。
管理局の艦船は、地球防衛軍の戦艦はおろか、小型艦部隊にも勝てないだろう。
(管理局にはここまで複雑な艦隊機動運用のノウハウがない。必要とするような事態がなかったからな。仮に地球等の技術を入手して艦艇を整えても、集中して機敏な運用ができなければ、宝の持ち腐れだな)
「件の通信ポッドが操作された時間とガトランティス艦隊がその空域を通過した時間差は、こちらの時間で一時間もありませんでした。恐

らくクライスラーはガトランティスの陽動部隊と運悪く鉢合わせをして、撃沈されたのではないでしょうか？」
映像が終わり、再び会談へと移り、良馬はあくまでもクライスラーの行方は知らないと言い切る。
「しょ、証拠はあるのか!?クライスラーがガトランティスの艦に撃沈された事を証明する確たる証拠が!!」
ギルフォードとしては、防衛軍がクライスラーを撃沈したにも関わらず、その罪をガトランティスに着せているのではないかと思ったのだ。
彼としては、防衛軍がクライスラーを沈めた証拠さえ手に入れれば、それを理由に第二の地球を管理世界へ編入させられる大義名分を得られると思い込んでいた。
だが、防衛軍がクライスラーを撃沈したという証拠もない。
ギルフォードの問いに対して良馬は、
「ありませんし、立証する義務もないですね。第一、領域侵犯目的で来た艦船が第三者に攻撃され撃沈されても、それは全て、自己責任、自業自得以外の何物でもありません。乗員及び乗員の遺族には大変お気の毒ではありますがね」
と、良馬（防衛軍）はあくまでクライスラーの事は『知らないの』一点張りを突き通した。
突き放した言い方をした良馬に等々ギルフォードが激昂した。
「き、貴様は我々管理局の船を不法侵入者呼ばわりするのか!?一体何様のつもりだ!?」
「小官はこちらの世界の一般論を言っただけですが？大体、他人の家に無断で上がり込めば、住居不法侵入で警察を呼ばれ、逮捕されても文句は言えませんよ。それとも貴方は、ご自分の家に上がり込んで来た不審者に対してお茶菓子を出して持て成す変わった趣向をお持ちなのですか？ギルフォード提督」
「な、なにぃ～!!」
挑発めいた微笑みを浮かべながら、良馬は解かりやすい例えを言う。

「わ、我々時空管理局は全ての次元世界の平和と秩序を守る唯一にして絶対の組織だ！そして、次元の海は全て我が管理局の領海なのだ!!その管理局を貴様は領海侵犯をした犯罪者呼ばわりする気か!?」
（この馬鹿が!!空気読めよ!!）
（あかんで。それを言ったらおしまいやんか・・・・）
クロノとはやては微かに肩を落とした。
画面の向こうではフェイトとティアナがいたたまれなくなったか、等々俯いてしまった。
その姿はまるで、裁判中、検事から起訴状の朗読を聞かされている被告人の様だ。
ギルフォードの言葉を聞いた良馬は目を細め、ニヤッと口元を緩め反論する。
まるでその言葉をまっていましたかと言わんばかりに・・・・。
「その自負と誇りは尊重しますが、我々がそれに共感したり、同調する義務は全くありません。それに貴官の先程の発言：『次元の海は全て管理局の領海？』一体何時から地球連邦の領域が管理局のものになったのです？太陽系内の防衛任務を担当している小官は連邦政府からも、また防衛軍司令部からもその様な事は一切聞いていませんが？・・リニス、君は聞いたか？地球連邦政府と地球防衛軍が時空管理局の傘下に入ったと言う事を？」
「いえ、初耳です」
ギルフォードの発言の中には防衛軍側としては管理局が地球の侵略を窺える発言があり、その件に対しても良馬とリニスは嘲笑を含めてお返しする。
良馬とギルフォードのやり取りを見て、はやてとクロノは顔色を青くし、画面向こうのフェイトとティアナも同様に顔色が悪いし少し震えている。
（くそっ、この馬鹿のせいで管理局が向こうの地球に対し侵略の意思があると思われたかもしれないじゃないか・・・・）
（向こうにすれば当然の返事やろうなぁ。本当やったら、腸が煮え繰り返っとるか、何じゃこのアホは、と思とるんやろうなぁ。しかし

困ったわ・・・これじゃ、同盟を結ぶどころの話やあらへん。次元航行艦船が次々やられとる今の情勢じゃ、話が分かりそうな、地球防衛軍まで敵に回すわけにはいかんのになぁ・・・）
（主はやて、このままでは交渉が決裂します。そうなればテスタロッサたちの待遇にも悪影響が及びかねません）
（せやな・でも、あちらさんが急にフェイトちゃんたちの待遇を変えるとは思えんけど、確かにこのままじゃ物分かれやな。いい加減止めんといかんわ。そやろ、クロノ君）
（そうだな。時期を見て僕が諌める）
（それは私に任せてくれないかしら？クロノ君、はやてさん、シグナムさん）
（（えっ!?））
唐突に、聞き慣れた女性の念話が割り込んできた。
剣呑な雰囲気になりかけた双方の空気を一変させたのは・・・
「れ、レティ提督!!」
「お待たせしました」
時空管理局本局運用部の提督、レティ・ロウランだった。
フェイトとティアナは突然のレティの登場に目を丸くしている。
良馬とリニスは特に何のリアクションも起こさず、ただレティをジッと見ている。
レティはギルフォードに向き直る。
「ご苦労様。後は私が話すから、貴方はもう戻っていいわよ」
「し、しかし・・・」
ギルフォードは突然現れたレティを見て、明らかに動揺している。
その様子を見て、
（後でじっくり絞ってやるぞと言うことだな。ほんの少しだけ同情するな・・・）
クロノはギルフォードに内心同情した。
その証拠にレティは微笑を浮かべているが、目は笑っていない。
（次回の人事考課を楽しみに待っていなさい）
とでも言いたげな彼女の雰囲気・・・。

彼女は管理局の人事権も有しているため、この後、彼には何らかの人事異動かペナルティーが有るに違いない。
(怖っ、めっちゃ怖いわ～。レティ提督)
(私も同感です。主はやて)
「良いから、貴方は今すぐ退室しなさい。い・い・わ・ね？」
「は、はい・・・」
一転して意気消沈したギルフォードはレティに敬礼して退室していった。
良馬とリニスも心の中で合掌し、ギルフォードを見送った。
ギルフォードを見送ったレティが向き直り、良馬たちも姿勢を正した。

「皆さんとは始めてですね。時空管理局運用部所属、人事統括官のレティ・ロウランです」
と、レティは深々と頭を下げた。
「いえ、船乗りとして当然の事をしたまでですのでお気になさらないで下さい。地球防衛軍、宇宙戦艦、まほろば　艦長の月村良馬です」
「同じく、戦艦　まほろば　医務官の月村リニスです」
良馬とリニスは踵を揃え、軍式の挙手礼をとる。
(ほえ～～)
(ほぅ・・・)
地球防衛軍側二人の敬礼は、はやてが思わず見惚れ、シグナムも唸るほど惚れ惚れしてしまうほど「色気」があった。
「フェイト、ティアナさん、元気だった？」
「ええ、私たちは元気です」
「そう、それは良かったわ」
フェイトは現状について、二、三会話をした後、核心のクライスラーの一件についての話題に移る。
レティは良馬たちに向き直るや、
「クライスラーがそちらに赴いたのは、そちらの太陽系の調査目的でした。しかし、それが地球連邦の領域を侵犯する疑いがあるのなら

ば、それは率直にお詫び致します」
　と再び頭を下げた。
（あっさり認めちゃったよこの人・・・管理局が領域侵犯を行った事を・・・・）
（先程の局員とは違いますが、やはり管理局は・・・・）
　レティは包み隠さず、管理局がこちらの太陽系へ無断で侵入して調査をしようとした事を認めその件について謝罪した。
　しかし、彼女の行動から少なくともさっきの奴よりは話が分かる人物だと良馬はそう判断した。
　だが、それとこれとは別で、管理局が一方的に地球連邦の領域を脅かしたことには変わらず、前の主、プレシア・テスタロッサの使い魔時代から管理局に対して不審があったリニスにとっては、やはり管理局が信頼に値しない組織だと改めて認識させられた。
　だが、向こうがあっさり認めて謝罪したのだから、こちらも歩み寄らなければなるまい。
「例の次元通信ポッドには、クロノ提督も知らなかったという、惑星座標軸を発信する機能が後付けされていました。それに気づいた私達は、安全保障上の理由からこのポッドをヘリオポーズに設置させていただきました。その理由はご理解いただけるでしょうか？」
「ええ。一世界の安全を担う者ならば、当然の判断です」
　レティも地球側の理由を考慮したのか良馬の言葉を聞き、頷く。
「さらに、通信発信元の座標を示す機能もついていましたので、安全保障のため、これもこちらで弄り、地球圏以外のランダムな座標を表示するようにしましたが、こっちの回路は急造したのか、工作が荒く、安定性も今一つでした。その結果、時々変な座標を表示することがありました」
「・・・と言うと？」
「木星の本星・・・星を形成している液化・固体化メタンガスの中やこの太陽系のまさに中央点、つまり太陽の中心核付近などです」
「なっ!?」
「っ!?」

管理局側の面々は、地球出身者と地球での生活経験がある者ばかりだ。当然太陽や太陽系各惑星の基本的な知識は持っている。
それはフェイトとティアナも同じだ。
木星から海王星までの大型惑星は液化ガスの海の下に固体化したガスの層が存在する。
重力も地球より遥かに強く、引きずり込まれれば脱出は不可能。
そしてその超重力で押し潰される。
仮に押し潰されなかったとしても超低温の液化ガスの海で永久に凍り付くしかない。
勿論超重力の影響で回収は不可能・・・
太陽に至ってはいわずもがなだろう。
「そのため、我々はポッドに軍司令部との通信機能を後付けし、かつポッドには、表示される座標を鵜呑みにせず、必ず我が軍ないし地球連邦政府に対し、連絡せよとの告知文をつけました。幸い、そちらのミッド語はこちらの英語と、ベルカ語はドイツ語との共通点が多かったので、英語とドイツ語の併記を用いました」
良馬たちの話をひとしきり聞いていたレティは、ひと息ついて話し始める。
「と言う事は、クライスラーはガトランティス軍に撃破されたか、そうでなければ其方の太陽か木星のどちらかに墜落した可能性が強いという事になりますね」
「・・・」
良馬たちは無言だ。
「・・・わかりました。この件においては、『クライスラーは太陽系に侵入しようとしていたガトランティス軍に撃破された　』と言う結論を出すのが妥当ですね」
レティが防衛軍側の提示したクライスラーの消息不明事件について、ガトランティス残党軍の手によって撃沈されたと言う結論を選んだ。
それは管理局、ガトランティス、互いに死人に口なしと言う結論であった。

（政治的決着ということか。まぁ、出鱈目な座標を鵜呑みにして、太陽や木星に墜落したと言うわけにはいかないだろうしな。それに防衛軍がその艦を撃沈させた訳では無いし、それを理解してくれたのだから、異議を唱えるほどのことではないな。後はそちらで片付ける問題だろうし・・またそっちがグダグダ文句を言ってきたら、その時こそ、交渉は決裂だな）

クライスラーの一件に対し、大人な対応と、管理局側が妥協した事により、

「こちらも異存はありません。レティ提督」

良馬はそう言って、この件に決着をつけ、リニスも頷いた。

「さて、硬い話はここまでにしましょうか」

その後はヴィヴィオとシャマルも戻り、元の和やかな雰囲気になった。

七十四話　論争の余波と新たなる暗雲

双方に飲み物が出されたが、その間、ユニゾンデバイスモードのリインフォース・ツヴァイとアギトが空中浮遊しながら登場して良馬を唖然とさせたが、飲み物を載せたトレイを持ったバトライザーが登場し、管理局のメンバーらに挨拶をした時には、今度は管理局勢が目を丸くした。

（へぇー流石、魔法の世界、妖精もちゃんと存在するんだ）

（固有人格付き自律ＡＩロボットまで実用化されているとは、地球防衛軍恐るべしやわ）

共に相手の文化に対し、微妙に間違った感想を持ったまま、双方の定期会談は終ろうとしていた。

通信を切る最後に、良馬がはやてに話しかけた。

「そういえば八神さんは、先日、お話をした高町さん同様、海鳴の出身者だとか？」

「え、ええ。そうです」

突然自分に話題を振られ、ビクッとするはやて。

「・・・それならば、今後の管理局の在り方としてためになるかもしれないある日本海軍将校の言葉を知っていますかな？」

「ある日本海軍将校？それって誰ですか？」

「臼淵　磐（うすぶち　いわお）と言う海軍将校です」

「いえ、残念ながら、私は知りません」

海鳴に居た頃、読書少女であったはやてであるが、ミリタリー系はそこまで詳しくはなく、以前フェイトから戦艦大和の資料を集めるのを頼まれた時は、戦艦大和自体があまりにも有名だったから直ぐに集めることが出来たのだが、大和の乗員についてはそこまで詳しくは知らなかった。

「そうですか・・・彼は、あの戦艦大和に乗艦した将校の一人で、大和の沖縄特攻の出撃前夜に海兵出身の若手将校と学徒出身の若手予備士官との間で、作戦の意義に付いて激しく論争となった時に仲裁したと

される人物です」
「・・・・」
　はやては良馬の説明を黙って聞いている。
「その時に彼は、揉めていた将校たちにこう言ったそうです。『進歩のない者は決して勝たない　負けて目覚める事が最上の道だ　日本は進歩という事を軽んじ過ぎた　私的な潔癖や徳義に拘って、本当の進歩を忘れてきた　敗れて目覚める、それ以外にどうして日本が救われるか　今目覚めずしていつ救われるか　俺たちはその先導になるのだ。　日本の新生に先駆けて散る。まさに本望じゃあないか』と・・・・まぁ、散るまでとは、行かないまでも、ノアやテリオスそしてクライスラー・・・・これらの尊い犠牲を無駄にせずに、管理局の今後の進歩を願います。勿論、この言葉は我々、防衛軍にも同じ事が言えますが・・・・」
　良馬は皮肉と、次は無いからなと言う警告を含めて、はやてに伝える。
「はは、耳が痛いですわ・・・・でも、私らも微力ながら、今後の管理局のために、今の管理局の体制を変えて行こうと思うとります」
　はやては苦笑いをしながら、そう言って、内心で、
（うぅ～・・次に下手な真似したら容赦はしないと言う事やな）
　と、良馬の言葉の意味をちゃんと受け取っていた。
　はやて以外にも臼淵　磐と言う海軍将校が残した言葉はこの場に居た誰もの耳に残った。
「では、私からも一言・・・・」
　リニスも管理局の局員に対し、言葉を送る様だ。
「な、何でしょう？」
「人は間違いを犯します。たとえそれが命令であったとしても、　間違っていると思ったら立ち止まり、自分を貫く勇気も必要なんですよ。お互い組織に属する人間故、そう簡単じゃないことは、分かりますが、過去に目を閉ざす者は、未来に対しても盲目になりますから」
「は、はい」
『・・・・』

こうして今日の定期連絡は終わった。
しかし、管理局側には重苦しい空気となった。
良馬とリニスの言葉は声をかけられたはやて以外の者たちにも重くのしかかった。
(そういえば、今日来ていたあのシグナムって言う人に妖精の二人組・・・八神さんの家の人たちに似ていたな・・・それにあのはやてって言う人も同じ八神姓だったし・・・)
良馬は、今日の定期連絡で、出会った八神家の皆が自分の知る八神家の人たちに似ていたと思った。
そして、その日の夜・・・
ミッドチルダ　首都クラナガン郊外・高町家
「――というわけなんよ。レティ提督のおかげで何とか丸く収めたけど、そうでなかったら決裂したか、彼方さんの前で大恥かいとったかも知れんかったわ」
はやては愚痴る様に今日の定期連絡の事をなのはに伝える。
「そうだったんだ・・・」
「おかげで向こうの地球に居るなのはちゃんの子孫かもしれへん子についてはなんも聞けへんかった」
帰宅するなり、フェイトたちとの定期通信の場に出ていたヴィヴィオから、冒頭から地球防衛軍の人たちと喧嘩になったと聞かされ、夕食後、なのはは、はやてに確認の通信を繋いだところ、レティ提督の仲裁で事なきを得たということだ。
しかし、それ以前ではまさに一触即発の空気だったと言う。
そのせいではやては紅葉について何も聞けなかった。
今回はレティ提督のおかげで交渉決裂にはならず、ホッと胸を撫で下ろしながらも、ギルフォードや〝海〟の上層部のやりようには苛立ちを隠せない。
そもそもフェイトたちを救出してくれた　まほろば　の指揮官に対し、「ありがとう」の感謝の一言もなく、いきなりクライスラーの行方不明事件の回答を迫るとは、礼儀知らずにも程がある。
最もギルフォードの様な連中の脳内には管理外世界・特に非魔導

師に対して、礼を述べる、頭を下げると言う言動は入っていないのだからしょうがない。
しかし、ギルフォードが、今でも乗組員や現地局員、住民たちに同じような姿勢で今日も職務に臨んでいるのかと思うと胸が痛くなる。
よく、地球防衛軍側が怒らなかったと思ったが、その疑問をはやてはなのはが口にする前に言った。
「でも、あちらさんは、怒る所か、何か可哀相なモンを見る眼やったわ・・・ホンマ恥ずかしかったで・・・・」
と聞き、なのはは激しい脱力感に襲われた。
あちらにしては管理局が行った行為など怒るにも値しなかったということなのか？
普通ならば、大問題になるところなのに・・・・
その場に居たフェイトとティアナはさぞいたたまれなかったことだろう。
「まぁ、百聞は一見に如かずや・・・・」
はやてが今日行われた定時連絡の映像を再生する。
クロノの直属上司として自ら同席を希望したというギルフォードの態度はあまりにも拙速過ぎた。
しかし、地球防衛軍側の二人、宇宙戦艦　まほろば　の艦長、月村良馬と同じく、まほろば　の医務官である月村リニス。
彼らがギルフォードを見る視線は、はやての言うとおり可哀相なモノを見る眼だった。
地球防衛軍は、これまで管理局と相対してきた反管理局組織（テロリスト）や犯罪者とは全く異なる、地球連邦という恒星系国家の正規軍だ。
それにも関わらず、従来の反対勢力、テロリストや犯罪者と同じような対処をしたのでは、まさに墓穴を掘るようなものだ。
いや、たとえ小さな反対勢力に対しても、もっと誠実に対処すべきだったのだ。
管理局はその姿勢が大幅に欠如している。
それはさておき、なのはの教え子も乗り組んでいたクライスラー

は、例の通信ポッドに接触した直後、地球に報復戦を挑んできたガトランティス残党軍に撃沈されたか、出鱈目な座標を真に受けて、太陽か木星本星のどちらかに墜落し、一瞬で燃え尽きたか、その強力な重力に引きずり込まれたかのいずれかで、クライスラーが太陽系内に入ったかどうかは、地球防衛軍も把握していないと言う。
「一応音声鑑定にかけてはみるけど、彼らが嘘を言っているようには思えへんかった。つまり、あちらさんが言っている事はホンマっちゅうこっちゃ。防衛軍はクライスラーの侵入は知っとったかもしれへんが、撃沈、拿捕をしておらん・・月村艦長の言う通り、クライスラーは向こうの太陽か木星に墜落したかガトランティスに撃沈されたかのどれかやろうな」
「・・・・それで、レティ提督は・・・・管理局はどう結論を出したの？」
『例の通信ポッドに接触してほどなく、太陽系に侵入を図るガトランティス艦隊に遭遇し急襲され、緊急通信すら出せずに撃破された』・・・・と言う事にしたんや。まさか、出鱈目な座標を真に受けて、太陽か木星に墜落しましたなんて恥ずかしくて発表できんし、そうなった確証もないんや。それよりかは、ガトランティス艦隊との戦闘で撃沈され、殉職したとする方が乗員の名誉も保てるし、二階級特進させた上で遺族に十分な補償もできるからということや・・・・」
はやての説明に、なのはは唇を噛んで俯いたが、
「そんな・・・・そんなの・・そんなの納得いかないよ。何で・・・・何で　まほろば　は・・地球防衛軍は通信ポッドをいじ・・「それ以上言うたらあかんで。なのはちゃん!!」ど、どうして!?」
なのはが、通信ポッドをいじった防衛軍側の行動を批難しようとしたら、はやてがそれを止めた。
なのはとしてはクライスラーが遭難したのは防衛軍のせいだと思ったからだ。
防衛軍が通信ポッドに変な細工をしなければ、少なくともクライスラーが太陽か木星に墜落する事はなかった。
もし、クライスラーの本当の遭難原因が出鱈目な座標を真に受けての遭難ならば、クライスラーを沈めたのは防衛軍同然だったから

だ。
「信用できるかわからん組織に、自分とこの重要な基地や拠点の位置を馬鹿正直に教える軍人なんか即刻クビやで。あちらさんの肩持つ気はないけど、地球防衛軍のとった処置は軍人としては正しい事やで。これはレティさんも同意しとる。むしろ責められるべきなのは、クロノ君にも内緒でポッドに小細工させた〝海〟のアホどもや。そもそも最初からあんな姑息な真似をしなければ、あそこまで警戒される事はなかったかも知らんし、クライスラーが出ていく必要もなかったのかも知れん。加えて今日の一件や・・・これで管理局は完全にあちらさんのブラックリストに載ったかも知らんな・・・」
「そんな!じゃあ、フェイトちゃんたちは?!」
地球防衛軍が時空管理局への不信感を募らせれば、かの地に保護されているフェイトたちの待遇にも悪影響が及ぶかも知れない。
スパイ容疑をかけられて身柄を拘束されるかもしれない。
そうなれば、ミッドへと戻る事も出来なくなるかもしれない。
向こうの地球の軍刑務所で終身刑・最悪の場合、死刑の恐れもある。
なのはにとって、目下の心配事はそれだった。
「それは今のところ大丈夫やろう。向こうの司令長官さんがフェイトちゃんとティアナに直接面会してくれて、待遇は保証してくれとるそうやから。だからこそ、管理局はこれ以上、あちらさんを刺激したらあかんのや・・・なのはちゃん、プレオがガトランティス軍によって破壊され、そのガトランティス軍をヤマト　や　まほろば　が一撃で掃滅させた時点で、管理局は次元世界最強ではなくなったんや。今、管理局は真綿でゆっくりと首を絞められ始めているのかも知れんのやで。私ら管理局と協調してくれる可能性があるのは、地球防衛軍だけなのかも知れへんのや。それを認識できなければ、管理局はいずれ、地球を侮った挙句、返り討ちに遭ったガトランティスと同じ運命を辿るで・・・」
「・・・」
「それに今日の通信の最後に月村艦長から、あの戦艦大和に乗艦した

ある将校さんの言葉を言われてな、ホンマ耳が痛かったで・・・あと医務長のリニスさんからもや・・・」
「それって、どんな言葉だったの？」
「月村艦長の方は確か・・・『進歩のない者は決して勝たない　負けて目覚める事が最上の道だ　日本は進歩という事を軽んじ過ぎた　私的な潔癖や徳義に拘って、本当の進歩を忘れてきた　敗れて目覚める、それ以外にどうして日本が救われるか　今目覚めずしていつ救われるか　俺たちはその先導になるのだ。　日本の新生に先駆けて散る。まさに本望じゃあないか』・・だったかな・・・」
「・・・」
「ほんで、リニスさんからは、『人は間違いを犯す。たとえそれが命令であったとしても、　間違っていると思ったら立ち止まり、自分を貫く勇気も必要』と『過去に目を閉ざす者は、未来に対しても盲目になる』・・やったな・・・」
「・・・」
　若干のアレンジは入るもはやてはなのはに今日の定時通信で防衛軍将校から賜ったありがたい御言葉をなのはに伝えた。
「なのはちゃん、管理局はまさにこの海軍将校さんやリニスさんの言う通り、進歩し、現状を見直さなきゃならん状況なんや・・・このままやと、管理局は滅びる。そうなる前に、古い考えは捨てなあかんのや。間違った命令が出されたら、それをきっぱり否定しなきゃアカン強さが必要なんや!!」
「はやてちゃん・・・」
　いつになく真剣なはやての瞳に、なのはは絶句した。
　その日の夜、ニュースでは、次元航行艦クライスラーが、第二の地球に再進攻を図ったガトランティス帝国軍の急襲を受けて撃破された、という時空管理局次元航行本部のプレスリリースを流していた。
　管理局としても、クライスラーの遭難の責任を地球防衛軍に問うことは困難との結論に達したのだ。
　防衛軍側に責任を問えば、事前連絡と地球防衛軍の承諾なしに太陽系内へ進入しようとした目的を問い糾され、領域侵犯目的で来たのか

と逆に責められかねない。
それに今回の責任の報復に武力行使として、かの世界に次元航行艦を多数出たとしても、彼我の艦船の性能が段違いな上、地球防衛軍には宇宙戦闘攻撃機まであるのだ。
たちまち返り討ちに遭うのは目に見えている。
クラナガンをはじめとする主要都市市民のインタビューが放映されているが、多くは管理局のコントロールが効かない軍事勢力への不安や次元世界探査の一時中止を求める声だった。
それに対し、管理局は、地球防衛軍・ガトランティス軍とも戦闘力は極めて高いが、彼らに次元航行技術は確認されておらず、管理世界へ侵攻してくる可能性は極めて低いことと、また、地球防衛軍は現在、ハラオウン執務官らを保護しており、彼女たちの身柄返還に向けて、管理局と定期的に連絡を取り合っており、双方の間にトラブルは起きていないので、心配することはないとも報道官は話していた。
しかし、クライスラーの乗員遺族にとっては、当然、納得のいくものではなく、遺族補償が有るとはいえ、泣き寝入りする様な心地だろう。
「・・・」
テレビに見入りながら、なのはは複雑な思いに浸っている。
時空管理局と地球防衛軍との関係は、公式発表されたほど良好でないことを肌で感じているからだ。
フェイトたちの待遇が思った以上に良好であることは、彼女たちの顔色や声の調子でわかっている。
とはいえ、彼らは質量兵器を多用する純軍事組織であり、地球連邦という統一国家の正規軍だ。
質量兵器は管理局法に違反しているから、本来は取り締まり、必要ならば武力を用いてでも質量兵器を廃棄させなければならない。
しかし、地球防衛軍はこれまでの武装組織や正規軍とは比較にならない強力な戦闘艦船と機動兵器を持つ。
しかも、彼らの世界は管理外世界だ。
本来ならば、管理局が干渉する世界ではない。

だが、その技術は管理局をゆうに上回るため、管理局側としても、見過ごすわけにはいかないのだろう。
彼らはガトランティスや暗黒星団帝国軍のような好戦的かつ侵略的ではないようだが、管理局と一線を引く姿勢である以上、潜在的な脅威であることは変わりない。
そして案の定、先日のやり取りで、地球防衛軍側の若い士官が、
『管理局は管理局、うちはうち』
という趣旨を明言したことで、管理局とは一線を画する姿勢を示した。
非公式で、かつ予想していたとはいえ、管理局の下に集う気はないという意思表示をしたことに、本局上層部、特に次元世界拡大派の高官は渋面だろう。
だが、実力行使すれば甚大な被害を被るのが目に見えているからだ。
「ねぇ、なのはママ」
余程難しい表情をしていたのか、目の前にヴィヴィオが来てこちらを見ている。
「ん？何？ヴィヴィオ」
一人娘は少し考えるようにしてから、顔を上げて母に訊ねてきた。
「かんり局とちきゅうぼうえい軍はどうして喧嘩しちゃったのかな？このまま、ちきゅうぼうえい軍とせんそうになっちゃうの？フェイトママは、帰って来れるの？」
「ヴィヴィオ・・・」
ヴィヴィオはギルフォードと地球防衛軍士官の刺々しいやり取りを目の当たりにしている。
不安にならない訳がない。
はやてに言わせれば、いきり立ったのはギルフォードだけで、向こうは白けていたということだが、ヴィヴィオの目には喧嘩しているように見えたことだろう。
しかし、互いに相手をよく知らないでいるのなら、行き違いはあるだろう。

これはかつてなのは自身が、アリサやフェイト、ヴォルケンリッターたちとぶつかり合い、そして友情を結んだ経験則だ。
ＪＳ事件で逮捕された戦闘機人たちとも同じ事が言える。
「大丈夫よ。管理局も、地球防衛軍も、まだお互いの事を知らないからだよ。じっくり語り合えば、必ず仲良くなれるはずだよ。フェイトママたちも、向こうの地球の事を勉強して、そして、管理局の事も知ってもらおうと頑張っているんだから」
これは確信できた。
フェイトとティアナの二人は無為徒食するような事はしない筈だ。
必ず、向こうの地球の生きた情報を持ち帰ってくる筈だ。
なのははそう信じて、二人の帰還を待つ事にした。

ミッドチルダ北部・ベルカ自治区、聖王教会本部
「そう・そんなことが・・・」
はやては、定期連絡の翌日、ベルカ自治区、聖王教会本部へと赴いた。
そこで、はやては昨日の定期連絡の映像を見せた。
案の定、カリムもシャッハもギルフォードの行為には顔をしかめた。
「これは、ありませんね」
良馬やリニスがそうだった様にシャッハもギルフォードの行為に対して呆れたように言う。
「そうですね・・まるで管理局が既にかの世界を管理下に置いたような発言と行為に受け取られる様な言動ですね」
カリムの彼の発言に対して危惧する。
「それで、ハラオウン執務官たちの待遇は大丈夫なのですか？」
ギルフォードの行為によってフェイトたちの待遇が救助者から捕虜、ないしスパイ容疑をかけられて拘束されたのではないかと心配になるカリム。
「その点に関しては、大丈夫や。向こうの司令長官さんが待遇は保証してくれとるそうやから」

「そうですか」
　はやての言葉を聞き、安心した様子のカリムとシャッハ。
「それで、今回のクライスラーの件なんやけど、これはこの前のカリムの預言の一つだと思うんよ」
「はい。私も今回のクライスラーの件を聞き、確信しました」
「あれから何か別の預言とか出たか？カリム？」
「いえ、あれから発動はしていません」
「そうか・・・・しかし、そうなると、後もう一つの預言が起こる可能性がある訳やな」
「・・・・」
「今度の預言・・・・」

星海を行く法の番人の船
独裁を司る者の宝物（ほうもつ）を強奪せんとす・・・・
独裁を司る者は、怒り狂い、強奪せし法の番人を業火の彼方へと滅する
報復せし法の番人は、独裁の地へと赴く
されど番人は漆黒の闇へと飲まれる・・・・

はやては以前にカリムから見せてもらった預言の言葉を書き記した紙を見て、呟く。
「この文面からガトランティスや防衛軍に喧嘩を売るわけやなさそうやけど・・・・」
　ガトランティスは国家元首が地球との戦争で死亡している事が防衛軍との定期連絡で判明しており、地球連邦には、独裁者など存在しない。
　そのため、この預言に書かれている『独裁を司る者』はガトランティス、防衛軍では無い事が分かる。
　では、ガミラスか暗黒星団帝国それともまた新たな星間国家なのだろうか？
「兎も角、最初の預言は現実に起きてもうた。二つ目の預言は何とか

防ごうと私は思うとる。勿論クロノ君やリンディ提督、レティ提督も同様の意見や」
「そうですね。私も出来ることは極力協力していきます」
と、カリムもはやてたちに協力を申し出た。
しかし、事態はそう上手くは行かなかった・・・・。

銀河系中心部・核恒星系より北方にある某宙域
無人惑星を望む宇宙空間に、数十隻の艦船が遊弋している。
そのフォルムは全体的に丸みを帯び、ずんぐりとした型であり、その中でも一際大型の艦のブリッジの中央部に一人の男が立ち、少し緊張した面持ちでチラッと横目で窓の外の光景を見ていた。
男の視線の先には、剥き出しの大砲を曳航しているずんぐり型の艦船がおり、更にその先・・曳航している大砲の砲門の先には古めかしい宇宙船が多数漂っていた。
ずんぐり型の艦船が曳航している大砲はその大きさから、艦船に搭載するものではなく、地上または宇宙要塞に搭載する要塞砲である事が窺える。
もっとも彼らがあのガトランティスが保有していた超巨大戦艦を建造しているというのであれば話は別となるが・・・・
「バルコム提督、お待たせ致しました。首相閣下との回線を開きます」
「うむ」
画面が切り替わり、いかにも尊大そうな壮年の肥満な男が映し出された。
敬礼するバルコムに男は頷いて応え、口を開いた。
「バルコム提督、例の新兵器とやらの準備は万端かね？」
「はっ、全て完了しております。首相閣下」
「よろしい。それでは早速見せて貰おうかね」
「承知しました」
〝首相〟に敬礼したバルコムは幕僚に向き直った。
「ブラックホール砲発射準備!!」
「ブラックホール砲発射準備」

「ブラックホール砲へエネルギー注入!!」
バルコムの命令は直ちに参謀長を通じて伝えられる。
曳航している艦船が大砲にエネルギーを注入し、やがて砲身の先が白く光り始める。
「ブラックホール砲発射準備完了!!」
「よしっ、ブラックホール砲発射!!」
バルコムは頷くや、発射命令を下した。
エネルギーが充填された砲身から白濁色の光源が放たれ、老朽船の上を通り越していくと、老朽船の傍に突如、ブラックホールが出現し、老朽船と周囲にある小さな星やアステロイドは次々とブラックホールへと飲み込まれていく。
老朽船やアステロイドを全て飲み込んだブラックホールは暫くすると、消えてしまった。
後には、何事も無かった様な平穏な星の海が広がるだけだった。
「如何でしょうか?首相閣下。新兵器『ブラックホール砲』の威力は?」
「うむ、見事だったぞ、バルコム君」
「いえ、これも首相閣下のご指導の賜物であります!」
首相はブラックホール砲の威力を見て満足げな表情だ。その様子にバルコムは内心で胸を撫で下ろした。
「これを完成予定のあの要塞に搭載できれば、我がボラー連邦の攻守は完璧なものとなる訳だ。君たちはよくやってくれた。君たちの帰還に合わせて祝いの品を用意させておこう。それで兵士たちを労ってくれたまえ」
「はっ、首相閣下のお気遣い心より感謝いたします!!」
バルコムは深々と頭を下げた。
「うむ、では君たちの帰還を待っておるぞ」
首相はかなり上機嫌な様子で通信を切った。
画面が完全に消えたのを確認して、バルコムは額に浮き出た汗を拭う。
「ふぅ〜・・・・」

首相閣下は一度不機嫌になると何をするかわからない。
激怒しようものなら、怒りが解けるまでに何人もの官僚や幕僚が〝突然の病のため、長期療養に入る〟そして、その療養に入った者は、二度と表には戻ってこない。
それはバルコムに限らず、軍の高官ならば同僚や上官が粛清されていくのを間近で見ているから、いつ自分がそういう目に遭うか戦々恐々なのだ。
それでも軍部があの首相についていくのは彼にこれまでの国家元首にはない圧倒的な指導力があるからである。
彼――ベムラーゼ――が首相の座に就いてから、自身が属するボラー連邦の版図は従来に増して早いペースで広がっている。
この銀河（天の川銀河）の中心を越え、辺境惑星であるバース星をも保護領にし、さらには高い科学技術力を誇るガルマン星をもその支配下に収めた。
祖国が：ボラー連邦が、この銀河全域を統一するのも現実のものになるだろう。
ボラー連邦軍主流派の将校たちは、その時はそう信じていた――。

七十五話　法の舟は再び星の海へと船出する

銀河系星雲・某宙域
「敵艦の撃沈を確認ました」
「スペース・ロックは、全弾正常に作動し、敵艦に命中しました」
「宜しい、参謀長、残骸と死体のサンプル回収を忘れるなよ」
「はっ!!」
「それにしても、あんな軟弱な艦で『次元世界の管理者』とは笑わせてくれる。だが、まあいい、新型誘導ミサイル『スペース・ロック』の実用試験に貢献してくれたことだけには感謝しよう。全艦反転、準備が出来次第帰還するぞ!」
「はっ!!」
大型の丸みを帯びたずんぐり型の艦船及びシャープなデザインの小型艦艇は何処へと去って行った・・・・。

時空管理局　本局
はやて、クロノら穏健派が「しばらく次元世界探索はやめるべき」と主張しても、相手は百年以上、魔導師至上主義、管理世界拡大推進を唱えて来た管理局のお歴々の方々が相手だ。
自分たちの様な若造の言う事など、聞く耳を持つはずがない。
しかも言っている事がこれまで管理局が行ってきた行動を控えろと言うのだから尚更だ。
そんな中、またもや管理局に凶報が齎された。
時空管理局本局にあるクロノの執務室にある端末が呼び出しのアラーム音を立てた。
「提督!!」
用件を訊ねようとしたクロノの機先を制するかのように、画面の秘書が焦った声を上げた。
「どうした?」
珍しく慌てた様子の秘書にただならぬ気配を感じたクロノは、敢え

てゆっくりと訊ねる。
「巡航艦ラティオが遭難信号を発信し、直後に消息を絶ちました!!」
「な、なんだと!?」
クロノの表情が凍り付き、彼は反射的にデスクから立ち上がった。
それから数時間後、クロノは突然の召集を受けた。

時空管理局本局・次元航行本部管制室
クライスラーの消息不明に次ぐ、ラティオの遭難の報に管制室は騒然としていた。
自分のオフィスから駆け付けたクロノも現状と経緯の把握にかかっている。
ラティオは、新たな有人世界を発見したと報告を寄せた後、調査のためその本星を確認する予定だったと聞く。
ラティオは反管理局活動の鎮圧や数多くのロストロギア確保・収集の実績が本局上層部に高く評価されていた艦だが、クロノはかねてからこの「実績」とやらに強い疑念と不信感を抱いていた。
反管理局勢力の殲滅では犯罪組織に無関係の者まで死傷させ、ロストロギアの回収もかなり強引な手段で行い、管理局への怨嗟を買う等、反管理局の火種を作って回っているとしか思えないのだ。
前・現艦長とも上層部に強力なコネがあるため、都合の悪い事は揉み消されてしまうところも、クロノが不信感を拭えない所だ。
しかし、遭難となればなおのこと無視できない。
反管理局勢力によるテロか？　あるいは、ガトランティスや地球防衛軍のような、管理局を上回る軍事力を持つ勢力なのか？
前者ならまだ打つ手はあるし、再発防止策も打てるが、後者ならオプションは大きく縮まる。
地球防衛軍のような、比較的穏健な勢力ならば交渉できる余地があるかも知れないが、ガトランティスや暗黒星団帝国のような好戦的・侵略的な組織だと、薮を突ついて毒蛇か大蛇を呼び出すようなものだ。
「一体、何が起きようとしているんだ・・・？」

何か大きな力が、時空管理局を破滅の落とし穴にゆっくりと引き寄せているような気分になるクロノだった。

時空管理局本局、会議室

L級巡航艦ラティオの遭難を受け、管理局の〝海〟・〝空〟に加え、〝陸〟の高官も交えた緊急会議が開かれた。

スクリーンには、まずラティオの出航から緊急救難信号をキャッチするまでの航路や定時連絡等の経過が説明された。

ラティオが最後に送ってきた通信文は、

「本艦はこの世界の艦隊に襲撃され・・・」

で途切れていた。

少なくとも、地球防衛軍やガミラス、ガトランティス、暗黒星団帝国ではない、未知の艦隊と交戦したらしい。

本局の管理世界拡大推進派や強硬派からは、直ちに捜索・探索隊を派遣すべきだとの声が上がったが、〝陸〟の高官からは、ラティオの捜索だけならまだしも、犯人の探索は新たな犠牲を増やすだけだ、との声が上がり、本局の慎重派もこれに同調して、互いに譲らぬ激論になった。

またミッドの地上本部、本部長のロールスロイス中将は、新世界探査の無期限中止を提案した。

この提案に対し、管理世界拡大推進派が真っ向から反発することになった。

「我々は次元世界の正義と安全を守る義務がある！我が管理局の正義を貴官らは自ら否定するというのか!?」

「その通りだ!!そんな軟弱な考えを持っているから未だにミッドの治安が改善されないのではないかね？」

「貴官らはそう言うが、次元航行艦の遭難が相次いでいるのに尚も世界探査を続けることに一体、何の意味があるのだ？ガトランティスや暗黒星団帝国のような好戦的勢力への対策の目処が立っていない上に、唯一話が通じそうな地球防衛軍にまで喧嘩を売るような真似をするなど、正気の沙汰とは思えん」

ロールスロイスは若干ムッとしながらも、本局の行動そのものを否定した。
「地球防衛軍も大量破壊兵器を持っている危険な勢力だ！貴官はそんな連中を信用など出来ると思っているのか!?貴官こそどうかしているぞ!!」
「ならば、こんな所で吠えないで、地球防衛軍と地球連邦政府側にそのまま言ってみたらどうかね？『君たちの存在は危険だ。故に我々の管理下に入れ!!』とな・・まぁ、そうなれば、ハラオウン執務官らは用済みということなんだな？」
皮肉混じりに返すロールスロイスに、〝陸〟の出席者は失笑し、本局の管理世界拡大推進派が反発しかかるが、フェイトの事が出てきたことで、流石の連中も失言に気づいて黙り込んだ。
もし、この時点でフェイトたちを切り捨てれば、市民のみならず管理局内部からも激しい反発が起きることに気づいたのだ。
それだけ、旧六課の隊長陣の人気は物凄いと言う事だ。
彼女たちは実績もそうだが、容姿も美しいため、局内、一般人問わずに人気があるのだ。
事実、局内の売店では彼女らのブロマイドが売っているくらいなのだから。
会議場が剣呑な空気に包まれた時、三提督の一人、ミゼット・クローベルが動いた。
「ラティオを襲撃したのが何者かわからない以上、派遣任務はラティオの捜索だけに限定し、かつ複数の艦で赴くべきでしょう。また、この捜索活動の結果が出るまで、新世界探索は一時見合わせて、現在探索任務についている艦船は直ちに中止命令を出し、一旦帰還させて、各管理世界との連絡を密にすべきだと思いますが、皆さんはどうお考えですか？」
〝陸〟や本局の穏健・慎重派は賛意を示し、本局の管理世界拡大推進派も三提督からの進言を蹴る訳にはいかず、渋々同意した。
次に議題はラティオの捜索任務に移り、その任務に当たったのは、先ごろ完成したばかりのＳＸ級一番艦キャデラックを始めとするＸ

級巡航艦、Ｒ級巡航艦を中心とする部隊となった。
これには管理世界拡大推進派の局員たちが、ここで新鋭艦の性能、強さを知らしめて、再び主導権を握ろうとする思惑があった。

それから数日後・・・
時空管理局　本局　次元航行艦発着港
謎の艦隊の攻撃を受け、消息不明になったラティオを捜索するため、管理局が誇る最新鋭のＳＸ級次元航行艦キャデラックと同じくＳＸ級次元航行艦ベントレーと三隻のＸＶ級次元航行艦、四隻のＸ級巡航艦、二隻のＲ級巡航艦が次々と本局の次元港バースを離れていく。
次元港には三提督を筆頭に、本局勤務の局員が多数見送りに来ていた。
「・・・」
穏健派の局員は一様に厳しい、あるいは浮かない表情だ。
出航した艦に家族や恋人が乗っているのか、発着港には涙ぐんでいる女性の姿も見受けられる。
明るい顔、自信満々の顔をしているのは管理世界拡大推進派の高官ぐらいだ。
勿論連中は、この任務には誰一人参加せず、彼らの身内は一人も乗って居らず、ただミッドで捜索隊の報告と帰りを待つだけだった。
恐らく捜索隊が帰還したら、さも自分たちの手柄の様に吹聴するだろう。
この見送りに来ている者の中にはクロノ・ハラオウンもいた。
艦長を務めているクラウディアがドック入りしたばかりのため、当面出動の予定はないが、事態の推移によってはドック明け後に出動という可能性もあるため、情報収集は欠かせない。
同時に、クルーたちには可能な限り一時帰宅を勧めた。
管理世界拡大推進派や魔導師至上主義者を中心に、ラティオは油断したからやられたのではないかと言う空気が漂っているが、クロノは嫌な予感が沸き上がるのを禁じ得なかった。
（ラティオを撃沈した艦隊はガトランティスや暗黒星団帝国同様、強

力かつ好戦的な軍事勢力ではないのか？）
クロノの脳裏にカリム・グラシアの預言が蘇る。
管理局は全次元世界の平和と正義の守護者たる唯一の存在と自認し、次元航行手段を実用化していたり、実用化の目処が立ちつつある世界を次々と管理世界に組み入れたが、全てが平和的だったわけではなく、「編入」時の行き違いや、ロストロギア収集を強引に行ったことが原因で、管理局に反発する者も決して少なくはないのだ。

時空管理局　本局　喫茶スペース
「管理局は驕り高ぶっていたというのか・・・？」
「そう思っとる人たちは少なくないやろな」
独白するクロノに、クロノ同様、見送りに出ていたはやてが応じる。
「ロストロギアの収集や管理世界に組み入れる時に、管理局の理屈だけを押し付けた事例は過去に幾らでもあった筈やろう？一族に代々伝わる宝みたいな、金では代えられないロストロギアを無一文で奪われた人や強引に管理世界に編入された後に管理局によって職を追われた人にすれば、後でどんなにケアをしようと、私ら管理局に対する憎しみは消えへんやろなぁ・・・そんな人らに私ら管理局が『正義』ですなんて言っても、向こうの人から見たら、完全に侵略者であり、略奪者で『悪』やで・・・」
特別捜査官として赴いた先で、地元住民からの冷たい視線や怨嗟の言葉、どこからともなく投げつけられる石礫や生ごみ、果ては汚物まであった。
そんな中で捜査協力を得るのは、大変、苦労の言葉では済まされなかった。
随行の局員の中には現地住民に対して高圧的に振る舞い、暴言や石を投げて来た現地住民を逮捕しようとしたり、他の住民に見せしめとして、その場で処刑しようとする輩も居た。
その都度はやてはそれらの局員を窘めていた。
「そう言った人たちからすれば、管理局は悪党だ、傲慢だと大声で叫びたいやろなぁ・・・」

「とはいえ、管理局が崩壊すれば、世界の治安は乱れに乱れてしまう。こちらが悪い所は正さなければいかないが・・・」
「その悪い所をちゃんと理解して謝罪し、改める気概が無いから、大変なんや・・・そう言う点では、管理局は直すべき所は沢山あるやろう。そもそも一番の問題は魔法至上主義やけど、これは私らにとっては自己否定に等しいからなぁ、難しい問題やで・・・」
続発する次元航行艦の遭難・戦没と地球防衛軍のヤマト　と　まほろば　が示した戦闘力は、今の魔導兵器の限界を如実に示している。
そこから導き出される結論は、
『結局のところ、戦闘魔法は訓練された兵士達が扱う質量兵器には歯が立たない』
と言うことだ。
この局面を打開するには、こういった世界からは完全撤退するか、ある程度、質量兵器の使用を緩和し、これらの世界の技術を導入するかのいずれかなのだが、撤退には強硬派が強く反対し、技術導入は時空管理局を根本から変えなければならない。
質量兵器は、非魔導師でも必要な訓練を受ければ扱える。
そうなれば、これまで魔導師が持っていた優位性は失われ、今の地位を追われることになる。
自己否定に等しい選択を今の魔導師たちが出来るとは思えない。
クロノやはやて、なのは自身もそれを受け入れられるのか？と、問われて、「出来ます」と即答できる自信は無い。
そう考えると、自分も今まで築いて来た権力や地位の保身に走っているのだと・・・魔導師至上主義の局員と何ら変わらないのだと自覚した。
それに、あの技術をどこから得るかだ。
ノアやテリオスを襲ったガトランティス軍の艦船は未だにその残骸ですら、管理局は回収できていない。
暗黒星団帝国は防衛軍側から話を聞いただけで、第三十七探査部隊の遭難以降未だに遭遇していない。
まぁ、遭遇したとしても接収する前にこちらが一方的にやられるだ

けだろうが・・・
　そして地球防衛軍も、クロノが用意した通信ポッドに小細工をしたことを見抜かれた挙句、クライスラーの領海侵犯の一件で完全に信用を失い、フェイトたちの事以外では完全に警戒されてしまっている。
　ノアやテリオスの船体から遺体と共に機密資料も回収・解析された可能性もあり、管理局のかなり深い部分や、魔法の事も丸裸にされているかも知れない。
　一番話が分かりそうな防衛軍や地球連邦にでさえも、自らが招いた行動により信頼を失った管理局。
　この先、管理局が防衛軍、地球連邦へ信頼を回復させるには容易な事ではないだろう。
　テーブルの上に置かれたコーヒーカップを見ながらクロノとはやてはそう思った。

　地球　メトロポリス東京・地球防衛軍本部
「改装・ですか・・・？」
「そうだ」
　一室にはヤマト副長兼技師長の真田志郎がいた。
「先日、説明した通り、今現在、ヨーロッパ、アメリカ、ロシア、中国では、大型戦艦の設計・建造が進められている」
　白色彗星戦役で大打撃を被った艦隊戦力の再建を急ぐため、現在、各国は独自設計の導入を認め、次期主力艦艇開発も睨んだ戦艦や巡洋艦等の建造を要請していた。
「日本ではアンドロメダ級二番艦の建造後、新型の戦艦、巡洋艦、駆逐艦の設計が始まっている」
「新型艦ですか？」
「そうだ。それにともない現有の艦も順次に近代改装を行う事になった。もちろんヤマトも例外ではない」
「・・・」
　ヤマトの改装・それを聞き、真田は去年のヤマトの改装案を思い出す。

あの時は、ヤマトの火器、機関を機械とコンピューターによる自動管理方式にする案がでた。
白色彗星の一件でそれは有耶無耶になったのだが、再びその話が持ち上がったのかと思った。
しかし、藤堂が提示したヤマトの改装案は、真田が予想していたのとは違い、大幅な機関の改装・前回のイスカンダルでの旅で使用した新型機関デバイスが完成の見通しつき、遂に連続ワープ搭載機関がヤマトに積むことが出来るのだ。
また全天球型レーダールームの設置などの改装であり、ヤマトに自動管理方式を導入するものでは無かった。
その為、真田はその改装案を快く受け入れ、ヤマトの改装が始まった。

海鳴市　市民慰霊園
真田が防衛軍本部でヤマトの改装案を聞いている頃、良馬、紅葉、ギンガ、フェイト、ティアナの五人は海鳴にあるこの市民霊園に来ていた。
霊園には高さ十メートルの慰霊塔と、ガミラス、そして白色彗星帝国との戦争で命を落とした海鳴市民の氏名が刻み込まれている慰霊碑がある。
そして慰霊塔の先には、直径三百メートルを超えるクレーター湾が広がっていた。
「クレーターの口辺りが臨海公園の跡です」
「そう・・・」
紅葉がクレーターと湾が接するあたりを指差す。
話には聞いていたが、この世界の今の海鳴の姿に、フェイトとティアナは言葉を失っていた。
先日、海鳴の繁華街に出た時は、もう完全に復興されたものばかりと思っていたのだが、実際自分たちが知らない場所ではまだまだ戦災の傷跡が残っていたのだ。
慰霊塔前で合掌した彼女たちは、一面に荒涼とした枯れ野原が広が

り、海側には最近植林された松の若木が、内陸側には広葉樹の若木が並んでいる。
内陸部の奥まった所には風力発電用の風車が立ち並んでゆっくりと回転していた。
(ここが、あの海鳴・・・・?)
世界は異なるが、小学三年から中学三年までの、約六年間を海鳴で過ごしたフェイトは言葉が出てこない。
それに、海鳴臨海公園・・・・そこは、かつて自分となのはが友情を得た場所・・・・。
フェイトにとっては大切な思い出の場所だった。
それが見るも無残な姿でフェイトの眼前にある。
「余りの荒廃さに驚いたかい?」
良馬が振り返り言う。
「はい・・まさか、これほどとは・・・・」
「そうだね。中心部は、復興されたのだが、郊外は未だに手つかずのままなんだ。それにこの風景はここだけじゃない。この地球の方々でこれに似た風景があるのさ」
「・・・・」
先頭を歩く良馬が静かに話す。
(そう言えば、月村艦長は、以前、自分は故郷も親友も守れなかったんだ、と言っていたわね)
先程、慰霊塔に花を供えた後、良馬はしばらく頭を下げたままだった。
(この人も、ずっと苦しんでいるのかな?)
軍人は同胞の生命を守るのが仕事であり、結果で評価される。
その意味で、ガミラスの地球への攻撃を阻止できなかった責任は免れまい。
(でも、ヤマト以前の地球防衛軍の戦力で、相手があのガミラスじゃあ仕方なかったと思うけど・・・・)
フェイト、ティアナとも、ただ日々を浪費していたわけではない。
図書館に通ったりしながら、この世界の情報収集を行っていた。

この世界の地球も、フェイトが知っている第９７管理外世界の２１世紀初めまでは、ほぼ同様の歴史を辿っている。
ただ、ヤマトの母体？である旧日本海軍の戦艦大和の最期は、フェイトが知っている第９７管理外世界とは異なっており、大和は沈没時に大爆発は起こさずに沈んだようだ。
それに大きさも異なっていた。
フェイトの知る戦艦大和の大きさは、約２６０ｍ。
しかし、この世界の戦艦大和は３３３ｍあった。
（この間のことは、はやてとなのはや本部には言わない方がいいと思うんだけど・・・）
（そうですね。忘れてしまいましょう）
フェイトとティアナは２１世紀から２２世紀の間の出来事も当然知ったが、その事については黙秘を貫こうと決心した。
馬鹿正直に全てを管理局に報告して、自分の知る第９７管理外世界に妙な干渉をされては困る。
そう言うティアナであったが、彼女は更に、フェイトの知らない情報がある。
この世界のなのは、フェイト、はやての未来もアルバムを通して知っていたが、この事もティアナは自分の胸の中に留めておこうと決めていた。
そして、ガミラスとの戦闘・・・
彼我の兵器の性能差を考えれば、地球は十分健闘したと言える。
管理局ならば、遷都するか、侵攻された世界を切り捨てていただろう。
ヤマト就役前の地球軍の主力艦船だったＭ―２１７４１式宇宙戦艦、Ｍ―２１７０式宇宙巡洋艦、Ｍ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦は、ガミラス艦に比べればだいぶ見劣りするが、通常空間での機動力は管理局の艦船を上回り、アルカンシェルを除いた火力でも管理局の性能を十分に上回っている。
そして宇宙・大気圏両用戦闘機のコスモゼロ、ブラックタイガーはガミラス軍の戦闘機と互角以上に戦っていたようだ。

とは言え、客観的事実として遊星爆弾は大半が地球に着弾し、人類を含めた地球上の動植物の大半が消えた。
地球防衛軍はその任務を全うできなかったのだ。
(今いる地球防衛軍の人たちは、皆、あの当時に同胞を守れなかったという後悔と苦しみと悲しみを抱えているのかな?)
だとすれば、白色彗星帝国相手に地球防衛軍の残存部隊が死兵と化してでも戦いを挑んだことも頷ける。
(管理局はここの人たちと戦ったら、間違いなく負けるわ)
ミッドに帰ったら報告する機会があるだろうが、地球防衛軍や地球連邦を敵に回したら、管理局に味方するところはなくなるとハッキリ言ってやる。
フェイトがそう意気込んでいると、
「ここです・・・」
紅葉の声に、フェイトとティアナは我に還った。
長方形の石板に無数に刻まれた夥しい犠牲者の名前。
その一角に紅葉を除く高町家一同と、良馬の大叔母にあたり、フェイトが知る親友の名前・月村すずかとその専属メイドのファリンの名前が刻まれていた。
「っ!?」
「・・・」
この世界にも高町家が代々続いていた事と、その一家が戦争という愚行で事実上全滅したという事実にフェイトたちは一言も発することができなかった。
特に親友の一人がこの時代まで生きており、その最後がガミラスとの戦争で命を落としていたことが、フェイトに少なからずショックを与えていた。
(向こうの海鳴の街が戦争や地震、大津波で全滅し、なのはの家族の高町家の人たちやアリサ、すずかたちが命を落とす事になったら、私はしばらく立ち直れないかも・・・)
自分の知る海鳴に居る親しい者たちを思い、もし、その人たちが不運な死を遂げたと思うと、胸が痛む。

良馬たちに続いてフェイトとティアナも花を供え、五人は慰霊園を後にした。
良馬が運転する４ＷＤで頭を天井にぶつけそうなほどの悪路に揺すられて約十分。
車は海を望む一角に止まった。
五人の目の前の更地には、
『都合によりしばらく休業致します。翠屋』
と、明らかに少女の字で書かれた板が立てられていた。
（紅葉は翠屋再建を諦めていない――）
『跡地』ではなく『休業中』と書いたところに、紅葉の強い意志を感じる。
世界こそ違え、思い込んだら一途に進むところはやはり高町の血を引いた娘だ、とフェイトとティアナは思った。
海鳴での墓参を済ませた後、ランチタイムを挟んで、良馬たちは、今度は東京・メガロポリスにある英雄の丘に足を伸ばした。
「考える事は皆同じかな」
「えっ？」
駐車場に車を入れ、皆が降り立った時、良馬たちの車の隣にもう一台の車が停まり、三人の男女と二人の赤子が降りてきた。
「おや？月村君も来たのか」
「ええ・皆に新年の挨拶に・・・」
車から降りて来たのは古代兄弟とその許嫁の女性、そして守の娘たちであるサーシアとユリーシャだった。
「古代先輩たちもご両親のお墓参りに？」
「ああ、それと娘たちの初顔見せにな・・・」
良馬と守の話し声を聞きながら短い坂道を上ると、やがて杖をつき、軍服を纏った人物の銅像が見えてきた。
その像を中心に、夥しい人数の氏名が刻み込まれたいくつもの真新しい石板が立てられている。
「石碑にはガミラスや白色彗星帝国との戦闘で亡くなった人達の名前が刻まれおり、あの銅像の人が、ヤマト初代艦長の沖田十三さんです」

「へぇー」
「あの人が・・・」
紅葉がフェイトとティアナに耳打ちする。
宇宙戦艦ヤマト初代艦長、沖田十三。
防衛軍が誇る名将であり、それと同時に優秀な物理学者でもあった。
自らの身体が宇宙放射線病と言う病に侵されながらも、１４万８千光年先のイスカンダルへの旅を・・・当時、乗組員たちの大半が新人だったヤマトを指揮統率し、文字通り命懸けで地球人類史上初の往復約３０万光年の銀河系間航行を成功させ、地球人類を滅亡の淵から救った人物。
古代進はもちろん、兄の守や良馬ら、地球防衛艦隊の中堅幹部たちを一人前の宇宙戦士に鍛え上げた人物だという。
（この人が、不可能を可能にした人・・・）
フェイトとティアナは銅像の沖田をジッと見つめる。
病の進行と闘いながら、成功率がゼロに近い、まさに手探りの大遠征に自ら志願、挑戦し、病のため、途中からは古代進の補佐を受けたとはいえ、艦の士気を最後まで保ち続けてイスカンダルへ向かい、そして地球への帰還を果たしたのだから、その精神力は一体どの位のものなのか？
（直接的な比較はできないだろうけど、この沖田提督は伝説の三提督をも上回る人かも知れない）
管理局の生きた英雄でもある伝説の三提督・しかし、目の前の沖田提督と比較してしまうと、三提督の実績も沖田提督一人の実績の前では霞んでしまう気がした。
時空管理局や管理世界が滅亡の崖っぷちに追い詰められた記録はない。
ＪＳ事件の出来事さえも、ミッドや管理局滅亡の危機と言うほどの事ではない。
スカリエッティは確かに『聖王のゆりかご』と言う強力な切り札があったが、所詮一介のテロリスト兼マッドサイエンティスト・・・彼の

敗因は保有する兵の数が余りにも少なすぎたのだ。
　しかし、この世界は一度ならず二度も生存の瀬戸際に追い詰められ、宇宙戦士たちの死を厭わぬ闘いでその窮地を脱したのだ。
（修羅場とは言うけど、私たちが体験した修羅場なんて、この人たちから見れば、多分足元にも及ばないな・・・）
（ＪＳ事件の地上本部崩壊や『聖王のゆりかご』の起動の時の絶望感が生易しいものに思えてきたわ）
　この地球が辿った歴史と自分たちが今まで経験して来た事件を振り返り、自分たちが修羅場だと思ってきた出来事がまだまだ温い事だったと自覚させられた。
　しかし、フェイトたちはまだ知らないが、時空管理局はＪＳ事件とは比べものにならない絶望と無力感を突き付けられることになる。
　沖田像の足元に花を供えた時、台座に取り付けられたステンレスらしい金属板に、フェイトたちは思わず見入った。
　其処には、こう書かれていた。
『明日のために、今日の屈辱に耐えるのだ』
　フェイトがエッチングされた文字を言葉にして読んだ。
「それは、沖田艦長が俺に向けた言葉なんだよ」
　当事者の守と、当時あの場に居合わせた良馬がほろ苦い表情でその時の一部始終を話して聞かせた。
　傍らの古代、雪、ギンガ、紅葉も哀しげで複雑な表情になる。
　あの時、守が決死の突撃に出なければ、守はスターシアと出会う事は無く、当然サーシアとユリーシャもこの世に生を受ける事は無かった。
　その反面、何とか冥王星の戦場から撤退して居れば、雪風の乗員を殺す事は無かったと言う罪悪感もある。
　もっともあの時、雪風には冥王星から撤退する程の力は残ってはいなかったので、どの道、結果は同じ事だったかもしれない。
「そうですか・・・」
「そんな事が・・・」
（すごいドラマよね）

（そうですね）
あの時、沖田の撤退指示に従った良馬は無事に帰還した。
しかし、守同様ガミラス艦隊へ特攻した紅葉の兄、高町恭介と沖田の息子、沖田一は還らぬ人となった。
そして、地球に帰還した良馬は、その途中でギンガを救助し、戦争孤児になった紅葉の後見人となった。
ヤマトが地球を旅立った後、良馬は、ガミラス軍残党の掃討と土星圏までの資源・物資輸送経路の確保に当たり、ヤマトが地球に帰還するまで、留守中の地球を守り抜いた。
一方、撤退を肯んぜず、沖田たちを撤退させるために恭介たちと共にガミラス艦隊へ突撃した守はそのガミラスに捕えられるが、移送中に輸送艦が遭難。
偶然にもイスカンダルに不時着したため、そこでスターシアと出逢った。
一同は次に沖田像の横にある胸像の前に立つ。
その銅像の台座には『土方　竜』と彫られている。
「こちらの方は？」
「白色彗星帝国との戦いで亡くなった地球艦隊の司令官で、俺らの士官学校時代の教官だった人だよ」
続いて、フェイトとティアナが土方の銅像を見ていると、
「おー、お前たちも来とったかー!!」
声の主は佐渡酒造だが、後ろには一升瓶の箱を抱えたアナライザーに相原、太田らのヤマトの乗員たち、まほろば　の機関長である井上らが来た。
「ふむ、沖田艦長の倅や娘たちに孫まで揃ったか」
佐渡が嬉しそうに言う。
佐渡が言った孫とは無論、サーシアとユリーシャだろう。
ともあれ、揃ったところで沖田像前に皆は整列し、最年長の佐渡が号令する。
「沖田・土方両艦長、並びにガミラス・白色彗星帝国との戦いに倒れた戦士たちの御霊に、敬礼ーっ!!」

ザッ!!
守、良馬、井上、ギンガらは海上自衛隊型の挙手礼を、それ以外の皆は拳を胸にあてるヤマト式の敬礼をする。
ちなみに紅葉、フェイト、ティアナの三人は頭を下げて黙祷の礼をとった。
皆の敬礼を見て、ティアナは、
(やはり、本物の軍人さん、いえ、宇宙戦士だけのことはあるわね。敬礼の姿勢は管理局よりピシッとしているわ・・・・元局員のギンガさんでさえも・・・・)
等ということを考えていた。
戦死した宇宙戦士たちに新年の挨拶やら、近状報告やらを行った後は、一同は沖田艦長の銅像の前で円陣を組んで座り酒盛りをする。
当然未成年である紅葉とティアナ、ギンガ、ドライバーである良馬と守は酒を飲まず、お茶やジュース等のソフトドリンクを飲んだ。
そして、年末パーティーでお酒に対して、トラウマのあるフェイトもソフトドリンクを飲んでいる。
良馬たちがソフトドリンクを飲んでいる中、雪は自分が淹れてきたと言うコーヒーを差し出してきた。
雪の淹れたコーヒーの威力を知る良馬と守は顔を引き攣らせ、その威力を知らないフェイトとティアナ、紅葉は首を傾げている。
「さっ、どうぞ」
雪がコーヒーの入った紙コップを差し出してくる。
受け取った良馬と守の手が僅かに震えている。
そして、コーヒーを口に含むと、我慢するかのようにソレを何とか無理矢理喉へと流し込む。
雪の淹れたコーヒーを飲んだ良馬たちは明らかに顔色が悪い。
「貴女方もどうですか?」
次に雪がフェイトたちにコーヒーを勧める。
良馬たちの行動に首を傾げつつも、フェイトたちはコーヒーの入った紙コップを手にしてソレを口にした。
いや、口にしてしまった。

すると・・・・
「「っ!?」」
紙コップのコーヒーを飲んだ瞬間、三人は固まった。
(あぁ～やっぱり・・・・それが当然の反応だよなぁ～)
良馬と守は、雪の淹れたコーヒーを飲んだ瞬間のフェイトたちの反応に納得した。
(な、何、このコーヒー!?シャマルさんと同レベルじゃない!?)
コーヒーを飲んだ途端、その味に驚愕するティアナ。
(匂いや見た目は普通なのにどんな方法をすればこんなコーヒーが出来るの!?)
何で見た目と匂いは普通なのに、どうして味だけは違うのかと、疑問に思うフェイト。
(マズっ!!激マズっ!!なに!?この泥水!?)
率直な意見を心の中で思う紅葉。
雪の淹れたコーヒーを此処で初めて飲んだ三人は、何故、良馬たちがあの様な表情をしたのかを理解した。
しかし、折角淹れてもらったコーヒーをそのまま地面にリリースする事は失礼なので、彼女らも良馬たち同様、紙コップの中のコーヒーを無理矢理喉に流し込んだ。
英雄の丘での酒盛りを終え、それぞれが家路に向かう中、紅葉は月村家にお邪魔した。
そこで、紅葉は夕食のカレーを作り、月村家の皆に振舞った。
「紅葉、美味しいよ。これ」
「ホント、美味しいわ。紅葉」
紅葉の作ったカレーライスを一口食べたフェイトとティアナは異口同音に賛辞を口にした。
他の皆も同様の意見で紅葉に賛辞を送る。
ギンガは紅葉のカレーのレシピを聞いている。
(向こうの翠屋のカレーほどじゃないけど、それに近い味だ・・・・でも、何かが違う・・・・)
地球に住んでいた折に何度となく口にした翠屋のカレーライス。

純粋な旨さではまだ及ばないが、その味に近い。
少なくとも、十三歳の少女が作るカレーとしては破格の味と言って良いだろう。
(紅葉ちゃん、腕を上げたわね・・・なのはちゃん・・貴女の子孫は、十分、貴女の血を後世に伝えているわよ)
(正直、年長者としては敗北感を覚えるわ・・・)
忍は紅葉の先祖であるなのはに想いを寄せ、ティアナは内心で忸怩たる思いを抱え、苦笑しながらサラダを突つく。
しかし、ティアナは知らなかった。
嘗ての相棒、スバルも特別救助隊へと入って、一人で寮生活を送っている中、家庭スキルが上がっていた事を・・・。
「『なのはカレー』と言って、母から受け継いだレシピで作ってみました」
「「なのはカレー!?」」
紅葉からその名称を聞いた二人は反射的にスプーンを止めた。
「はい。何でも翠屋の二代目店主が独自で考えたオリジナルレシピで、両親の代まで受け継いできたんです。『なのは』は二代目の店主の名前です」
(この世界のなのはは、翠屋を継いだんだ・・・)
(やっぱり紅葉はこの世界のなのはさんの直系の子孫なんじゃないのかな?)
フェイトはこの世界のなのはが翠屋を継いだ事に驚き、ティアナはアルバムから、この世界のなのはの生涯を知っていたが、紅葉がなのはの直系の子孫だと予測を立てた。
まぁ、紅葉の容姿を見ればなのはと酷似しているため、簡単に予測はつく。
(管理局に言うつもりはないけど、なのはたちにも打ち明けて良いのかどうか・・・)
紅葉が出処不明なインテリジェントデバイスまで有する高い資質を持つ魔導師である。
世界こそ違え、あのエース・オブ・エース、高町なのはの直系の子

孫であることを管理局が知ったら、どんな愚行に出るかわかったものではない。
それには紅葉の先祖にあたるなのは自身も例外では無かった。
フェイトはなのはと紅葉が邂逅するシーンを脳裏に浮かべた。

フェイトの脳裏には、先祖である高町なのはとその子孫である高町紅葉がそれぞれ、向かい合いっている姿があった。
「紅葉ちゃん、管理局に・・「固辞します!!」即答!?どうして!?」
なのはが紅葉を管理局へとスカウトするも紅葉は速攻でそれを拒否する。
「私には時空管理局とやらに入る意思は全くありません。それに、職業選択の自由は地球連邦の憲法に明記されていますから」
「ぐっ・・・で、でも、管理外世界での魔法使用は時空管理局規則で禁止されているんだよ。だから・・・」
なのはは引き攣った笑みを浮かべながら管理外世界における魔法の使用を禁ずる管理局法を述べる。
それは安易に魔法を使いたければ、管理世界、管理局へ来いと言うモノであった。
「それは随分と奇妙な話ですね。私は貴女が言うところの管理世界出身ではありません。『時空管理局?何それ?美味しいの?』としか言いようがないです。・・・それに貴女は基本的なことをお忘れではありませんか?」
「な、何を?」
「他人にそんな物騒な物（レイジングハート）を向けておいて、貴女は本当にお話をする気がおありなんですか?」
「・・・」
レイジング・ハートを向けられながらもそれに全く微動せず、冷静な態度でなのはの勧誘をバッサリと切っていく紅葉。
「と、とにかく、貴女は管理局に入るの!!」
どうしても紅葉の管理局入りを諦めきれない様子のなのは。
レイジング・ハートを引っ込めながらも必死にスカウトを継続す

る。
　きっと彼女は最初は嫌でも、働いていく内に魔法の素晴らしさや管理局での仕事や信念を分かってくれると思っているのだろう。
　そして、そんな魔法を使って人々の役立つ事をしている管理局に就職出来て良かったと思う日が必ず来ると信じているのだろう。
　そんな風になのはは思っているに違いない。
「はぁ～ですから、お断りすると言っているんですが・・・異世界生活が長くて日本語が理解出来なくなったのですか？」
　何となく、なのはに対する紅葉の視線が、可哀相なモノを見る眼に変わってきている。
　これでは、どちらが年上なのか分からない。
「ん？何か言ったの？」
「いえ、何も・・・」
　紅葉は、溜息をつきながら、背中のバックパックからビニール袋を取り出すと、その袋の中をごそごそ探るように掻き回す。
「な、何をしているのかな？」
　紅葉の行動に恐る恐る訊ねるなのは。
「なのはさん、手を出して下さい。私がこれから渡す物を落とさなければ、管理局入りを考えます」
「本当に？」
「ええ、女に二言はありません」
　なのはは既に勝ったとばかりに微笑んで、右手を差し出した。
「どうぞ・・・」
　そういって、紅葉は、なのはの掌に白っぽい物を数個、そっと置く。
　その際、紅葉の口元がニヤリと少し緩んでいた。
　なのはは手のひらに置かれた白い物体を注視する。
　それはニョロニョロと、なのはの手の上を動き回っていた。
「に、にゃあああぁぁぁ・・・!!（泣）」
　次の瞬間、なのははそれを放り投げ、号泣しながら走り去っていった。
　紅葉は無表情のまま、走り去って行くなのはを見送ると、地面に落

ちたそれをヒョイと拾い上げて袋に入れ直す。
彼女がなのはに渡したのは、蜂の子・いわゆるオオスズメバチの幼虫であった。
フェイトの脳裏には年末の夕食会で見た蜂の子が未だに強烈なインパクトがあり、今回フェイトの想像の世界にもゲスト登場したのだ。
仮になのはが、蜂の子を落とさなくても、紅葉は『管理局入りを考える』と言って、『管理局に入る』とは、明確に言っていない。
きっと、何らかの理由をつけてきっと管理局への就職を蹴るに決まっている。
つまり、なのはは、最初から紅葉の掌の上で踊らされていたのだ。

と、まぁこの様な感じで、なのはと紅葉のやり取りが脳裏に浮かび、それをイメージしたフェイトは、
(うーん・・・もしかしたら、なのはと紅葉は分かり合えないかも・・・)
魔法と言う未知の力に魅了され、そのまま流れる形で管理局に入局したなのはは、今の魔導師至上主義者と似た様な思想を持っているような気もする。
魔導師素質のある者は、管理局に入り、その力を管理局のために使うべきだと・・・。
質量兵器は危険な物でこの世から廃絶しなければならない。
そんな考えを持ったなのはが、異世界ではあるが、自分の直系の子孫、しかも自分と同じように高ランクの魔導師資質を持っていれば、彼女を管理局に勧誘しない筈がない。
しかし、当の紅葉は管理局に入局する意思は全くない。
そうなれば、二人は意見の違いか対立する事は目に見えている。
であれば、なのはにも紅葉が魔導師である事は黙っておいた方が良いのかもしれないと思うフェイトだった。
先日の定期連絡でこの世界になのはの子孫である紅葉の存在を知ってはいるが、彼女に魔導素質、デバイスがある事は知らない。
しかし、なのはの子孫なのだから、紅葉にも魔導師の素質があるの

ではないか？と、はやてやなのはたちはそう予測しているかもしれない。
だが、全ての魔導師が時空管理局の管理下に入る義務があるのかと言われれば、答はＮｏではないだろうか？
そもそも紅葉の場合、管理局の存在を知らずに育ち、なのはと違い、魔法を積極的に人前で使った形跡もない。
話を聞いた限りでは、ガトランティス帝国の超巨大戦艦の砲撃射撃の衝撃で、落下してきた大量の土砂と瓦礫から我が身と周囲にいた子供たちを守るために、防御魔法と中距離砲撃、シューター魔法を一度ずつ使っただけらしい。
まぁ、月村家の地下闘技場でギンガとリニス相手に模擬戦はしたようだが、それは十分に許容出来る。
それに、紅葉の将来の夢が翠屋の再建ならば、それを妨げる権利など誰にもあるまい。
それがたとえ時空管理局でも、だ。
下手に干渉すれば、それは基本的人権と精神への侵略だ。
第一、そんな事を後見人である月村家の人々がそんな事を認めるわけがないし地球防衛軍相手に管理局が戦えるとも思えない。
何としてでも、地球連邦・地球防衛軍とは共存、でなければ逆に一切の接触を断つしかない。
先日の定期連絡の際に一時漂った険悪な雰囲気。
管理局の次元航行艦、クライスラーがここの太陽系内に進入しようとして行方不明になってしまった。
それ以前にも、クロノが用意した次元通信ポッドに、どうやら〝海〟の管理世界拡大推進派が細工をして、此方の地球の位置を突き止めようとしたらしい。
「何て余計なことをしてくれたのだ！」と、画面の向こうのギルフォードを怒鳴りつけてやりたかった。
恐らくティアナも同じ気持ちだっただろう。
レティ提督のとりなしで喧嘩分かれにはならなかったが、あんないたたまれない思いをするとは思わなかったし、恥ずかしかった。

結局のところ、クライスラーの遭難は管理局側の自爆、自業自得としか思えなかった。
いきなり知らない人に「君のクレジットカードの番号とパスワードを教えて」と言われて、「ええ、良いですよ」と言って素直に応じる馬鹿がいると思っているのだろうか？
恐れていた事態――管理局の地球への干渉――が取り沙汰されているのかも知れないが、管理局の全戦力を投入しても勝てるかどうかわからないし、そんな事をすれば、管理局は壊滅的な被害を受け、再建するまでかなりの年月を必要とする。
そうなれば、再建が完了する前に管理世界は無法地帯になり、管理局は崩壊する。
得る物はあまりに少なく、失う物は甚大な、愚劣極まることだ。
一連の艦船の遭難で、ガトランティスや暗黒星団に対抗できるだけの戦力や技術を欲するのはわかるが、高圧的に臨めば反発されるのはわかりきったこと。
今まではそれで通じたが、地球防衛軍はそれが通じる相手ではないのだ。
もし、この地球に大規模な侵攻、ないし、地球にアルカンシェルを撃ち込もうものなら、次元航行能力を付加したヤマト　や　まほろば、その他多数の防衛軍艦船が管理世界に大挙して押し寄せ、本局に波動砲を撃ち込み、ミッドの空にはコスモタイガーが舞い、クラナガンに絨毯爆撃を行い、空戦魔導師たちをその銃口で蜂の巣にしていくだろう。
一度ならず不可能を可能にした彼らだ。
ことに、スカリエッティの上を行くあの男たち（真田と大山）ならば、本当に防衛軍艦船に次元航行能力を持たせてしまうだろう。
ミッドや本局の座標はノアやテリオスの調査から既に知っていてもおかしくはない。
「管理外世界の住人にそんなことができるはずがない」と管理局の皆は思うだろうが、ここにいるのは『不可能を可能にした男』の後継者たちだ。

管理局の基準や常識、法律など、道端の小石以下の価値でしかなかろう。
それに、目の前の高町　紅葉にしても、家族を皆失いながらも翠屋の再建を志している。
市井の一少女もこれだけの強い意思を見せているのだ。
こういう人たちが住まう地球が時空管理局に屈するとは到底思えない。
フェイトとティアナは管理局の未来と、防衛軍・地球連邦との友好を模索しながら、紅葉の作ったカレーに舌鼓をうった。

七十六話　管理局、悪夢の幕開け

時空管理局・本局
先のラティオ捜索艦隊出発から二昼夜が経過していた。
定時連絡では予定どおりの行程で、次元震・時空震の発生も確認されていない。
それにラティオを撃破したとされる謎の艦隊の姿も・・・・。
捜索艦隊は間もなくラティオが救難信号を発信した座標に到達するはずだ。
そして、艦隊は定時連絡で、「遭難現場に到着した、これより捜索に入る」と旗艦キャデラックから、連絡が入り、其れから五時間後、再びキャデラックから連絡が入った。
「所属不明の小規模艦隊を確認。これより臨検し、所属と目的を確認する」
と通信が入った。
管制室に緊張が走るが、その十分後に事態は暗転した。
場面はキャデラックのブリッジへと変わり、時系列は捜索艦隊が針路上に小規模艦隊を確認する前まで戻る。

時空管理局　ＳＸ級次元航行艦　キャデラック　ブリッジ
「予定座標に到着しました・ラティオの遭難現場です」
「うむ、直ちに捜索を開始しろ。本部には通信を送ったか？」
「はい」
ラティオの遭難現場にて、早速捜索活動を開始する。
しかし、捜索は難航し、広範囲の捜索にも関わらず、ラティオの船体すら確認できない。
捜索艦隊が捜索を始めて、五時間の時間が経過した頃・・・
「か、艦長、何かがこの海域を航行しています!!」
近くに艦船反応を探知したオペレーターは急ぎ、艦長に報告する。
「パネルに映せ」
「了解」

キャデラックのブリッジにあるメインパネルには丸みを帯びたずんぐり型の船とその船よりも小さいシャープなデザインの船が映し出される。
「一端、この海域から退避しますか？」
副長が艦長に指示を求める。
この海域はラティオが遭難した海域。
もしかしたら、ラティオはパネルに映っている艦に撃沈されたのかもしれないと思ったため、この海域に留まるのは危険だと判断したのだ。
キャデラックの艦長は、副長の言う通り、一時退避しようかと思ったが、オペレーターからの次の報告で、その考えを改めた。
それが、自らの身を滅ぼすとも知らずに・・・・。
「艦長、航行中の船より、ロストロギア反応があります!!」
「何っ!?」
「・・・本局へ通信、『所属不明の小規模艦隊を確認。我、これより臨検し、所属と目的を確認する』」
「っ!?」
「全艦にも通達、これより前方の艦隊を臨検する。全艦戦闘用意。警戒体制をとれ!!」
キャデラックの艦長が前方の艦隊の臨検を命令した。
その命令に対し、副長は、
「艦長、危険です!!この場はやはり、一端退避すべきです!!」
副長は、あくまで無駄な接触は控えるべきだと進言するが、
「君はすぐ目の前に居るロストロギアを不法所持している連中を見逃せと言うのかね？」
「そ、それは・・・」
「ロストロギアは我が管理局が管理、保管する事が次元世界の平和につながると言う時空管理局の基本概念を君は忘れた訳では無いだろう？」
「で、ですが、我々の任務は行方不明になったラティオの捜索です!!それにこの海域は、ラティオの遭難現場です。もしかしたら、ラティオ

はあの艦隊の攻撃を受け、撃沈された可能性があります!!藪を突っついて蛇を出す危険を冒す必要もありますまい!!」
副長はあくまで、艦長の言う臨検を控え、あの艦隊が通り過ぎるのを待つべきだと進言するが、艦長はあの艦隊がロストロギアを輸送していると分かると、出世欲が出たのか、臨検を行い、あわよくば輸送しているロストロギアを回収しようと言う魂胆だろう。
ラティオの乗員、船体が見つからないでも、ロストロギアを持って本局に帰れば、出世が出来ると考えたのだ。
「他の皆は何か意見はあるか?」
艦長が艦橋内を見渡す。
副長の意見通り、あの艦隊が通り過ぎるまで退避するか、艦長の意見通り、臨検をするか、皆の意見を訊ねた。
すると、他の皆の気持ちはどうやら、副長よりも艦長の意見寄りの様だった。
「ば、バカな!!み、皆、死にたいのか!?」
他の皆が艦長の意見に賛同した事が副長にとっては、予想外で声をあげる。
「君はそう言うがな、副長。あの船のどこが、武装船なのかね?」
艦長はスクリーンに映る丸みを帯びたずんぐり型の船を指さす。
確かにスクリーンに映る艦船には武装らしい武装は見当たらない。
それが、他の皆を艦長側の意見に賛同させる大きな要因となっていた。
「で、ですが・・・」
「くどいぞ!!副長!!これ以上反対するのであれば、抗命罪で、副長の任を解くことになるぞ!!」
「っ!?」
艦長が自らの権限を発動させ、副長を強制的に黙らせた。
「よし、前方の船団に停船命令を送れ!!」
「了解」
キャデラックから前方の艦隊へ停船命令が送られた。

ボラー連邦　第８打撃艦隊　旗艦　バイオン
「ハーキンス司令、停船命令です」
「停船命令だと？何処からだ？」
ハーキンスと呼ばれた丸刈りの髪型に割れ顎の男がオペレーターに訊ねる。
「はい、我が船団の左舷側面から接近してくる艦船より停船命令です」
「所属と目的を確認せよ」
「了解」
オペレーターがハーキンスの言葉通り、接近中の艦隊に所属と目的を訊ねると、
「所属判明、所属『時空管理局』。停船の目的は：『貴船は、ロストロギアなる次元世界における禁制の品を搭載している。速やかに停船し、当艦の臨検を受けられたし、尚これを拒否する場合、当方は武力行使も辞さない構えである』：以上です」
「時空管理局？：そう言えば、先日友軍がその様な組織の艦と交戦したと言う報告があったな：大方、捜索にでも来たのだろう。返信してやれ、『拒否する』とな：：」
「了解」
（ロストロギアが何かは知らないが、今回輸送している品は首相閣下が、所望している品なのだぞ。それがもし、あんな訳の分からない組織の手に奪われたりすれば、俺は身の破滅だ）
ハーキンスは、今回自分の艦隊が輸送している物資が自分たちの国家元首であるベムラーゼが所望している物資だったため、この任務には決して失敗が許されないと言う重圧があった。
そんな中で、突然何処からともなく湧いて来た連中に掠め取られてたまるかと言う思いがあった。
そして、そんな無粋なマネをしてくれたコソ泥連中を地獄に落としてやると決意した。
時空管理局　ＳＸ級次元航行艦　キャデラック　ブリッジ
「前方の艦隊より、返信『当方に貴官らの指示に従う義務無し、よって

臨検を拒否する』：以上です」
　オペレーターが前方の艦隊から送られてきた返信を読み上げると、艦長の表情が明らかに不機嫌なモノへと変わる。
「おのれ～、管理外世界の蛮族め!!我々の力を思い知らせてやる!!全艦戦闘用意!!」
　キャデラックを含め、管理局艦船は戦闘隊形をとる。
　非武装艦に大人気ないと思われそうだが、彼らは逆に思い知らされることになる。
　あの艦船が非武装艦でないと言う事を・・・・。
　一方、第８打撃艦隊も管理局側の動きを見て、此方も戦闘隊形をとる。
「アポストロ級戦艦部隊とデストロイヤー艦部隊は攻撃態勢!!ロスチラフ級戦艦部隊は迎撃態勢を取れ!!何としても輸送艦を守り通すのだ!!」
　ずんぐり型の艦船の中でも、艦首の先端部が尖っている艦と細長く鋭角的でスマートな小型艦が管理局艦隊へと向かい、艦隊の中でも大型の丸みを帯びた艦は輸送船の周りを固める。
「敵艦、距離２６５０宇宙キロ!!」
「スペース・ロック発射準備完了!!」
「スペース・ロック発射!!」
　小型艦の上部甲板の上に設置されたＶＬＳに酷似した形状の発射装置から、大型自己誘導ミサイル、スペース・ロックが発射され、管理局艦へと降り注いだ。

　時空管理局　ＳＸ級次元航行艦　キャデラック　ブリッジ
「敵艦急速接近!!」
　この時まで、管理局側は非武装艦が仮にも武装している自分たちに近寄るなんて何を考えている？
　接舷して白兵戦でも挑むつもりかと思っていたのだ、しかし、彼方の次の行動により、自分たちが今まで慢心していた事を自覚した。
「小型艦より、高速飛来物多数!!こちらに向かってきます!!」

「っ!?げ、迎撃!!」
「奴等、非武装艦じゃなかったのかよ!?」
慌てて艦長は迎撃指示を出すが、時既に遅し・・・・。
管理局艦は降り注ぐスペース・ロックに次々と被弾していく。
混乱する管理局艦隊に対し、追い打ちをかける様に艦首の先端部が尖っている艦が砲撃をしてくる。
あのずんぐりした艦は武装を艦内に格納するタイプの艦だった。
管理局はその外見からすっかり相手が非武装艦だと間違った認識をしていたのだった。
「つ、通信長、本局へ連絡を入れろ!!」
「は、はい!!」
通信士は急ぎ、本局へと通信を入れた。
本局へ緊急伝を入れ終えた直後、キャデラックを強烈な振動が襲った。

ここで、時系列は元に戻り、場面も時空管理局　本局へと移す。
「敵戦闘艦からの砲撃と小型艇からの大型ミサイルにより、我が艦隊は壊滅。本艦も被弾。負傷者多数・・・・」
キャデラックからの悲痛な通信を最後にキャデラックとは一切連絡がとれなくなった。
忽ち本局はパニック寸前に陥る。
「馬鹿な!・接触してからまだ十分しか経っていないのだぞ!」
「キャデラックを呼び出せ!・他の艦もだ!」
オペレーターは捜索隊の各艦を懸命に呼び続けるが、結局応答はなかった。
翌日、本局の局員は文字通り顔色を失うことになる。
そして、翌日・・・・
ミッドチルダ　首都　クラナガン、時空管理局首都航空基地、教育隊　隊舎・教官室
「〜〜♪」
教導官の高町なのは一尉は、ランチを口にしながら午後の教導メ

ニューをタブレットで再確認していた。
その時、教官室に設置されている通信機より緊急放送が流れた。
「緊急連絡、緊急連絡。ラティオ捜索艦隊が所属不明の艦隊と交戦後、消息不明となる事態が発生!!繰り返す・・・・」
「えっ!?」
なのはのみならず、在室していた同僚や職員らもこの緊急伝を聞き、蒼白になる。
「そ、そんな馬鹿な!捜索隊は新鋭艦揃いなんだぞ・・・・」
捜索隊は、管理局の新型主力艦を中心にした部隊だった。
あの艦隊は、管理局最強の艦隊と言っても過言では無かった。
それ故、管理外世界の艦船にはそうそう負けないはずだ、という意見が多かっただけに、苦戦どころか全滅の可能性大という連絡内容が信じられないという者が多い中、
「いやあぁーっ!!」
なのはの隣で叫ぶように泣き伏したのは、なのはの同僚の女性局員だった。
声をかけようとしてなのはは、ハッとした。
彼女は来月に結婚する予定なのだが、確か婚約者が今回の捜索隊の旗艦、キャデラックのクルーの一人だったと聞いていた。
「なんで・・・なんで、どうして!?キャデラックは次元世界最強の次元航行艦じゃなかったの!?」
「・・・・」
なのはは、声をかけられず、唇を噛む。
ＳＸ級は、確かに時空管理局史上最大最強のスペックを持つ次元航行艦だが、最近確認された数勢力の宇宙戦闘艦と比べるとだいぶ見劣りしている事実は、一部の者しか知らない。
なのははそれを知る数少ない一人なのだが、管理局では厳重な箝口令が敷かれていた。
先日、フェイトたちとの定期通信の折に地球防衛軍側が見せた地球艦隊とガトランティス残党軍の戦闘の映像が一部の局員に公開されたらしい。

なのはは直接その目で見た訳では無いが、後日にその時、同席していたはやてからその映像は見せてもらったのだが、映像は衝撃的なものだった。
飛び交う大出力のビームやミサイル・そして激しく撃ち合う双方の艦艇や宇宙戦闘機。
ガトランティスには大型戦闘艦と中型戦闘艦があったが、地球防衛艦隊にも当然ヤマト　や　まほろば　の大型艦船以外にもちゃんと中・小型の戦闘艦も存在し、高い機動性と攻撃力を持っていた。
「管理局の艦船は、地球防衛軍の小型艦相手でも勝てないだろう」
映像を見た後、クロノは憮然として呟いていたと言う。
(ガトランティスと暗黒星団帝国、地球防衛軍は一部だけとはいえデータ登録されている・・・そのどれでもないというのなら、一体どこの勢力なの？強力な質量兵器を使う軍事勢力と本格的な戦争状態になってしまうの・・・？そうなったら、管理局は・・・)
魔法が通じない相手なら、強力な実弾兵器やエネルギー兵器＝質量兵器で対抗するしかないが、質量兵器は管理局憲章で否定されており、運用ノウハウは殆ど残っていない。
それ以前に次元航行艦の艦隊運用も同じた。
地球艦隊やガトランティスの様にあそこまで統率のとれた艦船運用も管理局の歴史史上存在していない。
そして、そんな質量兵器、艦隊運用を扱える勢力の中で、ガトランティスや暗黒星団帝国は論外。
フェイトたちを保護している地球防衛軍とは戦闘状態にこそないが、通信ポッド、クライスラーの遭難の一件で、関係は必ずしも良好ではない。
定期連絡では、フェイトたちの待遇は何ら変わりないようだが、彼女たちの帰還と同時に防衛軍や地球連邦政府は管理局と距離を置きそうな状況だ。
本局の一部や地上本部には、管理局憲章を改訂し、次元航行技術と交換してでも地球連邦政府と地球防衛軍にタキオン機関技術の供与を要請するか、さもなくば無期限の世界探査中止を主張する意見があ

る。
本局の魔導師至上主義者、管理世界拡大推進派が主張するような、タキオン機関技術の強引な接収は地球防衛軍との全面戦争になり、夥しい犠牲を出してしまう。
それに夥しい犠牲を出しても管理局が地球連邦、地球防衛軍に勝てるかも分からない。
艦船同士の戦闘では、艦船の性能、戦術、地の利いずれも大きく管理局は劣り、空戦では、大気圏でも光速に近い速度で飛ぶことの出来るコスモタイガー相手では、空戦魔導師もそれを撃ち落とすには骨が折れそうだし、逆に自分たち空戦魔導師の身体にコスモタイガーから放たれたレーザーで風穴が開くだろう。
白兵戦では、初めから殺しに来る地球防衛軍の兵士相手に、殺傷設定戦闘経験がない者が多い管理局の魔導師では精神的に耐えられないだろうと推測されており、管理世界の地上部隊は、
「そんな馬鹿げた作戦に出せる人員の余裕はない!!やりたければ、〝海〟と〝空〟の方々でやってくれ!!」
と口を揃えて言い、各管理世界政府も反対の意向を示しているという。
そんなことをすれば、各管理世界の治安維持が立ちいかなくなるのは明白だったから、本局の強硬派もそれ以上は言えなかった。
しかし、一部が言う管理局憲章の改訂には反対意見が強い。
それは質量兵器の導入を認めることになり、管理世界の平和が脅かされる事に繋がるからだ。
この意見に対しては、なのはは、やや肯定的だ。
それは、自身の出身世界である地球での歴史が大きく関係している為である。
だが、この意見に対し、管理世界出身の非魔導師や低ランクの魔導師からは、
「一部の高ランク魔導師による支配体制が脅かされるからだろうさ」
「自分たちの権力や地位が脅かされるからだろう」
と、侮蔑の声が囁かれていた。

管理外世界出身であるなのは自身は、『高ランク魔導師＝この世で最も優れた人間、この世を管理運営する選ばれた人間』だとは思っていないが、本局にはそういう考えがはびこっており、一般の低ランク魔導師や非魔導師との溝が深まっていることは肌で感じていた。
事あるごとに教導生にも話して聞かせているのだが、自分を含め空戦魔導師自体が高ランク魔導師だから、我が事と受け止める者が少なく、歯痒い思いをしていた。
それになのは自身も低ランク魔導師や非魔導師から、陰口を叩かれた経験があるし、また、出身が管理外世界と言う事で遠回しの差別用語も受けた事が有る。
それでも彼女の内には、魔法は戦闘において最もクリーンな手段であり、それに比べて質量兵器は平気で人の命を奪い、争い事しか生まない危険なモノで、出来ればこの世から全ての質量兵器は無くさなければならないと思っていた。
しかし、ここ最近接触した世界や勢力の大半が、管理局の抑えが効かない軍事力を持つところばかりだ。
(私は・・・管理局は一体、どうしたらいいの？フェイトちゃん、教えてよ・・・)
管理局の未来に暗雲が立ち込め、ついつい、弱音が出てしまう。
地球防衛軍と接触しているフェイトたちなら、何らかの結論に達しているのではないか？
なのはは、この場に居ない無二の親友に縋りたい思いだった。

時空管理局次元航行本部・第七海上支部航路管制室
時空管理局の次元航行本部は、次元航路の要所に「海上支部」という中継ポイントを設け、航路警備の拠点としている。

ピーッ！　ピーッ！　ピーッ！
そのうちの一つ、第七海上支部に程近い次元空間に予定外の転移反応が発生したことを知らせるアラームが鳴った。

「ん?・なんだ?・」
この時間に転移してくる予定の艦船はないから、不審に思った管制士は即座にコンソールを叩き、データベースから艦船を特定する作業にかかったが、ほどなく緊張に引き締まった。
表示されたシグナルは、ラティオ捜索隊の一隻であるＸＶ級艦タイタンのものだった。
「きょ、巨人だ!!」
次元航行艦の一隻、タイタン・・・それは古代ベルカ神話に登場した、神々に戦いを挑んだ巨人族の長の名前で、局員からは『巨人』と呼ばれていた。
奇妙な偶然で地球のギリシャ神話、ローマ神話に登場する巨人族の神と同じ名前で、土星圏における地球艦隊の拠点である衛星の名前とも同じ名前の次元航行艦だった。
驚いた管制士は司令官に報告するとともにタイタンに通信回線を繋ごうとするが、応答がない。
そこに、報告を受けた司令官が現れる。
「巨人が戻ってきたって?・」
「はい。しかし、こちらからの呼びかけに全く答えません!!」
「呼び出しを続けろ!・巨人の映像を出せるか!?」
「お待ち下さい・・・映像出します!・」
一瞬置いて、次元空間に浮かぶ『タイタン（巨人）』の姿がメインモニターに映し出された。
「なっ!?」
「ひ、ひどい・・・!!」
「何だ、これはっ!?」
「一体何が有ったんだ!?」
司令以下の全員が顔色を失って立ち尽くす。
映し出されていたのは、ようやく見慣れたＸＶ級の白を基調とした艦体ではなく、原型を留めぬまでに傷つき、各所から煙を噴き出す赤茶けた残骸同然のタイタンの姿だった。
舷側には被弾跡らしい大きな穴が二つあき、そこからも火煙が噴き

出していた。
その姿は神話通り、神々に戦いを挑みながらもその戦いに負けて、地獄の底に落とされた巨人族の神、タイタンを告示するかのようだった。
タイタンをここまで傷つけた下手人は、誰が見てもラティオを襲った者だと、容易に想像できるだろう。
「すぐに本局に連絡するんだ！管制官は引き続き、巨人に呼び続けろ!!総員非常配置につけ！」
司令官はそう指示を出すが、彼らはタイタンの惨状に注意を奪われ、重大な事を見落としていた。
我に返ってコンソールを操作し始めた管制士が愕然とした。
「タイタンが最大巡航速度のまま、こちらへの衝突コースで直進してきますっ!!衝突まであと三分を切っています!!」
その報告を聞き、司令官も顔面蒼白になる。
たった三分・正確には既に三分を切っている短い時間では人員の避難転送もままならない。
「くっ、やむを得ない・・アルカンシェル発射用意!!」
「し、司令!?」
「巨人にアルカンシェルを撃つんですか!?」
「味方ですよ!?」
「構わん!!今はこの支部の職員の生命の安全を優先する!!責任は全て私がとる！」
司令官は苦渋の表情を浮かべ、タイタンに向けて大口径魔導砲アルカンシェルのスタンバイを命じる。
このままではタイタンと衝突し、この基地自体が崩壊しかねない。
味方艦を撃つのは忍びないが、この基地に居る何百人といる局員の生命には変えられない。
それにあのタイタンの惨状からみて、生存者は望めないだろう。
先程から管制官がずっとタイタンへと呼びかけているにも関わらず、その呼び出しに応じないのがその証拠である。
しかし…

「司令、本局から指示です！アルカンシェルの使用は認めず。艦体を何としてでも確保せよと！」
「何だと!?バカな!!」
（本局のボンクラ共は我々に死ねと言うのか!?）
本気で本局に呪詛を投げつけたくなった司令官に追い撃ちをかけるような報告が飛ぶ。
「司令、『巨人』の艦内に強い放射線反応があります！」
最悪だ・・この基地には放射線防護服の備えは少数しかない。
こうなれば・・・・。
「アルカンシェル以外の全砲門を開け！『巨人』の衝突針路を少しでもずらせばいい!!第十層より下にいる者には避難命令を出せ!!急げ!!」
「は、はい!!」
命令を出しながら、司令官は背中に冷たいものが走るのを感じていた。
基地下層部にいる者が第九層以上に退避するには最短でも四分～五分はかかる。
タイタンの転移を確認した段階で、既に詰んでいたのだ。
だからこそ、アルカンシェルを使おうとしたのだが、本局の・・こちらの事態を把握していない連中は、調査目的を優先させるためにタイタンの撃沈をさせない指示を出したのだ。
「全砲門、準備完了しました！」
「連続発射開始！砲身が焼けても構わん！」
「発射!!」
司令官の命令とともに、対艦船用の中・小口径魔導砲から無数の火線が伸び、巨人の名を冠した艦に突き刺さった。
たちまち中小規模の爆発がタイタンに発生する。
「タイタン、衝突まで後一分!!」
「撃ち続けろ！手空きの者は何かに掴まるんだ！衝撃に備えろ!!」
砲身が焼けんばかりに撃ち出される魔力弾はタイタンの装甲を貫徹して内部で炸裂する。
そして・・・・

「巨人の艦首が下がりました！」
「いいぞ、撃ち続けろ！」
タイタンの艦首が下がった・・もう一頑張りで衝突は免れる。
管制塔には僅かながら、緊張が緩んだ。
タイタンは全艦炎に包まれながら、第七海上支部の下部すれすれに通過した。
その様子を見守る一同が胸を撫で下ろした瞬間、タイタンの艦後部から凄まじい光芒が広がり、凄まじい衝撃波が管制塔を襲った・・・
タイタンの船体がこれまでの損傷に対し、終に耐え切れなくなり、大爆発を起こしたのだ。
その爆発の余波は第七海上支部へと襲い掛かる。
管制塔に居る者たちは自分たちの身に何が起きたのか分からないまま、一瞬の内に消滅した。

それから数日後・・・
時空管理局・第七海上支部、第五層～第六層通路
「うおおおりゃあッ!!」
ドガアアンッ！
ガラガラガラ・・・
通路を塞いでいた瓦礫を右拳の一撃で粉砕したスバル・ナカジマ一等防災士はさらに奥へと突入する。
（スバル、そっちはどうだ？）
（ダメ、生命反応は全然見つからないよ）
（クソ！こっちもダメだ。皆死んじまっている）
（こっちも同じくっス）
（無理はするなよ、助けに行った側が斃れるわけにはいかんのだからな。ディエチ、そっちはどうだ？）
（あと一・二撃ぐらいで鎮火できる！）
（急いでくれ!!）
（分かった）

タイタンの大爆発の爆圧と衝撃波を至近距離で受けた第七海上支部は、次元港等を擁する下部が大破。
管制室や居住ブロック等がある上部は、一見被災を免れているように思えたが、内部に多数飛び込んできたタイタンの残骸は致死量を大きく上回る人体に有害な放射能を被っており、その放射能が撒き散らされながら内部を切り刻んだのだ。
さらに、その時点でまだ生きていた中央空調システムのメインダクトにもその破片が飛び込んだため、人体に有害な放射能が支部全体に行き渡ることとなり、大多数の局員が急性放射線症に犯されることになった。
あの時、タイタンをアルカンシェルで撃っていれば、ここまでの被害は出なかったのは明白であり、事態を全く把握しておらず、アルカンシェルの発射命令を却下した本局の局員は後日、何かしらの責任を取らされるかもしれないし、管理局はうやむやにするかもしれない。
兎も角、予想外かつ最悪の事態に本局はパニックに陥った。
直ちに第七海上支部へ救援隊を派遣することになり、定期検査が明けたばかりのXV級次元航行艦クラウディアが第一次救援隊部隊に指名され、クロノはその救援隊の指揮官に任命された。
第一次救援隊のメンバーには、最近ナカジマ家の養女になったチンク、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディの旧ナンバーズ四姉妹が志願して加わった。
そしてクラナガン港湾特別救助隊からはスバル・ナカジマが本人の強い希望で派遣された。
彼女たちはその出自上、かなり苛酷な環境下でも行動できるのだが、それでもバリアジャケットだけで致死量を大幅に上回る放射能の中での活動は無謀であるから、他の隊員たちと同様にバリアジャケットの上から放射能防護服を着用し、スバル、ノーヴェらは、その上からデバイス（リボルバーナックル、ローラーブーツ）を着用した。
現在、彼女たちは中層ブロックで人命検索を行っているのだが、空気中の放射能濃度が高いため、これ以上の下層ブロックには行けず、なおかつ生命反応も確認できないまま行動限界時間を迎えようとし

ていた。
時空管理局　ＸＶ級次元航行艦クラウディア　ブリッジ
クロノの元には刻々と生存者救出・遺体収容の報告が上がってくるが、彼の表情は沈痛なままだ。
増え続けるのは死者の数で、何とか収容された生存者もその三割は一時間以内に息絶えてしまう。
医務室のシャマルからも悲痛な報告と要請が寄せられてくる。
「遺体収容袋が全然足りません。それに薬も・・・」
「いずれ到着する後続部隊に沢山積み込んであるとのことだ。あと半日でここに着くから、もう少し頑張ってくれ、シャマル医務官」
「は、はい・・・何とかやってみます」
放射能は空調システムを介して第七海上支部全体に回っており、タイタンの爆発で死傷しなかった者も皆、放射能でやられてしまった。
彼らを診たシャマルの診断でも、一刻も早く設備が整った病院で診察と治療を受ける必要があるとのことだが、彼女の表情と声色からすると、容態否、余命は限られているようだ。
当然ながら、放射線障害に治癒魔法は効かない。
内科・外科的措置で症状の進行停止や緩和はできても根治はできず、生涯にわたる後遺症に苦しむことになる。
こういった放射線障害の医療技術は、むしろ第二の地球の方が、ノウハウは豊富な分進んでいる。
ふと、クロノの脳裏に何度か通信を交わした第二の９７管理外世界こと地球防衛軍の士官が浮かんだ。
(あの地球なら・・ガミラスの放射能と戦った彼らの地球の医学ならば、被曝した者たちを救えるのだろうか？)
彼の予想通り、第二の９７管理外世界・地球連邦には、イスカンダルからもたらされた放射能除去装置と宇宙放射線病の治療処置も確立されていた。
だが、彼にはその事実を知る由もなく、すぐに首を横に振ってその考えを振り切った。

いずれにせよ、生存者は勿論、遺体もできるだけ後続部隊の艦に移して一刻も早く本局に送らなければならない。
そして、生存者と遺体の収容と移送が済んだら、分析作業が待っている。
何としても、攻撃してきた下手人を突き止めなければならない。
(もっとも、犯人がわかっても逮捕・拘束するのは困難だろうな・・・・否、出来ないと言った方がいいな)
恐らくはガトランティスや地球防衛軍と同等の質量兵器による軍事力を持っている。管理局で抑えられるものではあるまい。
これ以上次元航行艦と人材が失われることがあってはならない。
〝海〟では局員の動揺がひどく、〝空〟や〝陸〟への転属、あるいは管理局を自主退職する者が増えている。
これまで引き抜き放題に近かった〝陸〟からの異動もさっぱりで、〝海〟は退職・転属希望者の慰留に躍起にならなければならなかった。
空戦属性のある魔導師は〝空〟の空戦武装隊に行くこともできるが、空戦属性のない者が全員、〝陸〟に行けるかと言うと、それは否であった。
今回の事で、〝陸〟の方も強気で、面接や体力テスト等でふるいにかけられ、大半は追い返されているらしい。
追い返された者は、〝海〟に戻るか、管理局を退職するしか選択は残されていない。
人材不足で喘いでいる筈の〝陸〟が何故この様に異動を希望する者をふるいにかけるのかと言うと、
「〝陸〟に来る以上、全てここのやり方に従ってもらうのが当然だ。我々が必要なのはミッドチルダの住民のために身を粉にして働ける者なのだ。情勢が落ち着いたら再び〝海〟に戻ればいい、なんて思っている甘ちゃんはこちらから願い下げだ!!」
ミッド地上本部長のロールスロイス中将は、異動申請拒否の多さに対する苦情を伝えに来た本局のレティ・ロウラン人事統括官にそう回答した。

もっとも、レティも内心ではその通りだと思っていた。
〝陸〟への異動を希望した〝海〟の局員はその大半が、この情勢が落ち着くまで安全な〝陸〟に居り、解決する兆しがきたら、〝陸〟と言う苦労人が集まる地味で安月給な部署などで骨を埋めるつもりなど無く、さっさと〝海〟へと返り咲き、其処で再び権力を振るって他の管理世界を正義の名の下に傍若無人に管理（支配）しようと考えている者ばかりであった。
そんな優柔不断、下心や欲望がただ漏れた輩など、〝陸〟に移動しても今度はミッドの住人や配属された部隊でいざこざを起こしそうなので、正直に言って来られても迷惑だった。
だからこそ、ロールスロイス中将は、異動試験のハードルを通常よりも引き上げ、〝海〟からの異動希望者の要求を蹴って来たのだ。

ミッドチルダ　首都　クラナガン郊外、高町家
時刻は既に２２時を回っており、娘のヴィヴィオは既に就寝しており、なのはは週明けからの教導メニューをチェックしていたのだが、表情は沈痛そのものだった。
グリフィス・ロウランからの情報では、タイタンは完全に破壊された状態でクルーは全員殉職。
第七海上支部も、次元港等の艦船支援設備は大ダメージを受けたが、それよりも支部スタッフの殆どが急性の放射線障害で、既に六割以上が死亡か手の施しようがなく、残りの者も後遺症の心配がある。
それらの者も放射能の影響で余命が最大で数年と診断された。
現場に突入したスバルたち救助隊員も一日あたりの許容被曝量に達したら除染しても２４時間は再出動できず、捜索は思う様にはかどらないと聞く。
その間にも死亡者の人数は次々と増えていく。
そんな現実にスバルは悔しさを感じていると言う。
艦船のみならず、海上支部が半壊するほどの被害は管理局史上例がなく、管理局は元より、ただならぬ様子を嗅ぎ付けたマスメディアが独自の取材を始めており、プレスリリースせざるを得ないようだ。

（私たちが信じてきた魔法はこうも無力なの？）
今回の出来事で魔法・魔導師、管理局の限界に痛感したなのは。
そして、グリフィスからの情報で、正体不明の敵が核兵器を使ってきたと聞かされた時は愕然とした。
質量兵器の中でも最も忌むべき兵器・核・・・。
故郷の地球でも保持が規制されている御禁制の最終兵器・・・。
それを惜しげもなく使った敵に言いようのない憤りを感じるが、ＸＶ級や最新鋭のＳＸ級を撃破してしまう程の軍事力を持つ敵に魔法が通用しないのでは戦いようがない。
仮に根拠地を突き止めて、武力制裁を行ったとしても、返り討ちに遭い、一方的に虐殺されてしまうだけだ。
（忌み嫌っているだけでは何の解決にならないことはわかっているけど、質量兵器には質量兵器でないと対抗できないのかな？）
なのはに限らず、時空管理局の戦闘魔導師たちは、理想と現実の乖離に悩む者が多かった。
特になのはは、地球防衛軍の戦闘映像を目にして大きな衝撃を受けていた。
多数の艦船から撃ち出される大出力のビームとミサイルに乱舞する地球防衛軍の戦闘機。
メンテナンスに出していたレイジングハートを受け取りにいった時、マリエル・アテンザは、あの戦闘機は大気圏内でも運用可能と看破していた。
空戦魔導師が通常装備で活動できるのは対流圏内の中・低空域。
それ以上では断熱・耐圧スーツを着用し、酸素ボンベを追加装着しないと短時間で意識不明になってしまう。
ましてや成層圏以上の高度では活動できない。
宇宙空間なんてもってのほかだ。
だが、あの戦闘機は宇宙空間も成層圏以上の高層域でも運用できる。
航空自衛隊のジェット戦闘機もその位の性能はあるというから、２３世紀初頭の地球ならば宇宙・大気圏両用な戦闘機があっても何ら不

思議ではない。
（こんな戦闘機相手に勝てる訳ないじゃない・・・）
低空ならばまだしも、一撃離脱攻撃や高空の戦闘に持ち込まれたらどうにもならない。
ましてや宇宙空間では言わずもがなである。
（これが魔法の限界なの？）
あの映像は、現在の魔導師は純粋科学兵器に対抗できないことを如実に示していた。
もし、紅葉がこの場に居れば、「そんな事も分からなかったんですか？」と、呆れるだろう。
魔法の力で何とかなるのであれば、ヤマトがイスカンダルまで行き、その航海で、大勢の宇宙戦士の命を犠牲にしてまで、イスカンダルへ赴く事は無かっただろう。
ガミラスの遊星爆弾で地球が放射能塗れになる事も無かっただろう。
どんなに高ランクで優秀な魔導師でも強力な質量兵器や人体に有毒な放射能の前では無力なのだ。
管理局と提携を汲んでいるデバイス等の装備開発企業では、新たな魔導戦闘装備の開発も進んでいるが、あの戦闘機や宇宙戦艦に比べるとだいぶ見劣りするのは否めない。
魔導師は空気の無い宇宙空間では戦えないし、大気圏内での超音速飛行や成層圏内の飛行も出来ないし、バリアジャケットでは放射能は防げない。
ガトランティスには次元航行技術は流出していないようだが、地球防衛軍にはノアとテリオスの残骸が渡っているし、キャデラック、タイタンを撃破した未知の敵に次元航行艦が奪われた可能性もある。
もし、既存の艦船に次元航行能力を付加したら・・・・
例えばヤマト　や　まほろば　のような宇宙戦艦に次元航行能力が加わり、管理局の艦隊と交戦状態になったら、多分一方的な虐殺だ。
地球防衛軍とは今のところ話ができているが、今後共に手を取り合えるのだろうか？

時空管理局は質量兵器の全廃こそが次元世界の平和に繋がると主張しており、自分もその趣旨に賛成したから管理局に入った。
しかし、向こうの地球の人たちは、魔法ではなくタキオンエネルギー変換技術を得て、別の銀河まで往復する力と理不尽な侵略者と互角に戦う力を得た。
今さら自分たちよりも弱小な管理局の傘下に入るわけがないだろう。
先日、ギルフォードとやり合った地球防衛軍士官の態度からもそれは分かる。
管理局の主張は理解するが、地球が同じ道を歩むことはない。
ましてやそちらの世界の傘下（支配下）に入る事も絶対に無い。
彼らはそう言わんばかりの態度だった。
しかし、彼らは危険を冒してフェイトとティアナを助けてくれている。
単に人道的な理由というだけで、何のメリットもないのに・・・・。
そういう事をしてのける地球防衛軍を、単に質量兵器を使っているからといって危険視できるわけがない。
遥かに危ない勢力が続々と明らかになっているのだから。
しかし、管理局の・・本局の管理世界拡大推進派、魔導師至上主義者の連中は、ガトランティスや暗黒星団帝国と違い、地球連邦ならば、管理世界に組み込みやすいと思い込んでいるから厄介だ。
（違う道を歩む世界や組織とも折り合わないと、管理局は立ち行かない時期に来ているのかな？）
管理外世界で生まれ育った彼女の考えは間違っておらず、現実に即したものだが、管理局員の大半はまだそこまでに至らないのが現実だった。
そして、なのはの思いとは関係なく、管理局は再び理不尽な追い打ちに見舞われる事となった。

七十七話　管理局悪夢の日

時空管理局　本局・大会議場

大会議場では、ラティオ捜索艦隊と第七海上支部が壊滅した事件を受けての対策会議が、〝海〟・〝空〟・〝陸〟の幹部を召集して開催されていた。

損害は壊滅的以外の何物でもなかった。

捜索艦隊は旗艦キャデラックを含め全て全滅、数千人のクルーも全員が殉職した。

更に緊急転移して来たらしいタイタンの爆発の影響で第七海上支部も甚大なダメージを受けた。

タイタンには強力な放射線が検出され、飛散した残骸が第七海上支部を切り刻むとともに、メインの空調システムにも飛び込んだため、致死量の放射能がダクトを伝わって支部全体に回り、ほぼ全員のスタッフが急性放射線障害に冒され、既に四割を超える者が殉職してしまい、生存者も重度の放射線病に侵され、余命半年～数年と言う重傷を負った。

今回のこの事態に管理局は第七海上支部の被害は管制官らが迫りくるタイタンの対処を誤った結果と言う事で位置づけた。

だが、本来ならば、第七海上支部の管制官らはたとえ味方の艦を沈めてでも第七海上支部だけは守ろうとタイタンに向けてアルカンシェルの発射を本局へ要請したが、その要請を本局が蹴ったのだ。

ならば、第七海上支部壊滅の責任を負うのは当時、その指示を出した本局の管制官なのだが、本局は第七海上支部のメインスタッフが殉職をしたのを良い事に今回の責任を彼らに擦り付けたのだ。

まさに死人に口なしとはよく言ったモノだ。

そして・・・・

「何としても敵対勢力がどこなのか掴み、武力制裁を加えなければ、次元世界は混迷し、管理局の威信は地に落ちるぞ！ここはやはり、追加の探査部隊を出すべきだ！」

議題は今回の事態の根源とも言えるラティオ及び捜索隊襲撃犯の検挙となった。
「馬鹿か?貴様は!?今、ノコノコと出て行ったところで撃破されるのは目に見えているぞ!そんなに行きたいなら、貴官が自ら艦を指揮して行ったらどうだ!?」
「ふっ、出来もしないことを仰らないでもらいたい」
艦を出せと言った局員はいざ、自分が行けと言われたら、鼻で笑い自分は行けないと矛盾した事を言う。
その言葉に対し、穏健派の局員は怒気を露わにして言う。
「出来もしないことを言い立てるのは貴官の方だ！　それも安全な場所から動かずにな!!」
「なっ!?貴様は私を侮辱するか!?」
「貴官は、自己の才能を示すのに弁舌ではなく実績を以ってすべきだろう!?他人に命令するようなことが自分には出来るかどうかやってみたらどうだ!?」
「なんだと!?」
案の定、会議場は本局の次元世界拡大派と慎重派、本局の慎重派側に立つ〝陸〟の幹部士官に分かれて大激論になった。
議場の一角に席を与えられたカリム・グラシアは暗い面持ちで議論を聞いていた。
彼女は聖王教会騎士であるとともに、時空管理局では少将待遇の理事官である。
(次元世界拡大と現状維持。どちらに転んでも前途は容易ではないわね・・・)
このまま管理世界の拡大方針を維持すれば、今回の正体不明の敵やガトランティス、暗黒星団のような好戦的かつ極めて強力な軍事勢力と再び衝突する可能性がある。
反面、現状維持を通せば、管理世界全体が停滞し、活力を失う。
活力が失われれば、今まで表面化しなかった様々な問題が表面化する。
最大の問題は少数の高ランク魔導師と低ランク魔導師に非魔導師

の大多数勢力の溝だ。
時空管理局、特に本局の将官や提督は大半が高ランクの魔導師だ。
逆に、非魔導師では、今は亡きレジアス・ゲイズの中将が最高位だった。
〝陸〟の部隊ではそうでもないが、本局系の部隊では往々にして差別事例が多々あった。
むろん例外もある。
旧機動六課のように、本局系高ランク魔導師と低クラス魔導師や非魔導師の間の折り合いが良かった部隊もあるが、旧機動六課の場合は、副隊長以上の幹部は皆、管理外世界の出身者や、一定期間管理外世界で生活した経験を持つ者ばかりで、彼女たちには非魔導師への差別意識自体が存在せず、かつ差別を許さなかったためで、現実は幹部の人柄に左右されることが多かった。
最も隊内でいざこざはあった。
代表的な出来事がティアナ・ランスターと高町なのはとの間で行われた模擬戦だ。
ティアナは他のＦＷメンバーが自分よりも魔力素質が高かったことにコンプレックスを抱いていた。
また、なのはの教導に関しても、本当に自分は成長しているのかと言う疑問を抱いていた。
その不安と不満がなのはを相手に行った模擬戦で爆発したのだ。
結果はなのはがティアナを力でねじ伏せたが、その後はちゃんと向き合って話をして、その確執も短期間で解決された。
機動六課の例は余りにも特殊で、もし現状維持が恒常化すれば、この対立が表面化し、時空管理局は内側から揺さぶられることになる。
そして第三の選択――地球連邦・地球防衛軍の持つタキオン粒子エネルギー変換技術の導入――は、次元航行艦の大幅な性能と戦闘力向上に貢献するだろう。
但し、あくまで導入できれば、だ。
最近はトーンダウンしているが、管理世界拡大推進派はかの地球の技術を質量兵器として接収することを主張している。

しかし、例の通信ポッドとクライスラーの一件に加え、地球防衛軍の宇宙戦艦はアインヘリアル以上の威力を持つ艦砲を多数装備し、かつアルカンシェルを上回る戦略砲も装備し、一隻で次元航行艦一個艦隊以上の戦力を持つと推定されている。

さらに、中・小型の戦闘艦の存在も確認され、それらもＸＶ級、ＳＸ級を凌ぐ戦闘力を持つと判定されたため、実力による接収は事実上不可能という結論に近づいている。

正式に技術提供を受けるにしても、当然見返りを用意しなければならない。

地球連邦と管理局・管理世界間の相互不可侵協定の締結はもとより、次元航行技術の提供、そして、時空管理局憲章と諸規則の改定――質量兵器の否定や魔法中心主義と魔導師主導の管理局システムを根本から改める――を迫られよう。

タキオン粒子のエネルギー変換技術に魔法は必要ないからだ。

でなければ、地球側の警戒心を解くことはできないが、既得権を奪われる魔導師たち、特に高ランク魔導師は強く反発しよう。

自分たちの地位と権力が脅かされるのだから・・・

とはいえ、地球側が好戦的でないことは本当のようで、先方に保護されているフェイトら三人が帰還し、彼女たちが持ち帰るであろう数々の情報を精査してからでもいいのではないか？

しかし、今この場で自分が出来ることは、魔導師至上主義者、管理世界拡大推進派が唱えている追加の探査部隊の出征を阻止する事だとカリム自身は考えていたのだが、その思考は一つの報告で中断された。

「会議中失礼します。ボラー連邦、ベムラーゼ首相と名乗る人物から、時空管理局宛てに映像通信が入っています」

との緊急報告がもたらされたのだ。

会議は一時中断され、その映像通信を見ることになったのは当然だ。

その聞いた事もない世界・「ボラー連邦」がラティオと捜索隊を攻撃した勢力と関わりがあると予想されたわけだからだ。

映像はどうやら録画されたものらしく、曇った空模様に氷と雪に覆われた野外光景が映し出された。
見て分かる通り、非常に寒そうだ。
それは別に構わないのだが、カメラアングルが移動されると、議場から悲鳴や憤激の声が上がった。
其処には、四十人ばかりの、〝海〟の制服を着た男女が十字型の柱にかけられていた。
中には十歳そこそこの子供も何人か含まれている。
彼らの顔は一様に恐怖と絶望で染められ、中には失禁した者もいる。
そして、薄水色の肌をした肥満体型の男が玉座の様な椅子に座りながら登場した。
「私は、ボラー連邦首相のベムラーゼである。次元世界の法と正義の守護者を僭称する時空管理局の諸君。お前たちの同胞は不敵にも私の所有物を横から掠め取ろうとした。故に許しては置けぬ!!これよりその愚か者どもへの裁きを行う。自分たちが招いた愚かな結果を、最後まで見届けるがいい。アハハハハハ・・・」
ベムラーゼが高笑いを止め、サッと手を振り上げると、銃(レーザーライフル)を構えた兵士たちが張り付けられた局員に対し、その銃口を向ける。
そして、手が振り下ろされると、銃口からレーザーが一斉に放たれ、張り付けられた局員の頭部や心臓に命中し、彼らは絶命する。
突然行われた公開処刑の映像に殆どの者が映像を直視できず、口許を押さえながら議場から走り出ていく者もいる。
レティ、カリムは席を立つことはなかったが、顔面蒼白になりながらも憤怒に身を震わせていた。
「も、もういい!映像を切れ!!今すぐに!!」
見かねた〝海〟の高官が映像を切るよう命じ、映像は消えた。
だが、追い撃ちをかけるように予想外の事が起きる。
各世界の議員毎に開かれている映像ウィンドウが突然明滅したかと思うと、再びベムラーゼの顔が映る。

「途中で切るとは随分無粋な事をするな。だが、罪人共の処罰はまだ終わっていない。如何なる事態を招こうと、それは貴様らが責めを負わなければならぬのだ!!刑の執行を続けろ!!盗人共にはおしおきだべぇ～!!」

ミッドチルダ　首都　クラナガン　商業エリア及び繁華街エリア

それは唐突に現れた。

ビルに据え付けられたスカイビジョンの映像が突然乱れ、暗い空間の映像に切り替わる。

「ん？何だ？」

「何・・アレ・・・？」

スカイビジョンを見上げていた市民たちは訝しげな表情をしたが、次の瞬間、驚愕と恐怖のそれに変わった。

画面に映る空間が明るさを増すと、そこには〝海〟の制服を着た男女が磔にされている映像が流れた。

「私はボラー連邦首相ベムラーゼ。次元世界の管理世界とやらに住まう者達よ。お前達が守護者と頼む時空管理局とやらが、この大宇宙では弱き者でしかない事を教えてやろう」

嘲笑を浮かべたベムラーゼがそう告げるや画面が切り替わる。

ずんぐりした青色の艦艇からの凄まじい砲火によって無数の穴を穿たれ、艦体を切り刻まれて爆散するＸＶ級航行艦。

そして画面は、再び変わり、次に映し出されたのはつい最近、管理局が自信を持って送り出したＳＸ級キャデラックにＸ級巡航艦の姿が映し出された。

とは言え、モニター映るキャデラックもＸ級巡航艦もボロボロの状態であった。

その周りを囲むように細長く鋭角的でスマートな艦体を持つ艦が甲板から紫色の細長いモノ・・・対艦ミサイルを発射すると、キャデラックとＸ級巡航艦を包み込むように突き刺さる。

観衆の中から悲鳴と絶叫が上がる中、キャデラックとＸ級巡航艦の艦体は中央から両断されたかと思うと、大爆発の炎に包まれ四散し

た。
見ていた市民は泣き叫ぶ者、怒りの声を上げる者、失神して倒れ伏す者等々、平静を保っていられた者は誰一人としていない。
そして画面は最初の場に戻ったが、これこそが真の悪夢の幕開けだった。
ベムラーゼが続いてサッと右手を上げると、磔台近くの雪を掻き分け、キャタピラの着いた特殊車両・戦車と呼ばれる特殊車両が止まる。
一体何をするつもりなのだろうかと誰もがそう思っているとベムラーゼの上げた右手が再び振り下ろされる。
その直後、戦車の砲身から高熱の炎が磔台に向け、放たれ、磔にされている局員たちの身体を焼く。
局員たちは、悲鳴と絶叫を上げて、生きながら焼かれていった。

クラナガン　西部、陸士第１０８部隊　隊舎
テレビからは生きたまま焼かれ、断末魔の悲鳴を上げながらもがき、絶命していく管理局員の無惨な姿が流れていた。
「おぇぇ～・・・・」
「うぇぇぇぇぇ～・・・・」
「ひどい！」
「悪魔め！」
「外道がっ！」
ボラー連邦が行ったＳＸ級次元航行艦とＸ級巡航艦の撃沈と公開火炙りの刑の一部始終はクラナガンを初めとするミッドチルダ全土と一部管理世界のメディアをジャックして流された。
本局大議場に流された、処刑の映像すら生温い残虐極まる映像を目にした市民の相当数が激しい精神的外傷を負わされた。
当然、管理局の諸部隊にも映像が流れたわけだが、たちまち市民からの電話が殺到して対応に追われることになり、それは１０８部隊も例外ではなかった。
映像の真偽を確かめるもの、映像を見た者が倒れ、救急車の出動を

要請する者等々、あちこちでパニックが発生したのである。
「今のところ取り乱す者はいませんが、隊舎全体で二割は卒倒したり、吐き気を催したりして戻しました」
「そうかい。まぁ、無理もねぇな」
カルタスの報告を聞き、部隊長のゲンヤ・ナカジマ三佐が苦い表情で頷いた。
一見平静に見える部隊長だが、ひじ掛けを握る手は憤怒で震えていた。
そして、すかさずカルタスに指示を出す。
「市民がパニックになりかねんぞ。総員緊急配置だ！」
「了解!!」
１０８部隊の隊員達は動ける者は、急ぎ街へと出て、市民の暴動に対処するための行動に入った。
パニックに陥ったのは市民だけではなかった。
映像を目にした様々な隊舎の時空管理局職員らも昏倒したり、その場で嘔吐したり、泣き叫んだりで、職務遂行困難になった者が続出しており、それはエース・オブ・エースも例外ではなかった。
管理局でエースと呼ばれる彼女も所詮は殺し合いをした事もなく、戦争による人の死を目の当たりにした事のない年相応の女性と言う訳だ。

ミッドチルダ　首都クラナガン　時空管理局首都航空基地、教育隊隊舎
教導隊　隊舎の女性用化粧室で、なのはは顔面蒼白になって、必死になって吐き気に耐えていた。
映像を見た者の多くが卒倒したり泣き叫んだり、嘔吐したが、気が遠くなる思いをしながらも嘔吐しなかったのは、流石エース・オブ・エースというべきか？
「どうして・・・どうして・・あんな事を・・・・あんなひどい事を・・・・」
鏡に向かって憤怒の声をぶつける。
時空管理局が様々な矛盾を抱える組織であることは、十年以上働い

ていれば嫌が応でもわかってしまう。
それを何とか改善しようと、親友たちと共に機動六課で頑張ったりしてきたのだ。
しかし、ボラー連邦という国家はなのはの常識を悉く打ち砕くように拳を振り下ろしてきた。
残虐極まる公開処刑もさながら、管理局の唱える次元世界観を嘲笑とともに斬り捨て、無限の大宇宙の中では、管理局は単なる弱者に過ぎないと断言したのだ。
当然強い反感を抱いたが、管理局自慢のＳＸ級、Ｘ級の艦船が一矢報えないままボラー連邦の対艦ミサイルの餌食になっていく様を見せ付けられては、一言も反論できない。
艦の性能は勿論、戦術面でも明らかにボラー連邦が上であることを、不特定多数の市民が目にしてしまったのだ。
つまり、次元航行艦部隊の威信は完全に失墜した。
管理局が厳重に緘口令を敷いて来た事が全て無駄になってしまったのだ。
艦船には素人のなのはでも、その事実は痛い程理解した。
なのははそこで、もう一つの事実に気づき、戦慄する。
あの映像は、ミッドの各地で放送された。
愛娘、ヴィヴィオの通っているＳｔ．ヒルデ魔法学院では、あの映像を見せない様にしてくれただろうか？
もし、見ていたとしたら、ヴィヴィオの精神状態の事が心配だ。
更に、もう一つ・・・・。
処刑された者たちはＳＸ級艦のキャデラックとベントレーのクルーだった。
ということは、防衛軍に回収、調査されたノアやテリオス同様、管理局の次元航行艦はボラー連邦に捕獲されたという事で、管理局の機密事項や次元航行の技術もボラー連邦に渡る事を意味していた。
実際にボラー連邦がミッドに電波ジャックを行って処刑動画をながしている。
恐らく次元航行艦の通信網を調査・逆探して流して来たのだろう。

そうなったら、ボラー連邦が将来的には管理世界や本局等に対する軍事行動に出てくる可能性が大きいのだ。
もしそういう事態になったら・・・
ボラー連邦が敵に対して極めて残忍であることはさっきの映像で証明済みだ。
対して管理局の対人戦闘は、基本的に非殺傷設定であり、なのははもちろん、管理局の魔導師たちはそれを誇りにしてきた。
しかし、ボラー連邦は最初から殺すつもりで来るだろうし、民間人をも容赦なく殺戮するだろう。
そうなった時、管理局の魔導師は相手を殺すつもりで戦えるのか？
八神はやての守護騎士たちは心を決めて戦えるだろう。
しかし、自分たち魔導師はどうだろうか？
悲しみを打ち砕く力として魔法を使ってきた事を誇りにしてきたが、いくら敵とはいえ、相手を殺し続けることに自分たちは耐えきれるのか？
恐怖に打ち勝って戦い続けることができるのか？
そして、自分は娘（ヴィヴィオ）を守りきれるのか？
高ランク魔導師：管理局のエース・オブ・エースと言われながら、肝心な時に動けねば全くの役立たずではないか・・・・。
胸中に広がる絶望感は、『聖王のゆりかご』が起動した時とは比べものにならないほど重く暗かった。

ミッドチルダ、時空管理局地上本部一階、一般受付
「あの映像は事実なのか!?」
「映画の宣伝や合成映像じゃないのか!?」
「管理局ご自慢の艦船はあんなに弱かったのか!?」
あの惨劇の映像が流れた直後から、地上本部や管理局各部隊には市民が直接押しかけ、電話も常に鳴りっぱなしで、局員らは事実関係の説明を求めていたが、当の局員もわからないのだから説明のしようがない。
そして、ベムラーゼの陥穽に嵌められた事に気づいた本局の動揺も

著しかった。
管理局を弱者と堂々と発言し、それを証明するかのように行った管理局艦船の撃沈する映像と局員を残虐な方法で処刑し、その映像を一般市民に直接見せつけたボラー連邦とその国家元首、ベムラーゼ首相に対する感情は、もはや憤怒を通り越して憎悪に近い。
「あのような人でなしは許せん！正義の鉄槌を下さなければ、次元世界は奴らにいいように掻き回されるぞ！」
「許せん気持ちは皆同じだ！しかし、ボラー連邦の艦船はガトランティス同様、戦闘力はとんでもないものだぞ！我々の艦船で対抗できるのか!?」
「向こうは我々に明らかに挑戦してきたのだ！しかも、管理局を堂々と弱者だと罵り、最新鋭艦の次元航行艦までもが奴らの手に落ちたのだ。モタモタしていたら、次元航行技術も奴らの手に渡る恐れが強いのだ！奴らがこちらに来る力をつける前に討伐艦隊を差し向けて、踏み潰せばよかろう！」
等と激論が交わされている。
自分たちが拠って立つ力の象徴たる次元航行艦がろくに反撃できぬまま一方的に撃破されていく。
まだ若い局員たちが、あんな残虐なやり方で殺されていく様をただ見ているしかできず、彼らは惨めな敗北感と無力感と屈辱のぬかるみに突き落とされていた。
時空管理局の戦力は管理世界でしか通用しない。
立て続けに発生した艦船の喪失で管理局への信頼が揺らいでいるところに、今回の映像とベムラーゼの宣告は管理局にとって決め手となった。
管理局：特に〝海〟の体面と信頼は地に墜ちたのだ。
この敗北を挽回し、市民からの信頼を回復する為にはボラー連邦に武力制裁による大打撃を与え国家元首たるベムラーゼを逮捕するしか打開できない。
ここで、負けを認め、ボラー連邦を放置すれば、先程言ったように今度は管理世界にボラー連邦が攻め込んでくる可能性もあるし、管理

世界は一層動揺し、治安の悪化と反管理局勢力の跳梁跋扈を招く。
強硬派から出た主張は過激だが、的を射たものであり、慎重派も強く反対はできない。
ここはやはり、地球防衛軍に支援要請ないし、技術提供を受けてはどうかとの意見も出るには出たが、
「奴らもボラー連邦と同じ質量兵器信奉者だ！」
「そんな連中の力を借りれば次元世界に質量兵器が拡散するぞ！」
という魔導師至上主義者、管理世界拡大推進派に押し切られてしまった。
彼らとしては珍しく、管理外世界でも高魔力を持つ者は管理局へ入れたがるくせに、今回の事態収拾は全て管理局の手で行おうと言っているのだ。
もっとも、今の地球に管理局を支援する余裕があるかどうかはわからないし、技術提供を申し込んでも、通信ポッドとクライスラーの一件があるため、すんなりと行くとは限らない。
そんなやり取りを聞いているのか聞いていないのか、分からないが、カリムは、一人顔を頷かせていた。
（また、預言を防ぐことは出来なかった・・・）
ＪＳ事件、クライスラー遭難事件、そして今回のボラー連邦との一件。
恐らく今回のボラー連邦との一件が二番目の預言だと言う事は、カリムは直ぐに察しがついた。
預言にて起こる事が分かっていながらも自分はそれを防ぐことが出来なかった。
カリムは果てしない無力感と罪悪感に襲われていた。

海上第七支部付近空間、次元航行艦クラウディア　士官用ラウンジ
「「「「・・・」」」」
第七海上支部の下層部に突入して人命検索と救出任務に当たっているスバルとチンク、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディの新ナカジマ姉妹たちは、コーヒー、紅茶の湯気を顔に当てながら、一言も出せず

にいる。
ここは士官専用スペースであり、本来は准尉以上の階級の者しか入れない部屋で、スバルやノーヴェたちは士官ではなく、本来は士官同伴でないとここには入れないのだが、
「過去最悪の事態だ。非常に危険な場所へ突入する者に、階級の上下などない！」
と、クロノが艦長権限で曹長以下の突入隊員にも、放射能除染処置を受けた後の入室権限を与えていた。
第一次の突入隊員だったスバルたちは、撤収から最短で、あと十二時間経過しないと再突入できないため、休息を兼ねてここにいる。
現在は第三次隊が突入しており、聖王教会から派遣された教会騎士団も含まれ、修業予定者であるセイン、オットー、ディードの旧ナンバーズも志願し、救助隊に名を連ねている。
特に旧ナンバーズの中でも特殊なＩＳスキルを持つセインの能力、ディープダイバーは壁や地面の中に自在に潜れるため、今回の救助活動には重宝している。
「酷いよ、何であんなことを平然と出来るの・・・？」
見知らぬ敵への憤りを、スバルが絞り出すように呻く。
艦長のクロノを除くクラウディア乗組員とスバルたち派遣隊員には、ボラー連邦の事や、もっと残虐な行為が行われた事実はまだ知らされていない。
これはセインたち、追加派遣された艦と派遣隊も同じだ。
スバルが言った「ひどい」とは、タイタンをここまでボコボコニした連中の事を指している。
「敵が誰かはともかく、管理局やドクターたちとも違う正義と価値観を持つ者たちのようだな・・・」
スバルの言葉にチンクが応じる。
「身を置いた場所によって、正義の概念も違うだろう。私も奴らのした事を許すつもりはないが、それを以って奴らを絶対悪とは言えんさ・・私たちが知らないだけで、何かしらの事情が向こうにもあったのかもしれない」

「けど、被害はここだけで済んでいるのかな？」
ノーヴェが声のトーンを落とした。
彼女の勘は冴えており、まさにその通りであった。
「他にも被害が出ているかも知れないって事ッスか？」
「クロノ提督は何も言っていないけど、あえて伏せている可能性もある訳わけだね」
ウェンディとディエチが推測ではあるが、ノーヴェの言っている事も一理あると言う。
「でも、私たちはこの敵に対抗できるんッスかね？」
ナカジマ姉妹のムードメーカーであるウェンディも流石にショックだったのか、声のトーンが落ちている。
「これまでも質量兵器の犯罪はあったけど、せいぜい銃器や手榴弾を含む爆弾、大きくても携行型のロケットランチャー位だった・・・これだけの被害となれば、ラティオが発見したという新たな世界がそっくり敵に回ったと言うことかもしれないな」
チンクが今回の敵の存在を推定する。
最新鋭の次元航行艦を含む、十隻の次元航行艦をいとも簡単にひねってみせたのだ。
もはや反管理局の武装勢力やテロリストの様な類ではなく、暗黒星団帝国やガトランティス、地球防衛軍などと同じ、世界規模の軍事勢力だろうと誰でも推定できる。
「魔法文化はなく、純粋科学兵器で戦う世界とこうも続けて遭遇するとはな」
管理局にとっては厄年であり、管理局は、もうダメかも知れない、とは口に出さないチンクだった。
今、言えばスバルに強い不安を抱かせ、救助作業に支障をきたすと思ったからだ。

次元航行艦　クラウディア　艦長室
「ゴク・ゴク・ゴク・・・ふぅ～・・・・」
クロノはミネラルウォーターと一緒に胃薬を飲み下し、ひと息つ

く。
第七海上支部の半壊をも上回る悪夢のような情報に冗談ではなく胃痛がひどくなった。
あれは悪意なんてものではない。
以前地球の歴史書の中に登場し、なのはやはやての地球でもごく僅かだが、未だに存在する独裁国家そのものだ。
あの世界はガトランティス同様、交渉は不可能だ。
ではどうする？
武力制裁しようにも、返り討ちに遭うのがおちではないのか？
それにベムラーゼは確かに敵であるが、彼が治めている世界、ボラー連邦にも国民はいるだろう。
彼らまで討つ必要はない。
それに、あのベムラーゼが例え独裁者であっても、ボラー連邦国民にとっては良き為政者であれば、彼を討つ時空管理局は、ボラー連邦国民にとっては敵だ。
時空管理局の敵だということだけで排除していいのか？
そうなれば、いずれは地球防衛軍も敵と認識し、戦う事になるかもしれない。
そこまで思い至ったところで、クロノは現実に引き戻される。
ボラー連邦の軍がどれほどの規模なのかわからないが、艦船の性能や武装は管理局のそれを凌いでいる事は明らかであり、もしかしたら、地球防衛軍と同様、宇宙戦闘機もあるかもしれない。
そしてあの対艦ミサイル。
発射されてから不規則な動きをしたと思ったら、急加速し、接近、目標にほぼ確実に命中する。
そんな強力な兵器を持つ軍隊相手に、非殺傷戦闘を基本とする管理局が戦えるのか？
クロノの脳裏に何度か通信で顔を合わせた地球防衛軍士官の顔が浮かぶ。
彼らならば、たとえ敵が優勢でも臆さずに戦うだろう。
管理局はいくつかの反管理局武装組織と戦っているが、管理局の方

が戦力、物量とも上回っている。
　しかし、ガトランティス、地球防衛軍、暗黒星団帝国、ボラー連邦いずれも物量はわからないが、戦力が段違いで戦意も旺盛で敵を殺すつもりで戦う。
　そんな相手に、管理局が仮に物量で勝っていてもアドバンテージにすらならない。
　今すぐ、または明日、明後日にボラー連邦が管理世界に攻めて来るとは思えないが、次元航行技術を自分たちのものにした時、攻め込んで来てもおかしくはない。
　その時に必要なのは、敵を殺してでも大切なものを守る覚悟と、敵と互角に戦うための術だが、管理局には両方とも足りない。
「はぁ～…これが魔法の…管理局の限界なのか？」
　奇しくも彼の口からなのはと同じ、暗然たる呟きが漏れた。

ミッドチルダ　首都　クラナガン郊外、高町家
　ボラー連邦がミッドの放送系統を電波ジャックし流したあの映像の影響で、関係者の動揺が著しいと判断され、教導プログラムの一部が中止された為、なのはは定時で勤務を終え帰宅した。
　幸い、あの映像が流された時間は学校の授業中だったため、ヴィヴィオら学生たちはあの映像を見ていなかったが、周囲の大人や街中の異様な雰囲気から何か変事があったことは悟っていたようだ。
　そして、ヴィヴィオは疑問をストレートに訊ねる。
「ママ、かんりきょくの船がたくさんやられたってホントなの？」
「うん…」
　すでに子供たちにもその話が伝わっているのか、既にプレスリリースはなされており、管理局次元航行本部の記者会見も間もなく始まるので、なのはも否定できなかった。
「かんりきょくの…まほうの力でも負けちゃったの？」
　不安げな娘を、なのはは抱き締める。
「うん。負けちゃった…魔法の力でも勝てなかった…でも、ヴィヴィオは何があっても、なのはママが守るからね」

「・・・早く大人になって、強くなりたい。そしたら、ママを守ってあげられるのに・・・」
ＪＳ事件の折、ヴィヴィオは、体内にレリックを埋め込まれ、『聖王のゆりかご』でなのはと対峙した時、美しい女性姿であったが、最終的に体内に埋め込まれていたレリックはなのはの手によって摘出、破壊され、同時に聖王の鎧と呼ばれる絶対防御に近い鎧も同じく破壊された。
「・・・ヴィヴィオ」
愛娘を抱きながら、なのはは思考を巡らせた。
こんな事を考えたくはないが、もしミッドチルダが危なくなったら、子供たちだけでも地球へ・・・。
あるいはあの第二の地球に疎開ができないものか？
生まれ故郷である地球には両親、兄、姉たちがいるし、もう一つの地球には、もしかしたら、ボラー連邦とも互角に戦えるかもしれない。
それに今ならあの地球にはフェイトたちもいる。
地球防衛軍が如何に時空管理局に不信感を抱いていても、フェイトたちを救助したのだ、局員でもない子供たちを邪険に扱いはしないだろう。
少し前までは、こんな事なんか考えなかったのに・・・。
魔法の力で質量兵器を廃止し、次元世界を平和にするという管理局の理念に賛同したから局に入り、懸命に努力して、少しは世界のために貢献できたという自負があった。
しかし、ガトランティスや地球防衛軍等、魔法とは無縁で、かつ桁外れに強力な質量兵器を使う世界の宇宙軍隊や武装勢力は、なのはや管理局員達の自負を微塵に打ち砕いた。
アインヘリアルやアルカンシェル以上の威力と思われる強力なエネルギー兵器を持つ宇宙戦闘艦に宇宙・大気圏両用の機動兵器等、ＳＸ級艦やオーバーＳクラス魔導師でも太刀打ちできない。
彼らの力の前に自分たちの魔法は無力なのか？
なのはは、後日の定期連絡において、ティアナから、
「生身で飛んだり戦うことができない人が強力な鋼の翼と鋭い爪や牙

を求めるのは当然の事で、身一つでも飛べたり戦える魔導師や管理局の理屈だけでそれらを没収するのは、極論すれば『非魔導師は魔導師に従え、逆らうな』と言うようなもので、傲慢以外の何物でもありませんよ」
と言われ、絶句することになる。

時空管理局・無限書庫
次元世界最大の蔵書数を誇る超巨大図書館の実質的責任者であるユーノ・スクライアは、十年来の腐れ縁であるクロノ・ハラオウンと、モニター越しに話をしている。
普段はクロノが突然大至急の資料請求をするため、大抵一悶着あるのだが、珍しくも口論がない。
「そうか、やはり見つからないか・・・」
「恐らくは過去にどこの管理世界とも接触がなかったんだと思う」
クロノとフェイトがヤマトに遭遇してから、ユーノは事ある毎に関係する資料を探しているのだが、無限書庫をもってしても、もう一つの地球やヤマト、ガトランティス、暗黒星団帝国、ボラー連邦、あるいはタキオン粒子のエネルギー変換技術に関する資料は発見できていないのだ。
「〝海〟の様子はどうなんだい？」
「『最悪』の一言だよ。遠方世界への単独航行は禁止されたから、船の手配は一苦労さ。おまけに出航を渋る艦長も相次ぎ、転属や退職を願い出てくる者も増えている。正に負の連鎖さ」
「あれだけ、自信満々で送り出したにも関わらず、一方的にやられた上、あんな残酷な殺され方をされてはね。意気消沈するのも仕方ないといえば仕方ないが地球防衛軍から技術供与を受けるという提案はなかったのかい？」
ユーノの言うとおり、地球防衛軍から造船技術やタキオンエネルギー変換技術を提供してもらうのは一つの手だ。
しかし、
「その提案は議題にも上がったし、僕もそれが最善だとは思うが、管理

局や管理世界の質量兵器アレルギーを何とかしなければならない。それに、たとえ技術供与を得ても、こちらの力で艦船を建造し、運用できる人材を育てるまでには、相応の期間が要るだろうな」
「それもそうだけど、それ以前に根本的な問題があるな」
ユーノが話題を変えにかかる。
「根本的な問題？」
「ああ。地球防衛軍は地球連邦政府の指揮下にある一つの機関なんだろう？地球の常識では、軍に対しては文民統制がなされていて、軍や警察が独自に外国と交流することは禁じられている。ということは、防衛軍に要求したって『政府に言ってくれ』と言われるだろうし、地球連邦政府は政府で、管理局を外交相手と認識する事はありえないんじゃないかな？」
「シビリアン・コントロールか・・・確かにそのとおりだな。かといって、数ある管理世界政府の了承を、管理局がいちいち取るようなことをするとも思えないな」
「管理世界といっても、一桁台のところはともかく、強引に管理下にした世界は、今でも反管理局運動や管理局関連の施設に対するテロ行為が今でも続いている所も少なくないからな。素直に従ってはくれないだろうな」
ロストロギア収集や管理世界への編入の際、結構強引だったり、えげつない手段をとった事もあり、結果、住民の反感や憎悪を買った例も見聞きする。
地球防衛軍に回収されたノアやテリオスにもそういう「黒い」資料があったと聞く。
そういう資料が回収されていれば、地球防衛軍や地球連邦政府にとって、時空管理局はガトランティスに準じた侵略的要素を持つ勢力と見られるのではないか？
管理局に身を置く自分さえもそう思えるのだから、地球連邦、防衛軍がそう思っていてもおかしくはない。
クロノのこの懸念は、不幸にも的中していた。

此処で舞台はミッドから地球へと移る。

宇宙戦艦　まほろば　士官会議室

まほろば　の艦内にある会議室では、まほろば　の幹部乗組員とヤマトの幹部乗組員が集まり、会議を行っていた。

議題は当面の不安要素――敵性軍事勢力――についてだ。

ガミラスや白色彗星帝国は天の川銀河の外から侵略してきたし、ペテルギウス、イスカンダルで遭遇した暗黒星団帝国もその可能性が高い。

しかし、これからの地球は宇宙開拓の為、天の川銀河の内側――深宇宙――に向かう。

当然星の密度も高くなり、高度知的生命体――ヒューマノイド――が住む惑星もあるだろう。

彼らが宇宙に進出するだけの文明レベルになければ一切接触しないでやり過ごせばいいし、宇宙に漕ぎ出す文明・技術を持ち、平和・穏健的な勢力ならば、対等な外交関係を持つ選択も考えられるが、好戦的・侵略的な勢力ならば話は違う。

基本的には、可能な限り戦闘は避けねばならないが、こちらの艦船や乗組員に危険が迫れば排除しなければならない。

「ガミラスとは極めて特殊ではあるが、休戦状態と言っていい。ガミラス艦隊と仮に遭遇しても、こちらから攻撃することは厳に慎まなければならない。ガミラス艦隊もこちらを見つけ、いきなり攻撃してくることは無いだろうが、用心に越したことは無い」

新見、永倉、井上、ギンガ、フェリシアらの　まほろば　の幹部乗組員、古代、島、真田、雪らヤマトの幹部乗組員達も些か複雑な面持ちながらも頷いた。

「彗星帝国の残党に対しても、基本は無視でよろしいんですか？」

「組織的な報復攻撃をしてくる可能性は低下しているが、あちらが攻撃してくるのであれば、防衛行動を取らなければならないだろう・・・・問題はペテルギウス、イスカンダルで遭遇した暗黒星団帝国。それと・・・・」

「暗黒星団帝国以外にも厄介な勢力があるのですか？」
言葉を濁らせた良馬に古代が質問する。
良馬は、一呼吸置いて口にする。
「時空管理局だ」
と、管理局の名前を口にした。
「時空管理局？それって確かハラオウン執務官らが所属している例の魔法の世界の治安維持組織ですか？」
「そう。惑星を一つの世界と定義し、魔法文化の有無や、彼らがいうところの『次元の海』に出る技術を有するか否かで、彼らの管理下（支配下）になるかどうかが分かれるようだ」
古代の質問に良馬は答える。
「補足で言っておくが、魔法と言っても、一般的にテレビや漫画、絵本で知られているホウキに跨がって飛んだり、黒いトンガリ帽子を被って木の枝の様な杖を振る訳では無い・・・これから再生する映像に気分を悪くする者が居るかもしれないが、ハラオウン執務官らには、滞在中、変わらぬ接し方をしてもらいたい。映像にある事は彼女たちも知らなかった様だから」
「その時空管理局と言う組織も一枚岩ではないと言う訳ですね」
南部が納得する様子で言う。
「まぁ、組織である以上、それは、仕方ないだろうね。防衛軍だってそれは同じだろうし」
そう言って、良馬は用意した映像を再生する。
それはノア、テリオスから回収した時空管理局の航空武装隊の教導用映像で、管理局の活動映像と白いコスチュームに身を包んだ栗色の髪の少女と黒いコスチュームの金髪の少女が「戦っている」映像。
しかも、二人ともまだ十歳に満たない年頃だ。
「生身で飛んでいる・・・」
「箒にも杖にも乗っていない・・・」
「ビームを撃ち合っている・・・」
「黒い服の金髪ちゃんは確か、月村艦長が預かっている子じゃないですか？」

「それにしてもこの二人、テスタロッサさんと紅葉ちゃんそっくりですね」
　それぞれが映像を見て、言葉を交わす。
「その通り、当時、彼女も対戦相手の子も九歳だったと聞く。二人が時空管理局に入ったのはこの後だ」
　良馬も敢えて感情を排した口調で説明する。
　井上は腕を組み、無言で見ていたが、良馬に質問する。
「時空管理局は、このような年頃の子供も第一線に立たせるのですか？」
　年配者として孫にあたる年頃の子供たちを危険な任務に就かせる時空管理局に対し、不満、不審を感じている様だ。
「以前、遭遇した時空管理局の難破船を捜索した時に、十歳から十五歳位の子供の魔導師と思しき遺体を確認している。管理局は、魔導師としての才能がある者は年齢、過去の履歴に関わらず採用、あるいはスカウトしているようだ。事実、黒い服の少女、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは犯罪捜査官になったが、問題はもう一人、白いコスチュームの少女は、時空管理局が言うところの管理外世界、つまり魔法文化がない惑星の出身なんだが、この映像が撮影されてから十一年を経過した現在は、やはり管理局のエース的存在だという」
　白いコスチュームの少女・・・高町なのはが、過去のもう一つの地球出身者とは敢えて言わなかった。
「と言うことは、魔導師の資質が高ければ、誰彼構わないということなのですか？」
「穿った見方をすればそうだ。過去に凶悪な犯罪を犯した者でも、魔導師資質があれば、司法取引や情状酌量等で管理局入りするケースも多々あるようだ」
　一同が憮然とした表情になる。
「それって、悪質な洗脳ではないですか？」
　新見が辛辣なコメントを口にする。
「・・・・」
　元管理局員であるギンガは何も言えない。

「向こうには向こうの事情があるんでしょうけど、たとえ高い資質の持ち主であれ、本来不干渉であるべき世界の子供まで引き込むようなやり方には、一片の好感も持てませんね」
　島も管理局に対しては不信感を抱いている様子。
　今度はフェリシアが良馬に質問する。
「時空管理局が取り締まるという質量兵器というのは、実弾兵器だけなんでしょうか？」
「以前、ハラオウン執務官に質問したことがあるが、管理局は、魔力によらない兵器全般を質量兵器と定義づけているらしい」
「だとすれば、波動砲はその極致じゃないですか？」
「そういうことになる。管理局側としては取り締まりたいか、是が非でも接収したいだろうな・防衛軍の兵器を・・・そのため、今後、管理局から何かしらの干渉が予想される」
「自分達魔導師の優位を保ちたいためにですか？」
　古代がやや不機嫌さを出して質問する。
「管理局曰く、子供でも扱える質量兵器があるから戦争が絶えないということなんだが、意地悪な見方をすれば、魔法や魔導師の優位を保ちたいがために質量兵器を使わせたくないとも言えるな・・・とはいえ、別に管理局を全否定するつもりはないさ。彼らの活動で治安が保たれている惑星もあるのだろうから・・・我々としては、管理局は今の管理世界の治安維持に専念してもらって、こっちの事は放っておいてもらいたい所だがね」
「その管理局の戦力はどれくらいのモノなんですか？」
　永倉が管理局の戦力について訊ねる。
　まほろば　の乗員は何度か管理局の艦と接触しているが正式な戦力とその性能までは知らず、ヤマトの方に至っては未だに管理局艦とは接触していない。
「艦の性能としては、ガミラス戦役に我々が使用していた艦船とどっこいどっこいかそれ以下の性能だ」
『・・・・』
　良馬から管理局の所有する艦船の性能を聞き、ギンガを除いてポ

カーンとする一同。
「それ、マジっスか？」
「マジだ」
永倉が真意を訊ねるが、良馬はそれをあっさり肯定する。

続いての映像を見た一同は思わず顔をしかめた。
映像には管理外世界に逃げ込んだ次元犯罪者に対し、管理局が現地住民に対し無警告でアルカンシェルを放ち、その世界ごと、次元犯罪者を始末する映像だった。
アルカンシェルを撃ち込み、現地の無関係な非戦闘員を大勢虐殺した管理局艦はその後、なに事もなかったかのように、その場から立ち去って行った。
この他にも強引な管理世界への編入、管理外世界の現地住民に対する暴行・略奪、強盗同然なロストロギアの接収。
また、管理外世界における魔力属性者の拉致。
これらの映像を見て、一同は、明らかに不機嫌な顔をしている。
「・・・こんな事をしておいて、連中は正義や法の守護者等とほざいているのですか？」
永倉が怒りを我慢して管理局の実態を訊ねる。
「残念ながら・・・」
「あの連中は、正義と言う言葉に酔いしれて、正義と言う言葉を使えば、何をしても許される、何をしても良いと思い込んでいるのでは有りませんか？」
フェリシアも管理局に対して不信感、怒りを感じている様だ。
いや、永倉やフェリシア以外でもここに居る皆が同じことを思っている様だ。
それは以前、管理局に所属しているギンガも同様だった。
まさか、管理局がこんな残虐な侵略行為をしているとは思わなかったのだ。
「まぁ、今までは彼らの管轄・管理世界の領海ではその技量と性能で何とか運営してこれた。しかし、欲でも出して、この世の全て・・・宇

宙の全てを統一しようとしたら、白色彗星や暗黒星団に遭遇し、連中にたやすく捻られて、自分たちの身の程を知ったって所だろう」
今までの地球の努力を無駄にし、バカにする訳では無いが、ヤマト就役前の地球防衛軍艦艇ではガミラスはおろか、ガトランティスの艦艇にも歯が立たないだろう。
それと同じような・いや、それよりも少し劣る性能の艦艇で宇宙を全て統一しようなんて、余りにも無謀だ。
太平洋を小さなゴムボートで横断するのと同じぐらい無謀だ。
今の最新の地球の科学技術でさえ、もしかしたら、まだ見ぬ星にとっては旧式な技術なのかもしれないのに・・・・
宇宙にはどんな技術を持った星があるかまだまだ分からないのだ。
外宇宙に出るならば、常に自分は弱者であると言う謙虚さを忘れてはいけないのかもしれない。
良馬の見るところ、言葉は悪いが、管理局の次元航行艦船は次元空間と言うトンネルの中でしか生きられないモグラか鼠だ。
通常空間で宇宙戦艦と言う猛禽類、肉食獣、毒を持つ大蛇に狙われたら、ろくに抵抗できず、鋭い爪と嘴または、研ぎ澄まされた牙で簡単に引き裂かれてしまう。
この宇宙では、時空管理局の常識やルールが全て正しいわけではないことを、管理局はいい加減学習してほしいものだ。
「基本、管理局の艦船と接触したら、艦名を名乗る程度にしておこう。もし、武装解除しろだの、臨検し艦を接収するとか言ってきたら、その時は・・・・」
「その時は・・・・?」
「その時は、沖田艦長の故事に学ぶとしよう。連中に一言『バカめ』と言って、無視する。それでも向こうが諦めず、今度は武力行使をしてきたら・・・・」
そこで一息つき、幾分声を低くして言葉を接ぐ。
「容赦なく沈める。たとえ子供が相手でも、完膚なきまでに叩きのめすだけだ」
良馬が、管理局艦を撃沈すると言った時、冷たい殺気が飛び、その

場に居た誰もが身震いをして、生唾を飲み込んだ。

七十八話　それぞれの思い

時空管理局本局・無限書庫　応接室

其処では、一組の男女が難しい顔をして向き合っていた。

女性の方は管理局では言わずと知れたエース・オブ・エース、管理局の白い悪魔の異名を持つ、高町なのは。

男性の方はここの司書長で、へたれフェレット、フェレットもどき、淫獣の異名を持つユーノ・スクライア。

「そうなんだ」

「うん。やっと落ち着いてきたけど、まだ動揺は残っている」

なのはがユーノに話しているのは戦技教導隊内での出来事。

ボラー連邦首相ベムラーゼが残した爪痕は予想以上に深く、なのはたちの教導が再開されたのは映像が流された三日後だったが、数人の受講生は未だに出席できる状態ではなく、後日再受講しなければならなかった。

「こうも管理局の手に負えないまでに強い勢力、あるいは惑星国家が続けざまに出てきたのではね。動揺するなという方が難しいか・・・・」

「ユーノ君、私はどうしたら、いいのかな？」

なのはが声を落とす。

ガトランティス帝国に始まる一連の星間国家軍との遭遇や戦闘で、管理局の限界が明らかにされたが、有効な手を打てないまま、追い打ちをかけるかのように管理局はボラー連邦の蛮行を招いた。

しかし、ボラー連邦側からしたら、管理局の方が盗賊行為を行ったのだから、一概にボラー連邦側ばかりを悪い様には言えない。

「唯一話ができそうな地球防衛軍とも険悪になりかけたんだろう？」

「うん。レティさんが間に入ってくれたから決裂は避けられたけど、どうして向こうの人たちは、あんなにも冷淡なんだろう？」

なのはにすれば、管理局も地球防衛軍も同じ平和を守る組織なのに、ギルフォードの高飛車な対応を差し引いても、地球側の士官、良馬、リニスの余りにも素っ気ないまでの対応には納得し難いものが

あったのだろう。
「ノアやテリオスは十歳そこそこの魔導師も乗り組んでいたよね？そういう子供たちを危険が伴う任務に投入するのは、地球の人たちの価値観からして到底容認できないんじゃないかな？それだけじゃなく、ノアやテリオスから回収した資料で、ひょっとしたらなのはや僕らが知らない管理局の情報も知っているのかも知れないし・・・」
「裏情報ってこと？」
ＪＳ事件の関与には、亡きレジアス・ゲイズ以外にも管理局の最高幹部が連座しているという噂が絶えないし、それ以外にも、数多くの局員の汚職や不正捜査、冤罪事件が次々と発覚している。
さらにロストロギア回収や管理世界編入時の経緯にも良からぬ噂が色々聞こえてくる。それは本来管理局が介入しない筈の管理外世界にまでそれは及んでいる。
地球防衛軍側がその辺りの詳細を知っているとなれば、管理局に警戒心を抱いても何ら不思議ではないのだが・・・
「私たちは、ただ話し合いたいだけなのに・・・言葉にしなきゃ伝わらない事も沢山ある筈なのに・・・」
「話し合いと言っても、『質量兵器全廃』を前提とした話し合いを持ち掛けてもそれこそ暖簾に腕押しさ。まして、それを話すにあたって管理局が高圧的な態度を取れば、管理局と防衛軍との間を一層険悪なものにするよ。第一、向こうの地球を今の管理局が地球防衛軍に代わって守り切れるとは到底思えないしね」
ユーノは以前、はやてがなのはに言った台詞と同じ言葉を言う。
「ユーノ君・・・」
ユーノの表情とは裏腹で辛辣な主張になのははまじまじと彼を見るが、反論はできなかった。
客観的に見れば、艦船の性能に機動兵器、兵士の覚悟の差が余りにも大きすぎ、管理局が防衛軍と戦おうものならボコボコにされてしまうだろうことが容易に想像できたからだ。
ふと、なのはの脳裏にある考えが浮かぶ。
「もしかしたら、向こうの地球の人たちは、ただ放っておいてほしいだ

けなのかな？」
「多分ね。少くなくとも管理局に対してはそう思っているんじゃないかな」
　ユーノはなのはの推測を肯定し続ける。
「地球防衛軍は地球連邦政府の一機関だろうけど、時空管理局は多数の管理世界、つまり惑星国家の警察・司法・立法・行政・軍事権を一元的に握っている。つまり、管理局は管理世界政府の命脈を一手に握っており、間接的に管理世界を管理と言う名の支配をしている・・・つまり、向こうは管理局を支配者、あるいは侵略的性格を持つ勢力だと解釈しているんじゃないかな？」
「そんな事！管理局は侵略や支配なんてしないよ!!」
　なのははユーノの言葉を聞き、管理局は決して侵略者ではないと否定するが、
「なのは。ミッドや古くからの管理世界の人たちはそうは思っていないだろうけど、管理世界としての歴史が浅く、かつ管理局と武力衝突した末に負けて管理世界に組み入れられた世界からの視点はどうなんだろう？良し悪しはともかく、今なお、管理局に対して、反管理局運動やテロ活動をして抵抗し続ける人たちからすれば、管理局は自分たちの世界を滅茶苦茶にした侵略者であり、支配者にしか見えないんじゃないかな？」
「・・・」
　ユーノの言葉になのはは、否定も肯定も出来ずに、ただ黙るしか出来なかった。

　ＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａ　フードコート
　フェイトとティアナも段々とこちらの生活に慣れていき、彼女たちの表情に余裕を与えていた。
　この日、桜花からフェイトたちに、
「時間があるようでしたら、私と紅葉と一緒に、またＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやりませんか？」
　と、桜花からのお誘いを受けて、フェイト、ティアナ、桜花、紅葉

はＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａへと来たのだ。
そして、目一杯挑戦者を相手にプレイを行い、フェイト、ティアナはフードコートで休憩中だった。
桜花と紅葉の二人は挑戦者相手にプレイを続けている。
それぞれ、ソフトドリンクを口にする二人。
話題は地球と時空管理局共通の敵であるガトランティス帝国――白色彗星帝国のことだった。
「あんな苛烈で容赦がない攻撃は私自身初めてだし、管理局の歴史でもなかったと思う」
「管理局自慢の艦が手もなくやられちゃったのはもちろんだけど、同じ艦に乗り合わせていた人たちが皆死んでしまったのは、それ以上にショックだったわ・・・」
カップを手にしたまま、フェイトとティアナは心持ち下を向くが、
「でも、フェイトさん。私は尻尾を巻くつもりなんかありませんよ」
「そうだね。生き延びた私たちは、倒れてしまった人たちの分まで一生懸命生きる義務があるんだから・・・」
ティアナとフェイトは言葉に力を込めた。
そのためには、今までの様にもう魔法だけに頼るわけにはいかないこともわかっている。
彼女たちにはこれからするべき事がわかっていたが、共通の認識を持つ管理局員はまだまだ少なかった。
管理局がまさか、ボラー連邦の蛮行を受けたとは知る由もなく、親友／師匠でもある、なのはが、精神的に参っている事も知らずにミッドへ帰ったら何をすべきなのかを話していた。
其れから二人は再びゲームコーナーへと赴き、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬを堪能した。

ボラー連邦　本星　首都　ラスコー　首相官邸
ボラー連邦の首都の中で、一際高いビル・・・ベムラーゼが連邦国家の全てを司る中核、首相官邸。
その首相官邸内にある国家中央作戦室の最高司令官の席にベム

ラーゼが堂々たる風格で座っていた。
「ゴルサコフ」
「はっ」
彼は、最高司令官席の傍に控える男に声をかける。
ベムラーゼからゴルサコフと呼ばれた男はボラー連邦総参謀長を務め、それと同時にベムラーゼの主席秘書官を務めており、実質ボラー連邦の№2に当たる男である。
「例の盗人共の船からの調査状況はどうなっている？」
「はっ、技術官の報告では、機関、武装等の技術は今の我々から、二、三世代前の旧式だと言う事です」
「二、三世代前の旧式とな・・・？」
「はい」
「二、三世代前の旧式・・・その様な旧型艦で次元世界の法と正義の守護者を名乗るとは、連中の愚かさには称賛に値するな」
「全くその通りでございます」
ベムラーゼは表情を崩すことなく、今回の件に対し、思いを馳せる。
つい先日、自分を支持しない前政権の残党が、クーデター計画を立てていたのだが、秘密警察を通じ、その情報を掴むと、その関係者、赤子も含めて一族全てを粛清し、その混乱を立て直した所に「時空管理局」なる組織がちょっかいを出してきたのだ。
最初に接触してきたのはラティオなる艦で、その艦はボラー連邦船籍の宇宙貨物船に対して、
「積み荷の中にあるロストロギアを引き渡せ」
と要求し、船長が拒否するや武力行使すると脅しをかけてきた。
船長が急ぎ、救難信号を送ると、近くで試験航海を行っていたデストロイヤー艦部隊が駆け付け、搭載されていた新型誘導ミサイル『スペース・ロック』であっさりと沈んだと聞いた時は、そんな貧弱な船でよくこの弱肉強食の宇宙に乗り込んできたものだと失笑してしまったものだ。
その後やってきた小規模艦隊に至っては、捜索に来たのか報復に来たのか理解に苦しんだ。

報復には脆弱過ぎで、捜索には引き際がおそまつ過ぎだ。
旗艦らしい大型艦は呆気なく沈没。
一隻は大破しながらワープして離脱し、その他の艦も赤子の手をひねるかのように沈めていった。
そして、正体を探るために、残る数隻の艦は機関部を撃ち抜いて行き足を止め、即効性の麻痺ガス弾で乗組員を昏倒させて本国に曳航させた。
生存していた乗組員は即決裁判後全員を時空管理局への警告を兼ね、公開処刑した。
あとは艦の解析だ。
学ぶべき物は少ないと思うが、念のためだ。
しかし、予想通り、連中の艦からは、学ぶべき物など殆ど無かった。
だが、技術者の中には次元航行艦の次元航行能力に目をつけた者も居た。
「ふんっ、あの様な弱者の愚か者共など、相手をするだけ、時間の無駄だからな・・・しかし、性懲りもなくやって来たら、より素晴らしい恐怖と絶望を味わわせてやろう・・・だが、連中の動向は見張る必要はあるな・・・」
ベムラーゼはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。
「はっ、おっしゃる通りでございます」
ゴルサコフもベムラーゼに同意するかのように一礼し、彼と同じく不敵な笑みを浮かべた。

時空管理局本局
今回の定期連絡は、まだ具体的な予定は立っていないが、恐らくはクロノが艦長を務めているクラウディアで出向くことになるが、遠方世界へは複数の艦船で行くことになっている。
何より、向こうの地球はガトランティス帝国軍の残党と戦闘状態が続いており、太陽系は未だ警戒態勢が続いている。
もし合流地点に向かう途中ないし、合流中にガトランティス帝国軍と遭遇し、彼らが攻撃をしかけてくれば、地球軍の艦艇は反撃できる

だろうが、管理局の艦船は反撃どころか回避すらままならないのだ。
二重遭難：下手をしたら、テリオスやノアの二の舞になってしまう恐れがあるのだ。
まあ、現地での誘導と警戒は地球防衛軍側が責任を持つことだからいいとしても、管理局側にも問題の可能性は残る。
クラウディアに随伴する艦船の艦長は、クロノより下位か思想穏健な者でないと困る。
行った先でクロノの制止を振り切って地球軍側に質量兵器全廃論議を挑むような事があったら、最悪全てが台なしになりかねないし、余計な小細工をすれば挑発行為と受け取られかねない。
それどころか防衛軍の艦艇の接収を目論んで攻撃なんてすれば目も当てられない。
ここになって管理局にもようやく動きがあった。
それは、〝陸〟はもとより、本局の一部からも質量兵器全面禁止の見直し、地球防衛軍からの技術導入を求める声が上がっていることだ。
これを主張しているのは主に非魔導師の局員だが、低ランク魔導師や極少数ながら高ランク魔導師からも賛同者が出ている。
それを聞いたなのはは、質量兵器は全廃すべきと考えているが、管理局の艦船が呆気なく失われている現状では、次元航行艦等に限定して地球防衛軍等の技術を導入すべきではないか・・・はやてやユーノから、様々な意見を交わす事で、なのはも少しずつ考えを改めて来た為、「一部賛同」になっている。
だが、８：２の割合で、まだ管理局の方針が正しいと思っている。
しかし、このまま何もしない状態では、管理局の艦隊はいずれ壊滅し、引いては管理局が崩壊する。
理想に拘泥して崩壊を招くよりは、現実を認識した策を講じた方が遥かにましではないか？
ましてや、地球防衛軍や地球連邦に質量兵器全廃を要求するなど無謀極まりない。
管理局には地球防衛軍に代わってあの地球を守る力がないのは明

らかなのだし、向こうにこちらを侵略する意図がないのならば、下手に干渉すべきではないのだ。
　兎も角、そのなのはをそこまで妥協させるほど、時空管理局は追い込まれつつあるのだが、地球防衛軍等の技術導入に関しては管理局憲章を初めとする規則をかなり改定しなければならない。
　しかし、質量兵器（レーザー等の光学兵器）を事実上容認する改定には高ランク魔導師を中心に強い反発があり、本局サイド・特に魔導師至上主義者、管理世界拡大推進派からの反発は激しいと言っても良い。
　なのはもそういう声は耳にしていており、管理局規則改定反対の集会に誘われたこともあるが、娘（ヴィヴィオ）の世話を理由に辞退している。
　ヴィヴィオの世話というのはもちろん本当だが、もし自分が・・・管理局でエース・オブ・エースと呼ばれている自分が、そういった集会に参加すれば、自然とその集会の中心人物にされてしまうし、メンバーの多くがは魔導師至上主義・管理局絶対正義の信奉者で、低ランク魔導師や非魔導師を蔑視したり、管理外世界の住人を人と思っていない者もおり、非魔導師の家族や友人を持つなのはとしては腹に据えかねているからだ。
　ヴィータたちにも同様の誘いがあるようだが、仕事や訓練を理由にやはり断っていると言う。
　管理局規則改定反対派（魔導師至上主義・管理絶対正義の信奉者）にとって、なのはたちがこの集会に参加すれば、彼女たちを今回の管理局規則改定反対の先鋒（プロパガンダ）とし、またシンボルにしようとしたのだ。
　しかし、なのはもはやてたちも連中の考えを察しており、管理局規則改定反対派の目論見は外れた。
　集会に誘われたシグナムやクロノは部下に対し、
「バックヤードスタッフらの多くは非魔導師だ!!彼らの助力あればこそ、我々魔導師が戦える事を忘れるなよ!!」
　と、訓示し、部下たちにその手の集会に出席する事を固く禁じてい

た。
質量兵器云々よりも、声高に主張している・させている者たちへの不信感であろう。
反対に〝陸〟はレーザー等の光学兵器を質量兵器外とし、質量兵器禁止の緩和、導入を賛成し、積極的に導入するべきだと主張している。
（フェイトちゃんたちが今の管理局の内情を知ったら、何て言うのかな？）
なのはは異世界に居る親友達が今の管理局の姿を見た時、どう思うか？
それが、気がかりであった。

メガロポリス東京　地球防衛軍・本部
一室に十人ばかりの男女が集っている。
上座に居るのは、防衛軍司令長官藤堂　平九郎。
U字デスクに座ったメンバーは先日、まほろば　の士官会議室に集まったメンバーだった。
「地球は引き続き非常に厳しい状況に置かれているが、だからこそ人類は外向きでなければならない。前途は決して楽ではないが、ガミラス・彗星帝国戦を力強く乗り越えた君達の突破力で難局を打開することを期待している」
敬礼と答礼に続き、西郷が現状を説明する。
「連邦宇宙開拓本部では、アルファ・ケンタウルス星系向け探査船団を計画し、再来月の出発を目指して準備を始めている。まほろば　に関しては、訓練を兼ねて調査船団の護衛任務、その後は新造艦の慣熟訓練任務等についてもらう」
「新造艦と言うのは？」
良馬が、西郷の言う『新造艦』の部分が気になり質問した。
「アンドロメダ改級戦艦が、間もなく就航予定となっている。まほろば　には、その試験航海の同行と護衛を務めてもらう」
「承知しました」
その後、質疑応答を経て散会したが、まほろば　の幹部はそのまま

残り、今後の予定確認を行った。
近代改装を受けるヤマトは、一時的だが予備艦籍に編入させた。
ヤマトは地球の切り札的存在であるため、マニュアルオペレーション重視の思想はそのままに、カタログデータ上はアンドロメダ級に拮抗する艦にするため、改装期間も長くなりそうだ。
その改装にあたり、山崎機関長ら一部を除く大部分の乗組員は、それぞれ新たな任務先へ異動した。
主だった乗組員の異動先はと言うと古代進は惑星航路外の宙域を哨戒する警備艇（パトロール艇）第十号の艇長。
同じく北野哲も惑星航路外の宙域を哨戒する警備艇（パトロール艇）第十四号の艇長。
島大介と徳川太助は自動（無人）艦隊司令室勤務。
相原義一と森雪は防衛軍中央司令部勤務。
南部康夫と太田健二郎は内惑星防衛艦隊司令部勤務。
コスモタイガー隊の面々もそれぞれの部隊に転属したが、航空隊隊長の山本明夫はヤマトに残り、山本が選抜したメンバー坂本と椎名も、山本と同じくヤマトに残った。
佐渡酒造とアナライザーは佐渡が営む犬猫病院に戻ったが、いぜん軍属のままである。
そして改装計画を取り纏めた真田志郎はと言えば、アステロイドベルト内の一小惑星に新設される「イカルス天文台」の建設責任者を拝命したが、事情を知らない者は真田の異動先に奇異な印象を抱いた。
ついでに言うと、イスカンダルから戻った古代守は間もなく就役するアンドロメダ改級戦艦の副長の内定を受けていた。
そして、艦長には現連合艦隊司令長官、山南修が内定している。
全体的には地上勤務、それも中央司令部近辺に散らばったのは藤堂長官の深謀遠慮があったが、これは後日結実した。
まほろば　の方は、乗組員の異動は極少数に留まり、主だった士官の異動はなかった。
まほろば　は翌日、慌ただしい出撃と相成った。
「これより本艦は火星圏へ出撃、そこで、演習及び、基地建設の護衛任

務を行う。総員出航配置につけ」
「艦内機構復旧率９５％、出航には支障有りません」
「波動エンジン異常なし!!補助エンジンエネルギー充填８０％」
「出航準備整いました!!」
「出航、微速前進０．５」
「微速前進０．５」
　波動エンジンの心地よい轟音を立て、まほろば　は横須賀基地の地下ドックから出航していった。
「出港水路へ進入・・・」
「波動エンジン内、エネルギー注入」
「補助エンジン第二船速へ」
　波動エンジンにエネルギー注入、充填しつつ、離水ポイントへ向かう　まほろば。
　やがて、ポイントへと到達し、まほろば　は宙へと舞い上がった。

　火星圏沖合　アステロイド・小惑星帯群
　地球から出撃し、月軌道にてワープで火星圏まで進出した　まほろば　は、火星圏の沖にあるアステロイド帯へと到着した。
　其処には、周りの大小様々な大きさのアステロイドが有る中、複数の岩塊を反重力感応機によって無理矢理組み合わせたような奇妙な小惑星があり、数隻の作業船や工作艦が停泊していた。
　その作業船団から少し離れた宙域に、まほろば　は遊弋し、周囲をコスモタイガーが哨戒飛行していた。
「しかし、よくこんな小惑星をでっち上げましたね」
「ああ。こうでもしないと上手くカムフラージュできないからな」
　まほろば　の艦橋で、良馬は紅茶、そして今回の任務に同行したヤマト副長兼技師長の真田が緑茶を飲みながら言葉を交わす。
　艦橋のメインモニターには小惑星の表面に建造物が建設されている様子が映し出されている。
　この建物は『イカルス天文台』と呼ばれるモノで、確かに電子望遠鏡のパラボラアンテナや大口径の反射望遠鏡等も設置されているが、

これが全てハリボテ同然であることを知る者は少ない。
良馬が言うとおり、この小惑星自体が巨大なハリボテなのだ。
この小惑星は、小惑星イカルスの近くに大きな空洞部を持つ別の小惑星が発見されたため、２２０１年に非常用艦船修繕ドックと簡単な居住区の建設を進めていたが、白色彗星帝国が来襲したため、作業が中断したのだ。
戦後の建設再開に際して見直しが行われ、ヤマトの近代改装をここで行うとともに、宇宙戦士訓練学校の分校も置くことになり、突貫工事で施設の増強が進められているのだが、施設増強のために近くの岩塊も空洞小惑星に次々と貼り付けると言う何ともおどろおどろしい不気味な小惑星だった。
しかし、十分な擬態レベルには達しているので、よほどの近距離でないと分からない。
ヤマト自体の改装は既に新横須賀基地の修繕ドックで始まっているが、このイカルス天文台が完成するとともにヤマトもここへ回航して、ドック内で工事の核心部分を行うことになっている。
「問題は敵がいつ襲来して来るかですね・・・」
「ああ、来ないに越した事はないがな」
未だに太陽系に居座り続ける彗星帝国の残党。
何時ちょっかいを出してくることが分からない時空管理局。
そしてイスカンダルで戦ったあの暗黒星団帝国・・・。
真田はサーシアと共に、地球へ帰る作業船に乗り、一度地球へと戻り、そこから今度はヤマトを密かに此処へ、曳航する任務に携わる事になる。
こちらの通信を傍受・解析しただけかも知れないが、以前から地球の事を知っていたとしても何らおかしくはないだろう。
もし後者ならば、いずれ接触してくるだろう・・・友好的とは程遠い方法で・・・。
戦うとすれば時空管理局よりも厄介な相手だ。
今の地球に彗星帝国と暗黒星団帝国の二つを相手にする余裕等当然無い。

来なければ来ないでそれに越した事はないが、どうも嫌な胸騒ぎがするのだ。
危機管理の基本は、
『悲観的に準備して楽観的に行動せよ』
である。
戦力が足りないのは確かだが、泣き声を言ってはいられない状況なのだ。
ギルフォードのあの高圧的な定期連絡の後、管理局がボラー連邦とのいざこざに巻き込まれている間、まほろば　は様々な任務に駆り出されている。
新造された無人艦の合同テスト、航空部隊の訓練の相手はもちろん、地球から土星圏へ往復する輸送船団の護衛にもついている。
本来ならば、輸送船団の護衛には専門の護衛艦を中心とする部隊があるのだが、土星圏以遠の外惑星圏やカイパーベルト等の外縁部は白色彗星帝国軍残党の侵入が予想されるため、その方面に向かう輸送船団には、通常の護衛艦や駆逐艦等の小型艦のみならず、パトロール艦以上の艦も複数つくことになっていたからだ。
「・・・ところで、真田さん」
「なんだ？月村？」
良馬は、先程から必死で今まで気づかないフリをしていたのだが、とうとう限界を超えたので、真田に訊ねる事にした。
「あの子は誰です？」
良馬が顔を背後に向けると、其処にはバトライザーとギンガが幼女の面倒を見ている。
「・・・真田澪・・・私の姪だ」
真田はギンガとバトライザーが面倒を見ている幼女は自分の姪だと言う。
「・・・似てないですね」
「ほっとけ」
「その姪御さんが何故、まほろば　に？」
「あの子の両親に頼まれてな」

明らかに真田はポーカーフェイスを貫き通しているが、何かを隠している様子なので、良馬は、この茶番を終わらせることにした。
「・・・実は、先日、古代先輩が家に来まして、忍さんに『娘を一時的に預かってほしい』と言って、ちょうど澪ちゃんと同じ位の子を家に預けて行きました・・・でも、古代先輩の娘さんは双子なのに、家に預けたのは一人でした・・・後のもう一人は一体何処へ行ったのでしょうね？」
「・・・・」
良馬から、その話を聞かされた真田は黙る。
どうやら良馬は澪が誰なのか察しがついている様だ。
「・・・月村、お前も人が悪いな」
「確証が有った訳ではありませんでしたから・・・でも、サーシアちゃんとユリーシャちゃんは二卵性双生児の様ですが、双子ですからね・・・それに母親があの方ですから、やっぱり面影はあるので・・・・」
シレッと答える良馬。
「お前の察しの通り、あの子は古代とスターシアとの間に生まれた娘の一人、サーシアだ」
真田は、澪の正体を良馬に明かす。
「ユリーシャちゃんもそうですが、この前まで赤ん坊だったのが、この短期間で、何故あそこまで急激な成長を？」
「お前は古代から何も聞いていないのか？」
「ええ」
「そうか・・・・」
事情を知らない良馬に真田がイスカンダル人の特徴を話した。
それによると、イスカンダル人は赤子、幼児～第二次性徴までの成長速度が非常に速いらしい。
しかし、その後は地球人と何ら変わりない、老化速度だと言う。
「・・・イスカンダルの人口が減ったのは、そのイスカンダル人特色の成長速度のせいなのでは？」
真田からイスカンダル人の特徴を聞いた良馬は、イスカンダルの人口減少はイスカンダル人のその特徴が原因なのではないかと推測す

る。
「まぁ・恐らくな・・・」
良馬の推測に真田も否定はしなかった。
イカルス天文台の設置作業はその後も順調で行われ、敵の襲撃を受ける事無く終わった。
真田はサアーシアと共に、地球へ帰る作業船に乗り、一度地球へと戻り、そこから今度はヤマトを密かに此処へ、曳航する任務に携わる事になる。
火星圏での訓練と護衛任務を終えた　まほろば　は、対彗星帝国戦線の前線基地、土星へと向かった。
土星衛星　タイタンにて、良馬は山南から彗星帝国残党軍が再び、太陽系への侵攻を図ろうとしているとの話を聞いた。
しかも、前回の侵攻時よりも規模が大きなもので、恐らく彗星帝国は現有戦力による最後の総力戦に挑んで来たものと推測された。
彗星帝国がアンドロメダ星雲の有人惑星をことごとく植民地化し、次のターゲットに銀河系星雲、太陽系地球へとやってきたことは鹵獲した彗星帝国の艦のデータから、判明した。
恐らく前回のミサイル艦と今回の援軍もアンドロメダ方面から来たのだろう。
しかし、地球の思惑と異なり、実はこの時、彗星帝国側はかなり追い詰められていた。
国家元首を含めて彗星帝国本体が地球との戦いで敗れ、更にバルゼーやゴーランド、ザバイバル、ザイゼンと言った優秀な指揮官をことごとく失った事により彗星帝国は指揮官の人材面でも大きな痛手を受けており、第十一番惑星にいる彗星帝国の残党は、もはや地球攻略ではなく、ズォーダーや多くの同胞の弔い合戦と言う形になっていた。
そのため、アンドロメダ方面から、戦力を差し引いて援軍に来てもらっているのだが、その事如くが撃破され、アンドロメダ方面の植民地惑星の維持にも支障をきたし始めたのだ。
よってこれ以上、地球との戦いで、戦力を消耗することは、彗星帝

国側としては、好ましくない状況だった。
そこで、彗星帝国は背水の陣覚悟で、アンドロメダ方面から来た援軍と残存兵力の持てるだけを結集させ、地球艦隊に最後の決戦を挑んで来たのだ。

第十一番惑星　彗星帝国　残党軍司令部

地球へと侵攻していく友軍艦艇を見送るゲーニッツを始めとする軍幕僚たち。
「勝てますかね？」
幕僚の一人がゲーニッツに声をかける。
「勝ってもらわなければ、困る。もはやこれ以上、アンドロメダ方面から戦力を割いて地球に対して戦力を投入し、消耗する事は出来ぬのだからな」
ゲーニッツは友軍の勝利を切に願いながら艦隊を見送った。
彗星帝国軍は駆逐艦を前面に中堅に旗艦らしい大型空母と巡洋艦、戦艦を後衛、潜宙艦を両翼に展開し、地球へと進撃していった。
一方の地球艦隊も可能な限りの戦力を投入して、これを迎え撃つ構えを取った。
両軍がぶつかり合うのが予測されたのが、冥王星宙域・・・・。
奇しくも地球防衛軍がガミラスとの命運をかけ戦った宙域だった。
良馬は、決戦前の最中、山南司令が座乗する戦艦ネメシスを見て、（ギリシャ神話に登場する「義憤」「復讐」の女神・・・外見はあのアンドロメダと寸分変わりない・・・まるでアンドロメダの亡霊がガトランティスに復讐しに来たようだな・・・そして、討伐に当たる味方の軍艦は彗星帝国の軍艦からのリサイクル製・・・彗星帝国にとっては、なんとも皮肉な結果であり、因果応報な結果だな）
そう思っていた。
山南司令はまず、戦う前に十一番惑星に立て篭もる残党軍、接近して来る残党軍艦隊に対し降伏勧告を出したが、返答は拒否であった。
今回、残党軍を率いているのは、アンドロメダ方面から援軍としてきたホーエン提督であったが、彼はバルゼーやゴーランドと比べる

と、二流の軍人であり、前回の様に陽動部隊と本体とを分ける作戦はとらず、従来の数でモノを言わせる様な作戦をとった。

残党軍　旗艦　アポカリクス級航宙母艦　艦橋

「全艦戦闘配備！」

旗艦である大型回転空母を後方に置き、全面に駆逐艦、巡洋艦、戦艦を展開させ攻撃態勢をとる残党軍。

「艦載機発進！」

飛行甲板からデスバテーター攻撃機とイーターⅡ戦闘機が発艦し、先制攻撃をしかける。

防衛軍　臨時旗艦　戦艦　ネメシス　艦橋

空母から飛び立った艦載機をネメシスのレーダーが捉えた。

「敵機大編隊接近！」

「司令、我が方も艦載機で迎撃しますか？」

副官が山南にまず艦載機戦を行うか聞く。

「いや、このまま当初の作戦通りでよい」

「了解しました。戦艦部隊はそのまま後方で待機、巡洋艦・駆逐艦部隊は密集隊形をとり、我に続け！」

ネメシスを先頭に速度の速い巡洋艦と駆逐艦が続く。

進撃してきた防衛軍に残党軍の艦載機が襲い掛かるが、所詮一隻の空母から発進した艦載機数ではたいした戦果を挙げられるはずもなく、防衛軍の激しい対空砲火に次々と打ち落とされていく。

残党軍　旗艦　アポカリクス級航宙母艦　艦橋

「艦載機部隊、被害甚大！」

「提督このままでは・・・・！」

「うろたえるな。地球艦隊はまだ第二次ラインに入らんか？」

「待ってください・・・入りました。地球艦隊第二次戦闘宙域に到達！」

「フフフ・・・思うツボだ。潜宙艦隊攻撃開始」

ホーエン提督は密かに両翼に展開していた潜宙艦隊に攻撃命令を出した。
攻撃命令を受けた潜宙艦隊はまず左翼側から攻撃を開始、小口径ではあるが、正面に搭載されている砲と空間魚雷を進撃する防衛軍に向って発射した。
潜宙艦隊の奇襲を受け、左翼側を航行していた巡洋艦一隻と駆逐艦一隻が撃沈され、別の巡洋艦一隻が中破、駆逐艦一隻が大破した。

防衛軍　臨時旗艦　戦艦　ネメシス　艦橋
「潜宙艦か・・・全艦、空間照明弾を打ち上げろ！」
左舷方向へと幾つもの空間照明弾が打ち上げられ、姿を隠していた潜宙艦の姿があらわとなった。
潜宙艦は照明弾を放たれ、自分たちの姿が晒されると、潜宙艦隊は咄嗟に攻撃を止め、回避行動に移る。
回避行動を取る潜宙艦に防衛軍艦艇はショックカノンを放つ。
元々駆逐艦より小型の潜宙艦は防衛軍の駆逐艦のショックカノンの攻撃でさえ、当たり所が悪ければ誘爆して撃沈する有様。
防衛軍が左翼側の潜宙艦に気をとられている中、右翼側に展開している潜宙艦が時間差をおいて攻撃を開始する。
この潜宙艦の攻撃で地球側は駆逐艦三隻が撃沈された。
しかし、右翼側に展開する防衛軍も左翼側と同じように空間照明弾を打ち上げ、潜宙艦の姿を捉え砲撃する。
結果的に潜宙艦隊は壊滅したが、この奇襲攻撃で防衛軍の陣形に混乱が生じた。
この混乱を残党軍は見逃さなかった。
「よし、潜宙艦隊の攻撃で敵は乱れているぞ！全艦進撃！敵を踏み潰せ！」
ホーエン提督が控えていた駆逐艦・巡洋艦・戦艦部隊に号令をかけ、残党軍は混乱している防衛軍に接近戦を仕掛けてきた。
「山南司令、敵艦隊が急速接近してきます！」
「よし、全艦反転１８０度!!予定宙域まで敵を引き付けろ!!」

「了解！」
山南の号令の下、防衛軍は転進行動に移った。混乱しかけていた艦隊もネメシスの動きに習って転進する。
「地球艦隊転進!!」
「逃がすな!!追え!!」
残党軍は速度を上げ、防衛軍を追いかける。

防衛軍　臨時旗艦　戦艦　ネメシス　艦橋
「司令、まもなく予定地点です！」
「よし、全艦に通達！当初の予定通り艦隊を二つに分け、天頂、天底方向へ退避!!」
防衛軍は艦隊を二つに分け、上方と下方へと移動する奇妙な行動に出た。
突如前方を逃げていた地球艦隊が上と下に逃げる奇妙な行動をとり、残津軍将兵はそれを見て敵は形振り構わずにげているのか、それとも何か罠でもかと思った。
そしてそれは後者であり、自分達の前には敵の戦艦部隊が隊列を組んで待ち構えていた。それも波動砲にエネルギーを溜めて・・・
山南はかつて土星圏で行われた彗星帝国との戦闘で土方が打ち出した戦法をそのまま流用した。
つまり波動砲を搭載している戦艦と空母、巡洋艦、護衛艦をあらかじめ後方で隊列を組ませ、待機させておき、待機中にエネルギーを充填させいつでも波動砲を撃てる状況にさせておいた。
そして足の速い駆逐艦と巡洋艦、そして自らを囮役として敵を波動砲の射程まで誘い込んだのだ。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「各艦、波動砲発射準備整いました」
「味方艦、退避完了！」
「全艦、艦首波動砲発射！」
陣形を汲み、波動砲の発射準備を整えていた武蔵を始めとする波動

砲搭載艦が、一斉に敵艦めがけて波動砲を発射する。

残党軍　旗艦　アポカリクス級航宙母艦　艦橋

「提督!!敵の波動砲が!!」

「あれが・・あれが、報告にあった波動砲・・・何という威力だ」

「突入部隊はほぼ壊滅しました!!」

「い、いかがなされますか？提督!!」

「うろたえるな!!まだ全ての部隊がやられた訳では無い!!残存艦の集結命令!!このままでは終わらんぞ!!」

防衛軍の波動砲攻撃を受け、艦隊の半数を失っても、残党軍の士気は落ちる事は無かった。

また、地球艦隊の方は残党軍の艦隊を全て撃沈出来なかった事は痛手で、先程と同じ手はもう使えない。

消耗戦は地球軍としては避けたかったのだが、残党軍の殲滅が今回の最優先事項故、山南も艦隊を集結させ、陣形の再編を行う。

冥王星宙域での両軍の命運をかけた戦いは第二ラウンドへと突入した。

七十九話　終戦

冥王星宙域で繰り広げられる彗星帝国残党軍と地球防衛軍との戦いは、第一ラウンド目は波動砲搭載艦の波動砲一斉発射によって残党軍の大半を沈める事が出来たが、残党軍は再集結を図り、尚も地球防衛軍に戦いを挑み、防衛軍側も残党軍の殲滅を優先し、これを迎撃する構えをとった。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「敵艦隊接近!!前方、２５００！」
「オールウェポンズフリー！目標、敵艦隊！落ち着いて狙えよ！」
「はいっ！」
他の艦も同様に主砲を敵艦隊に指向し、ミサイルランチャーのドアを開いた。
敵戦艦の回転速射砲は距離をおけば怖くないが、艦橋砲が脅威なのは、以前土星圏で行われた総力戦において、ヒペリオン艦隊を潰滅させられたことで実証済だ。
正面での戦闘は禁物だ。
向こうは逆にこちらの波動砲を警戒しているだろう。
戦艦でなくても、巡洋艦や護衛艦のそれで十分致命的被害を与えられるのだ。
「ネメシスより、火線を敵の先頭艦に合わせるように、との指示です！座標データ入りました！」
旗艦ネメシスから敵艦隊先頭艦の照準データが来た。
即座に入力され、照準が調整された。
「機械に頼りきるなよ、自分の目でも確認するんだ。訓練を思い出せ！」
「はいっ！」
フェリシアの言葉に砲術士が力強く応えた。

防衛軍のメインコンピューターは優秀だが、それに頼りきってはいけない。
元々、宇宙戦士たちの照準能力はヤマト就役以前から高かった。
ガミラス艦隊との戦闘でも、先に命中弾を与えたのはたいてい地球側だったのだ。
ただ、当時の光学兵器は出力不足で、接近戦に持ち込まないとガミラス艦の装甲を撃ち抜くことができなかった。
一番強力だった戦艦の艦首砲ですら、中距離以遠では話にならず、最も戦果が多いのは、突撃駆逐艦による近接雷撃戦だった。
その分、犠牲も多かった。
ヤマトの帰還後再編された新艦隊でも、光学照準による砲雷撃訓練は続けられた。
参謀本部あたりからは、そんなの無駄だ、と言われもしたが、故・土方総司令は従来どおりの訓練を課した。
「狙点、固定完了！」
光学照準でも敵の先頭艦、戦艦に照準が合わさっているのを、艦長席でも確認した。
そして、艦長席と副長席、砲雷長席で射撃サインが点灯した。
「撃て!!」
地球側全艦からの主砲砲撃が敵艦隊の先頭艦に向かって伸びていった。
地球・白色彗星両軍の小艦隊同士の戦闘は、互いに決定打を与えられないまま推移していた。
白色彗星側は地球艦隊との距離を詰めて正面で捕捉しようとするのに対し、地球艦隊は拡散波動砲による殲滅戦を企図して距離をとろうとしたため、千日手状態に陥っていた。
「味方駆逐艦シムス、メインエンジン停止！総員退去！」
「敵巡洋艦一隻、撃沈！」
「十時の方向から敵駆逐艦二隻接近！」
「蹴散らせ！主砲一番二番、左舷艦首ミサイル、撃てっ！」
艦橋内に敵情報告と迎撃命令が飛び交う。

艦体に数発食らっているが、かすり傷程度だ。
幸い、戦死者も出ていない。
向こうも戦艦には大した被害が出ていない代わりに、駆逐艦は双方とも喪失艦が出ている。
「駆逐艦若竹被弾!!このままでは敵駆逐艦と衝突します!」
若竹はガミラス戦役前に就航したM―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦の一隻で従来の地球型のエンジンから波動エンジンに換装された艦であった。
若竹は艦橋をはじめ、船体の彼方此方から煙を噴き上げている。
残念だがあれでは助かるまい。
敵の駆逐艦も若竹が最後に放った攻撃が艦橋に命中したらしい。
火煙に包まれ、舵がきかなくなったのか、衝突コースを維持したままだ。
やがて、両艦とも速度を維持したまま、敵駆逐艦の左舷に若竹が衝突し、一瞬おいて大火球と化した。
「・・・」
敬礼してやりたいが、今はそんな余裕がない。
まほろば　の艦橋員は目礼で若竹の乗組員を悼んだ。
その後も戦闘は激化した。
「右舷、第一から第三、及び第十一発射管損傷!第五から第八ブロック閉鎖後注水!第二、第三ミサイルランチャー損傷されど、主砲及び波動砲に損傷なし!」
「ダメージコントロール現場に急げ!!」
「メディックは第三、第七区画へ急行せよ!!」
「敵戦艦、大破!!漂流を始めました!!」
まほろば　は右舷前・中央中から煙を噴き上げながら前進を続けていた。
既に敵味方とも無傷な艦はなく、破口を生じ、火煙を引きながらも戦闘を続けている。
しかし、まほろば　の方も敵戦艦の速射砲で右舷に少なからぬ被害を被ったが、艦橋と右舷艦体に主砲を撃ち込んでやったため、敵戦艦

は猛火に包まれて漂流し始めた。
「止めを刺してやれ。第四、第五主砲、斉射三連！艦尾発射管、対艦ミサイル撃てっ！」
フェリシアの指示から数瞬後、漂流していた敵戦艦は大小無数の金属片と人体だったものの残骸と化した。

残党軍　旗艦　アポカリクス級航宙母艦　艦橋
「提督。味方が次々と・・・・」
「・・・・」
「提督!!」
「陣形編成!!特攻準備!!」
「えっ!?」
「しかし、それでは・・・・」
「こうなれば、一艦一殺だ!!」
「で、ですが・・・・」
「やかましい!!俺の命令が聞けんのか!?」
ホーエンは艦橋にいる幕僚に対して、銃を突きつけ、無理矢理命令に従わせようとした。
そんな中、
「提督、ここはやはり、辺境の兵站基地へ撤退しましょう」
「なに?」
と、撤退意見を述べる若い参謀が居た。
「兵站基地宙域ならば、いくらかは我々に地の利があります。ここでこのまま戦い続けても無駄死です。提督」
彼は一度ここを撤退し、第十一番惑星宙域にて地球艦隊を待ち伏せようと言う。
しかし、
「黙れ!!その様な無様なマネが出来るか!!」
ホーエンは撤退には反対の様子。
「しかし、提督一時の汚辱にまみれても生きてさえいれば再戦の機会も得られます」

「貴様!!命を惜しむか!?かくなる上は玉砕あるのみだ!!辺境の蛮族共に彗星帝国ガトランティス軍人の誇りと魂を見せつけてくれるわ!!」
「ですから、それは無駄死にです!!」
「黙れ!!この卑怯者め!!」
「っ!?貴方は自己満足の為だけに多くの将兵を道連れにしようとしている!!どちらが卑怯か!?」
「ぬぅぅぅ反抗するか!?貴様!!」
逆上したホーエンは、
バキューン!!
「うっ・・・・」
その参謀を銃で撃った。
「うっ・・・・皆、無駄死にしたいのか?・・・・つまらない・・・・軍事ロマンチシズムに毒されるな・・・・」
斃れても尚、彼は他の艦橋員に、呼びかけるも、賛同する者はおらず、
「ふん、しぶとい奴だ」
バキューン!!
ホーエンは今度は、彼の額に銃口を合わせ、引き金を引いた。
「他に反抗する者はいるか!!」
ホーエンは銃を突きつけながら、艦橋員を見渡す。
皆は銃に怯え、反論する者、反抗する者はいなかった。
何故、アンドロメダ方面にいる彗星帝国軍はこの様な者を援軍に寄こしたのかと言うと、やはりアンドロメダ方面の彗星帝国も現地での植民維持が難しくなっており、現地住民により、ゲリラ活動が活発化して正直に言って未だに攻略できない辺境惑星に回せる余裕はなく、結果的に回ってくるのはこうした二流、三流の指揮官なのだ。
アンドロメダ方面のガトランティス側としては、地球にはもうこれ以上関わってほしくないと言うのが本音である。
その理由が、地球での戦闘で、彗星帝国ガトランティス本国、そして国家元首たるズォーダー、バルゼー、ゴーランド、ゲルン、ザバイバルと言った優秀な人材を多数失ったにも関わらず、未だに攻略出来

ず、援軍を送ってもその都度撃破されていては、アンドロメダ方面の連中もたまったものではない。
それに国家元首、本国を失ったのだから、新たな国家元首、本国を建国しなければならないのだ。
しかし、第十一番惑星にいるガトランティス側としても、ズォーダーら大勢の同胞の弔いとメンツの問題が有るので、そう簡単にアンドロメダ方面へ撤退は出来ないのだ。
また太陽系へ派遣された二流、三流の軍人にとっては、ここで手柄をあげれば、アンドロメダへ帰還した時に大出世出来ると思っていた。
しかし、それと同時に負ければ、どうなるかも分かっていた。
「諸君らの賛同を感謝する」
銃を突きつけながらニヤリと笑みを浮かべるホーエン。
「全艦全速!!」
彗星帝国艦隊は速度を上げて、地球艦隊へと迫っていった。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「あいつら、正気か!?」
敵艦隊の突然の変貌に、目の当たりにした地球艦隊クルーは皆こんな感想と戸惑いを持った。
それまではのらりくらりと、相手にじわじわと出血を強いるような戦術をとっていたのが、突然、陣形を三角形に変えつつあるのだ。
明らかに突撃を前提としたものだが、今突撃すれば双方相撃ちになることくらい理解できるだろうに・・・。
(遂に自暴自棄になったか)
「来るぞ!全砲門、発射管スタンバイ!副長!!敵戦艦の向きに気をつけろ!」
「了解!」
その時、通信席のギンガが弾んだ声を上げた。
「味方の援軍です!!後方から、戦艦　アーカンソー、イリノイ、ロイヤルオーク　巡洋艦　黄河、スフィンクス、パトロール艦　黒潮　駆逐

艦　丹陽です!!」

艦船ステータス
主力戦艦　後期生産型　丙
外見は通常のドレッドノート級主力戦艦と変化はないが、新型の積層装甲により、各部装甲が強化され、生還率の向上が図られた戦艦。
波動砲は砲口部を残し撤去されている。

恐らく突貫で建造されて、慌ただしく出てきたのだろうが、心強い援軍には違いない。
波動砲は装備しなくとも戦艦が三隻も増えたのだから・・・。
しかも通常の戦艦よりも防御力が格段に違うほどの艦だ。
「敵艦隊、突っ込んで来ますっ！」
まだ突撃隊形が完成していないのに、敵艦隊は突破を図ってきた。
しかも、こちらはまだアーカンソー等が合流できていない。
敵艦隊は戦艦を中央に据え、駆逐艦の中で損傷が軽い艦を前衛にして遮二無二突撃をかけてきた。
「敵の先頭艦に火線を集中しろ！撃てっ!!」
迎撃隊形が完成していなかったのは、地球側も同じだった。
たちまち中～近距離での砲雷撃戦になってしまった。
敵戦艦が放った衝撃砲をまともに喰らった味方の巡洋艦が爆沈。
「くっ、撃てっ！」
衝撃砲を放った敵戦艦と　まほろば　がすれ違いさまに激しく撃ち合う。
まほろば　の左舷装甲に無数の破口が穿たれ、小爆発の炎と煙が噴き出し始めたが、敵戦艦も　まほろば　からの主砲弾が機関部を直撃。
艦体後部が大爆発し、続いて艦体前部も爆発して轟沈した。
艦隊旗艦ネメシスは敵駆逐艦三隻と撃ち合った。
最終的には三隻とも沈めたが、回転速射砲で両舷に被弾した。

駆逐艦同士や護衛艦では相撃ちや、敵艦と衝突して爆沈するものが続出した。
まほろば　の前に敵の旗艦らしい大型空母が踊り出てきた。
「うぅ～・・・せめてこの艦だけでも・・・」
ホーエンは　まほろば　に艦をぶつけ様とした。
「スラスター全開!!下げ舵一杯!!全速急降下!!」
「了解!!スラスター全開!!下げ舵一杯!!全速急降下!!」
まほろば　は、高度を下げ、敵の体当たり攻撃を避避けようとするが、ただでは、転ばない。
「煙突ミサイル撃て!!」
フェリシアが空母の甲板に照準を合わせ、トリガーを引く。
その瞬間、艦橋に閃光が入り、震動が走る。
「帝国ばんざぁぁぁぁぁいいいー!!」
放たれたミサイルは狙い違わず敵の大型空母にいくつもの命中弾を与えこの世から消滅させた。
ホーエンは消滅する艦の中で「帝国万歳」を叫び、艦と運命を共にした。
こうして、互いに消耗戦になるも、白色彗星軍側は半ば死兵と化して何度も突破を図り、この戦術的には意味をなさない突撃で白色彗星軍の残存艦隊は全滅した。

戦闘が終わり、地球艦隊は集結した。
ダメージが酷く曳航不能と判断された艦は、廃棄され、乗員は他艦へと移乗し、戦闘は不能だが、航行が可能な艦、曳航が出来る艦は撤退をする事となった。
戦闘、航行可能な艦も損傷をしているため、援軍艦隊と随行していた輸送艦からたっぷりと資材供給を受け、艦の修理を行った。
その間は周囲警戒のため、コスモタイガー隊が哨戒任務を行った。
そして、修理、補給が終わった地球艦隊は、第十一番惑星へと進撃した。

第十一番惑星　彗星帝国残党軍基地　司令部
残党軍基地では先の艦隊戦でこちらが敗北したとの情報が入り、今後どうすべきか、幕僚達が会議を開いていた。
残党軍のとるべき道は、降伏するか?または玉砕か?その二者択一の選択だった。
「総司令・残念ですがもはや降伏しかありません」
「・・・・」
「我々は十分に戦いました。もうこれ以上の犠牲を出すわけには・・・・」
幕僚達は降伏を進言する。
しかし、
「降伏!?降伏だと!・あんな下等な辺境蛮族に頭を下げるだと!?」
と、降伏に反対する者も居た。
「だが、戦うにしても我々にはもう満足に戦える戦闘艦がない。この基地の防空設備ではとてもあの艦隊を撃ち落とすのは不可能だ!!それにここには帝国本土から避難してきた大勢の一般市民もいるのだ。彼らを助けるためにも・・・・」
「確かに、アンドロメダ方面からの援軍も期待できんしな・・・・」
「黙れ!!彼らも誇りある彗星帝国市民だ!!降伏よりも誇りある死を選ぶはずだ!!」
「それは貴様の勝手な思い込みだ!!」
「何だと!!貴様!!」
会議場は激しい論争の場になった。
「総司令!!貴方はどうお考えか!?」
降伏反対派の幕僚はゲーニッツに今後どうするべきかを問う。
(こっちに振るなよ・・・・)
ゲーニッツは内心毒づく、
「・・・・」
ゲーニッツ自身は自分が生き残れるのであれば、降伏しても良いと考えていたのだが、此処でそう簡単に降伏を主張するのも如何なものかと思っていた。

そこへ、
「司令、上空の地球艦隊より通信です。『地球時間三十分後に返答無き場合は基地及び周辺施設に対し無差別の艦砲射撃を開始する』・・・どうしますか!?」
通信兵が最後通告とも言える通信の内容を幕僚たちに伝える。
地球艦隊は、都市機能が停止した要塞都市ガトランティスにも艦砲射撃を行ったことから、躊躇なく通信通り、此方が返答をしなければ、三十分後にはこの基地には地球軍のショックカノン、ミサイルが雨霰の様に降り注がれるだろう。
「総司令!」
「やむを得ん・・・ここは・・・」
ゲーニッツが「降伏する」と言おうとした時、
「基地の対空ミサイルを全て発射準備!」
降伏反対派の幕僚が勝手に指示を出した。
「貴様!!何を勝手な事を!!」
「だまれ!私は卑怯者になりたくない!彗星帝国の将として一人でも多く敵を道連れにし、華々しく散るのだ!」
「そのために貴様は大勢の非戦闘員まで道連れにするつもりか!?」
「黙れ!この敗北主義者が!」
降伏反対派の幕僚が降伏を進言する幕僚の一人に銃を向ける。
そして引き金を引こうとしたとき、ゲーニッツが降伏反対派の幕僚に銃を向け、その引き金を引いた。
バキューン!!
一発の銃声と共にその幕僚はグラリと傾き床に倒れる。
「・・・うっ・・・帝・・・国・・・万歳・・・」
降伏反対派の幕僚は、その言葉を最後に息を引き取った。
主力艦隊を失った残党軍は山南の降伏勧告を受諾し、ここに約半年間続いた白色彗星戦役は終結した。
ガトランティス側として見れば、まさか一度は降伏勧告を出した相手にこうして降伏勧告をだされ、降伏するとは何とも皮肉な結末であった。

地球・彗星帝国両陣営で多くの死傷者を出した戦いは終わった。
山南から防衛軍本部へ彗星帝国残党軍の降伏が伝えられると、司令部は活気だった。
第十一番惑星基地で行われた降伏調印式は残党軍基地司令ゲーニッツと司令部の幕僚、地球側は討伐指揮に当たっていた山南司令を含む艦隊司令部幕僚たちとの間で執り行われた。
彗星帝国本体が滅んでしまったため地球側が提示した条件は戦争責任を問わず、以下の様な条件だった。
・太陽系からの全面撤退
・今後、太陽系に対する永久不可侵
上記の条件を承諾する場合、撤退に必要な物資を無償で譲渡する。
地球側にしては決して納得のいく条件ではなかったが、疲弊しきっている彗星帝国残党にはこれ以上何も望めそうになかった。
残津軍側も地球側が出した条件を承諾するしか道はなく調印式は何の問題も混乱もなく終わった。
その後、彗星帝国には二日間の撤退猶予が与えられ、今後、太陽系で彗星帝国の艦艇を見かけた場合、それは敵艦とみなし、撃沈または拿捕すると明確に警告を残した。
第十一番惑星基地に残っていた彗星帝国の艦艇は、非武装の輸送艦と上陸用舟艇、その他、損傷をしてドック入りをしている戦闘艦が少数であった。
残党軍及び彗星帝国本星から命からがら逃げて来た一般市民はそれぞれ、割り振られた艦船にそれぞれ分乗し、太陽系から去って行った。
「ふぅ～やっと終わったか・・・」
太陽系から撤収し、何処かへと去って行く彗星帝国の船を見ながら、良馬は一言呟いた。
本当に長かった・・・
長く、そして多くの戦友たちが散ってしまった・・・
彼らの犠牲を無駄にしないためにも、地球の独立は何とかこのまま

保っていなかければ、ならないが、気になる勢力は二つ・・・・
暗黒星団帝国と時空管理局。
管理局の概念からすれば、我々は異端以外の何者でもなく、連中としては何としても取り締まり、技術接収をしたいだろう。
だが、時空管理局に尻尾を振る気なんぞ毛頭ないが、共存できるならそれに越した事はない。
「ほどほどの距離で付き合うのがいいんだけどなぁ・・・・変に深入りさせて巻き添えを食わす訳にはいかないし、食らう訳にはいかない・・・・」
現在の地球連邦はまだ復興途上である上、白色彗星帝国残党勢力との抗争がようやく終結したばかりで、更には暗黒星団帝国来襲の可能性を抱えている。
時空管理局が関わったところで、狼がうろつく森で体中に肉をぶら下げて散歩する様な物だ。
フェイトたちを救助できたのは偶然の産物に過ぎず、同じような事がまたあった時は再び助けなければならないだろう。
いけ好かない組織ではあるが、犠牲者が出ていいはずはないのだ。
(果たして、どう釘を刺せばいいのやら・・・・)
良馬は、今後の事に関し、彗星帝国の勝利の余韻に浸る事もなく、考え込んでしまった。

約半年間に及び、多くの犠牲を払った彗星帝国戦役が終わり、一つの問題がようやく片付いた防衛軍。
一方、ボラー連邦を始めとし、一連の次元航行艦襲撃、遭難事件、ハラオウン執務官らの帰還手続きの為、防衛軍との交渉等問題が山積みの管理局では・・・・。

時空管理局本局・大会議場
会議場では、次元航行本部の提督会議において、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官ら二名の本局帰還が議題にのぼった。
転送ポートが使えるはずもなく、クロノが艦長として指揮を執るク

ラウディアともう一隻・Ｌ級巡航艦ルークスが派遣される予定で、クラウディアにはリンディも同乗する予定となっている。
　巡航艦ルークスの艦長を務める、アズナブル・キャラバン一等海佐は、今は亡きリンディの夫でクロノの父であるクライド・ハラオウンの元部下で、ＰＴ事件・闇の書事件発生時にはアースラの副長を務めていたため、リンディやクロノからの信任が篤く、フェイトたちとも顔見知りであるため、随伴にはうってつけの人物だった。
　リンディが同行することになったのは、フェイトの義母というだけでなく、今後も地球防衛軍とコネクションを維持しておく必要性があると主張しているためなのだが、
「かの世界が管理世界入りする意思があるかを確認する必要があると思いますが？」
　と主張する者が出たが、即座に反論する者が出る。
「管理世界入りすることで、あの世界に何かメリットがあるのかね？恐らく向こうは魔法文化が存在せず、我々が忌み嫌う質量兵器によって強力な外敵に備えているんだぞ」
　呆れた口調で地上本部本部長ロールスロイスが即座に反応するが、続けて言った言葉に座が凍りついた。
「住民全員がマゾヒストか馬鹿でもない限り、自分達の国防軍より弱い組織の管理下に入る世界があると思うかね？」
「管理局があんな蛮族共の軍より弱いですと!?」
「そうだ!!質量兵器にしか頼る事しか出来ない蛮族共ではないか!!」
（こいつらに本当、脳みそはあるのだろうか？）
　ロールスロイスは呆れながらも反論する。
「君はガトランティスやボラー連邦、地球防衛軍との遭遇や戦闘から一体何を学んだ？彼らに比べ、我が管理局はハードで大きく劣り、武装隊員個々の覚悟でも遅れをとっているんだぞ」
「覚悟で劣っているですと？」
「それはどういう事ですかな？」
「我々管理局員は全員、誇りを持って職に就いている!!」
「戦いにあたって、殺し殺される覚悟だよ。仲間の屍を弾除けにして

でも戦い続ける覚悟を持っている者が、この管理局にどれだけいるのかね？」
　これにはさすがに魔導師至上主義者、管理世界拡大推進派も黙り込む。
　そもそも、管理局はこれまで相手より優勢な状況下で戦い続けてきており、殉職率は一桁％台しかなかったが、ガトランティスやボラー連邦相手の戦闘ではほぼ全員が殉職してしまい、管理局員に深刻な心理ダメージを与えていた。
　これからはそういう事態が頻発するだろう。
　大部分の局員は、相手を殺してでも管理局の正義と信念を守り抜くという覚悟など持っていない。
　ロールスロイスの懸念はまさにそれだった。
　レジアス・ゲイズの在任中から、ミッド地上本部では所属下の陸戦魔導師から選抜した特殊制圧隊を組織して殺傷設定魔法を含めた訓練を行っており、凶悪犯罪者については殲滅もやむなしとした。
　後任についたロールスロイスもこの方針を踏襲したため、ことあるごとに本局とやり合っている。
『自らの手を汚す覚悟がない者が、世界を救う事などできぬ！』
　レジアスが生前口にしていた言葉だが、ロールスロイスも概ね同感だった。
　別世界にも同じような内容の訓示を自分の教え子達に伝えた、ほぼ同世代の男がいた。
　それが元宇宙戦士士官学校　日本校　校長の土方　竜であった。

　ミッドチルダ　クラナガン郊外　八神家
　この日、シグナムとアギトが遠方世界の任務から帰ってきたこともあり、久しぶりに家族全員揃っての夕食である。
「それにしても、フェイトたちが過ごしているもう一つの地球って、どんな世界なんだろうな」
　夕食のおかずをつつきながらヴィータが言う。
「せやなあ。二度も外宇宙から侵略されても屈服せへんかった…いわ

ば不撓不屈の世界や。それも魔法ではなく純粋な科学軍事力・・・質量兵器やからなぁ。管理局内では脅威に思う人が多いみたいや」
　はやてが溜め息をつく。
「確かに、あんな絶大な火力を持った艦船は、管理局からすれば理解できないでしょうね。しかし、主はやて。一連の宇宙軍事勢力の中で、話し合いができるのは地球防衛軍と地球連邦政府しかいないのでしょうか？」
「うん、メンタリティは私らの地球の人とほとんど同じ・いや、向こうも同じ地球人なんやから、全く同じやと思う。何とか共存していければえぇんやけど、管理局、特に本局は質量兵器アレルギーやからなぁ・・・」
「質量兵器が嫌だと言っても、魔導師じゃ、真空の宇宙では戦えない。それは守護騎士であるあたしたちも同じだ。それに管理局の船は全く歯が立たないんだから、質量兵器で対抗するしかねぇんじゃないのか？規則はもちろん大事だけど、それでミッドや他の世界が戦火に焼かれちゃ本末転倒だぜ」
　ヴィータが現実的な意見を口にした。
「そうなんよ。宇宙空間に限っては質量兵器禁止法を撤廃してはどうかという意見も出ているし、ロールスロイス中将は、アインヘリアルの再配備を提案するらしい」
「アインヘリアルを？」
「そうや、一連の事件で管理局の次元航行艦船の脆弱さが白日の元に曝されたからなぁ、もう〝海〟には任せておけないということなんやろう。同様の動きはミッド以外の地上本部からも出とるらしい」
「そんなに強いのか？そのボラー連邦って奴等は？」
　アギトがはやてに訊ねる。
　シグナムとアギトは実際ボラー連邦については話を軽く聞いた程度のため、よく知らない。
「最新鋭のＳＸ級も全く相手にならへんかったんや・・・それにボラー連邦だけやない、ガトランティスも地球防衛軍の艦船の戦闘力もほぼ同じやで・・・」

「・・・・」
はやての話を聞き、アギトの頬を冷や汗が一筋伝う。
「本局としては反対したいが、現に惨敗し続けているし、各管理世界市民から、管理局への突き上げや非難も強くなっとる今度ばかりは止められへんやろうなぁ・・・・」
はやては、遠い目をして今後の管理局について語った。

ミッドチルダ　西部地方　エルセア　ナカジマ家
「でも、アインヘリアルで防ぎきれるの？そんな強力な艦船を・・・？」
「何とも言えねぇなぁ・・・十隻程度ならどうにかなるかも知れないが、百隻単位で来られたらどうにもなるまいよ。それに、向こうの射程の方が長ければ、ミッドは一方的なタコ殴りだな」
ディエチの問いに、煎茶を口にしながらゲンヤ・ナカジマが答える。
と言うか、アインヘリアル自体が役に立つのか？と、過去にアインヘリアルを破壊した経験を持つ旧数の子たち。
しかし、何も無いよりはマシである。
「先日の映像でこっちの艦船がボラー連邦に鹵獲されている可能性は十分にあるからな、地球防衛軍と同様に次元航行技術が流出したと見るべきだろうが、凶悪さが段違いだからなぁ・・・」
「だとしたら、一連の勢力の中で唯一穏健な地球防衛軍から艦船の技術を教えてもらうしかないんじゃないッスか？もう、質量兵器云々と言ってられる状態じゃないッスよ」
「正直、それも難しいだろうな」
「どうしてッスか？パパりん」
地球防衛軍からの技術導入を主張するウェンディにゲンヤは首を振る。
「地球防衛軍より前に地球連邦政府との間に外交関係を結ばなければならないが、向こうの政府がこっち（時空管理局）を相手にするかねぇ。管理局はあくまで治安維持組織であって国家じゃない。ミッドみたいな管理世界の政府を通さないといかんかも知れないし、管理世界の意思が統一できるかどうかだ」

地球防衛軍の艦船は確かに強力だが、武装は質量兵器――魔法に依らない実弾兵器と超高エネルギー光学兵器――だ。
永年魔法戦力を寄りどころにしていた管理世界からは強い反発があるだろう。
「それに、手ぶらとはいかねえだろうよ」
「それって何らかの代償が伴うということですか？父上」
チンクがゲンヤに質問する。
「ああ。同じ地球でも、高町嬢ちゃん達の故郷とは訳が違うぞ。管理外世界じゃない。管理不能世界と言うべきだろう。高圧的に『よこせ』なんて言えば反発されるし、実力行使すれば返り討ちだろうさ。『下さい』と願い出るにしても、あちらさんにも何らかのメリットがなければ、いい顔はされないだろうな。何より、本局のお偉方が頭を下げられるかねぇ」
ゲンヤが皮肉を込めて苦笑しながら言う。
「アハハハハハ・・・それは無理ッスね。アイツらは人に命令するなら兎も角、人に頭を下げてお願いするなんてマネが出来る訳ないっスよ」
「想像できないね」
ウェンディとディエチが笑いながら、本局提督らのイメージを口にする。
確かにウェンディの言う通り、三提督やその下の連中では、せいぜいハラオウン親子やレティ・ロウランら、やっと両手に余る位しかいないだろう。
と、口の中で呟くゲンヤであった。

管理局が・・ミッドチルダが不安な空気で包まれて居る頃、フェイトたちがいる地球では・・・・。
彗星帝国が完全に太陽系から撤退した事は大統領府からの正式発表により、地球連邦市民に伝えられ、市民はその報に湧いた。
その興奮冷めぬ中、フェイトとティアナは、紅葉と共に海鳴の繁華街にあるショッピングモールへと買い物へ来ていた。

各店舗では、彗星帝国が太陽系から撤退した事に関する記念セールが行われている。
「やっぱり電気製品はこちらの方が格段に進んでいるわね」
家電や情報・ＡＶ機器等はミッド等の管理世界よりも、こちらの世界の物方が概ね機能的にできている。
購買欲がないわけではないが、電源仕様の違いや地球連邦の安全保障の関係で、フェイトたちが購入するとややこしい事になるため、見るだけなのだが、幾つかのお店を見ていく中で・・・・
「あっ、そうだ!!」
既に来慣れたＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａの前で、ティアナは何かを思い出したように声を出すと、
「ちょっと、見て行ってもいいですか？」
と、フェイトと紅葉に断りを入れる。
「いいよ」
「はい」
フェイトと紅葉が了承したので、三人はＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａの中へと入って行った。
しかし、普段やっているＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイしに来たのではなく、ティアナが向かったのは、宇宙艦船のプラモデルが売っているコーナーだった。
「ティアナさん、どうしたんでしょう？」
紅葉が首を傾げる。この店の品揃えは男性向けだ。女性が好むような物は少ない筈なのだが・・・・
（ああ、なるほど、そういう事か・・・・）
フェイトは合点がいったらしく、頻りに頷く。
旧機動六課のメンバーの一人、ルキノ・リリエは大の艦船マニアで、事務官補佐の傍らで艦船操舵士の資格も取得していた。
事実、ＪＳ事件の折には、大破した六課の隊舎から廃艦間際のアースラを仮隊舎兼司令部にしたのだが、この時、アースラを操艦したのは彼女だった。
そして、彼女は常日頃から、

「管理世界の船はもう見飽きた!!」
と言っていた。
当然彼女の部屋には沢山の次元航行艦や巡航艦、輸送船や客船のプラモデルやガレージキットが展示されている。
よって、彼女からしてみれば、こちらの艦船には非常に興味をそそられるのではないかとフェイトがそう思っていると、ティアナは大きな紙袋を手に戻って来る。
「何を買ったの？」
フェイトがティアナに訊ねると、
「えっと・・・これです」
フェイトの問いに答えながらティアナは紙袋からプラモデルの箱を取り出した。
大手玩具メーカー、バ○ダイから発売している１／１０００スケール　地球防衛軍　連合宇宙艦隊セット（Ｍ―２１７４１式宇宙戦艦Ｍ―２１７０式宇宙巡洋艦　Ｍ―２１８８１式宇宙突撃駆逐艦）
１／７００スケールの宇宙戦艦ヤマト、地球防衛艦隊旗艦アンドロメダ、主力戦艦、巡洋艦、パトロール艦、宇宙空母、地球防衛軍主力戦闘機・コスモタイガーⅡ、コスモゼロ、ブラックタイガー。
メカコレクション　駆逐艦　護衛艦。
地球防衛軍の艦艇と艦載機のほぼ全てをティアナは購入していた。
流石にプラモデルには軍事機密に関する事は書かれていないので、購入しても問題はない。
「・・・随分と漢らしい趣味をお持ちですね」
（あれ？ランスター補佐官にホビーの趣味ってあったっけ？それともこの世界のランスター補佐官にはあるのかな？）
紅葉はティアナの買った品を見て激しく勘違いしているようだ。
「ち、違うの！向こうにいる友達に艦船マニアがいるのよ!!それで・・・」
「それってもしかして彼氏さんですか？」
（ランスター補佐官にもギンガみたいに彼氏がいたの!?）
艦船マニアの友達と言う事で、真っ先に連想したのが、男子＝ティ

アナの彼氏と紅葉そう思いティアナに訊ねた。
しかし、これも勘違いである。
「だ、だから違うんだってば！私は生まれてこの方彼氏なんて・・・？ん？あ、あぅ・・・」　ｏｒｚ
間違いを訂正するため、思わず大声になってしまうが、ふと周囲を見回すと、何本もの生温かい視線に囲まれていた。
傍らのフェイトと、失言の原因を作った紅葉も唖然とした表情になっている。
この後、ティアナは紅葉の勘違いを正すのに五分を要した。
しかもその間、フェイトは薄情にも面白そうに笑うだけでティアナに全く加勢しなかった――。
（フェイトさん、貴女だって年齢＝彼氏いない歴じゃないですか!?それに紅葉、あんたがそもそもの元凶じゃない。なに他人事みたいな顔してんのよ!?そうだ、この子、誰かに似ていると思ったら、ルーテシアに一脈通じているんだわ。見た目がなのはさんで中身はルーテシアとは、何とも難儀な子だわ・・・）
その後、三人は書店に立ち寄り、フェイトは雑誌を何冊か購入した。
うち一冊は軍事雑誌で、地球防衛軍とガミラス軍艦船の特集号だ。
普通に市販されているものならばプラモデル同様、本局に持ち帰っても問題ないが、『近代史関係、特に２１世紀以降の書物は持ち帰らない方がいい』と忍から言われていたが、それには二人とも異存はなかった。
執務官としてそれなりのキャリアを積んだ結果、自分が身を置く組織の後ろ暗い面も見えてきたフェイトとしては、管理局に親友の故郷までちょっかいを出されるのは真っ平御免だからだ。
それにしても、この三人は人目を引いていた。
三人とも掛け値なしの美女／美少女で、発育途上の紅葉以外の二人はスタイルも群を抜いており、すれ違ったカップルの男の方が見とれ、彼女の方が不機嫌になったり、怒り始めたりした。
彼氏哀れ・・・。
そして、ナンパを試みようと接近を図るいかにも軽い三人連れが

フェイトたちの進路を遮るように立ち、怪訝な表情の彼女たちに声をかけようとした刹那、
「おや？三人そろって買い物かな？」
フェイトたちの背後から男性の声がかかる。
「あん？」
「なんだ・・・？」
「じゃま・・・」
その声に不機嫌そうな顔をした三人組だったが、声の主と目が合うや、表情が引き攣った。
青を基調にした軍の高級士官ジャケットに白いズボンを着て制帽を被った長身の男性が近づいてくる。
顔はイケメンの部類に入るが、その目は鷹か鷲の猛禽類の様に鋭い目つきをしている。
被っている制帽や軍服からして、艦長あるいは中規模以上の部隊司令官クラスの宇宙戦士であろう。
その男が纏う雰囲気は、どう見ても〝素人〟のそれではなかったのだ。
下手に手を出せば、病院送りに・・・いや、殺される・・・。
本能的に危機感を抱いた彼らは一目散に退散して行った。
「ん？知り合いだったのかな？」
大急ぎで去って行った彼らがもしかしたら、紅葉たちの知り合いで声をかけようかと思っていたのだが、何らかの理由でこの場から去ったのだと思っていたのは、イスカンダルから奇跡の帰還を果たした古代守だった。
「「いえ、違います」」
守の間違った認識に対し、フェイトとティアナ、紅葉は揃って苦笑いをした。
（やっぱり軍服が似合う人だ・・・）
守と同年輩の管理局員にも佐官や提督クラスの者はいるが、彼のように、有無をも言わさぬ雰囲気を持つ者はいない。
フェイトはそんな守をみて頬をほんのり赤らめる。

（管理局とはくぐってきた修羅場の質が違うからかな？）
ガミラスとの戦争から、約十年の歳月を命懸けで戦ってきたのだから、管理局員より強いオーラを纏うのも当然だろう。
ティアナは軍服姿の守をジッと観察する様に見つめながら、防衛軍軍人と管理局員との違いを確認した。
それは、守や良馬、真田にも言えるし、自分たちとさほど変わらない年頃の古代進ら、ヤマトの乗員にも同じ事が言えた。
そして、元管理局員だったギンガでさえも、管理局に居た頃に比べると、凛として女性としてレベルアップしている様にも見える。
（今さらだけど、地球防衛軍、地球連邦と喧嘩してはまずい。何とか協調していくことはできないものかな・・・？）
つい最近、管理局の若い提督と良馬たちが険悪な雰囲気になったことを思うと気が重くなるティアナだが、当の管理局ではそれどころではなくなっていた。
一方、フェイトの方は軍服姿の守に見とれていた。
それはまさに恋する乙女の仕草であった。
そして後日行われた定期連絡の日、
この日は良馬とリニスが遠征に出ていたため、この地球におけるギンガの父であり、紅葉の後見人の一人である中嶋源三郎が同席をした。
管理局側のメンツは、はやて、なのは、クロノの三人であった。
「地球防衛軍軍令部、五課長を務めております。中嶋源三郎です」
「時空管理局、次元航行艦クラウディア艦長を務めておりますクロノ・ハラオウンです」
（この人は僕やはやて、なのはの様にただ才能だけで出世したエリートとは違う様だ・・・・まさに現場での実績を含んでの叩き上げエリートだ・・・・）
「同じく、時空管理局、特務捜査官、八神　はやてです」
（この人の声、ナカジマ三佐にめっちゃ似とるわ・・・そう言えば、ナカジマ三佐の御先祖様も地球出身やったな、それにこの人も三佐と同じ『なかじま』やし・・・ってことは、この人はあの地球におけるナカジマ

三佐の子孫なんかな?それなら、向こうの世界にはスバルやギンガも居たんやろうか?)
「時空管理局、航空戦技教導隊所属の高町　なのはです」
(お父さんと同じ雰囲気なの・・・)
(高町?そうか、この人が・・・確かにどことなく紅葉嬢ちゃんに似ているな。それにしても、皆若いな・・・それでいて、エリート士官とは、管理局はウチ<防衛軍>と同じぐらい人材不足が深刻している組織なのか?)
　互いに名を名乗り合い、管理局側のメンツは源三郎の印象をそれぞれ、心の中で抱き、また源三郎の方も管理局側のメンツ、特になのはには内心驚いていた。
　その理由はやはり、自らが後見人を務める高町　紅葉と容姿が似ている事と高町と言う同じ苗字(フェミリーネーム)だからだ。
「本日は、月村良馬、月村リニスが共に軍務の為、この場には居らず、小官が二人の代理人として、この場に同席させてもらいます」
「はい、それは一向にかまいません」
　良馬とリニスが今回この場に居ない事を説明した。それに源三郎は既に管理局の内情もノアやテリオスからのデータから知っており、当然魔法の存在も知っていた。
　故に、源三郎がこの定時連絡に同席する理由を断る訳にはいかないので、源三郎が良馬の代理を務める事を言うと、管理局側はそれを了承した。
　そして、互いの情報交換が行われた。
　と言っても、互いに日常での出来事を語り合うだけなのだが、その中で・・・
「ねぇ、フェイトちゃん」
「何?なのは?」
「この前の通信で聞けなかったんだけど・・・この子・・誰?」
　そう言ってなのはは、先日、フェイトが渡したクリスマスの旅行中の画像の中で、紅葉の部分を切り抜き、拡大された画像をフェイトに見せた。

（フェイトさん・・・（？＿？））
（ごめん・・・（；^ω^））
ギンガに関しては、最初にこの世界で出会った時、
「もう自分は管理局では死んだ人間なので、この世界で自分が生きている事は秘密にしてください」
と、言われた事を守り、フェイトとティアナは写真やデバイスにギンガの姿を写さない様に気を付けてきたのだが、紅葉に関しては、魔導師であることを管理局に報告しないと言う事で、ギンガよりもマークが薄かったため、クリスマスの旅行中に一緒に撮った画像をなのはたちに送ってしまった事にフェイトは「やってしまった」と言う思いになった。
元々フェイトは少し、おっちょこちょいな所があったので、今回のミスはフェイトらしいといえば、フェイトらしいミスであった。
「ねぇ、フェイトちゃん。この子ってもしかして・・・」
なのはが、この子の正体に薄々勘付いている様なので、ここは正直に紅葉の事を伝えようと思った。
ただし、デバイス、魔力保持者である事を除いて・・・。
「彼女の名前は、高町紅葉・多分、なのはが予想している通り、この世界におけるなのはの子孫だよ」
「っ!?」
フェイトから言われた衝撃の事実に薄々そうではないかと思っていたなのはであったが、フェイトから直接言われて、驚かない方が無理であった。
「私の子孫・・・」
なのはがフェイトのいるもう一つの地球に居たであろうもう一人の自分と、そして今ここに居る自分、そして紅葉の関係を呟く。
「なぁ、フェイトちゃん」
なのはに続き、今度ははやてが話しかけた。
「その世界になのはちゃんの子孫がいるっちゅうことは、私の子孫もおるん？」
はやても自分の子孫が居るのか気になった様子で、フェイトに訊ね

てくる。
「うーん・・・はやてにそっくりな人には会ったけど、はやての子孫って言う人にはまだ会ってないなぁ」
「私にそっくりなのに、私の子孫じゃないんか？」
「うん」
「ティアナもまだ会っていないんか？」
「はい。残念ながら・・・」
「・・・（´・ω・）」
はやては自分の子孫にも会えるのかと思い、楽しみにしていた様なのだが、フェイトもティアナもまだ会っていないと言う回答にショボーンとした。
本来ならば、紅葉に魔力素質、デバイスの有無を聞きたかったのだが、元々ここは管理外世界・・・。
魔法文化は存在しないものとされており、一般に魔力素質、デバイスは持っているの？と聞きたかったのだが、この場に源三郎が居たため、聞くに聞けなかった。
ただ、フェイトは、なのはたちに一言だけ、述べた。
「クロノ、なのは、はやて・この世界には広くＡＭＦが散布されている」
「「っ!?」」
フェイトからの一言に衝撃を受ける一同。
「失礼だが、ＡＭＦとはなにかな？」
源三郎がＡＭＦについて尋ねる。
「管理局で確認されている空気成分の一種です。人体には何の影響も無いのでご心配には及びません」
ティアナが源三郎にＡＭＦについて、其れっぽい事を説明する。
まさか、魔導師の魔力が落ち特殊成分等と言えるはずが無かった。
「元々そちらの地球の空気はそんな型だったのかい？」
クロノがフェイトに質問する。
「詳しい原因はわからないけど、私たちはガミラスの遊星爆弾かヤマトがイスカンダルから持ち帰ったコスモクリーナーの能力だと思っ

ている」
「コスモクリーナー？」
　コスモクリーナーについてはフェイトに代わり、源三郎がコスモクリーナーについて大まかな説明をした。
「そんな機械が・・・」
　コスモクリーナーの能力を聞き、クロノは驚愕する。
（その機械があれば、第七海上支部の被爆患者を救う事が出来るのだがな・・・）
　先日、救助活動を行った第七海上支部の件を思い出すクロノ。
　第七海上支部は今も強い放射能反応が有り、立入禁止となっている。
　恐らく近々廃棄処分命令が下されるだろう。
　しかし、源三郎の話したコスモクリーナーがあれば、そこの放射能を除去するのも簡単だろうとクロノは思った。
　強力な質量兵器を有し、放射能を除去することの出来る機械に世界全体を包み込むＡＭＦ。
　やはり、もう一つの地球は魔導師・いや、管理局にとっては禁断の聖地とも言える世界だった。
　そういった印象を受けるクロノたちであった。
　そして、通信終了の時間が来て、今回の定期連絡は何の問題もなく終わった。
　紅葉について、肝心の部分が聞けなかったのは、モヤモヤした気分が若干残ったが、なのはは、自分の子孫が例え、別の世界であったとしてもちゃんと存在していた事に嬉しさはあった。

八十話　嵐がやって来る・・・

時空管理局本局

「世界全体にＡＭＦが展開しているだと!?」

先日の防衛軍との定期連絡において、新たな事実がハラオウン執務官から分かったと言うので、本局ではその内容についての行儀が行われた。

「はい。かの世界を覆うＡＭＦはもはやＡＭＡ（アンチ・マギリング・エア）・・と言った方が正しいかもしれません」

「ＡＭＡと言う事は、管理局の大部分の魔導師は無力化され、高ランク魔導師もリミッターを解除しても〝普通かそれ以下〟の力しか発揮できぬと言う事か!?」

「そのとおりです。まさにあの世界は魔導師にとっては禁断の世界です」

「・・・ハラオウン執務官の報告では、その空気を形成した原因らしいのは、イスカンダルとやらから持ってきたその〝コスモクリーナー〟とかいう機械と言う話ではないか。そんな危険極まる物、何とか回収することは出来ないのか?」

「いや、いっそ、その機械のあった母星、イスカンダルを管理局世界へ編入させた方が良いのではないか?」

管理世界拡大推進派の〝海〟の高官が発言する。

それに他の魔導師至上主義者、管理世界拡大推進派の高官も頷く。

〝ＡＭＡ〟の原因であるかもしれないコスモクリーナーを回収し、魔導師にとって苛酷な環境形成を抑えること・・・いやその製造元であるイスカンダルを管理世界に編入させれば、管理局にとって大きな利益になるかも知れないが・・・

「お言葉ですが、〝コスモクリーナー〟は前所有者のイスカンダルのスターシア女王が地球に譲渡することを決め、妹のサーシア王女やヤマトの乗組員たちが命懸けで戦い、多大な犠牲と引き換えに持ち帰っ

たものです。それを管理局が回収することは、ヤマトやスターシア、サーシア姉妹を・・赤の他人の努力の成果を否定する事と同じです。そうなれば、地球連邦は、管理局を掠奪者と見なすのではないですか？」

「その通りだ。それにイスカンダルを管理世界等に編入しようとすれば、地球防衛軍、そしてガミラスが許しはしないでしょう。ノアとテリオスの船体は地球防衛軍にあり、そこにあのガミラスの技術が加わったら、あっという間に彼らは次元航行を可能にする艦を建造するでしょう。そうなれば、本局と次元航行艦隊は防衛軍とガミラス軍の波動砲の前に消え去り、ミッドを始めとする管理世界にはガミラスの遊星爆弾の雨が降ることになります。それに我々はイスカンダルの正確な位置さえも知らないのですよ」

「それにそのようなことをすれば、かの地球にいるハラオウン執務官らの待遇はおろか、生命の危険さえも伴うのですぞ。管理局はいつからそんな恥知らずの侵略者に成り下がったのですかな？」

〝陸〟や本局の穏健派の高官らが魔導師至上主義者、管理世界拡大推進派の高官の意見を否定する。

「なんだと!!貴様ら!?」

「我らが掠奪者集団に侵略者だと!?」

「他人が汗水垂らして、ましてや夥しいまでの量の血を流してまで得た物を、横から掠め取る行為を『掠奪』と言わずして何と言うのかね？是非そのことについてご教授を願いたいね」

〝陸〟の高官が冷ややかな目で〝海〟の強硬派の高官達に言い放つと会議室は再び強硬派、穏健派の局員達が言い合いを始める。

魔導師至上主義者、穏健派・二つの派閥のやり取りを呆れた様子で見ていたクロノ。

彼は、内心で、

（こんな事ならコスモクリーナーの事を話すべきではなかったな）

と、今になって後悔していた。

いきり立つ〝海〟の魔導師至上主義者、管理世界拡大推進派に冷水を浴びせたのは三提督の一人、レオーネ・フィルスであった。

「地球連邦に我々時空管理局について今少し理解を深めてもらう必要はあるにしても、地球防衛軍の概念は、国あるいは世界の守り手としては別段過激なものではないと思うがね？」
「しかし閣下！彼らは本局と次元艦隊を壊滅させられるような過剰戦力を持っているのですぞ！野放しにしておくわけにはいきません！」
「危険度ならば、先日のボラー連邦やガトランティス、暗黒星団帝国の方が余程危ないだろう。彼らは、最初からこちらを皆殺しにするつもりで撃ってきているんだ。それに対し、地球連邦はハラオウン執務官らを救出し、治療のみならず、当面の生活まで面倒を見ているんだ。どちらが信頼に足るか、それぐらい子供でもわかる理屈だろう？それに地球防衛軍・・・特に彼らの宇宙艦隊と戦って勝てる成算があるのかね？〝海〟は？」
「し、しかし！」
「そこまでにしたまえ!!」
〝海〟側の魔導師至上主義者、管理世界拡大推進派が何か反論しようとしたが、それはラルゴ・キールが遮った。
「地球防衛軍が地球連邦政府傘下の組織であり、彼らに侵略の意図がないのは明白である。これ以上、地球連邦側の機嫌を損なわぬように今後も協議してもらいたい。そもそも、地球は魔法文化がなく、現地の住人の暮らしには何の支障もない筈だ。我々よそ者の魔導士が目くじらを立てる事自体おかしいのだ。くれぐれも・・・いいか、く・れ・ぐ・れ・も、軽率な行動と発言は控えるように・・・良いな？」
ラルゴ・キールが鋭い眼光で睨むと、辺りは波打ったように静まり返った。
（今回はコスモクリーナーの事を報告してしまったが、彼女：高町紅葉の事を報告しなくて良かった・・・）
紅葉の件についてはまだ彼女が魔導師資質及びデバイスを所持しているのか、不明だったため、報告には上げなかったが、この様子を見てクロノは報告しなくて良かったと思った。
報告すれば、魔導師資質及びデバイスの有無に関わらず、彼女を管理局に入れろと、言いそうだからだ。

そんな事になってみろ、たちまち防衛軍との交渉は決裂する。
それにもし、彼女をミッドに連れて来て、魔導師資質がなかったら、どうするつもりなのだ？
ミッドのなのはの家にでも押し付けて終わらせるつもりか？
そんな単純な事で終わる筈がない。
きっと管理局には、防衛軍の手厳しい報復が待っているに違いない。
最も、彼女をミッドに連れてくるのは無理だろうけど、今後紅葉の事は内密にするようにはやてたちに言わなければならないな、と思うクロノであった。

海鳴　月村家　リビング
これが漫画やアニメだったら、対峙する二人の背後には、ゴゴゴゴゴゴ・・・と言う効果音が入っているだろう。
「・・・・」
「はてな？」
「・・・なかなかやりますね、ティアナさん」
「貴女こそやるわね。紅葉・・・」
フェイトの腕の中で、事の流れが理解できていない様子の月村家のリトル・プリンセス、ユリーシャ・イスカンダルこと、月村摩耶は首を傾げている。
真田さんがサーシアを自らの姪、真田澪ともう一つの名を与えたようにユリーシャも彼女がイスカンダルの王女である事を隠す為、忍はサーシア同様、ユリーシャを遠縁の親戚の娘として、月村の姓と摩耶と言う名前を与えた。

ティアナと紅葉・二人が醸し出す闘志は旧六課のＦＷ陣ならば、涙目で逃げ出すだろう程に鋭利で重かった。
隊長陣ならば、冷や汗が伝うレベルだろう。
事の発端は、紅葉がチェス盤を持って月村家を訪れた事だった。
「あら？紅葉、それチェス盤？」

「はい」
「どうしたの？それ？」
「実は・・・」
紅葉曰く、二日後に自分の通う中学校のチェス部が大会に出るのだが、自分が部員のピンチヒッターになったので、忍かノエルにチェスの稽古をしてもらおうと来たのだと言う。
「紅葉。貴女、チェスが出来るの？」
「まぁ、人並み程度には・・・」
チェスの稽古に来た紅葉であったが、忍もノエルも今は出掛けている。
そこで、
「それじゃあ、私が相手をしようか？」
「フェイトさんはチェスが出来るんですか？」
「まぁ、私も人並みくらいにはね・・・」
と、フェイトが相手をする事になった。
しかし結果は・・・
「チェックメイト」
「・・・」
短時間でフェイトの敗北で終わった。
フェイトはその戦い方故か、駒を全て前進させる電撃戦、短期決戦型の戦いを行い、有利な地で待ち伏せた紅葉の戦法で次々と有力な駒を討ち取られていった。
「フェイトさん・・・（；^ ω^）」
ティアナはやや憐れむような眼でフェイトを見る。
「も、もう一回!!もう一回やりましょう!!」
体面を思ったのか、フェイトは、もう一度、紅葉にチェスを挑む。
だが、
「チェックメイト」
「・・・」
またもやフェイトの敗北で終わった。
今度は先ほどの電撃戦とは違い、防御路線の戦い方をしたのだが、

紅葉の一撃離脱方式の戦法で次々と有力な駒をとられていったフェイト。
「うわーん!!ティアナ、仇を討って!!」
「わ、私がですか!?」
フェイトは今度、ティアナに泣きついた。
自分よりも年下の紅葉に負けてよほど悔しかったのだろう。
しかし、実年齢は前世を含めれば紅葉が上である。
「わ、分かりました・・・」
ティアナもチェスに関しては、全くのど素人と言う訳ではない。
六課時代にフェイトに勧められて何度かチェスや将棋を指したことがある。
いや、それ以前にティアナは囲碁と将棋を知っていた。
訓練校時代にスバルの実家へと行った時、ゲンヤがカルタスやギンガと囲碁や将棋を指している場面に出くわしたことがあった。
何故、異世界であるはずのミッドに囲碁や将棋が有るのかと言うと、
地球人：それも日本人の系統のゲンヤは昔から、そう言った地球の日本文化由来の品を持っており、先祖から伝わって来た文化を継承していた。
その際、ティアナはゲンヤからルール等を教わり、ゲンヤやギンガと対局した経験があるのだ。
それに六課時代、センターガードを務めていたティアナであれば、駒の読みも自分より優れているかもしれないと思い、もしかしたらティアナならば勝てるかもしれないと思い、フェイトはティアナに自分の仇を討ってくれと頼んだのだ。
こうして始まったティアナと紅葉のチェス対決。
序盤ティアナは、いくら紅葉がフェイトに勝ったとしてもそれはまぐれで、中学生相手に本気でやる訳には行かないと思っていたのだが、
「チェックメイト」
フェイト同様、ティアナも紅葉に敗北した。

「・・・・もう一戦・・良いかしら？」
「はい」
（中学生だと思って侮っていたわ・・・・でも、次は容赦なく潰す!!）
そして、場面は戻り、
ティアナと紅葉はチェス盤を睨みながら、互いに重苦しい雰囲気を発生させている。
「・・・・なかなかやりますね、ティアナさん」
「貴女こそやるわね。紅葉・・・・」
「でも・・・・」
「負ける訳には・・・・」
「いかないの!!」
二人とも負けず嫌いの性格の為か、真剣になって駒を動かしていく。

タン
タン
コッ
コッ
トッ
トッ

リビングには駒を動かす音以外は聞こえず、ギャラリーのフェイトはハラハラしながら二人の戦いを見守っている。
反対に摩耶は興味無さそうだ。
制限時間を設けていないため、時には長考もあったが、遂に、
「チェックメイト」
「・・・・ま、まいりました」
ティアナはマジで悔しそうに苦々しく敗北宣言をする。
「ありがとうございました」
「あ、ありがとうございました」
僅差でティアナは紅葉に敗北した。

「ふぅ～正直、勝てる自信はあったのになぁ・・・」
　ティアナはチェスの駒の一つを手にとり、呟く。
「いえ、ティアナさんも良い腕をしていましたよ」
「負けた後に言われても虚しいだけよ」
「でも、駒の動きとか、二手、三手動きを読んでいる所もありましたし、やっぱりすごいですよ。ティアナさんは管理局では参謀の様な役職なんですか？」
「いえ、以前にセンターガードって言うポジションを務めていたのよ」
「センターガード？」
　ティアナは紅葉にセンターガードの役割を話した。
「成程。となると、やはりティアナさんにとってチェスや将棋は切っても欠かせない訓練になりますね」
「えっ？どうして？」
「味方を守るためのロジック、そのイメージ力や思考の素早さを養うには、チェスや将棋は最も適していますから・・・最もコレは良馬さんからの受け寄りですけどね・・・」
「「へぇー」」
　紅葉の言葉に思わずフェイトも声を出す。
　その後、忍とノエルが帰って来るまで代わる代わる対戦者を変えてチェスを撃ち込んでいた。
　ただ、フェイトは今日初めてチェスを打つ摩耶にも負けて物凄いショックを受けていた。
　イスカンダルの女王の娘であるが、もう半分には不屈の宇宙戦士を父にもつ摩耶にも才覚があったようだ。
　紅葉は夕食も月村家で食べ、その後、ノエルが運転する車で中嶋家へと帰って行った。
　フェイトとティアナは月村家にあったチェス盤を借りて、就寝前に部屋で打った。
「でも、チェスと言うのは盲点だったかも・・・」
　駒を動かしながらフェイトが呟く。
「そうですね。魔法やシミュレーターばかりに頼りきっていましたけ

ど、これなら盤と駒が有れば、何処でも出来ますからね」
　ティアナも盤面から目を離さず、駒を動かしながら言う。
「ミッドに帰ったら、チェスや将棋を盛り込んだ訓練も導入する様になのは言ってみようかな・・・っと」
「・・・」
　フェイトがポツリと呟いた内容を聞き、
（なのはさんが将棋やチェス・・・）
　ティアナはなのはがチェスや将棋を指している場面を想像する。
　しかし、どれも教え子である筈の訓練生にいとも簡単に敗北してしまう姿しか想像がつかなかった。
　特に理論よりも体が先に動くヴィータではこうした頭脳戦は苦手だろうと思うティアナだった。

　ボラー連邦　本星　首都　ロスクワ　首相官邸
　首相官邸のモニターには軍工廠、宇宙艦船製造ドックの様子が映っており、其処には、一隻の白色に塗られた艦が鎮座していた。
　ただ、この艦は周囲に並ぶ、ずんぐり型が特徴のボラー艦とは全く異なるフォルムをしており、従来のボラー艦とは全く違う思想のもとに設計・建造されたことが窺われる。
「ほう・・・これが・・・」
「はい、鹵獲した時空管理局の艦を改造した次元哨戒艦アフトワーズです」
　ボラー連邦首相ベムラーゼの隣には、彼の補佐官でもあり、ボラー連邦軍総参謀長のゴルサコフが居り、軍工廠から提示されたアフトワーズの説明を行っている。
　艦首部のフォルムはＳＸ級だが、機関換装、武装更新、艦体強化と装甲の追加等を行った為、外見もＳＸ級と異なる。
　ＳＸ級自体はボラーの造艦技術から二、三世代前の旧式なのだが、未だに無い次元航行能力の試作艦として、ボラーは鹵獲したＳＸ級を改良したのだ。
「しかし、次元航行能力は未だに我が方としては未知数であり、当面は

本艦でデータを収集し、今後の新造艦船に反映させます」
「よろしい。だが、些か消極的過ぎるな・・・本艦をもっと積極的に活用するのだ」
　ベムラーゼは、ゴルサコフや工廠の技師が提示したアフトワーズの運用計画よりも積極的な活用を考えていたようだ。
「と、おっしゃいますと？」
「時空管理局とか言う盗人共への嫌がらせに使うのだ。そろそろ緊張感もゆるむことだろうしな。災いは忘れた頃にやってくることと、魔法などと言う怪しい力では何も守れないことを、彼奴等に知らしめてやるのだ。それにスペックを見る限り彼奴等の動向を窺うにはもってこいの艦ではないか」
「承知しました。至急運用計画を練り直します」
　最凶最悪のＳＸ級は、新たな猛毒の牙をかつての古巣と仲間たちに剥こうとしていた。

　時空管理局本局、レティ・ロウラン執務室
　八神はやてとシグナムを自分のオフィスに招いたレティは早速切り出した。
「二人は、ギルフォード提督と面識があるわよね？
「はい」
「何度かは・・・」
　ギルフォードの名前を聞き、はやてとシグナムは微かに苦い顔つきになった。
　先月、地球防衛軍との定期通信の席に同席したはいいが、いきなり高圧的なＫＹ発言を繰り返して先方と一触即発になり、急遽レティ自身がとりなす事態になったのだ。
　典型的な魔導師至上主義者で、はやてたちからの印象も芳しくない。
「そのギルフォード提督がどうなさったんですか？」
「クルーの集団造反よ」
「「造反!?」」

やや物騒な言葉を聞き、思わず聞き返すはやてとシグナム。
ギルフォード自身もＸＶ級次元航行艦フーガの艦長であるのだが、自分が指揮する艦で造反が起きているとは、一体何が起きているのだろう。
クルーの一部がクーデターでも起こしたのだろうか？
レティが打ち明けた内容は、クーデターでないにしても、確かに聞き流すには余りに深刻なものだった。
クルーの一人や二人ならまだしも、半数近くが抜けては、艦船はまともに運航できない。
「時期が時期だから、事情聴取と説得に当たっているんだけど、芳しくないのよね」
「一体、フーガに何が有ったんですか？」
浮かぬ表情のレティにシグナムが質すと、他言無用と念押しして口を開いた。
「一口で言えば、パワハラよ」
「パワハラですか？」
「そうよ。彼の人となりは、直に会った貴女たちも大体わかるでしょう？」
「はい」
はやてとシグナムは、やっぱりという表情になった。
彼はニアＳクラスの空戦魔導師で、武装隊時代は反管理局勢力の摘発に活躍したらしいが、指揮官としては独善的なところがあり、部下からは敬遠されていた。
特に魔力ランクの低い低魔導師や魔力を持たない非魔導師には・・・・。
それでもフーガが、これまで実績を挙げてこれたのは、非魔導師ながらも実直な副長や航海長、機関長らの幹部クルーが他のクルーたちをよく纏めていたからなのだが、数か月前の人事異動で副長、航海長、機関長の三人が揃って他艦への異動となり、その途端に艦の雰囲気が悪くなり、不満を募らせたクルーたちが、抗議の意味を込めて、一斉にレティ宛に退職・転属願を提出したというのだ。

本来は所属の長たる艦長を経由とすべきところを、いきなり本部宛に提出したというのは、艦長や新しく着任した副長が全く信用されていないという証拠だ。
「事情を聞いた限り、原因は典型的な魔導士至上主義の高ランク魔導師ＶＳ低ランク魔導師＋非魔導師の対立ね」
まさに今の管理局の溝の縮図とも言える対立であった。
「そりゃあかんわ。魔導師ランクと人間の出来は全く関係ないのに……」
はやてとシグナムも思わずため息をつく。
「それで、ギルフォード提督は何と主張していられるんですか？」
当然、あちらにも言い分はあるだろう。
「『副長や幹部乗組員の統率力不足だ』と言うばかりで、『自分の指揮に問題はない』……だそうよ」
「それは、奇妙な論理ですね。副長や幹部乗組員を指導しフォローするのは提督や艦長の責任では？ましてや当の副長を始めとする幹部乗組員は新任だったのでしょう？」
シグナムも呆れた口調で指摘する。
「そうね。副長や他の士官たちの指導力不足もあるけど、新任士官を育てる責任は提督や艦長にあるからね」
レティはさらに、呟くように付け加えた。
「この際、荒療治がベターかしらね」
幸い、ここ一ヶ月余りは艦船が遭難したとの知らせはないが、問題は全く解決していないのだ。
そんな状況下で、内部に問題を抱える艦船は使えないし、こう言った問題は大きくなる前に処理した方が良いだろう。
只でさえ、〝海〟から転属願や退職願を出す局員が増加の一途を辿っている中、こうした件が公になるとあっという間に他艦へ広がる恐れがあるからだ。
続いての話題は先日本局で行われた会議での話題となったコスモクリーナーについての話となった。
「放射能を広範囲で除去・しかもそれと同時にＡＭＦを散布するとは

・・・」
シグナムはコスモクリーナーの性能を知り、驚愕する。
「私も実際にこの目でその機械を見たわけではないけど、放射能塗れになった地球がああして、元通りになった事から、コスモクリーナーには、放射能を除去する力はあると思っているわ。でも・・・」
レティが自分なりの見解を述べる。
「ＡＭＦですか？」
「ええ、人体に有害な放射性物質が除去されるのは喜ばしい事なのだけれど・・・」
「その反面、ＡＭＦが広範囲に散布されれば、魔導師にとっては、魔法を使うのに支障をきたしますな」
「本局の方々は何と？」
「地球からコスモクリーナーを接収し、製造元のイスカンダルは管理世界へ編入するべきだと主張してきたわ」
「なっ!?」
「それは、ヤバいのとちゃいますか!?」
イスカンダルを管理世界へ編入させる・・・。
そんな事をすれば、ミッドはおろか、管理世界全てが破滅する恐れがある。
ガミラスと地球防衛軍の手によって・・・
「もちろん、その主張は却下されたわ」
「そうですか・良かった・・・」
「まったくです」
はやてもシグナムも一安心した様子。
「私たちは今、この不気味なくらいの平穏の時間を無駄にする訳にはいかないの。この時間を使って何らかの打開策を打ち出さないといけないのよ・・・今の管理局はね」
レティの言葉にはやてとシグナムは頷いた。
そして、レティとの会談が終わり、はやてとシグナムがレティの執務室を出る間際、レティが思い出すかのように言った。
「ああ、それと・・・」

「なんです？」
「クロノ君からの伝言で、『クレハちゃんの事は黙っておいてくれ』だそうよ」
「あの子の事ですか？」
「それで、誰なの？『クレハ』って？」
レティは紅葉の事を知らないため、渦中の紅葉が誰なのかをはやてに訊ねる。
「うーん・・クロノ君が黙っておいてくれと言われては、今この場で私が話すわけにはまいりません。お許しください。詳しくはクロノ君にでも聞いてもらえますか？」
と、はやては紅葉の件をクロノに押し付けた。
「そう、わかったわ」
レティも納得した様子で、はやてとシグナムを見送った。

レティ・ロウランがはやてとシグナムをオフィスに招いた数日後、次元航行艦フーガの艦長らの異動人事が発表された。
艦長であるギルフォードは本局人事局統括官補佐、つまりレティの補佐官に異動。
副長、航海長、機関長もそれぞれ、他艦への異動となった。
そして、後任の艦長は、同艦の前副長だった局員が艦長へと昇進し、航海長、機関長も前任者を呼び寄せ、副長も低ランクの魔導師の局員が採用された。
この人事は当然物議を醸した。
そして、異動させられたフーガの副長には同情する声が大きかったが、事情を知る一人であるはやては、この人事が記されたタブレットを見ながら紅茶を一口飲み、
「ギルフォード提督はレティ提督の監視下に置かれたんやな。もう我が儘は出来へんで・・異動させられた副長は一見左遷やけど、異動先の艦長さんは人材育成と再生に定評がある人やからな。どっちが得したか、解る人には解るで」
と語った。

「それにしても、あのベムラーゼの大虐殺からこの方、次元の海は静かやな。不気味な程に平穏や・・・・」
はやての言うとおり、ボラー連邦による局員公開虐殺から幾日かの月日が経ったのだが、管理局や管理世界の艦船が襲われたという報告は未だにないし、ボラー連邦がミッドや他の管理世界に対し侵略して来る様子もない。
「過大な期待は禁物やけど、フェイトちゃんたちが帰って来れば、問題解決の糸口に繋がるんかなぁ」
はやての独り言は紅茶の湯気と共に消えていった・・・・。
しかし、平和、平穏と言うのはそう長いものではなく、唐突に乱れ、崩れるものである。
そしてソレは突然やって来た。

ミッドチルダ　首都　クラナガン　ザンクト・ヒルデ魔法学院初等科
その日、学院全学年で午後の授業が突然自習になった。
午前中は通常どおりの授業だったのだが、昼休みも終わりに近づいた頃、突然全校放送で、全学年とも第五限を自習とする旨が知らされたのである。
そして、教師全員が職員室へと集められた。
突然の放送と教師の集結、そして授業が突然の自習になり、クラス内が僅かながらざわついた。
一部では自習になった事を喜ぶ生徒も居たが、大半が戸惑っている様だ。
「なんだろう？」
「なにがあったんだろうね？」
「あんまりいいことじゃなさそうだね」
この学院に籍を置く金髪に紅翠のオッドアイの少女、高町ヴィヴィオは、すぐ前の席のクラスメイトであるコロナ・ティミルと会話を交わしていた。
ヴィヴィオが〝いいことじゃない〟と口にしたのには理由がある。

昼休み、件の放送がなされる少し前、学院理事長代理の職にある聖王教会騎士、カリム・グラシアが、秘書兼護衛のシャッハ・ヌエラを伴って現れた。
カリムが学院に顔を出すのは公式行事の時くらいで、何の行事もない日に現れただけでも珍しいのだが、心なしか二人の表情が強張って見えたのだ。
最も二人は子供たちの挨拶に応えるためか、すぐ穏やかな表情になったのだが――。
ヴィヴィオはかなり特殊な生まれ育ちであり、つい一年前は某事件のキーパーソンに祭り上げられていた経験上、他人の不安な表情には敏感なのだ。
(また、ああいうことがおきちゃうのかな?)
幸いにも今度は事件の当事者にはなっていないが、時空管理局の手に負えないらしい世界の存在は、ヴィヴィオも知るところになっている。
彼女自身、そうした世界の一つである第二の97管理外世界こと地球連邦の軍隊である地球防衛軍の士官とモニター越しに対面し、短時間だが会話したこともあるのだ。
(なのはママやフェイトママでもどうにもならないのかな?)
二人いるママが、〝わるいことをする人〟には負けない事を、ヴィヴィオは肌身に染みて知っているが、それは、対人戦における魔導師と直接相手と戦ってこそだった。
管理局の艦船に乗っているところを、より強い艦船に襲われてしまえば、いかに強い魔導師でもどうにもならないことをフェイトの件で、嫌と言うほど思い知らされたのだ。
そして、管理局とは全く違う世界の存在も・・・。
その世界は、なのはの故郷と同じ名前を持ちながら、とんでもなく強い艦船をたくさん持っており、その艦船を指揮している者たちもまた、とても強い意思の持ち主であることを直感的に感じ取った。
ヴィヴィオが考え込んでいると、
「皆さん、突然ですが、本日の午後の授業は全て中止です。今日はこれ

で下校と言う事になりました。寄り道をせず、真っ直ぐお家に帰って下さい。お家の方には、先生たちが既に連絡を入れておきました。では、皆さん気をつけて下校して下さい」
と、職員室から戻ってきた担任の教師が開口一番告げたからだ。
担任の教師も緊張した表情をしている。
（やっぱり、何かあったんだ・・・）
担任の教師の様子から、何かただならぬ事態が起きたのだとヴィヴィオは察した。
そして、ヴィヴィオを含め、生徒たちは一様に不安な表情になったのだが、詳しい事態を知ったのはその次の日の朝、朝一のニュースで管理局からの発表によってであった。

クラナガン中央港地区、港湾特別救助隊　隊舎
「――そんな!!」
緊急召集を受けたスバル・ナカジマ一等防災士は、上司から、事のあらましを聞かされ絶句した。
「第一次捜索隊を率いるクロノ・ハラオウン提督が、お前さんの派遣を打診してきたんだが・・・」
「行きます！行かせて下さい！」
上司に皆まで言わせず、スバルは自ら参加を申し出た。

ミッドチルダ　西部地方　エルセア　ナカジマ家
「すまねぇな。またこんな時ばかり頼っちまってよ・・・」
画面の向こうで頭を下げる陸士１０８隊部隊長、ゲンヤ・ナカジマ三佐に、チンクとウェンディが返す。
「気にしないでくれ、父様。ああいう場所でこそ私たちの特性が活きるんだからな」
「そうっスよ、パパリン。家族なんだから気遣い無用っス」
「でも、とんでもねぇ事になっちまったな」
荷物をまとめながらノーヴェが呟く。
「比べたくはねえけど、ドクターとあたしらがやらかしてきた事がす

げえ、小さくてつまらなく思えてきたぜ・・・」
去年、彼女たちはとある大事件に深く関与したが、彼女たちやその生みの親は無差別な殺戮は考えていなかった。
最もノーヴェたちの姉で管理局の司法取引を拒否し、刑務所に服役している腹黒メガネの姉一人は、分からないが・・・。
しかし、いずれにしても、自分たちがやったのはミッドチルダのクラナガン一都市内での事。
それに比べ、今回あった出来事と、ボラー連邦が行った管理局員を残虐極まるやり方での公開処刑は、スケールが違いすぎる。
ボラー連邦の行った公開処刑には、彼女たちも皆憤怒したが、同時に、管理世界の価値観が通じない世界が存在することも実感させられた。
(嵐みたいなこの世界で、あたしらがやれる事って何なんだろう？いや、自分で考えて見つけて、生涯それを貫き通すのが、あたしらに課された〝償い〟なんだろうな)
荷造りの手を止めて、ノーヴェは自分たちに課された贖罪について思いを馳せていたが、
「ノーヴェ、手が止まっているよ」
ディエチにツッコまれた――。
「わ、わりぃ・・・」
ノ―ヴェは慌てて荷造りに専念した。

ミッドで何やら大変な事が起こっている様子であるが、その頃、地球では・・・
海鳴　月村家
この日、紅葉が先日のチェス大会での結果を報告しに来た。
結果は、紅葉の通う中学が優勝したと言う。
「おめでとう。紅葉」
「おめでとう」
フェイトとティアナは、その成果に祝福の言葉を送る。
そして、三人はリビングにて、再びチェスをする。

（この世界のミッドチルダか・・・）
チェスを指しながら、紅葉はまじまじとフェイトとティアナの顔を窺う。
「お二人は何時頃、そのミッドチルダにお戻りになられるんですか？」
「うーん、まだ何時とは明確には分からないかな・・・でも、紅葉もいつか、ミッドにも来てくれると嬉しいな」
「・そうですね・・・お互いの星同士が国交を結べば、互いに行き来出来るでしょう。そうなれば、いつかお二人とお目にかかる機会もできますよ」
紅葉は再会を期待するフェイトたちにそう応えた。
それが現実になるまでには今暫くの年月を要する事は何となく想像がつく。
（時空管理局か・・・）
とはいえ、紅葉は前世での勤務先・そしてこの後世の管理局については些か警戒せざるを得ない。
彼女たちからチラリと聞いた話では、時空管理局が保有する艦船は、白色彗星帝国の艦船に全く歯が立たなかったらしい。
そうでなければ、そもそも彼女たちと会う事すらなかったのだから。
また、フェイトたちは地球防衛軍と時空管理局が何らかの形で提携できないだろうかと思い始めたようだ。
ただ、魔法以外の戦力保有を認めていないという時空管理局が、果たして質量兵器上等の地球防衛軍のあり方を受け入れられるのか？
それを言うならば、魔法文化がない地球側とて似たようなものなのだが、良馬はもとより、周囲の軍人たちは冷静に受け止めているようだ。
もし、この後世でもミッドに生まれていれば、職業選択の自由と言う選択肢は生まれた時から無くなっており、小学校など満足に卒業することなく、管理局に入れられていたかもしれないからだ。
（ハラオウン執務官たちはそういう世界に生まれ育ったのだから、私があれこれ言う資格はないけれど、フェイトさんの親友さんたち・・・

高町一尉と今の私は衝突してしまうかもね・・・・）
この世界の現実を目の当たりにしたフェイトとティアナは兎も角、別世界の紅葉の先祖、高町　なのはであれば、恐らく紅葉を管理局に入れ様とするだろう。
現在は、管理局の有り方に疑問を持つも、やがて、機動六課の様に部隊を持つ時に、即戦力になりそうな人材・・・しかも、あの高町なのはの直系の子孫と言うブランド名が付いているとなると、いくらはやてでも、手放しはしないだろう。
きっと手元に置きたい逸材だろう。
正規の局員は無理でも、民間協力者、嘱託局員として、間接的に管理局へ関わりを持たせるのではないだろうか？

紅葉、フェイト、ティアナがチェス盤を見ている中、摩耶はテレビを見ていた。
アナウンサーは、２２０１年の凶悪犯罪発生数と検挙率の話をしていた。
それをチラッと見て聞いたフェイトとティアナは、
（悔しいけど、治安の良さでは、ミッドやどの先進管理世界も、地球にはまだ及ばないね。こちらの地球にも、私たちが知っている地球にも・・・・）
（管理世界は管理外世界を格下に見る傾向がありますけど、とんだ思い上がりだったんですね）
念話で会話をするフェイトとティアナ。
フェイトは内心複雑な思いを禁じ得ないが、異邦人たる自分がどうこう言う権利はないし、当のフェイトも口を挟むつもりはない。
しかし、第９７管理外世界と同様に、この世界、いや、この星は紛れもない地球だ。
住まう人はあちらの地球と何ら変わらない。
紅葉のような極一部の例外を除けば、魔導師資質を持っていない人が圧倒的に多いが、それだけだ。
人間性も管理世界の住民に劣るところはない。

それどころか、絶滅戦争を生き延びただけあって、紅葉たちのような子供世代も含めて、バイタリティが高い人が多いように思えた。

舞台は再びミッドへと移る。

ザンクト・ヒルデ魔法学院初等部の制服を着た少女は朝、そのニュースを見て驚愕し、思わず手にしていた朝食のトーストを落した。

碧銀の髪と、紫碧のオッドアイの彼女は、ふと、朝食の最中、ニュースを流しているテレビ画面に目をやったが、次の瞬間、全身に悪寒が走る感覚に襲われて立ち竦んでしまった。

昨日何故、学院が午後の授業が自習になり、その後すぐに一斉下校になった理由も理解した。

（大変なことが起きてしまった・・・）

ニュースでは、

『ザンクト・ヒルデ魔法学院高等部の生徒たちが乗った次元航行客船が行方不明。正体不明の艦船から攻撃された可能性もある』

と言うテロップが表示され、記者が詳しい情報を探ろうと管理局施設前で中継している。

少女は震えながらテレビ画面をジッと見ていた。

（クラウス、貴方や聖王オリヴィエ殿下の時代のような、いや、もっと血生臭い時代が来てしまうんでしょうか――？）

少女――ハイディ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルトの問いに答えられる者は誰もいなかった。

次元空間回廊

捜索隊員と機材を載せ、僚艦三隻と共に本局を離れたクラウディアだが、件の船が緊急通信を発信した座標空間までは、最大巡航速度でも約十時間を要し、それが皆の焦慮をかき立てる。

（あ～、もうっ！遅い、遅過ぎるよ!!）

焦りを隠せずにいたのはスバルだった。

彼女は十一歳の時に姉（ギンガ）と共に大規模な空港の火災事故に

巻き込まれた経験があった。
それ故に災害現場での恐怖や不安はここに居る中では、誰よりも理解しているつもりだ。
だからこそ、一分一秒も早く現場に到着し、救助活動を始めなければ、と思っているのだ。
ＸＶ級は在来のＬ級艦より大型重武装であるとともに、航行能力も上がっているのだが・・・・
（映像で見た地球防衛軍の艦速と比べると、管理局の艦船はまるで遊覧船程度じゃない!!こうしている間にも、助けを待っている人がいるのにぃ～）
ヤマトを初めとする地球防衛軍艦船の性能を映像越しとは言え、目の当たりにしてからは、管理局の艦船が、次元空間航行能力以外では数世代も遅れていることを実感せざるを得ない。
しかし、魔法科学も日々進歩している。
管理局関係では、ＡＭＦ下でも使える新型デバイスの開発と試作も進んでいるが、未だに試作段階。
また、ジェイル・スカリエッティが開発・投入した無人兵器ガジェットドローンをベースにした空・陸戦用ガジェットもテストが始まったが、量産と配備には今しばらくの時間を要している。
しかし、これまでの犯罪者やテロリスト相手はともかく、ガトランティスみたいな獰猛な軍事勢力相手には何とも心許ない。
格段に強力な艦船や機動兵器でなければ撃退できないのだ。
スバル同様、一見落ち着いている様に見えるが、クロノも内心、焦り、苛立っていた。
ヤマト　や　まほろば　ならば・・・波動エンジン・・・タキオン粒子機関ならば、既に現場について救助活動を行っているのではないか？
大体、管理局の版図が拡大していけば、いつかは管理局よりも強大な勢力と遭遇してもおかしくなかった。
今までの管理局の歴史の中でそれが無かったのが、奇跡に近かった。

それを指摘する声は以前から何度も上がっていたのに、管理局・特に〝海〟の魔導師至上主義者や管理世界拡大推進派の連中は耳を貸さないまま突き進んだあげくがこの有様か・・・

一歩間違えれば、地球防衛軍とも武力衝突していてもおかしくは無い状況だった。

しかし、それには、魔法以外の武装を質量兵器だと一様に決めつけ、ひどく嫌悪してきた現場の自分たちにも責任はある。

宇宙戦艦の乗組員は厳しい選抜と訓練をくぐり抜けなければなれず、質量兵器は誰にでも扱えるという管理局の認識は当たらない。

遅きに失するかも知れないけど、やはり管理局は法律を改正してでも地球連邦から波動エンジンを含めた艦船建造技術を導入しないといけないんじゃないか？

そういう改革を迫られる状況、時期に来ているのではないだろうか？

戦艦クラスや波動砲の技術供与は当然無理としても、波動砲未搭載の小型艦なら可能性がある。

地球防衛軍の艦船は見た目の大きさ以上に戦闘力が高いことは目の当たりに見て知っている。

さらに、武装はショック・カノンやパルスレーザー等の光学兵器中心で、解釈さえ変えれば質量兵器には該当しない。

実弾兵器ならいざ知らず、魔法によらない兵器全てを質量兵器に指定しているのでは、魔法原理主義・高ランク魔導師優位主義と受け取られても仕方ない。

事実、管理局内でもそういう不満の声が上がっている。

特に低ランク魔導師、非魔導師局員からだ。

管理局でも低ランク魔導師、非魔導師局員の方が多いのに、左官、将官の大半は高ランク魔導師だ。

ＪＳ事件後の内部改革でいくらかは是正されているが、中途半端だという声が大きい。

魔法要らずで強大な軍事力を持つ国家と接触し、その多くを敵にまわしている現在、今までのような考えでは到底この〝嵐〟は乗り切れ

ないのかもしれない。
幾人かの高官は賛同しているが、全体の意識改革は遅々として進まずにいた。
ネックはやはり質量兵器。
拳銃はデバイス扱いで所持できるが、あくまで例外。主流を占める魔導師の間では魔法に拠らぬ武器に対する抵抗が強いのだ。
クロノの顔に翳りがさした。

八十一話　船は行く・・・・

地球防衛軍、横須賀基地
発進準備を整えているヤマトの舷門には十数人の軍人がいる。
「それじゃ、頼むぞ。真田・・・・」
「この期に及んじゃ、やるしかないさ」
イカルス天文台所長に任じられた真田志郎は古代守と握手を交わした。
傍らには大山歳郎も佇んでいるが、皆の表情はともかく、内心はお世辞にも冴え渡っているとは言えなかった。
それは決して今回の辞令に不服等が有った訳ではない。
ヤマトはこの後、イカルス天文台へ向け出発する。
しかし、そこは言うまでもなく、天文台とは名ばかりのヤマトの近代改装用ドックである。
そして、今回ヤマトに乗るのはヤマトの乗員の一部と宇宙戦士士官学校、訓練学校の訓練生だけではなかった。
真田澪という、六～七歳ほどの少女が彼らに同行するのだ。
澪は真田志郎の姉の一人娘で、姉夫婦はガミラスの遊星爆弾で死亡したため、叔父である真田が施設から引き取っていたのだが、特別な事情により、叔父に同行することになった。
むろん、これはでっち上げだ。
真田の姉はガミラスが地球へ攻めて来る前・・彼が少年時代、月にある遊園地で、真田自らのミスよって起こした事故で死亡している。
しかし、真田と親しい者は、その事実を知っており、皆一様に口をつぐんでいる。
何より、真田と守と澪を慮ってのことだ。
言うまでもなく、澪の本名は古代・サーシア・イスカンダル。
古代守とスターシアの娘の一人であり、イスカンダル王家の第一王女。
つまり、次期イスカンダル女王となる身のはずだが、継ぐべきイス

カンダルは星としての寿命が尽きかけている。
イスカンダルに残っている母、スターシアが彼女を王位につけるかどうかは分からない。
さて、澪ことサーシアがなぜイカルスに行くのかと言えば、地球では何かと気ぜわしいのと、幼少期の成長速度が地球人の十倍以上なイスカンダルの血を引くサーシアの身体を気遣った事。
そしてサーシアの双子の妹、ユリーシャは良馬の実家、月村家に預けた。
世界有数の大企業であり、資産家の月村家ならば、訳有りの人物を匿うことぐらいは、可能だろうと判断した守が年末パーティーの時に忍に相談したのだ。
そして、忍は快くその件を了承した。
しかし、二人同時に面倒を見てもらう事には守も負い目を感じ、妹のユリーシャを忍に預けたのだ。
月村家にやって来たリトル・プリンセス、古代・ユリーシャ・イスカンダルは瞬く間に月村家の娘の様に可愛がられた。
特にフェイト、忍の溺愛ぶりはノエルとティアナが引くぐらい凄かった。
ギンガも面倒を見たかった様だが、彼女には　まほろば　の通信長と言う重要な役職が有る為、なかなか良馬の実家に赴けないし、今の彼女には妹や妹分もいるため、ユリーシャと接する時間がフェイトよりも少なかった。

そして、その姉、サーシアはと言うと・・・・
「うぅ～たいくつだよ～」
ヤマトの士官用ゲストルームで大きなペンギンのぬいぐるみを抱きながらぼやいていた。
その他にも彼女の部屋には、年末パーティーにて良馬とギンガが着ていたあの謎の生物のぬいぐるみもあった。
大抵、サーシアぐらいの年の子供は親と離れることに悲しみ、泣きじゃくるものなのだが、彼女はそんな様子は見せない。

幼少期の成長速度のせいか、両親、特に母の教育のせいなのかは俄かに判断しかねた。
「ふわ～ぁ」
可愛らしい声とともに欠伸をする。
父親からは、欠伸を他人様の前でしてはいけない、欠伸する時は手で口元を覆い隠すように躾られているのだが、当の本人は手を口元にやることもなく、大欠伸をかましていた。
「だれもいないからいいよね～」
意外とプリンセスはふてぶてしさをも身につけつつあるようだ。
いやはや、末恐ろしい・・・・
しかし、宇宙で生きていくのであれば、こうした強い部分も無ければ生きてはいけない。
彼女はきっと強いプリンセスとなるだろう。
それは、妹のユリーシャも同じで、ノエルと忍が行う教養、マナーの時には、いかにも良い所育ちのお嬢様なのだが、ひとたび、講義の時間が終わると、お転婆娘に早変わりする。
ノエルはその件に関して、頭を抱えているが、忍は「良いじゃない、子供っぽい部分が有って」と許容している。
様々な思いを乗せ、ヤマトは人知れず、地球を飛び立った・・・・。

ここで舞台はミッドへと移る。
先日、高町ヴィヴィオが通うＳｔ．ヒルデ魔法学院の高等部の生徒たちが乗った次元客船、コスパ・コンコルド号が遭難した。
その遭難現場にクロノ・ハラオウンが艦長を務める次元航行艦、クラウディアがようやく現場に到着した。

次元航行艦　クラウディア　ブリッジ
「あ、ああ・・・・」
「そんな・・・・」
「こんなの・・・・」
「ひど過ぎるわ・・・・」

スクリーンに映し出された前方の光景に、ブリッジクルーは悲憤慷慨する。
声こそ上げないものの、艦長席のクロノ、ブリッジに居たスバル、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディらナカジマ姉妹たちも拳を握り締め、怒りを堪えていた。
映し出された次元航行客船、コスパ・コンコルド号は辛うじて船の形を留めているが、側面には大小の穴が穿たれ、そこから多数の煙の尾を引いており、航行能力を失っていることは一目瞭然だった。
むしろ原型を留めている事だけでも奇跡に近い。
「救助作業に入る。総員配置につけ!!」
クロノが命令を下すと、皆急ぎ足で配置場所へと向かう。
スバルたちナカジマ姉妹もブリッジを降りて、接舷するシャトルへと乗り込み救助作業の装備点検を行い、宇宙服を装備する。
「スバル一士、そろそろ出られるか?」
クロノは艦載シャトルで待機するスバルたち、救助隊を呼び出す。
「はい、いつでも行けます。クロノ提督」
最初にコスパ・コンコルド号の船内に突入するのは、スバルらナカジマ姉妹たちだ。
「強い放射能反応はないが、爆発が起きる可能性がある。無理だけはするなよ」
「わかりました」
通信を終えたクロノたちは改めてスクリーンを見遣る。
あれだけ船腹に穴を穿たれたのでは、内部の酸素はすっかり吸い出されてしまっただろう。
当然その破口から外へ吸いだされた遺体だってあるはずだ。
それらの遺体はもう収容不能と判断せざるを得ない。
「また、彼女たちには辛い思いをさせてしまうな・・・」
クラウディアから切り離されたシャトルを見て、クロノは呟く。
「しかし、一体誰が何のために・・・?」
「管理局に恨みを持つテロ組織・・・それとも・・・」
「まさかっ!?」

「ボラー連邦か・・・!?」
ブリッジクルーの皆は、憤りとやり切れなさが入り混じった気持ちにさせられる。
「通信の最後には、『ＳＸ級に似た艦・・・』と言っていたからな・・・ボラーが鹵獲した管理局の艦を改装してテロ活動に投入したという可能性が高いが・・・」
「もしその通りだとしたら、早急に奪還するか撃破しないと、いずれ次元航行能力を持った宇宙戦艦が次々と投入されますよ」
ボラーは鹵獲したＳＸ級を単なるテロ活動だけではなく、次元航行能力を持つ戦闘艦の建造を想定したデータ収集の役目を担っている可能性をクルーの一人が指摘すると、ブリッジクルーの顔は皆蒼白になった。
もし、下手人がボラー連邦ならば、強力無比な宇宙戦艦が次元空間に大挙して入り込み、本局や各世界は重大な危機に陥るのだ。
「その可能性は大いにある。しかし、今の最優先事項は生存者の捜索だ。単純に比較することはできないが、テリオスはもっと手酷くやられていたからな。望みはある」
かつてガトランティスに襲われたテリオスはもっと酷くやられていた。
率直に言えば、対艦戦闘を想定していなかった既存の次元航行艦の外板は材質も厚さも同程度の大きさの次元商船と大差ないのだ。
だとすれば、目の前のコスパ・コンコルド号にはまだ生存者がいるかも知れない。
第一、あれほど手酷くやられたテリオスでフェイトたちは奇跡的にも生き延びたのだ。
コスパ・コンコルド号で全員とは言わなくても、船内に生存者がいる可能性は決して低くない。
既にスバルたちが乗ったシャトルはコスパ・コンコルド号に接舷しようとしている。
専門の作業員が取り付き、外から乗船口の扉を開いた上でスバルたちが突入するのだ。

やがて、乗船口の扉が開けられ、スバルたちは船内の捜索に入った。
「うっ・・これは・・・」
「まさに地獄だな・・・」
「見てられないっスよ、これは・・・」
「・・・」
被弾し人工重力発生装置が損傷したためか、船内は乗客の荷物や船内設備の機材、被弾によって生じた瓦礫の他に乗客、乗員の遺体が宙に漂っていた。
死者の多くは被弾によって生じた破口から空気が抜けた事による窒息死で、喉元をかきむしったり、白目を剥いたり失禁や脱糞、或いは舌をベロンと出した状態で息絶えていた。
その地獄の様な光景が広がる中、ナカジマ姉妹の中で、チンクはゼスト隊殲滅時に稼働しており、隊長であるゼストと死闘を繰り広げた経験が有り、その時のアジトとこの現場が似ていた。
死者の顔がその時、自分らが手にかけたゼスト隊の隊員たちに見え、自分に語り掛けてくるかのようだった。
「何故、お前は生きている?」
「人殺しの癖に・・・」
「家族を持って幸せになる資格がお前にはあるのか?」
「俺たちを殺した癖に・・・」
「お前も死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」
「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」「死ね!!」

「あっ・・・・あっ・・・・あっ・・・・」
　無数の死者の手が自分に迫り、自らを死者の世界へ引きずり込もうとしているかのような光景にチンクは悲鳴を上げ、その手を振りほどこうとした時、
「チンク姉、大丈夫ッスか？」
「っ!?」
　ウェンディに声をかけられた。
「う、ウェンディか・・・・？」
「チンク姉、何か顔色が悪いッスよ？」
「まぁ、こんな地獄の様な所じゃ仕方ないけど・・・・辛いならシャトルに戻っている？」
　ウェンディとディエチが心配そうに声をかけてくる。
「い、いや大丈夫だ・・・・問題ない」
　妹たちに声をかけられ、冷静さを取り戻したチンクは救助作業へと入った。
　クラウディアに『生存者発見』の一報が飛び込んできたのはスバルたち、救助隊が突入してから五十分程が経過した頃であった。
　たちまちクラウディアのブリッジが色めき立つ。
　生存者が居た事は何よりもうれしい事だが、生存者が居たと言う事はまだ他にも生存者が居るかもしれないと言う希望が彼らの中に生まれた。
「慌てるな。まずはキャンターへの収容が先だ。情報確認を急げ!!」
「了解」
　今回の捜索において、遭難したのが、次元航行艦では無く、乗船人数が多い、次元客船と言う事で、生存者の救命処置が早く取れる様にクロノは病院船、キャンターを連れて来ていた。
　キャンターもスバルたち、捜索隊と共にその船体をコスパ・コンコルド号に接舷し、生存者の救護、受け入れ態勢をとっていた。
　ひと通り指示を下したクロノはクラウディアの副長に向き直った。
「キャンターに行けるように準備してくれ」
「生存者から事情を聞くのですか？」

「そうだ」
少なくとも、事故の経過の一部はわかるだろう。
ともあれ、生存者の容態が良い事とこの後も生存者が居る事を祈るしかない。

遭難船　コスパ・コンコルド号　病院船　キャンター　接合部
船内は瓦礫が散らばっていたが、爆発の危険はないためキャンターのクルーが周辺の死傷者の収容準備を始めている。
そこへ、
「生存者二名、お願いします！」
「分かった!!」
スバルとノーヴェがＳｔ．ヒルデ魔法学院高等部の制服を着た女子生徒とキャビンアテンダントらしい乗員の制服を着た女性を抱えて戻ってくる。
要救助者の発見場所とその時の状況、救助者の容態等をキャンターのクルーに伝え、二人の身柄を託すと、スバルたちはボンベの再充填等の作業を受け、再び船内に突入していった。
生存者収容に現場のムードは一時上がったが、更なる生存者発見の報はなかなか入って来ない。
スバルたちに加え、次元航行部隊の救難隊員や聖王教会騎士団直属の救助隊員も人命検索に当たっているが、発見されるのはすでに事切れた者ばかりだ。
救助活動が行なわれている中、クロノは妙な違和感を持った。
それは・・・・
『もし、今回の襲撃事件がボラー連邦の仕業であるならば・・・・ボラー連邦・・・・ベムラーゼのやり口にしては些かあっさりとし過ぎてはいないか？』
と言うモノだった。
もし、今回の襲撃事件がボラー連邦の仕業であるならば管理局に対して、電波ジャックを行い局員の公開処刑の映像をミッドのあちこちに流すような人物のやり口としては余りにも今回の件は余りにも

あっさりしすぎだ。
まずは船体がこうして残っている事自体が余りにも不自然だ。
ベムラーゼは公開処刑を行う前に、ＳＸ級、Ｘ級の艦船をまるで自分の力を誇示するかのように粉々に破壊した。
それにも関わらず、このコスパ・コンコルド号はこうして船体が残っている・・・。
船内にブービートラップを仕掛けた可能性は否定できないと思うが・・・。
まさか、船体を完全に破壊しなかったのはブービートラップを仕掛け、局員を誘い入れるためなのか？
いや、それ以前に船内に直接兵士を送り込み、乗員や乗客の一部を拉致して、再び管理局やミッドに公開処刑の映像を流すつもりなのだろうか？
しかし、報告では直接敵の兵士が乗り込んできた形跡はないと言うし、仮に乗員、乗客を公開処刑目的で拉致したとしてもこうして船体を残しておくのも解せない。
乗員、乗客を拉致した後、船体を破壊する事は可能なはずだ。
コスパ・コンコルド号が襲撃を受け、自分たちがこの現場に到着するまでかなりの時間があった。
時間的余裕は十分にあった。
ボラー連邦が襲撃中に管理局の艦が来る事を恐れるとはとても思えないが、コスパ・コンコルド号を襲撃したのが管理局からの鹵獲艦であるならば、性能は管理局の艦と同じ性能だからこそ、逃げたのか？
不発弾や時限爆弾があれば、それがブービートラップという可能性もある。
しかし、少なくとも船外には仕掛けられている様子はない。
それとも、完全に破壊しようとした時に何らかの事情があってその場から急いで撤退せざるを得なかったのか？
いや、そもそも今回の襲撃事件の犯人はボラー連邦ではなく別の勢力の仕業なのだろうか？

兎も角、作業が全て終わるまで油断は出来ない。
クロノはスバルたちにその旨を伝え、十分注意して捜索を続けるように指示を出した。
その間、コスパ・コンコルド号のブリッジで捜索を行っていた別の捜索グループから通信が入る。
「残念ながら、ブリッジに居た船長ら乗組員はダメでしたが、幸い、航行データの記録媒体（ブラック・ボックス）は無事に回収できましたので、一旦ここを離れます」
「わかった」
コスパ・コンコルド号の航路、音声を記録したブラック・ボックスは無事にクラウディアへと回収された。
これで、襲撃事件の真相も分かるだろう。
時間が経つにつれ、捜索範囲も広がっていったが、齎される報告は発見された遺体の数ばかりで、既に何体かはエントランスホールに搬送されている。
生存者は病院船キャンターに収容されたが、死者を連れ帰るのはクラウディアの仕事だ。
各艦では霊安室だけではスペースが足りず、倉庫や大浴場も遺体安置所に早変わりし、急拵えの祭壇と遺体収容袋が並べられており、更に聖王教会から派遣された神父とシスターも待機していた。
クラウディアのブリッジにはコスパ・コンコルド号の船内配置図が展開されているが、ほぼ全ての箇所に救助隊員が進入したことを示す緑一色に変わっていた。
「・・・これ以上の生存者の発見は恐らく無いだろう・・・作業体制を変更する。これより作業を人命救助から遺体収容作業に変更・捜索隊にそう伝えろ・・・」
「・・・わかりました」
船内全域に捜索の手が及んだにも関わらず、生存者は僅か二名だけで、他の生命反応はなし。
やり切れない面持ちで、クロノは救助作業から遺体収容作業への切り換えを捜索隊に指示した。

彼の心中には、襲撃者に対する激しい憤りとコスパ・コンコルド号の乗船者を救えなかった事への無力感がないまぜになっていた。
その時だった・スクリーンに映るコスパ・コンコルド号の船体後部・機関室付近から眩い閃光と火の手と共に爆発が起こった。
「っ!?捜索隊に緊急電!!直ちに船から退避しろ!!キャンターにも現場からの離脱を命じろ!!」
クロノは急ぎ、捜索隊と病院船キャンターに撤収を下令した。

次元航行艦　クラウディア　食堂

「・・・」
スバル・ナカジマら特別救助隊員たちは無言で食堂の椅子に座っていた。
コスパ・コンコルド号で突然発生した爆発により遺体捜索、遺体搬出作業は中止され、捜索隊は命からがらコスパ・コンコルド号から退避し、キャンターとシャトルが離脱した直後、コスパ・コンコルド号は全船体が炎と煙に包まれ、やがて爆発、その船体は次元の海に消滅した。
まさに間一髪であった・・もう少し遅ければ、スバルたち捜索隊とキャンターはコスパ・コンコルド号と運命を共にしているところだった。
やはりブービートラップは仕掛けられていた。
恐らく機関室付近に強力な時限爆弾がセットされていたのだろう。
しかも捜索に来た者には分かりづらい場所に・・・
収容できたのは女子生徒と女性クルーそれぞれ一人ずつ・・計二名の生存者で遺体や遺品の収容は全体の１０％程しか出来なかった。
多くの犠牲者たちの遺体はコスパ・コンコルド号と共に次元の海の彼方へと消えた。
「くっそおおおっ!!」
ガンっ!!
捜索隊の隊員の一人であるノーヴェ・ナカジマが悔しさを爆発させ、急に椅子から立ち上がると、壁に拳を叩きつける。

流石、戦闘機人・・・ノーヴェの拳を受けた壁は少し凹んでいる。
犠牲者の大半は十代半ばの少年少女たち・・・
戦闘機人である自分たちと単純に比較することはできないが、余り変わらない年頃である彼らの変わり果てた姿にノーヴェたちは一様に衝撃を受けていたのだ。
「どこのどいつなんだよ!?非武装の民間船をなぶり殺しなんて汚ねぇマネしやがって!!あいつらに一体何の罪があるっていうんだよ!?」
その叫ぶような問いに応えられる者はその場にいなかった――。
「また、助けてあげられなかった・・・」
肩と視線を落としたスバルも呟く。
救助者が居るのに救助できずに、その場から退却しなければならない・・・
救助隊員にとってはこれほど辛く悔しい事はない。
決して望んで得たわけではないが、普通の人より頑丈かつ強靭なこの身体・・・。
また、憧れていたあの人の教導の元で伸ばした力はこういう時にこそ役立つものではなかったのか？
しかし、この現場で見たものは理不尽で非情な現実以外の何物でもなかった。
破壊を免れた客室ホール付近で自分と同年輩の女子生徒と乗組員を救出するのが精一杯だった。
救助隊員である以上、助けられなかった事もあるが、先日の第七海上支部といい、今回のコスパ・コンコルド号の件といい、大半の要救助者を助けられなかった。
「・・・」
込み上げてくる涙を必死に堪える。
でも、泣く事は許されない。
かけがえのないものを失った犠牲者の家族の悲嘆の方が遥かに大きく重いのだから・・・。

時空管理局本局　リンディ・ハラオウン執務室

「そう、わかったわ」
派遣した捜索・救助隊司令、クロノ・ハラオウンからの報告に彼の母親であり、本局の統括官であるリンディ・ハラオウンも沈痛な表情になった。
「申し訳ありません。もっと早く我々が到着していれば・・・」
「クロノ、貴方のせいではないわ。命令受領から出発までは予想以上に早く進んだと皆驚いているのよ」
派遣命令を受けたクロノは、個人的なコネまで動員して人員と装備、補給を予想以上の短時間で揃えて救助へ出発していった。
客観的に見れば、僅か二名とはいえ生存者を収容できたのは上出来だろう。
本来の手続きを踏んで出発して居れば、その二名さえも救う事は出来なかった筈なのだから・・・
しかし、それを口に出せる状況ではない。
「それで、救助した二人の容態は？」
「医師からの報告では、二人とも軽い酸素欠乏症ですが、後遺症の心配はないとの事ですが、問題は・・・」
「メンタルケアね」
生き残った二人にとってはこれからが正念場だ。
仲間や同僚は皆死んでしまい、自分だけが生き延びたという事実は生涯消えない。
もしかしたら、遺族から誹謗・中傷を受けるかもしれない。
大勢のマスコミにしつこく追いかけまわされるかもしれない。
メンタルケアと身柄の保護を入念に行わなければ、後日自ら命を絶つ事だってあり得る。
ともかく、全てはクロノたちが帰還してからのこと・・あとは自分たちの仕事だ。
「いずれにせよ、皆が帰ってきてから考えましょう。クロノ、貴方も疲れているだろうけど、もう少しだけ頑張ってちょうだいね」
「承知しました」
通信を終えたリンディは腕を組んで考え込む。

クロノには言っていないが、今回の襲撃犯がボラー連邦であると明らかになれば、今度こそ〝海〟はボラー連邦に対して武力制裁という事態が現実味を帯びてくる。
民間人を理不尽に殺されておいて泣き寝入りという事はありえないからだ。
管理局はおろか、今まで遠距離航海や他の世界探索に難色を示してきた他の管理世界も掌を返して武力制裁に賛成するかもしれない。
問題は、仮にそうなった場合、管理局の戦力は相手に通じるのか？
相手があのボラー連邦だった場合、艦船同士の戦闘では、管理局の艦船とボラー連邦の艦船では戦闘力に差があり過ぎて勝ち目はない。
そもそも防衛軍同様、ボラー連邦の正確な戦力も分からないのだ。
ならば本星近くに艦隊を次元転移させ、首都をつくか？
首都に大気圏上からアルカンシェルを撃ち込み、国家元首たるベムラーゼを斃し、アルカンシェルの威力を見せつけた上で交渉に持ち込むのがベターかも知れないが、向こうはこちらの次元航行艦を鹵獲しているのだ。
ならば当然、次元航行艦を調べ、アルカンシェルも調べただろう。
そして何らかの対策を考えていてもおかしくはない。
単なる反管理局武装組織ならば打つ手はいくらでもあるが、ボラー連邦やガトランティス、暗黒星団帝国、地球防衛軍の様な強力な力を持つ艦船を持つ勢力では返り討ちに遭うのが関の山だ。
（ん？地球防衛軍――？）
そうだ・ガミラスに追い詰められながらも諦める事もなく戦い、ガトランティスをも退けた地球防衛軍ならばボラー連邦とも互角に戦えるだろうが、管理局内部では本局高官の過半数が地球防衛軍に対する拒否反応を未だ根強く持っている。
彼らの技術を全面的に導入すれば、確かに戦闘力は飛躍的に上がり、低ランク魔導師、非魔導師も戦力化できるが、非魔導師の武装＝質量兵器の導入は管理局の自己否定であり、また旧暦時代の様な混乱な時代に逆戻りだというのだが・・・・
（どうしたものかしら・・・）

リンディは一人、頭を抱えた。
そして、次の定期連絡で今回の件は伏せて、地球防衛軍からの技術提供、そして、レーザー等の光学兵器を質量兵器に位置付けるべきか、特例措置でそれを緩和するべきか、光学兵器が実際に使用されているかの世界にいるフェイトとティアナに意見を求めようかと思うリンディだった。
だが、事態はクロノ、リンディ、レティ、はやてたちが最も恐れていた結果となった。

数日後、
時空管理局本局　リンディ・ハラオウン執務室
「それ、ホンマなんですか?リンディ提督」
はやてはリンディの言葉を聞き、震える声で聞きなおす。
リンディは、はやてに先程の会議で決まった内容を話した。
会議の決定内容は、はやてにとってあまりにも衝撃的な内容だった。
「・・・ええ・・残念ながら、これ以上手をこまねいていては、次元世界の安定に悪影響を及ぼし、反管理局武装勢力をも勢いづかせるから・・・と言う結論に至ったわ・・・・」
「そ、そんなっ!?・・・・まだあの仕業がボラー連邦の連中がやったと決まったわけやないんですよ!!」
はやての言う通り、現在コスパ・コンコルド号から回収されたブラック・ボックスを解析中で、この時点で下手人がボラー連邦とはまだはっきりと分かっていなかった。
もし、コスパ・コンコルド号襲撃事件の犯人がボラー連邦でなかったら、管理局は誤解の下、ボラー連邦に対して宣戦を布告する事になる。
そうなった場合、管理局はボラー連邦に勝てるのか?
いや、恐らく無理だろう・・・・。
普通に艦隊決戦を挑んだところで返り討ちにされるのが関の山・・・・宇宙に散らばる局員の屍を増やすことが目に見えている。

しかし、本局の強硬派や魔導師至上主義・管理世界拡大派は、コスパ・コンコルド号からの最後の通信、『ＳＸ級に似た艦』と言う部分から、この『ＳＸ級に似た艦』がボラー連邦に鹵獲された管理局の次元航行艦であり、下手人はボラー連邦だと決定づけたのだった・・・・。

八十二話　武力制裁

高町なのはの養女、高町ヴィヴィオが通うＳｔ．ヒルデ魔法学院の高等部の生徒たちが乗った次元客船、コスパ・コンコルド号が何者かの襲撃を受けた。

クロノ・ハラオウン提督率いるクラウディアが現場に到着し、ナカジマ姉妹らが救助活動を行うも生存者は僅かに二名のみと言う結果で、多くの学生を含む乗客、乗員が死亡する大惨事となった。

しかも船には時限爆弾が仕掛けられており、犠牲者の遺体もその殆どが収容される事無く、次元の海へと船体と共に消えた。

非武装の客船を攻撃し、大勢の未来ある若者の命を奪い取った行為・・・・

このあまりにも悪逆非道とも言える襲撃事件を受け、管理局は直ちにこの襲撃事件の犯人の捜査へと乗り出した。

コスパ・コンコルド号のブラック・ボックスを解析したその結果、管理局は今回のコスパ・コンコルド号襲撃事件の犯人を先日、局員の公開処刑映像を流して来たボラー連邦と断定した。

さらに管理局は今回のコスパ・コンコルド号襲撃事件の報復としてボラー連邦への武力制裁を決定したのだった。

「八神二佐、貴女の言いたい事は分かっているわ。でも、ボラー連邦が犯人と断定されたら、管理局はボラー連邦への武力制裁、あわよくば管理世界への編入か殲滅をためらわないでしょう・・・・特に〝海〟の上層部はね」

「そ、そんな・・・・」

「今回は状況が状況だから、三提督方も今度ばかりは反対できないでしょうし、犠牲者の中には局員の子息も多数含まれていたのよ・・・・」

あかん・・・・詰んだ・・・・。

完全に管理局は詰んでもうた・・・・。

管理局はもしかしたら、これで終わりかもしれへん・・・・。

はやては事態が・・管理局が完全に泥沼に陥ったことを悟った。

下手人がボラー連邦ではなく、暗黒星団帝国や新たな武装勢力なら、またもや厄介で新たな敵が増えたことになるし、ボラー連邦、ベムラーゼ首相の犯行ならば、何も手を打たなければ管理世界は管理局に強い不信を抱き、管理世界からの離反や独立すら有り得る。
特に無理矢理管理世界入りさせられた世界は・・・・。
さらに、反管理局テロ組織をも勢いづかせてしまう。
今にすれば、最初にボラー連邦と接触したラティオのやり方が悔やまれた。
もしも、ベムラーゼの言う事が事実なら、ラティオの連中がとった軽率な行動がとんでもない毒蛇を管理世界に呼び込んだとも言える。
ラティオの連中は死んだからこうしたゴタゴタとはもう無縁であるが、生前の最後の行いが、こうした厄介事、厄災を招いたのだ。
はやての心の中では、地獄でもう一回殺してやりたいくらいの怒りが湧く。
仮に地球連邦の技術を全面的に導入できたとしても、今からでは整備、運用は到底間に合わない。
（一体どうしたら、ええんや・・・・）
はやては胸中で苦悶し始めた。

ミッドチルダ首都クラナガン、時空管理局首都航空基地、教育隊隊舎・教官室
「・・・・」
なのはの顔色は冴えない。
それは他の教導官も同じ感じで、皆厳しい表情だ。
というのも、先程はやてから本局のきな臭い動きを聞かされていたからだ。
更に三日前に行われた第二の地球での定期連絡において、なのははレティと共にその場に同行した。
その席で、レティは今後の管理局の運営方針として、地球連邦からの技術提供、特例として、光学兵器の質量兵器項目からの除外についてフェイトとティアナに意見を求めた。

その際、レティは先日、自分が思った、光学兵器を質量兵器の項目から除外し、携帯可能にすれば、確かに戦闘力は飛躍的に上がり、非魔導師、低ランク魔導師も大幅に戦力化できるが、質量兵器の導入は管理局の自己否定ではないかと言う思いも二人に聞いてみた。

すると、フェイトとティアナはレティのこの見解にやや否定的な態度をとった。

その理由は、

拳銃やライフル、小銃の類は確かに使い方を知れば簡単に凶器となるが、戦闘機や宇宙戦艦は厳しい選抜と訓練を経た者にしか扱えないし、一度その資格を得ても、常に研鑽していなければたちまちその資格を剥奪されてしまう。

魔法文化がない世界の人間からすれば、その気になれば、デバイス一つで、簡単に周囲を破壊できる自分たち魔導師こそ、歩く火薬庫：歩く兵器みたいな存在だと言い放った。

かつて、ギンガやスバルは自分たちの出生が戦闘機人であり、その定義は人の姿をした兵器である事に対して悩んでいたが、フェイトとティアナはこの世界に来て、自分たち魔導師を第三者的視点で捉えて見ると、戦闘機人よりもデバイスを装備した高ランクの魔導師こそが人間兵器に見えた。

それは自分自身を含めて、親友の　はやて　や　なのは　も例外ではない。

ヴォルケンリッターたちなんて人ですらないのだから・・・

「私たちは管理局の基本理念に賛同したからここにいますが、管理局の戦力を大きく上回っている勢力が相次いで登場している今、理念に囚われ続ければ、管理局はたちまち崩壊しますし、他の管理世界の中には、管理局を見限り、地球連邦のような、政治と軍事のバランスがとれた国家と同盟する世界だって出てくるのではないでしょうか？」

と、述べた。

また、編入時の行き違いで管理局への反感が根強い世界にすれば、管理局より地球連邦と結んだ方が、治安維持、国防関係は上手くいくと考えてもおかしくはないだろう。

そういった混乱を防ぐためにも、地球連邦との関係を進めたいのだが、管理局の方でも一連の騒動で、強硬派と穏健派の内部対立が活発化しており、地球連邦もまだ再建半ばで、自分たちのことで手一杯らしい。
と、早期による地球連邦との同盟も怪しいモノだと言った。
それ以前に管理局の意識改革が行われないまま地球連邦との同盟も不可能だ。
地球連邦と同盟が結べないのであれば、技術提供など夢のまた夢の話だ。
そして地球防衛軍との戦争で技術を全て鹵獲なんて論外である。
「ティアナはどう思っているのかな？」
と、なのはが、恐る恐るティアナに訊ねると、
「私もフェイトさんの意見と同意見ですね」
「・・・それはなんでかな？」
「生身で飛んだり戦うことができない普通の人が、強力な鋼の翼と鋭い爪や牙を求めるのは当然で、身一つでも飛べたり戦える魔導師や管理局の理屈だけでそれらを没収するのは、極論すれば『非魔導師は魔導師に逆らうな』と言うようなもので、傲慢以外の何物でもありません」
とキツイ言葉を言われた。
ティアナが例えに出したのは、防衛軍で現在採用されているコスモタイガーの事だった。
何故、彼女がコスモタイガーの事について話したのかと言うと、空戦属性の無いティアナは、努力して資格さえ取れれば、大空を高速で自由に飛べるあの翼に憧れを抱いたためであった。
仮想空間であるＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬならば設定次第では空戦属性の無い自分も空を飛べるが、所詮、仮想は仮想で現実では無い。
コスモタイガーやコスモゼロは宇宙空間・地球型惑星の重力圏内両方で運用できる。
宇宙空間で運用できるのなら、ミッドや管理世界の次元空間でも当然運用できるだろう。

そして、パイロットは選抜された人材だが、それが必ずしも魔導師である必要はない。
質量兵器云々を別にして、もし管理局がああいう戦闘機を導入すれば、次元空間や宇宙空間はもとより、成層圏等、航空魔導師が活動できないエリアもカバーでき、かつ、魔導師資質や空戦属性がないばかりに才能が埋もれている人材も活用できるだろうから、管理局の人材不足も緩和されるだろう。
しかし、
「自分たちをお払い箱にしかねないような戦闘機の導入に対して、なのはさんは認められますか？」
と、ティアナから問われ、なのはは黙ってしまう。
自分たちの存在を危うくする物を誰も好き好んで導入したくはないだろう。
それが例え、ミッドの・・管理世界の平和につながる物でも・・・・。
でも、既に管理局は強力な敵対勢力と遭遇してしまっている。
彼らがミッドや管理世界に侵攻してきたら、今の〝海〟と〝空〟では到底対抗しきれないし、制空権を奪われれば陸戦魔導師も十分な活動はできない。
建前や魔法、体裁、プライドや面子にばかりに固執し続ければ、いずれ管理局は滅ぶ。
一方、現実を選び、戦闘機や宇宙戦艦等の質量兵器を導入すれば戦力は強化されるが、管理局は管理局でいられなくなるかも知れない。
画面の向こうにいるかつての恩師と比べ、ティアナは確実にドライ・・と言うかリアリストだった。
彼女がなのはに言った言葉、
「建前にこだわって破滅するよりは、たとえ矛盾して苦しむことになっても、守り通せる確率が高い方を選ぶのが、世界の守り手としてのあるべき姿じゃないのでしょうか？」
と言う問いにレティもなのはも絶句するしかなかった。
それはまるで、管理局員（魔導師）でありながら管理局や魔法を否定する様な捉え方も出来るからだ。

管理局が言うところの、
『質量兵器はボタン一つで世界を滅ぼせる危険な物』
という質量兵器観に対しても、この世界にある強力な質量兵器を目の当たりにしてティアナはクールに見るようになっていた。
一番身近な地球連邦の場合、武装できるのは軍人と警察官だけだが、その全てが厳しい採用試験をパスし、更には厳格で採用試験よりも厳しい教育・訓練課程を修了しなければならない。
さらに、宇宙戦艦や戦闘機を扱える人材はより一層厳しい試験と訓練で選抜され教育されるが、途中で振るい落とされてしまう者だっている。
地球で見た雑誌に地球防衛軍の宇宙戦士訓練校での教習メニューの一部が掲載されていたが、管理局の訓練校と比べてもその訓練内容は管理局の訓練校よりも厳しい課程が課されていた。
訓練生が満十五歳以上に限定されている事を割り引いてもかなり厳しいと感じた。
それと同時にギンガは自分が六課に居る間に、こんなにも厳しい訓練をしていたのかと思い知らされた。
それは、六課での教導がお遊びでは無かったのかと、錯覚させられるぐらいに・・・・。
「不正に魔法を扱う連中だって後を絶たないじゃないですか。要は魔法も質量兵器も、それを使う人次第なんですよ。管理世界の・管理局の質量兵器嫌いは半ばアレルギー反応といってもいいかも知れません。普通の市民はともかく、治安を預かる管理局員までもが過敏に反応するのは行き過ぎです。ましてや、管理局は質量兵器の極致ともいうべき宇宙戦艦を保有する勢力と敵対してしまいました。いつまでも現実から目を背けてはいられないのではないでしょうか?」
と、ティアナにきつく言われ、上官にも関わらず、肩身の狭い思いをしたレティとなのはだった。
結論から言えば、フェイトとティアナの二人は地球連邦からの技術提供、管理局におけるビームやレーザーなどの光学質量兵器の使用と導入へ賛成の姿勢を示したのだ。

最も、それが出来ればの話だが・・・・。
今、思い出しても何故、フェイトもティアナもあんな風になってしまったのだろうと思うなのはに、翌日の昼食時・・・・
先日起きた次元客船襲撃事件の実行犯がボラー連邦軍と断定されたと管理局が会見を開き、大々的な記者発表した。
この発表は正しく解析されたコスパ・コンコルド号のブラック・ボックスの映像にはボラー連邦の艦船と鹵獲されたと思われるＳＸ級の次元航行艦の姿も見られた。
今回のニュースに管理世界は沸騰し、ボラー連邦への対応を巡って激しい議論が湧き起こっていた。
それは管理局も例外ではなく、〝海〟の強硬派からボラー連邦への武力制裁案が臨時理事会に提出され、今日の臨時理事会で採決される可能性が高いというのだ。
リンディ提督、レティ提督、聖王教会のカリム・グラシア、地上本部のロールスロイスらは強く反対しているが、事が事だけに、今回は三提督たち・いわゆる中立派といわれる者たちは賛成を迫られるだろうというのだ。
その中立派が強硬派の方へ賛成と流れれば、穏健派は数において不利になる。
なのはは、事情を知っていそうなはやてに連絡を取り、詳細を聞いてみた。
「ボラー連邦はあの強力な誘導ミサイルをはじめ、強力な宇宙艦隊や機動兵器があるんだよ。管理局は勝てる成算はあるの!?」
当然そこで、なのはは疑問をぶつけてみたが、はやては苦しげに、
「賛成派の意見では、『これまでは、こちらが小数だったから負けていた』っちゅう意見が多くてな、そこで、今度は３００隻以上の大艦隊を動員して、さらに別動隊でボラー連邦の本星をつき、交渉に持ち込むつもりみたいや・・・」
「本星をつくのはいいとしても、地表にアルカンシェルなんて撃ったら、ボラー連邦は、前回以上に残虐なやり方で報復してくるよ。ううん、ボラー連邦のベムラーゼっていう人が国民の犠牲を何とも思わな

い人だったら、敢えて管理局に撃たせておいて、無差別報復に出てくるよ！きっと!!それ以前に位置は分かっているの？」
捕虜を公開処刑するような人物なら、自国民に対してもいざとなれば冷酷非道な事もできるだろう。
しかし、それ以前にボラー連邦の本星の位置が分かっているかどうかである。
広い宇宙をボラー連邦の本星を探しながら移動していては、何年かかるか分からないし、敵の哨戒網に引っかかる可能性が大きい。
消耗戦になれば、遠征している分管理局が不利であるし、本星を見つける前に管理局艦隊が全滅する恐れもある。
「ボラー連邦の版図は一つの恒星系だけみたいやから、国家規模は地球連邦より少し大きい位で、位置もラティオからの報告で本星の座標は大体解っとるから、直接本国近くに転移してアルカンシェルを向けて交渉を持ち掛けるつもりみたいなんよ・・・」
はやてはボラー連邦の本星の推測位置をなのはに説明するが、管理局が手に入れたボラー連邦の情報は余りにも少なすぎた。
実際ボラー連邦は、銀河系の核恒星系を中心に銀河系北部をほぼ手中に収めている大星間国家だった。
しかし、管理局はこの事実を勿論知らない。
「でも、はやてちゃん。管理局にそんな事ができる力があると思う？もし、ボラー連邦が二段構えで防備を構えていたらどうなるの？当然あの誘導ミサイルは間違いなくあるだろうし、地上から宇宙空間に向けて撃てる兵器があるかも知れないんだよ・・・それに波動砲だって・・・」
「リンディ提督、レティ提督ら反対派の人らもそれを指摘しておるんやけど、賛成派に、『それは敗北思想に取り付かれた臆病者だ』と批難されとるらしいんよ。本局には魔導師至上主義が蔓延っておるけど、ボラー連邦や地球連邦みたいな魔法に頼らない軍事力を持つ世界は、異教徒か野蛮人の世界にしか見ようとしないんよ・・・でも、あちらさんの本音は多分、魔法要らずで管理局を圧倒する力を持つ世界に対する恐怖心の裏返しから来る拒絶反応なんやろうな」

「・・・・」
「それに今回の事件で、管理局の高官の子供も大勢犠牲になったみたいで、ボラー連邦への武力制裁はもう止めることは出来へん・・・・」
なのはは暗澹たる気分に陥っていた。
自分たちが理解できないからと言って対話を拒んで、相手が弱ければ、力（魔法）によって従わせているのでは、駄々を捏ねている子供より始末が悪い。
ましてや、相手を十分知ろうとしないまま戦端を開く等は愚の骨頂ではないか？
そのような事を思い返している内、教官室に本局から来た士官の一人が来たので、なのはははやてとの通信を切った。

時空管理局　教導隊　隊舎
「本日は緊急かつ重要な報告がある」
苦虫を噛み潰したような表情のまま、件の士官はひと呼吸置いて話し始める。
「時空管理局は、先日の次元客船襲撃の実行犯たるボラー連邦軍並びにボラー連邦政府に対し、武力による制裁を加えることになった。ついては、諸君たち教導官と一部の教導生にも担当部隊への転属命令が出る可能性がある。心しておくように」
その言葉を聞きズン、と空気が重くなる。
担当部隊への転属命令・・・・それは、自分や同僚、教え子たちが、ボラー連邦本星まで遠征し、そこで、その国の兵士たちと戦うかもしれないと言う事だ。
しかも相手は管理局を侵略者として必ず見てくる・・・・。
非殺傷なんて生易しい対応をしてくる筈がない。
殺し殺される血生臭い戦闘がこの先に待っているのは明白だ。
航空戦技教導官・高町なのはにとっての地獄が始まろうとしていた。

それから暫くして・・・

ボラー連邦への武力制裁が議会で賛成され、早速ボラー連邦への武力遠征部隊の発表が行われた。
ボラー連邦本星を急襲する部隊は稼働可能のＳＸ級二隻を中心として、Ｘ級、Ｒ級と言った新鋭艦で固められ、ＸＶ級も建造されてから比較的新しいモノが加えられた。
それにボラー連邦本土制圧の為、空戦魔導師三個師団が乗る輸送船団も結成された。
そして、ボラー連邦艦隊を陽動する部隊は従来のＸＶ級とＬ級巡航艦で固められ、こちらは本隊よりも数は多いが、その性能は明らかに段違いだ。
最もそれは管理局の戦力に関してだが・・・・。

そして、遠征艦隊は出立の日を迎えた。
時空管理局　本局　次元航行艦　ドック
「何で・何で!?どうして!?クロノが行かなきゃならないのっ!?」
夫であるクロノを見送りに来た妻、エイミィの第一声はそれだった。
「そんなに管理世界を拡げたいんなら、拡げたがっている連中だけで行けばいいんだよっ!!」
「エイミィっ！」
やり場のない理不尽な怒り、不満をぶちまける妻に、それ以上言うなとばかりに自然と声が大きくなってしまう。
「っ!?」
「あっ、すまない・・・」
つい大声を出してしまい、エイミィの体がビクッと震える。
エイミィの言う事はクロノ自身もわかる。
「今回の任務の第一はボラーに対する武力制裁だ。これ以上あの世界を放置すれば、今後もいいように管理世界に対するテロが行われる。もうそんな事をさせないために、ボラーにある程度の損害を与えて、二度とそうする気にさせないための任務なんだ。わかってくれ・・・」
そう言いながら、クロノの心中には無力感が募る。

武力制裁といえば聞こえはいいが、内実はアルカンシェルの先制攻撃により、ボラー連邦の本土を半ば焦土に変える・・これはれっきとした戦争であり、殺戮行為だ。
しかも、宣戦布告なしの卑劣な奇襲攻撃。
最も管理世界拡大推進派や今回の遠征作戦の賛成派にとっては、管理外世界への宣戦布告などする必要もないと決め込んでいるのだろう。
ベムラーゼらボラー連邦の指導者層は許すことができないが、だからといって普通に暮らしているであろうボラー連邦の大勢の国民まで犠牲にするやり方にはやはり納得できない。
いくら敵対しているとはいえ、魔法文化がない世界を格下に見る姿勢は相も変わらないのか――？
クロノは、武力制裁の裏に隠された任務にも思いを馳せる。
そして、もう一つの任務・・・
それは、ボラー連邦を管理世界へと編入させ、その技術をすべて没収して、管理局の戦力とすること。
ミサイルのような実弾兵器はダメにしても、防衛軍やガミラス、ガトランティス、暗黒星団帝国と同じ、光学兵器や宇宙船のエンジンは、極端な事を言えばどうにでもごまかせる。
あれだけの戦闘力を持つ艦艇を管理局のものにすれば・・・次元航行能力さえ付加できれば、反管理局テロ組織の殲滅も容易になるし、今後の管理世界拡大も楽になるだろう。
それに推察ではあるが、ボラー連邦の艦船技術と地球防衛軍の艦船技術は似ている部分が多々ある。
それらを接収出来れば、地球連邦からの技術提供を受ける事は無いだろう。
しかし、それは獲得できればの話だ。
失敗した時のリスクは余りにも大き過ぎて、口にするだけでも恐ろしい。
それに、成功したらしたで、管理局はガトランティスみたいな侵略組織に堕してしまいかねない。

いや、もう既にそうなりかけている。
そして、今よりも強力な力をつけたならば、管理局は真っ先に地球連邦・地球防衛軍と戦争になる可能性が高い。
フェイトたちの一件で交流を持ったとはいえ、正式に友誼を結んだわけではない。
それに管理局の中には、地球防衛軍に煮え湯を飲まされたと思い込んでいる連中も多々いる。
そんな連中にとっては、今まで受けた屈辱を返す時だと言わんばかりに、地球連邦・地球防衛軍との戦争を煽るだろう。
しかし、相手は今回のボラー同様プロの軍隊だ。
いざ戦闘となれば容赦なくこちらを殺すために手ぐすね引いて待ち構えているだろう。
次元航行能力を持たせた　ヤマト　や　まほろば　を始めとする戦艦部隊が本局に波動砲を撃ち込みに来るかも知れない。
ミッドに対し、これから自分たちがボラー連邦に行おうとしている事・・・軌道上からの艦砲射撃・・・あるいは直接、波動砲を撃ち込んでくるかもしれない。
彼らは〝侵略者〟に強い敵愾心を持ち、その企みを止めるためには敵国の中枢を攻撃するのもためらわないのだ。
殺し殺される覚悟が皆無か希薄な管理局に、そういった修羅場をくぐり抜けられるだけの気魄があるのか、クロノは自分自身も含めて首を横に振ることしかできずにいた。
今回の武力制裁で、一番ベストなのは、互いに五分と五分で引き分け、ボラー連邦に対して、民間非武装船襲撃での謝罪と今後、管理世界への不可侵条約の締結と一部の技術提供・・・。
その様な展開ならば良いのだが、そんな展開はボラー連邦に勝つ事よりも難しいだろう。
説得が奏功したのか、エイミィは渋々だが矛を収めてくれた。
「・・・でも、これだけは約束して。どんなに無様でもいいから、クラウディアのクルーと一緒に生きて還ってきて。魔導師や局員の代わり

はいくらでもいるけど、家族の代わりはいないんだからね。いい？」
眼を真っ赤にして早口で言うと、耐えられなかったのか、その場から走り去ってしまった。
「やれやれ・・・」
あの辺は昔から変わらない。
思わず苦笑が洩れてしまったが、すぐ表情を引き締めた。
「――そんなの当たり前だろう？」
こんな死ぬには馬鹿馬鹿しい任務で父、クライドの元に逝くのは真っ平ごめんだ。
それに義妹をまだ迎えに行っていないのだ。
自分はまだ死ぬわけにはいかない。
無論、クラウディアの乗組員も一人として無駄死なせるつもりはない。
結果がどうあれ、自分は部下の命に対する責任を果たすまでだ。
見っとも無い姿を晒しても、地べたを這いずり回って、周囲から卑怯者と罵られてでも必ず生きて帰る。
こんな馬鹿な作戦を立てた連中の思惑どおりにはさせない。
クロノはそう決意し、チラッと辺りを見回すと、やはり今回の武力制裁は、局の中や他の管理世界での政府の一部は賛成したが、実際に武力制裁へと赴く局員の家族たちは反対の様だ。
そりゃあ、あんな酷い映像を見たら当然の結果だろう。
もし、捕まって捕虜になればあのような末路が待ち構えているのだから・・・。
クロノの視線の先には、まだ幼い我が子を抱き上げる父親の姿・・・。
新婚なのだろう、大きくなった妻のお腹に耳を当てる夫の姿・・・。
彼女と長い抱擁を交わす若い男性局員の姿・・・。
中でも、クロノが渋い顔をしたのは、まだ未成年ながらも高魔力と空戦属性が有るが故に、今回の武力制裁・・ボラー連邦本星の制圧・占拠を行う為に招集された未成年の若い空戦魔導師たちとその家族であった。

母親なのだろう、管理局の制服に身を包んだまだあどけなさが残る少年にしがみ付きながら、泣いている女性の姿がちらほらと見える。
(やるせないな・・・)
地球防衛軍の士官たちが、管理局に対して、不信感を持つ訳があの光景を見て、ようやく分かった気がした。
そして今回の武力制裁賛成派の連中の多くは安全なミッドで吉報を待つだけ・・・
もちろん彼らの身内が今回の武力制裁に参加する筈もない。
そんな中、制裁に向かう中でもボラー連邦の本星を攻撃する連中も出世欲にかられた連中ばかりだ・・・
しかも、その殆どの連中は、管理外世界における現地住民への暴行・略奪をおこなった疑惑のある者も居る。
管理局はやはり、不信感を抱かれても仕方がない組織なのかと、クロノは思った。
「クロノ君」
「ん?ああ、はやてか・・・」
見送りに来たのだろう。クロノが振り返ると、そこにははやての姿があった。
「ごめんな、私らの力が及ばんばっかりに・・・」
「いや、はやてが気にする事じゃないよ。元々、今回の制裁決議は反対するのが難しかったんだから・・・」
「でも・・・」
はやての脳裏にカリムの預言が過ぎる。
報復せし法の番人は、独裁の地へと赴く
されど番人は漆黒の闇へと飲まれる・・・。
預言の二つ目の最後の節と今の状況が全く同じではないか・・・
「クロノ君、カリムの預言、覚えとるやろう?」
「あ、ああ・・・」
「今まさに、カリムの二つ目の預言の通りに事が進んどる・・・」

「・・・・」
クロノもカリムの預言の事は知っており、はやて同様、今の現状が彼女の予言通りに進んでいる事もはやてに指摘され、気がついた。
この武力制裁は失敗するな・・・・と・・・・。
「クロノ君・・・・」
「何だい？はやて・・・・」
「気いつけてな・・・・必ず・・必ず生きて帰るんやで」
「分かっているよ、はやて・・・・今回の任務は、死ぬには余りにも馬鹿馬鹿しい任務だからな・・・・」
本局の音楽隊が奏でる音楽が響き渡る中、ＳＸ級三番艦プレジデント・・・・
今回の武力制裁における総旗艦が、ゆっくりとバースから離れていく。
見送る局員や家族の表情は悲喜それぞれだが、乗員の家族の大部分に笑顔はなかった。
その人たちの願いはただ一つ、ただ無事に帰ってきてほしいと言うものだけであった。
様々な思惑を抱いて、制裁艦隊はボラー連邦本星を目指して遠征の途へとついていった・・・・。

八十三話　布告なき戦争

はやてたちが見送る中、ボラー連邦への制裁艦隊は本局を離れていく。
見送りに来た家族は皆、不安そうな表情で見送っている。
意気揚々と見送っているのは、今回の武力制裁に賛成しながらも、自らはミッドから一歩も出ないで安全な地で事の成り行きを見守る管理局の強硬派や管理世界拡大推進派、魔導師至上主義の幹部局員たちだけだ。
勿論、今回の制裁艦隊の中で、管理局に在籍する彼らの身内、家族は一人も参加していない。
彼らの家族は彼ら同様、安全なミッドで事の成り行きをただ見守るだけなのだ・・・。
（ふん、反吐が出るわ・・・）
同じ局員のはやても連中の行動には、殺意さえ抱く。
どう考えてもボラー連邦がそう簡単に白旗を上げるとは、思えない。
そんな事を言ったら、連中は「何たる弱腰か!!」と、言って来るだろうが、「それなら自分たちで行け!!」と言い返したい。
しかし、今のはやての権力では、それを言うのもままならない。
上の連中と同じく、今回の武力制裁を止められなかった自分自身にも苛立ちを覚えるはやてだった。

陽動部隊　次元航行艦　クラウディア　ブリッジ
慣れ親しんだ本局のバースを離れていくクラウディア。
クルーたちはジッと離れていく本局を見つめている。
そんな中、艦長のクロノは一人、考え込んでいた。
ボラー連邦がこちらに本格的攻勢をかけてくる様子は見られず、ならば先制してボラー連邦の本拠地を叩こうというわけだが、地の利はボラー連邦側にある。

それに艦船、機動兵器もそれは同様だ。
性能は向こうの方が断然上だ。
艦隊決戦に陥れば確実に不利な管理局側は、一目散にボラー連邦の首都をついてアルカンシェルを放ち、可能な限り有利な条件で停戦交渉を行う。
その過程でボラー連邦の国民が犠牲になるのもやむを得ない、ということだが――。
これまでの経緯からして、ボラー連邦の国民は管理局の事を知らされていないか、憎むべき侵略者と教え込まれているだろうな・・・・
そういうところにいきなりアルカンシェルを撃ち込めば、更なる敵愾心と憎悪を買うだけではないのか――？
管理局が・・・これから自分たちが行う所業について考え込むクロノであった。
しかし、今回の遠征で、クロノたちに与えられた任務は、事実上の囮となってボラー艦隊を挑発し、誘い出しボラー連邦の艦隊を本星から引き離すこと・・・・
極めて危険だが、うまくいけば本隊はボラー連邦の本星をつける。
ただ、クロノが何とも冷ややかな気持ちなのは、陽動部隊に配置された艦の多くは、いわゆる慎重派や穏健派といわれる者が艦長であること・・・・
（この遠征を使って目障りな連中を一網打尽に消してしまおうと言うわけか？）
余りにも見え見えな配置といい、不本意極まる任務だが、自分は艦と乗組員に責任がある。
そうやすやすと強硬派の思惑どおりに死んでやるつもりは毛頭ない。
何としてでも全員、生きて本局へ・・ミッドへ帰る。
クロノの頭には勝利の文字は全く浮かんでおらず、代わりに「生還・帰還」の文字が浮かんでいた。
ボラー連邦への武力制裁が決まったあたりから元気がなかったが、

制裁艦隊が出撃した日のなのはは、一段と沈んでいた。
そこに、同じ教導隊に所属するヴィータが声をかける。
「どうした？なのは？元気ねぇな」
「うん・・・」
「何が有った？」
十年近い付き合いのある両者・特にヴィータは騎士故か、人の感情を読み取るのには、長けていた。
最も、今のなのはは、騎士でなくとも、新米の局員でさえ、その表情を見れば何か良くない事があったのはすぐに分かるぐらい顔に出ていた。
「今回のボラー連邦制裁艦隊に、私の隊の教導生と同僚の人たちも何人かが参加することになったの・・・」
「えっ!?」
魔導師は大気圏内、それも対流圏内での任務に限定されている。
成層圏での活動については専用のバリアジャケットの開発が端緒についたばかりで、ましてや宇宙空間で活動できる目処はついていない。
空戦魔導師を連れて行ったとなると、ボラー連邦本星に降下するというのか？
それをなのはに問い質すと、
「私もそれが疑問で、本部に問い合わせたんだけど、降下任務が生じる可能性があるから、空戦魔導師も必要だと言っていたの・・・」
「馬鹿な!!ボラーには強力な宇宙艦船が有ったんだぞ!!当然地上には防衛軍の様な戦闘機だってある事ぐらいは簡単に予測がつくだろう!?」
ヴィータは声をあげるが、彼女の意見は最もである。
宇宙には管理局の艦船よりも強力な宇宙艦隊、そして地上には彼女の言う防空用の艦載機の他にも、強力な対空砲、対空ミサイルだって必ず保有しているはずだ。
優秀な航空魔導師であれば、低空での格闘戦で互角に戦えるかも知れないが、それは一対一での話だ。

多数のダイブ＆ズームの一撃離脱戦法や地上からの対空砲射撃には抵抗しきれない。
ヴィータはそれを指摘したが、なのはは、
「私もそれを指摘して反対したけど、決定は覆らないって・・・・」
と答えるや俯いてしまった。
よく見ると肩を震わせ、啜り泣いている。
「いくら向こうのやった事が外道で許せない事でも、まだひよっ子の教導生を侵略紛いの行為・・しかも殺されるかもしれない戦場に送り込むなんて、どうかしているぜ、上の連中は・・・・」
ヴィータはまだ若い教導生を管理局の任務よりも更に危険な戦場へと送り込んだ管理局上層部に対し、顔をしかめ、毒づく。
それは過去に起きた高町なのは墜落事件の出来事が大きく関係している。
自分の教導は、世界の平和の守り手になってもらいたい一心でやっている。
こんな、侵略同然の行為に加担させられる上、生還が保証されない任務に送られる教え子や同僚たちが余りにも不憫だとなのはは思った。

ボラー連邦　本星　首都　ラスコー　首相官邸
「首相閣下、只今、第八打撃艦隊司令、ハーキンス中将から至急の連絡が入っております」
「繋げ」
首相官邸で政務を執っていたボラー連邦国家元首、ベムラーゼ首相は、第八打撃艦隊司令官であるハーキンスとの通信回線を開かせる。
「何の用かな？ハーキンス中将」
「はっ、実は、当方の管轄宙域にある監視衛星が時空管理局の艦船を多数確認いたしました。それに例の特務艦、アフトワーズからの報告では、数日前から通信のやり取りが大幅に増えている様です」
「ふむ・・・・」
「恐らく彼奴等の狙いは・・・・」

「このボラー連邦本星だと言うのだろう？」
「御意。今回観測された艦隊の規模は以前に遭遇した艦隊よりもその規模は遥かに大規模であります。連中の言う管理世界における治安維持活動と比べても異常なまでに多い事を併せて考えるに・・・」
「我がボラー連邦本星への直接攻撃の可能性が高いということだな？」
「御意にございます」
　ハーキンスからの報告を聞いたベムラーゼは即断する。
「よろしい、彼奴等が戦いを望むのであれば、こちらも其れ相応の対応をするまでだ。アフトワーズには命令あるまで現在位置で待機させよ。第八打撃艦隊は直ちに出撃、迎撃態勢を取れ」
「はっ!!」
　ハーキンスは敬礼し、通信をきった。
「ゴルサコフ」
「はっ!!」
「彼奴等の狙いがここならば、連中は伏兵も潜ませている可能性がある。直ちに本国の第一、第二主力艦隊にも出撃準備をさせろ、そして出撃準備が整い次第、直ちに出撃させろ!!」
「はっ、承知しました。直ちに本国の第一、第二主力艦隊を出動させます」
「ああ、それと・・・」
「はい？」
「例の新兵器の準備もさせておけ」
「はっ。ですが、あの機動要塞の自走はまだ不可能です。例の新兵器は使用可能ですが要塞自体を動かす事は出来ませんが、それでもよろしいでしょうか？」
「構わん。すぐに準備をさせろ!!」
「はっ!!」
　ベムラーゼは迎撃態勢を整えさせるのと同時にボラー連邦本星全土に戒厳令を敷くように指示を出した。
　市街地に警報音が鳴り響く。

政府庁舎内で人員が目まぐるしく駆け回る中、ベムラーゼは堂々とその場から動かず、スクリーンを見ながら、不敵に口元を緩める。
「フフフフ・・・時空管理局よ、これは貴様たちが仕掛けてきた戦争だ。神聖なる我が連邦の領地に土足で上がり込んだことを後悔させてやるぞ。フフフフフフフ・・・アハハハハ・・・・」
ベムラーゼがこの場から逃げなかったのは、既に戦う前から勝敗は決していると・・・自軍の勝利に揺るぎがないと信じていたからだ。
管理局はこの星に傷一つつけられず、敗北するだろう・・・と言う思いを抱いて・・・
しかし、彼の思惑はあながち間違ってはいなかった・・・

ボラー連邦　本星　近海
クラウディアを含む管理局制裁艦隊、陽動部隊は予定宙域に転移を完了した。
「艦内全システム異常なし」
「通信状況クリア」
「レーダー正常動作」
クラウディアのブリッジ内に艦内外のチェック状況を報告するオペレーターの声が響く。
「よし、旗艦に報告してくれ」
艦長席のクロノ・ハラオウンは自艦の状況を旗艦に報告するよう指示した。
クロノたちが所属する陽動部隊は、ＸＶ級とＬ級の艦船で編成されている。
クロノたちの任務は迎撃に出て来るであろう、ボラー連邦艦隊を誘い出し、本隊をボラー連邦本星への接近を支援することだ。
いわば囮だが、簡単にやられては敵の矛先が本隊に向けられるため、敵艦隊に追いかけられながら〝敗走〟し、敵を本星から引き離さなければならない難しい役どころだ。
この策は奇しくも以前、ガトランティス残党軍が使った手口と全く同じである。

当然、陽動部隊のこちらは、少なからぬ被害が生じることも考えられる。
クロノは出航前に艦から可燃物を全て下ろさせ、代わりに船外作業服（宇宙服）を積み込んだ。
これとて気休めにしかならないが、生身よりはずっとましだ。
クロノのこの行為は、強硬派の提督連からは嘲笑されたが、地球防衛艦隊とガトランティス艦隊の戦闘を目の当たりにしたクロノにすれば、これですら足りないのだ。
彼は、陽動部隊の艦長らにもこの提案をし、彼らもクラウディア同様の行動を行った。
そしてボラー連邦の近海に来た時、クロノは乗員全員に宇宙服の着用を命じた。
とにかく生き残る・・こんな最低な任務で無駄死になど御免被る。
あのベムラーゼが易々と自分たちの攻撃を許すはずがなく、悪質で管理局を絶望させるような陥穽を用意して手ぐすね引いて待っているに違いない。
クロノの予感は、一度見ただけではあるが、ベムラーゼの人となりとカリムの預言からくるものであった。
周辺を警戒して進んでいくと、
「前方十時の方向に、艦船の転移反応多数！」
観測担当のオペレーターがクロノを振り返り報告した。
「っ!?ボラー艦隊か？」
「味方識別信号は出ていません！」
「ならば、ボラー艦隊だ。こんな所に味方が居る筈がないからな。総員戦闘配備につけ！艦内全隔壁を閉鎖せよ!!」
（・とはいえ、どこまで持ちこたえられるのか・・・？）
遭難したフェイトらが指摘したのは、管理局艦船の脆弱さだった。
特に艦内隔壁の少なさは、万一被弾した時に大量の空気が失われ、犠牲者を増やす原因になる。
また、艦の什器・備品に可燃物が多いのも問題で、艦船技術本部も、現在建造中の艦船については隔壁増設や什器備品の難不燃化を進め

ているが、肝心の艦自体の強化はやっと端緒についたばかりだ。
武装に関しても、ガトランティスや地球防衛軍の艦船と比べて数世代は遅れていると見られ、最強の魔導砲たるアルカンシェルは射程と威力で波動砲に及ばず、その他の中小口径魔導砲にしても同様だ。
何より、主機たる魔力炉が相対的に出力不足なのだ。
機関出力が小さければ航行能力が低く、戦闘時の機動性も低い。
だからこそ艦隊決戦ではなく、直接敵国の首都を衝くという戦術も領ける のだが・・・・。
「ボラー艦隊の方位確認!!」
「方位、左舷２５度・・・・数は・・・・」
「どうした？数は？」
「ひょ、表示します」
オペレーターがスクリーンに接近するボラー艦隊を表示すると、クラウディアのブリッジクルーは唖然とする者、顔を引き攣らせる者に分かれた。
「す、凄い数だ・・・・」
こちらに接近して来るボラー艦隊は軽く管理局陽動部隊の数よりも多かった。
「っ!?全砲門開け、障壁最大出力へ！」
クロノは急ぎ戦闘準備を整えさせる。
双方の艦隊は急速に距離を詰めていく。
「第一、第二部隊、アルカンシェル発射態勢に入りました！」
通信オペレーターが叫ぶように報告する。
前衛部隊がボラー艦隊に先制攻撃でアルカンシェルを浴びせかけようというのだ。
（発射を気取られなければ我々の勝ちだが・・・・）
クロノはメインモニターに視線をやり、アルカンシェル発射シークエンスに入った前衛部隊を見遣る。
前衛部隊の艦首直前に発生した光球が急激に拡大していくが、それを見ていたクロノの表情が強い不安に歪んだ。
（いかん。あれでは撃つぞと敵に言いふらしているようなものだ!!）

クロノの絶望に近い不安をよそに、発射シークエンスは最終段階に到った。
「アルカンシェル、撃ちますっ！」
「て、敵艦隊再び一斉に転移しました!!」
通信と観測の両オペレーターが叫ぶように言った――。
「アルカンシェル、外れました!!」
多くの艦で同じ報告がなされた。
前衛部隊から放たれたアルカンシェルは敵艦隊に着弾する前に、その敵艦隊が小ワープにて回避してしまい、外れたのだ。

ボラー艦隊　第八親衛打撃艦隊　旗艦　バイオン
ボラー連邦艦隊の中で、一隻だけ艦色と艦影が異なる艦があった。
ボラー式の丸みを帯びたずんぐりな艦影は変わらないが、大きな特徴なのはその下にある円盤型の艦体から構成される艦影だった。
色も他の艦が青紫なのに対し、その艦だけは赤い色をしていた。
この艦こそ、第八親衛打撃艦隊司令、ハーキンス中将の座乗艦、バイオンだった。
そのハーキンス率いるボラー艦隊は、管理局のアルカンシェルを小ワープにて回避すると、管理局艦隊の右舷側面へと出現した。
「全艦、総攻撃開始。目標管理局艦隊、前方、４００宇宙キロ」
ハーキンスは司令官席に座りながら、冷静に攻撃命令を下す。
攻撃命令が出たボラー艦隊は一斉に主砲を管理局艦隊に向けて放ってくる。

クラウディア　ブリッジ
「ボラー艦隊、我が艦隊の右舷側面に出現、攻撃してきました!!」
「障壁展開！主砲斉射!!撃ち返せ！」
「無理です！こちらの射程外です!!」
「着弾しますっ!!」
管理局にとっては最悪の展開になった。
ボラー艦隊はこちらの中小口径の魔導砲の射程外からでも撃って

くる。
標準装備の武装の射程距離でも管理局の艦とボラー連邦の艦では大きな差があった。
そして、例の厄介な誘導ミサイルも撃って来た。
ボラー艦隊の一斉攻撃を受け、陽動部隊は被害が出始めた。
右翼側に展開していた部隊の艦船が右舷らの砲撃で障壁を破られ、忽ち艦体に多数の破口を穿たれて爆発炎上したのを皮切りに、艦隊の外側に位置する艦から火の手が上がり始めた。
「ベレル、シグナルロスト!」
「ファスター反応消失!!」
瞬く間に僚艦のシグナルが次々と消えていく様に、クラウディアのブリッジクルーは蒼白になっていく。
「くそっ、本隊は何をしてやがる!?」
「まだ、着かないのか!?」
クルーから怒り混じりの声が上がる。
こちらは命懸けで囮役を演じているのだが、本隊が役目を果たさなければ、こちらは無駄死だ。
「本隊の状況は?」
「〝今しばらく持ち堪えよ〟とだけです」
早くも半泣き顔の通信オペレーターの報告を受けたクロノは、コンソールの下で拳に一層力を込めた。
ボラーの首都を焼野原にしたとしても降伏する保証などない。
むしろ憎悪にかられたボラー軍の報復の的になるだけではないのか?
現実を逃避するかのようにクロノにはそんな思いが脳裏を過った。
「うわぁぁぁぁー!!」
「助けてくれぇ!!」
「嫌だ!!死にたくねぇ!!」
「こんな所で死ぬのは嫌だぁぁぁー!!」
モニター中のスピーカーからは断末魔に瀕した僚艦のクルーの悲鳴と叫びが聞こえてくるのをクロノは無言で聴き入っていた。

彼の指示で艦隊内音声通信を録音している通信オペレーターは聞いていられなくなったか、俯き、インカムに添えた手を震わせている。
「・・・」
クロノの心中は怒りを通り越して冷え冷えとしていた。
何時自分たちも被弾し、彼らと同じ末路を辿るか分からないのに・・・
クロノは自分でも驚くほど、冷静だった。
永久不変の物などあり得ない。それが大宇宙の真理。
それは管理局も例外ではない――。
陽動部隊の四割強の艦が失われるか大破した頃、
「本隊、ボラー星近距離に転移！」
ようやく総旗艦プレジデント以下の本隊が動いた様だ。
クラウディア以下陽動部隊のブリッジ内にホッとした雰囲気が漂い始めたが、それは束の間の事だった・・・。
「ボラー星側面より、艦隊出現!!」
「何っ!?」
クロノが我が耳を疑った時、メインスクリーンにはこちらが相手をしている艦数と同等・・いや、それ以上の艦隊が映っていた。
「アイツらで全部じゃなかったのかよ!?」
オペレーターの一人は現在クラウディアら陽動部隊が相手をしている艦隊全部がボラー連邦の艦隊全てだと思っていた様で、ボラー連邦本星から出て来たボラー艦隊に思わず驚愕の声をあげる。
しかし、今自分たちが相手をしている艦隊がボラー連邦の総力とは誰も言っておらず、管理局側が勝手に勘違いをしているだけに過ぎない。
「これが、ボラー連邦の底力・・・」
また別のクルーは唖然とした表情で本星から出て来た艦隊を見ている。
ボラー連邦の力をまざまざと見せつけられ、もはや勝てる気にも、交渉にもつれ込む気など失せた様子のクラウディアのブリッジだった。

ボラー連邦本星から出現した艦隊は管理局本隊を攻撃するが、その攻撃手口がこちらと比べ、何やら手加減しているかのように見えた。
しかし、苛烈な攻撃である事には変わりなく、本隊はその攻撃から逃れるべく、ボラー艦隊から逃げる様な艦隊行動を取る。
ボラー艦隊は管理局艦隊から一定の距離を保ったまま、待機する様な陣形をとった。
すると、ボラー艦隊の攻撃から逃れた管理局本隊の前に建設中の大型機動要塞の様な建造物が現れる‥というよりも管理局艦隊はその要塞のある所へと誘き出された。
「ボラー連邦本星の至近距離に機動要塞らしき物体をキャッチ!!」
「パネルに映せ!!」
「了解!!」
「ボラー要塞より、超高エネルギー反応!」
「何!?」
クロノがメインスクリーンを見ると、要塞から長い砲身の様な物が突出すると、そこから白濁色の光球が断続的に放たれた。
その直後、映像が乱れた。
「本隊はどうなっている!?」
「一帯に極めて高いエネルギー反応!計測できません!」
(ボラー連邦はこちらの戦略を看破していたのか?)
「解析急げ!」
本隊がやられてしまえば作戦の大前提が消滅する。
一刻も早く正確な状況を掴んで手を打たなければ、我々は犬死にだ!
その思いは陽動部隊旗艦アクシオムも同じだった。
「本隊の反応はまだ確認できないのか!?」
「まだ出ません!」
陽動部隊司令官兼アクシオム艦長のランドバルト・ムーグル少将は焦慮していた。
強硬派/拡大派に属する彼は、本部高官と総司令官からは、多少の被害は無視しても構わぬと言われていたが、もう過半数の戦力を失っ

た。
管理世界拡張に消極な連中のみならず、同志の艦も続々と戦闘力を奪われ、スペースデブリと化している。
これで本隊がやられてしまったら、最早撤退しかないのだ。
「エルガミオ、撃沈されました!!」
「おのれ野蛮人共め!!」
また同志の艦が失われた。
「司令官、既に我が艦隊は戦力の６８％が失われました。これ以上の戦闘続行は不可能です」
観測オペレーターが強張った表情を向ける。
オペレーターだけではなく、他のクルーが向ける表情も大同小異。
こんなに犠牲を出した。
もう撤退すべきだ。
自分たちはこんな所で死にたくない。
「本隊との通信も繋がらないか!?」
「まだ繋がりません」
本隊は全滅したのではないか？
我々はまんまとボラー連邦の術中に嵌まったのではないのか？
そんな予感がランドバルトの脳裏をよぎった直後。決定的な映像が齎された。
「映像回復しました!!」
「よし、メインモニターに繋げ!!」
「了解!!」
ようやく映像が回復し、陽動部隊全ての艦船は本隊の現状を知るために、モニターに本隊の映像を表示する。
すると、其処には・・・・。
「あ、ああ・・・・」
「ば、馬鹿な・・・・」
「本隊が・・・・」
モニターには管理局本隊の近くには多数のブラックホールが存在し、その強力な引力によって管理局本隊の艦船は次々とブラックホー

ルへと飲まれていく映像が表示された。
何故、こんなにも多数のブラックホールが突然出現した？
先程までこの近海にはこんなにも沢山のブラックホールなんて無かった筈だ。
誰もがそんな疑問を抱いたが、その答えは直ぐに分かった。
例の建設中の要塞が再び、砲身から高エネルギーを放つ。
今回は一発しか放たなかったので、映像は乱れなかった。
放たれた光球は、やがて花火の様に割れると、そこからブラックホールが出現した。
「ブラックホールを生成してしるんだ…あの砲台は…」
誰かがポツリと呟いた。
突如、現れたブラックホールへと飲み込まれて行く管理局艦であったが、運よくブラックホールの引力圏から逃れた艦もあったが、その艦はブラックホールの引力圏外に待機していたボラー連邦本国の主力艦隊の餌食となっていく。
管理局本隊に残されたのはブラックホールに吸い込まれるか、敵艦の艦砲射撃の餌食になるかのどちらかだった。
「…ほ、本隊、全艦シグナルロストですっ!!」
観測員が涙声で伝えてきた。
「それは間違いないのか!?」
「はい!!僚艦からも同様の報告が入っています!!」
「恐らく本隊は全てあのブラックホールか敵艦の砲撃によって…」
「…」
「司令官…」
唇を噛むランドバルトの前に、副長が意見具申をした。
「作戦は完全に失敗です。一刻も早くこの海域からの撤退を!」
本隊の全滅＝作戦失敗である以上、ここに留まることはただの無駄死に過ぎず、面子など何の意味もない。
（あの女狐たちの言う通りだったか…）
非常に不愉快だが、はやて、レティ、リンディらが正しかったと認めざるを得ない。

「残存全艦、直ちに空間転移でここを離脱せよ。座標は各艦に一任。各艦の幸運を祈る！」
　統一した座標を計算する時間すら惜しいと判断したランドバルトは、残存艦に自由転移を命じ、続いて本局への打電を命じる。
「我が艦隊は、ボラー連邦軍の罠に嵌まり、本隊は全滅、陽動部隊は既に七割以上の戦力を喪失し壊滅に瀕す。これより残存艦は全て撤退すると打電しろ!!」
「わかりました!!」
　通信主任はコンソールに向き直り、手早く通信文を作成して本局に向けて送信したが、その直後、右舷と直上からの十字砲火がアクシオムのブリッジから機関部を直撃し、同艦は大火球と化して消滅した――。

　時空管理局本局　大会議場
　ボラー艦隊と戦闘に入るとの連絡が入ってから約一時間後、時空管理局本局に凶報が飛び込んで来た。
　ボラー連邦本星を攻撃する本隊は全滅。
　陽動部隊も大半を失い、残存艦は僅か二割～三割弱というのだ。
　しかも生き残った艦でも無傷のモノは無く、大なり小なり被弾している。
　報せを受けた〝海〟の高官たちは蒼白になって立ち尽くす。
「どういうことだ、もう一度確認しろ！」
「総旗艦、プレジデントに通信が繋がりません！」
「引き続き呼び続けろ!!陽動部隊のアクシオムにもだ!!」
「了解!!」
「プレジデント応答願います！こちら時空管理局本局管制室!!応答願います！」
「アクシオム、応答願います！応答して下さい!!」
　管制室のオペレーターは懸命に各艦に呼び掛けるが、応答してくる艦はごく僅かだ。既にやられてしまったのか、撤退することで精一杯なのか。

せめて後者であってほしいのだが――。
そしてその報せは瞬く間に本局中に広がった。
状況を確認に来たはやては知らせを聞き、顔面蒼白になり、彼女は棒立ちになったまま、しばらく動かなかった。
レティは会議室にて、打ち合わせ中だったが、秘書が慌てふためいた様子で会議室へと入って来て、事の次第をレティに報告した。
彼女も第一報を聞くや、一瞬気が遠くなりかかったが、すぐに気を取り直す。
レティは打ち合わせを中止し、足早で自室に戻った。
クロノが幼い頃、次元航行艦の艦長をしていた旦那のクライドを不慮の事故で失い、今度は息子の安否も危うくなったリンディの心中を、レティはよく知っていた。
自分にこの知らせが来たのだから、リンディにも当然この知らせは届いている筈だ。
もう少し時間が経てば、詳しい状況も分かるだろうが、万が一、クロノが戦死して居たらと思うと、気が気ではない。
一分一秒がとても長く感じたレティだった。
彼女は急ぎ、リンディの下へと連絡をいれると、通信に出たのは彼女本人ではなく、彼女の秘書だった。
レティがリンディの事を訊ねると、彼女は先程倒れて医務室へと運ばれたという。
一方、本局詰めのテレビ局や新聞、通信社等の記者は、行き交う局員の顔色が急に変わったのを見て取り、色めき立った。
編集部とやりとりする者、知り合いの局員を見つけて駆け寄る者等、思い思いのやり方で情報収集にかかった。
「明らかに怪しいな」
「ああ、何か大事なのは間違いないな」
日頃は競合関係にある記者同士が顔を突き合わせてはひそひそ話し込んだ。
彼らは知り合いの局員を見つけるや、何があったのか問い質すが、局員の口は固く、あるいはうまくかわされてしまうのだ。

苛立つ彼らの連名で、記者会見要請文が本局報道部に提出されたのはそれから間もなくのことだった。

陽動部隊　次元航行艦　クラウディア　ブリッジ

「陽動部隊旗艦から撤退命令です！自由転移で離脱せよと!!」

「わかった。第八海上支部に向かう。付近の残存艦にも伝達してくれ」

クロノは付近に居た残存艦に同様の指示を下すが、クルーが疑問を呈した。

「本局には戻らないんですか?!」

本局に艦籍があるのだから、当然本局に戻るのが筋だと思うのだが、

「・・・本局はボラーに見張られている可能性がある。奴らの鹵獲した艦が潜んでいるかも知れないからな。一旦第八支部に寄港して様子を見る。本局にその旨も伝えるんだ・・ただし、通信は暗号文で行え、通信を傍受されてボラー艦隊が第八支部に来たら今度こそ終わりだからな」

「了解」

クロノの指示を受け、クルーは空間転移の準備を急ぐが、ボラー艦隊のスピードはそれを上回り、クラウディアの周囲の艦からも火の手が上がり、その衝撃波は周囲の艦を揺さぶった。

「パッカード、アリストともに被弾!!」

すぐ近くで空間転移の準備に入っていた友軍艦艇に砲火が突き刺さり、中央部から火柱が上がった次の瞬間、大爆発の閃光と共に艦が両断される。

そして続け様の爆発であっという間にスペースデブリと化していく。

もう一隻の友軍艦も数発被弾し、ブリッジ付近に生じた破口から、海の制服姿の男女が次々と宇宙空間に吐き出されていったかと思うと、第二波の砲撃で艦体をへし折られた。

凶報はさらに続く。

「艦隊旗艦、アクシオム轟沈!!反応消失しましたっ!!」
撤退命令を出してから三分も経たずして陽動艦隊の旗艦もやられてしまった。
そしてまた一隻、僚艦が宇宙の塵と化す。
その様を直視してしまったブリッジクルーから悲鳴が上がり、泣き出す女性クルーも出始めたが、
「うろたえるなっ!!」
艦長席で仁王立ちになったクロノの大喝が飛んだ。
「泣くのはこの戦場から無事に脱出した後に泣け!!今はここから生きて脱出するのが最優先だ!!手あきの者は何かに掴まるかシートベルトを確認するんだ!!航海長!!」
「はい」
「転移までの時間はっ!?」
「あ、あと一分三十秒です!」
普段の冷静さをかなぐり捨てた鬼の形相で指示を下すクロノに、クラウディアの航海長は冷静に答えた。
「わかった。残り三十秒でカウントダウン開始だ」
「了解」
クロノはそれだけを指示すると、いつもの表情に戻って席についた。
(我々管理局は、こんな経験は初めてに等しいからな。泣き出したくなるのも無理もないか・・・)
本音を言えばクロノだって怖いし、叫びたい。
しかし、艦長たる自分がクルーの前で情けない姿を晒し、士気を低下させるわけにはいかないし、そんな事をすれば助かる命も助からない。
(あの人たちは、こんな戦いを何度もしてきたのか・・・?)
モニターを通して何度か会った月村良馬や月村リニスの姿を思い出した。
彼らは圧倒的に戦力で優勢なガミラスやガトランティス艦隊相手に一歩も退かず、敗北にもめげることなく戦い抜いて生き延びてき

た。
　そうだ、どんな相手でも臆してはいけない。攻めの姿勢こそが道を開く!!
　まさに、死中に活ありだ!!
「転移可能まであと一分です!!」
「総員対ショック防御！」
　航海長がコンソールを叩きながら告げ、続いてクロノが衝撃に備えるよう指示を出したが、その次の瞬間、スクリーンに閃光が走り、衝撃がクラウディアを襲った。
「本艦には被害ありません!!被弾したのはルークスです!!」
「何!?」
　愕然としたクロノの目の前には、炎に包まれ針路を外れていくルークスの無残な艦影があった。
「通信は繋がるか!?」
「映像は乱れるでしょうが、短時間ならば恐らくは・・・・」
「繋げ!!」
「はい」
　通信士はコンソールを叩いてクロノに回線を繋ぐ。
「キャラバン艦長!!状況を!!」
　クロノの呼び掛けに、所々映像が乱れながらもキャラバン艦長の姿が映る。
「ブリッジ近くに直撃弾を受けた・・・それと、生活ブロックまで撃ち抜かれ、機関出力も低下していく・・・・艦内各所で・・・・火災発生・・・・ブリッジクルーは・私以外は全員戦死した・・・・」
「・・・・」
　ブリッジクルー全滅の報に、クラウディアのブリッジは一瞬静まり返る。
　そしてキャラバンの声も苦しげだ。
　映像からでも頭から血を流していたため、重傷を負ったであろう事は容易に想像できた。
「ハラオウン艦長・・・このままでは犬死にだ・・・本艦が撤退の楯とな

る・・・その隙に君は撤退しろ!!」
「・・・」
クロノは立ったまま俯き、唇を噛んで右の拳を握る。
「・・・クロノ・私はもう助からない。しかし、君は必ず生きて帰れ・・・そして、こんな事を繰り返すことがないよう、管理局を頼む・・・君と一緒に戦えて良かった・・・最後に・・・君と共に義妹さんを迎えに行けなくてすまない・・・」
キャラバンはニッと笑みを浮かべ、クロノたち、クラウディアのクルーたちに敬礼をすると、通信をきった。
ルークスは死に絶えそうな機関を最後の力を振り絞って動かし、クラウディアの前面へと出る。
「転移可能まで・・・あと、三十秒です・・・」
カウントダウンを続けるオペレーターの声が震えている。
クロノは僅かな間俯いていたが、顔を上げるやルークス向けて挙手の礼をとり、再び指示を下した。
「本艦は予定通り転移、現海域から撤退する!!予想外の衝撃があるかも知れん。何かに掴まっていろ!!」
「転移可能まであと十秒・九・八・七・・・」
その時、艦が揺さぶられた。
「右舷に被弾!」
「人的被害なし!第十七から二十四区画を閉鎖!」
「転移用意完了!」
「転移!!」
この期に及んでは、多少の被害に右往左往してはいられない。
右舷艦側から煙を引きながら、クラウディアは次元空間へ転移していった・・・

陽動部隊　次元巡航艦　ルークス　ブリッジ
「そうだ。それでいい・・・クライド提督・貴方の息子さんは立派な局員になりましたよ・・・今から報告に伺い・ま・・・す・・・」
コンソールに半ば突っ伏しながら、巡航艦ルークスの艦長アズナブ

ル・キャラバン艦長は、クラウディアの転移を見届けて微笑した。
その直後、ルークスのブリッジは眩い光に包まれた・・・

八十四話　敗戦

時空管理局本局

『・・・』

本局内は過去に例を見ない沈鬱な空気に包まれていた。

管理局に敵対する専制国家であるボラー連邦に対して、先の次元客船襲撃事件の報復及び管理世界に編入させる一貫として、強い反対を押し切って実施した武力制裁が、ボラー連邦を制圧、降伏させるどころか、一方的な虐殺同然の戦闘で、管理局が投入した艦船の内、八割強～九割を失った上、撤退に入った艦船も苛烈な追撃に遭ったらしく、本局からの呼び掛けに応答があった艦は未だ十数隻程・・・

しかも大半が少なからぬダメージを受け、中には総員退艦に追い込まれて放棄された艦も複数出ていた。

「こ、これでは次元世界の拡張どころか現管理世界の治安維持すら覚束ないぞ！」

「艦はいずれ造り直せるが、乗組員はすぐには補充できん。どうするつもりだ!?」

確かに艦船を建造できる資材ならば、他の世界から調達する事は出来るが、それを動かす人の育成は一朝一夕では、出来ない。

特に管理局が払った犠牲として一番痛かったのは、ボラー連邦本星制圧・占拠のため、教導隊や各管理世界から招集した空戦魔導師たちだった。

彼らのランクは全てBランク以上の実力者だったため、その三個師団の犠牲は、SX級二隻、X級、R級の新鋭艦船の損失よりも大きく痛いモノとなった。

「やむを得ん。事情が事情だ。今回も普段の様に〝陸〟から人員を融通するしかなかろう」

「そうですな、それに他の管理世界からも大規模な徴兵を行わせましょう」

一部の高官は普段通り、〝陸〟から局員を異動させ、他の管理世界

からは現地住民を管理局へ徴兵させれば、それで済むと思っていた。
「ちょっと待って下さい!!そんな事ができるとお思いですか!? 〝陸〟はおろか、各世界も反対するに決まっている！」
今回の遠征に関しては〝陸〟は一人も人員を参加させていない。
それは、元々〝陸〟は魔導ランクが低い者が多く、前々から〝海〟のやり方には反発をしていたし、〝海〟も〝海〟で、今回の遠征に〝陸〟の低ランク魔導師など、足を引っ張るだけの邪魔者に過ぎんと豪語していた。
それが、失敗に終わると、手の掌を返す様に人員の提供を求めた所で、〝陸〟が応じる訳がない。
どう見ても「自業自得だ」と鼻で笑われるのがオチだ。
と言うか、あまりにも図々しい。
世の中そんな虫のいい話がある訳がない。
「再建はともかく、どのように報道発表するんだ？　真実を発表すれば人心の動揺は免れないぞ」
「かと言って、これだけの夥しい犠牲だ。隠したところでいずればれるぞ!!そうなったら管理局は本当に崩壊するぞ！」
「・・・」
実りのない激論を交わす高官たちの傍らで、管理局理事官でもある聖王教会騎士のカリム・グラシアも憂鬱さを隠せずにいた。
これだけ大勢の殉職者が出た以上、聖王教会にも騎士の派遣等、管理局から協力を要請されよう。
それ自体は構わないのだが、問題は、それがどれだけの規模になるのかと、聖王教会内部に、過激な主張をする者が出てきていることだ。
レアスキル〝プロフェーテン・シュリフテン〟を元に、かの機動六課創設に協力し、ＪＳ事件の短期鎮圧に貢献したことで教会とカリムの存在感は増した。
それ自体はいい・・・しかし、彼女が警戒するのは古きベルカの王朝を復興を主張する一派の存在だ。
今回の大敗は、管理局衰退の始まりとなる可能性がある。
それ以前に度重なる次元航行艦の損失と行方不明。

ＪＳ事件後の管理局の信用の失墜・・・それを機に、かつて消え去ったベルカ王国を再興し、管理局にとって代わるべきだと主張する者も出てきた。
しかも、おあつらえ向きにベルカ王国の象徴となるべき〝聖王陛下〟もクローンとは言え存在する。
最も管理局士官の養女としてだが・・・
まあ、陛下こと高町ヴィヴィオ自身が望まない道を強制されれば、母親たるエース・オブ・エースや一騎当千なその友人たちが絶対許さないだろうが、彼らの動向にも目を光らせるべきだろう。
カリムの思考はそこまでだった。
「帰還する艦船を確認！」
オペレーターの報告に会議場に居た一同はバッとスクリーンを見た。
「艦数と艦名は分かるか!?」
「少々お待ちください・・・判明しました!!コースター、ダイナ、アバロンです!!いずれも損傷していますが、航行に支障は無いようです!!」
オペレーターが帰還しつつある残存艦の艦名を読み上げていく。
その艦名を耳にしてホッとした表情になる者、不安を隠せずにいる者と様々だったが、次の瞬間、蒼白になって立ち竦んだ。
突然何処からともなく現れたエネルギー波によって、まずコースターとアバロンが動力部を撃ち抜かれ、そのまま誘爆して爆沈した。
「なっ!?」
「っ!?」
「な、なんだ!?」
「何が一体・・・?」
突然友軍艦の爆沈シーンを見せられた一同は言葉を無くした。
そして、残るダイナも続いて放たれたミサイルの餌食となって沈んだ・・・。
「本局を前に・・・」
「くそ！伏兵か!?」
本局の中央通信センターのメインスクリーンの中の光景は、凡そ信

じ難いものだった。
帰還する残存艦が、本局到着までにあと２０分の距離を切った空間にさしかかった時に敵の待ち伏せを受け、沈んだのだ。
〝百里を行く時は九十九里を以って半ばとせよ〟
第９７管理外世界の中・近世期、２５０年以上に及ぶ長期世襲政治体制を始めた覇者の言葉だというが、今、本局に向かっていた管理局の敗残艦に必要だったのは、まさに己の足元に対する注意力であろう。
命からがらあの地獄の様な戦場から戻って来た次元航行艦は謎の砲撃とミサイル攻撃の前に敢え無く沈んだ。
乗員はさぞ、無念だっただろう・・・・。
「一旦入港は中止！警戒態勢！」
本局内に警報が鳴り響く。
警報が鳴り響く中、この光景を別室のはやてたちも目にしていた。
「ああ・・・・」
「そんな・・・・」
「本局の前まで来たのに・・・・」
「物凄く腹立たしいですが、敵に心理的ダメージを与える点ではすごく有効な手段です」
唇を噛むはやてに対し、シグナムは怒りを隠さぬまま吐き捨てた。
もうすぐ母港というところで艦もろとも次元空間の塵と化した局員の無念と、その家族・同僚の悲憤を思うと、ベムラーゼのその脂ぎった贅肉体に全力全開のラグナロックをぶち込みたい衝動にかられる。
しかし同時に、実に有効な心理戦であることにもはやては気づいていた。
その直後、スクリーンに攻撃を行った下手人が姿を見せた。
それは、確かに艦首の作りは管理局のＳＸ級であるが、艦中央部から艦尾にかけては、全くの別物となっていた。
「アイツが・・・・」
ヴィータが噛みつく様な勢いで、スクリーンを睨みつける。
その艦は紛れもなく、ボラー連邦が鹵獲した管理局艦であった。

鹵獲艦はその姿を局員らに見せつけるかのように本局の前に現れた。
しかし、流石の鹵獲艦もボラーの技術を取り込んでいるとは言え、元は管理局の艦・・・本局にあまり近づきすぎては逆に危険だと判断したのか、鹵獲艦は本局自体には近づかず、何処へと姿を消した。
その後の詳しい調査で、鹵獲艦は先程と同様の手口で、コースター、ダイナ、アバロンの他にも更に四隻の管理局艦を本局付近の次元内に潜み、その凶暴で強力な牙と爪で血祭りにあげていた事が判明した。
どの艦も被弾しており、もうすぐ本局だと油断しきっていた為、撃沈され、突然の攻撃で本局にも周囲の艦にも警戒を出す前に沈められてしまった。
鹵獲艦の完全な撤退によって本局内はようやく一息つける空気となった。
(ど、どないしよう・・・?管理局はしばらく積極的な行動には出られへん・・・もし、あのベムラーゼがガトランティスの国家元首みたいな人物だったら、間違いなく報復戦を仕掛けてくる・・・管理局の残存兵力でその侵攻を防ぐことが出来るやろうか?)
恐らくベムラーゼはボラー連邦本星で自国民に〝時空管理局は侵略者〟だと喧伝しているだろう。
そんなことはないと反論したいが、ラティオがボラー連邦船籍の非武装船に対し、高圧的に接し、軍を呼ばれてしまったのがそもそものきっかけだ。
しかも相手の領海内で・・・。
領海侵犯したあげく、臨検だなんて、海賊行為も良い所だ。
それにもかかわらず、管理局は〝法の番人〟〝次元世界の守護者〟等と吹聴しているのだから、ボラー連邦側にとってはお笑い草だろう。
(この敗戦で〝海〟の意識が変わらへんと、管理局は外から攻められ、内から見離されて崩壊してまう・・・)
はやての拳に無意識に力が入った。

次元航行艦　クラウディア　ブリッジ
「提督、清水タンクの応急修理が終わりました」
「わかった。物資移送を始めてくれ」
「はい！」
通信長に地上への連絡を指示したクロノは、ふうと一息つく。
ボラー連邦への武力制裁は、薮蛇どころかとんでもない猛毒の大蛇に一方的に噛み殺される有様。
参加した戦力の内、九割近い損害を出した挙句、自分たちを戦場から逃がす為に、亡父と母、そして自分の補佐役だった老練の艦乗り、アズナブル・キャラバン艦長を失い、クラウディア自体も少なからぬ損傷を被った。
いや、キャラバン艦長だけでなく、大勢のベテラン艦長や優秀な空戦魔導師たちを失い、今回の任務の失敗では艦よりも人的損害の方が深刻だ。
幸いにもクラウディアには殉職・重傷者はいなかったが、清水タンクや食糧庫を始めとする倉庫区画が中～大破してしまった。
この被弾により当初の目的地であった第八支部とは異なる空間座標へと次元転移したクラウディアであったが、彼らは稀に見る幸運者たちだったようで、転移したすぐ傍に管理世界のポルテがあったのだ。
食糧と水の喪失は乗組員の士気に悪影響を与えかねないと判断したクロノは、ポルテに立ち寄って応急修理と水、食糧の補給を要請することとしたのだ。
ポルテにて、そこの管理局の支部長と話し合いを行い、支部長の快諾と応急修理の完了がクロノをようやくひと安心させた。
しかし、補給の事情から、あと数日はこのポルテに滞在しなければならない。
まぁ、無事にこうして生きているのだから、文句は言えないし、艦の状態が不安定のまま、航行するのは正直言って気が進まない。
物資移送・搬入作業が始まると、クロノは副長から、休憩するよう些か強く意見具申された。

副長は艦乗りとしてはクロノよりキャリアが長い彼からの進言であるため、それを受け入れて艦長室に引き揚げた。
「・・・」
とはいえ、一人っきりになると、キャラバン艦長の最期の声が脳裏にフラッシュバックし、彼とルークスを救えず、見捨てるような形で逃げた事実に打ちのめされる。
その時、ブリッジから通信が入った。
「お休みのところ申し訳ありません。乗艦してきたエリオ・モンディアル二士とキャロ・ル・ルシエ二士が面会を申し入れておりますが、どうなさいますか？」
「大丈夫だ。会おう。艦長室に通してくれ」
「承知しました」
義妹の被保護者であるあの二人が自然観察・保護官として此処（ポルテ）に赴任していたことをすっかり忘れていた事に、思わず苦笑した。
（確か彼らは今年で十一～十二歳になっているんだったな・・・）
（二人とも、少しは背が伸びただろうか――？）
そう思う中、ボラーへの地上降下作戦の為に招集された空戦魔導師たちにも彼らと同じ、年齢の少年・少女たちが居た事にも気づかされた。
彼らは乗艦していた輸送船ごとブラックホールへと飲み込まれた。
その時の彼らの心情を察すると、とてもつらい。
ブラックホールの強力な重力圏に捕まり、制御不能に陥った輸送船の中で彼らはきっと、故郷の両親の名を口にして泣いていただろう・・・。
短い間であるが、死との恐怖でさぞ怖い思いをしただろう・・・。
やるせない思いがクロノを覆った。

次元航行艦　クラウディア　艦長室
「そんなにやられてしまったんですか!?」
「・・・」

艦長室でクロノから〝事〟の顛末を聞かされたエリオ・モンディアルは驚きの声を上げ、キャロ・ル・ルシエは絶句してしまった。
乗組員に案内されて艦長室に通された二人は、憔悴しきったクロノに内心で驚き、艦の傷つき具合と合わせて、かなり厳しい戦闘だったことは想像できたが、参加した艦船と局員の八割～九割が僅か一時間足らずで、失われた惨敗とまでは思い至らなかった。
更に今回の武力制裁で、自分たちと同世代の空戦魔導師たちも地上制圧作戦のために招集され、乗っていた輸送船ごとブラックホールへ飲み込まれた事実を知り、身の毛がよだった。
ポルテに赴任せず、ミッドに居たら、自分たちも招集されていたかもしれなかったのだから・・・・
「管理局史上最悪の惨敗だ・・・・あのＪＳ事件が今回の件に比べればほんの些細な出来事でしかなかったと思うよ」
自嘲気味に語るクロノに、エリオ・キャロは返す言葉が見つからない。
あのＪＳ事件の時でさえ、自分たち六課のメンバーは一杯一杯、まさにギリギリの戦いをしたと言うのに、それがほんの些細な出来事だったと言うほど、今回の武力制裁は凄惨なモノだったのだと、想像がついた。
「それじゃ、管理局はこれからどうなるんですか？」
キャロが絞り出すような声で問う。
その様子はとても不安げだった。
「〝海〟の戦力はこの遠征で主力をつぎ込んだからな・・・・残った残存勢力は集められても五割弱って所だろう。しかもその殆どが廃艦寸前の老朽艦か旧式艦ばかり・・・・暫くは今の管理世界の治安維持がやっとだ。艦船はともかく、失われた人材の損害が余りにも大きすぎる」
「・・・・」
艦船だけなら建造すればいずれは補充できる。
しかし、艦もろとも失われた人材はすぐには補充できない。
これまでなら各世界の地上部隊から強引に人材を引き抜く事もで

きたが、慢性人材不足の管理局だ。
大量に人材を引き抜こうとすれば、各管理世界政府も黙ってはいないだろう。
各管理世界政府とすれば、これ以上は治安維持の為の局員を引き抜かれたり、大規模な徴兵を行っては自分たちの足元に火がつく。
そんなことを許すほど〝陸〟も各管理世界政府も寛容ではあるまい。
それどころか、管理世界からの脱退を表明するかもしれないのだ。
特に無理矢理管理世界入りをさせられた世界は尚更で今回の敗戦をいい機会だと思うに違いない。
「・・・」
クロノは俯き気味の二人を見遣った。
招集された空戦魔導師の他にも各艦にはこの二人のような年端もいかない魔導師も乗り組んでいた。
幸いにもクラウディアは助かったが、現在も行方不明になっている僚艦、失われた艦に乗り組んでいた若い・いや、幼い魔導師たちは恐らく今頃は・・・
(ミッドに戻ったら、遺族から石を投げられ、罵倒される事は覚悟しないとな・・・)
理由はどうあれ、未来ある大勢の子供たち、若者たちの未来を自分たち大人が断ち切ってしまったのだ。
この責めは、まず自分たち高位にある大人が背負わなければいけない。
クロノは当面やるべきことに思いを馳せなければならなかった――。
しかし、事態はクロノが思う事とは正反対の事が起きた。
ボラー連邦への武力制裁作戦が無残な失敗に終わったことで、時空管理局、特に〝海〟こと次元航行本部は半ば恐慌状態に陥った。
喧々囂々の議論の結果、管理局はほぼ正確な損害を発表した。
ごまかしたところでいつまでも隠し通せるものではないし、虚偽発

表が露顕すれば、管理世界の人心が完全に離反してしまう可能性が高いからで、どのみち非難されることは不可避なのだから、正確な被害を早めに発表した方が良いとの声が強かったのに加え、伝説の三提督も賛同したからであるが、案の定、各管理世界は激震し戦慄した。
何しろ、参加した艦船の約九割と、数多くの人命が艦と運命を共にして宇宙の塵芥に帰したのだ。
管理局創設以来例を見ない大敗、否、惨敗だ。
そして今回の敗戦の責任について管理局はその所在をうやむやにしようとしていたのだ。
管理局側はこれを機にボラー連邦への敵愾心をも植え付けようと目論み、若干の成果を得たのだが――。
「犠牲は避けられないし、作戦の失敗もさることながら、どんな経過を辿ったら九割もの人員と艦船が失われたのか!?」
「ボラー連邦はそれほど強いのか!?それとも管理局の戦術が拙劣だったのか!?戦力が脆弱だったのか!?管理局は全てを公表せよ!」
「今回の大敗の責任の所在を明らかにせよ!!」
管理局の発表の中で、肝心の戦闘経緯と遺族側への謝罪が全く行われなかった事に納得がいかない遺族やジャーナリスト、さらには管理世界政府までが戦闘経過の詳細発表を要求したり、地元の管理局の施設に押しかける者も出て、本局報道部や各世界の地上本部はそれらの対応に苦慮していた。
遺族やマスコミの対処にまわっている地上本部の局員らの心は一つで、
(本局の連中の尻拭いをなんで俺たちがしなきゃならない)
だった。
しかし、問題はそれだけではない。
失われた戦力の補充と再編をしなければならない。
武力制裁に失敗したから治安が悪くなったというのは許されないのだ。
次元航行本部はスタッフの穴埋めを従来通り地上総本部と航空総本部に求めたのだが、

「これ以上人員を割けば、各世界の治安維持すらできなくなる」
「そうだ!!人員を減らすなら財政支援を削ると他の管理世界政府から脅された」
「人材を無駄死にさせるような部署に行きたがる人材も居なければ、寄こす余裕などこちらにはない!!」
等と冷淡な回答しか返ってこない上、スカウトに応じる〝陸〟の優秀な局員も殆どいなくなっていたのだ。
さらに、各管理世界政府からも、〝海〟の体制を根本から見直せ!!
見直さなければ今後の協力体制を見直すという声が上がり始めた。
その中に、
「第二の97管理外世界の軍事技術を導入するべきだ。魔法だけで守れる時代ではなくなっているのは明らかなんだぞ!」
と主張する世界もあり、何とも混沌たる状況になっていた。
ボラー連邦への武力制裁で大敗した次元航行部隊に戦力の余裕はなくなり、新次元世界探査は無期限休止を余儀なくされている。
戦力再建、特に人材育成には数年ないし十年以上の歳月を要すると見られ、その間は各世界の地上本部や航空本部からの支援を得ているが、あくまで現在の管理世界の治安維持活動に限定するとの条件付きで、かつ転籍ではなく出向扱いである。
何分、各地上本部の後ろには管理局のスポンサーたる管理世界政府があり、これまでのような専横を〝海〟が続けるならば財政拠出を減額すると宣告されていた。
これは管理局への不信感のみならず、多くの世界で不況が進み、税収入が落ち込んでいる事もある。
そういう状態では、役立たずの烙印を押された次元航行部隊には厳しさを帯びた眼が向けられても仕方ない。
次元航行部隊を含む本局はけじめをつけざるを得なくなった。

時空管理局本局　大会議場
「ふざけるな!失態の責任もとらずにただ黙って人員を寄越せだと!?よくもそんな恥知らずで、図々しい事をぬけぬけと言えるな!?」

「恥知らずだと!?　人員の補充がなければ次元世界の平和は守れないんだぞ！今の言葉を取り消せ!!」
「取り消せだと!?　責任を取ったのは死者だけで、ボラー連邦への派遣反対を押し切って派遣に賛成した連中の何人が責任を取った!?誰もとっては居ないではないか!!」
「そうだ!!これでは殉職者が浮かばれんぞ!!」
紛糾しかかっている原因は、壊滅的打撃を受けた次元航行部隊の再建の事だった。
何もかもが手詰まりだった。
既存の艦船の性能不足は明らかで、残存する老朽艦や旧式艦では心許ない。
しかし、それ以前に武装、装甲、通常空間での機動力と次元空間への転移能力以外のハード面で、管理局の艦船は最大最強のＳＸ級すら貧弱に過ぎ、任務に参加しなかった艦船の乗組員からも失望の声が上がった。
改善しようにも、現行の魔導兵器では力不足で艦船の推進機関もアンダーパワーで、亜光速と推定されるボラー艦隊に翻弄された。
ボラー艦の動力様式は不明だが、残された映像を見る限り、地球防衛軍の波動機関とほぼ同等の性能を有していることは確かで、彼我の性能格差は十世代以上に及ぶというのが艦政本部の見解だった。
これを解決する近道は、地球防衛軍が有する波動機関＝タキオン推進機関を通常空間における主動力に起用することだが、管理外世界の技術導入に対する抵抗感もあり、管理局の艦船では波動機関の大出力に耐えられないということが指摘されたので、波動エンジンを搭載するのであれば新造艦の建造が必要不可欠となったが、肝心の波動エンジンの仕組みが分からない。
さらに、深刻な問題は失われた艦船の乗組員や武装隊員の補充だ。
一瞬で数千もの命が失われ、たとえ艦船を新造できても、それを動かすための人員の手配がつかなければ、ただのオブジェだ。
その肝心の人員の都合がつかない。
本局だけでは到底足りないから、各世界の地上本部にも協力を要請

したのだが、その手法が従来と代わり映えしない上、誰も〝海〟に行きたがらなくなったのだ。
そして、同じ〝海〟に所属する高官は自らの生命が危険な場所には決して行きたがらず、ミッドで偉そうにふんぞり返って、命令するだけの無能者ばかり・・・・。
それだけではなく、比較的仲良しだった〝空〟こと航空本部も派遣した武装隊員のほぼ全員が殉職したことで、〝海〟を見限るかのように、派遣できる人員はいないと言い出す有様だ。
痺れを切らせた〝海〟が今日の対策会議で〝空〟〝陸〟の対応に異議を唱えたところ、〝空〟〝陸〟がタッグを組んで揃って反撃してきたのだ。
とは言え、彼らも同じ管理局員であり、セクト主義に陥るような愚を冒してはならないということはよくわかっている。
「何も、絶対に人を出さないと言っているわけではない。今までと同じ思考では問題は解決しないと言っているのだ！今のままでは、せっかく一人前に育てた局員をみすみす無駄死にさせるだけだ。局員一人の死はそれに数倍する人々を悲しみの淵に沈める。機械の部品を交換するのとは訳が違うんだぞ！」
「今のような脆い艦船に、未来ある若者たちを乗せて危険な任務に出す等もっての外だ。艦船の性能改善案を早急に示してほしい」
「地上本部としては、これ以上〝海〟への無条件完全移籍は受け入れられない。こちらも深刻な人手不足なのだからな。期限付きの派遣、それも本部の合意なしでの一方的な派遣延長は認めない。これが最低限の条件だ」
地上本部長のロールスロイス中将と首都防空司令官のアームストロング・ルーデル中将が相次いで発言した。
〝海〟側の高官も、艦船の改善は必要だとわかっているから表立っての反論はしない。
しかし、一番手っ取り早い地球防衛軍の技術導入には管理局の規則を大幅に改定しなければならず、実質的には質量兵器導入に繋がると反発する者も少なくないのだ。

仮に技術導入を申し入れるとしても〝手ぶら〟というわけにはいかず、地球防衛軍、否、地球連邦にメリットがある手土産を用意しなければならず、それを用意できるのかがネックになっていた。
地球連邦の並行世界と思われる第９７管理外世界の文化を紹介・提供してはどうかと言う提案は何度も議題にあがった。
地球連邦は長年にわたる星間戦争で少なからぬ特有の文化や動植物が絶滅しているのは確実であり、時代的には２００年前である第９７管理外世界ならば、それらの〝種〟を持っているというのが根拠だ。
しかも某有名局員の故郷であり、ハラオウン家が〝常駐〟している上、件の局員の家族や親友ら、現地の民間協力者もいる。〝収集〟も難しくはない。
ただ、これもすぐには実現できるか疑わしい。
地球連邦政府が、並行世界の存在を信じるかが皆目見当がつかないからだ。
かの世界と何度か交信したレティによると、一部の地球防衛軍士官はもう一つの地球の存在を理解してくれたようだが、地球防衛軍側の時空管理局への感情は良好とは言えず、認識が広まっているかは疑わしいと言う意見が出た。
人員の確保、第二の９７管理世界からの技術導入、それらの問題や議題が解決しないまま時間が流れた。
そんな中、今回の遠征における失敗で管理局の存在を揺るがしかねない出来事が起きた。
それも、今回の武力制裁に賛成した〝海〟の高官の発言から・・・・
事の発端は、今回の武力制裁に賛成した管理世界拡大推進派の高官がテレビ番組において、「今回の武力制裁の失敗点については？」との記者からの質問に対し、
「我々の立てたプランは完璧だった。今回の武力制裁における失敗は現場指揮や派遣された局員らの無能さが際立った結果であり、失敗の責任は全て彼らにある」
と、余りにもＫＹな発言を行い、それを聞いた遺族らが管理局に対

して謝罪要求の為のデモや抗議集会を行った。
彼としては管理局の面子を守りたかったのかもしれないが、今回はあまりにも犠牲者の数が多すぎた。
そして何時しかデモの規模は次第に大きくなり、遂には暴徒化して、管理局関連の施設を襲撃する事態まで発展した。
管理局は治安維持の名目でこの事態の収拾に乗らなければならなかった・・・・

本局　特別捜査官執務室
「ご苦労さんやったな。シグナム、ヴィータ、アギト・・・・なのはちゃんもつらい思いさせてしもうたな・・・・」
「いえ、大した事はありません」
「「・・・・」」
部屋の主たる八神はやては任務を終えて戻ってきた自らの守護騎士、シグナム、ヴィータそして親友のなのはを労った。
大したことはない、と応じたシグナムだが、彼女らが着ている航空武装隊の士官制服、教導隊の士官制服の彼方此方には生卵やトマトのシミが複数付着しており、頬や額、腕には痣やうっすらと切り傷があった。
「大した事じゃんかよ！シグナムのせいじゃないってのに。逆恨みもいいとこだぜ!!アイツらは何も知らないからあんなことが言えるんだ!!」
心外だと声を張り上げたのは彼女の融合騎で相棒たるアギトだった。
一人の管理局高官のＫＹ発言から始まったミッド全体へと広がる大暴動で、事態を重く見た管理局は治安維持の名目で〝陸〟の局員は勿論、〝空〟と本局の武装隊を出して事態の収拾に出た。
しかし、それがかえって火に油を注ぐ形となり、大衆の怒りは更に燃え上がった。
ボラーに勝てなかった腰抜けが自分たち民衆にはデバイスを向けるのかと・・・・

更に民衆の怒りを注いだのは管理局で有名な高町なのは、ＪＳ事件で大きな功績を残した六課出身のシグナムとヴィータたちの存在で、彼女らの姿を見た民衆や遺族らは、
「何故、お前らはミッドにいる!?」
「何で遠征に行かなかった!?」
「お前らが行けば、今回の結果は違ったかもしれないのに!!」
「そんなに自分の命が大事か!?」
「何が管理局のエースだ!!この腰抜けがぁ!!」
「上司に身売りして自分たちの安全を買ったか!?売女めぇ!!」
「恥知らず!!」
「人でなし!!」
「卑怯者!!」
「ろくでなし!!」
「税金泥棒!!」
「夫を返せ!!」
「お父さんを返せ!!」
「息子を返せ!!」
「娘を返せ!!」
「孫を返せ!!」
「お兄ちゃんを返せ!!」
「お姉ちゃんを返せ!!」
「弟を返せ!!」
「妹を返せ!!」
と、管理局の誇るエースであるなのはたちが今回の遠征に参加して居なかった事で、今回の遠征は負けたのだと、無茶苦茶な結論に至ったのだ。
ＪＳ事件を始めとする過去の栄光ある実績がここで裏目に出てしまったのだ。
しかし、宇宙空間では流石のエース・オブ・エースでも戦えない。
だが、一般市民はどの様な経緯で今回の武力制裁が失敗したのか知らず、管理局のエースが行かなかったから、今回の制裁は失敗したの

だと思い始めていた。
「ヤロォ・・・」
「アイツら好き勝手言いやがって・・・」
ここでブチ切れそうになったのが、八神家でも沸点の低いヴィータとアギトであった。
彼女らは自分たちに向かって暴言を吐く遺族らに対して攻撃魔法をぶち込んで、強制的に黙らせてやろうかと意気込むが、
「待て、ヴィータ、アギト」
冷静に事態を見つめていたシグナムはそこで『待った』をかける。
「なんでだよ!?何で止めるんだよ!?シグナム!!」
「そうだぜ、あんなに好き勝手に言われて黙っているのかよ!?」
「今ここで彼らに非殺傷でも魔法を放てば、それこそ暴動は苛烈さを増して手が付けられなくなるぞ!!」
「うっ・・・」
「・・・」
「それに彼らは自分の家族を失い、その失った家族のことさえ、我々管理局が無能扱いしたのだ。彼らの行動も理解できない訳じゃない。私だってお前たちの誰かを失い、無能扱いされたら、管理局を辞め、逮捕される覚悟でそのものを叩き伏せる」
「・・・」
シグナムの言葉を聞き、確かに暴徒と化した彼らの気持ちも分からなくはないと思ったヴィータとアギト。
「高町、お前は後ろの方に下がっていろ」
シグナムはそう言って、敢えてデバイスは起動させずに、非魔導師の局員らと共に暴動の鎮圧へと挑んだ。
「くそっ、やりきれないが、シグナムの言う事も最もだな・・・アギト、お前も後ろに居てなのはを守っていろ」
「あ、ああ・・・」
ヴィータがアギトをなのはの護衛につかせ、シグナムの方へと駆け寄って行った。
「・・・」

シグナムとヴィータが非魔導師の局員らと共に暴動を鎮圧している間、なのはは、何もする事が出来なかった。
確かに魔法を使えば、暴動は簡単に鎮圧できるが、それでは余計に彼らの心が管理局から離れてしまう。
彼らは自分たちと違い、家族を亡くし、その家族が無能者と罵倒されたのだ。
管理局に恨み言を言いたくなるのも分からない訳では無い。
そんな彼らに非殺傷とは言え、シューターや収束砲を撃てば、其れこそ自分は本当に悪魔に成り下がってしまう。
人でなしの恥知らずになってしまう。
なのはは遺族たちからの罵倒と投石の中、ただじっと堪えるしかなかった。
アギトが一応なのはの護衛役についたが、大勢の暴徒たちから投げられる沢山の石つぶてや生ゴミを全て撃ち落とすには無理があり、多少の傷をなのはは受けた。
最前線で暴徒の相手をしていたシグナムとヴィータは言うまでもなくボロボロである。
後日、管理局は改めて遺族たちに対して、謝罪を行い、ＫＹな発言をした局員を始め、今回の遠征に賛成した局員らに左遷或いは懲戒免職、減俸等の厳しい処罰を下すと共に、超法規的措置で彼らの資産の一部を没収し、遺族年金へとまわした。
また、その中には汚職や背任容疑で司直の手に委ねられた者も出た。
この他にも三提督を始め、心ある管理局の高官らも自らの資産や給与、ボーナスの一部を遺族達へと寄付した。
次元航行部隊の大敗以降、一連の人事異動と内部改革で、以前よりはだいぶ風通しがよくなった本局だが、新たな人材確保は難渋を余儀なくされていた。
その様な経緯が有り、暴動をようやく鎮めたシグナムたちは、はやての下へ報告に来たのだ。
「兎も角、皆シャマルの治療を受けてや・・・シャマル頼むで」

「は、はい」
傷ついた皆をシャマルに任せたはやての下にある連絡が入った。
それはミッドの八神家、高町家が暴徒によって襲撃されたと言う報告だった。

八十五話　再建と陰謀

八神家、高町家、両者の家には投石が行われ、窓ガラスと言う窓ガラスは全て割られ、家の壁や塀には誹謗・中傷が書かれた張り紙やスプレーで書かれた落書きが有ったと言う。
更には、窓ガラスが割られた事で、家の中にまで侵入され、金目の物は根こそぎ奪われたらしい。
これが、遺族たちの仕業なのか、それとも暴動に加わっただけの只の暴徒の仕業なのかは、不明で捜査をするにも今の管理局では、時間がかかりそうだった。
はやては、自宅や高町家の被害よりもヴィヴィオの事が気がかりとなり、カリムに連絡を入れ、ヴィヴィオを学校が終わったら、高町家ではなく、ミッドでよく自分が使用するホテルへ送ってもらうように連絡をとった。
「そ、そんな・・・!?」
シャマルからの治療を終え、はやてから自宅の惨状を聞いたなのはは、顔を真っ青にした。
「ヴィヴィオは、シャッハが護衛して今はこのホテルに滞在しとる。迎えに行ってあげてや、なのはちゃん」
「う、うん」
ヴィヴィオが無事だったことは幸いしたが、遺族からの罵倒と自宅の襲撃。
この二つの出来事はなのはの精神力を更に傷つけるには十分の出来事であった。
はやての言っていたホテルへと到着すると、ロビーにて、シャッハと共にヴィヴィオが待っていたが、その顔色はあまり良好とは言えない。
「高町一尉、ちょっとお話が・・・」
「う、うん・・・ヴィヴィオ、少しここで待っていて・・・」
シャッハと共にヴィヴィオから少し離れた場所に立つなのは。

「それで、お話と言うのは？」
「・・・少しの間、陛下・いえ、ヴィヴィオさんは学院を休ませた方が良いかもしれません」
「えっ!?それはどういう事ですか!?」
「ヴィヴィオさんが通っている学院にも今回の遠征で家族や身内の方を亡くした生徒さんが大勢おり、その生徒さんから見たら、高町一尉とつながりのあるヴィヴィオさんは苛めを受ける可能性もあります」
「・・・・」
「お心当たりがあるようですね？」
「はい・・・今日、遺族の方々から言われました・・・『お前たちが行けば、今回の遠征は勝っていたんじゃないか？』って・・・『家族を返せ!!』・・とも・・・・」
「・・・その様な経緯もあり、やはり今回の件が沈静化するまでは、ヴィヴィオさんの学院への登校は自粛して下さい。それと、出来ればミッドを離れた方が良いかもしれません」
「何故です？」
「実は現在、騎士カリム、ヴェロッサたちと共に密かに内偵を進めているのですが、教会内でも今回の管理局の敗戦を受けて、『管理局に変わって聖王教会の自分たちが次元世界を管理しよう』『古代ベルカ王国の復興』を掲げようとする者が居るみたいなのです」
「そんなっ!?」
「彼らにとっては管理局が力を無くし、更に崇拝すべき聖王陛下が現代に存在するこの状況・・・まさに千載一遇の機会と見るでしょうね・・・・」
「・・・・」
ＪＳ事件の時の様にまたもやヴィヴィオが大人たちの勝手な野望の為に利用されるかもしれない・・・・。
そんな事はもうさせたくはない。
なのははチラッとホテルのロビーにある椅子に座りながらジュースを飲んでいるヴィヴィオに目をやる。
「そうですね・・・そうします」

シャッハの言う事は最もであり、なのはは、ヴィヴィオを暫くの間、生まれ故郷の海鳴にある実家に預ける事にして、その日の夜、泊まったホテルの一室でなのははヴィヴィオに暫く学院を休んで、自分の故郷で過ごしてほしいと言った。

ヴィヴィオは最初、なのはも一緒に来てくれるものだと思ったが、なのはは、「今、自分はミッドを離れる訳にはいかないので、今回はヴィヴィオ一人で海鳴に行ってもらう」事を話すと、ヴィヴィオは当然嫌がった。

でも、今のミッドはヴィヴィオにとって危険な事を諭し、必ず迎えに行くからと約束し、ヴィヴィオは渋々海鳴へ行く事を了承した。

その日の夜、なのはとヴィヴィオは同じベッドに一緒に寝た。

暫くは離れ離れで暮らす故、最後の晩は親子共に仲良く寝たのだ。

翌日、なのはとヴィヴィオは海鳴にあるなのはの実家にて、なのはの両親に訳を話して、暫くの間、ヴィヴィオを預かってもらう事にした。

なのはの話を聞いた両親は、「管理局を辞める事は出来ないのか？」と訊ねるが、なのはは、「今、自分が抜ければ、管理局は今よりも事態は悪化するし、大事な友達や生徒を残して自分だけ、安全な世界へ逃げるなんて真似は出来ない」と、まだ管理局に居る事を両親に伝えた。

なのはの言葉を聞き、両親の心は複雑だった。

管理局に務めていたからこそ、自分たちはこうして孫に会う事が出来た。

しかし、もし、管理局に務めていなかったら、十一歳の時、大怪我をする事も無かったし、話に聞いた外宇宙からの侵略者たちと戦うなんてＳＦ映画の様な危ない事もしなくて済んだのだ。

両親の心配を他所に、なのはは、ヴィヴィオに別れの言葉をかけ、再びミッドへと戻って行った。

ミッドチルダ　クラナガン　八神家

「・・・・」

「くそ、アイツら・・・・」

「ひでぇことしやがるぜ・・・・」
八神家の一同は、暴徒たちの手によって滅茶苦茶にされた自宅を見て、はやてはただ黙って見ており、ヴィータとアギトは苦虫を噛み潰したような顔で自宅を荒らした暴徒たちに毒づく。
「まぁ、こうなってもうたのはしょーもない。家はまた新しく作れば元通りになるんやから・・・それよりも私は皆が無事だった方が何倍も嬉しい」
「「主・・・・」」
「はやてちゃん・・・・」
「「はやて・・・・」」
「当分は、官舎か管理局の寮に住むことになるからな、今日は皆で必要なモノを買いに行こうか」
はやては、決して負けない、諦めない　の精神で管理局も自宅も復興させると意気込んだ。

ミッドでの暴動が終息してから数日後、ポルテで、応急修理を終えたクラウディアが本局へと帰還した。
乗員の皆はバースへ出迎えに来ていた家族と感動の再会を果たしていた。
クロノも妻のエイミィに無事だったことを伝えた後、本局に報告へ向かった。
「そう・・キャラバン艦長が・・・・」
「はい・・・・」
リンディは本局の医務室にてクロノからの報告でキャラバン艦長の最後を聞いた。
「キャラバン艦長らを連れて帰れなかったのは、紛れもなく私に責任があります。敗残の指揮官が責任を負うのは当然の事であり、私はその責任の追及から逃げるつもりは毛頭ありません」
「クロノ・・・・」
「はい」
「これからが管理局の正念場よ」

「はい・・・」
リンディはクロノに真剣なまなざしで言い、クロノもそれに答えるかのように頷いた。
それから一週間、本局は管理世界各国と連絡をとり、遠征に出た艦船が立ち寄っていないかの確認を行い、未だに未帰還、行方不明の艦船を撃沈認定し、乗員も全員が殉職認定を受け、二階級特進となった。
集計が纏められ、殉職者の人数、名前、階級が管理局から公式に発表された後、首都クラナガンにある大型の多目的スタジアムにて、合同葬儀が行われた。

ミッドチルダ　首都　クラナガン　多目的スタジアム　合同葬儀会場
約七万人の観客を収容できる多目的スタジアムは、普段は様々なスポーツやコンサートで歓声が響き渡るのだが、今日はスタジアム開設以来の異様な雰囲気に支配されていた。
飛び交うのは歓声ではなく罵声と泣き声。
「何故、私の息子が死ななければならなかったの!?」
「局員の殉職率が九割以上の理由が、いつまで経っても説明されていないじゃないか、ふざけるな!!」
「噂じゃ、元六課のエースたちは今回の遠征メンバーに入っていたのだが、管理局の高官と援交してメンバーから外してもらったらしいぜ・・・」
「マジかよ!?」
「最低最悪だな・・・」
「何が管理局のエースだ・・・」
「ベッドの上の方が勇ましいんじゃねぇの?」
「今の地位だって上官連中と寝て取ったんじゃねぇの?」
三提督を含む、壇上の管理局高官は苦渋の色を隠せずにいた。
またチラホラと聞こえるなのはやはやてたちの根も葉もないデマや誹謗・中傷にクロノは心を痛めた。
遠征に出て行った自分の陰口や誹謗・中傷ならば甘んじて受ける覚

悟はあったが、今回の遠征に全く関係のない彼女らの名誉がこうして傷つけられてしまう事には耐えられなかったが、「何も知らない貴様らにそんな事を言う権利があると思うのか!?」と、強気に言えないのもまた事実であり、ただジッと堪えるしか無かった。

そして、この場に彼女らが来ていない事が唯一の幸いだった。

管理局とミッドチルダ政府、クラナガン特別市合同主催の追悼式は、三提督を含む〝海〟〝空〟〝陸〟の管理局高官や政府・市の要人出席の元、厳かに行われた。

その様はテレビでも報道された。

今回の合同葬儀は遺族全員がスタジアムに入れる訳では無かったし、中には高齢、体が不自由だったり、病気の遺族が居り、病院や医療施設から出ることの出来ない者もいたからだ。

「お集まりの市民諸君、局員諸君、今日我々がこの場に馳せ参した目的は何か?それは、あの非道なるボラー連邦との戦いで散った多くの英霊を慰めるためである。彼らは尊い命を祖国と正義を守るために捧げたのだ・・・彼らは良き夫であり、良き父であり、良き息子、良き恋人出会った・・・彼らは幸福な生活を送る権利が有った。だが、その権利を捨ててまで正義を貫き通し、死んだのだ。市民諸君ここであえて問う。彼らは何故死んだのか?」

(お前ら首脳部の作戦指示が間違っていたからだろう?)

弔辞を述べる高官の言葉に心の中で今回の遠征の失敗理由を言うクロノ。

実際、ボラー連邦の正確な戦力も図らずにただ勢いのまま数でモノを言わせた戦いを挑んだのに相手はこちらの数よりも多く、またブラックホールを生成できる大砲と言う強力な兵器を備えていた。

どう見ても管理局の情報不足が招いた戦略的ミスだ。

クロノはこの弔辞を述べている高官が今回の遠征に賛成派の局員だったことから、この葬儀を利用してとんでもない事を・・・ボラーへの遠征を再び行おうではないかと、市民を煽らないか、不安になった。

「その回答はただ一つ。彼らは祖国と正義を守るために命を擲ったのだ。これほど崇高な死があるだろうか?諸君、我々は明記しなければ

ならない。祖国と正義こそが、命を擲ってでも守り通さなければならないモノなのだと!!この偉大なる祖国!!偉大なる正義を!!故に我々は戦わなくてはならない!!祖国と正義の為に!」
(これだから、扇動者は何時まで経っても消えない・・・・今の管理局の戦力でまともに活動できるかどうか分からないのに・・・・)
呆れながら高官の有り難い演説に耳を傾けるクロノであった。
厳かに行われていた葬儀だったのだが、その空気を破ったのは、今回の任務で婚約者(フィアンセ)を失った一人の女性の行動と発言だった。
その女性は式典の最中、壇上で弔辞を述べている高官の前に立つと、その高官をジッと睨むように見た。
そして、女性は自らの名前と戦死した局員の婚約者である事を明かす。
「そ、それは・・・・お気の毒です・・・・」
「労わっていただかなくて結構です。私の婚約者は貴方の言う祖国と正義を守るため、崇高なる死を遂げたのですから」
「そうですか、いや貴女はまさにミッドの・・いや、管理世界の婦女子の鏡の様な方だ」
(よく言うよ・・・・人間は恥と言うモノを学ばなければ成長はしないな・・・・)
女性と高官のやり取りを冷めた目で見るクロノ。
「ありがとうございます。私はただ一つ、貴方がたにご質問をしたく参りました」
「ほう、それは、どのような事でしょうか?」
「貴方がたは、今どこに座っていらっしゃるのですか?」
「ん?それはどういう意味ですかな?」
「私の婚約者は祖国と正義とやらを守るために戦い死に、この世の何処にも居りません・・・・そう・・遺体さえも残りませんでした・・・・貴方がたは、今何処に座っていらっしゃいます!?命を捧げる事を崇拝な事だとおっしゃる貴方は何処にいらっしゃいます!?貴方のご家族は何処にいらっしゃいます!?私は婚約者を犠牲に捧げました。それなの

に、貴方は何故そこに居るの!?貴方のご家族は何処に居るの!?貴方の演説はそれらしく聴こえるけど、ご自分はそれを実行しているのですか!?」

鋭い舌鋒に応えられた高官はいなかった。

三提督を始めとする幾人かの高官は女性の言わんとしている事を悟り、苦渋に満ちた表情を浮かべたが、一方では不愉快な表情を浮かべた者もいた。

それは、壇上で弔辞を述べる高官も含まれていた。

「警備員!!このお嬢さんは錯乱している様だ。別室で休んでもらえ!!」

壇上の高官が警備員を呼ぶと、二人の屈強そうな警備員がこの女性を取り押さえようとした時に見咎めた別の遺族が指弾し始めたのをきっかけに、遺族席から管理局の一連の対応への非難が沸き上がった。

その様子に壇上の高官も警備員も戸惑っている。

一人ならば兎も角、会場の大勢からの非難に対して、「彼らを全員この会場からつまみ出せ!!」とは、言えない。

もし、言えば再びミッドは暴動の嵐に包まれ治安は一気に落ちる。

「「・・・」」

スタジアム前の警備本部に詰めている警備担当の地上局員や上空警戒にあたる航空武装隊員たち、滞空しているシグナム、ヴィータ、なのはの三人もまた、憂いを隠せずにいた。

(スタジアムの中は沸騰しかかっているようだな)

(遺族の怒りはわかるけどよ、このままじゃ式は中止。全員締め出されちまうぞ。それじゃパニックになっちまう。そんな事になれば、またあの時の様な暴動が起きるぞ)

(誰かが扇動しているという可能性はないのかな?)

(指名手配のテロリストや要注意人物は入っていないと言っていたが・・・)

(一応、最初にあのいけ好かねぇ演説をグダグダ述べていたおっさんに喧嘩を吹っ掛けたあの女の事を調べてみるか・・・)

管理局艦船の相次ぐ撃沈事件発生からこのかた、強硬派から穏健派までの反管理局集団が活動を活発化させており、様々な手段で管理局に揺さぶりをかけているのだ。
常識的な言論だけの集団は監視だけで済むが、テロ集団はそうもいかない。
しかし、摘発しようにも逃げ足が早く、なかなか尻尾を掴めないとはやてたちも苦り切っていた。

管理局がボラー連邦と戦い、敗北、今後の方針を打ち出せない頃、ようやくガトランティスを太陽系から追い出した地球連邦側は・・・・。

ガトランティスの手によって破壊された第十一番惑星基地はその破壊したガトランティスの手によって地下に大規模な基地が建設されており、地球防衛軍はその基地を無傷で手に入れる事が出来た。
現在は基地調査の為の技術官とその護衛の為の軍人と艦船の一部がこの第十一番惑星に滞在している。
その中には、良馬が艦長を務める戦艦　まほろば　も居た。
そして良馬の元に新たな任務が課せられた。
「調査船団の護衛ですか？」
「そうだ。ようやくガトランティスを太陽系から追放したので、宇宙開発案も再開されたのだ」
「成程」
「計画書はコレだ」
「拝見します」
山南司令から宇宙開発案が記された計画書を読む良馬。
（ふむ、行先は・・・ケンタウルス座方面か・・・）
「調査船団は、三日後にこの第十一番惑星基地に到着する予定だ。それまでに　まほろば　の出航準備を整えてもらいたい」
「了解しました」
山南に敬礼し、司令官室を出る良馬。
その三日後、ケンタウルス座方面への調査の為に、調査作業船　蓬

莱丸　ウイング・バッファロー　スイート・フラッグ　の三隻が第十一番惑星基地に到着し、まほろば　はパトロール艦、畝傍と共に、第十一番惑星基地を出航、ケンタウルス座方面へと向かった。

ケンタウルス座アルファ星は太陽系から四光年余りと、太陽系から最も近い恒星である。

中心であるアルファ星はA・B・Cの三連星で、A星とB星は太陽と同じ位の大きさで、C星は遥かに小さな矮星だ。

いくつかある惑星の中には地球に近い環境の星もあることは前世紀までに判明していたが、ガミラス、ガトランティスとの戦争で探査できずにいた。

外洋宇宙であったイスカンダル行きとは異なり、内深宇宙行とも言えるアルファ星系の場合は、星等の密度が濃いため、長距離ワープには制限があり、航路開拓、測量も兼ねた今航海は片道十日～二週間程度を要すると予想されていた。

調査船団は先頭に畝傍とし、ウインググ・バッファロー、まほろば、蓬莱丸、スイート・フラッグの順で単縦陣を組み、航路データを収集しつつ慎重に進んでいた。

坂井率いるコスモタイガー隊はスクランブル状態で待機し、必要に応じて　まほろば　を発艦し、周辺警戒に当たっている。

ガミラス軍とは実質的な休戦状態にあるが、まだオリオン湾に潜んでいるかもしれない白色彗星帝国軍の残党や、暗黒星団帝国軍、時空管理局と遭遇する可能性は拭いきれず、万が一にも遭遇すれば非武装艦の調査船などただの標的にしかならない。

この手の護衛任務に戦艦や戦闘機まで動員するのは、地球防衛軍の苦しい台所事情を考えれば異例の大盤振る舞いといえよう。

それだけ連邦政府はこの探査計画に力を入れていることに他ならなかった。

船団は万が一の場合、一時退避できそうな小惑星や航行の障害になり得る天体等を確認しつつ進んでいたため、船団の行程は歩き始めた赤子の様にヨチヨチ歩きみたいな航海だった。

パトロール艦　畝傍　艦橋
「全方位、異状ありません」
「重力異常ありません」
「前方障害ありません」
「了解。通信長、船団各艦船に伝えて」
艦橋の乗組員からの報告を受けたパトロール艦、畝傍の艦長、美咲七波は船団全てへの通知を指示した。
船団の先頭を進む畝傍はまさに船団の目と耳である。
パトロール艦は太陽系外での行動も想定したため、レーダーやセンサー、通信機能は防衛軍艦船の中でも精密かつ良質な物を搭載している。
調査船の一隻、蓬莱丸にも同等の性能を持つレーダーやセンサーを備えてあるが、こちらはあくまで航路データの収集や分析がメインで、戦闘データの分析は二の次だ。
パトロール艦のお世辞にも広いとは言えない艦橋には、緊張感こそ漂っていたが、張り詰めるほどのものではなかった。
それは、艦長の七波と副長のターニャの表情が比較的柔和だからだ。
七波の第六感にはそれなりに定評があり、彼女の表情が柔和な時には凶事は起きていないからだ。
とはいえ、全ての乗組員たちは、口はともかく目、耳、手は休んでいない。
船団にとっての脅威は何も敵軍だけではない。
宇宙塵等の障害物や宇宙気象も十分脅威だ。
さらには何処からともなく流れてくる難破船・・・・。
過日のイスカンダル救援作戦では実際に　まほろば　が遭遇し、二名を救出しているからだ。
まあ、その後の付き合い方が些か厄介なのだが、事は既に軍の手を離れた。
後の事は全て地球連邦政府の手に委ねられているため、軍としては

その命令を実行するだけである。
期待と緊張を宿して、調査船団は星の海を進んでいった・・・・。

某宙域
某宙域にある某惑星・・・・赤黒く不気味な雰囲気であるが、その惑星の国家元首の執務室・・・・
そこへある報告が齎された。
「聖総統閣下」
側近の一人が聖総統と呼ばれる国家元首の下へと歩み寄る。
「なんだ？」
「以前、マゼラン方面の一角にて捕獲した艦についてなのですが・・・・」
「捕獲艦？」
「はい。時空管理局とか言う組織の艦です」
「・・・ああ、そう言えばいたなその様な組織の艦が・・・・確か、生体スパイ実験に使用して使い物にならなくなり、処分したのだな」
「はい」
「それで、その組織の艦がどうしたというのだ？あの艦はもはや宇宙の藻屑となったのだろう？」
「はい。ただ、これまでその組織の艦のコンピューターを解析した結果、面白いデータを発見いたしました」
「面白いデータ？」
「はっ、こちらをご覧ください」
側近は聖総統に端末を渡すと聖総統はその端末に目を通す。
「・・・・」
そして聖総統はその端末に表示されたデータを目にする。
「ふむ・・・・なかなか興味深い・・・・」
「しかし、かのデータによればその人物は収監されている模様です」
「ふむ・・・・その者の収監場所は判明しているのか？」
「はい」
「ふむ・・・・ならば、救出のための特務工作隊を編成し、直ちにその者を我が帝国に迎え入れたい」

「ハッ、承知しました」
聖総統は端末に表示された人物の救出を命じた。
側近は聖総統の命令を実行する為、特務工作隊の編成をする為に部屋を出て行く。
「プロジェクトＦａｔｅ：戦闘機人計画・・・実に素晴らしい計画だ・・・」
側近が部屋を出て行った後、聖総統は端末に表示されたデータをもう一度見る。
「早くお目にかかりたいものだ・・・ジェイル・スカリエッティ博士・・・」
端末にはＪＳ事件の首謀者、ジェイル・スカリエッティの顔写真と彼の研究成果が表示されていた。

「ほぉ～聖総統閣下からの特務：して、その内容は？」
「ある人物の救出任務です」
「救出任務？」
「はい。こちらをご覧ください。ミヨーズ大佐」
ミヨーズと呼ばれた人物はイスカンダルにてガミラス、ヤマト、まほろば　と戦ったあのゴルバ、プレアデスで戦った暗黒星団軍人のデーダー、メルダースと同じタイプの　宇宙人であったが、声や容姿はその同じ宇宙人の中でもなかなかの美形に入る人物であった。
「なるほど、確かにこの人物の研究は我が帝国の重要問題の解決の糸口となるな・・・わかりました。引き受けましょう：この任務を・・・我が帝国の為に・・・」
「はっ、では、こちらが今回の作戦の概要と要となる兵器です」
「・・・ふむ：まさか、これが実用化されていたとはな」
「では、搬入次第出撃をお願いします」
「了解した」
ミヨーズは物資の搬入を受け、何処かへと出撃した。

ジェイル・スカリエッティ・・・

かつて、管理局にて長年広域指名手配を受けていた人物で人造魔導師製造計画「プロジェクトＦ」、「戦闘機人計画」に携わっていた科学者。
高町なのはが十一歳の頃、大怪我をしたガジェット（当時はアンノウン）を製造したのも彼であった。
新暦７５年にて古代ベルカ時代の大型戦艦「聖王のゆりかご」を復活させて自らの野望を達成するために、レリックとヴィヴィオを狙い、自らが作り出したガジェットドローンや女性型戦闘機人集団「ナンバーズ」を率いて管理局へ戦いを挑んできた。
その正体は当時の最高評議会メンバーが伝説の地、アルハザードの技術で生み出した人造生命体：フェイトと同じ存在だった。
彼はＪＳ事件においてフェイトと対峙し、彼女の手により逮捕された。
その後、彼は管理局からの司法取引を拒否し、第９無人世界の「グリューエン」軌道拘置所第一監房に収容されている。
収監された彼は日がな一日、読書をしたり、ワインを飲んだりしている。
「はぁ～退屈だねぇ」
彼は独房のベッドの上で横になりながら呟く。
そんなスカリエッティが収監されている「グリューエン」の軌道拘置所を訪れる者たちが居た。
「り、リンディ・ハラオウン提督!?」
看守は突然のリンディの訪問に驚く。
リンディの後ろには護衛なのかシグナムとヴィータの姿があった。
「ほ、本日の訪問はどういった御用件でしょう？」
「ここへ収監されているジェイル・スカリエッティを別の世界の軌道拘置所へと移送します」
「そ、そんな報告は受けていませんが？」
「相手はスカリエッティ：堂々と教える訳にはいきません。これは極秘の護送任務です」
そう言ってリンディは正規の管理局印が押された書類を看守に見

せる。
看守もリンディが見せた書類と護送相手があのスカリエッティを護送するのであればその情報も少ない方がバレにくい。
リンディが言っている言葉は最もだと判断した。
そして看守はスカリエッティが居る独房へと案内する。
「ん？」
スカリエッティは自分の居る独房に看守が近づいている気配に気づく。
そして扉が開かれるとそこには看守の他に意外な人物たちが居た。
「おや？これは、これは珍しい。まさか本局の統括官殿がこんな辺境の世界にまで来るとは・・・」
スカリエッティは皮肉を込めてリンディに言うが彼女は顔色を変えずにスカリエッティに言い放つ。
「スカリエッティ・・貴方を別の世界へ護送する・・・」
看守はスカリエッティの手に手錠をかけ、彼を独房から出す。
拘置所の通路をリンディと看守二人がスカリエッティの前を歩き、彼の後ろをシグナム。ヴィータ、更に三人の看守は歩いている。
やがて、リンディたちが乗って来た艦の一室にスカリエッティを乗せ、その部屋にはシグナムとヴィータが残っている。
そして、艦は動き出す。
しかし、スカリエッティはこの時、妙な違和感を覚えた。
（ん？エンジン音が違うようにも聴こえるが・・・それに少々早く感じる・・・私が拘置所にいる間に管理局は新型のエンジンを開発したのか？）
「それで、次はどこに連れて行かれるんだい？」
スカリエッティは次の収監場所を訊ねるが、シグナムとヴィータは何も言わない。
部屋には窓がないので今何処に居るのか？
何処へ向かっているのか一切分からない。
やがて、グラっと艦がどこかに着いた衝撃を受ける。
（やれやれ、今度は何処へ連れてこられたのやら？）

スカリエッティがそう思っていると、部屋の扉が開いた。
すると、入って来たのは人型には見えるが、どうみてもこれまで自分が見てきた人類ではなかった。
皮膚は灰色で、細面の頭部には毛髪が無く顔立ちからは幼さの残る少年のような容貌をしている。
「はじめまして、ドクター・スカリエッティ」
「はじめまして・・・・えっと・・・・」
「ああ、これは失礼。私は暗黒星団帝国デザリアム軍大佐、ミョーズ」
ミョーズはスカリエッティに自己紹介をする。
「暗黒星団帝国デザリアム？管理局は随分と物騒な所を管理世界にしたものだね」
「我々は管理局とは全く関係はない。我々帝国は貴方の頭脳と研究を欲している」
「なるほど・・・・」
スカリエッティは動ずることなく、ミョーズが何故自分を欲するのかを何となく理解した。
「それにしても後ろの二人・・管理局のエース魔導師にそっくりなのだが、君には全然似ていないねぇ」
「ああ、これか・・・・」
ミョーズはリモコンを取り出しスイッチを押すとシグナムとヴィータの姿は白いゴム人形みたいな姿となる。
シグナムとヴィータがこの様な姿となったことから恐らくリンディも偽物だったのだろう。
「これは驚いた。まさかこんなにそっくりな偽物を用意するとは・・・・ドゥーエの『偽りの仮面（ライアーズ・マスク）』顔負けだな・・しかも変装できる人体の大きさも変更できるとは・・・・」
スカリエッティはかつて自分が製造したナンバーズの一人・・ドゥーエ以上の変装性能を持つ目の前のロボットに感嘆の声を漏らす。
今回、デザリアムがスカリエッティ救出に用いたロボ・・多目的任務機械生命体Ｄ号。

これは、表面を軟質ゴムで覆われ、中の機械を組み替えることで身長を自在に変えることが出来、さらにホログラムを纏う事でドゥーエ以上の変装機能を有している。
デザリアムは以前、拿捕した管理局の艦隊からＪＳ事件、スカリエッティ、管理局の有名な高ランク魔導師のデータを読み取りそこからリンディ、シグナム、ヴィータの容姿を真似たＤ号を今回投入したのだ。
そして、護送に使った艦もデザリアムが管理局の艦を真似て作った張りぼて艦だった。
「救助をしてくれるのはありがたいのだが、私の他にも四人の娘がまだ管理局の拘置所に居るのだ。彼女たちも救ってもらいたい」
「申し訳ございませんが、我々が命令されたのはドクターのみの救出でして、その他の人物に関しては対象外とさせていただきます」
ミョーズはスカリエッティ以外の人物の救助は命令されておらず、無理だと切り捨てる。
確かに今頃は自分を護送する為に来たリンディたちが偽物だという事実がバレているかもしれない。
そうなれば、別々の世界で留置されているウーノ、トーレ、クアットロ、セッテの四人を助けるのは困難だ。
「・・・」
スカリエッティは悔しそうに顔を歪めるが今の自分には拒否権は存在しなかった。
こうして彼はデザリアム帝国へ一人、亡命するような形で向かう事になった。

スカリエッティの脱獄は管理局でも知られる事になり、監視カメラの映像からリンディ、シグナム、ヴィータが真っ先に疑われたのだが、三人にはその時には完全なアリバイがあったので、疑いは晴れたが暫くの間、監視の対象となった。
スカリエッティが脱獄したと言う事で、ＪＳ事件の折、彼と共に管理局からの司法取引を拒否して拘置所へと送られたナンバーズの処

遇が問題となった。
管理局はボラー連邦との戦いで戦力が大幅に低下している。
そんな中、これ以上厄介なテロリストを脱獄させる訳にはいかなった。
「気は進まないが・・・・やむを得ないか・・・・」
管理局はウーノ、トーレ、クアットロ、セッテが収監されている拘置所の看守にある極秘命令を下した。

この日、ウーノはいつものように用意された食事を食べた。
すると、突然、彼女は息苦しさを感じた。
「うっ・・・・ぐっ・・・・がっ・・・・」
ウーノは苦しそうに喉や胸を手で抑え、床をのたうち舞うがやがて、口からは泡を吹き、目は白目となるとピクリとも動かなくなった。
ウーノの他にも同日、他の世界における拘置所にて収監されていたトーレ、クアットロ、セッテも食事中に原因不明の発作を起こして死んだ・・・・
管理局は彼女たちの死因を病死と記録した・・・・。

八十六話　探査、解放

ケンタウルス座　α星系　第四惑星

探査船団は惑星周辺の監視にあたり、探査母船、蓬莱丸は惑星自体の探査と監視機材の設営にかかっていた。

探査は、惑星の大気や地殻の組成、引力、風力、水脈、原住生物等を分析して、人間の行動や居住に適した環境かどうかを調べる一方、地球の資源として有用な鉱物資源の有無も確認する。

監視機材は地上と宇宙空間に設置し、敵性勢力であればその存在をタキオン通信で中央司令部に自動連絡する。

この手の監視機材や監視用人工衛星・惑星はこのα星系のみならず、地球を球状に囲むように設置し、太陽系に近づく艦隊や大型天体を監視するのだ。

更に、防衛軍は時空管理局の艦船から得たテクノロジーで異次元空間用アクティブ・パッシブソナーを現在開発中で、異次元空間というトンネルで太陽系や地球に近づこうとする艦船等を探知する試みも進められていた――。

それと同時に管理局の艦の様に異次元の海へ潜れる次元潜行艦の建造計画案も挙がっていた。

建造に関しては、管理局の次元航行艦とガトランティスの潜宙艦のデータが参考にされているが、何分、防衛軍としても初の試みの為、未だに慎重な調査と開発が続けられており、実用化はまだまだ先になる見通しだ。

宇宙戦艦　まほろば　艦長室

「・・・以上がこれまで判明した惑星のデータです」

良馬の目の前にはスクリーンが開かれ、十数人の人物が映し出されていた。

畝傍の艦長、七波は元より、今回の調査船団司令官、調査を行った研究者、技術者の責任者たちが一同に集まり今回の調査結果を報告

し、協議していた。
学会の研究者からは、恒星研究の第一人者である地球連邦大学教授のエドワード・サイモン教授、民間の技術者からは、南部、揚羽、月村等の有力な宇宙開発企業体からのスタッフも少なからず乗り組んでいる。
太陽系外の惑星の中には有用な資源が埋蔵されていたり、人間の生活に適した環境の星が存在する可能性がある上、各種新機材のデータ取りもできるため、企業にとっても一大開拓事業なのだ。
打ち合わせ自体は概ね順調で地学班からは、重力は地球とほぼ変わらず、地殻構造もオスニウム、コスモナイト等の貴重な鉱物資源らしき鉱脈や鉱床の存在が確認されているとの報告があった。
続いて、気象班からは大気や気象状況の報告があった。
大気組成も、窒素の比率が若干多い代わりに二酸化炭素が少ないが、それ以外は地球とほぼ同じで、宇宙服等の特別な装備は要らないようだが、気候は地球の砂漠地帯または乾燥帯に近く、また地下水脈も細いため、居住可能な星ではあるが、居住者の人数には制限があるとの見解がとられた。
しかし、この問題も長い時間をかければ解決するだろうという結論に至った。
「軍関係者や資源採掘関係者の居住はともかく、民間の一般人の移民先としては気候が厳し過ぎると言う事か・・・」
「はい」
「まぁ、最初から何もかもがうまくいくわけありませんが、少数とは言え、居住可能で、貴重な地下資源が有ると分かっただけでも良しとしましょう」
確かにサイモン教授の言うとおり、有用な鉱物資源があり、酸素の心配をしないで済むだけでも上出来というものだろう。
何しろ、外宇宙への本格的な進出はこれが初めてだ。
地球人類は存在する限り、これから長い時間をかけ、風に乗ったタンポポの種のように天の川銀河系、そしていずれは他の銀河系にも乗り出していくのだろう。

調査船団の乗員は、今回の調査結果に遥か先のゴールに思いを馳せた。
そのゴールを見る事はかなわないだろうが、少なくとも自分たちがバトンを握りしめ、走り出したのだ。
そして、今、自分たちが出来ることは、次世代の若者たちにこのバトンを少しでも優位な形で繋ぐことだった。
調査船団は、予定の調査日程を終え、今回得た調査結果を纏め、防衛軍司令部に調査結果を報告し、船団はケンタウルス座宙域を後にし、故郷である地球へ向け、帰還の途へとついた。
その途中、補給関係の為、ヤマトが密かに停泊するイカルス天文台に立ち寄った　まほろば。
「いつまでも真っ直ぐ飛んでいるんじゃない!!それじゃあ、どうぞ撃墜して下さいと言っているようなもんだぞ!!」
モニタースピーカーからは山本の怒号が響く。
イカルス天文台近くの宙域では、ヤマト配属予定の新人パイロットたちが今日も山本明夫らにしごかれていた。
どうやら本日の訓練メニューは小惑星帯内の模擬戦の様だった。
「坂本!!椎名!!貴様ら、ヒナ共に一体何を教えていた!?」
「すみません!!」
坂本と椎名は、新人の教導官も務めていた様だ。
山本の容赦ないダメ出しは新人のみならず、彼らを教えた坂本と椎名にも及ぶ。
「絞られているようですね、新人のヒナ鳥たちのみならず、若鳥の坂本たちも・・・」
「ヤマト戦闘機隊の名の重さは、山本が一番よく知っているからね。坂本たちにとってもいい復習になるだろう」
感嘆の声を上げる永倉に良馬が応じる。
ヤマトが不撓不屈の艦である以上、ヤマト所属の戦闘機隊もまた不屈であることを求められる。
今は亡きエース、加藤三郎と共にヤマト戦闘機隊を支え、唯一生還した山本とすれば、坂本や椎名たち後輩は、今後のコスモタイガー隊

を担う期待の後輩たちだ。
散っていった仲間たちの思いを継ぎ、立派なファイターパイロット、否、宇宙戦士に育ってもらいたいという思いは人一倍だ。
「さて、それじゃあこちらもそろそろ始めるか・・・・」
「そうですね」
「これより対空戦闘演習に入る。新人相手とはいえ、手加減なしで行くぞ!!」
「はいっ！」
良馬が鼓舞するように言うや、ブリッジクルーが元気よく返す。
「航海長、張り切り過ぎないようにな」
「はい」
「機関長、機関全速!!」
「了解!!機関全速」
「新人隊、編隊を組み直しています」
「やれやれ、鍛える余地が大分あるな」
新見の観測の報告に、良馬は一人愚痴る。
些か時間がかかり過ぎだ。敵に奇襲されたら最初の一撃で二割から三割はやられてしまう。
「全機突撃！行くぞっ!!」
まほろば　と　畝傍が加速しつつ前進を始め、それを目指して、山本率いるヤマトのコスモタイガー新人組が突撃していった――。

ボラー連邦　首都　ロスクワ　首相官邸
管理局制裁艦隊をいとも簡単に返り討ちにしたボラー連邦では、管理局：管理世界への侵攻案が議題に上がった。
ボラー艦隊は時空管理局の侵攻部隊を完膚なきまでに叩きのめした。
恐らく彼らにはもはや管理世界の治安維持に最低限必要な戦力しかなく、暫くこちらに侵攻してくる事はできないだろう。
仮に来たとしても、また返り討ちにすればいい事だ。
いや、その前に連中の本拠地を叩き潰して二度とこの様な愚かなマ

ネが出来ない様にしてやるのも一つの手であった。
事実、ベムラーゼを含め、軍官僚のほぼ全員が管理局への遠征に賛成の様子だ。
彼らも弱者の分際で、まるでこの世を支配する神様気取りの時空管理局の存在にウザったさを感じていた。
それにこれを放置して居れば、管理局は何度もこちらにちょっかいを出してくる可能性もあり、本国を始めとし、ボラー連邦系列の惑星国家の輸送船などが今後も臨検と称した海賊行為の被害を受ける事も十分にありえる。
何せ、そもそもの発端は、管理局が此方の輸送船に対して海賊行為（強引な臨検）を行ってきたのが始まりだった。
むしろボラー連邦側は被害者なのだ。
しかも、最初に海賊行為を行って、その次に来た捜索隊も同じく海賊行為を行って来た。
見せしめのために連中の艦を拿捕して、乗っていた乗員を処刑し、その映像を連中の根拠地に流した。
だが、この見せしめは逆効果となり、連中は処刑した者の敵討ちを行ってきた。
こちらへちょっかいを出す意欲と戦力を失わせれば、今回の戦闘の目的は果たしたようなものだ。
だが、再び戦力が整えば、今回の件で返り討ちにした連中の敵討ちだと言ってまたもや、艦隊を派遣して来るかもしれない。
そうなる前に根拠地ごと管理局を・・管理世界を支配してしまえばよい。
評決を下すまでもなく、管理局への侵攻が決まりそうになった時、
「首相閣下!!一大事です!!」
国家中央作戦室のオペレーターが慌てた様子で来た。
「何事だ？」
「ガルマンで・・・ガルマン星で、大規模な反乱が起きました!!」
「何っ!?どういう事だ!?駐屯軍は何をしている!?」
「そ、それが・・・」

報告では、外宇宙から現れた大艦隊が突如、ガルマン星に押し寄せ、現地住民と協力し、駐屯軍を攻撃し始めたのだと言う。
「どこの勢力だ?」
「まさか、時空管理局か!?」
「いえ、報告では見た事の無い、艦影との事です!!それどころか、ガルマン周辺の植民星にも我々、ボラー連邦からの独立を促す放送を一斉に流しているそうです!!」
「ぬぅ〜小癪な・・・・」
突如現れた時空管理局ではない第三者の宇宙艦隊・・・・。
しかも、それはガルマン星にいる駐屯軍を撃破できる程の技術を持っている。
その力が時空管理局よりも上回る事は明白である。
ボラー連邦の方針は一転し、管理局よりもこの謎の艦隊の殲滅と反乱を起こしたガルマン星への制裁へと方針転換が行われた。
ベムラーゼ曰く、「時空管理局とか言う弱小勢力などいつでも滅ぼせる。それよりも今は、我がボラー連邦の庭に入り込んだ新たな虫けらを潰す事を優先する」との事だった。
これが、この先数年にわたって銀河系を巻き込む大戦乱・・・・ボラー連邦とガルマン・・後のガルマン・ガミラス帝国との闘争の始まりであった。
結果的に管理局はガミラスのおかげで破滅の危機を乗り越えたのだが、当の管理局はその様な事を知る由も無く、ボラー連邦からのいつ来るか分からない報復に怯える日々が続くことになった。
その反乱が起きたガルマン星では・・・・

銀河系中心付近核恒星系　ガルマン星
つい数日前まで、この地を支配していたボラー連邦の総督府だったビルの前には数万もの人々が群れ集まり、歓呼の声を上げている。
群衆の視線は、ビルのテラスに立つ数人の人物の中央にいる一人の男に注がれていた。
歓呼に手を挙げて応えた一人の男はマイクの前に立ち、宣言する。

「本日、ガルマン星は暴虐なる支配者、ボラー連邦から解放された事をここに宣言する!!」
人々の喚声が一際高くなった。
マイクの前に立つ男・・・元大ガミラス帝国総統アベルト・デスラーは再び挙手し、喚声が鎮まるのを待って再び口を開く。
「ボラー連邦の理不尽極まる支配は、もはや過去のものである!!これからはガルマン、ガミラス両民族が手を取り合って新たな国を造り、暴虐なるボラー連邦を打倒して、この銀河に真の平和を齎そうではないか!」
デスラーと共にテラスに立つのは、ガデル・タラン、グラーフ・シュパー、ガル・ディッツら旧ガミラス軍高官とガイデルら、デスラーに協力した反ボラー活動のガルマン人指導者たちだ。
ボラー連邦に対するレジスタンス活動は長く続いていたが、当然ながら凄まじい弾圧を受け続け、活動の中心的指導者がいなかった。
宇宙艦船を有して居なかった事も大きな要因でもある。
そんなガルマン星に現れたのが、遥か昔に宇宙の海原に漕ぎ出していったガルマン人の末裔、デスラー率いる旧ガミラス艦隊と、ガミラス本星等から脱出してきたガミラス人の移民船団だった。
星の名前は違えど、そこに住んでいたのは、かつての自分たちの先祖の子孫たち・・・。
同胞たちの惨状を見聞きしたデスラーは憤怒し、ボラーの駐留艦隊を奇襲し撃滅した後に一気にガルマン星に迫った。
ボラー連邦は当初、事態をさほど重視しておらず、近隣星系の駐留艦隊を討伐艦隊として派遣したが、ガミラス艦隊はこれも〝瞬殺〟してしまった。
この時期、ボラー連邦には同格の敵対勢力は存在せず、軍、特に占領地の駐留軍の士気は弛緩が見られていたようだ。
喧嘩を吹っ掛けてきたあの時空管理局でさえも、ボラー連邦にとっては、演習相手レベル・・いや、もしかしたらソレ以下かもしれなかった。
一方、旧ガミラス軍はヤマトや小マゼランにてガトランティス、マ

ゼランでは暗黒星団帝国などの強敵と戦ってきたことで技量・士気は保たれており、しかも祖先の同胞を救うという大義名分もあってか戦意は旺盛で、数で勝るボラー連邦軍を戦術と戦意で圧倒したのである。

「手応えがなさ過ぎる。地球の連中はもっとしぶとかったぞ！」

宇宙に漂うボラー艦の残骸を見ながらデスラーはかつての敵と比較しつつボラー連邦軍を酷評したという

二度の惨敗した現地駐留軍の醜態にボラー連邦の実質的リーダーである連邦首相ベムラーゼは大激怒。

命からがら本星へ逃げ帰った現地駐屯軍の幹部の役職を即刻解任し、その者たちを粛清した上で、ボラー本星防衛艦隊から一個艦隊を抽出し、〝叛徒どもと扇動者を討伐するため〟に艦隊を派遣した。

既にこの時、ベムラーゼの頭の中には時空管理局の存在など当に消えていた。

本国艦隊の出撃で、不逞なる叛徒どももひとたまりもなかろうと、連邦政府中央や軍首脳部も考えたのだが、戦力を増やしていたのはガミラス側も同じだった。

各地に散らばっていた艦隊が〝新天地〟に到着したデスラーの後を追って続々とガルマン星に到着、または接近しつつあった。

しかもこれらの艦隊は行き掛けの駄賃とばかりにと、ボラー軍の補給線を突つき、輸送船団を襲って物資の強奪もやってのけた。

デスラーはこれら戦利物資のうち、軍事物資は接収したものの、食糧や医薬品などの物資をボラーの支配に喘いでいたガルマンの住民やガルマン星周辺の星々の住民に分け与えたため、否応なしにデスラーと旧ガミラス軍の人気は高まったのである。

祖先を同じくする者同士ということもあるが、ガミラス軍は厳しい軍規を敷いており、住民に狼藉を働いた者は公開銃殺刑にすると総統名で布告したこともあり、住民に乱暴狼藉を働くガミラス兵はいなかった。

当然ながらガルマン人からの評判もボラー軍人とは段違いで、急速に人心が離れたボラー駐留軍や総督府は孤立無援に陥った。

そこに、ボラー本国からの艦隊が叛徒と扇動者を討つべくやってきたのだ。
ここが正念場と判断したデスラーも全艦隊に集結を命じて迎撃準備にかかり、ガルマン人レジスタンスたちもボラー陸上軍との全面対決に備えた。
ガルマン星から約一光日余りの空域でボラー艦隊とデスラー直率のガミラス艦隊は激突したのだが、ここでデスラーはガミラスのお家芸とも言える〝ドメル戦法〟を以ってボラー艦隊本隊を急襲。
旗艦だけでも三十発以上被弾して落伍させ、艦隊指揮官及び幕僚らを戦死させた。
開戦早々に指揮系統が乱れたボラー艦隊にガミラス艦隊は群狼の如く、容赦なく襲いかかり、ボラー艦隊は司令部と戦力の半分を失って退却したのだが、退却するボラー艦隊にガルマン人のヴォルフ・フラーケンが率いる新造間もない次元潜航艦隊が執拗な追撃をかけたため、ボラー首都星に辿り着けた艦は出撃したうちの三割に過ぎなかった。
この戦いにおいて、フラーケンが率いる次元潜航艦隊はボラー艦の中に他と違う艦影・しかも、自分らと同じ、次元潜行能力を有する艦を発見し、沈めると言う戦果を得ていた。
それは紛れもなく、ボラー連邦が管理局から鹵獲したS　X級艦、アフトワーズだった。
やはり、管理局の鹵獲艦よりも純ガルマン・ガミラス製の次元航行艦の方が性能は上だった。
ボラー連邦はこの戦いで貴重な次元航行能力を有する艦も失ったのだ。
頼みの綱の本国艦隊が敗れたことで抗戦の手段を失ったボラー連邦のガルマン総督府と軍司令部は完全に陥落し、総督はデスラーの親衛隊に逮捕され、デスラーの面前に引き出されて不正蓄財を暴露・断罪された末に住民に対する残虐行為の責任も問われて即決裁判の後、公開処刑された。
その他にも同様の罪状により、多くの高級士官が処刑された。

降伏したボラー軍人やその関係者の一部は処刑こそされなかったが、旧式な宇宙貨物船に乗せられて追放された。
彼らはにはもう帰る星はなかった。
敗北した中、のこのこと本星へと帰れば、ベムラーゼの怒りを買うは必至。
言い渡されるのは敵前逃亡罪による死刑判決のみ・・・。
当てもない星の海を流離う事になった彼らの末路は恐らく悲惨なものとなるだろう。
しかし、この宇宙難民となったボラー連邦の者たちの中で、ある一人の男の存在がこの後の管理局に希望と新たなる火種を生み出す事は誰一人として知る由もなかった。

ボラー連邦の勢力が一掃されたことで、ガルマン星は長きにわたるボラー連邦の支配下から解放され、今日の解放宣言に漕ぎつけた。
解放後、デスラーは星の名前を『ガルマン・ガミラス』と改め、同じく二連星の青い　星の名を『スターシア』と名付けた。
演説するデスラーを眩しく見ながらも、タランは自分たちが思っていたよりも早く新天地を得た喜びより、これから待ち受ける難問に身が引き締まる思いだった。
(ボラーの支配で荒廃したガルマン星の整備と、再び侵攻してくるであろうボラー連邦の魔の手から同胞を守るための軍備増強、そしてガミラス人とガルマン人の融和。これが一番大切だ・・・)
デスラーを先頭に、このガルマン星を銀河の中心にするための闘いが始まろうとしていた――。

デスラーたちがかつての祖先の星からボラーを駆逐し、新たなる帝国の建国を行っている時、地球防衛軍でも、新たなる新造艦がこの日就役した。
その艦は、艦首の形状はかのアンドロメダ級と同系列艦であることを証明する、並列二門の波動砲砲口が存在しているのだが、艦首下部に更にもう一門、波動砲口らしき開口部が存在していた。

その艦の艦首直下、居並ぶ軍高官を背に、地球防衛軍司令長官・藤堂平九郎は厳かに宣言した。
「本艦の艦名を『春藍』と命名する！」

アンドロメダの時の様な派手な進宙式ではないが、春藍の期待は大きかった。
艦長には、地球防衛軍連合艦隊提督の山南　修が仮就任し、副長には古代の兄、古代　守が仮就任した。
春藍の進宙式の模様はテレビ放映され、その中継を月村家に居たフェイトとティアナも見ていた。
「防衛軍の新型宇宙戦艦・・・・」
「しかも、今までの戦艦と違って波動砲の発射口が三つあるなんて・・・・」
「やっぱり・・・・と言うか、当然管理局の艦船より遥かに強いんでしょうね」
「そうだね」
テレビ画面に映る春藍の姿に率直な感想を述べた。
ヤマト、まほろば、春藍、ネメシス・・・・日本が誇るこの四大宇宙戦艦が今後の地球の切り札となる事は、異邦人であるフェイトとティアナでもすぐに理解出来だ。
もし、管理局がこの四隻を拿捕、あるいは破壊するには、一体何隻の次元航行艦と人材を生贄にすればよいのか、正確な数は打ち出せないが、管理局の活動に支障をきたすぐらいの数になると言う事は理解できた。
その日の夜、ティアナがお風呂に入っている間、フェイトは部屋にて、姿見と相対していた。
身に着けているのは私服でも寝間着でもなく、白いマントを纏った通常のバリアジャケットだ。
フェイトはしばらく瞑目していたが、瞼を開き、鏡に映る自分を直視するや、一言呟く。

「――バルディッシュ、真・ソニックフォーム・セカンドバージョン」
「イエッサー。マスター」
――瞬転――
ほんの一瞬、僅か一秒もしない内にフェイトのコスチュームが変わった。
それは、管理局員や犯罪者達がよく見知っている二の腕や太腿が露わな、セクシーとも露出過多とも言われるコスチュームではなく、首から下、爪先や手首まで黒を基調に　白と金のラインが入ったとボディスーツ型のコスチュームに包まれていた。
「――よしっ、コスチュームは完成だ」
フェイトは姿見に映る自分の姿を見た後、両拳を握り、小さなガッツポーズを作る。
フェイトの真・・・もとい、新・ソニックフォームが姿を現した瞬間だ。
脚や二の腕をフルカバーしたことで防御力を増した一方、魔力制御の再設定で在来のソニックフォームとほぼ同等の機動力を確保し、バリアジャケットとしての総合性能は格段に向上した。
新コスチュームのモチーフは、過日、まほろば、ヤマトに身を寄せていた時に貸与された女性乗組員用制服だった。
ボディスーツの様なそれは宇宙服や戦闘服としての機能を持ち、ヤマト唯一の女性乗組員だった森雪は、その姿で幾度となく鉄火場を走り回り、負傷して倒れた古代進を庇ってデスラー総統とも対峙したという。
その話を聞いたフェイトは深く感銘を受け、自分も負けていられないと発奮したかどうかはともかく、その制服の高い実用性にも着目。自らのバリアジャケット改良のモデルに決め、こうしてデザイン変更を行ったのだ。
以来、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンのバリアジャケットは〝露出度〟を下げ、通常のバリアジャケットもスラックスタイプに転換した。
後にその事実は、男性局員を落胆させた一方で、女性局員からは

凛々しさを増したと好評を博した。

某宇宙空間

太陽系からアンドロメダ座銀河方面に約27万光年離れた宇宙空間に多数の漆黒の艦船が遊弋しているが、その艦隊のすぐ前には、艦船〝だった〟金属片や残骸、人間だった有機物が漂っていた。

漆黒の艦隊の中で一際大きな艦の艦橋で、中央の席に座るスキンヘッドの男に、幕僚らしき、これもスキンヘッドの男が姿勢を正して立つ。

「ミヨーズ司令、ガトランティス艦から回収した記録媒体から、地球艦隊と例のヤマトの資料が発見されました！」

「そうか、やはりあったか・・・」

ミヨーズと呼ばれた若い司令官の表情が僅かに綻ぶ。

しかし、それは物凄く近づかなければ、分からない程で、離れてみると、司令官の顔は普段通りの表情にしか見えない。

「取り急ぎ資料を用意しますが、引き続き解析と更なる収集を行います！」

「うむ」

（フッ・・・遂に見つけたぞ、地球への道の欠片をな・・・カザン総司令や聖総統閣下もお喜びになるだろう）

ミヨーズは自らの読みが的中したことに、内心で快哉を上げた。

地球に敗れたガトランティス軍は、支配下においているアンドロメダ星雲に引き揚げるものと読み、網を張っていたところにガトランティスの敗残艦隊が引っ掛かったのだ。

（もっとも、現地に行けたとしても、聖総統御自らお打ちになった手で、奴らの占領軍は大揺れだろうがな・・・）

ガトランティスとはいずれアンドロメダ星雲の覇権をかけて雌雄を決するつもりでいたが、地球を取るに足らぬ存在と侮った挙げ句、愚かにも元首たるズオーダーが斃されてしまった。

アンドロメダ星雲にいる彼らの現地占領軍は勢力争いで早くも共食いを始めてくれたし、占領地の奴隷たちも蜂起しつつある。

地球に対し、国家元首たるズォーダーの復讐戦など夢のまた夢だろう。
ガトランティスより戦力や技術が劣っていた地球が一体どんな手でズォーダーを討ち取ったかはわからないが、この大宇宙は勝ち残った者こそが強者だ。
（だが、我が帝国はそんな愚策はとらない）
（十分かつ迅速に地球を調べ、彼らが戦力を回復する前に制圧してやる）
ミョーズは、前方、太陽系のある天の川銀河がある方向に鋭い視線を射込んだ――。

ミッドチルダ　ベルカ地区　聖王教会
カリムはその日、普段通り自分の執務室にて、執務を行っていた。
そこへ、
「騎士カリム!!」
カリムの護衛兼秘書のシャッハ・ヌエラが慌てた様子で飛び込んできた。
「どうしたのですか？シスターシャッハ？」
「一大事です!!」
カリムとシャッハらが所属する聖王教会内には強硬派・現代に存在する聖王・ヴィヴィオを聖王と崇め、古代ベルカ王国を復活させようとする派閥があり、彼らは管理局がボラー連邦との戦いで疲弊した今こそ、管理局にとって代わって自分たちがこの次元世界を支配、運営しようと考えていた。
強硬派の考えを危険だと感じていたカリムは義弟のヴェロッサ、秘書兼護衛のシャッハ、そして元スカリエッティ一味であり、更生プログラムを受けたセイン、オットー、ディードの五人に彼らの動きを密かに内偵させていた。
シャッハの話では、その強硬派に動きが有ったのだと言う。
現代の聖王・高町ヴィヴィオが養母である高町なのはの下を離れて暮らして居る事を知った強硬派は、ヴィヴィオが居る世界・第９７

管理外世界へと工作員を送り込み、ヴィヴィオを拉致しようとしているのだと言う。
「っ!?シスターシャッハ!!シスターセインたちを連れて、直ぐに第９７管理外世界へ向かって陛下をお助けして来て下さい!!」
「承知しました!!」
シャッハはまたも、慌ててカリムの執務室を出てセインたちを連れ、急ぎ第９７管理外世界へと向かった。
「・・・シャッハ・・頼みましたよ・・・」
カリムは執務室を出て行ったシャッハを見送った。
シャッハたちがヴィヴィオを救い出す事を信じて・・・・。

第９７管理外世界　地球　海鳴
なのはの下から離れて過ごしていたヴィヴィオは、預けられた日から元気が無く、勉強以外の時は、公園や神社で人知れず泣いている事が多かった。
この日もヴィヴィオは神社の境内で一人、泣いていた。
するとそこへ・・・・。
「陛下・・・・」
声をかけられ、ハッと俯いていた顔をあげると、ヴィヴィオの目の前には黒いロングコートを纏い、サングラスをかけた薄気味悪い男たちが数人居た。
首にはヴィヴィオも見慣れたお揃いのロザリオをぶら下げている。
男たちがぶら下げていたロザリオは聖王教会の物で、ヴィヴィオは教会の知り合いであるカリムやシャッハ、セイン、オットー、ディードも身に着けていた事からその男たちが聖王教会の者たちである事がすぐにわかった。
それに自分の事を「陛下」と呼ぶのは、教会の関係者しかいない。
「・・・・」
ヴィヴィオは、無意識の内、後退り、男たちから距離を取る。
「お迎えに参りました陛下」
「さあ、私たちと共にミッドに帰りましょう」

男たちは無表情のまま、ヴィヴィオに近づいて来る。
「い、いや・・・」
ヴィヴィオは震える声で男たちに言う。
ミッドに帰ると言うが、ヴィヴィオには、この男たちについていけば、もう二度となのはには会えない様な気がしてならなかった。
「い、いやぁぁぁぁぁー!!」
恐怖が限界に達したのか、ヴィヴィオは悲鳴を上げて逃げ出した。
「はっはっはっはっ・・・どこへ行こうというのですか?陛下?」
男たちは逃げ出したヴィヴィオに慌てる様子もなく、むしろ、余裕がある様な感じで追いかける。
そりゃあ、大の男と小学校低学年の女子とでは、歩幅も走る速度も段違いである。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
神社の森をヴィヴィオは滅茶苦茶に走る。
ただ、足が赴くままに・・・
背後から迫ってくる脅威から逃れるために・・・
しかし、その途中で、
ガッ
「あっ!?」
ヴィヴィオが、足に何かが当たった感触が有ったと思ったら、途端にバランスを崩し、ヴィヴィオはその場に転んだ。
「うぅ〜いたたた・・・」
涙目で起き上がるヴィヴィオであったが、それが大きな時間のロスとなり、
「鬼ごっこはもう終わりですかな?陛下?」
「っ!?」
ヴィヴィオが振り返ると、男たちは自分の直ぐ近くまで来ていた。
彼女自身、かなり走ったからもう大丈夫だろうと内心何処かでそう思っていたのだが、やはり、体格差と体力差がモノを言った様で、実際は全然引き離せていなかった。
「さぁ、陛下。お戻りのお時間です。大人しく我々と共にミッドに来

てもらいますよ」
男たちがゆっくりと近づいてくる。
ヴィヴィオは、転んだ事と、迫り来る恐怖に起き上がれず、尻餅をついたまま、後退る事しか出来なかった。
(いや・・・誰か・・・誰か助けて・・・なのはママ・・・フェイトママ・・・)
心の中で、この場には居ない二人の母親に助けを求めるヴィヴィオ。
そんな彼女の指が地面に落ちていた小石程の小さなガラス片の様な物に触れた時、
それは起こった・・・
突如、辺り一面に虹色の輝きが起こり、サングラスをしていた筈の男たちもその眩さに目を閉じたり、手で目を覆ったりした。
ヴィヴィオを強硬派の工作員たちから救出すべく、地球へやって来たシャッハ、セイン、オットー、ディードの四人は海鳴の有る方向から魔力反応を探知した。
「この反応は!!」
「陛下・・・」
「行きますよ!!」
「「はい!!」」
シャッハたちは、魔力反応がした現場へと向かった。
そこで、彼女たちが見たものは、
「あぁ~あぁ~目がぁ~、目がぁ~!!」
と、ある有名なアニメ映画に登場する特務大佐と同じような台詞を吐き、目を手で抑え悶え苦しんでいる教会内における強硬派の工作員たちの姿だった。
しかし、その場にヴィヴィオの姿は見当たらなかった。
オットーに彼らの捕縛を命じ、残りのメンバーは付近を捜索し、ヴィヴィオを探したが、彼女の姿を発見する事は出来なかった。
その代わりに、セインが〝ある物〟を発見した。
「こ、これは・・・」

「どうしたのですか?セイン?」
「シスターシャッハ、コレ見て」
セインは小さなガラス片の様な物をシャッハに見せる。
「・・・シスターセイン、今は貴女と遊んでいる場合じゃないんですよ。それにそんなガラクタを拾って貴女は一体何を考えているのですか?」
シャッハは顔を引き攣らせながらセインに言うが、決してセインはふざけている訳では無かった。
「違いますよ!!コレ、昔ドクターの作った玩具(ガジェット)に埋め込まれていたジュエルシードにそっくりなんですよ!!」
「なんですって!?」
「まさか、陛下はジュエルシードの影響を受けて・・・」
「でも、なんでこんな場所にジュエルシードが?」
シャッハは、念の為、セインとディードにヴィヴィオの捜索の続行を命じ、オットーと共に捕縛した強硬派の工作員と共にミッドへと戻った。
しかし、シャッハの心中は重かった。
内偵を進めていたにも関わらず、強硬派にその一歩先を行かれ、ヴィヴィオを襲撃され、その上、肝心のヴィヴィオを行方不明にさせてしまった。
この事実を知れば、必ずなのははショックを受けるだろう。
度重なる心労に今の彼女が耐えられるだろうか?
しかし、この事実をひた隠しにするには無理がある。
故に彼女に今回の件を伝えなければならない。
シャッハにはその事が辛く重かった・・・。

八十七話　時を駆け抜けた聖王陛下（幼女）

「そんなっ!!」
　なのはは、カリムから大事な話があると言われ、聖王教会のカリムの執務室へと来ると、そこで教会の強硬派から海鳴に居るヴィヴィオが襲われ、行方不明になってしまったのだと言う。
「ヴィヴィオ・・・ヴィヴィオが・・・また・・・私は・・・また助けられなかった・・・約束を守れなかった・・・・」
　なのはは震える声でそう呟くと・・・・
　ドサッ
　その場に倒れてしまった。
「高町一尉!!」
「医者だ!!医者を早く!!」
　カリムとシャッハは慌てて倒れたなのはを客室のベッドへと運び、シャマルを呼んだ。
　その頃、オットーは海鳴でヴィヴィオが行方不明になった原因かもしれないジュエルシードのかけらを調べてもらう為、無限図書にいるユーノの下へ来ていた。
　何せ、彼はジュエルシードを発掘した張本人であるため、何か知っているのかもしれないと思ったのだ。
「うーん・・・間違いない。これは確かにジュエルシードだ・・・・」
　ルーペを使ってオットーが持ってきたジュエルシードと思しきガラス片を何度も見るユーノ。
　そして、彼の口からこのガラス片は間違いなくジュエルシードの欠片と言う事が判明した。
「でも、何故あの街にジュエルシードが？管理局の報告ではすべて回収された筈じゃあ？」
　管理局の公式記録で海鳴にばら撒かされたジュエルシードは全部で二十一個・・・・。
　それら全てはあの高町なのはが回収したと管理局の公式記録には

そう記されており、二十二個目があったなんて知られていない。
ユーノ自身も発掘したのは二十一個だと後の裁判でそう証言している。
ならば、この二十二個目のジュエルシードは一体何なのか？
「もしかしたら・・・」
ユーノはある仮説をたてると、クロノと連絡をとった。
そして、彼に訳を言って特別にジュエルシードが安置されている管理局の保管庫へと向かった。
海鳴でなのはが回収したジュエルシードは、当時の管理局の暗部によってスカリエッティの下へと流され、彼はそれを動力源にガジェットと呼ばれる機動兵器を作り上げたが、それらのガジェットも八神はやて率いる機動六課の手によって破壊され、スカリエッティの逮捕により、ジュエルシードは再び管理局の下へと安置され、今度は厳重な監視の下、保管庫で眠っていた。
クロノから特別許可を貰い、二十一個のジュエルシードを一つ一つ丁寧に見ていくと、その内の一つが不自然な欠け方をしていた。
「・・・」
ユーノはその欠けたジュエルシードに今回オットーが持ってきたジュエルシードの欠片をはめ合わせると、その二つはピタリと一致した。
「やっぱり・・・」
「どういう事です？スクライア司書長」
納得したユーノにオットーが訊ねる。
「つまり、この二十二個目のジュエルシードは・・・」
ユーノはオットーにこの二十二個目のジュエルシードの正体を話す。
彼の仮説では、発掘した際に生じた小さなヒビが海鳴にばら撒かれた時の衝撃によってこのヒビが広がり、遂には欠けてしまったのではないか？と言う説だった。
二十二個目のジュエルシード・・・ジュエルシードの欠片は小さかったため、管理局のサーチャーにも引っかからず、当時ジュエル

シードを探していたなのは、ユーノのペア、フェイト、アルフのペアもその存在には気がつかなかったのだ。
海鳴でジュエルシードをめぐる事件ＰＴ事件から十数年の年月の中、今まで発動しなかったのは奇跡に近い事だとユーノは言うが、今回はそのジュエルシードの欠片が、一人の少女を行方不明とさせてしまった。
ジュエルシードは願いを叶えるロストロギアだと言う、
ただし、その願いを歪ませてしまうと言う副作用もある。
ヴィヴィオは一体どこに消えてしまったのか？
何か心当たりがないかとオットーがユーノに訊ねると、
ヴィヴィオが教会の強硬派に追い詰められた経緯を聞いたユーノは、もしかしたら、ヴィヴィオはその時、「この場から逃げたい」と願い、その願いを聞いたジュエルシードの欠片はヴィヴィオを何処かの世界へ跳ばしてしまったのではないかと言う。
その跳ばされた世界が何処なのかを確かめる方法は残念ながら分からないと言われ、オットーはがっくりと肩を落とした。
しかし、何か確かめる方法があるかもしれないと言って再び無限図書館へとユーノは戻り、オットーはこの事を教会のカリムの下へと知らせた。
オットーの報告を聞いたカリムは海鳴に居るセインとディードを呼び戻し、オットーと共にユーノのアシスタントを命じ、何かヴィヴィオの居場所を突き止める方法がないか探す様に言った。
その命令を聞いたセインはあからさまに嫌そうな顔をしたが、シャッハの一睨みで、すたこらさっさと無限図書館へと向かった。
なにせ無限図書館は局員の墓場とも言える部署・・・・。
そんな所に好き好んで行く奴は居ない。
セインが嫌悪感を露にしたのも頷けると言うモノだ。
シャマルがシャッハの連絡を受け、教会にたどり着いた時、なのはは客室のベッドの中に居た。
なのはは額に大粒の汗をかき、時折魘されていた。
シャマルがクラール・ヴィントを使い、なのはの身体を診察する。

一通り、診察を行った後、シャマルはカリムとシャッハの待つ執務室へと出向き、二人になのはの容体を説明した。
「それで、どうでしたか?高町一尉の様子は?」
「極度の疲労です。肉体、精神面の両方の・・・・」
「そうですか・・・・」
管理局の現状をカリムとシャッハも当然知っている。
そして、先日ミッド全域で起こった大規模な暴動の事も・・・・。
ただその際、遺族から心無い暴言を吐かれた事は一部の人間しか知らない。
その事はカリムとシャッハは知らなかった。
元々ＪＳ事件の最終決戦からなのはは、体やリンカーコアに負担をかけるような、かなり無理な戦いを続けていたため、シャマルとしてはこれ以上の心労や過度な肉体的疲労はなのはにはしてほしくは無かったのだが、事態はそうはさせてくれない様で、管理局は管理世界への拡大にご執心になった挙句に自分たちが井の中の蛙、籠の中の鳥だったことに気づかず、肉食獣、猛禽類、毒を持つ大蛇のいる星の海へと勇んで乗り出した挙句に手痛い傷を負う羽目になった。
管理局は艦船の他に只でさえ、人材不足だった管理局はその人材不足に拍車がかかってしまった。
管理局が大変な中、責任感が人一倍高く、自分は魔法以外取り柄のないと思っているなのはに、今、管理局は自分を必要とされていると言う状況下で休む、管理局を辞めると言う選択肢は存在していないのだ。
そんなワーカホリックの状況下で肉体的に疲労が溜まり、そんな中に遺族からの誹謗・中傷、管理局の歴史的大敗北に加え沢山の同僚と教え子たちの死、魔法による力と管理の限界によって精神的疲労も溜まり、遂には養女とは言え、愛娘であるヴィヴィオまでもが、行方不明になってしまったのだ。
これまでの事で倒れなかったのが不思議なくらいである。
「はやてちゃんには、私から言っておくわ。暫くなのはちゃんを休ませないと・・・・」

「わかりました。では、病院はこちらで手配しておきます。騎士はやてたちによろしくお願いします」
「ええ・・・」
カリムはなのはを聖王教会系列の病院へ入院させる手続きをした。

本局　特別捜査官室
「なんやて!?なのはちゃんが!?」
「ええ・ヴィヴィオの件で・・・肉体的、精神的疲労がピークを迎えたみたい・・・」
「・・・そうか・・・ご苦労やったな、シャマル・引き続き、なのはちゃんの事を頼めるか?」
「ええ、任せてください。それじゃあ・・・」
シャマルとの通信を終えたはやては、深いため息をつく。
「はぁ～・・・」
正直、管理局が大変なこの時になのはの入院は痛い。
しかも、ヴィヴィオは行方不明・・・。
なのはが目を覚ました時に立ち直る可能性は低いかもしれない。
もしかしたら、精神異常をきたしてこのまま管理局を辞めてしまう事だって考えられる。
それに・・・
「フェイトちゃんにも何て言えばええんや・・・」
はやてはなのはの他に今、異世界の地球に居る親友であり、ヴィヴィオのもう一人の母親であるフェイトへの報告に頭を抱えた。
「管理局の〝海〟も〝海〟やけど、教会の強硬派も強硬派や・・・ベルカ王国の復活や何て・・・例え復活できたとしてもかつての古代ベルカの様に混乱の時代に逆戻りするだけやないか・・・」
カリムからヴィヴィオが行方不明になって事情を聞き、教会の強硬派にも、呆れと同時に管理局が厄介な時期に厄介な事をしてくれたと言う怒りを抱いたはやてであった。
そのヴィヴィオを強引に拉致しようとした教会の強硬派は、教会本部へと連行されると、早速宗教裁判にかけられた。

強硬派の幹部は当初、トカゲの尻尾切りの様に、ヴィヴィオを拉致しようとした工作員メンバーに全ての罪を着せようとし、
「下の者が勝手にやったことで我々には関係ない」
と、発言し、今回の件から逃れようとするが、そうは問屋が卸さない。
カリムら穏健派は、
「部下たちの行動も抑える事が出来ないのか?」
と、強硬派幹部らの監督不行届を指摘し、強硬派の連中に釘を刺す事に成功した。
強硬派も肝心の聖王の行方が分からなくなってしまっては、どうしようもなく、暫くは過激な行動を控える事にした。
管理局は兵力の回復と人材の確保、教会側は、カリムたちのおかげで強硬派を押さえる事が出来た。
しかし、管理局を含め、管理世界の住人はいつ来襲して来るか分からないボラー連邦の脅威に怯える日々を過ごしていかなければならなかった。
当のボラー連邦首相ベムラーゼは既に管理局、管理世界の事など眼中にない事を知らないまま‥‥。

その渦中であるヴィヴィオは一体どこへ転移したのかと言うと‥‥。

「ありがとうございました」
桜花は通っている道場の稽古が終わり、帰宅の途についていると、
「ん?なんでしょう?」
桜花の視線の先には、黄色いモノが落ちていた。
近づいて見ると、それは人間だった。
「どうしてこの子、こんな所で寝ているのでしょう?」
倒れている子を見て首を傾げる桜花。
取りあえず道端で寝かしておくわけにもいかず、桜花は、
「よっ‥と‥‥」

倒れている子をヒョイっと担ぎ上げると、近くの公園のベンチまで運んだ。
「・・・うっ・・・・うーん・・・・」
やがて、その子は目を覚ました。
「こ、ここは・・・・」
「あっ？気がつきましたか？」
「っ!?」
声をかけた桜花にその子はバッと飛び起き、怯えるような目で桜花を見る。
「えっ？あの・・・・私ってそんなに怖いでしょうか？」
突然、怯えられた桜花はどう反応して良いのか分からず、取りあえず、自分を見て怯えられているのが、自分の顔が怖いせいかと思い、訊ねる桜花。
「・・・・」
飛び起きた子も桜花が自分を攫おうとした教会の人間でないと分かると、徐々に警戒の度合いを下げて行った。
「えっと・・・・大丈夫ですか？」
「こ、ここは何処？」
「ここですか？ここは・・・・」
取りあえず、場所を聞かれたので、桜花はこの場所を言う事にした。
「ここは海鳴の三丁目にある公園ですよ」
「海鳴・・・・？」
その子は辺りをキョロキョロと見回し、
「私・・どうしてここに？」
「覚えていないんですか？貴女はこの近くの道端で倒れていたんですよ」
「・・・・っ!?あ、あの・・・・」
「ん？」
「私の他に倒れている人はいませんでしたか？」
「いえ、貴女一人だけですよ」
「そうですか・・・・」

「ところで、貴女、名前は？」
「えっ？」
「名前。何時までも『貴女』では、言いにくので・・・」
「あっ、そうですね。私の名前は高町ヴィヴィオと言います」
「私の名前は中嶋桜花です」
「でも、高町って・・・ひょっとして紅葉さんの知り合いですか？・・・・
でも、紅葉さんに外国人の知り合いが居るなんて話、聞いた事ないけど・・・・」
ヴィヴィオの苗字に桜花は自分の家の下宿人の紅葉が真っ先に思い浮かんだ。
たまたま同じ苗字かもしれないが、この海鳴で『高町』と言う苗字は紅葉の実家位しか思い当たらない。
しかし、ヴィヴィオの容姿から彼女はどう見ても日本人ではなく、外国人だ。
紅葉の知り合いの中で外国人が居て、その人が海鳴に来るなんて聞いていない。
桜花がヴィヴィオの苗字について考え込んでいると、
「おや？桜花さん。どうしました？」
と、桜花の耳に聞き慣れた声が聞こえた。
そして、その声に反応したのは、桜花だけでなく、ヴィヴィオも反応し、声のした方にバッと顔を向けた。
「ああ、紅葉さん」
そこに来たのは、今まさに桜花が血縁関係かもしれないと思っていた人物、高町紅葉だった。
彼女の手には買い物袋をさげているので、買い物の帰りなのだろう。
桜花は紅葉に普段通りに声をかける。
そして、紅葉にヴィヴィオの事を訊ねようとした時に、
「ママ？」
と、ヴィヴィオが紅葉を見て一言呟く。
「はい？」

「は？」
　その声を聞き、紅葉と桜花は唖然とするが、ヴィヴィオの呟いた『ママ』と言う意味を知ると、
「く、紅葉さんには子供がいたんですかぁ!?」
　桜花は驚くが、
「そんなわけないでしょう」
　紅葉の方は至って冷静だった。
　しかし、紅葉はヴィヴィオの姿を見て、
（っ!?高町ヴィヴィオ!?なんで彼女がここに!?・・・・それとも彼女のそっくりさん!?でも、私の事を『ママ』って言っていたけど、それって私と高町一尉を間違えたってことよね？となると、やっぱりこの子はあのＪＳ事件の時の子で間違いはないみたいね・・・・）
「それで何故、私を見て『ママ』と思ったんですか？」
　紅葉も参加して、ヴィヴィオに事情を訊ねる。
「あっ、その・・・・お姉さんが私のママによく似ていたので、つい・・・・」
「はぁ～・・・・でも、貴女の容姿から察するに日本人ではなく、外国人の様に見受けられるのですが？日本語はとても上手いですけど・・・・」
「その・・・・私とママは・・・・血の繋がりがないんです」
（うん、知っているけどね・・・・）
「「・・・・」」
　しょんぼりしながら言うヴィヴィオに紅葉と桜花は地雷を踏んだと言った感じの表情をする。
（紅葉さん、どうするんですか!?マズイ事を聞いちゃったみたいですよ？）
（そ、そう言われても、私だって会ったばかりの彼女の家庭環境まで知らなかったんですから、仕方がないでしょう。不可抗力ですよ）
（とは言え、ここはミッドじゃないからな・・・・やっぱり、ハラオウン執務官に預けた方がいいんだろうけど、このヴィヴィオがハラオウン執務官の世界のヴィヴィオだと言う確信はできないし・・・・どうしよう・・・・）
　アイコンタクトをとりながら、この重い空気を何とかしようとする

二人。
「えっと・・・取りあえず、互いに自己紹介しましょう。私の名前は紅葉・高町　紅葉です」
「えっ？」
　紅葉の名前を聞き、ヴィヴィオは意外そうな目で紅葉を見る。
「どうかしましたか？」
「あ、いえ・私の苗字も『高町』なので・・・」
「そうなんですか？」
「はい。私の名前は、高町ヴィヴィオです」
（やっぱり、ヴィヴィオだったか・・・）
　紅葉とヴィヴィオは互いに自己紹介を行い、次に紅葉は、ヴィヴィオの言う『ママ』について訊ねてみた。
「ヴィヴィオさんのお母さんのお名前をお訊ねしてもよろしいですか？」
「はい、ママの名前は高町なのはって言います」
（やっぱり・・・）
「紅葉さん、貴女の親戚とかに『なのは』って人は居んですか？」
「いえ・昔・同じ名前の人はいましたけど・・・」
「うーん・・・それで、ヴィヴィオさんは何で道端に倒れていたんですか？それに他に倒れている人が居なかったかと訊ねていましたけど、その人もヴィヴィオさんの知り合いですか？」
　桜花が、ヴィヴィオに事情を聞くと、
「いえ、違います・・・あの人たちは私を攫おうとしたんです」
「「攫う!?」」
　ヴィヴィオの言う『攫う』と言う言葉に反応する桜花と紅葉。
「攫うとは随分穏やかな表現ではありませんね」
「そうですね」
「ヴィヴィオさんを攫おうとする人たちは一体どんな人なんですか？」
　桜花はヴィヴィオの話を聞き、まだ見ぬその誘拐未遂犯に怒りをもやし、紅葉はその犯人がどういった人物なのかをヴィヴィオに訊ね

る。
「私を攫おうとした人たちは教会の人たちなんです」
「教会？」
「ヴィヴィオさんはキリスト教の信者なのですか？」
「キリスト教？」
　一般に教会と言われ、真っ先に思いつくのが、キリスト教だろう。
「いえ、私を攫おうとした教会の人たちは聖王教会と言う所の所属です」
「せいおう教会？聞いたことありますか？」
「いえ、まったく・・・恐らく新興宗教の一種だと思います」
（やっぱり、あっちの世界の教会か・・・）
　紅葉は知ってはいるが、知らない振りをする。
（そっか。ここは管理外世界だもんね。当然、聖王教会の事なんて知って居る筈がないか・・・）
　一方、ヴィヴィオも桜花と紅葉の二人が聖王教会の名前を知らない様子に納得した。
「ヴィヴィオさん大丈夫ですよ。私がその怪しい宗教連中から守ってあげます」
　桜花がヴィヴィオを抱きしめながら言う。
「それで、ヴィヴィオさんのお母さんは大丈夫ですか？」
「そうだ!!もしかして、貴女のお母さんはその怪しい宗教団体に捕まったんじゃ・・・」
「い、いえ・その・・・ママは仕事の都合で、海鳴を離れているので大丈夫です。私は海鳴に有るママの実家に預けられていたんです」
「そうか、それなら良かった」
　ヴィヴィオの母親の安全が分かり、ホッとする桜花。
「それじゃあ、私たちが、ヴィヴィオさんの実家とやらまで送って行ってあげるよ」
（いや、この世界には多分、彼女の家は無いんじゃないかな・・・？）
　桜花がヴィヴィオの実家へと護衛を兼ねて連れて行こうとする。

しかし、ヴィヴィオの事情をある程度知っている紅葉はこの世界にはヴィヴィオの家は無い事も知っていた。
「あっ、ママの実家はお店をやっているんです。多分、お爺ちゃんとお婆ちゃんはそこに居ると思います」
「何て言う名前のお店ですか？」
桜花が店の名前を聞くと、
「『翠屋』って言う喫茶店です」
「っ!?」
ヴィヴィオの言った店の名前を聞いて、二人は目を大きく見開く。
そして、
「・・・・」
途端に無言になる。
「えっ？えっと・・・・」
突然の二人の豹変にヴィヴィオはおろおろする。
「・・・・」
「紅葉さん・・その・・・・」
桜花は気まずそうに紅葉に声をかける。
「海鳴に『翠屋』って他に有ったんですか？」
「い、いえ・・・・私の知る限り、『翠屋』と言うお店の名前は・・・・私の実家が経営していたお店以外、今日まで見かけていません・・・・」
「・・・・ヴィヴィオさん。貴女のお爺さんとお婆さんの名前は何ていう名前なんですか？」
明らかに動揺している紅葉に変わって桜花がヴィヴィオに今度はヴィヴィオのお爺さんとお婆さんの名前を訊ねる。
「お爺ちゃんの名前は、高町士郎。お婆ちゃんの名前は、高町桃子です」
「・・・・ヴィヴィオさん」
「は、はい」
紅葉の余りにも真剣な表情に押され気味のヴィヴィオ。
「貴女のいた、海鳴の西暦は何年でした？」

「紅葉さん、突然何を聞いて・・・・」
「いいから、答えて下さい。ヴィヴィオさん」
　何をバカな質問をしているのかと思う桜花を他所に、紅葉は真剣な表情を崩さない。
「た、確かカレンダーには２００Ｘ年って書いてありました・・・・」
「・・・・」
「２００Ｘ年？二百年も前の年号じゃないですか。どういう事なんでしょう？」
「・・・・こんな事は余りにも荒唐無稽なので、考えたくはないのですが・・・・」
「何か分かったんですか？」
「？」
　ヴィヴィオが嘘を言っている様には見えないし、仮に嘘だとしても余りにもそれはあからさま過ぎる。
　故にヴィヴィオが言っている事は事実であり、そのヴィヴィオが今、この場に居る事に対し、紅葉には何か分かった様子であった。
　桜花は紅葉の答えを早く聞きたがっている様子で、ヴィヴィオは首を傾げている。
「ＳＦ映画や漫画・アニメの中でよくあるパターンで、タイムトラベルと言うモノを知っていますか？」
「タイムトラベル？」
「それって確か、タイムマシンに乗って過去や未来に行くって言うあのタイムトラベルの事ですか？」
「ええ。ヴィヴィオさんはそのタイムトラベルをした可能性が高いのです」
「・・・・」
「ヴィヴィオさん、ここに来る前に何か変わった事とかありませんでしたか？」
　桜花がヴィヴィオにタイムトラベルをした事に何か思い当たる事が無いかを訊ねる。
「うーんと・・・・確か、教会の人から追いかけられていると思ったら、突

然目の前が明るくなったの・・・・気がついた、目の前に桜花さんが居て・・・・」
「恐らくその光がヴィヴィオさんを過去からこの世界に跳ばした原因ですね」
「・・・・あの」
「ん？」
「・・・・私は元の時代に戻れるのでしょうか？・・・・ママの所に戻れるのでしょうか？」
ヴィヴィオが不安そうに訊ねる。
「・・・・」
西暦２２００年代のこの地球でも残念ながら、タイムマシンは存在していない。
故にヴィヴィオを元の時代に帰すのは不可能であった。
「それは・・・・その・・・・」
桜花が、しどろもどろしていると、不安を感じ取ったのか、段々と涙目になるヴィヴィオ。
「え、えっと・・・・その・・・・」
涙目になるヴィヴィオに対し、余計に混乱の渦中へと陥る桜花。
今にも涙腺が崩壊しかけるヴィヴィオに対し、
「・・・・」
紅葉がヴィヴィオをギュっと抱きしめた。
「大丈夫です。ここへ来ることが出来たのです・・・・きっと元の世界へ戻る方法もある筈です」
確実な方法が有る訳でもないが、今のヴィヴィオは、不安と攫われそうになったと言う出来事に精神的に不安定になっている。
母と離れ、別の世界で暮らして居たのだ。
まして、戦争のない平穏な世界ならば、尚更だ。
紅葉はヴィヴィオを暫く抱きしめ、頭を撫でた。
「ママ・・・・」
なのはと同じ雰囲気を持つ紅葉にヴィヴィオは、ポツリと呟いた。
そして、何時までもここに居る訳にもいかず、またヴィヴィオはこ

の世界には、当然身寄りもなく泊まる家も無い。
そこで、桜花は母親に頼み込むため、ヴィヴィオを連れて中嶋家へと向かう事にした。
（レディー・・・・）
中嶋家に向かう途中、ルシフェリオンが紅葉に念話で話しかける。
（どうしたの？ルシフェリオン？）
（このリトル・レディーからは、強力な魔力を感じる・・・それも、レディー並のな・・・・）
（そう・・・でも、ここは地球・フェイトさんたちの言う管理外世界・・・魔力が有っても無くても、関係ないよ、ルシフェリオン）
（そうか・そうだったな・・・・）
ルシフェリオンは無粋なマネをしたと言った感じで、紅葉に言った。
（やっぱり、彼女も私の知る世界との彼女と同じで、高レベルの魔導師だったみたいね・・・・）
紅葉は前世とは異なる世界のヴィヴィオもやはり、高レベルの魔導師だったのだと納得した。
「ほぇ～・・・・」
中嶋家に向かう途中、ヴィヴィオは近未来化した海鳴の街並みを見て、驚きの声をあげる。
ミッドに似ているが、見た目はミッドよりも優れているような街並みがヴィヴィオの眼前に広がっていた。
タイヤがなく、地面から少し浮いて動いているエアーカー。
ビルとビルの間や、ビルよりも高い位置に網目の様に広がる真空のチューブ・・・そしてその中を走るエアーカーやリニアモーターカー。
それはミッドにも他の自分が知る管理世界にも存在しない物ばかりだ。
ヴィヴィオの興味が惹かれない筈がない。
そして、一行は中嶋家へと着いた。
「ただいま」
「お、おじゃまします」

「おかえり・・・・」
すると、家の中から中嶋家のお母さん・中嶋　加奈江が三人を出迎えた。
「あら？」
加奈江は桜花と紅葉の他にもう一人、ヴィヴィオの姿を見て首を傾げる。
「・・・・スバルさん？」
その一方で、ヴィヴィオは加奈江を姿を見て、加奈江の纏う雰囲気が自分の知る知り合いに似ていたため、ポロリとその人物の名前を零す。
「えっ!?」
（何でこの子、スバルの事を知っているの!?）
「あっ、いえ、なんでもありません・・・・」
加奈江に先程ヴィヴィオが出した名前が聞こえたのか、加奈江が声を出すが、ヴィヴィオは慌てて取り繕う。
「それで、お母さんお願いがあるんだけど・・・・」
桜花が加奈江に今回の本題を切り出した。
そして、桜花と紅葉はヴィヴィオがおかれた状況と帰る方法が見つかるまで、ヴィヴィオを家に置いてほしいと頼んだ。
すると、加奈江はギンガの時と同じく、快くヴィヴィオの件を了承した。
その日の夜、
就寝しようとした紅葉の下に、
「あ、あの、紅葉お姉ちゃん・・・・」
「ん？どうしたの？ヴィヴィオ」
紅葉の部屋にヴィヴィオが訪ねて来た。
「どうかしましたか？」
「あの・・・・その・・・・」
ヴィヴィオは、視線を泳がせ、手をもじもじしている。
しかし、意を決したかのように、紅葉の部屋に来た目的を言った。
「あ、あの・・紅葉お姉ちゃん。その・・・・今日、私と一緒に寝てくれませ

んか？」
ヴィヴィオは、恐る恐る紅葉に頼み込んできた。
紅葉は、ヴィヴィオが何故この様な行動を取って来たのか何となくだが、分かる気がした。
妙な教会の連中に狙われ、見ず知らずの世界へ跳ばされ、親とは離れ離れとなり、元の世界へ戻れる確実な保証はない。
ヴィヴィオ位の年頃ならば、まだまだ親と一緒に居たい年頃である。
それが、もう二度と会えない可能性もあるのだ。
寂しい筈がない。
不安を抱かない訳がない。
ヴィヴィオは紅葉を初めて見た時、自分の事を『ママ』と呼んだ。
恐らく彼女の母親、高町なのはと自分は容姿が似ているのだろう。
だからこそ、ヴィヴィオは自分の下に来たのだろう。
紅葉はそんなヴィヴィオを拒めるわけが無く、
「ええ、いいですよ」
と、ヴィヴィオをベッドへと誘った。
ヴィヴィオと二人で寝た紅葉。
寝ている間、無意識なのか、ヴィヴィオは紅葉の身体にしがみついて来た。
紅葉、そんなヴィヴィオに微笑みを浮かべながら、頭を優しく撫でた。
こうして、次元漂流したヴィヴィオの初日は終わった。

「うつ・・うーん・・・」
翌朝、ヴィヴィオは、身を捩じらせながら目が覚めた。
見慣れない部屋に一瞬、「ここは何処!?」と、思ったが隣で寝ている紅葉の姿を見て、現状を理解した。
ヴィヴィオが目を覚ました後、直ぐに紅葉も目を覚ました。
「ヴィヴィオ？」
「あっ、紅葉お姉ちゃん。おはようございます」

「はい、おはようございます。ヴィヴィオ」
起きた後、ヴィヴィオは用意された部屋へとお戻り、桜花のお古であるが、出されていた服に着替えた。
「おはようございます」
着替え終えたヴィヴィオは、朝食が用意されたリビングへと降りて来た。
「あら？ヴィヴィオちゃん。おはよう」
朝食を用意していた加奈江がヴィヴィオに気づき挨拶する。
「桜花の昔の服だけど、サイズとかは大丈夫かしら？」
「大丈夫です。ありがとうございます」
ヴィヴィオは服を用意してもらった礼を言った。
やがて、中嶋家の皆が揃い、朝食が始まった。
ヴィヴィオは加奈江の朝食の量を見て、目を見開いて驚いた。
朝食が進んでいく中、テレビで流れていたあるＣＭを見て、目を大きく見開き驚愕する。
今、ヴィヴィオの目の前にあるテレビの画面では、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬのＣＭが流れていた。
「ん？どうしたの？ヴィヴィオ」
「ん？ヴィヴィオは、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬに興味があるんですか？」
「えっ!?あっ・うん・・・」
桜花の問いに、ヴィヴィオは生返事をする。
そして、心の中では、
（ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ!?それってこの前、フェイトママやティアナさんがやったって言うゲームじゃない!?もしかして、この世界にはフェイトママとティアナさんがいるのかもしれない!!）
と、この地球には、自分のもう一人の養母と知り合いが居るのではないかと思った。
もし、この世界にフェイトたちが居れば、自分もミッドに帰れるかもしれないと言う希望がヴィヴィオの中にあった。
「そんなっ!?」

「ヴィヴィオが・・・」
フェイトとティアナがヴィヴィオの次元漂流を知ったのは、ヴィヴィオが次元漂流をした翌日の事であった。
画面の向こう側には、はやてとカリムがおり、まずはやてから、海鳴のなのはの実家に預けていたヴィヴィオが聖王教会の強硬派に拉致されそうになった事、そして、その際、十年前、海鳴にばら撒かれたロストギア、ジュエルシードの欠片によって次元漂流してしまった事がフェイトとティアナに伝えられた。
その報を受け、フェイトはなのは同様、ショックが隠しきれなかった。
「この度の事は、私たちの落ち度です・・・申し訳ありません」
カリムが自らの不手際とヴィヴィオを次元漂流させてしまった事について謝罪をする。
当然、彼女も許される訳はないと思いながらも、謝罪せずにはいられなかった。
「そ、それでヴィヴィオの行方は・・・?分かっているんですか!?」
ショックを受けて、放心状態のフェイトに変わってティアナがはやてたちにヴィヴィオの行方を訊ねる。
次元漂流しても、自分たちの様に何か手がかりなどがないのかと思って・・・。
「・・・・・」
しかし、はやてたちが無言の上、気まずそうにティアナから視線を逸らすと、手掛かりはなく、ヴィヴィオの捜査は難航している様子が窺えた。
「それで、なのはは?大丈夫なの?」
フェイトは搾り出すような声で、ミッドにいる親友でもあり、ヴィヴィオの養母であるなのはについて訊ねる。
自分だってこんなにショックを受けたのだ。
自分よりもヴィヴィオを溺愛していたなのはのショックはかなりなモノだと、推測できる。
「・・・なのはちゃんは今、入院中や」

はやてが気まずそうにフェイトとティアナになのはの置かれた状況を説明する。
「「入院!?」」
入院と言う言葉を聞いて驚くフェイトとティアナ。
「なのはさんの身になにかあったんですか!?」
「それがな・・・」
はやてが重苦しそうになのはの現状を説明した。
元々、ボラー連邦との一件で、管理局がごたごたし、肉体的疲労、そして、それに伴う様々な、精神的疲労にヴィヴィオの件が拍車をかけ、肉体、精神の両方が限界を迎えたのだ。
「そう・・・」
はやてから、なのはの入院について、説明を受けたフェイトとティアナは顔を俯かせながらなのはの現状を理解した。
「フェイト・・・」
今日の定時連絡にフェイトとティアナと共にその場に居たリニスは、ただフェイトを見守る事しか出来なかった。
何とかしてやりたかったが、自分の知らないもう一つの地球で起こった出来事は、流石にどうする事も出来なかった。
そして、それはフェイトも同じ事だった。
この日の定期通信はひどく重苦しいもので終わりを告げた。

八十八話　再会と回転寿司

「ふふふ～ん♪～」
　この日、ヴィヴィオはやけに上機嫌で、鼻歌を歌いながら、道路を歩いていた。
「ねぇ、紅葉さん」
「はい？」
　ヴィヴィオの後ろを歩いている桜花と紅葉は、そんなヴィヴィオに若干戸惑いがちであった。
「今日のヴィヴィオさん、やけに機嫌が良いですね」
「そうですね」
「そんなにＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイするのが楽しみなんでしょうか？」
「さあ、どうでしょう？」
　昨夜の寂しそうな様子から打って変わって、今日の朝食の後、桜花がＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬのＣＭを見て、驚いているヴィヴィオに、「今日やってみますか？」と、誘ってみた所、ヴィヴィオは「やる!!やる!!やってみたい!!」と、凄い勢いで桜花に迫り、こうして今日、ヴィヴィオの初ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬが決まった。
　ヴィヴィオが、上機嫌な訳にはちゃんと理由が有った。
　その一つは勿論、フェイトやティアナから聞いたＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイ出来ることだ。
　ミッドにはまだない全立体型の体感シミュレーションゲーム・・・・
　想像するだけでワクワクする。
　そしてもう一つ、
　それは、ヴィヴィオにとって、もう一人の母であるフェイトと会えるかもしれないと言う期待だった。
　そもそも、ヴィヴィオがＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬを知ったのは、フェイトとティアナからの定期通信の時であり、そのＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬがこの地球には存在する。
　と言う事は、この地球は現在、フェイトとティアナが滞在している

地球と同一の地球ではないかと言う説が濃厚なのだ。
だから、この地球：海鳴の何処かにフェイトとティアナは居る。
二人はＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイしている様なので、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやっていれば、会えるのではないかとヴィヴィオはそう思っていた。
やがて、三人はＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの機器が設置されているＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａへと到着した。
「おおぉー」
初めて見るＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬのプレイ機器に思わず感嘆の声が出るヴィヴィオ。
「それじゃあ、早速プレイするための手続きをしましょう」
桜花の案内の下、ヴィヴィオがＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをするための手続きを行う。
データカートリッジとプレイブホルダーを購入し、次にアバターカードの製作に移る。
カードローダーに自分の性別、年齢、身長、体重を入力し、最後にカードローダーのカメラで、顔写真を撮れば終了。
程なくして、ヴィヴィオのアバターカードがカードローダーのカード取り出し口から出てくる。
「これが、私のカード・・・」
出て来たカードを見て、目を輝かせるヴィヴィオ。
準備は出来たので、いよいよ後は、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイするだけとなった。
ブレイブシミュレーターの方は紅葉が既に予約し、確保してくれたので、すぐにプレイする事が出来た。
ヴィヴィオがＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ初プレイと言う事で、最初は、この体感空間に慣れる事から始められた。
勿論乱入禁止設定はちゃんと行っている。
最初はやはり、操作に慣れるまでぎこちない動きのヴィヴィオであったが、次第に慣れていき、プレイ時間が終わる事には、ある程度の動きは出来る様になっていた。

「初回だけど、ヴィヴィオは中々筋が良いですね」
初めてのＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬが終わり、お店のフードコートにて、三人は飲み物や軽食をとりながら、先程のデュエルを振り返る。
「えへへへ」
桜花がヴィヴィオを褒めると、ヴィヴィオは照れ臭そうに顔を緩める。
ヴィヴィオがジュースを一口飲んだ後、本題の一つを切り出した。
「あ、あの・・・・」
「ん？」
「桜花お姉ちゃんと紅葉お姉ちゃんは、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやって長いの？」
「まぁ、そこそこは・・・・」
「それじゃあ、他のプレイヤーの人の事とか詳しい？」
「うーん・・・・全部のプレイヤーを知っているわけじゃないけど、オンライン対戦で戦った相手位なら・・・・」
「そ、それなら、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンかティアナ・ランスターって人を知っていますか？」
「えっ!?」
ヴィヴィオから尋ね人の名前を聞き、桜花も紅葉も唖然とする。
「知っているんですか!?」
二人の様子から、もしかしたら知っているのかもしれないと思ったヴィヴィオは、二人に詰め寄った。
「ええ・・・・」
「知っているも何も・・・・」
二人は、詰め寄るヴィヴィオに若干押されながらも、
「その人が居る所知っていますから・・・・」
桜花の言葉に、ヴィヴィオは更に彼女に詰め寄り、
「教えてください!!」
と、頼んだ。
一先ず、ヴィヴィオを落ち着かせた後、二人はヴィヴィオとフェイト、ティアナとの関係を訊ねた。

すると、フェイトはヴィヴィオの養母の一人なのだと言う。
事情を知った桜花と紅葉は早速、フェイトたちがいる月村邸へと向かった。
その月村邸では・・・・
「・・・・」
フェイトは、ヴィヴィオが行方不明との知らせを聞いてから、強いショックを受けて、あてがわれた部屋のベッドで、膝に顔をうずめたり、一日中食事もせずに泣いたりしていた。
「フェイトさん・・・・」
ティアナが話しかけてもフェイトはそれに対し、答えなくなり、心を閉ざしてしまった。
なのは同様、ヴィヴィオを救う事が出来なかったと言う責任感と罪悪感、何もできなかったという虚無感に押しつぶされてしまっていた。
憔悴したフェイトにどうすることもできなくなってしまったティアナ。
そこに、メイドのノエルが、部屋の扉をノックして入って来た。
「失礼します。ハラオウン様。ハラオウン様にお客様が来ています」
「お客・・ですか・・・・？」
フェイトの代わりにティアナが答えた。
「はい」
ノエルがフェイトを訪ねて来たと言うお客を通すと、
「こんにんちは」
「桜花に紅葉・・・・」
部屋の前に桜花と紅葉が来た。
「フェイトさん、今日来たのは、フェイトさんに会わせたい人が居るからなんです」
「・・・・」
紅葉が月村邸に来た要件を言う。
しかし、フェイトはやはり、何のリアクションを見せない。
そこで、

「会わせたい人？」
と、ティアナが代理で答える。
「はい。入っておいで・・・」
桜花が部屋の外で待っていたのであろう人物に入室を促すと、
「フェイトママ？」
フェイトの耳に聞き慣れた子供の声が聞こえ、彼女の身体がピクッと反応した。
そして、フェイトよりも先に反応したのは、
「ヴィヴィオ!!どうしてここに!?」
ティアナだった。
「ヴィヴィオ・・・」
ヴィヴィオの名を聞き、ようやくフェイトが始動し、ゆっくりと部屋の出入り口の方へと視線を向ける。
「フェイトママ!!」
フェイトの視線には此方に駆け寄って来るヴィヴィオの姿があった。
「ヴィヴィオ!!」
フェイトは無意識の内にヴィヴィオを抱きしめた。
今、自分が抱きしめているのはサイレンの星で見た幻覚では無く、正真正銘、本物のヴィヴィオなのだ。
こうして、ヴィヴィオは何とか、感動の再会を果たす事が出来、フェイトもヴィヴィオを失った喪失感から解放された。
ヴィヴィオに事情を聞く前にフェイトは身嗜みを整えるため、一度シャワー室へと向かい、ノエルはお茶の準備を行った。
そして、フェイトたちの部屋で、お茶とフェイトの準備が整った。
「それで、ヴィヴィオは、どうしてここに？」
まず最初に、フェイトが何故なのはの実家にいる筈の地球からこの並行世界と呼ぶべき、未来の地球にヴィヴィオが居るのかを彼女本人に訊ねる。
すると、やはり、定時連絡でカリムから聞いた通り、聖王教会の強硬派から襲われた事を話した。

しかし、その後の事は分からず、気がついたら、この世界の道端で倒れており、倒れている所を桜花に助けてもらった事をフェイトとティアナに話した。
そして、昨夜は桜花の家に泊めてもらった事もフェイトに話した。
ついでに、紅葉と一緒に寝た事もヴィヴィオは話した。
「そうだったんだ・・・・」
ヴィヴィオから話を聞いたフェイトは、桜花と紅葉の方に顔を向け、
「桜花、紅葉。娘が・・・・ヴィヴィオがお世話になりました」
と、深々に頭を下げ、桜花と紅葉にお礼を言った。
「い、いえ、そんなっ!!当然の事をしたまでですから」
年上の人から頭を下げられて、お礼を言われた桜花は若干慌てふためく。
何はともあれ、ヴィヴィオはちゃんと保護者と再会できたのであるから、良しとしよう。
「それで、ヴィヴィオは今後どうするんですか?」
紅葉がフェイトに今後のヴィヴィオの処遇を訊ねた。
まぁ、普通に考えれば、保護者と再会できたのだ。このまま一緒に過ごすのが普通なのであるが、ここはフェイトの家では無く、お世話になっている他所様の家・・・・
フェイト一人の独断では決められない。
全ての決定権はこの家の主である忍にあるのだ。
しかし、忍も訳を話せば、ちゃんと分かってくれる筈だ。
そして、案の定忍は、月村邸でのヴィヴィオの滞在を許可してくれた。
加奈江には桜花から、ヴィヴィオの保護者が無事に見つかったと、電話を入れた。
ヴィヴィオの件を聞き、加奈江は少し残念がっていたが、ヴィヴィオに「またいつでもいらっしゃい」と、言うと、ヴィヴィオは嬉しそうな顔でお礼を言った。
翌日、フェイトはヴィヴィオの無事をミッドのなのはに知らせるた

めに、良馬とリニスに無理を言って、ミッドとの通信回路を開いてもらった。
　ミッドの本局の管制室では、先日地球防衛軍との定期通信は終わった筈で、次の定期通信まで日数が有る筈なのに、どういう訳か、今日いきなり、防衛軍側からのコンタクトが有った。
　オペレーターが通信回路を開くと、モニターにはフェイトが映っており、彼女は急いでクロノないし、はやてに取り次いでほしいとオペレーターに言った。
　暫くしてはやてが通信室へと呼び出され、やって来た。
「どないしたん？フェイトちゃん？」
　突然呼び出されたはやては、何故、定期通信でもない日にフェイトが管理局に通信をいれてきたのかを訊ねた。
「はやて!!ヴィヴィオが・・・」
「ヴィヴィオがどないしたん？」
「ヴィヴィオが見つかったの!!」
「ホンマか!?フェイトちゃん!!」
「うん。ほら、ヴィヴィオ」
　フェイトに促され、ヴィヴィオが画面に映る。
「はやてお姉ちゃん」
「ホンマにヴィヴィオなんか？」
「うん。私は今、フェイトママの所に居るよ」
　笑みを浮かべてはやてに手を振るヴィヴィオ。
「ミッドにはフェイトママと一緒に帰るから、なのはママに心配はいらないよって伝えて」
　この場に居ないなのはに心配をかけたため、こうして自分は無事だと言う事をもう一人のママ（なのは）に伝えてほしいと言った。
　ヴィヴィオの無事を知らせる通信を終えたはやては、急いでなのはが入院している病院へと向かった。
「なのはちゃん!!」
　はやてがなのはのいる病室へと入ると、そこには、同じ教導隊に所属しているヴィータが居た。

恐らくなのはの見舞いに来ていたのだろう。
「はやて、どうしたんだ?そんな急いだ様子で?」
ヴィータははやての慌てた様子に首を傾げるが、当のなのは本人は全くの無反応。
なのはは、目が曇り、その下には隈がうっすらと浮き上がり、髪の毛はボサボサ、頬も痩せこけている。
看護師や医師の話では、満足に食事もとらないのだと言う。
今のなのはの様子は、十一歳の頃、当時アンノウンとされたガジェットⅣ型によって負傷し、魔法を使い、空を飛ぶどころか、歩けなくなるかもしれないと言い渡された時と同じ・・・いや、それ以上に傷ついていた。
しかし、この後の話を聞けば、なのはは、復活するとはやては確信していた。
「なのはちゃん、落ち着いて聞いてや・・・ヴィヴィオが・・・ヴィヴィオが見つかったんや!!」
「それ、本当かよ!?はやて?」
なのはよりも先にヴィータが驚くように反応した。
「間違いない。私もついさっき、会って来たばかりや!!」
「それじゃあ、ヴィヴィオは今、ここ(ミッド)に居るのか?」
「いや、残念ながらミッドにはおらへん」
「それじゃあ何処に・・・?」
ヴィータがヴィヴィオの居場所をはやてに聞こうとした時、
「ヴィヴィオは・・・ヴィヴィオは何処・・・何処に居るの・・・?」
先程まで、ベッドの上で放心状態だったなのはが、いつの間にか、はやての身体にしがみつき、ヴィヴィオの行方を聞いていた。
「な、なのはちゃん、いつの間に・・・」
「そ、それでヴィヴィオは今どこに居るんだ?はやて」
なのはの行動に若干引き気味のはやてと肝心のヴィヴィオの行方を訊ねるヴィータ。
「それがな、ヴィヴィオは今、フェイトちゃんと一緒や・・・もう一つの地球に居るんよ」

「あの世界にか!?」
ヴィヴィオが例の第二の９７管理外世界の地球に居る事をはやてから聞いたヴィータは驚きの声をあげ、なのはは目を見開いた。
「これが、さっき私が会って来たヴィヴィオの映像や・・・・」
はやては、デバイスに録画されたヴィヴィオの映像を流す。
そこには、確かにフェイトと一緒に居るヴィヴィオの姿があった。
「ヴィヴィオ・・・・」
ヴィヴィオの無事な姿を見て、なのはの目からは自然と涙が流れる。
「良かったな、なのは」
ヴィータがなのはに声をかけると、なのはは小さく頷く。
今こうして、ヴィヴィオを抱きしめる事も声をかける事も出来ないが、ヴィヴィオが無事に見つかった。
その事が、なのはを立ち直らせた。
「ただ、ヴィータになのはちゃん。この事はもう少し、オフレコにしといてや」
「ん？どうしてだよ？はやて」
「もし、ヴィヴィオがあの世界に居ると分かれば、管理局よりも聖王教会の方が何をしでかすか、わからんからや・・・・」
ヴィヴィオの件に関しては、はやては管理局よりも今は教会側に注意が必要だと言う。
「でも、はやて。教会は次元航行艦を持ってないぜ」
ヴィータの言う通り、聖王教会は管理局と違い、次元航行能力を有する艦船を所有しておらず、他の世界への布教活動には、一般人同様次元航行船か管理局の次元航行艦に便乗して他の世界へ渡っている。
故に、それほど脅威ではないだろうとヴィータは言うが、
「もし、教会の強硬派の連中が、管理局に金を渡して、次元航行艦をチャーターしたらどうや？」
「・・・・」
はやての指摘にヴィータは何も言えなかった。
確かに一般の次元航行船よりも管理局の次元航行艦ならば、渡航記

録も操作できるし、普通の船よりかは安全で尚且つ長距離の航行が可能だ。
教会側はヴィヴィオ（聖王）の身柄が確保出来、管理局側としても金は手に入る、さらに第二の９７管理外世界の位置が特定できるかもしれないと言う事で利害関係は一致する。
まぁ、必ずしも、上手い具合に第二の９７管理外世界の位置を特定できるかは分からないが・・・
兎も角、教会の強硬派の活動を完全に止めるか、フェイトたちが無事にミッドに帰って来るか、そのどちらかまでは、ヴィヴィオが第二の９７管理外世界に居る事は秘密にされた。

ここで場面はミッドから地球へと変わる。

月村邸のリビングでは、ヴィヴィオとユリーシャの二人がボードゲームを興じていた。
（フェイトさん・・・）
二人の姿を見て、ティアナがフェイトに念話で話しかける。
（何？ティアナ）
（この光景ってある意味凄いですよね・・・）
フェイトとティアナの前には、ミッド（ベルカ）とイスカンダルの王族がこうして和気藹々とボードゲームを興じているのだから。
そこへ、
「ティアナさん」
忍がやって来た。
「なんでしょう？」
「はい、コレ・整備に出していた貴女のデバイス」
「あっ、ありがとうございます」
そう言いながら忍はティアナに整備し終えたクロス・ミラージュを手渡す。
「・・・」
その様子を見ていたヴィヴィオは、ティアナを羨ましそうに見てい

た。
「ん？どうしたの？ヴィヴィオ」
ユリーシャが首を傾げながらヴィヴィオに訊ねる。
「・・・私、まだデバイスを貰えないの・・・」
ヴィヴィオはまだ小等部に上がったばかりの年齢故か、デバイスを貰っていない。
しかし、二人の母や周囲の知り合いは皆、デバイスを持っている。
子供さの願望なのか、そうしたデバイスを持っている人に囲まれていると、自分も専用のデバイスを欲しくなってしまうのだ。
「それじゃあシノブに頼んでみたら？」
ユリーシャが、ティアナのデバイスを整備した忍に自分（ヴィヴィオ）のデバイスを製作してもらったらと提案した。
「うーん・・・作ってくれるかな？」
「それは分からない。でも、ダメ元で頼んでみたら？」
ユリーシャにそう言われてヴィヴィオは忍の下へと歩み寄る。
「あ、あの・・・忍さん・・・」
「あら？ヴィヴィオちゃん。どうしたの？」
「その・・・私にもデバイスを作って貰えますか？」
「「えっ!?」」
ヴィヴィオの頼みに忍、フェイト、ティアナの三人は驚いた。
「えっと・・・」
忍は、チラッとフェイトとティアナの方を見る。
忍としては別に作っても構わないのだが、勝手に作って与えても良い物なのか、その点に関しては、判断に困った。
どうしたものかと、困っている忍に助け舟を出したのはフェイトだった。
「ヴィヴィオ、突然どうしちゃったの？」
フェイトがヴィヴィオにデバイスを欲しがる理由を訊ねる。
「だって、なのはママもフェイトママ、はやてお姉ちゃんにティアナさん、スバルさんにノーヴェたちも自分のデバイスを持っているんだよ・・・それなのに、私だけまだデバイスが無いんだもん」

ヴィヴィオは少し、むくれる感じでデバイスを欲しがる理由をフェイトに話す。
理由を聞き、忍やティアナは何となくヴィヴィオの気持ちが分かった。
（（そういえば、私にも同じ様な頃が有ったわね・・・））
二人の心はまさにシンクロしていた。
「えっと・・・ヴィヴィオ、それはミッドに帰ってからじゃダメなの？」
フェイトはデバイスをあげるのはミッドに戻ってからでも良いじゃないかと言うが、
「むぅ～・・・」
ヴィヴィオは納得していない様で、頬を膨らませる。
フェイトにしては珍しく困惑した。
別にデバイスを所有するのに年齢制限等は存在しないが、忍が作るとしたら、この世界のデバイスだ。
それをミッドで普通に使用できるのかと言う問題があった。
リニスがこの世界でデバイスを製作している事から作れないと言う訳ではなさそうだ。
この世界製のデバイスをミッドに持ち帰ってそれが新たな揉め事にならない保証は無い。
（どうしよう・・・）
珍しくヴィヴィオも今回ばかりは折れそうにも無い。
何とかならないかと思っていると、
「それなら、私が何とかしましょう」
と、フェイトに助け舟を出したのはリニスだった。
「リニス」
「私なら、ミッド製のデバイス製作に心得がありますし、何とかなると思います」
「うーん・・・そう言う事だけど、フェイトさんはどうかな？」
最終的な決定権はフェイトに託された。
しかし、ヴィヴィオのウルウル攻撃に耐えられるはずもなく、フェイトは、

「じゃ、じゃあ・リニス・・・・お願いできる？」
「分かりました」
と、リニスにヴィヴィオのデバイスの製作を依頼した。
元々自分（フェイト）のデバイスの製作者はリニスだったので、変な物は作らないだろうと思い、決断したのだ。
「ヤッター!!」
自分のデバイスを作って貰えると言う事で、ヴィヴィオは大はしゃぎだった。
ヴィヴィオの保護者が見つかったと言う事で、桜花と紅葉がその再会を祝して、ヴィヴィオを外食へと招いた。
と言っても、費用は中嶋夫妻から貰った物だが・・・・。
「ヴィヴィオはお寿司って食べたことありますか？」
「うん、あるよ」
地球育ちの養母（なのは）と、地球での生活経験のあるもう一人の養母（フェイト）がいるため、ヴィヴィオは地球の日本食というモノには、馴染みがあった。
その為、桜花と紅葉はヴィヴィオを寿司屋に招いた。
と言っても、カウンター席の寿司屋ではなく、回る方の寿司屋であったが・・・・。
ユリーシャも寿司と言う食べ物に興味があるのか、一緒に来た。
「ここのお寿司は中々、美味しいと評判なんですよ」
「へぇー」
ヴィヴィオが桜花と紅葉の後をついて行き、コンベアーの上をチラッと見ると、そこには、ケーキ、プリン、メロンのスイーツ等が流れていくのが見えた。
寿司をまだ知らないユリーシャはコレが寿司なのかと思い、特に疑問を抱かなかったが、
「？」
ヴィヴィオは、自分が入ったのは、確か寿司屋であり、喫茶店ではない筈だと思い、紅葉に訊ねる。
「あ、あの・・紅葉お姉ちゃん」

「何でしょう?」
「私たちが入ったのは、確かお寿司屋さん・・・だよね?」
「ええ、そうですよ」
紅葉からはここが間違いなく寿司屋だと言われ、もう一度コンベアーを見ると、今度はちゃんとした寿司が流れて行った。
一同は、店員さんの案内の下、席に着いた。
コンベアー
ヴィヴィオ　机　紅葉
ユリーシャ　机　桜花
机
通路
席はこの様な配置である。
こうして、ヴィヴィオたちの食事会は幕を上げた。
「サーモ・・・」
桜花がコンベアーで流れて来たサーモンの握り寿司を取ろうとしたら、紅葉が先にひょいと取ってしまった。
「・・・」
桜花が唖然としている中、紅葉は先程取ったサーモンの握り寿司をむしゃむしゃと食べた。
「マグロ・・・」
続いて、桜花がマグロの握り寿司を取ろうとしたら、またも紅葉が先にひょいと取ってしまった。
「・・・」
コンベアーから取ったマグロの握り寿司をむしゃむしゃと食べている紅葉をまたも唖然とした表情で見る桜花。
しかし、何時までも唖然としている桜花では無かった。
「紅葉さん・・一体何のつもりですか・・・?」
「何がです?」
桜花は額に青筋を浮かべて紅葉に詰め寄るが、紅葉は素知らぬ顔で華麗にスルーしている。
「私が取ろうとしたのをわざと取っているでしょう!?」

「気のせいです」
「むぅ～ヴィヴィオさんたちもなんか言ってよ!!」
桜花は年下のヴィヴィオたちに援護射撃を求めるが、
「ん？」
「はてな？」
二人のお姫様たちは突然話題を振られ、首を傾げるが、彼女たちの前には、この寿司屋でも値段が高い寿司が乗っていた絵皿が積まれていた。
（しまった!!先にツッコむべきは、こっちだった!!）
（見事に高い物ばかりを食べていますね・・・流石王族）
桜花と紅葉はここに来て、回転寿司の皿について先に説明しておくべきだったと思った。
「セコいぞ!!ずるいぞ!!ずっこいぞ!!」
ヴィヴィオたちが援護射撃の戦力とならないと判断した桜花は実力行使に移った。
空腹のせいか、既に桜花のキャラが崩壊しつつある。
桜花と紅葉のオラオラオラオラが行われていると、
「でも、オウカがその席を選んだのはオウカ自身のミスなんじゃないのかな？」
ユリーシャが首を傾げながら、桜花に訊ねる。
しかし・・・
「まさか、私の奥義の封印を解くことになるとは・・・」
桜花はユリーシャの言葉を軽くスルーして、紅葉をやる（殺る）気満々であった。
「ならば、それで私に右手をつかわせたら、席を変わってあげましょう」
と、紅葉は自信満々で受け答える。
寿司屋で一触即発な雰囲気になる中、二人のプリンセスたちは、我関せずの様子で寿司を堪能している。
そこへ、
「ふ、二人とも何やっているの？」

フェイトとティアナが来た。
フェイトとしては、やはりヴィヴィオが心配だったのと同時にこの世界の回転寿司と言うモノに興味があったのだ。
それはティアナも同じであった。
「それで、どうしたの？」
フェイトが桜花に事情を聞くと、
「えっ!?それなら注文パネルを使えばいいんじゃない？」
と、冷静に指摘すると、
「あっ!?」
ここで、桜花は注文パネルの存在に気がついた。
桜花が注文パネルで寿司を注文している中、
「およ？フェイトさん？」
フェイトは突然、自分の名前を呼ばれて、声のした方を向くと、
「やっほー」
そこには、フェリシアとセフィリアの姿があった。
「フェイトママそっくり・・・」
ヴィヴィオは初めて見たフェリシアに驚き、目を大きく見開く。
「フェリシアさんにセフィリアさん。お二人で夕食ですか？」
「うん。そうだよ」
母との夕食・・しかも、外食で、食べるのがお寿司と言う事で、フェリシアはご機嫌な様子。
「えっと・・・」
状況がつかめないヴィヴィオは困惑している。
「フェイトママ、この人はママの知り合い？」
「いやいや、ただのそっくりさんだよ。まぁ、知り合いと言えば知り合いだけどね」
フェイトが言う前にフェリシアが自分とフェイトの関係をヴィヴィオに言った。
フェイトとティアナは彼女がこの世界におけるフェイト、またはアリシアの子孫と言う事実を知っているのだが、ややこしくなるので、言わなかった。

「君は、フェイトの事を『ママ』と言っていたけど、もしかして、フェイトの娘さん？髪の毛も金髪だし・・・」
フェリシアはフェイトとヴィヴィオが共に金髪と言う事で、ヴィヴィオがフェイトの娘だと思った。
まぁ、フェリシアの言う事も決して外れでは無い。
フェイトはフェリシアにヴィヴィオとの関係（養女と養母）を話、ヴィヴィオにフェリシアの事を紹介した。
「それじゃあね～ヴィヴィオ～」
フェリシアとセフィリアは、ヴィヴィオに手を振って自分の席へと去って行った。
そして、フェイトとティアナも子供たちの邪魔はしない様にと近くに別の席を設け、そこで食べることにした。

注文パネルで注文を終えた桜花は、
「注文するとここは何が運んでくるんだろうね？」
「ん？」
「ほら、お店によっては船とか電車とかあるやつ」
当初、質問を受けた紅葉は桜花の質問の意図が読めなかったが、寿司を運んでくる装置だと知ると、
「ああ、アレは店の武器の一つですからね。意表をついて裏を巡り巡って・・・店員が持ってくるとか？」
「ちょっと、ソレ、武器を捨てているよ!!」
夢の無いオチをかました。
すると桜花が注文した寿司がデフェルメされたＵＦＯに乗って空からやって来た。
ＵＦＯはテーブルに着くと、屋根の部分が空き、そこに寿司が乗った皿があった。
桜花が皿を取ると、ＵＦＯは再び宙に舞い上がり、店の奥へと姿を消した。
「・・・」
桜花が恐る恐る寿司に手を伸ばすと、

「キャトられたマグロがこんな姿に・・・」
紅葉はまるで拝むように手を合わせる。
「ちょっ!!やめてよっ!!これから食べるのに!!」
食べにくくなる発言をした紅葉にツッコム桜花だった。
その後も、皆は次々と寿司を平らげて行くが・・・・。
「そろそろ皿が邪魔になって来たな・・・」
テーブルの上には皆が食べた寿司の皿が所狭しと乗っている。
「ここのお店はこの穴へ皿を入れると簡単に集計できる上に面白いサービスが有る様です」
紅葉が、店のサービスを説明しながら、コンベアーの下にあるシューターの様な所へ皿を入れていく。
「お皿が一定数になったら、スキャンして・・・」
「スキャン?」
桜花が首を傾げると、
シューターに入った皿が一定量になったのか、桜花の頭上にＵＦＯが再び来ると、
カシャ
カメラのシャッターの様な音が鳴った。
「次にサンプル型のポーズを選ぶと・・・」
紅葉が注文パネルを操作して、画面に表示されているポーズを選ぶ。
すると、シューターの隣にある穴からガチャポンのカプセルが出される。
「カプセルに入ってフィギュアが作製されて出てくる」
「すごい!!」
「おおぉぉぉー」
「更にこのフィギュア、頭部の部分にはマグネットが入っているので、小物アクセを別に買ってつけられるらしいです」
(えっ!?ここ、お寿司屋さんだよね?)
最初に見たスイーツと言い、このフィギュアのシステムと言いここが本当にお寿司屋さんなのかと少し疑問に思えて来たヴィヴィオ

だった。
「それじゃあ、早速小物アクセを買って来ようかな」
と、フィギュアをゲットした桜花はお店の玄関口付近にある小物のガチャポンの所へと向かい、ユリーシャもついて行った。
「それじゃあ、私はちょっとお手洗いに」
紅葉はお手洗いの為、席を立った。
「あっ、ヴィヴィオさん」
「ん？何？」
「もし、まだ食べられそうならお皿の枚数を稼いでおいてくれませんか？」
「あいさー」
皆が席を立った後、一人残されたヴィヴィオは、
キュピーン!!
何かを思いついた様で、にやけ顔で注文パネルを操作した。
そして、ヴィヴィオが注文したお寿司は・・・
大トロ
特上ウニ
アワビ
キャビアの軍艦
等、お店の寿司ネタでも上位の値段に当たるネタばかりであった。
（うましっ!!）
特上寿司を平らげたヴィヴィオはその皿をシューターへと落とし、証拠を隠滅した。
「あっ？枚数たりましたね」
「よく食べれましたね」
「うん」
隠滅と同時に皆が席に帰って来た。
「さて、そろそろ帰りましょう」
「そうだね～」
皆はお腹いっぱいに寿司を堪能したのか満足そうである。
ユリーシャも初めての寿司体験であったが、満足そうであった。

しかし、彼女はどちらかと言うと寿司よりもデザートのパフェの方が気に入ったらしく、全種類のパフェを食べた。
将来、紅葉が翠屋を再建し、ガミラスと国交を結ぶことがあれば、きっとそこにはユリーシャ、ジュラ、メルダの三人の姿があるかもしれない。
「会計・・・と・・・これは・・・」
合計金額が記された明細書を見た桜花は、
「うむ・・・やはり、最初にヴィヴィオさんたちが絵皿を食べ過ぎた様ですね・・・」
と、細かな所まで突っ込まなかった。

八十九話　バイキングレストランの悲劇とヴィヴィオのデバイス

ヴィヴィオたちが回転寿司に行っている中、良馬、ギンガ、加奈江、源三郎の四人は、バイキングレストランへと来ていた。
後で桜花が聞けば、『ズルイ!!』と言いそうだが、桜花たちも回転寿司に行っているのだから、お相子だろう。
Ｏ・Ｍ・Ｃ・Ｓ（オムシス）の量産のおかげで地球の食糧事情は日に日に改善されていき、外食産業もガミラスとの戦争前の様に次々と出店するようになった。
そんな中、四人はとあるバイキングレストランへと入り、夕食をとった。
「おかわり!」
「わ、私も・・・」
「「は、ははは・・・」」
山のように詰まれた料理を平らげまた料理を取りに行った加奈江とギンガの中嶋親子。
元々ギンガはよく食べる方だし、加奈江の方も前世の頃、同様に食欲は転生しても変わらなかった。
ガミラス戦役時の食糧事情は加奈江やギンガにとってはまさに地獄であった。
その地獄から解放された今日、その食欲は留まる事を知らない。
「げ、源三郎さん・・・」
「なんだ?」
「会計大丈夫ですか?」
「大丈夫だ、そのためにバイキングの店を探したんだ。問題ない」
大丈夫とは言うが、顔を引き攣らせている源三郎。
結構ギリギリの賭けなのかもしれない。
足りなかったら、その分を補おうと思った良馬だった。

「でも、お会計以前に大丈夫でしょうか？店員さんの目が怖いんですけど・・・」
ハラハラと言うか、『どんだけ食うんだ？こいつら？』と、心の中でツッコミを入れていそうな店員たちの様子が気になる良馬。
「気にするな、それに限界まできたら、流石に店員が止めに来るだろう」
「ただいま。二人共もういいの？男の人なんだし、食べ足りてないんじゃないの？」
高く盛られた料理が乗った皿を持ちながら加奈江が良馬と源三郎に訊ねる。
「いや、気にしなくていい」
「そう？」
そう言って皿に高く盛られた料理を食べ始める加奈江とギンガ。
彼女たちが食べている様子を見ているだけでお腹いっぱいになりそうだ。
大量の料理は次々と加奈江とギンガのお腹の中へと消えていく。
この二人の胃袋はブラックホールなのではないかと疑うほどだ。
「ふぅ～ご馳走様！」
「私も」
二人の豪快な夕食はようやく終わった様子。
後ろにいた店員たちもホッと安堵の息を吐いている。
「それじゃあ、次はデザートね！」
「はい」
「「えっ!?」」
まだいけるのか!?思わず声が出てしまう良馬、源三郎、店の店員たち。
そんな皆の様子に気がつくことなく、デザートコーナーへと意気揚々と向かう親子の姿がそこにあった。
その後・・・
「源三郎さん・・・俺は初めて見ました・・・バイキングのお店で店員さんから『帰ってください』って言われたの・・・」

夜の海鳴の街を歩きながら良馬は源三郎に語り掛ける。
「だ、だからもう言わないでよ！恥ずかしいんだから!!」
加奈江が赤面しながら言うと、
「それはこっちの台詞だ」
源三郎が冷静に突っ込んだ。
デザートコーナーで加奈江、ギンガの中嶋親子がデザートたちを蹂躙していると、店長が従業員数人を引き連れて頭を下げられた。
このままじゃ店が潰れるから帰ってくれと言われ、店長らしき人は泣きながら土下座しようとしていた。
そのおかげで、一緒に来ていた源三郎と良馬も公衆面前の前で大恥を掻く羽目になった。
「そ、それは謝るけど・・・・」
「まぁ、これでお前たちはあの店のブラックリストに載ったわけだ、もう行けないな」
「う、うそっ!?そんな～あのお店の料理美味しかったからまた来ようと思っていたのに!!」
「諦めろ、あっちも商売なんだ。お前とギンガがしょっちゅう来たらすぐに閉店に追い込まれるぞ」
店長自らが頭を下げたんだからな、相当凄かったんだろう、金額的に・・・・。
「ま、まぁ・・次から気をつけて・・・・」
良馬が加奈江を弁護しようとしたら、
「はぁ～これで三件目か・・・・」
加奈江が残念そうに呟く。
「って!?何度もやっているの!?」
それを聞き、思わずツッコミを入れてしまう良馬。
（加奈江さん実は常習犯だったのか・・・・それなら学習しなさいよ!!）
「だって食べ放題って書いてあるから・・・・」
「いくら食べ放題でも限度ってものがあるだろう・・・・」
シュンとする加奈江に源三郎は注意を促す。
そのうち街全体の飲食店のブラックリストに載るんじゃないのか

心配になってきた良馬だった。
予想外のハプニングがあったが、良馬たちの方も愉快な夕食の時間を過ごした様だった。

ここで場面は地球からミッドへと移る。
この日、特別捜査官・八神　はやては本局の通路を歩いていた。
彼女は昨夜、レティ・ロウランから呼び出しを受けたのだ。
そのため、彼女はこうして朝一番でレティ提督に会うために、こうして本局の通路を歩いているのだ。
「それにしても、お話って何なのでしょう？はやてちゃん？」
彼女の右肩に座るティンカーベル・・・もといユニゾンデバイスにして八神ファミリーの一人たるリインフォースⅡ（ツヴァイ）が顔を傾けながら疑問を呈する。
「うーん・・・何やろうなぁ・・・まぁ、可能性としては、一連の事態に関する事やろか？」
はやての言う『一連の事態』とは、ここ最近多発している次元航行艦の遭難・行方不明事故、フェイトたちが現在滞在している第二の９７管理外世界、そしてボラー連邦の事を指していた。
そして、はやてとリインはレティ提督の執務室前まで辿り着いた。
「さて、到着や・・・さぁ、この先に鬼が出るか蛇が出るか・・・」
緊張した面持ちで、レティ提督の執務前に立つ。
「うぅ～鬼も蛇もどちらも嫌ですぅよぉ～はやてちゃん」
はやての緊張した面持ちと言動を聞き、不安になるリイン。
とはいっても何時までも部屋の前で、突っ立っている訳にもいかず、
はやては目の前の扉を二、三度ノックする。
すると、中から「どうぞ」
と、レティ提督の声がしたので、はやてとリインは、
「「失礼します」」
と、言いながらレティ提督の執務室へと入室した。
「八神はやて二佐参りました」

「八神リインフォース・ツヴァイ曹長参りました」
執務室にいるレティ提督に敬礼しながら、階級と姓名を名乗る二人。
「待っていましたよ。八神二佐」
「はい」
「今日、貴女を呼んだのは他でもないわ・・・貴女をある部署に配属するため、その辞令を渡す為よ」
「ある部署・・ですか？」
「ええ」
『ある部署』と言われ、いぶかしむはやて。
そんなはやてに構うことなく、レティ提督は、その『ある部署』についての説明をはやてにした。
「それは、ほんまでっか？レティ提督」
レティ提督から内示を伝えられた八神はやての第一声は間抜けの一語に尽きるが、それを受けたレティの答えも似たようなレベルだった。
「ほんまどすえ」
はやての問いにそれっぽい口調で答えたレティ提督はそこで一息つき、口調を戻す。
「ボラー連邦との戦いで、管理局は惨敗し、管理局の内実は、管理世界の治安維持すら怪しいところまで弱体化してしまった。責任論はこれからとしても、既存の世界の治安は何としても守らなければならないの」
レティ提督の言わんとすることはわかる。体制を改めて新たに海上警備本部を創設するというのもわかるのだが――。
「おっしゃることはわかります。しかし、私に艦の指揮は・・・」
はやては自信が無いのか、戸惑うように言う。
「大丈夫、そこは優秀なスタッフをつけるわ。それに貴女も、短期間とはいえＪＳ事件の時にアースラを指揮したじゃない」
レティ提督の言う通り、はやてはＪＳ事件の決戦時、半壊してしまった六課の隊舎から、廃艦処分寸前のアースラを引き取り、そこを

六課の司令部とし、聖王のゆりかごとの決戦時、六課のメンバーと空の首都防空隊の指揮を執った経験がある。
その時の経験から今回、レティ提督は、はやてを海上警備の一部隊の指揮官として、彼女を次元航行艦の艦長に任命したのだ。
レティ提督はすかさずモニターを起動させる。
「こ、これは・・・」
モニターに映し出されている艦を見て、はやては驚愕の声をあげる。
映し出されたのは、これまでの管理局の艦とは異なるシルエットの艦船だ。
「今度、就航予定の新造艦ＬＳ級よ」
「ＬＳ級？」
「ええ、今までにない新理論を下に造られた実験型の次元航行艦よ・・・最もこの技術も地球防衛軍やガミラス、ガトランティスの星間国家では、旧式なのかもしれないけれど・・・」
（やっぱりか・・・まぁ、それもしゃーないか・・・あちらさんと管理局とじゃあ技術力も設計思想違うからなぁ・・・）
レティ提督の話では、新型の魔導炉機関を搭載された艦で、大気圏内での運用を主眼に入れて開発され、次元震制御により、大気圏間次元転移が容易になったという。
無論、宇宙空間での運用も可能だ。
「ＬＳ級一番艦、ヴォルフラム。これを貴女に任せるわ」
機動六課解散から約一年半・・・。
急転する時局は、はやての思いには応えてくれなかったようだ。
「ヴォルフラムの艦長就任の話、受けてくれるかしら？」
正直な話、いきなり一艦の艦長なんて荷が重すぎる。
しかし、これはある意味チャンスであった。
ボラーとの戦いで疲弊した管理局を立て直す事を手伝えるし、フェイトたちも、もしかしたら迎えにいけるかもしれない。
そう考えたはやては、
「分かりました。謹んで、その役職拝命いたします」

と、ＬＳ級一番艦ヴォルフラムの艦長職へと着いた。
こうして、海上警備司令・八神はやての新たなる闘いの幕が開いたのである。

はやてが、新たなる任務を拝命してから数日後、ヴィヴィオが居る第二の９７管理外世界では・・・・。
「ごちそうさまでした」
夕食を終えたヴィヴィオが、元気な声で発する。
「はい、お粗末様でした」
ノエルがペコッとヴィヴィオに一礼する。
「そうだ、ヴィヴィオちゃん」
「はい？」
「後で、地下の練習場に来て、貴女に渡す物があるから」
と、忍がヴィヴィオに言うと、
「渡す物？はっ!?それってもしかして・・・・」
ヴィヴィオの目が煌めきだす。
「ええ、ヴィヴィオちゃんのデバイスが完成したのよ」
「本当ですか!?ヤッター!!」
頼んでおいたデバイスが完成したと言う事で、ヴィヴィオのテンションは最高潮に上がった。
「でも、随分早く完成しましたね？」
ティアナが通常のデバイスの製作日数よりもヴィヴィオのデバイスの製作日数が早い事に関して質問をする。
「ヴィヴィオちゃんの場合はベルカ式の魔法だったから、直ぐに出来たのよ」
と、ヴィヴィオのデバイスの製作監修をしたリニスがティアナに答える。
製作日数が異なったからと言って決してヴィヴィオのデバイスが欠陥品と言う訳では無い様だ。
夕食後、地下の練習場では、ヴィヴィオ、フェイト、ティアナ、リニス、忍の姿があった。

ヴィヴィオはフェイト再会してから、この地下練習場でフェイトとリニスに魔法の教授を受けていた。
元々学校である程度の魔法の授業を受けていたが、それ以上にリニスの教え方はうまかった。
空気中に大量のＡＭＦが含まれていても、流石はフェイトの魔法の師であり、その道のエキスパートである。
「それじゃあ、開けてみてヴィヴィオ」
忍が白いケーキ箱ぐらいの大きさの箱をヴィヴィオに手渡す。
ヴィヴィオはワクワクした様子で箱を開ける。
するとそこには・・・
「くま・・・？」
そこには、デバイスでは無く赤い蝶ネクタイをして緑色の帽子を被り、クマのような、コアラのようなぐるみが入っていた。
箱の中身が、デバイスではなく、ぬいぐるみだった事にヴィヴィオは首を傾げる。
（あっ、あの姿は・・・）
フェイトとティアナにはそのぬいぐるみがなんなのかすぐに分かった。
あの姿は紛れもなく、年始年末において開かれた防衛軍のカウントダウンパーティーにて良馬が着ていた着ぐるみのキャラクターそのものだった。
「あっ、そのぬいぐるみは外装というかアクセサリーね」
「中にクリスタル状のデバイス本体が内蔵されているわよ」
忍とリニスがぬいぐるみの仕様を説明する。
ヴィヴィオが忍とリニスから説明を聞いていると、箱の中のぬいぐるみはムクッと一人で起き上がり、箱をよじ登る。
そしてフヨフヨと飛び上がり、ヴィヴィオの目の前で停止し、シュタッと片手を上げる。
それはまるで、ヴィヴィオに挨拶をしているかのように思えた。
「と、と、と、飛んだよっ!?っていうか、動いているよ!!」
慌てて忍とリニスの背後に隠れ、声を上げながらぬいぐるみを指さ

すヴィヴィオ。
外見は可愛い仕様になっているが、一般人から見たら、軽くホラーに近い光景だ。
「それはおまけの補助機能よ」
やはり、ヴィヴィオはまだまだ幼い故に心配したリニスが様々なサポート機能を付けていた。
「バルデッシュやフェイトに話しを聞いて、ヴィヴィオちゃん専用にチューニングしたんだけど、まだまだ中身は真っ白のまま・・・生まれたての赤ちゃんなのよ」
「名前もまだ着いていないから、ヴィヴィオちゃんが名付け親になってあげて」
説明を聞き、ヴィヴィオはぬいぐるみ（デバイス）に歩み寄る。
「実は、名前も愛称ももう決まっていたりして・・・」
「それじゃあ、早速登録とセットアップをしてみて」
「うん」
ヴィヴィオが少し皆から離れると、ヴィヴィオの足元に魔方陣が出現する。
「マスター認証・・・高町　ヴィヴィオ・・・個体名称を登録。愛称『クリス』。正式名称『セイクリッド・ハート・エクセリオン』・・・いくよ、クリス・・・」
ヴィヴィオがデバイスのクリスへと語り掛けると、クリスはまるで「任せろ」と言うように頷く。
「セイクリッド・ハート・エクセリオン！セット・ア――――ップ！」
ヴィヴィオが呪文を唱えると、眩い光がヴィヴィオを包み込む。
すると、ヴィヴィオの身体にも変化が現われた。
小さかった体は成人女性の姿へと変わって行ったのだ。
フェイトはその姿を見た途端、大きく目を見開くと、そのまま腰を抜かした。
「ん？ばっちりね」
ヴィヴィオが無事にセットアップ出来た事に忍とリニスはホッとした様子であったが、フェイトは放心したままだ。

そして、ヴィヴィオは成人した自分の姿を見回していた。
そんな中、
「あら？どうしたの？フェイト」
リニスが腰を抜かし、放心しているフェイトに声をかけた。
「り、リニス・・・ヴィヴィオが…ヴィヴィオがぁぁー!!何で聖王モードに!?」
「？」
取り乱しているフェイトにリニスは状況がついて行けず、首を傾げる。
そこで、リニスはフェイトに事情を訊ねた。
すると、ヴィヴィオの正体が元は古代ベルカ時代に存在した聖王のクローンだと言う事実を聞いた。
そして、ミッドで起きた大規模なテロ事件、ＪＳ事件の際、ヴィヴィオは『聖王のゆりかご』の中で、もう一人の養母、高町なのはとあの成人した姿で戦った事も教えられた。
今の成人化したヴィヴィオの姿とバリアジャケットの恰好はまさになのはと対峙した時と同じ格好だったのだ。
ヴィヴィオの今の姿はフェイトにとって一種のトラウマでもあったのかもしれない。
「でも、なんでヴィヴィオがこんな事に!?」
フェイトはヴィヴィオが成人化した事についてリニスに説明を求めた。
それによると、ヴィヴィオを検査した結果、一時的であるが、成人化出来る魔法要素をヴィヴィオは元々有しており、それは、決して悪い意味では無く、このＡＭＦが充満して居る中では、成人化している方が魔法の練習効率が上がる結果が出たので、デバイスに成人化出来る要素を組み込んでいたのだ。
最も紅葉はこのＡＭＦの空気に体とリンカーコアが馴染んだ様で、成人化する必要はないから、そのままの姿である。
ヴィヴィオ本人曰く、この成人化は決して聖王化したわけでは無いとフェイトに弁明した。

それでも何だか納得していないフェイトにヴィヴィオは、
「クリス、変身モード解除」
元の姿に戻り、
「大丈夫だよ、フェイトママ。変身してもヴィヴィオは、ちゃんとヴィヴィオのまんま!!もう、『ゆりかご』もレリックも無いんだし。だから大丈夫。クリスもちゃんとサポートしてくれるって」
ヴィヴィオが微笑みながらフェイトにそう語り、クリスもフェイトにまるで「任せろ」と言っているかの様にサムズアップを送る。
「う、うん・・・」
ヴィヴィオの言葉を聞き、ようやく納得した様子のフェイトだった。
「それに・・・」
納得した様子のフェイトにヴィヴィオは更に言葉を重ねる。
「ママたちだって、小さい頃に随分やんちゃなことをしたって、聞いたことがあるよ」
「そ、それは・・・その・・・」
フェイトはなのはとの出会いのきっかけとなったジュエルシードの件を思い出した。
確かに、今のヴィヴィオよりも年上であるが、六課に配属されたばかりのエリオやキャロよりも年下の頃だったため、やんちゃな事だと言われれば、確かに当てはまっていた。
「でも、ヴィヴィオ。これだけは覚えておいて」
リニスが真面目な顔でヴィヴィオに語り掛ける。
「大人姿は魔法の練習の為だけに使う事。決して悪戯や遊びで使わない事。これだけは守ってね」
「はい」
ヴィヴィオも真剣な表情でリニスとの約束を誓った。
(これじゃあ、まるでリニスの方が私やなのはよりも母親らしいわね・・・)
と、フェイトは、リニスにほんの少しだけ嫉妬したが、フェイトにとってリニスは魔法の師であり、もう一人の自分の母と言えるべき存

在だったため、仕方がないと思った。

ヴィヴィオがデバイスを貰ってから、数日後、通常の定期通信の日を迎えた。

この日は、入院中だったなのはも無事に退院して、この場に来ており、ヴィヴィオの姿を見ようとしていた。

前回のヴィヴィオの無事を知らせる通信ではやてが「次はなのはちゃんを連れてくるから、またヴィヴィオも来てや」とヴィヴィオを誘っていた。

ヴィヴィオ自身もなのはに自分の無事な姿を見せて安心させたかったので、通信の最後に、はやてに「必ず連れて来てね」と言っていた。

そして、ヴィヴィオにとっても、なのはにとっても楽しみにしていたこの日を迎えた。

ヴィヴィオとしては、この世界に突然跳ばされたのは、予想外であったが、無事にフェイトと再会する事が出来、尚且つやってみたかったBRAVE DUELをプレイし、デバイスまでも貰った。

なのはに伝えることはたくさんあった。

やがて、通信回路が開かれると、

「ヴィヴィオ!!」

と、いきなりなのはが画面に向かって叫んだ。

地球側の一同はヴィヴィオも含め、突然なのはの叫び声と彼女の顔のドアップ姿に、ギョッとした。

「ヴィヴィオ、元気?ケガとかしてない?ちゃんとご飯食べている?好き嫌いしてない?」

ギョッとしている一同をスルーして、ヴィヴィオに色々と質問をし続けるなのは。

「ちょっ、なのはちゃん。落ち着いて・・・」

隣に居るはやてもなのはの豹変ぶりについていけず、まずはなのはを落ち着かせる事か始めた。

でないと、ちゃんと話をする事が出来ないからだ。

「落ち着いた？なのは？」
　それからしばらくして、ようやく落ち着きを取り戻した様子のなのは。
「う、うん・・・ゴメン。恥かしい所を見せちゃって・・・」
　なのはは顔を赤くして俯いている。
　そして、定期通信はようやく始まった。
「それで、ヴィヴィオ、ケガとかは無い？」
「うん。大丈夫だよ」
「ご飯とかはちゃんと食べている？」
「うん。この前、お寿司屋さんに連れて行ってもらったの。それでね・・・」
　ヴィヴィオは先日行ったお寿司屋さんでの出来事を話した。
「へぇー流石は未来のお寿司屋さん。随分変わったサービスをするんやね」
　はやてはヴィヴィオの話を聞き、自分達の知る地球よりも未来の地球の回転寿司屋のサービスや店内設備を聞き、驚いている。
「お寿司もとっても美味しかったし、そのお店で、フェイトママとそっくりな人とも会ったんだよ」
「へぇー・・・」
　はやてとなのはは。ヴィヴィオの言うフェイトにそっくりな人と言うのに、少し興味がある様子だった。
「それでね、デバイスも作って貰ったんだ」
「えっ!?」
「デバイスを!?」
　ヴィヴィオがデバイスを持ったと言う事実に驚きの声をあげるなのはとはやて。
「それ、本当なの!?ヴィヴィオ」
「うん」
　ヴィヴィオは証拠と言わんばかりに、クリスを両手で持って、なのはたちに見せる。
「ん？」

「ぬいぐるみ？・・・・にしもてその動物は一体何や？クマ？」
「こっちの世界のキャラクターみたい・・・・」
しかし、デバイスと言われて見せられたのは、ごく普通のぬいぐるみ。
これの何処がデバイスなのかと首を傾げる二人。
「なのは、はやて、ぬいぐるみはあくまで外装でこの中身にデバイスの本体があるの」
フェイトが補足説明を行い、ヴィヴィオがぬいぐるみの背中にあるチャックを降ろして、中からデバイスの本体を取り出す。
すると、ヴィヴィオの小さな手の中には黄色いクリスタル状のデバイスがあった。
「これがヴィヴィオのデバイス。クリスって言うんだよ」
ヴィヴィオは満面の笑みを浮かべて、自らのデバイスをなのはとはやてに披露する。
「えっ、でも・・・・デバイスって・・・・」
「魔法文化が無いのに簡単に作れる物なんか？」
なのはとはやては、本来魔法文化の無い筈の世界で、デバイスを作る事の出来た事実に戸惑いが隠せない。
「えっと・・・・このデバイスを作ってくれた人は、その・・・・魔法の事を知っている人なの・・・・」
フェイトはデバイスの製作者の事を触り程度で紹介した。
まさか、かつての自分の母、プレシア・テスタロッサの使い魔であり、自分のデバイスの製作者でもあり、魔法の師であるリニスが作ったとは言えなかった。
しかし、デバイスの製造は管理局法でも特に違法とは認識されていないため、別に管理外世界で作っても何ら問題は無い。
だが、本来魔法文化の無い筈の世界で、尚且つ管理局よりも強力な力を持つ宇宙戦艦等を有する世界で作られたデバイスだ。
なのはとしてもそんな世界で作られたデバイスを持って大丈夫なのかと心配になった。
そんな、なのはの不安を読み取ったのか、フェイトが、

「大丈夫だよ、なのは。私もデバイスの初起動に立ち会ったけど、私たちが使っているデバイスと何ら変わりがないよ。ちゃんと、非殺傷設定もできるから。それに、デバイスを作った人と私がヴィヴィオに魔法を教えているから」
　と、フォローを入れる。
「そ、そう・・・」
　フェイトのフォローを聞き、その場では納得したなのはだった。
　しかし、フェイトはこの時、ヴィヴィオがセットアップした時に大人姿（聖王姿）になる事を言わなかったので、後にセットアップしたヴィヴィオの姿を見て、なのはが大変驚いた事を明記しておく。
「あとね、ヴィヴィオ、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬもやったんだよ」
　そう言ってヴィヴィオはなのは達にＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬで使うアバターカードを始めとするＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬに必要な機器をなのはとはやてに見せる。
「へぇーあのＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをヴィヴィオもプレイしたんか・・・それでどうやった？」
　はやてが、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの感想を訊ねると、
「とっても面白かった!!」
　ヴィヴィオは子供らしい感想を述べた。
「この後も、紅葉お姉ちゃんたちと一緒にＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやる約束をしているんだ!!」
　と、ヴィヴィオはこの後の予定もはやてとなのはに教える。
　最も二人はヴィヴィオの口から『紅葉』と言う名前を聞き、何かを思い出した様子だ。
「ヴィヴィオ、その・・紅葉お姉ちゃんは今日、そこには来ていないの？」
　と、なのはが、紅葉の所在を確認する。
「ん？ここには来ていないよ」
　ヴィヴィオの口からは、ここに紅葉が来て居ない事を告げた。
「そう・・・」
　紅葉がここに来て居ない事を知って、少し、残念そうな様子のなの

は。
当初、ヴィヴィオはなのはたちに紅葉を紹介しようとしたが、紅葉自身は、「私は管理世界の住人でもなければ、管理局員でも防衛軍の関係者でもないので、遠慮します」と言って、定期通信での同席を拒否した。
フェイトとティアナも紅葉の同席拒否はある意味、安堵した。
もし、立ち会えば、はやてとなのはは、紅葉を管理局へスカウトするかもしれない。
しかし、紅葉は管理局へ入るつもりなど毛頭ない。
それで、剣呑な空気となり、ヴィヴィオに精神的不安やストレスと与えてはマズイと思ったのだ。
「なぁ、ヴィヴィオ」
「ん？何？はやてお姉ちゃん」
「ヴィヴィオのデバイスを作った人ってどんな人なん？」
今度は、はやてがヴィヴィオのデバイスの製作者を訊ねる。
やはり局員としては、管理外世界にも関わらず、デバイスを製作した人物に興味と言うか、関心が有る様だ。
「うーんと・・・優しくてママみたいな人」
これもＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの感想同様、子供らしい率直な意見で、具体性がない。
なのは、はやて、ヴィヴィオの会話の様子を見たフェイトとティアナは何かを察した様子だった。
まだ、定期通信の時間は終了ではないのだが、途中でヴィヴィオが、
「あっ、そろそろ待ち合わせの時間になっちゃう・・・」
時計を見て、ヴィヴィオは、紅葉たちとの待ち合わせ時間が迫っているのを知った。
「いいよ、ヴィヴィオ行ってきて」
なのはは、ヴィヴィオにまた次の定期通信の時に一杯お話しようと言って、ヴィヴィオを見送り、ヴィヴィオ自身も後ろ髪を引かれる思いがありつつも、楽しみにしていたＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイしたい衝動で、なのはとはやてに、

「わかった。次にいっぱいお話しようね」
と言って紅葉たちとの待ち合わせ場所へと向かった。
ヴィヴィオが退室してから、フェイトとティアナ、なのはとはやてはその後も、お互いにあった日常の出来事ついて訊ねたが、終了時間が近くなったところで、はやてが、
「なぁ、フェイトちゃん」
「何？はやて」
「次の定期通信の時にその紅葉ちゃんとヴィヴィオのデバイスの製作者って人も連れて来てくれへんか？」
と、紅葉とヴィヴィオのデバイスの製作者（リニス）をこの場に連れて来てと言う。
まぁ、デバイスの製作者であるリニスとは、何度もこの場に立ち会っているのだが、はやてたちはその事実を知る筈がない。
しかし、何故はやてが、紅葉とデバイスの製作者（リニス）に会いたいのか、フェイトとティアナは、何となく想像がついた。
「・・・念のために聞くけど、はやては、二人に会って何を聞きたいのかな？」
若干冷めた声ではやてに訊ねるフェイト。
「ん？そりゃ、フェイトちゃん。管理外世界にも関わらず、デバイスを製作できるっちゅうことは、その人も魔導師なんやろう？どんな人かやっぱり局員として気になるやんか。それに紅葉ちゃんはその世界におけるなのはちゃんの子孫なんやし、どんな人なのか気になるやん」
「デバイスの製作者（リニス）はまず、置いといて、もし、紅葉が魔導師だったらどうする？」
フェイトの問いにはやては、予想通りの回答をした。
「もし、その紅葉ちゃんが魔導師やったら、管理局に来てもらいたいわ・・・なのはちゃんの子孫なら、きっとなのはちゃん同様、すっごい魔導師の筈やで・・・実は、今管理局はある事件で、人員が物凄く不足しとるんよ」
はやては笑みを浮かべてそう言うが、ティアナは、心の中で、

（はやてさん、もう少し空気読みましょうよ・・・明らかにフェイトさん、不機嫌じゃないですか・・・）
と、はやての言動に呆れた。
はやてとしては管理局の高官・・・ボラー連邦への制裁に賛成した者たちの言動は許せないが、その影響で管理局の人材不足が拍車をかけている事に対しても危機感を覚えていた。
そんな中、並行世界とはいえ、なのはの子孫である子が存在するのであれば、彼女もきっと、なのは同様、高ランクの魔導師に違いない。
高ランクの魔導師ならば、是非とも管理局へ来てもらいたかった。
「なのはもはやてと同じ意見なの？」
フェイトは次になのはの意見を求めた。
「う、うん。もし、紅葉ちゃんが魔導師ならやっぱり管理局に来てほしいな。それに紅葉ちゃんは私の子孫・・・私のひ孫さんかもしれないんでしょう？それなら、私も一緒に働きたいし・・・」
なのはらしいと言えば、なのはらしい意見なのだが。フェイトはここで心を鬼にして、二人に言い放った。
「無理だよ」
「「えっ!?」」
フェイトの「無理」と言う言葉になのはとはやては一瞬唖然とした。
「フェイトちゃん『無理』ってどういう事？」
「紅葉ちゃんは魔導師やないんか？」
「はやて、なのは、それ以前の問題だよ。仮に紅葉が魔導師だったとして、どうやってミッドまで連れて行くの？」
「それは・・・」
「フェイトちゃんたちが戻ってくるときに一緒に来ればええやん」
なのはは、どうやって紅葉をミッドまで連れてくるのかと言う問いに言葉を詰まらせるが、はやてはさも当然の様に、自分たちがミッドに帰るついでに連れてくればいいと言う。
「はやて、地球連邦とミッドは交流を一切持っていないんだよ。そんな中で、地球連邦の人を勝手にミッドへ連れて行けるわけないでしょう」

「でも、魔法素質はあるかもしれへんのやろう？」
「そんな事をしたら地球連邦側が、『管理局は地球連邦市民の少女を拉致した』って騒ぎ立てるよ。そうなった場合、地球連邦は当然紅葉の身柄引き渡しを要求するけど、管理局側としたら、絶対に紅葉を手放さないんじゃないかな？」
「まぁ、そうやろうな・・・・」
　高ランクの魔導師は管理局にとって金の卵であり、それを『還せ』と言われて『はい、どうぞ』と言って返却する訳がない。
　されるとしたら、任務で大けがを負い、魔導師としての素質を無くしたか、『殉職したから遺体を還します』のどちらかであろう。
　どちらにせよ、紅葉を強引にミッドに連れて行けば、地球連邦側は管理局を許す筈がない。
「もし、それが原因で地球連邦と・・地球防衛軍と管理局が戦争になったら、なのはやはやてどうするの？」
「・・・・」
　フェイトからの問いにはやてとなのはは何も答えられなかった。
「ねぇ、どうするの？管理局は勝てるの？地球防衛軍に・・・・もし、管理局が負けたら、二人は責任をとれるの？」
　はやての脳裏には、管理局の次元航行艦隊が防衛軍の波動砲の一斉射撃で消滅する光景しか思い浮かばない。
　しかも、防衛軍と戦争となれば、当然自分もその戦場へと向かわなければならない・・・・。
　自らの指揮する艦が防衛軍の波動砲によって融解されるシーンを想像し、はやては身震いし、冷や汗を流す。
「で、でも・・管理外世界での、魔法の使用は禁止されている筈だし・・・・」
　未だに黙っているはやてに変わってなのはが、震える声でフェイトに言う。
「それは、管理世界ないし、管理局員に言える事で、管理外世界の人にとっては、管理局の法律なんて関係ないよ・・・・なのはだって管理局（クロノたち）が来る前から魔法を使っていたじゃない」

「うっ・・・・」
フェイトの指摘についにはなのはも黙り込んでしまう。
まもなく定時通信終了の時間が迫る中、
「最後に、私から言える事は、この世界の人を管理局や管理世界の面倒事に巻き込まないで欲しいって言う事だよ。はやて、なのは・・・・」
フェイトは冷たい声と目でなのはとはやてに忠告を送る。
「・・・ティアナも同じ意見なの？」
なのはが今度はティアナに意見を求める。
（ここで私に振らないでよ・・・）
ティアナは、心の中でなのはの言動に愚痴りながらも、口では自分の考えをちゃんと述べた。
「そうですね、私もフェイトさんの考えに賛成です。この世界の人々は二度も異星人からの侵略を受けて、疲弊しているんです。だから、そっとしておいてあげたいと思っています」
「そんなっ!?」
愛弟子とも言えるティアナまでもが、自分では無く、フェイト寄りの考えにショックを受けている様子のなのは。
「なのはさん・・・彼女には・・・紅葉には夢があります。なのはさんも、紅葉と同じ年ぐらいの時にはもう、明確に将来のビジョンがあったんじゃないんですか？」
ティアナの言う通り、なのはは、中学時代には中学卒業後には、正式に管理局員になる事は決めていたが、その中でも教導隊の教官になると言う夢を既に抱いていた。
「う、うん・・・」
ティアナの問いに頷くなのは。
「そんな中、もし、横から大人が、『お前はこうならなければならない』と言ってなのはさんの夢を否定し、その夢を実現することの出来る道を絶たれたら、なのはさんはその人をどう思います？」
「・・・」
「その人を許せますか？なのはさんは大人が勝手に引いた線路を黙って走れますか？将来、ヴィヴィオにも同じような事を言えますか？」

「・・・・」
ティアナの問いに黙り込んでしまうなのは。
なのは自身も十一歳の頃、任務中に大怪我をして、もう二度と魔法は使えない、それどころか満足に歩けないかもしれないと診断された時に、両親が、『もう管理局や魔法とは縁を切れ』と言われたが、なのはは、必死に両親に頼み込み、管理局に居座り続けて今に至る。
もし、両親があの時、強引に自分からデバイスを取り上げ、魔法や魔法世界とも縁を切らせていたら、当然今の自分は無いし、ヴィヴィオとも会えなかった。
それに、自分から唯一の取り柄である魔法を取り上げた両親を許せるだろうか？
自分の事を心配してくれたと言う事は理解できるが、やはり、それでも・・・それでも・・・
「・・・・」
ティアナに言われてそんな思いがこみ上げてくる。
「・・・なのはさん・・今、なのはさんが紅葉にやろうとしたことは、なのはさんが心の中で思っているような事なんですよ・・・彼女も今、自分の夢を持ち、それを実現させようと日々頑張っているんです」
ティアナが冷静な声で、しかも、まるで自分の心の中を見透かしたように指摘する。
まぁ、なのはの場合、根が真面目で素直故、顔に出やすいから、ティアナも分かったのだろう。
「はやてさんもなのはさんも今後、この様な事が無いように気を付けてください・・・『魔法素質が有るから、必ず管理局員に入ならなければいけない』なんて、大人の横暴で我儘な考えは捨てた方が良いですよ・・・それがきっかけになって思わぬ大怪我や惨事を招く事や取り返しのつかない事態に発展しかねないんですから・・・」
「・・・・」
ティアナからの指摘を受け、二人は頭から冷水をぶっかけられた様な気がした。
何とも言えぬ重い空気の中、この日の定期通信の時間は終了した。

ただ、ティアナの言葉にはフェイトの心にもグサッと来るものがあった。
エリオとキャロを局員にした事が今では間違いだったのかもしれないと思い始めていたからだ。
時間を巻き戻せるなら、二人には局員ではなく、ヴィヴィオのようにちゃんと学校に通わせてあげたかった・・・大人だらけの環境ではなく、同世代が沢山居る環境で色々と学ばせてあげたかった。

「まさか、ティアナにあそこまで言われるとは思わへんかったわ・・・」
通信が終わり、フェイトとティアナの姿が消えたモニターを見ながらはやてが呟く。
「うん・・・」
ティアナからの言葉に、衝撃を受け、なのはは、力なく返答する。
「なのはちゃん、大丈夫か？」
「うん・・・」
（こりゃ、あかんな・・・）
ヴィヴィオの無事な姿を見る事が出来て嬉しかった。
そのついでに自分の子孫かもしれない子と会って、その子が魔導師ならば、管理局に引き入れたかった。
そうした意図はなのはにもはやてにもあったが、フェイトとティアナの冷静な指摘を受け、はやての方は、管理局のやや歪んでいると言うか、強引な勧誘部分を認識させられたが、なのはの場合は、それがショックの様だった。
小学校三年で、魔法と言う今まで自分の人生の中で見た事も無い未知の力を手に入れ、その力に魅入られ、そしてその力を平和利用していると言う管理局に盲信していたなのはにとって、今回、管理局員でありながら、管理局とは違う、外から見た管理局の内情を突きつけられて、これまで自分がしてきた事は一体何だったのだろうか？と、戸惑いが隠せない様子。
「ま、まぁ、なのはちゃん、とりあえずヴィヴィオが無事に見つかって良かったやないの」

「うん・・・・」
「フェイトちゃんやティアナの事もあるけど、今は、私らも大変なときなんや、クヨクヨしとる暇はないで」
「うん・・・・」
はやてははやてなりに、なのはを元気づけるが、真面目な性格故、なのはは結構後まで引きずったり、気にするタイプの性格だ。
フェイトとティアナの指摘をこの先、長く引きずらなければよいがと思うはやてであった。
ＡＭＦが充満するこの特殊な環境下で、魔力ランクＢ以上を保っている紅葉は、ミッドではＳランク以上の魔導師だ。
管理局員としては是が非でも手に入れたい人材であった。
しかし、フェイトの話を聞く限りでは、紅葉は聡明な子であり、かつてリンディがなのはに対して言った、自発的に協力を求めるような話術ではあっという間にその点を見抜かれてしまうだろう。
それに、この地球の太陽系内にはかなりの警戒網が張り巡らされており、それらの警戒網を突破してこの地球に来るのは管理局の艦船では、事実上かなりの困難である。
そう考えると、Ｓクラス以上の魔導師一人に対し、割に合わない。
大人たちは重苦しい空気となったが、ヴィヴィオと紅葉の方は、大人たちの事情を知る由も無く約束通り、この日もＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬを楽しんだ。

九十話　久しぶりの・・・・

「あ〜、ぁ〜、疲れた・・・」
下宿先である中嶋家へと向かう帰路の途中、良馬は夜空にそう吐き漏らした。
点々と仄光る星明りを見つめる眼差しには、疲労が浮かんでいた。
「昨日も仕事、今日も仕事、明日も仕事・・・家に帰っても食事と寝るだけか・・・はぁ〜・・・」
溜息をつく良馬は言うまでもなく憂鬱であった。
単に仕事疲れというわけではない。
最大の問題は、恋人との事である。
折角恋人である中嶋ギンガと共に現在は、地球に居るのに、いかんせん彼女のための時間が取り辛い。
付き合い始めてしばらく経つが、ここ最近は、なかなかデートに連れて行ってあげる事も出来なかった。
ガミラス、白色彗星との戦いがようやく終わったと思えば、新たな脅威となりかねない暗黒星団帝国、そして時空管理局の対策。
まほろば　での当直勤務。
その他に、新造艦、春藍と今度行われる合同遠洋航海の計画等やるべき仕事が沢山ある。
ただ孤独な独り身であるだけならば良かった。
だが彼は、極上の甘い蜜をもたらす可憐な花を手に入れてしまったのだ。
その花を手にしながら、ただ見ているだけで、愛でられぬというのは、あまりにも殺生だった。
(古代君も今、こんな気持ちなんだろうか?)
良馬はふと、ヤマトの艦長代理を務めていた後輩の事を思った。
彼も婚約者がいる中で、現在はヤマトを降り、空間パトロール艇の艇長として、星の海に居る。
愛しい婚約者を地球に残して・・・

そう考えれば、地球に恋人と共にいる自分はまだ恵まれている方なのだろう。
「はぁ～さっさと帰って、ご飯食べて寝よ、うん、そうしよう」
明日の仕事に繋がる体力優先を考え、下宿先の中嶋家へと足早で向かう良馬。
そして、下宿先に着くと、鍵を取り出してドアノブを握る。
そこで良馬は気付いた。
「あれ？」
鍵の掛かっているドアならばある筈の抵抗感がない。
試しに捻ってみると、微かな金属音と共にドアが開いた。
「開いている・・・おかしいな？今朝、加奈江さんが夜は誰も居ないって言っていたのに・・・閉め忘れたのかな？」
今朝加奈江は、今日の夜は外で食事をして、そのままホテルに外泊すると言う旨を良馬に伝えていた。
その為、夜、中嶋家に居るのは良馬だけの筈だった。
リニスは、まほろば　で当直勤務であるし、ギンガは非番であるが、家族と一緒に出掛けた筈・・・
まさか物取りの類が出入りしてはいないかと僅かな用心を胸に、ゆっくりとドアを開ける。
だがその先に待っていたのは、彼の予想だにしない光景であった。
「お、おかえりなさい、良馬さん。ご飯にします？　それともお風呂にします？　そ、それとも・・・わ、わたしにします？」
聞きなれた澄んだ声音で、顔を真っ赤にしたギンガがそう言って出迎えた。
それもただ出迎えただけではない、ふりふりとフリルのついたピンク色のエプロンを掛けた新妻装備によるお出迎えであった。
頬を羞恥で染めた様は、なんとも男心をくすぐる愛くるしさに満ちている。
だがその姿はあまりにも今まで良馬の思考を染め抜いていた疲労と、現実感から遠いものであるのもまた事実。
眼前の光景に呆然と硬直した良馬は、数秒の思慮の後こう判断し

た。
（ヤバッ、疲れすぎて幻見えたわ）
その考えのままに、彼はバタンとドアを閉じた。
再び目の前に出でた黒塗りの金属面を見ながら、じっくりと深呼吸。
今度こそ、誰も居ない下宿先に帰らんと再度ドアを開ける。
そこにはまだギンガ（幻覚？）がいた。
ただし、体育座りになってエグエグと涙を零しているという、なんとも寂寥感たっぷりの様に変わっていたが・・・。
「うぅ～・・・む、無視された・・・良馬さんに無視されたぁ～・・・・」
「えっ!?あっ、その・・もしかして本物のギンガ？」
「本物じゃない私がいるわけないじゃないですか！」
「えっ!?いや、だって今日は誰も居ないって加奈江さんが・・・と、とりあえず奥行こうか」
何故居ない筈のギンガがここに居り、自分を出迎えたのか？
その訳を聞くため、良馬は泣いているギンガを慰めながら、中嶋家（下宿先）に上がり、ギンガと共にリビングへと向かった。
「なるほどね・・・」
居間のソファに疲れきった身を沈めながら、良馬はギンガの話に相槌を打つ。
聞いたところによると、確かに今日、中嶋家の皆は居なかったのだが、それはギンガを除いてだった。
何故ギンガだけが居たのかと言うと、加奈江がギンガに勧めたらしい。
最近、疲れ気味の良馬（自分）の為に夕食でも作ってあげたら？と加奈江が勧め、ギンガはその提案に乗ったのだと言う。
「しかし、さっきのセリフは一体誰に吹き込まれたんだ？」
「あ、えっと・・・か、母さんが、こうすると男の人は悦ぶって言って・・・」
「な、なるほど」
一見すればごく普通に流しているが、それを聞き良馬は、

（加奈江さん、ギンガに何を吹き込んでいるんだ？）
と、呆れるもののそれでもほんの少し嬉しかったりもする。
そして、先程のセリフもそうだが、今のギンガの格好も疲労した男性を出迎えるには、なかなか完璧な服装だった。
エプロンの下は、水色をしたハイネックのシャツとジーンズといったラフな服装だ。
活動的でありながらしかし、身体にフィットした衣裳はギンガの爆発的プロポーションを惜しげもなく見せ付ける。
正に完璧としか言いようがない。
「それじゃあ、お夕食の準備をしますね」
「あ、ああ・・頼むよ」
ギンガはソファから立ち上がり、台所へと向かい、自分も堅苦しい軍服からラフな服装へと着替えに一度部屋へと向かった。
そして、着替えた後、台所で夕食の準備に励む彼女を、良馬はじっくりと見る。
ソファに深く腰掛けた事で視線は下から見上げる形となり、自然、すらりと伸びた引き締まった脚から肉付きの良い尻、くびれた腰までのラインという扇情的景観が見て取れた。
料理に打ち込む度に小刻みに揺れる尻の双丘はあまりにも強烈が過ぎる様であった。
眼の毒、いや、むしろ眼福だろう。
ミッドに居た頃から、母親の代わりとなって長年家事をしていただけに手馴れた風情もまた、なんとも新妻の風情が漂っていて良い。
「お待たせしました」
「ありがとう。では、いただきます」
良馬はギンガが作った夕食を食べた。
「ごちそうさま。美味しかったよ」
「お粗末様です」
ギンガは食器を下げて、流し台で食器を洗い始めた。
その姿に先程夕食を準備している姿が重なり、良馬が立ち上がり、ギンガの方へと歩み出すのにそう時間は掛からなかった。

「ひゃぁ!?」
愛らしい甘い悲鳴が、ギンガの唇から零れた。
いつの間にか背後に回っていた彼が、その腕をくびれた腰に回して抱きついてきたのだ。
良馬と密着し、伝わる鼓動にギンガの頬が紅くなる。
「あ、あの・・・どうしたんですか?」
高鳴る鼓動に声を震わせながら、ギンガは洗い物を中断する。
だが理性的な言葉の反面、既にギンガの中の〝女〟としての部分は彼の求めるものと、事の機微を予見していた。
胸の奥を熱くさせるものは、彼女の期待に他ならない。
腰を抱き寄せていた腕がするりと離れ、下腹部をつぅと撫でながら上へと上る。
そのささやかな刺激に、意図せずしてギンガの唇から悩ましげな吐息が漏れた。
「最後にこうして二人っきりになったのは、いつだったかな・・・?」
「ぁ・・・」
「最後に抱いたのも・・・」
「あぅ・・・」
言葉と共に指が胸に至った。
彼は前に掛けたエプロンをはち切れんばかりに押し上げ、躊躇なくギンガの胸を揉みしだく。
だが服越しの刺激はもどかしく、それが狂おしい。
身体の芯ばかり熱くなって、ちっとも快感のボルテージが上がらない。
焦らすような愛撫に身悶えするギンガは何かを訴えようとするが、まるで機を狙ったかのように、甘い刺激が脳天を突いた。
「んにゃ!?」
ヌチャっと言う水音と立てた生温いものが耳を這う。
言うまでもない、背後に立った彼が敏感な耳たぶを舐めたのだ。
今まで彼と関係を持って来たギンガの身体は、性感帯を責める刺激の前に徐々に火照っていく。

紅潮した顔は蕩け、細められた眼差しは濡れている。
ジーンズを膝まで脱がせたところで、良馬は大きく淫らなギンガが身に着けていた下着を見て、口元に嗜虐的微笑を浮かべて評ずる。
「へぇ～、随分とエロい下着穿いているじゃないかギンガ・・・やっぱりこっちも期待していたの？」
ギンガは淡い紫色のレース地の下着を身に着けていた。
大人びた印象を裏切らない、官能的でそそる装束・いわゆる勝負下着である。
「そ、そんな事・・・」
『そんな事』？　じゃあギンガはしたくなかったの？」
「うぅ～・・・」
言葉でいくら取り繕ったところで、ギンガの身体が淫らに火照っているのは明らかだった。
「ギンガ・・・寝室・行こう・・・」
「・・・」
耳まで真っ赤にした後姿に問えば、こくりと小さく頷きが返って来る。
洗い物の途中であったが、ギンガはそれを中断し、良馬と共に彼の部屋へと向かった。
愛しい者との久しぶりの逢瀬・・・
二人は本能の赴くままに互いを求め合う二匹のケダモノと成り果てた。
それは、一度では終わらず、何度も求めあった。
そして、翌日・・・

定時通りに、司令部に出頭した良馬。
「大丈夫ですか？・艦長。少し顔色が悪いですよ」
新見が心配そうに声をかけた。
「だ、大丈夫・・・少し寝不足なだけだから・・・」
良馬は新見に大丈夫と言うが、彼の顔は少しやつれていた。
その反面、

「あれ?ギンガ、今日は妙に顔色がツヤツヤしていて表情が満足そうだね?何か良い事でもあったの?」
まほろば　での当直任務に当たったギンガは同じく当直勤務を行うフェリシアがギンガの顔色が妙に良い事に質問した。
「えっ!?そ、そうかな?」
突然の質問にギンガは少し慌てた様子でフェリシアは首を傾げた。

中嶋源三郎にはある悩みがあった。
防衛軍軍人である身であるが、それは別に地球の平和だとか、そんな大層なものではない。
もっと身近な、もっと小さな悩み・・・
愛娘であるギンガについてだ。
彼女とは桜花と違い、血縁関係は無く、書類上では、養女となっているが、中嶋夫妻はそんなものは関係なく、ギンガを我が家の娘として扱っている。
そのため、源三郎にとってギンガは桜花同様、大切な愛娘なのだ。
その愛娘がどうにも、最近の妙なのだ。
先日は、何故か妻（加奈江）に「今日は桜花と一緒に出掛けるわよ」と、桜花と妻と共に夜のお出かけへとしゃれ込んだが、そのお出かけにギンガは来なかった。
そこで、長年軍人として目を光らせてきた源三郎の慧眼、またの名をパパリンアイで観察すると、それは発見できる。
そこから導き出される答え、それは一つしかない。
男が出来た・・・と・・・
では、果たして相手は誰なのか?
源三郎の疑問はそこに集約される。
彼の知る限り、ギンガの交友関係で男の知り合いはそう多くない。
そこで彼は推理する。
知りうる範囲で娘に手を出しそうな男とは、果たしてどこの男だろうか?
まず・・・と言うか、最初に怪しんだのは防衛軍関係・まほろば　の

乗員に限られてくる。
しかし、戦艦の乗員は今では、昔と違い数千人と言う大人数から大分減ったが、それでも百人近くは居る・・・
一人一人確認するにしても時間が掛かる。
そこで、まずは・・・
「・・・という訳で加奈江、ギンガの交際相手が誰なのか知らねぇか？」
と、連れ添った愛妻（加奈江）にギンガの交際相手に心当たりが無いか訊ねてみた。
同性であり、母親の加奈江には、何かしらの相談をしているかもしれない。
その中には、ギンガの意中の人の名前を言っているかもしれないと思ったからだ。
「どうしたんですか？突然？」
「あっ、いや・その・・・ギンガの様子・がな・・・ここ最近、妙に思えてな・・・お前はどう思う？」
気まずいのか加奈江から視線を逸らし、口ごもる源三郎。
「えっ？姉さんの好きな人？それって・・・」
「桜花」
桜花がギンガの意中の人の名前を出しそうになった時に、加奈江がそれを止める。
「あなた、いいじゃないですか」
「で、でもな・・・」
「過保護・過干渉は逆に嫌われますよ」
「うっ・・・」
「大丈夫ですよ。ギンガは・・・ちゃんとしっかりしている娘ですから・・・」
「そ、そうか・・・」
「ええ。だから、その時まで、待ってあげて下さい」
加奈江と桜花はどうやらギンガの意中の人を知っている様だ。
桜花に聞けば教えてくれそうなのだが、加奈江が口止めしてしまったいじょう、桜花は恐らくギンガの意中の人の名前を教えないだろ

う。
源三郎としては待つしかなかった。
ただ、その間、ギンガが騙されない事を祈るしかなかった。
・・・と、思ったが、やはり気になるものは気になるので、
「という訳で月村、ギンガの交際相手とか知らねぇか？」
今度はギンガが乗艦している艦の長であり、ギンガの上官でもある良馬にギンガの交際相手に心当たりが無いかを訊ねる。
「ど、どうして俺に聞くんですか？」
問われた良馬は、何故か額にうっすらと汗をかいて聞き返した。
心なしか声も震えているような気がする。
しかし、感情を読み取られない様に顔色は普段通りの様子を繕う。
「いや、お前ならギンガの直属の上司だし、知っているかなと思ってな」
「さ、さぁ・・・彼女のプライベートまでは・・・それに艦内では彼女は女性乗組員専用区画にいますので・・・その区画の責任者は新見副長なので、そこでのやりとりは流石に・・・」
そう言いながら、良馬のかく汗はどんどん多くなる。
まあ無理もあるまい。
ギンガと付き合っている男とは、正に自分の事なのだ。
ひょんな事から二人はお互いの想いを通じて交際を開始。
しかも既に肉体関係まで結んでいる。
こんな事を親バカの源三郎に知られたらどうなるか・・・想像するだけで恐ろしい。
源三郎にとってギンガは中嶋家の娘と言う認識が完全にされている。
そのため、親バカは当然ギンガも対象になっていた。
「そうか・・・」
源三郎は少し、がっかりした様子で呟く。
そんな様子を見て、
（すみません。源三郎さん・・・）

良馬は心の中で謝罪した。

それから数日後・・・

早朝、月村邸

「おはようございます。ノエルさん」

「おはようございます。ギンガさん」

この日の前の夜、ギンガは月村邸にお泊りした。

しかし、夕べ良馬は仕事があったらしく、夜、男女間の関係はなかった。

そのため、ギンガは月村邸に用意された部屋で目を覚まし、朝食の準備をしているノエルを手伝う為に、台所へと降りて来た。

粗方準備が整うと、

「ギンガさん。そろそろ良馬様を起こしに行っていただけませんか？」

と、ノエルが朝食の準備は後、自分一人で出来るので、ギンガには良馬を起こしに行くように頼んだ。

これはギンガに対するノエルなりの気配りであった。

ギンガは少し嬉しそうに良馬の部屋へと向かった。

コンコン、と良馬の部屋のドアをノックする。

普通なら、すぐ彼が迎えに出てくれるのだが、その彼は出てこない。

「あれ？良馬さん」

ノックをしても中からは反応が無い。

仕事の為、夜遅くまで起きていたのだろうか？

そのうちに中でごそごそ動く音がして、無理矢理起こしてしまったかと少し悪い気がした。

「・・・ん？ああ、ギンガか？・・・・ん？もう、朝か・・・」

明らかに「今起きました」という感じで、ギンガを出迎える良馬。

ガミラス戦役以降、彼は夜魘される事は無くなり、無事に夜も眠れている様だ。

そう言う点で、ギンガとしては良かった様な、一緒に寝る口実が無くなってしまったので、残念な様な微妙な気持ちだった。

「もうすぐ朝食ですよ」
苦笑しながらギンガは朝食の時間が迫ってきている事を告げる。
普段は凛々しい軍人であっても、やはり、この人はどこか抜けている。
そう思ったギンガであったが、逆にそうであるからこそ自分がいないと駄目なのだと思わせる。
これがただの完璧超人なら、敬意は持ってもそれ以外の感情は持ち得なかったであろう。
しかしそんなギンガの思いも、ベッドの上で人が動く気配で吹き飛んだ。
「・・・・ん?・・・・・あさ・・・・?」
「なっ!?」
良馬が寝ていたと思われるベッドからは金髪の美少女がもぞもぞと出て来た。
しかも服装は、下着に男物のワイシャツ一枚という大胆なもので、胸元などはあからさまにはだけさせている。
そんな格好の美女が良馬と同じベッドから出て来たら恋人としての反応は・・・・
「りょ、良馬さん!!その人は一体誰なんですか!!私と言う人がいるのに!!他の女性と関係を持つなんて最低です!!不潔です!!」
ギンガは良馬の胸ぐらを掴んで、問い詰める。
「ちょ、ちょっと待って!!ギンガ、誤解なんだ!!」
ギンガの勢いに嫌でも目も覚める良馬。
「五回!?昨晩は五回も彼女と関係を持ったんですか!?変態!!浮気者!!」
良馬では埒があかないので、ギンガはこの金髪美女に事情を聞く事にした。
「大体、誰なんですか!?貴女は!?」
「はてな?」
ギンガの問いに金髪美女は髪の毛をいじりながら首を傾げる。
「『はてな?』じゃありません!!」

完全にムキになっているギンガ。
それは、目の前の金髪美女に対する嫉妬からくるものであった。
「あぁ～ギンガ、その子はユリーシャだ」
「ユリーシャ？ユリーシャって確かイスカンダルの・・・・」
「ああ」
「でも・・・・」
ギンガが最後に見たユリーシャはまだヴィヴィオと同じ位の身長だった。
最初に会った時は赤ん坊だったのだが、それが地球人やミッドの人間よりも成長のスピードが早いと言う印象はあったのだが、それが更に加速したのか、既に15～16歳の体つきになっていた。
「どういう事か説明してもらえますか？」
ギンガはダークオーラを纏いながら良馬に説明を求めた。
「あ、ああ・・・」
良馬は顔を引き攣らせながら、ユリーシャ・・・イスカンダル人の特徴について説明した。
「成程、ユリーシャさんについては、分かりました。ですが、それが何で、良馬さんのベッドに潜り込むのか其方の方も説明していただけますか？」
「い、一応彼女は、体はここまで成長しているけど、まだ年齢は幼児なんだ。しかも親元を離れて生活しているんだ。心細かったんだろう。昨夜、一人じゃ眠れないって」
「それで一緒に寝たんですか」
「あ、ああ・・・」
「・・・変な事はしていないでしょうね？」
「幼児の女子にそんな事はしないよ!!」
(こんなナイスボディーの幼児が居てたまりますか!!)
心の中では目の前のユリーシャが幼児とは認めたくなかったが、それでもユリーシャがこの世に生を受けてから実際はさほど経ってはいなかったので、このナイスボディーの金髪美女の年齢はまだ幼児と言える年齢で間違いはなかったのだ。

だが、それでも納得は行かない。
もし、管理局の豆狸が知れば、同じ事を思っていただろう。
その後、朝食の席にて、ユリーシャの事がフェイトたちにも伝えられた。▪
金髪美女に成長したユリーシャを見て、フェイトたちは大層驚いていた。
それと同時に、
（イスカンダル人ってタケノコみたい）
と、ややイスカンダル人に対し失礼な印象も抱いていた。
ユリーシャ本人もこれ以降の成長スピードは地球人と何ら変わらないと補足説明をした。
ただ、ユリーシャの体・・・主に胸部を見て、ティアナが悔しそうな視線を向けていた。

ユリーシャ騒動があったこの日・・・
地球防衛軍本部、司令長官執務室
執務室には主たる藤堂平九郎と長官付秘書官の森雪の他、黒いジャケットタイプの艦長制服を着た壮年の男と精悍な顔つきの男がいた。
「山南修、貴君を新造艦、春藍　艦長を命ずる」
「はっ」
「古代守、貴君を新造艦、春藍　副長を命ずる」
「はっ」
藤堂から呼ばれた二人、山南と守は敬礼の後、それぞれの辞令を受け取った。
山南は沖田・土方の後輩でガミラス戦役では、沖田の乗艦、宇宙戦艦　えいゆう　の艦長を務め、沖田と共ガミラスと戦っていた。
白色彗星戦役時に、土方が士官学校の校長職から地球連合艦隊総司令に抜擢されると、その穴を埋める様に士官学校の校長となり、当時、士官学校に入ったばかりのギンガらを指導した。
今回、山南、古代が乗艦する春藍はつい先日就航した改アンドロメダ級戦艦で、太陽系内の近海における試験航海を終えたばかりで、今

度、まほろば　と共にシリウス恒星方面への遠洋航海へ向かう予定である。

春藍が遠距離航海の計画を立てている頃、
ミッドチルダでも同じく、八神はやてが艦長を務める新型次元巡航艦ヴォルフラムも試験航海計画を立てていた。
人員については、機動六課の時の様には行かなかった。
今回の勤務先はミッドに隊舎を構えていた六課と違い、星の海を行く次元航行艦・・・
なのはとヴィータは教導隊所属。
エリオとキャロは自然観察保護官で今はミッドを不在にしている。
スバルは〝陸〟所属の特別救護隊の所属。
シグナムは本局の武装隊所属であるが、流石に星の海では自慢の剣筋を披露するには、無理がある。
フェイトとティアナは本局所属の執務官と補佐官なのだが、今は第二の地球で保護されている最中でミッドには不在。
いずれ二人がミッドに帰ってきたら、所属してもらうつもりでいるが、現在は不在の為乗艦不可の状態。
そこで、直ぐに採用できたのは六課時代のロングアーチの面々で、航海長にはルキノ・リリエ、副長にはグリフィス・ロウラン、医務長には八神・シャマルが内定された。
その後、はやては、各パートのチーフを集め、試験航海の日程や訓練内容の計画を立てていった。

はやてが自らが艦長を務める新造艦ヴォルフラムの試験航海の計画を練って居る頃、なのはとヴィータが教導官を務める隊舎では、航空戦技教導官・高町なのは一尉は、午前の教導を終え、教導生らと昼食を共にしていた。
ヴィヴィオの無事も確認された後、なのはは、無事に病院を退院し、隊に復帰していた。
管理局に所属する高ランク魔導師の殆どは、己を恃む傾向が多く、

他者を見下しがちなのだが、管理外世界の出身ゆえ、魔導師・非魔導師に関わらず同じように接するなのはは、威張らない高ランク魔導師として信望を得ているのだ。
なのはが教導生から高い人気を博しているのが、こういう飾らない性格故なのだろう。
「あの・・高町教導官、質問よろしいでしょうか?・・・その・・・・教導とは関係ないことなんですが・・・・」
「私に答えられることなら構わないよ。何かな?」
まだあどけなさが残る若い教導生の一人が恐る恐るなのはに質問してきた。
「最近、ボラー連邦の話を全然と聞きませんが、教導官のところには何か情報は入っていませんか?」
ベムラーゼの虐殺、制裁艦隊の大敗北から既に幾日が経過している。
ボラー連邦側からはあれから何の音沙汰はなく、不気味な程の静寂な日々が続いている。
しかし、若い教導生らにとってはそれがとても不安に感じられた。
ボラー連邦への武力制裁へ向かった航空隊の教導官や先輩たちは誰一人帰って来なかった。
次は自分たちの番ではないか?
そしてもし、ボラー連邦の捕虜になれば、あの公開処刑の映像の様に処刑されるのではないだろうか?
制裁に向かった者たちは帰還者以外、皆あの様な残虐な方法で処刑されたのではないだろうか?
そんな不安と恐怖が彼らの中に渦巻いていた。
今の所、〝海〟の一部が主張している第二次ボラー連邦への武力制裁は艦も無ければ、人材も居らず、賛同者が集まらない為、今の所、具体化する気配はない。
管理局はボラー方面に繋がる次元回廊を無期限の航行禁止とし、サーチャーを設置して警戒しているが、今のところ異常は見られない。

通常、航空武装隊に次元航行本部の情報が全て流れてくるわけではないが、ボラー連邦関連の情報は重要であり、なのはにはクロノやはやてといった〝海〟の士官の友人がおり、通常ルートより先に情報が入ることもあるのだ。
ボラー連邦同様、第二の地球に関してもその情報は同列扱いとなっている。
必ずしも教導生が知るべき情報ではないし、窘めるのは簡単だが・・・・
「私もボラー連邦関連の情報は聞いてないんだ。何か変わった事があれば必ず発表されるから、少なくとも今は、周囲が動揺しようと、それに流されずに私たちのやるべき事をやるしかない。私はそう思うよ」
「は、はい・・・」
なのはの言葉に教導生たちは頷いたが、やはり不安の色は隠せないようだ。
だが、無理もない、となのはは思う。
つい最近まで、時空管理局が次元世界の最高権威であり、目の前にいる教導生たちは、その頃に入局した。
それが今では、ボラー連邦に暗黒星団帝国（ガトランティスは首脳陣が全滅したため、脅威度は低下したと思われる。ガミラスは根拠地となる本星を失い、放浪中との事で、ガトランティス同様、脅威とまでは認識していないが、無暗な接触は控える様厳命されている）といった強力な軍事国家が管理局に牙を剥き、一方的にやられて数多くの局員が殉職し、次元航行艦隊は壊滅してしまった。
これで管理局の権威は大きく揺らいでおり、もし一般市民がこれ以上犠牲になれば局への信頼は失墜しかねないのだ。
なのはは無論、教導生も士官候補生であるから動揺を表に出さなくとも、不安が募るのは仕方ないところだ。
「第二の９７管理外世界との関係はどうなるんでしょう？」
と、別の教導生がなのはに聞いてきた。
「あの世界も私の故郷と同じく、軍隊は現地政府の一機関という存在

だから、政府の命令なく勝手に判断したり行動する事はできないの。今のところは対話する姿勢だから、悪い方に進む事はないと思うけどね」
「はい・・・・でも、向こうは管理局法を受け入れる事はないんでしょうね・・・・」
　また別の教導生がぽつりと口にした。
「そうだね。地球連邦と地球防衛軍は、『今の管理局』と付き合わなくても殆ど困らないからね・・・・」
　正確には〝今の体制の管理局〟なのだが、なのははそこまで言い切ることはできなかった――。
　それは、今の管理局が、今の体制を変える事が出来るのか確証が無かったからであった。

九十一話　船出

――無限に広がる大宇宙――。
全ての始まりとも言う〝ビッグバン〟から約１５０億年・・・数多の星が生まれ、消えていった。
それはまさしく生命の営みに酷似している。
億年単位で進む星の生涯に比べれば、人間の営みなどまさに一瞬の光芒にも満たない。
しかし、その一瞬の光芒のごとき人の生命にもまた、輝きと煌めきがある――。
だが、その生命の息吹は時に宇宙の平和を乱す事が有る・・・

あのガミラス、ガトランティスの侵略を何とか跳ね返した地球は、侵略・絶滅戦争の痛手を乗り越えて立ち上がろうとしていた。
その最中、地球より１４万８０００光年の彼方にあるイスカンダル星を襲った謎の敵、『暗黒星団帝国』との戦いは地球防衛軍とデスラー率いるガミラス残存艦隊との協力により、終結した。
そして、今地球は平和への営みを取り戻したかのように思えた・・・。

また、地球とは別次元の世界に本部が存在する汎世界規模の治安・司法維持組織ともいうべき一大組織、時空管理局は、魔法による世界平和の構築と維持を掲げて活躍してきたが、成立から１５０年を経ずして、早くも行き詰まりを見せ始めていた。
さらに、魔法戦力を児戯のごとくあしらう強力かつ凶悪な軍事勢力や国家との遭遇で、管理局はジワジワとその力を削がれ始めていた――。
時に西暦２２０２年・・・。
管理世界では新暦７７年・・・の事であった。

時空管理局　本局　次元航行艦バース
この日、新造艦、ヴォルフラムが停泊するドックに数多くの人々が集まっていた。
集った人々は、ヴォルフラムの乗員とそれら乗員の家族や関係者たちだった。
連日の様に起こった次元航行艦の相次ぐ遭難に、ボラー連邦の襲撃、武力制裁の失敗も重なり、見送りに来た人々の表情は、やはり皆不安そうだ。
「それじゃあ、はやてちゃん気をつけてね」
なのははやてに見送りの言葉をかける。
「大丈夫やてなのはちゃん。今回、私らが行くのはボラー連邦の推定位置から全くの真逆の位置や。それに敵に見つかったら、形振り構わず逃げるつもりやで」
局員としては何とも情けない言葉であるが、管理局の艦船では全く歯が立たない現状では、当然の判断だ。
やがて、出航時間となり、はやてを含む乗員は艦へと次々に乗艦し、見送り人は所定の見送り場へと移動する。
乗員は全員が配置につき、後は艦長（はやて）からの命令を待つばかりとなった。
そして、ブリッジに艦長のはやてが入ると、
「敬礼」
グリフィスが号令をかけ、ブリッジクルー全員がはやてに敬礼し、はやてが返礼する。
はやてが腕を下ろすと、皆も下ろす。
「総員に告ぐ、艦長の八神はやてや。これより本艦は、試験航海へと出航する。皆も知っての通り、現在、次元の海は、ガトランティスやボラー連邦と言った血に飢えた鮫共が徘徊する危険な場所となっとる。従って訓練とは言え、これは実戦に近い航海となるが、私は皆を再びこのミッドの地へと帰すと約束する。だから、皆も職務を全うするように尚一層の努力を期待する・・・以上や」
「出航用意!!」

はやてが訓示を述べた後、副長のグリフィスが号令をかける。
「システムチェックスタンバイ」
「システムチェック・・・システム、オールグリーン」
「機関始動」
「機関始動・・・魔動力炉へシステム接続・薬室内圧力上昇中」
「バインドアンカー解除」
「了解、バインドアンカー解除」
「ヴォルフラム発進」
魔動力炉が起動し、ヴォルフラムはゆっくりと動き出した。
「はやてちゃん・・・気を付けてね・・・そして、絶対に帰って来てね・・・」
なのはを始めとする大勢の見送り人は不安と心配を抱きながら、ドックを離れていくヴォルフラムを見送った。

ヴォルフラムが試験航海へと出発した頃、第二の地球では・・・
海鳴市　月村邸
「明日からまた遠洋航海へと出るので、暫くは家を留守にします」
「そう・気を付けてね」
と、良馬が忍に明日から暫く家を留守にする旨を伝えた。
「・・・」
ただ、この時、良馬と忍がこの会話を聞いている人物がいたのを気がついてはいたが、まさかその人物があの様な行動に出るとは予想もつかなかった。

翌朝
月村の屋敷の前には、良馬をドックまで送るためのハイヤーが止まっていた。
リニスは既に前日から、まほろば　へと泊っているので、今回は良馬一人が月村邸からドックへと向かう事になっている。
「それじゃあ、忍さん・ノエル・・・いってきます」
「ええ、気を付けてね、良馬」

「いってらっしゃいませ、良馬様」
忍とノエルの見送りを受けて良馬はハイヤーに乗り、ドックへと向かった。
まほろば　が停泊しているドックの隣にはアンドロメダに似た様な艦影の艦、アンドロメダ改級宇宙戦艦、春藍が停泊している。
良馬がハイヤーから降りると、
「艦長」
「ん？おお、機関長」
途中で機関長の井上と出会い、話し込んだ。
その際、ハイヤーのトランクの扉が開いたことは、この時気がついた者は誰も居なかった。
後にハイヤーの運転手がトランクの扉を開け、荷物を取り出そうとした時、
「あれ？開いている？・・・・さっき、開けたっけ？」
トランクの扉が開いている事に運転手は首を傾げた。
「ヤマト、まほろば、春藍・・・この、三隻が地球不在で少し心配ですね・・・・」
「ん？」
「暗黒星団帝国の事ですよ・・・・」
「ああ、あの連中か・・・・」
「ええ、あのゴルバを率いていたメルダースと言う男は、出会い頭に『地球の戦艦よ』と言いました。連中はガミラスやガトランティスの様に地球側が、気がつかない内に地球の存在を知っていた様でもありましたし・・・・」
「しかし、ペテルギウスで遭遇した連中が知らせたのかもしれんぞ」
「その可能性もありますが、もし、そちらじゃなかったとしたら・・・・」
「・・・・」
「あの連中はペテルギウスのエネルギーやガミラスのガミラシウム、イスカンダルのイスカンダリウムを狙っていました。その使用方法も自分たちの星のエネルギー枯渇問題ではなく、戦争使用の為のエネルギー源でした。あの連中が地球に矛先を向けないとは決して言え

ません」
「むぅ・・・確かに・・・」
　太陽系内に不審な宇宙船や不自然な動きをする小天体が入り込めば、即座に地球や各惑星の有人基地は即応体制に入る。
　しかし、ワープで突然内惑星域に入り込んで来るケースもあるし、いきなり地球に降下してくる可能性も否定できない。
　暗黒星団帝国という、まだ全貌がわからない宇宙帝国主義の星間国家がどんな形で地球に接触してくるか、全く予想がつかない。
　だからこそ、連中が握手ではなく、銃をつきつけてくるのが一番最悪なのだ。
　無論、いざとなれば避難勧告や避難指示、はては身柄の一時拘束も可能な避難命令も出るが、状況は常に変わるものだ。
　軍や行政機関におんぶに抱っこではいけない。
　自分の目で見て判断することも必要というものだ。
「しかし、あの連中が仮に攻めてくるにしても、この地球を支配するメリットは一体何じゃろう?」
「そこまでは分かりません・・・単にエネルギー採掘の邪魔をされた腹いせ・・・ガミラスやガトランティス同様、地球人の奴隷化・・・行動原理が地球人とは多少違うだろうから、連中の目的が全く分かりません」
「そうじゃのう・ガミラス人やガトランティス人もメンタリティは地球人と大差なかったからのう・・・」
「ええ、ガミラス人やガトランティス人も容姿は、肌の色以外は地球人と変わらないし、暗黒星団帝国人も映画に出てくるようなエイリアンでは無く、見かけは地球人と大差なさそうでしたし・・・最も科学技術はあちらの方が上でしょうね・・・」
　上には上がいる。
　決して奢ることなかれ、そうした精神でなければ、この宇宙では生き残れないのかもしれない。
　やがて、まほろば、春藍、両艦の乗員が集合し、出航準備へと取り掛かった。

「総員に告ぐ、これより　まほろば　は　春藍との合同試験航海の為、シリウス方面へと出航する。総員出航配置につけ」
　良馬が指示を出し、乗員が慌ただしく配置へとついて行く。
「出航配置完了」
「機関始動」
「機関始動：補助エンジン点火」
　まほろば　の波動エンジンが心地よい轟音を奏でだした。
「ガントリーロック解除」
「ガントリーロック解除」
　船体を固定していた拘束具が外され、轟音と共に　まほろば　春藍の巨大な船体はフワリと宙へと浮いた。
　二隻の巨大な黒鉄の要塞は星の海へ・・・シリウスを目指し、舞い上がって行った。
　二隻の巨艦は、途中月軌道の沖合において、月基地から無線操作されて出撃してきた自動戦艦、ハルバードとファルシオンと合流した。
　ハルバードとファルシオンは形状が全く同じ、自動戦艦であるが、ハルバードはヤマトと同じ収束型の波動砲を装備し、ファルシオンはアンドロメダ級やガトランティス戦役時にて使用していた主力戦艦と同じ、拡散波動砲を装備していた。
　月軌道までは月面基地からの無線操作を受けていたハルバードとファルシオンはこれから先、春藍からの無線操作を受ける事になる。
　今回の春藍の試験航海には無人艦の無線操作機能の試験も兼ねていた。
　そして、今回の航海では二隻だけの無線操作だが、後々は小隊、中隊、大隊と無人艦の規模を大きくし、春藍以外の艦隊はすべて無人艦と言う構想も防衛軍は立てていた。

　天の川銀河・オリオン腕辺境、太陽系外縁部
　八神はやてが艦長を務める時空管理局所属の新型次元航行艦、ヴォルフラムは、試験航海の最中、本部からの指示により、第二の９７管理外世界方面の哨戒任務に当たっていた。

しかし、はやては無理に第二の９７管理外世界への座標を掴み取ろうとはせず、当初の目的通りの航路を辿っていた。
「センサー、レーダーともに正常。次元断層反応なし。周辺空域に異常ありません」
「うん・・・」
ここまでボラー連邦、ガトランティスの艦船に発見される事も無く、訓練日程をこなしつつ、ヴォルフラムは平穏に哨戒任務兼テスト航海をこなしていた。
とはいえ、太陽系を囲む〝エッジワース・カイパーベルト〟から内側は地球防衛軍の衛星や哨戒艦艇による監視網が敷かれており、不用意に侵入すれば管理局の艦船では簡単に拿捕・撃沈の憂き目に遭うのが目に見えているため、カイパーベルトの外側に近寄るのが精一杯なのだ。
出発前、クロノから『過度な接近は防衛軍側の警戒心を強める為、自重するように』と、言われており、はやて自身もその点に関しては十分に承知していた。
万が一領海外で遭遇しても防衛軍の艦艇ならば、領海外と言う事でこちらから手を出さない限り、攻撃される心配は恐らく無いだろう。
それから、小一時間程経過した頃、
観測担当のオペレーターが緊張した声を上げた。
「前方、左方向に空間歪曲反応を複数確認！」
「っ!?緊急空間転移スタンバイ！それと、念のため、通信回線をいつでも開けるようにしといてや」
「よろしいのですか？」
「かまへん」
オペレーターが疑問の声を上げるが、それは仕方ないことだ。
基本、管理局員は管理外世界の住民と接触することは規制されている。
但し、第二の９７管理外世界こと地球連邦とは何度もコミュニケーションをとっており、知らない間柄でもない。
「転移してきたのは艦船四隻・・・共に大型艦・・・戦艦クラスです!!反

応は地球防衛軍の艦船です!!」
「もしかして、ヤマトか!?」
緊迫した観測オペレーターの声に、他のブリッジクルーも驚きの声を上げる。
それは、はやても例外では無かった。
「接近する。あちらさんから質問されたら、正直に答えればええ・・ただし、絶対にこっちからは手を出しちゃならんで・・・・それに高圧的な態度もＮＧや」
「し、しかし、大丈夫ですか?」
はやての指示に通信員は不安そうに訊ねる。
「ボラー連邦やガトランティスと違い、いきなり撃ってはきいひん!!大丈夫や!!」
はやては即座に防衛軍艦への接近を行い、防衛軍艦の確認を決断した。
(反応は四隻・内一隻はもしかしたら、ヤマトかもしれへん・・・・)
今まで映像でしか見た事の無かった宇宙戦艦ヤマト・・・・。
滅亡寸前だった地球を救った艦・・・・
その乗員たちと話せるのであれば、はやては個人的にもヤマトのクルーとは話がしてみたかった。
「周辺監視を厳重。針路、１１０!!全速前進!」
「は、はいっ!」
はやては地球艦がワープアウトした空間にヴォルフラムを向かわせた。
「捕捉できるか?」
「今のスピードなら何とかなりますが、何分、巡航速力が違い過ぎます・・・・」
「わかった。とにかく接近しよう。速度そのまま!」
ヴォルフラムは最大戦速で地球艦に向かっていった。

同宙域、宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「ワープアウト成功・・・・」

「春藍、ハルバード、ファルシオンも無事にワープアウトを成功した模様です」
「各部、損傷の有無を知らせ」
「船体異常なし」
「機関異常なし」
「レーダー、通信設備共に異常なし」
「火器管制システム異常なし」
「艦の損傷は認められません。艦長」
「うむ・・・・」
　ワープを無事に終えた、まほろば　春藍　ハルバード、ファルシオンは外宇宙巡航速度で航行した。
　そんな中、まほろば　のレーダーが此方に接近して来る艦影を捉えた。
「艦長、本艦隊に接近中の艦影あり・・・・」
　艦橋内が一瞬の内に緊張が走る。
「総員、戦闘配備」
　艦内に警報がなり、まほろば　の火器管制システムが作動し、乗員は次々と配置につく。
「接近中の艦船の所属は分かるか？」
「少々お待ちください」
　新見が接近中の艦船の熱源ライブラリーを調べ、どこの所属かを調べる。
「判明しました。接近する艦は、時空管理局の艦です」
「通信長」
「はい」
「こちらで対処すると春藍に連絡」
「は、はい」
　良馬は春藍への連絡を指示し、ギンガは春藍の山南艦長に接近中の艦船が時空管理局の艦である事、その対処は　まほろば　が行う旨を伝えた。
　ヴォルフラムの接近は早々に地球側に捕捉され、警戒体制の全艦は

一時緊張状態になった。
それは接近するヴォルフラムも同様だ。
「接触まであと５０秒です！」
「通信長、念のため所属と船名を問い質して、回答しないようなら警告を送れ」
「はい」
新見からの報告に、良馬は念の為、接近中の艦船が時空管理局の艦なのか否かの確認を指示するようにギンガへと指示する。

次元航行艦　ヴォルフラム　ブリッジ
「で、でけぇ・・・」
こちらの接近を知った防衛軍の軍艦一隻が、ヴォルフラムへと近づいてくる。
そのフォルムを見て、ブリッジのクルーは皆唖然としている。
管理局：いや、どの管理世界の中でも見た事のない艦影・・・
管理局とは設計思想が全く異なる艦・・・
戦うためだけに生み出されたまさに黒鉄の要塞・・・
その艦が今まさに自分たちに近づいてきている。
その艦影はヴォルフラムのクルーたちを圧倒させるには十分な姿だった。
（あれは、ヤマトやない・・・フェイトちゃんたちを救助した　まほろば　っちゅう艦やな・・・）
接近中の艦船がヤマトではなく、まほろば　と判断したはやて。
ヤマト　と　まほろば　は確かに両艦とも水上艦を模した姿をしているが、艦の大きさ、武装の数、艦の造りが若干異なる。
ヤマトの画像を何度も見た事のある、はやて　はヤマト　と　まほろば　の違いを知っていた。
そこへ、
「接近中の艦船より、通信です。『　貴艦ノ所属、艦名ヲ求ム。我、地球防衛軍所属戦艦　まほろば　也　』・・・以上です」
（やっぱり、まほろば　やったか・・・）

はやては、自分の予想通りの結果を聞いた後、通信員に命令を下す。
「まほろば　にこっちの所属と艦名、それに要件として『かの大型艦の名を知りたい』と打電してや」
「りょ、了解」
どのみち、詳しい事を教えて貰えるわけがなかろうが、艦名位は訊ねても良いだろう。
それにしても、今ここに強硬派の局員が乗り合わせていなかった事は何よりの幸いだ。
と、言うよりもはやて自身が六課の時と同じように、この艦の乗員を選んだのだ。
次元の海が荒れている中で、自分が艦長を務める艦に危なそうな火種を持ち込む様な真似は極力避けたかったためである。
もし、この場に強硬派の局員が乗り合わせていたら、
「相手は四隻だが、こちらは管理局の新型艦なのだから負ける筈がない!!」
「接近中の艦船を臨検し、拿捕しよう」
等と明らかな死亡フラグを立てていただろう。
そんな事をしても無視されるか最悪撃破されてしまう。
しかし、折角防衛軍と接触したのだ。
はやても手ぶらで帰るつもりは全くなかった。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「接近中の艦船より返信『　我、時空管理局所属、ヴォルフラム。かの大型艦の名を知りたい　』…以上です。如何いたしますか?」
ギンガがヴォルフラムからの通信文の内容を良馬に伝え、指示を求める。
「艦名ぐらいならいいだろう…通信長、『春藍』の艦名を管理局の艦に送ってやれ」
「了解」
ギンガはヴォルフラムに通信を送った。

次元航行艦　ヴォルフラム　ブリッジ
「まほろば　から回答。あの大型艦の名は『春藍』であるとの事です」
「『春藍』か・・・・鮮明な映像データは取れる？その他の二隻の戦艦もや・・・・」
「はい、今とっています」
ここはいわば宇宙の公海・・必要以上に挑発しなければ情報収集は認められている。
「モニターに出せるか？」
「はい、映像データ出します」
太陽からも遠く離れた太陽系外空間ゆえ、処理した映像だが、それでも春藍の艦影は比較的鮮明だった。
「推定全長は４５０メートル以上、質量は推定２０万トンクラス。主な武装は艦首に高エネルギー砲らしき構造物を三門、三連又は四連大型砲塔が五～六基。全体的な形状からみて、防衛軍の新型艦と思われます」
「な、何て艦だ・・・・あのヤマト級ですら我々の理解を越える艦なのに・・・・」
グリフィスが　まほろば　春藍を見て、震える声で言う。
「これは、明らかにあちらさん（第二の９７管理外世界）からのメッセージなんやろうな・・・・我々は独自の道を歩む。故に管理局はその邪魔をするなという警告やな・・・・」
（フェイトちゃんやティアナの言う通り・・フェイトちゃんたちをミッドに還したら、もうウチら、管理局と関わりたくないと言う意思がひしひしと感じるわ・・・・）
春藍の存在・・そして、先日フェイトやティアナからの通信にてやはり、防衛軍と管理局は相容れない存在なのだと思う、はやてだった。
「・・・・」
そして、
（こりゃあ、管理局なんて話にならんわ・・・・）
自分が所属している組織と第二の地球の宇宙軍が所有している艦船の性能の差を映像では無く間近で見て、思い知らされた。

「艦長」
「なんや？」
　観測をしていたオペレーターがはやてに報告を入れるが、彼女はその報告を聞き、さらに驚愕する事になる。
「まほろば、春藍からは人の・・生体反応があるのですが、残りの二隻には全く、生体反応がありません」
「なんやて!?」
「観測ミスとかではないのか？」
　グリフィスが訊ねるが、
「いいえ、三度、確認しましたが間違いありません」
「と言う事はあの同型艦の二隻の戦艦は無人で航行していると言う事か!?」
「だと・・・思います。恐らく、春藍からの遠隔操作で航行しているものと思われます」
「なんちゅう技術や・・・戦艦を人っ子一人乗せずに操作できるなんて・・・」
「あの艦はまさに、戦艦の形をしたアンドロイドと言っても過言じゃありませんね」
　絶句しているブリッジクルーの中にあって、通信担当のオペレーターは黙々と己の職務を進めていた。
「地球艦隊、右に転針して離れていきます・・・更に　まほろば　より入電、『　貴艦の航海の無事を祈る　』・・・以上です！」
「艦長、追跡しますか？」
　オペレーターの報告に、副長のグリフィスが引き続き追跡するかをはやてに訊ねるが、
「いや、これ以上は無理や。やめとこう」
　はやてはこれ以上の追跡を断念した。
「どのみちこの艦では追いつけないし、これ以上追跡すれば、防衛軍からの疑惑を買う可能性がある。まほろば　に感謝の意思を伝えればそれでええ。本艦も予定の針路へと戻るで」
「わかりました」

これ以上留まれば地球防衛軍から警戒されかねない。
収穫は十分にあったのだ。
ただ、コレを見て、本局の連中が益々第二の９７管理外世界を管理世界へ編入させようと躍起にならないか心配であった。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
管理局の艦と遭遇すると言うイレギュラーはあったが、戦闘も無く、航海は順調そのものであった。
「艦長、当直時間が終了しました。交代します」
副長の新見が良馬との交代を伝えに来た。
「そうか。現在の針路、速度は・・・・この先の針路状況は・・・・」
良馬は新見に現在の航行速度と針路、航路状況等ここまでの航海の状態と状況を伝え、これから先予想される針路状況を伝える。
「それじゃあ、後を頼む」
「ご苦労様でした」
互いに敬礼し、新見は当直任務につき、良馬は緊急事態が無い限り、次の交代までの間、暫しの休息に入った。
艦長室に入った良馬は、食事よりも睡眠を欲していたので、軍帽とスカーフ、手袋を取り、ジャケットと靴を脱いでベッドへと入る。
「ん？・・・・ユリーシャ・・もう少し詰めてくれ」
「ん・・・・わかった・・・・」
ベッドに入ると、そこには既に先客がおり、良馬はその先客であるユリーシャにもう少し奥へ詰める様に言うと、彼女はもぞもぞと奥へと詰めた。
それから十数秒後・・・・
「・・・・うわぁぁぁぁぁあ!!」
良馬は大声をあげてベッドから転がり落ちた。
「ん？・・・リョーマ・・うるさい・・・・」
寝ぼけまなこを擦りながら、ユリーシャはムクっと上半身を起こした。
「むっ!?」

キュピーン!!
まほろば　の艦橋で新見と共に当直勤務をしていたギンガが突然辺りを見渡した。
「どうしたの？通信長」
「いえ、お邪魔虫が出てきた様な気がしたので・・・・」
「？」
ギンガの言葉に新見は首を傾げた。
そして、そのお邪魔虫・・・もといユリーシャを発見した良馬は、
「ユリーシャ、何で君がここに!?」
「はてな？」
ユリーシャは、良馬の質問の意図が分からない様子で首を傾げる。
「いや、『はてな？』じゃなくて、何で君がここに居るのかを聞いているの!?」
「リョーマが行くから」
「あのねぇ～」
ユリーシャが月村邸で今回の試験航海の話を聞いていた事は気配から何となくだが、察していた。
でも、まさか、密航して来るとは思いもよらなかった。
しかし、今更地球へ戻る訳にもいかないし、ましてやここで放り出すわけにもいかない。
また、彼女一人の為に、近くのパトロール艦を呼び寄せる訳にもいかない。
「はぁ～・・・・ここまで順調な航海だったのに、ここでまさかの問題浮上だ・・・」
良馬はやれやれと言った様子で艦橋に居る新見に連絡を入れた。
ユリーシャの密航はあっという間に広がり、まず、春藍の副長であり、ユリーシャの父親である守は、ユリーシャの行動に当初、呆れその次には延々とお説教を始めた。
父からのお説教を受け、涙目のユリーシャを見た山南司令は、
「まぁ、来てしまったものは仕方がないので、計画に支障が無い様に面倒をみてやれ」

と、訓練終了まで、ユリーシャの　まほろば　乗艦を認めた。
ただ、ギンガはやきもちを焼いた様に頬を膨らませていた。
そして、父親である守は良馬に「くれぐれも、娘に破廉恥なことはするなよ」と釘を刺した。
ユリーシャの　まほろば　乗艦が許可された後、良馬は地球の忍の下にも連絡を入れた。
きっと今頃、ユリーシャの姿が見えないと大騒ぎをしているに違いない。
連絡を入れると案の定、忍が人海戦術でユリーシャの捜索を行おうとしていた。
表向き、ユリーシャは月村家の遠縁の親戚であるが、その実はイスカンダルの王族：表にしろ裏にしろ、重要人物には違いない。
行方不明になり、万が一の事があれば、重大な問題となるので、忍が力を入れるのも当然の事であった。
無事に居場所がわかったユリーシャであるが、彼女は忍よりもノエルから淑女たる行動とは何たるかのお説教を受ける羽目になった。
これには流石の良馬も弁解は出来ずに、後でユリーシャを　まほろば　の食堂に連れて行ってやり、ディアーチェが作った料理で慰めてあげようと思った。
管理局の艦との遭遇、そしてユリーシャの密航と言うイレギュラーがあったが、まほろば、春藍は順調に星の海を進んで行った。

九十二話　嵐は来る

我々地球人類が住まう太陽系から、実に約４０万光年を隔てたところに位置する白と黒に重なる二重銀河系星雲・・・。
その二重銀河をほぼ支配下におくのが暗黒星団帝国ことデザリアム帝国だった。
その首都星たるデザリアム星では・・・・。
この巨大銀河帝国とも言うべき星間帝国の頂点に立つ人物〝聖総統〟の住まいと執務所を兼ねる大宮殿の謁見室に二人の男が黙然と座っていた。
前に座るのは暗黒星団帝国軍中将のカザン。
その後ろに座るのは、彼の右腕とも言える青年士官のミヨーズ大佐。
そして少し経った頃、謁見室に若い女性が入ってきた。
眉がないカザンら男性とは異なり、切れ長の眼の上には細いながらはっきりと眉がある。
そして、なにより、彼女が違うのがその女性の肌の色だった。
カザンやミヨーズは、共に青白い肌の色をしていたが、この女性は地球人と変わらぬ肌の色・容姿をしていた。
その女性――サーダ――の姿を認めたカザンとミヨーズは起立し、目礼する。
「お忙しい中、お越しいただきましてありがとうございます。カザン中将、ミヨーズ大佐」
サーダは一旦言葉を止め、口調を改めた。
「畏くも、聖総統がお出ましになります」
居住まいを直した一同の前に、二重銀河の頂点に立つ男、聖総統スカルダートがゆっくりとした足どりで現れる。
臣下が直立不動で迎える中、玉座に座ったデザリアム帝国聖総統スカルダートは、カザンを手招いた。
「カザン、ミヨーズ・・君たちがここに呼ばれた理由は解っているな？」

「「はっ」」
臣下の回答に頷いたスカルダートは玉座から立ち上がると、改まった口調で告げる。
「カザン・・現時刻を持って太陽系攻略軍司令官に任命する」
「ありがたき幸せでございます。聖総統閣下」
「そして、ミヨーズ。現時刻を持ってプレアデス級戦艦、ガリアデス艦長兼第二特務艦隊司令官に任命する」
「承知いたしました。聖総統閣下」
「うむ・・君たちも知ってのとおり、この国に残された時は無限ではない。我が臣民の将来は、君の手腕にかかっているといってもいい。この帝国のさらなる繁栄のために、力を尽くしてほしい。頼んだぞ」
国家元首の言葉に、カザンとミヨーズは頭を垂れて奉答する。
スカリエッティ本人と彼の研究技術を手にしながらも、デザリアムはある大きな問題を抱えていた。
彼の研究技術だけでは、帝国全体の問題解決には至らなかった。
その為、聖総統は従来の計画も同時に進めたのだ。
「我が身に余る光栄。この身に代えまして太陽系を制圧し、新たなる帝都を建設してご覧に入れます」
カザンの奉答に満足したスカルダートは更に続けた。
「うむ、君の元には主力として第三艦隊に加え、第二特務艦隊、第四艦隊、並びに第二・第五機動機甲師団をつける。直ちに準備し、完了次第太陽系へ向け出撃しろ」
「はっ!!」
「カザン、吉報を待っておるぞ」
「おかませ下さい。聖総統閣下」
告げ終わるや、スカルダートは玉座につくことなく、カザンたちの敬礼を受け、サーダを従えて謁見室から歩み去った。
「早速出撃準備にかかる。ミヨーズ、関係する司令官、艦長、参謀長を召集するのだ」
「承知しました」
謁見室を退出したカザンは、ミヨーズに最初の命令を下した――。

地球が暗黒星団帝国の手によって侵略されそうになっていようとは知る由も無く、その地球、海鳴市の一角にある翠屋の跡地では・・・・

「ここが・・・・翠屋の有った場所・・・・」

燦然と輝く太陽の下、ヴィヴィオは紅葉の案内の下、海鳴にある翠屋の跡地に来ていた。

自分の知る翠屋と違い、そこは何もない更地であり、立札が一つ立って居るだけだった。

今は何もない更地であるが、この土地は紛れもなく、翠屋があった場所で、紅葉が親から相続した土地で、紅葉の所有物件である。

「さてと・それじゃあ始めますか」

「は、はい」

今日、紅葉とヴィヴィオが来たのは、ただ単にヴィヴィオに並行世界とは言え、未来の翠屋の跡地を見せに来たわけでは無い。

更地と言う事で、定期的に手入れをしなければ、あっという間に雑草やほうき草が生い茂る荒れ野になってしまう。

その為、今日紅葉はここへ草刈りに来たのだ。

ヴィヴィオに関しては紅葉が誘った訳では無いが、彼女が、この世界の翠屋について知りたかったため、紅葉に訊ねた所、遊星爆弾のため、店は吹き飛んでしまい、今は更地になっている事を伝え、今日はその更地の手入れに行くと言ったら、ヴィヴィオも手伝うと言う事で、紅葉について来たのだ。

紅葉の話から店は吹き飛び、今は更地になっている事を事前に知っていたヴィヴィオであったが、いざそれを目の当たりにすると、神妙な気持ちになる。

ほんの少し前、ヴィヴィオがお世話になっていた母の実家には確かに店が存在し、店内は笑顔と活気に満ちていた。

それが今、目の前にあるのは何もない更地・・・・幼いながらも沈んだ気持ちになる。

とは言え、いつまでもセンチメンタルに浸っている訳にはいかない。

照り付ける太陽の中、草むしりは大変な作業であるが、海風がまともに通り、しんどい暑さではない。
尤も、冬は寒風が吹きすさぶため、寒い・・・・。
ガミラス、そして白色彗星の侵攻を受けた地球は、再建のやり直しとなった。
海鳴の地がヴィヴィオの・・そして紅葉の幼い頃に知る海鳴に戻り、再び賑わうのは、果たしていつになるのか――。
紅葉はそう考えながら、草むしりをする手を一度止め、海鳴の街並みを見渡した。

お昼時、紅葉は念話でルシフェリオンに話しかけた。
（ねぇ、ルシフェリオン）
（なんだ？レディー？）
（暗黒星団帝国は〝来る〟と思う？）
（・・・・）
ガミラス・白色彗星帝国との戦争は、紅葉から多くのものを理不尽に奪い去った。
自分以外の家族、親戚、友人等々・・・・。
あんな思いはもうごめんというのは、紅葉に限らず、あの戦争を生き延びた人たち全てに共通する思いだろう。
（暗黒星団帝国はまだその実態が把握されていない・・・・イスカンダルで接敵したのは氷山の一角とも言っていた・・・・彼らがイスカンダルへ来たのはエネルギー採掘のためだった・・・・その採掘を邪魔した地球は彼らにとって恨まれているだろう・・・・その過程で彼らが地球に対し、報復に来ないとは言い切れない・・・・）
（あんなことはもう二度と起こってほしくないんだけどな・・・・）
（うむ、それは私も同意見だ。しかし、暗黒星団帝国も話を聞く限りでは戦争こそが正義という考えの持ち主の様だ・・・・）
（・・・・）
ルシフェリオンの考えを聞いて、俯く紅葉。
戦争での勝利こそが正義・・・それは、かの白色彗星帝国がそうだっ

た。
かの帝国は征服（侵略）こそが正義であり、それをやめる時は滅亡の時だというのが国是だった。
立ち止まったら死んでしまうあたりはまさに大海原を回遊するマグロだ。
ならば、彼らに侵略される国家はマグロに捕食されるイワシやアジと言ったところだろう。
無論、地球連邦が掲げる正義とは到底相容れず、何もせずに捕食される訳にはいかず、もし彼らが戦争を仕掛けてくれれば彼らとは戦うしかなかった。
その結果、残念だが、勝者こそが正義という風潮はなかなか改まりそうにない

白色彗星帝国との戦いからまだ一年も経っていないが、地球防衛軍は躍起になって戦力の整備を行っており、その象徴といえるのが、先日就役が発表されたアンドロメダ改級宇宙戦艦の春藍だ。
その他にも無人艦や旧白色彗星帝国軍からの鹵獲・改造編入艦がある。
旧白色彗星帝国軍からの編入艦に対しては少なからぬ拒否反応があった。
これに対し、連邦議会で説明に立った藤堂司令長官は、
「我が軍の艦船は白色彗星帝国軍のそれに全く劣るものではありませんが、かの国の艦船は長距離侵攻作戦に適したもので、居住設備等、部分的には我々が見習うべき部分も少なからず見受けられます。無論、これらの点は今後の計画に活用することになりますが、我が軍は未だ再建半ばであり、使える艦船はたとえかつての敵国のものであっても、どんどん活用しなければ戦力が足りないのです！」
なりふり構わぬ戦力の再建は、偏に新たな侵略に備えてのこと。
ガミラスとは奇妙な休戦状態、白色彗星帝国の復讐戦も、先日の戦闘を最後にようやく終息した状態だ。
となれば、イスカンダルへの侵略を図った暗黒星団帝国が新たなる

侵略者としてやってくる可能性が相対的に高くなる・・・と断言していた。
それに例の時空管理局もその実態は完全につかめておらず、警戒するに越したことはない。
転んでもただでは起きるなかれ。
石に躓いたならばその石を持ち帰って詳しく調べろ・・・。
地球防衛軍の技術部門は、イスカンダルはもとよりガミラス、白色彗星帝国軍、さらには時空管理局からも盗める技術はどんどん盗み取っているのだ。
自分たちの平和を勝ち取るために・・・。
とはいえ、際限なく戦力を揃えられるわけではない。
全てが再建途上の地球は人材も資材も資金も限られている。
地球を取り巻く情勢は相変わらず不安定であるため、軍の予算は比較的多くまわされるが、それは他の分野にしわ寄せを強いる事であり、それを当然とすることは許されず、少しでも効率的に予算を使わなければならない。
尤も、勘違いする者は必ずいるもので、軍人や政治家の中には思い上がった言動をとる者も出ており、市民から強いブーイングを買ったケースも複数報告されている。
軍人に関しては、
「守ってやっている等と考えている者は我が軍には要らん。即刻退官願を書け！」
と、人事局長はそう檄を飛ばした。
また同様の檄を飛ばした指揮官は多数いた。
政治は当然として軍の場合、人の腐敗が命取りになることは往々にしてある。
ましてや、今のような軍の存在感が相対的に増している時こそ注意しなければならないのだ。
紅葉が見上げる空は青く澄んでいる。
（青空はどこまでも、いつまでも澄んでいてほしいんだけどな・・・）

（そうだな、レディー）
しかし、少女の願い空しく、再び空が焦がされる時が静かに忍び寄っていた――。

紅葉とヴィヴィオが翠屋の跡地で草刈りをしている中、フェイトとティアナは今日もＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　テスタロッサでＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬを楽しんだ後だった。
「はぁ～私たちこんな事をしていていいのかしら？」
ティアナはＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａのフードコートから外の景色をぼぉ～と眺めていた。
この地球に来てからフェイトとティアナのする事と言えば、決まった日の定時通信と防衛軍側との意見交換会ぐらいで、その他は月村家の地下アリーナで、フェイトや紅葉、ヴィヴィオとの模擬戦や横須賀市や海鳴市に出てこうしてＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをしたり、ウィンドウショッピングをしている。
その費用は皆、月村家から出ている。
半ば紐生活を送っている気分である。
管理局の高官からすれば、「何故軍事機密の諜報活動をしないのか？」と言われそうだが、何時迎えが来るか分からない中でそんな活動できるわけないし、フェイトもティアナもしようとも思わない。
仮に防衛軍の軍人がミッドに次元漂流したら、管理局はここまで厚遇するだろうか？とさえ思う。
ティアナが物思いにふけっている頃、フェイトはフードコートで注文した軽食とドリンクが乗ったお盆を持って、ティアナが確保した席に向かっている時だった。
その時、
トスッ
フェイトの太ももの部分に何かやわらかい物が当たった。
「ん？」
フェイトが視線を下げてみると、其処には薄紫色色でアホ毛が一本ぴょこんと立ったヴィヴィオ位の女の子が居た。

女の子の手を見ると、其処にはドリンクボトルが二本抱えられており、その様子から察するに、彼女は手元の注意が注がれており、前に注意が向かないため、フェイトにぶつかったようだ。
幸い蓋がしっかり閉まっていた為、彼女が抱えていた飲み物はこぼれていない。
「す、すみません・・・」
意外と無機質な声でフェイトに謝罪する女の子、
フェイトはその子がＪＳ事件時のルーテシアに通ずる雰囲気を感じたが、それ以前にフェイトは、目の前の女の子と何処かで出会った様な気がした。
フェイトがジッと彼女から目が離せないでいると、その視線に疑問を感じたのか、女の子は首を傾げた。
そこへ、
「七緒、どうかしたのかい？」
と、男性の声が聞こえた。
「あっ、パパ・・・」
女の子の父親が来たようで、振り向くとフェイトの目は大きく見開いた。
「っ!?」
今、フェイトの眼前に居る男は彼女にとって忘れはずの無い男だった。
「ジェイル・・・スカリエッティ・・・」
そう、フェイトの目の前に居る男はかつてミッドにて大規模なテロ事件を起こした男、ジェイル・スカリエッティがいたのだ。
「な、何でお前が・・・」
搾り出す様にフェイトはスカリエッティがここに居るのかを訊ねる。
「ん？」
一方、スカリエッティの方は、フェイトの質問の意図が掴めないのか首を傾げている。
そこへ、

「Ｍｒ．スカリエッティ、ちょっといいですか？」
店員がスカリエッティを呼ぶと、
「ああ・七緒、すまないがもう少しここ（フードコート）で待っていてくれ」
「うん・・・」
スカリエッティは自分を呼んだ店員と共に姿を消した。
そして、その場には憎悪を浮き彫りにしたフェイトと七緒と呼ばれた女の子だけが残された。
やがて、七緒は何事も無かったかのようにその場を去ろうとしたが、
「ちょっといいかな？」
フェイトは七緒に話しかけた。
「ん？」
「少し、お父さんについて話を聞きたいんだけど・・・」
「・・・『知らない人について行っちゃダメ』ってお姉ちゃんやパパに言われている」
七緒は意外としっかりした子で、彼女は、フェイトに対してはっきりと拒絶の構えをとった。
そして、テトテトとテーブル席の方へ行ってしまった。
このまま七緒について行っても彼女に不審を抱かれる為、やむをえずフェイトはティアナの下へと戻った。
「えっ!?スカリエッティが居た!?」
そして、フェイトは先程、スカリエッティが今この場に居た事をティアナに話した。
「でも、何で彼がここに？彼は刑務所で服役中の筈じゃあ・・・？」
「分からない・・・でも、確かにスカリエッティだったわ・・・店員さんからもそう呼ばれていたし・・・」
「それでも妙です・・・仮にスカリエッティが脱獄したのなら、この前の定期通信で管理局が伝える筈ですし、定期通信後に脱獄したとしてもこの地球へ来るにしては余りにも時間が無さすぎます。それに移動手段だって・・・」

ティアナの言う通り、管理局との最後の定期通信はつい先日でその時にはやてが新型の巡航艦の試験航海に行く事を知らされたばかりだ。
その後でスカリエッティが脱獄したとしてもこの地球に次元漂流したとしてもあそこまでこの地球に馴染むには余りにも時間が少なすぎる。
そもそも脱獄してもどうやってこの世界に来たのだろうか？
それ以前にスカリエッティの身辺で七緒と言う少女は確認されていない。
しかし、スカリエッティは既に暗黒星団帝国の手によって密かに留置されていた拘置場から救出されていた。
だが、はやてもなのはもフェイトにいらぬ心配をかけまいとスカリエッティの一件もボラー連邦の一件も話していなかった。
はやてはボラー連邦の一件で魔導師が大勢殉職してしまったので、高ランクの魔導師と思える紅葉のスカウトをしたかったのだが、フェイトとティアナからは紅葉は管理局からのスカウトには応じることは無い事と管理局と管理世界の揉め事を管理外世界出身の紅葉に負わせるのは筋違いだと紅葉を擁護する様な発言をしていた。
ボラー連邦の一件を知らなかったとはいえ、フェイトとティアナのあまりにもドライな対応にはやてもなのはも驚いていた。
だが、仮にフェイトとティアナがボラー連邦の一件を知っていたとしても紅葉を管理局へスカウトすることはないだろう。
ボラー連邦の一件：管理局の敗北理由を知ればなおさら、紅葉を管理局へはいれないだろう。
「もしかして、紅葉やフェリシアさん、ディアーチェさん同様、フェイトさんが見たスカリエッティもこの世界のスカリエッティって事は考えられませんか？」
これまで自分たちの知り合いのそっくりさんやこの世界における子孫同様、先程フェイトが見たスカリエッティもそれと同類なのでは？と、仮説を立てるティアナ。
「兎も角、本人に聞いてみてはどうでしょうか？」

ティアナはそう言うが、フェイトとしてはあのジェイル・スカリエッティと再び対峙しなければならないのかと思うと、腸が煮えくり返る思いだった。
それからしばらくして、
「どうもありがとうございました」
「いやいや、気にしないでくれたまえ」
フードコートに再びスカリエッティが姿を現した。
「フェイトさんの言う通り本当にスカリエッティそっくりですね・・・っていうか本人そのままですよ」
改めて見ると、ティアナの目の前に映るスカリエッティはＪＳ事件で逮捕したスカリエッティと瓜二つの容姿・・・と言うかまんま本人と変わりない容姿だった。
しかもファミリーネームまで同じときた。
「いくわよ、ティアナ」
「は、はい」
フェイトとティアナはスカリエッティと接触する為、席を立った。
「あ、あの・・・少しよろしいでしょうか？」
フェイトは固い表情のままスカリエッティに話しかける。
「おや？君は・・・？」
「さっきの人・・・」
フェイトとティアナはこのスカリエッティと瓜二つの人物から話を聞いた。
すると、彼の名前は、ファミリーネームはスカリエッティ姓であったが、名前はジェームズ・・・ジェームズ・スカリエッティと言うフルネームだった。
容姿は兎も角、名前から察するに彼は自分たちがミッドで逮捕したジェイル・スカリエッティではなく、彼はこの世界におけるスカリエッティの子孫であると考えられる。
当然、彼は犯罪者でも人造人間でもなく、普通の人間として生まれて来たスカリエッティの子孫だった。
そして彼は、なんとＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの製作者であった。

その事実にフェイトは物凄く納得がいかなった。
目の前に居るスカリエッティは自分の知っているスカリエッティではない。
それは分かっている筈なのだが、スカリエッティと同じ名前、同じ容姿、同じ声の人物がこんな素晴らしいゲームを創る筈がない。
スカリエッティは人の命を何とも思わない外道だ。
無意識的にフェイトは拳をギュッと握る。
（フェ、フェイトさんこのスカリエッティはあのスカリエッティじゃないですよ・・・抑えて下さい）
フェイトの余りにも険しい表情にティアナは念話で自重する様に伝える。
只似ていると言うだけで、殴り掛かったら、時空管理局執務官の資格などこの世界では役にたたず、即座に障害罪で警察に逮捕される
そして、彼の話が進んで行くと、この世界のスカリエッティには、七緒の他に後四人・・・計五人の娘が居ると言う。
彼はその娘の写真を見せてくれた。
（こ、これは・・・）
（予想はしていましたけど・・・）
写真には、管理局の司法取引を拒否し、スカリエッティと共に刑務所に収監された戦闘機人たちと唯一の死亡が確認された戦闘機人の姿写っていた。
長女の一架・スカリエッティはウーノの容姿と瓜二つで、彼女はミッドのスカリエッティ同様、この世界でもスカリエッティの秘書的存在だった。
次女の二乃・スカリエッティはＪＳ事件時に唯一死亡が確認された戦闘機人のドゥーエと同じ容姿をしていた。
彼女は、普段外資系企業でＯＬをやっておりＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬが成功するまで彼女がスカリエッティ一家の生活費のすべてを稼いでいた。
そして、スカリエッティ家で唯一の自動車免許所持者で車を使っての外出時には彼女が運転手を務めている。

その件に関してスカリエッティは、『二乃には随分と苦労を掛けた』と言っており、その時の表情を見たフェイトとティアナは、驚愕した。
あのスカリエッティがこんな顔をするなんて・・・・
と、そう思っていた。
三女の三月・スカリエッティはスカリエッティのアジトにて、フェイトと対峙したトーレと同じ容姿で、彼女は現在高校三年生で空手部所属しており、ボーイッシュな性格らしい。
四女の四菜・スカリエッティは『ゆりかご』にて、なのはの怒りの砲撃をもろに食らった哀れな戦闘機人、クアットロと同じ容姿で、彼女はミッドのクアットロ同様少し性格が歪んでいる中学三年生。
そして五女の七緒・スカリエッティは小学生ながら機械方面に詳しく父親（スカリエッティ）の助手としてシステム構築のサポートを行っている。
性格は内気だと言う。
今日もこの店のメンテの為に父と一緒に来たのだと言う。
（そうか!?この子、何処かで見たと思ったら、あのセッテって言う戦闘機人と似ていたんだ）
フェイトはスカリエッティのアジトで戦った戦闘機人と七緒の容姿が似ている事に気がついた。
セッテと七緒の身長が余りにも違いすぎる為、最初に七緒を見ても気がつかなかったのだ。
スカリエッティ家の家族構成を聞いたティアナは、
「スカリエッティ・さんは随分若い様に見えますけど、そのお歳で、これだけの娘さんを？」
と、スカリエッティの年と娘の大きさにやや疑問を感じた。
「わ、若気の至りとでも言っておこう・・・・」
スカリエッティはティアナから視線を逸らし、自分の年の割に娘の年齢が近そうな事実から話を逸らそうとしていた。
「スカリエッティさんの奥さんってどんな人なんですか？」
そこで、ティアナがスカリエッティの奥さんについて訊ねると、彼は表情を曇らせて、

「ガミラスとの戦争でね・・・・」
と、そこまで呟いた。
「あっ・・・・」
「・・・・」
ティアナもフェイトも彼の呟いた言葉の意味を即座に察した。
「まぁ、妻の事はもう割り切っているから大丈夫だ・・・今の私には可愛い娘たちがいるのだから・・・・」
と、彼は七緒の頭を撫でた。
そこには自分たちの知る元広域指名手配犯・・・・犯罪者であったジェイル・スカリエッティの面影は一切なく、フェイトもこのスカリエッティは自分の知るスカリエッティではないと思い始めた。
一通り話をした後、スカリエッティは七緒と共に店を後にした。
互いに手を繋いで帰って行くその様子はまさしく親子であり、スカリエッティのその姿にフェイトとティアナ余りにもギャップを感じたのは言うまでもなかった。
なお、彼の亡くなった奥さんと言うのが、聖王教会のシスターであるシャッハに似ていた事に後で気づいたフェイトだった。

時空管理局　本局
はやてが定時連絡でもたらした情報にクロノも息を飲む。
「それは本当かい!?はやて」
「間違いあらへん。随伴していたのは月村艦長の　まほろば　やったので、ほんで駄目元で照会したところ、艦名は『春藍』と回答してきたんや・・・・フォルムは艦首に三基の波動砲が特徴的やった超大型戦艦や・・・・しかも防衛軍は戦艦を無人でコントロールしとった・・・・」
ヤマトは十分に強力な戦艦であったが、まほろば　はそれよりも強力な艦・・そして今回、はやてが見たと言う春藍はまさに現在の防衛軍の最強の戦艦と言ってもいい。
さらに防衛軍は無人で宇宙戦艦を操艦させる技術も有していた。
「春藍や無人艦の事は戻ってから詳しく協議する事にしよう」
「了解や」

はやてとの通信を切ったクロノは、
（はやての報告を受けて〝海〟のお歴々たちがいきりだたなければ良いが・・・）
クロノははやてと同じ懸念を抱いた。
無人で艦をコントロールする技術は管理局でも未だに成功していない。
その技術を既に防衛軍は持っている。
管理局としたら十分な脅威でもあり、手にしたい技術でもあった。

その頃、シリウス方面へ向かっていた　まほろば　と　春藍であったが、ただ何もすることなく、シリウスへ向かっていた訳では無い。

シリウス星系、宇宙戦艦　まほろば
「前方、１１時方向から敵機接近!!数１５!!」
「面舵一杯!!左舷対空射撃用意！」
「了解！」
「３時の方角から新たな編隊接近！」
「艦首下げ舵３０！右舷対空射撃用意！主砲三番を右舷９０度へ直角旋回!!上下角４７度!!」
「はいっ！」
試験航海の計画の中にはこうしたコスモタイガーやバルン・ダミーを使用してでの戦闘訓練も入っていた。
〝仏の山南〟の課した演習という名の訓練はなかなか厳しく、地球防衛艦隊再建当初に土方総司令が課していた訓練とさほど変わらぬ苛烈さ。
敵は待ってくれないという事で、抜き打ち訓練や１７時間ぶっ通しの長時間演習も行われていたのだが、それでも事故による殉職者や重傷者が出ていないことは快挙といえた。
しかし、彼らが知らぬ間に地球は新たな侵略者たちに狙われていた。

おまけ

仰天メンテナンス　クリス編

「あれ？クリス、どうしたの？」
先日、リニスよりデバイスを貰ったヴィヴィオであったが、そのデバイスのクリスがここ最近、調子が悪い様子だった。
起動するにも貰ったばかりの頃と比べると時間が掛かるし、外装のぬいぐるみの表情もなんか冴えない様にも見える。
「どうかしましたか？」
そこへ、紅葉がヴィヴィオに声をかける。
「あっ、紅葉お姉ちゃん。クリスの調子が悪いみたいなの・・・」
ヴィヴィオが自分の愛機を心配そうな表情で見ながら紅葉に言う。
「うーん・そろそろメンテナンスが必要なのかもしれませんね」
紅葉はヴィヴィオから受け取ったクリスを見ながら、メンテナンスをする必要があると言う。
「めんてなんす？」
聞き慣れない言葉にヴィヴィオが首を傾げる。
「デバイスの健康診断です」
紅葉の『健康診断』と言う言葉でヴィヴィオは『メンテナンス』の意味を理解した。
ヴィヴィオ自身、学校で行われている健康診断を受診しているからだ。
メンテナンスを行うと言う事で、フェイトのデバイスとティアナのデバイスも序にメンテナンスを行う事になった。
「メンテナンス・・・またアレをやるのね・・・」
紅葉流のメンテナンス方法を知っているティアナは「はぁ～」とため息をつく。
しかし、フェイト、ティアナの両デバイスは、心なしか楽しみにしている様子でピカピカと嬉しそうに点滅している。
「ヴィヴィオ、これからやるメンテナンスは、物凄い特別な方法でミッ

ドでは、あまり真似しないようにね。特になのはママの前では・・・」
「？」
フェイトがミッドで紅葉流のメンテナンス方法やって、真似されたりしては少し恥ずかしいので、フェイトは予めヴィヴィオにミッドでは真似しない様に言う。
やがて、フェイトたちが見た紅葉流独特のメンテナンス準備が揃うと、紅葉はぬいぐるみからクリスの本体を取り出し、手の中でギュッと握り、目を閉じる。
「・・・ふむ、この子の好みは・・・キャラメルミルクにココアですか・・・」
クリスの好みが分かると、早速紅葉は、クリスの好みとされるキャラメルミルクを作り始めた。
そして出来上がったキャラメルミルクの入ったカップにクリスを入れる。
なお、ヴィヴィオも紅葉が作ったキャラメルミルクを貰った。
その他にもフェイトのバルディッシュはホットパンチの入ったグラス入ったグラスに沈んでいる。
勿論紅葉のデバイス、ルシフェリオンとティアナのデバイス、クロス・ミラージュは、今回はヤマトの佐渡先生特製のヤマトカクテルを貰っていたので、ヤマトカクテルが入っているグラスの中に入っている。
「・・・」
ヴィヴィオは紅葉の作ったキャラメルミルクを飲みながら、目の前光景を見て、コレがデバイスのメンテナンス方法なのかと首を傾げている。
やがて、キャラメルミルクの中からクリスが引き上げられ、紅葉が一度水で洗い流して布巾で綺麗に拭いた後、ぬいぐるみに収納して、ヴィヴィオに手渡す。
ヴィヴィオは手渡された愛機に、
「クリス、何ともない？」
と、訊ねると、ぬいぐるみは「大丈夫」と言っているかのようにメ

ンテナンス前よりも確実に元気になっている様子だった。
後にヴィヴィオは密かに紅葉からこの独特のメンテナンス方法を伝授してもらい、ミッドでちょっとした騒ぎを起こす事となった。

九十三話　地球占領

時に西暦２２０２年・・・・。
それは漆黒の大宇宙を背景に移動する小さな黒いシミの様に見えた・・・・。
だが、それこそ巨大で不吉な前代未聞の事態を地球へと運ぶ恐怖の巨大飛行物体だった・・・・。

太陽系外縁、第十一番惑星軌道付近
銀河系中央側空域に敷設されている無人監視衛星が、何の前触れもなく直近にワープアウトしてきた物体を捉えた。
その物体は亜光速で監視衛星をフライパスし、冥王星に向けて飛び去っていく。
衛星からの信号はタキオン通信で地球に向けて放たれたが、その直後、各衛星はその機能を突然停止した。
衛星からの信号をキャッチした防衛軍司令本部と、針路上にある各基地や部隊は騒然となった。

地球　メガロポリス東京　地球防衛軍司令部
「エマージェンシー!!エマージェンシー!!」
「外洋センサー全て停止!!」
「どういう事だ？」
「もう一度チェックをしてみろ!!」
司令長官室で執務に当たっていた藤堂平九郎はすぐさま中央司令部に降り、参謀長の西郷ら幕僚と共に現状報告を受ける。
「外宇宙より飛来した未確認飛行物体は光速の９５％以上の速度で冥王星に向かっています。あと１０分で冥王星宙域に到達します！」
報告を受けた藤堂はスクリーンを見る。
そこには、水星から最外縁の第十一番惑星軌道や両極方面に展開している防衛軍の各戦力が表示されていた。

(・・・天王星以外の惑星は、冥王星から火星までほぼ一直線に整列している。誰の仕業なのかはともかく、太陽系の惑星が直列になることを見越した上で、あの物体を送り込んできたのではないのか?地球に向けて・・・)
「相変わらずこちらからの通信には応答せんのか?」
　藤堂と司令部入りをした西郷がオペレーターに訊ねる。
「はい。何の応答もありません」
「相原君、冥王星基地所属艦隊に至急通信を送ってくれ。こちらからの通信に答えない以上、領海侵犯とみなすしかあるまい・・・攻撃命令だ!!よろしいですな?長官」
「うむ・相原君、命令を伝えてくれ。それと念の為、大統領官邸にも通信を繋げ!」
　防衛軍司令部はこの未確認飛行物体を領海侵犯とみなして攻撃、撃墜する命令を下した。
　藤堂は、本能的にこれは侵略だと思っていた。
　そして、冥王星基地で撃破できるだろうかと言う不安も抱いていた。
　しかし、最優先すべきは市民の安全だ。
　過剰反応、独断専行と言われようが、自分たち軍人は全てを賭けて市民を守らなければならない。
　藤堂にとって三度目にわたる地球の未来を賭けた戦いが今、幕を開けた。
「了解。冥王星基地、冥王星基地。こちら地球防衛軍司令部。未確認飛行物体への攻撃を許可する」
　相原は冥王星基地に攻撃命令を打電するが、
「・・・」
　冥王星基地からは何の応答もない。
「・・・ん?これは・・・・冥王星基地、通信途絶!!」
「通信が途絶えた!?あの一瞬の内にか!?」
「未確認飛行物体、尚も速度を上げて地球へ接近中」
「ならば、土星のタイタン基地と木星のガニメデ基地にも攻撃命令を

!!」
「そ、それがタイタン基地、ガニメデ基地も通信が途絶しました・・・」
「なっ!?」
「その他にも海王星トリトン基地、天王星チタニア基地も通信が途絶しました」
「ど、どういう事なんだ？相原君」
　太陽系内の主要基地との通信が途絶したこの異常事態に通信関係のスペシャリストである相原に藤堂は事情を聞く。
「非常通信回線も使用しているのですが、どの基地も応答がありません」
　相原自身も様々な手を使い、各基地とコンタクトを取ろうとしていた様だが、やはり。基地からの応答は無い。
「何と言う速度だ・・・それに全ての基地が・・・」
　西郷は未確認飛行物体の速度に舌を巻く。
「未確認飛行物体さらに加速!!火星まであと一万五千!!」
　そうこうしている間に未確認飛行物体はもう地球と目と鼻の先まで来ていた。
「全市民に避難警報を発令しろ!!それと火星に一番近い防衛軍の艦はどれだ？」
「第十パトロール艇が一番近い艦です」
「艇長は誰だ？」
「古代進少佐です」
「急ぎ古代に連絡しろ」
「了解」
　その頃、古代が艇長を務めている第十パトロール艇は火星のすぐ近くへ来ていた。

　火星付近　第十パトロール艇　操縦室
「こちら、第十パトロール艇。艇長、古代進。ただいまより地球時間５５分後に火星基地に着陸する」
　古代が火星基地に通信を送ると、

「古代さん待っていました。聞いてください、今火星に未確認飛行物体が・・・」
火星基地との交信はコレを最後に途絶えた。
「火星基地?応答せよ。火星基地?」
「・・・・」
古代は呼びかけるが火星基地からの応答は無い。
「火星基地、謎の未確認飛行物体がどうしたというんだ!?火星基地、応答せよ!?」
「・・・・」
それでもやはり、火星基地からの応答は無い。
「くそっ、エンジン出力全開!!火星基地に向かって直進!!」
「了解」
古代は操縦士の小栗浩に命じ、速度を上げて火星基地へと急いだ。
その直後、謎の光球物体が火星軌道を通過して行った。
「なんだ?アレは?まさか、あの飛行物体のせいで火星基地との通信が途絶えたのか?」
「どうします艇長?あちらを追尾しますか?」
「いや、火星基地の方が心配だ。そちらを優先する」
「了解」
当初の予定通り第十パトロール艇は火星へと向かう。
そこに、
「こちら、地球防衛軍司令部。第十パトロール艇、応答せよ」
司令部から通信が入った。
「相原か?なにが起こっているんだ?」
スピーカーから流れ出る声で通信を送って来たのが、ヤマト元通信長の相原義一だとわかると、古代は急ぎ現状を訊ねる。
司令部ならば、自分たちよりも詳しい事情を知っているかもしれないと思ったからだ。
「それが、こちらからでは確認できません。未確認飛行物体から発する巨大な重力波が干渉して、レーダーに捉えられないんです。それに速度が余りにも速すぎて・・・」

司令部の方でも状況が判断出来ていない様だ。
「やはり、外宇宙から飛来して来たあれか・・・・太陽系内の基地で破壊できなかったのか？」
「冥王星基地に攻撃命令を出したのですが、通信が途絶えてしまって・・・・同じくトリトン、チタニア、タイタン、ガニメデの各基地も同様です」
「そうか・・・・実は、それらしき物体が俺達の前方を飛んでいくのを見たんだ・・・・その直後、火星基地との通信が途絶えた」
「ええっ!?」
「それは本当か？古代」
相原は基地との交信途絶の事実に驚いたような声を上げるが、藤堂は毅然としている様子でスピーカーから流れる声にも動揺の様子は見られない。
「はい、長官。つい今しがたです」
「そうか・・・・分かった。とにかく今は一刻も早く火星基地へ向かってくれ」
「了解」
古代は急ぎ火星基地へと向かった。
そして、基地の近くでもう一度、基地へと連絡をいれるが、誰も出ない。
「小栗、着陸前に一度、基地の上空を旋回してくれ」
「了解。旋回します」
そのまま、パトロール艇は基地の上空を二、三度旋回したが、基地からはなんの通信も信号も送られてこない。
「・・・・着陸だ」
「はい」
パトロール艇は基地へと着陸した。
基地へ降り立つと、あたりはシーンと静まり返っている。
「なんか、不気味ですね」
「ああ」
古代たちは急ぎ、基地の中へと向かう。

すると、
「こ、これはっ!?」
「一体何が・・・」
そこには大勢の人が定位置に着いたままの姿勢でいたのだが、誰も動かず、喋らない。
「まさか・・・」
嫌な予感を覚えつつ古代は近くに人の肩を揺するとその人の身体はグラっと床に倒れる。
そこで脈拍を確認すると、
「し、死んでいる・・・」
「艇長、ダメです。この辺りに居る人は皆死んでいます」
小栗も周辺の人の生死を確認したのだが、皆死んでいた。
(どういうことだ?一体、何があったんだ?)
ここに居る人たちの身体には死因となるべく外傷は全く無く、死に顔も苦痛に歪んでおらず、普段通りの様に見える。
恐らく彼は自分たちの身に何が起きたのかさえ、分からない内に絶命したのだろう。
「兎に角、現状を地球司令部に報告するぞ」
「は、はい」
古代は火星基地の現状を地球へ知らせることにした。

未確認飛行物体が接近している地球でもただ手を拱いている訳にはいかなかった。
戦闘衛星や攻撃ステーションも全て起動させ、迎撃態勢を取る。
地上でも迎撃ミサイルの発射が用意された。

地上　迎撃ミサイル基地
「第一級戦闘指令!!迎撃ミサイル速射六連!!」
「８０８８よりプラス追尾!!」
やがて、全ての迎撃ミサイルの発射準備が整い、
「発射!!」

地上のミサイル基地からは多数の迎撃ミサイルが発射された。
同時に戦闘衛星、攻撃ステーションも未確認飛行物体への攻撃を行った。
しかし、発射されたミサイルは不明物体に接触する前に軌道がズレて次々と爆発し、効果が全く無く、不明物体は無傷のまま地球へ迫って行った。

メガロポリス東京　地球防衛軍司令部
「不明物体、地球軌道に到達!!減速を開始!!」
「迎撃態勢を確認!!」
「それが、攻撃は行ったのですが、全ての兵器が着弾せずに爆発し、無効化されました」
「なんだと!?」
あれだけのミサイルや戦闘衛星、攻撃ステーションの迎撃網を無傷で突破してきた事に驚愕する西郷。
「か、拡大投影しろ!!」
地球に接近した事により、ようやく未確認飛行物体の映像を捉えることが出来た。
モニターにはその正体が映し出された。
「こ、これは・・・」
「大型のミサイル・・・?」
「・・・」
モニターに表示されたのは、命中したら地球に甚大な被害を出しそうな程の巨大なミサイルの姿が映し出された。
「不明物体は現在、日本、メガロポリス東京上空に静止・・・いや、動き出しました!!降下してきます!!」
「着陸地点は!?」
「旧防衛軍司令部、未開発エリア付近です」
「長官」
「うむ、地球全区域を第一級戦闘態勢に指定する。特に科学調査隊は全力をあげ、一刻も早く敵の実態を究明しろ・・・以上だ」

司令部全体が緊張した空気に包まれる。
そこに、
「第十パトロール艇、艇長より入電」
火星基地に到着した古代から通信が入った。
「古代・火星基地は？」
「火星基地に生存者なし・・・全滅です」
「全滅!?・・それじゃあ他の基地も・・・」
「ぬぅ～・・被害状況は？」
全滅と言う事は基地が何らかの攻撃を受け、破壊されたモノだと推察され、その被害状況がどれほどの規模なのかを訊ねると、古代からは意外な答えが返って来た。
「施設には何の損傷もありません・・・不思議な事に遺体にも何の外傷がなく・・・」
古代は戸惑った様子で報告する。
敵の攻撃を受け、基地は破壊、その影響によって死亡と言うのであれば、分かるが、基地を破壊せず、その基地の中に居た人間のみ・・・それも遺体に何の外傷も無く大勢の人間を殺す・・・。
そんな方法があるのだろうか？
古代の報告では毒ガスや細菌兵器がばら撒かれた様子も無いと言う。
「何の外傷も無く、全員死亡しているのか？」
「はい」
古代の報告に西郷も戸惑う。
「自分はこれから更に状況を調査して帰還します」
そう言って古代は通信をきった。
その間、例の巨大なミサイルはロケットの様に地球へと不時着した。
皆の目が巨大なミサイルに釘付けとなっている時、
「大変です!!正体不明の降下兵が多数地球へ降下してきます!!」
「なんだと!?」
「・・・いました!!軌道上に大型輸送船らしき艦影と空母を確認!!」

「不明物体のレーダー妨害にあわせ、ワープアウトしてきたものと思われます!!」
「しまった!?こちらに気を取られている隙に!!」
「市街地に敵兵多数降下してきます!!」
「空間騎兵隊に出動命令!!本部職員も第一戦闘武装!!」
　藤堂は至急迎撃態勢をとるが、完全に不意を突かれた防衛軍は総崩れとなり、
「迎撃ミサイル基地占領!!」
「大統領官邸も敵に包囲されました!!」
「首相官邸応答なし!!」
「敵は防衛軍司令部へと向かっています!!」
　地球連邦の軍、政府主要施設が次々と敵の手によって落ちていく。
「くそ、なにやっているんだよ、空間騎兵隊は!?斎藤さんが泣くぞ!!」
　相原が思わず毒づく。
　こんな事でもいわなけりゃ、恐怖でパニックを起こしそうになる。
「と、藤堂長官!!」
「どうした？」
「み、見て下さい!!」
　現に今、報告を入れたオペレーターは恐怖で声が裏返っている。
　モニターに表示された映像では、２０階建てのビルに相当し、細長い３本の歩行脚で歩き回るロボットのような戦車の映像が映し出された。
「市街地の外れに多数出現!!」
「海岸線からも接近!!」
「戦車隊を出撃、迎撃に当たらせろ!!」
「了解」
　すぐさま、空間騎兵隊の戦車部隊にも命令が下され、戦車部隊は謎の巨大ロボ？の迎撃に当たるが、
　地球の戦車の連装ビーム砲を受けても、ビクともせず、圧倒的な攻撃力の前に防衛軍の戦車隊は次々と撃破されていった。
　更に敵は小型の戦車も輸送船から直接降下させ、歩兵部隊の援護に

まわらせた。
小型とは言え、戦車相手に歩兵では荷が重く、空間騎兵隊の兵士たちは敵戦車の攻撃を受け、次々と斃れていった。
「奇襲をかけた上に次から次へと追い打ちをかけてきおって・・・・」
西郷がモニターを睨むが、敵は空母からも爆撃機を発艦させ、制空権までも握ろうとしていた。
「第四機甲師団全滅!!」
「第３０７歩兵連隊全滅!!」
地上においては次々と防衛軍の地上部隊が壊滅もしくは全滅していく。
「長官、無人艦隊コントロールセンターが出ました」
「島です」
無人艦隊コントロールセンターにはヤマト元航海長の島大介と同じく元ヤマト機関科の徳川太助が勤務していた。
「島、直ちに各衛星軌道上の無人艦隊を第七周回軌道上に集結させ、地上援護に向かわせてくれ」
「了解。集結から地球到着までの所要時間は約１０分・・それまで何とか持ちこたえてもらえれば、背後から奇襲する事ができます」
「よし、頼んだぞ・・島」
「はい」
「今の防衛軍にとって無人艦隊が最後の頼みの綱ですな・・・・」
「・・・・」
藤堂は沈黙したまモニターを見ていた。

メガロポリス東京　無人艦隊コントロールセンター　メインコンピュータ室
島はコンソールを操作し、地球周辺に展開している無人艦隊を集結させた。
無人艦故に例のミサイルの通過時も何の影響も無く、無人艦隊は艦隊行動がとれた。
無人艦隊は無事に集結し、地球へと向かった。

「よし、艦隊到着まであと三分だ」
「よかったこれで地球を救う事が出来る」
徳川もホッとした様子で言う。
今、地球を攻撃している敵の艦種は輸送船と空母のみ、反対に無人艦隊は戦艦、巡洋艦、駆逐艦を中心にした戦闘艦隊・・・背後から武装した無人艦隊の一斉射撃を受ければ、混乱するだろうし、撃破はいとも簡単だろうと思っていた。
しかし、事態はそう簡単にはいかなかった。
無人艦隊のレーダーが後方から接近して来る大艦隊を捉えた。
「見ろ!!無人艦隊の背後に敵の大艦隊だ!!」
「畜生何時の間に・・・」
「ここは迎え撃つしかない」
島は無人艦隊を巡航モードから戦闘モードへと移行し、後方から迫る敵艦隊を迎撃しようとするが、やはり遠距離からの無人コントロール故か反応が鈍く、モタモタと艦首を回頭している間に無人艦隊は敵に先手を打たれた。
後方の敵艦隊からの一斉射撃で、反転中の無人艦隊は側面から攻撃を受け、大損害を受け、さらに無人艦隊をコントロールしているこの施設にも敵の攻撃が始まった。
恐らく電波を飛ばしていたのをキャッチされたのだろう。
コントロールセンターへの爆撃が開始され、その爆風と衝撃で島も徳川も座席から放り出される。
「徳川、大丈夫か?」
「な、なんとか・・・でも無人艦隊のコントルールが・・・」
「アンテナをやられた・・・無人艦隊の弱点を突かれたか!!」
完全に壊されてしまった無人艦隊のコントルールシステム。
この有様では、もう使用は出来ない。
そして、コントロールを失った無人艦隊も今頃は敵艦隊に壊滅されているだろう。
「徳川、銃を取れ!!ここから脱出する!!」
「で、でも何処へ?防衛軍司令部もこの様子じゃあ、危ないですよ?」

「なに、俺たちの行く場所は一つだ!!」
島と徳川は、銃（コスモガン）を片手にコントロールセンターから脱出した。
そしてある所へと向かった。

地球～火星　宙域
火星基地から地球へ向かっていた古代は、パトロール艇の窓の外で次々と撃破されていく無人艦隊の姿を見た。
中には味方の無人艦同士で衝突し、爆沈する艦もあった。
「くそっ、コントロールセンターがやられたんだ」
古代は急ぎ地球へと向かおうとしたが流れ弾がパトロール艇に命中した。
何とか間一髪で古代は救命ポッド脱出に成功して、地球へと辿り着くことが出来た。
ただ、地球に辿り着いた際に操縦士の小栗とは逸れてしまった。
彼の無事を祈りつつも古代は急いでこの事態を何とかしなければと思い、近くの有人機基地へと向かった。

メガロポリス東京　地球防衛軍司令部
「雪・・・」
藤堂は秘書官の雪を呼ぶ。
「はい」
「いずれここは占拠される・・・」
「長官・・・」
敵の上陸を許し、軍、政府関連の施設は次々と敵に占領されていき、頼みの綱であった無人艦隊も今や壊滅。
もはやこの状況下では起死回生の手はもう無い・・・。
この防衛軍司令部は地球軍における最後の要・・・。
敵が放置する筈がない。
となれば、敵は大挙してここへ押し寄せてくる。
現に職員らは机や椅子などでバリケードを作っている。

その前に、藤堂は打てる布石を打った。
「コレを持って第四有人機基地へ行ってくれ」
「え？」
「古代は必ずそこへ行くだろう・・・この命令書を渡してくれ」
「わかりました」
「うむ、頼んだぞ・・・」
「はい」
雪は命令書を携えて戦場となっているメガロポリス東京の市街地へと向かった。
しかし、極力敵との接敵を防ぐために、地下道を通る事にした。
そして、地下道への入り口で二人の空間騎兵隊員と出会った。
出会い頭だったため、一人は雪が敵だと勘違いし、彼女にコスモガンの銃口を向けたが、もう一人の隊員が即座に雪が敵でない事を見抜くと、
「撃つな!!・・・敵じゃない」
仲間の隊員に銃口を降ろす様に言った。
「貴方は・・・？」
「空間騎兵隊、第一都市防衛師団の古野間だ。こいつは副官の宗像」
「どうも」
宗像と呼ばれた空間騎兵隊員は雪に一礼する。
「・・・そう言うアンタは？」
空間騎兵隊員は自らの所属と氏名を雪に名乗り、今度は雪に対し、所属と氏名を訊ねる。
「防衛軍司令部の森雪です」
「森？・・・そうか、あのヤマトの・・・」
「地表はどうなっているんですか？」
地上から来た古野間に上の様子を訊ねる雪。
なにせ、地上はこれから雪が向かう場所なので、その状況を知りたかったのだ。
「残念だが、全滅と言っていいだろう・・・第一都市防衛師団も生き残ったのは俺たちだけだ・・・くそっ!!通信機もやられちまってな、今

から被害状況を長官に報告しにいくところなんだが・・・そういえば、あんたはどこへ行く気なんだ？こっから先は戦場だぜ？」
ここに居ると言う事はこれから地上へ出ていくと言う事だ。
しかし、地上は地獄の様な戦場の有様だ。
幾ら防衛軍軍人とは言え、女性では余りにも過酷な環境だ。
「第四有人機基地へ・・・長官命令により伝令として向かう所です」
「防衛軍も墜ちたもんだ・・・かよわい婦女子一人にそんな任務をまかすなんて・・・」
「それは・・・」
「わかっている。言ってみただけさ。それだけ状況が切羽詰っているってことだろう。持って行きな、丸腰じゃ第四有人機基地はおろか、市街地までたどり着けねぇぜ・・・エネルギーは十分にある」
そう言って古野間はホルスターから自分のコスモガンを抜いて雪に手渡す。
「でも・・・」
「俺はこれから報告に戻らなきゃならん。当分必要ないさ・・・本当のことを言うと、あんたみたいな美人を一人で行かせたくない。できれば俺がエスコートしてやりたい・・とこなんだが・・・」
古野間はそう言って少し苦痛で顔を歪める。
彼の空間騎兵隊の戦闘スーツには薄らと血が滲んでいるのが見えた。
「古野間さん。貴方、ケガを・・・!!」
「かすり傷だ・・・敵の豆鉄砲でくたばるような体はしてねぇよ・・・さぁ、俺に構わず行ってくれ・・・急ぎの用なんだろう？そこを直ぐ出た所にある三番倉庫に地下ケーブル通路への入り口が有る・・・ケーブルは第四有人基地まで通じている・・・もう敵が侵入してきているかもしれないが、地表よりは幾分安全な筈だ・・・」
「分かりました。三番倉庫、地下ケーブル通路ですね」
「無事に会えるといいな・・・」
「えっ？」
「アンタの目だよ。任務の為だけじゃない。アンタの目は違うモノを

目指している・・・アンタの大事な人が其処に居るんだろう?第四有人機基地に・・・」
「はい・・・古野間さんも御無事で・・・」
雪は古野間と分かれ、彼から教えられた通路を辿って行った。
その途中で、無人艦隊のコントロールセンターから脱出した島と徳川と合流した。
島と徳川はある場所へと向かおうとしていたが、雪が第四有人機基地へと向かうと言う事で、一緒に行くことにした。
そして、三人は第四有人機基地へと向かった。
その第四有人機基地では、古代が物陰に隠れながら滑走路へとやって来た。
周りを見渡すと、滑走路にあるのは敵の攻撃を受け、破壊されたコスモタイガーだらけである。
しかし、その中で、まだ飛べそうな機体を一機見つけた。
「しめた。あの機体まだ飛べそうだ」
古代がその機体に近づくと、上空から敵機一機がやって来た。
いち早くその敵機の存在に気がついた古代はまたも物陰へと隠れた。
そして、敵機は先程、古代が乗ろうとしたコスモタイガーを破壊すると、近くにあったコスモタイガーにも攻撃を加えた。
完全に飛べなくするためか、それとも隠れた古代をいぶり出す為なのかは、分からないが、敵機は数分間の間、滑走路のコスモタイガーに攻撃を加え続け、飛び去って行った。
敵機が完全に去って行ったのを確認し、再び物陰から出た古代だったが、その背後から自分に近づく気配を感じ、コスモガンをホルスターから抜き、
「誰だ!?」
気配がした方向へ銃口を向ける。
そこに居たのは敵兵ではなく、自分が最もよく知る人物・・・
婚約者の雪だった。
「雪!!」

「古代君!!」
　雪は古代の姿を確認すると、彼に走り寄った。
　また、雪の他に島と徳川の姿もあった。
「島、徳川も!!」
「お久しぶりです」
「無事で何よりだ、古代」
　島と徳川も古代に近寄った。
「そうだわ、命令書を・・・・」
　雪は懐から藤堂に託された命令書を取り出す。
「命令書？」
　雪が取り出した命令書には以下の事が書かれていた。
『命令――――――
　古代進、旧ヤマト乗組員を集め、小惑星『イカルス』天文台の真田志郎と連絡を取れ』
「真田さんに・・・・？」
「イカルス・・・・火星軌道外にある小惑星だな・・・・真田さんはそんな所に居るのか・・・・」
「とにかく行きましょう。皆を集めて!!」
「私も手伝うわ、古代君」
「しかし、どうやって皆を？」
　徳川と雪はやる気だが、この戦場と化したメガロポリス東京でどうやってヤマトの乗組員を集めればいいか分からない。
　何処かでまだ戦っているかもしれないし、残念ながら、敵の手にかかってしまった者もいるだろう。
　それに通信機能が完全に破壊されて居るこの状況で、どうやってコンタクトを取れば良いか全く方法が分からない。
　戦場となっている市街地を回るのは余りにも危険だ。
「英雄の丘へ行こう」
　島がポツリと呟いた。
「そうよ、苦しいときや辛いとき・・・・皆であの丘に集まったじゃない」
「英雄の丘・・・・沖田艦長・・・・」

古代たちはきっと生き残っているヤマトの乗員は英雄の丘に居ると信じ、英雄の丘へと向かった。
その英雄の丘では・・・・
「沖田艦長、とうとう地球もこんなザマになってしもうた・・・ガミラスからも白色彗星帝国からも直接侵略を受けなかった地球がなぁ・・・だが、ワシは諦めんぞ!!万に一つ希望がある限り・・・艦長、あんたがそうじゃったようにな・・・」
佐渡はアナライザーと共に沖田艦長の銅像の前にどっかりと座り込み、酒を煽る。
「ン?アレハ?」
その時、アナライザーがこちらに近づいてくる人の気配に気がつく。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
そこに息を切らしながら非常用の通信機を背負った相原が来た。
「相原じゃないか!?よお、生きとったのお、相原!!」
「ハァ・・・ハァ・・・勝手に殺さないで下さいよ・・・佐渡先生もよく御無事で」
「ソレニシテモ、相原ハ防衛軍司令部ニイタンジャナカッタノカ?」
アナライザーが防衛軍司令部に居た相原がよくここまで来れた事に疑問を感じ、訊ねる。
「司令部ヲ放って、一人デ逃ゲテキタノカ?」
「違うよ、地球に打ち込まれたあの飛行物体の調査に向かえと命令されたんだよ。その途中で敵の襲撃を受け、司令部に戻ろうとしたんだけど、そこも既に敵に囲まれて近づけなかったんだ」
「雪はどうなった?」
佐渡は同じく司令部勤務の雪の行方を訊ねる。
「分かりません・・・僕の方が先に司令部を出たので・・・・」
「そうか・・・でも、雪はきっと無事じゃよ」
そこへ、ヤマト元航海長補佐の太田と同じくヤマト元砲雷長の南部も姿を現した。
「太田!!南部!!お前たちも無事じゃったか!!」

「二、三発敵の弾丸がかすりましたが何とか・・・・」
「くそ、宇宙どころか地球さえも守る事が出来なかった・・・なんて無力なんだ・・・・」
太田も南部もボロボロ姿であったが、何とか無事な様子。
しかし、地球を守れなかったと言う事に無念さが感じられた。
「いや、ようやったよ・お前らは・・・・」
そんな太田と南部を佐渡は褒める。
そこに第四有人基地から来た古代たちが合流する。
「おお～!!古代！雪!!島に徳川もおるじゃないか!!」
「皆・無事だったんだな」
この戦場の中、無事に再会を果たせたことに皆はホッとした。
「皆、よう来た・・・・沖田艦長、さすがアンタの息子たちじゃよ・・・・本当に皆・よう来よったわい・・・・」
その後、相原の持っていた非常通信機で真田と連絡を取る事になった。
当初、無線電波なんて飛ばして大丈夫かと言う懸念は有ったが、地球の無線波長ではなく、ガミラスが使用していた無線波長へ変換をかけて飛ばす事にした。
これならば、敵に傍受される心配もないし、真田ならば気がついてくれる筈である。
相原が真田の居るイカルスと連絡を取っている中、
地球へと侵攻してきた暗黒星団帝国太陽系方面軍総司令カザンも本国へ通信を入れていた。
「聖総統閣下、奇襲は大成功の結果に終わり、我が軍は地球全土をほぼ制圧いたしました」
「奇襲成功は当然の事、それより例の戦艦・・・・ヤマトはまだ見つからんのか？」
「はっ、申し訳ありません。只今鋭意捜索中ですが、まだ発見の報告は入っておりません」
「何よりもまずはヤマトだ。必ず探し出せ!!良いな？」
「はっ!!必ずや探し出して見せます!!」

カザンが緊張した面持ちで答えた。

英雄の丘では、戦火により焦土と化したメガロポリス東京を見ながら、徳川が呟いた。

「古代さん、地球はこのまま占領されてしまうのでしょうか？」

「そんなバカな事があってたまるか!!」

古代としては何もしないままこのまま降伏なんて真っ平ごめんだ。

あの白色彗星帝国にもギリギリの線で地球を降伏から救ったのだ。

生きている限り戦う覚悟が古代にはあった。

それは他の防衛軍軍人たちも同じだろう。

「真田さんと連絡が取れました」

漸くイカルスの真田と連絡が取れた。

古代たちは通信機の傍に駆け寄った。

「真田さん」

「久しぶりだな・・・」

非常用の通信機の為か、それとも敵の妨害電波の影響か、画面の映像と音声がブレている。

「真田さん、そちらの状況は？」

「何の被害も無い・・・小惑星だから、敵も見落としたのだろう・・・我々も敵の不明物体をキャッチしていたが・・・強力な・・・妨害電波の・・・影響で・・・地球との連絡ができなかった・・・」

「真田さん、ヤマトを知りませんか？何処でどうなっているのか・・・？」

「そうか・実は私もそれを待っていた」

「待っていた？」

「あるんだよ、ヤマトが」

「ヤマトが!?」

「ヤマトがある!?」

真田の言葉にざわつく一同。

「そうだ。あるんだ・・・私が・・・ここで・・・!!」

その言葉を最後に真田との通信が切れた。

相原が再び通信を再開させようとするが、画面に真田が映る事は無かった。
「相原、どうした？」
「一番大事な所じゃないか!!」
古代と島は肝心なヤマトの行方が分かりそうだったのに、聞けなかった事に不満な様子。
「駄目です敵の妨害電波の影響で・・・・」
相原はすまなそうに通信不能な理由を言う。
結局敵の妨害電波の影響で真田との通信が再開される事は無かった。
「しかし、真田さんははっきりと『ここで』と言いましたよ」
徳川の言う通り、真田は通信が切れる寸前にはっきりと『ここで』と言った。
それはヤマトがイカルスに有るのかもしれないと言うことだ。
仮にイカルスにヤマトが無くても真田はヤマトの行方を知っている様子だった。
イカルスに行けば、ヤマトの行方が分かるかもしれない。
「行きましょう！イカルスに!!」
相原が意気込んで言う。
「そうだ、ヤマトのあるイカルスに行こう」
古代も相原の意見に賛同し、イカルスへと向かおうとしたが、問題が一つ・・・・。
「しかし、古代さん火星の向こうまでどうやって行くんです？」
太田の言う通り、敵の手によって宇宙港も占領され、宇宙船は破壊されているこの状況でどうやって地球を脱し、ヤマトのあるイカルスまで行くのかが問題だった。
「それなら私に任せて。防衛軍の地下ターミナルにある大統領避難用の高速連絡艇を使えば行ける筈よ」
「よし、じゃあ行こう!!」
雪の案内の下、古代たちは防衛軍司令部の地下道を走っていた。
その後ろからは敵兵がビームライフルを撃ちながら迫って来るが

間一髪、連絡艇の有るターミナルへと入る。
古代はターミナルの出入口を閉め、更にシャッターが閉まる前に出入り口の開閉装置を壊し、時間を稼ぐ。
追いついて来た敵兵たちは防壁シャッターに体当たりをするが当然ビクともしない。
「くそっ、開閉装置を破壊された!!」
「ならば、撃ち破れ!!」
敵兵たちは防壁シャッターにビームライフルを撃ちまくり、防壁シャッターを破ろうとする。
一方、古代たちは連絡艇の発進準備を整え、後は出発するだけなのだが、肝心の出入り口のハッチが開かない。
連絡艇の強度では出入り口の分厚いハッチを体当たりで打ち破る事は出来ない。
「確か外のコンピューターのロックだわ」
雪は一度連絡艇から出て、ターミナルの管制塔へと向かい、出入り口のハッチを開口させようとする。
「雪、自動発進まで６０秒だぞ!!」
「大丈夫よ。それまでには間に合わせるわ!!」
雪は管制室に入り、出入り口のロックを解く。
その間にも通その防壁は破られそうだった。
そして遂には防壁が破られて敵兵がターミナル内に侵入してくる。
「雪!!早くしろ!!」
古代は連絡艇から侵入してくる敵兵を銃撃しながら援護し、雪に早く連絡艇に乗る様に促す。
やがて、発進口が開き、連絡艇も自動発進装置が作動し、徐々に高度を上げ始める。雪は管制塔から連絡艇へ向かい走り出す。
しかし、ターミナルの上部から雪を狙う一人の敵兵が居た。
雪が連絡艇に乗る瞬間、一発のレーザーが雪の左肩を掠め、彼女はその場に倒れる。
「雪!!」
古代は必死に手を伸ばし、雪も古代に向け手を伸ばす。

その間、連絡艇は発進し徐々に高度を上げていく。
無理な体勢で雪を引き上げようとしている古代と撃たれた事により、身体が上手く動かない雪。
次第に二人の手は離れ、遂に雪の身体はターミナルへと落ちていった。
「雪!!くそっ!!」
古代は飛び降りようとしたが、
「古代さんダメです!!」
相原の手によって止められた。
「離せ!!相原!!」
古代は何としても雪を助けたかった様だが、飛び降りるには高さが有り過ぎるし、降りたらもう連絡艇には乗ることは出来ない。
ターミナルには敵兵が多数いる。
そして、無情にも連絡艇の扉は閉じられた。
無事に飛び去って行く連絡艇を見た後、雪は意識を失った。
そして、雪を狙撃した敵兵が彼女に近づく。
意識を失い、倒れている雪の姿を見て、その敵兵は目を見開いた。
「・・・」
やがてその敵兵は雪を抱き上げ、他の兵と共にターミナルを後にした。
その頃、防衛軍司令部も既に多数の敵兵が侵入し、司令室では激しい銃撃戦が繰り広げられていた。
床には敵、味方区別なく、死傷者が転がっている。
「ぐぁっ!!」
「参謀長!!」
その最中、西郷が敵弾に倒れた。
「ちょ、長官・・・あれを・・・」
破壊された壁の向こう側には地球を飛び立っていく連絡艇の姿があった。
「まだまだ・・・希望は・・・残っていた・・・様ですな・・・」
傷口をおさえながら弱弱しく呟く西郷。

「頼んだぞ・・・・古代」
藤堂は飛び去って行く連絡艇に最後の望みをかけた。
その後、大統領官邸も占拠され、大統領は暗黒星団帝国に降伏し、彼の口から防衛軍に対し戦闘中止命令が下された。
これにより地球防衛軍は暗黒星団帝国に敗北した・・・・。
それはたった一夜の短い時間の事だった。
たった一夜・・・・
たった一夜の短い時間で、地球は突如襲来した暗黒星団帝国に負けたのだった・・・・
しかし、地球人類は滅ぼされたわけでは無い。
まだ、諦めていない者たちも居た・・・・。

九十四話　パルチザン結成

イカルスへと向かっている連絡艇で、古代は相原を殴りつけた。
「相原!!何故あの時、俺を止めた!!何故雪を見殺しにさせた!!」
古代だって分かっている。
しかし、分かっていてもこの怒りと悔しさをぶつけなければ気が収まらなかったのだ。
そしてさんざん殴られながらも相原は一切抵抗しなかった。
戦友として古代の気持ちは痛い程理解していたし、相原自身も断腸の思いだったからだ。
「古代!!」
そこに佐渡が止めに入る。
「止めるな!ヤブ医者!!」
古代が再び相原に殴り掛かろうとした時、佐渡が古代の腕に一本の注射を突き刺す。
「イテッ!!な、何を・・する・・・」
注射された古代はその場に倒れた。
「先生、何をしたんですか!?」
突然倒れ、動かなくなった古代に相原が訊ねる。
すると、佐渡はとんでもない事を言い放った。
「とりあえず、死んでもらった」
「っ!!」
「次は島、オマエの番だ」
「な、何故です!!先生!?」
「全員死んでもらう必要がある」
佐渡の言動に戸惑う一同。
「一時的に仮死状態になって生命反応を消さねばならん。後ろを見ろ」
「えっ!?」
連絡艇の背後には敵の駆逐艦らしき艦影が数隻こちらへ追って来

た。
「怖がるな、一定の時間が経てば、目は醒める」
こうして佐渡はアナライザーを除く皆に仮死状態にする薬を注射し、最後は自らの腕にも注射器を突き刺した。
連絡艇を追ってきた敵艦はまずライフメーターでこの連絡艇が有人か無人かを調べた。
有人ならば、接舷するか攻撃し撃破するつもりであった。
しかし、連絡艇に生命反応はなかった。
「ライフメーターに反応なし、これは無人艇です」
「うーむ、ヤマトに何か関係あると思ったのだが・・・・」
「どうします?念の為、撃破いたしますか?」
「捨て置け、こんな事で貴重なエネルギーを消費するわけにもいかん。いずれ、エネルギーが切れて停止するだろう」
眼前の連絡艇が無人だと分かると、追尾して来た敵艦は針路を反転させ、地球へと戻って行った。
「オレハ、イキテイルウチニハイランノカ!?」
乗員が仮死状態と言う事で連絡艇を操縦していたアナライザーは一人（？）憤慨していた。

地下都市・海鳴地区
過去二度にわたる侵略戦争の教訓から、首都地域以外での地下都市への避難は迅速に行われ、謎の超大型物体の降下・着陸と同時に発生した敵の空挺兵との戦闘による一般市民の犠牲者は、メガロポリス東京以外では僅かだった。
というより、メガロポリス東京との一切の連絡が断たれてしまったのだ。
正体不明の敵の攻撃は横須賀の防衛軍基地にも及び、恐らくは地球近くに空母を直接ワープさせてきたのか、空からの航空機攻撃も仕掛けてきた。
爆発によるものか、ズシンズシンという衝撃が地上側から響いてくる。

不気味な震動にまだ幼い子供の怯えた泣き声が響く。
大半の子供は付き添っていた親に宥められるのだが、親とはぐれてしまった子供はそうもいかない。
フェイトが付き添っている女児も、そんな子供の一人だった。
避難指示を受け、フェイトたちは地下都市に避難したのだが、途中で迷子になっていた子供も一緒に連れて来ているため、一行は最初に避難した時よりも増えていた。
「泣き疲れて寝ちゃったようね」
「はい」
先程まで親を求めて泣きじゃくっていた女児は、今は目元を赤く腫らしながらも静かに寝息を立てていた。
ヴィヴィオは最初避難指示が出された時には不安そうにしていたが、途中、迷子になったこの女児を励ましていた。
そして、今彼女もこの女児に寄り添うようにして静かに寝息を立てている。
「疲れた？ティアナ？」
「いえ、大丈夫です。私より、この子の方が遥かに辛いでしょうから・・・」
寝息を立てるヴィヴィオと女児に支給された毛布をかけてやりながら、フェイトとティアナは会話を続ける。
「攻撃してきたのは暗黒星団帝国でしょうか？」
「今は何とも言えないけど、地球そのものを滅ぼすつもりはないんじゃないかな？」
「何故です？」
「初めからそのつもりなら、それこそ巨大な波動砲みたいな兵器を直接地球に撃ってくると思うんだけど・・・」
「確かにそうですね」
ガミラスは、寿命が尽きかけている母星に代わる新たな母星を地球にするつもりであったし、白色彗星帝国は国家首脳陣の保養地兼新たなる労働者（奴隷）確保として地球へと侵攻して来た。
そして今回の敵も、惑星を破壊するような巨大戦略兵器ではなく、

ある意味オーソドックスな降下制圧戦闘を行っている。
つまり、ガミラスや彗星帝国同様、今回の侵略者たちもこの地球に何らかの利用価値を見出だしている可能性が高い。
だとすれば、地球防衛軍には反撃の可能性がまだあるということだ。
しかし、詳しい事は聞かされていないものの、良馬の　まほろばと新造艦の春藍は太陽系外での任務に就いているようだし、あのヤマトは所在不明。
先行きは不安である。
「なんか、とんでもない事に巻き込まれていますね、私たち・・・」
「そうね・・・」
この第二の９７管理外世界と関わってからフェイトとティアナの常識と言うモノが根底から覆された。
管理局や管理世界の常識や法律、階級や役職等、この世界に来てからは紙屑以下の価値しかない。
巻き込まれた事も普通管理局や管理世界で起こる事件のスケールを超えている。
しかし、一番驚いたことはガミラス、彗星帝国とも遣り合ったこの第二の９７管理外世界の地球が敵の上陸を許し、占領されたことだった。
「今は、静かに成り行きを見守るしかないよ・・・この地球で私たちが出来ることは何もないのだから・・・」
「・・・」
フェイトはそう言うが、ティアナは本当に何もする事が無いのか？
何も出来ないのか？
と、そう考えていた。
やがて、地球連邦合同会議場から驚愕の事実が報道された。

地球連邦　合同会議場
地球連邦合同会議場・そこには地球連邦の政府、軍の高官らが集まっていた。

そして、会場の至るところに銃を所持している多くの敵兵も居た。
やがて、黒いボディースーツ状の軍服を身につけ、同じく黒いマントを着けた一人の男が会場へと入り、上座にある大統領席についた。
「私が地球占領軍総司令のカザンである。本日、我等が暗黒星団帝国は地球全土を完全に占領した事を此処に宣言する。もし我々に反抗する者があれば、都市周辺部に撃ち込んだ重核子爆弾を直ちに爆発させる」
カザンと名乗る男が発した「重核子爆弾」と言う言葉にざわつく会場。
「諸君・・・見るがいい・・・」
そう言ってカザンは背後にあるモニターを作動させる。
そこには地球に降下した例の巨大なミサイルの映像が映し出された。
「我が母星の文明の粋を極めた爆弾だ。あの爆弾一発で、地球の自然には何ら影響を与える事無く一瞬の内に『ある特定の生物』の脳細胞を破壊し、絶滅させることが出来る・・・この『ある特定の生物』と言うのが何なのか、賢明な諸君ならばもうお分かりの事だろう?」
カザンの言葉で『ある特定の生物』と言うのは直ぐに察しがついた。
「人間・・・我々人類の脳細胞のみを破壊するというのか!?」
防衛軍の幕僚の一人が震える声でカザンに訊ねると、
「左様・・・」
カザンはその問いを肯定した。
「この脅威にさらされたくなければ、我々の命令に服従する事だ」
カザンのこの言葉を聞き、何人かの軍幕僚たちは悔しそうに唇を噛んだ。
地球市民に伝えられた情報はここまでで、以下は会場で起こった事になる。
カザンがここでの事を地球市民にテレビ中継したのは、地球市民に対する脅しに寄る為であった。
現にこの中継を見た地下都市の地球市民は皆、顔色が悪くなっている。

単なるはったりの脅しなのかもしれない。
しかし、本当にカザンの言う通り、あの爆弾が人間だけの脳細胞を破壊できる爆弾だとしたら、それは地球人類の絶滅を意味した。
それは当然、魔導師とは言え、フェイト、ティアナ、ヴィヴィオ、紅葉も例外ではない。
テレビ中継を切った後、カザンは地球連邦政府、防衛軍に対し、最初の命令を下した。
「最初の命令を下す・・・宇宙戦艦ヤマトの所在を明らかにせよ」
「ヤマト・・・だって？」
カザンの口から出たヤマトと言う言葉でざわつく会場。
軍の幕僚の何人かが無意識的に藤堂へ視線を向けてしまった。
その辺は軍の悪い癖とも言える。
突発的な事態が起きた時、つい上官の指示を受けようとし、視線を向けてしまったのだ。
そして、その仕草を同じ軍人であるカザンは見逃さなかった。
「そこの男・・・お前は地球防衛軍の長官だそうだな？お前なら知っていよう。答えろ、ヤマトはどこだ？」
「・・・ヤマトの所在を知ってどうしようというのだ？」
「質問は許さん」
「ふっ、恐ろしいのか？ヤマトが・・・」
「くっ・・・」
藤堂はカザンを鼻で笑った。
藤堂のその態度にカザンは僅かに顔をしかめる。
「たかが戦艦一隻をなぜそれほど恐れるのだ？」
「なんだと!?」
「そうだ・・・貴様たちが恐れる様にヤマトは地球の希望だ。地球にはまだまだ力が残っている。我々はまだ完全に敗北したわけでは無い。知りたければ貴様たちで探すがいい」
「愚か者め・・・ええい、この男を連行しろ!!地球人類の見せしめの為、公開処刑せよ!!」
藤堂の言動にキレたカザンは会場に居た警備兵に藤堂を処刑する

様に命じた。
火星軌道沖　イカルス天文台
「物資搬入はどこまで進んでいますか？」
「水、食糧等の生活物資は完了しました。後は、弾薬と医薬品の積み込みがあるので、一時間程かかります」
「急がせて下さい」
「了解」
発進準備の指揮をとる真田志郎と山崎奨は準備の進捗状況を確認している。
イカルス天文台でヤマトの改装工事と新人乗組員の養成を主導していた二人は、暗黒星団帝国軍の太陽系侵入の報せを受けるや、即座にヤマトの発進準備を命じた。
古代たちはとうに地球を発ち、あと一時間ほどでこちらに到着するはずだ。
彼らと合流したら直ちに発進し、敵の侵攻部隊を叩く算段でいたが、事態は常に流動的だ。
この時、真田はまだ地球に撃ち込まれた重核子爆弾の存在を知らなかった。
そして、彼自身も最悪の可能性も考えていた。
つまり、古代たちがここへ辿り着けないという可能性だ。
敵はかなりの大部隊で地球へ侵攻した。
途中で古代たちが敵に拿捕あるいは撃破されてしまった可能性もある。
無線封鎖の為、お互いに連絡を取れない事がこうした最悪の予測を生む。
しかし、状況は切迫している。
時間が経てば敵の捜索網はより細かくなり、ここが発見されるのも時間の問題なので、その場合は古代たちをまたずに見切り発進するしかない。
だが、真田の最悪な様相は覆された。

観測用のレーダーがイカルスに接近する物体を捉えた。
モニターに表示されたその物体は防衛軍の連絡艇だった。
真田は天文台上部の物資輸送船発着ドームを開口させ、連絡艇を招き入れた。
仮死状態から目覚めた古代はまず、相原に謝罪した。
感情が高ぶり、公私混同の挙げ句、私怨のまま同僚に私的制裁を加えたのだ。
本来なら即日解任の上謹慎となり、最低でも査問委員会にかけられてもおかしくはない。
しかし、殴られた相原も事態が事態なので、水に流すと言った。
こうして、古代が相原を殴った件の正式な処分は、取りあえず両者が和解しているので、今はそれ以上の話は不要となった。
それよりも今は暗黒星団帝国の地球侵略を止める事が最優先なのだから。
イカルス天文台へと降り立った古代たちは誰も居ない天文台に不安と疑問を抱いた。
着陸をしたイカルスのターミナルには出迎えの者はおらず、声を上げて誰かを呼んでも、誰も出てこなければ、返事も無い。
それでも古代たちは真田を信じ、イカルス天文台の奥へと進んだ。
そしてある部屋を見て、違和感を抱いた。
「ここは・・・」
「まるで、ヤマトの第三艦橋にそっくりだ・・・まさか・・・」
古代たちは、近くのエレベーターへと飛び乗り、ある階へと昇る。
すると、そこは・・・
「間違いなくヤマトだ・・・」
古代たちが辿り着いた階・・・
そこは、自分たちが一時も忘れたことのない場所・・・
そして、自分たちの勤務地・・・
ヤマトの第一艦橋だった。
「俺たちはヤマトに帰ってきたんだ・・・」
古代たちは、懐かしむかの様に第一艦橋内を歩き回ったり、座席や

機材に手を触れる。
すると、機械が作動し、メーターやモニターに光が灯る。
そして、先程古代たちが乗って来たエレベーターの扉が開き、真田と山崎が艦橋に姿を現した。
「真田さん!!山崎さん!!どうして出迎えてくれなかったんです?少し不安になりましたよ」
「いや、すまん、すまん。山崎さんと一緒に機関の整備に追われていたんだ。何しろ、ここにはそれほど人が居ないのでな」
「皆の事だ。間違いなくここに来ると思っていたよ」
真田と山崎は地球から脱出してきた古代たちを出迎えるが、その中である人物が居ない事に気がつく。
「ん?雪が居ないな・・・どうしたんだ?」
真田は一緒に脱出してきたであろう雪の姿が見えない事に疑問を感じて訊ねる。
「・・・」
「な、な~に、雪の事じゃ。無事でいてくれることじゃろう」
真田の質問に古代は顔を俯かせ、代わりに佐渡が曖昧ながらも答える。
「そうか・・・雪は・・・」
佐渡の答えで、雪は地球を脱出出来なかったのだと察する真田。
「でも、ヤマトが健在で良かったです」
雪の話はこれ以上古代にとって禁句なので、島が話を逸らした。
「うむ・・・長官から私が預かり、非常事態に備えて管理と改修をしていたんだ」
真田が、ヤマトが何故、地球では無く、イカルスに置かれていた訳を話す。
そこへ、コスモタイガー隊のメンバーも古代たちを出迎えに来た。
「山本!!坂本に椎名も!!お前たちもここに居たのか?」
「ああ、そうだ。名目上では小惑星哨戒隊って事になっているが、長官にイカルス・・・つまりヤマトの警護を任されていた。此処に居る間、自分の訓練も兼ねてこの二人を徹底的にしごいていたのさ。何しろ

すぐ外が宇宙・・・しかもアステロイドベルトだからな、コスモタイガーも飛ばしがいがあったよ」
「そうか・・・坂本に椎名・二人とも腕は上がったか？」
古代は山本にしごかれた坂本と椎名本人に訊ねた。
「当たり前だろう。誰が指導していると思っているんだ」
まずは指導にあたった山本が自信ありげに言う。
「椎名なんて腕が上がり過ぎて参りましたよ。このままじゃ、俺も追い抜かれそうなんで、毎日頑張っています」
「あら？まだ自分が追い抜かれていないと思っているの？」
「この調子ですよ。まったく・・・」
相変わらず体育会系なコスモタイガー隊である。
「しかしまぁ、向上心が有ると言う事は良い事である」
「ええ、そうですね」
真田と古代は苦笑しながら言う。
「坂本、椎名。この戦いでも良い所を見せてくれよ」
古代が二人に期待を込めて言う。
「腕が鳴りますよ。それになんといっても、実戦が一番の教師ですからね」
「期待に応えてみせます」
二人は自信満々で答える。
「それじゃあ古代、俺たちはパイロットルームで待機している。用が有る時は何時でも呼んでくれ」
「ああ。頼んだぞ、山本」
山本、坂本、椎名の三人は第一艦橋を降りていった。
「ところで新艦長には真田さんが？」
古代は未だに不在となっているヤマトの艦長について真田に訊ねた。
真田はヤマト就航当時から技術長と共にヤマトの副長も兼務していたので、序列から言えば、真田がヤマトの艦長に就任するもの不思議では無かった。
しかし、

「いや、俺はそんな柄じゃない。今まで通り、お前が艦長代理だ。古代」
と、真田は自らがヤマトの艦長で無い事を告げると同時に、今回の出撃に当たって古代が今まで通り、戦闘班長兼ヤマトの艦長代理であると告げる。
「だが、何もかも今まで通りと言う訳にもいかない。見かけは殆ど変らないが、ヤマトは新しく生まれ変わったんだ・・・主砲、レーダー、ＣＩＣ・・・至る所に改良を加えてある。中でも特筆すべきは、つい最近になって完成した超ワープ機関・・・スーパーチャージャーを備えた新型波動エンジンだ」
「波動エンジンがパワーアップしたんですか？」
エンジン関係は航海に大きく影響するため、航海長の島は興味津々で真田に訊ねる。
「ああ、大幅にな。近距離のワープは通常通りだが、完成型のＨＷＶＤを組み込み、長距離の連続ワープが可能になっている」
「あの新型エンジンが・・・」
前回のイスカンダル救援任務の時にはまだ未完成だった例の新型エンジンが完成し、既に組み込まれている事実に同じ航海班の太田も関心ている様子。
「さすが、真田さんですね」
「いや、エンジンに関しては、俺はサブでね、メインは大山がやった」
「トチローさんが・・・？そういえば、トチローさんは何処に居るんですか？」
古代は新型エンジンの改良を施したトチロー本人の姿が見えない事に疑問を感じ、真田に訊ねる。
トチローならば、こういう時、真っ先に自分から説明する筈なのだが、その本人が居ない。
ならば、彼は何処に行ったのだろうか？
「うむ、新型エンジンの設計図を持って冥王星基地へ向かったのだが・・・」
気まずそうに真田がトチローの行方を答える。

「冥王星基地!?あそこは全滅したんですよ!!それじゃあ、トチローさんは・・・」
古代の脳裏に最悪の結果が浮かぶ。
「わからん・・・だが、あいつのことだ、そう簡単に死ぬようなやつではないんだが・・・もし、無事だとしても、無線封鎖の為に連絡がとれんのだ・・・生きていてくれればいいが・・・」
古代が雪の生存を信じている様に真田も悪友の生存を信じていた。
「そうですか・・・」
艦橋内に気まずい空気が流れた時、一人の少女が艦橋に入って来た。
「ユキサン?」
アナライザーがその少女を一瞬雪と見間違える。
「ああ、紹介しよう。真田澪、私の姪だ。雪が居ないので、今後は雪の代わりにレーダー担当を務めてもらうつもりだ」
「しかし、ずいぶんと若いようですが・・・」
真田の紹介と今後の役割に古代は「こんな若い子で大丈夫か?」と、少し心配になる。
あのテレザートへと向かう航海の中で、雪がレーダー担当となる前にレーダーの担当をしていた新人の乗組員だった新米俵太は度々敵の発見が遅れると言うミスを犯していたので、古代が心配になるのも当然だった。
「その点は心配ない。宇宙戦士として恥ずかしくない教育はしてある」
「はぁ・・・」
まぁ、真田のお墨付きならば大丈夫だろうと一応は納得する古代たち。
そして、ヤマトは地球を占領している暗黒星団帝国を撃滅するために出撃準備をするが、その前に相原が待ったをかけた。
相原はイカルスに到着する前、敵が流した例のプロパガンダ放送を傍受していた。
そして、地球に撃ち込まれた重核子爆弾について話し、モニターに

その爆弾の映像を映し、敵の指揮官（カザン）が言った『あの爆弾一発で、地球の自然には何ら影響を与える事無く一瞬の内に『ある特定の生物』の脳細胞を破壊し、絶滅させることが出来る』と言う宣言が事実かどうかを真田に訊ねた。

もし、敵の宣言が事実通りならば、今、地球の占領軍を攻撃するのはあまりにも不味い。

なにせ、地球人類を人質にとられている状況なのだから。

真田は映像に映る重核子爆弾を見て、この爆弾が『ハイペロン爆弾』である事を見抜き、敵の指揮官が言っている事が事実である事を言う。

そこで、ヤマトの方針は地球占領軍の撃滅から、重核子爆弾のコントロールの破壊へと変更された。

だが、その爆弾のコントロールが何処で行われているのかが問題だった。

真田曰く、この爆弾の機能、目的から地球側の捜索の手が届かない所・・・

暗黒星団帝国の本星にあるのではないかと推測された。

ヤマトは三度、地球人類を救う為、暗黒星団帝国本星へと旅立つことになった。

しかし、それはかつてのイスカンダルの航海と同じ・・・いや、それ以上の困難が予想された。

何せ、暗黒星団帝国本星の位置が分からないのだから・・・。

だが、このまま手を拱いている訳には行かない。

イカルスの偽装岩盤を脱ぎ去り、新しく生まれ変わった宇宙戦艦ヤマトは星海へと船出した・・・

しかし、暗黒星団帝国もタダでヤマトを自分たちの母星へと向かわせる訳には行かなかった。

地球～火星間宙域

万が一、地球本土にヤマトが不在だった場合を想定し、カザンはミヨーズに太陽系周辺の哨戒任務を行わせていた。

そして、ミヨーズが座乗するガリアデスはそのヤマトを捕捉した。

プレアデス級指揮戦艦　特務第二艦隊　旗艦　ガリアデス　艦橋

「ミヨーズ司令、ヤマトを発見いたしました」

「ふん・・・・とうとう姿を現したか。で、ヤマトは何処だ？何処に向かっている？」

「方向からすると、我等が暗黒星雲へ進行するものと思われます」

「ふん・・・・我々の母星へと向かうつもりか。カザン総司令が言われた通り、地球人というのはつくづく愚かだな。この期に及んでも、まだ我々に歯向かうつもりでいるらしい。しかし、総司令はさすがだな・・・・地球を決してなめてかからず、ヤマト追撃隊をこうして配備していたのだからな。まぁ、偶然とはいえ、一度はあのゴルバを倒した程の相手だ。警戒して当然だが・・・・」

「あの・・・・司令。ヤマトをどうしますか？」

「知れた事・・・・追撃しろ。我等が母星の有る暗黒星雲へと向かわせるわけにはいかん。まずは前衛部隊を出して様子を見るのだ」

前衛部隊は巡洋艦を旗艦とする駆逐艦を中心とする高速部隊だった。

ミヨーズはそれら高速部隊をまずは様子見としてヤマトへとけしかけた。

敵の接近は当然ヤマトでも捕捉していた。

敵艦隊はその高速機動を生かし、ヤマトに対して、一撃離脱の戦法を繰り出し、翻弄、ダメージを蓄積させていくが、新しく生まれ変わったヤマト、そしてアステロイドベルトで日々、厳しい訓練を行っていたコスモタイガー隊もその性能と訓練の成果を十分に発揮し、敵に見せつけた。

プレアデス級指揮戦艦　特務第二艦隊　旗艦　ガリアデス　艦橋

「前衛部隊が・・・・全滅!!」

送り出した味方の部隊の全滅と言う事実にガリアデスのオペレーターは驚愕した。

「思っていた通り、なかなかやるな・・・」
しかし、ミヨーズにしてみれば、ここまでの戦果は予想通りなのか、慌てる様子も、驚愕する様子も無い。
「よし、お遊びはこれまでだ!!我々が直に出るぞ!!」
ミヨーズはガリアデスを中心とする第二特務艦隊全ての投入を決断し、命令を下す。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋
「更に敵艦隊が現れました!!」
古代は当初、迎撃しようかと思ったが、太陽系内で時間を潰すわけにも行かないので、ここはワープにて逃げる事にした。
敵母星の正確な座標はまだ分からないが、敵艦隊が襲来した方向は特定できているため、連続ワープのテストも兼ねてワープにて戦線離脱を試みた。

プレアデス級指揮戦艦　特務第二艦隊　旗艦　ガリアデス　艦橋
「敵が退却していきます!!ワープを開始するようです!!」
オペレーターはヤマトが艦載機（コスモタイガー）を収容し、更に艦のエネルギー波長を調べた結果、ヤマトがワープによる戦線離脱を試みようとしているのを掴んだ。
「ワープだと?・・・・ええい!!させるな!!」
ミヨーズはヤマトがワープをする前に攻撃を加えようとするが、
「き、消えました・・・・!!」
時すでに遅し。
ヤマトはワープして、この宙域から撤退した後だった。
「むぅ・・・なんと早いワープだ!!」
ミヨーズはヤマトのワープ速度に舌を巻いた。
「フフフフ・・・地球の艦もなかなかやるなではないか・・・ヤマトか・・・カザン総司令が・・・そして、聖総統閣下があれほど気に留めておられる理由が、益々わかるというものだな・・・」
「あの・・・司令?」

「なんだ？一々命令されんと次の行動の判断がつかんのか？」
　ミョーズは要領の悪い自分の部下を叱り、指示を出す。
「ヤマトのワープアウト地点を計測しろ。すぐに後を追うのだ」
「いえ、それが・・・・」
　ミョーズの指示に対し、部下はすまなそうに言う。
「どうした？」
「敵のワープが余りにも速く、突然だったもので、ワープアウト地点の算出は不可能です・・・・」
「ならば、計測するな。我々もすぐワープの態勢に入れ。ヤマトがどの方向へ向かうかは分っているのだからな。先回りをして網を張るのだ!!」
「はっ、はい!!」
「ふん・・・・使えん部下だ・・・・」
「は・・・・申し訳ありません・・・・」
「つまらない事に一々反応するんじゃない!!ええい!!さっさと動け!!」
　第二特務艦隊は急ぎワープの態勢へと入った。
　その最中、
（逃げられんぞ・・・・ヤマト・・・・このミョーズから逃れた敵など、存在しないのだからな・・・・）
　こうしてヤマトは狩人のミョーズにとって最高の獲物として認識された。

　その頃、地球では・・・・
　カザンより死刑判決を言われた藤堂は処刑場へと続く通路を連行されていた。
　その途中、
「長官・・・・」
「君もか・・・・」
　同じく死刑判決を受けた西郷と出会った。
「誰が口をきいて良いと言った!!」

連行する兵が声を上げる。
そして、再び歩みを始める二人。
そんな中、西郷は敵兵に気づかれぬように小声で藤堂に話しかける。
「長官・・・まだ諦めてはなりません・・・処刑場に着くまでに、私が何とか抵抗します・・・その隙に逃げて下さい・・・」
「参謀長・・・」
「私はこれまで何度となく見誤りをしてきました・・・こんな私に出来ることと言えば・・・」
「・・・」
突然歩みを止める二人。
「何を立ち止まっている!?さっさと歩け!!そんなに歩きたくなかったら、ここで射殺しても良いんだぞ!!」
そう言って銃を構える敵兵。
「おい、ここではまずい・・・見せしめの為に公開処刑を行えとの命令なんだ」
そんな敵兵に対し、同僚の敵兵が止める。
その隙に西郷が、
「うわぁぁぁぁぁ!!」
敵兵の一人に体当たりをし、藤堂を逃がす隙を作ろうとするが、
「このっ!!」
敢え無くもう一人の敵に蹴られ、倒された。
怒った敵兵はこの場で西郷を射殺しようとしたが、天井からレーザーが照射され、敵兵は斃れた。
「うぐっ!!」
「ぐぁ!!」
敵が排除されると、天井の通風孔の蓋が外れ、そこから一人の空間騎兵隊隊員が降りて来た。
「お待たせしました」
「君は・・・空間騎兵隊の・・・」
「古野間君ではないか」

「御無事で何よりです。長官、参謀長。遅くなって申し訳ない・・・」
藤堂と西郷を助けたのは、空間騎兵隊第一都市防衛師団所属の古野間だった。
「なにぶんガタイがデカイもので、通風孔を抜けるのに手間取っちまいましてね」
苦笑交じりで古野間は救助に遅れた事を詫びる。
「いやいや。そんな文句は言わんよ。来てくれただけでもありがたい」
射殺される寸前だった西郷は古野間に礼を言う。
「礼は上手く脱出できてからにして下さい。さっ、行きますよ」
古野間は斃した敵兵からライフルや銃を奪い、藤堂と西郷に渡して脱出を図った。
防衛軍司令部付近は敵の哨戒がかなり厳重だった。
歩兵の他にも軽戦車（パトロール戦車）も加わっていた。
外へ出ると古野間は藤堂と西郷にインカムを手渡す。
「これは？」
「通信機能を兼ね揃えたインカムです。これがないと意思疎通が出来ないので・・・」
「？」
古野間の言っている事が理解出来ずに首を傾げる藤堂と西郷。
「しばし、お待ちを・・・」
すると、古野間は物陰に隠しておいたスーツに身を包む。
二人の下に戻って来た古野間の姿は、
「ふもっふ・・・『おまたせしました』」
ボ○太くん（ソ○ッド・ス○ーク　Ｖｅｒｓｉｏｎ）の着ぐるみを纏っていた。
「・・・」
着ぐるみを見て藤堂と西郷は唖然とする。
「こ、古野間君・それは一体何だね？」
藤堂が古野間に着ぐるみの正体を訊ねると、
「ふもふもふも、ふもっふる」

と、外部スピーカーではこうした訳の分からない音声が流れるが、インカムからは、
「月村グループが開発した新型戦闘スーツです。流石にコイツを着て、ダクトを通るのは無理だったので、一旦コイツを脱いでから潜入しました」
と、古野間の声でこの着ぐるみがなんなのかを説明する。
「では、参りましょう」
と、インカムからは古野間の声がするのだが、外部スピーカーからは「ふもふも」などと訳の分からない音声がする。
なんとも奇妙な光景ながらも藤堂と西郷はボ〇太くん・・もとい、古野間の後をついて行った。
「行ったようです」
敵兵を物陰からやり過ごした三人。
市街地は相変わらず、敵兵、敵のパトロール戦車がウヨウヨしていた。
「それにしても凄まじい破壊ぶりだな・・・・」
西郷は改めて周辺の被害状況を見て、呟く。
「なぁに、もっと酷い所は幾らでもありますよ。それはそうと、大統領をはじめ、他の政府上層部連中は全て収容所に移されたみたいです。残念ながら、降伏文書にも調印したみたいで・・・・」
「・・・・」
藤堂は現在の地球の状況に苦悶の表情を浮かべる。
しかし、大統領の決断があり、敵の殺戮が終息したのもまた事実であり、一概に大統領の事を批難する事も出来なかった。
「残るは、ワシらだけか？」
西郷は、防衛軍関係者はもういないのか古野間に訊ねる。
「いえ、数は少ないですが、我々は反抗組織として『パルチザン』を結成しました。私の任務はその本部にお二人を無事にお連れする事です」
「パルチザン・・・その本部はどこにあるのかね？」
西郷が本部の場所を訊ねる。

「お二人ともよくご存じの場所ですよ。まぁ、本部と言っても突貫工事で作った物ですから、あまり期待しないでください」
そして三人はパルチザン本部を目指したが、そこまでの道のりには敵が多数いる市街地を通らなければならなかった。
「これは・・・完全な焼け野原じゃないか・・・」
防衛軍の備蓄倉庫街は完全な焼け野原となり、破壊された建物、爆撃によって出来たクレーターが彼方此方に出来ていた。
「ええ・・・敵はここに絨毯爆撃を仕掛けてきました・・・今じゃ何もかもか瓦礫の中です。倉庫にあった物資も・・・俺の仲間も・・・」
あの夜の戦闘の事を思い出し、悔しそうに顔を歪める古野間。
三人はこの旧防衛軍の倉庫街を横断し、隣の地区へと入った。
「お二人とも大丈夫ですか?」
「なぁに、これしきの傷」
藤堂も西郷もかすり傷程度の負傷はしたが、根を上げる様子は無い。
「軍上層部の連中はただ、命令してふんぞりかえっている連中ばかりだと持っていましたけど、見直しましたよ」
「否定はせんよ。だが、地球人としての誇りは無くしてはおらんつもりだ」
「上出来です。さぁ行きましょう。もう少しです」
市街地を抜けていくと、そこに司令部で見た例の三脚戦車が姿を現した。
「戦車か・・・」
「近くでは初めて見るが・・・これほど巨大だったとは・・・」
「敵の掃討三脚戦車です・・・どんな地形でも自由に出動出来るように、あんな形をしているのでしょう。しかもかなりの装甲で、我々防衛軍の戦車ではこの瓦礫の中では自由に身動きが出来ませんし、あの分厚い装甲を破る事はできません。そのため、我々パルチザンは戦車を確保するのを断念しました」
「戦力、武装共に敵の方が優秀と言う訳か・・・・」
「ですが、あれも完璧な兵器と言う訳ではありません。弱点はあの

ヒョロ長い脚の付け根部分です」
古野間が敵の三脚戦車の弱点を説明していると、遠くの方で爆発が起きた。
その爆破音を聴き三脚戦車はその方角へと向かって行った。
「あの爆発音は？古野間君、街ではまだ交戦状態が続いているのかね？」
「いえ、あれは囮の陽動部隊です。貴方がたを無事本部へ送り届けるために、仲間が敵の目を逸らしてくれているんです」
「そうか・・・」
敵の三脚戦車が離れた隙に三人はパルチザン本部へと急いだ。
パルチザン本部は地下に設置されているのか、瓦礫の中に上手い具合に隠れていたエレベーターで下へと降りた。
そして、藤堂と西郷はパルチザン本部へと無事に到着した。
そこは・・・
「ここだったのか・・・」
「ヤマトの地下改修ドック・・・」
西郷の言う通り、パルチザン本部はヤマト専用の地下ドックだった。
「敵がヤマトを血眼になって探している事はご存知でしょう。奴等はまず先にここを捜索し、至る所を引っ掻き回して去って行きましたよ・・・まっ、ヤマトどころかここには何もなかったんですからね」
「そうか・・・敵も同じ場所をもう一度探したりはしない・・・絶好の隠れ場所と言う訳だな」
ここがパルチザン本部として選ばれた理由に納得した様子の藤堂。
「藤堂長官、参謀長。御無事で」
二人の姿を見つけ、本部に居た皆が集まって来た。
空間騎兵隊に航空科、司令部要員、整備課等の所属がまちまちな軍人や警官たち。その中には民間人も含まれていた。
西郷は所属の違う軍人や警官たちと素人な民間人たちを纏め上げたここの司令官に感服した。
そして、その司令官が古野間である事を告げられると、古野間は、司

令官職を藤堂と西郷に譲渡した。
そんな中、陽動部隊も本部に合流した。
陽動部隊を率いていたのはヤマトを降り、第十四パトロール艇艇長を務めていた北野だった。
その後、肝心のヤマトの行動に関し、当初は動揺が広まった。
何故ならば、ヤマトは太陽系外方向へと向かってしまったからだ。
「地球を見捨てて逃げたのか？」と言う意見も出てパルチザン本部は重い空気に包まれたが、そこを北野、藤堂、西郷が反論し、ヤマトは敵の母星へ向かったのだと三人はそう予測を立てた。
そこはやはり真田同様、地球に撃ち込まれた重核子爆弾の起爆装置を地球圏からではなく、敵の母星から操作していると言う結論だった。
そして、西郷は地球に残った自分たちは地球を解放する準備を整える事だと諭した。
いくらヤマトと言えど、地球の占領軍を殲滅し、敵母星の起爆装置を破壊する事を同時には出来ない。
ヤマトは地球の人々を信頼して、旅立ったのだ。
ならば、自分たちもその信頼に答えなければならない。
ただ、ヤマトが帰って来るのを何もせずに待っているのではなく、地上に居る敵の数を減らし、あの重核子爆弾を逆に占拠する所まで行かなければならない。
ヤマトが帰って来るまでに自分たちはやることが山ほどある。
地球人としての誇りを賭け、戦わなくてはならない。
パルチザン本部も先程の重い空気から一転、明るく士気が高まった。
地球の方でも新たな戦いが幕を上げた。

九十五話　再会を信じて

「・・・うぅ・・・・うう・・・・」
　連絡艇ターミナルで敵の銃弾に倒れた雪は、意識を取り戻した。
「こ、ここは・・・・？」
　どうやら、自分は死んではいない様だ。
「まだ、動いてはいけない」
　そんな雪に声をかける人物が居た。
「貴方は・・・・？」
「私は、地球占領軍技術部情報将校、アルフォン少尉」
「情報将校・・・・なぜ私をここに？」
　雪は何故敵の将校が自分を殺さず、手当てをしたのか理由を訊ねる。
「どんな勇猛な男でも、貴女ほど勇敢には戦えない。そんな女性を収容所に運ぶわけにはいかない。ましてや君は負傷していたのだからな・・・・」
「じゃあ、貴方はあのターミナルで・・・・」
　雪はアルフォンの言葉からあの時、連絡艇のターミナルを襲撃して来た敵兵のメンバーの中に彼が居た事を察する。
　雪の予想通り、彼女を狙撃したのは他ならぬアルフォンだった。
「教えてください。あの時発進した連絡艇はどうなったんです？」
　雪はアルフォンならば、地球を脱した古代たちがどうなったのかを知っているかもしれないと訊ねた。
「敵である私がそんな質問に答えると思っているのかい？」
「・・・・」
　アルフォンの意見は最もだった。
　しかし、
「・・・・彼らは私たちの警戒網をぬって発進した。しかし、追跡した艦の報告ではあの連絡艇からは生命反応が消えていたそうだ」
　沈黙の後、アルフォンはあの連絡艇について語り出した。

「生命反応が・・・」
「多分、発進後に内部で事故が発生したのだろう・・・」
「・・・」
アルフォンの言葉を聞き、俯く雪。
この時二人はまさか、佐渡が特殊な薬を乗員に打ち、仮死状態で切り抜けたとは思いもよらなかった。
「・・・涙一つ見せないか・・・気丈な人だ・・・女性は強いな。何が起ころうとも、誰を失おうとも次の世代へと命をつないでいける・・・羨ましいかぎりだよ、君たち人間は・・・」
アルフォンはまるで自分は人間ではないかのように言う。
その様子は『お前ら下等な地球人と一緒にするな』と言う上から目線の様子では無く、彼が最後に呟いた『羨ましい』と言う言葉通り、地球人を羨んでいる様子だった。
「貴方たちだって人間でしょう?」
「人間だ。だが、君たちとは違う」
「・・・そうでしょうね」
アルフォンの言葉に雪は彼らの行った殺戮の酷さに同じ人間でもあれ程まで残虐な行為が出来る物かと言う意味を込めて言った。
「・・・」
アルフォンは気まずくなったのか、黙って部屋から出ていった。

海鳴市　市街地
「「・・・」」
フェイト、ティアナ、紅葉の三人は食料品の買い出しからの帰り道を歩いている。
地球の主要都市、軍、政治の中枢を制圧した暗黒星団帝国軍は、地下都市に避難した一般市民に対し、速やかに地上の家に帰宅し、日常生活に戻るよう命令した。
無論、従わない場合は拘束、最悪は武力行使と警告して、だ。
これにより、市民生活が再開されたのだが、全てが元どおりになったわけではない。

地下都市を出る前に忍はフェイトたちに中嶋家へ行くように言った。
理由は、月村家は軍、政治と密接な関係の家柄。
屋敷を見れば分かる様に、敵も月村家の人間を拘束するには十分な価値があると思うに違いない。
自分と一緒に行けば関係者と見なされ必ず捕まってしまう。
本来、フェイトたちはこの地球とは無関係の星（世界）の住人。
今回この様な騒動に巻き込まれてしまったが、これ以上巻き込む訳にはいかない。
そうした理由で忍はフェイトたちを逃がす為に提案したのだ。
フェイトたちは当初戸惑ったが、忍曰く地球は決してこのままじゃ終わらない。
必ず、助けは来るから心配はいらないと言ってノエルと共に戻り、案の定、屋敷前で待機していた兵士たちに身柄を拘束され、収容所へと送られた。
その時の忍の様子は恐怖に震える事も無く、毅然とした態度であり、ノエルもそんな忍の付き人として凛とした態度で忍に付き従った。
フェイトとティアナは忍の行為にいたたまれない気持ちになったのは言うまでもなく、ヴィヴィオは忍とノエルの身を案じていた。
ただ、忍はフェイトたちに中嶋家に向かうように言った時、ティアナに記憶媒体を手渡した。
「これは？」
「月村グループで作った戦闘スーツの改良プログラムが記憶してあるメモリーよ」
忍の言う戦闘スーツと聞いて、ティアナは真っ先に思いついたのがあの着ぐるみだった。
「でも、どうして・・・？」
「・・・中嶋さんの事だから、このままで済ますわけがないわ・・・きっと、レジスタンス活動をするに決まっていると思うの・・・その時、あの戦闘スーツは必ず彼らの役立つはず・・・だからもし、中嶋さんと

会ったら、あの人にコレを渡してほしいの」
「分かりました」
ティアナは事の重大さを感じていた。
中嶋家に避難したフェイトとティアナであったが、忍の予想通り、源三郎は既にデザリアム軍に対してのレジスタンス活動の為、パルチザンに身を投じており、中嶋家には不在で、ティアナは忍からのメモリーを手渡せずにいた。
また、マスメディアは活動を大幅に制限され、携帯電話やインターネットは原則として使用禁止となった。
当然使えない様に妨害電波が絶えず地球には流され続けられた。
テレビやラジオはニュースや討論番組は放映（送）を禁じられた。
深夜帯は放送休止。
外出に関しても地球全土に夜間外出禁止命令が布告され、２２時から翌朝６時までは暗黒星団帝国軍関係や警察・消防等の緊急自動車以外は一切運行できなくなった。
当然、店舗はそれ以前に閉店せざるを得ない。
街中のあちこちにライフルを担いだ黒ずくめの暗黒星団帝国軍兵士が立ち、市民に威圧感を与えるようになったが、かなり厳しい軍律を敷いているようで、市民とのトラブルは少ないまま推移していた。
特に敵兵による女、子供に対する性的暴行が一件も起きていない事実に関しては、連邦市民は驚愕した。
「何ていうか・・・威圧的ではあるけど、乱暴狼藉沙汰は不思議と聞かないわね」
ティアナは遠目からライフルを構えた兵士を見て意外そうに呟く。
地球のこれまでの歴史や管理局の歴史においても、軍や管理局では軍律や法律を敷き、統治または占領地の住民に対し、乱暴狼藉は厳罰に処している。
しかし、そんな中でも婦女子や子供に対しての乱暴狼藉事件は絶えず起こっている。
司令官の中には前線の兵士に対して、「暴行や略奪こそが兵の士気を高める」と言う理由で敢えて暴行や略奪を懐の痛まぬ褒美だと言っ

て許可する例も多々あった。
「そう言われてみれば、そうね」
　ティアナの意見に賛同するフェイト。
（ふむ、そうだな・・・それとな、レディー。ミス、ハラオウン、ミス、ランスター。敵の兵士をサーチしたら、妙な反応があったぞ）
　ルシフェリオンが紅葉たちに念話で話しかけて来た。
（妙な反応？）
（どういう事？）
（連中の胴体部の広範囲から、精密機械特有のノイズや電磁波が僅かだが検出された。同時に、地球人類に近い生命反応も探知した。それも一人だけじゃない。今まですれ違った敵の兵士全員がそうだ）
（それって、サイボーグじゃない!?）
　どういう事なのか？兵力を補うためにアンドロイドが含まれていると言うのであれば解るが、兵士全員がサイボーグとは・・・。
　地球にも既にアンドロイドは存在するが、生身で戦闘をこなすようなハイレベルなものではない。
　ましてやサイボーグなど、技術面もさりながら倫理的問題もあって実用化自体怪しいものだ。
　ミッドでも戦闘機人と言うサイボーグに近い存在も居るが、顔から下が完全な機械のサイボーグなどミッドでも他の管理世界にもそんな存在は居ない。
（ひょっとして、暗黒星団帝国人は、生身での身体機能が著しく低下しているんじゃないでしょうか？）
　紅葉は何故暗黒星団帝国人がサイボーグと言う身体をしているのか推測を立てる。
（ふむ、レディーの言う通り、あの重核子爆弾とやらの技術から地球人より高度に進化したのかも知らんが、その代償として生命力・人類の種としての存在自体が衰弱してしまったという可能性はあるな）
（だとすれば、彼らの地球侵略の目的は・・・）
　三人は背中にこれまでになく冷たいものが走るのを感じ、慄然とした。

中嶋家
一体これはどんな光景なのか？
フェイトとティアナは完全に呆れ果てていた。
高町紅葉の容姿はどことなくだが、自分たちの親友、上官である高町なのはに似ている。
そして、バリアージャケットもデバイスの形状も似ている。
しかし、デバイスの性格は少々ズレている。
メンテナンスと称して酒や紅茶の風呂に浸かるようになったのはその最たるものだ。
そして今また、シュールな事をやり出した。
「どうだ？私の偽装はまさに完璧だろう？レディー」
「・・・その姿で言われてもね」
長嘆息する紅葉の目の前を一羽の青いインコが飛び回っていた・・・ただし、本物のインコではなくぬいぐるみのインコだ・・・。
敵の兵士の身体がサイボーグであると看破したルシフェリオンは、帰宅するや、ヴィヴィオの様子を心配そうに見守っているクリス（セイクリッド・エクセリオン）を見て、自分をぬいぐるみに縫い込めと言い出した。
それで自由に行動できるのだと言う。
始めはペンギンのぬいぐるみに縫い込んだのだが動き難いし、日本のど真ん中にペンギンが居るのは不自然だと言い出し、次に紅葉のベッドサイドにあったインコのぬいぐるみを指名してきた。
改めて縫い込んだら、大層気に入ったらしく、部屋の中で飛び回り始めた。
心なしかバルディッシュとクロスミラージュも羨ましそうに見ている・・・様な気がする・・・。
「それで、その恰好で何をするつもりなのかな？」
意味も無くルシフェリオンがこんな行動をするとは思えない。
故に紅葉は自らの相棒に訊ねた。
「無論、情報収集と伝達だ。レディー」

紅葉の相棒は、当然のようにのたまった。
その日の夜・・・
「古よりこの地に住みし蔑まれし者たちよ、我が朋輩が導きに応え給え・・・」
中嶋家に用意されたフェイトとティアナの部屋の真ん中で紅葉が瞑目し、詠唱する。
やがて、彼女の足元には魔方陣が出現する。
フェイトとティアナ、ヴィヴィオの三人はその様子をジッと見ている。
紅葉の魔法に興味津々だったためである。
（いいぞ、レディー。動き始めたぞ）
瞑目している紅葉に念話が届く。
声の主は勿論、ルシフェリオンだ。
青いインコのぬいぐるみに身を包んだルシフェリオンは夜の街を飛び回り、あちこちに潜むドブネズミやゴキブリ、銀蠅、やぶ蚊といった、いわゆる生活害虫・害獣を集めているのだ。
紅葉から念話で送られてくる呪文を、それぞれの動物の行動に影響を与える周波数に変換して発信する。
四十年以上の年月を地球で過ごし、すっかり土着したルシフェリオンならではの〝ふざけた〟能力だ。
しかし、ミッドではルーテシアやキャロといった召喚師もいるのでさほど珍しい能力では無い。
だが、召喚されるのが生活害虫・害獣と言う点では珍しいと言えば珍しい。
こんな能力でも夏ともなれば、ルシフェリオンはそのまま虫除けに変わるので、重宝している。
紅葉の母親の代でも喫茶店をしていたので、この能力は大変重宝された。
ビルの間を飛び回るインコ姿のルシフェリオンの後ろからは何本もの蚊柱が追従し、地下の下水道をドブネズミやゴキブリがいくつもの群を作りながら駆けずり回る。

ルシフェリオンが向かう先には、デザリアム帝国軍が宿舎として接収したホテルがあった。

その頃、ミッドチルダでは・・・・

地球が暗黒星団帝国に占領されたと言う事実はミッドでは当然知られていないが、地球に何らかのトラブルが起きたのかもしれないと言う予測はたてられた。

何しろ、定時連絡の日時を過ぎても地球からの応答が全く無かったからだ。

時空管理局本局

「連絡がとれないって、本当なの!?」

「本当だ。何度コンタクトを試みても、防衛軍司令部との回線が繋がらないんだ。こちらのシステムや通信ポッドは正常に動作しているんだが・・・・」

クロノの言葉に、はやては、傍らのなのは共々困惑の表情になった。

ボラー連邦との紛争で次元航行部隊に大打撃を被った管理局本局は、戦力再編に苦慮していた。

更に最近では〝空〟までもが〝海〟を見限り〝陸〟と連携を取ろうとしている動きが有る。

〝空〟の方も大勢の若い空戦魔導師たちを失った痛手があり、それを回復するまでかなりの時間を有する為、危険が伴う次元の海での任務を減らそうと言う意見が増えた為だ。

何より遺族からのバッシングが効いていた。

そこで三提督は極秘にレティ・ロウランに地球連邦政府と接触する事を命じた。

地球連邦・地球防衛軍と提携し、タキオン推進機関艦船の建造技術を会得しようという声が技術部門から上がり、管理局としては最低でも波動エンジン技術の提供を求めたかった。

波動エンジンは武装ではなく、あくまで艦船の機関に過ぎず、管理局が掲げる「質量兵器の廃絶」には当たらない。

精々、魔導師至上主義者から「管理外世界の機関を採用するなんて恥ずかしくは無いのか!?」等の野次は来るだろうが、現在管理局が採用している最新の魔動力炉の最大出力でも波動エンジン並の速力は出ない。
いつまでも魔力だけで管理を維持する時代はもう終わりに近づいているのかもしれない。
三提督や一部の高官らはそれに気づき始めていた。
そのため、三提督から命令を受けたレティはまず、何度も彼らとコンタクトをとった経験をもつクロノに地球防衛軍にコンタクトをとらせたのだが、それはのっけから躓いた。
防衛軍司令部が暗黒星団帝国軍に陥とされた地球が管理局からの通信に答えられるはずがなかったのだが、管理局はまだその事実を知る由もなかったのだ。
「それってあの地球に何かアクシデントが起きたって事なの?」
なのはが心配そうに訊ねる。
第二の地球には親友の他に今は、愛娘のヴィヴィオがいるのだから、なのはとしては心配で仕方がない。
「それは何とも言えない。何分にも情報がないからな・・・」
不安げな、なのはにクロノが答える。
「いずれにせよ、余り時間を空費するわけにはいかない。もしかしたら、クラウディアが派遣される可能性もあるな・・・」
管理局の中で、多少なりとも地球防衛軍とコネクションを持つのはクロノ・ハラオウンとレティ・ロウランぐらいだ。
自ら、艦船を指揮するクロノが派遣されるのは当然といえよう。
そして、クロノの予想通り、数日後、クラウディアに第二の９７管理外世界こと地球連邦への派遣命令が出た。
表向きはボラー連邦への警戒に対する哨戒任務であった。
クロノと同じく次元航行艦の艦長となったはやてもその任務に同行したかったが、はや　てのヴォルフラムは先日テスト航海から戻ったばかりで、整備・補修等で出撃するにはまだ時間が必要だった。
艦長として、補修中の艦から離れる訳にはいかず、はやては複雑な

心中のままクラウディアを見送った。
その頃、重核子爆弾の起爆装置の破壊を目的として、太陽系を脱し、一路暗黒星団帝国の本本星を目指すヤマト。
そのヤマトはワープにて太陽系を一気に脱し、オールトの雲へとやって来た。
しかし、当初の予定ではもっと遠方でワープアウトする筈だった。
何らかのイレギュラーが働き、オールトの雲でワープアウトしたのだ。
そして、連続ワープの影響の為か、レーダーにも被害が出た。
真田はそのイレギュラー原因を調査すると共に技術班にレーダーの修理を命じた。
しかし、そう簡単に原因は判明しなかった。
そのため、調査に少し時間が掛かった。
通常航行でオールト雲を航行していると、澪が接近してくる艦影を捕捉した。
敵かと思われたが、接近中の艦船は味方の・・・防衛軍の艦艇だと判明した。
その最中、真田が先程のワープアウトのイレギュラー原因を突き止めた。
その原因は波動エンジンのフライホイールシャフトに使うベアリングだった。
一つでは何の変哲もないただの金属球だったが、そのベアリングがこのオールトの雲の周辺に無数にばら撒かれており、コンピューターが其れを障害物と認識し、ワープアウトしたのだ。
レーダーの故障もこれがレーダーにぶち当たった為に起きた事だった。
之は明らかに人為的な物なのだが、このベアリングは防衛軍・・・地球連邦の艦船に採用されている部品で、敵の妨害工作とは考えられなかった。
そんな中、その犯人から通信が入った。

「よぉ!!やっと来たか」
「大山!!」
「トチローさん!!」
何とこのオールトの雲に無数のベアリングをばら撒いたのは、大山こと、トチローだった。
トチローは冥王星基地に新型エンジンの設計図を持って冥王星基地に赴いていたが、重核子爆弾が襲来する少し前に試験航海の為、冥王星基地を出ており命拾いしていた。
その後、オールトの雲に潜み、地球の様子を窺っていたのだと言う。
敵の無線も完全にではないが、傍受に成功し、ヤマトがこの宙域を通る事も知り、待っていたのだと言う。
そして、ヤマトを一時的に止めるために、この宙域一帯にベアリングをばら撒いたらしい。
トチローの迷惑行為に真田はキレ、
「こっちの航路が分かっていたのなら、無理に止めたりせずに、後からついて来ればよかったじゃないか」
と抗議する。
しかし、トチローの方にもヤマトにはどうしてもこの宙域で止って貰わなければならない事情があると言う。
「何かあったのか?」
真田が事情を訊ねると、
「敵に発見されて追われている」
と、サラリと言う。
トチロー自身も雪風・改で迎撃に当たったが、雪風・改には波動砲は搭載されておらず、相手は空母の様で艦載機を展開して撃ち落してもキリが無かった。
だからこそ、ヤマトにはこの宙域で停まって貰う必要があったのだ。
ヤマトは急ぎ戦闘態勢を取るが、このオールト雲には彗星となる原始惑星があり、それらを破壊すると、レーダーの効きが悪くなるので、ヤマトはコスモタイガーを先行させ、敵か原始惑星かの判別をさせ

た。
ヤマトのレーダーは、ベアリングとの衝突で未だに上手く作動しない為、雪風・改がヤマトをサポートした。
やがて、アステロイドの間に空母と駆逐艦数隻が潜んでいた。
ヤマトの対空砲火とコスモタイガー隊のドッグファイト、雪風・改の機動を生かした砲雷戦により、瞬く間に敵の空母を撃沈したヤマト。
空母が撃沈された事により、残存艦は次々と撤退して行った。
敵の存在がオールトの雲から消えるとトチローは雪風・改からヤマトへと移った。
戦闘終了後、古代は少し休むと言って艦橋を後にした。
戦闘後の興奮が冷め、ようやく一息がつける頃、古代は雪の事を思い出したのだ。
古代が艦橋を出て行くと、澪も真田に一言入れて、艦橋を後にした。
真田も船外作業の指揮の為、艦橋を降りた。
澪が艦橋を降りた後、
「あれ？」
太田が先程の出来事で一つ妙な事に気がついた。
「ん？どうしたんだ？」
「トチローさんが雪風で現れた時、澪が反応を発見したんだったよな？」
「ああ、確かそうだったと思うが・・・それがどうかしたのか？」
「あの時はレーダーが使えなかったんだ・・・レーダーが壊れていたのに、澪はどうやって雪風を見つけたんだ？」
「そう言えば・・・」
「確かに・・・」
太田の指摘に艦橋の皆が何とも言えない表情となった。
一方、艦橋を降りた古代は、展望室で一人、ターミナルで敵弾に倒れた雪の事を思い出していた。
そこへ、
「寂しそうね、おじさま」

澪が話しかけて来た。
「澪か・・・君に何がわかるんだ?第一、俺はおじさまなんかじゃない」
澪の言葉にムッとする古代。
まだ二十代の古代と見た目、十五、六の澪。
どう見ても古代はまだおじさんと言う年柄じゃない。
せいぜい少し年の離れた兄妹か親戚と言う感じだ。
そのため、古代が『おじさまなんかじゃない』と言ったのはそう言う意味を含んでいた。
しかし、
「いーえ、おじさまよ」
澪はどうあっても古代を『おじさま』扱いする。
「?」
古代は何故澪が自分を『おじさま』と呼ぶ意味が分からなかった。
「ほら、あたしをよーく見て。分からない?」
「????」
澪の言葉に益々混乱する古代。澪は真田の姪と紹介されたが、今までこの方、真田から姪を紹介されたことは無い為、澪とはヤマトで初めて出会ったのだ。
にも関わらず、澪は以前古代と出会った様な口調で話す。
「あたしよ。サーシアよ」
澪は遂に自分の正体を古代に明かした。
「・・・サーシア?そんな・・・君が兄さんとスターシアさんの・・・あの時の赤ん坊・・・しかし、まさか・・・」
古代が目の前に居る澪が姪のサーシアだと言う事実が信じられないのもうなずける。
サーシアは去年まで赤ん坊だった。
それが今では立派な少女に成長している。
いくらなんでもこの僅かな年月でここまで人間が成長するのは余りにも可笑しかった。
そこで、サーシアはイスカンダル人特有の成長速度について古代に説明した。

「少し見ない間にあたしがこんなに大きくなったことが不思議なんでしょう」
「あ、ああ・・・」
「驚くのも無理は無いでしょうね。あたしの体には、イスカンダル人のお母様の血が半分流れているわ。イスカンダル人は、大人になるまでの成長がすごく早いの。でも、周りの人を驚かせてもいけないから、お父様はあたしを真田さんに預けて、イカルスで育てていただいたの」
「そうだったのか」
「でも、これは当分、真田さんとあたしたちの秘密ね」
「そうしよう・・・」
古代はサーシアの説明を受け、一応納得はした。
確かに血筋で言えば、自分はサーシアの叔父にあたる。
だから、サーシアは自分の事を『おじさま』と呼んだのだ
「ホントはイスカンダルで育つのが一番だったんでしょうけど・・・いつかイスカンダルで暮らせるようになったら、あたしはきっとあの星で暮らすんでしょうね・・・そしてあたしは、名前がサーシアからスターシアに変わるの。お母様の名を受け継ぐのよ。イスカンダルの女王の名前・・・それがスターシア・・・そして、次の王位継承者の名前がサーシア、その次がユリーシャ・・・イスカンダルの女王は代々そうしてきたんだって。だから、お婆様も生まれた時はサーシア、女王になった時はスターシアって名前だったらしいわ。ユリーシャと言う名の王族も過去には居たみたいだけど、結構稀な事だったみたい」
澪：もとい、サーシアは古代にイスカンダル王族が代々受け継いできた継承を説明する。
「でも、あたしはもう一つの名前をもっているわ。素敵な名前・・・『真田　澪』って名前を・・・」
サーシアは地球人の名前の方にも誇りを持っている様子。
「お母さん・・・スターシアさんとは一度も・・・？」
古代はサーシアが、あれから一度も連絡等を取っていないのか訊ねる。

「会った事はないわ。でも、いつも心の中で話しかけている・・・お母様は、いつだってあたしこの事を見守ってくれているの。お父様にも・・もう長い間会っていないわ。今頃、何処で何をしているのかしら？」
　サーシアは父、古代　守の行方を案じている。
「兄さんは、地球への侵攻が開始される前から、春藍の乗組員として長期のテスト航海に出ているらしい・・・残念ながら、連絡も無いし、消息も掴めていないんだけど・・・兄さんなら、何があっても生きているさ」
　あながち古代の言う事は間違ってはいない。
　あの冥王星海戦において生存が絶望視されていた中、奇跡的に生還したのだから。
「・・・」
　それでもやはり、父の姿、声を聞かない限り、心配な様子のサーシア。
「大丈夫、すぐに会えるよ」
「・・・そうね・・・お母様にも、きっと会えるわ」
「ああ、そうだな・・・」
　会いたい人に会えない・・・。
　それはサーシアも古代も同じ心境だった。
　でも、必ず会える。
　古代はサーシアに言い聞かせるのと同時に、自分にも言い聞かせた。
「それまでは、おじさまがお父様の代わりね」
「ああ・・・俺で兄さんの代わりが務まるのなら、な」
　古代は苦笑交じりに言った。
「そういえば、もう一人の・・えっと・・・」
「ユリーシャ」
「そう、ユリーシャはどうしたんだい？」
　古代はもう一人の姪でサーシアの妹である、ユリーシャ・イスカンダルの行方を訊ねた。

サーシアはイカルスに住んでいたのだから、当然妹のユリーシャが居ても不思議では無かった。
しかし、イカルスに居たのはサーシアだけ・・・。
ならば、ユリーシャは、今、何処に居るのだろうか？
「妹は地球に住んでいるわ」
「地球に？」
「ええ・・・真田さんが言うには、自分同様とても信頼できる人にお父様は預けたって仰っていたわ・・・」
「そうか」
ユリーシャの行方は分かったが、地球に居ると言う事で、古代はユリーシャの身を案じた。
「でも・・・」
「でも？」
「あたしは妹ともすぐに会えるような気がするの・・・妹は直ぐ近くに居る・・・そんな気がするの・・・」
サーシアはユリーシャと直ぐに再会する予感がしていた。
それは強ち間違いでは無かった。

そのユリーシャが乗っている　まほろば　は今、苦境に立たされていた。
試験航海の目的地であるシリウス恒星において、まほろば　春藍　ハルバード　ファルシオンは突如、暗黒星団帝国の大艦隊の襲撃を受けた。
防衛軍が誇る戦艦も数と突然の奇襲には対処がしようがなく、反撃もままならぬ内に後退を余儀なくされた。
ワープによる撤退はアステロイドや小惑星が密集しており、不可能の為、通常航行で撤退するしかなかった。
「針路２３０!!アステロイド帯へ向けろ!!」
「敵駆逐艦尚も接近!!」
「迎撃ミサイルと機雷で足止めをしろ!!」
「了解、ミサイル発射!!」

「機雷投下!!」
「序にありったけのジャミング弾も投下しろ!!少しでも敵の目を鈍らせるんだ!!」
「艦長、我々に出撃命令を!!」
　坂井がコスモタイガー隊の出撃を求める意見を具申するが、
「駄目だ!!今、出ても返り討ちに遭うぞ!!」
「しかし・・・・」
「もう少し待て!!」
「りょ、了解・・・・」
　まほろば　のコスモタイガー隊のパイロットの腕が未熟ではないが、完全に多勢に無勢となっているこの状況下でコスモタイガー隊を出撃させても返り討ち遭うのは目に見えており、被弾・補給の為に艦へ戻ればそれは敵を案内する形になってしまう。
　そのため、人的被害、状況の悪化を防ぐ為、彼らには出撃を我慢してもらわなければならなかった。
　パイロットたちにとっては悔しい思いだろうが、良馬としてもここで彼らに犬死にしてもらいたくはない。
　春藍はテスト航海と言う事でコスモタイガーを積んでいない。
　そのため航空戦力は　まほろば　のみ・・・・。
　無駄にすることは出来ないのだ。
　敵の追撃を何とか振り切った　まほろば　春藍　ハルバード　ファルシオンは、機関を止め、必要最低限のエネルギー消費とし、息を殺して敵をやり過ごす事にした。
　互いの連絡も小さな光源による発光信号か短時間の有線による通信で行われた。
「何とか敵の追撃は振り切れたな・・・・」
「ええ・・・・しかし、敵は諦めきれない様です・・・・この小惑星帯を探し回っています」
「うむ・・・・一先ず隠れ通せる内は隠れるしかないか・・・・」
「ええ、何とも情けない姿ですけど、やむを得ません」
　山南との通信を終えた後、良馬は、休める者には休息を命じ、医療

班には負傷者の応急手当てをさせ、技術班には破損個所の修復を命じた。
「通信長」
「はい」
「微弱で構わない。ＳＯＳを送信してくれ」
「微弱で、ですか?それでは友軍に届かない可能性がありますが・・・」
「あまり出力を大きくすると、敵に気づかれる・・・でも、何もしないより少しでも打てる手は打っておきたい」
「わかりました」
ギンガは出力を調節しながら救難信号を送った。
しかし、余りにも小さな出力の為、ノイズに掻き消されてしまうかもしれない。
かと言って近くの友軍に届く様な大きな出力で打てばあっという間に敵にこちらの居場所を教えてしまう。
(誰か気づいてくれればいいんだけど・・・)
ＳＯＳを打つギンガは額に汗を滲ませながら、ひたすら遭難信号を打ち続けた。
(さて、どうする・・・最悪の場合、艦を動かせる最低限の乗員を残し、コスモタイガー隊と乗員を春藍に移乗させ、まほろば　ハルバードファルシオンが敵を惹きつける囮となるか・・・)
良馬は春藍を逃がす為にかつて、冥王星海戦において守や恭介がとった行動を再現するしかこの場を切り抜けられないのではないかと思った。
乗員の顔にも不安な顔色が隠せない。
敵に見つかってからでは、乗員を春藍に移乗させるのは危険である。
ならば、隠れおおせている今の内に乗員を春藍へ移乗させるか。
良馬がその旨を乗員に伝えようとした時、ユリーシャが艦橋に入って来た。
「ユリーシャ・・・どうしてここに?部屋に居ないとダメじゃないか」
「来る・・・」

「えっ？」
「近くまで来ている・・・」
「来ている？誰が？」
「・・・サーシア姉さん」
「えっ？」
　ユリーシャの口から意外な人物の名前が出た時、その人物が乗艦しているヤマトは、シリウス恒星系へと突入していた。
　ヤマトはシリウス恒星系に入ると、真田とトチローが新開発した通信機テストの為、コスモタイガー隊を偵察任務に向かわせていた。
　そのコスモタイガー隊は、まほろば　春藍　ハルバード　ファルシオンを捜索している敵艦隊を捕捉した。
　山本は敵艦隊発見の報告を直ちにヤマトへと知らせた。
　坂本は一戦交えるかと古代に訊ねるが、敵はまだヤマトの存在に気がついていない。
　ならば、余計な戦闘は避けるべきだと判断し、コスモタイガー隊に帰投命令を出した。
　コスモタイガー隊から得た敵艦隊の情報を元にヤマトで作戦会議が開かれた。
　敵はヤマトにもコスモタイガー隊にも気がついていない。
　ならば、敵をやり過ごし、この宙域をさっさと通り過ぎようと言う結論に出たのだが、先程から澪（サーシア）の様子がどうもおかしい。
　ブツブツと何かを呟いている。
　古代が敵の後方にレーダー照準を合わせ直してほしいと頼むと、澪（サーシア）は全く違う場所にレーダー照準を合わせた。
　それは敵艦隊の前方を印していた。
「そっちじゃないよ、澪・・・前方じゃなくて、敵の後方だ」
　古代は澪（サーシア）に間違いを指摘するが、彼女は、
「・・・こっち・だわ・・・ここに・ここに貴女は居るのね？」
　と、訳の分からない事を呟いている。
「おい、澪。聞いているのか？」
「ちょっと待て、古代・・・澪にやらせてみよう」

真田は澪（サーシア）が何かを感じ取ったのだと察し、彼女の好きな様にやらせてみようと言った。
澪（サーシア）は敵の前方の宙域にあるアステロイド帯へと照準を動かし、最大の大きさで拡大した。
すると、そこには防衛軍の艦船反応があった。
「これはっ!?」
「地球防衛軍の艦ですよ!!」
相原と南部が思わず声を上げた。
「っ!?南部、急いで識別信号の確認を!!太田は敵の航路をもう一度割り出してくれ!!」
「了解」
南部と太田は急ぎ、古代に指示された内容を実行に移した。
「出ました!!・・・っ!?これは、まほろば　と　春藍の識別信号です!!」
「春藍？地球防衛軍の艦隊旗艦じゃないか!!それがどうしてこんな所に？」
島は春藍がこんな所に居たのが意外で思わず声を上げる。
「春藍は就航後、新型波動エンジンの調整の為に長期航海テストの為に地球を出ていた筈だ。そして　まほろば　はその護衛にあたっていた」
まほろば　と　春藍がシリウスに居る心当たりを真田が説明すると、澪（サーシア）が突然倒れた。
「澪!!大丈夫か!?」
「やはり、力を使ったんだな・・・澪。無茶なことを・・・」
古代と真田が澪（サーシア）に駆け寄る。
「力？力って何の事ですか？」
太田が真田の呟いた『力』と言う言葉に引っ掛かりを感じ、訊ねる。
「説明は後だ。今はそれどころじゃない。敵が　まほろば　と　春藍を狙っているのは明白だぞ!!」
「艦橋に戻るぞ!!総員、戦闘配置!!」
「古代さん、そう言えば春藍には・・・」
艦橋に戻った相原が思い出したように古代に訊ねる。

「ああ、春藍には兄さんが・・・・守兄さんが乗っている・・・・相原、まほろば　と　春藍に通信を送れ!!」
「でも、向こうは新型の通信機を積んでいませんよ。従来のタキオン通信ならば、送受信は可能でしょうけど、敵に傍受される危険が・・・・」
「かまわん!!送れ!!」
「了解」
　古代はまだ敵に自分たちの存在が気づかれていないにも関わらず、まほろば　と　春藍に通信を送る様に命じた。
　相原が　まほろば　と　春藍　に通信を送っている中、澪（サーシア）が真田に付き添われて艦橋に入って来た。
「澪、大丈夫か？レーダーは何とかなる。君は休んでいた方が良い」
　と、彼女を気遣うが、
「いえ・・・・大丈夫・・・・やれます。やらせてください・・・・」
　当の本人は無理してでも職務に着く気でいた。
「古代さん、まほろば　からの通信をキャッチしました・・・・ＳＯＳを送信しています!!」
　相原が　まほろば　からの通信を受信した事を知らせる。
「余りにも微弱なので、ノイズに紛れて今まで見落としていたんですね・・・・もしかしてメインの通信機器が使えない程艦が損傷しているのかもしれませんね」
　もし、澪（サーシア）が見つけなければ、気づかずにそのまま素通りしていたかもしれない事実に相原は冷汗が流れた。
「ですが。ＳＯＳが来ると言う事は彼らがまだ生きていると言う証拠です。事は一刻をあらそいますよ。艦長代理」
　山崎が直ぐにでも救援へ向かうべきだと古代に言う。
「敵がこちらに気がつきました!!レーダー妨害を開始しています!!」
　ヤマトの通信を傍受した敵がヤマトの存在に気がつき動き始めた。
「これよりヤマトは　まほろば　と　春藍の救出に向かう!!」
　ヤマトは急ぎ、まほろば　と　春藍　の救助へと向かった。

九十六話　レジスタンス活動

微弱ながらもＳＯＳを送っていたギンガが　まほろば　宛てに送られてきた通信を受信した。
「艦長!!ヤマトです!!ヤマトから通信が入りました!!」
「ヤマトから!?内容は?」
「『我、大至急で救援へ向かう』・以上です」
「そうか、ヤマトが・・・よし、こちらも反撃に出るぞ!!通信長、春藍の山南艦長に連絡。ヤマトの攻撃に呼応して反撃に打って出る!!敵を挟み撃ちにする!!」
「了解」
救援が来たと言う事で艦橋内の空気も変わりつつあった。
春藍にも有線で連絡を取り、タイミングを見計らって攻勢に転じる事となった。
敵はアステロイドに隠れている　まほろば　春藍よりも堂々と自分たちの前に出現したヤマトへと標的を変え、向かって行く。
元々ヤマト拿捕ないし撃破の命令は自分たちの国家元首からの命令だ。
その第一優先目標が現れたのだ。
地球の大型戦艦など、もうどうでもよかった。
そのヤマトはコスモタイガー隊を発進させ、戦闘態勢をとる。
ただ最初の内、暗黒星団帝国の将兵たちは　まほろば　を　ヤマトと誤認していた。
その為、彼らは執拗に　まほろば　と　春藍　を捜索していた。
しかし、自分たちに接近して来る艦の通信を傍受した結果、接近中の艦がヤマトだと知ると、ピラニアの様にヤマトへと向かって行った。
「こちらもコスモタイガー隊を発進させる。またせたな、空戦隊長」
「全くですよ。でも、これで憂さを晴らせます!!」
「徹底的に暴れてやれ・コスモタイガー隊発進」

「了解。コスモタイガー隊発進!!」
待機命令を受けていた　まほろば　のコスモタイガー隊は、「待っていました」と言わんばかりに次々と発艦していく。
敵はヤマトへと向かって行ったため、こちらに背中を見せている。
奇襲するには持って来いのポジションだった。
ヤマトはコスモタイガー隊と雪風・改を前衛に敵へと挑んだ。
ヤマトの姿を視認した敵はヤマトにミサイルと砲撃を行って来る。
その敵部隊に対し、ヤマトのコスモタイガー隊は猛禽の群れの如く、襲い掛かった。
敵部隊は駆逐艦、巡洋艦を前衛に繰り出し、戦艦、空母を後衛に着かせる基本的な陣形でヤマトへと迫る。
対艦ミサイル兵装のヤマト所属のコスモタイガー隊の雷撃を受け、駆逐艦、巡洋艦は容易く撃沈できるが、戦艦はそう簡単には行かない。
防御も攻撃力もレベルが違う。
そんな中、敵部隊の背後から　まほろば　所属のコスモタイガー隊と　まほろば　春藍ハルバード　ファルシオン　の大戦艦部隊が砲雷撃を見舞う。
数は勝っているが、敵部隊は防衛軍に挟撃される形となった。
挟撃された事により、敵部隊は混乱し、敵艦を撃破しようとする艦と何とかこの挟撃状態から逃れようとする艦に別れ、攻撃するあまり、味方を間違えて撃つ艦、逃げようとして味方と接触する艦、そして逃げようとして、味方の砲撃によって撃沈ないしダメージを受ける艦が多発した。
数で勝って居た筈の敵艦隊は徐々にその数を確実に減らされて行く。
やがて、数での不利を悟ったのか、敵は撃破から逃亡の動きへと変更し、この宙域からの離脱を図るが、時すでに遅し。
数を減らされた敵艦はヤマトらの砲雷撃、コスモタイガー隊の雷撃を受け続け、やがて全滅した。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋

「敵艦隊、全滅を確認」
太田がこの周囲に敵の脅威が完全に取り払われた事を確認した。
「なんとか終わったな…古代」
「ああ・・・」
敵艦隊の全滅を確認し、ようやく一息ついた古代。
やがて、ヤマトは　まほろば　と　春藍に接舷し、有線通信にて交信を行った。

春藍　ハルバード
雪風・改　ヤマト
まほろば　ファルシオン

位置は大体こんな感じ。

有線ケーブルが接続されると、早速山南と良馬は、ヤマトの乗員たちに礼を述べた。
そして、古代の兄、守も当然春藍に乗艦しており、守もヤマトの皆に礼を述べた時、澪（サーシア）が思わず、
「お父様!!」
と、言ってしまった。
「お父様？」
「澪が守さんに向かって『お父様』？」
「どういう事だ？」
流石に聞き違いと言うレベルではなくなり、
「こうなっては仕方がないな・・・」
真田が澪の正体を第一艦橋のメンバーに話した。
「澪は俺の姪じゃない。古代守とスターシアの間に生まれた娘、サーシアだ」
「で、でも・・・あの時見た彼女は赤ん坊でしたよ・・・それがどうしてこんなに大きく・・・」
南部が当然の疑問を口にする。

また、南部の他に相原や太田も同じ疑問を抱いている様子だ。
しかし、
「今はそんな事を説明している場合じゃない。兎に角、彼女はサーシアなんだ」
「はぁ・・・」
真田が強引に澪＝サーシアと言う形でこの話を終えた。
当初は腑に落ちない様子の相原と太田であったが、真田の姪と言う澪は全くと言って良い程、真田と似ていない事から、澪＝サーシアと言う事実を受け入れた。
「それと、貴女も居るのでしょう？ユリーシャ」
サーシアが　まほろば　に密航しているユリーシャに声をかけると、
「ユリーシャ、バレている様だし、出てあげなさい」
良馬が艦橋にいたユリーシャに通信に出てあげる様に言うと、
「お、おひさしぶりです。お姉様・・・」
ユリーシャが気まずそうにモニターに現れた。
「月村さん。本当に彼女が・・・」
モニターに現れたユリーシャに、彼女が本当にユリーシャなのか、訊ねる太田。
「ええ、正真正銘、彼女はサーシアの双子の妹、ユリーシャだ」
「彼女もついこの前までは赤ん坊だったのに・・・」
サーシア同様、ついこの前まで赤ん坊だったユリーシャが僅かな間にここまで成長している事実に驚きが隠せない様子の南部たちだった。
「いや、しかし、今回の航海は参りましたよ。航海に出てすぐにユリーシャが密航していたり、時空管理局との艦と遭遇したり、連続ワープ明けにいきなりあの時の敵と遭遇するのだから・・・ほら、前にペテルギウスとイスカンダルに攻めて来たあの時の艦隊ですよ・・・何とか善戦したつもりなんですが、この宙域まで追い詰められてしまって・・・」
良馬は今回の航海の出来事をかいつまんでヤマトの乗員たちに話

す。
「そこに君たちが来てくれた訳だ。しかし、君たちは何故ここまで航海を？ヤマトのシリウスまでの航海は予定に入って居なかった筈だが・・・・？」
　山南はヤマトがシリウスまで来た理由を訊ねた。
「まだ何もご存じないんでしたね・・・・」
　山南と良馬達が現在の地球の状況を知らない事を知ると、真田は今の地球が置かれている状況を話した。
「・・・・」
　真田の話を聞いた山南と良馬は、当初信じられなかった。
「地球が・・・・占領・・・・」
　あの地球が・・・・
　ガミラスにも白色彗星帝国にも膝を屈せず、占領された事も無い筈のあの地球が先程交戦した暗黒星団帝国の占領を受けたと言うのだ。
「信じたくないだろうが、変えようのない事実ってやつさ。だが、俺たちはそれを変えにゃならん。重核子爆弾の起爆装置を破壊し、暗黒星団帝国を倒してな」
「そうか・・・・」
「それでは我々が地球に帰還してもその重核子爆弾が存在する以上、帰還の意味が無いと言う事になるな・・・・その敵の本星とやらの位置は確認できているのかね？」
　山南がヤマトに暗黒星団帝国の本星について訊ねると、
「爆弾の太陽系ルートから、逆算し、おおよその方角は判明しているのですが、本星の正確な位置までは・・・・かつてイスカンダルを見つけた時の様に、何とか進みながら探索するしかありません・・・・」
　真田が、今後の航路について説明する。
「・・・・どう思うね？月村君」
「ええ、もしかすると・・・・」
「何かあったんですか？」
　良馬には何か思い当たる事が有る様で、古代がその件について訊ねる。

「我々が暗黒星団帝国の艦隊に遭遇した時、偶然にも我々は敵の丁度正面から、敵のワープアウトを観測できたんですよ」
「そうか・・・空間歪曲のエコーか・・・よし、こっちにそのデータを転送してくれ」
「わかりました。通信長」
「はい」
「例の観測データをヤマトへ転送してくれ」
「了解」
　ギンガは早速ヤマトへ観測データを転送する。
「空間歪曲のエコー・・・一体どういうモノなんですか？」
　島が真田に『空間歪曲のエコー』とはどういうモノなのか質問する。
「大きな質量を持つ物体・・・たとえば、戦艦などがワープアウトをする際、その進行ベクトル前方に、波紋状の空間歪曲のエコーを放出するんだ。微弱な空間歪曲波だから、前方からしか観測できないのだがな・・・」
「そして、そのエコー形状はワープ距離によって左右されるって訳だ」
　トチローが補足説明をつけ足す。
「それじゃあ、そのエコーを逆算すれば・・・」
「ああ、方向だけでなく、距離も分かると言う訳さ」
「ただし、敵が我々の様に連続ワープを行っていなければの話だがな・・・」
「出たぞ・・・銀河系外周からおよそ２０万光年の先だ・・・」
　運良く敵は連続ワープにて、この宙域に来たわけでは無い様で、敵がワープして来た方向と距離は割り出せた。
「２０万光年・・・そこには何か星系があるんですか？」
「いや、何も無い・・・だが、その更に２０万光年ほど向こうには巨大な暗黒星雲があるな・・・もしかすると、敵は４０万光年先にある暗黒星雲の向こうから来たのかもしれん」
　トチローは敵が来た本当の距離を推測する。
「そうすると、この２０万光年先の地点には敵の補給基地・・・または宇宙要塞の様な施設があるのかもしれませんね」

良馬は今回敵が来た地点には地球攻略の要所である補給施設があるのではないかと推測する。
敵が地球よりも優れた科学技術を持っていようと、流石に４０万光年以上先の星を攻略するのに無補給と言う訳にはいかないだろう。
イスカンダルに現れた艦隊でさえ、背後にはあの大型の宇宙要塞（ゴルバ）が控えていたのだから。
「まぁ、とりあえず敵が来た方向と距離は分かったのですから、そこまで行ってみるしかないですね」
太田がとりあえず、今の目標はその逆算した方向の２０万光年先であり、そこへ行ってみなければ敵に関する情報は無いと言う。
「ちょっと待てよ、そこにはもしかしたら、敵の要塞が有るかもしれないんだろう？そんな所をヤマト一艦でくぐり抜けられるのか？」
と、この先の航海に対し、不安が過ぎる。
「うむ、その点については提案がある。針路の事は兎も角、我々も君たちと共に敵本星までの旅に同行しようと思う」
山南は、春藍はヤマトと行動を共にすると言う。
「もちろん、まほろば　も同行します」
良馬も山南の意見に同意し、まほろば　も　ヤマトと共に敵本星までの航海に同行すると言う。
「本当ですか!!」
「ええ、幸い、艦の損傷はそう重くは無いですから・・・」
良馬が　まほろば　の状態を説明し、今回の航海に支障が無い事を伝える。
「こちらも同じだ。無人艦のコントロール機能も問題ない」
山南も春藍、ハルバードとファルシオンの航行、戦闘には支障はないという。
「では、ヤマトを含め、艦隊指揮は山南艦長が・・・」
古代が今回の航海の指揮は山南が取るべきだと言うが、
「いや、指揮は君たちが・・・ヤマトが執るべきだと思う」
と、指揮権をヤマトに譲った。
「しかし・・・」

「暗黒星団帝国との戦闘経験に関してはイスカンダルで既に同じ敵を撃破している君達に一日の長があるのだ・・・・地球防衛軍が崩壊している今、私の肩書きなどには意味が無い・・・・」
暗黒星団帝国との戦闘経験、イスカンダルへの二度の大航海、テレザートへの航海・・長距離航海の経験が豊富なヤマトがこの艦隊の旗艦として選ばれた。
「わかりました」
今回の指揮権（旗艦）を決め、ヤマトから修理用の資材、雪風・改から工作機器を幾つか廻して貰い、最終調整に入る　まほろば、春藍、ハルバード、ファルシオン。
当然今回の調整では、ヤマトが装備した新型の通信機も装備した。
その最中、山南は守にヤマトの艦長に就任し、ヤマトの皆を導くように言った。
守はその言葉を受け止め、ヤマト艦長の件を了承した。
こうして古代守は宇宙戦艦ヤマトの二代目の艦長に就任した。
やがて、守はヤマトへと移乗し、艦長着任の挨拶を行った。
「俺が艦長の古代守だ。俺は敵を撃ち破るために艦長に就任した。故に、お前たちを特別扱いはしない」
ヤマトの艦長席に立った守は、開口一番に宣して皆を見渡す。
「我々の前途には幾多の困難が待ち受けているのは確実だが、それを理由に出撃をためらった者はいないはずだ。地球人類を救う。この一点を現実のものにするために全てを賭けて任務に当たれ。俺が言うべき事はそれだけだ！」
第一艦橋員に答礼し、守は着席した。
「発進準備完了しています。艦長」
「ヤマト、発進！」
「了解、全速前進！」
ヤマトを含む艦隊は雪風・改を先頭に右舷側に春藍、中央にヤマト、左舷側に、まほろば　後方にハルバードとファルシオンの位置で発進した。
第一次目標は銀河系外周２０万光年の位置・・・・。

そこに何が有るのか？
それは、ヤマト　まほろば　春藍の乗組員たちには分からない。
しかし、彼らは行かなければならない・・・・。
地球を救うために・・・・。

その頃、地球では・・・・

地球を占領した暗黒星団帝国軍の占領政策は、潜伏した防衛軍残党への捜索・掃討はともかく、一般市民に対しては、市民側の予想よりは緩く、市民生活自体は制限付きながら再開されていた。
無論、これには暗黒星団帝国の計算の上だ。
潜伏した地球防衛軍残党は、ゲリラ戦を行うに際し、市民を巻き込むような事はできまいと考えてのことだ。
当然ながら、ゲリラに協力した容疑がある市民は拘束、抵抗すれば殺傷するという布告が太陽系方面軍総司令官・カザンの名で出されていたのだ。
そんな中――。
「失礼します」
定例報告のため、報告書が纏められたファイルを持った兵士がアルフォンの下を訪れた。
報告を受けたアルフォンは、退出しようとした部下を制した。
「ああ、待ちたまえ」
「何でしょう？」
「少し気になったのだが、この数日、兵士たちが妙に疲れているように見えるのだが、何かあったのか？」
地球人の抵抗・パルチザン行動も計算に入れており、昼夜二体制をとっていたのだが、疲労は何故か兵士全体に蔓延しているように見えた。
アルフォンの問いに、その兵士は思い当たる節があるのか、少し首を傾げながら答える。
「実は今朝、数人に確認したのですが、この地に住む吸血害虫に悩まさ

れている、との事でして、少尉殿に申し上げるべきか考えあぐねておりました」
「考えあぐねた事は必ず話してくれたまえ。それで？」
促したアルフォンに、兵士は自分たちを悩ませる害虫被害の概要を話す。
曰く、耳障りなか細い音が一晩中響いたり、朝起きたら瞼が腫れ上がり、しかもとても痒い。
曰く、小さな羽がついた虫が止まって、しばらくしたら赤く腫れ、しかもとても痒い。
身体の九割を機械化しているデザリアム星人であったが、その吸血害虫はどう言う訳か、機械の部分ではなく、まだ人としての機能が残っている頭部のみに襲い掛かって来る。
「ふむ、わかった。眠れないというのは確かに痛いな」
アルフォンの脳裏に、つい先日、負傷して倒れていた所を自邸に連れ帰った地球防衛軍の女性軍人が思い浮かんだ。
彼女なら、これらの吸血虫の撃退・駆除方法も知っているだろうと思った。
「対処については私の方で調べよう、明日まで時間をくれないかね」
「わかりました、私も調べてみます」
部下を下がらせたアルフォンはしばし考え込んだ。
「ミクロの敵・・・か。地球人は駆逐できずにいるのか？あるいは駆逐せずに共存しているとでも言うのか？」
アルフォンはこの地に住む吸血害虫に関してこの時点では軽視していた。

翌日・・・
「――どうなさったのですか？アルフォン少尉」
朝、アルフォンと顔を合わせた森　雪は、彼の顔の惨状に思わず上擦った声を上げた。
アルフォンの両の瞼は赤く腫れ上がり、元々切れ長である彼の目は、ほぼ一本の横線に近くなっていた。

「私も吸血害虫・・この星ではヤブ蚊と言うのだったな・・・その虫に刺されたようだ。痒い上に視野が狭くてどうにもならない・・・どうして、ヤブ蚊と言う虫は人を見て血を吸うのかね？」
アルフォンは雪にヤブ蚊の習性について訊ねる。
「・・・」
雪は正直、返答に困った。
敵軍の士官とはいえ気の毒といえば気の毒だし、今の彼の顔に笑いたい気もしたからだ。
何とか笑いの衝動を抑え込んで答える。
「あ、あの・・・ヤブ蚊は、身体の発熱量や排出される二酸化炭素を感知して人に近づくと言われています。地球人でも、刺されやすい人と刺され難い人がいるといいます」
「些か納得いかないところもあるが、長年この虫と付き合ってきた君たちが言うならその通りなんだろうな・・・そもそも君たち、地球人は何故、そのヤブ蚊を撲滅しようとは思わなかったのかね？」
「この地域に棲息する蚊は単に痒いだけですし、過去幾度も撲滅を試みて失敗しましたので、ほどほどに駆除しながら共存する事にしたんです・・・」
数多くの生物がガミラスの遊星爆弾によって絶滅させられたこの地球であるが、どう言う訳か、ヤブ蚊やハエ、ダニ、ノミ、そして台所などに良く現れる黒い虫・・・通称Gは人類よりもしぶとく、ガミラスの絶滅戦争を生き抜いていた。
「・・共存・・か・・・」
この日、アルフォンは雪から痒みに効くと薦められたム○軟膏を貰ったのだが、塗布する時、誤って眼に入れてしまったため、遅刻の憂き目を見ることになった。
そして、彼らのいる建物の床下では、尻にカプセル状の物体をつけた〝黒光りする憎いヤツら〟・・・Gが不気味に蠢動していた。
「何だと!?」
第一報を聞いた藤堂平九郎以下の潜伏した地球防衛軍首脳陣は一

様に絶句した。
狙撃で斃した敵兵の死体を軍医が解剖したところ、予想外の事実が判明したからだ。
彼らが何故この様な事をしたのかと言と、海鳴市に潜伏しているメンバーから、
「敵軍兵士と接触した市民から、兵士の身体から、極僅かながら不自然なノイズが聞こえた、との情報提供があった」
との情報が寄せられたのが一昨日。
そこで、昨夜警戒中の敵兵を狙撃し、斃した後、その遺体を回収して解剖してみたところ、骨格や臓器が人工物で、筋肉や関節に相当する部位は明らかな機械構造。生身といえるのは首から上と生殖器くらいだというのだ。
「まさか、サイボーグとはな・・・」
「地球製の義肢と比べ、明らかに数世代は進んでいる精巧かつ強固な構造だとのことです」
唸る幕僚に、事務の一切を取り仕切っている源三郎が言う。
「これ程の技術を持っている以上、奴らの文明水準は地球より数世代は進んでいるはずだ。それにも関わらず侵略してきたということは、ガミラスや白色彗星帝国とは異なる目的を持っているということなのか・・・?」
参謀長の西郷が敵の目的を推量しようとすると、
「もしかして敵の目的は地球人の肉体に自分たちの脳髄を移植する、という事は考えられないでしょうか?重核子爆弾は我々人間の脳細胞だけを破壊するのならば、辻褄が合うと思うんですが・・・」
「っ!!!?」
北野が敵の地球侵攻の目的を彼なりの推測で述べた。
「まさか・・・」
北野の推測を聞き、辺りはザワつく。
「いや、君が言う通りなのかも知れんぞ」
その中で藤堂は北野の推測が強ち外れでは無いのではないかと思う。

「確かに、ハイペロン爆弾の特徴からすれば辻褄が合う。でなければガミラスの様に地球へ対して核ミサイルを撃ち込めばいい事なんだからな。そうしなかったと言う事は、敵にはこうして態々占領する意味が何かしらある訳だ」
西郷が補足する。
地球占領以降、敵兵による女子供に対する性的暴行事例が全く発生していないのは敵軍の軍律が物凄く厳しいモノだと思っていたが、いくら軍律が厳しくてもそう言う行いをする輩が必ず居る筈だ。
にも関わらず、性的暴行事例が一件も無いのは、敵兵たちがそう言う事をやりたくてもやれない身体だったと言う訳だ。
「となれば、敵本星の起爆装置を解除するか破壊しない限りはダメか」
ヤマトは恐らく敵の本星に向かっている。
その証拠に、敵の占領軍司令部の動きも慌ただしく、軌道上の艦隊も当初より減っている。
ヤマは敵の本星へと向かい、恐らく敵は引き連れて来た艦隊の何割かをヤマト追跡の為に本国へ向かわせたのだろう。
「敵の目的がそうだとすれば、我々はそれを妨害するまでだ。あの爆弾の無力化と並行して、な」
「そうですね」
古野間は相槌を打ち、その場にいるパルチザンメンバーを見回して付け加えた。
「お前たちも、思いついた事は抱え込まずにどんどん発言しろ。一見バカバカしい発想や時代遅れな手法が戦局を変えた事例は幾らでもあるんだからな。それと同時に、指揮官は、誰の提言であれ平等に耳を傾けるようにな。軍民、階級問わずだ!!」
『はい!!』
ヤマトの第一次イスカンダル航海で、ヤマトを窮地に追い込んだ多数のデスラー機雷を排除したのは人力による移動で、これにはデスラー総統も閉口したのか感心したのか、祝電を送ってきたし、テレザートへの航海中、空洞惑星でやはりデスラーに追い詰められたヤマトが窮地を脱したのも、当時、新人乗組員だった新米の何気ない一言

を真田が聞き流さなかったからだ。
今はまさに地球の一大事だ。
若者は、一見バカバカしいと思えるような事をも抱え込まずに口に出す勇気を持ち、それを掬い上げる度量を上官が持たなければ、この難局は乗り切れない。
藤堂　はそれが言いたかったのだ。

その翌日・・・
「おはようございます」
「おはよう・・・何があったのかね？」
アルフォンは出仕してきた部下を見るや声を潜めた。
「・・・今度はナンキンムシにやられました。あまりの痒みでろくに眠れませんでした」
「ナンキンムシ？」
そう言う兵士の右の瞼が真っ赤に腫れ上がっていた。
兵士は軍服のポケットから、小さな袋を取り出した。
アルフォンが手に取って見ると、数ミリくらいの赤茶けた虫が死んでいた。
「これが〝ナンキンムシ〟かね？」
「はい。正式名称は〝トコジラミ〟といいますが、この土地では古くから〝ナンキンムシ〟と呼んでいるようです」
「その虫の出所は？」
「地球人がガミラスとの戦争中に築いた地下都市で棲息していたのが地上に出てきたようです」
「そうか。地下都市は極めて大規模で複雑だと聞くが・・・」
「これから調査が始まるんでしょうけど、果たして完全なる駆除が行われるのかは不明です」
「カザン総司令はヤマトとパルチザンの件で悩まされているからな・・・」
「はい」
占領軍総司令官たるカザンは、ヤマトを危険視し、最優先で接収又

は完全な破壊を命じ、徹底的な捜索を命じていたが、それを知っているらしい軍首脳は悉く戦死するか地下に潜伏してしまい、その間隙をついてヤマトは脱出していった。
雪と一緒に行動していた者たちがヤマトの乗組員たちかも知れない。
地球を脱した連絡艇を追跡した艦からは生命反応がないと報告してきたため、発進直後の事故で全員死亡したと判断し、撃破要請を却下したと仄聞したが、考えてみれば、薬剤投与で一時的に仮死状態にすることは十分可能である。
ましてや、ガミラス、ガトランティスを退け、イスカンダルでは、デーダー提督率いる艦隊やメルダース長官のゴルバを討ち取った艦の乗組員たちならば、その位の悪知恵は持っていよう。
「地球は、本国が考えている以上に厄介な相手になるな」
「そうですね」
アルフォンの脳裏には、自分たちに臆することなく真っ直ぐな視線を向けてきた森　雪の顔が浮かんでいた――。
同じ頃、雪も古代たちヤマトの皆がそう簡単に死ぬような者たちでは無いと信じ、彼らは生きていると思っていた。
太陽が沈み、夜のメガロポリス東京の夜景をベランダにて見ながら雪は、今も生死不明の婚約者（古代）の事を想っていると、ビルの間からチカチカと明かりが点滅しているのを見つけた。
「あれは・・・」
「そこに居ると、虫に刺されるぞ・・・さぁ、中に入りたまえ」
アルフォンが雪に声をかけて来た。
「そうね・・・」
雪は先程見つけた明かりに気づかないフリをして中へと入った。
「・・・」
部屋に入った雪をアルフォンはジッと見つめる。
「あの・・・何か？」
雪は表情には出さないが、内心、今の発光信号を見ている所をみつかったのではないか？と、少し慌てていた。

「ああ・・・コレを持ってきた・君の服だ。少々擦り切れていた所は修正しておいた」
「ありがとうございます。ずっと寝間着のままでは落ち着かない所もありまして・・・・」
　雪は少し肩をすくめる。
「私はその服の方が好きだがね・・・まっ、干渉はすまい。だが、銃は返すわけにはいかない」
「ええ、当然の判断です」
「今日はもう遅い・・・休みたまえ」
　雪に寝る様に言うと、アルフォンは雪の部屋から出ていった。
　アルフォンが部屋から退出すると、雪は先程見た明かりについて思考を巡らせる。
（あれは、間違いなく発光信号だったわ・・・防衛軍のパターンだと・・・だめね、文章にならないわ。それじゃあ空間騎兵隊のパターン？・・・これもだめね・・・・）
　雪は脳内で先程見た発光信号と様々な部署での発光信号パターンと比べたが、どれも文章にはならない。
「・・・・」
　文章にならないように暗号として送ってきているのだろうか？
（暗号・・・そうよ、今の防衛軍の信号パターンじゃないんだわ）
　現在使用している防衛軍の信号パターンは恐らく暗黒星団帝国側に既に解読されて居る筈。
　そんな信号を暗号化とているとは言え、無暗に打つ程、防衛軍はバカでは無い。
　それならば、連中が知らない信号パターン。
　相原が英雄の丘で防衛軍ではなくガミラスの信号波長パターンでイカルスと連絡を取ったように、防衛軍も今使用している信号パターンとは違うパターンで信号を送って居る筈。
　しかし、新しい暗号を組めば、その暗号を知らない軍人は応答する事が出来ない。
　ならば、使用されているのは、今は廃止された古い信号・・・。

そう思った雪はガミラス戦役前の国連宇宙軍時代の信号パターンに置き換えてみた。
すると、
（キ・・・タ・・・レ・・・コ・・・コ・・・デ・・・マ・・・ツ・・・）
（『来たれ、ここで待つ』・・・）
と言う文章になった。

雪の部屋から退出したアルフォンは、所要の為、ここを留守にする事になり、警備の兵に留守を任せ、出掛けて行った。
その頃、雪は寝間着から先程返却された防衛軍の制服に着替えた。
「流石にコレは見つからなかったみたいね・・・ブローチ型の分析端末は・・・えっと・・・この館は内務長官の官邸だから、何処かに見取り図のデータベースがあるはず・・・あった、これだわ・・・アルフォン少尉が戻って来るまで約９０分・・・ここからあのビルまで急いでも３０分・・・向こうで誰かと会い、話をするにしても長くて１０分・・・往復の事を考えると、２０分以内にこの建物を出ないと・・・」
雪は常々アルフォンの行動時間とパターンを観察しており、今日の様に夜、所要に出掛ける時は大体９０分程で帰って来る。
アルフォンが戻ってくるまでにあの発光信号を灯していた場所まで行き、再びここへ戻らなければならない。
勿論館内にいる警備兵、都市を巡回している敵兵に見つからない様にしながらだ。
一分一秒も無駄に出来ない為、雪は即座に行動に移った。
まず、扉に耳をつけ、周囲に警備兵が居ないかを確かめ、部屋をそっと出る。
通路を歩いていると、前方から警備兵の足音が聞こえて来たので、即座に手近にあった部屋へと入る。
幸い部屋の中に敵兵は居なかった。
「ここは・・・内務長官の寝室かしら・・・？」
雪は寝室に隣接する書斎に入った。
「書斎・・・人がいた形跡があるわ・・・今はアルフォン少尉が執務室と

して使っているのかしら？」
　雪は執務デスクに近寄り、
「ここが内務長官の部屋だとすると、護身用の銃があってもおかしくわないわね・・・・」
　しかし、執務デスクの引き出しに銃は無かった。
「やっぱり没収されていたみたいね」
　武器が手に入らなかったと言う事で落胆した雪であったが、引き出しの中に走り書きをした様なメモが見つかった。
　その紙には数字が書かれており、それは何かのパスワードの様でもあった。
　念の為、雪はそのメモをポケットに入れ、再び部屋の外の安全を確認し、部屋の外へ出た。
　通路を歩いている中、アルフォンが使用している寝室前まで来た雪は、ここに自分が使っていた銃が無いか確かめようとしたが、部屋はロックがかかっていた。
（もしかしたら、さっきのメモ・・・・）
　雪は先ほどのメモの番号を部屋の前の番号キィーに打ち込むと、部屋のロックは解除された。
　アルフォンの部屋にあるテーブルには一本のワインが置かれていた。
「年代物のワイン・・・・いくら占領軍とはいえ、この戦火の中でもこれだけのモノを確保するには大変な筈・・・・この館の地下にワインセラーでもあるのかしら？でも、データベースにはそんな見取り図は載っていなかったけど・・・・」
　ワインに疑問を感じた雪であったが、それよりも本命の武器を探したが、アルフォンの部屋にも銃は置いて居なかった。
　武器は手に入らなかったが、何時までもここで時間を潰すわけにはいかないので、雪は出入り口のある一階まで降りた。
　すると、食堂で警備兵たちが食後の談話をしていた。
「ここでの警備任務は楽な仕事だよな、街の方はパルチザンとの戦いでかなり厳しみたいだがな」

「パルチザンなんか、さっさと叩き潰せねぇのか？」
「そうもいかんらしい、何せ地の利は奴等にあるからな・・・この前も夜中に街中を巡回していた奴が行方不明になったんだと・・・」
「それに地球人じゃない、謎の生物がパルチザンと一緒に抵抗しているって話もきいたぞ。言語も『ふもふも』とか言っている奴で、結構デカいらしいぜ」
「何か怖ぇな・・・それにしても、地球に居るこのヤブ蚊とか言う虫は何とかならんのか？痒くて仕方がねぇ・・・」
「俺もだ・・・夜中に寝ていると耳元であのブゥ～ンって羽音を聴いているだけで、イライラする」
警備兵たちは刺された顔の部分を掻きながらヤブ蚊に対する愚痴を言う。
その時、腕の時計がアラーム音を鳴らす。
「時間だ。持ち場に戻るぞ」
警備兵たちはワラワラと食堂から出ていく。
そんな中、
一人の警備兵が食堂のテーブルにハンドガンタイプのコスモガンを一丁置き忘れて食堂を出ていった。
雪は警備兵たちが食堂を出ていったのを確認すると、テーブルからその銃を取り、厨房へ行き、そのまま地下の食糧倉庫へと降りて行く。
そして地下の食糧倉庫にて、秘密のワインセラーを見つけた。
内務長官が秘密に作ったのだろうか？
そしてワインセラーにて気温維持の為の大きな通風孔を見つけ、雪はその通風孔の蓋を開けて、中へと入る。
通風孔の出入り口のエアコンルームにはメンテナンス業者用の為の出入り口が有り、そこは外へと通じていた。
しかし、その出入り口には鍵付きの鉄格子があった。
「あともうちょっとなのに・・・」
銃で鍵を撃てば鍵は壊れて外へと出られるのだが、ここで撃てば銃声が聴こえてバレてしまう。
やむを得ず雪はサイレンサー代わりになるモノを探しに来た道を

もう一度戻った。
そして、警備兵の目を掻い潜り仮眠室から枕を一つ調達し、再び戻ろうとした。
その時、食堂に警備兵が一人戻って来て慌てて雪は階段の影に身を隠した。
「あれ？何処かに置き忘れたのかな？」
その警備兵は首を振りながら何か探し物をしている様子だった。
（早く何処かに行って・・・・）
警備兵が食堂に居る限り、ワインセラーには行けない。
「どうした？」
心配に思ったのか、別の警備兵が声をかける。
「あ、いや、何でもない」
慌てて答える警備兵。
「そうか」
声をかけた警備兵は何事も無かったかのようにそのまま巡回に出ていった。
「・・・やばいな・・・銃を無くしたなんてわかったら、始末書モノだぞ・・・・」
食堂に自分の銃が無いとわかると、その警備兵は食堂を出ていった。
「この銃、あの警備兵のモノだったのね・・・それにしても、敵の軍隊にも始末書なんてあるのね・・・住んでいる星が違っても軍の規律は何処も似た様なものなのかしら？」
敵兵に対し、少し親近感が湧いた雪であった。
仮眠室から調達した枕をサイレンサー代わりにして鉄格子の鍵を撃ちぬいた雪は外へと出た。
そして、発光信号を灯していた場所へと赴くと、そこには白い花が咲いていた。
「・・・あなたたち・・・踏みにじられても頑張って生きているのね・・・・」
つい最近戦火の有った場所にも関わらず、懸命に花を咲かせている

草木に声をかけ、自分も負けていられないと言い聞かせた雪は、発光信号を灯していたであろう破壊されたビルの中へと入った。
そのビルの一室には、外の様子を双眼鏡で探っている人物が居た。
雪はその人物に銃口を向け、
「動かないで・・・今、私の銃が貴方の頭部を狙っているわ」
そう言うと、その人物は両手を上げる。
「答えて・・・光で信号を送ってきたのは貴方なの？」
「そ、その声は!?」
両手を上げていた人物は手を降ろし、振り返る。
「北野君!!」
発光信号を灯していたのは元ヤマト乗組員の北野だった。
「雪さん!!無事だったんですね!!」
意外な再会を果たした雪と北野は手短に情報交換を行った。
「そうですか・・・それで雪さんはあの館に・・・我々の下にはあの館に防衛軍関係者が軟禁されているとしか情報が入って来なかったので、信号はイチかバチかの賭けだったんですよ・・・しかし、良かったです。雪さんが無事で」
「北野君もちょっと見ないうちにたくましくなったわね」
「あっ、いや・その・・・ありがとうございます」
雪に褒められ嬉しい様子の北野だった。
続いて雪はヤマトと古代に関する情報を北野に訊ねた。
「残念ですが、詳しい事は・・・僕たちが掴んだ情報はヤマトがイカルスの偽装基地から飛び立ち、太陽系外へと向かったと言う事だけなんです。誰が乗り組んでいるのかまでは・・・」
北野は悔しそうに言う。
「そう・・・」
「で、でも大丈夫ですよ。古代さんたちは殺しても死なないような人たちですから。さあ、元気を出して下さい、クヨクヨしているなんて雪さんらしくありませんよ」
「ありがとう・北野君・・・そうだ、コレを持って行って」
雪は北野にブローチ型の端末を渡す。

「コレは？」
「前に真田さんに造ってもらったの・・・緊急用の通信端末よ。地球の何処にも使っていない周波数だから盗聴されにくいわ。でも、長時間回線をひらいていると、逆探知されるかもしれないから。情報は収束通信で送るわね」
「送るって・・・雪さんはまさか、あそこに戻るつもりですか？」
北野としてはこのまま雪をパルチザン本部まで案内する予定だったが、雪は再びあの館に戻り、敵から情報収集し、パルチザンに送ると言う。
危険な任務であるが、敵の情報が入れば、レジスタンス活動も速やかに行くと言う事で、北野は渋々であるが、雪を見送る事にした。
「通信は毎晩２３時丁度、３秒間だけ回線を開きます」
「いいわ・・・２３時丁度ね・・・収束通信の解凍パスワードは・・・『エイユウノオカ』でどう？」
「了解です」
「それじゃあもう戻るわね・・・それと皆には私の事を内緒にしておいて・・・皆に心配をかけたくないの。それと先輩としての命令よ。良いわね、絶対に死なないで!!何が有っても生きるのよ!!」
時間がおしているので、雪は急いで来た道を引き返して行った。
「雪さん・・・」
北野は去ってゆく雪に敬礼し彼女を見送った。
その後、雪は銃を通風孔に隠し、部屋へと戻った。
そして予定通りの時間にアルフォンが館に戻ると、
「ん？・・これは・・・」
彼は雪の部屋の前で白い花の花びらが落ちているのを見つけ、その花びらを拾い、花びらと雪の居る部屋のドアを交互に見ていた。

九十七話　ミヨーズのあぎと・ティアナの決意

「・・・・」

フェイトとティアナは、今日買い出しの為、市街地を歩いていた。

その市街地の彼方此方には、ライフルを構えて立っている暗黒星団帝国の兵士の姿がチラホラ見えた。

報道規制が敷かれているため、今の地球がどんな状況になっているのか、詳しい事は分からないが、市民たちの噂話から今でもメトロポリス東京では、パルチザンが抵抗活動をして暗黒星団帝国軍に対し、パルチザン活動をしていると言う。

現に今自分たちがお世話になっている中嶋家の主である中嶋源三郎も家を空け、パルチザン活動に従事している。

勿論パルチザン活動の情報はテレビでは報道されない。

しかし、詳しい戦果は知らされていないが、そう言った活動をしている者も居ると言う事実はフェイトとティアナの耳にも入っていた。

(管理局がこの地球を管理しようとしても防衛軍の人はやっぱり地下に潜って徹底抗戦するだろうな・・・)

パルチザンの活動を聞き、フェイトはその様に思った。

管理世界の中でも無理矢理に管理世界入りさせられた世界では今の地球同様、管理局に対する反管理局活動が続いており、管理局はそうした活動をしている者たちをテロリストと呼び殲滅対象にしている。

しかし、彼らは自分たちの世界を侵略者から解放するために戦っているのだ。

こうして管理局とは無縁の世界で過ごし、その世界が占領されてパルチザン活動をしている者たちの事を聞いて、今なお管理世界で管理局に対しテロ活動(レジスタンス活動)をしている者たちへの見方が何となく変わった気がするフェイトとティアナだった。

(私にも何か出来ることは無いのかしら・・・)

ティアナは、やはりこの世界で・・・占領されている今の地球で自分

にも何か出来ることは無いのかと思っていた。
買い出しを終えて中嶋家へ戻っている最中・・・
「アナタたち、ちょいといいかしらぁ？」
横断歩道で信号待ちをしていると、フェイトとティアナは、背後から呼び止められる妙なイントネーションの声を聞き振り向いた。
「「なっ!!!!」」
振り返ったフェイトとティアナは声の主を見てギョッとした。
声の主は、身長二メートル前後の、巨漢の敵国軍兵士だった。
漂白されたような肌の色のスキンヘッドに眉がなく、目の周りが奇妙な隈取りがされている顔立ちで、地球で言うところのオネエ言葉で話しかけられたのだ。
そんな人物に声をかけられれば、ギャッとするのも無理はない。
(ええー!? この人ってもしかしてオ○マ!?ヴィヴィオを連れてこなくて良かった・・・)
こんな人物を見ればヴィヴィオが声を出して泣いてしまうのでないかと思ったフェイトは、今日、ヴィヴィオを連れてこなくて良かったと安堵した。
(暗黒星団帝国にもオカ○がいるのぉ～!?)
ティアナは敵国にも地球やミッド同様この様な特殊な人種が居た事に意外性を感じていた。
「え、えっと・・・な、なんでしょうか？」
何時までも驚いている訳にもいかないので、ティアナ巨漢の敵軍兵士に用向きを問うた。
しかし、その表情は硬く少し引き攣っている。
「やぁねえ。大丈夫よぉ、ただ道を訊ねたいだけ、だ・か・ら」
ウィンクしながら、自分は何もしないと言う暗黒星団帝国の兵士。
「は、はぁ～・・・」
(嫌ぁぁぁぁー!・こんな筋骨隆々な異星人のオカマなんて嫌ぁぁぁぁー!!)
フェイトはやはり生理的に受け付けなかったのか、顔を引き攣らせている。

「そ、そうですか・・・それで、どちらへ？」
「食料品の買い出しに行きたいのだけれど、そう言った物が売っているお店はしらないかしら？」
　ティアナは先程自分たちが買い物をしていたスーパーへの道順を教えた。
「どうもありがとー」
　巨漢のオカ・・・もとい、オネエ軍人はフェイトとティアナに礼を言い、のっしのっしと歩き去った・・・しかも二人に投げキスを残して・・・。
「な、何なの？あの人～（泣）」
「何か、どっと疲れが・・・・」
　げんなりとした表情で二人は中嶋家へと戻って行った。
（それにしてもあの敵国の兵士もやっぱり食事は摂るんだ・・・）
　ティアナは振り返り先程のオネエ軍人が向かって行った方角をジッと見た。

　その頃、星の海では・・・・
　ヤマト　まほろば　春藍　雪風・改　ハルバード　ファルシオンは敵本星向けての長距離ワープを行っていた。
　計算上では現在位置から一気に２０万光年先にワープアウトする予定だった。
　その目的地である手前の某宙域にて・・・・

　ガリアデス　艦橋
「ミヨーズ司令、空間歪曲干渉装置設置完了いたしました!!」
「エネルギーパネル動作正常。干渉装置へのエネルギー注入、開始!!」
「ふん・・・ご苦労。ヤマトは間違いなく、我々の本星を目指してくる・・・銀河系のオリオン腕からのワープなら、この宙域を通る筈だ。間違いなく、この場所をな・・・・」
「エネルギー注入、６０％を突破!!」
「さぁ、ワープして来い、ヤマト!!貴様らは目的地に辿り着くことは出

来ん・・・干渉波に巻き込まれ、貴様らがワープアウトしてくるのは、このミョーズのあぎとの中なのだ!!」
「エネルギー注入、１００％に到達!!」
「空間歪曲干渉装置起動!!干渉波を放出せよ!!」
ミョーズの命令が下され、昆虫の様な形の衛星が起動し始めた。
やがて、ヤマト　まほろば　春藍　雪風・改　ハルバード　ファルシオンがワープアウトし、通常空間を確認した。
そして位置を確認すると、そこは目的地の２０万光年先の位置では無かった。
現在地位は先ほどのワープ地点から１７万光年の位置だった。
原因として最後のワープにて何らかのイレギュラーが発生したと思われた。
しかし、ワープ中にイレギュラー警告は無く、余りにも不可解な事態だった。
すると、各艦のレーダーが敵影と歪な空間歪曲反応を捉えた。
突然の原因不明のイレギュラーと敵の出現・・・
これは果たして偶然だろうか？
否、敵は此方が自分達の本星に向かっている事を知っている。
ならば、その途中で待ち伏せをしているのは、敵として当然の事だ。
しかし、一つ腑に落ちない点は、ワープのイレギュラーでワープアウトした地点でこうして敵艦隊と遭遇するなんて余りにも出来過ぎている。
そう考えると、このイレギュラーも敵の何らかの罠の可能性が指摘された。
真田曰く、「空間を広範囲に歪曲しておけば、干渉効果でワープ航路を狂わす事は可能」だと言う。
最もそれだけの装置を作れる技術と設備が有ればの話だ。
残念ながら、今の地球、管理局はその様な技術はないが、何万年光年も先の星に重核子爆弾を送り込んでくることの出来る暗黒星団帝国ならば、それは可能かもしれない。
それはレーダーでとらえた歪んだ空間歪曲が何よりの証拠である。

敵艦隊の後方には干渉波を出している装置らしきモノの存在が確認された。
やがて、その干渉波はコスモレーダーにも影響を及ぼし、遠距離レーダーは使用不能。
使用できるのは近距離レーダーのみとなった。
敵がワープに干渉出来るのであれば、この宙域をワープで撤退するのは不可能。
よって、この危機を乗り切るには敵艦隊を殲滅ないし、干渉装置を破壊しなければならない。
しかし、敵はこちらを包み込む様な包囲陣をしいている。
速やかに敵を片付けなければ、集中砲火を浴びる危険がある。
だが、ここで一つの不安要素もある。
波動エンジン、ショックカノン、そして波動砲は微小ながら空間歪曲の原理を一部使用している。
計器上では今は何の影響も無いが、使用してみると何かしらの悪影響が出ているかもしれない。
しかし、何もしない訳には行かない。
ヤマト　まほろば　はコスモタイガー隊を出撃させ、敵艦隊を突破する作戦をとった。
先陣をきったコスモタイガー隊はそれぞれ左右に展開し、包囲しようとする艦艇に対し雷撃を加える。
そしてヤマトら六隻も砲雷撃を開始するが、ミサイルは敵に向かって行くが、ショックカノンは敵艦に命中する前に軌道がズレてしまう。
それに波動エンジンの出力は低下していき、まず最初にヤマトが波動砲の使用は不可能となった。
それでも攻撃と進撃を止める事は出来なかった。
その様子をガリアデスの艦橋で見ていたミヨーズの下には、戦況報告が次々と入る。

ガリアデス　艦橋

「敵、我が方の包囲網に接近!!」
「ふん・・・覚悟を決めて突入を試みようと言う訳か・・・全艦!!狙いを絞れ!!一気に蜂の巣にしてやるのだ!!」
敵艦隊はさらに包囲陣を狭めて来た。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「敵艦隊更に接近!!」
「左舷Ｂブロック被弾!!」
「更に被弾箇所拡大!!」
「メデックは応急救護にかかれ!!」
「ダメージコントロール!!応急修理を急げ!!」
まほろば　の左舷側からは敵の砲撃が苛烈を増す。
敵の砲撃は何故か曲がらずにまっすぐ此方へと飛んでくる。
これは、かつて敵はエネルギー源としてイスカンダリウム、ガミラシウムを採掘しようとしていた事から地球が使用しているエネルギーとは異なったエネルギーを使用している事が推察された。
弱っていくのは地球側艦艇のみ・・・。
まぁ、自分たちの使っているエネルギーに干渉してしまえば、自分たちも兵器を使用できなくなる。それでは意味が無い。
弱っていく地球艦艇の内、ヤマト　雪風・改は特に状況が深刻だった。
春藍と無人戦艦は波動エンジンをそれぞれ二基搭載されており、地球防衛軍艦艇の中では随一の機関出力を誇る。
まほろば　も　ヤマトより多数の補助エンジンを搭載しているので、ヤマトより被害は低かった。
しかし、ヤマトはいくら機関を新型に換装してもメインエンジンを一基しか搭載されておらず、出力を春藍級並に上げるのは不可能であった。
雪風・改はいくら奇才大山　トチローが改良を加えたと言っても元が駆逐艦なので、出力低下は致し方が無い。
そんな中で敵を一気に殲滅する起死回生の手には波動砲は有効だ

が、今のヤマトは航行するだけでもやっとの状態。
波動砲を打つため、全エネルギーを停止し充填しなければならない。
だが、この干渉波の中、機関を停止させると、再び再始動できるかも怪しい。
そんな中、良馬は山南に通信をいれた。

宇宙戦艦　春藍　艦橋

「山南艦長、まほろばの月村艦長から通信です」
「繋いでくれ」
「了解」
春藍の艦橋に有るメインモニターには良馬の姿が映った。
「山南艦長、春藍の機関出力はやはり低下していますか？」
「若干だが、落ち始めてきている。ハルバードとファルシオンもだ・・・」
「春藍及び無人艦に波動砲を撃つ余力はありますか？」
「うむ、多少出力は落ちているが、撃てない事はない」
「では、我々が拡散波動砲を撃ち、包囲網に穴を開けましょう。このままではジリ貧です」
「うむ、そうだな。通信長」
「はい」
「至急ヤマトに通信を繋いでくれ」
「りょ、了解」
「砲雷長!!拡散波動砲発射用意!!」
「拡散波動砲をですか!?」
「そうだ!!急げ!!」
「りょ、了解拡散波動砲発射準備!!・・・波動砲のチャージを開始します!!」
山南の大声での命令を聞き、春藍の砲雷長は急ぎ、拡散波動砲の発射準備に取り掛かる。
「波動砲チャージャーに接続!!チャージを加速します!!」

そして山南は　まほろば、ファルシオンと共に拡散波動砲による一斉射で敵包囲網に穴を開ける旨をヤマトへと伝えた。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋

春藍、まほろば、ファルシオンの波動砲の発射準備はヤマトでも探知する事が出来た。

「春藍、まほろば、ファルシオンの周辺に高エネルギー反応!!拡散波動砲のチャージを行っている物と思われます!!」

「拡散波動砲か・・・!!」

「そうか・・・何せ、春藍はれっきとしたアンドロメダ級の跡継ぎだからな・・・」

「艦長、春藍の山南艦長から通信です!!」

「繋いでくれ」

「了解」

パネルには山南の姿が投影された。

「ヤマトの諸君!!我々が拡散波動砲で敵の包囲網に穴を開ける!!そこから一気に突破して干渉装置を破壊してくれ!!」

「山南艦長、波動砲のチャージは大丈夫ですか?」

「うむ、敵の干渉波で出力は落ちているが、春藍もファルシオンもエンジンが二基ある!!何とかなる筈だ!!まほろば　も今はすべてのエネルギーを波動砲へ注いでいる!!」

「了解しました。全艦に伝達!!拡散波動砲チャージの間、春藍、まほろば　は無防備になる。敵艦より春藍　と　まほろば　を守れ!!拡散波動砲の発射後、一気に敵を突破する!!」

守の命令を聞き、コスモタイガー隊は攻撃から艦隊の直掩へと回り、ヤマト　雪風・改、ハルバードは雷撃による弾幕を張った。

そして・・・

「拡散波動砲発射準備完了!!」

チャージをしていた艦の拡散波動砲の発射準備が整い・・・

「拡散波動砲発射!!」

春藍、まほろば、ファルシオンから拡散波動砲が放たれた。

暗黒星団帝国　包囲艦隊
「か、艦長!!こ、高エネルギー反応が・・・・うわぁぁぁぁぁー!!」
「な、何だとぉー!!」
「こ、この閃光は・・・・!?」
包囲艦隊の艦船の乗組員たちの目の前に眩い閃光が迫って来たと思うと、彼らが乗艦していた艦は次々と消滅していった。
拡散波動砲の一斉射撃で敵の包囲艦隊は壊滅的打撃を受けた。
包囲網を狭め、密集していたのが仇となったのだ。

ガリアデス　艦橋
「な、なんだ?・・・・なんなんだ?・・・・あの兵器は・・・・!!」
初めて拡散波動砲の威力を見たガリアデスや第二特務艦隊の将兵たちは驚愕と地球側の兵器に恐怖する。
「うろたえるな!!敵の兵器は驚愕に値するが、こちらにはまだ肝心の干渉装置が健在である!!恐れるな!!あの艦・・・・ヤマトと共にあの戦艦部隊も叩き潰せ!!」
拡散波動砲の威力を見てうろたえる部下にミヨーズは鼓舞し、士気の低下を防いだ。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋
「敵艦隊に混乱を確認!!」
「包囲網にも穴が開きました!!」
「出力全開!!一気に敵包囲網を突破する!!」
敵の包囲網に穴が開き動きにも混乱が確認されると、地球艦隊は一気に包囲網を突破し、干渉装置へと向かう。

ガリアデス　艦橋
「ミヨーズ司令!!敵が包囲網を突破!!干渉装置に接近しています!!」
「うぬぅぅぅ・・・・空母艦隊へ伝令!!迎撃機を展開し干渉装置を死守するのだ!!」

「了解!!」
　ミヨーズの命令を受け、干渉装置手前に布陣していた空母部隊の空母からは、直ちに迎撃の為の戦闘機が発艦される。

　宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「干渉装置前方に敵空母艦隊発見。迎撃機を展開し始めています!!」
「機関長もう一度波動砲を使えるか?」
　良馬が井上にもう一発波動砲が撃てるか訊ねる。
「もう一度ですか?・・・・撃てない事は無いが、撃った後、機関が止まるかもしれんぞ」
「構わない。敵空母を撃破した後、ヤマトが干渉装置を破壊してくれればエンジンの調子も元に戻るのだろう?」
「それはそうじゃが・・・・」
「だったら、迷っている暇は無い。今は敵が態勢を整える前に干渉装置を破壊する事が第一優先だ」
「分かった」
「通信長」
「はい」
「ヤマトに波動砲による敵空母部隊への攻撃の旨を伝えてくれ。それとハルバードにも波動砲の用意をして貰うように山南艦長に伝達!!」
「了解」
「砲雷長!!波動砲第二射準備!!次は空母のみを狙うから収束モードへ変更!!」
「りょ、了解、波動砲発射・・・・波動砲のチャージを開始します!!」
　ギンガはヤマトに空母部隊を　まほろば　ハルバードの波動砲にて一掃する旨を伝えた。
「波動砲発射準備完了!!」
「波動砲発射!!」
　まほろば、ハルバードから波動砲が放たれ、干渉装置の護衛をしていた敵空母部隊を一撃で葬り去った。
　しかし、

「機関出力低下・機関停止!!」
「推進力低下!!航行不能!!」
「・・・後は任せましたよ・・・古代さん」
干渉装置の影響下、拡散波動砲を二発撃った　まほろば　は機関停止の状態となった。
その為、まほろば　のコスモタイガー隊は艦の護衛にまわり、守の計らいで雪風・改もその護衛についた。

暗黒星団帝国　空母部隊　空母
「回避をー!!」
「駄目です!!間に合いません!!」
「ぐわぁぁぁぁぁー!!」
邪魔者が片付いたことでヤマトは干渉装置へと辿り着くと、ミサイルと魚雷で干渉装置を破壊した。
干渉装置自体にバリアーや攻撃機能はついていない様でミサイルや魚雷が命中するといとも簡単に干渉装置を破壊する事が出来た。

ガリアデス　艦橋
「味方空母部隊全滅!!」
「干渉装置も全て破壊されました!!」
「ふん・・・」
「どうされますか?ミヨーズ司令」
「・・・全艦に伝令・退却だ」
「は?」
「我々の任務はヤマトと地球艦隊が母星へと辿り着くのを阻止する事・・・罠の一つが突破された今、ここで戦力をこれ以上減らすのは愚策・・・必要のない事だ・・・次のポイントへ向かい、更に戦力を整えて待ち受けるのだ」
「了解」
通信員は直ちに残存艦艇に撤退命令を伝達する。
そんな中、

「あの・・・・ミヨーズ司令」
「なんだ？」
「この先には我らの中間補給基地があります。敵艦隊包囲網の突破を基地には打電しておくべきではないでしょうか？」
幕僚の一人がこの先にある味方の補給基地にヤマトら地球艦隊がこちらの策を突破した旨を伝えるべきでは？と進言する。
それは軍として、それは当然の行動である。
「中間基地か・・・・ふん・・・・司令官は確かグノンの奴だったな・・・・」
ミヨーズは暫し考えるが、
「・・・・連絡は不要だ。中間基地の事は放っておけ」
と、本来ならば伝えるべき伝達事項を味方に伝えなくても良いと言う。
ヤマトが中間基地で葬られれば所詮それまでの相手だったとでも言いたげな様子のミヨーズ。
「しかし、それでは・・・・」
暗黒星団帝国の軍人としては、万が一にも味方の補給基地が破壊されれば今後の地球占領維持に支障をきたすと思いミヨーズに意見するが、
「いいか・・・・よく聞け・・・・ヤマトは、『私の獲物』なのだ」
ミヨーズは殺気を含んだ視線で幕僚に言う。
すっかり狩人モードのミヨーズにはヤマトを撃滅する事しか頭にはないようで自分の艦隊以外の味方がどうなろうと知った事では無いと言いたげである。
「は、はい・・・・」
ミヨーズの殺気に当てられ、幕僚は怯えたように答えた。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「空間歪曲干渉波、消失!!」
「機関再始動を開始しました!!」
「レーダー機能も復旧しました。敵の残存艦がワープにて撤退していきます」

「えらく引き際の良い敵じゃな・・・」
敵のあっさりとした引き際に何か不気味さを感じる。
ここまで弱らせたのだから、刺し違えるつもりで攻撃を続行してくるものだと思っていた。
最もそれをやられればこちらも苦戦を強いられて艦の被害も馬鹿にならない。
「うん・・・どうやら敵さんはあの干渉装置に頼った作戦を立てていたみたいだからな・・・ここで撤退しなければ自軍の被害は更に拡大していただろう」
敵のあっさりとした撤退にあの干渉装置の破壊が大きく関わっていたのだろうと推察する良馬。
「作戦の内容と言い、戦況の把握と言い指揮官はかなり優秀な人物の様ですね」
新見が敵の指揮官をプロファイリングする。
「ああ・・・どうやら、その様だ・・・」
地球艦隊側でもミョーズの指揮官としての能力の高さに今後の航海に大きな影響となる人物だと予想された。
敵の策略を突破した地球艦隊は、エンジン等に影響は無いが干渉波の残留波が残っているため、その残留波の届かない宙域まで巡航し、そこからワープをする予定をとり、今は普通に航行している中・・・

宇宙戦艦ヤマト　展望室
古代はヤマトの展望室から徐々に離れていく銀河系星雲をジッと眺めていた。
そこに兄の守がやって来た。
「兄さん・・・」
「ついに来たな・・・銀河系の外まで・・・」
「ええ・・・」
「地球の事を考えていたのか？」
「うん・・・もう既に銀河系から十数万光年も離れてしまったんだ・・・もしここから地球は見えたとしても、それは十数万年前の地球・・・そ

う思うと、地球からずっと離れてしまったように思って・・・・」
「わかるよ、その気持ちは・・・・イスカンダルに居た間、俺も良くその事を考えていた・・・・自分は今、他の地球人たちとは違う時間を生きているのかもしれないってな・・・・だが、地球には今、間違いなく我々と同じ『今』を生きて、戦い、屈辱を堪え忍んでいる人たちがいるんだ・・・・」
「・・・・」
「あの銀河系の輝きの、たった一粒の中だが、そこにはヤマトに全てを託してくれた人たちが待っている・・・・雪君だってきっとそうだ・・・・我々は決して孤独じゃない。待っている人たちのためにも、頑張ろうじゃないか」
「はい・・・・」
古代兄弟が銀河系星雲を見ながら地球の事を想っていると、
突然展望室のドアが開き、
「トチローさん・・・・」
トチローが展望室に飛び込んできた。
「おい、兄弟水入らずのとこすまんが、ちょっと匿ってくれ」
何やらトチローは慌てている様子。
「どうしたんだ?」
守は何故トチローが慌てているのかその理由を訊ねる。
「しぃっ!!」
トチローは展望室に備え付けのテーブルの下に隠れる。
すると、今度は展望室に佐渡が入って来た。
「お〜い、大山君を見なかったかね?」
佐渡は古代兄弟にトチローの行方を訊ねる。
「敵包囲網の突破祝いに一杯やろうとおもったんじゃが・・・・」
佐渡は手に持った酒瓶を古代兄弟に見せる。
「いえ・・・その・見ていませんが・・・・」
古代はトチローの事を庇う。
「そうか・・・・機関室の方かのう・・・・」
佐渡はトチローが居そうな機関室へと降りて行った。
展望室から佐渡が退出すると、トチローが出て来た。

「・・・まいったよ。酒は好きだが、ああも毎日飲まされると、どうもな・・・」
「ハハ、じゃあ、くれぐれも体を壊さないように気を付けて下さい。入院した途端、一気にアルコール漬けにされちゃいますよ」
古代が冗談交じりに言う。
「うううう・・・くわばら、くわばら・・・」
「ははは・・・」
トチローの様子に古代兄弟は、苦笑した。

宇宙戦艦　まほろば　展望室
ヤマトの展望室で古代兄弟が銀河系星雲を眺め地球に想いを馳せている頃、まほろば　の展望室でも良馬が銀河系星雲をジッと見ていた。
そこへ、
「艦・・・良馬さん・・・」
ギンガが展望室へと来て、良馬に声をかけた。
「ギンガ・・・」
声をかけられて良馬は振り向く。
「どうしたんですか？一人で・・・」
「いや、随分と遠くに来たと思ってね・・・銀河系から既に十数万光年・・・地球人類が今まで来たことのない宇宙だ・・・」
再び眼前に広がる星の海へと視線を戻す良馬。
「そうですね・・・」
ギンガも良馬の隣に立つ。
当然管理局の次元航行艦もこの宙域まで来た記録は無い。
「・・・」
「やっぱり心配ですか？・・・忍さんたちの事・・・」
「ああ・・・でも、それはギンガも同じだろう？」
良馬としてはやはり、地球に残してきた忍たちの事が気がかりだ。
重核子爆弾はいつ爆発してもおかしくない状況・・・。
こうしている間にも爆発しているかもしれない。

いくら忍が夜の一族とはいえ、ハイペロン爆弾の前には恐らく無力だろう。
ガミラスの遊星爆弾の時と同じように・・・・
地球の現状が一切分からない今、地球に残してきた家族や親しい者たちの安否が気がかりになるのは当然だ。
ましてギンガの方は、家族や親しい者たちが多い。
更にはミッドからの大事なお客さんも居る。
彼女らの身に何かあれば管理局が後からブーブー文句を言ってきそうだ。
「はい・・・・でも、私は信じています。きっと皆無事だって・・・・そして、皆を助けるため、私たちは必ず勝ちます!!そして皆の待つ地球へ帰るって・・・・」
しかし、ギンガは今での地球は無事で、必ず救ってみせると信じている。
「ギンガ…そうだな・・・・」
ギンガの言葉を聞き、良馬はフッと笑みを零した。
煌めく星々を見ながら二人っきりの状態・・・・
無意識的に二人の手は触れ合う・・・・
「あっ・・・・」
「わ、悪い・・・・」
触れ合った瞬間、良馬は慌ててギンガから手を離した。
「いえ・・・その・・・嫌ではありませんでしたから・・・・」
そう言ってギンガは良馬の手を握り直す。
「ギンガ・・・・」
「良馬さん・・・・」
二人の唇が近づく・・・・。
そんな中、
ジィー・・・・
二人は自分達を見つめる視線に気づき、バッと近づく唇を離し、その視線を送る人物の方へ顔を向ける。
そしてそこに居たのは・・・・

「二人とも何をしていたの？」
右手で髪を弄りながら、ジト目で良馬とギンガを見るユリーシャの姿があった。
「ゆ、ユリーシャ!?」
「二人とも何をしていたの？」
「あ、あの・・・・」
突然のユリーシャの出現にパニくるギンガ。
「ほ、星を見ていたらギンガの眼にゴミが入っちゃったみたいで見ていたんだよ」
「そ、そうなのよ!!」
「ふーん・・・・」
咄嗟に着いた良い訳であるが、ユリーシャは半信半疑の様子で相変わらずジト目で見たいたのだが、
「それじゃあ、私も一緒に見る」
ユリーシャはニンマリと笑みを浮かべ、良馬に抱き付く。
（うぅ～やっぱりユリーシャちゃんはお邪魔虫です・・・・）
良馬に抱き付いているユリーシャをギンガは羨ましそうに見ていた。

その頃、地球では・・・・
フェイトとティアナが現在お世話になっている中嶋家。
そこには一家の大黒柱である源三郎が不在のまま、夕食の時間を迎えている。
テレビではコメディー番組が流れ、スピーカーから笑い声が聞こえるが、正直言って食卓の空気は重い。
桜花は何とか、この場を盛り上げようとしているが、彼女自身が重いオーラを纏っている為、スベリまくっている。
やはり、パルチザンに身を置く父の事を案じているのだ。
「・・・・」
そんな中、ティアナは人知れず、何かを決意した表情をしていた。

「フェイトさん」
夕食、入浴が終わり、後は就寝するだけと言う時、フェイトとティアナは自分たちに用意された部屋で、ティアナはフェイトに声をかける。
既にヴィヴィオはフェイトのベッドで夢の中に居る。
「何？ティアナ」
「・・・私、パルチザンに参加しようと思います」
「っ!?」
ティアナからの突然の爆弾発言にフェイトは一瞬思考が停止する。
「り、理由を聞いても良いかな？ティアナ」
何時までも絶句している訳にもいかず、再起動を果たしたフェイトはティアナが何故パルチザン活動に参加しようとしているのか理由を訊ねる。
本来管理局員であるティアナがこの世界の地球のゴタゴタに首を突っ込む必要は無い。
この世界の戦闘は管理局の非殺傷、相手を気絶させて捕えるなんて生易しいものではない。
相手を殺すか殺されるか・殺傷設定のみの戦闘だ。
それにティアナが管理局だと言う事は防衛軍側にも知られている。
そんなティアナがパルチザン活動に参加などすれば、スパイ容疑をかけられてしまうのではないだろうか？
正直、防衛軍の管理局に対する印象は最悪とは言わないまでもあまり良いモノとは言えない。
それは防衛軍が手に入れた管理局の資料と〝海〟の一部の高官が行った逆探知を仕掛けた事による行動が防衛軍側に不信感を与えていた。
そんな中、管理局員であるティアナがパルチザン活動に参加すれば占領下の混乱に乗じて防衛軍の機密情報を盗むのではないかと思われても不思議では無い。
ティアナがパルチザンに入りたいと言ってもすんなりと入れるものだろうか？

それは兎も角、ティアナは何故そんな危険なリスクを背負ってまでパルチザンに参加すると言うのだろうか？
「ギンガさんの気持ちが何となく分かった気がしてきたからです」
「ギンガの気持ち？」
「はい」
ティアナはこの世界に来てミッドで起きたＪＳ事件とはその規模が比べられない程の大きな戦争に巻き込まれたこの地球に来て、どんな苦境に立たされても決して諦めないこの地球の人たちを見てきて、何もしないままでただ見ている傍観者から抜け出たかった。
「ランスターの弾丸の本質は『弾は敵を貫くものじゃなく、誰かを守るもの』なんです・・・管理世界だとか管理外世界だとかは関係ないんです。今、私の目の前で苦しんでいる人たちが大勢居る・・・全てを救う事は出来なくても、せめて目の前に居る人たちだけでも救いたい・・・それが、私がパルチザンに参加しようと思った理由です」
「ティアナ・・・」
「それにこのままなにもしなければ、私たちの身体はアイツ等に乗っ取られるかもしれません・・・勿論、フェイトさん、ヴィヴィオの身体も・・・」
「・・・」
「私はただ、黙ってそれを待つなんて事はできません!!」
宇宙ではヤマトが頑張っているのだが、それでも地球では戦っている人が居る。
ならば、自分も大切な人の為に戦う・・・
これ以上、何もせずにただ黙って見ている事は出来なかった。
真面目なティアナらしいと言えば、ティアナらしい言動であった。
「でも、フェイトさんまでも付き合う必要はありませんし、もし、フェイトさんの身に何かあれば、ヴィヴィオが悲しみますし、私の身に何かあれば、管理局が地球連邦に対し何かいちゃもんをつけてくるでしょうから、その時には証人になって欲しいんです・・・全ては私、ティアナ・ランスター個人の意思であり、地球連邦、地球防衛軍は全く関係ない事を・・・」

「・・・・」
「面倒事を押し付ける様な役をとらせてしまって申し訳ありません」
「ううん・・・今は上官、部下なんて関係ない・・・ティアナがそこまで言うなら私は止めないし、管理局が地球側に文句を言わせない様に全力を尽くすよ・・・でもね、ティアナ」
「なんでしょう？」
「必ず生きて戻って来て・・・それだけは約束してね」
「確約はできませんが、私だってそう簡単に死ぬつもりはありませんよ」
ティアナは、フッと笑みを零した。
その後、ティアナは加奈江にパルチザンとのコンタクトを頼んだ。
加奈江の旦那の源三郎がパルチザンメンバーに入っている事は薄々フェイトたちも気がついていた。
そして、そのパルチザンに所属している源三郎が時々家族に手紙を送っている事も・・・
その事からティアナは加奈江を介して源三郎に自らもパルチザンへの参加を申し込んだ。
ティアナのパルチザン参加については、パルチザン内部でやはり賛否が問われた。
民間からのパルチザン兵は時空管理局の存在は知らないが、防衛軍軍人の一部には管理局の事を知っている軍人も居り、防衛軍側はやはり、ティアナがこの混乱に乗じて防衛軍の機密情報を入手しようと企んでいるのではないか？
または、彼女がパルチザンに参加し、万が一にも死亡した場合、管理局がその責任を地球連邦側に求め、管理局の支配下である管理世界入りを言って来るのではないか？
等、意見が奔走した。
しかし、後者についてはティアナ・ランスター自身の意志の為、管理局に横槍は入れさせないと明記されており、彼女の上官であるフェイト・テスタロッサ・ハラオウンも全力で地球連邦を弁護すると明記されていた。

それに今の防衛軍にとって老若男女、軍、民を問わず、地球の為に戦ってくれる人材は一人でも欲しい所だ。
そして最終的にパルチザン司令官の藤堂と彼女を連れて来た源三郎がティアナのパルチザン参加に賛成したため、パルチザンに参加している防衛軍軍人たちは渋々と言った様子でティアナをパルチザンに迎え入れた。
だが、藤堂も何の警戒も無く迎え入れたわけでは無く、ティアナの所属部隊を古野間と北野の部隊に入れ、彼らにティアナの監視を密かに命じた。
最もそれは杞憂に終わるだろうと藤堂も源三郎もそう思っていたが、一応警戒している軍人もいるので、恰好だけはつけさせたのだ。
勿論パルチザンに参加したティアナ本人もその事には勘付いていた。
そこで信用は結果で導き出す。
その意欲でティアナは本来自分とは縁も所縁も無いこの第二の97管理外世界の解放戦線へと身を委ねて行ったのだ。

その頃、地球に住む吸血害虫によって着々と被害が出ているデザリアム、地球占領軍。
「こ、これが・・本日の報告書・・・です・・・・」
アルフォンに報告書を手渡す兵士の顔は明らかにやつれており、顔も所々腫れている。
報告書に目を通すと、文章の中に誤字脱字が目立つ。
睡眠不足の中、書き上げたものだとアルフォンは判断して、報告書の誤字脱字に関しては目を瞑り、司令部にあげる前に清書する必要があると思った。
その報告書の中で気になる文章があった。
「ん？・この未確認生物の記述・・・これはなんだ？・」
「はい・・パルチザンと交戦した兵士の話では、地球人類とは別に、未知の生物がパルチザンに加わっていたそうです」
「未知の生物？・」

「はい・・・体格は地球人よりも大きく、二足歩行を行い、肌の色は茶色と灰色の二種類が確認されております。容姿はこの星の哺乳類生物の犬の様な、クマの様な・・・兎に角、形容しがたい容姿をしております」
「それは本当に生物なのか？地球軍の新兵器では無いのか？」
「ライフメータにて確認した所、生体反応があったので、生物と断定されました」
「地球軍の生物兵器と言う事か・・・」
「・かもしれません。銃器で武装し、我が軍と交戦していましたので・・・」
「それで、仕留めることはできたのか？」
「それが、頭部にレーザーを打ち込んでも死なずに、平然としていた様です」
「バカなっ!?」
「事実です・・・それにライフメータでさらに詳しく解析した所、生体反応の他に我々と同じく、機械反応も確認されました」
「・・・となると、その生物兵器は我々と同じく、生物と機械の融合生物と言う事か？」
「恐らくは・・・もしかしたら、あの生物は地球軍の生物兵器ではなく、我々と同じく、別の星の生物なのかもしれません。それにその生物は言語を話しておりました」
「ふむ・それで、なんと言っていた？」
「それが『ふもふも』『ふもっふる』と解析不明な言語を話していたのですが、地球人にはそれが通じている様でした」
「地球はその生物が住む星と同盟を結んでいたと言う事か？」
「地球人と共に我々と交戦し、更に地球人と意思疎通をしていた事からその可能性もあります」
「・・・」
　アルフォンはしばし考え込んだ後、
「分かった・その生物の対処に関しては司令部で検討してもらおう・・・下がっていいぞ」

「はい」
兵士を下がらせたアルフォンはこの未知の生物に関して司令部に報告すべきかどうか考えた。
圧倒的優位な立場で地球を占領している筈なのに、この星に住む吸血害虫に未知の生物兵器の存在が不安を駆り立てる。
ハイペロン爆弾を地球へ打ち込む前に、この地に住む吸血害虫を先に始末する手を講じるべきであった。
それに頭部にレーザーを受けても死なない自分たちと同じ機械融合した生物の存在・・・しかもそれは地球軍の生物兵器ではなく、第三者の星の住人の可能性も出てきた。
もし、あの生物が地球と同盟を組んだ別の星の生物だとしたら、我が軍は地球とその星と二正面作戦をとらなければならない。
前線の兵士たちから、これらの報告を受けてもう少し、地球に関して情報を収集しておくべきだったと・・今回の地球占領作戦はしばし早急だったと思うアルフォンだった。

九十八話　中間補給基地

ミョーズの罠を突破した地球艦隊は、予定通り銀河系から２０万光年の位置へと向けて３万光年のワープを行った。
銀河系から２０万光年の位置・・・。
当然地球の宇宙開拓の歴史上、地球人類が到達した事の無い未知の宙域だ。
そして、今地球を占領している暗黒星団帝国の中間基地が有ると予想される宙域・・・。
その為、暗黒星団帝国の艦艇と接触する可能性もあるが、今の地球艦隊は暗黒星団帝国の本星の正確な位置を未だに掴んでいない現状では、まほろば　春藍が遭遇した敵艦隊の航路を逆算して進むしかないのだ。
もしかしたら、ここは暗黒星団帝国の庭先なのかもしれない。
その為、どこから敵が襲いかかって来るか分からない状況。
しかも地球人類が人質にとられている現状で、のんびりという訳にはいかないのだが、かと言って四六時中神経を張り詰めさせる事など不可能だ。
それゆえ、緊急事態や訓練以外の場合は、当直・待機シフトに入っていない乗組員は休息するよう厳命されており、それは艦長も例外ではなかった――。
ヤマトの古代守は、基本的に艦橋に詰めていたが、親友に弟の忠告に従って、愛娘と親子水入らずの一時を過ごしていた。
一方、まほろば　の良馬も守同様基本的に艦橋に詰めていたが、此方は恋人と守のもう一人の娘からの忠告に従って、休息をとる様に言われたのだが・・・
「・・・」
「むぅ～・・・」
「ん～・・・」
まほろば　の食堂にて、自分に休息を促した美女二人が睨みあって

いる。
二人の眼からは火花が散っているようにも見えた。
「リョーマ、これ美味しいから食べて」
「良馬さん、こちらの料理美味しいですよ」
二人は、互いに自分のお勧めの料理を良馬に食べさせようとしていた。
傍から見れば、両手に花で羨ましい光景であるが、当事者にとってはまさに板挟みの状態・修羅場状態であった。
（休憩時間なのに何でこんなに緊張しなければならないんだ？）
と、顔を引き攣らせながら乾いた笑みを浮かべていた。

――それから、約１２時間後――

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋
「コスモタイガー、発進！」
「了解。山本機出撃するぜ!!」
「坂本機出撃します!!」
「椎名機行きます!!」
古代の指示に従い、艦尾の発進口から山本明夫らの三機のコスモタイガーが飛び立っていく。
素早く編隊を組んだ三機の向かう先には機首と尾部をスカイブルー、オレンジに塗装したコスモタイガーとコスモゼロ、まほろばの戦闘機隊長の坂井、コスモタイガー隊所属の加藤、山本玲が待っていた。
「みんな揃ったな、よし、行くぞ!!」
『はい!!』
「だが気を抜くな。これは実戦だからな！」
コスモタイガー隊はスロットルを開いて艦隊前方に向かった。
艦隊全体には既に総員配置がかかり、全ての艦橋員が配置に就いていた。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「敵さんは、いるんでしょうかねぇ・・・」
「艦隊もだけど、中継拠点があってもおかしくはないわね・・・」
永倉の疑問に新見が答えた。
地球からあれだけ離れた距離に艦隊を送り込んで来る暗黒星団帝国であるが、幾らなんでも艦隊を連続ワープでそのまま本星から地球へダイレクトに送り込んで来るとは考えにくい。
無人の重核子爆弾なら兎も角、艦隊では艦の修理、補給、乗員の休養を行う拠点がどうしても必要な筈。
その証拠にほんの三十分前、まほろば　の強力なレーダーとセンサーは、極めて微弱ながらも天体起源ではない反応を捉えた。
それは春藍も同様だった。
まほろば　からの報告を受けた守は全艦に警戒態勢を下令すると共に索敵飛行を決意。
山南の承認を得て、まほろば　ヤマト　から前路索敵隊を出した。
実戦経験豊かな坂井、山本をリーダーに、ヤマトのパイロットの中から、くじ引きで紅一点の椎名晶と準エースパイロットの坂本茂が山本に同行することになり、まほろば　でも同じく紅一点であり、山本の妹である玲、坂本同様、準エースパイロットの加藤　四郎らが発進して行った。
「接敵するなら、奇襲だと好都合だけどね・・・」
「ええ・・・」
全く会敵しないまま敵本星に行けるとは思っていないが、できるなら一人も死なせたくはない。
否、全員を地球に連れ帰りたいのだ。
それを現実のものにするのが、艦長たる自分に課された務め――。
全く持って難しい務めである。
艦隊が偵察隊の報告を待っていると、
突如、アラームが鳴り響く。
「緊急連絡、緊急連絡。こちら、偵察隊!!敵基地を発見!!繰り返す、敵基地を発見!!」

偵察隊より、敵基地発見の報告が入った。
守は偵察隊に一度帰還するように命令した。
幸い偵察隊は敵の警戒網にかからず、偵察隊も発見される事は無かった。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「やはり、ありましたね・・・敵の基地・・・・」
「うん、敵の襲来方向はトチローさんが見つけた暗黒星雲の方向と一致している。そして、この辺りはその線上の中間地点・敵が基地を設置する可能性は非常に高いだろう。ガミラスも地球からガミラス本星の中間位置にあるバラン星にも基地を設置していたからね」
フェリシアの質問に良馬は敵の戦略上、やはり中間地点に補給用の基地を設置する可能性が高い事を指摘した。
「偵察隊よりデータが送られてきました。パネルに転送します」
ギンガが偵察隊から送られてきた敵基地の映像をパネルに映した。
パネルには円盤状の土台に水晶で出来た様な都市のように白く輝くクリスタル状の建造物があり、滑走路やドーム型のドックらしき施設を備えている基地の映像が投影された。
「これは・・・・確かにデカイな」
「差し渡し、十キロ前後と言う所じゃな、彗星帝国の要塞都市とまではいかないが、巨大な事には変わらんな」
投影された敵基地の画像を見ていると、ヤマトから通信が入った。
内容はやはりこの敵基地の件について協議したいと言うモノであった。
守、良馬、山南の指揮官三人で通信越しではあるが、協議が行われた。
どうにか回り道をしてもその後、発見され追撃をされても厄介である。
それにその場合、前後からの挟撃も考えられる。
その他にも送られてきた画像からこの基地が敵の重要施設であることには変わらない。

予想される敵本星があるとされる暗黒星雲と地球の中間点から、ここに停泊している艦船が地球への更なる侵攻を許す結果にもつながる恐れがある。
そうなれば、今も地球で戦っている同胞に苦戦を強いらせる事になる。
結果、この基地と停泊している艦船の殲滅が決定された。
そして、次に基地攻略の為の作戦が練られた。
送られてきた基地の画像のエネルギー反応から、中心にあるドーム状の構造物が艦船の補給、修理用ドックなのは間違いなく、そこには大中小、様々な艦船の反応が有り、その数は約七十隻以上に及んだ。
更に外で警戒、または補給の順番待ちをしている艦船を含めると、百隻以上の艦船がこの基地周辺に居る計算となる。
それにこれだけ、大規模な基地である。
基地自体にも何か自衛の為の武装が施されていると考えて良い。
これらすべての艦船と基地に戦いを挑むのは余りにも無謀である。
しかし、逆転の発想で考えると、ドック内に七十隻以上の艦船が居ると言う事は、逆に言えば、直ぐに戦える艦船は外に居る三十隻ほどに絞られる。
更に補給の順番待ちで満足に戦えない艦船もいるかもしれない。
ドーム内の敵を外に逃がす事無く沈められることが出来れば数で劣る地球艦隊にも十分に勝機はある。
そこで、先陣をきるのはコスモタイガー隊となった。
まず、艦載機で奇襲を行い、ドーム内にいる敵を一掃してもらう。
さながらパールハーバー奇襲作戦の様だ。
そして、作戦内容が纏まり、実行に移された。
出撃前、良馬はコスモタイガー隊に以下の内容を訓示した。
「全機対艦爆装で発進。敵の迎撃機が来なければそのまま攻撃。迎撃された場合は爆装解除して空戦行動に移れ！それと絶対に独り相撲はとるな。皆、まずは生きて帰る事を最優先にしろ。まだまだ暗黒星団帝国との戦いは始まったばかりなんだからな！必ず生還しろ。無理はするなよ!!」

『はいっ!!』
やがて、ヤマト　まほろば　からは爆装されたコスモタイガー隊が全機出撃した。
「目標は敵さんの中間拠点、こいつを潰して奴らの血管と神経をズタズタにしてやるんだ!!いつも通りにやれば必ずうまくいく!!地球のためなんてでかい事を考えずに、地球に残してきた家族、彼女、親友の笑顔を守るために小憎らしいアイツらをぶっ潰せ!!」
『はい!!』
坂井は部下全員を鼓舞した。
「山本、この作戦は、最初の奇襲が要だ。できるだけ、多くの敵艦を沈め、敵基地を攪乱してくれ」
「ああ、奇襲だけで決定的なダメージを与えるつもりでやるぜ」
古代は山本と作戦内容を改めて確認し、出来るだけ多くの戦果を出せるように言う。そして、山本はそれ以上の戦果を出して見せると意気込んだ。

暗黒星団帝国・地球侵攻軍　中間補給基地　管制室
接近するコスモタイガー隊は基地のレーダーで捕捉される位置まで来た。
その報告は当然、基地司令官であるグノンにも知らされた。
「グノン司令!!正体不明の編隊がこちらに向かってきます!!」
「何だと?全く正体が分からんのか?」
「いえ、恐らくエネルギー反応から地球の機体と思われます」
「地球?地球は確か既に我が軍の占領下にある筈・・・いや、まて・・・ミヨーズの奴が追っていたヤマトとか言う艦があったな・・・」
グノンは思い当たる節を口にする。
「はっ、しかし、ミヨーズ大佐は確か三万光年先でヤマトを待ち構えている筈・・・何故、連絡が来なかったのでしょう?」
オペレーターは、ミヨーズからヤマトに関する情報が一切知らされてこなかった事に疑問を持つ。
「ふん、知れた事・・・どうせ奴は愚かにも敗北したのだろう。前から

気に食わなかった若造だ。いい気味だわい」
　グノンはミヨーズが既にヤマトとの戦いで戦死しており、その為にこの基地に対して、ヤマトに関する情報が無かったのだと推察する。
　しかし、まさか自分たちがミヨーズから切り捨てられて、敢えてヤマトに関する情報が送られて来なかったのだとは、グノンを始め、この基地に居る誰もが思ってもみなかった。
「それよりも眼前の敵だ。ふふ、たったあれだけの戦闘機隊でこの中間基地を落そうとするとは。全く持って片腹痛いわ!!迎撃態勢を整えろ!!返り討ちにしてくれる!!」
「はっ!!」
　この時、グノンはコスモタイガー隊の攻撃目標がドーム内の敵だとは知る由も無く、敵は正面からこの中間補給基地に挑んで来たと思い、態々ドーム内の艦を動かす事も無く、この基地の対空砲だけで、勝敗はつくと思っていた。
　コスモタイガー隊
「山本隊長、敵基地外部の艦隊に動きが有りました。どうやら、発見されたようです」
「よし、皆気合を入れろ!!外の奴等には目もくれるな・・・俺たちの目標はあのデカブツだ!!」
　コスモタイガー隊は外に居る敵艦船を無視して一気に中間基地へと迫る。
「見えて来たぜ・・・」
　やがて、コスモタイガー隊は敵基地を視認できる距離まで来ていた。
「隊長お先に!!」
　坂本はブースターを吹かし、一気に敵基地のドームに繋がっている排気口へと突っ込んでいく。
「あの野郎・・・」
「椎名!!お前は坂本のバックアップにまわれ!!」
「了解」
「全機、一直線に突っ切るぞ!!坂本と椎名に続け!!」

コスモタイガー隊は敵の対空砲火に怯むことなく排気口目指して突っ込む。
やがて、ドームの内部へと侵入すると、ドック内に停泊している艦船に対し、容赦ない爆撃を敢行した。
停泊している艦船はコスモタイガー隊の攻撃を受け、爆薬や燃料に引火し次々と誘爆していく。
ドーム内の艦船を粗方片付けたコスモタイガー隊は、長居は無用と言わんばかりに退避行動へと移った。

暗黒星団帝国・地球侵攻軍　中間補給基地　管制室
「な、何だと・・・!!敵は、始めから内部に侵入するのが目的で・・・!!」
敵の攻撃目標が判明した後、その行動に驚愕するグノンであったが、時すでに遅し。
「ドック内に停泊していた艦、七十二隻の内、四十四隻が轟沈、十七隻が大破!!」
「残りの艦も殆どが補給中で飛び立てません!!このままでは、爆発に巻き込まれてしまいます!!」
「敵艦載機、応戦可能宙域外へ離脱!!・・・は、速いっ・・・!!」
ドック内に居た艦船はその殆どが戦闘不能状態に追い込まれ、その原因となった敵機は基地の応戦可能外へと逃げていく。
「むむむ・・・おのれっ!!基地外部の艦隊に伝令!!あの攻撃機を何としても追撃するのだ!!」
憤慨したグノンは敵機の追撃を命じた。
「しかし、それでは基地が手薄になってしまいますが・・・」
オペレーターは最後の防御手段とも言える基地外部の艦隊を基地から離す事に異議を唱えるが、
「かまわん!!追え!!この基地の威信にかけて、追うのだっ!!」
頭に血が上っていたグノンは完全に周りが見えていなかった。
オペレーターの意見を退け、残存艦に敵機追撃を命じた。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「敵、中間基地ドーム内に爆発を確認。外の艦隊にも動きが出始めました!!」
「コスモタイガー隊から入電!!『我、奇襲ニ成功。間モ無ク本隊ト合流ス』・・・以上です」
「コスモタイガー隊後方に敵艦隊を確認!!」
「よし、まずは波動砲で一気に敵を殲滅するぞ」
「了解。拡散波動砲の発射準備」
敵は両翼から戦艦と巡洋艦の部隊、中央に駆逐艦部を展開してきた。
しかし、ドーム内の艦船が沈んでおり、その他の艦船もまだ補給が終了していなかったようで、展開する艦船は少ない。
両翼の戦艦、巡洋艦部隊は　まほろば　春藍　ハルバードが対応し、中央の駆逐艦隊にはヤマト　雪風・改　ファルシオンが対応した。
速度差で一番早く波動砲の射程に入って来たのは中央の駆逐艦隊だった。
そこへ、ヤマトとファルシオンの波動砲が火を吹いた。
「この閃光は・・・っ!!」
駆逐艦隊は一瞬の内に消滅した。

暗黒星団帝国・地球侵攻軍　中間補給基地　管制室
「司令・・・!!敵の艦隊が・・・!!」
「な、なんということ・・・!!お、大型対艦ミサイル発射準備!!艦隊も防衛に回せ!!狙撃戦艦でまだ無事な物は!?」
「はっ!!基地外部甲板で調整中だったものが五隻!!補給は完了しています!!」
「よし、全て出撃させろ!!」
「はっ!!」
グノンからの突然の反転命令を受けて、両翼の部隊は行足が鈍った。
そこを　まほろば　春藍の拡散波動砲が襲い掛かった。
基地の前衛部隊を退けたヤマト　まほろば　春藍　雪風・改　ハル

バード　ファルシオンはコスモタイガー隊と合流し、敵基地へと攻め込んだ。
「敵基地表面に変化あり!!対艦ミサイル砲門だと思われます!!」
「迎撃準備!!対艦ミサイルとは言え、コスモタイガー隊も気をつけろ!!」
「ミサイルの発射を確認!!・・・・第一波ミサイル・二十五発!!来ます!!」
「対空砲火で撃ち落せ!!」
　ヤマト　まほろば　春藍　ハルバード　ファルシオンからはパルスレーザーや主砲、副砲が火を吹き、ミサイルの迎撃に当たる。
　それと同時に基地への艦砲射撃を行う。
　そんな中、ミサイルとは別の攻撃・・・・。
　敵の大口径ショックカノンがヤマトの左舷中央部に命中した。

　宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋
「な、なんだ!?今のは!?」
　被弾によってヤマトの船体は大きく揺れる。
「砲撃!?・・・・どこからだ!?」
「レーダー範囲外からです!!位置、割り出せません!!」
「レーダー範囲外だって!?」
「敵には超射程兵器を持つ狙撃艦がいるのかもしれん・・・・まずいぞ!!早くその艦の位置を特定し、沈めなければ此方が蜂の巣にされてしまうぞ」
「タイムレーダーから敵の砲撃方向はわかるか!?」
「なんとか・・・・」
「ならば、コスモタイガー隊にそのデータを転送!!狙撃艦の撃破に当たらせろ!!」
「了解」
　コスモタイガー隊が狙撃艦を撃破するまで艦隊は基地からの対艦ミサイルと狙撃艦からの狙撃砲撃に晒された。
「消火器を持ってこい!!消火を急げ!!」

「負傷者が居る!!ストレッチャーを急げっ!!」
被弾箇所では、応急作業員が消火作業、負傷者の救助、被弾箇所の修理と声を上げながら駆けまわっている。
消火器を持つ者は被弾部に消火剤を噴きかけ、またある者は負傷者を肩に担ぎ、用意されたストレッチャーに乗せ、医務室へと運ぶ。
「先生、お願いします!!」
看護士と応急作業員が二台のストレッチャーを押して来た。
「分かった!!重傷者は無菌室へ!!軽傷者は診察室の方へ運んで!!」
「はいっ!!」
当然ながら、重傷者が優先だ。軽傷者は看護師らの手によって被曝チェックと傷の手当てを行い、後ほど医師の診断を受けることになる。

暗黒星団帝国・地球侵攻軍　中間補給基地　管制室
「艦船発着口の修理はまだできないのか!?」
「ダメです。外側からでないと修理できない上、敵戦闘機が付近に居座っています!!」
一度工作艇を出したが、すぐに地球の戦闘機に追跡され、多数の死傷者を出して断念させられた。
ゲートが開かなければ中にいる艦艇を出せず、迎撃できない。
基地はミサイルによる敵艦隊への攻撃のみを強いられた。
一方、狙撃艦の撃破に向かったコスモタイガー隊は空間照明弾、レーダー衛星を設置しながら、狙撃艦の探知をしながら、進んでいく。
その最中、
「ぐわっ!!」
「八番機がやられました!!」
「まだ飛べるか!?」
「は、はい・・・」
「直ぐに戻れ!!」
「す、すみません・・・」
狙撃艦からの長距離砲撃で、僚機が一機被弾した。

「怯むな!!進め!!」
　コスモタイガー隊は尚も進撃するが、またもや
「うわっ!!」
「五番機がっ!!」
　先程被弾した機よりも今度被弾した機は被弾箇所が悪く、瞬く間に爆散した。
「くそっ!!」
　味方を失いながらもコスモタイガー隊は進撃を止めない。
　そして、ようやく敵の狙撃艦を発見した。
「野郎〜やっと見つけたぞ!!仲間の仇だ!!全機、突撃!!」
　コスモタイガー隊は猛禽の群れの如く、狙撃艦に攻撃を開始した。
　仲間を殺られたコスモタイガー隊の攻撃は苛烈を極め、狙撃艦は次々と沈められて行った。

　暗黒星団帝国・地球侵攻軍　中間補給基地　管制室
「我が基地の艦隊・・・・全て全滅・・・・!!」
「馬鹿な・・・・馬鹿なっ!!」
　オペレーターの報告に唖然とするグノン。
　しかし、更なる凶報がグノンに知らされる。
「し、司令・・・・大変です・・・・!!」
「こ、今度は何事だ!?」
「敵艦船の砲撃の一発が四番外殻に被弾!!爆発の影響で格納ドームの火災が動力炉に燃え移りました!!」
「な、なんだとっ!!」
「第四動力炉爆発停止!!このままでは全ての炉が連鎖爆発を・・・・!!」
「す、すぐに消火に移れ!!」
「だ、駄目です!!爆発の影響が物凄く消火不能です!!スプリンクラーも異常が発生し、機能しません!!」
「アラート拡大中!!第二動力炉溶解!!第三動力炉出力停止!!」
「・・・・ああっ、第一動力炉も・・・・うわぁぁぁぁぁぁっ!!」
　動力炉区画からのアラートが鳴り響く中、基地の彼方此方で爆発が

起こり始めた。
「そ、そんな・・・そんなぁぁぁぁぁっ!!」
グノンは唖然とした表情のまま絶叫し、やがて、彼の目の前が真っ白になり、体全体が燃えるような熱さがグノンを襲ったが、それもほんの一瞬の事だった。
暗黒星団帝国・地球侵攻軍　中間補給基地は爆発を何度も繰り返し、やがて宇宙の塵と成り果てた。
基　地司令官のグノンを始め、生存者は一人もいなかった・・・・。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「敵基地、消滅」
「残存艦の方は？」
「基地周辺に展開していた艦は全て基地の爆発に巻き込まれたようです。この宙域に敵艦の存在は認められません」
「どうやら、終わった様じゃな、艦長」
「ええ・・・」
「しかし、数や規模の割には何だかあっさり倒せましたね」
永倉が今回撃破した敵の規模に何か引っかかる様子。
「奇襲攻撃が上手く言ったからじゃないんですか？」
ギンガが永倉に訊ねる。
「いや、三万光年で遭遇した敵はあれだけ周到な罠を張っていたんだ。敵にはその知らせやこちらの戦闘データが有っても良い筈なのに・・・妙じゃないか？」
「た、確かに・・・」
永倉の言葉に頷くギンガ。
他の乗員も永倉の意見に一理あると思っている。
「念の為、敵の形状やエネルギー波長、通信パターンを全て記録していたのですが、計測した結果、あの干渉装置の罠を使った艦隊はここには居なかったようです」
新見が永倉の疑問を解消する答えを掲示した。
「なるほど、敵も決して一枚岩じゃないようじゃのう」

相手も人間・・・。
それ故、例え同じ星、同じ組織に属していても考え方は十人十色。
全て同じと言う訳ではない様だ。
今回の戦闘に置いて、艦の乗員に負傷者は多数出したが、死亡者は出さずに済んだ。
しかし、コスモタイガー隊には何機かの未帰還者を出す結果となった。
坂井は、今回の結果を良馬に報告した後、展望室に立ち寄った。
窓辺に立った彼はポケットから指揮官用端末を取り出すと、しばらくその画面に見入っていた。
「・・・」
その表情に出撃前の豪放磊落さはなく、打って変わって哀しみの色が浮かんでいる。
坂井が見ているのは、未帰還になった　まほろば所属パイロットの顔写真付きプロフィール。
航空攻撃は敵基地と敵艦船に痛撃を与えたが、対空砲火で撃墜される機も少数ながら出ていた。
戦争に犠牲は付き物だ。それは紛れもない事実だが、訳知り顔な連中ならいざしらず、実戦指揮官たる者がそんな事を口に出すことは許されない。
犠牲者が出たと報告を受けた良馬も何か思う所がある表情をしていた。
彼としても全員を地球へ帰してやりたかった。
しかし、その思いは叶わぬものとなってしまった。
坂井は、しばらく展望室の窓際を離れなかった――。

太陽系最外縁・エッジワース・カイパーベルト
「間一髪でしたね」
「そうだな・・・」
時空管理局の次元航行艦クラウディアは、通常空間から緊急転移して逃れたばかりだ。

太陽系の外縁、エッジワース・カイパーベルトに到達したクラウディアを迎えたのは地球防衛軍の艦艇ではなく、管理局も敵と認定した暗黒星団帝国の中型戦闘艦一隻と小型戦闘艦六隻だった。
地球防衛軍の艦であればまず停船命令を出してこちらの所属を質してくるだろうが、暗黒星団帝国軍の艦はこちらの所属も確認しないままいきなり発砲してきた。
「提督、今後の方針はいかがいたしましょうか？」
副官がクロノに訊ね、彼は断言する。
「しばらくこの空間に留まり、時々通常空間に出て情報を集める。結論を出すには時期尚早だ。次の再転移で情報収集の為、サーチャーを多数射出する!!皆、気合と根性を入れて任務に当たれ！」
「は、はい!!」
クラウディアは、間違いなく時空管理局一勇敢な艦船であった――。

それから数日後・・・
時空管理局の次元航行艦クラウディアは、どうにかカイパーベルト内に進入を果たしていた。
艦長のクロノ・ハラオウンは臆病な位に慎重に次元空間と通常空間を行き来しながら、通常空間座標をカイパーベルトの中にまで移していた。
ここに来て分かった事はやはり、地球は例の暗黒星団帝国の侵略を受けていると言う事だ。
本来地球連邦：地球防衛軍の艦艇がパトロールしていそうな宙域でサーチャーによって確認できたのは防衛軍の艦艇では無く、暗黒星団帝国の艦艇だった。
それから更に調査を進め、敵の無線傍受に成功すると、有力な情報を幾つか入手する事ができた。
それは、現在太陽系内に暗黒星団帝国の主力艦隊が不在の事、
そして、不在理由はヤマトを追跡している事だった。
「暗黒星団帝国の艦艇の主力が出払ってくれたのは助かりましたね」
「そうだな。その分、太陽系内にいる敵艦の密度が減るわけだからな」

艦内食堂で、クロノと数人のクルーが一緒に昼食をとりながら雑談している。
「それにしても、どうして暗黒星団帝国はヤマトをそんなに恐れるんでしょう？」
「不思議か？」
今回が初乗り組みの新人オペレーターが素朴な疑問を呈し、クロノが面白そうな表情になった。
「はい。大規模な艦隊ならいざ知らず、たった一隻の戦艦をそんなに怖がるんでしょうか？少し異常とも思えますが・・・」
管理局では、次元航行部隊でもヤマトや地球防衛艦隊の事は、提督以上の高官や直接見聞きした極少数の者以外には余り知らされていない。
理由は色々あるのだが、クロノは、
（一隻で大陸を、数隻でミッドチルダ級の惑星を破壊できる宇宙戦艦の存在が知れ渡れば、局員は元より市民が動揺すると思ったからだろうな・・・）
と、地球艦隊の異常とも言える攻撃力の高さに余計な混乱を避けるための処置だと思っていた。
そして、クロノは若いクルーの疑問を受け、彼なりの回答を出す。
「本当の理由は暗黒星団帝国の軍の高官でないと分からないが、ヤマトは過去二回、多大な犠牲を払いながらも絶望的な状況に追い込まれた地球を救った、いわば奇跡の艦だ。逆に、敵サイドからすれば、ヤマトを撃沈あるいは拿捕する事が出来れば地球も諦めると踏んでいるのではないかな？ましてや暗黒星団帝国は既にヤマトに苦杯を舐めさせられているからね。メンツにかけても討ちたいだろうな。もっとも、それだけではないのかも知れないがね・・・」
「奇跡を起こした存在ですか・・・まるで八神艦長が部隊長を務めていた機動六課みたいですね」
『奇跡』と言う事から連想されたモノはＪＳ事件を解決に導いた機動六課の事が脳裏に過ぎった新人クルーであったが、クロノは苦笑しながら、

「いや、困難さでは遥かにヤマトや地球防衛軍の方に軍配があがるだろうな。彼らが失敗すれば、地球人類は文字通り破滅していたんだからね」
　と、自らが後見人を務めたにも関わらず、『奇跡』『英雄』と言う言葉は機動六課よりもヤマトや地球防衛軍の方にこそ相応しいと言う。
　更にクロノは、
「それに、ヤマトの成功は何もあの艦の乗組員だけの功績じゃない。僅か数ヶ月でタキオン機関を開発した技術陣、留守の地球を守り抜いた地球防衛軍の戦友たち、ヤマトの成功を信じた地球の人たち・・どれか一つが欠けても地球は滅んでいたんじゃないかな？」
　と、地球防衛軍軍人と地球の技術者達の事も褒め称えた。
「・・・・」
　皆が静聴してクロノの言葉に耳を貸す中、
　クロノはここでひと呼吸置いた。
「しかし、ここの世界で起きている出来事は、管理局も他人事と傍観している事はできなくなるかも知れないぞ」
「と、おっしゃいますと？」
「管理局も、こういった強力な軍事力を持った星間国家と向かい合わなければならなくなることさ。これまでの次元世界では、管理局が一番でいられたが、この世界の国家はガトランティス帝国も暗黒星団帝国も管理局を敵視し、軍事力で圧倒している。先に遭遇したボラー連邦がその良い例だ」
『・・・・・・』
　クロノからボラー連邦の名を聞き、クルー達が少し顔色を青くする。
「地球連邦はだいぶ穏健ではあるが、それでも管理世界入り等は絶対にありえないだろう。これからはそういった国家とも付き合っていかなければならなくなるかも知れない。そうなれば、管理局はこれまでのような上から目線や魔導師至上主義を掲げている事は不可能だろう。でも、その前に認識を改める事ができるかどうか・・・・」
　以前に比べれば少なくなったが、まだ頑なに非魔導師や管理外世界

を見下す者は少なからず存在する。それも管理局の中枢近くに・・・・。
次元世界を平和にするにはまずはそう言った偏った思考者を排除しなければ、いずれ管理局は滅びる。
ボラー連邦相手にあれだけの大敗をしたと言うのに、まだそんな考えなのかと怒鳴り付けたい気持ちにさせられたものだ。
いい加減現実を見てもらいたいものである。
「諸君。もはや、魔法と魔導師の優位性が崩れつつあることを認識して職務に当たれ・・・・どんなに優れた魔導師でも宇宙空間の中では生きられない・・・・我々の所有する次元航行艦も彼らが装備するレーザー兵器（ショックカノン）やタキオン砲（波動砲）の前では紙切れ同然の防御力しかないのだからな」
「了解」
「はっ」
新たに配属された乗組員にクロノはこう訓示し、事あるごとに説いていたが、本局ではまだ多数派たりえていないのだ――。

時空管理局本局　士官用サロン
「あっ、はやてちゃん」
「ああ、なのはちゃん」
補佐官のリインフォースⅡを肩にココアを飲んでいたはやては、なのはの姿を見つけて手を振った。
なのははカウンターでコーヒーを受け取るとはやての向かいに座る。
「ねぇ、はやてちゃん。オーリス元三佐が管理局に復帰するって本当なの？」
「・・・・うん。ナカジマ三佐も肯定しとったから間違いないやろうなぁ。最も階級は三佐から三等陸尉に降格やけど、元の地上本部長付秘書官に復帰するそうや」
「そう・・なんだ・・・・」
なのはは罰悪そうな顔でカップに視線を落とした。
オーリス・ゲイズ・・・・

ＪＳ事件において死亡したレジアス・ゲイズの娘で、そのＪＳ事件では、重要参考人であり、捜査に協力する交換条件で無期限停職処分になり、捜査終了に伴って懲戒免職になる予定のところを、現ミッド地上本部長のロールスロイスが懲戒免職処分を撤回し、無期限停職処分の方も階級の降格で停職解除と旧職務への復帰を命じた。

当然ながら、この人事は賛否両論を呼んだが、否定的な者は本局の〝海〟に多く、反対にミッド地上本部では概ね歓迎されたのである。

結果はどうあれオーリスの実務能力は一流であったため、人手不足の〝陸〟としては是が非でも復帰してもらいたい人材だった。

「本局は反対する人が多かったんやけど、ロールスロイス本部長は『ならばナンバーズは全員刑務所入りだな』と、にべもなく突っぱねたそうや。元々、本部長はチンクたちも一年ないし数年の懲役刑にするべきやと言うとったからな。だからあの時、あの人はチンクたちを保護監察・再教育処分にすることにあっさり同意したんやね。おかしいと思ったわ」

はやては『してやられた』と言う表情になった。

旧ナンバーズのうち、管理局の取り調べ、司法取引に協力的だったチンク、セイン、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディ、オットー、ディードの七人については、ロールスロイスは司法取引を経ても一～五年の有期懲役刑を求刑するつもりと思われていた。

特に取り調べの結果、ゼスト隊殲滅作戦に従事したチンクは他の六人の姉妹たちの中でも厳しく、下手をしたら、取り調べに非協力的だったウーノたちと同じ処分を受けてもおかしくは無かった。

そして、もしチンクがウーノらと共に刑務所に服役したら、きっと今頃は謎の病死として片付けられていた事だろう。

しかし、本局サイドからの〝要請〟で海上施設での再教育というかなり寛大な処分で落ち着いた。

強く反発すると思われたロールスロイスがあっさり賛成したので、本局は拍子抜けしたのだが、まさかここでオーリス・ゲイズの復職を交換条件にしてくるとは予想していなかった。

「恐らく、地上本部は各管理世界の政府や本局に質量兵器限定解禁法

案を提出するつもりなんやろう。オーリスさんの復職はそのための布石やな」
はやての見立てはほぼ的中していた。
「そんなっ!?管理局はミッドや管理世界での質量兵器の使用を認めるって言うの!?」
なのはは、ミッドでの管理局員による質量兵器の使用にはやはり反対の様子。
「・・・なのはちゃん。残念やけど、管理局はもう形振り構っていられるほど余裕が無くなっているんや・・・」
はやては深いため息をつきながらそう呟いた。
「・・・」
なのはははやての様子を見て、もはや管理局やミッドの改革はどう転んでも止められないと思っていた。
それから数日後、太陽系最外縁での情報収集任務を終えたクラウディアが本局へと帰還した。
そして、帰還したクロノからは、驚愕する事実が報告された。
〝第二の９７管理外世界の太陽系は暗黒星団帝国軍に占拠されている〟
〝暗黒星団帝国の中間基地が地球艦隊に襲われ、潰滅した模様〟
この報せは本局を震撼させた。
特にあの世界に義妹がいるクロノにとっては気が気でないだろう。
そんな中、クロノやレティたちを絶句させる議題が出た。
左遷を免れていた〝海〟の拡張派から、
〝太陽系に艦隊を派遣し、放棄された地球の艦船を接収してはどうか〟
という提案がなされたのだ。
その意見に対し、拡張派からは次々と賛同の声が上がった。
たとえ友好国であろうと、敗戦国の艦船を接収することは多くの管理外世界では常識のことで、地球連邦とほぼ同じ歴史を歩んできたと思われる第９７管理外世界でもそうだ。
故にルール違反ではない。

それにこれが成功すれば、管理局の造艦能力は飛躍的に進歩するのだが・・・

「そもそも、管理局の艦船で暗黒星団帝国に占領されている今の太陽系内に入れるのか？君たちは先のボラー連邦との大敗から何も学んでいないのか!?」

「仮に艦船を持って来れても、建造や運用のノウハウもないままで、どうやって戦力化できるのか!?使いこなせない艦等、ただのお荷物に過ぎないではないか!!」

といった反対意見が出て、激しい議論になった。

ボラー連邦の武力制裁失敗後、未だに艦船、人員問題は解決しておらず、日に日に悪化しているとも言ってよかった。

〝陸〟や〝空〟からの出向組はいずれ原隊に帰さなければいけないし、〝海〟への転籍を希望する者は激減していた。

むしろ、〝陸〟への転籍を希望する者の方が多いのだが、曹・士の下士官、兵士クラスはともかく、尉官以上の士官は相変わらず断られるケースが多いのだ。

また、〝海〟への新規入局者も減少していた。

現有の次元航行艦船ではあまりに脆弱過ぎるからで、またボラー連邦や暗黒星団帝国のような獰猛な勢力と遭遇した場合、次元空間に転移するしか対処法がなく、万一、管理世界に侵攻された場合、陥落する可能性が高いのだ。

特に二十歳以下の年少層の入局が激減したのは、保護者の意向が大きかろう。

本局が着目していた高ランク魔導師の雛鳥や卵たちも入局を延期したり、出身世界の地上本部に入局したりで、〝海〟のみならず〝空〟への入局者も減少していた。

今回の事件に関して〝陸〟としてはありがたい事なのだが、

「まさか〝海〟の不手際がこちらにまで響くとは・・・」

〝空〟に関しては完全に巻き添えであった。

ボラー連邦の武力制裁に派遣した空戦魔導師は全員が還らず、再建には年単位の時間がかかるのに加えての入局者減で、空戦特性がある

者が〝陸〟に流れ、ヘッドハンティングも思うに任せなくなっている。
こういう情勢の中、各管理世界駐留の航空武装隊は自ずと地元地上本部との連携を模索し、〝海〟と距離をとり始めた。
中心であるミッドチルダでは、地上本部長のロールスロイスと防空総監に就任したルーデル中将が士官学校からの友人同士という事もあり、前任者同士がいがみ合って頓挫していた〝空〟〝陸〟の連携を再び進める動きを見せていた。
〝海〟サイドは当然不愉快さを隠せなかったが、現在の窮状の主因が自分たちにあることを知っていたため、文句をつけることができなかった。
白熱する会議場をクロノからの続報がこの議論を収めた。
ヤマトと一部の地球艦隊が暗黒星団帝国軍の警戒網を突破して太陽系を脱出。
太陽系を占領している暗黒星団帝国の主力は現在追跡中。
〝ならば、主力艦隊が居ない今こそ、太陽系へ行き、艦を接収しようではないか〟
〝艦隊を派遣し、我々が防衛軍に代わり地球を解放すれば地球はすんなりと管理世界入りをするのではないか?〟
等と、意見が出たが、確かに今は太陽系に暗黒星団帝国の主力艦隊は居ないが、あくまで主力艦隊が居ないだけで、現在も太陽系内には暗黒星団帝国の艦艇は存在し、太陽系内を警戒中である。
事実、調査中のクラウディアは幾度も敵艦と遭遇し、撃沈されそうになった。
それに管理局が現存する次元航行艦全てを向かわせても能力はどうみても暗黒星団帝国の軍艦の方が上だろう。
現に数で勝って居た筈の第３７探査部隊は数で劣る暗黒星団帝国の艦艇に拿捕されて悪魔の実験の餌食となった前例が有る。
それに暗黒星団帝国は奇襲攻撃とは言え、あの地球を占領下においているのだから・・・
それらの意見を聞き、やはり太陽系への出撃は見送るべきだと穏健

派は主張した。
更にクロノの報告は続き、
〝防衛軍司令長官は地下に潜伏。占領軍に対するレジスタンス活動を展開中〟
と、地球連邦・地球防衛軍がまだ降伏していないと連絡してきた。
事態ここに至り、地球艦船の接収は延期された。
三提督は初めから難色を示していたのに加え、レティら穏健派から、
「接収を強行し、暗黒星団帝国に見つかった場合、地球防衛軍からも見捨てられるだけでなく、管理局は盗賊と同一視され、今後はコンタクトを取るにも難儀になる」
「かの世界には他人の苦難に乗じる事を『火事場泥棒』といい、永く軽蔑の対象になる」
「地球艦隊の艦一隻を接収するのに一体何隻の次元航行艦を生贄にするつもりだ？」
等との意見が出され、ハイリスク・ノーリターンでしかないとの結論が出たのだ。
更に、追い討ちをかける意見がリンディから出た。
「地球防衛軍にはノア、テリオスのデータがあります。地球が暗黒星団帝国に屈すれば、どういう事態になるでしょう？」
これには全員が蒼白になり絶句した。
あの地球を占領した技術力と軍事力を有する星間国家なのだ。
もし、彼らが次のターゲットにミッドや管理世界を選択すれば、防衛軍以下の性能しか有さない管理局の艦船では歯が立たず、ミッドもあっという間に占領されてしまう。
「そうだ、そもそも地球連邦がしっかりしていないからこういう事になるんだ！」
自分たちの事を棚に上げて地球連邦政府を非難する高官も居た。
「そんな戯事を言っている場合か！地球連邦と地球防衛軍には、何が何でも勝ってもらわなければいずれ我々も地球連邦と同じ運命を辿らされるんだぞ！」

管理局にとって望ましい結果は、ヤマトと地球艦隊が暗黒星団帝国に大打撃を与え、地球占領軍を追い出す事だ。
「我々がもし関与するならば、地球防衛軍を支援することしかありません。それに、地球防衛軍にもエースやストライカーは存在します。今は彼らを信じるしかないと思うのですが、どうでしょう？」
更にリンディは幾らか声を低めてダメを押す。
少なくとも、地球が降参していない今の時点で防衛軍の艦船の接収など、失う物が多く得る物余りに少ない無謀な賭けでしかない。
今は黙って情勢を見極めろ。
リンディはそう言いたかったのだ。

本局の会議室でクラウディアからの報告で会議場が沸いている最中、ミッドチルダの北西部にある森林保護区では・・・
特別救助隊に籍を置くスバル・ナカジマ一等防災士は、端境期で閑散とした湖畔にある公営キャンプ場を訪れた。
ここは湖畔に自動車を乗り入ることを禁止しているため、静かなキャンプを楽しみたいベテランに好まれるのだが、スバルもここを訪れるのはコレが二回目だった。
一度目はまだスバルが幼かった頃・・・
母親も姉も生きていた頃だった。
楽しい思い出と同時にスバルには今は亡き、母と姉を思い出させる悲しい場所であるが、スバルは心を落ち着け、自分を見直す為、敢えてここに来たのだ。
ここに来れば、母と姉が自分に何かを語り掛けてくれそうな気がしたのだ。
スバルはまず、バックパックや、先に送り込んであった寸胴から荷物を取り出し、キャンプスペースを作る。
寸胴は明らかに業務用の大型だが、彼女の体力維持にはこの位でなければならないのだ。
「ふぅ・・・」
キャンプペースの設営を終えたスバルは、早速夕食の支度にかかっ

ていた。
湖畔の日暮れは早く、明るい内に支度しなければならないのだが、スバルは溜息をつかずにいられなかった。
ここ最近は、精神的にきつい出動が多かった。
特に第七海上支部での救助活動任務とボラー連邦軍に撃破されたザンクト・ヒルデ魔法学院のチャーター船、コスパ・コンコルド号での救助任務はあまりにもしんどかった。
チャーター船、コスパ・コンコルド号の件はスバルも憤りが込み上げ、拳を震わせたほどだ。
後年、戦うレスキューお姉さんと謳われたスバルやノーヴェでも、現場には今一歩及ばず、要救助者を死なせてしまう事が多々あった。
物言わぬ骸と化した家族や親しき者に取り縋って泣き叫ぶ者たちを見た時は、己の無力と未熟を悔いて唇を噛み締め、心の中で泣いた。
もっと速ければ、もっと強ければ、もっと力があれば、もっと技術があれば、より多くの命を助けられるのに――。
いつまでも落ち込んではいられない。
しかし、もう二度と還ってこない、愛する者への慟哭を忘れてはならない。
自己満足に過ぎないかも知れないが、救えなかった人々への手向けは、この後、同じような悲劇を少しでも減らすこと。
そう思って、リフレッシュとトレーニングを風光明媚なこの地で行うことにしたのだ。
スバルの他の姉妹達も父(養父)、ゲンヤからそれぞれリフレッシュしてこいと言われ、今頃、姉妹同士、水入らずで暫しの休息を満喫して居る頃だろう。
自分も与えられたこの短い休暇を精一杯楽しもうと思ったスバルであった。

九十九話　白い花

敵の中間補給基地を撃破したヤマト　まほろば　春藍　では今後の航路確認を行っていた。

彼らの針路先には以前、大山がキャッチした『暗黒星雲』があった。

観測の結果、この星雲の直径は約十万光年以上の大きさがある。

約十万光年以上の大きさと言うと、太陽系がある銀河系とほぼ同じ大きさを誇る。

これだけの大きな星雲が観測されなかったのは、全く発光しない星雲なので、地球からは、観測はおろか、その存在さえも確認できなかったのだ。

この暗黒星雲の中には暗黒物質で出来た星が存在しているのかもしれない。

そう言った意味ではこの星雲は暗黒星雲というよりも『暗黒銀河』と言った方が正しいかもしれない。

しかもこの星雲はただ巨大な訳では無かった。

中心部にはガス状の物質が渦を巻いて充満しており、反対側の光を全く通さない。

故にその反対側に一体何があるのか分からないのだ。

その為に星雲を突き抜けるにはかなりのリスク（危険）が伴うと予想された。

そこで、連続ワープにて迂回する案も出たが、その案も難しいと言う結論に至った。

その理由は、銀河間の様に何もない宙域ならば、十万光年と言う距離はあっという間に通過出来るが、この星雲には独特の特徴があったのだ。

この星雲の回転速度は凄まじく、しかもその回転速度は、外縁部に行けば行くほど、速く激しくなっている。

星雲の降着円盤から外れてもその渦は大きく広がっていると予想される。

もし、ワープ中にこの渦の中に巻き込まれるような事態に陥れば、一巻の終わりになってしまう可能性もある。
そこで、航路には暗黒星雲の中心部を通る事となった。
どういう事だか、中心部は外縁と比べて回転が比較的に緩やかな為であった。
しかし、ガスや暗黒物質等が高密度に充満しているので、長距離ワープが出来なくなる欠点もあったが、外縁部の渦に巻き込まれるよりはマシであった。
やがて、一行は暗黒星雲・バルジ層へと到着した。
まだ星雲内に入ってもいないのに、周囲が薄暗くなってきた。
その薄暗さは暗黒物質の影響の為であった。
操縦機能、レーダー機能は今の所問題ないが、この先進んで行くとどうなるか分からない。
そんな中、先陣をきって航行していたヤマトに衝撃が走った。

宇宙戦艦　ヤマト　第一艦橋

「どうした!?」
「艦首右舷で爆発・・・ロケットアンカー付近に損傷!!」
「原因はなんだ!?」
「わ、分かりません!!障害物反応も何もなかったんですが・・・」
原因不明の爆発。
その原因の調査の為、艦隊は一時、行き足を止めた。
このヤマトが受けた衝撃をミヨーズ司令率いる追撃隊が探知した。

ガリアデス　艦橋

「ミヨーズ様、ヤマトと思しき反応を捕えました!!」
「何・・・どこだ?」
「暗黒星雲の界面近くです。どうも、友軍が散布した機雷に引っかかった模様です!!」
「ふん・・・そうか・・・」
「司令、グロータス准将より通信が入っております」

ヤマトの位置を掴んだミヨーズの下に暗黒星団帝国浮遊要塞艦隊司令官のグロータス准将から通信が入る。
「繋げ」
ガリアデスのメインモニターにはグロータスの姿が投影された。
「ミヨーズよ。ヤマト追撃の任、未だに成らずとは全くもってお前らしくないぞ」
開始早々グロータスはミヨーズにいきなり皮肉を言って来る。
「はっ、しかし、ヤマトとその艦隊は予想を遥かに上回る強敵故。ご容赦いただきたい。グロータス閣下も強敵に対する私の執念をご存知の筈。今しばらくお待ちを」
相手は自分よりも階級が上回る上官の為、ミヨーズは低い姿勢をとる。
「ふふふ・・・お前の事をよく分かっているつもりだよ、ミヨーズ。私としても絶対に敵に回したくない男の一人だからな・・・だが、中間基地も破壊され、聖総統閣下がご杞憂されておらしている。その為、私自らがこうして出る事になったのだ」
「では・・・」
「うむ、貴官の艦隊は我々に合流してもらう。共にヤマトが沈む姿を眺めようではないか。幸運にもヤマトは我が軍の機雷原に突入すると言うミスを犯し位置を我々に教えてくれた。今私の配下の艦隊が機雷原に向かっている所だ」
「お言葉ですが閣下。機雷ごときで封じ込められる敵だとは思えませんが・・・」
ミヨーズは短い間ながらもヤマトと幾度も戦火を交え、グロータスの策が成功する可能性は低いと考えた。
「その時はその時だ。ヤマトがもし、無事に機雷原を突破することなら、貴官の知恵を借りる事になろう」
「かしこまりました」
ミヨーズがそう言うとグロータスは通信をきった。
「司令、どうなされますか?」
グロータスの話を聞き、幕僚の一人が今後の艦隊方針をミヨーズに

訊ねる。
「ふん、何も変わらん。次の待ち伏せポイントまで移動を続けろ。敵は・・・ヤマトは必ずくぐり抜けてくる」
ミョーズは艦隊の方針は変わらない事を告げると同時にヤマトはグロータスの策を破ってくると予想していた。
その頃、ヤマトでは謎の爆発原因の調査でこの爆発原因が機雷である事が判明した。
回収された機雷の残骸から機雷表面の装甲板は、レーダーで映らないステルス性に優れている事が判明した。
しかも大きさは直径二十センチ程で目視できる大きさでもない。
それ故、威力は大したことが無い。しかし、一個で大して威力が無い機雷でも無数あれば、その威力も増す。
そんなものが周辺にばら撒かれているとなると、無暗に動けない。
そこへ、敵艦隊の反応があった。
絶好の攻撃時期に攻撃を仕掛けてこないバカはいない。
予想通りの展開だ。
しかも敵の主力は例の狙撃艦である。
敵の戦法は機雷で動きを封じ、長距離からの狙撃でジワジワと攻撃して来るつもりだ。
しかし、逆に言うと、機雷で此方の足を封じたと言うことは、あまり移動に長けた艦では無いということになる。
機雷は脅威であるが、それを乗り切り上手く虚をついて敵に接近で切れば、勝機はつかめると言う事だ。
ヤマト　と　まほろば　はまず、戦艦よりも機動性に優れるコスモタイガーを発艦させた。
発艦したコスモタイガー隊は、ＥＣＭポッドで敵のレーダー反応を鈍くし、空間照明弾やレーダー衛星を設置し、敵の索敵に全力を注いだ。▪
艦隊は機雷に接触しながらも、敵へと向かって行く。
「死中に活を見出さねばこの包囲網は突破できない」と言う思いだった。

そして、一度突破した機雷原はちゃんとレーダーに登録し、どの宙域が機雷原なのかを記録しながら進んだ。
あわよくば、敵を機雷原に追い込んで足を鈍くする事も可能かもしれないからだ。
そんな中、敵艦の中で一段と速度が違う艦が居た。
同型の狙撃艦だが、新型の機関を搭載しているのだろう。
おそらくこの艦が敵艦隊の旗艦だ。
この艦を沈めれば、敵艦隊の指揮系統を混乱させられるかもしれない。
しかし、ただでさえ、機雷の影響で行き足が鈍っているなか、高速で移動するあの狙撃艦を仕留めるには少々困難であった。
敵を機雷原に追い込みたいが、恐らく敵はどの宙域に機雷をばら撒いたか把握して居る筈だ。

暗黒星団帝国　狙撃艦　旗艦　艦橋
「むぅ・・・命知らずなのか・・・あるいは気でも狂ったのか、機雷に怯まず突っ込んでくるとは・・・仕方ない・・・第一戦速まで加速!!敵艦との距離を取れ!!」
追いかけられてきた狙撃艦旗艦は地球艦隊と距離を取ろうと一段加速を強めた。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「敵旗艦加速!!」
「こっちを引き離すつもりか・・・」
「追いつけないスピードじゃないんだが・・・くそっ、やっぱり機雷が邪魔だ・・・こんな機雷が無ければ、あんな奴らなんて・・・」
敵旗艦の加速は地球艦隊でも探知していた。
通常の宇宙空間ならば、敵に追いつくことは可能なのだが、行く手を機雷が邪魔して戦速を上げる事が出来ない。
その事実に航海科の乗員は悔しそうに顔を歪める。
「くそっ、敵を追えば反対側へ避けられる・・・その繰り返しですよ!!」

「このままでは、機雷のダメージもバカになりませんよ・・・」
やはり小さい機雷でも接雷し続ければ、艦のダメージもバカにはならない。
敵の動きを見て、地球艦隊は敵の旗艦を機雷原ではなく、この宙域に存在するアステロイドへと追い込む作戦に変更した。
ヤマト　まほろば　のコスモタイガー隊は二手に分かれ、一隊はこのまま索敵行動、そしてもう一隊は敵をアステロイドへと追い込む行動へと移った。
その作戦は見事成功し、敵艦は第一戦速のままアステロイドへと突っ込んだ為、前衛の艦艇がアステロイドに突っ込み爆沈、大破する艦がいた。
「くそっ、アステロイド帯か・・・やむを得ん減速!!」
狙撃艦隊はアステロイドと衝突を回避する為、速度を落した。
それが、自分たちの首を絞め、地球艦隊側にとっては敵との距離を詰める大きな転機となった。
「主砲、最大射程にて、敵艦隊を捕捉!!」
「主砲撃て!!」
ヤマト　まほろば　春藍　ハルバード　ファルシオンの主砲が火を吹き、敵艦を次々と沈めていく。
「誘い込まれたのは我々だと言うのか・・・」
ここに来て狙撃艦旗艦の艦長は自分が地球艦隊を機雷原に追い込む作戦が逆に自分たちがアステロイド帯へ追い込まれた事に気がつくが、気づくのが遅かった。
僚艦は次々と沈められて行き、遂に自艦にも地球艦隊のショックカノンが迫って来た。
「直撃弾、本艦にも接近!!」
「か、回避しろ!!」
「ダメです間に合いません!!」
「そんな・・・馬鹿な・・・」
グロータス麾下の狙撃艦隊はここで壊滅し、残存艦は撤退し地球艦隊はミョーズの予見通り機雷原を突破する事に成功した。

「これで全部か？」
「はい、周囲に敵の反応はありません」
「何とかなったようですね」
「兎も角こんな宙域はさっさと脱出しましょう」
「同感だ。神経が擦り減っちまいますし、艦の損傷が増えるだけですからね」
「全くだ」
　地球艦隊は機雷原を突破した後、損傷具合を調査、修理しながら再び暗黒星団帝国本星へ向け、この暗黒銀河を進んで行った。

　ガリアデス　艦橋
「グロータス閣下の艦隊より連絡、どうやら地球艦隊は機雷原を突破したもようです」
　地球艦隊機雷原突破の情報はミョーズの下にも届いた。
「ふん、当然の事。それぐらいでなければ、このミョーズの獲物は務まらんわ」
　機雷原の作戦前から突破される事を予見していたミョーズは落ち着いていた。
「それから。准将閣下より何かのデータが届いておりますが、司令宛てに封印付きです」
　オペレーターはグロータスからミョーズ宛に添付データが来た事も報告する。
「よし、こっちに転送しろ」
　オペレーターは添付データをミョーズの端末に転送し、ミョーズは早速その添付データの中身を見る。
「・・・・」
　添付データの中身を見たミョーズは、
「目的地を変更する。暗黒星雲中心点へ針路を変えろ」
　と、当初の予定針路を変更する命令を下した。
「は？・・・・はい」
　操舵手は言われた通りの針路をセットし、舵をきった。

「グロータス准将は私を敵に回したくないと言っておられていたが、全くそれはこっちのセリフだ。あの方を敵には絶対にまわしたくないな・・・まさか、こんな罠を考え出されるとは・・・」
添付データの中身を見たミョーズはグロータスの手腕を褒めると同時に恐怖する。
「は？といいますと？」
ミョーズの独り言に反応した幕僚がその真意を訊ねる。
「向こうに行けば分かる」
ミョーズの言葉の意味を幕僚も・・・そして、地球艦隊の乗員たちもいずれ知る事となった。

一方、その頃、暗黒星団帝国に占領されている地球では・・・
メガロポリス東京
「・・・」
デザリアム帝国軍が占領軍政本部として接収した地球防衛司令部の一室で、占領軍総司令のカザンは渋面を隠さずにいた。
自らの片腕として信頼していたミョーズが艦隊を率いて地球軍とヤマトを追撃したにも関わらず、敵艦隊に追いつけないまま中間補給基地を急襲され、壊滅してしまった。
ミョーズはそのまま追撃を続けているのだが、その分太陽系内の戦力は少なくなってしまい、本国からの増援もすぐには望めない。
いや、このままではヤマトを中心とする地球艦隊による本土攻撃が行われる可能性すら生じてきたのだ。とても増援どころではあるまい。
また、地球各都市の敵軍残兵たちは地下都市等に潜み、時折散発的な奇襲をかけてきている。
特に重核子爆弾付近では戦闘が頻発しており、兵士たちは気が休まらない。
サイボーグの体でも頭部は生身であり、精神的にしんどくなっている。
市民たちは、表向きは敵対行動こそとっていないが、裏で敵軍と繋

がっている可能性は否定できない。
しかし、本国からの命令で、今のところ市民に対しては原則として殺傷設定での鎮圧を禁じられているため、せいぜい身柄の拘束まで。
特に脳移植のためのドナー・・・健康な青少年層の肉体を傷つけるのは甚だ宜しくないとの判断だ。
但し、壮老年者に対してはこの限りではなく、市民層であっても敵対行動をとる者は射殺可と、内々の通達もきている。
(ただでさえ厄介な事態なのに加えて・・・)
渋面のカザンの耳元でプゥ~ンと耳障りな羽音が聴こえてくる。
(これか・・・)
パンっと言う音と共にカザンは何かを叩いた。
彼の手からは一匹の薮蚊の死骸がポロッと床に落ちていく。
カザンの新たな悩みの種は、東京を始めとする現地部隊からの、現地に棲息する有害生物の被害だ。
熱帯地方に駐留している部隊では、風土病であるマラリアや黄熱病に感染・発症する兵士が続出していた。
地球人たちはそれらの治療薬をあらかた持ち去ってしまった上に、ようやく確保した薬はデザリアム人に適合せず、副作用を起こして発狂したり死亡する将兵が出ていた。
それ以外の地域でも、地下都市等に棲息していたらしいネズミや蚊、蠅、ゴキブリ等が出没し、咬まれる、電線やケーブルを切断される、食料を食い荒らされる、羽音が耳障りで休めない等の訴えが寄せられていた。
地球人の捕虜から事情を聞いた者によると、
その捕虜は、
『とうに絶滅させるのは諦めて、適度に駆除しながら共存している』
と、述べたらしい。
さらに恐ろしい事態は、インフルエンザというこの星特有の伝染病だ。
南半球では既に終息しつつあるが、人口の大半が住まう北半球ではあと数ヶ月で流行が始まる。

地球人にはワクチンという予防薬や治療薬もあるが、それがデザリアム人に合うかはわからないし、これらもまたどさくさに紛れて地球人が持ち去ってしまっていた。
「くそっ、こうも厄介な星だったとは・・・だから辺境の田舎惑星は好かんのだ」
ガミラス、ガトランティスを退け、そしてイスカンダルにて我が軍で名将と謳われたメルダースとデーダーを討ち取った実力は本物だった。
我々は、とんでもない星に手を出してしまったのではないだろうか？
しばし、カザンは暗然たる思いに沈んだ。

中嶋家
デザリアム軍を見舞った一連の〝虫騒動〟の張本人たる紅葉は、魔力切れのため活動休止状態になっていた。
とはいえ、リンカーコアの有無等、時空管理局の魔導師の大半とは魔力の精製や貯蔵機能が根本的に異なっているため、魔力切れ状態でも日常生活や運動には支障をきたさない。
ただ、こちらの地球は魔力素が少ないため再チャージに時間がかかる上、愛機ルシフェリオンは長距離空間転移で世界中各地に出張してはその地の生活害虫や害獣を集めてデザリアム軍基地等に誘導するような事をしているため、魔力消費が激しいのだ。
それでも一晩経てば再チャージできるのは育ち盛り故なのだろう。
淹れたばかりのキャラメルミルクを口にしながら、紅葉はルシフェリオンの話を聞いていたが、その表情は冴えない。
昨夜出向いたフランスのパリでは市民の暴動に対してデザリアム軍が発砲し、二十名以上の市民が射殺されたというのだ。
「やはりフランスだからなのかな・・・」
その歴史上、自由は戦って勝ち取れというフランス人ならではと言えなくもないのだが、やはり気が重くなる。
同様の市民暴動は欧米を中心に拡大を見せており、わかっているだ

けでも２００名以上の犠牲者が出ている。
日本では、武力闘争を行っているのは地下に潜伏した藤堂以下の地球防衛軍兵士を始めとするパルチザンメンバーだが、市民たちもまた、〝非暴力不服従〟で占領軍に相対していた。
それは紅葉とルシフェリオンもそうだった。
「ふむ、これはこれで、案外乙なものだな」
悦に入った風に話すのは紅葉の愛機であるルシフェリオン。
今日の彼は普段の紅茶＋ウィスキー風呂ではなく、甘酒の入ったカップの中に入っている。
白濁した甘酒の中で紫色の光が点滅している。
「はぁ～・・・・」
紅葉は首を横に振る。
護り石の奇行は、前の主だった母の生前からだが、最近とみにエスカレートしており、これには嘆息せずにはいられなかった。
（リニスさんのバルニフィカスはもう手遅れかもしれないけど、バルディッシュとクロスミラージュ、クリスが真似してなきゃいいけど・・・・）
だが、不幸にも紅葉の懸念は後に的中する事となる。

地球防衛軍　ヤマト改修ドック　パルチザン司令本部
「・・・・」
急遽誂えられた司令部の大テーブルを前に、藤堂は腕組みをして端然と座していた。
司令部には、日本や各州でレジスタンス活動を行っている軍人たちからの戦況が入ってきていた。
少し離れた場所では、源三郎が部下から物資の備蓄状況の報告を受けている。
そこへ、
「長官、ヤマトから報告が入りました！」
通信文を手にした通信士官が小走りに入って来た。
「読んでくれ」

「はっ、我が艦隊は、敵中間補給基地並びに輸送船団を発見・攻撃し、撃滅に成功」
おおっ、とどよめきの声が上がり、ガッツポーズをする者もいたが、デザリアム軍の監視を警戒して、歓声を上げる者はいなかった。
藤堂は大きく頷くと立ち上がる。
「諸君、これで敵の危機感は一層強くなり、監視も厳しくなるだろうが、一致協力して重核子爆弾を無力化し、敵を追い出すまで力を尽くそう！」
戦士たちは敬礼で応えた。

それから数日後・・・
時刻は午後二十三時の真夜中。
パルチザン本部の非常回線端末に一通のメールが受信される。
「非常回線端末に入電!!例の『白い花』からです!!」
「よし、さっそくデータを解凍してくれ。パスワードは・・・」
「『エイユウノオカ』でしょう?もう何度もやっているので、分かっていますよ」
そう言ってオペレーターは受信したメールの解凍作業にかかる。
「しかし、毎度ながら助かるな・・・実に貴重な情報ばかりを提供してくれる・・・」
「うむ、この情報のおかげで、どれだけの同胞の命が救われた事か・・・」
古野間と西郷はこの謎の情報者、『白い花』に感謝の言葉を述べる。
「解凍完了、そちらに転送します」
そうしている間にメールの解消作業が終わり、藤堂のノートパソコンにメールの内容が転送される。
パルチザン幹部はその送られて来たメールの内容を見て息を飲む。
「ちょ、長官・・・これは・・・」
「うむ、敵はどうやら、捕虜として収容されている重要人物を軌道上の艦隊へ移送しようとしている様だな・・・その中には連邦政府大統領閣下も含まれているか・・・」

「どうします?軌道上に移されたら、俺たちじゃ手も足も出ませんぜ」
敵がどういう理由で艦隊へ地球連邦政府要人の捕虜を移すのだろうか?
パルチザンによる奪還を恐れているのか?
確かに古野間の言う通り、宇宙艦船を持たないパルチザンにとって軌道上まで移されては奪還等不可能だ。
パルチザンの手の届かない安全な軌道上へと移し、そこでパルチザンに対し、降伏勧告でもすると言うのだろうか?
しかし、移送理由はメールの末文にちゃんと記されていた。
「まて、移送の理由は、建造物の老朽化によって警備が完全に行えない為と書いてある。何とか今の内に手を打てば救出できるかもしれんな・・・」
「そう決まりゃ善は急げだ。長官、早速準備を行います」
「だが、敵も移送前は警戒しているだろう・・・危険な任務だぞ」
地球政府の要人を移送するというのだから、敵もパルチザンが奪還をするモノだと思い、警備を厳重にしていると予想される。
しかも、相手は要人を人質にする可能性もある。
この奪還任務はかなりの危険を伴う。
「はは、危険な場所に行くのが空間騎兵隊の仕事ですよ。それに建物内には多くは連れてきけません。少数で上手く侵入してみます」
「そうか・・・では、頼むぞ」
「了解。北野、空間騎兵隊の残りに招集命令を!!あと、使えそうな奴を十名程集めてくれ」
「わかりました」
こうして、政府要人奪還作戦が発動された。
その作戦発動前、
「北野君」
藤堂が北野を呼び止める。
「はい、何でしょう?
「匿名情報提供者、例の『白い花』だが・・・君は直に会ったのだったね?」

と、『白い花』の正体について訊ねる。
「はい・・・・」
「もしかして、我々が知っている人物なのではないかね？それにデータのパスワードが『エイユウノオカ』・・・・もしかして、この『白い花』という人物は・・・・」
藤堂にはこの『白い花』の正体が誰なのか察しがついた様だ。
「すみません、長官・・・名前は誰にも教えられない約束をしているんです・・・・我々も決死の覚悟で戦っています・・・・でも、彼女も同じように・・・・いや、それ以上に必死に戦ってくれているんです・・・・約束を破る訳にはいきません」
「そうか・・・・」
「では、失礼します」
北野は『白い花』との約束を忠実に守ったのだが、根が正直過ぎたのか、うっかり会話の中で『彼女』と言う単語を使用してしまった。
これにより、『白い花』が女性である事を教えてしまい、藤堂に『白い花』の正体に確信を持たせた。
（北野君は『彼女』と言った・・・・そうか・・・・生きて・・・・生きていてくれたんだな・・・・）
しかし、藤堂も北野、そして『白い花』の意を汲んでそれ以上、『白い花』の正体を訊ねようとはしなかった。
深夜の闇に紛れて古野間率いる救出部隊は捕虜収容施設の近くまで迫り、最後のミーティングを行い、作戦を決行した。
施設には古野間、北野、ティアナの三人が潜入し、残りの大半が外で陽動攻撃を行った。
「すまんな、嬢ちゃん。初陣がこんな危険な任務になっちまって・・・・」
「い、いえ、大丈夫です」
大丈夫と言うがティアナの声は少し震えていた。
古野間、北野と同じ班と言う事で今回、ティアナはこの任務に参加する事になった。
勿論、強制ではなく、作戦参加の志願に当たって、ティアナは自ら作戦に志願したのだ。

それでも、緊張・不安はある。
この日までティアナは古野間や北野を相手に訓練もして来た。
ヤマトで手渡された訓練用のコスモガンではなく、人を殺せる正規のコスモガンを手にした時も思わず身震いをした。
でも、これまでの訓練はこういう時の為なのだと自分に言い聞かせた。
それにもし、自分がここで死ぬようならば所詮、自分の実力はその程度だったと言う訳だ。
今回、室内への潜入と言う事で、古野間たちは例の戦闘スーツは着ていない。
あの戦闘スーツは確かに強力なのだが、弱点もある。
その一つは空を飛べない事、
もう一つはその大きさゆえ、狭い場所には適さない。
室内における殲滅戦ならば、実戦投入は可能であるが、室内における潜入には不向きだった。
その為、屋外にて陽動をする部隊へ優先的に戦闘スーツは貸し出された。
そして、政府要人が居るとされる収容施設に入った古野間たちは妙な違和感を覚えた。
施設内の警備が余りにも手薄なのだ。
既に要人は移送されてしまったのだろうか？
しかし、メールを受信してこの短時間に大勢いる政府要人を軌道上の艦隊に移すのは不可能だ。
施設に来る前に先発した偵察隊も施設からは何の動きが無いと報告も受けていた。
だが、独房区画に入った古野間たちの目には誰も居ない・・・無人の独房があった。
「そんなっ!?」
「誰も居ない・・・」
「馬鹿なっ!?」
（しまった!!コイツは罠だ!!）

古野間は直ぐに陽動部隊に撤退を促す。
そこへ、
「無駄な抵抗は止めたまえ」
多数の兵士を連れたアルフォンが現れた。
「敵っ!?」
「優秀な君たちの事だ・・・戦力差が歴然なのはわかるだろう・・・投降したまえ・・・君たちにはパルチザン本部の事を教えてもらわねばならない。ここで殺したくはない」
「そいつはどうも・・・お優しい事で!!」
アルフォンは古野間たちに投降を促すが、
古野間は、アルフォンたちの下にスタングレネードを投げる。
すると眩い閃光が辺りを覆う。
「うわぁぁー!!」
「くそっ!!」
「逃がすかぁ!!」
突然の閃光と爆音でパニックを起こした兵や古野間たちを逃がさんとする兵がライフルを乱射。
「止めろ!!撃つな!!」
アルフォンが発砲を禁じ、閃光が晴れると、床には同士討ちで斃れた兵の姿があった。
「くっ、同士討ちなどしおって・・・」
アルフォンは同士討ちをした兵たちの姿を見て顔を歪める。
「少尉!!侵入者は、ダストシュートから地下へと逃げた模様です!!」
開かれたダストシュートを指さしながら侵入者たちの行方を報告する兵士。
「地下か・・・確か下水道に繋がっているが出入り口は既に固めている・・・となると、出口は一つしかないか・・・」
「では、直ちに出口を封鎖、敵を追い詰めます!!」
「よし、行け。発砲も許可する。ただし、絶対に殺すな。何としてでも生け捕りにしろ!!」
「はっ!!」

兵士たちは急ぎ地下の出口へと向かった。
一方、ダストシュートから難を逃れた古野間たちは、何とか怪我は無かったが、古野間は『白い花』は敵の内通者か敵そのものだと思ったが、北野がそれを否定した。
ダイレクトに『白い花』の正体を教えたわけでは無いが、北野の断片的な『白い花』の人柄で古野間も『白い花』の正体が誰なのか察しがついた。
『白い花』の疑いが晴れてホッとした北野。
そして、古野間たちは敵が待ち構えている出口を目指した。
敵は古野間たちを殺す事無く捕える様に命じられていた為、猛撃をする事が出来ず、一方、古野間たちは少数ながらも、遠慮無く敵兵を斃しながら出口を目指した。
この日、ティアナは異星人とは言え、初めて人を殺した。
銃で殺したので、その手には人を殺めたという感覚が感じられなかったが、目の前で自分が殺した敵兵を見て、コスモガンを持つ彼女の手は小さく震えていた。
「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・」
「大丈夫ですか?」
「だ、大丈夫です」
「まぁ、初めての実戦を経験したんだ・・無理もない。だが、来たからにはそれ相応の覚悟を持て」
「は、はい」
やや過呼吸になりかけているティアナに北野は声をかけ、古野間はこの場に来たのだから腹を括れと言う。
そしてティアナは二人の荷物にはならないように大丈夫と答える。
(納得した筈よ、ティアナ・・・パルチザンに参加する時から人を殺すって・・・今更、後悔なんてする暇なんて無いわよ・・・)
ティアナは自分に言い聞かせ、自分を奮い立たせた。
そして、漸く出口へと続くエレベーターホールまで来たのだが、古野間たちがここを目指している事を知っている敵兵たちはホールを厳重に警備していた。

「出口へと出るにはあのエレベーターに乗らなければなりません」
「くそっ、ガッチリ固めてやがるな・・・」
「このまま出て行けば、それこそ蜂の巣ですね」
何か手は無いかと周囲を見渡す古野間たち。
そんな中、北野の目に天井部に設置されたスプリンクラーが目に入る。
「スプリンクラー・・・・」
「ん？スプリンクラーがどうした？」
「イスカンダルからの波動技術到来以降、防衛軍や警察の武器は全て衝撃銃・・・つまり、拳銃サイズであるけど、艦船の砲門と同じ原理のショックカノンです。対して、敵が使用しているのは高出力のレーザー銃・・・・」
「何がいいたいんだ？」
「敵は決定的なミスを犯しているんですよ。レーザー銃にはショックカノンにはない決定的な欠点があるんです!!ほら、訓練学校の最初に習ったでしょう」
「そんな昔の事・・・いや・・・・まてよ・・・・」
「どんな違いがあるんですか？」
古野間は訓練学校入りたての頃の記憶をさかのぼらせてレーザー銃とショックカノンの違いを思いだそうとして、思いだした。
一方、ティアナはこの世界の訓練校なんて言ってないので、その違いが分からない。
「・・・そうか、思い出しだぞ。いいか、嬢ちゃん。レーザー銃の場合、雨や霧等の天候によって威力が大きく減衰する場合がある」
「なるほど、それでスプリンクラーなんですね」
北野や古野間の言う通り、レーザー銃には天候によって威力が大幅に弱くなるという理由から、防衛軍、警察のコスモガンはイスカンダルの技術到来以降、全てレーザー銃からショックカノンへと変更されていた。
しかし、敵の兵士の銃はイスカンダルの技術到来前の防衛軍、警察が使用していたレーザー銃・・・・。

よって、スプリンクラーを作動させてその水を雨代わりにすれば、敵のレーザー銃の威力を落す事が出来るかもしれない。
しかし、問題が一つあった。
「だが、どうやってスプリンクラーを作動させるんだ？この区画の動力は殆ど切られている」
「発煙筒もありませんし・・・・」
「確かこの施設のコントロール室は地下に有った筈・・・そこから集中管理システムが有った筈です。それに管理室なら、非常電源があり、動くはずです」
「なるほど」
「では、急ぎましょう。敵が包囲網を作る前に」
「はい」
「ああ」
三人は来た道を戻り、地下（この階）にある管理室へと向かった。
管理室に到着すると、北野がコンソールを操作する。
予想通り、管理室は非常電源が働いており、システムは生きていた。
「どうだ？分かるか？」
「ちょっと、待って下さい・・・あった・・・これだ!!」
北野はスプリンクラーの作動システムを見つけ、それを作動させる。
すると、スプリンクラーが作動し、天井から水が降り注ぐ。
「冷たっ!!」
「うぉ冷てぇ!!おい、何もこの部屋までやるこたねぇだろう？」
突然、水を被った古野間は北野に作動させる部屋はあのエレベーターホールだけで良かったのではと言う。
「どうせ濡れるんです。我慢してください」
北野は遅かれ早かれ濡れるのだから気にするなと言う。
そして、三人は降り注ぐスプリンクラーの水を浴びながら、エレベーターホールを目指した。
一方、三人が向かっているエレベーターホールでは、突然作動したスプリンクラーにホールを警備していた兵たちは慌てた。

「うわぁっ!?」
「どうしてスプリンクラーが!?」
「システムの故障か!?」
　動揺している兵たちに対し、
「うろたえるな!!これは敵の策略かもしれんぞ!!敵襲に備え!!全方位を警戒せよ!!」
『は、はい!!』
　上等兵の一喝で、兵たちは冷静さを取り戻し、全方位に警戒を強めた。
　そして、この上等兵の言う通り、自分たちの敵・古野間たちは直ぐそこまで来ていた。
「準備はいいか?」
「は、はい」
「いつでもいいですよ」
「じゃあ、派手にぶっ放すぜ!!」
　そう言って古野間はまず、挨拶がわりと言わんばかりに、ハンドガンタイプのグレネードランチャーを警備兵に向けて放った。
　北野とティアナも手榴弾を敵に向かって投擲する。
「ぐあぁぁぁぁ!!」
「ぎゃぁぁぁぁ!!」
「て、敵襲!!」
「くそっ!!撃て!!応戦だ!!ただし殺すな!!何としてでも生け捕りにしろ!!」
　敵兵たちは手持ちのレーザー銃で応戦するが、
「兵長殿!!変です!!銃の威力が弱まっています!!」
「そんなバカな!!朝の装具点検では、異常は無かった筈だぞ!!」
「ですが、現に銃の威力が弱くなっています!!」
　古野間たち三人を生け捕りにしなければならず、銃の威力を最小限に設定していた上、スプリンクラーが雨代わりとなって敵兵の銃の威力は更に落ちていた。
　一方、古野間たちの銃は天候に左右されないショックカノンで更に

実弾武器である手榴弾とグレネードランチャーが人数の戦力差をカバーしていた。
次第に押され始める敵兵たち。
そこに、
「暗黒星団帝国、地球占領軍少尉アルフォン、参る!!」
アルフォンが兵を引き攣れて援軍として登場した。
古野間は敵との混戦の最中、援軍としてこのホールに現れた将校らしき敵兵が自分を狙っているのを察知し、咄嗟に体をずらした。
その直後、彼の右肩に痛みが走った。
「くっ・・・・」
(っ!?あの将校が使っている銃は、こいつらとは違うのか!?)
援軍の将校が持っている銃の威力は今戦っている兵のレーザー銃と明らかに威力が違っていた。
(こいつは少し厄介だ。早い所、片付けた方が良いな)
と、兵よりもこの将校が厄介だと判断し、早期にこの将校を始末する事にした。
古野間とアルフォンの銃撃戦は、古野間に軍配が上がった。
将校とは言え、アルフォンは情報技術将校で、対する古野間は戦闘のプロである空間騎兵隊員・・・・
対人戦ではアルフォンに分が悪かった。
それにティアナと北野からの援護もあった。
「アルフォン少尉!!危険です、ご退出を!!」
「すまん」
アルフォンは、護衛の兵たちと共にエレベーターホールから撤退した。
アルフォンがエレベーターホールから撤退してからすぐ後、ホールを警備していた兵たちは全滅した。
「終わった・・・・あれだけの人数を・・・・たった三人で・・・・信じられませんよ」
「ハァ・・・・ハァ・・・・ハァ・・・・ほ、ほんとうに・・・・生きた心地がしませんでした・・・・」

「いや、お前さんのアイディアのおかげだぜ。向こうが失ったのは三十人・・・・連中にとっては微々たるものかもしれないが、勝利は勝利だ・・・・生き残ったモンの勝ちだ・・・・嬢ちゃんも初陣ながら、よくやった」
「あ、ありがとうございます」
古野間はエレベーターホールの床に斃れている敵兵たちの死体を見渡しながら呟く。
とは言え、今回の作戦では空間騎兵隊員の生き残り・陸戦のプロ、パルチザンにおける精鋭を多く連れて来た。
例の戦闘スーツを大量投入したとはいえ、罠であった為、味方にも少なからずの被害が及んだ。
しかし、例の戦闘スーツがなければ被害はもっと甚大なモノに及んでいただろう。
そんな中、古野間は床に落ちている一丁のコスモガンを見つけた。
「これは、あの将校が落としていった銃・・・・」
古野間はあの戦闘で一人だけ他の兵士とは異なる銃を使っていたあの将校の銃を見つけたのだ。
彼はその銃を拾い上げると、
「・・・・こりゃあ、防衛軍の銃じゃねぇか」
あの将校・・アルフォンが使用していたのは自分たち防衛軍軍人が使用しているコスモガン、「南部９７式防衛軍正式拳銃」であった。
何故あの将校は自軍の銃では無く、敵である筈の防衛軍の銃を持っていたのか？
捕虜から鹵獲したのか？
それとも戦場跡で拾ったのか？
古野間が銃を調べてみると、
「っ!?」
グリップの部分を見た時、彼の目が大きく見開かれた。
その銃のグリップの部分には自分の名前が彫られていた。
この銃は紛れも無く、あの日・・・・暗黒星団帝国が地球に対し、上陸奇襲攻撃して来た日、防衛軍司令部の地下で自分が第四有人機基地へ

向かう雪に手渡した銃であった。
「どうしたんですか？」
古野間の様子が変な事に気がついたティアナが彼に声をかける。
「いや・・・何でも無い・・・・」
口では何でも無いと言ったが、古野間の心の中では、今回の作戦の敗因が判明した。
（そうか・・・あいつが・・・・あいつがこの茶番劇の黒幕か・・・・あの娘を利用したってわけだ・・・・アルフォン・・・・この名前、忘れねぇぜ!!）
古野間の心の中で傷ついた戦友の仇、そして、雪を利用した張本人であるアルフォンの名前が深く刻み込まれた。
その後、三人は敵の増援が来る前にエレベーターにて、施設を無事に脱出した。
今回の被害報告を受けた藤堂と西郷は悲痛な面持ちであったが、『白い花』もそして生還した古野間たちを攻める事も無かった。
そして、古野間は『白い花』の正体を藤堂たちに報告する事は無く、その時が来るまで黙っていた。

百話　狩人ミヨーズの最後

グロータスが仕掛けた機雷原を突破した地球艦隊は、暗黒銀河を今の所、敵の襲撃も無く、航行している。
「第四変更点を突破。暗黒星雲中央への針路変更を完了しました」
「微粒子密度＋２００．まだレーダー捜索可能な範囲です。危険度は高いですが、十分ワープが可能な状態かと思われます」
そして、今回の艦隊旗艦たるヤマトからワープの指示が来た。
「機関長、ワープ準備だ」
良馬は機関長の井上にワープ準備をさせた。
「了解。波動エンジン内、圧力上昇。ワープ可能領域へ移行」
「ワープ」
「ワープ」
各艦のワープ準備が整うと、地球艦隊はワープした。
すると、ワープ中に異常な振動が艦全体を襲った。
「ど、どうした？」
「イレギュラーです!!何か、巨大な障害物が航路の右舷前方に存在しています!!」
「なにっ!?」
「その障害物の影響でワープ航路が歪曲しています!!これ以上のワープは危険です!!強制ワープアウトします!!」
「分かった!!総員に告ぐ、これより本艦は強制ワープアウトを行う!!全員、衝撃に備えろ!!」
良馬が乗員に注意を喚起し、まほろば　は強制ワープアウトを行った。
「通常空間を確認：強制ワープアウト、成功」
「味方艦も無事にワープアウトが出来た様です」
まほろば　の周囲にはヤマト、春藍、雪風・改、ハルバード、ファルシオンのワープアウト反応があった。
「でも、おかしいですよ・・・計器では障害物も何も映っていなかった

んですけど・・・」
永倉は航海計器を見ながら、障害物の見落としがないかチェックする。
「レーダーにも反応がありませんし、故障もしていません」
新見もレーダーには異常が無いと報告する。
「反応が無い・・・どういう事だ・・・？」
「わ、分かりません。イレギュラーが出たのは、確かなんですが・・・ん？・・・か、艦長あれを見て下さい!!」
永倉がふと窓の外にある何かを見つけ、良馬に報告する。
「な、何だ？アレは・・・!?」
「真っ黒だ・・・まるで何もない空間みたいで不気味だ・・・」
フェリシアも眼前に広がる真っ黒で不気味な空間に対し、震えながら言う。
「もしかして、暗黒星雲の出口まで来てしまったのでしょうか？」
ギンガが現在位置の予測を立てる。
しかし、
「いや、それならいつもと同じように星が見えている筈じゃ。しかし、あれは一体・・・高密度の暗黒ガスが充満して居るならレーダーに映るはずじゃし・・・」
井上がギンガの予測を否定するも、あの眼前に広がる暗黒空間の正体を掴み兼ねている。
一方のヤマトでもあの不気味な暗黒空間の正体が何なのか、議論が交わされており、真田があの暗黒空間の正体を見破った。
それによるとあの不気味な暗黒空間は超巨大なブラックホールだと言う。
２０世紀の頃から、銀河の中心には、太陽の何百万、何千万と言う質量を持つ超巨大ブラックホールは存在すると言われてきた。
太陽系が存在する銀河系からでもそれは確認されている。
『射手座Ａウエスト』と呼ばれる天体がそのブラックホールであった。
ブラックホールの存在に関しては、迂闊であった。

主構成が暗黒星雲とは言え、この星雲のサイズは銀河系とほぼ同じ大きさ・・・
その為、この暗黒銀河の中心部にも同じ様な超巨大なブラックホールがあったとしても何らおかしくはなかった。
しかし、ここで一つ疑問があった。
もし、ブラックホールならば、その巨大な質量によって引き起こされる潮汐力が重力場感知装置に反応した筈であった。
だが、地球艦隊の艦で重力場感知装置に反応を捉えた艦はいない。
これにはちゃんと理由があった。
潮汐力と言うのは、距離の三乗に反比例する形で強さが変化する。
例えば、太陽質量ほどのブラックホールが持つ潮汐力は、１０億Ｇ以上もの強烈なものなのだが、直径が数光年を超える超巨大なブラックホールの場合、潮汐力は感じる事はおろか、景気でも計れない程度まで小さくなる。
それ故、この不気味な暗黒空間は、何も無い訳でなく、光すら脱出出来ないブラックホールの境界面・・・『シュバルツシルトの壁』であった。
だとすると、かなり厄介な存在であった。
潮汐力を感じないとは言え、ブラックホールである事に変わりない。
万が一、シュバルツシルト境界の内側に入り込んだから、脱出は絶対に不可能となる。
地球艦隊の面々がシュバルツシルトの壁を唖然とした表情で見ている頃、地球艦隊の針路前方の宙域では、ミヨーズ率いる艦隊が先回りをし、待ち受けていた。

ガリアデス　艦橋
「ふん・・・来たか・・・」
パネルに映る地球艦隊・ヤマトの姿を見てミヨーズはどこか嬉しそうであった。
「ミヨーズ司令、グロータス閣下より通信です」

そこにグロータスから通信が入る。
「繋げ」
通信回路を開くと、パネルの表示が地球艦隊からグロータスへと変わる。
「準備は整っているかね？ミヨーズ君」
「はっ、滞りなく・・・それにしても准将閣下には全く感服いたしますな・このような作戦を思いつかれるとは・・・」
ミヨーズは今回の作戦の立案をしたグロータスを褒め称える。
「なぁに、簡単な事だ。機雷原を突破したルートから、彼奴等が星雲中心付近を通過しようとしているのは分かっている・・・そして、この宙域を通る限り、巨大ブラックホールの影響を受けてワープアウトをするのは必然・・・あとは貴君の艦隊が自慢の空間歪曲干渉装置で連中を暗黒の中に追い込めばよい・・・」
「はっ、承知いたしております」
「では、聖総統閣下共々、勝利の報告を待っているぞ」
誘い役は自分（グロータス）で仕留め役はミヨーズ。
その役割を伝え、グロータスは通信をきった。
「ふん、全く感服するよ」
通信をきった後、ミヨーズは呆れる様に呟く。
「上手く、ヤマトを封じ込めればよいが、我々の艦隊までもがブラックホールに引きずり込まれる危険性もある・・・その点を語らんとはな・・・」
ブラックホールの周辺で作戦行動を行う以上、ミヨーズの艦隊もブラックホールに引きずり込まれる危険性は当然ある。
しかし、グロータスは敢えてその危険性を伝えていない。
だが、ミヨーズとて一流の軍人・ちゃんとブラックホール周辺の艦隊行動についてはその危険性も理解している。
「ここが・・・正念場か・・・」
ミヨーズは自分に言い聞かせるように呟く。
ヤマト追撃の為、展開していた艦隊も初戦で前衛艦隊を壊滅させられ、増援の為地球占領軍の艦艇を地球圏からかなり引き連れて来た

が、その艦船も度重なる戦闘で、次々と失われて行った。
連絡をしなかったとは言え、中間補給基地までも失った。
中間基地を破壊された為、地球に駐屯している占領軍には援軍も真面に送れない状況となっている。
しかも現在、占領軍は地球にて、パルチザの戦闘の他にもその土地の独特の風土病に害虫・害獣に悩まされている。
更に詳しい情報が無いながらも地球においてパルチザンに味方する謎の生物の存在の情報も入っている。
地球を占領していながらも占領軍は実際の所、彼らは厳しい状況下に居た。
ハイペロン爆弾で地球人類を一掃してしまいたい所だが、それでは自分たちの国家元首である聖総統への反逆行為になってしまう。
その為、地球の占領軍は厳しい状況の中、戦闘と占領維持を続けなければならなかった。
そして、それはミョーズも同じで、地球艦隊をこれ以上本星に近づけさせない為、ミョーズとしてもこれ以上の失敗は正直に言って許されない状況だった。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「今、一瞬ですがレーダーに反応がありました」
「やはり来たか・・・敵は恐らく我々をブラックホールへ放り込むつもりだ」
「艦長、敵のエネルギーパターンは、先日空間歪曲干渉装置で罠を張った艦隊と一致します!!」
「新たな罠で雪辱戦と来たか・・・でも、ブラックホールを罠に使うなんて・・・下手をしたら、自分たちもブラックホールに引きずり込まれる危険性もあると言うのに・・・」
「それほど、敵も必死と言う事なのでしょうか?」
「だろうな・・・総員、戦闘配置!!」
艦内に警戒音が鳴り、乗員は駆け足で戦闘配置についていく。

「航海長、操艦にはくれぐれも注意してくれ!!ブラックホールに追い込まれたら、一巻の終わりだぞ!!」
「任せて下さい!!」
ミョーズ艦隊の位置から敵は地球艦隊をブラックホールへと追い落とす作戦の様だ。
「暗黒ガスの影響で近距離レーダーに支障が出てきます」
「コスモタイガー隊はレーダー衛星を射出しつつ哨戒と敵艦隊への攻撃をしてくれ」
「了解」
地球艦隊が敵を求めていると、
「ん?航海長!!航路がブラックホール方向に向かっているぞ!!」
ヤマト、まほろば、春藍の有人艦の針路が何故かブラックホールの方向へと向いていた。
有人艦からの無線誘導で航行しているハルバード、ファルシオン、雪風・改も当然、同じ航路を辿っている。
良馬は急いで、永倉に原因を訊ねる。
「わ、わかりません。まっすぐに艦を操艦しているはずなんですが・・・・」
「センサーが空間歪曲干渉波を感知しています。もしかしたら、敵が航路に干渉しているのかもしれません」
新見が、航路が滅茶苦茶になっている原因を示唆する。
「そんな事って可能なんですか!?」
ギンガが新見に干渉波で艦の航路を滅茶苦茶にすることが可能なのかを問う。
「考えられなくはないわ・・・・周囲の空間を強力に歪曲すれば、艦のコンピューターを錯乱させることも出来るかもしれない・・・・」
「くっ・・・・」
「ですが、コントロールはなんとか取り戻せそうです。威力を上げた分、長時間の使用は出来ないみたいです」
ガトランティスの火炎直撃砲同様、やはり、人の手で作り出した物ゆえ、どんなに優れた兵器にも弱点はあった。

「艦長、この危機を脱するにはそこを突くしかありません」
「分かった。通信長」
「はい」
「ヤマト、春藍にも伝達してくれ」
「了解」
　ギンガがヤマトの守、春藍の山南に通信を入れると、ヤマトから通信が入る。
「月村、航路についてはこちらも確認した。敵の干渉波がいつまた再開されるか分からないいじょう、航路のチェックは入念に行え」
「はい。航海長、シュバルツシルトの境界面を越えたら、それで終わりだ。なんとしてでも敵艦隊へ接近し、干渉装置を破壊するんだ」
「こちら、コスモタイガー隊・・・・こちらは干渉波の影響は少ないみたいです」
　坂井からの報告では艦船よりも艦載機は敵の干渉波の影響は少ないらしい。
　まぁ、コスモタイガーはその構造上、高性能なセンサーを搭載していないので、干渉波の影響が少ないのだろう。
　しかし、当然敵も艦載機が干渉波の影響が少ない事は知っている筈・・・・
　恐らく、コスモタイガー隊を迎え撃つ戦闘機・それを運用する空母が居てもおかしくはない。
「敵も艦載機が干渉波の影響を受けることが少ない事は自覚している筈だ。となると敵は戦闘機を搭載した空母を連れている。油断するな」
「了解」
　コスモタイガー隊は哨戒飛行をしているとアステロイド帯に敵の戦艦部隊、空母を連れた機動部隊を見つけた。
　空母を守るかのように戦艦部隊が二個小隊・・・・
　更に地球艦隊を攻撃する為、空母からは戦闘爆撃機が発艦している。
「こちら、コスモタイガー隊、敵艦隊を発見!!」

敵艦隊発見の情報と位置は直ぐに地球艦隊へと報告される。
そしてコスモタイガー隊は敵の戦闘爆撃機とのドックファイトへと突入する。

宇宙戦艦ヤマト　艦橋

「艦長、ここならば、まだブラックホールの影響は少ないので、波動砲を撃っても差し支えがありません。敵艦隊との交戦時間を短縮する為に春藍　と　まほろば　に拡散波動砲の発射を打電してはどうでしょう？」
真田が今の位置から波動砲を撃っても問題はないので、反包囲される前に敵艦隊を一掃する為、春藍　と　まほろば　に対して拡散波動砲の発射を具申する。
「うむ・・・通信長、春藍　と　まほろば　に拡散波動砲の準備を要請してくれ」
「了解」
ヤマト通信長の相原は春藍　と　まほろば　に拡散波動砲の発射を要請した。
ヤマトからの要請を受け、春藍　と　まほろば　はアステロイド前に展開する二つの戦艦部隊に向けて拡散波動砲の発射準備を行う。
二艦が波動砲の発射準備を行っている間、ヤマト、雪風・改、ハルバード、ファルシオンがまほろば、春藍の護衛を行う。
やがて、拡散波動砲の発射が整うと二艦は波動を放つ。
味方の戦艦部隊を撃破された空母は、急ぎ後退して、後衛のミヨーズ艦隊本隊と合流を図る。
しかし、艦首を反転させたところに横腹からヤマト、ハルバード、ファルシオンからの長距離砲撃が空母の艦体を貫く。
敵空母はミヨーズと合流する前に撃沈された。
前衛の戦艦部隊、機動部隊を撃破されたミヨーズは干渉装置を背景に決戦に臨む。

ガリアデス　艦橋

「司令、敵がこちらに向かってきます!!」
「いよいよ決着をつける時が来たな・・・ヤマト・・・全艦砲雷撃戦用意!!総力戦だ!!」
「は、はい」
　地球艦隊と総力戦となったミヨーズ。
　ミヨーズ艦隊と地球艦隊との間にいくつものビームとミサイルが飛び交う。
　しかし、地球艦隊の戦艦は思いのほか装甲が厚くなかなか致命傷を与えられない。
　そんな中、
「し、司令!!」
「なんだ?」
「敵の艦載機が干渉装置に向かっています!!」
「なにっ!?」
「このままでは干渉装置が・・・」
「むぅ・・・駆逐艦を数隻向かわせて干渉装置の護衛をさせろ!!なんとしてでも干渉装置を死守するのだ」
「は、はい」
　ミヨーズは戦力を割いて駆逐艦を干渉装置の護衛に回す。
「隊長、敵の駆逐艦が・・・」
「構うな!!まずは邪魔なこのガラクタを壊す事を優先しろ!!」
　コスモタイガー隊は敵の駆逐艦を無視して干渉装置を目指す。
「山本、こいつらは俺たちが引き受ける。その隙に干渉装置を破壊してくれ」
「おう、坂井、頼んだぞ」
「任せとけ」
　コスモタイガー隊はヤマトのコスモタイガー隊は干渉装置の破壊へと向かい、まほろばのコスモタイガー隊は駆逐艦の相手をした。
　後方から敵の追撃の危険が減ったヤマトのコスモタイガー隊は干渉装置を破壊した。
「ミヨーズ司令・・・干渉装置がまたもや破壊されました!!このままで

は・・・」
干渉装置が破壊された事で、地球艦隊は干渉波の影響から解放された。
干渉装置の破壊はミョーズ艦隊の士気を下げ、逆に地球艦隊の士気を上げる。
「うろたえるな!!・・・准将が援軍を持って控えているはずだ!!早急に連絡をとれ!!」
ミョーズはこの後方にいるであろうグロータスの艦隊へ援軍要請をする。
グロータスの艦隊が来れば数の力で押し切って地球艦隊をブラックホールへと追い込めると思っていた。
しかし・・・
「そ、それが・・・さっきから打電しているのですが、いっこうに返答がありません・・・」
通信員がグロータスの艦隊に援軍要請をしているのだが、グロータスの艦隊から援軍が来る気配がない。
それどころか通信にも一切答えない。
「なにっ!?」
グロータスの艦隊からの返答もなく、また援軍が来る気配もないこの現状にミョーズは何かを察した。
「・・・いたしかたない。ならば、砲雷撃戦で迎え撃つのみ!!もはや後退はできん!!全力で突撃するのだ!!」
「は、はい」
(ふん・・・まさか、このミョーズが捨て駒にされようとはな・・・)
(これも・・・我々の敗北も計算の内と言う訳か?グロータス准将・・・)
(あなたの地位を脅かしかねない芽を今のうちに摘んでおこうと・・・)
ミョーズはグロータスが援軍を派遣しない事、
彼がこの宙域を戦場に指定した事、
それらの要素から自分たちはグロータスから捨て駒にされた事を

悟った。
その原因が、これまでの作戦の失敗・・・
そして、グロータス自身がミョーズの存在を恐れていた事だった。
彼はグロータスよりも年齢的に若いながらも准将である自分より一個下の階級である大佐の地位に居る。
このままではいつ、ミョーズに階級で追いつかれ、追い越されるのかグロータス本人にとっては戦々恐々だった。
だからこそ、グロータスはこの機会を利用してヤマトもミョーズも始末するつもりだった。
ミョーズがヤマトを始末しても彼のこれまでの作戦失敗を問題にして、彼を閑職に回すもよし、
ヤマトがミョーズを片付けてもミョーズとて、一門の武人・・・ヤマトにもそれなりのダメージを与える筈・・・
弱ったヤマトを自分が持つ全戦力を投入して仕留めれば、それこそ自分の手柄となり、自分はより高い地位に就ける。
グロータスの野心の為に自分は利用され、挙句の果てに捨て駒にされた・・・
しかし、例え、この後、これまでの作戦の失敗の責任を問われても今の自分としては強敵たるヤマトを仕留めることが出来ればそれで満足だった。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「艦長、見てください!!あの戦艦!!」
「あれはっ!?」
ミョーズ艦隊の旗艦、ガリアデスはかつて、イスカンダルにて戦った暗黒星団帝国の戦艦、プレアデスと同型艦だった。
「イスカンダルで戦ったあの大型戦艦か・・・対処はイスカンダルの時と同じだ!!恐らくあの戦艦は姉妹艦・強力な偏向型バリアを張っている筈だ!!ショックカノンではなく、実弾攻撃に入れ!!」
「了解!!」
主砲には実弾が装填され、ミサイル発射管、魚雷発射管にはそれぞ

れ実弾が込められる。
地球艦隊はそれぞれ三隻ずつに分かれ、ミヨーズ艦隊を左右から包囲する様な形で攻撃する。
右舷側を春藍、ハルバード、ファルシオンの比較的に推進力が高い艦隊。
これならば、少々ブラックホールの引力の影響を受けても脱出する事が出来るし、装甲が厚い。
いざとなれば無人艦のハルバードとファルシオンを犠牲にしてでもブラックホールの影響圏から脱出すればよい。
そして、左舷側をヤマト、まほろば、雪風・改が務める。
ミヨーズ艦隊の後方では、ヤマトのコスモタイガー隊が干渉装置を破壊し、まほろばのコスモタイガー隊が相手にしていた駆逐艦へと迫って来る。
エース、準エースらが操縦する多数のコスモタイガー隊の前では、数隻の駆逐艦が敵う筈もなく、瞬く間に撃沈され、ミヨーズ艦隊の背後から襲い掛かる。
主砲の実弾、ミサイル、魚雷が被弾するたびにガリアデスの船体が激しく揺れる。
「くっ・・やはり、この艦の偏向バリアでは実弾は防ぎきれんか・・・・」
ミヨーズは悔しそうに顔を歪める。
そもそもデザリアムは科学技術が発達し過ぎて、生命の種としての機能が大きく劣化した為、今回の地球占領作戦を実行したのだが、それは兵器に関しても同様で実弾を使用した兵器などもう何百年前にデザリアムから姿を消した。
故に今のデザリアム軍の艦には実弾に対しての防御が想定されていない。
発達しすぎたが為に起きた致命的な欠陥であった。
左右、そして後方から包囲される様な形で地球艦隊の猛攻を受けるミヨーズ艦隊の艦船は一隻、また一隻と数を減らしていく。
残ったガリアデスに地球艦隊の砲火が集中する。
艦自体、爆発はしていないがガリアデスの船体からはおびただしい

量の煙がでて、あちこちで火花が散っており、いつ爆発してもおかしくはない状態だった。
　既に戦闘能力はもう無いと判断した地球艦隊は、止めは刺さずに、この場からの脱出へと専念した。
「ミヨーズ司令!!もう艦がもちません!!」
「ヤマト・・・すばらしい・・・実にすばらしい艦だ・・・狩人たるわたしをその牙で屠るには、実にふさわしい獲物・・・いや、もはや獲物ではなく、あちらの方が狩人か・・・」
「ミヨーズ司令!!」
「・・・爆発にはまだ間はあろう。お前たちは脱出しろ」
　ミヨーズはガリアデス乗員に対して退官命令を出す。
　しかし、その中にミヨーズ自身は含まれていなかった。
「しかし、それでは・・・司令はどうされるんですか!?」
　幕僚はミヨーズに退艦しないのかを訊ねる。
「聞こえなかったのか!?・・・行けっ!!」
「は、はい・・・」
　幕僚は瞬時に察した。
　彼に何を言っても彼はガリアデスを退艦することが無いと・・・
　彼を退艦させることが出来るのはミヨーズ自身か自分たちの国家元首である聖総統ぐらいだと・・・
　いや、聖総統の命令でも彼はガリアデスから退艦するのか微妙だ。
「しかし、ヤマトよ・・・このミヨーズに狩られた方が貴様らにとっては幸運だったかもしれんぞ・・・」
　誰も居なくなったガリアデスの艦橋にて、この宙域から去って行く地球艦隊・・・ヤマトの後姿を見ながらミヨーズは呟く。
「我々を斃して進むその先に、何が待ちうけているのか・・・その目で。しかとみとどけるがいい・・・」
　この先の宙域にはグロータスの部隊がいる。
　あの部隊に果たして勝てるだろか？
　そんな思いがミヨーズにはあった。
　そして、ガリアデスから遠ざかって行く脱出艇の姿へと目をやる。

「やっと脱出しおったか・・・ふん・・・まったく最後の最後まで、使えん部下たちだったな・・・」
ミョーズはフッと笑みをこぼし、部下たちに毒づくが、自分がこの地位につけたのは、自分の能力の他にその使えん部下たちの功績があったのも確かだった。
例え使えん部下たちであっても自分にとっては大事な部下たちだった。
そんな部下たちの行く末を案じるミョーズ。
しかし、この敗戦の責任は司令官たる自分一人で負わなければならない。
その為、大勢の部下たちを犬死させるわけにはいかなかった。
部下たちの事を思っていると、辺りが眩い光に包まれるとガリアデスは大爆発を起こした。
狩人であるミョーズ・そして、この戦いで戦死した者たちを乗せて・・・

宇宙戦艦ヤマト　艦橋

「敵戦艦の爆発を確認」
「終わったか・・・強力な相手だった・・・」
「地球付近から、ずっと俺たちをつけ狙っていた訳だからな・・・まったくその執念には感服するよ」
「しかし、ヒヤヒヤしましたよ。いつブラックホールの境界を越えてもおかしくないような状況でしたからね・・・」
「うむ・・・まったく危険な状況だった。もし、暗黒ガスがもっと薄ければ遠くからあらかじめブラックホールの存在を観測できたはずだがな・・・」
「まったくです。ともかく、早くこの宙域から脱出したいですよ。ワープは使えそうにないですから、地道に進むしかないですが・・・」
「それにしても、敵がこれだけヤマトを確執に狙うには、何か意味があるのかもしれない・・・我々の存在自体が、それだけ敵にとっての危機をはらんでいるのかもしれないな・・・」

「ガミラスの時の様にか？」
「わからん・・・今は・・な・・・」
「その答えはあの先にある。この暗黒星雲を越えた向こうに・・・さあ、進もう」
「了解」
地球艦隊はミヨーズ艦隊との戦場宙域を後にする。
ヤマトにとってそれは七色星団にて、ドメル機動艦隊と戦った時の様だった・・・

その頃、地球艦隊が目指しているデザリアム星では・・・
デザリアム星のとある研究施設区画・・・
そこには数多くの試験管の様な形状のポッドがいくつも並んでおり、その中には若いデザリアム星人の男女が中に入っていた。
その光景はミッドにあったスカリエッティのアジトの再現そのものであり、ポッドの中に居る人物が地球人の様な姿をした人類か、デザリアム星人かの違いだけであった。
ただし、正確にはポッドの中に入っているデザリアム星人はこの星の住人ではなく、デザリアム星人の髪の毛や血液から採取されたクローン体であった。
これら大量のデザリアム星人のクローン体はすべて管理局の拘置所からミヨーズの手によって、デザリアムへ亡命？したスカリエッティの手によって生み出されていた。
「スカリエッティ博士」
「ん？おお、これは、これは聖総統閣下」
聖総統はスカリエッティがいる研究区画へと連絡をいれてきた。
「スカリエッティ博士、貴殿のおかげで我が帝国は種としての存命に新たな光を見出せることになりそうだ。貴殿の研究成果には感謝するよ」
「ありがとうございます。私自身もこのような技術をこうして目で見て出会えたことはまさに僥倖です。あのままつまらない管理局の拘置所で一生を終えるのかと思っていましたが、聖総統閣下には感謝し

てもしきれません」
「うむ、お互い持ちつ持たれつと言う訳だ。これからも我が帝国の為に頼むぞ」
「はい」
スカリエッティは聖総統に一礼してする。
彼のその態度に満足したのか聖総統は通信をきる。
聖総統との通信が完全にきれたことを確認したスカリエッティは、
「やれやれ、相変わらず宮仕えとは疲れるモノだ」
普段のふてぶてしい態度に戻る。
「お疲れ様です。ドクター」
そんなスカリエッティに紅茶が入ったカップを差し出す女性が居た。
「ん？ああ、ありがとう。ロベル」
「いえ、私はドクターの秘書として生まれましたので、これぐらいは当然です」
スカリエッティが言ったロベルと言う人物・・・
彼女はスカリエッティがデザリアムに来てから最初に生み出したクローン人間であった。
いくらスカリエッティがすぐれた科学者であっても一人で星一つの全人口のクローンを用意しろと言われてもそれは無理である。
それに本当にクローン人間として、人としての生活などに支障がないのかを立証する必要があった。
故に彼はまず、自らの秘書兼助手のクローン人間を生み出すことにした。
ミッドではウーノやクアットロがその役割をしていたのだが、ここには彼女たちは居ない。
それどころか、彼女たちが既に死んでいる事さえ、スカリエッティは知らなかった。
ロベルのＤＮＡデータに関してはスカリエッティ自らのＤＮＡ及び聖総統の秘書であるサーダのＤＮＡを元にしていた。
スカリエッティはこのデザリアムに来た当初は、ミッドやどの管理

世界よりもすぐれた科学力に子供の様にはしゃいだのだが、次第にデザリアムでの生活に慣れてくると彼は、外宇宙にはミッドや管理世界よりも優れた科学力がある星があるのだから、このデザリアムよりもさらにすぐれた科学力を持つ星があるのではないかと思い始めていた。

管理局の最高評議会から生み出され、十年と言う長い歳月をかけてその呪縛から逃れようとＪＳ事件を起こした様に彼はいずれ機会を見てデザリアムを出奔し、まだ見ぬ星の海へと自由気ままに流れようかと思っていた。

無限の欲望（アンリミテッドデザイア）・・・彼に与えられたコードネームの通り、人の欲望でもあり、この無限に広がる宇宙の様に、彼が求めるゴールは存在しないのかもしれない。

それでも彼は辿り着かないゴールを目指す事を止めないだろう。

もしかしたら、それが彼の存在意義なのかもしれない。

「うむ、お互い持ちつ持たれつと言う訳だ。これからも我が帝国の為に頼むぞ」

「はい」

一方、スカリエッティと通信のやりとりをした聖総統はと言うと・・・・

「聖総統閣下」

「ん？なんだ？サーダ」

聖総統の秘書官であるサーダが聖総統に声をかける。

「あの男をそれほどまで信じてもよろしいのでしょうか？」

かつて、ガトランティスの総参謀長であったサーベラがデスラーを信用していなかったようにサーダもスカリエッティに関しては警戒をしていた。

やはり、よそ者と言うのはどの星でも厄介者扱いされる様だ。

「・・・・」

「時空管理局とか言う組織の資料からは、あの男は元々その組織のトップが生み出したクローン人間・・・それが自らを生み出した組織

に対して反逆を仕掛けたと言うではありませんか・・・そのような男が我が帝国に従順にしたがっているとは思えません」
「分かっておる」
「それならば何ゆえに・・・・」
「確かにスカリエッティは今後、我が帝国に対して反逆の刃を向けるやもしれん・・・だが、今の帝国には奴の技術が必要なのだ・・・現に第一次クローン生産は完了しつつある。奴のクローン研究技術を手に入れればあとはどうにでもなる」
「しかし、あの男が生み出したクローン体に聖総統閣下御自らの移植は危険ではありませんか?どんな仕掛けが施されているか分かりません」
「だからこそ、地球占領作戦も同時に行ったのだ。地球という田舎惑星ながら素晴らしい環境で育った若き肉体・・・それは私や一部の選ばれた者にのみ与え、残りは奴のクローン体へと移植し、安全性を確認すればよかろう。罠が仕込まれていたのであれば、それを口実に奴を始末するだけの事だ。そして成功すれば、地球人の肉体、そして我々の子孫の肉体その二つが同時に手に入り、我が帝国の盤石な体制が整うのだからな」
「は、はぁ・・・・」
「それで、肝心の地球占領作戦についてはどうなっておる」
「は、はい。それが現地のカザン総司令の報告ではかなり難儀な状況の様です」
「なに?」
「地球人は予想外の抵抗をしているみたいで、更には第三者の介入の可能性もあるとのことです」
「第三者の介入だと?」
「はい。地球人の抵抗組織の中に明らかに地球の生命体では無い生物が地球人と共に我が軍と交戦状態との事です。今の所、捕獲には至っておらず、詳しい情報はえられていないのですが、報告ではどうもその生命体も我々と同じく半機械生命体との報告も来ています」
「・・・・」

「それにヤマトを追撃していたミヨーズ大佐の艦隊は既に全滅をしたようで、ミヨーズ大佐も戦死したとの報告が先程入りました」
「なに!?ミヨーズが!?」
「はい・・・聖総統・戦況は我々に不利な状況になりつつあります。中間基地も既に破壊され、地球への援軍や補給にも支障が出るのも時間の問題かもしれません。それに現地の風土病や害虫・害獣の被害も多発しているようです」
「しかし、折角見つけた素晴らしい肉体がある星をこのままみすみす諦める訳にはいかん・・・カザンには現有戦力にて現状を死守せよと伝えよ」
「はい」
「それと破壊された中間基地についても別の宙域に展開している同型の基地を直ちに配置変更し、変更が済み次第、地球へ援軍と補給を行え・・・後は・・・」
「我が帝国に迫りつつある地球の戦艦・・・」
「そうだ・・・なんとしてでも奴等を捕獲ないし撃破しなければならん」
「すでにその点につきましてはグロータス准将に討伐の命令は出しております」
「そうか・・・グロータスの部隊であるならば、奴等とて無事ではすまんだろう」
聖総統はグロータスの部隊に大きな期待を寄せていた。
そして、地球艦隊が進むその先にはまさにそのグロータス准将の部隊が待ち構えていた。
果たして彼らは地球を救う事が出来るのであろうか？

地球とデザリアム帝国がお互いに激しい戦闘を繰り広げている中、ボラー連邦との会戦により、現有戦力を大幅に失った管理局でもある邂逅がなされようとしていた。
この邂逅が後に管理局に希望の光を与えるだけでなく、管理局を更に増長させる結果となってしまう事をこの時はまだ地球も・そして

フェイトたちも知る由もなかった。

百一話　亡命者

管理局が管理する世界の一つ、ポルテ・・・・
そこはかつてガトランティスのゴーランド提督が破壊した恐竜惑星プレオの様に自然豊かな星で、数多くの幻獣生物が生息している世界だ。
かつてボラー連邦への武力制裁に失敗し、船体が傷ついたクロノが艦長を務めるクラウディアも応急修理と補給のため、この世界に立ち寄ったことがある。
そして、その世界には治安維持のための管理局員の他に、この世界に生息する幻獣生物や自然保護を任務とする自然保護官も駐在していた。
機動六課卒業後、自然保護官となった元機動六課、ライトニング分隊所属のエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエもこの世界に駐在していた。
実際、二人はクラウディアがこの地に来た時、クロノを表敬訪問している。
そしてこの日も普段の通り、キャロの使役竜であるフリードの背中に乗り、空から森林地帯の巡回をしていると、
「ん？なんだ？あれは？」
「どうしたの？エリオ君」
「あっ、あれ・・・・」
「えっ？」
エリオが空の一角を指さす。
キャロもつられて空を見ると、流れ星のようなモノが一つ降って来た。
「流れ星かな？」
「こんな昼間に？」
そう思っていると、それはポルテに近づき、やがて森林地帯へと落ちた。

宇宙からの飛来物が墜落した事により、周囲には轟音が鳴り響く…

「い、隕石かな？」

「わ、わからない…兎に角、本部に連絡をして、調べてみよう」

「う、うん」

キャロが本部へ森林地帯に隕石らしきものが墜落したことを伝え、エリオはフリードを現場に行くように指示する。

本部からは調査の許可がおりたが、慎重に行えという返答がきた。

やがて、エリオとキャロはその現場へと到着した。

ポルテに降って来た飛来物は木々をなぎ倒し、地面をえぐり、土煙を立ててその場に鎮座していた。

「こ、これはっ!?」

「宇宙船？」

宇宙からポルテに降って来た飛来物は隕石ではなく一隻の小型宇宙船だった。

宇宙船ならば、当然その中には乗員である宇宙人がいるかもしれない。

エリオとキャロは宇宙船の周りを回ってどこか乗り口がないかを調べた。

そして、ハッチらしきモノを見つけると、そこをこじ開けて、中へと入る。

小さな宇宙船だったので、そこまで大勢の宇宙人が乗っているとは思っていなかったが、宇宙船の中には誰も居ない。

警戒しながら、宇宙船のコックピットを目指していると、お目当てのコックピットへと辿り着いた。

そこには一人の宇宙人がコンソールに突っ伏す様な形で倒れていた。

「だ、大丈夫ですか!?」

エリオとキャロは慌てて駈け寄る。

「っ!?」

二人はその宇宙人の姿を見て驚いた。

その宇宙人はアニメ・漫画に出てくるようなタコの様な姿をしている訳でもなく、ＳＦ映画に出てくるエイリアンやグレイの様な姿をして居る訳でもなく、ミッドや他の管理世界に住んでいる普通の人の姿をしているのだが、自分たちがこれまで見て来た人類と異なる最大の特徴が肌の色だった。

その宇宙人の肌は自分たちの肌の色とは異なり、水色の肌をしていた。

顔を見る限り、年配者だと言う事は何とか分かった。

「・・・・い、生きているの？その人？」

「ちょ、ちょっと待って・・・・」

キャロがこの宇宙人が生きているのかを訊ねると、エリオは宇宙人の生死を確認する為に恐る恐る首へ手を近づける。

例え、肌の色が自分たちと異なっても人の姿形をしているのであれば、首にも頸動脈があり、脈拍があると思ったからだ。

案の定、首には頸動脈があり、脈拍が確認された。

「生きている!!この人、生きているよ!!」

「っ!?本部、こちらキャロ・ル・ルシエ、保護官。墜落した宇宙船にて生存者を発見しました!!至急医療体制の要請をお願いします!!」

キャロが本部に生存者がいることを報告する。

本部は急いで、現場にドクターヘリを向かわせる返答をしてきた。

やがて、宇宙船の墜落現場にドクターヘリが到着すると、医務官らがその宇宙船の乗員をヘリに乗せて病院へと向かった。

エリオとキャロも第一発見者として同行した。

処置が終わり、病室へと運ばれた後、エリオは医師にあの宇宙船の乗員の症状を尋ねる。

「あの、先生・あの人は・・・・？」

「酷く衰弱していましたが、特に大きな怪我はありませんでした。感染症についても確認はされませんでした。最もここの施設で診察できるレベルですが・・・・まぁ、皮膚の色を除けば、身体の組成が我々と同じでしたから、多分大丈夫だと思います。なお、リンカーコアの有無についても調べましたが、あの方からはリンカーコアの反応はあり

ませんでした」
「そうですか・詳しい事情を聴くことは出来ますか？」
「意識が戻れば可能だと思います。ただ、言語に関して通じるかは分かりませんけど・・・・」
「確かに・・・・」
肌が水色の人類なんてエリオとキャロはこれまで、見た事も聞いた事もなかった。
その訳は、エリオもキャロも六課卒業後、このポルテにいた為、ミッドであったベムラーゼの局員虐殺映像を見ていないので、肌の色が自分たちと異なる宇宙人の存在は知らなかったのだ。
管理局が大敗北したボラー連邦への武力制裁でも、ボラー星人も自分たちと同じ肌の色かＳＦ映画に出てくるグロテスクな姿をした宇宙人だと未だにそう思っていた。
しかし、現に二人の目の前には肌の色が違う宇宙人がこうして存在して、生きている。
それから数日の間、その宇宙人は眠り続けていた。

???ｓｉｄｅ

「うっ・・・・うーん・・・・」
重い瞼を開けるとそこは、白い天井が目に映る。
そして辺りからは薬の様な匂いがしている。
どうやら、ここは自分が脱出に使った救命艇でも天国でもボラー連邦に関係する施設でもない様だ。
救命艇の天井はこんな色をしていなかった。
それにボラー連邦に関係している施設であれば、自分は問答無用で殺されていた筈だ。
薬の匂いから察するに医療施設なのかもしれない。
ここが何処なのかわからないままでいると、白い服を着た女性が入って来た。

肌の色はボラー星人、ガルマン星人、バース星人とも違う色をしていた。
その女性は自分の姿を見て、一瞬目を見開いて驚いていた様な顔をしたが、すぐに平然とした様子に戻り、
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」
何やら訳の分からない言葉で話しかけて来た。
生まれた星が異なるので言語も通じない様だ。
女性の方も言葉が通じないと分かると困った顔をする。
自分の服の襟には翻訳装置が内蔵されているので、自分が着ていた軍服があれば恐らくコミュニケーションは取れる筈だ。
幸い自分の上着は直ぐ傍にハンガーで掛けてある。
指で上着を指さすと白い服の女性は自分が何を求めているのかを理解した様子でハンガーから上着を取り、持って来た。
上着を羽織ると、襟に仕込まれた翻訳装置を作動させる。
「いや、すまない・・・貴女の言葉が通じなくてね・・・」
「・・・」
翻訳装置を作動させたので、確かに言語は通じる筈なのだが、白い服の女性は目を見開いて固まっていた。
「ん？どうかしたのかね？」
「あっ、いえ・なんでもありません。で、では、先生を呼んできますね」
白い服の女性は踵を返して部屋から出て行った。

「先生、あの方が目を覚ました」
「なにっ!?それは本当か!?」
「はい」
「よしっ、今行く。それと管理局にも連絡をいれてくれ」
「はい」
医師は往診に必要な道具を持ち、看護師には管理局へ連絡をいれて病院へ来てもらうように手配した。
先日、救助した宇宙人が目を覚ました。

その連絡は宇宙人が入院している病院から管理局の本部へと入る。
知らせを聞いた管理局はエリオとキャロ、そして二人の上官が病院へと向かった。
最初に医師の診断が行われ、体調に問題がないと判断され、いよいよ管理局での事情聴取が始まった。
「小官は時空管理局、ポルテ駐在、自然保護官のトルネオ・ラングレーです」
「同じく、エリオ・モンディアルです」
「キャロ・ル・ルシエです」
トルネオ、エリオ、キャロは自己紹介をする。
「・・・・私は・・・・元ボラー連邦、軍属技術技官、ポピエーダ・ミノフスキーだ」
宇宙人・・もとい、ミノフスキーは自己紹介の中で自分が所属する勢力の前に『元』をつけた。
それと同時に彼はエリオとキャロを見て、
(二人は随分と若いな・・・・この組織はこんな年端のいかぬ子供も徴用しているのか?)
と、時空管理局と言う組織の採用年齢に疑問を感じた。
故郷であったボラー連邦でさえ、子供を軍や軍属に入れることはなかった。
もっとも幼年学校はあったので、少年期から軍事訓練と軍事教育はしていたが実際の戦場に出すのは幼年学校か士官学校を卒業してからなので、ボラー連邦でさえ、ここまで若い子供を現場に出す事はなかった。
「「ボラー連邦!!?」」
ミノフスキーの放った『ボラー連邦』という部分にトルネオ、エリオ、キャロは反応する。
まぁ、管理局員ならば当然の反応であった。
「元・・・・がつく・・・・私はもうボラー連邦の人間ではない」
「・・・・それはどういう言う事ですか?」
エリオがミノフスキーに何故、ボラー連邦の人間では無いのかと問

う。
「私は・・・」
ミノフスキーは自分の身の上話を語り出した。
彼は元々ボラー星で生まれた生粋のボラー星人だった。
故郷であるボラー星は軍事国家な惑星だったので、羽振りがいい職業は軍人か軍属だった。
そして、彼は軍属の技師となった。
軍属技師となった彼は、ボラー本星にて、様々な軍事品の研究開発を行ってきた。
そして、ボラー連邦が技術惑星であるガルマン星を制圧した時、ミノフスキーはそのガルマン星へと赴き、現地にて自分と同じボラー連邦から出向した軍属技師や技術官、さらにガルマン本星の科学奴隷を統括する立場だった。
しかし、そのガルマン星に突如、謎の艦隊が襲来し、更にガルマン星のレジスタンスたちが一斉に蜂起し、ガルマン星のボラー総督府はあっという間に陥落した。
陥落後、総督を始めとする駐屯していた軍幹部は悉く処刑された。
自分は軍属と言う事で処刑は免れたが、ガルマン星からの追放を宣告された。
そして、自分と同じく軍属や軍人でも下級階級のため、処刑を免れた同胞と共に老朽船に押し込められて宇宙を放浪する羽目になった。
ガルマン星の守備に失敗した時点で、自分たちは故郷へ戻る事は出来なくなった。
故郷のボラー星の国家元首、ベムラーゼは機嫌によっては一度の失態でもそれは死を意味する事もある。
今回は折角、手に入れた領地を奪われる失態をしたのだ。
しかもガルマン星はボラー連邦の領地の中でも貴重な技術惑星だったので、ガルマン星の喪失はボラー連邦にとってかなりの痛手だったのだ。
軍属とは言え、戻っても敵前逃亡罪で処刑されることは目に見えていた。

ガルマン星を追放された漂流者たちは帰る星もなく、行くあてもなく宇宙を彷徨う事になった。
乗せられた船は旧式な輸送船で、食糧生産プラントも直ぐに壊れてしまうと、船内で物資を巡って争いが起こった。
同じ、同胞同士で物資を巡って殺し合いが始まったのだ。
ミノフスキーは身の危険を感じ、命からがら搭載されていた救命艇に乗り込み脱出した。
勿論、救命艇で脱出しからと言って、命の保証がある訳でもない。
無限に広がるこの宇宙をちっぽけな救命艇で漂流するのだから、生存の可能性は低い。
しかし、あのまま老朽船にいれば、同胞の手によって殺されるのも目に見えている。
故に彼は僅かな可能性に賭けたのだ。
そして救命艇は運よくプレオに流れ着いたと言う事だ。
「それで、貴方は今後、どうなさるおつもりですか?」
トルネオがミノフスキーに今後の身の振りを訊ねる。
彼の言う事が本当であるならば、ミノフスキーにはもう行く場所がもう無い。
ここまで来た宇宙船も着陸の際に壊れてしまった。
「出来るのであれば・・・静かに暮らし、そこで研究を続けたいとは思っている・・・」
「そうですか・・・」
ミノフスキーは安定した生活を望んでいた。
しかし、彼がボラー連邦の人間だと言う事で当然、トルネオとエリオは警戒した。
(この人は、大勢の局員を殺したあのボラー連邦の人なんだ・・・油断はできない・・・)
(彼の話を裏付ける方法はない。故にこの老人の言う事全てが真実だとは限らない。もしかすると、ボラー連邦が送り込んできたスパイかもしれない・・・)
トルネオとエリオはミノフスキーの言う事を全て鵜?みにする訳

ではないが、一方故郷から半ば追放され、行くあてもないという事実を知ったキャロは、
（この人も昔の私と同じ、故郷から捨てられた人なんだ・・・）
と、フェイトに拾われる前の自分と境遇が似ている事から、疑う事よりもミノフスキーに同情と言うか共感めいたモノを抱いていた。
ミノフスキーの話が事実であれ、虚偽であれ、この件について報告しない訳にはいかず、トルネオは事情聴取を終えた後、本局へと報告した。
ポルテにボラー連邦の人間が不時着した・・・
この報告を受けた本局は驚愕した。
まだ、ボラー連邦への武力制裁の失敗から管理局の艦は生産も人員も確保できていない。
そんな矢先にボラー連邦の人間が来たというのだからあわてるのも無理はない。
「ポルテにボラー連邦の人間が来たというのは本当か!?」
「は、はい!!間違いありません!!」
「くそっ、まだこちらの戦力が整っていないのに・・・」
「いかがいたしますか？残存兵力を結集し、ポルテに向かわせますか!?」
局員が慌てふためく中、追加の報告が来た。
それによると、やって来たボラー連邦の人間は一人の老人だと言う。
そして、本人はボラー連邦から追放された軍属の技師と言う報告が入る。
「信じられるか!?」
「そうだ、そいつはボラー連邦のスパイに違いない!!」
本局でもトルネオやエリオが抱いた懸念を抱いていた。
ベムラーゼによる局員の公開処刑、鹵獲艦による本局近海における管理局艦の撃沈など、ボラー連邦はあまりにも管理局に対する武力行使に対して、トラウマレベルの事をした。
警戒されるのも当然だ。

「それで、本人はなんと言っている？」
「取り調べを行ったラングレー保護官の話では、『静かに暮らしたい』と言っていた様子です」
「『静かに暮らしたい』だと!?バカな!?」
「ボラー連邦の人間の癖に安定した生活を望む権利など、奴等にそんな権利がある筈が無い!!」
「殺してしまえ!!」
「そうだ!!連中も行ったのだから、公開処刑にするべきだ!!」
「しかし、それで、ボラー連邦が管理世界に侵攻して来たどうするのです？」
「むっ!?」
「ボラー連邦の人間をむやみに殺すよりはどこかへ行ってもらう方が良いのではないだろうか？」
「つまり、追放せよと？」
「左様」
「しかし、それでは遺族が納得しませんぞ!!」
ミノフスキーの処遇に対して本局の会議室は意見が飛び交う。
ボラー連邦もやったのだから、管理世界中に中継する公開処刑をするべきだ。
万が一、公開処刑の映像をボラー連邦が傍受して報復してくる可能性もあるので、管理世界から追放するべきだ。
などの意見が飛び交う。
そんな中、
「・・・いっそ、その者を受けいれてはいかがでしょうか？」
ミノフスキーの身柄を管理局で引き取ってはどうか？という意見が出た。
「バカなっ!?」
「貴官は何を考えている!?」
「わざわざ敵のスパイかもしれない人物を管理局で保護するなど、正気の沙汰とは思えんぞ!!」
「そうだ!!」

「左様!!」
当然、ミノフスキーの受け入れについては反対意見が多数を占めた。
しかし、
「ですが、考えてもみて下さい。彼はボラー連邦の人間ではありますが、それと同時に軍属技師でした。彼ならば、ボラー連邦で使用している艦船のエンジン技術を知っている筈・・・ボラー連邦が使用しているエンジンの性能はかの地球連邦の艦船と同等の技術なのは皆さんもご承知でしょう?・・・・座標が分からない地球連邦と交渉をするよりも早期に技術を手に入れられるのではないでしょうか?」
ミノフスキーの受け入れを提案した高官からの反論に、受け入れ反対を表明していた高官はピタッと反対意見を止める。
「どうでしょう?彼を亡命という形で受け入れ、見返りに彼の持つ知識と技術をこちらに提供してもらうというのは・・・・?」
「うっ、うーん・・・・」
「確かに魅力的ではあるが・・・・」
管理局でも、防衛軍やボラー連邦で使用している宇宙船のエンジンは欲しい。
座標が分からず、現在暗黒星団帝国に占領されている地球連邦と交渉するよりもボラー式ではあるが、同じ性能を持つエンジン技術を知るミノフスキーからその技術知識を引き出し、提供してもらった方が地球連邦と交渉するよりも遥かに早い。
しかも地球連邦・地球防衛軍は管理局に対して嫌悪感の様な物を抱いている。
それは管理局の方針や、管理局が通信ポッドに逆探知装置や無許可で地球連邦の領海に艦を派遣したせいなのだが、これらの行動から地球連邦と交渉をして、タキオン機関の技術を提供してもらえるだろうかという疑問もある。
だが、ミノフスキーの場合、彼に衣食住を提供すれば、タキオン機関と同等のエンジン技術を提供してもらえるかもしれない。
ミノフスキーがボラー連邦から放たれたスパイの可能性はあるが、

それは彼を監視すれば問題はない。
管理局にはサーチャーと言う魔法もある。
検査をした医師の見立てではミノフスキーにはリンカーコアの存在が確認されていない。
非魔導師である彼にはサーチャーは探知できないので、監視は容易に可能だ。
管理局にはどうしても彼の知識と技術が必要なのだ。
それは、戦力が著しく低下している管理局にはどうしても早急に新型の艦船を揃える必要がある。
その為にはもはやなりふりはかまっている状況ではない。
毒蛇だろうと、自分たちにその牙が向けられなければ、飼いならす必要もある。
「や、やむを得まい・・・・」
「う、うむ・・・・」
反対から一転、管理局はミノフスキーの身柄を亡命と言う形で受け入れることにした。
そして、彼をプレオから本局へ連れてくる役目をはやてが仰せつかった。

本局　リンディ執務室
「それホンマですか!?リンディ提督!!」
はやてはリンディから呼び出され、その内容を聞いて驚いた。
「ええ、本当よ。はやてさん」
「ポルテにボラー連邦の人間が来て、亡命を希望しているみたいなの」
「それで管理局はどうするんですか?まさか、受け入れる気じゃあ・・・・」
「ええ・・・管理局はその人物を亡命者として受け入れることが決まったわ」
「・・・そんな!?なんで、よりにもよってボラー連邦の人間なんかを・・・・」
はやては管理局がボラー連邦に対する強い憎しみがある事は知っ

ている。
自分自身もボラー連邦が管理局にした行為は許せない。
それにもかかわらず、その憎しみを抱く勢力の人間を亡命させるなんて、信じられなかった。
「はやてさん、私自身もボラー連邦に対する恨みはあるわ・・・でも、今の管理局にはどうしてもその人物の亡命を断れない思惑があるの」
「思惑？どんな思惑ですか？」
「取り調べた保護官が言うにはその人物は元々ボラーで軍属技師を務めていたみたいで、宇宙船のエンジン技術や幅広い兵器の開発知識を有しているの・・・それで、管理局は亡命を許可する代わりにその人物が持つ知識を管理局の為に活かすように交渉するつもりよ」
「・・・まるで、スカリエッティの再来みたいですね」
はやては皮肉を込めて言う。
実際にスカリエッティは当時、管理局を影から支配していた最高評議会が生み出した人造人間・・・
最高評議会は伝説の地とされるアルハザードの技術によって生み出したスカリエッティの頭脳を利用して、スカリエッティにさまざまな研究と開発を行わせた。
プロジェクトＦＡＴＳ、戦闘機人、ガジェットドローン、聖王のゆりかごの発掘と始動・・・それらの技術を全て手に入れたら、管理局は強大な力を手に入れられると思っていた。
しかし、最高評議会の思惑と異なり、スカリエッティは十二人の戦闘機人らと共に管理局へ刃を突きつけて来た。
結果的に生みの親でもある最高評議会メンバーは全員殺され、管理局の信用もぐらついた。
今回のボラー連邦のミノフスキーの亡命を受け入れれば、いつまたＪＳ事件と同じ様な事を起こされるかもしれない。
いや、管理局が防衛軍にしたように彼がミッドの座標を本国へ知らせ、ミッドに大挙してボラー連邦の艦隊が押し寄せてくるかもしれない。
そう言った不安や疑惑があった。

「ええ、私もそう思うわ・・・でも、今の管理局にはなりふり構っている余裕はないの・・・優れた技術を手に入れられるのであれば、毒蛇だろうと狂犬だろうと懐に入れる勇気と気概が必要なのよ」
「・・・」
しかし、リンディの言っている事は現状の管理局に対して最もな事だった。
「それで、はやてさんにはその人をポルテへ迎えに行ってもらいたいの」
リンディは、はやてに今回呼び出した理由を彼女に話す。
「えええぇー!!私がですか!?」
ボラー連邦の人間を自分が迎えに行くことを言われ驚くはやて。
「な、なんで私なのでしょう?」
はやては自分が迎えに行く理由を訊ねる。
会議の中で、誰がポルテにそのボラー連邦の人間を迎えに行くのかも議題に上がった。
その中で、リンディとレティが、異世界の人物と話し慣れているクロノ、はやて両名の名前が上がった。
その理由は、異世界の人物と話し慣れている理由の他に、以前防衛軍に対して、上から目線で通信をしたギルフォードの様なやり方では亡命者から技術を手に入れることが難しくなる恐れがある。
ここは我慢して下手に出て、技術を提供してもらう必要がある。
それに若い女性からの接待を受ければ、向こうも気をよくするかもしれない。
リンディはそれらの理由をはやてに伝えた。
当然、迎えにはオブザーバーとして、クロノも参加するし、護衛としてシグナムたち、ヴォルケンリッターも参加する。
「わ、わかりました」
はやてはリンディの話を受け、ポルテにそのボラー連邦の人間を迎えに行く事になった。

本局内にあるとある喫茶店

はやてはリンディの執務室から本局内にある喫茶店へと入った。
「あっ、はやてちゃん」
そこで、はやてはなのはと出会った。
「なのはちゃんか・・・」
「どうしたの？なんか、難しい顔をしているけど・・・」
「あっ、うん・・・実は・・・」
はやてはなのはにこの後、ボラー連邦からの亡命者を迎えに行く事を教えた。
ボラー連邦からの亡命者・・・それについては別に機密事項ではないので、教えても差し支えはないし、どの道亡命者から技術を提供してもらったら、その事実は遅かれ早かれ世間に知れ渡る。
「それ、本当なの!?はやてちゃん!?」
ボラー連邦からの亡命者を受け入れる。
その事実になのはは思わず声を上げる。
「さっき、リンディさんと話して私が迎えに行くから間違いないやろう」
「そんなっ!?だって、ボラー連邦は管理局にあんなひどい事をしたんだよ!?それなのに・・・」
「それは私だってそう思うとる・・・でも、リンディさんからも言われたんや・・・今の管理局には、毒蛇だろうと狂犬だろうと懐に入れる勇気と気概が必要なんだと・・・確かに戦力が低下している今の管理局に、ボラーの技術とは言え、防衛軍やボラーと同じ技術が手に入るかもしれへんのやから、管理局としてもその人をまさに国賓待遇で迎えたくもなるんや・・・」
「・・・」
なのは自身としては到底納得が出来ない。
ボラー連邦は自分の生徒や同僚を大勢殺した星間国家・・・
その星の人が図々しくも故郷から追われたから、逃げ込んで来る。
自分たちは管理局の人をあんな残虐な方法で殺したくせに・・・
本音を言うのであれば、助けたくなんてない。
でも、その人を助けなければ、管理局は今後も大きな犠牲を強いる

かもしれない。
今後も大勢の生徒や同僚が死ぬかもしれない。
そのためには個人的感情は捨てなければならない。
「そう・・・だよね・・・」
なのはは目の前のあるティーカップに視線を落とす。
はやてにはなのはの気持ちがわかる。
自分だって、大勢の仲間を殺したボラー連邦は許せない。
でも、それは管理局に力が無かった事、
管理局がボラー連邦への対応を間違えたがために起こった悲劇だった。
しかし、ボラー連邦の技術を手に入れたら・・・
管理局だってボラー連邦や防衛軍、ガトランティスの様に強力な力を手に入れたら、あんな負け方はしないだろうし、ボラー連邦が管理世界に攻め込んで来ても他の世界を守る事が出来る。
その為ならば、屈辱を敢えて受け入れる妥協も必要だったのだ。
それから数日後、はやては自身が艦長を務める艦、ヴォルフラムはポルテに向けて本局を出航していった。

ヴォルフラム　ブリッジ

「それにしてもボラーの人間を亡命者として受け入れるとはな・・・」
シグナムがブリッジにて呟く。
管理局員としてはやはり、今回のボラー連邦からの亡命者受け入れの話は納得できる様な話ではなかった。
「シグナムの言う通りだぜ、あれだけの事をしているのに亡命者を迎えに行けだなんて・・・」
ヴィータも憤慨していた。
ボラーとの一件では、なのはは身体的、精神的ダメージを受け、自分もそんな弱ったなのはを近くから見ていた経緯を踏まえるとやはり、ボラー連邦は許せない。

「みんなの怒りは最もだが、今回の亡命者はあの武力制裁には無関係の人物なんだ・・・ただ、ボラー連邦の人間だから全て悪だと決めつけるのは偏見だ」
憤慨しているシグナムやヴィータを諌めるようにクロノが言う。
「そ、そりゃ・そうだけどよぉ・・・・」
ヴィータ自身、クロノの言葉に突き刺さるモノがある。
まだ夜天の書が闇の書の時代・自分たちヴォルケンリッターは主を救うため、魔導生物の他に大勢の局員を襲ってきた。
その自分たちは、今、管理局にて局員として働いている。
そう言う意味では自分たちとボラー連邦は同じ穴の狢なのだ。
それにＪＳ事件にて逮捕され、更生教育を受けたナンバーズの戦闘機人たちも同じだ。
ボラー連邦の人間だからと言って、自分たちはそこまで憤慨する資格は本来ないのだ。
自分たち、ヴォルケンリッターやナンバーズの様に、昨日の敵は今日の友という関係を築けるかもしれないのだ。

はやてが艦長を務めるヴォルフラムが本局を出航していくのを見た管理局の高官たちは今回のボラー連邦からの亡命者受け入れについて話していた。
「今回の一件・現状の管理局では受けざるを得ないのですが、これで亡命者が耄碌したただの老いぼれであった場合、どうします?」
「無能な爺を置いておくほど、今の管理局には余裕はない」
「左様。もし、無能な老いぼれである時は・・・・突然の病死・・・・と言う事もありえるかもしれませんな」
「そうですな・・・・亡命者は年配の異星人・・・・ミッドの空気が合わないことも考えられますからね」
高官の口からは何やら物騒な発言も飛び出した。
彼らも当然、警戒はしているみたいだった。
しかし、はやてもなのはもリンディもクロノも・・・・管理局の殆どの者が気づいていなかった。

優れた技術を手に入れてもそれがイコール最強の力ではない。
優れた技術もそれを運用する人間の手によって技術を生かせずに宝の持ち腐れとなる事もあるのだ。
そして、使い方を間違えれば、それは破滅の道へ辿る危険も孕んでいることを・・・
様々な思いを抱き、ヴォルフラムはポルテを目指して行った・・・

百二話　交渉・不審

ポルテに降り立ったボラー連邦からの亡命希望者、ミノフスキーを迎えにポルテへと出発したヴォルフラムは宇宙気象やボラー連邦などからの襲撃などのトラブルもなく、無事にポルテへと到着した。
「これが、はやてさんの艦・・・・」
「大きい・・・・」
初めてヴォルフラムを見たエリオとキャロはその大きさ、艦影に唖然とする。
今まで自分たちが見て来たＬ級やＸＶ級と全く異なるフォルムをしている艦は、今は失われつつある管理局の威厳を取り戻そうとする不屈の信念を宿しているかのように見える。
やがて、タラップが降ろされると、はやてたちが降りて来た。
「はやてさん!!シグナムさん!!」
「ヴィータさんにクロノ提督もお久しぶりです!!」
ヴォルフラムから降りて来たはやてたちをエリオとキャロの二人は出迎える。
「エリオ、キャロ、元気にしとったか？」
「はい!!」
顔見知りの二人に出迎えてもらい、はやては笑みを浮かべて二人に手を振る。
「それで、さっそくなんやけど、そのボラー連邦から来たっちゅう人の所へ案内してもらえへんかな？」
「はい、どうぞ」
エリオは、はやてたちを用意していたワゴン車へと案内する。
そして、はやてたち一行は艦船ドックからミノフスキーが居る病院へと向かう。
その道中にて、
「そういえば、はやてさん」
キャロがはやてに話しかける。
「ん？なんや？キャロ」

「フェイトさんとティアナさんは元気にしていますか?」
「そうですね、僕たちあれからミッドに居なかったので、今、どうしているか気になったんです」
キャロとエリオははやてに第二の地球に滞在中のフェイトたちのことを聞いていた。
「あぁ・・・うん・・・元気にしとったよ・・・」
はやては、今第二の地球が暗黒星団帝国に占領されていることを二人に伏せた。
第二の地球が暗黒星団帝国に占領されてからは当然、定期通信も行われておらず、第二の地球の詳しい状況がつかめていない状況となっている。
はやては、二人には無用の心配をかけまいとして、誤魔化した。
その様子をクロノたちは何とも言えない表情で見ていた。
当然、彼らも第二の地球の現状を知っている。
しかし、はやてが何故、敢えて二人に誤魔化す様なことを言ったのか、その気持ちも理解出来た。
実際、養女のヴィヴィオが第二の地球にいることで、なのはは、ヴィヴィオの事が心配なのか、夜はあまり眠れていない様子で、仕事でもケアレスミスが目立っている。
ミッドの高町家、八神家はボラー連邦への武力制裁失敗の折、遺族や暴徒の手によって壊されてしまったので、なのはは、現在教導隊の宿舎にて寝泊まりをしている。
なのはのメンタル面を心配したヴィータは寮にて、なのはと同室で寝起きしているし、シャマルも定期的になのはの下を訪れて、カウンセリングをしている。
「そうですか、良かったです」
「私たち、仕事の都合でどうしてもミッドへはそう簡単に行けないので、フェイトさんたちの事が心配だったので・・・」
純粋にフェイトたちのことを心配している二人の言葉がはやてたちの胸に突き刺さる。
一刻も早く、この事態を変える為、地球防衛軍には頑張ってもらい

たい。
それと同時に管理局も今回の亡命者の一件で新たな改革をしなければならないと思うはやてたちだった。
やがて、ワゴン車はミノフスキーが入院している病院へと辿り着いた。
ミノフスキーが居る病室へは看護師が案内した。
看護師が病室の扉をコン、コン、とノックすると、
「はい」
中から老人の男性の声で返答があった。
「ミスター、ミノフスキー。ミスターに面会人が来ています」
「・・・・どうぞ」
「失礼します」
入室の許可がおりたので、はやてたちはミノフスキーが居る病室へと入る。
はやてたちが病室へと入ると、ベッドには人の姿をしているが、肌の色が自分たちと異なる色・・・・水色の肌をした、白髪の老人の姿がそこにあった。
身に纏っている服は忘れもしない・・・・あのボラー連邦の国家元首たるベムラーゼや局員を処刑していた銃殺隊の兵士が着ていた軍服と同じ様なデザインの服だった。
そして、備え付けのテーブルには沢山の紙があり、そこには訳の分からない数字らしき記号や文字の羅列が描かれている。
ミノフスキーはペンを置き、紙の束を整え、はやてたちへと視線を向ける。
軍人ではなく、軍属技師と聞いていたが、その眼光が鋭い。
かつての地上本部、本部長のレジアス中将とは一風異なる凄みがある。
それは地球における、長年その道一筋でその道を究めて来た職人の様なモノを感じる・・・・局員で言うのであれば、三提督のキール元帥の様だ。
「は、はじめまして・・私は時空管理局、次元航行艦ヴォルフラム艦長を

つとめております、八神はやてです」
「同じく、時空管理局、次元航行艦クラウディア艦長のクロノ・ハラオウンです」
「ミッドチルダ首都航空隊所属の八神シグナム」
「航空・教導隊所属、八神ヴィータです」
　はやてたちはミノフスキーに自己紹介をする。
「元ボラー連邦、ガルマン星統括技術官、ポピェーダ・ミノフスキー」
　ミノフスキーもはやてたちに自己紹介をする。
　ただ、この時ミノフスキーは、はやてたちの役職を聞いて、
（艦長と言う割には、あまりにも若いな・しかも女性・・・それに教導隊と言う部隊に居る子なんて、エリオ君やキャロ嬢ちゃんよりも子供じゃないか・・・）
　艦長と言う役職のわりにあまりにも若く、しかも女性と言う事に驚き、さらには事情を知らないとはいえ、ヴィータの存在にはさらに驚かされた。
　恐らくヴィータ本人が聞いたら、「あたしは子供じゃねぇ!!」と、大激怒するだろう。
「ミノフスキー技術官の現状はこちらでも把握しております」
　はやてが早速、ミノフスキーとの交渉に入る。
「すでに母国への帰国も困難となり、技術官自身、平穏な生活及び技術開発の研究の続行を望むというのであれば、私たち時空管理局が技術官の身の安全と衣食住を提供する用意があります・・・私たち時空管理局は技術官を亡命者として受け入れる用意があります」
　はやては回りくどいことはせずに直球でミノフスキーに亡命者として受け入れる体制があると伝える。
「・・・亡命者として私を受け入れるのは結構ですが、何か条件があるのではないですかな？」
　ミノフスキーは自分を亡命者として受け入れる代わりに管理局は自分に対して何らかの見返りを求めているのではないかと思った。
「それともう一つ聞きたい事があるのですが・・・」
「なんでしょう？」

ミノフスキーは局員であるはやてたちに聞きたい事があった。
「トルネオ保護官、エリオ君、キャロ嬢ちゃんと初めて出会い、自己紹介をした時、私は元がつくとは言え、ボラー連邦の人間であったことに驚いている様子だった・・・・しかし、私はこれまで、時空管理局と言う組織も知らなければ、ミッドチルダと言う星も知らなかった・・・・しかし、時空管理局に所属する君たちは我々ボラー連邦の事を知っているようだったが・・・・それはどうしてかな？」
ミノフスキーは時空管理局、ミッドチルダと言う組織も惑星の名前も知らなかった。
実際彼は、時空管理局がボラー連邦に対して武力制裁を行った時、まだガルマン星に居り、ガルマン星の総督府や駐屯軍に対して時空管理局の情報は知らされていなかった。
その為、ミノフスキーが時空管理局、ミッドチルダを知らないのも無理なかった。
「それは・・・・」
はやては言葉に詰まった。
ボラー連邦への武力制裁に関しては元はと言えば、管理局が行った蛮行が引き金である。
管理局が抱くボラー連邦への憎しみは半ば、八つ当たりに近い感情である。
しかし、管理局に反ボラー連邦感情があると知ったら、ミノフスキーは管理局への亡命に関して消極的になるかもしれない。
だが、ミノフスキーを受け入れてもいつかは反ボラー連邦感情をミノフスキーは感じ取るかもしれない。
はやてがどうしたものかと考え込んでいると、
「それについては私からお話しましょう」
「えっ!?クロノ君!?」
はやてがどうしたものかと言葉を詰まらせていると、オブザーバーとして同行したクロノが管理局とボラー連邦との因縁を語ろうとした。
「はやて、どの道、ミノフスキー技術官を連れて行くには遅かれ早か

れ、話さなければならない。ならば、この場で包み隠さずに話してしまった方が良い・・・本局の連中が話したら、きっと事実を捻じ曲げて話すだろうから」
　クロノの言う通り、本局の高官が管理局とボラー連邦との因縁を語ったら必ず、事実を捻じ曲げて・・・ボラー連邦が悪で管理局が正義、武力制裁についても管理局が被害者の様に語るだろう。
「・・・せやな」
　はやてもその部分を理解して、クロノに管理局とボラー連邦との因縁を話してもらった。
「・・・そうですか・そのような事が・・・」
　クロノはミノフスキーに事実を話した。
　勿論、引き金が管理局である事を包み隠さずに・・・
「管理局の中やミッドには当然、反ボラー連邦の感情がありますが、我々は全力で貴方を守ります。そして、我々の宇宙船開発に協力してもらえませんか？」
　クロノはミノフスキーの身の安全の保障の代わりに宇宙船開発への協力を求めた。
「・・・」
「貴方は平穏な生活と共に研究開発を続けたいという願望があった筈・・・ならば、開発の場所をボラー連邦から管理局へ移すという形で・・・可能な限り、貴方が必要なモノは揃えます」
「少し考えさせてもらえませんかな？」
　いきなりの交渉で『はい、よろしくお願いします』などと即答してもらえるとは思ってもいなかったので、ミノフスキーの返答は想定内である。
「分かりました。ただ、こちらとしてもあまり時間がありませんので、その点をどうか、ご理解下さい」
「ええ・・・」
　この日はとりあえず、自己紹介とこちらの要求を伝える形で面会は終わった。
「にしても、あの爺さん、本当に防衛軍やボラーの奴等が使っていたエ

ンジンを造れるのか？」
　病院の通路を歩きながらヴィータがぼやく。
　管理局がミノフスキーを亡命者として受け入れ、保護した後で、「実は何も作れません」とかだったら、ただの老害でしかない。
　管理局としても何の利用価値がないので、保護をするのもバカらしい。
　しかし、
「いや、詳しいことはまだ不明だが、僕はあのミノフスキー技術官は本物だと思う」
　クロノはミノフスキーが本物の天才技術官であると判断した。
「その根拠は？」
「彼の目だ」
「目？」
「ああ・・・スカリエッティは、どうかは分からないが、自分がこれだけは誰にも負けないと思ったモノや事に打ち込んでいる時・その時の顔は普段よりも真剣な顔つきになる・・・ヴィータ・なのはが生徒のカリキュラムを組んでいる時の顔は普段と比べるとどうだ？」
「た、たしか普段の顔つきとは違うな・・・」
「それと同じだ。あの時、僕たちが病室に入った時、彼は物凄く真剣な顔で何かを書いていた。僕らにはあの紙に書いてある内容は到底理解出来ないが、彼はどんな状況でも自らの研究を続けている気概が見られた・・・・まさに生涯現役を貫いている証拠だ」
「そんな人材だからこそ、今の管理局には必要なんやな」
「そうだ・・・ただ一つ気がかりがあるとすれば、管理局がミノフスキー技術官の技術と知識を得た後、彼を処分するのではないかと言うことだ」
「処分って・・・・」
「それはどう言うことですか？」
　『処分』と言う物騒な言葉に対して、エリオとキャロはそれがどう言う意味なのかをクロノに訊ねる。
「ミノフスキー技術官は言わずと知れたボラー連邦の人間だ。ミノフ

スキー技術官から技術を取り入れたら用済みとして、病死や事故死として処理するかもしれないと言う事だ。君たちは知らないかもしれないが、スカリエッティの脱獄後、相次いで、留置場に収監されていたナンバーズが全員病死した・・・だが、例え別々の留置場に収監されていたとは言え、同じ日にナンバーズの全員が病死なんてあまりにも出来過ぎている・・・僕は管理局が彼女たちの脱走を防ぐために秘密裏に殺したんじゃないかと思っている」

「・・・・」

クロノの話を聞いて、エリオもキャロもスカリエッティが脱獄していることを始めて知ったが、彼と共に収監されたナンバーズが死んでいることも始めて聞き、その死因に管理局が関係しているかもしれない疑惑に対して顔を固くした。

しかし、彼の言う通り、同じ日にナンバーズの四人が揃って病死だなんてあまりにも不自然すぎる。

はやて自身も収監されていたナンバーズの死にはクロノ同様、疑問を感じていた。

もしかしたら、本当にクロノの言う通り、彼女たちの死には何らかの陰謀が絡んでいるのかもしれない。

「まぁ、今はミノフスキー技術官を説得して、亡命と技術の提供をしてもらうことが最優先だ」

クロノはまずは、ミノフスキーが管理局に亡命してくれる事、彼の持っている技術と知識を管理局に提供してもらうことが最初の問題で、彼の身の安全はその次となる。

その後、一週間、クロノやはやては、ほぼ毎日ミノフスキーの下を訪れ、交渉と説得を繰り返した。

その過程で、ヴィータがミノフスキーに対して、「本当にお前、知識あるのか？」と問うと、彼の技術家魂に火をつけたようで、宇宙船から持ってきた機械とスクリーンを使い、ボラー連邦で使用していたエンジンの歴史と原理などを説明し始めた。

畑が違うクロノやはやてたちにはミノフスキーが言っていることの半分も理解できずに首をかしげることしかできず、ヴィータに至っ

ては知恵熱を出して倒れる始末だった。
ただ、こうした経緯やはやて、クロノの説得と交渉の結果、ミノフスキーは管理局への亡命および管理局への技術提供を了承してくれた。
クロノ、はやてはミノフスキーのこの判断を大いに喜んだ。
実際にミノフスキー自身も今の自分の現状は理解していた。
故郷にも帰れず、この星を出るにしてもここまで来た宇宙船は壊れている。
平穏な生活や研究開発を続けるには管理局からの援助を受けなければならない。
しかし、その管理局は自分が知らぬ間に故郷のボラー連邦と戦端を開いており、ボラー連邦に大敗北した。
ミッドでは自分に対して反ボラー感情が集中するのではないか？
そうなければ研究どころではない。
だが、彼らは全力で自分の身柄の安全は保障するという。
故にここは彼らを信じるしかなかった。
彼らも自分の持つ知識は欲しがっているみたいだ。
そして、何より、ミノフスキーが一番関心を抱いたのは、はやてやクロノから聞いた管理世界と呼ばれる星には魔法と呼ばれるオカルトめいた力が存在するのだという。
魔法と科学の融合・・・それこそが、自分が生涯探し求めていた究極の研究なのではないかとさえ、彼はそう思っていた。
しかし、この亡命・管理局への技術提供が後々にミノフスキー自身、そして管理局の運命に大きく左右する出来事になるとはこの時は、この場にいた誰もが予想していなかった。
クロノの場合、ナンバーズの死因に疑問を持ったものの、彼は管理局の裏の本質というものをまだ理解出来ていなかったため、予想できなかったのだ。
それ以前に彼には管理局の正義を信じていた点も関係していた。
それは、当然はやてたちにも同じ事が言えた。

はやてたちがミノフスキーの亡命交渉のため、ポルテへと赴いている頃、ミッドではある事件が起きていた。

「見えた!!あと少しでミッドに到着するぞ!!」
「ヤツはどうした!?」
宇宙空間にて間もなくミッドチルダにつこうとする管理局の大型輸送船のブリッジで乗員たちは慌てふためいている様子だった。
そして船長は艦底部に状況を訊ねる。
「ヤツは今、隔壁の向こうの倉庫に閉じ込めている!!」
ブリッジには空間ウィンドウが投影され艦底部に居る局員から状況が伝えられるが、背後の様子を見る限り、長くは持ちそうにない。
分厚い鋼鉄で出来た隔壁の周りには鉄パイプやコンテナでバリケードが設置されているが、何者かが隔壁の向こう側で体当たりをしている様子でドシン、ドシン、と大きな音が鳴り響き、今にも隔壁がこじ開けられそうになっている。
「向こう側の様子は!?ヤツを倒しに行った武装局員はどうなった!?」
「わからん!!恐らく生きている者はいないだろう!!それよりもミッドとの連絡は!?」
「今やっている!!〝空〟にも援軍要請をしている!!それまでなんとか持ちこたえろ!!」
船長がそう言った瞬間、一際大きな音がして隔壁が破られる。
「・・・無理だな・・・・時間切れだ・・・・」
「ぐあぁっ!!」
「ぎゃぁぁぁー!!」
「た、助けてくれー!!」
艦底部からの連絡はその言葉とそこに居た局員の悲鳴と共に途切れた。

ミッドでは普段と変わらない夜が訪れていた。
市街地では仕事帰りに一杯ひっかけて帰るサラリーマンやＯＬ。
恋愛に現を抜かす若い男女。

仲間と共に夜の街に繰り出している若者たち。
いつもと変わらない夜の風景は突如空の彼方から響いてきた轟音と共に崩された。
「お、おい、何だよ!?アレ!?」
「大型の次元航行船だ!!」
「なんでこんな市街地の傍をあんな低空で飛んでいるんだよ!?」
夜空の雲の切れ間から管理局の大型輸送船が降下してきた。
ただ、通常の航路から外れ、しかも市街地に此処まで近く降下して来るのは珍しい。
どうみてもあの大型輸送船の中で何かあったに違いない。
轟音に驚いた人々は空を見上げ、大型輸送船を指さしながら『何があった!?』『墜落するんじゃない!?』と騒いでいる。
幸いにも大型輸送船は市街地に墜落することなく、港湾区画まで飛んでいくと近くの海に着水した。
しかし、着水した大型輸送船は停止することなく港湾区画の岸壁に衝突して漸く停止した。
大型輸送船の衝突現場では消防隊が消火作業を行っている。
だが、大型輸送船が要請した〝空〟からの援軍は未だに到着していない。
新暦71年十月に起きた第八空港の火災事故でも〝空〟の到着は遅く、〝陸〟の消防隊が先に到着する事態となっていた。
しかし、空港の火災を鎮火し、事故の収拾を行ったのは〝空〟の魔導師と言う事になっており、当時、〝陸〟の総本山である地上本部責任者のレジアス中将は翌日の朝刊とニュースを見て憤慨した。
今回も〝空〟はまるで〝陸〟が行っている作業が終わる頃にやってきて彼らの手柄を根こそぎ横からかっさらう様な動きが見て取れた。
しかし、管理局としては何もいない訳にはいかず、事故の収拾に務めた。
「ホースをこっちに回せ!!」
「燃料に引火するぞ!!消火を急げ!!」

「どこの輸送船だ!?」
「管理局でチャーターしたモノです!!船名は・・・」
「なんで岸壁なんかに衝突した!?管理局でチャーターって〝海〟の輸送船だろう!?なんで空港や本局の港じゃなくて、ミッドの港湾地区なんかに!?」
「わかりません!!」
　通常の次元航行船ならば、専用の空港か本局の港に停泊する筈である。
　それがこの輸送船は本来止まる筈のないミッドの港湾区画にまるで墜落するかのように着水し、そのままの速度で岸壁にぶつかったと目撃者が多数いた。
　消防隊が消火作業を進めていると輸送船の甲板に人らしき影が見えた。
「隊長!!アレを!!」
「むっ!?乗員か!?」
　甲板に現れたのはこの輸送船の乗組員だった。
　ただ、その乗組員は怪我をしている様子で、
「た、助け・・・」
　岸壁の消防隊に助けを求めてきた。
　しかし・・・

　グシャ

　助けを求めていた輸送船の乗員を6、7メートルはあろう巨大な生物が前足で踏みつぶした。
　巨大生物の身体は赤く筋肉質な身体つき、そして頭部には鋭い二本の角に黄色い長い髪、口には鋭い牙の様な歯が並んでいる。
　その姿は第97管理外世界『地球』における日本の伝承や昔話でよく知られる鬼の様な外見をしていた。
「ば、ばばば・・・化け物だァァァ!!」
　鬼に似た巨大生物を見た消防隊は恐れおののき逃げ出す。

すると、巨大生物は輸送船から飛び降りると巨大生物は近くの消防隊に襲いかかる。
そこへ、管理局の公用車が巨大生物へと体当たりをする。
「グォォォォォォー!!」
巨大生物は悲鳴をあげて港湾区画の倉庫へと吹き飛ばされる。
「ちょっ、スバル!!いくらなんでも飛ばし過ぎだろうがぁ!!安全運転を心がけろよぁ!!大体、お前免許取りたてだろう!?」
「そんなこと言ったって『事態は逼迫している!!』って本部が急かすんだもん!!」
言い合いをしながら先程巨大生物に体当たりをした管理局の公用車から出てきたのは特別救助隊に所属するスバルとノーヴェだった。
そんな二人の様子を唖然としながら見ている消防隊。
「あ、あの・・・」
消防隊の一人の隊員が二人に声をかける。
「あっ、失礼しました。特別救助隊所属のスバル・ナカジマです」
「同じく、ノーヴェ・ナカジマです。現状の説明をいいですか?」
スバルとノーヴェは消防隊の隊員に身分証明書を提示して事情を訊ねる。
この港湾地区はスバルとノーヴェの父、ゲンヤが隊長を務める陸士108部隊の管轄地域だった。
そのゲンヤから特別救助隊に応援の出動要請が入り、スバルとノーヴェのコンビが現場に一番近い位置に居た事からこうして現場に一番乗りで到着したのだ。
「あ、ああ・・・」
消防隊員はこれまでの情報をかいつまんで二人に伝えた。
そして、最後に輸送船の中から未知の巨大生物が出てきた事を話した時、
「グォォォォォー!!」
倉庫から例の巨大生物が起き上がる。
車の体当たりをモロに喰らいながらも傷一つ負った様子がない。
巨大生物は物凄い跳躍力で再び輸送船の中へと入って行く。

「あっ、逃げた!!」
「逃がすかよ!!行くぞ、スバル!!」
「う、うん!!」
スバルはウィング・ロードを岸壁から輸送船へとつなぎ、
ノーヴェはエア・ライナーを岸壁と輸送船に繋いで、二人は輸送船へと乗り込んでいく。
輸送船の船内に入ると、船内の電気は消え、非常灯だけが灯る薄暗い空間となっていた。
二人はバリアジャケットを纏うと警戒しながら慎重に船内を進んで行く。
「うっ、これは・・・」
「ひでぇな・・・」
薄暗い船内は物凄い死臭に包まれており、思わず吐き気を覚える。
通路にはミイラ化した輸送船の乗組員の死体が彼方此方に転がっている。
「ひどい・・・」
(うぅ～・・・また私は救えなかった・・・)
休暇を満喫した後でスバルは再び救助隊なのに人を救う事が出来ない事実に胸を痛める。
「だから、空港じゃなくて港に墜落して岸壁にぶつかったのか・・・」
この輸送船が何故、本来の停泊地である次元航行船の空港ではなく、港湾区画に堕ちたのか納得がいった二人。
船を制御する人間がもう居なかったからだ。
市街地に墜落しなかったのが本当に不幸中の幸いだ。
それに本局の方では入港手続きやらなんやらで待たされるかもしれない。
あんな化け物が船内に居るのであれば、入港手続きなんて待ってはいられないし、本局も本局で船内にあんな化け物がいるのであれば、恐らく入港を拒否するに決まっている。
だからこそ、この船の乗員は本局ではなく、ミッド本土へ船を向かわせたのだろう。

もしかしたら、海に着水した時にはまだ生きていたのかもしれない。
ノーヴェは恐る恐る乗組員の死体を覗き込む様にして観察する。
「ノーヴェ、どうかしたの？」
「・・・この死体、妙じゃないか？」
「えっ？」
「この死体・死んで間も無い筈なのに完全にミイラ化している・・・いくらなんでもこんな短時間に死体がミイラ化するか？」
「そう言われてみれば・・・」
スバルもノーヴェと同じように恐る恐る死体を覗き込む様に死体を観察する。
この輸送船の乗員が生きていたのは先程の消防隊員の証言から取れている。
その他にもこの輸送船がミッドの管制塔と交信していた事も同じく消防隊員からの証言であるので、この輸送船の乗員たちは輸送船が墜落する直前まで生きていた筈である。
それがこの短時間でミイラ化するのはあまりにも不自然だ。
「それに、この死体・まだ暖かい・・・」
ノーヴェはミイラ化した死体の頬を触ると、この死体がまだ暖かい事が判明し、ますます疑問が深まる。
ミイラ化した死体が暖かい筈が無いからである。
しかし、いくら死体を観察しても分かる訳がなく、あの巨大生物をこのまま野放しにしておくわけにはいかない。
死因は後で検視官の人に頼めばいいだろう。
今、自分たちの役目はあの巨大生物を捕獲するか殺処分するのが優先である。
やがて、二人は中間層にある貨物倉庫に着くとその中へと入る。
すると倉庫の中には沢山の財宝が積まれていた。
「な、なんだ・これは・・・？」
「希少金属を使った美術品・・・みたいだけど・・・それにしても凄い量・・・どこから運んできたのかな？」

「この船一体何を運んでいたんだ？」
管理局の輸送船にしてはこの倉庫一杯に積み込まれていた財宝はあまりにも不釣り合いな量だった。
管理局の〝海〟の任務の一つに数多く存在するロストギアの回収があるが、この倉庫にある美術品や財宝はどうみてもロストギアとは言い難く、海賊のお宝、美術館の宝物品と言った方がしっくりくる。
そもそも、ボラー連邦への武力制裁失敗以降、新たな管理世界への探索は自粛されている。
しかし、全ての局員が活動を自粛している訳でない。
自粛している期間だからこそ、他の局員を出し抜いて、新たな管理世界を発見し、ロストギアを回収して来て本局へ納品すれば、昇給、昇格出来る。
この船の乗員もそうした密売みたいなやり方で手柄を狙った局員なのだろう。
二人が倉庫にある沢山の美術品・財宝に唖然としていると天井からあの巨大生物が両手の鋭い爪を突き立て降りてくる。
「っ!?」
二人は咄嗟に避けるが、巨大生物の体重で倉庫の床が抜けてノーヴェはそのまま巨大生物共々下層へと落ちていく。
「ノーヴェ!!」
「大丈夫だ!!スバル!!それよりもスバルはこの船を港から遠ざけろ!!このままだとアイツがまた港に逃げ込む!!船を港から遠ざければ、コイツの逃げ場を制限できる!!」
「わ、分かった」
ノーヴェはエア・ライナーを展開して下層へ滑り落ちながらスバルに輸送船を港から離す様に伝える。
スバルはノーヴェの事が心配になったがまたあの巨大生物が港に逃げ込んだから厄介だと思い、ノーヴェの指示通り、この輸送船を港から遠ざける為にブリッジへと向かった。
そしてノーヴェは輸送船の下層へと落ちていったが、そこは機関部だった。

「ここは機関室か・・・？っ!?」
そこには半透明になった輸送船の乗員が居て何事もなかったかのように機関を操作しようとしている。
「ど、どう言う事だ・・・これはっ？」
ノーヴェが機関室に居る乗員に恐る恐る手を触れること半透明になった乗員はノーヴェの手をすり抜けてしまう。
それと同じように半透明になった乗員の手は機関室にある機械をすり抜けている。
魂だけの存在となった彼らには物体を掴むことが出来ないみたいだ。
それでも彼らは生前と同じ行動を繰り返している。
そして、ノーヴェの眼前にはあの巨大生物が唸り声を上げながら立っていた。
「ナックルバンカー!!」
ノーヴェはジェット・エッジで巨大生物の懐へと入り、そのボディに硬質フィールドを纏う拳の打撃魔法であるナックルバンカーを叩き込む。
しかし、巨大生物はノーヴェの拳が届く前に霧のようにフッと消える。
「えっ？」
慌てたノーヴェの背後に巨大生物は現れ、お返しとばかりにその爪の突きをノーヴェに向ける。
「くっ・・・」
ノーヴェは咄嗟に背後に飛び退き、突きを躱す。
（こいつ・・・）
ノーヴェはあの巨大生物は消えた理由が分からなかった。
巨大生物はノーヴェの拳を飛び上がって避けた訳でもなく、転移魔法を使用した訳もなく、幻術のように消えたのだ。
しかし、魔法を使用した痕跡は全くなく、この巨大生物からは魔力も感じられない。
故にこの巨大生物がティアナのフェイクシルエットの様な幻影で

はない。
再び巨大生物と対峙するノーヴェ。
すると、
「なぜダ・・・ナゼジャマをスる・・・？」
巨大生物が片言ながらも人語を喋り始めた。
「喋った⁉」
ノーヴェが突然人語を喋った巨大生物に驚く。
そんなノーヴェを尻目に巨大生物は語り続ける。
「・・・ワレハ・・・ただ帰りたいダケダ・・・」
「帰りたい？どういう事だ？」
この巨大生物は何処かの世界で密猟にでもあったのだろうか？
しかし、この巨大生物の目的が自分の居た世界に戻る事であれば、この巨大生物が輸送船の周りから離れなかった事、そして一度港に降りたにも関わらず再び輸送船に戻った事、殺した輸送船の乗員の魂を使役して作業をさせていた事にも合点がいく。
「ワレハ帰るのだ⁉ジャマはさせぬ⁉」
「っ⁉」
意思疎通ができるのであれば、ノーヴェとしてはこの巨大生物を元の世界へ連れて帰りたいが、自分の故郷である世界へ戻る事の執念が物凄いのか、こちらの話は通じない様だ。
巨大生物はその巨体に似合わないスピードでノーヴェに迫ると左の前手でノーヴェを鷲掴みにする。
「ぐっ・・・」
そして髪の毛が伸びノーヴェを絡めとる。
すると、ノーヴェは物凄い脱力感に襲われる。
あの巨大生物の髪の毛がノーヴェの魔力、体力を奪っているのだ。
輸送船の乗員は恐らくこれでミイラ化されたのだろう。
「ジャマをスルな・・・ワレハ帰るのだ・・・」
「く、くそっ・・ち、力が・・・入らない・・・」
ノーヴェは意識を失いかけた時、ある光景がフラッシュバックする。

それは何処かの世界の神殿なのか、石造りの建物で周りにはその世界の民族衣装を纏った大勢の人々が居た。
服装や周辺の建物とかを見ると、文明レベルはミッドより低そうだった。
そして神殿の祭壇には金色の神像が安置されており、人々はその神像を崇拝していた。
そんな中、管理局の制服を着た局員とバリアジャケットを纏った武装局員がやって来た。
制服の局員がまず、その神殿の神官らしき人物と話をし、祭壇に祭られている神像を渡す様に言っている。
しかし、神官は管理局に神像への譲渡を断る。
すると、武装局員達は神官を殺し、神像を奪い、近くの集落を襲い始めた。
襲われた集落では、財宝や金目の物の略奪、女子供への性的暴行に虐殺など、本来管理局が法律で禁じられている犯罪行為を平然と行っている。
(な、なんだ・これは・?・なんで・・・・こんなひでぇ事を・・・・)
ノーヴェは目の前の光景が信じられなかった。
管理局の人間が平然と自分たちが定めた法律を破り、悪逆非道な事を平然と行い、更には、「我々、管理局に背いた当然の報いだ!!」なんて言っているのだ・・・・
そして巨大生物の声が耳に響く。
巨大生物は何度も「帰りたい」と叫ぶ。
しかし、その光景も突如、巨大生物の悲鳴の様な声で途切れた。
「ギャァァァァァ―!!」
ノーヴェが目を開けると、左腕にスバルのリボルバーシュートを喰らった巨大生物が悲鳴を上げている。
「ノーヴェ!!今だ!!」
「お、おう!!」
ノーヴェはなけなしの魔力を拳に集中して、
「ディバインバスター!!」

巨大生物のボディにディバインバスターを叩き込む。
魔力を吸っている時は実体化するのか先程は躱された攻撃も今度は通った。
「グォォォォォー!!」
ノーヴェのディバインバスターを喰らった巨大生物は雲散霧散するかのように消えてしまい、巨大生物が居た場所にはノーヴェがあの巨大生物に取り込まれそうになった時に見たあの金色の神像が床に落ちていた。
「これがあの化け物の正体？」
スバルが恐る恐る神像を手に取る。
「これ、何処かの世界の盗品だ・・・・」
「盗品？その根拠は？」
「・・・・さっき、あの化け物に取り込まれそうになった時に見たんだ・・・・あの化け物は・・ただ自分の生まれ故郷に帰りたがっているだけだった・・・・」
「・・・・」
ノーヴェの話を聞きながら響は神妙な顔で金色の神像を見つめ、ノーヴェは管理局の存在に疑問を感じ始めた。
巨大生物を倒したので、スバルは輸送船の針路を港へと戻した。
「お前そういえば、よく運転出来たな」
ノーヴェは今更ながら、スバルに次元航行船の操船が出来た事に気づく。
「ルキノさんから聞いていたからね」
「ふ～ん」
スバルが操船できる理由を聞いて納得したノーヴェだった。
港では既に他の特別救助隊や１０８部隊の捜査官らが待機していた。
輸送船を港に着岸させ、捜査官らが輸送船に乗り込もうとした時、
「ごくろうさまです。あとは我々、首都航空隊が引き継ぎますので」
と、ノーヴェとスバルが例の化け物を倒した後で、〝空〟の部隊がやって来た。

「何言ってんだ!?今更、のこのこと来やがって、なんで、地上を走る車より、空を飛べるお前らの方が遅いんだよ!!」
この〝空〟の局員の言動に納得いかなかったのが、ノーヴェだった。
化け物に殺されそうになり、更にその原因が〝海〟の連中の非道な行いかもしれないという光景を化け物の記憶から読み取った。
その調査を余所の部隊なんかに任せてはおけない。
もしかしたら、あの光景は真実であるのかもしれない。
だが、〝空〟の連中に任せたら、その事実を握りつぶされる可能性がある。
調査をするのであれば、自分やスバルが所属する部隊かゲンヤの部隊でなければ信用がおけない。
しかし、ノーヴェの進言は通る事なく、〝空〟の局員らは強引に〝陸〟の捜査官や救助隊、消防隊を下げて、自分たちだけで調査作業を始めた。
「くそっ!!」
隊舎に戻る中、ノーヴェは車の中で怒りを爆発させた。
彼女が叩いた部分は凹んでいる。
「・・・」
スバルはただハンドルを握り、前を向いているが、ノーヴェの悔しさは理解出来た。
翌日の新聞やニュースでもあの輸送船墜落事件については〝空〟が全て解決した事になっていた。
ただし、船の中に積まれていたあの大量の美術品については報道されることはなかったし、墜落原因についても現在調査中と真相を闇の中にしようとする気概が見えた。
「なぁ、スバル」
「なに?」
「これなんだと思う?」
ノーヴェはスバルにジュースの空き缶程の大きさの金属質のモノを見せる。

「そ、それはっ!?」
スバルは目を見開く。
ノーヴェの手の中にはあの巨大生物の正体である神像があった。
「ノーヴェ、持ってきちゃったの!?」
「ああ・・・コイツは元の世界にただ、還りたかっただけなんだ・・・あのままだと、管理局の倉庫か何処かのコレクターに横流しされちまうだろう?だから、私はいつかコイツを元の世界に還す」
ノーヴェはあの巨大生物が自分に見せた光景は決して幻でもなければ、出鱈目な光景でもないという確信を得た。
そして、いつかこの神像を自分の手で元の世界へ還す決意もしていた。
ノーヴェの手の中にある神像はその日を待つかのように、彼女の手の中で静かに鎮座していた。

百三話　ゴルバ再臨

狩人たるミョーズを撃破した地球艦隊は暗黒星雲の中を航行していた。
この暗黒星雲は地球から観測されていない星雲であり、この先に一体何があるのかは当然、地球人であるヤマト、まほろば、春藍の乗員たちは知らない。
しかし、地球を救うためにはこの未知なる宙域を進み、敵の母星まで行き、地球に打ち込まれたハイペロン爆弾の起爆装置を破壊しなければ、地球を救えない。
ここは敵の制宙権で当然、敵の艦隊が潜んでいるかもしれない。
さらに、宇宙気象の危険もある。
だが、地球艦隊はそれでも暗黒星雲中心点に向かって突き進んでいく。

宇宙戦艦ヤマト　展望室
ヤマトの展望室には酒瓶を持った佐渡と窓の外を見ているアナライザーの姿があった。
「アタリハモウ、真っ暗デスネ・・・星モ、何モカモ全然見エマセン」
機械の目を持つアナライザーのセンサー眼をもってしても周辺の状況が分からない。
「セッカク星デモ見ナガラオ酒ヲ楽シモウト思ッタノニ・・・」
相変わらずロボットとは思えない思考回路をしている。
「なぁに、花が見えなきゃ月が、月が見えなきゃ星が、星が見えなきゃ雲でも見る・・・昔から酒はそうして飲むもんじゃ。星が見えなくなったんなら、その分、地球からは見れん暗黒物質とやらを拝んでやろうじゃないか。・・・それが風流ってもんじゃぞい」
例え、窓の外が真っ暗な暗黒物質で包まれていてもどんな環境もプラス思考で見て酒を飲む佐渡。
「サスガハ大先生デス!!」

アナライザーはそんな佐渡を褒める。
「それにしても外はえらく荒れておるな・・・嵐か・・・何かの前触れでなければよいが・・・」
佐渡は窓の外に広がる漆黒の宇宙を見ながら何か胸騒ぎを感じた。

宇宙戦艦まほろば　艦橋
「しかし、凄い密度のガスだな・・・星雲の中心を越えたんだから、もうちょっとマシになるかと思ったんですけどね・・・」
操舵桿を握りながら永倉が窓との外を見ながら呟く。
「位置的ニハ、モウ後、数光年デ星雲ヲ抜出セル筈デス」
まほろば　の艦橋にはバトライザーも上って航海の補佐をして貰っている。
「恐ラク、コノ宙域ハ、局地的ニ、ガスノ濃イ宙域ナノデショウ」
「艦長、レーダーがもう限界です。ノイズと断続的なホワイトアウトで役に立ちません」
レーダー担当の新見が既に、まほろば　のレーダーが役に立たない事を報告する。
ＣＩＣからも同様の報告が上がっている。
このレーダー不調の原因はガス状物質が濃密になり過ぎて、液体に近い密度になった影響である。
恐らくヤマトや春藍のレーダーも、まほろば　と同じ様に使い物にならなくなっている筈だ。
しかし、通常宇宙空間にこれだけの濃密な物質が存在するなんて考えられない。
このガス状物質は収縮していって、やがて一つの巨星でも生み出そうとしているのだろうか？
それとも現時点において地球では存在が確認されていない全くの異常物質なのだろうか？
この暗黒星雲が地球から観測されていない為、あまりにも情報が不足していた。
乗員たちの疑惑や疑問を乗せたまま地球艦隊は進んで行く。

だが時折、小惑星や岩塊が飛んできたりもする。
衝突すれば損傷は免れない。
周囲が暗黒物質で包まれているからといって何もないわけではない。
「これからは有視界航法をとるより仕方がないか・・・・通信長、左舷及び右舷パネルを作動させろ」
「了解」
少しでも有視界の範囲を広げる為、良馬は艦橋にあるパネル全てを作動させ、見張りをしやすくする。
なお、この時、ヤマトでも同じように艦橋のパネル全てを起動させたのだが、古代はつい、癖でサーシアの事を雪と呼んでしまった。
雪に間違えられたサーシアは「違うわ・・・・」と頬を膨らませて、古代に抗議した。
古代も今、ヤマトのレーダー席に座っているのが雪ではなく、サーシアであることを思い出すと訂正した。
その直後、ヤマトに敵のショックカノンが命中した。
「ヤマト被弾!!」
「敵の砲撃か!?」
被害はマスト、上甲板にレベル1の装甲剥離の被害を受けたが、航行に支障はない。
地球艦隊のレーダーは使用不可能なので、どこに敵が潜んでいるのかは分からない。
しかし、敵はヤマトに対して攻撃を仕掛けてきた。
と言う事は、敵にはこちらの姿が見えている可能性がある。
暗黒星団帝国と名乗るだけあって、この濃密な暗黒物質だらけの空間でも相手のレーダーはきちんと機能しているのだろう。
反対に地球艦隊のレーダーは使用不能・・・・
出鱈目に攻撃しても敵に命中する保証はなく、逆に一方的な消耗戦を強いられる事になる。
「艦長、火器管制システムにも影響が出ています!!レーダーが完全に利かない今、火器の使用はほぼ不可能です!!やみくもに撃っても消耗

戦になるだけです」
「分かっている」
良馬はジッとパネルを睨む様に見続けると、右舷パネルに敵艦隊の姿がおぼろげに見えてきた。
「推定距離右舷前方一万宇宙キロ、各砲塔戦闘配置、通信長、各艦にも情報を伝達」
「りょ、了解」
ギンガは良馬が目視した情報をヤマトと春藍へと送る。
だが、周辺の暗黒物質の濃度は更に増し敵の姿が見えなくなってきた。
地球艦隊は左舷側にある暗黒ガス雲の中に一時退避しつつ、敵艦隊をそこで待ち伏せすることにした。
地球艦隊が暗黒ガス雲の中に入ると、敵艦隊も見失ったのか敵艦からの攻撃が止んだ。
暗黒星団帝国のレーダーは地球艦隊のレーダーよりも優れてはいるが、やはり宇宙の自然の前には限界があるのだろう。
地球艦隊は暗黒ガス雲の中でジッと息を殺して敵が来るのを待った。
「二十秒経過、敵艦隊との推定距離、八千宇宙キロ」
新見が敵の進撃速度、最後に確認された距離から敵艦隊の予想位置を計算する。
「三十秒経過・・・・」
「右四十度転進、雲海より出る。主砲発射準備」
「右四十度転進、ヨーソロー」
地球艦隊は雲海から出ると、敵艦隊は地球艦隊に横腹を晒していた。
眼前に自分たちへ横腹を晒している敵艦隊の姿を見ると、ヤマトから攻撃命令が下る。
「主砲斉射!!撃て!!」
「了解、主砲発射!!」
地球艦隊からは何発ものショックカノンが敵艦隊へと向かって放

たれる。
さらに追加でミサイルも発射された。
雲海からいきなり出てきた地球艦隊の攻撃を受け、敵艦隊は爆発、炎上し始める。
中には被弾してコントロールが利かなくなり、味方の艦と衝突する艦もいた。
しかし、敵艦隊も一方的にやられるわけでは無く、艦首を地球艦隊へと向け、反撃して来る。
「コースターン、右８０度」
「いや、このまま撃て!!」
「主砲発射!!」
まほろば　の下部に逃れようとした敵艦隊の上部で、反転しかけたまほろば　は敵に対して逆さまの状態で攻撃した。
敵艦隊は次々と被弾し、爆発していく。
敵艦隊の一番後方に居た旗艦らしき戦艦は味方が次々とられていき、敗色が濃厚となると、即座に転舵すると、撤退行動に入った。
「奴さん、どこへ逃げるつもりなんでしょう?」
「もしかしたら、行先に出口があるのかもしれない」
「追尾しますか?」
「うん・・・今はこの暗黒星雲を抜けなければ・・・」
地球艦隊は敗走する敵戦艦を追いかけようとする。
すると、後ろから敵の別動隊が迫って来た。
暗黒ガス雲の暗闇を利用して背後から迫って来た。
「全艦に告ぐ、奴等を追え!!絶対に逃がすな!!追撃するのだ!!駆逐艦隊は両翼へ展開!!・・・くれぐれも、予定航路を外れるな!!」
「敵は速度を上げて、左右に展開しました」
「このまま包囲するつもりなのでしょうか?」
「だが、最初の一撃以外攻撃を仕掛けてこないのは妙だ」
(こちらの反撃を恐れている・・・?いや、そんな筈が無い・・・数の上では彼方が上なのだから・・・それにこの宙域は連中のホームグラウンド・・・まさか、この先で何か罠でも張っているのか?)

良馬は後ろから迫って来る艦隊に違和感を覚える。
「地球艦隊め・・・なりふり構わず逃げているな。レーダーが利かないとは言え、臆病な連中だ」
地球艦隊の背後から迫る艦隊の旗艦では、艦長が一発も反撃せず、逃げ回っている地球艦隊の姿を見て嘲笑っている。
「艦長、あと２００で予定地点に到達します」
「ふん・・・では、この辺で良いだろう。全艦、戦闘態勢!!両翼の艦隊、全砲門を開け!!我々が追い込んだその先に何が待ち受けているのか、それを知った時の奴等の顔が目に思い浮かぶわ・・・グロータス准将に繋げ、敵を罠に追い込むのに成功したとな」
「ハッ!!」

「グロータス司令、暗黒星雲内にて行動中の第三艦隊より通信です」
「読め・・・」
「ハッ、『敵を罠に追い込むのに成功。間もなく、そちらへ向かう。我が艦隊は当初の予定通り、後方にて網を張る』・以上です」
「フフフフ・・・とうとう来よったか・・・さあ来い!!今度はこの私自らが貴様らを地獄へと叩き落してやろう」
グロータスは不敵な笑みを浮かべて地球艦隊が来るのを待った。
後方から敵艦隊の追撃を受け、逃走する地球艦隊。
「乱流が少しおさまりました!!レーダー機能、一部回復!!」
「後方の敵艦隊の様子は!?」
「包囲網は解いていませんが、進撃速度を落としています」
(やはり、妙だ・・・ここに来て進撃速度を落とす?何故・・・)
(暗黒ガス雲が薄れてきたからか?しかし、敵はいまだに包囲網を解いていない・・・だとすると・・・ま、まさかっ!?)
良馬は敵の奇妙な行動にある可能性を見出した。
「ああ!!・・・な、なんだ!?あれは!?」
操舵桿を握っていた永倉が声をあげる。
地球艦隊の眼前には、忘れもしない・・・イスカンダルで戦ったあの蛸壺・・・もとい、ゴルバがいた。

「あ、あれは・・・ゴルバ!!」
「ま、間違いない・・・ゴルバだ!!」
イスカンダルでデスラー率いるガミラス艦隊と共闘し、苦戦しながらもようやく倒したあのゴルバが居たのだ・・・しかも一基だけではない・・・
(やはり、罠だったか・・・)
敵艦隊の奇妙な動き・・・それは、地球艦隊をこのゴルバの包囲網の中に誘い込むためのモノだった。
ゴルバは左右にそれぞれ三基、前方に一基の計、七基・・・
「ゴルバが・・・あの厄介な要塞が七つも・・・」
ヤマト、まほろば、春藍の乗員たちは大きな衝撃と驚愕、そして絶望感のようなものを抱く。
先程まで自分たちが航行してきた宙域には敵艦隊が逃走防止の為に包囲網を強いている。
地球艦隊は完全にグロータスの罠に落ちてしまった。
そのゴルバの一基の司令塔では、
「ふはははははっ!!驚いたか!?このグロータスが指揮する戦力をもってすれば、貴様らなど、虫けら同然だと言う事をな!!しかし、貴様らには礼を言うぞ!!中間基地を破壊されたのは痛いが、なによりも邪魔なミヨーズめを始末してくれたのだからな!!」
やはり、グロータスはミヨーズの事を自分の出世街道の障害物であると認識しており、虎視眈々とミヨーズの排除を狙っていた様だ。
そして、今回の地球占領作戦においてはそのチャンスがようやく巡って来た。
まさに千載一遇の好機だった。
グロータスにとっては、ヤマトら地球艦隊は、自分に幸運をもたらす毒蛇にでも見えたのだろう。
だが、いつまでも自分たちの庭先に毒蛇を放置するわけにいかない。
ミヨーズの失点を重ねる結果となったヤマトを中心とする地球艦隊を撃破すれば、自分の地位と権力は今よりも更に上がる。

自分には暗黒星団帝国が誇るゴルバが七基もある。
地球艦隊ごとき、簡単に撃破できるという自信が彼にはあった。
「ここが貴様たちの墓場だ。これ以上貴様らを我が母星へ近づける訳にはいかん!!さあ、深淵へと続く暗黒星雲の渦の中に巻き込まれ永遠にさまよい続けるがいい!!全要塞、攻撃準備!!彼奴らを原始の塵へと還すのだ!!」

「どうします!?相手があのゴルバでは分が悪すぎるどころか、全く歯がたちませんよ!!ここは何とかこの宙域から脱出しなければ・・・」
フェリシアが七基ものゴルバを相手になんて戦いを挑んだところで勝利するのは難しい・・・と言うか事実上不可能に近いので、この場は戦闘ではなく退避するしかないと言う。
「でも逃げるってどこに?この乱流の中じゃ、ワープ何てできこっないぞ!!後ろも敵艦隊が包囲網を敷いているんだ」
艦橋内に絶望、焦りが漂う空気の中、
「確かにこの包囲網を突破するのは至難の業だ・・・しかし、逆に考えて見ると、これほどの敵が待ち受けていると言う事はやはり、この星雲の先には何かあるということだ・・・」
「ですが、艦長」
「我々は地球を救うためにヤマトと共に旅立ったんだ・・・そして、地球では今も我々よりも苦しんでいる人々が戦い、我々の帰りを待っている人がいるんだ・・・」
良馬は沖田艦長と同じくまだ絶望はしていない。
ガミラスとの戦いの時も、ガトランティスとの戦いの時だって大きな絶望感を味わった。
それでも、希望を捨ててはならない。
「その通りだ」
「山南艦長」
「確かに戦力は歴然としている・・・だが、『窮鼠猫を噛む』の言葉通り、決死の思いで立ち向かえば、開けない道はない・・・その事は沖田艦長と共に戦い、その意思を継いだ君たちが一番よくわかっている筈だ

…一度は諦めたこの命…私は賭けても良い。逃げる為でなく、道を切り開らく為ならばな…」
眼前にゴルバが七基も存在し、絶望しかかったが、ヤマト、まほろば、春藍の乗員は地球に居る大事な人々のため、勝ち目が薄いながらもゴルバとの戦いへと挑む。
確立は決して０％ではない。
それに一度はゴルバを倒し、ガミラス、ガトランティスとも戦い生き残ってきたのだ。
ここで負ける訳にはいかなかった。
「目標、敵ゴルバ型要塞、各砲戦闘用意!!」
地球艦隊は果敢にもゴルバ型の要塞群へと接近する。
ただ、ゴルバはイスカンダルの際に見せたあの強力な主砲・α砲を撃ってくる気配はなかった。
また、退路を塞いでいる敵艦隊も進撃して来る様子はなく、ずっと包囲体勢をしているままだった。
「妙ですね…ゴルバがあの強力な主砲を撃ってくる気配がありませんね」
ゴルバはその装甲は勿論の事、あのα砲の威力はイスカンダルで見た限り、かなりの威力がある。
いうなれば、α砲はゴルバの切り札と言ってもいい。
そのα砲をゴルバ群は地球艦隊に向けて撃ってくる気配がない。
その訳はこのゴルバ群の配置に関係していた。
「おそらく同士討ちを避けるためだろう…こちらを包囲している以上、あの強力な主砲を撃てば、我々を撃破する事は可能だが、その主砲は反対側に展開する味方のゴルバにも命中してしまう可能性があるからな…」
いかに強力な防御力を誇るゴルバでも波動砲やデスラー砲とは異なる強力なエネルギー砲であるα砲の破壊力の前には無力なのかもしれない。
「では、あの主砲を連中は使用できないって事ですか?」
あの強力なα砲が使用不能となれば、地球艦隊にも勝機は見える。

「いや、安全なのは我々がゴルバの包囲陣が形作る『円』と同じ平面上にいる場合のみだ・・・こちらが上下のいずれに大きく移動すれば、敵は同士討ちの心配なくあの強力な主砲を撃てる・・・それに同士討ちが起こるのは円の内側に向けて発砲した場合のみだ。円の外に向かって撃てば、仲間を撃つ心配もない・・・我々が円の外・・・つまり、ゴルバの包囲陣から外へ脱出しようとすれば、間違いなくあの主砲の集中砲火を浴びる事になる」
「なんてこった・・・この包囲陣から出るとそれがそのまま死に直結するって事か・・・」
「では、敵は主砲で一気に殺さず、じわじわといたぶってやろうと言う事ですか？」
「そうだろうな」
「なんて奴等だ・・・」
　主砲が飛んでこないとはいえ、じわじわとなぶり殺しにしてくるゴルバに対して、不快感を覚える。
　後方の敵艦隊もゴルバの集中攻撃による同士討ちを防ぐために包囲陣を敷いたままで進撃してくる気配がないのだ。
「各要塞、攻撃準備完了」
「よしっ、攻撃開始!!」
　七基のゴルバ群からは攻撃が開始される。
　地球艦隊は応戦するが、ゴルバの強力な装甲の前には無力でかすり傷一つ与えられない。
「くっ、やはり、ショックカノンが通用しない・・・」
　敵の装甲で無効化されるショックカノンを見てフェリシアは悔しそうに顔を歪める。
　ゴルバ自体の装甲の他にプレアデス級の戦艦でも使用されている強力なエネルギー偏向バリアーがどうにも厄介だ。
「フフフフ・・・圧倒的じゃないか我が軍は」
　グロータスは口元に笑みを浮かべ、戦況は自軍が有利な展開となっている事にご満悦の様子。
「ゴルバがエネルギー偏向バリアーを搭載しているのは予め予想がつ

いていたが・・・何しろ、波動砲やデスラー砲が通用しない相手だからな・・・」
「では、実弾でしかダメージを与えられないって事ですか!?ミサイルや魚雷、主砲の実弾だって限りがあります」
「・・・」
プレアデス級の様に確かに実弾攻撃ならばゴルバにもダメージを与えられるかもしれない。
だが、地球艦隊が保有するミサイル、魚雷、主砲の実弾で七基のゴルバを倒せるか正直分からない。
でも、やらなければならない。
地球艦隊はミサイル、魚雷、実弾による砲撃を行う。
やはり、暗黒星団帝国の兵器はエネルギー弾には強いが実弾には弱かった。
ゴルバにもかすり傷程度の損害が出始めた。
「ぬぬぬ・・・ミサイル攻撃と言い、この砲撃といい、実弾等と言う下等な攻撃を行いよって・・・」
予想外な地球艦隊の行動とかすり傷程度とはいえ、ゴルバに損害を与えた事でグロータスは不機嫌そうに眼下の地球艦隊を睨みつける。
しかし、かすり傷はかすり傷・・・ゴルバ自体の撃破までには至っていない。
このまま消耗戦に持ち込まれれば、いずれミサイル、魚雷、実弾が尽きてしまう。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋
「第三艦橋被弾!!」
「左舷ミサイル発射口被弾!!」
「右舷魚雷発射口被弾!!」
「艦載機発進口被弾!!」
ゴルバの攻撃を受け、艦橋には各被弾箇所の被害が上がってくる。
いよいよ敗色濃厚となってきている感じだ。
「くっ、このままじゃ消耗戦になっちまう・・・どうする古代?」

「あとは・・・覚悟を決めて接近し、ゼロ距離射撃を試みるぐらいしかないか・・・しかし、このまま座して死を待つよりは・・・」
「待て、古代。特攻を選ぶのは俺たちの新兵器をつかってみてからにしてくれ・・・」
消耗戦となり、実弾が尽きる前にゼロ距離射撃を敢行すればあるいは・・・と思ったが、ゴルバに接近すれば、それだけ被害も大きくなる。
撃沈される確率もグーンと上がる。
しかし、まだ手はあるとトチローが止める。
「新兵器？」
「ああ・・・波動カートリッジ弾だ」
「波動・・・カートリッジ弾？」
聞いた事の無い砲弾の名前がトチローの口から出た。
「うむ、主砲の実弾オプションのカートリッジ内に波動砲と同じタキオン波動収束エネルギーを仕込んでみたんだ。だが、波動砲の１００分の１以下のエネルギーしか仕込まれていないから、本当に通用するかどうかはわからんがな・・・ともかく、テストも無しのぶっつけ本番だ。一か八かの博打だが、やってみて損は無い筈だ」
「おい、博打とは何だ、博打とは!!俺の辞書に『偶然』って文字なんかねぇぞ。だいたい、お前だって自信満々だっただろうが」
波動カートリッジ弾の開発にあたっては、真田はもとより、トチローも関係していた。
この二人の合作ならば余程の事がない限り、失敗はありえない。
「勝機は・・・勝機はあるのか？」
守が真田に波動カートリッジ弾を使用しての勝機があるのかを問う。
「ああ、イスカンダル戦でのデータから、ゴルバを始めとする敵艦はエネルギー弾攻撃に脆いと言う事は判断できる。あの強力なエネルギー偏向バリアーはその弱点の裏返しというわけだ・・・」
「そういえばそうですね・・・」
相原が思い出したかのように納得する。
「だが、偏向バリアーを突き抜けられるのは実弾しかない・・・ならば、

実弾に波動エネルギーを込めてしまえば良いと言う訳だ」
「なるほど、トロイの木馬みたいなものか・・・」
「よろしい、ならば、急ぎ波動カートリッジ弾の用意だ」
守が波動カートリッジ弾の準備を命令する。
「では、自分は第一主砲室へ行きます」
「うむ、頼むぞ」
「了解」
南部は精密射撃をするため、第一艦橋から第一主砲室へと降りた。
「アナライザー、お前も波動カートリッジ弾の用意を手伝ってくれ」
「リョウカイデス」
アナライザーも波動カートリッジ弾装填の手伝いに向かった。

波動カートリッジ弾の使用についてヤマトから春藍、まほろば　へ伝達された。
シリウスにて補修と補給、レーダーの改修を行った際、まほろばと　春藍にも同じく波動カートリッジ弾は積み込まれていた。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「なるほど、わかりました。直ちに準備します」
「砲雷長、聞いた通りだ。急ぎ波動カートリッジ弾の準備だ」
「はい!!」
アナライザー同様、まほろば　ではバトライザーも波動カートリッジ弾の準備を手伝い、主砲へヤマトから受け取った波動カートリッジ弾の装填作業が始まる。
波動カートリッジ弾を準備している間にもゴルバからの攻撃を容赦なく受け、まほろばでも各部に被害が及んでいる。
応急修理班やメディックが艦内を駆け回り、被弾部の修理、負傷者の搬送や手当てに奔走している。
医務室も負傷で溢れかえっており、リニスが手早く治療していくが室内に充満するうめき声や絶叫、悲痛な声は増すばかりだ。

「バカスカ撃ってくる敵ね・・・ちょっとは手加減や一服したらいいのに・・・」
落ち着いている様子にリニスであるが、彼女自身も万が一のことは覚悟していた。
艦首の弾薬庫では砲術員の他にバトライザー、手空き者総動員で波動カートリッジ弾の準備が行われていたが、被弾するたびに艦全体が大きく揺れて作業はなかなかはかどらない。
「波動カートリッジ弾の装填はまだか!?」
「あと三分です」
あと三分で波動カートリッジ弾の装填作業が終わる報告がきたがその三分が物凄く長い時間に感じられた。
「敵、小型の攻撃艇を射出しました」
ゴルバであるからには当然、テンタクルスも装備されていると予想はしていたが、まさかここでテンタクルスを出してくるとは間が悪い。
「くそっ、こんな時に・・・」
「艦首ミサイルで応戦せよ!!」
「了解、艦首ミサイル発射!!」
艦首ミサイルでテンタクルスを迎撃するも、何艇かはそのミサイル攻撃をかいくぐって接近して来る。
「敵小型艇の何艇かはミサイル攻撃をかいくぐった模様」
「波動爆雷で防衛網を張れ」
次に波動爆雷でテンタクルスの接近を防ぐまほろば。
艦首部のＶＬＡから放たれた波動爆雷はテンタクルスの針路を遮るように発射され、テンタクルスは次々と波動爆雷に体当たりするかの様な形で迎撃される。
辺りはテンタクルスと波動爆雷による爆煙で包まれた。
その時、ようやく波動カートリッジ弾の準備が整った。
「波動カートリッジ弾、発射準備完了!!」
「目標、敵ゴルバ型浮遊要塞!!」
「発射!!」

ヤマト、まほろば、春藍の主砲からは次々と波動カートリッジ弾が発射された。
やはり、暗黒星団帝国の偏向バリアーは実弾に関しては無力で波動カートリッジ弾は偏向バリアーを通過してグロータスが座上するゴルバへと命中する。
すると、ゴルバのあちこちで爆発が起き始める。
「敵の砲弾が動力炉を貫通!!誘爆が広がっています!!」
「何故・・・何故だ・・・どうしてこのゴルバが地球の戦艦ごときに・・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・ぁぁぁぁぁぁぁぁー!!」
グロータスの絶叫と共にゴルバは誘爆を繰り返して爆発、その衝撃波を受け、周囲のゴルバも次々と誘爆していく。
「急速反転、離脱」
爆発に次ぐ爆発、白色の閃光が渦巻く中を地球艦隊は全速でこの宙域から離脱していく。
ゴルバがやられた以上、この宙域から出てもα砲の脅威もなくなり、後方の包囲艦隊もゴルバがやられたのを確認すると、地球艦隊を攻撃することなく、撤退していく。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋

もうだめかと思っていた中、波動カートリッジ弾の一斉射撃でゴルバ全てを倒したことで、主砲制御室からは歓声が沸き起こる。
「やった」
「やったぞ!!」
南部以下砲術員が手放しで喜んでいる。
おそらく、まほろば、春藍でも同様の事が起きているだろう。
しかし、第一艦橋では歓喜の声は上がらず、先程の光景に対して腑に落ちないと言うか、唖然としていた。
「たった一つを破壊しただけで、これほどの大爆発と誘爆が・・・」
「おかしいですな・・・衝撃波を受けて誘爆したにしろ、こちらは無傷で、あの強固なゴルバ型要塞の方は爆発するとは・・・いくらなんでも

おかしすぎます」
　これほどの戦果はこれまでの戦いでは見られない現象だった。
「もしかすると、暗黒星雲の深部領域に入っているせいで、物質の反応が変わってしまっているのかもしれないな」
「反応が？」
　真田がゴルバの誘爆についてこの暗黒星雲に関係があるのかもしれないと言う。
「たとえば『反物質』だ。憶えているか？」
「反物質・・・確かテレサが使っていたものでしたね・・・」
「そうだ。我々の世界を構成する常物質とその対極に位置する反物質が接触すると『対消滅』と言う現象が起き、莫大なエネルギーを放出する・・・そして、この場合、波動エネルギーが常物質で、暗黒星雲やゴルバ型要塞を構成する物質が反物質だとしよう・・・」
「なるほど、それで、あんな大爆発が・・・」
「だとすれば、敵のバリアーさえクリアすれば波動砲は敵に効果的どころか、無敵って事じゃないですか」
「だが、この仮説が当たっているとすれば、波動砲は今後よく考えてから、使用しなければならない。暗黒星雲を突き抜けた後も波動エネルギーは、同じ様な強力な作用を顕すかもしれない。対消滅とまではいかずとも、それに近い融合反応・・・仮に『波動融合反応』とでも呼ぼう。それほどの反応を引き起こすとなると、どうなってしまうのか予測がつかない。下手をすると波動砲を使用した我々までもが、巻き込まれてしまうかもしれない」
「なるほど・・・わかりました・・・」
　今回はゴルバのみが誘爆したが、今後の波動砲の使用に関しては慎重にならなければ、次は自分たちがゴルバの様に誘爆に巻き込まれる可能性があると真田は示唆した。
　敵の追撃もなく、グロータスのゴルバの包囲網を突破した地球艦隊は負傷者の集計と手当て、艦の修理、乗員の休息に入った。
　そんな中、古代はヤマトの展望室で窓の外をジッと見て、婚約者である雪の事を思っていた。

そこへ、
「おじさま・・・」
サーシャが展望室へと来て、古代に声をかける。
「・・・ああ、サーシャか・・・すまなかった・・・君と雪を間違えてしまったりして・・・」
古代はサーシアに雪と間違えた事を謝る。
古代としてはつい、いつもの癖だったのだろう。
サーシャが座っているレーダー員の席は普段は雪が座っていたし、サーシャの容姿も長い金髪に母親であるスターシャに似ている容姿だからだ。
そもそも雪自身がスターシャの妹である故・サーシャに似ており、姉であるスターシャも間違えたほどである。
「あたしのほうこそごめんなさい・・・間違えられたぐらいで怒ったりして・・・」
一方、サーシャも間違えられただけで怒るなんて大人げないと思い古代に謝った。
「ほんとうは、おじさまを元気づけてあげなくちゃいけないのに」
「人間って不思議なもんだな。いなくなって初めてその人の値打ちがわかるなんて・・・」
「どうしているかしら、雪さんは・・・あたしも会いたかったのに」
「あの時の状況じゃ、とても生きているとは思えない。でも、おれは信じている・・・」
「・・・」
通常ならば、あの時・・・連絡船でのターミナルにて雪が敵弾に倒れた時、周囲には沢山の敵兵が居た。
雪は敵兵の手によって殺されたと思う。
それでも古代は敵兵が雪を殺さずに捕虜にした可能性もあると思っていた。
その場合、雪が生きている可能性はある。
「雪は生きている・・・きっと生きている・・・」
「ええ、きっとそうよ・・・」

サーシャも古代の言うとおり、雪の生存を信じた。
ただ、この時のサーシャは神妙な面持ちだった。
この時、サーシャは自分でも知らない内に古代の事を叔父ではなく、一人の異性としての感情が芽生えていたのかもしれない。
一方、彼女の双子の妹であるユリーシャは天真爛漫な性格なため、彼女が良馬に対する思いが異性に対するモノなのかは分からない。
だが、恋人であるギンガにとっては気が気でない。
良馬は地球では有名な財閥の人間・・・
ユリーシャはイスカンダル王家の人間・・・
自分は中嶋家の養子・・・
ユリーシャと自分・どちらの家柄が良馬と釣り合うのかは、はっきりと分かる。
それに自分は良馬の家族・忍に紹介してもらったが、自分と良馬は古代や雪と違って、まだ正式に婚約をしたわけでは無い。
ユリーシャが密航をしていなければ、こんなモヤモヤを抱くことは無かっただろう。
サーシャ、そしてギンガのモヤモヤとした思いはまだ続く事になるだろう。

ミョーズ、グロータスを破り、着実に暗黒星団帝国の本星へと近づいている地球艦隊。
その頃、占領下にある地球では、占領軍とパルチザンの戦いは続いていた。
しかし、未だにハイペロン爆弾の占領には至っていない。
「うわぁ、例の未確認生物だ!!」
「撃て!!撃て!!何としてでも仕留めるのだ!!」
占領軍の兵士たちはボ〇太くんの姿を見て、半狂乱になりつつボ〇太くんへレーザー銃を撃つ。
ボ〇太くんは占領軍の兵士たちにとってトラウマの様なモノが植え付けられているのかもしれない。
「もふる!!」

「ふもっ!!」
「グアッ・・・・」
「ぐふっ・・・・」
　占領軍の兵士たちは次々とボ○太くんたちに斃されて行く。
「ふもふもふもっふる　（大丈夫ですか？隊長）」
　ソリッ○・ス○ーク仕様のボ○太くんに量産型ボ○太くんが駈け寄る。
「ふも・・・ふもふもふもふも・・・ふもっふる、ふもふもふも　（ふっ・・・いいかげん隊長ってのはやめてくれよ・・・今じゃお前の方が隊長だろう？）」
　ソリッ○・ス○ーク仕様のボ○太くんには古野間が入って、近づいてきた量産型ボ○太くんには北野が入っていた。
「ふもふも、ふもっふる、ふもふも。ふもふもっふるふもふも・・・
（まったく、お前さんの指揮は完璧だ。さすがヤマトに乗っていただけのことはあるぜ・・・・）」
「・・・・」
　量産型ボ○太くんの他にもう一体、オレンジ色のボ○太くんもおり、古野間と北野のやり取りを見ていた。
　オレンジ色のボ○太くんの中にはティアナが入っていた。
「ふもふもふもふっる、ふもふもふもふも・・・（前にも言ったが、俺は考えるよりは身体を動かす方が得意でね・・・・）」
（確かに、北野さんの指揮は凄い・・・それにこの戦闘スーツも・・・・）
　六課時代、センターガードを務めていたティアナから見ても北野の指揮は凄かった。
　彼からも学ぶ点はいくつもある。
　そして、外見は遊園地にいそうな着ぐるみっぽいこの戦闘スーツの性能にも驚かされた。
　空を飛べないと言う弱点はあるが、それを差し引いても防御力は高いし、武器もそれなりの威力がある。
（管理局が知ったら、〝陸〟が欲しがりそうだけど、本局は絶対に認めないわね・・・・）

そう思っていると、レーダーに反応がある。
（これはっ!?）
「ふもふも、ふもっふるふもふも!!ふもふもふもっふるふもふも!!（隊長、レーダーに反応です!!エネルギーから敵の戦車です!!）」
ティアナは北野と古野間に敵の戦車部隊が近づいていることを報告する。
「ふもふもふもふっる（一旦この場から退却しましょう）」
ボ〇太くん部隊はすぐにその場から撤退する。
（古代さん・・・島先輩・・・僕たちはこの地球で頑張っています・・・先輩たちも頑張って下さい・・・）
撤退する中、北野は空を見上げ、遥か彼方の星の海で戦っている先輩たちの事を思った。
占領軍の戦車部隊が現場に着いた時、戦闘は既に終わっており、地面には仲間の兵士の死体が転がっているだけだった。

百四話　二重銀河へ・・・・

ポルテにて、ボラー連邦からの亡命希望者、ミノフスキーの亡命が決まり、はやては本局へその旨を伝える。
「それで、亡命希望者はミッドへの亡命を受け入れたのね？」
通信画面の向こうにはリンディがおり、はやてに今回の任務の成果を訊ねる。
「はい・・亡命希望者であるポピェーダ・ミノフスキー技術官はミッドへの亡命を受け入れてくれました」
「それで、その技術官のレベルはどのくらいなの？」
「事情を聴いてみたところ、ボラー連邦に居た頃、彼は母国が使用している宇宙戦艦のエンジン設計を担当していたみたいで、その設計図の一部を見せてもらいました。そのことから彼はエンジニアとしては一流の技術者です。彼の技術があれば、管理局でもボラー連邦や地球防衛軍と同等の宇宙戦艦が作れると思います」
クロノはリンディにミノフスキーの技術を用いれば管理局でもボラー連邦、防衛軍と同等のエンジン性能を持った宇宙戦艦が建造可能だと判断し、その旨を伝える。
「そう・帰りも気を付けてね」
「はい。それではミッドで会いましょう」
リンディに一通り報告した後、通信をきった。
はやて、クロノからの報告を聞いたリンディとしては様々な思惑が渦巻いた。
（これで、管理局の艦は従来よりも性能が上がる・・・でも、それがかえって管理局を間違った方向へと導いてしまうんじゃないかしら・・・？）
リンディはボラー連邦、防衛軍と同等の性能をもつ宇宙戦艦が今後、建造されれば管理局の次元航行艦の遭難や外宇宙からの外敵の襲撃からミッド、各管理世界を防衛できる。
ただ、その一方で、管理局は再び管理世界への拡大・拡張に意欲を

燃やすのではないかという危惧を抱いていた。
Ｊ　Ｓ事件～ボラー連邦への武力制裁の失敗まで管理局は管理世界になりうる世界への探査を大規模に行った。
その結果、多くの管理世界を得る結果となったが、人類が居ない原住生物だけの世界や資源が豊富な資源世界であるならば、問題はないが、人類が居住している世界について、近年の管理局のやり方は少々強引なやり方で管理世界にしている。
防衛軍が見ればそれは明らかな侵略行為だった。
しかし、管理局はあくまでも侵略ではなく、『管理』という言葉で片付けている。
ボラー連邦への武力制裁の失敗でそれらの活動は自粛されているが、それでも管理局内では他の同僚を出し抜いてでも出世しようとする局員が多く、今でも密かに活動をしている者が居る。
それらの局員の成果は決して表では管理局の法律に触れている件があるのではないかと思っている。
しかし、明確な証拠もなく、成果は成果なので、管理局の上層部はたいして気にしていない。
もし、今後管理局がボラー連邦、防衛軍と同等の力を手に入れれば、管理局は再びボラー連邦へ武力制裁を行うかもしれない。
防衛軍へ戦争を仕掛けるかもしれない。
『管理』という名の侵略行為を再開するかもしれない。
そうした懸念がリンディの中にはあった。
果たしてリンディが抱く懸念をどれだけの管理局員が同じく抱いているだろうか？
確かにミッド、そして管理世界を守る力は必要だ。
しかし、大きすぎる力は争いを呼ぶ。
管理局が今よりも大きな力を持ち、暴走しかけた時、自分にそれを止めることが出来るだろうか？
いや、止めなければ管理局は今度こそ終わるかもしれない。
だが、現状の管理局ではそれを口にすることはできない。
ボラー連邦への武力制裁失敗で現在の管理局はミッドと一部の管

理世界の防衛でやっとの戦力しかないのだ。
強力な宇宙戦艦の建造は管理局の急務なのだ。
リンディには管理局の未来を信じるしか今はできなかった。
亡命条件を承諾し、健康診断の結果、特に問題ないと診断されたミノフスキーはいよいよ、亡命先であるミッドへと旅立つ日が来た。
一応、彼が老朽船から脱出し、ここポルテまで乗ってきた救命艇も壊れていたが、技術研究のため、ヴォルフラムへと積み込まれた。
エリオとキャロもはやてたちと共にミッドへと行きたがっている様子だった。
ミッドへと行けば、久しぶりにフェイトと会話できるのだが、自分たちにも仕事がある。
「フェイトたちと会いたいから」という理由だけでいきなり仕事を休むわけにはいかない。
はやてやクロノに頼めば、それぐらい融通してくれそうだが、真面目な二人はそのような私情を挟むことはしなかったし、仮にミッドへ行けてもフェイトたちと会話をすることはできない。
はやてとしてはエリオとキャロの真面目な性格は幸いした。
ヴォルフラムはミノフスキーを乗せて、ポルテを後にして、ミッドを目指した。
ミッドを目指している間、ミノフスキーはミッドにおける言語の勉強をしていた。
会話については翻訳装置があるので、問題なく会話、コミュニケーションをとることが可能であるが、読み書きについては文字を学ばなければ互いにコミュニケーションをとることが出来ない。
それにミッドには彼が興味を抱いている魔法というオカルトめいた謎の力がある。
ボラー連邦、そしてその勢力下に居た時には魔法などという未知の力は本の中の想像の産物だと思っていた。
しかし、今から行くミッドにはその想像の産物だと思っていた未知の力がある。
それら未知の力を知るためにも現地の言葉と文字は理解しなけれ

ばならない。
その思いがミノフスキーを動かしていた。
老年ながらミノフスキーはまだまだ物覚えはよく、Ｓｔ．（ザンクト）ヒルデ魔法学院の初等部一年生で学ぶ国語から始めたが、読み書きは既にできるレベルになった。
一応、護衛としてはやてに同行したシグナムやヴィータであったが、その日のほとんどを用意された部屋から出てくることなく、本やパソコンの画面ばかり見ているミノフスキーに警戒をするほどのレベルではなく、部屋の前で立ち番をしたり、遠巻きから見ている程度だった。
それに相手は丸腰の老人・・・そんな老人に対してデバイスを向けて攻撃なんて騎士として恥じる行為だ。
むしろ、シグナムとヴィータの役割は、はやてたちヴォルフラム乗員の護衛と言うよりも、ヴォルフラムの乗員がミノフスキーに対して私刑に走らないようにするため、どちらかと言うと、ミノフスキーの護衛とヴォルフラムの乗員の監視役と言った方が正しかった。
確かにボラー星人に対して、管理局員である自分たちは、恨みはある。
しかし今、目の前にいる老人は、今後の管理局にとってどうしても必要な人材・・・
ここで私刑に走って万が一、殺したりしたら、それこそ身の破滅だ。
普段、同じ局員の不正に対して甘い管理局であるが、今回の件については徹底的に調査を入れられ、処罰の対象になるかもしれない。
幸いはやての普段からの乗員に対する教育もあるのか、ボラー星人であるミノフスキーに対して、個人的怒りや恨みで私刑に走るような乗員はいなかった。
今まで確認されたどの管理世界には見ない水色の肌・・・自分たちと異なる肌の色をしたボラー星人に対して、どうやって接すればいいのか戸惑っている感じだった。
「どうだい？お客さんの様子は・・・？」
士官専用ラウンジでクロノは、はやてにミノフスキーの様子を訊ね

た。
「あの爺さんなら、部屋にこもって勉強漬けの日々を送っとるで・・・・あの年なのに勤勉やな」
「そうか・・・・乗員の様子は？」
「事前にお客さんの事情を話したうえで、絶対に乱暴狼藉の類はご法度にしとったからな、今のところ問題はあらへん・・・・むしろ、戸惑っている感じやな」
「そうか・・・・」
はやての話を聞く限り、ミノフスキー自身、そしてヴォルフラムの乗員にも問題はない様子で一安心のクロノだった。
まぁ、艦長としてはやてもクロノ同様、ホッとしている様子だ。
そして、ヴォルフラムはトラブルもなく無事に本局へとたどり着いた。
桟橋にはリンディをはじめとする管理局の高官らがヴォルフラムの到着を待っていた。
管理局が情報統制を行ったため、新聞記者やテレビカメラなどのマスコミの姿は一切なかった。
まだ反ボラー感情がある中で、ボラーからの亡命者を受け入れたなんて知られるとまた市民感情で管理局が叩かれる。
管理局はそれを恐れたのだ。
ミノフスキーの技術提供を伝えるのは、管理局が新たに戦力を整えた時だ。
ボラー連邦の人間さえも管理局に膝をおり、管理局に技術提供をした・・・・そんなシナリオでも用意しているのだろう。
やがて、桟橋にヴォルフラムが到着し、タラップが接舷されると、はやて、クロノと共にミノフスキーが下りてきた。
タラップを降りるミノフスキーは無表情ながらも緊張しているように見えた。
国賓級のもてなし・・・・と言う訳ではないが、それなりの待遇ともてなしを管理局は用意していた。
「ようこそ、ミッドチルダへ・・・・ミノフスキー技術官」

「お世話になります」
管理局の高官の一人がミノフスキーと握手を交わす。
高官は人の良さそうな笑みを浮かべているが、その内心では・・・・
(水色の肌とは、まるでエイリアンだな・・・・しかもリンカーコアのないこんな爺に頼ならければならないのは癪であるが、せいぜい利用するだけ利用してやるだけだ)
(用が済んだら、使い古したぼろ雑巾の様に捨ててやる。まぁ、管理局へ貢献したのであれば、名誉の病死をくれてやろう・野蛮人が・・・・)
高官は内心でミノフスキーを見下し、用が済んだらさっさと切り捨てる気満々だった。
リンディが抱いた危惧が現実に起こるのもそう遠くないかもしれない。
「では、さっそく、用意した官舎へとご案内いたします。こちらへ・・・・」
従卒の若い局員がミノフスキーのために用意した官舎へ彼を案内する。
ミノフスキーは若い局員の案内のもと、用意された官舎へと向かった。
「・・・・」
案内されていくミノフスキーの後姿をその高官はジッと見ていた。
桟橋での賑わいも時間が経つにつれて、薄らいでいく。
「・・・・」
先程、ミノフスキーと握手をした高官は通路のある一角にて、その高官は先程ミノフスキーと握手した右手をジッと見ていたが、やがておもむろに手に身に着けていた白手袋を脱ぎ、その手袋をゴミ箱に捨てた。
「ふん、手が腐るところだったわ・・・・」
ゴミ箱に捨てられた白手袋にむかってそう吐き捨てた高官は人知れずにその場から去っていった。
なにやら暗雲が漂う中、ミノフスキーのミッドでの亡命生活が始まった・・・・

管理局がミノフスキーを受け入れた頃、暗黒星団帝国に占領されている地球では・・・

地球に打ち込まれたハイペロン爆弾の占拠、地球連邦大統領ら連邦政府の高官らの奪還には至っていないが、着々と戦果は上がっていた。

占領軍総司令官であるカザンがミヨーズに艦隊を預けて太陽系を脱したヤマトを追尾させるために占領軍の宇宙艦艇の護衛はめっきり少なくなっている。

戦力と人員の低下、占領軍の兵士たちが未知の星外生物だと思い込んでいるボ〇太くん型戦闘スーツ。

昼夜を問わず、神出鬼没で自分たちを襲撃してくるパルチザン軍のゲリラ戦法。

夜間、睡眠中に襲い掛かってくるやぶ蚊と呼ばれるこの星に住み着いている吸血害虫。

やぶ蚊の他にもマダニ、ノミ、南京虫と呼ばれるトコジラミなどの吸血害虫やネズミによる施設の配線の断線などの被害も出ている。

さらにその吸血害虫や害獣からもたらされるマラリア、サルモネラ菌、インフルエンザなどのこの星独特の風土病による病魔が占領軍の兵士の士気を著しく下げていた。

地球連邦大統領、政府高官を人質に取り、ハイペロン爆弾という最大の切り札があるにもかかわらず、地球占領時には高かった占領軍の士気はダダ下がりで、本音を言うのであれば、地球からは撤退したい、ないし、宇宙から指揮、占領活動をしたいであった。

占領軍の士気の低下の反面、防衛軍長官である藤堂をはじめとするパルチザン軍の士気は高かった。

なお、余談であるが、このパルチザン軍のメンバーは防衛軍の様々な部署の職員、空間騎兵隊、民間からの勇士参加者が集まっている。

ティアナも勇士参加者の一人なのだが、パルチザン軍の中で女性はティアナ一人というわけではない。

防衛軍の職員の中には当然、女性職員もおり、その中にはパルチザン軍に参加している女性職員も居る。
彼女らの主な任務は司令部にて、通信、情報処理の他に一般人に紛れての情報収集や諜報活動を行っており、ティアナのように前線勤務は少ない。
ティアナの場合、彼女が地球人ではなく、管理局員だから前線勤務というわけではない。
パルチザン軍参加時、最低限の訓練の後、ティアナは安全な後方勤務にしようかと思ったのだ。
いくら本人が管理局からの文句は言わせないと言っても、管理局側が絶対にいちゃもんをつけてこない保証はない。
防衛軍としても管理局とのいざこざは極力避けたかった。
それでも、ティアナは最前線勤務を望んだ。
そこで、ティアナの監視という名目もあるが、パルチザン軍の中でも屈指の実力がある古野間の隊にティアナを入れたのだ。
その読みは当たり、古野間も北野も戦いながらティアナを守り、一方、ティアナ自身も古野間、北野からこの世界における戦闘、戦術、ゲリラ戦法、武器の使用方法を学び、経験して成長していった。
そして、この日も市街地の外れの工業地帯における夜間のゲリラ戦にて勝利したパルチザン軍。
敵は地球の工業施設を利用して武器の生産をし始めた。
しかも自軍が使用しているレーザー銃が水に弱いという弱点をすぐに見抜き、地球製のコスモガンを使用することに決めたのだ。
これもあの時・パルチザンを罠にはめた時の戦場に居たアルフォンが自軍のコスモガンと比べ、地球製のコスモガンの優位性を上層部に報告し、それを作るために地球にある生産施設の利用を提案したのだ。
敵にどんな理由があるにせよ、これ以上、敵の戦力を上げるわけにはいかない。
そのため、最近は兵器生産施設の攻撃が主な活動となっていた。
戦闘に参加し、指揮を執っていた北野、古野間、ティアナのチーム

がヤマトの改修ドックに設けられたパルチザン軍司令部へと戻ってきた。
戦闘で使用したボ○太くん型戦闘スーツをハンガーに戻した時、
「古野間さん!!北野さん!!大変です!!」
若い兵士が血相を変えて古野間たちに走ってきた。
「どうした?そんなに慌てて」
「じ、実は・・・・」
若い兵士は急いでいた理由を古野間たちに話した。
「なんだって!?」
「バカなことを・・・・」
「そんな無茶な・・・・」
若い兵士から事情を聞いた古野間たちは絶句した。
兵士の話では、若い青年士官の一部がハイペロン爆弾占領のため、勝手に向かってしまったとのことだ。
しかもボ○太くん型戦闘スーツを身に着けずに・・・・
ここ最近のパルチザン軍の勝利、敵の士気の低下が知らず知らずのうちにパルチザン軍の中に慢心を生み出してしまったのだ。
「いくら、なんでもあの爆弾の占領にそれ相応の準備も作戦もなしで行うにはあまりにも無謀です。戦力ではまだ相手の方が上なのに・・・・」
ティアナから見てもまだ、あの爆弾の占領には敵の戦力が多すぎるため、時期ではないと思っていた。
夜の闇があるからと言っても夜陰だけであの爆弾を占拠するのはあまりにも無謀だ。
「くそっ、急いでその馬鹿どもを連れ帰るぞ」
「はい!!」
古野間は貴重な戦力をここで無駄死にさせる訳にはいかないので、急いで止めに向かうことにした。
だがそれは間に合えばの話であるが・・・・
その頃、青年士官たちは既に地球へ打ち込まれたハイペロン爆弾のすぐそばまで来ていた。

地球：メガロポリス郊外の未開発エリアには地球に打ち込まれたハイペロン爆弾がそそり立っている。
そのハイペロン爆弾の周囲には武装した多数の兵士たちが警備をしている。
それに何の用途で設けられたのかは不明だが、爆弾本体の外部に設けられたバルコニーの様な部分にも見張りらしき兵士の姿も確認されている。
そのことから、恐らく爆弾の内部にも兵士が警備していることが予測される。
また、歩兵の他にも巨大な三脚戦車も配置されている。
市街地では建造物があるため、三脚戦車は戦闘には不向きということで見晴らしのいい未開発エリアに設置されたハイペロン爆弾の防衛に回され、市街地ではパトロール戦車が歩兵と共に巡回している。
ハイペロン爆弾の周りはまさにアリ一匹ハイペロン爆弾には近づけない厳戒態勢が続いていた。
厳戒態勢が続くハイペロン爆弾の近くの草むらにはパルチザンが身を潜めていた。
人一人がやっと通り抜けることが出来る細い穴を地下から掘り進め警戒の目をかいくぐったのだ。
敵は地下から近づいてくる事を予見していなかったのか、それとも地下から近づかれてもそれを撃退することが出来る自信があったのかはわからない。
しかし、敵の目がこうして地下に向いていなかったことが幸いして、彼らがここまで接近することができたのだ。
敵兵の目が自分たちに向いていないことを確認すると、今回の無茶ぶりな作戦を立てた指揮官らしき青年士官はトランシーバーにて別動隊に連絡を取る。
「こちらA隊、準備は整った」
「こちらB隊、突入準備完了」
「よし、これより敵三脚戦車へ攻撃を開始する。その機に乗じて一気にハイペロン爆弾に接近し、起爆装置を解体する」

「了解」
別動隊に連絡を終え、自分自身の覚悟を確認するかのように大きく深呼吸した後、
「攻撃開始!!」
攻撃命令を下した。
占領軍の兵士たちがいつもの様にハイペロン爆弾の警備をしていると、一基の三脚戦車の脚とコックピットの付け根の部分に突如、ロケットランチャーのロケット弾が命中した。
ロケット弾が命中した三脚戦車は大爆発を起こし、轟音を立てて地面に倒れる。
「敵襲だ!!」
「照明弾を上げろ!!」
「サーチライトを照らせ!!」
突然、三脚戦車が攻撃され、警備していた兵士たちは右往左往しながら混乱する。
その様子を草むらから見ていたパルチザンたちは草むらから飛び出し、攻撃を開始する。
「突撃!!」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁー!!」
草むらから飛び出したパルチザンたちは一気にハイペロン爆弾の出入口へ向かって走っていく。
警備兵たちも唖然と見ている筈もなく、応戦する。
パルチザンたちは手に持ったレーザー自動突撃銃、コスモガンを敵の警備兵に向けて乱射し、警備兵が固まっている所には手榴弾を投擲する。
パルチザンの攻撃を受け、警備兵たちはバタバタと斃れ、パルチザンたちは敵兵の屍を越えてハイペロン爆弾へ接近する。
警備兵、パルチザン、両軍のコスモガンの閃光、照明弾、サーチライトがハイペロン爆弾の全体像を不気味に照らす。
パルチザンの方も被害を出しながらも着実にハイペロン爆弾に近づいている。

この調子ならば、ハイペロン爆弾の内部へ侵入できる。
突撃したパルチザンたちはそう思っていた。
しかし、この時を待ち受けていたかのように、突然、付近の遮蔽物を跳ねのけて、数台のパトロール戦車がハイペロン爆弾の出入口を塞ぐように布陣する。
さらに現れたのはこれだけでなく、周囲からも多数のパトロール戦車が現れる。
パトロール戦車はパルチザンたちの前に現れると同時に攻撃を開始する。
「しまった!?攻撃中止!!撤退!!撤退だ!!」
敵が混乱を収めはじめ、しかも小回りが利くパトロール戦車が多数出現したことで形成は一気に警備兵側に傾いた。
これ以上の戦闘は部隊の全滅を招くと判断した部隊長の青年士官は撤退を命令する。
だが、時すでに遅く、パトロール戦車の攻撃を受け、パルチザンの兵士たちはバタバタと斃れていく。
ほんの数分間の戦闘でハイペロン爆弾の占領を狙ったパルチザンの部隊はあっけなく全滅してしまった。
戦闘が終わった後もまだパルチザンが潜んでいないか照明弾とサーチライトの明かりが周囲を照らす。
やがて、一台のパトロール戦車のコックピットから指揮官らしき人物が姿を見せる。
その指揮官はほかならぬアルフォンだった。
アルフォンは冷めた目で地面に転がっているパルチザンたちの死体を見まわして、
「愚かなことを・・・」
一言つぶやき、警備兵たちに引き続き、警戒態勢を命令し、官舎へと戻っていった。
「くそっ」
「間に合わなかったか・・・」

「・・・・」
古野間たちが、ハイペロン爆弾が撃ち込まれた未開発エリアの近くに来た時にはすでに戦闘は終わっていた。
北野は地面に転がる味方の死体を見て拳をギュッと握り、悔しそうに下唇を噛む。
彼としては味方を救えなかったこと、味方が慢心し、このような勝手な行動をとらせてしまったことに責任を感じていた。
自分がもっと厳しく厳命していれば・・・・
自分がもっと早く彼らのもとに駆けつけていれば・・・・
そんな思いが北野の脳裏を駆け巡る。
苦悩している北野の肩に古野間がポンと手を置く。
「思い詰めているみたいだが、これはあんたの責任じゃない」
「古野間さん・・・・」
「俺の方からも、常日頃からもっと部下たちに厳しくいっていれば連中がこんなバカなことをすることもなかった・・・・今回の件については俺にも責任がある」
「・・・・」
「今回の件を受けて、こんなバカなことをする連中もいなくなるだろう」
古野間の言う通り、今回の青年士官らの独断専行は今後のパルチザンたちに一つの教訓を与えた。
「連中の死を少しでも悲しむというのであれば、絶対にあの爆弾を占拠して、地球を取り戻すぞ・・・・」
「は、はい」
いつまでも戦場の近くで悲しみと後悔にくれているわけにはいかず、さっさと撤収しなければ、自分たちも敵に見つかる危険がある。
古野間たちは急いで現場から撤収した。
司令部では古野間たちからの報告を受け、重苦しい空気となったが、古野間の言う通り、今回の件を受け、今後は独断専行を控えるよう厳命がパルチザン全体に下された。

その頃、グロータスのゴルバ包囲網から脱した地球艦隊は暗黒星雲の彼方への航路に関するデータが集まるのを待つ一方で、ゴルバとの戦闘によって負った損傷個所の修理が行われていた。
修理が終わったころ、航路データの集計が終わり、ヤマト、まほろば、春藍の三艦ではモニター越しで艦長会議が行われた。
「観測とデータの集計結果、航路の内部には海流ともいうべき宇宙気流が流れ、また航路の幅も一定していない」
守の補佐として真田が司会役でこれまで集計した航路データを表示して説明する。
「観測時には敵の存在は認められませんでした」
「しかし、敵がこちらの銀河系に来ていることから、敵もこの回廊を通行している筈だ。連中ができるのだから、こちらも通行できる筈だ。いくら激しいといっても、気流自体はそれほどのことはないだろう？」
山南がこの航路は敵も使用しているのだから、地球艦隊も通行できるはずだと言う。
「問題は気流ではなく、敵の存在ですね」
確かに山南の言う通り、暗黒星団帝国の艦と今の地球艦隊ではエンジンの性能に関してそこまで大きな差はない。
ならば、敵が航行しているこの回廊は地球艦隊でも通れる。
だが、ここでも敵の待ち伏せが考えられる。
「ああ、さきほどの暗黒星雲での戦闘から敵のレーダーの方がこちらのレーダーよりも性能は上だ」
「しかし、ここを通らなければ地球を救うことはできない」
「今更、危険だから戻るなんて選択肢はありませんよ」
レーダーが利きにくい暗黒星雲、そしてゴルバ・・ここまでの航海で安全なんてなかった。
今更危険だからという程度の理由は全く意味をなさない。
良馬が敵の待ち伏せを恐れ、引き返すなんてことは出来ないという。
「真田、航行が可能なのはあとどれくらいだ？」

気流があるとはいえ、比較的に緩やかな流れの時に通過したい。
緩やかな時ならば、操艦も比較的に楽で、その時万が一、敵の待ち伏せを受けても逃げ切れることが出来る。
「観測の結果、航行が可能なのはあと二十時間ぐらいですね」
「では、すぐに突入しましょう。気流の流れが緩やかな時にこの厄介な回廊を通過しないと・・・・」
「そうだな。これより、回廊へ突入する」
結論はすぐに出て、地球艦隊は回廊内を進んでいく。
エンジン音が高くなり、暗黒の宇宙空間を突っ切って、地球艦隊は渦巻く入り口の中へ突入していく。
暗黒星雲の回廊内に入ると青黒い闇が立ち込め視界はいよいと利かなくなる。
暗黒ガス雲が液体に近い密度になった時と異なるが視界が利かないのは共通している。
それと同時に気流が地球艦隊に襲い掛かる。
緩やかとはいえ、それなりに揺れる。
しかも気流の流れに流されて隕石や岩塊が地球艦隊に降り注ぐ。
やがて、それらの岩塊が船体にぶつかり鈍い音を奏でる。
「航海長大丈夫か？」
「小さい奴ならともかく、大きいのが来たらやばいですね」
操舵桿を握る永倉がそういった時、まほろば　の艦橋に中くらいの岩塊がぶつかり大きな振動が　まほろば　を襲う。
「わっ・・くっ・・・・機関長!!エネルギー増幅!!」
「了解、エネルギー増幅!!」
井上が機関室に指示を出すが、機関室からは機関部員からの悲痛な声が返ってきた。
「伝導管が破損!!これ以上増幅できません!!」
「修理を急げ!!」
「は、はい!!」
永倉が慌てて操舵桿を倒して岩塊との衝突を避ける。
視界が利かないので、至近距離に岩塊が近づかないとわからないの

で始末が悪い。
当然、この暗黒星雲内ではレーダーも利かない。
「くそっ、このままじゃあ敵じゃなくて岩にやられちまう」
敵じゃなくて岩塊と衝突して沈むなんてあまりにも無様な最期であり、そんな結末は認めたくない。
「航海長なんとかならないの？」
フェリシアが永倉に訊ねるが、
「レーダーも利かない視界も利かない、お手上げだ」
永倉自身、長い宇宙生活でこんな特殊空間で艦を操艦させるなんて経験はない。
「くそっ、あともう少しで暗黒星雲を抜け出せそうなのに・・・」
「うーん・・・星雲の銀河系方面のみにだけ乱流が多いというのも変だな・・・星雲の向こうになにか巨大な重力源でもあるのかもしれない・・・」
艦長会議の時に見たデータ、そしてこの気流の流れを見て良馬はこの暗黒星雲の環境に不自然さを感じる。
「通信長、メインモニターをつけてください。このままじゃあ、マジで岩塊に衝突してお陀仏になりかねないっす」
「は、はい。メインモニターを起動します」
永倉に頼まれ、ギンガは艦橋のメインモニターをつける。
しかし、画面は真っ暗で何も見えない。
「これじゃあ何も映っていないのと同じじゃん!!」
真っ暗な画面を見てフェリシアは意味がないとぼやく。
そこへ、ユリーシャが艦橋に上がってきた。
「ユリーシャ・・・どうしてここに？ちゃんと部屋にいないとダメじゃないか」
良馬はユリーシャに部屋に戻るように言う。
今は暗黒星雲の回廊を航行中で岩塊も飛んできて艦自体が揺れている危ない状態だ。
そんな中をユリーシャは部屋から艦橋へ上ってきたのだ。
「リョーマが困っていると思って・・・私と姉さんならなんとかなる

・・・」
「えっ？」
　ユリーシャは一度目を閉じ、再び目を開けるとジッと真っ暗な画面のモニターをジッと見る。
「左前に・・・大きな岩・・・一時の方向・・・上下角マイナス三度・・・」
「えっ？ユリーシャは何を言って・・・」
「航海長、彼女の言う通りに操艦してみてくれ」
「は、はい。上方へ推力修正・・・面舵三十度」
　永倉はどうせ見えないので、かまわないと思いユリーシャが言った大きな岩が来そうなコースから艦を遠ざける。
　その直後、巨大な岩塊がまほろばの脇を過ぎていく。
　もう少し、舵を切るのが遅かったら、あの岩塊と衝突していたところだった。
「・・・」
　巨大な岩塊を見て、唖然とする永倉。
「どうしてユリーシャには分かったの？」
　フェリシアがユリーシャに訊ねると、
「イスカンダル人は不思議な力を持っている。それはきっとサーシャとユリーシャにも受け継がれているんだろう」
　良馬は以前、守や真田からイスカンダル人の特徴から成長速度以外にもイスカンダル人は超能力の様な力を秘めている事を聞いていた。
　まさかこうして実際にそれを目の当たりにするとは思ってもみなかったが・・・
「フッ・・・（　・、∀・、　）？ドヤ」
「なっ!?」
　ユリーシャはギンガに顔を向け、ドヤ顔を見せる。
「むぅ～・・・それぐらい私だって・・・」
　ギンガはユリーシャに負けたくない一心で、これまでの人生で使うのを拒んできた戦闘機人モードとなる。
　ただ、これまでの人生の中であれだけ忌み嫌ってきた力をまさかこんなくだらないことで使っていいのかと問う理性的なもう一人の自

分がギンガに問いかける。
　ギンガ本人が戦闘機人の力を使うのは確かにこれまでの自分の人生を否定する感じであるが、ユリーシャに負けたくないという所は本人だし、今は　まほろば　が大変な時なのだ。
　自分にはその大変な時に役立てる力がある。
　まほろばには大勢の仲間がいる。
　桜花の誘拐の時と同じく大切な人たちのために役立てるならば、きっと死んだ母だって許してくれるはずだと自分に言い聞かせ、正当化する自分もいた。
　戦闘機人モードを発動させた彼女の目は普段のエメラルドグリーンから金色へと変わる。
　その後、ユリーシャとギンガはまるで競い合うかのようにモニターを見て岩塊を見つけあう。
『・・・』
　なんだか大人げないような気もするが、ギンガとユリーシャのおかげで操艦しやすくなったのは事実である。
((通信長も超能力を使えたんだ・・・))
　ギンガの事情を知らない一部の艦橋クルーはユリーシャとタメを張っているギンガに唖然としていた。
(あっ、そういえば通信長は別の星の人だから、イスカンダル人と同じく何らかの能力を持っていても不思議じゃないか・・・)
　永倉、井上はギンガが地球人でないことを知っているので、ギンガがユリーシャと同じく地球人にはない何らかの不思議な能力を持っていても不思議ではないかと納得していた。
　岩塊を見つけた反応と数ではギンガが勝った。
　やはり、これまでの人生の経験がモノを言ったのかもしれない。
「フッ・・・（　•̀ ∀ •́　）？ドヤ」
「むぅ～・・・」
　今度はギンガがユリーシャにドヤ顔を向けると、負けて悔しかったのかユリーシャは頬を大きく膨らませて悔しがっていた。
　ユリーシャとギンガがモニターを見ながら岩塊を見つけあってい

る頃、ヤマトでもサーシャが同様の能力を使いヤマトを導いていた。
サーシャ、ユリーシャ、ギンガの情報はすぐに春藍にも伝えられ、地球艦隊は単縦陣にてこの回廊の突破を試みた。
やがて、前方に小さな明かりのような光が見えた。
「明かりが・・・・」
「もしかしたらあそこが出口かもしれない」
明かりに近づくにつれ、周囲も暗黒の黒からだんだんと白くなってくるそれはまるで夜明け前の空のようだ。
やがて光源を突破すると、
「やった!!暗黒星雲を突破したぞ!!」
幸いなことに暗黒星雲の出口付近には敵の待ち伏せは無かった。
たまたまいなかったのか、地球艦隊がここを突破するのは不可能だと思っていたのかは不明だが、ようやく地球艦隊は難所であった暗黒星雲を突破した。
暗黒星雲を突破した先には背景の黒い暗黒星雲とは真逆な白色銀河があった。
同じ白でも白色彗星の白とは異なる印象を受ける。
白と黒がおりなす光景はこの世のものとは思えない美しく壮大で神々しい光景だ。
まさに宇宙の神秘である。
「白と黒・・・光と闇・・・まさか、二重銀河が存在するなんて・・・・」
「この白色銀河のどこかに敵の本星が・・・・」
「通信長とユリーシャのおかげで助かったよ」
良馬がギンガとユリーシャに礼を言うと、
「じゃあ、何かお礼・・・・」
ユリーシャは甘えるように良馬に抱き着く。
「ちょっ、ユリーシャ!?」
「艦長、いいんじゃないですか？」
「そうですよ。ユリーシャちゃんはまだ子供なんですから」
「ただ艦内でふしだら事は控えてください。艦長」
「しないよ!!だいたいユリーシャはまだ一歳ちょっとの子供だよ!!」

永倉やフェリシアはからかうように言いい、新見は不純なことはするなと釘をさす。
礼をするのはとにかく、ユリーシャと関係を持つつもりはない良馬は慌てて否定する。
だが、一番納得できないのはギンガだった。
彼女の場合、ユリーシャと異なり、まほろば　の乗員なので、彼女が艦のためにその能力を役立てるのは当然のことなのだから・・・・
「・・・・（　・、∀・、　）？ドヤ」
「むぅ～・・・・」
勝負に勝って戦術で負けた・・・そんな気持ちのギンガだった。

百五話　手掛かりを求めて・・・・

無限に広がる大宇宙・・・・
この無数の星々のきらめきの中に様々な生命の営みがある・・・・
そして、生命の息吹は時に宇宙の平和を乱すことがある・・・・
地球に突如、襲来した暗黒星団帝国の大艦隊・・・・
その猛攻に地球防衛軍は脆くも崩壊してしまう。
一夜にして占領され、ハイペロン爆弾により、全地球人類を人質に取られてしまった地球を救うためヤマトは再び宇宙の深淵へと旅立った。
その途中、シリウス恒星系にて、試験航海中の最新鋭艦、春藍とその護衛をしていた、まほろば、ハルバード、ファルシオンの危機を救い、彼らと共に航海をすることになった。
一方、占領されてしまった地球も死んでしまったわけではない。
多く者のたちがパルチザンとして立ち上がり、明日への希望とつなげる戦いをしていた。
宙を・・・ヤマトが旅立っていった黒雲を眺めながら・・・・

そして今、地球から４００万光年の彼方、ヤマトを中心とする地球艦隊は暗黒星雲の裏に隠された白色銀河へと進みつつあった・・・・
敵、暗黒星団帝国の母星を見つけるために・・・・

白色銀河　某宙域　暗黒星団帝国本星　デザリアム星　聖総統執務室
ヤマトを中心とした地球艦隊の白色銀河到達はすでに暗黒星団帝国の知るところとなっていた。
聖総統の側近であるサーダはその件を国家元首である聖総統に報告するため、彼の執務室に赴いた。
「聖総統閣下・・・例の地球艦隊が、暗黒星雲との境界面を越え、我々の白色銀河へと侵入してきております・・・・」

「わかっておる・・・グロータスめ、しくじりおったな・・・何のためにゴルバを七基も与えたと思っておるのだ・・・まったく使えぬ奴め・・・」
地球艦隊と戦い、戦死したグロータスに一切の悲しみを抱かぬ聖総統。
彼にしてみればグロータスの戦死よりもゴルバ七基の損失の方が痛かったのかもしれない。
「敵はもう４０万光年の距離を無事にくぐりぬけてきております・・・このままでは、この帝星まで彼奴らが辿りつかないとも限りません・・・」
サーダはあの暗黒星雲の境界面・・・グロータス率いるゴルバの包囲網を破り、ミョーズの追撃をも破った地球艦隊がこのデザリアム星に来るのは時間の問題ではないかと危惧する。
しかし、
「フフ・・・彼奴らはまだ我々の位置も、そして我々の正体もつかんではおらん・・・安心せよ、サーダ」
聖総統はまったく動じておらず、むしろ余裕さえ醸し出している。
ズォーダー、デスラーの様に国家元首たる者は常に余裕がある態度を示さなければ務まらない。
「はっ・・・そうですが・・・」
しかし、サーダはやはり、気がかりで不安な様子。
まぁ、彼女の不安もわかる。
ミョーズ、中間基地、グロータスのゴルバ・・・どれも強力な艦隊、優秀な人材を投入しても地球艦隊はそれらを破り、あの暗黒星雲の境界面さえも突破してこの白色銀河に到達したのだ。
当初ではミョーズの艦隊で全ての方がつくと思っていたのに、地球艦隊はその予想を大きく上回る結果をだしている。
それも自分たちにとって最悪な結果で・・・
すると、彼女の不安げな心情を読み取ったのか、
「そこまで心配ならば、お前がじきじきに相手をしてみるかね？」
聖総統はサーダに地球艦隊の相手をしてみるかと問う。

「はっ・・・ご許可を頂ければ、今すぐにでも・・・」
すると、サーダは地球艦隊の相手をするつもりでいた。
だが、
「幸い、私の指揮下にあるサーグラス大将は、あのグロータスと旧友の仲・・・敵討ちということであれば、これまでになく発奮して戦いましょう・・・」
サーダは自らが相手をするのではなく、部下に任せるつもりであった。
彼女は軍人ではなく、デザリアムの聖総統府の一官僚・・・実際に戦場に赴くことはないが、戦略・作戦を練り、それを配下の軍人に伝達することはできる。
彗星帝国のサーベラーとほぼ同じ立ち位置だった。
「フッ・・・やはりお前は直接動かずに、裏で手を引くのみというわけか・・・」
それを知っている聖総統はニヤッと口元を緩める。
「フフ・・・私のやり方は、聖総統もご存知のはず・・・」
「よかろう・・・行け・・・サーグラスを彼奴らへ差し向けよ。さて、『魔女』とまで呼ばれたお前の指揮、久々に見せてもらおうではないか・・・」
「はっ・・・」
聖総統はまるでゲームか映画の観戦でもするかのようにサーダに地球艦隊の相手をすることの許可を出した。
「・・・」
その聖総統とサーダのやりとりを人知れずに聞き耳を立てていた者がいた・・・

デザリアム星の一角に設けられたスカリエッティの研究区画・・・
そこでは、スカリエッティが普段と変わりなく、自分のやりたい研究と同時に亡命先である暗黒星団帝国からのオーダーをつつがなくこなしていたが、彼自身、ここ最近暗黒星団帝国の内部・・・特に軍部の連中が妙に落ち着かない様子に気づいていた。

でも、亡命者である自分が聖総統や軍部の連中に訊ねても素直に教えてもらえるはずがない。
それに、積極的に聞くほど、興味がある話題でもない。
そこへ、秘書兼助手のロベルがいずこから戻ってきた。
「ドクター・・・・」
「やあ、ロベル。どこへ行っていたんだい？」
「最近、軍部の方々の落ち着きがない様子でしたので、それを探っていました」
「ほぉ～・・・・それで何かわかったかい？」
ロベルもスカリエッティ同様、ここ最近の軍部様子が気になっていた様だ。
彼女はその原因を突き止めるため、密かにあちこちで情報を収集していた。
「はい。判明しました」
先程、聖総統の執務室の近くで、聖総統とサーダの会話を聞いていたのはロベルだった。
ロベルはスカリエッティに聖総統の執務室での会話の内容を伝える。
「どうも、地球の艦隊がこのデザリアム星を目指しているようです・・・・ミョーズ大佐、グロータス准将もその地球艦隊との戦いで戦死なされたとか・・・・」
「へぇ～・・・・彼がね・・・・」
自分をこのデザリアム星へと連れてきたミョーズが死んだことを今、初めて知ったスカリエッティだが、別に彼の死を悲しむことも悼むこともなかった。
元々彼は、亡命の水先案内人であり、そこまでミョーズに対して、興味があるわけではなかったからだ。
「しかし、地球か・・・・」
スカリエッティも地球に関してはある程度知っていた。
自分が確立した理論、『プロジェクトｆａｔｅ』・・・・それの完成品であるフェイトを生み出したプレシア・テスタロッサ・・・・彼女が伝説の

地、アルハザードを目指すため、ジュエルシードを手に入れようとして失敗し、かの地にばらまいてしまった・・・それが第九十七管理外世界・地球・・・

また、自分を負かした機動六課・その部隊長である八神はやての出身地である世界・・・

当時はまだ管理局から必要な情報が引き出せたので、気まぐれに地球に関する情報を取り寄せてみたが、文明のレベルに関しては管理外世界というだけあって、魔法文明は存在せず、クローン研究も自分から見たら穴だらけ、おまえに宇宙開発技術は管理局の足元にも及ばない辺境世界。

なぜ、そのような低俗な世界から、高町なのはや八神はやてのような逸材が出てきたのか不思議に思ったぐらいで、何の興味も魅力も感じない世界だった。

それが今、この星に近づいているというのだからそれも疑問だ。

自分が知らぬ間に管理局があの世界を管理外世界から管理世界に編入したのだろうか？

それにしても、かの地の艦隊がこの星に来る意味が分からない。

「ロベル、なぜ地球の艦隊がこの星を目指しているのか・・・その理由もわかっているのかい？」

「はい、ドクター。現在、地球はこの暗黒星団帝国の占領下に置かれており、おそらくかの艦隊は祖国開放のため、この星を目指しているのではないでしょうか？」

「ん？祖国が占領されたのであれば、現地の占領軍を破ればそれで済む話でないのかね？」

「暗黒星団帝国は地球にハイペロン爆弾を打ち込みました」

「ハイペロン爆弾？」

流石のスカリエッティも質量兵器であるハイペロン爆弾についての知識は持ち合わせていなかった。

「はい、ハイペロン爆弾というのは・・・」

ロベルは自分が持っているサーダの知識からハイペロン爆弾の仕組みをスカリエッティに教えた。

「なるほど、そのような質量兵器があるとはねぇ～…やはり、この世はまだまだ未知の知識と技術に満ち溢れているな…」
（その様な爆弾があったのであれば、聖王のゆりかごなど必要もなかったな…）
研究者であるスカリエッティには軍略・戦術といった類はやはり、苦手だった。
配下のナンバーズの中にそういった軍略面でたけた者がいれば、あるいはあの事件は異なった結果となったのかもしれないが、そもそも彼の手元の駒はあまりにも少なすぎたのが敗因の一つである。
いくら、強力な聖王のゆりかご、聖王のクローンが居ても、少ない兵隊だけでは多勢に無勢である。
しかし、スカリエッティにはまだ疑問が残っていた。
自分の知る地球の文明レベルでは到底、宇宙へ乗り出すことはできない。
仮に管理局が、かの地を管理世界において技術を提供したとしても、管理局がここは動き出すべきなのではないだろうか？
それとも地球が暗黒星団帝国の占領下におかれ、あっさりと見捨てたのだろうか？
「ロベル、私も地球の事は少なからず知ってはいるのだが、地球の文明レベルではここまでくるのは無理なのではないかね？」
「？」
スカリエッティの問いにロベルは思わず首を傾げる。
それはまるで、「何を言っているんだ？」と体言しているかのようだ。
「ドクター、地球は既に優れた宇宙戦艦を多数保有していますよ」
「えっ？」
（…うーん…やはり、管理局はかの世界を管理世界においたのか…）
ロベルの説明を聞いて、スカリエッティは、管理局は地球を管理世界においたが、暗黒星団帝国が地球に攻め、その世界を占領してしまったので、あっさりと切り捨てたので、地球人は管理局を頼らず、自

らの手でこの星を目指しているのだろうと思った。
(これで、地球人自身が、かの地を開放したら、管理局の面目は丸つぶれだな)
折角管理世界においたのに、暗黒星団帝国に占領され、あっさりと見捨てた後で現地人が開放したら、管理局のメンツは丸つぶれで信用を失うだろうと思ったスカリエッティ。
「一応、これまで暗黒星団帝国が集めた地球に関する映像資料は存在しますが、ご覧になりますか?」
「ああ、頼むよ」
スカリエッティは今更、あの辺境の田舎世界を見てもつまらないと思いつつ、管理局の管理という名の支配を受けて、どれだけあの田舎世界が変わったのか暇つぶし程度には見てみようと思い、ロベルに映像の再生を頼んだ。
すると、映像に映っていたのは、自分が知る地球とは全く異なる映像だった。
ガミラス、ガトランティス、二度の外宇宙からの侵略者たちと戦う地球軍の艦艇はどれも管理局で使用している艦影とは全然違う。
それに管理局が忌み嫌う質量兵器もバンバン使用している。
極めつきはあの波動砲とよばれる兵器・・・・
管理局のアルカンシェルよりも威力のある兵器・・・・
あんなものを管理局が認めるわけがないし、保有するわけがない。
(ど、どういうことだ!?地球は管理局を受け入れたわけではないのか!?)
あまりにも自分の予想と異なる映像を見てスカリエッティは、彼にして珍しく困惑する。
「ドクター?どうしました?」
「あっ、いや・・なんでもない・・・・」
(なるほど、これほどの技術と兵器を有しているのであれば、あの辺境の田舎世界から、ここへ向かって来るというのも納得できる・・・私の知る地球とは異なる技術を持つ地球か・・・はたしてどんな世界なのか興味が沸いたよ・・・)

もし、彼らが無事にこのデザリアム星に来た場合、ここを捨てて彼らの故郷である地球へでも行こうかと思い始めた。

一方、そのデザリアム星を目指している地球艦隊は、白色銀河を航行していた。

まほろば　では、暗黒星雲突破、白色銀河到達記念で食堂では、あんことクリームを使った白色銀河クリームあんみつ、白色銀河パフェなるモノがデザートのメニューに期間限定で発売された。

ヤマトでも同様の企画が行われているという。

暗黒星雲突破では、ユリーシャには世話になったし、彼女からはお礼をすることになったので、良馬はユリーシャを連れて食堂へとやって来た。

ユリーシャはイスカンダル人と地球人のハーフであるが、やはり、女の子であるということで、甘い物は大好きな娘だった。

注文した白色銀河クリームあんみつ、白色銀河パフェを満面の笑みを浮かべて食べていた。

その様子を面白くない様子で見ていたのはギンガだった。

ただ、不機嫌そうであるが食欲だけは通常運転であり、彼女の前には特盛の料理がデェェェェンと存在していた。

「どうしたの？ギンガ、なんか不機嫌そうだけど？」

ギンガの隣にはフェリシアが座っており、ギンガの顔を覗き込むように訊ねる。

「な、なんでもありません!!」

ギンガは不機嫌さを隠すかのように黙々と食事をする手を動かす。

だが、視線は時折、良馬とユリーシャの方へと向いている。

フェリシアもその視線には気づいており、ニマッとした笑みを浮かべると、ギンガの耳元に口を寄せて、

「もしかして、気になるの？艦長とユリーシャちゃんの事・・・」

「なっ!?」

フェリシアの指摘を受け、ギンガは食事の手をピタッと止める。

心なしか顔もほんのりと赤い。

「その反応・図星かな？」
「うぅ・・・」
「まぁ、ギンガが気になるのもわかるよ。艦長の実家は金持ちだし、あのルックスだしね」
　実際、良馬とギンガが恋仲であると事は一部の人間しか知られていない。
「それにユリーシャちゃんって確かイスカンダルの王族だよね・・・意外とお似合いのカップルかも・・・」
「・・・」
　フェリシアのキャハハ、ウフフな会話はギンガの耳に入ってこない。
　実際、フェリシアが言っていたことはギンガも一度は抱いた。
　ギンガが沈黙していると、
「あっ、艦長がユリーシャちゃんに『あーん』やっている」
「っ!?」
　フェリシアのその言葉は耳に入ったのか、ギンガがハッと顔をあげると、彼女の言う通り、良馬がユリーシャにパフェを食べさせている。
「・・・」
　その姿を見てますます不安になるギンガだった。
　しかし、古代がサーシャを自分の姪として見ていないように良馬自身はユリーシャの事を異性としては意識しておらず、あの外見ながらも実年齢の方を強く意識しているため、どちらかというと妹の様に見ていた。
　ユリーシャの方も良馬の事を異性として意識しているのか、それとも良馬とくっついて慌てふためく周囲を見て面白がっているのかその真意は不明である。

　ユリーシャはその見た目に反して実年齢がまだ一歳と少しなので、まだ一人部屋ではない。
　実際に月村家で暮らしていた時もノエルが彼女の面倒を見て、夜は共に同じ部屋で過ごしていた。

そして、それは密航した　まほろば　でも同じで主にリニスが夜、部屋を共にしていた。
「ん？・・・・」
そして、この日もユリーシャはリニスと同じ部屋で寝ていたが、深夜のある時間帯にムクッとユリーシャが起きだした。
「どうしました？ユリーシャさん」
「おトイレ・・・・」
「一人で大丈夫ですか？」
「大丈夫」
瞼をこすりながら、起きた理由をリニスに話すユリーシャ。
そして、彼女はヨロヨロとふらつく足取りで部屋を出ていく。
リニスはそんなユリーシャの後姿を見送り、再びベッドに沈み目を閉じた。
一方、ユリーシャは部屋を出ると先程までのふらつく足取りではなく、しっかりとした足取りとなり、リニスと自分の部屋の扉を見て、ニマッと笑みを浮かべていずこかへと向かって行った。

起床時間になり、リニスが目を覚ますとユリーシャのベッドに彼女の姿はなかった。
「あれ？ユリーシャさん？・・・・どこに行ったんでしょう・・・？」
リニスは空のベッドを見て、つぶやく。
同じ頃、良馬も目を覚ました時、自分の部屋のベッドの中にユリーシャが居た。
「な、なんで・・・ユリーシャがここに・・・？」
良馬としてはなぜ、ユリーシャが自分の部屋のベッドに中にいるのかわからなかった。
でも、現状はかなりまずい。
こんなところを別の乗員に見られたら問題になる。
良馬が固まっていると、
「良馬さん」
部屋の外からギンガの声がした。

「ぎ、ギンガっ!?」
ギンガの声を聞いて慌てて良馬はベッドから飛び起きると、扉を開けて、部屋の外に出ると、扉を閉める。
部屋の中のユリーシャの姿を見せないために・・・・
「ど、どうした?ギンガ」
「リニスさんがさっき、ユリーシャちゃんが居ないって探しているんです・・・まさかとは思いますが、ユリーシャちゃん・・・部屋にいませんよね?」
ギンガは以前、ユリーシャが密航して良馬の部屋で見つかった経緯から今回もユリーシャは良馬の部屋にいるのではないかと思い、こうして良馬に訊ねに来たのだ。
「あ、ああ・ここには来ていないなぁ・・・トイレとかじゃないか?それか食堂とか?」
「食堂はついさっき行きましたが、いませんでした。あと、ユリーシャちゃんが行きそうなのは良馬さんの部屋だったので・・・・」
「そ、そうか・でも、ユリーシャはここにはいないから」
「・・・それなら、部屋の中を見せてもらってもいいですか?」
「えっ!?」
ギンガの発言にドキッとする良馬。
このままギンガを部屋に入れたから、ユリーシャが見つかってしまう。
それだけは何としてでも防がなければ・・・・
「あ、あとでな、もう着替えるから、それじゃあ・・・・」
「あっ、ちょっと・・・・」
良馬は後ろ手で部屋の扉を開けると、そのまま部屋の中へと入る。
(別にお互いに見慣れあっている体なのに・・・・)
ギンガは今更、見られてもおかしくはないはずなのにと、良馬の態度に疑問を感じつつも、彼が部屋の中に入ってしまったことで、部屋の中に入ることが不可能となったので、ギンガは別の場所へユリーシャを探しに行った。
ギンガが部屋の前からいなくなるのを確認した良馬はリニスを呼

んだ。
リニスは、まほろば　の医務長であるが、同時に良馬の使い魔でもあるので、彼女は信用がおける存在なので、呼んでも問題はなかった。
艦長室に来たリニスはベッドで眠っているユリーシャを見て、
「はぁ～」とため息を一つついて、
「艦長、ユリーシャさんがなぜここに？」
良馬になぜ、ユリーシャが自分の部屋ではなく、良馬の部屋にいるのかを訊ねる。
「俺にもわからない・・・・起床時間になって目が覚めるとここでユリーシャが寝ていたんだ」
「わかりました。事情はともかく、このままではまずいですからね。彼女は連れていきます」
リニスは寝ているユリーシャを抱えて部屋に運んだ。
「やれやれ・・・・」
なんとか問題にならずに済んで、一息つく良馬だった。

ユリーシャの寝起きドッキリというトラブルがあったが、地球艦隊は順調に白色銀河を航行している。
敵の襲撃もなく、順調なのだが、しかし敵の襲撃がないことがかえって地球艦隊の乗組員にある不安を抱かせた。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋
「どうです？真田さん」
「うーん・・・・ダメだな・・・・敵の足取りは、これ以上つかめそうにない・・・・この白色銀河のどこかだということは確実なんだが・・・・」
敵の襲撃が白色銀河到に入ってから全くなく、また敵影も確認できないことで、暗黒星団帝国の本星の場所の手掛かりが全くつかめないのだ。
「真田技師長。敵の母星なんですが・・・・我々が越えてきたあの暗黒星雲の中という可能性はないんですか？」
山崎が真田に敵の本星はこの白色銀河ではなく、あの暗黒星雲の方

だったのでないかと訊ねる。
確かに敵の出現規模からいうとこの白色銀河よりも暗黒星雲の方が多かった。
敵はあのゴルバを七基も繰り出してきたのだから・・・・
「それは私も考えました・・・・」
真田も当然、その可能性を考慮していた。
「ですが、それだと敵が暗黒星雲の境界面で、ゴルバまで持ち出して妨害してきた意味がない・・・・」
暗黒星雲と白色銀河の境界面にゴルバを七基も配置していたことからあの境界面は敵の防衛線であり、暗黒星雲の反対側・・・・つまり、この白色銀河へ地球艦隊を通さないためにゴルバを配備したとなれば、やはりこの白色銀河の方に敵の母星がある可能性が高い。
「敵は我々が暗黒星雲を越え、この白色銀河に到来するのを何としてでも防ぎたかった・・・・そう考えるのは妥当です」
「なるほど・・・・」
真田の説明を聞いて山崎は納得する。
「では、この・・・・我々の銀河系に匹敵する大きさの銀河をなんとか捜索しなければいけないわけですか・・・・」
敵の足取りがつかめないのであれば、地道に探すしかない。
しかし、自分たちが住んでいる太陽系がある銀河と同じ規模の大きさの銀河系から一つの星をみつけるのはかなり難しい。
自分たちは敵の母星がどんな姿の星なのかさえ掴んでいないのだから・・・・
「捜索するにしたって、この広さじゃなぁ・・・・」
ガトランティスの主力艦隊との決戦の折、土星圏に侵入した敵の空母部隊への奇襲作戦の時よりも捜索範囲が広すぎる。
敵の母星を見つけるまで一体どれくらいの時間がかかるのかわからない。
だが、天は地球艦隊に味方した。
「レーダーに反応あり!!十一時の方向、上下角プラス八度!!」
白色銀河に入り、ようやく敵が現れた。

「待ち構えていたような現れ方ですね・・・」
ここ数日、めっきり姿を見せなかった敵がこのタイミングで現れたことから単なる遭遇戦には見えなかった。
「本当にこの白色銀河が敵の本拠地だとすれば、この宙域・・・暗黒銀河との境界面は、敵の第一次防衛線に相当するだろうからな・・・よし、全艦に警報!!・・・総員、戦闘配置だ!!」
守は全艦に戦闘準備を命じる。
「了解!!全艦に警報!!総員、戦闘配置!!」
ヤマト、まほろば、春藍の三艦の艦内に警報が鳴り響く。
「真田さん!!この機会に!!」
「わかっている・・・この機会に、敵の航路のデータを是が非でも手に入れなければならない・・・戦闘班は、うまく敵を撤退させるように交戦してくれ・・・とどめは刺すな!!」
真田は敵の撤退方向を知るため、撃沈ではなくわざと逃がす様に攻撃してくれと頼む。
「むずかしい注文ですが・・・了解、何とかやってみます!!」
撃沈、大破、航行不能ではなく、航行可能で逃がすという難しい注文ながらもやらなければ、敵の本拠地をつかめない。
南部はショックカノンの威力を通常より下げて攻撃するようにした。
それは、まほろば、春藍にも伝えられ、春藍はコントロールで無人艦のショックカノンの出力を下げた。
暗黒星団帝国の艦艇は実弾攻撃には弱いので、ミサイル、魚雷の類の攻撃はしないようにも厳命した。

こっちは手加減なのだが、向こうはおかまいなしに攻撃できるハンデがあったが、敵艦すべてを返す必要もないこともまた確かである。
よって、前衛と中堅の艦艇は撃破しても構わないという判断をした。
前衛は駆逐艦が三隻、中堅は駆逐艦が五隻、後衛が巡洋艦一、護衛艦八隻の艦隊であり、出力を落としているとはいえ、集中砲火を受け

ると駆逐艦レベルでは脆くも撃破されてしまう。
この戦闘で前衛、中堅の駆逐艦は撃破され、後衛の部隊でも護衛艦三隻が沈められた。
そして、この戦闘報告はある男の下に届けられていた。

白色銀河　某宙域
「地球艦隊、防衛網第一陣を撃破!!第一陣の残存艦、戦闘宙域外にいるものも含め、残りわずかです!!」
オペレーターからの報告を聞いていたのは暗黒星団帝国・総司令官のサーグラス大将であった。
「そろそろいいだろう・・・第一陣の残存艦に撤退命令をだすのだ!!そう、例の場所へ撤退するようにとな・・・」
サーグラスは残りわずかとなった第一陣の艦艇に撤退命令を下す。
「撤退命令、伝達完了・・・」
「ですが、サーグラス様、よろしいのですか?敵を罠に誘い込むというのは理解できます・・・しかし、この場所は・・・」
オペレーターが撤退命令を伝達している中、彼の副官が大丈夫なのかと訊ねる。
「黙るのだ!!・・・これはサーダ様からのご命令なのだ・・・私としても、一刻も早くグロータスの仇をとってやりたい・・・だが、サーダ様の命令は聖総統閣下からのご意思にも等しい・・・無視するわけにはいかないのだ・・・」
サーグラス本人にしても今回の作戦はあまり気が乗らない様子だが、国家元首に近い存在からの命令では、軍人として逆らうわけにはいかず、渋々従ったという様子だった。
ましてや親友の仇を討ちたいという私情を挟むなどもってのほかだった。
今は地球艦隊が自分たちの母星への到着をなんとしてでも防ぐことが優先される。
サーグラスの撤退命令を受け、残存艦はワープにて指示された宙域

へと撤退していく。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「空間歪曲反応を感知・・・・敵がワープにて撤退を始めたもよう」

「よし、空間スキャナーを起動し、敵の撤退先を突き止めろ・・・・副長、通信長、記録を頼む」

「了解」

「敵、ワープにより消失」

「空間歪曲の偏差値を記録・・・・これで、敵の航路ベクトルを割り出せるはずです」

ヤマトと春藍でも同じ作業が行われているだろうから、多少の誤差は出ても大きな誤差は出ないはずだ。

敵が現れてうまく撤退に追い込み、航路データを確保できた。

今のところ順調なのだが、良馬としては腑に落ちない部分もあった。

（・・・・防衛網にしてはあまりにも戦力が脆すぎるというか、あっさりしすぎている・・・・反対の暗黒星雲側ではゴルバを七基も配置していたのに、その反対側はあれだけの数の艦隊・・・・）

（第一次防衛線とはいえ、その戦力があまりにも少なすぎる・・・・）

（先程の艦隊は駆逐艦八、護衛艦八、巡洋艦一のまるでパトロール艦隊規模でしかない）

（土星圏での戦いでは地球艦隊もそこまで多くの戦力を配置はしなかったが、前衛のヒペリオン艦隊でさえ、戦艦を置いていたのに・・・・）

（思い過ごしならいいんだが・・・・）

妙な違和感を覚えながらも、折角手に入れた航路データなので、分析作業が行われた。

今の地球艦隊には藁をも掴む思いだったからだ・・・・

やがて、三艦が採取したデータがまとめ上げられ、報告会が行われた。

「まずはこれを見てくれ」

モニターにはこの白色銀河の一角が表示される。

「敵の撤退方向・・・そして距離から、敵が逃げた先はこの宙域だということになる」
次にモニターの一角には敵の撤退方向の光点が表紙される。
「円の半径は誤差を含めても約５０光年だ」
「結構絞ることが出来たな」
この広い白色銀河の中からわずか５０光年という範囲に絞ることが出来たことに感心する守。
「そうなんだが・・・」
真田が言葉を濁らせる。
「ん？何か問題でもあったんですか？」
良馬が言葉を濁らせた真田の態度を見て、何か問題があったのかと訊ねる。
「うむ・・・まず考えねばならんことは、その宙域に存在する恒星のことなんだが・・・地球を占領している敵の兵士たちは、地球の大気・重力・温度など、地球の環境に完全に適応している」
真田の言う通り、暗黒星団帝国・・・デザリアム星人の外見は地球人と比べると肌の色を含め、全く異なる容姿をしているが、地球の環境には適応している。
ただ、地球の医薬品に関しては不適合な部分があるが、それでもおおむね地球人と変わらない。
「敵の母星も、地球と太陽と同じタイプの恒星を巡る惑星の可能性が大だということだ」
「なるほど・・・確かにそうですね」
ガミラス、イスカンダルもサンザー（太陽）を回っている二連星の惑星だった。
一方。ガトランティスは遊牧民の様な移動民族であり、あの要塞都市ガトランティスは科学文明で徹底的な居住環境が整えられていた。
もしかしたら、創世記のガトランティス・・・宇宙を旅する前はガトランティス民族も地球と同じような星に住んでいたのだろう。
それが、環境の変化などでその星に住めなくなり、宇宙を放浪する遊牧民の様な民族に変わったのかもしれない。

「敵が地球を植民地・奴隷化目的で占領したというのなら、なおさらだな」
「同じタイプの恒星・・・」
「うむ、かつてのガミラスもそうだったからな」
「じゃあ。この円の中から、地球と同じような恒星を見つけ出せばいいってことですか？」
「それがまったくないんだ・・・」
　真田が事前に調べた結果、この円の中には地球と同じような恒星が存在していなかった。
「まったく？・・・・全然なかったんですか？」
「ああ・・・多くの人員を使って何度も検証したが、見つけられなかった。この円の宙域には褐色矮星と中性子星ばかりで、生命体が存在できそうな星はありそうになかったんだ」
「褐色矮星・ですか・・・」
「うむ。元々、我々の太陽やサンザーのような黄色系列星は、星の種類の中ではかなりまれな部類に入る」
　真田の言うとおり、人類が存在するような星は奇跡的な偶然が重なりあって存在している。
　管理局が躍起になって他の管理世界になりそうな世界を探しているのもそういった魔法文明を持つ人類があまりにも少ないからだ。
　それ以外にも幻獣生物が存在している世界、地下資源が豊富でもその現地で採掘できる環境・人類が降り立っても問題ない世界でなければならないという色々と条件があるためだ。
　そう言った点では地球連邦は通常人類が生存できないような環境で場所は限られるも宇宙服などで活動できるあたり、宇宙開拓技術にかんしては管理局よりも地球連邦の方が上なのかもしれない。
「統計では、宇宙にある星の半数以上が小さな褐色矮星だと言われているぐらいだ・・・この宙域に、黄色星が完全にないというのは変だが・・・まぁ、ありえないことではない」
「ですが、真田さん。この宙域に生命の誕生できる環境がないということは・・・」

「罠の可能性があるということだ」
　良馬は自分が感じた違和感と真田の説明を聞いてやはり、敵はわざと自分たちに間違った航路データをとらせたのではないかと思ったが、まだこれが完全に罠である可能性がないわけではない。
「敵の本星でなくとも、この宙域にもしかしたら、ゴルバや以前、戦った宇宙要塞があるのかもしれません」
　良馬は敵の本星ではなくとも、ゴルバや以前撃破したあの中間補給基地の様な宇宙要塞施設がこの宙域に存在している可能性を示唆する。
「確かにその可能性も捨てきれないな・・・どうしますか？艦長」
　真田は良馬が立てた仮説を否定せず、敵の本星でなく宇宙要塞の施設があることを含めて、守に指示を仰ぐ。
「どちらにせよ、敵母星の位置を知らぬ我々にはほかに進む道がない・・・時間が切迫している今、危険を承知でも進まなければならん・・・・」
　このままあてもなく白色銀河をさまようわけにもいかない。
　守はたとえ、罠であっても今はこのデータを頼りに進まなければ、打開策がない。
　守は・・・ヤマトはたとえ罠でもこのデータ通り、この褐色矮星へ向かうことにした。
　罠であってもそこに敵がいるのであれば、そこで新たなデータをとることができるかもしれない。
　守はその可能性に賭けた。
「そうか・・・では再び、敵の罠の中へ、あえて飛び込まねばならんわけだな・・・・」
　方針が決まり、この後すぐにヤマトは敵の罠の中に飛び込むことになる。
「はい・・・・危険が待ち受けているのは確実です」
「山南艦長、月村艦長。問題の宙域にはヤマト単艦で進入し、春藍　とまほろば　はここで待機しておいてもらう方がいいと思うのですが・・・・」

古代は問題の罠が潜んでいる宙域にはまず、ヤマトが先行していき、その他の艦はこの宙域で待機するほうがいいのではないかと提案する。
「いや、我々も共に行こう」
「ここまで来て、置いてきぼりは酷いよ」
山南も良馬もヤマトと共に罠が潜んでいる褐色矮星の宙域へと行くと言う。
「えっ？」
「考えてもみたまえ。この白色銀河は完全に敵の勢力圏内なのだ・・・・たかがこれだけの艦隊を分散して温存したところで、その結果はしれている」
「山南艦長の言うとりだ。これから行く先に罠があるのであれば、一致団結して危険に立ち向かう方を選ぶべきだ」
「山南艦長・月村艦長・・・・」
山南も良馬も罠だと知りながらもあえてヤマトと共に褐色矮星の宙域へと進むことを選んだ。
「・・・・了解しました。よし、航海長、問題の渦状腕間隙に針路を定めろ。ワープ予定航路を各艦に転送」
「了解。針路、十時方向の渦状腕間隙に固定」
島が褐色矮星の宙域へワープ航路をセットする。
「航路、転送完了!!」
「これより、本艦隊は敵の領域、褐色矮星へと向かう」
地球艦隊は敵本星を求め、あえて敵の罠があるとされる褐色矮星宙域へと向かった。
敵本星の位置を掴む手掛かりを求めて・・・・

百六話　兵器製造プラント

敵本星の根拠地の手掛かりを求めて褐色矮星宙域へと向かった地球艦隊。
その頃、地球の彼方此方では、相変わらず占領軍とパルチザンとの間で戦闘が行われていた。
しかし、その他の一般市民に関しては、生活の一部に何かしらの制限はあるものの占領前と同じような生活を送っていた。
「ティアナ・・・大丈夫かな・・・？」
フェイトはパルチザンに参加したティアナの身を案じていた。
テレビや新聞、雑誌では当然、パルチザンの活動は報道されない。
ティアナは生きているのか？
けがを負っているか？
それとも戦死してしまったのか？
食事はちゃんと摂っているのか？
ティアナに関する情報は源三郎から中嶋家へとたまにくる暗号文の手紙によってパルチザンの活動を知ることが出来、ティアナの現状もそれでなんとか知ることが出来ているのだが、その手紙もそう頻繁に来るものではない。
フェイトがティアナの身を案じるのも無理はなかった。
「フェイトママ、元気ないけど大丈夫？」
ヴィヴィオは心配そうに訊ねる。
「うん、大丈夫だよ」
ヴィヴィオの前ではフェイトも空元気ながらも気丈にふるまう。
占領されている現状で自分が不安になれば、ヴィヴィオも不安にさせてしまう。
フェイトはヴィヴィオを守る意味でも平然を装うしかなかった。
（やれやれ・・・）
そんなフェイトを見た紅葉は桜花やヴィヴィオを連れ、気分転換にＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをしないかとフェイトを誘った。

フェイトもヴィヴィオの気分転換になるのであればということで紅葉たちと共にＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａへと向かった。
　占領下ながらもＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａは営業をしていた。
　ただ、プラモデルの中で地球防衛軍の宇宙艦艇のプラモデルだけは、占領軍の検閲に引っ掛かり店頭にはおいていない。
　フェイトたちはＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをするためにゲームコーナーへと行くと・・・・
「やったわ!!ついにレベルがＡクラスになったわよぉ～!!」
　と、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬのアバターデータを見て歓喜のオネエ口調を出し喜んでいる占領軍の男の姿がそこにあった。
　それはいつぞや、ティアナと共に町へ買い物に行った時に出会ったあの身長二メートル前後の、巨漢の兵士だった。
「「・・・・」」
　今回、初めてオネエ口調で喋る大男・・・・しかも地球人ではなく、デザリアム星人を見て桜花、紅葉、ヴィヴィオの三人は唖然としている。
（他の星でもオ○マっているんだ・・・・）
　紅葉はオネエ口調の兵士を見て、意外にもそう考えることが出来る余裕があった。
（やっぱ、強烈なインパクトを与えるわね・・・・あの人は・・・・）
　フェイトは二回目の出会いであるが、相変わらずあの容姿、体系、そして口調は大きな衝撃を与える。
　しかも意外なことが、彼は先程の言葉からＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイしていたみたいだ。
　ただアバターカードに表示されているのは漂白されたような肌の色のスキンヘッドに眉がなく、目の周りが奇妙な隈取りがされているような、デザリアム星人の顔立ちではなく、地球人と同じような容姿の男が描かれていた。
　それでも、見た目は白人風の男性で、身長は１９０ｃｍ、髪は茶、筋肉モリモリマッチョマンのへんた・・・・もとい、筋骨隆々な男性の姿が

描かれていた。
デザリアム星人の容姿では、コンピューターが認識しなかったのだろうか？
それでも、あのオネエ口調の男本人が喜んでいるのだから別に問題はないだろう。
喜んでいるオネエ口調の兵士を横目に自分たちもＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイしようとしたら、店に武装した兵士たちが入ってきた。
オネエ口調の兵士と違い、彼らがＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイまたは買い物に来たという感じには見えなかった。
「ここの責任者は誰だ!?」
一人の兵士が店の責任者・つまり、店長のセフィリアを出せという。
「なんでしょうか？」
武装した兵士の前にもかかわらず、セフィリアはビクつく様子もなく、兵士の前に出る。
「お前だな!?・・・・地球占領軍の総司令部からの命令を伝える!!本日をもってＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬなるゲームは即刻運営を中止せよ!!この命令に従えぬ者はパルチザンとみなし、それ相応の刑罰は覚悟してもらうぞ!!」
占領軍の総司令部はＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをパルチザンの戦闘訓練と判断してその運営を中止するように通達を出してきた。
「そんな横暴な命令には従えません!!貴方たちが来てから地球は・・・・パルチザンでない人々は常に緊張と不安で精神的に疲れているんです!!その緊張と不安を解消するためにも、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬは数少ない娯楽なんです!!それさえも取り上げようというのですか!?貴方たちは!?」
セフィリアはＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの運営を中止に関しては拒否すると兵士に言う。
「貴様!!先程言ったはずだぞ!!命令を拒否する者はパルチザンと認め、それ相応の刑罰に処するとな!!」

兵士はセフィリアに銃をつきつけ、大声をあげて、彼女を脅す。
「これが最後通告だ!!直ちにＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの運営を中止しろ!!」
「出来ません!!」
「そうか、あくまでも命令に従わないというのだな?ならば、かまわん!!こいつを連行しろ!!ついでに店にいる者も全員だ!!抵抗する者はパルチザンとみなし射殺しても構わん!!」
兵士がセフィリアや店にいる者全員を連行しようとした時、
「ちょっと待ちなさい、貴方たち」
そこに待ったをかける人物がいた。
「なに!?っ!?」
兵士は待ったをかけられたことで不機嫌そうな顔をするが、すぐにその人物の顔を見て顔面蒼白となる。
「め、メイトリック憲兵大佐!!」
兵士たちは慌てて敬礼する。
兵士たちに待ったをかけたのはあの巨漢のオネエ口調のデザリアム星人だった。
((大佐!?))
フェイトと紅葉はあのオネエ口調のデザリアム星人・・いや、彼の階級を聞いて驚いた。
(大佐って確か、管理局で言うと一佐よねっ!?)
(このオ〇マが大佐!?しかも憲兵!?)
フェイトと紅葉が驚いている間にもオネエ口調の士官、メイトリックと兵士との間のやりとりは続いていた。
「大佐・・ですが、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬは・・・」
「わかっているわ。でも、実際にＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやってみてわかったの・・・これは決してパルチザンを育成するような敵性内容じゃないって・・・貴方たちもやってみなさいな、私たちの星にはない素晴らしいゲームだったわよぉ～」
「い、いえ・・・」
「我々は・・・」

「遠慮します・・・」
　同じ星の人間でもあのオネエ口調の大佐はちょっと取っつきにくいようだ。
「そう？でも、そこの責任者の女の人が言うように、私たちは占領下でこの星の人たちに様々な制限を行っているわ。その中でさらに娯楽を奪っては、彼らの不満を高めて、余計にパルチザンを生み出す結果になっちゃうわよぉ～」
「は、はぁ～・・・」
「いい、銃や暴力ばかりで脅すだけがやり方じゃないわよ」
「で、ですが・・・」
「ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの件については、私からカザン総司令に直訴するわ。貴方たちはもう戻りなさい」
「は、はい」
「わ、わかりました・・・」
「では・・・」
　メイトリックは兵士たちを帰らせた。
「騒がせちゃってごめんなさいねぇ～」
「い、いえ・・その・・・あ、ありがとうございました」
　セフィリアはメイトリックに礼を言う。
　なんだかんだで、メイトリックのおかげでＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬは運営を中止しなくてもよさそうだからだ。
　それに自分を含め、来店しているお客たちも収容施設送りにならずに済みそうだった。
「気にしなくてもいいわ。私もＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬが中止になっちゃうのは悲しいから・・また、来るわね。それじゃあ・・・」
　メイトリックはこの後、占領軍総司令のカザンにＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの事を報告しに行くため、セフィリアにウィンクして店を後にした。
（敵の中にも話せば分かってくれる人？もいるんだ・・・）
（オネエ口調だけど、あの大佐は、いい人？だったんだ・・・）
　フェイトと紅葉は去っていくメイトリックの後姿を見て、占領軍の

中にも話の分かる者もいるということが分かった。
一応、メイトリックのおかげなのか、フェイトたちは連行されることもなく、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬもプレイすることが出来た。
その後、メイトリックはカザンをどう説き伏せたのかは分からないが、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの中止命令は撤回された。
メイトリックの様に占領下でも民衆に飴を与える者もいれば、鞭ばかり与える者もいた。
防衛軍とデザリアム軍・両軍のコスモガンにおいて、デザリアム軍のコスモガンは雨などの水に弱いという弱点が露見してから防衛軍と同時性能のコスモガンが地球の生産施設で生産され、それが占領軍の兵士に分配されるようになった。
しかし、そうした生産施設はパルチザンの攻撃目標となっていた。
だが、生産施設は多数あり、一時に何か所も襲撃できない。
また、占領軍も生産施設がパルチザンの攻撃目標であることをこれまでの襲撃で学び、そうした施設の警備も強化していた。
更に、他の生産施設が襲撃を受け、使い物にならなくなったため、無事な生産施設には襲撃された施設のノルマが追加され、施設に収容された技師や作業員の負担も増えていった。
「こら!!休まず働け!!」
「ぐっ・・・・」
とある生産施設では太った体型の占領軍の兵士が強制作業をさせられている作業員たちに鞭を振るう。
「先週よりも生産率が落ちているぞ!!貴様ら!!なに怠けている!?働け!!この劣等民族の野蛮人が!!」
「うっ・・・・」
鞭を振っている見張りの占領軍兵士は作業員が怠けているというが、決して彼らは怠けているわけではない。
パルチザンの破壊工作により、他の生産施設が襲撃され、その施設の生産分のノルマが勝手に追加されているだけなのだ。
「まぁ、貴様らも皮肉だな・・・お前たちが作った武器で、お前たちの仲間が死んでいくのだからなぁ・・・ハハハハハ・・・・」

ニヤリと下品な笑みを浮かべパルチザンを・地球人を殺すための武器を地球人である自分たちが作っていることを、皮肉を交えて言う。
彼が悦に浸って笑いをしている中、
「ムノー曹長殿」
「なんだ？」
ムノーと呼ばれた下士官に声をかける兵士がいた。
「占領軍総司令本部より、通達です」
兵士は電文が書かれた紙をムノーへと渡す。
ムノーはその電文の内容に目を通す。
「ふむ・・・・こ、これは・・・・うーん・・・・面倒なことになった・・・・」
「何かあったのですか？」
「明日、総司令部から情報将校がこの生産施設へ視察に来られる・・・・例の新兵器の一号機が量産されたと総司令部に通達したからな。それを見に来るらしい」
「はぁ・・・・」
「とりあえず、その日は生産ラインを止め、あの奴隷どもは地下の収容施設に閉じ込めておけ」
「はっ!!」
「いいか、決してこの施設の労働環境を本部の視察官に知られてはならぬぞ」
「承知しております」
占領軍は地球占領にあたっていくつかの規律を設けていた。
たとえ、自分たちの文明に劣る星であっても軍は規律がなければ、ただの賊に成り下がる。
その中で、占領時での捕虜の扱いについても記載されており、一日八時間の労働、十分な食事と休息などの事項が盛り込まれていたが、どうもムノーの話から、この生産施設はその規約を待っていない気概が見られる。
他にも無抵抗な現地住民に対する項目もあるのだが、女子供に対する性的暴行については記載されていなかった。

記載されていなくても彼らの身体の事情からその心配はなかった。
最も彼らの本国ではスカリエッティのおかげかクローンの生成も順調に進んでおり、一般市民に関しては次々とクローン体であるが、半機械の身体から生身の身体への転換が始まっていた。
しかし、前線の将兵たちは変わらぬ体で戦っていた。
ムノーはコスモガンの生産ラインの現場から地下の特別生産ライン区画まで降りる。
その特別区画では対パルチザン用の新型兵器が作られていた。
そして・・・・
「おい、女!!」
「・・・・」
「おい、返事ぐらいせんか!!」
「・・チィッ・・・・なに？一々、大声を上げなくても聞こえるわよ」
「・・・・」
特別生産区画には海鳴の月村家の屋敷でその身柄を拘束された忍の姿があった。
もちろん、彼女の傍らにはノエルの姿もあった。
忍は技術者としてこの生産施設へと送られ、そこで新型兵器の開発に従事させられていたのだった。
「貴様が考案したあの新型兵器・栄えある第一号機であるが、その性能はどうなのだ？ちゃんと機能するのだろうな!?」
「だったら、自分の目で確かめたらいいじゃない・・・・ノエル」
「・・はい」
ノエルは無表情で作られたばかりの新兵器のコックピットへと搭乗し、搭載されている武器の試射とその新型兵器の性能を披露する。
「ほぉ～素晴らしい・・・・実に素晴らしい性能ではないか!!これが量産された暁には目障りなパルチザンや未確認生物など、一気に一掃してやるわ!!そして、この生産施設の指揮官である私の地位はもっと上がる!!感謝するぞ、女・・ハハハハハ・・・・」
「・・・・」
忍は悔しそうに顔を歪めるが、ノエルは相変わらず無表情のまま

・・・しかし、人の心を持ち合わせない自動人形であるノエルも人の心で言い表すのであるならば、忍同様、腸が煮えくり返っている事だろう。
技師として作るからには完ぺきなモノを作らなければならない。
だが、自分がこうして作り上げた兵器が同じ地球人を殺す・・・・
夜の一族とはいえ、自分も地球人なのだ。
その地球人が地球のために戦っている人たちに向けて間接的とはいえ、自分は銃口を向けなければならない。
これほど悔しいことがあるだろうか？
いや、忍だけではない。
あちこちの武器生産施設で強制労働させられている技師・作業員全員が思っている事だろう。
その頃、パルチザン司令部では、様々な情報源から各地の武器生産施設の情報が収集されていた。
その中で、ある武器の生産施設では、これまでにない新型兵器の開発が進められているという情報がもたらされた。
しかもその生産施設で働かされている作業員はブラック企業顔負けの労働環境で強制労働を強いられていると言う。
新型兵器の開発なんて、聞き捨てには出来ない。
それに、ブラック企業顔負けの労働環境だなんてそれも許しがたい事実である。
食事や休息だってまともに与えられているのか？
更には事故による怪我や過労による病気だって、ちゃんと治療されているのかさえ怪しい。
一刻も早く、彼らの救助と新型兵器の破壊が急務となった。
ただ、一つここでパルチザンにも問題が起きた。
ここまでパルチザンの活躍を引っ張ってきたポ〇太くん型戦闘スーツに不具合が生じるスーツが出始めた。
このスーツも機械の塊であり、定期的なメンテナンスが必要なのだが、この戦闘スーツ：開発にあの真田や大山が絡んでいるためか、かなり専門の知識が必要なのだが、パルチザンのメンバーの中でこの戦

闘スーツのメンテナンスを完璧にこなすことが出来る技師が不足していた。
ポ○太くん型戦闘スーツはパルチザンの主力なのだが、いかんせんその出動回数も多ければ、占領軍兵士の恐怖の対象になっているので、被弾率も高い。
幸い防御力が高いので、中に乗っている人間が死傷することはないのだが、被弾したまま、十分なメンテナンスが行われなければ、強力な戦闘スーツでも機能障害を起こす。
パルチザンは２４時間、交代で占領軍と戦っているので、戦闘スーツのメンテナンスが追い付いていないのも現状である。
「どうだ？様子は？」
「うーん・・・・ダメです・・・・整備に必要な物資が不足していています。こいつを動かすには別のスーツから部品を取り出さないと・・・・」
「そうか・・・・」
「せめて、この戦闘スーツの開発に携わった人がいたら、心強いんですけどね・・・・」
今では、大破した戦闘スーツの部品を流用してスーツの修理をなんとかしているが、それでも人員と物資が足りない。
この戦闘スーツの開発者である真田と大山は宇宙の彼方・・・・
忍も今は捕らわれの身となっている。
その他にもこの戦闘スーツの開発に関係した月村グループの技師たちも忍と同じ収容施設に収容されている。
まだ、本格的に正式採用するまえの試作戦闘スーツだったと言うことがツケで回ってきた。
「たったこれだけのスーツで大丈夫でしょうか？」
ティアナが不安そうに北野に訊ねる。
稼働できるスーツは決して多いとは言えない。
「ん？」
「だって、次の襲撃目標には敵の新型兵器があるんですよね？それにそこで強制労働をさせられている人たちの救助もありますし・・・・」
「・・・・」

確かにティアナの言う通り、敵の新型兵器というものがどんな兵器なのかまだ詳しい情報がない。
しかし、強制労働をさせられている捕虜の数は５００名と判明している。
その大勢の人々を守りながら、ここまで連れてこなければならない。
途中で敵の襲撃は当然あるものだと考えなければならない。
外部の陽動、退路の確保、施設内の制圧に捕虜の救助・・・
一つの任務の中でやらなければならない事が多い。
だが、この作戦を中止するわけにはいかない。
「・・・それでも、やらなければならない・・・たとえ、戦闘スーツ全てをなくすことになっても・・・」
「・・・」
「大丈夫、なんとか味方の被害を最小限で抑える作戦を立案してみるさ・・・みんなの意見も聞きたい・・・ブリーフィングをしたいから集まってくれ」
北野は作戦に参加する皆を集め、地図をテーブルの上に広げると、さっそく作戦立案のための会議を行った。
翌日になり、パルチザンのもとに敵が開発している新型兵器は戦車であることが判明した。
開発の趣旨はやはり、あの戦闘スーツに対抗できるための戦車がコンセプトらしい。
それを聞き、何としてでもその新型戦車は破壊しなければならない。
この強力な戦闘スーツを上回る戦車なんて作られたら、それこそ今後の活動に大きな支障と犠牲者を出すことになるからだ。
パルチザンたちはありったけの装備を持ち、新型戦車製造工場へと向かった。
同じ頃、占領軍士官が使用している官舎では・・・
忍同様、暗黒星団帝国の囚われの身となっている雪が窓の外を呆然と見ていた。

（こうしている間にも地球の人の命が奪われているのね・・・）
世界各地にて、パルチザンと占領軍との間で戦闘が起きている。
戦闘が起これば当然、死傷者は出ている。
アルフォンに目をつけられていることで、味方に情報を送りにくくなっている雪は無力感を覚える。
しかし、自分にはまだやらなければならないことがある。
それはあの地球に打ち込まれたハイペロン爆弾についての情報を手に入れることだ。
占領軍の様子を見る限り、パルチザンは未だにハイペロン爆弾の占領には至っていないみたいだ。
アルフォンは階級が少尉という下級士官であるが、情報部に所属しているということで、様々な情報を知っている筈だ。
その中には当然あのハイペロン爆弾の情報を持っている。
自分がアルフォンの下を去るのはハイペロン爆弾の情報を得てからだ。
雪はそう心の中で決心していた。
そんな時、部屋の扉が空き、アルフォンが入ってきた。
「どうだね、体調の方は？」
アルフォンは雪の体調の具合を訊ねる。
「元気ですわ・・・」
負傷した怪我はすっかり癒えたので、体調に関しては問題なかった。
しかし、精神面ではこうして敵の手に捕まっていることで、やや疲れている。
「ふっ・そうは思えないがね・・・今日も顔色が良くないよ・・・」
アルフォンはそうした雪のメンタル面も見抜いていた。
「・・・心配なのかね？パルチザンにいる仲間たちのことが・・・？・・・それとも、君が考えているのは飛び立って行ったあの艦のことかな・・・？」
「・・・」
確かにアルフォンの言う通り、パルチザンにいる北野たち、仲間の

事も心配だし、宇宙のはるか彼方へと旅立ったヤマトの事も気になる。
「・・・まぁ、いい。来たまえ。今日は君を外へ連れて行ってあげよう・・・・」
「外へ？」
アルフォンは雪に意外な事を言い出す。
捕虜の身である自分を外へ連れ出すというのだ。
もしかしたら、怪我が治ったので、収容施設にでも移送するのだろうか？
そんな思いが雪の脳裏をよぎっても不思議ではなかった。
だが、アルフォンの目的は雪の思惑とは異なっていた。
「ああ、僕は今日、ある場所を視察せねばならん・・・そこに同行してもらいたい」
アルフォンは雪を収容施設へ移送するのではなく、公務である場所の視察をするので、その視察に雪も連れていくのだと言う。
「・・・私が逃げるかも、とはお考えにならないのですか？」
「・・・・」
もちろんその可能性はアルフォンだって抱いている。
しかし、彼には雪は絶対に脱走することはないと確信していた。
「お答えにならないんですね・・・」
「もし、逃げる気があるのなら、君ならこの建物からでもうまく逃げ出すことが出来るだろう・・・違うかね？」
「・・・・」
アルフォンは雪が度々、この建物から出てパルチザンに情報を送り、戻っていたことを密かに知っていた。
先程、自分が言ったように雪はなんどもこの建物から出ている。
逃げようと思ったらそのまま逃げることが出来る。
にもかかわらず、彼女は再びこの建物に戻ってきている。
ならば、雪には自分の下から離れない目的があるのだとアルフォンはそう読んでいた。
しかし、アルフォンはそれを雪に訊ねないし、総司令部にも雪の件

について報告を入れていない。
遠回しに雪に対して、『自分は知っているんだぞ』と心理的に訊ねるだけだ。
雪自身もアルフォンが、自分が行っていた諜報活動を既に知っている事を掴んでいた。
だからこそ、最近はその活動を休止していたのだ。
互いに互いの事を知っていながら問い詰めることもしない。
まるで仮面夫婦の様だ。
「フッ・・・ほら、君だって同じだよ。僕の質問には答えてくれない・・・それに、今日はどちらにしても同じだよ・・・これから僕たちが向かう場所は広大な砂漠の中央にあるのだからね・・・」
「砂漠？」
そして、アルフォンは雪をエアーカーに乗せて視察場所へと赴いた。
関東第二クレーター砂漠。
そこは２１９８年にガミラスの遊星爆弾が直撃したことによってできた巨大なクレーターでその直径は約四十六キロにも及ぶ。
コスモクリーナーのおかげで放射能はないが、そのクレーターには何故か草木が今でも生えていない砂漠化した土地になっていた。
やがて、肉眼でも今回の視察先の施設が見えてきた。
「これは・・・？」
「製造プラントだ・・・ここではあるモノを作っている・・・」
「あるもの・・・？」
「見ればわかる・・・」
やがて、アルフォンと雪を乗せたエアーカーは生産施設の前に到着した。
「これは、これは、アルフォン少尉。お待ちしておりました」
施設の出入り口で二人を出迎えたのは愛想笑いを浮かべた男だった。
「出迎えごくろう・・ムノー曹長」
「いえいえ、わざわざお越しいただいて光栄でございます」

「うむ・それで、例の新兵器の第一号機が完成したと聞いた・・・カザン総司令もあの新兵器には大いに期待している。それはつまり、君の手腕に期待しているということだ」
「はっ、粉骨砕身、帝国のため、かならずや、あの新兵器の量産を整えてみせます!!」
ムノーは自分が頑張っているかのように言うが、実際に働いているのはこの施設に収容され、強制労働をさせられている地球人である。
「おや?そちらの地球人は誰ですかな?新しい囚人ですか?」
「いや、私の同行人だ・・・彼女の事は構わず、さっそく見せてくれないか?」
「はっ、ではこちらに・・・」
ムノーはアルフォンと雪を新兵器が置かれている部屋へと案内する。
地下の大きな実験場には新型の兵器・・・対パルチザン用の新型戦車が置かれていた。
「あれは・・・歩行戦車・・・!!」
新型戦車は暗黒星団帝国の三脚戦車同様、キャタピラーやタイヤの類ではなく、ロボットの様な脚を持つ戦車でその見かけは虫のようにも見える。
大きさは対パルチザン用と言うことで、パトロール戦車よりも小さい。
戦車と言うよりも戦闘アーマーと言った方が正しいかもしれない。
「ここは・・・兵器工場なのね!!」
「そうだ・・・」
「あなたたちは今のまでは飽き足らず、また新しい兵器を・・・」
「誤解のないように言っておくが、この工場の運営に関しては僕も本意ではない・・・この計画を推し進めているのは、占領軍総司令官であるカザン総司令だ。僕は現場を任されていたにすぎない」
アルフォンは自己弁護するかのように新型戦車の開発プロジェクトに関しては深くかかわっていないと言う。
確かに地球製のコスモガンの製造案に関してはアルフォンの提案

であったが、新型戦車に関して、彼は提案していない。
カザンは神出鬼没なパルチザンと兵士たちが恐れている未確認生物に手を焼き、新型戦車の開発を推し進めたのだった。
「手をかしているなら、同じことです」
雪はアルフォンの自己弁護を蹴って、たとえどんな理由があるにせよ、こうして現場を任されているのであるならば、十分関係者であると言う。
「・・・・」
アルフォンだって、雪に言われなくとも自覚しているのか、それ以上は何も言わない。
「新型戦車の試作機は既に完成している。威力も証明済みだ。あそこにおかれているのは量産機の第一号機だ・・・・」
「・・・・」
「だが、私が見せたいのは戦車ではない・・・・ここの施設には、この戦車や武器を作るための労働者たちがいる・・・・今日は視察のため、製造ラインを停止しているので、今は最下層の地下収容施設にいる」
「地下・・・・収容施設?」
「見たまえ・・・・彼らだ」
モニターに表示された地下収容施設の防犯映像には雑居房に押し込められた大勢の地球人技師、労働者の姿が映し出されていた。
「っ!?あれはっ!?」
「そう・・・・彼らはすべて奴隷となった地球人たちだ・・・・すなわち、この戦車もここで作られている武器もすべて君と同じ、捕虜になった地球人が作っているのだよ・・・・」
「・・・・」
雪はこの新型戦車がまた大勢の地球人の命を奪うのかと思うと悔しくてたまらなかった。
しかもこの戦車を作っているのが暗黒星団帝国の技師ではなく、自分と同じ地球人であるということが許せなかった。
だが、まだ目的が果たせていない以上、雪はグッと耐えるしかなかった。

その頃、この兵器製造工場の近くでは、既にパルチザンたちが集結していた。
「まさか、こんな砂漠のど真ん中に兵器工場を作っているとはな・・・」
古野間が双眼鏡で目標のプラントを確認しながら呟く。
出来ればガセネタであってもらいたかったが、現実は非情で、実際に彼らの目の前には兵器工場が存在していた。
「元防衛軍の採掘プラントを改装して使っているようです・・・情報ではあの施設には捕虜になった人のうち、５００人の人が働かされているそうです」
「周りの警備状況はどうですか？」
ティアナが工場周辺の警備状況を訊ねる。
「まずまずってところだね。戦力は予想していたものとそう変わらないみたいだ・・・あとはうまく潜入できるかと、退路を確実に確保することにこの作戦の成否がかかっている」
「今回は戦闘スーツが不足していますからね・・・」
戦闘スーツ以外はこれまで敵の装備品や武器の生産施設を襲撃し、それを奪ったりして、それなりの数を揃えてきたが、それでも不安はある。
「なあに、あのスーツがなくても、これまでの実戦がいい訓練になっただろう？最初は素人だったお前さんを含めて、みんなもう一人前の空間騎兵だ。なにより、優秀な指揮官がいるしな、そうだろう？北野隊長」
「よしてくださいよ。からかうのは・実戦じゃ、古野間さんにはとうてい敵いません」
「北野さん」
「なんです？」
「新型兵器って聞きましたけど、具体的にあの工場では何を生産しているんですか？」
ティアナが今回の目的の一つである破壊すべき敵の新型兵器について北野に訊ねる。
「うん・あそこでは、我々パルチザンを討伐するための新型戦車の開

発をしているとの情報を掴んだ・・・これまでにない強力な戦車をね・・・」
「新型・・・戦車・・・」
ティアナはこれまでの戦闘で敵の三脚戦車やパトロール戦車を見てきた。
当然、搭載されている武器の威力も・・・
いずれの戦車も空を飛べない人間で相手をするには骨が折れる、手を焼くどころか、対応を間違えたら、死ぬレベルの強力な陸上兵器・・・
もちろん、管理局では採用されていない兵器だ。
その強力な陸上兵器の新型があの工場で生産されている。
なんとしてでもあの工場は破壊し、生産された戦車も鹵獲・または破壊しなければならない。
戦車と聞いてティアナの脳裏にあの時・ハイペロン爆弾を占拠しようとして攻め込んだが、逆に返り討ちにあった仲間の姿が過ぎる。
彼らにとどめを刺したのも敵の戦車部隊だったからだ。
しかし、ティアナは恐怖に呑まれまいと頭を振り、深呼吸をして事前に決められて作戦内容を思い浮かべ、あの時の光景を忘れるようにした。
「俺たちパルチザンを倒すための戦車を同じ地球人が作らされているわけか・・・胸糞悪くなるぜ・・・」
「私もです・・・それにこの環境下ではあそこに捕まっている人たちは逃げ出そうとしてもこの砂漠では生きて都市部までたどり着けないでしょうし・・・」
「でも、周囲から隔離されているおかげで、警備が比較的に薄いですからね・・・敵はこっちの情報網をなめているのか、我々がここを嗅ぎつけたことに気付いていません」
地球の彼方此方に存在する生産施設の中でもあの工場はトップシークレットレベルに値する工場のためか、味方でもあの工場の存在を知っている者はごくわずかなのだろう。
それに周囲が砂漠というこの環境は自然とあの工場を陸の孤島に

していた。
そのため、情報が漏れにくいのだが、警備する人間も限られてしまう諸刃の剣となっていた。
そして、今回は運悪く、工場の存在をパルチザンに掴まれてしまった。
「そういえば、この情報はどこから?・・・・あの娘か?」
古野間は北野にあの工場の情報は雪からもたらされたものなのかを問うと、
「いえ、別の情報源からです」
今回の情報は雪からではないと答える。
「あの人・・・『白い花』は、あの一件以来ずっと沈黙しています。無事だといいんですが・・・・」
「ああ、俺がくたばる前にもう一目会いたいところだしな・・・・」
「?」
北野と古野間の会話から、二人はこれまで自分たちに情報を与えていた『白い花』の正体を知っている様子で、会話の内容から『白い花』の人は女性だと推察された。
しかし、『白い花』が誰なのか皆目見当がつかないティアナは首を傾げた。
「くたばるなんて、縁起の悪いこと言いっこなしですよ。さっ、行きましょう!!」
「・・・・そうだな」
「はい!!」
北野、古野間、ティアナの三人は新型戦車及び施設の破壊、そしてその施設に囚われている人たちの救助のため、敵、生産施設へと向かった。

百七話　プラント破壊・救出

暗黒星団帝国、地球占領軍はメガロポリス東京にて神出鬼没で活動をしているパルチザンに手を焼いていた。

また、彼らが使用しているボ〇太くん型戦闘スーツを未知の生物兵器の類と勘違いしているのだが、こちらもパルチザン同様、手こずっており、占領軍の兵士にはある意味でトラウマを植え付けられていた。

カザンは地球占領軍の総司令としてこれらの不穏分子の一掃をするために、新兵器の開発を推し進めていた。

開発場所は関東の某所にあるガミラスの遊星爆弾によって作られた巨大なクレーター部分にある採掘プラントを改装したところにあり、そこではブラック企業顔負けの労働環境で捕虜となった技師たちが強制労働をさせられていた。

強制労働をさせられて技師の中には忍の姿もあり、彼女は製造プラントの中でも最重要機密にあたいする新型兵器・・・虫のような外見の四脚歩行戦車の開発をさせられていた。

ただ、この製造プラントの存在は、パルチザンはもとより、味方の占領軍の内部でも一部の者しか知らないほどのトップシークレットだった。

しかし、この製造プラントの存在はパルチザンに知られることになり、パルチザンは新兵器及び施設の破壊、そして強制労働をさせられている捕虜の開放のため、動き出した。

まず、内部に潜入し、敵の新型戦車の破壊と捕虜の開放では、古野間、北野、ティアナらの少数精鋭のチームが行い、数少ないボ〇太くん型戦闘スーツは退路を確保する別動隊に優先的に分配された。

潜入チームは下水道から内部へ潜入を試みた。

戦闘スーツなしでの潜入・しかも下水道から・・・・

マンホールを開けた時、ティアナは思わずその臭いに顔をしかめた。

しかし、『臭いから嫌です』とは言ってはられない。
北野を先頭に潜入チームは進んで行く。
そして、無事に製造プラントへの潜入に成功した。
秘密厳守のため、この製造プラントに割り当てられた警備兵の数が圧倒的に少なく、下水道まで警備の手が回っていなかった。
また、パルチザンにこの製造プラントが見つかるわけがないと高を括っていたのか罠の類も無かった。
「こちらスペード1、プラント内部の侵入に成功。予定通りだ」
北野が別のチームに現状を伝える。
「ハート1、了解」
「宗像、退路の確保は重要だ。救出した捕虜を運び出さなきゃいけないしな・・・いいか、外の確保はまかせたぞ!!」
「了解」
「ここまでは順調ですね」
「問題はここからだな・・・」
北野は携帯端末を稼働させ、この製造プラントの地図を表示する。
「新型戦車の開発工場と捕虜収容施設はここ・・・でも、建物の左側・・・戦車開発区画は捕虜監視システムと連動して、自動で動く銃座が多数設置されている」
「さすがに警備兵と銃座の目をかいくぐって戦車を破壊するのは無理がありますね・・・」
「だろうな・・・警備の兵士が少ない分、監視システムの銃座は連中にとって重要な兵力だろうからな・・・」
「ええ・・・そのため、我々はまず東側の最深部にあるコンピューター室にあるコンピューターを破壊し、捕虜監視システムを停止させてから、開発区画へと向かいます」
「なるほど・・・まずはコンピューター室の破壊と銃座の停止ですね」
「それでは、行きますよ!!」
「はい!!」
「おう!!」
三人はまず、東側にあるコンピューター室へと向かった。

まだ、敵にこちらが侵入したことを悟られるのはまずいので、手榴弾やバズーカなど、大きな音がする武器は極力使用せずにコスモガンや体術、ナイフなどの刃物で敵兵を斃し、進んで行くことにした。
通路の床にはセンサーで反応する格納式の銃座もあるので、通路に入る際は紫外線ゴーグルでまずはセンサーがないかをチェックして慎重に進んで行く。
コンピューター室を目指している中、武器集積区画にて警備の兵士に見つかり、銃撃戦となる。
見つかってしまってはもう隠れることも逃げることもできないので、古野間や北野はランチャーやマシンガンで敵兵を斃していく。
ティアナはコスモガンによる精密射撃で確実に敵兵を斃していった。
敵に見つかったことで製造プラントには警報が鳴り響く。
「な、何事だ!?」
アルフォンと雪をエスコートしていたムノーにもその警報は知れ渡る。
「南ブロックに侵入者あり!!繰り返す!!南ブロックに侵入者あり!!全警備兵はただちに警戒態勢に移れ!!」
「なっ!?侵入者だと!?」
館内放送を聞いて、慌てふためくムノー。
一方、アルフォンは慌てる様子もなく、落ち着いている。
「侵入者・・・そうか・・・ここにもうパルチザンが来たのか・・・」
「あ、アルフォン少尉・ど、どうすれば・・・」
ムノーはアルフォンに指示を仰ぐ。
「ここのプラントの警備責任者は君だろう?全力で彼らを排除し、新型戦車とこのプラントを死守せよ・・・万が一、戦車かこのプラントが彼らの手によって破壊されれば・・・どうなるかはわかるだろう?」
アルフォンは落ち着いた口調・そして冷めた目でムノーにどうするべきかを伝える。
「は、はい・・・」
自分たちの最高司令官であるカザンが推し進めていたこの計画と

プラント・・・
　それが万が一にもパルチザンの手によって破壊されれば、警備責任者である自分は文字通り、無能者の烙印を押されて処刑される。
　ムノーの顔は青ざめ、体はガタガタと小刻みに震える。
「アルフォン少尉!!パルチザンの襲撃です!!」
　そこへ、警備兵の一人が報告に現れる。
「ああ・・・この警報と放送を聞けばわかる」
「いつ、どこから襲撃してくるかわかりません。避難してください!!」
　兵士はアルフォンにこのプラントからの避難を促す。
「・・・わかった・・・君は来たまえ!!」
「はっ!!」
　アルフォンは報告に来た兵士に道案内役を頼む。
「それではな・ムノー・・・健闘を祈るよ」
「は、はい・・・」
　震えているムノーを横目にアルフォンは去っていった。
　一方、武器集積所を占拠した北野たちは・・・
「こちらスペード1。第一関門突破。A地点の占拠に成功」
「クラブ2、了解」
「まだ、コンピューター室にたどり着く前に気づかれてしまいましたね・・・まぁ、これだけドンパチやれば無理もありませんけど・・・」
　出来ればコンピューター室の破壊までは敵に見つかりたくはなかったが、少数とはいえ、敵兵がうろついている施設に潜入するからにはいつ、敵に見つかってもおかしくはなかった。
「まだまだだ・・・ここがドンパチ、賑やかになるのはな・・・」
　古野間はニッと笑みを浮かべながらティアナに言う。
「さっ、先を急ぎましょう!!」
　三人はもう敵に見つかることを気にせずに進む。
　通路からは武装した警備兵が来ると彼らに向かってロケットランチャーをぶっぱなし、手榴弾を遠慮なしに投げつける。
「こちらスペード1。B地点の占拠に成功」
「クラブ4、了解」

「いよいよこの奥が、コンピューター室がある区画ですね・・・？」
「ええ、間違いない」
北野が携帯端末で間違いがないかを確認し、三人はいよいよ、コンピューター室へと向かう。
「ここだな・・・」
コンピューター室には警備兵の姿はなかった。
人員不足なのか？
それとも自動銃座に頼り切っているのか？
とにかく、目的の一つであるコンピューターの破壊に障害となるモノが居ないのは幸いだ。
「こちらスペード1．ターゲット1に到着!!これよりターゲットを破壊する!!」
「クラブ1、了解」
「ハート1、了解」
三人はコンピューター室に時限爆弾をセットする。
「隊長、こっちのセットは終わったぜ」
「こっちもです!!」
「では、この部屋から出ましょう!!」
三人はコンピューター室から出て十分に安全が確保される距離まで離れると、設置した時限爆弾の起爆スイッチを押す。
轟音と地震のような振動がプラントに響き渡る。
確認のため、三人がコンピューター室へと戻ると、そこにあったコンピューターは見るも無残に破壊されており、復元はもはや不可能なレベルだった。
「スペード1、ターゲット1の完全破壊完了」
コンピューター室のコンピューターが破壊されたことにより、監視システムは停止。
通路の彼方此方にある自動銃座もその機能を停止した。
「あとは工場の方ですね・・・急いで戻りましょう!!」
「そうですね」
「ああ」

三人は急いで元来た道を引き返す。
「動力が落とされたか・・・・あるいは制御コンピューターが破壊されたか・・・・」
「・・・・」
一方、プラントからの避難途中だったアルフォンは、通路の照明が消えたのを見て、パルチザンたちが動力部かコンピューター室を破壊したのだと推察した。
雪はただじっと何も言わずにアルフォンに付き従った。
「少尉、この先はもう無理です。一番から四番まで、隔壁が全て閉じられました。・・・・東側の非常口からご避難ください!!」
コンピューター室が破壊され、防壁が下ろされた。
しかし、逃走防止のため、手動での開閉は不可能で、再び開けるにしてもコンピューター室は破壊されたので、隔壁を破るには爆弾かロケットランチャーによる武器での破壊しかなかった。
だが、アルフォンも案内役の兵士も分厚い隔壁を破壊できるほどの武器は持ち合わせていなかった。
当然、雪は丸腰なので問題外である。
遠回りだが、今は一刻も早くこのプラントから避難するのが最優先なので、アルフォンと雪は非常口を目指した。
一方、このプラントの警備責任者のムノーは通路を走っていた。
(くそっ、占領軍の仕事の中でも一番楽で出世しやすい部署だと思ったのに・・・・なんで・・なんで!?こんなことに・・・・!?くそっ!!)
彼は何度も頭の中で自問自答をしていた。
占領軍の数ある部署の中でもプラントの警備責任者という仕事はただ、労働力となる地球人をいたぶっているだけで、楽で、しかも昇進しやすい部署だと思っていた。
事実、昨日まではそうだったし、このプラントの製造プランは総司令であるカザン肝いりの計画で進められた。
製造された新型戦車を献上するだけで、自分の株は上がり、出世も約束されたはずだった。
それが今では、パルチザンがここへ襲撃しに来て、自分は窮地に立

たされている。
　ようやく出世のチャンスを掴んだのだ。
　こんなところで邪魔されてはたまらない。
（おれの、野蛮人め!!）
（しかし、まだだ・・・まだ、負けたわけでない・・・俺にはまだ、切り札が残されているんだ!!）
　ムノーは急ぎ、新型戦車が置かれている区画へと向かった。
　まさか、そこへ北野たち、パルチザンが向かっているとは知らずに・・・
「さて、こっちが例の新型戦車と捕虜の収容施設がある区画です・・・制御コンピューターは破壊しましたが、外部バッテリーでまだ、生きている銃座があるかもしれません・・・気を付けて進みましょう」
　新型戦車と捕虜がいる区画なので、監視用の銃座もコンピューターからの電源だけでなく、外部バッテリーを積み込んだタイプのモノが存在している可能性があるので、注意して進まなければならなかった。
　案の定、扉をあけると、床から格納式の銃座が姿を現した。
「「っ!?」」
　三人は急いで物陰に隠れる。
　銃座は一歩遅れて三人を銃撃して来る。
「このっ!!」
　ティアナはショルダーバッグから手榴弾を取り出して、銃座に向かって投げる。
　ほんの少しの間をおいて、通路からは轟音が響き、爆煙が立ち込める。
　チラッと通路の様子を見ると、銃座は物言わぬ残骸となり果てていた。
　銃座を突破して先へと進んで行くと、コンベアやクレーンといった工業設備が目立ってきて、ここが製造プラントなのだと実感させられてくる。
　警備兵を次々斃し、進んで行く三人。

「この先にあるんだな・・・・例の新型戦車が・・・・」
「あともう少しですね・・・・」
　間もなく、新型戦車が置かれている区画へはこの先の階段を降りるだけとなった時、上の通路には雪とアルフォンの姿があった。
「あれは・・・・!!」
　雪は下の階にいる北野たちの姿に気づく。
「北野く・・・・んっ・・・・」
　雪が北野に声をかけようとしたら、アルフォンは手で雪の口を塞ぐ。
「そうか・・・・あの時の彼らか・・・・」
　アルフォンも北野たちの存在に気づいたが、今は雪が居るので、アルフォンは高所から北野たちを狙撃できる絶好のチャンスでありながらも、彼らを攻撃することなく、北野たちがその場から去るのをただジッと待った。
　やがて、彼らはアルフォンと雪の存在に気づくことなく、その場を後にした・・・・
　そして、北野たちは地下の特別区画・・・・新型戦車が置かれて区画へとたどり着いた。
「ここが新型戦車の開発区画・・・・」
「あとで、ここにも時限爆弾を設置して生産器具を破壊しましょう。新型戦車も破壊しないといけないし・・・・でも、まずは囚われている人たちの救出が優先です」
　北野はここも破壊するがまずは、捕虜の救出を優先した。
「ん?・あれは・・・・?」
　すると古野間がこの区画におかれている虫型ロボットのようなモノの存在に気づく。
「おそらく、例の新型戦車でしょうね・・・・」
「意外と小さいですね・・・・本当にあれが戦車なんですか?私はもっと大きなモノだとばかり思っていました・・・・」
　占領軍の主力兵器の一つである三脚戦車を見た経験から、強力な戦車＝でかい戦車というイメージがあったティアナとしては新型戦車

がこんなにも小型な形状だったことに意外性を感じていた。
「いや、この方が良いんだよ。嬢ちゃん・・・俺たちパルチザンは、地の利を利用して迷路のような街中や工業地帯で戦う・・・大きすぎて身動きが取れず、足元をすくわれるかもしれない大型の戦車より、自由に狭いところへはいっていける小型の戦車のほうがいい・・・」
「なるほど・・・」
「ここまで小型化されるとなると、パルチザン本部にだってもぐりこめることができるだろうな・・・」
「なんかゾッとしますね・・・」
パルチザン本部に突然、目の前の虫のような戦車が襲って来たら一体何人の仲間が犠牲になるのか分からない。
当然、管理局では思いつかない兵器であるが、かつてスカリエッティが制作したガジェット・ドローンを大型化して有人機に改造したような印象を受ける。
「どうする隊長?先にあれだけでもぶち壊すか?」
古野間は捕虜収容区画へ行く前にあの新型戦車だけでも破壊してから行くかと訊ねる。
このままここに放置しておいて、捕虜収容区画へと行き、後ろから追撃されては折角助けた人たちに大勢の犠牲者を出す可能性がある。
「そうですね。このままここに置いておくと敵の手に渡るかもしれませんし・・・」
北野は古野間の意見を採用し、捕虜収容区画へ行く前にせめて新型戦車だけは爆破しておこうとした。
しかし・・・
ウィンンン・・・
起動音と共に新型戦車は動き出した。
「動き出した・・・もう、起動可能状態まで出来上がっていたんだ・・・!!」
まさか新型戦車が既に起動可能状態になっていたことに驚愕する北野たち。
しかし、彼らはまだ知らなかった。

既に新型戦車は目の前のこれを含めて二台が起動可能状態であることを・・・
「ちっ、とんだおまけがついていやがったな・・・」
「でも、ここで放置するわけにはいかないでしょう」
この先にある捕虜収容区画へコイツを連れて行くわけにはいかない。
それに今後の活動のためにもコイツはここで何としてでも破壊しなければならない。
「ハハハハハ・・・来たな!?虫けらどもが!!我らの新型戦車の威力、とくとその身で味わうがいい!!」
新型戦車に乗っていたのはムノーだった。
彼はさも自分たちデザリアム星人がこの新型戦車を作ったかのような口ぶりであるが、デザリアム星人が行ったのはコンセプトのみで、それを実現させたのは忍たち月村グループの技師たちであった。
新型戦車は後部の左右に装備しているビーム砲を乱射しながら接近してくる。
三人は散会し、柱などの物陰に隠れる。
「くそっ!!なんて速さだ・・・!!」
古野間は新型戦車の俊敏さに思わず舌を巻く。
「まるでクモみたいですね・・・」
その戦車の形状からティアナは見たままの感想を述べる。
新型戦車はブーストで高くジャンプするとなんと、壁にへばりついたりと本当に戦車ではなく、虫型ロボットなのではないかという性能を見せつける。
「ガハハハハ・・・どこに隠れようと、こいつからは逃れられんぞ!!」
「くっ・・・」
「こいつが量産された暁にはきさまらパルチザンなど一ひねりにしてやるわ!!」
パルチザンに侵入され、一時は今の地位からの失墜どころか、処刑まで考えたムノーであったが、この新型戦車を自らが操縦して、改めて威力を確認すると、パルチザンに侵入された失態などすぐに取り返

せると確信した。
　そして、この新型戦車を量産し、司令部へと献上すれば、自分はあのアルフォンよりも上の地位と権力を得られると思っていた。
（いつまでもペコペコと頭を下げている俺じゃない・・・・こいつらを始末して、この新型戦車を量産し、俺はさらなる高みを目指す!!）
「景気よくばかすか撃っちゃって・・・このっ!!」
　隙を見てティアナが新型戦車にコスモガンを討つが、小型でも戦車・・・・コスモガン程度ではダメージを与えることが出来ない。
「隊長、古野間さん、あいつに何か弱点みたいなのはないんですか?」
　インカムでティアナは北野と古野間にあの戦車の弱点に思い当たることがないかと訊ねる。
「通常の戦車だったら、履帯を壊すかジェネレータあたりをたたけば、何とかなるんだがな・・・・」
「それってどこにあるんですか!?」
「車体の下かとかだろうが、あいつは通常の戦車と異なる形状だらなぁ・・・・もしかしたら、あの邪魔なレーザー砲の後ろあたりにあるかもしれない」
「車体の下かレーザー砲の後ろ・・・・」
（クロス・ミラージュ・・・・）
（なんでしょう?）
（この状況下でも魔法は使えるかしら?）
　この地球はミッドとことなり、ＡＭＦが空気の中に当たり前の様に存在する。
　ＡＭＦの厄介さは起動六課時代に訓練や実戦で嫌というほど体験している。
　それでも、今回はなんとかこの場を切り抜けなければならない。
（あまり長時間は使用不可能で、使用後はしばしの休息が必要となりますが、できないことはありません）
（それならなんとかアイツの隙を作ることができれば・・・・）
　ティアナはこのＡＭＦが広がる状況下で、魔法を使いあの新型戦車を倒す方法を模索するが、まずは・・・・

「・・・・北野さん、古野間さん」
「ん？なんだ？」
「お二人は中嶋さんか藤堂さんに私が異星人で、その星の治安維持組織に属していることを知っているんですよね？」
　ティアナは北野と古野間に自分が管理局の人間であることを知っているのかを問う。
「え、ええ・・・・」
「ああ・・・・藤堂長官から聞いている・・・・」
「・・・・もう一つ、私が魔導師であることもですか？」
「・・・・」
　魔法の存在も管理局の艦がこの世界に漂流したことから一部の人間に知れ渡っており、防衛軍の長である藤堂も当然、知っていた。
「ああ・知っている」
　そしてティアナが魔導師であることは藤堂から北野、古野間から伝えられていた。
　しかし、それは北野、古野間が十分に信用できるからこそだった。
　二人が口の軽い男たちならば、藤堂は決してティアナが魔導師であることを伝えなかっただろう。
「・・・・それなら、これから見ることを誰にも言わないでもらえますか？」
「それはどういう・・・・」
「私が魔法を使い、あいつの注意を引きます。その隙にアイツの弱点を攻撃してください」
「・・・・わかった」
「古野間さん？」
「今は、あの化け物をぶち壊すことが優先だ・・・・嬢ちゃんがどんな力を持っていようとな・・・・」
「・・・・そうですね・・・・ランスターさん、お願いします」
「・・・・はい」
　ティアナは目を閉じ、意識を集中する。
　元々、ティアナは魔力が多い魔導師ではない。

このＡＭＦがある環境下ではクロス・ミラージュの言うとおり、長時間は無理だ。
だからこそ、この一回にすべてを賭けなければならない。
「さあ、もう観念して出てこい!!せめてもの情けだ・・・・苦しまずに一発で眉間をぶち抜いてやる」
ムノーは戦車のコックピットからセンサーと目視で北野たちを探す。
すると、柱の陰からティアナが飛び出してきた。
「そこだ!!」
ムノーはティアナに向けてレーザー砲を浴びせる。
初弾は外れるが、何十発も連発していれば、被弾率も上がり、ティアナの身体にレーザー砲が命中し、風穴があき、ティアナは倒れる。
(まずは一匹を仕留めた!!)
ムノーはこれで確実にティアナを仕留めたと思った・・・・
しかし・・・・
床に倒れると同時にティアナの身体はまるで空気に溶けるかのように消えた。
「なにっ!?」
突然消えたティアナに驚くムノー。
先程、柱の陰から出てきたのはティアナの幻影だった。
フェイク・シルエット・・・・単体あるいは複数の幻影を発生させる高位幻術魔法で、肉眼や簡易センサー類では見抜けない精度を誇るが、幻影に攻撃が直撃すると消えてしまう。
数少ないティアナの主要魔法であり、これまでの人生の中で様々な応用の効く性質とティアナ自身の機転によってたびたび仲間やティアナ本人の窮地を救ってきた。
今回もティアナはフェイク・シルエットにて、自らの幻影を囮にして、ムノーの注意を引きつけた。
初めて、魔法というものを目の当たりにした北野、古野間、そしてムノーは驚いたが、古野間はティアナが作り出したチャンスを無駄にはしなかった。

彼はロケットランチャーを肩に担ぎ、物陰から飛び出し、新型戦車に向かってロケット弾を放つ。
新型戦車は古野間に向けて背を向けていたのだ。
「くたばれぇ!!」
後部にロケット弾が命中した新型戦車は、レーザー砲は吹き飛び、足が折れ、崩れるように床に倒れ沈黙した。
「ざまぁみろ・・・」
完全に沈黙した戦車を確認し、北野はティアナの下へと駈け寄る。
「大丈夫か?」
「は、はい・・・でも、思ったよりも力を使い果たしたみたいで・・・しばらく動けそうにありません・・・隊長たちは先に行ってください・・・」
フェイク・シルエットを一度使っただけで、魔力の消費がかなり多いことで、ティアナには起き上がり、一緒についていく体力も残されていなかった。
でも、ここで動けないティアナを放っておくわけにもいかないので、北野は彼女に肩を貸した。
「それにしても恐ろしい戦車でしたね・・・あれが量産されていたと思うと、背筋が凍る思いです・・・」
北野に肩をかりながら、破壊された新型戦車を見てつぶやくティアナ。
「おそらくあの戦車自体がまだ完全品というわけではなかったのでしょう・・・」
「では、あれは試作機ってことですか?」
「多分・・・」
北野はあの新型戦車はまだ試作機であると判断したが、実際はアレで完成品だった。
おそらく忍たち新型戦車の開発に携わった技師たちのほんのささやかな抵抗だったのだろう。
強力であり、完ぺきであるが、唯一無二の無敵の戦車・・・というわけではなかったのだろう。
「・・・こちらスペード1、ターゲット2の破壊に成功・・・これより捕

虜の救助を開始する・・・・」
　北野は別動隊に新型戦車の破壊を伝え、この製造プラントに収容されている地球人の救助を行う旨を伝える。
「クラブ1、了解。隊長・・・・こちらも施設内の占拠が完了しました。・・・もう大丈夫ですよ」
「こちらハート1。工場外部の占拠も完了です。輸送車両もすべて確保できました・・・ただ、要人と思われる高速エアーカーが一台、逃走しました・・・今からではとても補足できません」
「要人用？・・・・わかりました。ともかく、各班ともに最後まで気を抜かないようにおねがいします」
　北野は要人用のエアーカーと聞いて、この製造プラントの所長が逃げたのだと思った。
「了解」
「それじゃあ、我々もここに捕まっている人たちの救助をしましょう。あまり時間をかけていると敵が戻ってくるかもしれませんし・・・・」
　北野は急いで収容されている人たちの救助を行うため、地下の捕虜収容所角へと向かう。
　この時、新型戦車の一番近くにいた古野間は戦車の搭乗員の生死を確認しに行く。
　すると、破壊された戦車のコックピットには瀕死のムノーが居た。
「うぅ・・・・あ・・・・アル・フォン・・・・少尉・・・・わ、私は・・・・」
　瀕死の重傷を負い、意識が朦朧とする中、コックピットの前に立つ古野間をアルフォンと見間違えたのか手を伸ばしてくるムノーであったが、やがて力尽き、ガクッと体を倒すと、彼は二度と起き上がることはなかった。
「・・・・ここも・・・・ここもお前の仕業か!?・・・・アルフォン!!・・・・出てこい・・・・出てこい!!どこにいやがる!!アルフォオオオオオンっ!!!」
　古野間はアルフォンの名を聞いて、周囲を見渡しアルフォンの名を叫ぶ。
　しかし、アルフォンが古野間の前に姿を現すことはなかった。
　一足先に捕虜収容区画へとたどり着いた北野はティアナを一度、床

におろし、次々と電子ロックを解除して捕まっていた人たちを解放する。
そして、解放した人たちに避難経路を説明する。
そんな中、
「あれ？もしかして、ティアナちゃん？」
「えっ？」
「やっぱり、ティアナちゃんじゃない!!どうしてこんなところに!?」
「忍さん!!それにノエルさんも!!」
解放された人たちの中にティアナは忍とノエルの姿を見つけた。
「忍さんとノエルさんもここに収容されていたんですね!?」
「ええ・・・それよりもどうしてティアナちゃんがここに・・・？」
「えっと・・・私もパルチザンに参加していて・・・」
ティアナは忍とノエルに自らがパルチザンに参加している事を話した。
「そう・・・でも、ティアナちゃんはもともと地球とは関係ないのになんでこんな危ないことを・・・」
「それでも、地球が大変なのにただジッと何もしないことはできなかったんです」
その後、体にまだ力が出ないティアナはノエルがお姫様抱っこをして外まで連れ出した。
ティアナは大勢の人に抱っこされている姿を見られ終始顔を赤くして恥ずかしがっていた。
収容されていた人たちの救助が行われている中、砂漠を高速で走る一台のエアーカー・・・。
そのエアーカーにはアルフォンと雪の姿があった。
「製造プラントは全滅・・・捕まっていた人たちも全員解放されたでしょうね・・・」
「・・・」
雪はあの様子では新型戦車の製造プラントは完全に破壊され、捕まっていた人たちもパルチザンの手によって解放されただろうと推

測する。
その証拠に製造プラントの彼方此方では爆発や煙が立ち上がっている。
雪の推測通りなのかアルフォンは無言のままだ。
「・・・なぜ・・なぜ、あなたは、あそこで働かせている人たちを私に見せたんです？」
雪はアルフォンに今日、あの製造プラントの視察に自分を同行させた真意を訊ねる。
「・・・わからないんだ・・・どうしてなのか・・・僕にもね・・・」
アルフォン自身も今日の視察でなぜ、雪を連れていき、そこで働かされている人たちの姿を見せたのか？
自分でもその行動を理解できなかった。
「あの状態では新型戦車もすぐには製造を再開することはできまい・・・完成している試作機が一台、司令部に残っているが、一台だけでなんとかなるものではない・・・」
確かに新型戦車の威力は凄かった。
しかし、たった一台で戦況を覆せるほどのものではない。
「・・・」
「これで・・・これでよかったのかもしれない・・・」
「えっ？今、何か言われました？」
「いや、なんでもない・・・帰ろう」
アルフォンは新型戦車の製造プラントが破壊され、今後新型戦車の製造が難しくなったと言うのに、それを悲観する様子もなく、むしろ新型戦車が製造されなかったことを喜んでいるみたいにも見えた。
しかし、そのつぶやきはあまりにも小さな声であったため、雪には聞こえなかった。
暗黒星団帝国に属しながらもアルフォンには何か心境の変化が生まれているかのようでもあった。
いや、もしかしたら雪を助け出した時から、彼には何か思う所があったのかもしれない。
今回、北野が得た情報は雪からもたらされたものではなく、別の情

報源からだった。
その情報源はもしかしたら・・・・

ヤマト地下改修ドック　現・パルチザン司令部

「まったく、ずいぶんと酷使してくれちゃって・・・・」
忍はボロボロになったボ○太くん型戦闘スーツを見てあきれるように言う。
「も、申し訳ありません・・・・パルチザンの活動でこの戦闘スーツは意外にも高性能だったので、あちこちの戦線に引っ張りだこになって・・・・」
北野は忍に折角の戦闘スーツをこんなにもボロボロにしてしまったことを謝罪する。
「まぁ、作った側の人間としてはうれしい悲鳴よ・・・・今後はちゃんとメンテナンスできるように係の人にも指導していくから、貴方たちにはもっと頑張ってもらうわよ」
「はい!!」
解放されていた人たちの中に忍たち月村グループの技師たちが居たことで、ボ○太くん型戦闘スーツのメンテナンスも行われ、さらに新型戦車の製造が事実上不可能となったことから、パルチザンの士気は高まった。

地球防衛軍司令部　現・暗黒星団帝国地球占領軍司令部　カザン執務室

「なんだと!?例の新型戦車製造プラントが破壊されただと!?」
「は、はい・・・・」
新型戦車製造プラント破壊の知らせは占領軍総司令であるカザンの下にも届いた。

「たしか今日はアルフォンが視察へと赴いていたはずだ・・・アルフォンはどうした!?」
「間一髪のところ、無事に避難されたようです」
「なにっ!?避難だと!?」
「は、はい・・・」
「プラントがパルチザンどもの攻撃を受けている中、破壊工作の阻止をせずに避難だと!?・・・それは立派な敵前逃亡でないか!!」
「は、はぁ・・・」
「後日、アルフォンを呼べ!!」
「は、はい」
「それで、今後の新型戦車の生産の目途はどうなった!?」
「製造にかかわっていた地球人技師たちも解放されたみたいで、目下新型戦車の製造の目途は立っていません・・・」
「くぅ～・・・忌々しいパルチザンめ・・・!!」
　新型戦車の製造プラントが破壊され、さらに今後の製造の目途もつかないことから反対に占領軍の士気は更に下がることになった。

百八話　褐色矮星・新たなる罠の予感

地球にて新型戦車の製造プラントを破壊し、暗黒星団帝国に囚われの身となっていた忍たちを解放したパルチザンは着々と地球解放へ近づいていた。

その頃、星の海では、ヤマトを中心とした地球艦隊は暗黒星団帝国の本星の手掛かりを求めて褐色矮星の宙域へとやってきた。

しかし、地球艦隊の動きは逐次、暗黒星団帝国本星、デザリアム星の国家元首、聖総統に知られていた。

「フフフフ・・・ついにやってきおったな・・・我らが懐の内まで・・・・」

モニターに映し出されている地球艦隊の姿を見て、不敵な笑みを浮かべる聖総統。

「・・・はい」

その傍では側近であるサーダの姿もあった。

「フフ、ご覧になって、聖総統閣下・あの下品な艦影を・・・まるで無知の象徴ではありませんか」

サーダはモニターに映し出されている地球艦隊の艦影を下品、無知の象徴と言う。

しかし、地球人とデザリアム星人では当然、住んでいる星、周辺の宇宙環境、技術力、艦船の設計思想が異なるので、サーダが地球艦隊を見て、下品と言うように、もしかしたらデザリアム星人が傑作だと自信満々で作り上げた暗黒星団帝国の艦船も地球人から見たら、『ダサい』と評価するかもしれない。

「フッ・・・それで、サーダよ。手筈は整っておるのだろうな？」

聖総統はサーダが立案した作戦は準備が出来ているのかと問う。

「はい・・・抜かり無く」

サーダは既に作戦の準備は出来ていると答える。

「まずはよく敵を知るのが先決。追撃艦隊のミョーズめも、グロータス准将もそれで失敗いたしました。地球艦隊の実力とやら、聖総統閣下の御前で暴いてごらんに入れますわ・・・」

サーダは地球艦隊の実力：つまり、情報不足により、ミヨーズもグロータスも敗北したと言うが、グロータの場合、慢心とサーダの言う通り、地球艦隊に波動カートリッジ弾と言う新兵器が搭載されていたことを知らなかった為に敗北したのだが、ミヨーズの場合、中間補給基地の時と同じく、地球艦隊の情報を友軍に知らせなかった経緯があるので、一概に情報不足で敗北したとは言いにくい。
しかし、ミヨーズが情報を送らなかったせいもあり、サーダはそれを知る由もなかった。
「では、お手並みを拝見しようとするか」
「はっ・・・フフ、あなたたちが誘い込まれたこの宙域が、いったいどんな場所なのか、知れば驚くでしょうね・・・・」
聖総統は観戦するかのようにモニターを見つめ、サーダは自分の立てた作戦にかなりの自信がある様子で、モニターを見ていた。
サーダが何やら罠を仕掛けたであろう褐色矮星の宙域を航行する地球艦隊。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋

「スクリーン、全てグリーン。左舷前方にクラス３の褐色矮星を確認。４光年以内の距離に、あと三つほどの恒星を確認できますが、ほぼ赤外線反応のみ。全部同じタイプの褐色矮星ですね・・・・」
「レーダーに敵影なし」
「敵がいないのか？」
敵本星の手掛かりがあると思われるこの褐色矮星宙域・・・・
しかし、周りには褐色矮星のみで敵の姿はどこにもない。
罠にしても待ち伏せぐらいは覚悟していたのだが、小型艦船どころか偵察機も見つからない。
「暗黒ガスが所々に点在しているようですから、そこに逃げ込んだ可能性もあります」
暗黒ガスの中まではレーダーには映らないので、敵はもしかしたらその暗黒ガスの中に逃げ込んだか、ガスの中で待ち伏せている可能性

もある。
新見がその点を指摘する。
「罠にしてはあまりにも不気味と言うか、静かすぎますね・・・」
「まったく、不気味な場所ですよ。すぐ近くに恒星があるのに、眩しいどころか、ただ薄暗いだけですしね」
ギンガや永倉の言う通り、この宙域はあまりにも不気味だ。
暗黒星雲ほど暗くはないが、恒星があるのに輝きが一切ない。
まるで、死んだ恒星のような宙域だ。
「まぁ、それは仕方ないだろう。もともと褐色矮星というのは恒星になりきれなかった星だと言われている。すなわち恒星と惑星の中間の存在とも言える。褐色矮星は核融合反応がおきるほど、高い熱を発生することが出来ない・そのほとんどが光をあまり発せず、自重による収縮時に赤外線を放出する程度なんだ・・・」
良馬が自分の持っている知識から褐色矮星の部分を説明する。
彼の言う通り、褐色矮星は太陽のような恒星、そして地球のような惑星の中間の惑星と考えてもらえれば分かりやすい。
通常の恒星の主成分は水素であり、その質量がある限界を超えると、自重により恒星内部で核融合反応が起こる。
これにより恒星は光と熱を発することになるのだ。
対して褐色矮星の場合、恒星の主成分は通常の恒星同様、水素であるが、質量不足により核融合反応が起こらない特徴を持っている。
「光を発しない恒星か・・・」
「とにかく、このまま先を進んでみよう。敵がいないとはいえ、ここにむけて撤退したと言うからには何かあるはずだ」
罠にしろ、まずは敵の姿を確認しなければ、敵本星の情報なんて得られない。
良馬はこのまま進むように伝える。
「そうですね。周囲には暗黒ガスがありますからね。副長が言った通り、ガスの中に敵さんが潜んでいる可能性は十分にありますからね」
永倉は引き続き艦を前進させた。
敵の待ち伏せが十分考えられるとのことで偵察もかねてコスモタ

イガーの発艦要請がヤマトから来たので、まほろば　はコスモタイガーを飛ばす。
　同じくヤマトからもコスモタイガー隊が発艦するのが確認できた。
　周囲を偵察しながら搭載されているレーダー衛星を設置していると、そのレーダー衛星の一つが敵影をキャッチした。
「レーダー衛星が敵影をキャッチ!!エネルギー反応多数!!・・・・艦隊の周辺に点在しています!!」
「パネルに投影」
「了解」
　パネルには地球艦隊を取り囲むような配置で敵の姿が投影されていた。
「やはり、罠だったか・・・・」
　とはいえ、この宙域に敵が罠を仕掛けている可能性は十分にあったので、そこまで驚愕するほどのものではなかった。
　まほろば、ヤマトのコスモタイガー隊は後方から接近する敵を・・・・
　無人艦のハルバードとファルシオンは前方から接近する敵を・・・・
　まほろば、春藍は左舷側の敵を・・・・
　ヤマト、雪風・改は右舷側の敵を受け持った。
　敵の艦種はエネルギー反応からみて、駆逐艦なのだが、その速力はあまりにも異常だった。
「は、速い・・・・なんなんだ?この敵は!?」
　敵の速度に狙いが定まりにくいことにフェリシアは思わず舌を巻く。
「高速駆逐艦か・・・・射程は短いようだが、その分、スピードと攻撃力は通常の駆逐艦よりもあるようだ・・・・敵は一撃離脱戦法でじわじわとこちらにダメージを与えるつもりの様だ・・・・」
「でも、あの速度は異常ですよ!?あんな無茶な操艦をすれば、乗員だって酔って戦闘なんてできるわけが・・・・いや、それ以上に重力加速の影響で体がつぶれてしまいます!!」
「・・・・おそらく敵はあのテンタクルスのような無人の駆逐艦なのだろう・・・・無人ゆえに重力加速度を無視して無茶な動きが出来ると言う

わけだ・・・」
　同じ無人艦でもやはり、暗黒星団帝国の方が技術は上の様だ。
　地球にも同じ無人の駆逐艦が建造されているがあそこまで無茶な動きは出来ない。
「そんな厄介な敵相手にどうすれば・・・」
「いや、コンピューター制御の無人艦だからこその弱点もある。あの艦はどうやら決まったパターンで動いているようだ・・・副長、あの艦の動きをすべてトレースしてくれ」
「はい」
　ガトランティスの火炎直撃砲の砲撃パターンを解析した新見ならば敵の動きもトレースできるだろう。
「砲雷長、副長が敵の動きをトレースするまで、盲撃ちでいい。時間を稼げ」
「は、はい」
　盲撃ちとはいえ、重武装の宇宙戦艦なので、何発かはラッキーパンチにより、敵艦に命中するモノもあった。
　一撃離脱を戦法とする高速駆逐艦故、装甲はかなり薄く、一発くらっただけで爆沈するほどの防御力であったが、やはり速力が早いので、そう簡単には当たらない。
　そんな中、褐色矮星の一つにある変化が起きた。
　突然、光を発しないはずの褐色矮星が光りだしたのだ。
「褐色矮星が光っている・・・」
「矮星二強烈ナ熱核反応ヲ確認!!」
　新見が敵艦の動きをトレース作業中なので、バトライザーがレーダー業務を行っていた。
　バトライザーは褐色矮星の変化を報告する。
「熱核反応・・・まさかっ!?」
　質量不足のため、核融合反応が起きないはずの褐色矮星で熱核反応が検知された。
　これはあきらかに人為的に起こされたモノだ。
「褐色矮星ガ爆発シマシタ!!衝撃波ガコチラニ向カッテキマス!!」

無茶な核融合反応をしたせいで、褐色矮星がそれに耐えきれずに崩壊・爆発した。
爆発の影響で衝撃波が生まれ、その衝撃波が地球艦隊めがけて押し寄せてくる。
「どのぐらいで来る？」
「衝撃波到達マデ後、３０秒デス」
「隔壁閉鎖!!総員、対ショック準備!!急げ!!コスモタイガー隊にも注意喚起を入れろ!!」
良馬は乗員とコスモタイガー隊に衝撃波による影響の備えを命じる。
「了解」
今から３０秒でコスモタイガー隊を呼び戻し、着艦させるのは無理だった。
「衝撃波だって!?くそっ!!」
褐色矮星の爆発と衝撃波についてはギンガとヤマト通信長の相原が急いでコスモタイガー隊に伝達した。
今からではヤマト、まほろば　への着艦は不可能だ。
山本と坂井は急いで味方機に指示を出した。
「全機、エンジン停止!!生命維持装置以外をすべてロックしろ!!」
「急げ!!凍結モードにして、衝撃波をやり過ごすんだ!!それが一番ダメージを少なくする方法だ!!」
衝撃波が迫る中、新見がようやく敵艦の動きをトレースできた。
コスモタイガー隊を守るためにも衝撃波が来る前に一隻でも多くの敵艦を沈める必要があった。
トレース情報を他艦にも伝達され、敵の撃沈率が上がった。
やがて、衝撃波がやってきた。
激しい振動が起こるも艦自体には大したダメージはなかった。
「ど、どうやら持ちこたえたみたいですね・・・」
「小さな褐色矮星だったから助かったな・・・ただこの距離だ・・・もっと大きな恒星が爆発していたら、一瞬で蒸発していたところだ・・・」
「艦長、コスモタイガー隊との連絡が途絶えました!!」

「なんだって!?・・・・そうか、今の衝撃波で・・・・」
「コスモタイガーの装甲では・・・・今頃・・・・」
　最悪の結果が脳裏を過ぎるが、
「諦めるな!!そう簡単に死ぬようなみんなじゃない!!引き続きコスモタイガー隊に呼びかけろ!!」
「は、はい」
　ギンガは必死にコスモタイガー隊に通信を送り続けた。
「敵の高速駆逐艦も今の衝撃波でほとんど大破したみたいです」
　艦載機並みに装甲が薄い高速駆逐艦が今の衝撃波を耐えきれる筈もなく、コスモタイガー隊同様、大きなダメージを受けていた。
　雪風・改はヤマトが盾になってくれたおかげでほぼ無傷だった。
「しかし、なんでいきなり爆発したんでしょう?」
　フェリシアが突然の褐色矮星爆発の原因を訊ねる。
「褐色矮星は、自力で核融合反応を起こすことは不可能だ・・・・考えたくないが、敵が人口的に爆発させたという線が濃厚だろう・・・・」
　褐色矮星の爆発は敵の仕業だと言う良馬。
「敵の仕業・・・ですか?」
「ああ・・・・向こうが使用している艦船はすべて無人・・・・人的被害はないからな・・・・高速駆逐艦で我々を釘付けにしてその間に褐色矮星を爆発させて、その衝撃波で仕留めるつもりなのだろう・・・・」
「じゃあ、敵は我々を沈めるためだけに星一つを犠牲にしたんですか!?」
「おそらくな・・・・あの程度の褐色矮星なら、爆発の影響も1千天文単位以上の距離までは広がらないだろう・・・・他の宙域に敵が控えていてもそこまで衝撃波は届かない。展開している無人艦さえ被害を除けば、この宙域に居る我々だけにダメージを与えることが出来る絶好の罠だ・・・・」
「なんて奴らだ・・・・」
　例え生命が存在しない星でもそれを捨て石の様に扱う暗黒星団帝国のやり方には胸糞悪い思いが込みあげてくる。
「ガス帯付近に、空間歪曲反応を感知!!敵がワープアウトしてきます

!!」
「なにっ!?」
「弱ったこちらにとどめを刺す気か・・・」
「そうはいくか・・・貴様らに捨て石にされた星の恨み、思い知れ!!」
敵は追加の無人高速駆逐艦を送り込んできたが、すでにその動きはトレースされているので、会敵当初よりはスムーズに戦いを進めることが出来た。
多少手こずりはしたものの、地球艦隊は無人高速駆逐艦隊を何とか撃破することに成功した。
無人高速駆逐艦隊全滅は戦闘を観測をしていたサーグラスも知ることとなった。
「無人高速駆逐艦隊、全て消滅!!」
「ぬぅ〜・・・」
オペレーターからの報告に苦虫を噛み潰したように顔を歪め、唸るサーグラス。
「本星より通信!!・・・サーダ様からです!!」
そこへ、通信員がサーダから通信が来たことを報告する。
「繋げ・・・」
通信回路を開くとモニターにサーダの姿が映しだされる。
「サーダ様、無人艦隊は全滅・・・地球艦隊はうまく切り抜けたようでございますが・・・」
「フフ・・・それはわかっています。無人艦をコントロールしていたのも私・・・戦況は全てモニターしています」
「はっ、出過ぎた発言、お許しください」
「いいえ、よいわ。一刻も早くグロータス准将の仇を討ちたいと言うあなたの気持ち、わからないでもないのよ。ただ連中の力がどれほどのものか、まずはそれを確かめることが肝要・・・よくぞ我慢してくれましたね、サーグラス。次はあなたの率いる艦隊の力、思う存分に見せてくれてもいいわ」
「それでは・・・」
「連中を誘い出し、あなたの用意した部隊で迎え撃ちなさい。ただし、

いいこと・・・？連中をなるべく本星から遠ざける位置に誘い込むのよ。彼らはまだ我々の本星がどこにあるのか暗中模索している様子・・・危険を承知でも、かならず誘いには乗ってくるわ・・・」
「心得ました!!我が艦隊の威力、彼奴等にしらしめてやりましょうぞ!!」
　ようやく親友の仇討ちの機会が訪れたことからサーグラスの機嫌も士気も高かった。
「フフ・・・では、吉報を待っているわ・・・」
「・・・フハハハハハ!!ついに、ついにグロータスの仇を討てる時がきたか・・・待っておれ!!」
　サーダとの通信が切れると、サーグラスは高笑いをして親友であるグロータスの仇討ちの機会が来たことに喜ぶ。

　無人高速駆逐艦隊をかたづけた後、地球艦隊ではコスモタイガー隊の捜索が行われていた。
「救命ビーコンを感知!!コスモタイガー隊の反応です!!」
「見つかったか!!」
「はい。無事な様子ですが、流されていますね・・・ここから１０宇宙キロほど後方の位置です」
「生き残ってくれただけでもうれしいよ・・・救命艇を手配、迎えにだしてくれ」
「了解」
　まほろば、ヤマト、春藍から救命艇が発進し、コスモタイガー隊を迎えに行く。
　その間、
「応急修理要班は艦の損傷チェックを頼む。被害状況を割り出し、すぐ修理にかかってくれ」
　良馬はコスモタイガー隊が戻ってくる合間に艦の修理を指示する。
　そんな中、
「空間歪曲反応をキャッチ!!敵です!!」
「なにっ!?」

艦隊の右舷側に空間歪曲反応と共に敵の反応が出た。
しかし、敵艦は地球艦隊に攻撃することなく、再びワープしてこの宙域から撤退した。
「敵反応消失・・・再びワープしたもようです・・・」
「一体何しに来たんだ？」
「あいつら、わざとワープ経路を残していきやがった・・・誘い込んでいるわけか・・・」
敵は地球艦隊にわざとワープの航跡を辿らせるために一時的に地球艦隊の前に現れてそしてワープで撤退していった。
「追いかけたとしてもまた敵が次の罠をしかけて待ち構えているでしょうね・・・」
「でも、行くしかない・・・地球を救うため・・・連中の本星の位置を掴むためには・・・」
「・・・」
良馬の言葉に皆はうなずく。
「まぁ、敵としても罠を張るために自分たちも知らない場所は選ばないだろう・・・どれだけ引きずり回されても、そこは敵の版図の中のはず・・・その中には必ず敵の本星を掴むための手掛かりはあるはずだ・・・」
(そうとも、どれだけ罠を張り巡らされようとも、それを食い破り、絶対に連中の本星をみつけてやる!!)
地球人よりも高度の技術力を持つデザリアム星人も人間なのだから必ずどこかに隙は生じるはずだ。
例え、次の宙域に罠が張り巡らされようとも地球を救うため、必ず敵本星の位置を掴んでやると地球艦隊乗員の心は固まっていた。
その頃、地球艦隊が目的地とする暗黒星団帝国本星デザリアム星では・・・
「フフ・・・ご覧になって聖総統閣下？連中は誘いに乗って、出発していきますわ・・・」
「うむ・・・データも多量に得ることが出来たし、まぁ、よしというところか・・・」

聖総統は無人高速駆逐艦の一個艦隊が全滅させられたが、その損害よりも得るものがあったので、一応、満足していた。
「波動砲とやらの威力を見られなかったのは残念だがな・・・」
相手が高速で動きまわる駆逐艦なので、地球艦隊は今回の戦いでは波動砲を使用せず、また貴重な波動カートリッジ弾も使用しなかった。
そういった点では、今回のデータ収集の作戦は不完全なのではないだろうか？
「問題は、あの融合反応・・・ゴルバとの一件を見る限り、敵のタキオン波動兵器は我々の兵器に使用している動力炉との間に大きな反応を起こしてしまうようです・・・やはり、連中は本星に近づけるべきではない敵かと・・・」
サーダは地球艦隊の波動砲、波動カートリッジ弾のタキオンエネルギーと自軍で使用しているエネルギーの融合反応を危惧していた。
地球艦隊と対峙する時、自分たちは体に爆薬を括りつけて戦っているようなものだ。
「ふふふ・・・ここまで近づけておいて、よく言うわ。だが、この件については緊急に対策を立てねばならんぞ、サーダ」
「・・・おまかせを・・・ですが、それも杞憂かもしれませんわ、聖総統閣下。例のモノもあることですし・・・」
サーダには無人高速駆逐艦隊、褐色矮星の爆破以外にもまだ地球艦隊に対する策があるかの様に含みを抱かせる感じで言う。
「あの駆逐艦隊も、褐色矮星の爆発さえも、全ては囮か・・・まったく恐ろしい女だよ、お前は・・・」
「・・・うまくいけば、サーグラス大将も地球艦隊と相見えることはないかもしれませんわね・・・」
今回の地球占領作戦、地球艦隊の追撃で暗黒星団帝国はあまりにも多くの人材と艦船を失い過ぎた。
これ以上の喪失は帝国の軍事バランスを大きく欠如する恐れもある。
特にサーグラスは暗黒星団帝国の総司令官なのだ。

地球艦隊との戦いで彼を失えば、それこそ軍は大きなダメージを受け、士気も低下するかもしれない。
そのため、サーダはサーグラスが地球艦隊と戦わなくても済むもう一つの策をすでにあの褐色矮星の戦いで仕込んでいた。
ヤマトの第三砲塔の陰には一つのカプセルのようなものが転がっていた・・・
しかし、ヤマトの乗員でそれに気づいている者はいなかった・・・
「地球艦隊よ・・・貴様らが血眼になって探している我が本星が、この銀河のどこに位置しているのか・・・・知れば驚愕するぞ・・・・それを知る日は永遠にこないだろうがな・・・・ふはははは・・・・!!」
聖総統はモニターに映る地球艦隊の姿を見ては口元を大きく歪め、高笑いをしていた。

ここで視点は星の海・・・・褐色矮星のある宙域からミッドへと移る。

ボラー連邦からミッドへと亡命したミノフスキーは、管理局の庇護のもと、ミッドの語学とミッド・管理局が従来使用している魔動力炉の知識を学んでいた。
近い将来、自分が持っているボラー連邦で使用している宇宙船のエンジンとこの魔動力炉を融合させた宇宙船のエンジンを作るために・・・・
管理局はどうも魔力にこだわるところがあるので、すべてボラー連邦と同じ・・・・は煙たがるような気概が見受けられる。
それらを解決するにはまず、管理局・管理世界の技術を知らなければ作れない。
管理局の技術官の中にはボラー連邦の人間に自分たちの技術を提示して大丈夫かと言う不安視をする者も居た。
その一方で、敵とは言え、高性能の技術を学べるかもしれないと言う未知の技術に興味を持つ者も居た。
マリエルやシャーリーもそう言った技術者の一人だった。
また、ルキノの方は将来、新たなエンジンを搭載した艦を見ること

やそれを操艦することを楽しみにしていた。
ミノフスキーの存在はまだミッドをはじめとする管理世界の一般人には知られてはいないが、本局の一部の人間にはその存在は知られており、管理局上層部は厳重な緘口令を敷いていた。
しかし、あそこまで管理局の艦隊をボコボコにしたボラー連邦の人間と言うことで、管理局の中にはボラー連邦の人間に対する恨みがある者も当然居る。
そういった者たちがミノフスキーを私刑または暗殺する恐れもある。
だが、今の管理局はミノフスキー自身の身柄はどうでもいいが、彼が持っている知識を失うわけにはいかない。
彼の私物から宇宙船のエンジンの設計図だけを奪えばいいかと思ったが、事態はそう簡単なことではなく、管理局の内部にはボラー連邦の言語を訳せる人物が居ない。
知識もなしに複雑なエンジンの設計図を見ただけで、それを具現化できる技師も居なかった。
そのため、ミノフスキーの護衛にはシグナムとヴィータがついていた。
ヴィータは以前、警護課に所属していた経緯があり、その過程で三提督の紅一点、ミゼットと知り合いになったのだ。
機動六課設立の際、三提督が秘密裏で協力したのも、ヴィータがミゼットと知り合いだったことが少なからず関係していた。
当初、なのはと同じ教導隊であるヴィータがボラー連邦の人間であるミノフスキーの警護にまわることに対して、なのはは不満を口にしていた。
「なんで、ヴィータちゃんがあんなひどいことをする星の人を守らなきゃいけないの!?」
「なのは、あたしだって、ボラーがしたことは許せねぇよ。でも、今の管理局にはあのじーさんの協力がどうしても必要なんだ。それにあのじーさんはベムラーゼじゃない・・・確かに同じ世界に所属していたけど、じーさん自身、故郷に帰れば問答無用で殺されちまうんだ

・・・ベムラーゼの手によってな・・・」
「・・・」
「ボラーに恨みを抱くなとは言わねぇ・・・でも、恨みを持つにしてもそれはベムラーゼや一部の軍人だけにしろ・・・少なくともあのじーさんは、局員の処刑や武力制裁に関しては全く関係ないんだ・・・ただボラー連邦の人間だからって理由で恨んでいたら、それこそテロリストと変わらねぇぞ」
ヴィータ自身、ボラー連邦のやり方には腸が煮えくり返る思いだが、そもそもの元凶は管理局があちらに手を出したことがきっかけだし、ボラー連邦全ての人間が局員の処刑、武力制裁に関係したわけではない事を理解している。
だからこそ、処刑にも武力制裁にも関係していないミノフスキーの事を第三者の様に見ることができるのだ。
それに護衛として関わってみてミノフスキーは決してベムラーゼの様な残忍なボラー星人ではなかった。
ちょっと変わり者なところがあるが、休憩中などはヴィータに自分の故郷や幼少期の頃を話すことがある。
住んでいる星の政府や環境でボラー連邦があの様な国家にならなければならない経緯もミノフスキーの話からヴィータは知った。
もっともシグナムからは『懐柔されるなよ』と注意を受けたが、互いに理解しあい、寄り添わなければ、信頼なんて生まれない。
ミノフスキー自身、ヴィータの事を異性として見る様なロリコンではなく、どちらかというと、孫に話しかける様な感じだった。
その様子からミノフスキーがミッドに亡命してから一番心を許せるのは今の所、ヴィータの様にも見える。
ヴィータはその容姿と身長から、やはり高齢者には好かれる様だ。
実際にミゼットや海鳴にいた頃には地元のゲートボールクラブの老人たちには孫の様に可愛がられていた。
「わ、私は・・そ、そんなつもりじゃ・・・」
ヴィータの指摘になのはは、顔色を青くして動揺している。
自分がスカリエッティやこれまで過去に取り締まってきた犯罪者

と同じ思想を持っているのかと思うと、自分の存在を否定された様な気持ちになったのだ。
「・・・」
（こりゃ、まずいな・・・フェイトやヴィヴィオがいない事で、なのはの奴、精神的にかなりまいっていやがる・・・）
なのはの言動からヴィータはなのはのメンタル面を危惧する。
なのは自身、幼少の頃、父である士郎がボディーガードの仕事中にテロに巻き込まれ、大怪我を負い、長期の入院生活を余儀亡くされた時、高町家は離散の危機に直面するほど、家族の心がバラバラになった時がある。
幸いあの時は、離散前に士郎が無事に退院して何とか事無きを得たが、親友のフェイト、そして養女のヴィヴィオの不在がじわじわとなのはの精神を傷つけている。
そこへ追い打ちをかけるようにボラー連邦への武力制裁とその失敗、さらには親友と養女が滞在する世界が、暗黒星団帝国なるボラー連邦やガトランティスのような凶暴な星間国家に占領されてしまい、現状が確認できないときた。
なのはが精神的にまいるのも無理はなかった。
（フェイト・・・ヴィヴィオ・・・早く帰ってきてくれ・・・それかせめて無事な姿を見せてくれ・・・）
なのはのメンタルが擦り切れる前にフェイトとヴィヴィオが帰ってきてくれることを祈った。
いや、ミッドへの帰還が無理ならば、せめて顔を見せて、なのはと話すことだけでもいい・・・
今のなのはを元気づけることが出来るのは自分ではなく、フェイトとヴィヴィオしか居ないのかもしれない・・・
そう思うヴィータであった。
そのヴィヴィオはと言うと・・・
先日、暗黒星団帝国・地球占領軍はシミュレーションゲーム、ＢＲ

ＡＶＥ　ＤＵＥＬの停止を行おうとしたが、憲兵大佐のメイトリックが占領軍総司令官のカザンとＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ・・・もとい、お話をして、取り下げることが出来た。
　ヴィヴィオはまさか、ミッドにいるもう一人の養母のメンタルが参っていることを知る由もなく、占領下でありながらも変わらぬ日々を過ごしていた。
　そして、今日もヴィヴィオはＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイしにＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａへと来た。
「待っていたわよぉ～ヴィヴィオちゃ～ん」
「あっ、大佐!!」
　ＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａにて、ヴィヴィオを待っていたのは暗黒星団帝国・地球占領軍・憲兵大佐のメイトリックだった。
　ヴィヴィオは敵の士官にもかかわらず、メイトリックと親しい様子で彼に近づき声をかけている。
　彼の階級が大佐と言うことでヴィヴィオは親しみを込めて彼の事を大佐と呼んでいる。
　メイトリックを初めて見た時はその強烈なキャラで言葉をなくし、唖然としていたが、今ではこうしてＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの思い、プレイ仲間としてこうして一緒に遊んでいる。
　周囲の人間：初めてこの店に来店した客はハラハラしているが、この店の店員や常連客は二人の様子を温かい目で見ている。
　敵の士官なのにあんなにも親しくしていると、「売国奴」と言われそうだが、メイトリック自身、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの運営中止の中止をカザンに進言したことや横暴な態度を取っていないこと、ヴィヴィオがまだ幼い子供だからこそ、そう言った暴言が来ないのだ。
　一方、メイトリックの方も、こうして現地の子供（と思い込んでいる）と戯れていると、メイトリック自身、裏切り者と疑われそうだが、彼の所属が軍の機密に関わるような部署ではなく、憲兵と言うことと相手がやはり、幼い子供だと言うことで警戒度が薄かった。
　まぁ、それ以外にも彼のキャラが強烈だから、なるべく関わりたく

ないと言うのもあるのかもしれない。
　また、彼がこうして地球占領作戦に従事することになったのも憲兵と言う役職以外にもやはり、彼のキャラが濃く、強烈なので聖総統も厄介払いを含めて、彼を地球占領作戦に従事させたのかもしれない。
「・・・」
　フェイトの場合、もうこの光景を何度も見ている筈なのだが、彼女は複雑そうな顔をしている。
　なのはやフェイトは、ヴィヴィオには魔導師、非魔導師と分け隔てなく交友を深めてもらいたいと考えている。
　それは、ヴィヴィオ本人はもとより、自分（フェイト）やエリオ、スバルやナカジマ家の姉妹たち、特殊な生まれをした者ばかりが周囲に大勢いるからだ。
　しかし、いくら分け隔てなく交友を広めてほしいと思いながらも地球を占領している敵軍の士官・・・しかも、オ〇マと親しくなっている・・・
　養母としては複雑になるのも当然だ。
（・・・なのは・・・私はどうすればいいのかな？）
（ヴィヴィオがいろんな人と親しくなるのは嬉しいはずなのに、なんか素直に喜べない・・・）
　フェイトの悩みもある意味深刻だった。
「負けないんだからねぇ～ヴィヴィオちゃん～」
「私だって、負けないよ!!大佐!!」
　フェイトの心配を余所にヴィヴィオとメイトリックは二人でブレイブシュミレーターへと向かって行った。

『歳をとったな大佐、てめえは老いぼれだ！』
『ぬぉっ!!』
『気分いいぜ、これから死ぬ気分はどうだ、大佐ぁ！てめぇはもう終わりだ！』
『ふざけやがってぇ!!へぇい!!はぁっ!!ほぉぁ!!』
『野郎、ぶっ殺してやぁぁる!!!』

モニターにはスキルカードで大人姿（聖王モード）となったヴィヴィオと白人男性で、身長は１９０ｃｍ、髪は茶、筋肉モリモリマッチョマンで筋骨隆々の男が肉弾戦をしている。
互いにアバターなので、傷つくことも出血することもなく、殴り合っている。
『……ちくしょおぉぉっ！ボールを吹っ飛ばしてやるぅぅ！』
『フンッ!!』
『ウウウウウォォ・・・・オォォォウ・・・・アァァァ・・・・』
メイトリックの渾身の一撃がヴィヴィオの鳩尾にヒットし、ヴィヴィオのＨＰが０となり、ゲームは終わった。
「うぅ～くやしいぃ～・・・・大佐!!もう一回!!もう一回やろう!!」
ブレイブシュミレーターから出てきたヴィヴィオはゲームながら悔しそうにしており、メイトリックもう一回対戦しようと誘う。
「いいわよぉ～でも、その後はまた一緒にチーム戦で通信対戦をしましょう～」
「うん、いいよ」
ヴィヴィオとメイトリックは再びブレイブシュミレーターへと入ると、また肉弾戦を繰り広げ、その後は、チームを組んで通信対戦をした。
スレンダーで、金髪巨乳の美女と筋肉モリモリマッチョマンの筋骨隆々の男のコンビが対戦相手を拳で倒していく光景はなんともシュールであった。
クローンながらもミッド出身のヴィヴィオとデザリアム星人のメイトリックがゲームの中とはいえ、協力し合っている姿勢は、本来理想な形の筈なのに、フェイトはどうしても素直に喜べず複雑な表情で見ていた。
（こんな光景を見せたら、なのはが卒倒しちゃうよ・・・）
ヴィヴィオがオネェ口調のオ〇マと一緒にコンビを組んで戦っているなんて光景は、もう一人の養母にはかなりショックキングな光景だろうと思い、フェイトは・・・・
（なのはには黙っていよう・・・）

なのはには見せることもせず、黙っていることにした。
それと同時にヴィヴィオの将来にも若干の不安を感じたのだった。

百九話　侵入者

サーダが仕掛けた褐色矮星の罠を突破した地球艦隊。
しかし、褐色矮星の爆発の影響による衝撃波を受け、ヤマトだけは地球艦隊の中で、一番大きな損害を受け、修理作業が滞っていた。
ヤマトは艦を止めて、修理作業を行う。
ヤマトの修理が終わるまで、まほろば、春藍は周辺の偵察を行うことになった。
偵察に関しては山南が指揮を執ることになり、まほろば　は一時、山南の指揮下につくことになった。
その最中、良馬は守と今後の航海計画を練るために、ヤマトへと訪れるため、格納庫で宇宙服に着替え、ヘルメットを装着していた。
航海計画の結果は後に偵察任務を終えた山南にも報告する予定となっている。
ヤマトへと赴くために用意された単座のコスモゼロを前に良馬は念入りにチェックをした。
その理由はユリーシャがどこかに潜んでいないかを確認するためだった。
しかし、単座のコックピットに今のユリーシャの体型では隠れることはできない。
(どうやら、いないみたいだな)
ユリーシャが居ないことを確認し、良馬はヤマトへと向かった。
その頃、まほろば　の医務室では、不満そうに頬を膨らませたユリーシャの姿があった。
「どうしたんですか?ユリーシャ」
「むぅ～私もリョーマと一緒にヤマトに行きたかった」
「マスター・いえ、艦長は遊びに行ったわけではないのですよ」
リニスはユリーシャにそう言うが、実際ヤマトには姉のサーシアに父親の守が居るので、家族団欒という意味では、まほろば　よりもヤマトの方が良いのかもしれない。

ギンガも話を聞けばおそらくユリーシャのヤマト移乗には賛成していただろう。
しかし、今は公務中と言うことでそういった私情を挟まないと言うことで、今回ユリーシャのヤマト移乗はなされなかった。

良馬が格納庫で搭乗するコスモゼロにユリーシャがいないかをチェックした後、まほろばを発進した頃、ヤマトでは船外、内部で修理作業が行われていた。
良馬がまほろばを発進してすぐに、まほろば、春藍、ハルバード、ファルシオン、雪風・改は周辺の索敵任務へと向かって行った。
そんな中、一人の技術班員が第三砲塔付近にて、口笛を吹きながら修理箇所へと向かっていると、
「～♪～～♪♪～～～～・・・・♪～～～・・・・ん？」
第三砲塔の近くに何かが落ちていた。
技術班員が近づいてみると、それはどうみてもヤマトの破損した部品や修理部品にも見えなかった。
「・・・なんだ？これは・・・不発弾かなにかかな・・・？」
それは砲弾の様にも見えるし、割れたカプセルの様にも見えた。
「・・・とりあえず、報告しておくか・・・」
不発弾にせよ、違うにせよ、不審物には変わりない。
その技術班員は上司である真田に報告しようとした時・・・
「っ!?」
後部甲板からその技術班員に向かってものすごい速さで何かが迫ってきた。
「うわぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!」
迫ってきた何かは技術班員に襲い掛かる。
技術班員の悲鳴が後部甲板に響くが、周囲には他の技術班員が居なかったため、その技術班員に襲い掛かってきた者の正体は分からず、見た者も居なかった。
宇宙空間にはその技術班員が手に持っていた道具が不気味にヤマトの甲板から離れ宇宙空間へと漂っていった。

後部甲板で技術班員が何者かに襲われた時、ヤマトの第一艦橋には各部の修理状況が報告される。
「各艦砲の修理は終わったみたいです。・・・・いつもながらさすがですね、技術班の連中は・・・・」
ヤマト技術班員の優秀さに舌を巻く南部。
「艦外作業に出ていた技術班員もみんな収容したし、あとは波動エンジンの再調整ぐらいだな」
「ええ・・・・航路補正もだいたい完了です。波動エンジンの方には山崎機関長が向かってくれています」
太田が航海計器の修理とチェックが終わったことを報告する。
「大変だなぁ、修理作業も」
通信機器は損害がなかったので、相原は特に修理作業するところもなく、座席に座り、艦の内外を修理する技術班や通所の勤務の他にエンジンの修理も行う機関班が大変な部署なのだと改めて感じた。
「いつも通り、真田さんにまかせておけば大丈夫さ」
島は真田の技術者としての腕を信頼しているようで、修理に関しては真田に任せておけば、問題はないと言う。
「よし、あとは山崎さんに急ぐように連絡しておいてくれ。真田さんにも、修理状況の最終確認を頼む」
「了解」
相原が山崎と真田にヤマトの修理状況の確認の通信を送る。
そんな中、ヤマトのコスモタイガーの格納庫に一機のコスモゼロが着艦する。
着艦シークエンスが終わり、コックピットから降りると、格納庫には坂本が一人でヘルメットをかぶり、なにやら作業をしていた。
「あれ？月村艦長」
坂本はヤマトの格納庫に着艦し、コスモゼロのコックピットから降りてきた良馬に気づき、声をかける。
「あっ、坂本君。どうしたの？一人で格納庫なんかで・・・・出迎え？」
「い、いえ・・コスモタイガーの気密チェックです」
「・・・・もしかして、何かやらかしたの？」

「えっと・その・・・・あはははは・・・・」
「・・・・」
（なにかやらかしたんだな・・・・）
笑ってごまかす坂本の態度に彼が、何かやらかして、山本から罰をくらってこうしてコスモタイガーの気密チェックをしているのだと良馬は思った。
良馬がヤマトについた頃、相原は機関室に通信を入れていた。
「こちら相原、機関室、山崎機関長・・・・山崎機関長？・・・・・あれ？」
機関室へと通信を入れたのだが、山崎は応答しない。
忙しくて手が離せないとしても代わりの機関員の誰かが応答してもいい筈なのだが、機関室からはうんともすんとも応答がない。
「技師長・・・・真田さん？」
次に相原は機械工作室で修理作業の指揮を執っていた真田に通信を送るが、真田も応答しない。
機関室同様、真田が不在または手が離せない状況だとしても他の技術班員が出てもおかしくはないのに機械工作室からも一切の応答がない。
「おかしいですよ。誰も返事がありません・・・・」
相原もさすがにおかしいと思う。
「なんだって？・真田さんもか？」
「はい・・・・」
そんな中、突如、ヤマトのメイン動力が落ちた。
「な、なんだ？」
「メイン動力が落ちたみたいですね・・・・何かあったのかな？」
ヤマトのメイン動力が落ちたと思ったら、今度は通風孔や気温清浄機からガスのようなものが流れてきた。
「お、おい!!なんだ？・こりゃぁ!!」
誰も応答に出ない状況にいきなりメイン動力が落ち、次はガス・・・・
艦橋に居るみんなが動揺するのも無理はなかった。
「ガス・・・・!?・通風孔から・・・・!?・・・・うう・・・・うぁぁっ・・・・!!」
ガスを吸い込んで太田がのどを抑えながら倒れる。

「太田・・・!?みんな、気密ヘルメットをつけろ!!」
古代がガスを吸わないように気密ヘルメットの着用を指示する。
「うう・・・うわぁぁぁ・・・がっ・・・・!!」
「このガスは・・・いったい・・・うぅ・・・・ぐあっ・・・・!!」
「南部!!相原!!」
気密ヘルメットを着ける前に太田、南部、相原はガスを吸い込んでしまい床に倒れる。
古代はガスを吸い込む前になんとか気密ヘルメットを着用できたので、倒れることはなかった。
気密ヘルメットを着けた古代は急いで倒れた相原と南部の様子を確認する。
「・・・・どうやら、死んではいないようだ・・・・昏睡状態になっているだけだ・・・・」
相原も南部も倒れはしたが、ちゃんと呼吸はしているので、生きていることは確認できた。
おそらく太田も相原や南部と同じように昏睡しているのだろう。
「島!!サーシア!!二人とも無事か!?」
古代は残る艦橋メンバーである島とサーシアの状態を確認する。
「・・・・なんとかな。だが、ガスをいくらか吸い込んじまった。頭がクラクラするよ」
「あたしは平気です・・・・」
島はいくらかガスを吸い込んでいしまったが、昏睡するほどの量ではなく、意識を保っていた。
サーシアも古代や島同様、意識を保っている。
「助かったのは俺たちだけか・・・・しかし、このガスはいったい・・・・?」
古代は艦橋に充満するガスが一体どこから流れてきたのか?
そもそもこのガスの正体は何なのか?
古代は辺りを見回していた。
第一艦橋にガスが充満したようにこのガスはヤマト艦内の全体に広がっていた。
それはコスモタイガーの格納庫も例外ではなかった。

「な、なんだ!?」
「通風孔からガスが・・・」
　坂本と良馬は最初から気密ヘルメットを着用していたので、このガスで昏睡することはなかった。
「このガスは一体何でしょう?」
「分からない・・・でも、いきなりこれだけの量のガスが流れてくるなんて異常だ・・・もしかしたら毒ガスかも・・・」
「ど、毒ガス!?」
「とにかく艦橋へ行こう。このガスについて何か情報が入っているかもしれない。それに他の乗員の状態も気になる」
「そうですね」
　良馬と坂本は第一艦橋を目指して格納庫を後にする。
　その途中、あちこちの部屋を見て回ったが、気密ヘルメットの着用が間に合わなかったヤマトの乗員があちこちで倒れていた。
「・・・」
　良馬が倒れている乗員の様子を窺う。
「し、死んでいるんですか?」
　坂本が恐る恐る訊ねる。
「いや、息はちゃんとしている・・・寝ている・・・というより、意識をなくしている感じだ・・・」
「死んではいないんですね?よかった・・・」
　とりあえず、仲間が死んでいないことにホッとする坂本。
　良馬と坂本は他に無事だった乗員が居ないか探しつつ第一艦橋を目指した。
　しかし、第一艦橋までの道のりの過程で、無事だった乗員は見当たらなかった。
「・・・ちょっと、坂本君、そんなにくっつかないでくれるかな?歩きにくい・・・」
　通路を歩く良馬と坂本の距離はかなり密接していた。
　そのため、良馬はなんか歩きにくそうだった。
「す、すみません・・・でも、なんか、不気味で・・・」

普段見慣れている筈のヤマトの艦内なのだが、メイン動力が落ちて艦内全体的に薄暗く、しかもガスが充満しているせいで非常電源の明かりさえも不気味に濁って見える。
しかも乗員は倒れており、見方によっては死んでいるようにも見え、艦内はシーンと静かな状態が更に不気味さのレベルを上げている。
「でも、第一艦橋に居る人も全員倒れていたらどうします？」
「通信でまほろばと春藍を呼び戻すしか方法はないな・・・二人だけではどうにもできないし・・・」
「そうですね」
流石にメイン動力が落ちているヤマトを良馬と坂本の二人で動かすのには無理がある。
それなら、ヤマトで、まほろば、春藍と合流するよりも、まほろばと春藍に来てもらった方が早い。
良馬と坂本が第一艦橋へと繋がる扉を潜ると、
「坂本!!それに月村艦長も!!」
「無事だったんですね!!」
第一艦橋には自分たちと同じように気密ヘルメットを着用した古代、島、サーシアの姿があった。
三人もガスが充満する前に何とかヘルメットを着用し、昏睡は免れたようだ。

「――――というわけです。俺はコスモタイガーの気密チェック中で、ヘルメットをかぶっていたから助かりました・・・」
「俺もヤマトに来たばかりで、ヘルメットをかぶっていたから坂本君同様無事だったんだ」
良馬と坂本の二人は自分たちが無事だった経緯を古代たちに話した。
「山本さんも椎名もコスモタイガー隊の連中はみんな、パイロットルームで倒れていました」
「コスモタイガー隊のメンバーだけでなく、格納庫からここまで上が

る途中、他の部屋や部署も確認したけど、どこも同じような感じだった・・・どうやらヤマトの艦内全域にこのガスがいきわたっているみたいだ・・・」
　良馬と坂本は第一艦橋まで上がる途中、無事だった乗員が居ないことも古代たちに伝える。
「そうですか・・・となると、何者かが、通風孔か換気装置の中枢にガスを流し込んだんだな・・・こっちはヘルメット着用が間に合ったのは俺と島だけだ。サーシアはガスを吸い込んでしまったようだが、半分流れているイスカンダルの血がガスの効果を弱めているんだろう・・・」
　古代はヤマト艦内にガスが充満している原因を推測する。
「助かったのはわずか五人だけですか・・・」
　坂本が弱々しくつぶやく。
「・・・通風孔か換気装置にガスを流したとなると、ヤマトに敵の工作員かスパイが乗り込んだとみるほうがいいだろう」
　古代の推測から良馬はこのガスを通風孔か換気装置に流し込んだのは暗黒星団帝国のスパイか工作員だと追加推測をする。
　ヤマトの乗員がこんな馬鹿な真似をする筈がないし、そもそもこんなガスをヤマトは積み込んでいない。
「敵のスパイか工作員がヤマトに!?」
「・・・」
　良馬の推測を聞いて、古代、坂本、島の間に緊張が走る。
「そういえば、お父様は大丈夫かしら・・・」
　サーシアが父親である守の身を案じる。
「そうだね。もしかしたら、守さんも無事かもしれない」
「行ってみよう」
「ああ・それと春藍とまほろばに救援要請をしてくれるかい？この状況じゃあ、ヤマトで春藍やまほろばと合流するより、向こうから来てもらった方がいい」
「そうですね・・・しかし、どちらも偵察のために散会中・・・ヤマトはメイン動力が落ちている状態でうまく連絡がつくかどうか・・・」

「やるだけやってみよう。やらないよりはマシだ」
「ええ」
「連絡がつくまで、みんなの無事を確認しに行こう・・・山崎さんと徳川は機関室、真田さんは機械工作室、兄さんは艦長室か・・・」
「俺は残るぞ、古代。吸い込んじまったガスの影響か右足が痺れて動かないんだ。指先も動きが鈍くなってきた・・・行っても足手まといになるだけだろう」
「よし、島は艦橋に残って南部たちの介抱を頼む。それになんとかして春藍とまほろばに連絡をつけてくれ」
「わかった。非常動力だけじゃあ、不安だが、とにかくやるだけやってみるよ」
「頼むぞ」
少しガスを吸いこんでしまった島は第一艦橋に残り、救援を要請することにした。
「それじゃあ、サーシアちゃんもここで待っていてくれ」
良馬はサーシアにも第一艦橋に残るように言う。
「えっ？」
「敵の工作員かスパイが艦内に潜んでいるかもしれないんだ。それに島君は満足に動けない・・・もしかしたらここに敵の工作員かスパイが来るかもしれない。その時は君が島君やみんなを守ってくれ」
「わかりました」
「すまない、サーシア」
世話になる島はサーシアに謝る。
「いえ、困ったときはお互い様です。それではおじさま、みなさんもお父様の事をよろしくお願いします」
「頼むぞ」
「ああ、任せてくれ」
「気を付けてくださいね」
こうして、古代、良馬、坂本はまず、第一艦橋から一番近い艦長室へと向かい、守の安否確認をした。
エレベーターでヤマトの一番上の階にある艦長室へといくと、艦長

室の床で守が倒れていた。
「兄さん・・・!!」
「古代先輩もダメだったか・・・」
守もヘルメット着用が間に合わなかったようだ。
古代と良馬は守を部屋に備え付けのベッドに横たえる。
「このままじゃ、まずいですよ。ともかく、倒れているみんなを医務室でにも動かしましょう」
坂本は倒れているヤマトの乗員を医務室へ連れていこうと提案する。
「いや・・・佐渡先生の無事を確かめるのが先だ。俺たちは医療に関してはまったくの素人なんだ。治療する人間がいないのなら、あまりむやみに動かさない方が良い」
古代は医務室に連れていくにしても医務長の佐渡の安否を確認した後の方が良いと言う。
「そうか・・・あっ、アナライザーの奴はどうです?あいつならロボットだからガスは効かないし、医務室の助手をやっているんだからなんとかなりますよ」
「そうだな。よし、まずは佐渡先生、ついでアナライザーの無事を確かめよう」
古代は方針を立てる。
まずは昏睡している乗員のため、医務長の佐渡の安否を確認し、倒れている乗員を見てもらうことにした。
「でもアナライザーは無事なのかな?」
良馬はこの事態になっても姿を見せないアナライザーが今も無事なのか不安視する。
「どういうことです?」
「坂本君の言う通り、アナライザーはロボットだから、当然このガスは効果がない。しかし、これだけの事態になったにもかかわらず、アナライザーの姿を見ていないし、連絡もない・・・敵の工作員もアナライザーがロボットであり、ガスも効かないと知ったら・・・」
「・・・」

「とにかく、医務室へ行ってみよう」
佐渡、そしてアナライザーの安否を確認するため、三人は医務室へ向かうことにした。
第一艦橋にいる島、同様、念のため、艦長室のドアにはカギをかけ、医務室がある第一居住区へと降りた。
敵の工作員が潜んでいる可能性があるので三人の手にはコスモガンが握られている。
「しかし、それにしてもいったい何が起きたんでしょうね・・・・動力は落ちるし、ガスは充満するし・・・・」
「やはり月村艦長の言う通り、ヤマトに敵の工作員が乗り込んで、やったとしか思えない」
「うーん・・・・敵かぁ・・・・でも、どうやってだ？」
昏睡ガスにメイン動力の停止。
どう見ても敵の仕業としか考えられない。
しかし、敵はおそらく今、地球を占領している暗黒星団帝国で間違いはない。
だが、ここで一番の疑問が敵の工作員が紛れ込んでいるとしても誰もその姿を見ていないと言うことだ。
昏睡ガスの影響もあるが、暗黒星団帝国・・デザリアム星人の容姿は地球人の艦ではあまりにも目立つ。
あの目立つ容姿で、メイン動力を落とし、通風孔か換気装置にガスを流し込むなんてことが出来るのだろうか？
「それにもし、敵の仕業なら、致死性のガスを使えば終わりのはずだ。わざわざ昏睡させる必要なんてないはずです」
坂本の言う通り、これが致死性のある毒ガスならば、ヤマトの乗員はほぼ壊滅している。
動かす人間が居ない宇宙戦艦なんてただの宇宙金属の塊に過ぎない。
簡単に拿捕あるいは撃沈することが出来る。
「・・・・」
坂本の意見は的を射ていた。

敵にはヤマトの乗員を殺すことのできない理由が何かあるのだろうか？
それは地球に打ち込まれたハイペロン爆弾と似たような理由なのかもしれないし、そうではないのかもしれない。
いずれにしろ、ここで考えていても答えは出ない。
今はこの事態の打開と乗員の安否を確認することが優先だ。
「あっ、そういえばサーシアは確か、超能力が使えるんでしたよね？彼女に頼んで、侵入者を見つけてもらうのはどうでしょう？」
「なるほど」
「今日の坂本君は冴えているね」
古代はさっそく、第一艦橋にいるサーシアと連絡をとり、彼女の超能力で侵入者の位置を特定してもらおうと思ったのだが、やはりガスの影響か今の彼女は超能力がうまく作動できない状況だった。
サーシアの超能力が使えないと言うことで当初の予定通り、自分たちの足で地道に探すしかなかった。
医務室への通路を警戒しながら進んでいると、通路の先で誰かが立っていた。
その人物はヤマト乗員の制服を身に纏っていた。
「古代さん、月村さん、誰かいますよ」
「俺たちの他に無事な乗員が居たんだ・・・」
「そうみたいですね。おい、大丈夫か!?」
ヤマトの乗員のほとんどが昏睡して倒れている中、その人物はちゃんと立っていることから、自分たち同様、ガスが充満する前にヘルメットをかぶって平気だった乗員だと思い、古代は声をかける。
すると、その人物は振り返るといきなりコスモガンを撃ってきた。
「っ!?伏せろ!!」
良馬が間一髪、声をかけたおかげで、古代と坂本は躱すことが出来た。
「うわっ!!」
「くっ・・・」
「おーい!!俺だ!!コスモタイガー隊の坂本だよ!!」

坂本は大声をあげて敵ではないことを告げるが、その人物は射撃をやめない。
「な、なんだっていうんですか?」
どうして仲間であるはずのヤマトの乗員が自分たちに射撃してくるのか分からない。
「わからん・・・だが、応戦するしかないぞ」
古代はこのままでは医務室へ行けないし、事情を聞くにしても向こうは話が通じないのかずっとコスモガンを撃ってくる。
先へ行くには倒すしかない。
「う、撃つんですか!?」
坂本が仲間に向かってコスモガンを撃つのかと訊ねる。
「パラライザーを最低出力にしてやれば、殺傷能力はなくなる。話をきいてくれる感じじゃないし、ここは仕方ないだろう?」
良馬が相手を殺さないようにする手段を坂本に伝えながら、コスモガンの出力を最低レベルまで下げる。
「は、はい」
坂本、古代も良馬同様、コスモガンの出力を最低レベルまでさげてコスモガンを撃ってくる乗員に向けて撃つ。
三人の一斉射撃をくらった乗員はその場に倒れる。
そして、三人は恐る恐るその乗員に近づく。
「こいつは・・・戦闘班の北谷じゃないか・・・」
同じ戦闘班である古代にはコスモガンを撃ってきた乗員が誰なのか顔を見てすぐに分かった。
「しかし、いったいなぜ・・・」
「いくらなんでも、俺たちを敵と間違えて撃ったなんてことはないだろうし・・・」
北谷がコスモガンを発砲してきた時、坂本はちゃんと自分の名前と所属を北谷に言った。
それにもかかわらず、北谷は発砲を続けた。
その事実から、北谷が自分たちを敵と誤認したとは考えにくい。
北谷がなぜ、自分たちに発砲してきた理由が分からない中、昏睡し

ていたはずの乗員が起き上がり、コスモガンを手にフラフラとした足取りで近づいてきた。
「こ、古代さん!!月村さん!!ほかにも来ましたよ!!」
「とにかく、医務室を目指そう」
「は、はい!!」
「ええ!!」
三人は迫ってくる他の乗員との戦闘をなるべくさけて、医務室を目指した。
そしてやっとのことで目当ての医務室へとたどり着くと、佐渡の居住スペースにて、佐渡とトチローが昏睡している姿があった。
佐渡は居住スペースの畳の上で大の字になって倒れており、トチローはちゃぶ台に突っ伏している。
そしてそのちゃぶ台の上には沢山の空だったり、中身が中途半端になくなっている酒瓶が置いてあった。
「佐渡先生!!トチローさん!!」
古代が声をかけながら、二人に近づく。
しかし、二人は起きる気配がない。
「なんだか、ガスにやられたっていうよりも、宴会してぶっ潰れただけっていう感じですね・・・・」
(確かに・・・・)
坂本の言う通り、ちゃぶ台の上の大量の酒瓶のせいで、ガスにやられたのか酒で酔いつぶれたのか判断に困る光景だった。
「バカなこと言っている場合か!!手伝え!!」
「は、はい!!」
古代と坂本が佐渡を医務室のベッドに横たえ、良馬がトチローを肩に担いで医務室のベッドに横たえる。
「アナライザーが居ないな・・・・」
ガスが充満する前、宴会をしていたのなら、アナライザーも医務室にいてもおかしくはなかった。
しかし、アナライザーの姿は医務室にはなかった。
(アナライザーは一体どこに・・・・?)

良馬がアナライザーの行方を考えていると、
「にゃ～～～」
医務室に猫の鳴き声がした。
良馬がふと足もとを見てみると、そこには佐渡の飼い猫であるミーくんが居た。
「あれ？この猫は・・・？確か・・・」
「佐渡先生の飼い猫です」
「猫にはこのガスは効かないみたいですね」
昏睡ガスが充満する中、ミーくんは平然とした足取りで歩いている。
「サーシアのこともある・・・我々地球人類だけを狙ったガスなのかもしれないな・・・」
猫のミーくん、そしてイスカンダルとの混血であるサーシア以外に昏睡していたことからこのガスは地球型の人類には有効なガスであることが証明された。
（ますます不可解だ・・・）
先程の坂本が言ったように毒ガスではなく、地球人のみに効く昏睡ガス・・・敵の目的が全然わからない。
「にゃ～～～」
こっちの状況を知っているのか知らないのか、ミーくんは再び鳴く。
「佐渡先生が倒れているのでは頼りはアナライザーだけなのだが、医務室にはそのアナライザーの姿がない・・・どこへ行ったんだろう？・・・古代君、坂本君、医務室以外にアナライザーが行きそうな場所の心当たりはないかい？」
「医務室以外・・・ですか・・・うーん・・・」
「俺、あんまりアナライザーと交流がないんで・・・」
古代が思いつくアナライザーが行きそうな場所は医務室か第一艦橋ぐらい。
しかし、そのどちらにもアナライザーはいなかった。
坂本はもともと所属部署の関係上、アナライザーとあまり交流がな

かったので、アナライザーが居そうな場所の心当たりはなかった。
「ねぇ、ミーくん・・君はアナライザーがどこに行ったのか知らないよね？」
　良馬はミーくんにアナライザーの行方を訊ねる。
「月村さん、いくらなんでも猫に聞いても知っている訳ないでしょう」
「それもそうだね」
「あと、アナライザーが行きそうな場所は・・・展望室や真田さんの所とか・・・うーん・・・あと、他には・・・・」
　古代自身もそこまで深くアナライザーと交流があるわけではないので、医務室や第一艦橋以外にアナライザーが行きそうな場所の心当たりがなかった。
　良馬はヤマトの乗員でないので、当然アナライザーが行きそうな場所の心当たりなんてない。
「アナライザーが行きそうな場所もしらみつぶしに探して回るしかないみたいだね」
「トホホ～」
　こうして三人は、今度はアナライザーを探すことになった。
「そういえば、以前、アナライザーが雪さんのスカートをめくったりしていたけど、アナライザーって女の人が好きなの？」
「えっ？ええ・・・まぁ・・・」
「ロボットらしからぬ行動ですね」
　坂本はアナライザーのロボットっぽくない行動に対して呆れる様に言う。
　良馬はアナライザーのロボットっぽくない行動を思い出し、
「考えたくないけど、乗員が昏睡しているのをいいことに女性乗務員の区画で良からぬことをしている・・・なんてことはないよね？」
「・・・」
　良馬の言葉に古代は否定できなかった。
　最初のイスカンダルでの航海でアナライザーはやたらと雪のスカートをめくったりしていたし、テレザートへの航海で、アルデバランの火の河を航行した時、そこから発する放射線で乗員が倒れた時、

ロボットであるアナライザーが奮闘してくれたのだが、その際、アナライザーは雪が昏睡していることをいいことに彼女のお尻をお触りしていたこともある。
それに先日、サーシアが熱を出して倒れた時も、レーダー任務そっちのけで、サーシアの看病をしていたこともあった。
「・・・念のため、女性乗員区画へ行ってみましょう」
古代はそれらの経緯からアナライザーが普段は入れない女性乗員区画へと向かうことにした。
女性乗員区画は第二居住スペースにある。
エレベーターで一回降り、第二居住スペースへとやってきた三人。
三人の後ろからはなぜかミーくんもついてくる。
アナライザーを探している最中にもヤマトの乗員が襲い掛かってくる場面もあった。
乗員はなぜかミーくんには発砲することはなかった。
こちらとしてもなるべく戦闘は避けたいのだが、挟み撃ちにされてはたまらない。
こっちは最低出力で撃っているのだが、向こうは通常の殺傷能力がある出力で撃ってくる。
すまないと思いつつ、乗員を撃って再び昏睡させながら三人と一匹はアナライザーを探す。
「にゃ～～～」
すると、ミーくんはある通路にくると、タッタッタッタ・・・と走っていく。
「おい!!待てよ、コラ!!」
坂本がミーくんを止めようするが、ミーくんは止まることなく、先へと行ってしまう。
「何かを感じ取ったのかもしれない・・・行ってみよう」
良馬はミーくんが動物的勘で何かを見つけたか感じ取ったのかもしれないと思い、ミーくんの後を追うことにした。
「にゃ～～～」
すると、ミーくんは女子トイレの前に止まっていた。

そして、ミーくんの視線の先には・・・
「ア、アナライザー!!」
「バラバラになっている・・・」
アナライザーはバラバラになり修理が必要な状態だった。
「ブチ壊れていやがる・・・くそっ!!何なんですか!?」
なぜ、アナライザーが壊れているのか理解できない。
一体アナライザーの身になにがあったのか?
「わからん・・・ガスでみんなが倒れたと思ったら、今度は仲間が襲い掛かってくるし、その次はアナライザーか・・・何か・・・裏に何かがあるはずなんだが・・・」
「やはり、これも敵の工作員の仕業か・・・それとも乗員の誰かの仕業か・・・」
乗員が襲い掛かってくるこの状況でアナライザーが一体誰に壊されたのかは不明だった。
「・・・しかし、ロボットのアナライザーが、なんでトイレの前にいるんでしょうね?」
アナライザーはロボットなので、生き物と違い排泄行為なんてしない。
「しかもここは女子トイレだし・・・」
良馬はアナライザーが倒れていた場所が場所なだけにアナライザーに対してちょっと引いている。
「まっ、アナライザーのことだからな・・・」
(まさかと思うけど、この機会を利用して女子トイレに盗撮器具を設置しようとしていたんじゃないだろうな・・・アナライザー・・・)
古代は口では日頃のアナライザーの言動から、どこか納得したような事を言ってはいるが、心の中ではアナライザーが盗撮未遂をしたんじゃないかと疑った。
「ん?・・・これは・・・」
「月村さん、どうしたんですか?」
良馬が何気なく、床に目をやった時、床に小さな赤い点々を見つける。

「・・・・これは・・・・血痕だ・・・・」
　良馬は床に落ちていた赤い点々を指につけ、それが何なのかを調べると、その赤い点々は血だった。
「血痕!?」
「なんで、そんなものが!?」
「誰かが怪我をしているのかも・・・・血痕はこっちに続いている・・・・」
「よし、あとを追ってみよう」
　アナライザーは見つかったが、修理が必要な状態だったので、ひとまず三人はアナライザーをその場に放置して、今度はその血痕の後を追う。
　床に点々と残っていた血痕は洗濯室へと続いていた。
　洗濯室に負傷した誰かが逃げ込んだのかもしれない。
　そう思い、洗濯室へと入るが、そこには誰もいなかった。
　そして、洗濯室の床には一着のヤマト乗員の制服、気密手袋、ブーツ、ヘルメットが脱ぎ捨てられていた。
「古代さん・・・・これは・・・・」
「技術班の服だ・・・・それに、船外作業用のヤツじゃないか・・・・」
「深く破れているし、血もついている・・・・船外作業服をここまで深く傷つけるなんて・・・・」
　良馬は破れている制服を手に持って、傷口を調べる。
「・・・・」
　宇宙空間という状況下で船外作業を行うのだから、宇宙服はそれなりに丈夫な構造となっている。
　しかし、その丈夫な服をここまで傷つけることのできる武器・・・・
　しかも銃ではなく服に残っている傷から、刃物の類だと判断されるが、その刃物はかなりの切れ味を持つことになる。
　それにガスで昏睡していた筈の乗員が突然起き上がり、自分たちに襲い掛かってくるこの現象はあまりにも奇妙で不気味だ。
「しかし、なぜみんな襲い掛かってくんだろう・・・・」
　古代は今更ながら、仲間である乗員が襲い掛かってくるこの現象の原因に疑問を感じている。

「まるで、誰かに操られているみたいですよね・・・」
坂本の言う通り、確かにこれまで遭遇してきた乗員は声も発せず、表情も変えずに無言・無表情のまま自分たちにコスモガンを発砲してきた。
それ以前に同じ仲間である自分たちに発砲してくる時点で、彼らは自分たちの意思で攻撃してくるわけではないのだと分かる。
（・・・人を操る・・・そういえば、暗黒星団帝国はあの時・・・）
良馬は以前のイスカンダルでの航海の途中で暗黒星団帝国が管理局の艦隊を使って洗脳実験を行っていたことを思い出した。
あの時は捕虜にした局員の頭部に受信機を埋め込み、洗脳衛星から発せられる電波を受信させることにより、人間を意のままに操っていた。
今回の事もその実験の改良版でこのガスに人を操る力があるのではないだろうか？
「あっ!?艦橋にはガスで倒れた南部君たちがいる・・・島君やサーシアちゃんは大丈夫だろうか？」
「っ!?」
良馬の言葉に古代はハッとなる。
彼の言う通り、艦橋にはガスで倒れた南部、相原、太田の三人がいる。
彼らもこれまで遭遇してきた乗員のように島とサーシアに襲い掛かる可能性が十分にある。
「島!!サーシア!!」
古代は急ぎ、艦橋に居る二人に連絡を取る。
「どうした？古代。なにかあったのか？」
インカムからは艦橋にいる島の普段通りの声がした。
どうやら、襲われた形跡はなさそうだ。
「南部たちの様子はどうだ？」
「まだ昏睡して倒れているがどうかしたのか？」
「い、いや、なんでもない・・・とにかく、事情を説明するために一度そっちへ戻る」

「わかった」
念のため、三人は南部たちの様子を確認することを含めて第一艦橋へと戻ることにした。

百十話　侵入者2

褐色矮星の爆発に巻き込まれ、ヤマトは僚艦の中で一番ひどい損害を受けた。
そこでヤマトは修理を行うことになり、他の僚艦は周辺の偵察することになった。
だが、修理中のヤマトに突如、異変が起きた。
メイン動力が落ち、通風孔からガスが流れ込んできた。
ガスを吸ったヤマトの乗員は次々と昏睡し、倒れいく。
ヤマト艦長の古代守と今後の航海計画を練るため、ヤマトに訪れていた良馬もこの異変に巻き込まれた。
間一髪、ガスを吸い込まず助かった古代、坂本らと共にヤマト艦内を調査する中、ロボットのアナライザーが何者かに手によって壊されていた。
さらに昏睡していたヤマトの乗員たちが起き上がり、襲い掛かってきた。
そして、洗濯室には血の付いた制服が落ちていた。
そのことから何者かがヤマトに侵入して、メイン動力を落とし、ガスを艦内に流し込み、アナライザーを壊した犯人だと思われた。
そんな中、昏睡したヤマトの乗員が襲い掛かってきたのであれば、第一艦橋にて昏睡していた南部、相原、太田も襲い掛かる可能性があった。
第一艦橋にはガスを少し吸い込んで体がマヒしている島と護衛のサーシアが居る。
三人は急いで第一艦橋へと急いだ。
「島!!サーシア!!大丈夫か!?」
第一艦橋に到着すると、古代は島とサーシアの安否を確認する。
「おう、古代。・・・・みんなはどうだった?」
「お父様はどうでした?」
島は第一艦橋に戻ってきた古代たちに他の乗員の状態を訊ね、サー

シアは父親である守の事を訊ねる。
南部たちは未だ昏睡している状態で襲い掛かってくる気配はない。
（今のうちに結束バンドで手足を縛っておいた方がいいか？）
良馬は南部たちが昏睡しているのであれば、いつ起き上がり襲い掛かってくるか分からないので、昏睡している今のうちに手足を拘束しておいた方がいいかと思った。
「兄さんだが、間に合わなかったようだ・・・他のみんなと同じ昏睡している」
「・・・」
サーシアは古代から父親の状態を聞いて、表情を暗くする。
「島君、サーシアちゃん、あれから、南部君たちに異常はなかった？」
良馬は島とサーシアに南部たちの様子を訊ねる。
「異常？どういうことです？相変わらず、三人は昏睡したままでしたけど・・・」
島は、南部たちは意識を取り戻す事無く、昏睡したままだと言う。
島の発言と二人の様子から、第一艦橋には他のヤマトの乗員が襲来して来ず、南部たちもずっと昏睡したままだったのだろう。
そこで、事情を二人に説明しようとした時、今まで昏睡していた南部たちがゆっくりと起き上がりだした。
「きゃっ!!」
突然起き上がりだした南部たちを見てサーシアは思わず悲鳴を上げる。
傍から見たら完全にゾンビに見える。
「こ、古代さん・・・あれ・・・!!」
「間に合わなかったか・・・」
昏睡している間に南部たちの身柄を拘束したかったが、起き上がってしまっては仕方がない。
他の乗員の様に最低出力のコスモガンでまた昏睡させるしかない。
「ど、どういうことだ・・・？」
事態を把握できない島は困惑している。
「事情は後で説明するから、今は伏せて!!」

戦えない島に対して良馬は姿勢を低くするように言うと、この三人の中で射撃の腕が一番の南部をまっさきに倒すため、彼に近づく。
そして至近距離から南部を撃つ。
南部を倒し、彼が持っていたコスモガンを素早く拾うとそのまま隣に居た相原に向けて撃つ。
南部、相原を倒した良馬だが、反対側に居た太田まで対処できず、太田がコスモガンを撃ってきた。
その一発は相原の席・・・ヤマトの通信機に命中する。
「くっ・・・」
初弾は許したが、それ以上撃たせないため、良馬は素早く身をひるがえし、太田も撃った。
三人は再び昏睡して床に倒れた。
「ふぅ〜・・・まさか、ヤマトの艦橋で銃を撃つことになるなんてな・・・」
これまでの人生でコスモガンを撃つ機会は何度もあったが、ヤマトの第一艦橋内で撃つなんてこれが最初で最後だろう。
「・・・おい、何が起きているんだ？説明してくれ・・・!!」
南部たちを倒し、安全確保が出来、島が事態の説明を求めた。
三人は島とサーシアにこれまで見てきたヤマト艦内の状況を説明した。
「――――そうだったのか・・・しかし、なぜなんだ？テレパシーのようなもので、操られているのかな・・・？」
「うん・・・以前のイスカンダルでの航海で、ヤマトと離れた時、連中が似たような実験をしているところに遭遇したことがあった・・・その時、連中は被験者の頭部に受信機を埋め込んで、衛星から電波を送って人を操っていた・・・今回の件もそれに似ていることから、連中・今度は受信機も衛星も使わない方法を思いついたのかもしれない」
「俺もそう思う。であれば、南部の動きが鈍かったのもわかる・・・」
「南部さん、そんなにすごいんですか？」
「ああ、オリンピック級の狙撃手さ。当然、早撃ちも凄腕の実力者だ。普通に戦っていたら、お前なんか三秒ともたないぜ」

南部の実力を知らない坂本が南部の実力訊ねると、島が南部本来の強さを説明する。
南部が銃の名手だからこそ、良馬は真っ先に南部を倒したのだ。
しかし、本人の意思でないためか、動きが鈍く、銃を抜くにも撃つにしろ、動きにタイムラグがあったからこそ、良馬は南部が銃を撃つ前に倒すことが出来た。
夜の一族のため、常人よりも体力、動きなどは上であるが、それでも南部ほどの腕ならば、初弾は許してしまうくらいの腕を本来の南部なら持っていた。
「う～っ、桑原、桑原・・・」
坂本は今後、何があっても南部を怒らせないこと、彼と銃に関しての勝負はしないと心の中で誓った。
「ところで島、春藍かまほろばと連絡はついたか？」
古代が僚艦と連絡が取れたのかを訊ねる。
「それがな・・・呼びかけてみたんだが、まったく反応がないんだ・・・かなり離れているみたいだし、なにぶん、非常動力でまかなえる分の通信出力しかないからな・・・だが、もしかすると通信は届いていて、こちらが返答を受信できていないだけかもしれん。まぁ、メイン動力が落ちている状態じゃあ、確認しようがないが・・・」
「見て・・・」
そんな時、サーシアは通信機が壊れているのを見つける。
「通信機器が・・・!!」
「さっきの戦いでか・・・」
「この様子だと、真田さんかトチローさんでもいないと、修理は無理だな・・・」
「メイン動力が落ちているのであれば、交信室の通信機器も使えないか・・・」
「トチローさんは医務室で倒れていた。あとは真田さんだけだな・・・下層デッキの機械工作室か・・・」
「連絡がないとなると、真田さんも倒れている可能性があるけど、行ってみるしかないか・・・ただ、その前にこのガスを何とかしよう・・・み

んなを操っている原因がこのガスかもしれないし」
「そうですね」
古代たちは念のため、昏睡している南部たちの手を縛った後、機関室へと向かった。
機関室付近ではやはり、ヤマトの機関員たちが襲い掛かってきた。
しかし、彼らはコスモガンではなく、レンチなどの工具で殴り掛かってきた。
飛び道具ではないので、比較的に倒しやすかった。
そして機関室へと入ると、
「っ!?」
「おい、誰だ・・・」
古代と良馬は機関室にて怪しい人影を見つけた。
「だ、誰かいたんですか?」
「一瞬、誰かが居たようにも見えた」
「山崎さんや徳川たちじゃないんですか?」
「そうかもしれないけど・・・なんか違うような気もしたんだよね・・・」
「ええ・・・あの人影は確かこっちへ・・・」
三人は謎の人影が向かった方へと進む。
すると、今度は機関室に居た機関員らが三人に襲い掛かってきた。
「山崎さん・・・!!徳川も・・・!!」
山崎や徳川も他の機関員同様、工具を手に持ち殴り掛かってきたが、なんとか倒すことはできた。
しかし、山崎はなかなかタフであり、倒すのも苦労した。
「ふぅ・・・手間取ったなぁ・・・まっ、山崎さんたち相手じゃしょうがないか」
倒れている山崎たちを見て坂本はなかなかの強敵だったとつぶやく。
「後でまた暴れだしたりしないように手足を縛っておきましょうか?」
南部たち同様、山崎たちも身柄を拘束するかと訊ねる坂本。

「そうだね・・・・攻撃目標をエンジンに切り替えて徹底的に壊されたら大変だし・・・・」
今は自分たち正常な人間に標的を絞っているが、それが艦の設備にいつ変更されるか分からない。
エンジンをこれ以上壊されたりしたら大変だ。
工具の結束バンドや縄で機関員らの手足を縛っている中、
（さっきの人影・・・・機関部の人間じゃなかったように思えたが・・・・気のせいだったんだろうか？）
古代は最初に見た人影が気になっていた。
機関員たちの身柄を拘束した後、三人は動力パネルを見てメイン動力を回復できるかをチェックする。
「これだな・・・・動力パネルは・・・・」
「メインの動力は完全に止まっちゃっていますね・・・・あっ、でも、サブ配線の方はショートしているだけみたいですね。こっちなら何とか直せそうですよ」
「本当か？」
「技師長や山崎さんたちみたいにうまくはいかないんですが、この程度ならなんとかなります」
坂本がチェックしてみてメイン配線に関しては真田やトチロー、山崎たち機関員でなければ無理だが、比較的に損害が小さいサブ配線は自分でも修理できると言う。
「へへ、いつもコスモタイガーの整備ばかりやらされていますからね。・・・・さて、と・・・・」
普段から罰でコスモタイガーの整備をさせられてきた坂本の知識と腕が今回は活かされる結果となり、彼はさっそく修理作業を始める。
「うわっ!!」
修理の中、バチバチと火花が散る場面もあった。
しかし、艦内に充満したガスは火花で爆発することはなかった。
このガスは、やはり地球に存在しているガスとは性質が異なるようだ。

「本当に大丈夫？」
　ちょっと不安になった良馬が坂本に訊ねる。
「まぁ、見ていてください。え～と、ここをこうして・・・っと・・・これでよし、っと。サブ動力だけでだから完全じゃないですけど、これだけあれば充分でしょう」
　ヤマトの波動エンジンが普段よりも小さいながらエンジン音を奏でだした。
　すると、周りのガスも薄れてきた。
「あっ、ガスも薄れてきた・・・」
「空気清浄機構がうまく動き出したんだ・・・」
　サブではあるが、動力を回復させた三人は次に真田のいる機械工作へと向かった。
「この先が工作室だ・・・いいか？ドアを開けるぞ・・・」
　古代が工作室の前で良馬と坂本に声をかけてから扉を開ける。
　この異常事態から、かなり時間が経っているにもかかわらず、真田からの連絡はない。
　となると、彼も十中八九ガスを吸って昏睡しているのだろう。
　機械工作室で昏睡して倒れていればいいが、起き上がっていたら、自分たちに襲い掛かってくる可能性はかなり・・・と言うか絶対に襲い掛かってくる。
　ドアが開き、三人は恐る恐る機械工作室の中へと足を踏み入れる。
「真田・・・さん？」
　古代は声をかける。
　機械工作室の奥に真田は立っていた。
「真田さん・・・」
　古代が声をかけても真田は答えない。
　それどころか・・・
　ウィーン、ウィーン
「うわっ!!な、なんですか!?これはっ!?」
「工作用のマニュピレーターだ!!コントローラーは真田さんが持っているぞ・・・気をつけろ!!」

真田は機械工作室に備え付けのマニュピレーターをけしかけてきた。
銃撃はしてこないがあんなもので弾き飛ばされたり、挟まれたりしたら、痛いや怪我では済まなそうだ。
「とりあえず、真田先輩が持っているあの端末を何とかすればいいんだね？」
「えっ？ええ・・・・」
「それじゃあ・・・・」
良馬は真田めがけて走り出す。
当然、真田はマニュピレーターで良馬を迎撃するが、マニュピレーターはそこまで俊敏な動きが出来るわけでもなく、動きが単調・・・しかも南部の時のようにマニュピレーターの操作もぎこちない感じだ。
「くっ・・・・」
良馬はマニュピレーターを躱し、真田が手に持っている端末に狙いを定める。
「そこだ!!」
バキューン!!
良馬のコスモガンから放たれたエネルギー弾は一直線に真田が手に持っている端末へと向かう。
バキッ!!
コスモガンのエネルギー弾を受けたマニュピレーターの端末は砕け、コントローラーを失ったマニュピレーターは動きを止める。
「真田先輩、すみません!!」
マニュピレーターのコントローラーである端末を破壊した良馬は真田へと接近し、その勢いを殺す事無く、真田の鳩尾に拳を叩き込む。
「がはっ・・・・」
良馬の拳を鳩尾にくらった真田はその場に倒れる。
「真田さん!!」
(月村艦長も南部さん同様、怒らせないようにしないとな・・・・)
第一艦橋で見せた動きや射撃の腕、そして、この機械工作室での動き、そして真田へ打ち込んだ一撃・・・良馬も怒らせたら必ず痛い目に

合うと思った坂本だった。
　良馬は倒れた真田に胸部に手を置き、法術で気を送り込み、真田の意識を戻す。
　今のヤマトには真田の知識と助言が必要だったのだ。
「うっ・・・・うぅ～・・・・ここは・・・・」
「真田さん、大丈夫ですか!?」
　意識を取り戻した真田に声をかける古代。
　その後、古代たちは真田にヤマトの現状を説明した。
「なるほど、お前たちの話を聞いていると、事態はかなり深刻なようだな・・・・」
「それに、謎も多いんです・・・・敵がなぜガスを流し込み、みんなを操っているのか・・・・アナライザーはなぜ壊れていたのか・・・・そして、この服・・・・」
　古代が事態を説明し、洗濯室で見つけた血の付いた技術班の制服を良馬は真田に見せる。
「これは・・・・船外作業用の制服・・・・技術班の小島のものだな・・・・」
「大きく破れていますし、血もついています・・・・艦内なら兎に角、もし真空の宇宙空間で、この出血量を負うほどの傷を負ったのであれば・・・・」
「ああ、生きてはいないだろう・・・・」
　良馬は真田の部下の一人、小島が宇宙空間でこの傷を負った場合の仮説を言うと、真田も小島の生存は絶望的だと言う。
「となると、敵は船外で作業をしていた乗員を襲って、その服を着て艦内に侵入した・・・・ってことになりますね」
「変装して・・・・ってことですか?」
「うむ、ヘルメットのバイザーを下ろしていれば、顔を見られることもない。服の破れ目を隠せば誰にも疑われないだろう」
「そうか・・・・そういうことか・・・・」
(なるほど、だから、制服が洗濯室にあったのか・・・・洗濯室にあった他の部署の制服に着替えて破れ目がある服から着替えたわけか・・・・)
「アナライザーを壊したのもうなずける。アナライザーは優秀な分析

ロボットだからな。アナライザーがいると分析されて正体が判明してしまう・・・邪魔になる前に破壊したんだろう」
　真田曰く、アナライザーを壊したのはガスが利かないだけでなく、アナライザーの分析機能で自分が偽物だとバレてしまうからだと言う。
「くそっ、なんてことだ!!じゃあ、やっぱり、侵入者がこの艦内に潜んでいるわけですね?!」
(さっき機関室で見たあの人影はもしや!?)
「可能性は高い・・・」
「じゃあ、アナライザーは自分を壊した者の正体を知っているかもしれませんね」
　良馬は真田にアナライザーは自分を壊した犯人を目撃した可能性があることを示唆する。
「ああ・・・すまないが、アナライザーをここまで連れて来てくれ。俺が修理する。月村の言う通り、あいつなら、敵をじかに見ているかもしれからな・・・」
「でも、あいつ、かなり重いですよ・・・三人がかりでも、うまく運んでこれるかどうか・・・」
　坂本が三人でアナライザーを運ぶのは無理があると言う。
「分解されているんだろう?・・・持ってくるのは頭部だけでいい」
「なるほど」
「さあ、急げ!!もしかすると、事態は一刻を争うかもしれんのだ・・・アナライザーを修理し、記憶を再生させて敵の正体を暴き出すんだ!!」
　敵がまだ艦内に居ることは明白であり、一刻も早く敵の正体を掴まなければならない。
　そのためにはまず、敵の正体を掴むため、それを知っているかもしれないアナライザーを真田の下に連れてこなければならなかった。
「確かアナライザーは第二居住区の女子トイレの前に居たはずですよね?」
　坂本がアナライザーの所在確認し、三人でアナライザーを迎えに行く。

しかし、
「あれ・・・ありませよ?・・・・ここだった筈なんだけどなぁ・・・」
三人はアナライザーが壊されていた女子トイレに着いたのだが、そこにアナライザーはなかった。
「どこへ行ったんだ・・・?」
「まさか、敵は完全にアナライザーを抹殺するためにどこかに運んだんじゃあ・・・?」
「操られたクルーを使っている可能性もありますね」
侵入してきた敵は制服の件から見て一人だが、アナライザーを運ぶには一人ではとても無理だ。
それこそ、侵入者が月を見て大猿に変身する戦闘民族の宇宙人か、日光を苦手とする兎の名を持つ宇宙最強最悪の傭兵部族でなければ一人でアナライザーを運ぶなんて真似は出来ない。
しかし、今のヤマトには操られているヤマトの乗員が居る。
彼らに運ばせた可能性もある。
「どこにやったんだ・・・考えろ・・・考えるんだ・・・運ぶ・・・どこへ・・・?」
「機械を使って処分するのは手間もかかるし時間もかかる・・・となると、二度と修理できないように手早く捨てるんじゃないか?」
「捨てる・・・宇宙・・・外か!?」
「エアロックですね・・・大きなエアロックは、メイン動力が落ちている今は動きません。手動でも動く小型のヤツに限定できますね・・・」
「それでもかなりの数があるはずだ・・・急ごう!!」
アナライザーを運ぶ手間を考えると、運ばれたのは第二居住区の下にある下層デッキの小型エアロックだ。
三人は急いで下層デッキに降りた。
小型エアロックの射出口前では四人の機関部の乗員がアナライザーを小型エアロックに押し込もうとしていた。
「いたぞ!!急げ!!エアロックを開けさせるな!!」
古代たちの存在に気づいた機関員たちはアナライザーを小型エアロックに押し込めるのをやめて襲い掛かってきた。

彼らは武器を持っていなかったので、比較的に簡単に倒すことが出来た。
しかし、もし彼らがエアロックを開けていればアナライザーは宇宙に放り出されることはもちろんのこと、彼らもアナライザーと共に宇宙へ放り出されていた。
船外作業装備をしていない生身の人間が真空の宇宙へ放り出されれば、結果はどうなるかは火を見るよりも明らかである。
古代たちはアナライザーの他に彼らの命を救うこともできたのだ。
「間一髪でしたね・・・まったく・・・世話をかけるなぁ、お前も」
愚痴りつつ、坂本がアナライザーの頭部を持つ。
三人は真田が待つ機械工作室へと向かう。
「よし、持ってきたな・・・作業台の上に置いてくれ・・・」
真田はさっそくアナライザーの修理に取り掛かった。
「メイン動力が落ちている分、時間がかかる・・・ちょっと待っていてくれ」
「わかりました。その間、艦内を捜索してみます」
ただここで修理が終わるのを待つのも時間の無駄なので、その間に侵入者の手掛かりがないか、古代たちは再び艦内の捜索へと向かう。
「うむ、だが、無茶はするなよ」
真田に見送られ、古代たちは艦内の捜索へと出て、第二艦橋、作戦室を捜索したが、侵入者の痕跡も手掛かりも見つからなかった。
「佐渡先生やトチローさんもまだ昏睡しているのかな?」
そんな中で、良馬は佐渡とトチローがそろそろ目を覚ましているのではないかと思いつぶやく。
「ほかのみんなもまだ昏睡しているか、操られていますからね・・・まだなんじゃないんですか?」
「うーん・・・でも、佐渡先生なら普段からお酒を飲んでいるから、酔いが醒めるのも普通の人よりも早いかも・・・」
「まぁ、ありえそうな話ですけど・・・」
確認のために三人は医務室へと向かう。
すると、医務室の居住スペースにて佐渡は座っていた。

「佐渡先生!!」
「おわっ!!な、な、な、なんじゃい!!」
突然声をかけられ、佐渡はビクッと身体を震わせ驚く。
「あれ?・・・・先生、正気なんですか?」
見たところ、佐渡は他の乗員たちと異なり正気を取り戻している様子だった。
しかし、トチローはまだ昏睡しており、医務室のベッドで横になっている。
古代が佐渡に現状を説明する。
「――――というわけなんです」
「そーかぁ、ワシはまた、大山君と二人で酔い潰れたんじゃと思っとったよ」
「ハハ、実際、そう見えましたけどね」
「確かに・・・・」
「しかし、頭痛がひどいわい・・・・迎え酒でもやらんとやっとられんぞ。まっ、ワシは酒で酔っ払って昏睡することになれとるから、それで早めに気が付いたのかもしれんなぁ・・・・いや、酒飲みでよかったわい。それにひきかえ、大山君は酒には弱いからのう・・・・ガスにも弱いんじゃろうか?」
佐渡が意識を取り戻した理由がまさか、良馬の推測通り普段から酒を飲んで酔って昏睡することに慣れていると言う事だった。
「ともかく、患者を運び込みたいところですが、いつ操られて動き出すかわからないですし、外に出るのも危険です。佐渡先生はここで待機しておいてください」
「わかった。ボチボチ酒でも飲んどるよ」
「トチローさんもいつ暴れだすかわかりませんよ。手足を縛っておいてください」
「あ～～～、わかったよ。ホラ、お前たちは行け」
佐渡の無事が確認できたところで、真田からアナライザーの修理が終わったと連絡が入ったので、三人は再び真田の下へと向かう。
「いいか、動力を入れるぞ・・・・」

真田が動力を入れるとアナライザーの頭部のメーターが光りだす。
「おい、アナライザー、聞こえるか？」
古代がアナライザーに声をかける。
「アレ・・・・ココハ・・・・？」
アナライザーが音声を発する。
「無事に直ったようですね」
「ンンン・・・・技師長・・・・？古代サン二・・月村サン・・・・？」
「おいおい、俺の名前はなしかよ」
「坂本ノヤローハ、ドウデモイイトシテ、ワタシハナゼ、コンナトコロニ・・・・？」
アナライザーは現状を理解できていない様子。
「この野郎・・・・」
坂本は顔を引き攣らせている。
「説明はあとだ。アナライザー。お前は何者かによって壊されていたんだ。どうだ？壊される寸前の記憶を再生できるか？」
「記憶・・・・再構成中・・・・最後二見タノハ、椎名サンデス」
「椎名？コスモタイガー隊の椎名か？」
「ハイ・・・・椎名サンカラ声ヲカケラレテ、振リカエッタ次ノ瞬間ニハ・・・・」
（それ以前にアナライザーが女子トイレの前に居たことが気になるんだが・・・・）
アナライザーが言うにはあの場で椎名に壊されたと言うのたまが、それ以前にロボットのアナライザーが何故女子トイレの前に居たのかが気になる良馬だった。
「椎名が・・・・アナライザーを・・・・？」
「いや、椎名の訳はありませんよ!!椎名は山本さんと一緒にパイロットルームで待機していた筈です。実際にガスが流れ込んできた時、椎名はパイロットルームで倒れていました。月村さんも確認しましたよね？」
「ああ、確かに彼女が倒れているのは確認した」
「デモ、椎名サンニ見エマシタ」

坂本と良馬は椎名を弁護するが、アナライザーは確かに椎名に見えたと言う。
「アナライザーの記憶力は人間と違い完璧だ。間違っている可能性は低い・・・・」
真田もロボットであるアナライザーが見間違えるとは考えにくいと言う。
普段の行動は人間っぽいアナライザーでも記憶力はロボットなので、人間よりもはるかに繊細に覚えている筈だ。
「でも、椎名は・・・・」
坂本は椎名がアナライザーを壊すなんて信じられなかった。
「わかっている。いいか、アナライザーは『椎名だ』と言ったわけじゃない・・・・『椎名に見えた』と言ったんだ。椎名じゃないとすると・・・・」
「敵は変装できると言うことですね？」
「ああ」
「あれ・・・・？でも、服はどうしたんでしょう？技術班の服は破られ状態で洗濯室に捨てられていましたよね？・・・・服が必要だったと言うことは、敵は服装まで真似できないと言うことでしょう？椎名のフリをするには、椎名と同じ服が必要ですよ」
「多分、その洗濯室で着替えたんだろう・・・・あそこなら、替えの制服はたくさんあるからね」
「なるほど・・・・最初に技術班の服を奪って艦内に侵入して、機関員に化けて艦内にガスを流しこんでエンジンをショートさせる・・・・次に椎名に化けてアナライザーを壊す・・・・女性の椎名が相手なら、アナライザーは油断するだろうしな・・・・」
「油断・・・・ソノ通リデスネ」
「じゃあ、今は誰に化けているんでしょう・・・・？」
「わからん・・・・椎名かもしれんし、別の誰かかも・・・・」
（変装できると言うことは、侵入者は暗黒星団帝国とは別の星の人物なのか？）
暗黒星団帝国の人間が怪人二十面相みたいに容姿を変える能力を持っているようには見えない。

ならば、ガミラスの様に暗黒星団帝国に協力する第三者が今回の侵入者で、その星の人間が容姿を変えることのできる能力を持つ人間なのだろうか？
「ともかく、誰と出会っても用心するんだ・・・誰が敵であってもおかしくはないんだからな・・・」
「「・・・」」
侵入者が自由にヤマトの乗員に変装できると言うことで古代たちの間に疑心暗鬼の感情が芽生える。
「とりあえず、この事を第一艦橋に居る島君とサーシアちゃんにも伝えに行きましょう。通信機越しではなく、直接会って話した方がいいでしょう・・・真田先輩も一人でいるよりは二人のいる第一艦橋の方が安全でしょう？それに第一艦橋の通信機が壊れてしまって、その修理を頼みたいんです」
「わかった」
真田は修理道具を用意した後、彼を含め、古代たちは第一艦橋へと戻り、島とサーシアに注意を促すことにした。
第一艦橋に戻ると、
「古代、他の艦と連絡がつきそうだぞ!!」
島が頑張って他の僚艦との連絡をつけていた。
「本当か？」
「ああ、さっき第二艦橋の緊急通信回線をこっちにまわしたんだ。すると、微弱だが反応があった。音声通信がまだ出来ないが、こちらからのＳＯＳは受け取ってくれている可能性は高い。もし、こっちに向かっているようなら、そのうち通信圏内に入ってくるだろう」
「それはなによりの吉報ですね」
「ところで、そっちの方はどうだ？」
古代たちは島とサーシアに現状を伝える。
「――――そうか・・・クルーの誰かに化けているのはやっかいだな・・・」
侵入者がヤマトの乗員に化けることが出来るのはあまりにも厄介だ。

だが、少なくとも島、サーシア、古代の三人はガスが送り込まれてからは常に二人以上で行動を共にしていたので偽物という可能性は低い。
しかし、この状況下では誰もが怪しいと感じてしまう。
古代、島、サーシアからすれば、良馬や坂本、真田はアリバイがあやふやであるから、『もしかしたら・・・』という思いもある。
でも、こういう状況下だからこそ、相手を信じる気持ちも必要なのだ。
「あっ、佐渡先生にも伝えないと・・・それにトチローさんの様子も気になりますし・・・」
「よし、次は佐渡先生の所に行こう」
真田に通信機の修理、島には引き続き僚艦との連絡を任せ、三人は医務室へと向かう。
医務室の扉の前に来た時、
「にゃ～～～」
「ん？この声は・・・」
「ミーくんの声だ・・・」
「医務室の中から聞こえましたよ」
「まさか、佐渡先生の身に何かあったんじゃ・・・」
三人が医務室の中に入ると、佐渡は床で倒れていた。
酒に酔ってまた昏睡したようには見えない。
頭には大きなタンコブを作っていたし、手や近くの床に酒瓶がない。
それにベッドで寝ていたはずのトチローの姿も消えている。
「まさか、トチローさんが暴れて佐渡先生を襲ったんじゃ・・・」
「とにかく、佐渡先生を起こしましょう」
「佐渡先生!!佐渡先生!!」
佐渡をベッドに横たえ、何があったのかを聞く。
「う・・・うう・・・」
「大丈夫ですか？いったい何があったんです？」
「だ、第三艦橋じゃ・・・第三艦橋へ急げ・・・」

「第三艦橋？」
「大山君・・・が・・・」
「まさか、トチローさんが・・・偽物だったのか・・・」
「いや、ただガスの影響で暴れだしたのかもしれない」
「とにかく、急ごう!!」
　三人はトチローが居るとされる第三艦橋へと急いで向かった。
　そして第三艦橋ではトチローが居た。
「トチローさん!!動かないでください!!」
　ただし・・・
「お、おい、俺じゃねぇぞ!!」
「だまされるな!!そいつが敵だ!!」
　二人いた。
　一方はシャツとパンツ姿のトチロー・・・
　そして、もう一方はヤマトの機関部の制服と上着、帽子と普段のトチロースタイルのトチローが・・・
「と、トチローさんが二人・・・!!」
「そいつは俺に化けようとしたんだ!!よく見ろ!!服を着ていないのが何よりの証拠だぞ!!」
「なに～～!!馬鹿言え～!!お前が俺の服を脱がしているときに目が覚めたんじゃねぇか!!あいにく、シャツとパンツだけはなんとか死守したけどな!!」
「馬鹿だと～～～ぉ？そっちこそ馬鹿じゃねぇか!!もう、逃げ場はないぜ!!観念しな!!」
　二人のトチローは互いにコスモガンを突き付け合って罵り合っている。
「ど、どっちが本物なんでしょう？」
「わからない・・・」
　声も体系も何もかもが瓜二つ・・・
　違っているのは服装だけ・・・
　ここまで完璧に変装されるとどっちが本物のトチローなのか分からない。

プロフィールなどを聞いて炙り出したいところだが、彼の正確なプロフィールを古代たちは知らない。
知っているのは守か真田ぐらいだ。
真田をここへ連れて来てもいいが、その間に偽物が逃げる可能性もある。
できればこの場で捕まえたい。
「ちょっとまって・・・・」
良馬は意識を集中し、法術で気を探る。
「ん?・・・・」
すると、服を着ているトチローの気の流れが、地球人とは異なる異質な流れをしていた。
「こっちが偽物だ!!」
良馬は服を着ているトチローに向かって発砲すると古代と坂本も少し遅れて服を着ているトチローに向け、発砲する。
すると、服を着ているトチローはまるで画家、ムンクの作品、『叫び』に描かれているような頬がこけ、髪がない真っ白な人?の様なものに変化する。
「なんだ!?あれはっ!?」
ソイツはジャンプして古代たちの上を飛び越えると、そのままエレベーターに乗り込み逃走する。
「くそっ!!」
「逃げられた!!」
「早く追いかけましょう!!また別の誰かに変装されたら厄介だ!!」
「でも、奴はどこに・・・・」
「あいつは俺に正体がばれてから、すぐ逃げようとしやがった。この第三艦橋には後部ハッチがあるからな・・・まぁ、お前らのおかげでなんとか阻止できたが・・・だが、古代、月村、これで諦めるような奴じゃないぞ・・・!!エアロックから逃げるといかんので、さっきここから艦内のエアロックは全てロックした。窓を破って逃げようとしても、ヤマトの窓は全て硬化テクタイトだ・・・・」
トチローのおかげで奴は今、袋のネズミとなった。

「じゃあ、奴が向かう先は・・・・」
ヤマトから逃げるとするならば、逃走経路は一本に絞られた。
「ああ、外に出られる場所はもうあそこしかない・・・・十中八九・・・・格納庫だ!!」
「急ごう!!」
奴を逃がすわけにはいかず、三人は急いで格納庫へと向かう。
その途中、
「そういえば、月村さんはなんで、トチローの違いを見分けることが出来たんですか?」
坂本は良馬にトチローを見分けることが出来た訳を聞いてきた。
「その説明は長くなるから、この事態が終わったら説明するよ」
流石にこの状況下で法術を伝えるのは手間なので、あとで教えることにした。
格納庫へ到着すると、侵入者がエアロックを必死にいじり、何とかヤマトから脱出しようとしていた。
「無駄だ!!もう観念しろ!!そこのハッチはもう開かない!!今ごろ、トチローさんがロックをしているさ・・・・!!」
古代は侵入者に対して投降を呼びかける。
「・・・・」
しかし、侵入者は投降するどころか、両手に鋭い鎌のような爪を伸ばし、古代たちに襲い掛かってきた。
侵入者はものすごいスピードで古代たちに迫ると、バク転をしつつ斬りつけてきた。
「気をつけろ!!奴の爪は船外作業用の制服でさえ、切り裂くほどの威力があるぞ!!」
洗濯室で見つけた技術班の服から、あの服の主はこの爪で切り裂かれたはずだ。
「散開しつつ、撃て!!絶対に立ち止まるな!!止まった途端、狙われるぞ!!」
ある程度ダメージを当たると、次に侵入者は四つん這いになり襲い掛かってくる。

「こわっ!?」
その姿に坂本は思わず、立ち止まってしまう。
しかし、確かにホラー映画に登場する化け物の様にこの光景は怖い。
「坂本君!!」
良馬はまずいと思い坂本にタックルし、侵入者の爪から坂本をかばう。
しかし、その中で、侵入者の爪の先は良馬の肩にあたる。
すると、服が切り裂かれ、肩の一部も切られた。
それによって良馬の肩からは真っ赤な血が流れ出る。
「いっ・・・・」
「月村さん!!」
「大丈夫だ!!かすり傷だ!!」
「このっ!!よくもっ!!」
侵入者が坂本と手負いの良馬を狙ったことで、古代は侵入者の背後に回ることが出来た。
流石の侵入者も三対一では多勢に無勢だったようだ。
古代の撃ったコスモガンのエネルギー弾が二発同じ場所へと命中する。
それは人間でいう所の心臓の部分だった。
侵入者は動きを鈍らせると、仰向けに倒れた。
「終わったか・・・・」
「月村さん、大丈夫ですか!?」
「あ、ああ・・・あとで佐渡先生かウチの医務長に見てもらうよ」
坂本が自分をかばって負傷した良馬の傷の状態を訊ねる。
そんな中、先程倒した侵入者がゆっくりと起き上がり、右手を振りかざし、今にも良馬に切りかかろうとした。
しかし、何かに気づき、背後を見ると、
「くたばれ!!」
良馬が乗ってきたコスモゼロに古代が乗っており、パルスレーザーで侵入者を撃った。

流石の侵入者も拳銃タイプのコスモガンより威力の高いコスモゼロのパルスレーザー砲にはかなわず、バラバラとなる。
「まったく、派手にやったな・・・あとで山本にちゃんと事情を説明しろよ」
そこへトチローがやってきた。
格納庫の壁にはパルスレーザーで空いた銃痕が出来た。
トチローはバラバラになった侵入者の近くにより、侵入者の正体を探る。
「ロボットか・・・」
侵入者は人間ではなくロボットだった。
「関節部の組み換えで、骨格と身長は自由自在・・・表面はただの軟質ゴムだが、ホログラムを薄く纏って誰にでも化けられるってわけだ・・・」
バラバラになった侵入者・・・もとい、変装ロボは、この後ヤマトの技術班の手によって回収され、徹底的な技術調査が行われた。
ヤマトにて変装ロボが倒された頃、デザリアム星では・・・
「聖総統閣下、サーダ様・・・D3号との交信が途絶え、シグナルもロストしました。どうやら、破壊されたもようでございます」
側近の一人が聖総統とサーダにヤマトに侵入させた変装ロボが破壊されたことを報告する。
「失敗か・・・まぁよい・・・」
「そう上手くはいかないものですわね・・・」
作戦が失敗したにもかかわらず、聖総統とサーダはそこまで落胆した様子も憤怒する様子もなかった。
「だが、ヤマトの内部データも十分に取れた・・・ヤマトを捕獲できなかったのは惜しまれるがな・・・」
「ともかく、まだ打つ手は無数にあります。とりあえずは、サーグラスにでも相手をさせておきましょう」
サーダは地球艦隊の相手をサーグラスに任せることにした。
前回の褐色矮星での作戦時、サーダはサーグラスにグロータスの仇

討ちを解禁していた。
　これで地球艦隊を撃滅できればそれはそれで良い。
「それにしても、危険なのは、あの波動エンジンと波動砲・・・ゴルバ級のα砲だけでは太刀打ちできますまい・・・・」
　現在、暗黒星団帝国で一番の威力を持つ、α砲も波動砲と比べるとやはり、見劣りする。
　ゴルバ級の装甲や偏向型バリアで防げても攻撃力が勝っていなければ、敵には勝てない。
「よし・・・一刻も早く、β砲の完成を急がなければな・・・・」
　暗黒星団帝国も手をこまねいているわけではなかった。
　既にα砲の威力を超えるβ砲の設計を行っていた。
　そして、そのβ砲を搭載する戦艦と戦うのはもう少し先になってからの事だった。
　一方、ヤマトでは、まほろば、春藍と連絡がつき、僚艦が戻ってきた。
　リニスをはじめとする、まほろば　の医療班と春藍の医療班がヤマトにやってきて、昏睡していた乗員の手当てを行う。
「しかし、まいりましたよ・・・パラライザーで撃つなら、もっと出力を下げてくださいよね・・・まだあちこち痺れていますよ」
　意識を取り戻した南部が愚痴る。
「ほーれすよ。まら、ひたがひびれてうまくひゃべれないんれすから・・・・」
　徳川が何やら聞き取れない言語を喋っている。
「ん？太助のヤツ、何て言っているんです？」
　太田には徳川が何を言っているのか分からなかった。
「『まだ舌が痺れてうまく喋れない』・だそうです・・・まったく、もう・・・おい、徳川。一緒に撃たれたワシは全然大丈夫だぞ。だいたい、お前は鍛え方がなっとらんのだ」
「ひょ、ひょんなぁ～」
　山崎はもうどこダメージも後遺症もなく、ピンピンしている。
「でも、敵の目的は一体何だったんだろう・・・？」

島はあの時変装ロボの目的が未だに分からなかった。
いや、島だけでなく、あの騒動を体験した皆がそれを思ったに違いない。
犯人であるあのロボットは壊れてしまったので、目的は永遠の謎だ。
「ああ・・・考えてみたんだが、敵はこのヤマト自体が欲しかったんじゃないだろうか？」
古代は敵の目的はヤマトの拿捕にあったのではないかと推測した。
「ヤマトの波動砲は敵から見れば、致命的な武器であるわけだしな・・・それに、俺たち乗組員を生きたまま捕虜にできれば、地球での反乱を簡単に沈めることが出来る・・・・」
「確かに古代君の言う通り、ガスで乗員全員を昏睡させ、操り、敵の本星、または地球に引き返させることも出来ただろうしね」
「なるほど・・・我々は地球に居る人にとっては、唯一残された希望なわけだからな・・・・」
「なんて奴らだ・・・でも、とにかく、パルスレーザーで撃たれただけで済んでよかったですけどね」
「お前らんぞ、まだマシじゃい。ワシなんぞ、あの化け物に殴られてえらい怪我しちまったんだ。見ろ、この包帯を・・・・」
佐渡は頭に包帯を巻いていた。
良馬も今は肩に包帯を巻いている。
「イヤイヤ。ワタシナド、一度壊サレテイタンデスヨ!!」
確かにアナライザーは生存者の中では一番の被害者であるが、今回の騒動で技術班の乗員一人が敵の手にかかって死んでいる。
敵の本星を目指す旅はまだまだ続くことになる。
その過程で命を落とす乗員も必ず居るだろう。
しかし、それでも地球艦隊は行かなければならない・・・・
故郷を救うために・・・・
地球で待つ大勢の人々のために・・・・

百十一話　サーグラスからの挑戦

　褐色矮星の宙域にて、無人高速駆逐艦、褐色矮星の爆破、そしてヤマト艦内に侵入した変装ロボ・・・暗黒星団帝国、聖総統付側近のサーダが繰り出した三本の罠を何とか突破したヤマト。
「そういえば、月村さん。あの変装ロボがトチローさんに化けた時、どうして見破ることが出来たんですか？」
　艦内を捜索した坂本が良馬にあの騒動の中、変装ロボがトチローに変装した時、その場には本物のトチローも居た。
　古代と坂本はどちらが本物のトチローなのか、判別がつかなかったとき、良馬は真っ先に偽物を見抜いた。
　最悪、どちらが本物のトチローか分からなかったら、両方のトチローを撃たなければならなかった。
　コスモガンは最低出力だったので、撃たれても失神するだけで命に別状はないが、後々トチローから愚痴られそうだった。
　良馬は偽物を見抜いた訳を坂本に後で話すと言っていた。
　よって、坂本は良馬に訊ねてきたのだ。
「あぁ～・・・サーシアちゃんやユリーシャちゃんほどじゃないけど、家の家系のご先祖で変わった力を持った人がいてね、俺はその力を受け継いでいるんだよ」
「不思議な力・・・ですか？」
「ああ・・・法術っていう力だ」
「法術・・・それってどんな力なんですか？」
「術者によってはその力は色々異なるけど、基本的なことは気を読み取ることが出来る」
「気？」
「ああ・・・モノには生命の脈・・・気が存在する・・・古代中国ではその気を使って、武術や医術に用いていたし、平安時代には地脈の流れを汲んで、魔物の侵入を防ぐ力、風水をつかさどる陰陽師とかが居た」
「じゃあ、月村艦長はその陰陽師なんですか？」

「まぁ、そんなところ・・・それで、地球人のトチローさんと敵の変装ロボ・・・人とロボットなのだから、気の流れは当然違う・・・だから、見抜くことが出来たんだよ」
「な、なるほど・・・」
良馬の説明を聞いて、一応、納得した坂本だった。
ただ、シャンブローの時、良馬は当然、あの大和ホテルに居たバーガーたちガミラス人の気を読んでいた。
しかし、ネレディアに化けていたレーレライの変装はまさに完ぺきに近かった。
地球人とガミラス人、当然住んでいる星の環境が異なるため、気の流れは異なっていた。
油断かまたは慢心したのか、ネレディアの記憶全てを読み切れず、そこをバーガーに見抜かれたが、レーレライは気の流れさえガミラス人と同調していた。
レーレライはジレル人なので、変装を解いた時、気の流れは地球人ともガミラス人とも異なっていた。
レーレライが最初からジレル人の気の流れであれば、良馬は今回の件同様、ネレディアが偽物だと見抜いていたことだろう。
その後、良馬、守、山南の三人で今後の航海計画を練り、地球艦隊は敵本星の手掛かりを求めて白色銀河を航行する。
やがて、地球艦隊は白色銀河の渦状腕内に入る。
敵のワープアウト地点まであり、２万宇宙キロと言う位置だ。
侵入者という予想外のトラブルがあったが、何とかたどり着いた地球艦隊。
しかし、ここは目的地ではなく、その目的地を知る手掛かりがあるかもしれない場所だ。
この宙域の近くに目的地である敵本星があれば儲けものだ。
だが、前回の様に敵はあれだけの罠を執拗に仕掛けてきたのだから、ここにも敵や敵の罠が待ち構えている可能性は十分にある。
周辺もこれまでの黒色銀河や褐色矮星の宙域と比べ、星も多くなってきた。

しかし、目当てのＧ２型スペクトルの恒星はこの周囲には存在していない。
この宙域には矮星がいくつか存在しているのと、サイズが大きなＭ型スペクトルの星・・・赤色巨星がいくつか存在しているだけだった。
また、アステロイド帯が網目の様に広がっており、濃密な暗黒ガスもある。
アステロイドが網目の様に広がっているとなると航行できる宙域に制限がかけられる。
それに暗黒ガスがあると言うことは、レーダーに映らない部分も存在すると言うことになる。
敵が待ち伏せるには絶好のポジションだ。
さらに波動融合反応の件もある。
下手に波動砲を撃てば周囲のガスが過剰反応を起こして大爆発をおこす危険性もある。
まるでガスが満たされた密閉空間の様だ。
技術班はこのガスの成分を調べ、波動砲を撃っても波動融合反応が起きるガスか？それとも起きないガスなのか、分析に取り掛かる。
結果が出るまで波動砲の使用は禁止となった。
できれば、敵とは遭遇したくはないところだが、地球艦隊が進んでいる前方にはサーグラス率いる艦隊が布陣していた。
「地球艦隊を捕捉。航路誤差、０．０２!!・・・予測通りです!!」
「来たか・・・よし、連中に電文を打て!!」
サーグラスは敵にわざわざ自分たちの存在を教えるような行為を取る。
「は？」
サーグラスの命令を聞いたオペレーターは一瞬唖然とする。
敵はまだ自分たちの存在に気づいていないのに、何故、わざわざ自分たちの存在を教えるのだろうかと・・・
「聞こえなかったのか!?連中に通信を送るのだ!!」
「し、しかし、それでは敵に我々の存在を教えてしまうことになりますが・・・」

オペレーターは自分が抱いた疑問をサーグラスに訊ねる。
「我々が待ち構えていることぐらい、奴らはもう推測している筈だ。・・・先の宙域での戦いで、連中の力がどれほどのものなのか知ることが出来た・・・そして、分かったのだ。本物の強敵であることがな・・・私は最初こう信じていた。グロータスはめったなことでやられる奴ではない・・・きっと、敵の汚い策略に落ちて敗北したのだとな・・・」
「・・・」
サーグラスはそういうが実際はグロータスの方が地球艦隊を策で嵌めようとしていた。
「だが、違った・・・連中は実に強い・・・!!もとより、私はグロータスやサーダ様のような策略家ではない。私は武人・・・!!彼奴等は、それ相応の礼儀を見せて戦うべき相手だと判断する!!」
「は、はい・・・」
オペレーターは絶対的に有利な条件にもかかわらず、自分から敵に自らの存在を教えるサーグラスの行為に納得できなくとも、上官である彼の命令には従わなければならない。
その為、地球艦隊に通信を送った。
サーグラスの通信は地球艦隊ですぐに受信できた。

宇宙戦艦　まほろば　艦橋
「艦長、敵からの入電です!」
サーグラスの通信は、まほろば　でも受信され、ギンガが良馬に報告する。
「敵から・・・?内容は?」
「はい・・・『貴艦等ノ進撃ヲワレハ、賞賛ス。シカシナガラ、貴艦等ハ我等ガ同胞ノ仇。ソシテ我ニ課セラレシ任務ハ貴艦等ノ撃滅ナリ・・・』『コレヨリ、我ガ艦隊ハ、貴艦等ニ宣戦ヲ布告スル。　暗黒星団帝国総司令　サーグラス大将』・・・以上です」
ギンガがサーグラスからの電文を読み上げる。
「わざわざ自分たちの存在を教え、決戦前に宣戦布告を入れてくるとは、随分と律儀な人だ・・・」

「しかし、『同胞の仇』って部分はなんか納得いきませんよ・・・それを言うなら、こっちだって同じなんですから」
「戦争ではそういった負の連鎖が続くからね・・・通信長」
「はい」
「ヤマトと春藍に通信を繋いでくれ・・・向こうにもこれと同じ内容の通信が届いている筈だから」
「了解」
　ギンガは早速、ヤマトと春藍との通信回線を開く。
「山南艦長、古代艦長、そちらでも敵の通信は受信したと思います」
「ああ・ついさっき来た」
「こちらもだ・・・」
「敵の通信をどう思いますか？わざわざ自分たちの存在をこちらに教える行為・・・」
「罠の可能性も否定できないな」
「うむ、通信を逆探知して、敵の位置も判明している・・・」
　サーグラスの艦隊は地球艦隊の正面にあるアステロイド帯の反対側に布陣している。
　艦数は確認できるだけで２５隻いる。
　探知した艦以外にも伏兵か援軍が潜んでいる可能性は十分にある。
「わざわざ優位な状況を捨ててまで、こちらに自分たちの存在を教える行為・・・古代艦長の言うように何か罠が仕掛けられているか・・・それとも、新兵器を導入している可能性もありますね」
「敵もいよいよ数に物を言わせた総力戦に持ち込む可能性もあるな」
　良馬の脳裏にかつて古代たちヤマトの乗員から聞いたガミラスの勇将、ドメル将軍との七色星団での決戦・・・そして、自らも参戦した土星圏であったガトランティス太陽系侵攻艦隊との戦いが過ぎる。
　今の状況がこれらの戦いと酷似していた。
　もっとも総力戦で来るのであれば、２５隻なんて少数で来るとは思えない。
　敵はこの白色銀河全域を支配下においている大帝国・・・。
　そんな大帝国が僅か２５隻だけの艦隊で総力戦を挑むとは考えに

くい。
あの艦隊も暗黒星団帝国全軍の規模からいえばほんの一部なのだろう。
だが、今の地球艦隊と比べると十分な数である。
例え、サーグラスからの決闘を無視しても数で勝っているので、あっという間に包囲されてしまう。
「避けては通れない道だろう・・・・」
守が一言そうつぶやくと、良馬も山南もフッと笑みをこぼす。
「死力を尽くすまで・・ですね」
「戦うからには勝たねばならぬな」
三人の決定は決まった。
「全艦に警報発令!!総員、戦闘態勢を取れ!!」
ヤマト、まほろば、春藍に警報が鳴り響く。
しかし、まだ周囲に充満するガスの分析が終わっていない。
波動砲が使用できないのは痛いが、避けては通れぬ道・・・・
こちらの敗北は地球人類の未来にも影響する。
決して負けられない戦いだ。
「敵、レーダー妨害を開始しました!!遠距離レーダーホワイトアウト!!近距離レーダーに切り替えます!!」
自分たちの存在とスタート位置は教えたが、サービスはここまで・・・・
あとは戦術と戦略で挑むしかなかった。
「艦長、敵の反応をロストする前にいくつかのエネルギーパターンを照合できました!!」
「流石だ・・・・それで、敵の規模は?」
「はい、戦艦・駆逐艦・空母・・・・狙撃戦艦もいます」
「どんな戦略にも対応できるって訳か・・・・最初の一手を読み間違えると、手痛い目に合うな・・・・」
艦隊はヤマトを中心にウィング体系をとり、両翼にはハルバードとファルシオンで固める。
「レーダーに艦載機の反応を確認!!エネルギーパターンから爆撃機の

編隊です!!」
「爆撃機はこちらで対処する。コスモタイガー隊は敵の索敵をしてくれ!!特に狙撃戦艦には注意を!!」
「了解」
　地球艦隊は主砲を含む全火器で爆撃機へ砲撃する。
　更にアステロイド帯の手前には駆逐戦隊が布陣して、爆撃機と連携して攻撃してくる。
　地球艦隊が爆撃機と駆逐艦を相手にしていると、アステロイド帯の中から、大口径の　ショックカノンが、まほろば　の艦種左舷側に命中する。
「ぐっ・・・・」
「きゃあ!!」
「うぉっ!!」
「被害報告!!」
「左舷、艦首魚雷室被弾!!」
「メディックと応急修理要員は現場へ急げ!!」
「アステロイド帯の中に狙撃戦艦を確認!!」
「こいつらは囮か!!」
　敵はまず、爆撃機と駆逐艦で地球艦隊を足止めし、アステロイド帯の中から狙撃戦艦で攻撃してくる手を行う。
「コスモタイガー隊に狙撃戦艦の位置を打電!!狙撃戦艦の対処を!!」
「は、はい」
「アステロイド帯の中にいるのであれば、身動きもそう簡単にはできないだろう・・・・こちらは一刻も早く、爆撃機と駆逐艦を始末するぞ!!」
・
　狙撃戦艦の対処をコスモタイガー隊に任せ、艦隊は爆撃機と駆逐艦の殲滅に取りかかる。
　この駆逐艦隊は動きからして先日、褐色矮星で遭遇した無人高速駆逐艦ではなく、有人の駆逐艦隊のようだった。
「あの厄介な駆逐艦じゃなきゃ、十分に対処できる・・・・」

砲雷撃の集中砲火で敵の駆逐艦戦隊を撃滅し、前衛を突破する地球艦隊。
前衛の駆逐戦隊壊滅はサーグラスの下にも報告が入る。
「前衛の駆逐戦隊壊滅・・・・敵は前衛を突破した模様!!」
「ここまでは読み通り・・・・連中があれしきの攻撃で沈むのであれば、拍子抜けもいいところだ・・・・よし、α砲搭載艦を展開せよ!!各艦、予定の位置につき、攻撃準備!!・・・・さて、どうする?次の相手はあのゴルバの主砲と同じ、α砲を搭載した艦だぞ・・・・!!フフフフ・・・・」
前衛の駆逐戦隊と爆撃機をかたづけた地球艦隊は進撃を続け、狙撃戦艦の対処に向かったコスモタイガー隊も強化対艦ミサイルで狙撃戦艦を攻撃し、大破あるいは撃沈する。
地球艦隊は続いて中堅へと挑む。
「レーダーに高エネルギー反応!!エネルギー兵器のチャージ反応だと思われます!!」
「反応の数値はだ上がり続けています!!・・・・これは、波動砲まではいかないにしても、かなりのエネルギー反応ですよ!!」
「・・・・おそらく、そのエネルギー反応を持つ艦は敵の切り札だろう・・・・やはり、敵は新兵器をこの戦いで導入してきたか・・・・」
「どうしますか?艦長、進撃速度を落としますか?」
「ああ・・・・それと敵もレーダーを使用してこちらに狙いを定めているのであれば、こちらも敵のレーダーを妨害するまでだ・・・・タキオン阻害チャフを散布!!コスモタイガー隊にも散布してもらえ!!」
地球艦隊は敵の新兵器の射程距離がどれほどのものか分からないため、進撃速度を落とすと同時に、チャフが詰まったカプセルを射出する。
射出されたカプセルはやがて割れて、タキオン阻害チャフが広範囲に散布される。
コスモタイガー隊からも同じくタキオン阻害チャフが散布される。

暗黒星団帝国　α砲搭載艦　艦橋
「か、艦長!!」

「どうした？」
「敵がレーダー妨害を開始した模様で、狙いがつきません!!」
「なにっ!?くっ・・・ちょこざいな・・・構わん!!そのまま撃て!!」
「し、しかし・・・」
「敵はどうせ、正面からくる!!それにα砲搭載艦は本艦を含め、五隻いるのだ!!どれか一つぐらいは当たるはずだ!!」
「は、はい・・・」
「α砲、発射!!」
　四隻のα砲搭載艦からα砲が発射される。
　しかし、地球艦隊は進撃速度を落としていたため、α砲の射程外に居た。
「な、なんだ!?あれは・・・」
「あれは・・・ゴルバのα砲じゃないか・・・」
「でも、ゴルバの姿なんてありませよ!!」
「・・・敵はα砲を搭載した砲艦を作り出したのかもしれない」
　α砲は波動砲より幾分、威力は落ちるが、この宙域に充満しているガスに引火する様子はない。
　反対に地球艦隊はまだガスの分析が終わっていないので、波動砲は使用不可の状態。
　ここからショックカノンを撃ってもα砲搭載艦には届かない。
　敵のアウトレンジ戦法にもはや打ち手なしかと思われた。
　更に、
「レーダーに小型艦載機の反応あり!!」
「識別は？」
「それが・・・高機動型だということはわかるんですが・・・データベースにはない機体です」
「新型機か!?くそっ、こんな時に・・・」
　地球艦隊の後方から敵の新型機の反応があった。
　α砲搭載艦の他に厄介な敵が出現したと誰もが思った。
（・・・コスモタイガーならば、機体も小さいし、高速推進ポットで加速し、一気に敵の懐へ飛び込めるか・・・）

（しかし、後方の新型機の存在も気になる・・・）
危険な賭けかもしれないが、良馬はα砲搭載艦の対処をコスモタイガー隊に任せようかと思ったが、地球艦隊の後方にいる新型機の存在も気になる。
「後方の艦載機の様子は？」
「それが、依然艦隊の周囲に展開しています。ただ接近して来る気配はありません」
「接近してくる気配がない？」
「どういう事だ？」
「っ!?それは偵察機だ!!こっちの正確な位置を艦隊に伝えているんだ!!」
敵は暗黒ガスにより、レーダーが使えなくなる事態に備え、偵察機を用意していた。
ならば、こちらがいくらチャフをばらまいても情報を筒抜けになってしまう。
（コスモタイガー隊を呼び戻すか！いや、今は呼び戻す時間も惜しい・・・ならば俺自身が出るか・・・）
良馬が自らコスモゼロで、敵の偵察機を対処しようかと思っていると、
「ヤマトから入電、敵の偵察機はこちらで対処するとのことです!!」
ヤマトのカタパルトには古代が乗ったコスモゼロが設置され、ヤマトを発進。
敵の偵察機へと向かって行く。
偵察機は高機動であるが、武装は施されていない。
高速推進ポットを点火して、速度を上げたコスモゼロにたちまち捕捉され、撃墜された。
「敵は偵察機からの情報でこちらの位置を掴んでいる。針路変更」
ヤマトから針路を変更する旨の通信が入り、地球艦隊は一時、進撃方向を変える。
「コスモタイガー隊に通達、敵α砲搭載艦の所在位置の確認と共に同艦の撃破を下令」

地球艦隊が囮となり、α砲搭載艦の位置をコスモタイガー隊に教えるとともにコスモタイガー隊にはα砲搭載艦の撃沈を命じた。
偵察機からの情報を得たα砲搭載艦は艦首を地球艦隊が居る方向へと向け、艦を前進させ、α砲を打ち込むが、偵察機の存在から既に自分たちの位置がバレていると読んだ　地球艦隊は針路を変更しており、またもや、α砲は不発に終わる。
そして、α砲を発射したことで、逆にコスモタイガー隊に自分たちの居場所を教えてやる結果となってしまった。
「いたぞ!!例の新型艦だ!!全機、高速推進ポット点火!!強化ミサイルハッチも開口!!」
α砲搭載艦に向けてヤマト、まほろば　のコスモタイガー隊が猛禽のごとく襲い掛かる。
「艦長!!敵の艦載機がこちらに向かってきます!!」
α砲搭載艦の方も近距離レーダーでコスモタイガー隊の存在に気づくが既に時遅し・・・・
「か、回避!!全艦、散会しろ!!」
α砲搭載艦はその名の通り、主な武装がα砲ぐらいで、対空兵装は搭載していない。
その為、対艦載機戦は不利だった。
α砲を撃った直後に、散会しろと言われ、α砲搭載艦群は動きに混乱が生じる。
そんな中、ヤマトとまほろばのコスモタイガー隊が放った強化ミサイルがα砲搭載艦に命中する。
α砲搭載艦は防御の面も急ごしらえの試作艦故、護衛艦や駆逐艦並みの強度しかなかった。
「さ、サーグラス司令・・α砲搭載艦、ダルー、ルパルカ共に轟沈しました!!」
「α砲搭載艦、残り二隻です!!」
「むむむ・・・やるな・・・こうなれば最後の駒を投入だ!!見ておれ・・・!!」
切り札の一つ、α砲搭載艦が壊滅するのも時間の問題だと判断した

サーグラスはもう一つの戦力の投入を決め、準備に入る。
　α砲搭載艦のダルーとルパルカを撃沈したコスモタイガー隊はそのまま回頭し、艦隊と合流を図ろうとする残りのα砲搭載艦へと迫る。
「し、司令、α砲搭載艦、ドリーネ、ムールーグ轟沈!!」
「α砲搭載艦全滅です!!」
「ぬぅぅ～・・・・新型爆撃機隊の発艦はまだか!?」
「まもなく、準備が整います!!」
　サーグラス艦隊が艦載機の発艦準備を整える中、艦隊に合流を図ったα砲搭載艦を追撃し、撃破したコスモタイガー隊は敵艦隊の反応をとらえた。
「これはっ!?・・・・急いで、ヤマトと艦隊に知らせなくては・・・・」
　コスモタイガー隊から敵本隊らしき艦隊の反応をとらえたと報告が入る。
　直ちに報告のあった艦隊の分析が行われ、
「むっ・・・・!!いました!!敵艦隊の中に空母の反応です!!」
　前衛の爆撃機、そして偵察機がいたのだから、当然それを運用する空母が居る筈だった。
　そして、案の定、空母が敵艦隊の中に居た。
「どこだ?」
「宙域の中央に、アステロイドと暗黒ガスに囲まれた空洞があります!!その中心部にいます!!」
「アステロイド・ボイドの中か・・・・おそらくそれが敵の本隊だ・・・・宙域の中央なら、戦況の把握もしやすい・・・・その空洞から各艦に指令を送っていたのだろう・・・・」
「しかし、どうやって進入しますか?空洞の周囲は完全にアステロイドに囲まれて今います」
　アステロイドの中を航行できないわけではない。
　しかし、速度を落として進撃するので、敵の格好の標的となってしまう。
「艦長、暗黒ガスの分析が終わったとヤマトの真田技師長から通信で

す。この宙域の暗黒ガスはただのガスなので、波動を発射しても波動融合反応は起こらないとのことです」
「でも、波動砲が撃てても敵に届くか、どうか・・・」
波動砲が使用可能となっても現在位置からでは波動砲を撃っても敵艦隊までは届かない。
「敵を撃破できなくても、敵を守っているアステロイドを吹き飛ばせるだけでもいい・・・障害物がなくなれば、速度を落とす必要もないからな」
「なるほど、アステロイドの壁に風穴をあけてやれば航行は十分可能ですね!!砲雷長!!」
「了解、波動砲発射準備!!」
地球艦隊はアステロイドへと波動砲を打ち込んで、進入路をつくり、敵艦隊へと接近する。
すると、敵の空母からまた爆撃機が発艦してきた。
その爆撃機が搭載していた爆弾はこれまでの爆撃機が搭載していたモノよりもはるかに破壊力がある爆弾だった。
最初に波動防壁の出力が３０％もダウンし、波状攻撃をくらうとあっという間に防壁が消失、装甲板へと命中すると、装甲板が削り取られた。
このままダメージを受け続けると内部まで深刻なダメージを受ける。
敵の爆撃機を迎撃しつつ、大本の空母を撃沈しなければ被害が増す。
空母の周りには護衛の巡洋艦、護衛艦、狙撃戦艦が展開していたが、地球艦隊は爆撃機の迎撃と空母の撃破を優先させる。
コスモタイガー隊と雪風・改が爆撃機の迎撃を行い、ヤマト以下の戦艦部隊が空母へと砲雷撃をくわえる。
狙撃戦艦からの攻撃を受けても、ひるむことなく、迎撃することなく、空母の身を狙ってくる地球艦隊の姿に狂気を感じる。
そして、地球艦隊は空母を撃破する。
「司令・・・空母、ドムドーラ・・・撃沈されました・・・」

「艦隊も既に総崩れとなっております」
サーグラスの下に空母の撃沈と艦隊の意思統率が乱れている報告が入る。
「あれだけの艦隊が・・・・まさか・・・・総崩れだと・・・・!!」
自信をもって挑んだ地球艦隊との戦い・・・・
それが蓋を開けてみれば、艦隊は壊滅し、試作艦とはいえ、α砲搭載艦は全滅した。
サーグラスは現状がとても信じられなかった。
「・・・・いかがいたしましょう？」
オペレーターがサーグラスにどうするかを訊ねる。
撤退か、それとも徹底抗戦か？
「グロータスの仇を取ってやるつもりだったが・・・・逆に更に数多くの同胞を散らせるのみに終わったか・・・・」
戦いには犠牲はつきものであるが、サーグラス自身、友軍にここまでの犠牲者を出すとは思ってもみなかった。
「・・・・このまま生き恥をさらしていても仕方あるまい・・・・特攻だ!!刺し違えても、彼奴等に一矢報いるのだ!!」
サーグラスは徹底抗戦・・・・しかも特攻を命じた。
かつて、ガトランティスの残党軍が土星圏で行ったように、混乱する指揮系統をまとめるには、旗艦みずからが、今、何をすべきかを各艦に示すため、行動を起こそうとした。
その時、
「待ちなさい、サーグラス」
サーグラス乗艦の戦艦に一本の通信が入る。
「さ、サーダ様・・・・!!」
それはデザリアム星から今回の戦いをモニタリングしていたサーダだった。
「くっ・・・・お借りしたα砲搭載艦をもってしても、彼奴等を沈められぬ、このサーグラスの不甲斐なさ、お笑いください・・・・!!」
サーグラスは自嘲するように無理矢理笑みを浮かべ、サーダに今回の敗戦における失態を責めてくれと言う。

三流司令官ならば、言い訳するか部下に責任を押し付けようなところをサーグラスはすんなりと自分の力量不足だったと認めた。
「かくなるうえば・・・この命をもってして、此度の敗戦の責任を・・・」
「私は『待ちなさい』と言ったのですよ、サーグラス。死ぬことは、私が許しません。グロータス亡き今、貴方は私が持つ最も優秀な人材・・・まだ貴方には働いてもらわねば困ります・・・」
「では、生き恥をさらして・・・なお生きよと・・・」
「α砲でもなお、仕留めることが出来なかったと、言いましたね・・・？しかし、我々は次世代の超破壊兵器、β砲を・・・いえ、『無限β砲』を順調に開発しています・・・どう？その兵器で、連中を粉微塵にふきとばしたくはない？」
「・・・」
サーダはサーグラスとの戦いを本星からモニタリングして、サーグラスの敗戦を予期して、この通信を送った。
武人気質のサーグラスならば、自分の命を懸けてでも敵に一矢報いる行動をとるだろうと予見していた。
案の定、通信を送ってみれば、サーグラスは特攻する気だった。
もし、通信を送らなければ、彼は特攻を実施していただろう。
サーダの提案・・・新たな次世代兵器をもって、地球艦隊との再戦を提案すると、サーグラスは迷っている様子だった。
そこで、サーダはダメ押しの一言を言う。
「本星へ帰ってくるのです。サーグラス。幸い連中は、まだ我々の本星の位置を掴んではいません。彼奴等の位置は、本星から充分に離れました。とりあえず、暫くは連中を放置させ、無駄に本星の捜索をさせ、消耗させるのです。その間に我々は新兵器の開発と完成に着手し、完成のあかつきに貴方が再びグロータスをはじめとする同胞の仇を討てばいいのです」
「了解・・・いたしました・・・」
サーダのこの一言を聞いてサーグラスは特攻を思いとどまる。
「では、待っていますよ・・・本星で・・・」
「サーグラス様・・・無念のほど、痛いほどよくわかります・・・」

「・・・・」
「・・・ご命令を・サーグラス様」
「帰るしかあるまい・・・本星へ・・・全艦、転進だ・・・」
「はっ・・・全艦、転進!!本星へ向け撤退せよ!!」
オペレーターは残存艦に撤退命令を送る。
サーグラスは無念な様子であるが、オペレーターは生きて祖国へ帰れることから、少し嬉しげな様子にも見えた。
「もう、航路を見せつける必要はあるまい・・・『航跡』を消すのを忘れるな」
「はっ!!」
(・・・もはや仇討ちだけではない。・・・私自身のために・・・この屈辱をはらすためにも・・・)
(次こそは必ず・・・貴様らを討つ!!)
武人として生き恥をさらすことになった今回の戦い・・・
サーグラスのプライドは著しく傷つけられた。
撤退準備が進められていく中で、次の再戦の時、サーグラスは必ず地球艦隊を撃滅すると心の中の闘志を燃やした。

「ん?なんだ?これはっ!?」
「どうした?」
「宙域のはずれで、何か爆発反応みたいなものがありました」
「こちらでも同じような現状を観測しました・・・これは・・空間振動波です」
「今の反応と同時に。ワープ反応も検出しました!!敵の残存艦がワープで撤退したものと思われます!!」
「航路分析は?」
敵が撤退したのであれば、また航跡を辿って敵の本星の手掛かりをつかもうとしたのだが・・・
「それが、さっきの空間振動波が、ワープエコーをめちゃくちゃにして、敵の航跡を辿ることができません!!」
「ワープの航跡を完全に消し去ったわけか・・・敵は最初からワープ航

路を消去する方法を知っていたのか・・・・くそっ・・・・」
「じゃあ、今まで航跡を残していたのはわざと・・・・？」
「だろうな・・・我々を罠のある宙域やこの戦場に誘い込むため・・・航跡を残すこと自体が罠だったと言うわけだ」
「敵が今回、航跡を残さなかったと言うことは、もしかして俺たちを誘い込む必要がなくなったから・・・ということでしょうか？」
「もし、そうだとすると、我々は敵本星とは見当違いな場所へ誘い出されたことになるのう・・・・」
「この先・・・いったいどうなるんだ・・・・？」
地球艦隊は地図もなしに未開の地に放り出された遭難者となってしまった。
艦内には今後の航海に対して不安な空気が流れた。
一方、超距離ワープにて、無事にデザリアム星へ帰還したサーグラスは今回の敗戦による、自らの力量不足による自己嫌悪で不機嫌な様子だった。
それは艦を降りた後も変わらない。
「おやおや、まるでレジアス中将みたいな顔をして・・・・」
そんなサーグラスの様子を物陰からスカリエッティは見ており、サーグラスの雰囲気が、かつて自分が切り捨てたスポンサーの一人を同じであることに薄ら笑いを浮かべた。
スカリエッティは兵器開発には着手していないが、聖総統からの特権である程度の軍事施設への行き来が可能となっていた。
敗軍の将であるサーグラスを嘲笑ったのち、彼はこの星の軍事技術を確認するかの様に新造艦ドックへと赴き、建造中の新型戦艦を見る。
彼の眼前には次世代兵器、『無限β砲』を搭載する予定の大型艦が鎮座している。
「これほどの技術がある世界では管理局が、歯が立たないのは当然だな・・・今後、星の海は荒れるだろうな・・・その時、君たちは生き残れるのかな・・・？」
造化艦技術、武器の性能、それらすべてをとっても暗黒星団帝国の

技術はこれまで自分が見てきた管理世界の技術水準を大きく上回っている。
スカリエッティの脳裏にはかつて自分たちを負かした魔導師の姿……
フェイト、はやて、なのはたち、機動六課の魔導師たちの姿がよみがえった。

百十二話　司令部襲撃

暗黒星団帝国、聖総統側近のサーダが繰り出した三つの罠、そしてグロータスをはじめとする大勢の同胞の仇討ちに意欲を燃やす暗黒星団帝国が誇る猛将、サーグラス大将からの挑戦を受けてサーグラス率いる艦隊をも破った地球艦隊。

しかし、サーグラスは残存艦を率いて撤退する際、今までとは異なりワープによる航跡を消してから撤退していった。

これにより地球艦隊は敵の本星への手掛かりを失うことになった。

この白色銀河のどこかに敵の本星があることは間違いないのだが、太陽系がある銀河とほぼ同じ大きさの銀河系から手掛かりなしで星一つを捜すのはあまりにも無茶苦茶である。

一体どれだけの時間がかかるのか計算するのもあほらしい。

だが、このまま地球を見捨てるわけにもいかない。

地球艦隊はあてもなく敵の本星を求めて白色銀河を彷徨うことになった。

しかし、やみくもに探しても物資やエネルギーを無駄に消耗するだけである。

そこで、地球艦隊はコスモタイガー隊による偵察を行った。

その偵察任務には真田とトチローが三席タイプのコスモタイガーを改良した偵察機型コスモタイガーの初陣となった。

ヤマトに搭載された偵察機にはパイロットが山本、レーダー員には椎名が搭乗した。

普段、コスモタイガーに搭乗してもこうして同じ機体に一緒に乗る機会なんて滅多になく、山本と椎名がコンビを組んだのはこれが初めてであった。

同じコックピットに居る中で、山本は椎名が訓練学校時代にパイロットコースとレーダー員コースを並行で受講していたことを椎名本人の口からきいた。

北野とギンガも椎名の様に様々なコースを受講していた。
椎名からパイロットコースとレーダー員コースを並行受講している話を聞いて山本は、なぜ、レーダー員ではなくパイロットを選んだのかを訊ねる。
椎名は女性ながら、十分にパイロットの素質は妹の玲同様、あったが正直に言ってパイロットは出世コースではない。
守や良馬の時はガミラスとの戦争があったので、共に艦の長になれた時代背景があるが普通ならば精々飛行隊の隊長か飛行科の教官あたりだ。
椎名は当初、レーダー員を希望していた。
だが、彼女は今、こうしてコスモタイガーのパイロットになっている。
椎名がレーダー員ではなく、なぜパイロットを選んだ理由を話そうとした時、レーダーに反応があった。
確認のため、その惑星反応がある方向へと向かうとそこには恒星もない空間に惑星が一つ存在していた。
太陽系からマゼラン星雲の中間地点に存在しているバラン星と同じ、恒星の周囲を回っていない単独惑星だった。
長い時間をかけて恒星の重力圏から出て宇宙を放浪している単独惑星かと思われる星・・・
今の自分たちと同じような星だった。
山本はこの星に敵の基地や要塞が建設されているかもしれないとこの放浪惑星を探査した。
しかし、この星には敵の基地も要塞はなく完全な無人の惑星で、地表からは時々マグマが噴き出す危険な星だった。
だが、敵の基地はなかったが敵の空母が存在していた。
しかも、その空母には先の戦いでサーグラスが投入していた新型爆撃機の反応があった。
おそらくこの放浪惑星相手に搭乗員の演習か訓練でもしていたのだろう。
今の地球艦隊はコスモタイガーが全て出払っている。

通信を入れようにもここから地球艦隊までは圏外・・・
圏内に戻って、味方に通信を入れるにしても時間がかかりすぎる。
その間に敵の空母が地球艦隊へ迫る恐れもある。
そこで、山本は一機ながらも敵へと挑んだ。
やはり、敵は搭乗員の演習中だったみたいで、敵機のパイロットの腕は正直に言っていまいちであり、ガミラス、ガトランティスを戦い抜いたエースパイロット、山本明夫の敵ではなかった。
しかも搭載されていた艦載機の数も少なかった。
しかし、流石に空母本体は偵察型のコスモタイガーで撃沈させることは無理なので、あの空母が撤退するか、地球艦隊に対処してもらうことにした。
だが、退避中にエンジンに被弾してスピードが落ちた。
このままではいずれ追い付かれると思ったが、山本は放浪惑星のマグマの噴射を利用して、空母をマグマの噴射地点まで誘導し、空母をマグマの噴射で撃破した。
敵を撃破したが、艦載機との戦闘前に上部に装備していたレーダードームをパージして、機体も被弾したことから、山本は偵察任務を切り上げ、戻ることにした。
その際、戦闘前に椎名がなぜ、レーダー員ではなくパイロットになったのかを山本に語りだした。
彼女は訓練学校卒業後にレーダー員の研修中に実戦配備されたパトロール艦がガトランティスの艦艇に襲撃された。
椎名を含め、艦の乗員はもう撃沈されるのではないかと思った時、コスモタイガー隊が来て、敵を撃破し自分たちを救ってくれた。
そして、それがきっかけで椎名はレーダー員ではなく、パイロットになったのだと言う。
椎名がそこまで語ると彼女は顔を苦痛でゆがめる。
この時、彼女は空母を撃破した際のマグマの爆発時にショートした計器の破片がいくつか体に食い込んでいた。
しかもコスモタイガーは酸素タンクまで被弾していた。
メインエンジンが被弾しているせいで、スピードが出ない。

残る酸素の量は一人分で三十分・・・・
しかし、今は二人乗っている・・・・
よって、機体に残っている酸素の量は一人十五分・・・・
予備の小型酸素ボンベを使っても十分・・・・
現在位置からヤマトまで四十分かかる。
そこで、椎名はイチかバチかの賭けで、インシュリンを使って自らを仮死状態にして、酸素の消費量を減らして、ヤマトへ帰還する旨を山本に伝える。
彼女はレーダー員、パイロットコースの他に医療コースも受けていた。
そして、椎名はそれを実行した・・・・
酸素がゼロになるギリギリで、山本はヤマトへと帰還して椎名も一命を取り留めた。
その後、坂本から椎名がレーダー員の研修時に乗り込んでいたパトロール艦が渦潮だったことを聞いた。
パトロール艦、渦潮はヤマトがテレザートからの帰りにカイパーベルトで助けた艦で、渦潮を襲撃していたガトランティスの艦を撃破したのが、山本のコスモタイガー隊だったことを知った。
山本は今回の件にて、意外な椎名の一面と、隠された彼女の過去を垣間見たのであった・・・・

地球艦隊が敵本星の位置を掴むため、四苦八苦している中、地球では大きな動きがあった。
それは、例の新型戦車の製造プラントを破壊してからすぐの事だった・・・・
アルフォンが宿舎として使用している館に憲兵隊がやってきた。
「アルフォン少尉・・・貴方に総司令部への出頭命令が下りました。ご同行を・・・・」
「分かった。ご苦労様です」
憲兵隊大佐、メイトリックが、アルフォンに司令部への出頭を促し、アルフォンは、それに従った。

そして、アルフォンは地球占領軍司令部（防衛級司令部）の会議自室にて、総司令官、カザンから、先日の新型戦車製造プラントの件について尋問を受けた。
アルフォンのすぐ後ろにはメイトリックの姿もあり、アルフォンとカザンのやり取りを見ていた。
「――――――では、君は工場の破壊工作をまったく阻止できなかった・・・いや、阻止しようとすらしなかったわけだな？その場に居たにもかかわらず・・・」
「・・・」
あの時、確かにアルフォンは警備兵と共に戦いに参加せずに雪と共に製造プラントから脱出した。
アルフォンは行動を共にしていた雪を戦いに巻き込みたくないと言う思いがあった。
また、警備にあたっていた兵士たちも司令部からの監査に来たアルフォンを戦死させたり、負傷させては自分たちの責任問題に発展するかと思い、彼を逃がしたのだ。
もっともその警備兵たちも今は生き残っておらず、案内役だった一人以外全員が戦死している。
アルフォンはその案内役の兵士の名誉のために、弁解することなく、ただ沈黙を貫いている。
「おめおめと逃げ帰ってきおって!!貴様もあの新型戦車の製造がどれだけ重要かわかっておろう!!艦隊はヤマト討伐のために駆り出され、その四割近くが本星へと帰らねばならない羽目になってしまっておるのだぞ!!」
現在の地球占領軍の戦力は地球襲来時に比べると見劣りするほど、戦力ダウンしている。
「地上での静止力を確保できねば、忌々しいパルチザンどもを一掃できんではないか!!」
頼みである艦隊が不在と言うことで、軌道上からの艦砲射撃は事実上不可能となり、パルチザンに睨みを利かせる力の不在は占領軍にとっても痛い。

その為に新たな抑止力としてあの新型戦車を製造したのだが、その製造プラントは破壊され、占領軍は再び抑止力を失った。
「・・・・」
「それに、アルフォン少尉・・・・最近は地球人の女に現を抜かしてるそうじゃないかね・・・・？」
「・・・・」
カザンから雪の事を言われて、ピクっと眉を動かすアルフォン。
「否定せぬか・・・・いい心がけだ。だが、貴様のような奴に指揮権を渡したのが間違いだったわ・・・・地球占領軍総司令官の特権により、貴様の地位をはく奪する!!・・・・その後の処置については考えておこう。本星の判断次第だが、よくて銃殺か永久追放・・・・あるいは、ニッケル詰めにして超重力惑星へ放り出されるか・・・・とにかく、しばらくの間、謹慎して、判決を待っておるのだな・・・・連行せよ!!」
確かに破壊阻止をできなかった点については現場指揮官であったムノーの責任であるが、彼が戦死してしまった以上、誰かが責任を負わねばならない。
本来ならば、カザンも降格ぐらいの責任は負わねばならぬところをたまたまその日、現場視察に居たアルフォンにカザンは新型戦車の製造プラントの破壊の件について、すべての責任を押し付け、自らの地位の保身を図った。
仮処分を言い渡したカザンはアルフォンを留置場へと連行するように命ずる。
会議室を出て通路を歩いている中、
「こんなことになって残念だわ、アルフォン少尉・・・・アルフォンちゃんは、兵士、下士官には気遣ってくれる良い士官なのに・・・・私からもなんとか刑罰が軽減されるように、カザン総司令に嘆願してみるから・・・・」
「大佐・・ありがとうございます・・・・しかし、製造プラントを守れなかったことは事実ですから・・・・お気遣いだけ、ありがたく頂戴します」
「アルフォンちゃん・・・・」

こうして、アルフォンは本星からの沙汰が下るまでその身柄を拘束されることになった。
そして、時を同じくして、パルチザンはいよいよ占領軍の本丸・・・・地球防衛軍司令部の施設の破壊に着手した。
これについては藤堂や西郷たち、防衛軍司令部の幹部も容認した。
占領軍の司令はここから各国へと指令されている。
ここを叩けば、占領軍の指揮系統は大きく乱れる。
あわよくば、司令部要員を捕虜または斃すことができれば、なお占領軍の指揮系統を混乱させることが出来る狙いがあった。
「スペード1だ」
「ハート1、準備完了です。それよりも本当にそちらは三人で大丈夫なんですか？」
宗像が心配そうに訊ねる。
今回の司令部襲撃に関しては、北野、古野間、ティアナの三人だけで、あとの部隊は陽動となっている。
しかも三人はあの戦闘スーツを着用していない。
「ああ、レーダー・通信中枢は警備が厳しい・・・・多数で乗り込んでも被害が拡大するだけだ・・・それにあの大きさの戦闘スーツでは、入り込めないところもあるしな・・・・」
古野間は大人数でいけば、それだけ味方の損害が大きくなるので少数精鋭で行くことにした。
また、室内では戦闘スーツで入り込めないところがあるので、未着用となった。
「見つからないように忍び込んで内部から破壊するしかない・・・・」
「了解、わかりました・・・・三脚戦車の駐屯所はこっちに任せてください。そちらに目がいかないように思いっきり掻きまわしてみせます」
反対に宗像たち陽動部隊の方にはあの戦闘スーツが回され、敵の目が司令部へといかないようにする手筈となった。
「よし、頼む。さて、北野、嬢ちゃん、行こうか？」
「はい・・・・ランスターさんは司令部の内部構造は大丈夫ですか？」
「大丈夫です。事前に地図を何度もみましたから」

一応、端末に司令部の地図はインプットされているが、事前の下準備は完璧だとティアナ言う。
ティアナの返答を聞き、北野は頷く。
そして、どす黒く曇った空の下に聳え立つ防衛軍司令部の庁舎を見上げる。
「地球防衛軍本部か・・・まさか、ここに忍び込むことになるなんて、昔なら夢にも思わなかったでしょうね・・・」
「フッ、まったくだな・・・」
北野や古野間が少し前なら平然と正面玄関から出入りできた防衛軍の司令部に今度はコソ泥みたいに侵入し、内部の施設を破壊するテロ行為を行うことになんとも考え深いものを感じる。
三人は地下駐車場の入り口からまず侵入する。
「もう一度、図面地図を確認しましょう」
端末で司令部の地図を表示し、これからの作戦行動を確認する。
「おそらく、エレベーターはパスワードが書き換えられて使えません」
「となると、この階段を使わないと上には行けませんね」
北野がエレベーターは使用不可である可能性を示唆し、上の階に行くには階段を使用しなければならない。
「レーダー・通信中枢は・・・確か。四階の奥か・・・結構登らなきゃならんか・・・しかし、ここを破壊できれば、司令部と上空の艦隊、各国の占領軍の司令部との連絡がつかなくなるはずだ」
「とにかく、見つからないように進みましょう」
ここは占領軍の司令部・・・当然、警備もそれなりにあるはずだ。
見つかって包囲されたら、あっという間に全滅だ。
慎重に進まなければならない。
三人は物陰に隠れ、敵兵をやり過ごしながら階段へと向かう。
地球全体がＡＭＦで満たされているので、魔法は長時間の使用は出来ないが、それでもティアナはクロス・ミラージュに周囲の探知を行わせた。
古野間は時折、通路を歩いて巡回している兵士の背後から襲い掛かり、手で敵の兵士の口を塞いでナイフで首を掻っ切って敵兵を絶命さ

せる。
しかし、階段口で敵の兵士が立ち番をしていた。
このままでは階段へ行くことが出来ない。
だが、見つかり警報を鳴らされたら敵兵がわんさかと溢れてくる。
ティアナは物陰から立ち番の兵士の頭に狙いを定めて一発で仕留める。
「なかなかやるじゃないか、嬢ちゃん」
敵の兵士を一発のヘッドショットで斃したティアナを褒める古野間。
「先生が良かったですからね」
「そりゃどうも」
実際に射撃型魔導師で射撃センスがあるティアナであるが、本格的なコスモガンの扱いはパルチザンに入ってから古野間と北野から教わった。
その他にも魔法を使用しない生身だけでの近接戦闘術も空間騎兵である古野間直伝である。
そのため、魔法を使わない格闘技だけならば、ティアナはなのははもとよりスバルやノーヴェとだっていい勝負が出来るかもしれない。
ティアナと古野間は互いに軽口をたたきながら、階段へと向かう。
幸い階段には敵の兵士はおらず、三人は無事に四階へとたどり着く。
そして、エレベーターホールに来た時、司令部に警報が鳴り響く。
「見つかったんでしょうか？」
「いや、おそらくハート1だ。戦車の駐屯所の襲撃が上手くいったんだろう」
「それよりもここはエレベーターホールです。あまり長居をしていると敵に見つかります」
「そうですね、急ぎましょう」
三人は目的地であるレーダー・通信中枢を目指す。
「この部屋だな」
「ここを壊すとどちらにしても警報が鳴ります。覚悟はいいですか

?」
「はい」
「おう」
レーダー・通信中枢の扉を開けると、
「な、なんだ!?お前たちは!?」
「し、侵入者だ!!」
部屋の中には当然、敵の兵士居た。
古野間はロケットランチャーで、北野はレーザーライフル、ティアナはコスモガンで、部屋の中に居た敵の兵士を斃し、主目的だった設備も壊した。

「よし、これでもう使い物にはならんぞ・・・・」
完全に破壊されたレーダー・通信中枢・・・・
復旧するにはかなりの時間を有するだろう。
だが、防衛軍の軍人である北野や古野間にとってはきっと複雑な気持ちだろう。
自分たちが使っていた施設を敵に使われないようにするためとはいえ、こうして破壊したのだから・・・・
「こちら、スペード1、ターゲットの破壊に成功」
北野は陽動部隊に主目的の破壊が成功した旨を伝える。
すると、警報が再び鳴り始め、下から順に隔壁が下り始めた。
誤作動なのか?それとも、敵が新たにプログラムを加えていたのか?
いずれにしてもこの場にいてはいずれ包囲殲滅されてしまう。
だが、往路で使用した階段も既に隔壁が閉まっており、使用不可能となっている。
「出口が閉鎖されてしまいましたね」
「ああ、登ってきた階段も閉鎖されている」
ティアナと古野間は焦ったり、パニックを起こす事無く、冷静に現状を見ている。
こういう時、焦ったり、パニックを起こすとより事態を悪化させる。

「北野さん、どうします?このままじゃ、袋のネズミですよ」
ティアナは隊長である北野に指示を仰ぐ。
「確か奥にはもう一つ・非常階段があるはず・・・そこなら隔壁も閉じていないでしょう・・・でも・・・」
「敵の待ち伏せが予測されている・・・だな?」
「ええ」
「でも、このままここにいる訳にはいかないでしょう」
「そうですね」
三人が行動に移そうとした時、扉が開いて、
「いたぞ!!」
敵の兵士が入ってきた。
「このっ!!」
「ぐあぁ!!」
古野間が出入り口に向けてロケットランチャーを撃ち通信室に入ってきた敵の兵士を斃して三人は非常階段を目指す。
通路を走っていく中、後ろから敵の兵士の声や足音が聞こえるが決して後ろを振り向かずにひたすら走る。
そんな中、
「こいつは・・・物資搬送のエレベーター・・・こいつなら使えるかもしれない」
途中にあった物資搬送用の大型エレベーターへ乗り込むが、ここで問題が生じた。
「北野さん、古野間さん!!このエレベーター、上の階にしか行けません!!」
そう、この物資搬送用のエレベーターは今、自分たちが居る階が始発で上にしか行けなかった。
「行くしかない・・・押せ!!」
どのみち、エレベーターを降りてここから非常階段を目指す時間もない。
ティアナはエレベーターのボタンを押す。
そして、エレベーターは上昇し、二十五階に到着する。

エレベーターの前には敵が既に待ち構えている可能性が高い。
（クロス・ミラージュ、敵の反応は？）
ティアナはこの先に待ち構えているであろう敵の数をクロス・ミラージュに訊ねる。
（エレベーターホール周辺に敵の反応はありません）
（えっ!?）
クロス・ミラージュからの返答にティアナは驚いた。
古野間と北野は武器を構え、エレベーターの扉が開くのを待つ。
しかし、扉の前には誰も居なかった。
「誰も居ない・・・？」
クロス・ミラージュから聞いていたが、こうして実際に無人のエレベーターホールを見ると、なんか拍子抜けしてしまう。
「敵が待ち受けていると思ったが・・・一体、どうなっているんだ？」
エレベーターホールに誰も居ないことに古野間とティアナは首を傾げる。
「駐屯所や兵器庫が同時に襲撃されていますし、通信中枢も破壊しましたからね。敵の指揮系統が混乱しているのでしょう・・・」
「じゃあ、敵が指揮系統を回復する前にここを出ましょう」
「そうですね」
「ここから非常階段の位置はどこだ？」
「えっと・・・こっちです」
上の階に行くと言うアクシデントがあったが、敵の追撃を振り切り、陽動部隊の陽動と通信中枢の破壊で敵の指揮系統を混乱することが出来た三人は当初の予定より、遠回りになるが、司令部からの脱出を図る。
なお、敵が再び物資搬送用のエレベーターで追いかけてこないようにエレベーターは停止させた。
二十五階からの非常階段を目指していると、途中、人員用のエレベーターホールにて、誰かがやってきた。
「しっ・・・誰か来る!!」
三人はエレベーターホールの柱の物陰に隠れてやり過ごす。

「ええぃ!!被害の方はまだ分からんのか!?」
やってきたのは数名の士官を連れたカザンであった。
声を荒げている様子から、カザンはかなりご立腹の様子だ。
「そ、それが、通信中枢を破壊されておりまして、各隊とも連絡がつかない状態でして・・・」
「馬鹿者!!ならば、自分たちの脚で伝達せよ!!・・・部隊をまとめ上げ、侵入してきたパルチザンを一掃するのだ!!」
「はっ!!」
「くそっ、アルフォンの奴が、戦車工場を完全に守っていればこんなことには・・・」
カザンが苛立っている訳・・・それは新型戦車の製造プラントを破壊されただけでなく、パルチザンの行動が着々と戦果をあげていることだった。
戦車製造プラントの責任はアルフォンに押し付けることが出来たが、今回の司令部の通信中枢の破壊、その他多くのパルチザンの活動においては自分の責任問題にかかわる。
これ以上の失態が続けば自分は更迭されるかもしれない。
やっとここまでの地位に上り詰めたのに、ここで更迭なんてされれば、不敬罪の罪を着せられて軍刑務所に収監されてしまう恐れもあるからだ。
いや、下手をしたら処刑される可能性もある。
そのため、カザンが焦るのも無理はなかった。
「何をしておる!!早く行け!!」
カザンは士官たちに伝令へ赴くように怒鳴る。
「はっ・・・では、ご報告は司令室の専用独立回線で・・・」
「馬鹿者!!あの回線は私が使う!!貴様らはその脚で直接報告に来い!!」
「「はっ!!」」
まだ独立した通信回線が使用可能にもかかわらず、カザンは、報告は時間のかかる伝令で行うように命令する。
(典型的な嫌われる上司ね・・・)

ティアナはカザンと士官たちの様子を見て、カザンは正直に言って人望がないと判断した。
管理局にも能力はないのに親や身内のコネで権力を手にしている輩が大勢いる。
そんな輩の多くは権力を盾に威張り散らすだけしか出来ないので、部下からの信頼は当然ない。
士官たちは急ぎ現場へと向かって走っていった。
敵とは言え実にご苦労なことである。
「そうか・・・この階から上は、元防衛軍の司令中枢・・・・」
「敵もそこを司令本部に使っているって訳だ・・・カザン総司令・・・あれが占領軍の親玉か・・・・」
「どうします?追いかけますか?それとも従来通り、撤退しますか?」
ティアナはここであのカザン総司令を捕虜または斃すことができれば、敵の指揮系統をなお混乱させることが出来ると思い、北野と古野間の意見を求める。
今の自分たちの状況は決して有利ではない。
通路の彼方此方は隔壁が閉まっており、陽動部隊の働きがあり、指揮系統が混乱しているとはいえ、あまり時間をかけると指揮系統が回復して、この司令部にも敵兵が戻ってくる。
そうなれば、数の上でも戦力の上でも自分たちはかなりの不利となる。
しかし、目の前に敵の総大将が居る。
北野は迷ったが、このチャンスを生かすことにして、カザンを捕虜または斃すことにした。
だが、司令室の前には分厚い硬化テクタイト製の防御シャッターが三人の前に立ちはだかった。
「こ、これは・・・」
ティアナが硬化テクタイト製のシャッターを手でコンコンと叩く。
「硬化テクタイトの防御シャッター・・・銃では打ち破れませんよ・・・・」
「宇宙船の窓と同じ物質か・・・銃どころか手榴弾やロケットラン

チャーでも壊せそうにないな・・・カードキーがあれば開くようだが・・・」
やはり、カザンを捕虜または斃すのは無理なのだろうか？
その時、陽動部隊から通信が入った。
「スペード1だ」
「こちらハート1・そちらはご無事ですか？」
「無事だ・・・そっちはどうだ？」
「こっちはほぼ占拠完了です。兵器庫の方も順調で、あと十五分もあれば制圧できます」
「上出来だ・・・」
「ただ、指揮官らしいのは何人か取り逃がしました・・・」
「わかった。あとは予定通りに行動してくれ」
「了解」
陽動部隊との通信をきり、ティアナが、
「取り逃がした指揮官はさっき見た士官の誰かでしょうか？」
陽動部隊が仕留めることが出来なかった士官は先程見たカザンの側近出る可能性を示唆する。
「多分な・・・連中はカザンの命令で現場に向かうように言われていたからな」
「となると、ここへ戻ってきますね。カザンに直接報告を入れるために・・・」
「その士官なら、さっきのシャッターのカードキーを持っているでしょうね」
そこで、三人はカードキーを持っているであろう士官を待ち伏せた。
司令室のある二十八階のエレベーターを降りた直後、伝令に来た士官の目の前に北野、古野間、ティアナの三人が姿を現す。
「な、なんだ?!お前たちは?!」
突然、敵が目の前に現れたことで、その士官は驚き咄嗟の対応が遅れた。
バキューン!!

バキューン!!
バキューン!!
腰にあるホルスターから銃を抜く前に士官は三人に斃された。
「ぐあぁ!!」
ドサッ
ゴソ、ゴソ
床に倒れた士官の軍服のポケットをまさぐり、お目当てのカードキーを見つける。
「ありました・・・・カードキーです!!」
「じゃあ、いよいよ敵の大将と決着をつけるときですね」
「そういうことだ・・・・いくぞ」
三人は司令室まで向かい、カードキーを使って司令室前の硬化テクタイトのシャッターを開ける。
「準備は良いか?隊長?嬢ちゃん?」
「ええ!!」
「はい!!」
「よしっ、じゃあ行くぞ」
三人が司令室へと入るとカザンは司令室に備え付けの独立回線で戦車駐屯所と通信をしていた。
「――そうだ!!私のところに持ってこい!!・・・・例の新型戦車だ!!」
「　　」
「・・・・何?無いとはどう言うことだ!?まだもう一台、完成品があったであろうが!!」
新型戦車はあの製造プラントで古野間たちが破壊した第一号機の他に試作機の零号機が第一号機と同じく稼働が可能状態となっていた。
試作機とはいえ、性能は一号機と変わらぬ性能を有していた。
しかし、その零号機はカザンが今、通信をいれている戦車駐屯所には無いと言う返答がきた。
「・・・・そこに無い!?アルフォンの管轄だと!?・・・・ぬぅぅぅ〜!!急いでアルフォンを呼べ!!そうだ!!司令室に来るように伝えるのだ!!」

例の新型戦車零号機の場所を知っているのはアルフォンだと言う。
カザンが新型戦車の保管場所を知っているアルフォンを司令室へ連れてくるように言うと、通信先の相手からの通信が突然途切れた。
「・・・おい、どうした!!応答せんか!!おい!!」
カザンがいくら怒鳴っても通信が回復することはなかった。
「戦車駐屯所も兵器管理庫も、もう連絡はつかないぜ・・・」
「っ!?」
自分の背後から何者かの声がした。
カザンが振り返ると、そこには自分にコスモガンを構える古野間、北野、ティアナの姿があった。
「・・・パルチザンか・・・ハハ・・・そ、そうか・・・もうここまで侵入してきたわけか・・・うん・・・ゆ、優秀だな、君たちは・・・ハハ・・・私の部下の兵にも見習ってもらいたいぐらいに・・・ハハ・・・」
先程までの威厳はなく、声が震えているカザン。
「「・・・」」
今のカザンの姿には地球占領軍総司令官の威厳はなく、小物臭しかいない。
そんなカザンの姿に内心呆れる三人であるが、三人はコスモガンを構える姿勢を崩さない。
「ま、まさか、撃ったりはしないだろうね・・・ハハ・・・撃ったところで、良いことなど一つもないよ、うん」
「「・・・」」
三人は無言のままカザンを睨む。
「ひぃっ!!た、助けてくれ!!命ばかりは・・・」
ここにきてカザンは三人に対して命乞いをしてきた。
「そうやって命乞いをする人をお前は一体何人殺してきたんだ?」
「あまりにも見苦しいわよ」
「チッ、こんな奴のために・・・こんな奴のために、何人もの地球人が死んでいったとはな・・・」
一時は捕虜にすることも考えたが、眼前に居るカザンのあまりにも見苦しい態度を見て、こんな小物相手にこれまで大勢の地球人が殺さ

れたと思うと、腸が煮えくり返る思いがあり、殺された地球人のためにもここでカザンは斃すと決めた三人だった。
しかし、カザンは三人の一瞬の隙を突いて、腰に装着されていた機械のボタンを押す。
すると、機械の駆動音が鳴る。
三人がカザンに向けてコスモガンを撃つと、コスモガンのエネルギー弾はカザンの身体を貫くことなく消滅する。
「何ぃ!?」
「エネルギー弾がかき消された!?」
「フハハハハハ!!馬鹿者めが!!早く撃っておればよかったものを!!」
カザンの周囲には薄紫色のシールドが張られていた。
「こいつは要人保護のための携帯用エネルギー偏向フィールドだ!!ネズミどもめ!!覚悟しろ!!このまま地獄へ送ってくれてやるわ!!」
そう言って、ホルスターからコスモガンを抜いて、三人を銃撃してくる。
あの偏向フィールドは暗黒星団帝国の銃のエネルギー弾は通すが、地球のコスモガンのエネルギー弾は通さない仕組みになっているようで、三人がいくら銃撃してもカザンにかすり傷一つ負わせることが出来ない。
「効かない・・・!!」
「そんな馬鹿なっ!?」
「だが、無尽蔵にエネルギーがある訳ねぇ!!いずれ、エネルギー切れをおこすはずだ!!それまで耐えろ!!ありったけの弾を撃ち込んで、奴のバリアーのエネルギーを減らすんだ!!」
「はい!!」
「了解!!」
カザンの偏向フィールドはプレアデス、ガリアデスが張っていた偏向フィールドよりも強力でロケットランチャーの弾さえも無効化した。
しかし、所詮は携帯型の偏向フィールド・・・
プレアデス級の戦艦に搭載されていた偏向フィールドよりもエネ

ルギー消費が激しいようで、三人の攻撃を受けていると次第にフィールドの規模は縮小していき、遂には消滅してしまった。
「ひっ!!」
とうとう自分を守るフィールドが消えて狼狽えるカザン。
「終わりだぜ・・・お前を守ってくれたバリアーのエネルギーも、お前さん自身もな・・・」
「ひぃっっっ!!」
「・・・」
三人の鋭い眼光がカザンに突き刺さる。
「き、キミたち・・・う、撃たないよね・・・?私は総司令官だ・・・生かしておいてくれると、その・・・あれだ・・・な、何かと役に立つぞ・・・」
カザンは今度こそ、ガチで命乞いをしてきた。
投降する姿勢も見せているのだが・・・
「・・・おしゃべりも、終わりだ」
北野たちはカザンの投降を受け入れるつもりはなかった。
「く、くそがぁぁ!!」
カザンは最後の抵抗を見せて銃を発砲してくる。
その一発はティアナの左頬を掠める。
ティアナを狙ったのはせめて一矢報いろうとしたカザンが、北野、古野間、ティアナの三人の内、ティアナがもっとも倒しやすそうに思ったのだろう。
しかし、死の恐怖で手が震えたカザンの射撃はティアナの命を刈り取ることはできなかった。
「っ!?」
頬に突然、焼き鏝を押し当てられたかのような熱さと痛みが走るがティアナは姿勢を崩す事無くカザンに銃口を向けたまま・・・
そして、三人はコスモガンの引き金を引いた。
三つのコスモガンのエネルギー弾はまっすぐカザンへと向かい、自分を守る偏向フィールドも無くなったカザンの身体を撃ち抜く。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
撃たれたカザンは大きくのけぞり、背後の窓ガラスを突き破って、

外へと落下していった。
「ランスターさん!!大丈夫ですか!?」
カザンを斃した後、北野はすぐにティアナに駆け寄って彼女の傷を診る。
「だ、大丈夫です・・・」
大丈夫と言うが、ティアナは痛みで顔を歪める。
敵を倒したことで、ティアナは片膝をつき、血が流れ出る頬に手をやる。
北野は持っていた救急キットでティアナの治療をする。
「いつっ・・・で、でも、これで終わりましたね・・・」
今回の戦果は地球占領軍総司令官をも斃す大戦果だ。
占領軍の士気はますます低下するはずだ。
しかし、
「いや・・・まだ一人残っている・・・」
総司令官であるカザンを斃したにもかかわらず、古野間はまだ倒すべき敵が一人残っていると言う。
「?」
総司令官以外に占領軍で重要な人物は見当がつかない。
北野とティアナは首を傾げる。
「残っているんだ・・・どうしても倒さなきゃならん奴がな・・・」
古野間の脳裏にはアルフォンの姿が強く焼き付いていた。
彼にしてみれば、カザンよりもアルフォンの方が倒すべき本当の敵だった。

百十三話　それぞれの覚悟

地球占領軍総司令官、カザンの死は瞬く間に地球占領軍全域へと知れ渡った。

当然、その知らせは占領軍にとっては最悪な知らせであり、今や占領軍には地球占領当時の勢いも士気もなかった。

地球占領当時は、辺境の田舎惑星に住む野蛮人など、自分たちにとっての新たな器にしかならない、取るに足らない存在かと思いきや、実際にこの地球と言う辺境の田舎惑星に来てみると、この星に住む吸血害虫に害獣、独特の風土病、更にはパルチザンと共に戦う未確認の生物、そして徹底抗戦を掲げ、神出鬼没で現れるパルチザンの襲撃でその印象は大きく塗り替えられた。

しかも対パルチザン用の新型戦車の製造プラントは破壊され、戦車製造の見通しはつかない中、ついには占領軍総司令官たるカザンまでもがパルチザンの手によって殺された。

生き残った占領軍司令部の幕僚たちは、当然動揺が隠せなかった。

総司令官が殺されたのだから、次なる総司令官をすぐに決めなければ、占領軍の士気にも関わるが、新たな総司令官となれば、当然パルチザンの暗殺のターゲットにされるという恐怖が司令部幕僚たちに蔓延した。

それほど、今回のカザン総司令の暗殺事件は占領軍にとってショッキングな出来事だったのだ。

幕僚たちの中でもちろん、パルチザンの暗殺のターゲットに自ら立候補する者はいなかった。

それに、地球占領軍総司令官なんて響きの言い役職ではあるが、正直に言って、今のその地位は針の筵に近い。

兵士たちの士気は低下し、戦況はパルチザン側に徐々に傾きつつあるこの状況・・・

本星へ事の次第を報告したくとも、このような失態・・・

『最高官であるカザン総司令がパルチザンに暗殺されましたので、援軍と代わりの司令官たる人物を派遣してください』

なんて、報告をすれば、たちまち自分たちは無能者の烙印を押されて更迭・・・ぐらいで済めばいい・・・。
最悪の場合は、永久追放、粛清の恐れもある。
占領軍は報告を隠蔽することにして、現有戦力で地球での占領維持をしなければならなくなった。
そして、総司令にはあの新型戦車の製造プラントを守り切れなかったとされるアルフォンにしようという意見があがった。
もちろん、少尉と言う下級士官で尚且つ地位を剥奪されたアルフォンを総司令官にすることに対しての反対意見も出たが、意外にもそれはごく少数であった。
そもそもの発端はアルフォンが新型戦車の製造プラントを守り切っていれば、カザンは暗殺されなかったのだからと言う、カザン同様、司令部の幕僚たちはアルフォンにすべての責任を押し付けたのだ。
留置されていたアルフォンは釈放されると、さっそく司令官室へと通され、そこにあった独立回線にて、今回の人事異動の命令を受けた。
「――わかりました・・・私でよければ、お引き受けしましょう・・・」
アルフォンは、一切弁明することなく、司令部からの人事異動の命令を了承した。
いや、元々アルフォンには拒否権なんて存在しなかった。
このままこの命令を拒否すれば、新型戦車の製造プラントの件で裁かれていたところだ。
アルフォンにとってこれまでの失態を挽回するにはこの命令を受けるしかなかったのだ。
そして、戦士として最期を迎えるにしても処刑よりも戦場での最期を彼は望んでいた。
「はい・・・司令部中枢はすぐに地表から撤退するのですね・・・軌道上の艦隊へと・・・はい、・・・では・・・」
そして、生き残った司令部の幕僚たちは、パルチザンの襲撃や彼らのテロ行為によって命を落とすのは御免だと言わんばかりに、地表から撤退し、軌道上にいる艦隊へと司令部を移した。

艦隊と言っても既に戦艦、巡洋艦などの攻撃力が高い大型艦船はなく、輸送艦、護衛艦、駆逐艦などの補助艦艇や小型艦艇しか存在しない輸送船団の様な艦隊だった。
だが、宇宙船を有しないパルチザンは宇宙まで来ることはできない。
よって、宇宙船の中ならば、パルチザンの襲撃を恐れる必要はない。
司令部はその収容機能を重視し、護衛艦ではなく、とある輸送艦に司令部を置いた。
だが、新たな総司令官となったアルフォンは引き続き、地表から指示を送ることとなった。
彼らが宇宙船へ避難したのは、パルチザンの襲撃がないという安全面の他に少尉と言う格下の士官から命令されるのは、自分たちのプライドが許さないという面もあったのだろう。
司令室から出ると、そこにはメイトリックが待っていた。
「大佐・・・」
「アルフォンちゃん・・・総司令代行就任おめでとう」
「ありがとうございます。大佐・・・しかし、階級で下回る自分が大佐を差し置いて、代行とはいえ、総司令の地位につくなんて思ってもみませんでした・・・しかも、一時は軍務と階級を剥奪された身でしたのに・・・」
「いいえ、司令部の腰抜けは、アルフォンちゃんに責任を押し付けて、自分たちは安全な宙へ逃げただけじゃない」
「・・・大佐は避難されないのですか？」
「見くびられちゃ、困るわ～、取り締まる対象がいない宇宙の艦隊じゃあ、憲兵隊はごくつぶしじゃない？そんな遊兵を作るほど、今の軍には余裕はないでしょう？」
「は、はぁ～・・・」
「これより、憲兵隊はアルフォン総司令代行の指揮下に入ります!!」
メイトリックは真剣な表情でアルフォンに敬礼する。
アルフォンは一瞬、目をパチクリと瞬きして、驚いたが、やがて彼も真剣な表情をし、メイトリックに敬礼し、

「メイトリック大佐・・・総司令官代行として、憲兵隊の働きに期待します」
と、返答した。
このアルフォンの言う、『働き』の中には通常の憲兵任務の他にパルチザンとの戦闘も含まれていた。
「了解であります。総司令代行」
もちろん、メイトリック自身もそれはちゃんと理解していた。
司令部庁舎を後にしたアルフォンは、自分の宿舎へと戻ると、宿舎に居た雪に今回の人事異動の件について話すことにした。
アルフォンが雪の部屋へと行くと、彼女はバルコニーから外の景色を見ていた。
そして、アルフォンの気配に気づくと振り返る。
「雪・・・この間の話、考えてくれたかい？」
アルフォンは以前、雪に対してプロポーズめいた事を言っていた。
雪の心の中に存在する古代。
しかし、アルフォンは、古代は既に高速連絡艇の事故で死んでいると判断していた。
一方で雪は、実際にこの目で古代の死体を確認したわけではない。
故に雪は、古代は生きていると確信していた。
だが、雪はまだあのハイペロン爆弾についての情報を得ていない。
地球を占領軍から解放するにはあのハイペロン爆弾の存在が要である。
「地球人はそれほどまでに愛する人の事を考えるモノなのか・・・？重核子爆弾の秘密を知りたくはないのか？」
「・・・」
アルフォンは、自分を受け入れてくれるのであれば、雪にハイペロン爆弾の情報をすべて教えるという条件を提示してきた。
雪だって、ハイペロン爆弾の情報を知りたい。
しかし、それは古代や同じ地球人への裏切りに相当する。
雪の心は葛藤していた。
「何も言わないんだね・・・あくまでも実力で探り出そうというわけか

…君がこのところ、不穏な動きを見せていたことは知っていたよ」
アルフォンは、ここで初めて雪に対して、彼女が自分たちから情報を盗み、それをパルチザンへ送っていたことを既に知っていた事実を突きつける。
さらに、自分の周辺を嗅ぎ回り、ハイペロン爆弾の情報を得ようとしていることも…
「だが、そんなことで重核子爆弾の秘密を知ることはできない」
しかし、ハイペロン爆弾は暗黒星団帝国にとっては最大の切り札…
そう簡単に情報が洩れるようなヘマを暗黒星団帝国は・アルフォンはしなかった。
「…」
「仲間のところへ帰りたまえ…」
「っ!?」
「今日、司令本部へパルチザンの襲撃があった…通信網が破壊され、カザン総司令が暗殺された…」
「…」
アルフォンがスパイ活動をしていた自分を殺すこともなく、また収容所へと送ることもなく、パルチザン活動をしている仲間のところへと帰れと言ったことにも驚いたが、まさか、自分たちの仲間が敵の占領軍たる総司令を暗殺したことにも驚いた。
「司令部要員も多くが斃れた…おかけで、指揮系統はひどい混乱ぶりだよ。生き残った司令部要員は軌道上に撤退…これより、各都市に居る地球占領軍は、それぞれ独立して、占領維持に挑まねばならん…」
「…」
指揮系統が分断され、それぞれの司令部が独自の判断で動かねばならない状況となり、雪は占領軍が自棄をおこして住民への虐殺行為に出ないか心配となるが、占領軍も地球人をむやみに殺せない理由があるため、そうそう下手な行動をとれない。
反対に弱体化した占領軍の方がパルチザンの襲撃に怯えなければ

ならなくなった。
「そして、私が・・・私が、重核子爆弾の護衛を含む、このメガロポリス占領部隊の臨時司令官に任命されたよ・・・皮肉なことに、一度地位を剥奪されかけた、下っ端士官の少尉ごとき私がね・・・」
自嘲めいたようにつぶやくアルフォン。
傍から見れば、少尉から将官クラスの地位へ一気に昇りつめたことは物凄く凄い事なのだが、現状は責任と厄介ごとを押し付けられただけに過ぎなかった。
アルフォンの話を聞き、雪は、
「・・・それでは・・・それでは、あなたは・・・」
「そう・・・今や私こそが、君たちパルチザンが倒すべき新たな敵なのだ・・・」
カザンにとって代わって新たな司令官となった人物・・・
それは、ハイペロン爆弾の情報を持っている人物・・・アルフォン・・・
彼を倒せば、敵の戦意を下げ、更にはハイペロン爆弾の情報を得ることが出来る一石二鳥の状況となった。
しかし、雪はなぜかそれを素直に喜べなかった。
そんな雪の気持ちを知ってなのか？
それとも戦士としての矜持なのか、アルフォンは、
「雪・・・もう一度言おう・・・仲間の所へ帰りたまえ・・・そして、私に立ち向かってくるのだ・・・」
雪に仲間であるパルチザンの下に戻り、そして改めて自分へ挑んでくるように言う。
「私を倒すことができれば、そのときすべてを教えよう・・・」
「・・・」
「・・・重核子爆弾の内部で、君を待っているよ」
アルフォンの言葉が嘘ではないと判断した雪はただ黙って館を後にした。
雪だって女性ながらも戦士である。
戦士の気持ちは戦士にしか分からない。

「雪・・・君は強い女性だ・・・・君ならば、ぼくを苦しみから解放してくれるかもしれない・・・・」
去っていく雪の後姿を見つめながらアルフォンは哀愁が漂う雰囲気でつぶやく。
実らぬ恋をしてしまったこと、
上からの理不尽な命令・・・・
雪を倒せば、自分の胸に抱くこの敵わぬ恋に終止符を・・・・
そして、雪に倒されれば、この理不尽な世界から解放・・・・
アルフォンは総司令官代行の人事命令を受けた時から、自らの死を願っていたのかもしれない・・・・。
アルフォンは、この館についた時から雪を開放するつもりでいたので、警備兵には雪に手出しをすることを固く禁じていた。
その為、雪が堂々と通路を歩き、正面玄関から出ていくのを止めたり、彼女を襲撃する者も居なかった。
「・・・・少尉・・例の地球人の女性を逃がしてしまって本当によろしかったのですか?それも尾行をつけずに・・・・?」
警備の兵士の一人がアルフォンの下に来て、雪がこの館から完全に去っていったのだと確認した。
「構わぬ・・・・」
(彼女とは戦場で決着をつけたい・・・それに雪の他にもこの私を倒そうとする地球の戦士が居る・・・・)
アルフォンの脳裏に収容所、そして戦車製造プラントで見たパルチザンの戦士たちの姿が脳裏を過ぎった。
「し、しかし・・・・」
「いいんだ・・・それより、我々もここを引き払う・・・各自、撤収準備と機密情報の処分を行え・・・特に情報に関しては念入りにな・・・・」
「はっ!!」
アルフォンは、機密情報を念入りに処分した後、館に居た警備兵を伴い、ハイペロン爆弾の下へと向かった。
アルフォンが雪へ別れを告げた頃、同じくメイトリックもある人物へ別れを告げに行った。

ＨＯＢＢＹ　ＳＨＯＰ　Ｔｅｓｔａｒｏｓｓａにて、ヴィヴィオとＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬを興じるメイトリック。
しかし、今日のメイトリックは動きにキレがない。
「大佐、どうしたの？なんか今日は調子が悪そうだけど？」
ヴィヴィオでもメイトリックの動きが今日は変だと気付く。
「・・・その・ヴィヴィオちゃん」
「ん？どうしたの？」
「その・・・実は私・・・もう、ヴィヴィオちゃんとＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬは出来そうにないの・・・」
「えっ？」
メイトリックの言葉にヴィヴィオは目を見開く。
「それってどういうことなの？」
「・・・実は、お仕事が忙しくなりそうなのよ・・・だから、もう、ヴィヴィオちゃんとＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをする余裕がなくなりそうなの・・・」
「お仕事・・・それって大佐は地球の人を殺すってこと？」
ヴィヴィオだって、メイトリックが異星人であることぐらいは分かる。
そして、彼らの同胞が今、この地球を占領していることも・・・
その占領軍の仕事が忙しいということをヴィヴィオは子供なりに察した。
ヴィヴィオの言葉にメイトリックは、悲しそうな顔をして、
「ごめんないさい・・・出来ることなら、私だってこの星の人は傷つけたくないわ・・・でも、私には大勢の部下が居るの・・・その仲間を守るために、今は戦わないといけないの・・・」
「・・・」
「まだ、子供のヴィヴィオちゃんには私たちの事が酷い事をしている様に見えるけど、これだけは覚えておいてちょうだい」
「えっ？」
「正義は決して、一つだけじゃないの・・・」
メイトリックが言った『正義』と言う言葉・・・

この言葉はヴィヴィオがミッドにいる時から聞きなれた言葉だ。
管理局はよくテレビのＣＭでこの言葉を使用している。
そして、自分の知り合いはみんな、管理局の局員ばかり・・・
故にヴィヴィオは正義とは自分の養母を含め、管理局の局員の人が行っているような行動なのだと思っていた。
実際、自分の養母たちや知り合いは凶悪な犯罪者たちを捕まえたり、災害にあった人たちを助けている。
それはまさしくテレビアニメや漫画で描かれているヒーローそのものだ。
しかし、メイトリックは、正義は一つではないと言う。
「ヴィヴィオちゃんたち、地球の人から見たら、私たちはどうみても正義じゃない、地球を占領している悪だけど、私たちにもちゃんとした理由があって、こんなことをしているの・・・そして、私たちのこの行動には、故郷に居る大勢の人たちの未来がかかっているのよ・・・」
「未来？」
「そう、未来が・・・」
メイトリックはヴィヴィオが自分と同じ異星人とは知る由もなかったので、ヴィヴィオを地球人として見ていた。
「過去の歴史の中で、勝者が正義だと描かれて来たけど、敗者にも敗者なりに正義を掲げて戦っていたのよ・・・」
「・・・」
「歴史は勝者が築いてきたのかもしれないけど、その中の正義は決して一つだけではないだろうし、正義が絶対に正しいとは限らないわ」
「えっ？」
「その正義の中の真実次第では、正義も悪になりえることもあるのよ」
メイトリックの言っていることを当てはめると、管理局に勝ったボラー連邦が正義で負けた管理局が悪と言うことになる。
しかし、ヴィヴィオは管理局が悪だとは思っていないし、話を聞いた限りでは、あんな酷い事をしたボラー連邦が正義だなんて思いたくもない。
だからこそ、ヴィヴィオにはメイトリックの言葉が深く印象に残っ

た。
その後、メイトリックは時間が許す限り、ヴィヴィオとＢＲＡＶＥＤＵＥＬを楽しんだ。
「それじゃあ、ヴィヴィオちゃん、元気でね」
「大佐・・・また会える・・・？」
「・・・難しいわね・・・それは・・・でも、ヴィヴィオちゃんが私の事を忘れない限り、私は、ヴィヴィオちゃんの思い出の中で永遠に生きているわ」
「・・・」
「それと、今後は都市部でも戦闘が起こる可能性があるから、十分に注意してね」
「う、うん・・・」
メイトリックはヴィヴィオの無事を祈りながら、
（さようなら、ヴィヴィオちゃん・・・貴女は私の良き友人でもあり、良きライバルだったわ・・・）
と、メイトリック自身はもう二度とヴィヴィオと出会うことも彼女とＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをすることもないだろうと心の中でそう思っていた。
この時、メイトリックもアルフォン同様、死を覚悟していた。
メイトリックが憲兵隊庁舎に戻ると、憲兵隊はほぼ全員揃っていた。
「気をつけ!!」
ザッ!!
古参の先任憲兵伍長が号令をかけると、待っていた兵士たちは姿勢を正す。
「・・・みんなも既にカザン総司令の件は聞いていると思う・・・」
メイトリックはそこに居る全員を見渡しながら、訓示を行う。
「生き残った司令部幕僚たちは、軌道上の艦隊へと避難し、新たに総司令官代理には技術部情報将校のアルフォン少尉が就任することになった・・・今後、パルチザンとの戦いは苛烈さを増し、我々憲兵隊も今後は憲兵任務ではなく、陸戦隊としてパルチザンとの戦いに身を投

じることになると思う・・・・」
『・・・・』
「そこで、私はみんなに選択の機会を与える・・・・司令部と共に軌道上の艦隊へ避難したい者は、申し出なさい・・・・私が司令部と話をつけて、艦隊勤務への異動を許可してもらうわ」
メイトリックは部下の安全も考慮して、パルチザンとの戦いがある地表よりも安全な艦隊への異動を提案する。
憲兵隊員たちは、顔を見合わせ困惑するも、誰も手を上げなかった。
「・・・・大佐、我ら憲兵隊は、艦隊への異動を志願する者は誰もおりません!!」
「メイトリック大佐と共に!!」
『大佐と共に!!』
憲兵隊員たちはメイトリックに敬礼する。
「・・・・あなたたち・・・・ありがとう・・・・」
(そして、ごめんなさい・・・・)
自分も含め、部下たちを死地へと追いやなければならないことにメイトリックは心の中で謝った。

士気がガタガタとなった占領軍とは反対に総司令官たるカザンの暗殺、メガロポリスにおける占領軍の兵器庫を襲撃し、その戦力を大幅にダウンさせることが出来たパルチザンの士気は高まっていた。
通信中枢を破壊し、総司令のカザンを斃し、防衛軍司令部から、パルチザン本部へと戻った古野間、北野、ティアナは、他のパルチザンメンバーからまるで英雄の凱旋のような感じで出迎えられた。
しかし、ティアナの頬には血が滲むガーゼが貼り付けられており、彼女は医療室へと運ばれる。
ティアナの治療はノエルが行い、忍もその場に立ち会う。
「うわぁ、結構、ザックリやられたね・・・・」
忍はティアナの傷を見て、その傷がけっこう深いモノであり、痛そうで思わず声に出す。
「まさか、最後の抵抗を受けるとは思ってもみませんでした・・・・い

つっ・・・」
　ティアナとしてもカザンのあの攻撃はあまりにも予想外だった。
「今は、傷痕が残りますが、この戦いが終わったら、本格的な整形手術をしましょう。そうすれば、傷痕を綺麗に消すことはできると思いますよ」
　ティアナの治療をしながら、ノエルが今は無理でもこの戦いが終われば、ティアナの頬の傷は手術で綺麗に消すことが出来るという。
　しかし、ティアナは、
「いえ、傷はこのまま残してください」
　頬の傷は敢えてこのまま残しておくという。
「えっ？でも・・・」
「そ、そうだよ、ティアナちゃん。折角の美人さんが台無しだよ」
　ノエルも忍も女の顔には似つかわしくないその傷を残そうと思っているティアナの心境が理解できなかった。
「この傷は、この戦いを忘れないため・・・この戦いで死んでいった大勢の人たちの事を忘れないために、残しておきたいんです・・・」
「・・・」
　ティアナが傷を敢えて残す決意を黙って聞くノエルと忍。
「でも、その傷のせいで、出会いとかもなくなるかもしれないし・・・」
　忍は折角の美人なのにその頬の傷のせいで、異性が恐れをなして、寄り付かないのではないかと訊ねる。
「この傷が怖くて近づけない男なんて、こっちから願い下げですよ」
　たかが頬の傷ぐらいで、自分を恐れるような腰抜けは、こっちから願い下げだとティアナはニッと笑みを浮かべながら言う。
　ただ、この戦いが終わったら、きっとミッドへの通信も再開されるだろう。
　その時、ミッドのなのはやスバルがなんて言うだろうか？
　自分が異星人相手とはいえ、既に人殺しになっていること、
　そして、ザックリと残るこの頬の傷を見て、何と言うだろうか？
　スバルなら理解を示してくれるだろうけど、なのはの事だろうから、きっと今の自分を否定してくるのではないだろうか？

ホテル・アグスタ後の模擬戦の時の様に・・・
でも、これは誰かに命令された訳でも、強制された訳でもなく、これは自分の・ティアナ・ランスターとしての意志なのだ・・・
例え、昔世話になった上官とはいえ、文句は言わせないし、否定もさせない。
だが、それはこの戦いを生き残った後だ。
ティアナの目は決意が宿っていた。
「あっ、忍さん」
「なにかしら？」
そしてティアナは、忍にある頼みごとをするために、彼女に声をかける。
「確か忍さんは、ヴィヴィオのデバイスを制作したんですよね？」
「ええ、リニスさんに監修してもらったけどね」
「でしたら、私のデバイス・・・クロス・ミラージュを改造してもらえませんか？」
「えっ？」
ティアナの頼みを聞いた忍は唖然とする。
「でも、そんなことをしても大丈夫なの？」
忍としては、別に異存はないが、勝手にデバイスを改造して、管理局が文句を言ってこないか？
改造したデバイスを使用して、ティアナは大丈夫なのか？と、心配になったのだ。
「大丈夫です。クロス・ミラージュは私、ティアナ・ランスター個人の所有物です。管理局が文句を言ってきても、それを没収する権利はありませんし、私が処罰されることもありませんから」
そう言って、ティアナは忍の心配事を解消する。
とは言え、管理局がこの世界で改造されたクロス・ミラージュをロストロギア認定してくるかもしれないが、その場合、ティアナは、はやての夜天の書を引き合いに出すつもりだった。
それに、この世界で改造したクロス・ミラージュをロストロギア認定するのであれば、この世界の純製であるヴィヴィオのデバイスだっ

て、ロストロギアになる。
だが、ヴィヴィオの場合、あの養母であり、管理局のエース・オブ・エースである高町なのはが、ヴィヴィオからデバイスを取り上げる筈がない。
ヴィヴィオから取り上げず、自分からは取り上げる・・・そんな理不尽がまかり通っていい筈がない。
だからこそ、ティアナは絶対の自信があったのだ。
それ以前にティアナにはある迷いがあった。
それは、フェイトたちと共にミッドへと帰るか？
それともギンガの様にこの地球に残留するか？
いずれにせよ、その答えを出すのは今ではないが、いずれは出さなければならない答えであるが、今は目の前の戦いに集中する事にした。
「そう？それなら別にいいけど・・・・」
「お願いします」
「でも、今使用しているデバイスに何か不満でもあるの？」
「出力が弱く、近接戦闘に関して、リーチが短いんです・・・・それを何とか解消してもらいたくて・・・・」
コスモガンを扱い、古野間から魔術無しの格闘技を教わっていると、どうしても今のデバイスの性能に不満が出てしまう。
「わかったわ。この戦いが終わったら、ティアナちゃんのデバイスも強化してあげる・・・・だから、絶対に生き残りなさい」
「はい!!」

ティアナが頬の傷の治療を行っている頃、アルフォンの館を出た雪は、自分の後ろを尾行してくる敵兵の姿を警戒したが、意外にもその姿は見えなかった。
アルフォンの館でも警備兵と通路ですれ違っても、呼び止められることもなく、また襲撃されることもなく、無事に館を出ることが出来た。
しかし、だからと言って油断はできない。

自分を囮にして、パルチザンの本部を突き止めようとするアルフォンの策略かもしれない。
そこで、雪は尾行を振り切るために走った。
建物の陰から蔭へと夢中で走った。
しばらく走ってから雪は気づいた。
走っているとかえって敵に気づかれて、怪しまれてしまう。
敵の兵士はアルフォンの館に居た警備兵だけではないのだから・・・・
そこで、雪は足を緩めた。
(いけない・・いけない・・もっと落ち着かなくちゃ・・・・)
雪は走るのを止めて、平然を装って普段通りの歩幅で歩きだす。
しかし、尾行がないか時折、後ろを振り返る。
だが、自分の後ろには尾行者の様な怪しい人物は確認できない。
それでも、一流の尾行者は、そう簡単には尻尾を掴ませない。
雪はチューブカーやリニアを何度も乗り換えて、パルチザン本部に着く前になんとか尾行者をあぶりだそうとする。
そして、えらく遠回りをして、パルチザンの本部であるヤマトの地下改修ドックの近くへと来てしまった。
しかし、この長い時間と遠回りのルート、そして時折見せるフェイントでも自分を尾行する敵兵の姿は見えなかった。
ここにきて、アルフォンは自分に尾行をつけていなかったのではないかと雪はそう思った。
彼は雪に、「重核子爆弾の中で待っている」と言っていた。
情報将校ながら、彼も自分や古代たちのように一流の戦士なのだろう。
そして、地下の改修ドックへ続く階段を下りていくとドックの出入り口で雪をとがめる声がした。
「止まれ!!誰だ!!」
出入り口を警備していたパルチザン兵たちがレーザーライフルの銃口を雪へと向けてくる。
「地球防衛軍、司令部司令長官付き、宇宙戦艦ヤマト乗員の森雪です」

雪は味方からの誤射を防ぐため、自分の所属と名前を告げる。
「森雪だと?」
警備のパルチザン兵が驚いた声をあげ、懐中電灯で雪の顔を照らす。
そこに居たのは紛れもなく、森雪だった。
「間違いない!!森雪だ!!」
警備のパルチザン兵の一人は雪の同僚の司令部勤務の軍人だったようで、雪の姿を確認して、自分の目の前に居る女性が間違いなく森雪だと確認した。
「ねえ、あなた。ヤマトがどうなったか知っている?」
雪は早速、ヤマトの行方について訊ねる。
「はい、ヤマトは現在、敵、暗黒星団帝国の本星を目指しているとのことです」
「それじゃあ、ヤマト艦長代理の古代進、航海長の島大介がどうなったか知っている?」
「えっ?ええ・・・お二人とも、ヤマトに乗艦していると聞きましたが・・・」
「っ!?」
その軍人の話を聞き、雪は思わず走り出す。
そして、パルチザン本部の中枢であるヤマトの改修ドックへとたどり着くと、雪の姿を見て、彼女を知る者たちはたちまちざわめく。
「雪だ!!」
「森雪だ!!」
「ホントだ!!」
「生きていたのか!?」
パルチザン本部の皆がざわつく中、雪は藤堂の前に歩み寄り、
「森雪、ただいま、帰還しました」
藤堂に敬礼し、戻ってきたことを報告する。
「雪・・・」
「連絡艇発進の際、負傷して地球に残り、敵に軟禁されておりましたが、完治しました。私もパルチザンとして、戦います」

「うむ、力を合わせて頑張ろう・・・・」▪
「はい・・・あの、長官・・・ヤマトは・・・古代君は、無事だったそうですね？」
「うむ、君のおかげだ・・・だが、今は作戦上、通信を封鎖している。状況を知ることが出来ないが、ヤマトのことだ。今もきっと立派に戦ってくれていることだろう」
「はい、きっとそうですね」
「やはり、消息が分からないと不安かな？」
「いいえ、ヤマトが・・・古代君たちが負けることなんてありえません」
雪は、はっきりとした口調で藤堂に断言する。
そこには一切の迷いはなかった。
「うむ、私もそれを信じている」
ヤマトの現状を知ることはできなかったが、少なくともあの日、連絡艇で地球を脱した古代たちが生きていることは確認できた。
ならば、何故、アルフォンは自分に古代たちは死んだと言ったのだろうか？
もしかして、アルフォンは自分に古代を諦めさせるために、古代は死んだと言ったのだろうか？
あの時のアルフォンの心境は分からないが、雪は不思議とアルフォンに怒りは沸いてこなかった。
古代の死を信じたわけではないが、こうして、古代の生存を確認できたからこそ、雪はアルフォンに対する怒りよりも、古代の生存の歓喜が勝ったのだ。

一方、その頃、ミッドでは・・・

本局の奥深くにある特別ゲストルーム・・・
そこに、ボラー連邦から亡命をしたミノフスキーは居た。
まだまだボラー星人であるミノフスキーの存在をおいそれとミッドや管理世界の住人に教えることが出来ない。
彼はこの本局のゲストルームにて、宇宙船の新型エンジンの開発を

進めていた。
「おーい、ミノフスキーの爺さん、飯だぞ」
そこへ、ミノフスキーの護衛であるヴィータが、食事が乗ったトレーを持ってきた。
「うぉっ、相変わらず、すげぇ部屋だな・・・」
ミノフスキーの部屋に入ったヴィータは部屋の惨状を見て、呆れるように言う。
それなりの広さがあるゲストルームだが、そこには沢山のパソコンやモニター、ホワイトボード、自分が見ても何が書いているのか分からない文字や絵、数字が書かれている紙が壁に貼り付けられたり、床一面に散らばっている。
ヴィータがゲストルームの奥へと進んで行くと、デスクには無心で空間パネルのキーボードを打っているミノフスキーの姿があった。
「爺さん」
「・・・」
「おい、爺さん」
「・・・」
「爺さん!!」
ヴィータが声をかけてもミノフスキーはヴィータの存在に気づかない様で、キーボードを打っていたが、ヴィータが大声を上げて、ようやく彼女の存在に気づいた。
「ん?おお、ヴィータちゃんか、どうした?」
『どうした?』じゃねぇよ。飯だよ、飯」
「ん?お、おお・すまんのぅ・・・」
ヴィータがトレーに乗った食事を見せて、ミノフスキーは、キーボードを打つ手を止めた。
そして、ヴィータからトレーを受け取り、食事を食べ始める。
ミノフスキーが食事を摂っている中、ヴィータが周囲を見回す。
「爺さん、ちゃんとした生活を送らねぇと体を壊すぞ、風呂とか入っているのか?それにちゃんと寝ているのか?」
「うむ・まぁ、気が向いたらな」

「気が向いたらって・・・」
彼の発言にちょっと引くヴィータ。
（マリエルやシャーリーのヤツもこんな私生活を送っているのか？）
ヴィータはミノフスキーの様に技術肌な知り合いの局員たちの寮の部屋もこの部屋みたいなのかと思った。
「それで、今はどんな感じなんだ？」
ヴィータがミノフスキーに現状を訊ねる。
すると、ミノフスキーの目がキラーンと光ったように見えた。
そして、ミノフスキーが現状を説明するが、ヴィータには彼の言っていることがほとんど分からなかった。
しかし、一度説明を始めたミノフスキーはヴィータが理解できていないにもかかわらず、延々と説明している。
更にはホワイトボードを持ち出し、絵をかいて説明している。
それはまるで、理系の大学の講義のようにも見える。
マリエルやシャーリーならば彼の言っていることが理解できていたのかもしれない。
「・・・と、現状はこんな感じだ。これについて君はどう思うかね？おや？」
「・・・・」
ようやくミノフスキーの説明が終わった時、ヴィータの頭からは白い湯気が出ていた。
彼の説明に対して、思考回路が追い付かずにオーバーヒートしたのだ。
ヴィータはふらつく足で、ミノフスキーの部屋から出て通路を歩いていると、
「ヴィータ!!一体、どうしたのだ!?大丈夫か!?」
オーバーヒートしたヴィータを見て、同じくミノフスキーを護衛しているシグナムが慌てて彼女に駆け寄り声をかける。
「し、シグナム・・・か・・・？」
「ああ、そうだ!!一体どうした!?」
「じ、爺さん・・・に・・・」

シグナムに抱えられたヴィータはそこまで言うと、そのままガクッと項垂れ意識を失う。
「お、おのれ、あの年よりめ!!ヴィータに何かしたのだな!?」
シグナムはミノフスキーがヴィータに何かしたのだと思い、彼の部屋へと向かう。

それから五時間後・・・・

「あっ・・・・うっ・・・・」
本局の通路にて、自らのデバイスであるレヴァンティンを杖代わりにして、ヨロヨロと歩くシグナムの姿があった。
「ど、どないしたん!?シグナム!!大丈夫か!?」
そこへ、はやてが慌てて、駆け寄り声をかける。
「あ、主・はやて・・・・」
「な、なんや?」
「み、ミノフスキーに質問をしてはいけません・・・・」
「はい?」
シグナムは、はやてにそこまで呟くとガクッと意識を失う。
「い、一体何があったんや・・・・」
はやては、自らの腕の中で意識を失っているシグナムの姿を見て、首を傾げた。

本局・〝海〟がミノフスキーの力を借りて、新型の宇宙戦艦のエンジン・新型の宇宙船の開発を依頼している頃、〝陸〟でも、かつて、レジアス中将が開発・運用を推し進めていたアインヘリアルとは異なり、新たな兵器の導入を検討していた。
それは第９７管理外世界における陸上主力兵器である戦車と呼ばれる兵器の導入だった。
〝海〟がボラー連邦への武力制裁に失敗し、共闘してきた〝空〟も〝海〟から離れつつある今、〝陸〟自身が新たな改革を押し迫るチャンスだった。

ミッドでも着実に改革の変動が見え始めていた・・・・

百十四話　正義とは？

地球にて、カザン総司令がパルチザンの襲撃で斃れ、形勢は地球側へと傾きはじめたが、ハイペロン爆弾の占拠には未だ至らず、ヤマトを中心とする地球艦隊も敵本星の座標を掴めずにいた。
地球と暗黒星団帝国との戦いはほんのわずかだが、まだ暗黒星団帝国が有利と言える状況だった。
そんな中、ミッドでは〝海〟の方は、ボラー連邦からの亡命者であるミノフスキーの協力により、従来の艦とは違い、新たな宇宙船のエンジンの開発と艦の設計が進められ、〝陸〟では、新たな兵器の導入の動きがみられた。
ミッド・・・管理局でも、少しずつではあるが、再建と改革の動きがあった。
その最中、クロノは以前、第二の地球にて保護されている義妹のフェイトから聞いた、テリオスのメインコンピューター内に残されていたダーティミッションの詳細について密かに調べており、本来管理局が定めた法律に違反した局員らをリストアップして、母でもあり、上官でもあるリンディの下へと報告へと向かった。
クロノのリストの中にはまだ疑いのある者の他に明確に違反した者で証拠もそろっている事案も存在した。
彼は管理局の再建に伴う中で、これを正式に公表し、早期粛正を考えていた。
もちろん、クロノはリンディにこの報告書を見せた時、彼は彼女にこれを公表しようと言った。
しかし、クロノからの報告書を見たリンディは、
「クロノ、残念だけど、これは公表できないわ」
と、リンディはクロノの報告書を公には出来ないと言う。
「なっ!?何故です!?母さ・・・いえ、統括官!?」
クロノは一瞬であるが、自分の耳を疑った。
疑いがある者はこれから証拠固めをするが、明確な証拠がある事案

もあるのだ。
これは犯罪であることを立証している。
それにもかかわらず、リンディはこれを公表しないと言う。
何故、これを公表しないのか、リンディの考えをクロノは当然訊ねる。
「統括官、これは犯罪であることは明白なんです!!それを何故・・・!?」
「わかっています」
「例え今回これを公表しなくとも、いつかまた誰かが調べ上げます。その時、今回公表しなかったこともバレるかもしれません!!そうなれば、また管理局のイメージダウンとなり、市民が暴徒となりうるかもしれないんですよ!?そうなる前に、公表し、厳正な処罰をするべきです!!」
クロノは自分だってこうして調べ上げたのだ。
今回この不正を公表しなくとも、いずれはまた誰かが自分の様に調べ上げるだろうと言う。
その誰かとは今のところ、フェイトが一番の候補だ。
何しろ、フェイト自身が自分にこうして、教えてきたのだから・・・
今は、第二の地球に居るが、いずれミッドに戻ってきた時、この不正が公になっていなければ、真面目で正義感が強いフェイトの事だ。
不審に思い必ず、今の自分の様に調べ上げるに違いない。
どの道、公になるのだから、フェイトが帰ってくる前でも何ら構わない。
フェイトがこれを調べ上げる時間の短縮になるのだから、むしろ、プラスになる。
だが、リンディは折角、クロノが調べ上げた局員らの不正事実を公表しない・・黙っていろと言う。
これはあまりにもリンディらしくない言動であり、クロノが困惑するのも無理はなかった。
「理由を言ってください!!統括官!!」
クロノはたとえ、自分の母親であろうともその返答次第では、くってかかる勢いだった。

「・・・このリスト中にはあのボラー連邦への武力制裁で殉職した局員も居ます」
「はい。ですから、殉職者は被疑者死亡のまま送検するつもりです」
「そして、その遺族は周囲からのバッシングを受ける・・・」
「・・・」
リンディはこれを公表したら、不正を行い、ボラー連邦への武力制裁で殉職者した局員の遺族がバッシングを受けることをクロノに指摘する。
「管理局はあのボラー連邦への武力制裁の失敗で、人材も艦も不足しています・・・そんな中で、更に人材を不足させるほどの余裕は今の管理局にはありません」
「では、統括官は不正を・犯罪を見過ごせと言うのですか!?被害者たちに泣き寝入りをしろと言うのですか!?」
確かにリンディの言う通り、これを公表し、被疑者死亡のまま送検すれば、不正をして殉職者をした局員の遺族は周囲からバッシングを受けるだろう。
だが、それでも被害者は、いくらかは報われるはずであるし、不正をした局員の自業自得だ。
遺族だってそのふで得た甘い汁を吸っていたはずだからだ。
「今、局員を減らせば、犯罪が増え、より多くの犯罪被害者を生み出す結果になります。クロノ、ここは耐えて」
「統括官、その取り締まる側の局員が犯罪を起こしている本末転倒な状況なんですよ!?」
「わかってちょうだい、クロノ!!」
「・・・」
「私が今の貴方の様に、一艦長の立場ならば、不正を公表しようとしたでしょう。でも、今の私の立場では、組織も守らなければならない立場なのよ・・・」
リンディ本人だって、今回の不正を公表したい。
でも、今の自分の統括官と言う立場、そして、管理局が置かれた状況を見て、クロノが調べ上げた不正をおいそれと公表できない。

「組織を守る・・・統括官の立場とお考えは理解できます・・・しかし、犯罪や不正をした局員を守ることも統括官の仕事に含まれることなんですか？それが統括官の正義ですか？」
「・・・」
クロノだってリンディの葛藤は理解できる。
しかし、このまま不正を闇に葬っては、彼女が守ろうとしている組織にはマイナスだと理解を求める。
だが、
「決定に変更はありません」
「なっ!?」
「クロノ・ハラオウン提督、今回の件について、口外は固く禁じます。これに違反した場合、何らかの処分が下る可能性があります・・・話は以上です」
「くっ・・・失礼・しました・・・」
クロノとしては納得できなかった。
不正をした局員が処分されず、不正を公表したら処分される。
あまりにも理不尽だ。
「くそっ!!」
クロノはリンディの部屋を出たら、通路の柱に拳を叩きつける。
一方、リンディは、クロノが調べ上げた不正を『今は』公表するつもりはなかった。
いずれ、ミノフスキーの手により、管理局は戦力を再建でき、人材も確保できる、その時に、この不正を公表し、取り締まるつもりであった。
彼女がそれをクロノに語らなかったのは、盗聴を恐れての事だった。
クロノだって自分の子供なのだから、きっと自分の気持ちを理解してくれると思っていた。
クロノとリンディの親子の仲がギクシャクした中、なのはは、表面上は普段通りの様子で仕事をこなしていた。
しかし、なのはと行動を共にしているヴィータが現在、シグナムと

共にミノフスキーの護衛をしているので、なのはの傍に居なかった。
はやてやヴィータは、なのはのメンタル面を心配したが、なのは自身、このままではダメだと自分に言い聞かせ、教導隊で将来のエースたる候補生たちに教鞭を振るっていた。
しかし、実技に関してはどうも動きにキレがなかった。
食事に関して、ボラー連邦への武力制裁前と同じく、なのはは、訓練生たちと共に摂っていた。
「あ、あの‥高町教官」
「ん？なに？」
「あの‥‥デマ‥なのかもしれませんが‥‥」
「ん？」
「‥‥その‥‥ボラー連邦からミッドへ亡命者が来たって本当ですか？」
「えっ？」
ミノフスキーの存在については、現在はごく一部の局員にしか知らされていなかったが、ミノフスキー自身がちゃんと存在しているが故に彼の存在については、やはりどこからか洩れたのだろう。
「え、えっと‥‥」
なのはもミノフスキーの件については知っているが、本局からは彼の件については未だに緘口令が敷かれているので、いくら教え子とはいえ、そう簡単に教えることはできない。
ミノフスキーの護衛をしているヴィータも表向きは長期に任務と言う名目で、今は教導隊を離れている。
その為、なのはは、今は一人なのだが、彼女のメンタル面を心配して、今は航海に出ていないはやてやシャマルが彼女の傍に居るし、スバルもなのはに頻繁にテレビ電話を入れている。
「えっと‥‥ごめん、私も知らないけど‥‥」
「そうですか‥‥」
「ん？どうしたの？」
「あっ、いえ‥‥」
訓練生たちの表情はなんか不安そうだ。

「なにか心配事があるの？」
「・・・その・仮にボラー連邦からミッドに亡命者が来ているとして、本当に大丈夫なんでしょうか？」
「えっ？どうして？」
「だって、そいつが亡命者を装ってのスパイかもしれないじゃないですか」
「そいつのせいで、ミッドの座標がボラー連邦に知られたら・・・・」
「俺たちも武力制裁に参加した先輩や教官たちみたいにボラーの奴らと戦わないといけないんですよね？」
　武力制裁に向かった教官や先輩の訓練生たちは誰一人として、帰ってこなかった。
　彼らがどんな最期を迎えたのか、詳しい情報は未だに一般市民や末端の局員には知られていない。
　ボラーが本格的にミッドへと攻め込んできたら、訓練生でもミッドを守るため、戦場へ立たなければならないかもしれない。
　公開処刑や武力制裁の結果を見ても、ボラー相手に戦って負けたり、捕虜になればどんな悲惨な目に遭うのか、それを想像しただけでも恐ろしい。
「だ、大丈夫じゃないかな？・・・・そもそも本当にボラー連邦からミッドに亡命した人が居るかさえ、分からないんだし・・・・」
　本当は知っているが、なのはは、ボラー連邦からの亡命者の存在自体をあやふやにして、訓練生たちの不安を取り除こうとした。
「は、はぁ～・・・・」
「そう・でしょうか？」
「そうだよ・・・それに仮に居たとしても、本局の人だってきっと、それを見越して見張っているんじゃないかな？」
「た、確かに・・・・」
「ボラー連邦は残念だけど、管理局よりも物凄い技術と軍事力を持った世界だけど、そのボラー連邦が未だにミッドに攻めてこないところを見ると、亡命者なんていないんじゃないかな？」
「そうですね」

なのはの話を聞いて、ようやく訓練生たちも安堵した様子だった。
しかし、なのは自身は訓練生たちからの話を聞いて、不安は拭えなかった。
そこで、なのはは、件の亡命者であるミノフスキーの護衛をしているヴィータに連絡を取り、ミノフスキーの様子を聞いてみることにした。
「ん？どうした？なのは」
「ヴィータちゃん・・・その・・・実は、今日ね・・・」
なのはは、ヴィータに今日、訓練生たちが話していた内容を話す。
「はぁっ!?訓練生のひよっこたちにまで、爺さんの情報が洩れているのか!?」
「う、うん・・そうみたい・・・」
「ったく、どこのどいつだ？口が軽いお喋りは・・・」
ヴィータはミノフスキーの情報がおぼろげながらも洩れていたことに忌々しそうに顔を歪める。
少なくともミノフスキーの情報は自分やシグナムが流したモノではない。
「それで、あの爺さんが亡命者を装ったボラーのスパイじゃないかって話だが・・・」
「う、うん・・・」
ヴィータは早速、なのはが聞いてきた疑問に答える。
「それはありえないな」
ヴィータはミノフスキーがボラー連邦からの亡命者を装ってミッドへと送り込まれたスパイではないかと言う疑問をあっさりと否定する。
「ど、どうしてそう言い切れるの？」
「あの技術屋一筋の爺さんにスパイなんて器用な真似事なんざぁ無理だ。脳みそまで機械で出来ているんじゃないかと思うぐらいのレベル機械オタクなんだぜ」
ヴィータは先日、ミノフスキーの技術屋としての本気をその身で味わったことから、どう見ても彼はスパイではなく技師であると言う。

それもマリエルやシャーリー・・もしかしたら、あのスカリエッティ以上のマッドなのかもしれない・・・・とさえ、思った。
シグナムもヴィータ同様、ミノフスキーの技術屋としての部分をその身で体験して、知恵熱を出し、はやてに決してミノフスキーに質問してはならないとさえ忠告をいれるぐらいだ。
「でも、それは私たちを騙す演技かもしれないじゃない。一流のスパイはなりきって諜報活動をするんでしょう？おじいさんの姿だって私たちを油断させる手段の一つかもしれないし・・・・」
なのはは、まだミノフスキーと出会ったことがないため、ヴィータが何故、ミノフスキーの事を信じられるのか疑問だった。
その中にはミノフスキーがボラー連邦所属だと言う偏見意識が含まれていた。
もちろん、本局・・〝海〟でもミノフスキーが亡命を希望している時にも彼がボラー連邦から送り込まれたスパイではないかという疑いはあった。
しかし、彼がボラー連邦で宇宙船・・特にエンジンの開発の技師であることを知り、警戒しながらも、現在の管理局の艦の性能の低下が否めない現状を打開するための苦肉の策として、彼に協力を仰いだのだ。
「なのは、お前さんがボラーに対する恨みが高いのは知っているが、いつまでもそれを引きづっていちゃあ、誰も信じられなくなるし、前に進めねぇぞ」
「・・・・」
「あたしが言うのも説得力はねぇが、フェイトやあたし、シグナム・・それにノーヴェたちもお前さんや、管理局と対立したが、今じゃそんな事があったのさえ忘れるぐらいの関係だろう？」
「・・・・」
「お前さんは昔、フェイトやあたしに必死になって、話をして分かり合おうとしたねぇか」
「・・・・」
ヴィータは海鳴でなのはと出会ったばかりの頃を思い出す。

あの頃のなのはは、今と違って自由闊達で、組織にも立場にも縛られず、魔法と言う力のすばらしさを信じて戦っていたように見える。
管理局に入って、夢だった教導隊に入って、養女となるヴィヴィオを引き取り、生活は充実していた。
第二の地球・・・そして、ボラー連邦との邂逅がなければ・・・
フェイトとティアナが遭難し、ボラー連邦への武力制裁が失敗し、大勢の同僚や生徒が亡くなった。
そして、ヴィヴィオまでもが教会の過激派に狙われ、行方不明になってしまう。
幸い、ヴィヴィオはフェイトとティアナが居る第二の地球で無事が確認されたのだが、なのはのメンタル面は情緒不安定な状態が続いていた。
そこへ、あのボラー連邦からの亡命者が来たことになのはは、不安、そして大勢の仲間を殺した勢力からの亡命者の存在が我慢できなかったのかもしれない。
フェイトやヴィータ、ノーヴェたちの時は、自分の同僚や生徒が殺されるなんてことはなかった。
だからこそ、彼女たちとは分かり合えたのかもしれない。
でも、ボラー連邦とは・・・
(はぁ～・・・こんなことなら、なのはにも爺さんのことは黙っていた方がよかったな・・・)
(はやての奴も余計なことをしてくれたもんだ・・・)
(まさか、あの爺さんの情報が流れたのも、はやてとなのはが話しているのを誰かが聞き耳を立てていたんじゃねぇだろうな・・・)
ミノフスキーついては、はやてがなのはに洩らしてしまったのだが、本局はその件については、特に気にしていなかった。
それは、はやてがミノフスキーを迎えに行ったこと、
そして、なのはが、管理局を代表するエースであることが重視された。
これが、非魔導師の局員であれば、何からの処分が下されていたかもしれない。

訓練生たちがあやふやながらもミノフスキーの情報を持っていたのも、はやてがなのはに彼の事を教えたのが、本局の喫茶店だったことであり、二人の会話を誰かが聞き耳を立てていたからではないかと思うヴィータだった。
「あたしだって、ボラーがしたことは今でも許せないさ・・でも、皆が前を向いて進もうとしているんだ・・・エースであり、教導官であるお前だって、今更立ち止まることは許されないはずだぞ」
ヴィータの言う通り、なのはには今更立ち止まることなんて許されない。
数多くの魔導師を失った管理局では一日でもはやく、その埋め合わせをしなくてはならない。
教導官は、一日でも早く、まだ雛である訓練生たちを一人前の局員へ育て上げることが仕事だ。
ヴィヴィオを海鳴の実家に預けた時、自分は生徒たちを見捨てられないからこそ、ミッドへと戻ったのではないのか？
それなのに、今の自分は、まだ過去の事を気にして、引きづっている。
これでは、訓練生たちを不安にしてしまい顔合わせ出来ない。
ＪＳ事件の折、ヴィヴィオが攫われた時も彼女を守ってあげられなく、深い悲しみに落とされ、フェイトに泣きついた。
それでも、結果的に自分はなんとか立ち直り、ヴィヴィオを助け出した。
六課の時だって、十一歳の時、自分がガジェットに堕とされた経験から、ティアナたちに自分の様な経験をさせないため、訓練に臨んできた。
ティアナと一度衝突したが、それでも自分の考えを伝えて彼女に理解してもらった。
今の自分を過去の自分が見たら、きっと怒るだろう。
「そう・・だね・・・ヴィータちゃんの言う通りだったよ・・・ありがとね、ヴィータちゃん・・・」
「お、おう・・お前が元気になってくれればそれでいい・・・フェイトや

ティアナ、ヴィヴィオだって、第二の地球で頑張っているんだ」
「そうだね・・・フェイトちゃんたちも頑張っているんだもんね・・・」
今回の件で、なのはもようやく立ち直れたのかもしれない。

なのはがようやく立ち直れたその頃、なのはの養女であるヴィヴィオはフェイトと共に第二の地球にて、中嶋家で考え込んでいた。
別室では紅葉が自身を含めたフェイトとヴィヴィオのデバイスを例のメンテナンス方法でメンテナンスをしており、ヴィヴィオは紅葉が淹れてくれたキャラメルミルクをちびちびと飲みながら、
「う～ん・・・」
と、頭を抱え込んでいた。
ヴィヴィオのもう一人の養母であるフェイトは当然、今のヴィヴィオの様子が変なことに気づいていた。
「ヴィヴィオ、どうしたの？」
「フェイトママ・・・ねぇ、フェイトママ・・・」
「ん？なに？ヴィヴィオ」
「正義ってどうおもう？」
「えっ？」
ヴィヴィオの漠然とした質問にフェイトは目が点となる。
「えっと・・・それってどういうことかな？」
フェイトとしては、なるべくヴィヴィオの質問には答えたい。
しかし、あまりにもヴィヴィオの質問が漠然しすぎて、答えるに答えられない。
そもそも何故、ヴィヴィオは突然『正義』についての疑問を持ったのだろうか？
フェイトはその経緯についてヴィヴィオに訊ねる。
「実はね今日、大佐が・・・」
（大佐って、ヴィヴィオ・・まだあのオ○マと交流を持っていたんだ・・・）
フェイトはまだヴィヴィオがメイトリックと交流を持っていたことに驚いていた。

ヴィヴィオがメイトリックと交流していたことに驚きはしたが、フェイトはヴィヴィオの話にちゃんと耳を傾けていた。
「そう・あの大佐が・・・」
ヴィヴィオの話を聞いて、この第二の地球で起きている暗黒星団帝国とパルチザンとの戦いは苛烈さを増しているのだと判断した。
（ティアナ、大丈夫かな・・・？）
フェイトとしては、暗黒星団帝国と戦っているパルチザンに身を投じているティアナの身も案じた。
後にティアナが戻ってきた時、彼女の姿を見たフェイトがびっくりするのは当然の結果であった。
「それで、大佐は『正義は一つじゃない』って、言ってた・・・フェイトママは大佐の言っていた『正義』をどう思う？大佐は間違ったことを言っていると思う？」
「えッと・・・そうだね・・・」
フェイトもヴィヴィオが悩んでいた中身を聞いて、考える。
六課に居た頃ならば、管理局＝正義でそれ以外は悪とまではいかないけど、この世の正義を管理局が一手に握っていると思っていた。
でも、宇宙に出て、さまざまな出会いや体験をして、管理局がこの世の絶対的な正義とは言えないことを経験した。
メイトリックの言う通り、『正義は一つではない』と言う言葉は確かに自分にも当てはまっていた。
自分がなのはと初めて出会うきっかけとなった海鳴でのＰＴ事件・・・
あの時、自分の行動は母であるプレシアの命令に従っていただけでが、当時の自分には彼女のしていることは正しい事だと思っていた。
ジュエルシードを集めて母の下に持っていけば、いつかは自分を本当の娘だと認めてくれるはず。
その期待を込めて、自分はプレシアのために行動した。
しかし、自分の行動は管理局にとっては間違った行動だった。
シグナムたちも自分の様に主であるはやてを思っての行動だった。
自分やシグナムたちのように自分の心の中に信念を抱いて行動し

ていた。
それはメイトリックが言うように人の数だけ正義は存在していたのかもしれない。
もしかしたら、あのスカリエッティにさえ、彼には彼なりの信念と正義が存在していたのかもしれない。
とはいえ、フェイト個人としてはたとえ、スカリエッティの心の中に絶対的な信念と正義が存在していたとしてもそれは認めたくはなかった。
「・・・そう・だね・・・大佐が言っていたことは間違いじゃないと思うよ」
フェイトはこれまでの経験から、メイトリックが言っていた正義について間違いではないことをヴィヴィオに伝える。
「ヴィヴィオもまだ子供だけど、『これだけは負けない』『これだけは絶対に譲れない』って言う固い信念を持って・・・それはきっとヴィヴィオにとっての正義になると思うから・・・」
「う、うん・・・」
「ただし、他の人の迷惑になることはダメだよ」
自分の中に信念と正義を持つことは大事であるが、スカリエッティの様に大勢の人に迷惑をかけるのは正義に反する行いだとヴィヴィオに諭した。
メイトリックもフェイトもまだヴィヴィオが子供だから、自分たちが言っていることが難しいことでまだヴィヴィオには理解できないことかもしれないと思っていたが、ヴィヴィオはこうした同年代の子供が体験したことのない、様々な出会いを経験し、十分に精神は鍛えられていた。
それは決してミッドだけに居ては出来ない体験と出会いであっただろう。
今回の正義についてのメイトリックの言葉はヴィヴィオの未来に大きな糧となるに違いない。
地球における暗黒星団帝国とパルチザンとの戦闘、ミッドにおける

管理局での改革が進んで行く中、暗黒星団帝国の本星、デザリアム星を目指す地球艦隊は完全に手詰まりとなる。
サーグラス大将との決戦以降、敵の接触が全くと言っていいほど途絶えたのだ。
敵の目的は、ヤマトを中心とする艦隊の撃破の他に地球艦隊を本星から遠くへと引き離すことも含まれていた。
元々暗黒星団帝国本星の情報がなく、これまで敵の罠を承知で挑んできたのだが、肝心の敵の姿は見えないのではどうしようもない。
地球艦隊は敵本星の手掛かりもなく、連日コスモタイガーを偵察に向かわせながら白色銀河を航海していた。
航海が長引く旅、乗員には不安が募っていく。
本当に敵の本星は見つかるのだろうか？
故郷は・・・地球は大丈夫だろうか？
敵の攻撃はないのは本来ならば、喜ばしい事なのだが、敵の情報を求めている今の地球艦隊にとってはこの平穏がある意味苦痛でもあった。
古代兄弟、山南、良馬・・・艦を統括する者たちも連日不安を抱えたが、それを表に出すことはなかった。
非直の時間、良馬は展望室で一人、外に広がる白色銀河の光景を呆然としながら見ていた。
そこへ、
「リョーマ、大丈夫？」
ユリーシャがやって来て、良馬の顔がすぐれないことを見抜き、心配そうに声をかけながら、良馬の隣に座る。
「あっ、ユリーシャか・・・うん・・・大丈夫・・・とはちょっといいがたいかな・・・」
良馬はポロっとユリーシャに弱音を吐いた。
ユリーシャが纏う独特の雰囲気の前に隠し事はなぜか出来ない。
彼女はまるですべてを見透かすかのような目で見つめてくるのだから・・・
「大丈夫・・・きっと見つかるよ・・・」

「えっ？」
「リョーマたちが目指している星・・・」
通常ならば、根拠のない気休めな言葉であるが、何故かユリーシャが言うと、妙な説得力がある。
「そうか・・・どうしてだろうな・・・君がそう言うと、なんかそんな気がしてきたよ」
良馬がそう言うと、突然、ユリーシャが良馬の身体を倒すと、彼の頭を自らの膝の上に乗せた。
「ゆ、ユリーシャちゃん!?」
「リョーマ、最近寝てないでしょう？」
「えっ？」
「今はゆっくり休んで、リョーマ・・・」
ユリーシャはそう言って、良馬の髪を撫でる。
彼女の言う通り、良馬は最近寝不足だった。
そして、ユリーシャの声、髪を撫でる行為は心地よく、彼はあっという間に静かに寝息を立て始めた。
膝の上で眠る良馬の姿を見て、ユリーシャは微笑む。
傍から見れば、二人の姿はどう見てもカップルの様に見えた。
そんな二人の姿を面白くなさそうに見ていたのは他らなぬギンガだった。
彼女としては、ユリーシャに抗議したいところであるが、眠っている良馬を起こすのはしのびなく、ただ黙って堪えるしかなかった。
しかし、彼女としては、ユリーシャのポジは羨ましく、彼を慰めるのは自分の役割りのはずだった。
現にこの世界に来たばかり、悪夢に魘されていた彼を慰めたのは他ならぬ自分だった。
ギンガとしても女としての面子がある。
このまま黙ってユリーシャの好きにさせるわけにはいかなかった。
しかし、それは自身と良馬との暗黙のルールを破る事を意味していた。
ギンガ自身もそのルールを破る事に関しては、後ろめたい気持ちは

当然あった。
でも、婚約者としてはある意味不安を抱くこの状況・・・・
今一度、彼の気持ち・・・本心をこの耳で聞かなければ、どうしてもこの胸のモヤモヤは晴れなかった。

そして、この日の夜・・・・
まほろば　の艦長室・・・・
その部屋のベッドには互いの身体を求めあう獣が二匹いた。
ギンガも良馬も公人である時は、上官と部下の関係・・・・
この関係を壊す事無く、これまで任務をこなしてきた。
しかし、二人は今日、その暗黙のルールを破った。
ギンガはユリーシャに対する嫉妬と不安から、良馬は艦の長として、敵の本星が見つからない不安と焦りから周りを見る余裕がなくなりつつある中で、ギンガからのお誘いを受け、一時的でも今の状況を忘れたかった。
互いに暗黙のルールを破ることに対して、後ろめたさは当然あった。
しかし、その理性を破るほど、追い詰められていたのかもしれない。
だが、ユリーシャの言う通り、それからすぐに暗黒星団帝国本星の手掛かりをつかむチャンスが訪れることになる・・・・

百十五話　隠された星

管理局がこれまでひた隠しにした不正を密かに暴いたクロノだったが、彼はそれを母親でもあり、上官でもあるリンディに報告し、これを公表して不正にかかわった局員を処罰しようと言うが、リンディは今の管理局の現状を鑑みて今回、クロノが調べ上げた不正を公表しないことを告げる。

クロノが調べ上げた不正にはあのボラー連邦への武力制裁にて、殉職した局員も含まれていた。

リンディは管理局の現状の他に遺族たちに対するバッシングを危惧した。

クロノ自身も遺族たちがバッシングされるのは確かに心苦しいと思いつつも、やはり不正は不正・・・見過ごすわけにはいかない。

それに管理局のイメージダウンをこれ以上回避するのであれば、不正は公表し関わった者を処罰し、早期粛正をしなければ、それこそ管理局のイメージダウンを招きかねない。

管理局は自分たちの不正を見過ごすのか!?

局員は法律を守らなくてもいいと言う法律でもあるのか!?

身内贔屓だ!!

などとマスコミや市民から管理局がバッシングされかねない。

そうなればまたボラー連邦への武力制裁失敗時みたいな大規模な暴動やデモが起きかねない。

組織を守るためと言うのであれば、なおの事、この不正は公表しなければならない。

新しい組織に生まれ変わる前に膿は出し切ってしまわねば、たとえ新しい組織へと生まれ変わっても、たちまち組織は腐敗してしまう。

リンディの決断に納得できないクロノは当然、抗議したが彼女の決断が変わることはなかった。

憤慨したクロノはその日の内に休暇届けを人事課に出すと、なのはとはやての故郷である地球へと向かった。

「えっ？クロノが休暇届けを!?」
「はい。ハラオウン提督でしたら、さきほど、人事課に休暇届を提出し、第９７管理外世界へと向かいました」
クロノが休暇届けを出したことはすぐにリンディの方でも確認できた。
「・・・そう、分かったわ・・ありがとう」
クロノが休暇届けを出して、地球へ向かったことにリンディは特に何も言わなかった。
リンディとしてもクロノと少し距離を開ける必要があると思ったし、彼自身にも休息の時間が必要だと思っていた。
彼が向かった先の地球にはクロノの妻であるエイミィが居る。
彼女がクロノの疲れを癒してくれるだろうとリンディはそう思っていた。
管理局が第９７管理外世界と定めているこの地球にはハラオウン家のセカンドハウスがあり、そこではフェイトの使い魔であるアルフの他に元局員であり自分の妻であるエイミィと子供たちが住んでいた。
「ただいま・・・」
「えっ？クロノ君!?仕事はどうしたの!?」
「えっ？お父さん？」
「ほんとだ!!お父さんだ!!」
突然連絡もなしに帰ってきた旦那の姿に驚くエイミィ。
一方、子供たちの方は普段から家にはおらず、なかなか会えない父親の姿を見て、喜んでクロノに抱き着いてくる。
そんな子供たちの姿を見てクロノは思わず微笑む。
「休みを取ってきたんだ」
「じゃあ、しばらくはお家に居るの？」
「ああ、お家に居るぞ!!」
「やった!!」
「わーい!!」

子供たちは父親がしばらくの間、家に居ることに喜んでいる。
クロノは手に持っていたカバンとミッドで買った土産を子供たちに手渡すと、子供たちはそれを持って家の奥へと走っていく・・・・
「・・・・ミッドで・・・・管理局で、なにかあったの？」
玄関先で二人っきりになったクロノとエイミィ。
突然、連絡もなしに帰ってきてしばらくの間、家に居るという夫に対して、ミッドで・・・・管理局で何かあったのだと思ったエイミィは不安な様子でクロノに何があったのかを訊ねる。
「・・・・いや・・たまには、家族でゆっくりと過ごしたいと思ってな・・・・ここ最近ずっと仕事ばかりでこっちの家には戻れていなかったし・・・・」
「ええっ!?仕事の方は本当に大丈夫なの!?」
「ああ・・・・大丈夫だ・・・・問題ない」
ボラー連邦への武力制裁後からクロノはまともに休む時間もなく、家族と過ごす時間も取れなかった。
クロノとしてもしばらくの間、管理局から離れ、家族との時間をとり、管理局の事も、仕事のことも忘れたかった・・・・
ミッドで夫に何かあったのだと思ったエイミィであったが、こうして久しぶりに家族一緒に過ごせることで、彼には深く訊ねることはなかった。
そして、クロノも『元』局員となったエイミィに詳しい事情は説明しなかった。
今回、クロノが暴いた不正事実であるが、これを知るきっかけとなったフェイトとの交信の席にはやても居たが、彼女は彼女で新造艦の艦長となったばかりの身で、すっかり忘れていた。
クロノがリンディの他にはやてに伝えていなかったのは、クロノもはやての現状を理解した上で、伝えなかった。
機動六課をはじめとして様々な部署を歩いたはやてであったが、当然、次元航行艦の艦長なんて役職は初めてであった。
慣れない職務になったばかりの彼女に余計なことを背負わせたくはなかったのだ。

「ねぇ、クロノ君」
「ん？なんだ？」
夕食後のひと時、子供たちとアルフはすでにベッドに入り夢の中に居る頃、リビングにてエイミィがクロノに話しかける。
「フェイトちゃんたちの様子はどう？元気にしている？」
エイミィは義妹であるフェイトたちの様子を訊ねる。
「ん？あ、ああ・・・元気だよ・・・つい、この間も交信したばかりだ」
エイミィはフェイトたちが居る地球が暗黒星団帝国に占領され、交信不能となっていることを知らない。
妻に余計な心配をさせないようにとそのことを黙っていた。
そして、心苦しいながらも彼は妻に嘘をついた。
「そう？なら、よかったけど・・・それで、フェイトちゃんたちはいつぐらいにミッドへ帰ってこれそうなの？」
「まだ向こうとの折り合いがつかなくてな・・・明確な日時は未だに不明だ」
「そう・・なんだ・・・」
エイミィは、まだフェイトたちの事以外にも何かを言いたげな顔をしていた。
「ん？なんだ？まだ何か言いたそうな顔だけど？」
「えっ？ううん、なんでもないよ」
エイミィとしてはミッドで・仕事で夫に何かあったのかを聞きたかったのだが、今の自分は局員ではなく、局員の妻である。
彼女も元は局員だったので、情報や機密の重要性は知っている。
例え、ミッド・管理局で何かあったのだとしても夫であるクロノが言わないのであれば、知ることはできない。
それは義母であるリンディに聞いても同じだろう。
「・・・ね、ねぇクロノ君」
エイミィはもうクロノに聞くことはやめて代わりにもう一つの頼みをすることにした。
「ん？なんだ？」

「疲れている？」
「まぁ、色々あったからな・・・」
「でも、しばらくの間は休むんでしょう？」
「ああ、そのつもりだが・・・」
「・・・だったら・ねぇ・・・久しぶりに・・・」
「・・・」
　エイミィはクロノの寝間着の袖の部分を摘まむ。
　彼女の目は、久しぶりにクロノと交わりたいという憂いを含む目をしていた。
「あ、ああ・・・そうだな・・・」
　クロノとしても心身ともに疲れてはいたが、管理局でのことを少しでも忘れたいと言う思いがあったので、エイミィからのお誘いに乗った。
　明かりが消えたハラオウン夫妻の寝室にて、クロノとエイミィ・・・二人の影が一つへと重なった・・・
　クロノは仕事も管理局も、今は忘れて、管理局の提督ではなく、一人の男として、愛妻の身体を堪能することにした・・・

　クロノが家族の下へと出向き、仕事を忘れている頃、遠く星の海では敵本星の手掛かりを失い、広大な白色銀河の海を敵の本星を求めて航行している地球艦隊の姿があった。
　そんな中、艦長と通信長と言う上官と部下の立場での公人の際は、男女の仲にならないと暗黙のルールを設けた良馬とギンガであったが、長い航海での不安から二人は誓いを破ってしまい、互いに公人ではなく、一人の男女となった。
「・・・」
「ぎ、ギンガ・・・そ、その・・・ごめん・・・」
　そして、事が終わり、互いに身体を求めあっていた時と異なり、理性を取り戻し、冷静になると互いに暗黙のルールを破ってしまったことに罪悪感を互いに抱く。
　ギンガはシーツを一糸まとわぬ身体の上に纏い、良馬に背を向けて

いる。
良馬も気まずさから、ギンガを直視できずに視線を逸らしている。
そして、まず良馬の方が先にギンガに謝る。
ギンガからのお誘いからだったとは言え、理性がぶっ飛び、記憶が曖昧で行為中は彼女を乱暴に扱ってしまったかもしれない。
それにいくらギンガから誘ってきたとはいえ、強引に断れば済むだけの話だった。
最終的に自らの性欲に負けて、ギンガを抱いてしまった。
それほど、自分が彼女に飢えていたのかと思うと自己嫌悪さえ抱く。
「い、いえ・・・その・・・そもそも最初に誘ったのは私の方ですし・・・」
ギンガはゆっくりと振り返り、彼女も良馬に謝る。
「ぎ、ギンガ・・・その・・・今夜の事は、一時の迷いと言うことで・・・」
「そ、そうですね・忘れてしまいましょう・・・お互いに・・・」
「・・・」
気まずい空気が流れはしたが、二人は互いに今夜の事は忘れることにした・・・

そして、今日も今日とて、地球艦隊は暗黒星団帝国の本星を求めて白色銀河を航行していた。
相変わらず敵からの襲撃もない平穏な航海であった。
しかし、コスモタイガー隊の索敵活動により、半径約１２０光年の星図を組み立てることが出来た。
これも敵が襲撃して来ず、じっくりと測量する余裕があってのことだった。
星図をみると、この周辺は渦状腕内部なのに星が少ない宙域だった。
黄色主系列星もほとんどない。
この星の少なさも気になるが、もう一つ別の気になる点があった。
重力場レンズ効果にて確認できたこの宙域には密集した白色矮星が多数存在していた。

白色矮星はなんらかの理由で縮んでしまった巨星の成れの果てで、小さな超重力星である。
ヤマトがテレザート星へ向けての航海で、プロキオン星系の外れにもソーサナーと言う白色矮星があった。
彗星帝国のナスカはここをヤマトの墓場にしようと潜宙艦隊で襲い掛かるも逆に返り討ちに遭い、ヤマトを仕留めようとした罠に自分がかかり、命を落とした。
だが、問題なのは白色矮星ではなく、その横にあるモノだった。
そこにあったのは以前、倒した中間補給基地と同型の補給基地だった。
もし、明るい恒星の近くなら、星の光に紛れて分からなかったが、暗い白色矮星の近くに居たため、こうして発見することが出来た。
無くなった敵本星への手掛かりがつかめるチャンスがやってきた。
しかも艦隊ではワープに逃げられてしまうが、あの移動型の基地ならば、敵本星への航路図や位置情報も保有している可能性はかなり高く、動きもそこまで早くはないはずだ。
地球艦隊は確認のため、基地があるとされる宙域へと向かった。
仮に同型の補給基地でももしかしたら、廃棄された基地の可能性もあった。
しかし、向かってみると熱源やエネルギー反応があったので、あの基地は間違いなく稼働していた。
外見を確認してみるとやはり、以前戦った中間補給基地と同型の基地だった。
そして、あの基地の用途と前回の経験から、あのタイプの基地が敵の補給移動基地であることは間違いなく、その基地がここにあると言うことは、地球艦隊は敵の本星からだいぶ離れたところに居ると言う証明となる。
だからこそ、敵の本星の手掛かりとなる情報をこのチャンスに掴まなければならない。
基地周辺はアステロイドやガス帯などの障害物が少なく、このまま接近してはこちらも見つかってしまう。

以前戦ったことからあの基地自体にはかなりの数の艦艇が収容されていることが分かっている。
奇襲をかける前にドック内の艦隊が出てくると厄介だ。
相手のレーダーに探知されないように地球艦隊はスロットルを最低限に絞り、ゆっくりと、慎重に基地へと接近する。
だが、敵もバカではなく、接近してくる地球艦隊に気づいた。
基地では警報が鳴り響き、ドック内の艦船はスクランブル発進の準備が行われる。
そして、準備が出来た艦から次々と基地を発進していく。
地球艦隊はコスモタイガーを展開していなかったので、前回の様な奇襲攻撃はもうできない。
すでに二十数隻の敵艦が基地を発進し、地球艦隊へと向かっている。
数においては不利・・・・
一時撤退するか？
それとも迎え撃つか？
守は後者を選択し、各艦へ戦闘態勢を命じる。
ただし、敵艦船の撃破を優先とし、基地本体には手を付けないように厳命する。
やっと見つけた敵本星の手掛かりとなりうる情報源をみすみす自らの手で破壊しては元も子もなくなる。
しかし、基地自体にも当然防御手段である武装が施されている。
基地への不用意な接近は怪我の元になる。
敵は左舷に狙撃戦艦と例のα砲搭載艦、右舷に狙撃戦艦と空母、正面に主力戦艦と駆逐艦を展開している。
敵は空母とα砲搭載艦を敢えて別々に展開させて勝率を上げようとしていた。
地球艦隊からはコスモタイガーを全機出し空母と艦載機、α砲搭載艦の対処にあたらせる。
α砲搭載艦に向かったコスモタイガー隊はタキオン阻害チャフを散布し、α砲搭載艦のレーダーをかく乱させる。

レーダーを頼ってα砲を撃つα砲搭載艦にとって目を奪われては切り札でもあるα砲を撃てない。
その隙にコスモタイガー隊は敵の懐へと入り込み、α砲搭載艦を撃破する。
続いてα砲搭載艦の護衛として随伴していた狙撃戦艦へと攻撃目標を移す。
空母へと向かったコスモタイガー隊はまず、敵艦載機や狙撃戦艦よりも敵の空母を狙う。
敵艦載機の包囲網を突破し、空母へと突っ走る。
「ぐわっ!!」
「五番機被弾!!墜落します!!」
「くっ・・・かまうな!!全機空母に向け突撃!!」
「うわっ!!」
「九番機も被弾!!」
「怯むな!!続け!!」
「敵空母を射程内に捕捉!!」
「くらえ!!」
狙撃戦艦からの攻撃でコスモタイガー隊に被害が出ても・・・味方の機が撃ち落されてもコスモタイガー隊は躊躇することなく、止まることなく、敵の空母へと接近し、強化対艦ミサイルを空母の甲板へと打ち込む。
強化対艦ミサイルを受けた空母はたちまち火に包まれ爆散する。
そして、地球艦隊本隊は正面の敵艦隊を波動砲で一気に殲滅する。
拡散モードにしてはその流れ弾が基地へ命中する恐れがあるので、ヤマトと同じ収束モードにて行う。
敵をとり逃さぬよう各艦は時間差をつけて波動砲を撃つ。
「は、波動砲・・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁー!!」
「う、うわぁぁぁぁぁぁぁ―!!」
「ま、まさかぁぁぁぁぁぁー!!」
「ば、バカなぁぁぁぁぁぁぁぁー!!」
「な、なんだとおおおおおおー!!」

正面の敵艦隊を波動砲で一掃した地球艦隊。
味方の艦隊を撃破された基地では、
「だ、第一陣、壊滅」
「敵の被害は微少!!」
「ぬぅぅ～・・・・第二陣展開!!急げ!!」
「しかし、艦隊を出してもまたすぐにあの戦略砲でやられてしまうのではありませんか?」
「あれほどの威力を持つ戦略砲だ・・・・エネルギーの消費も激しい筈・・・・そう短時間で連射は出来ん!!相手の懐に飛び込んでしまえば、数に勝る我が軍に勝機はある!!基地からも大型ミサイルを発射準備!!」
「はっ!!」
基地からは第二陣の艦隊が出撃する。
しかし、その陣容は、先程波動砲で撃破した艦隊の様に戦艦と駆逐艦を中心とした艦隊で、空母や狙撃戦艦、α砲搭載艦などの特殊艦艇は居なかった。
「敵第二波、基地より出撃を開始!!」
敵の第二陣は地球艦隊でもすぐに確認できた。
「くそっ、一体何隻いるんだ!?」
永倉が再び出現した敵艦隊に対して思わず愚痴る。
あの規模の基地なのだから、それなりの数の艦船がいると予想はしていたが、まさか波動砲発射後の隙をついて出すとは・・・・
「艦長、波動砲発射後なので、エネルギーの回復まで少し時間がかかります!!」
「機関をフル稼働してもエネルギーの充填には最低五分はかかるぞ、艦長」
フェリシアと井上は、波動砲発射後なので、エネルギー回復するには時間がかかることを伝える。
「実弾だ!!ミサイルと魚雷、そして波動カートリッジ弾を使って敵の第二陣を攻撃する!!砲雷長!!」
「了解、波動カートリッジ弾連続装填!!」
ショックカノンは波動砲発射後のためにすぐには使えない。

波動砲の第二斉射も敵は与える隙はないだろう。
ならば、実弾で対抗するまでだ。
ゴルバ戦での経験から、波動カートリッジ弾も敵には有効な手段であるはずだ。
ヤマトや春藍でも実弾による攻撃を敵の第二陣へと叩き込む。
元々実弾に弱い暗黒星団帝国の艦艇・・・しかもカートリッジの中に波動融合エネルギーが仕込まれていることで、波動砲よりは威力が下がるが、強力な兵器であることには変わらなかった。
「っ!?敵基地から大型ミサイルの発射を確認!!」
「くそっ、やっぱり撃ってきたか・・・」
基地自体にも何らかの武装が施されており、黙って友軍艦隊が撃沈されていくのを見ているわけがない。
攻撃能力を有しているのであれば、基地自体も当然地球艦隊を攻撃してくる。
「ミサイルについては無視しろ!!多少の被害はやむを得ない!!敵艦隊の殲滅を優先する!!」
攻撃中は波動防壁を展開する事は出来ない。
良馬は船体にミサイルからのダメージを受けても敵艦隊の殲滅を優先にした。
基地からのミサイルを受けつつも、地球艦隊は敵艦隊の殲滅を優先とし、敵艦船を次々と撃沈していく。
懐に入られて混戦となる前に遠距離からの砲撃戦で、一隻でも多くの敵艦を沈めたい。
コスモタイガー隊も生き残った敵の空母艦載機部隊と激しいドックファイトを繰り広げ、敵機を撃ち落していく。
やがて、敵艦隊、敵艦載機をすべて退けた。
残るは基地本体だけとなる。
「我が基地の艦隊・・・す、全て沈黙!!」
「うぅ～・・・」
数では勝っていた筈の自軍の艦隊が全滅したことに信じられない基地司令官。

「ミサイルを撃ちまくれ!!敵を近づけるな!!」
基地司令官は、ミサイルを連射して、地球艦隊へ波動砲を撃たせる余裕を与えないようにする。
しかし、まさか地球艦隊がこの基地を破壊することを目的としていないことを基地要員は知る由もない。
基地自体はまだミサイル攻撃を継続してくる。
さて、問題はここからだ。
波動砲で攻撃すれば、当然基地そのものを破壊してしまう。
そうなればようやく見つけた敵本星の手掛かりも消えてしまう。
だが、このまま基地を放置してもミサイル攻撃でやられてしまうし、折角見つけた手掛かりをみすみす手放すわけにはいかない。
なんとかして基地の機能だけを停止しなければならない。
ヤマトは通常の波動カートリッジ弾の波動エネルギーを抑えた特殊弾頭で基地を攻撃する。
動力炉をさけ、誘爆しないように機能だけを停止させるように撃つ・・・・
これはオリンピック級の射撃技術を持つ南部でなければできない凄腕だ。
ヤマトから放たれた特殊弾を受け、敵基地は連鎖爆発を起こす。
失敗かと思われたが、動力炉への誘爆までとはいかず、半壊程度で爆発は収まった。
地球艦隊乗員全員は爆発が収まりホッとしたが、一番安心したのはおそらく南部本人だろう。
基地の機能が停止し、あとは航路情報を得るだけだとなり、戦闘班と技術班が敵基地へと乗り込む。
「これで、敵さんの星の情報がつかめればいいんですけどね・・・・」
「そうありたいもんじゃな」
「・・・・」
半壊した敵基地へと上陸していく戦闘班と技術班を見ながら永倉と井上が何か成果があることに期待する。
コスモタイガー隊や雪風・改も敵基地上陸の護衛にあたり、まほろ

ば、ヤマト、春藍、ハルバード、ファルシオンは周辺の警戒を行う。
そして、技術班は敵の航路データを無事に入手し、その解析へと移る。
解析の結果、敵本星の座標を示すデータは残念ながら見つからなかった。
おそらく基地が攻撃される前、乗員が情報の漏洩を防ぐために消去したのか、基地自体のコンピューターにはインプットされていなかったのかもしれない。
ただし、代わりとなるデータとしてこの白色銀河の宇宙航路図を見つけた。
その宇宙海図をみると、この白色銀河には大きな異常が検知された。
そもそもこれまで地球艦隊が航行してきた宙域はどこも異常な宙域だった。
褐色矮星ばかりの宙域‥‥
濃密な暗黒ガス帯‥‥
恒星を持たずに漂流している惑星‥‥
そして、密集している白色矮星‥‥

▪

恒星のスペクトル分布も異常で、太陽の様な黄色主系列星は限りなく少なく、寿命を終えた矮星や巨星が多く分布していた。
サルガッソーとは異なる宇宙の墓場の様な星系だ。
これは太陽系をはじめとする地球がこれまで進出してきた宇宙の常識からは考えられない様な、異常な宙域だった。
もちろん、宇宙のすべての謎が解明されていないのだから、こんな宙域があっても不思議ではない。
そして、解析をしていた真田が恒星分布に異常のある範囲を割り出した宙域を表示すると、それはまるで白色銀河に発疹が出来たような感じで、所々に表示されていた。
その中の一点は最初に地球艦隊が誘い込まれた例の褐色矮星帯の宙域だった。

恒星分布が偏っている宙域を円で囲むと、そこがほぼ中心位置になる。
しかし、あの宙域には褐色矮星以外の反応はなく、とても敵本星があるようには見えなかった。
当然、真田もこれに疑問を感じ、過去の記録をさかのぼって調べたが、あそこには敵本星どころか敵の基地さえ確認できなかった。
だが、あの宙域が円の中心と言うことはあの宙域には何かがある可能性も出てきた。
しかし、真田の疑問はまだあった。
それは、なぜあの褐色矮星を中心とする円の中だけ、恒星のスペクトル分布に異常があるかだ。
そこへ、トチローがある仮説をたてる。
それは、暗黒星団帝国が資源採掘をおこない、自然のサイクルが狂ってしまったのではないかと言うのだ。
確かに連中は、ガミラス、イスカンダルでも資源採掘を行い、更にオリオン座ペテルギウスのα星でも強引にエネルギーを採掘しようとしていた。
あのまま採掘されていればハイパーノヴァが発生するところだった。
あの時はヤマト、まほろば　が介入し、更には徳川の機転でハイパーノヴァを未然に防ぐことが出来た。
しかし、この白色銀河は暗黒星団帝国の領海内・・・
邪魔をする者はいない。
であれば、連中は惑星を丸ごと潰せば、それこそ、大量の地下資源を手に入れられる。
それが恒星のエネルギー源であるならなおさらである。
現にイスカンダルがアスタルにぶつかりそうな時も、サンザーに落ちそうになっても暗黒星団帝国は静観していた。
トチローの仮説を聞いた真田はある学者が唱えた理論を思い出した。
それはダイソン球殻と言うものであった。

ダイソン球殻・・・それは、２０世紀のある学者が唱えた理論で、恒星から出るエネルギーを余す事無く利用するには、恒星を丸ごと包み隠す建造物を作ればいい・・・

太陽系で分かりやすく例えると、地球そのものをすっぽりと覆うほどの巨大な球を作るということだ。

そして、その星に住む人類は球殻の内部を地表として住む・・・

超大型の宇宙コロニーの様なものだ。

表面積は地球地表の数億倍・・・

それだけ大きなモノであるなら、どれだけの人口でも養える・・・

そして、エネルギーは太陽がある限り無限に供給することが出来る。

まさに理想的な環境である。

しかし、現時点の地球の科学力でもそれを実現するのは不可能だ。

地球をすっぽりと覆うほどの資源の確保さえ難しい。

ただ、この理論が出された時、このような意見も出た・・・

いずれ宇宙から、まったく目には見えない『赤外線のみを放射する天体』が見つかった場合、それは高度に発達した文明かもしれない・・・

なぜなら、その天体はまさしくダイソン球殻である可能性が高いからだ・・・

と言う意見だ。

しかし、それに関しても無理があるという意見も出た。

実際に宇宙には赤外線しか出さない星もあるのではないかと言う意見だ。

褐色矮星がそれに当てはまる。

だが、２０世紀当時には褐色矮星の存在など、確認されず逆に今の地球では赤外線を放射する星＝褐色矮星と言う思い込みがある。

あの褐色矮星がひしめく宙域にて、確かに褐色矮星は存在し、爆発した星も褐色矮星だった。

だが、他の星に関しては、赤外線反応だけで褐色矮星だと判断して

いた。
あの宙域にはそれ以外の反応もなかったことから、あの宙域の星すべてが褐色矮星だと思い込んでいた。
何しろ、太陽と同じＧ２型スペクトルの恒星はおろか、赤外線放出する星以外のどんな恒星も存在していなかった。
暗黒星団帝国が周辺の星々の資源を採掘しつくし、自分たちの星を覆い隠すダイソン球殻に等しいものを作りあげたモノだとすれば・・・・
あの褐色矮星が存在する宙域に敵の本星があった可能性が高い・・・・
地球のパルチザンが、本部をヤマトの地下改修ドックに作ったように敵も地球艦隊が一度探して、去った場所には再び戻ってくることはないと判断し、自分たちの星の近くへと誘い出したのだ。
しかも星の姿は、ダイソン球殻で覆っているので、一見すると褐色矮星でまさか、ここが目指している星だとは気づかないだろうという計算を含めて・・・・
まさしく灯台下暗しだった・・・・

その頃、地球艦隊が目指している暗黒星団帝国本星、デザリアム星では・・・・
聖総統の下に側近がやってきて、地球艦隊の動向を報告する。
「ご報告いたします。地球艦隊は第八補給基地を破壊後、針路を変え、連続ワープに入ったもようです」
「何・・・・？」
「・・・・して、その予想目的地点は？」
聖総統は地球艦隊が向かった先を訊ねる。
「はっ・・・・それが・・・・座標ゼロ地点・・・・すなわちこの暗黒星団帝国本星、デザリアムかと・・・・」
「な、なんだと・・・・!!」
サーダは思わず声が裏返るほど驚く。
「ふっ・・・・はははははははっ!!よし、下がってよいぞ」

一方、聖総統の方はなんだか楽しそうだ。
「はっ・・・・」
「せ、聖総統!これは・・・・」
何故、地球艦隊がこのデザリアム星の位置を突き止めることが出来たのか信じられないサーダ。
あれだけ用意周到に罠を巡らせ、地球艦隊をこのデザリアム星から引き離したにもかかわらず、奴らは見事自分たちの星の座標を突き止めたのだからサーダが驚愕するのも無理はなかった。
「まぁ、そううろたえるな。どうやってかは知らぬが、奴らは我らがデザリアム星の位置を見事に突き止めたのだ・・・・こうなれば、それ相応の出迎えをしてやろうではないか・・・・」
「しかし・・・・」
「このような時のために準備を整えていたのであろう・・・・?」
「そ、それはそうですが・・・・」
「さあ、彼奴等がこの星にたどり着いた時の目を見張るさまを楽しもうではないか。ふはははは・・・・」
聖総統には何やら、絶対の自信がある様子だった。

聖総統の執務室にて、このようなことがあった中、スカリエッティのラボ区画では、
「ドクター・・・・」
「ん?どうしたんだい?ロベル」
「どうも例の地球艦隊ですが、この星の座標を突き止めた様子で、まもなくここへ来るかと・・・・」
聖総統の執務室でのやり取りは例のごとくロベルに探知されており、彼女は地球艦隊がこのデザリアム星に接近していることをスカリエッティに伝える。
「ほぉ～・・・・では、総統府の連中もさぞや驚き慌てふためいていたのではないかね?」
「はい、サーダ様は大変驚愕しておられていました。しかし、聖総統閣下は、特に驚愕する様子もなく、むしろ楽しんでいるかの様子でした」

「まぁ、この星の外見を見れば、彼が余裕な訳も分かる・・・それにどうやら、例の新造艦も完成したみたいだしね」
「・・・」
スカリエッティには何故、聖総統が余裕なのか分かる要素があった。
「ただ・・・」
「ただ？」
「うむ、ただ、これまでの地球艦隊の活躍から、彼らを甘く見ない方が良いかもしれないねぇ～」
ただ、スカリエッティは聖総統とは異なりあまり楽観視はしていなかった。
「ん？何故ですか？ドクター・・・戦力、そして科学力でも彼らより、こちらの方が上だと思われますが・・・」
サーダのＤＮＡ情報が入っていることから、暗黒星団帝国が地球艦隊に負けるとは思っていない様子のロベル。
「まぁ、人生経験ってやつだよ」
「？」
スカリエッティの言葉にロベルは首を傾げる。
彼は現状をミッドに居た頃の自分と今の暗黒星団帝国の状況を重ねて見ていた。
管理局との決戦時、無数のガジェット、ナンバーズ、ルーテシア、そして聖王のゆりかごに聖王のクローン（ヴィヴィオ）・・・
これらの要素から自分は決して敗北することはないと思っていた。
現に公開陳述会にて、地上本部、機動六課の隊舎を壊滅させ、決戦時の初戦では、地上の切り札とされるアインヘリヤル砲台をすべて潰した。
負ける要素を見つける方が難しいとさえ思った。
Ｆの遺作であるフェイトも追い詰め、あの管理局のエースである高町なのはも聖王のクローン（ヴィヴィオ）が追い詰めた。
しかし、ほんのわずかな奇跡が小さな綻びとなり、自分は管理局に・・・機動六課に敗北した。

勝負は完全に終わるまで気を抜いてはならない。
窮鼠猫を噛むという言葉通り、下手に追い詰めるだけ追い詰めるだけではなく、一気に決めなければならなかった。
故に彼は聖総統のように楽観視はしていなかった。
もっとも、敗北したからこそ、今の自分は管理世界に居ただけではお目にかかれない様々な技術を見ることが出来た。
それについては感謝している。
でも、正直に言って、このデザリアム星に自分の骨を埋めるつもりはない。
「・・・・ロベル」
「はい、ドクター」
「万が一のことを考えて、例の準備をしてくれたまえ」
「はっ、承知しました」
スカリエッティは状況を見て、いつでもこの星から出ていけるように準備を始めた。

その頃、連続ワープにて、最初に誘い込まれた褐色矮星の宙域へと戻ってきた地球艦隊。
今度は、念入りに周辺の惑星探査を行う。
すると、
「・・・・ありました!!可視光系反応ゼロ、赤外線反応のみ微弱・・・・球の半径はちょうど1．８天文単位です・・・・」
褐色矮星ばかりの宙域にうまく偽装されている個所を見つけた。
「まさしく、真田先輩の言う通りだったな、流石だ・・・・パネルに投影してくれ」
「了解」
まほろば　の艦橋にあるメインパネルには星らしき姿は表示されない。
「ん？副長、何も表示されていませんよ」
パネルを見たギンガは新見に何も映っていない件について訊ねる。
「可視光がゼロだからね。ちょっとまって、今赤外線フィルターをか

けて見やすくするから・・・」
新見は星の姿を見えるように画像処理をする。
すると、赤い姿の星が表示される。
「これは・・・ガス・・・ですか？」
「そう・・・みたいね・・・」
これについて、真田は、
理屈はダイソン球殻と同じだが建造物ではなく、高濃度の暗黒ガスで星系をまるごと包み込んでいるのではないかと言う。
確かに人工の建造物では擬態にはならない。
もし、人工の建造物なら最初にこの宙域に誘い込まれた時に発見できたはずだ。
反対に暗黒ガスならば、十分な擬態となる。
もともとこの宙域には暗黒ガスも存在していたし、暗黒ガスの中にまさか星系が隠されているとは夢にも思わない。
恒星からのエネルギーは全て暗黒ガスに蓄えられ、敵はそのエネルギーを使用しているのだと考えられる。
実に効率的だ。
しかし、敵も人類型の宇宙生命体であるいじょう、敵はガスの中に住んでいるわけではなない。
このガス球体の中に恒星系と敵の本星がある。
地球艦隊は警戒しつつガス球体の中へと入っていく・・・
その中に恒星の反応があった。
それは自分たちが住んでいる太陽系と同じ、G型スペックの恒星系だった。
ガス球体の中に敵は潜んでおらず、地球艦隊は無事にガス球体の外へと出る。
そして、惑星の反応を見つけた。▪
パネルに投影すると、その惑星の姿は・・・
「えっ？」
「ま、まさか・・・」
「そ、そんな・・・」

「バカな・・・」
パネルに投影された星の姿を見て、まほろば　の乗員は全員目を見開く。
いや、まほろば　だけではない。
おそらくヤマト、春藍の乗員全員が驚いているに違いない。
「あの星は・・・」
「ち、地球だ・・・」
パネルに投影されていた惑星の姿は自分たちの故郷、地球と瓜二つの姿をしていた・・・

百十六話　バース星

地球艦隊がようやく苦労して敵の本拠地、デザリアム星の位置を突き止めた頃、銀河系中心部、核恒星系では、それまで銀河系の北部を中心に版図を拡大してきたボラー連邦であったが、ガルマン星にて突如、反乱と共に外宇宙から謎の艦隊が来襲し、瞬く間にガルマン星を占領してしまった。

その後、ガルマン星はガルマン・ガミラスと名を変え、こともあろうに自分たちボラー連邦に対して宣戦布告をしてきた。

しかもガルマン星周辺のボラー連邦の勢力下の星を次々と攻略し、ボラー連邦の支配権から解放した後、自分たちの勢力下に組み込んでいった。

ボラー連邦国家元首のベムラーゼ首相は以前、自分の勢力下に入り込んできた時空管理局に対して一度は武力制裁を行おうとしたが、いつでも潰せるような弱体組織よりも技術力の高いガルマン星の奪還を最優先とし、管理局よりもガルマン・ガミラスの攻略へと踏み切った。

ベムラーゼのこの決断が管理局の寿命を延ばすこととなった。

例え、ガルマン星と周辺の星々の戦力を得たとはいえ、数においてはまだ自分たちが勝っている。

当初は、短期間でガルマン星を奪還できると思っていたボラー連邦だったが、技術惑星でもあるガルマン・ガミラスの艦隊の前にボラー連邦の制裁艦隊はことごとく敗北した。

戦術においてもガルマン・ガミラスの方が何枚も上手だったのだ。

そして、現在の勢力図は銀河系の中心部はボラー連邦、ガルマン・ガミラスの二大勢力の構図となった。

そんな数多くのボラー連邦領の中で、取り残される星があった・・・・

ボラー連邦領の一つ、バース星・・・地球から１５００光年、ボラー連邦から３５０００光年に位置する近隣恒星系バジウド星系第四惑

星である。
そこは一年中深い雪で覆われた星で、最高気温は5度と気候は冷涼で、針葉樹林に覆われているなど、大気や鉱物組成、植物の分布状態などは地球のアラスカやカナダと酷似している気候の星だった。
そして、バース星の気候は、奇しくもボラー連邦の本星とも似ている気候の星だった。
このバース星は約十年前までは独立した惑星国家であったが、絶えず周辺の惑星国家から侵略の憂き目にあってきた。
そんな中、ボラー連邦の遠征艦隊が救援に赴き、このバース星を保護国（同盟惑星）として、駐屯艦隊や宇宙艦艇を含む大量の軍事物資をバース星へと持ち込んだ。
バース星の軍人たちもボラー連邦に所属する軍人として組み込まれた。
保護国・・・なんて聞こえはいいが、見方によってはボラー連邦からの侵略にも見える。
それは管理局の管理世界と同じだ。
そして、ボラー連邦はこの地に大規模な収容所を建設した。
この収容所にはボラー連邦の星系において政治犯と宗教思想犯を主に収容して、強制労働をさせていた。
政治犯は、ボラー連邦領内でベムラーゼの政治運営に異議を唱えたり、ベムラーゼが不機嫌な時にたまたま運悪く、その逆鱗に触れてしまった哀れな者もいれば、視界に入っただけと言う理由だけで役職を解かれ、犯罪者扱いになってしまった者も居た。
宗教犯に至っては、ボラー連邦、ガルマン・ガミラスに問わずに活動しているシャルバート教と言われる信者たちだった。
なお、このシャルバート教に関してはガルマン・ガミラスでも摘発の対象となっている。
そんなバース星にて、このバース星を統治するボローズ総督はあることに頭を抱えていた。
ガルマン・ガミラスが銀河系の中心部を占領し、その後もガルマン・ガミラスは版図を拡大し、銀河系の東部へと進出しており、バース星

はボラー連邦の版図の中で、取り残された点となった。
　これまではガルマン・ガミラスの勢力など存在せず、銀河系内にあるボラー連邦本星とバース星を我が物顔で、航行できたが、ガルマン・ガミラスが銀河系中心部を占領下においたため、これまで自由に航行していた航路が通行不能となった。
　ワープで回避しようにもバース星からボラー連邦領まではかなりの距離がある。
　当然、ガルマン・ガミラスの警戒網はあるだろう。
　宇宙は広大なため、見つからない可能性もあるが、あまりにもリスクが高い。
　本国もガルマン・ガミラスとの国境際の警備やら、攻防などで、貴重な戦力を遠くのバース星まで送る余裕はないようで、バース星駐屯軍は現有の戦力でバース星の占領を維持するしかなかった。
　もちろん、バース星でも独自に宇宙戦闘艦の建造、乗員の訓練などを行っていた。
　そんな中、ミッドでは・・・
「ええっ!!クロノ君が休暇?!」
　はやてはクロノが休暇で自分たちの故郷である地球へ有給休暇で現在管理局に居ないことに意外性を感じるとともに驚いた。
「でも、クロノ君はなんで突然休暇何て・・・」
　はやてはクロノが急に有給休暇をとった理由が分からず首を傾げる。
「噂ではどうもハラオウン統括官となんか激しく角を突き合わせたみたいですよ」
　副官であるグリフィスが何故、クロノが有給休暇を取ったのか？
　それについて思い当たる出来事をはやてに伝える。
「えっ？クロノ君がリンディ提督と・・・うーん・あの親子仲がええ、クロノ君とリンディ提督が・・・」
（い、いったいクロノ君とリンディ提督の間に何があったんやろう・・・？）
　はやてとしてもクロノがリンディと親子喧嘩したというのもやは

り、意外性を感じていた。
それほど、クロノとリンディの親子仲は良かったのである。
「それよりも艦長、これが今度の航海計画書です」
グリフィスは、はやてに航海計画の計画書を手渡す。
ボラー連邦、ガトランティスのせいで、管理局は活動場所を大幅に削られている。
現在も何とか管理世界の行き来が出来るレベルであり、〝海〟の本来の目的、ロストロギアの捜索と管理世界になりうる世界の探索は未だに再開の目途が立っていない。
そんな中、はやてが艦長を務めるヴォルフラムは乗組員の熟練訓練に出ようとしていた。
航海する宙域も安全が確保されていることが確認されている。
管理局としても、ボラー連邦の武力制裁の失敗、フェイトと言うエースが不在な中、現在の管理局艦では最新鋭のヴォルフラムと八神はやてと言うエースを失うわけにもいかず、またこのままミッドで何もせず腐らせるわけにもいかず、こうして安全が確保された宙域にて訓練を行ってもらうつもりだった。
ミノフスキーが現在開発を進めている新型宇宙船エンジンを搭載する新型艦に対応できるような乗員を育てなければならない。
今回の航海には訓練校・士官学校の卒業生も乗艦する予定となっている。
ただし、ヴィータとシグナムはミノフスキーの護衛があり、今回の航海に参加させる訳にはいかなかった。
そもそもミノフスキーの護衛が無くとも、六課を卒業した後、ヴィータはなのはと同じ教導隊、シグナムは〝空〟の本土防衛隊に所属している。
そして、ヴォルフラムの訓練場所は宇宙・・・・
ヴィータもシグナムも畑違いで、参加しても何かの役に立つわけではない。
一般市民が知ったら、
税金の無駄遣いだ!!

とか言われてしまう。
ただ、シャマルに関しては医務官なので、ヴォルフラムに戻ってもらった。
なのはもあれから、次第に立ち直っているので、もう大丈夫だろう。
いざとなれば、スバルたちナカジマ姉妹もミッドに居るし、ナカジマ家がなのはに下宿先を提供しても良いと言っていた。
なのはの方も本当に我慢できない時はお世話になるとゲンヤに打診していた。
なのはのメンタル面の事を気にしつつも、はやては、航海計画の書類に目を通して、
「ほな、それじゃあ、この計画書に沿って準備をすすめようか?」
「了解です」
はやては次の航海の準備を進めた・・・・
それから数日後、はやてが艦長を務めるヴォルフラムは訓練のため、星の海へと出港していった。

訓練自体は平穏そのもので、つつがなく訓練日程をこなしていった。
それは、事前に何度も、念入りに訓練宙域に関しては安全確認をしていたおかげだった。
だが、宇宙の自然は人の予測を大きく裏切ることがある。
ビィー!!ビィー!!ビィー!!
突如、ヴォルフラムのブリジットに警報が鳴り響く。
「どないしたんや!?」
はやてが慌ててオペレーターに訊ねる。
「本艦の至近距離にホワイトホールが突如、出現しました!!」
「重力レベル上昇中!!」
「ホワイトホールから流星群がこちらに向かってきます!!」
突如出現したホワイトホールとそれに伴う流星群がヴォルフラムに襲い掛かる。
「うわっ!!」

「きゃぁぁぁー!!」
流星群の隕石がヴォルフラムにあたり、すさまじい衝撃がヴォルフラムの船体に襲い掛かる。
「くっ・・・被害報告!!」
はやてが自艦の被害状況を訊ねる。
「シールド機能に問題が生じ、シールド展開不能!!」
「流星群、第二陣、接近中!!」
「機関は無事か!?」
「無事です!!艦長!!」
「それなら、強制転移や!!すぐにこの空間から脱出するで!!」
はやてはこの窮地を脱するためにこの場からの強制転移を命ずる。
「し、しかし、これでは転移先の座標の設定が出来ません!!」
こんな短時間では転移先の安全の確認が出来ない。
もし、転移先の空間にブラックホールがあれば、吸い込まれてしまうし、アステロイド帯や惑星があったら、星に衝突する可能性もある。
「かまへん!!今はここから離脱するのを優先するんや!!」
しかし、はやてはイチかバチかの賭けに出る。
「は、はい!!」
ヴォルフラムは現状の打破を優先として、座標を設定せずに転移した。
強制転移したヴォルフラムはどこかの宙域に無事に転移した。
周辺にはブラックホールやホワイトホール、宇宙気流、衝突の危険があるアステロイドや惑星などはない、通常の宇宙空間だった。
はやては賭けになんとか勝った。
「つ、通常空間を確認・・・強制転移・成功・・・」
オペレーターはヴォルフラムが居る空間が通常の宇宙空間であることを確認し、強制転移が無事に成功したのだと判断した。
「現在位置と艦の状態の確認を急いでや!!」
「りょ、了解」
はやてはヴォルフラムの現在位置と損傷個所がないかの確認を急がせる。

ここは訓練航海にない空間なので、ここが一体何処なのかを急いで確認する必要があった。
それに艦のどこかが壊れていれば、損傷個所も急ぎ、修理しなければならない。
ヴォルフラムの乗員が急ぎ、現在位置と艦の状態を確認していると、
「か、艦長!!」
「どうしたんや？」
「本艦の後方に艦影を多数感知!!」
「なんやて!?」
ヴォルフラムの背後から艦隊が近づいてきた。
「確認急いでや!?」
「は、はい」
はやては、オペレーターにどこの勢力の艦隊なのかの確認を急がせる。
少なくとも、管理局・味方ではないことは確かだ。
（これがガトランティスやボラー連邦やったら、マジでヤバいで・・・・）
ここでもし、ガトランティスやボラー連邦の艦隊と出くわしたら、あっという間に撃沈される可能性が高い。
なにしろ、今のヴォルフラムはシールドが張れない状態だったからだ。
迎撃するにしても数が違い過ぎる・・・・
逃げるにしても今の管理局の魔導力炉の性能では、とてもじゃないがガトランティスやボラー連邦の宇宙戦艦を振り切ることは無理だ。
急いでこの場から転移したくともエネルギーの充填がまだ終わっていないので、転移も出来ない。
「っ!?か、艦長!!」
艦隊の戦力を確認していたオペレーターは、悲鳴の様な声をあげる。
「どないした!?」
「接近中の艦隊は・・・・ぼ、ボラー連邦の艦隊です!!」

「な、なんやて!?」
『っ!?』
　オペレーターの報告を聞き、はやては勿論の事、ブリッジに居た全員の顔がこわばる。
「間違いないんか!?」
「ま、間違いありません。エネルギー反応がボラー連邦の艦と該当します!!」
「モニターに表示!!」
「は、はい。モニターに表示します」
　オペレーターはコンソールを操作して、ブリッジのモニターに接近中の艦隊の姿を表示する。
　そこには確かに丸々とずんぐりとし、一見、武装艦には見えない艦影の艦が映し出されていた。
　その姿は本局の管理局員ならば見間違えるはずもない・・・間違いなく接近中の艦隊はボラー連邦の宇宙戦闘艦群だった。
「あっ・・・あっ・・・」
「こ、殺される・・・」
「もうだめだ・・・」
「お、おしまいだ・・・」
　ヴォルフラムのブリッジには絶望した空気が流れる。
　自分たちはここで撃沈されてしまうのか？
　それとも、捕虜となり、火あぶりの刑か？はたまた銃殺刑か？
　いずれにせよ、自分たちは殺される・・・
　そんな絶望した空気と雰囲気がひしひしと伝わってくる。
　それは、艦長であるはやても例外ではなく、絶望すると同時に何とかこの場から逃げる方法を模索していた。
　勿論、ブリッジ以外でもヴォルフラムの艦内は絶望感が支配していた。
　そんな中、
「か、艦長・・ボラー艦より通信です・・・!!」
（・・・降伏勧告をしてきたか・・・）

はやてはこの通信はボラー連邦の艦が自分たちに降伏勧告をしてきたのかと思った。
(このまま、無視して逃げるのは無理や・・・ここは少しでも生き残る方法をとらなアカン・・・)
ヴォルフラムの艦長として、自分を含めた乗員全員の命を救うため、はやては思考を巡らせ、
「・・・通信回線を開いてや」
「えっ?」
「艦長!?」
はやての指示を聞いて、ブリッジの乗員はギョッとする。
あの粗暴で野蛮なボラー連邦の連中と話をするつもりか?
話をして、通じる相手だと思っているのか?
どうせ、殺されるなら、無駄な抵抗だとしてもこの場から逃げられるだけ逃げるか、それとも一隻でもいいから一矢報いるべきではないかと思う者も居た。
「相手がコンタクトを取ろうとしておるんや・・・このまま無視しても逃げ切れないし、攻撃したところで、あの数では相手にならへん・・・それなら、まずは話し合いをしてもええんとちゃうか?」
「し、しかし、艦長。相手はあのボラー連邦ですよ!?」
グリフィスは、あのボラー連邦の連中と話し合い何て無理ではないかと思いはやてに声をかける。
「例え、ボラー連邦の連中でも、向こうはいきなり攻撃せんと、コンタクトを取ろうとしているんや・・・話し合いで、解決できるならそれに越したことはないやろう?」
「で、ですが・・・」
「私は艦長として、皆の安全を守る義務があるんや」
「わ、分かりました・・・」
はやての言葉を聞いて、グリフィスもブリッジの乗員も納得したみたいで、通信員はボラー連邦の艦との通信回線を開く。
「ぼ、ボラー艦との通信回線、開きました・・・」
ボラー連邦の艦と通信回線が開き、はやてはガチガチに緊張しつつ

もなんとか平然を保っているように振舞う。
ヴォルフラムの乗員全員が、はやてとボラー連邦のやり取りをハラハラしながら見守っている。
やがて、ヴォルフラムのモニターにボラー連邦側の相手の姿が映った。
しかし、はやてはモニターに映った人物を見て、違和感を覚える。
(あれ?確かボラー連邦の人の肌の色は・・・)
「私は、ボラー連邦領、バース星艦隊、ラジェンドラ号艦長のラムである」
モニターに映し出されたラムと言う人物は自分たちと同じ人型の姿の異星人で、欧米人風な彫りの深い顔立ち、緑色の肌に茶色いパーマの髪の毛、そして108部隊の部隊長であり、ギンガとスバルの父親であるゲンヤ・ナカジマと同じように、いかにも叩き上げの軍人と言う雰囲気を纏う人物だった。
だが、ボラー星人はあのベムラーゼの様に人型の異星人ではあるが、肌の色は水色の肌をしている筈で、モニターに映っているラムと言う人物は水色ではなく、緑色の肌をしている。
しかし、率いている艦隊はどうみてもボラー連邦の宇宙戦闘艦であり、ラム自身もボラー連邦の名前を出している。
(ボラー連邦領?・・・・ちゅうことはボラー連邦も管理局同様、宇宙にいくつもの属国を持っとるわけか・・・)
ラムの言うボラー連邦領と言う言葉から、ボラー連邦も自分たち管理局同様、宇宙に出て他の有人惑星を植民地(管理世界)にしているのだと判断した。
そりゃあ、あれだけの強力な宇宙艦艇を有しているのならば、そうした行動に出るのも不思議ではなかった。
「じ、時空管理局所属次元航行艦、ヴォルフラム艦長の八神はやてです」
誤魔化してもよかったのかもしれないが、あとでバレた際、印象が悪くなると思ったはやては、誤魔化す事無く、自らが時空管理局に所属していることをラムに伝える。

はやての姿を見たラムは、
(時空管理局・・・以前、ボラー連邦本星に攻め込んだという組織か・・・それにしても艦長と言う割には若いな・・・)
ボラー連邦領のバース星にも時空管理局の情報は回っていた。
そして、一艦の長として、はやてに対して若いという印象を受けた。
「ヤガミ艦長・・貴官の艦は我がバース星の領海を侵犯している。直ちに退避してもらいたい。こちらの指示に従わぬ時は、貴艦を撃沈する」
ラムは、はやてたちヴォルフラムに領海侵犯をしているので、退避するように警告する。
「わ、分かっております。ラム艦長・・ただ、転移するにしてもエネルギーの充填をする必要があるので、ほんの少しで、ええので、待っていただけるでしょうか?」
「よろしい・・では、三十分の猶予を与える」
「はっ、ありがとうございます、ラム艦長」
(た、助かったわ~・・・・よかったでぇ、話が分かる人で・・・・)
はやてはラムに転移の準備が出来たら、さっさとこの宙域から退避するという旨を伝えると、ラムも話を分かってくれたようで、退避する時間の猶予を与えてくれた。
はやてとラム・・二人のやり取りをハラハラした様子で見ていた乗員たちもラムの話を聞いてひとまずはホッと胸を撫で下ろした。
ラジェンドラ号を中心とするバース星艦隊は、ヴォルフラムを後方から警戒する様な陣形でヴォルフラムの動向を窺っている。
「か、艦長、空間転移の準備が整いました」
ヴォルフラムはラムが猶予した時間内に転移に必要なエネルギーを充填する事が出来た。
「わかった。ほな、転移して、ここから急いでおさらばや」
「了解」
やがて、ヴォルフラムは転移の準備が整い、バース星の領海から退避した。

ラジェンドラ号　艦橋

ラジェンドラ号からもヴォルフラムが転移した姿を確認した後、警戒態勢を解除した。
「・・・しかし、よろしかったのですか？ラム艦長」
副官がラムに声をかける。
「ん？」
「あの時空管理局と言う組織は、以前ボラー連邦本星へ侵入した侵略者です。その時空管理局の艦をみすみす見逃したとボローズ総督が知ったら、艦長の立場が・・・」
「かまわぬ」
「えっ？」
「我々バースの軍人は軍律を守ってこその軍人だ!!領海侵犯をした者にはまずは、退避するように警告する・・・いきなり攻撃するようでは、争いの芽となる。話し合いで解決できるのであればそれに越したことはない。争いが起きなければ、大事な部下と艦を守ることが出来る・・・今のバースには兵一人、艦一隻でも無駄にするわけにはいかんのだ」
故郷であるバースは確かにボラー連邦からの保護と言う名目でボラー連邦に組み込まれた。
しかし、自分はバースの軍人であり、ラムはボラー連邦よりも故国バース星への忠誠（愛着）心が強かった。
もし、ヴォルフラムを見つけたのが、ラム艦長の様にバース星人の艦隊ではなく、ボラー連邦の人間が乗った艦隊だったら、ヴォルフラムは今頃宇宙の塵になっていただろう。
「艦長・・・そうですね」
副官は改めてラムの軍人としての在り方に尊敬をもった
バース星の領海から無事に転移したヴォルフラムは管理局の管理している領海へと戻った。

「通常空間を確認、転移成功・・・・」
「本艦の現在位置は・・・・」
オペレーターからヴォルフラムの現在位置の報告を聞き、ブリッジには先程の絶望した空気から安堵した空気へと変わる。
「ひやひやしましたね、艦長」
グリフィスがはやてに声をかける。
「はぁ～・・・・いやぁ～全くや・・・・生きた心地がせぇへんかったわ・・・・」
はやては袖で額に浮かんだ汗を拭う。
(こんな感じをクロノ君や向こうの地球の軍人さんたちは経験してきたんやな・・・・)
ボラー連邦への武力制裁に参加したクロノ。
そしてガミラス、ガトランティスと戦った地球防衛軍の軍人たちはこれ以上の緊張・・・・命を懸けた戦場を体験してきたのかと改めて自覚するはやてだった。
(例え新造艦が出来ても無敵と言うわけやないやろうからな、今後も宇宙へ出ればこうした経験は続くんやろうなぁ・・・・)
ミノフスキーが作った艦も宇宙最強・無敵の艦・・・・と言うわけではないだろう。
これまで管理局の次元航行艦がそう思っていた中、いざ宇宙に出てみれば、これまで遭遇した星間国家の宇宙戦闘艦と比べると一番最弱な艦だったと判明したのだ。
だからこそ、ミノフスキーの艦も同じことが言えるのだ。
(本局に今回の事を報告すれば、また荒れるかもしれへんなぁ・・・・)
はやては今回の出来事・・・・ボラー連邦に領土が存在した事を報告すれば本局の連中が騒ぎ立てるのは容易に想像できる。
しかし、報告をしなければならない重要な案件だ。
(はぁ～・・・・気が重い・・・・)
(私もクロノ君みたいに有給をとろうかな・・・・)
本局に帰り、報告書を提出したら、自分もクロノ同様、有給休暇をとろうかと考えるはやて。

しかし・・・・
(無理やろうな・・・・)
重要な案件を報告してそのままとんずらして知らん顔では他の局員にも迷惑をかける可能性が高い。
はやては一嵐が吹くだろうと予測しつつもヴォルフラムの艦長室で、今回の一件の報告書をしたため始めた。

はやての予想通り、彼女からの報告を受けた本局は驚愕した。
「あれだけの戦力と技術力を持つ、星間国家だ・・・・植民地を有しているのも不思議ではないか・・・・」
「なにを悠長なことを言っている!?」
「その通りだ!!一刻も早く、新造艦を建造しなければ、いつボラーの連中がミッドを始めとする管理世界に侵攻してくるか分からんのだぞ!?」
「あの老いぼれは一体何をしているんだ!?管理世界に危機が迫っているというのに!?」
怒りの矛先は未だに新型エンジンを製造できていないミノフスキーへと向けられる。
「だいたい、あの老いぼれはちゃんと仕事をしているのか!?」
「彼の護衛にあたっている八神シグナム二尉と八神ヴィータ三尉からの報告では机にかじりっぱなしだそうです」
「それにしたって遅いぞ!!」
「何分、彼一人で行っていますからなぁ～」
「やはり、本局の技術官を助手として派遣すべきではありませんか?」
「う～む・しかし・・・・」
ミノフスキーの存在をあまり知られたくはない本局であるが、一人では時間がかかる。
それならば、本局の技術官を助手として派遣すればいいという提案が今になって出てきた。
「それに技術を継承するのは我々管理局なのですから、今のうちに派遣してもよろしいのでは?」

「うーん・・・よかろう。本局の技術官の派遣を許可しよう」
　こうしてミノフスキーの下に助手として本局の技術官が派遣されることとなった。
「ええっ!!」
「私たちが・・ですか?」
　人事課のレティの下に呼びだされたマリエルとシャリオは今回の辞令を聞いて驚いた。
「貴女たちも風の噂で聞いていると思うけど、現在、本局ではボラー連邦からの亡命者であるミノフスキー博士に新型の宇宙戦闘艦のエンジンの設計と船体の設計を依頼しています」
「あの噂は本当だったんですね・・・・」
「まさか、ボラー連邦の人が管理局に居たなんて・・・・」
「でも、信用できるんですか?その人・・・・」
　シャリオがミノフスキーは本当に信頼がおける人物なのかと問う。
「彼の護衛にあたっている八神ヴィータ三尉からの報告では、彼は本物の技術者だそうよ」
「・・・・」
　本物の技術者と言われてもやはり、ボラー連邦の人間・・・不安になるのは当然だった。
「でも、何故、急に本局の技術官を助手として派遣することになったんですか?」
　マリエルは自分たちがミノフスキーの助手に選ばれた経緯をレティに訊ねる。
「八神はやて艦長が先日、訓練航海でボラー連邦の勢力下に誤って転移したみたいなの」
「ボラー連邦の勢力下に!?」
「それで、はやてさんは無事だったんですか!?」
「ええ、報告では話の通じる相手だったみたいで、その場は何とか転移して退避に成功したみたいよ」
「そうですか・・・・」
「良かった・・・・」

「ただ、その件でボラー連邦も私たち管理局のようにいくつかの世界を管理においていることが判明したの・・・」
「まぁ、あれだけの技術と戦力を持った世界ですからね・・・」
「当然でしょうね」
「その件を本局は危惧して、一刻も早く次元航行艦の戦力を整備することが急務になったの・・・でも、現状はミノフスキー博士一人で行っているわ」
「一人で・・・」
「そう・・ミノフスキー博士が一流の技術者でも人一人では、限りがあるわ。そこで、今回、博士の下に助手を派遣することが決まったのよ」
「・・・」
ボラー連邦の人間の下で助手として働くというのは正直不安がある。
しかし、技術者としては、ボラー連邦の技術力には興味がある。
それに彼の下には彼の護衛としてシグナムとヴィータが居る。
六課でもそれぞれの分隊の副隊長・管理局でもエース級の局員がいるのであれば、滅多なことは起きないだろう。
「わかりました。その辞令、謹んでお受けいたします」
「ま、マリエルさん!?」
ボラー連邦の人間の下で働くことを了承したマリエルに驚くシャリオ。
「い、いいんですか!?相手はあのボラー連邦の人ですよ!?」
「そうね、確かに不安はあるけど、あのボラー連邦の技術がどんなモノなのか・・・技術者としては興味があるじゃない?」
「ま、まぁ、それはそうですけど・・・」
シャリオとしてもマリエル同様、ボラー連邦の技術には興味がある。
「わ、わかりました。私もその辞令、お受けいたします」
シャリオも最終的に自らの知的好奇心に負けて、今回の話を受けることにした。

マリエルとシャリオがミノフスキーの助手として派遣されることが決定した頃、
未だに暗黒星団帝国の占領下におかれている地球では・・・
「うーん・・・」
フェイトが中嶋家で用意してもらった部屋で唸っていた。
彼女の視線の先にはベッドの上に広げられた防衛軍からもらった制服が広げられている。
まほろば　に救助されてから、この地球に戻るまでお世話になった制服で、フェイトとティアナはそのまま貰っていた。
なお、ティアナはパルチザンに参加している間、この制服を着用し、戦っている。
この制服は、ボディースーツっぽいデザインであるが、丈夫でヘルメットとこの気密手袋とブーツを着用すれば、ある程度宇宙空間でも活動できる優れものだ。
フェイトはこの素材を基に新たなバリアジャケットのデザインを考案していた。
特に真・ソニックフォームはフェイトの得意とする速さを活かすために布の部分を大幅に削っているが、肌の露出部分が多いため、防御力が低下している。
それをカバーするのにこの防衛軍の制服は肌の露出も少なく丈夫・・腕や足の部分をカバー出来ているので、うってつけだ。
そこへ、ヴィヴィオがやってきた。
「フェイトママ、どうしたの？怖い顔をして・・・」
「あっ、ヴィヴィオ・・ちょっとバリアジャケットのデザインで悩んでいるのよ」
「デザイン？」
「そう・・・バリアジャケットはその名前の通り、魔導師の防御力を上げるいわば鎧みたいなものなの・・・ヴィヴィオもセットアップした時に服装が変わるでしょう？」
「うん」
「ママはデザインの他にもう少し機能を上げたいデザインにしたくて

ね・・・」
「そんなことできるの？」
「出来なくはないんだろうけど、フェイトママとしてはこの制服の素材を組み込めないかな？と思って・・・」
　そう言ってフェイトはヴィヴィオに防衛軍の制服を見せる。
「その服どうしたの？」
「これは、まほろば　で貰ったんだよ。とっても丈夫で、着やすいんだよ」
「へぇ～・・・」
「ヴィヴィオも着てみる？」
「えっ？いいの？」
「うん、いいよ」
　フェイトはヴィヴィオに防衛軍の制服の着心地を体感してもらう。
　一度、デバイスを起動させて、大人モードになってもらったのち、ヴィヴィオに防衛軍の制服を着せる。

「どう？ヴィヴィオ」
「フェイトママの言う通り、本当にいい着心地だね」
「でしょう？・・・デザインは変更できても、この素材の着心地や機能までは再現できないからね・・・その辺をなんとか出来ないか、迷っているんだよ」
「うーん・・・そうだ!!」
「ん？どうしたの？ヴィヴィオ」
「忍さんに頼めばなんとかならないかな？」
「えっ？忍？」
「うん。ヴィヴィオのデバイスを作ってくれたのも忍さんだし、忍さんなら、なんとか出来るんじゃないかな？」
「あっ、そっか!!・・・あっ、でも、肝心のその忍がどこにいるのか分かっていないんだよね」
「あっ・・・」

バリアジャケットのデザイン変更に関して、要である忍の行方が分からない。
「うーん・・・どこにいるんだろう・・・」
(大丈夫かな?忍・・・)
海鳴・・・いや、世界でも有数のトップレベルの月村グループの総裁である忍は、暗黒星団帝国の地球襲来の時、あの規模の屋敷の所有者だ。
地球側の要人の一人として、暗黒星団帝国に捕まっているかもしれない。
忍が捕まっているとして、どこに捕まっているのか?
無事なのか?
それは、フェイトには分からない。
パルチザンとして戦っているティアナならば、忍の情報を何か知っているかもしれない。
しかし、そのティアナとも連絡がつけようがない。
今は、忍、ティアナの無事を祈ることしかできなかった。
そして、もし、忍が無事に戻ってくれれば、彼女にバリアジャケットの素材の変更を頼もうと決めたフェイトだった。
フェイトもまさか、この時、忍がティアナたちパルチザンに助けられて、共に戦っていることを知る由もなかった。
「うーん・・・それなら、ヴィヴィオもバリアジャケットのデザインを変えてもらおうかな・・・?」
「えっ?」
ヴィヴィオもバリアジャケットのデザインと素材を変更してもらおうと言う。
「どうしたの?ヴィヴィオも突然そんなことを言って・・・」
「ヴィヴィオの場合、大人モードだとあの格好でしょう?」
「うん、そうだね」
「あの格好だと、なのはママもきっと驚いちゃうと思って・・・」
「うーん・・・確かに・・・」
ヴィヴィオの大人モードの時のバリアジャケットのデザインはJ

S事件において、聖王のゆりかご内で、なのはと対峙した聖王モードの時と同じデザインのバリアジャケットのデザインだった。
ヴィヴィオが初めてデバイスを起動させた時、フェイトは腰が抜けるほど驚いていた。
なのはにはデバイスを貰ったことを話したが、なのはは、それが大人モードでバリアジャケットのデザインが聖王モードの時と同じであることを知らない。
ならば、自分もミッドに帰る前にバリアジャケットのデザインを変更したいと思うヴィヴィオであった。
当然、素材も防衛軍の制服と同じ素材で作られたモノを・・・
その後、二人は忍の無事を信じ、彼女が帰ってきた時にバリアジャケットのデザインと素材を変更してもらうため、新しいバリアジャケットのデザインを考えるのであった。

百十七話　疑惑の星

　地球を救うため、暗黒星団帝国の本星、デザリアム星を目指し黒色銀河、白色銀河へとやってきた地球艦隊・・・・
　苦労の末、地球艦隊はようやくデザリアム星の座標を掴んだ。
　デザリアム星を目指したのだが、デザリアム星と思しき星の姿はなんと、自分たちの故郷・地球と瓜二つの姿だった。
「あ、あれは・・・・」
「ち、地球だ・・・・」
「ば、バカな・・・・っ!?」
　当然、デザリアム星と思われた星の姿を見て地球艦隊の乗員は驚愕する。
「我々は地球に戻ってきてしまったのか？」
「そ、そんな筈は・・・・」
　ここで焦ったのは各艦の航海班だった。
　航路計算を間違って入力してしまったのか？
　しかし、一隻ならばともかく、ヤマト、まほろば、春藍、雪風・改、ハルバード、ファルシオンすべての地球艦隊がこうして地球へ辿り着いている。
（いや、あれは本当に地球なのか？いくら、ワープ機関が発達したとはいえ、一回の連続ワープで、白色銀河から太陽系まで戻るのは不可能だ・・・・）
　良馬は、目の前にある地球が本当に自分たちの故郷である地球なのかと疑問に思った。
「副長」
「は、はい」
「あの星の周辺に艦隊は確認できるか？」
「艦隊ですか？」
「そうだ」
「・・・いえ、確認できません。この空間を航行しているのは我々だけ

です」
「そうか・・・」
　新見の報告を聞いてますます、良馬が抱いた違和感が強くなる。
（現状の地球は、暗黒星団帝国に占領されている筈だ。それにもかかわらず、占領軍の宇宙艦隊が、地球の周辺に展開していないのはあまりにも妙だ・・・占領軍すべての宇宙艦隊が地表に着陸しているのか？）
　地球と思われる星の周辺に暗黒星団帝国の艦隊が不在であることに良馬が違和感を覚えている中、
「おい、ＣＩＣ!!航路計算はちゃんとやったのか?!」
　永倉はＣＩＣに航路計算は間違いないのかと問う。
「三度、再チェックをしましたが、航路計算に間違いはありません!!」
　ＣＩＣからの報告では、三回もチェックしたが、航路計算には間違いはないと言う。
（で、あれば、やはりあの星は地球ではない可能性が高いな・・・）
「通信長」
「は、はい」
「ヤマトと春藍に通信を繋いでくれ」
「りょ、了解」
　ギンガは急ぎ、ヤマトと春藍に連絡を取る。
「古代艦長、山南艦長・・・」
「おお、月村か・・・」
　ヤマト航海長の島も春藍の航海長も顔色が悪い。
　敵の母星だと思っていたら、地球に辿り着いてしまったのだから、無理はない。
「あの眼前の星をどう思うのか意見を聞きたく、こうして通信を送りました」
「うむ、あの星はどうみても地球に見えるが・・・」
「航路計算ではミスはないようだ。だから、単にあの星が地球とも言い切れない」
「はい。広大な宇宙ならば、姿形が地球に似ている星があっても不思

議ではありませんからね」
　ガトランティスはともかく、イスカンダルも青い海が広がる星であり、ギンガが生まれたミッドチルダも同様だった。
　青い星＝地球　と言うのは些か軽率な判断である。
「しかし、そうだとしてもかなり天文学的な確率だぞ」
「真田さんはどう思いますか？」
　良馬は、ヤマト副長兼技術班班長の真田にも意見を求める。
「この映像だけでは判断しかねるな・・・・」
　真田もこの眼前の星が地球だとはまだ判断していない様子だ。
「ブラックホールを抜けるとホワイトホールの入口へ続き、元の宇宙へ続く出入り口があると言う説を聞きましたが・・・・」
「暗黒星雲がブラックホールで、白色銀河がホワイトホール・・・・と言うことか？」
　色的には確かに暗黒星雲は黒で白色銀河は白だ。
　しかし、
「だが、暗黒星雲も白色銀河も確かに星雲として存在していた。現に白色銀河では敵と交戦もしたからな」
「ひょっとしたら、我々が行ったワープに何らかの障害が生じて、異次元の空間を通り、様々な空間に間欠的に出現する出入り口から出てしまったのかもしれない」
「それに、今の地球は暗黒星団帝国の占領下に置かれています。その占領軍の宇宙艦隊が地球の周りに居ない事と、地表に着陸しているとしても、未だに何のリアクションもないのは妙です」
　良馬は守と山南に自分が抱いた違和感を伝える。
「うむ、そうだな・・・そういえば、異次元空間では通常の空間とは時間軸の流れが異なると聞いたことがある。もしかしたら、我々の眼前にある地球は我々が知る時間軸の地球ではないのかもしれない」
「なるほど・・・あの星が過去か未来の地球である可能性もあると言うわけですね」
「うむ、故に占領軍の艦船が出撃して来ないのかもしれない」
　様々な憶測が飛び交うが、どれもこれも憶測の域を出ていない。

「いや、もしかすると、月村の言う通り、ただ地球に似た青い星と言うだけかもしれない。まずはあの星の地表の様子を探ってみよう・・・」
そして、真田も良馬同様、あの星が地球に似た青い星である可能性もあるので、あの星が本当に地球なのか？
それとも地球に似た青い星なのかを調査するため、地表の様子を見てみることにした。
「サーシア、あの星の雲の下に隠れた地形をスキャンしてみてくれ」
「はい。パネルに投影します」
ヤマト同様、まほろば、春藍でもあの星の地表の様子をスキャンしてみて、それぞれの艦橋にあるパネルに映し出す。
しかし、それをみて地球艦隊の乗員たちはますます困惑する。
あの星の雲の下に広がる地形も地球と全く同じ地形をしていた。
アフリカ大陸、オーストラリア大陸、ユーラシア大陸・・・大陸の地形も位置も地球と全く同じだった。
さらに、
「あそこのクレーター・・・あれはガミラスの遊星爆弾で出来たクレーターですよ!!」
「しかも、アフリカにはあの彗星帝国の巨大戦艦で出来た砲撃の後もありますよ!!」
「・・・」
大陸の位置、ガミラス、ガトランティスとの戦火の跡・・・
それらの要素からあの眼前の星が地球に似た星・・・と言う可能性がどんどん薄れていく。
そんな中、
「進、調査隊のメンバーを選出してくれ」
守が古代に調査隊のメンバーを選ぶように指示を出す。
「調査隊？」
「攻撃もしてこないようだし、着陸して様子を探ってみるんだ」
守の言う通り、確かにあの星からは何のリアクションもなく、不気味な平穏な時間が流れている。
シャンブローの時と同様に実際にあの星の地表に降りてみれば、あ

の星が本当に地球なのか？
　それとも地球ではないのかを確認できる。
「ただ、メンバーの中にアナライザーを入れるのを忘れるな。カメラを通して、地上の様子をこちらでも見ておきたいからな」
　調査隊のメンバーにアナライザーは確定の様だ。
　まぁ、アナライザーならば搭載されたカメラから地球艦隊へ地上の映像をリアルタイムで送信することが出来る。
　カメラを構えて映像を送るよりも怪しまれずに済む。
「わかりました。では、島、南部、相原、そしてアナライザーとぼくの五人であの星に降ります」
　古代が調査隊のメンバーを選出して、いざあの星へと降りようとした時、
「・・・私も行きます!!」
　サーシアも調査隊に志願した。
「サーシア・・・君はダメだ。危険な任務かもしれないんだぞ」
　当然、古代はサーシアの調査隊の参加には難色を示した。
「お願い・・・叔父様、お父様。私の力が、何か役立つかもしれないでしょう・・・？」
　アナライザーの他に自分が持つ超能力が何か役立つかもしれないとサーシアにしては珍しく調査隊の参加には意固地だ。
「・・・」
　古代はそう言われて考えこむ。
　確かにサーシアの超能力ならば、アナライザーや自分たちが見落としがちな小さな違和感を感じ取れるかもしれない。
「・・・よし、わかった」
「ありがとう!!叔父様!!」
　古代は渋々ながらもサーシアの調査隊の同行を認めた。
「だが、何か起こった場合、すぐにアナライザーの後ろに隠れるようにするんだぞ」
「はい」
「アナライザーも万が一の事が起きたら、サーシアを守ってくれ」

「ワカリマシタ。サーシアさん、ワタシノ後ロナラ、絶対ニ安全デス!!」
「ええ、頼りにしているわ、アナライザー」
「いいですか?兄さん」
古代は次にサーシアの父親である守に、彼女を連れていってもいいか、許可を求める。
「うむ・・・だが、気をつけろ。あの惑星が地球だとしても、何が待ち受けているかわからんのだ・・・サーシアのことも、よろしく頼むぞ」
「はい」
「古代艦長、こちらからも調査隊を派遣しましょうか?」
良馬は、まほろば　からもあの星の調査隊員を派遣しようかと具申する。
「いや、あまり大勢で行っても相手を警戒させるだけだ。調査は進たち、六人で行わせる」
守は調査隊のメンバーは、ヤマトから選出した六人として、それ以上の人員は送らないことにした。
良馬は守の決定を、まほろば　の艦内に放送し、あの星がまだ正式に地球だと判断された訳ではないので、落ち着いて現状維持に努めるように伝える。
放送を聞いたユリーシャは、念話でサーシアにコンタクトをとる。
未知の星へわざわざ志願して調査に行くなんてあまりにサーシアらしくない行動だったからだ。
ユリーシャはサーシアの立ち位置を自分に置き換えてみた。
これから調査隊が向かう星は地球に似ている未知の星でもあり、敵の本拠地かもしれない。
そんな星に向かうのだから無事に戻れる保証もない。
だからこそ、調査隊のメンバーの中にサーシアの大切な人が居るのではないか?
ユリーシャはそう思ったのだ。
もし、まほろば　から調査隊が向かうとして、そのメンバーの中に良馬が居たら、きっと自分もサーシアの様に志願していたに違いな

い。
（姉様・・・）
（ん？ユリーシャ？）
（姉様、どうして、調査隊に志願したの？）
（・・・）
（もしかして、姉様は調査隊の誰かが好きなの？）
（っ!?）
ユリーシャのストレートな問いにサーシアは思わずビクッと体を震わせる。
それは魔力にもブレが生じたので、ユリーシャにもサーシアが動揺したことが分かった。
（・・・姉様が好きなのって・・・もしかして、進叔父様？）
（・・・）
これまでの航海中、サーシアとユリーシャは互いに念話で会話をしていた。
その中で、古代が自分の事をよく雪と間違えると愚痴っていた。
と言うよりも、何故かサーシアの話題は父親である守よりも叔父である古代の方が多かった。
しかも古代の事をユリーシャに話している時のサーシアはとても楽しそうに声が弾んでいた。
それにより、サーシアが古代に好意を持っていることはまだ幼心が残るユリーシャでも分かった。
何よりも自分自身が似たような感覚を良馬に抱いていたのだ。
サーシアのこの行動から、自分が良馬に抱いている気持ちもきっと、サーシアと同じように、彼の事を好いているのだと最近になってユリーシャは学んだ。
（やっぱり、姉様は進叔父様の事を・・・）
（うん・・・好き・・・叔父様ではなく、一人の男性として・・・でも、叔父様には雪さんが居る・・・だから、私は少しでも叔父様の役に立てればそれでいい・・・）
（・・・）

サーシアの気持ちは何となくだが、理解は出来る。
自分だって良馬とギンガがとても仲が良いのはこの目で見てきている。
でも、自分はまだ諦めていない。
サーシアの場合、雪のこともあるが、叔父と姪の関係から、実ることは非常に難しい。
しかし、自分の場合、良馬とは血縁関係はないので、血縁と言う問題に関してはクリアーしている。
後は自分の事を一人の異性として見てもらえばいい。
とはいえ、赤ん坊の頃から知っている良馬はやはり、ユリーシャの事を異性と言うよりもどうしても妹の様にしか見ていない。
それは古代も同じで、サーシアの事を姪でもあり、娘のように思っていた。
だからこそ、サーシアはたとえ、異性として見てくれなくても自分は古代のために何か役立ちたいと思い、今回の調査隊に志願したのだとユリーシャに語った。
(姉様が進叔父様のために役立ちたいと言う気持ちはわかった・・・でも、絶対に危険な真似は止めてね、姉様が傷つくのをお父様も進叔父様もきっと望んではいないだろうから・・・)
(・・・え、ええ。わかったわ)
念話ではそう言うが、サーシアは心の中に既に一つの決意を固めていた。
(ごめんなさい、ユリーシャ・・・もし、私に万が一の事あれば、貴女がイスカンダル王家を受け継いで・・・)

調査隊のメンバーは上陸用舟艇で地球と思われる謎の星へと降下していく。
地球艦隊の乗員たちは固唾を飲んでその様子を見守っている。
しかし、大気圏を通り過ぎても地表からは迎撃のミサイルはおろか戦闘機一機の姿も見えず、静まり返っている。
やがて、雲を抜けると、下にはきらめくばかりに幾学的に立体化さ

れた都市の姿が見えてきた。
だが、この都市にも人っ子一人姿が見えない。
「きれいな街だ・・・」
「でも、誰も居ませんよ・・・まるで、ゴーストタウンだ・・・」
「それに戦火の跡が全くない・・・」
「やはり、ここは地球じゃないのか?それとも俺たちの知る時代の地球ではないのか?」
古代たちを乗せた上陸用舟艇は着陸して地上を走行するが、やはり人の姿は見えない。
それに地球を占領している筈の暗黒星団帝国の兵士の姿もだ。
やがて、上陸用舟艇は街はずれを走行していると、前方に宮殿の様な建物が見えてきた。
「あ、あれは!?なんでしょう!?」
「宮殿・・・みたいだな・・・」
「古代、やはりここは地球じゃないんじゃないか?」
島が古代にここはやはり地球ではないと確信めいたように言う。
「地球じゃない?それじゃあ、ここはなんなんだ?それにまだ、この星が俺たちの時代の地球じゃない・・・未来か過去の地球である可能性だってあるじゃないか」
「人が居ないことから、少なくとも過去の地球ではないことが確かだが、未来の地球でもない気がするんだ」
「気のせいだろう?地球じゃなければここはなんなんだ?」
「やはり、敵の星しかないだろう?」
ガミラスの遊星爆弾、彗星帝国の超巨大戦艦、ガトランティスの砲撃跡、人の姿が全く見えないこと、あんな宮殿の様な建物は見たことがない事からこの地球が少なくとも過去の地球ではないことは確かだ。
もちろん、自分たちが知っている故郷の地球でもない。
となると、残された可能性は、敵の本星であるか未来の地球であるかのどちらかだ。
しかし、島は未来の地球でもない気がすると言う。

で、あれば、やはりここは・・・
「じゃあ、ここが敵の星なら、何故敵が攻撃をしてこない？妙じゃないか」
もし、ここが本当に島の言う通り、敵の星であるならば、宇宙に居るヤマトを含む地球艦隊、そして自分たちが敵の襲撃を受けないのはあまりにもおかしい。
「そ、それは・・・」
調査隊の中でも困惑とした空気が流れる。
「叔父様、島さん、まだ結論を出すのは早いでしょう？」
そこへ、サーシアが仲裁に入る。
「そ、そうだな・ともかく、あの宮殿の様な建物を調べてみよう・・・何か手掛かりがつかめるかもしれない」
上陸用舟艇は宮殿の様な建物の前まで着くと、古代たちは降りて宮殿の様な建物を調べることにした。
すると、
「チカクニ、セイメイ、ハンノウ、アリ」
アナライザーのセンサーがピカピカと光りながら自分たちの近くに生き物が居ることを知らせる。
古代たちは万が一を想定して、コスモガンに手を伸ばす。
「コチラニ、キマス」
やがて、宮殿の様な建物から一人の女の人がやって来た。
「ひ、人が居ます」
「女の人だ・・・」
古代たちが警戒する中、その女性は平然とした様子で古代たちに近づく。
「あなたは・・・？」
古代は近づいてきた女性に訊ねる。
「私はサーダ・・・」
女性は自分の名前を古代たちにつげる。
「お迎えに上がりました。聖総統、スカルダート様がお待ちかねです」
「聖総統？」

聞いたことのない国家元首名に首をかしげる古代。
「教えてください・・・ここは地球なんですか？」
南部がサーダにここが地球なのか、それとも違う星なのかを訊ねる。
「聖総統にお会いになれば、わかりますわ・・・さあ。こちらへ・・・」
まぁ、敵が自分たちの事を馬鹿正直に言うはずもないが、ここでこうして立ち尽くしていてもここが地球なのか、それとも違う星なのか分からない。
罠だとしてもここはサーダの誘いに乗らなければ、この星の正体を掴めそうにない。
古代たちはサーダの後についていった。

地球艦隊がこの地球に似た星に着た頃、某所では・・・
「ほほう、あれが噂の地球艦隊か・・・確かに艦影から管理局とも設計思想が全然違うねぇ・・・さて、ここからは聖総統閣下の演技を見せてもらおうか？はたして彼らを騙すことは出来るかな？」
モニターに表示された地球艦隊の姿を見て、紫色の髪に白衣を着た男は口元をニヤリと歪め、事の成り行きをまるで映画か演劇を見るかのように見守った。

サーダの後ろをついていくと、宮殿の通路には沢山の絵画や彫刻が飾られていた。
どれもこれも、ガミラスの戦災を運よく生き残った貴重な絵画と彫刻だった。
レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』『モナリザ』
ミケランジェロの『ビーナスの誕生』『ダビデ像』
フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』
ムンクの『叫び』
ドラクロワの『民衆を率いる自由の女神』
ジャン・シメオン・シャルダンの『日除けをかぶる自画像』『食前の祈り』

ロダンの『考える人』
ルーヴル美術館で展示・管理されていた『ミロのヴィーナス』
ツタンカーメンの黄金のマスク
エミール＝アントワーヌ・ブールデルの『弓をひくヘラクレス』
その他にもゴッホやゴーギャン、ピカソ、ルノワール、葛飾北斎、喜多川歌麿、写楽など、これまでの地球の歴史の中で大芸術家と呼ばれる芸術家たちの絵画や彫刻の作品が並ぶ通路は宮殿の通路と言うよりも美術館の様な感じだ。
「これは・・・やはり地球の・・・」
これらの絵画や彫刻はどうみても地球の文化財である。
姿形、地形、文化財・・・これらの要素から古代の中ではますますこの星が未来の地球ではないかと言う疑惑が強くなる。

宇宙戦艦ヤマト　第一艦橋
「艦長、アナライザーより、通信です」
宮殿の様な建物の通路を歩いていたアナライザーは自身に搭載されたカメラを通して、地球艦隊にリアルタイムで現状を映像付きで送った。
「うむ、パネルに映してくれ」
「了解」
艦橋員の視線は第一艦橋のメインパネルへと向けられる。
「こ、これはっ!?」
「すべて地球の美術品じゃないか・・・?」
ヤマトを始めとする地球艦隊でもアナライザーから送られてきた映像から宮殿の通路に飾られている絵画や彫刻を見て、古代同様やはりあの星は敵の星ではなく、地球なのではないかと言う雰囲気が高まりつつあった。
「どう思う?・真田」
守は真田に意見を訊ねる。
こう見えて、真田は月の遊園地での事故が起こる前は、絵描きを目指していた。

故に絵画や彫刻にもある程度精通していた。
「・・・まだ、判断はつきません」
真田は顔を歪ませつつ、まだ判断を下せなかった。
地球にも精巧に作られた贋作も存在している。
地球の事を調べた暗黒星団帝国ならば、もしかしたら、こうした精巧に作られた贋作を用意できる可能性もあるのだ。
(ん?・・・・何かしら・なにか違和感が・・・・)
この時、新見はアナライザーから送られてきた映像を見て、何か違和感を覚えた。
やがて、サーダに案内されて古代たちは玉座の様な大きな部屋に案内された。
すると、奥の方から堂々たる貫禄に髪は金髪で、赤いポンチョの様な衣服を纏った奇妙な風貌の男が椅子に座りながら奥から現れた。
肌の色はガミラス人ともガトランティス人とも異なり、サーダや自分たちと地球人と同じ肌の色をしていた。
「ヤマトの諸君・・・よくぞ来られた。私が聖総統のスカルダートだ」
(ん?・何故、古代君たちがヤマトの乗員だと知っているんだ?)
聖総統、スカルダートは、まだ自分たちが名乗りもしていないにもかかわらず、古代たちがヤマトの乗員であることを見抜いており、『ヤマトの諸君』と言ってきた。
アナライザーからの映像付き通信は当然、まほろば　にも送られており、スカルダートが古代たちに発した第一声に疑惑を抱く良馬だった。
「・・・我々は、諸君を第一級の賓客として迎えることにした。安心せらえよ」
周辺に怪しい素振りをした武装兵士の姿が見えないことから少なくとも歓迎はされている様だ。
「敵ではないと言うことか・・・・?」
南部が訝しむように呟く。
いきなり、敵ではないと言われてもちょっと信じがたい。
「さて、諸君・・・さっそくご鑑賞いただいた我々の古典美術品はいか

がだったかな？」
　スカルダートは先程、通路に飾られていた絵画や彫刻の感想を古代たちに訊ねてきた。
「あなた方の美術品？」
「左様・・・この星に何世紀も前から伝わる由緒正しい美術品で、あのガミラスとの戦災から奇跡的に生き残ったまさに我々人類の宝の数々だ」
「・・・・」
「君たちが疑問に思うのも無理はない。この星は君たちの地球から２００年未来の地球なのだよ」
「っ!?」
「２００年後の・・・未来の地球・・・？」
　スカルダートはこの星は自分たちの地球から２００年未来の地球・・西暦２４００年代の地球だと言う。
（なるほど、未来人だから、古代君たちがヤマトの乗員だと知っていたのか・・・でも、なんだか、胡散臭いがな・・・）
「やっぱり・・・」
「どうりで都市の様子が違って見えたわけだ・・・」
　確かにこの地球がまだ未来の地球である可能性はあった。
　その可能性をスカルダートは自身の口から古代たち・・・地球艦隊の乗員に宣言するかのように言う。
　スカルダートの言う通り２００年後の未来の地球ならば、暗黒星団帝国との戦火の跡が見当たらないのも不自然ではない。
「その通り・・・君たちの視点から見て、１５０年後に・・・太陽の暴走によって太陽系のすべての惑星は消滅する大災害が起きた」
「・・・・」
「我々は君たちで例えると、未来の技術により地球だけはなんとかこの白色銀河へとワープさせることに成功し、地球・・そして生命の種を永らえさせることに成功したのだ・・・」
「しかし、なぜそんな未来の地球が、我々の時代に・・・？」
　古代はスカルダートに同じ時間軸に現在と未来の地球・・・二つの

地球が存在することが可能なのかと訊ねる。
「・・・いくら進んだ科学技術とは言え。星一つを何十万光年も隔てた銀河へと移動させたのだ・・・その無謀な作業の中でミスが起こったのだよ」
「ミス・・・？」
　スカルダートは古代の質問に答えるかのように同じ時間軸に現在と未来の地球が存在している理由を語りだす。
「左様・・・地球は星ごと白色銀河へと移動するとともに過去の時空へと戻されてしまったのだ」
「そんな突拍子もない話を信じろと言うのですか!?」
　この星が未来の地球でもないと思っていた島はスカルダートに対して、そんなＳＦ映画か小説みたいな出来事が起こるのかと疑問に思ってスカルダートにかみつく。
「・・・」
　サーシアもなんだか困惑している様子だ。
「ふっ、信じろと言っているわけではない。私はただ、事実を述べているだけだ・・・」
　まぁ、スカルダートの話は島の言うとり、あまりにも突拍子がない話であるが、彼の言うことが全て嘘であると言う証拠もない。
　しかし、彼の雰囲気から、スカルダートの話があまりにも突拍子もなく嘘くさい。
「ともかく、ゆっくりくつろいでくれたまえ。そして君たち自身の未来でもご覧いただこう」
「我々の・・・未来だって・・・？」
　古代が困惑する中、自分たちをここまで案内してきたサーダは飲み物が入ったグラスが乗るカートを押してやって来た。
「どうぞ」
「はぁ、どうも・・・」
　そして、彼女は古代たちにグラスを手渡す。
　なお、この時サーダは手袋をつけておらず、素手の状態だった。
　困惑しながらも古代たちはサーダからグラスを受け取る。

グラスが行き渡ると、玉座の間はまるで映画館の様に照明が落とされ暗くなると、空間スクリーンが出現し、そこにある映像が映し出される。
そこにはこれまでヤマトが戦ってきたガミラスやガトランティスの戦いの記録、中間基地やグロータスのゴルバ群との戦いの映像が映し出される。
そして、最後には砂嵐で乱れる映像となるが、ノイズにかき消されながらも音声らしきものが流れ始めた。
「・・・ら、ヤマ・・・こちら・・・ヤ・・・」
「これはちょうど、２００年前・・・この星・・・つまり地球でキャッチした通信波の記録だ・・・あまりにも遠くからの通信のため、ノイズが酷いがね・・・」
「こ、古代さん・・・この声は・・・」
ノイズ交りに聞こえる声に南部は聞き覚えがある様子だ。
「・・・こち・・・ヤマト・・・・・・こちらヤマト・・・我々は現在、白色銀河において敵の大艦隊に包囲されている・・・既に僚艦、まほろば、春藍は撃沈され・・・」
「これは・・・古代、お前の声だぞ!?」
島もこのノイズ交じりの声が古代の声であること見抜く。
「・・・」
古代はスクリーンから流れるノイズ交じりの自分の声に困惑する。
実際に自分はこんな通信を地球へ送った覚えはないし、まほろばと　春藍も撃沈なんてされていない。
古代が困惑する中、映像は続いていく。
やがて、ノイズが徐々に収まり、映像が鮮明に映り始める。
「・・・波動エンジンに大きな損傷を受け、現在、航行不能・・・乗員も七割以上が死傷し・・・次の攻撃を耐えきれるとは思えない・・・地球のみんな・・・すまない・・・ヤマトは・・・ヤマトは・・・・・・うわぁぁぁぁぁぁっ!!」
「・・・・・・・・・」
やがて、ヤマトが暗黒星団帝国の最新鋭艦と思われる大型戦艦の攻

撃をうけて撃沈される映像が流れる。
しかも、下には『西暦２４０２年　ヤマト　帰還せず』なんてタイトルまで加えられている。
ガシャーン!!
古代たちはあまりのショックから、手に持っていたグラスを床に落とす。
勿論、これらの映像はヤマト以外にまほろば、春藍にも送られており、各艦の乗員たちは困惑する。
しかし、その中で良馬は、スカルダートが見せた映像と話の中で、地球が暗黒星団帝国に占領された件について一切触れていないことに疑問を感じた。
仮にあの映像が真実だとして、ヤマト、まほろば、春藍が撃沈されたとして、暗黒星団帝国に占領された地球はどうなったのか？
それらを一切、スカルダートは語っていなかったからだ。
一方で調査隊メンバーはあまりにもショッキングな映像のためか未だに唖然としながら、スクリーンを見ている。
「ヤマトが・・・ヤマトが沈む・・・!?そんなバカな!!」
「あれがヤマトの最後だと言うのか・・・？」
「ヤマトは地球に還らないなんて・・・」
「でたらめな映像を見せるのはやめてくれ!!」
元々この地球が未来の地球でないと信じている島はスカルダートにこんなのは合成映像であり、でたらめだと声を荒げる。
「これが事実だ・・・君たちにとっては未来だが、我々にとっては既に決定し、過ぎ去った過去なのだよ・・・諸君、ヤマトは２２００年代の地球には帰れない・・・君たちが生き残るただ一つの方法は、このまま降伏してこの星に永住することだ」
「降伏?・・・・すると、お前たちは・・・」
スカルダートの口から出てきた『降伏』と言う言葉に反応する古代。
「そう・・・私は現在の地球・・・君たちから見た未来の地球・暗黒星団帝国を治める国家元首なのだ」
スカルダートは未来の地球＝暗黒星団帝国だと言い放つ。

「暗黒星団帝国っ!!」
「じゃあ、地球へ侵攻してきたのはやはり、お前たちか!?」
「先程、『我々が』地球を移動させ、崩壊から救ったと言ったが、いつ『地球人類が』といったかね？地球は我々、暗黒星団帝国に占領される運命にあり、そして太陽系はいずれ崩壊してしまうのだ・・・・」
　良馬が感じた疑問をここでスカルダートは語りだす。
「これは予言でも何でもない。全て事実だ。私は確定した歴史を語っているだけなのだよ」
「くそっ・・・・」
「地球を侵略したくせに、偉そうなことを!!」
　島や南部、相原は苦虫を噛み潰したようにしてスカルダートを睨みつける。
「フフフ・・・そう構えることはない・・・君たちは重核子爆弾の起爆コントロール装置を求めて、はるばるここまでやって来たのだろう？」
「っ!?」
「どうしてそれを・・・・」
「ふっ、それぐらいのことはわかる・・・・しかし、無駄なことだ。今見せた通り、地球はいずれ暗黒星団帝国のモノとなる運命にある。君たちが我々、暗黒星団帝国の母星だと思って捜し求めた星は、君たちの地球だったわけだよ・・・・いや、正確には２００年先の未来・・・そして、君たち地球人類が住んでいた星・・・と言うべきかな？・・・・フフフ・・・・」
　地球に地球人類が住んでいたことを過去形で言うスカルダート。
「地球は・・・・暗黒星団帝国に勝てないのか・・・・？勝てなかったのか・・・・？」
「２００年先の未来人相手では・・・・やはり・・・・」
「そのとおり・・・・重核子爆弾を止めることなどできん。・・・・止める方法など、最初から存在しないのだよ。悪いことは言わない。この星に残って生き残る道を選びたまえ。私としても例え過去とはいえ、地球人をむやみに殺したくはない」
「いや、ヤマトは帰る・・・・２２００年代の地球に・・・・重核子爆弾を止

めることができないというのならば、地球に戻り、最後の最後まで戦ってみせる!!」
古代はスカルダートに降伏はしないと宣言する。
ガミラスとの戦いの時もガトランティスの戦いの時も、ヤマトは・・・地球は最後まで諦めなかった。
きっと、地球では今でも暗黒星団帝国の占領軍相手に奮戦している戦士たちが居る。
彼らのためにも・・・そして、自分たちのためにもここで諦めて降伏するわけにはいかない。
「たわけたことを・・・いくらあがこうとも、君たちは君たちの運命の糸からは逃げることはできないのだ」
「いや!!我々の運命は我々で決める!!」
(そうだな・・・過去は変えられなくても未来は変えられる・・・スカルダートが未来人であり、あの映像の歴史が過去のものでも、俺たちにとっては未来の事だ・・・あんな未来、こっちから願い下げだ)
良馬も古代と同じく、暗黒星団帝国に降伏なんてするつもりはサラサラなかった。
それはきっと、山南も・いや、地球艦隊、地球で戦っている戦士全員が同じだろう。
「そうか・・・それは実に残念だ・・・せっかく、ここまで来たことに敬意を表して生き残れるチャンスを与えたと言うのに・・・それをなげうって、滅びることが分かっている過去の地球に戻ろうというのか?過ぎ去ってしまった歴史を変えようと言うのか?やれるものなら、やってみるがいい・・・フハハハハハ・・・」
スカルダートは高笑いをして、椅子ごと奥へと下がって行った。
「くそっ!!」
「やめろ、古代・・・行こう」
古代をなだめ、島は此処を出ていこうと言う。
「・・・」
相原はこの時、古代たち他の調査隊メンバーはヤマトが撃沈されたショックで手に持っていたグラスを床に落としたが、彼はグラスを落

とさなかった。
そして、相原はそのグラスをこっそり持ち帰ることにした。
此処が本当に未来の地球なのか？
あの映像は本当の事なのか？
まだ半分信じられない相原はこの世界の物が本当に地球の物なのか、ヤマトに帰って真田に調べてもらうつもりだった。
此処が未来の地球であり、暗黒星団帝国が地球を占領したのであったとしても、地球の物質組成が自分たちの知る地球の物と変化したとは考えにくい。
このグラスの物質組成が地球にある物質なのか？
それとも地球には存在しない物質で構成されているのか？
もし、このグラスの物質組成が地球には存在しない物質で構成されていたら、スカルダートの此処が未来の地球であること、彼が見せたあの映像もすべて嘘と言うことになる。
だが、もし地球にある物質であるものならば・・・・
とはいえ、今はまだ結論は出せないが、それを知るためにもまずはこのグラスを調べてもらう必要があった。
しかし、後に相原のこの機転と行動は大きな結果をもたらすことになる。

調査隊のメンバーは玉座の間を後にして、ヤマトに戻るため、上陸用舟艇へと向かっている中、サーシアは一人、何かを決意した顔をしていた。
（私の役目はここに残ること・・・そして・・・）
しかし、古代たちはサーシアの表情には気づいていなかった。
サーシアはみんなの一番後ろをトボトボと歩いていたが、宮殿の玄関口まで来ると急に立ち止まってしまう。
「ん？ほら、サーシア、どうした？急いで」
サーシアの様子に気づいた古代が彼女に急ぐように促す。
「・・・・」
しかし、サーシアは何か思い詰めた顔をして、その場から動こうと

はしない。
「どうしたんだ？サーシア」
古代はサーシアの行動に違和感を覚える。
そして、サーシアの近くへと寄る。
すると、サーシアは古代に衝撃的な言葉を言った。

百十八話　サーシアの決意

長く、苦心の末にたどり着いた暗黒星団帝国の本星、デザリアム星の外見は地球そっくりな星だった。
当初はただ外見が似ているだけだと思っていたのだが、地表にはガミラスとガトランティスの戦争で出来た戦災の痕も確認できた。
そんな中、古代を中心とする調査隊が件の星へと直接降下して、現地を調査することになった。
調査隊は敵の攻撃を受けることなく、無事に星へとたどり着く。
地表へ着くと、そこには超近代化された未来都市が広がっていたが、都市には人の姿は見えずゴーストタウンの様だった。
それに今の地球は暗黒星団帝国に占領されているのに、占領軍の兵士の姿も戦禍の痕も全くない。
困惑する中、調査隊は街はずれに見慣れない宮殿を見つけた。
そこで、古代たちはサーダと言う女性に出会った。
そして、彼女の案内の下、この星の国家元首である聖総統、スカルダートと呼ばれる人物の下に通された。
サーダに案内されている中、宮殿の通路には自分たちがこれまでの人生の中で一度はテレビや本の中で見た有名な芸術家が作った絵画や彫刻などの芸術品が飾られていた。
それらの芸術品やガミラス、ガトランティスの戦災の痕からやはり、この星は敵の本星ではなく、地球なのではないかと言う疑惑が高まる。
やがて、この星の国家元首、聖総統、スカルダートが古代たちの前に現れた。
そして、彼が言うにはこの地球は、自分たちの知る２２００年代の地球から２００年後の２４００年代の未来の地球であることを告げられる。
一見、突拍子もなく、信じられない馬鹿馬鹿しい話であるが、スカルダートは同じ次元に二つの地球が存在する事と、古代たち、ヤマト、

そして地球艦隊の未来の映像を見せた。
それによると、地球艦隊は暗黒星団帝国の艦隊に敗れ、地球を取り戻すことに失敗する歴史となっていた。
ヤマトが撃沈される映像を見せられ、唖然とする古代たち。
さらにスカルダートはこの２００年後の地球こそが暗黒星団帝国であることを告げた。
そして、古代たち・・・地球艦隊に降伏を勧告してきた。
だが、ガミラス、ガトランティス、そしてこれまでの暗黒星団帝国との戦いでも自分たちは絶望せず、地球のために戦ってきた。

未来の映像を見せられたから何だというのだ。
未来は変えられる。
それを信じ、古代たちはスカルダートの降伏勧告を蹴って地球に帰ると宣言し、ヤマトに戻ることにした。
スカルダートと古代たちのやり取りはこの星の某所にある研究区画のモニターで表示されていた。
そのやり取りを見ていた紫髪に白衣を着た人物は、
「ハハハハハ・・・２００年後の地球だって!?面白い設定を考えるな、彼は・・・聖総統なんかではなく、役者としても十分に食べていけるんじゃないか?もっとも彼の素顔ではあまりにも不気味で強面だからね。舞台の上に立つには、今被っているマスクを着けなければならないがね・・・ハハハハハ・・・」
腹を抱えて笑っていた。
さらにその人物が言うには、スカルダートが古代たちの前に見せた姿はまるで、真の姿ではないかの様に言う。
「そんなに面白い事でしょうか?」
白衣の人物の傍に控える女性は、何故ここまで彼が大爆笑しているのか分からない様子で、やや冷ややかな目で見ている。
「おっと、これは失礼・・・けど、実際笑っちゃうだろう?もしも立場が逆だったら君だって腹抱えて笑いこけているよ」
「そうでしょうか?」

やはり、傍に控えている女性は、理解できない様子だった。

古代たちがヤマトに帰るため、乗ってきた上陸用舟艇に向かっていると、突然、サーシアは歩みを止めた。

「どうしたんだ?サーシア」

古代がサーシアに近寄り、声をかける。

すると、サーシアは言うべきか一瞬迷ったが、自身が考えているままを古代に行った。

「・・・叔父様、私は・・・ここに残ります」

「なんだって!?」

古代はサーシアが何を言ったのか一瞬、理解できなかった。

「じょ、冗談だろう?サーシア。一体どうしたというんだ!?」

古代はサーシアに何故、こんな胡散臭い星に残るのかを問うが、サーシアは古代の問いに応えず、クルリと踵を返して宮殿の方へと走り出す。

「待ってくれ!!サーシア!!」

「古代さん!?」

「ちょっと、待っていてくれ!!サーシアを連れ戻してくる!!」

古代は他のメンバーに声をかけ、慌ててサーシアを追いかける。

後ろから自分を追いかけてくる古代の足音が聞こえるが、サーシアは止まることなく、走る。

宮殿の中に入り、大広間を出て角を曲がり、停止しているエスカレーターを駆け昇る。

エスカレーターの上のロビーには、美しい花々が沢山いけてあった。

サーシアは背をかがめて、その花壇の隅に隠れた。

しかし、普段から体を鍛えている古代とまだ少女のサーシアの体力差はあり、すぐに追いつかれ、隠れてもすぐに見つかってしまった。

「サーシア、冗談だろう?ここに残るなんて・・・」

「いいえ、本当よ」

やはり、聞き間違いではなく、サーシアはこの星に残るという。

「どうして、残るなんて言うんだい？」
「私の身体は、半分は地球人だけれど、半分はイスカンダル人・・・叔父様たち地球人から見れば、宇宙人・・・私には、今の地球よりも２００年後のこの地球の方が住みやすいの・・・それに滅ぶことが分かっている地球に残るなんて・・・私にはイスカンダル王家を引き継がなければならない使命があるの・・・ここで死ぬわけにはいかないわ」
「・・・サーシア、それは君の本音なのか？君は本気でそんなことを言っているのか？」
サーシアが残る理由があまりにもサーシアらしくない。
勿論これはサーシアの本心ではない。
サーシアは本音を隠し、思わず俯く。
すると古代はサーシアをジッと見つめる。
古代に・・・好意を寄せる異性に見つめられ、サーシアはどうしようもなく、胸の中が熱く、悲しくなる。
「本当の事を言ってくれ、サーシア。君は何か隠しているんじゃないか？」
サーシアは顔を上げるが、古代の顔をまともに見ることは出来ない。
「隠していることなんてないわ・・・これが私の本心よ・・・私は死にたくない・・・」
「サーシア・・・」
口ではそう言っているが、古代にはやはり、サーシアが言っている事が本心であるとはどうしても信じられない。
しかし、いくら問いただしてもサーシアは本音を言わないだろう。
「・・・」
気まずい空気が古代とサーシアの間に流れる。
ただ、古代が自分の事をジッと見つめてくると、次第に眼の奥から涙がこみ上げ、それと同時に胸の熱さが増していく。
それと同時にドロドロとした嫉妬心の様なものも増大していく。
「それに叔父様・・・」
「な、なんだい？サーシア」

「私に『一緒に帰れ』なんて、残酷なことを言わないで!!」
「さ、サーシア?」
ついに我慢できずにサーシアは胸の中の不満を爆発させた。
古代はサーシアの変貌に驚き唖然とする。
「叔父様には雪さんがいる!!あなたの心には、私が入り込むところなんか、どこにもない・・・・」
「サーシア・・・・その・・・・それは・・・・」
古代はサーシアがもしかして自分の事を叔父ではなく、一人の異性として見ていたのかと思った。
自惚れかと思ったが、サーシアの次の言葉でそれは確信に変わる。
「ええ・・・・でも、叔父様は私の叔父様ですものね・・・・初めから分かっていたのに・・・・絶対に叶うはずもないのに・・・・」
もし、自分もユリーシャの様に月村家に預けられていたら、ユリーシャの様に古代ではなく、良馬に好意を持ったかもしれない。
彼もギンガと付き合っていたが、世の中には略奪愛と言うものがあり、サーシアもユリーシャも美人だし、叔父である古代よりも倫理的にはセーフ・・・・なのだろうか?
しかし、これは『もし~』『たられば・・・・』の話でもう遅い。
自分は叔父である古代に許されざる恋心を抱いてしまったのだ。
「私・・・・私・・・・さようなら!!」
サーシアは身を翻して再び走り出した。
「サーシア!!」
古代は当然、サーシアを追いかける。
「来ないで!!来ないで!!叔父様!!」
サーシアは走り続けながら、背後から追いかけてくる古代に対して叫ぶ。
「待ってくれ!!サーシア!!」
古代もサーシアに向かって叫ぶが、サーシアは走りを止めようとはしない。
「叔父様!!少しでも私が好きなら、追ってこないで!!」
後から後からこみ上げてくる涙で頬を濡らし、サーシアはひたすら

走り続ける。
その時、サーシアの行く手に長いベルトウェイが目に入る。
サーシアはそのベルトウェイに向かい、走りながら壁にあるスイッチを押した。
そのスイッチがどういう機能なのか、初めてここに来て、初めて見るものなのに、サーシアにはそれが分かっていたかの様だった。
これも一流の科学技術士の真田に預けられ、彼の下で成長した賜物なのかもしれない。
ボタンが押されるとベルトウェイの入口に格子シャッターが降りてきて、サーシアと古代の間を遮った。
「サーシア!!」
格子シャッターの開け方が分からない古代はベルトウェイに乗り、奥へと消えていくサーシアをただ呆然と立ち尽くして見ているだけしかできなかった。
(ごめんなさい、叔父様・・・私は・・・私は、本当にあなたを愛してしまったの・・・でも、サーシアはこの星に残って、自分の役目を果たします・・・)
サーシア自身、スカルダートが見せたあの未来の映像なんて信じてはいない。
それにこの星が２００年後の地球だということも信じていない。
サーシアは決して自分の命が惜しいからこの星に残ったわけではない。
連中の化けの皮を剥いで、それを古代と守・・・ヤマトに知らせるために残ったのだ。

古代とサーシアの二人のやり取り・・・
それもこの星の某所にある研究区画でモニターされていた。
「ふむ、これが男女の痴情のもつれ・・・ってやつかな?」
「どうやら、近親者の禁断の愛ってやつでしょうね・・・」
昼ドラの一場面の様な光景を見たにもかかわらず、白衣の人物と助手らしき女性は興味があるわけでもなく、平然とした様子で見てい

た。
「やれやれ、人間ってやつはどうして愛だの恋だの、そんな不確定で曖昧なモノに一々悩み、傷つくのかホント理解に苦しむねぇ～・・・だが、そう言った人間の精神状態を解明したくもあるのだがね。だからこそ、人間ってやつはまったく面白い」
白衣の人物は、愛や恋愛など、くだらないかのように言うが、ここに来る前・・・自らが生み出した娘たちに対する感情の中には家族愛があったことを自分でも気付かなかった。
それはその白衣の人物に恋愛云々を教える者がその人物の周りに居なかったことも原因の一つであり、更にその白衣の人物は恋愛感情を知るために創作物を参考に第三者視点で愛や恋愛云々を見てきたので、自分には愛の感情は不要だと思っていたのだ。

これまでの人生経験の中で、
白衣の人物が立てた理論の一つを実際に立証したある大魔導師の女性とその大魔導師の女性と同じく一人息子を失った家族。
自らの生まれ故郷を平和にしたいと願いつつも、深い闇へと足を踏み込んだ結果、利用され命を落とした哀れな男。
大魔導師の娘のクローンとして生まれながらも結局、クローン（コピー）は所詮、クローン（コピー）、オリジナルにはなれず、捨てられたが新たな家族を得て、自分の様な悲しく辛い思いをするような子供を生まない様にと執務官になり、奮戦している女性。
クローンながらもまるで自分の娘の様に扱い、必死にそのクローンを助け出だしたエースと呼ばれた魔導師の女性。
それぞれがそれぞれの理由と信念を持っての行動をしたのだが、この白衣の人物にとってはあくまでも自らの探求と興味を満たすための実験に過ぎなかったのだろう。
「それで、あの娘はどうやら、何か目的があってこの星に残ったように見えるんだが・・・？」
「目的・ですか？」
「ああ・・・彼らが集めた情報から見ると、地球の戦士たちの気概では、

彼が作った映画ごときで、あっさりと降伏するなんて思えないんだよ」
白衣の人物の脳裏にかつて、自分と敵対し、自分の自慢の娘たちを破った女性たちの姿が浮かぶ。
事の大きさでは、自分が関係した事件と地球と外宇宙からの侵略戦争では規模があまりに違いすぎるが、武人として、戦士としての気概は彼らと彼女らには似たようなモノを感じる。
「はぁ～・・・・ですが、人間である以上、自らの命惜しさに逃げ出す者もいるのではないでしょうか？」
「確かにその可能性も否定できないが・・・・少なくとも彼女は違う・・・・非科学的なことだが直感？・・・・とでも言うのかな？」
「直感・・・・ですか・・・・？」
「ああ、根拠としても薄いが、強いて言うなら彼女の目だ」
「目？」
「そう・・・・あの時、『この星に残る』と言った少し前の彼女の目は、何かを決意していた目だ。それは決して、自分の命惜しさに仲間を裏切り、仲間を捨てるような人間の目ではなかった・・・・まぁ、これも経験の一つかな？」
自分が立てた理論から生まれた女性と対峙したあの時・・・・
彼女も決意に満ちた強い目をして自分を睨みつけ対峙していた。
あのサーシアと言う少女の目もあの時の女性と同じ目だった。
それは、自分の命惜しさにここに残ると決めた決意ではない。
彼女が何を考えて、この星に残ると決めたのか？
この星に残って、いったい何をしようと言うのか？
それが気になった白衣の人物は、
「ロベル」
「はい」
「すまないが、彼女を迎えに行ってはくれないか？」
「えっ？」
白衣の人物からの言葉にロベルは唖然とする。
「下手に宮殿内をうろついて、聖総統閣下やサーダ君、その他の連中に

見つかって捕まると厄介だ。そうなる前に彼女を保護してくれたまえ」
「は、はい」
「いいかい。くれぐれも丁重に頼むよ。ああ、それと、出来るなら、彼女のＤＮＡデータも採取出来たら、採取しておいてくれ」
「かしこまりました。ドクター」
白衣の人物の頼みを聞いた女性はスッと音もなくその場から消えた。

サーシアは、古代からの追走を振り切り、宮殿内を当てもなく彷徨い歩いていると、彼女の前に一人の人物が姿を現した。
サーダやスカルダートかと思ったが、その人物は、深緑色のＯＬっぽいスーツを着た女性だった。
「あ、貴女は・・・？」
「はじめまして、わたくしは、ロベルと申します」
ロベルと名乗った女性はサーシアに深々と頭を下げながらサーシアに自己紹介をしてくる。
意外と礼儀正しい人物だった。
なんとなく、宮殿前で自分たちを案内したあのサーダとか言う女性に雰囲気が似ていたが、彼女の様な怪しさはあまり感じられなかった。
どちらかと言うと、このロベルと言う女性からはあまり感情を感じない。
「わたくしの主が、貴女とお話がしたいと仰っております。ご足労を願えますか？」
「主・・・？それって聖総統、スカルダートって人の事？それとも、サーダと言う女の人？」
「いえ、わたくしの主は聖総統、スカルダートではありません。追加で言うのであれば、スカルダートの秘書であるサーダでもありません」
「えっ？」
ロベルの主はスカルダートでもサーダでもないと言う。

では、このロベルと言う女性の主はいったい誰なのだろうか？
ロベルの言葉にサーシアは一瞬唖然とする。▪
しかし、ロベルの主は自分の事を知っているみたいだ。
仮にこの場から逃げて、どこに逃げようともきっと、ロベルの主には自分の居場所がバレているのだろう。
ならば、逃げ回って下手に警報を鳴らされるよりも、罠であってもここはロベルの主とやらに会うしかなさそうだ。
それにスカルダートはきっと今の自分を亡命希望者と思って油断しているだろうし、ここは大人しく従った方が良いだろう。
「わかりました」
「では、こちらへ・・・」
サーシアはロベルについていくことにした。

サーシアを連れて帰ることが出来なかったこと、更に彼女が胸に抱いた初恋の本音を聞いた古代は意気消沈した様子で、上陸用舟艇に戻ってきた。
「古代さん、サーシアは？」
サーシアが戻ってきていないことに疑問を感じた相原は古代にサーシアについて訊ねる。
「・・・彼女はここに残るそうだ」
「えっ!?」
「本当なのか？古代」
「ああ・・・」
「・・・そうですか」
「・彼女は半分宇宙人だもんな・・・仕方ないよ・・・それにあんな映像を見せられちゃあ・・・」
相原は、サーシアの生まれと先程、宮殿で見たあの未来の映像を見せられてはヤマトに帰りたくないとしても分からなくはないと言う。
「バカ、滅多なこと言うもんじゃない!!」
そんな相原を古代は叱咤する。
白衣の人物が、サーシアがこの星に残ったことに何か目的を感じた

ように古代もサーシアがこの星に残ると言ったのは何か訳か目的があるのだろうと思っていた。
「しかし、お前の兄さんに何と言うつもりだ？」
島は古代の兄・・・サーシアの父親である守には何と言うつもりなのかを古代に問う。
確かにサーシアの事を任されたのに、敵地に一人で残してきてしまった。
「・・・正直に話すさ・・・サーシアがここに残ると決めたのは彼女の意志だったんだから・・・」
「そうか・・・それじゃあ、行こう」
（サーシア・・・）

ヤマトに戻った古代たちはさっそく艦橋へと戻ると、みんなに地上での出来事を報告する。
もっとも、宮殿内の事はアナライザーを通して、地球艦隊の乗員の殆どが見ていたので、知っているが、サーシアがあの星に残ると決めたところまでは予想外の出来事だった。
「地表の様子、そして、なにが起こっていたのかは、アナライザーのカメラを通して見ていたよ」
「真田さんはあの星の事をどう思いますか？本当に２００年後の地球だと思いますか？」
未だにあの地球が２００年後の地球だとは信じられない島は真田に見解を訊ねる。
「それをこれから、少しでも見極めようと思っている」
「あっ、技師長、そう言うと思って、あの星からこれを一つ貰ってきました」
相原は、真田に宮殿から失敬してきたグラスを手渡す。
「いつの間に持ってきたんだ？」
「お前にしちゃあやるじゃないか、相原。案外、スリの才能でもあるんじゃないか？」
「茶化さないでくださいよ。あと、惑星表面の土も念のため、採取して

きました。これです」
　相原は、グラスの他にあの星の土も持ち帰っていた。
「うむ、では、早速分析室で調べてみよう」▪
「お願いします。真田さん」
　真田は相原から受け取ったグラスとあの星の土を持って分析室へと向かった。
「何か分かるといいんだが・・・・」
「でも、検査結果次第ではあのスカルダートとか言う奴の言ったことが事実である可能性もあると言うことになる・・・・」
　どんな検査結果が出るのか不安になる一同。
　そして、古代は守にサーシアの事について話す。
　しかし、サーシアの初恋の相手が自分であることは黙っていた。
「兄さん・・・・サーシアのことなんですが・・・・」
「そうか、サーシアが・・・・だが、サーシアはなにか考えがあって、あの星に残ったんだ・・・・俺はそう信じている・・・・」
「兄さん・・・・」
「進・・・・お前も俺の娘を信じてやってくれ・・・・あの子は・・・・俺とスターシアの子だ・・・・強い信念を持つ子だ・・・・」
「・・・・」
「地球に戻るぞ、進。・・・・迷いを振り切るんだ。そして、暗黒星団帝国に打ち勝ち、サーシアを迎えに行く」
「・・・・わかりました。島、発進準備だ」
「・・・・」
　古代は島に出航の用意を促すが、島は黙ったままだ。
「どうした島？」
「古代・・・・本当に、地球に帰るつもりなのか？」
「どういうことだ？今更何を言い出すんだ」
「ヤマトは・・・・俺たちは、この暗黒星雲の中で敗北する運命じゃないのか？それが歴史であり、決まった未来なんじゃないか？」
「歴史が・・・・未来が何だっていうんだ!?俺たちは今、こうしてちゃんと生きているんだ!!次の瞬間も生き続ける権利があるんだ!!あんな

不確定な映像だけ信じるなんてバカげている!!万に一つの可能性をもとめて、生きぬくために、全ての努力を傾けるのが人間だろう!?沖田艦長だったそうしてきた!!ここで俺たちが諦めてどうする!?地球では、今も懸命に戦っている人たちがいるんだ!!奴らが見せたあの映像が俺たちの未来だっていうなら、その未来を変えてみせる!!」
「フッ・・・その言葉を待っていたんだ、古代。俺も全く同じ気持ちだよ」
　島はスカルダートが見せた自分たちの未来と言う映像に恐れをなしていないか、古代を試したのだった。
「みんなだって同じさ・・・そうだろう?」
「はい!!」
「もちろんです!!」
「大艦隊だかなんだか知らないが、俺がこの手で蹴散らしてやりますよ!!」
「帰りましょう、地球へ・・・!!」
「みんな・・・」
「・・・よし、総員部署に着け!!発進準備だ」
「ヤマト、発進準備!!」
　まほろば、春藍でも、ヤマト同様、地球へ戻ることは決定事項となっていた。
「うーん・・・」
　そんな中、新見は言い知れぬ違和感を覚えていた。
「どうした?副長」
　良馬は唸っている新見に声をかける。
「あっ、艦長・・・いえ、アナライザーから送られてきた映像の中で違和感があって・・・」
「違和感?」
「はい・・・宮殿の通路にあった芸術品・・・あの中で、違和感があって・・・」
　新見はあの宮殿の通路に展示されていた芸術品の中に違和感を覚え、アナライザーが録画した映像を見返していた。

「艦長、ヤマトより通信です」
「内容は？」
「これより、全艦、地球への帰還行動へと入れ・以上です」
「そうか・・・・総員・・出航配置につけ!!」
ヤマトが地球へと戻るというのであれば、まほろば　もそれに従うまでだ。
しかし、良馬には一つの懸念があった。
（あの星が暗黒星団帝国の本星と言うことで間違いはない・・・・しかし、あのまま放置して大丈夫なのだろうか？）
（彼らは自分たちの星は２００年後の地球だと言っていたが・・・・）
彼らの星が２００年後の地球であり、あの映像はこれからの未来だと言うが、古代たちが信じていないように勿論、良馬だって信じてはいない。
仮に、あの映像がこれから起こることであるとしても、未来は変えられる。
事前に知っているといないとでは大きく違う。
あんな未来は願い下げだ。
しかし、もし・・・・もし、彼らの星が２００年後の地球ではなかったとしたら・・・・
スカルダートの言っていた事が嘘であったら・・・・
自分たちの地球に打ち込まれたハイペロン爆弾の起爆装置がやはり気がかりとなる。
もし、彼らの星が２００年後の地球でなければ、地球人類を絶滅させてもなんら問題はないのだから・・・・
良馬としてはどうしてもそれが気がかりとなった。

一方、ユリーシャも姉であるサーシアがあの星に残ったことを医務室のモニター越しでヤマトとの通信を見て、知ると驚いた。
「姉さま・・・・」
ユリーシャは念話を飛ばして、２００年後の地球に残ったサーシアとコンタクトをとる。

（姉さま・・・姉さま!!返事をして!!姉さま!!）
（・・・ユリーシャ？）
（姉さま!!なんで、その星に残ったのです!?）
（ユリーシャ、あなたもあの映像を見たのでしょう？あれがホントなのか？それに、あの星が本当に２００年後の未来の地球なのか・・・私はそれを確かめるために残った・・・すこしでもお父様や叔父様の役に立てれば、私はそれでいい・・・それで満足よ・・・）
（そんな!!）
（ユリーシャ・・・イスカンダル王家は貴女が継いで・・・さようなら、ユリーシャ・・・）
（姉さま!!姉さま!!）
　ユリーシャがサーシアに何度も念話を送ったが、それ以降、サーシアがユリーシャの念話に応えることはなかった。

　地球艦隊が地球への帰還行動に入ろうとしている頃、ロベルと言う女性の案内の下、ユリーシャとの念話を切ったサーシアは研究所の様な所へと案内された。
「・・・」
　その研究所は全体的に薄暗く、そして沢山の溶液で満たされたカプセルの様なものがあった。
　そして、その中にはどれも人間・・・若い男女が入っている。
（ここは・・・それにこの人たちは一体・・・）
「そうこそ、私のラボへ・・・」
　案内された先には紫色の髪に白衣を着た一人の男性が待っていた。
　この白衣の男もスカルダート同様、なんか胡散臭い雰囲気な男だった。
「あなたがロベルさんの・・・」
「そうだ・・・私がロベルの生みの親・・・そうだな・・・この場は、ジェレミア・ゴットバルトとでも名乗っておこう」
　ジェレミア・ゴットバルトと名乗った男は明らかにその名前が偽名であるにも関わらず、平然とサーシアに偽名で自己紹介をする。

「それで、勇敢なお嬢さん。君の名前は？」
　そして、白衣の男は、サーシアに名前を聞いてくる。
「・・・真田・澪」
　向こうが偽名で名乗ったので、サーシアももう一つの名を名乗る。
「それで、早速なのだが、君がこの星に残った訳を聞いてもいいかな？」
「それは・・・死にたくないからですわ」
「ほぉ～・・・・」
「これから、死ぬのが分かっているのに、わざわざそこへ戻る必要があると思いますか？」
「なるほど、君は死にたくないから、仲間を捨てて逃げ出したというわけかな？」
「他の方々にもここに残るという選択はありました。自ら死を望んだのは、あの人たちの勝手です」
　サーシアは口では本心とは思ってない事を自分でも不思議なくらい口にする。
「それは君の本心かね？」
「どういうことです？」
「君は、ついさっき『死にたくない』と言っているが、逆なんじゃないか？」
「・・・・」
「君は自らの命をかけてでも、何か目的があって、この星に残ったのではないか？・・・・そう、例えば・・・・この星の秘密とか？」
「っ!?」
　自分の考えと行動がこの男には見抜かれている・・・・サーシアはビクッと体を震わせて、いつでも逃げられる体勢をとる。
　しかし、自分の背後にはロベルがおり、逃げるに逃げられない。
　もし、このジェレミアとか言う男がスカルダートやサーダに自分の目的を告げたら、自分の行動が、何もかもパァになる。
　なんとかこの場を切り抜けなければ・・・・
「ふむ、どうやら図星みたいだね・・・・？まぁ、そこまで警戒する必要は

ない・・・私もそろそろこの星には飽きた・・・この星の技術は十分に堪能し、学んだ。そろそろ別の星の技術を見てみたくてね・・・」
「あなたはこの星の人間ではないのですか？」
ジェレミアの口調から、彼はまるでこの星の人間ではないかの様に言う。
「まぁ、信じるか信じないかは君の勝手だが、私はここの星の人間ではないし、ロベルも半分この星の人間ではない」
「半分？」
「ロベルは私が生み出した人造生命体だ。そしてその元となったのが、あのサーダとか言う女性と私のＤＮＡ情報だ」
「・・・」
当然、人造生命体なんて言われて、本当にそんなものを生み出せるのかと思いつつも、科学技術が地球よりも進んでいるこの星の技術ならばそれも可能かもしれない。
「それで、話を戻すが、君はこの星の秘密を彼らに伝える為に敢えてこの星に残った・・・それでいいのかい？」
「は、はい」
「そうか・・・となると、君は彼が見せたあの映像を信じていない・・・と言うことだね」
「はい。あのヤマトが沈むなんて信じられませんから」
「だろうね・・・私も実際にこの目で見たわけではないが、この星の連中が集めたヤマトなる艦の活躍を見れば、確かにあの艦がそう簡単に沈むとは思えない」
ジェレミアもサーシアと同じ考えの様なのだが、サーシアは悩んでいた。
信じてもいいのだろうか？
このジェレミアと言う胡散臭い男を・・・
しかし、この男は自分の目的を完全に見抜いている。
もし、彼の言っている事が本当で、彼が自分の味方になってくれれば・・・

この星の構造を知っている人物が味方になってくれれば自分にとってかなり心強い。
それに彼は、自分が知りたいこの星の秘密を知っているようだ。
そこで、サーシアはもう少し、このジェレミアと言う男を見極めることにした。

モニターにはこの星の沖合にて、停泊しているヤマトの姿が映し出されている。
サーシアはその姿を見て、
(私はもう、二度とヤマトに戻ることは出来ないかもしれない・・・・)
(でも、サーシアは自分の命を懸けてでもこの星の秘密を暴いてみせます・・・・)
(さようなら、ヤマト・・・・さようなら、お父様・・・・)
(さようなら、叔父様・・・・さようなら、ユリーシャ・・・・)
サーシアはジェレミアとロベルが居る手前、泣くことは出来ずに涙をグッとこらえてモニターに映るヤマトを見ていた。
地表から戻った上陸用舟艇を収容したヤマトはしばしの間、静観していたが、やがて、艦首を反転させる。
まほろば　や　春藍の他の艦艇もヤマトに続いて、艦首を反転させて、この星から遠ざかっていく。
サーシアがヤマトら地球艦隊の行動をモニターで見ていたように、サーダとスカルダートも同じようにモニターで地球艦隊の行動を見ていた。
「聖総統、どうやら連中は本気で地球へと戻るつもりのようです」
「フフフ・・・愚かな連中め・・・このまま無事に地球へ帰れると思っておるのか?・・・・いいだろう。あの映像通り・・・・未来の歴史通りに沈めてくれる!!一隻たりとも逃してはならぬぞ!!」
「はっ、すでにサーグラス率いる艦隊はすでに出撃を終えております」
「よろしい・・・・さて、どうあがくかな?地球人」
スカルダートは映画かテレビでスポーツ観戦でもするかのように地球艦隊とサーグラス艦隊の戦闘の成り行きを見ることにした。

そのサーグラス艦隊旗艦の無限β砲搭載超弩級、グロテーズの艦橋では、
「地球艦隊・・・貴様らに受けてきた数々の屈辱!!・・・そして、貴様らによって死んでいった同胞たちの仇!!ついに恨みを晴らす時が来たぞ!!」
艦長席では、ようやく完成したばかりの新鋭艦の手によって、ヤマトを・・・地球艦隊を撃滅する機会がようやく訪れたと血気盛んなサーグラスの姿があった。
「全艦、戦闘準備!!目標、地球艦隊!!いいか、聖総統閣下のご期待に沿えぬような戦いだけはするな!!」
スカルダートは、なるべくならば無駄な戦闘をせずに・・楽に地球艦隊を降伏させて、地球の艦船を手に入れたかったが、武人であるサーグラスは、地球艦隊がスカルダートの策に嵌まり、降伏してしまう展開を望んではいなかった。
もし、地球艦隊がスカルダートの策に騙されて、降伏してしまっては親友（グロータス）を始めとする大勢の同胞の仇を討つ機会を永久に失ってしまう。
しかし、地球艦隊の乗員たちも自分と同じ一流の武人。
不敬かもしれないが、彼らがスカルダートの策に嵌まるはずがないと思っていた。
そして、自分の予想通り、彼らはスカルダートの策には嵌まらず、こうして自分の前に存在している。
武人としてサーグラスには嬉しかった。
これで堂々と地球艦隊と戦える。
これまでの戦いでは、連中に自分たちの本星の位置を突き止めさせないようにという制限があったが、この戦いではそんな制限はない。
この戦いはまさに生か死かの戦い・・・・
武人としてこれほど、血がたぎり、興奮することはない。
（この戦い、ワシのすべてをぶつけるぞ・・・貴様らも命をかけて挑んで来い!!）
サーグラスはモニターに映る地球艦隊の姿を睨みつけていた。

百十九話　行動開始

２００年後の地球とされる暗黒星団帝国本星から自分たちの知る地球へ帰還することを決めた地球艦隊。
サーシアを残しての出航は心苦しいが、守も古代もサーシア一人よりも地球にいる大勢の人々を選んだのだ。
しかし、暗黒星団帝国も地球艦隊をやすやすと地球に還す訳もなく、追っ手を差し向けた。
それは、地球艦隊・・・ヤマトに親友や大勢の同胞の敵討ちの執念を燃やしているサーグラスだった。
地球艦隊にサーグラス率いる新鋭艦隊が迫っている中、２００年後の地球とされる星に残ったサーシアは現地にて、ジェレミア・ゴットバルトと名乗る紫色の髪に白衣を着たなんとも胡散臭い男性とロベルと名乗る感情が薄い女性と出会った。
そして、ジェレミアはサーシアにこの星の秘密を教えると言ってきた。
正直、この男の言うことも１００％信用できないが、この広い星を一人で敵に怪しまれずに調査をするなんて無理がある。
それもヤマトが近くに居る間に・・・・
だからこそ、サーシアはこのジェレミアから話を聞くことにした。
「では、教えようこの星の秘密を・・・・」
「は、はい」
「結論から言うと、この星は君たちの故郷の星・・・地球ではない。当然、２００年後の地球と言う話も嘘だ」
「やっぱり・・・・」
ジェレミアはこの２００年後の地球とされる星は地球でもなければ、２００年後の地球でもないことをサーシアに告げる。
「この星の外装、宮殿の通路にあった美術品、全ては彼らが地球のデータを基に作った偽物さ」
「じゃあ、あの映像も・・・・」

「すべては作り物だ」
「なんで彼らはそんなモノを・・・・あなたは彼らの目的を知っていますか？」
サーシアはスカルダート・・・・暗黒星団帝国の目的をジェレミアは知っているかを訊ねる。
地球人類のみをいつでも抹殺することができるハイペロン爆弾を地球に打ち込んでいながら、彼らはその爆弾を起爆させる気配がない。
現地で占領軍がパルチザンと派手にドンパチやり合っているのに・・・・
パルチザンが目障りならば、ハイペロン爆弾を起爆させれば一気にカタがつく筈だ。
一体彼らは何の目的で地球にハイペロン爆弾を打ち込んだのか？
あんな兵器を地球へ打ち込むのであるならば、何か目的があるはずだ。
「ああ、知っている・・・・」
すると、ジェレミアは彼らの目的を知っていると言う。
「彼らは一体何の目的があって、地球へハイペロン爆弾を打ち込んだんですか？」
「君は確かスカルダート閣下やサーダ君と出会ったね？」
「は、はい」
「彼らを見てどう思った？」
「えっ？」
サーシアはジェレミアの言う言葉の意味がよく分からない。
確かにスカルダートの第一印象はジェレミア同様、胡散臭い男、サーダの方は妖艶というか怪しい雰囲気がある女で、見た目だけでは地球人と同じ肌の色をしており、雰囲気以外では別に怪しいところはなかった。
「まぁ、戸惑うのも無理はない。彼らの外見は君たち地球人とそっくりに見えただろうからね」
ジェレミアは当然、サーシアが地球人とイスカンダル人のハーフだ

なんて分かるわけもないので、彼はサーシアが地球人だと思っていた。
　そして、ジェレミアの言葉はまるでスカルダートとサーダが人間ではないかの様に聞こえた。
「あ、あの・・・・」
「なんだい？」
「貴方の話から、まるでスカルダートやサーダが人間の様に聞こえないのですが・・・・」
　サーシアはジェレミアに自分が抱いた疑問を投げかける。
「ふむ、彼らはその外見は人間だが、血が通っているのは、頭だけ・・・・身体は機械なんだよ」
「えっ!?」
　ジェレミアから語られた暗黒星団帝国の人々の正体に驚愕するサーシア。
「じゃあ、貴方も・・・・」
　サーシアはジェレミアも頭部のみは生身の体で、あとの身体は機械かと思ったが、
「あっ、一つ訂正させてもらうと、私はそもそもこの星の人間ではない。ある目的でここへ連れてこられただけに過ぎない。もっとも、純粋な人間ではないと言う点においては私も彼らとご同類なのかもしれないがね・・・・」
「ある目的・・・・それはこの星の人と何か関係が・・・・？それに同類って・・・・？」
「それを踏まえて教えよう」
　ジェレミアはサーシアに自分の事を含めたこの星の秘密を語る。
　まず、ジェレミアについて・・・・
　彼は本人が言うように、本来はこの星の人間ではなく、別の星からある目的でこの星に連れてこられたのだと言う。
　そして、ジェレミアが言ったこの星の人間とご同類と言う意味・・・・
　それは、元々彼は、ここに連れてこられる前の星にて、ある技術で生み出された人造人間だった。

作られた目的は、その星の治安維持組織が法律で禁止している違法行為の研究・開発。
そして、彼を生み出したのはその治安維持組織のトップだった・・・
生まれた当初、彼は何の疑問もなく言われたことを行い、自らを生み出した治安維持組織から広域指名手配を受けながらも研究と開発を続けていた。
指名手配をしたのがその星の治安維持組織であるのだから、彼は絶対に捕まることはなかった。
しかし、長年の研究生活でだんだんと知恵をつけてきた彼は、このまま治安維持組織のスケープゴート生活を続けることに嫌気がさし、自由と独立、そして今まで自分をスケープゴートにしてきた治安維持組織への復讐のため、自身が生み出した戦闘機人と呼ばれる人造人間と発掘した古代の兵器を使い、治安維持組織に対して独立戦争を挑むも敗北した。
敗北後、治安維持組織の人間は組織の発展のために自分の知識を貸せと司法取引を持ちかけてきた。
彼らの司法取引に対して、配下の戦闘機人たち内、半数以上が治安維持組織からの司法取引に乗ったが、自分と残りの四人の戦闘機人たちは司法取引を受けずに刑務所へと収監された。
その後、刑務所に収監されていた自分はミヨーズと呼ばれるこの暗黒星団帝国の大佐に刑務所から連れ出されてこの星に来た。
何故、自分がこの暗黒星団帝国に連れてこられたのか？
それは自分が元居た星で行っていた研究とこの星の人間の事情に関係していた。
自分は主に生物・クローン培養技術を研究してきた。
元居た世界ではクローン研究など、生命・生物に関する研究・開発を法律で禁止していた。
しかし、自らを生みだしたその治安維持組織は、その禁止された方法でジェレミアを生み出し、彼をスケープゴートにすることで違法な研究をさせていた。
その結果、彼は人造魔導師製造計画「プロジェクトF」なるクロー

ン培養技術の理論を生み出した。
　そのクローン培養技術に目をつけたのは例の治安維持組織だけでなく、この暗黒星団帝国も同じだった。
　暗黒星団帝国がジェレミアを収監されていた刑務所から連れ出した理由について、彼はサーシアに伝える。
「先程、言ったようにこの星の住人・・・・あのスカルダート閣下を含めて、首から下の身体は機械の身体だ・・・・その理由は、どうもこの星は科学技術、機械文明が発達しすぎて、脳みそさえあれば、あとは強靭な生命体であると結論づけた結果、あの様な機械の身体になったのだよ・・・・」
「・・・・」
　ジェレミアはそう言うと、証拠と言わんばかりにこの星の住人のレントゲン写真をサーシアに見せる。
　すると、確かに彼の言う通り、首から下の身体の部分には本来の生物にはない機械の部品がふんだんに使用されていた。
　いくら暗黒星団帝国が宇宙人とは言え、ここまで身体に金属の部品らしきものがあれば、『元々こんな身体で生まれてきました』なんて事は通じない。
　使われていた機械の部品はそれこそ、戦闘機人以上の数の機械部品が使用されていた。
「しかし、いくら優れた頭脳や科学技術・機械文明を持っても、生物として・・・・人として、種を後世に残すことは難しかった・・・・それもそうさね、機械の身体同士では、交配なんてできないからねぇ～」
「・・・・」
　ジェレミアの言う『交配』と言う言葉を聞いて、サーシアは思わず頬を染める。
「生物として当然、交配が出来なければ、後世に種を残すことは出来ない」
（交配、交配って、女性の前でそんな恥ずかしい単語をおくびもなく連発しないでよ・・・・聞いているこっちが恥ずかしいじゃない!!）
　この場には自分の他にロベルも居るのであるが、ジェレミアは平然

とサーシアに恥ずかしい単語を述べている。
まぁ、彼自身が恋愛なんて興味ないし、もしかしたらこれでも彼なりにオブラートに包んだのかもしれない。
そうでなければ、『交配』の部分を世間一般で知られている言葉、『セッ〇ス』とでも言っていただろう。
サーシアは恥ずかしいと思う反面、ロベルの方は、そう言った知識の方は持ち合わせていないためか、何故サーシアが顔を赤らめているのか理解不能と言った感じだった。
「だからこそ、彼らは新しい体を欲したのさ・・・機械の体ではなく、純正の血肉がある身体をね・・・」
「・・・」
「君はここに来るまでの間に、通路にあった培養槽を見ただろう？」
「は、はい」
「あれは、私が用意したこの星の住人のための新しい身体さ」
「新たらしい身体・・・あれが・・・」
ジェレミアの言う通り、サーシアはロベルにここまで案内してもらうまでに沢山の培養槽とその中に居た人の姿を見てきた。
はじめはコールドスリープ装置か別の星で拉致された人々かと思っていたのだが、ジェレミアの話からどうやら異なるようだ。
「そう、あれは私が一から培養して生成したクローン体だ」
「それなら、何故暗黒星団帝国は地球を狙ったんですか？貴方が彼らに新しい身体を提供できる筈なのに・・・？」
「ふむ、君の疑問は最もだ・・・」
サーシアの言う通り、ジェレミアの研究・・・クローン培養技術があれば、この星の住人の問題である種の保存には何ら問題はない筈で地球にわざわざハイペロン爆弾を打ち込む必要なんてない筈だ。
「彼らは確かに私にこの星の住人のための新たな身体の生産を頼んできた。しかし、どうもこの星の上級国民はなにかと贅沢でね、クローンなどと言う養殖な身体ではなく、天然物・・・その星で育った純正の肉体が欲しいみたいでね」
「なっ!?」

ジェレミアの言葉に思わず絶句するサーシア。
知的生命体・・・人間であれば、獣以上に欲が存在する。
それはこの暗黒星団帝国の人間も例外ではないのだろう。
しかし、ジェレミアの研究で暗黒星団帝国の問題は既に解決しているにもかかわらず、彼らはそれ以上のモノを求めていた。
サーシアにとって、父や叔父の故郷である地球を滅茶苦茶にしなくてもいい筈なのに、新しい身体欲しさに地球を滅茶苦茶にした暗黒星団帝国の行いに怒りが湧いてくる。
「さて、これで、君が知りたかったこの星の秘密は終わりだ」
ジェレミアの彼自身の出生やこの星に連れてこられた経緯はともかく、この星の秘密については信憑性があった。
「っ!?」
ここまでジェレミアの話を聞いて、サーシアはあることに気づく。
(ちょっと、待って・・・ここが２００年後の地球ではないことであるならば、地球に打ち込まれたハイペロン爆弾を起爆させてもなんら問題はない筈・・・それにあの映像が作り物なら、ヤマトは地球へ帰れる可能性が十分にある・いいえ、お父様や叔父様がいるんですもの、絶対に地球へ帰れるわ)
(でも、それをスカルダートに知られてはまずい・・・)
(せっかくこの星の秘密を知ることが出来たのに・・・)
(問題は地球に打ち込まれたハイペロン爆弾ね・・・)
サーシアはヤマトを地球へ無事に帰すにはやはり、地球に打ち込まれたハイペロン爆弾がネックであるので、なんとかハイペロン爆弾の起爆装置を破壊しなければならないという結論に至る。
「あ、あの・・・」
「なんだい?」
「貴方は、地球に打ち込まれたハイペロン爆弾の起爆装置の解除方法を知っていますか?」
サーシアは次いでジェレミアにハイペロン爆弾の起爆装置の解除方法を知っているかを訊ねた。
この星の秘密を知っている人物だ。

きっと、ハイペロン爆弾の起爆装置の解除方法も知っている筈だ。
「まぁ、知っていると言えば知っている」
やはり、ジェレミアはハイペロン爆弾の起爆装置の解除方法を知っていた。
「では、その方法を教えてください!!」
サーシアはジェレミアにハイペロン爆弾の起爆装置の解除方法を教えてくれと頼む。
すると、
「まぁ、教えてもいいが、その代わりに条件がある」
ジェレミアはハイペロン爆弾の起爆装置の解除方法に関しては教える代わりにサーシアに条件を提示してきた。
「な、なんでしょう・・・・?」
サーシアは、ジェレミアが出す条件にやや警戒する。
先程の種についての話からまさか、自分と関係を持ちたいなんて条件を打ち出すかもしれない。
「君の髪の毛を一本貰いたい・・・・もちろん、毛根がついた状態のモノをね・・・・」
「えっ?」
てっきり、エッチな条件を出すかと思ったら、ジェレミアは自分の髪の毛が一本欲しいという。
それもそれで、変な条件だが、髪の毛一本で、ハイペロン爆弾の起爆装置の解除方法を知ることが出来るのであれば、十分に安い。
ジェレミアはサーシアが、地球人だと思っていたが、マッドサイエンティストとしての勘が継げていたのだ。
目の前の娘はただの地球人ではないと・・・・
だからこそ、ジェレミアはサーシアのＤＮＡ情報を確保したかったのだ。
ここまで案内する時にロベルにも頼んだが、ＤＮＡ情報を得る機会がなかったが、ハイペロン爆弾の起爆装置の解除方法を教える見返りに堂々と彼女のＤＮＡ情報を得る機会を得た。
「わ、わかりました」

「それともう一つ・・・・」
「まだなにか？」
「私とロベルをここから連れ出すのを手伝ってほしい」
　ジェレミアはサーシアの髪の毛の他に自分とロベルをこの星から連れ出してほしいと言う。
「えっ？」
「君は、命を捨てる覚悟でこの星に残ったみたいだが、こうして私たちと会うことで、君は私たちの協力を得ることが出来た。ならば、無駄にその命を散らす必要もないのではないかい？」
「・・・・」
　ジェレミアの言う通り、彼とロベルの協力があればなんとか出来るだろう。
　しかし、今更どんな顔をしてヤマトに・・・・父親と叔父の前に出ればいいのだろう？
　あそこまで叔父に啖呵を切って・・・・
「まぁ、二つ目の条件に関しては、この作戦を成功させなければならないがね・・・・現状ではハイペロン爆弾の起爆装置の解除方法はまさに命をかけなければならないからねぇ～・・・・」
「それはどういうことですか？」
「説明しよう・・・・あの地球に打ち込まれたハイペロン爆弾は、その爆弾の機能と特性から、あの爆弾自体にある起爆装置と、この星にある起爆装置の両方を破壊ないし停止しなければならない二重構造になっている。よって、ハイペロン爆弾自体にある起爆装置を解除しただけでは何の意味もない」
「そんなっ!?」
「そして、もう一つの方法・・・・それは、この星もろとも破壊するしかない。この星自体を破壊してしまえば、起爆しないかもしれないが・・・・それでも懸念がある」
「懸念？」
「そうだ・・・・メインの起爆装置が破壊されたことで、サブであるハイペロン爆弾の起爆装置が働かないか・・・・だ・・・・」

「・・・・」
「この星を破壊せずに起爆装置だけを破壊してもこの星の住人がいれば、すぐに修理されてしまうので、意味がない・・・・ならば、この星の住人もとろも起爆装置を破壊するしかない」
「で、でも、この星を破壊すると言っても方法が・・・・」
「それならば、君が乗ってきたあのヤマトとか言う艦・・・・あの艦に搭載されている戦略砲をもってすれば、何とかなるだろう」
「戦略砲・・・・?ああ、波動砲のことね」
「あれは、波動砲と言うのかい?・・・・まぁ、今は名前なんてどうでもいい・・・・この星の外部装甲はその波動砲をもってしても決定的なダメージを与えることは不可能だが、内部の人口中心都市へ打ち込めば、簡単にこの星は自己崩壊する・・・・どうもこの星のエネルギーは、君たちの使用しているエネルギーと相性が悪いようだからね」
(波動融合反応のことね・・・・)
　あのゴルバとの戦いで、真田が提唱した説はやはり正しく、それはこの星も例外なく波動融合反応が起きるようだ。
　地球人の肉体を欲しがる事、以外にも暗黒星団帝国が地球を恐れる理由が波動砲なのだろう。
　だからこそ、暗黒星団帝国は地球へとやって来たのだ。
「でも、この星の外部装甲は波動砲でも破壊できないのでしょう?どうやってヤマトをこの星の内部へ?」
「先程言ったが、今、この星の外見は君たちを騙すため、地球そっくりのコーティングをしているが、その実はスカスカの空洞惑星になっている」
　ジェレミアはモニターにこの星の本当の姿を映し出してサーシアに教える。
「そして、南極と北極に大きな出入り口が存在している。まず、南極の入口を開けてヤマトを侵入させる。我々はその間にこの星にあるハイペロン爆弾の起爆装置を破壊して時間を稼ぎ、都市を脱出、ヤマトが中心部に来た時、ヤマトに避難、その後、波動砲を討ち、都市部を破壊、北極の出入り口から脱出するプランだ」

ジェレミアがこの星の破壊と脱出のプランをサーシアに伝える。
かなりリスクのあるプランであるが、元々命をかける気概でこの星に残ったのだから、それも覚悟の内だ。
ただ、自分が知りえたこの情報をなんとかして、ヤマトに伝えなければならない。
都市を破壊するにはヤマトの波動砲がどうしても不可欠だからである。

そのヤマトを含む地球艦隊は、地球への帰還行動に入っていたが、背後からは暗黒星団帝国の追手が迫っていた。
「急げ!!奴らが追ってきたぞ!!」
「応戦しますか?」
「いや、ここで時間を無駄に費やすわけにはいかない。振り切れ!!」
「了解!!」
敵艦隊の追走を受けつつ、地球艦隊はオーロラが輝く暗黒星雲の出入り口を目指す。
応戦準備とあんな歴史なんて信じないという決意があるが、やはり不安は隠せない。
それに今は一刻も早く地球へ戻らなければならない。
連続ワープで振り切りたいところであるが、敵の追走速度が思いのほか早く、ワープの準備をしている暇はなくなった。
敵艦隊は地球艦隊の周囲を取り囲むように展開し始めた。
典型的な狩猟陣形である。
しかも、地球艦隊の前方にも敵影を捕捉した。
「前方に敵反応!!」
「くそっ、やはり待ち伏せもしていたか!!」
「前方、三十宇宙キロに大型艦反応!!これまでにないエネルギー質量…敵の新型戦艦です!!」
「応戦準備!」
「応戦準備よし!!」
地球艦隊は地球を目指すため、前方の艦隊を撃破して追走してくる

敵を振り切るつもりだった。

グロデーズ　艦橋

「フハハハハハ・・・まっていたぞ!!」

グロテーズの艦橋にて、サーグラスは、モニターに映るヤマトを見て拳をギュッと握り、不敵な笑みを浮かべる。

周りは友軍が地球艦隊を包囲し、前方にはこの新鋭戦艦、グロデーズ。

既に地球艦隊は暗黒星団帝国本星の位置を突き止めたため、航跡を気にしての撤退なんて、しなくてもいい。

いや、スカルダートはこの戦いを本星にてモニターで見ている筈。

敗北は許されないし、サーグラス自身も負ける気はなかったし、絶対の自信があった。

「全艦、攻撃準備!!」

「全艦、攻撃準備」

やがて、攻撃準備が整うと・・・・

「全艦、攻撃準備完了!!」

「攻撃開始!!」

「攻撃開始!!」

サーグラス艦隊からはもう攻撃が始まり、いくつものビームが地球艦隊へと襲い掛かる。

ズガーン!!ズガガーン!!

「急速反転!!応戦せよ!!」

「了解、急速反転!!」

「砲撃開始!!」

地球艦隊はサーグラス艦隊に応戦する。

しかし、数が多ければ今まで戦ってきた暗黒星団帝国の艦船と異なり、攻撃力も防御力も高い。

地球艦隊は次々と被弾していく。

「第一砲塔損傷!!」

「右舷、ミサイル発射口損傷!!」
「艦載機発進口損傷!!」
「格納庫で火災発生!!応急班と医療班は至急現場へ急行せよ!!」
　艦橋には次々と被害報告が入り、各パートのチーフは被害状況と応急処置の指揮でてんてこ舞いとなる。
　被弾するたびに艦橋でもその衝撃と振動が伝わってくる。
「ぐっ・・・やはり、これが運命なのか・・・?」
「未来は・・・歴史はやっぱり、変えられないのか・・・?」
「情けない事を言うな!!まだ、我々は死んでないぞ!!」
　良馬は弱音を吐く者たちを叱咤激励したが、やはり歴史は・・・運命は・・・未来は変えられないのだという悲壮感が環境にも漂い始めていた。

　サーグラス艦隊と戦いつつ、新見は違和感を払拭出来ずにいた。
(あの地球がもし、２００年後の地球だとして、いったいどうやってあの様な専制君主が生まれたの?)
(やはり、暗黒星団帝国が地球を占拠したせい?)
(でも、何かがおかしい・・・何かが間違っている・・・)
(妙な違和感がある・・・)
　新見の中で何かどう間違っているのか、明確に答えは出せないし、出ないのだが、何かが間違っているのだ。
　彼女が顎に手を当てた時、
(考える人・・・そうよ!!考える人だわ!!)
　新見は戦闘中だが、アナライザーがあの宮殿でカメラに収めた映像と　まほろば　のメインコンピューターに保存されている考える人の画像データを見比べる。
　すると、あの宮殿にあったロダンの考える人の銅像は左手を顎に当てているが、まほろば　のメインコンピューターに保存されている考える人の画像は右手を顎に当てている。
「艦長!!」
「どうした?副長」

「考える人が変なんです!!」
「考える人？」
「はい。アナライザーが宮殿にあった美術品を撮影した時から妙な違和感があったのですが、今、分かりました!!これを見てください」
　新見はモニターに宮殿にあった考える人とメインコンピューターに保存されている考える人の画像を映し出す。
「見てください、本物は右手を顎に当てているのですが、あの宮殿の銅像は左手を顎に当てているんです。おそらく、贋作を作る際、顎に当てる手を間違えたのでしょう」
「それって・・・・」
「つまり・・・・」
「あの星は２００年後の地球なんかじゃないってことよ」
　新見があの星が２００年後の地球ではないと正体を見破った時と同じくして、ヤマトでは、
「みんな、聞いてくれ!!相原が持って帰ってきたグラスや土を解析してみたんだが、大変な事がわかったぞ!!」
　相原があの星から失敬してきたグラスと土を解析した真田が解析結果を持ってきて、みんなにそれを伝える。
「なにか特殊な物質で出来ていたんですか？」
「それとも、やはりあの星は２００年後の地球だったんですか？」
「そうじゃない・・・まず、グラスの表面だが、指紋が検出できなかった・・・・」
「指紋？」
「そうだ。案内した女がお前たちに渡したようだな・・・それも素手で・・・・」
「えっ？ええ・・・・」
　アナライザーが録画した映像からもあの時、調査隊のメンバーにグラスを渡した際、サーダは手袋を脱いだ素手の状態で調査隊のメンバーにグラスを渡していた。
「奴らが２００年後の地球人であるならば、本当ならグラスに指紋がつく筈だ」

「しかし、暗黒星団帝国に占領され、それから２００年経ったとなると、地球人と暗黒星団帝国の人間との交わりでそう言った人類が生まれるのでは？」
「そうだな、その可能性もある・・・だから、次に俺は土とグラスの鉱物組成を調べてみたのだが・・・その二つはいずれも解析できんのだ」
「どういうことです？」
「グラスや土を構成しているのは、地球上・・・いや、銀河系に存在していない物質なんだ」
　いくら２００年経ち、地球人類と暗黒星団帝国の人間との間に生まれた人類が指紋のない人類が生まれたとしても、地球の鉱物そのものが、銀河系に存在しない鉱物組成に変換するなんてありえない。
「なっ!?」
「!?」
「しかも、両方ともヤマトの波動エンジン出力の上昇に合わせ、熱を持って反応し始めた・・・おそらく、グラスも土も、あの星のすべては、例の波動融合反応物質で出来ているんだ・・・」
「つまり、どういうことなんだ？」
「・・・あの星は２００年後の地球ではないし、スカルダートもサーダも地球人類ではないと言うことだ・・・」
「それじゃあ、あの未来の映像は・・・？あれには古代の顔と声がありましたよ」
「そうです・・・あれは確かに、俺の声と顔でした」
「子供だましの作り物だ!!あの宮殿の廊下にあった美術品もな!!・・・以前、敵のロボットが、ヤマトに侵入した時、直接戦ったのは古代、お前だろう？」
「は、はい」
「あの時に声紋パターンとお前の顔の画像が取られており、本国・つまり、あの星へデータを転送したのであれば、納得がいくだろう。そうでなくとも、占領した地球のデータベースを調べれば、お前の顔写真くらい簡単に入手できる」
「あのロボット、そんなことを・・・」

「映像も、声も、歴史も・・・あの星そのものが地球に似せられて作られた偽物だったんだ!!」
「じゃあ、ヤマトは・・・・」
「・・・沈まないんだ!!」
「では、太陽系の崩壊という話も・・・すべて・・・・」
「奴らの作り話だ」
「くそっ、人を騙しやがって!!おかしいと思ったんですよ。ヤマトが沈むなんて・・・・」
　絶望から一転、希望へと変わる。
　その時、まほろば　から通信が送られ、新見が気づいた考える人の件であの星が２００年後の地球ではない可能性が高い事が伝えられると、ヤマトも、まほろば　と　春藍に真田の分析結果が伝えられ、あの星が２００年後の地球ではない事が証明された。
「しかし、何故敵はこんな手の込んだことを・・・・」
「敵は我々を恐れているのかもしれない・・・考えてもみろ・・・あの星が２００年後の地球で、我々が滅びる未来まで知っていたというのならば、敵はどうしてここまで確執に攻撃してくるんだ？」
「敵はどうあっても、我々を倒すか拿捕したい・・・・」
　これまでの敵の攻撃で暗黒星団帝国は、地球艦隊の撃沈はもとより、ヤマトを拿捕したいという思いから、あのロボットを送り込んできた。
　しかし、ここである問題が生じる。
「ちょっと、待ってください!!あの星が２００年後の地球ではないとなると・・・・」
「そうだ・・・あのスカルダートとかいう奴が、言ったこともすべて嘘だとすれば・・・・」
「地球に打ち込まれた重核子爆弾の話も嘘になる・・・・」
「それなら、あの重核子爆弾の起爆装置を破壊することができるかもしれない」
「だが、その反面、現状で地球人類を絶滅させても連中にとっては何の影響もなくなる・・・・」

「となると、奴らは・・・」
「地球に打ち込んだ重核子爆弾を起爆させるかもしれない・・・」
「急いで、あの星にある起爆装置を破壊しなくては・・・」
未だに地球人類が人質になっている事実に直面する。
スカルダートは重核子爆弾の解除は不可能だと言うが、彼が言っていることが全て嘘であるならば、爆弾の解除も可能と言うことになる。
だが、急いで爆弾の起爆装置を破壊しなければ、スカルダートは重核子爆弾を起爆させて地球人類を絶滅に追い込む可能性も出てきた。
「艦長!!」
「うむ、これで、ますます敵に背を向けるわけにはいかない」
「艦を反転させろ!!急いで敵本星に戻るぞ!!」
「了解、コースターン!!目標、敵母星!!」
地球艦隊は１８０度旋回して、地球への帰還コースからもう一度、敵の母星へと戻り始める。
「サーシアが残ったのは、あの星が地球ではないことに気づいていたからなんだ・・・」
「でも、それなら、どうしてサーシアはそのことを教えてくれなったのでしょう?」
「我々があの時にあの星の秘密について知ろうと知らなかろうと、サーシアはきっとあの星に残っただろう・・・我々を巻き込まないために・・・」
「・・・サーシア、待っていろ・・・すぐに迎えに行くからな」
地球艦隊が反転したことで、サーグラスは、
「ぬぅ～逃がすか!!ヤマトぉ!!包囲艦隊はこのまま奴らを追撃しろ!!本艦は小ワープにてヤマトの前に立ちふさがる!!このまま奴らを聖総統閣下のお膝元に近づける訳にはいかん!!」
「了解」
グロデーズは小ワープをして、母星の前・・・地球艦隊の前に移動する。
サーグラスの他に地球艦隊の行動は敵の本星・デザリアム星でも

捕捉していた。
「地球艦隊は転進し、そのままこちらに向かっております。聖総統、奴らは我々の芝居に気づいたのでは・・・？」
「・・・」
地球に戻っていったはずの地球艦隊が突然転進して自分たちのところへと戻ってくる。
降伏するために戻ってくるような連中でないことは先程、宮殿で出会って分かっている。
それに降伏するのであれば、宮殿であの映像を見せた時に降伏している。
ならば、何故連中はこの星に戻ってきた？
それはこの星が彼らの故郷・・・地球ではないことに連中が気づいたためではないだろうか？
「どうなさいますか？この星系の鉱物祖型が全て奴らの波動砲に脆いと言うことが奴らにバレれば・・・」
「心配は無用だ、サーダ・・・サーグラスには新兵器、無限β砲搭載艦を与えた・・・いくら連中の波動砲が強力でも、我が帝国の技術の結晶である無限β砲にはかなうまいて・・・フフフフ・・・」
スカルダートにとってこの星が偽物だとバレるのはすでに織り込み済みであり、まだ彼には余裕があったのだ。
しかし、後々にその余裕が焦りと変わるのはそう時間がかからなかった。

地球艦隊がスカルダートの策を見破り、敵の母星へと反転し戻ってきたのは、スカルダートの他にジェレミアとサーシアも知ることとなった。
「ヤマトが・・・」
「ふむ、どうやら、彼らはスカルダート閣下の策を見破ったみたいだね」
サーグラス同様、ヤマトが降伏しに戻ってきたのだとはとても思えず、地球艦隊が戻ってきたのは、この星が２００年後の地球ではない

ことを突き止めたから戻ってきたのだと判断したサーシアとジェレミア。
「さて、では迎えも来たようだし、こちらもそろそろ行動を開始しようか？」
　ジェレミアはデスクから暗黒星団帝国の兵士が使用している拳銃を取り出しサーシアに手渡す。
「銃？」
「ここから先は、ドンパチ賑やかになるからね。丸腰ではキツイだろう？」
「あ、ありがとうございます」
　ロベルもサーシア同様、暗黒星団帝国の兵士が使用しているビームライフルを手に持つ。
　しかし、ジェレミアは丸腰だ。
「貴方は武器を持たないんですか？」
　サーシアはジェレミアに武器は持たないのかと訊ねる。
「もともと私は科学者で戦闘能力は皆無だし、銃を撃っても当たるか分からない。下手に撃って、君やロベルを撃ったりしたら、大変だろう？」
「そ、そうですね」
（それって、足手まとい・・・お荷物ってことになるんじゃあ・・・）
　サーシアは自ら戦力外通告をするジェレミアはこの先の作戦でお荷物になるのではないかと思った。
「ご安心を・・・ドクターにはわたくしが、指一本触れさせません」
　無表情ながらもロベルからはやる気の様なものを感じた。
「では、まず何とかしてヤマトと連絡をつけよう・・・スカルダート閣下に逆探知をされてはかなわないから、ダミー情報を流す・・・ただし、そのダミー情報の構築にはちょっと時間がかかるがね・・・」
　ジェレミアはまず、この星の現状とハイペロン爆弾の起爆装置についての情報をヤマトに伝えるため、ヤマトとコンタクトを取ろうとするが、スカルダートに通信システムを逆探知されては自分たちの行動がバレてしまう。

そうなれば、この星の秘密をヤマトに・・・父親や叔父たちに伝えることが出来ないし、この星にあるハイペロン爆弾の起爆装置を破壊することが出来ない。
その為、ジェレミアはヤマトとコンタクトをとる前に通信システムがスカルダートたちに逆探知出来ないようにダミー情報を構築し始める。
これだけ、機械文明が発達した星のコンピューターを欺くわけなのだから、流石のジェレミアでも、ダミー情報の構築には時間もかかるし、そのダミー情報もそう長くは連中を騙すことは出来ないだろう。

ジェレミア＆サーシア＆ロベルたち・・・
そして、ハイペロン爆弾が打ち込まれた地球・・・
すべては時間との勝負となった。

百二十話　決着

２００年後の地球とされる星はやはり、２００年後の地球ではなかった。
全ては地球艦隊の乗員たちを騙す暗黒星団帝国の策略だった。
しかし、それを看破した地球艦隊は、地球に打ち込まれたハイペロン爆弾の起爆装置を破壊するため、２００年後の地球・・・いや、暗黒星団帝国の本星へと引き返す。
それを追撃してくる暗黒星団帝国が誇る猛将、サーグラス大将が率いるサーグラス艦隊。
地球艦隊と暗黒星団帝国・・・今まさに最後の戦いが始まろうとしていた。
敵は前衛に高速の駆逐艦、護衛を突撃させてくる。
そして、周辺のアステロイドには狙撃戦艦を潜ませている。
対する地球艦隊は横一線にならんで、対処する。
まほろば、ヤマトからはコスモタイガーが発進し、アステロイド帯に潜んでいる狙撃戦艦の対処へと当たる。
「高速推進ポット点火!!一気に距離を詰めるぞ!!」
狙撃戦艦のピンポイント攻撃が来る前に一気に狙撃戦艦へと接近して屠る。
「見えた!!敵、狙撃戦艦だ!!全機、強化ミサイルハッチ開口!!攻撃開始!!」
狙撃戦艦へ一気に距離をつめたコスモタイガー隊は強化ミサイルで狙撃戦艦を攻撃する。
アステロイド帯ごと敵艦隊をふっとばしてやりたいところだが、近くには暗黒星団帝国の本星があり、波動融合反応が気になるので、波動砲は使用できない。
前衛の敵はそれぞれ左右から接近してくる。
中央のヤマトと雪風・改は砲門をそれぞれ左右に向け、左舷側には、まほろば、ファルシオン。

右舷側には、春藍とハルバードが展開して敵を迎え撃つ。
前衛を撃破突破すると、次に現れたのは巡洋艦部隊。
更にアステロイド帯にはまたもや狙撃戦艦が控えていた。
「くそっ、また狙撃戦艦か!!」
「馬鹿の一つ覚えみたいに同じ手を繰り出しやがって!!」
確かに前衛と中堅・・・駆逐艦・護衛艦か巡洋艦の違いはあるが、アステロイド帯に狙撃戦艦を控えているのは確かに馬鹿の一つ覚えっぽい戦略配置である。
(確かに馬鹿の一つ覚えだが、敵がこんな作戦をとるだろうか?)
(それに、気になるのは一番後方に控えているあの戦艦・・・)
「通信長」
「はい」
「ヤマトと春藍に打電。進撃ペースを落とすように伝えてくれ」
「は、はい。でも、どうしてですか?」
「あの一番後ろに居る戦艦の存在が気がかりなんだ・・・・」
ガトランティスとの土星圏で繰り広げた攻防戦・・・
あの時もガトランティスの艦隊旗艦はこれまで戦ってきたガトランティス艦艇と異なる形状をしていた。
そして、その艦はワープによって絶対回避不可能である転移砲を使い、地球艦隊を大いに苦しめた。
あの艦もこれまで戦ってきた暗黒星団帝国の艦艇とは異なり、プレアデス級よりもデカい。
それに艦隊の他の艦がこうして地球艦隊と戦っている間、沈黙を保ち続けている。
その巨体だけで存在感を遺憾なく発揮しているが、旗艦がただの置物ってことはない。
あの艦もガトランティスの火炎直撃砲搭載艦の様になにか切り札である兵器を持っている筈だ。
良馬の予想は当たっており、

グロデーズ　艦橋

「敵艦隊、前衛を突破し、第二ラインへと接近!!」
「よし、無限β砲、発射用意!!」
「無限β砲、発射準備!!」
サーグラスがグロデーズの切り札でもある無限β砲の発射命令を下す。
すると、艦首の装甲板の一部が開き、その中からは、二つの巨大な大砲が姿を現す。
「エネルギーチャージ完了!!」
「フフフ・・・ヤマトめ、見るがいい・・・これが我が帝国が誇る無限β砲の威力だ!!無限β砲発射!!」
グロデーズの艦首の大砲からはオレンジ色の高出力のエネルギー砲が発射された。

「なんだ!?あの兵器は!?」
「それになんて威力だ・・・」
「おそらく波動砲と同じ粒子砲だ・・・エネルギー組成は我々の波動砲とは異なるようだが・・・しかし、威力に関しては波動砲と同等かそれ以上の威力なのかもしれない・・・」
「あと少し進んでいたら、ヤバかった・・・」
地球艦隊は無限β砲の射程ギリギリの圏外に居たので、くらうことはなかったが、グロデーズ周辺のアステロイドは完全に消滅しており、その威力は波動砲と同じがそれ以上の威力があることを物語っていた。
「やっぱり、切り札を持っていたか・・・」
以前、ゴルバと同じα砲を搭載した砲艦の様な艦が居たが、どうやらあの砲艦はあの大型戦艦の建造のための実験艦だったのだろう。

グロデーズ　艦橋
「ヤマトはどうした!?」
「・・・健在です」
「なにっ!?どういうことだ!?」

「敵は無限β砲着弾前に速度を落としていたようです。そのため、ヤマトはギリギリで無限β砲の射程外に居た模様です」
「くぅ～・・・・あと少しだったものを・・・・」
サーグラスは歯をギリギリと噛みしめて悔しがる。
「無限β砲、次弾発射準備!!」
「はっ、無限β砲エネルギーの再充填を開始します!!」
グロデーズは無限β砲を再度撃つための準備に取り掛かる。

「ほぉ～まさか、あの新造艦の切り札がこれ程の威力とはねぇ～・・・・」
「・・・・」
暗黒星団帝国本星の近海で地球艦隊とサーグラス艦隊がドンパチしている中、ジェレミアとサーシアは、ロベルが運転するエアーカーで地表よりも奥深くを目指していた。
もし、地球艦隊の流れ弾がこの星に命中すれば、波動融合反応でこの星の表面を覆っている地球に見せかけているシートが燃えるからだ。
スカルダートやサーダもこの戦いが始まってから既に地表にあった宮殿から退避している。
ジェレミアとサーシアは退避の過程で、地球艦隊とサーグラス艦隊との戦いをタブレット端末で見ていた。
ジェレミア自身もまさかグロデーズの無限β砲があれほどの威力があるとは予想外だった。
「これはもしかして、ヤマトも苦戦するんじゃないかい？」
ジェレミアは、隣の座席に座るサーシアをチラッと見ながら訊ねる。
「・・・・大丈夫です・・ヤマトは・・・・お父様と叔父様は勝ちます」
例え相手が強力な粒子砲を装備した戦艦であっても、サーシアはやはり、ヤマトの勝利を信じていた。
ジェレミア自身も口には出さないが、ここはヤマト・・地球艦隊には勝ってもらいたかった。
折角、この星から脱出する機会が来て、なおかつ、それは自分の知

る地球よりも科学・技術力が発達した世界・・・
確かにこの暗黒星団帝国よりは劣るかもしれないが、それでもすべての技術が劣っているとは限らない。
少なくとも管理局よりはあのヤマトが属する地球の科学・技術力は上だろうし、この暗黒星団帝国にはない技術もあるはずだ。
無限の欲望としてはその技術力も見てみたいと言う欲があった。

「どうします？敵はあの位置からは動いていませんが、かなり厄介ですよ」
「くそっ、波動砲が使えたら、あんな奴、吹っ飛ばしてやるのに・・・」
「しかし、あの粒子砲もかなりのエネルギーを消費するはずだ。あの粒子砲も連射は出来ないはずだ。奴がエネルギーを充填中に懐深く入り込んで仕留めるしかない」
火炎直撃砲と異なり、水蒸気爆発を狙って敵の砲を破壊することは出来ない。
しかし、火炎直撃砲や波動砲と同じように一発撃った後、次の発射までエネルギーを充填しなくてはならない。
敵があの場から動いていないのは、砲撃とエネルギーの充填を優先しているのだろう。
だが、あの戦艦以外にもまだ敵の艦船が存在している。
「相原、まほろばの月村艦長と春藍の山南艦長に通信を繋いでくれ」
「はい」
守は良馬と山南に通信を繋ぐ。
「山南艦長、月村。ヤマトはこれより敵旗艦の撃滅に向かいます。敵旗艦撃破までの間、援護をお願いします」
「うむ、承知した」
「了解です」
ヤマトはグロデーズの撃破を目指し、グロデーズが無限β砲のエネルギーを充填している最中に、肉薄するためバーニアを吹かしてグロデーズを目指していく。
雪風・改は、まほろば　と行動を共にし、サーグラス艦隊の相手を

する。

グロデーズ　艦橋

「ヤマト接近してきます!!」

「フハハハハハ・・・・これは飛んで火にいる何とやらだな・・・・無限β砲、次弾発射準備急げ!!」

「はっ!!」

ヤマト　第一艦橋

「超高密度のエネルギー反応!!敵の粒子砲、来ますっ!!」

グロデーズの無限β砲の発射準備はヤマトでも観測できた。

「島っ!!全速回避だっ!!」

「了解!!」

島は操舵桿を右に思いっきり切る。

すると、グロデーズから無限β砲が発射される。

グロデーズから発射された無限β砲はヤマトの艦尾を掠めた。

「か、回避・・成功・・・・」

「今のは、なんとか避けられたが、この状態ではジリ貧になるかもしれない!!早めにカタをつけなければ、いずれは命中するかもしれないぞ!!」

プレアデス級を上回る大きさの新型艦であるが、当然プレアデス級にも採用されていた偏向型バリアを張っている筈だ。

故にショックカノンの様な光学兵器は役に立たない。

ダメージを与えられるのは、ミサイル、魚雷、砲弾による実弾攻撃だけだ。

ヤマトはミサイルと砲弾による実弾でグロデーズを攻撃する。

しかし・・・・

「敵反応、変化なし!!・・・・なんてこった!!」

「ダメージを・・・・与えていないのか!?」

プレアデス級ならば、これで少なからずダメージを与えられていた。

しかし、グロデーズは全くの無傷だった。
「そのようです!!・・・なんて分厚い装甲なんだ・・・!!」
「くっ、人が作ったモノであるならば、必ずどこかに弱点はあるはずだ!!」
このまま止まったら、無限β砲の餌食になるので、ヤマトはグロデーズの周辺を旋回しながら、実弾攻撃を繰り返す。
「真田さん、波動カートリッジ弾なら敵に決定的なダメージを与えられるんじゃないんですか!?」
波動砲は無理でも波動エネルギーを仕込んだ波動カートリッジ弾ならば、あの分厚い装甲でも突き破り破壊することが出来るかもしれなかった。
だが、
「波動カートリッジ弾はもうない・・・」
「えっ?」
「波動カートリッジ弾は試作品だったから、大量には作っていなかった・・・まほろば　や春藍にも分けたからな・・・」
この事態を突破することの出来るかもしれない波動カートリッジ弾は既に弾切れだった。
その間にもグロデーズは無限β砲のエネルギーチャージをしつつ、スラスターを吹かしながら回頭してヤマトを無限β砲で仕留めようとする。
ヤマトは必死に旋回してグロデーズの正面に追い付かれないようにする。
あれだけ分厚い装甲ではコスモタイガーの強化対艦ミサイルでも、致命傷を当たられるかも怪しい。
グロデーズはその巨体故か旋回する動きもヤマトよりも遅かった。
ヤマトとグロデーズが戦っている頃、まほろば　と　春藍はグロデーズ以外のサーグラス艦隊と交戦していた。
サーグラス自身がヤマトに対して執着していたので、他の艦艇と交戦している　まほろば　と　春藍に対して無限β砲を撃ちこんでくることはなかった。

交戦中の　まほろば　と　春藍に対して無限β砲を撃てば、味方の艦も巻き添えにしてしまう。
部下を大切にしているサーグラスは味方殺しまではしなかった
。
まほろば　と　春藍の前には空母が二隻、護衛艦が四隻の機動部隊。
空母なので、当然相手は艦載機を展開していた。
対艦戦を意識していた為か戦闘機の姿はなく、どれも爆撃機のみを展開している。
まほろば　と　春藍は、爆撃機の攻撃を受けながらもまずは、爆撃機の大元である空母へ攻撃をかける。
とはいえ、対空のパルスレーザー砲を連射しながら、敵爆撃機への攻撃と牽制は忘れない。
(ヤマトがあのデカブツを相手にしているが、早くこいつ等を片付けて援護に行きたいところだが、敵も死に物狂いで戦っているから、手こずるな・・・)
「砲雷長、空母は船体ではなく、なるべく飛行甲板を狙え」
「飛行甲板ですか?」
「そうだ。甲板には爆撃機が居る・・・そいつらに当てて誘爆を誘う」
「分かりました」
フェリシアは目を凝らして照準器を睨みながら、砲撃地点を敵空母の飛行甲板へと定める。
そして照準がロックされると、
「発射!!」
フェリシアは主砲の発射ボタンを押す。
すると、まほろばの第二主砲が火を吹き、敵空母の飛行甲板めがけてショックカノンが勢いよく向かって行く。
敵空母では、新たに爆撃機の発艦作業中だった為、まほろばから放たれたショックカノンが飛行甲板に命中した際は大惨事となった。
飛行甲板にて発進準備をしていた爆撃機は、ショックカノンが命中し爆発。

爆撃機に搭載されていたミサイルや爆弾、燃料に引火して大爆発を起こす。
衝撃と爆風の影響で、飛行甲板で作業中だった作業員は宇宙空間へと投げ飛ばされる。
爆撃機の爆発と引火はたちまち空母全体へと回り、たちまち火だるまとなり、空母は轟沈する。
空母の護衛をしていた護衛艦も空母の近くに居た為、空母の爆発の巻き添えになる。
残った空母も、まほろば　と　春藍の集中砲火を受け、轟沈した。
こうして、グロデーズを除くサーグラス艦隊は壊滅した。
「敵反応、一隻ヲ除イテ、スベテ消滅シマシタ」
サーシアの代わりにレーダー手の任務に就いているアナライザーがサーグラス艦隊の壊滅を報告する。
「あと一隻・・・あの化け物艦だけか・・・」
島は操舵桿を握りながらグロデーズを睨む。
「でも、どうします!?敵の装甲の厚さはケタ違いです!!エネルギー弾も実弾だって、貫通しませんよ!!」
ヤマトが無限β砲を回避しながらもグロデーズに攻撃を仕掛けてきたが、グロデーズの分厚い装甲の前に、グロデーズはかすり傷一つ負っていない。
地球艦隊全部の一斉攻撃を仕掛けても傷をつけられるか分からない。
もっとも波動カートリッジ弾があれば話は別だったが、既に全艦、波動カートリッジ弾は打ち尽くしていた。
自軍の艦隊の壊滅はサーグラスも知ることとなる。
「味方艦すべて撃破されました!!残っているのは本艦だけです!!」
「くぅ～忌々しい奴らめ・・・何としてでも彼奴等を撃破し、亡き戦友たちの無念を晴らすのだ!!」
サーグラスは無限β砲の威力から、命中さえすれば、ヤマトも地球艦隊も簡単に撃破できると考えていた。
それに、これまでのヤマトの攻撃を受けてもびくともしなかったこ

のグロデーズの装甲にも自信があった。
長期戦にもちこめば自分たちに分があると・・・
そこへ、
「サーグラス司令、本星より電文です」
「むっ？」
そこへ、暗黒星団帝国本星から通信文が送られてきた。
サーグラスが電文に目を通すと、サーグラス艦隊の壊滅は本星も確認していた。
その為、第二陣を送り込むまで、グロデーズは本星の援護へと回れと言う内容だった。
ここで地球艦隊との決着をつけたいところではあるが、敵はヤマト一隻ではない。
自分たちがヤマトを相手にしている間に他の地球艦が本星へと向かってしまうかもしれない。
ここは援軍が来るまでグロデーズ自らが本星の盾となり、地球艦隊に睨みを利かせなければならなかった。
「転進、回頭。本艦は本星の護衛に回る」
「了解」
グロデーズは一時戦線から後退した。
グロデーズの後退は当然、ヤマトでも探知できた。
「うーん・・・敵戦艦は母星の援護に回ったか・・・艦長、エネルギー充填の時間が十分あります。この隙に最大出力の波動砲で一気に撃滅しましょう」
真田がグロデーズの行動を見て、一気に波動砲でカタをつけようと提案する。
「しかし、真田さん・・・波動融合反応のことがあります。サーシアのいる敵本星への影響は？」
古代はもし、波動融合反応の影響でサーシアがまだいる敵本星が波動融合反応の影響で誘爆しないかを危惧する。
「どうなんだ？真田」
守もやはり、娘のことが心配なので、真田に波動融合反応の影響は

ないかを訊ねる。
「敵本星まではまだ距離がある・・・射軸を外しさえすれば、サーシアのいる敵本星には影響はないと思われます・・・」
グロデーズと敵本星との距離から真田は影響ないと判断する。
「よし・・・波動砲、発射準備だ!!波動砲への回路を開け!!」
真田の見解を聞いて守は波動砲の発射準備を命じる。
このままグロデーズを敵本星に近づけては波動砲での撃滅がより困難になるし、敵の援軍がくればそれはそれで厄介だ。
であるならば、グロデーズを撃破できるのはこのチャンスしかない。
「はいっ!!波動砲への回路を開きます!!総員、対ショック、対閃光準備!!」
「波動エンジン出力上昇・・・波動砲へバイパス接続・・・!!」
ヤマトで波動砲の発射準備が進められ、通信長の相原は、まほろばと　春藍に波動砲の発射をする旨を伝える。
「艦長、ヤマトが波動砲を撃つようです」
ギンガが相原からの通信を受け、それを良馬に伝える。
「波動砲をっ!?」
「大丈夫なんでしょうか?波動融合反応の影響は・・・」
「通信長、その点はどうなんだ?」
「ヤマトの真田副長の話では、敵艦と敵本星の距離から波動砲を撃っても敵本星に波動融合反応の問題はないそうです」
「そうか・・・では、こちらも対閃光防御。ヤマトの波動砲の閃光で目が潰れるぞ」
まほろばの艦橋員たちは閃光防止ゴーグルをかける。
「ターゲットスコープ、オープン!!」
古代の座席に波動砲の反射式照準器と発射トリガーが飛び出す。
「電影クロスゲージ、明度２０!目標、前方敵戦艦!!距離５０００!」
ヤマトが波動砲の発射準備をしているのはグロデーズからも確認できた。

「サーグラス司令!!ヤマトが!!」
「むっ!?」
ヤマトは艦首をこちらに向けており、その艦首にある波動砲の発射口が青白い光が集まり始めている。
「波動砲とやらで、一気にカタをつけようという魂胆だろうが・・・そうはいかんぞ!!貴様らの波動砲・・・そして、我々の無限β砲・・・!!どちらが勝つか、これで雌雄を決しようではないか!!無限β砲、発射準備!!」
「はっ、無限β砲発射準備!!」
グロデーズも後退する足を止めて、ヤマトに無限β砲の発射口を向け、エネルギーを充填する。

「古代さん!!敵巨大戦艦に高エネルギー反応!!例の粒子砲のチャージを始めたと思われます!!」
「・・・!!やる気か・・・!!」
ヤマトが波動砲の発射準備を進めているのをグロデーズが確認したのと同じように、ヤマトの方もグロデーズが無限β砲の発射準備を行っているのを確認した。
「シアーロック開放!!内圧限界へ!!・・・カウントダウン開始!!１０・・・９・・・８・・・７・・・」
南部がカウントダウンを始める。
一方、グロデーズも無限β砲の発射はカウントダウン段階へとなり、砲術員がカウントダウンをする。
「６・・・５・・・４・・・」
「３・・・２・・・」
ヤマトの艦首の波動砲発射口には青白い光が、グロデーズの無限β砲の発射口には二つのオレンジ色の光りが集まる。
「艦首、波動砲・・・」
「無限β砲・・・」
「「発射!!」」
ヤマトの波動砲とグロデーズの無限β砲が同じタイミングで発射

される。
　最大出力の波動砲の発射で猛烈な反動のショックが艦橋を揺さぶる。
　ヤマトから唸りを上げた波動砲の光の束とグロデーズから放たれたオレンジ色の光の束がぶつかり合う。
　しかし、元々暗黒星団帝国の鉱物組成が波動エネルギーと相性が悪いことから、ヤマトの波動砲はグロデーズの無限β砲を撃ち破り、グロデーズへと迫る。
「司令!!敵の波動砲が!!」
「か、回避!!」
「だ、ダメです!!間に合いません!!」
　サーグラスたちに波動砲の青白い光が迫ってくる。
　回避が間に合わないと分かっていても、グロデーズは左舷のスラスターを吹かして、波動砲の回避を試みる。
　しかし、回避が間に合わない事実は変わりなく、ヤマトの波動砲はグロデーズの左舷の船体をえぐるかの様に命中する。
「ぐわぁぁぁぁー!!」
　グロデーズは誘爆を繰り返しながら、暗黒星団帝国の本星へと墜落していく。
　コントロールが既に効かないグロデーズは針路を変えることなく、暗黒星団帝国の本星へと墜ちていく。
「あっ!!」
「敵戦艦が!!」
　全員が思わず息をのんだ。
　一瞬の間をおいて暗黒星団帝国の本星が大爆発を起こす。
　地表にある地球を模した超近代都市は次々と爆発と火災の誘爆に巻き込まれ、積み木を崩すかの様に倒壊していく。
　海の水もあっという間に蒸発して無くなっていく・・・・
　空には稲妻が走り、それはまるでこの世の終わり・・・・地球の終わりの様な光景が広がっている。
　暗黒星団帝国の地下にある本当の都市部へと向かっていたサーシ

アはその光景をタブレット端末越しに見て思わずゾッとした。
しかし、地表の都市には誰も居ない無人の世界・・・
人的被害は無かった。
「ほぉ～まさか、あのサーグラス閣下までもが破れるとはねぇ～・・・」
（あの無限β砲とやらは、この帝国の最先端技術で作られたはずの兵器だった・・・それさえも、ヤマトは破った・・・やはり、あのヤマト・・・地球の技術は興味ある・・・ぜひともこの世界の地球を見てみたい・・・）
ジェレミアはサーグラスとヤマトの交戦を見て、ますますヤマトの故郷である地球へと行きたくなった。
「まぁ、ここまでは君の予想通りの展開となった・・・あとはヤマトに私が教えた情報を伝えてくれたまえ・・・顔を知らぬ私が話すよりは、向こうも信じてくれるだろう？」
「はい」
サーシアにとってもここからが正念場であった。

暗黒星団帝国本星の表面の崩壊はとどまることを知らず、まるで新聞紙に火をつけたかの様に広がっていき、星全体が炎に包まれた。
ヤマトの乗員はもちろん、地球艦隊の誰もがその光景を唖然とした表情で見ていた。
いや、見ているだけしかできなかった。
誘爆を繰り返しながら崩壊を続けているあの星の崩壊を停める術はない。
「敵の本星が・・・」
真田もまさか自分の予想よりも波動融合反応の影響がここまで大きいとは予測できなかった。
「ま、まさか、こんなことになるなんて・・・波動融合反応がこれほどの威力があるなんて・・・」
真田は自分の判断ミスに思わず頭を抱え込む。
だが、今になってもそれは全て手遅れだった。
「・・・」

守も唖然として崩壊していく暗黒星団帝国の本星の様子を見ている。
暗黒星団帝国の本星が崩壊していったのだから、地球は救われたのだと言う実感が全く沸かない。
あの様子ではとてもじゃないが、生きている人間なんて居るはずがない。
当然、あの星に残ったサーシアもあの爆発と崩壊に巻き込まれて落命してしまっただろう・・・
「あの星にはサーシアが・・・・サーシアが・・・・」
古代の脳裏に最後にあったサーシアの姿と言葉が蘇る。
こんなことならば、例え嫌われてもいい・・・・罵られてもいい・・・・
サーシアを強引にあの星から連れ出すべきだった。
あの星が２００年後の地球ではないことは相原が持ち帰ってグラスと土から分かる事実だったのだから・・・・
誰もが唖然としながらもサーシアの死を覚悟している中、まほろばの医務室でリニスと共に暗黒星団帝国の本星が崩壊していく様子を見ていたユリーシャは、
「・・・・生きている」
ポツリと呟く。
「えっ？」
原田は、ドキッとした様子でユリーシャを見て、
「だ、誰が生きているの？ユリーシャちゃん」
リニスがユリーシャに、さきほどユリーシャが言った言葉の意味を訊ねる。
「姉さま・・・・」
「えっ？姉さん？」
「ユリーシャさんの姉さんって・・・・でも・・・・」
原田が崩壊していく暗黒星団帝国の本星が映し出されているモニターを見る。
とても、あの状況で人が生きているなんて信じられない。
でも、ユリーシャはあの状況下でもユリーシャの姉・・・・サーシアは

生きていると言う。
ユリーシャの様子から決して現実逃避をしているようには見えない。
元々イスカンダル人には不思議な力がある。
だからこそ、ユリーシャが言っているようにサーシアは生きているのではないだろうか？
ガトランティス戦役の時も、都市帝国をヤマト、まほろば、さつまで、艦砲射撃で攻撃し、崩壊させた時もこれで終わったかと思ったら、中から漆黒の超巨大戦艦、ガトランティスが出てきた。
そうした経緯から、リニスはあれだけ高い技術力を持ち、地球を占領した暗黒星団帝国本星がこうも簡単に崩壊するとは考えにくかった。
「ユリーシャちゃんがそう言うからには戦いはまだ続きそうですね…原田さん、引き続き医療体制はこのまま維持してください」
「は、はい」
戸惑いながらも原田は薬や包帯などの応急処置に必要な医療品を用意した。
そして、リニスはユリーシャと共にモニターを見た。
リニスが思っていたことは、本当は地球艦隊の誰もが予測していた可能性でもあったのだが、あの星のサーシアが残っていた事と崩壊していく様子から、てっきりサーシアはあの星と運命を共にして、これで地球は救われたのかと思った。
古代が悲しみを押し殺して、崩壊していく暗黒星団帝国本星を見ていると、どういう現象なのか、大爆発の中から苦悶する魔女や醜い顔の老婆の顔のようなモノが浮かんでは消え、やがて、惑星全体が白色の大閃光に包まれた。
その閃光が薄れていくと、暗黒星団帝国本星は地殻の土壌、岩層が吹っ飛び、その残骸の中から異様な形の物体が浮かび上がってきた。
それは、中心部から無数の蜘蛛の巣みたいに巨大なパイプが突き出たメカニックな球体が姿を現した。

暗黒星団帝国本星の至近距離で地球艦隊と暗黒星団帝国が激しい攻防戦をしている中、その暗黒星団帝国に占領下の地球では・・・
地球でも暗黒星団帝国の占領軍とパルチザンが激しい攻防戦をしている中、海鳴の月村邸から中嶋家に避難していたフェイトとヴィヴィオは、この戦いが終わったら、忍にバリアジャケットを改良してもらおうと考えていた。
使用する生地も、ヤマトを始めとする地球防衛軍で採用している制服の生地で作ってもらおうとしていた。
「それで、ヴィヴィオはどんな感じのバリアジャケットがいいの？」
フェイトはヴィヴィオにどんなデザインのバリアジャケットがいいのかを訊ねる。
「うーん・・・子供の姿の時はなのはママのバリアジャケットと同じで、やっぱり大人モードの時は、カッコイイデザインがいい」
「大人モードの時、なのはママと同じバリアジャケットのデザインじゃなくてもいいの？」
フェイトはヴィヴィオに子供の姿の時、なのはと同じバリアジャケットのデザインであるなら、大人の姿の時も別になのはと同じバリアジャケットのデザインでもいいのではないかと聞くと、
「大人の姿であのバリアジャケットのデザインはちょっと・・・なんか、痛い大人に見える」
（・・・なのは・・・ヴィヴィオに痛い大人と思われているよ・・・）
知らなかったヴィヴィオの本音に対して、ミッドに居る親友を憐れむフェイト。
「じゃ、じゃあ、フェイトママと同じデザインはどうかな？」
次にフェイトは自分のバリアジャケットのデザインはどうかと聞くと、
「私の戦闘スタイルはフェイトママと違って、スピード戦じゃないから・・・」
「そ、そっか・・・」
戦闘スタイルの違いからヴィヴィオはフェイトのバリアジャケットのデザインをやんわり却下した。

そんなヴィヴィオの反応にちょっとシュンとするフェイト。
しかし、ヴィヴィオの本音は・・・
(あんな布の部分が少ない、バリアジャケットのデザインは嫌・・・なんか変態みたいだし・・・)
と、なのは以上に辛辣なヴィヴィオであったが、さすがに本人を前にしてそれは言わなかった。
紙に絵を描きながら、あーでもない、こうでもないとバリアジャケットのデザインを考案していると、
「二人ともなにやっているんですか?」
そこへ、紅葉がやってきた。
「あっ、紅葉おねえちゃん」
「実は・・・」
フェイトが、紅葉に事情を説明する。
「なるほど、新しいバリアジャケットのデザインですか・・・それなら・・・」
と、紅葉は一旦部屋を出て、戻ってくると、沢山のファッション雑誌やゲーム、漫画・アニメの設定資料集を持ってきた。
「これを参考にするといいよ」
「こ、この本は?」
「ファッション誌は私たち女性陣が買ったやつで、アニメ・漫画の設定資料集は、忍さんや良馬さんが買ったやつです」
「へぇ~あの月村艦長が・・・」
フェイトは良馬の意外な趣味にちょっと驚いた。
忍がゲームやアニメ好きなのは、向こうの海鳴に居た頃から知っていたが、まさか良馬もアニメ好きな一面があったのは意外だったのだ。
ともあれ、フェイトとヴィヴィオは紅葉が持ってきたファッション誌や漫画・アニメの設定資料集を見て、新たなバリアジャケットのデザインを考案するのであった。
もちろん、そこには紅葉の姿もあり、魔導師つながりで、彼女もヴィヴィオとフェイトの新たなバリアジャケットのデザイン作りに協力

した。
地球が暗黒星団帝国の占領下と言う状況でもそこには普段と変わらない風景が存在していた。
一見それは現実逃避のようにも見えるが、彼女たちは信じていたのだろう。
宇宙の果てで戦っているヤマトと地球艦隊が暗黒星団帝国に勝利することを・・・
そして、地球で戦っているパルチザンたちの勝利も・・・

百二十一話　重核子爆弾占領作戦

ここで、時系列は少し過去に戻り、場面は宇宙から、地球へと変わる。

地球防衛軍司令部にて、暗黒星団帝国地球占領軍総司令官であるカザンを斃した日、カザンの銃撃を頬に受けたティアナが医務室で治療を終えて、医務室を出ると、通路では古野間が待っていた。

「古野間さん・・・・」

「よぉ、嬢ちゃん。傷の手当は済んだか？」

「はい」

「それじゃあ、付き合ってくれ」

「えっ？」

「一応、今回のことを藤堂長官に報告しなければならない。お前さんもこの件に関しては関係者だからな」

「はい」

ティアナと古野間がパルチザンの司令部へと行くと、北野が藤堂と話し込んでいた。

「長官、重核子爆弾の秘密はいつになったら、掴めるのでしょうか？我々は勢力を取り戻しつつありますが、肝心の重核子爆弾がある限りは・・・・」

北野の言う通り、これまでのパルチザンの活動で、占領軍の勢力は、地球占領当日と比べると格段に下がった。

戦車駐屯上への襲撃、武器集積所、新型戦車の開発プラントの破壊、そして、今日は占領軍総司令官であるカザンの殺害まで達成した。

しかし、あのハイペロン爆弾を占領、解体してこそ、ようやく地球の安全確保が出来る。

奴らがその気になれば、あのハイペロン爆弾を炸裂させ、地球人類を一瞬のうちに絶滅させられることが可能なのだ。

その脅威がある限り・・・・地球にあのハイペロン爆弾が存在している限り、決して安全ともいえず、また勝利とも言えない。

幸い、暗黒星団帝国は今のところ、あのハイペロン爆弾を起爆させる気配はない。
だが、いつ起爆させるのかも不明なので、早期のハイペロン爆弾の占領と起爆装置の解体が急務である。
「今はまだ、耐える時だ・・・すぐに勝機は訪れる」
藤堂はハイペロン爆弾の情報不足と言うこともあり、まだハイペロン爆弾への攻撃は避けるべきだと言う。
これまで、何度かハイペロン爆弾への攻撃を繰り返してきたが、ことごとく失敗している。
そんな中、通路の奥ではガヤガヤとパルチザンの兵士たちが騒ぎ始めた。
何があったのかと思っていると、通路から一人の女性が藤堂と北野の前に姿を見せた。
「雪だ!!」
「森雪だ!!」
「ホントだ!!」
「生きていたのか!?」
パルチザン本部の皆がざわつく中、雪は藤堂の前に歩み寄り、
「森雪、ただいま、帰還しました」
藤堂に敬礼し、戻ってきたことを報告する。
「雪・・・」
「連絡艇発進の際、負傷して地球に残り、敵に軟禁されておりましたが、完治しました。私もパルチザンとして、戦います」
「うむ、力を合わせて頑張ろう・・・」
「はい・・・あの、長官・・・ヤマトは・・・古代君は、無事だったそうですね?」
「うむ、君のおかげだ・・・だが、今は作戦上、通信を封鎖している。状況を知ることが出来ないが、ヤマトのことだ。今もきっと立派に戦ってくれていることだろう」
「はい、きっとそうですね」
「やはり、消息が分からないと不安かな?」

「いいえ、ヤマトが・・・古代君たちが負けることなんてありえません」
雪は、はっきりとした口調で藤堂に断言する。
そこには一切の迷いはなかった。
「うむ、私もそれを信じている」
「雪さん・・・・」
「北野君・・・元気そうでなによりだわ」
藤堂に報告した雪は北野に声をかける。
そこへ、古野間とティアナが合流する。
「あっ、アンタは・・・無事だったか・・・よかったぜ」
司令室で雪の姿を見た古野間は雪に声をかける。
「古野間さん・・・・」
(あっ、あの人は・・・・)
ティアナもイスカンダルから地球に戻る際、フェイトと共にヤマトに乗艦していたので、雪の事は当然知っていた。
(てっきり、ヤマトに乗っていると思っていたけど・・・・)
ティアナは雪が地球に居たことに意外性を感じていた。
ヤマトの乗員なのだから、てっきり、ヤマトに乗っていると思っていたからだ。
「あら?貴女は・・・・」
「どうも、お久しぶりです。雪さん」
雪もティアナに気づき、声をかけ、ティアナの方も雪に挨拶をする。
「どうして、ランスターさんがここに・・・・?」
「私もパルチザンの一員として戦っているんです」
「えっ?でも、貴女は・・・・」
「ええ、本来なら、地球とは関係ない人間ですが、地球が大変な時にそんなのは些細なことです。それに此処にいるのは、私自身の意志であり、強要された訳ではありませんから」
「でも・・・その傷は・・・・」
雪はティアナの左頬に貼られたガーゼを見て、ティアナが負傷したことに気づく。
「戦争ですからね、名誉の負傷の一つもしますし、私は気にしていませ

んから・・・それよりも雪さんは何故、地球に・・・？てっきり、ヤマトに乗っていると思っていました」
ティアナは雪を見た時の疑問を彼女本人に聞いてみた。
「私も戦闘に巻き込まれて、負傷してね・・・」
雪はティアナに何故、ヤマトに乗らず、地球に残っているのかを話す。
その後、雪もパルチザンのメンバーとして戦うことになった。
そして地球艦隊が、暗黒星団帝国本星の所在を突き止めた頃、地球でも動きがあった。
これまでの情報収集から、ハイペロン爆弾の周辺には強力なバリアが張られ、遠距離からの砲撃は無力化され、地上から攻め込んでもバリアとハイペロン爆弾の高所から敵兵の銃撃でたどり着くことが出来ない。
しかし、このハイペロン爆弾も暗黒星団帝国とはいえ、人類が制作したモノ・・・
完ぺきなモノではなく、死角は存在していた。
このハイペロン爆弾のバリアは地下までは伸びておらず、またバリアを張るにも一定の距離がある。
よって、ハイペロン爆弾の真下・・・地下から穴を掘って、ハイペロン爆弾の真下からならば、突入が出来そうだったのだ。
雪がパルチザンに合流した日からパルチザンはハイペロン爆弾の真下に続く地下トンネルを掘っていた。
レーザードリルで岩盤を削り、トンネルを掘っていた。
暗黒星団帝国占領軍・・・アルフォンもまさか、パルチザンが地下から迫ってくるとは予想しておらず、ハイペロン爆弾の周辺の地下に罠を張ることはなかった。
地下トンネルの掘削には雪、そしてティアナも参加していた。
二人とも、女だからといって特別扱いされるのを嫌っていたからだ。
占領軍からの妨害もなく、地下トンネルは順調に進み、あとは地上に出る穴を開けるだけのところまで来た。

そして、夜の闇に乗じてハイペロン爆弾占領作戦が実施されることになった。
勿論、陽動も行い、敵の目をかく乱する作戦も同時に行われることになった。
「みんな・・・よくここまで戦ってくれた」
ハイペロン爆弾占領作戦実施前に藤堂が作戦に参加するパルチザン全員に訓示を行う。
「これが最後の戦いとあるだろう。これより我々は重核子爆弾に突入し、起爆装置を解体する。では、作戦の概要を説明する・・・」
藤堂はハイペロン爆弾への突入メンバーと陽動部隊のメンバーの割り振りと各隊の作戦内容を伝える。
訓示が終わり、各隊のブリーフィングを行う。
「いつも通り、俺たちのコールはスペード1で頼むぜ」
「了解」
古野間、北野、ティアナの隊には雪も加わる。
「ダイヤ班、クラブ班各員は爆弾外周を固め、敵の援軍を防いでくれ。内部突入は、スペード班、ハート班が行う。ジョーカー班は敵施設の陽動を!!」
そして、作戦開始時刻となる。
突如、占領軍のパトロール戦車の駐屯地で爆発が起きる。
「ふもっふる!!」
「もふる」
パトロール戦車駐屯地に多数のボ〇太くんが襲い掛かる。
手にしたロケットランチャーでパトロール戦車を攻撃していく。
「うわぁぁぁぁぁぁぁ!!アイツラだ!!」
「あの未確認生物だ!!」
多数のボ〇太くん部隊による襲撃に恐れおののく占領軍の兵士たち。
「ひるむな!!」
「撃て!!撃て!!」
古参の下士官や士官は逃げ腰の兵士たちを叱咤したり、鼓舞する。

「撃て!!撃て!!ぐぁ・・・・」
兵士を叱咤している士官がボ〇太くんに狙撃される。
「うわぁぁ―!!」
恐慌状態の兵士たちが狂ったようにレーザー銃を撃つが、分厚い装甲のボ〇太くんに致命傷を与えることが出来ずに、ボ〇太くんは撃たれても平然とした様子で、兵士たちに自動突撃レーザー銃を撃ちながら、近づいてくる。
占領軍の兵士たちから見れば、化け物に見えた。
「こんな装備じゃ、連中に敵わない」
「だ、ダメだ!!逃げろ!!」
「待ってくれ!!」
戦意を喪失した兵士たちは次々と逃亡する。
パトロール戦車駐屯地の襲撃は、ハイペロン爆弾の内部に居るアルフォンの下にも入っていた。
「少尉!!パトロール戦車駐屯地が例の未確認生物の襲撃を受けています!!」
伝令の兵士がアルフォンにボ〇太くん部隊による、パトロール戦車駐屯地の襲撃を報告する。
「構わぬ・・・・」
「えっ？」
伝令の兵士はアルフォンのドライな反応に驚く。
「これもパルチザンの陽動だ・・・奴らの目的地はここだ・・・被害を免れた戦車と市街地をパトロールしている戦車に伝令・・・ただちに無事な戦車はこの地区に集結させろ」
「は、はい」
アルフォンは被害を免れたパトロール戦車をこのハイペロン爆弾のある地区へ終結させる命令を下す。
その頃、ハイペロン爆弾の近くの地下トンネルにはパルチザンのメンバーがひしめき合っていた。
これまで、北野、古野間と共に幾多の戦場を駆け抜けたティアナもコスモガンを握る手が小さく震えていた。

（もう、戦場には慣れたと思っていたのに・・・）
小さく震えるティアナの手に別の手が重ねられた。
「えっ？」
ティアナはその手の主を見ると、それは雪だった。
「大丈夫？緊張してない？」
「・・・していないと言えば嘘になります。これまで北野さんや古野間さんと戦かってきましたが、やっぱりなかなか慣れないものですね」
ティアナは無理矢理笑みを浮かべる。
「そうね・・・私だって怖いもの」
「雪さんも？」
「ええ・・・でも、ティアナさん。重要なのはその恐怖に飲み込まれないようにする事よ」
「・・・」
「逆に戦場に・・・人を殺すことに慣れてもダメ・・・矛盾しているようにも聞こえるけど、ただ人を殺すだけになっては、それはもう、人じゃなくて、獣か機械よ・・・私たちが戦うのは大切な人を守るため・・・それだけは忘れてはだめよ」
「はい・・・雪さんもやっぱり怖いですか？」
「もちろんよ・・・ほら・・・」
雪はティアナに自分の手を見せる。
彼女の手も自分同様、小さく震えていた。
自分よりも生死が関わる戦場を多く経験してきたはずの雪でさえ、こうして緊張している。
ティアナは周りを見渡す。
パルチザンには自分の様に民間人からの志願者も居る。
彼らも雪の言うように大切な人を守るため、パルチザンに志願してきたのだ。
この後、地球の今度の運命を左右する大規模な作戦が行われる。
これに失敗したら、パルチザンは壊滅的な被害を受ける。
それは地球人類の滅亡につながるかもしれない。
戦いと言うことで、味方の被害なしで作戦を完遂するのはほぼ不可

能だ。
管理局で経験したこれまでの戦闘とは異なり、この世界では生死をかけての戦いだ。
戦いが始まれば、今この場で生きている味方のパルチザンの何人かが死ぬ。
当然それは自分かもしれない。
「よし、行くぞ」
「了解!!」
「はい!!」
(ふぅ〜・・・・落ち着きなさい、ティアナ、雪さんも言っていたじゃない・・・・恐怖に呑まれちゃダメだって・・・・逆に飲み込んでやりなさい・・・・)
深呼吸して他のパルチザンと共にハイペロン爆弾占領のため、駆け出す。
パルチザンは地上につながる地面をくり抜き、その穴から次々と地表に出る。
アルフォン同様、まさかパルチザンが自分たちの足元に地下トンネルを掘っているとは思いもつかなかったハイペロン爆弾の警備兵たちは背後からパルチザンの襲撃を受ける。
パルチザンたちは敵兵士の背後からコスモガンや自動突撃レーザー銃を撃ち、大型手榴弾を投げ込む。
「ぐぁぁー!!」
「敵襲!!」
「うわぁぁぁー!!」
混乱する敵兵を撃つパルチザンの中に雪とティアナも必死に駆け込む。
ティアナも声を上げて、コスモガンを撃ちながらハイペロン爆弾へと迫る。
これまで遠目で見てきたがこうして近くで改めて見てみると、かなりデカい。
中央付近にはぐるりと回廊があり、敵の兵士たちが警戒している。

そのすぐ上からは伸縮自在のノズルがまるで、タコかイカの足の様に宙にうごめいて先端からレーザーを発射してくる。
ハイペロン爆弾は上に行くほど、細くなっており、無数のライトがまるで航海灯や航空障害灯の様に各所で点滅している。
もしかしたら、あの上部が起爆装置の回路があるのかもしれない。
「少尉!!敵襲です!!」
「・・・やはりきたか・・・しかし、彼らはどうやってバリアを突破してきたんだ?」
「そ、それが、パルチザンは地下を掘り進んできたようです」
「地下か・・・なるほど、地面の中までは、想定していなかったな・・・」
アルフォンはパルチザンの侵入経路を聞いて、思わずフッと自嘲の笑みが浮かぶ。
「少尉、味方の戦車部隊がようやく集結し、こちらへ向かっています」
「ふむ・・・バリアを解除したまえ」
「えっ?」
アルフォンはハイペロン爆弾の周りを覆っているバリアを解除しろという。
「し、しかし、それでは・・・」
「バリアがある限り、味方の戦車は近づけない。それに、既にバリア内に侵入されているのだ。もはや、バリアには何の意味もない」
「は、はい」
既に爆弾の至近距離にパルチザンに侵入されており、バリアは何の意味もない。
反対にバリアがある限り、味方の戦車は接近できない。
アルフォンは既に意味のなさないバリアを解除させた。
バリアが消えたことで、占領軍の戦車は難なく、ハイペロン爆弾の周りに向かってくる。
「敵戦車だ!!」
「対戦車バズーカを出せ!!」
陽動のボ○太くん部隊すべてがパトロール戦車を潰せるとは思ってはおらず、突入部隊はちゃんと対戦車装備も持っていた。

何度もこの戦車に悩まされたパルチザンはすぐに接近してくるパトロール戦車に向かって対戦車バズーカを放つ。
パルチザンの対戦車バズーカの攻撃を受け、占領軍のパトロール戦車群はたちまち残骸となり果てる。
しかし、多勢に無勢・・・
警備兵たちも体制を立て直し始め、反撃に移り始める。
そして、パルチザンにも犠牲が出始める。
しかし、いくら味方が斃れてもパルチザンたちは足を止めることはない。
今回の作戦で何としてでもハイペロン爆弾を占拠しなければならない。
「右に回れ!!」
「援護してくれ!!」
叫びながら攻撃し、戦場を駆け回るパルチザンたち。
銃声と爆音、パルチザンと占領軍のレーザーが飛び交う戦場に、パルチザンたちは自動噴射式の梯子を設置して、それを噴射する。
バシューン!!と音を立てて、梯子の先端は舞い上がり、ハイペロン爆弾の中間の回廊に突き刺さる。
梯子が設置されてパルチザンたちは次々と梯子を登り始める。
しかし、梯子を登っている最中は無防備になる。
そこを中間の回廊から警備兵の容赦ない銃撃がパルチザンたちを襲う。
一人、一人、とパルチザンたちは撃ち落されるが、それでも、パルチザンたちは恐れることなく、次々と梯子を登ってくる。
雪、ティアナも梯子を登り始める。
(こんな時、空戦属性があれば、簡単に侵入できるのに・・・)
(スバルやノーヴェのウィングロードやエアーライナーでも、いいわ・・・)
ティアナは梯子を登りながら、なのはやフェイトみたいに空戦属性があったり、スバルやノーヴェの固有魔法があれば、ここまで危険をおかさずハイペロン爆弾に侵入できると思いながら梯子を登る。

地上のパルチザンたちは突入部隊を掩護する。
梯子を登るパルチザンたちを銃撃、狙撃する警備兵たちは次々と撃ち倒され、パルチザンたちはようやく梯子を登り終えた。
しかし、これはまだ、第一関門を突破したに過ぎない。
作戦の完了まで、まだまだ道のりは遠い。
梯子を登り切った雪とティアナは、まだ梯子を登り切っていないパルチザンたちを援護するため、回廊にいる警備兵に対して、銃撃する。
そして、回廊に居る警備兵をあらかた斃し、梯子を登っていたパルチザンたちも梯子を登りきる。
「さて・・・行こうぜ・・・!!」
古野間も無事に梯子を登りきっており、雪とティアナに声をかける。
「「はい」」
古野間、北野、雪、ティアナはハイペロン爆弾の起爆装置を目指して内部へと突入する。
「アルフォン少尉!!敵が・・・・パルチザンが内部に侵入しました!!」
「表の戦車部隊はどうなった?」
「壊滅です!!」
「陽動の未確認生物の部隊により、奇襲を受け、すでに大半の戦車が使用不能となっていましたから・・・」
「・・・全警備兵を・・いや、部署に関わらず、兵士は全て武装し集結させ、パルチザンの迎撃に当たらせろ」
「はっ!!」
(いよいよ、我が占領軍も終焉の時が来たな・・・)
アルフォンはこの時点で、既に自軍の敗北を悟っていた。
(雪・・・私は此処にいる・・・君が倒すべき敵は此処にいるぞ!!)
そして、必ず自分の前に、自分を倒しに来るであろう女性を静かに待つことにした。
ハイペロン爆弾内部の通路を立ちはだかる警備兵を斃しながら進んで行くと、通路の途中で、パルチザンの兵士たちが通路の物陰に隠れており、進めていない状態に遭遇する。

「どうした？」
「自動狙撃銃座です!!三人ほどやられました・・・」
警備兵の他にちゃんと対侵入者用の警備システムが装備されていた。
「厄介ですね・・・」
自動狙撃銃座は部屋の上にレールが敷かれており、そのレールの上を通る仕掛けとなっていた。
「私が囮になるので、その隙に銃座を破壊してください」
ティアナが囮を買って出て、部屋の中に飛び込む。
すると、自動狙撃銃座はティアナを狙うが、銃撃してくると知っているので、部屋に入ると、ティアナはとっさに反復飛びの要領で、右に跳ぶ。
自動狙撃銃座は機械制御なので、ティアナのとっさの動きについていけず、ワンテンポ遅れる。
その隙に古野間、雪、北野が自動狙撃銃座に攻撃を加え、銃座を破壊する。
自動狙撃銃座を破壊し、再び進むパルチザンたち。
しかし、隔壁が閉じる。
その為、迂回を余儀なくされる。
迂回し、新たな侵入路へと進むと、一際大きな部屋に出る。
だが、広さとは打って変わって、そこには警備の兵士の姿は見えなかった。
「敵はいない様だな・・・」
古野間が部屋を見渡しても敵の警備兵の姿は見えない。
そんな中、雪が何気なく上を見上げると、そこには工作用のクレーンが動いており、そのアームを伸ばしてきた。
「上よ!!」
「なにっ!?」
雪の声に反応し、古野間、北野、ティアナは銃口を上に構え、伸びてくるクレーンのアームを銃撃し、アームを破壊する。
クレーンのアームを破壊し、上部を目指して進むパルチザンたち。

だが、上に上がるほど、警備兵の数が少なくなってきている印象を受け、反対に機械の警備システムが多くなっている。
占領軍もだんだんと追い詰められているのか？
通路の途中でバリケードを設置した箇所へと出る。
そこは、柱などの障害物が多い、部屋であり、古野間、ティアナが先程の自動狙撃銃座を破壊した時と同じく、囮として飛び出し、障害物を盾にバリケードに近づき、後ろからは雪、北野らの味方の援護射撃を受け、ながら、その部屋の警備兵たちを斃していく。
途中、斃した警備兵から奪った威力の高い、マシンガンやショットガンは突入したパルチザンたちの役に立った。
「アルフォンちゃん、とうとうバリケードも突破されたみたい・・・・」
アルフォンの直ぐ傍にはメイトリックがいた。
「そうですか・・・・」
「・・・・お別れの時が来たみたいね、アルフォンちゃん」
メイトリックはアルフォンに右手を差し出す。
「・・・・ご武運を・・・・大佐」
アルフォンはメイトリックと握手を交わす。
短い握手を交わした両者。
そして、メイトリックは部屋を出ていく。
ハイペロン爆弾内部に突入した雪、古野間、北野、ティアナはようやく爆弾の中心部に到着した。
「これが・・・・爆弾の中央シャフト・・・・」
起爆装置はこの中央シャフトの上だ。
「・・・・あっちに階段があります!!」
ティアナがこの中央シャフトを登る階段を見つける。
「登って行くしかないでしょうね・・・・」
起爆装置のある区画へたどり着くにはこの長い螺旋階段を登っていくしかない様だ。
しかし、
「やっぱりやって来たわね!!」
階段の登り口には、筋肉モリモリマッチョマンのオネエ口調の敵兵

士、メイトリックが居た。
（あの人はあの時の・・・）
　ティアナは一度、フェイトと共に市街地で見かけたあのオネエ口調の敵兵士だと気づく。
「ここから先は進ませないわよ～!!」
　そう言って、メイトリックは何を思ったのか、銃が入っている腰のホルスターを投げ捨て、ついで、マントと軍服の上着を脱ぎ、
「さあ、銃なんか捨てて、かかっていらっしゃい!!」
　ファイティングポーズをとる。
「さあ、いらっしゃい!!それとも怖いのかしら?」
　ティアナたちが唖然としている中、メイトリックはこちらを挑発してくる。
「な、何をしているのかしら?あの人は・・・」
「さあ?」
「決闘を望んでいるみたいにも見えますが・・・」
「どうします?」
「どうするって言っても・・・」
「一々、相手にもしていられません。ヘッドショットを決めて先に進みますか?」
　ティアナがヘッドショットを決めて、早々にメイトリックを斃して先に進むかと提案する。
「さあ、どうしたの?楽に殺しちゃあ、つまらないでしょう?私が苦しみもがいて、死んでいく様を見るのが望みだったんでしょう?」
（（（誰もそんなことを望んでいない!!））））
　メイトリックに対して心の中でツッコミを入れるティアナたち。
「楽しみをふいにしたくはないでしょう?さあ、いらっしゃい!!」
　正直、相手にはしてられないが、
「ここは、俺が行く・・・」
「えっ?」
「古野間さん?」
「アイツを斃したかったが、その権利はお前たちにやる・・・俺はアイ

ツで我慢するさ」
「な、何を言って・・・」
「アイツは、口調はあんなんでも、立派な戦士だ。目がそう言っている・・・戦士には戦士なりの戦いと死に場所を与えてやるのが礼儀だ」
「「・・・・」」
「俺がアイツを食い止めている間にお前たちは爆弾の起爆装置を破壊しろ・・・おそらく、その近くに、アイツが居る」
(アルフォン少尉の事ね・・・)
雪は古野間の言う『アイツ』に心当たりがあった。
ここまで来て、アルフォンの姿を見ていない。
彼は自分に「重核子爆弾で待っている」と言っていた。
アルフォンが居るのであれば、それは爆弾の最重要機密の近くだ。
雪がそう思っていると、古野間がメイトリックの前に出る。
「来たわね、地球の戦士・・・」
「占領軍の中にもお前さんの様な戦士が居るとはな・・・」
「さあ、行くわよ・・・」
「ああ、かかってきな」
古野間は人差し指をちょいちょいと動かす。
それが合図になったのか、両者は駆け出し、至近距離で、拳でぶつかり合う。
「ふんっ!」
「やぁぁ!」
古野間とメイトリックが殴り合っている隙を見て、雪、ティアナ、北野は中央シャフトの螺旋階段に向かって駆け出す。
「あっ、待ちなさい!!」
「どこ、見てんだよ!?お前の相手は俺だろうがぁ!?」
「ぐっ・・・ふんっ!!」
(ごめんなさい、アルフォンちゃん・・・一人しか足止めできなかったわ・・・でも、アルフォンちゃんは強い子だから大丈夫よね・・・?)
螺旋階段を上る雪たちを悔しそうに見つつ、アルフォンの勝利を信じ、メイトリックは目の前の敵に集中することにした。

螺旋階段を登り終えると、
（この先に居るのね・・・アルフォン少尉・・・）
中央シャフトのてっぺんの部屋・・・おそらく爆弾の起爆装置があると思われる部屋のドアを開けるとその部屋の中心には・・・
「あ、あれはっ!?新型歩行戦車!?」
「ど、どうして・・・工場は破壊したはずなのに・・・」
以前、生産プラントで破壊した例の新型歩行戦車が一機いた。
「量産された一号機の他に試作機が完成していたのよ」
雪が何故、新型歩行戦車が居るのかを説明する。
（それに乗っているのね・・・私が見える？）
（ここまで・・・ここまでやってきたわよ・・・アルフォン少尉・・・）
十中八九、あの新型歩行戦車に搭乗しているのはアルフォンだ。
雪にはそれが分かった。
「バラバラに散開して、攻撃を!!」
北野が雪とティアナに合図を送ると、三人はバラバラの方向に別れ、新型歩行戦車を攻撃する。
新型歩行戦車は縦横無尽に動き回り、搭載されていたレーザーを撃ち、ロケットランチャーを乱射する。
とはいえ、アルフォンは戦車兵ではなく、情報将校・・・
ある程度の陸戦の訓練と経験はあるが、戦車の操縦はやはり、それを専門とした戦車兵のものとは異なり、動きに無駄がある。
三脚戦車の弱点が足の付け根であるようにこの新型歩行戦車の弱点も同じで、ティアナはその精密射撃の腕を活かして、確実に新型歩行戦車の足の付け根を狙い撃つ。
やがて、足の付け根、レーザーの銃口を破壊され、新型歩行戦車は崩れるようにして、スクラップとなる。
「雪さん、下がって・・・」
「さあ、観念して出てきなさい」
北野とティアナが恐る恐る新型歩行戦車に近づくと、
バシュン!!バシュン!!
「ぐっ・・・」

「うわっ・・・」
まだかろうじていきていたレーザーの照射を受けて、ティアナは左肩を、北野は右肩を負傷する。
そして、レーザーの照射を受けたティアナはこの時、その衝撃で吹っ飛ばされ、手に持っていたコスモガンを手離してしまった。
「北野君!!ティアナさん!!」
「うぅ～・・・・」
「最後の最後で、油断をしてしまいました・・・・」
「喋らないで!!今、手当てを・・・・」
「ゆ、雪さん、逃げてください・・・・」
スクラップとなった新型歩行戦車のコックピットからは無傷のアルフォンが出てきた。
雪はコスモガンを構え、銃口をアルフォンに向けるが、銃身はカタカタと小さく震えていた。
「雪・・・私を撃てるか?・・・・私を倒すことが出来たら、その時こそ、重核子爆弾の秘密を教える・・・そう、言ったね・・・・」
「撃つんだ!!雪さん!!」
北野は雪にアルフォンを撃つように言うが、雪は未だに躊躇しているかのようだ。
「撃てまい・・・だが、私は君を見逃すわけにはいかない・・・撃つ・・・・」
アルフォンは銃を構え、その銃口を雪に向ける。
雪とアルフォンが銃を構えている中、ティアナはゆっくりと起き上がる。
「くっ・・・・雪さん・・・・」
(銃は・・・あそこ・・・起き上がって拾いに行っても間に合わない・・・・それなら・・・・)
ティアナは落としたコスモガンを拾うのではなく、もう一つの武器を使うことにした。
(このＡＭＡが充満している空気では魔法はうまく使えない・・・それでも確実に一発は撃たないと・・・ランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜くんだから・・・・)

ティアナはクロスミラージュを起動させ、アルフォンに銃口を向け、シュートバレットを撃ちこむ。
眼前の雪に集中していたアルフォンはまさか、別方向から攻撃が飛んでくるとは思わず、避ける間もなく、ティアナのシュートバレットを受けて倒れる。
「ぐあぁっ!!」
「アルフォン少尉!!」
雪は倒れたアルフォンに近づく。
ティアナのシュートバレットを受けた衝撃で、彼もまた手にしていた銃を落としていた。
「ぐっ・・・・うぅ・・・・」
非殺傷設定で撃ったことで、アルフォンは生きていた。
ティアナと北野は傷口を抑えながら、雪とアルフォンの傍による。
「ふっ・・・・結果はどうあれ、君の勝ちだ・・・・雪・・・・」
アルフォンは雪に自らの敗北を認めた。
「この銃・・・・エネルギーが空の状態よ・・・・」
「どういうことだ？」
ティアナはアルフォンが持っていた銃を拾い、マガジンを調べると、そのマガジンにはエネルギーが入っていなかった。
つまり、彼は雪に射殺されることを望んでいたようだった。
「私は決めていたのだ・・・・最後は愛した者に殺されると言うことを・・・・」
「なぜ、そんなことを・・・・？」
「雪・・・・私は君を愛していた・・・・そして、尊敬もしていた・・・・新たな生命を生み出すことのできる女性を・・・・どんな状態にあろうとも、ただ一人の男を想い続けることのできる君のことを・・・・そして、君に想われる古代と言う男を羨でいた・・・・だから、君が欲しかった・・・・浅はかな男だよ・・・・例え君を自分のものにできても私が望んだ本当のものは手に入れられないのに・・・・それならば、いっそ、私は君の思い出の中で永遠に生きたかった・・・・」
アルフォンは雪に自分を殺させることで、自分の存在を雪の中で忘

れない存在でいてもらいたかったみたいだ。
「ずいぶんと残酷なことをさせるのね」
ティアナはそんなアルフォンを冷めた目で見ていた。
もし、雪がアルフォンを射殺していれば、それは恩人を殺したと言う負の思い出だ。
そうやって雪の中に苦しめる思い出として彼女に永遠に忘れ去られないようにしたのだから・・・・
しかし、ティアナが非殺傷設定の魔力弾でアルフォンを倒したことで、その思惑は失敗に終わった。
「君たちとこうして直に会うのは二度目だな・・・・」
生産プラントでは物陰からティアナと北野を確認しただけなので、こうして互いに気づいて顔を合わせるのは政府要人奪還作戦の時を含めて今回で二回目だ。
「・・・やはり、地球人は素晴らしい・・・・なに事にも屈服せず、自由を信じて戦っている・・・・」
地球軍と自軍を比べて思わず自嘲をこぼすアルフォン。
「アルフォン少尉・・・・」
「わかっているよ・・・・約束通り、重核子爆弾の秘密を教えよう・・・・この爆弾は起爆装置だけを解体してもダメだ。かといって、本星にあるコントロール装置を破壊しても自動的に起爆装置が働いてしまう二重構造になっている。まず、ここの起爆装置を解体し、しかる後、本星のコントロール装置を破壊しなければならない。・・・・これが解体図だ」
アルフォンは雪にＵＳＢメモリーの様な記憶媒体を手渡す。
そこにはハイペロン爆弾の解体図が記録されていると言う。
ここまできて、アルフォンが嘘の情報を教えるとは雪には思えなかった。
ティアナと北野も自分たちは部外者なので、二人のやり取りに口を挟まなかった。
雪とアルフォンとの間に決着がついた頃、螺旋階段の下で繰り広げ

られていた古野間とメイトリックとの戦いにも決着がついた。
「てめぇはもう終わりだ！」
「ふざけやがってぇ!!」
「野郎、ぶっ殺してやぁぁる!!」
「フンッ!!」
古野間とメイトリックの拳がぶつかり合うクロスカウンターが決まり、やがて、グラッと、メイトリックの身体がドサッと床に倒れる。
「ハァ・・・・ハァ・・・・ハァ・・・・ふぅ～・・・・」
メイトリックを倒した古野間はその場に座りこむ。
「古野間さん!!大丈夫ですか?!」
そこに味方のパルチザン兵たちが駆け付ける。
「ああ、顔はボコボコだが、こうして生きている。俺は大丈夫だ。それよりも上に行って手伝ってやってくれ」
「は、はい」
パルチザンたちは螺旋階段を上がっていくが、数名はその場に残り、古野間の手当てを行った。
手当てを受けている最中、古野間は、
「そいつも生きている・・・できればそいつも治療してやってくれ」
「えっ？でも・・・・」
「そいつは敵ながらも勇敢な戦士だった・・・死なせるには惜しい奴だ・・・・」
「は、はい」
古野間の頼みを聞いて、意識を失い、床で大の字で倒れているメイトリックも治療を受けることとなった。
やがて、螺旋階段を登り切ったパルチザンたちは雪たちと合流し、北野とティアナの手当てを行い、アルフォンの身柄を抑えた。
そして、雪はパルチザンの兵士と共にアルフォンから教えてもらった解体図を頼りにハイペロン爆弾の起爆装置を解除した。
地上での戦闘に関しては、アルフォンが戦闘の終了を呼びかけ、戦闘が終わった。
ただ、地球の軌道上にはまだ占領軍の艦隊が存在していた。

その艦隊からの艦砲射撃を防ぐため、ハイペロン爆弾の周りには再びバリアが張られた。
占領軍は自軍のバリアを突破できずに、ハイペロン爆弾をパルチザンから奪還するにはこれまで、パルチザンの様に地上戦を行わなければならなくなった。
しかし、既に今の占領軍にそこまでの気概がある筈もなかった。
そしてこの日、パルチザンたちの悲願であるハイペロン爆弾の占領をようやくなしえたのだった。
これで、あとはヤマトが暗黒星団帝国本星にあるコントロール装置を破壊するだけとなった。

百二十二話　人工都市

ハイペロン爆弾がパルチザンの手によって、占拠され、地上における地球占領軍総司令官代理であるアルフォン、憲兵隊司令のメイトリックがパルチザンとの戦いによって、捕虜となる結果に地球の衛星軌道上に展開している占領軍司令部は大混乱となる。

地球に残っている艦隊の主力艦船は護衛艦、駆逐艦などの中、小の最低限の武装艦艇と大型の輸送船のみ・・・

司令部は護衛艦、駆逐艦でのハイペロン爆弾への艦砲射撃を検討したが、パルチザンは、占領軍の逆襲により、再びハイペロン爆弾が奪還されるのを防ぐために占拠したハイペロン爆弾のバリアを稼働させた。

ハイペロン爆弾のバリアは、かなり強力なもので、襲来当時、防衛軍が迎撃の為に放ったミサイルの軌道を変更させるほどの強力なバリアだった。

中、小艦艇の護衛艦、駆逐艦程度の砲撃能力ではとてもこの強力なバリアを破ることは出来ない。

そもそも、本星の許可なくハイペロン爆弾を攻撃して、起爆させて、地球人類を絶滅させることは現場の軍人たちの勝手な判断ではできない。

反対に、これらの大敗北の結果を本星に知らせるわけにもいかず、占領軍司令部は手詰まり状態だった。

また、地上の占領軍もハイペロン爆弾の占拠、アルフォン、メイトリック両司令官の捕虜の情報により、指揮系統はバラバラとなり、武装解除して投降する占領軍の部隊や兵士たちも続出するが、中には徹底的に抵抗する部隊もあったが、既に戦車も満足になく、抵抗する部隊や兵士たちはボ〇太くん部隊の手によって短期間で鎮圧された。

そして、占領軍の手によって、囚われの身となっていた地球連邦大統領をはじめとする地球連邦政府の高官、官僚らも無事に救出された。

大統領は藤堂からハイペロン爆弾の占拠の話を聞いたが、地球に対

してその解放宣言はまだ行わなかった。
ハイペロン爆弾の占拠には成功したが、起爆装置はまだ暗黒星団帝国の本星にもう一つある。
その起爆装置が存在している限りは下手に情報を世界に公開するわけにはいかなかった。
またヤマトら地球艦隊の動向がつかめず、暗黒星団帝国の本星の起爆装置の状況がどうなっているのか？
それらの情報を掴むまでは解放宣言を控えたのだ。
ハイペロン爆弾の占拠、指揮官らの捕虜や地上部隊の壊滅・・・・
これらの要素から、軌道上の司令部は地球圏からの撤退を決めた。
しかし、彼らはこのまま地球圏にとどまり、投降すれば、命は助かったのかもしれない。
ハイペロン爆弾の襲来時、太陽系における惑星や衛星にある防衛軍の主だった基地は壊滅したが、まほろば、春藍のように試験航海やパトロールに出ていた艦隊、ヤマトの様に密かに小惑星の基地に滞在してハイペロン爆弾の影響を免れた艦隊も存在していた。
彼らはハイペロン爆弾がある限り、地球への帰還は出来ず、またヤマトの様に敵本星の場所を探知することが出来ずに、シリウス恒星系、プロキオン恒星系に集結し、ジッと地球奪還の機会を伺っていた。
そして、地上におけるパルチザンがハイペロン爆弾の占拠に成功した情報を掴み、地球へと向かった。
地球奪還艦隊の中にはアンドロメダ級戦艦、二番艦のネメシスやパトロール艦の畝傍、渦潮、主力戦艦の薩摩らの姿もあった。
地球を目指している奪還艦隊は地球圏から退避しようとする占領軍司令部の艦隊と遭遇。
両艦隊は戦闘となるが、護衛艦、駆逐艦・・しかも最低限の数しかいなかった占領軍の艦隊は瞬く間に奪還艦隊の餌食となった。
地球にて、事態が好転した時、太陽系から遠く離れた二重銀河にある暗黒星団帝国本星、デザリアム星では・・・・
サーグラス艦隊を破るも、その残骸が地球そっくりな暗黒星団帝国

本星に降り注ぎ、星が崩壊していく。
唖然としながら、その光景を見ている地球艦隊の乗員たち・・・
あの星の残ったサーシアの生存が絶望的だと誰もがそう思った。
しかし、地球の姿にそっくりな星の下から機械で出来た星が出てきた。
「あ、あれは一体なんだ？」
「どういうことなんだ？」
「敵の本星が・・・」
地球にそっくりな暗黒星団帝国本星が崩壊した光景も衝撃的だったが、その星の下から新たな星らしきものが出現した。
この光景にも唖然とする地球艦隊の乗員たち。
そんな中、真田は冷静に自分の座席に座り新たに出現したあの機械の星の解析を行っていた。
「真田さん、あれは一体・・・」
古代が真田に訊ねると、ちょうど、解析が終わり、真田があの機械で出来た惑星について説明する。
「あれが敵の本体だ。地表は見かけの都市だったのだ。おそらくあの中心部の核から各パートにエネルギーを伝達しているんだ。あの巨大なパイプも中心部の装甲もこれまでの敵の装甲とことなり、未知の力場でコーティングされた超宇宙金属から成っていて、波動砲をもってしても決定的なダメージを与えることはできない」
「波動砲でさえ、ダメージを与えられないなんて・・・」
これまでの暗黒星団帝国の艦艇は波動融合反応によって誘爆することがあり、この周辺での戦闘では、その波動融合反応を気にして戦っていた。
しかし、暗黒星団帝国の本星はその波動融合反応を起こすこともなく、波動砲を撃っても無傷であると真田はそのような見解を下す。
暗黒星団帝国の艦船には波動エネルギーが有効な手立てだったのに、その切り札でもある波動砲は相手には効果がない。
艦橋内に重苦しい空気が漂う。
（敵を・・・暗黒星団帝国を倒さなければ、起爆装置を破壊しなければ

地球を救えない・・・）
（占領軍の手から地球を救うことは出来ないのか・・・？）
　地球艦隊ではパルチザンがハイペロン爆弾を占拠し、更には宇宙へ逃れた占領軍司令部が既に地球の残存艦隊により、殲滅されていることをまだ知らない。
「問題はあの中心部だ・・・この宙域を包むダイソン球殻状のガスから、あの中心部に向かって、ものすごいエネルギーが流れ込み続けている・・・十中八九、爆弾の起爆装置を含む、敵の司令中枢は、あそこにあると見ていいだろう・・・」
　敵の司令中枢・・・爆弾の起爆装置が置かれている箇所が分かってもそこを破壊すことが出来ない。
　地球艦隊の中で重苦しい空気が漂う中、そのデザリアム星では・・・
「ドクター、ダミー情報作成完了」
「よし、ではダミー情報を流してくれ」
「了解です」
「さっ・・・準備できたよ。ヤマトに現状を伝えてくれたまえ」
「はい」
　ロベルとジェレミアがデザリアム星の通信網にダミー情報を流して逆探知を妨害し、その間にサーシアが地球艦隊へ今、自分が置かれている現状とジェレミア立てた作戦を伝えるために通信を送る。
　地球艦隊のメインパネルにサーシアの姿が映りだす。
「サーシア!?サーシアがパネルに!!」
　メインパネルに映し出されたサーシアに太田が思わず声をあげる。
「周波数を同調させてきたのか・・・」
　通信担当の相原がどうやってデザリアム星にいるサーシアが地球艦隊に通信を送ってきたのかを言う。
　もちろん、この通信にはジェレミアロベルの協力があってこそだ。
「サーシア・・・」
　守も父親として、娘が無事だったことにホッとする。
「無事だったんだな・・・」
　叔父の古代も守と同じ反応だ。

（サーシア?･それがこの娘の本名か･･･）
　サーシアの傍には彼女以外の人物もおり、その人物は図らずもサーシアの本名を知ることとなった。
「みんな、まだよ!!ここまでは敵も予測していたらしく、この星の人は誰も傷ついていないわ」
　サーシアは、聖総統らデザリアム星側は、表面の偽物の地球がバレることも計算していたことを伝える。
「なんだって!?」
「この星の内部は空洞よ。内部空洞の中央には巨大な人工都市がある わ･･･暗黒星団帝国の中枢は全てそこに･･･もちろん、地球に打ち込まれた重核子爆弾の起爆装置もそこにあるわ。私が南極にあるパイプの出入口を開けるから、その隙に内部に突入して、人工都市に波動砲を撃ちこむのよ!!」
　サーシアはジェレミアが立てた作戦を地球艦隊に伝える。
「この星の中枢は、エネルギー炉も含めて、すべて波動融合物質･･･波動砲の波動エネルギーと都市中心部のエネルギーが融合すれば、星全体が自己崩壊するはずよ。波動砲を発射後は反対の北極のパイプから脱出して」
　サーシアの情報と真田の解析では、デザリアム星の外装は波動砲さえもダメージを与えることが出来ない装甲となっているが、内部は生物同様、波動砲には脆いみたいだ。
「波動融合反応･･･」
「それしかこの星を打ち破る方法はないわ･･･」
「待て、サーシア!!そんなことをしたら、今度こそ君は･･･」
　地球そっくりな地表を吹っ飛ばした時は、こうしてサーシアは無事だったが、今度はサーシアが居るデザリアム星の内部･･･人工中心都市部に波動砲を撃ちこめば、今度こそ、サーシアを殺してしまうことになる。
「･･･」
　サーシアはグッと唇をかみしめる。
　そこへ、

「あぁ～話の最中だが、いいかい？」
サーシアの隣には紫色の髪の毛、白衣を着た怪しい雰囲気の男が映し出される。
白衣の男、ジェレミアが会話に割り込んだのはこのままでは、脱出する前にここに波動砲を撃ちこまれてしまう恐れがあったからだ。
「あ、貴方は⁉」
突然見ず知らずの男が映し出されたことにギョッとする古代。
「私はジェレミア・ゴットバルト。彼女の協力者さ」
「協力者？」
敵中の中にサーシアの協力者と名乗るのだから、戸惑いは隠せない。
サーシアがジェレミアにもう一つの名を名乗っていたように、ジェレミアもサーシアに偽名を名乗っていた。
ギンガが管理局に居た頃、当時、管理局から広域指名手配をされていたジェイル・スカリエッティ・・・・彼の名前は当然知っていたが、顔までは知らなかった。
もし、ギンガが彼の顔も知っていたら、今パネルに映し出されたジェレミアと名乗る男の顔を見て、「もしかしたら・・・・」という思いがあったかもしれない。

「ほんとうなのかい？サーシア」
守はジェレミが本当に暗黒星団帝国の本星におけるサーシアの協力者なのかを訊ねる。
「ええ、本当です。お父様・・・・お二人の協力がなければこの短時間でこの星の秘密を知ることは出来ませんでした」
「何故、貴方はサーシアに協力を？貴方は暗黒星団帝国の人間ではないのですか？」
「詳しい説明は後にして、南極の出入口から侵入後、できればこちらに迎えの船を寄こしてくれると助かるのだが・・・・居場所についてはビーコン発生装置を起動させるので、そのビーコンを辿って迎えの船を突入させてくれ」

ジェレミアはヤマトに南極の出入口からは侵入した後、波動砲を撃つ前に自分たちを迎えに来る船を寄こしてから、波動砲を撃ってくれと言う。
たしかにそれなら、サーシアも無事だ。
「分かった」
「ただ、時間がないのは事実だ。聖総統閣下はいつ起爆装置のボタンを押すのかわからない。こちらでもなるべく時間は稼ぐ」
そう言ってデザリアム星からの通信は切れた。
「・・・サーシアは今の情報を得るために敵の星に残ったんだ・・・協力者を得たのはこちらでも意外だったが・・・」
「しかし、信じられるのでしょうか？相手は敵の星にいた人物ですし・・・これも敵の罠と言う線も捨てきれません」
「敵の罠だとしたら、サーシアが生きているのも辻褄が合わない・・・今はサーシアとあのジェレミアと言う協力者を信じよう・・・それ以外に今は敵を撃破する方法がないのだから・・・」
守は確かにあのジェレミアと言う男からは怪しい雰囲気を出していたが、サーシアが捕まって無理矢理セリフを言わされていたようにも見えなかった。
とすると、あのジェレミアと言う男は本当にサーシアの協力者なのだろう。
地球とサーシアを救うにはサーシアとあのジェレミアと言う男の立てた作戦を実行するしかない。
すると、再び地球艦隊に通信が送られてきた。
パネルに映し出されたのはサーシアでもなく、ジェレミアでもなく、灰色の肌にシワと血管が浮き出た不気味な男だった。
肌の色や顔立ちはイスカンダルでゴルバを率いて戦ったメルダースと似た顔立ちだった。
そして、その声は宮殿で出会った聖総統スカルダートの声そっくりであり、今、パネルに映し出された男こそ、暗黒星団帝国、デザリアムの国家元首、聖総統スカルダートの本当の姿だった。
宮殿で古代たちと出会った時は、地球人に似せたマスクを被って変

装していたみたいだ。
「地球人たちよ、悪あがきは止めたほうがよい・・・・」
「今度は別の所から通信が・・・・」
「これが聖総統の正体か・・・・」
「変装していたのか・・・・」
「今、私がこのスイッチを押すと地球時間で五分以内に重核子爆弾が爆発する。爆発すれば、当然地球人類は絶滅することになる・・・諸君、考え直して降伏したまえ。フフフ・・・あと五分だけ猶予を与えよう。それが、私が諸君らに与える最後の慈悲だ。賢明に考えることだな。ハハハハハ・・・・」
　スカルダートは地球艦隊の乗員たちにハイペロン爆弾の起爆装置のボタンを見せつけ、高笑いをしながら通信を切った。
　なお、彼はロベルが流したダミー情報のために先程のサーシア、ジェレミアの通信に関しては全く知らなかった。
　しかし、サーシアとジェレミアこの通信をちゃんと傍受していた。
「ふむ、随分と余裕だね、聖総統閣下は・・・・」
　傍受した通信内容を聞いて、ジェレミアは顎に手を当てて、不敵な笑みをこぼす。
「まぁ、全地球人類の生死を己の手の中に握って、圧倒的優位な位置に居るのですから、聖総統閣下の余裕な態度にも理解できます」
　ロベルもジェレミア同様、冷静な姿勢だ。
「ちょっと!!二人とも!!そんな悠長な事を言っている場合じゃないでしょう!?」
　サーシアは反対に地球人類の命がスカルダートの手の内にあることに焦りを感じている。
「だから、言っただろう?『時間稼ぎをする』って」
「えっ?」
「南極の出入口を開ける前に起爆装置の回路を破壊する。そうすれば、多少なりとも時間は稼げるはずさ。もっとも本当にそれはただの時間稼ぎにしかならない。ここには優秀な技師が大勢いるからね。すぐに修復されてしまうだろう」

「優秀と言ってもドクターには及びませんが・・・・」
ロベルが付け足すようにしてジェレミアを褒める。
彼女の言う通り、ジェレミアほどの優秀な科学者がいれば、暗黒星団帝国の悩みは解決でき、わざわざ地球へハイペロン爆弾を打ち込む必要はなかった。
「とにかく、急ぎましょう」
サーシアは起爆装置の回路を破壊するため、行動しようと言う。
確かに回路を破壊する前にあのボタンを押されてしまったらアウトだ。
サーシアたちは早速行動に出た。
ロベルの案内の下、宮殿地下の配線室へと忍び込むと、起爆装置の回路を破壊する。
すると、巡回の警備兵がやってきた。
サーシアとロベル、ジェレミアは物陰に隠れてやり過ごすことにした。
兵士は回路が破壊されているのを見つけると、
「回路が破壊されている・・・・一体誰が・・・・？」
「技師を呼べ!!すぐに修理するんだ!!」
「サーダ様と聖総統閣下にも知らせろ!!急げ!!」
破壊された回路を見て、慌てた様子で配線室から出ていった。
「ひとまず成功ですね」
「しかし、すぐに修復されてしまうでしょう。時間は無駄には出来ません」
「はい」
サーシアとロベル、ジェレミア次に南極の出入口を開ける作業のため、配線室を出て制御室を目指す。
「あのボタンを押されたら、地球人類は絶滅・・・・」
「これじゃあ、手も足も出ないじゃないか・・・・」
「どうしたらいいんだ・・・・」
まだ南極の出入口が開いておらず、五分の間に南極の出入口から内部に突入して、サーシアたちを助けて波動砲を撃って、反対の北極の

出入口から脱出・・・
とても、五分以内には無理だ。
更なる絶望感がただよう中、三度通信が入る。
しかもそれは意外なところからの通信であり、送信元はなんと地球からだった。
「地球からの通信です!!・・・でも、周波数は地球のものなんですが、なぜこんなところまで届く出力が・・・」
相原が疑問に思いながらも通信回線を開くとそこには雪の姿が映し出されていた。
雪の姿を見て、ヤマトの艦橋員たちは喜んでいた。
そして、雪は通信を送ってきた内容を伝える。
「古代艦長、山南艦長、月村艦長、地球防衛軍司令長官からのメッセージを伝えます。長官をはじめとして、地球の有志は地下に潜ってパルチザンを組織し、戦ってきました」
(やはり、地球でも暗黒星団帝国に対して抵抗運動をしていたか・・・)
誰もが、地球でただ黙って事態の改善を待っている訳でなく、占領軍を相手に戦っていたのだと実感する。
「そして、ようやく重核子爆弾の占拠に成功しました。この通信も、重核子爆弾内部の通信回線を使って送っています」
「なるほど・・・敵の回線を使って通信を・・・」
地球の通信技術ではまだ、この二重銀河にいる地球艦隊へ通信を送ることは当然不可能だが、この太陽系から遠く離れた二重銀河から太陽系の地球にハイペロン爆弾を撃ちこむことが出来るこの暗黒星団帝国の技術力ならば、当然通信技術も地球より発達している。
ハイペロン爆弾は爆弾と同時に半ば宇宙船としての機能も有していた。
内部に通信機能を有していても不思議ではなかった。
雪はその通信回線を使用して二重銀河にいる地球艦隊に地球の現状を伝えるために通信をしてきた。
(でも、それって、この通信が敵に傍受されているんじゃないだろうか?)

（もし、傍受されて、スカルダートが、ハイペロン爆弾が地球側に占拠されたことを知ったらヤバいような気もするが・・・）
周波数を地球のものにしても、暗黒星団帝国の通信回路を使用しているのでは、敵に傍受されている可能性が高い。
スカルダートが地球に打ち込んであるハイペロン爆弾が地球人の手によって占拠されたことを知ったら、あのボタンを押すのではないだろうかと思う良馬。
「雪、それで現在地球の起爆装置は？」
守がハイペロン爆弾内部の起爆装置の現状を訊ねる。
「解体できました。あとは敵本星の起爆装置を破壊すれば・・・」
「そうか・・・よくやってくれた」
地球側の脅威はなんとか排除されたことを知ったが、まだ敵本星の起爆装置が残っているので、地球の脅威は完全に拭われた訳ではない。
そして、良馬が恐れていた通り、この通信は暗黒星団帝国側でも傍受されていた。
「愚かな地球人め・・・降伏する気はないようだな・・・」
（カザンの奴め、しくじりおって・・・）
スカルダートは占領軍総司令官であるカザンと地球人に対して憤慨する。
「仕方ない・・・地球人どもの新鮮な肉体が得られないのは惜しいが、もはや放っておくわけにはいかぬ」
スカルダートはスカリエッティが生成したクローンの肉体となってしまうが、帝国に対してここまで反抗した地球人類を許すわけにはいかず、ハイペロン爆弾を起爆させることにした。
そして、ハイペロン爆弾の起爆装置のボタンを押した。
しかし、いくらボタンを押してもカチ、カチ、カチ、と空打ちの音がするだけで、起爆を知らせる警告音やシステム音、爆発までの秒読みなどが一切しない。
「???おかしい、作動せんぞ・・・これは・・・どうしたことだ？」
スカルダートは焦るように何度もボタンを押すが、やはり作動しな

い。
　そこへ、慌てた様子でサーダが駆け込んできた。
「聖総統・・・サーシアが起爆装置の回路を破壊したようです」
「なにぃ!?あの小娘は今どこにいる!?」
「わかりません。現在捜索中です。ですが、破壊された回路はすぐに修復可能で、現在修理中です」
「よし・・・あの小娘は見つけ次第射殺しろ!!そして、修理作業を急がせろ!!これ以上、我が帝国を侮辱する輩を放置するわけにはいかん!!」
「はっ・・・本星周辺にうろついている連中はいかがなさいましょう？」
「攻撃しろ!!奴らも生きて帰すな!!」
「承知しました」
　デザリアム星のいたるところに設置されている砲台から砲撃が始まる。
「いきなり撃ってきたぞ!!」
「まだ、五分経っていないのに・・・」
　スカルダートは五分待つと言ったにもかかわらず、いきなり地球艦隊を攻撃してきた。
「ヤマト、艦橋部に被弾」
「なにっ!?」
　ヤマトの艦橋部への被弾は、まほろば　からでも確認できた。
「ぐあっ・・・!!」
　艦橋部の被弾で、艦長席から放り出された守。
「大丈夫ですか!?兄さん!?」
　古代が守に駆け寄る。
「だ、大丈夫・・・だ・・・」
　傷口を手で押さえながら答える守。
　意識は、はっきりとあるようだ。
「だが・・・動けそうに・・・ない・・・進・・・お前が代わって・・・艦の指揮を執れ・・・」

「はい・・・・相原、佐渡先生を第一艦橋によこしてくれ!!」
「了解・・・・あっ、サーシアから通信です」
パネルには再びサーシアの姿が映し出される。
「重核子爆弾の起爆装置の回路の一部を破壊しました。でも、わずかな時間しかありません、突入してください。攻撃するのは今です。今から、南極の出入口を開けます」
サーシアが起爆装置の回路を破壊したおかけで時間は稼げた。
彼女の言う通り、起爆装置を完全に破壊するのは今しかない。
突入を決めた古代は山南と良馬に通信を送る。
「山南艦長、月村艦長、いったん中に入ってしまえば、無事に外へ出てこられるかどうかもわかりません。ここはヤマトのみで突入します」
古代はヤマト一隻で内部に突入すると言うが、
「いや、古代君。本艦も同行するぞ」
「月村艦長!?」
良馬は、まほろば　もヤマトと同行して内部に突入すると言う。
「その方が、ヤマト一隻よりも少しは成功する確率が上がるだろう?」
「では、我々は外で耐え凌ぎ、北極の出口をなんとしてでも確保しよう」
春藍、ハルバード、ファルシオンは出口確保のため、外部で戦線を支えることになった。
「おい、古代。雪風も連れていくぞ!!」
「トチローさん・・・・」
「人工都市がどれくらいの大きさなのかわからないが、サーシアを迎えに行くなら、ヤマトやまほろばの様な大型艦船よりも小回りが利く雪風の方が適任だろう?」
「・・・・わかった・・・・頼むぞ」
ヤマト、まほろば、雪風・改はデザリアム星の南極部に向かって突き進む。
その間、デザリアム星からの砲撃があるが、波動防壁を張り、ひるむことなく突き進んでくる。
「地球艦隊の一部が接近してきます!!」

「撃滅せよ!!生かして帰してはならぬぞ!!」
「見つけた!!あれが南極の出入口だ!!」
「でも、まだシャッターが閉まっています!!」
サーシアが先程、南極の出入口を開けると言っていたが、まだ南極の出入口は閉まったままだ。
波動防壁を展開しているとはいえ、防壁＋宇宙戦艦の装甲ではとてもあの分厚いシャッターは破れないだろうし、体当たりをすれば逆にこっちが大きな被害を受けそうだ。
「サーシアを信じるんだ・・・突入!!」
まだ、シャッターが閉まっているにもかかわらず、ヤマト、まほろば、雪風・改は速度を落とす事無く進んでいる。
その頃、制御室にやって来たサーシアたちは、
「どれが南極の出入口を開ける装置なの?!」
制御室には沢山の機械があり、どれが南極の出入口を開ける装置なのか分からない。
地球艦隊は既に南極の出入口を目指して接近している。
早く開けなければ、接近してくる地球艦隊の艦船が南極の出入口を塞いでいるシャッターに衝突してしまう。
「これです」
ロベルが当然かのように一つのレバーを下げる。
すると警報と共に、
ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・
地響きの様な音と共に南極の出入口を塞いでいる分厚いシャッターが左右に開いていく。
「シャッターが開きはじめました!!」
「よし、このまま突入だ!!」
ヤマト、まほろば、雪風・改は南極の出入口のシャッターの開口部から内部へと侵入した。
「早く・・・もっと早く・・・」
南極の出入口から侵入し、パイプの空洞を走るヤマト、まほろば、雪風・改。

それほど長くはない筈の空洞パイプを航行する三隻の姿を見て、サーシアにはそれさえも物凄く長く感じた。
やがて、ヤマト、まほろば、雪風・改の三隻が空洞パイプを通り抜けるとサーシアはホッと胸を撫で下ろした。
ヤマト、まほろば、雪風・改の三隻が空洞パイプを通り抜けるとそこは巨大なからの空間が広がっており、その空間の中心部に宙に浮くイガグリ状の超近代人工都市が存在していた。
地表はガラスかクリスタル、水晶の様なもので構成されていた。
人工で作られたものとはいえ、それは目を奪われるほど美しい人工都市だった。
「あれが人工都市か・・・・」
「顔に似合わず、随分と綺麗なモノを作りますね・・・・」
「人工都市表面に熱反応を確認!!」
「なんだって!?」
突然、人工都市からビルの何本かが突然、都市部を離れると物凄いスピードでヤマト、まほろば、雪風・改の三隻に迫ってきた。
ヤマトにとってはガミラス本星の戦いを彷彿とさせるようなミサイルだった。
ガミラス本星での戦いの時も、海底火山脈を波動砲で撃ち抜いた後、地表の火山を連鎖爆発させた。
その後、デスラーは天井部にあるビル群をヤマトにぶつけてきた。
この水晶状の人工都市が放ってきたミサイルはまさにその時のミサイルに似ていたのだ。
「ミサイルだ!!」
「あの都市全体が迎撃要塞になっているんだ」
「白色彗星の要塞都市と同じですね」
「迎撃!!」
まほろば、ヤマトはミサイルと砲撃で迫りくるミサイルを迎撃する。
続いて、人工都市にも攻撃を行うが、まほろば、ヤマトが撃ったショックカノンは人工都市に命中する前に中和されて消滅する。

「な、なんだ・・・？今のは!?」
「ショックカノンが消えたようにも見えたぞ!?」
「人工都市周辺にバリア反応を探知」
　新見が人工都市を包み込むようにして展開されているバリアの反応があることを報告する。
「バリアだって!?」
「はい。しかも反応から、これまで敵が使用してきた偏向型バリアではありません。完全にこちらの攻撃を消失させています」
「じゃあ、ミサイルや魚雷、砲弾による実弾攻撃も・・・」
「効果はないでしょうね。無尽蔵のエネルギーがあるからこそ、できる超強力な中和バリアでしょう」
「中和バリア・・・」
「なんて厄介な・・・」
　彗星帝国ガトランティスの要塞都市にあったガスバリアも厄介な代物であったが、厄介度で言えば、この暗黒星団帝国の中和バリアの方が厄介かもしれない。
「しかも、あの強度では波動砲さえも中和してしまうかもしれません」
「波動砲でさえも!?」
「敵は波動砲による波動融合反応を恐れています・・・どうやらちゃんと対抗策を用意していたみたいですね」
「じゃあ、どうすればいいんですか？波動砲をあの都市に撃ち込まないと地球が・・・」
「あの都市は周囲の外郭から完全に独立して浮いています。無尽蔵のエネルギーを外から供給するには都市部へエネルギーを送る伝達ユニットがこの周辺にあるはずです」
「そうか、そのユニットを破壊すれば、人工都市はエネルギー供給が止まる・・・」
「無尽蔵のエネルギーも都市へ供給されなければ、宝の持ち腐れですね」
「副長、すぐに周辺を探査して敵のエネルギー伝達ユニットの位置を探りだしてくれ!!」

「了解」
新見はさっそくこの人工都市周辺を探査してエネルギー伝達ユニットを探りだす。
内部ではエネルギー伝達ユニットの探査が行われている頃、外部では、
「山南艦長、周辺に敵のワープ反応を確認!!」
「敵艦隊が次々とワープアウトしてきます!!」
「敵も総力戦を挑んできたか・・・ヤマト、まほろば　が出て来るまで何としてでも耐え凌ぐのだ!!総員戦闘配置!!」
外部にいた春藍の方も一筋縄ではいかぬ状況になりそうだった。

百二十三話　二重銀河の崩壊

地球を救うため、ようやく暗黒星団帝国の本星へとやってきた防衛軍一行。

しかし、目の前にあったのは自分たちの故郷である地球・・・

暗黒星団帝国の本星を目指していた筈なのに何故地球へ戻ってしまったのか？

突如目の前に現れた地球に戸惑う一同。

その為、眼前の地球を調査すると地表は暗黒星団帝国と防衛軍との戦火の痕が全くなく、それどころか地球を占領している筈の暗黒星団帝国の占領軍の姿もない。

しかし、世界各国には復元された昔の地球に存在していた過去の歴史的建造物が見られた。

そこで直接地表に降り調査隊を派遣すると調査隊の前にサーダと名乗る女性が姿を現す。

彼女の案内の元、調査隊はこの地球そっくりな星を治める聖総統スカルダートと言う人物と謁見することになった。

そして、彼の口からこの星の秘密が語られた。

それによると、この地球にそっくりな星はヤマトが出発した２２００年代の地球から２００年未来の地球だと言う。

そして、ヤマトはこの地球から脱出後に暗黒星団帝国の艦艇に撃沈されたと言う映像を流され一同は唖然とする。

しかし、不確かな未来なんて信じない一同は自称未来の地球から故郷の地球を目指すことにする。

ただ、宮殿を出る際、古代守とスターシアの娘であるサーシアは何か思うことがあったのか、未来の地球へ残留した。

サーシアを残すことで後ろ髪を引かれる思いながらも防衛軍艦艇は故郷である地球を目指して出発する。

そんな中、これまでの戦いで敗戦の煮え湯を飲まされてきた暗黒星団帝国の猛将サーグラスはヤマトとの最終決戦を挑んできた。

戦いの中で　まほろば　副長の新見は宮殿の映像に違和感を覚え、宮殿の廊下に飾られていたロダン作の『考える人』の像が左右逆のポーズをとっていた事、調査隊のメンバーの一人であるヤマト通信長の相原があの星から持ち帰ったグラスと土から自称未来の地球が地球ではない事を見抜く。

そしてサーグラスとの戦いにも決着がつくが、彼が乗艦した艦、グロデースが未来の地球・・・もとい、地球もどきの敵本星へと墜落する。

すると、敵本星は波動融合反応の影響で瞬く間に崩壊する。

敵本星が崩壊したことであの星に残ったサーシアの生存が絶望視されたが、崩壊した星の下から今度は超巨大な機械で出来たような星が姿を現す。

その機械の星こそ今回の敵である暗黒星団帝国の本星・デザリアム星の本当の姿であり、サーシアは無事に敵本星の内部へ逃れていた。

敵本星であるデザリアム星を前にしている頃、暗黒星団帝国に占領された地球では多くの犠牲を払いながらも地球人類は地球へ撃ち込まれた重核子爆弾・ハイペロン爆弾を占拠することに成功し、地球側の起爆装置は破壊された。

残るはデザリアム星側の起爆装置のみ・・・・

ヤマト、まほろば、春藍は地球を救うため、最後の決戦へと臨んだ。

デザリアム星は空洞惑星となっており、南極と北極に内部へ侵入する穴がある。

サーシアはデザリアム星内部で協力者となったジェレミアとロベルと共にまずデザリアム星側の起爆装置を破壊する。

しかし、これは一時的なものですぐに修復されてしまう。

地球を救うにはこのデザリアム星を破壊するしか今のところ方法はない。

起爆装置を破壊したサーシアたちは南極の入り口を開けてヤマトたちを誘う。

デザリアム星内部にはヤマト、まほろば、雪風・改が侵入し、脱出

路の北極では春藍とハルバード、ファルシオンの三隻が脱出路を死守するために残った。
デザリアム星内部へと侵入したヤマト、まほろば、雪風・改は破壊目的であるデザリアム星の人工都市へたどり着いた。
しかし、そこは敵の根拠地。
彗星帝国同様、人工都市は強力なバリアで守られていた。
しかも人工都市はミサイルによる攻撃も可能。
人工都市を破壊するにはまずバリアを解除しなければならない。
バリアはこのデザリアム星内部の空間に点在するエネルギー転送ユニットからエネルギーを得ている。
この転送ユニットを破壊すれば人工都市を守っているバリアは解除され、都市への攻撃も可能となる。
まほろば、ヤマトの二隻はエネルギー転送ユニットを捜し始めた。
ヤマトは索敵の為に以前に真田が開発した偵察型コスモタイガーを一機出した。
パイロットは山本で後部座席には椎名がオペレートを務めている。

「艦長、こちらも航空隊を出しますか？」
新見がコスモタイガーを出して索敵に当たらせるか訊ねる。
「航空隊は・・・出せない」
「えっ？なぜです？」
「航空隊を出せば確かにエネルギー転送ユニットを見つけられるが、航空隊の収容作業で時間を有する・・・今は少しでも時間を節約したい。それにエネルギー転送ユニット自体にもし、攻撃機能があったら収容作業はなお、時間がかかる」
今は一分一秒の時間が惜しい。
その為、コスモタイガーの離着艦の時間の節約とエネルギー転送ユニット自体に何らかの防衛手段があり、万が一コスモタイガーが被弾した場合、その被弾したコスモタイガーの収容にも時間がかかる。

これが空母ならば離着艦も容易なので航空隊を支援に回していたが、あいにくと　まほろば、ヤマトの航空隊の離着艦機能では離着艦作業に時間がかかる。
全機を出さずともヤマトの様に少数を出せばいいかもしれないが、まほろば　にはヤマトに搭載されていた偵察型のコスモタイガーを持っていなかった。
よって、良馬はコスモタイガーを出せなかった。
「艦長、ヤマトのコスモタイガーがエネルギー転送ユニットらしき物体をスキャン出来たようで、座標を転送してきました」
山本と椎名の偵察型のコスモタイガーがエネルギー転送ユニットの所在をスキャンすることに成功し、その座標データが送られてきた。
偵察型のコスモタイガーは円盤状のレドームを上部と下部に取り付けて索敵機能が充実している他にレーダー衛星を射出し、索敵能力をフル活用してエネルギー転送ユニットの位置を探査したのだ。
「数と位置は？」
「数は全部で四つ。左右に二つずつ展開しています」
「では、本艦とヤマト、それぞれ左右に分かれて転送ユニットを撃破するか」
左右に二つずつある為、まほろば、ヤマトはそれぞれ左右に分かれエネルギー転送ユニットを破壊することにする。
その間もヤマト、まほろば、雪風・改を撃破せんと人工都市からはミサイルが発射される。
エネルギー転送ユニットを発見したことで偵察型のコスモタイガーは帰還行動に入るが、ミサイルからの回避行動でやはり収容作業には少々手間がかかっているみたいだが、一機だけだったことから偵察型のコスモタイガーは無事にヤマトへ着艦出来た。
「直撃でなければ、ミサイルは無視しろ!!今は一刻も早くエネルギー転送ユニットの破壊を優先する」
良馬は多少の被害はやむなしと判断し、人工都市から発射されたミサイルに関しては直撃コース以外のミサイルは無視してエネルギー

転送ユニットのみを狙うように指示を出す。
「エネルギー転送ユニットを目視で確認!!」
「攻撃!!」
　エネルギー転送ユニットの一つへ接近した　まほろば　はユニットに対して砲撃とミサイル攻撃を行う。
　人工都市自体は強力なバリアで守られているが、エネルギー転送ユニットに関してはバリアやミサイル、砲撃などの守備機能は持ち合わせていないようだ。
　当然、まほろば、ヤマトの行動はスカルダートやサーダもモニターで見ていた。
「聖総統、大変です・・・!!連中は、エネルギー伝達衛星に攻撃を仕掛けています!!」
「なにいっ!?・・・なんとしてでも阻止しろ!!ミサイルの集中砲火を浴びせてやるのだ!!」
（くっ、このような事なら伝達衛星にもバリアか迎撃機能をつけておくべきだったか・・・）
（彼奴等を葬った後、伝達衛星には防御手段を施すか・・・）
　人工都市自体はエネルギー転送ユニットから送られるエネルギーを元に強力なバリアで攻撃を防げるが、そのエネルギーを伝達するユニット自体にはなんの防御手段を施していなかったことにスカルダートは後悔する。
　彗星帝国同様、デザリアム星も内部に敵が侵入されること事態想定していない事なので、エネルギー転送ユニットに防御手段を施していない事に何ら不思議ではなかった。

　デザリアム星に置いて防衛軍が地球の未来をかけて戦っている中、
某宇宙空間では・・・

　ヴォルフラム　ブリッジ

「こ、これはっ!?」
「一体・・・」
「何があったんだ・・・?」
ヴォルフラムのブリッジにあるメインスクリーンに映るのは、浮遊する夥しい大小の金属片の数々・・・
はやてが艦長を務めるヴォルフラムは引き続き情報収集と管理世界になり得る惑星の探査任務でこの宙域へと来ていたのだが、彼女たちの目の前に広がる残骸の山は決して自然に出来た物ではなく、人工的に加工された物で、残骸と化して宇宙空間を漂っていたと言う事は此処で何かしらの事故か戦闘が起きたことを物語っている。
「ここで大規模な戦闘があったのかも知らん。周辺の監視を疎かにしちゃあかんで。原型を留めている残骸を探して、データベースと照合するんや。もしかしたら、管理局の艦か民間船の残骸かもしれへんからな」
「は、はい!」
艦長席の八神はやては、冷汗をかきながらもオペレーターに残骸の分析を命じる。
分析担当のオペレーターは、懸命に映像とデータベースを照合した。
もしかしたら、はやての言う通り管理局の艦か民間の次元航行船の残骸の可能性もあったからだ。
もし、周辺を漂っている残骸が管理局の艦か民間船の残骸ならば救助を必要としている者がいる可能性だってある。
「照合できました。周辺の残骸は暗黒星団帝国軍の小型戦闘艦と地球防衛軍のコスモタイガー戦闘機です!」
「それは間違いないんか?」
「はい。間違いありません。地球側の残骸は少数のコスモタイガーのみで、数的には圧倒的に暗黒星団帝国軍側の残骸が多いです」
オペレーターからの報告を聞き、周辺に漂っていた金属片の残骸が管理局の艦や民間の次元航行船ではなかったことから味方の艦艇や民間船が被害に遭ったわけではないことが判明し、はやてはややホッ

とした表情になる。
「さよか・・・。ここで暗黒星団帝国軍と地球防衛艦隊の戦闘があって、地球側が勝ったと見て良さそうやな」
残骸は圧倒的に暗黒星団帝国軍の艦船らしき物が多く、地球側のそれは少数のコスモタイガーの残骸くらいで、地球側の艦船の残骸は確認できない。
残骸の結果から少なくとも、この宇宙空間での戦闘による軍配は地球防衛艦隊側に上がったと見て良かろうとはやてはそう結論づけた。
「救助信号みたいな信号反応は確認できるか？」
「ちょっと待ってください。探査してみます」
はやてはこの残骸の中に生存者がおり、救助を待っているかもしれないとのことで救難信号の有無を確認させる。
例え暗黒星団帝国の人だろうと防衛軍の人だろうと救助を待っている人が居れば救助したい。
生存者が居ればより正確な情報が手に入るからだ。
「・・・艦長、残念ながら救難信号らしき信号は確認できません」
オペレーターは周囲を探査し信号の反応がないかを確認したが、救難信号らしき反応は確認できなかった。
「・・・さよか・・本来ならこの辺の残骸を持ち帰りたいとこやけど、近くに暗黒星団帝国軍がいるかも知らん。次元ブイを敷設して一旦撤収しよか」
「わかりました」
地球艦隊はまだしも、暗黒星団帝国軍に捕捉されるのは非常にまずい。
後日工作艦を呼ぶ事とし、次元ブイを数基設置して再び次元空間に戻ることにした。
はやて自身も暗黒星団帝国の強さは当然理解している。
何しろ、フェイトたちが居るもう一つの地球が管理局よりも強力なこともはやては認めており、その地球を占領しているのだから、暗黒星団帝国の強さは嫌でも理解せざるを得ない。
そんな中、ヴォルフラム一隻でたとえ暗黒星団帝国の中型・小型艦

艇でも複数で襲われれば撃沈されるのは目に見えている。
暗黒星団帝国艦艇の残骸が多いという事は、此処は彼らの縄張りの可能性もある。
クルーの安全の為にもこの宙域から離れた方が賢明だとはやては判断し、ヴォルフラムはこの宙域から去って行った・・・。

はやてが艦長を務めるヴォルフラムが暗黒星団帝国と防衛軍との戦場跡地から去った頃、その暗黒星団帝国本星では地球の未来をかけた戦いはまだ続いていた。
内部では　まほろば、ヤマトがハイペロン爆弾の起爆装置を破壊するために・・・
外部では内部に突入した　まほろば、ヤマトの脱出路を確保するために・・・
「山南司令、周囲に空間歪曲反応を多数感知!!敵艦隊がワープアウトしてきます!!」
「諸君、ここが執念場だ!!ヤマト、まほろば　が起爆装置を破壊し、北極から出てくるまで何としてでもここを死守するぞ!!」
『おおおー!!』
デザリアム星周辺に暗黒星団帝国の艦船が次々とワープアウトしてくる。
スカルダートが周辺のパトロール艦隊を急遽呼び寄せたのだろう。
「ファルシオンに波動砲の準備をさせろ」
「了解。ファルシオンへ拡散波動砲のチャージを伝達!!」
山南は、拡散波動砲を装備している無人戦艦のファルシオンに拡散波動砲の発射準備を行わせる。
まずは挨拶代わりに拡散波動砲で敵に強力な一撃をお見舞いするつもりだ。
同じ無人戦艦でもハルバードは収束型の波動砲を搭載しており、敵を密集させる必要があり、春藍は敵の総数が不明なのでエネルギーをなるべく蓄積しなければならなかったので、波動砲を撃てなかった。
「ファルシオン、拡散波動砲発射準備整いました!!」

「敵を十分に引き付けてから撃て」
「了解」
　春藍の戦術長のターゲットスコープにはファルシオンと連動した映像が映し出されており、戦術長は相手にすると厄介な戦艦を主にターゲットに設定し、敵艦隊を十分に引き付ける。
　スカルダートが呼び寄せたのがパトロール艦隊だったことから、戦艦の数も旗艦クラスでそこまで多くなく、またα砲搭載艦やグロテーズの様な決戦兵器を搭載した艦も今のところ存在は確認されていない。
「ファルシオン、拡散波動砲発射!!」
　ファルシオンの艦首から拡散波動砲が放たれる。
　ファルシオン一隻ながらも拡散波動砲は広範囲に広がり敵艦を葬る。
　しかし、いくら拡散波動砲が強力でも敵艦すべてを葬ることは出来ず、いくつかの敵艦は残った。
「こ、これが・・・・波動砲・・・・」
　拡散波動砲からの攻撃を逃れた残存艦の乗員は波動砲の威力に恐れ戦く。
「狼狽えるな!!敵の兵器は確かに強力だが、あれだけのエネルギー量だ!!早々に連発は出来ぬ!!相手の懐に入ってしまえば、敵はあの超兵器は使えぬ筈だ!!全速で敵との距離を詰めろ!!」
　そんな乗員たちを士官は叱咤し、春藍との距離を詰めれば相手は波動砲を簡単に撃てないと判断して春藍との距離を詰めるために全速で近づいてくる。
「敵艦隊、急速接近!!」
「敵は距離を詰めて波動砲を撃たせないつもりか・・・・」
　山南も敵の戦術をすぐに見抜く。
「だが、まさに飛んで火にいる夏の虫だ!!全艦砲雷撃戦用意!!ミサイル及び波動爆雷は遠慮せずに全弾撃ち尽くすつもりで撃て!!」
　春藍、ハルバード、ファルシオンからは無数のミサイルと主砲からはショックカノンが一斉に斉射される。

強力な弾幕に敵艦隊は被弾、または速度を落とし進撃ペースが乱れ、味方同士の衝突が起きる。
それでも駆逐艦クラスはその俊敏さを活かして接近を試みる。
「敵駆逐戦隊、迎撃網を突破して接近してきます!!」
「波動爆雷で周囲を固めろ!!」
迎撃網を突破してきた敵の駆逐艦は波動爆雷網に突っ込み波動爆雷の餌食となる。
外部で春藍が脱出路確保のため奮闘している頃、内部でも　まほろば、ヤマトの奮戦は続いていた。
人工都市からのミサイル攻撃を受けながらもエネルギー転送ユニットに攻撃を仕掛けていく。
「エネルギー転送ユニットの破壊を確認!!」
「だが、一つを破壊した程度ではエネルギーの流れを止めることはできん!!やはり、すべてのエネルギー転送ユニットを破壊しなければならない」
エネルギー転送ユニットを一基破壊しても人工都市へのエネルギー供給には問題なく、都市を守っているバリアは未だに健在だ。
「次の攻撃目標へ針路を変更」
「了解」
「しかし、あれだけ大きなユニットだ・・・例え攻撃手段を有していなくとも硬いな」
エネルギー転送ユニットには防御手段は有されていないが、それでも丈夫に作られており、一基壊すにも一苦労だ。
そんな中、
「古代さん・・・!!見てください・・・!!雪風が・・・!!」
「被弾したのか!?」
「わかりません・・・遠隔自動操縦システムへの割り込みが受け付けないんです!!」
突如、雪風・改に不具合が生じた。
「大山はどこだ!?・・・くそっ!!あいつめ、こんな時にどこで何をやっているんだ!?」

ヤマトからの操艦信号を受け付けず、操艦不能となったのだ。
真田は突然の雪風・改の不具合に対して、雪風・改を建造したトチローに原因の調査と雪風・改の操艦機能の回復をしてもらおうとするが、肝心なトチローの姿がいつの間にか消えていた。
ヤマトからの信号を受け付けず、雪風・改自体のＡＩにも不具合があるようで自走すらせず、機関が止まり失速して人工都市が発する人工重力に引っかかり、そのまま人工都市へと墜落していく。
「だめです!!あのままじゃバリアに突っ込んじゃいますよ!!」
いくらトチローが設計した雪風・改でも暗黒星団帝国の強力なバリアには敵わないはず。
バリアに接触すれば雪風・改は粉々になってしまうと思われた。
しかし、誰もが雪風・改がバリアに引っかかり粉々になるかと思いきや、雪風・改は粉々にならず人工都市の地表へと無事に?墜落した。
「すり抜けたぞ・・・!!」
雪風・改に暗黒星団帝国の強力なバリアを無効化させる機能なんてついてはいない。
となると、雪風・改がバリアを通り抜けることが出来たのは何か理由がある筈だ。
「そうか・・・エネルギー供給量が減り、バリアが断続的に消えているんだ!!」
エネルギー転送ユニットを一基壊した程度ではまだバリアは強力であったが、既にエネルギー転送ユニットは三基破壊されていたので、人工都市を守るバリアは寿命が尽きかけている電灯の様にバリアを常に張ることが出来ず、展開している状態と消えている状態と交互になっており、雪風・改は上手く、バリアが消えている間に人工都市へと墜落したのだろう。
「古代、あと一つユニットを破壊できれば完全にバリアを消滅させることが出来るぞ!!」
「あと一つか・・・太田、雪風はどうなった?」
古代は人工都市に墜落した雪風・改の状況を訊ねる。
「敵都市へ墜落したようです!!反応、応答共になし!!」

やはり、ヤマトからの信号を受け付けず、沈黙したままだ。
「くそっ、これで雪風からの援護は期待できないか・・・急ぎ、エネルギー転送ユニットを破壊するんだ!!」
エネルギー転送ユニットが次々と破壊されていることにスカルダート側も焦りを見せ、ミサイル攻撃はより過熱さを増す。
「艦首および艦尾魚雷撃て!!続いて煙突ミサイル撃て!!」
当初は人工都市からのミサイルを無視していたが、次第に敵ミサイル攻撃も段々と無視できない状況になってきた。
まほろば、ヤマトは艦首、艦尾の魚雷、煙突ミサイルで敵ミサイルを迎撃する。
「見つけた!!最後のエネルギー転送ユニットだ!!」
「急ぎ破壊しろ!!」
最後のエネルギー転送ユニットを射程内に収め、攻撃するヤマト。
「早く・・・早く・・・」
命中弾を与えるが、装甲が厚いエネルギー転送ユニットはなかなか爆発しない。
最後の一基と言う事で古代には焦る感情が吹き上がる。
そこへ、別方向からエネルギー転送ユニットへ攻撃が加えられる。
まほろば　が自分の担当する範囲のエネルギー転送ユニットを破壊し終え、ヤマトの方へ援軍に来たのだ。
さすがのエネルギー転送ユニットも二隻の戦艦からの砲撃には耐えきれず、ようやくエネルギー転送ユニットを全て破壊することができた。
「エネルギー転送ユニットすべて破壊!!」
「バリアは!?消えたのか!?」
エネルギー転送ユニットを全て破壊したことにより、人工都市を守っていたバリアは消えた。
あとはサーシアとついでに彼女の協力者であるジェレミアを救助して人工都市に波動砲を撃ち込めば地球人類を救うことが出来る。
まほろば、ヤマトがデザリアム星の内部でエネルギー転送ユニット

を破壊している頃、人工都市でもサーシア、ジェレミア、ロベルも脱出の為の行動をとっていた。
南極側の出入り口を開け、まほろば、ヤマトを内部へと侵入させたので、次は脱出口である北極側の出入り口を開ける。
そして、ジェレミアは北極側の出入り口の開閉レバーを壊した。
「ふむ、これで北極側の出入り口を閉じるにしてもレバーの修理からしなければならないだろう。さて、後は迎えが来るまで耐えなければならないが・・・・」
脱出路を確保したので、あとはこの人工都市から脱出するだけだ。
その時、
ドカーン!!
「ぬおっ!?」
「きゃっ!!」
「・・・・」
突然、轟音と地震の様な振動が辺りを襲う。
「な、なんだ?」
「ヤマトの攻撃かしら?」
三人は轟音がした方向を見ると、そこには人工都市に墜落した雪風・改の姿があった。
轟音と衝撃の正体は人工都市に墜落した雪風・改だった。
「雪風・改!!」
「あれが、迎えと見ていいのかな?」
「おそらく・・・・さあ、行きましょう!!」
三人は雪風・改が自分たちを迎えに来た艦だと判断し、雪風・改の墜落現場へと向かう。
「聖総統閣下、エネルギー伝達衛星が全て破壊されました!!」
「都市周辺のバリアも消滅しました!!」
「ぐっ・・・・ぬぅ〜・・・・」
スカルダートはモニターに映る　まほろば、ヤマトを睨みつける。
「都市機能の一部をバリア機能へ回せ!!あと、ハイペロン爆弾の起爆回路の修理を急がせろ!!」

スカルダートも波動砲が相手の切り札であり、一発撃つのにエネルギーのチャージにはある程度の時間を有することは理解している。
ならば、都市のバリア機能を回復させることが出来れば、例え相手が波動砲を撃ったとしてもこの宮殿がある人工都市を破壊することは出来ず、更に　ハイペロン爆弾の起爆回路の修理が終われば地球人類を一気に抹殺することが出来、勝利することが出来る。
一方、真田の方もスカルダートの考えを読んでいたのか、自分の席にて何かを準備している。
「技師長、一体何をしているんですか？」
真田が何か作業をしている事に気づいた相原が真田に声をかける。
「コンピューターウィルスだ。ウィルスであの都市全体の機能を停滞させるんだ」
「コンピューターウィルス？でも、そんな古風なモノが通用するんですか？敵は物凄い科学力をもった相手なんですよ？」
太田は例えコンピューターウィルスを使用しても地球よりも科学技術が優れた暗黒星団帝国には通じないのではないかと不安になる。
「相手の科学力が優れているからこそ、可能性がある。地球から送られてきた情報では奴らは半機械の生命体だそうだ。地球で天然痘ウィルスが絶滅したように彼らの文明では機械に悪影響を与えるコンピューターウィルス自体が絶滅している可能性が高い」
優れているからこそ、敢えて単純な事や古風な事に対応できないと踏んだ真田はコンピューターウィルスで相手の動きを鈍らせる作戦をとる。
「しかし、どうやってここからウィルスを送り込むんですか？」
島が真田に人工都市へウィルスを送り込む方法を訊ねる。
「注射器ならもう刺さっている。しかも特大サイズのヤツがな」
「っ!?雪風!?」
そこへ、トチローが姿を現してコンピューターウィルスを送り込むための注射器があることを伝える。
「あれにはタイタンで使っていた工作機がまだ積んだままになっていた。墜落地点から配線を敵の中枢回路へ接続すれば・・・」

イレギュラーであった雪風・改の墜落がまさか役に立つとは怪我の功名であり、真田は雪風・改に搭載されていた工作機械を経由して人工都市の中枢回路へ侵入しコンピューターウィルスを送り込む。
「こ、これはっ!?一体何が・・・!?」
突如、都市の機能に問題が生じ始めたことにスカルダートは狼狽える。
「こ、コンピューターウィルスが都市の機能中枢に送り込まれた模様です!!」
「な、なにぃ!?コンピューターウィルスだと!?すぐに消去しろ!!」
「で、ですがコンピューターウィルスに対抗するワクチンがありません!!」
「ならば、ウィルスに侵された回路を切り離せ!!今は一刻も早くバリア機能を回復させるのだ!!」
「は、はい!!」
真田の読み通り、暗黒星団帝国にはウィルスに対抗するためのワクチンが用意されていなかった為、ウィルスに侵入された回路を切り離すと言うまさに肉を切らせて骨を断つ形の応急方法をとってきた。
一方、雪風・改に向かっていたサーシアたちは敵に見つかり追いかけられていた。
「居たぞ!!止まれ!!」
「やむをえん!!撃て!!射殺しろ!!」
三人の後ろからは衛兵たちがビームライフルを撃ちながら追いかけてくる。
「敵は狂った回路を切り離し始めたぞ!!」
「都市周囲のバリア装置修復が再開!!復帰まであと一分!!」
「サーシアは今、どのあたりだ!?」
古代が相原にサーシアの現状を訊ねる。
「・・・ダメです。ウィルスの影響で都市内部の様子がわかりません」
真田が送り込んだコンピューターウィルスは確かに相手の機能を一時麻痺させることが出来たが、反対にこちら側からの通信や映像も遮断してしまい、サーシアの現状を確認することが出来なくなってし

まった。
暗黒星団帝国側、防衛軍側、共に時間との勝負となる。
バリアが復帰する前にサーシアを助け波動砲を撃ち込まなければ、地球人類は滅ぶ。
「・・・相原、まほろば　の月村に連絡・・・波動砲の準備を整えさせろ・・・進・・・ヤマトもだ」
守はヤマト、まほろば　に波動砲の準備を命じる。
「しかし、まだサーシアが・・・・」
「信じるんだ・・・・サーシアを・・・・」
「・・・・了解」

まほろば　第一艦橋

「艦長、ヤマトの古代艦長より波動砲の発射準備をせよとの命令が・・・・」
ギンガが良馬に守からの命令を伝える。
「・・・・サーシアの脱出は確認できたのか？」
「それが、コンピューターウィルスの影響で現状の確認が出来ていません」
「・・・・」
サーシアが脱出できていれば当然、ヤマトからサーシア脱出の知らせはくる筈だ。
しかし、未だにサーシア脱出の報告は来ていない。
となると、サーシアはまだあの人工都市に居る。
このまま波動砲を撃てば、サーシアも巻き込んでしまう。
だが、時間が経てば経つほど、暗黒星団帝国側が有利になる。
手を拱いていれば、折角破壊したハイペロン爆弾の起爆装置を修理されてしまい地球人類の絶滅が確定的になる。
「くっ・・・・航海長、本艦をヤマトの横につけろ。砲雷長、波動砲の発射準備だ!!」
「は、はい」

「了解」
良馬は葛藤するが、それはヤマト、まほろば　の乗組員も同じだろう。
まほろば　はヤマトの隣に横付けし、波動砲の発射準備を整える。
「ターゲットスコープ、オープン!!目標、人工都市中心部!!」
「総員、対ショック、対閃光準備!!」
まほろば、ヤマトの艦首にある波動砲の発射口に段々と青白エネルギー反応がたかまっていく。
古代たちがサーシアに早く脱出してくれと心の中で願うように、
「・・・・」
スカルダートの方も早くバリア機能が回復してくれと心の中で焦る。
やがて、ヤマト、まほろばの二隻が波動砲を撃つ前に人工都市は再びバリアに包まれる。
「敵都市、バリアを復帰!!・・・・くそっ!!」
あの人工都市のバリアに対して波動砲が無力なのは既に解析済み・・・・
しかも今度はエネルギー転送ユニットではなく都市機能の一部からバリアのエネルギーを得ているので、あのバリアを破るには都市を攻撃しなければならない。
しかし、その都市はバリアで守られている。
(詰んだ・・・・完全に詰んだ・・・・)
(地球は・・・・地球人類はここまでなのか・・・・?)
完全にお手上げ状態となり絶望感がヤマト、まほろば　の乗組員に漂う。
「ハハハハハ・・・・運命は我らに味方したようだな?もはや抗う力もあるまい?起爆装置の修理が終われば、その時こそ地球人類の運命は終わりを告げるのだ。ハハハハハ・・・・」
バリアが復帰して、ヤマト、まほろば　の波動砲が通用しなくなったとたんスカルダートの焦りは消え、一転して余裕へと変わり高笑いをする。

だが、運命の神は気まぐれだったみたいで、突如人工都市の一画で爆発が起きる。
「ぬっ!?何事か!?」
「聖総統閣下、バリアが!?」
人工都市の一部が破壊されたことでバリアへのエネルギー供給が再び弱まり、都市を包み込んでいたバリアがまたもや消滅した。
そして都市の爆炎の中から雪風・改が姿を現す。
先ほどの都市の爆発は雪風・改が砲雷撃を行った為に起きた爆発だった。
「雪風、コントロール復帰!!」
不具合を起こした雪風・改はコントロールを取り戻し、都市を攻撃して浮上した。
「今だ!!撃て!!」
「発射!!」
バリアが消え、雪風・改が浮上したことでヤマト、まほろば　は遠慮なく人工都市へ波動砲を撃ち込んだ。
二隻の戦艦の波動砲を喰らった人工都市は脆くも崩壊、消滅しその中の宮殿に居たスカルダートやサーダたちは・・・
「きゃぁぁぁぁぁぁぁー!!」
「ぬっ!?ぎゃぁぁぁぁぁー!!」
都市同様、消滅した。
波動砲の攻撃を受け、ゴルバやデザリアム星の表面同様、波動融合反応による誘爆が広がる。
「誘爆が広がっています!!」
「脱出!!全速前進!!」
脱出口である北極側の出入り口は既に開口済みなので、あとはそこから脱出するだけだ。
「通信長、外に居る春藍に現状を伝え、ワープで避難するように指示をするんだ!!急げ!!」
「は、はい!!」
ギンガは急ぎ、デザリアム星外部で脱出口を死守している山南の春

藍に無事にハイペロン爆弾の起爆装置破壊と波動融合反応による誘爆が内部で広がっている事を伝え、ワープによる避難を伝えた。
「大山、雪風のワープを同調させろ!!」
「言われなくても分かっているよ!!」
折角脱出できたのに誘爆に巻き込まれてお陀仏では洒落にならない。
とは言え、今雪風・改に乗っているであろうサーシアにワープ操作なんて出来ないので、トチローが急ぎ、雪風・改のワープ機能をヤマトに同調させて脱出させる。
防衛軍艦艇全てがワープした後、デザリアム星は内部から波動融合反応の誘爆で大爆発を起こし消滅した。

安全宙域にヤマト、まほろば、春藍、ファルシオン、ハルバードが次々とワープアウトしてくる。
「雪風は!?サーシアはどうなった!?」
しかし、雪風・改はまだワープアウトしてこない。
雪風・改は無事にワープできたのか?
それとも・・・
一同が不安と緊張の中に居ると・・・
「ワープアウト反応を確認・・・あれは・・・あれは・・・」
一番最後にワープアウトしてきたのは雪風・改だった。
「雪風・・・雪風だ!!」
「やった!!」
ワープアウトした雪風・改の姿を見て一同は思わず歓喜の声を上げる。
そして、雪風・改の艦橋にはサーシアの姿が確認できた。
「お父様・・・」
サーシアは特にケガもなく無事だった。
「サーシア・・・」
サーシアの姿を見てようやく不安と緊張から解放され、守もホッとした表情になる。

「良かった・・・・」
「ふぅ～・・・・まだ手が震えているぜ・・・・」
　まほろば　でもサーシアの無事な姿が確認でき良馬たちもホッとする。
「お姉様・・・・」
「良かったわね。ユリーシャちゃん」
「うん」
　まほろば　の医務室でもサーシアの無事が確認できた映像がモニターに映し出され、妹のユリーシャは思わず嬉し涙を流し、そんなユリーシャの頭をリニスは優しくなでた。
「あっ、見てください!!」
　ギンガが窓の外を指さす。
　そこにはデザリアム星の爆発の影響で白色銀河と黒色銀河、二つの銀河系のバランスが崩れ崩壊し、混ざり合い新たな銀河系が誕生していく。
　それはまさに宇宙の生と死の神秘的な瞬間であった。

百二十四話　戦後処理

宇宙の彼方から飛来したハイペロン爆弾と続々と押し寄せてきた暗黒星団帝国の大戦力の前に、地球防衛軍は敗北し、地球は瞬く間に制圧された。

暗黒星団帝国は地球へ撃ち込んだハイペロン爆弾により人類の脳細胞を一挙に死滅させることが出来ると地球連邦政府を脅す。

地球を救うため、ヤマトは暗黒星団帝国の本星を目指し旅立つ。

その途中、シリウスにて演習中に暗黒星団帝国の奇襲を受けたまほろば、春藍を救助し、共に暗黒星団帝国の本星を目指す。

数々の妨害の中、ついに暗黒星団帝国の本星へと到達する。

一方、地球でも暗黒星団帝国の支配に抵抗する地球人はパルチザンを結成し、多くの犠牲を払いながらも着々と暗黒星団帝国の戦力を削いでいき、最終的に地球へ撃ち込まれたハイペロン爆弾の占拠と起爆装置の解除に成功する。

宇宙の方でもヤマト、まほろば、そしてサーシアの活躍により、暗黒星団帝国側の起爆装置を破壊することが出来た。

地球、暗黒星団帝国、両方のハイペロン爆弾の起爆装置を破壊して無事に地球を救うことが出来、あとは地球へ帰還するだけとなった。

地球への帰路の途中、ヤマトの第一艦橋にて古代は島に、

「なぁ、兄さんとトチローさんは今頃、どの辺りにいるのだろう?」

と、自身の兄である古代守と守、真田の同期であるトチローの現状についてポツリと零した。

「心配することはないさ、古代。きっと無事に着くよ」

島はあの守とトチローならば大丈夫だろうと言う確信があり、古代を励ます。

「兄さん・・・」

実はヤマトら一行が地球への帰還行動に入る前に良馬はサーシアの双子の妹のユリーシャを連れてヤマトを訪れていた。

それは守からユリーシャに大切な話があると言われたからだ。

ヤマトに到着した際、ユリーシャはサーシアの下へ駆け寄り、姉の生還を喜んでいる。
そんな姉妹の姿に思わずほっこりする中、
「ん？やっぱり、あれは・・・」
良馬はヤマト艦内の装備品を興味深かそうに見ている一人の男性に気づき、声をかけた。
「あの、もしかしてスカリエッティさん？」
「っ!?」
声をかけられて男性はビクッと体を震わせ恐る恐る良馬の方へと振り向く。
「あっ!!やっぱり!!スカリエッティさん。どうして此処に？」
親しげに声をかけながら男性に近づく良馬。
サーシアがヤマトにデザリアム内部での現状を通信で送ってきた際、まほろばの艦橋にあるパネルで男性が映し出された時から、『あれ？もしかして・・・』と思っていたのだが、こうして間近で出会い、男性が誰なのかを確信して声をかけたのだ。
一方、良馬から声をかけられた男性は顔や態度には見せないが内心ではかなり焦っていた。
（な、なぜ、この男は私の名前を知っている!?もしかして、この男は管理局の人間なのか!?）
（い、いや、落ち着け私。ここは地球防衛軍とやらの戦艦なのだから、管理局の人間が居る筈がない）
「スカリエッティ？」
「ジェレミア・ゴットバルトじゃないのか？」
この男性・・・ジェレミア・ゴットバルトはサーシアと共にヤマトへ乗艦した際、守たちに自らの名をジェレミア・ゴットバルトと名乗っていた。
名乗った名前と異なることに訝しむ古代たち。
「あっ、知りません？最近地球で流行っている『ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ』っていう仮想体験型のアクションゲームなんですけど、そのゲームシステムを考案し、製作したのがこちらのジェイル・スカリエッ

ティさんなんですよ」
「いや、ゲームはやらないから・・・」
「俺も・・・」
　良馬は訝しむ古代たちにジェレミア・ゴットバルト・・・もとい、ジェイル・スカリエッティを紹介する。
　もし、この場に真田がいれば、ゲーム内容や開発者の顔は知らずともＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの仮想システムやそのゲームシステムの開発者の名前については知っていただろう。
　しかし、古代兄弟はＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬについて全く知らなかったので、開発者のジェイル・スカリエッティと言われてもピンとこなかった。
「それにしてもどうして此処に?まさか、暗黒星団帝国に拉致されていたんですか?」
　ジェレミアにグイグイと質問する良馬であるが、彼の紹介を聞いてジェレミアは、
（ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ?そんなゲームシステムなんて聞いたことも開発したこともないぞ!?）
（し、しかし、彼の話を聞く限り、どうやら彼らの故郷である地球にはもう一人の私が居るみたいだな。そして、彼はもう一人の私と思い込んでいるようだ・・・）
（ここはもう一人の私に成りすましても良いが、下手に誤魔化してドジを踏むわけにはいくまい）
　ジェレミアはそう考え、
「すまないが、貴方は私をどなたかと人違いされている様だ。私はジェレミア・ゴットバルトと言う者だが?」
　あくまでも自分はジェイル・スカリエッティではなく、ジェレミア・ゴットバルトである事を貫く選択をした。
「えっ?もしかして人違い?」
「ああ、残念ながら私は地球とは別の星から暗黒星団帝国に連れ去られて来てね。そちらのお嬢さんとあの星の中で出会い、脱出の為に協力させてもらったのだよ」

「そ、そうだったんですか?すみません。知人に貴方と瓜二つの人が居ましたので・・・」
「いや、いや、世の中には自分に似ている人間が三人居ると聞くからねぇ~君が見間違えるのも仕方ないさ」
ジェレミアは笑みを浮かべながら人違いである事を突き通す。
(ふぅ~何とか誤魔化せたか・・・)
笑みを浮かべていたがジェレミアは内心ひやひやしていた。
(人違いだったのか・・・でも、ウチの砲雷長とハラオウンさんも似ているし、ギンガと加奈江さんも似ているから、広い宇宙だからそっくりな人が居ても不思議ではないか・・・)
ジェレミアの話を聞いて良馬はジェレミアと自分が知るスカリエッティが別人であり、自分は人違いしたのだとあっさりと納得した。
ジェレミアの主張は一見苦しいものがあるが、良馬の周りにそっくりな人たちが居たおかげでジェレミアはこの危機を乗り切ることが出来たのだ。
古代もフェイトとフェリシア、故人であるがスターシアの妹の方のサーシアと雪、などの前例があったので良馬同様に納得した。
ジェレミアの人違い騒動が収まり、守はユリーシャにわざわざヤマトへ呼んだ訳を話す。
「ユリーシャ」
「はい、お父様」
「俺とサーシアはこのままイスカンダルへ帰ろうと思う」
「えっ?」
「兄さん、本当にイスカンダルへ帰るんですか?」
守の発言にユリーシャも古代も驚いている。
「ああ。俺は地球人でもあるが、同時にイスカンダル人でもあるんだ。サーシアもユリーシャも無事にここまで成長した。俺がこれから進むべき道はイスカンダルへ帰り、スターシアやサーシアと共にあの星を立て直すことだと思う」
「私も、もう二度とお父様と離れたくないわ。叔父様やみんなと離れ

るのは辛いけど・・・・」
守はイスカンダルへ戻り、イスカンダルの復興を決意しており、サーシアもやはり父親である守がイスカンダルへ戻ると言うのであれば、彼と共に母親が待つイスカンダルへ戻るのも不思議ではない。
それに失恋相手の古代と一緒にいるのは気まずい。
「ユリーシャ、貴女はどうする？」
サーシアは妹のユリーシャに自分たちと共にイスカンダルへ戻るかそれともこのまま地球へ戻るかを訊ねる。
守やサーシアとしては勿論ユリーシャにもイスカンダルへ戻ってきて欲しいが、もしユリーシャがイスカンダルへ戻らず地球への残留を望むのであるならば、二人はユリーシャの意思を尊重するつもりだ。
「わ、私は・・・・」
ユリーシャは守、サーシア、そして良馬をチラッと見て、
「私は地球へ行きます」
と、自分は守やサーシアと共にイスカンダルへは戻らずこのまま地球への残留を希望した。
「そうか・・・・月村」
「は、はい」
「ユリーシャの事をくれぐれも・・・・いいか、く・れ・ぐ・れ・も頼むぞ」
守は両手で良馬の両肩をガシッと掴み、背後にゴゴゴゴ・・・・と文字が浮き出るほどの圧がある笑みを浮かべながら良馬にユリーシャのことを託した。
彼としては娘の成長は嬉しい反面、自分の手から娘が離れてしまうのはやはり寂しい。
しかし、娘が望むのであるならば・・・・
と、苦渋の決断でもあった。
「は、はい。お嬢さんの後見人として悪い虫がつかないよう気を付けます」
「ん？あっ、ああ・・・・そうだな。うん・・頼むぞ」
ユリーシャの仕草と父親としての勘から娘のユリーシャが良馬に

対して好意を抱いているのは察したが、その良馬からの返答を聞きあくまでも良馬はユリーシャの後見人としての役目を全力で果たすと言う。
良馬からの返答を聞いて、守は良馬がユリーシャの事を異性として意識していないことに対して怒りの様な、娘が取られない事に対してホッとしたような複雑な心境だった。
そんな良馬と守の様子を見て、サーシアとユリーシャの姉妹は、
「ユリーシャ・・貴女も苦労しそうね。でも、私よりは可能性があるかな？」
サーシアの場合、自身の叔父に恋心を抱いてしまい、更にはその叔父には既に雪と言う婚約者も居た。
略奪愛にするにしても叔父と姪と言う関係上から倫理的にも血筋的にもサーシアの初恋は実ることはなかったのだ。
しかし、ユリーシャの場合は恋心を抱いたのは叔父の古代ではなかったのでサーシアと異なりワンチャンある。
「うん、頑張る」
ユリーシャ自身、良馬は自分よりもギンガのことを愛しているのは知っている。
でも、ユリーシャ自身負けるつもりはなかった。
だからこそ、自分は父親や姉と違って故郷であるイスカンダルへは戻らず地球へ行くのだ。
（私も志郎おじさまではなく、ユリーシャと同じ家に預けられていれば違った未来があったのかな？）
ユリーシャの姿を見て、もし自分もユリーシャと同じく月村家に預けられていれば、初恋の相手は古代ではなかったのかと言う想像もしたが、しかしそれはあくまでも結果論に過ぎない。
「元気でね、ユリーシャ」
「お姉様も・・・」
今生の別れではないが、今度はまたいつ出会えるかわからない。
姉妹は再び抱擁を交わす。
「俺も行くぞ、古代」

すると、トチローも守、サーシアと共にイスカンダルへ行くと言う。
「大山。お前・・・」
「なあに、ほんの道連れさ。お前とスターシアの仲を邪魔をするようで悪いが、俺だったら荒廃したイスカンダルをどうにか元の姿に戻せると思ってな、いくら俺でも星一つの相手じゃあ無理かもしれんが、まぁ何とかやってみるさ」
「すまない大山」
イスカンダルはあの暗黒星団帝国とイスカンダリウムの争奪戦の影響でただでさえ寿命が尽きかけている星だったにもかかわらず、無理をさせてしまった。
軌道を外れ暴走し、暗黒星団帝国に取られないようにするためとは言え、イスカンダリウムの組成変換までした為、残り少ない星の寿命を更に縮めてしまった可能性もある。
しかし、イスカンダリウムの組成変換をしたトチローが行くのであれば、確かに彼の言う通りイスカンダルの寿命をもう少し延ばすことも出来るかもしれない。
「気持ちの悪いセリフを吐くなよ。俺の勝手にすることだ。それじゃあ行くとするか?古代。俺たちの雪風でな」
「ああ・・・」
イスカンダルへ古代とトチローが向かおうとすると、
「だったら、私とロベルも良いかな?」
すると、トチローの話を聞いていたジェレミアも自身の秘書であるロベルと共にイスカンダルへの渡航を求める。
(向こうの地球の技術も見てみたいが、何やら厄介な予感がする)
(それならば、彼らと共にそのイスカンダルとやらへ行った方が良さそうだ)
(彼らの反応から、そのイスカンダルはどうやら管理局とは無縁の世界の様だしね)
ジェレミアの勘はまさに当たっており、ヤマトがこれから向かう地球にはかつて自分を逮捕した管理局の執務官が居る。
その執務官がジェレミアの正体を知ったら色々と面倒だ。

「えっ？でも・・・」
守はジェレミアからの突然の申し出に困惑する。
（暗黒星団帝国内部では確かに協力者だったけど、この人をイスカンダルへ連れて行って大丈夫かしら？）
サーシアもジェレミアの暗黒星団帝国内での研究内容や言動から不安視する。
「まぁ、いいじゃないか古代。人手は少しでも多ければ多いほどイスカンダルの復興も早まるってもんだろう？」
困惑する古代親子であるが、楽天的なトチローはむしろ人手が増えると言う事で賛成の様子。
「まぁ、お前が言うなら・・・」
若干の不安が残るものの確かにトチローの言う通り、イスカンダルの復興には人手が必要なのも事実だ。
それに怪しさがあるもののジェレミアはサーシアを無事に暗黒星団帝国から脱出させるために協力してくれた恩もある。
「それじゃあ進。元気でな」
「兄さんも・・・」
「叔父様。また・・・またいつか会えるわ」
「サーシア・・・」
こうして守、サーシアの古代親子、トチロー、ジェレミア、ロベルの五人を乗せた雪風・改は地球へ帰還するヤマトら一行とは別にイスカンダルがあるマゼラン星雲へと旅立って行った。
あの暗黒星団帝国がここからマゼラン星雲のイスカンダルへ襲来したのだから、雪風・改だってイスカンダルへ行ける筈だ。
（雪、今から帰るよ・・・）
古代は兄や姪たちの無事を信じて今は愛する人が待つ地球へ戻ることを最優先した。

古代親子たちの旅立ちを見送り、ユリーシャと共に　まほろば　に戻ってきた良馬はギンガがジッと窓の外を眺めているのを見つける。
「ギンガ、どうした？」

「あっ、良馬さん・・・ちょっと思うことがあって・・・」
「ん？」
「人はいつになったら血を流さずに幸せになれるんでしょうね？」
「・・・」
「私たちはサーシアちゃんも地球の人々も救うことが出来ました。でも、暗黒星団帝国の人々は私たちが滅ぼさなければならない人たちだったのでしょうか？生き残るには敵を滅ぼすしか手はないのでしょうか？」
　地球の脅威となった彗星帝国、そして今回の敵だった暗黒星団帝国には地球側が流した血以上の血が流れ、命が消えた。
　ティアナから聞いた話では、機動六課時代に戦った広域指名手配犯の方のジェイル・スカリエッティの下に居た戦闘機人たちはそのほとんどが今は平和にミッドチルダで暮らし、更には四人がナカジマ家の養女となりスバルと姉妹関係であると言う。
　また最初に地球を滅ぼそうとしたガミラスも暗黒星団帝国との共闘をきっかけに和解が出来た。
『昨日の敵は今日の友』と言う言葉があるように例え一度は敵対しても友になりえる可能性だってある。
　しかし、それは互いに生き残った場合だ。
　強大な脅威となった場合、どちらかが滅ぶまで戦わなければならないのか？
　ギンガはそんな疑問を抱く。
「ギンガの気持ちは十分にわかるよ。でも、俺たちは自分の罪を知っている。血を流すことの恐ろしさを感じている。その思いが少しずつ積み重なって、今はダメでもきっといつかは命を大切に出来る人類を作り上げることが出来る筈だ」
「良馬さん・・・」
「ギンガ、俺はやはりこの宇宙で地球が一番美しい星だと思うよ・・・それは何かをひたむきに信じることが出来るからだ。今は無理でもいずれやって来るさ、宇宙の全てが平和になる日が・・・俺たちがそれを信じている限りね」

「・・・そうですね」
「さあ、帰ろう・・・皆が待っている地球へ・・・」
「はい!!」
良馬の言う宇宙の平和が来る日・・・
それはいつ来るのは分からない。
しかし一つ確実なのは、地球は暗黒星団帝国からの脅威から脱したと言う事だ。
ただ、地球へ戻る中でユリーシャがサーシアと共にイスカンダルへは行かず、このまま地球へ一緒に帰る事を知って、
「ええー!?ユリーシャちゃん、サーシアちゃんとイスカンダルへ帰らなかったの!?」
「うん。私は地球で暮らすことにしたの」
ユリーシャは指で髪先を弄りながら答える。
「で、でも・・・どうして・・・」
やや動揺するギンガはユリーシャに地球への残留理由を訊ねる。
「それはギンガが何よりも知っているんじゃない?」
「・・・」
ギンガはユリーシャが何故父親や姉と共に母親が居るイスカンダルへ戻らず、地球へ一緒に帰るのか女としての勘ですぐに分かった。
ユリーシャは家族や故郷よりも愛を選んだのだと・・・
「これからもよろしくね、ギンガさん」
「え、ええ・・・こちらこそ・・・」
ユリーシャはいたずらっ子の様な笑みを浮かべるが、反対にギンガの方は引き攣った笑みを浮かべる。
(むぅ〜やっぱりユリーシャちゃんはお邪魔虫です)
そして、心の中でユリーシャに対して毒づいた。

ヤマトら一行が地球との通信圏内に入ると、早速戦況報告を地球へと入れる。
暗黒星団帝国側のハイペロン爆弾の起爆装置は破壊し、地球はハイペロン爆弾からの脅威から去ったことを伝えるとその場にいたパル

チザンメンバーは歓声をあげる。
ヤマト、まほろば　のカメラが記録した暗黒星団帝国の中心部とも言える人工都市を破壊した映像、内部から波動融合反応で誘爆していく暗黒星団帝国本星の映像の数々・・・・
これらの映像が決して作られたものではない事はヤマトらが地球への帰還行動に移っている事から明白であった。
ようやく暗黒星団帝国からの脅威が去った事実は藤堂から地球連邦政府へと伝えられ、大統領は連邦市民に対し公式に会見を開くと地球の各所では歓喜の声が響いた。
ただ、ヤマト、まほろばが撮影したデザリアム星の崩壊映像は暗黒星団帝国の人たちが吹き飛ぶ詳細な映像ではないが、都市がヤマト、まほろば　の波動砲で消滅していく光景は都市内部に居た民間人も同じく消滅していくことを意味しているショッキングな映像なので、大統領からの会見ではその映像は使用されず、あくまでも防衛軍関係者がその映像を確認し、暗黒星団帝国の脅威は完全に去ったと判断したのだ。
地球上が歓喜の声で満たされている中、雪とティアナの姿は英雄の丘にあった。
二人は髪を風になびかせながら、じっと空を見上げている。
「終わりましたね・・・」
一息吐きながらティアナは雪に声をかける。
「ええ・・・でも、地球はまた新しい始まりを迎えることになるわね」
英雄の丘から見える市街地ではパルチザンと占領軍との戦禍の爪痕が残っており、まだあちこちに煙が上がっているのが見えるし、ビルも破壊されたままだ。
「でも、地球の人ならまた復興できますよ」
ガミラス、彗星帝国とこれまでこの世界の地球は二度に渡る大きな戦乱を乗り越え復興を果たした。
今度だって復興を果たせるとティアナはそう思っていた。
「そうね・・・」
ティアナの言葉に雪は微笑みながらそう答える。

（やっぱり、この世界の人たちは強いわね・・・）
ティアナ自身もＪＳ事件にて、公開陳述会にてナンバーズとガジェットの襲撃で地上本部ビル、機動六課隊舎が破壊された経験があり、事件後に地上本部ビルは修繕された現場を見たが、復興レベルが全然違う。
暗黒星団帝国は日本だけではなく、地球全域を占領下に置いたことから復興作業は地球全域となるのだ。
それ以前に占領下の中、不屈の闘志でパルチザンを組織して徹底抗戦をした事、
あてもない航海になるかもしれない中、敵の本星を突き止め攻略し、地球を救ったのだから、まさに英雄の名にふさわしい功績だろう。
管理局の魔導師にここまでの功績をあげることが出来る者がいるだろうか？

ＪＳ事件の時は陸、空の局員はミッドで・・・・
海はゆりかごに引導を渡すために戦ったが、ミッドが今回の地球の様に占領下であった場合果たして管理局は・・・ミッドの人たちはパルチザンとして徹底抗戦をするだろうか？
なのはやはやて、ヴォルケンリッターたちならば徹底抗戦を決意するだろうが、例え一人の魔力レベルが高くても少人数では大勢の敵には勝てないだろうし、今回のパルチザンみたいに、なのはたちに賛同して一緒に戦ってくれる局員や聖王教会の騎士が一体何人いるだろうか？
そしてミッドの住人は何も全てが魔導師であり管理局員と言う訳ではない。
スバルの父親のゲンヤみたいに非魔導師も居れば、ヴィヴィオの様な学生を始めとする民間人も当然いる。
ティアナが共に戦ったパルチザンの中には民間人も多数含まれていた。
ミッドが万が一、どこかの勢力の手によって占領された時、局員は勿論の事、ミッドの民間人も戦うだろうか？

パルチザンとして暗黒星団帝国と戦ったティアナだからこそ、管理局の局員としての視点から管理局とこの地球の人たちと比べ疑問を持ってしまう。
ティアナがそう思いながらチラッと隣に立つ雪の姿を見ると、雪は空を見上げながら微笑んでいる。
ヤマトが帰ってくると言う事は、古代の帰還も意味している。
アクシデントで離れ離れになってしまった雪であったが、もう少しで婚約者と再会できる。
雪としては一日千秋の思いでヤマトの帰還を待っているのだろう。
「・・・」
雪の表情を見てティアナは、
(戦っている時の雪さんは女性ながらも頼もしく見えたけど、こうして恋人を待っている雪さんは同じ女性ながらも綺麗だわ・・・やっぱり、恋をすると女性って綺麗になるのね)
戦闘時の雪はなのはの様に頼もしく見えたが、こうして古代の帰りを待っている雪の表情は同性のティアナから見ても綺麗だった。
(恋・・・か・・・)
これまでの人生でティアナは年齢＝彼氏無しであった。
それ以前に異性に対して現を抜かす余裕がなかった。
しかし、遭難してパルチザンとして戦闘をしこうして平和が来たという実感を感じていると何だか心に余裕が出来たような感覚となり、雪やギンガの様に婚約者や彼氏が居る人に対して羨むと同時に自分も恋をしてみたいと言う思いが沸き上がり始めた。
とは言え、先日の戦闘で自分は顔に傷を負った。
忍の話では整形で傷は消すことは出来るが、ティアナとしてはこの傷はこの戦いを忘れないために残したい。
でも、こんな顔に傷がある女を貰ってくれる男なんているだろうか？
そう思いつつも傷がある自分を愛してくれる男が居たとしたら、それは自分の全てを受け入れてくれる男と言う事でもある。
(そんな人、現れるのかな・・・？)

異性関係や管理局についての将来を思いつつ、ティアナは雪と共に再び空を見上げた。

地球のあちこちで暗黒星団帝国からの脅威が去った事に歓喜する中、反対に悲哀な空気を出している者たちが居た。

それは捕虜収容所に収監されている暗黒星団帝国の占領軍将兵たちだった。

藤堂が収容所へと赴き、アルフォンとメイトリックの二人にヤマト、まほろばが撮影したデザリアム星の映像を確認してもらったのだ。

二人にしてみれば、祖国が滅ぼされる映像を見せられたことになったが、アルフォンもメイトリックも占領軍終末の時から可能性の一つとして祖国の滅亡は覚悟していた。

アルフォンもメイトリックも藤堂の見解通り、この映像はフェイクではなく事実であることを認めた。

アルフォンとメイトリック以外の捕虜になった占領軍の将兵たちにアルフォンは祖国の滅亡を伝えた。

本国には家族や恋人を残してきた者も大勢いたので、祖国の滅亡の知らせを聞き、涙を流す将兵たちが大勢居た。

それからしばらくして、ヤマト、まほろば、春藍が地球へ帰還した。

それはヤマトが最初のイスカンダルからの航海で帰還した時の様に連邦市民や防衛軍関係者からの歓喜の声で迎えられた。

まさに凱旋とも言える帰還だった。

「何とか無事に地球へ戻れましたね」

地球へ到着し新見が安心したように言う。

「ああ・でも当分戦後処理で忙しくなるだろうな」

良馬はこの後地球で待っている戦後処理で当分は宇宙へ上がることはないだろうと判断した。

帰還後、古代、良馬、山南は防衛軍司令部に戦況報告を求められ司令部へと出頭し、地球までの帰路の途中で作成した報告書を提出し

た。
地球はまたもや復興作業が急務となる。
復興作業の他に問題は暗黒星団帝国がメガロポリス東京に撃ち込んだハイペロン爆弾の処理と捕虜になった暗黒星団帝国の将兵たちの処遇だ。
ハイペロン爆弾の処理に関しては真田率いる科学局の技術者たちが念入りに調査を行った後、爆破処理されることになった。
しかし、起爆装置を外したとはいえ、地球上で爆発すれば地球の中間子質量を破壊し地球人類を滅亡させてしまうので、浮上させる際も細心の注意が払われた。
地球人類がハイペロン爆弾処理の不手際で地球人類を滅ぼすなんて洒落にならない。
ハイペロン爆弾自体に自走機能もあったので、七色星団での戦闘の際、ヤマトに撃ち込まれたドリルミサイルを逆転させたようにハイペロン爆弾下部に装備されていたドリル部分を逆回転させ、空からは頑丈なワイヤーとパワーのある戦艦で引っ張りあげる。
ハイペロン爆弾の牽引には春藍の他に数隻の無人戦艦群が担当した。
春藍や無人戦艦は波動エンジンを二基装備しているので、ヤマトまほろば　よりもパワーがあったからだ。
春藍の艦橋には艦長の山南の他に真田の姿もあり、パワー出力の調整監督を務めた。
地表からハイペロン爆弾が引き抜かれる際には現地に沢山のマスコミが集まり、生中継で世界各国に放送された。
宇宙へ牽引されたハイペロン爆弾は第十一番惑星の沖合まで曳航された後、十分な距離をとり、牽引した戦艦部隊の波動砲の一斉射撃で爆破処理された。
ハイペロン爆弾の処理が行われている中、雪は暗黒星団帝国の捕虜が収容されている捕虜収容所へと出向いた。
「お加減はいかがですか?アルフォン少尉」

雪は収容所にある医務室のベッドに居るアルフォンを見舞う。
「動きに関して多少の違和感はあるが、動くだけならば問題はない。この後控えている裁判にも十分に耐えられる」
「・・・・」
裁判と言う言葉を聞き雪は表情を曇らせる。
「そんな顔をしないでくれ・・私たちはあまりにもやりすぎた。この後の裁判の判決を私は受け入れるつもりだ」
アルフォンの言う通り、ハイペロン爆弾の処理に続いての戦後処理は暗黒星団帝国の捕虜たちの処遇だった。
ただ、彗星帝国の残党と異なり、暗黒星団帝国の将兵たちは地球襲来時に直接地球へ降下して軍・民問わずに多くの破壊と虐殺行為を行った。
任務の為とは言え、民間人も多数虐殺したことは許されない行為だった。
防衛軍も地球連邦政府、連邦市民も暗黒星団帝国の捕虜に対する憎悪は激しかった。
カザンの後任としてアルフォンは地球占領軍総司令官に就任していた。
例えアルフォン本人が民間人の虐殺に関与していなくとも総司令官という立場上責任は取らなければならない。
「・・アルフォン少尉。実は今日、少尉には会ってもらいたい人が居て・・・・」
「ん？誰だい？」
雪はアルフォンにある人物と会ってもらいたく、今日はその人物を連れてきた。
「貴方がアルフォン少尉・・・・」
「君は？」
「ヤマト艦長代理の古代進です」
雪は今日、アルフォンに古代と会ってもらいたく、彼を連れてアルフォンの下を訪れた。
「そうか、君が・・・・雪から話を聞いているよ・・・・それにヤマトの事も

ね」
「私の方も雪からアルフォン少尉、貴方の事を聞いています。負傷した雪を治療し、介抱していただきありがとうございます」
「礼なんてよしてくれ。私は君たちの仲を引き裂いた憎むべき敵なのだからな」
「いえ、例え貴方が敵だとしても大切な人を守ってくれたことには変わりないので、礼を言うのは人として当然のことです。それに私たちは地球人類のためとは言え、貴方がたの母星を滅ぼし、大勢の同胞を殺しました」
「君も私も軍に身を置くのだから互いに敵を倒す行為は当然の事だ。そして我々は負けた。敗軍の将となった者の末路は大体分かっている。そして、私はそれを覚悟している」
「・・・」
デスラー同様、古代はアルフォンとも違った形で出会えれば、彼との間に友情関係を結べたかもしれず、残念に思った。
その後に民間人殺害に関してアルフォンとメイトリックをはじめとして生き残った士官・下士官に関しては連日厳しい尋問が行われ、事実確認が行われた。
もっともこれまでのパルチザンとの戦闘で占領軍側にも大勢の戦死者を出しているので確認は困難になった。
中には戦死した将兵に民間人殺害の罪をきせて逃れようとする者も居た。
民間人虐殺行為が確定的な者に対して死刑判決が下される中、やはりアルフォンの身柄については処遇が割れた。
カザンの後任として地球占領軍総司令官なのだから死刑にするべきだと言う意見の他、雪や古代から彼の助命を乞う意見も出ている。
死刑を免れた捕虜に関しては彗星帝国の残党同様、太陽系からの追放だろうが、その時のリーダー役としてアルフォンを推す意見があるのも事実である。
復興作業の中、アルフォンを含めた捕虜に関する処遇はもう少しもめそうだった。

暗黒星団帝国からの脅威が去ったことから、抵抗勢力であるパルチザンは解散となり、民間人は地球の復興へ今度はその力を貸し、軍人はそのまま軍へと戻る。
パルチザンが使用した兵器のメンテナンス係をしていた忍とノエル、戦闘員だったティアナは海鳴市の月村邸へと戻った。
源三郎も中嶋家に戻り、一時的に中嶋家に世話になっていたフェイトとヴィヴィオも月村邸へと戻る。
フェイトは月村邸でティアナと再会した際、ティアナの頬に貼られているガーゼを見て目を見開く。
「ティアナ!!どうしたの!?そのガーゼ!?やっぱり、怪我を!?」
「あっ・・は、はい。油断して・・・・」
「大丈夫なの？ちゃんと治るの？」
「一応、手術をすれば傷は消えるみたいなんですけど・・・・」
「そうなの？良かった」
手術をすればティアナの頬の傷は消えるようなので、それを聞いてホッとするフェイト。
しかし、ティアナは、
「・・・・でも、フェイトさん。私はこの傷を敢えて残すつもりです」
ティアナは手術をせずに傷を残すと言う。
彼女の返答に驚くフェイト。
「えっ!?なんで!?どうして!?手術が怖いの!?大丈夫だよ、手術中は麻酔で意識が無いみたいだし」
フェイトはティアナが手術をせずに傷を残すのは手術が怖いからだと思った。
しかし、手術中は全身麻酔をするのだから痛くはないから安心して手術を受ければいいと言う。
「いえ、そうではなくて・・・・この傷は私がここで戦った証でもあるんです・・・・あの戦いを忘れないため、私は敢えてこの傷を残します」
ティアナはフェイトに手術で傷を消さない訳を話す。
「そう・・・・」

フェイトもティアナの理由を聞いてティアナの出した決断ならばそれ以上深くは言わず、彼女の意思を尊重した。
「でも、なのははきっと・・・」
「ええ・・・色々言うかもしれませんね」
フェイトはティアナの決断に理解を示したが、なのはに関してはきっとティアナの言動に対して理解に苦しむかもしれない。
それでもティアナは自分が下した決断を曲げるつもりはなく、例え相手がなのはだろうとも文句は言わせないつもりだった。
「ねぇ、ティアナさん」
「ん？何？ヴィヴィオ」
「そのガーゼの下、どんな風になっているの？」
これまでの話を聞いてヴィヴィオはティアナの傷がどんなモノなのか気になり、ティアナに傷を見せてくれと頼む。
「ちょっ、ヴィヴィオ!?」
ヴィヴィオの頼みにフェイトはドキッとする。
いくらなんでもそれは失礼じゃないかと思ったからだ。
しかし、ヴィヴィオもこの世界に来て色々と図太くなったようだ。
それは傷を負ったティアナも例外ではない。
「まぁ、傷口もだいぶ乾いたみたいだし、もう大丈夫かな？」
ティアナは慎重に頬に貼られたガーゼをゆっくりと取る。
ベリベリベリ・・・
ガーゼの下から露になった傷はティアナの左頬から鼻骨にかけて斜めに着いた傷で、レーザー銃の影響による火傷と縫った後も含め魚の骨みたいな傷となっていた。
「・・・」
フェイトはティアナが経験した戦闘の凄まじさを想像し、露になったティアナの傷を見て息をのむ。
(ティアナ・・・きっと、激しい戦闘を経験したんだ・・・)
「おぉーティアナさん、カッコいい!!まるで女海賊みたい!!」
一方、ヴィヴィオの方は地球で女海賊が主人公のアニメを見た経緯から今のティアナとそのアニメの女海賊の主人公と姿が重なり、キラ

キラした目でティアナを見る。
（えっ!?ちょっとヴィヴィオ!!まさか、ヴィヴィオもティアナみたいな傷を作るなんて言わないよね!?）
ティアナの傷を見たヴィヴィオの反応を見て、心配になるフェイトであった。

百二十五話　交信再開

暗黒星団帝国からの脅威が去り、地球は再び復興への道のりを辿らなければならなかった。
帰還後、良馬はシリウスから暗黒星団帝国までの航海とその最中で行われた戦闘報告の為、海鳴市の実家へ戻れず、メガロポリス東京に留まっていた。
イスカンダルへは戻らず、地球への残留を決めたユリーシャはリニスに任せて先に海鳴市にある実家に戻ってもらった。
そして、報告会が終わると春藍に関しては地球へ撃ち込まれたハイペロン爆弾の処理作業の為、近日中に再び宇宙へ飛び立つ事になった。
良馬は暗黒星団帝国との戦いにおける報告を終え、ようやく暫しの休暇がもらえた。
山南たち春藍の乗員らもハイペロン爆弾の処理が終われば休暇となる。
「ふぅ～やっと帰れた・・・」
海鳴市の実家に久しぶりに戻った良馬。
「・・・なんかものすごく懐かしく感じるな」
実家の月村邸を見てポツリと呟く。
「ただいま～」
「あっ、月村さんおかえりなさい」
良馬を出迎えたのはたまたまロビーに居たティアナだった。
「っ!?ら、ランスターさん、その頬の傷どうしたの!?」
良馬はティアナの頬の傷を見てギョッとする。
「あっ、これは・・・」
ティアナは良馬に暗黒星団帝国の占領下でパルチザン活動をして、頬の傷はその最中で負った傷であることを伝える。
ユリーシャを連れて帰ったリニスも当然、ティアナを見て驚いた。
しかし、リニスと一緒に居たユリーシャの方は、「はてな?」と口に

はしたがリニスほど驚いてはいなかった。
なお余談であるが、リニスとユリーシャが先に月村邸に戻った日、忍たちは当然、どんな旅だったのかをリニスとユリーシャに訊ねた。
一日で全てを語るには時間が足りないが、守とサーシアが地球へ戻らずイスカンダルへ戻った話をした際、フェイトは物凄く落ち込んでいた。
(フェイトさんまさか本気で守さんの事を・・・)
守が地球へ戻らなかった事実を知り落ち込んでいるフェイトを見て、ティアナはフェイトが失恋したのだと直感し、まさか、まさかの失恋場面を目撃してしまったことになる。

「そんなっ!?ランスターさんは元々この地球の動乱には関係なかったのに・・・」
本来ならばミッドの住人であるティアナにとって地球の動乱は無関係でありそのまま無視して構わなかった。
それにもかかわらずティアナはパルチザンの一員として暗黒星団帝国の占領軍相手にドンパチしていたなんてまさに寝耳に水であった。
しかも顔に傷までつける程の大怪我をさせてしまった。
(あっ、そういえば暗黒星団帝国との戦いですっかり忘れていたけど、ランスターさんやハラオウンさんの問題もあったんだ・・・)
暗黒星団帝国との戦いで忘れていたが、こうしてティアナの姿を見て彼女たちを元の世界へ還す問題も残っていた。
こうして暗黒星団帝国との戦いが終わったので彼女たちの帰還について管理局との交信も再開されることになるだろう。
(ランスターさんの傷を見て管理局がクレームをつけてこなければいいけど・・・)
管理局との交信の際には嫌でもティアナの傷は管理局側の人間に見られる。
その時、管理局側がティアナを傷物にしたと喚いてくる可能性は高い。

「ランスターさん。知っていると思うけど、暗黒星団帝国との戦いは決着がついた」
「はい」
「そうなると管理局との交信はまた再開されることになるだろう。だから・・・・」
「この傷については全て私の自己責任ですから、管理局に文句を言わせません」
　ティアナは良馬が何を言いたいのかすぐに察し、先手を打つ。
「で、でも、それぐらいの傷は手術で・・・・」
「分かっています。それでも、私は忘れたくないんです。この世界であったことを・・・・あの戦いの事を・・・・」
　ティアナにとってはこの世界での戦闘はこれまでの人生の中で生と死を間近で経験した物凄い体験だ。
　ハイペロン爆弾の占領作戦では、すぐそばで戦友を亡くす経験もした。
　ティアナが傷を敢えて残すのはあの戦いで死んでいった仲間を忘れたくないと言うセンチメンタルな面があった。
　良馬とティアナとの間でしんみりとした空気がある中、
「リョーマ!!」
　その空気を壊すかのように明るい声がその場に響いたと思ったら、
「わぷっ!?」
　ユリーシャが良馬に抱き着く。
　ギュっ・・・・
　ただ抱き着かれた時、ユリーシャの柔らかい体・・・・特に短期間で大きく育った胸がその存在感を主張してくる。
「ゆ、ユリーシャ!?」
「もう、リョーマ。なかなか帰ってこないんだもん。あぁ～久しぶりのリョーマの匂い・・・・」
　ユリーシャは良馬に抱き着いたまま胸板に顔を埋める。
「ちょ、ちょっと、ユリーシャ」
「・・・・」

ユリーシャと良馬とのやり取りを見ているティアナの視線が気になる。
「あ、あの・・・ランスターさん？」
「あぁ～私にはお構いなく。ごゆっくり～」
「えっ？ちょっ、ランスターさん!?」
羨むような、ドン引きするような感情が入り混じった視線をしながらその場から去るティアナだった。
（月村さんもか・・・あれ？ちょっと待って、確か月村さんはギンガさんと・・・浮気!?浮気なの!?）
ティアナとフェイトは月村邸で良馬とギンガの二人がキスをしているのを目撃しているし、クリスマスに行った温泉宿ではキスどころか露天風呂で二人は合体なんてしていた。
（くっ、リア充め!!）
ギンガと言う恋人が居ながらユリーシャともイチャイチャ（ティアナ視点）している良馬の姿を見て胸にむかむかする気分になるティアナだったが、
（ん？あれ？でも確かイスカンダル人って赤ん坊の期間がすごく短いのが特徴・・・ってことは、ユリーシャちゃんはあの体付きで一桁の年齢!?）
（それって年齢的に大丈夫なのかしら!?）
ユリーシャの体つきを見ると十代後半～二十代前半ぐらいなのだが、実年齢はまだ二～三歳・・・
イスカンダル人の特徴を知らなければ何の疑問も持たないが、特徴を知っているとやはり気にしてしまう。
良馬がユリーシャに対してよそよそしい態度をとるのは彼女が古代守とイスカンダルの女王であるスターシアの娘と言う理由だけでなく、ユリーシャの年齢も関係していた。
（いけない、いけない、それよりも現状を確認しましょう）
いくら心の中で文句を言っても自分に彼氏が出来るわけではないので、ティアナは良馬からの情報と現状の確認を行う。
（暗黒星団帝国からの脅威が去ったから管理局との交信が再開される

となると、やっぱりなのはさんとも話すのは当然よね・・・？）
フェイトと話した時にも思ったが、この傷を見たらなのはは絶対に経緯を訊ねてくる。
ガーゼを貼っても同様だ。
『そのガーゼはどうしたの？』と、絶対に聞いてくる。
メイクで誤魔化せるかと一瞬そう思ったがこの傷は大きく広範囲なので、メイクだけでは完全に隠せそうにない。
だからと言ってこの傷を手術で消すつもりはない。
だったら、管理局との交信の際、その席にでなければ良いのではないか？
スバル辺りが心配しそうだが、少なくともなのはと顔を合わせることはない。
でも、ミッドに戻ったら嫌でも顔を合わせることになる。
それならば、面倒事はさっさと片付けた方が良い。
ティアナは面倒だと思いつつもいつまでも先延ばしに出来る問題ではないので、管理局との交信が再開されたらこの傷の経緯を話そうと思った。

地球の復興作業と暗黒星団帝国の捕虜の扱い問題の中、地球側のもう一つの問題・・・フェイトたちをミッドへ戻さなければならなかった。
流石に人員がイスカンダルの様に少ない訳ではないので、地球の復興作業、暗黒星団帝国の捕虜に関する処遇もあるが、管理局との交信は従来通り源三郎と良馬が担当することになった。
幸い休暇後も　まほろば　はあの長距離航海と戦闘を行った為、ヤマトと共にドック入りしているので、宇宙へ航海する予定もないので、良馬の方はフェイトたちの帰還に専念することにしたのだ。
なお、休暇中は同じく休暇になったギンガとあちこち出かけたり、あの航海中は一回きりだけだったので、それを埋め合わせするかのように互いに体を重ねた。
ギンガと二人っきりのお出かけの他に良馬はちゃんと家族サービ

スもした。
忍やリニス、ユリーシャを連れて出かけたりもした。
ただ、出かけ先でのユリーシャのアプローチにはドギマギさせられることも多々あった。
ギンガの方も中嶋家の皆と離れている時間が長かったので彼女も家族サービスを行った。
そんな良馬とギンガであったが、月村家と中嶋家の皆で出かけた際、良馬に引っ付くユリーシャの姿にギンガが嫉妬オーラを全開にする場面も見られた。
嫉妬オーラ全開のギンガ・・目のハイライトが仕事を辞め、普段はエメラルドグリーンの瞳だったはずなのに、この時ばかりは金色に変化していた。
流石のフェイトとティアナはそんなギンガの姿に思わず身震いしていた。
ユリーシャとしてはやはり、姉の失恋場面を見ているので、積極的に意識してもらおうと言う行動だった。
そして、嫉妬オーラ全開のギンガの機嫌をなおすために良馬の財布の中身と一軒のレストランが犠牲になった。

それからしばらくして・・・・

時空管理局・次元航行本部
コンソールに着信を知らせるシグナルが点灯し、アラームが鳴る。
それはしばらくの間、遠のいていたアラーム音だった。
「っ!?ま、まさか!?」
当直に当たっていたオペレーターはアラーム音を聴いて慌てて回線を繋ぐ。
モニターには良馬と源三郎の姿が映し出される。
「地球防衛軍、宇宙戦艦　まほろば　艦長の月村良馬です」
「同じく、地球防衛軍作戦課第五課長の中嶋源三郎です」
「じ、時空管理局本局勤務、オペレーターの・・・・」

オペレーターは慌てて良馬と源三郎に役職と名前を名乗る。
「暗黒星団帝国襲来と言うアクシデントにより、交信が滞っておりましたが、何とか退けることが出来、こうして再びハラオウン執務官らの返還についての協議を再開したく、今回こうして交信をした次第です」
「なお、こちらの地球が一時暗黒星団帝国の占領下に置かれましたが、ハラオウン執務官らは無事です。次回の交信時にはその席に同席するでしょう」
「わ、分かりました。至急上司に報告し、協議の再開の旨を打診いたします」
「了解です。では、次の交信日時ですが・・・」
良馬たちは管理局との次の交信日時を知らせ今回は通信を切った。
オペレーターは早速上官に地球防衛軍が暗黒星団帝国を退け、もう一つの地球との交信が再開されたことを報告した。
「何っ!?かの世界があの暗黒星団帝国を退けただと!?」
「はい。先ほど先方より交信が入り、ハラオウン執務官らの帰還について協議を再開したいとのことです」
「分かった。ハラオウン提督とレティ―提督に報告しておこう」
「了解です」
もう一つの地球が暗黒星団帝国を退けたことは瞬く間に管理局の中を駆け巡った。
「なのはさん!!ティアたちがいる世界との交信が再開したって聞いたんですけど、本当ですか!?」
スバルが早速、噂を聞きつけなのはに噂が本当なのかを訊ねてきた。
「うん。私も直接その場にいた訳じゃないけど、リンディさんに聞いてみたら本当みたい」
「そうですか・・・また、ティアと話せるんだ・・・」
スバルは再びティアナの顔を見て話せることに喜んだ。
スバル同様、なのは自身も嬉しかった。
なのはの場合、かつての教え子と親友の他に養女のヴィヴィオが向

こうの地球に居るのだ。
その地球が宇宙からの侵略者の手により占領されてしまい、管理局との交信が途絶えてしまったのだから、スバル以上に気に病んでいた。
それがようやく向こうの地球と交信が再開されるのだから、なのはとしては次の交信日には有休をとってでもその席に同席するつもりだった。
「それで、なのはさん。次の交信日はいつですか!?」
もう一つの地球との交信はなのはの様子から確定の様子だったので、その交信日がいつなのかをなのはに訊ねる。
交信日が自分の非番の日ならばいいのだが、もしそうでなければスバルもなのは同様、有休を使うつもりだった。
「えっと・私もまだ交信する日は聞いてないの・・リンディさんに聞いてみて分かったら連絡するね」
「ありがとうございます!!なのはさん!!」
なのは同様、スバルももう一つの地球との交信日を楽しみにしていた。

フェイトやティアナと関係があるスバルやなのはたちはもう一つの地球との交信再開を喜ぶ者が居たのは当然であるが、反面交信再開についてもう一つの地球を危惧する者たちも居た。
「まさか、もう一つの地球が暗黒星団帝国を撃退するとは・・・・」
「魔法をろくに使えない蛮族だと思われましたが、やはりあの世界の存在は極めて危険です!!」
「しかし、肝心の座標が分からないのではどうしよもない」
「それに艦船の数も未だに揃っていない」
「では、このまま手を拱いて見ていろと言うのですか?」
「チャンスはハラオウン執務官の帰還の機会だが・・・・」
「何とか、執務官らの引き渡し場所を向こうの地球へ指定することは出来ないのだろうか?」
フェイトたちの引き渡し場所をもう一つの地球にすれば迎えに居

た次元航行艦のログから、もう一つの地球の座標を特定できる。
「それは今後の交渉次第ですな・・・」
「しかし、あの女狐（リンディ）にそれが出来るでしょうか？」
「うーん・・・」
リンディに頼んでフェイトたちの引き渡し場所をもう一つの地球に指定するように言ったところで彼女がそれに従うのかと言う疑問がある。
「あの女狐も管理局の提督だ。今回の事態には危機感を抱くのではないか？」
暗黒星団帝国はもう一つの地球よりも科学技術が上であの地球を一時的とはいえ占領したのだ。
その格上の暗黒星団帝国を地球防衛軍は退けたのだから、管理局としてはもう一つの地球に危機感を抱くのも当然だ。
リンディも管理局の提督と言う立場ならば、同様の危機感を抱く筈だとここに集まった高官たちはそう思った。
交信前の某日、リンディは本局内のとある会議室に呼び出された。
「失礼します。リンディ・ハラオウン参りました」
その会議室には幾人かの本局の高官局員らが待っていた。
「よく来てくれたハラオウン提督。さっ、掛け給え」
高官の一人がリンディに椅子へ座るように促す。
「失礼します」
促されリンディは椅子へと腰かける。
「早速だが、ハラオウン提督。君ももう一つの地球が暗黒星団帝国を退けた件については知っていると思う」
「はい。それでもう一つの地球と交信が再開されたのだとか？」
「うむ・君としても義娘さんがミッドに戻ってこられるのだから一安心だろう？」
「そうですね」
「・・・今回の件、君はどう思う？」
「『どう？』とは？どういう意味でしょう？」
「聞けばもう一つの地球を占領した暗黒星団帝国・・・かの帝国はもう

一つの地球よりも優れた技術力を有していたと聞く」
「はい。私もそれについては聞いています。先日、探査航海に出た八神艦長が暗黒星団帝国と地球防衛軍との戦場跡を発見し、工作部隊が残骸を回収したとのことです」
「それで何か分かったのか？」
「例の地球の情報とか？」
　暗黒星団帝国はもう一つの地球を占領していたので、はやてが見つけた暗黒星団帝国艦の残骸からもう一つの地球についての情報があるかもしれなかった。
「残骸を回収し調査をしましたが、航海ログなどの情報は全て消去していたみたいでもう一つの地球に関しての情報はありませんでした」
　暗黒星団帝国側も自分たちの本星の座標をヤマトら一行に知られないように戦闘前にあらかじめ航海ログを消去したり、艦が撃沈された際に調査されることを見越して撃沈された時に作動する自滅プログラムを仕込んでいた。
　その為、はやてが見つけた暗黒星団帝国の残骸からはもう一つの地球の情報は手に入らなかった。
　防衛軍側の残骸はコスモタイガーばかりであり、戦闘機であるコスモタイガーにはワープ機能なんてないので、地球の座標なんて言う情報はなかった。
　とは言え、管理局には存在していない貴重な宇宙金属と宇宙船のエンジン等がわずかながらも手に入ったので全くの無駄骨と言う訳ではなかった。
「そうか・・・」
　もう一つの地球の情報が何ら手に入らなかったことに落胆している様子の高官たち。
「ハラオウン提督、そんな暗黒星団帝国が格下の地球相手に敗北した・・・この結果は由々しき事態ではないと思わないかね？」
「我々が暗黒星団帝国の残骸を手に入れることが出来たように、もう一つの地球は我々以上に暗黒星団帝国の技術を接収できたのではないか？」

「その通りだ。それによってもう一つの地球がいつ我々に牙をむけるが分からない状況だ」
「この際、打つべき手は事前に打っておくべきではないかな？」
「ん？打つべき手とおっしゃりますと？」
（まさか、もう一つの地球に対して武力行使をする気じゃないでしょうね？）
（でも、もう一つの地球の座標は不明だから、もう一つの地球に対して武力行使なんて不可能な筈・・・）
　リンディは高官たちの言動に嫌な予感がした。
「ハラオウン提督・今後、交渉を通じて君の義娘であるハラオウン執務官らの帰還交渉が考えられるだろう？」
「ええ、そうですね」
「その交渉を通じてハラオウン執務官らの返還場所をもう一つの地球に出来んかね？」
　高官の一人がリンディに今回彼女を呼んだ要件を切り出す。
「えっ？」
　高官の提案にリンディは鳩が豆鉄砲を食ったようにポカーンとした顔になる。
「返還場所をもう一つの地球に設定すれば、必然的に座標を知ることが出来る。座標さえ知ることが出来れば後はどうとでも対処は出来る」
「暗黒星団帝国を退けたとは言え、地球側も無傷と言う訳ではあるまい。何かしらの被害が出ている筈だ。ならば、我々でも今の地球防衛軍に勝てるのではないか？」
「それに武力でなくとも戦災復興の名目で我々が救いの手を差し伸べ、かの世界に介入し管理世界へ編入も出来るのではないかね？」
　高官たちはポカーンとしているリンディを無視して、彼女を通じて何とかもう一つの地球の座標を手に入れようと提案する。
「お、お言葉ですが、それは難しいかと思います」
　しかし、リンディはすぐに再起動して高官らの提案はほぼ不可能だと言う。

リンディ自身も管理局の提督と言う立場から防衛軍と暗黒星団帝国の強さは理解しているし、高官らの言う格上相手の暗黒星団帝国を防衛軍が破ったと言う事実から彼らの強さを改めて実感している。
だが、地球防衛軍はこちらが手を出さない限り、管理局に対して牙をむくとは思えない。
防衛軍を敵に回さないようにするには変なちょっかいを出さない事こそ防衛軍側にも管理局側にも被害を出さず、両者にとっても円満なのだ。
「そもそも、私たち時空管理局は地球防衛軍から不信視されています。それは皆様にもその心当たりがあるかと思いますが？」
リンディが目を細めて高官たちを見渡しながら訊ねると、彼らは気まずそうに視線を逸らす。
視線を逸らすと言う事は彼らに心当たりがあると言う事だ。
管理局はこれまで通信ポッドをいじったり、無許可で地球連邦の領海とも言える太陽系内へ次元航行艦を派遣した。
その結果、逆にコンピューターウィルスを送り込まれ、派遣した次元航行艦は遭難し乗員は全員殉職した。
そして、その件についてあたかも防衛軍側に非があるような態度をとった。
『そんな相手を信用できるか？』と聞かれれば当然その答えは『信用できない』である。
そんな中でフェイトたちの引き取り場所を地球にしてくれと頼み込んだところで却下されるのは目に見えている。
「よって、ハラオウン執務官らの返還場所はおそらく宇宙空間の公海上のどこかになるでしょう。では、私はそのための交渉準備がありますので失礼します」
リンディはきっぱりと地球でのフェイトたちの返還は無理であることを高官らに告げ、会議室からそそくさと出て行った。
「くっ・・・・」
「・・・・」
高官らはリンディの背中を悔しそうに顔を歪めながら眺める事し

かできなかった。

一方、もう一つの地球に居る件のフェイトたちの方はと言うと・・・

「うーん・・・こっちが良いかな？それともこっちかな？でも、色合いからしてこっちかな？いや、こっちも捨てがたいな」

「ねぇ、フェイトママ、もういい？眠いよぉ～」

「もうちょっと待ってヴィヴィオ。久しぶりになのはママとお話するんだから、おめかしして行かないと」

自分たちの引き渡し場所についての話し合いが行われているとは知る由もなく、フェイトは久しぶりにミッドの皆と交信をするのだから、ヴィヴィオには十分にめかしこんだ服を着てもらって、なのはには会ってほしかった。

しかし、親バカな一面があるフェイトはなかなかヴィヴィオの服を選べずに夜遅くになっても迷いに迷っていた。

そんな親バカなフェイトに付き合わされているヴィヴィオは既に眠いようで目をこすっている。

こうして様々な思いを抱く中、いよいよ交信の日を迎えた。

先日、防衛軍側が管理局へ伝えた日時と時間に通信を知らせるアラーム音が鳴る。

オペレーターは早速通信回路を開く。

モニターには先日、交信を入れた良馬の姿が映し出される。

「こちら、地球防衛軍所属、宇宙戦艦　まほろば　艦長の月村良馬です」

「こちらは時空管理局・本局です」

良馬とオペレーターが形式的な挨拶を交わすと、返還についての話よりも暗黒星団帝国の侵略の為、フェイトらとミッドの友人たちとの交信が滞っていたので色々と積もる話もあるだろうと思いまずは彼女たちには久しぶりの交流をしてもらおうと良馬なりの気遣いだった。

「フェイトちゃん!!ヴィヴィオ!!」

「久しぶりなのは」

「なのはママ、久しぶり!!元気だった!?」
管理局側のモニターにはなのはがモニターに食いつく勢いでフェイトとヴィヴィオに声をかける。
なのはは今日の為にリンディから交信日を聞いてわざわざ有休をとったのだ。
「暗黒星団帝国に地球が占領されたって聞いて物凄く心配したんだよ!?ケガとかしなかった!?」
「えっ?あぁ～・・・うん、ワタシタチハダイジョウブダッタヨ・・・」
フェイトはなのはから少し視線を逸らし、カタコトで無事だったことを伝える。
ティアナは頬に大きなケガをしたが、フェイトとヴィヴィオは無傷なのであながちフェイトの返答はある意味で間違ってはいなかった。
「あれ?フェイトさん、ティアはどうしたんですか?今日来てないんですか?」
なのは同様、スバルもなのは経由から今日の交信日を聞いて有休をとったのだ。
しかし、地球側のモニターには良馬、フェイト、ヴィヴィオだけでティアナの姿がなかった。
「あぁ～ティアナはね・・・」
フェイトは今日この場にティアナが居ない理由を語る。

どうして今日、ティアナがこの場に居ないのか?
それは少し時間を巻き戻し、月村邸での朝食時まで遡る。
「あの、フェイトさん」
「ん?何かな?」
「今日の交信ですが、私は欠席してもいいでしょうか?」
「えっ?」
ティアナは今日の交信は欠席すると言い、彼女の言葉にフェイトは驚く。
「理由を聞いても良いかな?」
「その・・・先日、フェイトさんに言いましたけど、この傷をなのはさん

が見たらきっと口論になるでしょう・・・久しぶりの交信でフェイトさんもヴィヴィオも・おそらくなのはさんも沢山話したいことがある中、私のせいで場の空気を悪くするのは・・・」
「・・・」
「だから、この傷については次の交信の日にして、今日はフェイトさんたちも久しぶりになのはさんとお話してください」
フェイトもティアナの言い分には理解できる。
自分やヴィヴィオがミッドの皆との交信を楽しみにしているのだから、きっとミッドのなのはたちも楽しみにしているに違いない。
楽しみにして中、口論で終わるのはあまりにも後味が悪い。
「分かった。でも、スバルはきっとがっかりするんじゃないかな？」
「でしょうね・・・でも、なのはさんとの事を思えば・・・」
「うん・・・」
「それに次の交信には嫌でも顔を合わせるますから・・・フェイトさんにはすみませんが、私は今日欠席する理由を適当に伝えてもらえますか？」
「分かったよ、ティアナ。ヴィヴィオも今日、ティアナは一緒に行かないけど、余計な事を言っちゃだめだよ」
「うん、分かった」
と、この様なやり取りがあった。
当然、なのはたちはこの場にティアナも来るものばかりだと思っていたので、ティアナの欠席は意外だったのだ。
「ティアナはちょっと風邪気味みたいで・・・」
「えぇー!!あのティアが風邪!?訓練でも六課の時も風邪なんてひいたことが無かったのに・・・」
フェイトは今日、ティアナが風邪のために欠席だと伝えると、スバルは物凄く驚いていた。
「暗黒星団帝国の事とか色々あったから、きっと疲れちゃったんだよ。次の交信には来るって言っていたから」
「そうですか・・・」
久しぶりにティアナと出会い話すことが出来ると思ったスバルは

ティアナが欠席と言う事でがっかりしていた。
「まぁ、風邪って言うなら仕方ないよ、スバル。無理をして悪化させちゃそれこそティアナが可哀想でしょう？」
「は、はい」
なのははがっかりしているスバルを慰める。
「それで、そっちの地球が暗黒星団帝国に占領されている時、フェイトちゃんもヴィヴィオも大丈夫だった？収容所みたいなところに連れて行かれなかった？」
「うん。情報管制や夜間の外出禁止とかはあったけど、比較的に自由に過ごせたよ」
「ヴィヴィオは平気だった？怖いことはなかった？」
「最初は少し怖かったけど、でも大佐と一緒にＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをやって楽しかった」
「大佐？」
「くすっ、それがヴィヴィオがね・・・」
フェイトはヴィヴィオが暗黒星団帝国の大佐とゲームを通じて仲良くなっていた話をなのはたちに話す。
「えええーっ!!ヴィヴィオ、そんな人と仲良くゲームを!?」
地球を占領していた敵兵・・しかも大佐と言う上級将校と仲良くゲームしていたヴィヴィオの行動になのはもスバルも驚愕する。
「ヴィヴィオ、本当に大丈夫なの!?その人から酷いことをされなかったの!?」
育ての親として、やはりなのははヴィヴィオが敵兵と仲良くなったという事実が信じられない感じでヴィヴィオに訊ねる。
「大佐はちょっと変わった人だけど、いい人だったよ。暗黒星団帝国の人たちがＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬを止めさせようとした時、大佐はそれを止めてくれたの」
ヴィヴィオはなのはたちにメイトリックとＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬを一緒にプレイした事を楽しそうに話した。
ヴィヴィオの様子からなのはは本当にヴィヴィオが怖い思いをしたわけではないのだと判断した。

その後もフェイト、ヴィヴィオ、なのは、スバルはこの空白期間を埋めるかのように互いにあった身の上話を楽しそうに語り合った。
結局今日の交信では、帰還についての話は出来ず、次の交信日の日にちを決め、終了した。

フェイトたちがなのはたちと交信をしている中、月村邸の地下では・・・・

「ランスターさん。はい、これ」
忍はティアナに新しく改良したクロスミラージュを手渡す。
朝食の席で今日、ティアナが交信を欠席するのであれば、その間新しく改良したクロスミラージュの試験運用をしてみようと言う事になったのだ。
元々、ティアナが忍にクロスミラージュの改造を頼んでおり、暗黒星団帝国とのごたごたが終わり丁度良かった。
「これが・・・・」
ティアナは受け取ったクロスミラージュ・改を受け取る。
クロスミラージュの待機モードはタロットカードの様なカード状であるが、新しくなったクロスミラージュはそのカードにドクロマークが描かれていた。

（ど、ドクロマーク？何故、ドクロマーク？）
ティアナは何故、ドクロマークなのか疑問に思った。
「あ、あの・・・どうしてドクロマークなのでしょうか？」
そこで、ティアナは何故ドクロマークにしたのかを忍に訊ねた。
「クロスマークだったから、より強そうなドクロマークにしたの」
「そ、そうですか・・・・」
「さっ、それよりも起動してみて」
「は、はい」
この際、ドクロマークにはもう突っ込まず、ティアナはクロスミラージュを稼働させてみた。

稼働させてみると、これまで自動拳銃型のデバイスはリボルバー型へと変わっていた。
カートリッジも四発から六発に増えていた。
リボルバー型であるが、パルチザンの際に使用していたコスモガンとほぼ同じ大きさに設定されていたので、今のティアナには手に十分馴染んだ。
ティアナが試し打ちしてみると、改造前よりもシューターの精製の速さも連射速度も断然違う。
(早い!?)
(それにＡＭＡで満たされているこの環境なのに威力もある・・・これがＡＭＡの無い環境ならリミッターものね)
しかも、威力も上がっていた。
近接のダガーモードも問題なく使用できた。
「更に追加のモードも設定しておいたわ」
「追加の設定?」
「えっと・・・ここをこうして・・・」
忍がクロスミラージュ・改に追加された機能を発動すると、リボルバー型のクロスミラージュ・改は重力サーベル型に変化する。
「け、剣!?・・・いえ、銃身が長い銃?」
ティアナは重力サーベルを今回初めて見たので、重力サーベルが銃身が長い銃に見えた。
「これは重力サーベルを参考にしたのよ。ダガーモードは近接型だけど、この重力サーベル型は中距離、遠距離に対応できるわ。ただ、この銃身の長さだから使用できるのは主に屋外になるけどね」
重力サーベル型は使用空間が限られるが拳銃型、ダガーモードと忍の手によりクロスミラージュ・改はオールラウンド型のデバイスへとなった。
「それじゃあ、早速模擬戦をしてみましょう」
「えっ?模擬戦?」
このＡＭＡで満たされた環境での模擬戦・・・
しかも、此処にいる魔導師の人数は限られている。

模擬戦の相手は一体誰なのだろうか？
ティアナがそう思っていると、
「ふもっふ!!」
月村邸の地下にパルチザン活動中によく見たあのボ〇太くんが居た。
「ぼ、ボ〇太くん!?」
「このスーツのパイロットはノエルが勤めているわ。大丈夫、ノエルとこのボ〇太くんスーツなら多少無理をしても大丈夫だから」
「だ、大丈夫って・・・・」
ティアナは改めてボ〇太くんを見る。
ボ〇太くんは手にビームライフル、腰にはコスモガンに手榴弾、背中にはハルバードを背負っている。
「さっ、では模擬戦開始!!」
「えっ？ちょっと!!忍さん!?」
忍がティアナから距離をとり、模擬戦の開始を宣言すると、
「もふる!!」
ボ〇太くんがビームライフルを撃ちながら突撃してきた。
模擬戦なので勿論、ボ〇太くんが使用しているビームライフルは最低限の出力に設定されているので、命中しても電気ショックを喰らうぐらいのダメージだ。
コスモガンもビームライフルと同じで、手榴弾は閃光弾で背中のハルバードは刃が無い模造ハルバードとなっている。
「ひぇ～!!」
ティアナ自身、あのボ〇太くんスーツの能力は知っていた。
実際にパルチザン活動の時もあのボ〇太くんスーツにはティアナ自身もお世話になっていたからだ。
（こ、こんなことならなのはさんと言い合いになってもフェイトさんたちと一緒に行けば良かった!!）
デバイスの起動だけだと思ったのだが、まさかのボ〇太くんとの模擬戦なんて予想外だった。
しかもノエルは自動人形なので、通常の人間と異なり多少無理な動

きをしても丈夫なのでティアナの予想外な動きをしてくる。
忍も忍でノエルにボ○太くんスーツを着てこうしてティアナの相手をしてもらい敢えて無理な動きしてもらい、ボ○太くんの耐久テストを兼ねていた。

それからしばらくして・・・・
「ただいま～」
「ふぅ～なのはたちも元気で良かった」
管理局との交信を終えたフェイトたちが帰ってきた。
「あっ、フェイさん、ヴィヴィオ。おかえりなさい」
「ティ、ティアナ!?どうしたの!?なんでボロボロなの!?」
ボ○太くんとの模擬戦を終えたティアナはまさにボロボロとなっていた。
「色々ありまして・・・・」
「ほ、本当に大丈夫？」
「は、はい・・・・」
「えっと・・・それで、次の交信日なんだけど・・・・」
フェイトはティアナを心配しつつも次の交信日の日程を教えた。
「次の交信日は来るんでしょう？」
「は、はい。スバルは元気でしたか？」
「うん。多分、次の交信もスバルは来ると思うよ・・・勿論なのはも・・・・」
「・・・・」
ティアナもフェイトも次の交信はやや荒れる予感がした。
しかし、ティアナにしてもそれは言わなければならない事案だった・・・・

百二十六話　交信日の夜の出来事

暗黒星団帝国の脅威が去り、地球と管理局との間で交信が再開された日、フェイトとヴィヴィオが交信を終えて月村邸に戻ると何故かティアナはボロボロになっていた。
フェイトが理由を聞いてもティアナはその時は、はぐらかした。
夕食を摂った後、ティアナがボ○太くんを相手にクロスミラージュ・改の起動実験をした月村邸の地下にて、
「やぁ!!」
「ふっ」
「たぁ!!」
「よっ、と・・・」
大人姿になったヴィヴィオがギンガを相手にスパーリングをしていた。
ギンガもやはり、ミッドの様子・・・スバルの事が気になったので、フェイト経由からスバルの様子を聞こうと今日は月村邸に来たのだ。
そして、ヴィヴィオはミッドでスバルのシューティングアーツの先生がギンガである事を知っていたので、ちょうどいい機会だったのでギンガに頼んでこうしてスパーリングの相手を頼んだのだ。
ギンガとヴィヴィオのスパーリングをフェイトはハラハラしながら見学している。
ヴィヴィオはＳｔ・ヒルデ魔法学院初等科に通ってからノーヴェにストライクアーツを教えてもらっていた。
ティアナ同様、忍からデバイスを貰ったヴィヴィオは身体が鈍らない様にするためとティアナ同様デバイスの起動確認を兼ねてこうしてギンガを相手にスパーリングをしているのだ。
ギンガも格闘型の戦闘スタイルなので、ヴィヴィオの相手が務まっている。
ギンガの母、クイントはシューティングアーツを生み出した魔導師であり、そのシューティングアーツはストライクアーツを根源にして

いる。
　クイントに保護されてから彼女が殉職する二年と言う短い期間であるが、ギンガはクイントからシューティングアーツを習っていた。
　そして、クイントの殉職後はギンガがスバルにシューティングアーツを教えていたので、ギンガは教える事に関しても問題なくヴィヴィオに的確なアドバイスをしている。
「ほら、踏み込みが甘いわよ!!ヴィヴィオ!!もっと重心を意識して身体がぶれないようにしなさい!!」
「は、はいっ!!」
「回避の時もただ避けるんじゃなく、自分の攻撃を合わせられないか相手を常に観察するのよ!!」
「はいっ!!」
「身体は熱くても意識は冷たく冷静に!!　客観的に自分と相手を見ることを心がけなさい!!」
「はいっ!!」
「そして、刹那の隙に必倒の一撃を叩きこんで終わらせるのが打撃系のスタイル。出力がどうとか、射程や速度や防御能力がどうとか、自分と相手のどちらが強かろうがそんなの全部関係ない!!」
　ギンガの強烈でなおかつ素早い拳がヴィヴィオの顔の横に叩き込まれる。
「相手の急所に正確な一撃。狙うのはただそれだけよ・・・・」
「・・・・」
　身長差は大人モードになっているので、問題ないが経験と力の差があるので、ギンガは敢えて攻撃を逸らしながら、クイントから教わった打撃系スタイルの真骨頂をヴィヴィオに教える。
　ギンガとヴィヴィオのスパーリングに決着がついたことで休憩となる。
「ふぅ～・・・・」
「お疲れ様です。ギンガさん」
「あっ、ありがとう。ティアナ」
　ティアナがギンガにタオルとスポーツドリンクを差し出し、ギンガ

はソレを受け取る。
「はい、ヴィヴィオも・ちゃんと水分補給はしないとね」
「ありがとう!!フェイトママ」
ヴィヴィオもフェイトがタオルとスポーツドリンクを渡している。
フェイトから渡されたスポーツドリンクをヴィヴィオはゴクゴクと飲んでいる。
「ねぇ、ティアナ」
「はい？」
ヴィヴィオにタオルとスポーツドリンクを渡し終えたフェイトがティアナに声をかける。
「それで、今日はどうしてあんなにボロボロだったの？」
フェイトは、やはり今日の交信を欠席したにもかかわらず、ティアナがボロボロになっていたのかが気になり改めて彼女に訊ねる。
「あぁ～・・・それはですね・・・」
ティアナは一度何かに興味を示したフェイトはなのは同様、しつこい事を学んでいるので、諦めて話す。
「へぇ～忍がクロスミラージュを・・・」
「ええ。それで、新しくなったクロスミラージュの起動実験でノエルさんが乗る特殊スーツを相手にしまして・・・」
「それで、どうだったの？新しくなったクロスミラージュは？」
「シャーリーさんには申し訳ないですが、段違いでした」
「・・・」
これまで使用してきたクロスミラージュよりも性能が上がったクロスミラージュ・改。
「ねぇ、ティアナ」
「なんでしょう？」
「模擬戦やらない？」
「えっ？」
バトルジャンキーな一面を持つフェイトとしてはティアナのクロスミラージュがどんな性能に生まれ変わったのか気になったのだ。
「一応、空戦なしの地上戦のみでどうかな？」

フェイトはなのはやはやてと同じく空戦属性があるので、空を飛べるがティアナは空戦属性がないので空を飛べない。
そこで今回はあくまでも新たに生まれ変わったクロスミラージュの性能を見てみたいので、ティアナと同じ土俵での模擬戦を提案した。
「・・・分かりました」
昼間はノエルが乗るボ○太くんとの模擬戦をしてボロボロになったが、夕食を食べある程度の時間でティアナの体力も回復したので、これからフェイトと模擬戦をするにしても問題はなかったので、ティアナはフェイトとの模擬戦を了承した。
「ギンガ」
「はい」
「ちょっと、ティアナと模擬戦をやるからヴィヴィオをお願い」
「分かりました」
「今度はフェイトママとティアナさんが模擬戦をやるんだ・・・」
「そうみたいね。さっ、ヴィヴィオ、ちょっと離れようか？」
「うん」
フェイトとティアナの模擬戦は自分やヴィヴィオよりも広範囲になるかもしれないので、ギンガとヴィヴィオは地下室の隅に移動して二人の模擬戦を見学する。
地下室の中央でフェイトとティアナは対峙する。
「じゃあ、改めてルールの確認ね」
「はい」
「今回は地上戦メインだから、私は空を飛ばない、設定はミッドでの模擬戦同様、非殺傷設定ね」
「分かりました」
互いにデバイスを設定し、バリアジャケットを纏う。
そして、デバイスを起動する。
「・・・」
（クロスミラージュの形状が変わっている）
自分が知るティアナのクロスミラージュはより質量兵器に近い形

に変化している。
だが、変わったのはクロスミラージュだけではない。
「・・・」
対峙しているティアナ自身もだ。
短期間とは言え、生死をかけた戦いに身を投じていたティアナはパルチザンとは言え、いわば戦場からの帰還兵だ。
目つきが獲物を狙う肉食獣の様で、顔に残る傷がより一層ティアナの凄みを強めている。
(なんだか、シグナムを前にしているみたい・・・)
フェイトは同じバトルジャンキーのシグナムと対峙している様な錯覚を覚える。
両者は共に準備が出来、模擬戦が始まる。
「プラズマスラッシャー!!」
まずはフェイトが先手を打ち、バルディッシュから砲撃タイプの雷撃攻撃がティアナへと迫る。
「・・・」
ティアナはそれを最小限の動きで避ける。
その間にフェイトは動作を高速化させる移動魔法、ソニックムーブでティアナとの距離鵜を詰めて、彼女の死角から斬撃をくらわそうとする。
スっ・・・
ガチャっ!!
「えっ?」
すると、ティアナは自身の死角から迫るフェイトに向けてクロスミラージュの銃口を向けて、接近してくるフェイトにシューターを六発撃ち込む。
「くっ・・・」
高速で死角を突いたと思ったがティアナはそれに反応して反撃をしてきた。
咄嗟のことながらもフェイトは体制を立て直し、一度ティアナから距離を取る。

フェイト自身も若いながらもさまざまな戦闘を経験しているので、ティアナと距離を取る際、牽制を含めてプラズマバレットを放つ。
しかし、フェイトの誘導射撃魔法もティアナのシューターで全て撃ち落される。
（シューターの精製が早い!!）
ティアナは魔力が魔導師の中でも多い方ではないので、なのはのみたいに一度で何十発のシューターを精製するのは無理だ。
ＡＭＡの状況下で一度に六発のシューターを撃った後、短時間で再びシューターを精製して撃ってきた。
デバイスの演算能力がずば抜けており、フェイトは驚愕する。
（でも!!）
魔導師としてのキャリアはフェイトの方が上。
フェイトは追加にプラズマバレットを放つ。
（いくら演算が早くても三連続でのシューターなら・・・・）
とは言え、フェイトもＡＭＡの環境下で三連続のシューターはきつかったのか、一撃目と二撃目のプラズマバレットよりも三撃目のプラズマバレットは数が少ない。
「クロスミラージュ、ダガーモード」
『イエス・マム』
クロスミラージュ・改が銃口から銃床にかけてオレンジ色の魔力刃を形成すると、ティアナは迫りくるプラズマバレットを切り裂きながらフェイトへと向かう。
（プラズマバレットを切り裂くなんて無茶苦茶よ!!）
（それでも私の速さにはついていけない筈）
フェイトが思うように、流石に今のティアナでもソニックムーブ状態のフェイトには走って追い付けないので、ティアナはシューターでフェイトの動きを誘導する。
六課のＦＷ陣で参謀のようなセンターガードを務めていた事とこれまでフェイトと行動を共にして彼女の動きの癖をこれまで見てきたからこそ出来る。
（流石ティアナ・私の動きの癖をよく知っている・・・だからこそ、私

の動きを誘導している・・・)
当然、フェイトも自身がティアナに誘導されているのは気づいている。
(それなら・・・)
しかし、フェイトは敢えて罠の・ティアナの懐へと飛び込み死中に活を求める。
「バルディッシュ!!ザンバーフォーム!!」
『イエス・マム』
フェイトはバルディッシュを斬馬刀のような形状に変形させてティアナへと切りかかる。
「クロスミラージュ、サーベルモード!!」
すると、ティアナも新たに追加されたサーベルモードでフェイトを迎え撃つ。
ガキン!!
フェイトのザンバーフォームの魔力刃とクロスミラージュ・改の長くなった銃身部分がぶつかり合う。
「クロスミラージュの形が違ったけど、その形も初めて見る形だね」
「はい、重力サーベル?ってやつを基にして製作されたクロスミラージュの新しいモードです」
(室内だけど、ダガーモードじゃあ、フェイトさんのバルディッシュを防げない。近接戦はそこまで得意じゃないけど、四の五の言っていられる余裕はないしね!!)
鍔迫り合いをしながら初めて見るクロスミラージュの新たなモードについて訊ねるフェイト。
ティアナもクロスミラージュ・改の新たなモードについてフェイトに答える。
鍔迫り合いをする両者であったが、ティアナは横へとズレ、鍔迫り合いから脱し、銃身の下に魔力刃を形成して、フェイトに切りかかる。
フェイトは切りかかるティアナを迎え撃ち、両者は魔力刃を打ち合う。
しかし、ティアナのクロスミラージュ・改のサーベルモードは彼女

が言った通り重力サーベルを基にしているので、銃口がある。
ティアナは刃の打ち合いの隙を見てフェイトの腹部にシューターを撃ち込んだ。
不意を突かれたフェイトはもろにシューターを喰らい飛ばされ、思わずバルディッシュを手放してしまう。
デバイスを手放したことで勝敗がつき、色々と縛りのルールはあるが、今回の模擬戦はティアナに軍配があがった。

「ふぅ～負けちゃったけど、なかなか面白かったよ、ティアナ」
「は、はぁ～」
ヴィヴィオからタオルとスポーツドリンクを受け取り、スポーツドリンクを口にしながらフェイトは、負けはしたが今回のティアナとの模擬戦は楽しかったと言う。
この地球へ来てから本格的な模擬戦は行っておらず、久しぶりに魔力を使用しての模擬戦はバトルジャンキーであるフェイトにしてみればやはり楽しかったのかもしれない。
(今回と同じように空戦なしの条件だったら、なのはもティアナに負けていたかも・・・)
今のティアナの実力を体験したフェイトは今回と同じルール・空戦なしの地上戦の場合、なのはでもティアナに負けるのではないかと思った。
「それにしても銃と剣が一緒になっているなんて驚いたよ。それに近接戦も強くなったんじゃない？」
「ええ・パルチザンに居た時、古野間さんに習いましたからね」
六課に来る前に使用していたアンカーガンは射撃魔法専用で六課時代にクロスミラージュに出会ってダガーモードが備わって近接戦も可能となったが、ティアナは生粋の射撃タイプの魔導師だったので、近接戦はそこまで得意ではなかった。
機動六課卒業まで自分の相棒が近接戦タイプのスバルだったのも一因していた。
しかし、パルチザンに居た時は近接戦が苦手だからやらないでは、

死に直結することもあるので、ティアナは古野間から空間騎兵仕込みの近接戦の訓練を受けていたのだ。

フェイトとティアナの模擬戦が終わったその頃、ミッドチルダでは・・・・

「そうか、フェイトちゃんもヴィヴィオも元気そうだったんやな？よかったな、なのはちゃん」

「うん。でも、ティアナは風邪気味だったから今日の交信はお休みだった」

なのは　は　はやてに今日の交信でのフェイトとヴィヴィオの様子を語っていた。

「もう一つの地球が暗黒星団帝国を倒したって話は私も〝海〟の人から聞いたんやけど、まさかこの短期間で倒すなんてな・・・やっぱり、もう一つの地球は強いなぁ～」

暗黒星団帝国に地球全土を占拠されたのだから、奪還するにはもっと時間がかかるモノかと思われたが、防衛軍は僅かな期間で地球を奪還して、暗黒星団帝国を退けた。

その結果からも防衛軍の強さが分かる。

自分たちもＪＳ事件の際における最終決戦を一日と言う短期間で片づけたが、ＪＳ事件と今回もう一つの地球が経験した戦争では規模が違いすぎる。

「管理局のお偉いさんたちが躍起になるのも分かるけど、あんまり向こうの地球を刺激しないでほしいわぁ～」

「う、うん・・・」

「それで、次の交信にもなのはちゃんは行くんか？」

「うん、そのつもりだよ。今回はティアナの様子が分からなかったし・・はやてちゃんはどう？これそう？」

「うーん・ちょっと厳しいわぁ～艦の整備が終わったらまたパトロールの仕事が入ってもうて・・・」

「そうなんだ・・・まぁ、はやてちゃんは艦長さんなんだし、色々お仕事

も沢山あるもんね」
フェイトとヴィヴィオはもう一つの地球に、そしてはやては艦長職と言う事で今はそのほとんどを本局か宇宙へ出ている。
学生時代や機動六課時代は顔を合わせる時間が多かったのだが、こうして役職が異なる部署では会う時間も必然的に減ってしまう。
今のなのはとしてはそれが寂しく感じてしまう。
(早くフェイトちゃんとヴィヴィオが帰ってきたらええんやけど・・・・)
はやて自身もなのはの心情を察して一日でも早く、フェイトたちがミッドに戻ってきてほしかった。
「あっ、それで、はやてちゃん」
「なんや?なのはちゃん」
「一つ気になった事があったんだけど・・・・」
「気になった事?なんや?」
「その・・・・ヴィヴィオの事なんだけど・・・・」
「ん?ヴィヴィオ?ヴィヴィオは元気やったんやろう?」
「う、うん・・・・そうなんだけど・・・・」
「なんや、随分と煮え切らんな、なのはちゃん」
何やら歯切れが悪いなのは。
「その・・・・ヴィヴィオの様子に違和感があって・・・・」
「違和感?」
なのはは今日の交信でヴィヴィオと話して、ヴィヴィオの様子に違和感を覚えた。
「なんや?空元気だったんか?」
「ううん・ヴィヴィオは元気だったよ。むしろ、ミッドに居る頃よりも元気に見えた・・・・」
ボラー連邦への武力制裁失敗後に広げられたなのはやはやてらのデマ・・・・
そのデマの影響でヴィヴィオが学校で虐められることを危惧したカリムやシャッハが一時的に学校を休ませてヴィヴィオの身柄を海鳴の実家で預かってもらうように提案した。

フェイトが居ない中、ヴィヴィオもなのはも家族と引き離されることになるが、ヴィヴィオの身を案じれば、シャッハからの提案を受け入れざるを得なかった。
海鳴の実家で預けられた後、今は海鳴市に住んでいるクロノの奥さんであるエイミィが定期的になのはにヴィヴィオの様子を伝えていたのだが、その時のヴィヴィオは家族から引き離されたせいで元気はなかった。
その後、教会の強硬派のせいでフェイトたちがいるもう一つの地球へと跳ばされてしまったヴィヴィオであるが、暗黒星団帝国侵攻前に何度か交信した際は教会に預けている時よりもヴィヴィオは元気になっていた。
しかし、今日・暗黒星団帝国侵攻後に初めて交信したのだが、ヴィヴィオは侵攻前と同じく元気であったのだが、なのははヴィヴィオの様子を見て違和感を覚えたのだ。
「ん？どういう事や？なのはちゃん」
「その・なんだか目力が強く感じられた」
「目力？」
「うん・・・何か強い意志を宿したみたいな・・・」
「それはやっぱり、なのはちゃんの子どもやからやないか？」
「そうかな？」
「そうやで。不屈のエース・オブ・エースが育てた子なんやから、そうなるのも当然なんちゃうか？それに、無事だったけど、ヴィヴィオは戦時下を経験したんやし、それも影響しとるかもしれへんよ・・・」
はやてはなのはが育てたのだから、なのはに似るのも当然だと言い、なのはは自分の勘違いかもしれないし、はやてが言う通り自分に似たのかもしれないと思った。

なのはがはやてに今日の交信の事を話していたようにスバルの方も今日の交信の出来事を家族に話していた。
ただ、ノーヴェだけはバイトがあるみたいでナカジマ家に不在だった。

ノーヴェは現在、嘱託局員としてスバルと同じ救護隊で働いているが、救護隊の仕事以外に最近ではジムでのバイトも始めており、局員よりもジムでの仕事の方がノーヴェ本人としては向いているようで、ジムトレーナーの資格やジムの経営についての勉強をしている。
「そうか、ティアナの嬢ちゃんは風邪か・・・・」
「うん、久しぶりにティアと話せると思っていたのに・・・・」
ゲンヤにスバルは今日、ティアナと話せなかったことにややがっかりした様子で話す。
「でも、フェイトとヴィヴィオは元気そうだったのだろう？」
チンクがフェイトとヴィヴィオの様子をスバルに訊ねる。
「うん、二人は元気そうだった」
「でも、少し前までもう一つの地球は暗黒星団帝国に占領されていたんでしょう？よく無事だったね」
ディエチがもう一つの地球のついこの前の現状からフェイトとヴィヴィオがよく戦乱に巻き込まれずに無事だったとしみじみと思う。
「シェルターに避難していたっスか？」
ウェンディがフェイトとヴィヴィオの二人が占領下の際、シェルター生活をしていたのかを訊ねる。
「ううん、色々な規制はあったみたいだけど、基本的に自由に生活ができたみたい」
「しかし、もう一つの地球を占領下におくなんて暗黒星団帝国と言うのはかなりの強さを持つ世界なのだろうな」
暗黒星団帝国の存在は管理局でもその名称だけはもう一つの地球の経緯から判明したが、その詳しい実力に関して、管理局は実態を掴めていない。
だが現状の管理局よりも、もう一つの地球が上なのはナカジマ家の皆はこれまでの経緯から察している。
そして、その地球全土を占領下においたのだから暗黒星団帝国の実力は管理局よりも上なのだと分かる。
「でも、その暗黒星団帝国は地球に負けたんでしょう？」

ディエチがチンクに訊ねる。
「こうしてもう一つの地球と交信が再開されたのだからそうなのだろうな」
「それってもう一つの地球が暗黒星団帝国よりも強いってことっスか？」
「暗黒星団帝国の詳しい実力が分からないが、結果的にそうだろうな」
「それで、ヴィヴィオがその暗黒星団帝国の大佐？って人と仲良くなって、なのはさんが驚いていた」
「えっ!?ヴィヴィオが!?」
「暗黒星団帝国の人と!?」
「仲良く!?」
ヴィヴィオ自身がなのはに暗黒星団帝国憲兵大佐のメイトリックと仲良くしていたことに驚いていたが、スバルからヴィヴィオの現状を聞いたチンクたちもこれには驚いた。
「えっ？なんでヴィヴィオが暗黒星団帝国の人と仲良くなっているっスか!?」
「その人、女の人だったの？」
ディエチはその暗黒星団帝国の大佐がヴィヴィオと同じ女性なのかと思いスバルに訊ねる。
「ううん、多分男の人？だと思うよ」
「なんか随分と曖昧な表現だな」
「暗黒星団帝国の人って私たちと違う肌の色をして、見かけも変わっている容姿なんだって」
「違う肌の色って何色なの？」
「灰色だって」
「灰色・・・」
「灰色の肌の人・・・」
ミッドのこれまでの歴史の中で肌の色が灰色の宇宙人なんて邂逅したことがない。
一般的にミッドの人間が肌の色が異なる宇宙人を初めて見たのはボラー連邦のベムラーゼで、一部の管理局の人間ではそこにミノフス

キーも含まれる。
　はやてに関しては短い時間であるが、バース星人であるラムとも出会っている。
　チンクたちは灰色の肌の人間を想像するが、やはり気味が悪い。
「それでヴィヴィオはどういった経緯でその大佐と仲良くなったの？」
「ゲームだってさ」
「ゲーム？」
「うん。ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬって言う仮想空間で遊べるゲームらしいよ」
「ふむ、仮想空間か・・・」
「それって管理局が採用しているシミュレーターとは違うの？」
「自分自身をアバターって言うデジタルの自分をシミュレーター内で戦闘を体感しながら武器や魔法で戦うみたい。戦闘の他にも色んなステージも用意されていてそこでイベントとかもやるんだって」
「へぇ～面白そうっスね」
「うん。ヴィヴィオの話を聞く限り、面白そうだった」
　スバルもヴィヴィオから聞いた内容でＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬには興味があった。
「ミッドでも出来ないかな？そのＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬ・・・」
　管理局が訓練で使用しているシミュレーション装置があるのだから、それを応用すればミッドでもＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬは出来そうだった。
「でも、ゲームを介して地球を占領していた宇宙人と仲良くするなんてヴィヴィオは凄いね」
「ああ・・・私たちが言うのも変であるが、実際にヴィヴィオはノーヴェとも仲良くやっているからな・・・」
　ＪＳ事件の際、自分たちは管理局と敵対関係にありヴィヴィオを攫い酷い目に遭わせた。
　だが、今はヴィヴィオと自分たちの関係は１８０度異なっている。
　ヴィヴィオの養母であるなのはの魔導師としての経歴を見ても最

初はジュエルシードを巡りフェイトと敵対し、ヴィータともはやてを巡り対立し戦った。
一度は敵対しつつも何らかのきっかけで友になりえる。
なのはとヴィヴィオの高町親子は似たような経歴を辿っていた。
「それで、次の交信も行くの？」
「うん。次の交信にはティアも来るみたいだし」
フェイトは次の交信にはティアナも来るとの事なので、スバルは次の交信にも行くつもりであった。

ミッドで再開された交信について様々な感情や話題が出た中、フェイトたちがいる地球では・・・
『ア〝ア〝ア〝ア〝～』
月村邸の食堂ではバルディッシュが普段は出さないような声を出している。
これは決してバルディッシュが不具合を起こしているわけではない。
ついさっき、ティアナのクロスミラージュ・改の性能を確かめるために久しぶりに起動して模擬戦を行ったので、フェイトに例のメンテナンスを頼み込んできたのだ。
そこで、フェイトはノエルに頼み暖かいお酒を頼んだ。
この仰天メンテナンスの方法はノエルもあらかじめ紅葉から聞いて知っていたのでバルディッシュの為にホットビールを用意してくれたのだ。
バルディッシュが普段出さないような声を出したのは、今バルディッシュがホットビールの中に沈んで、疲労？を癒しているためだった。
その様子は仕事終わりに風呂へ入るサラリーマンの様だ。
バルディッシュがこの仰天メンテナンスを行っているのだから、対戦相手であるクロスミラージュ・改も例外ではなく、ホット・バター・ラムが入った耐熱グラスの中に沈んでいる。
『ふぅ～・・・労働の後のメンテナンスは最高です』

「あんた、改良されても性格は変わっていないみたいね」
忍の手により、改良してもらい形状は変わってもクロスミラージュ自体の性格は変わっておらず、この仰天メンテナンスも普通にティアナに要求してきた。
ヴィヴィオのクリスもボ○太くん人形から取り出しホットミルクの中に沈んでいる。
当然、ギンガのブリッツキャリバーもホットワインに入っている。
「ギンガ様も本日はお泊りなさいますか？」
各メンバーのデバイスをメンテナンス中にノエルがギンガに今日は月村邸に泊るかを訊ねる。
「あっ、はい。お願いします」
夜も更けているのでギンガは今日、月村邸でお泊りすることにした。
（フェイトさん・・・）
（ん？何かな？ティアナ）
ティアナはフェイトに念話で語り掛ける。
（ギンガさんが泊っていくと言う事は・・・まさか・・・）
（・・・ま、まぁ、否定はできないかな？）
二人が初めてこの地球へ来た際もギンガは月村邸に泊っていた。
そして、二人はギンガと良馬がキスをして恋人繋ぎをして良馬の寝室へ入っていくのを見ている。
寝室でナニが行われたかなんて、良馬とギンガの様子と保健体育の知識があれば想像は容易い。
実際に翌日の良馬とギンガの様子を見ても夜中にナニがあったなんて想像はつく。
それに二人は既に良馬とギンガの現場を図らずも見てしまったので、わざわざ覗きなどと言う野暮な真似をするつもりはなかった・・・
そう、この時は・・・だ・・・
それから時間が過ぎ深夜・・・
「・・・ん？」
ティアナはベッドで寝ていたのだが、ふと生理的欲求を催してふと

目が覚めた。
「うーん・・・お手洗い・・・」
　ティアナはベッドからムクッと上半身を起こし、ベッドから降りるとお手洗いへと向かう。
「・・・ん？ティアナ？」
　すると、ティアナのベッドの隣でヴィヴィオと一緒に眠っていたフェイトも目を覚ました。
「あっ、フェイトさん。すみません、起こしてしまいましたか？」
「ううん・それよりどこかに行くの？」
「あっ、お手洗いに・・・」
「じゃあ、私も・・・」
　どうやらフェイトもティアナの気配を感じたのと同じく、彼女も生理的欲求を催して、ティアナと共にお手洗いへと向かった。
　二人がお手洗いで用を終えて、寝室へと戻ろうとした時、その帰り道には良馬の寝室がある。
「・・・」
　お手洗いへ行く時は、早く用を足したかったので特に気にも留めなかったが、こうして用を足し終えて後は再び寝室にあるベッドの中に戻るだけとなった今、ふと良馬の寝室の様子が気になった。
　ギンガは確かに今日、月村邸にお泊りしているが、だからと言って今日も良馬の寝室に居るとは限らない。
　それでももしかして・・・
　と言う思いもある。
（・・・ねぇ、ティアナ）
（なんでしょう？）
　フェイトはティアナに念話で話しかける。
（・・・ギンガ・今日も月村艦長の部屋に居ると思う？）
（さ、さあ？）
（ねぇ、ティアナ）
（はい？）
（・・・気にならない？）

（えっ？）
（ギンガが居るか、居ないか？）
（そ、それは・・・）
　クリスマスの時は、露天風呂と言う場所だったので驚きと共に温泉のせいで湯あたりをしてダウンしたが今は月村邸の中でフェイトもティアナも多少は耐性が出来て覚悟も出来ている。
　そして、フェイトもティアナも興味があるのも事実・・・
　ティアナの頭の中では悪魔の羽と尻尾、角を生やしたティアナと天使の羽と頭に輪っかをつけたティアナが語り掛けている。
（ティアナ、覗き何て駄目よ!!もし、気づかれたらどうするの？）
（貴女も行為中、他人に覗かれたら嫌でしょう？）
（何言っているのよ!!行為中なら気づくわけがないじゃない!!）
（それにしていなければさっさと戻れば済む話じゃない）
　理性（天使）と欲求（悪魔）がティアナの頭の中で戦っている中、キィィ・・・
　フェイトが細心の注意を払いながら良馬の寝室の扉を開けていた。
（フェ、フェイトさん!?貴女、一体何やっているんですか!?）
　自分が必死に欲求（悪魔）と戦っている中で、フェイトはあっさりと好奇心に負けて良馬の寝室を覗いていたのだ。
　フェイトが覗いていたことでティアナも欲求に負けてフェイトと共に良馬の寝室を覗いた。
（つ、月村艦長が普通に寝ていれば問題ないわよね）
　別に良馬へ夜這いを仕掛けに来た訳ではないのにドキドキするティアナ。
　しかし、ティアナの予想は裏切られ、月明かりの下、寝室のベッドでは一組の男女の影が一つになっていた。
「うわぁー……うわぁー……」
　顔を赤くしたフェイトが、良馬の寝室を覗きながら小声を漏らす。
　流石に明かりは点けていないが月明かりでシルエットや声、音で良馬とギンガがナニをしているのか分かる。
「・・・・」

ティアナも顔を赤くし、部屋の中で行われている男女の行為を覗いている。
「うわ、ちょっ、そ、そんな事までしちゃうの？」
「すご……月村艦長もギンガも大人だ……」
夜の一族（吸血鬼）と戦闘機人の行為は一度では終わらず、体勢を変えて再び交じる。
「……わー」
「……わぁ」
（ちゃんと避妊しているのかしら？）
此処からでは避妊具の確認は出来ないが、あそこまで何度も交わってはギンガが妊娠するのではないかと思うティアナ。
「あ、あの・フェイトさん。そろそろ戻った方が・・・・」
「もうちょっと。もうちょっとだけ、後学のために・・・・」
「なんの後学ですか・・・・？」
（彼氏もいないのに・・・・）
フェイトの言動にやや呆れるティアナ。
「そんなに言うならティアナは先に戻っていいよ」
「そ、それは・・・・」
ティアナだって気になっている。
だからこそ、こうしてフェイトと共に覗いているのだ。
その後も良馬とギンガの行為を覗いていた二人であったが、ティアナの欲求（悪魔）の囁き通り、良馬とギンガの二人は行為に集中しているのか、フェイトとティアナが覗いている事に気づいていないが、流石にこのままずっと覗いているとノエルか忍に見つかる可能性もあるので、そっと扉を閉め二人は自分たちの寝室へ戻ることにした。
「・・・・」
寝室へ続く廊下を歩いている最中、二人の顔は当然まだ赤い。
「す、凄かったね・・・・ギンガも月村艦長も・・・・」
「え、ええ・・・・そうですね・・・・」
「あれだけやってギンガ大丈夫なのかな？」
「？」

「・・・その・・妊娠しないのかな？って」
「ああ・・・」
フェイトもティアナが思っていた疑問を感じていた様だ。
二人は成人しているので赤ちゃんがどうやって生まれてくるのかぐらいは当然知っている。
「ギンガは・・・」
「えっ？」
「ギンガは・・どうするのかな？」
「ん？それはどういう意味でしょう？」
「私たちは近々ミッドに戻るでしょう？」
「えっ？ええ・・・」
「その時、ギンガはどうするのかな？って思って・・・」
「・・・」
「それで、もし、その時にギンガが妊娠していたら・・・」
フェイトの言う事は分かる。
ミッドにはゲンヤ、スバルとギンガの家族が居る。
最も今ではスバルの姉妹たちも増えている。
スバルの姉妹はギンガの姉妹でもある。
そして、ゲンヤとスバルの二人は今でもギンガの名誉を回復するための活動を続けている。
ミッドではギンガは既に死亡している事になっている。
しかし、ギンガはこうして無事に生きている。
ミッドに帰れる機会は恐らく自分たちの帰還する機会が絶好の機会である。
もし、ギンガが望むのであれば彼女も一緒に連れて帰ってもいい・・・
だが、その時にもしもギンガが妊娠していたらと思うとギンガにも生まれてくる子供も片親になる可能性が高い。
その理由は良馬がミッドに来るとは思えないからだ。
スバルやゲンヤはギンガが生きている事を知れば、きっと帰って来て欲しい筈だ。

勿論、フェイトはミッドに帰る前にはギンガへ聞いてみるつもりだ。

しかし、ギンガだって家族か愛する人かきっと葛藤するはずである。

とりあえず、今はギンガが妊娠してないことを望むぐらいだった。

翌朝の朝食の席にて、ギンガの顔色はツヤツヤとしていた。

百二十七話　交信口論

此処で少し時間を巻き戻し、管理局との交信が再開された日の夜……

良馬の寝室に視点を当てる。

ギンガが月村邸に泊ったと言う事で良馬とギンガは身体を重ねたのだが、この日はいつもよりも良馬は烈しくギンガを求めた。

と言うのも良馬には一抹の不安があったからだ。

暗黒星団帝国の脅威が去り、管理局との交信が再開されたのだから、フェイトたちのミッドへの帰国はもう間もなくだろう。

フェイトたちの帰還先であるミッドチルダはギンガの故郷でもある。

当然、故郷のミッドチルダにはギンガの家族も居る筈だ。

フェイトたちの帰国と一緒にギンガもミッドに帰ってしまうのではないか？

そんな不安が最近より強くなっていた。

ギンガをこうして激しく求めるのはそうした不安の現れでもあった。

幾度もギンガの膣内で果て、流石の良馬もギンガも息も絶え絶えとなり、ベッドに沈んでいる。

「……ギンガ」

「なんでしょう？」

息を整え、良馬はギンガに自分が抱いている不安をぶつけることにした。

「……もうすぐハラオウン執務官らの帰国手続きに入る」

「……はい」

「……その……ギンガは帰りたい？ミッドチルダに？」

「……」

ギンガもフェイトらの帰国が近いことは感じているし、フェイトた

ちの帰国が何を意味するのかも当然理解している。
フェイトたちと一緒に行けばミッドに戻れるし、そうすればミッドに居るスバルやゲンヤと再会することもできる。
良馬が言いたいことにギンガは直ぐに分かり、
「大丈夫ですよ、良馬さん」
ギンガはギュッと良馬は抱きしめ、
「私は良馬さんと一緒にいますから」
「・・・・でも、ハラオウン執務官の故郷には・・・・」
「・・・・はい、私の家族が居ます。でも、この世界に残ると決めたのは私の意思です。月村家に嫁いだと思ってください・・・・良馬さんは私を貰ってくれるのでしょう？」
「ああ、勿論だとも」
ギンガの返答を聞き、良馬もギンガを抱きしめる。
「不安でしたか？私がミッドに帰ると思って・・・・？」
「ああ、不安だった・・・・ハラオウン執務官らの帰国が近づくと思うと増々ね」
「じゃあ、私をこの世界に縛る確実な方法をとってみますか？」
「ん？確実に縛る方法？」
「はい。例えば・・・・赤ちゃんが出来ました・・・・・・・・とか？」
「えっ？」
ギンガの発言に良馬はドキッとする。
確かに二重銀河から戻って来てからは極力ギンガと二人っきりの時はこうしてイチャイチャしている。
そのイチャイチャする時も今日の様に一度で終わった訳ではなく、何度もしている。
ギンガの発言を聞いてギンガを結婚前に孕ませてしまったのかと思う良馬。
「・・・・・・・・なんてね、ちょっとした冗談ですよ」
ギンガは笑みを浮かべ妊娠はしていないと言う。
「えっ？」
どうやら妊娠したと言うのはギンガの冗談であったが流石に今の

シチュエーションでその冗談はきつい。
「ふぅ～心臓に悪いよ・・・でも、それは決して遠くない未来だと思っているよ」
「はい、私もです」
二人は口づけをした後、あれだけイチャついたにも関わらず、良馬はギンガがこの地球に残ると言う事実を聞いて安心したのだが、このままギンガをもう少し感じたいと思い、
「ギンガ・・その・・・・もう一回・・いいかい？」
ナニを何て詳しく言わずともギンガだってその言葉の意味は直ぐに分かり、
「もう・・しょうがないですね」
二人の夜はまだ続きそうだった。
ただ、寝室の扉の外でフェイトとティアナの二人が覗いていることに良馬とギンガは行為で夢中だったので気付かなかった。
良馬とギンガの行為を覗いた後、フェイトとティアナは寝室へと戻りベッドに入る。
二人はそのまますぐに眠れるのかと言われると、それはＮＯであり、しばらくはベッドの中で悶々とさせられる。
しかし、フェイトはいつの間にか眠っていたがティアナは先ほど見た良馬とギンガとの行為の光景から段々と時間が経ち冷静になってくるとこの先についてのヴィジョンについて自問する。
もうすぐで兄が目指していた執務官にもう一息でなれる。
だが、この地球へ来てから管理局が井の中の蛙なのだと認識させられた。
執務官は管理局の中でもエリート職であるが、そんな役職の肩書きなんてこの広い宇宙では何の役にも立たないことがこの地球へ来る切っ掛けである彗星帝国の襲撃から先日あった暗黒星団帝国の脅威を経験して十分に分かった。
（私はどうしたら・・・）
フェイトと共にミッドに戻れば兄が目指し、自分の夢でもあった執務官にもう少しでなれる。

しかしその一方で、管理局の未来に暗雲を感じている自分も居る。
今のティアナにはボラー連邦からの亡命者が密かに新型の宇宙船のエンジンを開発している事は知らないので、ティアナが知る管理局が所有している艦と防衛軍が所有している艦との性能を比べるとどうしても管理局の将来に不安を感じてしまうのも納得できる。
そもそも、この疑問はパルチザンに入る前から抱いていた疑問であった。
ギンガと言う前例があるので、自分も管理局から防衛軍に転属しようかと検討した事だって何度もある。
ミッドへの帰還が近づいている今、早めにその答えを出さなければならない。
ティアナは別の意味を抱えながら悶々とした思いを抱きながら夜を過ごした。
そして、やってきた管理局との交信日の朝・・・・
「・・・・」
ザァー・・・・
交信へ向かう前、ティアナは月村邸でシャワーを浴びている。
頭からお湯を被り、これから起こるであろうなのはとのやり取り・・・・
それを思うとやや億劫になる。
「・・・・」
ふと顔をあげると、鏡にうつる自分の顔・・・・
その顔にはこの地球へ来た時には無い傷がくっきり残っている・・・・
管理局との最後の交信には無かった傷が今ではくっきり残っている・・・・
手術をすれば消える傷であるが、自分はこの傷を消すつもりは毛頭ない。
この傷を消してしまってはあの戦いで死んでいった仲間たちの事も忘れてしまうのではないかという思いもあるからだ。
なのはに何と言われようともこの傷は消さない・消すつもりはな

い!!
「よしっ!!」
パンっ!!
ティアナは両手で頬を叩き気合をいれるとお湯を止め、バスルームから出る。
「ふぅ～・・・・」
お湯で濡れた身体をバスタオルで拭き、ブラとショーツを身に着け、クローゼットから私服を取り出す。
「ティアナ・・・・」
着替えている最中、フェイトがティアナに声をかける。
「はい？」
「その・・・・今日の交信だけど・・・・」
「今日は行くつもりですよ、フェイトさん。スバルも多分私と話したかっただろうし、私自身も久しぶりにスバルとは会いたいですし・・・・」
前回はフェイトとヴィヴィオ、そしてミッド側のなのはに配慮して欠席したが今日は出席する。
「・・・・フェイトさん」
「何かな？」
「もし、私となのはさんが言い合いになったら、ヴィヴィオを連れて退出して下さい」
ティアナは自分となのはが言い合いになれば、自分はなのはに対して口汚い言葉を吐いてしまうかもしれない。
そんな場面をヴィヴィオには見せたくはない。
それ以前に口論する場面は見せたくはないからだ。
「分かったよ、ティアナ」
フェイトもティアナの意を組んでそれに同意した。
いきなりこの傷を見えるのではなく、一応大きなガーゼを頬に貼り、ティアナは今日の交信に臨んだ。
普段の交信通り、モニターの向こう側に本局の制服を着たオペレーターの姿が映る。

そして、オペレーターの後ろには先日の交信の場に居たなのはとスバルの姿もあった。
「ティア!!」
スバルは先日の交信の場にティアナが居なかったので、こうして久しぶりにティアナの姿を見たスバルは感極まってモニターに食いつく。
「「「・・・・」」」
スバルの行動に良馬、フェイト、ティアナ、ヴィヴィオはドン引き。
「す、スバル、少し落ち着いて」
「機械が壊れてしまいますから!!」
モニターの向こう側ではオペレーターとなのはがモニターに食いついているスバルを引きはがす。
「お、お見苦しい所をお見せして、申し訳ございません」
オペレーターとなのはに引きはがされたスバルは冷静になったのか、先ほどの自分の行動に対して頭を下げ謝罪する。
「い、いえ・お気になさらず・・・・我々の不甲斐なさで音信不通となってしまい、こちらこそ申し訳ありません。音信不通の間、親友の安否が気になっていたことでしょう。交信再開となった先日でも欠席でしたからね」
良馬はスバルに対して気にするなと言う。
彼としてもスバルの気持ちは分かるからだ。
スバルが落ち着き、ようやく今日の交信が始まる。
「ティ、ティア?・・その・・・・元気だった?・・・・えっと・・・・最後に会った時よりも雰囲気が変わったし・・・・それにその顔のガーゼもどうしたの?」
久しぶりに画面越しのティアナと面会したスバルであったが、ティアナの変わった雰囲気を読み取り、なんだがしどろもどろに話しかける。
それは訓練校で初めてティアナと出会った時と似たような・・・・いや、それ以上のプレッシャーをモニター越しであるがひしひしと感じている。

（あぁ～やっぱり、スバルも今のティアナはちょっと怖いよね？）
（私だって、ティアナが帰ってきたときには驚いたし、この前の模擬戦でも雰囲気がすごかったもん）
暗黒星団帝国の脅威が去り、それに伴いパルチザンが解散となりティアナが月村邸に戻った時、フェイトはティアナを見て絶句した。
それは言うまでもなく彼女の顔の傷だった。
ヴィヴィオも怖がるかと思いきや、彼女がこの地球に来てから見たアニメキャラに似ていると目を輝かせていた。
ティアナが帰ってきた日の事を思い出し、スバルのリアクションは無理もないと思うフェイト。
「スバルの言う通りだよ。その顔はどうしたの？」
なのはもやはりティアナの顔のガーゼについて訊ねる。
「戦傷を負いまして・・・・」
「センショウ？えっ？ティア、何を言っているの？」
『戦傷』の意味を知らないのかスバルは首を傾げる。
「・・・・どういうことかな？ティアナ」
ティアナの言う『戦傷』を聞いて心なしかなのはの声のトーンが低くなる。
それは機動六課時代に模擬戦で容赦なくティアナをシューターで撃った時と同じだった。
なのはの隣に居るスバルも彼女の変化に気づき、体をビクッとさせ引いている。
恐らくスバルもあの時の模擬戦の事を思い出しているのだろう。
モニター越しということもあるが、今のティアナはなのはに対して何とも思っておらず、淡々と傷が残った原因を話す。
「敵の・・・・暗黒星団帝国の占領軍総司令官からの銃撃を受けまして・・・・」
「えっ？な、なんで？ティアが銃撃を受けるの？」
「・・・・」
スバルはティアナの言う事に段々と困惑と言うか混乱してきた。
一方、なのははティアナの話を黙って聞いている。

「ティ、ティア、暗黒星団帝国の人に捕まっていたの？」
「捕まっていたわけじゃないわ」
「じゃ、じゃあ、どうして・・・？」
　暗黒星団帝国に捕まっていた訳ではないのに顔に傷を追っていると言う矛盾にスバルは困惑している。
「それは、私がパルチザンとして暗黒星団帝国と戦っていたからよ」
　ベリッ・・・
　ティアナは傷の理由を話すと同時に頬に貼っていたガーゼを取り外す。
「っ!?」
　ガーゼの下にあったティアナの頬に残る傷を見てなのはもスバルも絶句する。
　絶句している二人に対してヴィヴィオは空気が読めず、
「ねぇ、なのはママ、ティアナさんカッコイイでしょう？海賊みたいで!!」
「ヴィ、ヴィヴィオ、ちょっと黙ろうか？」
　今回、フェイトはヴィヴィオにティアナについて話すなと言っていなかったので、ヴィヴィオはなのはにティアナの感想を述べた。
　しかし、流石にこの空気の中でヴィヴィオのこの発言は空気を読んでいない発言だったので、フェイトは慌ててヴィヴィオを黙らせる。
「・・・フェイトさん」
　ティアナはフェイトをジッと見つめる。
「・・・」
　フェイトはティアナの視線を受けて彼女が何を言いたいのかすぐに分かり、
「ヴィヴィオ、ちょっと席を外そうか？」
　ヴィヴィオの手を引いて、ヴィヴィオに退出を促す。
「えっ？どうして？」
　ヴィヴィオとしてはまだ来たばかりでなのはと全然会話をしていないのに部屋から出なければならない事に首を傾げる。
「ティアナはこの前、なのはママと話せなかったでしょう？だから

ティアナはなのはママと大事な話をするみたいだから、ねっ？」
事前にフェイトと打ち合わせをしている事とフェイトもなのはの声のトーンが低くなった事でこの後、ティアナと口論になるかもしれないと予想してヴィヴィオに退出を促したのだ。
きっと、なのはの方もフェイトが空気を読んでくれたと思ったことだろう。
ヴィヴィオがフェイトと共に部屋から退出すると、重苦しい空気が一層増した様な気がした。
なのはもヴィヴィオが退出した事で遠慮なくティアナに言いたい事を言えると思ったのだろう。
それによって管理局側の空気はもっと重いだろう。
スバルやその場に居るオペレーターにはご愁傷様としか言えない。
実際にスバルもオペレーターも黙ってやや俯いているなのはに対してドン引きしているからだ。
「ティアナ・どうしてティアナが暗黒星団帝国と戦っていたのかな？もしかして無理矢理戦わされていたのかな？」
本来、地球と暗黒星団帝国との戦争にミッドの住人であるティアナは無関係だ。
それにもかかわらず、ティアナは現に地球を占領した暗黒星団帝国と戦い、顔に傷が残った。
なのははもしかしたらティアナは防衛軍に無理矢理徴兵されたのかと思った。
「なのはさん、私は防衛軍に徴兵された訳ではありません。パルチザンに参加したのは私自身の意思です」
「どうしてパルチザンなんかに・・・・一つ間違えればティアナは殺されていたかもしれないんだよ!?」
「そ、そうだよ。模擬戦とは全然違うんだよ!!」
「管理局が追っている犯罪者の中にも凶悪な犯罪者だっているじゃない。私の兄さんやスバル・アンタのお母さんだって殉職したじゃない」
「そ、それは・・・・」

管理局員だから・魔導師だから、事件で追っている犯罪者に絶対勝てると言う訳ではない。
実際にティアナの兄、ティーダもスバルの母親（正確には養母）であるクイントも事件を追う中で殉職した。
「それにこれは暗黒星団帝国の脅威が去った後なので言えますが、暗黒星団帝国の目的・これも関係しています」
「暗黒星団帝国の目的？」
「それってなんなの？」
地球が暗黒星団帝国に占領された情報は管理局に入っていたが、流石に管理局でも暗黒星団帝国の目的なんて知らされていない。
しかし、ティアナとフェイトの二人は、ティアナがパルチザンに入る前、避難先である中嶋家でティアナよりも先にパルチザン入りしていた源三郎が妻である加奈江に送られていた手紙に暗黒星団帝国が地球を占領した目的らしき内容が記されておりフェイトもティアナも源三郎からの手紙で暗黒星団帝国の地球占領の目的を知った。
その時は確証もないただの推測であったが、それが事実である時はティアナもフェイトもまさに身震いした。
暗黒星団帝国の情報を送った源三郎は加奈江たちを信頼して暗黒星団帝国に関する情報を手紙に記したのだ。
フェイトもティアナも源三郎の信頼に応えるべく、手紙の内容を他者に伝えることはなかった。
しかし、暗黒星団帝国の脅威が去った今だからこそ暗黒星団帝国が何故、地球にハイペロン爆弾を撃ち込み、地球を占領したのかその理由をティアナはなのはたちに話した。
暗黒星団帝国の脅威が去ったので、暗黒星団帝国の地球占領の目的は既に機密ではなくなっていた。
ティアナは隣に座っている良馬に視線を向ける。
すると良馬は頷く。
それは話して構わないと言う意思表示だった。
「暗黒星団帝国の人たちは首から上が生身の肉体で、首から下は機械・・・サイボーグと言う半機械な生命体だったんです」

「首から下が機械・・・それって・・・」
スバルは何か言いたげであり、なのはもチラッとスバルを見る。
ＪＳ事件の際にスバルが普通の魔導師ではなく、戦闘機人であることは六課の人間は知ることになったが、ティアナは訓練校時代にスバルから自身が戦闘機人であることを告白されていたがずっと黙っていた。
「ええ、スバル・アンタと似た存在だったけど、アンタ以上に暗黒星団帝国の人たちは機械化が進んでいたわ」
良馬はギンガが戦闘機人である事を知っていたので、彼女の妹のスバルも当然、戦闘機人である事を知っている。
スバルは良馬に戦闘機人である事がサラリとバラされていたが、ティアナの印象と暗黒星団帝国の人たちが自分以上の機械生命体であることを知り、その事実にスバルもなのはも気づいていない。
当然、サラリとバラシてしまったティアナもだ。
「な、なんでそんな身体に・・・し、信じられない。暗黒星団帝国の人たちは一体何を考えているの？」
スバルは自分が普通の人間でないことにコンプレックスみたいなモノを感じていたので、自ら進んで自分たちの体を機械化させた暗黒星団帝国の人たちに嫌悪感みたいなものを抱く。
「機械の身体なら普通の肉体よりも長く生きられる・・普通の肉体よりも身体能力を上げることが出来る・・・そう考えたみたい。元々暗黒星団帝国はこの地球やミッドのよりも科学技術が進んだ星みたいだから・・でも根本的な事を彼らは忘れていたみたい」
「根本的な事？」
「スバル・なのはさんもその年なら子供がどんな風にして生まれてくるか知っているでしょう？」
「ティア、バカにしすぎ!!いくらなんでも私だって知っているよ!!」
「ま、まさか・・・」
スバルはいくら自分が戦闘機人だからとは言え、コウノトリやキャベツ畑などではなく、子供が普通どんな風に生まれてくるかぐらいは知っており、そんな当たり前の質問をしてきたティアナが自分をバカ

にしているのかと憤慨する。
一方、なのははティアナが言いたい事、暗黒星団帝国の人たちが自らの身体を機械化したことによるデメリットを瞬時に理解した。
「なのはさんが思った通り、優秀な科学技術、優れた機械の肉体を持つ反面、彼らは子孫を残すための生殖機能を失ったんです」
異性でも機械の身体同士では性交は出来ない。
性交が出来なければ、女性は体内に子供を宿すことは出来ない。
いくら長生き出来る丈夫な機械の身体を手に入れても子孫を残す術がなければいずれは滅んでしまう。
「で、でも、それが何で地球を占領する事になるの？」
「彼らは地球人の身体に自分たちの脳を移植して、子孫を残そうと画策し地球を占領したんです。脅しと万が一の失敗の為にハイペロン爆弾を撃ち込んだみたいです」
「ハイペロン爆弾？」
「それってどんな爆弾なの？」
「えっと、ハイペロン爆弾って言うのは・・・・うーん・・・・」
ティアナはハイペロン爆弾について説明しようとするが、流石にハイペロン爆弾についての性能は曖昧だった。
源三郎の手紙にもハイペロン爆弾については『厄介な爆弾』とだけしか書かれていなかったからだ。
「ハイペロン爆弾と言うのは・・・・」
そこで、良馬がティアナの代わりになのはとスバルにハイペロン爆弾について説明を行う。
「起爆から死滅までのプロセスが設定されており、任意の種を選んで死滅させることが可能な大量殺戮兵器で、これも暗黒星団帝国の技術の結晶の一つでもある爆弾だ。この爆弾は大気圏の中間子質量を破壊する能力を持ち、外傷を与えずに生物の脳細胞を一挙に死滅させることが出来、起爆すると、内部に封入された重核子へ中性子ビームが照射され、高エネルギーのプラズマ状態となる。このプラズマ化された重核子を超高エネルギー状態で炉内に閉じ込め、二重らせん構造の定常空間を維持すると、周囲の空間に歪みが発生してベータ変調され

た重力波が発生する。その結果、これを浴びた生物は細胞核内部のＤＮＡが異常活性され、瞬時にして自己崩壊してしまうんだ」
「？」
　ハイペロン爆弾について説明を受けるなのはとスバルであるが、意味は分からない様子。
「今回、暗黒星団帝国は地球人のみを絶滅するように設定していたが、設定によっては人間には無害だけど、他の動植物を死滅させることが可能なのだろう」
　詳しい原理は分からないが、なのはとスバルはハイペロン爆弾がロストロギア並みの凶悪な質量兵器であることだけは理解した。
「話を戻しますね。あのまま暗黒星団帝国に占領されていたら、私を含めフェイトさんやヴィヴィオの身体さえ危なかったんです」
「それでも、ティアナが戦わなくたって・・・それに戦うってクロスミラージュで戦ったの？」
　この地球はＡＭＡの環境下なので、魔導師としては禁断の地とも言える星だ。
　そんな環境下でデバイスを長時間使用して影響はないのか？
　そもそも使用できるのかと言う疑問もある。
「いえ、防衛軍から支給されたコスモガンを使用していました」
「それって質量兵器だよね？局員として質量兵器を使うなんてティアナ、貴女は一体何を考えているの？」
「コスモガンは出力によってデバイスの非殺傷設定と同じように調整する事が出来ます」
「じゃ、じゃあ、ティアは非殺傷で戦っていたの？」
「・・・いいえ、殺傷設定で戦っていたわ」
「殺傷・・・それって・・・」
「ええ、暗黒星団帝国の占領兵を何人も殺したわ」
「そ、そんなっ!?ティアが・・・」
　親友が宇宙人・地球を襲撃した侵略者とは言え、人を殺したことにスバルはショックを受ける。
「ティアナ・なんで・・・なんでそんなことを!!どうして人殺しなんて

!!」
「言った筈です。フェイトさんとヴィヴィオを守る為・・・いえ、それ以上に暗黒星団帝国に占領されたこの地球を救いたかった・実際にパルチザン活動で敵の兵器工場を襲撃した際には、こちらで衣食住のお世話になっていた人を救うことが出来ました」
「でも、ティアナは管理局の人なんだよ!!そっちの地球の戦争は全く関係ないじゃない!!」
元教え子が人を殺したことになのはは憤慨する。
「なのはさん・なのはさんはもし、ミッドが暗黒星団帝国の様な外宇宙からの侵略者にミッドが占領されたら戦えますか？殺しにかかって来る侵略者に対して話し合いや非殺傷なんて甘い対処なんですよ!!私はこの世界に来てからそれを嫌と言うほど体験しました」
ＪＳ事件の時、ティアナはヴァイスの援護があったとは言え複数の戦闘機人相手に勝利したが、もしその時のティアナが今のティアナだった場合、ティアナの相手をした戦闘機人たちは確実に命を落としていただろう。
ティアナ自身、管理局の艦が一方的にガトランティスに襲われ自分とフェイト以外の乗員が殺され、暗黒星団帝国の手により第３７探査部隊が悪魔の実験に巻き込まれ、部隊の全員が理不尽にも殺された。
そして、地球が暗黒星団帝国の手により占領された。
目の前で繰り広げられる理不尽にティアナの我慢も限界に来ていたのも彼女がパルチザンに参加していた理由の一つでもある。
「貴女はこの理不尽な光景も体験もしていないからそんな事を言えるんですよ」
「でも、フェイトちゃんもティアナと同じ体験したけど、フェイトちゃんはティアナと違ってパルチザンに参加していなかったじゃない」
「そうですね・でも、フェイトさんもパルチザンに参加していたら、誰がヴィヴィオを守るんですか？」
「・・・」
「それに、フェイトさんは私より表には出していませんが、フェイトさん自身もきっと何か思うことがある筈です」

「そ、それは・・・」
自分と同じく理不尽な光景も体験もしたフェイトだって、自分と同じ思いや管理局に対する思いも抱いている筈だ。
ただ、自分と違いフェイトはそういった思いを自らの心の奥底にひた隠しているのではないかとティアナはなのはに言う。
なのはもフェイトに対してそういう一面があることは知っている。
海鳴で魔法とフェイトに出会う切っ掛けとなったＰＴ事件・・・
その時のフェイトはジュエルシードを集めている目的をなのは、ユーノに話すことはなかった。
ティアナの指摘を受け、なのはは完全に否定は出来なかった。
もしも、ヴィヴィオがフェイト、ティアナの居る地球へ跳ばされていなかったらフェイトもティアナ同様、パルチザンに参加していたかもしれないと思うなのは。
その後もティアナとなのはの話は平行線をたどり、両者には険悪なムードが続き、スバルは二人のやり取りにあたふたしていた。
「これ以上、話をしても無駄みたいですね」
「無駄って、私は・・・」
「スバル、ごめんね。こんな空気にしちゃって」
「えっ?あっ、いや・その・・・」
スバルとしてもどう返答して良いのか分からなかった。
ティアナのせいではないと言えばなのはを否定することになるし、その逆ではティアナを否定することになる。
「それじゃあ、月村さん。私は部屋の外で待っていますから」
「待ちなさい、ティアナ。まだ話は・・・」
ティアナ自身もこれ以上なのはと話しても意味はないと思い、良馬に一声かけた後に部屋から退出する。
「お待たせしましたフェイトさん」
「あっ、ティアナ・・・その・なのはとは・・・」
「ええ、予想していた通りの結果です」
「そう・・・」
「あっ、フェイトさん」

「何かな？ティアナ」
「先に謝っておきますね」
「えっ？」
「その・・・もしかしたら、フェイトさんに飛び火したかもしれないので・・・」
「・・・」
　ティアナの言葉を聞いてフェイトは顔を引き攣らせる。
　きっと心の中では、
（余計な事を!!）
　と、思っているかもしれない。
「ヴィヴィオ、なのはさんはフェイトさんと大事な話があるみたいなの・・もう少し我慢してくれるかな？」
「う、うん」
　ヴィヴィオには申し訳ないが、次にフェイトが交信が行われている部屋へと入る。
「なのは・・・」
「フェイトちゃん・・・」
「その・・・随分とティアナとやりあったみたいだね」
「う、うん・・・ねぇ、フェイトちゃん」
「ん？」
「・・・もし・・もし、ヴィヴィオがそっちの地球に居なかったら、フェイトちゃんはティアナと同じ様に暗黒星団帝国と戦っていた？」
「ティアナから聞いたの？」
「う、うん・・・ティアナは『フェイトちゃんが表に出さないだけで、多分自分と同じ思いを抱いていると思う』って言っていたから・・・」
　なのはは心の中では否定して欲しいと願っていた。
「そうだね・・・確かにティアナの言う通り、もしヴィヴィオがこの世界に来ていなかったら、ティアナと同じ行動をしていたかもしれない・・かな」
「っ!?」
　フェイトの返答はティアナと同じであり、なのはにとっては否定し

て欲しかった回答だった。
「ど、どうして？」
「私も防衛軍に助けられてこの世界を見て、管理局との違いを沢山見せられたよ・・・ティアナがパルチザンに参加するって言った時、私はティアナを止められたかもしれない。でも、結果的にティアナを止めなかったのは、私自身もきっとティアナと同じ思いがあったからなんだと思う」
「でも、そのせいでティアナは顔に傷を負ったし、人も・・・」
「知っているよ。私もティアナが戻ってきた時はビックリしたもん」
　フェイトはあっけらかんとした様子で戻ってきたティアナの印象を口にする。
「フェイトちゃんは平気なの？ティアナは人を殺したんだよ？」
「でも、相手だってティアナを殺しにかかってきたんだよ？管理局は逮捕権があり、事件の真実を知るために犯人を生きて逮捕しなければならないけど、軍の人は逮捕権なんてない、迫りくる脅威を排除するために相手を殺す・・・ただ、それだけだよ、なのは」
　フェイトは軍人と管理局との違いを指摘し、
「そして、パルチザンの意味は非正規軍の事だから侵略者に対して逮捕権はない。その一方で侵略者を殺しても殺人罪にもならない。自分たちの国や星を守るために侵略者を斃すのだから、正当な行為とも言えるんだよ」
「・・・」
「それに暗黒星団帝国は管理局が管理する管理世界じゃないから、ティアナが暗黒星団帝国の兵士を殺してもそれは犯罪じゃない・・・これも理不尽かもしれないけどね・実際に無理矢理管理世界に編入させられた世界では私たちは侵略者に当たる・・・だからこそ、そういった世界では未だにテロ事件が起こっているし、現地の人たちはそういったテロリストたちの情報をなかなか渡さないんじゃないかな？」
　フェイトも地球において占領下を経験したことから、辺境における管理世界で頻発しているテロ事件に関しても局員視点ではテロを起

こすテロリストは憎い犯罪者であるが、今のフェイトは管理局の局員視点だけではなく、客観的に見ることが出来た。
「じゃ、じゃあ、フェイトちゃんは仮に・・・仮にもだよ？スカリエッティがそっちの地球に居たらどうする？フェイトちゃんは諦めるの？」
やや論点がズレている様な気もするが、なのはは仮にスカリエッティが今フェイトたちがいる地球に居た場合の話をする。
「もし、スカリエッティが居たのなら、無理を承知で彼の身柄引き渡しを要求するけど、スカリエッティがこの地球へ亡命者としていたなら、悔しいけど諦めざるを得ないだろうね」
フェイトはあっさりとスカリエッティを見逃すと言う。
「管理局はこの地球を管理世界に置いたわけじゃないし、犯罪者の引き渡し条約を結んでいるわけでもない・・・そんな中で、スカリエッティの身柄を引き渡せなんて言っても鼻で笑われるだけだよ。子供の我が儘や癇癪程度に思われて逆に恥ずかしい思いをするだけだって」
そして、スカリエッティを見逃すわけをなのはに話すフェイト。
『もし～』の話なので、この場では割り切れるのだが、もし実際にそのような事態となっていた場合、きっとフェイトは内心、腸が煮えくりかえる悔しさを抱いていただろうが、管理局の執務官が管理局の法律を破っては本末転倒だ。
場所が管理外世界だからその場でスカリエッティを殺害したら、その世界の法律で裁かれる可能性が高い。
自分が管理局の執務官だから見逃されるなんてことはない。
だからこそ、なのはの仮定の話ではフェイトは悔しさを堪えてスカリエッティを見逃さざるを得ない状況だったのだ。
再開した日と異なり、今日の交信は空気が重いまま終了した。
交信を終えたスバルはチンクたちから今日の交信の感想を訊ねられた。
そこで、スバルはデバイスに記録した今のティアナの画像を見せ

た。
「えっ？これがティアナ・・・っスか？そっくりさんとかじゃなくて？」
ＪＳ事件の時、ティアナと戦ったウェンディが顔を引き攣らせながらスバルに訊ねる。
ウェンディだけでなくチンクたちも今のティアナの画像を見てギョッとする。
「う、うん・・・正真正銘ティアだよ」
「目つきがヤバい・・・なにより頬の傷にインパクトが・・・」
「管理局の執務官と言うよりはまるでヤ○ザみたいだな」
ディエチとチンクもドン引きしている。
「ティアナ嬢ちゃん、一体何があったんだ？」
ゲンヤもティアナの変化には驚いている。
「・・・その・向こうの地球が暗黒星団帝国に占領されていたでしょう？」
「ああ、そうだな」
「その時、ティア、防衛軍の人たちと一緒に暗黒星団帝国の人と戦っていたみたい」
「えっ？なんでティアナが？」
「徴兵でもされたの？防衛軍に？」
ディエチがスバルにティアナが暗黒星団帝国と戦った理由が防衛軍に徴兵でもされたのかと訊ねる。
「ううん、暗黒星団帝国の人と戦ったのはティアが自分で選んだみたい」
「しかし、自分の意思とは言えなんで、ティアナは暗黒星団帝国と戦ったんだ？」
チンクが徴兵でもなく、何故自分の意志でティアナが戦ったのかをスバルに訊ねる。
「ティアは・・・」
スバルはチンクたちに今日の交信でのティアナが暗黒星団帝国と戦った理由を話す。

「そうか・・・」
「・・・」
「ティアナの嬢ちゃん・・・随分と壮大な体験をしたんだな・・・」
「うん・・・なんだか、ティアがティアでなくなっちゃったような気がして・・・」
「まぁ、そのような体験をしたのであれば、仕方ないが・・・」
「でも、ミッドに戻って時間が経てば元のティアナに戻るんじゃない？」
　ディエチは時間が経てば元のティアナに戻る筈、今は占領下を体験したばかりできっと気が立っているのだろう思ってスバルを宥める。
「そうっスよ。それに顔の傷も手術をすればきっと消えるっスよ」
　ウェンディもティアナの顔に残る傷もミッドに戻って手術をすれば傷も消えて元のティアナに戻るだろうとスバルを励ます。
「う、うん・・・そうだよね・・・」
　スバルはそう言うが、不安は何故か拭いされなかった。

百二十八話　様々な思惑

管理局との交信が再開されて二回目の交信の際、ティアナの予想通りティアナとなのはとの間で口論が起きた。
なのはとしては元教え子が管理局と無関係の筈の戦いに身を投じ、宇宙人とは言え人を殺した事が許せなかった。
一方のティアナもパルチザンに参加したのは自分自身の意思だったのでそれを否定され、ティアナの方もムキになったのだ。
重苦しい空気の中で二回目の交信が終わった。
ただ、その重苦しい空気の中で文字通り、空気になりかけていた良馬はその帰り道、
「あの・・・ランスターさん。その・・・大丈夫？」
「あっ、はい・・・」
「でも、疲れたんじゃない？」
「ええ・・・こうなることは予想出来ていたんですが・・・」
ティアナは帰りの車の中でぐったりとしていた。
交渉に関しても次の交信日を決めるぐらいでフェイトたちの帰還に関する話は出来なかった。

一方、なのはも今日の出来事について、ヴィータに相談した。
ミッドにあるなのはとフェイトの家は先日、ミッドで起きた暴動により暴徒たちの手によって滅茶苦茶にされたので、今は教導隊の教官宿舎に住んでおり、なのはと同じく教導隊に所属しているヴィータも暴動で家が暴徒の手により滅茶苦茶にされ、なのはと同じ教導隊の教官宿舎に住んでいる。
現在、ヴィータはシグナムと交代で本局にてボラー連邦からの亡命者であるミノフスキー博士の護衛に当たっている。
今日はシグナムとの交代でヴィータは宿舎に戻っていた。
「おっ、なのは」
「あっ、ヴィータちゃん・・・」

「ん?どうした?やけに元気がないが・・・今日は確かもう一つの地球との交信日だったんだろう?」
「う、うん・・・」
交信日だったのだからフェイトやヴィヴィオと話すことが出来た筈なのに、今日のなのはは何だか沈んでいる。
「・・・何があった?」
なのはの様子から今日の交信で何かあったのだと判断したヴィータは何があったのか事情をなのはに訊ねる。
「・・・」
「とりあえず、此処じゃあ何だ・・・アタシの部屋に行こう」
ヴィータは宿舎の通路で話す内容ではないと判断し、なのはを自らの部屋に案内する。
自分の部屋になのはを招いたヴィータはなのはをソファに座らせお茶を出す。
「それで何があった?フェイトたちに何かあったのか?」
ヴィータももう一つの地球がついこの前まで暗黒星団帝国に占領されていたが、その脅威が去ったからこそ交信が再開された事を知っていたのだが、最初の交信の内容をなのはから聞いていなかったので、フェイトたちの身に何かあったのだと思った。
「ううん・フェイトちゃんとヴィヴィオは無事だったよ・・・」
「フェイトとヴィヴィオは・・・?ってことはティアナの身に何かあったのか?」
「う、うん・・・」
なのははレイジングハートに記録されているティアナの今の姿をヴィータに見せた。
「っ!?こ、これがティアナだっていうのか!?」
今日の交信で見たティアナの今の姿を見たヴィータは驚愕した。
元々猫みたいな釣り目であったが、その目つきは鋭く猫と言うよりもライオンやトラみたいな肉食獣の様で、何より左頬に走る魚の骨みたいな傷が今のティアナの凄みを一層引き立てている。
「い、一体、ティアナに何があったんだ?」

「じ、実は・・・」
なのははヴィータに今日の交信でティアナが地球と暗黒星団帝国の戦いに身を投じた事、
その過程で暗黒星団帝国の兵士を殺したこと、
顔に傷を負った事を話した。
（ったく、ティアナの奴、一体何考えているんだ？）
なのはの話を聞いてヴィータはティアナの行動に呆れた。
本来ならば関わらなくても良い筈の戦いに身を投じ、顔に傷を負い、ましてや戦時下とは言えこちらも管理局に無関係な暗黒星団帝国の兵士を殺したなんて・・・
一探索部隊が捕まり、悪魔の実験により、部隊全員が殺された経緯があるが、そもそも暗黒星団帝国と管理局はボラー連邦と違い交戦世界でもない。
そんな中で、管理局の執務補佐官が暗黒星団帝国の兵士を殺したなんて事実は暗黒星団帝国に対しての敵対行動になる。
幸いにして暗黒星団帝国は地球防衛軍により本星も占領軍も壊滅させられ、管理局が暗黒星団帝国の脅威に晒されることはないがそれはあくまでも結果論である。
（とは言え、ティアナはなのはと同じ、馬鹿正直で融通が利かない頑固な一面があるからな・・・六課の模擬戦の時もなのはとティアナの主義主張がぶつかり合った結果、起きた事だったからな・・・）
六課稼働中の一年間と言う長い様で短い期限付きとは言え、ヴィータもティアナの上官と言う立場から、ティアナの性格は一応理解しているつもりだ。
なのはとティアナは似ている性格だとヴィータは思っていた。
「でも、なのは。今更過去の事を言っても変えようがない。大事なのはこれからだろう？ティアナがミッドに戻ってきた時にあいつとじっくり話し合え。それくらいの時間はあるだろう？モニター越しじゃあなくて面と向かってだ」
「う、うん・・そうだね。ありがとうヴィータちゃん」
「お、おう。あたしはお前の友人だからな、困った時はなんでも言って

くれ」
ヴィータに相談し、そして励まされたことによりなのはは多少元気になった。
その日の深夜、本局内部にある艦船修理ドック・・・
艦船ドックは普段この時間は作業員も撤収し静まり返っている筈だがこの日の艦船ドックは、奇妙なくらいの厳重な体制が敷かれていた。
ドックに続く出入り口では、武装した局員たちが見張っており、周囲にはサーチャーが多数存在し、アリ一匹も入り込む隙がなく、その体制はまるでどこぞの要人が来ているのかと言うぐらいの厳重であり、その反面何故かドック内部の監視カメラは今日だけ映像が切られており、内部で何が行われているのか不明な状態であった。
そんな奇妙な体制となっているドックの内部には、リンディ、マリエル、シャーリーの他に肌が水色の老人の姿があった。
そして、艦船ドックには管理局の艦船ではなく、残骸と化した宇宙船が横たわっていた。
残骸は既に宇宙船の形を有しておらず、焦げ目と溶けた跡がありかろうじて原型を留めている事からその残骸は宇宙船の機関部らしき部分と言う事だけが分かっているだけだ。
この残骸は先日、はやてが某宙域で発見した暗黒星団帝国の艦船の残骸であった。
はやては探査航海していた某宙域でこの残骸を発見した際、暗黒星団帝国の襲来を危惧してビーコンを残して、残骸の回収は後に工作艦部隊が安全を確保して行った。
当初は管理局の艦船技術官やドックの作業員たちがこの残骸を調べたが、彼らの手ではその詳細を得ることが出来なかった。
そこで、管理局はボラー連邦からの亡命者であるミノフスキーを呼び、この残骸の調査を依頼したのだ。
しかし、ミノフスキーの存在は管理局でもごく一部の者しか知られていない極秘扱いなので、残骸が置かれているドックに招いた今回もこうした厳戒態勢を敷いていたのだ。

そして、人目を避けるために人の出入りが激しい昼間ではなくこうして深夜の時間帯となったのだ。
「フム・・・」
ミノフスキーはドックに横たわる残骸を丁寧に調べている。
「博士、何かわかりましたか？」
マリエルが残骸を調べているミノフスキーに質問する。
「フム・・・これは確かに私の故郷、ボラー連邦の宇宙船と似たエンジンの仕組みだが、所々異なる点もある・・・これは一体・・・？」
ミノフスキーには予めボラー連邦とは異なる星団帝国の宇宙船の残骸を回収したので、その調査と知らせていた。
「これは、ある宇宙空間で回収された暗黒星団帝国と言う星間国家で使用されていた宇宙船のエンジンです」
リンディがミノフスキーにこの残骸の正体を告げる。
「暗黒星団帝国？」
「知りませんか？」
「うむ、少なくとも私がボラー連邦に居た時には、そのような星間国家の名前は聞いたことが無いな」
どうやら、暗黒星団帝国とボラー連邦は交戦相手では無い様で、ミノフスキーは暗黒星団帝国の名前を知らなかった。
「何か参考になりませんか？」
「もう少し調査が必要だが、参考資料には十分になるな」
「そうですか」
この暗黒星団帝国の残骸とミノフスキーの頭脳・・・
この二つは今後の管理局の宇宙船技術の発展に大いに貢献することになった。

フェイトたちのミッドへの帰還問題の他に地球側が抱えている問題・・・
暗黒星団帝国との戦後処理において、アルフォン、メイトリックら捕虜の扱いで死刑判決を免れた将兵については大方彗星帝国同様、太

陽系からの追放であるが、やはり当時の地球占領軍総司令官となっていたアルフォンの取り扱いだった。
指揮官には大佐であるメイトリックが居るので、アルフォンはやはり処刑すべきだと言う意見も出ていた。
雪と古代は藤堂にアルフォンの助命を嘆願し、次第に島や真田ら第一艦橋のメンバーも古代と雪に賛同し始めた。
地球を何度も救ったヤマトの乗員たちの意見と言う事で藤堂も無下には出来なかった。
藤堂とヤマトの第一艦橋メンバーがアルフォンの進退について協議される中、源三郎と良馬はフェイトたちの帰還問題について話し合っていた。
藤堂が暗黒星団帝国の戦後処理に追われていたので、フェイトたちの帰還問題については作戦課五課の源三郎に全権を委ね、フェイトたち帰還問題については源三郎が責任者として動いていた。
「では、ハラオウン執務官らの身柄引き渡し場所については太陽系内では無理なんだな？」
源三郎と良馬は後日行われるフェイトたちの身柄を管理局へ引き渡す場所について話し合っていた。
「はい。平和的に付き合えるか否か見極めがつかない武装組織を相手に太陽系での接触は危険です」
「まぁ、暗黒星団帝国との戦後処理もまだまだ終わっていないからな」
「ええ・・・それに時空管理局はこれまで二度、こちらの太陽系にちょっかいを出してきました。その内、一度は太陽系に武装艦を無断で派遣してきましたからね」
一度目は通信ポッドをいじり逆探して地球の座標を知ろうした事。
二度目は太陽系に無断で入り込んでいた管理局艦については通信ポッドの間違った座標を鵜？みにして太陽か木星本星へ墜落した事だ。
しかも、管理局側は管理局艦の墜落について防衛軍側に非があるような高圧的態度をとってきたことにより、防衛軍側からの信用を完全に失っていた。

ましてや今は暗黒星団帝国との戦後処理でごたついている中だ。
そんな中で管理局が大挙して地球へ再び襲来なんて来られたら事態は余計に混乱してしまう。
これまで回収された管理局艦の装甲や武装を解析した結果、その性能は２１９０年代にガミラス戦役で使用していた防衛軍の旧式艦艇と同等かそれ以下のレベルなので、現在の防衛軍の宇宙戦闘艦でも十分に対処は出来る。
しかし、ガミラス、ガトランティスとこれまで地球本土の占領を許したことのない地球が暗黒星団帝国の奇襲で成す術なく占領されてしまった経緯から慢心は禁物である。
実際に防衛軍もガミラス戦役当初は、ガミラス相手に手も足も出なかった宇宙戦闘艦群を僅か一年ちょっとでガミラス相手に十分対応できる強力な宇宙戦闘艦を建造できる技術を手に入れたので、管理局も決して例外ではないかもしれない。
地球が暗黒星団帝国と戦っている間、もしかしたら管理局側も地球が回収した管理局の艦船よりも強力な宇宙戦闘艦を建造しているかもしれない。
「会合場所を太陽系外にする理由は分かった。だが、十分に会合場所の安全は覚悟する必要があるな」
「はい。彗星帝国も残党が居たように暗黒星団帝国も太陽系周辺に残党が居ないとも限りませんからね」
彗星帝国残党軍は第十一番惑星の戦力増強に占領下であるアンドロメダ星雲から援軍を送らせ戦力を増強していた。
暗黒星団帝国もイスカンダルで戦ったメルダースの発言からあちこちの宇宙へ戦線を広げていた様子だったので、それらの戦線から援軍を求める可能性は十分にあった。
「うむ・・・そういった安全確保のために　まほろば　一隻だけではなく、会合当日は周辺の哨戒のために空母とパトロール艦を何隻か同行させよう」
「お願いします」
会合の後、フェイトたちが乗艦した管理局の艦が暗黒星団帝国の残

党に遭遇し撃沈でもされれば管理局は防衛軍が撃沈したといちゃもんをつけこないとも限らない。
そういったことから会合場所周辺の安全確保は十分に確保しなければならない。
他にも組織は大勢の人間が在籍し、その人数分、様々な考えを持つので、例え同じ組織に在籍しても一枚岩とは限らない。
もし、管理局がこの地球を暗黒星団帝国の様に手に入れたいと考えていれば、迎えに来たフェイトたちの艦を味方であるはずの管理局艦が撃沈してその原因を防衛軍側になすりつける可能性も捨てきれない。
フェイトたちが無事にミッドへ帰るまで油断は出来ないが流石に向こうも防衛軍側に自分たちの根拠地や本星の場所を突き止められたくはないだろう。
(周囲の安全確保は兎も角、ハラオウン執務官を引き渡した後、ミッドチルダとやらまでの航路の安全は向こうの責任だからな。迎えに来た艦の艦長には本国との連絡は密にするように伝えるか)
フェイトたちを管理局側へ引き渡した後、ミッドまでの航海は管理局側の責任である。
その後のアクシデントは流石に責任を持てない。
そのため、管理局側には本国との連絡を密にしてもらい、ミッドまでの航海途中で何らかのアクシデントが起きても防衛軍側に一切の責任が無いことを伝えてもらわなければならない。
もっとも管理局側の艦が連絡を密にしても何らかのアクシデントで遭難した場合、管理局側は受信した報告をそのまま採用するは限らないが、それでも記録は残してもらいたい。
(会合場所は周辺にアステロイド、小惑星の障害物が無く見渡しやすくなおかつ電離ガスも少なくレーダーに影響が少ない宙域に設定しないとな)
周辺の安全確保のためには周りに障害物がなく、レーダーに影響がない宙域でなければならない。
(となると、通信ポッドが設置されているカイパーベルトはアステロ

イドが存在しているから無理だな）
　管理局との交信に使用されている通信ポッドが設置されているカイパーベルトではアステロイドが存在するので、会合場所としては不向きと判断した良馬。
（次の交信で会合場所について管理局と話すか・・・）

　フェイトたちの帰還への準備が進む中、日程の調節で管理局側と交信が続けられる中、その交信の席にティアナが出席する回数は目に見えて減っていた。
　なのははティアナが欠席するのは自分のせいなのではないかと落ち込み、スバルもティアナが出席しないなら・・・と、スバルも交信の出席回数が減っていった。
「本日はハラオウン執務官らの身柄をそちらに引き渡す会合場所について意見を交換したいと思います」
「分かりました」
　なのはとスバルの出席回数は減ったがリンディに関しては統括官と言う立場から交信には出席し始めていた。
「ハラオウン執務官らの身柄引き渡しについてですが、管理局側へ引き渡すのはハラオウン執務官らだけではなく、こちらが可能な限り収容が出来ましたハラオウン執務官が乗艦しておりましたテリオス及びそれ以前に太陽系内で遭難しましたノアの乗員のご遺体を引き渡したいと思います」
「防衛軍側のご厚意に感謝いたします」
　リンディとしてはまさかテリオスとノアの殉職者の遺体を防衛軍が収容していたとは思っておらず、フェイトたちと共に彼らの遺体も引き取れるのは遺族にとってせめてもの慰めであり、管理局のイメージダウンを緩和することもできるかもしれないとリンディはそう思った。
「それで、会合場所についてですが、彗星帝国の残党が太陽系内に存在していたように暗黒星団帝国も残党が居ないとは言い切れません」
「はい」

「ハラオウン執務官らの安全の為に会合場所については周辺にアステロイドや小惑星などの障害物がなく、レーダーの妨げになるガスが比較的に少ない宙域に設定したいと考えております」
「となると、通信ポッドが設置されている宙域ではないと言う事ですか？」
「はい。通信ポッドが設置されているカイパーベルトは周辺にアステロイドが存在しているので、万が一暗黒星団帝国の残党が襲撃してくると初動行動に支障をきたす可能性がありますので・・・・」
「な、なるほど・・・・」
「それと当日は周辺哨戒の為に私が艦長を務めます　まほろば　の他に何隻かの艦船が哨戒任務の為に同行いたしますが、これは決して武力を誇示するためではない事をご理解ください」
「分かりました」
「では、会合場所でいくつかピックアップした宙域の説明をいたします」
　良馬は事前に会合場所をピックアップしており、シリウス恒星系かプロキオン恒星系の近くに定めていた。
（やはり、そちらの本星は設定していないわね・・・・まっ、それは想定内だったし、あちらは明らかに管理局を不審に思っているからこちら側から指定することもないか・・・・）
　リンディは何時ぞや管理局の高官に意見したようにフェイトたちの引き渡し場所がもう一つの地球でないことは想定内だったので、良馬がピックアップした場所がもう一つの地球でなかったことに関して意見することはなかった。

　今日の交信が終わるとリンディは一息つく。
　管理局側でもフェイトたちの帰還についての議題がのぼっていた。
　フェイトたちがいる地球は交流もなければ座標さえも特定されていないため、管理局が認知している第９７管理外世界の地球と異なり転送ポートが使えるはずもない。
　そこで、フェイトたちを迎えに行くには直接次元航行艦を出して迎

えに行くしかない。
リンディは慎重になおかつ信頼できる者にフェイトたちの迎え役を選定しなければならない。
贔屓になるが、リンディは今回のその任務にはやてを指名した。
リンディは早速その旨をはやてに伝えた。
もっともはやては今現在、探査航海へ出ていたので、リンディからの話は星の海の最中で聞いた。
「えええぇぇー!!わ、私がフェイトちゃんたちを迎えに行くんですか!?」
はやてはリンディにフェイトたちのお迎えに行く任務を知らされ驚く。
「で、でも、私じゃなくてクロノ君の方が適任じゃないんですか?」
はやては自分よりもクロノの方が防衛軍と交信して向こうの軍人と顔見知りであるし、次元航行艦乗りとしてはクロノの方が経験は上である。
はやての言葉にリンディは気まずそうにはやてから視線をずらし、
「あぁ〜クロノはねぇ〜・・・その・・・」
リンディにしては珍しく口ごもる。
「ん?クロノ君に何かあったんですか?確か少し前に休暇を取ったと聞いたんですけど、いつまで何ですか?」
はやてもクロノが現在休暇中であることは知っていたが、その休暇期間もそろそろあける筈だと思いリンディに訊ねた。
「それが、クロノは休暇の延長を申請してきたのよ」
「ええー!!あのクロノ君が!?」
はやての知るクロノはまさに仕事人間なのでそのクロノが休暇を延長したのはまさに驚愕に値する事だった。
「そうなの・・・それで、今回の任務は私も同行するのだけれど、信用がおける人じゃないと・・・万が一にも防衛軍との間に問題が起きたら・・・ね?」
「ゾッとしますね・・・」
はやてはリンディからの信頼の他に防衛軍を敵に回せばどうなる

のかをこれまでのもう一つの地球と敵対してきた星間国家の末路を知っているし、はやて自身は実際に防衛軍の艦船と出会ったことがある。
その艦影から見ても防衛軍と管理局とはあまりにも設計概念が違いすぎる。
そんな相手に対してはやては当然ちょっかいを出すつもりは毛頭ない。
リンディははやてに対する長年の付き合いからの信頼の他にそういった人となりが今回の選抜に影響していた。
「分かりました。その任務、承ります」
そして、はやてはフェイトたちのお迎え任務を引き受けた。
「まだ日程は決まっていないけど、行く前に艦の状態は万全にしてほしいから、機を見て本局へ戻って来てちょうだい」
「分かりました」
リンディからの通信を終えたはやてはドサッと椅子に深く腰掛ける。
「ふぅ～まさか、私がフェイトちゃんたちのお迎えに行くなんてな・・・・」
はやてが艦長を務めるヴォルフラムは一度だけ防衛軍の艦船と出会ったことがあるがその際は艦影を見て通信をした程度だったが、フェイトたちの身柄引き渡しと言う事は実際に防衛軍の軍人と出会うことになる。
それが、何度か交信を交わした良馬かもしれないし、別の軍人かもしれない。
いずれにせよ、簡単なようで重要な任務だとはやては実感した。

一方、もう一つの地球での残留期間が短くなっているフェイトたちは、目一杯思い出を残そうと言う忍の意見からこの日は管理局との交信もなかったので、フェイトたちと月村家の一行は遊園地へとやって来た。
ガミラス戦役後に復興し、運よくガトランティスからの攻撃を免れ

た山梨県にあるこの遊園地は１９６０年代にオープンした今では歴史のある遊園地の一つで、数多くのジェットコースターや本物の幽霊が出ると噂されたお化け屋敷が有名である。
　最もお化け屋敷だけは老朽化で何度か改装され、ガミラス戦役時における遊星爆弾で建造物は破壊され、地上は放射能まみれになり、歴史あるこの遊園地も物理的に閉園となったが、ガミラス戦役後にこうして復興されたがお化け屋敷に関してはかつての様に本物が出るのかは定かではない。
「ウフフフ・・・」
「ちょっ、ユリーシャ、くっつきすぎ」
「でも、人が多いし迷子になったら大変でしょう？」
「・・・」
　ユリーシャは良馬の右隣をガッチリキープして、右腕に胸を当てている。
　そんな二人の姿をギンガはジト目でジッと見ている。
　良馬の左隣は空いているのだからギンガは彼の左側へ行けばいいのだが、生憎良馬の左手にはカバンが握られており、彼の左手を握ることは叶わなかった。
　ヴィヴィオは初めて来たこの世界の遊園地に大はしゃぎで、フェイトはそんなヴィヴィオが迷子にならない様に彼女から目を離せない状況なのでフェイトはギンガの様子に気づかず、ティアナは折角の遊園地なのだが、何やら深刻そうな顔だ。
「あらあら良馬ったら、罪作りな子ね」
　忍は良馬、ギンガ、ユリーシャの様子を見て何だか楽しんでいる様子だった。
　しかし、良馬としては守からユリーシャの事を頼まれており、実年齢からも良馬はユリーシャの事を後見人の一人または妹の様にしか思っていなかった。
　ヴィヴィオは遊園地にある絶叫マシンをはしごして、それに着きあわされているフェイトはグロッキー状態となっている。
「うぷっ・・・最近、空を飛んでないせいか酔ったかも」

こちらの地球に来てからフェイトは空を飛ぶ機会もなかった為、久しぶりに高速と浮遊感を体験したせいか酔ったみたいだが、ヴィヴィオは平気な様子でフェイトに次に乗りたい絶叫マシンをピックアップしている。
「ヴィ、ヴィヴィオ、ちょっと自重してあげよう。フェイトさん大変なことになっているから・・・」
ティアナがヴィヴィオにフェイトの現状を伝えるとヴィヴィオは明らかに不満そうな顔をする。
ヴィヴィオとしても管理局との交信の話から、この地球に居られる日数があと僅かであると察している為、一分一秒でもこの地球のアトラクションを楽しみたいのだろう。
「じゃあ、ヴィヴィオちゃん。私と乗りましょう」
そこで、忍がヴィヴィオと共にアトラクションに乗ることにした。
「えっ？いいの？」
「ええ、行きましょう」
「わーい!!やった!!」
「では、私はハラオウン様の介抱をいたします」
グロッキー状態のフェイトの世話はノエルが行う。
「す、すみません」
「いえいえ」
「じゃあ、リョーマ。私たちはあそこに行こう」
「えっ？」
ユリーシャはお化け屋敷を指さす。
「あそこはお化け屋敷だけど、ユリーシャ大丈夫なの？」
「うん、へーき!!行こう!!」
ユリーシャは良馬の手を引いてお化け屋敷へと向かった。
「ティアナ・・・」
「は、はい」
ティアナはギンガの底冷えするような声をかけられ思わず身体をビクッと震わせる。
「私たちも行くわよ」

「えっ？」
　ギンガの言い知れぬ圧に圧倒されティアナもお化け屋敷へ着きあわされることになった。
　この遊園地のお化け屋敷は機械仕掛けの人形ではなく、従業員がお化けの仮装をして驚かしてくるスタイルであった。
「キャー、コワイ!!」
　お化け役の従業員が驚かしにかかるとユリーシャは悲鳴を上げて良馬に抱き着くが、彼女の悲鳴は物凄いカタコトであり、表情も笑みを浮かべているので、とても怖がっている様子が無い。
　怖がっているフリは良馬に抱き着くための口実に過ぎなかった。
　そんなユリーシャと抱き着かれている良馬の姿を見せつけられた従業員たちの方はと言うと、
（くそっ、人前でイチャイチャしやがって・・・）
（リア充爆発しろ!!）
　と、嫉妬の感情を露にしていた。
　ユリーシャは、実年齢は兎も角、容姿、スタイルはまさしく美女にカテゴリーされるので、男性従業員たちにとっては当たり前の感情だったかもしれない。
（おい、次の客は女らしいぞ!!それも美人の部類だ!!）
（なにっ!?よーし、こうなればこの感情を鎮めるためどさくさに紛れてお触りしてやるぞ!!）
　お化け役の男性従業員は次に来る客が女性・しかも美人な人だと聞くと、驚かすことを良いことに女性客へのお触り行為をしてやろうと決めたのだが、
「ヴォォォォォー!!」
　ギロッ!!
「ひぃっ!?」
　やってきた女性客を驚かし、そのまま胸かお尻を触ってやろうとしたのだが、その女性客の眼光で逆に驚かされてしまった。
「ぎ、ギンガさん・お化けの方を驚かせてどうするんですか？」
「ん？何か言ったかな？ティアナ？」

「イイエ、ナニモイッテイマセン」
（お化けよりも今のギンガさんの方が怖い・・・）
良馬とユリーシャの後を追うギンガはまささにお化け屋敷に居るお化けよりも怖かったとティアナは後にそう語っている。
その後、フードコートにて、
「ん～♪」
ユリーシャは満面の笑みを浮かべソフトクリームを食べている。
「ユリーシャ、鼻の頭にクリームが付いているぞ」
良馬が紙ナプキンでユリーシャの鼻に付いていたアイスクリームを拭う。
ベコッ!!
その光景を見たギンガは思わず手にしたコーヒー缶を手で握りつぶす。
（あれ？今、ギンガさんが持っている缶ってアルミ缶じゃなくてスチール缶よね？身体強化魔法をかけているの？あっ、そう言えばギンガさんはスバルと同じ戦闘機人だったわね・・・）
軽く現実逃避しつつもティアナはギンガの事を知っているので、スチール缶を手で握りつぶした件について納得した。
「あ、あの・・ギンガさん」
「ん？何かな？ティアナ」
振り向いたギンガは笑みを浮かべていたのだが、額の辺りにはムカツキマークが浮き出ていた。
「あ、あの・・こんな空気の中ですけど、ちょっとお話したいことが・・・」
「えっ？」
良馬とユリーシャのイチャイチャ（ギンガ視点）に対して嫉妬の炎を燃やしていたギンガであるが、ティアナの真剣な表情を見て、彼女が自分に相談事があるのだと判断してティアナの話を聞くことにした。
（まぁ、夜に良馬さんを搾りとればいいでしょう）
ギンガは今日の夜、良馬から搾り取ってやると決意した。

ビクッ!?
「ん?どうしたの?リョーマ」
「い、いや、なんか寒気が・・・」
良馬は何故か言い知れぬ寒気を感じた。

「それで話って何かな?」
ギンガとティアナは比較的人が少ないフードコートの端の席に座る。
完全に人がいないわけではないが、これだけの雑踏の中で二人の会話に聞き耳を立てている人なんていないので、二人は特に気にする様子はなかった。
「あの・・・ギンガさんはフェイトさんたちと一緒にミッドに戻りますか?」
ティアナはギンガに先日、良馬がした同じ質問をした。
ギンガとしては二度手間になってしまったが、まぁ、ティアナとしては気になる事だったし、ティアナもフェイトもギンガの決意を知らないのでこれは当然の質問だと言えよう。
「ううん、私はミッドには戻らずに此処で暮らしていくつもりよ」
「でも、ミッドにはスバルやナカジマ三佐が・・・」
「ええ、そうね・・・もし、私がこの世界に来たのがティアナたちと同じ頃だったりしたら私もフェイトさんたちと一緒にミッドへ戻っていたかもしれない・・・でも、今の私は防衛軍の軍人だし、好きな人も出来た・・・その人と添い遂げるから私はミッドへは戻らない」
「・・・」
ギンガの決意を聞いてティアナは沈黙する。
「・・・もしかしてティアナ・貴女は迷っているの?」
そして、ギンガはティアナの反応を見て、彼女がミッドへ戻るか?それともこのまま地球に残るか迷っているのではないかと思い訊ねる。
「は、はい・・・」
やはり、ティアナはミッドへの帰還か地球への残留に迷っていた。

「でも、今のティアナは執務補佐官なんでしょう？あと少しで念願の執務官になれるじゃない。以前、スバルから聞いたけど確かお兄さんの意思を継いで執務官になるのが夢だって・・・」
「はい。その思いで私はこれまで訓練校や管理局で頑張ってきました。でも、今回の事でいかに管理局の肩書が無意味だったことに気づかされて・・・それに管理局の将来についても・・・」
「管理局の将来？」
「はい・・この地球が管理局よりも優れた技術を持っているのは艦船の素人目で見ても分かります。そんな地球でさえ暗黒星団帝国に占領されました・・・この地球よりも技術が下の管理局が今後も次元の世界の管理者の地位を維持できるのか？それにこれまでの管理世界の方針に対しても彗星帝国や暗黒星団帝国を見ていると疑問を感じてきて・・・」
「その話フェイトさんには・・・」
「まだ詳しくは話していませんが、多分フェイトさんも様々な思いを抱いていると思いますし、私が迷っている事も何となく察していると思います」
「それで、ティアナは地球に残るとして何をしたいの？」
「・・・できれば私もギンガさんと同じく防衛軍に入りたいです」
　ティアナは管理局の将来に対して不安を感じ、ミッドへの帰還さえも迷っていたが実際はティアナの中ではもう答えは出ている様子だった。
「・・・ティアナの決意は分かったわ。もし、地球に残り防衛軍に入りたいって言うならお父さん・・ああ、こっちの中嶋家のお父さんね。お父さんに協力を頼んでみるわ。私の時もそうだったから」
「はい。ありがとうございます。ギンガさん」
「でも、地球に残るとしてもフェイトさんにはちゃんと話してあげて・・それにスバルとも・・・多分、フェイトさんたちがミッドへ帰ったら管理局と今後もコンタクトをとるか分からないから、スバルとは後悔を残さないように話したいことは話した方がいいわ」
「は、はい」

この地球に残留するとすれば、防衛軍と管理局との関係性からスバルともなのはとも今生の別れになる可能性が高いのでティアナには自分と違いスバルとは後腐れがないように伝えたいことは伝えた方がいいとアドバイスを送るギンガであった。

なお、その日の夜に良馬がギンガに目一杯搾り取られたのは言うまでもなかった。

百二十九話　決断

山梨県の遊園地から海鳴市にある月村邸へと戻った一行。
「はぁ～楽しかった～!!」
「うぅ～・・・・」
ヴィヴィオは遊園地を満喫したのか大変満足そうで終始笑顔であったが、反対にフェイトは終始グロッキー状態だった。
「大丈夫ですか？ハラオウン様」
ノエルが心配そうにフェイトへ声をかける。
「だ、大丈夫・・・それにヴィヴィオが満足していたのなら私は満足だよ」
フェイトはノエルにサムズアップしながら答えるが、その顔色は青い。
「はぁ、はぁ・・・」
ノエル自身も忍の事を大事に思っているので、ヴィヴィオ優先なフェイトの気持ちも理解できた。
フェイトがグロッキー状態となっている中でティアナは、
「あの・月村艦長。一つお訊ねしたいことがあるんですけど・・・」
「ん？何かな？ランスターさん」
良馬に声をかけた。
遊園地でのユリーシャと良馬のイチャイチャぶりを見せつけられたギンガがこの後どんな行動に出るのかティアナもこれまでの月村邸での生活から学んでおり今日の夜、良馬はギンガとの一戦で確実に寝不足となるだろうから、その前にティアナは聞いておきたいことを予め聞いておくことにしたのだ。
「・管理局との交信はあとどれくらいやる予定になっていますか？」
「管理局との交信？そうだな・すでに会合場所とかの設定もしたし、あと数回ってところかな？」
「あと数回・・・」
「うん。そう言えば、ランスターさんあれから交信を欠席しているけ

ど、やっぱり高町さんとは・・・」
「はい、やっぱり気まずさがありまして・・・」
（まぁ、あれだけ言い合いをしたらな・・・）
なのはとティアナが言い合いになった二回目の交信の時、その場に居た良馬もティアナが気まずさから管理局との交信を欠席している訳も理解できる。
「残りもやっぱり欠席するかい？」
「いえ、最後の交信は出席します」
「そう、分かった」
「はい。では・・・」
管理局との交信について良馬から残りの回数を聞いたティアナ。
夕食と入浴を済ませると、ヴィヴィオは今日一日遊園地ではしゃぎまわったこともありベッドに入ると直ぐに寝息をたてって眠ってしまった。
フェイトは入浴後グロッキー状態からやや回復した様子だったのでティアナはフェイトに声をかける。
「あの・フェイトさん」
「ん？何かな？ティアナ」
「さっき月村艦長と話したんですが、管理局との交信はあと数回みたいなんです」
「そっか・・・もうすぐでこの地球ともお別れか・・・」
ティアナの話を聞いてフェイトはもうすぐミッドへ戻るのかと思うとなんだか寂しいような気もした。
「それで、最後の交信には出席するつもりで・・・その時にはスバルも来てもらいたいので、次の交信でその旨を管理局に伝えてもらっても良いでしょうか？」
フェイトは地球に居る管理局側の代表として管理局との交信には毎回出席している。
一方、ティアナは二回目の交信でなのはと口論して欠席し続け、ヴィヴィオもなのはとはミッドに還れば会えるので、この地球をギリギリまで満喫しようと紅葉や桜花と共にＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをや

りに行っている。
「えっ？あっ、うん。それぐらいなら良いけど・・・でも、どうしたの？なのはと言い合いをしてから交信には出席していなかったのに？」
「・・・フェイトさんには先に伝えます」
　ティアナの真剣な表情にフェイトは変に緊張する。
　それはやはり、ティアナが纏う雰囲気と顔の傷が原因だろう。
「な、なにかな？」
「・・・フェイトさん。私はミッドへは還らず、この地球に残ります」
「えっ？」
　ティアナの言葉にフェイトは固まる。
（えっ？）
（ティアナは今なんて言った？）
（ミッドへ還らない？）
（地球に残る？）
「な、なんで・かな？・・・・ティアナ」
　フェイトは絞り出すようにティアナへ訊ねる。
「これは前々から考えていた事です・・・管理局の将来にも不安を感じ、存在自体にも疑問を思いまして・・・」
「そ、そう・・・でも、本当にいいの？ティアナ。もうすぐで念願の執務官になれそうなのに・・・？」
「これまでの経験から管理局の執務官と言う肩書にもなんの意味も成さない事も分かりました・・・それに私にはミッドで帰りを待つ家族も居ませんから・・・」
「・・・」
　ティアナの言う執務官の肩書の意味の無さ・・・これはフェイトも同意見であった。
「・・・そっか・それで、最後の交信にはスバルと・・・」
　先ほどのティアナからの頼み・・・
　最後の交信にはスバルを呼んでほしいという頼みはティアナがスバルと今生の別れをしようと言う事を意味していたのだとフェイトは悟った。

「あと、今日ギンガさんとも話したんですけど、ギンガさんもミッドへは還らないと・・・もし、気になるならば後で確認してください」
「う、うん・分かったよ」
ギンガがミッドへ還らない事は何となくだが察していたフェイト。
でも、一応ギンガ本人には後で確認してみようとフェイトはそう思いつつもやはりティアナがミッドへ還らない事には驚きが隠せなかった。
（一応、明日の朝、ギンガにもティアナにも確認してみよう）
（あっ、リニスにもアルフ宛てに手紙とか提案してみようかな）
フェイトは一時の迷いかもしれないと思い、明日の朝にもう一度ティアナに確認すると同時にギンガとリニスにも聞いてみようと思いこの日はベッドに横になった。

翌朝・・・
「ね、ねぇ、ティアナ」
「はい？なんでしょう？」
「その・・・昨日の夜、話したことなんだけど・・・考え直す気はない？」
フェイトはまずティアナにミッドへ還らない件について再考の余地は無いかと訊ねる。
「・・・はい。ミッドへ還るか還らないかは私自身悩みに悩みまして出した結論ですから・・・」
「そう・・・分かったよ、ティアナ」
ティアナが長い時間をかけて悩みに悩んで出した結論がミッドへの未帰還だ。
スバルやなのははきっとティアナを説得するだろうけど、ティアナの意思はきっと変わらないだろう。
何しろ、六課に入る前から夢見ていた執務官への道を蹴ってまで残ると言い出したのだから・・・
身支度を整えて食堂へと降りるとそこには既にギンガが待っていた。
「あっ、ギンガ。おはよう」

「おはようございます。フェイトさん」
「・・・ねぇ、ギンガ」
「はい？」
「その・・・昨日ティアナから聞いたんだけど、ギンガ・・ミッドへ戻らないって・・・」
「はい。折角の機会ですけど、私はもう防衛軍の軍人ですから・・・それに、ミッドへ戻ればスバルとお父さんは喜ぶかもしれませんが、防衛軍から送られたスパイ容疑をかけられそうですし、この地球の座標や情報を無理矢理聞かれそうですから・・・」
「・・・」
確かに今のギンガは管理局の関係者の中では誰よりも防衛軍の機密を知っている。
そんなギンガがミッドへ戻れば管理局の上層部は彼女を放っておくだろうか？
管理局がこの地球の情報を集めようとしているのはこれまで管理局が仕出かした醜態をフェイト自身も知っているのでギンガの予測は完全に否定できない。
むしろ、肯定さえできる。
もし、自分がこの地球へ来ることなく、ミッドに居る状況下でこの地球の事を知れば、管理局の執務官としてこの地球の存在に対して興味と同時に脅威を抱くかもしれない。
実際に波動砲や自分たちよりも強大な技術力をもつ星間国家と戦い勝った実績から管理局の執務官としてこの地球に対して脅威を感じてもおかしくはない。
そんな中で、その地球の情報を知っているかもしれないギンガが地球からミッドへ戻ってきたら何が何でもこの地球の情報を聞き出そうとするだろう。
信じたくはないが、秘密裏に自白剤等の薬物の使用や拷問まがいな尋問、スバルやゲンヤたち家族を人質にするかもしれない。
だが、今のフェイトはこの地球に滞在して地球人の強さを間近に見て体験し、地球に対する見方ではなく、むしろ自分が所属している筈

の管理局への見方が変わってきている。
だからこそ、ギンガがミッドへ戻らないというのも頷ける。
そして、ティアナがミッドへ戻らないと言う事も・・・
自分も恐らくミッドへ戻れば本局にて色々と事情聴取を受ける可能性が高い。
バルディッシュには事前にこの世界で出会った魔力保持者や地球の座標を記録しない様に言ってある。
本局の局員が何か言っても幸いなことにこの地球はＡＭＡで満たされている事からＡＭＡの影響で記録できなかったとでも言っておこう。
ヴィヴィオのクリスに関してもメンテナンスは信用できるシャーリーだけに任せることにしたフェイト。
「分かった・でも、ギンガ」
「はい？」
「せめて、スバルやナカジマ三佐にだけでもギンガが生きている事を知らせない？」
「えっ？」
「ギンガの今の近況を記した手紙や写真を送ってもスバルやナカジマ三佐ならギンガの事をあまり周りに話さないと思うし、どうかな・・・？ギンガが手紙を書くなら私が直接その手紙をスバルとナカジマ三佐に手渡すし・・・」
「ちょっと考えさせてもらえますか？」
フェイトはギンガにミッドへ戻らなくてもせめてミッドに居るスバルやゲンヤに自身の生存や近況を手紙や写真で知らせるのはどうかと提案する。
「うん、いいよ。でも時間があまりないけど、私たちがミッドへ還るまでは待つから」
「は、はい。分かりました」
ギンガもミッドへは帰るつもりはないが、それでもミッドに居るスバルやゲンヤの事も全く気にしていないと言えばそれは嘘になる。
フェイトからの提案も有りだとギンガは思った。

「あっ、リニス」
　次にフェイトはリニスに声をかける。
「なんでしょう？フェイト」
「さっき、ギンガにも提案したんだけど、アルフに手紙を書かない？」
「えっ？アルフに？」
「うん。アルフもリニスが消えちゃった時、泣いていたんだよ・・・でも、リニスはこうして無事に生きていた・・・会う・・のは難しいかもしれないけど、せめてアルフに手紙や写真を送るのはどうかな？」
「・・そうですね。大きくなったフェイトにはこうして会えましたが、アルフには会えませんでしたからね」
　ギンガはミッドに居るスバルとゲンヤに手紙を送ることに迷いがあったが、リニスに関してはアルフに手紙を出すことを直ぐに了承した。
　そして、その日に行われた管理局との交信にてフェイトはリンディに、
「あっ、お義母さん」
「ん？何かしら？」
「今度の交信が最後になるんだよね？」
「ええ、そうね」
「その・・ティアナが・・ランスター執務補佐官が最後の交信には出席するみたいで、そこでスバルと話がしたいみたいだから、スバルには最後の交信に呼んで欲しいの」
「スバルって言うと機動六課時代、ＦＷ陣に所属していたスバル・ナカジマ一士のことね？」
「うん。そう」
「分かったわ。交信が終わったら彼女に連絡を入れておくわね」
「ありがとう」
　フェイトはリンディにスバルへの伝言を頼んだ。
　地球との交信が終わり、リンディは早速フェイトに頼まれたスバルへの伝言を伝えるために現在スバルが所属している湾岸特別救助隊へ連絡を入れた。

「ナカジマ一士、本局のハラオウン統括官から連絡です」
「えっ？本局の統括官から？」
一応、六課でフェイトと関りを持ったのでスバルは統括官がフェイトの養母であることは知っていた。
実際に地球との交信でリンディとは同席したことが何度かある。
（もしかして、ティアたちの帰国日が決まったのかも・・・）
ティアナとなのはが口論し、それ以降ティアナが管理局との交信の席に欠席しがちになってからスバルも地球との交信の席に出席しなくなってからティアナたちの帰国状況が本局に所属していないスバルは分からなかったが、こうしてリンディから連絡が来たと言う事はティアナたちの帰国の日程が判明したのではないかとスバルはそう判断した。
「はい、スバル・ナカジマです」
「あっ、ナカジマさん。今日、もう一つの地球との交信でハラオウン執務官から貴女宛てに伝言を頼まれたの」
「えっ？フェイトさんから？」
「ええ、地球との交信もいよいよ次で最後になるのよ」
「最後・・・と言う事はもうすぐでティアたちがミッドへ還って来るんですね？」
「そうね。それで、ハラオウン執務官は次回の地球との最後の交信に貴女に来てもらいたいって」
「えっ？最後の交信に私が・・ですか？」
「ええ・なんでもランスター執務補佐官もその時には同席するみたいで、彼女が貴女に来て欲しいってハラオウン執務官に伝言を頼まれたの」
「ティアが・・・」
スバルとしてはミッドへ戻ってくれれば直接話すことも出来るのに最後の交信に自分を呼んだと言う事は・・・
（ミッドに還ってきたらどこか食事にでも行こうってことかな？）
（もう、ティアったらせっかちなんだから～）
「分かりました。それで最後の交信の日は何時なんですか？」

そしてスバルはリンディに地球との最後の交信日の日時を訊ねた。
交信日時を聞いたスバルは、
「あっ、でも、なのはさんも来るのかな？」
地球との交信が再開されてから二回目の交信でティアナと話したのだが、その時のティアナの変貌と暗黒星団帝国の兵士を殺したということからティアナとなのはは価値観の違いから言い合いになり、その後ティアナは交信の席に出席しなくなった。
そんな中、最後の交信には出席するし自分に来て欲しいとわざわざフェイトとリンディに頼んできた。
スバルはきっとティアナがミッドへ戻ってきたその日の予定を自分と立てたい為に自分を呼んだのだと思った。
ただ、その席になのはも同席したら前の交信の時の様になのはとティアナは言い合いを始めてしまうだろう。
そうなれば、ティアナが自分に何を言いたいのか分からなくなってしまう。
「ハラオウン統括官が伝えちゃったら仕方ないけど、私からはなのはさんに黙っていよう」
もし、リンディからなのはに伝われば最後の交信と言う事でなのはも来る可能性が高い。
なのはがリンディ経由で出席するのは仕方がないがもし知らなければわざわざ藪をつついて蛇を出す必要もない。
スバルは自分の口から最後の交信日時をなのはに知らせる事はなかった。

フェイトたちのミッドへの帰国が近づく中、
管理局のエース・オブ・エースである高町なのは、夜天の書の主である八神はやての生まれ故郷であり、管理局が第９７管理外世界と認識している方の地球では・・・
日本の海鳴市・・・
そこにはミッドから移り住んだハラオウン家の家がある。
そのハラオウン家では現在休暇中のクロノが居た。

クロノは自宅のロビーにあるソファで新聞を見ている。
「ねぇ、クロノ君」
「ん？なんだ？エイミィ」
そんなクロノに妻であるエイミィが声をかけてきた。
「お仕事はいいの？そろそろ休暇も開ける頃だと思うんだけど・・・」
エイミィはクロノに休暇明けの期日を訊ねる。
「ああ、ここ最近はずっと仕事ばかりで子供たちにも君にも満足に家族サービスが出来なかったから休暇を延長したんだ」
しかし、クロノはエイミィに休暇を延長させたことを告げる。
「そうなんだ・・・それは嬉しいけど・・・」
エイミィとしてはボラーへの武力制裁から生きて戻ってきてくれたこと、
そして、わざわざ休みを取って自分や子供たちへ家族サービスを目一杯しれくれることには感謝しているが、その反面エイミィの目にはクロノが何だか仕事への意欲を無くしているようにも見えていた。
そりゃあ、管理局史上最悪の失敗と言ってもいいほどの武力制裁から命からがら戻ってきたのだから分からなくもない。
自分だって武力制裁前はクロノには遠征には行って欲しくなかったのだから・・・
「ん？どうした？」
エイミィからの視線に気づいたクロノが声をかける。
「あっ、ううん・何でもないよ」
「そうか？」
エイミィは慌ててお茶を濁す。
妻からの不安を知る由もなくクロノはこの休暇でフェイトやティアナ同様、管理局・管理世界の存在について考えていた。
自分とエイミィとの間にはもうすぐで四歳になる双子が居る。
魔導師夫婦との間に生まれた自分の子供たちも当然リンカーコアを受け継いでいるが、魔法文化が無いこの地球ではエイミィやリンディが子供たちに魔法の使用を固く禁じ、デバイスも持たせておらず、普通の子供・非魔導師と同じ環境で生活させていた。

その反面、自分は幼少期には当然地球と言う世界の存在を知らず、自分の子供たち同様、魔導師であり管理局のエリート局員であるリンディとクライドとの間に生まれた子供だったことから将来の管理局を担う人材として幼少期から専門のエリート教育を受け、１０代前半には執務官として職務についていた。

だからこそ、クロノは地球での生活を続ければ続けるほど管理局の異常性に気づき始めていた。

この町でなのはたちと出会う切っ掛けとなったＰＴ事件では、自分は当時民間人であったなのはとユーノに関してジュエルシード回収作業から手を引くように言った。

しかし、母であるリンディはなのはを半ば騙すような形でなのはにジュエルシードの回収作業を協力させた。

なのはの協力によって、事件の早期解決が出来たのは事実ではあるが子を持つ今の自分の立場で言うのであれば、やはりあの時のリンディの行為には納得できないモノがある。

あの時のなのはは当時の自分や今のなのはと異なり民間人であった。

しかも魔法を覚えたての・・・・

人手不足な管理局としては高魔力の魔導師は喉から手が出る程勧誘したい人材である。

実際になのはＰＴ事件を皮切りに闇の書事件を解決し、その後管理局とかかわっていくが十一歳の時に当時アンノウンだったスカリエッティが製作したガジェットⅢ型と戦闘し大怪我を負った。

いくらガジェットがＡＭＦを発生させるとしてもなのはの魔力レベルであればそれこそ多数のガジェットがいなければ負ける筈がない。

しかし、あの時のなのはは一体のガジェット相手に敗北した。

それは彼女がガジェットⅢ型と邂逅する前にオーバーワークによる疲労の蓄積が原因だった。

十一歳の少女が過労が原因で二度と歩けなくなるかもしれない重傷を負う・・・・

この地球における日本では考えられない事だ。
結果的になのはは奇跡的に回復し今では管理局のエースと呼ばれる魔導師になったが、もしも、なのはがあのまま歩けなくなった時、リンディは責任を負えたのだろうか？
ふと、そんな疑問がクロノの脳裏を過る。
管理局と関わる切っ掛けを作っておきながらその少女が魔導師として再起不能になり更には身体障害者となった時に彼女のこの先にある人生のアフターケアをしただろうか？
なのはの両親に誠心誠意謝罪しただろうか？
不正・汚職をした局員に対して人材不足を理由に目を瞑った事からクロノのリンディへ対する信頼が揺らいでいた。
そもそも今、自分たちが居る日本では十五歳までの就業を認めていない。
ボラーの一件を始めとしてこれまでの経験から見ても管理局の人材不足は今後も解消されることはないだろう。
本局がそれこそ星の海の全てを掌握するかこれ以上の管理世界の拡大を諦めるまでは・・・
なのは、フェイト、はやては僅か九歳で嘱託局員となった。
その経緯からリンディはもしかしたら自分の孫たちにも九歳になった時、管理局の嘱託局員にするかもしれない。
義妹のフェイトもエリオとキャロを嘱託局員どころか引き取ってすぐに局員にした。
二人も幼いながらも魔力レベルは高かった。
いくら身寄りがないとしてもせめて自分たちのように嘱託局員と学業を併用させるべきだったのではないだろうか？
ヴィヴィオは学校に通わせているが、この先いつなのはとフェイトの都合から嘱託局員にするか分からない。
もしかしたら、ヴィヴィオ本人の希望により嘱託局員へ志願するかもしれない。
しかし、それでも今のクロノには思う所がある。
「・・エイミィ」

「ん？何？」
「・・・もしも・・もしもだ、母さんが僕らの子供たちを嘱託局員にすると言ったら、君はどうする？」
「えっ？」
クロノは自分が思った疑問をエイミィに訊ねる。
「あの子たちが嘱託局員になって・・ゆくゆくは管理局で働くとしたら・・・君はどう思う？」
クロノは管理局員の妻、元管理局員からの目線ではなく、一人の・・子供たちの母親としての意見をエイミィに求めた。
「・・・」
エイミィはクロノの質問に直ぐには答えられなかった。
だが、クロノが管理局の関係者としての目線で意見を求めているのではないのだと長年の付き合いから察していた。
「そうね・・・」
ボラーへの武力制裁前ならば、自分の子供たちが義母や旦那と同じ様に管理局で働くのは素敵な事だと思ったかもしれない。
親バカかもしれないが、自分の子供たちも旧六課のメンバーと同じくらい優秀な魔導師になれるだろうと思っている。
しかし、今の管理局の現状を見ると自分の子供たちを管理局と・・魔法に関わらせる事に対しても躊躇している自分が居た。
「・・・私は・・・その・・クロノ君の前で言うのはなんだけど・・・あまり関わって欲しくはない・・かな？」
ボラーに対する武力制裁の失敗では沢山の艦船はもとより、多くの人の命が失われた。
その中には自分よりも若い訓練校や士官学校の学生たちも居た。
今後もボラーとの戦争が続けば管理局側の人材枯渇は続くだろう。
先日の武力制裁ではクロノは生きて戻ってきたが、今後も生きて帰れるという保証はない。
エイミィは本音を言えばクロノにも管理局を辞めるか、艦船勤務から外れて欲しかった。
そんな中で自分の子供たちも管理局に関わればボラーとの戦乱で

命を落とす可能性が高い。
だからこそ、エイミィはクロノに子供たちは管理局へあまり関わって欲しくないと言う。
元管理局員、管理局高官の妻としてその意見は本来あってはならない回答かもしれない。
しかし、それでも子供たちの安全のためならエイミィは胸を張って自分の子供たちは管理局と関わらせないと言える。
「クロノ君はどう思っているの？やっぱり管理局員になってほしいの？」
エイミィは反対にクロノの意見を訊ねる。
「・・・・いや、僕も君の意見と同じだ・・・・ただ・・子供たちが今後自分の意志で管理局員になりたいと言ってきたら・・・・」
「言ってきたら？」
「・・・・その時は子供たちの意志を尊重したい」
「そ、そんなっ!?」
クロノの回答を聞いてエイミィは驚愕する。
エイミィ本人としてはあまり管理局とは関わって欲しくないが、子供たちが局員になりたいと自ら志願すればクロノは子供たちの意志を尊重・・・・つまり、局員になることを許すと言うのだ。
「ただし、関わらせるとしても高校を卒業してから・・・・そして魔法の・・管理局の綺麗なところも汚いところも見せてからだ・・・・」
フェイトとはやてに関しては関係者が起こしてしまった事件への贖罪の気持ちもあったのだろが、なのはに関しては魔法も管理局も綺麗なところしか見て来なかった故に今の管理局のギャップに驚愕しているみたいだ。
「それまでは例え母さんが相手でも子供たちには管理局とも魔法にも関わらせない」
初めてのなのはとの出会いの一件からリンディは管理局の綺麗な所しか見せない様な気がしたクロノは、管理局は決して綺麗な所だけではなく、裏の顔がある組織である事をしっかりと見せてそれを見せた結果、子供たちがそれでも管理局の局員になるなら止めず、自分で

物事の分別がつく精神と年齢がくるまでは管理局にも魔法にも関わらせない事をエイミィに誓う。
「クロノ君・・・」
クロノが自分の意志をエイミィに伝えた時、
「ただいまー!!」
「ふぅ～疲れた～」
外へ遊びに出かけていた子供たちと子守役のアルフが帰ってきた。
「おかえり～アルフも子供たちのお守りありがとう～」
エイミィが子供たちとアルフを出迎える。
「さっ、手を洗っておいで、おやつ用意してあるわよ」
「はーい!!」
子供たちの姿を見てあの子たちが大きくなるまでせめてボラーとの一件が片付くことを祈るハラオウン夫妻だった。

「そう言えば、もう一つの地球に居るフェイトちゃんたちはいつ頃ミッドに戻るの?」
子供たちとアルフにおやつを出した後、エイミィはクロノにフェイトたちがいつミッドに還って来るのかを訊ねた。
彼女にとってフェイトは義理の妹にあたる。
フェイトたちが乗った艦が遭難したと聞いた時、エイミィ自身もフェイトたちの身を案じていた。
「そうそう、あたしたちずっと地球に居たからフェイトたちの情報が来ないからさ」
使い魔であるアルフも主人であるフェイトがいつ帰って来るのか気になる様子だった。
「それに向こうの地球がどこかの星間国家に占拠されたって聞いたんだけど?」
「えっ?ソレ大丈夫なのかい!?フェイトは無事なの!?」
一応、使い魔の自分と主人であるフェイトは魔力でリンクしているので、フェイトの身に何かあれば自分の身にも何らかの変化があるのだが、それが無いのでフェイトが無事だろうと言う事は何となくわか

る。
　それでも小さな傷や精神的疲労も負うだろう。
「ああ、無事みたいだ。もう一つの地球の方も防衛軍が奮闘して解放したみたいだ」
「それって凄いねぇ。確か防衛軍って管理局よりも強いんでしょう？」
　エイミィがクロノに防衛軍と管理局の艦船の性能差を訊ねる。
「うむ・・・技術的には管理局の艦船よりも防衛軍の艦船技術が上だ」
　クロノは悔しさを見せることもなく平然と管理局の艦船が防衛軍の艦船よりも性能が負けていることを認める。
「ってことはその地球を占拠した奴らはもっと強いってことだろう？」
　するとアルフが地球を占拠したどこかの星間国家はもう一つの地球や管理局よりも実力が上である方式が出来上がりそれをクロノに訊ねる。
「だろうな・・・つくづく防衛軍を・・・もう一つの地球を敵に回す真似は出来ない・・・それに時期的から考えてもうすぐ帰って来るだろうな・・・」
「フェイトちゃんたちは占領下を体験したってことだよね？」
「ああ・・・きっと僕らには想像もつかない体験をしたんだと思う・・・そんな体験をしたんだ。きっと前よりも成長して帰って来ることだろう」
　あの地球で過ごしたのだからきっと成長して戻って来る・・・
　クロノにはそんな確信があった。
「そうだね」
「早く帰ってこないかな・・・」
　エイミィもアルフもフェイトが帰って来る日を楽しみに待っていた。

　それから幾日が過ぎ・・・
　管理局との最後の交信を控えた前日・・・

「月村艦長・・・・」
「ん？」
　良馬はティアナに声をかけられた。
　なお、余談であるがギンガは昨夜、中嶋家に帰っているので良馬がギンガに食われる事がなかったのでティアナとしては好都合だった。
「何かな？ランスターさん」
「あの・・・今度の管理局との交信で向こうの友人にも伝えるつもりなんですけど・・・・」
「うん」
　ティアナにしては珍しく歯切れが悪い。
「その・・・・私・・・・ミッドへ戻らずこの地球に残りたいんです!!」
「えっ？」
　ティアナの発言に一瞬、固まる良馬。
「えっ？ちょっと待って・・・・えっ？帰らない？」
「はい」
「理由を聞いてもいい？」
　ひとまず良馬はティアナが何故ミッドへ帰らず地球へ残留するのかその理由を訊ねる。
　ティアナは事前にフェイトへ話した地球への残留理由を良馬に話した。
「そう・・・・分かったよ、ランスターさん。でも、本当にいいのかい？ハラオウン執務官らを帰国させたら恐らくだけど、地球連邦政府はミッドと交流を持つことはない。この先、永久にミッドの地を踏むことは出来ない可能性が高いけど？」
「大丈夫です。私は天涯孤独の身なので、ミッドで帰りを待つ家族は居ませんから・・・・友人には申し訳ないことですが・・・・」
　ティアナの言う友人と言う単語から真っ先に思い浮かんだのがギンガの妹であるスバルの姿であった。
　暗黒星団帝国のせいで管理局との交信が一時閉鎖し、スバルとしてはティアナの身を案じ、交信が再開された時は感極まって涙目でモニターに食いついたぐらいだ。

きっとティアナがミッドへ戻らず地球へ残留するとなれば絶対に悲しむだろう。
それはティアナ自身も分かっている筈だ。
しかし、それを承知の上で彼女は地球での残留を決めたのだ。
軍や政府の一部の者たちはティアナがミッドへ還らず地球へ残留すると言う事で彼女にスパイではないかと疑うかもしれないが、ティアナは暗黒星団帝国との戦いでパルチザンとして戦ったことからスパイ容疑もすぐに解けるだろう。
「地球に残ることはハラオウン執務官にはもう言ったの？」
「はい。先日・・・」
「そう・・・ただこの話は忍さんにも伝えて。忍さんならきっと力になってくれるだろうから」
「はい。ありがとうございます」
ティアナが地球に残ると言う事は管理局での役職を失うことを意味する。
地球での生活おいて、ティアナの年齢から大学へ行くにも就職するにも後ろ盾が必要だ。
忍ならばティアナをサポートしてくれる筈だ。
良馬はティアナからまさかの地球残留話を聞かされ驚きながらも彼女に忍にも伝えることを話した後、源三郎の下へと向かった。

「司令部と協議してハラオウン執務官らの帰国の際、まほろば　と同行する艦が選定された」
「拝見します」
源三郎はフェイトたちの帰国の時、周辺哨戒のために　まほろば　と同行する艦を選び抜き、その艦艇リストを良馬に見せる。
フェイトたちの帰国の時に参加する艦艇リストは、フェイト、ヴィヴィオ及び管理局殉職者のご遺体を乗せる艦が　まほろば　となり、周辺を哨戒する艦が、ティアナと声が似ている美咲七波が艦長を務める防衛軍のパトロール艦　畝傍　同じくパトロール艦の白浜

改彗星帝国巡洋艦ホワイトアーチャー級のホワイトアローⅠ　Ⅱ
Ⅲ

改彗星帝国高速中型空母ホワイトスカウト級の龍驤

以上、これらの艦船が参加する。
「・・・今回の任務には彗星帝国の鹵獲艦が含まれていますね」
「ああ、艦隊司令部としてもこれら鹵獲艦の性能を知る試験航海としていい機会だと言う事で今回の任務にこれらの艦を当てた訳だ」
リストを見て良馬が呟くと源三郎は今回の任務に彗星帝国の鹵獲艦が参加する理由を話す。
彗星帝国の艦船の鹵獲後に調査と地球人でも操艦できるように改修された後、性能試験等を行う前に暗黒星団帝国の襲来があった為、ホワイト艦隊と呼ばれる鹵獲艦部隊の性能試験を満足に行える機会がなかったので今回の任務に短時間ではあるが参加することになったのだ。
「事前に説明をしておかないと管理局に誤解を与えかねませんね」
「ああ。それについては明日の交信で伝えてくれ」
「承知しました」
管理局の次元航行艦のノア、そしてフェイトとティアナがこの地球に来る切っ掛けとなったテリオスを攻撃したのは彗星帝国の艦船だったので、鹵獲し多少外見が変わったが、それでも事前に説明をしなければノアとテリオスを攻撃したのは彗星帝国の艦船と言われているが実際は防衛軍が攻撃したのではないかと言う誤解を管理局側に与えかねない。
画像写真くらいならば軍事機密には当たらない筈だ。
良馬が源三郎とフェイトたちの帰国について話し合いをしているその頃、月村邸では・・・・

「あの・忍さん」
「ん？何？」
　ティアナは良馬から言われた通り忍に地球残留の旨を伝えた。
「えっ？ティアナちゃん、ミッドに還らないの!?」
「はい。この件はフェイトさん、月村艦長にも伝えてあります。それで、忍さんにも伝えた方が良いって」
「なるほど・・・・それで、ティアナちゃんは地球に残って何かやりたいことはあるの？大学を受験するなら私とノエルで勉強を見るし、受験料や学費も負担してあげるよ」
「いえ・その・・・・できれば私もギンガさんと同じく防衛軍に入りたいんですけど・・・・」
「えっ？防衛軍に？」
「はい」
「まぁ、ティアナちゃんはパルチザン活動にも参加していたし、管理局でも訓練や実践も経験したと思うけど・・・・」
　忍としてはティアナが地球に残るというのも驚いたが、地球に残ってやりたいことが良馬やリニス、ギンガと同じ様に防衛軍への入隊を希望するのは意外だった。
　ギンガという前例もあるし、パルチザン活動でティアナは空間騎兵隊の古野間、防衛軍のエリートとも言える北野と行動を共にしていたので、軍でも人間性を疑われることはないだろう。
「・・・・分かったわ。そういう事なら軍に話をしておくわ」
「ありがとうございます」
　ティアナは地球での今後の生活基盤を着々と整え始めようとしていた。

百三十話　帰国準備

ティアナがミッドへは戻らず、地球での残留を決めると決意してからいよいよ管理局と最後の交信の日となった。
防衛軍側は良馬、フェイト、ティアナが出席し、管理局側はオペレーターとリンディ、そして前回の交信の際にフェイトがリンディに頼んだスバルがおり、なのはの姿はなかった。
その代わりにはやてが来ていた。
リンディもティアナとなのはが交信の時に口論した事をオペレーターから聞いており、最後の交信であるが、ティアナがミッドへ戻ればモニター越しではなく直接話せるのだからと思い、今回の交信に声をかけず、代わりにフェイトたちの帰国の際に関わるはやてを呼び寄せたのだ。
(うわぁ～・・なのはちゃんとヴィータから事前に聞いておったけど、確かに今のティアナ、めっちゃインパクトがあるわ・・・)
(目つきはバトル時のシグナムに何や似ているし、何よりあの顔に残る魚の骨みたいな傷が・・・)
なのはやヴィータからティアナの現状を聞いていたはやてであったが、こうして顔に傷があるティアナとモニター越しとは言え対面するのは今回が初めてであり、改めて今のティアナを見てみると自分の知るティアナとは別人のような凄みを感じているはやてだった。
最初にティアナがスバルに対して自分はミッドへ戻らない事を伝えてはその後の話し合いがこじれてしまうので、まず最初にフェイトたちの帰国の件についての話し合いとなった。
「月村艦長、こちらが今回ハラオウン執務官らの帰国の際に同行する八神はやて艦長です」
リンディが良馬にはやてを紹介するが、良馬とはやては今回が初対面ではなく、年始の交信で会っており、その他にも春藍の試験航海の際にもはやてが艦長を務めるヴォルフラムと邂逅している。
「八神艦長とはこちらの年始の席で会いましたね」

「は、はい。あと、宇宙でも一度、月村さんが艦長を務める　まほろば　とも会いました」
「ああ、あの時の・・・」
　はやてに言われ、春藍の試験航海の時に出会った管理局の艦の事を思い出す良馬。
　良馬としてはあの時の管理局艦の艦長がはやてであるとこの席で初めて知った。
「はい。あの時は、わざわざこちらの要望で艦名を教えていただきありがとうございます」
　はやてはペコッと一礼する。
「いえ、艦名ぐらいは軍事機密には当たらないので・・・それで、ハラオウン執務官らの帰国の際には貴女の艦が迎えに来ると言う訳ですね？」
「はい、そうです。ハラオウン統括官からは事前に会合場所は聞いております」
「分かりました。あと、会合場所の周辺哨戒の為に　まほろば　以外にも防衛軍の艦艇が同行する事は聞いていますか？」
「はい、その件も聞いています」
「先日の交信の後、今回のハラオウン執務官らの帰国の際に防衛軍側の同行する艦が決まりまして、その件について事前に伝えておきたい事があるのでお伝えします」
「分かりました」
（でも、なんでわざわざ同行する艦について詳しく話す必要があるんやろう？）
（別に『まほろば以外の防衛軍の艦が同行します』の一言で済む話やないんか？）
　はやてはフェイトたちの帰国に際して防衛軍側が　まほろば　以外の艦を同行させる件についてわざわざここまで詳しく説明しなくても『当日は　まほろば　以外の防衛軍の艦も同行します』の一言で済む話なのにどうしてなのかと疑問に思う。
「今回のハラオウン執務官らの帰国の際に同行する防衛軍の艦は　ま

ほろば　以外に防衛軍のパトロール艦二隻の他に彗星帝国の鹵獲艦が同行します」
「えっ？」
「彗星帝国の鹵獲艦？・・・・ですか？」
「はい。防衛軍が彗星帝国との戦いで比較的に損害が少ない艦を鹵獲し、地球人でも運用できるように改修した鹵獲艦で、そちらの所属艦であったノアやハラオウン執務官が乗艦していたテリオスを攻撃したのが彗星帝国の艦と言う事で、あらぬ誤解をそちらに与えないようにこうして事前に説明をと思いまして・・・・」
「なるほどそういう事ですか・分かりました」
　良馬の説明を聞いてリンディは納得した。
（彗星帝国の艦を鹵獲してそれを地球人でも運用しとるって・・・・それって彗星帝国の技術をそっちの地球の人らは手に入れてソレを理解しとるっちゅうこっちゃな）
　はやては地球以外の星の技術をもう一つの地球人は手に入れソレを理解し運用している事を悟る。
（まさか、彗星帝国の艦を鹵獲してソレを使用しているなんて・・・・と言う事は、ノアやテリオスを通して管理局の・・・・次元航行能力もそちらの地球は手に入れているかもしれないってことね・・・・）
（防衛軍が彗星帝国の鹵獲艦を運用している事を本局の過激派幹部が知れば私と同じ考えをする人がいてもおかしくない・・・・）
（となると、もう一つの地球への侵攻を企てかねないわね・・・・）
（防衛軍が彗星帝国の鹵獲艦を運用している事は黙っていた方がいいかしら？）
　防衛軍が彗星帝国の艦を鹵獲して運用していると言う事から既に防衛軍側が手中に収めている次元航行艦がある事から防衛軍がいつ次元航行能力を持つ艦を建造するのも時間の問題か既に建造しているかもしれないとリンディは危惧する。
　そして、防衛軍が彗星帝国の鹵獲艦を運用している事を知れば自分と同じ考えにたどり着く者もきっと居る筈だ。
　そうなればもう一つの地球に対して武力侵攻を本格的に提案して

行いそうだ。
　故にリンディは防衛軍が彗星帝国の鹵獲艦を運用している事を報告して大丈夫だろうかと悩んだ。
「こちらが、今回同行する鹵獲艦の外見です」
　リンディの危惧を知る由もなく良馬はリンディたちに防衛軍が彗星帝国から鹵獲して改修した彗星帝国の巡洋艦と空母の写真を見せる。
（プレオを破壊したミサイル艦に似ている構造ね・・・）
（説明が無ければ確かに管理局へ誤解を与えかねないわね）
　彗星帝国のラスコー級突撃型巡洋艦は元々ゴストーク級ミサイル戦艦に外見が似ていた事から事前に知らされていなければ管理局側に誤解を与えていただろう。
「今回の任務で巡洋艦が三隻、空母が一隻同行いたします」
「分かりました」
　その後、最後の事前確認を行い帰国に関する話し合いは終わった。
　そして、いよいよティアナの番となった。
「久しぶりね、スバル」
「そ、そうだね・・・」
　スバルはティアナと久しぶりに会えて嬉しい筈なのだが、やはり前回の交信でなのはとの口論とティアナの目つきと傷でやや弱腰になっている。
「この前はごめんなさい。なのはさんと口論になって、アンタと沢山話せなくて」
「い、いいよ。気にしていないから・・・それにティアがミッドに戻れば一緒に出掛けたり、お話しすることも出来るし・・・」
　ティアナは前回の交信でなのはと口論してスバルと中々話せずに終わってしまったことを詫びた。
　しかし、スバルは気にしている様子はなく、ティアナがミッドに戻れば彼女と一緒に出掛ける事も出来るし、話すこともできる。
　スバルは当初、その予定を決めるために今日ティアナはわざわざ自分を呼んだのだと思っていた。

だが、次にティアナの口から出た言葉はスバルをはじめその場に居た管理局側のメンバーに衝撃的な言葉だった。
「その事なんだけど、スバル・・・」
「ん？何？」
「・・・私はミッドに戻らず、この地球で暮らすことにしたの」
「えっ？」
「なっ!?」
「っ!?」
ティアナのこの発言にスバル、リンディ、はやては驚愕する。
ティアナがもう一つの地球に残るなんて去れが予想出来ただろか？
「えっ？えっ？ど、どういう事かな？ティア・・・えっと・・冗談なのかな？」
スバルは震える声でティアナに確認するかのように訊ねる。
彼女にとってティアナの地球残留はまささに寝耳に水、青天の霹靂だったからだ。
「ごめん、スバル。これは冗談・じゃないわ・・・フェイトさんとヴィヴィオはミッドに還るけど、私はミッドには還らず地球に残る事に決めたの」
「な、なんで・・・？ど、どうして？ま、まさか前の交信でなのはさんと喧嘩になったから？」
スバルはティアナがミッドに帰ってこない理由を前回の交信でなのはと言い合いをしたせいかと思って訊ねる。
「あのねぇ～いくらなんでもなのはさんと言い合いをしてそれで還らないって、家出じゃないのよ」
ティアナはスバルの言葉をあっさりと否定する。
「これは前々から考えていたのよ。フェイトさんたちの帰国が近づいたから決心したのよ」
「・・・」
「な、なぁ、フェイトちゃん」
ティアナの話を聞いてはやてがフェイトに声をかける。

「ん？何？はやて」
「フェイトちゃんは随分と落ち着いているけど、ティアナの事を知ってたんか？」
　自分やスバルはティアナの地球残留の話を聞いて驚愕したのにフェイトは驚く様子もなく平然としていたので、フェイトはティアナの地球残留を知っていたのかもしれないと思いフェイトに声をかけたのだ。
「うん。この前、ティアナから聞いたから」
　やはり、フェイトはティアナの地球残留を知っていた。
「止めなかったんか？」
　管理局員であり、執務官補佐と言う準エリートにまで上り詰めたにも関わらず地球へ残ると言う選択したことに理解できないはやて。
　はやてはフェイトにティアナへ説得しなかったのかを訊ねた。
「もちろん、理由を聞いて考え直す余地がないか聞いたけど、ティアナの意志は固いみたい」
「そ、そうなんか・・・・」
　勿論、フェイトもこの交信の前にティアナから地球残留の件を聞いて彼女に説得を試みたが、ティアナの意志は固く地球残留を撤回することはなかった事を伝える。
「ね、ねぇ、ティア。どうしてもミッドに還ってこないの？ティア、執務官になるのが夢だったんでしょう？もうすぐで念願の執務官になれるのに・・・・」
　はやてとフェイトのやり取りを見たスバルであるが、彼女はやはり諦めきれないのかティアナの説得を試みる。
「ええ、今日アンタを呼んだのもこうして最後に会って話をする為よ。それに管理局の執務官の資格なんてこの宇宙じゃあなんの役にも立たない事が身に染みて分かったのよ」
「そ、そんなっ!?・・・・じゃ、じゃあ、もう二度と会えないの・・・・？」
「・・・・そうね・・ミッドとこの地球が国交を結ばない限りね・・・・でも、それは難しいと思うわ」
　〝陸〟所属のスバルも今、ティアナが居る地球とミッドが将来的に

国交を結ぶのは難しい事なのは何となくだが察している。
当然、本局所属のはやてとリンディもだ。
「だからスバル・・・今日は時間が許すまで語り合いましょう。後悔が残らない様に」
「う、うん・・・分かったよ。ティア」
ティアナの決意から自分がこれ以上説得しても無駄だと判断したスバルはティアナとの会話に興じるがやはり、もう二度とティアナと会うことが出来ないと分かると悲しいのか笑みを浮かべてもその目には涙が浮かんでいるし、声も震えて無理に明るい声を出している。
一方のティアナの方も自分が下した決断とは言え、訓練校時代から六課卒業までコンビを組み、配属先が別れた後も交流を深めたスバルとの別れはやはり悲しいのか、スバル同様、声が震えていた。
しかし、時間は有限であり、楽しい時間と言うのはあっという間に終わってしまう。
やがて、交信の終了時間となる。
「ランスターさん、そろそろ・・・」
良馬がティアナに交信時間の終了が迫っている事を伝える。
「あっ、はい・・・それじゃあ、スバル・・・元気でね」
「グズッ・・・ティア〝もね・・・」
スバルはもう顔面が涙でグズグズとなりながらティアナと別れを交わした。
ティアナもスバルとの交信の時は我慢していたのだろうが、こうして交信が終わると目には光るモノがあった。
「最後になのはさんにも伝えて頂戴」
「うん・・・録画するね・・・」
スバルはマッハキャリバーにてティアナのメッセージを録画し始める。
「なのはさんは星のような人でした・・・私は教え子としては不出来でしたが、管理局の今後を思うと未来の人材を担う教導官の仕事はより一層重要な役割を果たすでしょう・・・なのはさんは闇に浮かぶ光のような人でいてください」

ティアナはこの場にいないなのはにメッセージを残した。
なのはの性格を六課時代に少しは理解しているつもりであり、きっと自分がミッドに戻らないと知るとなのはは自分を責めるだろうと思ったからだ。
やがて地球との最後の交信が終わるとスバルは大号泣。
はやてとリンディは何とも言えない表情をしていた。
そして泣いているスバルにはやては彼女の背中を撫でてやり優しく慰めた。
一頻りに泣いた後スバルは、
「すみません・・・・」
「気にしなくてもええで、スバル」
「ええ。それにしてもまさかランスターさんが・・・・」
「・・・・」
ティアナの地球残留はスバルたちにしてみればまさに寝耳に水の出来事であった。
「はやてさん・・・・ミッドは今後、ティアの居る地球とは・・・・」
スバルははやてにミッドとティアナが残るとされるもう一つの地球との間に交流する可能性を訊ねる。
「うーん・・・・ティアナの言う通り、交流は難しいやろうな。何しろ、向こうさんが管理局の事をあまり信用してへんからな」
「・・・・」
しかし、はやて自身もティアナ同様、今の管理局がもう一つの地球と国交を結ぶのは難しいと判断している。
「せめて、未成年者の労働については文化の違いと言う事で説明し理解を求めていけばなんとかなったかもしれへんけど、通信ポッドを弄ったり、無断で向こうの地球へ艦を派遣した件については擁護出来へんな・・あの件がなければワンチャンあったのかもしれへんのにな・・・・」
管理局、管理世界において未成年での就労に関して文化が異なるので、もう一つの地球に関しては説明しそれについて理解してもらうほかない。

実際に地球でも発展途上国では未成年でも就労している子供はいる。
防衛軍は専守防衛を概念においているので、もう一つの地球である地球連邦政府が管理局や管理世界に対して自分たちの理念や法を押し付ける事はないだろうが、管理局は自分たちが決めた法律や概念を押し付ける傾向があるので、もう一つの地球と国交を結べばきっと管理局は自分たちの方が上の立場だと決めつけ、もう一つの地球に対して管理世界の法律や概念を押し付けるだろう。
もう一つの地球：地球連邦政府及び防衛軍はそうした管理局の横暴さに対して不信感を抱いているのだろう。
「あの・・・なのはさんにはいつ知らせるんですか・・・？」
「まぁ、どの道フェイトちゃんたちがミッドに還って来る時には分かってもうからな。早い内に知らせておいた方がええやろう」
結果的に喧嘩別れになってしまったなのはとティアナであったが、ティアナの地球残留については遅かれ早かれフェイトたちがミッドに戻って来る時には嫌でも判明する事なので、はやてはフェイトたちがミッド戻る前にこの事実をなのはに伝えようとスバルに言う。
「分かりました。はやてさん、私もなのはさんの所へ一緒に行きます」
スバルはなのはにティアナの事を知らせる際、はやてと同行すると言う。
「そうしてくれるとありがたいわ」
ティアナと最後に言葉を交わしたのはスバルだったので、なのはにティアナの意志を伝えるのは自分の役目だと思っていた。
「なのはちゃんの他にもエリオとキャロにも伝えな・・・」
六課時代に同じＦＷ陣だったエリオとキャロもティアナと交流があったので、ちゃんと彼女の事を伝えなければならないと思うはやてだった。
二人もなのは同様、ティアナの顔を見ることなく別れる事になってしまった。
そう言う面を含めると今日、ティアナとモニター越しとは言え、別れの挨拶を交わしたスバルは恵まれていたのだろう。

「あっ、はやてさん」
「何でしょう？」
　交信が終わり、はやてとスバルがなのはにティアナの件を伝えに行こうとした際、リンディは、はやてに声をかける。
「スバル、ちょっとリンディさんと話をするから部屋の外で待っていてもらえる」
「分かりました」
　本局所属のリンディから声をかけられたと言う事は内容も〝海〟に関する話だろうと思ったはやてはスバルを部屋に外に出してそこで待ってもらった。
「何でしょう？リンディさん」
「さっきの防衛軍側の同行する艦について貴女はどう思う？」
「どう？とは？」
　リンディははやてにフェイトの帰国の際に同行する防衛軍の艦について意見を求めた。
「これは予測でしかないのだけれど、彗星帝国の軍艦と防衛軍の軍艦は構造も操艦系統も何もかもが異なると思うの・・・」
「でしょうね。暗黒星団帝国の軍艦は残骸とは言え、エンジンの構造を管理局の技術者たちは解析できませんでしたから・・・」
　暗黒星団帝国の軍人にとっては何の変哲もない宇宙艦艇のエンジンであるが、管理局から見たら残骸とは言え、それは全くの未知の構造物であった。
　そうなると防衛軍側も当初は彗星帝国の宇宙艦艇も未知の艦扱いだったのだろうが、防衛軍はその未知の艦を既に地球人でも運用可能にしている。
「でも、防衛軍は彗星帝国の軍艦を鹵獲してそれを地球人でも運用可能にした・・・」
「ええ・・・」
「となると、ノアやテリオスの残骸から防衛軍が次元航行能力を持つ艦を建造してもおかしくはないとは思わない？」
「っ!?」

リンディの指摘を受けて、はやてはその事実に気づく。
未知の艦扱いだった彗星帝国の宇宙艦艇を地球人でも運用可能にした防衛軍の技術ならば、管理局のノアとテリオスを解析して次元航行能力を解明し、次元航行能力を可能にした宇宙艦艇を建造していてもおかしくはない筈だ。
「ま、まさか・・・いや、でも・・・」
「防衛軍が既に次元航行能力を持つ艦を完成、もしくは建造を進めていてもおかしくはないと思うわ」
「・・・」
「それでもし、その事実を本局の幹部局員全員が知ったとなると・・・」
「もう一つの地球に対して武力侵攻を?」
「・・・」
はやての考えにリンディは頷く。
「防衛軍が彗星帝国の鹵獲艦を運用している事実・・・フェイトさんたちを迎えに行った際、ついでに報告するべきかと思って・・・」
「そ、それは・・・」
はやては言葉に詰まる。
しかし、すぐに答えを出す。
「同行する艦についてそこまで詳しく報告する必要はないかと・・・」
「理由を聞いても?」
「私たちの今回の任務はあくまでもフェイトちゃ・・・いえ、ハラオウン執務官の帰国の補助です。それ以外については特に明記する事は無いかと・・・」
はやてはあくまでも今回の任務はフェイトたちの帰還の迎えなので、わざわざ防衛軍側の同行する艦について報告する必要はないと判断した。
つまりは藪をつついて蛇を出す必要は無いだろうと言う事だ。
仮に防衛軍が次元航行能力を持つ艦を建造したとしても防衛軍・地球連邦政府が暗黒星団帝国や彗星帝国みたいに侵略戦争を仕掛けてくるとは思えない事も要因の一つである。
「そうね・・・はやてさんもそう思うわよね」

「はい」
リンディもはやてと同じ考えだったようだ。
「一応、フェイトさんを迎えに行く前にヴォルフラムの乗員にはこの件を伝えておいてくれるかしら？」
「分かりました」
事前にヴォルフラムの乗員にはフェイトたちが乗る　まほろばに同行する防衛軍の艦が彗星帝国の鹵獲艦であることを伝え誤解を与えない事。
そして、それら鹵獲艦の映像記録を残さないようにする事を決めた。
幸い今回のお迎え任務にはヴォルフラムの乗員以外にはリンディだけが便乗者であり、他の本局の局員やマスコミ関係者は乗艦しないので、鹵獲艦の件については比較的に表には出ない様に対処しなければならなかった。
はやてやリンディとしては面倒な事をしてくれた防衛軍に対して愚痴りたいところだが、今更、『やっぱりその艦を連れてこないでくれ』とは言えなかった。
一方、親友と恐らく今生の別れとなったティアナの方は・・・
（ごめんなさい。スバル・・・もし、アンタがギンガさんの事を知っていれば、アンタもこっちの地球へ来ると言ったかもしれなかったわね・・・でも、安易な考えで変な選択をするより知らない方が良いこともあるのよ・・・）
スバルにとってこちらの地球は死んだとされた姉であるギンガが居り、ティアナも居る。
もしかしたら、スバルにとってもこちらの地球の方に居たかったかもしれない。
だが、今のスバルにはゲンヤの他に多くの姉妹が居り、六課卒業後に入りたかった部署へ入隊も果たした。
家族・そして職場にも恵まれている彼女に姉と自分の居る環境を天秤にかけるのは酷だと思ったのだ。
しかし、ティアナの心情知る由もなくフェイトはギンガにミッドに

居るスバルたちに手紙を送るように提案しており、ギンガもそれに乗り気であった。
スバルがそれを知るのはもう少し先の事であった・・・

そのスバルは、はやてと共になのはが住んでいる教導隊の教官宿舎へと向かう。
「あっ、はやてちゃん。ミッドに戻っていたんだ。それにスバルもどうしたの？」
「あぁ～あんな、なのはちゃん・・・ちょっと、なのはちゃんに話があるんやけど・・・」
「えっ？話？いいけど・・・」
なのはは怪訝な顔をするが、はやてとスバルが自分に話があると言うのだから、なのはは二人を自分の部屋に案内した。
この後、なのはにティアナの事を話さなければならないと思うと憂鬱になるはやてとスバルだった。
「それで、話って何かな？」
なのははははやてとスバルを部屋に招き入れ、お茶を出すと早速二人に訪問した要件を訊ねる。
「あ、あんな・なのはちゃん・・・」
「ん？」
「その・・・実は今日、フェイトちゃんがいるもう一つの地球との交信があってな・・・それが地球との最後の交信やったんよ・・・」
「えっ!?そうだったの!?でも、最後ってことはもうすぐフェイトちゃんとヴィヴィオ、ティアナが帰って来るってことだね!?」
なのはは出来れば最後の交信に出席したかったが、それでも最後の交信と言う事でフェイトたちがもうすぐミッドに還ってくる事に繋がるので、そこまで残念はってはいなかった。
「ティアナとはじっくりとＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩをしないといけないし・・・」
なのははフッフッフ・・・と、薄気味悪い笑みを浮かべながらティアナとミッドでＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩをすることを何だか楽しみにし

ているようにも見えた。
「あ、あの‥なのはさん‥‥」
　そんななのはにスバルは恐る恐る声をかける。
「何かな?スバル」
「あの‥‥ティアの事なんですけど‥‥」
「ティアナの事?」
「はい‥‥えっと‥‥」
　スバルはチラッとはやてに目をやる。
(わ、私に言わすんか?スバル!?)
　てっきり、ティアナの親友だったスバルがなのはに話すのかと思いきや、土壇場‥と言うか、なのはのダークオーラに当てられて尻込みしてしまったスバル。
(お、お願いします。はやてさん。はやてさん、なのはさんと付き合いが長いんですし‥‥)
　念話ではやてに頼むスバル。
(むぅ〜‥‥)
「あ、あんな‥なのはちゃん‥‥落ち着いて聞いて欲しいんやけど‥‥その‥ティアナの事なんやけど‥‥」
「えっ?ティアナの事?」
「うん‥‥その‥ティアナ‥ミッドには還らないって事に‥‥」
「えっ?」
　はやてのこの一言になのはは固まる。
「はやてちゃん‥‥それってどういう事?ティアナ‥ミッドに戻らないの?ドッキリとか冗談なの?」
「なのはちゃん‥ちゃうねん‥‥これはドッキリでも冗談でもない‥‥ティアナから直接言われたんや‥‥恐らくティアナは本気でミッドには戻らずあの地球で暮らすつもりや‥‥ティアナの性格上、冗談やドッキリであのような事を言う訳がないんや‥‥」
「そ、そんなっ!?あっ、もしかして、私があの時、ティアナの事を否定したから?ティアナは私のことが嫌いだから‥私の顔なんて見たくないから‥‥同じミッドにいたくなかったから、ミッドに還らないん

じゃあ・・・・」
　なのはは自分のせいでティアナがミッドに還らないのではないかと思い始めた。
「なのはさん、それは違います!!」
　スバルは声をあげてソレを否定する。
「ティアは、なのはさんの事を『嫌い』とは言っていませんでした。地球に残ると決めたのはティアの意志でした」
「でも、ティアナはもうすぐで念願の執務官になれそうだったのに・・・・」
　ティアナが執務官志望なのはなのは自身も知っていた。
　六課卒業後にフェイトの下で執務官を目指し、執務官補佐となり執務官までもうすぐの所まで来ていた。
　それにもかかわらず、ティアナはその執務官の道を蹴ってまでもう一つの地球に残留すると言う。
　なのはにはそれが理解できなかった。
「ティア・・言っていたんです・・・・執務官の肩書に何の意味があるのかって・・・・」
「きっと、ティアナはもう一つの地球で沢山の事を経験しすぎたんや・・・・それで、現状の管理局に対して思うことがあったんやろう・・・・管理局の執務官以上になりたいことがもう一つの地球で出来たんやろうな・・・・」
　スバルとはやてはなのはを慰める。
「私、ダメな教官だった・・・・ティアナみたいに　いい才能に出会ったら、その才能を磨くことに夢中になっちゃって、本人の気持ちを見落としちゃって・・・・・・あの時もティアナが迷っていたのに気付けなくて・・・・・・今度の事もティアナの気持ちを無視して頭ごなしに否定しちゃって・・・・」
　なのはの言う『あの時』とは六課時代にあったホテル・アグスタの後の模擬戦の事だとスバルもはやてもすぐに分かった。
「私はティアナと強くなりたかった・・・・・・また一緒に訓練して、ティアナを磨いて、私も磨かれて、一緒に強くなりたかった!もっと悩みを

打ち明けてほしかった。私がティアナの相談相手に値しない人間だったとしても頼ってほしかった」
「なのはちゃん・・・・」
「なのはさん・・・・」
「・・・私は取り返しのつかない最大の失敗をしちゃったよ」
「えっ？」
「失敗？」
「うん・・・ティアナに嫌われたまま別れちゃった事だよ」
スバル、はやて、ティアナは管理局が・・・ミッドが、もう一つの地球と国交を結ぶことはないだろうと思っていた。
それは、なのはも同じだったみたいで、ティアナとはもう二度と会うことがないだろうと瞬時に悟り、ティアナと喧嘩別れしてしまった事を悔いた。
過去の経験上、ティアナがミッドに戻ってきてＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩをすれば、きっとティアナとはまた良好な関係が築けると思っていたからだ。
「なのはさん・・・ティアはなのはさんに事を嫌っていませんでしたよ。ちゃんとなのはさん宛てにメッセージを残して言いました」
「えっ？メッセージ？」
「はい」
そう言ってスバルはティアナからのメッセージをなのはに見せた。
「ティアナ・・・・」
なのははティアナとの別れは悲しいが、まだまだ教導官として一人前ではなく、精進しなければとティアナからのメッセージを見てそう決意した。

一方、管理局との最後の交信を終えたフェイトは月村邸に戻ると帰国の準備をするがその際、帰国後に行われるであろう本局での事情聴取を見越して打つべき手を打っておいた。
まず、バルディッシュに記録されている映像や画像を密かにヴィヴィオのデバイスであるクリスへと移動させた。

とにかくこの地球での記録は『ＡＭＡのせいで記録できなかった』と言う設定にしなければならない。
だが、この地球で記録した写真や映像をそのまま消去もしたくはなかった。
どれもこれもこの地球で体験した貴重な記録なのだ。
要は自分や自分の信頼できる一部の人と共有できればいいのだ。
そして、ヴィヴィオにもいくつかの注意事項を伝えた。
「ヴィヴィオ、もうすぐミッドに戻るけど、フェイトママは多分、ミッドに戻ったら本局の人たちとお話しないといけないんだけど、もしかしたらヴィヴィオにもいくつかの質問をするかもしれないんだけどね、その時にヴィヴィオが忍からデバイスを貰ったことは内緒にしてね」
「えっ？どうして？」
「もし、こっちの地球の人から貰ったと知れたら、本局の人にクリスを取り上げられちゃうかもしれないよ」
「えぇー嫌だ、そんなの!!」
せっかくもらったデバイスを取り上げられることに関してヴィヴィオは嫌がる。
「でしょう？だから、クリスを守るためにフェイトママが良いって言うまでクリスの事は内緒ね？」
「うん」
この地球で作られたデバイスとなれば、本局の局員は必ず調査するだろう。
そこから、この地球の座標、ギンガの事や紅葉の事が知られたら管理局はこの地球へやって来る可能性が高い。
万が一、侵略行為なんてしようものなら、手痛い仕返しを受けるのは管理局の方だ。
その発端がヴィヴィオになることをフェイトは保護者として何としてでも避けなければならなかった。
「ヴィヴィオがクリスを持っていてもいいようにフェイトママが何とかするから、それまで少し我慢してね」

「わかった」
「あと、ヴィヴィオはスバルの事を知っているでしょう？」
「うん。確かノーヴェのお姉さんだよね？六課の時もたまに遊んでくれた」
「そう・・・それで、こっちの地球には桜花のおねえちゃんのギンガが居るでしょう？」
「うん」
「そのギンガが実はスバルのお姉ちゃんなの」
「えっ!?そうなの!?」
　ヴィヴィオとギンガはこの地球で邂逅したので、ヴィヴィオはギンガがスバルの実の姉であると言う事実を知らない。
　しかし、何がきっかけでギンガがこの地球で生きているか分からなかったのでフェイトはヴィヴィオにギンガの正体を教えた。
「うん。まだ、機動六課が稼働する前にギンガは事故でこの地球に来たの・・・それで、この地球で防衛軍の軍人さんになったんだよ」
「へぇ～・・・それじゃあ、ギンガさんもミッドに帰るの？」
　当然ヴィヴィオは、ギンガはスバルの実姉なのだから、ギンガも自分たちと一緒にミッドに戻るのかと思った。
「ううん。ギンガはこの地球に残るよ・・・それにティアナも・・・」
「えっ!?ティアナさんもこの地球に残るの!?」
　ヴィヴィオはここでティアナがミッドに戻らずこの地球に残る事を知った。
「うん。ティアナはこっちの地球でやりたい事を見つけたみたい」
「そうなんだ・・・」
「それでギンガの事なんだけど、どうやら管理局の中にも悪い人がいるみたいなの」
「えっ？管理局の中に？」
「うん。それでもし、ギンガが生きていることがバレたら、スバルやノーヴェたちが酷い目に遭っちゃうかもしれないの・・・」
「ノーヴェたちが!?」
「うん。ヴィヴィオもノーヴェたちが酷い目に遭うのは嫌でしょう

？」
「うん・・・」
「だから、ギンガの事は秘密ね？」
「分かった」
　ヴィヴィオにデバイスのクリス、そしてギンガについて口止めしたフェイト。
「・・・ヴィヴィオは・・・ううん、何でもない。兎も角、クリスの事はミッドに戻っても暫くの間は内緒で、ギンガの事は絶対に秘密だからね？いい？ヴィヴィオ」
「うん。分かった」
　ヴィヴィオはギンガがスバルの姉であることを知り、更にティアナがミッドには戻らず地球に残ることを知った。
　そんなヴィヴィオにフェイトはもしかしたら、ヴィヴィオもこの地球に残りたいのではないかと思ったが、その問いをヴィヴィオに対して訊ねる事はなかった。
　もし、ヴィヴィオがこの地球に残りたいと言った場合、自分はどうすればいいのかと自問自答しそうになる。
　とは言え、ここまで帰国の準備が進められている中でヴィヴィオも自分も帰らないとなれば管理局、防衛軍共に迷惑をかける事になるからだ。
　ティアナがこの地球に残留すると言うイレギュラーな事が起きるもフェイトとヴィヴィオの帰国の準備は滞りなく進んでいった・・・
　フェイトとヴィヴィオの二人がミッドに戻るまであと僅かだった。

百三十一話　会合

地球との最後の交信が終わり、ミッドへの帰国日も管理局との会合場所も決まり、あとはその日を迎えるだけとなった。
帰国を控えたある日、月村邸ではフェイトとヴィヴィオの送別会が開かれた。
この地球に転移したばかりのヴィヴィオを見つけた桜花の中嶋家と紅葉もこの送別会に参加した。
紅葉は前世では管理局員であり、当然その前世ではフェイトとヴィヴィオとも面識があったがこうしてこの世界のフェイトとヴィヴィオに会い、そしてもう二度と会えなくなるかもしれないと思うとやはり寂しくもあり、悲しくもある。
「はい、ヴィヴィオ。これは私と紅葉からの餞別だ」
「ありがとう、桜花お姉ちゃん、紅葉お姉ちゃん」
「ヴィヴィオ、向こうに行っても元気でな」
「うん、桜花お姉ちゃんもね」
「ヴィヴィオと過ごせた日々は楽しかったですよ」
「私も楽しかったよ、紅葉お姉ちゃん」
ヴィヴィオも桜花と紅葉から餞別のプレゼントを貰い目に涙を浮かべ、桜花も泣いていた。
(この世界でもヴィヴィオに友達が出来て良かったよ・・・でも、もう二度と来れないと思うとヴィヴィオには悲しい思いもさせちゃったかな・・・)
桜花と紅葉から餞別のプレゼントを貰っているヴィヴィオを見て、フェイトにとってもヴィヴィオにとっても此処は管理局でも認識していなかったもう一つの地球は全くの未知の世界でもあった。
そんな未知の世界でヴィヴィオには友人が出来た。
ミッドの学校では体験できない沢山の体験も経験した。
そして、もう二度と会うことが出来ないかもしれない今回の別れ・・・

ティアナもこの地球で沢山の経験をした結果、この地球への残留を決めた。
きっとヴィヴィオも今回の地球滞在での経験から人として成長した事だろう。
それがフェイトにとっては嬉しい事だが、桜花、紅葉、ティアナとの別れはヴィヴィオにとっても悲しい事だろうが、それは自分にとっても同じ事だった。
一方でミッドに戻れば本局の事情聴取が控えていると思うと憂鬱になるフェイトであった。

時空管理局本局、次元港
本局の次元港、第四バースに接岸している八神はやてが艦長を務めるＬＳ級次元航行艦ヴォルフラムの会議室では翌日の任務に控え、会議室にて乗員たちがブリーフィングを行っていた。
次元航行艦が次々と失われている中、まだ暗黒星団帝国との戦いが終わったばかりで厳戒態勢にあるという太陽系に赴くこともあり、ヴォルフラムの乗員たち緊張を隠せずにいるが、それでも多少なりとも不安感を和らげているのは、地球防衛軍は比較的穏健な軍事勢力であり、きちんと話し合える相手であると、先方と何度かコンタクトしたはやてが説明したからだ。
何より本来ならば何のメリットもない筈なのにも関わらず彗星帝国に襲われているテリオスの援に向かい、フェイト執務官たちを救出したという動かぬ事実があるのだ。
上層部はどう考えているか知らないが、最前線で働く艦船乗組員達の間では、地球防衛軍に対する印象は意外に良かったのだ。
それは質量兵器を使う軍隊であることを割り引いても・・・・
「いよいよ明日、ハラオウン執務官らを迎えに出航する。それについて先日、防衛軍との交信の際で、あちらさんからハラオウン執務官らが乗艦した艦以外にも周辺哨戒の為に何隻かの艦が同行する」
「周辺哨戒・・ですか？」
副官のグリフィスが首を傾げる。

「うん。もう一つの地球は暗黒星団帝国からの脅威は去ったみたいやけど、その残党が周辺に居ないとは限らへん。実際にハラオウン執務官らは彗星帝国の残党に襲われ遭難したからな」
「なるほど」
　はやての説明を聞き、グリフィスを始めとしてヴォルフラムの乗員らは　まほろば　以外の防衛軍の艦が同行する理由に頷く。
「で、ハラオウン執務官らを迎えに行くにあたって二つ伝えたいことがあるんや」
「なんでしょう？」
「・・・まず、一つ目は・ハラオウン執務官と一緒に遭難したティアナ・ランスター執務補佐官なんやけど・・・・」
　はやては乗員たちにまずティアナの件を伝える。
「ランスター執務補佐官がどうかされましたか？」
「何かあったんですか？」
　このヴォルフラムの乗員には艦長のはやて、副長のグリフィス以外にも旧六課の局員が複数居り、当然ティアナとは顔馴染みである。
　しかし、もう一つの地球との交信には出席していなかったので、ティアナがもう一つの地球に残る事を知らなかった。
　それにあの地球は少し前に暗黒星団帝国に占領されていたので、その為、ティアナの身に何かあったのかと心配になる。
「その事なんやけど・・・ランスター執務補佐官はミッドへは帰還せぇへん」
「えっ!?」
「そ、それはどういうことですか!?」
「言葉のままの意味や・・・ランスター執務補佐官はもう一つの地球に残り、向こうで暮らすっちゅうこっちゃ」
『・・・・』
　はやての言葉にヴォルフラムの乗員たちは固まる。
「な、何故、ランスター執務補佐官はもう一つの地球に残ったんですか？」
「大怪我を負って動かせない状態とか？」

「ま、まさか、亡くなったとか？」
　ヴォルフラムの乗員たちももう一つの地球が暗黒星団帝国に占領されたと言う情報を知っていたので、ティアナが暗黒星団帝国との戦いに巻き込まれ死傷したのかと思ったのだ。
「ランスター執務補佐官は元気や・・実際に最後の交信でランスター執務補佐官本人から地球残留の件を聞いたんや・・・ただどんな心境の変化があったのか分からへんが、ランスター執務補佐官はきっともう一つの地球で管理局よりもやりがいのある事を見つけたんやろう」
　はやてはヴォルフラムの乗員たちにはそう言ったが、実際はティアナが管理局の存在自体に暗雲を感じていたとは言えない。
　一応、はやてがティアナ本人から聞いたと言う事で、ティアナが大怪我を負った、もしくは死亡したと言う訳ではなさそうであるが、それでもヴォルフラムの乗員たちはモヤモヤした気持だった。
「次はハラオウン執務官らの迎えに行く際に防衛軍の同行する艦についてや」
「確か周辺哨戒の為に来るんですよね？」
「そうや・・で、その防衛軍の同行する艦についてなんやけど、まほろば以外に防衛軍のパトロール艦の他に防衛軍が彗星帝国から鹵獲した艦も今回の任務に参加するみたいや」
「えっ？彗星帝国の鹵獲艦!?・・ですか？」
「せや、防衛軍は彗星帝国との戦いで、使用可能な彗星帝国の艦を鹵獲・改良して運用しているみたいや。そんで、ハラオウン執務官らの帰国の際にこれらの鹵獲艦が周辺哨戒の為に同行する」
『・・・』
　彗星帝国の鹵獲艦が来ると言う事でヴォルフラムの乗員たちは何とも言え複雑そうな表情を浮かべる。
「みんなの言いたいことも分かる。実際に管理局はプレオを破壊され、ノアやテリオスも彗星帝国の艦に攻撃を受け、多くの人員が失われた。でも、今回の任務に参加するのは、見かけは彗星帝国の艦やけど、運用しているのは防衛軍や。それに防衛軍側も彗星帝国との戦いで多くの被害を受けとる」

はやては乗員たちにあくまでも今回の任務に参加するのは防衛軍の艦艇であることを強調する。
「そんで、本局にあらぬ誤解を与えないように映像記録は取らんでええ。今回の任務はあくまでもハラオウン執務官らの迎えやからな」
そして、鹵獲艦の映像は取るなと伝える。
(えぇー防衛軍が彗星帝国の艦をどんなふうに改造したのか模型にしたかったのに・・・)
(それに彗星帝国の艦を間近で見るチャンスだったのになぁ~・・・)
はやての話を聞いてヴォルフラムの操舵長であるルキノは艦船マニアであり、フェイトたちの迎えでは、彗星帝国の宇宙艦艇を直に見る機会であり、画像を残せばそこからガレージキットを作成できるのだが、はやてが画像にも映像にも記録を残すなと言われてはそれが出来ないので、心の中で物凄く悔しがった。
(フェイトさん、あっちの世界の艦船模型を買ってくれたかな?)
そして、ティアナがミッドに還ってこないとなるとフェイトがもう一つの地球で防衛軍の宇宙艦艇のプラモデルを買ってきてくれることを祈った。

ブリーフィングが終わり、会議室からは乗員たちが退室していく。
「ふぅ~やれやれ、やっとフェイトちゃんたちが帰って来れる・・か・・・」
感慨深げにはやてが呟く。
「はい。ランスター執務補佐官の事は残念に思いますが、帰還するハラオウン執務官らのもう一つの地球からどんな土産話を携えてくるのか、私も非常に興味深いです」
はやての傍にいたグリフィスが言う。
「そやなぁ~……なにしろ未来の地球やからな。あんな強力な軍備を持つに至った詳しい事もわかるかも知らんな」
向こうの地球が三度も外宇宙からの侵略にさらされ、多大な犠牲を払いながらも侵略者を退けてきた詳しい経緯は管理局員ならずとも知りたいところだ。

大まかな経緯は定期通信でも知らされていたが、フェイトならばもっと詳しい事を調べているだろう。
はやてはそう確信していた。

送別会が行われた翌日、防衛軍の公用車が月村邸にやってきた。
「皆さん、大変お世話になりました」
「なりました!!」
玄関先でフェイトとヴィヴィオは月村家、中嶋家の面々に深々と頭を下げ、今までお世話になった事に対してお礼を言う。
「ミッドに戻っても元気でね」
「私たちの事忘れないでね」
「あまり無茶しないでね」
月村家、中嶋家の面々はフェイトとヴィヴィオに別れの言葉をかける。
「フェイトさん・ヴィヴィオ・・・」
「ティアナ・・・元気でね」
「はい・・・フェイトさんも・・・ヴィヴィオも元気でね」
ティアナはフェイト、ヴィヴィオと握手と言葉を交わす。
「さよなら、ティアナさん」
「さようなら」
別れの挨拶を交わし、フェイト、ヴィヴィオは公用車に乗る。
そして、良馬とギンガも公用車に乗り、まほろば　が係留されている地球防衛軍新横須賀基地へ向かった。
月村家、中嶋家の面々、そしてティアナは公用車の姿が見えなくなるまで手を振り、フェイトたちの別れを見送った。

時空管理局本局、次元港　第四バース
ヴォルフラム　ブリッジ
「艦内全システムオールグリーン、出港準備完了しました」
「了解。ヴォルフラム、防衛軍との会合地点へ向け、発進や」
係留アームが外され、ヴォルフラムは本局の第四バースから離れて

いく。
地球防衛軍との会合ポイントまでの所要時間は約７０～８０時間の航海だ。
ヴォルフラムは多くの局員に見守られフェイトとヴィヴィオを迎えに出航して行った。
ガミラス　彗星帝国　暗黒星団帝国　ボラー連邦・管理局を遥かに凌ぐ科学技術力と軍事力を持つ勢力が悉く敵に回っている現状において、偶然とはいえフェイトたちを助ける行動を取った防衛軍に対する印象は、階級が下の者ほど良く、逆に高ランク魔導師が多い高級士官からは相変わらず不安視する声が高かった。
さすがに、武力を用いてでも質量兵器を接収しろと公言する者は最初に比べて減りはしていたが、『地球防衛軍・地球連邦と関わることが自分たちの優位性を突き崩すのではないか？』という懸念は隠せずにいた。
だからこそ、未だに『もう一つの地球に対して武力侵攻を』と言う声が完全に消滅してはいないのだ。
出航するヴォルフラムの見送りには管理局の白い悪魔こと、高町なのはとユーノ・スクライア・無限書庫司書長の姿もそこにはあった。
「あと、一週間もすればフェイトやヴィヴィオが帰って来るね」
ヴォルフラムの往復を考えればフェイトとヴィヴィオがミッドに戻ってくるのは約一週間後だ。
本局から離れていくヴォルフラムを見送りながらユーノはポツンと呟く。
「うん・・・無事に帰って来てくれればいいけど・・・」
往路は防衛軍の艦船で行くから特に不安視していないが、復路については、はやてのヴォルフラムで帰って来る。
ボラーへの武力制裁の失敗にフェイトとティアナの遭難から管理局の艦船の能力不足が否めない。
もしも途中でボラーや暗黒星団帝国、彗星帝国の残党と出くわしたらどうしよう・・・
そんな不安がなのはにはあったのだ。

「そういえば、はやてからチラッと聞いたんだけど、リンディさんがもう一つの地球へ親書を託されたって聞いたんだけど・・・？」
「うん、それは私も聞いたよ。内容までは聞かされていないけど・・・」
「そうか・・・ただ、内容によっては地球連邦政府さえも敵に回しかねないからね」
ただでさえ、管理局は地球連邦政府及び防衛軍から不信視されている。
そんな中、高圧的・挑発的な文章もしくは降伏勧告に近い文章なんて書いた親書を渡しでもしたら、それこそ地球連邦政府さえも敵に回してしまう。
「魔法とか質量兵器とか、ハードルは高いけど、何とか共存できる方向に進むといいんだけど、地球とミッドでは魔法を含めて文化の違いとかあるからね・・・」
「そうだね・・・」
魔法の有無を含めた文化の違いそして未だに不信視されていることからミッドともう一つの地球と交流を結ぶのは難しい現状であるが、自分が生きている間に交流することが出来れば自分ももう一つの地球へ行くことが出来る。
そうなればティアナとも再会する事が出来る。
現地に赴くリンディは管理局から地球防衛軍司令長官と地球連邦大統領に宛てた親書を預かっている。
ユーノとなのはは親書の内容が、向こうが歩み寄れるような穏健な内容であることを切に願った。

フェイトとヴィヴィオ、そして管理局の殉職者たちの棺を乗せたまほろば　は屋久島上空から一気に大気圏を離脱し、一時間後には月軌道を抜けた。
「月軌道を通過しました！」
「機関、地球圏外出力へ切り換えます！」
「パトロール艦、畝傍、白浜及びホワイト艦隊との会合宙域まで、あと

二十分です」
「僚艦と合流後、木星圏までワープする。ワープ準備」
やがて、今回の任務の同行艦が　まほろば　と合流すると、一行は木星圏まで一気にワープした。

木星圏
まほろば　畝傍　白浜　龍驤　ホワイトアローⅠ　Ⅱ　Ⅲの七隻は木星から５００万キロの宙域にワープアウトした。
「ワープアウト」
「艦に異常を認めず・・・・」
「僚艦も全艦全てワープアウトを確認」
「全艦異常なしとのことです」
（ふむ、パトロール艦は兎も角、ホワイト艦隊の艦艇は今回が初の地球人による運用航海になるが、何とか無事にワープは出来たか・・・・）
今回の航海はただフェイトとヴィヴィオを管理局艦に引き渡すだけではなく、同行する彗星帝国の鹵獲艦の試験航海も兼ねている。
その為、会合場所の宙域まで航行や戦闘などの試験を行いながら向かう。
会合場所はプロキオン宙域の沖合・・・・
プロキオンはかつてヤマト　と　すくね　がテレザートへ向かう途中に航路の一つに選定した宙域であり、その宙域では彗星帝国のコズモダート・ナスカが潜宙艦隊を率いてヤマト、すくねを襲撃した古戦場でもある。
また、土星圏のフェーベで戦ったゲルン機動部隊はこの宙域まで進出して、ズォーダーの太陽系への出撃命令を待っていた。
このプロキオン宙域にはヒアデス方面に超重力惑星である白色わい星、ソーサナーがあるが、プロキオン本星とそのソーサナーの超重力の影響により周囲にはアステロイドや惑星も少ない宙域で、電離ガスが多少存在するが決してレーダーに影響を及ぼす程のガス量ではない。
プロキオン本星とソーサナーへ近づかなければ、障害物も少なく哨

戒しやすい宙域と言う事で今回、管理局との会合地点にこのプロキオン宙域が選ばれた。
管理局の母港である本局からこのプロキオン宙域まで約三日かかると言われたので、防衛軍は太陽系内でホワイト艦隊の性能試験航海をやりながら、時間を潰し、プロキオン宙域へと向かった。
そして、まほろば　以下の艦艇は会合場所であるプロキオン宙域へと到着した。
「全艦、会合宙域へ到達」
「減速開始!!重力アンカー始動!!」
「了解、減速開始!!重力アンカー始動!!」
「会合予定時刻まであと一時間です」
「よし、警戒態勢を維持。コスモタイガーは全機発進せよ。畝傍、白浜及びホワイト艦隊は各々の割り振られた宙域の哨戒任務を開始」
管理局との会合場所に先着した　まほろば　は機関を止めて管理局からの迎えの艦の到着を待つ。
その間、まほろば　所属のコスモタイガー隊と龍驤のコスモタイガー隊は他艦同様、周辺哨戒及び　まほろば　の直掩警戒を行う。
暗黒星団帝国の残党や存在しないとは思うが彗星帝国の残党の存在も否定できない。
また、防衛軍は管理局に対して不信感を有しているので、今回フェイトとヴィヴィオを迎えに来るヴォルフラム以外の管理局艦については、不審船として対処することにしていた。
とは言え、プロキオン宙域は公海なので、いきなり攻撃はせずに所属・目的を聞き出した後に対処する。
まほろば　そして、龍驤から発艦し、宇宙空間を飛び交うコスモタイガーをフェイトは複雑な思いで見ていた。
いくら高ランクの魔導師でも真空の宇宙では、大気圏内と同じ様に高速で飛び回る事も出来ない。
だが、以前ティアナがなのはに指摘した、
「自分たちをお払い箱にしかねないような戦闘機の導入に対して、なのはさんは認められますか？」

と言う言葉通り、管理局が周囲を飛んでいるコスモタイガーの様な大気圏内・宇宙空間の両方を併用できる艦載機を採用するだろうか？
管理局での宇宙空間の活動は次元航行艦か次元巡航艦で遭難事件では、搭載されている小型艇で遭難した次元航行船に救助隊員を送り込む。
しかし、防衛軍、ガトランティス、暗黒星団帝国、ガミラス：管理局よりも強力な勢力はどれも大気圏内・宇宙空間の両方を併用できる艦載機を運用している。
艦載機を持たない管理局の勢力で制宙権、制空権を取られれば成す術なく敗北するのではないか？
フェイトが管理局への将来に対して不安を抱きながらコスモタイガーをジッと見ていると、
「あっ、フェイトさん」
「ん？あっ、ギンガ・・・」
ギンガに声をかけられた。
「あの・・これ・・・」
ギンガはフェイトにそれなりの厚さがある封筒を渡す。
「お父さんとスバル宛ての手紙と写真です」
「うん、確かに受け取ったよ」
まほろば　に乗艦してすぐにリニスからはアルフ宛ての手紙と写真を受け取っている。
そして、ギンガも以前フェイトからの提案からミッドに居るゲンヤとスバル宛ての手紙と写真を用意しており、それをフェイトに託した。
ギンガがフェイトに手紙を託してからすぐに、
「本艦、前方に空間歪曲を確認!!」
まほろば　の近くで空間歪曲反応が確認された。
恐らく会合相手の管理局艦だろうが、念のため警戒態勢は崩さない。
やがて、歪曲した空間からはやてが艦長を務めるヴォルフラムが姿を現した。

ヴォルフラム　ブリッジ
「通常空間を確認、次元転移完了」
「位置は？」
「防衛軍側の指定空間です。間違いありません」
「あっ・・・これは・・・!?」
ヴォルフラムが空間転移してきたのは間違いなく、防衛軍側が指定した会合宙域だった。
そんな中、ルキノが思わず声をあげる。
「ん？どうした？」
「なんかあったんか!?」
「いえ、外の景色が・・・」
ルキノの指摘を受け、ヴォルフラムのブリッジ要員は皆、外を見る。
「おぉ・・・」
「綺麗・・・」
ヴォルフラムの乗員たちは初めて見るプロキオン宙域の景色に見とれる。
普段は漆黒の中に星々の薄明りが灯っている様な宇宙空間であるが、プロキオン宙域は電離ガスが恒星からの紫外線放射によりまるでオーロラがかかっている様な景色だった。
これまで短期間であるが、あちこちの宇宙へ航海したが、このような光景を見るのは初めてだった。
「って、いつまでも見とらんで、防衛軍と接触するで!!」
『は、はい!!』
はやてが、乗員たちを叱咤して防衛軍との会合準備を促した。
乗員たちは慌てて準備をする。
すると、出迎えなのかヴォルフラムの周辺にコスモタイガーが接近してきた。
「あれが、戦闘機……？」
スクリーン画面の中を飛び交うコスモタイガーにブリッジクルーは驚愕と戦慄の声を上げていたが、それを見てとった艦長席のはやて

が声を上げる。
「大丈夫や!!あちらさんは魔法文化が存在しない世界なんや。平和を守る為に質量兵器を使うのは至って当然のことやで、それにあの戦闘機たちは私らを案内すると同時に護衛してくれているんや」
「は、はい……」
（まほろば　は前にちょこっと見ただけだったけど、今回はじっくりと見れそう）
ルキノは今回、まほろば　の姿をじっくりと観察できることから好奇心に目を輝かせていた。
初邂逅した際、まほろば　は春藍の護衛でチラッとヴォルフラムの前に現れただけであったが、今回はフェイトとヴィヴィオを引き渡すことから停止している時間もそれなりにある筈なので、その間じっくりと観察するつもりであった。
はやてのお達しでその艦影を記録できない事が悔やまれるが、だからこそ自分の目と脳に　まほろば　の姿を焼き付けるつもりだった。
「艦長、防衛軍の戦闘機隊の指揮官から、音声通信が入っています」
「わかった。スピーカーに繋いでや」
「了解」
通信オペレーターがコンソールを操作すると、ブリッジに若い男の声が流れる。
「こちら、地球防衛軍所属、戦艦　まほろば　戦闘機隊隊長、坂井健夫。そちらは時空管理局、次元航行艦　ヴォルフラムでよろしいですか？」
「こちら、時空管理局・次元航行本部所属、次元航行艦ヴォルフラム。艦長の八神はやてです。お出迎えに感謝致します」
「了解しました。八神艦長、これからそちらに誘導通信を送りますので、よろしくお願いします』
まほろば　も事前のミーティングでヴォルフラムの艦影についての情報を共有していたが念のために確認を行う。
確認が取れるとコスモタイガーはヴォルフラムを見つけると翼を振る。

そして、機体を反転すると　まほろば　の下へヴォルフラムを案内し始めた。
「周辺の状況はどうや？」
「事前に情報提供された地球防衛軍の艦船と戦闘機以外の反応はありません」
この宙域には既に複数の地球艦が展開してきているようだ。
やはり、暗黒星団帝国、彗星帝国の残党を警戒しているのだろうとはやてはそう思うが、防衛軍側としてはそれらの勢力以外にヴォルフラム以外の管理局の艦も警戒の対象に入っている事を彼女は知らなかった。
「誘導通信波を受信しました。シグナルに従い、半速航行します。まほろば　との合流まであと十分です!!」
「いよいよ・ですね……」
「うん・・・」
公式な地球防衛軍との直接接触は初めてだが、これは同時に管理外世界の公的機関との初会合でもある。
フェイト、ティアナ、ギンガの場合は遭難した救助者なので、公式とは言えない。
この会合は時空管理局の将来に少なからぬ影響を及ぼすだろうとはやてはそう考えていた。

まほろば　艦橋
「ヴォルフラムとの合流まで、あと五分」
メインスクリーンにはゆっくりと接近してくるヴォルフラムの船体が映し出されていた。
「ふむ、どうやら武装は格納式みたいだな」
永倉がヴォルフラムの艦影を見て呟く。
「防衛軍と違い、建艦思想が全く違うし、管理世界の住民に必要以上のプレッシャーを与えないよう配慮しているのかも知れないな・・・」
永倉の言葉に良馬が答える。
しかし、その配慮は今となっては全て空しく、彗星帝国、暗黒星団

帝国、ボラー連邦の艦船に簡単に捻られる程度の戦闘力しかないのでは、この世界では戦闘艦と名乗ることすら恥ずかしく、せいぜい大型の巡視艇レベルの戦闘力だろう。
「艦長、ヴォルフラムから通信が入っています」
ギンガがヴォルフラムから通信が入ってきたことを報告する。
「わかった。繋いでくれ」
「はい」
ギンガは通信回路を開くとメインスクリーンの画面が変わるのに合わせ、良馬は艦長席から立ち上がり、ギンガはバレない様に顔を伏せる。
メインスクリーンにははやて、リンディの姿が映し出される。
「遠路はるばるご苦労様です」
「いえ、義娘の為ですから・・・それで、そちらと合流しましたら、こちらから義理娘たちを迎えに伺いますが、よろしいでしょうか？」
「わかりました。お待ちしております」
敬礼を交わして通信を終える。
副長席では新見がディアーチェと回線を繋ぎ、何やら打ち合わせを始めた。
そして、はやてもリンディも良馬に視線が向いていたので、顔を俯かせているギンガには幸い気付かなかった。

ヴォルフラム　ブリッジ
「それじゃ、私たちは行くから、後をお願いしますね、ロウランさん」
「はい！お任せください。統括官と艦長もお気を付けください」
まほろば　の近くまで来たヴォルフラム。
留守を副長のグリフィスに任せて、はやてとリンディは小型シャトルで　まほろば　に向かう。
その小型シャトルの両側を　まほろば　所属のコスモタイガーが固めている。
「あの機体を見ると、世界こそ違え、あのフォルムは地球の戦闘機なんだなと思います・・・」

寄り添うように飛行するコスモタイガーを見ながらはやては呟いた。
海鳴にいた頃は、流石にミリオタではなかったが、戦闘機の姿をテレビや雑誌で見る機会はあったので、コスモタイガーの機影はまさに自分が知る戦闘機その物のフォルムをしていた。
「あの外見・・・いかにも戦う為に生まれたという雰囲気ですね」
操縦桿を握るルキノが改めて　まほろば　の姿を見て呟く。
「ええ。それでも彗星帝国との戦闘では戦力の大半を失い、まほろば　も　あのヤマトもボロボロになったらしいわよ」
「大半って、管理局では全滅扱いですよね?!」
リンディから聞かされた内容に、思わずルキノは聞き返した。
あのボラーへの武力制裁以上の被害を出した防衛軍。
防衛軍側も彗星帝国との戦いに関してはテレサの力が無ければ負けていただろう。
彗星帝国との戦いの勝利はまさに奇跡的な勝利だったのだ。
「地球防衛軍とすれば、降伏すれば地球人類は奴隷化され、いずれ絶滅させられると思ったのだろう。だから戦友の屍の山を築いてでも戦ったと思う。管理局の戦いとは根本からして違うんやろうな」
「・・・・」
そして防衛軍の存在に対してのはやての言葉にリンディもルキノも黙って　まほろば　の姿をジッと見つめる。
やがて、シャトルは　まほろば　へと接舷した。

まほろば　シャトル接舷部
「ご足労痛み入ります。ようこそ、まほろば　へ」
「こちらこそ。義娘たちが大変お世話になりまして、ありがとうございます」
シャトル　と　まほろば　との接舷部から、まほろば　の艦内へ入ったはやてとリンディを良馬が出迎える。
そして、良馬とリンディは敬礼と握手を交わす。
リンディとはやてとは交信の際、何度か話しているので、改めて自

己紹介することはなかったが、ルキノと良馬は今回が初対面だった。
「あっ、自分は時空管理局・次元航行本部所属、次元航行艦ヴォルフラム操舵士長のルキノ・リリエ一等海士でありまふっ!!」
ルキノは緊張の余り、噛んでしまった。
リンディ、そして若いながらも機動六課を指揮しＪＳ事件を解決に導いたはやても管理局の歴戦の勇士として名を馳せているが、初対面である良馬もガミラス、彗星帝国、そして暗黒星団帝国と数多の戦いと修羅場を潜り抜けてきたであろうことが解ったため、ルキノは気圧されてガチガチになってしまった。
それにこれだけの戦艦の艦長なのだから、ルキノが緊張するのも無理はない。
「まほろば艦長の月村良馬です。ようこそ、まほろばへリリエ一士」
「は、はい……」
「では、ハラオウン執務官らが待機している部屋へ案内します。どうぞこちらへ……」
良馬が三人をフェイトとヴィヴィオが待つ部屋へと案内する。
まほろば　の艦内を歩いている時、はやてとリンディとしての本音は　まほろば　の艦内を隅々まで案内して構造などの説明を受けたかったが、それでは怪しまれると思い、周囲をキョロキョロと見渡すことなく歩いている。
しかし、ルキノの方は　まほろば　を見る事を楽しみにしており、その　まほろば　に図らずも乗艦した事で少し緊張が解けたので、まほろば　の艦内をキョロキョロしながら見ている。
（やっぱり、管理局の艦船に比べると造りは武骨ね。でも、被害を受けた時はすぐパーツ交換ができそう）
天井や隔壁には各種のパイプが剥き出しになって走っており、如何にも実戦本位な造りが印象的だった。
まほろば　の会議室にてフェイトとヴィヴィオは、リンディたちを待っていた。
「フェイト!!」
「義母さん!!」

「ヴィヴィオ!!」
「はやてさん!!」
「フェイト、ヴィヴィオ、元気だった？よく頑張ったわね」
「ううん、ごめんね。心配かけちゃって」
「皆さんには、本当に何から何までお世話になりました。何とお礼を申し上げたらいいのか・・・・」
「いえ。あの場に我々が通りかかったのは正真正銘の偶然でしたし、船乗りとして当然の事をしたまでですから、どうぞ、お気になさらないで下さい」
その後、一同は会議室の椅子へ着席する。
机には日本茶と和菓子が並べられていた。
なお、リンディは日本茶を見た時、クリームと砂糖を頼んだ。
そこで、良馬は主計科の乗員にクリームと砂糖を持ってくるように頼んだ。
「艦長、クリームと砂糖を持ってきたが一体何に・・・・ん？」
「「えっ？」」
会議室にクリームと砂糖を持って来たのはディアーチェだった。
最初、会議室へ日本茶と和菓子を持って来たのは別の主計科の乗員であったが、厨房で用意したのはディアーチェだったので、クリームと砂糖を使用するお茶とお菓子ではなかったので、気になってクリームと砂糖を持って来たのだ。
そして、ディアーチェは会議室に居るはやてを見てピクッと反応し、はやて、リンディ、ルキノの管理局側は会議室へ入ってきたディアーチェの姿を見て目を見開く。
「「はやてさんそっくり!!」」
「ぎ、銀髪の私や・・・・」
「ああ、お主がはやてか・・・・」
自分にそっくりなはやてを見て、ディアーチェは納得するように呟く。
「お主の事は聞いておる。我にそっくりな者が管理局に居るとな・・・・」

ディアーチェはギンガ、フェイト、ティアナからはやてと間違われていたので、実際にはやてを見てもそこまで驚く事はなかった。
「えっと・・・」
「ああ、我は防衛軍、まほろば所属、主計科長兼厨房長のディアーチェ・K（コンドウ）・クローディアである」
はやてたちが戸惑っていると、ディアーチェは管理局の面々に自己紹介をする。
「あっ、私は時空管理局・次元航行本部所属、次元航行艦ヴォルフラム艦長の八神はやてです」
はやてが慌ててディアーチェに自己紹介をする。
「あの・月村艦長、もしかして彼女はこの世界の・・・」
「あっ、いえ、彼女は八神艦長とは全くの無関係で本当によく似ているだけの他人の空似です」
リンディはディアーチェがもう一つの地球におけるはやての子孫または関係者かと思い訊ねるが、ディアーチェと八神家とは何の関係もない。
「そ、そうですか・・・」
「でも、他人の空似でここまで似るなんて・・・」
ルキノもディアーチェとはやてを見比べて本当に赤の他人なのかと疑うレベルだ。
「私も初めてディアーチェと会った時は驚いたよ」
フェイトもディアーチェとの初邂逅の際の感想を述べる。
「それで、クリームと砂糖を何に使うのだ？」
「ああ、こちらのハラオウン統括官さんが使うみたいなんだ」
ディアーチェがクリームと砂糖を使用方法訊ねると、良馬はリンディがクリームと砂糖を使用する事を伝えるとディアーチェはリンディの傍にクリームと砂糖が入ってケースを置く。
日本茶と和菓子にクリームと砂糖をどう使うのか良馬とディアーチェが見ていると、リンディは日本茶の中にクリームと砂糖をこれでもかと言うぐらいにドバドバと入れる。
「・・・・」

リンディの行動に良馬もディアーチェも固まる。
（えっ？何この人？ミッドではこんな風にしてお茶を飲むの？）
（でも、ギンガたちはこんな風にしてお茶は飲まなかったし・・・・）
良馬はお茶の中にクリームと砂糖をドバドバ入れたリンディの行動に戸惑い、
（せっかくの茶をあんなゲテモノにしてからに・・・・）
ディアーチェは折角入れたお茶を台無しにされて心の中で憤慨した。

百三十二話　帰国

フェイトとヴィヴィオの帰国のためにプロキオン宙域の沖合にて、会合した　まほろば　と　ヴォルフラム。
まほろば　の会議室にて、フェイトとヴィヴィオは久しぶりにモニター越しではなく、リンディとはやてに会うことが出来た。
帰国手続き、そしてリンディが管理局の上層部から託された親書を手渡すため、一同が会議室にある椅子へ着席し、御堅い話の前にお茶と茶菓子が振る舞われた。
そこで、リンディは自身が愛飲している緑茶に砂糖とクリームをこれでもかと放り込む通称リンディ茶を作り出す奇行（？）を行う場面があった。
ヴィヴィオはお菓子を食べたのだが、何分用意されたお菓子が少なく何だか物足りない様子。
そこで、クリームと砂糖を持って来たディアーチェが、
「足りないならば、食堂に来ると良い。我が直々にまほろばパフェを用意してやろう」
「パフェ!!」
ディアーチェがヴィヴィオのために食堂でパフェを用意してくれると言われ、ヴィヴィオは喜ぶ。
「まだ、話し合いは長そうなのか？艦長」
「一応、込み入った話があるし、まだ子供のヴィヴィオちゃんに聞かせる話でもないから・・・ハラオウン統括官、ハラオウン執務官、よろしいでしょうか？」
良馬はリンディとフェイトに許可を求める。
「そうだね。ヴィヴィオ、食堂で待っていてくれるかな？」
フェイトもこの後の防衛軍と管理局との話についてあまり子供には聞かせられない事か退屈な話になるかもしれない。
なので、フェイトはディアーチェの提案を受ける事にした。
「ルキノさんも一緒に行ってもらってもいいかしら？月村艦長」

フェイトが許可を出すと、リンディは念のためにルキノも同行してもらうように頼む。
お眼付役と言う事だろう。
「分かりました。リリエ一士、食堂の場所はディアーチェが案内してくれるから、ヴィヴィオちゃんの事を頼んでもよろしいかな？」
リンディの意図を読み取った良馬はルキノ本人が了承すれば彼女の同行を許可した。
「は、はい」
「うむ、では行くか」
「はーい!!」
ディアーチェはヴィヴィオとルキノを連れて食堂へと向かった。
ディアーチェたちが退室した後、リンディは自身が作り、湯？に残っていたリンディ茶を一口飲むと、携えてきた親書――地球連邦大統領と地球防衛軍司令長官：つまり藤堂宛ての二通――を差し出す。
これを受けとったのは　まほろば　の艦長である良馬であり、彼は親書を受け取ると、
「リンディ提督。私は、防衛軍司令長官宛の文書を開封し、内容を確認する権限を委譲されております。故に、連邦大統領宛の親書はこのままお預かりしますが、長官宛親書はこの場で開封します。よろしいですね？」
と、藤堂宛ての親書の中身を確認する事を管理局側に伝える。
「……はい、結構です」
藤堂は長年の経験からこうした事態を予想していたようだ。
リンディとしては、防衛軍側はこの場で親書の中身を確認する事に関して許可が出ているし、特に断る理由が無いのでこの場で防衛軍側の親書の中身を開けることについて同意する。
（親書の内容によっては、この場で突っ返されるかも知れないわね……）
（一体何て書いてあるんやろう・・・変な事を書いていなければええんやけど・・・・）
リンディもはやても親書の中身がどんな内容なのか知らされてい

ないために内容もさることながら、良馬の反応にドキドキした。
実際にリンディもはやても親書の内容が気になっていた。
良馬は藤堂宛の親書の封を切り、親書を取り出して目を通し始めた。
「ハラオウン統括官、八神艦長、これだけは最低限確認しなければなりませんが・・・我々は貴女がたが所属する時空管理局の艦・ノアとテリオスの両艦にて、救助活動すると同時に両艦を曳航し、各種資料も回収して精査しました」
「は、はい・・・」
「その結果、時空管理局が管轄する世界――我々は惑星と解釈しますが、管理世界においては、〝魔法〟が科学として成立し、広範囲にわたり普及していると判断しましたが、この解釈に誤りはあるでしょうか？」
「「っ!?」」
良馬の言葉にリンディとはやては一瞬息が詰まった。
傍らのフェイトに振り返ると、無言で頷いた。
「これは明確に申し上げますが、我々が魔法の存在を知り得たのはノアを調査した結果なので、ハラオウン執務官たちからではありません」
良馬はフェイト、ティアナから防衛軍側に魔法の存在がバレた訳ではない事を伝える。
管理局規則で、管理外世界・魔法が存在しない非魔法文化圏住民に魔法の存在を露顕させた局員はやむを得ない場合を除いて厳しい懲戒処分の対象とされているが、地球側はフェイト達に機密漏洩の責任はないと言っているのだ。
なのはの場合は、ロストロギアであるジュエルシードが海鳴の町の広範囲にばら撒かれたと言う事でこの規則には該当しなかった。
もっとも良馬に関しては防衛軍に入る前・リニスと契約した時に魔法の存在を知っていたし、自身も夜の一族、法術と非科学的な力と付き合ってきた。
フェイトもリニスがこの地球に存在している経緯から察していた

が、話がこじれる事を考慮して黙っていた。
「管理局の規則では、魔法を知った管理外世界の住民は、管理世界への移住又は現地協力者として、管理局に協力する義務を負う――とありますし、第９７管理外世界・・・我々から見たもう一つの地球において、魔導師の家族や友人一家等がそれに該当しているようですが、我々もまた管理局法の適用対象になるのでしょうか？」
魔法を知り得た管理外世界の住民も管理世界への移住・・・拒否すれば身柄拘束または、現地協力者と指定され、他の住民に魔法のことを知らせてはならない等の条件をつけられる。
実際になのはとはやての生まれ故郷であるもう一つの地球では、その世界の月村家とバニングス家がなのはたちの協力者となっている。
六課時代に地球でロストロギア反応があった際、なのはたちは地球へと赴いた。
その時、食住を提供したのはこの両家であった。
「ノアとテリオス同様、魔法の件は軍上層部に報告済で、既に連邦政府にも資料は報告されておりますが、我々は連邦市民の生命財産を守るために活動しており、命令なくしてそれ以外のいかなる組織にも協力はできません・・・それはご理解いただけますね？」
良馬の言葉は、彼本人を含め、地球防衛軍や連邦政府内で魔法の存在を直接・間接問わず知った者は、時空管理局法に従う気は毛頭ないということだ。
管理局側がそれに対して実力行使を行ってくるのであるならば、防衛軍側も連邦市民の生命・財産を守るために管理局を迎え撃つ覚悟があると言う事だ。
「は、はい。ノアとテリオスの件については共に不可抗力ですし、私たちも組織の一員ですから、それは十分認識しています」
良馬の問いにリンディが応じる。
防衛軍側の言い分は至極まともであるし、自分たちが彼らの立場なら同じ事を言うだろう。
第一関係した者たちが膨大な上に現在の管理局と防衛軍では戦闘力が話にならないのだ。

仮に強硬派が管理世界編入を目論み、実力行使すれば一方的に叩きのめされる。
それどころか、暗黒星団帝国と防衛軍の戦いの経緯から今回の任務前にリンディが懸念したように次元航行能力を有した防衛軍の宇宙艦艇がミッドへ襲来することだって考えられる。
(軍や太陽系へのちょっかいだけじゃなく、もう一つの地球の住人へちょっかいを出したら承知しないということやな・・・)
(でも、国防に携わる者なら当然のことよ、はやてさん)
(そうですね。今まで管理局が傲慢過ぎたということですね……親書の内容も気になりますけど、上層部が納得するんでしょうか?三提督はまだしも、その下の提督クラスには未だに管理世界拡大派が根強いですよ)
(そうね・・・ミノフスキー博士の研究もあるし、選択肢を間違えれば管理局は破滅するかもしれないわね)
(上層部の意向はどうあれ、地球連邦と防衛軍と敵対することだけは避けないといけませんね。地球連邦が彗星帝国や暗黒星団帝国と敵対したからと言って、自動的に管理局に味方してくれるわけやありませんし……)
現在、本局で次期新型宇宙エンジンを開発しているミノフスキーがその新型エンジンの開発に成功し、その性能が防衛軍、彗星帝国、暗黒星団帝国と同等またはそれ以上の性能を有していたら管理世界拡大派を勢いづかせてしまう。
しかし、これまで管理局以上の性能を有した宇宙艦船はないと思われてきた中で、続々と管理局の性能以上の性能を有した星間国家が現れてきたことから、仮にミノフスキーが現在、防衛軍が有している宇宙艦船以上の艦を作り上げたとしてもそれが宇宙最強の艦とは言えない。
管理局がここまでの事態に陥ったのは管理局自体の傲慢さが招いた結果であり、ミノフスキーの結果次第ではそれを繰り返す事になる。
だからこそ、これからの管理局は謙虚にならなければならない。

しかし、大きな力を持てばそれを行使し、弱者を従えたいと言うのは人の性でもある。
リンディは管理局が謙虚何て殊勝な態度を取れるとは思えず、今後の手綱の引き締めの必要性を感じた。
はやて自身も例え異なる歴史を辿ったとしても自分の生まれ故郷と同じ名前の星とは敵対したくはなかった。
それに、フェイトたちがこの世界の地球でどんな事を見聞きしてきたかも聞かなければならない。
フェイトたちは軟禁されたようには思えず、比較的自由に行動できたようだ。
もう一つの歴史が異なる未来の地球に住まう人たちがどんな思いで生きているか、是非とも知っておきたい。
やがて、親書に一通り目を通し終えた良馬が顔を上げて、親書を封筒に戻した。
「・・・御二人は、親書の内容をご存じですか？」
「いえ。私どもは親書の作成には一切関わっておりません……故にその親書にどのような事が書かれているのかさえ、私どもは知りません」
「わかりました。この親書は本部に持ち帰り、司令長官と連邦大統領に提出して回答します。ただ、この内容だけで、『回答期限が地球時間で一週間』と言うのは余りに性急かつ一方的である・・とだけ申し上げます」
（ちゃんとまとまるのかしら？この交渉……）
（一方的に回答期限が書いてあったんか・・・）
親書の内容を知らなかったとは言え、他の世界・・特に魔法文明が存在しない世界に対して高姿勢という、管理局中央の悪癖がまた出たようだ。
リンディたちは前途を案じずにはいられなくなった。
「親書の回答についてはこれまで通り、そちらへ交信して結果をお伝えします」
「はい」

「・・・結果次第ですが、例の通信ポッドに関してはこちらで廃棄いたしますがよろしいですか？」
「え、ええ・お任せします」
ヘリオポーズに設置されている通信ポッドをいつまでも放置していると管理局が再び小細工をしかけてきそうだ。
もし、連邦政府が管理局とのフェードアウトを望むのであるならば、早々にあの通信ポッドは処分しなければならない。
実際に管理局はあの通信ポッドに小細工を仕掛けた経緯があるので信用は残念ながら出来ない。
この話を聞いたら一部の上層部連中は憤慨しそうであるが、リンディもはやても回答結果によってはあの通信ポッドを処分すると言う良馬の言葉は最もだと思い通信ポッドの処分に対して異議は申さず、処分も防衛軍側に任せた。

ヴォルフラム　ブリッジ
はやて、リンディ、そしてルキノがフェイトとヴィヴィオを迎えにまほろば　に向かってから暫しの時間が過ぎた頃・・・
「・・・・・・周辺空間の異状はないか？」
「はい。地球軍の艦船と艦載機以外の反応は感じられません」
留守を任されたグリフィスは周囲に何か異状がオペレーターに訊ねる。
異状があれば地球側から緊急通信が入ることになっているが、自分の〝目〟でも確かめるのは至って当然だろう。
しかし、周囲には異状はなく平穏な時間が過ぎている。
（改めて見ても、管理局の艦船とはまるで違うな。宇宙空間での戦闘に特化するとああいう造りになるのか・・・・・・）
グリフィスはヴォルフラムのブリッジから隣に停泊している　まほろば　の姿を見て心の中で呟く。
だが、グリフィスの思いとは裏腹に防衛軍の宇宙艦艇は、宇宙空間はもとより大気圏内の上空、海上、海中でも戦闘が可能である事を知

る由もなかった。
（確か地球の海上艦艇には戦艦の他に様々な艦種があった・・・星の海にもそれらが適応されているとしたら防衛軍は戦艦以外の艦種が存在しているだろうし、戦艦に関しても　まほろば　以外に以前出会った春藍の様に様々な型の戦艦も存在している筈だ・・・）
（それにこの任務前に艦長から説明があったように防衛軍は彗星帝国の軍艦も使用している・・・）
　グリフィスは防衛軍全ての戦力を見た訳ではないが、地球における軍艦の艦種、そして彗星帝国の宇宙艦艇を鹵獲・運用していることから彼自身も管理局と防衛軍との差を感じていた。
「副長」
「ん？なんだ？」
「地球連邦は・・・防衛軍は、管理局とどう関わるつもりなんでしょうか？」
　オペレーターの一人がグリフィスに訊ねる。
　その疑問は最もなモノだ。
　まほろば　を含め防衛軍は管理局の艦をあっさり撃破した彗星帝国の艦船を粉砕してしまった。
　恐らく管理局では最新鋭だったにもかかわらずいとも簡単に撃破したボラー連邦の宇宙艦艇とも十分に戦える能力を有している事が予測できる。
「それは、ハラオウン統括官が携えてこられた親書の内容と、それに地球側がどう回答するか・それ次第だな」
「・・・」
　親書の内容を知らないために不安はぬぐえない。
　それはリンディもはやてもグリフィスも同じ気持ちだ。
「もし、管理局が地球連邦に対し、管理世界編入や質量兵器全廃を要求したとして、地球連邦がうんと言うと思うか？」
「いいえ・・・」
　グリフィスの問いにオペレーターは力なく首を横に振った。
「もう一つの世界の地球は何度も強力な星間国家に侵略され、それを

撃退してきている。もし、親書の内容が高圧的かつ降伏勧告の様な内容なら・・・」
「防衛軍との戦争は避けられない・・・と？」
「考えたくはないけど、上層部には未だにあの地球の事を諦めきれない人が何人も居るみたいだからね」
「流石にそれだけは避けたいですね」
「ああ、全くだ」
グリフィスもオペレーターも親書の内容が穏やかなものであることを祈った。

畝傍　艦橋
今回の任務で周辺哨戒のために参加したパトロール艦、畝傍は指定された宙域の哨戒を行っていた。
その畝傍の艦橋には艦長である美咲七波と副長のターニャ・L・コジマの姿があった。
「ねぇ、ターニャ」
「はい？」
「時空管理局は、私たちに対しどんな姿勢をとるつもりだと思う？」
「何とも言えませんね。彼らは魔法以外の力を質量兵器として廃絶したがっているみたいですから・・・それでも魔法文化がない惑星には干渉しない方針らしいけど、それは相手が管理局の世界より文明が遅れているからでしょう」
「そうね・・・でも、私たちは偶然とは言え、管理局と魔法の事を知ってしまった・・・いくら魔法文化がないとはいえ、このまま放置してくれるかしら…？」
美咲は溜息まじりに答える。
万が一にも戦闘になった場合、艦船の性能から当面の局地戦で負ける要素はないが、何分にも組織の規模が桁違い・・と言うか未知数だ。
消耗戦に持ち込まれたらかなり面倒なことになる。
「今回帰国される局員の方がちゃんと地球の事を話し、管理局が耳を傾けてくれるのを願うしかありませんね」

「そうね・・・管理局の人も同じ人類だしね・・・」
「そうですね」
ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国の人間と異なり、管理局・ミッドの人間は魔法が使えると言うだけで、肌の色、言語は地球に通ずる。
それに宇宙艦艇を運用しているのだから、物事の理解力と分別ぐらいはあるはずだ。
美咲の返答にターニャは頷いた。
そんな中、
「ん?・・・・」
コスモレーダーを見ていたレーダー手が反応を見逃さず、思わず声を漏らす。
「どうしたの?」
「艦長、レーダーに反応があります」
「パネルに回して」
「了解」
畝傍の艦橋にあるメインパネルにはレーダーの反応があった宙域の光景が映し出される。
「あっ、あれはっ!?」
美咲はメインパネルに映るモノを見て思わず声をあげた。

地球　月村邸
「あの子たちは家族の方や仲間の人たちに再会した頃かしらね」
月村邸のロビーにて忍は紅茶が入ったカップを片手にまほろばと管理局側の迎えが合流した頃合いかとノエルに訊ねる。
「はい。日数的には恐らく・・・・」
「無事に故郷へ帰れればいいけど、その後・時空管理局とやらがどんなリアクションを取るかよね」
「忍様は時空管理局が地球へ侵略に来るかもしれないと思っているのですか?」
「これでも色んな人を見てきたからね・・・管理局がこの地球と平等な同盟ないし交流をしましょうなら、連邦政府も検討するかもしれない

けど、ガミラスや彗星帝国みたいに自分たちの配下に・奴隷になれ・・・なんてことも言ってくるかもしれないでしょう？」
「・・・」
これまで地球が関係した星間国家に関して、イスカンダル以外は地球へ刃を向けてきた相手ばかり・・・
連邦政府も防衛軍も未知なる組織である時空管理局に警戒するは当然の事だ。
「そうですね・・・」
「良馬やギンガちゃんがあの子たちと殺し合いをするなんて事は考えたくないし、一番いいのが互いにフェードアウトなんだけどね・・・」
遭難者の救助に関してはギンガやフェイト、ティアナたちの様に行うが互いに積極的に関わることはせずに不干渉・・・
それが地球にもミッドにも一番いい関係なのではないかと忍はそう思いつつカップに口をつけた。

まほろば　食堂
「ほれ、特製　まほろばパフェだ」
会議室からディアーチェと共にまほろばの食堂へとやってきたヴィヴィオとルキノ。
そこで、ディアーチェがヴィヴィオとルキノにまほろばで提供されている。
「おぉ～」
透き通った杯型の器には色とりどりのアイス、クリーム、果物、焼き菓子が盛られている。
ヴィヴィオは眼前のパフェを見て目を輝かせている。
「すみません。私まで頂いてしまって・・・」
「構わぬ。一つ作るのも二つ作るのも大して変わらぬからな」
ルキノは自分もご相伴し恐縮するが、ディアーチェは気にせずに彼女に対してパフェを提供した。
「いただきます!!」
ルキノの分のパフェも届いたのでヴィヴィオはロングスプーンを

手に取りパフェを食べ始める。
母の実家である翠屋のスイーツも美味しいがディアーチェが作ったこのパフェも美味しく、一杯目をあっという間に完食してしまうヴィヴィオ。
ルキノはヴィヴィオの食べっぷりに唖然とする。
そして、ヴィヴィオが二杯目を頼もうとした時、
「ふぅ～お腹すいたぁ～」
食堂に新たな来訪者が来た。
「王様～今日の日替わりはなに～」
「ん？なんだ？青ひよこ。交代なのか？」
「そっ、だから今の内にご飯食べておこうと思ってね」
新たに食堂へやって来た来訪者はルキノにとって聞き慣れた声であった。
「あっ、フェリシアお姉ちゃん」
「おっ、ヴィヴィオじゃん。やっほー」
食堂に来たのは交代で勤務を終えたフェリシアだった。
ヴィヴィオは地球での滞在中にフェリシアとは回転寿司店で邂逅していたので、驚く様子はなかったが、
（あ、青髪のフェイトさんだ!!）
ディアーチェを始めてみた時と同じくルキノはフェイトそっくりなフェリシアの容姿を見て思わず心の中で絶叫した。

親書の意見交換を終え、フェイトとヴィヴィオの正式な帰国手続きの書類にリンディとはやては署名を行うと、次にリンディとはやては以前、太陽系内で彗星帝国の攻撃を受け遭難したノア及びフェイトとティアナが乗艦していたテリオスの乗員たちの遺体安置所へ案内された。
遺体安置所には沢山の棺が安置されていた。
「荼毘に付そうか迷ったのですが、遺骨よりもやはりご遺体で故郷へ還そうと思いまして、納棺師の方々とハラオウ執務官らの協力で管理局の制服姿で納めてあります。あと身元確認の為にデバイスとタグ

もご遺体と一緒に納めてあります」
煤や血で汚れていたご遺体は納棺師が綺麗にし、フェイトとティアナが管理局の制服のデザインを伝え、被服工廠にて特注しそれを着せて棺にデバイスとタグを入れて納めたのだ。
「それは・お手数をおかけしました」
「わざわざ、ありがとうございます」
リンディたちは礼を言いながら頭を下げた。
「では、棺の移送作業に入ります」
「はい。お願いします」
はやてはヴォルフラムに居るグリフィスにこれより殉職者たちが納められた棺の移送作業をする旨を伝える。
棺の移送にはリンディたちが乗ってきたシャトル以外に　まほろば　に搭載されている救命艇も使用して行われた。
まほろば　からヴォルフラムへと移される棺を見ながら、
(ミッドに着く前にご遺体の身元確認をして殉職者たちのリストを作らなあかんな)
棺の中にはご遺体の他にデバイスや身分証明のタグも納められており、それを元にミッドへ着く前にノアとテリオスの殉職者たちのリストを作成し、ご遺族たちにご遺体を還さなければならない。
はやては此処からミッドまでの航海の最中で殉職者たちのリストを作成しなければならないと思うと大変だと思うもこれもミッドで還らぬ家族を待つご遺族たちのことを思えば当然の事だと割り切る。
やがて、全ての棺が　まほろば　からヴォルフラムへと移された。
「さて、そろそろヴィヴィオを迎えに行こうか?」
帰国手続き、棺の移送も終わり後はヴォルフラムへ戻るだけとなった。
そこで、ヴィヴィオとルキノを迎えに食堂へと向かう。
すると、食堂からは明るい声と笑い声が聞こえてきた。
(ん?・何か、聞き覚えのある様な声が・・・)
はやては食堂から聞こえてくる声の中で、ヴィヴィオとルキノ以外に聞き覚えのある声がする気がした。

それはディアーチェとは違い、もっと身近な人物の声でもあった。
（あっ、この声・フェリシアも食堂に来ていたんだ・・・・）
一方、フェイトはこの声の主が誰なのかすぐに分かった。
そして、食堂に入るとそこには・・・・
「それで、これが赤道祭でやったイベントの映像」
ヴィヴィオとルキノに太陽系赤道祭の映像を見せるフェリシアの姿があった。
『ら、雷神の如くササッと登場！立ち塞がる悪には容赦なく死の鉄槌を下す!!わ、私こそが正義の象徴、雷光の死神!!フェイト・テスタロッサ・ライトニング――――っっっっっ!!!!!』
フェリシアの持つ端末には太陽系赤道祭においてフェリシアと共に舞台でふ○りは○リ○ュアの○ュアブラック風の衣装を身に纏い、顔を赤くし、ポージングをしながらもうヤケクソ気味に叫ぶフェイトの姿が映し出されていた。
「フェイトママかわいい～!!」
「あ、あのフェイトさんが・・・・ぷっ・・フフフフ・・・・」
ヴィヴィオはふ○りは○リ○ュアの○ュアブラック風の衣装を着たフェイトの姿を見て新鮮さを感じ、ルキノはあのフェイトがまさかの衣装を身に纏い、顔を赤くしながらアニメキャラの様なセリフを吐く姿に思わず吹き出す。
「あああああー!!」
フェイトはヴィヴィオとルキノに自分の黒歴史とも言える映像を見られてしまい思わず声をあげる。
一方、声をあげているフェイトとは反対にリンディとはやてはフェリシアの姿を見て目を見開く。
「今度は青髪のフェイトちゃんや・・・・」
ルキノと同じセリフを吐くはやて。
（やっぱり、地球と言う事でそっくりな人が居るのね・・・・はやてさんにフェイトのそっくりな人が居るなら、なのはさんのそっくりな人もいるのかしら？）
リンディは、はやて、フェイトにそっくりな人が居るならば、なの

はにそっくりな人も居るのではないかと思った。
　実際に彼女の予想は当たっており、なのはに似ている人物はディアーチェとフェリシアよりも年下だが、まほろば　の母港である地球にちゃんと存在しているし、フェイト、はやて、なのはの三人は彼女の存在を知っている。
「フェリシア、ちょっとヴィヴィオたちに何てモノを見せるのよ!!」
「えっ？でも、あの時の舞台は面白かったでしょう？」
「私にとっては恥ずかしさで顔から火が出そうだったよ」
「フェイトちゃんがあそこまで恥ずかしそうに声をあげるなんて一体どんな映像なんやろう？」
　はやてはフェリシアの端末に映っている映像が気になった。
「この時の衣装いる？餞別代りに持って行ってもいいよ」
「い、いらないよ!!」
「えぇ～フェイトママ、意外と似合っていたのに・・・・」
「じゃあ、この映像は？」
「それもいらない!!」
　フェリシアからの餞別を悉くいらないと断るフェイト。
　しかし、ヴィヴィオとはやてとしては衣装と映像は貰って欲しかった。
「って、ヴィヴィオ、パフェをいくつ食べたの？」
　ヴィヴィオの近くにはパフェが入っていた器が幾つも置いてあった。
「あっ、フェイトさん・私の分もあるんです・その・・・・とても美味しくて・・・・」
　ルキノも一杯だけではなく、何杯か食べたみたいだ。
（ルキノ・・・・羨ましい・・・・）
（あの器の量・・・そんなに美味しかったのかしら？）
　ヴィヴィオだけでなく、ルキノも何杯も食べたと言う事ではやてとリンディはどんな味だったのか気になった。
　はやてはよく家事をして料理の腕もなかなかのモノであり、自分そっくりの人物が作ったパフェに興味があったし、甘党のリンディか

らしても食べてみたかった。
しかし、これ以上時間を消費するわけにはいかない。
ディアーチェが作ったパフェを惜しみつつリンディたちはシャトルでヴォルフラムへと向かう。

ヴォルフラム　ブリッジ
「副長、ハラオウン統括官、八神艦長らの収容終わりました」
「よし、出航準備」
「了解」
フェイトとヴィヴィオ、そして殉職者たちの棺を乗せ、任務の半分を終えたヴォルフラム。
あとは本局へ向かい今回の任務は終了する。
「グリフィス君。ごくろうさん、周囲に異状は？」
「ありません。出航準備も既に整っています」
ブリッジにはやてとリンディが戻ってきたが、フェイトとヴィヴィオはブリッジには上がらず、展望室で　まほろば　を見送る。
「艦長、まほろば　より電文です」
「内容は？」
「はい、『貴艦ノ航海ノ安全ヲ祈ル』：以上です」
「じゃあ、こちらからも返信してや」
「はい」
出航準備が整いヴォルフラムは本局を目指して出航した。
プロキオン宙域を抜け、一度長距離の次元跳躍をした後に通常空間を航行している。
「あれ？フェイトちゃんとヴィヴィオは？」
ブリッジを降りたはやてはフェイトと二人で色々と話したいことがあったので、フェイトにあてがわれた部屋にフェイトもヴィヴィオが居なかったので、食堂や浴場に行くも二人の姿は見つからない。
艦内を回るはやて。
そのフェイトはヴォルフラムが出航してからずっと展望室に居た。
「あっ、フェイトちゃん。やっと見つけたで」

「あっ、はやて・・・・」
「ん？フェイトちゃんもヴィヴィオもあれからずっと此処に居たんか？」
「うん。星の海を見たくて・・・・」
「・・・・」
　フェイトもヴィヴィオもジッと窓の外を見ている。
　はやてもそれにつられ、窓の外を見る。
「ねぇ、はやて・・・・」
「ん？」
「ヴィヴィオのデバイスについて頼みたいことがあるんだけど・・・・」
　フェイトは、はやてにヴィヴィオのデバイスについて話し始める。
「ん？ヴィヴィオのデバイス？」
「うん。この後、本局に着いたら十中八九、私は事情聴取を受けると思うの」
「せやろうな・・・・」
「それにデバイスや荷物検査もされると思うけど、ヴィヴィオのデバイスはあの地球で作られたデバイスなのは、はやても知っているでしょう？」
「う、うん・・・・」
「そうなれば、本局はヴィヴィオに返却せずにそのまま技術調査の名目でヴィヴィオから取り上げるかもしれない・・・・ヴィヴィオ、デバイスを貰って物凄く喜んでいたの・・・・」
「・・・・分かった。私もリインを強引に奪われるのは許せへぇんから、私の方からも何とかするわ・・・・」
「ありがとう、はやて」
　はやてに礼を言うとフェイトは再び窓の外を見る。
　そして、
「～♪～～♪～～～♪」
　徐に向こうの地球で覚えた『銀河航路』を歌い始める。
　すると、ヴィヴィオも釣られてフェイトと一緒に歌いだす。
「ん？聞き慣れない歌やけど、その歌は向こうの地球の歌なんか？」

「そう・・・防衛軍の軍人さんもよく歌っていたって・・・・」
フェイトは守から冥王星海戦の際、雪風が旗艦であるえいゆうを逃すためガミラス艦隊へ突っ込む際、乗員全員でこの銀河航路を歌いながら突っ込んだ話を聞いていた。
その時、雪風の乗員たちはこれから死ぬとわかっていながらも泣き喚く事もなく、普段どおりや笑顔だったらしい。
管理局にそこまでの気概がある者が一体何人いるだろうか？
防衛軍の人たちのエピソードを聞くとそう考えるのも無理はなかった。
展望室で星の海を堪能したフェイトたちはヴォルフラムの食堂に行くと早めの夕食を摂る。
食事をしているフェイトに、
「あ、あの・・フェイトさん・・・・」
「ん？・あっ、ルキノ。どうしたの？」
勤務明けのルキノが声をかけてきた。
しかし、どうもルキノの歯切れが悪い。
「あ、あのフェイトさん・・・・その・・・・む、向こうの地球の・・・・その・・・・」
「あっ・・・・」
ルキノの言った『向こうの地球』と言う単語でフェイトはルキノが何を言いたいのか分かった。
「大丈夫だよ。ルキノ」
「えっ？」
「ティアナがちゃんとルキノのために向こうの地球のプラモデルをいくつか買って私に持たせてくれたから、後で私の部屋に取りに来て」
「あ、ありがとうございます!!」
ミッドを含め、どの管理世界でも手に入れることが出来ないプラモデルが確実に手に入る事実にルキノはパァ～っと花が咲いたような笑みを浮かべてフェイトにお礼を言う。
その後、フェイトの部屋を訪れたルキノは向こうの地球のバ○ダイ社製の宇宙艦艇のプラモデルを受け取り狂喜乱舞している姿が他の

ヴォルフラムの乗員に目撃された。

ヴォルフラムがプロキオン宙域を出発してから数日後・・・
ヴォルフラムにとっては約一週間の日数がかかるも無事に母港である本局へと辿り着いた。
本局の第四バースには管理局とマスコミ関係者でごった返していた。
「うわぁ～すごいマスコミの数・・・」
「そりゃあ、フェイトちゃんは今や注目の的やからな」
ヴォルフラムからもバースの様子が分かり、そこで待機しているマスコミの人数にドン引きするフェイト。
「私が先に降りてマスコミを引き付けるからはやてはヴィヴィオの事よろしくね」
「分かったで、フェイトちゃん」
「フェイトママ・・・」
「大丈夫だよ、ヴィヴィオ・・・ヴィヴィオは、はやてと一緒になのはママの所で待っていて。直ぐに戻るから」
「う、うん・・・」
そして、フェイトがヴォルフラムから降りるとマスコミのカメラのフラッシュが沢山たかれ、記者たちがフェイトにインタビューをしようと押し掛ける。
「ハラオウンさん!!向こうの地球での生活はどうでした!?」
「向こうの地球がどこかの星間国家に占領されたと聞きましたが!?」
「ハラオウンさん!!何か一言お願いします!!」
「ランスター執務補佐官の姿が見えませんが、どうなさったのですか!?」
記者たちがフェイトに押し掛ける中、その記者たちを押しのけてフェイトに近づく者たちが居た。
その者たちは黒い管理局の制服を身に纏いサングラスをかけていた。
「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官ですね？」

「はい、そうです」
「我々は査察部の者です。帰国早々お手数ですが、事情をお訊ねしたいので、ご同行をお願いします」
フェイトが帰国する前から予測していた展開通りとなった。
「・・・わかりました」
「あと、お荷物とデバイスもこちらで一時お預かりいたします」
「どうぞ」
フェイトは査察部の局員にバルディッシュを手渡す。
「ご理解が早くて助かります。では、こちらへ・・・」
そしてフェイトは査察部の局員らと共に事情聴取が行われる査察部へと出頭した。

百三十三話　鹵獲・返答

ここで時間を少し巻き戻す。
フェイトとヴィヴィオの帰国手続きが終わり、太陽系内で収容した管理局艦の殉職者たちの棺も管理局側に引き渡し、管理局側は全ての帰国準備が整った。
そんな中、
「通信長」
「はい」
「ヴォルフラムへ通信文を送ってくれ」
良馬はギンガにヴォルフラムへ通信文を送るように指示を出した。
「何と言う文章を送るのですか？」
「『貴艦ノ航海ノ安全ヲ祈ル』・・と、送ってくれ」
「了解」
ギンガは良馬に頼まれた通信文の文章をヴォルフラムへと送る。
すると、しばらくしてヴォルフラムから返信が来た。
「艦長、ヴォルフラムから返信です」
「内容は？」
「『此方モ貴艦ラ之航海ノ安全ヲ祈ル』・・・・です」
「そうか・・・・」
長かったようなフェイトたちのもう一つの地球生活はこれで完全に終了した。
ヴォルフラムは出航準備が整い、次元跳躍してミッドを目指して行った。
「行っちゃいましたね・・・・」
「ああ・・・・」
次元跳躍したヴォルフラムがついさっきまで居た宙域を見ながら永倉が呟いた。
「できればあの娘たちと敵対する未来が来ない事を祈るよ・・・・」
連邦政府、防衛軍共に管理局を不信視している中で、管理局が彗星

帝国や暗黒星団帝国の様に太陽系内へ攻め込んできたら防衛軍は管理局を侵略者とみなして、全力でこれを迎撃する。
そして、管理局員である以上、フェイトや彼女たちを迎えに来たあの管理局艦の艦長であるはやてと戦う可能性もある。
今回の様に知己を得た者同士で殺し合いをする未来なんて考えただけでゾっとする。
「そう言えば、管理局からの親書には何て書いてあったんですか？」
永倉は艦長であり、親書を受け取った良馬ならば、親書の内容を知っているのではないかと思い訊ねる。
「一応、知ってはいるが、内容を口外することは許可されていなくてね・・・すまない」
「い、いえ・・ちょっと気になっただけですから・・・」
永倉としてはまさか本当に良馬が管理局からの親書の内容を知っているとは思わなかった。

フェイトたちを無事に管理局の艦へと還したことで任務も終わり、周辺哨戒を行っている畝傍らを呼び戻してあとは地球へ帰還するだけとなったので、ギンガに周辺哨戒を行っている艦に集結指示を出してもらおうとした時、
「艦長。パトロール艦、畝傍より通信です」
周辺哨戒を行っていたパトロール艦、畝傍から通信が入った。
「何かあったんでしょうね」
「ああ・・繋いでくれ」
「了解」
ギンガが畝傍との通信回路を開くとメインパネルに畝傍艦長の美咲が映し出される。
「どうしました？美咲艦長」
「月村艦長、哨戒中にこのようなモノを発見しました」
美咲は畝傍が哨戒中に発見した『あるモノ』を良馬たちに見せた。
「っ!?こ、これはっ!?」
「彗星帝国の潜宙艦!?」

まほろば　のメインパネルには美咲の他にもう一つ・・・宇宙色と同化しているかの様な小型の潜水艦みたいな艦影の艦が映し出されている。
ただ、戦闘を行った形跡があり、船体のあちこちには、破孔が確認出来た。
「はい。以前、ヤマトから送られてきた彗星帝国の潜宙艦のデータと一致しましたので・・・」
「美咲艦長。その潜宙艦はそこに潜んでいたんですか？」
破孔があるので、映し出されている潜宙艦は畝傍と戦闘して撃破されたのかと思い良馬は美咲に潜宙艦と戦闘があったのかを訊ねる。
「いえ、私たちが発見した時には既にこの潜宙艦は漂流していました」
「そう言えば、ヤマトがテレザートに向けて航海した時、このプロキオン宙域で彗星帝国の潜宙艦隊と戦ったと報告があったな・・・」
ヤマトはテレザートまでの航海途中、このプロキオン宙域とテレザートから地球へ戻る途中、冥王星宙域でも彗星帝国の潜宙艦隊と戦った経緯がある。
これらの戦闘データが防衛軍に潜宙艦と言う艦種の存在を伝える結果となったのだ。
「と、するとその潜宙艦は以前、ヤマトと戦った潜宙艦の可能性が高い・・・と言う訳ですね？」
「恐らく」
「よく、プロキオンとソーサナーに吸い寄せられなかったな・・・」
「どうしますか？」
「・・・念のため調べてみよう。美咲艦長、畝傍の現在位置の座標をまほろばに送ってくれ」
「了解」
美咲は畝傍の現在位置を　まほろば　に転送する。
「通信長」
「はい」
「他の艦に事情を説明し、集結地点を畝傍の現在位置へと変更する旨を送ってくれ」

「了解」
ギンガは白浜、龍驤、ホワイトアローⅠ　Ⅱ　Ⅲに畝傍の現在位置と集結地点の変更の通信文を送った。
「コスモタイガー隊の収容は？」
「既に完了しています」
「よし、航海長。針路変更」
「了解」
まほろば　は畝傍が居る宙域へと向かった。

そして、畝傍が居る宙域へと到着する　まほろば　だが、まだ他の艦は到着していなかった。
「ふむ、確かに彗星帝国の潜宙艦だな・・・」
改めて実物を見ると、どう見ても漂流しているのは彗星帝国の潜宙艦であった。
まほろば　が来るまで畝傍がこの潜宙艦の様子を窺っていたが、やはりエンジンを損傷しているみたいで亜空間へ潜航または移動する様子もなければ、畝傍に対して攻撃をしてくる様子もなかったので、やはり眼前の潜宙艦は漂流しているみたいだ。
「あの様子から完全に漂流しているみたいだな・・・」
「ヤマトとの戦闘経過日数から恐らく艦内に生存者は居ないだろうが、一応調査はしてみるか・・・」
まほろば　と　畝傍は注意深く潜宙艦に接近し、艦内へ調査隊を派遣した。
艦内はエンジンが停止しているためか明かりが点いておらず物音一つなく暗くて不気味だ。
調査隊はヘルメットに懐中電灯を取り付け、手にはコスモガンや自動レーザーライフルを手に潜宙艦の艦内を調査する。
破孔が存在しているので、そこから宇宙空間へ吸い出されてしまった乗員もいるのだろうが艦橋部付近は、比較的に損害は少なく、人工重力が働いていない艦橋には乗員の死体が宙を漂っていた。
「やはり、生存者は居ないようだな・・・」

艦内を調査しても予想通り生存者は居なかった。
「艦に連絡を入れよう」
「了解」
調査隊は艦へ調査結果を送った。
「艦長、調査隊より通信が入りました。予測通り艦内に生存者は居ないとのことです」
「そうか・・・・」
「艦長、他の艦も集結終了しました」
「・・・・では、この潜宙艦の曳航準備を進めてくれ」
「えっ？あの潜宙艦を・・ですか？」
良馬の言葉に新見が驚いたように聞き返す。
「ああ・・・・山南艦長が言っていたように彗星帝国の艦船は高い技術力を持っている。それにヤマトからもたらされた情報では、彗星帝国の潜宙艦はワープに利用される空間歪曲を艦体の遮蔽に応用し、通常空間とは異なる異次元空間への潜航が可能らしい・・・・あの潜宙艦を地球で調査すれば防衛軍でも将来潜宙艦を持つことが出来るかもしれない」
「な、なるほど・・・・」
防衛軍にはまだ潜宙艦と言う艦種は存在していない。
それは、防衛軍に潜宙艦の建造ノウハウがないからだ。
しかし、この潜宙艦を鹵獲・曳航し、地球で調査をすれば防衛軍でも潜宙艦を建造し備える事が可能になるかもしれない。
やがて、ホワイトアローⅠ　Ⅱに曳航用のワイヤーを掛けられた潜宙艦は地球へと運ばれた。
ただ、曳航をしているので、ワープはすることが出来ずに、まほろば　以下の艦艇は復路では遅い到着予定となった。

地球　メガロポリス東京　防衛軍司令部
「長官、プロキオン方面へ時空管理局の救助者帰還任務へ向かったまほろば　より通信文が入っています」
「うむ・・・・」

良馬はフェイトたち、時空管理局の救助者を無事に迎えに来た時空管理局側へ引き渡した事、そして畝傍がプロキオン宙域にて彗星帝国の潜宙艦を発見した旨を防衛軍司令部に電文を送った。
「何かありましたか？」
西郷が藤堂に声をかける。
「時空管理局の救助者たちは無事に時空管理局側へ引き渡されたようだ」
「そうですか・・・無事に故郷へ着くと良いんですが・・・」
「そうだな。それと、今回の任務に同行した畝傍が彗星帝国の潜宙艦を発見したらしい」
「彗星帝国の潜宙艦ですと!?」
ここでまさかの彗星帝国の艦艇の話題が出てきたことで西郷は思わず声が裏返る。
「うむ・・まほろば　からの報告では以前、ヤマトがテレザートへ向けての航海中に撃破した艦らしい」
「それで、まほろば　は何と？」
「調査をした結果、比較的に損害が少ないので、地球へ曳航するとの事だ」
「彗星帝国の艦を・・ですか？」
「ヤマトが記録していた交戦データから潜宙艦は星の海における潜水艦の様な艦種みたいだからな、調査をより詳しく行えば防衛軍でも後々潜宙艦を揃える事が出来る可能性があると、月村艦長はそう判断したらしい」
「なるほど・・・・」
「損傷した潜宙艦を曳航するため、大ワープが出来ず、まほろば　を含め今回の時空管理局の救助者の帰還任務に就いた艦艇は少々地球への到着が遅れるとの事だ」
「まぁ、曳航中にトラブルが起きても困りますからな」
折角、鹵獲出来た潜宙艦を失うのは防衛軍としても惜しい。
「鹵獲した潜宙艦の調査については真田君たち科学局と造船局の技師たちに任せよう。連絡を入れておいてくれたまえ」

「承知しました」
西郷は藤堂の命令を実行し、暗黒星団帝国との戦い後、ヤマトを降り再び科学局勤務になった真田と造船局に連絡を入れた。

まほろば　がプロキオン宙域で彗星帝国の潜宙艦を鹵獲・曳航している中、地球本土では暗黒星団帝国の捕虜に対する処遇が決まった。
アルフォンに関しては最終時点の地位が地球占領軍総司令であったが、その総司令官の期間が短い事を含め、メイトリックら死刑を免れた他の捕虜たち同様、古代や雪からの助命嘆願が来たことから死刑を免れた将兵たち同様、地球・太陽系内から追放となった。
地球占領のために襲来した暗黒星団帝国の武装艦はその殆どがヤマト追跡に向かい返り討ちにされ、残された中・小の艦艇は防衛軍の残存艦隊の攻撃を受けて壊滅。
巨大な輸送艦が地球上にまだ残されていたので、これらの輸送艦を集結させ、暗黒星団帝国の捕虜を乗せる予定だ。
もちろん、その決定は現在宇宙へ飛んでいる防衛軍の宇宙艦艇全てに知らされた。
よって、地球方面から飛来する暗黒星団帝国の輸送艦を発見しても攻撃してはならないと言う命令が通達された。
「艦長、防衛軍司令部より通信文です」
防衛軍司令部からの暗黒星団帝国の捕虜たちの処遇はプロキオン宙域から彗星帝国の潜宙艦を曳航中の　まほろば　を含む艦艇にも伝えられた。
「司令部からは何と？」
新見が司令部からの通信文の内容を訊ねる。
「暗黒星団帝国の捕虜たちの処遇が決まったらしい」
「暗黒星団帝国の捕虜たち・・・」
「それで、どうなったんですか？」
「彗星帝国の時と同じ、太陽系内からの全面撤退と以降の不可侵らしい」
「まぁ、そうなりますよね」

流石に地球を占領下に置き、地球への襲来時には軍民問わずに世界中で虐殺行為をした暗黒星団帝国と共存は難しい。
被害者や遺族たちには納得できる事ではないが、ガミラスや彗星帝国の時と異なり、地球上に居た為に地球解放後に軍事裁判が行われ、多くの暗黒星団帝国の将兵が裁かれた事が唯一の救いだろう。
「それで、太陽系から撤退する暗黒星団帝国の艦艇には攻撃禁止が厳命された」
「うーん・なんか、モヤモヤしますね」
永倉も今回の暗黒星団帝国の捕虜たちの処遇についての連邦政府、防衛軍の決定については完全に納得できていない様子だ。
「それは、相手側もそうだろう。何しろ我々は彼らの同胞を大勢斃し、母星を滅ぼしたんだ・・・暗黒星団帝国側から見れば地球側が悪にも見えるだろうさ」
良馬は暗黒星団帝国側を弁護するわけではないが、暗黒星団帝国側の視点からの地球を見ると、立場が逆転している事を指摘した。
(それに生き残った彼らも彼らで大変だろう・・・)
太陽系からの追放でも生き残ったアルフォンやメイトリックたちの今後を思うと彼らの未来は波乱になることは間違いない。
彼らには既に還るべき星はない。
しかし、イスカンダルにて対峙したメルダースは、イスカンダリウムを欲する理由が暗黒星団帝国は星間戦争を繰り広げているので、そのエネルギー源としてイスカンダリウムを必要としていた。
つまり、かつてのガミラスや彗星帝国の様に暗黒星団帝国にも植民惑星やどこかの星と戦闘を行っているので、デザリアム星人全てが死に絶えた訳ではない。
アルフォンたちが運よく各戦線の味方と出会えれば・・・
そして、同胞たちを纏め上げ、新たな星間国家を立ち上げればデザリアム星人の再興も不可能ではないが、身体的問題の解決はまだ先になる事だろう。
フェイトたち管理局の問題、暗黒星団帝国の捕虜たちの処遇につい

ての問題が解決し、プロキオン宙域にて彗星帝国の潜宙艦を鹵獲・曳航した　まほろば　一行は防衛軍司令部に通信で報告した通り、予定より遅れながらも無事に地球へ帰還した。
管理局からもたらされた親書は母港で待機していた連邦政府からの使者に託し、すぐに閣僚会議が開かれるらしい。
そして鹵獲された彗星帝国の潜宙艦は、防衛軍の艦船ドックへと運ばれた。
ドックには既に真田たち科学局の局員と造船局の技師らが待機していた。
真田たちは早速、彗星帝国の潜宙艦を調査し始めた。
艦内に残っていた乗員の遺体に関しては地球への曳航前に宇宙葬をしており、遺体は艦内には残っていない。
「真田先輩」
「ん？おう、月村か」
良馬は気になって調査が行われている艦船ドックへとやって来て休憩中の真田に声をかけた。
「あのお嬢ちゃんたちは無事に還ったのか？」
真田はフェイトたちについて訊ねる。
「ええ、迎えに来た管理局の艦に引き渡しました」
「そうか・・・無事に故郷へ還れると良いのだがな」
「自分もそう思っています。ただ、今後の管理局との付き合い方については上の判断によりますがね」
管理局からもたらされた親書の内容によって今後、連邦政府が管理局・ミッドと交流を持つのかを決めるのだろうし、それを判断するのは政治家と防衛軍上層部だ。
ただ、これまでの管理局の所業から交流をするのは難しいのではないかと思う良馬であった。
恐らく真田も同じ思いだろう。
「そうだな。それにしても、まさか帰りに意外な土産を持って来たな」
「畝傍の美咲艦長の担当哨戒宙域に漂っていたのはまさに偶然でした。この潜宙艦はやはり、ヤマトが？」

「ああ、テレザートに向かう途中で遭遇した艦の一隻だろう。しかし、これだけ原型を留めていたのは恐らくヤマトからの攻撃ではなく、あの時同行していた巡洋艦　すくね　が撃破した艦だろう」
「三木君の・・・」
　すくね　の艦名が出て、テレザートに向かう途中、ヤマトを守るために奮戦し、艦と運命を共にしたかつての戦友の姿が脳裏を過る良馬。
「ヤマトの攻撃力ではここまで原型を留めるのは難しいからな」
　事実、ヤマトはプロキオン宙域、冥王星宙域にて彗星帝国の潜宙艦と遭遇し、これを撃破したが、そのほとんどが原型を留めないくらいの損傷を受けて撃破していたので、今回鹵獲出来たのはヤマトよりも攻撃力が低い巡洋艦である　すくね　の攻撃を受けたのであるならば、原型を留めて漂流していたのも頷ける。
　元々大きさが駆逐艦クラスであったので、施されている装甲もそのサイズと同じ駆逐艦クラスだったのがヤマトの攻撃を受け、原型を留める事が出来なかった要因だ。
「それで、調査の進捗はどうですか？」
「まぁ、まだ初日だし、潜宙艦はその性質上、亜空間に関する事だからな、防衛軍としてもまだまだ未開の域だからもう少し時間をかけた詳しい調査が必要だ」
「しかし、イスカンダルから送られた波動エンジン、ガミラスから送られたワープ技術・・・それらを実現できた地球の技術からしたら、近い将来に防衛軍も潜宙艦を保持することは可能ではないでしょうか？」
　良馬はこれまでの地球の技術力から防衛軍も潜宙艦を保持できるのではないかと言う可能性を真田に訊ねる。
「その可能性は否定しない」
　真田曰く、良馬の予想通り、この潜宙艦の調査によっては防衛軍も潜宙艦を保持出来る可能性はあると言う。
「それにしても、星の海ながら保持する艦船が水上艦艇とあまり変わらない様相になってきましたね」
「星の海も海だからな」

「そう言えば、ガミラスと言えば、デスラーはあれから新たな星を見つけたのか気になりますね」
「うむ、彼の性格から新惑星を発見してそれで終わるとは思えない」
「武力によって勢力を広げる・・・と？」
「ああ、十分にあり得るな」
「それならまたガミラスが地球を侵略する可能性もある訳ですか？」
デスラーが武力による勢力拡大を行うのであるならば、デスラーが再び地球を狙う可能性があるのではないかと真田に訊ねる。
「いや、恐らくそれは無いだろう」
しかし、真田はデスラーが新惑星を発見後、武力による勢力拡大を行っても地球へ再び侵攻してくる可能性を否定する。
「なぜですか？」
「地球への侵攻は元々、地球をガミラス人が住める環境へのテラフォーミングと移住が目標だった。新たに住める星が見つかったのならば、地球へ侵攻する理由が無い。それに雪の話ではデスラーは地球にもヤマトにも恨みは無いと口にしたらしいからな」
「なるほど・・・」
「だが、新兵器、新造艦を造っている可能性は十分にある」
「元々、ガミラスは地球よりも技術力・科学力が高い星でしたからね」
「ああ、それにデスラーは一時、彗星帝国と同盟を組んでいた」
「あの転送砲搭載艦がその例でした」
彗星帝国の科学力・技術力もガミラスに負けず劣らずであった。
しかし、メダルーザ級火炎直撃砲搭載戦艦はガミラスからの技術供与があってこそ実現した艦であり、ワープ技術に関してはこれまで地球が遭遇した星間国家の中ではガミラスが一番優れていた。
実際に地球側もガミラスの技術供与によって連続ワープ機関の製造が早まった。
そして、同盟による技術供与なのだから、ガミラスも彗星帝国から何らかの技術供与を受けた可能性は高い。
「もし、デスラーが彗星帝国から技術供与を受けるとしたら、やはり潜宙艦の技術は受け取ると思いますか？」

「受け取るだろうな。元々ガミラスは技術力の中でもワープ機関技術が優れた星だ。そのワープ技術に似た亜空間を潜行出来る艦の技術はガミラスとしても興味深い技術に違いない」
「もし、ガミラスが既に新惑星を発見し、武力による勢力を拡大しているとしたら、ガミラス製の潜宙艦を既に進宙しているかもしれませんね」
「デスラーが彗星帝国から潜宙艦の技術供与を受け、新惑星を発見していたらその可能性は十分にあるな」
　真田はガミラスの技術力ならば、ガミラス製の潜宙艦の存在は十分にあると肯定する。
「地球側も潜宙艦を保持できると今後の防衛軍の戦略も大きく広がりますね」
「ああ・だが、先も言った通り、潜宙艦技術は防衛軍にとってはまだまだ未知の領域だ。今後の調査と試行錯誤の壁を乗り越えなければならない・・・さて、俺は調査に戻るが、お前さんはこの後の予定は？」
「自分はこの後、宇宙開拓局へ向かいます。暗黒星団帝国の侵攻で停滞していたケンタウロス座の開拓が再開するみたいなので」
「そうか・・・」
　こうして真田は再び潜宙艦の調査へ、良馬はケンタウロス座の開拓業務が再開するとの事で宇宙開拓局へと向かった。
　しかし、今回のこの潜宙艦が今後の防衛軍における造艦技術の発展に大いに貢献することになった。
　今回、防衛軍が潜宙艦を手に入れる事が出来たのはいくつかの偶然が重なった事だった。
　一つ、すくね　の攻撃で比較的に原型を留めていた。
　一つ、プロキオン本星、ソーサナーへ引きずり込まれなかったこと
　一つ、畝傍の担当哨戒宙域に漂流していたこと
　これらの偶然が重なったまさに奇跡的な出来事であった。
　管理局の本局自体が通常空間とは異なる空間に存在するので管理局の艦にも似たような機能は搭載されているが、管理局側から見ても彗星帝国の潜宙艦は技術の塊である事は言うまでもない。

もし、発見したのがヴォルフラムであった場合、管理局は絶対に潜宙艦を本局へ曳航していただろう。
今回、フェイトたちの引き渡しが行われプロキオン宙域は地球連邦の領海でなければ管理局の領海でもない、公海なので早い者勝ち、見つけた者勝ちだったので、地球側は運がよかったのだ。

真田が引き続き鹵獲・曳航された潜宙艦の調査を行い、良馬が宇宙開拓局へ出向いている中、地球連邦大統領官邸では、管理局からもたらされた親書による閣僚会議が開かれていた。
当初、プロキオンで彗星帝国の潜宙艦を発見し、地球までワープなしの曳航から　まほろば一行の到着は予定よりも遅くなるので、親書を持っている　まほろば　を先行させて地球に返し、潜宙艦の曳航に関しては畝傍に指揮を代行させても良かったので、曳航前に良馬は防衛軍司令部へ通信をいれていたが、司令部からの返答は『予定通りまほろば　が指揮を執り地球へ帰還せよ』であった。
多少遅れても親書の返答期限まで数日の余裕があった事ともしかしたら、親書の内容がどんな内容にせよ、地球連邦政府も防衛軍も管理局：ミッドとの交流は最初から見送るつもりだったのかもしれない。
しかし、一応各々の意見を聞く必要もあるので、こうして閣僚会議が開かれたのだ。
「魔法か・・・てっきり、おとぎ話や書物の中の産物かと思っていたよ」
親書を見た官僚の一人が魔法と言う非科学的で書物の中にしか存在しない能力が実際に存在していた事に意外性を感じていた。
何しろいきなり『自分は魔法使いです』なんて言われても直ぐにその言葉を信じられないからだ。
だが、今回管理局からもたらされた親書の中には魔法に関しての記述が書かれていた。
管理局はノアやテリオスが防衛軍に調査され魔法の存在について知っている事を見越して親書の中に魔法についての記述が記載されていた。

「いや、テレサの反物質を操る能力など、宇宙にはまだ我々が認知していない能力を有する民族が存在していてもおかしくはないと言うことだ」
藤堂がテレサを引き合いに異能力を持つ宇宙人が存在しており、それは地球人が知らないだけで、まだまだそう言った異能力を持つ宇宙人が存在している事を指摘する。
とは言え、既に地球には魔導師、そして夜の一族と呼ばれる吸血鬼の一族が一般人の生活の中で普通に溶け込んで生活をしている事を彼らは知らなかった。
「それで、大統領はどうなさるおつもりですか？」
官僚の一人が地球連邦大統領に今後の方針を訊ねる。
「ん？『どう』とは？」
「親書には、時空管理局は今後、我が地球連邦との交流を行いたいと記してありますが？」
「うーむ・・・」
大統領は腕を組んで考え込む。
親書の内容には魔法以外にも管理局の活動概要が書かれており、その中には魔法がいかにクリーンな能力である事、
管理局の仕事が宇宙（次元世界）の平和と安定を担っている事、
それを踏まえて今後、地球連邦との技術と人材の交流を深めていきたい事が書かれていた。
もし、これがガミラス戦役前ならば、連邦政府は管理局と・・ミッドと交流を持っていたかもしれない。
しかし、ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国と立て続けに外宇宙から侵略されてから地球連邦は、宇宙開拓は兎も角、文明のある外宇宙からの誘いに対しては慎重と言うか、やや鎖国体制に入りつつあった。
しかも連邦政府、防衛軍はノアとテリオスから管理局の闇の一部も既に把握している為、管理局との交流に関してはやはり消極的な姿勢が目立つ。
「防衛軍側として、この時空管理局はどうかね？信頼に値する組織に

見えるのかな？」
　大統領は藤堂に管理局の存在を問う。
「そうですね・・・我々はこの時空管理局全てを理解している訳ではありませんが、現時点で有する時空管理局の情報からは残念ながら信頼に値するかと言われると難しい所です」
　管理局が密かに行っていたダーティミッションに文化の違いとは言え未成年者の危険が伴う宇宙での就労。
　魔法文化がある世界、そして彼らが必要と認めた世界を管理と言う名の下で植民地支配している体制から管理局＝彗星帝国の印象が強く、今は交流とされているがそれがいつ地球に対して牙を向けられるのか分からない。
　例えにするならば、毒が盛られているかもしれない料理を口にするよりは、そんな料理を出しているレストランへ入らない事が確実に安全である。
　藤堂は防衛軍の長として管理局との交流は避けるべきであると主張した。
　そもそも技術交流においても防衛軍が有している管理局の艦の技術調査から、管理局の艦と防衛軍の艦とでは性能に関して圧倒的差がある事も報告されており、管理局が防衛軍にどんな技術を提供できるのかも怪しい所だ。
　防衛軍側の技術を根こそぎ奪うだけ奪い、地球では既に旧式化された技術を渡されても地球側には何のメリットがない。
　地球防衛を担う防衛軍の長である藤堂のこの言葉が決め手になったのか、やはり地球連邦政府としては管理局との交流は見送る流れとなった。
　閣僚会議後に藤堂は管理局との交流がある源三郎を呼んだ。
「中嶋君、先ほど大統領官邸にて管理局からもたらされた親書について協議があった」
「はい・・・それで、親書には何と記載されていたのですか？」
「時空管理局は地球連邦との技術と人材の交流を求めてきた」
「交流ですか・・・」

流石の管理局もフェイトたち救助者を収容した後に掌を返すように地球に対して降伏文章を送って来るほど無神経ではない様だ。
「それで、行うのですか?管理局との間で交流を・・・」
「いや、閣議の結果、地球連邦は管理局との交流は見送る事になった」
藤堂は源三郎に会議の結果を伝える。
「月村君より親書の回答通告期限についても知らせが来ている。中嶋君は管理局との交信の場に出ていたね?」
「はい」
「ふむ、すまないが、今回の連邦政府からの返答を時空管理局へ伝えてはもらえないかね?」
「承知しました」
藤堂は源三郎に管理局への返答を頼み、彼はそれを了承した。
そして、良馬がリンディへ伝え了承をもらった親書の回答通告期限の日、管理局との交信に使用されたチャンネルを開いた。
フェイトたちの帰国から久しぶり鳴る受信を知らせるアラーム音。
「っ!?」
当直のオペレーターは慌ててコンソールを操作して通信回路を開く。
するとモニターには源三郎の姿が映し出される。
「地球防衛軍司令部第三部第五課長の中嶋源三郎です」
源三郎は敬礼しながら所属と名前を名乗る。
「じ、時空管理局、本局通信課オペレーターの・・・」
オペレーターは慌てて敬礼し源三郎に所属と名前を名乗った。
「早速ですが、本日は先日時空管理局より頂いた親書の回答をお伝えするために、こうして交信を入れました」
「わ、分かりました。では担当の者を此処へ呼ぶので少々お待ちください」
「分かりました」
オペレーターは急ぎ、リンディに連絡を入れた。
リンディが来るまで待つことになった源三郎であるが、それはオペレーターの局員も同じことで、リンディが来るまで二人は互いに無言

のまま気まずい時間を過ごすことになった。
(早く来てくださいよ、統括官・・・)
一分一秒でも早くリンディに来てもらいたいオペレーターとしては彼女が来る時間が物凄く長く感じた。
「あの・・・一ついいですかな?」
「ひゃっ!?は、はい、なんでしょう?」
源三郎はこうして管理局との交信をする機会を設けたので、気になった事がありオペレーターへ訊ねてみる事にした。
突然、源三郎から声を掛けられたオペレーターは思わず声が裏返る。
「先日、プロキオンにてそちらの所属する艦へ引き渡されたハラオウン執務官らは無事にミッドチルダへ着きましたかな?」
源三郎はフェイトたちが無事にミッドへ着いたかを訊ねる。
恐らくこれが正真正銘、管理局との最後の交信になる。
その前に先日、管理局側へ引き渡されたフェイトたちがミッドに帰ってきたのを確認したかった。
「ハラオウン執務官たちですか?ええ、無事に帰還しました」
「そうですか・それは良かった」
フェイトたちが無事にミッドへ戻った知らせを聞き、一安心する源三郎。
(あとで月村の奴にも知らせておくか・・・)
フェイトたちが無事にミッドへ戻れた知らせを源三郎は後で良馬に伝える事にした。
そして、リンディがやって来るとオペレーターはホッと胸をなでおろした。
「お待たせしてしまい申し訳ありません」
「いえ、こちらも何時にそちらへ回答をするのかを伝えておりませんでしたのでお気になさらず・・・」
「それで、親書の回答と言う事ですが・・・」
リンディは地球からの親書の回答が来たという知らせを聞き、表面上は冷静を保っているが、内心ではドキドキしながら地球からの返信

を待っていた。
「はい・・・地球連邦政府及び地球防衛軍は閣僚会議の結果、時空管理局から提案があった技術、そして人材の交流について見送らせていただくと言う結果になりました」
「・・・そう・ですか・・・分かりました」
リンディは管理局ともう一つの地球が交流する事が出来ないと言う結果を聞き、半分がっかり、半分納得と言う心境だった。
元々もう一つの地球が管理局に対して不信感を抱いているのは気づいていた。
なので、地球側からの返答はある程度の予測は出来ていた。
(これでまた上層部連中が騒ぐわね)
リンディには今回の地球へ送った親書における返信の結果を報告した時の管理局上層部の姿が容易に想像出来た。
彼らとしてみれば、魔法が使えない本来ならば管理するに値しない世界に対して、わざわざ管理局が交流してやるのだからありがたく思えと言う意味合いで親書を送ったにもかかわらず、地球側はそれを断ってきたのだから、プライドを著しく傷つけられたことになる。
(自棄を起こしてもう一つの地球へ武力侵攻をしなければいいけど・・・)
リンディとしてはこの後の報告会の事を思うと憂鬱になる。
「それでは、小官はこれにて失礼いたします」
「は、はい。わざわざありがとうございます」
フェイトたちが無事にミッドへ戻れたのかを知り、そして親書に対する連邦政府側の返答を伝えると源三郎は交信を終えた。
「はぁ～・・・」
交信を終えたリンディは一つ深いため息をつく。
「お疲れ様です、統括官」
交信を終えたリンディにオペレーターは労いの言葉をかけるが、
「いえ、本当に疲れるのはこれからよ・・・」
「えっ？」
しかし、リンディはこの後もっと疲労する事になるとオペレーター

に言う。
「貴方も聞いていたでしょう？もう一つの地球はミッドとの交流を断った・・・そして、その提案をしたのは管理局の上層部連中・・・彼らとしては魔法が使えない本来なら管理外世界の人たちに自分たちの提案を拒否されたのよ？プライドだけが高いあの連中が聞いたらそれこそ、もう一つの地球に武力侵攻をすると言いかねないわ」
「・・・・」
リンディの言葉を聞いてオペレーターはハッとしてその言葉の意味を理解する。
「当然、今回の親書に関する報告もしないといけないし、上層部連中も宥めないといけないわね・・・・」
「アハハ・・・・お疲れ様です、統括官」
「はぁ～・・・・私もクロノと同じ様に休暇を取ろうかしら？」
げんなりした様子で通信室を後にしたリンディの背中には哀愁が漂っているように見えたオペレーターだった。

管理局側へ親書の返答を伝えた源三郎はその日の夜に良馬へ電話を入れた。
「はい、月村です」
「おう、良馬か？中嶋だ」
「あっ、中嶋さん。お疲れ様です。何かありましたか？」
夜に源三郎から電話が来たことで何かあったのかを訊ねる良馬。
「今日、管理局へ親書に対する連邦政府からの決定について交信をしたんだ」
「それで、連邦政府の決定は？」
「管理局との交流は見送るとの決定だ」
「そうですか・・・・やっぱり・・・・」
「まぁ、大方の予想通りだな。それで、ついでに向こうの人にあのお嬢ちゃんたちが無事に着いたかも聞いておいた」
「彼女たちは無事に故郷へ還れましたか？」
「ああ、安心しろ、無事に故郷へ着いたみたいだ」

「そうですか・良かった」
源三郎からフェイトたちが無事にミッドへ着いたと知らされ良馬もホッとした。
そんな二人の会話を聞いていたギンガは、
(フェイトさん無事にミッドへ着いたんだ・・・・スバルや向こうのお父さんは手紙を読んでくれたかな?)
ギンガはフェイトに託したスバルとゲンヤへの手紙がミッドのナカジマ家に渡され、二人が手紙や写真を見ている事だと思いを寄せるのだった。

百三十四話　一段落

管理局の問題、暗黒星団帝国の戦後処理が終わり、地球は戦災の復興と停滞していた宇宙開拓へようやく着手する事が出来た頃、パルチザンとして暗黒星団帝国と戦った戦士たちへある朗報がもたらされた。

「えっ？表彰・・ですか？」

ミッドへは還らず、もう一つの地球への残留を決めたティアナは、月村邸にてその報告を受けた。

一応、この地球で何をやりたいのかのビジョンを持っているティアナであるが、忍からの行為から現在も引き続き、月村邸でお世話になっている。

「うん。暗黒星団帝国の占領下の地球で戦った人たちを対象に行われるみたいだ」

良馬はティアナに今回の表彰について話す。

（ランスターさんが、ミッドに戻っていなくてある意味良かったのかな？）

もし、ティアナがフェイトたちとミッドへ戻っていたら今回の表彰に出席できなかったので、ティアナが地球に残ってくれたことはある意味で良かったのかもしれない。

暗黒星団帝国と戦ったのは防衛軍の軍人だけではなく、占領下の地球では軍・民と問わずにパルチザンとして戦っており、ティアナも当時は管理局員ながらも民間人の一人として暗黒星団帝国と戦った。

よって、今回の表彰にティアナは該当していた。

パルチザン入隊の際に志願入隊してきた隊員のリストは作成されており、あの戦いを生き残った者はもとより、戦死者した遺族にも謝礼金が支払われる事になっている。

とは言え、流石に人数が多いので、全員が防衛軍司令部の庁舎で表彰式をやると時間がかかるので、リストに明記されている住所を頼りに近くの軍関係の施設や行政施設にて行われ、ティアナは横須賀基地

にて表彰が行われる。
「表彰か・・・」
機動六課時代にもＪＳ事件を解決したと言う事で管理局から表彰を受けた経験があるが、まさか地球に来ても表彰を受けるとは思ってもみなかった。
（もし、フェイトさんたちと一緒にミッドへ戻っていたらどうなっていたんだろう？）
ティアナ自身も良馬同様、もし予定通りミッドへ戻っていたら今回の表彰式に地球へ居なかった。
別に狙っていたわけではないがこうして自分たちの行動を評価してもらえる事なのでこうして表彰してもらえるのは嬉しかった。
忍がその話を聞いて、ティアナに表彰式に着て行く為のレディース・スーツを用意してくれた。
民間人であるティアナは当然、軍服はないし、ドレスでは何だか場違いな気がしたので、無難なところでレディース・スーツにしたのだ。
「顔の傷はどうする？ガーゼを貼る？」
スーツの採寸をしている中、忍はティアナに表彰式当日は顔の傷を隠すためにガーゼを貼っていくかを確認する。
「いえ、隠さずにこのままで行きます」
しかし、ティアナは敢えて傷を隠さずに表彰式に臨むと言う。
暗黒星団帝国との戦いの後、ティアナは敢えて顔の傷を残したのだが、海鳴市とは違う街へ行くと若干周囲の人の視線が気になる事がある。
だが、つい最近まで大規模な戦いがあったと言う事で、周囲の人々も戦傷だと理解しているのが唯一の幸いである。

そして、表彰式当日、忍に用意してもらったレディース・スーツを身に纏ったティアナは横須賀基地に来た。
「よぉ、嬢ちゃん」
そこへ、ティアナに声をかける者が居た。
「えっ？あっ、古野間さん、北野さん」

ティアナに声をかけたのはパルチザン活動をしていた時、行動を共にする時間が多かった古野間と北野だった。
「ら、ランスターさん!?ミッドへは還らなかったのですか!?」
「はい、地球に残留することにしました」
北野は暗黒星団帝国との戦いの後、司令部勤務となっていたので、管理局関係の情報も彼の耳には入っていた。
しかし、まさかティアナがミッドへは戻らず地球に残っていのは北野としては意外だった。
「えっ?そうだったのか?」
古野間は空間騎兵隊所属なので、管理局関係の情報が入ってこないので、今回の表彰式の事を踏まえて、まだティアナがミッドに戻っていないだけかと思いきや、既にティアナ以外のミッドの住人がミッドへ帰還している事を知らなかった。
「はい、先日、まほろば　が時空管理局の関係者をプロキオンにて、引き渡したって聞いたので、てっきりランスターさんも還ってしまったのかと思っていました」
「へぇ～そうだったのか・・・でも、良かったのかい?嬢ちゃん。故郷にはアンタを待っている家族や恋人が居たんじゃないか?」
古野間はティアナに故郷であるミッドにいるであろう家族や恋人について訊ねる。
「いえ、私は故郷でも天涯孤独でしたし、それに恋人も・・・居ませんから・・・」
ティアナは家族の有無よりも恋人の有無についての方が何だか言いにくそうだった。
「そ、そうだったのか?それはすまなかった」
「いえ・・・」
ティアナは恋人の有無の方が言いにくそうだったが、古野間は恋人よりも家族が居ない事の方が彼女の地雷を踏んでしまったと思い謝罪する。
「でも、どうして地球に残ったんですか?」
例え家族や恋人が居なくとも、故郷へ還る機会があったにもかかわ

らず、ティアナは敢えて地球に残る選択を取ったので、北野はティアナに何故地球に残る選択を取ったのかを訊ねる。
今後、地球とミッドが交流を持てば行き来も行われるだろうから、ティアナは地球とミッドを行き来が可能となるだろうが、防衛軍の中でも管理局との交流には否定的な意見が多かったことから、今後、地球とミッドの行き来は行われない可能性が高く、それはティアナが故郷へ還れない事を意味している。
だが、それを承知でティアナは地球への残留を希望しているのだから、二人としては気になるところだ。
「そうですね・・・管理局・前に所属していた組織なんですけど、そこに居た時よりもこちらの地球に来て、あの戦いに身を投じて管理局の肩書きの意味の無さを感じるのと同時にやりたいことも見つかったので・・・」
「やりたいこと？」
「それは何だい？」
「私は防衛軍に入隊したいと思いまして」
「えっ？防衛軍に!?」
「そりゃあ、大きく出たな」
わざわざ故郷を捨ててまで地球に残り、防衛軍に入隊したいと言うティアナの姿勢に驚く北野と微笑を浮かべる古野間。
表彰式でティアナは謝礼金、感謝状、そして野戦勲章をもらった。
機動六課の時は感謝状だったのでまさか、勲章をもらえるとは思ってもみなかった。
ティアナにとってこの表彰式で貰った勲章が一生の宝になったのは言うまでもなかった。

ここで、視点は地球からミッドチルダへと移り、時間も少し過去に巻き戻す。

プロキオン宙域にてフェイトとヴィヴィオを防衛軍側から引き取

りミッドへ帰還したヴォルフラム。
本局にあるヴォルフラムの母港には沢山のマスコミが駆けつけており、フェイトにもう一つの地球での生活をインタビューしようとしていた。
しかし、マスコミがフェイトにインタビューする前に管理局の査察部に所属する局員らがフェイトに駆け寄ると査察部への同行を求めてきた。
帰国したら査察部からの事情聴取が行われるであろうことは帰国前からフェイトは予測していたので、フェイトは大人しく彼らの指示に従って査察部へと出頭した。
査察部に出頭したフェイトはまさにザ・取調室みたいな机と椅子のみが置かれている小部屋へと通される。
「では、お掛け下さい」
査察部の局員に促され、フェイトは部屋にあった椅子へ着席する。
「帰国したばかりで、お疲れの中、わざわざすみませんね」
「いえ、帰国前からある程度は予測していた事なので・・・それで、あなた方は何をお聞きになりたいのですか？」
「お察しが早くて助かります。では、まず確認としてハラオウン執務官が乗艦していた艦を襲撃したのは間違いなく、防衛軍から情報提供があった彗星帝国所属の艦でしたか？」
「はい、それは間違いありません」
（今更、何を聞いているの？防衛軍に攻撃されたとでも言って欲しかったのかな？）
「ハラオウン執務官らを救助後に防衛軍は何らかの任務により、テリオスの遭難現場から移動し、執務官の帰国が此処まで遅くなったと聞きましたが、その時の防衛軍の任務は一体どんな任務だったのですか？」
査察部の局員はフェイトにあの時のイスカンダルへの航海について聞いてきた。
「さあ、私は防衛軍の軍人ではないので、救助されたとは言え、防衛軍の任務についてそこまで詳しい事は知りません。ただ、一つ言えるこ

とは、ある星へ向かったことだけです。それ以上の事は知りません」
フェイトは管理局にイスカンダルの情報を知らせては不味いと判断しており、『知らぬ・存ぜぬ』を突き通している。
バルディッシュにもイスカンダルでの結婚式の写真やスターシア、そして双子の王女たちについても記録しない様にしたし、交信の時もはやてやなのはにイスカンダルについて何も言っていない。
イスカンダルの情報がバレる事は管理局の破滅の序章になる恐れがある事をフェイトはあの時の航海で体験し、学んだからだ。
「その防衛軍が向かった星と言うのは？」
「共に向かったとは言え、やはり軍務だったので詳しい情報は知りません」
「・・・・では、向こうの地球での生活について、何か不自由な事はありましたか？」
「いえ、行動に大きな制限を掛けられることは特にありませんでした。もっとも軍事機密に関する情報は規制されていましたけど・・・・」
フェイトがそこまで答えた時、ガチャと部屋の扉が開き別の査察部の局員が入ってくると、フェイトの向かいに座っている局員に何か耳打ちをしている。
そして、伝える事を伝え終わった局員は部屋から退出していく。
「失礼ながら先ほど、執務官のデバイスを調査したのですが、メモリー部分には何も記録されていなかったとのことですが、執務官はもう一つの地球に滞在中、映像や画像の記録をなされなかったのですか？それとも撮影を禁止されていたのでしょうか？」
先ほど入って来た局員はバルディッシュの調査結果を伝えに来たみたいだ。
その結果を聞いた向かい側に居る査察部の局員は、フェイトにもう一つの地球に滞在中、デバイスに何も記録しなかったのかを訊ねる。
これもフェイトは事前に予測していた事なので、バルディッシュに記録されていた映像や記録は全てヴィヴィオのデバイスであるクリスへ転送済みなのでバルディッシュのメモリーには何も記録されていない。

その事実を不自然に思った局員はフェイトに訊ねたのだ。
「御存知かもしれませんが、かの世界はＡＭＡが星中に充満しており、魔導師にとってはまさに毒沼のような地です。そしてそれはデバイスにも影響を与えるみたいで、滞在中はデバイスが上手く作動しませんでした」
フェイトの回答は当然、嘘である。
もう一つの地球に充満しているＡＭＡの環境下でもデバイスは普通に機能した。
実際に月村邸の地下でフェイトはティアナと模擬戦もしたし、映像も画像もクリスに移動させる前に確認したが、問題なく記録されていた。
しかし、イスカンダル同様、もう一つの地球でも管理局に知られては色々と不味い画像や映像が多々あった為、クリスにバルディッシュ内に保存されていた動画や画像を移したのだ。
特に死んだとされているギンガの存在ともう一つの地球に居るなのはの子孫である紅葉の存在・・これらも管理局にバレては色々と不味い。
「・・・」
フェイトの回答に対して訝しむ査察部の局員。
しかし、フェイトの発言における信憑性の確認は実際にもう一つの地球へ行かなければ確認できない。
座標も分からないもう一つの地球へ行くのは不可能に近いので確認が出来ないのは査察部の局員としては歯痒い事だろう。
魔法があるからと言ってなんでも出来る訳ではない。
実際に死者を蘇らせる魔法、時間を過去へ遡る魔法、反対に未来へ行く魔法、不老不死になる魔法が存在しない様に嘘を見抜く魔法、真実しか語らない魔法と言うのは現時点では確認されていない。
だからこそ、プレシア・テスタロッサ、モンディアル夫妻は死んだ家族を別の形で蘇らそうとしてクローンを生み出し、かつて存在していた最高評議会メンバーは肉体を捨て脳髄だけで生き長らえていた。

査察部・もとい、管理局の上層部としては、自白剤の使用や拷問をしてでも真意を問いただしたいところだろうが、フェイトは血が繋がっていないとは言え、現職の統括官の義娘であり、多くの管理局・一般人からも知られている有名人である。
もし、フェイトが取り調べ中に不審な死を遂げれば本局・リンディやあの三提督が動き出し徹底的に死因の調査を行う可能性が高く、査察部としてもフェイトを無下に扱うことが出来なかった。
「執務官の他にティアナ・ランスター執務補佐官にも事情をお訊ねしたかったのですが、彼女はヴォルフラムに乗艦していないと八神艦長から返答がありました・・・ランスター執務補佐官はどうしたのでしょうか？」
査察部の局員は次にティアナの件についてフェイトに質問する。
「ランスター執務補佐官はもう一つの地球への残留を決め、かの世界に残りました」
ティアナの件については隠しきれない事なので、フェイトはティアナについては正直に答える。
フェイトの回答に査察部の局員はピクッと眉を動かす。
「執務官はランスター執務補佐官の上官として、彼女を止めなかったのですか？」
「勿論、止めました。しかし彼女の意志は固く、私が説得し続けてもランスター執務補佐官の意志を変える事は不可能でした」
フェイトは査察部の局員にティアナを説得した旨を伝えるのと同時に彼女の意志が固かったことも伝える。
「それでは、防衛軍の艦に救助された時、もう一つの地球に到着した際、執務官らの待遇はどうでした？監禁などされていませんでしたか？」
査察部の局員は次に救助された後の生活について訊ねてきた。
「そのようなことはありませんでした。行動の制限は一部ありましたが、基本的に自由に過ごせました」
フェイトはあくまでも自分たちの待遇は救助者であり、けして捕虜などではない事を強調し、軍事機密に関する情報の規制はあるが、ま

ほろば　ヤマト　そして月村邸では比較的自由に過ごせたことを話す。

フェイトが査察部の事情聴取を受けて居る頃、ヴォルフラムの乗員たちは未だに艦を降りていない。

それはまだドックにはマスコミ関係者が居るからだ。

例えもう一つの地球に滞在していないヴォルフラムの乗員たちでも今、艦を降りればマスコミにもみくちゃにされるのは目に見えているので、無用の混乱を避けるため母港からマスコミが居なくなるまで艦を降りる許可をはやては出さなかった。

待機状態が続くヴォルフラム。

そんな中、副長のグリフィスがルキノの部屋を訪ねた。

「ルキノ、ちょっと良いかな?・・・って、何だい?その段ボールは?」

「あっ、グリフィス君」

ルキノの部屋にはいくつかの段ボールがあり、彼女はそれらの段ボールを積んでいる。

部屋にある段ボールを見てグリフィスはこの段ボールの正体をルキノに訊ねる。

「コレ?ウフフフ・・・」

グリフィスから段ボールについて訊ねられると、ルキノは顔を嬉しそうに緩める。

「これは、ティアナからの地球土産よ」

「ランスター執務補佐官の地球土産?」

ミッドに戻らなかったティアナからの土産と言われ首を傾げるグリフィス。

「そっ、ティアナが向こうの地球で購入してくれた防衛軍のプラモデルで、フェイトさんがティアナから受け取ってくれていたの」

「そ、そうなんだ・・・でも、飾るにしてもあまり他の人の目が届かない様にしなよ」

「えっ?どうして?」

「強硬派の局員に見つかったら何かしらの理由をつけられて没収され

かねないぞ」
「えっ？ウソ!?」
「十分にあり得るよ」
　ルキノが貰った地球土産はプラモデルとは言え、防衛軍の宇宙艦船の外見をしている為、強硬派の局員らがそれらを見つければ『新型艦船の設計資料にする』とでも理由をつけてルキノから没収するのは容易に想像がついた。
　グリフィスはルキノにその点を指摘したのだ。
「折角のレアモノなのに・・・・」
　没収されるかもしれないとグリフィスから指摘を受けたルキノはがっくりと肩を落とす。
「ま、まぁ、自分の部屋なら大丈夫じゃないかな？」
　グリフィスはルキノの落ち込み具合を見て、いくらなんでもミッドにあるルキノの自宅の部屋に飾れば流石に問題はないとアドバイスを入れた。
　その頃、艦長室では・・・・
「ねぇ、はやておねえちゃん、まだなのはママのところに行けないの？」
　ヴィヴィオがはやてにまだ艦を降りられないのかと訊ねる。
「すまんなぁ、ヴィヴィオ。まだマスコミの人たちがぎょうさんおるさかい、今降りるとその人らにもみくちゃにされてまうんよ」
「むぅ～・・・・」
「本局のテレポート装置を使えば直ぐにミッドへ着くんやし、少しの辛抱や」
　ヴィヴィオとしては一分一秒でも早くなのはに会いたい様子。
　何しろ、ミッドとはもう目と鼻の先であったからだ。
「なのはママが来たら、あの人たちにバスターやシューターを撃ち込んでこっちに来そうなんだけどね」
　艦を直ぐに降りられないのは母港に集まっているマスコミ関係者のせいだと判断したヴィヴィオはもし、あの場になのはが居たら邪魔になるマスコミ関係者に対してディバインバスターやシューターを

撃ち込んで物理的（？）にマスコミ関係者を黙らせて自分を迎えに来そうだと思った。
「ソレ、シャレにならんわ・・・でも、あのなのはちゃんならやりかねんわ・・・」
　はやてがヴィヴィオの予測が中らずと雖も遠からずな事に思わず冷や汗を垂らす。
「あっ、そうや、ヴィヴィオ」
「ん？なあに？」
　はやては、なのはの名前を聞いて思い出すかのように話題を変える。
「あんな、ヴィヴィオ。ヴィヴィオが向こうの地球に居る間になのはちゃんたちの家を改築する事になってな、そんで今、なのはちゃんは管理局の寮に住んどるんよ」
「へぇ～機動六課の時みたい」
「そうや、だからマスコミの人たちが居なくなったら、私がなのはちゃんが住んどる寮に案内するわ」
「ありがとう、はやておねえちゃん」
　はやてはヴィヴィオになのはが住んでいる場所がクラナガンにある家ではなく、教導隊の局員宿舎である事を伝える。
　しかし、本当の理由は流石に話せない。
　なのはが教導隊の宿舎に住んでいる理由が、ボラー連邦への武力制裁失敗後に民衆が暴徒化して、ミッドにあるなのはとフェイトが同居している家を襲撃して家の中を滅茶苦茶した事をヴィヴィオはタッチの差で知らない。
　八神家同様、現在なのはとフェイトの家はまだ建て直し中であり住めない。
　その為、はやてはヴィヴィオに自宅を改装していると言う事にしてなのはが住んでいる場所を伝えたのだ。
（あっ、そう言えばフェイトちゃんの家はどないするんやろう？）
　なのはは、現在教導隊の宿舎に仮住まいしている。
　ヴィヴィオはなのはの下へ向かえばいい・・・

しかし、フェイトの所属は教導隊ではなく、本局の執務官・・・
なのはが現在仮住まいしている宿舎にはいくらなんでも暮らせない。
（リンディさんに相談してみるか・・・）
そこで、はやてはフェイトの養母であるリンディにフェイトの仮住まいについて聞くことにした。
幸いリンディはまだヴォルフラムに乗っている。
「ヴィヴィオ、ちょっと私はリンディさんと話すことがあるから、リンディさんの所に行くけど、私が戻るまでこの部屋で待っていてや」
「うん、分かった」
はやてはリンディにフェイトの今後の仮住まいについて訊ねに行く。
「リンディさん、はやてです。いいですか？」
リンディの居る士官予備室の前に行き、扉をノックしてリンディに入室許可を求めるはやて。
艦長とは言え、階級ではリンディの方が上なのでこうしたマナーは公私で交流があるとは言え、メリハリは大事だ。
「はい、どうぞ」
「失礼します」
部屋の中からリンディの返答があったので、はやては部屋に入る。
「何かしら？」
「リンディさん、一つ聞いておきたいことがありまして・・・・」
「ん？」
「フェイトちゃんの今後の仮住まいはどないします？」
「確かなのはさんは教導隊の宿舎に住んでいるのよね？」
「はい。ヴィヴィオもそこで仮住まいさせるつもりですが、フェイトちゃんはなのはちゃんと所属が違いますから・・・」
リンディもミッドにあるはやてとなのは・フェイトの家が暴徒たちの手により焼き討ちされたことは当然知っている。
「フェイトは今、査察部で事情聴取中よね？」
「はい」

「うーん、事情聴取がいつ終わるか分からないし、ミッドにあるフェイトたちの家はあの状態だし・・・」
「あぁ～そうですね・・・」
「それなら今日は本局内にある私の別邸で引き取るわ。それにフェイトがミッドを留守にしている間の事も話さないとね・・・」
　ボラー連邦への武力制裁失敗などもう一つの地球との交信の席では話せなかった事など現在のミッドの・管理局が置かれた現状を話さなければならないので、丁度良かった。
　交信の席では、もう一つの地球に居るフェイトに要らぬ心配や不安を与える事になるので、リンディたちはあの場では話さなかったのだが、こうして無事にミッドへ還って来たのだからフェイトには管理局の現状を伝えなければならない。
「分かりました。フェイトちゃんの事、よろしくお願いします」
「ええ、はやてさんの方もヴィヴィオさんの事、お願いね」
「はい」
　とりあえず、フェイトの仮住まい問題についてはリンディが何とかするみたいなので、あっさりと解決した。

　そしてようやく、マスコミ関係者がドックから去るとヴォルフラムの乗員たちは順次、艦を降り始めた。
　グリフィスはルキノの段ボールを運ぶ荷物持ちになったのは言うまでもない。
　艦長であるはやてはその役職柄、最後に艦を降りなければならないので、その間に彼女は、自分とヴィヴィオの荷造りと転送先である地上本部からなのはが居る教導隊の宿舎まで移動するためのハイヤーの手配を行った。
「さて、ヴィヴィオ。待たせてすまへんな。それじゃあ、艦を降りようか？」
「うん」
　やがて、準備が整いはやてとヴィヴィオはヴォルフラムを降り、本局のテレポート装置へと向かい、ミッドのクラナガンにある地上本部

へとやって来た。
ヴィヴィオにとっては久しぶりに見るクラナガンの街並みであった。
「こっちやで、ヴィヴィオ」
「はーい」
はやては予め、地上本部に呼んでいたハイヤーに乗る為、地上本部のロータリーへとヴィヴィオと共に向かい、そしてハイヤーに乗り込み、なのはが居る教導隊の宿舎に向かう。
なのはが現在住んでいる教導隊の宿舎に近づくと、はやてはなのはに念話を入れる。
（なのはちゃん、なのはちゃん）
（えっ!?はやてちゃん？ミッドに帰って来ていたの!?）
はやてがなのはに念話を入れるとなのはからすぐに返答があり、彼女は少し驚いている様子だった。
なのはは、フェイトとヴィヴィオが乗ったヴォルフラムが今日、本局に到着することを知らなかったみたいだ。
本局の母港に集まったマスコミ関係者は本局内にある記者クラブに詰めていたマスコミ関係者であり、一早くもう一つの地球から帰ってきたフェイトにインタビューをしようとヴォルフラムの帰還日については戒厳令を敷いていた。
この為、なのはは今日、ヴィヴィオたちが帰ってくることを知らなかったのだ。
（今、ハイヤーで地上本部からなのはちゃんが住んどる宿舎へ向かっているんやけど、ヴィヴィオにはなのはちゃんたちの家が今、改装しとると言ってあるから、話を合わしてほしいねん。流石に自分の家が暴徒たちに壊されたなんて知るとヴィヴィオもショックを受けると思ってな）
（うん、分かった。それで、フェイトちゃんも一緒なの？）
なのはは、ヴィヴィオがはやてと居るのであるならば、ヴィヴィオと共にもう一つの地球に居たフェイトも一緒に居るのかと思い、はやてにフェイトについて訊ねる。

（あぁ～そのことなんやけど、フェイトちゃんは今、査察部で事情聴取中や）
（査察部!?えっ？なんでっ!?）
　査察部と聞いて念話ではあるが、なのはの声は裏返る。
　なのはとしては、どうしてフェイトが査察部で事情聴取を受けるのか理解できなかった。
（恐らく本局の意向や・・・）
（本局の？）
（せや、本局の一部の局員連中としてみれば、フェイトちゃんが忘れる前にもう一つの地球の情報を少しでも得ようとしとるんや）
（それで、フェイトちゃんは大丈夫なの？）
（フェイトちゃんもどうやら本局に着く前から査察部からの事情聴取があるのは予測しているみたいで、ヴィヴィオについても私に任せるように頼んでいたんや）
（フェイトちゃんが・・・）
（まぁ、事情聴取だけやし、手荒な事はされないと思うから多分フェイトちゃんは大丈夫や）
（そ、そうだよね）
（それで、フェイトちゃんの家はリンディさんに任せてあるから）
（リンディさんに？）
（うん。フェイトちゃんも家が暴徒たちに壊されたことを知らないから、リンディさんがフェイトちゃんに説明するみたいや）
（そうなんだ・分かったよ）
（ほな、もうすぐでなのはちゃんの所に着くから、後は着いてからな）
（うん、待っている）
　はやてはなのはに家とフェイトについて念話で伝え終わると後はハイヤーがなのはの住んでいる宿舎に着くだけとなった。
　やがて、ハイヤーがなのはの住む宿舎に着くと、宿舎の出入り口でなのはは待っていた。
　そして、ハイヤーからヴィヴィオが降りると、
「ヴィヴィオ!!」

声を上げてヴィヴィオに駆け寄る。
「なのはママ!!」
ヴィヴィオもなのはに向かって駆け寄り、両者は抱き着く。
「おかえり、ヴィヴィオ」
「うん、ただいま」
モニター越しではなく久しぶりの再会に両者の目には光るモノがあった。
「よかったな、なのはちゃん・・・・ヴィヴィオ・・・・」
そんな二人の様子をはやては少し離れた所から見て嬉しそうに顔を緩ませながらポツリと呟く。
その後、なのははヴィヴィオの手荷物を持ち、ヴィヴィオとはやてと共に自身の部屋に向かう。
その最中で、
「ねぇ、ヴィヴィオ」
「ん?なに?なのはママ」
「そのヴィヴィオが手に持っている人形・・・・それは熊さん?」
なのははヴィヴィオが手に持っている人形について訊ねる。
「あっ、これは、クリ・・・・ぼ、ボ○太くん人形だよ、なのはママ」
ヴィヴィオが今手にしているボ○太くん人形こそ、彼女のデバイスのクリスであった。
しかし、フェイトから『クリスの事を話しても良いと言われるまでクリスの事は秘密』と、言われており、もしバレたらクリスを取り上げられてしまう事から、ヴィヴィオはなのはが相手でもクリスの事を誤魔化した。
クリス自身も下手に動けばヤバいとデバイスながらも察している様子で動かず、喋らず、人形の振りを貫いていた。
「向こうの地球じゃあ、流行っていてフェイトママと買い物に行った時に買ってもらったんだ。どう?可愛いでしょう?」
ヴィヴィオはボ○太くん人形をなのはにズイッと見せつけ人形であることをアピールする。
「う、うん、可愛いね・・・・」

（か、可愛い・・・のかな？）
口ではヴィヴィオにボ○太くんが可愛いと言うなのはであるが、正直なところそこまで可愛いとは思えず何だか微妙な感覚だった。
「そういえば、ヴィヴィオは向こうの地球でデバイスを作ってもらったんでしょう？そのデバイスはどうしたの？」
なのはは、ヴィヴィオに向こうの地球で作ってもらったとされるデバイスについて訊ねる。
「む、向こうの地球に忘れてきちゃった。アハハハ・・・」
なのはを相手にどこまで誤魔化せるか分からないが、それでもヴィヴィオはフェイトの言いつけを守った。
（あっ、ヤバっ、ヴィヴィオのデバイスについてなのはちゃんにヴィヴィオのデバイスについて口止めするのを忘れたわ・・・）
はやては家については寮に着く前になのはに念話で伝えたが、ヴィヴィオのデバイスについては伝え忘れた。
（で、でも、フェイトちゃんの説明から考えるにヴィヴィオのデバイスについては一人でも知っとる人が少ない方が良さそうやし、ここは黙っておこう）
しかし、ヴィヴィオのデバイスはもう一つの地球で製作されたデバイスであることから、フェイトが根回しをして公式にクリスがヴィヴィオの物になるまでは、あのボ○太くん人形がヴィヴィオのデバイスである事を知る人物が一人でも少ない方が無用の混乱を防ぐ手の一つだと思い、はやては、クリスが公になるまでなのはにも黙っている事にした。
その日の夕食はヴィヴィオのミッド帰還を祝う事にして、なのはとはやてが腕によりをかけて夕食を作った。
テーブルの上に沢山あるご馳走を前にヴィヴィオは目を輝かせるが、
「あっ、でもまだフェイトママが戻ってきていない・・・」
未だに査察部で事情聴取を受けているフェイトの身を案じた。
「フェイトちゃんが戻ってきたら、また作るよ。今日の主役はヴィヴィオなんだから、沢山食べて良いんだよ」

「うん、分かった」
ヴィヴィオは久しぶりの養母の心尽くしの料理を堪能した。
食後、なのはとヴィヴィオは入浴も共にした。
そして、疲れたのか入浴後、ヴィヴィオは直ぐに眠ってしまった。
「お疲れ様、なのはちゃん」
ヴィヴィオが眠ったのを確認したなのはにはやては冷えた麦茶が入ったコップを差し出す。
時間も時間なので、はやては今日、なのはの部屋に泊る事になっている。
「ありがとう。はやてちゃんもお疲れ」
なのはは自分よりも疲れているだろうはやてに労いの言葉をかける。
「ヴィヴィオとフェイトちゃんが戻って来て、やっと一段落ついた感じやな・・・・」
「うん・・それで、管理局は今後あの地球とはどう付き合うのかな？ティアナとはもう会えないのかな？」
「それは今の段階じゃあわからへん。防衛軍に渡した親書の内容にもよるな・・・・」
管理局がもう一つの地球を簡単に諦めるとははやてもなのはも思えなかった。
しかし、強硬手段を取れば管理局と防衛軍との間で戦争が起こるのは目に見えている。
そして、管理局現有戦力と艦の性能ではとても防衛軍には勝てない。
二人は管理局、そしてもう一つの地球との行き先に不安を感じながら夜は更けていった。
なのはたちが宿舎で夜の一時を過ごして居る頃、フェイトは未だに査察部で事情聴取を受けていた。
時刻は既に夜中の九時を過ぎている。

「本日の聴取は此処までです。後日も聴取を取ることがあるので、連絡は常に取れる状況にしておいてください」
「分かりました」
「こちらは執務官のデバイスです。問題は見つからなかったので、返却いたします」
　査察部の局員はフェイトにバルディッシュを返却する。
　バルディッシュを受け取り、査察部を後にするフェイト。
「あぁ～もう、何なんですか!?あの人たちは!!私の彼方此方を弄繰り回して、何もないと知ると、『役立たず』なんて言うんですよ!!酷いと思いませんか!?マスター!!」
　バルディッシュがグチグチとフェイトに愚直り始める。
「もう、今日の事を忘れたいので、この後は例のメンテナンスをお願いします!!アルコール度数が高い奴で浸からなければやってられませんよ!!」
（バルディッシュの性格も何だか変わったような気がする・・・）
　バルディッシュはフェイトに例のメンテナンスを頼んできた。
　そんなバルディッシュにフェイトはもう一つの地球に行ってから性格が変わった気がした。
「分かった、分かった。とりあえず、家に戻ろう」
　フェイトがミッドにあるなのはと同居している家に戻る為、本局にあるテレポート装置がある場所まで向かおうとした時、
「フェイト」
「あっ、リンディ母さん」
　リンディがフェイトに声をかけた。
「どうしたの？まだ仕事があったの？」
「いいえ、フェイトを待っていたのよ」
「私を？」
「ええ、貴女がミッドを留守にしている間の事で交信の席では話せなかったことがあるの」
「えっ？」
「それを踏まえて、今日は本局内にある私の別邸まで来て欲しいの」

「う、うん。分かった」
フェイトはリンディについていくことになったが、この後リンディから自分がミッドに居ない間に起こった出来事を聞いて衝撃を受けたのは言うまでもなかった。

百三十五話　ギンガからの手紙

もう一つの地球に救助されたフェイトたちを迎えに行き、ミッドへ帰還したヴォルフラム。

宇宙で死にそうな目に遭い命からがら地球防衛軍に救助され、そこで管理局や管理世界とのギャップを感じさせられる様々な体験をして、これまで管理局が観測していないもう一つの地球へ実際に来てみると、その地球が外宇宙からの侵略者に占領される経験をしたフェイト。

一生の内でもう二度と体験しないだろうと思われる超レアな体験をして、ようやくミッドに還って来たと思ったら、着いてから直ぐに査察部からの事情聴取がフェイトを待っていた。

しかし、査察部からの事情聴取はフェイトにとって予測の範囲だったのだが、流石に夜中まで続くのは予想外であった。

（ふぅ～やっと終わった・・・でも、査察部からの事情聴取を受けてみて、改めてギンガがミッドに戻ってこなくて良かったかもしれない）

自分たちよりも長く尚且つ防衛軍に入隊していたギンガがミッドに戻ってきていたら、きっと自分よりも厳しい事情聴取が行われていただろうと予測するフェイト。

そして、ようやく査察部の事情聴取から解放され、帰ろうとした時、フェイトを迎えに来たのは養母であるリンディだった。

夜も遅いと言う事で今日の夜、フェイトは本局内にあるリンディの部屋に泊る事になった。

リンディ曰く、自分がミッドを留守にしている間にどうやらミッドでは様々事があったみたいで、しかもそれは地球に居る時に管理局との間で行われていた交信の席では話せない内容みたいだ。

フェイトとしても自分がミッドに居ない間にミッドで何があったのか当然気になる。

本局内にあるリンディの部屋へと赴き、遅い夕食と入浴を済ませた頃。時刻は既に夜の十時半を過ぎており、流石に時間が遅いと言う事

で話は翌日に持ち越しとなった。
　ただ寝る前にバルディッシュはフェイトに例のメンテナンスを頼んできたので、
「ね、ねぇ、リンディ母さん」
「何かしら？」
「あ、あの・・お酒ってある？」
「えっ？お酒？」
「う、うん・・・・」
「フェイトってお酒を飲むの？」
「あっ、向こうの地球でちょっと飲んで・・・・それで、今日は疲れたけど色々あって寝付けそうになくて・・・・」
「あら？そうなの？それじゃあ・・・・」
　フェイトの頼みを聞いてリンディはアルコール度数が低いフルーツワインの瓶を差し出した。
「飲んでも良いけど、あまり飲み過ぎてはダメよ」
　リンディは二日酔いを心配してフェイトに忠告をいれる。
「う、うん。ありがとう」
　フェイトは自分が飲む訳ではないのだが、リンディは完全にフェイトが飲むものだと思っていた。
　まぁ、例のメンテナンス方法を知らなければ当たり前の事だろう。
　リンディからワインの瓶を受け取り、寝室にあてがわれた部屋に行くと、グラスにワインを注ぎ、そこにバルディッシュを浸ける。
「ふぅ～・・・・ん？やはり、地球のお酒とミッドのお酒では違いがありますが、今後の慣れで馴染んでいくでしょう」
　バルディッシュは地球産のお酒とミッド産のお酒ではやはり、感覚が異なると呟く。
　そんなバルディッシュの愚痴を聞きながら、フェイトは今後の予定を確認する。
　仕事に関しては、査察部がまだフェイトに事情聴取があるかもしれない事ともう一つの地球から還って来たばかりと言う事から当面、休職扱いとなっている。

（えっと、まずはナカジマ三佐とスバルにギンガからの手紙を渡して、エリオとキャロにミッドへ戻ってきたことを伝えて、シャーリーにヴィヴィオのデバイスについて登録手続きをしてもらって、アルフにリニスからの手紙を渡して・・・・）

こうして予定を確認してみると、色々とやる事が沢山ある。

（査察部からの事情聴取もまだ続くかもしれないし、リンディ母さんも何だか深刻そうな顔をしていたし、私がミッドに居ない間に何があったのかな？）

フェイトは自分が立てた予定以外にも査察部からの事情聴取の他に自分がミッドに居ない間の事を話そうとしたリンディの様子から何だか深刻そうであり、ミッドで何があったのか気になった。

翌朝・・・・

フェイトは洗面と着替え、朝食を終えると、

「それで、リンディ母さん。私がミッドに居ない間に何があったの？」

リンディに改めて自分がミッドに居ない間に何があったのかを訊ねた。

「実はね・・・・」

リンディはフェイトが留守にしている間、管理局で何があったのかを話す。

ボラー連邦との邂逅から武力制裁の決定とその失敗、それに伴いミッドにあるなのはとフェイトが一緒に住んでいる家、はやての家が暴徒たちの襲撃により半壊した事を伝えた。

ただ、ミノフスキー博士に関しては管理局内でもトップシークレット事項だったので、いくら義娘とは言え、リンディはミノフスキー博士については伝えなかった。

「・・・・」

リンディから事の次第を聞いたフェイトの顔は蒼白になっている。

まさか、自分がミッドに居ない間にもう一つの地球と似た事が起きていたなんてあまりにも予想外だ。

管理局がもう一つの地球の技術をあれだけ欲するのもただ単に優れているからと言う理由だけでなく、早急に管理局の艦船を揃えなけ

ればならなかった。
（だったら、理由を話してもう一つの地球に波動エンジンの技術供与をお願いすればよかったのに・・・）
（相手が管理外世界で非魔導師だから頭を下げるのは嫌だったのかな？）
余計な小細工をせずにもう一つの地球に対して頭を下げ、波動エンジンの技術供与を頼めばよかったモノを管理局はそれをせずにむしろもう一つの地球そのものを管理世界へ編入させようとした方針を立てたせいでもう一つの地球から不信感を買ってしまい、もう一つの地球からの波動エンジンの技術供与を管理局は自らの手で閉ざしてしまった。
「フェイトたちの引き渡しの時に防衛軍へ渡した親書が最後の頼みの綱だけど・・・」
「これまでの管理局の言動からみると私から見ても望み薄だと思う」
「やっぱり・・・」
ミノフスキーは現在も新型エンジンの研究を行ってはいるが、もう一つの地球からの波動エンジンの技術供与が行われればミノフスキーの研究成果を待つよりも早く、そして防衛軍の実績からも十分に信頼できる新型エンジンを管理局は得ることが出来る。
しかし、現状管理局が地球連邦政府、防衛軍から不信視されている現状、連邦政府と防衛軍に託した親書もあまり期待できないとリンディもフェイトもそう予測していた。
（ティアナ、貴女の選択はもしかしたら、正しかったのかもしれないよ・・・）
フェイトはミッドには戻らず、もう一つの地球に残ったティアナの選択は正しかったのではないかと思っていた。
だが、もう一つの地球に居る時、管理局の現状を知る由もなく、フェイトにはヴィヴィオが居たので、ミッドに戻らざるを得なかったのだ。
フェイトが管理局の現状を憂いても直ぐに改善は出来ない。
ひとまず、管理局の現状については今後の成り行きを見守るしかな

い。
　まずは自分がやるべきことはたくさんあるので、そちらを優先した。
「フェイトはまだ査察部からの事情聴取があるの？」
「うん、そうみたい。でも事情聴取がある時は査察部から連絡がくるみたい」
「そう・それで、今日はどうする？ここで休んでいる？」
「ううん、ちょっとやる事があるからクラナガンに行くよ。なのはにも会いたいし・・・・」
「分かったわ。ただ、気を付けてね。マスコミやボラーへの武力制裁失敗で殉職した遺族の中には貴女たち元機動六課の隊長陣に恨みを持っている人も居るから」
　フェイトたちがミッドに帰還した事を知っているのはマスコミ関係者と本局の管理局員のみで、まだ公式には発表されていない。
　それは査察部がフェイトからもう一つの地球について有益な情報をまだ得ていないので、そんな中でマスコミ連中にフェイトが付き纏われては事情聴取の邪魔になるので、管理局側がマスコミ側に圧力をかけてフェイトたちの帰還の情報について緘口令を敷いているのだが、それもあと数日もすればマスコミとの協定から解禁されるだろう。
　しかし、それでもスクープを狙うマスコミが居ないとも言えないのでリンディはフェイトに注意喚起したのだ。
　遺族に関しては言わずもがなだ。
「私服だし、髪型を変えて帽子や伊達眼鏡で変装をして行くよ」
　フェイトは変装をして、本局のテレポート装置を使用してミッドへと戻る。
　ヴィヴィオ同様、フェイトにとって久しぶりのミッドの街並みであった。
「さてと、まずはクリスに仕舞ってあるギンガからの手紙を回収しつつ、なのはに会いに行こう」
　ギンガとリニスの二人が記した手紙は万が一を考えてヴィヴィオ

のデバイスのクリスに収納してある。
　ただ、行く前になのはに連絡を入れるのをフェイトは忘れなかった。
「あっ、なのは？」
「えっ？フェイトちゃん!?」
　フェイトからの突然の連絡に驚くなのは。
「フェイトちゃん、査察部から事情聴取を受けたって聞いたけど大丈夫・・・？」
「あっ、うん。事情聴取は昨日の夜に終わって、今後は査察部からの連絡待ちなの」
「そうなんだ・・大変だったね」
「まぁ、予測できたことだから・・・それで、リンディ母さんから聞いたけど、なのはたちの方も大変だったね・・ごめんね、なのはたちが大変な時にミッドに居なくて・・・」
　なのはは査察部からの事情聴取を受けたフェイトに労いの言葉をかけるが、フェイトは自分がミッドに居ない間に大変な目に遭っていたなのはたちの方が自分より苦労したのだから、フェイトは大変な時になのはたちの力になれずに謝る。
「ううん、向こうの地球に居たんだもん仕方ないよ。それで、どうしたの？お仕事は？」
「なのはの顔を久しぶりに見ようと思って・・・仕事はまだ査察部からの事情聴取が完全に終わっていないから休職扱いだよ。それで、今からなのはが居る宿舎に行っても大丈夫？」
「うん、大丈夫だよ」
「それじゃあ、今から行くから」
　リンディからミッドの自宅が暴徒たちの手によって襲撃を受けた話を聞き、なのはが今教導隊の宿舎に仮住まいしている事を聞いていたので、なのはに連絡を入れた後、フェイトは地上本部ビルからタクシーで向かった。
「なのは!!」
「フェイトちゃん!!」

昨日のヴィヴィオ同様、なのはとフェイトはモニター越しではなく、久しぶりに再会し、抱き合う。
その後、なのはの部屋に向かう二人。
はやては朝食後に仕事があるので、既になのはの部屋には居なかった。
「あっ、ヴィヴィオ。おはよう」
「おはよう、フェイトママ」
フェイトは部屋に居たヴィヴィオに声をかける。
「お家の方は今、修理しているみたいなんだけど・・・・」
その後、なのははフェイトにもてなしのお茶を振る舞い、ミッドにある自宅についての現状を伝える。
「話は聞いていたけど、ミッドで暴動が起こるなんて・・・・」
「私自身も信じられなかったよ」
「はやての家も被害に遭ったって聞いたけど？」
「うん、はやてちゃんの家も滅茶苦茶になっていた」
「・・・・」
「私はこうして教導隊の宿舎に仮住まい出来たけど、フェイトちゃんは今後どうするの？」
「私は暫く本局にあるリンディ母さんの部屋に居るよ。それで、ヴィヴィオはどうするの？」
ヴィヴィオはボラー連邦への武力制裁失敗後に学校での虐めを不安視した教会側からなのはの故郷である第９７管理外世界の地球へ避難していた。
しかし、教会の強硬派により拉致されそうになった時、ジュエルシードの欠片でもう一つの地球に転移した。
運よくその地球にフェイトが居たからこそ、ヴィヴィオは無事にミッドへ・なのはの下に帰ることが出来た。
だが、もしヴィヴィオの転移先が、人が誰も居ない未開の地だったり、管理局がまだ認識していない世界だったらヴィヴィオは未だに行方不明のままだった。
それを踏まえるとヴィヴィオの居住先は安全が確保されている環

境でなければならない。
　そう考えるともう一つの地球は安全地帯だったのかもしれない。
「本局なら、知り合いの人も多いし、託児施設も整っているよ」
　フェイトはヴィヴィオの安全を考慮すると本局内に仮住まいする自分が引き取ろうかとなのはに提案する。
「うーん・そうしたいけど、私もヴィヴィオとの時間を過ごしたい。それに教会の方もカリムやシスター・シャッハたちがヴィヴィオを攫おうとした人たちを処罰したみたいだし・・・・」
　フェイトはもう一つの地球でヴィヴィオとの時間を過ごしたが、なのははモニター越しでヴィヴィオと面会するだけで、もう一つの地球が暗黒星団帝国に占領されてしばらくの間、なのははヴィヴィオとの交信も出来なかったので、なのはがヴィヴィオとの時間を取り戻したいと言うなのはの気持ちもフェイトには十分に理解できる。
「分かったよ、なのは。でも、無理はしないでね。何かあったらちゃんと相談して、私もはやてたちも協力するから」
「うん、分かったよ。フェイトちゃん」
　なのはとヴィヴィオに会ったフェイトはこっそりとクリスからギンガとリニスの手紙を取り出しなのはの部屋を後にする。
「さて、次はナカジマ三佐か・・・・」
　次にフェイトはギンガからの手紙をゲンヤに渡すべく行動する。
　もちろん、相手であるゲンヤにアポイントメントを取るのも忘れない。
　端末からゲンヤが部隊長を務めている陸上警備隊第１０８部隊へ連絡を取る。
「はい、こちら陸上警備隊第１０８部隊です」
「私は本局執務官のフェイト・Ｔ・ハラオウンです。部隊長のゲンヤ・ナカジマさんにお繋ぎして頂きたいのですが・・・・」
「確認いたしますので、承認コードをお願いします」
「承認コードは・・・・」
　フェイトは管理局で登録されている自身のコードを伝える。
「・・・確認しました。少々お待ちください」

「はい」
１０８部隊のオペレーターはフェイトの登録コードを確認すると部隊長のゲンヤに内線を入れる。
陸上警備隊第１０８部隊　部隊長室
ゲンヤは今日もいつもと変わらない日常を送っており、部隊長室にて書類作業をしていた。
そこへ、デスク上の電話が鳴る。
「ん？はい、部隊長室」
「ナカジマ三佐、本局のフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官よりお電話が入っておりますが、お繋ぎしてよろしいでしょうか？」
「えっ？ハラオウンのお嬢から？分かった、繋いでくれ」
ゲンヤが許可を出すとフェイトの顔が映し出される。
「お久しぶりです、ナカジマ三佐」
「ああ、久しぶりだな。ハラオウンのお嬢。いつミッドに戻って来たんだい？」
「昨日ミッドに着きました」
「それで何か用かい？」
「ナカジマ三佐とスバルに渡したい物がありまして、今から直接三佐に手渡したいのですが、ご都合はよろしいでしょうか？」
「俺とスバルに？」
「はい」
「・・・わかった。今は特に大きなヤマを抱えていないから大丈夫だ。スバルにも何か手渡すなら、スバルの奴も呼んでおくか？」
「スバルの予定が合えば良いですよ」
「分かった。それじゃあ、スバルには一応連絡をいれておく」
「はい、ありがとうございます。では、後ほど・・・」
「ああ、後でな」
フェイトとの連絡を終えたゲンヤは次にスバルの勤務先である港湾警備防災部特別救助隊の隊舎へ連絡を入れる。
「ナカジマ一士、陸上警備隊第１０８部隊のナカジマ三佐からお電話

です」
「えっ？父さんから!?」
　オフィスで事務仕事をしていたスバルに突然父であるゲンヤから連絡が来たことに驚くも、すぐに対応する。
「父さん、どうしたの？突然連絡を入れてくるなんて・・・」
「実はさっき、ハラオウンのお嬢から連絡があったんだ」
「えっ？フェイト執務官から!?」
「ああ、何でも俺とスバルに渡したい物があるみたいでな、今から俺の所に来るんだが、スバルは来れそうか？」
　陸勤務のスバルはゲンヤ同様、フェイトがミッドに戻っている事を知らなかったのでゲンヤからフェイトが自分に渡したい物があると言う事に驚く。
「上司の人に話さないと分からないかな？」
「だったら、お前さんの上司にはこっちで話を通しておく」
「分かった。ありがとう」
（フェイトさん、ミッドに戻っていたんだ・・・）
（でも、あたしと父さんに渡したい物って何だろう？）
（向こうの地球のお土産かな？）
　つい最近までもう一つの地球に居たフェイトがいつの間にか戻っており、自分に渡したい物があると言う事は必然的に考えて自分たちにもう一つの地球土産を渡すためだと思った。
　スバルとは機動六課の時に上官と部下の関係であったし、ゲンヤの祖先は元々地球出身者であった為、地球と無関係というわけではない。
　フェイトが一体自分たち親子に何を渡すのか分からないが、渡す物があるならばそれを受け取らない選択はスバルにはなかった。
　ゲンヤがスバルの上司に話をつけてくれ、スバルはゲンヤが居る陸上警備隊第１０８部隊の隊舎へと向かう。
　スバルが陸上警備隊第１０８部隊の隊舎へ向かっている最中、フェイトはスバルよりも先に陸上警備隊第１０８部隊の隊舎に到着した。
　ロビーの受付にて、

「すみません。先ほど電話を入れたフェイト・T・ハラオウンです。ゲンヤ・ナカジマ三佐に面会の約束をしていたんですけど・・・？」
フェイトは受付係に自分の身分証明書を提示してこの後でゲンヤと会う約束がある事を伝える。
「少々お待ちください」
受付係は内線でゲンヤにフェイトが来たことを伝える。
「確認しました。ナカジマ三佐は部隊長室でお待ちしております」
「分かりました」
受付係からゲンヤの居場所を聞いたフェイトはゲンヤが居る部隊長室へと向かった。
部隊長室のドアをノックすると、中からゲンヤの返答があり入室する。
「失礼します。ナカジマ三佐、お久しぶりです」
「おう、お嬢。久しぶりだな」
ゲンヤは気さくそうな笑みを浮かべてフェイトを出迎える。
「スバルは来れそうですか？」
「ああ、スバルの上司と話をして、今こっちに向かっている」
「では、スバルが来るまで待ちましょう」
スバルが来るのであるならば、フェイトは二人一緒に手紙を渡したかったので、フェイトとゲンヤはスバルの到着を待った。

スバルが陸上警備隊第１０８部隊の隊舎に到着し、ゲンヤが居る部隊長室へ来ると既にフェイトは到着していた。
「あっ、フェイト執務官。お久しぶりです」
「うん、久しぶりスバル。その・・元気・・・？」
フェイトはティアナの事をスバルがまだ引きずっているかもしれないと思い声をかける。
「はい。ティアの事はもう気持ちの整理がついていますから・・・それであたしと父さんに渡したい物ってなんですか？」
「その前に、事前に忠告を入れるよ」

「忠告？」
「それはどんな？」
「これから渡す物を見ても決して口外しないと約束してください」
「えっ？それってそんなにヤバい物なんですか？」
「まぁ、ある意味では・・・」
　てっきりもう一つの地球からの地球土産かと思っていたのだが、フェイトから事前に忠告を入れられ、しかも『ある意味でヤバい物』と言われた。
「お嬢、それは一体何なんだ？事と次第によってはスバルを退出させる」
　ゲンヤはフェイトの話を聞いてスバルに火の粉がかからないように対処しようとする。
「父さん・・・」
「えっと・・お二人に渡したいものは手紙です」
「手紙？」
「誰からの？・・・・もしかして、ティアからですか？」
　もう一つの地球に居る知り合いと言えばティアナぐらいしか居ない。
　しかし、それだとスバルは分かるが何故ティアナがゲンヤに手紙を書くのか分からない。
「ううん、ティアナからじゃないよ」
「えっ？ティアからじゃない・・・？じゃあ一体誰だろう？」
　ティアナではないとすると一体誰の手紙かますます分からない。
「分かった。兎に角、誰からの手紙か口外しなければいいんだろう？」
「はい」
「スバルもいいか？」
「う、うん・・・」
『ある意味でヤバい物』の正体が手紙と言う事。
　そして、その手紙が誰から送られて来た手紙なのか、それを黙っているだけなら構わないと判断したゲンヤはスバルに確認をとると、スバルも口外しないことを納得してその手紙を受け取る事を了承した。

「それじゃあ・・・」
フェイトはバルディッシュに収納されていた二通の手紙をそれぞれゲンヤとスバルに手渡す。
二人は分厚い封筒を受け取り、早速裏を見て差出人を確認する。
「「っ!?」」
差出人の名前を見て二人は目を見開く。
封筒の裏には差出人の名前が書かれていた。
書かれていた名前は、『ギンガ・ナカジマ』と書かれていた。
「ギンガ・ナカジマ・・・だと・・・？」
「ギン姉からの・・・手紙・・・？」
「お二人が困惑するのも無理はありません・・・ですが、私はもう一つの地球でギンガに会いました・・・ギンガは生きていました」
「じゃ、じゃあ、なんでギン姉はフェイト執務官と一緒にミッドに還らなかったんですか？」
「その理由は多分、手紙書いてあると思うから手紙を見て」
「は、はい」
スバルとゲンヤはギンガからの手紙を読むために封筒を開ける。
封筒の中にはギンガが認めた手紙の他に何枚もの写真が入っていた。
そして、ゲンヤ宛ての封筒の中には何かの記憶媒体が入っていた。
記憶媒体についてはリニスがミッドの機械でも内部に記録されている画像や映像を見ることが出来るようにちゃんと対応できる物を製作してくれていた。
手紙には何故もう一つの地球へ行くことになった経緯から防衛軍の軍人になった事、
もう一つの地球にてある家族の養子入りをした事、
好きな人が出来た事、
そして、今回フェイトたちがミッドに戻る際、自分が戻らない理由も書かれていた。
「そっか・・ギン姉は向こうの地球で防衛軍の軍人になっていたんだ・・・」

「うん。私とティアナを助けた防衛軍の軍艦にギンガが乗艦していたよ・・・」
新暦７１年に起きた空港火災の時、フェイトはその火災事故で被災したギンガを救助した事があり、艦長はギンガではなかったが、テリオスが攻撃を受け、そのテリオスを救助した防衛軍の艦にギンガが乗艦していた・・・
まさにギンガからの恩返しの様な形となってフェイトとティアナは助かったのだ。
「なぁ、ハラオウンのお嬢」
「なんでしょう？」
「ギンガが好きになった奴ってどんな奴だったんだ？」
ゲンヤはやはり、父親として娘の恋人が気になるようだ。
「えっと・・・とても良い人ですよ」
フェイトは良馬の事についてお茶を濁すかのように言う。
実際にスバルはモニター越しとは言え、会っているのだが二人が既に肉体関係をもっている事を知っているフェイトとしてはどうしても二人の行為を何度か覗き見してしまった事もある為かその印象が強くてあまり詳しくは語れない。
「それにしてもあの時の執務官の野郎がやはり全ての元凶か・・・」
ギンガの手紙には記録媒体にはブリッツ・キャリバーがあの時の映像を記録していると記載されていた。
ゲンヤにしてみればギンガの名誉を回復できる証拠を手に入れたが、それはギンガの生存を世間に知らせる事にもつながり、口惜しい。
しかもあの時の執務官であるジュリオはクライスラーを指揮してもう一つの太陽系に向かい、通信ポッドの出鱈目な情報を信じて太陽か木星本星に艦ごと突っ込んで殉職している。
本局は体裁を気にしてクライスラーは事故により沈んだと発表をし、指揮官であるジュリオは名誉の殉職となっているので、その事実がギンガの名誉回復を更に困難としている。
「それにしてもギン姉はどうしてミッドに戻ってこなかったんでしょう？・・・それに生きていたなら交信の席に出てくれても良かったん

じゃあ・・・」
　スバルは何故、ギンガがここまで自分の生存を隠したがるのか不思議だった。
「それは多分、ギンガはスバルたちに負い目を感じていたんじゃないかな？」
「負い目？」
「うん。もし、ギンガがあの地球に私やティアナと同じ時期に行っていたら、きっと私たちと一緒にミッドに戻って来ていたと思う。でも、ギンガがあの地球に行ったのはもう二年くらい前・・・その間に色んなことがありすぎたんだと思う・・・その・・恋人も出来たし・・・」
「・・・」
　ゲンヤとしてはギンガが生きていた事は嬉しかったが、もう一つの地球と交流がないことからギンガと会うことは事実上不可能であり、更に恋人も居るので、ゲンヤとしては複雑な心境だった。
「でも、ギンガを恨まないであげて・・ギンガがもう一つの地球に来た時、もう一つの地球は外宇宙からの侵略で地球人が絶滅寸前まで追い込まれていて、その翌年復興したばかりの地球は別の星間国家から侵略を受けて何度も死にそうな体験をしたんだ・・私も救助される時に経験したけど、あの時の体験はＪＳ事件の時の比じゃなかった・・それをギンガは何度も経験していたんだよ」
　フェイトはゲンヤとスバルにギンガがもう一つの地球で管理局では考えられないくらいの修羅場をくぐってきた事を告げ、それぐらいの修羅場を経験したのだから、彼女がもう一つの地球で幸せになってもそれを恨まないで欲しいとギンガを弁護した。
「そんな、あたしはギン姉を恨むなんて・・・」
　ティアナでさえパルチザン活動で顔にあんな傷を残した戦いがあったのだから、あの世界に置ける修羅場がどんな凄惨な戦いが繰り広げられたのか容易に想像が出来る。
　そんな世界の修羅場を何度も潜り抜けてと言うのだからそれ相応の幸せを得る権利はギンガにだってある。
「写真を見ると、確かにギンガの奴はもう一つの地球で楽しそうに過

ごしている事が分かるな・・・」
　同封されている写真には　まほろばの艦内で撮ったと思われる写真
　月村家の人たちと撮った写真などがあり、その写真に写るギンガはどれも楽しそうに笑みを浮かべている。
　そんな中で、ゲンヤとスバルが反応した写真があった。
　それは向こうの地球におけるギンガの引き取り先である中嶋家の皆と一緒に撮った写真だった。
「クイント・・・？」
「母さん？」
「あっ、その人は向こうの地球でのギンガの家族の人たちだよ」
　フェイトが二人に補足説明を入れる。
「向こうの地球には何人かのそっくりさんが居るんだよ・・・ほら、この人なんて私とはやてにそっくりでしょう？」
　フェイトは　まほろば　で撮られた写真の中からフェリシアとディアーチェの写真を二人に見せる。
「た、確かに・・・髪や目の色を除けば八神の奴にそっくりだ・・・」
「この人は青い髪のフェイト執務官だ・・・」
「そう、多分この人もスバルたちの母さんにそっくりな人なんだと思うの」
「まぁ、ここまで八神やお嬢にそっくりな人が居るなら・・・」
　はやてや自分以外にもなのはとスカリエッティそっくりな人物も居たが、あまり向こうの地球の情報を与えるのは避けようと判断し、フェイトは二人には黙っていた。
　そして、ディアーチェとフェリシアの写真を見たゲンヤとスバルは中嶋加奈江が今は亡きクイントのそっくりさんであると判断した。
　しかし、中嶋加奈江が実は殉職したクイントの転生体である事実を知っているのは本人と良馬のみであった。
「それで、先に述べたようにギンガが向こうの地球で生きている事は内密にお願いします」
「それが気になったんですけど、どうしてですか？」

スバルはフェイトにどうしてギンガの生存を秘密にしなければならないのかを改めて訊ねる。
「その手紙に書いてあるように今のギンガは防衛軍の軍人なのは分かったでしょう？」
「はい」
「・・・昨日、私はミッドに還って来たのと同時に査察部からの事情聴取を受けました」
「査察部から？」
「はい。その際、向こうの地球について根掘り葉掘り聞かれました」
「えっ？もう一つの地球について？・・・・ですか？」
「防衛軍の艦に実際に乗って分かったし、スバルも何となくだけど察しているでしょう？防衛軍の艦と管理局の艦の性能の差を・・・」
「は、はい」
「管理局としてはやっぱり防衛軍の艦を接収ないし、同等の能力を有する艦を保有したがっている事は間違いない。でも、肝心のもう一つの地球の座標が分からない以上、もう一つの地球の情報を持っている人の情報は是が非でも欲しい筈・・・」
「なるほど、だから上層部連中は査察部を使って向こうの地球に滞在経験のあるお嬢を取り調べたのか・・・もう一つの地球の情報を得るために・・・」
ゲンヤは何故フェイトが査察部から事情聴取を受けたのかすぐに察しがついた。
「はい。まぁ、それについてはミッドに着く前から予測していたので適当にあしらいました」
「あしらうって・お嬢もやるなぁ～」
「それで、もしギンガが私と一緒にミッドに戻ってきたら必ず査察部から事情聴取を受けていたでしょう・・・しかも今のギンガは防衛軍の軍人・・・」
「防衛軍の機密に関する情報をお嬢以上に持っている・・・か・？」
「・・・」
ゲンヤの問いにフェイトは頷く。

「私よりも防衛軍の情報を持っているギンガが取り調べを受けたら、防衛軍の情報をどうしても知りたい管理局は強引な手段でギンガを取り調べていたに違いありません」
「強引な手段って・・・・」
　スバルはフェイトの言う取り調べにおける『強引な手段』と言う部分に反応する。
「自白剤の使用や拷問による取り調べだよ」
「そ、そんなっ!?管理局がそんなことを・・・・」
「いや、ありえない訳じゃあねぇな」
　スバルは管理局が取り調べにおいて自白剤の使用や拷問をするなんて信じられなかったが、ゲンヤは否定しなかった。
「お嬢は知っているかい？今の管理局の実情を・・・・？」
「はい。リンディ母さんから聞いています」
「そうかい・・それなら話が早い。管理局の現状・・特に〝海〟の連中は強力な艦を欲している。そんな中、管理局の艦よりも強力な艦を保有している世界が見つかった・・しかも高町嬢ちゃんや八神の故郷と同じ世界だ。管理局としてはボラーの連中よりも組み伏せしやすいと思っているんだろう。そんな中でもし、防衛軍の情報を持っている奴がミッドに来たら確かにお嬢の言う通り情報を何としてでも引き出そうとするだろうな」
「でも、フェイト執務官は自白剤も拷問もされなかったんですよね？」
「スバル、お嬢は防衛軍の軍人じゃあない。それに・・・・」
　ゲンヤはチラッとフェイトを見る。
「・・・それに私は本局の統括官の義娘だし、六課の元隊長ではやてやなのはと親しいから手荒な事は出来なかった・・・からだと思うの」
「・・・・」
　フェイトがスバルに自分が拷問紛いな事情聴取を受けなかった理由を話すとスバルは顔を曇らせる。
「ギンガは防衛軍に入って、何度も修羅場を潜り抜けて管理局のそうした裏の部分を知ったんだと思う・・・それに防衛軍は〝海〟が密かに行ったダーティミッションの情報も持っているみたいだったから

・・・・」
「ギンガがまたミッドに戻って来るにはもう一つの地球とミッドが交流を持つ事と、管理局のこうした体質を改善しないとギンガはミッドに戻れないと思う」
「・・・・」
　ギンガがミッドに持ってこない理由と、もしギンガが戻る為の条件をスバルに伝えても彼女は表情を曇らせたままだ。
　現状、今の管理局では難しい条件の為、いつギンガが再びミッドの地を踏めるのか不透明なのだからスバルが顔を曇らせるのも分かる気がする。
「だからナカジマ三佐、スバル、ギンガの事は秘密にして頂戴。ギンガの為を思うなら・・・・」
「そうだな。今はギンガの奴が生きていた事が分かっただけで十分だ」
「そ、そうだね・・・・」
「元ナンバーズの皆にもギンガの事は・・・・」
　スカリエッティの配下でＪＳ事件終息後に管理局からの司法取引を受け、ナカジマ家の養子入りした元ナンバーズのチンク、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディの四人はゲンヤからギンガの存在は語られていたが、その時は既に死亡していると伝えており、四人は今もギンガが死んでいると思っている。
　しかし、今回フェイトがギンガから手紙と写真を持って来た事から彼女がもう一つの地球で生きている事が判明した。
　だが、ギンガの事を思うと今はチンクたちにもギンガが生きている事は黙っておいた方が良いとフェイトは判断した。
「ああ。いつか、ギンガが居る地球と交流出来たらその時、改めてチンクたちにギンガを紹介しよう。スバルも良いか？」
「う、うん・・・・」
　フェイトの説明を聞いてゲンヤとスバルはギンガが生きている事を秘密にすることにした。
　その後、二人はフェイトに彼女が知る限り、向こうの地球に居るギ

ンガの生活や写真を見ながら会話に花を咲かせた。

百三十六話　デバイス登録手続き

ミッドへ還って来たフェイトは還って来て早々に査察部からの事情聴取を受ける羽目になったが、事前に予測をしていたフェイトはもう一つの地球の情報を極力削除していた為、査察部はフェイトからもう一つの地球に関して有益な情報を得る事が出来なかった。

査察部からの事情聴取を受けた翌日、フェイトはなのはに会いに行くついでにヴィヴィオのデバイスに収納されていたギンガがゲンヤとスバルに記した手紙を回収しつつ、その手紙を渡す為にゲンヤの下へと赴いた。

ゲンヤに訪問目的を伝えると、彼はフェイトがスバルにも用がある事を伝えると、スバルにも連絡をいれて自身が部隊長を務める陸上警備隊第１０８部隊の隊舎にスバルも呼んでくれた。

陸上警備隊第１０８部隊の隊舎にてフェイトはゲンヤとスバルにギンガからの手紙を渡した。

当然、二人は死んだと思われたギンガからの手紙に驚愕したが、ギンガが生きていた事実を知り嬉しそうであったが、彼女がもう一つの地球にいる事から再会するには難しい現状に複雑そうだった。

フェイトがゲンヤとスバルにギンガからの手紙を渡して居る頃、本局のある一室では、管理局の幹部たちが、査察部からフェイトの事情聴取報告を受けていた。

「こちらがハラオウン執務官の事情聴取報告です」

「うむ・・・」

コピーされた報告書に目を通す幹部たち。

しかし、その内容は幹部たちが望んだ結果ではなかった。

「なんだ!?この報告は!?」

「デバイスに何も記録されていなかっただと!?」

「どういうことだね!?」

幹部たちからの一喝に萎縮する査察部の局員。

「はっ、デバイスに何の記録がなかったのは、ハラオウン執務官により

ますと、かの世界はＡＭＡの環境下にあり、それがデバイスに影響したのではないかと言う事でして・・・」
「例えＡＭＡでデバイスが使用不可の環境下であるならば、カメラぐらいあるだろう。それを使用して何らかの情報を持ち帰るのが本局の執務官の職務ではないのかね？」
「は、はぁ・・・」
　幹部の一人は報告を持ち込んだ査察部の局員に愚痴る。
「左様、優秀な執務官だと思ったのだが、肝心なところで抜けている」
　幹部たちはフェイトがもう一つの地球でスパイ活動みたいな事をしていなかった事に不満をぶちまけていた。
「多少強引な方法を用いてでもハラオウン執務官に詰問するべきではなかったのかね？」
「皆さんもご存知でしょうが、ハラオウン執務官はあのハラオウン統括官の義娘であり、ロウラン提督とも深い関りがあります。それに彼女は局内・民間でも有名な人物故にあまり手荒なことは・・・」
　幹部の言った『多少強引な方法』と言う部分に査察部の局員は反論する。
「ふん、あの女狐どもか・・・」
　査察部の局員からの反論を受け、苦虫を噛み潰したように顔を歪める幹部局員たち。
「それで、次にランスター執務補佐官についてだが・・・」
「ランスター？どこかで聞いたファミリーネームだな？」
　幹部の一人はティアナのファミリーネームを聞いてどこかで顎に手をやりながら首を傾げる。
　しかも、この幹部は『ランスター』と言うファミリーネームをどこかで聞いたとまで言う。
「ランスター執務補佐官は元機動六課にてＦＷメンバーの一人だったみたいですが？」
　別の幹部はティアナがかつて機動六課所属の局員だったことからＪＳ事件後にティアナの名前を聞いたのではないかと訊ねる。
「いや、機動六課よりも前に・・・」

しかし、『ランスター』のファミリーネームを聞いたと言う幹部は機動六課がＪＳ事件を解決する前に『ランスター』と言うファミリーネームを聞いたと言う。
「うーん・・・あっ、そうか、思い出したぞ」
そして、ようやくどこで『ランスター』と言うファミリーネームを聞いたのかを思い出した。
「どこです？」
「役立たずの『ランスター』だ」
「役立たずの『ランスター』？」
「そうだ。かつて〝空〟の部隊の一つ、首都航空隊に所属していた一等空尉で・・・逃走した違法魔導師の追跡中に無様にも返り討ちにあって殉職した局員だ」
幹部の一人はティアナの兄であるティーダ・ランスターについて他の幹部たちに説明する。
「それで、そのランスター執務補佐官がどうかしたのかね？かの世界で死んだのか？」
「それならば、それはそれでランスター執務補佐官の件を口実にかの世界に賠償を求めてもいいのではないか？何しろ、将来を担う筈だった『優秀な』執務官候補が死んだのだからな」
「いえ、死亡はしていません」
「ならば、なんだ？」
「ハラオウン執務官の話ですと、ランスター執務補佐官はかの世界に残った様です」
「はぁっ!?」
「残った？一体何のために？」
査察部の局員からティアナがもう一つの地球に残留した事を聞いて声が裏返る者もいた。
「理由はこちらでも聴取したのですが、ハラオウン執務官もあまり詳しい理由は不明ですが、ランスター執務補佐官は退職届をハラオウン執務官に託しており、こちらから人事課へ提出し既に受理されています」

ティアナからの管理局への退職届はフェイトに託され、査察部の事情聴取を受けた時に査察部へ渡され、査察部から人事課へと渡り、受理されティアナは既に管理局を退職した事になっている。
「くっ、役立たずは、役立たずなりに死んで少しでも管理局の役に立っていればいいものを・・・・」
「そうですな、かの世界は暗黒星団帝国に占領されていたのだからな。暗黒星団帝国の奴らも存外役立っておらんな」
幹部たちはティアナが暗黒星団帝国の占領時に死んでくれていればソレを口実にもう一つの地球にクレームをつけることが出来たのだが、そのティアナが生きている以上、ティアナの死に対するクレームをつけることが出来ない。
ティアナを殺すことを出来なかった暗黒星団帝国に対しても役立たず呼ばわりをする幹部たち。
「やはり、役立たずの妹も役立たず・・でしたか・・・・」
本人が居ないからこそ、言いたい放題である。
しかし、そんな中、
「あっ、もしかすると・・・・」
ティアナにも役立たずの烙印が押される中、一人の幹部がある仮説を唱えた。
「どうかしましたか？」
「ランスター執務補佐官がかの世界に残ったのは、もしかすると意図的に残ったのではないだろうか？」
「意図的に？」
「何故？」
「先ほどの査察部からの報告から恐らくハラオウン執務官はミッドに還る事から防衛軍から監視されていた為にかの世界の情報を持ち帰る事が出来ない為にランスター執務補佐官はかの世界に残り諜報活動を行っているのではないでしょうか？」
「そして、その情報をハラオウン執務官へ密かに報告を送ると言う事か？」
「おそらく・・・・」

幹部たちはフェイトがもう一つの地球の情報を持ってこなかったのは、フェイトが防衛軍から監視されていた事から情報を得ることが出来なかったので、ティアナをもう一つの地球に残し、彼女に諜報活動を行わせる為だと勝手な解釈をした。
しかも好都合にティアナからの退職届は既に受理されている為、万が一にも防衛軍側にティアナの諜報活動がバレたとしても『その者は既に管理局を退職している』とティアナを簡単に切り捨てる事も可能だ。
「では、次回のハラオウン執務官の事情聴取にてその点について尋問していただけるかな？」
「承知しました」
最初の事情聴取の時、査察部の局員はフェイトにティアナがミッドに戻らなかった訳を当然聴取した。
しかし、フェイトは半ば曖昧な感じで答えた。
それがかえってティアナがもう一つの地球で諜報活動を行っているのではないかと言う憶測に繋がった。
諜報活動を知る人物は一人でも少ない方が外部に情報が洩れるリスクが少ないからだ。

査察部からの報告を受けて管理局の幹部たちが勝手な解釈の結論を出したその頃、フェイトは陸上警備隊第１０８部隊の隊舎を後にした。
「さて、次はエリオとキャロの二人にミッドへ戻って来た事を伝えないと・・・・確か二人はポルテに居るんだっけ？・・・・バルディッシュ、ミッドとポルテの時差は？」
「三時間差でミッドが早いです」
フェイトはバルディッシュにエリオとキャロが居るポルテの時差とミッドの現在時刻を照らし合わせる。
すると、そこまでの時差がなかったので、フェイトはこのままエリオとキャロの二人にミッドへ戻って来た事を伝えようと思い本局へ戻った。

エリオとキャロが自然保護官として赴任しているそのポルテにて、二人は今日もいつもと変わらない日を送っており、二人はキャロの使役竜であるフリードの背中に乗りパトロール任務を行っていた。
すると、本部から二人に通信が入る。
「エリオ・モンディアル二士、キャロ・ル・ルシエ二士、応答せよ」
「はい、こちらエリオ・モンディアル二士です」
「キャロ・ル・ルシエ二士です」
「本局より、二人に通信が入っている。至急本部へ帰還せよ」
「本局から？」
「なんだろう？」
「了解しました。ただちに帰還します」
エリオはフリードの手綱を引き、踵を反転させ本部へと戻った。
「でも、一体何だろうね、本局からの連絡って・・・」
キャロはいきなりの本局からの連絡に首を傾げる。
「ミッドで何かあったのかな？それとも勤務地の変更かな？」
エリオもやはり、本局から連絡に思い当たる節がない。
二人が本部へ戻ると、通信室へと案内される。
するとモニターに映し出されている人物の姿を見て、二人は目を見開く。
「っ!?」
「エリオ、キャロ、久しぶり、元気だった？」
「フェイトさん!!」
モニターに映っていたのはかつて所属していた部隊の上官であり、自分たちの後見人であるフェイトの姿であった。
「いつミッドに戻って来たんですか？」
「昨日だよ」
「フェイトさんも元気そうで良かったです」
モニター越しではあるが、エリオもキャロも久しぶりにフェイトと出会えて嬉しそうだ。
かく言うフェイト自身もエリオとキャロに出会えて嬉しそうだっ

た。
　エリオもキャロもポルテに赴任していた事からもう一つの地球との交信の席の出席回数が少なかったので、フェイトがもう一つの地球でどのような生活をしていたのか気になったので、早速フェイトに様々な質問をした。
「そう言えば、チラッと噂で聞いたんですけど、フェイトさんが居たもう一つの地球が一時、どこかの星の勢力に占領されたって聞いたんですけど、本当だったんですか？」
　地球が一時暗黒星団帝国に占領されている間、地球と管理局との間の交信が途絶えていた事はポルテでも噂程度で伝わっていた様だ。
「うん、本当だよ」
「えっ？大丈夫だったですか？」
「キャロ、フェイトさんが此処に居るんだから大丈夫だったんだよ」
「あっ、そっか」
「でも、もう一つの地球が占領されていたと言う事は色々と苦労があったんじゃないですか？」
「武装した兵士が街中に居て、情報規制や夜の外出制限があったけど、そこまで不自由な思いはしなかったよ」
「そうなんですか・・良かった」
「それで、占領された地球はどうなったんですか？」
「占領した勢力と和解したんですか？」
「もう一つの地球は防衛軍の手で解放されたよ」
「一つの世界を占領した勢力と戦って解放したんですか？」
「そうだよ。占領下の中で地球の人たちは自分たちの星を取り返すために必死に戦って、宇宙でも故郷を救うために戦っていたよ」
「・・・・」
　戦って解放した事にエリオとキャロは驚いたような、解放するには戦う方法しかなかったのかと複雑そうな表情だ。
「そう言えば、ティアさんは元気ですか？」
「フェイトさんと一緒にもう一つの地球に行きましたよね？」
　二人は話題を変えてフェイトと一緒に遭難してもう一つの地球に

救助されたティアナについて質問する。
「あっ、うん・・・ティアナの事なんだけど・・・」
フェイトは何とも言いにくそうな感じで口ごもる。
いずれ二人にはティアナの事を伝えなければならないと思ってはいたのだが、二人からティアナについて訊ねられると今ここで話さなければならない。
「何かあったんですか？」
「まさか、怪我をしたんですか？」
もう一つの地球が占領されたことからティアナが怪我をしたのかと思い、彼女を案じる二人。
「うーん・怪我はしたんだけど・・・・」
「えっ？」
「ティアさんは大丈夫なんですか!?」
「・・・実は、ティアナなんだけど・・・・」
「・・・・」
フェイトは言いにくそうに言うと、エリオとキャロはフェイトの様子からティアナが重傷を負ったのかと思い心配そうな表情を浮かべる。
「ティアナは地球が占領されている時に解放戦線に参戦したの」
「えええー!!」
「ティアさん、本当に戦争に参加したんですか!?」
管理局員である筈のティアナが地球の為に戦いそして負傷した事実に驚愕する二人。
「うん・・・それで地球解放後にティアナは無事に帰って来たんだけど、顔に傷を負っていて・・・」
「顔に傷・・・」
同性のキャロは顔に傷を負うことがどれだけショックな事なのか瞬時に理解した。
「それで、手術をすれば傷は消せるって診断だったんだけど、ティアナは敢えて傷を残すって言って傷を消さなかった」
「えええー!!何故ですか!?」

「ティアナが言うには傷を消してしまうと、自分が戦った事もその戦いで死んでしまった仲間も忘れる事になるから・・って・・・・」
「・・・・」
フェイトが伝えたティアナからの思いについて二人は分からない訳ではなかった。
自分たちにも機動六課での思い出がありその絆は今でも繋がっている。
「それとティアナの事でもう一つ、二人には言っておかないといけない事があるの」
「何でしょう？」
ティアナの顔の傷やパルチザン活動に参加した事よりも今からフェイトが言う事がむしろ本題とも言える。
「ティアナなんだけど・・・・ティアナはもう一つの地球に残ったの」
「えっ？」
フェイトの発言に二人は時間が止まったかのように固まる。
「えっ？残った？もう一つの地球に・・・・？」
「なんで・・・・？どうして・・・・？ティアさんが・・・・？」
二人はフェイトの言った言葉の意味を理解するのにわずかながらの時間を要した。
「フェイトさん、嘘ですよね？ティアさんが残った何て・・・・？ミッドに戻らなかったなんて・・・・」
「ううん・・・・エリオ、キャロ、残念だけど本当だよ。ティアナはミッドに戻らずに地球に残ったの」
「そんなっ!?どうして!?」
「そうですよ!!ティアさん、六課に居た時から執務官になりたいって・・・・六課を卒業して執務補佐官になってもうすぐで念願の執務官になれそうだったのに・・・・」
エリオとキャロにしれみれば当然と言えば当然の疑問で、何故ティアナがもう一つの地球に残ったのか理解できない。
「私もその点についてはティアナに聞いたよ・・・・でも、ティアナは防衛軍に助けられて短い期間だけど、航海の最中防衛軍の戦闘を見て、

もう一つの地球に来てから色んな見方が変わったんだと思う・ティアナが占領軍に対してパルチザン活動に参加したのもそれが一因じゃないかな？」
念願の執務官の道を蹴ってでももう一つの地球に残ったのだからティアナにはかなりの覚悟と理由があったのだろう。
しかし、その理由を二人はティアナに訊ねる事は叶わない。
それが二人にとっての心残りとなった。
だが、それはティアナもきっと同じ事だろう。
スバルにはモニター越しであるがちゃんと別れを伝える事が出来たが、それ以外の六課のメンバーには面と向かって別れを伝える事が出来なかったのだから・・・
エリオとキャロとの通信を終えたフェイトは、次にヴィヴィオのデバイスであるクリスを何とか公式の物にする為、シャリオに協力してもらおうと彼女と連絡を取ろうとした時、
「フェイト・T・ハラオウン執務官ですか？」
「はい、そうです」
「こちらは時空管理局・査察部の者です」
査察部からフェイトに連絡が来た。
（そう言えば、不定期に査察部から連絡が来るって言っていたっけ？）
（まだ、やることがあったのに・・・）
フェイトとしては水を差された気分だった。
「本日〇〇時に査察部へ出頭して下さい」
「は、はい。分かりました」
査察部からの出頭指示を無視する訳に行かなかったので、フェイトは渋々ながら指示された時間に査察部へ出頭した。

査察部へ出頭したフェイトは昨日と同じ取調室へと案内される。
「それで、今日は何を聞きたいのでしょうか？」
さっさと終わらせたかったフェイトは査察部の局員に今日の事情聴取の要件を訊ねる。
「では早速ですが、ランスター元執務補佐官がかの世界に残ったのは、

ハラオウン執務官、貴女の密命ではありませんか？」
「はぁっ!?」
　査察部の局員からの指摘にフェイトは思わず声が裏返る。
「貴女はランスター元執務補佐官にかの世界の諜報活動を行うように命令をだし、かの世界の情報を密かに受け取る算段を取っているのではないかと我々はそう認識しておりますが？いかがですか？」
「・・・・」
　あまりにも荒唐無稽な指摘にフェイトは絶句するし、頭を抱えたくなる。
　どういった解釈で自分がティアナにもう一つの地球での諜報活動を命じなければならないのか？
（この人は一体何を言っているの？）
（私がティアナに諜報活動を命令？）
（あまりにも馬鹿げているわ）
「お言葉ですが、私はランスターさんに諜報活動を命じておりません。彼女がかの世界に残ったのはランスターさん自身の意志です」
　ティアナは既に管理局を退職しているので、フェイトはティアナの事を『ランスターさん』と呼んだ。
　そして、フェイトはティアナがもう一つの地球に残ったのはあくまでもティアナ自身の意志であり、自分は決してティアナに諜報活動の密命を命じていない事を伝える。
　しかし、査察部の局員はティアナがもう一つの地球に残ったのは諜報活動であると主張し続ける。
　一方でフェイトは否定するので、水掛け論になりつつあった。
　それは夜まで続きフェイトとしてはまさに不毛な議論であり無駄な時間を費やす事になった。
　そして、時間が時間と言う事で深夜近くにようやく解放された。
「ホント、こんなことなら私もティアナと一緒にもう一つの地球に残れば良かったかな・・・？」
　こんなことを愚痴りながらフェイトは本局内にあるリンディの部屋に戻った。

査察部からの事情聴取報告は当然、管理局の幹部たちの下に伝えられた。
「ハラオウン執務官はランスター元執務補佐官の件については否定しました」
「そう簡単には認めないか・・・・」
「しかし、いつかはランスター元執務補佐官からの報告を受ける筈だ。しばらくはハラオウン執務官を泳がせておき、報告を受け取ったところを抑えるのだ」
「では、ハラオウン執務官には監視の目をつけておきます」
ティアナがもう一つの地球で諜報活動を行っていると信じ込んでいる管理局の幹部たちはフェイトに監視の目をつけることで、しばらくの間、フェイトを泳がせることにした。
翌日、フェイトは昨日の査察部からの事情聴取のせいで潰れてしまったヴィヴィオのデバイスの件でシャリオに相談しようとするが、何故か彼女と連絡をつけることが出来ない。
「あれ？シャーリーと連絡がつかない・・・・何かの任務中なのかな？」
「ねえ、リンディ母さん」
「何かしら？」
「シャーリーと連絡を取りたいんだけど、今シャーリーって何かの任務中なの？」
「えっ？シャーリーさんって、シャリオ・フィニーノさんの事？」
「うん。そうだよ」
「えっと・・・・彼女は今、重要な仕事をしている最中なんだけど・・・・」
「やっぱり、任務中だったんだ・・・・でも、何とか出来ない？もし、シャーリーがダメならマリエルさんでも良いんだけど・・・・」
フェイトはシャリオが無理ならば、マリエルでも構わないと言う。
なお、フェイトは六課時代にスバル経由でマリエルと知り合っていた。
「マリエルさんも実は今手が離せない状況で・・・・」
残念ながらマリエルもシャリオ同様、今は手が離せない状況下である事をフェイトに伝える。

マリエルもシャリオも現在、ミノフスキーの助手として新型宇宙エンジンの設計と製作に携わっており、その任務は管理局内でもトップシークレットであり、ボラーへの武力制裁が失敗し、戦力を一日でも早く回復させなければならない管理局にとって最重要任務なのだ。
フェイトが一体何の用があって二人とコンタクトを取りたがっているのかは分からないが、トップシークレットであるミノフスキーと深く関わっている二人を今は簡単にフェイトに合わせる訳にはいかなかった。
「二人が関わっている仕事って長引きそうなの？」
「そうね・私の口からはどのくらいなのかは分からないわね」
リンディ自身もミノフスキーの研究が一体いつになったらその成果が出るのか分からない。
マリエルとシャリオが通常の任務に戻れるのがいつになるのかは分からない。
（シャーリーもマリエルさんも今は仕事で無理・・・他に頼れそうな人は・・・あっ!!）
デバイス関係の知り合い二人が何らかの任務中で連絡が取れず、しかもいつになったら戻ってくるのかも分からない。
となると、ヴィヴィオのデバイスであるクリスの対応がいつになるのかが分からない。
ヴィヴィオも一日でも早くクリスを堂々と使用したがっている中で、いつになるのか分からないと言う返答はきっとヴィヴィオをがっかりさせる結果に繋がる。
そこで、フェイトはヴィヴィオが聖王オリヴィエのクローンである事と、リィンの誕生に関して聖王教会がバックアップした事を思い出し、クリスについても聖王教会がバックアップしてくれるのではないかと思った。
幸い聖王教会には、はやて経由でカリムやシスター・シャッハ、それにセインたち教会に引き取られた元ナンバーズのメンバーと知り合いが居るので何とかなるかもしれない。
そこで、フェイトはヴィヴィオに連絡をいれて彼女と共に教会へと

向かった。
「フェイトママ、どうして教会に行くの？」
ヴィヴィオとしてはもう一つの地球へ転移する切っ掛けが教会の強硬派の連中のせいだったので、これから聖王教会へ行くと言う事でちょっと緊張している様子だ。
なのはにもヴィヴィオを聖王教会へ連れて行く事を話したら難色を示す。
ただ、今日なのはにはどうしても外せない用事が入っていたので、フェイトたちと一緒に聖王教会へ行くことが出来なかったのも要因の一つだ。
フェイトはなのはを何とか説き伏せてヴィヴィオとこうして聖王教会へと向かっているのだ。
「その事なんだけど、ヴィヴィオのデバイスで、シャーリーやマリエルさんに頼もうとしたんだけど、二人ともお仕事が忙しいみたいで、連絡がつかなかったの・・・それで、教会でもデバイス技師は居るから、ヴィヴィオのデバイスも何とか出来ると思ってね」
フェイトはヴィヴィオに聖王教会へ行く目的を話す。
管理局のデバイス関係の知り合いであるシャーリーとマリエルと連絡が取れない状況下では管理局側でヴィヴィオのデバイスの登録が出来ない。
しかし、デバイスを保有しているのは何も管理局員だけではない。
聖王教会所属の魔導騎士たちもデバイスを保有している。
そして、その教会騎士たちが使用するデバイスの製作・メンテナンスを行う教会お抱えのデバイス技師が教会に居る。
そこで、フェイトはカリムに頼んでヴィヴィオのデバイスを公式の所有者にヴィヴィオを登録してもらおうと考えたのだ。
民間企業ではツテがなく、管理局側が要請したらその要請に従わなければならないからだ。
しかし、聖王教会で登録したデバイスならば管理局もそう簡単にクリスをヴィヴィオから没収することは出来ないだろう。
聖王教会に向かっている中、フェイトは自分たちが乗る車を尾行し

てくるサーチャーの存在に気づいた。
（サーチャーの気配？）
（・・・査察部のかな？）
（まさかと思うけど、まだ私がティアナに諜報活動を命令したと思っているのかな？）
（査察部って意外と暇なの？）
フェイトはそう思ったが、査察部としては大いに真面目でフェイトの動向を探っていた。
やがて、フェイトたちが乗る車が聖王教会のあるベルカ自治区へ入るとサーチャーの動きはピタッと止まる。
「むっ!?ベルカ自治区に入ったか!?」
「どうしますか？」
「やむを得ない。ハラオウン執務官がベルカ自治区から出てくるまで待つしかあるまい」
ベルカ自治区には聖王教会があり、その教会には魔導騎士や魔導師のシスターが大勢居る。
そんな彼らが自分たちの縄張りに管理局のサーチャーがうろついている事を知ったら、自分たちの縄張りを荒らされたと勘繰る可能性が高い。
と、言うのも管理局はボラーの武力制裁失敗から信用を大きく失墜し、更に人材も不足し、その人材不足を教会から騎士たちを派遣してもらうことでギリギリの活動をしており、今の管理局は聖王教会に対して強く出られない所がある。
管理局の力が落ち、教会が徐々に力を強めている状況下だからこそ、教会の強硬派が暴走したのだ。
（ん？サーチャーの追跡が・・）
（やっと諦めたのかな？）
ベルカ自治区に入るとサーチャーの追跡が消えた事により、フェイトは諦めたのかと思った。
しかし、まさか管理局側に聖王教会といざこざを起こす訳にはいかない理由がある事をフェイトは知らなかったでの、査察部がフェイト

の事を諦めた訳ではない事も知らなかった。
　聖王教会に着くとシスター・シャッハがフェイトとヴィヴィオを出迎えた。
「ヴィヴィオ、お久しぶりでございます。こちらの不手際でご迷惑をおかけして申し訳ございません」
　シスター・シャッハはヴィヴィオに深々と頭を下げる。
「でも、アレがあったから、私はもう一つの地球に行けて色んな出会いが出来たのは怪我の功名？でした」
「あ、あれ？ヴィヴィオ…なんだか口調が大人びましたね…」
　ヴィヴィオの返答にシスター・シャッハは戸惑った。
　戸惑っているシスター・シャッハを見てフェイトは苦笑する。
　あの世界に行って変わったのはティアナだけではなく、ヴィヴィオも成長していた。
「フェイト執務官もお久しぶりです。ヴィヴィオ同様、この度は大変でしたね」
「ううん、大変だったけど、私も貴重な体験をすることが出来たよ」
「そうですか…では、早速ご案内いたします。騎士カリムは執務室にてお待ちしております」
　シスター・シャッハの案内の下、フェイトとヴィヴィオはカリムが待つ執務官へと向かう。
「そう言えば、セインたちは元気？ちゃんとシスターをやれている？」
　フェイトはシスター・シャッハに聖王教会に引き取られたセインたちの近況を訊ねる。
「…あぁ～シスター・ディードとオットーは真面目なんですけど、シスター・セインは…」
　シスター・シャッハはセインの事を思い出して何かセインに思う所があるのか顔を歪める。
「セインが何かしたの？まさか、何か悪い事でも企んでいるとか？」
　まさかと思うがセインが何か良からぬことでも企んでいるのかとフェイトはシスター・シャッハに訊ねる。
「い、いえ…ま、まぁ、ある意味でフェイト執務官のおっしゃる通り

なんですけど・・・」
「一体何があったの？」
　もし、セインが何か良からぬことを企んでいるのであるならば、早急に対処しなければならない。
「そ、それが・・・」
　シスター・シャッハは重い口を開けるのかの様にフェイトに話す。
「最近になりまして新人のシスター・シャンテ・アピニオンと言う子を保護したのですが・・・」
「うん、うん」
「その・・・シスター・シャンテは元々無軌道な不良少女だったのですが、シスター・セインは馬が合ったみたいで、行動を共にする事が多くあるのですが・・・」
「うん、うん。それで？」
「その・・・よく掃除をサボったり、シスター・セインと一緒に悪戯をしたりしておりまして・・・」
「えっ？悪戯？」
「はい」
　先ほど、フェイトがシスター・シャッハに『セインが何か悪事を企んでいるのではないか？』と言う指摘について、シスター・シャッハはセインと新人のシスターであるシャンテがタッグを組んで悪戯をしていると言う。
「・・・」
　特に管理局へ通報されている様子はないので、人に大怪我を負わせた訳ではなく、教会内で対処できるレベルの悪戯なのだろう。
（シャッハ・・苦労しているんだ・・・）
　シスター・シャッハの様子を見てセインとシャンテの悪戯に手を焼いているのだろうと予測するフェイトだった。
　そして、カリムが待つ執務室に到着し室内に入る。
「フェイトさん、ヴィヴィオ、お久しぶりです。それにお元気そうで何よりです。そしてヴィヴィオ、この度は私たちの不手際で怖い目に遭わせてしまい申し訳ありません」

シスター・シャッハ同様、カリムもヴィヴィオに頭を下げ、強硬派の行いを詫びる。
「ううん、大丈夫だよ。フェイトママにも会えたし、他にも友達や面白いゲームも出来たよ」
強硬派に襲われそうになった時は怖かったし、もう一つの地球に転移されたばかりの時は心細かった。
しかし、運よくもう一つの地球にはフェイトが居り、再会することが出来た。
そして、桜花や紅葉と出会いＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬをプレイして楽しんだ他に地球を占領したはずの暗黒星団帝国の将校とＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬを通じて交流を深めた。
それに他に自分のデバイスも貰った。
もう一つの地球での生活はヴィヴィオにとって成長と共にどれも貴重な体験ばかりだった。
「それで、今日はどういった御用でしょうか？」
カリムはフェイトに今日、二人が聖王教会へ来た要件を訊ねる。
「その前にこの部屋の防諜対策は大丈夫？」
フェイトは要件を話す前にカリムへ執務室の盗聴・盗撮対策を訊ねる。
「それは問題ありません。毎朝、私とシャッハで確認していますから」
「そう・・実は・・・・」
防諜対策が出来ているとの事なので、フェイトはカリムに今日、聖王教会に来た目的を話した。
「ヴィヴィオにデバイスを・・・・」
「うん、向こうの地球で製作されたデバイスで、稼働もちゃんと出来たんだけど・・・・」
「何か問題でも？」
「そのデバイスが向こうの地球で製作された事が問題なんだよ」
「？」
カリムもシャッハも、ヴィヴィオのデバイスについて稼働も問題なく出来たのだから一体何が問題なのかと首を傾げる。

「それはどういうこと何ですか？」
　シャッハがフェイトに訊ねる。
「二人は私たちが先日までいたもう一つの地球についてどのくらい知っている？」
「確か、なのはさん、はやての故郷と似て非なる世界とか？」
「そして、管理局よりも強力な戦闘力を持つ軍艦が存在するとも聞きました」
「概ねそうだね・・・私もつい先日、私たちがもう一つの地球に居る間に管理局で起こった事は聞いたけど、武力制裁の失敗で艦艇と人員を多く喪失した管理局は高い技術力を有するもう一つの地球の技術を手に入れたがっているみたい」
「管理局の現状はこちらとしても情報を掴んでおりますが、確かにＪＳ事件の時以上に混乱していますね」
「そんな中でもう一つの地球で製作されたデバイスの存在を知れば、管理局はどうすると思う？」
「・・・管理局はヴィヴィオからデバイスを取り上げる可能性が高いですね」
「うん。私としても折角ヴィヴィオの為に作ってもらったデバイスが取り上げられるのは辛いから・・・」
「なるほど、それで教会のデバイス技師が製作した事にする・・と？」
「そう・・・それで頼めるかな？」
「分かりました。こちらで何とかいたしましょう」
　カリムはヴィヴィオの為にデバイスの登録に関して、教会側が用意したデバイスと言う形で登録手続きを進めてくれた。
　聖王教会としても強硬派の一件もあり、ヴィヴィオに対して負い目がある事から、ヴィヴィオ自身が自分の身を守る為にもデバイスを所持した方が良いだろうと判断した。
「それで、ヴィヴィオさんのデバイスと言うのは？」
「これです」
　ヴィヴィオはカリムにボ○太くん人形を見せる。
「えっ？これ・・・ですか？」

「はい」
「ず、随分個性的な生物の形をしていますね」
ボ〇太くん人形を見て若干顔を引き攣らせるカリム。
「では、早速登録手続きをいたしますね」
「お願いします」
「します!!」
こうしてカリムたち聖王教会の協力によりヴィヴィオのデバイスであるクリスの登録手続きが進められた。

百三十七話　予兆？

ギンガから託された手紙をゲンヤとスバルに渡し、次にヴィヴィオのデバイスを公式にヴィヴィオのデバイスにする為に動くフェイト。
しかし、知り合いのデバイス関係者は現在何らかの任務で忙しいとの事でフェイトは聖王教会のデバイス技師に頼る事にして聖王教会へと向かいカリムを通じてヴィヴィオのデバイスを公式登録してもらった。
「デバイスの登録が無事に終わりました。これで、このデバイスは正式にヴィヴィオのモノですよ」
「ありがとうございます!!」
ヴィヴィオはクリスの秘密が解禁され、正式にクリスが自分のデバイスとなった事に嬉しそうだ。
「そういえば、ヴィヴィオのバリアジャケットはどんなデザインなんですか？」
カリムはヴィヴィオのバリアジャケットのデザインが気になり、ヴィヴィオに訊ねる。
「フェイト執務官は知っているんですか？」
「うん。向こうの地球で稼働試験をした時にその場に居たし、模擬戦もしたから・・・」
模擬戦の相手はもっぱらギンガであったが、彼女の生存を知る者がミッドでは一人でも少ない方が良いので、誰がヴィヴィオの模擬戦の相手をしたのかは濁した。
フェイトが濁したことにより、カリムもシスター・シャッハもフェイトがヴィヴィオの模擬戦の相手だと思った。
「宜しければ見せていただいてもよろしいですか？」
「私も見てみたいです」
カリムもシスター・シャッハも気になる様だ。
「ミッドの環境での稼働も兼ねてここで起動させてもいいけど、二人とも驚かないでね」

「？」
ヴィヴィオの意味深なセリフに首を傾げる二人。
「セイクリッド・ハート!!セーット・アーップ!!」
ヴィヴィオがクリスを起動させるとデバイスとヴィヴィオの身体が光りだす。
そして、光が収まるとそこにはドレス甲冑を身に纏い大人姿になったヴィヴィオが居た。
「っ!?」
大人姿になったヴィヴィオを見てカリムもシスター・シャッハも目を大きく見開いて驚愕している。
「なっ・・なっ・・なっ・・・・」
「ど、どうしてヴィヴィオが・・・・レリックはないはずなのに・・・・」
ＪＳ事件において聖王のゆりかご内におけるヴィヴィオとなのはとの戦いはクアットロがミッド中に中継していたので、カリムもシスター・シャッハもヴィヴィオの大人姿・聖王化した姿を知っているのだが、その聖王化したヴィヴィオが目の前に・・・・デバイスを起動したら居るのだから驚かないはずがない。
「これは決して聖王化したわけじゃないよ」
フェイトが二人に補足説明をする。
「この姿は魔法や武術の練習をするのに適した姿だとデバイスが認識し、大人化したんだよ」
「は、はぁ・・・・」
「な、なるほど・・・・」
ヴィヴィオの周りには確かに同年代の魔導師の友人が少ない。
反対に高レベルの魔導師が大勢いるのだが皆ヴィヴィオよりも年上なので、フェイトの説明通りヴィヴィオが大人姿になった方が模擬戦や練習をするのに適しているのだろう。
「クリス、変身解除」
ヴィヴィオは大人姿から元の姿に戻る。
「大人の姿になっても私は私・・・・高町ヴィヴィオですから・・・・もうゆりかごもレリックもない。だから大丈夫です。それにクリスもちゃ

んとサポートしてくれますから」
（やはり、ヴィヴィオは精神的に大きく成長なされている・・・）
ヴィヴィオの言葉にシスター・シャッハは彼女の成長を感じた。
（もう一つの地球でヴィヴィオは成長したのですね）
カリムはヴィヴィオがもう一つの地球で貴重な経験をしてきたのだとここで感じる。
「なのはママに今の姿を見せたらきっとビックリするね」
「うん、多分ね」
聖王のゆりかごで聖王化したヴィヴィオと対峙したのは、なのはだったので、あの時の衝撃は今でも忘れてはいない筈なので、二人よりもきっと大きなリアクションをとってくれるだろう。
「カリム。ヴィヴィオのデバイスの登録の手続きありがとう」
「ありがとうございました!!」
「いえ、いえ、こちらとしてもお役に立てて良かったです」
「それじゃあ、私たちはこれで・・・・」
無事にデバイスの登録が終わり、フェイトとヴィヴィオはカリムの執務室を出る。
そして、教会の外に出ると、
「セイン姉様!!シャンテ!!覚悟なさい!!私のツインブレイズの錆にして差し上げますわ!!」
「「ヒエー!!」」
「あれはディード・・・・?」
「一体何があったんだろう?」
ディードが両手にツインブレイズを持って振り回しながらセインとオレンジ色の髪をしたシスターを追い回している姿があった。
そして、二人を追い回しているディードなのだが、何故か頭から赤ペンキを被っていた。
「もう!!セインが悪いんだからね!!シスター・シャッハを嵌める筈がよりにもよってディードを嵌めるなんて!!」
「仕方ないじゃん!!いつもはシスター・シャッハが来るはずだったんだから!!ディードがあそこを通るなんて予想外だったんだよ!!」

どうやらセインともう一人、ディードに追われているシスター・・・シャンテはシスター・シャッハに悪戯の為に何か罠を仕掛けたみたいだ。
シスター・シャッハがフェイトとヴィヴィオの二人を案内する役があったので、彼女はセインとシャンテの罠にかからなかったのだろう。
しかしその反面、二人が仕掛けた罠にかかってしまったのがシスター・シャッハではなくディードだったのだ。
自分を罠にかけたことに憤慨したディードは罠を仕掛けた二人をこうして追い回している。
（オレンジ色の髪・・・）
（ティアナ・元気かな・・・？）
シャンテをチラッとだが見たフェイトは彼女の髪の色を見てもう一つの地球に残ったティアナの姿が脳裏を過った。
フェイトとヴィヴィオが帰った後のカリムの執務室では、カリムとシスター・シャッハがまだ執務室に残っていた。
「ヴィヴィオは・・・」
「はい？」
「ヴィヴィオはもう一つの地球で貴重な体験をして大きく成長したみたいね」
カリムはヴィヴィオの言動を見て、ヴィヴィオの成長を口にする。
「はい。私もそう感じました。それにもう一つの地球にて、デバイスを製作する技術がある事にも驚きです」
「そうね。なのはさんやはやてと言う例外があるけど、基本あの世界は魔法が存在しない世界と認識されているものね。でも、それを差し引いてもヴィヴィオが力を振るう事に対する大切さを学んでいたことが貴重ですね」
「はい。大抵の場合、力を得た者はそれを使ったり、試したりしたいと思うものです。それ自体は特に問題はありませんし、極当たり前の衝動でしょう。ですが、その欲求が度を超えれば・・・・・」
「力に呑まれ、力を振るう為に闘いを望むようになってしまう・・・」

「はい。仰る通りです」
「ヴィヴィオにはあのまま強く、そして大きくなってもらいたいわね。万が一、億が一にも修羅道に堕ちたら大変ですもの」
「高町一尉、フェイト執務官がそんな事を許すとは思えませんが・・・」
「そうね・・・今はヴィヴィオの成長を嬉しく思うと同時に今後の更なる成長を期待しましょう」
窓の外には教会から去っていくフェイトとヴィヴィオの後姿があった。
ただこの時、カリムの執務室からディードに追いかけられているセインとシャンテの姿が死角になっていたが、
「シスター・シャッハ!!」
「どうしたのですか?オットー」
慌てた様子で執務室に入って来たオットー。
「それが、セインとシャンテが・・・」
オットーがカリムとシスター・シャッハに現在、中庭で起きている騒動を伝えることで二人の耳にセインとシャンテが引き起こした悪戯の件が入る事になった。
「まったくあの二人は・・・騎士カリム。すみませんが・・・」
「ええ、行ってらっしゃい」
カリムは微笑みを浮かべながらシスター・シャッハを見送る。
「オットー、行きますよ」
「は、はい」
シスター・シャッハはオットーを連れて慌ただしく騒動が起きている中庭へと向かった。
この後、セインとシャンテの二人がシスター・シャッハから大目玉をくらったのは言うまでもなかった。

フェイトとヴィヴィオがベルカ自治区から出ると案の定、管理局のサーチャーが追跡を再開した。
(サーチャー!?まだ諦めていなかったの?)
再び始まったサーチャーによる監視にフェイトは呆れた。

「なのはママの所に帰ったらまずはクリスの話をしようか？」
「えっ？」
「もうクリスはヴィヴィオのデバイスになったから、秘密にしなくても良いんだよ」
「うん。なのはママきっとびっくりするよ!!」
「そうだね」
　ヴィヴィオもフェイトもクリス、そして大人姿になったヴィヴィオを見た時のなのはのリアクションを今から想像するだけで笑みがこぼれた。
　そして、なのはが用を済ませて教導隊の宿舎へと戻って来た。
「ただいま・・って、フェイトちゃんもヴィヴィオも先に帰っていたんだ」
「うん。要件は案外直ぐに終わったからね。なのはが帰ってくるまでヴィヴィオと待っていたの」
「そうだったんだ。ありがとうフェイトちゃん」
「それで、なのは」
「ん？何？フェイトちゃん」
「今日、ヴィヴィオと聖王教会に行った用なんだけど・・・・」
「うん」
「実は・・・・」
　フェイトはなのはにヴィヴィオのデバイス・・クリスについて話した。
「ええー!!ヴィヴィオのデバイス!?」
　ヴィヴィオはなのはにもう一つの地球でデバイスを貰ったことは管理局との交信の際に話していたが、没収を恐れたフェイトはヴィヴィオに登録が終わるまではクリスの事は秘密にするように言ってあった。
　それはなのはに対しても例外ではなく、ミッドに戻ってきた時、なのはからクリスの事を訊ねられた時、ヴィヴィオはもう一つの地球に忘れてきたと伝えたが、今日正式にクリスがヴィヴィオのデバイスである登録が済んだのでその秘密も解禁となった。

「本当なの!?ヴィヴィオ」
「うん。黙っていてごめんなさい」
「なのは、ヴィヴィオを責めないであげて。ヴィヴィオにデバイスの事を黙っているように言ったのは私なの」
「どういうことなの？」
「なのはは、クリス・ヴィヴィオのデバイスがもう一つの地球で作られたことは知っているよね？」
「う、うん」
「私はミッドに還る前、もし管理局がクリスの事を知ったらヴィヴィオからクリスを何かしらの理由をつけてヴィヴィオの手から没収すると考えたの」
「そんなっ!?管理局がそんなことを・・・」
「『しない』と言い切れる？」
「・・・」
　フェイトの問いになのはは『ない』と言い切れなかった。
　フェイトはもう一つの地球に居る間に管理局が仕出かした通信ポッドに小細工をした事や勝手に太陽系に次元航行艦を派遣した件を見てフェイトはこの時から管理局に対して不信感を抱いていたのかもしれない。
　ミッドに戻ってきたら管理局がボラーへの武力制裁の失敗により多くの艦船と大勢の人材を失っていた事を知りフェイトは自分が取った対応が間違いではなかったことを改めて感じた。
「話を戻すね」
「うん」
「ヴィヴィオのデバイスを守る為にヴィヴィオにはデバイスをもう一つの地球に忘れたと言う事にして秘密にして、今日、聖王教会に行って、教会の名前でクリスの登録をしたの」
「そう・だったんだ・・・」
　フェイトの言う事も分からない訳ではない。
　実際にフェイトの問いに否定できなかったし、武力制裁の失敗後に起きたデモに関しても心無い言葉を遺族から投げられた。

フェイトの行動全てを否定することも出来ないなのはであった。
「でも、これでクリスは正式にヴィヴィオのデバイスになったから、もう秘密を解禁しても問題ないと判断したから、こうしてなのはに話したんだよ」
なのはもフェイトの話を聞き、元々ヴィヴィオがデバイスを手に入れたからと言って怒るつもりは毛頭なく、ただ驚いただけだ。
「それで、ヴィヴィオのデバイスはちゃんと稼働するの？」
「その点は問題ないよ。もう一つの地球で何度も稼働したし、教会でも稼働したばかりで、問題なく稼働出来るよ」
「へぇ～そうなんだ・・・ねぇ、ヴィヴィオ。ちょっと見せてくれる？」
なのははヴィヴィオにクリスを稼働させてと頼む。
そこで、ヴィヴィオはなのはのリクエストに応え、クリスを稼働させる。
勿論、ヴィヴィオの姿はバリアジャケットを身に纏った大人姿であった。
大人姿になったヴィヴィオを見てなのはが声を上げて驚いたのは言うまでもなかった。
「ふぅ～びっくりしたよ。ヴィヴィオがまさか大人の姿になるなんて・・・」
ようやく落ち着きを取り戻したなのはは一息ついてクリスを稼働したヴィヴィオについての感想を述べた。
「カリムとシスター・シャッハにも説明したけど、大人の姿になったからと言ってあの時みたいに聖王化した訳じゃなくて、大人の姿の方が練習しやすいって言うだけだから大丈夫だよなのは」
「う、うん。わかった」
なのはの了解も得てヴィヴィオはバリアジャケットを解除した後、元の姿に戻った。
「それじゃあ、私はまだやる事があるから」
「あれ？お仕事なの？確かしばらくの間休職扱いって聞いたけど？」
「個人的にやることがまだあるんだよ。それじゃあまたね」
「う、うん・・・」

（なんだろう？個人的にやることって・・・・）
なのははフェイトが仕事ではなく、個人的にやる事に少々の興味が沸いたが、フェイト個人がやることなので、首を突っ込むのは野暮だと思い深くは突っ込まなかった。
ギンガからの手紙、エリオとキャロの二人に帰還した報告、ヴィヴィオのデバイス登録が終わり、あとはアルフにリニスからの手紙を渡すだけとなったフェイト。
アルフは今、海鳴市にあるハラオウン家に居るので、渡航許可を得なければならない。
フェイトが本局に戻り、第９７外管理世界への渡航許可を申請したら、やはり査察部からの圧力があったのか第９７管理外世界への渡航許可は下りなかった。
（やっぱり、そうなるよね・・・・）
未だに査察部からの事情聴取が終了していない為、他の世界への渡航許可なんておりる訳がないと思っていたがこれではアルフに手紙を渡す事が出来ない。
（いっそ、アルフをミッドに呼ぼうかな？）
自分が行けないのであるならば、手紙を渡す相手であるアルフを呼ぼうかと思ったフェイト。
そこで、海鳴市にあるハラオウン家に連絡をとった。
モニターに映し出されたのはクロノの奥さんであるエイミィだった。
「あっ、エイミィ」
「えっ？フェイトちゃん!?」
エイミィはモニターに映し出されたフェイトの姿を見て驚く。
「ミッドに戻っていたの!?」
「うん。少し前に・・・ねぇ、エイミィ。アルフ居る？」
「アルフ？居るよ、ちょっと待ってね。アルフ!!」
「ん？何だい？エイミィ」
「フェイトちゃんがミッドに戻って来たよ!!」
「えっ!?ホントかい!?」

エイミィがアルフを呼ぶと、アルフは物凄い勢いでモニターの前に現れる。
「フェイト!!」
「アルフ・久しぶり」
「うん!!フェイトこそ、元気だったのかい?もう一つの地球じゃあ窮屈な事や酷い目に遭わなかった?」
「大丈夫だよ。向こうの地球でも色んな事があって貴重な体験だったよ」
「フェイトちゃん、アルフに何か用があるみたいなんだけど・・・・」
「えっ?そうなのかい?フェイト」
「うん。アルフに渡したい物があるんだけど・・・・」
「あたしに?」
「うんそうなの・・それで、海鳴に行ければ良いんだけど、ちょっと事情があって渡航許可がおりなくて・・・・」
「えっ?どうして?」
「査察部が私に色々と事情を聞きたいみたいで・・・・」
「査察部が・・・・?」
「そうなの。それで、海鳴に私が行けないからアルフ、面倒かもしれないけど、ミッドに来てもらえるかな?」
「分かったよ。フェイト」
アルフがミッドに行き、フェイトが自分に渡したい物があるが、肝心のフェイト自身が査察部から睨まれているので、アルフが居る第97管理外世界への渡航が出来ないので、アルフに来てもらうことにした。
そして、アルフもフェイトの現状を理解してミッドに来ることを了承した。
アルフがミッドに来ることでリニスからの手紙を渡す件が解決しようとする中、
「アルフ、すまないがミッドには僕が代わりに行こう」
クロノがアルフの代わりにミッドに行くと言う。
「えっ?・クロノ!?どうして海鳴の家に?」

フェイトは海鳴にあるハラオウン家にクロノが居た事に驚く。
「長期の休暇をとったんだ。それで、エイミィとアルフがフェイトと話しているのを見てね・・・」
「そうなんだ・・・それでアルフに代わってクロノがミッドに来るって話だけど、休暇中なのにわざわざミッドに来てもらっていいの？」
「ああ・・・フェイトがもう一つの地球でどんな体験をしたのか話を聞いてみたいからね」
「私は別に構わないけど・・・アルフは大丈夫？」
「あたしも別に構わないけど・・・」
アルフも使い魔の自分よりも管理局の提督であるクロノならば、第97管理外世界からミッドに行くのも手続き等は早いだろう。
それにアルフ本人もクロノがミッドに行く事に対して了承しているので問題はなさそうだ。
こうしてリニスからの手紙の件はクロノがアルフの代理でミッドに来ることになった。
「それでなんだが、フェイト」
「なに？」
「僕がミッドに来る事は母さんには内緒にしてくれないか？」
「えっ？どうして？」
「休暇中に母さんと出会うと色々と付き合わされたり、事務仕事をやらされたりするかもしれないからね」
「あっ、うん。分かったよ」
人材不足となっている管理局では上層部の仕事は更に大変そうであり、リンディはちゃっかりしている所があるので、クロノがミッドに来ると知れば彼の言う通り、休暇中でも何かしらの仕事を頼みそうである。
クロノの現状とリンディの性格を知っているフェイトだからこそ、彼の言う通り、クロノがミッドに来る事を黙っている事にした。
フェイトはクロノが言う、休暇中だがリンディに知られると仕事を手伝われそうだと言う言葉を信じたが、クロノ本人としてはリンディの件もあるが、フェイトからもう一つの地球での生活や出来事を直接

聞きたいと言う事の他、母であるリンディに若干の不信感を抱いているので彼女とあまり顔を合わせたくないと言う思いもあったのだ。
　フェイトとの通信を終えたクロノは、
「アルフ、すまなかった」
　アルフに謝罪した。
「えっ？」
「アルフもフェイトとモニター越しではなく、直接会いたかっただろうが、何だかが僕が横入りした感じになってしまって・・・・」
「いや・・あたしは・・・・フェイトがもうミッドに居ると分かったならこの後、フェイトと直接会う事もあるだろうから、大丈夫さね。あっ、ただ、フェイトはあたしに何かを渡すつもりだったらしいんだ」
「フェイトが？」
「ああ、だから、フェイトからの預かり物を忘れたり落としたりしないでおくれよ」
「ああ、分かったよ」
　アルフもクロノと一緒に行けば早いのだが、管理外世界からミッドの渡航の手続きが二人だと時間がかかる。
　ましてやアルフは使い魔なので、通常の人よりも色々と手続きが面倒なのだ。
　その反面、クロノは休暇中とは言え現職の管理局の提督なので、クロノとアルフでは渡航手続きにかかる時間が違ったのだ。
　それから数日後、本局にクロノの姿があった。
「あっ、クロノ」
　事前に待ち合わせ場所と日時をクロノはフェイトに伝えていたので、二人はすんなりと合流することが出来た。
　合流した二人は本局内にあるカフェに入った。
　そのカフェは個室タイプのカフェだった。
　本局内にあり、個室と言う事で管理局の幹部局員もよく使用している。
　しかもその為かこのカフェは防諜対策がなされている。
　恐らくこのカフェでは、これまで幹部局員同士の内密な会談も行わ

れている事だろう。
「まずは、無事に帰って来てなによりだ。向こうの地球での生活はどうだった？大変だったか？」
「いろんなことがあったけど、どれも貴重な体験だったよ。それに大変だったのはクロノも同じでしょう？・・・・リンディ母さんに聞いたよ。私がミッドに居ない間に何があったか・・・・」
「そうか・・・・」
「うん。私も防衛軍の戦艦に乗って戦闘を経験したけど、あの時は管理局じゃあ考えられないと思った・・・・だけど、リンディ母さんから話を聞いた時にクロノもあの時と同じ状況で戦っていたんだと思ったよ」
「あの時の事はまるで悪夢のような時間だった・・・・一分一秒が物凄く長く感じた・・・・そして僕も防衛軍の軍人たちはあのような体験をしていたのだと感じ、彼らの強さを実感したよ・・・・それで、フェイト」
「ん？何？」
「向こうの地球と管理局・・・・この二つを比較してどう思った？」
「えっ？」
「もう一つの地球は何度も侵略を受けながらも必死に戦い勝って来た・・・・例え地球本土が占領されてもだ・・・・防衛軍の軍人・・いや、地球の人たちは決して諦めなかった。それはただ単に優れた技術力を持っているだけではないと僕はそう思う」
「そうだね・・・・でも、元々の強さはきっともう一つの地球が絶滅寸前まで追い込まれた環境じゃないかな？」
「ん？どういうことだ？」
「九死に一生を得ると人生観が変わるって聞いたことがある。もう一つの地球はまさに九死に一生を得える事によってメンタル面が強くなったんじゃないかな？」
「ならば、組織も同じなのかもな・・・・」
「えっ？」
「戦いで負けることで新しい時代、新しい組織として改革が可能となるんじゃないか？」

「でも・それって・・・・」
「分かっている。負ける相手はちゃんと選別しなければならない。ボラー連邦やガトランティスの様な思想の持主には絶対に負けられない。その理由は分かるだろう?」
「う、うん・・・・」
「しかし、地球連邦政府なら・・・・防衛軍ならば・・・・」
「クロノ・・・・それって・・・・」
クロノの発言は地球連邦政府・・・・防衛軍に戦争を吹っかけて負けようと言う事に聞こえる。
「分かっている。管理局の・・現職の提督が口にして良いことではないことぐらい・・・・だが、ボラー連邦やガトランティスと比べてももう一つの地球は世論を反映しうる理性ある世界だと思わないか?」
「・・・・」
フェイトも防衛軍と管理局が戦争をした場合、現在の管理局の戦力では防衛軍に勝てない事はミッドに戻って来たばかりのフェイトも分かる。
ただ、防衛軍が経験した過去の映像でもヤマトらの防衛軍艦艇がガトランティス本土を砲雷撃して壊滅させた事、
防衛軍が管理局の次元航行艦の残骸を有している事、
暗黒星団帝国の本土も壊滅させた事、
これらの事から防衛軍を相手にする場合、匙加減も必要であると同時に思った。
意固地になり、徹底抗戦をすればミッドが灰燼に帰すだろうし、本局にもショックカノンとミサイルの雨どころか、波動砲が撃ち込まれる可能性だってある。
「・・・・クロノ、少し疲れているみたいだね」
これまでのクロノならば決してこんなことを口にすることはしないし、管理局の破滅なんて望むわけはなく、むしろ破滅を防ぐ側に立つ筈だ。
機動六課設立時に後見人の一人に立候補したのもただはやてと付き合いが長いと言う訳ではなく、カリムの予言を信じはやてと共に管

理局の崩壊を防ぐ為だ。
　それが今では何だか病んでいるようにも見える。
「そうかもな・・・」
　クロノは力なく答える。
「・・・そう言えば、ランスター執務補佐官やヴィヴィオはどうしている？」
　クロノは話題を変えようと、フェイトと共にもう一つの地球に行ったティアナとヴィヴィオについて訊ねた。
「あっ・うん、ヴィヴィオも私と同じ元気で、デバイスも貰ったの」
「デバイス？もう一つの地球でか？」
「うん。もっとも表の書類上では聖王教会での製作になっているけどね」
　フェイトは既にクリスが聖王教会で製作したデバイスになっている事と義兄であるクロノだからこそ、クリスが本当はどこで製作されたデバイスであるのかを話した。
「そ、そうか・・・しかし、もう一つの地球は僕たちが知っている地球の異なる未来の世界とは言え、デバイスを製作する能力もあるとはな・・・」
　クロノも本来魔法が存在しない世界の筈なのにデバイスを製作する技術がある事に驚いている。
「ティアナのクロスミラージュもパワーアップしてもらったんだよ。条件付きで模擬戦をしたけど、負けちゃって・・・」
「フェイトが？」
「うん」
　フェイトがどんな条件を出したのかは分からないが、何かしらの制限がある中でティアナがフェイトを模擬戦で破った事についても驚愕する出来事であった。
「でも、ティアナにはまだ驚くことがあって・・・」
「ん？これ以上まだあるのかい？」
「なのはやスバルは知っているけど、ティアナ・もう一つの地球が暗黒星団帝国に占領された時、パルチザンとして戦ったの・それで、顔

に傷を負って・・・・」
「顔に傷？それにパルチザンって・・・・ランスター執務補佐官は防衛軍に徴兵でもされたのか？」
「ううん、ティアナがパルチザンに入ったのはティアナ自身の意志だよ。私もティアナからその話を聞いた時、止めたけどティアナは、お世話になっている地球の為に戦いたいって言って・・・・」
「しかし、あの世界は元々魔法が無い世界だし、何より空気がＡＭＡとなっている状況じゃないか・・そんな中で魔法何て・・・・」
「ティアナは魔法じゃなくてあの世界の武器で戦っていたよ」
「あの世界の武器？それって質量兵器か？」
「うん」
「非殺傷設定があるのか？まさか、殺傷したのか？」
「一応、出力調整で非殺傷設定もあるみたいだけど、基本あの世界での戦闘はやるかやられるか・・らしいから・・・・その・・ティアナも・・・・」
「・・・・なのはが知ったら大激怒しそうな話だな」
「もう知っているよ。モニター越しで大喧嘩。見ているこっちがハラハラしちゃったよ」
「あの二人は似た者同士だからな・・・・それにしても僕の休暇中に色んな事があったんだな」
「それは私も同じだよ。もう一つの地球に居る間、管理局でも色んな事がありすぎた・・・・クロノやなのはたちが大変な時に私はミッドに居なかったことが、私としては悔やまれるところだよ」
「それで、ランスター執務補佐官はどうしたんだ？顔に傷を負ったのだから、当然治療はしたのだろう？」
「必要最低限の治療をしただけで、傷は残したままだよ」
「残したまま？」
「うん。本来は手術で消せる傷なんだけど、ティアナ本人が『傷は残したままにしておくって』言って・・・・」
「それは何故だい？」
　クロノは顔に傷と聞いて、男ならば箔が付くのだろうが、女性の場合、その傷がコンプレックスになる筈だと思った。

しかもその傷は手術をすれば消せると言うのにティアナは敢えて残すと言うのだからクロノとしてはそれが解せない。
「ティアナにとって顔の傷は、戦った仲間やパルチザンとしての戦いを忘れない為だって」
「そうか・・・しかし、そんな傷があると他の局員たちはビビったんじゃないか?」
クロノはミッドに戻ってくる際、顔に傷があるティアナを見た次元航行艦の乗員たちの姿を想像して苦笑する。
「その事なんだけど・・・ティアナ・ミッドに戻って来てないの・・・」
「えっ!?ミッドに戻って来てない!?それはどういうことだ!?」
これまでのティアナのミッドの未帰還の話を聞いて来た人たちと同じリアクションでクロノも驚いた。
「ランスター執務補佐官は執務官になる事を目標にしていたじゃないか!?もうすぐで念願の執務官になれそうだったのに・・・」
「ティアナは防衛軍に救助されて、戦闘を見て、そしてティアナ自身が戦いを経験して何かを悟ったみたい・・・それに執務官の肩書きに対しても・・・」
「・・・」
ティアナの考えに対してクロノは共感できる部分があった。
フェイトも心のどこかでティアナの考えに共感している所があったが、あの時はヴィヴィオも居り、彼女をミッドへ無事に還すのは自分の役割だった。
だが、もしもヴィヴィオが居なかったら自分もティアナ同様残っていたかもしれないと最近になって思うようになっていた。
そして、クロノも今の自分には家族が居る。
しかし、独身でフェイト、ティアナと共にもう一つの地球に居たら・・・
ティアナの話を聞いてそんな考えが脳裏を過るのも無理はなかった。
その後、注文したコーヒーを飲みながら、クロノはフェイトにこの他の日常生活について訊ねた。

「それで、ヴィヴィオが向こうの地球にある体感シュミレーションゲームにハマっちゃって」
「体感シュミレーションゲーム？それってどんなゲームなんだい？」
「現実とは違う仮想空間で魔法や武器を使用しての戦闘や球技、レースとか出来るんだよ」
「それはシミュレーター装置とどう違うんだい？」
六課の時、訓練用に最新鋭のシミュレーション装置を導入していた。
しかし、シミュレーション装置はあくまでも舞台のシミュレーションだけであったが、フェイトたちが体験した体感シュミレーションゲーム、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬは仮想空間なので、現実には考えられない世界を体験することが出来る。
更に仮想空間なので、肉体的疲労、痛みを感じないと言う利点があった。
フェイトは管理局で採用されているシミュレーション装置とＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬの違いを話す。
「それで、ヴィヴィオの他に暗黒星団帝国の人も気に入った人が居て・・・」
「えっ？暗黒星団帝国って地球を占領した？」
「うん。それで、ヴィヴィオがその人と仲良くなってね」
フェイトは楽しそうにもう一つの地球での日常をクロノに語った。
楽しい時間はあっという間に過ぎ、フェイトはクロノに本命の要件を頼んだ。
「それで、クロノに頼みたい事なんだけど・・・」
「ああ、確かアルフに渡す物があるんだろう？」
「うん。コレをアルフに渡しておいてくれる？」
フェイトはクロノに厚みのある一通の封筒を渡す。
「これは？・・・手紙かい？」
「そう。私とアルフにとって、大事な人からの手紙」
「わかった。確かに預かったよ」
クロノはフェイトから託された封筒を上着のポケットに入れた。

「そう言えば、フェイトは何故、地球への渡航許可が下りなかったんだい？」
　クロノは此処でフェイトにそもそもの原因・・・第９７管理外世界への渡航許可が下りなかった理由を訊ねる。
「ああ、その事なんだけど、多分査察部からの圧力があったんだと思う」
　フェイトがやや疲れた感じで渡航許可が下りなかった理由をクロノに言う。
「査察部からの？」
「うん。ミッドに還ってから査察部にしつこく付き纏われてね。しかもティアナがもう一つの地球に残った理由が私がティアナに諜報活動を命令したんじゃないかって訳のわからない考えになっているの・・・それにもう一つの地球の座標や防衛軍の情報も物凄く欲しがっていた」
「なるほど・・・だが、査察部はあくまでも使いっぱしりで、本命は本局の一部の連中だろう」
「私もそう思う。クロノも一応、用心してね。こうして私と会っている所を多分サーチャーで窺っているだろうから」
「ああ、分かった。気を付けよう」
　こうして、クロノは再び第９７管理外世界の海鳴にある家に戻って行った。
「ただいま」
「あっ、お帰りクロノ君」
「おかえり～」
「おかえりなさい、父さん」
「おかえり、クロノ」
　クロノが玄関の扉を開けると家族とアルフが自分を出迎えてくれた。
「フェイトちゃんの様子はどうだった？」
　モニター越しではなく、直接フェイトに会ったクロノにエイミィはフェイトの様子を訊ねる。

「ああ、元気そうだった。ただ、本局の一部の連中に目をつけられている様で、呆れている感じだったよ」
「えっ？それって大丈夫なの？」
「どうせ、連中の取り越し苦労で終わるさ」
　査察部を使ってフェイトが呆れるまで付き纏うのだから、とうにフェイトへの事情聴取をしている筈だが、その事情聴取でもう一つの地球の情報が掴めなかったからこそ、未だに付き纏っているのだろう。
　しかし、クロノはこれ以上フェイトに付き纏っても、もう一つの地球の情報は得られないだろと判断していた。
「それで、クロノ。フェイトがあたしに渡したい物って何だったんだい？」
「ああ、これだ」
　クロノはアルフにフェイトから託された手紙を渡す。
「えっ？何だい？こりゃ？」
「手紙らしい」
「手紙？誰から？フェイトかい？」
「いや、フェイトが言うには自分とアルフの大切な人からの手紙らしい」
「ふーん・・・・」
　自分とフェイトの共通した大切な人と言われてもピンとこない。
「一体誰からだろう？」
　アルフは早速ロビーにて封筒を開けると中に同封知れていた写真を見て目を大きく見開く。
「そ、そんな・・・・こ、こんなことって・・・・」
「一体誰からの手紙だったんだい？」
「り、リニス・・・・リニスからの手紙だよ。これはっ!?」
「リニス？」
「誰それ？」
　クロノもエイミィも『リニス』と言う人物には心当たりがない。
「・・・・フェイトのバルディッシュを造ったプレシアの元使い魔で・・・・

プレシアの奴が契約を切って・・・消えちまったと思ったのに・・・」
アルフはクロノとエイミィにリニスについて説明すると、早速封筒の中に入っているリニスからの手紙を読むと、プレシアとの契約を切られ、消えるのを待つ筈だったのだが、もう一つの地球に転移した際、その世界に居た人と新たな契約を結びこうして生きているのだと書かれていた。
「リニス・・・アンタも幸せになったんだね・・・良かった・・・」
今の自分もフェイトもプレシアの下に居た時と比べると幸せを感じている。
消えてしまったと思ったリニスも運よく生き長らえている。
そして同封されていた写真を見ると今のリニスが幸せになっているのだと見て取れた。
アルフにとってリニスからの手紙はフェイトの生存と同じく嬉しい知らせであった。

百三十八話　銀河系の出来事

ギンガ、リニスからの手紙をそれぞれの関係者たちに渡し、ヴィヴィオのデバイスの登録を終えたフェイトは相変わらず査察部からの不定期な事情聴取に呼ばれる日々を過ごしていた。

そんな中で、フェイトはある事を思い出す。

「あっ、クリスの中にまだ向こうの地球の画像や動画とか入れたままだった・・・」

ミッドに戻ってから査察部からの事情聴取、ゲンヤ・スバルの二人にギンガからの手紙を渡したり、ヴィヴィオのデバイスの登録、アルフにリニスからの手紙を渡したりやら短期間ながらもバタバタしてクリスの中に向こうの地球で撮影した画像や動画が入れっぱなしだったことを思い出す。

もう査察部からバルディッシュを調べられることもないだろうと思いクリスに収納されている画像と動画を引き取りに行こうと思い、フェイトはなのはに連絡を入れる。

その頃、なのはが仮住まいしている教導隊の宿舎では・・・

「あれ?これなんだろう?」

「ん?どうしたの?ヴィヴィオ」

「あっ、なのはママ。クリスに保存されているこのフォルダなんだけど、なんか開けないの」

「えっ?どれ?」

「これなんだけど・・・」

ヴィヴィオはクリスが保存しているフォルダの内、一つのフォルダだけが開けない。

開こうとすると、

『このフォルダはフェイト・T・ハラオウン氏本人または同氏より許可がなければ開けません』

と、表示されてフォルダが開けないので、このフォルダの中に何か記録されているのかはフェイトしか分からない。

「このフォルダはフェイトちゃんの許可がないと開けないみたい…」
「フェイトママの許可？」
「うん。一体何が保存されているんだろう？」
「なんだろうね？」
　フェイトの事だから、ウィルスや危険なデータとか、保存されてはいないはずだが、なのはもヴィヴィオもフェイトの許可が無ければ開けないフォルダに興味を抱く。
「あっ、別のフォルダは開けるみたい。何が記録されているんだろう？ヴィヴィオは知っている？」
「ううん、知らない」
「一応、確認してみようか？」
「うん」
　ファイトの許可が無ければ開けないフォルダの他にフェイトの許可無しでも開けるフォルダがあった。
　しかし、ヴィヴィオはこのフォルダには心当たりがなく、一体何が記録されているのか分からない。
　その為、なのははヴィヴィオと一緒に一応確認してみようと言う事になりフォルダを開くと、どうやらフォルダには動画が記録されているみたいだ。
「動画ファイル？何の動画を記録しているんだろう？」
　なのはが動画を再生した時、
『なのは、ちょっといいかな？』
　タイミング良く？フェイトがなのはに通信を入れて来た。
　その時、
『ら、雷神の如くササッと登場！立ち塞がる悪には容赦なく死の鉄槌を下す!!わ、私こそが正義の象徴、雷光の死神!!フェイト・テスタロッサ・ライトニング――――っっっっっ!!!!!』
　記録されていたのは太陽系赤道祭時のフェイトの黒歴史とも言えるあの舞台の動画だった。
『なっ!?』

フェイトはその動画を見て目を大きく見開き絶句する。
「えっ?えっ?な、何?・・・これ?」
一方、動画を見たなのはは目を点にして唖然とする。
『ヴィ、ヴィヴィオ。どうしてその動画が!?』
なのはが唖然としている中、一早く再起動したフェイトはヴィヴィオに何故、太陽系赤道祭の動画を持っているのかを訊ねる。
「えっと・・・クリスの中に記録されていて・・・」
ヴィヴィオ自身も何故、クリスの中に太陽系赤道祭の動画が記録されているのか分からない様子。
クリスの持ち主である筈のヴィヴィオでさえ、いつ記録されているのか分からない太陽系赤道祭の動画・・・
しかし、これは決してバグなどではない。
まほろば　の食堂にてフェリシアに太陽系赤道祭の動画を見せてもらった時、ヴィヴィオの手にはクリスがあった。
その時、クリスは端末に映し出されていたこの映像を記録していたのだ。
クリス自身が記録していたので、閲覧に関して誰かの許可はいらなかったし、ヴィヴィオも知らなかった。
「えっと・・フェイトちゃん。この動画は一体・・・それにこの衣装・・・」
なのはがフェイトにこの動画について訊ねる。
動画に映し出されているのは間違いなくフェイトなのだから、彼女はこの動画がなんなのか知っている筈だ。
『え、えっと・・それは・・・防衛軍の艦に救助された時に行われたイベントで・・・』
フェイトは顔を赤くしながらこの動画が何なのかを説明した。
「へぇ～防衛軍の艦じゃあそんな事を・・・」
親友のはやてが今、次元航行艦の艦長で星の海を渡っているが、艦内でこのようなイベントを行っているなんて聞いたことが無い。
『私やティアナも最初に聞いた時はびっくりしたけど、この時の乗員は新人の人たちも居たみたいで、訓練と突然の戦闘があってガス抜き

も兼ねていたみたい』
「そうなんだ・・・」
訓練ばかりだけではなく、こうしたイベントでガス抜きや休息も必要なのは六課時代にも経験した。
防衛軍は軍艦に乗っている時もこうしたガス抜きをしているのだとこの動画から判明する事が出来た。
「それにしても・・・」
『？』
「フェイトちゃん、なかなか似合っているよ。この衣装」
『なっ!?』
なのはは動画内で〇ュアブラック風の衣装を身に纏っているフェイトを褒める。
しかし、フェイトはなのはの言葉に絶句する。
「バリアジャケットも折角だからこの衣装に変更してみない？丁度フェイトちゃんのイメージカラーと同じ黒い衣装なんだし」
仕舞いにはフェイトのバリアジャケットのデザインを〇ュアブラック風の衣装に変えてみないかと提案してきた。
『しないよ!!』
フェイトとしてはあの衣装は彼女にとって黒歴史そのものなのだから当然拒否した。
「それで、何か用があるんでしょう？」
なのははフェイトにこうして通信を送って来た理由を訊ねる。
まぁ、タイミングはフェイトにとって最悪であったが・・・
『あっ、うん。実はクリスの中に記録されているフォルダを取りに行こうと思って・・・』
「ああ、このフェイトちゃんの許可がないと開けないフォルダね」
『うん。そう』
「いいけど、一体何が記録されているの？」
なのはは当然、フェイトにフォルダの中身を訊ねる。
『ソ、ソレハ、ナノハニハカンケイナイヨ・・・』
やや目を泳がせながらフェイトはなのはにフォルダの中身を教え

ない。
『じゃ、じゃあ・少ししたら取りに行くから』
何だか逃げるように通信を切るフェイト。
「むぅ・なんか怪しい・・・・」
フェイトらしからぬ行動になのはは訝しむ。
それから暫くして、なのはの下にフェイトが来てクリスから例のフォルダをバルディッシュへと移す。
「ねぇ、フェイトちゃん・・・・」
やはり、フォルダの中身が気になる様子。
恐らくこのフォルダの中身を見せないとなのははきっと自分を帰さないつもりだ。
「・・・・もう仕方ないなぁ・・・・でも、他の人には黙っていてね。レイジングハートもクリスも記録しちゃダメだよ」
「うん、ありがとう」
『『分かりました』』
フェイトはフォルダの中身を口外しない事、記録しない事を前提にフォルダの中身を見せる。
フォルダの中身は、もう一つの地球での画像や動画で防衛軍の軍艦での生活やクリスマスに行った温泉、年末のパーティーの様子、ＢＲＡＶＥ　ＤＵＥＬのプレイ動画等であった。
なのははこれらの画像や動画を見て、
「でも、どうして、これを秘密にするの？・向こうの地球の日常風景でしょう？」
何故、もう一つの地球での画像や動画を秘密にするのか分からず、フェイトに訊ねる。
「それは・・管理局はもう一つの地球の情報を欲しがっているから・・・・画像の中には紅葉の姿もあるんだよ。もう一つの地球に・・別世界のなのはの子孫が存在している・・・・もし、管理局がもう一つの地球の座標を特定し、紅葉の事を知ったらどう思う？」
「どうって・・・・」
「以前、私がなのはにも聞いたでしょう？『もし、紅葉が魔導師だった

らどうする？』って・・・・」
「あっ・・・・」
なのははフェイトの問いに思い出すかのように言葉を漏らす。
管理局が別世界とは言え、なのはの子孫で魔導師かもしれない人物を見逃すはずがない。
拉致をしてでも紅葉を確保するだろう。
そうなれば、それが引き金となり防衛軍が管理局を犯罪組織と認定するに違いない。
そこから防衛軍と管理局との間に戦争が起きるかもしれない。
だからこそ、フェイトは紅葉の姿が映る画像は極力他の人には見せたくなかった。
一応、これらの画像の中にはギンガの画像もあったのだが、なのはとギンガは面識がなく、わざわざギンガの存在を知る人を増やす理由もないので、黙っていた。
画像や映像を消去してしまえば、紅葉の存在が周囲にバレる事はないだろうが、ティアナの顔の傷ではないが、フェイトとしてももう一つの地球との思い出を忘れたくはなかったのだ。
フェイトがフォルダの中身を秘密にしたがった理由を知り、なのはは納得した。
その後、教導隊の宿舎から出て、査察部のサーチャーを気にしつつ、フェイトはフォルダの中にひっそりと存在する隠しファイルを開く。
「・・・・」
その隠しファイルの中には古代守の画像が沢山入っていた。
フェイトは頬をほんのりと赤く染め、それらの画像を見ていた。
紅葉やギンガの画像は勿論、極秘扱いであるが、シークレット・オブ・シークレットなファイルはこれら古代守の画像だったのだ。

それから数日後、管理局とマスコミとの協定からフェイトたちのミッドへの帰還が報道された。
これにより、管理局側は記者会見を開くことになり、査察部もますますフェイトから事情聴取を取りにくくなった。

しかし、これまでのフェイトの事情聴取からもう一つの地球に関して相変わらず有益な情報は得られていない。
もう一つの地球の情報が得られない状況下で本局の一部の連中は焦りが隠せない。
そんな中、フェイトたちの身柄引き渡しの際、地球連邦政府と防衛軍に管理局側が送った親書の回答が齎された。
地球連邦政府からは中嶋源三郎が代表として管理局代表のリンディに親書の回答を伝えた。
その結果、地球連邦政府及び防衛軍は、今後フェイトたちのように宇宙で遭難した遭難者を発見した場合、救助活動を行うのはやぶさかでないが、ミッドとは積極的に交流するつもりはないと伝えられた。
つまり、地球連邦政府及び防衛軍は管理局に対してフェードアウトを決め込んだのだ。
リンディとしては地球側の返答は予測通りだったのだが、管理局の局員全員が地球側の返答を納得する筈がない。
むしろ、自分みたいにもう一つの地球がフェードアウトすることを予測してそれを許容している局員の方が珍しいだろう。
リンディはズーンと重苦しい空気を纏いながら親書の回答を報告すべく会議場へと向かった。
「本日、地球連邦政府及び防衛軍より、親書の回答を頂きました」
「ほぉ、それでかの世界はどのような回答を？」
「それが・・・」
リンディからの報告を聞いて案の定、会議場では怒声が飛び交った。
「フェードアウトだと!?ふざけるな!!」
「魔法を碌に使えず質量兵器にしか頼る事しかできない蛮族共が!!」
「我々が下手に出れば付け上がりおってからに!!」
（この人たちは一体どういう思考回路をしたら、もう一つの地球がミッドと交流を持つと思っているのかしら？）
（下手ってこれまで管理局がそこまで下手に出たことがあった？）
激高している幹部局員を見ながらリンディやレティは呆れるよう

に彼らを見ていた。
その後、地球側はヘリオポーズに設置されていた通信ポッドを処分したのか、もう一つの地球から管理局に連絡が来ることはなかった。
管理局はもはやもう一つの地球の事を諦めるか、自力でもう一つの地球を見つけるかの二択となったが、魔導師・管理局の高官としてのプライドが高い一部の本局幹部は躍起になってもう一つの地球の探査を続ける方針を密かに抱いていた。

そんな管理局事情を知る由もない地球連邦政府は管理局との関りをフェードアウトして、暗黒星団帝国の襲来により止まってしまった宇宙開拓を再開した。
まずは、地球から4．5光年離れたケンタウロス座α星系の第四惑星への開拓だ。
元々第四惑星は暗黒星団帝国襲来前の事前調査が行われていた。
この調査により第四惑星にはオスミウムがふんだんに埋蔵されている事が確認されており、新たな鉱山惑星としての採掘準備が進められた。
開拓と言う事で地球の様々な国や企業はこぞってこうした宇宙開拓業に参加していた。
中には個人で辺境開拓を行い、一発逆転に臨む者も居た。
また、鉱山惑星と言う事で労働者が当然入植する。
そんな労働者たちの為の居住先に娯楽施設、飲食店、病院、治安維持の為の警察署、そして第四惑星自体の防衛の為の防衛軍の駐屯地の設営。
それらを建造する為に建設関係の企業もこうした開拓業には必然と参加して自社の利益を得ようとする。
地球からケンタウロス座α星系へ向かう宇宙船には開拓に使用する大量の物資に機材、人員が乗船している。
ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国の脅威が去ったとは言え、宇宙では何が起こるか分からない。
その為、開拓使団の護衛の為に防衛軍も艦艇を出した。

護衛艦隊の中には地球製の艦艇の他に乗員と艦の熟練訓練も兼ねて彗星帝国の鹵獲艦も参加していた。
「それにしても凄い数の輸送船ですね」
まほろばの周囲を航行している輸送船の数を見て永倉が呟く。
「第四惑星の開拓は連邦政府としても外宇宙開拓の第一歩である目玉政策だから、開拓支援する金額も大きい。だからこそ、国や企業も資本を大量に投資する。だけど、今回の開拓する第四惑星が鉱山惑星と言う事で長い目で見ると懸念があるのだけどね」
「懸念・ですか？」
「ああ・昔の日本でもあったことなんだが、江戸時代、明治時代に開拓された鉱山が昭和時代になると相次いで閉山となり、地元の町がゴーストタウンとなった歴史があるからね」
「第四惑星もいつかは廃れてしまうと・・・？」
「うん・・・」
良馬が永倉に日本での鉱山の歴史を軽く説明する。
かつて日本のエネルギー産業を支えた日本国内の石炭産業・・・。
日本の経済発展及び国民経済の向上に大きく貢献し、鉱山麓の町は鉱山労働者、その労働者を労う施設とそれら施設の従業員ら大勢の人たちで賑わい沢山のお金が動いた。
しかし、石炭から石油のエネルギー転換、燃焼率が高い海外産の石炭の輸入増加、そして炭坑内の事故などにより日本の石炭業は衰退し、日本国内の鉱山は次々と閉山を余儀なくされた。
閉山された鉱山の街に居た人々は次の仕事を求めて次々と街を出ていくと鉱山の街はたちまちゴーストタウンと化していった。
「アメリカでもゴールドラッシュで賑わった町も金が取りつくされると人々は別の町に移って、廃れていった町もあったみたいよ」
新見が補足説明も加える。
「今回の第四惑星もオスミウムがふんだんに埋蔵されている星とは言え、無尽蔵にある訳ではない。オスミウムが掘りつくされても第四惑星に人が居住し続ける環境を整える事も重要な事だ」
鉱山物質は決して無尽蔵ではない。

いつかは掘りつくされる。
今回の目的地である第四惑星もいつかはオスミウムが掘りつくされる日が来るだろう。
そうなったら、折角莫大な資金を投資した苦労が水の泡にならないだろうか？
それに鉱石の採掘量が減っていくと各国の間に争いごとが起きないだろうか？
オスミウムが取りつくされても人々が永住する事が出来る環境へ開拓する事も今回の開拓業の一つなのではないかと良馬は思っていた。
第四惑星へ着いた開拓団一行はまず、第四惑星のテラーフォーミングを開始する。
オゾン層発生装置を備えた衛星でオゾン層を生成し、地上では空気製造機能を有したコスモクリーナーを第四惑星の各所に設置し惑星内に酸素を散布すると同時に惑星内に存在する放射線を除去する。
なお、コスモクリーナーを稼働した事によりこの空気の中にはＡＭＡも同じく散布されていたが、地球人は大半が非魔導師なのでなんの影響もなかった。
次に冥王星の海や土星の輪から採取し、放射線を除去した氷を溶かして水源を確保。
酸素と水源を確保し、いよいよ地表に降りると各国で決められた国境内で建物の建築と鉱石の採掘、植林作業、食糧確保の為の大型Ｏ・Ｍ・Ｃ・Ｓを使用した食糧生産プラントの建造が行われる。
軍の方も惑星防衛と周辺警備の為の基地の建造と惑星周辺に警戒の為の戦闘衛星、無人攻撃ステーションを設置した。
地球が第四惑星の開拓を着々と進めている中、
地球から１５００光年離れたバジウド星系の第四惑星であるバース星では・・・
惑星バースは、元々独立国家『惑星国家バース』を名乗っていたが、約十年前ボラー連邦の保護国となり総督府が置かれた。

バース星周辺には同等の技術力と軍事力を持つ惑星国家が多数存在し、バース星は度々周辺の惑星国家から侵略の危機に見舞われていた。
そこで、銀河系東部方面へ進出してきたボラー連邦がバース星を保護国とした。
しかし、見方を変えればボラー連邦がバース星を侵略したのではないかと言う見方も出来る。
それは管理局による管理世界政策とほぼ類似している。
ボラー連邦としてはバース星を橋頭堡として東部方面への進出を画策していた。
まずは、バース星を狙っていたバジウド星系の星々の攻略を行っていた。
だが、この周辺の惑星国家の攻略と平定に時間が思いの外かかった。
この攻略の時間がボラー連邦、バース星の運命を決定づけたのかもしれない。
ボラー連邦がバース星を保護国とし、周辺の惑星国家を攻略している間、地球ではガミラス、彗星帝国との戦争があり、マゼラン星雲におけるガミラスと防衛軍との共闘で暗黒星団帝国の脅威を取り除き、デスラーたちガミラスの生き残りは第二の故郷を探し宇宙を放浪する。
その放浪は長くなるものだとデスラーたちはそう思っていたが、意外にも早く第二の故郷となる星は見つかった。
銀河系中心部核恒星系にてガミラス民族の祖となるガルマン民族が住むガルマン星を発見した。
当時、銀河系北部から中心部はボラー連邦が勢力を拡大させていた。
銀河系中心部にあるガルマン星も当然、ボラー連邦領の植民地となっていた。
そこへ突如襲来したデスラー率いるガミラス艦隊がガルマン星を瞬く間に攻略し、更には周辺の星々もボラー連邦から解放してしまっ

た。
これにより、バース星はボラー連邦本国と分断され、ボラー連邦も銀河系東部方面への橋頭堡と進出への足掛かりを失うことになった。
バース星総督府では、総督のボローズは頭を抱えていた。
彼の悩みは絶えなかったからだ。
ガルマン星が突如来襲した謎の勢力により、奪われた事により、バース星は本星と分断され、行き来する事が出来なくなった為、本星へ逃げる事も出来ない。
例えワープを連続して、上手くガルマン軍の監視網・警戒網の網をくぐり抜けて本星に戻っても敵前逃亡の罪で処刑される可能性が高い。
更に孤立した点となったバース星を見捨てたのか、本星から援軍が来る気配もない。
その反面、ガルマン軍は銀河系中心部からバース星がある銀河系東部へと着々に勢力を伸ばしている。
いずれはこのバース星へガルマン軍が大挙して押し寄せてくるのも時間の問題であった。
ガルマン軍の他に周辺のボラー連邦系の惑星国家についてもいつ、自分たちを見限るか分からない。
このバース星本来の軍人たちもいつボラー連邦から独立すると言うか分からない。
ボローズとしてはもう自分と同じボラー星人以外・いや、彼らも総督の自分の首を手土産に命乞いをするかもしれないと言う思いから自分以外が信じられない程追い詰められていた。
「総督、ご報告が・・・」
「なんだ?」
総督室で頭を抱えていたボローズであったが、報告を入れにやって来た副官を前に空の虚栄を保つかのように姿勢を整え、報告を受ける。
「先日来より電撃戦を繰り広げているガルマン軍の動きですが・・・」
副官は言いにくそうにガルマン軍の動向をボローズに伝える。

「なんだ?」
「ストニア、ラビア、トニアの三つの惑星が陥落しました」
「なっ!?」
「更にウラナでも独立運動が活発化していると・・・」
副官からもたらされた報告はボローズを絶望へ叩き落す様な報告であった。
バジウド星系でも銀河系中心部に近い三つのボラー連邦系の惑星国家がガルマン軍の攻撃を受けて陥落。
同じくバジウド星系の中でも反ボラー意識が強い惑星で独立運動が活発化しており、ボラー連邦系の枠から独立しそうだと言う。
「ど、どうすればいい・・・私は・・・」
「現在、国内及び周辺惑星国家にある造艦所にて、宇宙戦闘艦の建造を急務に進め、乗員の育成も行っておりますが・・・」
「それで間に合うのか?」
「・・・」
迫りくるガルマン軍の猛攻を付け焼き刃の様な宇宙艦隊で戦い退ける事が出来るのかとボローズが副官に訊ねると、副官は答えられなかった。
つまり、否定する事が出来なかったのだ。
周辺にあるボラー連邦系の惑星国家に所属する宇宙艦隊をかき集め、ガルマン軍と戦ってもガルマン軍は本国から援軍が来るが、こちらは援軍が来ず、数も減っていく一方だろう。
しかし、やらない訳にはいかない。
本国にも戻れない。
例えガルマン軍に降伏しても自分はボラー連邦の軍人でありバース星の総督と言う立場から軍事裁判の後、死刑判決を受ける可能性が高い。
ならば、僅かな希望と可能性を信じてガルマン軍と戦わなければならない。
「・・・ひとまず、艦の数だけは揃えたい・・・建造と乗員の育成はそのまま進めてくれ」

「承知しました」
　現状大きな打開策も思いつかず、宇宙戦闘艦の建造と乗員の育成しか出来ずボローズはそれを命じるしかなかった。
　総督府にてボローズらが絶望の淵に頭を抱えている頃、バース星宇宙艦隊司令部でも重苦しい空気は変わらなかった。
　ボローズの下に齎された報告は当然、バース星の宇宙防衛を担う宇宙艦隊司令部にも伝えられていた。
「ラム艦長・例のご報告は・・・」
「ああ、聞いておる」
「既に我がバースが所属するバジウド星系はガルマン軍の脅威に晒されており、周辺の惑星国家もボラーからの独立への風潮機運も高まっているとのことです」
「ラム艦長、我々もこの機に乗じてボラーからの独立を・・・」
「そうです。ガルマンに対してボローズの首を手土産にすれば、バースの自治は認めてもらえるかもしれません」
　バース星出身の軍人たちはバース星宇宙艦隊総旗艦のラジェンドラ号の艦長であるラムにボラー連邦からの独立を促す。
「私も君たちも誇りあるバースの軍人であろう。バースの軍人ならば、恩人を売るような卑怯な真似をせず、侵略者に対して正々堂々最後まで戦うべきであろう。それに総督の首を差し出したからと言ってガルマンから自治の確約を取れるとも言い切れんだろう」
『・・・』
　バース星を保護国としたボラー連邦の見方は保護ではなく侵略だと思う者も居るのだが、ラムはボラー連邦に対して珍しく侵略者であると言う認識は抱いていなかった。
　ボラー連邦はバース星の宇宙艦艇技術を高め、周辺の惑星国家からバースを侵略の魔の手から救ってくれた恩人と言う認識さえ抱いていた。
　ラムの一喝でボローズを裏切ってバースを独立させようと提案する軍人たちを黙らせた。
　これもラムの人徳からなせるモノであった。

バース星のボラー連邦系軍人たちが絶望感を抱いている頃、そのボラー連邦と銀河を二分している大帝星であるガルマン星・もとい、ガルマン・ガミラスの帝都であるデスラーパレス・・・その帝都デスラーパレスの中でも一際高く、目立つ建物・・・ガルマン・ガミラス総統府。
その総統府内の通路をデスラーと彼の娘のジュラが歩いている。
マゼラン星雲にてゴルバとの戦いから宇宙を放浪し、銀河系中心部でガルマン星を発見し、占領していたボラーの勢力を駆逐した後、デスラーはガルマン・ガミラスの君主である総統となり、ジュラはデスラーの秘書官を務めていた。
やがて二人は総統府内にある会議室へと入る。
会議室では既に複数の高級軍人たちが二人の到着を待っていた。
『デスラー総統万歳!!デスラー総統万歳!!デスラー総統万歳!!』
彼らはデスラーが現れると敬礼と共にデスラーを称える。
デスラーとジュラは上座にある自分の席に着き、手を上げ会議室の軍人たちに返答すると、彼らも会議室に用意されていた椅子へ着席する。
従卒たちがデスラーとジュラに手慣れた手つきで飲み物を用意する。
「それでは、本日の会議を始める」
全ての用意が整うと参謀総長のキーリングが軍議の進行を行う。
「東部方面司令、ガイデル提督」
「はっ!!」
キーリングから呼ばれたガイデルは席から起立し、デスラーに敬礼をし、東部方面の戦況を報告する。
「昨日来より、我が東部方面軍主力の第１８機甲師団は二手に分かれ作戦を展開し、バジウド星系内におけるボラー勢力下の惑星三つを攻略し、引き続きバジウド星系の攻略を順調に継続中であります」
「ガイデル・・・」
東部方面軍の戦況報告を聞き、デスラーはガイデルに声をかける。
「はっ!!」

一方、声を掛けられたガイデルは緊張した感じでピンと姿勢を正す。
「いつもながら、腕も口も切れる男だ・・・君の為、そして東部方面の将兵たちの為に乾杯しよう」
「はっ、ありがとうございます!!総統!!」
ヤマトに代わり、新たな仇敵となったボラー連邦の勢力を着々と削る戦果報告を聞き、上機嫌のデスラー。
その後も各戦線からの報告でも東部方面程ではないが、ボラーの戦力を削る戦況報告が齎された。

軍議が終わり、デスラーは自らの執務室にて今日の戦況報告を考慮して今後の戦況分析をしていた。
(ふむ、今のところ順調ではあるが、今後はボラーの領域へ深く突き進むことになる・・・そこからは完全なるボラーの領域・・・直実に橋頭堡を築きながら進まなければならない)
補給線が伸びれば遠征しているこちらが不利になる。
なにより、地の利は相手であるボラー連邦にある。
各惑星にはボラーの軍事基地があるのは当然として、その星にはかつて冥王星ガミラス基地に設置されていた反射衛星砲の様な強力な兵器が設置されているだろうし、防衛艦隊もこれまでの戦線の艦隊よりも数が多い事も考慮しなければならない。
兵站の確保は十分に行わなければボラーの逆襲を受け、味方に甚大な被害を被る事になる。
銀河系の勢力図を見ながらデスラーが今後の戦況分析にふけっていると、
「お父様」
「ん?なんだい?ジュラ」
ジュラがデスラーに声をかけてきた。
「東部方面軍が、攻略を進めているバジウド星系の先には、オリオン腕が・・・そのオリオン腕には太陽系・地球があります。東部方面軍が地球まで侵攻しないでしょうか?」

ジュラは先ほどの軍議にて、戦勝報告をいれたガイデル・その部下である第18機甲師団がバジウド星系の攻略を終えた後、オリオン腕方面・太陽系へ侵攻しないか心配した。
「その件ならば、大丈夫だ。ガイデルにはオリオン腕最辺境の星々には手を出すなと伝えてある」
デスラーはちゃんとジュラの心配を考慮して既に東部方面には地球がある太陽系への侵攻は禁じていた。
しかし、ジュラの不安は拭えなかった。
「そう言えば、お父様。地球にはお父様がガルマン・ガミラスを建国した旨はお伝えしたのでしょうか？」
「ああ、そう言えばまだ伝えてはいなかったな」
「では、この際ですから地球にガルマン・ガミラスの建国を伝えるのと同時に同盟についての話し合いをしてみてはいかがでしょうか？」
「同盟？」
ジュラはデスラーにガルマン・ガミラスと地球との間に同盟を結んではどうかと提案をする。
例え、同盟と行かなくとも東部方面軍に地球の存在を伝える機会にもなると思ったのだ。
「お父様が許していただけるのでしたら、地球への使者は私が務めます」
更にジュラは自分が地球へと赴くと言う。
「ふむ・・・」
デスラーはジュラの提案を聞いて考える。
確かに自分は東部方面軍へ地球への侵攻を禁じてあるが、『地球への侵攻』と明確に指示をしたわけではなく、『オリオン腕最辺境の星々には手を出すな』と漠然とした内容であった。
オリオン腕とは言え、広い宇宙空間であり、自分とガイデルらの認識の違いから地球との間に誤解が生じする可能性がある。
それならば、地球に対してガルマン・ガミラスの建国を伝えれば、ガイデルらに自分が侵攻を禁じた星系・星がどこなのかを理解させることが出来る。

「分かった。頼めるかな?ジュラ」
「はい!!」
デスラーはジュラに地球への使者を頼んだ。
地球への使者役をもぎ取ったジュラはデスラーの執務室を出ると軽い足取りで自室へと向かう。
ジュラの機嫌がいいのはただ単に使者の役目を父であるデスラーから頼まれただけではなく、
(地球へ行けばまたあのパフェが食べられる~♪)
そう、ジュラが地球へ行きたがっていたのは　まほろば　の食堂で食べたパフェの味がどうしても忘れられず、あれからずっと食べたかったのだ。
「ご機嫌でございますね。ジュラ様」
「あっ、メルダ」
そんな浮かれているジュラに声をかけたのは彼女の護衛兼世話係のメルダだった。
「うふふ、そうなの・まだ確定はしていないけど、メルダにも近々良いことがあるかもしれないわ」
「えっ?良い事・ですか?」
「ええ。楽しみにしていてね」
「は、はぁ・・・」
自分同様、メルダも　まほろば　の食堂で一緒に食べたパフェが気に入っていた。
そしてメルダは自分の護衛兼世話係なので、自分が地球へ赴くのであるならば、彼女も一緒に地球へ行く事になるだろう。
ガミラス人は地球型の空気は体質的に合わないが、以前イスカンダルにて佐渡がガミラス側に提供した酸素適応薬があるので、ガミラス人が地球で過ごすのも問題ない。
それから数日後・・・
総統府内の会議場にてデスラーから衝撃的な言葉が発せられた。
「我がガルマン・ガミラスは地球と同盟を組もうと思う」
『えっ?』

『はっ？』
デスラーの言葉を聞いて頭の上に？マークを浮かべている。
「総統閣下、地球と同盟・・・でありますか？」
「そもそも地球とはどんな星なのでしょうか？」
ガミラス出身の軍人は地球を知っているが、ガルマン出身の軍人は地球と聞かれても首を傾げる。
「総統閣下に代わり、諸君らには私から説明しよう」
そこで、ディッツがガルマン出身の軍人たちに地球を説明する。
「な、なるほど・ですから、総統はオリオン腕最辺境の侵攻を禁じた訳ですか・・・」
地球の位置を聞き、ガイデルはデスラーが厳命した命令の理由を理解した。
「それで、地球への使者は我が娘のジュラが志願してくれた」
デスラーはジュラが地球への使者に立候補した事を伝えると、ジュラは会議室内に居る軍人たちに一礼する。
「と言う訳だ・ガイデル」
「はっ!!」
「ガルマン・ガミラスから地球への航路は君が担当する東部方面を通過することになる。面倒をかけるがよろしく頼むよ」
「宜しくお願い致します。ガイデル提督」
「はっ!!このガイデル、身命を賭してジュラ様を地球へとお送り致します」
地球への使者の派遣が決定した後、次は人選となる。
代表はジュラであり、彼女の護衛には引き続きメルダが務め、副代表には外務省の官僚、ローレン・バレルが選出された。
その他にも武官と文官が次々と選出され地球派遣の準備が整うと、宇宙空港にて出発式が行われた。
宇宙空港にはゲルバデス級航宙戦闘母艦に似た青い艦が鎮座している。
この艦は今回、地球への使者としてジュラが乗艦する御召し艦、改・ゲルバデス級特一等航宙戦闘母艦、ガミラシアである。

本艦は指揮能力を持ちながら旧ガミラス宇宙軍で使用されていたゼルグート級一等航宙戦闘艦より小型なので、取り回しが良く、ゲルバデス級と同様多機能で長期航海に向いている艦と言う事で、ガルマン・ガミラスの力を誇示すると共にジュラたち乗員の安全性を考慮してジュラの御召し艦となった。
「では、行って参ります。お父様」
「うむ、気を付けてな。そして、地球との懸け橋と言う大役であるが、宜しく頼むぞ」
「はい」
「メルダ、ジュラ様の事を頼んだぞ」
「承知しております。父上」
乗員たちがガミラシアに乗艦し、ジュラたちはガルマン・ガミラスと地球の懸け橋となるべく、星の海へと乗り出して行った。

百三十九話　ティアナの訓練校生活

ここで時系列は時間をジュラがデスラーに地球への使者を名乗り出る前までに巻き戻す。
地球は暗黒星団帝国からの戦災復興と宇宙開拓を再開した中、地球の宇宙防衛を担う宇宙戦士訓練学校の校長室では、校長の榎本勇が一枚の履歴書を見ていた。
そして、机の上には四枚の推薦状も置かれている。
推薦人は、空間騎兵隊　第一都市防衛師団　第一大隊　大隊長　古野間　卓
防衛軍司令部　軍令部　第一部　第一課所属　北野　哲
防衛軍　宇宙戦艦　まほろば　艦長　月村良馬
防衛軍司令部　軍令部　第三部　第五課長　中嶋　源三郎
軍でも現場、司令部からのエリート軍人からの推薦状に履歴書の備考欄には『暗黒星団帝国による地球の占領時、パルチザン活動に参加』と書かれていた。
「このお嬢ちゃんがね・・・でも、顔の傷を見る限り信憑性があるな・・・それに推薦状にも確かにパルチザン活動に参加していたと書いてあるし・・・」
履歴書の顔写真の部分にはティアナの写真が貼られていた。
今回、ティアナは宇宙戦士訓練学校の途中編入試験を受け、その時に必要な書類を訓練学校へと送っていた。
その書類を榎本は合否判定をしながら見ていたのだ。
なお、編入試験を受ける際、忍は一応ティアナに顔の傷は隠していくように言ってティアナは面接もあるので、顔の傷にはガーゼを貼って受けたが履歴書の証明写真は素顔のまま撮影しており、インパクトを榎本をはじめ教官らに植え付けた。
「まぁ、学力も合格点に到達しているしな・・・」
顔の傷は衝撃的だったが、学力、人格、さらにパルチザン活動を経験した事や推薦人が軍の中でもエリート事だったことにより、ティア

ナは宇宙戦士訓練学校へと入校を果たした。
宇宙戦士訓練学校は将来の宇宙戦士を育成する訓練学校であり、多くの若者が入学し、日々厳しい訓練と志を共にする仲間たちと共同生活をしている。
そんな訓練学校の学生の一人、土門竜介と日本でも月村家、南部家と並ぶ大財閥である揚羽家のご子息である揚羽武が教室の窓際にて会話を興じていた。
「そう言えば、土門。この前、訓練学校の編入試験があったじゃないか」
揚羽が土門に編入試験の話題を振る。
「ああ、その日は休校だったからよく覚えているよ」
「で、その編入試験を覗き見に行った奴がいてな」
「へぇ～わざわざ休日を潰してまで他人の試験を見学に行くなんて暇な奴だな」
土門は、折角の休校を外で過ごさずにわざわざ自分に関係のない編入試験を覗き見に行くなんて暇人だと呆れる。
「まぁ、そいつが言うにはその試験の受験生で凄い奴がいたらしい」
「凄い奴？どんな奴なんだ？」
「顔立ちは日本人じゃなく、外国人っぽい感じだったらしいが、顔に大きなガーゼを貼っている奴でな」
「顔にガーゼ？」
「ああ、覗き見に行った奴は気になって後をつけたみたいなんだ。それで、洗面所でガーゼを貼りかえる所を見たんだが、そのガーゼの下には・・・」
「下には？」
「下には大きな傷があったんだ」
「・・・そりゃあ、ガーゼを貼っていたんだから、怪我や傷があっても別に不思議じゃないだろう？」
「そ、それはそうなんだが・・傷があったのは男じゃなくて女だったらしい」
「女!?」

てっきり、男だと思っていたのだが、顔に傷を持つ女と言う事で思わず土門の声が裏返る。
「気になるだろう？顔に傷を持つ女なんて・・・」
「あ、ああ・でも、その女が編入試験をパスしたかは分からないんだろう？」
「ま、まぁ、そうなんだが・・・」
顔に傷を持つ女に多少の興味を抱く二人であったが、その女が編入試験を合格して訓練学校に編入してくるとは言い切れなかった。
そんな中、朝礼を告げるチャイムが鳴り、二人は自分たちの席へと戻る。
勿論他の訓練生たちも同様に自分の席に着く。
そして教官が教室へと入ってくる。
「起立!!」
日直が号令をかけると訓練生たちは一糸乱れずに席から立ち上がる。
「礼!!着席!!」
訓練生たちは教官に一礼し、席へと座る。
「おはよう」
『おはようございます!!』
「さて、諸君らも知っているが、先日我が宇宙戦士訓練学校にて編入試験が行われた」
教官は先日行われた編入試験について訓練生たちに確認するかのように伝える。
「編入試験において、編入前の学歴・職歴を吟味して編入クラスを決定する。その結果、本日このクラスに編入する新たな訓練生が来る。軍では集団行動、集団生活が基本となる。途中編入だからといって差別することなく、接してもらいたい。以上だ」
続いて教官は、土門と揚羽らのクラスに編入試験を突破した編入組が新たに来る旨を伝えると、
「では、入り給え」
「失礼します!!」

「失礼します!!」
「失礼します!!」
教官が編入組の入室を許可すると、教室の外で待機していた編入組の新訓練生たちが一礼と挨拶をしながら、教室へと入って来る。
そんな新訓練生の中で教室に居た訓練生たちがギョッとする人物が教室に入って来た。
「失礼します!!」
『っ!?』
教室に入って来たその人物はオレンジ色の髪に蒼い眼、容姿は日本人ではなく外国人風の女性なのだが、何より目につくのは彼女の左頬に走る魚の骨のような傷。
教壇の隣に立つ新訓練生たち。
「彼らが新たに諸君らとこれから学生生活、訓練、勉学を共にする。では、一人ずつ自己紹介を・・・」
教官は顔に傷を持つ女性を華麗にスルーして新訓練生たちに自己紹介を促す。
新訓練生たちは自己紹介をするが、教室に居る訓練生たちの興味は完全に顔に傷を持つ女性になっている。
やがて、顔に傷を持つ女性の番になる。
「ティアナ・ランスターです。顔の傷に関しては気にせずに接してもらいたいと思っております」
(揚羽、アレが・・・)
(ああ、特徴が一致している。まさか、俺たちのクラスになるなんてな・・・)
土門と揚羽は朝礼前に話していた人物がまさか自分たちと同じクラスになる事に驚いていた。
新訓練生、訓練生と混合となったクラスでは互いに物珍しさがあるのか、座学の講義の中でもチラチラと視線が飛び交うが、土門と揚羽たちのクラスではそのほとんどがティアナに向かっていたが、当の本人は視線をものともせずに講義に集中していた。
そして、実技訓練では・・・

編入組の多くはコスモガン何て初めて握る者が多かったので、まずはコスモガンについての講義だったが、ティアナに関してはパルチザン活動の際に使用しており、その件についてはティアナを推薦した古野間と北野からの推薦状に書かれていたので、ティアナは訓練生たちと共に射撃場に居た。
（お、おい、他の編入組はコスモガンの講義からなのに、どうしてアイツは射撃場に居るんだ？）
（俺が知るかよ）
揚羽は編入組のティアナが何故、射撃場に居るのか分からず土門に訊ねるが、当然土門もティアナが射撃場に居る理由を知る筈もない。
やがて、射撃訓練が始まると土門も揚羽も訓練に集中する。
最低限出力に調整されたコスモガンを手にして的に向かって射撃する訓練生たち。
電子ボードには訓練生たちのスコアが表示され、もう一つの電子ボードにはクラス内のトップ３の成績が表示される。
「相変わらず、射撃が上手いよなぁ～」
「射撃に関しては誰にも負けない自信があるからな。でも、揚羽だってなかなかの成績じゃないか」
揚羽は電子ボードに表示されている土門のスコアを見て呟くと、土門は自信ありげに言う。
「お前に言われても皮肉にしか聞こえないぜ」
電子ボードには、
土門竜介　４９７／５００
揚羽武　４５７／５００
と表示され、現在の射撃成績では土門が一位となっていた。
そんな中、ブースの一角がざわついている。
「ん？なんだ？」
「さあ？行ってみるか？」
「ああ」
二人がざわついているブースへと言ってみると、そのブースにはティアナが居り、コスモガンで次々と的を撃っている。

しかも凄い速さでなおかつ、正確に・・・・
「す、すげぇ・・・・」
「パーフェクト行くんじゃねぇ？」
周囲の訓練生たちはティアナの射撃を見て感嘆の声を漏らす。
「・・・・」
そんな中、土門は悔しそうに顔を歪ませる。
やがて、射撃訓練が終わり、ティアナの成績が表示される。
ティアナ・ランスター　５００／５００
ティアナの成績は何とパーフェクトだった。
「土門・・・・」
揚羽が土門の肩に手をポンと置くと、
土門は揚羽の手を払いのけ、不機嫌そうにその場を後にした。
「あぁ～あぁ～こりゃあ荒れるな・・・・」
土門の態度から揚羽は彼が物凄く不機嫌になったと判断する。
元々土門は負けず嫌いなところがあったので、自分が得意とする射撃でティアナに・・女性に負けた事が土門のプライドを著しく傷つけた。
一方、そんな土門の心情を知る由もなくティアナの方はと言うと・・・・
「ふぅ～・・・・」
一息つき、
（まずまずの成績ね。こっちが止まって射撃するならそれなりの結果が出ると思ったけどまさか全部当たるなんてね・・・・）
顔には出さないがティアナ自身もやや驚いていた。
しかし、パルチザン活動をしていた時は多数ｖｓ少数の戦闘ばかりで撃つ方も撃たれる方も常に動いていたので、今回の訓練で射撃する側のティアナが動かない為に好成績をたたき出すのは別段不思議ではなかった。
こうしてティアナにとって人生で二度目になる訓練学校生活が始まった。
初日にはティアナの顔の傷のインパクトは凄かったが何日かもす

れば周囲の訓練生たちも慣れていく。
そして、ティアナにも友人が出来た。
管理局の訓練学校でスバルと縁を持った時と同様、寮の同室となった女学生だ。
その女学生と共に食堂で昼食を食べている時、
「ランスター!!」
「ん？」
ティアナは突然呼ばれ視線を向けると、
「今日の射撃訓練じゃあ、絶対に負けないからな!!」
土門がビシッとティアナに指を突きつけ勝負？を挑む。
そして、土門は一方的にそう言うとズカズカとした足取りでその場を後にする。
「・相変わらず土門の奴、貴女をライバル視しているわね。ティアナ」
「はぁ～毎回挑まれるこっちの身にもなってほしいものだわ」
「ご愁傷様～」
「まったく、他人事みたいに言うわね。うらら」
ティアナは恨めしそうに向かい席に座る女学生・日下部うららを見る。
「まぁ、事実他人事だもんねぇ～」
一方のうららはまさにどこ吹く風と言った感じだった。
編入後、初めての射撃訓練以降、土門はティアナを完全にライバル視しており、何かにつけてはティアナに勝負を挑んで来ていた。
ティアナの実力が高いのは彼女が別の星における治安維持組織で働いていた事やパルチザン活動が大きく影響していた。
しかし、そんなティアナの事情何て彼女が語らない限りしらないし、そもそもパルチザン活動については吹聴するような話でもないし、自分が別の星で治安維持組織に従事していたなんて言ったところで信じる者は居ないとは言い切れないがそれでも突拍子のない話だ。
言い切れないと言うのはこれまで地球がガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国と外宇宙から侵略を受けた為、人型の宇宙人が存在している事が判明しているからだ。

土門に関しては実力でティアナに勝ってやると意気込んでいたのだが、中には邪な手でティアナを蹴落とそうとする者も居た・・・
恐らく編入組であるティアナが好成績を立てているのが我慢ならなかったのだろう。
ティアナが訓練校に入校してから少しして訓練校内にて、
『ティアナ・ランスターは元レディースの総長で顔の傷はヤクザとの抗争で出来た』
『ティアナ・ランスターは中学生時代に援交・麻薬・万引きの常習者で少年鑑別所に収監された過去を持つ』
などと、根も葉もない噂ばかり・・・
そもそもこの噂が事実であるならば、訓練校に入校することは出来ない。
（あほくさ、此処でもこんなガキみたいなことをする奴が居たのね）
管理局の訓練校でも、初めての試験の結果を見に行った時、自分とスバルが好成績の結果を出した時、陰口をたたかれた時があったので、ティアナはありもしない噂に関して特に気にする様子がなかった。
だが、学友となったうららはまるで自分がされたかのように烈火のごとく大激怒した。
そして、意外なのがこの噂の鎮静化に乗り出したのが土門と揚羽の二人だった。
うららがティアナを連れて土門たちに訊ねてみると、
「くだらない噂で此奴が勝ち逃げして放校処分になるのが許せなかった」
と、土門はティアナから視線を逸らしながら言った。
そして、このデマを流した訓練生はティアナではなく自身が放校処分となった。
このデマ騒動以降、土門、揚羽、ティアナ、うららの四人の絆が深まったのだが、
あるシミュレーション実技講義で土門、揚羽、ティアナ、うららの四人は同じ班になり、艦隊戦のシミュレーション実技を行った。

結果的には四人は対戦相手の班に勝つことが出来たのだが、実技後・・・・

「あんた、何なの!?あの猪突猛進した動きは!?おかげでこっちにも被害が及んだし、あんたが率いた部隊なんて壊滅状態じゃないの!?」

「はぁ!?攻撃は最大の防御って言葉を知らないのか!?これだから女は・・・・」

ティアナと土門は先程のシミュレーション実技についての反省会で口論し始めた。

「男、女は関係ないの!!あんたのやったことは無駄に味方を殺し、味方を混乱させただけの迷惑行為なのよ!!」

六課時代にＦＷ陣のセンターガードを務めていたティアナとしては今回のシミュレーション実技での土門の動きは看過できなかった。

やがて、互いの口論が徐々にヒートアップしていきこのままでは殴り合いに発展するのではないかと思われたので、

「揚羽、アンタが行って二人を止めなさいよ」

「えっ?俺が!?」

「あそこまで互いにヒートアップしちゃあ、いつ殴り合いに発展してもおかしくはないでしょう?男なら身体を張って喧嘩を一つでも止めてみなさい」

「それって、日下部が火の粉を浴びたくないだけなんじゃあ・・・・」

「いいから行く!!」

「くそ～」

どうも気が強い女性相手には逆らえないのか揚羽は渋々と言った様子で土門とティアナの口論を仲裁する。

「まぁ、まぁ、二人ともそこまで熱くならなくても・・・今回はシミュレーションで人的被害はなかったし、それにチームは勝ったんだから良かったじゃないか」

揚羽が恐る恐る二人に声をかけると、

「「うるさい!!」」

二人は息がピッタリあう形で揚羽に言い放つ。

『シミュレーションで人的被害はなかった』?シミュレーションだか

らこそ、人的被害が少ないような戦術を導き出さないと将来、下に就く部下や仲間たちを無駄死にさせるじゃない!!」
「揚羽は俺の戦術を分かってくれるよな？勝負にも勝ったんだしな!?」
「えっと・・・あの・・・その・・・」
「どっちの言い分が正しいかなんて火を見るよりも明らかじゃない？ねぇ、揚羽？」
「勿論俺だよな？揚羽？」
「あの・・・その・・・」
二人に詰め寄られあたふたする揚羽。
「それで、どっちの意見が正しいと思っているの？」
「そうだな。白黒つけようぜ。さあ、揚羽どっちだ？」
「大体、揚羽、あんたちょっと優柔不断なところがあるわよ」
「そだよな、いつまでもなよなよしていないでハッキリと言えよ」
「あ、あれ？さっきまで二人とも口論していたよな？何で？いつの間にか矛先が俺に向いているの？」
ターゲットが自身に代わっている事に困惑する揚羽。
そんな三人の様子を対岸の火事の如くうららは呆れた様子で見ていた。
時にはこうして口論をするが、基本四人の仲は悪くはなかった。

宇宙戦士訓練学校は文字通り、宇宙戦士を育成する学校だが、そのカリキュラムの中には射撃訓練の様に宇宙艦艇の運用以外のカリキュラムもあり、体術訓練の他に野戦訓練もあった。
しかも夜間での・・・
この日は夜間の野戦訓練が行われた。
対戦相手は何年も訓練生たちを相手にしている教官たちだ。
「やれやれ、俺たちは宇宙戦士を目指しているのに何で空間騎兵みたいな事を・・・特に俺は航空科志望なのに・・・」
模擬戦に使用する装備を点検しながら揚羽がぼやく。
「何言っているの？宇宙での戦闘でも艦を降りて戦う事だってあるの

よ。ヤマト　や　まほろば　の人たちはあの彗星帝国の戦いで敵の根拠地に侵入して戦ったのよ」
　ティアナは宇宙とは言え、決して艦や艦載機での戦闘だけではないことを教える。
「あれ？ティアナはヤマトかまほろばの乗員に知り合いが居るの？」
「えっ？ええ・それなりに・・・」
　知り合いどころかこの地球に来て居住先も提供されていた。
　しかし、ティアナはお茶を濁す感じで曖昧に答えた。
　そして、夜間野戦訓練が始まる。
　会場は林や小高い丘のあるフィールド。
　訓練生たちは姿勢を低くして進んで行く。
「居た・・・教官連中だ」
　土門は双眼鏡で対戦相手である教官たちを見つける。
「相手との距離は？」
　ティアナが現在位置から教官たちとの距離を訊ねる。
「距離三百・・・敵数・・・十ってところだ」
　土門は双眼鏡から相手との距離と確認できる人数を報告する。
「なんか・ティアナは随分と落ち着いていると言うか・慣れている感じね」
　うららが妙に冷静なティアナを見て戦場に慣れている感じがしたので訊ねてみる。
「まぁ、色々と経験はしたわね・・・でも、模擬戦とは言えこうして戦場に立つと自分は生きているって実感が沸かない？」
　ティアナが不敵な笑みを浮かべながらうららに訊ねる。
　しかし、うららは、
「さ、さあ・私には分からない・かな・・・」
「まぁ、うららも経験すれば分かるわ」
　模擬戦とは言え、うららはこうした野戦は今日が初めてだったので、ティアナの言葉の意味はまだ分からなかった。
　すると、教官たちも訓練生たちの存在に気づいたのか発砲してきた。

「うわっと、あぶね!!」
土門は間一髪な所を躱す。
「へへへ、派手にぶっ放すか」
土門は戦場と言う周りの空気に触発されたのかやや興奮しているように見える。
「ちょっと待ちなさい」
「なんだよ?」
「下手に応戦するとかえって相手に此方の位置と人数を教える事になるわ」
「じゃあ、どうするんだよ?」
「戦場では状況を正しく判断した者が勝利する。向こうはまだ正確に此方の位置も人数も把握していない。このまま回り込んで・・・・ん?」
ティアナはまだ教官たちが正確に自分たちの位置も人数も把握していないと判断し、相手が気づかない内に側面と背後から強襲しようかと思っていると、
ギュピッギュピッ・・・・
教官たちの奥から妙な音が聴こえて来た。
しかし、ティアナはこの音には聞き覚えがある音だった。
(この音・・・・ま、まさかっ!?)
ティアナが嫌な予感を覚えると、
「もっふる!!」
奥から犬だかネズミだかよく分からない茶色の生き物が出て来た。
「ぼ、ボ○太くんスーツ!?」
犬だかネズミだかよく分からない茶色の生き物を見てティアナは驚愕の声を上げる。
「えっ?ティアナ、アレが何だか知っているの?」
「え、ええ・・・教官連中、まさかあんなモノを模擬戦に投入するなんて大人げない・・・っ!?や、ヤバい、皆伏せて!!」
ティアナは仲間に伏せるように言うが、
「はぁ?何言ってんだ?ランスター」
「教官連中も焼きが回ったのか?あんな着ぐるみを着てくるなんて

…」
「ここは遊園地じゃねぇって言うのに」
「やっちまおうぜ」
　しかし、ティアナからの忠告を聞かない訓練生たちも居り、姿勢を低くしながら教官たちの下へと接近していく。
「あのバカが…」
　そんな訓練生たちを見てティアナは思わず毒づく。
「おい、ランスター。あの着ぐるみが何だって言うんだ？」
　土門はティアナの言動が気になり、教官たちの下へ向かはなかった。
「いいから、伏せながらこの場を移動するわよ。モタモタしていたらあっという間に全滅するわ」
　ティアナは匍匐前進しながら移動し始める。
　うららもティアナの事を信じたのか、彼女も匍匐前進でティアナの後をついていく。
「「…」」
　土門も揚羽も顔を見合わせるが、あのティアナがあんな着ぐるみにビビるなんて何か訳があると思い、彼らも匍匐前進してティアナとうららの後を追う。
　すると、背後からは…
　ババババババ…
　ダダダダダダダ…
「ぐわっ!!」
「ぎゃぁぁー!!」
「ぐふっ!!」
　突撃を行った訓練生たちの悲鳴とビームガンの銃声がした。
　勿論、この模擬戦に使用するコスモガンも最低出力になっているので、当たっても失神するぐらいの威力になっている。
　土門と揚羽が後ろをチラッと振り返ると、訓練生たちがバタバタと着ぐるみ一体に殲滅されている光景が目に入った。
「なっ、なんだよ・・アレ…」

「あんなかわいい顔してやっている事がものすごくえげつねぇ・・・」
　着ぐるみの顔とやっている事のギャップに顔を引き攣らせながら匍匐前進を続ける。
「それで、ティアナ。あの着ぐるみは何なの？」
　匍匐前進しながら、うららがティアナにあの着ぐるみの正体を訊ねる。
「・・・」
　ティアナは説明するかどうか悩んだが、敵の正体を知らなければ協力して倒せないと判断して話すことにした。
「あの着ぐるみはただの着ぐるみじゃないわ・・・あの着ぐるみは月村グループが製作した戦闘スーツよ」
「えっ？戦闘スーツ？」
「マジかよ・・・」
「あの外見で・・・」
「あんたたちもさっき見たでしょう？あの外見に騙されて突撃していった連中の末路を・・・」
「あ、ああ・・・」
「何だかホラーみたいだったぜ・・・」
「製作者（忍さん）の意図は分からないけど、外装は超アラミド繊維に防弾チョッキの二段構え、指向性マイク・サーマルセンサー・暗視システム、サーモグラフィとかの探知システムが充実して戦術支援ＡＩまで搭載しているのよ」
「へ、へぇ～・・・」
　ティアナからボ○太くんの性能を聞いてうららは思考がついて来ていない様子。
「あの戦闘スーツの暗視装置やサーモグラフィの前じゃあ、夜の闇なんて無意味だし、この匍匐前進でさえ、向こうには丸見えかもしれないわね」
　ティアナは匍匐前進しながら苦虫を噛み潰したように顔を歪ませる。
「でも、なんでお前はそんなにあの着ぐるみの事を詳しく知っている

んだ？」
　土門がティアナに何故そこまであの戦闘スーツに詳しいのか訊ねる。
　あの外見からアレが戦闘スーツなんて分かりづらいし、見ただけで外部の素材、ましてや内部の装備品なんて知る訳もない。
「・・・使ったことがあるからよ」
「「えっ？」」
　ティアナの発言に三人は目を点にする。
「今まで黙っていたけど、私は訓練校に入る前に戦場を経験しているの」
「戦場・・・？それって・・・」
　うららはつい最近起こった戦場に心当たりがあった。
　当然、土門と揚羽もだ。
「ええ、暗黒星団帝国が地球を占領した時、私はパルチザン活動に参加していたのよ」
「「・・・」」
　ティアナの告白に三人は絶句する。
　暗黒星団帝国が地球へ襲来し、地球を占拠した時、暗黒星団帝国は地球の宇宙戦士を育成するこの宇宙戦士訓練学校にもやってきた。
　暗黒星団帝国の兵士がやってくると教官、訓練生たちは寮に軟禁されていた。
　暗黒星団帝国の占領軍将兵たちにとって訓練生たちは将来自分たちの敵となる危険な芽であったからだ。
　ただ、教官や訓練生たちが殺されなかったのは暗黒星団帝国が抱える身体的問題の解消の為、本星から極力地球人は殺すなと命令されていたからで、暗黒星団帝国の兵士たちは教官と訓練生たちから武器だけを取り上げて、寮に軟禁したのだ。
　自分たちが軟禁されている頃、ティアナはパルチザンとしてその暗黒星団帝国の占領軍と戦っていたと言うのだから驚きだ。
「じゃあ、その顔の傷は・・・」
「占領軍の総司令・カザンとか言う奴につけられたのよ」

「嘘・・・じゃないんだな？」
土門が恐る恐るティアナに訊ねる。
「こんなことで嘘を言ってどうするの？」
パルチザンには防衛軍の軍人たちも大勢参加していた。
調べれば分かる嘘をティアナがわざわざ言う必要性を感じない。
「それにしても教官連中ふざけやがって!!そんな高性能の戦闘スーツを自分たちだけで使用するなんてルール違反じゃねぇか」
ティアナからボ○太くんスーツの仕様を聞いてそんな戦闘スーツを訓練生相手の模擬戦にわざわざ持ち出してきた教官たちに土門は声を荒げる。
「そうね、とんだ茶番だわ。教官たち、私たちをいたぶって遊んでいるんじゃないの？」
うららもやはり、訓練生相手の模擬戦にもかかわらず、自分たちだけ有利な戦闘スーツを使用する教官たちに憤慨している様子。
「戦争に綺麗も汚いも無いわよ。実際に暗黒星団帝国も地球に対して奇襲をかけて来たし、パルチザンに居た時はその暗黒星団帝国の占領軍に対してあの戦闘スーツを使っていたしね」
「それで、そんな高性能の戦闘スーツ相手にどう対処する？」
揚羽がティアナにボ○太くんの対処法を訊ねる。
「一応、対処方法がない訳じゃないわ」
「それはどんな方法なの？」
「あの戦闘スーツの目玉がカメラになっているの・・・そこを壊して、転ばせることが出来れば・・・ひとまず、遮蔽物が多い森へ退避しましょう」
対処方法を告げるティアナ。
教官チームに勝つには、まずあのボ○太くんを倒さなければならない。
ひとまず、リタイアを免れた訓練生たちはティアナに付き従い森へと退避した。
ボ○太くんスーツを始めとした教官らはそんな訓練生たちを追いかける。

「フハハハハハ、学生どもめ無様に逃げていくぞ!!出来れば全員一斉に突撃してくればさっさとケリがついたのだがな」
森へと退避していく訓練生たちを見て教官の一人は高笑いをする。
しかし、そんな姿勢が教官たちに慢心を生んだのかもしれない。
一方、森へ一早く退避したティアナたち訓練生たちは、対ボ○太くん用の対処方法を立てていた。
「まず、隊を三つに分けましょう」
「三つ？」
「ええ、一つはボ○太くんを含めた教官たちの注意を引き付ける囮チーム、次に教官チームの側面や背後から襲撃するチーム、そして三つ目は・・ボ○太くんを仕留めるため一撃必殺の役目・・・」
ティアナが作戦を立てチーム分けをする。
囮チームは足の速い訓練生たちを中心に揚羽をリーダーとしたチーム。
襲撃チームは射撃を得意とする土門を中心にしたチーム。
そして、ボ○太くんを仕留めるのはボ○太くんの事を知っているティアナが務めた。
本来ならば、ボ○太くんを仕留める役を土門は自分がやりたかったが、ボ○太くんの性能を知るのは訓練生たちの中ではティアナだけだったので、仕留め役はティアナに決まった。
ボ○太くんを中心とした教官チームが森の中へ入ると、前方から訓練生たちが教官チームへ攻撃してくる。
「ふん、無駄な抵抗を・・・」
ボ○太くんがビームガンを放つと訓練生たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていく。
「このまま一気に殲滅してやるわ!!」
ボ○太くんが訓練生たちを追撃しようとした時、
バキューン!!
「ぎゃあああああ」
「ん？どうした!?浜北教官!?」
「や・・・やられました・別方向から・・・」

ドサッ!!
一人の教官が別方向から撃ってきた訓練生の攻撃を受け、その場に倒れる。
これは土門たち別動隊からの攻撃だった。
「ぬぅ〜学生どもが、ちょこざいな真似をしおって!!別方向から敵襲っ!!ただちに応戦せよ!!」
教官たちが土門たち別動隊へ攻撃を掛けようとした時、散っていた筈の揚羽たち囮部隊は再集結して再び教官チームへ攻撃を仕掛けてくる。
「前方の学生たちが集結して反撃してきました!!」
挟撃を受け、混乱が生じる教官チーム。
そこへ、木の上に居たティアナがボ○太くんの上に飛び降りて来た。
「もふる?」
「いいぞ、ランスター!!そのままその着ぐるみを潰しちまえ!!」
揚羽はボ○太くんの頭部に飛び乗ったティアナを見て、彼女に応援の声をかける。
「これで、終わりよ!!」
ティアナはコスモガンの銃身を持ち、クリップの部分をトンカチで叩くかのようにボ○太くんの両眼を叩き割る。
「も、も、も、も・・・ふる・・・」
ドゴンっ!!
メインカメラを割られたボ○太くんは制御不能になり、まるで酔っ払いみたいな千鳥足になるとその場に倒れた。
ティアナはボ○太くんが倒れる前に頭部から飛び降りていたので、転倒した際下敷きになる事はなかった。
「ら、ランスター・・おのれ〜・・・・」
ボ○太くんを潰したティアナの行動を見た教官は蟀谷に血管を浮き出してティアナにコスモガンの銃口を向ける。
しかし、教官のコスモガンからビームが出る事はなかった。
何故ならば、

「銃を捨てていただきましょうか?教官殿」
土門とうららが教官の背後に立っており、コスモガンを突きつけていた。
「ぬっ・・・・うぅ〜・・・・」
撃たれても、銃を捨てても自分は学生に負けてしまう。
教官としてのプライドが葛藤する中、野戦訓練の運営本部より終わりを告げる花火が打ちあがり、
『制限時間経過の為、現時刻を持って訓練を終了とする!!繰り返す!!訓練終了!!訓練終了!!』
模擬戦終了を告げる放送が流れた。
訓練終了の放送が流れ、訓練生たちは『終わった』と一息ついたり、緊張から解放された様子でホッとしている。
今回の模擬戦は夜間帯で行われた事を含め殲滅戦ではなく、この模擬戦も講義の一環だったので制限時間が設けられていた。
教官チーム、訓練生チームが相手チームを殲滅したらその時点で終了していたが、こうして制限時間を越えても両チームが生き残っているので人数が多い方が勝ち・・・と言う訳ではなく、引き分けとなった。
元々、訓練生チームの方が教官チームより人数が多い為であった。
「時間切れだ!!私は負けていないからな!!いいか、負けてなんかいないぞ!!ふんっ!!」
何だか負け犬の遠吠えみたいな捨て台詞を吐いて教官はズカズカと大股でその場から去っていく。
「「・・・」」
教官の子供じみた言い訳をティアナ、土門、うららの三人はポカンとした表情で見ていた。
やがて、教官が去るとティアナはナイスアシストをしてくれた土門とうららに敬礼すると二人もティアナに返礼した。
そして、模擬戦が終わり撤収する最中、
「あっ、三人とも私がパルチザン活動をしていた事は秘密にしておい

てね」
　ティアナは土門、揚羽、うららの三人に自分がパルチザン活動に参加した事は黙っておいてと頼んだ。
「えっ？どうして？」
「そうだよ、地球を救うために戦っていたじゃないか」
　うららと揚羽はどうしてパルチザン活動に参加していた事を秘密にするのか理解できなかった。
　防衛軍のパルチザンと言えばヤマト同様、地球を救った言わばヒーローみたいな存在なのに・・・
「あまり吹聴されて目立ちたくないの」
（（いや、十分に目立っていると思うけど・・・））
　例えパルチザン活動を秘密にしなくてもティアナの場合、その顔の傷のせいで目立っていると思ううらと揚羽。
「ふん、変に格好つけやがって」
　土門はティアナの経歴を聞いて悔しそうに言う。
「あれ？もしかして悔しいの？土門。それに、今日の模擬戦でもティアナが教官チームの切り札を叩き潰したしね」
「べ、べつに悔しくなんか・・・それに俺たちは宇宙戦士になるんだから、宇宙での実績を積んでこそじゃないか。それこそ地球を救ったヤマトみたいに・・・」
「はい、はい。分かったから」
　うららは土門に生暖かい視線と共に彼の肩をポンポンと叩く。
「そ、それよりも次の模擬戦で教官連中があの着ぐるみを出してきたら俺が潰すからな!!ランスターばかりにいい所を取られっぱなしは癪だからな」
（（やっぱり、悔しいんじゃない））
　否定しつつも根が馬鹿正直なのはそれとも無意識なのか土門はティアナの実績に対して悔しがっている事を口にしていた。
「まぁ、馬鹿正直な所が土門らしいじゃないか」
　揚羽は苦笑しながら前を歩く土門の性格を褒める。
「ええ、そうね」

「面倒くさい所もあるけどね」
ティアナもうららも揚羽同様、苦笑しつつそれに同意する。
教官チームのボ〇太くんの投入と言うイレギュラーな事が起きつつもティアナはリタイアを免れた訓練生たちを一つに纏め作戦を立案、実行し、自身はボ〇太くんを撃破すると言う結果を出した。
時間切れと言う形で模擬戦は引き分けに終わったが、ティアナの指揮官としての能力は着実に成長していたのだった。

百四十話　太陽系の破滅

大銀河系星雲・・・
直径１０万光年・・・
厚さ１万５０００光年・・・
恒星の数、一千億・・・
そこには、今生まれて来た星もある。
死んでゆく星もある。
宇宙の命は無限だが、その命を受け継ぐ個々の星々の運命は様々である。
そして、地球もその様な星々の一つに過ぎない。

ティアナが宇宙戦士訓練学校へと編入し、人生で二度目の訓練校生活を送りながら宇宙戦士を目指しているその頃、銀河系東部、バジウド星系のバース星では総督のボローズはある決断を下した。
それは、迫りくるガルマン帝国軍の魔の手から逃げると言う選択肢であった。
ただし、逃げると言ってもボラー連邦本星ではなく、このバジウド星系から更に東進し、オリオン腕方面へと向かい、新たなる惑星国家を作ろうと言う壮大と言うか無茶な計画であった。
ただ、ボローズはバース星だけでなく、このバジウド星系におけるボラー連邦系の惑星国家へこの旨を打診し、彼の考えに賛同する同志を集めた。
このバジウド星系にいくつもの惑星国家が存在しており、それらの惑星国家が此処、バース星を侵略しようとしていた中、ボラー連邦がバース星を保護星とし、次いで周辺の惑星国家も次々とボラー連邦の領地へ編入していった。
しかし、ガルマン星が謎の勢力による電撃戦で解放されて以降、その勢いは銀河系東部方面・このバジウド星系まで忍び寄っており、統

治の維持に関して暗雲が立ち込めていた。
しかも銀河系中心部をガルマン帝国軍によって抑えられているので、本星への帰還も不可能。
ボローズに突きつけられた選択肢はこのままバース星に留まりガルマン帝国と戦うか？
それともまだガルマン帝国が進出していない東部、オリオン腕方面へ逃亡するかの二者択一であった。
正直に言ってバジウド星系にあるボラー連邦系の惑星国家すべての宇宙艦隊を集結させてもガルマン帝国に勝てるか不透明であった。
ならば、一部の望みをかけオリオン腕方面へ逃亡する方が生き延びる事が出来るのではないかと彼はそう思った。
都合が良いことに先日、宇宙艦艇の造艦ドックにて新造艦が完成したばかりだ。

ただ、事態が逼迫している中なので華々しい就役式なんて行う余裕も今のボローズたちにはなかった。
更にボローズの下には彼の考えに賛同した者たちからの連絡も入っていた。
自分のようにこのまま統治している星に留まればガルマン帝国の手により処刑されるか、現地の住人たちがボラー連邦からの独立運動を起こし、現地の住民たちの手により殺されるかもしれないとの事で今回のボローズからの連絡はまさに渡りに船だったので賛同したのだ。
ボラー連邦から惑星統治へやってきたボラー星人の他にボラー連邦に協力してボラーからの特権と賄賂などの甘い蜜を吸っていた現地の権力者たちの中にもボローズに賛同する者も居た。
話が纏まり、後は賛同者たちと共にバース星から去るだけとなった中、ボローズは総督府にラムを呼び寄せた。
「総督、お呼びでしょうか？」
「うむ・ラム君・・・私は既にこのバジウド星系の命運は既に尽きたと

思っている。その理由は分かるだろう？」
「・・・ガルマン帝国・ですか？」
「そうだ。既に奴らは銀河系中心部を完全に掌握し、銀河系東部・このバジウド星系へ・バース星へと迫りつつある。もはやガルマン帝国がいつ襲来してもおかしくはない状況となっている」
「それについては承知しております」
「故に我々はこの星から脱出し、新たな新天地を目指す」
「新天地・ですか？」
「うむ、オリオン腕にはまだガルマン帝国の手が及んでいない有人惑星がある筈だ。それらの星々の惑星国家を集結させ、ガルマン帝国と戦うつもりだ。既に此処バース星以外に周辺の星々にて賛同してくれる者も多数居る」
　ボローズはバース星以外にも周辺の惑星国家にて、自分たちの生まれ故郷の星や統治している星を捨て、オリオン腕方面へ逃亡する者が大勢いる事を語る。
「・・・」
　ボローズの話を聞き、ラムは神妙な顔つきだ。
「そこでだ、ラム君。ぜひとも君にもこの旅と我々の一大事業に参加してもらいたい」
　ボローズはラムを勧誘し始めた。
「軍人としての君の能力と人望があれば今後の対ガルマン帝国との戦いも優位に進められる筈だ」
「・・・総督、申し訳ございません。私はバースの軍人であります。母国バースに危機が迫っている中で、母国を見捨てる訳にはいきません。私はバースの軍人として最後までこの地に踏みとどまりガルマン帝国と戦うつもりです」
　しかし、ラムはボローズからの誘いを断り、バース星に残りガルマン帝国と戦う決意である事を告げる。
　ラムの勧誘が失敗したことにボローズはやや顔を歪める。
「それにここへガルマン帝国が襲来するのは総督の仰る通りであります。ならば、総督らがオリオン腕へ向かっている中、誰かが殿を努め

なければなりますまい」
「・・・」
確かにラムの言う通り、自分たちがオリオン腕へ向かっている中、背後からガルマン帝国から攻撃を受けては堪らない。
ならば、此処はラムたちに踏ん張ってもらい少しでも自分たちの逃亡と言う名の旅路の時間を稼いでもらおうと考え、ボローズはラムに対して処罰をする事はなかった。
それからすぐにボローズは自分の考えに賛同する同志を集め、宇宙港からバース星を見捨てて出て行った。
宇宙へ飛び立っていくボローズたちの宇宙艦艇を見上げながら、ラムの副官がポツリと呟く。
「総督らボラーの連中が去ったことで、図らずも我がバースはボラーからの独立を果たしたと判断してもよろしいのでしょうか?」
「あくまでも形だけな・・・しかし、それもそう長くはないだろう・・・」
ラムは副官の意見を肯定する。
「・・・」
ボローズらボラー連邦の関係者がバース星から去ったことでバース星はボラー連邦から独立した形となった。
しかし、ラムは覚悟していたし、分かっていた。
この独立が長くない事に・・・
いずれはこのバース星にガルマン帝国の艦隊が大挙して押し寄せてくる。
現状のバース星の戦力ではとてもあの大帝国の侵攻を止める事は出来ない。
そうなればガルマン帝国はこのバース星を植民地にする筈だ。
バース星人である自分たちの主がボラー連邦からガルマン帝国に代わるだけだ。
だが、すんなりとガルマン帝国の植民地に成り下がる訳にもいかず、せめて一矢報いてやるつもりであった。
「ラム艦長・・・」
「分かっている。我々はやるべき事をやるだけだ。引き続き造艦所で

は宇宙艦艇の建造を行い、指揮官の一部を乗員の訓練に割り当ててくれ」
「承知しました」
ラムは副官に焼け石に水だろうが、戦力の増強を指示した。
ただ、この他にもラムにはやる事があった。
このバース星にはボラー連邦本星を始めとしてボラー連邦系の惑星国家からボラーの政治理念に反対した政治犯やゲリラ活動をしていたレジスタンス、ボラー連邦、ガルマン帝国で禁教とされているシャルバート教の信者を収監する収容所があった。
既にボローズらボラー連邦の関係者はバース星を出て行ったので、彼らをこの星で収監する意味も無くなった。
ラムは収容所にて、ボローズがこの星を出て行き既にバース星がボラー連邦系の星でない事、バース星からの退去の為に輸送船を与える旨を伝え、この星に残るか?それとも他の星を目指すか?その選択を彼らに与えた。
勿論、ガルマン帝国がこの星へ迫っている事も付け加えて・・・・
シャルバート教の信者たちはラムの申し出を受け入れ輸送船で自分たちの宗教の母体であるシャルバート星を目指すためにバース星を船出し、レジスタンスや政治犯たちも自分たちの星へ戻り、引き続き自分たちの星からボラーを追い出すため彼らも自分たちの星を目指しバース星から退去した。
無関係な人々を出来る限りバース星から退去させる活動をラムは続けつつバース星軍人の訓練も欠かさないと多忙な日々を送る事になった。

バジウド星系にてボローズたちボラー連邦とソレに付き従う権力者たちがオリオン腕へ向かっている中、ガルマン・ガミラス帝国では総統であるデスラーの娘、ジュラが地球へガルマン・ガミラスの建国と地球との同盟を結ぶ為、地球への旅路に出る少し前、ガルマン帝国銀河系東部方面軍総司令のガイデルは部下のダゴンにジュラの地球への行幸を伝えた。

その頃、ダゴンはバジウド星系の攻略に当たっていた。

バジウド星系　某宙域　ラムール級航宙巡洋戦艦　ダゴン艦隊
旗艦　ダンドール　艦橋
「ダゴン司令、司令宛てに通信です」
「誰からだ？」
「東部方面軍司令のガイデル提督です」
「よし、繋げ」
　通信士が通信回路を開くとパネルにガイデルの姿が映し出される。
「ガイデル提督」
　ダゴンはガイデルに敬礼する。
「ダゴン、今日の軍議である事が決まった」
「ある事？何でしょう？」
「ジュラ様の行幸が決まったのだ」
「ジュラ様の行幸ですか・・・？」
「うむ」
「ジュラ様は一体何処へ行幸なされるのですか？」
「地球だ」
「地球？聞いたことがありませんな」
「オリオン腕方面にある最辺境にある惑星だ。私も議題に上がらなければ知りもしなかった」
　ガイデルもダゴンもガミラス人ではなくガルマン人だったので地球の存在を知らなかった。
　ガミラス人ならば、地球の存在を知らない訳がないからだ。
「しかし、何故ジュラ様がそんな辺境の星に行幸へ行くのですか？」
　上官であるガイデルさえ知らない星へ総統の娘であるジュラが行幸へ行くのかダゴンには理解できなかった。
「どうも、総統と地球には何かしらの因縁があったらしい・・・もっとも今は和解しているみたいだがな」
「は、はぁ・・・」
「それで、今回のジュラ様の行幸はその地球へ総統の名代としてガル

マン・ガミラスの建国と地球との同盟の為の使者として向かう」
「同盟・・でありますか？辺境の星に・・・？」
「これは総統閣下の決定事項でもある」
「・・・」
　心の中ではガイデルもダゴンも辺境の一惑星に自分たちと対等の同盟だなんてモヤモヤするところがあるかもしれないが、総統であるデスラーの決定事項に異議を唱えるなんて出来ない。
「そして、ジュラ様の行幸航路は我が戦線を横切る」
「戦線へ!?それは危険ではないでしょうか？」
「当然、ジュラ様の行幸には護衛の艦隊も随伴する」
　ジュラの行幸にはガルマン・ガミラス本星の第十七空母艦隊を中心とした護衛艦隊も地球へ同行する。
「しかし、万が一の事もある。ジュラ様の御身に何かあれば当然、私もお前もどうなるか分かっているだろう？」
「は、はい・・・」
「ダゴン、バジウド星系で攻略に時間がかかりそうな星はどこだ？」
「バース星でございます。かの星はボラー連邦が銀河系東部方面の橋頭堡として確保した惑星であり、駐屯する艦隊数もバジウド星系では最多規模であるかと・・・」
「ふむ、ではダゴン。ジュラ様がバジウド星系へ到着する前に掃除をするのだ。バジウド星系にボラーの艦一隻もうろつかぬよう彼奴等を殲滅するのだ!!」
「はっ、承知しました!!」
　ガイデルからの要請は無茶ぶりな要請ではあるが、このバジウド星系の攻略が無事に済めばデスラー、ジュラからの心象は良いだろう。
　そうなれば、自分の昇進にも繋がる。
　そういった打算がダゴンにはあった。
「航海長、針路変更。我が艦隊はバース星へと向かいバース艦隊を殲滅する!!全艦全速前進!!」
　ダゴン率いる第十八機甲師団は針路をバース星へと向けた。

ガルマン・ガミラス側のまさかの理由でバース星への攻略が早まったことを当然知る由もないバース艦隊は乗員の育成目的の訓練と周辺のパトロールを行っていた。
そんなバース艦隊の一艦隊が小・中程度の無人惑星が多数存在するとある宙域で訓練兼パトロールを行っていると・・・・
「敵艦隊、発見!!」
「なにっ!?」
(ガルマン帝国め、もうここまで進出していたのか!?)
この艦隊の旗艦であるセヴァストー級航宙戦闘艦の艦長、ベルノフはガルマン帝国の侵略速度の速さに驚愕した。
「位置は!?」
「はっ、ｒーｘ３６座標、軸上Ｙ接点。ポイント８１Ｆ１。シグナルレッド!!」
「スクリーンに投影」
「了解」
艦橋のメインモニターには艦首が黄色で船体色が深緑色の艦船の姿が映し出される。
(来たか、侵略者ども・・・・)
「バース星本国へ緊急電!!『我、敵と遭遇セリ』とな、座標も忘れるなよ!!」
「はっ、直ちに・・艦隊司令部、此方第三十一養成パトロール艦隊、『我、敵と遭遇セリ』、接触ポイントはｒーｘ３６座標、軸上Ｙ接点。ポイント８１Ｆ１地点!!」
ベルノフは敵と接触した旨をバース星の艦隊司令部へと知らせる。
バース艦隊がガルマン帝国の艦隊を発見したように、ガルマン帝国・・ダゴンが指揮する第十八機甲師団もバース艦隊を発見・捕捉していた。

ガルマン帝国　東部方面軍　第十八機甲師団　旗艦　ダンドール
艦橋
「距離１０万宇宙キロ前方に敵艦隊発見!!」

「解析急げ!!」
「エネルギーパターン判明!!ボラー系の艦船です!!」
「ふむ、攻撃を開始しろ!!」
この宙域で自分たちガルマン帝国の宇宙艦艇のエネルギー反応ではなく、ボラー連邦の宇宙艦艇エネルギー反応が出るのであるならば、敵である事に間違いない。
ダゴンは前方の艦隊に対して攻撃命令を下すと艦隊は攻撃を開始する。
リンチェント級航宙駆逐艦の回転速射砲塔、ラムール級航宙巡洋戦艦の三連装砲塔、回転速射砲塔からは赤いビームが前方の艦隊に向けて放たれる。
そのビームはバース艦隊の前衛に命中する。
「三番艦、七番艦被弾!!撃沈されました!!」
「応戦!!全砲門発射!!」
先手を相手に取られ前方の艦隊に被害が出たが、ベルノフは慌てることなく冷静に全艦に対して反撃を命令する。
バース艦隊を構成するアポストロ級航宙戦艦、ロスチラフ級航宙戦艦、グラード級航宙母艦が格納されていた砲塔を出し、第十八機甲師団の艦艇に対して反撃する。
バース艦隊から放たれた青緑色のビームが第十八機甲師団の艦艇へと襲い掛かる。
バース艦隊の反撃を受け、前衛のリンチェント級航宙駆逐艦とラムール級航宙巡洋戦艦に被弾する。
「前衛部隊に多数の被害!!」
「ほぉ～なかなかやるではないか・・・」
前衛部隊へ被害を与えた事にダゴンはフッと笑みを浮かべるが、
「惑星破壊ミサイル搭載母艦前へ!!」
ダゴンは艦隊の後方に控えていた特殊艦を前進させる。
艦隊の後方から三隻、前進してきたその艦は艦底部に巨大なミサイルを吊り下げた艦だった。

「後方の惑星諸共吹っ飛ばせ!!ミサイル発射!!」
特殊艦の艦底部から発射されたミサイルはバース艦隊に向かって突き進んでいく。
「敵艦隊より、超大型のミサイルが発射されました!!」
「撃て!!撃破しろ!!」
ベルノフは迫りくる大型ミサイルの破壊を命じる。
しかし、そのミサイルは大きさもさることながら丈夫さでも通常のミサイルより丈夫で数隻のアポストロ級航宙戦艦がミサイルに接触するとミサイルではなく、アポストロ級航宙戦艦の方が傷ついた。
バース艦隊を蹴散らしながら進んで行く超大型のミサイルはバース艦隊の後方にあった惑星に着弾する。
するとたちまち惑星の表面に幾つもの亀裂が入り始め、地表が盛り上がりながら溶岩が吹き出て惑星全体がオレンジ色に変貌しまるで風船が割れるかのように眩い光と共に爆発する。
「そ・そんな・・・こんなことが・・・」
いくら大型のミサイルだからと言っても数発着弾しただけで惑星が崩壊するなんて信じられなくベルノフは目を見開いて驚愕する。
やがて、惑星が破壊された事により発生した衝撃波と破片がバース艦隊を襲う。
(ラム・・・すまない・・・俺はここまでの様だ・・・後は・・後は頼んだぞ・・・)
ベルノフは迫りくる衝撃波を前にバート星の未来をラムに託した。
惑星の傍に展開していた事により、バース艦隊の艦船は全てが惑星の崩壊に巻き込まれ、ガラス細工が粉々に砕け散るように崩壊した。
無事に退避出来た艦は一隻も居なかった。
当然、ベルノフも戦死した。
「惑星ｒ－２８－α崩壊!!」
「敵艦隊消滅しました!!」
「我が方のプロトンミサイル一基が軌道を外れてしまいましたがいかがいたしましょうか・・・?」

今回、第十八機甲師団が使用した惑星破壊プロトンミサイルは三発。
その内、二発が惑星に着弾した。
だが、一発だけはバース艦隊の艦艇との接触で軌道がズレ、惑星に着弾せずそのまま何処かへ飛んで行ってしまった。
副官がダゴンにミサイルの処理を訊ねると、
「放っておけ。我々にはジュラ様がバジウド星系へお越しになる前にボラー陣営の戦力を削がなければならんのだ。全艦戦闘態勢解除。指令Ｂ―４２行動に移れ!!」
この時、ダゴンは宇宙の彼方に飛んで行ったプロトンミサイルは適当な惑星に着弾して終わるだろうと思っていた。
しかし、このミサイルが後々地球へ・太陽系へ大災害を引き起こす原因となった。

太陽系へ危機が迫っている事など知る由もなく、宇宙戦士訓練学校では今日も未来の宇宙戦士たちが勉学に励んでいた。
朝食の席にて、土門は普段とは違い物凄い勢いで朝食を掻っ込んでいた。
「ちょっと、土門。少し落ち着いて食べなさいよ」
ティアナが呆れる感じで注意する。
「うるへぇ、今日はちょっと野暮用があって急いでいるんだよ」
しかし、土門はティアナの注意などそっちのけで朝食を勢いよく食べている。
彼が急いで朝食を食べているのは何か用事がある為の様だ。
「野暮用って今日アンタ日直だっけ？」
「違う」
土門が急いで朝食を食べているのは彼が今日、日直だからと思いティアナが訊ねると土門はそれを否定する。
「じゃあ、課題を忘れたの？」
「それも違う。見送りに行くんだよ」
うららが日直ではないのであるならば、彼が課題を忘れたから今日

の講義が始まる前にその課題を終わらせようと急いで朝食を食べているのかと思いきや、それも違い、どうやら彼は誰かを見送りに行く為に急いでいる様だ。
「見送り？」
「って言うか、授業はどうするの？サボる気？」
「ちゃんと教官には外出許可は貰っているよ」
見送りと言う事は外出すると言う事だが、今日は平日・・・
当然この後、講義と実習がある。
しかし、土門は事前に教官から外出許可を貰っているみたいで今日の講義と実習は休むみたいだ。
土門は朝食を食べ終えると食器を返却口へ持っていくと慌ただしく食堂を出て行った。
「あんなに慌てて見送りに行くって・・・彼女かしらね？」
うららがニマっとした笑みを浮かべながらティアナに訊ねる。
「あいつに彼女？はっ、ありえないわね。あんな粗暴な奴に彼女だなんて」
ティアナは小馬鹿にするような目でうららの予想を否定する。
「そうよねぇ～」
「あはははは・・・」
ティアナとうららの二人が土門に彼女なんて出来る訳がないと断言し笑いあう。
（土門、お前酷い言われようだぞ・・・）
揚羽は笑い合っている二人を尻目にこの場に居ない土門を憐れんだ。
そんな土門はどこへ向かったのか？
その答えは宇宙空港だった。
東京宇宙空港の出発ロビーは物凄い賑わいだ。
ガミラス戦役前は賑わっていた宇宙空港であるが、ガミラス戦役時は当然民間人の宇宙への渡航は出来ず、ガミラス戦役後から彗星帝国戦役前は民間の宇宙旅行が再開されるも白色彗星が地球へ飛来するかもしれないと言う疑いが出た頃から、民間の宇宙渡航はまたもや中

止となり、その後も彗星帝国軍の残党、そして暗黒星団帝国の襲来と長い間に渡って民間の宇宙渡航は中止になっていた。
だが、彗星帝国軍の残党、暗黒星団帝国の脅威がようやく去り、民間の宇宙渡航が再開されると長い間我慢していた地球の人たちは星の海を目指して旅に出た。
東京宇宙空港の出発ロビーには雑踏を縫ってロボット・ポーターに荷物を持たせている人、仲睦まじく手を繋いでいる恋人たち、他の惑星への旅行者や単身赴任、出張等の仕事に出向くサラリーマンたちがチェック・イン・カウンターで行列をなしている。
天井部にある出発掲示板の表示が変わり、アナウンスが空港内に流れる。
「出発便のご案内を申し上げます。午前十時、東京発、水星経由、太陽観光船、六〇〇便へご乗船のお客様は出発手続きをお急ぎの上、三十八番ゲートへお越しください。ご乗船が始まっております。繰り返しご案内を申し上げます・・・・」
アナウンスが流れ、混雑している人混みを縫って土門は空港のロビーを走っていた。
「ちょっと通してくれ!すみません、通して・・・・」
土門は三十八番ゲートを目指す。
(まだ、居るかな・・・・?)
そしてようやく三十八番ゲートに着くと、彼の眼前には搭乗手続きをしている一組の夫婦が居た。
(良かった、間に合った!!)
土門は安堵の表情を浮かべ、その夫婦に近づき声をかけた。
「父さん、母さん。いやぁ間に合って良かったよ。見送りに来たんだ」
この夫婦は土門の両親だった。
土門に声を掛けられた二人は振り向くと、少し驚きの表情を浮かべる。
「竜介!?いや、よく来てくれた。しかし、大丈夫なのか?訓練校の方は?」
「ああ、教官に話をしたら時間をくれたんだ」

「お父さんもお母さんも等々決心しましたよ。一生の思い出に・・身体に気を付けてね、竜介。変な物を食べるんじゃありませんよ」
「やだなぁ、母さん。子供じゃああるまいし・・それにたかが十日間、宇宙旅行に出かけるだけじゃないか」
「まぁ、母さんにしてみれば十年がかりの大決心なんだからね」
「もう、お父さんったら・・・」
　息子の土門から見ても自分の両親の仲はいくら年をとってもラブラブに見える。
　太陽観光はガミラス戦役前から密かに両親が計画していたのだが、自分がまだ幼く、子育てで忙しかったり、父親の仕事が忙しくなかなか二人の日程が合わなかったりで、時間が取れない中、ガミラスが地球へ侵攻し、民間の宇宙渡航が全面中止となり、その後も外宇宙からの侵略で太陽観光が再開されないまま今日まで至り、ようやく今回の旅行へとこぎつけることが出来た。
　息子の見送りを受け、土門の両親は太陽観光船へと乗り込む。
　土門が送迎デッキで太陽観光に手を振りながら見送ると、観光船の窓には両親の姿があった。
「父さん!!母さん!!行ってらっしゃい!!楽しんでおいでよ!!」
「行ってらっしゃい!!気をつけてな!!」
　送迎デッキには土門の他にも太陽観光船を見送りに来ている人たちが大勢いた。
　沢山の見送りに来た人たちを前に太陽観光船は出発時刻となる。
　防衛軍の軍艦と異なり太陽観光船は昔ながらの垂直発射スタイルを採用しており、発射台から勢いよく飛び立った太陽観光船は多くの観光客を乗せて太陽を目指して飛んで行った。
（良い旅行になるといいな・・・）
　あっという間に飛んで行った太陽観光船を見て土門は両親の土産話を十日後、楽しみに待つことにして訓練校へと戻って行った。
　土門が両親の旅行へ見送りに行ったその日の夕食、食堂にて、
「それで、土門。今日見送りに行くって言っていたけど、誰を見送りに行ったの？」

うららはやはり気になったのか土門に訊ねた。
「あん？なんだよ？いきなり」
「だって気になるじゃん、あんなに慌てて見送りに行くなんて・・ねぇ、ティアナ？」
うららはティアナに話を振り、味方を増やそうとする。
「えっ？ええ、そうね。それで、誰の見送りに行ったの？」
ティアナもやはり気になっていたのでうららと共に今日、土門が講義を休んでまで誰の見送りに行ったのかを訊ねる。
「ん？誰って、両親だよ、両親。俺の両親は昔から太陽観光に行きたがっていたんだが、忙しくて時間が取れなかったり、ガミラスの奴らが侵略しに来りと、太陽観光になかなか行けなかったんだけど、今回ようやく行けたんだよ」
「えっ？両親？」
「それってマジなの？」
「あん？何が？」
「い、いえ・・・・」
「別に・・・・」
「何だよ？そのつまらなさそうな顔は？お前らが聞いて来たんだろうが」
「い、いや、それはそうなんだけど・・・・」
「なんか・・・・ねぇ・・・・」
「うん・・・・」
朝食の席で土門に彼女なんて居る訳がないと豪語し高笑いをしていた二人であったが、ちょっとは意外性を期待して、こうして土門に聞いてみたのだが、二人の予想はある意味で裏切られ、なんだか拍子抜けをした。
土門は馬鹿正直な性格なので、仮に両親を隠れ蓑にして彼女を見送りに行った場合、下手な嘘をつくか、顔に出るのだが、『両親を見送りに行った』と言った時の彼の表情は至って冷静で嘘をついている様子はなかったので、今日土門は本当に両親の見送りに行ったのだ。
「あっ、それよりも揚羽、今日の講義分のノートを後で見せてくれねぇ

？」
拍子抜けしている二人を尻目に土門は揚羽に自分が休んでいる間の講義ノートを見せてくれと頼んだ。
「なんか拍子抜けね・・・・」
土門の彼女の存在がなかった事にうららはつまらなそうに呟く。
「そ、そうね・・・・」
「やっぱり、土門に彼女なんて居なかったか・・・・」
「だから言ったでしょう？」
「ん？あれ？ティアナ、もしかして安心している？土門に彼女が居なくて？」
うららがつまらなそうにしていた態度から一転してニヤリとした笑みを浮かべながらティアナに訊ねると、
「は、はぁっ!?な、何言ってんのよ!!うらら!!」
ティアナは顔をほんのりと赤く染めて声を荒げる。
「あれ？あれ？何か顔が赤いよ？ティアナ。もしかして、ＺＵ・ＢＯ・ＳＨＩ？・・なのかな？」
「あんたがバカなことをいきなり言うから、驚きと怒りで赤くなったのよ!!」
「ん？何やってんだ？あいつら？」
「さ、さあ・・・・」
うららとティアナがギャアギャアと言い合いをしている中、土門は呆れ、揚羽は関わろうと思わず二人をアウト・オブ・眼中する事を貫いた。
また変にあの二人に関われば自分に火の粉が飛んできそうだからだ。

宇宙戦士訓練学校の食堂にて学生たちのこんなやり取りが行われている頃、今日地球を出発した太陽観光は水星軌道まで来ていた。
この後、太陽周辺をぐるりと時間をかけて回り、地球へ戻る予定だ。
太陽観光船は観光客たちに太陽を見せる為、停止した。
「みなさん、ご覧ください、太陽です。太陽は銀河系を構成する約一千

億の恒星の一つで、私たちに熱と光をめぐみ、太陽系の生命を生み育んでいる生命の親とも言える星です。私たちは現在、水星軌道上におります。水星の周辺には複数の太陽エネルギー集積衛星が展開しており、太陽の光を受けたこの衛星は、水星基地、金星基地、月基地を経由して地球へ送られ、今日の私たちの生活に欠かせないエネルギーとなっております。この後、当船は・・・・」
「おお・・・・」
「すげぇな・・・・」
「近くで見るとやはり迫力が違うぜ・・・・」
「雄大な宇宙の神秘ね・・・・」
太陽観光船の展望室では、観光客たちが集まり、眼前の太陽を見て感嘆の声を漏らし、搭乗員が太陽の説明と今後の予定を観光客たちに伝えている。
勿論、この展望室には土門の両親も居り、太陽を見ていたのだが、
「あら？」
土門の母親は搭乗員の説明も眼前にある太陽もそっちのけで、太陽観光船が来た方向をジッと見ている。
「ん？どうしたんだい？母さん。せっかく、太陽の近くへ来たのだから太陽を見ないと・・・・」
土門の父親は母親に対してようやく来れた念願の太陽観光なのだからメインの太陽を見てはどうかと言うが、
「あれ？何かしら？」
土門の母親が窓の外・星々が煌めく空中空間の一角を指さす。
「ん？」
土門の父親も目を細めて妻が指さした方向を見る。
すると、その方向にはチカチカと光るモノがあった。
「最初は流れ星かと思ったんだけど、どんどんこっちへ近づいてくるわ」
土門の母親は不安そうに言う。
水星、金星には一応基地はあるが、それはあくまでも太陽エネルギー集積基地なので、防衛軍はこの二つの惑星には駐屯していない。

だが、エネルギー集積基地があるのでその集積基地に関係する宇宙船かと思ったが違った。
「あっ!?」
「あれはっ!?」
二人が思わず悲鳴を上げた時、接近する光点はその姿を露にする。
太陽観光船に接近してきたのは集積基地に関係する宇宙船ではなく、太陽観光船の船体よりも巨大なミサイルだった。
そのミサイルは防衛軍に採用されているミサイルとは異なる形状をしていた。
そもそも、太陽観光船の船体以上の巨大なミサイルなんて防衛軍は開発をしていないし、周辺で軍が演習をしている事実も予定もない事は事前に軍へ確認できている。
だからこそ、太陽観光船はこの宙域に止まり、観光客に太陽を見学させていたのだ。
「船長!!未確認物体が本船に接近中!!ぶつかります!!」
「か、回避を・・・機関始動!!」
「だ、ダメです!!未確認物体の速度が早すぎて、機関の始動が間に合いません!!」
太陽観光船が太陽観光の為、エンジンを切って止まっていた事、
接近するミサイルの速度が速すぎた事、
この二つの不運が重なってしまった結果、ミサイルは太陽観光船に直撃した。
ズガーン!!
「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁー!!」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁー!!」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁー!!」
「ぐはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ—!!」
ミサイルと衝突した太陽観光船は真っ二つに折れて爆発をしながら船体はバラバラとなった。
太陽観光船の船内は阿鼻叫喚の地獄に代わり、乗っていた乗員・乗客は船体の爆発に巻き込まれ木っ端微塵となり、宇宙空間へと消え

た。
ミサイルの方は太陽観光船に衝突したが、炸裂する事も無くそのまま太陽へ一直線に進んで行き、やがて太陽の中へ消えて行った・・・

おまけ
此処で時間はかなり過去に戻し、視点はイスカンダルへ向かう雪風・改に移す。
イスカンダル復興の為、ヤマトを降りた守、サーシア、トチローの三人。
そして、暗黒星団帝国の本星、デザリアム星にてサーシアの協力者で彼女と共にデザリアム星から脱出し、今回のイスカンダル復興にも協力を名乗り出た謎の科学者、ジェレミアとその助手のロベル。
当初、守もサーシアもこの二人をイスカンダルへ連れて来て大丈夫かと訝しんだが、トチローはイスカンダルの復興には人手が居ると守に助言すると、守も渋々だが彼らの同行を了承した。
波動エンジンへ換装したとは言え、デザリアム星があった宙域から大マゼラン星雲のイスカンダルまではワープをしてもそれなりの日数がかかった。
しかし、そんな航海中でもイスカンダルの復興方法を考えたりとやる事はあった。
そんな中でもトチローとジェレミアは技術談に花を咲かせ二人とも楽しそうな様子だった。
トチローとジェレミアの技術談議に守もサーシアも当然理解できず、談議をしている二人を守もサーシアも居ない者と認識していた。
それはイスカンダルに到着した時もジェレミアはイスカンダルに残された技術を前に狂喜乱舞していた。
「おおおぉぉぉーこれは凄い!!まさに科学技術の理想郷のようなところではないか!!ハハハハハ・・・凄いぞ!!これは凄い!!」
惜しまれるのはイスカンダルへ来る前にトチローから聞いたイスカダリウムが物質偏向されてしまい、偏向前のイスカンダリウムを見

てみたかったとジェレミアは嘆いていた。
「私ですら、こんな発想には思い当たらなかった・・・やはり、宇宙は広いなぁ～ハハハハハ!!」
「・・・・」
　そんなジェレミアを見て流石のスターシアも引いていた。
「も、申し訳ございません。ドクターは変わった技術を前にすると周囲が見えなくなってしまいまして・・・・」
　ジェレミアの行動に引いているスターシアにロベルは深々とジェレミアに代わって謝る姿があった。
「守の知り合いには面白い人がいるのね」
「い、いや、彼は知り合いって訳じゃあ・・・・」
（やっぱり、彼を連れて来たのは間違いだったか？）
　守の本音としては、変人はトチローだけで十分だと言う意味を込めてスターシアの言葉を否定した。
　何はともあれ、イスカンダルの復興はまだ始まったばかりだった。

百四十一話　太陽異常

水星軌道にて、太陽観光船が突如、外宇宙から飛来した大型のミサイルと接触し遭難した翌日・・・・

地球連邦中央天文台の所長である倉田博士は太陽を観測した際、妙な事に気づく。

倉田博士は彗星帝国戦役の少し前、アンドロメダ星雲から飛来する巨大な白色彗星を発見し、彗星の針路上に地球がある事に気づき、藤堂に報告を上げた人物でもあった。

「うーん・・・・おかしい・・・・太陽の核融合数値が昨日と比べると異常に上がっている。たった一日でこんなことが起きるものなのか・・・・？」

今日の観測データと昨日の観測データを比較し首を傾げる。

倉田博士はさらに一週間前、一ヶ月前、三ヶ月前、半年前、一年前と過去のデータと比較するが、今日観測した太陽のデータはあまりにも異常だった。

「僅か一日でここまでの核融合反応が早まるなんてやはり妙だ・・・・」

倉田博士は太陽エネルギー省に連絡を入れるか迷い、太陽エネルギー省へ連絡を入れる前に地球連邦大学へ連絡を入れた。

「もしもし、地球連邦中央天文台所長の倉田です。宇宙物理学部、学部長のサイモン教授をお願いします」

倉田は地球連邦大学宇宙物理学部長で知り合いでもあるサイモン教授へ連絡を入れたのだ。

「お電話代わりました。サイモンです。倉田博士、どうしました？」

「ああ、サイモン教授。実は今日、太陽の観測データで異常な数値を観測しまして・・・・」

「異常な数値？」

「はい。詳しくは教授のパソコンに今日の観測データと過去の観測データを送りますので、教授の見解を知りたいのですが・・・・」

「分かりました」

倉田博士はサイモン教授のパソコンへ観測データを送る。

サイモン教授は倉田博士から送られてきたデータに目を通す。
「ん?こ、これはっ!?・・・・倉田博士、この観測データに間違いはないのですか?」
「はい、こちらでも間違いがないか、何度もチェックしましたが、間違いありません」
「むぅ・・・・」
電話口からサイモン教授の芳しくない声が聴こえる。
「倉田博士、まだ結論を出すのは早計かもしれませんが、この異常な数値が続くようでしたら地球の危機かもしれません」
「やはり・・・・」
サイモン教授の考えと倉田博士の考えは一致していたが、今日一日の観測データでは早計かもしれないので、倉田博士とサイモン教授は暫しの期間を設け、太陽の観測を続けてからこの異常数値が続くようならば、太陽エネルギー省、防衛軍、地球連邦大統領府に連絡を入れる事にした。

地球で太陽の核融合の異常増進が観測された頃、開拓が進んでいるケンタウルス座α星系第四惑星では、オスミウムの採掘が進むと同時に鉱山労働者の為の町づくりも進み、何もなかった荒野には住宅団地、商業施設、娯楽施設、病院等の建物が立ち並んでいる。
ガミラスとの戦災復興を僅か一年ちょっとで成し遂げ、太陽系内の惑星を開拓した地球の勢いと底力はこのα星系第四惑星でも同じで地球や太陽系内の他の惑星と変わらない居住環境となっていた。
そんな開拓が進むα星系第四惑星にて、防衛軍はそんな開拓民保護の為に基地が建設され、まほろば　は現在その基地のドックにて整備・補修を受けていた。
まほろばの乗員たちもローテーションで勤務、非番を行い非番の乗員たちは開拓されたα星系第四惑星の商業施設でショッピングをしたり、娯楽施設で日々の疲れを癒したりしていた。
そんなある日、良馬とギンガは非番でとある商業施設へとショッピングに来ていた。

まぁ、ショッピングと言う名のデートでもあるのだが・・・
ギンガがアクセサリーショップにて、良馬と共にアクセサリーを見ていると、
「あれ？中嶋さん？」
「えっ？」
「ん？」
ギンガに声をかけて来た女性が居た。
その女性は茶髪でショートカットの女性で、彼女の隣には旦那と思われる男性の姿があった。
「あっ、山上さん」
「知り合い？」
「ええ、先日、山上さんのお父さんが居酒屋で酔っ払いに絡まれていたので、その時に・・・」
「あの時は父がお世話になりました」
「いえ、流石に一対多数で殴り掛かかっていたのは見過ごせなかったので・・・お父様はあの後、大丈夫でしたか？」
「ええ、すぐに病院で診察を受け、幸い骨折等は無く今も開拓業を続けています。重ね重ね、父を救って頂きありがとうございます」
「私からもお礼申し上げます。お義父さんを助けていただいてありがとうございます」
山上夫婦はギンガに一礼する。

山上夫婦と分かれ、ショッピング再開した二人。
「まさか、ギンガが居酒屋に行くなんて・・・ちょっと意外だな」
ギンガが山上さんの父親を助けたのが、居酒屋だったと言う事は彼女が居酒屋に居たと言う事なので、ちょっと意外性を感じた良馬。
「もしかして一人で行ったの？」
「いえ、ディアーチェさんとフェリシアさん、新見さんと行きました」
流石にギンガ一人で居酒屋へ行ったわけではなく、艦橋員メンバーの女子会で居酒屋へ行ったみたいだ。
「それで、新見さんが結構荒れちゃって・・・」

「・・・・」
良馬からしてみればあの新見が自棄酒をする姿なんて想像できない。
「何か、『男がぁ～』『独りだっていいだろう～』って叫びながらお酒をガブ飲みしていました」
「・・・・」
(きっと仕事やテラフォーミングをしたとは言え、地球と異なる星の生活環境でストレスが溜まっていたんだろう。うん、きっとそうだ・・・・)
自分なりの理由をつけ、納得して深く突っ込まない方が彼女の名誉の為なのだろう判断した良馬だった。
ギンガと共にショッピングをしてから数日後、まほろばの整備が終了すると、まほろばは僚艦と共にα星系第四惑星周辺のパトロールを兼ねた演習へと出た。

地球が順調にα星系第四惑星の開拓を行っている頃、バジウド星系ではガルマン帝国、東部方面軍第十八機甲師団は遂にバース星近海へと迫っていた。
(遂に来たか・・・・)
バース星艦隊旗艦、ラジェンドラ号の艦橋でラム艦長は緊張した面持ちで艦長席から前方の宇宙空間を見つめる。
ボローズがバース星を捨ててからも工廠では宇宙艦艇の建造が進められて来たが、短期間で宇宙艦艇がそうホイホイと建造するのは難しい。
ただでさえ、ボローズが逃げていく際、バース星からも技術者や軍人らが多数出て行った事もやはり影響していたので、ガルマン艦隊を迎え撃つには心もとなかった。

バース艦隊が戦場宙域へと着くと、ガルマン艦隊は長距離砲でバース艦隊へと砲撃をしてくる。
ガルマン艦隊の攻撃を受けバース艦隊に多数の被害が出る。

「ガルマン艦隊の砲撃です!!長距離砲で我が艦隊を攻撃してきます!!」
「味方艦に多数の被害!!」
「２３番艦、１７番艦撃沈!!」
「１９番艦、１４番艦、大破!!」
「反撃だ!!撃て!!」
当然、バース艦隊も反撃するが、ガルマン艦隊は左右に分かれ、バース艦隊を包囲しながら砲撃を加える。
「艦長、我が艦隊の被害は甚大です!!」
ガルマン艦隊の統制の取れた電撃戦にバース艦隊は翻弄され被害が大きい。
「まだ敗れた訳ではない!!体勢を立て直す!!」
バース艦隊とガルマン艦隊の初戦はガルマン艦隊に白星がつく結果となった。
「バース艦隊が撤退していきます!!」
「追撃しますか?」
「いや、こちらも一時後退し、陣形を立て直す。それと補給も行う。バース艦隊との戦いはまだまだ続くからな」
「はっ、承知しました」
ダゴンは陣形を整え補給を行う為に撤退するバース艦隊を追撃はしなかった。

一方、太陽の異常が出始めた地球では、太陽観光船との連絡が途絶えてから四、五日が経ち、観光船を運航する会社の方もいくら何でもおかしいと思い始め防衛軍へ通報した。
当初、観光船からの定時連絡が来なかったのは太陽に近いため、磁場の影響かと思われたが、流石に出発から四、五日経過しても定時連絡が無く、会社側が観光船へ連絡を入れても応答がない。
運航会社から観光船が遭難した可能性があると通報を受けた防衛軍は急ぎ、会社から観光船の航路データを受け取ると水星軌道へ捜索隊を派遣した。

その捜索隊の中にはヤマトを降りた古代の姿もあった。
古代は暗黒星団帝国の戦い後、ヤマト自体が北アルプスにある防衛軍のドックにて整備することになり、暗黒星団帝国戦役前に就いていたパトロール隊の部署へ戻っており、今回の太陽観光船遭難事件の捜索へ参加したのだ。
なお、今回のヤマトの整備に関して、地球が現在宇宙開拓を推し進めている事からヤマトには最新鋭の探査用の大型航空機、コスモハウンドが搭載されることが決まり、その改造が行われていた。
まほろば　に関してはコスモハウンドの搭載改装をする前にα星系第四惑星の開拓団護衛任務が入り、α星系第四惑星における整備でも肝心のコスモハウンド自体がα星系第四惑星に無かったので、改装は見送られた。

水星軌道周辺では複数のパトロール艇が太陽観光船の予定航路を航行しながら何らかの痕跡が無いかを捜す。
やがて捜索隊が水星軌道に達すると残骸らしき破片をいくつか発見した。
「艇長、前方に何かの残骸があります!!」
「太陽観光船と関係があるかもしれない・・・艇を止めろ。耐熱宇宙服を用意、ここからは艇ではなく、直接船外に出て捜索する」
「了解」
太陽の近くと言う事で通常の宇宙服ではなく、耐熱仕様の分厚い宇宙服を着て艇にきつく命綱をつけるとパトロール艇の船外へと出て残骸付近の捜索を行う古代たち。
まずはこの残骸が太陽観光船の残骸なのか?
それとも廃棄された衛星等のデブリなのかを確認した。
古代たちのパトロール艇以外のパトロール艇からも同じ様に耐熱仕様の宇宙服に命綱をつけた防衛軍軍人たちが次々と船外に出て捜索をする姿が見られた。
「て、艇長!!コレを見てください!!」
捜索をする中、古代と同じパトロール艇の乗員が何かを見つけた。

「どうした？」
古代が乗員の下へ向かってみると、そこには一つの残骸が宙を漂っていた。
「この残骸、文字みたいなのが書かれています!!船名の一部ではないでしょうか？」
「ん？こ、これはっ!?」
すると、残骸の一つに『太陽観・・・』と書かれていた事からこの残骸がデブリではなく、太陽観光船の残骸である事が確認できた。
「・・・やはり、この残骸は太陽観光船のモノか・・・」
残骸が太陽観光船の残骸である事が確定されたことに古代は顔を歪める。
この状況下では生存者はとてもじゃないが、期待は出来ない。
「艇長・・・？」
残骸を見つめながら黙っている古代に対して恐る恐る声をかけるパトロール艇の乗員。
「ひとまず、この残骸は艇に収容する。あと、周辺に残骸以外に被害者の痕跡や遭難の原因に繋がる手掛かりがないか引き続き捜索をする」
「了解」
生存者は期待できないが、それでも乗員・乗客のご遺体や遺品が無いかの捜索は続けられた。
そして、事故の原因追究の為に太陽観光船の残骸も同じく幾つか収容された。
ご遺体・遺品について、やはり遭難から時間が経過していた為か、それとも爆発の威力が大きかった為か、残念ながらどちらも収容するに至らなかった。

地球　メガロポリス東京　防衛軍司令部　指令室
「長官、太陽観光船捜索に向かった捜索隊より通信です」
「繋げ」
オペレーターが通信回路を開くとモニターに古代の姿が映し出される。

「古代、捜索状況は？何か手掛かりは見つかったか？」
「長官、残念ながら太陽観光船は水星軌道辺りで遭難したモノと判断いたします。生存者は・居ません」
「そうか・・・」
古代の報告を聞き、藤堂は顔を俯かせる。
「それで、古代。太陽観光船の遭難原因は分かりそうか？」
「現状では何とも言えません。現在、太陽観光船の物と思わしき残骸を収容中です。残骸を収容出来次第地球へ帰還します」
「うむ、分かった」
太陽観光船の残骸は収容出来る限りの残骸を収容し、捜索隊は地球へと帰還し、地球の技術たちの手によって遭難原因の調査が行われるのだった。
遭難原因はまだ調査中であるが、少なくとも太陽観光船が遭難し、乗員・乗客が全員死亡した事実は変わらない。
観光船の運航会社は防衛軍からの報告を受け、乗船リストから遺族へ連絡を入れる。
その中には当然、土門も含まれていた。
土門が入校している宇宙戦士訓練学校では、普段と変わらない時間が過ぎていたが、
「土門竜介、土門竜介訓練生は居るか!?」
休み時間、土門が揚羽、ティアナ、うららのいつものメンバーで駄弁っていると、教官が教室に入って来ると、土門を呼び出す。
「は、はい!!」
「土門訓練生、至急校長室へ出頭せよ。校長がお呼びだ」
「えっ？」
突然の校長室からの呼び出しを受けた土門は唖然とする。
「ちょっと、アンタなにしたのよ？校長室からの呼び出しなんて相当マズイ事でもやったんじゃないの？」
ティアナが土門に校長先生へ呼び出されるほどの何かをしたのではないかと訊ねる。
「い、いや、そんな事をした覚えはないぞ!!」

当然、土門は否定する。
「でも、土門だからねぇ～自分では気づかない内に何かヤバい事をやっちゃっているんじゃない？」
うららも訝しむ目線で土門を見る。
「だから、知らねぇって!!」
「ま、まぁ、何にせよ、校長室に行けば呼び出しの理由も分かる事だし、とりあえず行って来いよ」
「揚羽～お前、人の事だと思って・・・・」
土門は揚羽を恨めしそうに見つつも確かに彼の言う通り、校長室へ行かなければ呼び出しの理由も分からないので、ひとまず土門は校長室へと向かった。

「土門竜介訓練生!!参りました!!」
土門は校長室の前で自身が出頭した事を告げる。
「おう、入ってこい」
すると、中から応答があった。
「はっ、失礼します!!」
校長室の中から校長の榎本の応答を確認すると土門は校長室へと入る。
「土門訓練生、君は先日ご両親の旅行の見送りに行ったと担当教官から聞いたが、君のご両親が乗った観光船は太陽観光船六〇〇便で間違いないかね？」
「は、はい。間違いありません」
榎本は先日、土門の両親太陽観光へ向かった事を確認すると土門は間違いなく自分の両親は太陽観光船六〇〇便に搭乗したと言う。
「・・・・」
土門からの返答を聞き、榎本は顔を渋らせる。
「あ、あの・・何かあったのでしょうか？」
土門はそんな榎本の表情を読み取り、両親が乗った太陽観光船に何かあったのではないかと察する。
「・・土門訓練生・・・君には辛い話になるが・・・・」

「えっ？」
「・・・先ほど、太陽観光船の運航会社より連絡があった・・・太陽観光船六〇〇便が遭難した」
「えっ？そ、遭難・・・」
土門は榎本が何を言ったのか一瞬理解できなかった。
「そ、遭難って・・・ち、父と母はどうなったんですか!?」
土門は榎本に駆け寄り、太陽観光船に乗っていた両親の安否確認をする。
「防衛軍が捜索隊を派遣したが生存者は確認できなかったらしい」
「・・・」
榎本から両親の生存が絶望的だと聞かされ土門は膝から崩れ落ちる。
「・・・土門訓練生、今日は休みなさい。教官からは私から伝えておく」
榎本はポンと土門の肩に手を置き、彼の心情を理解したうえで今日の講義と実技を休むように伝えた。
まさか、土門の両親が亡くなった事を知らないティアナたちは・・・
「土門の奴、結局帰って来なかったわね」
「まさか本当に何かヤバい事をしたのかしら？」
「い、いや、土門の奴に限ってそんなことは・・・」
「このまま放校処分・・・ってことにはならないと良いけど・・・」
土門が校長室へ呼び出しを受けた後、土門はこの日の講義・実技に戻ってこなかった。
その事実に放校処分と言う言葉がチラつく三人だった。

揚羽が寮の自室に戻るとベッドの中に土門の姿があった。
「土門、どうしたんだよ。あれから戻ってこなかったから心配したんだぞ」
「・・・」
揚羽は土門に声をかけるが、彼からの返答はない。
「・何かあったのか？」
土門の態度に揚羽は彼に何かあったのだと直ぐに察した。

「ま、まさかお前、本当に放校処分になったのか？」
　ティアナやうららが冗談半分で今日、土門が校長室へ呼ばれたのは彼が何かしらヤバい事をしたせいで呼び出され、放校処分になるのではないかと言っていたが、土門の現状を見る限り彼女たちの冗談が事実だったのかと揚羽がそう思うのも無理はなかった。
「いや・違う・・・」
　すると、土門がベッドの中から重苦しい声を出す。
　彼がベッドに沈みながらも放校処分になったのではないと言う。
「・・・じゃあ、何があったんだ？」
「・・・俺の両親が・・・・・」
「土門の両親？」
「・俺の両親が死んだ」
「えっ？」
　土門の告白に揚羽は絶句する。
「えっ？死んだ？どういう事だよ？この前、お前は両親の見送りに行ったって・・・」
　事態についていけない揚羽は困惑する。
「父さんと母さんが乗った太陽観光船が遭難したって・・・運航会社から連絡があったらしいんだ・・・」
　困惑する揚羽に事情を伝える土門。
　海上の遭難と異なり、宇宙での遭難は死亡率が物凄く高くその反面、生存者や遺体の発見率は極めて低い。
　それは未来の宇宙戦士を目指している土門も揚羽も当然理解している。
「そうか・・・」
　揚羽にはこれ以上、土門にかける言葉が見つからない。
「明日からは・・・何とかいつもの俺に戻るつもりだ・・・でも、今日だけは・・・」
「ああ、分かっている・・・ただ、土門。あの二人もお前の事を心配していたから、俺から伝えるが良いか？」
「ああ・・・頼む・・・」

揚羽の言う『二人』とはティアナとうららの事だと土門は直ぐに理解する。
揚羽はティアナとうららに土門の両親の事を伝えるべく寮の部屋を後にした。

寮の部屋を後にした揚羽は食堂へと向かう。
食堂では、ティアナとうららの姿があった。
「あっ、二人とも」
「ん？ああ、揚羽」
「あれ？土門は？」
「ああ、その事なんだけど・・・・」
「ん？やっぱり土門に何かあったの？」
「それが・・・・」
揚羽はティアナとうららの二人に土門の両親が亡くなった事を伝えた。
「そう・・・・土門の両親が・・・・」
「それは・・何というか・・・・」
「あいつは明日には元に戻るって言っていたが・・・・」
「まぁ、アイツは変に気を使われるのを嫌いそうだけど・・・・」
「何か・・ねぇ・・・・」
ティアナもうららも勿論、土門の前で彼の両親の事を話題に出すつもりはないが、こうして彼の両親の訃報を知ってしまうと何だか複雑であった。
翌日、土門は確かに両親の死が無かったかのように振舞うが、やはり一人で居ると哀愁が漂っていた。

それから幾日が過ぎ、地球では太陽観光船の遭難原因の調査が進められている中、太陽の観測を続けていた地球連邦中央天文台では・・・・
「サイモン教授、やはり太陽の核融合数値は低くなるどころか日を追うごとに増加しています」
「うーむ・・・・」

倉田博士はサイモン教授に太陽の観測データを見せる。
「これは観測ミスや単なる自然現象では片付けられません」
「た、確かに・・・・」
「このまま太陽の核融合が進めば・・・・」
「地球を含む太陽系の危機となる宇宙大災害が起きる可能性が高い・・・・倉田博士、貴方はこのまま太陽の観測を引き続きお願いします。私はこのまま太陽の核融合が進めばどうなるのかをシミュレーションし、連邦大統領府と太陽エネルギー省、防衛軍司令部に伝えます」
「分かりました。サイモン教授お願いします」
倉田博士はあくまでも観測専門なので、この先に起きる可能性のある未曾有の宇宙災害のシミュレーションは宇宙物理学専門のサイモン教授に任せることになった。
サイモン教授は倉田博士から送られる太陽観測のデータを基にこのまま太陽の核融合が進めばどうなるかのシミュレーションを作り、太陽エネルギー省の責任者である黒田博士に事の次第を伝える。
「・・・・」
黒田博士はサイモン教授からもたらされた太陽の観測データとシミュレーション結果が書かれた報告書を見るが、
「サイモン教授。これはあくまでも仮説にすぎないのではないか？」
「いえ、そのようなことはありません黒田博士。これまでの太陽の観測データを見る限り、ここ最近における太陽の核融合の数値は異常です。今の内に何らかの手を打っておかなければ手遅れになる恐れがあります」
「しかし、相手は自然だ。太陽の全てを現時点で我々人類が解き明かした訳ではない。いたずらにデマを流しパニックを誘発するのはいかがなものかと・・・・？」
サイモン教授は黒田博士に現在太陽で起きている異常と将来起きる可能性がある宇宙大災害の危険性を伝えるが黒田博士はあくまでも自然現象だと一蹴した。
太陽エネルギー省の黒田博士に信じて貰えなかったので、サイモン教授は次に連邦大統領府にこの話を伝える。

大統領が信じてくれれば太陽エネルギー省もサイモン教授の話を信じられざるを得ないと思ったからだ。
しかし、大統領はサイモン教授の話が本当なのか太陽エネルギー省へ問い合わせをするがやはり黒田博士はその話を否定した。
これにより大統領を主体に対応してもらう手段を失った。
連邦大統領府、太陽エネルギー省がこの話を信じて貰えなかった事からサイモン教授は最後の望みをかけて防衛軍司令部の藤堂長官にこの話を持ち掛けた。
「ふむ・・・サイモン教授。この話は事実なのでしょうか？」
「はい。かなりの確率で起きる可能性が高く、事態が判明してから対応をしても手遅れになります」
「・・・・」
サイモン教授としては藤堂がまさに最後の希望であり、彼までもがこの話を信じて貰えなければ、地球人類は滅んでしまう。
「分かりました。防衛軍としても手遅れになる前に対処致しましょう」
「あ、ありがとうございます」
「ただ、パニックを防ぐため、まだ公にすることは出来ません。内密に進めてもよろしいですかな？」
「はい。今は少しでも信じて貰っただけでも唯一の救いですから」
サイモン教授としては内密に進めると言う事で握りつぶされてしまうかもしれないと言う恐れがあったが、大統領や黒田博士より藤堂のリアクションは自分の話を信じて貰える印象があった。
藤堂も彗星帝国の件があったので、地球の危機に対して少しでも危険の可能性があるならば、即座に対処しなければならないと思っていた。
藤堂は直ぐに行動し、古代にヤマト乗員の補充の為、宇宙戦士訓練学校の学生を繰り上げ卒業させてヤマトに乗せる旨を命じた。
古代としては地上に移転した宇宙戦士訓練学校を訪れる事になった。
自分の時は、ガミラスの侵攻で地下都市に築かれた訓練校へ通って

いた。
　その訓練校の半重力ドームの中で宇宙戦闘を模した訓練が行われており、
「無重力遊泳隊形をとれ!!一斉射撃をしながら突撃!!」
　教官の指示で宇宙服を身に纏った訓練生たちがコスモガンで的に向かって射撃していた。
　その中には両親の死の悲しみをこらえて訓練に臨む土門の姿があった。
　射撃訓練と言う事でティアナと土門の二人が好成績を叩き出している。
　やがてすべての的が撃破されると、
「よーし、よくやった。反重力解除」
　ドーム内の反重力が徐々に解除されるとドームの床に訓練生たちと教官が降りたつ。
「生命維持装置、コスモガンの点検はじめ!!」
　訓練生たちは宇宙服を脱ぎ、使用した宇宙服とコスモガンの点検を行い、それが終わると訓練終了となる。
　器具の点検が終わって訓練生たちが整列すると、
「これから名前を呼ぶ者は式服に着替え講堂に集合せよ」
　教官はタブレットを取り出しそこに表示された訓練生たちの名前を呼び始める。
「揚羽武、土門竜介、久家賢次、矢野信一・・・・」
　次々と訓練生たちの名前が呼ばれる中、揚羽と土門の名前は呼ばれたが、うららとティアナの名前は呼ばれなかった。
「一体なんだろう?」
「呼ばれたのは全員じゃないみたいだしな」
「そうね、私とティアナは呼ばれなかったし・・・・」
「とにかく、二人とも行ってらっしゃいよ」
「ああ」
「そうだな」
　名前を呼ばれた揚羽と土門は急ぎ着替えて講堂へと向かった。

講堂へ集まった訓練生たちは何故自分たちが呼ばれたのか気になっていると、壇上に校長である榎本が姿を現す。
「突然の呼び出しに戸惑っているだろうが、諸君らはこの宇宙戦士訓練学校の中から特別に選出された者たちだ。本日、急遽繰り上げ卒業式を行うことになった」
『ええっ!?』
榎本の発言に驚愕する訓練生たち。
その時、後方の出入り口から一人の教官に案内されて古代が入って来た。
土門は古代の姿を見て隣に居る揚羽を腕で突っつく。
「おい、見ろよ。ＯＢの古代先輩だぜ。確かヤマトの・・・・」
古代は榎本に迎えられ壇上へ登った。
「すみません。遅くなりました」
「いえ、ご苦労様です。さっ、こちらへどうぞ」
榎本は壇上の上に用意されていた来賓席へと招く。
「一体どういうことだ?突然の繰り上げ卒業式に来賓はＯＢの古代先輩だけ・・・あまりにも妙じゃないか?」
揚羽がこの事態に対して違和感を覚えて土門に声をかける。
そこで、土門はハッとなり、
「・・・なぁ、揚羽。もしかして俺たちヤマトに乗るんじゃないか?」
土門の予想を聞いて、揚羽はニヤリと笑みを浮かべ、
「そうなりゃあ願ったり叶ったりだ」
土門は古代の姿を見て胸の高まりを覚えた。
本来よりも早い訓練校の卒業にヤマト艦長代理の古代がこうして来賓として出席しているこの事態に土門がヤマト乗員の為に繰り上げ卒業式を行うのだと思うのも無理はなかった。
(もし、ヤマトに乗るのであるなら父さんと母さんに伝えたかったな・・・)
やがて、卒業式は直ぐに終わり、講堂に集まった訓練生たちは一人ずつ校長室へと呼ばれた。
やがて、土門の番となる。

校長室には両親の件で呼び出された時に入ったが、やはり緊張する。
「土門竜介訓練生!!入ります!!」
「入れ!!」
土門が校長室の扉を開けると、正面の机に榎本、部屋の中心にある応接ソファに古代は座っていた。
土門は扉を閉め、直立不動の姿勢を取る。
そして、榎本が防衛軍から発行された正式辞令を読み上げる。
「地球防衛軍司令部からの緊急辞令を伝える。土門竜介。宇宙戦艦ヤマト乗艦を命じる」
「は、はい。謹んで辞令を拝命致します!!」
土門の予想通り、あの講堂に集められた訓練生たちはヤマトへ乗艦する者たちだった。
「うむ、頑張れ。土門」
「は、はい」
榎本は土門に声をかける。
つい、先日両親を事故で失うと言う悲劇を乗り越えこうしてヤマト乗艦になったのだから、榎本としても彼を誇りに思ったのだろう。
「ヤマトでの配属希望はあるか?」
古代は土門にヤマトの希望部署を訊ねる。
「はい。古代先輩と同じ戦闘班の砲術科を希望します。先輩は自分の憧れでした。お願いします」
土門は古代と同じ部署を希望する。
「・・・よし」
古代は手にしたタブレットを操作し、土門に配属部署を伝える。
「土門竜介。生活班炊事科勤務だ」
土門が配属されたのは希望した部署ではなく戦闘に全く関係のない部署であった。
自分の配属場所を聞き、土門は自分の耳を疑い唖然とする。
「あ、あの・・今何と?」
「聞こえなかったのか?君は生活班炊事科勤務だ」

「な、何故ですか!?理由を教えてください!!」
「答える義務はない!!不服ならばヤマト乗艦を取り消しても良い。君の代わりは居るのだからな」
「っ!?」
古代から一喝され、これ以上ごねたらヤマト乗艦の話さえ取り消しにされそうだったので、土門はすごすごと引き下がった。
そして隣室にて、ヤマトの制服を受け取った。
ただし、土門が受け取ったヤマトの制服は戦闘班の赤い制服ではなく、生活班の黄色い制服だった。
(くそっ、なんで俺が生活班なんだよ・・・射撃の腕だって同期の中では上位なのに・・・)
生活班の黄色い制服を見ながら自分の配属先に不満を持っていた。
そして訓練校で集合場所とも言えるお決まりの食堂にてティアナとうららは揚羽と土門に一体何の用で呼ばれたのかを訊ねる。
「それで、一体何だったの?」
「ああ、実は・・・」
揚羽が何故、自分や土門を始めとする一部の訓練生たちが呼び出しを受けたのかをティアナとうららに話した。
「えっ?繰り上げ卒業式?」
「それにヤマト乗艦だなんて・・・」
繰り上げ卒業をして直ぐにヤマト乗艦の話を聞いてティアナとうららは驚く。
もっともティアナはヤマトにゲストとして乗艦した事があるがそれは黙っていたが、目の前の二人はあのヤマトに乗ると言う事で考え深い事だ。
「そう言えば、揚羽は何処の部署に配属になったんだ?」
土門は揚羽にヤマトの数ある部署の内、どの部署に配置されたのかを訊ねる。
「俺は戦闘班だ」
「えっ?戦闘班!?」
揚羽は当初、自分が希望した戦闘班に配属されたみたいだ。

「ああ、戦闘班飛行科だ」
揚羽はヤマトのコスモタイガー隊所属となった。
「最初に何を希望したんだ？」
「勿論、戦闘班飛行科だよ」
「それじゃあ、希望通りじゃないか」
「そうだよ」
揚羽は第一希望通りの配置だった。
「そういう土門はどこの配置になったんだ？」
揚羽が土門の配属先を訊ねる。
「・・・・」
配属先を聞かれ不機嫌そうにムスッとした顔になる土門。
「えっ？どうしたのよ？」
「変な部署にでもなったの？」
ティアナとうららは何故土門が不機嫌そうになったのか気になった。
「・・・・生活班・炊事科」
忌々しそうに土門は自分の配属先を口にする。
「えっ？生活班・・・・？」
「炊事科？・・・・アンタ、随分と変わった部署を希望したのね」
「そうね、てっきり砲術科を希望すると思ったのに・・・・」
揚羽、ティアナ、うららは土門の配属先を聞いて目を点にする。
射撃が得意な土門の事だからてっきり砲術科だと思ったのに、戦闘とほぼ無関係な部署に配置されることに驚いたのだ。
「ちげぇよ。俺だって最初は戦闘班砲術科を希望したさ、でも、あのＯＢ野郎が俺の希望を蹴って生活班にしたんだよ。しかも、嫌ならヤマトに乗らなくて良いだなんて言ってきたんだぞ!!」
「ＯＢ野郎？一体誰が来たの？」
「ヤマトの人事に関する事だから、ヤマトの関係者よね？」
（人事ってことは艦長代理の古代さんかしら？それとも船務長の雪さんかな？あっ、でもＯＢってことは男の人だから、やっぱり古代さんね）

「古代だよ!!古代進」
（あっ、やっぱり古代さんだったんだ・・・）
ティアナの予想通り、今回のヤマトの人事を決めたのは古代だった。
納得したティアナとは反面、土門の不快指数はまさにＭＡＸ状態となりながら古代の名を口にする。
「てか、アンタ。料理できるの？」
炊事科としては不可欠である料理の腕が土門にあるのかを訊ねるうらら。
「ああ、土門はこう見えて料理は出来るぞ。野戦訓練で此奴が作ったカレーを食べたけど、なかなか旨かったからな」
揚羽が二人に土門は料理上手だと教える。
「「へぇ～」」
揚羽から土門の料理の腕前を聞いたティアナとうららは意外そうな顔をする。
「まぁ、俺の両親は共働きだったからな、必然的に料理の腕が上手くなったんだよ」
一応、土門は自分の料理の腕前は人並みに出来るので炊事科勤務になっても問題ではないと答える。
「でも、繰り上げ卒業ってことは揚羽も土門も今日で此処を出て行くってことよね？」
不快指数ＭＡＸな土門とは裏腹にティアナは冷静に繰り上げ卒業の意味を口にする。
「あっ・・・そう言えばそうね。そう思うと何かこの後の学生生活がつまらないと言うか、競いがいが無くなると言うか・・・」
ティアナもうららも土門と揚羽が居なくなると思うとつまらなそうな様子だった。
ティアナの場合途中編入なので、いくらパルチザン活動をしていたとは言え、やはり経験の少なさから今回の繰り上げ卒業から除外され、うららの場合は成績に関係していたのかもしれない。
「でも二人にしては良いハンデなんじゃない？せいぜいヤマトでしご

かれてらっしゃい。私たちが宇宙へ上がった時に失望はさせないでよね」
「そうね。土門も揚羽も意外と抜けている所があるからね。私たちが士官になっても下士官か兵だったら、私たちの下でこき使ってあげるから」
ティアナとうららは揚羽と土門に発破をかける。
「ほざけ～逆に俺がお前らより先に艦長になって、お前ら二人をこき使ってやるぜ」
二人の発破を受け、土門の不快指数は下がり、逆に不敵な笑みを浮かべる。
将来の夢を語り合う若き宇宙戦士たち・・・・
しかし、この四人が揃う事は今後なく、今日が最後であるとはこの時、四人の誰もが知る由も無かった。

百四十二話　土門ヤマト着任

太陽にて、異常な核融合の数値が観測され、その現象を危惧した地球連邦中央天文台の所長である倉田博士と地球連邦大学宇宙物理学部長のサイモン教授は観測データを集め、サイモン教授は太陽エネルギー省と連邦大統領府へ直訴するが一蹴されてしまう。

サイモン教授は最後の望みをかけて防衛軍司令長官の藤堂へこの話をすると、藤堂はサイモン教授の話を前向きに捉え対策を取ってくれた。

藤堂は古代に宇宙戦士訓練学校の一部の訓練生らを繰り上げ卒業させて、ヤマト乗員の補填に当てた。

宇宙戦士訓練学校にて、一部の訓練生たちを繰り上げ卒業させ、ヤマト乗員の補填に当てた古代はそのまま宇宙戦士訓練学校から防衛軍司令部へと向かった。

古代が司令部に戻る頃には既に日は落ちて夜となっていたが、地球の宇宙防衛を要とする司令部には明かりが灯っていた。

その司令部では自身の婚約者である雪が古代を待っていた。

暗黒星団帝国戦役後、雪は長官付き秘書官の役職に戻っていた。

「雪、藤堂長官に取り次いでくれ」

「はい」

雪は長官室に入り、

「長官、古代進が戻ってまいりました」

「そうか、入れてくれ」

雪と入れ替わりに古代が長官室に入ると藤堂は窓の外に広がる夜景を見ていた。

「長官、ヤマト乗員の補充は完了しました」

「うむ、ご苦労」

藤堂は長官室の自分のデスクに座ると机の引き出しから一枚の紙を取り出すと古代へと手渡す。

「古代、君に当てた辞令だ」

古代は一礼して受け取るとそこに書かれていた内容に目を通す。
「古代進、ヤマトの艦長を命ず・・・艦長!?私が!?」
その辞令には古代を正式にヤマトの艦長へ昇進する旨が書かれていた。
古代はその辞令内容を見て驚く。
(月村さんもこんな気分だったのだろうか?)
古代が知る艦長は、ヤマトの初代艦長である沖田艦長、かつての恩師であり連合艦隊総司令兼アンドロメダの艦長を務めた土方、巡洋艦すくねの艦長であった三木、春藍艦長の山南、そして まほろば の艦長である月村の五人であり、年齢的にも近い良馬の姿が脳裏を過る。
「古代。君はこれまで数々の航海に艦長代理として充分にその責務を果たした。今後のヤマトの扱いに関しては若いながらも経験のある君が適任だと私は判断した。人間、何をやるにしても苦労と経験はつきものだ。一つ頼んだよ」
「はい」
「次に君を補佐する人物を紹介しよう。ヤマトの副長を入れてくれ」
藤堂はインターフォンで長官室の外に居る雪にヤマトの副長を入室するように言う。
古代は一体誰がヤマトの副長になったのか気になり、扉へ目を向ける。
すると、長官室に入って来たのは真田と島の二人だった。
「島、真田さん!!」
「古代、艦長就任おめでとう」
「おめでとう」
「ありがとう。しかし、お互いえらい事になってしまったな」
古代としては知らない人物がヤマトの副長になるよりもこうして最初のイスカンダルの航海から自分と共にヤマトに乗っていた島と真田が副長になったことに内心ホッとしていた。
通常、艦の副長は一人なのだが、古代の若さから今回、島と真田の二人の副長体制と言う形になったのかもしれない。

「よろしく頼む。今度のヤマトの航海はことに重要なのだ」
「ヤマトの今度の航海と言いますと？」
ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国の様に地球は外宇宙からの侵略を受けている訳ではない。
かと言って、雷王作戦・第二次イスカンダル遠征の時の様に正規の時期の宇宙戦士訓練学校の卒業生を受け入れた訳ではなく、今回は卒業を繰り上げてまで乗員を補充したからには何かしらの理由があるのだろう。
「三人ともこっちへ来てくれ」
藤堂は古代たち三人を隣接する応接室に案内した。
応接室には倉田博士とサイモン教授の姿があった。
「紹介しよう、地球連邦中央天文台所長の倉田博士と地球連邦大学宇宙物理学部長のサイモン教授だ。倉田博士は以前、白色彗星の針路観測を行った経緯がある」
「あの白色彗星を・・・」
古代たちは倉田博士とサイモン教授に会釈を交わした後、自己紹介をして席に着く。
そこに雪がファイルを手に持ってやって来ると古代たちにファイルを手渡す。
「よろしいですかな？倉田博士、サイモン教授」
「はい、大丈夫です」
「用意は出来ています」
「では、よろしく頼みます。雪、君も聞いていってくれ。君もいずれヤマトに乗艦するのだから」
藤堂の発言から次のヤマトの航海時に雪は長官付秘書からヤマトの船務長に復帰するみたいだ。
「はい」
雪は古代の隣に座ると室内の明かりが消え、スクリーンに太陽の映像が映し出される。
「先日、太陽の観測をしていた最中、私は太陽の核融合の異常な数値を観測しました。そこで知人であるサイモン教授に連絡を入れ、教授と

共に太陽を観測しておりました」
「異常な数値と言いますとどのくらいなのでしょうか？」
　真田が質問すると、
「此処に太陽の観測データがあります」
　倉田博士が端末を操作すると、スクリーンにはこれまでの太陽の観測データの数値とグラフが表示される。
　すると、三週間前のある日を境に数値が異常に膨れ上がっていた。
「これはっ!?」
「数値が物凄く跳ね上がっている・・・」
「もし、このまま太陽の核融合が進めばどうなるんですか？」
　古代が倉田博士に質問する。
「そのシミュレーションはサイモン教授が作成してくれました」
「私の計算によれば、このまま太陽の核融合が進めば地球上に生物が生存できる期限はあと一年・・・三年後には太陽が超新星化して爆発、地球を含めた太陽系内の惑星をすべて道連れにしてこの宇宙から消滅します」
「なっ!?」
「そんなっ!?」
「あと一年で!?」
　スクリーンには一年後の地球、そして三年後の太陽系のシミュレーション映像が映し出される。
　その姿はまさに灼熱地獄の様な光景が映し出される。
「本当にこんな大災害があと一年後に起きると言うのですか？」
　古代が倉田博士とサイモン教授に訊ねると両者は確信めいて頷く。
「・・・」
　二人のリアクションからスクリーンのシミュレーション映像は決してフィクションではなく、未来の出来事なのだと思い知らされる。
「私は報告書を纏め、太陽エネルギー省と大統領府を訪れ事の重要さを説明しました。しかし、太陽エネルギー省の黒田博士は『単なる自然現象』だと片付け、大統領も黒田博士の説を信じて私の話を信じていません」

「大統領としても地球の危機なんて話を信じたくはなかったのでしょうな」
　外宇宙からの侵略ではなく、太陽が突如超新星化して太陽系があと三年で滅亡するなんて話をされても信じ難い事なのだろう。
「しかし、私も倉田博士もこの仮説には確信がありました。故に私は藤堂長官にもこの話をして、本日倉田博士と共に皆さんに集まって頂いた次第であります」
「太陽の核融合増進制御に関して、私とサイモン教授と共にいくつかの制御方法を考えてみましたが、絶対に成功する確証が残念ながらありません」
「太陽と共に地球と太陽系内の惑星が破滅するという最悪のシナリオによって、人類絶滅を回避するとしたら、第二の地球を探し当てるしか方法はありません」
　倉田博士とサイモン教授が事態の説明を終えると一同は配られた資料に目をやる。
「サイモン教授からこの話を聞かされた時、私は即座に決断した。人類が地球上で生存できる期間が僅か一年：いや、正確には十一か月と一週間しかない。連邦政府の判断が誤っていたとしたら時間が足りず、第二の地球探査が間に合わないかもしれない。そこで私は独断でヤマトを第二の地球を探査する特務艦として派遣したい」
　藤堂の決断を聞き、古代は訓練校の訓練生たちを繰り上げ卒業させてまでヤマトの乗員として補充した訳を理解した。
　事態は最初のイスカンダルへの航海と似ているが、今回の航海と最初の航海の違いは地球がもう助からない事が前提となっている事だ。
「分かりました。長官」
　藤堂の説明を聞き、古代は頷く。
「真田君、ヤマトの改修工事はあと何日かかるかね？」
「あと、四週間いただきたいと思います」
「駄目だ。あと二週間でやってくれ。多少の作業は航行しながらやってくれないか？」
「分かりました」

「第二の地球探査ですが、何かしらの条件はあるのでしょうか？」
島が倉田博士とサイモン教授に質問をする。
「勿論、第二の地球というわけですから、太陽と同じ様な恒星がある事、惑星自体が地球と同じ大きさと重力であり、大気の組成も当然地球と同じでなければなりません」
倉田博士が第二の地球となる惑星の条件を説明する。
「距離に関しても条件があります」
「と、言いますと？」
追加でサイモン教授が地球から第二の地球となる惑星の条件の中に距離の問題もあると言う。
「銀河系星雲は直径十万光年、厚さ三万光年の星の集合体です」
サイモン教授が端末を操作するとスクリーンに銀河系の映像が映し出される。
「遠くから見ればその形はレンズ状ですが、細かくは渦巻きの形になっています。この渦の流れには一つ一つ名前がついています。地球を含む太陽系は銀河系の中心から三万光年の位置、オリオン腕と呼ばれる星雲の中にあります。移住用の避難船を建造したとしてその航続距離は一万五千光年しかないと推定されます」
連邦政府が倉田博士とサイモン教授の説を信じた頃には太陽の異常が進んでおり、急いで避難用の移民船を建造したところで、建造できる船の数は限られているし、急ごしらえで建造した船の性能何てたかが知れているし、第二の地球と地球との往復時間も考慮しなければならない。
サイモン教授はそれらの要素を計算にいれて建造できた移民船の航続距離を一万五千光年程であると距離に関しても制限がある事を説明する。
「航続距離が最大で一万五千光年か・・・」
「はい。そこで、第二の地球探査は地球を中心に半径一万五千光年の球形の範囲に限られます。更に太陽の超新星化に伴うハイパーノヴァの影響外でなければなりません」
スクリーンには第二の地球探査の範囲が表示される。

半径一万五千光年と言う制限があるもののやはり広大な空間であることに変わりない。
「ヤマトら戦艦のようなエンジンは無限に近い航続距離がありますが、この範囲外に第二の地球になりえる惑星が見つかったとしても一年以内と言う時間内では移民船の航続距離と時間の関係上、人類の移住には間に合いません」
「第二の地球探査は限られた時間内で限られた範囲を有効に使い出来るだけ多くの星を探査する必要があります。星が多く存在するのは銀河系の周外ではなく、銀河系の中心部方向です。夜空に見える天の川と呼ばれる白い川のような流れがあります。これは無数の光輝く星が重なり合って光の川のように見えるもので、つまりこの方向に向が銀河系中心部と言う訳です。ヤマトは天の川を目指し、天の川の中を一万五千光年の範囲にわたって第二の地球となりえる惑星を探査していただきたい」
倉田博士とサイモン教授がヤマトの捜索範囲を古代たちに説明する。
古代、真田、島、雪たちは事の重大さを理解し顔を見合わせる。
(またしても地球の危機か・・・しかも今度は侵略者ではなく自然が相手・・・)
(別の意味で今度の航海は責任重大だな・・・)
侵略者相手ならば、その侵略者と戦えばいいのだが、今度の相手は太陽と言う自然が相手・・・
太陽相手に戦いようがないが、それでも人類存亡の危機には変わらない。
藤堂の言う通り、今度のヤマトの航海は重大である事に変わらない。

翌日
島は早速、ヤマトの航海計画を立てつつ新人の出迎えの為、真田はヤマト改装の為、北アルプスのドックへと赴き作業を指揮している。
そんな中、古代と雪の姿は司令部内のレストランにあった。

「古代君、ヤマト艦長就任おめでとう」
　雪からヤマト艦長の祝福を受ける古代であるが、心境は複雑である。
「ありがとう・・・って言うべきなのかな？」
「どうしたの？」
「いや、俺に艦長なんてやれるのかどうか・・・」
「大丈夫よ。古代君はこれまで艦長代理として地球を救ってきたじゃない」
「だがな、今回の航海はこれまでの航海と違う・・・それに第二の地球を探すとなると船務長の雪にも頑張って貰わないといけない・・・データの調査は機械でやれるけど、最後は直接人が降りて判断しなければならない・・・頼りにしているよ、雪」
「ええ、頑張るわ。だから古代君も頑張ってね」
「あ、ああ」
　二人は手を握って見つめ合った。

　ヤマト乗艦の為、訓練校を繰り上げ卒業した元訓練生たちは手早く準備を整えると北アルプスドックで整備されているヤマトへと続々と集合する。
　その中には土門の姿があった。
「ヤマトか・・・」
　望んだ部署ではなかったが、こうして念願のヤマトへ乗艦できる事実から複雑そうにヤマトを見上げる土門。
　船体側面にあるタラップからヤマトへ上げるとそこには乗員名簿を手にした島が待っていた。
「よし、次!!」
「土門竜介、着任しました!!」
「ふむ、土門竜介・・・君は生活班所属だな・アナライザー、船務長の所へ案内してやれ」
　島は隣に居たアナライザーに土門の案内を頼む。
「リョウカイ。オイ、コッチダ。ツイテコイ」

ロボットであるアナライザーに上から目線で言われたことに土門はムッとするが、これから自分の上官である船務長に会うことになるので、土門は黙ってアナライザーについていく。
ヤマトの艦内は急ピッチで出航に向けての準備が進められており、土門よりも先に着任した乗員たちが慌ただしく動いていた。

土門がヤマトの艦内を歩いている頃、訓練学校では・・・・
「そろそろ土門と揚羽がヤマトに乗艦して居る頃か・・・・」
「そうね・・・・」
ティアナとうららは訓練校にて、土門と揚羽の二人がヤマトに乗り込んでいる頃かと思いふけっていた。
「うららはやっぱり訓練校を卒業したらヤマトに乗りたい？」
ティアナはうららに訓練校を卒業したら、やはり土門や揚羽の様にヤマトへ乗艦したいかを訊ねる。
「うーん・・・・私としてはあまり気にした事はないかな」
「えっ？そうなの？」
「そう言うティアナはどうなの？やっぱりヤマトに乗りたい？それとも司令部やどこかの基地勤務を希望？」
うららは逆にティアナが将来乗りたい艦を訊ねる。
「そうね・・・・もし、乗艦するならうららの言う通りヤマト　か　まほろば　かな？」
ティアナは乗艦経験があるヤマト　か　まほろば　に乗艦したいとうららに伝える。
「へぇ～　まほろば　なんて結構マイナーな艦をチョイスするわね。でも、まほろば　もヤマトに似ていたわね」
うららとティアナが談笑していると、ティアナはある事を思い出す。
（あっ、そう言えば土門は生活班所属だったわね・・・・と言う事は、アイツの上官は雪さんになるけど、アイツ大丈夫かしら？）
土門の上官が女性の雪である事を知った時、すんなりと受け入れるのかと疑問に思った。

そして、ティアナの疑問は今まさに的中しようとしていた。

その頃、ヤマトでは、

「船務長、新人デス」

アナライザーが船務長・つまり雪の部屋に土門を案内してきた。

「どうぞ」

雪が入室を許可するとアナライザーと土門は船務長室に入る。

そして、雪の姿を見た土門は一気に不機嫌になる。

「船務長って女じゃないか!?ヤマトに乗っても俺は女の下で働かされるのか!?」

望んだ部署ではない部署へ配属され、更に上官が女性である事に土門は思わず怒声を上げる。

「コノ野郎、女デ悪イノカ!?女ノ何処ガ悪イ!?女性蔑視ヲスルナ!!謝レ!!ユキサンニ謝レ!!」

雪ｌｏｖｅなアナライザーは土門の発言にブチ切れ彼に掴みかかる。

「うるせぇ!!ポンコツ!!」

土門がアナライザーを突き飛ばすと、アナライザーは器用に起き上がり、

「ヤルカ!?コノ野郎!!」

アナライザーもロボットながら不機嫌そうな電子声を出し、両者は一触即発状態となる。

そこへ、

「待て、その喧嘩は俺が買おう」

土門とアナライザーの怒声を聞きつけた古代が雪の部屋の前に居た。

「えっ?古代君?」

土門とこれから喧嘩をするという古代に雪は目を白黒させる。

「元々そいつは俺に腹が立っている様だからな。殴りたければ殴らせてやろう。ただし、俺も黙って殴られるつもりはない」

「こっちこそ望むところだ」

希望部署ではなく、しかも女性である雪の下で働く羽目になった原因の古代が殴らせてやると言うのだから土門にとっては願ったり叶ったりだ。
「良いだろう。だが、此処ではダメだ。場所を変えるぞ、ついて来い」
流石に雪の部屋で殴り合いをするわけにはいかないので、古代と土門は広く邪魔の入らないヤマトの艦首上甲板へと場所を変えた。
ヤマトの艦首上甲板では、古代と土門が合図も無しに殴り合いを始める。
そこには上官、部下の関係も無く、互いに一人の男同士として殴り合う。
やがて、クロスカウンターが決まり古代も土門も甲板上に大の字で倒れる。
二人ともボロボロで息も絶え絶えの状態だ。
「ハァ・・・ハァ・・・強いな・お前・・・」
「ハァ・・・ハァ・・・先輩の方こそ・・・」
二人の殴り合いは引き分けと言う形になった時、雪と共に二人の殴り合いを見学していたアナライザーのメーターがチカチカと点灯すると突然倒れた。
「ピ・ガガガガガ・・・」
ドサッ
「アナライザー!?どうしたの!?」
突然倒れたアナライザーに声をかける雪であったが、アナライザーからの返答はない。
更に異変はアナライザーだけではなく、近くの森からは突如沢山の鳥たちが鳴きながら飛び立つと崖や木に体当たりをすると言う奇妙な行動を取り始めた。
「艦長、此処だったのか?」
「真田さん、これは一体・・・?」
「世界規模で電波障害が起き始めた」
「電波障害?」

「ああ、やはり太陽が原因かもしれない。すぐに収まるだろうが、アナライザーは点検が必要だ。ひとまず工作室へ運ぶ」
真田は近くにあった台車へアナライザーを乗せると工作室へと運んだ。
この電波障害はヤマトが停泊している北アルプスドックだけではなく、真田の言う通り世界規模で起きており、海鳴市の月村邸でも、
「・・・・」
「ノエル？ちょっと、ノエル、どうしたの!?大丈夫？」
「ハッ!?忍様、私は一体・・・・」
ノエルがボォ～っとしてしまう現象が起きた。

「サイモン教授の説・・・本当みたいね」
「残念ながら・・・・」
出来ればサイモン教授の説が外れて欲しいと願ったが突如起きた世界規模のこの電波障害を見て、古代も雪もサイモン教授の仮説が正しく、人類に残された時間がもう一年切っている事に今回のヤマトの航海の重要度を改めて認識させられた。
電波障害が収まり、古代と土門は先ほど殴り合いをしていた艦首上甲板にて、夕陽を見ていた。
そんな中、古代は土門に語り掛ける。
「俺はお前に謝らなければならない」
「えっ？」
「太陽観光船の事故の後、俺は遭難者の捜索へ向かったのだが、君のご両親のご遺体も遺品も見つける事が出来なかった」
「先輩が俺の両親を・・・知りませんでした」
「ご両親はあの太陽で永遠の眠りについたのだろう」
「・・・・」
「よく見ておけ、土門。今は美しいがあの太陽では恐ろしい事が起きている。今度の航海ではヤマト皆の力を合わせて立ち向かわねばならん・・・お前は砲術科志望だったな？」
「はい」

「大砲撃ちの道は険しい。苦労して、どん底から這い上がってこい!!俺はそんなお前を待っている!!」
「はい」
古代はガッシリと励ますように土門の肩を掴んだ。
古代が土門をこうして目をかけているのは彼の境遇が似ている事に共感した為なのかもしれない。

太陽系の太陽に異常が起き、地球を含む太陽系が徐々に破滅へ進んでいる中、ケンタウロス座では、まほろば　が第四惑星防衛艦隊と共に演習を行っていた。
第四惑星防衛艦隊はフェイトとヴィヴィオを管理局の艦に送り届けに行く中、まほろばを護衛していた彗星帝国の鹵獲艦を中心とした鹵獲艦隊（通称：ホワイト艦隊）であった。
改装したとは言え、元々は異星人が建造した艦なので、地球人である防衛軍軍人が手足の様に扱いきるには時間と訓練が必要だった。
前衛の鹵獲駆逐艦、ホワイトパイカー級が射撃の的のアステロイド帯へ砲雷撃を行う光景を　まほろば　の艦橋で見つめる艦橋員一同。
「駆逐艦クラスであるだけあって、機動力は防衛軍の駆逐艦と同等ですね」
新見がホワイトパイカー群の動きを見ながら呟く。
「うん。乗員たちも段々と扱いに慣れてきているな」
良馬もホワイトパイカー級に乗っている乗員たちの練度が上がっている事を実感できる。
「でも、主砲の連射速度で言うとやはり改装前の回転式砲塔の方が早い気がします」
砲雷長であるフェリシアがホワイトパイカー級の射撃速度に関して、改装前のククルカン級襲撃型駆逐艦の方が上だと感じていた。
「確かに砲雷長の言う通り、射撃速度、連射速度に関しては改装前の回転式砲塔の方が早いみたいだが、どうも回転式砲塔は扱いが地球人には難しいみたいだ」
鹵獲艦を改修した時、防衛軍はまだ彗星帝国の残党軍との戦闘が続

いている中で、取り扱いが難しい武器よりも多少のレベルが下がっても使い慣れている武器を使用して、少しでも早く戦線投入した方が良いとの判断で鹵獲艦は装備していた回転式砲塔を全て撤去して、防衛軍が使用していた砲身付きの砲塔が採用されてソレを搭載している。
「ミサイル艦の艦首にあるバカでかいミサイルも今の地球人には過ぎた代物だ。だからこそ、外見だけはそのままにしてミサイル機能を外し、レーダー機能にしたからね」
まほろば　の隣を航行している鹵獲ミサイル艦であるホワイトランサー級をチラッと見る良馬。
ホワイトパイカー級が砲雷撃をくわえた後、ホワイトスカウト級の空母から発艦したコスモタイガーが近接戦をアステロイド帯相手に行う。
コスモタイガーの扱いに関しては元々防衛軍の機体なので、問題なく使用でき、ホワイトスカウト級に関しても一応、防衛軍には空母と呼ばれる艦種も存在するので、ホワイトスカウト級に関しては他の鹵獲艦よりもスムーズに使用出来ている。
「でも、あのホワイトスカウト級が、防衛軍が保有した初めての純粋な空母じゃないかな？」
良馬がホワイトスカウト級についての意見を述べる。
「えっ？ですが、防衛軍でも空母は保有していますよ」
ギンガが防衛軍の空母について意見を言うと、
「いや、これまでの防衛軍の空母はドレッドノート級を改装したモノだから、あれは純粋な空母と言うよりも戦艦空母の部類に入るんじゃないかな？」
「しかし、防衛軍が保有した純粋な空母が彗星帝国からの鹵獲艦とはなんともねぇ～」
永倉が空母に関して複雑な感じに言う。
「まぁ、防衛軍はこれまで純粋な空母を保有していなかったから、ホワイトスカウト級を基に今後、純粋な空母を建造していくかもしれないな」
「鹵獲艦と言えば、先日畝傍が見つけた彗星帝国の潜宙艦・あれはど

うなったんですか？」
　次にギンガが先日、フェイトたちがミッドへ帰還した後、当時護衛でまほろばに同行し、管理局の関係者と帰国手続きをしている最中、周辺宙域を哨戒していたパトロール艦、畝傍が漂流していた彗星帝国の潜宙艦を発見し、それを地球まで回航した。
　地球へ回航された潜宙艦は技術調査されるが、次元潜行技術は地球でも全くの未知の領域だったので、調査に参加した真田でも早々に結論は出せなかった。
「まだ、調査中らしい・・・でも、次元潜行技術が確立されれば防衛軍でも次元潜行艦を保有することが出来るだろうね」
　イスカンダルからもたらされた波動エンジン、ガミラスからもたらされた連続ワープ機関、そして彗星帝国の鹵獲艦、これらを防衛軍は・・・地球人は、自分たちが扱えるように改良し、それを扱えるように努力してきた。
　真田も良馬もいつかは防衛軍・地球も次元潜行能力を有する事が出来ると信じていた。

　地球では、太陽の異常が起き、ケンタウロス座では　まほろば　を含むホワイト艦隊が演習している中、ミッドチルダでは・・・
　此処で視点はミッドチルダへと変え、時間は少し過去に遡る・・・

　マスコミとの協定までに査察部・もとい、本局の一部の局員たちは何としてでもフェイトからもう一つの地球の情報を得ようとするもそれは徒労に終わり、とうとうマスコミとの協定解禁の日を迎えてしまった。
　時空管理局本局・第一会見所
　そこでは、フェイトの帰還を受け、テリオスの遭難事件の経過報告を兼ねた記者会見が行われている。
　管理局側の出席者はフェイト、リンディ、はやて、に次元航行本部の幕僚と本局広報部の局員が同席したのだが、案の定、会見に先立ち、もう一つの地球と防衛軍関係の質問は受け付けない旨の通告があっ

た。
防衛軍について、もう一つの地球での生活、魔法のことが露見したか等、重要事項を質問できないことに当然マスコミからは不満の声は上がった。
しかし、管理局側は肝心なもう一つの地球の座標さえ把握していなかったので、マスコミへ正式発表できる段階ではないとの理由説明がなされたが、これはこれで当然な措置と言えよう。
管理局が握っているもう一つの地球の情報で、向こうの地球の大気圏全体がＡＭＦならぬＡＭＡのため、ＡＡランクの魔導師ですら無力化される上にオーバーＳランク魔導師も大幅に力を減殺されるという事で管理局魔導師にとっては地獄同然の環境である事、
防衛軍が保有している主力戦闘機は宇宙空間から大気圏内まで連続して運用できる事、
地球防衛軍の戦艦一隻の通常火力が推定ながらも管理局のアインヘリアル三基分を超え、決戦兵器たる波動砲の破壊力に至っては、アルカンシェルの十倍とも百倍とも推定される凶悪極まる戦闘力を持っている等が明らかになろうものなら、管理世界の住民に無用な動揺を与え、管理局への不信感を招きかねない。
ただでさえ、ボラーへの武力制裁失敗の尾を未だに引きづっている管理局ならば猶更、もう一つの地球の情報をマスコミへそう簡単に流すわけにはいかなかったのだ。

会見の様子はテレビ中継されており、フェイトやはやてが出ると言う事で、教導隊の宿舎にて、なのはとヴィヴィオもその様子をテレビで見ていた。
「うわぁ～フェイトママ、すごくがまんしているね」
「そ、そうだね」
テレビ画面の向こう側に居るマスコミからの質問に言葉を選びながら答えるもう一人の母親の姿を見ながらヴィヴィオはボ○太くん人形を抱きしめながらそう評し、親友が見た目とは裏腹な激情家である事を誰よりも知っている彼女の養母も、同感とばかりに頷きなが

ら、テレビ画面の向こう側の親友の姿を見つめる。
もう一つの地球を知り、その世界を体験してきたのはフェイトただ一人なので、マスコミの質問が過熱するのも無理はない。
一応、防衛軍軍人と直接接触したリンディとはやてにも質問が飛ぶが、フェイトとの比ではない。
フェイトの笑顔が明らかに引き攣っており、彼女が相当我慢している事がテレビ画面越しながらも窺える。
フェイトの記者会見を見ながら、なのはの脳裏には、もう一つの地球に居るとされる平行世界の自分の子孫である紅葉ともう一つの地球に敢えて残ったティアナの姿が脳裏を過る。
とはいえ、なのはがもう一人の自分の子孫や元教え子と対面するには、クリアしなければならない問題が山積している
これまでもう一つの地球に滞在中で会った時のフェイトとの交信で武力衝突なんて事になれば、管理局側が手痛い損害を喰らうのは目に見えている。
通常空間での艦船同士の戦闘では話にならない。
単艦でも高い戦闘力を持つ地球艦は当然艦隊運用もでき、アルカンシェルの射程外から一方的に撃ち減らされる上、地球の艦載機は対艦攻撃もでき、単独で大気圏に突入し、戦闘を続行できる。
いくらシールドやバスター魔法が使える自分でも光速や音速の飛行物体を撃ち落すなんて芸当は難しい。
シューターを無差別にばら撒けば、運よく当たるかもしれないが、それでは味方にも当たってしまうだろうし、なにより向こうの世界での戦闘を行えば、かの世界に充満しているＡＭＡで大半の魔導師は無力化され、高ランク魔導師も大幅な能力ダウンは避けられず、並の魔導師と大差ない能力しか出せない。
反対に向こうは非魔導師ながらも拳銃を含めてレーザーガンが標準装備だ。
亜光速で飛んでくる対人レーザーはほぼ回避不可能で、これまで拳銃弾には通用してきた魔導師の防御障壁やバリアジャケットも対人レーザーに通用する保証はないし、障壁やバリアジャケットを展開す

る前に狙撃されたらどうにもならない。
それは当然、向こうの世界で滞在していたフェイト自身も理解している。
だからこそ、管理局がもう一つの地球に手を出さない様にとあれこれ手を打っていた。
やがて、本局広報部の局員が、
「お時間になりましたので、以上で記者会見を終了させていただきます」
時間と言う制限で記者会見を強引に打ち切った。
マスコミたちはまだフェイトに質問がしたいのか不満げに『もう少し・・』などと言っているが、フェイトたちはそれは無視して会場を後にした。
「ふぅ～・・・・」
会場を後にしたフェイトは一息つく。
「お疲れフェイト」
「お疲れ」
そんなフェイトにリンディとはやてが労いの声をかける。
「全くだよ。あぁ～疲れた～」
マスコミとの協定が解禁されたことでようやくうっとおしい査察部からの監視からも解放され、やっと面倒事から解放されたと疲れながらも解放感を感じるフェイト。
そこへ、なのはから通信が入る。
「お疲れ様、フェイトちゃん。記者会見、見たよ」
「あぁ、なのは・・・・」
「フェイトちゃん、随分と我慢していたね」
「ホントだよ。今日はもうはっちゃけたい気分」
「ほんなら、居酒屋にでも行く？」
はやてがフェイトを居酒屋へと誘う。
「うん、行く」
「なのはちゃんもどうや？」
フェイトは居酒屋へ行くと言うので、はやてはなのはも誘う。

「うーん・でも、ヴィヴィオが居るし・・・・」
なのはとしてはヴィヴィオが居るのでおいそれと夜間に外出は出来ない。
かと言って自分たちが今いるのは教導隊の宿舎なので、そこでどんちゃん騒ぎをするわけにもいかない。
「それなら、シャマルとザフィーラを向かわせるで」
なのはが来たいと言うのであるならば、はやてはヴィヴィオの下にシャマルとザフィーラをベビーシッターとして派遣すると提案する。
「そ、それじゃあ・・・・」
シャマルとザフィーラにすまないと思いつつも、なのは自身フェイトとはやてと会って女子会をしたかった。
なのははヴィヴィオに説明をして、今日の夜、久しぶりにフェイトとはやてとの夜の女子会に参加した。
女子会と言っても居酒屋なのがやや色気が無い気もするが、本人たちが楽しければ良いのだろう。
「すみませーん!!ジョッキお代り!!」
「はいよ!!」
「フェイトちゃん、飲み過ぎだよ・・・・・」
「せやな・・・・ピッチが速すぎるで、フェイトちゃん」
なのはとはやてはフェイトに飲み過ぎだと注意するが、
「飲まなきゃやってらんないよぉ～査察部のゴキブリ野郎どもが今日まで付き纏ってホント、迷惑だったんだから」
「・・・・」
フェイトの口からまさかの発言になのはとはやてはドン引き。
(フェイトちゃん、相当ストレスが溜まっていたんだね・・・・)
(まさか、あのフェイトちゃんが此処まで荒れるなんて珍しいな～)
「すみませーん!!お代わりまだですかぁ～!?」
「はいよ、お待ち!!」
「来た、来たぁ～ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ、ん～、ぷはぁ～あぁ美味しい～」
フェイトはお代わりのお酒を一気に煽る。

その姿は完全に美人執務官と言うよりもおじさんである。
二人の視線を気にせずにお酒をグビグビ飲んでいるフェイト。
そんなフェイトにバルディッシュが、
「マスター、マスター、私も飲みたいです」
と、お酒をフェイトに強請る。
「ん？バルディッシュも？どれがいい？」
フェイトはバルディッシュにメニューを見せる。
「えっと・・・これを下さい」
「うん。すみませーん!!」
バルディッシュに酒を選んでもらい、それを注文する。
「お待たせしました」
やがて、注文したお酒が来るとフェイトはお酒が入っているグラスの中にバルディッシュを入れた。
「えっ？フェイトちゃん!?」
「一体何をしとるんや？酔っとるんか？」
フェイトの行動にギョッとするなのはとはやて。
「ん？そこまで酔ってないよ。これはバルディッシュのメンテナンス」
「えっ？メンテナンス？」
「そんな破天荒な・・・」
なのはとはやては目を白黒させながらお酒のグラスに入ったバルディッシュを見ていた。

百四十三話　ミッドと地球での出来事

ミッドにて、フェイトのもう一つの地球での情報について管理局とマスコミとの協定が解禁され、フェイトがもう一つの地球関係についての記者会見を行ったその日の夜、フェイトはこれまでの査察部からの監視と事情聴取からストレスが溜まっている様子だったので、はやてから居酒屋でパァ～っとストレスを発散しないかと提案され、フェイトはその提案に賛成する。

フェイトの他にはやて、そしてはやてが誘ったなのはと共に居酒屋へと向かう。

フェイトはこれまでのストレスを忘れるかのように居酒屋に着くと浴びるように酒を飲む。

そんなフェイトの姿に対して、はやてとなのははややドン引き気味。

飲み会が進む中、フェイトは自身の愛機であるバルディッシュを酒の入ったグラスへ入れると言う奇行を行う。

はやてもなのはもフェイトが相当酔っているのかと思いきや、フェイトは確かに酔ってはいたが、泥酔するほどではなかった。

そこで、はやてがフェイトの奇行を訊ねると彼女はこの行為はバルディッシュのメンテナンスだと言う。

フェイトの回答に驚愕するはやてとなのは。

「えっ？ちょっと待って、それがメンテナンス？」

「ほんまか？」

ただ酒に浸けるだけ・・・そんなメンテナンス方法はこれまで聞いたことがない。

なので、はやてとなのはが疑うのも当然の事だ。

「うん、ホント、ホント。バルディッシュ自身もすっごく気に入っているんだから」

「・・・」

はやてとなのははお酒が入ったグラスに浸かっているバルディッ

シュを見つめる。
「ア〝ア〝ア〝～・・・・」
確かにバルディッシュは嫌がる様な様子もなく、まるで温泉に浸かっているかのような声を上げている。
そして黄色の宝石部分は、最初は黄色く点滅をしていたのが、段々と赤くなっていく。
（えっ？バルディッシュ、酔っておるんか？）
（デバイスって酔うの？）
そんなバルディッシュの様子をはやてとなのはは目をパチクリしながら見ている。
そして、
（バルディッシュが気に入っているって、リインも気に入るんか？）
はやては自身のデバイスであるリインが酒風呂に入る様子を想像する。
「うぃ～なんか、気持ちいいですぅ～」
バルディッシュの様子を見て、リインが酒風呂に浸かりながら顔を赤くしながらも酒風呂を気に入る様子が脳裏を過るが、その翌日・・・・
「うっぷ、気持ち悪いですぅ～」
リインが二日酔いになった姿が容易に想像できた。
（うん、ないわなぁ～）
リインが二日酔いになったら大変なので、はやては酒風呂は無いと判断した。
「・・・・」
一方、なのはの愛機であるレイジングハートもバルディッシュの様子をジッと見ていた。
「そんなメンテナンス方法一体どこで教わったの？」
なのははフェイトにこんな仰天メンテナンスをどこで教わったのかを訊ねる。
「ん～・・・・向こうの地球～・・・・紅葉から・・・・」
（えっ？紅葉って確かもう一つの地球に居る私の子孫って言われている子だよね・・・・？）

（デバイスのメンテナンスをやるってことはやっぱり・・・）
フェイトがこの仰天メンテナンス方法を教わった場所、そして教えた人を知ったなのはは唖然とする。
紅葉がもう一つの地球におけるなのはの子孫ではないかとこれまで薄々思っていたが、この仰天メンテナンスをフェイトに教えたとなるとやはり紅葉は別世界における自分の子孫である他に、自分と同じ魔導師なのだと確信を得る事が出来た。
なのはが紅葉の事を思っていると、
「・・・マスター」
なのはの首にかけていた待機モードのレイジングハートが声をかけてきた。
「ん？何？レイジングハート」
「・・・あの・・私も・・・あれ・・試してみたいです」
「えっ？」
何とレイジングハートがなのはにバルディッシュと同じく自分も酒に浸かりたいと言ってきた。
「えっ？ちょっと待って、レイジングハート。本気なの？」
レイジングハートの頼みに対して、なのはは思わず声が裏返る。
「はい。バルディッシュの様子を見る限り、気持ち良さそうなので・・・」
「・・・」
レイジングハートの頼みの言葉を聞き、お酒が入っているグラスに浸かっているバルディッシュを見つめるなのは。
（大丈夫なのかな？お酒にデバイスを浸けても壊れないよね？）
お酒に浸けてレイジングハートが壊れないか心配になるなのは。
「ふぇ、フェイトちゃん。バルディッシュをお酒に浸けて大丈夫なの？壊れない？」
そこで、なのははデバイスをお酒に浸けてメンテナンスしているフェイトに訊ねる。
「全然、むしろお酒に浸けた方が何故か調子が良いんだよね～」
フェイト自身もジョッキに入ったお酒を飲みながら、なのはに対し

てお酒に浸けてもデバイスは壊れないと答える。
「・・・」
（えっ？それってバルディッシュがアル中とちゃうんか？）
　はやてはフェイトの説明を聞き、バルディッシュが既にアルコール中毒になっているのではないかと思った。
「じゃ、じゃあ・・・」
「えっ？なのはちゃん、やるんか？」
「うん。レイジングハートがやりたそうだし・・・」
「ほ、ほんまか・・・」
　フェイトの言葉を全て信じられる訳ではないが、お酒に浸けても壊れる事は無い事、更に何故かお酒に浸けた後、調子が良いと聞いた事から、なのははレイジングハートにもこの仰天メンテナンスをやってみる事にした。
　そんな、なのはの態度にはやてはやや引いている。
「えっと・・・レイジングハート・・・どれがいい？最初はなるべくアルコール度数が低い方が良いんじゃないかな？」
「えっと・・・これにします」
　なのはがレイジングハートにお酒のメニューを見せるとレイジングハートはなのはの忠告を聞き、アルコール度数が低いお酒をチョイスする。
「お待たせしました」
　やがて、注文したお酒が届くとなのはは恐る恐るレイジングハートをお酒が入ったグラスの中に入れる。
　ポチャっ・・・
　レイジングハートは当初、全体が薄赤色の点滅をしていたのだが、段々と点滅している赤色が濃くなっていく。
（レイジングハート、酔っているんか？）
（機械である筈のデバイスもお酒に酔うんか・・・？）
　バルディッシュやレイジングハートのこの現象に対して、はやては、バルディッシュとレイジングハートがお酒に酔っているのかと思った。

デバイスはデバイスでもリィンやアギトの様な人型で感情があり、食事も出来、生物に近いユニゾンデバイスと違い、機械的なインテリジェント、ストレージ、アームドデバイスが酔うなんて非現実的な現象にも感じた。
「はふぅ～・・・これは・・・確かになかなか気持ちいいですね～」
電子声なのだが、レイジングハートは気持ちよさそうにグラスに沈んでいる。
テーブルの上にデバイスが入っているお酒のグラスが二つある奇妙な光景の中、飲み会は進んで行く。
この時、フェイトは既に五、六杯ジョッキで飲んでおり、顔全体が赤い。
そんな中、フェイトがボソッと呟く。
「ねぇ～なのは、はやて。私ってどうしてモテないのかな？ルックスには自信があるし、スタイルだって結構いい線いっていると思うんだけど・・・？」
「「えっ？」」
フェイトからまさか異性についての愚痴が出るなんて意外であり、思わずフェイトを見るなのはとはやて。
「えっ？えっと・・・フェイトちゃん。それはどういう意味や？」
「ん？言葉通りの意味だけど？」
「・・・」
はやてとしてもこれまでのフェイトとの付き合いから、彼女はどちらかと言うと年頃の異性に対して興味が無く、むしろ、なのは一筋・なのはＬＯＶＥの同性愛者みたいな印象を抱いていた。
それが、異性に対しての愚痴をするなんてまさに青天の霹靂である。
一方、これまでのフェイトから好意みたいな感情を向けられていたなのは自身は、フェイトのそんな感情をただの友情だと思っていたのだが、はやて同様、これまでのフェイトとの付き合いで異性に対する愚痴を聞いたのはこれが初めてだったので、意外性を感じていた。
「で、でもなんでいきなりそんな話をするんや？フェイトちゃん」

「ん?・・・・実は向こうの地球で知り合った人が・・・・既婚者だったり、リア充だったりで・・・・」
酔って口が多少、軽くはなっていたのだが、フェイトはギンガの名前を口に出すことはなかった。
「えっ?既婚者?」
「リア充?」
(えっ?フェイトちゃん、既婚者の男の人に手を出そうとしたんか!?それとも彼女が居る彼氏を寝取ろうとしたんか!?)
「はぁ~・・・・もう少し早く、あっちの地球に行っていたら、結果は違っていたのかな・・・・でも、あんな立派な人が相手じゃあ、私でもやっぱり勝ち目はないか・・・・」
フェイトの脳裏には既に大人の階段を昇ったギンガの姿、古代守との仲を引き裂くなんて事実上不可能なスターシアの姿が過る。
「えっ?いや、ちょっ・・・・」
「フェイトちゃん?」
困惑するなのはとはやてを尻目にフェイトは、
「すみませーん!!お代わり~」
更にお酒を注文する。
「で、でも、フェイトちゃんは確かに美人さんやし、男なんてすぐに見つかるんとちゃうか?」
はやては無難にフェイトを慰めるが、
「あの人みたいな人・・・・管理局には居ないよぉ~」
(フェイトちゃん、もしかして失恋したんか・・・・?)
フェイトはグテ~っとテーブルに突っ伏す。
(しかし、フェイトちゃんがここまでお熱になる人って一体どんな人やったんやろう・・・・?)
フェイトの言動から、はやては彼女が向こうの地球で運命的な出会いをするもその人が既婚者だった為に諦めざるを得なく、失恋したのだろうと察した。
ただ、なのはＬＯＶＥだったフェイトをここまで夢中にさせた男性が一体どんな男性だったのかも気になった。

そして、はやてから見てもフェイトは本人が言うように容姿もプロポーションも女性としてはレベルが高い。
恋人になりたいと思っている男性局員は沢山居る。
しかし、そんなフェイト自身が負けを認めると言うのだから、フェイトの失恋相手のパートナーである女性がフェイト以上の女性である事が窺える。
フェイトの失恋相手とそのパートナーの女性も見てみたいとはやては思った。
その後もはやてとなのははフェイトから酒の愚痴に付き合わされるのであった。
その後、店を出てからも・・・・
「ねぇねぇ、はやて、なのは。カラオケに行こう、カラオケ!! ナナ・ミズキの新曲覚えてきたから、二人に披露しちゃうよ～」
フェイトは二次会にカラオケに行かないかとなのはとはやてを誘う。
しかし、
「フェイトちゃんの歌は確かに上手だし、ナナ・ミズキって人に声が似ているけど、私もはやてちゃんも明日お仕事があるからもう帰らないと・・・・シャマルさんとザフィーラにも悪いし・・・・」
「ブ～ブ～分かったよ。それじゃあ、かーいさーん!!」
フェイトは不満そうであったが、なのはとはやては明日も仕事があり、流石にこれ以上の女子会は明日の仕事に支障をきたすので解散となった。
翌朝、フェイトは昨夜の事はバルディッシュをお酒に浸けた後はあまりよく覚えておらず、自分が遠回しになのはとはやてに古代守に抱いた恋心と失恋を口にした事を覚えていなかった。
そして、お酒に浸けたレイジングハートであるが、シャーリーにフルメンテナンスをしてもらった時よりも何故か調子が良く、使用していたなのは自身が困惑する事態が起きた。
ここで時間を昼間まで巻き戻す。

ミッドチルダ西部　エルセア　ナカジマ家
居間のテレビには本局で記者の質問に慎重に答えるフェイト、リンディ、はやてたちの姿が映し出されている。
リビングで見入るのは非番で実家に戻っていたスバルと元ナンバーズの姉妹たち。
なお、ナカジマ家の大黒柱であり、スバルたちの父親のゲンヤはまだ陸士１０８隊で勤務中だった。
「フェイト執務官、大変そう・・・・」
テレビ画面に映るフェイトの姿を見てスバルがヴィヴィオと同じく同情する感じで呟く。
一応、一年と言う短い期間の付き合いであったが、人間観察が意外にも上手いスバルから見ても画面の向こうに映るフェイトが不機嫌である事を読み取っていた。
「そう言えば、ティアナはどうしたんだ？」
ノーヴェがスバルにフェイトと共に遭難し、もう一つの地球に行ったティアナについて訊ねる。
ティアナの件もマスコミとの協定が解禁されるまで一部の人間以外は知らなかった。
「ティア・・・・もう一つの地球に残ったみたい」
スバルはこうしてマスコミとの協定が解禁されたので、ノーヴェたちにティアナがもう一つの地球に残った事を伝える。
「えっ？残った!?」
「もう一つの地球に・・・・？」
「なんでっスか!?」
「確か補佐官は執務官志望だったのだろう？もうすぐで、念願の執務官になれそうだと言う時に管理局を辞めてもう一つの地球に残ったのか？」
ノーヴェたちもティアナがもう一つの地球に残ったのは意外そうで何故、ティアナがもう一つの地球に残ったのかスバルに訊ねる。
「詳しくは教えてくれなかったけど、ティア・・もう一つの地球で本当にやりたい事を見つけたみたい・・・・訓練校時代から目指していた執

務官以上の事を・・・」
「そうだったのか・・・」
ノーヴェとしてはティアナの気持ちが何となくだが理解出来た。
まだスカリエッティの下に居た頃は、自分は戦闘機人であり、兵器であり、創造主であるスカリエッティの言う事が絶対でただ彼の野望を邪魔するモノを破壊しなければ自分の存在意義がないと思っていた。
しかし、ＪＳ事件後に更生施設で更生教育を受け、こうしてナカジマ家の養女となってからはノーヴェの世界に対する視界は大きく広がった。
最近では格闘技ジムの開設と運営資格取得の為の勉強を頑張っている。
そういった点がノーヴェとティアナは似ていた。
恐らくノーヴェ以外の元ナンバーズのメンバーも同じ事だろう。
セインたち聖王教会に引き取られた教会組も今は教会のシスターとしてその役職を頑張っている。
「もし、ティアがフェイト執務官と一緒にミッドに戻って来ても多分、フェイト執務官のことだから、きっとティアをあんな矢面には立たせないと思うな・・・」
スバルは仮にティアナがミッドに戻って来たとしてもフェイトは今回の記者会見の場にティアナを出さなかったと思った。
「確かにあの執務官の性格を考えるとスバルの言う通りかもな」
チンクもスバルの意見に賛同する。
「ああ、あれっスね、『ミッドの借金をヴァイゼンで返す』っていうヤツっスね」
「ウェンディ、それを言うなら『親の恩は子に返せ』だよ」
ディエチがウェンディの間違いを指摘する。
「あれ？そうだっけ？」
「やれやれ」
チンクは妹の知力に呆れた。
「そう言えば、スバルは向こうの地球・防衛軍の人とも何回か交信し

たんだよね？」
　ディエチがスバルに防衛軍の軍人と会った事を確認する。
「うん。会ったよ」
「守秘義務があるだろうから詳しい事は聞かないけど、スバルはフェイトたちを助けた防衛軍の艦や軍人さんたちをどう思う？」
「えっ？防衛軍の艦や軍人さんたち？」
「うん」
「うーん・・・・一言で言うなら『地球のストライカー』・・かな？」
「『地球のストライカー』・・・・」
「うん。詳しくは私も知らないけど、向こうの地球は何度か異星人との大きな戦争があったみたい・・・・つい最近じゃあ、地球が占領されちゃったみたいだし・・・・」
「おいおいマジかよ・・・・」
「もう一つの地球って確か管理局よりも強いって聞いたっス・・・・」
「その地球を占領って・・・・」
　ノーヴェたちはもう一つの地球と交信をした経験が無いながらもスバルやゲンヤからの又聞きで、もう一つの地球は管理局を上回る戦力を有している事は知っていた。
　その地球を占領した異星人である暗黒星団帝国の事をチラッと聞き、思わず顔を引き攣らせる。
「地球を占領したその異星人たちはどうなったの？」
「もちろん、防衛軍の人たちが解放したよ。占領中は地球との交信が出来なかったけど、占領した異星人たちを追い出して復興もしたみたい」
「占領下の状況から押し返すとはやはり、凄いな」
「そうだね。でも、もう一つの地球は何度も存亡の危機になったみたいで、その危機を救ったのはヤマトや防衛軍の人たちで、そのほとんどが何もかもがぶっつけ本番で、負ければ自分たちだけでなく、地球そのものが滅ぶ瀬戸際ばかりな戦いだったって・・・・」
「事件の規模を比べるものじゃないが、スバルの話を聞く度にドクターや私らの行為がコソ泥レベルの規模だったんだな・・・・」

もう一つの地球での戦争とＪＳ事件の規模があまりにも違いすぎる事を実感する。
「ティアナはそんな地球へ残った訳か・・・・」
チンクがそんな地球へ残ったティアナが何故、かの世界へ残ったのか分からないが彼女の生活を思うと色々と苦労するだろうとしみじみと察するが、管理局でも苦労するのは変わらない。
「それで、管理局は今後どうするんだろう？」
ディエチがまだ続いている記者会見が行われているテレビをチラッと見る。
「フェイト執務官、ヴィヴィオはミッドに戻って来たけど、もう一つの地球は今後も管理局と付き合うのかな？」
そして、今後の管理局ともう一つの地球との付き合いをスバルに訊ねる。
「うーん・・・・どうなるんだろう？私は〝海〟の所属じゃないから分からないけど、フェイト執務官のこの表情から難しいかも・・・・」
スバルはテレビに映るフェイトの表情から管理局ともう一つの地球との間に交流が続くのは難しいのではないかと判断した。
（交流が続けばティアやギン姉と会えるんだけどなぁ～・・・・）
スバル個人とすればミッドともう一つの地球が交流してくれればもう一つの地球に居るティアナやギンガと会える。
それはなのはも同じだ。
しかし、管理局のこれまでのもう一つの地球へ行った言動から管理局へ不信感を持っているもう一つの地球が交流を持つとも思えない。
ゲンヤの言う通り、ギンガ、ティアナと再会するまで多くの障害がありそうだった。

此処で視点はミッドから太陽の異常が起き、一部の人間が知らぬ間に破滅へと向かい、管理局が血眼になって探しているもう一つの地球へと移す。
そして、時間軸もヤマトが藤堂の密命を受け、出航準備をしている

現時刻まで戻る。
　朝食の時間、ヤマトの乗員たちが食堂にて、朝食を摂っている中、
「揚羽、揚羽武は居るか？」
　ヤマトの新艦長に就任した古代が食堂で揚羽を探す。
「は、はい!!」
　揚羽が食事を中断して古代の下へと向かう。
「揚羽、すまないがこの後、新型の探査航空機であるコスモハウンドがヤマトに搭載されるのだが、そのコスモハウンドの試験飛行を頼みたい」
「えっ？自分がでありますか？」
「ああ、ヤマト航空隊の隊員たちがまだ到着していなくてな」
「了解です」
「それと、飛行以外にも機銃の試射も行っておきたい。お前の知り合いで射撃が上手い奴も一緒に乗せてやってくれ」
　古代はそう言うと、チラッと厨房で働いている土門を見る。
（ああ、なるほど・・・・）
　古代の思いに気づいた揚羽。
「分かりました!!」
「それじゃあ、頼む」
　古代が去り、揚羽は朝食を食べ終えると、食器を片付けるために食器の回収所へと向かうと、
「土門、ちょっといいか？」
「ん？なんだ？」
　土門を呼び寄せた。
「実はこの後、新型機のコスモハウンドの試験飛行をやるんだ」
「なんだよ？自慢か？」
　自分と異なり、希望部署へ配属になった揚羽が自慢をしてきたのかと思い不機嫌そうに顔を歪める土門。
「違うよ。その際、搭載されている機銃の試射もやるんだよ」
「だから？」
「だから、コスモハウンドに乗らないか？」

「ん？どういうことだ？」
「試験飛行時の機銃手については俺が指名して良いって古代艦長が言っていたんだよ」
「えっ？古代艦長が？本当か!?」
「ああ」
「ちょ、ちょっと、幕ノ内キャップに説明してくる!!幕ノ内キャップ!!」
揚羽の誘いを受け、土門は急ぎ厨房責任者である幕ノ内に説明しに行った。
古代から幕ノ内にも連絡がいっているみたいで、土門はコスモハウンドの試験飛行の間、厨房勤務から外れることが出来、揚羽と共にコスモハウンドの試験飛行へと臨んだ。
ヤマトの改装が進む中、暗黒星団帝国戦役後にヤマトを降り、様々な部署へ配属された元ヤマトの乗員たちは藤堂の命令を受け、続々とヤマトへと戻って来ていた。
昼時の少し前、ヤマト空戦隊隊長の山本明夫がヤマトに戻って来た。
この時、古代はカタパルト上にある自身の愛機の整備を行っていた。
「古代!!」
山本はそんな古代の姿を見つけ、声をかけた。
「山本、来るのが遅いじゃないか」
「すまん、色々と引継ぎの手続きで手間取っちまって、それより聞いたぜ、正式にヤマトの艦長になったって、おめでとう」
「ああ、ありがとう」
古代と山本がそんなやりとりをしていると、ヤマトの周囲の上空をコスモタイガーよりも大きな航空機が飛んでいた。
「ん？あの航空機は？」
「コスモハウンド。今度、ヤマトに新しく搭載される惑星探査の地上活動に使う新型機だ」
「良い腕だ。誰が乗っているんだ？坂本か？それとも椎名の奴か？」

「揚羽武。宇宙戦士訓練学校から繰り上げ卒業させて引っ張って来た新人だ」
「へぇ～」
古代と共に上空を飛行しているコスモハウンドの動きを見つめる山本。
その試験飛行を行っているコスモハウンドのコックピットでは機長席にて、揚羽が操縦桿を握りながらコスモハウンドの操縦を行い、隣の副操縦士席では土門が座っている。
コスモハウンドは最大速力での飛行、旋回飛行、急降下、上昇などの運動性の試験飛行を行い、一通りの運動飛行を行い、
「よし、次は武装チェックだ」
「待っていました」
土門は上機嫌で機首に装備されている自衛用の２５㎜単装パルスレーザー機銃を稼働させる。
標的は地上に設置されている風船状の的で、揚羽は機体を降下させる。
土門は地上に設置されている的を次々と撃ち抜いていった。
古代と山本がコスモハウンドの試験飛行を見学している頃、山本以外にもヤマトの乗員が集まっていた。
その中には医務長の佐渡もヤマトに到着した。
「佐渡先生」
「おう、船務長、遅くなってすまんのう。佐渡酒造、ただいまヤマト医務長として着任しました」
タラップでは雪とアナライザーが佐渡を出迎えた。
「サドセンセイ!!」
「おぉ～アナライザー!!元気じゃったか!?」
佐渡はアナライザーと抱き合う。
「ワシは生涯の中で一度はロボットの病気を治したいと思っておるよ」
「ボクハシンデモ、センセイニミテモライタクハアリマセン」
佐渡は一生のうちに一度はコンピューターウィルスに犯されたロ

ボットを診察して治したいと言うが、アナライザーは永久に壊れても佐渡には診てもらいたくはないと拒否する。
「ハッ、ハッ、ハッ、言うの～」
佐渡はアナライザーの診察拒否を軽く笑いで受け流す。
これは佐渡とアナライザーとの間に絆みたいなモノがあるからそこなせるモノであった。
そんな中、ヤマトにアナライザー以外のロボットが沢山積み込まれている様子が見えた。
「ん？なんじゃ？今度の航海じゃあ、随分と沢山のロボットを乗せるんじゃな」
「探査用のロボットです」
雪が佐渡にアナライザー以外のロボットを沢山乗せる訳を話す。
そんな中、ロボットの乗艦が詰まるとアナライザーが現場に赴き、誘導を行う。
「アナライザーはロボット班のリーダーになるので、今から張り切っています」
「ハハ、アイツの事じゃから威張るんじゃないか？」
後輩のロボットの誘導を行っているアナライザーを見ながら佐渡は、今回の航海におけるアナライザーの様子を想像しながら笑みを浮かべた。

コスモハウンドは、試験飛行過程を終えて、土門と揚羽は昼食の為、ヤマトの食堂へと戻るが、昼食時と言う事で、厨房はてんてこ舞いとなっており、土門は厨房を手伝う事となり、厨房内へと入る。
揚羽は土門にすまないと思いつつも昼食を摂る事にした。
揚羽と土門がヤマトの食堂へ来る前、古代と山本が先に昼食を摂っていた。
「しかし、さっきのコスモハウンドを操縦していた新人、揚羽？でしたっけ？なかなか良い腕をしていましたね」
山本は古代に先ほど見たコスモハウンドの動きから操縦していた揚羽の技量が新人ながらもなかなかの腕であると褒める。

「お前もうかうかしていると、飛行科のキャップの座を奪われるぞ」
「そう易々と加藤から引き継いだこの座を明け渡すつもりはないさ」
古代が茶化すが、山本自身、辞令が無い限りヤマト空戦隊隊長の座を明け渡すつもりはないと強気な発言をする。
そんな中、揚羽が昼食が乗ったトレイを持って食堂内を歩きながら席を探していた。
「おっ、ちょうどいい所に・・・おーい、揚羽。こっちで一緒に食べないか？」
「えっ？古代艦長？」
古代からまたもや呼ばれ驚く揚羽。
「揚羽、紹介しよう。ヤマト空戦隊隊長の山本明夫だ」
「山本だ。よろしく新人君」
「あ、揚羽武です!!よろしくお願いします!!」
ヤマトの艦長である古代の他に直属の上官である山本の存在が揚羽をなお一層緊張させる。
「それで、コスモハウンドの性能はどうだ？」
「大型機ながら、なかなかの運動性能であり、レーダー、武装などの装備も充実していました」
揚羽が古代にコスモハウンドの性能を説明する。
やがて、昼食も終盤になった頃、
「艦長、防衛軍司令部より、緊急通信です」
通信科の乗員が古代に司令部からの緊急通信の内容が書かれた紙を手渡す。
「なんです？」
山本が通信文の内容を訊ねると、
「・・・揚羽武の乗組員解除命令だ」
「えっ？」
古代から通信文の内容を聞いた山本と揚羽は唖然とした。
司令部から送られてきた通信文は揚羽をヤマトから降ろせと言う命令だった。
何故、司令部から揚羽をヤマトから降りるような命令が来たのか？

それは数日前まで遡る。
メガロポリス東京の一等地に立つ揚羽の実家である揚羽邸。
揚羽邸では、この屋敷の主であり、揚羽の父親である揚羽蝶人が憤慨していた。
「どういうことだ!?武が既に訓練校を卒業しているなんて・・・・しかも既に任官しているだと!?」
揚羽は父親に繰り上げ卒業をしてヤマトの乗員になった事を知らせていなかった。
しかし、蝶人は一人息子である揚羽を宇宙戦士にさせるつもりはサラサラなかった。
訓練校を卒業したら、自身が経営する会社へ無理やりにでも入社させ、将来は自分の後を継いでもらうつもりだった。
それが自分の知らぬ間に訓練校を卒業して既に任官しているなんて蝶人にとっては寝耳に水だった。
「武の奴め、一体何を考えておる・・・・」
蝶人は直ぐに防衛軍の人事課へと連絡を入れ、息子の任官解除を要請した。
蝶人が経営している会社の機器は防衛軍でも納品されている物があり、彼自身軍にも多少顔が利いていた。
軍としても蝶人の会社が特許を持っている機器は必要な物だったので、彼の頼みを無下には出来なかった。
ただ、手続きには時間がかかるモノなので、こうして数日の時間差でヤマトへと届いたのだ。

「揚羽、何か退艦命令を受ける心当たりがあるか?」
「い、いえ、ありません」
「しかし、急に司令部から乗組員解除命令が来るなんて・・本当に心当たりはないのか?」
「はい。ありません・・・・それじゃあ・・・・」
揚羽は諦めた様に言うと、力なく肩を落として食堂を去って行った。

彼は古代と山本に乗組員解除命令に対して心当たりがないと言うが、内心この命令がどんな経緯で届いたのか心当たりがあった。
（やってくれたな、父さん・・・）
ヤマトにおける自分の部屋で私物を含めた荷物をトランクへ詰め込みながら、自分の父親に対して毒づいていた。

太陽の異常とヤマトの出航準備が進む中、バジウド星系では・・・
第四惑星、バース星所属の宇宙艦隊は初戦にて、ダゴン率いるガルマン帝国東部方面軍第十八機甲師団と戦い手痛い損害を受けた。
現在、バース星は初戦で受けた被害の補修と艦隊の増援を待っていた。
「ラム艦長、補修作業完了しました。増援部隊も間もなく到着します」
副官がラムに艦隊の現状を報告する。
「うむ・・・」
（増援とは言え、一体何隻送られてくるやら・・・）
バース星本土も空にするわけにはいかないので、今回の増援も決して多くは無いだろうと予測するラム。
増援を待っている中、バース艦隊の後方から接近する艦影をレーダーが捉えた。
増援部隊かと思ったが、味方識別信号に応答がなく、エネルギー反応がボラー系の艦船の反応ではなかった。
「敵艦隊!!接近してきます!!」
「っ!?」
まだ増援部隊が到着する前にバース艦隊の後方からガルマン艦隊が接近してきた。

ラムール級航宙巡洋戦艦　ダゴン艦隊　旗艦　ダンドール　艦橋
「ダゴン司令、バース星の艦隊らしき反応を捉えました」
「ふむ・・・」
（バース星の主力艦隊か・・・さすがにえらく手間取らせてくれたが、

これが最後だ）
「全艦、攻撃を開始せよ!!」
ガルマン艦隊はバース艦隊へと猛攻を仕掛けてくる。
後方から、しかも不意を突かれたような形で攻撃されたバース艦隊は混乱する。

バース艦隊　旗艦　ラジェンドラ号　艦橋
「くっ、こんな時に・・・・」
増援部隊の到着前にガルマン艦隊に補足されてしまったことにラムは顔を歪める。
「２９番艦、８番艦損傷!!」
「１８番艦、２５番艦、撃沈されました!!」
僚艦以外にも突然の攻撃と味方の被害からラジェンドラ号の艦橋も混乱し始める。
「落ち着け!!各艦、反転し応戦せよ!!」
混乱している部下や僚艦を落ち着ける為、ラムは全艦に一斉通信を行い、混乱している僚艦に対して一喝し艦隊の統制を回復させる。
ラムの一喝を受け、混乱していたバース艦隊は態勢を整え、ガルマン艦隊に反撃する。

ラムール級航宙巡洋戦艦　ダゴン艦隊　旗艦　ダンドール　艦橋
「バース艦隊が反撃に出ました!!」
「６番艦被弾!!」
「ぬぅ～・・・・猪口才な・・・第三部隊、敵右舷に回り込み攻撃せよ!!」
バース艦隊の混乱が短時間だったことにダゴンは忌々しく思いつつも包囲体制を敷き、バース艦隊を一気に殲滅しようとする。

バース艦隊　旗艦　ラジェンドラ号　艦橋
「ラム艦長、敵は我々を包囲殲滅しようとしています!!」
ラジェンドラ号のオペレーターがガルマン艦隊の動きから相手の行動を予測し、ラムに報告する。

「全艦に通達!!小ワープにて、現宙域から離脱!!増援部隊には合流地点の変更を暗号通信で送れ!!」
「了解!!」
バース艦隊は反撃しつつ順次、小ワープを行いながら現宙域から離脱していく。

ラムール級航宙巡洋戦艦　ダゴン艦隊　旗艦　ダンドール　艦橋
「バース艦隊が小ワープして離脱していきます!!」
ワープして現宙域を離脱していくバース艦隊を見て、ダンドールのオペレーターがダゴンに報告を入れる。
(もろい癖に逃げ足だけは早いな・・・)
初戦の際もバース艦隊はある程度の被害を受けるとワープして逃げて行った。
そして、今回の戦いでもワープして逃げていく。
(本来ならば、この程度の相手など無視しても構わないのだが、ジュラ様の行幸があるからには無視するわけにはいくまい・・・)
「全艦、追跡!!奴らを逃がすな!!」
ダゴンは本来ならば、相手にするような敵ではないと思いつつもジュラが地球までの航路でこのバジウド星系を航行するからにはバース艦隊を殲滅し、バジウド星系の安全を確保しなければならない。
万が一、ジュラ一行の前にバース艦隊が現れればジュラの身に危険が生じる。
ジュラの安全の為、バース艦隊は何としてでも殲滅しなければならなかった。
ダゴンは急ぎ、ワープで逃げたバース艦隊を追った。

百四十四話　母は強し

太陽の核融合異常増進が進み、破滅に進んでいる太陽系、地球・・・
この事態において地球人類を存続させるには、地球が破滅する前に宇宙に第二の地球となりえる星を見つけ、その星へ移住するしか現段階では方法がなかった。
そこで防衛軍司令長官である藤堂はヤマトを第二の地球捜索の特務艦として派遣することを決定し、乗員の補充として宇宙戦士訓練学校に通っている訓練生の中で成績優秀者を繰り上げ卒業させてヤマトの補充乗組員とした。
その中の一人、日本でも有数の大財閥の一つ、揚羽家の一人息子、揚羽武・・・
彼も宇宙戦士訓練学校から繰り上げ卒業させてヤマトに乗艦した新人乗組員の一人であった。
新人の乗員たちの他にこれまでのヤマトの乗員たちもヤマトへ合流し、ヤマトの整備も着々と進む中で突如、揚羽の乗組員解除命令が出された。
突然の乗組員解除命令にヤマト艦長に就任した古代も揚羽本人も戸惑うだけだったが、司令部からの正式な命令では従わざるを得ないので、揚羽は渋々ヤマトを降りた。
ただ、古代の前で揚羽は何故、自分に乗組員解除命令が来たのか心当たりがないと言うとが、実際はどうして自分に乗組員解除命令が来たのか心当たりがあった。
揚羽に乗組員解除命令を出した・・・正確には軍に揚羽の乗組員解除命令を出すように要請したのは揚羽の父親である揚羽蝶人だった。
父親の蝶人としては、一人息子を危険が孕む宇宙戦士なんぞにするつもりはなく、訓練校を卒業したら軍へは任官させずに揚羽財閥を継いでもらうつもりでいた。
メガロポリス東京にある実家に戻った揚羽であるが、親が敷いたレールを走さらせる事や自身のコネまで使ってまで自分をヤマトか

ら退艦させた父親への反発なのか、彼は夜な夜な家を出てはバーやキャバクラで自棄酒をしてはチンピラや酔っぱらい相手に喧嘩をふっかける荒れた生活を送っていた。

揚羽が少し前まで通っていた宇宙戦士訓練学校でも休日はあり、その日は門限があるが、外出は可能となっている。

その外出許可日となっているとある日、ティアナとうららは外出日を満喫するために街へ買い物に出ていた。

「はぁ～この外出許可日がホント、命の洗濯になるわよねぇ～」

私服姿のうららが大きく背伸びをしながら外出許可日を満喫している様子だ。

「まぁ、その意見には同意ね。でも、あまり羽目を外し過ぎると明日の訓練にも響くから程々にね」

ティアナも管理局の訓練校、訓練校卒業後に配属された救助隊、そして機動六課でもこうした休日はスバルと行動を共にしていることが多かったのだが、このもう一つの地球にある宇宙戦士訓練学校でもこうして寮のルームメイトと出かけている事から、ティアナは、

（うららとも長い付き合いになるのかしら・・・？）

管理局の訓練校でルームメイトになったスバルとは訓練校、救助隊、機動六課とそれなりの付き合いとなったので、うららとも訓練校を卒業した後、同じ部署に配属されるのかと思った。

二人が街中を歩いていると、

「!!!」

「っ!!!」

「!?!!」

路地裏から複数の男たちの怒声が聞こえてきたと思うと、

バキッ!!

ドカッ!!

殴り合いでもしているのか鈍い音が聞こえてきた。

「えっ？なに？喧嘩？」

「みたい・・ね・・・」

怒声や殴る蹴るような鈍い音を聞き、路地裏で喧嘩が起きているの

だろうと判断した二人。
「チンピラか暴力団同士の抗争？」
「うーん・どうだろう？」
「いずれにしても近づかない方がいいわね」
「え、ええ・・・・」
（ん？でも、この声・・・）
喧嘩と言う事でうららはチンピラ同士か暴力団同士の抗争なのかと思い、巻き込まれては堪らないので、その場から移動しようと提案するうららであるが、ティアナは喧嘩をしているであろう男たちの声の中に何となくではあるが、聞き覚えがあるような声が交じっている様な気がした。
「・・・・」
ティアナは気になって路地裏へと歩みを進める。
「えっ？ちょっと、ティアナ!?」
ティアナの行動に驚くうららだが、慌ててティアナを追いかける。
やがて、喧嘩をしている男たちの近くへ来ると、複数の男たちが一人の男相手に殴る蹴るの暴行を行っていた。
「っ!?」
「あれって・・・・」
ティアナとうららは殴られている男の姿を見て、息を呑む。
殴られていたのは二人にとって顔馴染みの男だったからだ。
「「揚羽っ!?」」
そう、殴られていたのはつい先日、訓練校を繰り上げ卒業してヤマトへ乗艦していったはずの揚羽だった。
「ど、どうしよぉ～ティアナ、このままだと揚羽が殺されちゃわない？」
「・・・・」
いくら自分とうららが防衛軍の訓練校に通っているとはいえ、流石に丸腰で複数の男を相手にするのは分が悪い。
（一か八か・・・）
ティアナは大きく息を吸い込むと、

「おまわりさーん!!こっちです!!こっちで男の人が殴られています!!」
　大声を上げて警官を呼ぶ。
「っ!?」
「サツだと!?」
「や、やべぇ!!」
「行くぞ、お前ら!!」
　ティアナの声を聞き、その中の『おまわりさん』と言う単語を聞きつけて、揚羽に暴行していた男たちは蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。
「ティアナ、いつの間に警官を呼んだの？」
「ブラフよ」
「えええー!!」
　男たちが完全に去るのを確認したティアナは急いで揚羽に駆け寄り、うららもそれに続く。
　その際、うららはいつ警官を呼んだのかを訊ねるが、実際にティアナは警官を呼んではおらず、男たちを追っ払う為の嘘だった。
「揚羽、アンタなにやっているのよ!?」
「ヤマトに乗っていたんじゃなかったの？」
　ティアナは揚羽の傍に駆け寄り、ハンカチで彼の顔から出血している血を拭う。
「あん？ランスターに日下部か？なんでこんなところに・・・？」
「それはこっちのセリフよ!!」
「それにこの臭い・・あんた、どんだけ飲んだのよ？」
　揚羽からは酒独特のアルコール臭が漂っていたし、深酒したせいか目も焦点が定まっておらず、呂律も回っていない。
「うるせぇなぁ～もう、俺とお前たちとは関係ないんだから、俺の事はほっといてくれ～」
　揚羽はティアナの手を払いのけると、フラフラとした足取りで立ち上がる。
「ちょっと、アンタ何よその言い草は!?」

揚羽の態度に声をあらげるうらら。
しかし、揚羽は何も言わずそのまま路地裏へと消えて行った。
「・・・」
そんな彼の後姿をティアナもうららも神妙な顔で見ていた。
訓練校での揚羽と今の揚羽は本当に同一人物なのかと思うぐらい別人に見えた。
それからティアナとうららは土門の端末へ連絡を入れた。
まだヤマトが地球を出ていない事が幸いだった。
「あれ？ランスターに日下部じゃん、どうした？」
「実は今日、訓練校の外出許可日だったから、うららと一緒に街に買い物へ出たんだけど・・・」
「その時、路地裏で喧嘩をしている人たちが居てね」
「なんだ？喧嘩に巻き込まれたのか？それとも、自分たちを助けてくれた白馬の王子様とでも出会ったのか？」
「アンタ、真面目に聞きなさいよ」
「へい、へい」
「それで、喧嘩をしていたのが揚羽だったのよ」
「えっ？」
路地裏で揚羽が喧嘩をしていたと聞いて土門は目を見開いて驚いた。
「揚羽はアンタと一緒にヤマトに乗っている筈でしょう？それがなんで、街中でチンピラ相手にボコボコにされているのよ？」
「しかも、酒の臭いがすごかったわよ。あれは完全に悪酔いしていたわね」
ティアナとうららは土門に揚羽がどうしてヤマトに居た筈なのに街中でチンピラ相手に喧嘩をしているのかを訊ねる。
「じ、実はこの前、揚羽に乗組員解除命令が来たみたいなんだ」
そして、土門からヤマトに乗っていた筈の揚羽が何故、路地裏でチンピラ相手にボコボコにされていたのかを知ったティアナとうらら。
「乗組員解除命令って・・・」
「どうやら、揚羽自身が頼んだ訳じゃないみたいね・・・」

「当然だろう。揚羽はヤマトに乗って希望部署にも配属されていたからな」
土門から見ても揚羽が怖気づいて自分から乗組員解除命令を頼んだなんて信じられなかった。
まだヤマトに乗って数日しか経っていなかったが、揚羽の様子からいざヤマトに乗って怖気づいてしまったと言う様子もなかったし、嫌々でヤマトに乗った訳でもなさそうなので、とても揚羽自身の意志でヤマトを降りた様には見えなかった。
「土門、何とかならない？」
「何とかって・・・・」
「アンタの上官から艦長に伝えてもらうとか？」
「な、何とかやってみるが、あまり期待はするなよ」
新人の一乗組員である自分にどうにかなる問題ではないが、それでも何もやらないよりはマシなので、土門は上官である雪にティアナとうららから聞いた揚羽の情報を伝えに向かった。
「森船務長」
「あら？土門君」
「船務長、お話が・・・・」
「ん？どうかしたの？」
「実はさっき、訓練校の同期から電話があって・・・・その揚羽の事について何ですが・・・・」
「揚羽君の？」
「はい。実は・・・・」
土門は雪に先ほど、ティアナとうららから聞いた揚羽の件について話した。
「そう、そんなことが・・・・」
「船務長・・船務長から艦長にこの件を伝えてもらえないでしょうか？」
「えっ？古代艦長に？」
「は、はい。艦長なら、防衛軍のお偉いさんとも知り合いなのでしょう？何とか揚羽をヤマトに戻してやってくれませんか？」

「分かったわ。古代艦長に早速伝えるわ」
「お願いします」
　土門から揚羽の現状を聞いた雪は古代にもこの件を伝える事にした。
　その古代は第二艦橋にて、ヤマトの航海計画を島から聞いていた。
「我々が探すべき星は地球と同じ環境条件をもった星のみだ。惑星をテラフォーミングすることは可能であるが、重力、自転までを改造するには一年以内では不可能だ」
「その点が悩ましいな・・・・テラフォーミングが出来るのなら簡単なのだがな・・それで針路は？」
「針路は銀河系中心部へ向かうことになり、ケンタウロス座を経由して、６．４光年先にあるバーナード星を調査、この星が適合しない場合は、いて座のロス１５４惑星を通り更に銀河系中心部へと向かう」
「いて座の１５４惑星は調査しないのか？」
「ああ、この１５４惑星は地球型ではない惑星である事が既に判明している。時間は有効に使いたいだろう？」
「確かに」
「星の状態は５０００光年までなら地球から観測出来ている。従って、地球から観測可能な衛星を持つ恒星系を選んで作ったのがこの航路図だ。５０００光年から先は探査しながら進んで行くしかない」
「５０００光年先は白紙の海図と言う訳か・・・・はたして鬼が出るか蛇が出るか・・・・」
「イスカンダルの最初の航海、テレザート、暗黒星団帝国の航海でも似たような状況だったが、今回は地球が滅ぶことが決まっているから何とも言えない気持ちだよ」
「それに異星人との出会いが完全に無い訳じゃあないからな・・・・」
　ガミラス、彗星帝国、時空管理局、暗黒星団帝国と地球以外にも人類が存在している事が確認されている。
　５０００光年先の宇宙にもこうした人類が存在する惑星がある可能性が高い。
　それらの星に住む人類が好戦的な人類ではないと言い切れない。

古代の言う通り、５０００光年先はまさに暗中模索な航海である。
「ああ・あまり、好戦的な惑星国家と出会わない事を祈るしかないな」
戦闘が起きればそれだけ時間をロスすることになる。
それはイスカンダルの最初の航海でも宇宙気象の影響もあったが、ガミラスとの戦闘で時間をロスした経緯がある。
地球人類に残されている時間は一年・・・
宇宙が広大なのは当然、宇宙戦士である古代も島も理解しているが、出来ればすんなりと第二の地球となり得る惑星が見つかって欲しいものだ。
航海計画を島から聞いた古代は第二艦橋を出ると、雪が古代を呼び止める。
「古代君」
「ん？どうしたんだ？雪」
「ちょっと話があるの。私の部屋に来てくれない？」
「？」
「揚羽君のことで、土門君が・・・」
「分かった」
古代が雪の部屋に向かうと、土門が先に待っていた。
「揚羽がどうかしたのか？」
古代は早速土門に揚羽について訊ねる。
「実はついさっき、訓練校の同期から連絡があって・・・」
土門は古代に先ほどティアナとうららから聞いた揚羽の現状を伝える。
「揚羽の奴、ヤマトを降りてからどうも荒れているみたいで・・・」
「荒れている？」
「はい。同期の話じゃあ、酒を飲んでチンピラ相手に喧嘩をしていたみたいで・・・でも、揚羽はそんな奴じゃあないんです。アイツは宇宙戦士になる事を訓練校に入る前から夢見ていました。今回のヤマト乗艦だって物凄く喜んでいたんです!!」
「・・・」
古代も雪も流石に訓練校での揚羽の事は知らなかったので、土門の

話に耳を傾ける。
「今回、突然ヤマトを降ろされたのはきっと揚羽の親父の差し金です!!」
「揚羽の父親？」
「はい。アイツの親父は揚羽財閥の総帥なんです。艦長も聞いた事がある筈です。揚羽電子とか、揚羽医療とか・揚羽の実家は手広く商売をしている大手企業なんです」
「確かこのドックの建設にも揚羽財閥は関係していたな・・・それに防衛軍で使用している電子機器も確か揚羽電子の機材が多数納入されていた筈だ」
「揚羽の親父は揚羽に会社を継いでもらいたいんです。訓練校で揚羽は愚痴っていましたから・・・訓練校の入学時だって親父と揉めたって・・・でも、あいつの親父は学生だからってことで、訓練校までの入学は許可して卒業後は軍人なんてやらせず、自分の会社にいれるつもりだって・・・だから揚羽は繰り上げ卒業の事もヤマト乗艦の事も親父には黙っていたんですが、それがバレて・・・」
「ヤマトを降ろされたってことか？」
古代の問いに土門は頷く。
「艦長、お願いです!!揚羽をヤマトに戻してくれませんか？艦長ならなんとかできるでしょう？」
「うーん・・・」
古代は腕を組んで考え込んでしまう。
いくら自分がヤマトの艦長だからと言って他人の家庭環境まで口を出す権限はない。
同じ財閥系の良馬に頼めばもしかしたら何とかなるかもしれないが、現在その良馬本人が地球に居ない。
ならば、月村グループの総帥である忍に頼めば良いのではないかと思うも、自分と忍は面識がない。
それにこれが原因で月村グループと揚羽財閥の仲が拗れれば経済的な問題が発生するかもしれない。
自分は流石にそこまでの責任は負えない。

「土門君、揚羽君を救えるのは揚羽君自身なのかもしれないわ」
成り行きを見ていた雪が土門を諭すように言う。
「揚羽自身？」
「ええ、揚羽君が自分の意志でお父さんと戦わなくてはならないの・・・それは自分の親から勘当され、揚羽財閥との関係を解消するぐらいの覚悟がないと・・・」
「・・・」
土門自身には分からないが金持ちの家に生まれ、何不自由なく生活してきた中で自分の夢の為にその金持ちの実家と縁を切る覚悟はかなりの覚悟ではないだろうかと傍から見ればそう思える。
今後の自分の生活の為に夢を諦めて金持ちの実家で親が決めたレールの上を走るか？
それとも困難を承知で金持ちの実家と縁を切って自分の夢を叶えるか？
確かに雪の言う通り、これは揚羽自身の戦いだ。
そう思うと自分には何もできない。
「確かに雪の言う通りだが、梃入れだけはしてみよう。俺が直接揚羽に会って来る」
古代としても優秀で才能のある若者をこのまま埋もれさせたくはないと言う思いから揚羽が自分で戦わなければならない事を自覚させる為に直接彼に会いに行くと言う。
「ありがとうございます!!艦長!!」
土門は古代に礼を言って雪の部屋から出た。

翌日、古代はメガロポリス東京にある揚羽の実家へと向かった。
流石に北アルプスのドックから直接車でメガロポリス東京にある揚羽邸に行くのは時間がかかるので、ヘリで最寄りの空港まで行き、そこから鉄道とレンタカーで揚羽の実家へと赴いた。
（こんな時に月村さんが居てくれたら心強いんだがな・・・）
（そう言えば、南部や月村さんも軍への入隊の時は家族と揉めたのだろうか？）

揚羽の他に同じ艦橋メンバーである南部も大企業である南部重工業の御曹司であるが、問題なく士官学校に入り、ヤマトに乗艦している。
良馬も今では　まほろば　の艦長職を務めている。
二人が軍へ入隊した時、地球はガミラスとの戦争の真っ最中であり命の危険が高い軍への入隊をよく親が許したモノだと思う古代だった。
そして、やってきた揚羽の実家・・・・
(月村さんや南部の実家もでかいと聞いているが、揚羽の実家もでかいな・・・・)
揚羽邸を見ながらその大きさに圧巻される古代。
呼び鈴を押すとインターホンからは機械的な声がした。
「ハイ、アゲハデゴザイマス」
使用人ロボの様だ。
「私は地球防衛軍、宇宙戦艦ヤマト艦長の古代です。揚羽武さんはご在宅でしょうか?」
「ショウショウオマチクダサイ」
その使用人ロボに要件を伝えると、暫くして門が開き、古代は揚羽邸へと入った。
そして揚羽邸のリビングにて、古代は揚羽と再会するが、彼の顔には絆創膏やガーゼが貼られており、土門の話が本当だったことを実感する。
古代は揚羽に土門と雪の言葉を伝えると、
「そうですか・・・・森船務長に土門が・・・・」
「それで、揚羽はどうする?」
「どう?とは?」
「親の言いなりになるのか?それとも家族の縁を切る覚悟で自分の夢を叶えるか?・・・・これは自分との戦いだぞ、揚羽武」
「・・・・」
「タケシサマ、オキャクサマ、オチャデゴザイマス・・・・オチャ・・ド・・・・オチャチャ!!」

ガシャン!!
ドサッ!!
古代の言葉に揚羽が顔を俯かせていると、突如室内の電灯が点滅し、お茶を持って来た使用人ロボが倒れる。
「また電波障害か!?」
先日、北アルプスでも起きた大規模な電波障害がまたもや起こった。

「ノエル!?」
「・・・」
ドサッ!!
揚羽邸で使用人ロボが倒れたのと同じように月村邸でもノエルが突然、固まり床に倒れる。
「またなの・・・?一体、地球に何が起こっているの?」
長い時間ノエルと共に過ごしてきたが、こんな大規模な電波障害が起こり、ノエルが倒れるなんて事はなかった。
忍は地球に何か異変が起きているのだとノエルを見て察した。
当然この電波障害は北アルプスのドックで整備中のヤマトにも影響があった。
「機関長、電波障害の様です」
「何またか!?」
ヤマトの機関室で機関整備を行っていた徳川が計器の異常を機関長の山崎に報告する。
異常はヤマトの計器だけではなく、前回同様アナライザーもこの電波障害の影響を受けて倒れる。
また、アナライザー以外のロボットたちも同様にバタバタと倒れる。
更に今回の電波障害は前回のモノよりもひどく、かなりの広範囲で強力なモノであり、東京空港では管制塔と飛行機との間の通信機器が電波障害で使用不能となってしまった。
「電波障害だ!!」

「くそっ、またか!?」
「レーダーも通信機器も全部使えないぞ!!」
「やむを得ん、障害が回復するまで空港を閉鎖しろ!!急げ!!」
「大変だ!!一機着陸してくるぞ!!」
突然の電波障害で通信機器、レーダーが使用不可となり、空港を閉鎖しようとするも通信機器が使用できないので、空港閉鎖の連絡が出来ない中、閉鎖をする前に飛行場の滑走路に一機の中型飛行機が着陸してきた。
滑走路へ着陸してくる飛行機を見て、管制塔は大混乱となる。
一方、着陸してくるこの飛行機も計器が電波障害の影響で狂い操縦が困難になっていた。
「機長!!計器が!!」
「緊急着陸だ!!」
操縦が困難な中、着陸態勢をとると、滑走路の前方から小型の飛行機が離陸態勢を取ってきた。
「き、機長!!前方に別の機が!?」
「何!?う、うわぁぁぁぁぁぁぁ!!」
二機の飛行機は滑走路上で衝突し炎上する大惨事となった。
「急いで消防隊を向かわせろ!!」
「救助も急げ!!」
「空港内でも利用客がパニックを起こしています!!」
「警備員を総動員して対処させろ!!」
電波障害で大混乱している中での惨事に空港スタッフはもとより、空港に来ていた利用客も滑走路の惨事を見てパニックになった。
通信機器が使用不可で警察が呼べない中、空港内のパニックは警備員の手によって対処させるしかなかった。

各所で電波障害の影響で混乱になっている中、此処で視点を揚羽邸に戻す。
「っ!?母さん!?」
揚羽はハッとして立ち上がると急ぎリビングを出て玄関から外に

出ると車に飛び乗った。
「お、おい、揚羽!!」
古代も急ぎ揚羽の後を追う。
（一体、どうしたんだ?揚羽は?それになんであんなに慌てているんだ?）
揚羽の車を追いかけながら彼の行動に疑問を覚える古代。
街中は電波障害の影響で鳥はギャアギャアと声を上げながら滅茶苦茶に飛び、路上ではネズミの大群が走り回り、信号機も消え大混乱になっている。
揚羽は車線や一方通行を無視してある場所へと向かう。
（街中も無茶苦茶だが、アイツの運転も無茶苦茶だぞ!?）
彼の後を追う古代も必至についていくが、揚羽の運転に思わず心の中でツッコム。
そして揚羽が向かったのは揚羽財閥が運営する病院であった。
（揚羽総合病院?ここも揚羽の実家が運営している病院か・・・・?）
車を駐車場に止めることなく、病院の玄関近くに乗り捨てるように止めると揚羽は駆け足で病院内に入っていく。
病院内も電波障害の影響でレジや受付機器、医療機器も止まっているのか医療スタッフや病院の利用者たちが混乱している。
混乱している病院内を揚羽はひたすら走る。
やがて、彼はＶＩＰ専用病棟にある一つの病室へと入っていく・・・・
病室の扉には『揚羽美佐代』と言う札があった。
（揚羽と同じ苗字・・それに女の人の名前・・・・揚羽の親族なのか?）
（そう言えば、揚羽は『母さん』と言って家から出て行ったな・・・・）
（揚羽の母親か?）
病室の扉にあった札と彼の言動からこの病院に入院しているのは揚羽の母親だと判断した古代。
揚羽が病室に入ると医療スタッフが突然の電波障害によって医療機器が止まり、それにより美佐代の体調が悪くなった様子を見てどうすればいいのか判断がつかないのかオロオロしている。
「何をしているんだ!!電源の復旧なんて待てるか!?手動にするんだ!!

手動に!!貸せ!!」
揚羽は医療スタッフを押しのけ、自ら医療機器を操作し始めた。
「うっ・・・あ・・・」
やがて、美佐代の呼吸は安定して、彼女の意識がはっきりとすると美佐代は瞼をゆっくりと開ける。
「母さん、俺だよ!!武だよ!!」
「武・・・?」
「母さん・・・よかった・・・間に合った・・・」
揚羽は美佐代の意識が戻りホッとしているが、額には玉のような汗を浮かべているので、彼の焦りが窺える。
それは医療スタッフも同じでオーナー夫人を電波障害があったとは言え殺してしまったと思われれば自分たちは医療業界からあっという間に干されてしまうからだ。
「あとは、我々が行いますので・・・」
美佐代の容態が安定したので、揚羽は後を医療スタッフに任せた。
「揚羽、すまなかった。お前が乗員解除命令にあっさりとしたがったのは母親の事情があったなんて・・・俺からはもう何も言わない」
「古代艦長・・・」
「じゃあ、俺はヤマトの事もあるから戻る」
古代が揚羽に手を差し出すと揚羽は辛そうに古代の手を握り返した。
「古代艦長、態々ありがとうございます」
「母親を大切にな・・・」
古代には両親が居ない。
だが、揚羽には両親が居る。
しかし、母親の美佐代の容態は様子を見る限り決して安定している訳でない。
この先、容態が急変してそのまま還らぬ人になるかもしれない。
自分や土門みたいに親の死に目に会えない事は辛い。
そんな時に彼を第二の地球捜索任務に何て連れてはいけない。
(揚羽の事は諦めるしかないか・・・)

家庭事情は家柄の問題だけではなかった事から古代は揚羽の復帰を諦め病室を後にした。
古代が病室から去った後、
「武、あの人は？」
美佐代は揚羽に古代について訊ねる。
「ヤマトの古代艦長だよ」
「まぁ、こんなところまで来てくださったの？挨拶も出来なかったわ・・・申し訳ない事をしたわ・・・」
「いや、いいんだ」
「それで、貴方は行かないの？」
「えっ？」
「ヤマトによ・艦長さんが態々来てくださったのだから、貴方も乗るんでしょう？ヤマトに？」
「そ、それは・・・」
「武はヤマトには乗らんよ」
揚羽が口ごもっていると、彼の事を代弁するかのように一人の男の声がした。
「父さん・・・」
そこには揚羽の父親である蝶人が居た。
「武、本当なの？」
「・・・」
美佐代の問いに揚羽は辛そうな顔で肯定も否定も出来ずに黙り込む。
「ほら、武。『ヤマトには乗らない』と言って、母さんを安心させてあげなさい」
蝶人のこの言葉に激しい衝動が揚羽の胸の中から突き上げてきた。
そして古代や雪、土門の言葉、訓練校のティアナとうららの姿が脳裏を過った。
「いやだ!!俺はヤマトに乗る!!」
「武、お前・・・」
「今はっきりと分かった。俺の人生は俺だけのモノだ!!そして俺の未

来は俺自身が決める!!俺はヤマトに乗る!!そして、星の海へ行く!!」
「そんな勝手を許すと思っているのか!?大体、お前はヤマトを降ろされたのだぞ!?」
「これまでは父さんの言葉一つでみんな縮み上がってきた・・・俺もそうだった・・・でも、もう違う!!」
「どう違う?既に乗組員解除命令を受けたお前がどうやってヤマトに乗る?密航でもすると言うのか?悪い事は言わない。このまま地球に残れ」
「くっ・・・」
　確かにヤマトの乗組員解除命令を受けたが、軍籍自体はまだ除籍されていないので、ヤマトへ再び乗るには乗組員解除命令を撤回してもらわなければならない。
　蝶人の言う通り、密航をしても見つかれば途中でヤマトを降ろされてしまう。
　それでは意味がない。
　揚羽が苦々しく顔を歪める。
　そんな中、
「あなた・・・」
　美佐代が弱々しく口を開くと、彼女は自分の身体に繋がれているチューブをギュッと手で握ると今にもそれらのチューブを身体から引き抜こうとする。
「お、お前、何をするんだ?止めなさい!!」
「そうだよ!!母さん、止めてくれ!!そんなことをしたら母さんが死んでしまう!!」
　美佐代の行動に揚羽も蝶人も驚く。
「いいのよ、武。母さんは私のせいで武のお荷物になるつもりはないわ。貴方が自分の夢を捨てて意に沿わない人生を送るのを見ながら生きていくなんて嫌なの」
「母さん・・・」
「さあ、あなた。軍に電話して武をヤマトに戻してあげて」
「むっ・だ、だが・・・」

蝶人も諦めがつかないのか口ごもる。
すると、美佐代はとどめと言わんばかりにチューブを握る手に力を籠め、今にも身体からチューブを引っこ抜こうとする。
「あなた、早くして!!私は死にたくないのよ!!」
「くそっ、どいつもこいつも家にはロクな奴がおらんな!!」
蝶人はやけくそ気味に叫ぶと復旧したばかりの電話機を取り、軍の人事課に電話を入れた。
何だかんだ言っても蝶人は愛妻家であったので、妻の命には代えられなかった。
こうして揚羽武のヤマト乗組員解除命令は、彼の母親である美佐代の懸命な言動により撤回されることになった。

揚羽の問題が病室で解決した頃、古代はレンタカーを返却し、ヘリを止めてある空港まで行く為に列車を待っていた。
『この電波障害で東京空港では飛行機同士の接触事故が起き、死者が多数出たと報告があり、消防、警察、空港関係者は現在消火・救助活動を行うと共に原因の調査を行っております』
駅にある街頭テレビでは先程の東京空港での飛行機の接触事故の報道をしていた。
『一連の大規模な電波障害は太陽の影響があるのではないかと言う指摘がありますが、太陽エネルギー省ではそれらの指摘を否定しております』
(白色彗星の時もそうだが、危機意識が欠如し過ぎじゃないか?)
古代は一連の電波障害はサイモン教授や倉田博士が主張する太陽の核融合異常増進が関係しているのだと確信していたのだが、太陽エネルギー省も連邦大統領府もそれを認めていない。
街頭テレビを見ながら連邦政府の対応の遅れに古代が嫌悪感を感じていると彼は声をかけられた。
「古代さん」
「ん?あっ、サイモン教授」
古代に声をかけたのは地球連邦大学のサイモン教授だった。

ただ、先日長官室で出会った時と異なりサイモン教授はやつれている様に見えた。
「いえ、私はもう教授ではありません」
「えっ？それはどういう事ですか？」
「クビになりました。太陽の核融合異常増進を主張した事が太陽エネルギー省の黒田博士の逆鱗に触れたみたいで・・・・」
「そ、そんなっ!?」
太陽の核融合異常増進は太陽エネルギー省の黒田博士にとっては目障りな主張であった為、それを黙らせるために黒田博士は地球連邦大学へ圧力をかけて、サイモン教授をクビにした。
それはまさに地動説を唱えたガリレオ・ガリレイの様であった。
大学を追放されればサイモン教授は研究も観測も出来ないので、これ以上は太陽の核融合異常増進を主張できないだろうと黒田博士はそう判断したのだろう。
サイモン教授が自分の知らぬ間に大学をクビになっていたなんて驚愕な事実だった。
「私の事よりもヤマトは・ヤマトは宇宙へ行くのですか？第二の地球を探しに・・・・？」
「ええ、もちろんです」
「そうですか・良かった・・・・それだけ聞ければ満足です。では、私はこれで・・・・」
「は、はい。サイモン教授もお元気で・・・・」
サイモン教授はそう言って踵を返し駅の雑踏の中に姿を消していった。
「サイモン教授・・・・必ず・・必ず、第二の地球を見つけてみせます」
サイモン教授の名誉の為にも・地球人類の為にも何としてでも第二の地球を見つけてみせると意気込む古代だった。

サイモン教授の他にも黒田博士の逆鱗に触れてしまった者が居た。
それは地球連邦中央天文台の倉田博士だった。
彼もまたサイモン教授同様、太陽の核融合異常増進を主張した為、

黒田博士が地球連邦中央天文台に同じく圧力をかけて、地球連邦中央天文台の責任者の座から引きずり下ろしたのだ。
「倉田博士・何故、博士が異動だなんて・・・」
地球連邦中央天文台の職員が倉田博士の異動に関して悲観する様に言う。
「ハハ、一応形だけでも栄転ではあるし、太陽エネルギー省でも観測業務は続けられる」
「し、しかし・・・」
倉田博士はサイモン教授と異なり、白色彗星の接近を観測し、軍へ報告した実績からか軍への信頼もあり、サイモン教授の様に地球連邦中央天文台をただクビにする訳にもいかなかったので、一応、栄転と言う形で地球連邦中央天文台から太陽エネルギー省の観測部へと異動させた。
だが、これは倉田博士の動向を監視する為の行動でもあった。
「良いんだ。それよりも私とサイモン教授は今回の件から退くことになるが、この先も太陽の動きには注意してくれ」
「は、はい」
「君も先日起きた電波障害、そして今日起きた電波障害については知っていると思うが、太陽の異常な活動によって磁気嵐的に大規模に起きている。今後もこのような電波障害が起きるだろうし、それ以上の異常な出来事がこの先、地球で起きるかもしれない。その前兆は太陽の動きに必ずある筈だ。些細な動きも見逃さないようにな」
「分かりました」
倉田博士は部下に今後の太陽の動向を託して、地球連邦中央天文台を去った。

後日、揚羽がヤマトに復帰を果たし、古代と雪の復帰の挨拶をしてきた。
「古代艦長、森船務長。俺、父と戦って勝ちました!!これからもよろしくお願いします!!」
「そうか・・・これからも頼むぞ、揚羽」

「良かったわね、揚羽君」
「はい!!」
「揚羽が帰って来たって!?あっ、艦長、船務長、すみません」
揚羽が帰って来た話を聞いた土門が駆け込んできた。
「いや、構わない。君たちは同期生だし親友なのだからな」
古代から許可を貰うと、土門は揚羽にヘッドロックをかける。
「揚羽、この野郎!!心配かけやがて!!ちゃんとランスターと日下部にも詫びを入れておけよ!!」
「分かっているよ」
土門からヘッドロックをかけられながらも揚羽は嬉しそうに笑みを浮かべていた。
それほど、揚羽にとっては同期の土門と一緒にヤマトに乗れることが嬉しかったのだ、
同期でもあり親友の二人のそんな姿を見て、自分や島、兄の守、真田、トチローのような男同士の友情を微笑ましく見る古代と雪だった。

百四十五話　バース星陥落

ガルマン帝国所属東部方面軍第１８機甲師団との戦いに連敗したバース艦隊。
増援を待つ間に運悪く見つかり、攻撃を受け、増援部隊との合流地点を変更し、小ワープにて戦場から撤退し何とか全滅を回避するが、所詮は全滅する時間が少し伸びただけであった。
バース艦隊旗艦、ラジェンドラ号ではこれまでの戦闘で受けた損傷個所の修理をしながら増援部隊の到着を待っていた。

バース艦隊　旗艦　ラジェンドラ号　艦橋
「艦長、修理作業は９２％終了しました」
「うむ、ごくろう」
「なお、本国に問い合わせたところ、これ以上の増援は不可能であるとの回答がきました」
ラジェンドラ号艦長、ラムに副官が本国の回答と共に増援部隊の編成表を手渡す。
（予定艦艇の三分の一以下か・・・・）
合流する増援部隊の数を見て顔をしかめるラム。
だが、本星であるバース星の残存兵力をゼロにする訳にもいかなかった。
本国としてもバース艦隊への増援も苦渋の決断だったのかもしれない。
（敵艦隊の殲滅は例え増援部隊が到着しても不可能だろう・・・・）
（ならば、せめて敵旗艦を沈め、敵の司令官を戦死させることが出来れば、指揮系統を混乱させることができるかもしれない・・・・）
ラムは現在のバース艦隊とガルマン艦隊との数から既に勝機がないことを察していた。
なので、敵艦隊の殲滅ではなく、敵司令官を討つ事を念頭においた。
「艦長、増援部隊が到着しました」

「本艦も含め、全艦修理作業も終了しました」
「うむ」
(彼らにはすまない事をしたが、このまま一矢報いることなく敗れる訳にはいかない・・・)
「全艦、発進」
「はっ、全艦発進」
　ラムは次の戦いでラジェンドラ号を含めバース艦隊は全滅するだろうと予測し、折角到着した増援部隊の乗員たちを殺すことになるが、バース星の軍人としてむざむざ降伏するのではなく、一矢報いる覚悟でガルマン艦隊と最後の戦いを挑む覚悟をした。
　そして増援部隊の合流と損傷艦の修理が終わったバース艦隊はガルマン艦隊との最後の戦いを挑むために発進した。
「ガルマン艦隊発見!!」
「敵艦隊は現在、ボスドラス星域へ侵入しつつあり!!」
「敵は単縦陣にて第二惑星の軌道上を航行中!!」
「艦長、おそらく敵の司令官が乗る旗艦は艦隊の真ん中に展開していると思われますが、中央突破を仕掛けた場合、左右両翼からの挟み撃ちに遭う危険性があります」
　副官がモニターに表示されているガルマン艦隊の動向を見てラムに意見具申する。
「恐らく・・いや、疑いなく君の言う通りだが、もはや取るべき戦法は我々には残されていない」
「しかし、この戦力差では先ほどの二の舞になるだけです。ここは一旦母国バースに戻り、艦隊の増強をしてからの方がよろしいのではないでしょうか?」
「バースにはもはや戦う力は残されていない・・・それは今、君が報告してくれたばかりではないか・・・バースにはもう我々しかおらんのだよ・・・バースを守る為には我々が戦わねばならん。そして、宇宙の平和の為にもガルマンの無法を見過ごすわけにはいかん!!全艦戦闘用意!!」
「はっ、全艦戦闘用意!!」

「敵の陣形とこのボスドラス星域の地形を利用して、敵の中央を突破、敵旗艦及び、敵艦を各個に撃破する!!」
「承知しました」
「敵艦隊まで５５０００!!」
「思ったよりも胴体部が厚いですな・・中央突破が不可能とは言えませんが、時間がかかりすぎると敵の左右両翼に包囲される危険が大きくなります」
「中央部に敵の司令官がいる証拠だ。ここは敵に先制をさせ、引き付けながら敵の攻撃を受け流し、左右両翼のいずれかに回り込む方が各個撃破しやすいかもしれないが・・・・」
　左右両翼のどちらかへ攻撃すれば各個撃破はできるかもしれないが、それでは中央に居る敵の司令官を討ち取れない。
　ラムが戦略を練っていると、
「味方の右翼部隊、敵艦隊へ攻撃を始めました!!」
「何っ!?まだ攻撃命令は下していないぞ!!」
　ラムが攻撃命令を下す前に味方の一部が敵へ先制攻撃をした。
「艦長・・・・」
「訓練不足・・そして混成艦隊の弱みがここで出たか・・・・やむを得ん!!当初の予定通り、このまま中央突破を図り、敵司令官の旗艦を狙う!!全艦攻撃開始!!」
　バース艦隊が一斉にガルマン艦隊に向けて攻撃を開始する。

　ダゴン艦隊　旗艦　ダンドール　艦橋
「バース艦隊発見!!」
「ダゴン司令、バース艦隊が攻撃を仕掛けてきました!!」
「ふんっ、死に損ない共め・・今度こそ息の根を止めてくれる」
「しかし、手負いの獣は狂暴化しています。数の上では我々が上ですが、連中はどんな手を使ってくるか分かりません」
　副官がダゴンに忠告を入れる。
「ならば、少々連中の動きを探ってみるか?・・・・全艦、敵艦隊に攻撃をしつつ前進」

「司令ただこのまま前進ですか？」
「なあに、一種の示威行動だ。それで敵の動きを見極める」
ガルマン艦隊はバース艦隊の正面から攻撃をくわえながらじわりじわりと接近する。

バース艦隊　旗艦　ラジェンドラ号　艦橋
「敵艦隊、攻撃をしつつ前進してきます!!」
「艦長!!」
「慌てるな、あれは威嚇だ・・釣られて動けばあっという間に全滅するぞ」
ラムは冷静に対処するが、
「敵艦隊接近!!」
「全砲門を開け!!ミサイルもだ!!撃って、撃って、撃ちまくれ!!」
「攻撃しろ!!このまま接近を許せば包囲殲滅されるぞ!!」
「撃て!!撃て!!」
まだ訓練不足で今回の戦いが初陣であるバース艦隊の乗員たちは接近してくる敵に対してパニックになり、ガルマン艦隊へ砲撃とミサイルを撃ち込む。

ダゴン艦隊　旗艦　ダンドール　艦橋
「司令!!一部に砲火が集中してきます!!」
「このままでは分断されます!!」
「なにっ!?」
ダゴンはまさか先ほど副官が言ったような事態になるとは思わず、バース艦隊の狂気に憑りつかれたような攻撃に驚愕する。

バース艦隊　旗艦　ラジェンドラ号　艦橋
「敵艦隊に亀裂が生じました」
「驚いた・・・計算されない狂気が戦術や戦略を越えた戦果をあげることがあるとは・・・」
「左右両翼の前衛部隊が前進していきます」

「・・・・」
敵の接近に狂乱した左右両翼の前衛部隊がガルマン艦隊を迎え撃つかのように高速で接近し攻撃を行う。
バース艦隊のまさかの行動にガルマン艦隊の前衛には敵の攻撃を受けて撃沈されるのは勿論の事、味方艦同士の接触や味方の攻撃を受けて沈む艦、バース艦隊の艦と衝突する艦も続出した。

ダゴン艦隊　旗艦　ダンドール　艦橋
「前衛に多数の被害が出ております」
「くっ、まさか、手負いの獣がここまで厄介だとは・・・・」
「司令官」
「全艦、一時後退しろ!!」
「はっ、全艦一時後退」
「突出してくるのは敵の一部だ。すぐに行動が限界に達する。その隙を突いて突き崩すぞ」
ガルマン艦隊は後退していくが、バース艦隊の一部はそのまま追撃をしてくる。
「呆れた見境無しとは・・奴らには計算も計画性もないのか?」
ダゴンは顔を歪めながらバース艦隊の行動に忌々しさを感じた。

バース艦隊　旗艦　ラジェンドラ号　艦橋
「このまま勢いに乗って中央突破が可能なのではありませんか?」
味方の行動を見て、計画通り中央突破が可能かもしれないと副官はラムに訊ねる。
「いや、敵はこちらの行動に戸惑っているだけだ。本気になり体制を立て直されればすぐに全滅させられてしまう。ここは何としてでも無秩序な攻撃を止めなければ逆にこちらが兵力分散の状態に陥りかねん。全艦の通信回路を開き、統制を回復させる」
「承知しました」
ラムはガルマン艦隊が体制を立て直す前に突出した味方を引き戻す為に全ての艦に通信を入れる。

「前進を止めろ!!後退して陣形を編成せよ!!君たちはもう十分に敵を殺したではないか!?」
「進撃中止・後退する」
「後退し、陣形を立て直す・・・・」
ラムの通信を聞き、冷静さを取り戻したバース艦隊は後退して本隊との合流を図る。
しかし、それをすんなりと許すガルマン艦隊ではなかった。

ダゴン艦隊　旗艦　ダンドール　艦橋
「敵艦隊、後退して行きます!!」
「勝ち逃げを許すな!!全艦反転、攻勢に出る!!」
「はっ!!」
後退していたガルマン艦隊が今度は前進しながら攻撃し、後退していくバース艦隊へ攻撃をしかける。
「左右両翼の部隊も前進させ、敵を包囲せよ!!」
ダゴンは左右両翼の艦隊にも指示を出す。

バース艦隊　旗艦　ラジェンドラ号　艦橋
「中央の敵艦隊、反転してきます!!」
「左右両翼の敵部隊も接近!!」
「全艦、密集しつつ第一惑星の軌道上まで後退せよ!!」
バース艦隊は全艦が後退するが、やはり突出して後退していた前衛部隊に被害が多く出た。
「前衛及び右翼の艦隊に被害が多数出ています」
「前衛は本隊の合流を目指し引き続きこのまま後退させ、後衛の部隊を右翼へ回せ」
ラムは分断されることを恐れ、後衛の部隊を右翼へと回し、分断の危機を何とか回避しようとする。
ラムの機転で右翼を攻撃してきたガルマン艦隊は分断を諦め、分散してバース艦隊への攻撃へと方針転換する。
しかし、一部のガルマン艦隊は大きく迂回してバース艦隊の背後を

突こうとするが、宇宙潮流がバース艦隊とガルマン艦隊の間で起き、ガルマン艦隊の行く手を遮りバース艦隊は背後からの強襲を防ぐことが出来た。
「宇宙潮流のおかげで背後へ回られる事は何とか避ける事ができました」
「この兵力差だ。地の利を得られなければ対抗のしようがない・だが、敵を分断し各個撃破することも中央突破を図る事も既に不可能になったか・・・」
予想外に被害を出すことが早かった事で中央突破して敵司令官を討つ事も各個撃破することも今や不可能となり、バース艦隊は新たな策を練らなければならなくなった。
「防御を徹底させろ!!破壊された艦の残骸を盾として使え!!」
バース艦隊は味方、敵の破壊された艦の残骸の隙間から攻撃を加える。
「空母部隊に下令、艦載機部隊を出せ。それと司令部直属の戦艦は全て前衛に出すのだ。急げよ」
「はっ」
バース艦隊所属の空母からは次々と艦載機が出撃する。
もっともその艦載機でさえ、空母に満足な数を搭載していなかった。

ダゴン艦隊　旗艦　ダンドール　艦橋
「敵空母より艦載機が射出されました」
「何!?艦載機だと!?」
これまでのバース艦隊との戦いで、バース艦隊は艦載機を出してくる事はなかった。
もっともバース艦隊の空母に艦載機が搭載機数いっぱいに搭載されていなかった事やガルマン艦隊が電撃戦をしたことで射出する隙を与えなかった事も影響している。
だが、今回はダゴンが慎重に戦いを進めたことでバース艦隊に艦載機を出撃させる隙を与えてしまった。

しかし、慎重に進めた事でまだこれだけの被害だったのかもしれない。
もしも短期決戦で数にモノを言わせる戦いをすれば一体どれだけの損害を出したのか分かったものではない。
バース艦隊の艦載機は自身を囮にしてガルマン艦隊をクロスファイアポイントへ誘い込みガルマン艦を攻撃したり、ガルマン艦の機関を攻撃し敵艦を航行不能にする。
「敵は味方艦の機関をピンポイントで攻撃しています!!」
「前方に味方の漂流艦が居て攻撃できません!!」
「くっ、小賢しい手を・・・」
(我々も空母を持ってくるべきだったか・・・)
「いかがなさいますか?司令」
「こちらも艦載機を出しますか?」
空母ほどではないが、一応ラム―ル級航宙巡洋戦艦もわずかながらも艦載機を搭載していた。
「いや、下手に艦載機を展開すればこちらは艦砲射撃が出来なくなる。それに相手の艦載機数は僅かだ。ならば、駆逐艦部隊を総動員し、機動力と攻撃力、そして数で敵の艦載機部隊を蹴散らせる」
しかし、ダゴンは同士討ちを避けるために艦船で敵艦載機を対処させた。
「はっ」
ダゴンはリンチェント級航宙駆逐艦の部隊を前面に出し、敵艦載機の殲滅を命じる。
ガルマン艦隊は駆逐艦部隊に被害を出しつつもバース艦隊の艦載機を撃墜していく。
「右翼方面の艦隊に下令。宇宙潮流を渡河し敵艦隊へ楔を打ち込ませろ」
「はっ」
味方の駆逐艦部隊がバース艦隊の艦載機部隊を攻撃している中、ダゴンは味方右翼の部隊に宇宙潮流を渡河させ、バース艦隊への攻撃を命じる。

バース艦隊　旗艦　ラジェンドラ号　艦橋
「敵、右翼の艦隊が前進してきます!!」
「宇宙潮流を渡河するつもりか・・・・」
「やはり、数の上での劣勢は覆すことが困難ですな」
「しかし、このまま敵の渡河を許す訳にはいかん。計算しろ、敵は潮流の影響を受け、流されている。敵の進撃速度、潮流の流れの速度をだ。計算すれば敵の渡河ポイントが分かる筈だ」
「は、はい」
ラムはオペレーターに進撃してくるガルマン艦隊の渡河ポイントを計算させて位置を特定させる。
「出ました!!」
「よし、全艦、敵の渡河ポイントに向けて砲門を固定!!」
前面の敵は艦載機部隊が何とか時間を稼いでいるので、バース艦隊本隊は宇宙潮流を渡河してくるガルマン艦隊へ砲口を向ける。
「今だ!!撃て!!」
そして、ラムはタイミングを見計らって攻撃命令を下す。
宇宙潮流を渡河しているガルマン艦隊はいきなり前方から敵のショックカノンが来て回避のしようもなく、被弾する。
「怯むな!!反撃しろ!!」
一方のガルマン艦隊もこのまま無抵抗のままやられるはずもなく、反撃してくる。
更に前方のガルマン艦隊もバース艦隊の艦載機部隊を駆逐し、全面攻勢にうって出てくる。
渡河ポイントで集中攻撃をする為、バース艦隊は密集していた為に逆にガルマン艦隊の集中砲火を受け次々と爆沈していく。
「味方の被害甚大!!」
「敵艦隊、尚も接近!!」
（くっ、こうなれば・・・・）
「全艦、全速前進!!突撃だ!!」
「か、艦長・・・・」

「我々は最後まで戦うぞ!!敵艦に突っ込め!!」
「は、はい・・・」
「突撃!!」
ラジェンドラ号はダゴン座乗する戦艦へ突っ込んでいく。

ダゴン艦隊　旗艦　ダンドール　艦橋
「敵艦、突っ込んできます!!」
「特攻か!?」
「何を狼狽えている?艦首高圧直撃砲、発射準備!!目標、敵旗艦!!」
波動砲とは異なり、威力と射程は劣るがラムール級航宙巡洋戦艦の艦首に装備されている高圧直撃砲にエネルギーが充填される。
「無駄死にはせん!!敵戦艦に突っ込め!!」
ラジェンドラ号は恐れることなく接近してくる。
「艦首高圧直撃砲、エネルギー充填完了!!」
「撃て!!」
ダンドールからラジェンドラ号に向かって高圧直撃砲が発射されると、直進してきたラジェンドラ号に命中する。
「バース・・万歳・・・」
ラムは最後に祖国への万歳を告げ、乗艦であるラジェンドラ号と運命を共にした。
こうしてラジェンドラ号を含むバース艦隊は壊滅した。
「バース艦隊、全滅を確認」
「ふぅ～終わったか・・・」
バース艦隊の全滅が確認され、ダゴンは一息つく。
「通信長」
「はっ」
「ガイデル提督へ打電、『我、バース艦隊ヲ殲滅セリ、直ちに陸戦隊ヲバースへ送り掌握サレタシ』とな」
「はっ!!」
通信長はガイデルの下へバース艦隊壊滅の旨を打電した。

「ガイデル提督、ダゴン将軍より電文です」
「読め・・・・」
「はっ」
　通信員はダゴンからの電文を読み、バース艦隊壊滅の旨を知る。
「ふむ、そうか・・・・東部方面軍要塞へ電信、直ちに陸戦隊をバース星へ送れ」
「了解しました」
　東部方面軍はバース星へ陸戦隊を送り、僅かな抵抗を排除するとバース星を瞬く間に占領した。
「これでジュラ様の行幸の障害が一つ消えたな」
　バース星占領により地球への航路における障害が一つ消えたことにガイデルはホッと胸をなでおろした。

　バース艦隊が全滅した頃、地球では太陽の核融合の増進が進むと同時にヤマトの出航準備も着々と進んでいた。
　暗黒星団帝国との戦いの後、ヤマトの乗員たちはヤマトを降り、防衛軍の様々な部署へ配置されていた。
『　相原義一　殿　至急日本へ帰国し、ヤマトへの乗艦を命ず』
　ヤマト通信長の相原義一は、防衛軍の研修の一環で南太平洋にある南国の島、南十字島に来ていた。
（いきなりのヤマトへの乗艦命令・・・・地球に何かあったのか・・・・？）
（みんな元気にしているかな・・・・？）
　いきなりのヤマトへの乗艦命令が来たと言う事は地球に何か起きたことを意味しているのではないかと思いつつ相原は研修施設の宿舎で荷物を纏めていた。
　相原が荷物を纏めていると、当然ビシ、ビシ、と窓ガラスに何かがぶつかる音がした。
　びっくりしながら窓を見ると、そこには鳥やコウモリが窓や研修施設の壁に体当たりをしていた。
（と、鳥やコウモリが・・・・一体なんだ？鳥たちの集団自殺か!?）

鳥やコウモリの行動にドン引きする相原。
彼は急いで荷物を纏めて宿舎を出て空港へと向かう。
空港へ向かう道中も鳥やコウモリ、ネズミの死骸が道にあふれていた。
（鳥やコウモリの他にネズミも集団自殺をしているのか・・・・？）
（まるで地球の終わりみたいだ・・・・）
タクシーの車窓から一見何事も無いような環境だが、周囲の様子と突然のヤマトへの乗艦命令から地球に何かが起きているのだと確信した。
相原が空港へ到着すると、空には既に鳥やコウモリの姿は見えず、空港では空港スタッフ、清掃員たちが鳥、コウモリ、ネズミの死骸を片付けていた。
「お客様にご案内申し上げます。ただいま滑走路の清掃・点検が終了しました。まもなく空港業務を再開いたします。お客様に大変ご迷惑をおかけいたしまして申し訳ございません。搭乗手続きが始まるまでもう少々お待ちください・・繰り返し申し上げます・・・・」
空港業務再開のアナウンスが流れる空港ロビーの床には清掃し損ねたのか一羽の小鳥の死骸が横たわっていた。
「あら？」
そんな小鳥の死骸をみつけたのは淵の広い白い帽子に白いワンピースを身に纏った女性だった。
身なりや仕草から彼女が良家のご令嬢なのだと窺える。
周囲の人が小鳥の死骸を見ても何とも思わず精々死骸を踏まない様に気を付ける程度なのだが、彼女は小鳥の死骸を手に取った。
（どこかに埋められるところは・・・・）
そして、小鳥を埋葬してあげようと土がある場所を探すが、空港周辺は整備され埋葬できそうな場所がない。
彼女が困っていると、
「どうかしましたか？」
一人の軍服姿の男性が声をかけて来た。

相原が搭乗手続きの再開を空港ロビーで待とうとした時、白い帽子と同じく白いワンピースを身に纏った栗毛色の長い髪の女性が困った様子であたりをキョロキョロ見回していた。
(何かあったのかな?)
相原は彼女が何か困っている様子から声をかけてみる事にした。
一応、今は軍服を纏っているので不審者には思われない筈だという判断もあったからだ。
「どうかしましたか?」
相原が声をかけると女性が振り向き、目が合う。
その瞬間、相原の心臓がドキンと大きく胸を打った。
彼のそんな心情を知る由もなく、女性は自らの手の中の小鳥の死骸を示した。
「可哀想だからどこかに埋めてあげようと思ったのだけど、どこにも土が・・・」
「ああ、みんな舗装されているから・・・あっ、そうだ!!滑走路の脇なら芝生があったからそこなら土がある筈だよ」
「でも、滑走路の傍なんて一般人の私じゃあ・・・」
「大丈夫、ボクが一緒なら入れてくれるよ」
相原は空港の整備員に事情を話し女性と共に滑走路脇の地面に小鳥を葬ることが出来た。
空港整備員も流石に軍の士官の頼みを無下には出来なかったのだ。
無事に小鳥を葬り、土を盛った小鳥のお墓に女性はポンポンと両手で叩き立ち上がると、ヒュ~と風が吹き彼女の後ろ髪がなびく姿が相原には輝いて見えた。
「一人でご旅行ですか?」
「はい」
「観光・・ですか?」
「ええ、私。アメリカの学校に通っておりまして、東京のお爺様に急用が出来たみたいで帰る途中でしたの」
「お待たせしました。十時発東京行き日本航空四一三便へご搭乗のお客様は搭乗手続きを開始いたしました。手続きが終了しましたら、二

十一番ゲートへお越しください。繰り返しお伝え致します・・・」
東京行きの飛行機の搭乗が始まるアナウンスが流れる。
「搭乗が始まったみたいですね」
「ええ・・・あら？」
女性は何かに気づき、再び視線を地面に向ける。
相原も釣られて地面に視線を向けるとそこには数本の野菊の花が咲いていた。
「こんなところに野菊が・・・」
女性は二本の野菊を摘むと、
「はい、小鳥さんからのお礼よ。どうもありがとう」
一本の野菊の花を相原の胸ポケットに挿した。
そして、女性は相原に手を振って二十一番ゲートへ向かって行った。
（素敵な人だったな・・・）
相原は暫しの間、呆然としながら女性を見送った。
東京行きの飛行機が出て少ししてから、軍が手配した輸送機に相原は搭乗した。
離陸した輸送機の窓から先ほどの女性の事を思っていると、
「ああ!!名前・聞いていなかった・・・」
相原は女性に自分の名前を教える事もなければ、女性の名前を聞き忘れた事を思い出した。
「はぁ～なにやっているんだ？俺は・・・」
女性に自己紹介をしなかった事、
女性の名前を聞き忘れた自分に自己嫌悪を感じながら相原は北アルプスドックにあるヤマトへと向かった。

此処で視点は地球からミッドチルダへと移す。
そして、時系列はフェイト、なのは、はやての三人が居酒屋で女子会を行った次の日となる。
時空管理局本局　リンディの公室
「フェイト・T・ハラオウン執務官、出頭致しました」

女子会の翌日、フェイトは朝食の際、リンディから○○時に本局に自分の部屋に来て欲しいと言われた。
「わざわざ来てもらってごめんなさい。ささ、どうぞ座って」
「はい」
リンディの部屋には彼女以外にレティの姿もあった。
リンディに促されフェイトはソファーへと腰を下ろす。
「お茶飲む？」
「ううん、いい」
「そう？レティ、貴女は？」
「私もいいわ。そっちよりもコーヒーか紅茶の方にしてれくれないかしら？フェイトさんもそっちの方が良いわよね？」
「は、はい」
「そう？美味しいのに・・・」
リンディはフェイとレティトがお茶を断ったことに少々残念がりながらもリンディ茶を作り始めた。
「少しは糖分を控えなさい。近い将来、糖尿になっても知らないわよ」
そして、リンディ茶を作り終えると、フェイトとレティのためにドリップコーヒーを淹れた。
レティはドリップコーヒーを淹れているリンディに対して糖分を控えるように注意する。
やがて、飲み物が用意されるとリンディはフェイトに話を振る。
「フェイトにはミッドに戻って来てから査察部の聴取やマスコミへの記者会見とか・・・」
「うん・・まぁ・・・でも、向こうの世界で体験した事に比べれば大したことじゃなかったよ。それで今日、私を呼んだ要件は何かな？」
フェイトはリンディに今日自分をわざわざ部屋に呼び出した要件を訊ねる。
「それなんだけど・・フェイト、貴女が話せる範囲と判断した内容で良いわ。向こうの世界での事を色々教えて欲しいの」
「えっ？」
リンディはフェイトに交信以外で向こうの世界での体験話を聞き

たいと言う。
一応、フェイトに無理矢理全てを聞くわけではなく、彼女が話したら不味いと思う部分は話さなくてもいいと一言前置きをする。
「勿論、貴女から聞いた話を第三者に言うつもりはないわ」
リンディもレティもフェイトは、信用はしているので、自分が話せる範囲の事を二人に語り始めた。
その中で自分とティアナが遭難し、防衛軍と共に向かったイスカンダル・・・と言うよりもガミラスについて話した。
地球連邦と旧ガミラス帝国、『ヤマト』とデスラー総統の戦いと因縁には自分となのは、シグナムたち、スバルとノーヴェたち旧ナンバーズたちに通ずる部分があったからだ。
「私は直接そのデスラー総統と言う人と会った事は無いけど、大丈夫かしら？」
レティはフェイトから聞いたガミラス・デスラーの人となりを危惧する。
「ん？どう言う事かしら？レティ」
「フェイトさんの話を聞く限り、そのデスラー総統と言う人は、他人の傘下に入るような人ではない事が確かでしょう？」
「ええ、そうね」
デスラーが・ガミラスが管理局の傘下になるとはフェイトから聞いたデスラーの人となりを聞く限りそれは絶対に有り得ない。
「いずれ管理局にも牙を剥いてこないかと思って・・・」
だからこそ、レティはデスラーとガミラスの存在を危惧したのだ。
「でも、レティ・今の私たちにガミラスと戦う術はないわ。それにフェイトの話では、ガミラスは今や流浪の境遇なのだから、そう簡単に復活できるとは限らないんじゃないかしら？」
「ガミラスが放浪しているからこそ、どこかの管理世界に襲来しないとも言えないじゃない？それにボラーの時みたいに星の海で遭遇しないとも言い切れないし・・・」
「それはそうだけど・・・」
レティとリンディは放浪しているガミラスの残党がふとした切っ

掛けでどこかの管理世界へ襲来しないとは言えない不安があった。
　しかし、フェイトからの情報は既に古く、ガミラスは既に第二の本国を築いていた事を知る由もなかった。
「デスラー総統たちガミラスの動向がわからない以上、捜索は極めて困難だし、管理局がわざわざ血眼になって追いかける必要は、そこまで重要じゃないと思うけど？」
「そ、そうね・・・」
「ただ、レティの言う通り、星の海で偶然遭遇する可能性はあるだろうから、〝海〟は一層慎重な対応をとらないといけないわね」
「ええ・たとえ相手が単艦で行動していたり、ロストロギアの反応があっても、停船や臨検は控えるようにしないとボラーとの一件の再来になりかねないわね」
（ガミラスと地球の戦争の様相を見る限り、ガミラスと戦争になったら、ボラーの時よりも悲惨な惨状になるわね・・・）
　もう一つの地球でのガミラスとの戦争の資料とリンディから聞かされたボラーとの戦闘からボラーよりもガミラスと戦争したら管理局にもミッド・いや管理世界に甚大な被害を及ぼすと予測するフェイト。
　ガミラスが地球に対して行った遊星爆弾のガミラスフォーミングを含めた攻撃で、資料映像で見たあの赤くなり放射能まみれになった地球みたいにミッドや管理世界もあのような星になってしまう可能性が高い。
　放射能まみれになってしまえば、ミッドには放射能除去装置であるコスモクリーナーは無いし、予想の範疇であるがコスモクリーナーを使用すれば放射能は除去できるが、周囲の空気は魔導師には禁断とされるＡＭＡに変換される可能性が高い。
　どちらにしても苦しい状況になるのは変わりなかった。
「地球連邦政府と交流が持てれば、ガミラスの情報を得られたんだけどね・・・」
「ええ、そうね・・・」
　リンディとレティはもう一つの地球との交流が持てなかった事を

残念がる。
「仮に地球連邦政府と交流を得られたとしても地球からはガミラスの情報を得られるのは難しいと思う」
　二人の話を聞いたフェイトは仮に地球との交流があっても地球が管理局に対してガミラスの情報を渡すとは思えなかった。
「どうしてかしら？」
「デスラー総統自身が、地球とヤマトへの復仇心を昇華させているし、チラッと聞いた話だと地球はガミラスから技術供与も得ていたみたいだから・・・デスラー総統本人もイスカンダルの危機に因縁がある旧敵のヤマトを名指ししてまで支援を要請したほどだったから・・むしろ、万一、管理局と地球連邦との間に武力紛争が生じた場合、ガミラスが地球の側に立って管理局と敵対する可能性の方が遥かに高いと思う。当然、地球側もそれを知っているから彼の動向に注意しながらも、排除まではせずにいると私はそう思っている・・・少なくとも、デスラー総統の人となりは、私や管理局よりも地球防衛軍、特にヤマトの人たちの方が十分知っているだろうし、放浪したデスラー総統たちがどこに向かったかは地球の人たちも知らない筈だし・・・」
「因縁・・か・・・私もそうだけど、フェイト・・貴女にもそう言った事があったわね」
　リンディとクロノのハラオウン親子には闇の書との因縁があり、先ほどフェイトが思っていたなのはとの因縁を思い出すリンディ。
「うん・・それに私見だけど、デスラー総統は敵や戦い方にも美学を求めていると思う」
「美学？敵や戦い方に？」
　レティはフェイトの言葉に首を傾げる。
「はい。ヤマトは大切なものを守るために全てを賭けてガミラスと死闘を繰り広げ、地球を救いました。そんな姿にデスラー総統やガミラス軍人は評価したのではないでしょうか？」
「デスラー総統やガミラスから見ればそういう事もあり得るだろうけど、もう一つの地球の人たち全員の感情は違うのではないかしら？数多の同胞を殺されているのに、そんな簡単に恨みや憎しみを捨てきれ

るのかしら？」
「もちろん、地球市民の間には今なおガミラスに対して深い恨みを抱いている人もいるけど、それは当然だけど、地球側もヤマトはガミラス本星を死の星にして、数多くのガミラス人を殺めました。ヤマトが行った最初のイスカンダルの航海については地球連邦はその事実も義務教育の授業で教えているみたいだし、私自身も図書館の本でそれを知りました。解決方法は間違っていたけど、ガミラス側も自分たちの星の余命が僅かになり、いつ消滅してもおかしくない状態だったと書かれていました。それに・・・・」
「それに？」
「それに、恨みを抱くと言えば、管理局が管理世界にした住民たちにも同じ事が言えると思います」
「・・・・」
フェイトはもう一つの地球におけるガミラスと彗星帝国の情報から、管理局だけが全ての人から恨まれることなく崇拝されている訳ではない事を指摘する。
フェイトの指摘を受けてリンディもレティも思い当たる節があるのか気まずそうな顔をする。
「さっきリンディ母さんが言うように管理局の艦とガミラスの艦が戦っても多分勝ち目はないと思う・・・ガミラスの艦は地球防衛軍と違って波動砲を標準装備してはいないけど、戦闘力は高いし地球防衛軍に負けず劣らずの機動部隊も有していて、瞬間物質移送装置を使った転送戦闘はヤマトの波動砲さえも封じ込め、二度も撃沈寸前まで追い詰めたほどの戦術であり、地球防衛軍も今なお警戒する戦術だって聞いたよ」
ガミラス艦隊は、地球防衛軍と異なり波動砲に相当するデスラー砲を搭載する艦はデスラー本人が座乗する艦の他にまだガルマン本星の一部の艦に留まっている。
ガミラスの基本戦術は波動砲の決戦兵器よりもむしろ高機動の艦による電撃戦や瞬間物質移送装置を利用して艦載機を敵の鼻先まで送り込み、近距離からの飽和攻撃で仕留める戦闘・戦術こそがガミラ

ス軍の真骨頂であり、それはガルマンとなった今でもその戦術は健在であった。
「波動砲やアルカンシェルみたいな殲滅兵器ではなく、戦闘機や小型快速艦による高機動戦か・・・確かに今の管理局の艦船では追従すらできないわね」
「ガミラスの艦載機も大気圏内で行動できるとなると、航空魔導師でも対応は難しいわね」
「〝空〟の魔導師には納得できない人もいるだろうけど、今後の管理局の事を思うなら、地球やガミラスみたいに大気圏と宇宙空間の両方でも行動可能な航空機の導入も考えるべきだと思う」
フェイトは同行したイスカンダルでの航海における地球防衛軍のコスモタイガー、ガミラスのデバッケやスヌーカーの活躍から今後の管理局でもこうした大気圏内・宇宙空間の両方で使用可能な航空機の導入の検討を指摘した。
（なのはやはやてはどう思うのかな？）
〝空〟に所属するなのは、次元航行艦の艦長のはやての二人はもしも、大気圏内・宇宙空間の両方で使用可能な航空機の導入を検討する際、二人はどんな反応をするのか？
空戦魔導師の立場を危うくするかもしれない航空機の導入何てなのはは反対するかもしれない。
反対にはやては次元航行艦乗りとして航空機の導入は賛成するかもしれないがシグナムやヴィータたちの立場を考えれば反対にまわるかもしれない。
フェイト自身は自分の空戦能力の立場を無くしてでも航空機の導入に関しては賛成するつもりだった。
例えそれで、なのはとはやてからの友情を失っても大勢の局員を守る為ならば、魔導師の面子や立場を守るだけの理由で、本来ならば優位に進められる戦術を棒に振り大勢の局員を危険に晒しては本末転倒だとフェイトは思った。
ただ、現状管理局は航空機の導入よりも新型の次元航行艦の建造を優先するだろうとリンディもレティもそう判断した。

百四十六話　ケンタウロス座・アルファ星沖会戦

まもなく第二の地球捜しへ向かう為に出航するヤマト。
そのヤマトの艦内にあるコンピュータールームでは真田たち技術班とアナライザーたちロボット班がコンピューターの増設作業を行っていた。
「このコンピュータールームの作業が一番遅れているんだ。頑張ってくれ」
「時間モナイノニ設備ノ拡張ヲスルカラデスヨ」
作業をしながらアナライザーがコンピュータールームの作業が遅れている原因を真田に指摘する。
「今度のヤマトの航海は地球と酷似した惑星探しなんだ。大気や鉱物質、生物の有無の調査にはコンピューターの増強をしておかなければならんのだ」
「調査ナラ、ボクヤ。ロボットガイルジャナイデスカ、全クヒトヲ信用シナインダカラ」
「お前が信用できないからコンピューターを増設している訳ではない。分からん奴だな」
アナライザーとしては分析ロボットとしてのプライドがあるのかコンピュータールームの分析・解析コンピューターの増設になんだか納得できない様子であるが、真田としては今回のヤマトの航海では分析・解析する分野が多いからコンピューターを増設するのだとアナライザーに説明するが、やはり納得のいかない様子のアナライザーだった。
技術班とロボット班がコンピュータールームで作業をしている中、雪はタラップで乗員のチェックをしていた。
「そろそろ、相原君が来る頃ね」
既に南部と太田は先任士官として着任しており、第一艦橋のメンバーでまだ来ていないのは通信長の相原だけであり、司令部からはヤマトへの乗艦命令が彼に届いている筈なのでそろそろ来るはずだ。

ヤマトの整備も最終段階となっている。
あとは現在真田たちが整備しているコンピュータールームと招集された乗員たちがヤマトに着任すればヤマトはもう出航するだけとなる。
やがて、タラップの下には招集された乗員たちを乗せたマイクロバスが到着した。
「・・・・相原・・義一、ヤマト通信長として着任しました」
タラップには肩を落とした相原が現れた。
「ご苦労様です・・って、相原君。どうしたの？」
雪が相原の顔を見ると、彼は何故かげっそりとしており見るからに元気がなかった。
「確か南十字島から来たのよね？もしかして時差ボケでもしたの？」
「いえ、時差ボケはしていません。それに体調も悪い訳ではありません」
「でも、その顔はなんでもないって顔じゃないわよ？一体何があったの？」
「・・・・」
相原本人は体調不良ではないと言うが、見るからに元気が無く、しかも時差ボケと言う訳でもないので、何か訳ありと言う様子から雪が相原に事情を訊ねるが、相原は気まずそうに雪から視線を逸らす。
しかし、意を決したように、
「ゆ、雪さん、その・・話を聞いてもらえますか？」
相原は雪に自らが抱える葛藤を聞いてもらう事にした。
「ええ、いいわよ。でもそこまで元気がないなんて・・・・もしかして失恋をしたの？」
「・・・・」
雪は何となく当てずっぽうみたいな感じで相原の元気がない原因を彼が南十字島で失恋でもしたのかと問うと、
「いえ、それ以前の段階なんです」
「えっ？」
彼の返答に本当に失恋したのか？と思いつつもどうやら失恋した

訳でもなさそうなので、とりあえず相原から事情を聞くことにした。
相原は第一艦橋まで行く道中で、南十字島の空港で出会った女性の事を雪に伝える。
「なるほど、相原君はその女性に一目惚れしたのね？」
「は、はい・・・どうやらそうみたいです」
「でも、名前を聞かずにその女性と別れてしまった・・と・・・」
「はい。分かっているのはその人が東京へ行ったって事だけで・・・」
あの時、南十字島で出会った女性は東京行きの飛行機に乗って行ったが、東京に相原が出会った女性と同じ年頃の女性は大勢いる。
手掛かりはその女性が東京の祖父の下へ向かったと言う事だけ・・・
いくら何でも『一目惚れしたこの人を探してください』と警察に頼むわけにもいかず、探偵に依頼するにしても女性の写真も無く、名前も分からず、年頃と東京に祖父が居ると言う条件だけでは捜し様がない。
「はぁ～・・・ドジなんだよなぁ～俺は・・・肝心の名前を聞き忘れるなんて・・・」
せめて別れ際に互いに自己紹介でもしておけば良かったと自己嫌悪になる相原。
相原の言う女性が、相原と交際するかは分からないが、確かに相原の悩みは失恋以前の問題だった。
「ヤマトの出航も迫っているし・・・俺はどうしたら・・・」
「・・・」
手掛かりもなく、ただでさえ日本国内で名前も分からない一人の女性を捜す事さえ、時間がかかる中、ヤマトの出航はもう間近に迫っている。
しかも今度の航海目的は第二の地球探し・・・
最低一年は地球に戻れないし、万が一、第二の地球となる星が見つからなかったら・・・
（私たちにとって、時間は無限じゃない・・・）
そう思うと相原が葛藤するのも雪には理解できた。

雪が相原の悩みにどうしたモノかと思っている中、地球から離れたケンタウロス座では・・・

ラム艦長率いるバース艦隊が、ガルマン艦隊との決戦に敗れ、母国であるバース星が既にガルマン・ガミラスに陥落した事を知る由もなく、バース星をはじめとするバジウド星系から脱出したボローズたちボラー連邦の将兵たちとボラーの保護・管理と呼ばれる支配を利用して甘い蜜を吸っていた元々の惑星の権力者たちはひたすら銀河系東部を東進し、オリオン腕へと向かっていた。

そんなボラー・バジウド連合艦隊はラム艦長らバース艦隊の決死の奮戦のおかげで、ガルマン艦隊に追跡されることなくケンタウロス座まで進出してきた。

ボラー・バジウド連合艦隊　旗艦　ゾルヴァ号　艦橋

「総督、未確認惑星国家の開拓惑星を発見いたしました」

ボラー・バジウド連合艦隊旗艦のゾルヴァ号のセンサーがケンタウロス座・アルファ星軌道上に存在するいくつかの人工衛星を確認した。

軌道上の人工衛星の存在からアルファ星がどこかの惑星国家が開拓したであろう証拠となった。

「またえらく辺境の惑星を開拓したモノだ」

「いかがいたしますか?素通りしても構いませんが、その場合ですと我々の姿を見られる恐れがあります。すでに接近し過ぎているので、ワープをしてもその反応を捕捉される可能性があります」

レバルスがボローズに指示を仰ぐ。

この場合、ボラー・バジウド連合艦隊は一時反転をしてアルファ星を大きく迂回すれば発見されることなくオリオン腕を東進する事が出来る。

無用な戦闘と自分たちの発見を避けるのであるならば、迂回するのが最適だったが、ボローズは、

「開拓したと言う事はあの惑星には人類と思われる知的生命体が存在

すると言う事か・・・よし、攻撃準備」
　ボローズはアルファ星への攻撃を命じた。
「えっ？攻撃ですか⁉総督⁉」
　ボローズの攻撃命令を聞き、レバルスは驚愕する。
「総督、ここは迂回して我々の存在を秘匿した方がよろしいのではないでしょうか？」
「開拓惑星ならばたいした戦力は有していまい。我々の艦隊の戦闘力が如何ほどなのか試す絶好の標的だと思わんかね？」
　ボローズとしてはボラー・バジウド連合艦隊の戦闘力を早い内に把握しておきたかったと言う思惑があった。
　それに彼の言う通り、まだ発展途上の開拓惑星ならば防衛システムも完全ではなく貧弱な筈なので、味方の艦隊に被害なく、味方の戦闘力を把握することが出来ると判断した。
「た、確かに・・・総督の仰る通りです。全艦戦闘用意⁉」
　ボラー・バジウド連合艦隊は戦闘態勢を取りつつ、アルファ星へと接近した。
　そのアルファ星では当然、接近してくるボラー・バジウド連合艦隊の艦影を捕捉し始めていた。

　ケンタウロス座・アルファ星　防衛軍基地　司令部　指令室
　アルファ星に建設された防衛軍の司令部では接近してくる未確認の艦隊にてんやわんやの状態となる。
「接近してくる艦隊は従来の艦船データにはない未知の艦隊です⁉」
　防衛軍のコンピューターに保存されているこれまでの惑星国家が保有した宇宙艦隊と接近してくる艦隊は、ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国、時空管理局のどの勢力とも異なる艦隊であることをオペレーターが基地司令官に伝える。
「艦隊にコンタクトをとってみろ⁉」
「しかし、周波数が分かりません⁉」
「地球とこれまでの惑星国家の周波数全てで試してみろ⁉」
「りょ、了解⁉」

オペレーターは接近してくる艦隊に対して防衛軍をはじめとしてこれまで地球連邦・防衛軍が接触してきた惑星国家の通信の周波数でコンタクトをとってみた。
「万が一の事もある、住民には直ちに避難警報を出せ!!」
「は、はい!!」
接近してくる未知の惑星国家の艦隊とコンタクトをとると同時に基地司令官は住民に避難警報を出す。
町には警報が鳴り響き、
『避難警報!!避難警報!!住民の皆さんは直ちに最寄りのシェルターへ避難して下さい!!これは訓練ではありません!!繰り返します!!これは訓練ではありません!!住民の皆さんは直ちに最寄りのシェルターへ避難してください!!』
軍から住民に対して避難警報の放送が流され、放送を聞いた住民たちはシェルターへ避難し始める。
こうした避難はガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国との戦いから住民には慣れた行為だったのか大きな混乱もなく、住民たちはシェルターへと避難していく。

ボラー・バジウド連合艦隊　旗艦　ゾルヴァ号　艦橋
「総督、例の惑星より、通信波が来ています」
「通信だと?」
「はい。様々な周波数で通信を送っているのですが、その中でガルマン・ガミラスと似た周波数もありました」
「なに!?ガルマン帝国の周波数だと!?」
「はい。完全に一致するものではないのですが、周波数帯がガルマン・ガミラスに似ています」
ガミラスがガルマン・ガミラスへ変わった後、ガルマン艦隊の使用する通信の周波数はガミラス時代のモノと若干の変更点があるものの、その大本はガミラスに酷似している周波数をガルマン・ガミラスは使用していた。
「内容は分からないのか?」

「少々、お待ちください。現在、解析しております」
　ボローズとしては万が一、この通信がガルマン艦隊への暗号通信なのではないかと勘繰り、解析を急がせた。
「解析が出来ました」
「それで、内容は？」
「はっ、『貴艦らの所属、及び来訪の目的を求む』・・・以上です」
　アルファ星から発している通信波は自分たちの所属と目的を問う内容の通信であった。
「目的か・・・それは直ぐに教えてやれ!!攻撃開始!!」
「はっ、全艦攻撃開始!!」
　ボラー・バジウド連合艦隊はゾルヴァ号をはじめとしてアルファ星へ次々とミサイルの雨を降らせた。

　ケンタウロス座・アルファ星　防衛軍基地　司令部　指令室
「艦隊より、高速飛来物接近!!おそらくミサイルと思われます!!」
「なに!?」
　基地のレーダーがアルファ星の近くに展開する艦隊よりミサイルの飛来を捕捉した。
　その直後、アルファ星のいたるところにミサイルが着弾した。
「地表にミサイルの着弾を確認!!」
「これより、アルファ星近海に展開中の艦隊を敵と認識する!!戦闘衛星と攻撃ステーションを集結させ、迎撃に当たらせろ!!それと、まほろば　以下の防衛艦隊、付近のパトロール隊に救難信号を送れ!!」
「りょ、了解!!」
　基地司令官は戦闘衛星、攻撃ステーションを迎撃に向かわせ、まほろば以下のアルファ星の守備艦隊をはじめとするパトロール隊へ大至急アルファ星に引き返すよう救難信号を送った。

　アルファ星の状況が地球でも確認できており、ヤマトの出航を控えている防衛軍司令部でも確認できており、アルファ星の基地へ交信を行うも戦闘の影響の為か地球との交信状態が悪く、アルファ星の詳し

い状況は掴めずにいた。
「戦況はどうなっている？」
　藤堂がオペレーターにアルファ星の状況を訊ねる。
「はっ、現在、周辺の戦闘衛星と攻撃ステーションで迎撃を行っている模様ですが、詳しい状況は不明です」
「・・・外惑星パトロール艦隊は出撃したのか？」
「はい。第十一番惑星、冥王星、アステロイドベルト基地から第二、第三、第四パトロール艦隊が出撃しました。しかし、アステロイドベルト基地からは距離があり、冥王星、第十一番惑星は反対側の位置にありますので、到着までには時間がかかるかと・・・」
「それまで戦闘衛星と攻撃ステーションで持ちこたえられるか・・・」
「基地の方でも　まほろば以下の守備艦隊を呼び戻している筈です。外惑星パトロール艦隊の到着までには、まほろば　が時間を稼いでくれる筈かと・・・」
「・・・」
　監視衛星からの映像では戦闘衛星と攻撃ステーションは射撃場の的の様に次々と撃ち落されていく映像が司令部のモニターに映し出されている。
（一体、どこの勢力だ・・・？）
（今度のヤマトの航海も決して安寧した航海とは言えないようだな・・・）
　地球がまさに滅びようとしている中で未知の艦隊が地球の開拓惑星へ突如、襲来し攻撃を仕掛けてきた。
　ヤマトは間もなく、第二の地球を探す航海へと向かうのだが、この分ではただ単に第二の地球となりうる惑星の探査だけでは済まなそうな予感が藤堂にはあった。
　アルファ星へ襲来した謎の艦隊からの攻撃と救援の知らせは、まほろばにも届く。

まほろば　艦橋

「艦長、アルファ星より救援要請です!!」
ギンガがアルファ星からの救援要請を良馬に伝える。
「なに!?救援要請!?」
救援要請と聞いて良馬は驚愕する。
「アルファ星に一体何があった!?」
ガミラスはおろか、彗星帝国、暗黒星団帝国の残党も既に太陽系から撤退し、周辺の星団からも撤退が確認されており、地球に対して逆襲をするにしてもあまりにも期間が短すぎるので彗星帝国、暗黒星団帝国が逆襲してきたとは思えない。
戦闘力ではかつてギンガが所属していた時空管理局は論外だ。
良馬はギンガにアルファ星の詳しい現状を訊ねる。
「謎の艦隊からの攻撃を受けているようです!!」
「謎の艦隊?」
「はい。襲来した艦隊はこれまでのデータには無い艦隊の様です」
「・・・どこの勢力か不明との事だが、アルファ星が攻撃を受けているのは確かだ。急ぎ、アルファ星へ急行する。航海長、方位確認」
「了解。方位確認。方位策定開始」
永倉が現在位置からアルファ星への最短ルートを策定する。
「通信長、僚艦とアルファ星基地へ打電、『我、救援へ急行ス』だ」
「了解」
そして、ギンガはアルファ星基地へ救援へ向かう旨を打電。
「機関長、機関全速」
「機関、全速」
「砲雷長、戦闘用意」
「戦闘用意」
まほろば以下の艦艇は戦闘準備をしたまま急ぎアルファ星へ急行した。
そして、アルファ星の近海まで戻ると、敵の存在を確認した。
そこにはアルファ星の地表へミサイル攻撃をしている艦隊の姿が、まほろばの艦橋にあるモニターに映し出される。
「・・・確かにこれまで戦ってきた勢力の艦とは違うな」

モニターに映し出されている艦隊の艦はガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国、時空管理局の艦艇とは異なり、全体的に丸みを帯びてずんぐりした形をした艦ばかりであった。
「艦長、どうしますか?」
地球連邦が保有する開拓惑星を攻撃している事から、彼らが地球に対して脅威となるのは明白であった。
敵であるなら、現在、まほろば以下の守備艦隊は敵艦隊の後方に位置しているので、この位置から攻撃をすれば敵への奇襲攻撃が可能となる。
これがもし、デスラーであるならばこのまま背後から強襲していたところであるが、良馬は・・・
「通信長、前方の艦隊に通信を送れ」
「えっ!?あの艦隊に・・ですか?!」
良馬はアルファ星を攻撃している艦隊に対して攻撃ではなく通信を送れと言う。
彼の判断に新見も通信を送る役のギンガも驚愕する。
「艦長、お言葉ながらあの艦隊は地球連邦政府が所有する開拓惑星を攻撃しているのは事実です。ここは背後から強襲するのが最良なのでは?」
「確かに副長の言う通りだが、敵の勢力がどこの惑星国家かを知る切っ掛けにもなるかもしれない」
「それは・・そうですが・・・」
良馬とて、相手に攻撃中止の要請をしたところでこう言った輩が攻撃を辞めてすんなりと引き下がるとは思えない事は知っている。
しかし、今はあの艦隊の情報が少しでも欲しい。
相手と通信をしてあの艦隊がどこから来たのか?
それだけでも知ることが出来れば今後の防衛策にも生かせるかもしれない。
「ですが、艦長。相手の周波数が分かりません」
未知の相手と言う事でアルファ星の基地同様、相手と通信を行うにしても相手の周波数が分からなければ通信のしようがない。

良馬はそこでもアルファ星の基地と同じくこれまで地球が遭遇した星間国家が使用した周波数と地球の周波数を使って相手とのコンタクトを図った。
まほろばからの通信は当然、アルファ星を攻撃しているボラー・バジウド連合艦隊の旗艦であるゾルヴァ号でも受信された。

ボラー・バジウド連合艦隊　旗艦　ゾルヴァ号
「総督、我が艦隊の後方より少数ですが宇宙艦艇が出現しました」
「して、その所属は？ガルマン艦隊か？」
「いえ、ガルマン艦隊ではありません。おそらく現在攻撃をしている開拓惑星の守備艦隊と思われます」
「総督、後方の艦隊より通信がはいっております。周波数も先ほど、開拓惑星より発せられた周波数と同一のモノです!!」
「やはり、この開拓惑星の守備艦隊とみて間違いないようですね」
レバルスが後方に居る艦隊が目の前の開拓惑星の宇宙防衛をしている守備艦隊であることは間違いないことが証明された事をボローズに伝える。
「それで、通信の内容は？」
ボローズはオペレーターに後方の艦隊が送っている通信内容を訊ねる。
オペレーターは既に通信を解析しており、すぐにボローズへ伝えることが出来た。
「はっ、『貴下の所属を述べ、直ちにアルファ星への攻撃を中止されたし』『これ以上の攻撃を行うのであるならば、貴下らの行動を侵略行為とみなし、こちらも厳正に対処するモノなり』・以上です」
「ふん、小癪な」
「いかがなさいますか？返答をなさいますか？」
レバルスが後方の艦隊に対して返答を行うかをボローズに訊ねる。
「こんな辺境の田舎蛮族に何故我々が一々相手をしてやらなければならない？」
ボローズは小馬鹿にした様に言うが、自分たちもガルマン艦隊を恐

れ都落ちをした落ち武者にもかかわらず、ボラー連邦出身で一時は一惑星の総督と言う立場から相手を見下していた。
「後衛の艦隊を反転させ相手をさせろ」
「はっ!!」
ボラー・バジウド連合艦隊の後衛の艦隊は反転し、まほろば以下の守備艦隊へと向かう。
「敵艦隊は防御陣をとっている模様です。いかがなさいますか?」
後衛の艦隊と言ってもまほろば以下の守備艦隊より数が多い。
数で勝っている事が後衛艦隊を指揮していた指揮官の慢心を誘った。
「知れた事、小細工は無用、数で圧倒するまでだ!!撃て!!」
後衛の艦隊は主砲を撃ちながら接近してきた。

まほろば　艦橋
「所属不明艦隊より、通信は?」
「ありません」
良馬がギンガにアルファ星を攻撃している艦隊から返信の有無を問うが、相手からは返答はなかった。
「艦長、前方の艦隊に動きがあります。後衛の艦隊が戦闘態勢をとっています!!」
そんな中、艦隊に動きがあり、後衛の艦隊が反転しこちらを攻撃しようとしている。
「やっぱりそうなるか・・・」
「やはり、あの時攻撃した方が良かったのでは?」
新見がジト目で良馬を見てくる。
「まぁ、今更言ったところで後の祭りじゃな」
井上が良馬の言葉を代弁するかのように言う。
「とにかく、相手がやる気ならこちらも相手をするまでだ。作戦を指示する」
良馬は、まほろば以下の守備艦隊に指令を飛ばす。
まず、まほろばの他にホワイトランサー級、パトロール艦が相手の

正面に陣取り相手をし、その後方にホワイトスカウト級中型高速空母がいつでもコスモタイガーを発艦できるように待機する。
　そして、ホワイトアーチャー級巡洋艦及びホワイトパイカー級高速駆逐艦部隊はタイミングを見計らい反時計回りに敵の側面を突くように指令を受けた。
「パトロール艦はまほろばやホワイトランサー級と比べて装甲が薄い。装甲が厚い本艦とホワイトランサー級は防御壁を築きつつ、敵艦隊を攻撃。パトロール艦は本艦とホワイトランサー級の隙間から砲雷撃戦を行え」
「敵艦隊の一部突出してきます」
「敵艦発砲!!」
　アルファ星を攻撃していた一部の艦隊は反転し、まほろば以下の守備艦隊へ攻撃してくる。
　しかし、敵艦の主砲はまだ距離があったらしく、敵艦の主砲のエネルギー波が届く前に消滅か波動防壁で防がれる。
「ふん、遠いわ。間合いも分からないのか?全艦十分に引き付けてから撃て」
「距離、８０００!!」
「よし、撃て!!」
　まほろば、ホワイトランサー級の主砲とミサイル、パトロール艦のミサイルが一斉に敵艦隊に向かって放たれる。
　数で圧倒しようと密集隊形をとっていた敵艦隊は次々と被弾し、宇宙に光の花を咲かせる。
　まほろばとホワイトランサー級が敵艦隊の正面に立ち塞がり、攻防を開始したのを見計らい、ホワイトアーチャー級巡洋艦、ホワイトパイカー級高速駆逐艦部隊は艦隊から離れ、反時計回りに迂回し始める。

　ボラー・バジウド連合艦隊　旗艦　ゾルヴァ号
「総督、後衛艦隊の被害が甚大であります」
　ボローズの下には敵艦隊殲滅の報告ではなく、逆に敵の逆襲を受

け、後衛艦隊が受けた被害が甚大であると言う報告がきた。
「な、なんだと!?」
ボローズとしては信じられなかった。
数の上では自分たちの方が上である筈なのに、何故自分たちよりも数が少ない相手に大きな被害をだしたのか？
「総督!!」
「くっ、やむを得ない。開拓惑星への攻撃を中止して、本艦を含め、残りの艦も回頭!!後方の艦隊を撃滅せよ!!」
アルファ星を攻撃していたゾルヴァ号を含めた残りの艦も反転し、後衛艦隊の加勢に向かう。
「そもそも何故、少数の敵に手間取っておるのだ!?何故、簡単に殲滅出来ん!?」
「数が勝っているとは言え、我が方はその構成も編成比率も通常の艦隊とは異なっておりまして・・・」
ボローズは味方の艦隊が、数の力を活かせていない事に対して不機嫌そうに訊ねる。
レバルスは、その訳をボローズへと言うが、
「レバルス、君はこの艦隊が無能の集まりだと言うのか？」
「い、いえ。決してそのような・ですが、数ほどの働きをするには・・・」
「左舷方向より、新たな敵を確認」
「なに!?」
ボローズのゾルヴァ号が後方艦隊と合流しようとした矢先、艦隊の左舷方向から新たな敵部隊を捕捉した。
「くっ、敵の増援か!?」
横っ腹を晒しているボラー・バジウド連合艦隊の艦艇にホワイトアーチャー級巡洋艦、ホワイトパイカー級高速駆逐艦部隊が敵中突破をする形でボラー・バジウド連合艦隊の艦艇に砲雷撃をくわえる。
ホワイトアーチャー級巡洋艦、ホワイトパイカー級高速駆逐艦部隊の敵中突破と攻撃でボラー・バジウド連合艦隊は大混乱となる。
「何を狼狽えている!?敵は正面の艦隊よりも少数ではないか!?」

ボラー・バジウド連合艦隊の混乱ぶりを見たボローズの不快指数は益々高くなる。

まほろば　艦橋

「巡洋艦部隊、駆逐艦部隊、敵艦隊の側面より攻撃を開始しました」

「敵艦隊に混乱の動きがみられます」

「よし、敵の混乱に乗じて一気に攻める!!全艦突撃!!空母部隊はコスモタイガーを発艦させろ!!」

良馬の命令を受けホワイトスカウト級中型高速空母からはコスモタイガーが次々と発艦し、近接戦闘を行う。

ボラー・バジウド連合艦隊　旗艦　ゾルヴァ号

「敵戦闘機来襲!!」

「こちらも戦闘機を出せ!!」

「航空隊のスクランブル準備がまだ出来ていないので、発艦にはもうしばらく時間がかかります」

バジウド星系からの都落ちから何事もない平穏な航海で訓練もろくに行わなかったツケがここで来た。

その間にもコスモタイガーとアルファ星守備艦隊の攻撃は苛烈さを増す。

「戦艦ガルンゼ撃沈!!レボルチ大破!!」

「戦艦アルゼフ通信途絶!!」

「空母アチャパエル撃沈!!」

「くっ・・・・」

味方の被害報告を聞きながらボローズは悔しそうに歯軋りをしながら顔を歪める。

「総督、このままでは・・・」

「くそっ、やむを得ない!!全艦、ワープにて撤退!!集結地点、バーナード星近海!!各艦、ワープ準備が出来次第ワープしろ!!」

此処に来てボローズはケンタウロス座・アルファ星からの撤退を決め、集結地点を指示しワープにて撤退して行った。

まほろば　艦橋
「艦長、敵艦隊がワープして撤退していきます」
「敵を追撃しますか？」
「いや、逃げていく敵を追いかけるよりもアルファ星の被害の方が心配だ。艦隊の一部を周辺警戒と敵艦の残骸回収に当たらせ、その他の艦は基地へ帰還、被災者の救援に向かう」
　良馬は敵の追撃よりも攻撃を受けたアルファ星の救援を優先した。
「了解」
「あいつら、広範囲にミサイルをばら撒いたな・・・」
「ただめくら撃ちしたみたいで、被害が開拓地に集中しなかったことが不幸中の幸いでしょうか？」
　まほろば艦橋のモニターにはアルファ星の地表の様子が映し出され、地表にはあちこちにミサイル攻撃で出来たクレーターがあり、開拓地にある建物の一部も破損し、煙や火災が起きている。
「それでも全くの無傷ではない筈だ・・・通信長」
「はい」
「アルファ星基地司令部へ打電、アルファ星周辺に展開中だった敵艦隊は撤退した旨を伝えてくれ」
「了解」
　ギンガはアルファ星基地司令部に通信を送る。
「ディアーチェ」
　ギンガがアルファ星基地司令部に通信を送っている中、良馬は厨房に内線を入れる。
「ん？なんだ？」
「O・M・C・Sをフル稼働して、食糧の生産を行ってくれ。被災者に炊き出しを行いたい」
「うむ、承知した」
「リニス」
　厨房の次に良馬は医務室に内線を入れる。
「はい」

「アルファ星の被害は聞いていると思う」
「はい。かなりの広範囲になったとか？」
「ああ・映像からでは一体何人が負傷したのか分からないが、かなりの人数が出た筈だ。医療班は直ぐに負傷者の対処できるように準備をして待機していてくれ」
「了解しました」
　良馬はディアーチェに被災者の炊き出しの準備、リニスには負傷者の応急手当てを直ぐに出来るように指示を出した。
　アルファ星の守備艦隊は一部をそのまま周辺哨戒の為に残し、その他の艦はアルファ星へと降りた。
「まほろばより入電、本星を攻撃していた敵艦隊はワープにて撤退。現在一部の味方艦が周辺哨戒を行い、残りの艦は被災者救援の為、降下して来るとのことです」
「よし、入港を許可しろ」
「はっ!!」
　一先ず脅威が去った事に基地司令官を含め、司令部に居た隊員たちはホッと一息ついた。

　アルファ星の脅威が去った頃、地球では・・・
「古代、ケンタウロス座・アルファ星がどこかの惑星の艦隊より攻撃を受けた」
　藤堂は古代にアルファ星で起きた事件を伝える。
「攻撃!?それで、攻撃してきた艦隊の正体は掴めたのですか？」
「いや、監視衛星からの画像で、アルファ星を攻撃してきた艦隊はこれまで地球が接触した星間国家のモノではない」
「新たな敵・・・と言う訳ですか？」
「うむ・・・今度のヤマトの航海も決して平穏なモノにはならない事を覚悟してもらいたい」
「承知しました」
　藤堂と古代がアルファ星の件で通信をしていると、
　ウウウウウ～!!

ウウウウウ～!!
司令部に警戒サイレンの音が鳴り響いた。
「ん?どうした!?何事だ!?」
「長官、所属不明艦が地球軌道上に突如ワープアウトしてきました!!」
「なに!?」
「映像出ます!!」
司令部のモニターにはつい先ほどまでアルファ星を攻撃していた艦と同じ艦影の艦が映し出されていた。
「これはっ!?」
「アルファ星を攻撃していた艦・・・」
モニターに映し出された艦を見て藤堂をはじめ司令部に緊張が走った。

ボラー・バジウド連合艦隊所属　ロスチラフ級航宙戦艦　艦橋
「ワープ計算違いで戦略外惑星の軌道上にワープアウトしてしまったみたいです」
「観測データによると先ほど攻撃をした植民惑星の母星と思われます」
「母星だと・・・むぅ～・・・いずれは我々が攻略する星だ。それに先ほどの借りもある。エネルギー反応が高い所を叩き、しかる後反転ワープしてバーナード星へ戻る!!」
「はっ!!」
地球圏へワープ計算違いでワープアウトしたロスチラフ級航宙戦艦は地球へ降下していき、都市部に対して砲撃とミサイル攻撃を行う。
この艦を指揮する艦長にしてみれば先ほどのアルファ星での戦いで破れた憂さ晴らしでもあったのだろう。
地球に侵入したロスチラフ級航宙戦艦は都市部を攻撃しながら北アルプスへと向かった。
「藤堂長官、敵艦は北アルプスへ針路を向けました!!」
「なに!?」

（まさか、ガミラスの時の様にヤマトの存在に気づいたのか!?）
「古代、現在地球圏に侵入した敵艦は北アルプス・・・ヤマトへ向かっている」
ヤマトのイスカンダルへの最初の航海の際、まだ地表で艤装中だったヤマトはガミラスの偵察機が襲来した経緯がある為、今回の敵艦もヤマトを攻撃するつもりなのではないかと藤堂は危惧し、通信が繋がったままの古代に敵艦接近の旨を伝える。
「今、ヤマトに何かあってはまずい。敵は既に都市部へ攻撃を仕掛けている事から侵略目的であるのは明白だ。古代、敵がヤマトを捕捉する前にコレを迎撃せよ」
「はい!!」
藤堂は古代に敵艦撃破の許可を出した。
「北アルプス東南１１度、上空２３０００ｍ、敵艦接近、航空隊は直ちに発進し、これを迎撃せよ!!」
古代は山本たちヤマト航空隊にスクランブル発進を命じる。
北アルプスドックには周辺哨戒用に中型雷撃艇が多数配備されていた。

中型雷撃艇

ヤマト航空隊の隊員たちは中型雷撃艇へと飛び乗っていく。
「揚羽、いきなりの初陣だが緊張してないか?」
「は、はい!!大丈夫です!!」
山本は雷撃艇に乗る前に今回の迎撃任務に出撃する揚羽に声をかけた。
揚羽にとってはこれが初の実戦になるが、覚悟は出来ているみたいだった。
「発進!!」
北アルプスドックにある山の中を刳り貫いた秘匿飛行場からは

次々と中型雷撃艇が発進する。
　中型雷撃艇の接近はロスチラフ級航宙戦艦でも捕捉した。
「地表より迎撃飛行隊が多数接近」
「引き付けて一気に撃滅しろ」
「はっ!!」
　ロスチラフ級航宙戦艦と中型雷撃艇の距離が徐々に縮まっていく。
「敵艦距離、前方３５００、坂本、椎名の隊は上方より、残りは俺に続け、全機戦闘態勢をとれ!!」
　山本は隊を二つに分け、敵艦上方からは坂本と椎名の隊が、下方からは山本が率いる隊が襲い掛かる。
「攻撃開始!!」
　中型雷撃艇からは多数のミサイルが放たれる。
　まず上甲板に中型雷撃艇のミサイルが多数命中し、次いで左舷下方に山本隊が放ったミサイルが命中する。
　中型雷撃艇はなおも波状攻撃をしかけてくる。
　ロスチラフ級航宙戦艦も当然迎撃をするが、砲塔やミサイル発射口は次々と潰されて行き、艦内で誘爆が広がる。
「右舷第三ブロック、第八ブロック被弾!!」
「左舷第五ブロックも被弾!!」
「くっ、小さいながらもよくやる!!アルファ星でもそうだが、えらく動きの良いメカだ・・・」
　アルファ星で遭遇したコスモタイガーも宇宙戦闘機ながらも動きが素早かった。
　そしてコスモタイガーよりも大きいが中型雷撃艇の運動性能は素早く迎撃が間に合わない。
「一番砲塔、二番砲塔被弾し、使用不能!!」
　それは老いて動きが鈍くなったクジラに多数のシャチが群がるかのようだった。
「動力回路Ａ～Ｇまでが破損!!」
「て、撤退だ!!」
　艦長はここで勝てないと判断し撤退を指示するが、その命令は遅す

ぎた。
上昇しようとするも機関の損傷がひどく上昇するどころか艦は墜落していく。
「ば、蛮族共が・・・」
艦長のその言葉を最後に地球に侵入したロスチラフ級航宙戦艦は爆発した。
空中で爆発したことでこの艦の生存者は確認できなかった。
「敵艦の爆発を確認。これより帰還する」
ロスチラフ級航宙戦艦の爆沈を確認した中型雷撃艇は次々と北アルプスドックへと戻っていった。

百四十七話　捜し人現る

バジウド星系からガルマン帝国の追撃の手から逃れるためにバジウド星系から逃げた惑星統治役のボラー連邦の高官と現地の一部権力者たちは地球が開拓したケンタウロス座・アルファ星へ攻撃を仕掛けてきた。

戦闘衛星と攻撃ステーション相手では優位だったボラー・バジウド連合艦隊であったが、アルファ星の救援に駆け付けたまほろばをはじめとする守備艦隊に返り討ちに遭いボラー・バジウド連合艦隊はワープにて蜘蛛の子を散らすようにケンタウロス座宙域より撤退して行った。

しかし、その中の一隻の宇宙戦艦がワープ計算違いで地球圏へワープアウト。

すぐに逃げればいいものをその艦に乗っていた艦長は地球がアルファ星を開拓した母星だと知ると、返り討ちにされた事に対してまるで八つ当たりをするかのように都市部を攻撃し始めた。

都市部を攻撃していくボラー・バジウド連合艦隊所属の宇宙戦艦はそのままヤマトが整備している北アルプスドックへと向かって行く。

地球：太陽系が破滅しようとしている現状、今のヤマトは地球の希望である。

そんなヤマトを傷つけるわけにはいかない。

藤堂は古代にこの宇宙戦艦の迎撃命令を下し、山本らヤマト航空隊はドックに常備していた中型雷撃艇でこの戦艦を撃破した。

アルファ星への攻撃、そして地球圏へワープアウトしてきた謎の宇宙戦艦。

これらの事態から、自分たちの知らない星の海では星間戦争が起きている可能性があり、今回のヤマトの任務：第二の地球探しの航海は決して生易しいモノではないことが窺えた。

謎の宇宙戦艦が地球圏へワープアウトし、これを撃破したその日の夜。

古代はようやく揃ったヤマト全乗組員を前甲板に集め訓示を行った。
「艦長に敬礼!!」
副長の真田が号令をかけると乗組員全員が古代に敬礼し、古代は答礼し、手を降ろすと乗員たちも手を降ろす。
「本艦は明日午前五時二十八分、日の出と共に出航する」
古代は乗員たちに明日の日の出と共にヤマトが出航する事を伝える。
出航命令を聞き、新人の乗組員は緊張が隠せない。
「すでに一部の者は知っているように我々の任務は第二の地球となりうる惑星の探査だ。しかも今回の航海は決して平穏なものではない。先ほど、地球圏に襲来した謎の宇宙艦艇の他にケンタウロス座にある開拓惑星が先ほどの宇宙艦艇を有している惑星国家の攻撃を受けた」
古代の話を聞いて乗組員たちの間で今回の任務、そして先程の騒動の他に地球がケンタウロス座にある開拓惑星が謎の勢力に攻撃を受けた事にざわつく。
「我々が再び生きて地球へ戻れると言う保証はない。そこで、皆に最後の選択の機会を与える。もし、地球に残りたいと言う者が居れば退艦を許可する」
古代は最初のイスカンダルへの航海で沖田艦長が当時の乗組員に訓示した時、彗星帝国の脅威が地球へ向けられている中、それを信じない政府・防衛軍の制止を振り切り、ヤマトを出航する時と同じく、無理に連れて行くつもりはなく、もし行きたくない者は行かなくても良いと退艦の許可を出す。
乗組員一人、一人、の顔を見渡す古代。
すると、相原は動揺しているのか視線が泳ぎ挙動不審となっている。
「相原、どうした?」
「・・・」
古代が相原の挙動不審な様子に気づき、真田、島も彼の挙動不審な様子に気づき、

「相原、お前・・まさか・・・・」
「相原・・これまですっと一緒に戦ってきたじゃないか!?」
相原に声をかける。
「すまん!!みんな・・・・俺は・・・・今、あることをしなかったら、一生後悔すんだ!!だから・・俺は・・・・俺は・・・・」
相原はまるで逃げるようにタラップの方へと走り去っていった。
「相原・・・・」
皆は彼の様子を唖然として見ていた。
ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国が地球へ襲来した時も相原はヤマトと・・・・みんなと一緒に戦ってきた。
その相原が、どこかの宇宙で戦争が行われているかもしれないと言う理由で恐れをなして逃げるなんて考えられなかった。
過去に一度だけ、最初のイスカンダルへの航海の際、ドメルが策したリレー衛星でヤマト乗組員をホームシックにさせようとした罠で、相原が自身の父親の死を知り、ヤマトから脱走した経緯があったが、今回も残された母親が心配でヤマトを降りたのだろうか?
相原の退艦理由が分からないまま、他の乗組員からは退艦者が居ないため、訓示は終わり、古代は艦長室で相原の退艦理由を考える。
そんな中、雪が艦長室にやって来た。
そして雪は古代に相原の退艦理由を伝えた。
相原の退艦理由として雪は南十字島で出会ったとされる女性が原因としか思い当たらなかったからだ。
「そうだったのか・・・・」
「相原君はあと一年・・万一ということを考えた時、その人を捜さなければならないと思うと、どうしてもヤマトに乗って宇宙へ出る訳にはいかなかったのよ・・・・」
「あと一年・・・・万一・・・・」
相原が抱える葛藤を雪から聞くと古代にも相原の葛藤が分からない言う訳でもなく、古代にも今になって強烈なプレッシャーが襲い掛かった。
「古代君、どうしたの?」

「・・・雪、ヤマトは本当に第二の地球を見つけられるのだろうか？宇宙に地球そっくりな星があり、それを見つける事ができるのだろうか？島は広大な宇宙なのだから、見つからなかったら人類は滅亡するんだ。第二の地球探し以前に現在宇宙ではどこかの惑星国家が地球を狙っているのかもしれない。その戦争に巻き込まれ星探しどころではなくなったら・・・？」

最初のイスカンダルの航海でも戦闘によるロスで予定航海日よりヤマトは遅れて地球へ帰還した経緯から、もしヤマトが宇宙戦争に巻き込まれたら？

また、先程の騒動からヤマトが留守中にどこかの惑星国家が地球へ侵略の魔の手を伸ばしてきたら・・・

そう考えると古代が不安になるのも無理はない。

『探したけどそんな星はありませんでした』ではすまないんだ・・・雪・・今、ヤマトを降りたいのは俺の方だよ・・・俺は沖田艦長のように強くはない・・・」

（あの時の沖田艦長もきっとプレッシャーに押しつぶされそうになっていたに違いない）

艦長としての職務、そして今回の任務、どこかの宇宙で起きている宇宙戦争、地球を狙っているかもしれない惑星国家の存在、これらの要因からくるプレッシャーに古代は押しつぶされそうになっており、つい弱音を吐いてしまう。

そして、イスカンダルへの航海時の沖田艦長もきっと今の自分の様にプレッシャーに押しつぶされそうになっていただろうに、弱音を吐くことも諦める事もなく、ガミラスとの戦闘にも勝ち、イスカンダルへの航海も成功させている。

そう思うと改めて沖田艦長の偉大さが感じられる。

「古代君・・・」

雪は古代に思わず抱き着く。

「雪・・・」

二人はそのまましばし抱き合う。

（俺もこのまま雪と・・・）
相原の話を聞き、自分も雪と共にヤマトを降り、どこか遠くへ・・・
そんな思いが古代の中にあった。
しかし、自分の肩に地球人類の未来がかかっていると思うと逃げ出す訳にもいかなかった。
「艦長、藤堂長官が見えられたぞ」
艦長室の内線スピーカーに真田の声で藤堂が来たことを古代に知らせる。
その知らせを聞き、慌てて古代と雪は離れる。
今夜はヤマトの出向前の出陣式が行われる予定で、見送りも兼ねて藤堂がヤマトを来訪する予定になっていた。
「わ、分かった。直ぐに行く」
「雪、出陣式の用意は出来ているか？」
「は、はい」
「よし、それじゃあ、俺は長官を出迎えてくる」
古代、島、真田は藤堂の出迎えの為に後部甲板へと出る。
やがて、藤堂を乗せたヘリが着艦した。
外は日が落ちると天候が悪化して吹雪になり始める。
吹雪の中で古代たちは藤堂を敬礼して出迎える。
藤堂は答礼し、ヘリのタラップを降りると外の吹雪を見て、
「異常気象だな、これは・・・」
（これも太陽異常が原因か・・・）
季節外れの吹雪に対して呟く。
すると、藤堂の後ろにもう一人、ヤマトの甲板に立つ人物が降り、藤堂は古代たちに紹介する。
「わしの孫娘でな、晶子と言う」
フードをとって顔をあげた藤堂の孫娘である晶子は思わずドキッとなる程の美少女であった。
「ヤマトの皆さん、はじめまして。藤堂晶子です」
「どうしてもヤマトを見たいと言われてな・・・」
防衛軍司令官と言えど、人の子であり、一人の祖父でもあり、どう

も孫娘には弱いみたいだ。
「コートをお預かりいたしましょう」
「ありがとうございます」
晶子は真田にコートを預け、艦内へ入る。
古代は藤堂と晶子の二人をヤマトの左舷展望室へと案内する。
展望室には出陣式の為のパーティー会場に模様替えされており、新人乗組員をはじめとして当直者を除き、ヤマトの乗員たちで溢れかえっていた。
藤堂は上座に設置された演説台に乗り、ヤマトの乗員たちに訓示を行う。
「ヤマトの諸君、私が防衛軍司令長官の藤堂平九郎、諸君らを宇宙へ送り出す弔砲人である。地球連邦政府は太陽の異変について再調査に乗り出したが、まだ正式に認めるところとなっていない」
藤堂はヤマトの出航準備が行われている間に地球連邦政府に対して太陽の観測調査の再度行うように嘆願していた。
もしこれが取り越し苦労で終わるのであるならば、それが一番なのだが、此処に来て非公認ながらも芳しくはない結果が出て今後も太陽の調査を継続して行っていくと言う。
「今回のヤマトの出航と第二の地球探査の任務は今の所、私の独断であり、表向きは太陽系周辺のパトロールと言う事になっており、私と孫娘の他に諸君らを見送る者はいない。しかし、私はヤマトに期待している。地球人類に未来を運んできてくれ!!ヤマトの航海の成功と諸君の無事を祈って乾杯!!」
『乾杯!!』
会場に集まった者たちがグラスを掲げ、グラスの中身を飲み干す。
それから暫しの間、パーティーを楽しんだ後、古代は晶子を連れてヤマト艦内の各部署を案内する。
藤堂は勿論ヤマト艦内の構造は設計図を何度も見ているので知っているが、実際に艦内をこうして見て歩くのは初めてであった。
そして最後に古代たちの部署である第一艦橋を案内する。
「ここが私の席、その隣が航海長の島、あちらは技師長の真田さんの

席、その隣は航海長補佐の太田、反対側が砲術長の南部、その隣が・・・・」
　南部の隣は通信長の相原の席であるが、その相原はついさっき・・・・
「・・・・長官、相原通信長はヤマトを退艦しました」
「退艦？どいう事かね？」
「相原は南十字島の空港で一人の女性とであったみたいでその人の事を捜したいと・・・・分かってやって頂けませんか？」
　地球の危機の中、恋愛に現を抜かすなんて・・・・と思われるかもしれないが、地球の危機だからこそ、その人を捜したいと言う相原の気持ちをフォローする古代。
「えっ？南十字島の空港・・・・」
『南十字島の空港』と言う単語を聞き晶子には何か思い当たる節がある様子だ。
「あ、あのその話、詳しく聞かせてもらえますか？」
「え、ええ・・私もまた聞きでよくは知らないのですが・・・・」
　古代は晶子に雪から聞いた相原と南十字島の空港で出会ったとされる女性のエピソードを晶子に伝える。
「・・・・その女性は私です」
「えっ!?えええええー!!」
「先日、私は南十字島に観光へ出かけ、空港で一羽の小鳥さんが亡くなっているのを見つけ、どこかに葬ろうとしていたんです。ただ周りがコンクリートばかりで困っている中、一人の軍人さんが土のある所を見つけて手伝ってくれたんです」
　晶子の話と相原が出会ったと言う話は一致していた。
　古代は急ぎ、パーティー会場に戻り、山本たち飛行科の隊員を集め、相原の捜索を命じた。
　明日の出航の為にパーティーに出されていた飲み物はすべてソフトドリンクだったので、操縦に関して問題はなく、航空隊の隊員たちは新に搭載された小型ヘリで相原の捜索へ向かった。
「面倒をかけてすまない。だが、何としてでも相原を見つけてくれ」
「ああ、任せておけ」

相原捜索隊のヘリは次々とヤマトの甲板を飛び立って行った。
流石に吹雪の中で待っている訳にはいかないので、古代は艦内で吉報を待つことにして踵を返した時、タラップに座り込む人影を見つけた。
「ま、まさかっ!?」
古代がタラップへ駆け寄ると、そこにはタラップに腰掛ける相原の姿があった。
「相原!!降りたんじゃなかったのか!?」
古代はタラップに座る相原に声をかける。
「降りたよ・・・だけど、戻って来た。俺が探さなければならないのはあの人じゃなくて第二の地球だって気がどうしても吹っ切れなくてな・・・あの人はそれからでも・・・」
地球が滅亡してしまってはあの人を捜す事も出来ない。
それならば第二の地球を探し終えてからあの人を捜そうと決意した為、相原はもう一度ヤマトに戻って来た。
彼は一人の男よりも一人の宇宙戦士としての矜持を選択したのだ。
「相原、こっちへ来い、早く」
古代は相原の手を引いて艦内へと引っ張っていく。
「えっ?えっ?」
相原はいきなりの事態で戸惑っている。
「お前に合わせたい人がいる・・・その前に一度着替えてこい」
古代は雪で濡れた相原を一度着替えさせて出陣式の会場へと連れて行く。
会場では真田たちの談笑の中に居た晶子は相原の姿を見てハッとなる。
当然、相原も晶子の姿を見て目を大きく見開く。
二人はどちらからともなく歩み寄る。
「えっと・・・あの時、言っていた『お爺様』ってもしかして長官のこと?」
晶子は微笑しながら頷く。
「し、失礼しました!!」

相原は藤堂に一礼する。
一同の間に失笑が広がる。
「改めまして、藤堂晶子です」
「ヤマト通信長の相原義一です」
相原はヤマト出航間際に捜し人と出会い、彼女の名前を知ることが出来た。
やがて、出陣式は終わり、藤堂と晶子は迎えのヘリに乗ろうとした時、
「晶子さん・・これ・・・・」
相原は脇に抱えていた手帳を開く。
するとそのページには野菊の花が押し花になっていた。
それを見た晶子は微笑しながら自らも懐から手帳を取り出し開くとそこには相原同様、野菊の花が押し花になっていた。
「私も押し花にしているの・・・・私の宝物よ」
「あ、晶子さん」
「はい？」
「・・・・いえ、お元気で」
「はい。相原さんも・・・・」
晶子は相原に一礼しヘリの機内へと入っていく。
(初心な恋人たちね・・・・)
相原と晶子・・二人の様子を見た雪はそんな風に思った。
やがて二人を乗せたヘリはヤマトの後部甲板から飛び立っていった。
「相原・・・・」
「はい」
「俺も自信が沸いたよ」
「えっ？」
古代の言葉の意味が分からず相原は首を傾げる。
しかし、古代は奇跡のような偶然から相原の捜し人は見つかった。
島の言う通り、宇宙は広大であり、イスカンダルや時空管理局があるミッドチルダがあるように地球に似た惑星もあり、見つかるだろう

と言う自信が沸いて来た。
その後、ヤマト航空隊の隊員らが戻ってくると、相原は彼らに心配された事と無駄足をさせた事から、ヤマト航空隊全員に食堂の食事を奢る羽目になった。

ヤマトの出航が目前に迫っている中、ケンタウロス座・アルファ星では・・・
アルファ星は謎の宇宙艦隊より突如、攻撃を受け、そこを　まほろば以下の守備艦隊が謎の宇宙艦隊を撃破したばかりで、守備艦隊は被災地救援の為、一部を警戒と敵艦の残骸回収の為に宇宙へ残しアルファ星の基地へと戻った。
各艦の主計科の隊員たちは搭載されていたO・M・C・Sをフル稼働させて被災者たちへ炊き出しを行い、医務官たちは総出で負傷者たちの治療にあたる。
「あっ、山上さん」
通信科の所属しているギンガであるが、クイントが亡くなった後にナカジマ家の炊事を担うようになった彼女は、自分も被災者の為にと炊き出しを手伝っていた。
そんな中、炊き出しの列にギンガの見知った人が居た。
「中嶋さん・・・」
「ご家族は大丈夫でしたか？」
「はい。私は買い物の途中で、近くにシェルターがあり、そこへ避難しまして・父も主人も会社のシェルターへ無事に避難出来て幸いケガもないそうです」
「それは良かったです」
ギンガは山上一家がケガもなく無事に今回の事件を乗り切れたことにホッとした。
良馬は基地の司令部へ行き、地球へ今回の件とアルファ星への救援を求めたのかを確認した。
「司令官、今回の一件は既に地球に報告は？」
「通達はした。それと、地球でもどうやら先ほどの勢力と同じ宇宙戦

艦が一隻ワープアウトをして都市部へ攻撃をおこなったみたいだ」
「地球へ!?それで、被害は?」
「一隻だけだったので、大規模な攻撃ではなかったが都市部のライフラインの一部が破壊されたようだ」
「それでその戦艦は?」
「北アルプスのヤマトが整備しているドックへ向かったようだが、ヤマト航空隊がこれを撃沈したらしい」
「そうですか・・・・」
「今回の攻撃で戦闘衛星と攻撃ステーションが壊滅したので、当分の惑星守備は守備艦隊に行ってもらう。救援で第十一番惑星、冥王星、アステロイドベルト基地からも増援のパトロール部隊がこちらに向かっている」
「承知しました」
(パトロール部隊と言うことは、戦艦や空母は望めないか・・・・)
(せめてアンドロメダ級が一隻・・・・それが無理なら丙型のドレッドノート級でも良いから三隻〜五隻はよこしてもらいたいな・・・・)
パトロール部隊の主な編成がパトロール艦、護衛艦、駆逐艦などの中・小艦艇なので、せめて戦艦を少数でも良いので派遣してもらいたいともう良馬であった。
おそらく目の前の基地司令官も同じようなことを思っているに違いない。
「それで、監視衛星からの映像をモニター越しで見たのだが、実際にあの艦隊と戦った君の意見も聞きたい。今回の襲撃者はやはりこれまで地球が遭遇した事のない未知の惑星国家だと思うか?」
「現在、宇宙に漂っている敵艦の残骸を回収中ですが、艦の構造を見る限りではガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国、時空管理局の艦とも形状が一致せず、これらの勢力に所属している艦とは言い難いのですが、詳しい事は残骸を調べてみない事にはまだ分かりません。もしかしたら、これまで地球が接触したいずれかの惑星国家が新型の宇宙艦船を建造した可能性もありますし・・・・」
ずんぐりと丸みを帯びた艦影はガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国、

時空管理局、それぞれの艦船の特徴からはズレている形状をしていた。
　しかし、格納式の武装に関しては時空管理局の宇宙艦艇が採用していた武装方式だ。
『まさか、時空管理局が？』と言う思いもあるが、時空管理局の場合、ギンガが時空管理局の周波数でも通信を行っても返信することがなかった。
　主観ながら、時空管理局は自尊心が強い者たちが多い印象があったので、攻撃前に此方に対して降伏勧告ぐらいはしてきそうなので、こちらの通信を一方的に無視するのは合点がいかなかった。
「司令官、襲撃した艦の曳航準備をしている守備艦隊より入港許可を求める通信が入っております」
　オペレーターが司令官に襲撃してきた艦を曳航している味方艦からの通信が入る。
「曳航している艦に生存者は？」
　司令官は曳航されている艦に生存者の有無を訊ねる。
「サーチしましたが、生存者はなかったそうです」
　アルファ星を襲撃し、今現在曳航準備をしている艦は調査・救助活動によって生存者は居なかった事が報告にあがる。
「よし、入港を許可する。ドックの整備員や保険部の職員たちには調査準備を指示しろ」
「了解」
　やがて、アルファ星周辺で襲撃してきた艦隊の内、比較的に原型を留めている漂流艦を曳航してきた味方の艦がアルファ星の基地ドックへ戻って来た。
　ドックには整備員たちが待機しており、準備が整うと曳航された艦の調査に入る。
　良馬も今回の敵艦と戦った者として曳航された艦の調査に同行した。
　軍帽から作業用のヘルメットをかぶり、整備員たちと共に撃破された艦内に入る。

「この艦の生存者は居ないと聞きましたけど、乗員の遺体も無かったのですか？」
「艦橋をはじめ各部署に相当な被害を受け、乗員は宇宙に吸い出されたり、誘爆に巻き込まれたみたいですが、何体かは確認できたみたいです」
「検死の方は？」
「これから行われるみたいです」
　良馬がこの艦の乗員について質問をしていると、防護服姿の人間がストレッチャーの上に布が被された何かを乗せて通路を歩いていく。
　あのストレッチャーに乗っているのがこの艦の乗員の遺体であるのは一目で分かった。
　それから調査が進んで行くと、
「うーん・・・」
「どうしました？」
「あっ、月村艦長・・・実はこの艦のエンジンなんですけど・・・」
「この艦のエンジン？」
「はい・・・これをちょっと見て下さい」
「ん？これって・・・」
「はい。この構造は・・・」
　調査結果を見せてもらうと、この艦のエンジンがガミラスの宇宙艦艇に使用されている機関と似ていると言う結果が出たのだ。
「この艦のエンジンがガミラスと似ている？」
「はい。全て一致するわけではないのですが、構造がガミラス製の波動エンジンと酷似している部分があります」
「ガミラスの宇宙艦艇が使用しているエンジンも波動エンジンに似ているエンジンなので偶然似ているとか？」
「うーん・その可能性もあるのですが・・・その点を解明するにはもう少し詳しい調査が必要です」
「だろうね・・・」
　イスカンダル製の設計図を基に製作した地球製の波動エンジン、ガミラス純正の波動エンジンと宇宙には既に二種類の似た構造の波動

エンジンが存在しているので、他にも波動エンジンに似た構造のエンジンを採用している惑星国家があっても不思議ではないのだが、調査に当たった整備員も良馬も煮え切らないモヤモヤした印象を抱いた。
　ただ、整備員の言うようにこのモヤモヤを解決するにはより詳しい調査が必要なのだが、このアルファ星には防衛軍の基地はあるが、地球の科学局並みの調査機関も調査機器もないので、詳しい調査をするのであるならばこの艦を地球まで曳航するか、科学局の職員と調査機器を持ってアルファ星に来てもらうしかない。
　リスクや時間を考えると後者の方が、効率が良いだろう。
　その点も地球に今回の調査報告を入れて指示を仰ぎ、意見を具申しなければならない。
　次に良馬は、乗員の遺体を検死している保険部へと行き、調査報告を訊ねる。
「それであの艦の乗員ですが、検死の結果で何か分かった事がありましたか？」
「皮膚の色や血液の色を除けば身体の組成は我々地球人とそっくりな構造をしていました」
　どうやらあの艦の乗員たちはＳＦに出てくるようなタコ型の宇宙人や暗黒星団帝国の人たちみたいなグレイと呼ばれる宇宙人に似た姿でもなく、ライトノベルの異世界モノによく登場する獣人みたいな姿でもなく、地球人の様な人型であり、その構造も地球人とほぼ一致していると言う。
『ほぼ』と言うのはあの艦の乗員の皮膚と血液の色が地球人類と異なる色をしているみたいだ。
「皮膚や血液の色？それってガミラス人や彗星帝国人と同じだったんですか？」
　皮膚の色が違う地球人類に似ている宇宙人と言えばガミラス人と彗星帝国人ぐらいだった。
「いえ、ガミラス人よりもやや薄い色・・水色だったり、彗星帝国の人間に似た皮膚の色をした乗員も居ました」
「水色の皮膚に彗星帝国の人間に似た皮膚・・・その彗星帝国人の皮膚

に似た乗員は彗星帝国人だったのですか？」
　あの艦の乗員の皮膚は水色か彗星帝国人みたいな黄緑色の皮膚をしていた。
「こちらも気になり調べたところ、ＤＮＡの配列が若干、彗星帝国人と異なっていたので、あの艦の乗員が彗星帝国人とは言い切れません」
　黄緑色の皮膚の乗員は彗星帝国人と異なる星の住人だと検死をした法医学者は結論を出した。
（似た色の皮膚を持つ異星人か・・・・まぁ地球、イスカンダル、ミッドチルダの住人も同じ肌の色をしているし、この広い宇宙、そっくりさんも居る訳だし、似たような肌の色をした人が居てもおかしくは無いか・・・・）
「ガミラス人や地球人の様な乗員は居ましたか？」
「いえ、そのような特徴の乗員の遺体はありませんでした」
（ガミラス人や地球人の特徴を持つ乗員は居なかったとなると、やはりあの艦はガミラス・時空管理局の所属ではなかった事か・・・・）
　乗員にガミラス人、地球人に似た特徴を持つ者が居なかった事からあの艦がガミラス、そして時空管理局の所属ではない事が窺えるが、それでもあの艦のエンジンがガミラスと似ていた事については疑問が残った。
　良馬が保険部の建物から艦船ドックの近くで行われている炊き出し所まで戻ってくると、そこではフェリシア、ギンガ、ディアーチェが子供たちの相手をしていた。
（守れた・・・・んだよな・・・・）
　無邪気な笑い声をあげて笑みを浮かべている子供たちの姿を見て、良馬はこの開拓惑星を守れたのだと実感することが出来た。
　炊き出しの邪魔になってはならないし、現在まで分かっている事を基地司令官と地球へ報告する為、良馬は司令部へと向かった。
　一方、子供たちの相手をしているフェリシア、ギンガ、ディアーチェの三人は・・・・
「王様はやっぱりカリスマ性があるから艦長職とか向いていそうなのになんで目指さなかったの？」

と、フェリシアはディアーチェに何故艦長職を目指さずに主計科の隊員に収まっているのかを不思議に思い訊ねた。
ディアーチェは子供たちと共に炊き出しの料理に使う為の食材を切りながら料理を教えたり、主計科の隊員に指示を出していた。
「あっ、私もそう思いました」
(ディアーチェさん、はやてさんにそっくりだし、フェリシアさんが言うようにカリスマ性を感じるし、艦長になっていても不思議じゃないわね)
「ん?ああ、我は料理をしつつ宇宙へ行きたかったからな、艦長なんて役職には元々興味がなかったし、今後も目指さすことはない」
「ありゃりゃ、そうなんだ・・・」
「でも、ディアーチェさんはお世話好きなんで何となく分かる気がします」
ディアーチェの説明を聞いたフェリシアとギンガは何故、ディアーチェが艦長職にならないのかを聞いて納得した二人。
その後も三人は子供たちの相手をしていたのだが、不意にギンガは子供たちと触れ合っていて将来について考えた。
(もし、将来、良馬さんと結婚出来たら子供は欲しいけど・・・)
将来、良馬と結婚をしたら、ギンガとしては当然、彼との間に子供は欲しい。
しかし、ギンガにはどうしても拭いきれない不安があった。
(でも、私は戦闘機人だし・・・子供・出来るのかな?)
それは、ギンガ自身の出生が関係していた。
ギンガは死んだクイントのＤＮＡデータを基に生まれた戦闘機人・・・
母の母体から生まれた通常の人と異なる形でこの世に生を受けている。
そもそも戦闘機人の特徴が、人体に身体能力を強化するための機械部品をインプラントし、人の身体と機械を融合させ、常人を超える能力を得た者で、鋼の骨格と人工筋肉を持ち、遺伝子調整やリンカーコアに干渉するプログラムユニットが埋め込まれていると言うモノだ。

この戦闘機人独自の特徴は勿論、ギンガ本人は知っている。
年齢に応じて成長し、普通の人よりはたくさん食べるが、同じ食べ物を食べている事から外見は普通の人と変わらないが、この戦闘機人独特の身体的特徴からギンガは、自分は普通の女性のように妊娠できるのか不安と疑問をもっていた。
戦闘機人の開発の歴史は旧暦の頃より幾度も開発が試みられたてきたが、旧暦の時代にあった技術力では、完成の域に達したものはほとんど存在せず、「肉体と機械との間で起こる拒絶反応」や「長期使用における機械部分のメンテナンス」など本来人体に機械を移植・融合させることは免疫を初めとした幾つもの問題があり、実用化は不可能とされていた。
また、世間でも倫理的、技術的な問題からタブー視されていた。
しかし、スカリエッティがこれまでの戦闘機人の製造理論を基に新たな戦闘機人の製造理論を生み出したことにより、スカリエッティ自身は十二人の戦闘機人、ナンバーズを・・そして彼とは異なるとある謎の組織がギンガとスバルを生み出した。
旧暦の頃より研究と開発が進められてきた戦闘機人の研究であるが、そんな長い研究でも、戦闘機人の妊娠・出産の記録が未だに存在していない。
もし、過去の古い記録でも戦闘機人の妊娠・出産記録があれば、ギンガもここまでは不安にならないが、旧暦、そして新暦になってもやはり戦闘機人の妊娠・出産記録はない。
そもそも戦闘機人を生み出した研究者たちは戦闘機人を兵器として生み出し、妊娠・出産の機能なんて二の次が想定さえしていない可能性が高い。
ただ、ギンガはＪＳ事件の事をフェイトとティアナから大まかな概要は聞いたが、細かな詳細は知らされていない。
その中で、スカリエッティが生み出した戦闘機人・・ナンバーズの体内には自分のコピー因子が埋め込まれており、例え自分が滅びても一月もすればその誰かが新たなスカリエッティとして記憶を引き継ぎ新生するという機能を植え付けていたが、ナンバーズが全員逮捕され

た後、この因子は除去されたが、この仕掛けはある意味妊娠に近い仕掛けなのだろうが、ギンガはこの事実を知らない。
（リニスさんや忍さんなら、分かるかな？）
デバイスを製作できるリニス、そしてこの世界に次元漂流してから自分の身体のメンテナンスをしている忍ならば、例えミッドの技術者でなくとも戦闘機人のギンガが妊娠出来るか分かるかもしれない。
（リニスさんならすぐに聞けるから時間があったらまずはリニスさんに聞いてみよう）
忍は地球に居るので、すぐに確認する事は出来ないが、まほろばの医務官であるリニスならば、時間を見て話をすることが出来るので、炊き出しが終わったら時間を見てリニスに相談へ行こうと思うギンガであった。

一方、良馬は基地司令官の下へ行き、今回、艦と乗員の検死調査で判明した結果を地球へ報告する場面にオブザーバーとして参加した。
地球との通信が繋がるとモニターの向こう側に出たのは藤堂ではなく、参謀長の西郷であった。
「藤堂長官はご不在でしょうか？」
「うむ、長官は現在、北アルプスドックのヤマトへ表敬訪問に出ておる」
「ヤマトへ？」
「ああ、近々ヤマトは太陽系周辺のパトロールの為に出航するためだ」
（太陽系周辺のパトロール任務なのに長官自らが表敬訪問？なんか妙だな・・・）
良馬は藤堂の行動に違和感を覚えた。
「アルファ星の現状はどうなっておる？」
アルファ星が謎の艦隊に突如、攻撃を受けた事は当然、西郷は知っているが、事態は刻一刻変化しているので、現在のアルファ星の状況を訊ねる。
艦と乗員の検死前にも地球へ一度、襲撃してきた艦隊の撃破の知らせは送っているが、その後の調査報告はまだ入れていない。

「当惑星を襲撃した謎の艦隊は、まほろば以下の守備艦隊が攻撃し、何処へと撤退して行きましたが、今度の襲撃にも備え、守備艦隊の一部が引き続き、軌道上で警戒をしております。住民の方々には炊き出しと無償で負傷者の手当てを行っております」
確認の為に司令官は西郷に襲撃してきた艦隊の撃破と現在、被災した住民に対しての支援を行っている旨を報告し、
「次に撃破した艦隊の中で、比較的原型を留めている艦をドックまで曳航して調査をした結果、生存者は認められませんでした」
「どこの惑星国家に所属しているのかは判明したのか？」
「いえ。原型を留めていたとはいえ、艦橋が吹っ飛んでいたので、航海ログなどのデータも吹っ飛んでいたみたいでどこの惑星国家に所属しているのか不明です」
「そうか・・・その他に何か分かった事は？」
「エンジンを調査した技師の話では、この艦のエンジンの構造がガミラスの宇宙艦艇のエンジンの構造と酷似していると言う結果が出ました」
「ガミラスと!?」
ガミラスと似た宇宙エンジンを持つ艦と聞き西郷は驚愕する。
「はい。ただ、艦内に残っていた乗員の遺体を検死した結果、ガミラス人の特徴を持った者は居ませんでした」
「むぅ～・・・」
この不可解な事態に西郷も唸るしかなかった。
ガミラス人が乗っていなかったにもかかわらず、ガミラスの宇宙艦艇と酷似したエンジンを持つ謎の惑星国家・・・
この謎が解明されるのはもう間もなく事であった。

百四十八話　ジュラ来訪

北アルプスのドックで整備されていたヤマトは遂に出航準備が整い、朝日を浴びながら、第二の地球を求めて地球を発進した。
地球を出航したヤマトは月へと針路をとり、まずは主砲の訓練射撃を行う。
暗黒星団帝国との戦いから幾日かが経過しており、ベテランのヤマトの乗員でも僅かなブランクがあったので、太陽系内で勘を取り戻さなければならない。
「命中率９８％」
「よし、腕は鈍っていないな」
「だが、射撃開始まで二十五秒かかっています」
「かかりすぎだな。十秒後半から二十秒に短縮しなければならない」
この後の訓練の課題を見つけつつ、まずは新人宇宙戦士の洗礼とも言えるワープ体験をしてもらう事になる。
古代は艦内マイクの電源を入れて、艦内放送を行う。
「総員に告ぐ、これよりヤマトは火星圏までワープを行う。総員ワープ準備!!」
「いきなりワープか・・・新人にはキツイんじゃないか？」
島が古代に言うが、
「だからこそ、今の内に慣れて貰わないといけないんだ。太陽系内に居るうちにやるべきことはやっておかないとな」
「なるほど・・・ワープ自動装置セットオン」
「メインエンジン異常なし、エネルギー上昇」
島がワープをする為、航路をセットし、機関長である山崎が機関長席でエネルギー調整を行う。
「スーパーチャージャーチェック。作業をしながらで良いから聞くように!!新人である君たちも訓練校でワープについて学んだと思うが、言うまでもなくワープは時間の波の頂点から頂点へと飛んで、本来なら何日もかかる距離を一気にすっ飛ばして航行する航法だ。ただし、

机上で学ぶのと実際の体験は違うぞ、ワープは便利であるが決して生易しいモノではない。失敗すればそれは死に直結する航法だ。迅速に正確に作業をするんだ!!」
機関室では徳川が新人たちにワープについての注意事項を説いた。
厨房では幕ノ内と平田がチェックボードを手に厨房の食器や調理器具をチェックしながら新人たちに指示や注意をする。
「ワープ時体勢。訓練校で習っただろう?そんな座り方では身体に負荷がかかるぞ。もっとシートを倒してベルトをしっかり締めろ」
やがて、艦内の各部署でワープ準備が整うと、
「カウント開始!!十、九、八、七、六、五、四、三、二、一・・・ワープ!!」
通常空間から亜空間へ放り込まれる強い圧迫感がドッと新人たちの全身に襲い掛かると同時に髪の毛が総毛立ち、身体中の神経と血管がキリキリと苦痛の悲鳴をあげる。
この衝撃で失神したり、気分が悪くなる者が続出する。
実際、最初のイスカンダルへの航海で古代たち第一艦橋のメンバーも初めてのワープでは失神したし、第十一番惑星でヤマトに救助された斎藤たち屈強な身体の空間騎兵たちも失神はせずともこの衝撃でワープ酔いする者が続出したりした。
しかし、回数をこなすと自然とこの衝撃に身体も慣れてくるので、最初のワープ体験はまさに宇宙戦士が体験する洗礼なのだろう。
苦痛がフッと消えると再び通常の宇宙空間に戻る。
すると、ヤマトの前方には火星の姿があった。
「ワープ終了、現在位置、火星軌道手前・誤差の範囲０．００３。十分な許容範囲だ」
「よし、これより火星圏のアステロイドベルト付近で実戦訓練を行う」
古代はワープアウトしたばかりだが、早速訓練を行うように指示を出す。
ヤマトの艦首魚雷発射口からは一発のロケットが発射され、しばらくするとロケットの中からは標的用のダミー戦艦が出現する。
「ヤマト右舷前方二十五度に敵艦発見!!距離四万五千宇宙キロ」

「コスモタイガー発進用意!!」
パイロットルームから山本、坂本、椎名たちが格納庫にあるコスモタイガーに次々と乗り込む中、ワープ酔いで足元がおぼつかない揚羽たち新人は上手くコスモタイガーに乗れなかったり、格納庫の床に倒れたりしている。
「こら、肝心な時にモタモタするな!!敵は待っていてはくれないぞ!!」
『は、はい～』
新人たちはワープ酔いをする中、四苦八苦しつつもコスモタイガーへと乗り込む。
「コスモタイガー、発進準備完了!!」
「発進!!」
コスモタイガーは次々とヤマトから発艦する。
しかし、ワープ酔いが醒めない新人たちは編隊がなかなかとれない。
「何している!?ただちに戦闘態勢をとれ!!五番機、七番機、八番機、遅れているぞ!?」
『す、すみません!!』
四苦八苦しながらもコスモタイガー隊は戦闘態勢を取り、標的用のダミー戦艦へと迫る。
「敵艦発見!!これより攻撃を開始する!!」
山本を先頭にダミー戦艦へと攻撃を仕掛けるコスモタイガー隊。
コスモタイガー隊は何段にも分かれダミー戦艦へ波状攻撃をしかける。
「坂本隊、椎名隊、攻撃の時間にムラがあるぞ!!もっと綿密にしろ!!」
コスモタイガー隊がダミー戦艦相手に波状攻撃の演習を行って居る頃、ヤマトの医務室では、
医務科の乗員たちが負傷者役の乗員たちをストレッチャーで運んでくると、佐渡が診察をして、診察が終わった負傷者役の乗員たちは、次に医務科の乗員たちの手により薬を塗ってもらい、ガーゼ、絆創膏、湿布を貼ってもらい、包帯を巻かれ、治療が終わった患者役の乗員たちは医務室の外へ出る。

ただ、患者役の乗員の中には佐渡がおでこに白い三角のシールを貼られる者も居た。
「こら!!死んだ者は冷凍保存室じゃ!!」
「あっ、はい」
佐渡がおでこに貼った白い三角のシールは死亡者を示す天冠だった。
艦尾の被弾・故障とされる演習箇所では真田本人が自ら出向き、新人たちに指示を出していた。
「遅い!!何、モタモタしておるか!?」
『は、はい～』
「新人だからと言って容赦はせんぞ!!いいか!?ヤマトのどてっ腹に穴が開けば中に居る俺たちは真空の宇宙へ吸い出され、ヤマトは一貫の終わりだ!!素早く隔壁を閉め、消火をし、ヤマトの傷口を溶接する!!この一秒の成否がヤマトと自分たちの運命を左右するんだ!!『新人だから遅かった、間に合いませんでした』では、済まないんだぞ!!」
真田の檄にしごかれながら技術班の乗員たちは破損・故障箇所の応急作業を行った。
第一艦橋では、
「アステロイドベルトまであと五百宇宙キロ」
「もうそこまで来たか・・・」
訓練に集中していたせいかアステロイドベルトまで進出して事に気付かなかった。
パネルには現在の演習状況が表示されていた。
「被弾箇所の火災鎮火」
「死傷者の収容完了」
「被弾箇所、応急修理完了」
「真田さん、まもなく次の演習地のアステロイドベルトです」
「了解」
「アステロイドベルトにて敵の根拠地を発見!!」
「コスモタイガー隊は帰還せよ」
「了解」

コスモタイガー隊へ帰還命令を下し、コスモタイガーはヤマトへと戻る。
「主砲発射用意!!」
帰還するコスモタイガーに代わり、アステロイドベルトへ接近するヤマト。
この無数に存在するアステロイドベルトには中型のアステロイドの中を刳り貫いて作られた防衛軍のアステロイドベルト基地の他に演習地も設置されており、そこには標的用の小さなアステロイドも存在する。
「方位、ヤマト左舷前方十五度、距離三百宇宙キロ」
「砲撃用意完了!!」
「撃て!!」
ヤマトの主砲からショックカノンが標的用のアステロイドに向かい飛んでいく。
各部署で演習が行われている中、土門が所属する生活班炊事科の仕事場であるヤマトの厨房では戦闘配食の弁当が作られている。
土門は出来上がった弁当を各部署へ運んでいた。
第一砲塔に来ると砲術科の乗員たちが代わる代わるでヤマトの砲をぶっ放していた。
(いいな・・・俺も撃ちたい・・・)
砲術科志望だった土門にとって今、第一砲塔で主砲を撃っている同期が羨ましかった。
そう思いつつもまずは自分の仕事を務めなければならず、土門は弁当が入ったボックスを床に置く。
そして主任の坂巻浪夫に声をかけた。
「弁当、置きます!!」
「おう、全員、交代で飯を食え!!あぁ～腹減った・・・」
砲術科の乗員たちが代わる代わるで、主砲を撃つ者、弁当を食べる者に分かれる。
そんな中、土門は坂巻に声をかける。
「坂巻キャップ、私に撃たせてもらえませんか?」

「何？お前、やれるのか？」
「はい!!お願いします!!」
「じゃあ、俺が弁当を食っている間、撃たせてやる」
「ありがとうございます!!」
土門は砲術席に座り、標的用のアステロイドへ狙いをつけて主砲を放つ。
土門が撃ったショックカノンは標的用のアステロイドへと命中する。
「やった!!」
見事標的用のアステロイドへ命中したが、
「バカ、命中点を外している。まだ十年早い」
土門が撃ったショックカノンは確かに標的用のアステロイドに命中したが本来当てる箇所からズレていた事を坂巻に指摘された。
その後も演習は続き、演習時間は故に十六時間にもなる猛演習だった。
雷王作戦に従事した当時、新人だった北野、徳川、坂本、椎名たちの時も作戦前に演習を行ったが、今回の演習はその時の演習以上の演習だった。
北野たちが行った演習と今回の演習の違いは、北野たちは士官学校・訓練校を正規の時期に卒業したが、今回のヤマトの新人たちは繰り上げ卒業だったので本来の卒業までの間に行われるはずの演習をこの機会で取り戻すかのように行われたのであった。
演習が終わり、誰もが疲れ果てて、居室に戻るとベッドに倒れ、そのまま眠ってしまう。
土門も他の新人同様、疲れ、自分の部屋に戻るとベッドの上に倒れる。
しかし、初めてヤマトの主砲を撃ったことでまだ興奮していたので、すぐに眠気は押し寄せてこなかった。
「十六時間ぶっ続け・・・全く思いやりがないなぁ～ヤマトの艦長は・・・」
「疲れたぁ～」

同室の新人たちは疲労困憊の中、古代に愚痴ったりしている。
そんな中、土門は自分の拳を広げたり閉じたりしていた。
「おい、土門。何やっているんだ？」
訓練校の同期で技術班に配属になった坂東平次が土門に声をかけて来た。
そんな坂東に対して土門はニヤリとドヤ顔をして、
「さっきの演習でヤマトの主砲を撃ったんだよ」
「ええっ!!お前、生活班だろう？どうして主砲を撃てたんだよ!?」
「弁当を運んだ時、坂巻キャップに頼んだんだよ」
土門の発言を聞き、坂東は驚き、部署が異なる土門が何故、ヤマトの主砲を撃てたのかを訊ねると、土門は坂東に主砲を撃てた理由を自慢げに話した。
そして坂東のリアクションを見て、満足したのか土門はトイレに行ってから寝る事にして、トイレで用を済ませると自室へと戻る。
そんな中、平田の部屋から明かりが漏れている事に気づき、平田の部屋に向かうと、彼はデスクで本を読んでいた。
「失礼します」
「ん？土門か？どうした？」
「平田さんの部屋から明かりが見えたので気になって・・・・その机の上にあるのは何です？漫画ですか？」
「いや、これだ」
平田が土門に見せたのは『宇宙生命体の栄養学的分析』と書かれた本だった。
「土門」
「はい」
「見せたいモノがある。着いてこい」
「は、はい」
もう寝ようとしていた中、土門は平田に射撃場に連れて行かれた。
射撃場では第一艦橋のメンバーを中心に各部署の長たちが射撃訓練をしていた。
（あれだけの訓練の後でまだ射撃訓練を・・・・）

射撃訓練場での訓練を見た土門は唖然とする。
「こっちにはもっと凄い奴がいるぞ」
「えっ？」
平田は射撃場に隣接する訓練場へ土門を案内すると、訓練場には古代がおり、彼もまた訓練を行っていたが、この訓練場はかつて兄の守やティアナも訓練を行った場所で、電気ショックを与えてくる標的がある本格的な模擬戦用の訓練場だった。
「艦長・・・」
「俺と古代は同期でね。務める部署は違うがそれぞれがプロフェッショナルになろうと約束した。奴もあれだけの作戦指揮をして、まだ自分を鍛えようとしている。身体を虐め抜くんだ。奴の指はヤマトの波動砲の引き金にかかる。撃ち損じたらヤマトが沈む・・・ヤマトの破滅は地球の破滅に繋がるかもしれない。だからいつも彼に要求されるのは絶対と言うことだ。万分の一にも狂わぬ正確さを求めて柔軟な身体と精神の統一を作り上げているんだ」
時刻は日本時間で午前三時を示していた。
平田と土門は一度、炊飯室へ戻ると平田はレモンティーを淹れ始める。
「そりゃあ、奴だって人間だ。恐ろしいと言っている、不安だと言っている。だから鍛えるしかない。俺に出来るのは彼の為に温かいレモンティーを用意して待ってやることだけだ・・・」
平田はレモンティーを用意して古代が来るのを待った。
やがて上半身裸で肩にバスタオルをかけ、シャワーで汗を流した古代が炊飯室へやって来た。
そして、平田が用意したレモンティーを一口飲み、
「土門、まだ起きていたのか？疲れているだろう？」
「はぁ・・・疲れてはいますが、何だか、いい気持ちです。興奮しています」
「そうか・・・始めは誰でもそうだ」
そう言って古代はカップに残っていたレモンティーを飲み干す。
「うまい」

「もう一杯飲むか？」
「ああ、頼む」
土門はレモンティーをカップに注ぐ平田に近寄り、声をかけた。
「平田さん、明日からはこの役・俺にやらせてください」
土門の頼みに平田は笑みを浮かべて頷いた。

ヤマトが太陽系内で猛訓練を行っている中、ケンタウロス座アルファ星では・・・
先日、謎の艦隊から突如攻撃を受け、アルファ星周辺に展開していた戦闘衛星と無人攻撃ステーションが破壊されてしまった事から、アルファ星の守備は有人の守備艦隊となった。
幸い冥王星、第十一番惑星、アステロイドベルト基地から援軍の守備艦隊が来たことから当初、アルファ星を開拓したばかりの頃と比べ駐屯する戦力は格段に上がった。
あの時、アルファ星を攻撃してきた謎の艦隊はその全てを撃破した訳ではなく、大半はどこかへワープして逃げて行ったので、再びアルファ星を攻撃してこないと言い切れないので、アルファ星周辺の哨戒は連日行われていた。
まほろばも僚艦を率いてこの日も哨戒任務を行っていた。
「いまだにあの時、襲撃してきた敵の正体は不明のままか・・・」
星の海を眺めつつ良馬は先日、アルファ星を襲撃してきたあの艦隊について考えていた。
「あの時は大半を逃してしまいましたからね・しかし、あの艦隊が再びアルファ星に攻勢をかけてくる様子がありませんね」
「今の所はね・・・ただ、いつ仕掛けてくるか分からないからこうして哨戒任務を続けなければならないのだが、不安を抱えるアルファ星に居る開拓民の人たちの事を思うと、やはり敵の正体と根拠地を掴みたいものだ」
あの時、それなりの戦力があれば敵艦隊を逃すことなく殲滅できたと思うと悔しい思いがあるが、地球の軍備もまだ復興途上なのだと思うと贅沢は言えない。

あの時の艦隊との接触もなく、平穏な哨戒任務が続いていた時、
「っ!?艦長、前方に多数の空間歪曲反応を確認!!」
「なにっ!?」
突如、まほろば以下の哨戒艦隊の前面に多数の空間歪曲反応が現れ、次々と宇宙艦艇がワープアウトしてきた。
「あの時の艦隊か・・・・?」
先日のアルファ星を襲撃してきた艦隊が再びアルファ星へ攻勢にかけて来たのかと誰もが思った。
「総員、戦闘配置!!アルファ星の基地へ緊急連絡!!」
「は、はい!!」
ギンガが未確認艦と遭遇した旨をアルファ星の防衛軍基地へ連絡する。
やがてワープアウトした艦隊の映像が、まほろばの艦橋にあるメインモニターに表示される。
「ん?あの艦のシルエットは・・・・」
「ま、まさか・・・・」
メインモニターに映し出されたのは先日アルファ星を攻撃してきた艦隊ではなく・・・・
「ガミラスのゲルバデス級?」
「それにガイベロン級を二つくっつけた様な艦も居ます」
メインモニターに映し出されているのはガミラスのゲルバデス級とそれに似たシルエットを持つ大型の戦闘空母らしき艦が一隻にゲルバデス級が三隻、同じくガミラスのガイベロン級を二隻くっつけたシルエットをした大型の航宙母艦であった。
(ガミラスは既に新惑星を発見し、新型艦を建造していたのか・・・・?)
(いや、その判断はまだ早計か?)
ゲルバデス級は兎も角、旗艦と思われるゲルバデス級に似た戦闘空母に二隻のガイベロン級を合わせた大型の航宙母艦はこれまでのガミラスとの戦闘、共闘では見なかった事から新造艦であることが窺えるが未だに推測の域を脱しない。
(しかし、ガミラスが何故、この宙域に・・・・?)

問題はガミラスがどう言った理由でケンタウロス座まで進出してきたかである。
個人的な関係であったが、ガミラスと地球は停戦している形である。
しかし、終戦ではなく、あくまでも停戦の様な形なので、ガミラスが新たな居住惑星を見つけ、再び地球へ侵攻してきたのではないか？
そんな考えが一瞬、脳裏を過るが、ワープアウトしてきたガミラスの機動部隊ではとても地球を攻略できる戦力ではない。
デスラーも地球の軍備を正確に把握している訳ではないだろうが、それでも２１９０年代に侵攻してきた時よりも大幅に力をつけている事は知っている筈だ。
ガミラス側の意図が読めないが、いきなり発砲するのはまずい。
ガミラスが一体どう言った理由で此処まで来たのかを知るには相手と交信して訊ねなければならない。
「・・・・通信長」
「はい」
「ガミラスの周波数で相手と交信を求めてくれ」
「りょ、了解」
ギンガはアルファ星の基地へ緊急電を送った後、次にワープアウトしてきたガミラス艦へガミラスが使用していた周波数で通信を送った。

ガミラシア　艦橋
「ワープアウト完了・・・・」
「現在位置は、ケンタウロス座アルファ星付近の宙域です」
流石のガルマン・ガミラスのワープ技術力でもガルマン・ガミラス本星から地球まで一気にワープは不可能だった。
しかし、戦場である東部方面の宙域は極力ワープで切り抜けてきた。
そして、艦隊は現在ケンタウロス座付近まで進出していた。
そんな中、ガミラシアに通信が齎された。

「ジュラ様、バレル様、旧式の周波数で通信がきました」
　通信士がジュラとバレルに旧ガミラス時代に使用されていた周波数で通信が来たことを報告する。
「旧式の周波数？」
　旧式の周波数と言う事でバレルは首を傾げる。
「はい」
「それで、なんと言ってきている？」
　バレルが通信士に通信内容を訊ねる。
「『停船シ、貴艦ノ所属、目的ヲ答エヨ』・・・・以上です」
「恐らく地球の艦でしょう」
　ジュラには誰が通信を送って来たのか分かっていた。
「いかがなさいますか？」
　バレルがジュラに指示を求める。
「私たちは地球との関係を築くために来ました。ここは地球側の指示に従いましょう」
「はっ、全艦停止。通信士、こちらの所属を相手側に送れ」
　バレルが通信士に自分たちの所属を伝えるように指示出すが、
「いえ、ここは私が直接話します。映像回線を開いてください」
「えっ？ジュラ様自ら・・・・」
　ジュラの行動にバレルをはじめ、ガミラシアの艦橋に居た者たちが度肝を抜かれるが、彼女の護衛兼世話係のメルダは父親であるデスラーらしい行動だと思った。

　まほろば　艦橋
「ガミラス艦より映像通信です」
「分かった。パネルに回してくれ」
「はい」
　ガミラスからの返答があったのだが、通信ではなく映像通信だったので、パネルに投影してもらう。
　すると、パネルに映し出されたのは・・・・
「まほろばの皆さん、お久しぶりです」

「えっ？」
「あ、貴女はっ!?」
「じゅ、ジュラさん!?」
パネルに映し出された人物はデスラーの娘であるジュラだった。
まさかの人物の登場にまほろばの艦橋メンバーは驚く。
「ジュラさんがどうして此処へ？」
良馬はジュラにわざわざ此処まで出向いて来た訳を訊ねる。
「その件に関しては直接、そちらへ出向いて話をしたいのですが、よろしいでしょうか？」
「えっ？あっ、はい・・・分かりました」
「では、今からそちらへ出向きます」
「は、はい。お待ちしております」
ジュラは通信越しではなく、直接まほろばに来て自分たちが此処まで来た要件を話したいと言うので、その訳を知るにはジュラをまほろばに受け入れるしか方法がない。
そもそも彼女は、ジレル星人特有の性格故か嘘は言わないだろうし、彼女に対して嘘は通じない。
まほろばはジュラが乗艦する新型のゲルバデス級と思われる戦闘空母に横付けをしてジュラの到着を待つ。
一応、警戒しているのか？それともポーズなのかは分からないが、ゲルバデス級と新型のガイベロン級の航宙母艦もまほろば周辺を包囲する様な陣形を取り、地球側もパトロール艦、護衛艦も警戒態勢を取る。
しかし、ゲルバデス級が戦闘甲板を開いていないのでそこまで厳しく警戒している訳ではなさそうだ。

ガミラシア　艦橋
「じゅ、ジュラ様、些か危険ではありませんか？」
ジュラの行動にバレルは自重してくれと諌めるが、
「大丈夫です。私自身、短期間でありますが、あのまほろばに乗艦していた経験がありますから」

「で、ですが・・・」
「バレル大使、私はモニター越しではなく、ちゃんと面と向かって地球の方々と話をしたいのです」
「は、はぁ・・・」
「ちゃんとメルダも連れて行きますから」
バレルに留守を頼み、ジュラはメルダと共にまほろばへと向かう。
「ジュラ様、もしかしてジュラ様がまほろばへ行きたい理由はやはり・・・」
メルダはジュラがまほろばへ直接行きたがる理由に心当たりがあった。
「あら？メルダ。私はガルマン・ガミラスの特使として赴くのよ」
「それならば、バレル大使でも問題はないのではありませんか？何もジュラ様御自らが赴かなくとも・・・」
「上に立つ人間が率先して動かなければならない・・・父様もそうでしょう？」
「・・・ジュラ様・・・ジュラ様は既に私の心を読んでおられ、私が何を言いたいのかもうお分かりの筈では？」
メルダはジト目でジュラを見る。
「でも、内心メルダも喜んでいるのではなくて？」
ジュラは直接口にするのではなく、遠回しな返答をする。
先ほど、メルダの言う通り、ジュラはメルダの心の声を読み取っており、彼女が何を言いたいのかちゃんと理解しているのと同時にメルダの隠された本音もちゃんと読み取っていた。
ジュラの返答を聞き、メルダは気まずそうにジュラから視線を逸らす。
「心配せずとも、ちゃんと特使としての仕事もしますから、それが終わったらまほろばの人に頼んでアレを出してもらえないか頼んでみます。勿論、メルダの分もちゃんと頼みますから」
「は、はい」
「では、行きましょう」
ジュラはメルダが操縦する内火艇に乗り、まほろばへと向かった。

ジレル星人の血が濃いジュラは地球型の空気でも平気だが、ガミラス人であるメルダはちゃんとまほろばへ向かう前に酸素適合薬を飲むのを忘れなかった。

「まさか、ジュラさんが来るなんてな・・・」

ガミラス側の予想外である客人に良馬は戸惑いが隠せない。

「あまりにも意外過ぎる客人ですね」

「ああ・・・」

それはまほろばの第一艦橋のメンバーも同じだ。

「しかし、一体何の用があって来たのでしょうね？」

「それは直接本人に聞いてみる事にするよ」

良馬はジュラを出迎えに行く為、艦橋を後にした。

やがて、ガミラスの内火艇がまほろばへ到着し、まずはメルダが降りてくる。

そして、悠々とした足取りでジュラが内火艇からまほろばの格納庫へと降り立つ。

彼女はデスラーのカリスマ性をちゃんと受け継いでおり、ジュラの纏っている雰囲気は以前に出会った時よりも増している。

「お久しぶりです。ジュラさん」

ジュラを出迎えた良馬は若干緊張した面持ちで彼女へ挨拶をする。

「はい。月村さんもお元気そうでなによりです」

「お話があるということですので、応接室へご案内いたします。どうぞ、こちらへ・・・」

来訪理由を流石に格納庫で話す訳にはいかないので、良馬はジュラとメルダを応接室へと案内する。

（本当は食堂でもいいんだけどな・・・）

ジュラは応接室ではなく、食堂ならば特使としての話をした後、すぐに例のモノを食べる事が出来るので、食堂でも構わないと思いつつも特使としての役目があるので、それは黙っていた。

「そう言えば、フォムトやリッケさん、バーレンさんたちはお元気ですか？」

良馬はジュラにシャンブロウに迷い込み、共闘してガトランティスと戦ったバーガーたちの事を訊ねた。
「はい。皆さん元気ですよ。ただ、バーレンさんは軍を退役して悠々自適な隠居生活を送っています」
「そうですか・・・」
今回の来訪にバーガーたちは来ていないみたいだが、新惑星でバーガーたちは元気にしているようだ。
彼らの事を聞けてホッとした良馬。
やがて、応接室に着き室内にある椅子へ案内すると、
「艦長、失礼するぞ」
ディアーチェがジュラとメルダにもてなしのお茶とお茶菓子を出す。
ジュラはお茶菓子を一つ摘まみ、カップに口をつけ、お茶を一口飲む。
「さて、それではお話をお聞きしましょう」
そして良馬はジュラに来訪理由を訊ねる。
「はい。月村さんは薄々分かっていると思いますが、私たちガミラスはイスカンダルで暗黒星団帝国との戦いの後、第二の故郷を探し求める放浪の旅に出ました・・・」
「・・・」
「旅の終点がいつになるのか分からない果てしなく長い旅になるかと思われましたが、銀河系中心部核恒星系に来た時、ガミラスとイスカンダルに似た二連星の星を見つけました。そして、その星にはガルマン民族と言う民族が住んでいました」
「ガルマン民族・・・」
「はい。このガルマン民族はガミラス民族と同じ民族で遠い昔、ガルマン星から一部のガルマン民族がマゼラン星雲へと移民し、ガミラスを建国したのです」
(なるほど、ガミラスがイスカンダルを攻撃、占領しなかったのは、大家と下宿人みたいな関係があったからか・・・)
ガミラス建国の歴史を聞き、ガミラス星は昔、イスカンダルの領地

だった後のガミラス星になる星を当時のイスカンダル王家が移民してきたガルマン民族に与えた恩があったのだろう。
　ガミラスがその気になれば、イスカンダルへ遊星爆弾の雨を降らせてガミラス人が住める環境にすることも可能だった筈だ。
　にもかかわらずガミラスはイスカンダルを攻撃せず、逆に敬う理由にはガミラスの建国にイスカンダルが関わっていたからだ。
「ただ、当時のガルマン星はボラー連邦の占領下に置かれており、ガルマン星の人々は奴隷扱いされておりました」
「ボラー連邦？聞いた事の無い勢力ですね」
「はい。私たちもガルマン星を発見するまでは知らない勢力でした」
（それにしてもあのガミラスと同じ民族であるガルマン星人を奴隷化するなんて一体どんな勢力なんだ？）
　ジュラの話の中に出てきた『ボラー連邦』と言う新たな星間国家に嫌な予感を覚える良馬。
「父たちガミラスの方々は自分たち、祖先の故郷をボラー連邦から解放する為にガルマン星でレジスタンス活動をしている方々と協力し、ガルマン星からボラー連邦を駆逐し、銀河系中心部でもボラー連邦と決戦を行い、周辺の星々をボラー連邦から開放していきました。そして、解放後、父は星の名前を『ガルマン・ガミラス』と名を改めて、総統へ選出されました」
「なるほど、そのガルマン星やボラー連邦に支配されていた星々の人たちにとって、貴女のお父様であるデスラー総統はまさしく救世主ですからね」
「はい」
（やはり予想通り、ガミラスは新惑星を発見していたか・・・）
　ジュラが乗っていた新型のゲルバデス級や双胴型のガイベロン級を見る限りガミラス時代にはなかった新造艦だったので、それらの艦艇からガミラスが新惑星を見つけたのではないかと推測した良馬であったが、その時はまだ確証が持てなかったのだが、こうしてジュラから話を聞き、ガミラスが新惑星を発見したのだと確証が持てた。
「それで、私たちがこうして赴いた理由ですが、地球へガルマン・ガミ

ラスの建国と地球との同盟を結びたく、私がガルマン・ガミラスの特使として赴いた次第です」
「えっ？地球との同盟!?」
　ジュラの来訪目的を聞き、良馬はまたもや驚愕する。
「ガミラスとの一件でもちろん、地球との同盟はそう簡単に行くとは思ってはいません。ですが、父は地球との同盟を望んでいます」
「・・・・」
　ジュラの言う通り、地球はイスカンダルからのコスモクリーナーで絶滅の危機から脱することが出来、ガミラス戦役前の技術を手に入れることが出来た。
　しかし、ほんの少し前のガミラスとの戦争の過去はそう簡単には拭えない。
　未だにガミラスに対して憎悪を持っている地球人だっている。
　そんな中で例え国家の名前を変えたとは言え、旧ガミラスと今度は同盟を組もうと言われても『はい。分かりました』とは言えないだろう。
　それは特使のジュラ自身も理解しているし、一介の軍人である良馬が決定できる問題ではなかった。
「わかりました。その件は地球連邦政府と交渉していただきましょう。ジュラさんたちの来訪はこちらから地球連邦政府に知らせておきます」
「分かりました。月村艦長のご厚意に感謝いたします」
「それで、軍人の自分としてはそのガルマン星を占領していたボラー連邦についてお聞きしたいのですが・・・・」
　良馬の問いにジュラはメルダに視線を向け、彼女は頷くとタブレット端末のようなモノを取り出す。
「ボラー連邦は銀河系の一翼・丁度オリオン腕（太陽系）の反対側に広がる広大な星間国家です。我々がガルマン星に来たばかりの頃は銀河系の半分以上の領域を支配する星間国家でした。ガルマン・ガミラス建国後、銀河系中心部は我がガルマン・ガミラスが抑えており、全体の支配領域は銀河系の３０～４０％ほどになりましたが、依然強大

な星間国家であることにかわりはありません」
　そして、ジュラにかわりメルダが良馬にボラー連邦について説明をした。
（銀河系にそのような星間国家が存在していたとは・・・・地球がいかに井の中の蛙であることを自覚させられるな・・・・）
　タブレット端末に映るボラー連邦とガルマン帝国の勢力図を見て地球が発展途上な星間国家だと現実を突きつけられる。
「月村艦長。私からもよろしいだろうか？」
「はい？」
　すると、次はメルダが良馬に質問をしてきた。
「地球艦隊は何故、ここまで進出していたのだ？何かの任務か演習なのか？あっ、勿論、軍の機密になるのであるならば、語らなくて結構だが・・・・」
「いえ、そこまで機密になる訳ではないので大丈夫です。現在、地球はケンタウロス座まで宇宙開拓を行っているのですが、先日謎の艦隊から突如攻撃を受けました。大半はワープで逃げられましたが、撃破した艦を調べた結果その宇宙艦艇のエンジンがガミラス製のエンジンの造りに似ている事が判明したのですが・・・・」
「えっ？ガミラス製のエンジン？」
「はい」
　良馬はここで先日、アルファ星を攻撃してきた艦隊がもしかしたらガルマン帝国の艦隊もしくは二人が何かを知っているかもしれないと思いアルファ星を攻撃してきた艦の調査報告を含めて二人に話した。
「・・・・」
　良馬の話を聞き、ジュラとメルダは東部方面軍の艦隊が地球の開拓惑星を攻撃したのではないかと思った。
　地球との同盟を模索している中、旧ガミラスとの因縁もあるなかで、さらに溝を深める出来事があれば今後地球と同盟何て夢のまた夢となってしまう。
「その地球が開拓した惑星を攻撃した艦の画像があれば見せていただ

けないだろうか？」
「・・・どうぞ」
　今度は良馬がタブレット端末を操作してアルファ星で撃破した艦の画像を二人に見せる。
「これは・・・」
「何か心当たりがありますか？」
「ええ、これこそボラー連邦の宇宙艦艇です」
「えっ？」
　ジュラ曰くアルファ星を攻撃してきたのはガルマン帝国ではなくボラー連邦の艦である言う。
「しかし、この艦が仮にそのボラー連邦の艦だとして、何故エンジンの構造がガミラス製のエンジンに似ていたのでしょう？」
「それはボラー連邦がガルマン星を占領していた事が関係しています」
「と言うと？」
「ガミラス同様、ガルマンの方々も優れた技術力を有している星で、ボラー連邦がガルマン星を占領したのはその技術力を欲した為でした」
「つまり、ボラー連邦が使用している宇宙艦艇のエンジンがガミラス製のエンジンに似ていたのはガルマン星の技術が使用されていたから・・・と言う事ですか？」
「はい」
「なるほど・・・」
　ジュラからガルマン星の歴史を聞き、アルファ星を攻撃してきたあの謎の艦隊の所属、そして何故、ガミラス製のエンジンに似た造りをしていたのか？
　その謎がとけた瞬間であった。

百四十九話　ジュラ来訪Ⅱ　陸の改革案

第二の地球を探索する任務を帯びたヤマトは太陽系内で新人たち向けの大規模な演習を行っていた。
そんな中、ケンタウロス座アルファ星では、外宇宙から意外な来訪者一行がやって来た。
その来訪者はガミラスの総統、デスラーの娘であるジュラだった。
まほろばと接触したジュラたち一行は、来訪目的を伝えるためにジュラは護衛のメルダと共にまほろばへと赴く。
当然、まほろばの乗員たちも一体何の用があってジュラがわざわざ来訪してきたのか気になった。
そして、良馬がジュラとメルダを出迎え、応接室にて今回の来訪目的を訊ねると、彼女はまず、ガミラスが新惑星の発見と新国家の樹立を伝え、地球との同盟を提案してきた。
ジュラの話では現在の銀河系はデスラー率いるガルマン・ガミラス帝国とボラー連邦の二分した状況となっており、先日アルファ星と地球を攻撃してきた謎の艦隊の正体はボラー連邦であることが判明した。
「ジュラさんたちの来訪目的は分かりました。ただ、一介の軍人である自分一人では決めかねる案件なので、この件は地球連邦政府と防衛軍司令部へ報告させていただいてもよろしいでしょうか？」
「はい。構いません」
ジュラからの了承を受け、良馬は今回のジュラたち一行の来訪目的と先日、アルファ星を攻撃してきた名の艦隊の正体を地球の防衛軍司令部とアルファ星基地の司令部に知らせる事にした。
「あ、あの・・・月村艦長」
「はい？何でしょう？」
来訪目的を告げ、やる事をやり終えたジュラは遠慮がちな様子で良馬に声をかける。
「あの・・・実は、私とメルダがまほろばへ来たのはもう一つ目的があ

るのですが・・・」
「えっ？」
ジュラは今回の来訪目的を告げること以外にまほろばへ来た目的があると言う。
しかもジュラだけでなく、メルダにも何か目的があるみたいだ。
女性とは言えメルダは軍人なので、まほろばの何か軍事機密に属するモノを見たいとでも言うのだろうか？
「な、何でしょう？」
とりあえず、その目的を聞かなければ分からないので、良馬はジュラにその目的とやらを訊ねる。
ただ、心なしかメルダは『自分を巻き込むな』と心外そうに顔を小さく歪めているように見えた。
「実はまほろばで食べたあの『パフェ』なる食べ物を食べたいのですが・・・」
「ぱ、パフェ・・・？」
ジュラたちのもう一つの目的がまほろばの食堂で提供されているパフェを食べたいと言う事実に良馬は唖然とする。
「ダメ・・でしょうか？」
「い、いえ・・それぐらいなら・・・」
「よかった～実は、私もメルダも以前、まほろば　で食べたあの『パフェ』の美味しさの虜になっておりまして・・・またあの味に出会える日を一日千秋の思いで待っていました」
パフェが食べられると言う事でジュラの目は輝いているように見えた。
メルダの方も小さくガッツポーズをしている。
（第二の故郷となった星にはパフェがないのか・・・）
（まぁ、地球と異星だし、食文化の違いってやつかな？）
良馬はガルマン・ガミラスにはジュラとメルダの好物なるパフェが存在しない事がジュラの発言から窺えた。
二人のまほろばへの来訪目的が軍事機密とは全く関係なく食堂に行けば普通に提供されている食べ物なので、問題はなく、良馬はジュ

ラとメルダにパフェを提供することに了承を出した。
そして、応接室からまほろばの食堂へ移ると、二人は早速パフェを注文した。
それからしばらくして・・・・
「・・・・」
「お主らは一体何杯食べるのだ？あまり食べ過ぎると腹を壊すぞ」
ジュラとメルダのテーブルには空になったパフェグラスがたくさん置かれていた。
そんなテーブルの状態に良馬は言葉を無くし、ディアーチェは呆れつつも二人の腹具合を心配して忠告している。
「それは分かっているのですが・・・・」
「止めたくてもこの手が止まらんのだ・・・・」
しかし、二人にしてみれば久しぶりのパフェであり、次はいつ食べられるのか分からないので、ここで食い溜めしたかったのだ。
「ふぅ～・・・・大変に美味しかったです」
「やはり、このパフェなる食べ物は宇宙の宝だ・・・・」
心ゆくまでパフェを堪能し、備え付けの紙ナプキンで口元を拭うジュラと空になったパフェグラスを見つめながら改めてパフェの存在を褒めるメルダ。
「い、いえ・・・それでは、自分は地球とアルファ星の基地へ連絡を入れてきますので、もうしばらくお待ちください」
「はい。お願いします」
良馬は地球の防衛軍司令部とアルファ星の基地司令部へ今回のジュラたち一行の来訪目的を伝えに艦橋へ戻った。
なお、その間にジュラとメルダはパフェをたくさん食べたのでお腹が冷える事を心配したディアーチェがハーブティーを出してそれを飲んでいた。
「あっ、艦長」
「それでガミラスさんの用って一体何だったんですか？」
まほろばの艦橋メンバーも当然、ジュラたちの来訪目的は気になっていたので、艦橋へ戻って来た良馬に早速訊ねてきた。

「ああ、それについてはこの後でアルファ星の司令部と地球へ知らせるが、まずは皆に伝えておこう」
　良馬は艦橋メンバーに今回のジュラたち一行の来訪目的を伝えた。
「なるほど、ガミラスは既に新惑星を見つけて新国家を築いておったか・・・・」
「しかも銀河系中心部では勢力を二分する程の大国家になっているとはね・・・・」
「それにもう一方の勢力は先日、地球とアルファ星を攻撃してきたあの艦隊が所属していた国家だなんて・・・・」
「もしかして、それでデスラーは地球と同盟を結ぼうと・・・・？」
「デスラー総統の真意は分からないけど、確かに地球と同盟を組めば自軍の戦力と技術の強化になるしね・・・・」
　艦橋メンバーは良馬からの話を聞き驚きが隠せなかった。
　イスカンダルでの共闘からこんなにも僅かな期間で新国家を建国させた事、
　しかもそれが銀河系を二分する程の強大な星間国家へ成長させた事、
　地球との同盟を画策している事、
　そしてデスラーが新たに建国した星間国家の他に銀河系にはもう一つの強大な星間国家が存在し、その星間国家に所属する艦隊が先日アルファ星と地球を攻撃してきた事、
　いずれにせよ、この件は地球へ報告することになるが、藤堂も連邦政府大統領もきっと驚くだろう。
「とりあえず、今回のジュラさんたちの来訪目的をアルファ星基地の司令官と地球へ報告しよう。通信長」
「はい」
「防衛軍司令部とアルファ星基地へ通信回路を開いてくれ」
「了解」
　ギンガは地球とアルファ星へ通信回路を開き、良馬は藤堂とアルファ星の基地司令官へジュラたちが来訪した事、そしてその来訪目的を伝えた。

良馬の話を聞いて藤堂もアルファ星基地の司令官も予想通り驚いていた。
「まさか、ガミラスがこの短期間で新国家を建国するとは・・・」
「そしてボラー連邦か・・・」
未だに自分たちの知らない宇宙・・・銀河系の中心部でデスラーが建国した新国家、ガルマン・ガミラスとボラー連邦が激しい星間戦争を行っている事実を知り、藤堂長官はヤマトに課した第二の地球探査任務は宇宙環境の他にこの二つの星間国家との戦争に巻き込まれるのではないかと危惧した。
実際に地球とアルファ星はそのボラー連邦所属の宇宙艦隊に攻撃を受けたのだから・・・
しかし、アルファ星の攻撃については多少事実と異なっていた。
地球とアルファ星を攻撃してきたのは正確にはボラー連邦所属の宇宙艦隊ではなく、ボラー連邦から脱走した集団と言える艦隊だった。
その艦隊が所属していたボラー連邦では・・・

ここで時系列は少し時間を過去に戻す。
バース星の陥落の報告はガルマン本星に届けられたのと同じく、バース星を実効支配していたボラー連邦本星にも届けられた。
「なんだと!?バース星がガルマン・ガミラスの手に落ちただと!?」
「はい。彼奴等の通信を傍受した結果、東部戦線所属の艦隊からガルマン本星と東部方面軍司令部へバース星を陥落させた通信を送っておりました」
「お、おのれぇ～奴隷共の分際で我が神聖なる領土を侵すとは～・・・」
ゴルサコフがベムラーゼにバース星陥落の報告をするとベムラーゼは烈火の如く憤慨した。
とは言え、このバース星の陥落についてはボラー側も決して無関係ではなかった。
ガルマン星をはじめとする銀河系中心部をデスラーたち旧ガミラス陣営とガルマン星でレジスタンス活動をしていたガルマン人たち

に取られた時点でバース星をはじめとするバジウド星系のボラー連邦系の星々は分断されて孤立した点となってしまった。
　そんな孤立している状況下にもかかわらず、ボラー連邦本星はバース星をはじめとするバジウド星系のボラー連邦系の星間国家に対して援軍を送らず半ば彼らを見捨てた形であった。
　それにもかかわらず、陥落した事について憤慨するのは何か間違っている気がする。
「ゴルサコフ」
「はっ」
「バース星陥落の責任は君にある。君は国家中央作戦室の責任者なのだからな」
　するとベムラーゼはバース星の陥落の責任をゴルサコフにあると言い放つ。
「御意、立場上の責任を取るのはやぶさかではありません。しかしながら私は銀河系中心部がガルマン・ガミラスに制圧されかけた時に首相閣下へバジウド星系への援軍を進言したしました」
　しかし、ゴルサコフは冷静に言い返す。
「ほう？君はバース星陥落の責任は私にあると言うのかね？」
「無論です。首相閣下は我がボラー連邦の軍における最高司令官なのですから・・・・」
「き、貴様・・・・」
　ゴルサコフはバース星陥落の責任は自分一人だけではなく、ベムラーゼにもあると言うのだから、ベムラーゼの額には憤怒の血管が浮き出て側近たちは戦々恐々している。
「ですが、より多くの責を担うのが、現場の指揮官であることは明白です」
　だが、ゴルサコフはここで切り返す。
「ぬぅ～・・・・ボローズたちはどうなった？」
「艦隊を率いてバース星を出た後、行方不明となっております。恐らくガルマン・ガミラスの艦隊に撃破されたモノと思われます」
「それでは、彼奴等に責任を取らせる事が出来ぬではないか!?」

ボローズが既に戦死している可能性からバース星陥落の責任を取らせることが出来ない事にまたもや憤慨するベムラーゼ。
「本星にある彼ら一門の全財産を没収し、それを戦没者基金として運用する・・・無能な指揮官の一罰百戒になると同時に首相閣下への国民の信望も厚くなるかと・・・？」
しかし、ゴルサコフは代案をベムラーゼに提案し、自身に降りかかりそうになった責任問題をボローズたちに被せた。
「フフ、面白い。いいだろう・・・ゴルサコフ・君の提案を採用しようではないか」
ベムラーゼは憤慨していた様子から一転し、不敵な笑みを浮かべ、ゴルサコフの提案を採用した。
ゴルサコフの言う『国民からの信望』と言う言葉に動かされたのだ。
領地を奪われた責任についてもボローズたちに被せる事により、自身の支持率の低下には繋がらず、逆にボローズたち一門の資産を戦死した遺族へ分配することにより逆に支持率を上げられる算段があったからだろう。
ただこの時、ボローズはまだ生きており、自身に賛同する者たちと共にオリオン腕方面へひたすら東進していたのだが、ゴルサコフも仮にボローズが生きていたとしても敗残兵となった彼らがガルマン・ガミラスの包囲網を命からがら突破してボラー連邦本星に戻って来るなんて絶対にないだろうと見越していたのだ。
それからすぐにボラー連邦本星にあるボローズたち一門の家系は突如、途絶える事になった・・・

そして、時系列は元に戻り、場面はケンタウロス座アルファ星近海へ移る。
「流石にガルマン・ガミラスとの同盟については一介の軍人である自分には決断しかねますので、その点に関しては申し訳ございませんが藤堂長官及び大統領ら地球連邦政府の閣僚たちの判断にお任せいたします」
ジュラの来訪目的である地球とガルマン・ガミラスとの同盟につい

て、良馬はその決断を地球連邦政府へと委ねた。
　軍人としてはガルマン・ガミラスとの同盟よりもボラー連邦の方が興味と言うか今の地球における重要度が高かった。
「そして、特使より齎されたボラー連邦の情報ですが、アルファ星へ攻撃し、一部を撃退した以降、音沙汰がありませんが、その大半はまだ存在しているのでアルファ星近海は油断できない状況が続いております」
「うむ・銀河系を二分する程の星間国家だ・・・今後もアルファ星へ攻撃をしかけてくる可能性は十分あると言う事か・・・」
「はい。それにアルファ星への攻撃はあくまでも前哨戦であり、今後は本格的に太陽系へ牙を向けてくる可能性もあります。実際に一隻の戦艦が地球圏へワープアウトをして、日本のライフラインを攻撃したと聞きました」
「そうだな・・・アルファ星や第十一番惑星、冥王星には可能な限りの防衛戦力を割り振る事にしよう」
「もし、地球への航路確保ができるのであるならば、今の内にアルファ星の民間人を地球へ避難させた方がこの場合賢明ではないでしょうか？」
　良馬は藤堂にボラー連邦の攻撃が本格化する前に現在地球から最も遠距離の開拓地であるこのアルファ星に居る民間人の安全確保のため地球へ一度引き揚げさせてみてはどうかと提案する。
「むっ？・・・・うーん・・・それはそうなのだが・・・・」
　アルファ星に赴任していた良馬は現在太陽系で起きている太陽異常について一切知らされていない。
　破滅するかもしれない地球へ民間人を戻すことは危険でもあるが、ボラー連邦の艦隊が再びアルファ星へ攻撃を仕掛けてこないとも言い切れず、アルファ星に居ても民間人を危険に晒す可能性もある。
　藤堂としてはいきなり舞い込んできたガルマン・ガミラスとの同盟の件もあるが、破滅するかもしれない地球にヤマトへ課した第二の地球の探査任務、そしてアルファ星の民間人の安全にも配慮しなければならなくなり、重大な責任が伴うがやらなければならない仕事が重な

り、胃がキリキリと痛む様な思いだった。
　そんな藤堂の様子を見て良馬は、
（ん？長官の様子・・・なんだか煮え切らない感じだな・・・）
（民間人を地球へ帰す事に何か問題があるのか？）
　民間人の地球への一時引き上げについて、軍人視点ならば本来即決する様な案件なのだが、藤堂は即決せずに煮え切らない様子だ。
「月村君」
「はい」
「民間人の地球への引き上げについてだが、アルファ星から地球までの航路の安全が未だに確保できていない状況下では民間人の地球への輸送には未知の危険が伴う。故に民間人の地球への引き上げについてはしばらくの間延期とする」
「えっ？」
　藤堂はアルファ星に居る民間人の地球への引き上げについては見送る判断を下した。
「だが、アルファ星に居る民間人の安全には十分配慮する。シェルターの建設に必要な機材、戦闘衛星、攻撃ステーションの大幅な設置も手配しよう」
「わ、分かりました」
　良馬の方も煮え切らない思いがありつつもアルファ星の防衛強化と避難設備の増設をしてもらえるならば、今はそれを良しとした。
　一方で藤堂は、
（ボラー連邦か・・・銀河系にデスラーが建国した星の他にそのような星間国家があるとは・・・）
（ヤマトが銀河系中心部へ行けば行くほど宇宙環境の他にこのボラー連邦とデスラーとの星間戦争に巻き込まれる可能性もある訳か・・・）
　ヤマトが第二の地球探査へ向かうのは銀河系中心部なので、銀河系の中心部へ近づけば近づくほど、ガルマン・ガミラスとボラー連邦との間で起きている星間戦争にヤマトが巻き込まれる可能性が十分にあった。
（ここはヤマト単艦ではなく、月村のまほろばをヤマトの護衛として

一緒に探索任務に向かわせた方がいいだろうか？）
（報告では先のイスカンダルでの航海で月村は今回の特使であるデスラーの娘と交流を持っているみたいだしな・・・）
藤堂は銀河系中心部で起きているガルマン・ガミラスとボラー連邦との星間戦争を考慮してヤマト単艦だけではなく、まほろばをヤマトの護衛として第二の地球探査任務に向かわせようと思った。
実際に良馬はジュラやバーガーたちと交流がある。
そして、今回特使として地球へ来たのはそのジュラであることから良馬を待通じて銀河系中心部までの航路図を貰えるかもしれない。
藤堂がまほろばにヤマト護衛の任務を与えようと思っていると、
「しかし、ジュラさんたちガルマン・ガミラスからの特使は長官や連邦政府大統領らと直接会って同盟の件について会談したいと思いますが？」
良馬が藤堂にジュラたちと連邦政府の高官たちの面会を求める。
「分かった。その件についてはこの後、私が大統領に連絡をしておこう。大統領府の返答があるまで特使たち一行はアルファ星で待機してもらいたい」
「了解しました」
同盟の会談をするにしても大統領たち連邦政府らの閣僚との調整も必要でありいきなりジュラたち一行を地球へ連れてこられても連邦政府がガルマン・ガミラスとの同盟を拒否する可能性もあるので、ジュラたちには連邦政府の決定が下るまで一時アルファ星で待機してもらった。
藤堂との通信を終えた良馬は再び食堂へ戻り、ジュラたちに地球側の対応について説明しに行った。
「お待たせしました。先ほど防衛軍の長官と地球側に今回、ジュラさんたちの件を話しました。ただ、地球側も直ぐには対応できないみたいで、準備が整うまでケンタウロス座のアルファ星で待機してもらいたいとの事です」
「わかりました」
「では、我々が先導いたします」

ガミラシアに戻ったジュラとメルダはバレルに地球側の対応を伝えた。
そして、まほろばが先導してガルマン・ガミラスの特使団一行をアルファ星へと案内した。
まほろばがジュラたち特使団一行をアルファ星へ案内している中、藤堂は先ほど良馬から受けた通信内容を早速大統領府へと伝えた。

地球　地球連邦大統領府
「大統領閣下、藤堂長官より映像通信が来ております」
地球連邦大統領が大統領府の執務室にて執務作業をしていると、内線で大統領秘書官が大統領に藤堂から連絡が来たことを告げる。
「ん？藤堂長官から？・・・・繋いでくれ」
「承知しました」
（また例の太陽異常の件か？やれやれ、防衛軍の長官職何かに就いていると些細な事でも大袈裟にとらえる程の重度な心配性になるのだな）
大統領は先日、サイモン教授や倉田博士、藤堂から現在太陽で起きている核融合の異常増進における太陽異常の話を聞いたが、太陽エネルギー省の黒田博士が提唱する自然現象説を信じ、太陽の異常は一時的なものだと信じていた。
そんな中、藤堂から通信が来たので、大統領が藤堂の要件がまた太陽異常の件なのかと思うのも不思議ではなかった。
正直に言って大統領は面倒だと思いながらも藤堂は地球防衛に関する役職に就いているので無下には出来なかった。
「大統領閣下」
「どうかしたのかね？藤堂長官。また例の太陽異常の話か？」
「いえ、今回はその件とは別の件でお話しがあります」
「ほう？それはどんな要件なのかね？」
「大統領閣下は先日、地球に突如飛来し日本のライフラインを攻撃した謎の宇宙戦艦とケンタウロス座にある開拓惑星を攻撃した謎の艦隊の話を既にご存知かと思います」

「ああ、報告は受けておるよ」
「実はその地球とケンタウロス座の開拓惑星を攻撃してきた勢力が判明しました」
「ほう？それで、攻撃をしてきた勢力は一体どこの勢力だったのかね？」
「その件を含めまして二つ、大統領閣下にお話がございます」
「ん？」
「まず、地球とケンタウロス座の開拓惑星を攻撃してきた勢力についてですが、その勢力はボラー連邦と言う星間国家であることが判明しました」
「ボラー連邦？」
「はい」
「して、どのような経緯があって判明したのだ？」
　大統領は藤堂に攻撃してきた謎の艦隊がボラー連邦と言う星間国家だと判明した経緯を訊ねる。
「襲撃してきた勢力が判明した経緯については、もう一つお伝えしたい件と関係しております」
「ん？それはどういうことだ？」
「実はつい先ほど、ケンタウロス座の開拓惑星に外宇宙からある特使団が参りました」
「特使団？それはもしかして年始年末に報告があった例の時空管理局とやらかね？」
　管理局の存在は防衛軍からの通達で地球連邦政府、大統領も周知の事実となっていた。
　そのため、ケンタウロス座のアルファ星にやってきた特使団が時空管理局の一行だと思っても不思議ではなかった。
（時空管理局か・・・軍からの報告では、彗星帝国の様に植民地を多数保有している治安維持組織のようだが、印象的にはあまり付き合いたいとは思えない組織だな）
　大統領でさえ、時空管理局の存在やその在り方については疑問を抱いており、やってきた特使団が時空管理局の場合、一体地球へ何を要

求してくるのは分からないがどうせ碌な事ではないだろうと思っていた。
「いえ、その特使団は・・・」
「特使団は？」
「ガミラスからの特使団です」
「何いっ!?ガミラスだと!?」
　大統領は特使団の正体を聞き思わず椅子から立ち上がる。
　やってきた特使団は時空管理局ではなく、かつて地球を絶滅寸前まで追い込んだガミラスからの特使団だった。
「正確に言うと旧ガミラスからの特使団です」
「旧ガミラス・だと？」
「はい。ガミラスは第二次イスカンダルの航海でヤマトらの共闘の後、銀河系中心部へ第二の故郷を求めた所、新惑星を発見し新たな国家を建国したようです」
「・・・」
「今回の特使団はその新国家の建国を知らせると共に地球との同盟を結びたいとの事です」
「地球との同盟・だと？」
「はい」
「・・・」
　外宇宙からの特使団の目的を聞き、大統領は怪訝な顔だ。
　大統領の反応も当然であり、依然ガミラスは地球に対して地球人類の奴隷化か絶滅の究極の二択を迫り、地球側が徹底抗戦の選択をすると地球人類を含め地球に存在する全生物を一年で絶滅寸前まで追い込んだ。
　その元凶が今度は地球と対等な関係の同盟を結びたいと言ってきたのだから複雑と言うか信じられない。
「それで、返答は？」
「いえ、これは何分あまりにも大きな決断が必要な案件ですので、ひとまず特使団の方々はケンタウロス座の開拓惑星で待機してもらっています」

さすがに防衛軍司令長官とは言え、勝手に地球とガルマン・ガミラスとの同盟を結ぶ決定は下せず、こうして大統領に連絡を入れて来たのだ。
「うむ、それは賢明な判断だろう」
「今回の同盟の話は私や大統領、地球連邦政府閣僚を含めた見解の一致が必要不可欠な案件かと？」
「だがな、藤堂長官。連邦市民の中には未だに反ガミラス感情の市民が大勢居る。家族や大切な者を一方的にガミラスへ奪われたのだからな。そんな市民たちの前でガミラスとの同盟を発表すれば暴動が起きるかもしれないぞ」
「は、はい・・・・」
「いや、市民の暴動なら兎も角、軍がクーデターを引き起こす危険性もあるのではないか？」
「ええ、その可能性は否定できません」
「ならば、答えは既に決まっているではないか。特使団には早々にお引き取りいただけ」
「ですが、会談の場を設けずに特使団を追い返しては地球の心象が悪くなるのではないでしょうか？」
「・・・・」
「ここは形だけでも会談の場を設けてはどうでしょうか？」
「・・・・」
藤堂の指摘を受けて大統領はまたもや怪訝な顔をする。
大統領の反応を見る限り、ガルマン・ガミラスとの同盟話は一筋縄ではいかないだろうと藤堂は予測した。
だが、良馬から報告を受けた銀河系を二分する勢力・ボラー連邦の存在を危惧するのであるならば、ガルマン・ガミラスとの同盟は今後の地球にはひつようなのかもしれないが、連邦市民の感情ではそう簡単にいかないのも致し方無い事だった。
地球側としては何だか無理矢理会談の席に着かされた形で特使団との会談に臨むことになった。
ただ、こうしている間にも太陽では核融合の異常増進が続いていた

・・・・

藤堂が地球連邦大統領府へ連絡を入れている頃、まほろばの先導の下、ガルマン・ガミラスの特使団一行の艦隊はケンタウロス座、アルファ星へとやって来た。

肉眼でアルファ星が確認できる中、通常の宇宙空間から突如、世界大戦中にドイツが建造したUボートとガミラス艦を併せ持った様な外見の艦が次々と出現した。

「が、ガルマン・ガミラスの小型艦艇らしき艦が次々と出現しました!!」

「レーダーに反応はなかったのか!?」

「は、はい。突然現れました!!」

「ワープアウトしてきたのか!?」

「い、いえ、それがワープアウト反応もありません」

いきなり出現してきたガルマン・ガミラスの艦艇の出現にワープアウトを疑うもワープアウト反応がなく、一体これらの艦艇がどこに潜んでいたのか戸惑う中、

(あの艦・なんだか潜水艦・・・Uボートに似ているな・・・ん?まさか・・・)

良馬は突如出現した艦影が潜水艦に似ている事から、

「副長、ヤマトと彗星帝国の潜宙艦の戦闘データから潜宙艦の出現パターンの波長と先ほど出現したガルマン・ガミラスの艦の出現パターンの波長を調べてみてくれ」

「は、はい」

新見は良馬の指示を受け、保存されている過去の戦闘データから、ヤマトと彗星帝国の潜宙艦との戦闘データを調べる。

すると、彗星帝国の潜宙艦の出現パターンの波長と先程出現したガルマン・ガミラスの艦艇の出現パターンの波長が完全に一致とはいかないまでも物凄く似た波長となっていた。

「艦長、彗星帝国の潜宙艦とあの艦の出現パターンの波長は、物凄く似ている波長となっていました」

「やはり・・・あれはガルマン・ガミラスの潜宙艦だ・・・」
「ガルマン・ガミラスの・・・」
「潜宙艦・・・」
「ああ。デスラーは一時、彗星帝国の下に身を寄せていた。その際、彗星帝国と技術交換をしていたんだろう・・・土星圏とシャンブロウで戦った彗星帝国の戦艦は瞬間物質転送機を装備していた・・・反対にガミラスは潜宙艦の建造技術を彗星帝国から得ており、新国家を建国した後に建造したのだろう」
「あれが、ガミラスの潜宙艦・・・」
「た、確かに潜水艦に似た外見をしていますね」
「じゃあ、突然出現したように見えたのは・・・」
「亜空間に潜んでいたが通常空間に浮上したからだろうね」
　良馬の説明を聞き、納得する艦橋メンバーだった。
（それにしても予想通り、ガミラスでも潜宙艦を建造していたか・・・）
　以前、彗星帝国の潜宙艦を鹵獲した際、ガミラスも潜宙艦技術を得ており、新たな星間国家を建国した時には建造するかもしれないと思っていたが、まさに良馬の予想は当たっていた。
（ガルマン・ガミラスとの同盟・・・市民感情的には難しいし、ボラー連邦との星間戦争に巻き込まれるかもしれないが、その反面、ガミラスからの優れた技術を得られるかもしれない。ガルマン・ガミラスとの同盟は地球にとっては諸刃の剣になるな・・・）
　この後に控える地球とガルマン・ガミラスの同盟について良馬は一喜一憂するのであった。

　アルファ星の地表は先日のボラー連邦からの攻撃で町の建造物はあちこち破損し、荒野にはいくつものクレーターが出来ていた。
　そんな中でガルマン・ガミラスの特使団一行がアルファ星へ来るのは既に藤堂から通達されており、基地司令官ら幹部級の職員たちは緊張した面持ちで特使団の到着を待っていた。

　地球でガルマン・ガミラスとの同盟についての会談が決定する少し

前、ミッドチルダの地上本部の会議室の一室では、ロールスロイス中将をはじめとする〝陸〟の幹部たちが集まり会議を行っていた。
〝海〟にて密かにミノフスキー博士の協力の元、新型の宇宙艦船のエンジンを研究・開発が行われているように、〝陸〟の方でも新型の装備の検討会議が行われていた。
なお、〝空〟に関してはフェイトが将来的に導入した方が良いのではないかと思っている防衛軍で採用されているコスモゼロやコスモタイガーみたいな宇宙・大気圏でも飛行可能な戦闘機の導入を当然見送り、現在はボラーへの武力制裁失敗で失われた空戦魔導師の育成に力を注いでいる。
「現在〝海〟では先のボラーへの武力制裁失敗の件で喪失した艦の補填と新たな艦の建造を模索しているらしい」
「〝空〟に関しては新たな装備を開発する動きはなく、空戦魔導師の育成に留まっております」
「我々〝陸〟に関しても新たな装備を開発して行こうと思う」
「しかし、〝海〟の連中がそれを許すでしょうか？」
幹部の一人がロールスロイスに〝陸〟の装備開発に関して〝海〟が新装備の開発費をすんなりと許すだろうか？と言う懸念があった。
ボラーへの武力制裁前でも〝海〟は多額の予算に人材を優遇されていた。
そして、ボラーへの武力制裁が失敗して、所有していた次元航行艦を多数喪失し、管理世界の治安維持及び管理世界になりうる世界の探査もままならない現状で、〝海〟は〝空〟〝陸〟よりも人材、予算を優先で得ようとするので、そんな中で〝陸〟が新たに装備を開発したいので、その開発費を貰いたいと言ったところでその予算がおりるのか疑問なところだ。
「いや、〝海〟がこれまでの管理局の歴史の中でも弱体化している今だからこそだ」
しかし、ロールスロイスは幹部の懸念を他所に〝海〟が物凄く弱体している今だからこそ、〝陸〟が新たな装備の開発費を貰えるチャンスなのだと言う。

「そ、それはどういう事でしょう?」
　ロールスロイスの真意が分からず幹部がロールスロイスに直接訊ねる。
「〝海〟は艦も人材も不足しており、これまで以上に〝空〟〝陸〟から人材を廻してもらいたい筈だ。故に我々〝陸〟は人材を〝海〟は廻す見返りとして新装備の開発費を廻してもらうのだよ」
「な、なるほど・・・・」
　予算確保の名分を得た〝陸〟は次に何を開発するかの議題に移る。
「魔導師の局員がこれまで通り〝海〟へ引き抜かれると非魔導師の局員も今後は事件現場へ赴くことになる。そんな事件現場に丸腰のまま行かせるわけにはいかない」
　ロールスロイスは会議に集まる〝陸〟の幹部たちを見渡しながら今後の〝陸〟の局員らが境遇する事態を口にする。
　彼の言葉を聞き幹部たちは頷く。
「これまで摘発されたテロリストが使用していた質量兵器である拳銃、ライフル・・・これらの武器を非魔導師の局員にも通常装備させると共にこれらの装備を更に進化させる必要がある」
「し、進化と申しますと?」
「これまで押収してきた質量兵器は火薬を必要とする兵器だが、これを火薬ではなく、光学武器に変更する形で開発を進めていきたいと思う」
「光学武器・・・ですか?」
「ああ・光学武器ならば、弾薬の不足と言う事態にはならぬし、火薬の炸裂による反動もない」
「し、しかし、どうやって・・・・」
「スカリエッティが使用していたガジェットⅠ型はあの大きさで光学兵器を搭載していた。ガジェットをベースに更に小型化を目指す。１０８の隊舎倉庫には機動六課からの押収品が管理されている。そこからガジェットの残骸を引き取り、調査・開発を行ってもらいたい」
　光学武器の銃・・・つまり、防衛軍が採用しているコスモガンを管理局でも採用しようと〝陸〟は動き出した。

また〝陸〟は非魔導師の局員への装備以外にも更なる装備の強化を考案する。
実際に〝海〟が見つけた管理世界に駐屯するのは〝空〟と〝陸〟の局員であり、無理矢理管理世界にされた世界では住民のテロ事件が横行している。
そんな危険地帯での勤務でテロ事件に巻き込まれ殉職する局員も居る。
しかし、〝海〟はテロ事件の解決に協力せずに利益のみを奪っていく。
だからこそ、〝陸〟局員個人の装備だけではなく、〝陸〟自体の装備強化も議題にあがる。
「次に個人ではなく、隊への装備だ。管理局のエース、八神はやて　高町なのは　らの故郷である第９７管理外世界では戦車なる鋼鉄製の戦闘車が陸の主力兵器となっている」
ロールスロイスは会議室のモニターに第９７管理外世界：地球の陸上における主力兵器・戦車と軍用装甲車の映像を映し出す。
「つまり我々もその戦車を導入するべきと？」
「うむ」
幹部の問いにロールスロイスは頷く。
〝陸〟が持つ装甲車は装甲車と言える代物ではなく、中型トラックに鉄板を装備したモノや地球のハマーの様な四輪駆動しかなく、非魔導師の局員にはこれらの装備では心もとない。

「諸君、今こそ、我々〝陸〟が開花期を迎える時なのだ!!」
『おう!!』
だからこそ、ロールスロイスは局員の個別装備以外にもこの機会に乗じて戦車や装甲車の開発予算をもぎ取ろうと意気込んだ。

百五十話　クロノの休暇明け

ケンタウロス座アルファ星近海へやってきたジュラたち、ガルマン・ガミラスの特使団一行。
その来訪目的がデスラーによる新国家の建国報告と地球との同盟だった。
しかし、いくら新国家となり名前を変えても地球人にとってガミラスもガルマン・ガミラスも同じ元侵略者なので、ガミラスに対する感情としてはすんなりと同盟を結ぶのは難しいと誰もが思い、特使団一行は一時、ケンタウロス座のアルファ星で待機してもらうことになった、
現在、アルファ星の守備艦隊に所属している　まほろば　の案内の下、特使団一行の艦隊はアルファ星の宇宙艦船ドックへ着陸した。
ジュラ、そして彼女の護衛であるメルダ、特使団の副団長であるローレン・バレルが乗艦していたガミラシアから降り、アルファ星の基地の司令官たちの前に現れる。
「ガルマン・ガミラス特使団のジュラです。こちらは私の護衛を務めるメルダ・ディッツ大尉」
「メルダ・ディッツです」
ジュラは自分たちを出迎えたアルファ星の基地の司令官たちに自己紹介とメルダを紹介する。
紹介されたメルダは基地司令官たちに自己紹介をしつつ一礼する。
「こちらは特使団、副団長のローレン・バレルさんです」
「ローレン・バレルです」
外務担当を務める文官と言う事でバレルはこれまで出会って来たガミラス人と異なり物腰が柔らかい印象を受けた。
「地球防衛軍、アルファ星兵站基地司令官のアレックス・キャゼルヌです。遠路はるばるご苦労様です」
特使団一行を出迎えたアルファ星基地の司令官であるキャゼルヌも主に主計等の軍における事務仕事で才幹を発揮する文官向きの軍

人であり、バレル同様物腰が柔らかい軍人である。
「ジュラ様より、先日、ボラー連邦の艦船がこちらの惑星を攻撃したとお聞きしたのですが・・・？」
「はい。突然の攻撃で、施設及び住民に被害を受けました」
「では、死亡者も・・・？」
「・・・はい。軍民問わず、少なからずの犠牲者を出しました」
ボラー連邦のアルファ星への攻撃は大規模なモノだったので、当然アルファ星には多数の死傷者が出ており、瓦礫の下敷きになり押しつぶされて即死する者も居れば、ミサイルの着弾の衝撃で吹き飛ばされる者も居れば、攻撃後瓦礫の下から救助されるも治療の甲斐も虚しく死亡した者も居た。
「「・・・」」
キャゼルヌの説明を聞き、ジュラたちはいたたまれない気持ちとなる。
「・・・キャゼルヌ司令官、もしよろしければその方々を弔わせていただいてもよろしいでしょうか？」
ジュラは先日に起きたボラー連邦からの攻撃で死亡した人たちを弔いたいと願い出た。
地球側から見たら、同盟締結のためのポーズだと捉える者も居るかもしれないが、それでも本来は地球とは関係ない外宇宙からの来訪者が地球人の死を悼んでいる。
例えそれがポーズであってもこうして願い出ているジュラの姿勢をキャゼルヌは汲んで、ジュラたちを基地内に設けてある遺体収容所へと案内する。
案内された遺体収容所には既に棺に納められた遺体が多数安置されていた。
犠牲者が納められているこの棺は、遺体を納める棺の役割の他に遺体の保存機能も有しているので、宇宙艦艇でも長い航海の中で事故や病死、戦闘による戦死等で死亡した者に対して宇宙葬を行う際に使用するために積み込まれている棺だった。
現在、遺体の身元確認と遺体の引き取りについて関係者へ連絡を入

れている業務が行われている。
故郷である地球の地へ還すことを望む者が居れば、命を懸けて宇宙開拓を行ったこのアルファ星の地へ葬って欲しいと希望する者も居れば、関係者へ連絡がつかない者、生前なんらかの問題があり遺体の引き取りを拒否する者やあまりにも遺体の損傷が酷く身元が確認できない者も居た。
(生きている民間人は兎も角、地球へ葬ってもらいたいと希望をする犠牲者のご遺体は早く地球へ・遺族の下に還してやりたいな・・・)
遺体が納められている棺を見つつ、良馬は藤堂から民間人の地球への引き上げに関しては延長されるたが、地球の地で葬ってもらいたいと希望をする遺体だけでも地球へ還してやりたかった。
そんな数多くの遺体が安置されている遺体収容所にて、多数の棺の前でメルダとバレルは宇宙開拓に命を懸けた勇敢なる開拓者たちの鎮魂を祈り一礼し、ジュラは胸の前で手を組み犠牲者たちの冥福を祈った。
犠牲者たちの弔いを済ませ、ジュラたちは次に基地内にある応接室へ通され、今後の予定の確認を行う。
「銀河系中心部にあるガルマン・ガミラスからここまでの長距離航海で、そちらの艦でも色々と物資が消耗した事でしょう。こちら側も先日のボラー連邦からの攻撃を受け、ご覧の通り被災している状況下ですが、出来る限りの補給は提供いたしましょう」
長期間宇宙を航海したのだから当然、物資は消耗していることを宇宙戦士であり兵站部門で秀でていたキャゼルヌならば理解していた。
だからこそ、彼は外宇宙からの来訪者たちを冷たくあしらうことなく、ジュラたちをもてなした。
「地球側のご配慮に感謝いたします」
「それで、今後の予定ですが、地球には既に今回の特使団の件については既に報告済みであることはもうご存知かと思います」
「はい。月村艦長から聞いております」
「地球側も会談の日程を調節する為、しばしのお時間が必要とのことです」

「ええ、その辺りもご理解しております」
「ご理解、ありがとうございます。日程が判明次第、そちらへご連絡をいれますので、その間はこの基地の敷地内で待機していただきます」
ボラー艦隊からの突然の攻撃といくら国名を変えたとは言え、元はガミラスの人間が酸素適合薬を使用して出歩けるとは言え、やはり地球人と接し、互いに何らかの揉め事が起きるのは同盟の会談をこれから行う現状、それは何としてでも防ぎたかった。
旧ガミラス人は兎も角、ガルマン人にとっては自分たちの知らぬ恨みで地球人から恨まれることになるので、そう言ったトラブルも防がなければならない。
「わかりました」
ジュラもガミラスと地球の因縁からそうした理由を承知しておりキャゼルヌの提案を受け入れた。
こうしてジュラたちガルマン・ガミラスの特使団は地球側の日程が決まるまでアルファ星の基地で待機することになった。
一応、酸素適合薬を飲めば基地の敷地内であるならば、出歩くことを許可されていたので、特使団の団員たちは初めて見る地球の文化に触れていた。
ジュラの能力で特使団の団員が基地の外に出ようと考えればたちまちに見抜かれるので、特使団の団員たちはおとなしく指示に従っていた。

地球側で様々な出来事が起きている中、魔法世界であるミッドチルダでは・・・
ボラー連邦への武力制裁が失敗して以降、クロノは長期の休暇を取り、最初の休暇期間が終わると更に休暇を申請した。
元々仕事人間だった為に有給休暇の期間がそれなりにあったので、普段できなかった家族サービスを行うことが出来、双子の子供たちも仕事で家を空ける事が多い父親が家に居て自分たちと遊んでくれるのを喜んでいた。
しかし、仕事をしている以上、休暇はいつか終わりが来る。

等々クロノの休暇期間が終わってしまう。
「はぁ～・・・」
休暇期間終了の朝、クロノはこれから本局へ向かわなければならず、テンションは物凄く低い。
深いため息をつきながらも寝巻から本局制服のズボンを穿き、ワイシャツを着てネクタイを締める。
着替えを終え、リビングに用意されていた朝食の席に着く。
「お父さん、今日からお仕事？」
クロノの双子の兄であるカレルがクロノに訊ねる。
制服姿の父親の姿を見て今日から仕事なのだと察したのだ。
「ああ、今日からまたお仕事だ」
「今度はいつ帰って来るの？」
次に双子の妹であり、娘のリエラがクロノに今度の帰宅日を訊ねる。
「うーん・・・今度はもしかしたら長いかもしれないな」
通常の休暇を更に延長したので、次の休暇はかなり長い間の勤務を行わなければ巡ってこないと判断したので、クロノは娘に次の休暇はかなり先になる事を教える。
「えぇ～そうなの～？」
「つまんない～」
再び父親が家に戻らない事実に子供たちは不満そうだ。
「ごめんな～お父さんもお前たちと一緒に居たいんだが、会社にはお父さんを待っている人が沢山居るんだ」
クラウディアの艦長として幾人もの部下が居るので彼らを見捨てる訳にはいかないので、休暇が終われば戻らなければならない。
「二人とも、お父さんがお仕事をしているから、ご飯を食べたり、二人が欲しいモノを買えるんだから我慢しないとね？」
エイミィがカレルとリエラに父であるクロノが仕事を頑張っている理由を話す。
「「はーい」」
エイミィの話を聞き、クロノとの暫しの別れを理解する二人。

その後、朝食を食べ終え、本局制服の上着を着たクロノは、
「じゃあ、行ってくる」
「「いってらっしゃい」」
「クロノ君、気を付けてね」
「ああ、エイミィや子供たちが居るんだ。そう簡単に死んでたまるか・・・カレル、リエラ、お父さんが帰ってくるまで良い子にしているんだぞ。お母さんやアルフに迷惑をかけない様に・・いいか？」
「「はい」」
「うん。それじゃあ・・・」
「うん」
家族に見送られクロノは地球から本局へと向かった。
（あの人たちも休暇明けはこんな気分なのだろうか？）
クロノはもう一つの地球・・・防衛軍の宇宙艦船勤務の軍人たちも休暇が明け、再び宇宙艦艇勤務の時、家族や大切な人を残して宇宙へ出る際はこうした後ろ髪を引かれる気持ちなのだろうかと思いをはせる。
ボラー連邦の武力制裁前はこんな気持ちを抱くことはなかったが、武力制裁の失敗で・・眼前で大勢の仲間を失った現実と管理局の闇の一部を知りその不正さえも正そうとしない管理局の姿勢にあれだけ誇りに思っていた管理局の仕事に対してクロノの中では暗雲が立ち込めていた。
しかし、子供たちに言ったように今、自分が管理局を辞めるのは、自分の下に居る部下たちを裏切る事になる。
せめて信頼できる者にクラウディアと部下たちを託すまで自分は管理局を去る訳にはいかないとクロノは自分に言い聞かせた。

クロノが本局へ戻る少し前、その本局では・・・
本局内にあるリンディの居住ルームにて、朝食を摂っているフェイトとリンディ。
「そう言えば、今日からクロノの休暇が明けて仕事に復帰するわ」
リンディはフェイトにクロノの職務復帰を伝える。

「そっか・・・長く休んでいたみたいだから、次の休暇は結構先になるだろうからカレルやリエラは寂しいんじゃないかな？」
　フェイトはクロノの子供たち・・・自身にとっては甥と姪の二人が父親と長い間会えずに寂しい思いをするのではないかと思った。
「そうね・・・でも、管理局の現状を見るとクロノにいつまでも休んでもらう訳にはいかないの」
「そうだね・・・」
「それにエイミィもカレルもリエラもクロノの仕事の事をちゃんと理解している筈だからきっとわかってくれている筈よ」
「船乗りの宿命って奴かな・・・？」
「それで、フェイト」
「ん？なに？」
「フェイトも執務官としてクロノの艦にまた同乗してもらいたいの」
「えっ？」
　リンディはフェイトに今日、休暇明けするクロノが艦長を務めるクラウディアへ乗ってもらいたいと言う。
「マスコミへ記者発表をして査察部からの調査が一通り終わったと思うけど、まだ諦めきれない連中も少なからずいると思うの」
「ああ、確かに・・・」
　マスコミにも査察部にもまだフェイトに付き纏う者たちがいないとは言い切れない。
「今度のクロノの航海は少し長いモノになるからフェイトもクラウディアに乗ればそうした煩わしい思いをしなくても済むと思うんだけど、どうかしら？」
「うん、そうだね」
　リンディの思いを理解したフェイトはこの後、本局へやって来るクロノと合流して、クラウディアへ乗艦することになった。
　その為、フェイトは急いで荷造りをするのであった。
　勿論その荷造りにはリンディも手伝った。
　荷造りが終わり、クラウディアが停泊している本局の艦船ドックへとやってきやフェイト。

そこにはクラウディアの乗員たちがちらほらと集まっていた。
搬入口からは航海に必要な物資が積み込まれている。
クラウディアの他にも今日、航海に出るのか出航準備をしている艦も見える。
そんな中、クロノも艦船ドックへとやって来た。
「あっ、クロノ」
「フェイト？どうしてここに？」
「私も休職期間が開けて職務復帰したの。それで、今回はまたクラウディアに乗艦することになったんだよ」
「そうか、君も休み明けか」
「うん。またよろしくね」
「ああ、こちらこそ」
「それじゃあ、私は先に乗っているから」
クロノは提督兼艦長なので、出航手続きや搬入された物質の確認と受取書にサインしなければならない乗艦前の仕事等があるので、フェイトは先にクラウディアに乗艦した。
フェイトがクラウディアに乗艦する後ろ姿を確認した時、
「おや？そこに居るのはもしかして、クロノか？」
クロノの背後から自分に声をかける者が居た。
「ん？ああ、二コラウフか・・・」
振り向くとそこにはクロノにとって知っている顔があった。
クロノに声をかけてきたのは二コラウフ・ロガン。
彼は管理局の士官学校におけるクロノの同期で二コラウフ本人が高ランクの魔導師であり、クロノの実家であるハラオウン家同様ロガン家は代々高ランク魔導師を輩出している名門家であり、二コラウフの父親も管理局ではかなりの地位に就いている。
「随分と長い休みをとっていたみたいだが、今日から復帰か？」
「あ、ああ」
「あの武力制裁からおめおめ逃げ戻って来た後、長期の休みをとるなんて復興に尽力している同僚にすまないと思わなかったのか？」
二コラウフは長期休暇明けのクロノに対して皮肉を言ってくる。

士官学校時代から二コラウフはクロノをライバル視してきた。
ハラオウン家と同じく代々高ランク魔導師を輩出し、自身も高ランク魔導師であった二コラウフは自分自身にも実家にも誇りを持っていた。
士官学校でも同期で自分に勝てる魔導師なんて居ないと思っていた。
しかし、その自信はあっけなく崩れた。
クロノは常に二コラウフの上を行っていた。
成績でもクロノは常に首席で自分は次席・・・
家柄もハラオウン家は自分の家同様、代々高ランク魔導師を輩出してきた名門家であり、しかもクロノの父親であるクラウド・ハラオウンは自身の命と引き換えに闇の書を封じたと言う事で管理局でも英雄視されていた。
執務官になったのも自分ではなくクロノの方が先だった。
更に新暦６５年、第９７管理外世界においてＰＴ事件、そして管理局の宿敵ともされる闇の書を完全に封じた闇の書事件の解決にも貢献し、母親のリンディ・ハラオウンはＰＴ事件の被告人ながらも高ランク魔導師であるフェイトを養子にし、管理外世界出身者にも関わらず今では管理局では知らないと人が居ないとされるエース・オブ・エース、高町なのはをスカウトし、親子で八神はやての後見人となった。
その八神はやては新暦７５年、試験運用ながらも機動六課を開設し、その年に起きたＪＳ事件を解決に導いた。
その功績は後見人であったハラオウン親子にもはやての後見人と言う事で任命功績を得た。
士官学校卒業から自分とクロノ・・ハラオウン家とは明確な差が出来てしまった。
プライドが高かった二コラウフとしてはクロノをライバル視・・と言うか、彼に対して嫉妬心を抱くのも当然であった。
そんな中、管理局の次元航行艦がボラー連邦なる蛮族に襲われ、更には民間人も多数犠牲となる大事件が起きた。

管理局は当然、一連のボラー連邦が行った蛮行を許容する訳がなく、ボラー連邦に対して宣戦布告無しの武力制裁へと踏み切った。
武力制裁には管理局の新鋭艦に〝空〟のエースたちも投入するほどのこれまでにない大規模な制裁だった。
この制裁に関して管理局の高官の間では武力制裁は成功だろうと楽観視する者もいれば、管理局は負けるのではないかと悲観視する者も居た。
二コラウフの親はこの武力制裁に対するリスクを思い、息子をこの武力制裁に不参加させるように動き、息子はこの武力制裁には参加しなかった。
一方、クロノは参加することになり、二コラウフは万が一この武力制裁が成功したら、またクロノの株が上がるのではないかと思うが、結果は管理局側の大敗北で武力制裁に参加した艦の８割～９割の大損害を出した。
二コラウフは管理局の敗北でクロノが殉職したかと思ったが、悪運でもあるのかクロノは生きて戻って来た。
クロノが指揮するクラウディアの帰還に彼が舌打ちしたのは言うまでもない。
ただ武力制裁失敗から直ぐにクロノは長期の休暇を取りしばらくの間、本局でクロノの姿を見る事は無かった。
その間、クラウディアもドックで整備を施し、乗員たちも交代で休暇をとった。
そんな中、クロノの休暇期間が明けて、こうして自分の目の前に立っている。
二コラウフにしてみれば、クロノはボラーと言う蛮族相手に無様に負けた負け犬なので、見下すにはいい機会だった。
「休暇を取ったのは事実だが、あの戦いで艦は傷つき、乗員たちにはメンタル面も考慮して休みが必要だった」
クロノは二コラウフの皮肉をもろともせずに艦や乗員たちの事を考えて休みを与え自分も休んだことを言う。
「ふん、まぁいい。今度の航海はお前の艦は俺の艦と同行するみたい

だが、休暇明けで感覚が鈍ったなんて言い訳をして俺の足を引っ張らないでくれよ、おめおめと戦場から逃げ帰った負け犬のクロノ君」
　二コラウフは手をひらひらと振りながらその場を後にする。
　彼としてはクロノの言葉は苦し紛れの言い訳か負け犬の遠吠えにしか聞こえなかったので、実に気分が良かった。
　クロノは二コラウフの後姿をジッと見つめながら、
「僕が負け犬ならば、お前は戦いもせずに逃げた臆病者だよ」
　と、座った眼でボソッと呟いた。
　やがて出航手続きが全て終わり、クロノはクラウディアのブリッジへと上がる。
「あっ、クロノ提督」
「お久しぶりです。提督」
　ブリッジにあがるとクロノは乗員たちから声をかけられる。
　クラウディアは元々クロノの人柄もあるが、あの武力制裁を経験し、クロノと乗員たちとの絆はグッと固いモノとなった。
「みんなも元気そうでよかった。すまなかった。艦の長たる僕が長期の休暇をとってしまって・・・・」
　クロノはブリッジの乗員たちに謝罪する。
「いえ、そのようなことは・・・・」
「そうですよ。クラウディアも整備が必要でしたし、私たちも休みを取れて息抜き出来ましたから」
　クラウディアの乗員たちはクロノとはちょっと事情は異なるが、あの地獄のような戦場から生きて戻れたが、トラウマのようなモノを抱え、心の整理がつくまで休息は必要だった。
　今回の休暇はクラウディアの乗員たちには必要不可欠であった。
　やがて、出航準備が整うとクラウディアは出航する。
　そして、今回クラウディアの航海に同行するのはついさっき出会った二コラウフが艦長を務めるＳＸ級次元航行艦のソラーズとなっている。
　武力制裁失敗後、管理局は数隻で一組の隊として航海を行いもし、宇宙空間で管理局以外の宇宙船を発見した場合、決して相手に通信は

行わずその場から急ぎ撤退するようにリンディから訓示が出されていた。
　誇りある時空管理局の艦が他の勢力の宇宙船を見て急ぎ逃げるのは管理局の魔導師としてのプライドが許さないかもしれないが、そもそもボラー連邦とのいざこざの原因は管理局の次元航行艦が高圧的にボラー連邦の宇宙船が輸送していた貨物を奪い取ろうとした結果、その後に起きた結末は言うまでもない。
　管理局の次元航行艦乗りは内心、悔しい思いを抱きつつも最終的には自身の命が大事なので、リンディからの訓示を守っていた。
　本局を出航したクラウディアとソラーズは広い宇宙を航海しながら管理局がまだ把握していない管理世界になりうる惑星を探すと同時に測定を行い宇宙海図を作成しながら航海を続けている。
　ただ今回の航海は日程が決められた航海ではなかったので、長期間の航海となり食事も航海の日数が増えるにつれ、味気ない宇宙食へと変わっていく。
「・・・防衛軍のO・M・C・Sがあれば長期航海でも色々と食べる事ができたのになぁ～・・・」
　クラウディアの食堂にてお皿の上にあるチューブ状の宇宙食を見ながらフェイトは愚痴を零す。
「そんなに凄いモノなのかい？そのO・M・C・Sと言う機械は・・・？」
　フェイトの向かい側に居るクロノは彼女の愚痴を聞いてO・M・C・Sについて質問する。
「うん。どんな原理かは教えてもらえなかったけど、土星圏からイスカンダル、イスカンダルから地球までの航海でほぼ補給なしの状態で色んな食事を出していた」
　フェイトは第二次イスカンダルでの航海における防衛軍の食事事情をクロノに教える。
「通信ポッドが設置されていたヘリオポーズじゃあ、赤道祭をやってかなりの量の料理をだしていたし・・・」
　赤道祭の事をクロノに伝えるとフェイトの脳裏にあの黒歴史とも言えるフェリシアとの舞台が過る。

しかもあの時の映像は管理局内でもある程度の人数に知られてしまっている。
「・・・」
「ん？どうした？」
フェイトが赤道祭での黒歴史を思い出し、複雑そうな表情を浮かべているとクロノが声をかけてきた。
「あっ、ううん、なんでもないよ」
「そ、そうか・・・だが、軍艦に備えられていた機械なんだ。そのO・M・C・Sも防衛軍にとっては軍事機密の一つに当たるのだから、部外者にはそう簡単に原理は教えないだろうさ」
「それはそうなんだけどね・・・」
まほろば　ヤマトに乗艦したフェイトとしては長期間の航海ながらも普段の食生活と変わらない料理を提供してくれたO・M・C・Sの存在は管理局の艦に欲しい装備品であった。
しかし、クロノの言う通り、軍艦は機密情報の塊とも言える代物であり、その軍艦に備わっている機械なのだからO・M・C・Sも軍事機密に当たる機械なのでどんな構造をしてあれほどの料理を提供できるのか当然部外者だった自分には教える訳にはいかない。
それは分かっているのだが、一度快適な航海を経験すると、どうしても見比べてしまう。
フェイトとクロノが食堂で味気ない食事をしていると、

グラン・・・
ゴゴゴゴゴゴゴ・・・
グラグラグラグラ・・・

突如、クラウディアの船体が揺れ、異常な振動が襲い掛かる。
「キャッ!?」
「な、なんだっ!?」
船体の揺れと異常振動・・・艦に何か起きた証拠であり、二人は急ぎブリッジへと向かった。

「どうした!?何があった!?」
「異常な重力波が本艦に作用しています!!」
「なにっ!?」
「重力制御装置が効きません!!どんどん引っ張られていきます!!」
「本艦同様、ソラーズも引っ張られています!!」
「機関室出力を上げろ!!」
　クロノは機関室へ連絡を入れ、機関出力を上げて振り切ろうとする。
「もっか補正しておりますがダメです!!」
「機関長、エンジン出力が低下していきます!!」
「オーバーブーストに非常電源も使え!!」
「は、はい」
　クラウディアとソラーズは何かに引き寄せられるかのようにどこかへ引っ張られて行く。
「ん?あれはなんだ!?」
　外に広がる宇宙空間には靄の様な気流があり、それにクラウディアとソラーズは流されている。
「現在、分析をしています」
「機関室、もっと出力を上げろ!!」
「それが、三度もチェックを行い、非常電源等の手段もやっているのですが、出力が上がりません!!」
「逆噴射もブレーキも効きません!!引きずりこまれます!!」
　気流の流れに逆らい脱出を図るクラウディアとソラーズだが、それは無駄な抵抗となり、二隻の次元航行艦はどんどん流されていく。
「通信士、本局へ緊急連絡を入れろ!!」
「は、はい!!司令部、こちら次元航行艦、クラウディア!!本艦及びソラーズは宇宙気流の影響を受けている!!至急救援を!!現在位置は・・・」
　通信士は本局へクラウディアとソラーズの現状を伝える。
「繰り返す、こちら次元航行艦、クラウディア・・・」
　通信士は通信が可能な限り本局へ通信を送った。

その内に外の景色は星もない漆黒の空間へと変わっていく。
「提督、気流の成分分析が終わりました。この気流の正体は水素です!!」
「なにっ!?水素だって!?」
「はい。水素ガスの総量はミッドにある太陽の十倍、水素の噴流は毎秒二百キロ」
「提督この気流はあまりにも異常です」
「ああ・・・これはただの宇宙気流ではない」
クロノは艦の外をジッと見ながら言う。
「と言いますと？」
「これはもしかして空間の歪みで出来た異次元断層の発生が原因かもしれない・・・外をよく見てみろ」
「えっ？」
クロノが指をさすとブリッジに居た乗員たちは外を見る。
すると、そこには様々な形、様々な大きさの宇宙船が漂流していた。
「あ、あれはっ!?」
「次元断層に落ちて脱出できなかった宇宙船だ・・・」
「い、いろんな宇宙船があるな・・・」
「まさに宇宙の墓場だ」
外の光景を乗員たちは息を?むように感想を述べるが、それと同時に自分たちの周囲の宇宙船の様になるのだと言う絶望感も同時に漂い始めた。

クラウディアとソラーズからの緊急伝は本局でも受信された。
「クラウディア、ソラーズ、こちら時空管理局、本局!!現状を伝えよ!!クラウディア、ソラーズ!!」
クラウディアとソラーズ、二隻の通信士の様子から何かアクシデントが起きたのは明白であった。
「あっ、ハラオウン統括官」
そんな中、リンディが本局の指令室へとやって来た。
「クラウディアに何かあったの!?」

「はい。クラウディアとソラーズが宇宙気流に流されたみたいで、その後通信が途絶えました」
「なっ!?」
オペレーターがリンディにクラウディアとソラーズの現状を説明すると彼女は言葉を失う。
「最後の通信位置は判明していますので、急ぎ救援を送ります」
「え、ええ・・そうしてちょうだい」
フェイトが遭難し、もう一つの地球からやっと帰って来たと思ったら再び遭難してしまった。
しかも今度は息子のクロノまでも・・・・
リンディは、表面上は冷静に徹していたが内心は気が気ではなかった。
そこで、リンディは急ぎ・・・・
「な、なんやて!?クロノ君のクラウディアが!?」
「ええ、どうやら宇宙気流に流されてしまったみたいなの」
ヴォルフラムに乗艦しているはやてに通信を送った。
「それにクラウディアにはクロノの他にフェイトも乗っているのよ」
「えええぇー!!フェイトちゃんまで!?」
「ええ、マスコミや査察部の連中から遠ざけようと思って・・・・それがまさかこんな事になるなんて・・・・」
リンディとしてはフェイトに対して良かれと思った行動が、再びフェイトを危険に晒してしまったことを後悔する。
「それでクラウディアの位置は分かっているんですか!?」
「ええ、宇宙気流に流されながらも本局へ連絡を入れていたわ・・・・クラウディアの座標が最後に判明している位置は此処よ」
リンディはヴォルフラムにクラウディアが通信を送って来た位置を伝える。
「本局からもクラウディアとソラーズの救援を出したけど、はやてさんのヴォルフラムも現場に向かってもらえるかしら?」
「分かりました。ヴォルフラムも急いでクラウディアの遭難現場に向かいます!!」

「ありがとう・・・ただ、遭難現場の近くにあるとされる宇宙気流には気を付けてね。クラウディア、ソラーズと同じ運命を辿れば悲劇が大きくなるから」
「はい」
クラウディアとソラーズの救援のためにはやてが艦長を務めるヴォルフラムもクラウディアとソラーズの遭難現場へと向かった。

クラウディアとソラーズが宇宙気流に流され、次元断層に落ちた時、なのはとはやての故郷である第９７管理外世界の地球・海鳴市にあるハラオウン家のリビングでは・・・
ガタッ、パリン!!
地震が起きてもいないのにクロノ、エイミィ、カレル、リエラの家族写真が納められている写真立てが床に落ちてカバーガラスが割れた。
「あっ、写真立てが・・・」
エイミィが壊れた写真立てを見つけポツリと呟く。
「ま、まさか、クロノ君の身に何かあったんじゃあ・・・」
地震も起きていないにも関わらず床に落ちて壊れた写真立てを見て虫の知らせのような感覚を覚えたエイミィだった。

その頃、次元断層に落ちたクラウディアとソラーズでは・・・
「機関停止、ソラーズと通信は可能か?」
「はい。近距離ならなんとか」
「では、繋いでくれ」
「了解」
クロノはエンジンを止め、ソラーズとの通信を試みた。
彼としては二コラウフと話なんてしたくはなかったが、こうした緊急事態なのでやむを得なかった。
「ロガン艦長」
「なんだ?クロノ。今、忙しいんだ。お前と無駄話をしている暇は俺にはない!!」

ソラーズでも似たような状況で乗員たちは半ばパニックになっていおり、二コラウフは不機嫌そうな様子だった。
「こんな状況だからこそ、冷静にならなければ事態は益々悪化するぞ。ひとまずエンジンを止めて・・・・」
「うるさい!!俺に指図をするな!!」
「しかし、ここは冷静になってエンジンを止めて、エネルギーの節約を・・・・」
「入り口があるのだから、出口もある筈だ。俺たちソラーズは独自で出口を探す!!」
「やみくもに動いてもエネルギーを無駄に消費するだけだぞ!?落ち着けって!!」
「だったらお前はずっとそこに居るがいい!!俺たちはこんなところで死ぬなんて真っ平御免だからな!!」
そう言って二コラウフは通信を切り、ソラーズは出口を求めて次元断層内に広がる漆黒の闇の中へと消えてしまった。
「ソラーズ!!応答しろ!!ソラーズ!!おい、二コラウフ!!戻ってこい!!」
クロノがいくら通信を送っても二コラウフが・・・・ソラーズがクロノからの通信に応えることはなく、またクラウディアの傍に戻ってくることもなかった。
「くっ、あのバカが・・・・」
二コラウフの行動に思わず毒づくクロノ。
「提督、我々はどうしますか?」
「ソラーズの様に出口を探しますか?」
「・・・本局へは連絡を入れてあるか?」
「はい。気流付近の位置の座標は送ってあります。しかし、この次元断層内まで救援が来る可能性は・・・・」
「分かっている。それは極めて低いだろうな」
次元断層に落ちて遭難をしたのだから、その次元断層内に来ては二重遭難となるので、救援がこの次元断層内まで来ることはないだろう。
ならば自力で次元断層を抜けた後、通常空間で救援をまたなければ

ならない。
「フェイト」
「はい」
「武装局員数名を率いて周囲の様子を探索してくれるか？」
「分かったよ」
クロノはフェイト以下数名の武装局員に小型艇で周囲を遭難している宇宙船の探査を命じた。
もしかしたらこの次元断層から脱出する手がかりがあるかもしれないからだ。
真空の宇宙なのでバリアジャケットは展開できないが、手にはバルディッシュを持ち宇宙服を着て自分と同じく展開されたデバイスを手にした武装局員らと小型艇で周囲の宇宙船を探査した。
遭難している船なので、電源は落ちており艦内は暗く光源は宇宙服に装備されている懐中電灯の明かりのみ・・・・
「暗く、静かで不気味ですね・・・・」
暗い船内を慎重に進むフェイトたち。
「ひぃっ!?が、ガイコツ!?」
船内のあちこちには既に白骨化している乗員らしき遺体もあった。
白骨化した遺体を見て思わず悲鳴を上げる局員。
「生きている人は誰も居ない・・・・外の光景同様、まさに死の世界ね・・・・」
外は宇宙船の墓場であり、その宇宙船の中はまさに宇宙船乗りの棺となっている。
（この人たちにも帰りを待っている家族や大切な人も居たんだろうな・・・・）
白骨化した乗員の遺体を見てフェイトは死亡している乗員たちの家族や恋人の事を思うと胸が痛む。
しかし、この次元断層から脱出しなければ自分たちも彼らと同じ運命をたどる事になる。
何としてでも脱出の手がかりを見つけなければならなかった。

百五十一話　脱出の手がかりを求めて

長い休暇期間が明けて、職務に復帰したクロノ。
フェイトもしつこいマスコミや査察部から逃すためにリンディはクロノが艦長を務めるクラウディアへ乗艦させた。
そして、今回の航海にはクロノの士官学校時代の同期生である二コラウフが艦長を務める次元航行艦、ソラーズもクラウディアに同行することになった。
本局を出航した二隻の次元航行艦は今後、管理世界になりうる世界を探査すると共にまだまだ未開域な星の海の海図を製作しながら航海を続けた。
しかし、ある宙域にて二隻は宇宙気流に流されてしまい、そのまま次元断層へと落ちてしまった。
次元断層内には多数の宇宙船が遭難しており、そこはまさに宇宙の墓場と言える場所だった。
クロノはエネルギーの消費を防ぐために流れ着いた箇所から動かない様に指示を出すが、二コラウフは彼の提案とは逆に独自で出口を探しにクロノの忠告を無視して次元断層の奥深くへと行ってしまった。
遠ざかって行く二コラウフのソラーズをクロノは追いかけることはなかった。
下手にソラーズの後を追い、事態を悪化させてクラウディアの乗員たちを危険に晒す訳には艦長として出来なかったのだ。
クロノは事態を打開する為、フェイトに周囲で遭難している宇宙船の探査を命じた。
クロノからの命令を受けて、クラウディアに搭載されている小型艇で周囲に漂流している遭難船へ乗り込むフェイトたち。
遭難船の船内はまさに船の形をした棺桶状態で、光もなければ音もなく、動くモノもない、暗闇と静寂、そして死の世界が広がっていた。
フェイトも管理局で働くようになって様々な事を経験してきたが、

此処までの経験は初めてだ。
「何か脱出の手がかりになるようなモノはあった？」
調査をしていたフェイトが同行していた局員たちに声をかける。
「いえ、特にめぼしいモノは・・・・」
「こっちもです」
「こちらも食料などの物資はありませんでした」
自分たち同様、この次元断層へ落ちたばかりの頃はまだ食料もあったのだろうが、脱出の手がかりがなく、次元断層内に留まり続けた結果、積み込まれていた食料も物資も底を尽き最後は飢えによる衰弱死か乗員同士の暴動で命を落としたのかもしれない。
（そう言えば、月村艦長とギンガはイスカンダルの航海でガミラスの人たちと一週間共同生活を送っていたって聞いたけど・・・・争いにはならなかったから無事に戻って来たんだけど、私たちは・・・・）
シャンブロウで良馬たちは自分たちよりも先に遭難したバーガーたちガミラス人と出会い大和ホテルで一週間の共同生活を送った。
そのホテルには水はあったが、その他の食料は見つからず、脱出口もなく、良馬たちが持っていた非常食を全員で分けて食いつなぎながらトンネルを掘って脱出しようとしていた。
しかし、良馬たちが経験した大和ホテルでの一週間はホテルの外では数時間しか経っていない不思議な経験だったと言う。
限られた空間内で敵対していた人たちの間でよく争いが起きなかったとフェイトは思うが、時間が経てば経つほど、同じ職場の自分たちの中にも疑心暗鬼や不満、恐怖が募り、艦内で争いが起きても不思議ではない。
（早く、脱出の手がかりを見つけないと・・・・）
此処までの航海でクラウディアの食料もかなり消費しているので、食糧をめぐる問題が起きてもおかしくはない。
クラウディアに備蓄されている食糧が無くなる前に何としてでもこの空間から脱出する手がかりを見つけ中ればならなかった。
「ハラオウン執務官、この船には脱出に繋がる手掛かりも物資もなさそうです」

遭難した宇宙船のブリッジ、機関室、倉庫を調べたが脱出の手がかりや食料などの生き延びる為に必要な物資は見つからず大した成果はなかった。
「分かった・・・・まずはクロノに報告を入れるね・・・・あっ、クロノ？うん・・・・この船には脱出の手がかりや使えそうな物資は無かったから次の船に行くね」
「ああ、分かった。気をつけてな」
フェイトはクロノへ連絡を入れて遭難した宇宙船の探査報告をして大した成果がなかった事と次の船を探査する事を伝える。
クロノへ連絡を入れたフェイトたちは別の宇宙船へと調査に向かう。
しかし、その船でも大した情報もなく、物資もなく、さらに別の船へと向かう。
そんな事を何度か繰り返すもやはり脱出の手がかりも物資も見つからない。
脱出の手がかりも物資も見つからず、空振りに終わっていくと次第にフェイト以外の局員らにも焦りの色が見え始めた。
もう何隻目になったか分からない探査に入ったある宇宙船・・・・
この宇宙船でもやはり乗員たちの白骨化した遺体が船内の彼方此方にあったが、この船の乗員の遺体はこれまで見て来た乗員の遺体と異なり、骨格が人間の形とは少々違う形をしていた。
「この船にある遺体、人の形とちょっと違う・・・・」
フェイトは恐る恐る遺体に近づきジッと観察するかのように見つめる。
「何だか大きな虫みたいな骨だ・・・・」
「この船で運搬されていた生物でしょうか？」
「まさか、生物兵器？」
「うーん、骨だけじゃあ判断がつかないな・・・・」
一体の遺体だけでは判断がつかず、いつまでも遺体を見ている訳にもいかないので、フェイトたちは調査を進める。
だが、調査を進めていくとこの宇宙船の船内には人の形をした遺体

は見つからなかった。
「この船に残っている遺体は全部虫っぽい形をしていたね・・・」
「ええ・・・」
「・・・もしかしたら、この船に乗っていたのは虫に近い姿をした宇宙人だったのかもしれないな・・・」
（ルーテシアの召喚獣、ガリューみたいな姿をした宇宙人だったのかもしれない・・・）
元々管理局は管理世界と呼ばれる有人惑星をいくつも所有している。
そして、管理外世界でも地球をはじめとする有人惑星を見て来た。
それらの星に住む人々はどの惑星でも人の姿をしていた。
違いは魔法が使えるか使えないかぐらいだ。
しかし、彗星帝国の艦船に襲われて、遭難して管理局がこれまで認識していなかったもう一つの地球に所属する軍に助けられ、その地球が辿った歴史とイスカンダルへの航海、その後訪れたもう一つの地球で外宇宙からの侵略による占領下で宇宙には肌の色がミッドや地球、管理世界とは異なるカラフルな肌の色をした宇宙人が居る事を経験したフェイトとしては虫型の宇宙人が居ても不思議に思わなかった。
実際にルーテシアの召喚獣であるガリューも二足歩行している人に近い虫型の召喚獣なので、ガリューのような虫っぽい姿をした宇宙人がもしかしたらこの広い宇宙に存在するかもしれない。
そんな中、フェイトがふと窓の外を見ると、一隻の漂流船で小さな明かりが見えた。
「ん？あれ？」
「どうかしましたか？ハラオウン執務官」
「今、あの宇宙船で何か光ったように見えたんだけど・・・」
「どの宇宙船ですか？」
「ほら、あの宇宙船」
フェイトは近くで漂流している宇宙船の内、ある一隻の宇宙船が一瞬であるが船内で何かが光ったように見えた。

傍にいた局員が何事かと声をかけ、フェイトは明かりが見えた宇宙船を指さして何があったのかを伝えるが、光が見えた宇宙船はその後は光らずに周囲にある漂流船同様、沈黙したまま次元断層内を漂っているだけだった・・・・
「見間違え・・・ってことは？」
何のリアクションも無い宇宙船を見て局員はフェイトの見間違えではないかと訊ねる。
「ううん、確かに光った。それは間違いないよ」
しかし、フェイトは確かにあの宇宙船が光ったと言い切る。
「ハラオウン執務官、やはりこの宇宙船も手掛かりや物資はありませんでした」
すると、この宇宙船を調査している別の局員たちがフェイトたちと合流してこの宇宙船に手掛かりがない事を報告する。
「分かりました。では、次はあの宇宙船を探査してみましょう」
「うん。そうしよう」
次にフェイトたちは一瞬光った宇宙船へと探査へ向かった。
そして、フェイトたちが一瞬何かが光った宇宙船へと接舷して内部に入ると、
「あれ？この船・・・・」
「薄暗いですが明かりが点いていますね」
新たに調査へ入った宇宙船はこれまで調査してきた宇宙船と異なり、船内には薄暗いが明かりが灯っていた。
「もしかしてこの宇宙船は私たち同様つい最近、遭難した船かもしれない・・・・」
明かりが灯っていた事からこの宇宙船の遭難時期がつい最近である事が窺える。
「では、船内にはもしかしたら生きている乗員がいるかもしれませんね」
「うん。好戦的な人たちじゃあないと良いけど・・・・」
もしこの宇宙船の乗員が好戦的な性格だと船内で一戦交えなければならないかもしれない。

フェイトとしては出来れば無駄な争いはしたくはない。
この宇宙船の乗員とはなのは方式のＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩではなく、普通のお話で争いを回避出来れば良いと思いながら艦内を探査する。
「ハラオウン執務官」
「ん？なに？」
「この宇宙船の船内に充満している空気はミッドと同じ酸素の成分です」
酸素濃度を調べていた局員がフェイトに船内に充満している酸素がミッドや地球と同じ酸素成分である事を報告する。
「うーん・・となると、やっぱりこの宇宙船の乗員は私たちと同じ人型の姿をしているのかな？でも、念のため、宇宙服は脱がない様に・・・このままの格好で調査をするよ」
「了解」
船内の酸素成分がミッドと同じなので、宇宙服を脱いでも問題はないが、万が一のために宇宙服は脱がずにそのままの状態でフェイトたちは宇宙船を探査した。
「それじゃあ私たちは後ろを調査するから、貴方たちは前を調査してもらえるかな？」
「わかりました」
フェイトは調査隊を二つに分けてフェイトたちは機関室のある後部を一部の局員らをブリッジがある前部へ調査を命じた。
機関室の方へと調査に言ったフェイトらは恐る恐る警戒しながら進んで行く。
しかし、この船は非常灯が点いていながらも乗員の姿もその遺体も見つからない。
「だ、誰もいませんね・・・」
同行していた局員がフェイトに声をかける。
「うーん・・・乗員全員が船を捨てて脱出したのか・・・それとも私たちみたいに周囲の遭難船の調査に出ているのか・・・」
乗員が一人もおらず、更に遺体も無い事にフェイトは既にこの船の

乗員たちが船を捨てて脱出したか、または今の自分みたいに一度船を離れて周囲にある遭難船の調査に出かけているのか？そんな考察をたてる。
「元々この船が無人・・・ってことはないですかね？」
　すると、局員の一人がこの船自体が無人船で宇宙を航行している最中にこの次元断層に落ちたのではないかと考察する。
「うーん・・・でも、この船・造りを見ても無人ではなく人の手を使って動かす感じだし、やっぱり人は居たんだと思う」
　しかし、フェイトは船の造りからして、この船は無人タイプの宇宙船には見えなく、この船には人が乗っていたのは間違いないと指摘する。
　そんな中、ブリッジの方へ調査に行った局員から連絡があった。
「ふぇ、フェイトさん・・・緊急・・・緊・急・・・す・直ぐに・・・き・・・て・・・た、助けて・・・」
「ど、どうしたの!?」
　フェイトは慌てて返信するが、
「・・・」
「応答して!!何があったの!?」
　しかし、前部へ調査に行った局員らの応答がない。
「何かあったんだ・・・」
「ふぇ、フェイトさん!?」
「ハラオウン執務官!?」
　フェイトは前部へ調査に行った局員らの身に何かあったのだと判断し、バルディッシュをライオットフォームに展開して急ぎブリッジを目指す。
　すると、フェイトの目に局員らを糸でグルグル巻きにしている巨大な蜘蛛のような宇宙生物が映った。
「っ!?この化け物めっ!!」
　フェイトは戸惑うことなく殺傷設定のままでバルディッシュを蜘蛛の姿をした宇宙生物の腹部に突き刺し腸を引き裂いた。
「ぐぎゃぁぁぁぁー!!」

フェイトから殺傷力のある一撃と致命傷なダメージを負い蜘蛛型の宇宙生物は絶叫を上げながら一瞬で絶命する。
「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」
見た事もない宇宙生物とそれを一撃で仕留めた事、様々な思いがこんな短時間で脳を巡った事にフェイトは息を荒く呼吸する。
「ハラオウン執務官!!」
「大丈夫ですか!?」
「一体何があったんですか!?」
それから少し遅れて他の局員らが合流する。
「私は大丈夫・・・それよりも他の皆の救助を・・・」
「は、はい」
「了解」
合流した局員らは宇宙生物の糸に捕まった局員らの救助を行う。
「た、助かりました。ハラオウン執務官」
「ありがとうございます」
「それで、一体何があったの?」
フェイトは救助した局員に事情を訊ねる。
「げ、幻覚を見せられて・・・」
「その隙に糸で・・・」
「なるほど・・・」
地球の植物に虫が好む匂いを出し、虫をおびき寄せてそのまま虫を捕まえて捕食する食虫植物や深海の海底で、自身で生産した発光物質を使い小魚やエビをおびき寄せて捕食するチョウチンアンコウみたいにフェイトが仕留めた蜘蛛型の宇宙生物は幻覚を見せて獲物をおびき寄せ、獲物の動きを止めそこを糸で絡め獲物を捕らえ捕食するタイプの宇宙生物みたいだ。
(咄嗟の事とは言え、殺傷設定で生き物を殺めるなんて・・・)
(私もあの世界の影響を受けているのかな?)
時間が経ち、冷静さを取り戻すと自分でも初めてではないかと思う殺傷設定で生き物を殺めた事に驚いているフェイト。
殺られる前に殺れ・・・

そんな言葉がフェイトの脳裏を過る。
ただ、そんな言葉も行動も彗星帝国に襲われた事やもう一つの地球で占領下を間近で経験したからこその言動だったのかもしれない。
「この船の乗員が見つからないのは、もしかしたらこの船の人たちは皆、この宇宙生物に捕食されてしまったせいかもしれませんね」
宇宙生物の生死を恐る恐る確認している局員がフェイトにこの船の乗員が見つからなかった原因がこの宇宙生物が船の乗員を襲い、捕食してしまったせいなのではないかと指摘する。
「う、うん・・・多分ね」
フェイトも先ほど、局員らが襲われていることから船の乗員がこの蜘蛛型の宇宙生物に襲われ捕食されてしまった事について肯定する。
恐らくこの船の乗員は武器をもっていなかったのだろう。
「まだ、他にもこの生物と同じ宇宙生物が居るかもしれないから、ここからは全員で行動をしよう」
この船にあの宇宙生物が・・フェイトが斃した一匹だけとは限らず、また分かれて行動しては襲われる危険性もあるので、ここからは先の探査は全員で行う事にした。
ブリッジに近い前部に居たので、まずはブリッジを調査する事にした。
宇宙船のブリッジに警戒しながら辿り着いたフェイトたち。
しかし、ブリッジにもやはり人の姿はなく、同時にあの蜘蛛型の宇宙生物の姿もなかった。
だが、どこから襲ってくるのは分からないので、半数は周囲を警戒し、残りがブリッジの調査を行う。
「ハラオウン執務官」
「ん？何かあった？」
「はい。この船、これまで調査した船と違って明かりが点いていただけあってエネルギーがまだ残っています」
「推定されるエンジン出力もそれなりにあります。クラウディアに上手くドッキングすることが出来れば、エネルギー問題からしばらくの間は解決するかもしれない」

「分かった。クラウディアに連絡を入れてドッキングの準備をしよう」
　フェイトはクロノに連絡を入れ、調査をした宇宙船に蜘蛛型の宇宙生物が存在していたが、その宇宙船にはまだエネルギーが残されている事を伝えると、
「そうか・・では、こちらでもドッキングの準備をしよう。しかし、まさか幻覚を見せて獲物を捕食する宇宙生物が居たとは・・・その宇宙船にまだその宇宙生物は残っていそうか？」
「それはまだ分からない。機関室とか宇宙船の後部はまだ調査をしていないから」
「分かった。気を付けてくれ」
「了解」
　調査している宇宙船とのドッキングをする為にクラウディアはフェイトたちが調査している宇宙船の傍までやって来て、宇宙服と命綱をつけたクラウディアの乗員たちが宇宙船をクラウディアの後部とドッキングさせる。
　宇宙船とクラウディアがドッキング作業を行っている最中、宇宙船の内部にいるフェイトたちは引き続き調査を行い、船内にあの蜘蛛型の宇宙生物が残っていないか？
　他にも何が脱出の手がかりに繋がる物や物資が無いか調査を続けていた。
　あの宇宙生物の危険性を考慮してこれまで調査した宇宙船よりも念入りに調査が行われ、天井部の通風孔も調査されたが、あの宇宙生物は見つからず、フェイトが斃した一匹だけだった。
「クロノ、この宇宙生物の死骸だけど、どうする？サンプルとして持っていく？」
　宇宙船には一匹しか見つからず、その個体はフェイトが殺傷設定のまま斃してしまったので、生きたままの捕獲は出来なかったが、死体は残っている。
　今後の宇宙開拓の為、この宇宙生物を危険生物のサンプルとしてクラウディアへ持っていくかをクロノに訊ねる。

「・・・・うーん・・いや、写真と映像だけを残して死体は宇宙へ投棄してくれ・・死体の体中にその生物の卵や幼虫を宿していたら途中で孵化する可能性もあるからな」
生物の中には体内に卵や幼虫を宿し、ある程度体内で成長した後に体外へ放出する生物もいる。
既に斃してしまったので、この宇宙生物がどんな方法で出産するのか？
性別が雄なのか？雌なのか？不明となっている以上、たとえ死体であっても保管するのは危険だとクロノは判断し、写真と動画を記録として残して記録が出来次第、本体は宇宙へ葬るように伝える。
「分かったよ」
フェイトはクロノの指示通りに宇宙生物の写真、動画を撮り記録を残すと宇宙船の船外へと投棄した。
その後もフェイトたちは周辺の遭難船の調査を続行し、エネルギーが残っている宇宙船を集めてクラウディアとドッキングさせた。
「ハラオウン執務官たちの調査によって、エネルギー問題についてはなんとかなりそうだ。しかし・・・・」
「この空間からの脱出の手がかりがない・・・・と？」
「ああ・・・・エネルギー問題が解決したと言ってもそれは一時的なモノだ」
「確かに・・・・」
クラウディアの艦内にある会議室では艦長のクロノを含めた幹部会議が行われ、フェイトたちの調査報告が伝えられる。
クラウディアの後部には何隻かの宇宙船がドッキングされているやや不格好な状態となっているが、クロノがこれまでエネルギーの節約を行ってきたので、ドッキングした遭難船のエネルギーを合わせてクラウディアのエネルギーは十分な量が溜まった。
しかし、エネルギーも消耗品であり、人は船のエネルギーを食べる事は出来ない。
エネルギー問題の解決はクロノが言う通り、一時的なモノだった。
「ふぅ～・・・・」

会議室で幹部会議が行われている頃、フェイトたちは食堂で休憩をしていた。
宇宙服を脱ぎ、その解放感と疲労感から調査隊のメンバーはテーブルに突っ伏している。
特にあの宇宙生物に襲われた局員はまさに九死に一生を得たのだから無理もない。
そこへ、会議を終えたクロノが食堂へとやって来た。
「お疲れ様」
「あっ、クロノ・・・何とか脱出のめどはついた？」
「いや、こちらでもドッキングした宇宙船の情報を調べたが、脱出の手がかりにはなりそうもない。ただ、当分のエネルギー問題については解決したがな・・・」
「そう・・・」
「でも、時間だけはある。すまないが明日も周辺にある宇宙船の調査を頼めるか？」
「うん。分かったよ」
こうして今日の成果はエネルギーが残っていた宇宙船を何隻か発見し、それらをクラウディアにドッキングしたことによるエネルギー問題が解決するに至り、この空間からの脱出の手がかりは見つからなかった。
翌日、相変わらず外は星の明かりは無く、宇宙船が漂う不気味で寂しい空間だった。
クロノ、フェイトを含むクラウディアの乗員たちの誰もが夢だったら・・・と、思ったに違いない。
フェイトは今日の調査隊のメンバーを昨日のメンバーと入れ替えた。
宇宙生物に襲われた局員らにしてみればトラウマでしかないし、調査中にパニック状態になっても時間を無駄に消費するからだ。
メンバーを変えた調査隊は昨日と同じく周辺に漂う遭難船の調査へと向かう。
既に調査をした船には船体に目印を刻んであるので、二度手間にな

らないようにちゃんと対処していた。
昨日はエネルギーが残っていた船を何隻か発見したが、そうした幸運は何度も続くとは限らない。
エネルギーも物資も見つからない事の方が当たり前なので、この日も調査した船のほとんどが物資もエネルギーもない宇宙金属の塊と化している物体に過ぎなかった。
(食料の備蓄もあるし、早く何とかしないと・・・)
もし、このままこの空間からの脱出の手がかりがないまま食料が無くなればクラウディアでも乗員同士の争いが起きる可能性は十分にある。
艦内で暴動が起こる前にこの空間から脱出しなければならない。
そんな中、明かりの無い漆黒の空間でまたもや光るモノをフェイトは見つけた。
「ん?光・・・?でも、前の宇宙船よりも小さい様な・・・」
あの宇宙生物が居た宇宙船の光点よりも小さい光源が漆黒の空間を漂っている。
それはまるで夜中に懐中電灯を振っているような明かりだ。
星明かりがあったら気づかない明かりだろうが、周囲の空間が漆黒の闇だったからこそ、気づいたのだ。
「どうかしましたか?」
「あれを見て・・・何か光っている」
「えっ?」
近くに居た局員がフェイトに声をかけると、フェイトは漆黒の空間に光るモノがあると伝える。
局員もフェイトに習って宇宙船の窓から外を見るとそこには確かに漆黒の空間をチカッ、チカッと赤く点滅する光源が存在していた。
「一体なんでしょう?」
「分からない」
光るモノが一切存在しないこの漆黒の空間で何かが断続的に光っている。
その正体は当然不明である。

しかし、その光源は漂っている感じで生物でも宇宙船の類でもなさそうだ。
「ちょっと調べてみる」
「えっ？ハラオウン執務官!?」
フェイトはチカッ、チカッ光る光源の正体を確かめると言う。
局員はギョッとしながらもやはり光源の正体が気になるのか強くフェイトを止める事はなかった。
フェイトは宇宙船の内部と自分が着ている宇宙服に命綱を繋ぐと船外へと出る。
局員らはフェイトの行動をドキドキしながら宇宙船から見ている。
「よっ・・・とっ・・・」
無重力の空間を平泳ぎするかのように進んで行くフェイト。
（ちょっと不格好だけど仕方ないよね・・・）
（大気圏内ならあれぐらいの距離、あっという間に行けるのにな・・・）
フェイトの飛行魔法の速度は空戦属性がある魔導師の中でもトップクラスなのだが、それは空気がある大気圏内の話だ。
空気が無い真空の宇宙空間では、バリアジャケットだけではいくら魔導師と言えど死ぬ。
なので、魔導師だろうが戦闘機人だろうが宇宙空間で活動するには宇宙服は必須の装備品なのだ。
そして、宇宙空間では空戦属性がある魔導師でもやはり大気圏内と環境が異なるためか飛行魔法が使えない。
仮に使用する事が出来たとしても装備している宇宙服が飛行魔法の耐熱性とかで耐えきれなかったらいくら高ランクの魔導師と言えど、一巻の終わりである。
不格好な平泳ぎでようやく光源へ接近したフェイト。
肉眼で確認できる距離まで接近すると、チカッ、チカッ光っていたのはラグビーボールぐらいの大きさをしたカプセルだった。
「なんだろう？カプセル？」
カプセルを手にとったフェイトは首を傾げる。
不審物でもしかしたら、爆弾のような危険かもしれないが、フェイ

トは一応カプセルを持って調査隊が居る宇宙船へ戻った。
「ただいま」
「お疲れ様です。ハラオウン執務官・・・それで、あの光源の正体は一体何だったんですか？」
　フェイトを出迎えた局員は早速、例の光源の正体を聞いてきた。
「コレだった」
　フェイトは局員に回収してきたばかりのカプセルを見せる。
「・・・ん？なんですか？コレ？」
「多分、カプセルの類だと思う・・・」
「カプセル？それが何で外に？」
「うーん・・・どこかの船にあったモノが破孔から外に出たんだと思う」
　フェイトは外の空間にカプセルが漂流していた仮説を言う。
「・・・でしょうな」
　局員もフェイトの立てた仮説が至極当然だと納得する。
「それで、どうしますか？」
「一応、これが何なのかを解析してみよう」
「大丈夫でしょうか？もしも爆発物だったら・・・」
「パルディッシュ、解析できる？」
　もしもこれが爆弾の様な危険物だった場合、このままクラウディアに持ち込むのは危険だ。
　そこで、フェイトはバルディッシュにこのカプセルの解析を頼む。
『何とかやってみます』
　バルディッシュはカプセルを解析し始める。
『・・・解析完了』
「それで、これは何なの？」
『これは何らかの音声と画像データが記録されているカプセルで爆弾等の危険物ではありません』
　解析をしたバルディッシュ曰く、このカプセルの正体は何らかの音声と画像データが記録されているカプセルで危険物ではない言う結果を出した。

「音声に画像データ？・・・・なんの音声と画像が記録されているの？」
『あまりにも膨大なデータなので、私では解析しきれません』
　このカプセルの正体が、音声と画像のデータが記録されているカプセルと言う所まで解析は出来たが、一体どんな音声と画像が記録されているのかは記録されているデータが膨大過ぎてデバイスであるバルディッシュでは解析出来なかった。
「ま、まさか、遭難した船の乗員の遺書めいた音声や写真のデータだったり・・・・？」
「うーん、ありえそう・・・・」
　こんな宇宙船の墓場みたいな空間にある音声と画像のデータなんて、確かに乗員の最後の言葉や写真が記録されている物だと思うのも当然だ。
「それでも一応、調べてみよう」
「りょ、了解」
　とは言え、解析しなければ一体どんな音声や画像が記録されているのか分からない。
　フェイトは調査を一時中止して、調査隊を引き連れてこのカプセルをクラウディアへと運びそこで解析してもらうことにした。
「これが外を漂っていたカプセルか・・・・」
　クラウディアに戻ったフェイトは早速、クロノに回収したカプセルを見せる。
「そう・・・・バルディッシュが解析したら何かの音声と画像が記録されているんだって」
「音声と画像？」
「うん。中にどんな音声や画像が記録されているのかは、膨大なデータ量みたいでバルディッシュじゃあ解析できなかったから、クラウディアで解析してもらおうと思って」
「なるほど」
　クロノはフェイトから事情を聞き、早速回収したカプセルを解析に回した。
　クラウディアのＣＩＣでカプセルの解析が行われ、その場にはクロ

ノとカプセルを回収したフェイトも立ち会った。
解析作業が行われてからしばらくして、
「・・・解析できました」
「では、再生してくれ」
「了解。再生します」
「ああ、頼む」
解析を担当していた局員がカプセルの解析が出来た事を報告し、クロノはカプセル内に記録されているデータを再生させる。
すると、カプセルが光り始め、スピーカーから声がした。
『地球の皆さん・・・』
それは女の人の声だった。
『私はイスカンダルのスターシア』
「スターシア!?」
「な、なんでスターシア陛下の音声が・・・?」
カプセルに記録されていた音声はイスカンダルの女王であるスターシアの声だった。
あまりにも意外すぎる人物の音声にクロノもフェイトも驚愕する。
『私は、ヤマトがイスカンダルへ来ることを信じています。イスカンダルまで旅路には様々な試練が待ち受ける事でしょう。そこで、私はその試練に打ち勝つための手助けとして、航海に必要な情報をこのカプセルに記録して宇宙へ放ちました。地球を救う為、貴方がたはいかなる試練にも打ち勝たなければなりません。私は貴方がたの愛と勇気と実行力に期待します。私はイスカンダルのスターシア』
次に画面には何らかの航路図のようなモノが映し出される。
「こ、これは・・・」
「・・・恐らくこのカプセルはヤマトがイスカンダルに向っている途中で、スターシア陛下がヤマトの為に宇宙へ飛ばしたカプセルなんだと思う。そしてこの航路図は多分、この次元断層内の出口が記録されているんじゃないかな?」
「・・・」
フェイトは、このカプセルは本来、イスカンダルを目指すヤマトの

為にスターシアが宇宙へ放出したカプセルの一つであり、この次元断層内に万が一ヤマトが迷い込んだ際、此処から脱出する為の情報を記録していた物だと推測する。
(きっと、スターシア陛下はヤマトの為にありとあらゆる可能性や事態を考慮していたんだ・・・)
　もう一つの地球の歴史を映像で見ていたフェイトは、スターシアがヤマトの為に様々な事態を考慮していたことに驚く。
「ヤマトじゃないけど、これで私たちはこの空間から脱出できるかもしれないよ。クロノ」
「あ、ああ・そうだな。直ぐにこの航路図をブリッジの航海計器に転送してくれ」
「は、はい」
　クロノとしては驚愕する事ばかりで脳の処理が追いついていないが、フェイトの言葉を聞き、ぎこちないながらもスターシアが残してくれた航海図をブリッジの航海計器へ転送し、脱出の準備を行う、
　ヤマトの為に用意されていたスターシアからの救援カプセルであったが、ヤマトはこの次元断層に落ちることなく、無事にイスカンダルへとたどり着き、放射能除去装置を受け取り、地球を救い、今もきっともう一つの地球にいるだろう。
　故に今回は自分たちがこの次元断層から脱出する為にありがたく使わせてもらう事にした。
　ただ、この次元断層から脱出する前に一つの問題・・・と言うか、懸念があった。
　それは・・・
「周辺にソラーズの反応はないか?」
　クロノは一応、次元断層からの脱出の手がかりを掴むことが出来たので、一緒にこの次元断層へ落ちた僚艦であるソラーズが近くに居ないか確認を取る。
　クロノが抱いた懸念は共に遭難したソラーズの事だった。
　二コラウフの事は個人的にはあまり好感がもてる人物ではなかったが、それでも同僚であり、ソラーズには大勢の乗員が乗っている。

救えるのであるならば、彼らを見殺しにはしたくなかった。
しかし、
「・・・・いえ、反応はありません」
オペレーターは近距離のみ働くレーダーを確認して周辺にソラーズが居ないかを確認するが、やはり周辺にソラーズの姿はなかった。
「・・・・そうか」
近くにソラーズが居ない事を知るとクロノは重々しく報告を受理する。
「いかがいたしますか？ソラーズを捜索してからこの空間から脱出しますか？」
副官がクロノにソラーズの捜索をしてから次元断層の脱出を図るかを訊ねる。
クロノとしては苦渋の決断であった。
次元断層からの脱出の手がかりを掴んだのだから、乗員たちの安全を考えるならすぐに脱出したい。
だが、未だにこの空間のどこかを彷徨っているソラーズの事を思うと彼らも連れて帰りたい。
しかし、恐らく今もソラーズは出口を求めて動き回っているに違いない。
互いに動いている状況下でレーダーも通信機も上手く作動しない中でソラーズ一隻を捜すのは難しい。
「・・・・針路を航路図に示されている針路へ向けろ」
「えっ？」
「クロノ？」
クロノはソラーズの捜索をせずにクラウディアの脱出を指示した。
そんな彼の指示を聞き、クラウディアのブリッジは静まり返った。
「て、提督・・それは・・・・ソラーズを・・・・」
副官はブリッジに居る乗員を代表するかのようにクロノへ声をかけるが、
「副長や皆が言いたい事は分かる。だが、僕にはクラウディアや皆の安全を守る義務がある・・・・未知の空間でむやみに動いて二重遭難の

様な事態を招くことは出来ない・・・もし、この空間から無事に脱出した後、ソラーズの一件が問題になったら全ての責任は僕がとる」
クロノの声は重く・・そして辛そうだった。
勿論、副長やブリッジに居る乗員たちにはクロノの心中を察した。
「いえ・・・艦長の心中はお察しします」
この次元断層から折角、脱出できるかもしれないと言うのにクラウディアのブリッジには重苦しい空気が流れた。

百五十二話　脱出

管理世界になり得る世界の探査を目的とした長距離航海を行っている最中に次元断層へ落ちてしまったクラウディア。

クロノは次元断層からの脱出の手がかりを求めてクラウディアと同じく次元断層にはまり込んで遭難してしまった他の宇宙船の調査をフェイトに命じる。

クロノから次元断層にはまり込んで遭難してしまった宇宙船の調査を命じられたフェイトは同僚を引き連れて周辺の宇宙船を調査するとほとんどの宇宙船は動力が停止して乗員は白骨化した遺体となり、食糧などの物資も見つからない状況が続いた。

そんな中、ある宇宙船の調査では運搬中だったのか蜘蛛に似た宇宙生物に同僚が襲われる事態が起きたが、フェイトは初めて殺傷設定でその宇宙生物を一撃で斃した。

その後の調査で宇宙生物が運搬されていた宇宙船はまだエネルギーが残されていたので、クラウディアへとドッキングした。

調査後にまだ、エネルギーが残っている宇宙船があるかもしれないと調査を続け、クラウディア周辺の宇宙船を調査し続けエネルギーが残っている宇宙船を見つけ、それらの船をクラウディアにドッキングした。

エネルギーがある宇宙船をドッキングしたことによってクラウディアのエネルギー問題はしばらくの間は解決したが、食糧問題等は未だに解決出来ておらず、本局を出てからこの宙域まである程度の日数が経っており食糧も減っている。

エネルギーがあっても食べる物が無ければクラウディアの乗員は死に絶えてしまう。

いや、それ以前に艦内で同僚同士の殺し合いが起きるかもしれない。

そうなる前に一刻も早くこの次元断層から出る必要があった。

脱出の手がかりを捜している中、フェイトが次元断層の空間を漂う

一つのカプセルを見つける。
カプセルを収容してクラウディアで解析するとなんとそのカプセルはイスカンダルの女王、スターシアがヤマトの為に敢えてこの次元断層内に送り込んだカプセルであった。
カプセル内にはスターシアからのメッセージとこの次元断層を脱出する為のルートが記載されていた。
これで次元断層から脱出する事が出来る。
しかし、クラウディアの乗員たちには一つの懸念があった。
それは自分たちと同じく次元断層に落ちてしまった僚艦のソラーズの事だ。
ソラーズは次元断層に落ちてから直ぐにクロノの制止を聞かずに出口を求めて次元断層の奥深くへ行ってしまった。
クラウディアは次元断層からの脱出の手がかりを掴んだが、僚艦のソラーズは行方知れず・・・
ソラーズ一隻を捜しまわって次元断層内を動き回ってしまっては、折角解決したエネルギー問題が再燃してしまうし、食糧問題は未だに解決していない。
ソラーズの艦長である二コラウフはクロノ個人としては苦手な同期生であったが、ソラーズには彼以外にも大勢の乗員たちが居た。
自分が下した決断は二コラウフを始め、ソラーズ全乗組員を見殺しにする決断でもある。
クロノはクラウディアの乗員たちの安全を優先する為、ソラーズを・・彼らを見捨てる決断を下したのだ。
しかし、クロノの決断に異議を唱える者は誰も居なかった。
脱出の手がかりを掴んだとは言え、今も遭難しているのは変わらない。
そんな中で、ソラーズを捜しに次元断層の奥深くへ行けば次元断層からの脱出する機会を永遠に失うかもしれない。
クラウディアは辛い決断をした後にスターシアが記した針路を進む。
「クロノ・・・」

味方を見殺しにすると言う辛い決断をしたクロノを見つめるフェイト。
「ハラオウン執務官、我々も同じ気持ちです。ですが提督の判断も間違ってはいません・・・・状況によっては非情な決断を下さなければならない・・・・これも提督の仕事の一つなのです」
クラウディアの副長がフェイトにクロノの気持ちを代弁する。
「・・・・うん・・そう・・だね」
(クロノだけではなく、きっと防衛軍の艦長さんだってこんな決断をした筈だよね・・・・)
(古代守さんも沖田艦長も・・・・)
絶滅をかけた戦争ではきっと今回クロノが決断したような仲間を見捨てる、仲間の屍を踏み越えてでも作戦を成功させなければならない事態が多々あった筈だ。
古代守もあの冥王星会戦で、味方を逃がすために自らの艦を囮として、ガミラス艦隊へと突っ込んで行った。
自分一人だけでなく、当時有人艦であった雪風の乗員たちと共に・・・・
結果的に古代守はガミラスの捕虜になり、その後にスターシアの手で救助されたが、自分一人生き残ってしまった。
古代守としては辛い経験になったに違いない。
沖田艦長もそんな雪風を見捨てる決断をし、それまでのガミラスとの戦いで大勢の部下を失う経験をしてきた。
今回の経験はクロノもクラウディアの乗員たちにとっては辛い経験になったのは言うまでもないが、それは決して無駄になってはおらず、成長の糧に繋がるに違いない。
クラウディアが次元断層へ落ちて遭難した事はリンディから海鳴で暮らすエイミイにも伝えられた。
「えっ!?そんなっ!?クロノ君が!?」
当然、エイミイが受けた衝撃は計り知れない。
「リンディさん、間違いないんですか!?」

エイミィとしては夫の艦が次元断層へ落ちたなんて信じたくはなく、誤報だと信じたかった。
「クラウディアからの最後の通信から間違いないわ・・・・」
「そ、そんなっ・・・・」
しかし、現実は残酷でありクラウディアが次元断層へ落ちたのは間違いではなかった。
「く、クロノ君は・・・・クロノ君は助かるんですか!?」
「急いで救援の艦を現場に向かわせたけど、次元断層は通常の空間と違うから・・・・」
「・・・・」
リンディの返答に俯くエイミィ。
いくらリンディでも次元断層についてはどうしようもない。
故に義娘を励ます言葉が見つからない。
何かを言ったところで気休めにもならないのはリンディ自身も分かっているからだ。
クラウディアが次元断層に落ちた事をエイミィに黙っていても良かったのだが、黙っていてもクロノがいつまでも帰らなければいずれはバレる事なので、リンディは早めにエイミィへ伝えたのだ。
「・・・・エイミィ、残酷な事を言うのは承知しているけど、最悪の事態を覚悟しておいてね」
「・・・・はい」
エイミィとて次元航行艦勤務をしていたので、次元断層の事は知っているし、そこへ落ちた者の末路も当然知っていた。
リンディの言う『最悪の事態』・・それはクロノの殉職のことを指す。
エイミィは重々しく返答するしか出来なかった。
「・・・・」
リンディからの通信を切るとエイミィはまだ項垂れたままだ。
そこへ、
「お母さん、どうしたの?」
「何かあったの?」
カレルとリエラが母の異変に気付いて声をかけてきた。

「ううん、なんでもないよ。ちょっとリンディさんとお話をしただけ」
エイミィは子供たちに悟られない様に空元気ながらも明るく振舞った。
しかし、リンディが思ったようにクロノがいつまでも帰らなければ子供たちも不審に思うだろうが、まだクロノが死んだと完全に決まった訳ではない。
せめてクロノの殉職が正式に決まるまでエイミィは子供たちに黙っている事にした。
(クロノ君・・・クロノ君がそう簡単に死ぬ筈がないよね・・・)
(私も子供たちも待っているから・・・)
だが、エイミィは最後まで希望を捨てる事はなかった。
この時、リンディはフェイトもクラウディアに乗艦している事をエイミィに伝えておらず、もしそれを知っていればエイミィは常にフェイトの使い魔であるアルフの様子を注視していただろう。
フェイトが彗星帝国の残党に襲われティアナと共に遭難した際、クロノはエイミィにアルフの様子を注視するように言っていた。
もし、フェイトの身に何かあれば使い魔であるアルフの様子にも変化が現れるからだ。
しかし、今回はリンディがエイミィにフェイトの事を伝え忘れていたので、エイミィがアルフの様子を注視することがなく、後にフェイトがあの時、クラウディアに乗艦していた事を知り、リンディに詰め寄ったのは言うまでもなかった。

家族たちが心配している中、星の明かりもない次元断層内をスターシアが作成した針路に従って進むクラウディア。
「周囲の遭難船に気を付けて進め。今のクラウディアは他の宇宙船をドッキングさせているから普段の様に舵は利かないぞ」
「りょ、了解」
クロノが航海長に注意を促すと航海長は緊張した様子で操舵する。
するとある地点で停止のサインが出た。
「て、提督。指示ではこの空間で停止するようにと出ています」

「分かった。ひとまず機関停止」
「機関停止」
停止指示が出た空間でクラウディアがエンジンを停止すると、再びスターシアのメッセージが流れる。
するとスターシアのメッセージからはこの空間で波動砲を撃てば次元の壁を一時的に打ち壊して穴を開けることが出来るので、穴が開いている内にそこを通れば通常空間へ出られるとの事だ。
スターシアのメッセージを聞いてクロノたちは再び頭を抱える事になる。
クラウディア艦内の会議室では重苦しい空気で艦上層部の局員らで会議が行われていた。
「まさか、脱出の最後の鍵があの波動砲とは・・・」
次元断層内からの脱出の最後の鍵が波動砲であることに副長は思わず頭をかく。
「しかし、スターシア陛下は何故波動砲の存在を知っているんだ？・・・メッセージでは、ヤマトがまだイスカンダルへ到着する前の事だと言うのに・・・？」
クロノはスターシアがまるでヤマトに波動砲が搭載されることを見越しているかの様な発言に疑問を抱いた。
「いえ、それについては疑問に思う事ではありません」
クロノの疑問にフェイトはあっさりと回答する。
「それはどういうことだ？」
「ヤマトの波動エンジンは元々スターシア陛下が妹のサーシア殿下に託した設計図からもう一つの地球の技師たちが形にしたモノであり、恐らく波動エンジンの設計図が記されたデータには波動エンジン以外に波動砲のデータないし、波動砲の設計図も一緒に添付されていたんじゃないかな？」
「なるほど・・・スターシア陛下はヤマトが波動エンジンの他に波動砲を搭載する事も見越していた訳か・・・」
フェイトの説明を聞き納得するクロノ。
「しかし、提督。スターシア陛下がヤマトに波動砲を搭載する事を見

越していたとしても我々はその波動砲を有しておりません。これではせっかく手に入れた脱出の手がかりも無駄に終わります」
「今からでも別の出入り口を捜しに行きますか？」
ヤマトに備わっている波動砲・・・当然、管理局の次元航行艦であるクラウディアに搭載されている筈がない。
「アルカンシェルでは威力は足りませんか？」
そう、ヤマトに波動砲と言う切り札があるように管理局の次元航行艦にもアルカンシェルと言う切り札がある。
ＪＳ事件の折には古代兵器である『聖王のゆりかご』を葬った管理局が誇る兵器である。
とは言え、アルカンシェルと波動砲では威力があまりにも違い過ぎる。
「うーん・・・」
しかし、現時点で試すことが出来るのはアルカンシェルぐらいだ。
「だが、アルカンシェルを撃つには莫大なエネルギーが必要だ。万が一、アルカンシェルを撃って次元断層の壁に穴をあける事が出来なかったら・・・」
「無駄にエネルギーを消費するだけか・・・」
乗員の中にはここからの脱出を諦めて別の空間に存在しているかもしれない出口を探そうと言う案も出る。
クロノはまたもや大きな決断を下すことになる。
「確かにアルカンシェルと波動砲ではその威力は比べなくとも波動砲が勝るだろう。だが、アルカンシェルの特徴を思い出してほしい」
「アルカンシェルの特徴？」
「そうだ。アルカンシェルは空間歪曲と反応消滅を起こすことにより広範囲の対象物を消滅させる。現在の次元航行艦は指向性の制御装置により殲滅範囲を調整することが出来る。空間を変換接続させる特性が位相に干渉をもたらせれば通常空間への接続・・・開口部が形成できるかもしれない。此処周辺の空間は次元断層の中でも層の厚さが薄い事がスターシア陛下のメッセージから判明しているからな」
クロノはアルカンシェルの特徴から波動砲並みの威力がなくても

脱出できるかもしれないと仮説を唱える。
　それは此処周辺の次元断層の層が薄い事も関係している。
「ですが、それでも万が一の事もあります」
「ではどうする？あてもなくこのまま次元断層を彷徨うか？」
「そ、それは・・・」
　乗員の中にはアルカンシェルの使用を渋る者も居るが、此処でアルカンシェルの発射を諦めて、別の出口を捜しに行ったとして出口が見つかる保証はない。
　ならば、一か八かの賭けでアルカンシェルをこの空間で撃ち込むのも一つの手であるが、もしアルカンシェルを撃ち込んで何も起きなければ無駄にエネルギーを消費するだけで終わる事になる。
「やりましょう」
　すると副長がアルカンシェルの使用を支持する。
「副長・・・」
「このまま次元断層の中を彷徨っても何処かに出口がある保証はありません。それならば、アルカンシェルの使用が此処からの脱出に繋がるかもしれないのであるならば、やってみる価値はある筈です。幸い、今の本艦は他の宇宙船をドッキングしているので、エネルギーに関しては多少の余裕があります」
「そうだね・・・私も副長の意見に賛成するよ」
　副長の他にフェイトも此処でアルカンシェルの使用に賛成する。
　アルカンシェルの特徴とエネルギー問題から、『もしかしたら・・・』という思いが強くなり、当初はアルカンシェルの使用に消極的な様子の乗員たちも次第にアルカンシェルの使用に賛成し始めた。
　ただいきなりアルカンシェルを使用する訳ではなく、何度もシミュレーションで脱出プランを立てた。
「アルカンシェルを発射後、ドッキングしている宇宙船からエネルギーをクラウディアの機関へと流し込み直ぐにエンジンを動かせるようにしなければならない。機関室は常に動けるよう態勢を整えておいてくれ」
「はい」

「発射するアルカンシェルに関してもクラウディアのエネルギー全てを使用し尚且つエネルギーを集約した最大出力のアルカンシェルを次元断層の壁に撃ち込む・・・」
「エネルギー全てを使用した最大出力のアルカンシェル・・・」
「クラウディアでは、もう二度と使用はされないでしょうな・そんなアルカンシェルは・・・」
「そうだな。では、各部準備が出来次第、実行に移す。念の為、乗員全員には宇宙服の着用を徹底するように」
『了解!!』
　脱出へのシミュレーションが終わり、各部署の乗員たちが配置へと着く。
「・・・各部、配置に着きました」
「総員、宇宙服の着用も完了」
「不要箇所のエネルギー供給を停止・・・」
　クラウディア本来のエネルギーをアルカンシェルへと流し込んだので、ブリッジ内の明かりも消え、計器の明かりのみの明かりとなる。
「よし、エネルギー充填。アルカンシェル発射用意」
「アルカンシェルへエネルギー充填・・・」
　普段のアルカンシェルの発射も緊張感があるのだが、今回のアルカンシェルの準備はそれ以上に緊張感が漂っているのをフェイトは肌で感じていた。
「アルカンシェル、発射準備完了・・・」
「機関室、アルカンシェルを撃つぞ!!準備は大丈夫か!?」
「いつでもどうぞ!!」
「アルカンシェル・・発射!!」
「発射!!」
　クラウディアからはこれまでにない眩い光と分厚いアルカンシェルを放った。
　すると、前方の何もない筈の空間に稲妻と共に赤黒い靄のようなモノが発生する。
「前方に突破口らしきモノが形成されました!!」

「やった!!」
「成功だ!!」
　何もなかった空間から異常現状が起きた事からこれがスターシアの言う次元断層の壁に開いた穴だと判断した。
「機関室!!宇宙船のエネルギーをクラウディアへ流せ!!」
「了解!!」
「航海長、全速前進!!穴が閉じる前に突っ切れ!!」
「は、はい!!」
　クロノは素早く機関室と航海長に指示を出す。
　そして、クラウディアは全速で赤黒い靄の中へと突入し、その中を突っ切る。
「観測員、周囲の状況の変化に気をつけろ」
「はい」
　次元断層の脱出なんて事はこれまでの管理局の歴史から今回が初めてのケースであり、何が待ち受けているのか一切情報がない。
　その為、観測員も手空きの乗員たちも周囲の様子を注意深く監視する。
「提督、後方の穴が消滅しました」
「次元断層の壁が修復し始めたと言う事か・・・・」
「この空間も決して安定していると言う訳ではありませんね」
「変な刺激を与えなければ大丈夫だと思うが、慎重に且つ急いでこの空間から出るぞ」
　次元断層とも通常空間とも異なるこの亜空間で止まってしまっては、この亜空間に閉じ込められる所か消滅してしまう恐れもある。
　周囲が暗闇で支配されていた次元断層と異なり、赤黒く稲妻が鳴り響く亜空間を突き進むクラウディア。
　すると、
「提督!!前方に星明かりらしき光源を確認!!」
　クラウディアの前にはまるでチャックを開けたような亜空間の開口部が存在し、そこには星明かりらしき明かりが確認できた。
「そこが通常空間の出口だ!!」

「やった・・・」
「助かったぞ」
「まだ、油断するな。感傷に浸るのは出てからにしろ」
「は、はい」
　クラウディアが亜空間から通常空間へ向かっている頃、通常空間ではリンディからクラウディアが次元断層に落ちたと言う知らせを受けて現場に救助へ向かったヴォルフラムが例の宇宙気流の近くで停止して様子を見ていた。
　ヴォルフラムはクラウディアが遭難した時、本局ではなく別の宙域への探査航海に出ていたので、比較的すぐにクラウディアの遭難現場へ到着したのだ。

　ヴォルフラム　ブリッジ
「艦長、ここがクラウディアの遭難現場です」
「クラウディアとソラーズが流された宇宙気流も確認できます」
「了解や・・あんまし宇宙気流の傍へは近づいたらあかんで。流されたらクラウディアとソラーズと同じ様に次元断層へ流されてしまうからな」
「了解」
　はやてはヴォルフラムの航海長に宇宙気流へはあまり近づかないように忠告する。
「しかし、現場に到着したのは良いですけど、これからどうしましょう？」
　グリフィスがはやてにどうやってクラウディアとソラーズを救出するかを訊ねる。
「うーん・・・『どうしましょう？』と言われてもな・・・」
　はやて自身も困惑する。
　クラウディアとソラーズを助け出すために次元断層に入り込んでは二重遭難する事になる。
　自然を相手ではいくら高ランクの魔導師とは言え、勝てない。
　現場についても何も出来ない。

（あんな中にクロノ君たちが居るっちゅうのに何も出来へんのは悔しいな・・・）
　はやては宇宙気流を見つめながら自身の無力さを悔しがる。
　そんな中、
「艦長!!」
「なんや？」
「この近くで空間の歪みを確認!!」
　オペレーターがこの近くの空間の歪みが発生したことを発見し、報告する。
「なんやて!?次元震か!?」
「いえ、違います!!次元震とは波長が異なります!!」
　空間の歪みは次元震の発生パターンと異なる。
「じゃあ、何かが空間転移してくるのか？」
　グリフィスがオペレーターに訊ねると、
「た、確かに空間転移に似てはいるのですが・・・・」
　オペレーターはどうにも煮え切らない報告をする。
　オペレーター自身もこんな反応を観測したのは初めてであったからだ。
「総員臨戦態勢!!」
　はやては万が一を想定して戦闘及びこの宙域からいつでも離脱できるように指示を出す。
　一体何が起きるのか、はやてを始めとしたヴォルフラム乗員たちが固唾を飲んで待機していると、
　赤黒い靄と稲妻が出現し、その中から管理局のＸＶ級の次元航行艦が出現した。
「え、ＸＶ級?!」
　突然現れた味方のＸＶ級の次元航行艦にはやてたちは驚いた。
　そのＸＶ級次元航行艦・・・クラウディアでは、
「通常空間を確認!!」
「急いでこの場から離れろ!!直ぐに穴が塞がるぞ!!」
「提督!!艦のバランスが・・・・」

「ドッキングした宇宙船を切り離せ!!」
「了解」
　速度を出すとやはりドッキングした宇宙船の影響でバランスを崩した。
　そこでクロノはドッキングした宇宙船を切り離した。
　クラウディアは航行に必要なエネルギーはドッキングした宇宙船から既に得ていたので、エネルギーがないドッキングした宇宙船は航行に支障をきたすと判断し、ドッキングを解除したのだ。
「本艦の近くに艦船反応があります!!」
「なに!?所属は分かるか!?」
「えっと・・・判明しました!!八神艦長のヴォルフラムです!!」
「急ぎ八神艦長へ通信を入れろ!!」
「了解!!」
　クロノは通常空間に出ても油断せずにテキパキと各部へと指示を出す。
　そんな中で近くにはやてのヴォルフラムが居る事を確認すると、ヴォルフラムへ通信を入れる。

　ヴォルフラム　ブリッジ
「艦長、出現したＸＶ級より通信です!!」
「繋いでや」
「は、はい」
　ヴォルフラムの通信士が通信回線を開くとモニターには意外な人物が映し出される。
『はやて!!』
「えっ!?クロノ君!?」
「ハラオウン提督!?」
　モニターに映るクロノの姿にはやてとグリフィスは驚愕する。
『はやて!!詳しい話は後でする!!直ぐに牽引ビームでクラウディアを引っ張ってくれ!!』
「りょ、了解や・・牽引ビーム用意!!」

「は、はい」
クロノから頼まれ、はやては牽引ビームの用意を指示し、クラウディアへと牽引ビームを放つ。

クラウディア　ブリッジ
「ヴォルフラムからの牽引ビームの接続を確認!!」
「提督、形成口が・・・・」
監視をしていた観測員が次元断層からの出口の異変を報告する。
「どうした・・・・あっ・・・・」
クラウディアが出て来た穴はチャックが閉まるかのように消滅した。
「・・・・形成口・消滅しました」
「本艦、ヴォルフラムは安全宙域まで退避しました」
「ふぅ～・・・・」
次元断層から脱出し、形成口の対消滅も無事に終わり、クラウディアは数日ぶりに通常空間へ脱出することが出来、クロノはようやく一息つくことが出来た。
「提督、八神艦長より通信が入っております」
「繋いでくれ」
「はい」
クラウディアの通信士がヴォルフラムとの通信回路を開く。
するとモニターにはやての姿が映し出される。
『クロノ君、これは一体どういう事や?それにあの穴は一体何なんや?』
『それにソラーズの姿が見えませんが、ソラーズはどうなったんですか?』
事態を飲み込めていないはやてとしては当然、クロノから事態の説明を求めるのは当たり前の事であった。
そしてグリフィスはクラウディアと一緒に次元断層へ落ちた筈のソラーズの姿が見えない事に疑問を覚え、クロノにソラーズの行方を訊ねる。

「あ、ああ・・説明しよう」
クロノは、はやてにある程度の事を話した。
ソラーズと共に宇宙気流に流されそのまま次元断層へと落ちた後、クロノはエネルギーの節約の為、その場から動かずに脱出の手がかりを探そうとしたが、ソラーズはクロノの制止を無視してそのまま次元断層の奥深くへ出口を捜しに行ってしまい、そこから分かれてしまった。
ソラーズと別れた後、周囲に漂流していた宇宙船を調査し次元断層からの脱出の手がかりを掴んで脱出をした事をクロノははやてたちに伝えた。
しかし、その話の中でスターシアのカプセルについては黙っていた。
『そんな事が・・・・』
「まさに九死に一生を得る経験だったよ」
『そら、そんな体験をしたらな・・・・』
「はやて、すまないが、本局への報告は少し待ってはくれないか？」
『えっ？どないしたん？』
「色々とありすぎて僕も含め、クラウディアの乗員全員は疲れているんだ・・・・本局へ報告を入れると、色々と質問攻めになる。せめて乗員たちの疲れを癒してからにしてもらいたいのだが・・・・」
『あぁ～確かに・・・・分かった。それじゃあ、報告をしても良いタイミングになったらまた連絡してや』
「ああ、分かった。それと乗員全員を休息するからヴォルフラムはしばらくの間、クラウディアを牽引してくれると助かる」
『了解や』
クロノは次元断層に落ちてから脱出までの事態を説明はしたが、本局への報告は、はやてに『待った』をかけた。
クラウディア乗員のメンタル面を理由に休息を入れてから本局へ報告してもらう事にしてもらった。
ただ、クロノが『待った』をかけたのは、乗員の休息だけではなかった。

「艦の航行はヴォルフラムが牽引してくれる。乗員は順次休息に入ってくれ・・・ただ、各部の長はすまないが、会議室へ集まってくれ。フェイト、君も来てくれ」
「えっ?う、うん。分かった」
クロノは各部の長を再び会議室へ集めた。
その中にはフェイトも含まれていた。
会議室に集まったクラウディアの幹部たち。
「疲れている所を集まってもらってすまない」
「そんなことはないよ。一番疲れているのはクロノの筈だし」
「そうですよ。提督は我々の為に辛い決断をしたのですから」
フェイトと副長がクロノの苦労を労うと、他の幹部たちも頷く。
「ありがとう・・・それでわざわざ集まってもらったのは他でもない・・・次元断層内でハラオウン執務官が発見したスターシア陛下のカプセルについてだ」
クロノが議題を話す。
議題は次元断層内で見つけたスターシアのカプセルについてだ。
「スターシア陛下のカプセル?」
「どういうことでしょう?」
「今回の次元断層からの脱出にはスターシア陛下のカプセルが大いに役立った。ただ、それによってスターシア陛下の故郷が管理局に狙われないかと言う疑念がある」
『・・・』
クロノの懸念にその場に居た一同は黙る。
「で、でも、あのカプセルにはスターシア陛下の故郷であるイスカンダルの座標は記録されていなかったけど・・・」
「それは分かっている。だが、管理局が数を使ってこの周辺の宙域を捜索し、あのカプセル以外のカプセルを探査し、そのカプセルに万が一イスカンダルの座標が記されていたらどうする?」
「そ、それは・・・」
「イスカンダルはもう一つの地球の恩人とも言える星だ。その星を管理という名の侵略目的で攻め込んだら・・・」

「管理局は防衛軍に侵略者認定されると言う事ですね？」
「防衛軍以外にもガミラスからも敵と認識される・・・私は遭難時、防衛軍に救助され一緒にイスカンダルまで航海をしましたが、防衛軍とガミラスに侵略者認定された暗黒星団帝国がどうなったのか？その末路をこの目で見ました・・・管理局がその両者に敵と認識されたら、管理局は一日ともたずに消滅します」
フェイトは防衛軍とガミラスを敵に回すリスクを会議室に集まった幹部たちに話す。
防衛軍とガミラスを敵に回せば、管理局の次元航行艦隊は防衛軍の波動砲の餌食となり、ミッドチルダにはもう一つの地球を赤茶色の死の星に変えた遊星爆弾の雨が降り注ぐことになる。
管理局には放射能除去装置何て代物は無い。
仮にイスカンダルを占領してそこから放射能除去装置を手に入れてもＡＭＡを発生させる装置なのだから魔導師としてはそんな装置は即刻処分するだろうから、放射能塗れになったミッドチルダには使用出来ないだろう。
となれば、どのみちミッドチルダは滅ぶ。
その破滅の発端を自分たちが原因となればミッドチルダに住む大勢の人々に申し訳が立たない。
「ここはやはり、スターシア陛下のカプセル・・と言うかカプセルに記録されていた中身については秘匿するべきだと思います」
フェイトはクロノにスターシアのカプセルについては黙っておくべきだと進言する。
「わ、私も・・・」
フェイトに続いて副長もフェイトの意見に賛同する。
アルカンシェルの使用の時と同じく段々とフェイトの意見に賛同する者が続いた。
そもそもスターシアのカプセルの存在についてはフェイトと宇宙船を探査していた時に同行していた局員らは知っているが、カプセルの中身に何が記録されていたのかはクラウディアの中でも一部の者しか知らない。

同行した局員らには、『カプセルには何も記録されていなかった』と伝えれば中身を知られる事は無いだろう。
「ですが、あのカプセルが次元断層内に落ちたヤマトの為に用意されたモノだとすれば、ハラオウン執務官が収容したあのカプセルが一つとは限らずソラーズが収容しましたらどうしますか？」
副長がカプセルの存在を指摘する。
スターシアのカプセルがあの一つとは限らない。
今も次元断層内を彷徨っているソラーズが自分たちの様に次元断層の中でスターシアのカプセルを見つける可能性は十分にある。
「確かに副長の指摘は最もだ。しかし、次元断層を脱出するには波動砲が鍵となる」
「ですが、我々はアルカンシェルで脱出に成功しましたが？」
「それはまだエネルギーが残っている宇宙船をドッキングしたからだ。エネルギーが残った宇宙船をドッキングせずにアルカンシェルを使用してもエネルギー切れで次元断層からの脱出は無理だ」
「あっ・・・」
クロノの指摘に確かに波動砲を装備していない次元航行艦でも次元断層からの脱出は出来たが、それは別エネルギー源を有している場合だ。
仮に次元断層内にあのカプセル以外のカプセルが存在し、ソラーズがそのカプセルを見つけたとしても二コラウフがクラウディアの様にエネルギーが残った他の宇宙船をドッキングしなければ次元断層からの脱出は不可能だろう。
果たして二コラウフにそこまでの機転があるかは疑問だ。
「しかし、カプセルの記録を秘匿するにしても本局への報告はどうしますか？」
次元断層から脱出してきたのは管理局の歴史史上クラウディアが初のケースになり、クラウディアの次元断層内とった行動と次元の壁の薄い箇所へ向かうルートは今後の〝海〟の活動に必要不可欠なデータになるだろう。
「それについては、僕に考えがある。スターシア陛下のカプセルの内

容を秘匿しつつ、今回のデータを無駄にしない方法がな・・・」
クロノには何か策がある様子だった。
「ひとまず、八神艦長に一つ確認する事がある」
そう言ってクロノは、はやてに通信を入れた。
『お？クロノ、準備は出来たんか？』
「その前に一つ、確認したいことがあるんだが・・・」
『ん？なんや？』
「ヴォルフラムの映像記録にクラウディアが次元断層から出て来た時の映像は残っているか？」
『映像記録？ちょっと待ってな』
クロノに頼まれ、はやてはヴォルフラムが撮影した映像記録を調べる。
『クロノ君、あったで』
「そうか・すまないが、そのデータを送ってくれないか？本局への報告にヴォルフラムの視点側と言うことで使いたい」
『了解や』
ヴォルフラムから送られてきた映像記録を確認してみると、次元の壁に出来た穴から出て来たクラウディア。
バランスを保つためにドッキングしていた宇宙船を切り離すシーンもあり、切り離された宇宙船は動かす人もエネルギーもなく、次元の穴へと吸い込まれて行った。
「確認できた。ありがとう、はやて」
『ほんなら、本局へ報告を入れてもええか？』
「ああ、構わない」
ヴォルフラムから送られてきた映像記録を確認した後で、クロノは、はやてに本局へ報告して構わないと伝えた。
はやてから本局へ齎された報告はリンディを始めとした本局に居た者たちを驚愕させた。
その内容と言うのが、
クラウディアが次元断層から無事生還を果たす。

と言うモノだった。
これまでの管理局の歴史上、次元断層に落ちて無事に戻って来た事例は存在せず、今回のクラウディアのケースはレアなケースとなった。
リンディとしては息子が無事に次元断層から戻って来たので、思わず涙目になった。
流石に次元断層から戻って来たクラウディアに再び長距離航海の続きをする余裕もなく、本局としてもどのような経緯で次元断層から戻って来たのかその方法をクロノから聴取する必要があったので、ヴォルフラムとクラウディアには本局への帰還命令が下された。
その他に次元断層から戻って来たのはクラウディア一隻だったので、この後に本局で控えている聴取には勿論、ソラーズの行方も含まれていた。
本局へ戻る最中、クロノはクラウディアの自室にて本局へ説明する為の報告書を作成していた。
「ふぅ～」
ある程度、報告書を作成した後、クロノは一息つきながらパソコンの画面から視線を逸らした。
そして、執務机の上にある写真立てに目をやる。
「・・・」
その写真立ての中には妻であるエイミィと双子のカレルとリエラの写真が納まっていた。
(エイミィ・・・今回の航海は色々と大変な事があったが、何とか帰れることが出来そうだ・・・)
(流石に海鳴の家に戻る事は出来ないだろうが、本局へ着いたらエイミィたちに一報を入れて安心させてやらないとな・・・)
身体は疲れ切っている筈なのにこうして家族の写真を見ると自然と顔が綻んだ。
「クロノ、ちょっと良いかな?」

それからしばらくしてフェイトがクロノの部屋を訪れる。
「・・・・」
しかし、部屋の中からクロノの返答がない。
「クロノ？」
返答がない事にフェイトは首を傾げ、恐る恐るクロノの部屋に入る。
「クロノ？大丈夫？」
フェイトがクロノの部屋に入ると、クロノは執務机に突っ伏していた。
近づいてみるとクロノはスー、スーと寝息を立てていた。
「・クスッ・・・お疲れ様・・クロノ」
次元断層内、そしてこの後に本局で控えている今回の件における報告会・・・
まだまだクロノには気苦労が絶えないだろうが、せめて今だけはゆっくり眠らせてあげたい。
フェイトは眠っているクロノに毛布を掛けながら微笑んだ。

百五十三話　報告会

宇宙気流に流されてそのまま次元断層へ落ちてしまったクラウディアであったが、次元断層内を調査していると、ヤマトの為に用意されていたスターシアのメッセージ・カプセルとクロノの機転により、クラウディアは無事に次元断層から脱出することが出来た。

今回のクラウディアの行動は管理局の歴史史上初の次元断層からの生還と言う偉業を達した事になる。

遭難したクラウディアの救援に向かったヴォルフラムが本局に連絡を入れると、本局は歓喜と驚愕に満ちた。

ただ次元断層からの生還時に、クラウディアと共に次元断層へ落ちたソラーズの姿はなく、ソラーズ乗員の関係者たちは落胆と悲しみ、焦り等の感情が渦巻いていた。

此処までの航海と次元断層からの生還と言う偉業の経緯とソラーズの行方を訊ねる為、クラウディアには本局への帰還命令が下された。

クラウディア生還の知らせはリンディからエイミィに伝えられた。

勿論、エイミィ以外にもクラウディアの関係者全員にクラウディアの無事は伝えられる事になった。

「えっ？クラウディアが戻って来た!?本当なんですか!?リンディさん!?」

「ええ、はやてさんから本局へ知らせが入ったの・・映像でもクラウディアの姿を確認したから間違いないわ」

「そうなんですか・・・良かった・・・それで、クロノ君は無事なんですよね？怪我とかしていませんよね？」

「ええ・・クロノは、はやてさんとモニター越しだけど直接話したみたいで、怪我はしていないみたい。今、クラウディアは本局へ向かっているみたいだから、本局に着いたらクロノから貴女に連絡が入ると思うから待っていてね」

「はい」

先日のクラウディアが遭難した知らせを聞いた時とは打って変わり、エイミィの様子は顔が綻んでいた。

それから幾日かの日々が過ぎ、クラウディアとヴォルフラムは本局へ無事に到着した。

「お疲れ様です。クラウディアの皆さん・・・そして、おかえりなさい」

本局に戻って来たクラウディアにリンディが通信を入れ、クロノをはじめとするクラウディアの乗員たちを労う。

「クロノ・ハラオウン以下、クラウディア全乗員・ただいま、帰還しました」

一応、公務中なのでリンディとクロノは親子ではなく、統括官と一提督として通信を交わした。

「ハラオウン提督、戻って来たばかりですが、今回の件について報告をしてもらいたいので、本局の第三会議室へ出頭してください」

「分かりました。既に報告書は作成済みなので、皆さんがお訊ねしたい事情は直ぐに判明出来ると思います」

クロノはこうした事を既に予見していたので、特に驚く事も面倒くさがる事もなく、事前に用意してある資料と報告書を持って指定された会議室へ向かう旨をリンディに伝える。

「分かりました。では、第三会議室にて待っています」

「はい」

会議室で待っている幹部局員の関心はクラウディアがどのような方法で次元断層から脱出をしたのか？とクラウディアと共に次元断層に落ちたソラーズの行方なのはこれから会議に出席するクロノ以外でも簡単に想像がついた。

「クロノ・・・私もオブザーバーとして一緒に行こうか？」

フェイトはクロノ一人に負担をさせまいと会議に一緒に付き合おうかと提案するが、

「いや、僕一人で大丈夫だ」

クロノは自分一人で今回の会議に臨むと言って支度をした後に会議室へと向かった。

彼としてはフェイトが自分と一緒に会議室へ来て今回の一件の他にもう一つの地球の情報をまた根掘り葉掘り聞かれると思い、フェイトの事を思って彼女からの提案を断った。

会場となった本局の第三会議室では主に〝海〟の高官が集まっていたが、今回のクラウディアの偉業に興味を示したのかレオーネ・フィルス、ラルゴ・キール、ミゼット・クローベルらの三提督も出席していた。

「クロノ・ハラオウン、召喚に応じ出頭しました」

会議室に入るとクロノは会議室に集まっていた高官らに敬礼する。

「ごくろう・・さっ、座り給え」

レオーネがクロノに着席を促す。

「はっ、失礼いたします」

クロノは会議室の下座に用意された椅子へ着席する。

そんなクロノを会議室に居る高官の一人が物凄い形相で睨みつけていた。

「さて、まずは次元断層からの生還、おめでとう。今回、君たちクラウディアの行動は今後の〝海〟の行動に希望を与える事になるだろう」

ラルゴがクロノに次元断層から生還した事を祝福する。

「ありがとうございます。キール元帥閣下」

「それで早速なのだが・・・」

「クロノ・ハラオウン提督!!」

高官の一人がクロノに次元断層からの脱出方法を訊ねようとした時、その高官の声を遮る程の大声をあげてクロノの名を呼ぶ一人の男が居た。

「なんでしょう?ロガン少将」

このクロノの名を呼んだ男はクラウディアと共に次元断層に落ちたソラーズの艦長、二コラウフ・ロガンの父親であるイヴァノヴァ・ロガン少将だった。

「ハラオウン提督!!貴様は僚艦であるソラーズを見捨てて今この場に居るのではないか!?」

イヴァノヴァはクロノの事をビシッと指さしてクロノを糾弾する。
「貴様は私の息子を見捨てて自分たちだけのこのこと戻って来て、まるで英雄のような扱い・・・・貴様は英雄なのではない!!私の息子を・・・・ソラーズの乗員を見捨てた人でなしだ!!」
「・・・・」
「私の息子は、今も次元断層の中で苦しんでいるのだぞ!!・・・・おぉ～哀れな我が子よ・・・・」
イヴァノヴァは芝居じみたオーバーリアクションを取りつつも息子である二コラウフを思うあまりに涙を流す。
リンディもクロノの母親という立場から見れば、イヴァノヴァの気持ちは理解できる。
もしも立場が逆でソラーズが戻って来てクラウディアが今も次元断層を彷徨っていたら、どんな状況だったのかを二コラウフに詰問していただろう。
しかし、クロノ本人にしてみればただのとばっちりでしかない。
「確かにロガン少将の言う通り、自分は貴方のご子息であるロガン艦長を・ソラーズを見捨てました。しかし、ロガン艦長が・・・・ソラーズが未だに次元断層を彷徨っているのは半分、ロガン艦長の自業自得なのです」
最終的にソラーズを見捨てたのはクロノの判断なので、イヴァノヴァが言う通り二コラウフを・ソラーズを見捨てたのは半分当たっていたので、クロノはそれをあっさりと認めたが、ソラーズが未だに次元断層を彷徨っているのは二コラウフの自業自得であるとも言い放つ。
「な、なんだと!?貴様!!言うに事を欠いて、この場に居ない息子にも責任を押し付けるつもりか!?いくら統括官の息子だからといってそんな横暴・・・・」
「自分はちゃんとした証拠を持って、発言しております!!」
クロノはイヴァノヴァの言葉を遮って証拠があると言い放つ。
彼としてはいつまでもイヴァノヴァとソラーズの件で水掛け論をするつもりはなかったので、早々にこの話を決着する為に証拠を提示

する事にした。
この会議場に居る大半の幹部局員もソラーズの件よりもクラウディアが・・クロノがどのような方法で次元断層から脱出したのか？
その経緯と方法を知りたかったに違いない。
「な、なんだと・・・」
クロノの自信のある態度にイヴァノヴァは思わずたじろぐ。
「こちらは、クラウディアとソラーズが次元断層に落ちたばかりの時にソラーズの二コラウフ艦長と自分との間で行われた通信のやり取りです」
クロノは会議室に居たオペレーターに記録媒体を手渡す。
クロノから記録媒体を受け取ったオペレーターは記録媒体をパソコンに差して媒体の中に記録されていたデータを再生する。
すると、会議場にあるモニターにはクラウディアのブリッジの映像が流れだし、クラウディアとソラーズが次元断層に落ちたばかりの時、クロノが二コラウフにこの場から動かない様に提案するも二コラウフはクロノの提案を無視して勝手に次元断層の奥深くへと向かって行ってしまった。
「こ、これは捏造だ!!私の息子がこんな愚かな事をする訳が・・・」
「御自分の御子息を信じたい気持ちは分かりますが、事実です。実際にその記録データには改竄をした形跡はない筈ですから」
イヴァノヴァにとっては次元断層内での息子の行動を当然信じたくないだろうが、実際にこれが、二コラウフが・・ソラーズが取った行動であり、これは覆せない事実だった。
「くぅ～・・・」
イヴァノヴァにとっては三提督をはじめとする大勢の高官の前で赤っ恥をかかされた事になり、気まずくなったのか会議室から出て行った。
（おのれ～クロノ・ハラオウン・・・この恥辱と息子の仇・・・忘れはせぬぞ!!）
本局の通路を歩くロガン少将の顔はまさに阿修羅の如く憤怒にまみれていた。

「さて、要らぬ手間をとらせてすまなかったね」
レオーネがクロノとロガン少将との無駄なやり取りをさせてしまったことを謝る。
「いえ、ロガン艦長の家族として、ロガン少将の態度は当然の事だと思いますので・・・」
クロノは大人な対応を貫く。
「では、早速であるが、今回の経緯を説明してもらおうか？」
「はい」
クロノは次元断層に落ち、ソラーズと別れた後の経緯を幹部局員たちに説明する。
「自分はエネルギーの節約の為、次元断層に落ちたその場から動かずに、同乗していたハラオウン執務官らに周辺で遭難している宇宙船の調査を命じました。周辺には本艦やソラーズ同様、次元断層へ落ちて遭難した宇宙船が多数ありました。もしかしたら、次元断層からの脱出方法の手がかりや使えるかもしれない物資があるかもしれないと思ったからです」
会議場のモニターにはフェイトたちが次元断層に落ちて遭難した宇宙船の調査映像が流れる。
「その中である宇宙船には次元断層からの脱出の手がかりを持つ宇宙船がありました。さらにその宇宙船のエンジンにはエネルギーが残されていたので、その宇宙船をクラウディアにドッキングしました」
映像にはクラウディアの艦尾に見慣れぬ宇宙船がドッキングされている映像が映し出される。
「私はこの一件から、エネルギーが残っている宇宙船がまだあると思い、宇宙船の調査を続行しました。そして周辺にある宇宙船をある程度調査を終えた後にドッキングした宇宙船の調査をしたところ、運良く一隻の宇宙船から次元断層からの脱出方法を見つけました」
「ほう？それはどんな方法なのかね？」
クロノから次元断層からの脱出方法と聞き、幹部局員たちは興味津々と言った様子だ。
「本艦が手に入れたデータによりますと、ある箇所が次元断層の層の

厚さが薄い箇所であることが判明しました。なので、私はその層が薄い箇所へアルカンシェルを撃ち込みました。すると、データ通り、その箇所には穴が開き、本艦はその穴から次元断層を脱出し、通常の空間へ出て近くに居た八神艦長のヴォルフラムの牽引ビームで危険宙域から離れました・・・これが今回の次元断層からの脱出の経緯です」
　クロノは会議場の幹部局員に説明をするが、その中で脱出の手がかりがスターシアのカプセルからの情報である事を変更し、ドッキングした宇宙船から得たデータと言う事にした。
「ふむ・・・ハラオウン提督。一ついいかね？」
「はい」
「君は次元断層からの脱出に関するデータを遭難した宇宙船から得たと言うが、では何故その宇宙船は次元断層から脱出をしなかったのか君は疑問に思わなかったのかね？」
　幹部局員の一人がクロノへ質問する。
　当然、クロノはスターシアのカプセルを秘匿する時からこのような質問が来ることを見越しており、
「その疑問はもっともです。ですが、この宇宙船が次元断層から脱出できなかったのはちゃんとした理由があります」
「理由？それは一体何だね？」
「はい。その宇宙船を調査したハラオウン執務官によりますと、その宇宙船は生物兵器を輸送していた輸送船だったらしく、調査に入った局員がその生物兵器に襲われる事態が起きました。幸いにも襲われた局員の生命には問題なく、局員を襲った生物兵器もハラオウン執務官が斃しました」
　モニターにはフェイトが斃した蜘蛛に似た宇宙生物の死骸の映像が映し出される。
「人を襲う生物・・・となると・・・」
「はい。お察しの通り、この宇宙船の乗員たちはこの生物兵器を運搬中に何らかのトラブルが起き、生物兵器が収容していた檻から脱走。乗員たちはこの生物兵器に捕食されてしまったモノと推測できます。そして生物兵器しか居ない宇宙船は操船されず、そのまま宇宙を漂流

して行き、運悪く次元断層に落ちてしまったモノと思われます。ただ、この宇宙船がどの世界に所属していたのか不明でしたが、あの宇宙船が所属していた世界では次元断層の調査もおこなっていたのかもしれません。生存者が居ないのですべては推測になりますが・・・・」
　あの宇宙船の乗員たちが、フェイトが斃したあの宇宙生物に捕食されたのは間違いないだろうが、クロノがスターシアのカプセルの情報を秘匿する為にあの宇宙船が所属している惑星が管理局よりも高度な文明である事を告げる。
「ハラオウン提督。君はその宇宙船を調査対象として曳航しようとは思わなかったのかね？」
　クロノの話を聞き、管理局よりも次元断層の詳しい情報を持っていたかもしれない宇宙船ならば、その宇宙船が所属していた世界の情報もあったかもしれない。
　その世界を管理世界に置けば、管理局は次元断層さえも管理できると思い幹部局員の一人がクロノにその宇宙船を曳航して本局へ持って来れなかったのか？と問う。
「あの時は次元断層から脱出するのに手一杯でした」
　クロノたちクラウディアの乗員にとっては次元断層からの脱出で手一杯でドッキングした宇宙船の事なんて気にする余裕はなかった。
「では、クラウディアの脱出地点の傍にはその宇宙船があるんではないか？」
「ならば、急ぎその宇宙船を回収してみてはどうか？」
　次元断層開拓のカギを握る宇宙船がまだ宇宙を漂流している可能性があると指摘する幹部局員であるが、
「残念ですが、それは出来ません」
　幹部局員たちの指摘をクロノは無理だと一蹴する。
「出来ない？それはどういうことかね？」
「クラウディアが次元断層から脱出した際、ドッキングした宇宙船のエネルギー全てを使用したので、ドッキングした宇宙船のエネルギーは空となり、クラウディアの航行バランスを崩したので、切り離しました。その際、切り離した宇宙船は次元断層の層に開いた穴に吸い込

まれてしまいました。その光景はヴォルフラム側のカメラで記録されています」
　クロノは次にヴォルフラムが記録した映像をモニターに映し出す。
　モニターには次元断層と通常空間との間にクラウディアのアルカンシェルで開いた穴の光景が映っており、穴はジッパーを閉めるかのように塞がっていき、その穴に推進力が無い宇宙船は吸い込まれて行った。
「この映像の通り、今回の次元断層からの脱出における重要な手がかりを持つ宇宙船は次元断層へ逆戻りしてしまいました」
『・・・』
　次元断層を開拓・管理することが出来るかもしれないチャンスをみすみす逃した事に幹部局員たちは悔しさからか顔を歪める。
　しかし、クロノの言う通りあの状況下では自分たちが次元断層から脱出するのが精一杯であり、切り離した宇宙船にまで構う余裕なんてない。
　幹部局員たちもそれは分かっていたので、クロノに対して、
「命に代えてでもその宇宙船を持ってくるべきだ!!」
　なんて無茶ぶりな事は言わなかった。
　それは、あの状況下の他にクロノが統括官の息子であり、その統括官であるリンディ本人がこの会議場に居る事も関係しているのかもしれなかった。
「クラウディアが得た情報を共有する事で、今後は次元断層へ落ちても生存率はあがる事でしょう・・・それだけでも今回のハラオウン提督の実績は称賛されるものではありませんか?」
　ミゼットが幹部局員らに訊ねるかの様に問うと幹部局員らもそれで納得するしかなかった。
「ただ一つ補足をいれますと、次元断層からの脱出については今回入手したデータだけでは不足であり現在、管理局で採用している次元航行艦、単艦だけではエネルギーの問題から脱出は不可能です。先ほど、映像でご覧になられたようにクラウディアが脱出できたのも次元断層内で遭難し、まだエネルギーが残っていた宇宙船を数隻ドッキン

グした事により、エネルギー問題を解決しました。次元断層から脱出するにはデータの他に莫大なエネルギーが必要となる事を留意してください」
　クロノが次元断層から脱出についての補足説明を行う。
「では、次元断層内に入り、ソラーズの救助を行うのは困難と言う事か・・・・」
「残念ながら・・・次元断層も一体どれほどの広さなのかも不明なので・・・・」
　次元断層からの脱出データとエネルギー問題に関しても増槽をつければもしかしたら、次元断層の調査・・・そして現在も次元断層内を彷徨っているソラーズの救助も出来るかもしれないと思われたが、次元断層内の規模が不明である以上、下手に入り込んで二重遭難のリスクもあるので、ソラーズの救助は断念せざるを得なかった。
　今回クロノが得た次元断層からの脱出データは管理局所属の次元航行艦に共有されることになったが、これはあくまでも非常手段であり、自ら好き好んで次元断層へ向かう事は管理局でも行う事はなかった。

「ふぅ～・・・・」
　報告会が終わり、会議場を出たクロノは一息つく。
「クロノ・・・・」
　そこへ、リンディがクロノに声をかける。
「なんでしょう？統括官」
「・・・・」
　クロノとリンディの関係は休暇前の一件以降も改善することなく、むしろクロノが管理局の存在自体に疑問視してから冷めている感じになっている。
「い、いえ・・その・・・・次元断層から戻って来て良かったわ・・・・エイミィも心配していたから連絡を入れてあげてね」
「分かりました。では・・・・」
「・・・・」

クロノは妻であるエイミィに連絡を入れるためにその場から去る。
リンディはそんなクロノの背中を見つめていた。

会議室からクラウディアへ戻って来たクロノを出迎えたのは副長とフェイトの二人だった。
「お疲れ様です。提督」
「お疲れ、クロノ」
「ああ、ただいま」
「それで、どうだった？うまく秘匿できた？」
フェイトはクロノにスターシアのカプセルの事を秘匿する事が出来たかと訊ねる。
「ああ、スターシア陛下のカプセルについては上手く誤魔化す事が出来た。例の生物兵器が居た宇宙船に脱出に関するデータがあった事にしたよ」
「そうなんだ・・・」
「他には、ロガン少将からの恨みを買ったよ・・・」
「ロガン少将？えっ？誰？」
フェイトは『ロガン少将』と言われ、首を傾げる。
「ソラーズの艦長の父親だよ。『お前は息子を見殺しにした』って糾弾された」
「そんなっ!?」
「提督の決断は、あの状況下ではやむを得ないことではありませんか!?」
「しかし、ソラーズの関係者から見れば、クラウディアは身内を見殺しにしたとみられても仕方がない」
「・・・」
「一応、乗員たちには注意を促す」
ロガン少将の反応からソラーズの関係者がクラウディアの乗員たちに対して何らかの行動をしてくる可能性があるので、当分クラウディアの乗員たちには周辺の注意を促すことぐらいしかできなかった。

「副長、今は無事に戻って来た事を家族に伝えてあげると良い・・・乗員たちにもその旨を通達してくれ」
「了解しました」
　本局へ戻るまで流石に私用で通信をする事は出来ないので、こうして無事に本局へ戻って来たので、クロノはクラウディアの乗員たちに家族へ無事を知らせる通信をする事を許可した。
　クラウディアの乗員たちが家族に自分の無事を伝えている中、クロノも海鳴の自宅に居るエイミィに連絡をいれた。
「クロノ!!」
　連絡を入れた途端、エイミィはモニターに食いついてきた。
「リンディさんから聞いていたけど、大丈夫なんだよね？怪我とかしてないよね？」
「ああ、僕もフェイトも怪我無く戻って来たよ」
「良かった～・・・本当に良かったよ・・・」
　モニター越しとは言え、夫であるクロノが無事な事が完全に確認出来たことでエイミィは思わず涙を流す。
「心配かけたな・・・」
「本当だよ、まったく・・・」
　目に涙を浮かべるもクロノの生還に心から喜び、笑みを浮かべるエイミィ。
「ねぇ、クロノ君。子供たちの為にも異動届けを出せない？」
「・・・」
　エイミィはクロノに対して異動届けを出して部署の移動が出来ないかを問う。
　クロノの魔導師としてのレベルやこれまでの実績に有している資格ならば〝海〟ではなく、〝空〟か〝陸〟でも十分やっていける。
　もしろ〝陸〟はクロノを喜んで出迎えそうである。
　例え〝空〟〝陸〟でなくとも〝海〟だって何も艦船勤務以外にも仕事はある。
　ボラー連邦への武力制裁、そして今回の次元断層の件から艦船勤務がいかに危険な仕事なのかを改めて実感させられる。

エイミィはカレルとリエラから父親を永遠に喪う事態を回避したかった。
父親を喪う経験はクロノ自身が経験しているので、そんな辛い経験を自分たちの子供たちに経験させたくはない気持ちはクロノだってわかっている筈だ。
「すまないエイミィ・・・それは出来ない」
しかし、クロノはエイミィの願いを聞き入れなかった。
「ど、どうして？クロノ君は子供たちに寂しい思いをさせたいの？」
「エイミィ・・僕自身、父親を喪う経験をしたからその気持ちは分かる。だが、管理局の現状から今は苦しい状況だ・・・もちろん、僕も管理局に対して思う所はあるが、誰かがやらなければならないんだ・・・」
「何もそれがクロノ君じゃなくてもいいじゃない」
「僕だって出来るならそうしたいさ・・・でも、周りがそれを決して許さないだろう・・・」
「・・・」
クロノが言う言葉の意味をエイミィは当然理解している。
高ランクの魔導師であり、本局統括官の息子であり、これまで管理局では有名な事件を一人ではないにしろ、解決に導いて来た若き英雄・・・
ただでさえボラー連邦への武力制裁の失敗で人材が枯渇している管理局・・・そんな時に〝海〟がクロノを手放す筈がない。
それにクロノ自身がクラウディアの乗員たちの事を案じているので、そう簡単に今の部署から離れるに離れられなかったのだ。
クロノがエイミィと通信を交わしている中、フェイトもはやてとなのはの二人とモニター越しに連絡を取っていた。
「いやぁ～それにしてもフェイトちゃんたちが無事でホンマ、良かったわ～」
「うん、私もリンディさんから聞いて物凄く心配したよ」
「はやてもなのはも心配かけてごめんね。でも、私自身これで二度も死にそうな目に遭うなんて思ってもみなかったよ」
「せやな、ＪＳ事件以降、フェイトちゃんは不運続きやったからな

・・・・」
「ねぇ、フェイトちゃん」
「ん？何かな？なのは」
「その・・・・次元断層の中ってどんな感じだったの？」
「あぁ、クロノ君からはある程度聞いては居たけど、フェイトちゃんからの視点も気になるわ～」
なのはとはやてはフェイトに次元断層が一体どんな空間だったのか質問してきた。
次元断層なんて簡単に行って帰ってくるなんてことは出来ない空間なので、そんな空間から奇跡の生還を果たしたフェイトに次元断層がどんな空間だったのかを訊ねるのは至極当然の事だった。
「次元断層の中？うーん・・・・そうだね・・・・あそこはまさに宇宙の・・・・宇宙船の墓場の様な場所だったよ」
「宇宙船の墓場？」
「うん。光を発する星が無いから、辺りは完全な闇が支配する世界で、その中には管理局が把握していない星の宇宙船が沢山遭難していた・・・・」
「・・・・」
フェイトが説明する次元断層の中を想像して沈黙するなのはとはやて。
「私はクロノから周辺にある遭難した宇宙船の調査を頼まれて遭難した宇宙船の中を調査したんだよ。調査した宇宙船はどれもエネルギーが無かったから外の空間と同じく真っ暗闇でさ・・・・船の中には白骨化した乗員の遺体だらけだった・・・・」
「す、凄いね。フェイトちゃん」
「ん？」
真っ暗な遭難船の中を調査したフェイトになのはは『凄い』の言葉を送る。
しかし、フェイトはなのはの言葉の意味を理解していないのか首を傾げる。
「勤務中に不謹慎やけど、フェイトちゃんはその時、リアル肝試しをし

た事になるからな」
　はやてはなのはの言う『凄い』という言葉の意味を理解してフェイトに教える。
「ああ、なるほど・・・・」
　フェイトは、はやてからなのはの言った『凄い』の言葉の意味を理解して頷く。
「でも、あの時は仕事って事と早く次元断層から脱出しないと・・・・って思いが強かったから怖さなんて感じる余裕なんて無かったよ」
「まぁ、あの時のクラウディアやフェイトちゃんたちが置かれた環境を考えると、確かにそんな余裕なんて無いわな」
　フェイトの回答を聞いて、納得するはやてだった。
「それで、調査していた宇宙船で、明かりが点いている船があったの・・・・」
「明かり？」
「クラウディアやソラーズの他に生きている船があったんか？」
「エネルギーが残っていて非常電源が働いていたみたい・・・・でもその船にはとんでもないモノが居たの」
「とんでもないモノ？」
「まさか、エイリアンとか？」
　はやては昔見たＳＦ映画みたいにフェイトが調査した宇宙船にエイリアンの様な化け物が居たのかと問う。
「まぁ、似たようなモノかな？」
「えっ？ほんまか!?」
　すると、フェイトからの回答はエイリアンに似たような生物が居たとの事で、当てずっぽうで訊ねた回答がまさかの正解だった事にはやて自身も驚いた。
「うん。相手に幻覚を見せて足止めをさせている隙に獲物を捕らえて捕食する蜘蛛に似た姿の生物兵器が居たの」
「幻覚を見せるなんて・・・・」
「そんな生物が・・・・」
　管理局が管理している自然世界でも幻覚を見せて獲物を捕獲して

捕食する生物なんて聞いた事がない。
「それで、フェイトちゃんは大丈夫だったんか？」
　はやてはフェイトにその生物兵器に襲われなかったか訊ねる。
「私は大丈夫だったけど、同行していた他のクルーが襲われて・・・・幸い直ぐに対処したから命に別状はなかったよ」
「そうなの？良かった～」
　襲われた局員が無事だったことに胸をなでおろすなのは。
「それで、『直ぐに対処』って言うとったけど、捕獲したんか？その生物兵器を？」
　はやてはフェイトに局員を襲った生物兵器の対処を訊ねる。
「ううん、違うよ。殺傷設定のバルディッシュで一突きにしたよ」
「えっ？殺傷設定!?」
「まさか、殺したんか？その生物兵器を・・・・」
　フェイトが殺傷設定で局員を襲った生物兵器を殺した事を知り、なのはもはやても固まる。
　はやてもなのはもてっきり、局員に襲い掛かった生物兵器を捕獲したのかと思ったからだ。
「あの状況下ではとても捕獲何て出来なかったよ。それにあの場で仕留めないとクルーの被害が広がっていただろうからね・・・・」
　生物兵器とは言え、殺傷設定で生物を殺したにもかかわらずフェイトは淡々とした様子で語る。
「・・・・」
　そんなフェイトに対してどんな言葉をかければ良いか言葉が見つからないはやてとなのはだった。
「話をつづけるけど、良い？」
「えっ？あっ、うん・・・・」
「大丈夫やで」
　フェイトが二人に次元断層内での話を続けても良いかと訊ねると、二人は続けて構わないと言うので、フェイトは話を続けた。
「それで、その宇宙船にはエネルギーが残っていたから、クラウディアにドッキングしてエネルギーを貯めたんだよ。それで、クロノが周辺

にまだエネルギーが残っている船があるかもしれないって言って、私は引き続き遭難船の調査を続けたの・・・」
「他の宇宙船にフェイトちゃんが斃した生物兵器とか生きていた人は居たんか？」
「ううん、調査した宇宙船で生き物が居たのは蜘蛛に似た生物兵器だけだったよ。それで、調査を続けて数隻の宇宙船にエネルギーが残っていたから、その船を全部クラウディアにドッキングさせた後に改めてドッキングした宇宙船の調査をしたんだけど、あの生物兵器が居た宇宙船に脱出に関するデータがあったの」
　フェイトはクロノが会議場で幹部局員らに説明したようにスターシアのカプセルの存在を二人に秘密にするかのように誤魔化した。
「どんなデータやったん？」
　クロノと同じく次元航行艦の艦長となったはやてとしては、やはり次元断層からの脱出方法には興味があった。
「そもそも、次元断層は、通常の三次元空間異次元との結節点に存在する次元空洞なんだけど、一部に層の厚さが薄い箇所があるみたいなの・・・私たちが手に入れたデータはその層が薄い箇所が記されたデータで、その箇所に強力なエネルギー波を撃ち込むと三次元空間との位相境界面に発生した干渉波で三次元空間への開口部・つまり次元断層を出る出口が出来るからクラウディアはアルカンシェルを層が薄い箇所に打ち込んで、出口を作ってそこから脱出したの」
「へぇ～・・・」
「・・・」
　三次元空間やら位相境界面やら聞いたことが無い単語を含むフェイトの説明になのははあまり理解できていない様子。
　それは〝海〟所属のはやても全ては理解できているのか怪しい。
「ほんなら、その層が薄い所でアルカンシェルを撃てば簡単に次元断層から脱出する事が出来るんか？」
「ううん、クロノが言うには、通常のアルカンシェルじゃあ穴を開けるにはエネルギー不足で、穴をあけるぐらいのアルカンシェルを撃つには次元航行艦の全エネルギーを集約したアルカンシェルじゃないと

穴は開けられないって結論になったの」
「でも、そんな無茶ぶりなアルカンシェルを撃てば、例え穴が開いても動けないとちゃうか？」
「そう、だからアルカンシェルにはクラウディアのエネルギーを使いきってエンジンにはドッキングした宇宙船のエネルギーを使って、クラウディアは穴を開けてそこから出てきたんだよ」
「なるほどな・・・」
「ん？」
　フェイトの説明を聞いてはやては理解したが、なのははやはり理解できずに首を傾げていた。
「多分、今回クラウディアが得たデータは管理局の全ての船に配布されると思うから、時期にはやての所にも来ると思うよ」
「そうなんか・・・まぁ、本音を言うとそのデータが役立つ機会が来ない事を祈っとるわ」
「そうだね・・・それが一番良いからね。でも、データだけじゃあ次元断層からは脱出できないから・・・」
（防衛軍の波動砲搭載艦ならそんな面倒くさい事をしなくても大丈夫なんだろうけど・・・）
　次元断層から脱出に関するデータがあっても実際に脱出するには次元航行艦単艦では難しく、次元断層から脱出にはクラウディアの様に次元断層内でエネルギーが残っている遭難船を見つけなければならないので、一番は次元断層に落ちない事だ。
　これが防衛軍の波動砲搭載艦ならエネルギーが残っている遭難船を探さなくても次元断層から脱出する事が出来るだろうとフェイトは心の中で呟いた。

　はやてはクラウディアを救助した際、クラウディアと共に次元断層へ飲み込まれた僚艦のソラーズについてクロノから聞いていたので、事情を知らないなのはがソラーズの事を聞けばショックを受けると思い、この場ではソラーズについてフェイトには訊ねなかった。
　フェイトの方もソラーズの件に関しては、ショッキングな話なの

で、普段スバルの様に一部で空気が読めない所があるが此処は空気を読んでソラーズの件については黙っていた。
「それでクラウディアはこの後、どうするんや？また直ぐに出航するんか？」
「ううん、今回の件でアルカンシェルを無理な形で撃ったから、エネルギー伝導管を含めて総チェックをしないといけないみたい。はやての方は？」
「私らの方は必要な物資を補給してまた出航せなあかんやろうな。まだ予定の航海日数を満たしておらんからな」
　クラウディアはドック入りになるが、ヴォルフラムは消費した物資を補給した後、再び出航する様だ。
「クラウディアの乗員たちは休みになるんか？」
　一方、クラウディアはドック入りになったので乗員たちはその間は休みになるのかをフェイトに訊ねるはやて。
「うーん。修復作業を手伝ったり、報告書や事務作業があるだろうから、当分は本局通いになるんじゃないかな？」
　クロノをはじめクラウディアの乗員たちはこの航海前に休暇をとった者が多かったので、今回乗艦がドック入りになったとは言え、乗員たちが休暇になるかと言えばそれは違うみたいだ。
「そっか・まぁ、本局通いとは言え、宇宙に出ている時よりは気が休めるやろうから、ゆっくり休んでや」
「そうだね。今は離れて暮らしているけど、ヴィヴィオもフェイトちゃんに会いたがっているからいつでも会いに来てね」
「うん、ありがとう。なのは」
　なのはは教導隊の宿舎でヴィヴィオと一緒に暮らして、フェイトは本局の居住区にあるリンディの部屋に住んでおり、フェイトとヴィヴィオは離れて暮らしているが、なのははいつでも来て良いと言いフェイトはそんななのはの好意に礼を言った。

百五十四話　あたし、気になります!!

クラウディアが次元断層からの奇跡的帰還と言う偉業を達成し、本局へ戻ってから数日が経った。
そのクラウディアは本局内にあるドックにて整備と補修が行われ、乗員たちもその整備作業の手伝いや報告書等の事務作業を行って次の航海に向けての準備に余念がなかった。
本局のドックでクラウディアが次の航海に向けて整備が行われている中、ミッドチルダでは・・・・
「うーん・・・・」
ミッドチルダ、首都クラナガン・その一角にあるマンションの一室にて、その部屋の主であるスバルはベッドの上でギンガからの手紙を何度も読み返しながら唸っていた。
新暦７５年四月に稼働予定だった機動六課に姉妹で所属予定だったが、稼働の少し前にスバルの姉であるギンガは、とある美術品窃盗事件を追いかける中で殉職してしまう。
しかも、その事件の指揮を執っていた執務官からギンガの名誉は著しく傷つけられた。
スバルたちギンガの家族は彼女の名誉を回復する為に仕事をする傍らでギンガの名誉回復の運動を行っていた。
それから幾日かの月日が過ぎ、機動六課の解散後にスバルは特別救助隊に所属する事になった。
機動六課前から救助隊に所属していたスバルにとって救助隊の中でもエリートである特別救助隊に所属できた事はとても誇らしかった。
所属する部署が変わってもスバルは引き続き、ギンガの名誉を回復する運動は続けていた。
そんな中で、訓練校からの付き合いである親友のティアナがフェイトと共に遭難してしまう事態が起きた。
結果的にティアナとフェイトは無事に救助され紆余曲折を経て、

ティアナは救助されたもう一つの地球への残留を決めて、ミッドにはフェイトと教会の強硬派に襲われ、ジュエルシードの欠片でもう一つの地球に次元転移したヴィヴィオの二人が帰って来た。
そして、ミッドに帰還したフェイトは自分と父親であるゲンヤの下にとある人物からの手紙を持って来た。
てっきりティアナからの手紙かと思いつつ、手紙を受け取った自分とゲンヤはまさに青天の霹靂であった。
自分とゲンヤに手紙を送って来たのはなんと死んだと思われたギンガからだった。
ギンガからの手紙には事の真相やギンガの現状が書かれており、写真も何枚か同封されていた。
そして、ギンガの生存はごく一部の者の間で秘密となった。
スバルはその秘密を今も守っており、ＪＳ事件後にナカジマ家へ新たに養子入りした元ナンバーズの姉妹にも黙っていた。

現在、スバルは特別救助隊に所属しており、実家から離れて暮らしている。
スバルの実家があるのはミッドチルダ西部のエルセアであり、父が部隊長を務めている陸士１０８部隊もミッドチルダの西部にあるが、特別救助隊の隊舎は首都クラナガンにあるので、実家から通勤するのは時間がかかるので、こうしてクラナガンにあるマンションで下宿しているのだ。
下宿先のマンションにはスバル一人だけなので、スバルはよくギンガからの手紙や写真を眺めている。
親友のティアナ、そして姉のギンガが居るもう一つの地球へ行くにはミッドチルダともう一つの地球との間に交流を持たなければならない。
しかし、現状ミッドチルダともう一つの地球が交流を持つのはゲンヤ曰く、望み薄だと言う。
スバル自身もそれについては薄々気づいている。
なので、こうして夜にスバルはギンガからの手紙や写真を眺め、も

う一つの地球に居る姉と親友へ思いを寄せている。
そんなギンガからの手紙の中で、スバルは最近気になる一文があった。
ギンガがもう一つの地球に残留している理由の一つに『好きな人が出来た』・・・と言う部分。
手紙を貰った時はギンガの生存のインパクトが強くて気付かなかったが、時間が経ちこうして何度もギンガの手紙を読んでいる中で、『好きな人が出来た』の文面を改めて読み返し気づいたスバル。
『好きな人が出来た』・・・それは、もう一つの地球にギンガの好きな人・・・つまり、姉の恋人が居ると言う事だ。
スバルは会えないと知りつつもギンガの恋人がどんな人物なのか？
それが気になり始めていた。
もう一つの地球で出来た恋人なのだから、当然ギンガの恋人はもう一つの地球に住んでいる人だ。
（ギン姉の恋人はギン姉の正体を知っているのかな？）
（もし、知らなかったとして、ギン姉の出生の秘密を知った時、その人はギン姉の事を受け入れてくれるのかな？）
（ギン姉の正体を知って、もしその人がギン姉を振って、ギン姉が失恋をして傷ついていたらどうしよう・・・）
そんな疑問と不安がスバルの脳内をグルグルと巡る。
（何とか確かめる方法はないかな・・・？）
（父さんに相談してもいいけど、誰がギン姉の恋人なんて知る筈がないし・・・）
（ティアはもう一つの地球に居るから確認できないし・・・）
（もう一つの地球とはもう交信は出来ないだろうしな～・・・）
最後の交信の時、これまで交信に使用していた通信ポッドは防衛軍の方で処分すると言っていたので、地球連邦政府・防衛軍側が管理局へコンタクトをとってこない限り交信は出来ないし、恐らく向こうからコンタクトを取ってくることは無いだろう。
（ヴィヴィオ・・・は、まだ恋愛について分からないだろうな・・・）

まだ小等部のヴィヴィオに『ギン姉の恋人知らない？』と聞いても知っているのか分からないし、そもそも恋愛事にはまだ疎そうなので、却下。
（と、なると知っていそうなのはただ一人か・・・・）
スバルはもう一つの地球へ行き、ミッドチルダに戻り、なおかつギンガの恋人の存在を知っていそうな人物に心当たりがあった。
（そう言えば、フェイト執務官、今ミッドに居るのかな・・・？）
（なのはさんならフェイト執務官が何処に居るのか知っているかも・・・・）
スバルはフェイトにもう一つの地球に居るギンガの恋人が誰なのかを聞くためにまずはフェイトの所在をなのはに訊ねる事にした。
「なのはさん、すみません。スバルです」
「あっ、スバル。どうしたの？」
「あの、なのはさん。フェイト執務官が今何処に居るのか分かりますか？」
「えっ？フェイトちゃん？」
「はい。フェイト執務官にどうしても聞きたいことがあるので・・・・」
「フェイトちゃんに聞きたい事？」
「はい」
「それってどんなことなのかな？」
なのははスバルがフェイトに一体どんな用があるのか気になった。
「えっと・・・それは・・・・」
なのはとギンガとの間に面識も交流もないが、それでもどこからギンガの生存が漏れるか分からない。
ギンガの生存はごく一部の者たちのみの極秘事項なので、例えギンガとの面識と交流が無いなのはでも教える訳にはいかない。
「あっ、その・・・交信後のティアの様子が気になって・・・・」
スバルは咄嗟にもう一つの地球に居るティアナの事が気になる事にして、ギンガの存在を隠す事に成功した。
「ティアナの様子か・・・・」
ティアナの名前を聞いてなのはも思う所がある様子。

「・・・スバル、私もティアナの事を知りたいから一緒にフェイトちゃんに聞いてもいいかな？」
「えっ？なのはさんも!?」
（ヤバいよ、なのはさんが一緒だとギン姉の事を聞けないじゃん!!）
　なのはの返答を聞き、スバルはドキッとする。
（でも、ここで断ると変に思われるし・・・）
（それに本命の前に違う話題を挟んだ方が良いかな？）
（なのはさんの会話の後なら、フェイト執務官も気をよくして話してくれるかもしれないし・・・）
　なのはが一緒に行くと言った時は、焦ったがなのはを相手にしてくれたらフェイトも油断するかもしれないと思ったスバルは、
「分かりました。一緒にフェイト執務官にティアの事を聞きましょう」
　なのはと一緒にフェイトの下へ向かうことにした。
「それで、フェイト執務官は今何処に居るのか分かりますか？」
　そして、なのはにフェイトの所在を訊ねる。
「フェイトちゃんは今、本局に居る筈だよ。数日前にはやてちゃんと一緒に話したから」
「分かりました。では、フェイト執務官との時間はなのはさんがとってもらってもいいでしょうか？」
「いいよ。フェイトちゃんに暇な時間を聞いて、二人で一緒に会いに行こう」
「はい」
　こうしてなのはがフェイトの予定を聞いて、彼女の都合がいい時間になのはとスバルはフェイトに会いに行くことになった。

「フェイトちゃん」
「ん？どうしたの？なのは」
「あのね、今度フェイトちゃんの都合がいい時間で、ちょっと会いたいんだけど」
「えっ？まぁ、いいけど・・・」

フェイトは予定を確認してなのはに都合がいい時間を伝える。
「ありがとう。あっ、フェイトちゃんに話があるのは私の他にスバルもあるみたいなの」
「スバルも？」
「うん。最初にフェイトちゃんに話があるのはスバルの方だったから・・・」
「えっ？スバルが・・・？」
フェイトはスバルが自分に用がある事に意外に思うも用があるのだから話を聞こうと判断し、
「分かった。じゃあ、待っているから」
「うん。それじゃあ・・・」
フェイトとの都合を取り付けたなのははスバルに日時を伝えた。
そして、フェイトと会う日、スバルとなのはの姿は本局の中にあった。
「あっ、なのは!!スバル!!こっち、こっち!!」
本局に着いたなのはとスバルに手を振って二人を呼ぶフェイト。
「フェイトちゃん!!」
「フェイト執務官」
フェイトと合流したなのはとスバルは、先日、フェイトがクロノにリニスが書いたアルフ宛ての手紙を渡した本局内にある個室型の喫茶店へと向かう。
本局内に居るとは言え、どこで査察部の目があるか分からないからだ。
三人は席に座り、飲み物を注文する。
そして、各々が注文した飲み物が届き、店員が個室から出ると、
「さて、それじゃあ、二人は何が聞きたいのかな？」
フェイトがなのはとスバルに要件を訊ねる。
「えっと、フェイトちゃんに聞きたいことはティアナの事なんだけど・・・」
「ティアナの？」
「うん・・・ティアナはフェイトちゃんみたいに執務官になる事を目指

していたけど、もう一つの地球でティアナは一体何の心境の変化があってもう少しで執務官になれたのにミッドに戻らず、もう一つの地球に残ったのか分からないけど、ティアナはもう一つの地球で何をしたいのかフェイトちゃんは知らない？」
なのははフェイトにもう一つの地球に残ったティアナが一体何をしているのかを訊ねる。
あのティアナがもう一つの地球でニートなんてしている訳がない。
ギリギリまでティアナと居たフェイトならば、彼女がもう一つの地球で何を目指しているのか知っていると思ったのだ。
「私自身、途中で帰っちゃったから詳しい事は分からないけど、ティアナはもう一つの地球で防衛軍の軍人さんを目指すって言っていたよ」
「えっ？ティアナが・・・・」
「防衛軍の軍人に・・・・？」
フェイトからティアナの新たな就職先を聞いてなのはもスバルも唖然とする。
スバルとしては本命の質問内容ではないが、もう会うことが無いだろう親友が、管理局のエリート職とも言える執務官を蹴ってまで目指す仕事がもう一つの地球における防衛軍の軍人だったとは予想外であった。
「ティアナはスバルもなのはも知っている通り、暗黒星団帝国がもう一つの地球を占領している間にパルチザン活動をしていたからね。もしかしたら、その時にもう一つの地球に残って、防衛軍の軍人さんになろうと決めていたのかもしれない」
「・・・・」
（私もヴィヴィオが次元転移してこなかったら、もしかしたらもう一つの地球に残っていたかもしれないな・・・・）
フェイトは心の中でティアナと同じ行動をしていたかもしれない可能性を思う。
ティアナと違いフェイトの場合、もう一つの地球に次元転移したヴィヴィオが居た。
彼女を無事にミッドへ還すのが、ヴィヴィオの保護者としての役目

だった。
　ミッドにはなのは、はやて、エリオ、キャロ、クロノ、リンディとフェイトにとって親しい者たちが居るが、最近クロノが管理局の存在自体に疑問符を持ち始め、フェイト自身、遭難して、管理局よりも技術が高い星間国家と出会い、占領下を体験して執務官と言う管理局の中でもエリートクラスの役職が紙くず以下の価値しかない事を痛感したからだ。
　だからこそ、管理局には大規模な改革が必要なのだと思いつつもまだ一執務官の自分にどこまでの改革が出来るのか分からないが、はやても二十歳前に一部隊を設立した事から、自分も周りの人たちを頼り改革を行いたいと思っているフェイトだった。
　その後、管理局との最後の交信後からフェイトとヴィヴィオがミッドに戻るまでのティアナの様子をフェイトはなのはとスバルに伝えた。
　自分たちが知らない間、ティアナがもう一つの地球でどんな生活を送っていたのかを知る事が出来てなのはもスバルもなんだか憑き物が落ちたような様子だった。
「ティアナとはやっぱり、もう二度と会えないのかな？」
「多分・・・地球連邦政府が管理局と交流を持つとは思えないし・・・もっとも最悪のケースで再会するかもしれない可能性はあるけど・・・」
「最悪のケース？」
「ティアナは防衛軍の軍人さんを目指しているでしょう？」
「う、うん・・・」
「万が一、もう一つの地球と管理局が戦争になった場合、戦場に防衛軍の軍人さんになったティアナが出て来て、私たちと対峙した時だよ」
「っ!?」
「・・・」
　フェイトから最悪のケースでのティアナの再会を聞かされ、なのはは驚愕の表情を浮かべ、スバルは強張った顔を浮かべる。
「そ、そんな・・・そんなこと・・・」

なのはは戦場でティアナと対峙する姿を想像したのか声を震わせながら否定をする。
「まぁ、まぁ、なのは。落ち着いて・・・これはあくまでも可能性の一つだから・・・地球連邦政府が管理局に対して戦争を仕掛けてくる可能性は低いから・・・むしろ管理局があの地球にちょっかいを出さない限り、そんな最悪のケースはないよ」
そんな、なのはに対してフェイトは管理局があの地球に不可侵の態度を貫けば管理局と地球連邦政府との間で戦争にはならないし、戦場でティアナと対峙する最悪のケースは防ぐことが出来る事を伝える。
「そ、そうだよね・・・」
フェイトからの指摘を受けて、なのははどこかホッとした様子だ。
(そりゃあ、教導官としては教え子と敵対して、その教え子が自分を殺しに来る姿なんて想像したくはないよね・・・)
教導官と言う生徒を教え、導く職務をしているなのはからすれば、自分の教え子と殺し合いなんてまっぴらごめんだろう。
「あっ、ちょっとゴメン。私、お手洗いに行ってくるね」
話に一息ついた時、なのははお手洗いへ向かう。
「・・・」
スバルはなのはがお手洗いへ向かったのを確認し、
「あ、あの・フェイト執務官」
「ん?何かな?スバル」
「あの・実は、あたし、フェイト執務官にティアの他にもう一つ聞きたいことがあるんですけど・・・」
「えっ?ティアナ以外に?」
「はい。ですが、この話は、なのはさんに聞かれるとちょっと厄介なので、できれば二人っきりで話したいんですが・・・」
「分かった。それじゃあ、なのはが帰った後でいいかな?」
「はい!!」
こうしてスバルはフェイトに約束を取り付けることが出来た。
その後、なのはがお手洗いから戻って来て、三人はお茶会となる。
本命であるギンガの恋人が一体誰なのか?その正体をまだ聞いて

いないが、ティアナの話を聞けた事とこの後でフェイトと約束事を取り付けた事で一安心したのか、店員を呼んで注文を追加した。
「すみません、このサンドイッチのセットを五人前とピザを三人前、野菜とキノコのパスタを大盛りで二つ、あとデザートにこのパフェを四つください」
「えっ？」
スバルの注文を聞いて店員は困惑する。
「えっと・・・・」
スバルが注文した内容の料理の量はいくら三人居るとはいえ、女性が完食できるか疑問である。
「あっ、大丈夫です。この子、結構食べる子なので・・・・」
困惑している店員に気づき、フェイトが注文は間違いないと言う。
「わ、分かりました」
フェイトから注文は間違いないと言われ店員はオーダーを伝えに厨房へと向かう。
「スバルは相変わらずたくさん食べるね」
なのはは笑みを浮かべながら六課時代にからスバルが変わっていない事にホッとしている様子だ。
「まぁ、食べる事は好きですから」
スバルは後頭部を手でかきながら笑みを浮かべる。
手紙では姉のギンガはもう一つの地球で恋人が居るのだが、スバルはどうも花より団子みたいなので、彼女に恋人が出来るのはもう少し先になる様だ。
「お、おまたせしました」
やがて、スバルが注文した品が届くと、
「いただきます!!」
スバルはサンドイッチに手を付ける。
「あっ、なのはさんもフェイト執務官も良かったら食べませんか？」
スバルはなのはとフェイトに注文した品をシェアしないかと提案する。
「そ、それじゃあ、ちょっともらおうかな？」

「私も・・・」
　フェイトもなのはも少し小腹が減ったのでスバルの提案を受けて軽食をシェアしてもらった。
「ふぅ～ごちそうさまでした」
「私たちも食べさせてもらったからお会計、出すよ」
　なのははスバルの軽食をシェアしてもらったので、軽食代は割り勘にすると言う。
「えっ？そんな、いいですよ。元々は私が注文した料理ですし・・・」
「でもスバルは大切な教え子だし、食べさせてもらったんだから、お金を出すのは当然だよ」
「そうだよ。スバル。ここは私たちの好意に甘えて」
「わ、分かりました」
　フェイトにも押し切られ、此処の会計は三人の割り勘となり、スバルはやや恐縮してしまった。
「それじゃあ、フェイトちゃん。今日はありがとう。ティアナの話を聞けて良かったよ」
「ううん。私の方もなのはとスバルと話せて楽しかったよ」
「それじゃあね。フェイトちゃん」
「またね、なのは」
　会計を終えて喫茶店を出るとなのははフェイトとスバルに別れの言葉をかけ、ミッドへと戻って行こうするが、
「あれ？スバルは帰らないの？」
　なのははスバルがまだ喫茶店の前に居る事に気づき、彼女に声をかける。
　スバルもなのはと同じくミッド住まいなので、本局の転送ポートからミッドへ戻るので、ミッドまでは一緒の筈なのだが、帰る素振りがない。
「えっ？あ、あたしはその・・て、テイクアウトを頼もうかと思って・・・今日の夕飯に・・・」
　この後、フェイトに話があるのだが、それをなのはが知ると付いてきそうなので、スバルは咄嗟に誤魔化した。

「あっ、なるほど・・・でも、いくらたくさん食べても平気だからって、食べ過ぎは身体に毒だよ。ほどほどにね」
「は、はい」
　なのはもスバルが食べる量は知っているので、スバルの言葉を信じて彼女に注意を入れる。
「それじゃあ私はヴィヴィオが待っているから先に帰るね」
「はい。ヴィヴィオにもよろしく」
「うん。それじゃあね」
　なのはは先にミッドへと戻って行った。
　一方、スバルはまだフェイトに話があるので、なのはを見送った後、今度は本局内で今現在フェイトとリンディが暮らしている居住区へと向かった。
　今はリンディが仕事に出ているので、喫茶店以上に人の目がない。
　しかし、フェイトは念のために、
「バルディッシュ、サーチャーや盗聴器がないか調べて」
『了解』
　バルディッシュにサーチャーや盗聴器の有無を調べさせた。
『マスター、サーチャーも盗聴器もありません』
「ありがとう、バルディッシュ」
　この部屋にサーチャーや盗聴器は見つからなかったので一安心し、
「さっ、スバル。座って」
「はい」
　フェイトはリビングの椅子にスバルを座らせ、自身は持成しのお茶を用意する。
「さっき、喫茶店でお茶を飲んだけど、長くなりそうなら喉が渇くと思ってね」
「あっ、どうもありがとうございます」
　スバルと自分の分のお茶を用意してフェイトはスバルの向かいに座る。
「さて、それじゃあ、スバルは私に何を聞きたいのかな？」
「えっと・・・ギン姉のことです」

「ギンガの？」
「はい」
「なるほど、確かにギンガの話題なら、なのはが居たら不味いね」
スバルのこれまでの行動に納得のフェイト。
いくらなのはとギンガの間に交流が無くてもなるべくならギンガの生存を知る人は一人でも少ない方が良い。
「それで、スバルはギンガの何を知りたいのかな？」
スバルはマッハキャリバーに仕舞っていたギンガからの手紙を取り出して、リビングテーブルの上に広げる。
「ギン姉の手紙にあったこの部分が気になりまして・・・・」
「ん？」
スバルはギンガからの手紙の一文を指さし、フェイトはその一文を覗き込む。
そこにはミッドへ戻らない理由の一つで『好きな人が出来た』と書かれていた。
「・・・・」
「ギン姉の好きな人って、ギン姉の恋人ですよね？それってどんな人なんですか？フェイト執務官なら知っていると思って・・・・」
「え、えっと・・・・」
フェイトはスバルが疑問に思っている答えを当然知っている。
しかし、その答えを教えて良いモノかと悩む。
「ギン姉の手紙によれば、ギン姉は今、もう一つの地球では防衛軍の軍人さんになっているんですよね？」
「う、うん。そうだよ」
「じゃあ、ギン姉の恋人も同じ防衛軍の軍人さんなんですか？」
「・・・・」
スバルの質問にやはり答えるに答えられないフェイト。
「どうなんですか？フェイト執務官。ギン姉の恋人が誰なのか知っていますか？」
「・・・・」
グイグイくるスバルにタジタジなフェイト。

ミッドともう一つの地球は交流を持っていないので、スバルがもう一つの地球に行き、ギンガやティアナと出会う事は現状難しいし、恐らくもう二度と会うことは無いだろうと判断したフェイトはグイグイくるスバルに根負けしてしまう。
「スバルの質問・だけど・・・・」
「はい」
「・・・・ギンガの恋人が誰なのか?・について、『知っているか?・』と言われると私は知っている」
「やっぱり・・・・それで、誰なんですか!?・ギン姉の恋人は!?・あたし、気になります!!」
フェイトが恐る恐る答えるとスバルは目を輝かせて、ギンガの恋人が誰なのかを聞いてくる。
(スバルの目が純真無垢なヴィヴィオやエリオたちみたいな綺麗な目・・・・)
(そんなスバルにギンガの大人な関係は話せないよね・・・・)
向こうの地球に居る間に行った温泉旅行における露天風呂、月村邸でティアナと盗み見たギンガと良馬との間で行われていた濃厚なキスシーンや大人な関係をフェイトはスバルに話す事に戸惑う。
とりあえず、ギンガの恋人が一体誰なのかを話せばスバルは納得し満足するだろうと思いフェイトはスバルに話した。
「それで、ギンガの恋人は・・・・」
「うん、うん」
「・・・・スバルも、もう一つの地球の交信の席で何度か会っているんだけど・・・・」
「えっ!?・交信の時に!?・」
スバルは既にギンガの恋人とモニター越しとは言え出会っていた事に驚く。
「うん・・・・ギンガの恋人は・・・・」
「ギン姉の恋人は・・・・?」
「ギンガの恋人は・・・・まほろばの艦長を務めている月村艦長だよ」
「えっ!?・えええー!!・月村艦長がギン姉の恋人!?・」

フェイトからギンガの恋人を聞いてスバルは声を上げる。
スバル自身、先ほどフェイトが言ったように、もう一つの地球との交信の席で良馬とは何度か会っているのだが、そんな素振りに全く気付かなかった。
良馬が本当にギンガの恋人であるならば、当然ギンガから自分がギンガの妹であると伝えられていたかもしれないからだ。
「ほ、本当に月村艦長がギン姉の恋人なんですか!?」
「うん。間違いないよ・・・私とティアナはもう一つの地球に居た頃、月村艦長の実家にお世話になっていたんだけど、その時、ギンガも月村艦長の実家に何日かお泊りしていたし、月村艦長が他の女の人（ユリーシャ殿下）に言い寄られていた時、ギンガは物凄く嫉妬していたってティアナが言っていたし・・・」
フェイトは良馬がギンガとキスをしている所や大人な関係の場面を目撃しているので、良馬がギンガの恋人である事は自信を持って言える。
「あのギン姉が嫉妬・・・」
スバルはギンガと過ごした十数年の間で彼女が誰かに嫉妬した姿を目撃した事がないので、ギンガが嫉妬した姿が全く想像できなかった。
「・・・月村艦長はギン姉の事を知っているのでしょうか?」
次にスバルは自分たち姉妹の出生を良馬が知っているのかをフェイトに訊ねる。
ＪＳ事件の最中に、スバルの出生の秘密をフェイトも知る事になり、スバルの姉であるギンガも当然、スバルと同じ出生方法なのはフェイトでも容易に想像がつく。
「うん。多分、知っていると思うよ」
「えっ?」
「次元漂流したギンガを救助したのが月村艦長みたいで、救助した際にギンガの身体検査をしただろうから・・・防衛軍・・と言うよりももう一つの地球の医療技術はミッドと同等かそれ以上だから、ギンガを身体検査した時にギンガが普通の人じゃないことぐらいは分かると

思う。そもそもスバルもマリエルさんの所に何度か行って健康診断をしているでしょう？」
「は、はい・・・・」
「当然、ギンガだってスバルと同じ健康診断をしないといけないでしょう？」
「え、ええ・・・・」
「月村艦長の実家は色んな商売を手広くやっていてね。それでギンガの健康診断も月村艦長の実家がやってくれているみたい」
「そうですか・・・・月村艦長とギン姉が恋人なのは分かりましたけど、フェイト執務官は月村艦長とギン姉が恋人らしいところを見たりしていませんか？」
「えっ？」
フェイトの話では、もう一つの地球でもギンガの健康診断は問題なくやっているみたいで、ギンガが普通の人ではないにもかかわらず、偏見を持たれてはいない事にまずはホッとするが、良馬とギンガが恋人なのであるならば恋人らしい場面を見たことがないかとスバルは問うてきた。
その質問にフェイトは固まる。
「え、えっと・・・・」
再起動したフェイトは視線を泳がせながらどう答えれば良いのか悩む。
（さ、流石にあの場面はまずいよね・・・・）
フェイトの脳裏を過るのは、クリスマスで温泉宿に行った時の露天風呂と良馬の実家で覗き見した際の二人の大人な関係の場面・・・・
二度も大人な関係を持つ場面に遭遇したのだから、きっと自分が知らぬ場面で二人はもっと大人な関係を持っているに違いない。
いくら花より団子なスバルでも子供がどんな経緯で産まれてくるのかぐらいは知っているだろう。
（馬鹿正直に全部言わなくても良いか・・・・）
（伝えるこっちも恥ずかしいし・・・・）
「えっと、月村艦長の実家でお世話になっている時にティアナと一緒

に見ちゃったの・・・・」
「えっ？見た？な、なにを・・ですか？」
スバルはドキドキしながらフェイトの回答を待つ。
もしかしたらスバル自身が、姉の大人な関係を期待しているのかもしれない。
しかし、フェイトにはそんなスバルの心情なんて分かる筈もなく、むしろ逆に姉であるギンガが大人の階段をひた走っている事実を知ればスバルが傷つくと思い、そこまで深い内容ではなく、
「その・・・・キス・・をね・・・・ギンガと月村艦長がしている所を見ちゃったの・・・・」
「えっ？キス・・ですか？」
「うん・・・・」
「キスだけですか？」
「ん？えっ？キスだけ？えっ？」
スバルの返しにフェイトは首を傾げる。
「スバル。それはどういう意味なのかな？」
「えっと、妹のあたしが言うのも変かもしれませんが、ギン姉って年齢の割に大人っぽいじゃないですか」
「えっ？ああ、うん・・・・そうだね・・・・」
確かにスバルの言う通り、新暦７１年に起きた空港火災で助けた時よりも、もう一つの地球で出会ったギンガは自分やなのは、はやてよりも二歳年下なのだが、女性として身体つきは良い方だ。
身長もなのはと同じで、胸の大きさに関しても恐らくはやてより大きい。
「そんなギン姉を恋人にしているんですから、きっとキスよりも先の展開になっているんじゃないかと思ったんですけど・・・・」
「・・・・」
（スバルって六課の時にはよくティアナにド突かれていたり、突っ込まれたりしていたから、天然かおバカキャラかと思っていたけど、変なところは鋭いな・・・・）
フェイトは六課時代のスバルの言動から、彼女は漫才におけるボケ

担当キャラに見えていたが、スバルは意外と知的であり、管理局の訓練校では周囲よりも年下ながら上位の成績をキープしており、今でも救助隊の中でもエリート部隊である特別救助隊に在籍しているので、スバルの知能を彼女の言動から判断してはならない。
「え、えっと・・・私も常にギンガや月村艦長の傍に居た訳じゃないから・・・月村艦長とギンガのキスシーンも偶然目撃したし・・・」
スバルの疑問にフェイトは当然思い当たる節があり、それを二度も目撃しているが、いくらなんでもそれを口にするのは自身が恥ずかしいので言えない。
それにスバルの目的は既に達成されたはずなので、フェイトとしてはこれ以上の事を口にする事はなかった。
「そうなんですか・・・分かりました」
スバルもどうやらフェイトのここまでの話でひとまず満足した様子だった。

ミッドにて、スバルがフェイトにギンガの恋人が誰なのかを訊ねて居る頃、ケンタウロス座・第四惑星のアルファ星の防衛軍基地では・・・
「へっくち!!へっくち!!」
ギンガが盛大にくしゃみをしていた。
「あれ?どうしたの?ギンガ。風邪?」
そんなくしゃみを連発したギンガにフェリシアが訊ねる。
「ううん。私は生まれてこの方、病気らしい病気はした事がないし、風邪じゃあないと思う」
「それじゃあ、誰かがギンガの噂でもしていたのかな?」
「うーん・どうなんだろう・・・」
まさか、フェリシアの推測が当たっているとは、ギンガは当然知る由もなかった。

百五十五話　予算会議・ヴィヴィオ復学

フェイトがスバルにギンガからの手紙に書かれた『ギンガの恋人』について話している頃、

ミッドチルダの首都クラナガン中央部にある一際高いビル・・・

地上本部・・・

そこは時空管理局における〝陸〟の総本山とも言えるビルであり、毎年一回、〝陸〟、〝海〟、空〟の幹部局員らが集まり一般人に対して管理局の予算や活動報告等を行う公開陳述会が行われる会場にもなる。

新暦７５年に行われた公開陳述会では、当時広域指名手配されていたジェイル・スカリエッティらが襲撃を行いビル施設の一部が破損し、警備に当たっていた大勢の局員にも多数の負傷者を出すテロ現場にもなった。

現在は、その事件があった痕跡もなく、破壊された箇所は完全に修復され、〝陸〟の業務も通常通り行われている。

そんな地上本部ビルにある会議室にて、公開陳述会とは異なるが、〝陸〟、〝海〟、空〟の幹部局員らが集まり予算会議が行われていた。

この予算会議では毎年、〝海〟が当たり前のように多額の予算を貪っていき、ミッドチルダ本土の治安維持を担っている〝陸〟の予算は〝海〟と比べるとはした金程度の予算が割り振られていた。

〝陸〟は更にその低予算をミッドチルダ本土の中央および東西南北に展開している各部隊へ割り当てなければならない。

今年は〝海〟がボラー連邦に対する武力制裁の失敗もあり、失った艦艇の建造費に人件費、装備費で例年よりも多額の予算を申請するのは目に見えていた。

「今回の予算会議の結果次第で、我々〝陸〟の発展か停滞若しくは後退が決まる」

本部長のロールスロイスは緊張した面持ちで〝陸〟の幕僚たちを見回しながら今回の予算会議における重要性を説き、幕僚たちは皆頷

く。
「さて、それでは参ろうか？諸君」
『はっ!!』
ロールスロイスは幕僚たちを引き連れて会議室へと向かった。
予算会議が始めると案の定、〝海〟が多額の予算を申請してきた。
しかもその額はこれまでの予算を越える程の額であり、〝陸〟も〝空〟も一部隊しか賄えるか分からないぐらいの予算しか割り当てられない。
しかし、〝海〟からしてみればこの予算は当然の額であり、予算は通るモノだと思っていたが、当然〝陸〟と〝空〟からしてみれば、〝海〟の横暴は許せるものではない。
「異議あり。議長、よろしいですか？」
そこへ、異議を申し出たのがロールスロイスだった。
ロールスロイスの突然の『異議あり』発言に対して、〝海〟の幹部局員からしてみれば、『また〝陸〟の無能共が騒ぎ立てている』：程度にしか思っていなかった。
「ロールスロイス君」
「この〝海〟の予算額はあまりにも多額過ぎます。妙な表現になりますが、今日まで〝陸〟〝海〟〝空〟が財政のかろうじて許容できる範囲で予算を割り振ってきました。ですが、それはもはや過去の話となりつつあります」
「それは、どういうことですかな？ロールスロイス君」
「この上、〝海〟ばかりに予算が通ってゆけば、ミッドチルダの国家財政と経済が破綻するのではないかと言う事です」
無から有は生み出せない・・・錬金術の基本通り、管理局で使用する予算はどこからともなく無限に湧いて出てくるわけでもなく、何もない空間からお金が出てくるわけでもなく、ミッドを始めとする管理世界から徴収された税金が資金となっている。
「ならば、紙幣の発行部数を増やせばいいだけではないか」
〝海〟の幹部局員の一人が、お札がないなら、造幣局で大量のお札を発行すれば問題は解決するのではないかとやや子供じみた解決案

を言うが、
「財政の裏付けも無しに・・ですか？何年か先の未来では紙幣の額ではなく、重さで商品の売買が行われることになりますよ。あなた方は歴史的インフレーション時代を引き起こすつもりですか？」
　お札を大量に発行すれば、そのお札の価値を下げ、インフレを起こすリスクがあるとロールスロイスは反論する。
「それならば、他の管理世界の税金を引き上げてはどうか？それと大規模な徴兵を行うとか？」
「新たに管理世界へ編入したばかりの世界ならば、管理世界の税や徴兵の仕組みなど分かっていないだろうから丁度いいのではないか？」
　ミッドでのインフレを避けるために他の管理世界の住民に重税を課して財源を確保して、大規模な徴兵を行い人材の確保をしようと提案する〝海〟の幹部局員たち。
「重税と大規模な徴兵を課して、その世界での民衆の怒りを買いたいのであるならば、あなた方〝海〟が買って下さい。〝陸〟では他の世界まで赴いて暴動を鎮圧するほど人材に余裕がありませんので・・・・」
「我々〝空〟も〝陸〟同様、人材が不足しているので、〝陸〟と同様に他の世界へ回す人材はおりません」
　ミッドで起きた市民による暴動を鎮圧した〝陸〟と〝空〟だからこそ、民衆たちによる暴動の凄まじさを知っているので、もし他の管理世界において民衆の暴動が起きた際には〝海〟のみで対処しろと突き放すロールスロイスと〝空〟の幹部局員。
　〝空〟に関しては、ボラー連邦への武力制裁失敗で多くの空戦隊魔導師が殉職しているので、〝空〟も〝海〟への協力要請に対しては非協力的になっているので、ロールスロイスの言う通り、他の管理世界での揉め事に関しては同意見と言う姿勢だ。
「貴官らは我々〝海〟の活動をバカにしているのか？」
　そんなロールスロイスと〝空〟の態度に不機嫌そうな〝海〟の幹部局員。
「いえいえ、あなた方〝海〟の崇高な職務は把握しております。宇宙を探索し、侵略して植民地を増やすという大変な職務をね・・・・」

「き、貴様・・・」
「管理などと言葉を変えているだけ、実際に我々管理局が行っているのは、管理という名の支配ではありませんか？もし、違うと言うのであるならば、管理世界などと言う植民地の増加を即時止めるべきではありませんか？現状の管理世界の治安維持だけでも手一杯にもかかわらず、これ以上の植民地を増やしては財源や人材がいくらあっても永遠に足りないでしょう」
「ロールスロイス君。君の意見は分かった。しかし、我々時空管理局は次元の法の番人であり、絶対的正義な存在なのだ。不経済、人材不足などと言う理由で〝海〟の活動を止めることはできない。こうしている間にも我々の管理を欲する世界が存在している事を忘れないでもらいたい」
「私もそう思う。経済的問題は内政的努力と増税と徴兵で何とか解消できるはずだ」
「しかし、人的資源として一言申し上げたい」
そこへ、〝陸〟の人事部長が〝海〟の幹部局員らに物申す。
「経済もそうですが、〝陸〟では人材の問題はもうどうにもならないところまで来ている。優秀な人材が〝海〟ばかりに偏り過ぎている。〝陸〟及び民間企業には高齢者や若年層、非魔導師ばかり、このままではミッドの治安維持はおろか、社会構造さえも崩壊するかもしれない」
「何を大袈裟な事を・・・」
〝海〟の幹部局員らはこれまでの方法で上手くいっているのだから、この先も多少の変更はありつつもこのままの方法で大丈夫だと楽観視している〝海〟の幹部局員たち。
もう、ボラー連邦に対する武力制裁の失敗を忘れているかのようだ。
それはボラー連邦がミッドを始めとする管理世界へ報復行動に移らない事、
現在探査を再開した際、リンディの訓示が行き届き、現場の〝海〟の局員らが横暴な態度をとっておらず、またボラー連邦並みの技術力

を持った星間国家と遭遇していない偶然が続いただけだ。
『喉元過ぎれば熱さを忘れる』とはまさにこのことであった。
　そして、〝海〟の幹部局員たちがロールスロイスに対して更に不愉快になる事態が起きる。
「それにこの〝陸〟から提案された『新装備の開発費』・・・これは一体なんだね？ロールスロイス本部長」
「文字通りです。〝陸〟でも〝陸〟所属の局員・主に非魔導師の局員に対して新たな武器を装備したく、その開発費を申請した次第です」
「非魔導師に新たな装備？ハハ、〝陸〟所属の非魔導師などに装備など不要だ」
「左様。そんな獄潰しの無能共に持たせる武器の開発費など、それこそ無駄な金だ」
　高ランクの魔導師である〝海〟の幹部局員たちはヘラヘラと小馬鹿な笑みを浮かべロールスロイスの申請した予算案に対して却下しようとする。
「ならば、〝海〟へ出向させている〝陸〟所属の局員らは直ちに原隊へ戻さなければなりませんな。我々〝陸〟は〝海〟と異なり人材不足なので・・・その他にボラー連邦への武力制裁失敗後に〝海〟から〝陸〟への転属届が増加しておりまして、士官のほとんどが〝海〟のこの事態が収まるまで、安全な〝陸〟に居ようとする志が低い者ばかりですが、こうも人材不足が続きますと志が低くても〝陸〟に来てもらえるというのであるならば、士官の異動も寛容にする必要がありますな」
「むぅ・・・」
「くっ・・・」
　〝海〟の幹部局員らは忌々しそうにロールスロイスを睨みつける。
　しかし、とうのロールスロイスはどこ吹く風の様にスルーしている。
　〝海〟からの人材流出を防ぎたい〝海〟としては〝陸〟の・・・ロールスロイスの申請を受け入れるしか方法はなく、〝海〟は当初申請をした予算を大きく減額し、その分が〝陸〟へと流れる事になっ

た。
予算会議後、〝海〟の幹部局員らは皆、忌々しそうに顔を歪めながら会議室から出て行った。
一方、これまでにない多額の予算を獲得したロールスロイスたち〝陸〟の幹部局員らは皆、ホクホク顔であった。
「やりましたね、本部長」
「ああ・・・だが、この手はそう長くは続かない。〝海〟が再び体制を整えれば、これまで通り、〝海〟が多額の予算を独占するだろう。それまでに〝陸〟としては何としてでも装備を充実させなければならない・・・我々は限られた時間内に〝陸〟の改革を行わなければならないのだ」
「はっ、承知しました!!」
〝海〟、〝陸〟互いに職場、職務は異なるが、限られた時間、限られた予算内での改革が望まれた。

「ふぅ〜ただいま・・・」
本局内にあるリンディとフェイトが住んでいる居住区の部屋にお疲れ様子のリンディが帰宅した。
「おかえり・・・ん?リンディ母さん、何か疲れているみたいだね」
疲れている様子のリンディをフェイトは玄関先で出迎える。
なお、この時は既にスバルはミッドに戻っていた。
「うん。今日の予算会議でね・・・」
「今日、予算会議だったんだ・・・」
統括官であるリンディも地上本部ビルで行われた予算会議に参加していた。
「ええ・それで、予算会議で一悶着があってね」
「一悶着?何があったの?」
「・・・フェイトは管理局がボラー連邦への武力制裁で失敗した事を知っているでしょう?」
「う、うん・・・」
「それで、〝海〟は去年よりも多額の予算を申請したんだけど・・・」

「ああ・まぁ〝海〟としては当然の事だね」
「申請をした・・までは良かったんだけど、そこを〝陸〟のロールスロイス本部長が『待った』をかけてね・・・」
「〝陸〟側としても当然の事だね」
「今は人材不足で〝陸〟からも出向って形で人材の補填をしているんだけど、〝陸〟でも人材不足じゃない？」
「〝陸〟や〝海〟を含めて、管理局はどの部署でも人材不足だしね」
「それで、〝陸〟からの人材を原隊に戻すって言ってきて、更に〝陸〟所属の非魔導師の局員の為に新装備を開発するからその開発費を申請してきたわ」
「非魔導師の局員の為に新装備？それってどんな装備なの？」
「さあ？そこまでは分からないわ」
「でも、ロールスロイス本部長なら、その予算を横領するとは思えないから折角得た予算を非魔導師の局員の為に使ってくれるんじゃないかな？」
「そうね・でもそれで、〝海〟の予算の申請は却下されて申請した予算よりもかなり減額されたわ・・・」
「うわぁ～」
艦艇と人材が不足している中、予算も減らされて〝海〟としては踏んだり蹴ったりでリンディの苦労を心中察するフェイト。
「レティも頭を抱えていたわ」
リンディは友人の心中を察し彼女の気苦労を察した。
（はぁ～ロールスロイス本部長もレジアス中将みたいに何か大きなスキャンダルが起きれば失脚するかもしれないんだけど・・・）
リンディは心の中でロールスロイスがレジアスの様に何か裏で犯罪行為を行っていないかと願ってしまう。

地上本部ビルで〝陸〟〝海〟〝空〟の予算会議が行われた翌日・・・
「ヴィヴィオ、本当に大丈夫？」
教導隊の教官宿舎にて、なのはが心配そうにヴィヴィオへ訊ねる。

「うん。大丈夫だよ、なのはママ」
ヴィヴィオは休学していたＳｔ．ヒルデ魔法学院初等科へ今日復学するのだ。
ヴィヴィオが通うＳｔ．ヒルデ魔法学院でも、ボラー連邦への武力制裁失敗で家族を失った家族が多く居た。
ボラー連邦への武力制裁の決定打が修学旅行中のＳｔ．ヒルデ魔法学院高等科の生徒たちが乗った次元航行船がボラー連邦から攻撃を受けた事であるが、最初の発端は〝海〟がボラー連邦の輸送船を強引に臨検した事に始まる。
最初の発端が管理局側に責任があるとはいえ、武力制裁を行い、失敗した後にどこからともなく、なのは、はやて、シグナムたちヴォルケンリッターのメンバーたちがボラー連邦への武力制裁に参加しなかったから、武力制裁が失敗したと言う根も葉もないデマが流れ出た。
ミッドではそのデマを信じた民衆が暴徒と化し、その結果的になのはとはやての家が焼き討ちに遭う被害を受け、シスター・シャッハからＳｔ．ヒルデ魔法学院に通う遺族の生徒たちからヴィヴィオが虐めに遭う可能性を指摘して、なのははヴィヴィオに対する虐めを危惧し、暫くの期間、ヴィヴィオはＳｔ．ヒルデ魔法学院を休学していた。
しかし、いつまでも学校を休学するわけにもいかないのも事実だ。
「じゃあ、行ってきます」
「いってらっしゃい・・・」
なのはの心配を他所にヴィヴィオは学院へと通学して行った。
確かにヴィヴィオはもう一つの地球から戻って来てからなのはから見ても何だか逞しく見えた。
（大丈夫・なのかな・・・）
ヴィヴィオ本人は『大丈夫』と言うが、それでもヴィヴィオの保護者としては、不安が拭えなかった。
Ｓｔ．ヒルデ魔法学院の敷地内に入ると、ヴィヴィオの姿を見た何人かの生徒たちはひそひそ話をし始める。
きっと、例のデマを信じている生徒たちなのだろう。

しかし、ヴィヴィオはそんな生徒たちの様子を気にせずに昇降口へと向かう。
そして、下駄箱にて外履きと上履きを履き替えていると、
「あら?そこにいるのは卑怯者の高町さんではありませんか?」
「ん?」
ヴィヴィオが顔を上げるとそこにはふんぞり返っている初等科の制服を着てふんぞり返っている一人の女子生徒とその取り巻きらしき数人の女子生徒が居た。
「えっと・・・・誰?」
ヴィヴィオの記憶の中には少なくとも眼前でふんぞり返っている女子生徒には覚えがない。
少なくともクラスメイトではない。
「まぁ!!貴女、この私を知らないというの!?この私、カテジナ・クラウンの事を!?」
「ううん、全然知らない」
元々Ｓｔ．ヒルデ魔法学院は初等科、中等科、高等科があるマンモス校であり、在籍する生徒の人数が多い。
そんな大勢の生徒が在籍するマンモス校のクラスメイトでもない生徒の事を覚える程の余裕はヴィヴィオにはない。
だからこそ、ヴィヴィオが眼前でふんぞり返っている女子生徒、カテジナの事を知らないのも無理はないし不思議でもない。
「それで?そのクラウンさんが私に何の用かな?」
ヴィヴィオはカテジナの事を知らないが、向こうの方は自分の事を知っている様子であり、何か自分に用があるからこそ、こうして話しかけてきたのだろう。
ただし、彼女の態度が高圧的であり、尚且つ最初に言い放った『卑怯者』と言う部分は引っかかるが・・・・
「ふん、貴女、貴女の母親の愚行がどれだけ沢山の生徒の心を傷つけたのか理解していないの?」
「ん?」
「自覚がないなんて、貴女自身はおつむが足りないみたいですわね。

どうやってこの伝統ある学院に入学できたのかしら？」
「きっとアレですわ。この方の母親が裏口入学をさせたか、身体を使って教育関係者を誘惑させたに決まっていますわ」
「そうですわね」
「管理局ではエース何て言われていますけど、本性は卑怯者ですからね」
「本当に管理局でもエースなのかしら？」
「怪しいですわねぇ～」
　カテジナとその取り巻きたちは人を小馬鹿にした様な笑みを浮かべながら、なのはをバカにしてくる。
　一方、ヴィヴィオにとってはなのはの名誉を一方的に傷つけている眼前の生徒たちに不快感を覚える。
「なのはママは此処の生徒を傷つけた覚えはありませんけど？」
　ヴィヴィオは管理局員であり教導官であるなのはが、この学院の生徒に対して一方的に暴力をふるったとは思えずに首を傾げながらカテジナの言葉を否定する。
「ですから、こうして知能が足りない貴女にも分かりやすく説明してあげますわ。貴女の母親が遠征に参加しなかったせいで、この学院に通う生徒の中で家族を失った方が大勢いると言う事ですわ」
「なのはママが元々その遠征に参加する予定だったんですか？その証拠はあるんですか？」
「貴女はご自身の母親が遠征前までなんて言われていたかご存知ないの？」
「うーん・・・管理局の白い悪魔？」
「・・・貴女、ご自身の母親に対して辛辣ですわね。違いますわ!!管理局のエース!!エース・オブ・エースですわ!!」
「ああ、そっちの方ね」
「それで、管理局の大遠征にその管理局のエースが行かないなんて普通ならありえませんわ!!」
「つまり、勝手な想像をして、証拠もないのになのはママの事をバカにしたって事？」

ヴィヴィオは年齢に似合わず凄みがある目つきでカテジナたちを睨みつける。
『っ!?』
ヴィヴィオの眼力に怯むカテジナたち。
クローンとは言え、ヴィヴィオの元となった人物が古代ベルカ時代の聖王オリヴィエである事、ＪＳ事件、教会の強硬派に襲われた事、そしてもう一つの地球では占領下を経験した事からヴィヴィオのメンタルは年齢に反比例して強くなっていた。
「さあ?どうなんですか?答えて下さいよ・・・さあ、さあ、さあ・・・」
カテジナに詰め寄るヴィヴィオ。
「くっ、お、覚えていなさい!!」
「あっ、待ってください!!」
「クラウンさん!!」
ヴィヴィオの迫力に負けたカテジナとその取り巻きたちは蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。
ヴィヴィオが教室に入ると、彼女の姿を見て、気まずさなのかヴィヴィオから視線を逸らす者、ひそひそと話す者も居たが、
「あっ、ヴィヴィオ!!」
「もう大丈夫なの?心配したよ」
と、ヴィヴィオに声をかけてくれる生徒もいた。
ヴィヴィオに声をかけてきたのはクラスメイトであり、ヴィヴィオの親友であるリオ・ウエズリーとコロナ・ティミルの二人だった。
「あっ、リオ、コロナ・うん。もう大丈夫だよ。心配かけてごめんね」
「ううん、そんなことないよ」
「そうだよ。ヴィヴィオが無事に戻って来てくれただけでいいよ」
リオとコロナはヴィヴィオがこうして無事に学校へ復学した事を喜んだ。
やがて、教室に教師が入って来ると生徒たちはそれぞれ自分に着席する。
「皆さん、おはようございます」
『おはようございます!!』

「さて、皆さんもお気づきのようですが、本日より高町さんが当学院に復学しました」
『・・・』
教師がヴィヴィオの事を話題にすると、ヴィヴィオの事をチラッと見るクラスメイトがちらほら居た。
「皆さんも、高町さんのお母さんが先の遠征に参加しなかった件についてのあらぬ噂を耳にしたかもしれませんが、それは事実無根の噂であり、元々高町さんのお母さんは遠征メンバーでなかったことは管理局から通達があり、学院側でも既に確認済みです。よって、皆さんもあらぬ噂を鵜？みにしてはいけません。勿論、この件について高町さん本人も無関係なので、これまで通り接して下さい」
教師はクラスメイトに対して、ボラー連邦への遠征に伴うなのはの噂は事実無根の噂であり、当然ヴィヴィオもその噂には全くの無関係なので、なのはに対する噂の憂さをヴィヴィオに向けない様に釘を刺した。
教師から釘を刺され、クラスメイトの中には渋々と言った様子のクラスメイトも居たが、こうして教師から直々に釘を刺されては強くは言えない。
しかし、学院の運営元である聖王教会としてはやはりヴィヴィオの身を案じており、教師が釘を刺したにもかかわらず、ヴィヴィオに対して良からぬ事をしでかす生徒が居ないとは言い切れず、密かに学院のあちこちにサーチャーを飛ばしてヴィヴィオ、そして学院の生徒の動向を監視していた。
こうして学院は暫くの間、半ば刑務所みたいな様相となってしまった。
そんな中、なのははフェイトに連絡を入れていた。
「そう・ヴィヴィオ、今日から学院に復学するんだね」
「うん。でも、大丈夫かな？ヴィヴィオ・私のせいで、学校でいじめられないかな？」
なのはは以前シスター・シャッハから聞かされた懸念をフェイトに伝える。

「大丈夫だよ、なのは。元々なのははあの遠征に参加予定じゃなかったんでしょう？」
「う、うん」
「管理局側から教会に説明が言っているだろうから、教会が学校の理事に伝えて、そこから教師、生徒に説明がいくだろうしきっと大丈夫だよ」
「そ、そうかな・・・？」
「うん。それにヴィヴィオは強くなったと思うよ・・・」
「それは、もう一つの地球でデバイスを貰ったから？」
「ううん。それだけじゃなくて、ヴィヴィオは同年代の子供と比べたら色々な経験をしているでしょう」
「う、うん：確かに・・・」
「特にもう一つの地球での体験はヴィヴィオを精神的に大きく成長させたと思う」
「・・・」
（フェイトちゃんも何だか、変わったような気もするけどな・・・）
ヴィヴィオに対するフェイトの反応を見て、なのはは、変わったのはヴィヴィオだけでなく、フェイトも変わったという印象を受けた。
まだ機動六課時代、ヴィヴィオが保護されたばかりの頃のフェイトはヴィヴィオには勿論、自身が後見人を務めているエリオやキャロの二人にも周囲がやや引くほど甘かった。
まぁ、ヴィヴィオ、エリオ、キャロの三人に家族的な問題があり、フェイト自身も幼少期から家族に問題を抱えていた事もフェイトがヴィヴィオ、エリオ、キャロに甘い事が要因になっている。
ヴィヴィオが六課の訓練場で転んだ時もフェイトはいち早くヴィヴィオに駆け寄ろうとしたところをなのはが止めて、ヴィヴィオに自力で立ち上がる事を促した。
新暦７５年、公開陳述会が行われた日に地上本部ビルがスカリエッティたちの襲撃を受けた時、機動六課の隊舎も襲撃を受けた。
その際、ヴィヴィオはスカリエッティの配下のナンバーズに攫われてしまった。

なのはは破壊された隊舎からヴィヴィオが気に入っていたうさぎのぬいぐるみが落ちていた事にショックを受けた。
ＪＳ事件が終息し、ヴィヴィオは成長して学院に通う様になり、平穏を過ごせると思いつつ、管理局の横暴さが招いたボラーとの一件から自分に変な噂が立ち、そこからヴィヴィオが学校から虐められるかもしれない懸念を聞かされて、良かれと思いミッドから避難させたが、教会の強硬派に拉致されそうになり、ジュエルシードの欠片でフェイトが救助されたもう一つの地球へ次元転移した時はホッと胸をなでおろす。
しかし、そのもう一つの地球がどこかの星間国家から侵略を受け、交信が一時停止してしまった際はなのはは気が気でない日々を過ごした。
その後、もう一つの地球は徹底抗戦の後、占領下から解放して交信が再開し、フェイトとヴィヴィオは無事にミッドに戻って来たが、こうした波乱万丈な事が立て続けに起こった経緯から六課時代のなのはとフェイトのヴィヴィオに対する態度が逆転していた。
なのははヴィヴィオに深く関係し、逆にフェイトはヴィヴィオともう一つの地球で過ごヴィヴィオの精神的成長を間近で見て来た事からヴィヴィオが自立している事を知っているので、ヴィヴィオに対して過干渉をしていない。
それが今回、なのはが思っているフェイトの印象なのだろう。
学院に復学したヴィヴィオの事を案じているのはなのはだけではなく・・・

聖王教会　カリム・グラシア執務室

「そう言えば、今日からヴィヴィオが学院に復学するって聞いたけど？」
この執務室の主であるカリム・グラシアがシスター・シャッハに確認するように訊ねる。
「はい。学院の理事から報告が上がっています」

シスター・シャッハがテーブルの上に置かれているカップに紅茶を注ぎながら答える。
「・・・」
「心配ですか?ヴィヴィオの事・・・」
「ええ・あんな噂が出回ってしまって・・・管理局側が学院に噂を否定したけれど、あの遠征で家族を失った生徒さんはそう簡単に信じるかどうか・・・」
「一応、警戒のためにサーチャーを飛ばしてヴィヴィオの動向を監視していますが・・・」
そう言ってシスター・シャッハはタブレット端末を取り出してカリムに見せる。
タブレット端末にはヴィヴィオが在籍している教室の風景が映し出される。
映像ではこの時間帯は授業中なので、ヴィヴィオたち生徒が私語もなく授業を受けている映像が映っている。
そんな中、ヴィヴィオの後方に席がある一人のクラスメイトがヴィヴィオに向けて消しゴムの切っ端をデコピンで飛ばす。
ヴィヴィオに対して些細な嫌がらせのつもりだったのだろう。
飛んでくる消しゴムの切っ端・・・
このままではヴィヴィオに消しゴムの切っ端が当たってしまうかと思われた時、
『もっふる!!』
犬だかネズミだかよく分からない茶色のぬいぐるみがヴィヴィオに向かって飛んでくる消しゴムの切っ端を逆に消しゴムの切っ端を飛ばしたクラスメイトに向かって跳ね返した。
「いっ・・・」
ヴィヴィオに当てるつもりが跳ね返って来た消しゴムの切っ端が自分の額に勢い良く当たり、クラスメイトは思わず小さく悲鳴を上げた。
勿論。この様子はサーチャーで記録されていた。
「ほら、あのような事が授業中にもかかわらず、起こっているんですよ

!!幸い今回はヴィヴィオのデバイスが防ぎましたが、やはりサーチャーだけでは不十分です!!」
　更にカリムはサーチャーが記録した昇降口でのカテジナとの一件を見ると、
「何ですか!?この生徒は!?証拠もない噂を信じ、多勢で攻めるなんて学院の生徒の質も随分と下がりましたね!?」
　カリムはこれらの映像を見て、サーチャーによる監視だけでは不十分だとシスター・シャッハに指摘する。
「わ、分かりました。では、シスター・セインを現場に向かわせましょう。彼女の能力は潜入にはもってこいですし」
「直ぐにシスター・セインを派遣して!!」
「わ、分かりました」
　カリムの勢いに負け、シスター・シャッハは急ぎセインをＳｔ．ヒルデ魔法学院に向かってもらうことにした。
「えぇぇー!!ヴィヴィオが学院にいる間、私も学院に潜入していろと!?」
　シスター・シャッハから派遣の依頼を聞いたセインは思わず声をあげる。
「ええ。これは騎士カリムからの依頼です。シスター・セイン」
「で、でも、半日ずっとヴィヴィオの監視だなんて・・・それに監視ならサーチャーで十分じゃないんですか？」
　セインは今回の学院での任務にやや不満そうな様子だ。
「もし、この任務を引き受けてもらえるならば、当分の掃除当番を免除しても良いとの事です」
「直ぐに向かいます!!」
　シスター・シャッハから掃除当番免除の特典を聞いてセインは直ぐに学院へと向かうと言う。
「それで、監視の件ですが、私もサーチャーだけで事足りると思っていましたが、やはり不十分でした」
　そう言って先ほどの昇降口での出来事とクラスメイトの行いが記録された映像をセインに見せる。

「あぁ～まぁ、子供の悪ふざけと言えば悪ふざけなんでしょうけど・・・」
「今はこの程度で済んでいるだけで、それがいつエスカレートするか分かりません。子供は無邪気な分、限度を知りませんからね」
「分かりました・・・元ナンバーズの私がこう言うのも変ですが、折角ヴィヴィオが学院に復学出来たんですからね・・・ヴィヴィオには普通のスクールライフを送って欲しいものです」
「ええ、そうね」
　セインもヴィヴィオの生い立ちや辛い経験を知っているので、映像を見てやっと復学できたヴィヴィオにも今後も平穏な学生ライフを送って欲しいという望みがあるので、ただ単に掃除当番が免除になるからと言う訳ではなく、ヴィヴィオの為に一肌脱ぐことにした。
「ただ、あくまでも陰からの監視とヴィヴィオの警護を優先にしてください。決して先に手を出さない様に・・いいですね？シスター・セイン」
「分かっていますよ」
　シスター・シャッハから監視・警護の注意点を言われセインはヴィヴィオの監視・警護の為、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院に向かい、陰ながら当分ヴィヴィオの護衛に就くことになった。

百五十六話　合流

ミッドチルダにて大小様々な出来事が起きている中、視点を破滅に向かっているもう一つの地球がある太陽系へと変わる。
ケンタウロス座アルファ星系第四惑星では、地球との同盟の為、ガルマン・ガミラスより使者として来訪したジュラたち一行が地球連邦政府からの指示を待っていた。
基地内での行動は軍事機密に関わる区画への立ち入りは当然禁止になっているが、それは軍人たる向こう側も理解しているので、特にガルマン側からの抗議等はなかった。
小規模ながらも地球とガルマン・ガミラスとの間で技術交換や空戦隊同士の演習も行われていた。
今回のジュラたち使節団の一行には護衛としてガルマン・ガミラスの新鋭空母とも言える二連三段空母が随行しており、その空母にはガルマン・ガミラスとなってから開発された航空機が搭載されていたので、航空機の技術交換が行われたのだ。
また技術交換の他に使節団一行の興味は地球の食べ物だった。
特にジュラとメルダはパフェやケーキ、プリン、シュークリームを始めとする地球のスイーツを大変気に入っており、連日まほろばの食堂に顔を出している。
使節団のメンバーもそんなジュラとメルダの行動に感化されたのか、基地内の食堂やまほろばの食堂へと赴き、各々が気に入った地球の料理を探求していた。
そんな中、ようやく地球連邦政府から使節団へ連絡がきた。
「ジュラさん、地球連邦政府より連絡が来ました。政府としては連邦市民に無用な混乱を避けるため、会談場所は地球本土ではなく月で行いたいそうです」
良馬がまほろばの食堂に居たジュラに地球連邦政府からの回答を伝えた。
「分かりました」

「月へ向かう途中に遭遇する事が予測される他の防衛軍艦艇への説明等を行う為、本艦も同行いたします」
「ご配慮感謝いたします」
「いえ、太陽系とは言え、宇宙では何が起こるか分かりませんから・・・では、本艦も発進準備に入ります。使節団の方々も発進準備が整いましたらご連絡を下さい」
「承知しました」
ジュラは上品な仕草で、ナプキンを使用して口を拭うと椅子から立ち上がる。
「・・・」
ただこの時、良馬はジュラとメルダが居たテーブルの上に置かれた大量のパフェグラスについてはスルーした。
そして、ジュラは少々名残惜しそうな様子で御召し艦であるガミラシアへと戻り、使節団一行へ今回の地球連邦政府からの通達を伝えた。

まほろば　艦橋
ジュラ同様、良馬もまほろばの艦橋へと上がり、地球連邦政府からの通達をまほろばの乗員たちに伝える。
「本日、地球連邦政府より使節団に向けての回答があった。地球連邦政府はガルマン・ガミラスの使節団との会談場所として月を指名した。本艦はこれより、使節団護衛のため、一時アルファ星を離れる。総員出航準備にかかれ!!」
良馬の放送を聞き、まほろばの乗員たちは出航準備へと取り掛かる。
「しかし、艦長。今我々がアルファ星を離れて大丈夫かのう?」
井上が機関チェックをしながらアルファ星からまほろばが離れるリスクを懸念する。
「一応、援軍が冥王星や第十一番惑星から来ているし、月まででではなく太陽系内の惑星の途中まで送り、その後は内惑星防衛艦隊所属の艦に護衛を任せて我々はアルファ星へ直ぐに戻ることになるだろう」

先日のボラー連邦の宇宙艦艇の襲撃を受け、防衛軍も地球が太陽系外の初めての宇宙開拓を行った星なだけあり、民間企業・開拓業を生業にしようとしている民間人が中心になって開墾しているだけあってアルファ星には民間人が多数いる。
そうした民間人たちを守るため、防衛軍側も防衛力を強化しなければならない。
そんな中で戦艦であるまほろばがアルファ星を一時的に離れるのだから、良馬本人としても不安が残る。
冥王星や第十一番惑星から到着した援軍はパトロール艦、護衛艦、駆逐艦などの中小の艦艇だからだ。
しかし、使節団一行だけを向かわせて道中で何かトラブルがあれば、それこそガルマン・ガミラスとの同盟前に地球とガルマン・ガミラスとの間で再び戦争が起きる可能性もある。
アルファ星基地司令官のキャゼルヌも援軍の中・小艦艇を使節団一行の護衛に回すか？
それとも、戦艦である　まほろば　一隻を護衛に回すか検討した結果、まほろば　一隻の戦力よりも援軍の中・小艦艇の数をアルファ星の防衛に回す決断をしたのだ。
（留守中にあの時の敵が襲撃してこなければ良いけど・・・）
アルファ星の防衛に不安を残しつつも、まほろば　は使節団一行を護衛しながらアルファ星を出発し、太陽系へと戻った。
その頃、ケンタウロス座アルファ星の向かい側に位置するへびつかい座の方向にある恒星・バーナード星には多数のボラー連邦の艦艇が集結していた。
ただし、艦影はボラー連邦の宇宙艦艇であったが、乗員はボラー連邦所属の人間も居れば、ボラー連邦の人間とは異なる肌の色をした人間も居た。
彼らはかつてボラー連邦が保護・管理していたバジウド星系の星々を統括していたボラー連邦の人間とボラー連邦に尻尾を振っていた現地の星の権力者たちであったが、ガルマン・ガミラスの東部方面軍がバジウド星系へ進出してきたことから、統括していた星、自分たち

の故郷の星を捨て放浪者の運命を辿る事になった。
　ガルマン・ガミラスから逃げるように銀河系を東進している中、ケンタウロス座アルファ星が自分たちの知らない星間国家が開拓しているのを発見し、突如、警告もなくアルファ星へ攻撃を仕掛けた。
　アルファ星軌道上に展開していた無人戦闘衛星や無人攻撃ステーションを破壊し、ついにはアルファ星の地表に無差別のミサイル攻撃を加えた。
　しかし、アルファ星からのＳＯＳを受けたまほろばを始めとするホワイト艦隊と交戦し返り討ちに遭いケンタウロス座星系から蜘蛛の子を散らすように撤退。
　そしてケンタウロス座の向かい側に位置するへびつかい座にあるバーナード星へ何とかたどり着いた。
「レバルス、こちらの被害は？」
　この艦隊の指揮官とも言える元バース星総督のボローズは艦隊旗艦ゾルヴァ号の艦長である元バース星警備隊長のレバルスにアルファ星における戦闘で生じた味方の被害状況を訊ねる。
「はっ、本艦及び後方に控えていた工作船団、船団護衛をしていた護衛艦隊は無傷ですが、アルファ星攻撃に参加した戦闘艦艇の内、三分の一を失いました」
「くっ、どこの星かも分からぬ田舎蛮族共が・・・・」
　同志を含む貴重な戦闘艦艇を失った現実にボローズは歯ぎしりをしながら悔しがる。
「レバルス」
「はっ!!」
「工作船団は無事なのだな!?」
「はい!!」
「よし・・・・これより、この星にアルファ星攻略の基地を設営する!!」
「この星に攻略基地を・・ですか？」
「我々が受けた屈辱・・田舎蛮族に還さねば、散って行った同志に顔向けが出来ぬ・・・・君自身も田舎の蛮族共に一方的にやられた屈辱を晴らしたいとは思わぬか？」

「勿論です。私としても負けたまま背中を見せるのは武人として我慢なりません」
　レバルスの報告通り、工作船団が無事だった事は基地を建設するための資材・重機が無事である事を示すので、ボローズはアルファ星で受けた屈辱を晴らすべくバーナード星にアルファ星攻略のための基地を設営し始めた。
　バーナード星がボローズの指示でアルファ星攻略のための基地が建造された頃、第二の地球探査の命令を受けたヤマトは木星、土星、天王星を通過して海王星宙域まで進出した。
　海王星宙域まで来たヤマトの全天球レーダー室で周辺観測をしていた観測手が空間歪曲反応を捉えた。
「ヤマト左舷前方に空間歪曲反応!!距離五万宇宙キロ!!」
「総員戦闘配置!!」
　いくら太陽系内・防衛軍の領域でも突然の空間歪曲反応があったので、臨戦態勢をとるのは当然の事であった。
　ヤマトが主砲を空間歪曲反応がある空間に向けていると、第一艦橋のパネルには　まほろば　を先頭にガミラスのゲルバデス級航宙戦闘母艦が三隻、そしてそのゲルバデス級に似た青色の航宙戦闘母艦、ガイペロン級多層式航宙母艦を二隻くっつけたような形状で赤色の多層式航宙母艦一隻がワープアウトしてきた。
「まほろば!?」
　突然ワープアウトしてきたまほろばに古代はギョッとする。
「先頭は確かにまほろばだが、後方の艦隊は・・・ガミラスか?」
　島はゲルバデス級航宙戦闘母艦が三隻確認出来たことから、まほろばの後方の艦隊はガミラス艦隊ではないかと推測する。
「艦長、まほろばの月村艦長から通信がきました」
　様々な推測と困惑の空気が流れるヤマトの第一艦橋。
　そんな中、相原が古代に良馬から通信が来たことを報告する。
「パネルにまわしてくれ」
「了解」
　ヤマトの第一艦橋のパネルに艦隊の艦影から良馬の姿へと変わる。

「月村艦長」
「古代艦長」
　月村、古代の両艦長は互いに敬礼をする。
「月村艦長、まほろばの後方にいる艦隊はガミラスの艦隊なんですか？」
　古代は早速良馬に後方の艦隊について質問する。
「それは半分正解だ」
「半分？それは、一体どういうことでしょうか？」
「後方の艦隊が所属している星間国家はガミラスが新たに建国した新国家所属の艦隊だ」
「ガミラスが建国した・・・・」
「新国家・・・・」
　良馬の回答を聞いて古代たち第一艦橋のメンバーはガミラスがあのイスカンダルでの共闘からこの僅かな期間で新たなる新惑星を発見して、新国家を樹立させていることに驚愕した。
（デスラーはあの時の宿願を達成させたのか・・・・）
　デスラーたちガミラス艦隊がイスカンダルを旅立つ直前に古代はデスラーと会い、彼と直接話をした。
　その時、デスラーは自身の宿願をガミラス民族の復興であると宣言し、例え幾年の年月の間、宇宙を放浪しようとも必ず第二の故郷となる星を見つけてみせると強い信念を感じた。
　ガトランティス戦役の際、地球が超巨大戦艦の砲撃を受けている中、ヤマトでは生き残った乗員たちはヤマトを退艦していた。
　その際、古代は真田を脱出のための救命艇に運んでいた。
　真田はその時古代に、
『デスラーを見習うべきだ』
　と、諭した事があった。
　幸いあの時はテレサの力によってガトランティスの超巨大戦艦は消滅して地球を救う事が出来た。
　しかし、今回の地球の危機は自然相手であり人の力ではどうにもならない。

だからこそ、こうしてヤマトは第二の地球探査の特命で地球を発進したのだが、今回のヤマトの航海はまさにあの時のデスラーたちガミラスと同じ状況だった。
ただ、デスラーたちと異なるのは、あの時デスラーたちには無限の時間があったが、自分たちは一年以内と言うタイムリミットがある。
（デスラーたちが宿願を叶え、新たな星を見つけたのなら、俺たちも……）
しかし、デスラーが新たな故郷となる星を見つけた実績から古代も第二の地球となる星が見つかるかもしれないと言う希望に変わった。
「それで、ガミラスの新国家がどうして　まほろば　と一緒に太陽系へ？」
「それは、彼女も交えて話した方が早いかもしれない」
「彼女？」
「うん。ヤマトの皆とは面識がある人物だよ」
（彼女？ヤマトの乗員と面識がある人物？）
（一体誰だ？）
此処で良馬が『彼女』ではなく『彼』だった場合、古代たちはデスラーの姿が脳裏を過ったに違いない。
しかし、良馬は古代たちにはっきりと『彼』ではなく、『彼女』と言った。
古代たちが一体誰なのだろうかと思っていると、
「ヤマトの皆さん、お久しぶりです」
ヤマトの第一艦橋のパネルの半分にジュラの姿が映し出された。
「あ、貴女はっ!?」
「ジュラさん!?」
パネルに映し出されたジュラの姿に驚く古代たち。
まさかデスラーの娘がわざわざ太陽系に赴いてきたのだから驚くのも無理はない。
「あ、あの・ジュラさんはどうして　まほろば　と一緒に太陽系へ？」
意外な人物の登場に驚愕しつつも、古代は改めてジュラに太陽系への来訪目的を尋ねる。

「今回の私たちの来訪目的は二つあります」
「二つ？」
「はい。一つは父、デスラーが新たな国家を樹立した事、もう一つは地球との同盟締結です」
「地球との・・・・」
「同盟・・・・」
「はい。勿論、地球とガミラスの間には深い溝があることは知っていますし、そう簡単な道ではないことは十分承知しております」
「確かにガミラスとの過去の戦争の経緯からいくら新国家となり、国名を変えたとは言え、連邦市民の中には反ガミラス感情を持つ市民もいるでしょうから・・・・」
　第二次イスカンダルへの航海で、ヤマト　まほろば　の乗員たちはイスカンダルを救うためにガミラスと共闘し、デスラーたちが新たな星を見つけるための航海へ出る前に共同で補給・修理をした時、ガミラス軍人と防衛軍軍人との間にいがみ合う空気はなく、むしろ手に手を取るような空気があった。
　しかし、防衛軍軍人、連邦市民全員があの時のヤマト　まほろば　の乗員たちみたいにガミラスを簡単に受け入れるといは言い切れない。
　ジュラの言う通り、地球との同盟はそう簡単な道ではない事は明白であった。
　だが、ジュラもデスラーの血をちゃんと引いており、一度や二度、壁にぶち当たったからといってそう簡単に諦めるとは思えず、必ず地球との同盟を締結すると言う固い意志をパネル越しながらも古代は感じた。
　まほろば、ガルマン・ガミラスからの特使団一行の動きは防衛軍司令部へ逐次知らされており、一行が海王星宙域にてヤマトと鉢合わせした事も当然、藤堂の知る所になった。
「長官、まほろば　及びガルマン・ガミラスからの特使団一行は海王星宙域にてヤマトと邂逅したようです」
「ふむ・・・まほろばの・・・月村艦長に通信を入れてくれ」

「はっ」
藤堂はまほろば・・・と言うか、良馬に対して通信を入れた。

まほろば　艦橋
「艦長、防衛軍司令部の藤堂長官から艦長宛てに通信が入っています」
通信長のギンガが良馬に藤堂から通信が入った事を報告する。
「えっ？俺宛てに？まほろばの乗員全員ではなく？」
「はい」
「分かった。古代くん、すまないが藤堂長官から通信が入ったので、通信を一時切る」
「分かりました」
「通信長、通信をこっちに転送してくれ」
「了解」
良馬はヘッドホンを装着し、自分以外の艦橋メンバーに通信内容を聴こえない様にして、艦長席にある通信回路を開く。
そしてモニターに藤堂の姿が映し出される。
「藤堂長官。どうしました？」
良馬は藤堂に何故自分だけに通信を送って来たのかを訊ねる。
「月村艦長、今まほろばは海王星宙域に居る事が確認出来ているが近くにヤマトも居ると思う」
「はい。ワープアウトした際、近くにヤマトが居ました。ジュラさんたち特使団一行の存在はまだ地球に居る連邦市民にその存在を公にする訳にはいきませんから、民間船の航路情報を念入りに調べ遭遇しないような航路とワープを行ってきました。勿論防衛軍の艦艇ともなるべく遭遇しない様に・・・」
「うむ、その判断は妥当だな」
「ですが、まさか海王星宙域にてヤマトと遭遇するとは思いませんでした」
「その件についてなのだが、現在ヤマトはある特務の為に出航しているのだが、まほろばもその特務に加わってもらいたい」
「えっ？特務・ですか？」

藤堂から放たれた『特務』と言う単語に良馬は眉をひそめる。
(特務に参加という事はアルファ星を暫く留守にすると言う事だよな・・・うーん・・・)
「藤堂長官、自分は軍人なので、長官からの命令となれば従いますが、自分としてはアルファ星の事が気がかりなので、まほろば　が特務に参加すると言うのであるならば、まほろば　の代わりにアルファ星の防衛力をもう少し強化していただけないでしょうか?」
「先日のボラー連邦との一件かね?」
「はい。あの時、全ての脅威を排除できれば良かったのですが、あの時の戦力差から全ての敵艦を葬ることが出来ませんでした。今後、アルファ星にボラー連邦が再び攻撃を仕掛けないとは言い切れないので・・・」
「分かった。冥王星基地と第十一番惑星からアルファ星へもう少し戦力を割り振ろう」
「ありがとうございます。それで、ヤマトが受けている特務とは一体どんな特務なのでしょうか?」
　気がかりとなっているアルファ星の件について更なる援軍を確約したことで一先ず安心し、次にヤマトが受けている特務について訊ねる。
「現在ヤマトは表向きの任務は太陽系周辺のパトロールとなっているが、本当の任務は第二の地球を探査する事だ」
「第二の地球?」
「月村君はアルファ星に赴任していたから知らないのも無理はないが、今太陽では核融合の異常増進が起きている」
「核融合の異常増進・・・」
「そうだ。専門家の分析によればあと一年以内に地球は人類が住めない状況下になり、三年で太陽は超新星化し、太陽系の全ての惑星を道連れに爆発する」
「・・・」
　自分たちの知らない間に太陽系が破滅に突き進んでいる事態を聞き驚愕する良馬。

「既に地球にはその影響が出ていて世界的規模で電波障害が何度も起きている」
「なるほど、故にヤマトへ第二の地球探査の命令を・・・それでは他の国も第二の地球探査を開始しているのですね？」
「いや、第二の地球探査をしているのはヤマトだけだ」
「えっ？な、何故です!?地球の危機だと言うのに・・・」
「大統領府も太陽エネルギー省も今回の核融合の異常増進は単なる自然現象だと決めつけているのだ」
「そ、そんな・・・白色彗星の一件でほんの些細な出来事も調査をする大切さを学んだと思ったのですが・・・それに世界規模での電波障害が起こっているのに、あくまでも自然現象だと言い切っているのですか？」
「うむ、しかし今回は外宇宙からの侵略ではなく、太陽系内の自然相手故に信じられない部分もあるのだろう」
「・・・」
　ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国何度も地球の危機を経験してきた筈なのに今回の件は外宇宙からの侵略ではなく、太陽系内にある自然相手と言う事で脅威とも感じていない地球連邦政府の対応に呆れる良馬。
「今は大統領府も太陽エネルギー省も自然現象だと片付けてはいるが、いずれは単なる自然現象ではないと気づくだろうが、その時に第二の地球探査をしても間に合わない可能性がある」
「そうでしょうね・・・」
　今は世界規模の電波障害だが、時間が進むにつれて電波障害だけではなく、もっと大きな障害が地球に起きる事が予測され、大統領府も太陽エネルギー省も今回の太陽で起きている核融合の異常増進が自然現象ではないと確信する時が来るだろう。
　ただ大統領府と太陽エネルギー省がソレに気づいた時に対処し始めても第二の地球探査の時間があまりにも足りなく人類を移住するための第二の地球となる星を見つける前に人類を始めとする地球にいる生物が滅んでしまう可能性が高い。

「だからこそ、私はヤマトを第二の地球探査の特務を命じたのだ。そして、まほろば　にはヤマトの護衛を頼みたい」
　ヤマト単艦でも問題はないだろうが、世の中には『絶対』などと言うモノは存在しない。
　それにこの広大な宇宙には地球人類以外の星間国家が存在しているのはこれまでの歴史が証明しているし、もしかしたらその中にはまだ地球人類が遭遇しておらず、現状の地球の科学技術よりも優れた星間国家が存在している可能性は十分にある。
　故に藤堂は少しでも成功率を高める為にヤマトの護衛として、まほろば　にも今回の移住探査の特務を命じたのだ。
「事情は分かりました。だた、本艦はアルファ星の守備の他に現在、ガルマン・ガミラスからの特使団一行の先導を行っています。そちらの方も代行を手配していただけますか？」
「分かった。海王星のトリトン基地所属の艦に代行を頼もう」
「ありがとうございます。では、乗員たちと特使団たち説明を行い、ヤマトからも航海計画等の情報を得たいと思います」
「そうしてくれ・ヤマトもトリトン基地にて補給の予定もある。そこでヤマトから情報を得てくれ」
「承知しました。しかし、地球がその様な危機的状況となるとガルマン・ガミラスとの同盟についての話は少々難しい様そうになりそうですね」
「うむ。ただでさえ、連邦市民には未だに反ガミラスの感情があるからな・・・しかし、広大な宇宙を長きにわたって侵攻をしたガミラスならば、もしかしたら地球に似た環境の星の所在を知っているかもしれない」
「皮肉な話ですね」
「ああ・・・だが、地球人類が生き残る為にはこの際面子など気にしてはいられないのだよ」
「そうですね・・・」
「では、頼むぞ月村艦長」
「はっ!!」

藤堂からの特務を受け、良馬はヘッドホンを外し、
「通信長、特使の艦とヤマトにもう一度通信回路を開いてくれ」
「了解」
ギンガにガミラシアとヤマトとの間に通信回路を開かせる。
「ジュラさん」
「なんでしょう？」
「大変申し訳ございませんが、只今司令部より本艦へ別の任務が入ってしまいました」
「そうですか・・・・」
「・・大変心苦しいのですが、此処から先は別の艦がジュラさんたちを月まで先導するとのことです」
「いえ、月村さんも軍人です・・・・上からの命令があればそれに従わなければならないのは理解しています」
「ご理解の程ありがとうございます」
ジュラに特務が入った事と　まほろば　の代わりの艦が月まで先導する旨を伝えた後に、
「古代くん、先ほど藤堂長官から話を聞いたのだが・・・・」
「あっ・・・・」
藤堂からの話と言う事で、藤堂が良馬に何を話したのか直ぐに察しがついた。
「ヤマトはこれからトリトン基地で補給を受けると聞いた・・・・そこで、詳しく話をしたい」
「分かりました」
やがて、海王星トリトン基地からはジュラたち特使団一行の先導役のパトロール艦が到着し、特使団一行を月まで案内して行く。
「航海長、針路変更。トリトン基地に向かう」
「えっ？トリトン基地に・・ですか？」
「ああ」
「りょ、了解。針路変更、トリトン基地に向かいます」
そしてヤマト、まほろば　はトリトン基地へと降下していく。
「艦長、特使団の方々を案内しなくていいのですか？」

「それについてはトリトン基地に到着後に伝える」
新見が特使団一行の先導を他の艦に任せてトリトン基地へヤマトと共に降下する事に疑問を抱き良馬に訊ねる。
特務の内容から今この場では説明しきれないと判断した良馬はトリトン基地に着陸した後に　まほろば　の乗員たちに説明し、その後にヤマトから航海計画を訊ねる事にした。
トリトン基地にある浮遊ドックにてヤマト、まほろば　は着陸する。
「通信長、艦内放送を入れてくれ」
「はい・・どうぞ」
「んっ・・・・艦長の月村だ。先ほど、藤堂長官より通信が入り、本艦はこれよりヤマトと共にある特務に従事することになった」
「特務？」
「一体どんな任務なんでしょう？」
良馬が放った『特務』と言う単語に艦橋メンバーは勿論の事、艦内のあちこちでも乗員たちが戸惑う様子が窺えた。
「・・・・これはまだ公になってはいないが、現在太陽にて核融合の異常増進が観測された。専門家の観測により、これは単なる自然現象ではなく重大な災害の予兆である仮説がたてられた」
「重大な・・・・」
「災害・・・・」
「一体どんな・・・・」
「専門家の判断では、あと一年以内に地球は太陽の核融合異常増進によって生物が住めない環境となり、三年で太陽は超新星化し、地球を含む太陽系の惑星を道連れに爆発、太陽系は消滅するとの事だ」
『・・・・』
あと一年以内に地球は生物が住めない死の惑星になり、三年で太陽系が消滅・・・・
あまりにも突拍子過ぎて俄かに信じられない話だ。
「突然このような話をされて信じられないかもしれないし、この仮説が本当に事実なのかと言う疑問もあり、確実な確証もない。しかし、

今地球では世界規模での電波障害が起きており、一概にこの仮説が間違っているとも言えない」
　自分たちがアルファ星に居る間に地球では大変な宇宙災害が起きていた事に増々困惑する　まほろば　の乗員たち。
　良馬自身も乗員たちに説明をしているが、地球に居る忍たちの事を思うと不安だろうが、今は　まほろば　の艦長として藤堂からの特務の説明をしている。
「この事態を重く見た藤堂長官はヤマトに第二の地球探査の特務を命じ、先ほど本艦にもヤマトの護衛と共に第二の地球探査の特務を命じられた。これより、ヤマトから情報を得た後、本艦もヤマトと共に第二の地球探査を行う。なお、アルファ星には更なる援軍の派遣が決定したので、アルファ星の守備については心配はない・・・」
　まほろば　が留守中のアルファ星の守備に関して更なる援軍がアルファ星に行く予定なので、アルファ星の守備に関しては心配はないと言うが、地球に残している家族や大切な人が居る中で、あと一年以内に地球は生物が住めない星になる可能性がある中、第二の地球探査の特務を行っている精神的余裕があるのか疑問なところだ。
　ヤマトの乗員たちと違い、まほろば　の乗員たちは今この場で突然言われたのだから戸惑うのは当たり前だ。
　それに第二の地球となる星が絶対に見つかる確証はない。
　もし見つからなかったら、地球人類は滅んでしまう。
　しかも、ガミラス戦役時の放射の除去装置と異なり、確実に太陽の核融合異常増進を止める術もない。
　地球人類を救うためには一年以内に第二の地球となる星を見つけなければならない。
　この特務の責任は重大である。
　それと同時に精神的負担もある。
「突然このような事態になり、困惑するのは当然であると思う。もし、今回の航海について、不安がある者は退艦を許可する」
　良馬は地球で古代と同じ様に今回の特務に対して不安がある者、航海に耐えられそうにない者に対して退艦を許可する訓示をする。

　此処は海王星なので、地球へ帰還する術は同じ防衛力の宇宙艦艇、民間の船があるので、地球へ戻ることは出来る。
「退艦を望む者は各部署のチーフに申告せよ」
　退艦についての方法と伝えると、
「では、これからヤマトに行き情報を共有してくる」
　ヤマトへと赴き、航海計画を訊ねることにした。
　ヤマトへと向かうとタラップの出入り口にて古代が良馬を出迎えてくれた。
「ん？その恰好・・・もしかして古代君、正式にヤマトの艦長に・・・？」
　良馬を出迎えた古代の服装は士官ジャケットに艦長帽を被っていた。
「は、はい。今回の航海前に・・・」
「そうだったんだ・・・遅ればせながら艦長就任おめでとう」
「ありがとうございます。ですが、今回の任務の内容が内容だけに責任を重く感じています」
「まほろば　も今回の航海で少しでもヤマトの・古代君の負担軽減になるように協力をするよ」
「重ね重ねありがとうございます。月村艦長」
「それで、早速だが、ヤマトが立てた航海計画を聞きたい」
「はい。こちらへどうぞ」
　古代は良馬をヤマトの第二艦橋へと案内した。
「今回、ヤマトが探査をする宙域はこのコースであり、針路はこのようなコースを辿ります。ただ、５０００光年先は地球でも観測が出来ていない状況下なので、そこからは宇宙海図を作成しながらの航海となります」
　第二艦橋では、ヤマトの副長兼航海長の島からヤマトの航海計画を聞いた。
「発見した惑星の探査についてはどのような方法で探査を？ヤマトのセンサーや観測衛星を飛ばして行うのかい？」
「その方法もありますが、衛星の方も数は無限ではないので、今回の探査航海の為に新たに実装したコスモハウンドを使用します」

惑星探査についての説明は古代がコスモハウンドのスペックと共に良馬へ説明する。
一通り今回のヤマトの航海計画聞いた良馬は、
「島航海長」
「はい」
「時間が有限である事は重々承知しているが、計画の中で一部変更を入れて貰っても構わないだろうか？」
「変更・ですか？」
計画の変更に島は怪訝な顔をする。
「ああ・藤堂長官から聞いているかもしれないが、先日ケンタウロス座の第四惑星であるアルファ星が外宇宙から飛来した艦隊の攻撃を受けた。その艦隊の一隻が地球にも出現し、北アルプス上空で撃破された事は俺の方でも藤堂長官から聞いた」
「はい。我々もアルファ星の件については藤堂長官より聞いております」
「ジュラさんからの情報ではアルファ星、そして地球に出現した艦隊はボラー連邦と呼ばれる星間国家に所属している艦隊らしい」
「ボラー連邦？」
「ああ・・・デスラーが樹立した新国家であるガルマン・ガミラスはそのボラー連邦と対峙しているらしい」
「デスラーが・・・」
「新国家を樹立した後、デスラーはやはり宇宙侵略を？」
「いや、ボラー連邦との関係についてはどうも事情があるみたいだ」
「事情？」
「どんな事情なんですか？」
「デスラーが新国家を樹立した星・・・当初の名前はガルマン星と言う星でそこにはガルマン民族と言う現地人が居た・・・そのガルマン民族とガミラス人は同一の民族で遥か昔、一部のガルマン民族が大マゼラン雲へ移民をし、サンザー星系で二連星を見つけた・・・」
「まさかっ!?」
「それがイスカンダルとガミラス星・・・？」

「そうだ。それで、話はガルマン星に戻るが、デスラーたちがガルマン星を見つけた時、ガルマン星はボラー連邦に支配されて、ガルマン民族は奴隷化されていたんだ」
「異なる星とは言え、あのガミラスと同じ民族を奴隷化させるなんて・・・・」
　波動エンジンがイスカンダルから齎されるまで地球はガミラスに苦しめられた。
　イスカンダルから波動エンジンを齎されてもヤマトのイスカンダルへの旅路は苦難の連続であった。
　あの時の航海がヤマト単艦だったと言う点もあるが、それを差し引いてもガミラスは強国であった。
　そんなガミラスと同じ民族が住む星を支配下に置いたと言うのだからそれだけでもボラー連邦と言う星間国家が強力な事が窺える。
「デスラーたちガミラス人にとっては自分たちの先祖の星が何処の星かも分からない勢力に支配されて同じ民族たちが奴隷化されていたのだからボラー連邦に対して怒りを覚えるのは当然だろうね・・・そしてデスラーはガルマン星からボラー連邦の勢力を一掃し、更にはガルマン星周辺の星々からもボラー連邦の勢力も一掃した。これによって銀河系中心部からボラー連邦の勢力は一掃された」
「では、現在銀河系中心部は・・・」
「今はガルマン・ガミラスの勢力下だ」
「・・・・」
　良馬の話を聞いて古代も島も絶句する。
「そんな中でジュラさんが新国家樹立と地球との同盟締結のために来訪したわけだ。それで話を戻すが、そんなボラー連邦の艦隊が先日アルファ星へ襲来し、地表に対して無差別のミサイル攻撃をしてきた。まほろば　とホワイト艦隊でこれを迎撃したが敵艦隊を完全に殲滅する事は出来なかった・・・一応、藤堂長官からアルファ星へ援軍の確約を取り付けたが、被災をした事には変わりない・・・故に救援物資を此処、海王星で積み込みアルファ星へ届けたいのだが・・・」
「そんなことが・・・」

「島、アルファ星へ寄れるか？」
「寄れなくはないが、俺たちの任務は一刻も早く第二の地球を探す事だぞ」
「それは分かっている。だが、未だにボラー連邦の脅威があるし、アルファ星には被災者が大勢いるんだ。放っておくわけには居なかだろう」
「古代、今回のヤマトの航海は戦闘をする為に出航したわけじゃないんだ。月村艦長の話を聞く限り、アルファ星周辺ではまだボラー連邦の残党が居る危険な宙域みたいじゃないか。つまらん戦闘に巻き込まれて時間を無駄にする訳にはいかないだろう」
「理屈は分かる・・・・しかし・・・・」
　島の言う通り、地球に残された時間が決して多くはないのは古代も良馬も理解している。
　しかし、古代、良馬の心情としてはやはり援軍が来るとしてもボラー連邦の脅威がある以上やはり心残りがある。
「島航海長の言う事は最もだ。ただこの先の長い航海を考えると、アルファ星にある鉱物資源はこの先の航海に役立つと思う」
「と言いますと？」
「アルファ星で採掘されているオスミウムは金の比重二十三％と良質の白金属だから、修理に使用する金属としてあっても困らないと思うのだが・・・・」
「うーん・・・・まぁ、それなら・・・・」
　良馬の説明を聞き島は渋々と言った様子でアルファ星へ寄る事を了承した。
「では、補給が終わり太陽系を出た後、ケンタウロス座第四惑星のアルファ星へ寄港する針路をとります」
「古代艦長、島航海長、ありがとうございます」
　アルファ星へ寄港すると言う事で話がつき、良馬は古代と島の二人に礼を言った。
（それにしても島の態度・・・・少し妙だったな・・・・）
　ただこの時、古代はアルファ星へ寄港する事を渋った島の態度に妙

な違和感を覚えていた。
補給及び救援物資の積み込みに際、退艦者を受け付けていた　まほろば　であったが、まほろば　からの退艦者は零であった。
やがて、ヤマトの補給、まほろばの補給及びアルファ星への救援物資の積み込みが終わると二隻の宇宙戦艦はケンタウロス座第四惑星のアルファ星へと針路をとった。

百五十七話　恒例行事

太陽の核融合異常増進が起き、破滅へと進んでいる太陽系・・・
ガミラス戦役と異なり、天体観測の専門家である倉田博士と地球連邦政大学の元教授であったサイモン氏が言うには、地球人類が生き延びるには地球を捨てて第二の地球となる星を見つけそこへ移住するしか方法がないと言う結論が出された。
イスカンダルから波動エンジンが齎される前、ヤマトも本来はこうした移住船として建造されたが、イスカンダルから波動エンジンが齎され、更にそのイスカンダルには地球に充満する放射能を除去出来る放射能除去装置、コスモクリーナーがあるとの事で、移住計画は見直された経緯があるが、今回はコスモクリーナーではどうしようもなく、また当時の地球と異なり宇宙船の建造技術が上がった事から、第二の地球を見つけ、地球を脱出する計画が密かに立てられた。
密かにと言うのはこの太陽の核融合異常増進・太陽系の破滅の事実について地球連邦政府及び太陽エネルギー省は単なる自然現象であり、しばらくしたら収まると楽観視していたからだ。
もし、地球連邦政府や太陽エネルギー省の見立て通り、核融合異常増進が自然に収まれば取り越し苦労になるが、それはそれで太陽系は破滅しないと言う事なので、楽観できるが、倉田博士、サイモン氏の見立てが正しければそれは太陽系の破滅を意味する事であり、第二の地球を探査する時間が少なくなり、地球人類は滅んでしまう。
ヤマトは藤堂の密命を受け、第二の地球探査の為、地球を出航した。
ヤマトに乗艦した新人たちの訓練を行いながら太陽系を航行している中、海王星宙域にてガルマン・ガミラスの特使団の先導をしていた　まほろば　と遭遇し、まほろば　も藤堂の密命を受け、第二の地球探査を行っているヤマトの護衛として、第二の地球探査の任務に就くことになった。
順調に太陽系を進んで行く中、良馬はふと海王星まで送ったジュラたちガルマン・ガミラスの特使団の事を思う。

（そろそろジュラさんたち特使団一行は月に着くころか・・・）
（無事に到着できただろうか？）
（地球との同盟も簡単な道のりではないが、それ以前に太陽系の危機に陥っているからな・・・）
　海王星にて藤堂から聞かされた太陽系消滅の危機・・・
　これが事実であるならば、同盟話なんて締結以前の話だ。
（しかし、ジュラさんの話によれば、ガルマン・ガミラスは銀河系中心部を始めとしてかなりの勢力を保有しているらしいから、ガルマン・ガミラスの勢力下から地球に似た星を提供してもらえればあるいは・・・）
（ただその場合、同盟よりも併合の可能性もあるからな・・・）
　銀河系中心部を始めとしてガルマン・ガミラスはボラー連邦と共に銀河系でかなりの勢力を有している事がジュラの話から伝えられていた。
　そのガルマン・ガミラスの勢力下の中でもしかしたら地球の環境に似た星があるかもしれない。
　地球との同盟において、太陽系の現状を伝えれば、ガルマン・ガミラスからその星を提供する代わりに同盟を締結するかもしれないが、その反面、地球人類が住める星を提供したのだから、今後はガルマン・ガミラスに協力する事を強要されるかもしれないと言う危険もあるので、やはり今回の探査任務で第二の地球となりえる星を見つけることがガルマン・ガミラスとの間に波風を立てない方法などだろう。
　ただその星が見つかる保証もないし、仮に見つかったとしてもその星がガルマン・ガミラス、ボラー連邦の勢力下に無い事、
　その星に原住民となる知的生命体が居ない事が前提となるので、今回の任務は前途多難な任務であった。

　ヤマト　まほろば　が一先ず太陽系内からの離脱の為、太陽系の外縁部を航行している中、ジュラたちガルマン・ガミラスの特使団一行はトリトン基地所属の艦の先導の下、まもなく月に到着しようとしていた。

ガルマン・ガミラス特使団　旗艦　ガミラシア　艦橋
「本星からのデータで見ましたが、こうして本物を見ると青く美しい星ですね」
バレルがジュラに初めて本物の地球を見て、第一印象を口にする。
「お父様の故郷であるガミラス星・その隣にあったイスカンダルも地球と同じく青い海が広がる綺麗な星でした・・・」
こうして地球を見ると青い星と言う共通点からイスカンダルを思い出すジュラ。
「さて、これからが大変ですな」
「そうですね。ですが、地球・ガルマン・ガミラス・・・お互いに新たな一歩を踏み出す機会となり得る筈ですから、頑張りましょう」
「はい」
これから行われる同盟締結についての地球側との話し合いに意気込むジュラであったが、ふと太陽を見て、
（あれ？地球の太陽ってあんな大きさでしたっけ？）
（心なしか少し大きい様な気が・・・）
事前に見ていた地球のデータからジュラは太陽に違和感を覚えていた・・・

ガルマン・ガミラスからの特使団一行が無事に会談場所である月に到着している頃、ヤマト、まほろばも順調な航海を行っており、既に第十一番惑星も既に遥か後方だった。
第十一番惑星を過ぎた事で地球の勢力圏外となるが、暗黒星団帝国との戦いが終わった地球はかねてより宇宙開拓を進め、太陽系外でも観測ステーションや無人監視衛星などが点在していた。
そして、ヤマト、まほろば　ではもはや恒例となっている太陽系赤道祭が行われていた。
地球人類の存亡がかかっているとは言え、今まで厳しい訓練を行ってきた新人たちにも休息が必要であるとの事だ。
第二次イスカンダル航海時の様にヤマト、まほろば　の二隻は横付

けし、接舷ハッチが互いの船体に接続され、ヤマト、まほろばの行き来が出来るようになっている。
今回の太陽系赤道祭はコスプレ衣装に身を包む者が多く、雪もドーリス式キトーンを身に纏い、頭にはオリーブの造葉で出来た冠を被り、古代もトゥニカの上にトガを纏ったローマ帝国時代の服装をしていた。
「こ、古代君、その服装・・どうしたの？」
雪は兎も角、あの古代がコスプレなんてしているのだから良馬としては意外性を覚えると同時に驚愕した。
そして、何故コスプレなんてしているのかを古代に訊ねた。
「い、いや・・俺もこの格好をするのは・・・・でも、この後で祈願の儀式をするみたいで・・・・」
「祈願の儀式？」
「その・・・・今回の任務が成功する為の祈願儀式みたいで・・・・」
「な、なるほど」
今回の任務・・第二の地球探査のメインはヤマトであり、その任務の内容が運の要素も絡むが、それでも困難な事には変わらず、ゲン担ぎを含めてこの赤道祭にて祈願の儀式も行うのだと言う。
主に日本人クルーで構成されているヤマトで行われる祈願の儀式なので、神社等で行う祈祷かと思い、身に着ける衣装も巫女服や宮司が纏う様な衣装かと思ったのだが、どうやら違うらしい。
「ゲン担ぎとは言え、今回の任務の成功を祈る為の儀式だからね。頑張って」
「は、はい」
古代としては良馬に代役を頼みたかったのだろうが、今回の任務の主役がヤマトであり、ヤマトの艦長と言う立場から良馬に代役を頼みづらかったのだろう。
「古代君も大変だな」
グラスを片手にこの後に控えている儀式の主役を務める古代に同情している良馬。
そこに、

「あっ、良馬さん」
「ん？えっ？ギンガ？」
　良馬は声をかけられたので振り向くとそこにはギンガが居たのだが、ギンガの姿を見て良馬は再び驚愕した。
「ぎ、ギンガ・その恰好・・・・」
「に、似合いますか？」
　ギンガはクルッとターンをして、自らが纏っている衣装を良馬に見せる。
　彼女は第二次イスカンダル航海時にて原田と共にメイド服を着て参加していたが、今回の赤道祭ではチャームポイントであるリボンを解いてイスカンダル風のドレスを着ていた。

「う、うん。よく似合っているけど・・・・そのドレス、もしかしてイスカンダルの・・・・？」
「はい。スターシア陛下のウェディングドレスも素敵でしたけど、普段からお召しになっていたドレスも素敵だったので、そのドレスをモチーフにして作ってみました」
　やはりギンガも王族であるスターシアに対して憧れの様な感覚があり、今回の赤道祭の様に色んな衣装を堂々と着る事が出来るイベントだったので、ギンガはイスカンダル風のドレスをチョイスしたのだ。
　祭りの参加者たちが会場に集まると、古代が言っていた祈願の儀式とやらが始まった。
「大地に光と実りを与えたもう太陽の子、アポロよ。我らにあた新たなる恵みと加護を与えたまえ」
　雪が古代の前で祈りの言葉を告げる。
　すると乗員たちからは拍手が起こった。
（なるほど、古代君のコスプレはアポロだったのか・・・・とすると、森さんのコスプレは月の女神であるセレーネかな？）
　儀式の様子から二人のコスプレの内容を察する良馬だった。

祈願の儀式が終わり、乗員たちは料理に舌鼓を打つ者、この後で勤務がない者は明日の勤務に影響がないレベルで酒を飲む者、談笑に華を咲かせる者と各々好きに太陽系赤道祭を楽しんでいる。
ヤマトの医務長である佐渡はやはりと言うか当然の如くアルコール提供のコーナーにて酒をかっ喰らっていた。
なお、この時の佐渡は古代と同じくトゥニカの上にトガを纏い、頭には雪と同じくオリーブの葉の造葉で出来た冠を被っていた。
「佐渡先生は一体何の仮装をしているのですか？」
酒を飲んでいる佐渡に良馬は彼が一体何の仮装をしているのかを訊ねる。
「ワシか？ワシはバッカスの衣装じゃよ」
佐渡はローマ神話におけるワインの神であるバッカスの仮装であると言う。
「バッカス・・・佐渡先生らしい仮装ですね」
「そうじゃろう、そうじゃろう。ハハハハハ・・・」
満面の笑みを浮かべ楽しそうに酒を飲む佐渡であった。
良馬が再び祭りの会場を歩いていると、
「頑張って!!」
「次の皿を持ってこい!!」
「お水も用意してあげて!!」
と、一部の区画にて何やら乗員たちが盛り上がっている。
「ん？なんだ？」
良馬も気になってその区画へ行ってみると、そこには一つのテーブルに座って食事をしている男女の姿があった。
女性の方はギンガであり、男性の方はヤマトの航海長補佐の太田だ。
二人は当初、普通に食事をしていたのだが、いつの間にか大食い対決となっていた。
太田はヤマトでも大食漢として有名なのだがまさかその太田を相手に女性であるギンガがまったく引けを取らずについている事にヤマトの乗員たち、まほろばの乗員たちも信じられずにヒートアップし

ているのだ。
「太田さん!!頑張って!!」
「中嶋さんも頑張れ!!」
太田はヤマトの隊員服であるが、ギンガの方はイスカンダル風のドレスを着たままドレスを汚すことなく器用に食べている。
女性でありなおかつドレスを着ていると言う点から一見ギンガの方が不利かと思えた。
しかし、蓋を開けてみれば両者はペースを崩すことなく一歩も譲らないペースで次々と皿の上の料理を平らげていく。
だが、戦闘機人であり、ギンガの元となったクイントが太田に負けず劣らずの大食乙女であった事から、皿の枚数が増えていくにつれ、太田の顔が青くなり、料理を口へ運ぶペースも段々と遅くなって行き、そして・・・・
「うっ・・・ぎ、ギブアップ」
「ごちそうさまでした」
太田はギブアップして、大食い対決はギンガが勝者となった。
「ま、まさかあの太田に勝つなんて・・・・」
「しかも相手は女性・・・・」
「中嶋さんすげぇ・・・・」
「それにあれだけ食べたのにお腹が膨れていない様だぞ・・・・」
倒れている太田のお腹はパンパンに膨れているのに対してギンガの方はお腹が膨れている様子が全くない。
しかもまだ余裕があるのか、
「あっ、まだデザートを食べていなかった」
そう言って口元をナプキンで拭うと席を立ちデザートを取りに行った。
「あ、あれだけ食べたのに・・・・」
「ま、まだ食べるのか・・・・?」
「い、一体どんな胃袋をしているんだ?あの人・・・・」
まほろばの乗員たちは元々ギンガがよく食べる事を知っていたので、さほど驚いてはいないが、事情を知らないヤマトの乗員たちは、勝

者となったギンガに対して驚いているというか引いていた。
(そう言えばギンガと加奈江さん・二人でバイキングレストランの料理を食べ尽くしたことがあったからな・・・太田君もよく戦ったけど、相手が悪かったな)
ギンガを相手に大食いで奮闘して、倒れている太田に心の中で合掌する良馬だった。

ギンガと太田の大食い対決の他に盛り上がっていた箇所が赤道祭の会場にあった。
「ヤマト航海科主催、艦内相撲大会!!決勝戦をこれより開始します!!」
『うわぁぁぁぁぁぁぁぁー!!』
「ひぃ～がぁ～しぃ～永倉やぁ～まぁ～・・・にぃ～いぃ～しぃ～雷電のぉうぅ～みぃ～」
相撲大会の決勝戦では、まほろば　の航海長の永倉とヤマト航海科の新人、雷電五郎の対決となった。
「先輩と言えど、全力で挑ませてもらいますよ」
「おう、受けて立つぜ」
雷電も永倉も闘志が宿った目で互いを見つめ、開始の合図を待つ。
「両者、見合って、見合って・・・はっけよい・・・のこった!!」
「うぉぉぉぉぉ!!」
「おりゃぁぁぁ!!」
行司役の隊員が合図を出すと両者は思いっきりぶつかり合う。
「のこった!!のこった!!」
「永倉さん!!いけぇー!!」
「頑張れ!!雷電!!」
「踏ん張れ!!」
「ど根性を見せろ!!」
ヤマト、まほろば、互いの乗員たちがそれぞれ永倉と雷電に声援を送る。
「うぐぐぐ・・・・」
「ぐぬぬぬ・・・・」

永倉、雷電の両者は互いに譲らず土俵の中心で踏ん張っていたが、
「どりゃぁぁぁ!!」
「ぬおっ!?」
永倉の一瞬の隙を突いて雷電が永倉を上手投げで転がした。
「勝者、雷電のぉうぅ～みぃ～」
『わぁぁぁー!!』
勝者の名が呼ばれ、周囲は歓声をあげる。
「いやぁ～参ったぜ～・・・・やっぱ若さには勝てねぇなぁ～・・・・」
「そんなことないですよ。今回は俺が勝ちましたが、勝負は時の運・・先輩も中々の強さでした」
「ふっ、次は負けねぇぞ」
「自分もです」
雷電が永倉を励まし互いに健闘を称えると、再び拍手と喝采が起きた。

赤道祭の会場で様々な大会や出来事が起きている中、
「ふぅ～・・・・」
祈願の儀式を終えた古代は壁際にて一息つく。
儀式の後、太田が記念写真を撮ろうと言い、第一艦橋のメンバー合同で記念撮影をしたり、雪とのツーショット写真を撮られたりと何かに絡まれていた。
「お疲れ様」
そこへ、良馬がウーロン茶の入ったグラスを古代に手渡す。
「あっ、ありがとうございます」
古代はグラスを受け取るとグイッとグラスの中のウーロン茶を一気に飲み干す。
変な格好で儀式に参加してヤマト、まほろばの大勢の乗員たちに見られ、記念写真の撮影、絡まれてと色々あって喉がカラカラだった様だ。
「この祭りをやると太陽系ともお別れか・・・・と思うよ・・・・前回は山南さんたち春藍の皆とやってね・・・・」

赤道祭の会場で祭りを楽しんでいるヤマト、まほろばの乗員たちを見渡しながら以前行った赤道祭について語る良馬。
「自分たちはそんな余裕がありませんでしたけど、こうして　まほろば　の皆さんと赤道祭をやるとあの時の航海の事を思い出します」
暗黒星団帝国が地球へ襲来する少し前に春藍のテスト航海に同行した、まほろば　は太陽系を出た際、春藍の乗員たちと太陽系赤道祭を行った。
しかし、ヤマトの時は地球が暗黒星団帝国襲来を受け、イカルス天文台から発進したヤマトはミヨーズ率いる暗黒星団帝国地球侵攻軍・第二特務艦隊の追撃を受け、更に地球が暗黒星団帝国に占拠されてしまったので、赤道祭を行う余裕がなかった。
なので、こうしてまほろばの乗員たちと赤道祭をやると第二次イスカンダル航海の時を思い出す古代。
「ただ、この先近い将来に太陽系とは永遠にお別れになると思うと無慈悲な話だ」
「ええ・・・ですが、今回の件はどうしようもありません。相手は侵略者ではなく、太陽と言う自然相手なんですから・・・自分たちに出来る事は一日も早く第二の地球を見つけることです」
「ああ・・・デスラーが第二の故郷を見つけられたのだから、自分たちも見つけられる筈、この広い宇宙なら地球と似た星だってある筈・・・そんな楽観視をする反面、現在銀河系で起きているガルマン・ガミラスとボラー連邦との星間戦争の状況から色々と厳しい状況だ」
「と、言いますと？」
「ガルマン・ガミラスについては一応、デスラー総統との間に知己があるからそこまでは揉めないかもしれないが、もしボラー連邦の勢力下の宙域に第二の地球となる星が見つかった場合、地球は必然的にボラー連邦との星間戦争に突入する訳だ」
「そうなりますね・・・」
「それにいくら知己があるとは言え、ガルマン・ガミラス勢力下でも地球に似た星が見つかった場合、当然ガルマン・ガミラスと交渉しなければならない・・・今はジュラさんたちが地球との同盟締結のために

交渉しているが、ガルマン・ガミラスの勢力下で地球に似た星が見つかった場合、同盟ではなく、ガルマン・ガミラスの傘下に入らなければならなくなるかもしれない」
「・・・・」
　良馬は今回の任務で抱いた疑問を古代に吐露する。
「ガルマン・ガミラスとしては戦って犠牲を出した上で得た勢力下に無断で入り込み、『この星は本日より地球連邦政府の所有とする』なんて一方的に言われたらガルマン・ガミラス側もいい気分ではないだろう？」
「た、確かに・・・・」
「今回の任務は星の探査は勿論の事、こうした外交問題も絡んでくる部分もある点、やはり厳しい状況であり、困難な任務だ・・・・」
「・・・・」
　古代は良馬が抱く不安を聞き、改めて今回の任務の困難度を感じた。
「あっ、ごめん・・なんか不安にさせてしまって・・・・」
「い、いえ・・・・月村艦長の言う事も最もです」
　ヤマトの艦長として初の任務がこんなにも困難な任務に対して余計なプレッシャーを与えてしまったと良馬は古代に謝る。
　しかし、良馬からの指摘を受け、現在の銀河系の状況から古代はただ単に地球に似た星を探すだけではないと自覚させられた。
「それにしても太陽系の破滅か・・・・にわかには信じられない話だが、これが本当に取り越し苦労だったら良かったんだがな・・・・藤堂長官の話・・間違いないのかい？」
「自分も当初は信じられない話でしたが、専門家である倉田博士とサイモン教授の話を聞く限り間違いないと思います。真田さんも同じ意見でしたから・・・・」
「そうか・・・・」
　古代も良馬同様、太陽系の破滅話が取り越し苦労だったらどんなに楽だろうと思っていたが、あの真田も倉田博士とサイモン氏が立てた太陽系の破滅説は信憑性が高いと判断しているので、やはり太陽系の

破滅は事実のようだ。
（地球と同じ星か・・・）
　そんな二人の艦長の話を土門は偶々聞こえてしまい、古代と良馬の話を複雑な思いで聞いていると、ポンと肩を叩く者が居たので振り向くとそこには坂東の姿があった。
「土門、仲間に入らないのか？この機会を逃したら次はいつ、こんな祭りをやるのか分からないんだぞ」
「とてもそんな気分になれないよ」
　他の同期は日ごろの訓練のガス抜きを兼ねて赤道祭を楽しんでいるみたいだが、土門の気分は古代と良馬同様、未来に不安を覚える。
「地球の事を考えているのか？」
「まあな・・・地球のこと、太陽のこと、それにあのガルマン・ガミラスって星のこと、色々とな・・・」
「土門、俺たちは地球を救うためにこうしてヤマトに乗り、広大な宇宙へ乗り出したんだ・・・未知への挑戦に不安も感じるのは当然だが、それと同時に胸が躍り、血が騒ぐのは当然だろう？今日だけは地球の事は忘れて、皆と一緒に楽しもうじゃないか」
「あとでな・・・」
　そう言って土門は赤道祭の会場を後にした。
　赤道祭の会場を後にした土門はあてもなく艦内をブラブラと歩いていると、大切そうに何かを持った相原が通路を歩いていくのを見つけた。
　しかもこれから外に出るのか、船外装備を装着している。
「相原通信長」
「ん？ああ、土門君か」
「今は赤道祭の最中ですよ」
「うん。でも、今の内にやっておきたい事があるんだ」
「やっておきたい事？」
「ああ・・・土門君もやるかい？」
「えっ？何をです？」
「一種のおまじないだよ」

「おまじない？」
「ああ」
特にやる事も無かったし、祭りを楽しむ気分でもなかった土門は相原と同じく船外装備を用意して相原についていく事にした。

相原と土門と言う珍しい組み合わせとなった二人はヤマトの後部甲板へと出る。
「地球の宇宙船乗りの間にはこうやってコインを投げるとまた地球へ帰って来れるって言う伝説があるんだ」
そう言って相原は身体を後ろに反らして遥か彼方の太陽を仰ぎ見ながらコインを宇宙空間へと弾き飛ばした。
「何か、ローマにある『トレヴィの泉』みたいですね。あそこの泉に背を向けてコインを一枚投げ入れるとローマへの再訪が叶うって話を聞いた事があります」
「俺が聞いた話では、大切な人と永遠に一緒にいることができるって話だったな」
「相原通信長は地球に誰か大切な人でも待っているんですか？」
「そうだな・・・待っているかは分からないけど、会いたい人は居るかな」
流石に藤堂長官の孫娘である晶子とは言えず、やんわりと誤魔化す相原。
「良いですね。俺には地球で待っている人や会いたい人なんて・・・居ませんから」
両親は既に他界し、近しい親戚もガミラスとの戦いで亡くなっているので、土門は既に天涯孤独の身なので、相原と違って地球で自分の帰りを待っている人なんて居ないと答える。
「君の両親の事は艦長から聞いているよ。確か太陽観光船の事故で亡くなったって・・・」
「はい。親戚の人たちもガミラスの戦争で死んでいるので・・・」
「本当に居ないのかい？」
「ええ・・・」

「・・・確か土門君は宇宙戦士訓練学校を繰り上げ卒業をしてヤマトに乗ったんだよね？」
「はい」
「訓練校に親しい友達は居ないのかい？」
　今回のヤマトの新人たちは北野や徳川たちと異なり、まだ在学期間がある中で繰り上げ卒業をしたが、訓練校の学生全員が繰り上げ卒業をした訳ではない。
　地球にある宇宙戦士訓練学校には土門の同期がまだ在席しており、今も座学と訓練をしている。
「えっ？」
　相原の問いに土門の脳裏にはティアナとうららの姿が思い浮かんだ。
「あっ・・・」
「その様子だと居るみたいだね」
「は、はい。日々の訓練やヤマトの任務の重要性からすっかり忘れていました」
「おい、おい、それは酷いなぁ～」
　土門の態度を見て相原は苦笑する。
「相原通信長、俺もやってみます。太陽の近くでは両親が眠って、地球にはアイツらが待っているので・・・」
「ああ、やってみるといい」
　そう言って相原は土門にコインを渡す。
　相原からコインを受け取った土門は先ほど、相原がやったように身体を後ろに反らせ宇宙空間へコインを弾き飛ばした。
　男同士と言うのも何やら妙な光景ではあるが、相原と土門は各々の思いを抱きながら離れてゆく太陽系を見つめていた。
　まほろば、ヤマト、両艦にある交信室では、乗員たちが家族や恋人など地球に残してきた大切な人たちとの通信のやり取りが行われていた。
　やはり地球に残してきた家族を心配する者が当然多く居り、交信希望者が多数居る為、一人五分と言う短い時間ながらも互いに思い思い

の言葉を酌み交わす。
特に、まほろば　の乗員たちはアルファ星に赴任してから突然の第二の地球探査任務をヤマトと合同にやる事になったので、地球に居る家族との対面はかなりご無沙汰となっているし、これからもそうなりそうだった。
ただ、地球連邦政府からの公式発表が未だに無いため、ヤマト、まほろばの今回の任務：第二の地球探査、そして太陽系の消滅の件については戒厳令が敷かれているので、伝えるのは厳禁とされた。
良馬も地球に残してきた忍たちの事を心配して通信を入れた。
「あら？珍しいわね。良馬が宇宙に居る時、家へ連絡を入れてくるなんて」
良馬からの交信に忍は意外だった。
「それで、アルファ星の開拓はどう？順調？」
「ええ、食糧生産、水源確保も出来、ショッピングモールや飲食店も出来たので開拓に来た人々の生活も地球と変わらない生活になりつつあります」
アルファ星の開拓には良馬の実家である月村グループも出資しているので、総帥である忍がアルファ星の開拓の現状に興味を持つのは当然だった。
しかし、そのアルファ星は先日ボラー連邦の攻撃を受け、少なからず被害を受けていた。
更に太陽系が破滅へ進んでいる事から忍を心配させまいと良馬はアルファ星が攻撃を受けた事を黙っていた。
「それで忍さんの方はどう？」
「・・・これは私の勘なんだけど、今地球で何かが起こっている様な気がするのよ」
「えっ？どうしてそう言えるの？」
「実は先日、ノエルが突然機能を停止する事があって・・・それが何度も・・・ちゃんとメンテナンスはしている筈なのに・・・それにノエル以外にも鳥や犬猫、そしてネズミも何かせわしない行動をとっているし・・・」

（ノエルの不調や動物たちの異変は長官が言っていた電波障害の影響か・・・）
　忍の話を聞き、ノエルの不調、動物たちの挙動不審な行動は太陽の核融合異常増進における影響で起きた電波障害だろうと判断する良馬。
（やはり、地球の終末が近づいていると言う事か・・・）
（この状況下なのに何故、政府は対策を取らないんだ？）
　電波障害は機械や動物に影響を与えているみたいだが、人間にはまだ影響が出ていない。
　その為、地球連邦政府も太陽エネルギー省も太陽の核融合異常増進を未だに自然現象だと信じ込んでいる様だ。
「そうですか・・・」
「それで、良馬はいつ地球に戻る予定なの？」
「それが、まほろば　は、長期の任務を受けまして正確に地球への帰還日時が不明でして・・・」
「そう？ユリーシャも貴方に会いたがっているから、なるべく早くに戻って来てね」
「はい」
　忍との交信を終え、真実を口に出来ない申し訳なさと同時に自分を慕う家族たちの為にも新たなる移住先を見つめなければと自身を奮い立たせた。
　なお、良馬との通信の後、良馬から通信が来たことを知ったユリーシャは忍に『何故呼んでくれなかったのか？』と詰め寄った。

　赤道祭も無事に終わり、ヤマト、まほろば　はケンタウロス座アルファ星へと向かう。
　アルファ星に向かっている中でもヤマト、まほろば　はただ航海をするだけではなく、互いの艦を仮想敵艦に見立てての実戦形式の訓練等を行った。
　そんなある日、古代は自室となった艦長室で訓練経過についての報告書を纏めていると、

コン、コン、
艦長室のドアがノックされた。
「森雪です。入室してもよろしいですか？」
やって来たのは雪みたいだ。
「どうぞ」
古代が入室の許可を出すと雪は何かを乗せたお盆を持ち入って来た。
「ご苦労様、お腹が空いていると思ってお夜食を持って来たわ」
「ああ、ありがとう」
雪は古代の為に夜食を持って来た。
そしてティーポットからカップに紅茶を注ぎ、次いでカップの中にレモンを淹れる。
「・・・えっと・・この紅茶はもしかして雪が淹れたのかい？」
古代はカップに入っている紅茶を一目見た後、雪を見る。
「違うわ。土門君が淹れた紅茶よ」
「そ、そうか」
雪がカップに注いだ紅茶は、雪ではなく土門が淹れた紅茶であると知り、古代は何だか安心した様子でカップに口をつける。
平田から古代が飲むレモンティーを淹れる役を引き継がせてもらった土門は今回の夜食の紅茶もちゃんと淹れてくれたみたいだ。
雪は、料理の腕は問題ないのだが、コーヒーやお茶を淹れる事に関しては何故か物凄く下手なのだ。
将来、喫茶店である翠屋の再興を目指している紅葉曰く、雪の淹れたコーヒーは『泥水』と言う評価であり、第一次イスカンダルの航海からヤマトに乗艦している乗員たちとって雪の淹れるコーヒーや紅茶、お茶類は不味い事を知っており、彼女が淹れた飲み物を飲むことはある種の罰ゲームの様なモノだった。
「何か古代君、ホッとしてない？」
自分が淹れた紅茶ではなく土門が淹れた紅茶であると知り、安心して飲んでいる古代に対してジト目で見てくる雪。
「そ、そんな事は無いぞ。それに雪も知っているだろう？俺が夜にレ

モンティーをよく飲んでいる事を・・・疲れた身体にこうして温かいレモンティーを飲むと心が落ち着くんだ」
慌てて雪に弁解する古代。
「それに土門の奴が平田に直接頼み込んだんだ・・・俺が飲むレモンティーを淹れさせてくれって・・・アイツは着実に成長しているよ・・・立派な宇宙戦士に・・・」
あの時の食堂での一件を間近で見ていた古代は土門の成長に嬉しさを覚える。
レモンティーと雪が用意した夜食を食べ終えた後、不意に古代は雪にある違和感を話す。
「なぁ、雪・・・」
「ん？なに？古代君」
「島の事なんだが・・・」
「島君？」
「ああ・・・アイツ、ここ最近なんか変じゃないか？」
「変って？」
「うーん・・・俺も確証があって言える訳じゃないんだが、なんだか最近、アイツに避けられている様に感じるんだが・・・いや、必要な事はちゃんと受け答えしてくれるんだが、それ以外だと何か素っ気ない態度をとってくるように感じるんだ」
古代が覚えていた違和感・・・それは自分に対する島の態度であった。
「きっと気が立っているのよ。新しい星を一年以内に見つけないといけないし」
「そうなんだろうか？・・・もしかしたら、島は俺がヤマトの艦長になったのが面白くないのかもしれないんじゃないだろうか？実際にこの前の赤道祭じゃあ、島は俺に一言も声をかけなかった・・・」
古代と島は宇宙戦士訓練学校の同期でずっと一緒にヤマトに乗り戦ってきた。
役職も互いに航海長と戦術長と同列だった。
第一次イスカンダルの航海の途中から長い期間、艦長代理として一

時的に指揮を執った事はあるが、今回は正式な辞令を受けて、自分はヤマトの艦長となり、役職では島よりも上になった。
　同期で長い間、同じ艦に乗っていたからこそ、島にとっては今回の人事に関して不満があったのかもしれない。
「そんな筈はないわ。みんな、貴方が一番適任だと思っているわよ。だからこそ、藤堂長官は貴方をヤマトの艦長にしたんじゃない」
「そうだと良いんだが・・・」
　雪は古代を励ますが、それでも心の中のモヤモヤは晴れない古代。
「今度の任務があまりにも重大だから、みんな神経が知らず知らずの内に苛立ってしまうのよ。貴方だってそうじゃない？」
「そんなものかな・・・」
「そうよ。艦長として任務の重大性を深く受け止めているのかもしれないけど、航海長の島君だって、人類が住める星を最短で見つけるコースを策定しなければならないって言う大事な仕事を託されているのだから、島君だってきっと神経を尖らせているのよ」
「・・・」
「新しい星が見つかれば、きっと何もかも元通りになるわよ」
「そ、そうだな・・・」
　その後、話題を変えて古代と雪は談笑をし、しばらくして雪は帰って行った。

　古代が島に対する自分の態度や任務の重大さなど悩んでいる中、まほろばの艦橋では、
「もうすぐケンタウロス座、アルファ星か・・・」
「この辺の宇宙も何だか見慣れた感じになりましたね」
　良馬はケンタウロス座宙域を見ながら呟くと舵を握っていた永倉も太陽系同様、ケンタウロス座宙域も見慣れた宙域となりつつあった。
「ああ・・・海王星で補給した救援物資を降ろし、代わりに修理用のオスミウムを搭載したら、まほろば　もヤマトも未知なる宇宙への旅だ・・・それも一年以内に地球に似た星を見つける為のな・・・」

「何かヤマトの第一次イスカンダル航海に似ていますね」
「うん。だが、第一次イスカンダル航海と異なり、今度の航海は目的地が不明な点だな」
一年以内と言うタイムリミットは同じであるが、第一次イスカンダルの航海は大マゼラン星雲、サンザー星系の中にあるイスカンダルを目的地にする航海であったが、今度のヤマト、そしてまほろばの航海は目的地を探す航海なので、第一次イスカンダル航海と異なる。
だからこそ、両艦の乗員たちの不安もあったが、地球の危機が迫っている以上、手を拱いて太陽系の最後を座して死を待つよりも僅かな可能性に賭けて、地球人類の明日を得るために行かなければならなかった。
ヤマト、まほろばの近距離にはケンタウロス座第四惑星のアルファ星が見えて来た。

百五十八話　アルファ星上陸

ガルマン・ガミラスと地球の両星間国家との間における同盟を締結する為に月へとやってきたジュラたちガルマン・ガミラスの特使団一行。

その一行を月で出迎えたのは軍部代表では藤堂長官・ではなく山南司令が・・・

地球連邦政府の代表では大統領ではなく、連邦政府首相のジョアン・レベロが今回のガルマン・ガミラスとの会談に臨んだ。

「遠路はるばるようこそ太陽系へ」

「こちらこそ、会談の機会を設けていただきありがとうございます」

「いえ、折角のご来訪にもかかわらず、このようなお忍びみたいな形で出迎える事をご容赦ください」

「地球側の事情も理解しております」

ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国と地球は何度も外宇宙からの侵略を受けているいため、いきなり地球に外宇宙からの来訪者なんて来れば連邦市民はパニックに陥る恐れがあるので、ジュラたちの来訪はこうしてひっそりと行われるモノとなった。

ジュラたちも当然、地球側の事情は知っていたので、地球側が自分たちの来訪を隠すかのように対応してきた事に関して抗議等は行わなかった。

山南、レベロの地球側、ジュラ、バレルのガルマン・ガミラスの代表は互いに握手を交わして会談会場へと向かう。

今回のガルマン・ガミラスとの会談は非公式な為、地球側のマスコミには完全に伏せられていたので会談会場に記者の姿は見られない。

むしろ、記者が居て記事に書かれれば地球で大規模な反ガミラスの抗議運動が起きる可能性がある。

会談会場へ向かう最中、

「あの・・すみませんが、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「なんでしょう？」

ジュラが地球側の代表に声をかけてきた。
「地球の太陽では今、何か起こっているのでしょうか？」
「？何故、そのような事を？」
「ガルマン・ガミラスで保存されていた地球を含む太陽系のデータと比べますと、何だか太陽の大きさが異なっている様に見えまして・・・」
「異なるとは？」
「観測データよりもなんだか大きくなっている様に見えるんです。地球でここ最近、何か異常な事が起きていませんか？」
「・・・」
ジュラの問いに山南、レベロが真っ先に思い浮かんだのが先日来より突発的に起きる世界規模の電波障害だ。
もし、ジュラの言う事が正しければ、自分たちが知らぬ間に太陽で何かが起きており、世界各地で起きている電波障害もその太陽の異常から起きている現象ではないかと推察される。
「君、すまないが太陽エネルギー省に確認をとって来てもらえるか？」
「は、はい」
レベロが傍に控えていた秘書官に太陽エネルギー省へ太陽の観測データを確認するように伝えた。
彼らが太陽で起きている異常を知るのはこの後すぐの事であった。
ジュラの予感はまさに当たっており、太陽は今、地球人類に対して牙をむこうとしていた。
太陽はジュラの言う通り従来の大きさから核融合が進んだことにより膨張し始め、その影響を受けて地球の気温は上昇し、南極の氷河が溶け始めた。

太陽エネルギー省　黒田博士　執務室
「黒田博士、この観測データを見ても貴方は太陽では異常は起きておらず、ここ最近地球で起きている異常気象や電波障害は単なる自然現象と片付けるおつもりですか!?そして、それは直ぐに終息するとお思いですか!?」

「・・・・」
　地球連邦中央天文台から半ば監視の為、太陽エネルギー省へ異動となった倉田博士がここ最近における太陽の観測データを黒田博士に見せながら彼に詰問する。
　倉田博士は地球連邦中央天文台から太陽エネルギー省に異動になった後、太陽エネルギー省の職員らに監視されていた為、太陽を観測する事は出来なかったが、倉田博士は太陽エネルギー省へ異動になる前、地球連邦中央天文台の部下たちに引き続き太陽の観測を続けるよう命じており、倉田博士から命を受けた天文台の部下たちは太陽の観測を続け、観測データを倉田博士に送っていた。
　そして、倉田博士は送られたデータを纏め上げ、こうして黒田博士に提出したのだ。
　黒田博士は倉田博士から見せられた観測データが記されている資料を悔いるように見つめている。
　資料に記載されている観測データが示す異常数値は、収まるどころか日に日に増加している。
「このまま太陽の核融合が進めば地球は生物が住めない灼熱の星へと変わります」
「・・・・」
「黒田博士!!至急、大統領にこの事態を知らせ、急ぎ対策を講じていただきたい!!」
「う、うむ・・・わ、分かった、急ぎ大統領に事の次第を伝えよう・・・」
　黒田博士としては自分と大統領が異端だと判断した倉田博士とサイモン氏の定説があっていた事に悔しさがあったが、確かにこのまま放置しては倉田博士が言うように地球人類の存亡にかかる。
　黒田博士は観測データを纏めた資料を持ち、大統領府へと赴いた。

　地球連邦政大統領府　大統領執務室
「黒田博士、この観測データとその先に待つ結論に間違いはないのかね？」
　太陽エネルギー省から齎された資料に目をやった大統領は当初、こ

の異常事態は単なる自然現象であり、しばらくすれば収まると聞いていたが、資料に書かれている数値や地球で起きている異常気象、電波障害が収まる気配がない事にようやく太陽の異常に気付き、地球が破滅の道を進んでいる事をようやく認識した。
「は、はい。残念ながら・・・・」
「では、ここ最近頻発している異常気象や電波障害も・・・・」
「太陽の核融合異常増進の影響かと・・・・」
「うーむ・・・・黒田博士、急ぎ太陽の核融合異常増進を止める手立てを講じてくれたまえ」
「は、はい。私も当初、この現象に関して楽観視し過ぎていたきらいがありました・・・・急ぎ対策を講じたいと思います」
　太陽エネルギー省でも此処に来てようやく太陽の異常を認め、対策を講じる事にしたが、この時点ではあくまでも太陽の異常を止める対策であって、現在ヤマト、まほろば　が行っている第二の地球探査と言う大掛かりなモノではなかった。

　月面　防衛軍基地　会議室
「レベロ首相、こちらを・・・・」
「うむ・・・・」
　月では太陽エネルギー省へ問い合わせたところ、同省の責任者である黒田博士、そして地球連邦大統領が太陽で異常が起きている事を認めた。
「どうかされましたか？レベロ首相」
　太陽エネルギー省からの通達が書かれたメモを見て顔をしかめるレベロ。
　そんなレベロの様子を見て何かがあったのだと察する山南。
「・・・・どうやら特使がおっしゃった事が当たっていたようです・・・・現在、太陽にて核融合の異常増進が確認されたとの事です」
「核融合の異常増進・・・・」
「それは少々厄介な事ですな」
　現在、太陽系の太陽で起きている異常についてバレルがポツリと呟

く。
「厄介と言いますと？」
「私も仮説としか言い切れませんが、このまま太陽の核融合が進めばいずれは太陽が爆発する恐れがあります」
「そ、そんなっ!?」
「バカなっ!?」
「しかし、実際に太陽は以前より膨張している筈です」
「・・・・」
　バレルの指摘を受け、地球の危機があるのではないかと不安視する山南とレベロであった。
「勿論、地球側も何かしらの対応策を取ると思いますが、ガルマン・ガミラスの方でもその手助けは勿論行う所存であります」
「ありがとうございます。バレル大使」
　藤堂は既に対処を取っているが、それを知る者は軍でも政府でもごく一部の者であり、この後で行うであろう太陽エネルギー省の太陽制御の対策が失敗した場合、ガルマン・ガミラスでもその対策に協力するとバレルは伝える。
　勿論、ジュラも父であるデスラーに地球の状況を報告し、太陽制御の手伝いを行う所存であった。
「しかし、太陽が大変な時に貴国との同盟についての会談を出来るか分からなくなってきましたな・・・」
　山南の言う通り、地球に危機が迫っている中でのんびりと会談を行っている余裕はなさそうだ。
「そうですね。太陽の一件が落ち着くまでこの話は保留にした方がいいかもしれません」
　ジュラも山南の提案には同意した。
「大使の方々には申し訳ない形となりましたが折角、月までいらして下さったので、しばらくは月にご逗留下さい。出来る限りのおもてなしをさせていただきます」
「地球の方々のお心遣い感謝いたします。私どもも折を見て一度、本国へと戻り、太陽制御の方法を検討してみます」

太陽の異常とそれに伴う地球の危機と言う事態が起きた事により、同盟についての会談は保留となった。

地球、ガルマン・ガミラスとの同盟が一時保留となりジュラたち特使団一行が暫しの間、月に逗留して居る頃、ヤマト、まほろば　はケンタウロス座・第四惑星のアルファ星に近づいていた。

まほろば　第一艦橋

「アルファ星周辺に敵影なし」

数週間前の攻撃以降、アルファ星が攻撃を受けた形跡はないが完全に敵を殲滅するまでは油断できない。

「うん・だが、油断は出来ない。警戒態勢のまま航行を続けよ」

「了解」

「通信長、アルファ星基地に入港許可を要請してくれ」

「はい」

良馬がギンガにアルファ星へ入港許可を求める通信を送らせる。

アルファ星は現在、ボラー連邦の攻撃に備えて臨戦態勢を取っている。

いくら友軍艦艇とは言え、連絡なしに接近するのはフレンドリーファイアを引き起こしかねない。

「アルファ星基地、アルファ星基地、こちら戦艦　まほろば　繰り返します。こちら戦艦　まほろば、現在、戦艦ヤマトと共にアルファ星へ接近しつつあり、ヤマトと共に入港許可を求めます」

「こちらアルファ基地、まほろば、ヤマトの入港を歓迎する。第二、第三ドックへ入港せよ。繰り返す、まほろば、ヤマトは第二、第三ドックへ入港せよ」

「こちら戦艦　まほろば。ヤマトと共に第二、第三、ドックへ入港します・・・艦長、アルファ星基地より入港許可が下りました」

「よし、ヤマトにも通信で入港許可が出た事を知らせよ」

「了解」

「これより、アルファ星基地へ入港する」

まほろば、ヤマトはアルファ星の大気圏へと突入する。

やがて地表が肉眼でも確認できる距離になるとヤマトの乗員たちにとっては初めて地球人類が太陽系外で開拓を開始したアルファ星の姿が映りだす。
(なるほど、これでは、資源を採掘する事は出来ても人類の居住地としては適さないな・・・)
(それに星の彼方此方に爆撃で出来たと思われるクレーターが出来ている・・・)
(ボラー連邦・・・酷い事をする連中だ・・・)
星全体に広がる荒野を見て古代は、アルファ星は地球人類が住む星には適さないと判断したが、都市部では開拓が今も進められており、少しでも人類が住める環境になりつつあったが、都市部の郊外には先日のボラー連邦・正確にはボラー・バジウド連合からの攻撃の爪痕がまだ残っている有り様だった。
やがて、基地からは中型雷撃艇が三機、誘導の為に接近し、まほろば、ヤマトを基地へと誘導する。
そして、まほろば　は第二ドックへ・ヤマトは第三ドックに入港した。
入港したまほろば、ヤマトに基地司令官であるキャゼルヌ自らが出迎えた。
「お待ちしておりました。アルファ星基地司令官のアレックス・キャゼルヌです」
「ヤマト艦長の古代進です」
「当基地は、ヤマトの入港を心より歓迎いたします」
「ありがとうございます」
キャゼルヌと古代は握手を交わす。
「月村艦長もご苦労様です。特使団の方々は無事に月へ辿り着けましたか?」
「その件を含めて諸々キャゼルヌ司令にお話があります」
「分かりました」
「それで、あれから敵の攻撃はありましたか?」
良馬はキャゼルヌにまほろばが留守の間にボラー・バジウド連合か

らの攻撃があったかを訊ねる。
「いえ、あの攻撃以降、攻撃はありません。嵐の前の静けさの様です」
「ですが、完全に敵勢力を排除した訳ではありません。敵は第二、第三の攻撃をかけてくる可能性は十分あります」
「月村艦長のおっしゃる通りです。よって、我々も警備を担います」
「感謝いたします。では、警備の打ち合わせを・・・それに月村艦長からも話があるみたいですし・・・」
　キャゼルヌは良馬と古代をドック内にある事務所の応接室へと案内する。
「まず、特使団一行についてですが、海王星宙域まで先導した後、当艦はそこでヤマトと合流しました。特使団一行の先導と護衛は海王星トリトン基地所属の艦に引き続きました」
　良馬はまず特使団の件とヤマトと合流した経緯を話す。
「そして、当艦は藤堂長官よりある任務を拝命する事になりました」
「ある任務と言うと・・・？」
「この任務にはヤマトも関係している任務です」
「ヤマトと？」
「それについては自分が説明します」
　古代がキャゼルヌにヤマトが受けた任務について説明をする。
「太陽系ではそんなことが・・・」
「はい。故に我々は地球人類が滅ぶ前に人類が移住できる星を見つける必要があります。ただ、地球が開拓を始めたこの星が攻撃を受けた以上、まずはその対処を取りたいと思っています」
「時間が無い中にもかかわらず、ありがとうございます」
「それと、トリトン基地にて戦災復興のための物資を運んできましたので、復興に役立てて下さい。ただ、その代わり採掘したオスミウムを分けて頂きたいのですが・・・」
　良馬がキャゼルヌにトリトン基地にて復興物資を運んできた旨を伝える。
「分かりました。そちらは手配いたしましょう」
「ありがとうございます。後、ヤマトの任務に同行するため、長期間ア

ルファ星を留守にすることになるので、代わりの援軍についても藤堂長官が手配して下さるそうです」
「そうですか・・まほろばが留守になると言う事で不安でしたが更なる援軍が来るのならば、民間の方々の不安も多少は払拭する事が出来ます」
「それでもし、敵が襲ってくるとしたらの話ですが・・・」
タブレットにはアルファ星から観測出来た範囲の宇宙海図が表示される。
「敵はこの方角へ撤退して行きました」
「となると、第一候補はこの方角から攻撃してくる可能性が高いですね」
「そして第二候補はこちらの方角だな・・・」
キャゼルヌとの話し合いが終わり、良馬は　まほろば、古代はヤマトへと戻った。
良馬、古代の二人がそれぞれの艦に戻っている中、
「古代君から見てこのアルファ星はどう見える？」
良馬は古代にアルファ星についての意見を聞いて来た。
「えっ？この星について・・ですか？」
「うん。率直な意見を聞かせてほしい」
「・・・では、言わせていただきますが、正直に言って人類が住むには厳しい環境のように思える星です」
「ハハ、まだ星の大半が荒野だからね・・・でも、開拓事業の人たちが頑張っているおかげで都市部は開発が進んでいるし、かつてのアメリカ大陸もヨーロッパからの移民たちが長い時間をかけて開拓をして今のアメリカを築き上げた・・・まぁ、先住民との間にいざこざや独立戦争があったけど、この星には先住民は居ないからそうした問題はないな」
「確かに最初のイスカンダルの航海後、地球人類は太陽系の惑星を開拓していきましたからね」
「・・・もし、第二の地球探査が失敗した場合、地球人類の移住先の候補はこのアルファ星になると思っている」

「それは・・・ですが・・・」
「分かっている。太陽系から４．５光年しか離れていないこの星にも太陽系の消滅の際に生じたハイパーノヴァの影響もあるだろう・・・でも、その影響が来るまでに約５０年ほどの歳月がかかる。少なくとも人類には半世紀の時間があるのかもしれないが、先延ばしに出来る問題ではないことはちゃんと理解しているよ」
　第二次イスカンダルへの航海の際、地球から約６００光年離れたペテルギウスにて、暗黒星団帝国はエネルギー採取を行っていた。
　しかし強引なエネルギー採取は星の寿命を縮め、ハイパーノヴァを引き起こす危険があった。
　ペテルギウスにてエネルギー採取を行っていた暗黒星団帝国の艦隊を撃破した後、ハイパーノヴァが起こる寸前、初代ヤマト機関長の徳川彦左衛門が残したデータにより、かつてペテルギウスにてヤマトの航路妨害をしていたガミラスのバリアーユニットのおかげでハイパーノヴァを防ぐことが出来た。
　だが、ハイパーノヴァがもし起きてしまった場合、ペテルギウスから地球にその影響が出るのは約５００年後と推定された。
　ケンタウロス座にあるこのアルファ星は太陽系から４，５光年しか離れていないので、太陽系が消滅した際に起こるハイパーノヴァの影響はペテルギウスの時よりも早くに訪れるが、それでも約半世紀先になる。
　そう考えると、地球はあと一年、太陽系はあと三年の寿命となるが、このアルファ星は半世紀の寿命がある。
　万が一、第二の地球となる星が見つからなかった場合、地球人類はこのアルファ星に一時的に避難をして、ハイパーノヴァが迫る約半世紀の間に再び第二の故郷となる星の探査をすれば良いと思われるが、それでも先送りには出来ない問題である。
「ですが、月村さんが言う事も的を射ています。最悪の場合、地球人類を一時的に避難出来そうな星はこのアルファ星ぐらいでしょうから・・・それでもちゃんと宇宙を探査すれば、地球とそっくりな星が見つかる可能性はあります。自分はその可能性を信じています」

「そうだね。その為に俺たちは星の海へと行くのだからその可能性を信じよう・・・古代君が赤道祭でちゃんと願掛けをしてくれたのだからね」
「つ、月村さん、あの時の事は・・・」
やはり古代としてはあの時の赤道祭での祈願の儀式は恥ずかしかったようだ。

その頃、へびつかい座にある第一惑星、バーナード星では・・・
バーナード星はボラー・バジウド連合軍がアルファ星の攻略基地を急ピッチで建築しており、ガミラスの冥王星基地程の規模ではないが、地下に艦船を収容できるドック、惑星表面には攻撃手段の砲台等が設置されていた。
「なに!?例の戦艦が!?」
「はい。例の戦艦の他に同型艦と思われる戦艦の艦影も補足しました」
意気揚々とアルファ星を攻撃するも思わぬ　まほろば　以下のホワイト艦隊の出現に大敗し、返り討ちに遭ったボラー・バジウド連合軍は蜘蛛の子を散らすかのように撤退した。
ただ、撤退する前にゾルヴァ号はアルファ星の監視のために小型のスパイ衛星をばら撒いていた。
そのスパイ衛星の一つがアルファ星に降下して行く　まほろば　、ヤマトの姿を捕捉していた。
レバルスはボローズにさっそくこの情報を報告する。
「フフフ、我々が受けた屈辱を返す時が来たぞ、レバルス」
「はっ」
「彼奴等をこの星へ誘い込むのだ!!」
「承知しました」
ボローズの復讐の牙は今まさにアルファ星・・・まほろば　へと向こうとしていた。

キャゼルヌと良馬との話し合いを終え、ヤマトに戻った古代は、

「総乗組員に告ぐ。只今より、偵察行動を兼ね、半舷上陸を許可する。ただし、この星は臨戦態勢下にあり、いつ敵の攻撃を受けてもおかしくはない状況下である、故にいつでも迅速かつ機敏な行動が出来るように心掛けておくこと、以上だ」

乗員たちに半舷上陸を許可した。

まさかの半舷上陸の許可に上陸許可が下りた乗員たちは歓喜する。

ただ工作班はヤマトの補強作業とオスミウムの受け取り作業があるので、その大半が居残りとなってしまった。

そんな工作班の中で坂東は上陸許可のクジを引き当てたのだが、彼の姿はアルファ星の街の中ではなく、ヤマトの機関室にあった。

「坂東、お前上陸しないのか？」

艦内を見回っていた真田がせっかく上陸許可をもらったにもかかわらず、上陸をせずに補強作業をしている坂東に声をかける。

「あっ、技師長・その・自分の担当箇所の補強作業が思ったほど捗らないモノですから・・・・」

仕事がまだ残っていたので坂東は上陸せずに残業をしていたのだ。

「よし、俺も手伝ってやろう」

「すみません」

見かねた真田が坂東を手伝った。

やがて、上陸準備が整ったのかヤマトからは次々とエアーバイクに跨った乗員たちがアルファ星の街へと降り立って行った。

（雪はみんな神経が苛立っていると言っていたが、羽目を外し過ぎて乗員同士の揉め事が起きなければいいが・・・・）

ヤマトから降りていく乗員たちの姿を見ながら古代は一抹の不安を抱いていた。

海王星トリトン基地にてアルファ星への救援物資を積んでいた

まほろば　にはコンベアが接続され、救援物資が次々と降ろされていく。

「ヤマトの方では乗員への半舷上陸を許可したみたいだな・・・・乗員のケアも兼ねてこちらもそうするか・・・・」

ヤマトから降りていくヤマトの乗員たちの姿を見た良馬も古代同様、まほろば　の乗員たちへ半舷上陸を許可した。
ヤマトの乗員同様、まほろばの乗員たちも歓喜して早速上陸の準備をすると次々とエアーバイクに跨りアルファ星の街へと降りていく。
半舷上陸で乗員たちが次々と艦を降りていく中、救援物資の搬出が終わるとコンベアは逆運転し、今度は　まほろば　に加工されたオスミウムの積み込み作業が始まる。
それはヤマトでも同じで接続されたコンベアの上には加工されたオスミウムが次々とヤマトへと積み込まれていく。
半舷上陸の許可が下りたヤマト、まほろば　の乗員たちがアルファ星の街を思い思いに探索をしている中、上陸許可を得たギンガの姿は都市部の中にあるショッピングモールにあった。
ボラー・バジウド連合からの攻撃がいつ再開するのか分からない中でもこの星に住んでいる人々の為にショッピングモールはこうして開店していた。
アルファ星を出たら、まほろば　はヤマトと共に第二の地球探査を行う為、次はいつ買い物ができるのか分からない。
その為、ギンガは生活必需品や消耗品を買いだめしようと来たのだ。
長距離航海が可能な　まほろば　の艦内でもある程度の消耗品や生活必需品は生産できるが、やはり艦内で生産した物とこうして店に売っている物とでは質が異なるので、調達できる時には調達しておきたかった。
ギンガが生活必需品を見て、選び、買っていると、
「あら？もしかして中嶋さん？」
「ん？」
ギンガは声をかけられたので、振り向くとそこには山上夫婦が居た。
「あっ、山上さん。どうもこんにちは」
「こんにちは。中嶋さんも買い物ですか？」
「はい。次の航海が長くなりそうなので、今の内に生活に必要な物や

消耗品を買いだめしておこうと思って」
「そうですか・・・やはり軍は大変なお仕事ですね」
「長い航海と言うことは防衛軍の軍艦がこの星を離れると言う事ですか？」
　山上トモ子の夫が不安そうに訊ねる。
「はい。ですが、私が乗艦している艦の艦長が藤堂長官と話をしてこの星に援軍を向かわせてくれるみたいです」
「そうですか・・・」
　ギンガの話を聞いてトモ子の夫は少しホッとした様子だった。
「山上さんたちも生活品の買い物ですか？」
「ええ・・・あと・・・」
「・・・」
　山上夫妻もギンガ同様、生活必需品の買い物に来たようだが、それ以外にも何か買う物があるみたいなのだが、山上夫妻はなんだか照れくさそうに顔をほんのり赤らめている。
「？」
　ギンガがそんな山上夫妻の態度に首を傾げていると、
「じ、実は・・・」
「俺たちの間に子供が出来たんです・・・」
「えっ？」
　トモ子の夫が妻であるトモ子の妊娠をギンガに伝えた。
　トモ子の妊娠を伝えられたギンガは一瞬、目が点になるも、
「それはおめでとうございます」
　妊娠したトモ子を祝福した。
「ありがとうございます。まだ妊娠の初期段階なんですが、先日の健康診断で知りまして・・・」
「それで、生活必需品の他にベビー用品も今の内に揃えておこうと思って、こうして二人で見に来たんです・・・」
　トモ子の妊娠が判明したので今日、山上夫妻は生活必需品の他に子育てに必要なベビー用品を買いに来たのだ。
「お父さんなんて、おもちゃ屋さんに行って沢山のおもちゃを買い込

んで来るって張り切っちゃって・まだ性別も分かっていないのに・・・」
トモ子は苦笑しながら自分の父がまだ生まれぬ孫の為にはりきっておもちゃ屋でおもちゃを買っている事を伝える。
彼女の父親は強面で頑固な一面があるのだが、そんな父親がおもちゃ屋で赤ん坊のおもちゃを買っている姿を想像すると確かにトモ子が苦笑してしまうのも分かる。
「でも、いいお父さんじゃないですか」
トモ子の父親も気が早いが、山上夫妻もこの時点でベビー用品を揃えようとしているので、山上夫妻も気が早いと思いながらも初めての妊娠なので、山上夫妻もやはり浮かれているのだろう。
「ええ・きっとこの子が生まれた時、爺馬鹿なおじいちゃんになるのが目に見えていますけどね」
父親の話題が出てギンガの脳裏にはミッドに居るゲンヤの姿が過る。
(爺馬鹿か・・・)
自分がまだ管理局員だった頃、ゲンヤは自分が所属する部隊の部隊長で公私をちゃんと分けていたが、私生活におけるゲンヤは自分を大切に育ててくれた。
(父さんもきっと私やスバルに子供が出来たら爺馬鹿になっていたんだろうな・・・)
トモ子の父親の話からゲンヤも同じく孫には甘くなりそうだと思うギンガ。
自分はゲンヤに子供を見せる事は叶わないがミッドにはスバルや養女となった元ナンバーズの子らが居るので、孫をゲンヤに見せる役目はスバルと彼女たちへと託された。
「では、私たちはこれで・・・」
「はい。体調には十分気をつけてくださいね」
「ええ・・・」
山上夫妻は仲睦まじい様子でショッピングモールの奥へと消えて行った。

「赤ちゃん‥か‥‥」
ゲンヤの次にギンガの脳裏を過ったのは照れくさそうに自らの下腹部に優しく手を置くトモ子の姿であった。
まだ赤ん坊だった時のサーシア、ユリーシャ、そして妊娠したトモ子の姿を見て、ギンガとしてはますます将来における自分の子供に対しての欲求は高まった。
それはやはり自分が戦闘機人と言う特殊な人種である事を気にしている一面があったからだ。
(あっ、そう言えば前の航海で‥‥)
そして、ギンガは前回の航海中にあった出来事を思い出す。
前回の航海‥‥それは地球を占領した暗黒星団帝国の本星を突き止める航海の中で、一度だけ良馬とギンガは関係を持った。
艦に乗っている以上、良馬とギンガは上官と部下の関係でいようと互いに誓っていたのだが、やはり長い航海でなおかつ地球人類の命運がかかっていると言う大きな不安の中で、互いに不安を払拭したかったと言う所があった。
そして今回の航海も宇宙の何処かにある地球に似た星を見つける事、
地球人類の命運が掛かっている点が前回の航海と似ている点があった。
(な、長い航海、何があるか分からないからね‥‥)
そう自分に言い聞かせつつ、ギンガはショッピングモール内にあるドラッグストアにて密かに避妊具も購入した。
幸いにしてドラッグストアのレジはセルフレジだったので、ギンガは店員に避妊具を購入する姿を見られることはなかった。

ヤマト、まほろば　の乗員たちへの半舷上陸許可が下りてから数時間後‥‥
乗員たちの中にはギンガの様に買い物を行い満足して艦に戻る乗員たちが現れ始めた頃、一軒のバーにて二人のヤマトの乗員たち酒盛りをしていた。

酒盛りをしていたのは、ヤマトの第一砲塔のキャップである坂巻と第一砲塔の砲手である仁科春夫の二人だった。
「お代わり!!」
「俺も!!」
坂巻も仁科もグラスを手に上機嫌になっていた。
バーのマスターが二人に酒の入ったグラスを出すと、二人は一気に煽る。
「もう一杯」
「面倒だ!!瓶ごともらうぜ!!」
「お客さん、そんなに飲んで良いんですか?」
バーのマスターは酒を提供しておいて今更ながらも公務中に酒を飲んで良いのかと二人に問う。
「いいって、いいって」
「ああ、これも偵察行動の一環だ」
酒を飲んで気が大きくなっているのか飲酒している自らを肯定している二人。
そこへ、島がバーに入って来て飲酒をしている坂巻と仁科の姿を見て眉をひそめる。
島はつかつかと二人に歩み寄り、
「こら!!酒なんか飲んでいいとは言っていなかったぞ!!」
と、二人を窘める。
「あん?何だ、航海長さんか・・・」
「固いこと言わないで、どうです?一杯?」
坂巻は島に一緒に飲まないかと誘うが、
「いい加減にしろ!!」
島は声を荒げ、坂巻の手から酒瓶を取り上げた。
「な、何するんだ!?」
いい気分で酒を飲んでいたにもかかわらず、酒瓶を取り上げられた坂巻は声を荒げる。
「今すぐ艦に帰れ!!」
「艦長の命令なら聞くけど、アンタの指図は受けねぇよ!!」

（くっ、此処でも古代かよ・・・）
島は心の中で古代に対して毒づく。
坂巻と仁科は酒瓶を取り返そうと島に飛び掛かる。
「お、おい、よせ!!」
島はひらりと二人を躱すが、狭い店内ではそれはいつまで続くか分からない。
しかし、突如、坂巻と仁科は後ろ首をつかまれ放り投げられる。
「てめぇら、航海長様に何て真似をしやがる」
二人を投げ飛ばしたのは航海科の雷電だった。
「艦内相撲大会チャンピオンの雷電五郎が相手になってやるぜ」
「おう!!望むところだ!!」
突然の雷電の登場に坂巻と仁科は唖然とする。
何しろ雷電の身長は島よりも大きく、先日の赤道祭で永倉と相撲を興じて新人ながらも彼を倒した猛者であり、身長もさることながら体格もまさに力士の様に大きかった。
しかし、酒が入っていた坂巻は雷電を恐れることなく彼に駆け寄り、二、三発雷電の腹にパンチを浴びせる。
だが、坂巻のパンチは雷電には全く効いておらず、倒れるどころか痛がる様子もない。
それどころか一歩も引いてさえいない。
続けてパンチを連打する坂巻であったが、ついには顔を歪めて痛そうに手を振り始めた。
雷電にダメージを与えるどころか自分の拳にダメージがきたみたいだった。
「ハハハ、どうした?それだけか?それじゃあ、今度はこっちの番だぜ、覚悟しな!!」
雷電がバキバキと手を鳴らしながら坂巻と仁科に近づくと、二人は思わず後退る。
「待った!!その喧嘩、俺が買ったぜ!!」
すると別の人物が現れ三人の中に割って入って来た。
「誰だ?テメェ?」

「元輸送船機関長、宇宙のトラック野郎、赤城大六とは俺の事よ!!喧嘩をやめて仲直りしねぇと俺のド根性を見せることになるぜ」
ヤマトの乗員には士門たち、宇宙戦士訓練学校の繰り上げ卒業者たち以外にも赤城の様に別部署のベテラン乗員も新人の負担軽減のために少なからず採用されていた。
「うるせぇ!邪魔するな!」
気が立っていたのか雷電は赤城を突き飛ばす。
「野郎!!やりやがったな!?仲裁人を殴るとは何事だ!?」
喧嘩を止めようとしたのにいきなりド突かれた赤城は憤慨し雷電に殴りかかる。
すると、坂巻と仁科も雷電に殴りかかる。
「は、始めやがった・・・」
バーのマスターはヤマトの乗員たちが殴り合いをしたので、自分も被害を受けてはたまらんとカウンターの下に避難した。
バーはたちまち怒号と悲鳴が交錯し、坂巻が殴り飛ばされ机が壊れ、仁科が酒瓶で雷電を殴りつけ、その隙を突いて赤城が雷電に飛び掛かるが、赤城は投げ飛ばされる。
酒瓶や椅子までもが武器となる中、誰かが投げた椅子がビール樽に当たり、そこからビールが勢いよく漏れ出す。
「ああ、ビールが、ビールが!!」
マスターが手で壊れたビール樽を抑えるが焼け石に水であった。
ついで、雷電が坂巻をなげると坂巻はカウンターの上を滑り、その勢いを殺すことなくガラスを突き破り店の外に転がる。
そこに古代が通りかかりいきなりバーの中から坂巻がガラスを突き破って外に転がって来たので驚いた。
「坂巻?お、おい・・・」
「やろう!!」
坂巻は立ち上がり再びバーの中へ入っていく。
「い、一体何が・・・」
バーの中で何か起きているのだと察した古代はバーの中へと入って行く。

バーの中では坂巻、仁科、雷電、赤城の四人がハチャメチャの大乱闘を繰り広げていた。
そんな中でカウンターを背に島がゲラゲラと笑っていた。
喧嘩を止める訳でもなくただ笑っているだけの島の姿を見て古代は、
「島!!何故止めない!?」
と、声を荒げる。
「ん?止められるならとっくに止めているよ」
「みんな!!止め・・・」
島は止める気が無い様なので、古代が声をあげて止めようとするが、途中で声をあげるのを止める。
そして島と同様、ゲラゲラと笑い出し、
「エネルギーの発散だ。大目に見てやろう」
と、坂巻たちの喧嘩を不問にした。
バーの中で大乱闘が続く中、
ズドーン!!
突如、都市部の郊外で閃光が走り、地震のような振動が辺りを揺るがした。
この轟音と振動に大乱闘をしていた坂巻たちも流石に気付き、殴り合いを止める。
古代たちが窓の外を見ると、空の彼方からミサイルが雨の様に降り注ぎ始めた。
「敵襲だ!!」
「ミサイル弾だぞ!?」
「ヤマトに戻るぞ!!」
『おう!!』
古代たちは急ぎバーを出て店の前に止めてあるエアーバイクに跨りヤマトに戻った。
エアーバイクの運転は自動制御に設定可能なので、酒を飲んだ坂巻と仁科も事故ることなくヤマトに向かうことが出来た。
そして、このミサイル攻撃は復讐に燃えるボローズの牙がアルファ

星に向けられたモノだった。

百五十九話　アルファ星出航

太陽の核融合異常増進に伴い、破滅の道へと進んでいる太陽系・・・
地球人類の存亡をかけてヤマトとまほろばは星の海に第二の地球となる惑星を求めて太陽系を出た。
第二の地球となる惑星を探査する前、ヤマトとまほろばは、地球が初めて太陽系外に開拓したケンタウロス座第四惑星のアルファ星に立ち寄った。
アルファ星は数週間前に突如、地球がまだ邂逅した事の無い星間国家の宇宙艦隊より攻撃を受けた。
そして、未だにアルファ星はこの星間国家からの脅威が去っていない状況下であった。
まほろばは海王星トリトン基地にて積み込んだアルファ星への救援物資の荷下ろしと共に修理に必要な加工されたオスミウムの積み込み作業を行った。
ヤマトもこの先の長い航海の為にまほろば同様、修理用のオスミウムを積み込んだ。
その際、両艦の乗員たちには半舷上陸が許可され、上陸許可が下りた乗員たちは歓喜してアルファ星の都市部へと繰り出して行った。
半舷上陸の許可が下りてから数時間後、アルファ星は再びミサイル攻撃を受ける事になるのだが、時系列はアルファ星が二度目の攻撃を受ける少し前に戻る。
この後に控えている長い航海に備えてショッピングモールへ生活必需品と消耗品の買い出しに来たギンガ。
そのショッピングモールにてギンガはこのアルファ星で知り合った山上夫妻と出会った。
山上夫妻もギンガ同様、買い物に来ていたのだが、普段の生活必需品の他にベビー用品も買いに来ていた。
それによると、山上トモ子が先日健康診断を受けた際、妊娠が判明したのだ。

その為、山上夫妻は気が早いと思いつつも今の内にベビー用品を揃えておこうとし、こうして夫婦でショッピングモールにベビー用品を買いに来たのだ。
なお、トモ子の父親も娘が出産する孫の為におもちゃ屋へ出向き、おもちゃを大量買いしているのだと言う。
山上夫妻と別れ、自分の買い物を終えたギンガはフードコートにて休憩していた。
そんなギンガに、
「あら？中嶋さん？」
またもや声をかける人物が居た。
「えっ？あっ、森さん」
山上夫妻に続いてギンガに声をかけたのは雪だった。
雪もギンガ同様、この後に控えている長い航海に備えて生活必需品と消耗品を買いに来たみたいだ。
「森さんも買い物に？」
「ええ、この後の航海に備えてね。中嶋さんも？」
「はい」
雪の両手には沢山の生活必需品や消耗品が入った袋が握られている。
目的が同じで、買い物を終えた二人は今、フードコートにある一つのテーブルに座りささやかな茶会をしている。
「まだ開拓したてって聞いたけど、街中は整備されていてビックリしちゃったわ」
「開拓業を生業にしている人たちや地球の様々な企業が資金援助をしてくれたおかげです」
先ほど出会った山上夫妻の夫とトモ子の父親もこうした未開の惑星開拓業の仕事をしている。
「なので、そんな人たちの努力を無に帰すような攻撃を仕掛けてきたボラー連邦に関しては腸が煮えくり返る思いですよ」
ボラー連邦・・・ボラー・バジウド連合からの攻撃はそんな開拓業を生業にしている人たちの生命を危険に晒すのと同時に彼らの努力を

無駄にする行為だ。
「ボラー連邦・・・確かアルファ星を攻撃してきた星間国家だったわね」
「はい・・・ジュラさんから聞いた話では今、銀河系で起きているガルマン・ガミラスとボラー連邦の戦争からヤマトとまほろばが巻き込まれる可能性があると思うとこの後の航海が不安もありますが、それと同時に留守の間にこの星が再びボラー連邦から攻撃を受けないか心配です」
「まほろばは確かアルファ星の開拓初期からこの星の守備に就いていたのよね？」
「はい。だからこそ、この星で頑張っている人々を私たちは見てきました・・・開拓したばかりの頃。この星は厳しい自然環境下でした。それでも人々は諦めることなく大地を開拓し、鉱山で鉱石を採掘して開拓の基盤を築き上げました。それに知り合いの方々も出来ました・・・」
「なるほど、知り合いの方が出来たのなら、中嶋さんが心配になるのも分かるわ」
「はい・・・」
　ギンガの脳裏に山上夫妻の姿が過った時、ギンガはふと雪にある事を聞いてみた。
「あ、あの、森さん」
「ん？何かしら？」
「話は変わるんですが、森さんと古代艦長は婚約者の仲なんですよね？」
「え、ええ、そうよ」
「あ、あの・・森さんは結婚や出産についてどう思いますか？」
「えっ？」
　ギンガからの質問に雪は一瞬唖然とする。
「ど、どうして、そんなことを？」
「あの・・・ついさっき、この星で知り合った夫婦の方々と出会って、その奥さんが妊娠したみたいで・・・」

「そうなんですか・・・・あ、あの・・失礼ながら、中嶋さんにはその・・・・彼氏とかいるんですか？」
雪は結婚や出産以前に相手が居なければ話にならない。
なので、雪はギンガにまずは相手が居るのかを訊ねた。
「は、はい。私にも森さんと同じく婚約者の方が居ます」
（婚約者・・・・で良いんだよね？あの時、良馬さんの家に挨拶に行ったし、良馬さんも忍さんに『結婚前提』って言っていたし・・・・）
雪に自分は婚約者が居るとは言え、内心では自分は本当に良馬と婚約者の関係なのか？とやや自信がないギンガであった。
「あら？そうだったの？」
雪は当然乗艦している艦が異なっているので、ギンガと良馬の関係を知る由もなく、今ここでギンガに婚約者が居ると知り驚いていた。
「それで、中嶋さんの婚約者って誰なの？」
「えっと・・・・この話はオフレコにして頂きたいのですが・・・・その・・・・まほろばの艦長の・・・・月村艦長です」
雪と古代が婚約者であることはヤマトの第一艦橋のメンバーや佐渡、藤堂は知っているが、ギンガの場合、良馬とギンガが婚約者であることを知っているのは当人と忍、そしてギンガの養母である加奈江と言ったごく一部の人しか知らない。
やはり、良馬の実家である月村家が地球でも有数の大財閥なので、その家の者の結婚・婚約となるとマスコミが飛びついてくるだろうし、他の企業からも祝福以外に月村家の後継ぎとなる良馬の妻を自らの娘、身内に据え置こうとする家も無いわけではなく、そうした家にとってギンガは邪魔な存在となる。
よって、まだ完全に身を固める結婚ではなく婚約段階ではギンガを排除、もしくは中嶋家の家族に危害を与える輩が居る可能性もあるので、大っぴらに公表出来ていない。
「えっ？中嶋さんの婚約者が月村艦長!?」
「も、森さん!!声が大きいです!!」
「あっ、ごめんなさい・・・・でも、まさか、月村艦長と中嶋さんが・・・・」
ギンガに彼氏を通り越して、婚約者が居た事にも驚いたが、その相

手が良馬である事についても驚く雪。
(そっか、中嶋さんの婚約者って月村艦長なんだ・・・ん?あれ?そうなると、中嶋さんって私と何だか似ているわね)
雪は自分の状況とギンガの状況が似ている事に気づく。
雪の婚約者は言わずもがな古代であるが、その古代の現在における防衛軍の役職はヤマトの艦長・・・
そして、ギンガの婚約者はまほろばの艦長である良馬・・・
雪とギンガは自身が乗艦している艦長が婚約者であると言う共通点があった。
「えっと、それで結婚と出産についてよね?」
「はい」
「・・・実は、私と古代艦長は結婚直前って所まで行ったの・・・」
雪は普段、古代の事を『古代君』と呼んでいるが、この場ではあえて古代の事を『古代艦長』と呼んだ。
それはギンガがヤマトの乗員ではなく、まほろばの乗員・・・他艦の乗員なので、ちゃんと公私を分けたためだ。

雪と古代はガミラス戦役後、地球が復興の道を歩んでいた中、あと三日で結婚式を控えている間柄になっていた。
だが、もうすぐで結婚式という時に地球に新たな脅威が迫っていた。
白色彗星帝国が地球人類を奴隷化しようとアンドロメダ星雲から太陽系に侵攻してきたのだ。
その時の地球連邦政府も防衛軍も地球が新たな侵略者に狙われているなんて信じてはいなかった。
しかし、古代たちヤマトの乗組員たちは地球の危機を察し、その原因解明のために改装が終わったばかりのヤマトを強引に出航させてテレザートへと向かった。
その後、彗星帝国の存在が明らかになり、地球はそのまま彗星帝国との戦いに突入し、ヤマトも地球を守る為にその戦いに身を投じていった。

彗星帝国との戦いはテレサの命を懸けた祈りにて彗星帝国の切り札とも言える超巨大戦艦、ガトランティスは消滅。
国家元首のズォーダーもガトランティスと共に消滅し、地球は再び滅亡の危機を免れた。
彗星帝国との戦いの後、生き残ったヤマトの乗員たちはてっきり雪と古代は直ぐに結婚をするのかと思いきや、二人は結婚式を延期して今でも婚約関係を続けている。
結婚式を挙げずに婚約関係になっているのは雪も古代も互いに思う所があるのだろう。
雪としては別に結婚をせずとも古代の婚約者と言う立場でも満足していた。
「森さんと古代艦長にそんな事が・・・でも、森さんは良かったんですか？」
ギンガは雪に折角結婚直前の所まで関係が進んだにもかかわらず、結婚せずに婚約関係のままでいる事について質問する。
「ええ、私も古代艦長も結婚というのはあくまでも建前であって、一番肝心なのは『互いに一緒に居ること』なんだって分かったのよ。それに今思うと彗星帝国との戦いの直ぐ後に結婚式を挙げなくて良かったと思っているわ」
雪の言う通り、彗星帝国との戦いの後に地球は暗黒星団帝国との戦いへと突入し、雪は地球を脱出する際にアルフォンからの狙撃を受けて、負傷して地球に残留する事になった。
地球に残留した雪は当初、捕虜という扱いだったが、アルフォンが雪に一目惚れした事から通常の捕虜とは異なる扱いになっていた。
雪はその立場を利用して地球を占領している暗黒星団帝国に抵抗しているパルチザンへ占領軍の情報を流していた。
やがてパルチザンと暗黒星団帝国の占領軍との決戦が間近に迫っている時、アルフォンは雪を解放すると、彼女はパルチザンの一員として占領軍と戦った。
そして暗黒星団帝国の戦いが終わり、やっと地球は平和になり、彗星帝国戦役前からの目標であった宇宙開拓への道を進もうとしたら、

太陽異常が起きヤマトは第二の地球探査と言う長い航海をすることになった。
もし、彗星帝国との戦いの直ぐ後に古代と結婚していたら新婚生活を満喫できたとは思えなかった。
勿論、雪も古代も暗黒星団帝国との戦いや太陽異常の事を予見していた訳ではないが、現状を鑑みると古代と結婚していなくて良かったと思う雪であった。
「互いに一緒に居る事・・・」
「ええ。中嶋さんの言う通り、私も将来的には古代艦長との子供は欲しいけれど、地球の現状を考えるとどうしてもね・・・きっと古代艦長も私と同じことを思っている筈よ。だから今は結婚や子供についてはまだ考えていないわ」
「あっ・・・そ、そうですよね」
地球の現状を考えると今の自分たちの役目は第二の地球となる星を見つける事・・・
第二の地球となる星が見つからなければ、地球人類は破滅するのだから今は新たなる星の探査に集中しなければならない。
「でも、長い航海になるのだから、やっぱり甘えたい時は甘えても良いと思うわ。私だって多分、そう思ってしまうもの」
「森さんも・ですか?」
「ええ・・・互いに艦長と部下で居ようと決めたけれど、古代艦長だって今回の航海にはきっと不安もあるだろうから・・・その不安を共有し、少しでも古代艦長の不安を癒す事が出来ればと思っているわ」
まだヤマトが北アルプスのドックに入っている時、古代は雪に今回の航海に対する不安を愚痴った場面があったし、先日は島との関係も雪に相談していた。
公私はちゃんと割り切らなければならないが、艦長たる古代が不安を抱き続ければそれは艦全体の士気にも繋がる・・・
古代の不安を緩和する役割を担うのは自分の役目であると雪は思っており、それをギンガに伝える。
「そ、そうですね」

「ええ、だから中嶋さんも頑張ってね」
「は、はい!!」
(やっぱりアレを買っておいて良かったかも・・・)
雪からのアドバイスを貰いギンガは雪と会う前にドラッグストアにて密かに購入した避妊具を買っておいて良かったと思っていた。
その後、ギンガと雪は二人でドックへと戻った。
二人がドックへ戻ってから少ししてアルファ星は突然のミサイル攻撃を受けたのであった。

へびつかい座　バーナード星系　第一惑星　ソルヴァ号　艦橋
「総督、アルファ星攻撃隊から連絡が入りました」
「よし、繋げ」
「はっ!!」
ゾルヴァ号の艦橋にあるメインモニターにはアルファ星攻撃隊隊長の姿が映る。
「バルスキー君、君たちの任務は危険が伴うが、例の戦艦をこの星へおびき寄せる為の大変重大な任務だ」
「はっ!!承知しております総督。必ずやあの戦艦をおびき寄せてみせます!!」
「うむ、吉報を待っている」
「はっ!!」
ボローズからアルファ星へ攻撃を命じられたアルファ星攻撃隊隊長であるバルスキーは、ロスチラフ級航宙戦艦を十数隻率いてアルファ星の近海まで進出し、搭載されているミサイルの射程にアルファ星を捉えた。
「バルスキー隊長、全艦攻撃配置に着きました!!」
「ミサイル発射準備完了!!」
「よし、全艦、攻撃開始!!」
ロスチラフ級航宙戦艦の艦首にあるミサイル発射管からミサイルが次々と発射され、アルファ星へと降り注いだ。

再びアルファ星へ降り注いだミサイル攻撃にヤマト、まほろば　の乗員たちは、
「敵襲だ!!」
「敵は!?どこからミサイル攻撃をしている!?」
色めき、浮足立った。
都市部の方でも、
『空襲警報!!空襲警報!!現在、当惑星はボラー連邦と思われるミサイル攻撃を受けています!!路上や地上の建物に居るのは非常に危険です!!住民の皆さんは最寄りのシェルター、もしくは地下道へ速やかに避難してください!!走行中の車両は直ちに停車してください!!繰り返しお伝えします!!・・・・』
と、住民に避難を促す警報が流れる。
その警報は、まほろば　にも聞こえていた。
（山上さんたち無事に避難出来たかな・・・・？）
ギンガはショッピングモールで出会った山上一家が無事に避難出来ているのか気になったが、この状況下では確認は出来ない。
彼女に出来たことは山上一家の無事を祈ることしか出来なかった。
都市部で警報が流されているのと同じく、アルファ星基地、ヤマト、まほろば　でも警報が鳴り響いている。
「基地からも迎撃ミサイルを打ち上げろ!!これ以上、ボラーの連中に好き勝手をさせるな!!」
「了解!!」
「周辺のパトロール艦隊もすぐに呼び戻すのだ!!」
「はっ!!」
司令室ではキャゼルヌが基地に設置されている迎撃ミサイルの発射の命令と同時にアルファ星周辺哨戒をしているパトロール艦隊にも引き返すように命令を下す。

まほろば　第一艦橋
「至急、応戦態勢をとれ!!砲術班にかかわらず、他の部署の乗員も敵ミサイルの迎撃に専心せよ!!」

この時点で、ヤマトもまほろばも半舷上陸を行っている乗員全員がまだ戻っておらず、両艦の迎撃能力は通常よりも下がっていたが、『砲術員が不足しているので砲は撃てません』なんて、言える筈もなく良馬は部署・階級に関係なく、砲を撃てる乗員に対して迎撃命令を下令する。
「主砲、副砲、対空砲、ミサイル発射管全ての火器を使用し、敵ミサイルを撃ち落せ!!」
主砲制御室では発射準備に少人数の留守砲術員が突然の攻撃であたふたしていると、ギンガや玲たちが駆け付けた。
ギンガはまほろばでは通信長を務めているが士官学校では通信科、医務科、そしてパイロット養成科を受講していたので、多少なりとも砲の扱いは出来た。
「通信科でもミサイルぐらい撃ち落せるところを見せてやる!!」
「砲身が焦げ付くまで撃ちまくってやるわ!!」
アルファ星に居る大切な人たちをミサイルから守る為、ギンガはまほろばの主砲のトリガーを弾き、玲も艦載機で敵を撃つ要領で敵ミサイルを迎撃する。
艦橋では新見がレーダーを操作して敵ミサイルの襲来方向を主砲制御室へと伝える。
「敵ミサイル、右舷上方三十度!!下方三十度!!左舷上下角五十度!!」
「各砲塔発射角、右舷上方三十度!!下方三十度!!左舷上下角五十度!!発射!!」
まほろばにある五基の主砲、ヤマトにある三基の主砲を始めとして両艦からは多数のショックカノンとミサイルがアルファ星に降り注ぐ敵ミサイルに向かって行くと、アルファ星の空には雷鳴のような轟音と共にいくつもの爆炎で出来た閃光と煙が上がる。
やがて、半舷上陸をしていた乗員たちが艦に戻り、本来の砲術員が迎撃を行うと敵ミサイルへの命中率も上がっていく。
「敵ミサイル、攻撃を停止した模様!!」
「ミサイルの発射源は分かったか!?」
「・・・ミサイルの発散源はアルファ星軌道上に展開していた敵艦船に

よるものだと判明!!」
「敵の動きは?」
「ミサイルを撃ち尽くしたのか撤退していきました」
「・・・・」
　まほろばの艦橋にあるメインモニターにはアルファ星を攻撃し、ミサイルを撃ち尽くしたと思われるボラー連邦の艦船が悠々と引き返していく光景が映し出される。
「ボラーめ・・・・」
　メインモニターに映るボラー連邦の艦艇を見て、良馬はかつてのガミラス戦役時におけるガミラスへの憎しみと同等の怒りと憎しみをボラー連邦に抱く。
「艦長、今回の敵の攻撃ですが・・・・」
「ああ、威力偵察なのかもしれないな・・・・」
　新見が良馬に今回のボラー連邦の目的を訊ねと、良馬は今回のボラー連邦の目的が威力偵察ではないかとにらむ。
「・・・・敵が撤退した方向は?」
「へびつかい座、バーナード星方面です。艦長」
「わざわざ航跡を残しての撤退・・・・」
「こりゃあ、ただの威力偵察ではなさそうじゃのう」
　暗黒星団帝国戦役における暗黒星団帝国の動きを経験したまほろばの乗員たちにとって、挑発的とも言える攻撃とあえて航跡を残しての撤退・・・・
　何か罠があると思わせるには十分だった。
「通信長」
　良馬は主砲制御室から戻って来たギンガに声をかける。
「はい」
「ヤマトに通信回路を開いてくれ」
　そして、ヤマトとの間に通信回路を開かせた。
「了解・・・・ヤマトとの通信回路開きました」
「古代艦長、ヤマトの方でも先ほどアルファ星を攻撃したボラー連邦の艦船がバーナード星方面に撤退して行った事は探知していると思

う」
「はい」
「・・・今回のボラー連邦の攻撃は威力偵察・・・もしくは我々をバーナード星へ引き込む罠であると思う」
「ええ、敵艦隊の行動から敵は、アルファ星を攻撃する事によって我々を挑発してバーナード星方面に誘っているのは明白ですね」
「・・・古代艦長、バーナード星方面は確か最初の惑星探査予定地だった筈だ」
「敵がバーナード星方面に撤退して行ったとなると、そこには敵の基地があるとみていいでしょう」
「バーナード星方面へ行けばボラー連邦との戦闘が予想されるが、ヤマトの方針を聞きたい」
今回の任務・・・第二の地球探査のメインはヤマトであり、まほろばはそのヤマトの護衛・・・航路の選択はヤマトにある。
よって、良馬はヤマトの今後の予定を古代に訊ねた。
敵が罠を張っている可能性が高いバーナード星方面へ敢えて行くのか？
それとも戦闘を回避してバーナード星方面を避けて行くのか？
古代が出した結論は・・・
「確かに月村艦長のおっしゃる通り、敵がバーナード星方面へ撤退して行ったと言う事はバーナード星に敵の基地があり、当然そこへ行けば戦闘が予測されますが、このまま回避してもアルファ星が再び攻撃をされる可能性が高く、我々も後方から攻撃を受ける可能性があります。ここは後顧の憂いを断つと言う事で、敢えてバーナード星方面へ発進して、敵を発見次第、撃滅したいと思います」
第一次イスカンダルでの航海で、沖田艦長はタイムロスを承知の上で、当時冥王星にあったガミラス軍の基地を敢えて攻略してから太陽系外へ出た。
冥王星のガミラス基地攻略は当時の防衛軍にとっては長年の宿願でもあり、ヤマトが留守の間に地球が冥王星基地からの遊星爆弾の攻撃で地球人類滅亡の時間が一年よりもさらに早く短縮される恐れも

あり、また背後から襲撃を受ける可能性もあったからだ。
そして、今回もバーナード星にあると思われるボラー連邦の基地をそのまま放置すれば、アルファ星がいつまた攻撃を受けるか分からず、古代の言う通り背後から襲撃を受ける可能性がある。
それならば、バーナード星にあると思われるボラー連邦の基地を攻略してから第二の地球探査を行おうと古代はそう決めた。
それに基地があると言う事は人類が住める環境の星かもしれないからだ。
もっともバーナード星も地球から9．5光年と太陽系消滅時に起こるハイパーノヴァの影響圏であるが、ケンタウロス座第四惑星であるアルファ星よりも太陽系から離れているので、僅かならもハイパーノヴァの影響が来るまで時間がある。
「分かりました。では、出航準備が整い次第、バーナード星方面へ向かいましょう」
「はい」
アルファ星を出航してからの方針が決まり、
「通信長、艦内放送を」
「はい・・・どうぞ」
「艦長の月村だ。本艦とヤマトは一時間後にバーナード星方面へ出航する。なお、先ほどの攻撃を行ったボラー連邦の艦隊はアルファ星を攻撃後、バーナード星方面へ撤退して行くのが確認できた・・・よって、バーナード星方面にてボラー連邦との戦闘が予測される」
バーナード星宙域にてボラー連邦との戦闘が起きる可能性が高いと言われ、互いに顔を見合わせたり、ざわつくまほろばの乗員たち・・・
「しかし、我々が留守の間にアルファ星がこれ以上、ボラー連邦からの攻撃を受けない為にもバーナード星に居るであろうボラー連邦の勢力は殲滅する。総員、出航準備!!」
乗員たちはバタバタと走り回り、出航準備を行う。
「通信長、アルファ星基地のキャゼルヌ司令に通信回路を開いてくれ」
「はい」

続いて良馬はアルファ星基地司令官のキャゼルヌと交信する。
「キャゼルヌ司令、これよりヤマト及びまほろばはボラー連邦が駐屯しているであろうバーナード星方面へ向かい、敵の殲滅を計ります」
「了解した。ヤマト、まほろばの健闘を祈る。ご武運を・・・・」
「ありがとうございます」
良馬とキャゼルヌはモニター越しに敬礼を交わした。
そして一時間後、ヤマト、まほろばはケンタウロス座第四惑星アルファ星を出航し、へびつかい座のバーナード星方面へ向かった。

アルファ星を出航し、バーナード星方面へ向かっている中、ヤマトの艦橋では・・・・
「古代、ちょっと話があるんだが・・・・」
島が古代に遠慮しがちな様子で声をかけてきた。
「ん？何だ？」
「いや、ここではちょっと・・・・」
「・・・・わかった」
第一艦橋ではどうも話しづらい内容らしく、島はヤマトの舵をオートモードにして、古代と共に第一艦橋を降りた。
そして、二人の姿はヤマトの艦橋後部にある展望室にあった。
「それで島、話ってなんだ？」
「古代・・・・すまなかった。俺の負けだよ」
「えっ？」
島の突然の謝罪に古代は唖然とする。
「正直に言って、俺はお前がヤマトの艦長になった事が内心面白くなかった」
やはり島は古代が思っていた通り、ヤマトの艦長となった古代に対して不満があったみたいだ。
「いや、口惜しかったのかもしれない。だが、アルファ星のバーで乗組員たちが大暴れした時、お前は俺と同じ立場に立ってくれた。お前が止めて騒動が収まったら、副長としての俺の立場がなかった・・・・お前が止めずに俺と一緒に笑ってくれて助かった・・・・古代、やっぱりお前

は艦長の器だよ」
アルファ星のバーであったヤマトの乗員同士による大乱闘・・・艦長の古代が一喝すればあの騒動はすんなりと収まっただろう。
結果的にボラー連邦のミサイル攻撃であの騒動は強制的に収まったが、もしも古代が止めていたら、ヤマトの副長でもある島の立場が無かった。
だが古代はあの時、島の立場を考慮して注意することなく島と共に笑っていた。
古代の行動に島は彼の器の大きさと感銘を受けて、こうして古代に謝って来たのだ。
「島・・・」
「古代、改めてすまなかった。ガキみたいな態度をとって・・・」
島は古代にペコッと頭を下げる。
「何を言うんだ島。お前が居てくれるから、俺も艦長の勤めが果たせるんだ。これからも力を合わせて頑張ろう!!」
「ああ、頑張ろう!!」
古代と島はがっしりとかたい握手を交わした。
(ヤマト全員のチームワークがあれば、絶対に今回の使命を果たす事が出来る!!)
こうして島とのわだかまりを解消したことにより、古代は今回の任務成功の確信と希望を持つことが出来た。

まほろば、ヤマトがアルファ星を出航し、バーナード星方面へ向かっている中、地球では大統領と黒田博士が太陽の異常を認めてから、黒田博士を中心に太陽異常の解消プロジェクトチームが組まれ、様々なケースが検討されこの日、いよいよ太陽制御の試みが行われようとしていた。
太陽エネルギー省庁舎には大統領と藤堂が呼ばれた。
太陽エネルギー省庁舎内にある指令室にて、黒田博士は大統領と藤堂に今回行われる太陽制御計画についての説明をする。
「現在、太陽エネルギーはこの図解の順序で行われ地球に送られてい

ます」
　スクリーンには太陽、水星、金星、月、地球の位置が表示されている。
　現在、地球が行っている太陽エネルギーの採集方法は、まず太陽周辺に展開している太陽エネルギー採集ステーションが太陽からエネルギーを採取し、それを水星、金星、月面上にある中継ステーションを経由させて、地球へ太陽エネルギーを送っている。
「今回、我々が試みる制御方法はこの太陽エネルギーステーションシステムをそのまま転用しようと言う事なのです。つまり、地球上で受けた太陽エネルギーをマイナスの方向に転換させ、冷却ビームとして太陽へと送り、太陽そのものを冷却させ太陽の異常エネルギーの増進を止めると言う訳です」
　黒田博士の説明を聞き、
（風邪やインフルエンザで高熱を出した時、額に冷却シートや氷枕を使うのと同じような事か・・・）
（果たしてそう簡単にいくものだろうか・・・？）
　藤堂は高熱を出した際、額に冷却シートや氷枕で冷やすのと同じ要領だと思うのと同時にどうもこの太陽制御方法に対して懐疑的であった。
　とは言え、この方法で太陽が制御出来れば、ヤマト、まほろばの任務は地球、アルファ星にとって脅威となるバーナード星に存在するであろうボラー連邦の勢力を排除すれば今回の任務は終了となるので、成功するに越したことはない。
「第八ブロック作業急げ!!」
「ＡＺ・６２箇所の規準範囲がオーバーしているぞ!!」
「最終チェック、確認急げ!!」
　まず、太陽へ冷却ビームを照射する地球にある太陽エネルギー配送システム基地では作業員や技術者たちが作業の最終確認を行っていた。
「黒田博士。冷却ビーム準備完了しました」
「よし、秒読みに入ってくれ」

やがて、冷却ビームの発射準備が整ったと連絡が入るといよいよ太陽制御プランが実行に移された。
「カウントダウン、オールチェック、オーバー・・・・10・・・・9・・・・8・・・・7・・・・6・・・・5・・・・4・・・・3・・・・2・・・・1・・・・0・・・・発射!!」
太陽エネルギー配送システム基地からまずは月へ冷却ビームが照射され、月面上にある中継ステーションへと配送る。
「月面中継ステーション、冷却ビームの通過を確認!!ビーム減衰率コンマ3以下、許容範囲です!!」
地球から発射された冷却ビームは月を経由し、次で金星、水星にある中継ステーションへと配送されると最後は太陽の近くにある多数の太陽エネルギー採集ステーションに配送され、採集ステーションは太陽に向けて冷却ビームを照射する。
黒田博士、大統領、藤堂、太陽エネルギー省の職員たちは固唾を飲んでモニターを見ている。
やがて、水星にある観測所から報告が入る。
「こちら、水星観測基地、太陽が・・・・太陽の反応が・・・・収まっていきます!!成功です!!」
水星観測基地からの報告は太陽制御が成功したと言う報告だった。
「やった!!」
「成功だ!!」
水星観測基地からの成功報告を受け、太陽エネルギー省の職員たちは歓喜し、大統領と黒田博士もホッとした表情となる。
周囲が歓喜に満ちている中、藤堂はただ一人表情をかたくしていた。
(どうも嫌な予感がする・・・・)
藤堂の予感は直ぐに的中する事になった。
先ほど、太陽制御が成功した報告を入れた水星観測基地が一度おさまった太陽の温度が再び上昇する兆候を捉えた。
「ま、待ってください!!再チェックを・・・・う、うわっ!?」
「こちら水星軌道第二ステーション、だ、だめです!!エネルギーが・・・・」

突如、水星軌道の観測基地から慌てた様子の報告が入って来た。
「どうした!?何があった!?」
黒田博士がオペレーターに事態の説明を求めた。
「中継ステーションが爆発しました!!」
「安全弁閉鎖!!急げ!!」
「太陽エネルギー採集ステーションも次々と爆発しています!!」
「水星、金星、月面、地球の配送システム基地でも装置が爆発しています!!」
「作業員に退避命令を出せ!!」
「システムの被害状況はどうなっている!?」
太陽エネルギー省の職員たちは先ほどの歓喜から一転、黒田博士に報告をする者、配送システム基地に居る作業員へ退避命令を伝える者、被害状況を確認する者とてんやわんやの混乱となった。
「な、何故だ!?爆発の原因は一体なんだ!?」
黒田博士には何故、採集ステーションや配送システムが爆発したのか理解できなかった。
「冷却ビーム発射のオーバーロードかと思われます!!」
職員が黒田博士に爆発した原因を報告すると、
「な、何!?すぐに冷却ビームの発射を中止しろ・・・・」
「は、はい」
黒田博士は太陽制御作業の中止を指示した。
(ば、バカな・・・ありとあらゆる可能性をシミュレートしたにもかかわらず、このような事が・・・・)
太陽制御プランを立てている中、黒田博士たちプロジェクトチームのメンバーは勿論様々な事態を考慮していた。
それにもかかわらず今回の太陽制御は失敗に終わった。
黒田博士は頭を抱え、力なく椅子にもたれかかり、大統領は太陽制御が失敗した事実に唖然とした。
(失敗に終わったか・・・ヤマト、まほろば、地球を救うにはやはり君たちに頼るしかないのかもしれないな・・・・)
藤堂は今回の結果から現在、ヤマトとまほろばが進めている第二の

地球探査こそが地球人類が生き残る術でしかないと心の中で思った。
太陽と言う宇宙自然は地球人類の英知よりも未知数であったと言う事だ。
今回の太陽制御の失敗は単なる太陽制御の失敗だけではなく、太陽エネルギー採集ステーションを始めとする太陽エネルギーの採集システムを失うと言う大きな損害を被る事になった。

今回の太陽制御の様子は月面にある防衛軍の基地にて、ジュラたちガルマン・ガミラスの特使団もその様子をモニターで見ていた。
しかし、結果は失敗に終わり、月面にある配送システムの中継基地でも爆発が起き、月基地でも地震のような揺れが観測された。
太陽制御の失敗は太陽配送システムの破損以外にもガルマン・ガミラスの特使団に地球側の恥を晒してしまう醜態となった。
「バレル大使」
「はっ」
「ご足労をかけますが、大使は直ぐにガルマン・ガミラスへと戻り、お父様にこの件を報告していただけますか？」
「えっ？」
「成功するか分かりませんが、ガルマン・ガミラスでも地球の太陽制御のプランを検討してもらってください」
「はっ、承知しました」
「ジュラ特使・・・」
「地球との同盟を結ぼうとしている大事な時、そしてこれは私たちガミラスの償いの時でもあります・・・私たちも太陽制御に協力を致します」
「ありがとうございます。ジュラ特使」
「ありがとうございます」
ジュラは地球が行った太陽制御の失敗を嘲笑うことなく、バレルに一時、ガルマン・ガミラス本星へ帰国してもらい、地球の現状をデスラーに伝えてもらい、太陽制御のプランをガルマン・ガミラスでも検討してもらおうと決めた。

ジュラの行動に山南とレベロは彼女に礼を言う。
そして、ジュラからの命を受けたバレルは、ジュラが地球の現状を認めた特書を持ち、今回特使団一行の護衛として随員していた三隻のゲルバデス級航宙戦闘母艦の中の一隻に飛び乗り、急ぎガルマン・ガミラス本星へと戻って行った。
ただ、地球側も今回の太陽制御の失敗から大統領は方針を一転させて、ヤマト、まほろばが現在行っている第二の地球探査へと舵をきることになる。
それはやはり太陽エネルギーの配送システムが破損してしまった事が一番の原因であり、もはや地球の科学技術では制御が仕切れないと言う諦めだったのかもしれない。

百六十話　バーナード星の決闘　ボラー・バジウド連合の終焉

バーナード星は、へびつかい座の方向にある肉眼では見えない暗い恒星で、１９１６年にアメリカの天文学者エドワード・エマーソン・バーナードが１８９４年と１９１６年と年代の異なる二枚の写真乾板を比較していて発見した星だ。

特徴として、バーナード星は全天で一番大きな固有運動を持つ星として知られている。

視等級９．５３等のＭ型主系列星である。

実直径は約２２４，０００　ｋｍとその大きさは太陽の約５分の１程度。

質量は１６％程度、密度は４０倍、光度は２，５００分の１の典型的な赤色矮星で、表面温度は約３，２００　Ｋと太陽よりも低いため地球が太陽から受け取るものと同等のエネルギーを得ることができない。

バーナード星本星は地球人類が居住できる環境ではないが、バーナード星系を構成している第一惑星でようやく地球に近い気温となっている。

ケンタウロス座第四惑星のアルファ星を出航し、ボラー連邦の基地がある可能性が高いバーナード星へと向かったヤマトとまほろば。

ワープアウトをした二隻の宇宙戦艦の前には赤黒く弱弱しく光を放つバーナード星が見えて来た。

まほろば　第一艦橋

「バーナード星まであと二十万宇宙キロ」

「周辺に敵影は？」

「見当たりません」

「ふむ・・・しかし、敵は我々がバーナード星系へ進出している事は既

に把握しているだろう・・・戦闘配置のままバーナード星へ接近する」
「了解」
「ヤマトは確か第一惑星の探査も兼ねていたな・・・」
「となると、やはり地表へ降りるのでしょうか？」
「・・・副長、第一惑星の地表をパネルに表示できるか？」
「少々お待ちください・・・出ました。どうぞ」
　新見が第一艦橋のメインモニターに第一惑星の地表の映像を映す。
　そこには北極か南極のような氷で閉ざされた荒涼たる世界だった。
「草木が全くない星じゃな」
　井上が第一惑星の感想を述べる。
「氷と水晶みたいな岩石だ・・・一応、空気の成分は地球に似ているので、植物は自生しているみたいです」
「でも、映像を見る限り寒そうですよ」
「気温だけならば、アラスカやシベリアと思えば人類は移住できなくはないだろうが・・・」
「それなら、まだアルファ星の方がマシですね」
「星周辺に敵の姿が無いとすると、地表に居ると思うのだが・・・副長、地表に人工物や過剰な量のエネルギー反応はあるか？」
「・・・表示されている映像の周囲にはそれらしい反応はありません」
「星全体に敵がいる訳じゃないからな・・・しかし、必ずこの星のどこかにボラー連邦の艦隊と基地はある・・・」
「艦長。ヤマトの古代艦長から通信です」
「繋いでくれ」
「はい・・・どうぞ」
　ヤマトから通信が入り、メインモニターの映像が第一惑星の地表からヤマトの第一艦橋へと変わる。
「月村艦長、我々はこれよりコスモハウンドで第一惑星の地上に降りて探査を開始したいと思います」
「分かりました。ただこの星のどこかに敵が潜んでいることは明白です。くれぐれも用心をしてください」
「了解」

「あっ、コスモタイガー隊を護衛と哨戒に出してみてはどうでしょう？まほろば　の方からも出しますが？」
　良馬は古代にコスモタイガーによる哨戒とコスモハウンドの護衛を提案した。
「なるほど、分かりました。こちらもコスモタイガーを哨戒に出します」
　良馬の提案に古代も賛同し、ヤマト、まほろばからコスモタイガーが周辺の哨戒と地表探査をするコスモハウンドの護衛の為に発進する事になった。
　ただし、全てのコスモタイガーを出す訳ではなく、半分は哨戒とコスモハウンドの護衛、半分は艦内で待機とした。
　万が一、敵基地、敵艦隊、敵艦載機との戦闘が起こった際、哨戒任務でエネルギーを消費している状態だと返り討ちに遭う恐れがあるので、エネルギーが十分のコスモタイガーを残しておく必要があった。

ヤマト　第一艦橋
「これより、第一惑星の地表を探査する。生活班、探査係、戦闘班を若干名、機関部は徳川太助以下二名を同行させる」
　古代は艦内放送でコスモハウンドの乗員を発表する。
「ありがとうございます」
　すると、太助の声が第一艦橋でしたので、振り向くと機関長席の隣に太助が居た。
「なんだ？お前もう来ていたのか？」
　あまりにも早い太助の行動に相原は驚く。
「機関長との連絡です。上陸したくてうずうずしていたんですよ」
　太助はアルファ星の半舷上陸が出来なかったので、未開の惑星とは言え第一惑星に上陸できる事を楽しみにしている様子だったが、
「徳川。あいにくだが、お前はコスモハウンドに居残りだ。初飛行だし、エンジンテストも兼ねているからな」
　北アルプスドックに居た時、コスモハウンドの試験飛行は一度だけ

…しかも短時間の飛行のみだったが、今回は試験飛行の時よりも長時間の使用と飛行が予測されたので、太助はコスモハウンドの整備係も兼務することになったので、第一惑星での上陸はお預けになってしまった。
「そ、そんなぁ～」
　折角上陸できると思ったのに、それが出来ないと言われ太助はショックを受けていた。
　そして地表探査に向かったコスモハウンドは敵の攻撃を警戒していたが、何も起こらず、コスモハウンドは第一惑星の地表に無事に着陸した。
「コスモタイガー隊は周囲の哨戒をしてくれ」
『了解』
　古代はコスモハウンドの護衛をしていたコスモタイガーに周囲の哨戒を命じた。
　コスモハウンドは垂直離着陸が可能であるが、コスモタイガーは着陸・離陸するのにある程度の滑走路が必要であり、コスモハウンドが降りた第一惑星の地表には滑走路になりえそうな障害物が無い土地がなかった。
　それにこの星にはボラー連邦の基地があるのは判明しているので、古代は地表での探査を安全に行うためにこうして護衛のコスモタイガーに周辺の哨戒を命じたのだ。

「コスモハウンド、第一惑星の地表に着陸した模様です」
　まほろばの第一艦橋にあるメインモニターには第一惑星の地表に着陸したコスモハウンドの様子が映っている。
「周囲に敵が居なくて何よりだ」
　無事に着陸したコスモハウンドの姿を見てホッとする良馬。
「艦長、哨戒に出たコスモタイガー隊から通信が入っています」
「繋いでくれ」
「はい」
「こちらコスモタイガー隊、加藤。第一惑星北部に基地らしき人工物

は確認できません。見えるのは水晶岩石の山ばかりです」
そこに哨戒に出したコスモタイガー隊から通信が入った。
第一惑星は地球とほぼ同じ大きさであり、捜索範囲はあまりにも広すぎる。
(兄さんもフェーベで敵の空母艦隊を探す時もこんな感じだったのだろうな・・・)
加藤は兄である加藤三郎が彗星帝国との戦いの中で行われた土星圏フェーベ沖での敵機動艦隊を捜索する時の事を思った。
「こちら山本、東部も同じく敵基地、艦隊らしきものはみつかりません」
哨戒に出したコスモタイガー隊からは敵の姿が見つからないと言う報告が上がる。
「了解。ただ、敵は必ずこの星のどこかに居る筈だ。帰還分のエネルギーギリギリまで哨戒を続けてくれ」
『了解』
良馬引き続き、コスモタイガー隊には周辺の哨戒任務を続行させた。
その頃、コスモハウンドから第一惑星の地表に降り立った古代たちは周囲を見渡す。
すると、キラリ・・・と、バーナード星からの薄い光が丘陵の水晶岩石を貫通し、七色の光のアラベスクとなって幻想的な光を出す。
「虹だ」
「きれい・・・・」
地表に降りた者たちはしばしその光景に見とれていた。
やがて、虹が消えると自分たちの仕事に取り掛かる。
「生活班、探査係は早速地表の探査を開始してくれ!!戦闘班は周辺の警戒だ!!」
『了解!!』
第一惑星の地表探査が行われている中、良馬の予測通り、ヤマト、まほろば　の動きは監視衛星によって既にボローズたちに捕捉されていた。

ボローズたちが築き上げた基地はヤマト、まほろばが来た方向とは丁度真逆の方向・・・第一惑星の裏側にあった。
基地とは言え、急ピッチで築き上げたモノなので、司令部は地下ドックに係留されているゾルヴァ号に置かれており、ヤマト、まほろばを既に捕捉しており、攻撃態勢を整えつつあった。

バーナード星系　第一惑星　地下　ボラー・バジウド連合艦隊　旗艦　ゾルヴァ号　艦橋
「総督、只今監視衛星Ｋ－０２３が第一惑星に接近してくる例の戦艦の艦影を捕捉しました!!」
「あの星を攻撃すれば必ず出てくると思ったが、案の定まんまと引っかかったな・・・レバルス、説明をしてくれたまえ」
「はっ!!この基地に設置されている砲台はガルマン・ガミラスで採用されている反射衛星砲と似ていますが、レーザー砲を反射する衛星を使用するのではなく、反射板搭載機を上空に待機させ、攻撃目標を上下左右から包囲し、地上の中継ステーションから発射されたレーザー砲を反射する仕組みとなっております」
「うむ」
レバルスはボローズを始めとしてボラー・バジウド連合の幹部たちにこの惑星の地上に設置した反射砲の説明を行う。
「反射板搭載機は、攻撃目標が移動してもその動きに着いていき、撃破するまで包囲は解きません。敵は我々の存在がこの星にある事を突き止めてはいますが、この基地にはまだ気づいてはいません」
「よろしい、直ちに攻撃態勢を整えろ」
「はっ!!反射板搭載機発進準備!!反射レーザー砲発射準備!!」
「反射レーザー砲発射準備!!」
「反射板搭載機発進準備!!」
「第一号機は南東へ!!第二号機は南南東へ!!」
「了解、第一号機発進!!」
「第二号機発進!!」
洞窟を刳り貫いて作られた地下飛行場からは機体の下部に反射板

を取り付けた反射板搭載機が次々と発進して行った。
そして、その反射板搭載機の護衛の為に増槽を着けた護衛機も発信していく。
この護衛機は随伴していた空母に搭載されていた機体で、空母から全ての艦載機を下ろして今回の反射板搭載機の護衛にあてたのだ。
とは言え、元々随伴していた空母も少なく、搭載されていた機体も搭載規定数に満たない数であった。
ボローズたちの魔の手がヤマト、まほろばへ向けられようとしている中、第一惑星の地表で調査をしている古代たちは、
「艦長、見て下さい!!」
探査を担当している乗員の一人が何かを見つけて声をあげる。
「どうした?・・・・ん?」
乗員が見つけたのは、この星に住んでいると思われる現住生物の死骸だった。
「この星に生息している現住生物みたいだな。死因は事故・・・って事は無いな」
開拓が全くされていない星なので、車両なんて通っていないのだから、車両接触による事故とは言えず、
「他の生物に襲われた形跡はありません。ただ体中に薄気味悪い紫色の斑点があります・・・」
現住生物の身体を見た所、他の生物に襲われた形跡はなかった。
ただ身体の彼方此方にどす黒い紫色の斑点がある。
「この生物独特の模様なのか・・・?」
此処は地球ではないので、この星に住む生物独特の斑点なのかと思われたが、
「あっ、艦長。この生物と同種らしき生物が居ます!!」
「ん?」
古代たちの居るところから、約１０メートル先に死んでいる現住生物と同じ種類らしき動物の群れが見えた。
「・・・」
古代が双眼鏡で確認してみると顔の作りや毛皮の色、体長の大きさ

からみて死んでいる現住生物と同種であると確認できたのだが、生きている現住生物の身体には紫色の斑点なんてなかった。
「相原」
「はい」
「ヤマトに連絡をして佐渡先生たち衛生科の隊員を呼んでくれ」
「は、はい」
　古代は通信要員として連れて来た相原に佐渡たちを呼んだ。
「それとこの生物の死骸には近づかない方がいいかもしれない」
「えっ？」
「それってどういう・・・」
「この生物の死因は病気かもしれないからだ」
「まぁ、この気味が悪い斑点ですからね」
　古代たちは佐渡たちが来るまで現住生物の死骸から離れた。
　やがて、救命艇に乗った佐渡たちが到着した。
「どうしたんじゃ？古代。誰か怪我でもしたのか？」
　佐渡は自分が呼ばれたのだがから、探査隊の誰かが怪我をしたのだと思ったからだ。
「いえ、この生物の死骸についてなんですが・・・」
「ん？なんじゃ？この斑点は？この星に住む現住生物独特の模様なのか？」
「自分も最初はそう思ったんですが、ついさっき、この生物と同種の生物を見ました。しかし生きている生物にはこんな紫色の斑点なんてありませんでしたからこの生物の死因は病気によるものだと判断し確認の為、佐渡先生を呼びました」
「なるほど」
　佐渡は通常の医師免許の他に獣医師の資格も有していたので、現住生物の死因を調査してもらおうと思い古代は佐渡を呼んだのだ。
　佐渡たちは防護服を身に纏い、死んでいる現住生物の解剖を始める。
　その光景を離れたところで見ている古代たち。
　やがて解剖が終わり、古代は佐渡に訊ねる。

「佐渡先生、何かわかりましたか?」
「ふむ、骨格や臓器のつくりを見たところ、この生物は地球に生息している鹿に近い生物じゃ」
古代は解剖をした佐渡に死骸となっている生物について質問する。
佐渡によると、死骸となっている現住生物は鹿に近い生き物らしい。
「それで体中に浮き出ているこの紫色の斑点は一体何なんですか?」
「詳しいことはヤマトに戻らんと何とも言えないが、この生物の死因はお前さんの予想通り病気じゃ」
「やはり病気ですか・・・」
古代も紫色の斑点を見る限り、この現住生物の死因は病気かと思っていたが、専門家ではないので佐渡に死因の解明を頼んだのだが、現住生物の死因は古代の予想通り病気だった。
佐渡は血液や臓器の一部を摘出し、密封ボックスへと入れる。
「ウィルスによっては動物だけでなく、人間にも感染する恐れがあるからのう。取り扱いは慎重にするんじゃ」
「は、はい」
防護服姿の衛生科所属の隊員にサンプルを輸送する際の注意事項を言う佐渡。
鳥インフルエンザや狂犬病など、動物がかかる病気も人間にも感染する事はある。
人間も哺乳類サル目ヒト科の動物なのだから・・・
「佐渡先生、もしこの生物の死因となる病気が人間にも感染するとなると・・・」
「治療法や薬の開発が必要じゃが、もし治療方法やワクチンの製造方法が確立できないならば、この星に人が住むのは危険じゃ」
「・・・」
佐渡の結論を聞き、古代たちは思わず絶句する。
かつてメキシコ南部に栄えたアステカ文明、南アメリカのペルーで栄えたインカ帝国。
どちらもスペインからの侵略で滅んだ文明であるが、滅亡の原因は

スペイン人との戦闘だけではなく、欧州から持ち込まれたサルモネラ菌や黒死病、天然痘ウイルスも滅亡の一因となっている。
日本でも江戸時代の文政５（１８２２）年にコレラが流行し、大勢の人たちが感染し死亡した事例がある。
病気の原因、そして治療方法も分からなく、薬も無い当時の人たちからしてみればそれらの病気やウィルスはまさに未知のウィルスであり死の病だったに違いない。
未知の惑星に入植したらそう言った病原菌の脅威もある事が今回の一件で判明した。
（もし、佐渡先生が言うようにこの病気が人間にも感染し、治療も出来ず、薬も作る事が出来ないなら、此処は人類の移住地としては無理だな）
古代はそう思いつつ、
「探査はこれまでだ。撤収する」
と、探査の終了を告げた。
あまり長居すると自分たちがこの星独特の風土病にかかる恐れがあるからだ。
探査をした乗員たちはコスモハウンドへと戻り、佐渡たちは救命艇に乗る。
「こちら古代。バーナード星第一惑星の探査終了。これよりヤマトに帰還する」
古代はヤマトに帰還報告を入れる。
「了解」
ヤマトからの返信を受け、コスモハウンドと救命艇はヤマトを目指す。
そんな中、ヤマトを見上げていた古代は第一惑星の空にいくつもの尾を引く光がヤマト、まほろばへと向かって行くのを目撃する。
「ビーム砲だ!!」
古代が叫んだ時にはビーム砲がヤマト、まほろばに命中していた。
「ヤマト、まほろば、応答せよ!!」
古代はビーム砲を受けたヤマト、まほろばに通信を送る。

「いきなりの攻撃でしたが、障壁と装甲で何とか防ぎました!!ですが、かなりの威力があり、集中砲火を受けると危険です!!」
ギンガが古代にまほろばの現状を伝え、
「不意打ちを喰らった!!だが、どこから撃ってきたのか分からない!!」
ヤマトからは島の声が返ってきた。
「よし、救命艇を収容してくれ。俺はコスモハウンドで敵基地を捜索する」
「了解」
まほろば、ヤマトとの交信を終えた時、エンジンルームから徳川がコックピットへと顔を出す。
「艦長、エンジンの調子は快調です!!」
「よし、行くぞ!!」
救命艇はヤマトを目指し、コスモハウンドは第一惑星の上空を敵の基地を求めて飛行する。
次々と襲い掛かるビーム砲を反転・回避してヤマトは救命艇を何とか収容する。
「艦長、救命艇は無事に収容しました」
救命艇が無事にヤマトに収容された報告を聞いて古代はホッとする。
その後、古代は先ほどヤマト、まほろばが受けた攻撃の映像を解析する。
解析結果によってはビームを撃ってきた砲台の場所を特定できるかもしれないからだ。
そして、地上から放たれたビーム砲が空中で屈折してヤマト、まほろばへと命中している。
ビーム砲の不自然な屈折を見た古代は以前、似たような兵器を見たことがあった。
「月村艦長、島、このビーム砲はもしかしたらガミラスの反射衛星砲じゃないか?」
「ああ、俺もそう思った」
「反射衛星砲・・・それってかつてガミラスの冥王星基地にあったとさ

れるビーム砲台の事だよね？」
　島は古代と共に第一次イスカンダル航海に参加していたので、かつて冥王星ガミラス基地に設置されていた反射衛星砲の事を知っていたが、良馬はヤマトからの報告書でしかその存在を知らなかった。
「はい。反射衛星砲はガミラスの・・・デスラーの武器です」
「しかし、ガミラスは今、ガルマン・ガミラスとなって地球との同盟を結ぼうとしている筈じゃないのか？」
　島は、反射衛星砲は確かにガミラスの武器であったが、そのガミラスはガルマン・ガミラスと名を変え、地球との同盟を締結しようとしている。
　そのガルマン・ガミラスがヤマト、まほろばを・・・地球の艦を攻撃してくるなんて同盟どころか戦争を誘発している行動なので解せない。
「これはもしかしたら、ガルマン・ガミラスのモノではなく、ボラー連邦がガルマン星から得た技術かもしれない」
　解せない状況下で良馬はある仮説をたてた。
「それは、どういう事です？」
「ボラー連邦はかつてガルマン星を支配していた・・・そして、そのガルマン星人はガミラス星人と同一の民族・・・ガミラス星人が反射衛星砲を作る技術を持っているのならば、同一民族のガルマン星人も反射衛星砲を作れると言う事さ・・・恐らくガルマン星を支配していた時にボラー連邦は反射衛星砲の技術を得たと言う事だ」
「なるほど・・確かに以前デスラーと同盟を結んでいた彗星帝国もガミラスからの技術供与で瞬間物質転送機の技術を得ていましたからね」
　良馬の仮説を聞いて納得する古代。
「反射衛星砲ならば、ビーム砲を反射する反射衛星がある筈・・・衛星は我々が破壊するので、ヤマトとまほろばは敵基地を発見次第現場に急行してくれ」
「了解」
「任せたよ、古代艦長」
「雷電、ビーム砲の方向から見て反射衛星砲と敵基地の予測位置は此

処から丁度この星の裏側だ!!急いでくれ!!」
「了解!!」
古代はコスモハウンドの操縦桿を握っていた雷電に針路を命じる。
そして、最初にビームが屈折した箇所へ行くが、
「反射衛星が無い・・・だと」
ビームが屈折した現場には反射衛星が存在していなかった。
この時はまさか反射機能を持つのが静止衛星ではなく、移動が可能な航空機であるとは予想しておらず、ヤマト、まほろばが回避運動をしている為、それに連動して反射板搭載機も移動していたので、古代は反射板搭載機を発見できなかった。
「どういうことだ?反射衛星砲なら衛星がある筈・・・」
「艦長、どうしますか?」
「こうなれば本体を叩くしかない。雷電、星の裏側に向かってくれ」
「了解」
コスモハウンドは全速で敵基地の予測地点へと向かう。
その間もヤマト、まほろばにはビーム砲の雨が容赦なく襲い掛かって来る。
ビーム砲の攻撃を受けて、グラグラと船体は大きく揺れる。

まほろば　第一艦橋
「第三砲塔被弾!!」
「第二艦橋付近に命中!!」
「右八十度、左百三十度に転進!!」
「了解、右八十度、左百三十度に転進!!」
被害報告が入る中、良馬は少しでも被害を抑えるために船体を小刻みに動かす指示を出す。
操縦桿を握る永倉もそれは理解しているようで精一杯回避行動に専念する。
「反射衛星の探知は!?」
「見つかりません!!ただ、本艦とヤマトの周囲に多数の飛行物体の反応があります!!」

「コスモハウンドからも敵基地、衛星発見の報告はまだ入りません!!」
「くっ・・・・航海長、引き続き回避行動に専念!!」
「了解!!」
(このビーム砲の数と連射から見て砲台はおそらく一基ではなく複数あるな・・・・)
衛星を見つけ撃破するまではこのビーム砲の攻撃は続く。
そんな中、ビーム砲の数から良馬は砲台の数が複数あると予測した。
(しかし、周りにあるのは衛星ではなく敵機の反応?)
(偵察機か?いや、偵察機にしては妙に数が多いな・・・・)
(しかし、此方を攻撃してくる気配はない・・・・同士討ちを警戒しているのか?)
暗黒星団帝国との戦いの時も暗黒星団帝国は高性能な艦載機を使用して、暗黒ガス、アステロイドがある悪環境な宙域の中で味方に正確な情報を送り、α砲搭載艦の砲撃を行ってきた。
ヤマト、まほろばの周囲に展開している艦載機もその類の偵察機かと思われたが偵察機にしては数が多いのだが、ヤマト、まほろばに対して雷撃や艦爆を仕掛けてくる気配が無い。
(いずれにせよ、敵に情報を与え続ける訳にはいかない)
敵機の数とその行動に違和感を覚えつつも放置しておくわけにはいかない。
「コスモタイガー隊発進準備!!それと哨戒に出したコスモタイガー隊でエネルギーに余力がある機体は哨戒行動を一時中止し、敵機の撃墜に向かわせてくれ」
「了解」
良馬は待機しているコスモタイガーを出撃させ、ギンガは哨戒にあたっているコスモタイガー隊に敵機の位置を報告して、コレの撃墜に向かわせた。
「右舷艦尾損傷!!」
「応急班を向かわせろ!!これ以上、傷口を広げる訳にはいかない」
「了解!!応急班!!右舷艦尾へ急行せよ!!」

被弾箇所の応急修理に向かった技術班の隊員たちは被弾の衝撃でよろけたり、尻餅をついたり、転びながらも修理箇所へと向かって行く。
「急げ!!右舷艦尾だ!!」
「は、はい~!!」
応急班が損傷箇所に向かっている中でも外ではビーム砲の攻撃は止まずに、
「左舷船体中央部、被弾!!」
「第三艦橋被弾!!」
被害は広がっていく。
「右三十度コースターン!!そのまま直進して回避!!機関長、エネルギー増幅!!」
「右三十度コースターン!!宜候!!」
「了解。機関室、エネルギー増幅!!」
「了解、エネルギー増幅!!」
機関室では機関科の乗員たちが揺れる中で奮闘していた。
「リニス先生、また怪我人です!!」
「医務室は一杯です!!とりあえず医務室近くの通路に下ろして、トリアージを行ってください!!」
「りょ、了解」
医務室でも怪我人で溢れておりトリアージを行い治療の順番を決める事態となっていた。
しかし、逃げ回るだけではいつかはビーム砲の餌食となってしまう事は明らかであった。
まほろばでビーム砲の被弾で船体が揺れる中で各部署の乗員たちが奮闘している中、ヤマトも同じくビーム砲の攻撃を受けて船体が傷つき、揺れている中で各部署の乗員たちは奮闘していた。
そんな中、
「平田先輩、どこへ!?」
平田が持ち場である厨房から通路へ出て行くのを見て土門が声をかける。

「食料貯蔵エリアだ。隔壁の調子がおかしい。様子を見てくる」
「俺も行きます!!」
土門も慌てて平田の後を追った。

バーナード星系　第一惑星　地下　ボラー・バジウド連合艦隊　旗艦　ゾルヴァ号　艦橋
ヤマト、まほろばが苦戦をしている様子はゾルヴァ号の艦橋にあるモニターで表示されており、ボローズは当初、余裕がある様子で見ていたが、
「ええい、まだ堕とせんのか!?」
回避運動をしながらしぶとく生き残っているヤマトとまほろばの姿に段々と苛立ちを募らせていていた。
そんな中、コスモタイガー隊はヤマト、まほろばの周囲に展開している敵機の撃墜へと向かっていた。
「総督、反射板搭載機に敵の艦載機が接近しています!!」
「なにっ!?くっ、バレたのか・・・」
ボローズは反射レーザー砲のアキレス腱とも言える反射板搭載機の存在がバレたのかと焦る。
「護衛機を迎撃に向かわせろ!!」
「はっ!!」
ボローズは反射板搭載機を護衛している戦闘機に迎撃を命じる。

接近したコスモタイガー隊はヤマト、まほろばの周囲に展開している敵機に接近をしていくと、一際大きな航空機が居るのを見つける。
「こちらコスモタイガー隊、揚羽!!敵機を目視にて確認した!!内一機は大型の機体で、下部にミラーのようなモノを着けています!!そして周りには護衛機らしき戦闘機も多数おり、此方に向かってきます!!これより戦闘に入ります!!」
「ミラーのようなモノを装備した機体・・・そうか、連中は反射板を衛星ではなく航空機に搭載させていたのか!?」
揚羽からの報告を受け、真田は反射衛星砲にもかかわらず反射衛星

が見つからない訳を理解した。
「揚羽、その機体の下部にミラーを装備した航空機はこのビーム砲を反射する重要な航空機だ!!護衛の機よりもそのミラーを装備した航空機を優先に撃ち落せ!!」
「りょ、了解!!」
真田は揚羽たちコスモタイガー隊に護衛機よりも反射板搭載機を優先に落とせと命じた。
揚羽が反射板搭載機を発見し、この事態を打開できる突破口を作った時、ヤマトの艦内では・・・
「くっ、やっぱり隔壁を閉めるシステムが破損している。エネルギーブースを閉鎖しないと貯蔵庫の食料品がダメになっちまう!!」
「で、でも先輩。食糧供給はO・M・C・Sがありますよ」
「O・M・C・Sだって万能じゃない。万が一、O・M・C・Sが壊れた時、食糧の備蓄がなかったらどうする?」
「そ、それはそうですが・・・」
「俺が手動でロックしてくる。土門は此処で待っていろ」
「あ、危ないですよ!?」
「心配するな、鉄砲を撃つだけが戦いじゃないだろう?」
そう言って平田はバッテリー室へと入っていく・・・
上空ではコスモタイガー隊と反射板搭載機、その護衛機との戦闘に入ったが、ビーム砲は相変わらずヤマト、まほろばへと降り注いでいる。
「隔壁ロック完了。これで大丈夫だ!!今から降りるぞ!!」
バッテリー室の隔壁を手動で下ろした平田は土門に戻ると伝える。

平田の声を聞いてホッとする土門。
その直後、一発のビーム砲がヤマトの右舷に命中する。
しかもその命中した箇所は先ほど平田が入ったバッテリー室の近くだった。
「先輩!!平田先輩!!返事をしてください!!」
土門はバッテリー室に居る平田に大声をあげて声をかける。

「・・・・」
しかし、平田から返答が返って来る事も彼が生きて土門の前に姿を見せる事もなかった。
「平田先輩・・・・」
先輩の戦死の事実に土門はガクッとその場に膝をついた。

平田が戦死しても戦いは続いており、揚羽は護衛機よりも反射板搭載機を優先に攻撃をしていたが、護衛機は護衛機で反射板搭載機を護衛する任務があり、コスモタイガーを反射板搭載機に近づけまいと必死だ。
「くそっ、逃がすか!!」
揚羽は反射板搭載機を追っているとその後方から護衛機が迫って来る。
「揚羽!?くそっ、A班俺に続け!!」
山本が揚羽のピンチに気付き、救援に回る。
護衛機の後ろを取った山本隊は護衛機を次々と撃ち落していき、揚羽も追っていた反射板搭載機を撃ち落した。
「揚羽、大丈夫か!?」
「はい!!隊長、ありがとうございます!!」
「揚羽、単独行動は禁物だ!!以後気をつけろ!!」
「はい!!気を付けます!!」
ヤマト、まほろばのコスモタイガー隊のドックファイトで反射板搭載機、護衛機は次々と撃ち落されていった。
「反射板搭載機、護衛機、共に全機撃墜を確認」
「よし、コスモタイガー隊は帰還せよ」
反射板搭載機と護衛機の全滅を確認すると良馬はコスモタイガー隊を帰還させた。

そして、古代たちコスモハウンドは星の裏側に到達すると、地上からビーム砲を撃っている砲台を見つける。
「あれか!?」

古代はコスモハウンドに搭載されているパルスレーザーでビーム砲台を破壊する。
「よし、これで・・・」
ビーム砲を潰した事で脅威は去ったかと思ったが、地上からはビームがまだ発射されていた。
「砲台は一基じゃなかったのか!?」
古代が冥王星ガミラス基地で破壊した反射衛星砲は一基だけであったが、良馬の予測通り、第一惑星にはビーム砲台が複数あった。
「さっき壊したのは中継ステーションか・・・くそっ」
地上から放たれるビーム砲を睨む古代。
「ヤマト、まほろばへ、地上にあった砲台は中継ステーションだ。砲台は多数あってコスモハウンドでは対処しきれない」
「じゃあ、本体と基地は一体何処に?」
「我々が見つけ出す。ヤマトとまほろばを方位三百四十度の方向へ向かわせてくれ」
中継ステーションの近くに砲台へエネルギーを送っている本体もしくは基地があると判断した古代はヤマトとまほろばを誘導する。
古代から指示を受けたヤマト、まほろばは急ぎ、現場へと向かう。
反射板搭載機を全て撃ち落しているので、空かビーム砲が降って来ることもなく、ヤマト、まほろばは攻撃を受けることなく現場に向かう事が出来る。
ヤマト、まほろばが向かっている中、コスモハウンドは敵基地の探索を続けていた。
「艦長、方位十度の方向にエネルギーが集中しています!!」
地上探査をしていた雷電がエネルギーの集中地点を発見する。
「エネルギーの供給源か基地があるのかもしれない。行ってみよう」
「了解」
コスモハウンドが方位十度の方向へ向かってみるとそこにはビーム砲の他に人工の建造物らしき建物が存在していた。
「敵の基地だ!!」
「この状態では上陸作戦は無理ですね」

「ああ・・・こちら、古代。敵基地発見!!位置は・・・」
白兵戦で基地を陥落させるのは不可能だと判断した古代はヤマト、まほろばに基地の位置を知らせる。

バーナード星系　第一惑星　地下　ボラー・バジウド連合艦隊　旗艦　ゾルヴァ号　艦橋
「何!?反射板搭載機が全機撃ち落されただと!?」
反射板搭載機全機撃墜の報告にボローズは思わず声が裏返る。
「はい。敵艦はこの星の裏側に居るので、反射板搭載機が無ければビーム砲を当てる方法がありません」
「総督、ビーム砲台X―65が破壊されました!!」
「原因はなんだ!?」
「・・・敵航空機の攻撃です!!」
「ぬぅ～・・・バルスキー君、君はただちに艦を率いて迎撃態勢をとれ!!」
「はっ!!」
「中継ステーションは直接射撃に移行!!彼奴等が来るぞ・・・」
ボローズはヤマト、まほろばが間もなく来ると判断し、地下ドックに居る艦船に出撃命令を下し、ビーム砲台には射角を下げて直接射撃の用意をする。
「全艦、順次発進!!敵艦を迎え撃て!!」
切り札となる反射ビーム砲のアキレス腱である反射板搭載機全機撃墜となり、旗色が悪くなり始めたボラー・バジウド連合軍。
それでも彼らは諦めずに迎撃態勢をとる。

ヤマト、まほろばが敵基地の近くまで来ると、コスモハウンドはヤマトへと帰還する。
「敵基地まであと五分！」
「損傷個所の補修急げ!!ここで方を付ける!!砲雷撃戦用意!!」
(アルファ星の人たちの為にもこの基地は潰さなければ・・・)
良馬はアルファ星に居る大勢の人たちの為にこの戦いで一気に方

をつける覚悟で決戦に挑んだ。
「ビーム砲発射!!敵艦を撃ち落せ!!」
地上に設置した多数のビーム砲がヤマト、まほろばへ砲撃してくる。
「ビーム砲を反射せずに直接射撃をしてきたか・・・・」
「砲台を破壊しろ!!主砲斉射!!」
ヤマト、まほろばも主砲で応戦してビーム砲を潰していく。
「後方より、敵艦隊接近」
「月村艦長、敵艦隊はヤマトが引き受けます。まほろばは敵基地の殲滅を!!」
「分かった。しかし、無理はしないでくれ」
ヤマトは反転して敵艦隊を迎え撃つ。
そして、ヤマトが敵艦隊の相手をしている中、まほろばは敵基地を攻撃する。
「艦長、主砲とミサイルで砲台を叩いても時間がかかります。ここは一気に波動砲でケリをつけましょう」
フェリシアが波動砲の使用を具申する。
「よし・・・・波動砲発射準備にかかれ」
「了解」
「通信長、ヤマトに打電、『我、波動砲ヲ使用ス、至急上昇シ退避サレタシ』と」
「はい」
「航海長、まほろばを上空三宇宙キロまで上昇」
「了解」
まほろばが攻撃を止め、上昇しある一定の高さで停止すると、
「どうやら連中は策に窮したと見える・・・・大型ミサイル発射用意!!」
ボローズはまほろばが基地の攻略に手間取っているものだと判断した。
そこで、止めをさすべく大型ミサイルの発射を命じる。
しかし、まほろばは攻略に手間取っている訳ではなく、それどころか一気に勝負をしかけるつもりであった。

「波動砲安全装置解除、圧力上昇」
「ターゲットスコープオープン、自動修正照準プラスマイナスゼロ!!」
「総員、対ショック・対閃光防御!!」
　波動砲の発射準備が着々と進んでいる中、
「地上より大型ミサイルの発射を確認!!」
「かまうな!!ミサイル諸共吹き飛ばす!!波動砲・・・発射!!」
「波動砲発射!!」
　眩い閃光と共にまほろばから波動砲が発射される。
「な、なんだ!?あの輝きは!?」
　初めて波動砲を目の当たりにしたボローズは狼狽える。
　その間にもまほろばの波動砲は基地へと迫り、まほろばを撃破する為に撃った大型ミサイルは水飴の様に融解して爆発、次いで基地へと命中する。
「うわぁぁぁぁぁぁー!!」
　ボローズは基地、乗艦していたゾルヴァ号共々波動砲の直撃を受けた。
　ボラー・バジウド連合軍の基地は爆発と共に巨大なクレーターを作り消滅した。
　ヤマトの方も出撃してきた敵艦隊を殲滅しており、それはボラー・バジウド連合軍の消滅を意味していた。
「敵基地消滅・・・」
「ヤマトの方も敵艦隊を殲滅した模様」
「・・・終わったか」
　第二の地球探査はまだ始まったばかりであるが、第一惑星に存在していたボラー・バジウド連合軍を殲滅した事でアルファ星が攻撃を受けることはもうない。
　アルファ星の危機が去った事に一息つけた良馬たちであった。

　戦闘後にヤマト、まほろばでは被害調査が行われ、古代はそこで平田の戦死の事実を知った。
「『鉄砲を撃つだけが戦いじゃない・・・』・・アイツがよく口にしていた

言葉だ・・・・」
「平田先輩・・・・」
「土門、平田の分まで頑張れ」
「はい」
　調査が終わると、この戦いで戦死した宇宙戦士たちの宇宙葬が行われ、重度の負傷者はアルファ星から駆け付けた警備艦がアルファ星へと移送することが決まった。
　なお、その後の検査の結果、第一惑星に住む現住生物が感染した病気は人にも感染することが判明し、未知の病原菌が存在する星と言う事で人類の移住は見送る結果となった。

「では、よろしくお願いします」
「はっ、乗員の方々は無事にアルファ星へ送ります。そして、ヤマト並びにまほろばの航海の安全を祈ります」
「ありがとうございます」
　宇宙葬、そして負傷者たちの退艦が終わると、ヤマト、まほろばは再び星の海へと旅立つ。
　人類が住める第二の地球となる星を求めて・・・・

百六十一話　元流刑惑星バース

バーナード星第一惑星にてボローズらボラー・バジウド連合軍の基地を撃破したヤマトとまほろば。
この戦闘の勝利はアルファ星がボラー連邦からの脅威が去った事を意味していた。
しかし、第一惑星で撃破したボラー連邦の艦隊は正確にはボラー連邦から半ば逃亡した者たちであったことをヤマト、まほろばの乗員たちは知る由も無かった。
アルファ星の安全を確保したヤマトとまほろばは本来の任務である第二の地球探査の任に移った。
その間も地球では太陽の核融合の異常増進は続いていた。
当初は電波障害くらいの障害だったが、それは世界規模の異常気象へとなり、滅亡の兆候は顕著に起こっていた。

オーストラリア　某海水浴場
北半球はまさに秋から冬になろうとしている頃、南半球の季節は春となっていたが、気温は春の気温を通り越してまさに真夏並みの気温となっており、海水浴場には多くの人々が暑さから逃れ、涼しさを求めて季節外れの海水浴に来ていた。
「ふぅ～暑い・・・・」
「まだ春なのに・・・・」
「全くこの暑さと言い、最近の太陽の大きさはどういうことだ？」
「なんだか日に日に大きくなっている様な気がするわ」
この頃になると膨張した太陽の大きさは肉眼でも約二倍の大きさに見えていた。
人々が海水浴をしながら季節外れの暑さや日に日に大きくなっている太陽に疑問を抱いていると、
ズズズズズ・・・
「ん？」

「えっ？」
「う・・・」
ゴゴゴゴゴゴゴ・・・
ゴゴゴゴゴゴゴ・・・
「じ、地震だ!?」
大地が大きく揺れた。
しかし、地震は直ぐにおさまった。
「おさまったみたいね」
「異常な暑さの次は地震か？一体どうなっているんだ？」
オーストラリアは日本と異なり地震が少ない国であるが、地殻プレートの移動による地震活動を観測することもある。
人々は突然の地震に驚きはしたが、直ぐにおさまった事から次第に落ち着きを取り戻していく。
だが、災害はまだ続いていた。
ザザザ・・・
「おい見ろ、海の水が引いていくぞ」
「えっ？」
ザザザザザザ・・・
地震が来る前までは下腹部まで浸っていた海水が物凄い勢いで引いていき、気づいた時には海の水は膝下まで引いていた。
すると水平線の彼方から水の轟音がしてきた。
ザザ・・・
「な、なんだ？」
「どうしたんだ!?」
ゴオオオオオオ・・・
人々が固唾を飲んで水平線を見ていると、
グオオオオ・・・
「つ、津波だ!?」
ドドドドドドドド・・・
海水浴場に大津波が押し寄せて来た。
「逃げろ!!」

「待って!!」
「うわぁぁぁぁぁぁぁー!!」
大津波は海水浴場に居た人々と沿岸都市、港湾施設、停泊していた船舶を次々と飲み込んだ。
オーストラリアを襲った大津波の他に北極、南極の氷河が溶け海面は上昇し、各国の沿岸都市に洪水を齎した。

日本　メガロポリス東京
「もう夜の筈なのに西の彼方が夕方の様に明るい」
「白夜ほどではないが、どうしてあんなに明るいんだ？日本じゃあ白夜なんて現象は起きないのに・・・・」
「それにもうすぐ冬なのにどうしてこんなに暑いんだ？この前は雪が降ったのに・・・・」
北半球では夕日が沈んでも夕焼けのように明るく秋が終わろうとしているにもかかわらず未だに真夏の様な暑さが続いている。
この異常な事態となっているにもかかわらず地球連邦政府は大規模なパニックや暴動を恐れまもなく訪れる地球の終焉をいまだに連邦市民には伝えていなかった。

地球連邦大統領府　大統領執務室
大統領の執務室にはこの部屋の主でもある地球連邦政府大統領と藤堂の姿があった。
「藤堂長官、私は太陽エネルギーの制御作業が失敗に終わった今、取るべき最後の手段は新惑星探査計画の拡大以外に無いと思う」
大統領は等々太陽の制御を諦め、地球人類の存続の為、地球を捨て宇宙にあるかもしれない第二の地球となる星を見つけ、そこへ地球人類を移住させる事に決めた。
「同感です」
ジュラがガルマン・ガミラスでも地球の太陽制御の協力要請があった旨を藤堂も大統領も聞いていたが、ガルマン・ガミラスの太陽制御が必ずしも成功すると言う保証はない。

第一、▪デスラーからの正式な協力要請がまだ来ていない。
ガルマン・ガミラスからの協力要請が来るのを待って万が一、太陽制御に失敗すればそれだけ時間を無駄にすることとなる。
すでに大統領がこの決断を下すまで地球は時間を無駄にしているので、これ以上の時間を無駄にする訳にはいかないのだ。
「今回の新惑星探査計画の拡大には宇宙開拓省を中心に宇宙移民本部を設けることにした。御苦労だが、君にはそこの本部長職を兼務してもらいたい」
「・・・・大任ですな」
「そうだ。この計画は防衛軍との連携が密接かつ円滑に行わなければならない。君以外に適任者はいないのだ」
「承知しました。至急、新惑星の探査計画を練り直します」
「頼む。一日も早く第二の地球となる新惑星を見つけ、市民を安心させてくれ」
そう言って大統領は藤堂に辞令書を手渡す
「承知しました」
藤堂が辞令書を受け取った時、
「だ、大統領閣下!!」
大統領の秘書官が慌てた様子で執務室に入って来た。
「どうした?そんなに慌てて」
「そ、それが・・・・」
秘書官は先ほどオーストラリアで大津波が発生し、沿岸部の都市や施設、そして人命に大きな被害を齎した事を報告した。
「な、なんだと・・・・!?」
秘書官からの報告を受け大統領は顔色を青くした。
「そ、それで被害は?」
大統領は声を震わせるながら被害状況を訊ねる。
「沿岸部の都市及び港湾施設に壊滅的被害が出て、被災者の正確な人数はまだ判明しておりませんが、現時点で少なくとも死傷者・行方不明者は十万人ほどだと・・・・なお、この人数はこれから先、まだ増える見込みであるとの事です・・・・」

「な、なんてことだ・・・」
大統領は頭を抱える。
「・・・」
藤堂はその様子を神妙な面持ちで見ていた。
(やはり私の判断は奇しくも正しかったと言う事か・・・)
藤堂としては出来る事ならば、取り越し苦労で終わって欲しかった判断が正しかった事に複雑な心境だった。
大統領府、太陽エネルギー省の楽観的な判断が貴重な時間のロスを生み出したのだが、今となってはそれを責めても後の祭りだ。
(頼みの綱はヤマト、まほろばか・・・)
大統領府を出て駐車場に入ると、防衛軍の公用車の車内には孫の晶子が藤堂を待っていた。
今回の大統領府の訪問は極秘裏にと言う事で藤堂はハイヤーの運転手ではなく、晶子に運転手を頼んだのだ。
そして藤堂が公用車に乗ると晶子は車を走らせる。
「それで、どうでした?」
「うむ・・・」
藤堂は当初、孫とは言え晶子に地球連邦政府がまだ発表していない地球の終焉の事実を話すか躊躇ったが、どのみち地球連邦政府は発表する事になるだろうと判断し、大統領との会見内容を簡単にまとめて話した。
「たとえ新しい星が見つかっても何十億の人々と生き物たちを運ぶことが出来るの?お爺様」
晶子は藤堂に今回の新惑星の探査計画について質問をする。
「もはや出来る、出来ないの問題ではない。やらなければならないのだよ、晶子。地球人類の為にもな・・・」
「・・・そうね。ヤマトもそのために宇宙へ旅立って行ったんですものね」
「そういう事だ」
「お爺様、私にも何かお手伝いできることはないかしら?」
「お前に?」

「ええ、お爺様は防衛軍の長官職の他に今回、宇宙移民本部の本部長も務めるんですもの何もしないままヤマトの帰りを待つなんて出来ないわ」
「そうか？」
「はい・・・・あっ、私をお爺様の秘書にしてくださらない？一生懸命頑張りますから」
「・・・・良かろう。ヤマトとも連絡を取ることもあるしな。ん？そう言えば、相原君はヤマトの通信長だったな」
「えっ？わ、私はそんなつもりじゃあ・・・・」
晶子は思わず顔を赤らめる。
彼女としてみれば、多忙となる祖父の為、少しでも役立ちたいと言う思いからで、相原がヤマトの通信長だった事をすっかり忘れていた。
「だが、晶子。仕事は忙しく厳しいぞ。そのつもりでな」
「はい」
藤堂としても身内である晶子が自分の仕事をサポートしてくれた方が何かと心に余裕が出来てやりやすかった。
やがて公用車のフロントガラスに宇宙開拓省の庁舎が見えて来た。
藤堂と晶子は宇宙開拓省庁舎に着くと庁舎内にある大会議室へと入った。
大会議室のメインモニターには、太陽系を中心に半径一万五千光年内外の探査範囲が映し出された映像が表示されている。
やがて今回の新惑星の探査計画に参加する宇宙開拓省、防衛軍の職員たちが大会議室へと入って来た。
関係者が集まったところで第一回目の会議が始まった。
「では、これより会議を始めます。まず今回の新惑星の探査計画において、建造される移民船の航続距離から考えて半径一万五千光年の範囲を探査することになります。さらにその範囲を五つのブロックに分け、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、ロシアの五州がそれぞれのブロックの探査を担当します。現在、アジア担当の銀河系中心部方向のＡブロックには宇宙戦艦ヤマト、まほろばが探査を続行し

ており、今後発進する探査船団には不測の事態に備え護衛戦艦を同行させます」
ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国、時空管理局と宇宙には地球以外の知的生命体の文明がある事が既に確認されており、宇宙にはこの他にも優れた文明を持つ知的生命体が存在している可能性は十分あり、それらの知的生命体が探査船を襲ってこないとは言い切れないので、護衛をつける事が決められた。
「そして探査し、地球人類の移住が可能な惑星の条件が以下の通りとなります」
続いて第二の地球となる星の条件がモニターに表示された。

一つ　地球と同様な大気を有する事
二つ　人類・生物の生活に欠かせない水、食物、鉱物等が豊富に存在している事
三つ　地球滅亡前に地球人類及び生物が可及的速やかに移住できる範囲内にある事（一万五千光年以内）
四つ　気候、自然環境及び重力が地球人類、生物に適する事
五つ　母星である恒星が地球の太陽と同じG型かこれに近いK型である事
六つ　新惑星に知的生命体が存在しない事

「これらの条件が一つでも欠けていては、地球人類は移住する事が出来ません」
「これらの条件が全て揃う惑星など地球が滅亡する前までに都合よく見つかるのか？」
説明が終わると、職員の一人がこの六つの条件が全て揃う惑星なんて都合よく見つかるのかと不安視する。
「捜索範囲が決められているとは言え、広大な宇宙なのだから地球と同型の星ぐらい一つや二つぐらいすぐに見つかるだろう」
一方で別の職員は楽観的している。
「いや、楽観的は出来んぞ。それにしても探査範囲が一万五千光年か

…広大な宇宙の中で探査範囲が限定されると言うのは長所でもあり短所でもあるな…」
「どういう事です?それは?」
「先ほども言ったが、広大な宇宙で探索範囲が決まっている事は探査に無駄な時間を使わない部分は長所ではあるが、もし一万五千光年以上の距離に第二の地球となる惑星が見つかっても移住できないと言う事だ」
「なるほど」
「移住の為の宇宙船の航続距離がネックだ」
「急ごしらえの大型宇宙船故の問題だな」
「防衛軍で最近になって建造された輸送艦ではダメなのか?」
「航続距離の問題は解決するが、乗せることが出来る人員が…現在防衛軍が保有しているドレッドノート級輸送艦ではとても全ての地球人類、地球に現存する動植物を移住させるのは無理です」
宇宙開拓省の職員が防衛軍の職員に輸送艦について訊ねる。
防衛軍はガミラス戦役後に建造・使用された輸送艦の他にドレッドノート級の船体を改装した輸送艦を就役させていた。

このドレッドノート級を改装した輸送艦ならば航続距離の問題は解決するが、収容人数が現在、移住の為に急ピッチで建造されている移住船の方が収容人数は上であった。

勿論、移住の際にはこのドレッドノート級輸送艦も使用される予定ではあるが、地球滅亡まで地球人類と動植物を新惑星へ移住させるのに現有のドレッドノート級輸送艦では数が足りない。
ガヤガヤと話し合っている官僚たちを見て藤堂は席を立ちあがる。
「諸君、我々の使命は今回の新惑星の探査計画を完璧に達成する事にある。人類滅亡の危機はもはや目前に迫っている。今や一日の猶予もならない。探査期間は約半年だ。この半年という期間を『まだ半

年』ではなく、『もう半年』と捉え直ちに実行に着手してもらいたい」
藤堂の言葉に大会議室は緊張に包まれ先ほどまでガヤガヤと騒がしかった室内はシーンと静まり返った。
こうして藤堂の命令一下、新惑星探査計画は直ちに実行に移された。
地球の各地のドックでは惑星探査の為、宇宙開拓省所属の探査船が整備され、探査船護衛の為の戦艦は所定の宇宙港へ回航されていった。

イギリスはプリンス・オブ・ウェールズ

ドイツはビスマルク

アメリカはアリゾナ

ロシアはノーウィック

これらの戦艦が今回の惑星探査における探査船の護衛の任に就くことになった。

地球でようやく第二の地球となる惑星探査が開始された頃、ヤマトが地球を発進して二ヶ月の月日が経過していた。
日本以外の国は大統領府と太陽エネルギー省の間違った判断の結果、二ヶ月の遅れを出していた。
ヤマト、まほろばが航行しているのは地球から観測されていない宇宙の白地図とも言うべき未知の宙域だったので、宇宙海図を作成し、

地球との連絡用の為、リレー衛星を設置しながら第二の地球となる星を探査しながら航行していた。
　現在、二隻は地球から四千二百光年の位置まで来ており、この間バーナード星第一惑星を含めて十三の恒星系を探査したがどの星も地球人に適さない星ばかりであった。
　そんな中、藤堂から通信が入る。
「艦長、地球から入電です」
「地球から？パネルに回してくれ」
「了解」
　ヤマト、まほろばの第一艦橋にあるパネルには藤堂の姿が映し出される。
「ヤマト、まほろばの諸君」
「「藤堂長官」」
　古代、良馬はパネルに映った藤堂に敬礼する。
「しばらくだな。バーナード星の戦闘で犠牲者をだしたそうだが、その後の状況はどうだ？」
「バーナード星での戦闘相手はアルファ星を攻撃してきたボラー連邦であり、アルファ星を守る為、やむを得ないモノでした」
　バーナード星での戦闘経緯は良馬が藤堂に伝える。
「そうか・・・犠牲者の冥福を心から祈る」
　良馬からの説明を聞き、アルファ星に住む地球人の為と言う事で藤堂自身も戦闘に関しては納得した様子だ。
　とは言え、その戦闘で幾人かの宇宙戦士の犠牲を出してしまったことに関しては防衛軍の長官としてはやはり辛く悲しい事実である。
「長官。現在、ヤマトとまほろばはバーナード星の戦闘後は特に戦闘もなく予定通りの航海を順調に行っております」
　続いてヤマトとまほろばの現状を古代が藤堂に報告する。
「うむ。地球でもこの度、正式に宇宙移民本部が発足され私が本部長を兼務する事になった。ヤマト、まほろばもこの組織に所属する事になる」
「では、連邦政府は太陽の核融合異常増進と太陽系の消滅を認めたの

ですね？」
「ああ。私としては取り越し苦労であってもらいたかったのだがね」
「移民本部が発足されたと言う事は日本以外の国でも惑星探査を行うと言う事ですか？」
「ああ。今後、アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ、ロシアの探査船と護衛戦艦が新惑星探査の為、続々と発進する。君たちも引き続き頑張ってくれ給え」
「「承知しました」」
「地球人類の未来は君たちの双肩にかかっている。頼むぞ」
「「はっ!!」」
藤堂はヤマト、まほろばの働きに期待して、通信を終えた。
藤堂からの通信で地球でもようやく第二の地球となる惑星探査の動きを見せた事をヤマト、まほろばの乗員たち。

まほろば　第一艦橋
「やれやれ、やっと連邦政府も正式に動き出したか・・・・」
藤堂の通信後、地球側のあまりにも遅い対応に良馬はやや呆れる。
「しかし、連邦政府が公に動き出したと言う事はやはり地球は・・・・」
「うん。近々滅亡する事が決まった・・・・ってことか・・・・」
『・・・・』
藤堂同様、取り越し苦労で終われば良かったと思ったのだが、連邦政府が本格的に新惑星探査計画を発動したと言う事は地球が滅亡することが確定したと言う事だ。
「まぁ、悲観的になっても仕方がない。ヤマトとまほろば以外にも惑星探査をする国が増えたと言う事は第二の地球となる惑星が見つかる可能性が高くなったと言う事だ」
「そ、そうですね」
「他の探査船団に負ける訳にはいかないな」
「おう、第二の地球は俺たちが見つけるぞ!!」
一同は決意の眼で頷き合った。
「まもなく次の探査惑星・・・バジウド星系第四惑星です」

「距離は？」
「あと二十万宇宙キロです」
「周囲に警戒しつつ速度、コースそのまま・バジウド星系第四惑星へ」
「了解」
　ヤマト、まほろばの二隻がバジウド星系第四惑星へ近づいている中、
「艦長、ちょっといいだろうか？」
　ディアーチェが艦内通信を送って来た。
「ん？どうした？」
「実は先日からＯ・Ｍ・Ｃ・Ｓの調子が悪くてな」
「Ｏ・Ｍ・Ｃ・Ｓが？」
「うむ。しかも生鮮食品が二日分ほどしか備蓄が無い」
「えっ？マジで？」
「マジだ」
「どうしてそんな事に・・・」
「どうやらバーナード星での戦闘でＯ・Ｍ・Ｃ・Ｓと冷凍調整装置の一部が壊れていたみたいだ。これまでは補助動力で動いていたみたいで発見できなかったのだが、その補助動力もガタがきたみたいだ」
「うわぁ～最悪だ・・・」
「ああ、最悪だ。流石に食い物がないと乗員たちの健康維持が出来んぞ、艦長・・・」
　まほろばのＯ・Ｍ・Ｃ・Ｓと食糧貯蔵機能が不具合を起こした事実に一番要撃を受けたのはギンガであった。
「か、艦長。Ｏ・Ｍ・Ｃ・Ｓが不具合って・・・それに生鮮食品があと二日分しかないって・・・しょ、食事はどうなるんですか？」
　今後のまほろばの食事事情をギンガは震える声で良馬に訊ねる。
（あっ、ギンガは沢山食べるからな・・・）
　ギンガ本人としては、食糧問題は死活問題なのだ。
「この後でバジウド星系の第四惑星を探査するからその時にヤマトから修理部品を分けてもらい補修と補給しよう。あと第四惑星で原料を得ることが出来れば、そこでも調達しよう。兎も角、古代艦長にそ

の旨を伝えてくれ」
「はい!!」
　ヤマトから部品を分けてもらいＯ・Ｍ・Ｃ・Ｓと食糧貯蔵庫を直せば食糧難にならないと知るとギンガが嬉々としてヤマトに通信を送った。
（第四惑星で補修と補給できないとえらいことになるな・・・）
　ヤマトに通信を送っているギンガを尻目に食糧問題が解決しなければ厄介な事になると思う良馬であった。

　ヤマト　第一艦橋
「艦長、まほろばから通信です」
「まほろばから?・・内容は?」
「どうやら、バーナード星の戦闘でまほろばのＯ・Ｍ・Ｃ・Ｓと食糧貯蔵庫の機能が損傷したらしく、次の探査惑星である第四惑星に到着したら修理部品を分けてもらいたいようです」
「食料問題は長い航海では重大な問題だからな・・・相原、まほろばに返信。『了解した』と送れ」
「はい」
　相原はＯ・Ｍ・Ｃ・Ｓと食糧貯蔵庫を修理する部品を提供する事を了承した旨をまほろばに送った。
　その後も特に問題なく宇宙空間を航行するヤマト、まほろばの行く手に探査惑星であるバジウド星系第四惑星が見えて来た。
「艦長、次の探査惑星バジウド星系第四惑星まであと一万宇宙キロです」
　太田が古代に報告する。
「よし、コスモハウンド乗員は発進準備にかかれ」
　探査をするため、古代はコスモハウンドの発進準備を進めていると、
「艦長、右舷後方より接近する艦影が多数あります!!」
　雪がヤマト、まほろばに接近してくる艦影があることを報告する。
「接近中の艦影、戦闘態勢を取っています!!」

続いて接近中の艦影の動きを監視していた太田が報告する。
「なにっ!?コスモハウンド発進中止!!」
接近してくる艦隊がどこの星間国家に所属しているか不明で万が一、好戦的な星間国家の艦隊であったら一方的に攻撃を受ける恐れもある。
事実、接近中の艦隊は戦闘態勢を取っている。
もし、その攻撃でコスモハウンドが撃墜されれば今後の惑星探査に大きな支障をきたすので、古代はコスモハウンドの発進準備を止めた。
「相原、接近して来る艦隊に通信を送れ」
「了解!!」
相原は様々な周波数で接近してくる艦隊へ通信を送る。
「こちら地球防衛軍所属、宇宙戦艦ヤマト!こちら地球・・・受信反応出ました!」
すると、相手側がヤマトの通信を受信した反応があった。
「よし、音声交信設定にしてくれ」
「了解・・・どうぞ」
「我々は四千二百光年の彼方、太陽系第三惑星、地球から発進した宇宙戦艦ヤマトの乗員である。侵略の意図は全くない。直ちに戦闘態勢を解かれたし!!」
古代が接近中の艦隊に戦闘の意志が無い事を告げると艦隊の内、一隻の艦がヤマトとまほろばに近づいて来た。
すると、ヤマト、まほろばの第一艦橋にあるパネルにその間の乗員が映りだした。
「私はガルマン・ガミラス東部方面軍所属、ゲパルスである」
「ガルマン・ガミラス・・・それはデスラー総統が樹立した星間国家ですね?」
「左様。まさか貴殿らが総統閣下のご息女であらせれるジュラ殿下が向かわれた星の艦とは知らず、申し訳ない」
「いえ、貴殿の立場ならば当然です」
接近してきた艦隊はガルマン・ガミラスの艦隊であり、ヤマト、ま

ほろばが地球の戦艦だと知ると、戦闘態勢を解除した。
「それで貴殿らは何用でこのバジウド星系へ？」
ゲパルスはヤマト、まほろばの来訪目的を訪ねてきた。
「我々はある事情から地球人類が住める惑星を探しており、このバジウド星系第四惑星も探査をする予定でした」
「そうか・・・しかし、この第四惑星バースは既にガルマン・ガミラスの自治領となっている星だ」
「分かりました。流石に人類が住んでいる星を侵略する意図は我々にはありません。ですが、許されるならばお願いが二つあります」
「何かな？」
「一つは艦整備点検、もう一つは植物の採集です」
「・・・よろしい。では三日間の寄港を許可しよう」
ヤマト、まほろばの寄港許可を出すとゲパルスの姿はパネルから消えた。
ゲパルスもジュラが地球へ赴いている事とその内容がガルマン・ガミラスと地球との同盟締結を目指している事から此処で地球所属の戦艦を無下に扱うとジュラの身に何かあると思いバース星へヤマト、まほろばの寄港を許可した。
「バース星・・・既に人類が住んでいたのか・・・」
「気温はバーナード星第一惑星と同じく一年を通して低いが大気、鉱物蘇生、植物の分布状態から言って居住は可能な星だったのだが、既に人類が住んでいるのであるならば、此処も地球人類の移住は無理だな」
「ああ・・・」
バース星には既に知的生命体が存在していた事から地球人類の移住は不可能となった。
しかもガルマン・ガミラスの艦隊が駐留している事から自治領とは言え、事実上このバース星はガルマン・ガミラスの植民惑星と言える星だ。
その星を無理矢理奪えばガルマン・ガミラスとの間で同盟ではなく戦争になってしまうので、ヤマト、まほろばとしては諦めるしかな

かった。
残念な心境ながらも補修と補給があるのでヤマト、まほろばはゲパルスの艦の先導の下、バース星へと降下していく。
バース星の日中の最高気温は摂氏マイナス五度で、地球の氷河期さながらの星であった。
そしてバース星の地表はバーナード星第一惑星と同じく雪と氷に閉ざされた星であったが、人類が存在しているので、針葉樹の様な木々が生えている森と町のような人工の建造物が多数存在していた。
ヤマト、まほろばは街外れにある艦船ドックへと着陸した。
古代と良馬が艦を降りるとドックではゲパルスと数名のガルマン・ガミラスの兵士が二人を待っていた。
「ようこそ、バース星へ」
「寄港の許可を出して頂きありがとうございます」
「ガルマン・ガミラス側の御厚意に感謝します」
「ドロッペ総督もぜひ皆さんとお会いしたいと申しております。後ほど、総督府にて皆様との会食の機会を設けますので、是非ご出席願いたい」
「分かりました。喜んでご招待をお受けします」
「総督へよろしくお伝えください」
バース星の新たな総督となったドロッペ総督との会食の約束を取り付けた後、ヤマトからまほろばへ修理部品が納入され、O・M・C・Sと食糧貯蔵庫の修理が行われる。
その他にヤマトの生活班、まほろばの生活班は植物の採集を行う為、雪上車に乗りバース星の地上を移動していく。
すると行く手に針葉樹林の森が見えてきた。
「あそこの森なら十分な量の植物を採集できそうだ」
やがて、針葉樹の森に到着すると雪上車から降り、生活班員たちは採集メカで葉や枝、草を採集していく。
両艦の生活班員たちが植物の採集を行っていると、
ズズズズズ・・・・

ガガガガガガ・・・
ドドドドドドド・・・
森の奥から轟音が聴こえた。
「ん？何の音だ？」
土門が気になって行ってみると、森の中に開けた場所があり、そこでは重機が建物を壊している光景が目に入った。
「工事の音だったのか・・・」
轟音の正体が解体工事の音だったことに土門が唖然としていると、
「こんなところで何をしている」
工事現場の警備員が土門を見つけ声をかけてきた。
「大きな音が聴こえてきたので何かな？と思って・・・」
「ここは解体作業現場で関係者以外は立ち入り禁止だ」
「わ、分かった。でも、一体何の建物を解体しているんです？」
土門としては解体工事の作業をしている事から警備員が言っている事は最もだと思い引き下がるが、その前に一体何の建物を解体しているか気になり警備員に思いきって訊ねてみた。
「あの建物か？あれはボラー連邦の連中が建てた強制収容所の建物だ」
「きょ、強制収容所!?」
警備員からの返答に思わず目を大きく見開き声が裏返る土門。
「そうだ。ボラーの連中は、保護国とか言いながらこの星を流刑地にしていたのさ。それを我々ガルマン・ガミラスがボラーからこの星を解放し、ドロッペ総督が負の遺産の象徴である強制収容所の解体を命じたのだ」
（解放って言うけど、それって侵略者がボラーからガルマン・ガミラスに変わっただけじゃないか？）
警備員の言葉に対して心の中で突っ込む土門。
「さあ、もういいだろう？ほら帰った、帰った」
「は、はい」
聞けることも聞けたので、皆のいる場所へ戻る土門。
「強制収容所の建物を解体していると言う事はもう囚人は居ないと言

う事だよな・・・？」
　土門は流石に囚人諸共建物を解体する訳はないと思いつつ森を歩く。
「あら？土門君、どこに行っていたの？」
「あっ、生活班長・実は・・・・」
　土門は先ほど森の奥で見た光景を雪に話す。
「強制収容所・・・・」
「はい。この星はボラーが支配していた時は流刑の星だったみたいです」
「でも、その建物を壊していたと言う事はもう流刑地じゃないって事かしら？」
「恐らく・・・ただ、この辺りは工事現場らしいので、別の場所を探しましょう」
「そうね」
　生活班員たちは採集場所を変えて植物の採集を続けた。
　やがて植物の採集作業を終えた生活班員たちはそれぞれの艦へと戻る。
　まほろばの生活班員たちが戻った頃にはＯ・Ｍ・Ｃ・Ｓと食糧貯蔵庫の修理が終わっており、生活班員たちは採集してきた植物を変造機に入れて分解、地球型の植物に成分を変換し直す。
　ヤマトの厨房でも同様の作業が行われていた。
　土門がその過程を見守っていると揚羽がやってきた。
　そこで、土門は揚羽に森の奥で見た出来事を彼に話す。
「へぇ～強制収容所か・・・歴史の教科書に載っていたけど、現代でもそんな施設が存在するなんて驚いたな」
「ここは地球じゃない。バース星だ。宇宙には我々よりも精神文化が遅れている星もあると言う事だ」
「アルファ星をいきなり攻撃してくる事や強制収容所と言い、ボラーの連中は野蛮な種族と言えるな」
「確かに・・・・」
「でも、もうその強制収容所とやらは無いんだろう？」

「ああ、俺が行った時には建物を壊していたからな」
「じゃあ、そこに収容されていた人たちは一体何処に行ったんだろう？」
「俺も気にはなったが、今となっちゃあ確かめようがないだろう？」
「それもそうだな」
土門も揚羽も強制収容所に収容されていた人たちの行方が気になったが、建物は解体されていたし、今更囚人たちの行方を知ったところでどうしようもなかった。

まほろば　第一艦橋

「艦長、O・M・C・Sと食糧貯蔵庫の修理が終わったぞ。今は生活班員たちが採集してきた植物での成造作業を行っておる」
良馬の下にディアーチェから厨房施設の現状報告が入る。
「とりあえず、食糧問題は解決したってところかな？」
「うむ、そうだな。これで大食らいの通信長も一安心するだろう」
「ハハ、そうだね」
ギンガにとっては死活問題だった食糧問題はこれで解決した。
そして、ゲパルスから夕方に総督府で開かれる会食会の誘いを受けていたので、良馬は艦内放送のマイクを手にして、
「本日の夕刻、バース星総督府主催の会食会が行われる。艦内警備員を除き、任務に支障が無い者は参加を許可する」
良馬の放送を聞き、各部署ではドッと歓声が広がる。
「やったー!!」
「久しぶりに上陸できるぞ!!」
「会食会ってことは当然、酒も出るな!?」
「それじゃあ、久しぶりに一杯飲めるぞ!!」
「でも、この星に酒なんてあるのか？」
「あるに決まっているだろう!?ロシアじゃあ、ウォッカで暖をとっているんだ。ロシアよりも寒いこの星なら酒が無けりゃあ暮らせねぇよ」
「それもそうか!!」

やがて、会食会開始時刻少し前にヤマト、まほろばではそれぞれの艦の連絡艇数隻に乗員たちが分乗し、空からバース星の総督府へと向かう。
バース星の街並みはレンガや石造りの建物が多く、まるで帝政ロシア時代の街並みを思わせる。
そんな街で異彩を誇る宮殿のような建物・・・
バース星の総督府はボラー形式の建造物だったので、周囲の街の建造物と比べると一際浮いて見えた。
ガルマン・ガミラスはバース星からボラー連邦そして宇宙艦隊を壊滅させた後、この総督府を接収したが、建物をガルマン・ガミラス風の建物に改築することなく使用していた。
それは建物を解体し、新たな総督府を建造する時間も資材も無駄にしたくなかった為とボラーの技術調査も含まれていたからだ。
連絡艇は総督府前のエアポートに着陸した。
連絡艇から降りたヤマト、まほろばの乗員たちは案内され、総督府大広間に入っていくと、メインテーブルには豪華な料理や飲み物が沢山用意されていた。
やがて、大広間に総督であるリベル・ドロッペがやって来る。
「地球の皆さん、ようこそバース星へ・・私はガルマン・ガミラス東部管区惑星バースの総督、リベル・ドロッペです」
総督と言う割には何か頼りない貴族と言う印象を受けるドロッペがヤマト、まほろばの乗員たちに歓迎の祝辞を述べる。
「ドロッペ総督、一つお訊ねしてもよろしいでしょうか?」
すると、古代がドロッペに質問をする。
「なんでしょう?」
「この星は昔、ボラー連邦の属国だったとお聞きしたのですが、この星の周辺でもボラー連邦との戦闘が今も続いているのでしょうか?」
古代は雪からバース星がボラー連邦の流刑地であったことを聞いたので、この星の周辺でもボラー連邦の勢力が存在するのかを訊ねたのだ。
「このバース星は約十年前までは独立国家でありましたが、絶えず周

辺の星間国家から侵略の危機に見舞われ、独立を守る事が困難となりボラー連邦が保護国と言う名の植民惑星とし、この地に強制収容所を建設し流刑地として使用していました。その後、ボラー連邦はこのバジウド星系の周辺国家も勢力下に治めていきましたが、我がガルマン・ガミラス帝国がボラーの勢力を一掃し、解放した後に自治領としました」

ドロッペはバース星を含むバジウド星系の歴史を語る。

「ボラー連邦の本星の位置は判明しているのですか？」

「ボラー連邦の本星はバース星から離れる事、三万光年の彼方に位置し、我々ガルマン・ガミラスと銀河系を二分する一大星間国家です」

大広間にあるモニターには銀河系の画像と共にボラー連邦、ガルマン・ガミラスの勢力図が表示される。

ボラー連邦、ガルマン・ガミラス・・・双方の巨大な勢力に一同は唖然として見上げる。

（ボラー連邦、ガルマン・ガミラス・・・銀河系を二分する勢力・・・）

（それはつまり、銀河系の中心部でこんなにも大規模な星間戦争が行われていると言う事か・・・）

（こんな星間戦争が行われている中で第二の地球となる惑星が見つかるのか？）

勢力図を見ながら自分たち地球の小ささを嫌でも自覚させられる一方で、第二の地球となる惑星を見つけると言う使命が増々不安になる古代と良馬。

やがて、会食会が始まると賑やかな歓談となる。

佐渡はテーブルの上の酒を飲み干しては注ぎ、飲み干しては注ぎを繰り返す。

「先生、オ行儀ガ宜シクナイデスヨ。悪酔イスルト地球人ノ恥ニナリマス」

そんな佐渡をアナライザーが窘める。

「酒は酔う為に飲むんじゃ!!遠慮はいらん!!お前さんも飲め!!」

そう言って佐渡はアナライザーに酒をかける。

すると、

「イイ酒デスネ。先生」
「そうじゃろう、そうじゃろう。宇宙にはまだまだ我々の知らない美味い酒があるようじゃ!!」
「先生、モウ一杯下サイ」
「おういいぞ!!ドンドン飲め!!」
窘めた筈が更に酒を要求するアナライザー。
まさに木乃伊取りが木乃伊になる光景であった。
佐渡とアナライザーは酒をグビグビと飲んでいたが、
「赤道祭でも見たが、まほろばの通信長、相変わらず女性ながらたくさん食べるな・・・」
「まぁ、ヤマトの航海長補佐さんも沢山食べているけどね」
「でも、まほろばの通信長程じゃあないでしょう」
ギンガと太田は異星の料理に舌鼓を打ち、テーブルの上には空の皿が何枚も積み重ねた。
こうして会食会は何事もなく賑やかに終わった。

百六十二話　暗雲バジウド星系

ヤマト、まほろばが補修と補給の為、バジウド星系の第四惑星、バース星へ寄港した頃、ボラー連邦本星の首相官邸では軍部の上層部が集められていた。

ボラー連邦本星　首相官邸　会議室

「ガルマン帝国は我がボラー連邦と銀河系を二分する強敵である。だが、その勢力の均衡は今や破られつつある。彼らは大胆にも我が衛星国の大艦隊を撃滅した。これはボラー連邦の最大の恥辱であるばかりでなく、ガルマン帝国の挑戦状とも言えよう」

ベムラーゼの言葉に一同は頷く。

「我々はバース星艦隊の敗北の教訓を学びとり、断固として彼らの野望をくじかなければならないのだ」

ベムラーゼはガルマン・ガミラスとの決戦に備えるべく、兵器開発局へ多額の出資を行い新兵器の開発を急がせていた。

今回ベムラーゼがこうした強気の発言を行った背景には既に新兵器の開発に成功し実戦導入への目途がついた可能性があった。

一方のガルマン・ガミラスでもデスラーを中心にボラー連邦との決戦に備え総統府で軍議が開かれていた。

ガルマン・ガミラス本星　総統府　会議室

「諸君、銀河中心部における四方向の攻略はまもなく初期の目標を達する事が出来る。いよいよ最大の敵、ボラー連邦との決戦を開始する時が来た。先般ボラー連邦の武力を探る為、バース星の艦隊を攻撃したが、容易く撃滅することが出来た。この事をもって敵を侮ることは出来ないが、また必要以上に脅威を感じる事もない。ボラーを倒さずして銀河系を支配することは出来ない。勝利を得たとは言えないのだ!!」

デスラーの言葉を緊張した面持ちで聞くガルマン・ガミラスの将軍

たち。
「そこで、諸君らの戦略プランを忌憚なく聞かせてもらいたい」
そして、将軍たちの対ボラー戦線の作戦を聞くことにした。
「総統、戦略討議の前にご報告する事があります」
「何だね？キーリング」
すると、総参謀長のキーリングがデスラーに何らや報告がある様子で、デスラーにある報告をいれる。
「ガルマン帝国内にもシャルバートの信者たちが不穏な動きを企てている事が発覚いたしました」
キーリングの報告はガルマン・ガミラス内に居るシャルバート教と言う宗教の信者がクーデターを計画していると言う報告であった。
「ほう？」
「ボラー連邦の決戦を前に彼らが蜂起し、全宇宙のシャルバート伝説の信者に何らかの影響を与えるとなると、作戦に重大な支障をきたす恐れがあります」
「・・・・」
キーリングの報告を聞く中、会議に参加している一人の将軍の顔色が悪い。
デスラーはその将軍の不審さを見逃さなかった。
「その首謀者ですが・・・・」
キーリングがクーデターの首謀者の名前を告げようとした時、デスラーは手でキーリングの説明を止め、
「ハイゲル将軍・・・・どうした？顔色が悪いようだが？」
「・・・・」
デスラーは顔色を悪くしている将軍・ハイゲルに声をかけると彼は黙って席を立つと窓際へと歩み寄り跪くとポケットからペンダントを取り出し空へ掲げひれ伏して礼拝を始めた。
その姿勢はまるで地球の宗教の一つであるイスラム教の教徒がアラー神礼拝の形によく似ていた。
「マザー・シャルバート・・・・マザー・シャルバート・・・・」
すると、空に輝くように美しい女性の像が現れた。

シャルバート教の信者が崇めるシャルバート・・・それは伝説の星と言われる星で、幾千もの昔、銀河系に大きな影響力を持ち、星々に平和と愛を齎したシャルバート星・・・

その星はイスカンダル同様、代々女王が治め、女神と言うべき超人的な権威で平和を守ってきたと言われている。

まさに大マゼラン星雲のイスカンダル、銀河系のシャルバートとも言える星だった。

しかし、今やシャルバート星はその力を落としシャルバート星の存在位置さえも不明となってしまい、地球で言うアトランティス大陸やムー大陸、レムリア大陸と言った伝説の大陸同様、本当に存在したのかさえ分からない宇宙伝説とされているが、シャルバート星の女王を神として崇める信仰はこうして現在でも根深く残っており、それはボラー連邦、ガルマン・ガミラスだけではなく、宇宙のあちこちにシャルバート教の信者が居た。

そして、ハイゲル自身もガルマン・ガミラスの将軍と言う地位にありながら、シャルバート教の信者の一人であった。

キーリングが掴んだ情報では彼こそがガルマン・ガミラス内に居るシャルバート教の信者たちを先導し、クーデターを起こそうとする主犯格であった。

バキューン!!

ハイゲルが礼拝を行っていると一発の銃声が会議室に響く。

ドサッ・・・

そして、ハイゲルの身体は力なくその場に横たわる。

「ガルマンには神は二人も要らん」

銃声の正体はデスラーであり、彼は礼拝をしていたハイゲルを射殺したのだ。

とは言え、ハイゲル自身もキーリングに自身のクーデター計画を知られ、どの道処刑されることは分かっていたからこそ、こうして最後の礼拝を行ったのだろう。

自身の死が殉死となり、ガルマン・ガミラス内に居る同志たちの働きを期待して・・・

ハイゲルを射殺したデスラーは銃をホルスターに戻して席に着くと、
「さあ、諸君。会議を続けよう」
ニヤリと不敵な笑みを浮かべ何事もなかったかのように軍議を続ける。
デスラーの一連の行動にハイゲルのクーデターを報告したキーリングを始めとして会議室に居た将軍一同は唖然としていた。

ボラー連邦、ガルマン・ガミラスにおいて互いの勢力への決戦に挑むための会議が行われている頃、バジウド星系第四惑星のバース星近海に一隻の艦がワープアウトした。

ガルマン・ガミラス　第十七機動艦隊所属　ゲルバデス級航宙戦闘母艦　アルバレス　艦橋
ワープアウトしたのはゲルバデス級航宙戦闘母艦であり、この艦はジュラたち特使団一行の護衛の為に地球へ派遣されたガルマン・ガミラスの第十七機動艦隊所属の艦の一隻であったが、ジュラの伝令任務を受けたバレルがガルマン・ガミラス本星への帰途のために乗艦していた艦であった。
アルバレスは連続ワープ等の強行軍でやっとの事、地球からバジウド星系まで到着した。
「バレル様。本艦は現在、バジウド星系第四惑星の惑星バース近海まで来ました」
「うむ、戦闘がなかったとは言え地球から此処までは中々の距離だったな・・・この後の航海の為に一時惑星バースに立ち寄り補給と補修を行う。特に機関の方には連続ワープで無理をさせたからな」
「承知しました」
「バレル様、本艦に接近中の艦影があります」
「味方識別信号を確認せよ」
「了解・・・識別判明、惑星バースに駐留している友軍艦艇です。恐らくパトロール隊と思われます」

「よし、そのパトロール隊と交信し、バース星へ寄港許可を取ってくれ」
「了解」
アルバレスは味方のパトロール隊と交信して、補給と補修の為にバース星への寄港許可を求めた。
相手がガルマン・ガミラスの外務省に所属する上級役人と言う事でパトロール隊はすんなりとアルバレスの寄港許可を出した。
「本艦は着陸態勢に入ります。速度、００６・００５・・・・」
「ん？あれは・・・・」
バース星へ降下していく中、ドックにはバレルが見慣れた二隻の地球型の戦艦が停泊していた。

明後日にバース星を出航予定のヤマト、まほろばが停泊しているドックの隣に空から轟音と共に一隻のゲルバデス級が降下してきた。

まほろば　第一艦橋
「ゲルバデス級だ・・・・」
「パトロール隊の艦か？」
ゆっくりと降下してきたゲルバデス級はまほろばの隣のドックへ着陸した。
「艦長、着陸したゲルバデス級より通信が入っています」
「繋いでくれ」
「はい」
隣のドックに着陸したゲルバデス級から通信と言う事で何事かと思ったが、パネルに映し出された人物に良馬は驚いた。
「やはり、まほろばとヤマトでしたか」
「バレル大使!?何故此処に!?」
バレルは地球でジュラと共に地球との同盟締結の交渉にあたっていた筈だ。
それが単身ゲルバデス級でバース星に来たのだから驚くのも当然だ。

「地球との同盟交渉で何かトラブルがあったんですか!?」
「いえ、交渉については現在もジュラ様が地球側の代表と交渉を続けております。今回、私はジュラ様からのメッセージを届ける伝令役としてガルマン・ガミラス本星へ急いでいる次第です」
「ジュラさんからのメッセージ?」
「はい。ジュラ様も地球の太陽で起きている異常を察し、ガルマン・ガミラスでも太陽制御が出来ないかと本国へ打診するよう私に命じられました」
「そうだったんですか・・・」
(確かにガルマン・ガミラスの技術は地球よりも上だ。彼らの技術ならばもしかしたら太陽制御も可能かもしれない・・・)
「大使、後でヤマトの古代艦長とその件について協議したいので、御苦労かもしれませんが、同席していただけますか?」
「承知しました。では、準備が出来ましたら連絡を下さい」
「はい。では、後ほど」
バレルがバース星に来た目的を聞き、良馬は次にヤマトの古代と連絡を取る。
「古代艦長、先ほど着陸したゲルバデス級のバレル大使はジュラさんからの伝令を頼まれており、ガルマン・ガミラス本星に向かっているそうですが、その内容はガルマン・ガミラスの技術で地球の太陽制御を行ってもらおうと言う依頼みたいです」
「ガルマン・ガミラスに太陽制御の依頼?」
「ああ。だが実際の所、ガルマン・ガミラスが動いてくれるのか?そしてどんな方法で太陽制御を行うのかはまだ不明だが、ガルマン・ガミラスの科学技術は地球よりも上だ」
「でしょうね」
「それならば、ガルマン・ガミラスの技術を使っての太陽制御ならば・・・」
「地球の太陽制御も可能かもしれない・・と・・・」
「うん。勿論、地球側もこの事を知っているだろうが、打てる手は全て打っておこうと言う事で同時に新惑星探査計画を進めたのだろう」

「なるほど、世の中に絶対や完璧なんてありませんからね」
「その事でこの後、大使と協議をするのだけれども古代艦長もその席に出席してもらいたいのだがよろしいだろうか？」
「勿論、出席させていただきます」
バレルと古代、両名からの協議の出席を取り付けた良馬はさっそく二人をまほろばへと呼んだ。
まほろばの会議室では良馬、古代、バレルの三人での話し合いが行われた。
「それで、ガルマン・ガミラスの技術で地球の太陽制御は可能なのでしょうか？」
古代はバレルに肝心の太陽制御が成功するのかを訊ねる。
「私は技術者ではないので何とも言えません。しかし、可能性は十分にあると思います」
バレルは母国の技術の力をもってすれば地球の太陽制御は可能であると信じている様子。
「ですが、まずは総統に地球の現状を伝え、太陽制御のプランを立てなければなりません。総統の許可が下りた後は本国の技術者たちに地球の太陽のデータを渡す必要があります」
「では、このままガルマン・ガミラス本星を目指す航海ですか？」
良馬はバレルに今後の航海日程を訊ねる。
「最終的にはそうなります。ですが、その前にこの宙域を管轄とする東部方面軍司令部の宇宙要塞へ向かいます」
「宇宙要塞へ？」
「はい。その要塞ならば、艦艇よりも強力な通信設備がありますので、そこから本国の総統へ通信を入れ、地球の現状をお伝えします。そちらの方が幾ばくかの時間を短縮する事が出来るので」
「なるほど」
「大使、もし差し支えなければガルマン・ガミラス本星までの航路を聞いてもよろしいでしょうか？」
良馬がバレルにガルマン・ガミラス本星の位置を訊ねた。
バレルは暫し考えた後、持参したタブレット端末の様な機械でこの

後の予定航路を表示する。
「途中まではヤマトの探査航路と同じだ」
　アルバレスの予定航路とヤマト、まほろばの探査航路は被っていた。
「大使。もし大使がよろしければ途中までヤマトとまほろばは同行してもよろしいでしょうか？」
　良馬はバレルに同行の許可を求めた。
「大使は後にこの宙域を管轄する司令部となっている宇宙要塞へと赴くとの事で、ヤマトとまほろばが赴いた際、何かしらの誤解や問題が生じては・・・」
「そうですね。私が同行した方が東部方面軍へ変な誤解を与えはしないでしょう。分かりました。途中まで共に行きましょう」
「ヤマトとまほろばは明日までこのバース星の寄港許可が下りています」
「分かりました。アルバレスも明日までに出航準備を整えます」
「ヤマト、まほろばの乗員たちも協力します」
「ありがとうございます」
　アルバレスとヤマト、まほろばはこの宙域を管区とする東部方面軍の宇宙要塞まで同行することになった。
「そう言えば、昨日総督府主催の会食会が行われ、このバース星について教えて頂いたのですが、ボラーはこの星を支配している時にこの星を流刑地として使用していたみたいなのですが、大使はその件についてご存知でしょうか？」
「ええ、勿論知っています」
「では、この星へ送られた人々はどうなったのでしょう？聞いたところ、ドロッペ総督はこの地にあった強制収容所を取り壊していたので、もうこの星にはボラーが送り込んだ囚人は居ないと思ったのですが・・・？」
「この星がガルマン・ガミラスの自治領となる直前にどうやらバース星人が収容されていた囚人たちを宇宙へ逃がしたみたいです」
　外務省の役人だからなのかバレルは意外にも情報通であった。

「この星に流刑された囚人たちは一体何をしたかは・・・流石に知りませんよね？」
「さすがに全員は知りません。ですが、大半の囚人は主にシャルバート教の信者が収容されていたみたいです」
「シャルバート教？」
「『教』と言う事は宗教ですね？」
「ええ、シャルバート教はボラー連邦、ガルマン・ガミラス・・いえ、宇宙の彼方此方に信者を持つ大規模な宗教です」
「・・・」
ガルマン・ガミラス、ボラー連邦・・両国の垣根を越えて宇宙に信仰がある宗教に良馬も古代も神妙な顔つきになる。
地球ではシャルバート教なんて宗教はないからだ。
そう言う一面からも地球はまだまだ宇宙では発展途上なのかもしれない。
「それでそのシャルバート教と言う宗教は一体どんな宗教なんですか？」
「伝説の星、シャルバート星の女王を崇拝する宗教です」
バレルの端末にはシャルバート教の情報として跪きペンダントらしき物を空に掲げている信者の写真が映し出される。
「伝説の星・・・」
「そんな星が銀河系に？」
「古い文献等に度々登場する星の名前ですが、実際にその星が何処にあるのかは不明なのです。今では存在しないただの伝説ではないかと言う意見もあります」
(伝説の星、シャルバート星か・・・それってシャンブロウで出会ったジレル人の方舟みたいに惑星サイズの移動する宇宙船なのだろうか？それとも彗星帝国の様な移動要塞なのだろうか？)
シャルバート星の説明を聞いて良馬はかつて迷い込んだ異次元で見たジレル人の方舟を思い出し、シャルバート星も星ではなく常に移動する方舟や彗星帝国みたいな移動要塞だからこそ、星の位置が掴めないのではないだろうかと思った。

「そして、シャルバート教はボラー連邦でも我がガルマン・ガミラスでも禁教となっている宗教なのです」
「禁教？」
「なんでまた禁教なのですか？」
「全ての信者には当てはまりはしないのですが、一部の信者の中には過激な思想を持つ者も居て、各所でテロ活動を行っているのです」
　続いて映し出されたのはシャルバート教信者が起こしたテロ活動の被害写真。
「禁教なのは恐らくテロ活動だけではないのでしょう？」
「・・・・」
　シャルバート教が禁教なのはテロリストを生み出す危険な宗教という理由だけではないと指摘する良馬にバレルは気まずそうな顔をする。
「月村艦長。それってどういうことですか？」
　古代が良馬に質問したので、答える良馬。
「先ほど大使はシャルバート教の説明で、シャルバート教は『シャルバート星の女王を崇拝する宗教』と仰いました。ボラー連邦がどのような政治体制なのかは知りませんが、デスラー総統としては自分が統治する国家で自分以外の人物を崇拝されるのが我慢ならないんじゃないかな？」
「・・・・」
　古代もデスラーの性格からあり得そうだと思い神妙な顔つきだ。
　バレルもやはり図星だったのか良馬から視線を逸らしている。
「ま、まぁ、宇宙の宗教よりも今は新惑星探査と太陽の問題を解決する事にしましょう」
　自分で指摘してしまい気まずい空気を作ってしまった良馬はシャルバート教についての話題を逸らした。
「そ、そうですね」
「ええ・・・・」
　バレルとしてもあまり触れては欲しくなかった話題だったので、早々にこの話題を打ち切った。

その後、アルバレスにはヤマト、まほろばから人員が送られ補給と補修が急ピッチで行われた。
バース星でまほろば、ヤマト、アルバレスの補修と補給が行われている頃、東部方面軍管轄のバジウド星系手前の某宙域では・・・

???　艦橋
「敵輸送船団、本艦の頭上を航行中・・・」
「艦長、敵は我々に気づいてはいません」
「よし、狩りの時間だ。亜空間暗号通信ブイを射出。司令官に報告だ」
「はっ!!亜空間暗号通信ブイ射出!!」
通常とは異なる次元に潜んでいた襲撃者たちは今まさに星の海を航行しているガルマン・ガミラスの輸送船団へその牙をむけようとしていた。

ガルマン・ガミラス　輸送船団　護衛隊　旗艦
「司令官、妙な電波を受信しました」
「妙な電波？」
「はい。内容から暗号通信かと思われますが解読不能です」
「暗号通信だと発信源は？」
「至近なのですが、見張り員からは艦船や艦載機等の報告はなく、またレーダーにも反応はありません」
「・・・全方位警戒。輸送船を中心に護衛艦はその周囲へ展開せよ」
「はっ!!陣形を変更!!各艦へ信号!!」
友軍からの暗号通信ではない通信が至近で発せられたのだから警戒するは当然の事だった。
護衛隊司令官は陣形を変更し周囲を警戒しつつ進んで行く。

???　艦橋
「友軍艦艇より連絡があった敵輸送船団を発見」
「敵は陣形を変えているようですが、本艦ならびに友軍艦艇には気づいている様子はありません」

「ふむ、敵はまんまと罠にかかったな・・・機関始動、微速前進追尾する」
「はっ!!機関始動、微速前進!!」
襲撃者たちの包囲網は徐々に狭められていく・・・・

ガルマン・ガミラス　輸送船団　護衛隊　旗艦
「周囲に異常は？」
「ありません。この宙域を航行しているのは我が輸送船団のみです」
司令官はレーダー手に周囲の状況を訊ねるが、輸送船団周辺には相変わらず何の変化もなく、航行している他の宇宙艦艇は存在していない。
「・・・・」
（周囲に艦影はない・・・しかし、どうも嫌な予感がする）
護衛隊の司令官は妙な胸騒ぎを覚える。
そしてその予感は的中する事になる。

???　艦橋
「・・・時間だ。亜空間魚雷全門発射!!」
「亜空間魚雷全門発射!!」
「発射!!」
異次元の空間に潜む襲撃者たちは遂にその牙をガルマン・ガミラスの輸送船団へと向けた。

ガルマン・ガミラス　輸送船団　護衛隊　旗艦
「高速飛来物、我が輸送船団に接近!!」
「な、なに!?応戦!!急げ!!」
輸送艦の護衛についていた戦闘艦艇は直ちに砲門を開き応戦するが、距離が近かった事、そして数が多かったが為に対処が遅れた。
「駆逐艦Ｚ―１６８撃沈!!」
「同じくＺ―３４も被弾!!」
「輸送船３０５号被弾し大破!!」

「司令官、飛来してきたのは亜空間魚雷です!!」
「亜空間魚雷だと!?では、次元潜行艦か!?」
「間違いありません!!」
「まさか、ボラーの連中が次元潜行艦の技術を・・・」
謎の暗号通信にレーダーに映らない事、突然の攻撃、しかも攻撃方法が亜空間魚雷と言う事から護衛隊の司令官は自分たちを攻撃してきたのが次元潜行艦であると察した。
しかし、ボラーはこれまでの戦いで次元潜行艦を繰り出した事などなかった。
だが、現に自分たちはこうして攻撃を受けている。
いくらなんでも友軍の次元航行艦が自分たちを攻撃してくるとは思えない。
その事から司令官はボラー連邦が自分たち同様、次元潜行艦の建造技術を得てソレを建造し、実戦に投入して来たのだと判断した。
「周辺のパトロール隊に緊急伝!!」
「は、はい!!」
「亜空間魚雷、本艦にも接近!!」
「迎撃しつつ回避!!」
「敵亜空間魚雷、きわめて至近!!回避間に合いません!!」
「そ、そんな・・・」
「あ、当たる!!うわぁぁぁぁぁぁぁー!!」
亜空間魚雷は輸送船団の護衛をしていた護衛隊の旗艦へと命中した。

???改め、ボラー連邦　B型次元潜行艦　B―001　艦橋
「亜空間魚雷全弾命中、敵輸送船団は壊滅状態です」
「ふむ、初戦にしては中々の戦果だな」
「はっ!!首相閣下にも吉報をお伝え出来ますね」
「うむ。このまま戦果をあげれば我々は国家英雄になれるぞ」
「敵輸送船団の残存艦が救難信号を発信しています!!」
「全艦に通達、直ちにこの宙域から離脱する」

「はっ!!」
「ふっ、ガルマンの連中め、次元潜行艦を有しているのは自分たちだけではないぞ。これからはどこから魚雷が襲い掛かって来るのか分からない不安な航海となるだろう。ハハハハハ!!」
ボラー連邦の次元航行艦隊はガルマン・ガミラスの輸送船団を壊滅させるとその姿を何処かへと消した。
輸送船団からの救難信号を受信したガルマン・ガミラス東部方面軍のパトロール隊が現場に到着すると、そこには既に敵の姿はなく輸送船団とその護衛をしていた戦闘艦艇の残骸と大破した艦艇が空しく宇宙空間を漂っていた。
「い、一体彼らの身に何があったと言うのだ・・・」
ガルマン・ガミラス側がボラー連邦も次元潜行艦を使用し通商破壊活動を行っている事を知るのはもう少し先になってからだった。

此処でガルマン・ガミラス、ボラー連邦、両陣営が保有する次元潜行艦について説明しておこう。
ガルマン・ガミラスが保有する次元潜行艦はまだデスラーがガルマン星を見つける前、彗星帝国に身を寄せていた時、デスラーは彗星帝国との間に技術交換を行っていた。
それにより彗星帝国はガミラスの瞬間物質転送機の技術を得て、メダルーザ級殲滅型重戦艦を建造することが出来た。
一方のガミラスは彗星帝国の宇宙艦艇で採用されている回転式砲塔の技術と彗星帝国が保有していた潜宙艦の技術を得た。
木星圏におけるヤマトとの決戦後、デスラーはヤマトへの憎しみを解消し新天地への大航海へと出た。
マゼラン星雲にてヤマトと共にゴルバと戦い、そしてようやく新天地であるガルマン星へとたどり着き、当時ガルマン星を支配していたボラー連邦を一掃した後、新国家を樹立させた。
新国家樹立後にデスラーはボラー連邦を完全な敵対国として認識し、優位に戦況を進める為、新兵器の開発を進め、次々と新たな新造艦を建造していった。

そして、その最中に彗星帝国からの技術交換で得た潜宙艦の技術で次元潜行艦を建造した。
ガルマン・ガミラスの次元航行艦が彗星帝国からの技術で建造された経緯がある一方、今回初めて実戦導入されたボラー連邦側は時空管理局より次元潜行艦技術を得ていた。
時空管理局がボラー連邦への武力制裁失敗により、時空管理局が保有していた次元航行艦が何隻かボラー連邦側に鹵獲されていた。
ベムラーゼが時空管理局への見せしめとして破壊した次元航行艦もあったが、鹵獲し改造したボラーの次元航行艦は本局へ帰還する管理局の次元航行艦を追撃する働きを見せるが、鹵獲した次元航行艦はその後のガルマン・ガミラスとの戦闘により喪失した。
だが、次元航行艦の実戦データや技術調査のデータはボラー連邦本国に残されていた。
ガルマン・ガミラスと敵対していたボラー連邦はガルマン・ガミラスが次元潜行艦を保有していた事を当然、知っていた。
管理局から鹵獲した次元航行艦を沈めたのもガルマン・ガミラスの次元潜行艦だからだ。
ガルマン・ガミラスの次元潜行艦により喪失した管理局の次元航行艦なんて当初、ボラー連邦は自分たちよりも弱小勢力の艦なので、『所詮この程度かと』思い歯牙にもかけない扱いであったが、その後も続くガルマン・ガミラスとの戦争で次元潜行艦の優位性に気づいたボラー連邦の兵器開発局は再び管理局の次元航行艦のデータとガルマン星支配時代に得た波動エンジンの技術を組み合わせてボラー側も次元潜行艦の建造を開始して短期間で次元潜行艦の建造に成功したのだ。

管理局では現在、ボラー連邦から亡命したミノフスキーが宇宙艦艇の新型エンジンの開発を行っているが、その反面、管理局はボラー連邦に次元潜行艦技術を不本意ながらもプレゼントしてしまう皮肉な結果となってしまった。

その管理局において、某日フェイトはクロノにある相談をしていた。
「えっ？士官学校へ行く？フェイトが？今から？」
「うん」
フェイトは管理局の士官学校へ学び直したいと言うのだ。
フェイトはＰＴ事件後に事情聴取、裁判を半年で終えた後、嘱託局員として活動し、海鳴でジュエルシードをかけて後に管理局でエース・オブ・エースと呼ばれる高町なのはと共に聖祥大附属中学を卒業後に管理局の訓練校を僅か三ヶ月の短期プログラムを受けた後、実績を積んで執務官試験を受験して合格した後、執務官となり現在に至る。
そのフェイトが改めて士官学校へ入校したいとクロノに言ってきたのだ。
「どうして今になって士官学校へ？」
クロノは何故今頃になってフェイトがわざわざ士官学校へ入りたいのか？
その真意をフェイトに訊ねる。
既に執務官資格を有して魔導師としても管理局員としても実績も十分に積んでいるフェイトはまさに絵に描いたようなエリート局員なのだから今更士官学校へ入校する意味はない筈だ。
それにもかかわらずフェイトはこうしてクロノに士官学校への入校を相談している。
「私、将来はクロノみたいに次元航行艦の艦長を目指したい」
「次元航行艦の艦長に？」
フェイトは本格的に次元航行艦乗りを目指しゆくゆくはクロノやはやてと同じく次元航行艦の艦長を目指したいと言う。
「うん。その為には現場の経験も大切だけど、まずは基礎から学びたいの・ティアナもきっと向こうの地球で防衛軍の軍人になる為、専門の学校か訓練校に通っているだろうし」
（フェイトもティアナに感化されたのだろうか？）

そう思いつつクロノはフェイトに管理局・〝海〟の現状を話す。
「しかし、フェイト。〝海〟・特に次元航行艦乗りは既に少し前のような花形職業ではない。ひとたび次元の海へ出れば常に死の覚悟が必要になる。乗員の中には不正も横行し他の世界の住人に恨まれ、時にはそんな彼らを手にかけろとまで言われるかもしれないんだぞ。今の次元航行艦乗りはそんな職場環境になっているんだ」
クロノの話ではフェイトが思っていた以上に〝海〟の次元航行艦乗りの職場は危険で荒れている様子だ。
危険な職場になっているからこそ、使い捨てのような素行が悪い局員があてがわれているのかもしれない。
「この前の次元断層での遭難もそうだが、彗星帝国から襲撃を受け遭難して、暗黒星団帝国の占領下を経験したフェイトも分かっている筈だ」
「だからこそだよ、クロノ。クロノだってボラーへの武力制裁を経験した後もこうして管理局に残って、次元航行艦の艦長をしているじゃない。それに不正を正したいって言う思いがあるからこそ、こうして学び直したいんだよ」
「・・・・」
「私もなのはもはやてもこれまで管理局の綺麗な所しか見てこなかった・・・・ううん、気づかなかったのかもしれない・・・・六課が解散する前までは〝陸〟は文句が多い部署としてか見ていなかったけど、実際にＪＳ事件後の事後調査で〝海〟がいかに恵まれていたのかを理解できたし、〝陸〟の事を誤解していた自分が物凄く恥ずかしかった」
「・・・・分かった。フェイトがそこまで言うのなら、推薦状は用意しよう。ただし試験は他の受験生同様受けてもらうぞ。でないと受験生に示しがつかないからな」
「うん。そのつもりだよ」
こうして、ティアナと同じくフェイトはミッドにて士官学校を受験をして次元航行艦乗りを目指す事になった。
フェイト同様、もう一人将来について悩んでいる者がもう一人いた。

ミッドチルダ西部地方　エルセア　ナカジマ家
チンク・ナカジマは悩んでいた。
彼女はＪＳ事件後に管理局の司法取引を受け、海上更生施設にて更生教育を受けた後、ナカジマ家に他の姉妹と共に養女として引き取られた。
管理局の司法取引があったので、チンクたちは嘱託局員扱いであり、ピンチヒッターとして現場に出る事があった。
その中でも海上第七支部、次元航行船コスパ・コンコルド号の救助任務が、チンクたちが嘱託局員となってから体験した大きな事件であった。
その後、ノーヴェは嘱託局員をする傍らスポーツジムの経営者を目指して勉強中、ディエチとウェンディもスバル同様、救助隊に所属している。
スバルは兎も角、ディエチとウェンディは戦闘機人だからこそ、通常の人間では困難な現場でも活動できる、自分の存在意義は人を助ける事なのだと新たな生きがいを感じている様だった。
ナカジマ家ではなく聖王教会へ引き取られたセイン、オットー、ディードもシスター、教会騎士として頑張っている。
特に感情が乏しかったオットーとディードは教会に引き取られてからは感情豊かになりつつあり、それは良い傾向だろう。
しかし、チンクの場合他の妹たちよりも稼働期間が早かった事と養父であるゲンヤの妻であるクイントが所属しているゼスト隊の壊滅に関わっていた。
そういった点からもチンクは他に姉妹と異なり負い目を感じていた。
当初は管理局の司法取引を拒否したウーノ、トーレ、クアットロ、セッテの様に刑務所に服役しようかと思ったが、ウーノたちが刑務所に収監されることを選んだ事から最年長は自分だけとなり、妹たちの引率も兼ねて自分は司法取引を受けた。
嘱託局員として時には人命救助、そして時には捜査官として犯罪者

を追う捜査も行っているが、チンクはどこかやりがいを感じられない所があった。
元とは言え犯罪者の自分がこんなことを感じる事はあまりにも無神経と言うか贅沢すぎる事なのだが、はたしてただやりがいを感じないだけなのだろうか？
そんな疑問もチンクの中にはあった。
妹たちはもう十分に外の世界で経験を積み、自立した。
姉として妹の引率役は果たしたのではないか？
では、自分は一体この後どうする？
「・・・」
チンクが自身の今後に悩んでいると、
「あっ・・ち、チンク姉？」
実家に戻っていたスバルがチンクに声をかけた。
スバルはこう見えて他人の感情には鋭い一面がある。
チンクが何かに悩んでいるのではないかと察したのだ。
「ああ、スバルか・・・」
「どうしたの？何か悩んでいるみたいだけど・・・」
「・・・ちょっと自分の将来に・・な」
「？チンク姉の将来？」
「ああ・・・ノーヴェはスポーツジムの経営者を目指し、セインたちは教会のシスター、ディエチとウェンディは救助隊でスバル同様活躍をしているのだろう？」
「う、うん。でもチンク姉も救助隊や父さんの部隊で活躍しているってノーヴェが言っていたけど？」
「活躍か・・・ただ指示に従って動いていただけだ。それではドクターの作った玩具となんら変わらん」
「・・・」
自嘲した笑みを浮かべるチンクに対してスバルは何だか危いモノを感じた。
「チンクが悩んでいる？」

「はい」
スバルはフェイトに連絡を入れた。
なのはではなくフェイトに連絡を入れたのは共にギンガの生存を知っている仲であり、フェイトはもう一つの地球でティアナの悩みを聞いていたからだと推察したからだ。
「それってどんな悩みなの？」
悩みにも色々ある。
もし、チンクが異性関係で悩んでいるとしたら恋愛経験のない自分は、アドバイスは出来そうにない。
「チンク姉が言うには将来について悩んでいるみたいですが、ただそれだけじゃないようにも思えて・・・・」
「そう・・・それなら、今度私がチンクと話そうか？」
「えっ？フェイト執務官が？」
「うん。実は私もちょっと将来について悩む所があってね」
「わ、分かりました。フェイト執務官がよければチンク姉の相談にのってあげて下さい。チンク姉の方にはあたしから伝えておきますので、フェイト執務官の都合がいい日を教えてもらえますか？」
「えっとね・・・・」
「ありがとうございます。フェイト執務官。えっと・・チンク姉の事よろしくお願いします」
「うん。できる限りの事はするよ」
こうしてフェイトはチンクの相談に乗る事にした。
果たしてフェイトはチンクの悩みを解決する事が出来るのであろうか？

百六十三話　牙をむくボラー次元潜行艦隊

本局内にある個室型の喫茶店。
スバルとフェイトにとってはもはや馴染みの店になりつつある喫茶店の一室にフェイト、チンク、そしてスバルの姿があった。
スカリエッティが生み出した戦闘機人・元ナンバーズⅤ、チンク・・・ＪＳ事件後は海上更生施設にて更生教育を受けた後、ナカジマ家に養女として引き取られ現在はチンク・ナカジマとして嘱託局員になり働いているのだが、彼女は最近、自らの将来について悩んでいた。
そんな彼女を見かねたスバルはフェイトに相談をすると、フェイトはチンクと会って彼女の相談に乗ると返答が来た。
そしてフェイトは時間を取り、こうしてチンクと会った。
スバルがこの場に居るのはフェイトとチンクの仲介役であり、基本二人のやり取りを見守るつもりでいた。
「わざわざ私の為に時間を割いて申し訳ない。フェイト執務官」
「ううん、そんなことないよ。私自身もつい最近、自分の将来について考えていたところだし」
「フェイト執務官も将来について悩むのか？」
チンクから見たフェイトはまさに絵に描いたような管理局のエリート街道を突き進んでいるエリート局員の様に見えていたので、そんなフェイトが将来について一体何を悩んでいるのか不思議に思った。
「私だって人だもの、悩む事だってあるよ。それよりもまずはチンクの悩みを解決する事が先だから、話してくれる？もし、言いづらい所が有れば全部は言わなくてもいいから・・・」
「う、うむ・・・」
チンクはフェイトにここ最近自分が思っている事を語る。
チンクから話を聞いたフェイトは、
「もしかしたら、チンクは今、燃え尽き症候群になっているんじゃないかな？」

「も、燃え尽き症候群？」
「えっ？チンク姉、どこか燃えていたの？それなら急いでマリーさんに診てもらった方が・・・」
　フェイトが口にした『燃え尽き症候群』と言う単語にスバルが反応して、チンクの身体を案じる。
「違うよ、スバル。『燃え尽き』って単語は入るけど、身体が燃えたりする訳じゃなくて、『燃え尽き症候群』って言うのは、意欲を持って一つのことに没頭していた人が、あたかも燃え尽きたかのように意欲をなくし、社会的に適応できなくなってしまう状態の事だよ」
「そんな病気があるのか・・・」
「うん。主に仕事一筋で定年退職した人がなりやすいみたい」
「じゃあ、父さんもそうなる可能性が・・・」
　スバルは父親のゲンヤが管理局を定年退職した後にフェイトが言う燃え尽き症候群になるのではないかと心配した。
「何か趣味があれば大丈夫かも」
　フェイトも仕事一筋のゲンヤが定年退職後、燃え尽き症候群になるかもしれないと思い今の内に何か趣味があれば防ぐことが出来るかもしれないとアドバイスをする。
「じゃあ、チンク姉も何か趣味があれば治るの？」
「うーん、チンクの話を聞くと、チンクは妹であるノーヴェたちが自立して自分の役割が無くなったと感じて燃え尽き症候群になったように思えるんだよね・・・チンクって結構世話好きじゃない？」
「うん。確かにチンク姉は世話好きだね」
「そ、そうなのか？」
　チンク自身はあまり自覚していないようだが、フェイトの指摘にスバルは頷く。
「お世話をするのが好きなら、そう言った部署・・・例えばなのはやヴィータみたいな教導隊とか目指してみる？」
　フェイトはチンクに生徒に教える仕事・なのはやヴィータが所属している教導隊を提案する。
「いや、私の戦闘スタイルは独特で私と同じ戦闘機人向きだから、普通

の魔導師に教えられるかは・・・」
「あっ・・・」
　チンクがこれまで世話を焼いていたのは自分と同じ戦闘機人の妹たち・・・
　やはり通常の魔導師と戦闘機人とでは似て異なる存在なのだとチンクの様子から実感するフェイト。
　若干気まずい空気の中、スバルがそれを察して、
「そ、そう言えばさっきフェイト執務官も将来について悩んでいると言っていましたが、フェイト執務官の方はもう解決したんですか？」
　話題をチンクからフェイトに移した。
「ああ、うん。私の方は解決？したよ。もっともこの後は私自身の努力次第だけどね」
「ん？それってどういう事ですか？」
「私、今度管理局の士官学校を受験しようと思っているの」
「えっ？士官学校!?フェイト執務官が!?」
　スバルはクロノ同様、フェイトが士官学校を受験すると言う事実に驚く。
「ん？フェイト執務官は士官学校を卒業していないのか？」
　一方、チンクの方はＪＳ事件前のフェイトの経歴をあまり知らず、執務官でありエリート局員なのだからてっきり士官学校を卒業したのかと思いきや、フェイトの口ぶりから士官学校を卒業していない様に見えた。
「あっ、うん。私は海鳴での事件後に嘱託局員として働いて、なのはと一緒に訓練校を三ヶ月の短期プログラムを受けた後で正式に管理局の局員になったから士官学校は出ていないよ」
「でもなんで今更士官学校を受験しようと思ったんですか？」
「うむ、私から見てもフェイト執務官はもう十分なキャリアを積んでいるのではないか？」
　スバルもチンクもフェイトが士官学校を受験し直す意図が掴めず、何故今になって士官学校を受験するのかをフェイトに訊ねる。
「私、次元航行艦の艦長を目指そうと思っているの」

「えっ？次元航行艦の艦長!?」
「フェイト執務官が!?」
フェイトが士官学校を受験する理由を聞きスバルもチンクも驚く。
「フェイト執務官はどうして次元航行艦の艦長を目指そうと？」
「やっぱり、向こうの地球に関係しているんですか？」
そして、フェイトに次元航行艦の艦長を目指す理由を訊ねる。
スバルとしてはフェイトもティアナ同様、遭難しもう一つの地球で過ごした事に何か関係があるのかと思った。
「うん。スバルの言う通り、やっぱりもう一つの地球・・・防衛軍の軍艦に乗って航海した事が起点かな。ティアナも多分そうだったと思う」
「フェイト執務官、もしよければその話を聞かせてはくれないか？」
スバルは防衛軍との交信の席に何度か出席した事でもう一つの地球での生活や防衛軍の艦に乗った時の航海についての大まかな内容を知っているが、チンクは触り程度の事しか知らなかったので、エリート局員であるフェイトが途中で自身の進路を変更するほどの影響を与えたもう一つの地球に対して興味が沸いてきた。
「チンクはスバルから聞いていないの？」
「うむ、もう一つの第９７管理外世界の存在とその星を守備する防衛軍の存在は知っているが、フェイト執務官たちがどんな事を経験したのかは知らない」
フェイトは下宿して実家から出ているとは言え、てっきりスバルは家族に話しているかと思ってスバルをチラッと見る。
「えっと・・もう一つの地球の事はあまり吹聴しない方がいいかな？と思って・・・」
スバルはもう一つの地球にはギンガが居るので、もう一つの地球に関して詳しい事情を家族とは言えあまり吹聴するのはマズイと思い、チンクたちにもそこまで詳しい内容は話していなかった。
「なるほど。まぁ、私自身もスバルと同じであまりもう一つの地球に関して話しにくい部分もあるけど、スバルが知っている範囲なら話せるよ」

「ぜひ聞かせてくれ」
「それじゃあ、まず私とティアナが遭難して防衛軍の人たちと出会った時から話すね」
　フェイトは『スバルが知っている範囲』とは言うが、やはりギンガの事は除き、チンクに自身が体験したもう一つの地球での出来事を話した。
「・・・その後、私とヴィヴィオはミッドに戻って来たの」
「壮絶な体験をしたのだな、フェイト執務官は・・・」
　フェイトの話を聞いたチンクは振り絞るような声で感想を呟く。
「うん。一見すると嘘のようにも聞こえるし、自分でも夢じゃないかと思う様な体験だったけど、これは全部本当の出来事だよ」
「そ、そうか・・・しかし、フェイト執務官一ついいだろうか？」
「ん？なに？」
「そのような体験をしたにもかかわらずフェイト執務官は敢えて危険な次元航行艦の艦長を目指す理由は一体なんだ？」
　一つ間違えれば死にそうな程の危険な目に遭遇したにもかかわらずフェイトは敢えてその世界へ深く足を踏み入れようとしている。
　その理由をチンクはフェイトに訊ねる。
「理由はいくつかあるかな。まず一つは、まだ見ぬ世界を見てみたい。次元の海・宇宙にはこれまで管理局が知らない世界が・星がたくさんあると言う事をあの時の体験で知った・だからこそ私はそんな世界を見てみたい。次はミッドを守る為かな」
（『新しい世界を見てみたい』って言う思いは何かスカリエッティみたいなところが癪なんだけどね・・・）
　フェイトは自分が次元航行艦の艦長を目指す理由の一つにスカリエッティと似たような所があるのが複雑な気持ちだった。
　と言うのも、スカリエッティ自身がフェイトのように純粋な人間ではなくアルハザード時代の技術を用いて生み出した人工的な生命体であり、彼の開発コードネームが『無限の欲望（アンリミテッドデザイア）』であり、彼自身がその名を体現するように飽くなき欲望と探究心を持ち現在はイスカンダルにて当星の復旧を行っているのだが、

フェイトは宇宙に存在する沢山の星を見てみたいと言う思いがスカリエッティと何となくだが被っていると思ったからだ。
「ミッドを守る？」
「うん。宇宙には管理局よりも技術が高い星が幾つもある事が分かった。今後ミッドがそうした勢力に脅かされないとも言い切れない・・・もう一つの地球でさえ暗黒星団帝国に一時とは言え占領されてしまったのだから・・・」
「・・・」
「だからこれからの管理局はそうした世界と対等のパートナーが必要だと思っている。もう一つの地球はパートナーにふさわしい世界だったのだろうけど、残念ながら管理局は信頼を得る事は出来なかったからね」
フェイトが次元航行艦の艦長を目指す理由を聞きチンクは唖然とする。
そんなフェイトにスバルは、
「フェイト執務官・何か人が・性格が変わったような気がします・・・」
スバルが知るフェイトは真面目ではあるが肝心なところは抜けていて子供が大好きな印象が強かったのだが、今のフェイトは何だか別人に見えた。
「うーん・これはクロノにも言ったけど、やっぱり九死に一生を得たからだと思う」
「えっ？それってどういう意味ですか？」
スバルの疑問にフェイトは否定をせずに自らの性格が変わった理由を話す。
「九死に一生を得ると人生観が変わるって事だよ。もしもあの時、遭難をせずにもう一つの地球へ行かなければきっと私は何も変わらなかっただろうし、次元航行艦の艦長を目指す事も無かったと思う」
「まさに人生の転換点と言う事か・・・フェイト執務官にとってもう一つの地球との遭遇は・・・」
「うん。そういう事になるね。勿論、ティアナもね」

「そうか・・・」
　フェイトの話を聞き、チンクは店に入って来た時と異なり何かを決意したような表情で、
「フェイト執務官」
「ん？なに？」
「その・・・わ、私も入れるだろうか？その・・・士官学校に・・・」
「えっ？」
「チンク姉？」
「私もフェイト執務官の話を聞いて、私もまだ見ぬ世界を見てみたくなった・・・」
「でも、チンク姉大丈夫？客船の救助活動の時に過呼吸になったって聞いたけど？」
「あれは私自身の過去の行いが原因だ。私がどれだけ人を救おうとそれは偽善と自己満足なのだろうが、それでも償いたいし、それに私たちを引き取ってくれた義父上や妹たちが居るこのミッドを守りたい言う思いはこんな私にもあるのだ」
「だけどチンク姉、士官学校を受験するにはもう一つ問題が・・・」
　スバルが指摘する士官学校への受験の壁・それは・・・」
「フェイト執務官、チンク姉は魔導師じゃないから士官学校を受験する事が出来るのでしょうか？」
　チンクたちナンバーズはスカリエッティが生み出した戦闘機人でインヒューレントスキル（Ｉｎｈｅｒｅｎｔ　Ｓｋｉｌｌ、通称：ＩＳ）と呼ばれる先天固有技能を持っており、その能力は一見魔法に見えるが、彼女たちのＩＳ能力は魔力とは異なるエネルギーを使用しているため、彼女たちは正確には魔導師ではない。
　それは誕生にギンガ、スバル同様クイントのＤＮＡデータを基に生まれたノーヴェも例外ではない。
　一方、同じ戦闘機人でもギンガとスバルはナンバーズとは異なる誕生の仕方をしており、スバルは魔法とＩＳの両方を使用できる特殊な戦闘機人となっている。
　そして管理局の士官学校の受験条件は魔力レベルが一定以上のラ

ンクがある者とされている。
　かつてティアナも士官学校と空隊を受験したのだが、士官学校は魔力レベルが低いと言う理由で、空隊は空戦属性が無いために落とされた経緯がある。
　フェイト程の魔力レベルの魔導師ならば受験できるのだが、ティアナと言う前例があるので、チンクが士官学校を受験できるのかが問題でありスバルはフェイトに意見を求める。
「多分、大丈夫じゃないかな」
　スバルの心配を他所にフェイトは魔導師ではないチンクでも士官学校を受験することは出来るのではないかと言う。
「えっ？大丈夫なんですか？」
「確実・とは言えないけど、管理局の・ううん、〝海〟の現状を考えてみると・・ね・・・」
「〝海〟の現状？」
　フェイトの返答に首を傾げるスバルとチンク。
「そう・ボラー連邦への武力制裁の失敗で〝海〟は沢山の艦船と人材を失い、その後も〝海〟からは人材の流出が止まらないみたいだからね。そんな現状で魔力レベルがどうだとか選り好みをしている余裕なんて管理局にはもう無いだろうからね」
　フェイト曰く、もはや管理局・特に〝海〟には人材を選り好みしている余裕などなく、来る者は拒まず状態となっており、〝海〟所属の士官局員を多く輩出している士官学校も同様の理由で入学者を増やしているとフェイトは予想していた。
　その為、魔導師ではないチンクも士官学校を受験できると判断したのだ。
　もっとも受験ができると言う事で通常通り試験には合格ラインは設定されている筈なので、士官学校へ入学できるかはフェイト同様、チンク自身の今後の努力が必要不可欠である。
「そ、そうなのか・・・」
「うん。もしチンクが本気で士官学校を受験する気なら必要書類を用意するけど？」

「ありがとう。フェイト執務官：よろしく頼む」
「分かった」
　こうしてチンクの悩みは解決し、それと同時にフェイトと同じく士官学校を受験する事になった。
　フェイトとチンクは受験生となり受験が終わるまではライバルとなった。
　チンクが士官学校を受験する事にスバル以外のナカジマ家の面々は驚いた。
「えええー!!チンク姉が士官学校を受験する!?」
「どういう事っスか!?」
「そのままの意味だ」
「でも、突然だね」
「スバルの奴が最近、お前さんが悩んでいるんじゃないかと言っていたが、士官学校の受験で悩んでいたのか？」
「えっ？ああ・・・はい・・・・」
　フェイトから自分が燃え尽き症候群になっていたとはいえず、士官学校の受験の件で悩んでいる事にした。
「それで、スバルがフェイト執務官に話をして必要書類とかを用意してくれるとの事なんですが・・・・」
　受験となると受験料が必要となる。
　一応、チンクも嘱託局員として働いているので正規の局員ほどではないが管理局から給料は出ているので、受験料は自分で賄えるが一応家族には報告を入れる必要はある。
「そもそも何でチンク姉は士官学校を受験しようと思ったの？」
　ディエチがチンクに士官学校を受験しようとする切っ掛けを訊ねる。
　チンクは家族にフェイトの話を聞いて感化された事で士官学校を受験して、ゆくゆくは〝海〟の次元航行艦乗りになりたい事を告げる。
「そうか・・・チンクは〝海〟の士官を目指したいのか・・・・」
「は、はい。〝陸〟所属の義父上には申し訳ありませんが・・・・」

「いや、お前さんが決めたのなら止めはしないさ」
ゲンヤは当初、ギンガとスバルには管理局員ではなく普通の人生を歩んでもらいたかった。
それは勿論、彼女たちの出生が関係していた。
しかし、クイントが所属していたゼスト隊事件でクイントが殉職してから、ギンガは母親の事件の真相を突き止める為、スバルは巻き込まれた空港火災の時に自分を助け出してくれたなのはに憧れ、自分も人を助ける事を目標にして、二人は管理局へと入った。
そしてスバルは目標を達成して、今では特別救助隊へと入隊を果たした。
一方、ギンガの方は母親の事件の真相を突き止める前に不慮の事故で遠くの世界へ跳ばされてしまったが、フェイトが自分たちに届けてくれたギンガからの手紙で、ギンガはギンガなりの幸せを遠くの世界で手に入れることが出来た。
もし、ギンガが管理局員になっていなければ、彼女が遠くの世界へ跳ばされることはなかったのかもしれないが、それと同時に彼女が今手に入れている幸せも無かった事になるので、父親であるゲンヤとしては複雑である。
(チンクの奴が〝海〟へ行きたがるか・・・・)
(しかし、今の〝海〟は危険な職場だからな・・・・)
(チンクもギンガみてぇにならなければ良いが・・・・)
しかし何はともあれチンクの悩みが解決し、彼女の新たなる目標が出来たことに関しては養父として嬉しい反面、今の〝海〟の現状を知るとすべてに対して喜ぶことは出来ないゲンヤであった。
フェイトとチンクがそれぞれ自身の将来に新たな目標を立てて、その目標に向かおうと決めた頃、遠く宇宙の彼方にあるボラー連邦の本星では・・・・
ボラー連邦　本星　首相官邸　首相執務室
「ゴルサコフ・・・・」

「はっ!!」
「それで、例の新鋭艦隊の戦果はどうかね？」
ベムラーゼはゴルサコフに実戦投入したばかりの次元潜行艦隊の戦果を訊ねる。
「はっ、その件につきましては、着々と戦果は上がっております。現在、東部戦線へ投入したスペース・サブ艦隊は集団戦法により通商破壊行為を行い、ガルマン帝国の輸送船及び護衛艦を多数葬っております」
ゴルサコフは執務室にあるモニターに次元潜行艦隊の戦果を表示し、同艦隊の戦果を報告する。
「ふむ、弱小な時空管理局の技術から建造した艦であるので、役立つのか疑問であったが、どうやら杞憂だったみたいだな」
ベムラーゼとしてはやはり管理局の技術を疑問視していたのだが、こうして敵対するガルマン・ガミラスへ着実に被害を与えている報告に満足している様子だ。
「よろしい。新鋭艦隊には引き続きガルマン帝国の戦力を削ぐ・・いや、ガルマン帝国の艦隊を殲滅するよう攻撃を命じ給え」
「はっ!!」
一方、ボラー連邦の次元潜行艦隊の実戦投入を受けたガルマン・ガミラス東部方面軍では、

ガルマン・ガミラス　東部方面軍司令部　宇宙要塞
「昨日来より我が輸送船団が正体不明の攻撃を受け、輸送船団及び護衛艦艇に大きな損失を受けている。これは明らかに我々ガルマン・ガミラス東部方面軍への挑戦である」
ガイデルは現在、ガルマン・ガミラス本星に居るのだが、輸送船団への正体不明の攻撃の報告を受け、要塞へ通信を送りダゴンを始めとする東部方面軍の将兵たちへ檄を飛ばす。
「我々はガルマン・ガミラスの栄光を背にしておるのだ。これ以上無様な姿を晒す訳にはいかん。何としてでも襲撃した敵の正体を突き止め撃滅するのだ!!」

ガイデルの演説が終わると、東部方面軍の将官たちはまず敵の正体を掴む調査から始めた。
敵がどういった性能を持つ艦なのかそれが分からなければ対策の打ちようがないからだ。
当然、東部方面軍の将官たちはこの時、まさかボラー連邦が自分たちが保有する次元潜行艦とほぼ同じ能力を持つ艦がボラー連邦で建造され実戦投入されているとは知る由もなかった。
「回収したブラックボックスを解析した結果、輸送船団は突然の攻撃を受けたようです」
「レーダーは何も捕捉していなかったのか？」
「はい。レーダーには何の艦影も無かったみたいです」
「敵は高度なステルス機能を持つ艦なのでしょうか？」
会議室では将官たちの様々な意見が飛び交う。
そして当面の作戦行動は正体不明の敵の正体を突き止める事を念頭に威力偵察を行い輸送船の出航を中止する事を決定した。

そんな東部方面軍管轄が亜空間からの襲撃者がうろつく宙域へヤマト、まほろば、アルバレスはまさに入ろうとしていた。
バース星の寄港期間が終わり、出航しようとしていたのだ。

まほろば　第一艦橋
「出航準備。艦内、システムチェック」
「システムチェック」
「・・・システムチェック終了、オールグリーン!!」
「総員、出航配備!!」
「機関始動、圧力上昇中」
「艦長、出航準備整いました」
「ヤマト、アルバレスも同じく出航準備が完了したとの事です」
「うん。あっ、通信長」
「はい」
「出航前に総督府へ寄港許可を出してくれたお礼の電文を送ってく

れ」
「了解」
ギンガはドロッペの下にお礼の電文を送った。
「艦長、総督府より返信です」
「内容は？」
「はい：『貴艦ラノ航海ノ安全ヲ祈ル』：以上です」
「分かった。出航する!!ガントリーロック解除!!」
「ガントリーロック解除!!」
「微速上昇」
「微速上昇」
総督府へのお礼を終え、ヤマト、まほろば、アルバレスの三隻はバース星のドックを離れて、星の海へと乗り出した。
この先に潜む脅威があるとは知らずに・・・

ヤマト、まほろば、アルバレスの三隻がバース星を出航し、航路上の惑星探査を行いつつ東部方面軍の宇宙要塞を目指して航行している中、地球から定時連絡の時間が近づいていた。

ヤマト　第一艦橋
ヤマトの第一艦橋では通信長の相原が口笛を吹きながら通信機を操作していた。
相原は何やら機嫌が良さそうであるが、古代にとっては地球との定時報告は苦痛であった。
その理由はやはり第二の地球となる星が未だに見つからないからである。
一方、第二の地球が未だに見つからないにもかかわらず相原の機嫌が良いのは晶子の顔を見て話す事が出来るからである。
「艦長、地球との定時交信の時間です」
「うむ、通信回路を開いてくれ。それにしても手回しがいいなぁ。相原」
「相原通信長の楽しみの時間だからな」

古代が相原の手際の良さを褒め、太田が冷やかす。
やがて第一艦橋のメインパネルに孫の晶子の姿が映る。
「はい。こちら、宇宙移民本部長室」
「こちら、宇宙戦艦ヤマト。定時報告の為、通信を入れました。藤堂長官をお願いします」
「分かりました。少々お待ちください」
晶子は藤堂へ通信を繋ぐ。
藤堂の執務机は沢山の書類に埋もれており多忙そうであったが、ヤマトからの定時報告と言う事で通信に出た。
「いやぁすまん。地球防衛軍の職務に加えて宇宙移民本部の部長職も引き受けてしまったので、忙しくてな」
執務机の上の書類の量を見る限り藤堂が多忙である事が容易にうかがえる。
藤堂以外でも新惑星探査チームの全員が忙しそうだ。
「それで古代、現時点までの調査報告を聞こう」
「はい。本艦はバジウド星系第四惑星のバース星を出航後、昨日より宇宙経度四十度、経度二十度、百万宇宙キロを銀河系中心部方面へ進み、探査予定のＮ８０８１星系を調査しましたが、この星も人類の移住には適さない星と判断いたしました。その理由は大気中の酸素の含有率が極めて低い結果が出たためです・・・・」
古代は探査した星が地球人類の移住に適さない理由を報告する。
古代の報告を聞き、藤堂は少し沈んだ表情になる。
「そうか・・ご苦労、ではまた探査を続けてくれたまえ。次の定時報告を待つ」
「はい。定時報告を終わります」
定時報告が終わり地球との通信回路が閉じる。
宇宙移民本部の宇宙海図にはこれまでヤマトが探査した結果が表示されるが全て移住不可の赤印ばかり・・・・
「移住に適さずの赤印ばかりが増えていく一方だ・・・・」
宇宙海図に表示されている赤印を恨めしそうに見ながら呟く藤堂。
「ですが、間もなく他の国の探査船団も出航なさるのでしょう?・お爺

様」
「こら、仕事中は、お爺様はよせ」
「ごめんなさい」
藤堂は窓際に立ち沈みゆく太陽を見る。
もっとも沈んだとしても太陽が膨張しているので以前のような夜の闇はなく、夕方か日の入りのようなぼんやりとした明るさが残っている。
「二倍は膨らんだな」
(頼むぞ・・・ヤマト・まほろば・・・)
膨張している太陽を見て地球に残されている時間が着実に削られていく危機感を抱きながら藤堂は呟いた。
地球との定時報告を終え、探査も宇宙気象の影響もなく平穏な航海が続いている中、通常空間とは異なる亜空間から三隻の動向を窺うモノが居た。

ボラー連邦　B型次元潜行艦　B―001　艦橋
「ハーベリー少尉、見てみろ。新たな獲物だ」
B型次元潜行艦、B―001の次元潜行艦隊司令官兼艦長のボグダークシュは副長のハーベリーに潜望鏡を見てみるよう勧める。
「あれはガルマン帝国のゲルバデス級に・・・ん?あとの二隻は見慣れない艦影ですね」
「ああ・だが、明らかに武装している艦であり、尚且つゲルバデス級と行動を共にしていると言う事はあの二隻はガルマン帝国の新型艦の可能性が高い」
ボグダークシュはアルバレスと行動を共にしている事からヤマトとまほろばをガルマン・ガミラスの新鋭艦と判断した。
事情を知らない彼らからすればヤマトとまほろばがガルマン・ガミラスと異なる星に所属する宇宙戦艦だとは気づかない。
そもそも彼らは地球と言う星が存在している事さえ知らなかったのだ。
「次元潜行艦隊同時攻撃を行うぞ」

「飽和攻撃ですな」
「各艦に通達する。亜空間暗号通信ブイ、射出」
「はっ!!亜空間暗号通信ブイ、射出」
　Ｂ―００１から僚艦に向けて暗号通信を行う亜空間暗号通信ブイが射出される。

　まほろば　第一艦橋
「ん？・・・・艦長、何かの通信波を受信しました」
　Ｂ―００１が発した暗号通信はまほろばの受信機でも受信された。
「通信？内容は？」
「そ、それが・・・・」
　ギンガは通信機を操作して受信した通信内容を解読しようとするが、
「すみません。どうやら暗号通信みたいで解読不能です」
「暗号通信・・・・通信長、アルバレスのバレル大使と通信を繋いでくれ」
「了解」
　ギンガはアルバレスへ通信を入れる。
「アルバレスのバレル大使、出ました」
　まほろばの第一艦橋のメインモニターにはバレルの姿が映し出された。
「バレル大使、先ほど妙な暗号通信を傍受しましたが、そちらでも傍受しましたか？」
「ええ、傍受しました」
「この暗号通信はガルマン・ガミラス軍で使用されているモノですか？」
「いえ、このような暗号通信は初めて見ました」
　この辺の宙域で活動しているのはガルマン・ガミラス軍の東部方面軍なので、この暗号通信もガルマン・ガミラス軍の暗号通信かと思い良馬はバレルに確認をしたのだが、バレル曰くこのような暗号通信はガルマン・ガミラス軍では使用されていないモノだと言う。
「・・・一応、警戒した方が良いみたいですね」

「そのようですね」
ガルマン・ガミラスではない暗号通信を傍受したと言う事はガルマン・ガミラスではない艦船が暗号通信をこの近くで発信されたと言う事だ。
「通信長、ヤマトにも確認を!!」
「は、はい」
ギンガが急ぎヤマトに確認の通信を送るとやはりヤマトでも先ほどの暗号通信を傍受していた。
「艦長、やはりヤマトでも傍受していたみたいです」
「ヤマトにも先ほどのバレル大使の内容を伝え、全方位の警戒を伝えてくれ!!」
「了解!!」
ギンガはヤマトにも先ほどの暗号通信はガルマン・ガミラス軍で使用されている者ではない事を伝え、三隻は周囲を警戒しながら航海を続ける。

ボラー連邦　B型次元潜行艦　B―001　艦橋
「敵艦隊本艦の真上を航行中・例の新型艦はかなりの大きさの戦艦です」
「司令官、凄い獲物ですな」
「うむ・敵が我々に気づいている様子は?」
「ありません」
「ふっ、鼠共は罠にかかったな・・・」
「はい。後は罠のバネを外すだけです」
ボグダークシュは既に勝利でも確信したのか不敵な笑みを浮かべる。
「よし、追跡に入るぞ」
「はっ、機関始動。微速前進」
B―001はヤマト、まほろば、アルバレスの三隻を追尾する。
そして、その三隻の前方にはB―001の僚艦が待ち受けていた。

ボラー連邦　Ｂ型次元潜行艦　Ｂ―００３　艦橋
「Ｂ―００１より連絡があった敵艦隊接近中」
「よし、亜空間魚雷発射準備!!」
「はっ!!亜空間魚雷発射準備!!」
Ｂ―００３の艦首部にある魚雷発射管には次々と亜空間魚雷が装填されていく。
「亜空間魚雷装填完了!!」
「秒読み開始」
「発射五秒前、四‥‥三‥‥二‥‥一‥‥零」
「発射!!」
「発射!!」
Ｂ―００３を始めとしてヤマト、まほろば、アルバレスの前面に潜んでいた五隻の次元潜行艦から亜空間魚雷が一斉に発射された。
亜空間に潜む次元潜行艦から発射された魚雷は強力な推進力で亜空間を突き破り通常空間へ出るとヤマト、まほろば、アルバレスへと襲い掛かる。
先頭を航行していたヤマトとまほろばが亜空間魚雷をもろに喰らった。
被弾した事で艦全体は大きく揺れ、艦内には警報が鳴りひびく。
「こ、航海長!!艦の姿勢を制御しないと危ない!!」
「りょ、了解!!」
永倉は必至に操縦舵を操作して艦の姿勢を傾かない様に制御する。
「レーダーはどうした!?敵の反応はなかったのか!?」
新見がレーダーの記録を遡って探査するが、
「それがレーダーのログには敵の接近反応がありません!!」
「こんな至近距離で攻撃を受けているのに本当に反応はないのか!?」
「はい!!」
「攻撃でレーダーが壊れたんですか!?」
「異常も破損もないわ!!」
ギンガが新見にレーダーの異常を問うがレーダーには異常も破損も無かった。

ボラー連邦　Ｂ型次元潜行艦　Ｂ―００１　艦橋
「司令官、Ｂ―００２～Ｂ―００６までの第一波攻撃は成功したもようです」
「よし、こちらも攻撃するぞ」
「諸元入力完了、亜空間魚雷発射準備完了!!」
「発射!!」
Ｂ―００１も亜空間魚雷を発射し、その魚雷は後方に居たアルバレスへと迫る。

アルバレス　艦橋
「本艦の後方より魚雷接近!!」
「回避!!取舵一杯!!」
アルバレスは回避行動をとるが間に合わず、
ズガガーン!!
「左舷艦尾付近に被弾!!」
「火災発生!!」
「消火急げ!!」
「応急修理班は現場へ急行せよ!!」
「くっ・・・・」
バレルは被弾の衝撃で床に倒れた。
「ば、バレル様!!」
「大丈夫ですか!?」
「だ、大丈夫だ・・・イテテ・・・」
バレルは痛む身体を起こし、身体は打ったが怪我はない事を乗員たちに伝える。
アルバレスは被弾をしたが、ゲルバデス級は空母でもあり戦艦でもあるので、装甲板はそれなりの厚さがあったので、航行に支障はなかった。
ボラー連邦の次元潜行艦からの亜空間魚雷一斉攻撃を受けた三隻では被弾箇所の消火と応急修理が行われる。

消火作業と応急修理作業が行われている中、まほろばの食糧庫付近が被弾し火災が起きた。
「消火作業かかれ!!」
「こっちだ!!急げ!!少しでも多くの食料を移動させろ!!」
火災現場の中、ディアーチェたち生活班の炊事科の乗員たちは必死に消火作業と食料が入ったボックスを火災現場から遠ざける。
「ん?」
そんな中、作業を指揮していたディアーチェは窓外の宇宙空間に何かがあるのを見つけた。
「な、なんだ?」
ディアーチェがソレを注視してみるとソレは潜水艦の潜望鏡のようなモノが宇宙空間に存在していた。
潜望鏡らしきモノは左右に動き、宇宙空間を滑るように動くとやがて水に沈むように消えた。
「あ、あれはっ!?」
ディアーチェは急ぎ艦橋へ連絡をいれた。
「艦長!!」
「えっ?潜望鏡?」
「ああ、間違いない!!」
「潜望鏡って潜水艦に着いているあの潜望鏡!?」
「潜望鏡の下は?」
「何もなかった。あれは彗星帝国の潜宙艦と同じだ」
「潜宙艦・・そうか!!通信長、ヤマトとアルバレスに通信を!!」
「は、はい」
艦影が捕捉できず、いきなりの攻撃とディアーチェが見たとされる潜望鏡で全ての辻褄があい良馬は急ぎ古代とバレルに通信を入れた。
「なに!?潜宙艦!?」
「ええ、ウチの主計長が宇宙空間に潜望鏡らしきモノを見たと言ってきた。それに艦影のない攻撃は瞬間物質転送機か潜宙艦特有の攻撃方法だ」
「なるほど、最初は瞬間物質転送機でミサイルを送り込んできたのか

と思ったが、レーダーのログを見ると、ミサイルの出現パターンが不規則で空間歪曲反応もなかった」
　真田もこれは潜宙艦・次元潜行艦からの攻撃で間違いないと断言する。
「ガルマン・ガミラスが次元潜行艦を保有していたが、バレル大使の艦が居るにもかかわらず攻撃してくるとは思えない。勿論、時空管理局も違うだろう」
　ガルマン・ガミラスは友軍のアルバレスを攻撃してくるとは思えず、管理局の方も質量兵器を持っていない為、魚雷攻撃なんてしてくるとは思えない。
「まさか彗星帝国の残党が・・・・？」
　残るは彗星帝国であるが、これもはっきりと断言はできない。
　しかし、どの勢力が保有する次元潜行艦だろうと負ける訳には行かない。
　地球にはヤマト、まほろばの成果を期待している大勢の人々が待っているのだから・・・・

百六十四話　殲滅・亜空間襲撃艦隊

バース星を出航したヤマト、まほろばは第二の地球探査の為、銀河系中心部へと向かう・・・

ジュラからガルマン・ガミラス本星への伝令任務を帯びたアルバレスは東部方面軍司令部の宇宙要塞へ向かっている中、三隻は突如魚雷攻撃を受けた。

東部方面軍が管轄する宙域ではここ数日、正体不明の艦船の攻撃を受け、輸送船団とその護衛艦隊は著しい被害を受けていた。

今回三隻が受けた魚雷攻撃は東部方面軍が受けた被害と同様の攻撃であり、その正体の突破口をまほろばの主計長であるディアーチェが宇宙空間に突出する潜望鏡らしきモノを発見した。

その事から正体不明の敵は次元潜行艦だと判断された。

現在、地球側が認識している次元潜行艦を保有している勢力はガルマン・ガミラスと彗星帝国、そして次元潜行艦に似ている艦を保有・運用している時空管理局の三つの勢力であった。

ガルマン・ガミラスが友軍のアルバレスを攻撃してくるとは思えない。

次に時空管理局は質量兵器を禁止としているので、魚雷攻撃なんてしてくるとは思えない。

ならば彗星帝国の残党が偶々この宙域に降り、ヤマト、まほろばの姿を見て攻撃してきたのか？

ひとまず敵が何処の星間国家に属するのかを確認する必要もあった。

まほろば　第一艦橋

「古代艦長、バレル大使、ヤマトとアルバレスはワープをしてこの宙域から離脱してください。敵の次元潜行艦は本艦が対処します」

良馬はヤマトとアルバレスをこの宙域からの離脱を提案する。

「そ、そんなっ!?」

「貴方たちを置いて逃げるなど・・・・」
古代とバレルもまほろばをこの宙域に残していく事に抵抗があった。
「ヤマトは地球の未来を担っており、アルバレスはジュラさんからの大事なメッセージを預かっているのです!!ここであなた方に万が一の事があってはならないのです!!」
「・・・・」
「例え相手が次元潜行艦でも我々は此処で死ぬつもりはありません!!後から追いかけますから・・・・」
「わ、分かりました。ですが、必ず来てください。我々も待っていますから」
「要塞に辿り着ければ、そちらに援軍を手配します。ご武運を・・・・」
「月村、次元潜行艦を相手にするなら例の新装備を惜しみなく使え!!いいな!?」
真田が良馬に対次元潜行艦の装備を使えとアドバイスする。
「分かりました」
後ろ髪を引かれる思いがある中、ヤマトとアルバレスはワープを行いこの宙域から離脱していった。
「艦長、真田さんが言っていた『例の新装備』ってなんですか?」
永倉が良馬に質問をしてきた。
「実は以前、ハラオウン執務官たちを管理局の艦に引き渡した後、彗星帝国の潜宙艦を鹵獲しただろう?」
「ええ」
「あの後、鹵獲した潜宙艦を真田さんたち科学局の研究者と技術者が調査をしていた時に真田さんと会ったんだ。その時にまほろばに新たな装備を追加した事を聞いたんだ」
良馬は永倉を始めとする第一艦橋のメンバーに暗黒星団帝国戦役後～アルファ星へ向かう前に密かにまほろばに新装備を追加していた事を話した。
元々暗黒星団帝国の本星を探索している最中、真田とトチローは彗星帝国の潜宙艦、時空管理局の次元航行艦の対策として艦首航路セン

サーに亜空間ソナー機能と対次元潜行艦の特殊弾頭の研究開発を行っていた。
「真田さんとトチローさんは彗星帝国や時空管理局がもしかしたら潜宙艦や次元航行艦を密かに太陽系へ送り込んで来る可能性を見越していたんだと思う」
「ですが、潜宙艦を探すのは通信機の探信機能で分かるのでは？」
ギンガが亜空間ソナーではなくとも通信機の機能で対応できるのではないかと質問する。
「通信機の探信では探査出来る宙域が狭い。しかし、亜空間ソナーならば、全周囲を捜索できるから次元潜行艦を発見しやすいんだ」
「な、なるほど・・・」
良馬の説明を聞いて納得するギンガ。
「相手が次元潜行艦なら亜空間ソナーを使えば、亜空間に隠れている次元潜行艦を見つけることが出来る筈だ。航海長、艦首航路センサーを起動。ただし、ソナーの操作と探査は通信長が行ってくれ」
「了解」
「通信長」
「は、はい」
「亜空間ソナーの使用方法は探信機能とほぼ変わらないが、全周囲にソナーを打つから相手の反応が一度に複数くると思うが、何とかなるか？」
「はい。大丈夫です。視力と聴力には自信がありますから」
ギンガは自信をもって返答する。
（こういう時、普通の人じゃなくて戦闘機人で良かったって思うわね）
スバルは空港火災の時、なのはに助けてもらっただけではなく、戦闘機人として生まれた自分は普通の人とは異なる身体である事を当然認識していた。
当初は、普通の人よりも丈夫な身体を持って生まれた事を嫌悪していたが、なのはに助けられてからは戦闘機人として出生した自分の役割を探し、あの空港火災の時、自分はなのはに助けられたように、災害に巻き込まれた人を助け出す事が、自分が戦闘機人として生まれた

理由なのだと悟った。
ギンガ自身も暗黒星雲を航行した時、流れてくる岩塊をユリーシャと張り合う形でまほろばの危機を救った。
そして、今回も戦闘機人としての自分の能力が役立つ機会が来て、戦闘機人モードになり集中し敵の次元潜行艦の探査を行う。
ワープをしてこの宙域から離脱したヤマト、アルバレスの行動は亜空間に潜んでいたボラー連邦の次元潜行艦の方も掴んでいた。

ボラー連邦　Ｂ型次元潜行艦　Ｂ―００１　艦橋
「ゲルバデス級と新型艦の一隻がワープをしてこの宙域から離脱しました!!」
「残りの一隻は!?」
「まだこの宙域を航行しています!!」
「どうやら残った艦はワープ機関にダメージを負ったみたいだな」
ボグダークシュは僚艦の魚雷攻撃でまほろばのワープ機関に深刻なダメージを与え、ワープ不能になったのだと判断した。
「よし、まずはあの艦を先に葬る。残りの二隻はあの艦を葬った後、ワープ航跡を追って追尾する」
「了解!!」
「さあ、さっさとあの艦を片付けるぞ!!何せ残り二隻の獲物がこの後に控えているのだからな」
「はっ!!」
ボグダークシュはニヤリと笑みを浮かべる。
しかし、ボグダークシュの思惑は外れており、まほろばのワープ機関は健在であった。
そして、まほろばは、彗星帝国の潜宙艦と戦っていた頃の防衛軍の艦艇よりも対次元潜行艦の装備も充実している事を知る由もなかった。

まほろば　第一艦橋
「・・・ソナー反応ありました」

「どこだ?」
　亜空間ソナーでギンガは敵の次元潜行艦の位置を突き止めた。
「一番近いのは本艦の後方、距離十五宇宙キロ」
「よし、まずはそいつを仕留める。砲雷長、まほろば後方十五宇宙キロに向けて波動爆雷発射!!」
「了解、まほろば後方、十五宇宙キロに向け波動爆雷発射!!」
　まほろばの後方の爆雷発射管から波動爆雷が四方八方へと撃ち出され、次々と爆発していく。
　ズドーン!!
　ズドーン!!
　すると宇宙空間の一角がグニャリと歪んだかと思ったら、潜水艦が浮上するかのように一隻の次元潜行艦が姿を見せた。

　ボラー連邦　B型次元潜行艦　B―001　艦橋
「ぐあっ!!」
「がはっ!!」
　亜空間に潜んでいたB―001の船体が大きく揺れる。
「な、何事だ!?」
「て、敵の爆雷攻撃です!!」
「なにっ!?バカな、たかが爆雷如きでこんな事が起こる筈がない!!我々は亜空間に隠れているのだぞ!?」
「そ、それが敵の爆雷には波動エネルギーが仕込まれていたもようです!!その波動エネルギーが我々の潜んでいる次元断層と共鳴してこのような振動が・・・」
　以前、クラウディアが次元断層へ落ちてしまった時、偶然スターシアの通信カプセルを解析した結果、次元断層からの脱出のカギが波動砲であると告げられたように、波動エネルギーは異次元の空間に何らかの干渉を引き起こす様だ。
　そして、波動カートリッジ弾に波動砲とまではいかないものの少量の波動エネルギーが仕込まれている様に波動爆雷にも波動エネルギーが仕込まれていた。

「敵の爆雷が一発、本艦の機関室付近に命中!!」
「し、司令官、通常空間に浮上しなければ危険です!!このままでは亜空間に取り残されてしまいます!!」
「くっ、緊急浮上!!」
ボグダークシュは亜空間に取り残されることを恐れ通常空間へと浮上した。
しかしそれはヤドカリが貝を脱ぎ捨て海中・海岸を漂う様なリスクを伴っていた。

まほろば　第一艦橋
「敵次元潜行艦、通常空間へ浮上!!」
通常空間へ姿を見せた次元潜行艦は当然、ガルマン・ガミラスの次元潜行艦ではなく、また彗星帝国の潜宙艦とも異なる形状をしていた。
勿論、時空管理局の次元航行艦とも異なる。
これにより、正体不明の次元潜行艦は未知なる勢力が保有する次元潜行艦となる。
しかし、向こうが最初に攻撃を仕掛けてきたのだから、まほろばの行動は正当防衛である。
「第四、第五主砲砲撃!!」
「了解、第四、第五主砲発射!!」
まほろばの後部にある第四、第五主砲のショックカノンが通常空間へ浮上した次元潜行艦へ向け放たれる。

ボラー連邦　B型次元潜行艦　B―001　艦橋
「敵のショックカノン、本艦に接近!!」
「か、回避!!面舵一杯!!」
「だ、ダメです!!回避、間に合いません!!う、うわぁー!!当たる!!」
「そ、そんな・・・こんなところで・・・」
亜空間から浮上したB―001はまほろばのショックカノンの直撃を受け轟沈した。

まほろば　第一艦橋
「敵、次元潜行艦の撃沈を確認!!」
「よしっ!!」
「やったぞ!!」
「喜ぶのはまだ早い!!敵はまだまだ居るぞ!!」
良馬が一喝し、艦橋内は再び緊張が走る。
まほろばが仕留めたのは後方に居た一隻。
当初の攻撃は前方からやってきた事から敵の数は前方の方が多く、仲間が弔い合戦を仕掛けてくる可能性は十分にあった。
「早期警戒型コスモタイガーを出撃、敵の魚雷と潜望鏡の発見と可能ならば敵の次元潜行艦を攻撃させろ!!」
「はっ!!」
暗黒星団帝国戦役時に真田が急ごしらえとは言え開発した早期警戒型コスモタイガー・・・・

同戦役時には急ごしらえ故にヤマトに一機しか搭載されていなかったが、暗黒星団帝国戦役後にはこの機は量産され、まほろばにも搭載されていた。
早期警戒型コスモタイガーは発進し、まほろばの前方へ哨戒飛行を行う。
なお、この時早期警戒型コスモタイガーには波動カートリッジ弾、波動爆雷の様に波動エネルギーを仕込んだ爆弾・波動エネルギー爆弾を装備していた。
この新型爆弾も真田とトチローが新開発した新装備の一つであった。
「艦長、敵の次元潜行艦の位置、トレース出来ました」
ギンガは敵の次元潜行艦の位置をトレースし終えていた。
「位置は?」
「この様な陣形をとっています」

ギンガがトレースした敵の次元潜行艦の位置は楔型・・・鶴翼の陣形をとっていた。
「・・・では、本艦はこのまま進み左側の次元潜行艦から順に攻撃を行う」
「了解」
まほろばは速度を上げ、自らボラー連邦の次元潜行艦隊が待ち受ける鶴翼の陣形へと突入していく。

ボラー連邦　Ｂ型次元潜行艦　Ｂ―００５　艦橋
「敵艦、直進してきます」
「早いな・・・飽和攻撃は時間厳守だ」
「どうしますか？」
「一度、このままやり過ごす」
「はっ!!」
Ｂ―００５は単独ではなく僚艦との合同攻撃・すなわち飽和攻撃を行うために攻撃はせずに待機していた。
「敵艦、間もなく本艦の頭上を通過」
まほろばがＢ―００５の頭上をまもなく通過しようとした時、
ズドーン!!
ズドーン!!
「うぉっ!?」
「くっ・・・」
衝撃と共に船体が大きく揺れる。
「な、なんだ!?」
「敵の攻撃です!!」
「機関全速、面舵一杯!!」
Ｂ―００５が右側に大きく回避しようとした時、まほろばの波動爆雷がＢ―００５の艦橋付近で炸裂し、Ｂ―００５の船体はそのまま圧壊、亜空間の狭間に消えていった。
Ｂ―００５を撃沈した頃、早期警戒型コスモタイガーの一番機が右翼の次元潜行艦Ｂ―００２へ攻撃を行っていた。

「敵の次元潜行艦の潜望鏡発見!!」
「よし、新型爆弾の威力を見せてもらうぞ!!」
Ｂ―００２は潜望鏡深度の通常空間と亜空間の境目付近におり、早期警戒型コスモタイガーの姿を発見すると急速潜航を行うも間に合わず、早期警戒型コスモタイガーが投下した波動エネルギー爆弾の攻撃を両舷中央部に受け、Ｂ―００５同様亜空間の中で爆沈した。
「こちら一番機、敵右翼の次元潜行艦を一隻撃沈!!」
こうしてボラー次元潜行艦隊は旗艦の他に鶴翼の陣形の両翼を失った。
本来ならば、両翼の二隻はまほろばを袋の鼠にし、Ｂ―００１と共に後方遮断の任務を担う筈であった。
「そのまま作戦を続行!!トレースした艦は此処で確実に沈める」
「了解!!波動爆雷発射!!」
まほろばの快進撃が続くかと思いきや、早期警戒型コスモタイガーが波動エネルギー爆弾を撃ち尽くした頃、果敢に反撃へ転じる次元潜行艦も居た。

ボラー連邦　Ｂ型次元潜行艦　Ｂ―００３　艦橋
「配電盤修理完了」
「敵艦、遠ざかります」
「魚雷戦どうか？」
「準備良し」
「よし、メインタンクブロー、アップトリム二十。機関微速」
Ｂ―００３の艦長は潜望鏡を上げ、遠ざかるまほろばの艦影を確認する。
すると、周囲の宙域には早期警戒型コスモタイガーが自分たちを探しているのが見えた。
早期警戒型コスモタイガーを見た艦長は、一時退避を考えたが、ここまで僚艦がやられた事と絶好の射程に自分たちが居る事に軍人としての警戒心を鈍らせた。
「雷撃戦を行う。右五度修正、距離四千二百、調整深度八、急げ!!」

「発射!!」
「急速潜航!!急げ!!」
亜空間魚雷を放ったＢ―００３は亜空間の奥底に深く潜ろうとする。

まほろば　第一艦橋
「コスモタイガー三番機より通信、敵の魚雷本艦へ接近!!」
「位置は!?」
「左舷十時方向、距離四千二百」
「主砲に対潜弾装填!!魚雷はミサイルで迎撃!!波動爆雷で空間の歪みを形成した後、対潜弾で仕留めろ!!」
「了解!!主砲戦用意!!
「主砲に対潜弾装填!!」
「距離、四千二百」
この対潜弾装填も真田たちが開発した新型弾で波動カートリッジ弾の弾頭が高速回転するドリルになっており、敵の船体へ深く突き刺さり炸裂すると言うモノになっている。
早期警戒型コスモタイガーが敵の次元潜行艦が居る付近に空間照明弾を投下する。
「目標確認!!」
「方位良し、距離微調整。修正角二十五・・・・」
「撃て!!」
まほろばからまず波動爆雷が発射され、次いで主砲から対潜弾が放たれる。
一方でＢ―００３が放った亜空間魚雷もまほろばへ接近していた。
「魚雷接近、雷速四十」
「距離四百で迎撃ミサイル発射!!」
「了解、距離四百で迎撃ミサイル発射」
「距離六百・・・・五百五十・・・・五百・・・・四百五十・・・・四百!!」
「ミサイル撃て!!」
「発射!!」

まほろばのミサイルとB―003の亜空間魚雷の弾頭がぶつかり合い宇宙空間にいくつもの閃光の華が生じる。

ボラー連邦　B型次元潜行艦　B―003　艦橋

「早く・・・早く潜れ・・・」

B―003の艦長を始めとする乗員たちは祈るように船体が潜行していくのを待つ。

彼らにしてみれば一秒の時間がこんなにも長く感じた事はないだろう。

ズドーン!!

ズドーン!!

通常空間と亜空間の狭間で波動爆雷が炸裂したと同時に空間の歪みから対潜弾がB―003の潜む亜空間へと入り込みそして・・・

「むっ!?」

ズガーン!!

数発がB―003の船体に命中した。

僚艦が次々と沈められていく中、残ったのはB―004とB―006の二隻のみでもはや陣形など意味はなかった。

ボラー連邦　B型次元潜行艦　B―004　艦橋

「艦長、既に味方は本艦とB―006のみとなりました」

「ここは撤退なさってはいかがでしょうか?」

「バカもん、敵を撃破せずに此処まで味方の被害を出してノコノコと戻ってみろ、我々は敵前逃亡罪で死刑だぞ!?」

「し、しかし・・・」

「数ではまだ我々が勝っている!!魚雷戦用意!!潜望鏡深度まで浮上!!」

B―004の艦長の言う事も当たっており、乗員たちに残されている道はまほろばを撃沈するか自分たちが撃沈されるかの二択であった。

ズドーン!!

ズドーン!!
相変わらずまほろばの波動爆雷の攻撃は止まない。
「諸元入力はやらなくてもいい!!亜空間魚雷を信じて撃つ!!」
「はっ!!」
「一番～六番まで発射!!」
「発射後は直ちに潜行!!」

まほろば　第一艦橋
「敵次元潜行艦、魚雷を発射!!」
「迎撃!!」
「敵の次元潜行艦の位置は!?」
「時計回りに大きく迂回しています!!」
「波動爆雷と対潜弾発射用意!!」
第一艦橋では火事場のように様々な報告と指示が飛んでいた。
そんな中、
「敵魚雷、至近距離!!」
「なにっ!?迎撃!!パルスレーザー掃射!!」
Ｂ―００４同様、Ｂ―００６も徹底抗戦をしており、まほろばが魚雷の対処をしている隙を突いて、まほろばの至近距離まで迫り、いきなり浮上して砲撃戦を仕掛けてきた。
「敵次元潜行艦本艦前方に浮上!!極めて至近です!!」
「な、なにっ!?」
敵の次元潜行艦のあまりにも常識外れの行動に驚く第一艦橋のメンバー。
まほろばの至近距離に浮上したＢ―００６は艦橋全部にある格納式砲塔を亜空間の中で出しており、その砲口をまほろばの艦橋へ向けてきた。
「回避、面舵一杯!!下げ舵一杯!!」
良馬はＢ―００６の船体下部へ回避しようとする。
「了解!!面舵一杯!!下げ舵一杯!!」
永倉が慌てて指示通り操縦舵を操作するが、あまりにも至近距離と

咄嗟の事で完全に回避することは出来なかった。
ズガーン!!
まほろばに大きな衝撃が襲ったかと思うと、第一艦橋の天井の一部が被弾により崩落してきた。
声を上げようとした瞬間、天井から降り注ぐ瓦礫が良馬を押しつぶした。
一瞬にして目の前が暗くなり、良馬は暗黒の奈落へと転落していった。
(くそっ、こんなところで・・・)
良馬以外の第一艦橋のメンバーも被弾による衝撃で何人かが座席から床に叩きつけられる。
「いたたたた・・・」
ギンガも座席から放り出されて身体を打った。
打ち身で痛む身体を起こしていると、
「艦長!!」
新見の悲痛な叫びが聞こえ、ギンガが艦長席を見上げると良馬が血塗れで倒れていた。
「医務長!!直ぐに艦橋へ!!艦長が負傷した!!」
「・・・」
「医務長!?どうした!?返事を!!」
「こ、こちら原田衛生士!!医務長が突然倒れました!!」
新見の問いにリニスは答えず、代わりに答えたのは衛生士の原田だった。
「倒れた!?」
良馬と魔力ラインで繋がっているリニスも良馬が負傷した事で倒れてしまったのだ。
ギリギリ人の姿を保っていたみたいなので、リニスが山猫を素体とした良馬の使い魔であることは原田たち医務科の乗員にはバレなかった。
「どういう事!?医務室にも何か被害があったの!?」
新見はリニスが倒れたのだから医務室が被弾したのかと思ったの

だが、
「いえ、医務室は無傷です!!」
　医務室に被弾はなく、被害は全くなかった。
「じゃあ、何で医務長は倒れたの!?」
「わ、分かりません!!」
（恐らく良馬さんが倒れたせいで、使い魔のリニスさんも倒れてしまったのね・・・）
　良馬とリニスの関係を知らない者にしてみれば、リニスが突然倒れた理由は分かる筈もない。
　ギンガはリニスが倒れたと言う報告を聞いて、すぐに察しがついた。
「とにかく、医務科の人間を艦橋まで寄越して!!大至急!!」
「は、はい!!」
　原田は急ぎ応急処置に必要な医療具や薬が入ったバッグを持って第一艦橋へと急いだ。
　まほろばの艦橋で良馬が倒れ、医務長であるリニスも原因不明の昏睡状態となり、指揮系統に混乱が生じる中、決死の行動でまほろばへ一矢報いたＢ―００６は再び亜空間へ逃げようとするが、
「この野郎!!逃がすか!!」
「今更、潜ろうったって遅いぜ!!」
　波動エネルギー爆弾を全て使い切った早期警戒型コスモタイガーであったが、パルスレーザーでＢ―００６の格納式主砲と艦橋部へ機銃斉射を行う。
　主砲は兎も角、艦橋部への攻撃は効果的でＢ―００６の艦長を含め、艦橋員に死傷者を出す結果となり、Ｂ―００６の動きが鈍った。
「第一、▪第二副砲発射!!」
　フェリシアが艦橋下部両舷に備わっている無砲身の副砲でＢ―００６を攻撃する。
　副砲から放たれたショックカノンはＢ―００６の左舷船体中央部に命中し、Ｂ―００６は船体を真っ二つに割られ撃沈された。

まほろばがボラー連邦の次元潜行艦の相手をして居る頃、ワープにて戦闘宙域から離脱したヤマトとアルバレスの二隻は、アルバレスの先導の下、東部方面軍司令部の宇宙要塞へと全速で向かっていた。

アルバレス　艦橋

「前方に東部方面軍司令部・宇宙要塞を確認!!」

「よし、直ちに要塞へ現状を伝えろ!!」

「はっ!!」

アルバレスの通信士は急ぎ東部方面軍司令部の宇宙要塞へ通信を入れる。

一方、アルバレスと行動を共にしているヤマトもアルバレスが向かっている宇宙要塞を肉眼で視認できる距離まで来ていた。

ヤマト　第一艦橋

「前方に巨大な人工物を確認!!」

「アレが、バレル大使が向かっていた東部方面軍司令部の宇宙要塞か・・・」

「宇宙要塞と言うだけあってデカいな・・・」

「ああ、暗黒星団帝国の補給基地と同じくらいか？」

ガルマン・ガミラス東部方面軍司令部の宇宙要塞を見たヤマトの乗員たちの印象は暗黒星団帝国が保有していた中間補給基地を始めてみた時と同じ印象だった。

「艦長、アルバレスが宇宙要塞へ通信を送っています」

「バレル大使がこちらに敵対の意志がない事をちゃんと伝えて貰わないとな・・・」

「ああ、外見から見ても暗黒星団帝国の補給基地と比べるとかなり装甲が厚い感じだ」

古代たち第一艦橋の乗員たちが東部方面軍司令部の宇宙要塞を唖然とした表情で見ていると、

「艦長、アルバレスのバレル大使から通信が入っております」

「繋いでくれ」
「了解」
　第一艦橋のメインパネルにはバレルの姿が映し出された。
「古代艦長、さきほど要塞と連絡を入れ、本艦とヤマトの入港許可がとれました。それとまほろばが残った宙域への援軍も決まり、すぐに援軍が向かうとの事です」
　バレルは古代たちに要塞の入港許可とまほろばが戦っている宙域への援軍を急ぎ送る事が決定された旨を伝える。
「ありがとうございます。バレル大使・ただ、援軍には本艦も同行します」
　古代はガルマン・ガミラスの援軍と共にまほろばが戦っている宙域へ戻る事を伝える。
「そうですか・分かりました。ですが、気を付けてください。それと援軍艦艇はヤマトの指揮下に就くように話を通しておきました」
「はい。ありがとうございます」
　ヤマトは宇宙要塞から出撃したガルマン・ガミラスの一個小隊の艦艇と共にまほろばが戦っている宙域へワープした。
　ヤマトとガルマン・ガミラスの援軍が向かっている中、まほろばでは・・・・

　まほろば　第一艦橋
「原田さん!!こっちです!!」
「は、はい!!」
　第一艦橋に原田とバトライザーが到着した。
「バトライザー、慎重に瓦礫を撤去して」
「ワカリマシタ」
　バトライザーは良馬を押しつぶしている天井の瓦礫を丁寧に撤去していく。
　ギンガは当然、自分もそこへ行き良馬を助けたかった。
　しかし、亜空間ソナーを操作している自分は言わばまほろばの目と耳・・・・

まほろばに乗っている大勢の乗員たちの運命は自分が担っている。
敵の次元潜行艦はまだ残っている。
その次元潜行艦を撃破ないし捕獲しなければ安心できない。
そしてその次元潜行艦を見つけることが出来るのは自分だ。
きっと良馬もギンガが任務をすっぽかして、怪我をした良馬につきっきりな状態だったと知れば怒るだろう。
ギンガが必死に敵の次元潜行艦の行方を探った。
その次元潜行艦Ｂ―００４は・・・

ボラー連邦　次元潜行艦　Ｂ―００４　艦橋
「か、艦長、Ｂ―００６までもが・・・」
Ｂ―００６の決死の行動をＢ―００４は亜空間から潜望鏡で見ていた。
そして最後の僚艦であったＢ―００６も撃沈されて残るのは自分たちだけとなる。
「の、残っているのは本艦のみです」
「くっ・・・」
Ｂ―００４の艦長は苦虫を噛み潰したように悔しさから顔を歪める。
「艦長!!」
「て、撤退だ・・・」
Ｂ―００４の艦長はここにきて撤退を決めた。
「急速潜航、針路五十、全速前進」
「急速潜航、ヨーソロー」
「針路五十、全速前進」
Ｂ―００４は亜空間へ深く潜り、全速で現宙域から逃げて行った。

まほろば　第一艦橋
バトライザーは瓦礫を取り除き、良馬をストレッチャーに乗せ原田と共に医務室へ向かう。
その間もギンガは医務室へ行きたい衝動を抑えて敵の次元潜行艦

の行方を追う。
（ん？敵の次元潜行艦が離れていく・・・）
　すると、敵の次元潜行艦の反応が遠ざかって行く。
「ふ、副長。敵の次元潜行艦の反応が遠ざかっていきます」
「撤退・したのかしら？」
「・・・はい。反応がドンドン遠ざかっていくので、恐らくは・・・」
「副長、この後はどうします？」
　敵の次元潜行艦が撤退した事でとりあえず周辺の安全は確保できたとみていいだろう。
「ヤマトとアルバレスを追いかけますか？」
　敵が撤退して行ったのであるならば、まほろばもヤマトとアルバレスの後を追いかけるべきなのだろう。
「そ、そうね」
　新見がヤマトとアルバレスの後を追うべきだと判断した時、
「ふ、副長。本艦の近距離に空間歪曲反応!!た、多数です!!」
「なんですって!?」
　取り逃がした敵の次元潜行艦が救援を呼んだのだろうか？
「引き続き、戦闘配備!!コスモタイガーも発進用意!!」
　まほろばの乗員たちが緊張した面持ちでワープアウトしてくる艦隊が敵なのかそれともガルマン・ガミラスの艦隊なのかを待っていると、ワープアウトしてきたのはヤマトを先頭にしたガルマン・ガミラスの艦隊だった。
「や、ヤマト!?」
「それに後続の艦はガルマン・ガミラスの艦です!!」
「ふぅ～・・・」
　ヤマトの姿を見て一息つきながら座席に腰を下ろす新見。
「副長、ヤマトから通信が入っております」
「繋いで頂戴」
「はい」
　まほろばの第一艦橋にあるメインパネルには古代が映る。
「古代艦長」

「アルバレスを目的地の宇宙要塞へ送り届けたので、ガルマン・ガミラスの援軍艦艇と共に救援に戻りました・・・えっ？艦橋部が損傷しているように見えるのですが、月村艦長は!?」
「艦長は艦橋への被弾時に倒れられました」
「月村艦長が!?」
　新見の報告に古代は驚愕する。
「それで月村艦長の容体は!?」
「それが、医務長も原因不明の昏睡状態になってしまって治療が出来ない状況なんです」
「わ、分かりました。急ぎ佐渡医師をまほろばに向かわせます!!」
「ありがとうございます」
「交戦中の敵の動きは!?」
「亜空間ソナーを操作していた中嶋通信長によれば敵の次元潜行艦は撤退したもようです」
「そうですか・・・分かりました。ガルマン・ガミラス側にはこちらから伝えておきます」
「わかりました」
　ヤマトと通信を行った後、佐渡がまほろばに赴いて良馬を始めとする負傷者の治療を行う事になった。
「副長、私も医務室の手伝いへ向かいます」
　するとギンガも医務室へ応援に行くことを伝える。
「えっ？でも・・・」
「すでに敵の次元潜行艦は撤退しましたし、医務長が昏睡状態となってしまった状況では医務科の人たちも大変な筈です。私、士官学校で医務科のコースも受講したので、応急手当は出来ます」
「分かったわ。通信業務に関してはバトライザーを呼び戻して代わってもらうことにするわ」
「はい。では・・・」
　ギンガは急ぎ医務室へと向かった。

ヤマト　第一艦橋

「まさか、月村艦長が・・・」
「大丈夫かしら？月村さん」
古代は良馬が負傷した事に驚き、雪は良馬の容体を案じた。
「佐渡先生が向かったから大丈夫だと思うが・・・」
古代は名医である佐渡が手術をするのだから、良馬は助かると信じた。
「それにしてもこの宙域でいきなり攻撃してきたあの次元潜行艦は一体何処の次元潜行艦だったのだろう？」
良馬の事を佐渡に任せ、次は敵の正体がどの勢力に所属していたのかが気になる。
「まほろばの戦闘記録では少なくとも二隻は通常空間で撃沈したとの事だ。それらの残骸を回収して調べれば何か分かるかもしれない」
真田はまほろばが撃沈した敵の残骸を調査すれば敵の正体が分かるだろと判断し、現在ガルマン・ガミラスの艦艇に搭載されている小型艇が敵の残骸を回収している。
勿論、ヤマトの方でも同じく敵の残骸の回収作業は行われていおり、真田たちヤマトの技術班の乗員が次元潜行艦と戦い損傷したまほろばの修理を手伝う。
一方、まほろばの医務室内に設けられている手術室では佐渡が良馬を手術していた。
ギンガも医務室にて負傷者の応急手当を行うがやはり気になるのかチラチラと手術室を見ていた。
やがて、負傷者の応急手当も終わった頃、手術中のランプが消え佐渡が出てきた。
「あっ、先生!!りょ・・・か、艦長は!?手術はどうなりました!?」
ギンガは佐渡に真っ先に良馬の容体と手術の成否を訊ねる。
「安心せい、手術は成功じゃ。一週間もすれば元通りの身体に戻れる」
「ありがとうございます!!」
ギンガは深々と佐渡に頭を下げて礼を言う。
ギンガの他に医務室に居た乗員たちも良馬の容体が心配だった様で、佐渡の言葉に安堵していた。

「さあ、治療が済んだ者は仕事に戻るんじゃ。もう心配は要らん」
ギンガは手術室から良馬が乗るストレッチャーを押して病室へと向かう。
そして病室に入ったギンガは良馬をストレッチャーからベッドへと移す。
良馬をベッドに横たえ、掛け布団を掛けると、良馬はゆっくりと瞼を開けた。
「あっ、良馬さん。気づきましたか!?」
「こ、ここは・・・・?」
「病室です。良馬さん、艦橋で怪我をしたんですよ」
「・・・・あっ」
ギンガから何故自分が病室に居るのかを伝えられ、それを思い出し上半身を起こそうとするも全身に走る苦痛に顔を歪める。
「ダメですよ。動いちゃあ」
そんな良馬をギンガは再びベッドへと沈める。
「戦闘は・・・・?それにリニスの事も心配だ」
良馬も自分がこうして怪我で倒れた事により使い魔であるリニスにも何か影響が出ている筈だと思いリニスの身を案じる。
「戦闘に関して、敵は撤退しました。リニスさんは良馬さんが倒れた影響のせいか、倒れられましたが、山猫の姿には戻っていません。なので、リニスさんの正体はバレてはいないようです。良馬さんが目を覚ましたことでリニスさんも時期に目が覚めるでしょう」
「そ、そうか・・・・」
「はい。バレルさんたちも無事に要塞へ辿り着いたみたいで、ヤマトはわざわざ戻って来てくれました」
「古代艦長には貴重な時間を無駄にさせてしまったな・・・・」
ヤマトを逃す為にまほろばが敵の次元潜行艦を引き付けたのだが、先ほどのギンガの言葉から『敵は撤退』・・つまり殲滅は出来ずに何隻かは取り逃がしてしまったと言う事だ、
「そんなことはありませんよ。確かに敵を全て倒すことは出来ませんでしたが、大半の敵は倒すことは出来、バレルさんたちは無事に目的

地に到着できたのですから、まほろばがとった行動は決して無駄ではない筈です」
「・・・・」
「何はともあれ、敵の脅威は去りました。安心して休んでいて下さいね」
「あ、ああ・・・・」
ギンガの言葉を聞き、良馬は静かに目を閉じた。
良馬が意識を取り戻したことにより、リニスの方も目を覚ました。
「うっ・・・・あ、あれ？私・・・・」
「あっ、医務長!!」
目を覚ましたリニスに気づいた原田が声をかける。
「突然、倒れたから心配したんですよ。医務長」
「倒れた？私が？」
「はい」
（突然倒れた？私が？っ!?ま、まさか、マスターの身に何かあったんじゃあ・・・・）
リニスは自分が理由なしに突然倒れた原因として使い魔との契約・・・・すなわちマスターである良馬の身に何か起きたのだと察した。
しかし、自分が消滅していない事から良馬は死んではいないのだろうが、それでも突然倒れたのだからそれなりの事が起きた筈だ。
「原田さん、もしかして艦長の身に何かあったんですか!?」
リニスは原田に良馬の事を訊ねる。
「は、はい。敵の攻撃が第一艦橋付近に命中して艦長は怪我を負いました」
「怪我・・・・艦長が・・・・」
「はい。でも、ヤマトの佐渡先生が来てくれたおかげで手術は成功して今は病室で休まれています。他の負傷者たちも応急手当ては既に終了しています」
「そう・・・・はぁ～・・・・肝心な時に倒れるなんて医務長失格ね」
リニスは手で顔を覆いながら自嘲する。
「いえ、きっと医務長は疲れていたんですよ」

そんなリニスを原田は励ます。
「・・・」
使い魔と言う存在である以上、マスターの身に何かしらの事があればそれに連動してしまうこの身体がとても忌々しく思ってしまう。
そのせいで、肝心な時・マスターが怪我をした時に手当をすることが出来なかった事がリニスに強い屈辱感を与えた。

敵の残骸の回収は終わったが、その残会を調査し敵が所属していた勢力が未だに不明なままであったが、この宙域に長く留まると敵が引き返してくる恐れがあった。
良馬の手術と負傷他の手当てが終わり、まほろばも応急修理も終わって航行可能なので、周辺を哨戒していた早期警戒型コスモタイガーを収容した後、ヤマト、まほろば、ガルマン・ガミラスの艦艇はこの宙域を後にし、アルバレスが待つガルマン・ガミラス東部方面軍司令部の宇宙要塞へと向かった。

百六十五話　ガルマン・ガミラスへ・・・・

バース星を出航して、ガルマン・ガミラス東部方面軍司令部の宇宙要塞を目指す途中で、突如亜空間からの襲撃者の攻撃を突如受けたヤマト、まほろば、アルバレス。

良馬はヤマトとアルバレスを戦闘宙域から逃し、まほろば一隻で亜空間に潜む次元潜行艦の相手をすることを決断する。

複数で襲撃してきた次元潜行艦を相手に奮戦するまほろばであったが、敵の次元潜行艦は決死の行動でまほろばへ一矢報いた。

その結果、まほろばは艦橋部を被弾し、艦長である良馬は負傷して、彼と魔力リンクで繋がっているリニスも良馬の負傷に連動して昏睡状態となってしまった。

しかし、まほろばの奮戦の甲斐もあり敵は撤退し、ヤマトは救援に戻ってきた。

負傷者の手当て、まほろばの損傷個所の修理、敵の残骸の回収を終えると、一行はガルマン・ガミラス東部方面軍司令部の宇宙要塞へと向かった。

まほろば　第一艦橋

「アレがガルマン・ガミラスの宇宙要塞か・・・」

「やはり軍事技術が優れているだけあって凄い要塞だ・・・」

「あんな要塞と戦うことにならなくて本当に良かったよ」

ヤマト同様、ガルマン・ガミラスの宇宙要塞を初めて見たまほろばの乗員たちもその大きさに圧巻されている。

宇宙要塞へ入港したまほろばはドックにて本格的な修復を受ける事になった。

まほろばが修復を受けている中、リニスは良馬の病室を見舞った。

「マスターが倒れたと言うのに肝心な時に役に立てずに申し訳ございません」

リニスは良馬に深々と頭を下げる。

「いや、リニスとの契約上これは仕方がない事さ。俺の方こそ負傷者が居た中で、リニスを昏倒させてしまう事になって申し訳ない」
　良馬としてもリニスが医務長と言う負傷者にとっては最後の希望である役職に就いている中で自分が負傷してしまった事により負傷者たちを不安にさせ、場合によってはリニスの立場さえも危うくさせてしまう事に繋がる所だった。
「しかし、今思うと軍人になってここまでの大怪我を負ったのは今回が初めての事だな」
　士官学校、軍に任官してから、かすり傷、切り傷、打ち身等の軽傷は負った事があったが、病室に入院するほどの大怪我を負ったのは今回が初めてであり、リニスもマスターが負傷して昏睡状態になったのも今回が初めてだった。
「だが、リニスが昏睡状態となっても山猫の姿に戻らなかったのは不幸中の幸いだったな」
「ええ、そうですね」
　ギンガからの話ではリニスは山猫ではなく、人の姿のままで昏睡状態となったので、リニスの本当の姿を知らないまほろばの乗員たちに正体はバレていない。
「まぁ、原田くん辺りなら驚きはするだろうけど、その後でリニスを撫でまくる姿が想像できる」
「た、確かに・・・」
　良馬とリニスの脳裏には山猫の姿となったリニスを満面の笑みで抱きしめながら撫で、リニスの身体に顔を埋める原田の姿が浮かんだ。

　リニスが良馬を見舞っている頃、真田は戦場で回収した敵の残骸をガルマン・ガミラスの技術者たちと共に調査していた。
　なお、この時の真田は宇宙服を着てガルマン・ガミラスの技術者と調査していた。
　残骸に放射能が付着している可能性と同時にガミラスと同じ民族であるならば、その体質は放射能・硫化水素を含む空気が彼らにとっ

ては普通の空気だからだ。
「この材質は間違いない、ボラー連邦の宇宙艦船に使用されているモノだ!!」
　ガルマン・ガミラスの技術者はまほろばが戦った次元潜行艦をボラー連邦所属の次元潜行艦であると結論付けた。
「ボラー連邦の次元潜行艦・・・・」
（そう言えば、ガルマン・ガミラスも既に次元潜行艦を保有していたからな・・・・）
（ガルマン星を占領していたボラー連邦ならば次元潜行艦を保有していてもおかしくはないか・・・・）
　真田はガルマン・ガミラスの建国の歴史からボラー連邦が次元潜行艦を保有していても不思議ではないと思われたが、
「くそっ、ボラーの奴らは一体どこで次元潜行艦の技術を手に入れたんだ・・・・?」
「味方の次元潜行艦でボラーに鹵獲された艦は?」
「そんな報告上がってはいないぞ!!」
「じゃあ、一体奴らはどうやって次元潜行艦の技術を!?」
　ガルマン・ガミラスの技術者たちはボラー連邦が次元潜行艦を保有している事に驚き、その技術をどこから手に入れたのか疑問を抱いていた。
「えっ?」
　ガルマン・ガミラスの技術者たちの発言から真田は元々ボラー連邦では次元潜行艦の技術を有していない様に聞こえた。
「あの、失礼ですがボラー連邦は次元潜行艦の技術を持っていなかったのですか?」
　そこで、真田は技術者たちにボラー連邦の次元潜行艦について訊ねた。
「ええ、ボラー連邦は次元潜行艦を保有してはいませんでした。ですから次元潜行艦を保有していた我々が亜空間戦闘においては優位にたっていたのです」
「それがいつの間に・・・・」

「連日当管轄内で起きていた輸送船団の襲撃犯はどうやらあなた方が遭遇したボラー連邦の次元潜行艦で間違いないな」
「ガイデル提督とダゴン将軍に急ぎ報告をいれなければ!!」
(ボラーは当初、次元潜行艦の技術を有してはいなかった・・・)
(先ほどの話の中ではボラーに鹵獲されたガルマン・ガミラスの次元潜行艦は存在しない)
(・・・ガルマン・ガミラスの次元潜行艦は、元々はデスラーが彗星帝国の潜宙艦の技術から得たものだ)
(となると、ボラーの連中はガルマン・ガミラスではなく我々と同じく彗星帝国の潜宙艦を鹵獲して次元潜行艦の技術を得たのだろうか?)
(彗星帝国は宇宙を回っていた星間国家だ。銀河系のどこかで彗星帝国はボラー連邦と接触をしていてもおかしくはないか・・・)
真田はまほろばがプロキオン宙域で彗星帝国の潜宙艦の船体を鹵獲してきたようにボラー連邦も同じく彗星帝国の潜宙艦を鹵獲して今回の次元潜行艦を建造したのではないかと推測した。
流石の真田もまさかボラー連邦が時空管理局の次元航行艦の技術から次元潜行艦を造り上げたとは分かる筈も無かった。
ボラー連邦側に確認をとりたくてもとれない情報なのは真田もガルマン・ガミラス側も当然分かり切っている。
そもそも次元潜行艦の建造技術はガルマン・ガミラスでもボラー連邦内でも恐らくトップシークレットに近い情報だろう。
それに地球とボラー連邦とは直接宣戦布告をして戦争状態となった訳ではないが、アルファ星とバーナード星での一件からボラー連邦とは相容れないだろうと真田でも簡単に分かった。

真田が敵の残骸を調査している時、古代と負傷した良馬の名代として新見、そしてバレルはダゴン将軍とモニター越しで面会していた。
「私はガルマン帝国東部方面軍のダゴンだ」
「地球防衛軍、宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進です」
「同じく地球防衛軍、宇宙戦艦まほろば副長の新見薫です」
「副長?艦長はどうしたのかね?」

「当艦の艦長、月村良馬は先の戦闘で負傷し、現在治療中です」
ダゴンは当然、まほろばの艦長ではなく副長がこの場に来たことから新見に艦長の行方を訊ねる。
そこで新見がダゴンに良馬の事を伝える。
「そうか・・・それで、貴官らが遭遇したとされる敵の正体であるが・・・」
新見から良馬の事を伝えるとダゴンは既に興味を無くしたかのように話題を変える。
(このダゴンとか言う軍人、なんか無駄に偉そうだな・・・)
(目つきも何だかこちらを小馬鹿にしている様な感じだし・・・)
古代はダゴンの言動に嫌悪感を抱く。
最もダゴンの方も古代たち地球人の事を良くは思ってはいないだろう。
地球で反ガミラス感情がある様に、ガミラスの中でも反地球、反ヤマト感情を未だに持っている者も居るだろうが、それでも第二次イスカンダル航海に参加したガミラス軍人ならば、此処まで地球・ヤマトの乗員に対してマウントを取ろうとはしないだろう。
ならばこそ、ダゴンはガミラス出身の軍人ではなくガルマン出身の軍人である事が窺える。
ダゴンにしてみれば辺境の田舎惑星の戦艦とその星の住人なんて客人として扱うに値しないのだろう。
古代がダゴンに対する印象を思っていると、ダゴンは今回まほろばが相手をした正体不明の次元潜行艦について話した。
「あなた方が撃破した次元潜行艦の残骸を調査の結果、ボラー連邦が建造した次元潜行艦であると判明した」
嫌っている相手とは言え、ちゃんと襲撃者たちの正体を伝えてきたダゴン。
しかし、『あなた方が撃破した次元潜行艦』と言う部分を言うダゴンの声は少し震えていた。
自分たちのお株を田舎惑星所属の戦艦が先に撃破してしまったのだからダゴンとしてはこの件に関しても屈辱的な出来事だったのだ

ろう。
　調査結果をこちらに伝えてきたのも『調査をしたが分かりませんでした』と言う結果では、ガルマン・ガミラスが下に見られると思い襲撃者の正体を伝えたのかもしれない。
「ボラー連邦・・・」
「彗星帝国じゃあなかったのか・・・」
　襲撃してきた次元潜行艦が所属していた勢力に真田同様意外性を覚える古代と新見。
「ダゴン将軍、ボラーはこれまでの戦いで次元潜行艦を実戦投入した事はあるのですか？」
　バレルがダゴンにボラー連邦の次元潜行艦の戦線投入について訊ねる。
　自分たち特使団一行が地球に向かってこの東部戦線を通過した時はボラー連邦の襲撃はなかったのだが、それは偶々ボラーの次元潜行艦隊の襲撃が無かっただけだったのかを問う。
　ジュラはまだ地球に居るので、今回の件で地球からガルマン・ガミラス本星への帰り道で襲撃を受ける事も十分に考えられる。
「いえ、ボラーの次元潜行艦が確認できたのは今回が初めてです」
　同じガルマン・ガミラスの人間で外務省の上級役人と言う事でダゴンもバレルに対しては失礼な態度は取れない様だ。
　襲撃者の正体が判明した時、
「ダゴン将軍。本国より通信が入っております」
　オペレーターがガルマン・ガミラス本星から通信が入った事をダゴンに報告する。
「本国から？ガイデル提督か？」
　ダゴンはガルマン・ガミラス本星からの通信は、現在本星に戻っているガイデルからと思ったが、通信はダゴンにとっては意外な人物からの通信だった。
「い、いえ、それがデスラー総統からです」
「で、デスラー総統だと!?す、すぐに繋げ!!」
　デスラーから通信が入った事にダゴンは思わず声が裏返りすぐに

モニターへ転送するように言うとモニターにはデスラーの姿が映し出された。

ここで視点と時系列は少し時間を巻き戻し、ガルマン・ガミラス本星へと移る。

デスラーが東部方面軍司令部の宇宙要塞に通信を入れる少し前、ガルマン・ガミラスの総統府では戦勝報告が齎されていた。

総参謀長のキーリングがうやうやしく進み出て、デスラーに深々と一礼する。

「総統、この度の西部戦線、南部戦線の勝利を全国民に代わって心からお祝い申し上げます」

「うむ、全ては両方面軍の将兵の奮闘のたまものだ。私からも礼を言うおう。ヒステンバーガー、クロッペン、両将軍ともに御苦労であった」

「「はっ!!」」

デスラーから直接名指しで呼ばれた二人の将軍は感激に頬を紅潮させた。

特に西部戦線司令のヒステンバーガーは担当する管轄内で６２％の支配権を獲得したが、そこまでの戦果で三分の一の師団を喪失すると言う大失態を犯しており、あと二回の失敗で死刑と言う判決をデスラーから言われていたので、今回の勝利はヒステンバーガーにとっては汚名返上の機会となった。

「では、両将軍の栄誉を称え、ガルマン・ガミラス帝国の限りなき発展を祈って乾杯!!」

『乾杯!!』

キーリングの音頭でグラスを上げるデスラーと参列した将軍たち。

デスラーがグラスに入っている酒を一気に煽った後、

「ガイデル」

「はっ!!」

東部方面軍司令のガイデルに声をかけた。

「東部方面軍では最近、謎の襲撃事件が多発していると聞くが、その後

の戦況はどうなっている？」
　東部方面軍において輸送船団を襲う謎の敵の情報はデスラーの下にも報告が上がっていた。
　デスラーとしてはこの襲撃者の正体が気になるのも当然の事だった。
　結果によっては東部戦線だけではなく他の戦線にも影響が出る可能性があったからだ。
「その件に関してございますが、現在鋭意調査中で間もなく敵の正体は判明するモノであります」
　この時点では、謎の襲撃者の犯人がボラー連邦の次元潜行艦である事は分かっていないが、デスラーの前で『まだ分かりません』と馬鹿正直に言える筈もなく、とりあえずこの場は調査している格好を示すガイデル。
　とは言え、こうしてデスラーに言ってしまった以上、近々デスラーに謎の襲撃者の正体を報告しなければ自らの首を絞めることになる。
「ですが、総統よりお預かりした貴重な艦艇を喪失する失態についてはまことに面目次第も無く、申し訳ございません」
　結果的に損失を出しているのは事実なのでガイデルはデスラーに深々と頭下げて謝罪する。
「そう力を落とす事は無い。銀河系東部方面は進化した星が多い。攻略が困難な事は事前に分かっていた。それでもバジウド星系を含む約８０％以上の支配権を獲得したことはまさに偉業と言わねばなるまい」
「総統・・・」
「ガイデル。私は君に期待しているよ」
「ありがとうございます!!」
　ガイデルは再びデスラーに深々と頭を下げて礼を言った。
　そんな中、デスラーの小姓が彼の下へと来て、
「総統、ただいま東部方面軍司令部よりバレル様が総統に火急の知らせがあるとの事で通信が入っております」
「バレルから？確か彼はジュラと共に地球へ赴いている筈だが？」

娘のジュラと共に地球へ赴いたはずのバレルが何故、東部方面軍司令部の宇宙要塞に居るのか不思議に思いつつ通信に出る事にした。
そして場面は東部方面軍司令部の宇宙要塞へと移る。
東部方面軍司令部の宇宙要塞の指令室には自分に火急の要件があると通信を送ってきたバレルと東部方面軍所属の第１８機甲師団司令官のダゴン、そしてデスラーにとっては友人とも言える古代の姿が映るモニターがそこにあった。
「ん？もしかして古代なのか？」
「デスラー・久しぶりだなぁ。元気そうでなによりだ。それにしてもあれから直ぐに新たな国を作るとは大きな仕事を成し遂げたんだな」
（コイツ、総統閣下を馴れ馴れしく名指するとは失礼な異星人だ）
ダゴンはデスラーの名前だけを呼んだ古代を心の中で毒づく。
「ありがとう古代。しかし、何故君がそこへ？それにバレル。ジュラと共に地球へ赴いていた筈の君もだ」
「それについて俺から説明する」
古代はデスラーに自分とバレルが何故東部方面軍司令部の宇宙要塞に居るのかを説明する。
地球の太陽で核融合の異常増進が起き、あと一年以内で地球は人類を始めとする生物が生存不能な星に代わり、そして三年以内に超新星化し太陽系の惑星全てを道連れに爆発する事、
地球でも何とか太陽制御を行うも失敗に終わった事、
ヤマトは地球人類の為、第二の地球となるべく新惑星探査の為に地球を発進した事、
そしてバレルは地球へ赴いていたジュラからガルマン・ガミラスでも地球の太陽制御を出来ないかデスラーに頼むために伝令としてガルマン・ガミラス本星へ向かわせた事、
古代はデスラーにそれらの事を伝えた。
ただ一つ黙っていたのは今回の太陽の核融合異常増進の原因がガルマン・ガミラスの大型ミサイルかもしれないと言う点についてだ。
地球にはまだデスラーの娘のジュラが居り、自分たちもこうしてガルマン・ガミラスの宇宙要塞に居る。

　此処で太陽の核融合異常増進の原因がガルマン・ガミラス側にあると主張すれば大きな問題となる。
「そうか・・まさか地球でそのような事が・・・」
　デスラーとしても自分が知らぬ間に地球が危機に陥っている事を此処で初めて知り驚愕する。
「どうだろう?古代。ガルマン帝国へ君とヤマトを招待したい。地球の太陽制御に関してもモニター越しではなく直接会って話したのだが、受けてくれないか?」
「ああ。喜んで、ガルマン帝国を訪ねさせ貰うよ」
　本来ならば一艦長の一存で決める事ではないが、デスラーの言う通りガルマン・ガミラス側で行う地球の太陽制御に関してもやはり直接話す方が良いだろうと判断した。
「よかった・・バレル」
「はっ!!」
「君は引き続きヤマトをガルマン帝国へ案内してくれ」
「承知しました!!」
「総統、私からも一つご報告することがございます」
「何だね?ダゴン」
「実は我が東部方面軍の管轄内で頻繁に起きております輸送船団の襲撃犯でございますが、その正体が判明いたしました」
「ほう?一体誰かね?」
「ボラー連邦でございます」
「やはりボラーの連中か・・・・」
　ダゴンから謎の輸送船団襲撃犯の正体を聞かされ、その正体がボラー連邦であると知るとデスラーは僅かに顔を歪めた。
「して、連中はどんな兵器を使用して我が軍の輸送船団を襲撃していたのかね?」
「次元潜行艦でございます」
「次元潜行艦・・・確かボラーの連中は次元潜行艦の建造技術など保有してはいなかった筈だが・・・?」
　デスラーの記憶でもボラー連邦がこれまでのガルマン・ガミラスと

の戦いで次元潜行艦を使用しているケースなどなかった。
　故にボラー連邦は次元潜行艦の建造技術を持っていないモノと判断していた。
「は、はい。それが、ボラーの連中はどこからか次元潜行艦の建造技術を入手したようで、それを元に次元潜行艦を建造し実戦投入してきた様です」
「くっ、相変わらず忌々しい連中だ。至急各戦線と部隊に情報を共有し、対策を立てろ」
「はっ!!承知しました!!」
「古代、ガルマン・ガミラスまでの航路も決して安全とはいいがたくなったが、道中気を付けてくれ」
「ありがとうデスラー」
「それでは、古代。君たちと会える日を楽しみに待っている」
　こうしてヤマトはバレルと共にガルマン・ガミラス本星へ向かう事になった。
「新見副長、聞いての通りです。ヤマトはこのままガルマン・ガミラス本星へ向かいます。まほろばにもガルマン・ガミラス本星へ同行してもらいたいので、この件を月村艦長に伝えてもらえますか?」
「分かりました」
　古代は新見にまほろばの病室に居る良馬にガルマン・ガミラス本星へ向かう旨を伝えるように頼んだ。

まほろば　病室
　ボラー連邦との次元潜行艦の戦闘により負傷した良馬は佐渡が行った手術後、こうして病室に入院している。
「・・・」
　ベッドに横になっていると外からはまほろばの船体を修理している作業音が聴こえてくる。
　良馬の意識が戻った事でリニスも医務長の仕事に復帰し、負傷した乗員たちの診察を行っている。
「・・・暇だ」

入院中の良馬自身、こうして皆が艦の為に働いている中、艦長たる自分がベッドに横になっていていいものなのかと自問する。
リニスや原田からは絶対安静と言われているのだが、それでも何かできる事は無いかと模索していると、
「艦長」
タブレット端末に新見の姿が映し出される。
「あっ、副長。何かあったのか？」
「はい。先ほど、古代艦長とガルマン・ガミラス側と話し合った結果、ヤマトはガルマン・ガミラス本星へ向かうことになりました」
「ヤマトがガルマン・ガミラスの本星へ？」
「はい。話し合いの最中、デスラー総統から通信が入り、ガルマン・ガミラスとの間で太陽制御の話し合いも兼ねてとの事です」
「そうか・・分かった。それでまほろばの修理状況は？」
「既に九割は終わっていますので、明日の早朝に出航します」
「此処からガルマン・ガミラスまでの距離は？」
「連続ワープを行って数日の予定です」
「分かった。ガルマン・ガミラスに着くまでには何とか退院できるよう医務長に掛け合う。それまでの間、副長に艦の運用を任せる」
「わ、分かりました」
病室から流石に指揮はとれないので、良馬は退院するまで、まほろばの指揮権を副長の新見に預けた。
（ガルマン・ガミラスか・・・デスラーが居ると言う事はフォムトやネレディアさんも居ると言う事だ・・・二人とも元気だろうか？）
古代、そしてデスラーが再会を楽しみにしているように良馬もシャンブロウで知り合いガトランティス相手に共闘したバーガーとネレディアとの再会を楽しみにしていた。
早朝、ヤマト、アルバレス、まほろばの三隻は東部方面軍司令部の宇宙要塞を出航し、連続ワープで距離と時間を短縮しガルマン・ガミラス本星を目指す。
宇宙要塞を出航してから二日後、良馬は身体の所々に包帯を巻いている姿ではあるが病室から退院し、艦橋へ上がった。

「艦長、大丈夫なんですか？」
「ああ、医務長から退院許可も下りた。皆、色々と心配をかけてすまなかった」
「いえ、無事に戻って来てなによりです」
「おかえりなさい、艦長」
「艦長、指揮権をお返ししますね」
「ああ、指揮権を受け取った」
　こうして負傷した身体ながらも復帰した良馬。
　その後、ボラーの次元潜行艦からの攻撃もなく、順調に三隻はガルマン・ガミラス本星への航海を続けた。
「まもなく銀河系中心部です」
「地球の艦で銀河系の中心部へ来たのはヤマトと本艦が初めての偉業じゃな」
　宇宙空間に青白い若い恒星が密集し、煌めいている姿が見えてきた。
「ガルマン・ガミラス本星まであとどれくらいだ？」
「あと三時間です」
「三時間か・・・・」
　やがてガルマン・ガミラス本星が見えてきた。
「二連星か・・・・マゼラン星雲のイスカンダルとガミラスの様だ・・・・」
　ガルマン・ガミラスはマゼラン星雲にあったガミラスとイスカンダルの様に二連星で、ガルマン・ガミラスの星表面の色は緑でもう一つの二連星の星は青く、まさに銀河系版のガミラスとイスカンダルに見えた。

ヤマト　第一艦橋
　ヤマトの方でもガルマン・ガミラス本星の姿が見え、やはりマゼラン星雲のイスカンダルとガミラスに見えた。
　古代はデスラーとの再会にこれまでの彼との想い出に耽っていた。
　そんな中、
「艦長!!」

突然声をかけられ古代は想い出の中から現実へ引き戻される。
古代は振り向くとそこには土門、揚羽、坂東の三人が険しい顔で立っていた。
「艦長、なぜデスラーの招待なんか受けたんですか!?」
「僕たちは反対です!!ガルマン・ガミラスはあのガミラスが樹立させた新国家・すなわちガミラスそのものじゃないですか!?」
「ガミラスは地球をめちゃめちゃにした奴らなんですよ!?艦長だって忘れた訳じゃあないでしょう!?」
「・・・・」
ガミラス戦役時はまだ学生だった土門たちだったからこそ、未だに反ガミラス感情が残っていた。
「そう艦長を責めるなよ。デスラーもあの時の事を悪いと思っているからこそ、今では地球との同盟を結ぼうとし、今回の太陽異常の件に関しても何とかしようと協力を求めてきたからこそ、我々を招待したんじゃないか」
「君たちはしらないだろうが、我々は何度もデスラーに救われているんだ・・・あの彗星帝国の弱点を教えたのはデスラーであり、ヤマトが連続ワープする事が出来るのもデスラーからの技術提供なのだ」
島と真田は古代を弁護する。
「しかし、ガミラスが地球を滅ぼそうとしたのは事実じゃあないですか!!」
「確かに一度は地球を滅ぼそうとした。しかし、ガミラス側にも・・デスラーにも戦うべき理由があった。あの時の戦いは民族の存亡をかけた戦いだったのだ」
「では、何故新国家を樹立した後でもデスラーは宇宙のあちこちに戦乱を引き起こしているんですか!?」
ガミラス戦役時のガミラスも自分たちが住む星が寿命で長く住むことが出来ず、その為に地球をガミラス人が生きられる環境へテラーフォーミングを行い移住しようとしていた。
しかし、現在ガルマン・ガミラスと言う新国家を樹立させた後もデスラーは宇宙の各所で戦乱を引き起こしている。

既に居住できる星を見つけたにも関わらずに・・・・
揚羽の指摘に島も真田も言葉に詰まる。
二人の様子を見て古代は口を開く。
「太陽制御の協力以外に揚羽の指摘する答えを知る為に招待を受けたんだ。デスラーの真意を確かめなければ今後の探査任務にどんな支障が起きるかわからないからだ」
古代の回答を聞き、渋々ながらも納得した土門たちであった。
やがて、ガルマン・ガミラス本星の絶対防衛領空内へ入るとそこには沢山の戦闘衛星が配備されていた。
「凄い数の戦闘衛星だ・・・・」
「地球よりも数が多いな・・・・」
戦闘衛星の数に圧倒されていると、
「こちらガルマン・ガミラス宇宙管制室。ヤマト、まほろば、アルバレスに告ぐ。貴艦らは第三宇宙港へ着陸せよ」
ガルマン・ガミラス側から着陸指示が来た。
三隻は管制室へ返信した後、着陸予定地である第三宇宙港へ着陸態勢を取る。
「着陸まであと三十分四十五秒・・・・コースはそのまま」
管制室からは着陸コースと時間が知らされる。

ガルマン・ガミラス　総統府デスラーパレス
ガルマン・ガミラスの総統府であるデスラーパレスにはガルマン・ガミラスの同盟国の首脳、外務大臣、外務省の役人、軍の幹部たちが集まっていた。
そのデスラーパレス内にあるデスラーの居室では、デスラーが小姓たちの手で式典用の大礼服を整えていた。
そこにデスラーの副官であるタランが入って来た。
「デスラー総統、お誕生日おめでとうございます!!」
「タランか、ありがとう」
「本日、総統の誕生日をもってガルマン・ガミラス建国紀元一年となり華々しく記念式典が催されますことを不肖タラン、心よりお喜び申し

上げます!!」
「うむ」
「すでに式典の参加者は集まっており、ヤマトも間もなく到着する予定です」
「・・・・タラン」
「はっ!!」
「外出の準備をしてくれ給え」
「は?外出の準備でございますか?既に総統を表敬訪問したいと言う希望者が多数おりますが?」
タランがデスラーの言葉に唖然としている中、デスラーはスタスタと扉の方へ向かっている。
「そ、総統。一体どちらへ・・・・?」
「ヤマトが・・・・古代が来るのだ。直接彼らを出迎えたい」
「そ、総統〜!!」
デスラーが足早に部屋を出て行くとタランは慌てて後を追った。

ヤマト、まほろば、アルバレスが指定されたガルマン・ガミラスの第三宇宙港へ着陸しようとしていると、古代の目はある人物の姿を捉えた。
その人物は身じろぎもせずヤマトを見上げているデスラーだった。
「デスラー・・・・」
やがて三隻は第三宇宙港へ着陸し、ガントリーロックで船体を固定する。
デスラーが立っている位置はヤマトの上甲板と同じ高さの位置であった。
ガルマン・ガミラス星へ降りる前、ヤマト、まほろばの乗員たちにはある薬が配られる。
これは第二次イスカンダルへの航海で佐渡がガミラス側に提供した酸素適合薬の逆バージョンで放射能・硫化水素の適合薬で、地球人の様に放射能や硫化水素に耐性がない星の住人の為にガルマン・ガミラスで作られた薬であった。

土門や揚羽、坂東たち新人の乗組員の中には毒薬じゃないかと不安視する者が居たが、古代たち幹部乗員たちが率先して適合薬を飲み、毒薬ではない事を自らの身体で証明した。
ガミラスと同じ環境下であるガルマン・ガミラスの大気は宇宙服なしの地球人にとっては有害な大気なので、宇宙服なしでガルマン・ガミラス内を活動するにはこの薬が必要不可欠であったのだ。
当然それは魔導師、戦闘機人でも例外ではない。
適合薬を飲んだことで放射能が含まれる大気内でも宇宙服なしで活動することが出来るようになり、古代たちは上甲板へと上がり、出迎えたデスラーへ敬礼をする。
するとデスラー本人と護衛の親衛隊員たちも返礼した。
「ヤマトの諸君・・・地球の諸君・・・我々は諸君らの来訪を歓迎する」
タランが出迎え用のエアーカーのドアを開け、デスラーは一同を促すとヤマト、まほろばの乗員たちは出迎えのエアーカーへ順次乗っていく。
エアーバイクに乗った親衛隊の先導と護衛を受けながら、古代はデスラーと共にリムジン型のエアーカーに乗っていた。
「ゴルバとの戦い以来だな」
「この星も二連星だな。ガミラスとイスカンダルに似ていたから驚いたよ」
古代は空を見上げガルマン・ガミラスの直ぐ近くにある青い星を見つめる。
「私はあの星をスターシアと名付けた」
デスラーも古代同様、ガルマン・ガミラスの兄弟星である青い星を見つめながら、その星の名前を口にする。
「スターシア？イスカンダルの女王の・・・？」
「そうだ・・・私はスターシアをこよなく愛していた・・・」
「それであの星の名前を・・・」
「ああ・・・」
第二次イスカンダル航海での暗黒星団帝国との戦いでイスカンダルとスターシアを何とか救う事は出来た。

そして、こうしている間もスターシアたちはイスカンダルの復興をして居る頃だろう。
しかし、デスラーにとってスターシアへの想いは永遠に届かない。
それならば、スターシアの事をいつでも思い出せるよう、イスカンダルに似た青い星にスターシアの名を授けたのだ。

一行の車列はやがて空港から都市部へと入る。
すると歩道には沢山のガルマン・ガミラスの市民たちが手を振っている。
「凄い都市だ・・・短期間でこれだけの国家を築き上げるとはデスラー総統のカリスマ性はもしかしたら宇宙一なのかもしれないな・・・」
ガルマン・ガミラスの近代化された都市を見ながら良馬はガルマン・ガミラスの建築技術と手を振っている市民の反応からデスラーのカリスマ性にも驚く。
「ええ、ミッドを始めとして私が知る限りの管理世界でも此処までの都市は見たことがありません」
ギンガも故郷であるミッドチルダ、そして自分が知る限りの管理世界でも此処までの近代都市は見た事もない。
「バース星と同じ様にガルマン・ガミラスもボラー連邦に一時支配されていたと聞いたけど、本当にボラー連邦に支配されていたとは思えないな」
同じボラー連邦に支配されていたバース星と比べるとガルマン・ガミラスの技術は雲泥の差である事が窺える。
「でも、地球もガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国との戦いの後に復興しました。第二の地球となる星を見つけることが出来れば、地球の人たちはいずれその星もガルマン・ガミラスに負けないくらいの都市を築けるのではないでしょうか？」
「そうだな」
ギンガももう一つの地球に住む人類の底力を見てきた。
第二の地球となる星が見つかった時、きっとその星は何もない星だろうが、地球人類の力をもってすれば住みよい星になるだろうと信じ

ていた。
　そして祝賀会の会場となるデスラーパレスが見えて来ると、一同はその高さと大きさにも驚く。
（凄く高くて大きい・・・ミッドにある地上本部ビルよりも大きく高いんじゃないかな・・・）
　ミッドチルダの首都クラナガンの中央部に聳え立つ〝陸〟の総本山でありミッドチルダの象徴とも言える地上本部ビル・・・
　しかし、今自分たちが向かっているデスラーパレスはその地上本部ビルよりも大きく高い。
（〝海〟の人が見たらこの星を欲しがるのかな・・・？）
（でも、この星の大気は通常は有毒だから技術のみを欲しがるのかな・・・）
　ガルマン・ガミラスの技術力ならば当然管理局でも欲しがる技術の筈であるが、星ごとの場合、適合薬が無ければ管理局の人間でもこの星で過ごすことが出来ない。
　ならば管理局とすればガルマン・ガミラスの技術力だけでも欲するだろう。
　ギンガがミッドチルダとガルマン・ガミラスの技術を比較しながらデスラーパレスを見ていると、やがてエアーカーはそのデスラーパレスへと到着した。

百六十六話　ガルマン・ガミラス建国紀元一周年

デスラーからの招待を受け、ガルマン・ガミラスへとやってきたヤマトとまほろば。
そのガルマン・ガミラスではデスラーの生誕祭と同時にガルマン・ガミラス建国紀元一周年の記念行事が行われ、総統府であるデスラーパレスのメインホールには歓迎午餐会が開かれた。
列席者はガルマン・ガミラス政府の首脳、軍部の幹部、そしてガルマン・ガミラスの同盟国の首脳陣と錚々たる人々であった。
やがて壇上に今日の主役であるデスラーが登壇する。
『デスラー総統万歳!!』
『ガルマン・ガミラス帝国万歳!!』
デスラーの登場と共に会場は異様な熱気に包まれる。
やがてデスラーは片手で参列者に着席を促すとスピーチを始める。
「参列者の諸君。本日はガルマン・ガミラス建国紀元一年の記念式典のために遠路はるばるからの参列に心から感謝すると共に歓迎する。諸君らの努力のおかげで、我がガルマン・ガミラス帝国は銀河系宇宙のほぼ半分を支配することが出来た。我々は凶悪なボラー連邦の侵略という蛮行の守護者になると同時にガルマン・ガミラス民族の繁栄の礎を築くことが出来た。諸君らの努力に感謝すると共にボラー連邦を倒すまで、諸君らの忠誠と奮戦に期待する!!」
『オオオオオオオオオオオオー!!』
パチパチパチパチ・・・・
デスラーのスピーチが終わると会場は拍手と喝采に包まれる。
そしてキーリングがグラスを手に立ち上がり、
「それではデスラー総統の生誕を祝し、またガルマン・ガミラス帝国の繁栄を祈って、乾杯!!」
『乾杯!!』
参列者たちは立ち上がってグラスを掲げ乾杯する。
（フォムトやネレディアさんは・・・参加していないのか・・・）

（折角二人と久しぶりに会えるかと思ったのにな・・・）
祝宴の中、良馬はバーガーとネレディアの姿を探すが、どうやら二人はこの祝賀会には参列してはいなかった。
この祝賀会に参列した軍人は皆、将官クラスの軍人たち・・・
バーガーとネレディアは未だに佐官であったので、参列する資格がまだなかったのだ。
最もバーガーの性格から、
「あんなお堅い席での酒なんか不味くて飲めない」
とでも言いそうだ。
（この料理食べても大丈夫なのかな・・・？）
一方でギンガは用意された料理をジッと見つめる。
元々ガルマン・ガミラスの大気は放射能や硫化水素が含まれている。
今は適合薬のおかげで人体には何の影響もないが、用意された料理を食べた後で適合薬の効き目が切れたら人体に何かしらの悪影響を与えるのかもしれないと思っていた。
「ん？どうしたの？食べないの？」
そんなギンガの様子に気づいた良馬がギンガに声をかける。
「い、いえ・・・その・・・食べた後で適合薬の効き目が切れたら人体に何かしらの影響がないか不安で・・・」
「だったら、食べても身体から排出されるまで適合薬を飲んでいたら大丈夫じゃないかな？」
「あっ、なるほど」
「うん。でもあまり食べ過ぎない様にね」
「わ、分かっています」
食後の人体に関する影響問題も解決したので、ギンガは用意された料理を食べ始めるが、この時は彼女にしては珍しく食べる量をセーブしていた。
やがて、祝宴は何事もなく終わり、デスラーは一度居室へと引き上げる。
デスラーは窓外の空に浮かぶ青い星・スターシア星を見上げる。

「スターシア・・・ヤマトが・・・古代がこの星に来た・・・雪も一緒だ・・・彼らに出会ったら、急に君の事が懐かしくなってね・・・」
スターシア星を見つめているとデスラーの脳裏にはスターシアの姿が蘇る。
「スターシア・・・君は私にとっていつもまでもこよなく懐かしい人なのだよ・・・」
デスラーがスターシアの事を思っていると、彼の背後に人の気配がした。
「雪か・・・足音で君だと分かったよ」
デスラーは彗星帝国に身を寄せていた頃、木星圏でヤマトとの決戦を挑んだ時、当時デスラーが旗艦として使用していた戦艦の艦橋で古代と対峙した。
その際、古代は負傷しておりデスラーと一騎打ちする前に失血のせいで意識を失ってしまった。
倒れた古代に彼を追いかけてきた雪が倒れた古代を庇う。
そして、古代が落としたコスモガンを拾いデスラー相手にその銃口を向けるが、苦悶する古代を見て雪はハッとし彼を抱きしめる。
雪の一連の行動にデスラーは心を打たれ、静かに手にしていたコスモガンをホルスターに納めた。
「もしも私に愛というものがあるとしたら、それはスターシアに対してだけだったのかもしれないな・・・最も今は娘のジュラに対しても愛おしいと言う思いもあるがそれはきっと父親としての娘に対する愛なのだろう・・・」
デスラーは雪の気配を感じてあの時の事を思い出す。
そこへ古代も雪と合流した。
「デスラー、まだ君に『誕生日おめでとう』を言ってなかったね」
「いや、それよりもガルマン・ガミラス建国紀元一年を祝ってくれ」
デスラーは自分の誕生日よりも帝国紀元の方を祝ってほしかったようだ。
「そうだな、紀元一年おめでとう」
「ありがとう」

「それにしても短い間によくこれだけの大帝国を建設出来たものだ」
「そう・ガミラスの再建が私の宿願だった・・・だが、その宿願を果たすまでは決して平坦な道のりではなかった・・・ゴルバとの戦いが終わり君たちと別れた後、私たちは長い放浪の旅に出た・・・」
デスラーは古代と雪にガルマン・ガミラス帝国の建国までの経緯を話した。
デスラーとしても当初は何年、何十年もの長い旅を覚悟していたが、短期間でガルマン星を発見できたことはまさに天佑と言える奇跡であった。
「そんなことが・・・」
(デスラーはこうして第二の故郷と言える星を見つけた)
(しかし、デスラーたちには時間と言うタイムリミットがなかった)
(俺たちには・・・地球にはもう半年ほどの時間しか残されていない)
ゴルバとの戦いの後のデスラーたちは今の自分たちの様に第二の故郷となる星を探す旅となった。
そうした状況は自分たちと似ているが、その時のデスラーたちにはタイムリミットはなかった。
あるとすればせいぜい自分たちの寿命ぐらいだろう。
しかし、地球には時間制限と探査範囲が一万五千光年という制限があるので、その点が大きな違いであった。
「失礼します。総統、まもなく記念パレードのお時間です」
タランがデスラーの居室に来てパレードの時間である事を伝えに来た。
「うむ。古代、雪、君たちもパレードの見学に来てもらえるかね?」
「はい。喜んで」
雪の返答を聞いてデスラーは満足した様子で部屋を後にする。
デスラーパレスのバルコニーに出ると、
『デスラー総統万歳!!』
『ガルマン・ガミラス帝国万歳!!』
『デスラー総統万歳!!』
『ガルマン・ガミラス帝国万歳!!』

先ほどの祝賀会に参列した人たちがバルコニーに設けられた席に居り、デスラーとガルマン帝国の建国を祝福していた。
「デスラー総統とは話が出来たかい？」
バルコニーに設けられた見物席には良馬が先に来ており古代に話しかけた。
「ええ、彼から直接ガルマン帝国の建国までの話を聞きました」
「そうか・・俺はジュラさんやバレル大使から聞いていたが、デスラー総統らがガルマン星を見つけるまでの旅と今の俺たちの立場は似て異なるな・・・」
「はい。デスラーたちには時間と航続距離と言う制限がありませんでした・・・でも、俺たちには時間も探査範囲も制限がある・・・」
「ああ・・できる事ならこの後のガルマン・ガミラスによる太陽制御で上手く制御が出来ればと思っているよ」
「そうですね」
ガルマン・ガミラスによる太陽制御がうまくいけば、第二の地球探査任務も終了となる。
その後はガルマン・ガミラスとの同盟会談になるが、その辺は軍の上層部と政治家に任せるしかない。
古代と良馬が話していると、パレードが始まる。
三隻のノイ・ゼラード級航宙戦艦が陣形を組んで飛行するとそこからパーソナルジェットを背負った降下猟兵が降下して空中で隊列を組みホバリングしながら浮遊移動をして行く。
地上ではガミラス時代から陸戦兵器の主力を務めたサルバーＳ―ＶＩ型　重戦車が此処ガルマン・ガミラスでも主力戦車の様で隊列を組んで走行している。
空では多数のゼードラーⅢが編隊飛行をし、その後ろからゲルバデス級航宙戦闘母艦、続いてデスラー砲を搭載したフォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦、次元潜行艦、二連三段空母とガルマン・ガミラスが誇る宇宙艦船がデスラーパレスの前をゆっくりと航行して行く。
宇宙艦船や兵器、パレードに参加する兵士たちを見て歓呼の声を上げるガルマン・ガミラスの市民たちとガルマン・ガミラスの軍事力を

間近に見て眼を見張る同盟国の首脳たち。
「驚くべき軍事力だ・・・」
「さすがデスラーだと言うべきか・・・」
真田は眼前を航行する宇宙艦船を見て呟くと島も頷き同意する。
「ふん、兵器を見せつけて『俺はこんなにすごいんだぞ!!』って自慢するガキか!?胸糞悪い!!」
「ほんと、ほんと、買ってもらったばかりのおもちゃを自慢する子供と変わらないな」
土門と揚羽は悪態をつき席を立つと早々にヤマトへと帰っていく。
二人の他にガルマン・ガミラスご自慢の兵器を見るのが嫌なのかパレードの最中に艦へ戻る新人たちがちらほら居た。
パレードに参加する兵器、乗員たちの反応を見ながら古代の心は複雑であった。
この強力で強大な軍事力を背景にデスラーはやはり、宇宙制覇の野望を諦めてはいないのではないか?
一度結ばれた友情をこのまま続けて行く事が出来るのか?
もしも友情が破れた時は・・・?
古代の想いは千々に乱れた・・・
パレードも終わり、祝賀会のプログラムが全て終わるとデスラーの姿はヤマトにあった。
「まさか、こうしてヤマトの甲板を再び踏めるとは思ってもみなかったよ」
デスラーが初めてヤマトの甲板を踏んだ時・・・
それはヤマトがイスカンダルから放射能除去装置を受け取り、地球へ帰還する最中の出来事で、この時はまだデスラーとは敵対関係にあった。
ヤマトの甲板に降り立ったデスラーはそこから第一艦橋を見上げる。
古代の案内の下、デスラーはヤマトの第一艦橋へと上がる。
第一艦橋にある沖田艦長のレリーフの前に立ったデスラーはなんとマントを翻し敬虔に跪いた。

ガルマン・ガミラスの人間が見たら驚愕する光景である。
「沖田・・・貴方は立派な艦長であった・・・」
ヤマト初代艦長、沖田十三は地球人ながらもデスラーに尊敬と敬意をはらわせる唯一無二の地球人であった。
第一艦橋のメンバーと同じくヤマトを訪問していた良馬が一連のデスラーの行動を見守っていると彼は静かに立ち上がる。
「それで、古代。バレルから聞いた話であるが、地球の太陽異常の話と制御の話を早速したい」
「ああ、わかった」
古代はデスラーに自分が知りうる範囲の中で今、地球の太陽で起きている異常を伝えた。
「なるほど・・・しかし、第二の地球を探す前に地球で太陽の制御は出来なかったのか？」
「勿論、地球でもその作業は試みた。しかし、失敗に終わった」
「そうか・・・タラン」
「はっ!!」
「フラウスキー技術少佐に連絡を・・・直ちに太陽制御のプログラムを立案させろ!!」
「はっ!!承知しました!!」
「デスラー・・・ありがとう」
ガルマン・ガミラスの太陽制御の話は地球側でもジュラが既に提案を打診している。
そして今、デスラーはその提案に賛同してくれた。
これによってガルマン・ガミラスの太陽制御の作業が行われることが決定したのだった。
デスラーとタランがヤマトを去った後、
「真田さんはどう思いますか？」
「ん？」
「ガルマン・ガミラスの技術力を使えば太陽制御は成功すると思いますか？」
「そうだな・・・この星の軍事力はよほど高いレベルの科学力の裏付け

がなくては達成できない。もしかすると太陽制御も行えるかもしれない」
　先ほど見た宇宙艦船の建造技術から真田はガルマン・ガミラスの手を借りれば太陽制御も可能かもしれないと言う見解を打ち出す。
「僕は反対です!!デスラーの力を借りるなんて・・・・地球は僕らの手で救うべきだと思います!!」
　しかし、反ガミラス感情がある土門はガルマン・ガミラスの・・・・デスラーの手を借りて太陽制御を行う事に反対する。
「僕もです。何だか不安と言うか陰謀のような気もします」
　南部も反対の意を示す。
「デスラーはそんな男ではない」
　一方で古代はデスラーを信じ賛成の姿勢を示す。
「俺も今のデスラー総統を信じている。それにこの提案は元々ジュラさんの提案だったからね」
　良馬も古代と同じく賛成にまわる。
「私も信じるわ。あの人は昔のデスラーじゃないわ。私たちと同じように熱い血が流れているのよ」
「ワシも賛成じゃ。今は誰の手を借りてでも地球を救う事が先決じゃろう？」
　佐渡も賛成側に回る。
　彼の言う事は最もであり、銀河系中心部まで来て未だに第二の地球となる星が見つかっていない状況下なので地球を救える手が一つでも多ければそれを実行しない手はない。
「艦長、俺は先ほど名が出たフラウスキー少佐の下へ向かって太陽制御の方法を聞いてみる」
「よろしくお願いします」
　真田はガルマン・ガミラス側の太陽制御方法の確認とこれまでの太陽の観測データ、そして地球側で試みた太陽制御の方法を記したデータを持ってフラウスキーの下へと向かった。
　その頃、ガルマン・ガミラスとボラー連邦の国境付近にあるボラー

連邦前線基地では・・・
　警報と同時に基地のミサイル発射台には多数のミサイルが設置され、発射体制に入る。
「司令官、ワープミサイル発射準備完了しました!!」
「うむ・・・このミサイル攻撃の成否によってガルマン・ガミラスとの戦争の分岐点となる・・・ワープミサイル発射!!」
「はっ!!ワープミサイル発射!!」
　轟音を立て発射台からは次々とミサイルが打ち上がる。
　打ち上がったミサイルは宇宙空間まで上がりある程度の距離を飛行すると突如ワープして消える。
　瞬間物質転送機で送り込む方法とは異なるが、ワープ機関を搭載したこの多弾頭式ワープミサイルはワープによって目標座標の付近へワープアウトし、弾頭の中に仕込まれている多数の小型ミサイルが飛来して、目標物を攻撃・破壊するミサイルであった。
　しかも弾頭の他に戦果確認用の小型のスパイ衛星も多数搭載されていた。
　その為、国境付近に配備されていたガルマン・ガミラスの無人監視衛星もこのミサイルの姿を捉える事は出来なかった。
「第一陣、全弾発射完了!!」
「直ちに第二陣発射準備にかかれ!!」
「はっ!!」
　基地の司令官は徹底的に攻撃を行う様子でワープミサイルによる波状攻撃を仕掛けようとしていた。

　ボラーからワープミサイルが撃ち込まれようとしている中、真田はフラウスキーの下を訪れていた。
「フラウスキー技術少佐。宇宙戦艦ヤマトの真田副長をお連れしました」
「ご苦労」
　真田の眼前にはガルマン・ガミラスの士官軍服を身に纏い、左目にはモノクルを掛けた技術士官というよりも博士か教授といった風貌

の男が居た。
「フラウスキーです」
「宇宙戦艦ヤマト副長の真田志郎です」
「デスラー総統と帝国の名誉にかけて必ずやあなた方の太陽を制御してみせます」
「ありがとうございます。こちらはこれまでの太陽の観測データと地球で行われた太陽制御の方法とデータです」
「拝見します」
　真田はフラウスキーにこれまでの太陽に関するデータを渡し、フラウスキーは太陽制御の方法を検討する。
　真田とフラウスキーが太陽制御の方法を検討している中、古代と良馬はヤマトの艦長室で休憩をしていた。
「今回の話、土門君や南部君の気持も分からない訳ではないかな」
「えっ？」
　良馬の呟きに古代はレモンティーが入ったカップをソーサーの上に置く。
「それはどういう事でしょう？」
「確かに森さんの言った通り、デスラー総統は変わった。彗星帝国戦以前の彼だったら、他の惑星国家と同盟何て結ばずに武力によって支配するか殲滅するかのどちらかであったと思う」
「ええ・・・実際に地球は人類絶滅寸前まで追い込まれましたからね」
「しかし、今は反ボラー感情がある星間国家へ同盟を促して戦力と勢力を拡大してきた。今回のガルマン・ガミラスによる太陽制御が成功すればガルマン・ガミラスとの同盟も前向きな姿勢になるかもしれない」
「た、確かに・・・」
「同盟が締結されればジュラさんやフォムト、ネレディアさんとも交流が増えるだろうけど、これはあくまでも俺の個人的な交流だが、地球とガルマン・ガミラス・共に公式的な交流を行えば人材と技術交流で地球の科学技術は大きく発展するだろう」
　良馬はガルマン・ガミラスとの人材・技術の交流には賛成派であり、

ジュラとメルダも地球の文化・・特に食文化に関しては強い関心があった。
「そうですね」
「ただ、良い面だけではなく、マイナス面も含んでいる事も予想される」
「マイナス面？それは一体どんな？」
「・・・もしもガルマン・ガミラスからボラー連邦との戦争の参戦や他の惑星に対する侵略行為の助力を求められた時、古代君はどうする？」
「・・・」
　現在の銀河系中心部で起きているガルマン・ガミラスとボラー連邦の戦争からガルマン・ガミラスと同盟を締結すればそう言った戦争の参戦要請も考えられる。
　軍事パレードで見た数々の最新鋭の兵器を見て古代も良馬の言葉を否定する事は出来なかった。
「それに土門君たちの様に未だに反デスラー、反ガミラス感情がある地球人も居るだろうしね。同盟締結後に地球で大規模な暴動も起きないとは言い切れない」
「・・・」
　地球の未来、そしてガルマン・ガミラスとの今後の付き合いに重苦しい空気が流れかけた頃、
「艦長、フラウスキー少佐と太陽制御について話してきたがその結果を伝える」
　フラウスキーとの太陽制御についての検討を終えた真田がヤマトに戻って来た。
「変な空気にしてすまなかった・・・ひとまず、ガルマン・ガミラスとの同盟については政治家や軍の上層部に任せて、今は地球の事について考えようか？」
「そ、そうですね」
　ガルマン・ガミラスとの同盟やその後のうんぬんよりもまずは地球を救う事が前提なので、フラウスキーとの間で検討した太陽制御の方

法を真田から聞くことにした。
「それでガルマン・ガミラスはどのような方法で太陽を制御するつもりなんですか？」
古代が真田にガルマン・ガミラスがとる太陽制御の方法を訊ねる。
「では、説明しよう。これが太陽と地球だ」
真田は持っていたタブレット端末にて説明を行う。
端末には膨張した太陽と地球の位置が表示される。
「まず、磁気発生シールド装置を太陽の周りに展開させて人工的に力場を作る。その力場に向けて多弾頭ミサイルを発射し、ミサイルの弾頭に仕込んだ反エネルギー物質を散布させ、一時的に太陽の強力な熱放射を吸収させる」
「この磁気発生装置の仕組みや反エネルギー物質のエネルギー内容は一体どういったモノなんですか？制御後に何か悪影響とかあればそれはそれで問題だと思いますが？」
良馬が真田に力場を作るシールド発生装置の仕組みと反エネルギー物質のエネルギー内容を訊ねる。
「その点はやはり軍事機密らしく詳しい内容までは伝えられなかった」
「大丈夫なんですか？ソレ？」
「まぁ、フラウスキー少佐も十分に検討しているから大丈夫だ」
「・・・」
「続けるぞ」
「は、はい」
「どうぞ・・・」
「次に強力なアステロイド吸着システムを使用して大量の小惑星を金星付近に集結させ、そのまま太陽へと突入させる」
「小惑星を太陽へ？それって何か意味があるんですか？」
「あるぞ。小惑星を太陽へ突入させることによって瞬間的にヘリウムガスを噴射させる」
「しかし、太陽には事前に磁気シールドが張られていますよね？小惑星を太陽へ突入させた際にそのシールドが破れたりしませんか？」

「ふむ、俺もその点をフラウスキー少佐に指摘したが、どうやらこの磁気シールドは外からの物質を通せるモノの様だ」
　真田が言うには、この様な特殊シールドを発生させる装置を開発することが出来る点からもガルマン・ガミラスの科学技術の高さがうかがえるらしい。
「そしてヘリウムガスの噴出と同時に太陽熱核融合プラズマ抑制弾頭を仕込んだプロトンミサイルを太陽へと撃ち込む。理論上はこれで太陽は制御できる筈だ」
「なんか、毒を以て毒を制すみたいな制御方法ですね」
　良馬がガルマン・ガミラスの制御方法についての感想を述べる。
　公表はされていないが、今回の太陽の核融合異常増進はプロトンミサイルが太陽に着弾した結果引き起こされた事態だが、その事態をプロトンミサイルで制御する事から皮肉と言うか、まさに的を射ている言葉であった。
「まぁ、そういう事になるな」
「では、早速この件を地球に知らせよう」
　これまでヤマトが探査宙域に設置したリレー衛星を経由してガルマン・ガミラスの太陽制御の方法を地球へ報告を入れる事にした。

　地球　宇宙移民本部
「藤堂長官、宇宙戦艦ヤマトの古代艦長より通信が入っております」
「古代から？繋いでくれ」
「了解」
　定時報告でもない時間帯に突然の古代からの通信。
　もしかしたら第二の地球となる星が見つかったのかもしれないと言う思いが藤堂を始め宇宙移民本部のスタッフたちに過る。
　やがて、パネルに古代の姿が映ると彼はガルマン・ガミラスの太陽制御に至るまでの経緯を話し、
「太陽制御の方法に関して、ガルマン・ガミラスの科学力をもってあたれば、真田さんの見解では成功率は９０％と言う見通しです」
「そうか・・・いや、真田君が保証するなら間違いはあるまい」

１００％と言う絶対の確率ではないが、それでも９０％と言うかなりの高確率の成功例に藤堂も安堵の表情を浮かべる。
「はい。工作船五隻が準備出来次第こちらを出発します」
「分かった。こちらでも至急受け入れ態勢を整えよう」
「ありがとうございます。なお、工作船には真田副長以下技術班員五名、連絡要員として相原通信長を同行させます」
「承知した。デスラー総統には私から感謝の意を伝えてくれたまえ」
「わかりました」
ガルマン・ガミラスの太陽制御についての報告を入れ古代は通信を切った。
「相原さんが地球へ・・・・」
晶子は相原が一時的とはいえ一足先に地球に戻る報告を聞き、顔を綻ばせた。
ガルマン・ガミラスの手を借りることになるが、それでも地球は救われるかもしれないと思っている宇宙移民本部。
一方、その頃未来の宇宙戦士たちを育む宇宙戦士訓練学校では・・・・
「あぁ～つぅ～いぃ～」
訓練校の寮の一室・・・・
ティアナとうららの相部屋にてティアナがコンパクト型の冷風機を抱きしめるような姿勢で季節外れの残暑に参っていた。
「ティアナ、アンタなんて格好をしているのよ」
そんなティアナに対しうららは呆れた。
何せ今のティアナの格好は、上はウェアやシャツの類は身に着けずにブラのみで、下はショーツ姿と、とても女性らしくない格好をしていたからだ。
もし、スバルが今のティアナの姿を見ていたらきっと胸を揉みしだこうと襲い掛かっていたかもしれない。
「そういうアンタだって似たような格好でしょう？」
ティアナは気だるそうにうららへ顔を向けながら彼女の服装を指摘する。
うららの格好は、一応上はウェアを身に着けてはいるが、下はティ

アナ同様ショーツ一枚な姿だ。
「わ、私はちゃんとウェアを身に着けているわよ!!」
「五十歩百歩じゃない・・・・大体、戦場じゃあ格好なんて気にする余裕なんてないわよ」
「いや、例え戦場でもその恰好は無いわ・・・・第一此処は戦場じゃないし、そんなだらけた格好で言われても説得力が全然ないわよ」
いくらなんでも戦場に下着姿で立つことはないだろうとツッコミを入れるうらら。
しかも暑さでへばって冷風機を抱きしめている姿はどうみても宇宙戦士の卵には到底見えない。
「常在戦場の心構えは大事よ」
「だからそれが全然ないって言っているの」
「それもこれも全部この異常な暑さのせいよ。あぁ～それにしても暑いぃ～本当に暑いぃ～もうすぐで冬なのにぃ～・・・・去年はここまで暑くはなかった筈よ・・・・」
「暑い、暑い、連呼しないでよ。こっちも暑く感じるわ。でも、ティアナの言う通り、確かにここ最近の気象は異常ね」
「電波障害も頻繁に起きて授業にも影響が出ているしね・・・・」
「暑さ以外にも夜になった筈なのに西の彼方はずっと明るいし、太陽だって何だか大きくなっている気がするわ」
(こんな現象、ミッドでも他の管理世界でも見たことのない現象ね・・・・)
「土門や揚羽たちが繰り上げ卒業してヤマトに乗って行った事と何か関係があるのかもしれないわね」
「そう言えば、あいつらは宇宙で元気にやっているかしらね・・・・」
ティアナとうららは現在、地球・太陽で起きている異常に違和感を覚えつつも宇宙で・ヤマトで頑張っている同期の事を思った。
その土門や揚羽が居るガルマン・ガミラス本星では・・・・
古代は藤堂の言葉を伝えるためにデスラーの下を訪れた。
「地球防衛軍の藤堂長官も心から君の好意に感謝すると言っておられた」

「そうか」
「地球は君たちの科学力に絶大な信頼を抱き、成功を期待している」
「光栄の至りだ」
「デスラー・・・一つ聞きたい」
「何かね？」
「君は何故その科学力を平和のために用いない？」
　古代はデスラーと再会してからずっと胸に抱いてきた疑問を彼に直接問う。
「平和？」
「そうだ。こうしてガミラス民族の復興を成しえた今、何故武力によって他の星を責めなければならない？」
「平和な宇宙を築くためだ」
「えっ？」
　デスラーはそう言って銀河系の宇宙図をパネルに表示する。
「古代、見たまえこのようにボラー連邦の勢力は広大なモノだ。当然その武力も侮れない。しかも彼らは虎視眈々と宇宙制覇の野望を抱いている。私はこの星をボラーから守らなければならない。そして私を信じ付き従っている同盟国からの信頼も裏切る事は出来ないのだ」
　デスラーはもはや一国の君主と言う地位だけではなく多くの星の人たちの信頼を一人で請け負っている。
　ガルマン・ガミラスがボラー連邦に負ければ、ガルマン・ガミラスは勿論の事、ガルマン・ガミラスの同盟国の星もボラー連邦に蹂躙される。
（一戦艦の艦長とデスラーが背負っているモノの数と大きさは異なるか・・・しかし・・・）
　デスラーが背負っている責任も分かるが、それでも未だにモヤモヤとした気持ちが残る古代であった。
「デスラー総統。工作船団発進準備完了しました。いつでも地球へ向けて出発出来ます」
　そこへフラウスキーが地球へ出発準備が整ったと報告を入れる。

そんな中、ガルマン・ガミラス本星付近の監視衛星がガルマン・ガミラス本星に迫るミサイルらしき飛来物の姿を捉える。
「第四防衛衛星!!ミサイルらしき飛行物体を捕捉!!」
「ボラー型ミサイルと確認!!」
「ミサイルの侵入コースはＸＹＬからＷＺＡの間二百度!!」
デスラーパレス内にはけたたましい警報が鳴り響き、慌ただしく動き回る兵士たちの姿があった。
「我が方の防衛ラインを突破するのは不可能な筈だ」
ガルマン・ガミラスから一番近いボラー連邦領の星から無傷でミサイルを飛来させるなど不可能な程、国境の警備は厳重であった。
それにもかかわらずボラーはこうしてガルマン・ガミラス本星へミサイルを送り込んできた。
国境警備に何か不具合が起きたのかと思われたが、
「防衛ラインに異常はありません!!」
しかし、国境警備には何ら不具合はなかった。
兵士たちが困惑している中、ボラーが送り込んだワープミサイルは弾頭のカバーが外れ、その中に仕込まれていた多数の小型ミサイルがガルマン・ガミラス本星へ向かう。
「侵入コース付近の戦闘衛星に攻撃命令。地上のミサイル基地でもスクランブル体制を下令しろ!!」
「はっ!!」
本星周辺に展開している戦闘衛星は直ちに迎撃を始める。
それでもボラーのミサイルは多く、戦闘衛星で破壊しきれなかったミサイルは地上からの迎撃ミサイルで応戦する。
「ボラーは絶えず攻撃を仕掛けてくる。一刻も油断は出来ないのだ。古代、これが現実なのだよ。だが、我が方の防衛システムは完璧だ」
パネルには飛来するミサイルを迎撃する戦闘衛星と迎撃ミサイルの様子が映し出される。
「敵、第二波ミサイル捕捉!!」

「敵は長距離ワープエンジンを積んだ。ワープミサイルと思われます!!」
ワープアウトした姿を監視衛星が捉えた事から国境警備のラインを越えてガルマン・ガミラス本星へ無傷でミサイルを送り込めた原因が判明した。
「くっ、ボラーの奴め、またつまらぬものを新開発しおって・・・」
新型のワープミサイルだと知り、デスラーは怒りで顔を歪める。
「第二波ミサイル、侵入コースは四方向、ＸＹＬからＷＢＺ六十度、ＺＬＹからＸＢＬ六十度方向!!」
順調に飛来するボラーのワープミサイルを迎撃していくガルマン・ガミラスの戦闘衛星と地上の迎撃ミサイルであったが、一区画だけ飛来すると分かっているにもかかわらず迎撃をしない地区があった。
「あっ、敵ミサイル一基が接近!!迎撃間に合いません!!」
迎撃が間に合あわず、ミサイルは地表へと着弾した。
「何故、この地域の防衛システムは作動しない？」
「大変です!!メインコンピューターの識別・指令系統が何者かの手によって破壊されています!!」
着弾した地区の防衛システムが働かなかったのは何者かに手による破壊工作が原因であった。
「空港の被害は？」
「無事です」
「よし、工作船団は直ちに出航せよ」
「はっ!!」
「至急、戦闘艦も発進!!迎撃態勢を固めろ!!」
「はっ!!」
コンピューターに不具合が生じてしまったので、デスラーは戦闘艦による迎撃を命じた。
軍港からは多数のデストリア級航宙重巡洋艦が緊急出撃し、ミサイルの迎撃に向かった。
古代もヤマトが心配になり艦へ戻る事にした。
彼がデスラーパレスの出入り口付近へ来た時、

「待てー!!」
古代の背後が何やら騒がしい。
「ん?なんだ?」
古代が振り返ると一人の下士官クラスの軍服を着た男が通路を走って来ると、その男の後ろからは青い軍服を纏った男たち・・・デスラー親衛隊の隊員たちが下士官の男を追いかけて来た。
「ガルマン・ガミラスなんて滅びてしまえ!!」
下士官の男は自らの故郷の滅亡を口にする。
「なんだと!?貴様!!」
「この裏切り者が!!」
「止まれ!!止まらんと撃つぞ!!」
ついに親衛隊の隊員たちはホルスターからコスモガンを抜く。
親衛隊の警告を無視して下士官の男は出入り口を目指して逃げていく。
警告に従う素振りがないと見ると親衛隊員はコスモガンを発砲。
下士官は胸を貫かれ、失速する。
すると下士官はポケットから一つのペンダントを取り出し空に掲げる。
「ま、マザー・シャルバート・・・マザー・シャルバート・・・」
すると空には一人の女性の姿が浮かび上がる。
『・・・』
親衛隊員たちも古代もその様子に唖然とする。
やがて下士官は息絶えて倒れると女性の姿は消える。
「コンピューター機構を破壊したのはあの男だったのか・・・」
先ほどデスラーとオペレーターとの会話の中で防衛システムが人為的に破壊されたと言っていたが、その犯人が先ほど古代の眼前で親衛隊員に射殺された下士官だったのかと合点がいく。
「そしてあの男もシャルバート教の信者だったみたいだな」
バース星でバレルからシャルバート教について聞いていたが、こうして実際にシャルバート教の信者を見て、彼がした言動を見るとガルマン・ガミラスでも禁教になるのも頷けると思う古代であった。

その古代が向かっている宇宙港では、
シャルバート教信者の下士官が防衛システムを破壊した影響で、戦闘衛星、地上の迎撃ミサイルの機能が働かず、地表へ着弾するミサイルの数が増えて来た。
工作船の前に立つ真田、相原、坂東ら技術班のメンバーは緊張した面持ちである。
「この分じゃあいつこの空港も被害に遭うか分からんな」
真田が上を見上げながら呟く。
遠くからミサイルの着弾する音と振動が、工作船が係留されている地下ドックまで届く。
「古代艦長も急ぎ向かっているみたいですが、空港に被害が出る前に発進した方が良いでしょう」
「そうだな」
古代はデスラーパレスからこの空港に向かっているのだが、いつミサイルが空港に着弾してもおかしくはない。
空港または工作船自体が被害を受ける前に発進しなければ地球は救えない。
その為、良馬と真田は工作船を発進させることにした。
「これが成功したらヤマトとまほろばの使命は終わりですね」
「ああ、いい結果を持って戻って来る」
「坂東くんたちもがんばってね」
「はい」
見送りに来た雪も坂東たちを励ます。
「まほろばも途中まで護衛します」
「ああ」
「ヤマトの方も古代艦長が戻り次第、まほろばを追いかけます」
島は古代が戻り次第、まほろばと工作船団を追いかける旨を伝える。
「分かった」
良馬は急ぎまほろばの第一艦橋へと戻った。
「本艦はこれより工作船団護衛のために発進する!!発進準備はいいか

？」
　良馬が新見に声をかけると彼女は頷く。
「オールグリーンです。艦長」
「よし、まほろば。出航!!ヤマトも古代艦長が戻り次第、合流する」
　地下ドックの装甲シャッターが開き、エレベーターで工作船団は地上へと出るそしてガントリーロックが解除されると工作船は次々とガルマン・ガミラスの空へと舞い上がる。
　まほろばも宇宙港から飛び上がり工作船団の前面に展開して降り注ぐボラーのミサイルから工作船団を護衛しながら宇宙へと上がる。
　その宇宙空間ではデストリア級航宙重巡洋艦がボラーのミサイルを迎撃していたのだが、飛来するミサイルの数が多く撃沈される艦もあった。
　やがて、ミサイルの飛来も一区切りつき等々弾切れかと思われたが、
「敵大型ミサイル発見!!これまで飛来したミサイルとは異なる大きさです!!しかも複数です!!」
　新見が新たなミサイルの飛来を報告する。
「ボラーの奴、止めのミサイルを送り込んで来たな・・・」
「後方よりヤマトが来ました!!」
　此処でヤマトも工作船団の護衛の為に合流した。
「通信長、ヤマトに通信を繋いでくれ」
「了解」
「砲雷長、波動砲の発射準備だ!!モードは拡散モードに設定!!」
「了解!!」
　良馬は迫りくる大型ミサイル撃破する為の指示を出した。

百六十七話　太陽の怒り

デスラーの招待を受けて、ガルマン・ガミラス本星にてガルマン・ガミラス建国紀元一年の祝賀会と軍事パレードを見学した後、ガルマン・ガミラスの技術で太陽制御を行う事になった。
太陽制御の為の工作船の発進準備が整った時、ボラー連邦は新型のワープミサイルを使用してガルマン・ガミラスへの本土攻撃を行ってきた。
しかし、ガルマン・ガミラス本星の防衛システムの目は鋭く、牙は強靭であった。
当初は本星周辺に展開している戦闘衛星と地上の迎撃ミサイルで防衛し、ボラーのミサイルを次々と撃墜していたが、ガルマン・ガミラス軍内部に潜むシャルバート教の信者が防衛システムのコンピューター機構を破壊し、戦闘衛星と迎撃ミサイルが使用不可能な状況となり、ガルマン・ガミラスの地上にボラーのミサイルが着弾し始める。
このままでは工作船が停泊している空港及び工作船自体が被害に遭う可能性が高くなり、工作船は被害を免れる為、空港を発進し、まほろば、ヤマトはその護衛にあたった。
するとボラーはガルマン・ガミラスに止めと言わんばかりに超大型ミサイルを複数送り込んできた。
そこで良馬はまほろばの拡散波動砲にて大型ミサイルの破壊を試みた。
「古代艦長、まほろばの拡散波動砲にてボラーの大型ミサイルを破壊します。ただ、数が多いので、万が一撃ち漏らすミサイルもあるかもしれないので、ヤマトの方でも波動砲の準備をお願いします」
「分かりました」
「通信長、ガルマン・ガミラスの迎撃艦隊にも退避勧告を送ってくれ」
「了解」
ギンガがボラーのミサイルを迎撃に宇宙へ上がったデストリア級

航宙重巡洋艦へ退避勧告を送るとデストリア級航宙重巡洋艦と工作船団は急速に遠ざかった。
ヤマトとまほろばは横陣し、まずまほろばが波動砲の発射準備を行う。
波動砲の準備とガルマン・ガミラスの艦艇が退避行動を行っている中、ボラーの大型ミサイルはガルマン・ガミラスへと迫る。
「大型ミサイル接近!!方位三十、距離五百宇宙キロ!!」
「波動エネルギー充填完了!!」
「波動砲安全装置解除」
「ストライカー圧縮機作動・・・最終セーフティ解除」
「波動砲・・・発射!!」
まほろばから拡散波動砲が放たれ迫りくるボラーの大型ミサイルを迎え撃つ。
流石の大型ミサイルも波動砲の前には無力で次々と爆発していく大型ミサイル。
しかし、一基のみまほろばの拡散波動砲から逃れ、ガルマン・ガミラスへと迫っていく。
「くっ、一基逃したか・・・」
波動砲を撃ったフェリシアが悔しそうに呟く。
良馬から言われた通り、ヤマトでも波動砲の発射準備が行われていた。
そして今回、波動砲を撃つのは古代ではなく土門だった。
古代は土門の反ガルマン・ガミラス感情について思う所があり、今回土門に波動砲を撃たせることにした。
波動砲の発射準備が着々と進んでいき後はトリガーを引くだけとなった時、土門は真剣な表情で艦長席に座る古代へ振り向き、
「艦長、このままあの星が吹っ飛んでしまった方が・・・」
「バカ!後方の工作船には真田さんや坂東たちが乗っているんだぞ!?ガルマン・ガミラスが吹き飛べば工作船も巻き添えにしてしまうぞ!!」
土門は古代の言葉にハッとして前方を見据え直した。

そして大型ミサイルが波動砲の軸線に乗り、土門は波動砲のトリガーを引いた。
ヤマトからの波動砲を受けたボラーの大型ミサイルは眩い光と共に消滅した。
ボラーはこれで本当にミサイル切れの様でこの大型ミサイル以降、ワープミサイルを撃ち込んでくる事は無かった。
「艦長、デスラーから通信が入っています」
ボラーのミサイルを退けるとデスラー通信が入った。
「繋いでくれ」
「はい」
ヤマトの第一艦橋にあるメインモニターにデスラーの姿が映し出される。
「古代、よくやってくれた。君たちのおかげでガルマン・ガミラスの壊滅を防ぐことが出来た。礼を言う」
「友として当然の事を下までだ。ただ、武力を過信する事がいかに慢心を生むのか、今回の事で分かった筈だ。よく考えてくれデスラー」
新発想は常に自分たちだけではない。
そしてガルマン・ガミラスの人間が地球よりも優れている頭脳を持っているとしても人間である以上、完璧・完全な物を造り上げるのは不可能であると言う事だ。
デスラーは古代の言葉に神妙な顔つきであった。
(このくらいの忠告で壊れるような友情なら、そんなものは友情でも何でもない。デスラーも一代の英雄ならばきっと理解してくれるはずだ)
古代はデウスーの器の広さを信じた。
「では、我々工作船団はこれより地球へ向け出発する」
「はい。ヤマトとまほろばはガルマン・ガミラスで工作船団の吉報を待っています」
ボラーミサイル攻撃を防ぎ切った後、工作船団は予定通り地球へ向けて発信する。
途中、東部方面軍の護衛艦隊と合流して第十一番惑星近海まで護衛

してもらう予定だ。
　その理由はやはりボラーが保有していた次元潜行艦の攻撃があった為だ。
　ヤマトとまほろばが地球へ同行しなかったのは工作船団が地球へ向かっている最中、再びあの大型ミサイルが飛来してこないとは言い切れないからだ。
　工作船団が地球へ向かっている頃、ガルマン・ガミラス本土の攻撃の成果はミサイルの中に仕込まれていたボラーのスパイ衛星でボラー連邦本星へリアルタイムで送られていた。

　ボラー連邦本星　首相官邸
「して、ゴルサコフよ。ガルマン・ガミラス本土へ行ったワープミサイルの戦果はどうなった？」
　ベムラーゼはゴルサコフにワープミサイルを使用したガルマン・ガミラス本土への攻撃の成果を訊ねる。
「はっ、ワープミサイル内に仕込んだスパイ衛星からの映像が届きましたが・・・」
　ベムラーゼよりも先にワープミサイルの戦果確認の映像を見たゴルサコフは言葉に詰まる。
「ん？どうした？」
「率直に申し上げますと、失敗に終わりました」
「な、なに!?失敗だと!?」
　ガルマン・ガミラス本土攻撃の戦果が失敗と言う結果をゴルサコフから聞いたベムラーゼは憤慨した。
「失敗とはどういう事だ!?ゴルサコフ!!」
「何発かのミサイルはガルマン・ガミラス本土と迎撃に上がった宇宙艦艇に損害を与えましたが、本命の大型ミサイルは全弾破壊されました。スパイ衛星からの映像もあり確認しましたので、間違いありません」
「くぅ～・・・ガルマンの奴らめぇ～・・・あのミサイルを撃ち落す程の技術をいつの間にぃ～」

本命の大型ミサイル攻撃が失敗に終わり顔を歪め悔しがるベムラーゼ。
「いえ、あの大型ミサイルを撃破したのはどうやらガルマン・ガミラスの兵器ではなさそうです」
「なに?それはどういう事だ?」
「こちらをご覧ください」
ゴルサコフはベムラーゼにスパイ衛星が録画した映像を見せた。
ガルマン・ガミラス本星に接近する大型ミサイルの前に立ちはだかる二隻の見慣れない艦影の宇宙戦艦。
そして艦首にある発射口らしき砲口から放たれる高エネルギー砲が拡散し、大型ミサイルを破壊していく。
一基だけ残った大型ミサイルも、もう一隻の宇宙戦艦から放たれた高エネルギー砲で消滅した。
「な、なんだ!?この映像は!?それに!?この艦は一体!?ガルマン・ガミラスの新型艦か!?」
「いえ、その後の無線傍受の結果、この二隻の宇宙戦艦は『地球』と呼ばれる星に所属する戦艦の様です。艦名も既に判明しており、『ヤマト』『まほろば』と言う名だそうです」
「地球?聞いたことが無い星だな。だが、こうして我々の邪魔をしたのだ、彼奴等も我々の敵であると言う事だな」
「そういう事になります」
ヤマト、まほろばからは既にボラー連邦は敵として認識していたが、彼らが戦っていたのはボラー連邦からの逃亡者たちであったが、今回ガルマン・ガミラスへ迫った大型ミサイルを撃破したことからボラー連邦から正式にヤマト、まほろば・地球は敵認定されてしまった。
「ゴルサコフ・・・」
「はっ!!」
「彼奴等の母星と言われている地球に関して情報を集めよ」
「承知しました」
ガルマン星人が地球を知らなかったようにベムラーゼも地球と言

う星がある事を全く知らなかったが、今回の件を受け地球の存在を知り、そして不？戴天の仇であるガルマン・ガミラスを滅ぼすための作戦を邪魔された事によりいずれはこのツケを払わせるつもりでゴルサコフに地球の情報を集める様に命じた。

ボラー連邦・ベムラーゼから敵認定を受けた事をある意味で知らない真田とフラウスキーを乗せた工作船団は第十一番惑星前までガルマン・ガミラス東部方面軍の護衛で連続ワープを使用し地球の防衛圏までやってきた。

流石に護衛とは言え、武装艦を許可なく地球の防衛圏内に入れるわけにはいかなかったので、護衛艦隊は第十一番惑星手前で引き返した。

幸い此処までの道中でボラー連邦の次元航行艦からの襲撃は無かった。

工作船団は第十一番惑星を通過し、冥王星宙域まで進出した。

すると冥王星基地から工作船団へ通信が入った。

「こちら冥王星基地。貴船らはガルマン・ガミラスからの工作船団と認めるが？間違いはないか？」

「はい。ヤマトより真田志郎副長以下六名が同行しています」

通信要員の相原が返答する。

「了解。こちらから各惑星、展開中の部隊へ報告を入れておきます。作業の成功を祈ります」

冥王星基地から他の惑星の基地、太陽系内に展開している艦隊へガルマン・ガミラスの工作船団が来訪した知らせが発せられた。

その後工作船団は太陽系内に突入した。

そして現在の太陽の姿を確認すると、自分たちが地球を留守にしている間も太陽の核融合異常増進を続いており、太陽の視直径は２．５倍に膨れ上がっていた。

「凄い大きさだ・・・」

「地球を出てからまだ半年も経っていないのに・・・」

「相原、早い所地球と連絡をとれ」

「は、はい」
　相原が地球との通信回線を開くと宇宙移民本部の司令室へと繋がる。
「ガルマン・ガミラスの工作船団から通信です」
「うむ。パネルにまわしてくれ」
「はい」
　宇宙移民本部でも通信回路を開くとパネルに相原の姿が映る。
「報告します。工作船団は三十分後に土星圏へ達し、そのまま制御作業に従事します」
「分かった。そこまで出迎えよう」
「分かりました」
　藤堂は太陽制御を行うガルマン・ガミラスの工作船団を出迎える為に急ぎ土星圏へと向かった。
　工作船団が太陽系内を航行していると、藤堂長官が乗ったパトロール艦が合流した。
　パトロール艦から連絡艇が発進するとフラウスキーが乗っている工作船へ着艦する。
　フラウスキー以下、ガルマン・ガミラスの工作隊の将兵、真田、相原、坂東たちが藤堂と晶子を出迎える。
「ガルマン・ガミラスの工作船団一行の到着を心より歓迎します」
「ありがとうございます。地球の皆さんの為、全力を尽くし太陽を制御してみせます」
「成功を信じています。真田くん、ご苦労だった」
「ガルマン・ガミラスの科学力は高度で偉大です。太陽制御の方法も完璧だと思います」
「うむ、君がそう言ってくれると心強い」
「では、太陽制御の方法を皆さんに説明します」
　フラウスキーは藤堂に太陽制御の方法を説明するが、相原と晶子は完全に上の空だった。
　説明の後で展望室に相原と晶子の姿があった。
「こんなに早くお会い出来るとは思わなかったわ」

晶子は嬉しそうに言う。
「古代艦長が気を利かせてくれたんですよ。あれでなかなか物分かりが良いんだ。あいつ」
「まぁ、アイツだなんて・・・・」
相原の軽口に晶子は苦笑する。
「太陽制御が成功すればヤマトはガルマン・ガミラスから帰って来る予定です」
「成功するわ、きっと・・・・そして季節が規則正しく巡ってくるようになってみんな将来の夢を語るようになるわ・・・・私たちも・・ね？」
「ええ・・・・」
相原が頷くと晶子は持っていた本を広げる。
そこには野菊の押し花が挟まれていた。
「南十字島で摘んだ野菊よ」
「僕も持っています」
相原も手帳を取り出しあるページを晶子に見せる。
そのページにも晶子と同じく野菊の押し花が挟まっていた。
二人は見つめ合い微笑を交わす。
その時、真田から太陽制御作業が始まる放送が流れる。
「相原、今から制御工作作業に向かうぞ」
「晶子さん・・それじゃあ・・・・」
「はい。地球で待っています」
二人は互いに手を握り、見つめ合った後に別れた。

太陽制御を行う工作船団はまず、二手に分かれた。
一つはフラウスキーが指揮を執り太陽へと向かい、もう一方は真田が指揮を執りアステロイドベルトへと向かった。
工作船団の作業映像を古代と雪はデスラーパレスにてデスラーと共に見守り、ヤマト、まほろばでも各部署のモニターに表示され、乗員たちは固唾を飲んで太陽制御の作業映像を見つめている。
そして月でもジュラたちガルマン・ガミラスの特使団一行と地球側の交渉役であるレベロ、山南もモニターで様子を見ていた。

フラウスキー率いる工作船団は太陽付近まで進出すると、それぞれの作業位置へ展開する。
「二号艦、発射位置に着きました!!」
「三号艦、位置に着きました!!」
「四号艦、配置に着きました!!」
「磁器シールド発生装置、発射準備完了!!」
「発射!!」
工作船から射出された磁器シールド発生装置から磁気シールドが発生し、太陽表面に力場が淡く輝き始めた。
「磁気シールドの発生を確認!!」
「よし、多弾頭ミサイル発射!!」
続いて多弾頭ミサイルが放たれ、命中点がパッと光り、反エネルギー物質が散布され、熱防御シールドが徐々に形成されていく。
熱防御シールドは霧がかかったように太陽全体を包み込んでいく……
この熱防御シールドは太陽の熱核反応を抑制する際、瞬間的に強力な熱が発生する事を予測し、予めその熱の外部流出を防ぐためのものである。
太陽に展開した熱防御シールドによって地球の気温は下がり始める。
宇宙移民本部の司令室でも作業の様子はパネルに表示され、職員全員からは歓喜の声が上がる。
「外気温低下し始めました」
「うむ・・しかし、油断はまだ出来ん」
ただ藤堂は作業が完全に終わるまで油断が出来ないと言い、緊張した面持ちでモニターを見ていた。
一方、真田が率いる工作船の方は、アステロイドベルトにて小惑星を採集・牽引を行っていた。
工作船に積まれていたアステロイド吸着機が下ろされ、牽引ビームで周辺にあるアステロイドを吸着させる。
「ナンバーI～Vまで、アステロイド吸着完了!!」

「よし、これより金星宙域まで一気にワープするぞ」
「了解」
　真田たちが乗艦する工作船とアステロイドを吸着させた吸着機は金星付近までワープしてフラウスキーたちと合流する。
「こちら、第二工作船団真田。金星作業地点に間もなく到着します。アステロイドは順調に予定コースを進んでいます」
「ご苦労様です。このまま一気にアステロイドを太陽へ突入させてください」
「了解」
「全艦、プロトンミサイル発射用意!!」
「アステロイド、太陽突入まであと十二分!!」
「プロトンミサイルへプラズマ抑制剤注入!!」
「安全装置解除!!」
「アステロイド左へ１．８度軌道修正!!」
「アステロイド、黒点まであと五千宇宙キロ!!」
「全艦、プロトンミサイル発射!!」
　フラウスキーはプロトンミサイルの発射装置を押す。
　工作船団からは次々とプロトンミサイルが発射される。
　アステロイドは太陽へ突入すると太陽表面からヘリウムガスがドッと噴出する。
「ヘリウムガスの噴出を確認!!」
　ヘリウムガスが噴出した太陽へ次にプロトンミサイルが突入する。
「続いてプロトンミサイル太陽へ突入!!」
　プロトンミサイルが太陽へ突入するし、暫くするとミサイル内に仕込んでいたプラズマ抑制剤が効いてきたのか太陽の温度が更に低くなっていく。
「・・・どうやら成功したようだな」
　太陽の温度が下がった事でフラウスキー、真田を始めとする一同は太陽制御が成功したと思った。
　しかし・・・
「しょ、少佐!!」

「どうした!?」
「た、太陽温度が再び上昇し始めました!!」
「な、なに!?」
下がっていた筈の太陽の温度が再び上がり始めた。
温度が上昇したと思ったらコロナも発生するイレギュラーが起こり、太陽全体を包み込んでいた熱防御シールドはコロナによって破られ、核融合の増進が再び始まった。
「い、いかん!!全艦安全宙域まで退避!!」
フラウスキーは工作船団の退避を命じる。
「こ、こんな筈はない・・・我々の科学力があの程度の太陽を制御できない筈は・・・」
デスラーも眼前の光景が信じられないように声を絞りながら呟いた。
フラウスキー、真田が共に成功率９０％だと判断した太陽制御は失敗率１０％の確率の出来事が起きてしまった。
太陽から遠ざかる工作船団の中で、フラウスキーが乗艦する工作船では、
「止めろ!!艦を止めるんだ!!」
フラウスキーが艦の停止を命じる。
「少佐、今止めたら危険です!!」
フラウスキーの副官がまだ安全宙域に達していないので艦を止める事に対して異議を具申する。
「いいから止めろ!!このままおめおめと帰れると思っているのか!?」
「し、しかし・・・」
「総員に告ぐ!!直ちに退艦せよ!!」
そしてフラウスキーは退艦命令を発動する。
「少佐は・・・」
「いいから退艦しろ!!命令に背く者は射殺する!!」
ホルスターからコスモガンを抜き、乗員たちを強制的に連絡艇へと乗せた。
フラウスキーの艦でこのような事が起こっている中、他の工作船は

安全宙域まで退避する。
「危険宙域から離脱しました・・・・あっ、真田副長!!フラウスキー少佐の艦が!!」
　他の工作船が退避していた中、フラウスキーの艦だけは引き返して太陽へと戻るコースをとった。
「相原、フラウスキー少佐の艦に通信を入れてくれ!!」
「了解!!」
「少佐!!フラウスキー少佐!!」
　工作船の艦橋にあるメインモニターにはフラウスキー以外の乗員が退艦した工作船の艦橋が映る。
「・・・・真田君・・残念だった・・・・デスラー総統のご信頼に応えられなかった私は・・ガルマン・ガミラスへ帰る訳にはいかない・・・・」
「何を言うのだ!?」
「総統に伝えてくれ・・・・フラウスキーは全力を尽くしたと・・・・」
「早まるな、少佐!!これは不可抗力なのだ!!」
　真田としてもフラウスキー程の優秀な科学者をむざむざと殺したくはなかった。
　デスラーへの助命嘆願が無理ならば、地球への亡命を提案する覚悟で真田はフラウスキーを救いたかった。
「・・・・ありがとう、真田君・・・・さようなら・・・・地球の方々にもすまなかったと・・・・」
「フラウスキー少佐!!」
「私も青く美しくよみがえった地球をこの目で見たかった」
　ガルマン星人であるフラウスキーは真田からもらった地球のデータから地球に対して興味があったのだが、今回の制御作業の結果によりそれは叶わぬ願いとなってしまった。
「フラウスキー少佐!!」
（くそっ、科学め!!お前は姉さんだけでなく、フラウスキー少佐まで奪うのか!?）
　真田は幼少期、月の遊園地にある遊具の事故で姉を失った。
　それ以降、絵描きになる夢から科学を屈服させる為の科学者になっ

た。
　しかし、今回の太陽制御の失敗はフラウスキーの命を奪う結果となった事に真田は自信の無力感と科学に対する憎しみを増長させた。
　フラウスキーの艦は停止することなくそのまま太陽の中へと消えた・・・・

　ガルマン・ガミラス本星　デスラーパレス　司令室

「デスラー・・・・」
　古代は恐る恐るデスラーに声をかける。
「古代、地球の期待に応えられなくて申し訳なかった」
「宇宙の自然はそれほど厳しいと言う事だ。デスラー・・貴方の好意には感謝する」
「フラウスキー少佐の事は心からお悔やみ申し上げます」
「彼は立派に責任をとった・・・・流石は我が帝国の軍人だ」
「・・・・残った工作船の乗員たちには寛大な配慮をしてくれ」
「承知した」
　フラウスキーは今回の失敗の件について自らの命で責任をとり殉職したので、他の工作部隊の将兵たちに責任を問わない様に古代はデスラーへ伝えると、デスラーもそれは了承した。
「デスラー。真田副長が戻り次第、ヤマトとまほろばは再び惑星探査の航海に出る」
「分かった。新しい地球となる星が見つかる事を祈っている」
「ありがとう」
　デスラーと古代は握手を交わし、デスラーは居室へと引き上げていく。
　ただその後ろ姿は何だか覇気がないように見えた。

　まほろば　第一艦橋
「まさか・・・・」
「ガルマン・ガミラスの科学力をもってしてもダメだったか・・・・」

まほろばでもガルマン・ガミラスの太陽制御の失敗の映像を見て空気が重い。
しかし、ガルマン・ガミラスに対して不平不満を言うモノは居なかった。
「そう言えば一隻、太陽へ墜落した工作船がチラッと映りましたが・・・」
「多分、工作船団を指揮していたフラウスキー少佐の艦だろう」
良馬は太陽へ突っ込んで行った工作船にはフラウスキーが乗艦していたのだろうと推察する。
「デスラー総統と帝国の名誉、地球の期待を背負っていた作業がこうして失敗してしまったんだ・・・だから責任をとって・・・」
「死ぬことが責任をとる唯一の道ではないと思いますが・・・」
「地球とガルマン・ガミラスの違いでもあるが、フラウスキー少佐自身のプライドもあったのだろうな・・・」
「やはり太陽を制御するのは無理と言う事ですか?」
「この星の科学技術をもってしても制御できなかったんだ・・・太陽は人類がコントロールできる代物では無かったと言う事だろう。故にガルマン・ガミラスの失敗を責めるのはお門違いと言う事だ」
「また当てのない航海が続くと言う訳ですか・・・」
「気を落とすな。我々の失敗は地球人類の滅亡に繋がるのだからな」
地球よりも科学技術が進んだガルマン・ガミラスでも無理だった事から、もはや太陽を制御する方法はなく、やはり地球を捨て第二の地球となる新惑星を見つけるしか地球人類が生き延びるしか方法はなかった。
「艦長、古代艦長から通信です」
「分かった。繋いでくれ」
「はい」
そんな中、古代から通信が入った。
ギンガが通信回路を開くと通信席のモニターに古代が映る。
「月村艦長・ガルマン・ガミラスの太陽制御の結果は・・・」
「ああ、残念な結果になってしまったな・・・」

「ガルマン・ガミラスの太陽制御が失敗した事により、我々は再び新惑星の探査に向かう事になります。工作船団が戻り次第、ガルマン・ガミラスを出航したいと思います」
「分かった」
太陽制御が失敗に終わった事により、工作船団は急ぎガルマン・ガミラスへと戻った。
デスラーパレス、ヤマト、まほろばで太陽制御の失敗という結果に重い空気となったが、それは地球と月でも同じであった。
「このような結果になってしまい、申し訳ございません」
ジュラはレベロと山南に深々と頭を下げ今回の太陽制御の失敗を詫びる。
「いえ、ガルマン・ガミラスの方々は我々の為に精一杯の尽力をなされました」
「この様な結果になってしまいましたが、感謝をしております」
流石にレベロも山南も、
『あれだけ期待させておいてなんて様だ!!』
なんて罵倒は言わなかった。
「ジュラ様・・・」
「ごめん、メルダ・・・今日は一人にさせて・・・」
「は、はい」
それでも今回の太陽制御の失敗はジュラの心には傷をつけた事に変わりはなかった。
自分が提案した事で、地球の期待を裏切り、一人の技術将校を殺す結果になってしまったのだがから・・・

工作船団がガルマン・ガミラスに戻るのは数日後という事で、ヤマト、まほろばはこの後に控えている新惑星探査の為、艦のチェックや修繕、乗員たちの訓練を行いながら工作船団帰りを待った。
工作船団が戻るまで乗員たちのメンタル面も考え半舷上陸も許可された。
しかし、新人の乗員たちの中には折角の半舷上陸でもやはり反ガミ

ラス感情がある為か艦を降りない者も居た。
　そんな中で良馬はある再会をした。
「おう!!ツキムラ!!」
「フォムト!!」
　ガルマン・ガミラスの都市部で良馬はバーガーと再会を果たした。
　バーガーが所属する部隊がガルマン・ガミラスへ帰還し、そこで彼はまほろばが来ている事を知り、こうして良馬に会いに来てくれたのだ。
「久しぶり!!元気だった!?」
「ああ、お前も元気そうだな。ナカジマの嬢ちゃんも元気か?」
「うん。半舷上陸の順番が違うから今日は艦に居るけど、元気だよ。ネレディアさんやバーレンさんは?」
「ネレディも今は宇宙で仕事をして留守だ。バーレンの爺さんは軍を退役して田舎で隠居生活をしている」
「そうなのか・・・でも、彼女たちが元気ならいいさ。こうしてフォムトと会えたんだ。またいつかネレディアさんやバーレンさんとも再会できる事があるだろうさ」
「そうだな」
　再会した二人はバーガーの案内の下、一軒のバーに入った。
「んじゃ、久しぶりの再会に・・・」
「乾杯・・・」
　カチン・・・
　二人は酒が注がれたグラスを軽く当てて再会を祝う。
　その後は互いの身の上話をしながら酒を嗜む二人。
　再会の祝杯をあげた二人はバーを後にして、ガルマン・ガミラスの都市部をブラリと歩いていた。
　そんな中、とある広場に来た時、
「ん?なんだ?あれ・・・?」
「ん?あれは・・・」
　その広場には十数人の老若男女の人たちが両膝をついて空を見上げていた。

空には一人の女性の姿が薄っすらと浮かんでいる。
そして彼らは、
『マザー・・シャルバート・・・・マザー・・シャルバート・・・・』
と同じセリフを口にして空に浮かんでいる女性を崇拝していた。
「シャルバート教の信者たちじゃねぇか・・・・禁教だって言われているのにあんな堂々と集会なんかしやがって」
広場に集まっている人たちはやはり、シャルバート教の信者たちだった。
そんなシャルバート教の信者たちをバーガーは引き気味な視線で見ている。
「・・・・」
しかし、良馬は恐る恐る彼らに近づく。
「お、おい、ツキムラ」
バーガーは慌てて良馬を追いかける。
「何者だ？」
すると、老人の信者が良馬に気づき咎めるような視線を向けて来た。
「怪しい者ではありません。地球から来た戦艦まほろばの乗員です」
「まほろば？ああ、そうかい」
良馬が自分たちを取り締まる親衛隊や警官でないと知ると警戒を緩めるシャルバート教信者の老人。
「あのお聞きしても良いですか？」
「なんだ？」
「シャルバート星と言う星は本当に存在しているんですか？」
良馬は老人にシャルバート教信者が崇拝するシャルバート星の有無を訊ねる。
「ある。はるか幾千年もの昔から銀河系の星々に愛と平和の恵みを与え給う女王の星だ。我々は今、現在宇宙で起きている混乱を鎮めて下さるよう祈っていたのだ」
「おい、爺さん。ただ祈るだけで戦争に勝てると思っているのか？」
軍人として日々命がけでボラー連邦と戦っているバーガーとして

みれば祈るだけで相手に勝てるなら苦労はないと言う思いから老人を茶化す。
「ふん、マザーシャルバートの偉大さを理解出来ぬ若造が」
「あん？」
老人の返しに不機嫌そうになるバーガー。
「そ、それでその女王は実在しているんですか？」
良馬が老人にシャルバート星の女王について訊ねた時、
「シティ・ポリスだ!!」
「逃げろ!!」
「うわぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「キャー!!」
誰かが警察を呼んだのか広場に警官隊が来たみたいでシャルバート教の信者たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていく。
「おい、ツキムラ。俺たちも此処に居ると不味いぞ!!」
「ああ!!」
良馬とバーガーも巻き込まれるのは御免なので、広場から急いで逃げた。
「はぁ・はぁ・はぁ・・・まったくひでぇ目に遭ったぜ・・・あのサイコ野郎どもが・・・」
警官隊が来る前に広場から何とか逃げた良馬とバーガー。
二人は街中にあったベンチに座り息を整える。
そして一歩間違えれば警官に逮捕されたかもしれない事にバーガーは思わず悪態をつく。
「はぁ・はぁ・はぁ・・・それにしてもガルマン・ガミラスでシャルバート教が禁教だって聞いたけど、どうやら本当だったみたいだ。しかし、シャルバート教はガミラスでも存在していた宗教なのか？」
「いや、ガミラスにはあんな宗教は無かった。大マゼラン星雲にガミラス星があったことも関係があるのかもしれないがな」
「でも、ガミラスは元々この星からの移住者が建国した星なら、ガミラスでもシャルバート教が密教として存在しているのかと思ったよ」
「それなんだがな、この星のシャルバート教の信者はボラーの連中の

せいだ」
「ボラーの？」
「ああ・・・ツキムラもこの星が一時期ボラーの連中に支配されていたのは知っているだろう？」
「ああ」
「で、その支配していたボラーの連中の中にシャルバート教の信者が居たらしく、そいつがガルマン星でシャルバート教を布教していやがったんだ。ボラーの支配時代はまさに暗黒時代みたいだったからな。当時のガルマンの中には自分たちの不幸な現状を神頼みで打開してくれと祈っていた奴らが多かったんだろう」
「まるで隠れキリシタンみたいだな・・・でも、それ以前に自分たちを支配していた連中からの宗教をよく信じたな・・・よほど布教した信者の話術が凄かったんだろうな」
　ガルマン星でのシャルバート教の布教がまさか侵略者であるボラーからの布教と言う意外な経緯であった。
「ん？カクレキリシタン？なんだ？それは？」
「地球：俺の生まれ故郷の国でも昔、キリスト教と言う宗教が禁教だった頃があって、密かにその宗教を信仰していた信者を隠れキリシタンと呼んでいたんだ」
「そうなのか・・・昔と言う事は、今は違うのか？」
「うん、今は解禁になっているよ」
「まぁ、それはテロンでの話だろう？この星じゃあシャルバート教の禁教が解禁されることはないだろうな。それにしてもこの星を解放した後でもボラーの連中は面倒事を残してくれたモンだぜ」
　バーガーはこの星を支配していた事を含め、シャルバート教を布教させたボラーを忌々そうな感じで呟く。
　デスラーやバーガーたちガミラスからの移住者にとって、シャルバート教はボラーがガルマン星に残した厄介な置き土産だった。
「飲み直す？」
　良馬はバーガーにもう一度酒場へ行くかを問う。
「そうだな」

良馬とバーガーは先ほどのバーと違う飲み屋に入り、そこで飲み直した。
「それじゃあ、フォムト・・元気で・・・・」
「ああ、ツキムラ。お前もな・・・・」
飲み直した後、二人は再会を約束した後に別れた。

三日後、連続ワープで工作船団はガルマン・ガミラスに戻って来た。
「デスラーが自信満々だったから成功すると思ったんだがな・・・・」
「こうなったら何が何でも新惑星を見つけないとな」
「しかし、本当にこの宇宙に地球そっくりな星があるのだろうか？」
「あるさ、なければえらいことになる。地球ではもう地表では生物が住めなくなっている状況らしい」
帰って来た工作船を見ながら土門と揚羽は声を上げた。
「デスラー、色々とお世話になった。我々はこれより新惑星探査の任に戻るので、此処から礼を言いたい」
直接デスラーパレスへ行くのではなく、古代はヤマトの第一艦橋にてデスラーとモニター越しで話している。
「もう少し、滞在してもらいたかったがそうもいくまい。君と会えて嬉しかったよ」
デスラーも地球の状況を知っているので、これ以上古代たちをガルマン・ガミラスに留めて新惑星探査の時間を潰す訳にはいかなかった。
実際にヤマトとまほろばは工作船団の往復で一週間ほどの時間をガルマン・ガミラスで過ごした。
「デスラー、貴方の友情と好意は私たちも地球の人たちも忘れないわ」
「ありがとう、雪」
雪もデスラーへ別れの言葉を告げる。
「古代、君に良い知らせがある。我々の観測ステーションが地球型の惑星を発見した」
「えっ？地球型の惑星を!?」
「ああ、この星から北東方向へ約一万光年離れたファンタムと呼ばれ

る星だ」
　デスラーは地球型の惑星とされるファンタムの座標をヤマトとまほろばに転送してきた。
「観測ステーションからの報告によると、知的生命体の存在は確認できず、大きさも地球と同じ大きさの様だ」
「デスラーありがとう。君の友情は忘れない」
「私もだ。古代。また会える日を楽しみにしている」
　良馬とバーガーと同じくデスラーは古代との再会を告げ通信を終えた。
「ファンタム星へ向け発進!!」
　当初立てた航海計画の探査惑星ではなく、探査をする惑星が増えた事になるが、ガルマン・ガミラスの観測データではこのファンタム星は地球とそっくりな星と言う事でヤマトとまほろばはこのファンタム星へ向かう事になった。
（ファンタム星・果たしてそれが第二の地球と成り得るだろうか？もしそうならありがたいことなのだが・・・）
　実際に目で見て探査をしなければファンタム星が地球と似た星なのか不明だ。
　ガルマン・ガミラスから離れていくヤマトとまほろば。
　しかし、この二隻の動きは先のガルマン・ガミラス本土攻撃に使用されたボラーのワープミサイルに仕込まれたスパイ衛星で監視されていた。
「ゴルサコフ様。例の地球戦艦が動きました」
「どこへ向かっている？」
　国家中央作戦室にてオペレーターがゴルサコフに報告を入れる。
「ガルマン・ガミラスから北東方面へ向かっています」
「よし、その方面の監視衛星をフル稼働させ奴らの行き先を突き止めるのだ」
「はっ!!」
（北東方向だと？そこは我がボラー連邦とガルマン帝国の国境近くだ・・・）

（地球はガルマン帝国の同盟国なのか？）
（我々の大型ミサイルをいとも簡単に破壊したあの戦略砲を有しているのだから、あの戦艦を尖兵として送り込んで来るつもりか？）
ゴルサコフはヤマトとまほろばがボイラー連邦とガルマン・ガミラスの国境方面へ向かっている事から、ヤマトとまほろばがガルマン・ガミラスの尖兵として向かってくるのではないかと予想した。
ファンタムへの航海も決して平穏とは言い切れそうになかった。

百六十八話　宇宙の巡礼者たち

ガルマン・ガミラスが自信を持って実施した地球の太陽制御は残念ながら失敗に終わった。
ヤマト、まほろばは再び第二の地球となる新惑星探査の航海へ出る事になった。
そんな中、デスラーから自軍の観測ステーションが地球そっくりな星を発見したと言う報告を受け、ヤマト、まほろばはその地球そっくりな星・ファンタム星へと向かう事にした。
ヤマト、まほろばがデスラーからの情報を頼りに惑星ファンタムへと向かっている頃、地球にある宇宙戦士訓練学校では・・・・
訓練校の敷地内にある大講堂にて、訓練生全員が集められた。
大講堂内はエアコンがガンガンに利かせている筈なのだが、外が異常な残暑なため、何だか生暖かい。
「いきなりの集合だけど何なんだろうね？」
「さあ？でも、こうして全員が集められたんだから何かあった事には間違いないわね」
うららもティアナも当然、何のために集められたのか分からなかったが、全学年の訓練生が集められたのだから何かあったのは間違いないので、校長か教官ならば理由を知っているので、それを待った。
やがて、壇上に訓練校の校長である榎本が登壇する。
「えぇー早速ではあるが、諸君らも現在、太陽で起きている異常とそれに伴う地球の異変は知っていると思う」
ヤマト、まほろば以外の国の所属の探査船団が第二の地球となる新惑星探査が開始された頃、連邦政府は連邦市民に今、太陽で起きている異常が知らされ防衛軍と宇宙開拓局が第二の地球となる新惑星の探査を行っている事も同時に知らされた。
「現在、日本をはじめとして各国が第二の地球となる新惑星の探査を行っているが、今の所、第二の地球となる新惑星は見つかっていない。そして太陽の異常も続いている」

『・・・・』
榎本の話を訓練生たちは静聴しているが、不安に思っているのは彼らの表情を見れば容易に窺える。
「本日、防衛軍司令部より、地上での宇宙戦士訓練学校の訓練カリキュラムは全て中止し、地下都市にある地下校舎へ移動せよとの通達があった。各自、直ちに荷物を纏め地下校舎への移動準備を行うこと・以上だ」
榎本の話が終わると一同は榎本に敬礼する。
そして、榎本が返礼し壇上を降りると訓練生たちはざわつく。
「地下校舎へ移動だってよ・・・・」
「またあの穴蔵生活か・・・・」
「それ以前に地球は大丈夫なのか?」
今も続いている太陽の異常と急に地下都市にある地下校舎への移動・・・・
訓練生たちが不安になるもの当然だ。
「やっぱり、土門や揚羽たちが繰り上げ卒業してヤマトに乗ったのはこういう事情があったのね・・・・」
「新人だからそこまでの責任はないと思うけど・・・・」
「土門の奴は変なところが真面目だからね。第二の地球となる星が見つからない事に焦ってなければいいけど・・・・」
「でも、悠長に構えている余裕・ないかもね・・・・」
「・・・・」
うららが窓の外から空を見上げる。
彼女に釣られてティアナも同じく空を見上げる。
冬とは思えない暑さと膨張した太陽・・・・
うららの言う通り、地球に残された時間はそう多くは無かった・・・・
宇宙戦士訓練学校以外でも連邦政府の発表により、連邦市民には地下都市への避難警報が発せられた。
海鳴にある月村邸でも避難準備が行われている中、今日は電波障害が起きていなかった事もありノエルは通常通りに動いていた。
「忍様。忍様もアルファ星へ避難されてはいかがでしょう?」

ノエルは忍に滅亡へ突き進んでいる地球からケンタウロス座アルファ星への避難を促す。
「ノエル。私よりも会社の従業員やその家族を優先に避難をさせて」
忍は月村グループが所有する宇宙船で会社の人間とその家族を優先的に避難させていた。
「しかし・・・・」
「総帥たる私が地球を離れるのは一番最後よ・・・船でも船長は最後に退船するでしょう？上に立つ者が行動で示さなければ誰もついてこないわ」
「忍様・・・承知しました。無粋な発言をお許しください」
「いいのよ、ノエル。ノエルも私の為を思って言ってくれたのだから・・・さあ、急いで荷物を纏めてしまいましょう」
「はい」
忍とノエルは引き続き地下都市への引っ越し作業を進めた。

地球で連邦市民に対して地下都市への避難警報が発せられた頃、ヤマト、まほろばがガルマン・ガミラスを出航してから一週間の時が経過していた・・・
そして現在、ヤマト艦内にある中央作戦室では古代を始めとして良馬、島、真田が集まりファンタム星への航海について会議が行われていた。
「デスラーから提供された資料によれば我々が目指す惑星ファンタムは球状散開星団の外れ、星間座標Ｇ三Ｙ五―β付近にあります。つまり我々の現在位置から距離九九五〇光年、ワープ三回分の地点にあると言う事です」
島が宇宙海図を指し示しながらファンタム星の位置とヤマト、まほろばの現在位置からファンタム到着の予定等を説明する。
「うーん・・・」
そんな中、良馬はファンタム星の位置を凝視していた。
「ん？どうかしましたか？」
古代は良馬の様子に気づき声をかける。

「いや、デスラー総統から齎されたファンタム星の情報から、ファンタム星がある位置はギリギリ、ガルマン・ガミラスの勢力圏だけど、ボラー連邦との国境もギリギリの位置だ。この先、ファンタム星に近づけば近づくほど、ボラー連邦の威力偵察の部隊と遭遇する可能性があると思ってね。まぁ、例え出くわしたとしても向こうが引くならばそれで良いし、攻撃してくるのであるならば迎え撃つだけだ」
　ファンタム星の位置はガルマン・ガミラスとボラー連邦の国境付近であった。
　良馬の指摘に一同は顔を見合わせ、土門はハッとなり、
「もしかすると、デスラーは・・・」
「ん？デスラーがどうした？」
「いや、デスラーは我々に第二の地球を教えると称して実はボラーの連中と戦わせようと画策しているんじゃあ・・・」
　ヤマトの強さはガルマン・ガミラスの中ではデスラーが何より知っている。
　だからこそ、デスラーはヤマトをボラー連邦との戦闘に巻き込んで、ボラーの戦力を削ろうと画策したのではないかと土門の発言を聞いて勘繰ってしまう。
「あり得ない・・・とは言い切れないな・・・」
「やっぱりデスラーの罠だったのか!?」
「道理で・・・おかし過ぎると思ったぜ」
「ちくしょう。地球の危機に漬け込みやがって!!」
　あちこちからデスラーに対する不満が噴出する。
「いや、流石にデスラー総統もそこまでは考えてはいないと思えない。そもそも今のデスラー総統がヤマトを罠にかける必要がないし、彼の性格上ボラーを倒す事にヤマトの力を借りようとは思えない。ボラーを倒すのは自分たちガルマン・ガミラスだと言う信念が彼にはあると思う・・・かつて執念にヤマトを狙っていたようにね」
　彗星帝国戦役時にデスラーは自身が受けた屈辱を晴らすべく様々な罠を駆使してヤマトを追いつめた。
　そんな性格の彼がボラーを倒す役目をヤマトへ譲るなんて事は絶

対にしない。
　デスラーのそんな性格を読み取り良馬はデスラーを擁護する。
「月村艦長の言う通りだ。推測でモノを言うのはよせ!!」
　そんな中で古代は一喝する。
「しかし、艦長・・・」
「いいか、たとえ我々の赴くところがどんな危険なところであろうとも、それが人類にとって必要ならば万の一つの可能性がある限り、その目的地に向かうのが、我々に課せられた任務である。本艦はこのまま予定通り惑星ファンタムへ向かう!!以上だ!!」
　古代はそう言って踵を返すと中央作戦室から出て行った。
「古代の奴、だんだんと沖田艦長に似てきたな」
「それだけに苦しいだろうな」
「かつての沖田艦長も同じ気持ちだったのだろうな」
　第一次イスカンダル航海の時、地球も一年と言うタイムリミットの中、大マゼラン星雲の中にあると言うだけイスカンダルの正確な位置も分からず、ガミラスの妨害もあった。
　そんな中で一年以内と言うタイムリミットの中でイスカンダルへ行き、放射能除去装置コスモクリーナーを手に入れて地球へ戻ならければならなかった。
　今回の第二の地球となる新惑星探査も第一次イスカンダル航海に似ている部分があり、古代にはあの時の沖田艦長と同じくらいの重圧と責任が伸し掛かっていた。
　ファンタムへの航路確認を終えた後、良馬はまほろばへと戻りファンタムへと向かう。
　ファンタムへの航海中に地球との定時報告の時間となった。
「波長修正完了、出力調整完了」
　相原が通信機を操作して通信回路を開く。
「藤堂長官・・・」
「古代。そちらの状況は?」
「はい。ヤマト、まほろばは現在、デスラーから情報を受けた惑星ファンタムへ向かっております。ガルマン・ガミラスが観測したデータで

はその惑星は地球型の惑星との事ですが、詳しい詳細は実際にその惑星に立ち寄り調査をしなければ何とも言えませんが、調査する価値はあると思います」
「そうか・・・地球は今、終末の様相を呈している」
藤堂はヤマトとまほろばに現在の地球の惨状を送る。
北極と南極は残りわずかな氷河と氷山を残すのみとなり、全ての氷が溶けるのも時間の問題となっている。
アジア大陸は強い熱風の嵐が吹き荒れ、湖、河川が干上がっている。
ヨーロッパ、米国では熱波の影響で山火事が多発。
沿岸部の都市は氷河が溶けた影響で海面水位が上昇し水没。
内陸でも地殻変動で火山の爆発を誘い、麓の街が溶岩に飲み込まれる惨事が起きた。
ガルマン・ガミラスを出発してから一週間で地球の惨状は拍車がかかっている。
「酷いな・・・」
「人々はかつてガミラスとの戦いで使用した地下都市に避難している。我々も地下都市にある旧防衛軍司令部で指揮を執っている」
「藤堂長官、人々は全員地下都市に避難したんですか?宇宙へ避難した人は?」
良馬は藤堂に地球人類全員が地下都市に避難したのかを問う。
「うむ、ガルマン・ガミラスの太陽制御が失敗した後、民間の宇宙船と建造出来たばかりの移民船で冥王星、第十一番惑星、そしてケンタウロス座のアルファ星へ避難した人たちもいる。そして現在、地下の宇宙船建造ドックでは移民船の建造を急がせている。これらの移民船の建造が出来次第、地下都市の人々も地球以外の星へ順次避難させるつもりだ」
続いてヤマトとまほろばのパネルには建造中の移民船の映像が映る。
「他の国の探査状況はどうなっていますか?」
古代が他の国の探査状況を訊ねる。
(まぁ、探査停止の命令が下っていない現状、他の国の探査も行き詰っ

ているのだろうが・・・)
未だに自分たちに探査停止の命令がない以上、他の国もまだ第二の地球となる新惑星は発見されていないのだろうと推測する古代。
「こと座、ベガ方面、カシオペア方面、エリダヌス、イプシロン星、シリウス方面に向かった探査船団からも希望の持てる報告はまだ入っていない」
(やはり・・・)
古代の予測通り、他国の探査船団も自分たち同様、未だに第二の地球となる惑星の発見に至っていなかった。
プロキオン、ふたご座のポルックス、カストル、ヒアデス方面に関してはヤマトがテレザート星へ向かう航海で、人類が居住できる星がない事が判明しているので、これらの星系は今回の探査区域から外されている。
特にふたご座方面は、彗星帝国が光子砲要塞を設置したことによりある程度の大きさの星は全て破壊されてしまった。
その後、光子砲要塞に関してはポルックスとカストルに設置されていた要塞同士で互いに光子砲を撃ち合い自滅したが、真田はふたご座宙域に生命が存在する星は今後、存在しないだろうとさえ断言した。

ヤマト、まほろばの第一艦橋にあるメインパネルには銀河系の星図と各惑星探査船団の航海探査エリアが映し出された。
「射手座、銀河系中心部を担当する諸君らがこれより探査する惑星ファンタムの情報が吉報であることをひたすら祈って待つのみだ。以上」
一同は敬礼して応えた。
「以上で定時報告終わります」
映像が消える寸前、藤堂の後ろに居る晶子がチラッと野菊の押し花をかざす。
ヤマトでも相原がそれに応えるかのように手帳に挟んでいる野菊の押し花を晶子にかざした。
「通信長。今の何ですか?何かの合図ですか?」

晶子と相原のやり取りを見ていた土門が相原に訊ねる。
「えっ？何？」
相原は当然とぼける。
「あっ、ずるいなぁ。ねっ、太田さん、南部さん、今の見たでしょう？」
「そうだな。何か花のようなモノをチラッとこう・・ねぇ・・・」
「ああ、あれはその・・・ほら、地球とヤマトが通信する時だけ、一瞬咲く花なのよね？相原くん？」
太田と南部がからかうように相原に訊ねる。
「ああ、恋の・・・」
土門が手をポンと叩くと先ほどの晶子と相原とのやり取りに合点がいった。
「お、おい、よせよ・・・あ、相原、通信室へ行ってきます!!」
これ以上第一艦橋に居ると全員から、からかわれるので、通信室へと逃げた。
「あっ、逃げた・・・」
「相原にもようやく春が来たってことだ」
一同がドッと湧き、未だに第二の地球となる惑星が見つからない状況、地球の惨状からくる重苦しい空気はこの時だけは和らいだ。
しかくあくまでも一時的であり、すぐさま皆は真剣な表情となる。
「本艦はこれよりワープに入る。総員、ワープ準備にはいれ!!」
古代は艦内にワープ準備に入るように下令する。
やがて、ワープ準備が整うとヤマトとまほろばは惑星ファンタムに向けての一回目のワープへと入った。
しかし、ヤマトとまほろばの行動はゴルサコフが命じたボラー連邦の監視衛星にばっちりと監視されていた。

ボラー連邦　本星　首相官邸
「何？例の地球戦艦が・・・？」
「はっ、我がボラー連邦に近いＭ１６７８３方面に向かい移動中でございます」
ゴルサコフは早速ヤマトとまほろばの動向をベムラーゼに知らせ

る。
「たかが辺境の宇宙戦艦・・・だが、あの戦略砲の威力を持つ戦艦がデスラーの手先となると目障りだな・・・ゴルサコフ参謀長」
「はっ!!」
「我がボラー連邦の支配圏には例え虫一匹、うろつくことは許さん。直ちに始末しろ!!」
「承知いたしました」
ベムラーゼからの命を受けたゴルサコフは首相官邸から直ぐに国家中央作戦室へと戻り、ヤマト、まほろばの進行方向に一番近いボラー連邦の基地へと連絡を入れる。
「ハーキンス中将です。いつもながらご壮健なお姿で」
「挨拶はよい。首相閣下の命令だ。地球の戦艦、ヤマト、まほろばの撃破に出撃せよ!!」
「はっ!!」
ヤマト、まほろばの攻撃に出撃したのはかつて管理局と初邂逅をしたハーキンスが司令官を務める部隊、第八打撃艦隊であった。
ゴルサコフはハーキンスにヤマトとまほろばの艦影と進行方向のデータを送り、データを受け取ったハーキンスは自身の艦隊旗艦のバイオン号ではなく、基地に係留されているラザレフ級航宙戦闘艦に乗艦し、同型の戦闘艦を多数率いて出撃した。
この時の彼は、辺境の惑星国家が保有する戦艦などこれで十分だと言う慢心があったのかもしれない・・・・

ハーキンスの艦隊がまさか自分たちを狙って出撃したとは知る由もなく、ヤマト、まほろばは惑星ファンタムへと向かっていた。
一回目のワープアウトを終えたヤマト、まほろばはガスが濃い暗黒星雲の宙域へたどり着く。

まほろば　第一艦橋
「ワープアウト・通常空間を確認」
「ヤマトもワープアウトを確認」

まほろばの近くでもワープアウト反応があり、ヤマトも無事にワープアウトした様だ。
「航海班、艦位の測定と確認を急げ」
「了解。航海班、艦位の測定と確認を急ぎます!!」
「うわぁ～外は真っ暗だ・・・・」
航海班が現在位置を確認している中、フェリシアは窓外の光景を見て感想を述べる。
「濃密なガス状暗黒物質が水に近い密度だ・・・・」
「何だか暗黒星団帝国の母星を目指していた時を思い出しますね」
「ただ待ち伏せもあり得るな・・・・あの時もそうだった・・・・全方位警戒しつつ進め」
「了解」
ボラー連邦の警備部隊が潜んでいる可能性もあるので、良馬は警戒態勢を命じた。
そんな中、
「ん?・・・・これは・・・・艦長!!」
ギンガは微弱ながらも通信波を捉えた。
「ん?どうした?」
「微弱ながらも通信波を捉えました!!」
「通信波?内容は?」
「えっと・・・・救難信号みたいです」
「救難信号!?発信場所は?」
ギンガは通信機を操作して救難信号を発信している場所の特定を急ぐ。
「発信場所は・・・・距離四千宇宙キロ、十一時方向・・・・靄の様な星雲に包まれている小惑星からです」
「メインパネルに投影」
「了解」
続いてギンガは救難信号を発信している場所らしき宙域をメインパネルに映す。
パネルには薄暗い靄が漂っている宙域に小惑星がいくつも漂う空

間であった。
「小惑星って言ってもかなりの数があるな・・・」
「どこの救難信号か所属は分かるか？」
「・・・申し訳ありません。どこの救難信号なのかは分かりません。ただ、ガルマン・ガミラス、ボラー連邦、時空管理局、彗星帝国、暗黒星団帝国でもありません」
　これまで地球が邂逅した星間国家のモノとは異なる救難信号・・・
「ヤマトに繋いでくれ」
「了解」
　まほろばで受信したのだから、当然この救難信号はヤマトも受信している筈だ。
　パネルには周辺宙域の映像からヤマトの第一艦橋へと変わる。
「古代艦長、ヤマトの方でも救難信号を受信しましたか？」
「ええ、先ほど・・・」
「これまで地球と接触した星間国家とは異なる救難信号です。罠の可能性もありますが、本当に救助を求めている可能性もあります」
「私も同意見です。ですが、信号の正体を確認しないまま進む訳にもいかないので、偵察をしようと思います」
「偵察？」
「ええ、コスモハウンドで偵察行動をとります」
「分かりました」
　古代は救難信号を送っている正体を突き止めるために偵察隊を出すことにした。
　偵察要員はアナライザー、土門、揚羽の三人をコスモハウンドに乗せてまず、救難信号を送っている小惑星を探査させた。
　ヤマトからコスモハウンドが発進した時、通信波が切れた。
「通信波、切れました」
「偵察隊が出たタイミングで？」
「コスモハウンドを戻しますか？」
「いや、彼らなら大丈夫だ」
　偵察隊が出たタイミングで通信波が切れた事から罠かと思われた

が、古代はそのまま偵察行動を続行させた。

暗黒物質の靄が漂う宇宙空間をコスモハウンドは飛行する。
コスモハウンドは無数に存在している小惑星を避けながら先ほど通信を送った人物が居る星を探査する。
「何か見えるか？」
コスモハウンドの操縦桿を握る揚羽が補助席に座る土門に訊ねる。
「いや、ダメだ」
双眼鏡で周囲を覗く土門は通信を送って来た施設または宇宙船を探すが、それらしいモノは見つからない。
「くそっ、通信波が続いていたら・・・・」
通信波が続いていたらそれを逆探知して簡単に位置を特定することが出来たのだが、肝心の通信波が途絶えてしまったので、こうして有視界で通信源を探しているのだ。
「ン？近クニ金属反応アリ・・・・」
そんな中、アナライザーが金属反応を探知した。
「どこだ？アナライザー」
「前方ノ小惑星ニ何カガアリマス!!」
「よし、行ってみよう」
コスモハウンドは金属反応が出た小惑星へと接近する。
「金属反応ガ段々ト強クナッテイマス・・・アッ、アソコニ何カアリマス」
アナライザーが指さした一つの小惑星にあるクレーターには球体型の宇宙船らしきモノがあった。
「あれは・・・・宇宙船の様だ・・・・」
「見た事の無い型だな・・・・」
「着陸して確認してみよう」
「ああ。でも、気をつけろよ」
「了解」
何者かがヤマトとまほろばへ通信波を送り、こうして宇宙船があったのだから、あの宇宙船には誰かが乗っている事が予測された。

その為、土門と揚羽は直接あの宇宙船の内部を調査することにした。
揚羽はクレーターの近くにコスモハウンドを着陸させる。
コスモハウンドを降り、宇宙船へと近づく土門、揚羽、アナライザー。
クレーターに鎮座している宇宙船は航海灯などの明かりはなく、中で機械が動いている気配もなく、さながら幽霊船の様だ。
「ひどく傷んだ宇宙船だな・・・」
「マサニウゴクノガ不思議トイウ奴デスネ」
「エンジンが故障しているんじゃないか?もっと近づいてみよう」
土門、揚羽、アナライザーは警戒しながら宇宙船へと近づく。
クレーターに鎮座している宇宙船は外見のあちこちに錆があり、船体の至る所に傷や凹み、応急修理を行ったであろう形跡がいくつもあり、長い期間使用された老朽船である事が窺える。
宇宙船の外見を一通り見た後、エアコックから土門、揚羽、アナライザーは宇宙船の船内へと入る。
「ン?近クニ生命反応デス」
船内でも警戒しながら進んで行くと、アナライザーが生命反応を探知した瞬間、通路の左右から無言で黒い影の集団が土門と揚羽に襲い掛かって来た。
「むっ!?」
「くっ!?」
しかし、そこは宇宙戦士である土門と揚羽。
二人は自分たちを襲ってきた襲撃者を背負い投げで撃退したのだ。
「何なんだ!?コイツ等は!?」
「助けを求めておいて襲い掛かって来るなんて・・・やっぱり罠だったのか!?」
揚羽と土門は襲撃されたことであの通信は罠だったのかと思った。
アナライザーは襲撃者の正体を探る為に身体に装備されていたライトを点灯させる。
土門と揚羽はアナライザーのライトで照らされた光芒の中を見て

思わず息を呑んだ。
光芒の中には寄り添うように固まっている人の一団があった。
その人々は生きているのが不思議なくらい痩せている人、疲労困憊な様子の人たちだった。
(こ、この人たちは一体・・・)
(そう言えば、さっき投げ飛ばした人もやけに軽かったな・・・)
「アナライザー、ヤマトとまほろばに通信を送ってくれ」
「了解」
アナライザーはヤマトとまほろばに通信を送った。
ヤマト、まほろばの第一艦橋のメインパネルには宇宙船内部の光景と共に土門がこの宇宙船の正体を伝える。
「なに!?シャルバート教の信者たちの船!?」
「はい。彼らは長い間、シャルバート星を探している巡礼者たちなのです」
「巡礼者・・・」
「長い間って一体どれだけの旅をしてきたのだろう・・・」
(何だかジレルの人たちみたいだな・・・)
長い間、どこにあるのか分からないシャルバート星を探し求めながら宇宙を彷徨っている彼らとシャンブロウで出会った女王レーレライたちジレル人と重なった。
(いや、タイムリミットはあるが自分たちも似たようなモノだな)
「地球の皆さんお聞きください」
そこへ、この巡礼団の代表者らしき長老が話しかけてきた。
「今はガルマン・ガミラスとボラー連邦とが銀河系で争いごとをしていますが、それ以前から銀河系では争いが絶え間なく続いていました。力なき人々は長きに渡る無用の苦痛に喘いでおります。私どもは銀河で起きているこの戦乱をマザーシャルバートに鎮めて頂こうと思い、こうして宇宙を彷徨いつつシャルバート星を探しているのです。あと何年かかるのか分かりませんが、私たちの世代が倒れても次の子の世代、そしてそのまた子の世代とシャルバート星が見つかるまで、宇宙を彷徨う覚悟です」

「やはり、今の我々とあなた方は同じだな・・・我々にはタイムリミットがありますが、今のあなた方と同じく星を求めて宇宙を彷徨っている巡礼者の様な者です」
　良馬は長老の言葉を聞き、内心抱いていた彼らの境遇と今の自分たちの境遇が似ている事に共感を抱く。
　バレルの話ではシャルバート教の一部の信者には過激な思想からテロ活動をする信者もいるらしく、先日起きたボラーのガルマン・ガミラス本土攻撃にはガルマン・ガミラス軍内部に居るシャルバート教の信者が防衛システムは破壊した事でヤマト、まほろばが居なければガルマン・ガミラスは滅んでいたかもしれなかった。
　バレルの言う通り、シャルバート教の信者の一部にはテロ活動を行う過激派が居るが、ガルマン・ガミラスの広場、そして宇宙船に居る巡礼者たちを見る限り本当のシャルバート教の信者は思慮深い大人しい人たちなのだろう。
「ありがとうございます。今思うとこうしてあなた方と出会う事が出来たのもマザーシャルバートのお導きかと存じます」
「すると救難信号を発していたのはやはり・・・・」
「はい。宇宙船のエンジンが故障してしまい、この小惑星に不時着したのですが、ガルマン・ガミラスやボラー連邦に気づかれる訳にはいかず、救難信号を送るに送れない状況下だったのですが、子供の一人が通信機を弄って救難信号を発したところ、あなた方とこうしてお会いする事が出来ました」
「事情は分かりました。早速宇宙船の修理を行いましょう」
「それと長い航海になるのですから、航海に必要な物質や機械も設置しましょう」
「ありがとうございます。何とお礼を申し上げてよいか・・・・」
　長老は深々と頭を下げ、礼を言った。
　やがて、ヤマトとまほろばから修理に必要な物資と技術班の隊員たちと運搬ロボが駆け付け、下がドリルになっている鉄柱の柱を小惑星に埋め込み、その柱に足場となる鉄板を固定し、足場を作り技術班が宇宙船の外部修理と船体の補強を行う。

勿論内部も同様に修理と補強を行う。
技術班の他に佐渡、リニスたち医療科の隊員たちも宇宙船に乗っていた巡礼者たちの健康診断を行う。
そして、ディアーチェたち主計科の隊員らも彼らの食生活を確認すると、
「貴様らの目的が達成するまで宇宙を旅する決意は認めよう・・・だが・・・こんな貧弱な施設でどうやって食っていくつもりだったのだ!?」
ディアーチェが巡礼者たちの厨房担当の信者に詰め寄っている。
「むしろ、こんな脆弱な設備でよくこれまで生きてこれたな!?」
ディアーチェが厨房担当者に詰め寄る。
彼女がそれくらい呆れるほどに宇宙船の厨房設備は長距離航海に向いていないモノだった。
「おい、ヤマトの真田技師長を呼んで、この船にもO・M・C・Sを設置してもらえ。物資ついてはガルマン・ガミラスで補給してもらったのがあるだろう」
「は、はい」
ディアーチェは傍に居た主計科の隊員に事情を話して、真田を呼びに行ってもらった。
「えっ?まほろばの主計長が?」
「はい。ヤマトの真田技師長を呼んでくれと・・・」
「なんでまたまほろばの主計長が俺を呼んでいるんだ?」
「なんでもこの宇宙船の厨房施設があまりにも脆弱な為、O・M・C・Sを設置してもらいたいそうです」
「なるほど・・坂東」
「はい!!」
「俺は船内設備の強化に向かうが、外部修理と補強の作業を任せていいか!?」
「はい、大丈夫です!!」
真田は外部作業を坂東に任せて宇宙船の中にある厨房施設へと向かった。
そして、真田の手腕とガルマン・ガミラスで補給した物資で宇宙船

の厨房施設にO・M・C・Sが設置された。
「使い方は地球のO・M・C・Sと同じだから、使い方を教えてやってくれ。俺はまた外部の修理・補強作業に戻る」
「うむ」
　宇宙船の厨房施設にO・M・C・Sを設置した後、O・M・C・Sの使い方のレクチャーをディアーチェに任せて真田は外部作業へと戻った。
「いいか？では、使い方を教えるぞ」
「は、はい」
　ディアーチェは厨房担当者にO・M・C・Sの使い方を教えた。
「・・・と、こうやるのだ。分かったか？」
「はい。ありがとうございます・・・それにしても凄い機械ですね、このO・M・C・Sというのは・・・一体何を原料にしているんですか？」
　O・M・C・Sの使い方と性能を知った厨房担当者は驚愕すると同時にO・M・C・Sの原理をディアーチェに訊ねてきた。
「・・・それは知らない方が幸せだと思うぞ」
「は、はぁ・・・」
　使い方を覚えれば今後の航海での食生活が改善されるのだから、O・M・C・Sの詳しい詳細までは知らなくても良いとディアーチェは厨房担当者に助言した。
　やがて、外部、内部の修理、補強が終わり、ヤマトとまほろばから長航海に必要な物資を分けてもらい、巡礼者たちの宇宙船は発進準備を行う。
「地球の皆さん、ありがとうございます。おかげで出発する事が出来ます」
　長老がヤマト、まほろばの乗員たちに礼を述べる。
「今後の航海の無事を祈ります」
「お元気で・・・」
「ありがとうございます。では・・・」
　宇宙船のエンジンが点火してゆっくりと小惑星から発進していく。
「親から子、子から孫か・・・我々には時間がないが、せめてあの巡礼者

たちの執念を見習って第二の地球を探さないとな」
「これからいく惑星ファンタムがその第二の地球となりうる星ならば良いのですけどね」
宇宙へ旅立って行く巡礼者たちの宇宙船を見ながら古代と良馬が呟いた時、ヤマト、まほろばのレーダーが小惑星に接近して来る艦隊を捕捉した。
「十二時の方向に艦影を捕捉。距離六千宇宙キロ。船籍は不明です」
「此処はガルマン・ガミラス、ボラー連邦との国境線に近い宙域だからな・・・ガルマン・ガミラスの艦隊なら話せば通してくれるのだろうけど、ボラーの場合だとちょっと厄介だな」
「ええ・ひとまず小惑星に居る作業班を呼び戻しましょう」
「それと船籍が分からない以上、交戦の可能性もある。戦闘の用意も・・・」
「ええ」
ヤマト、まほろばの艦内に警報が鳴り、乗員たちは戦闘配置につく。
小惑星からは急ぎ作業にあたった技術班がヤマト、まほろばへと戻る。
「くそっ、やけに忙しい日だ」
「いや、いや、そうこなくっちゃ面白くない」
コスモハウンドもヤマトに帰投し、搭乗していた土門たちは急ぎコスモハウンドから急いで降りる。
真田もヤマトの第一艦橋へと戻ると、
「雪、巡礼船の位置は!?」
雪に巡礼者たちが乗った宇宙船の現在位置を訊ねる。
「まだ戦闘圏内にいます」
接近して来る艦隊がボラー連邦の場合、この宙域で戦闘が予想される。
巡礼者たちが乗った宇宙船はまだ戦闘圏内に居た。
此処でボラー連邦の艦隊と戦闘が起きたら巡礼者たちが乗った宇宙船が戦闘に巻き込まれる可能性が高かった。
いくら補強したとはいえ、宇宙船は非武装船なので、攻撃を受けれ

ばあっという間に撃沈されてしまう。
いくら地球とは何の関係もない人々でも救助して知己を得た人々が目の前で宇宙船諸共吹き飛ばされるのはあまりにも目覚めが悪い。
「艦長、巡礼船に護衛が必要だな」
「コスモタイガー発進!!巡礼船を戦闘圏外まで護衛してくれ」
「了解」
巡礼者たちが乗った宇宙船を守る為にヤマト、まほろばのコスモタイガーが発進し、その護衛に就く。
その間にも艦隊はヤマト、まほろばへと接近して来る。
「戦闘艦隊、距離五千宇宙キロまで接近・・・戦闘艦の識別判明・ボラー連邦の戦闘艦です!!」
「ガルマン・ガミラスだったらまだ話し合いの余地があったがよりにもよってボラー連邦の艦隊とは・・・」
「相原、交信回路を開け」
「了解」
古代は無駄かもしれないが、一応ボラー連邦の艦隊指揮官と話し合ってみようと通信回路を開く。
「ボラー連邦戦闘艦隊指揮官に告ぐ!!こちらは地球の宇宙戦艦ヤマト!!諸君らと戦う理由は無い!!すみやかに戦闘態勢を解かれたし!!繰り返す。すみやかに戦闘態勢を解かれたし!!」
古代が接近して来るボラー連邦の艦隊へ通信を送ると、意外にも相手側から返答があった。
もっともその内容は古代が期待する内容ではなかった。
「こちらはボラー連邦第八打撃艦隊司令、ハーキンス中将。問答無用だ」
接近して来るボラー連邦の艦隊はベムラーゼが刺客として送り込んだハーキンス中将の艦隊であった。
ヤマト、まほろばの撃破を命じられたハーキンスとしてはいくらヤマト、まほろばに戦闘の意思がなくとも自分たちには戦闘を行う理由があった。
「やはり、聞き入れてもらえませんでしたね」

良馬が古代とハーキンスのやりとりを見て古代に声をかける。
此方が戦う意思が無くとも向こうは戦う気満々であった。
「ええ、全くボラーの連中は融通が利かない連中だ」
「敵艦隊、戦闘態勢をとり接近してきます!!」
「古代艦長、不本意かもしれませんが、ここは戦うしか無いようです。それに近くには巡礼船が居る・・・彼らを守る為にも此処で足止めをしなければなりません」
「そうですね・・・総員、応戦準備!!」
ヤマト、まほろばはボラー連邦の艦隊をこの宙域で足止めするよう戦闘態勢をとった。

百六十九話　惑星ファンタムへの道＆管理世界での出来事

デスラーからの情報提供により、ガルマン・ガミラスとボラー連邦との国境線付近にあるとされる地球に似た惑星ファンタム・・・

現在、探査担当宙域にて良い結果が出ていないヤマト、まほろばとしては地球人類生存のタイムリミットがあるので、此処は藁にも縋る思いで情報提供をもらった惑星ファンタムへと向かっていた。

惑星ファンタムへ向かっている道中、暗黒物質と小惑星が密集しているとある宙域にて、救助信号を受信したヤマトとまほろば。

現場に行ってみるとそこにはシャルバート教の巡礼者たちを乗せた宇宙船がエンジントラブルを起こして不時着していた。

本来地球とは縁も所縁も何の関係もない彼らであったが、目の前で困っている人々を見捨てて行く程、宇宙戦士は腐ってはいない。

巡礼者たちを乗せた宇宙船を修理し終え、彼らが出発した直後、この宙域に艦隊が出現した。

ガルマン・ガミラスの艦隊だったら、通信を交わして航行目的を話せばすんなりと終わったのだが、接近して来たのはボラー連邦の艦隊だった。

この宙域はガルマン・ガミラスとボラー連邦との国境線付近なので、運悪くボラー連邦の艦隊がガルマン・ガミラス領へ侵攻してきたのだろうか？

古代は無駄だと思いつつも接近してくるボラー連邦の艦隊指揮官に対して自分たちには戦闘の意志が無い事を告げるが、艦隊司令官であるハーキンスは元々ベムラーゼよりヤマト、まほろばを撃破する事を命じられていたので、当然古代の言葉を蹴ってきた。

ボラー連邦　第八打撃艦隊所属　ハーキンス座上　ラザレフ級航宙戦闘艦　艦橋

「ハーキンス司令」
「なんだ？」
「周辺宙域にヤマト、まほろば以外にもう一隻、宇宙船の反応があります」
「何？もう一隻だと？」
「はい。いかがいたしましょう？」
　戦闘圏外へまだ退避出来ていなかった巡礼者たちを乗せた宇宙船はラザレフ級航宙戦闘艦のレーダーにいとも簡単に捕捉されてしまった。
「友軍艦艇でなければ沈めて構わん!!艦隊の一部を差し向けろ!!」
「はっ!!」
　ハーキンスは巡礼者たちを乗せた宇宙船も攻撃対象にした。

　まほろば　第一艦橋
「敵艦隊、二手に分かれました!!一方は巡礼船の方へ向かっています!!」
「やはり巡礼船はボラーに捕捉されていたか・・・コスモタイガー、そっちにボラー艦隊の一部が向かった!!そちらの迎撃は任せたぞ!!」
「了解!!」
　ヤマト、まほろばのコスモタイガー隊が護衛についているので、そう簡単に遅れを取ることはないだろう。
　巡礼者たちを乗せた宇宙船の方はコスモタイガー隊に任せて、自分たちは眼前に迫るボラー連邦の艦隊の対処だ。
　ボラーの主力艦隊は左右からヤマト、まほろばへと迫る。
　そして、距離がある一定に達すると艦体中央部にある回転式弾倉発射管から次々と誘導ミサイルであるスペース・ロックを発射してきた。
　スペース・ロックは不規則な動きをしながら両舷よりヤマト、まほろばの全方位を包み込むように迫って来ると船体のあちこちに命中する。
　しかし、ヤマトもまほろばも波動防壁を展開していたので、致命傷

は避けることが出来た。
「艦長、敵のミサイルは誘導型のミサイルの様です」
「よし、それならチャフをばら撒いて誘導機能を奪う!!反転上昇し、チャフを撒きながら小惑星帯へ突入せよ!!」
「了解!!」
まほろばはチャフを撒きながら反転上昇し、小惑星帯へ飛び込んで行き、ヤマトは波動爆雷で迫りくるスペース・ロックを迎撃する。
チャフによって誘導機能を失ったスペース・ロックは小惑星にぶつかったり、他のスペース・ロックに接触したりして爆発する。
そして、ヤマトの方では発射された波動爆雷の爆発に巻き込まれる。
二隻の宇宙戦艦の周囲には次々と爆発するスペース・ロックが赤やオレンジの花を咲かせた。
「敵艦隊、急速接近!!」
「主砲発射用意!!目標、ボラー艦隊!!」
「了解!!主砲発射用意!!目標、ボラー艦隊!!」
良馬の命令をフェリシアは復唱する。
「第一主砲は右舷、第二主砲は左舷の敵を狙え!!」
「照準固定、主砲発射準備完了!!」
「撃て!!」
まほろば、ヤマトからは主砲が放たれ命中するとボラー艦は相次いで吹っ飛び、陣形が崩れる。
「敵艦隊の陣形が乱れました!!」
「艦首魚雷及び煙突ミサイル発射!!」
砲撃によって混乱が生じたボラー艦隊へ次は魚雷とミサイルが襲い掛かる。
ヤマト、まほろばが相手をしているボラー艦隊に関しては優位に戦況が進んでいる中、巡礼者たちを乗せた宇宙船の護衛を行っているコスモタイガー隊の方では・・・
やはり、非武装の宇宙船と戦闘艦とでは速力の差があり、多少の距離があったにもかかわらず、ボラー艦隊は宇宙船の近くまで迫ってい

た。
「くそっ、もう追いついたか・・・」
迫りくるボラー艦隊の姿を見て山本は苦々しく呟く。
「全機、反転!!」
このままではボラー艦隊に追いつかれてしまうので、コスモタイガー隊は反転をしてボラー艦隊を迎え撃つ。
ボラー艦隊は主砲の射程に宇宙船を捕捉すると砲撃してきた。
スペース・ロックで攻撃してこなかったのは、非武装の宇宙船相手にスペース・ロックはもったいないと判断したのだろう。
ボラー艦隊のショックカノンが巡礼者たちを乗せた宇宙船に容赦なく襲い掛かる。
「キャァァァァー!!」
「うわぁぁぁぁぁぁー!!」
宇宙船の中ではシャルバート教の信者たちがボラー艦隊からの砲撃を受けて、パニックに陥る。
子供たちは泣き喚き、大人たちは不安そうに周囲を見ている。
しかし、補強で装甲を厚くしていた事が功を奏したので、宇宙船がボラー艦隊の一撃で撃沈されることはなかったが、このまま砲撃を受け続けていれば撃沈は時間の問題であった。
「全機突入!!」
「俺に続け!!」
コスモタイガー隊は宇宙船を攻撃してくるボラー艦隊へと迫る。
「攻撃開始!!」
「全機、敵前部甲板へミサイル集中攻撃!!」
ボラー艦隊がいつ砲撃からあの厄介なミサイル攻撃に移るか分からず、またミサイルの発射管ならばミサイルへの誘爆を狙えるので、コスモタイガー隊はスペース・ロックの発射管へミサイル攻撃を行う。
コスモタイガー隊の狙い通り、ミサイル攻撃を受けたラザレフ級航宙戦闘艦は搭載していたスペース・ロックに誘爆して爆沈する。
「うわぁ!!凄い!!」

「助かった・・・・」
　自分たちを攻撃してきたボラー艦隊が沈んだことでシャルバート教の信者たちは助かった事で歓声をあげる者、ホッと胸を撫で下ろす者で湧き上がる。
　子供たちは自分たちを助けてくれたコスモタイガー隊へ手を振っている。
「マザーシャルバート・・・・我らの為に戦ってくださった地球の方々に大いなるご加護を与え給え・・・・」
　本来ならば自分たちシャルバート教とは何の関係が無いにもかかわらず自分たちの船を直し、自分たちを守る為に戦ってくれているヤマト、まほろばの為に長老はマザーシャルバートへ祈りを捧げた。
　コスモタイガー隊の奮闘により巡礼者たちを乗せた宇宙船を追撃してきたボラー艦隊は全滅し、追撃者が居なくなったことで宇宙船は無事に戦闘宙域から離脱する事が出来た。

　ボラー連邦　第八打撃艦隊所属　ハーキンス座上　ラザレフ級航宙戦闘艦　艦橋
「は、ハーキンス司令、味方の艦が次々と・・・・」
「不明船を追撃した分艦隊も敵の航空隊の攻撃に遭い全滅です!!」
「我々も空母を持ってくるべきだったか・・・・残存艦の数は・・・・」
「はっ、本艦を含めあと七隻です」
「くっ・・・・任務は失敗だ・・・・」
(ま、まさか、辺境の田舎蛮族如きの艦があそこまでの能力があるとは・・・・)
　事前にある程度の情報を得ていたとは言え、ハーキンスはヤマト、まほろばの能力を侮っていた。
　また、戦艦ながら多数の航空機を搭載していた事とその航空隊の強さもハーキンスにとっては予想外だった。
「司令官、いかがいたしましょう?」
「撤退だ」
「は、はい・・・・?」

「撤退だ。今の戦力ではあの戦艦には勝てない」
「しょ、承知しました」
ハーキンスはすぐさま敗北を悟ると残存艦に撤退命令を下した。

まほろば　第一艦橋

「敵の残存艦がワープしました・・・撤退したと思われます」
「巡礼船は？」
「無事に戦闘圏外へ脱出しました」
「そうか・・・通信長、コスモタイガー隊へ帰還命令を出してくれ」
「了解」
ボラー艦隊の撤退と巡礼者たちを乗せた宇宙船が戦闘圏外へ脱出した事が確認できたので、良馬はコスモタイガー隊へ帰還命令を出した。
ヤマトでも同じくコスモタイガー隊へ帰還命令が出たみたいでコスモタイガーは次々とヤマト、まほろばへと戻って行く。
コスモタイガーを収容し終え、戦闘によるダメージ箇所のチェックと応急修理を行う。
「波動防壁とチャフのおかげで致命的なダメージはありません。応急修理も間もなく終わります」
「ヤマトの方も同じく航行に支障をきたす程のダメージは無く、応急修理ももうすぐで終わるみたいです」
やがて、応急修理が終わり、ヤマトとまほろばは惑星ファンタムへの航海を再開する。
「艦長、本艦及びヤマトの応急修理が終わりました」
「よし、針路を戻せ!!惑星ファンタムへ向かうぞ!!」
「了解、針路惑星ファンタム」
永倉が航海計器を操作してヤマト、まほろばは惑星ファンタムへ針路を戻し、ゆっくりと動き始めた。
ヤマト、まほろばが惑星ファンタムへ針路を向け、航行しだした時、突如、前方の空間にマザーシャルバートの姿が浮かび上がった。
突然のマザーシャルバートの出現にヤマト、まほろばの乗員たちは

ドキッとした。
「ま、マザーシャルバート!?」
「驚いたな・・まさかマザーシャルバートが姿を見せるなんて・・・」
ヤマト、まほろばの乗員の中にシャルバート教の信者は居ない。
それにもかかわらずマザーシャルバートはヤマト、まほろばの前に姿を見せた。
「あの方向は惑星ファンタムがある方向です」
「マザーシャルバートが我々を惑星ファンタムへ導いているのか・・・」
「ボラー連邦に敵認識され、シャルバートにも見込まれたって事か・・・」
「なんだか先が思いやられますね」
「だが、我々は行かなければならない。例え前途にいかなる事態が待ち受けていようともな・・・」
ヤマト、まほろばがマザーシャルバートの導きの下、惑星ファンタムへと全速で向かった。

ヤマト、まほろばが惑星ファンタムへ向かっている頃、ミッドチルダでは・・・
ユーノ・スクライアが司書長を務めている彼の職場である無限図書館にて、この日一人の訪問者が居た。
「スクライア司書長。司書長にお客様が来ております」
「あっ、はい。今行きます」
受付係からの内線を受けてユーノは訪問客の居るロビーへと向かう。
「やあ、スクライア君」
「スピアーノ教授、お久しぶりです」
訪問者はユーノと同じスクライア族でミッドにあるペトルグリフ大学にて考古学を教えているランティス・スピアーノ教授だった。
ユーノもランティスも同じ種族でありミッド在住と言う事でお互いに知らない仲ではなかった。

「それでスクライア君。頼んでおいたモノは・・・・」
「あっ、此方です」
　ユーノは先日、ランティスよりある資料を頼まれており、それを今日ランティスは取りに来たのだ。
「ただ、教授。自分も事前にこの資料に目を通しましたが、正直信じられないような内容でしたけど・・・・」
「まぁ、古代ベルカ時代よりも前の記述であるからね。しかし、いくら古い記録で眉唾物の様な内容でもそれが全て空想だと言い切れないだろう？我々スクライア一族は遺跡を発掘しそこから古代の記録を読み取っていくのだから」
「それはそうですけど・・・・」
　ランティスからの依頼の資料についてユーノはいまいちその資料の内容は信じられない内容であった。
　しかし、スクライア族で大学にて考古学を教えているランティスは受け取った資料の内容すべてを否定する事は出来なかった。
「ですが、資料によるとそれに記載されている内容は他の世界ではなくミッドの出来事ですが、ミッドにはそのような形跡や遺跡は存在していませんよ」
　遺跡の発掘を生業とするスクライア一族ならば、ミッドに遺跡があれば当然その遺跡を発掘するがミッドでは資料に記載されているような遺跡が見つかったという報告は未だにない。
「古代ベルカ時代前の遺跡だとしたら、あのベルカ戦争の戦乱で破壊されたと思われるからね。まったく当時の王たちは後先考えずに目に映るモノを常に破壊し続けていたのだろう」
「まぁ、あの時代はミッド全体が戦乱の時代でしたからね・・・・」
「それにだ。仮に破壊されていなかったとして、あのＪＳ事件における『聖王のゆりかご』の様にまだ見つかっていない可能性も捨てきれないのでないか？例えば海の底に沈んでいる可能性もあるのだからね。その可能性を確認する為にもう一冊の資料を君に頼んだのだ」
「た、確かに・・・・」
　古代ベルカ時代に失われたと思われていた『聖王のゆりかご』

はベルカ戦争の折に失われることなくスカリエッティが発掘しＪＳ事件まで保守・整備していた。
『聖王のゆりかご』の様に失われたと思われる古代の遺物がまだミッドにあり、ただそれが見つかっていない可能性もあった。
　資料内容についてランティスとユーノは暫しの間、意見交換をした後にランティスは資料を持って無限図書館を後にした。
「司書長、スピアーノ教授が頼んだ資料って一体どんな資料だったんですか？」
　ランティスが帰った後で司書の一人がユーノにランティスへ渡した資料内容について訊ねてきた。
「ああ、古代ベルカ時代よりもさらに昔・超古代文明に関する資料とある回遊惑星に関する資料だよ」
「古代ベルカ時代よりも昔・・・そんな時代に文明何てあったんですか？」
「古代ベルカ時代よりも昔からミッドには既に人類が既に存在していたからね。その人類が文明を築き上げていてもおかしくはないかもしれないが、何分古すぎる記録のせいか若干信憑性にかける内容だったけどね。まぁ、スピアーノ教授は肯定的だったけど・・・」
「確かに文明が存在したという遺跡などの決定的な証拠がなければ信憑性が欠けますね」
「ああ・・・第９７管理外世界・地球でも似たような話が沢山あるんだ。『バベルの塔』『バビロンの空中庭園』『ロドス島の巨像』とかは記述だけでその存在が曖昧であったし、エジプトという国にある『ギザの大ピラミッド』は王の墓とされているけど、本当に王の墓なのか？そしてその建造方法も謎とされている」
「あの世界は魔法が存在しませんからね。魔法が使えればそうした謎も解決するのではないでしょうか？」
「それはどうかな・・・実際に魔法が存在するミッドや他の世界でもまだまだ解明されていない謎があるから、魔法も万能というわけじゃないんだよ。だからこそ、考古学者や僕たちスクライア一族は遺跡を発掘して謎を一つずつ解明していくしかなく、無限図書はそうした人た

ちの手助けをする機関の一つなのだと僕はそう思っている」
「な、なるほど・・・」
当初はランティスに渡した資料に関してやや否定的な立場であったユーノであったが、ランティスと会話をしてスクライア一族として古代文明に関して全てを否定的するのは間違っていると自覚した。
そして司書もユーノの言葉に納得していた。
しかし、後にこの資料の内容がミッドを巻き込む大騒動になる事をユーノもランティスもこの時はまだ知る由もなかった。

ヤマト、まほろばをはじめとする地球が第二の地球となる新惑星を探査している中、はやてが艦長を務めるヴォルフラムも新たな管理世界になりうる惑星を探していた。

ヴォルフラム　艦長室
「艦長」
「ん？グリフィス君。どないしたん？」
艦長室に居たはやてにグリフィスが内線を入れて来た。
「実はヴォルフラムに備蓄してある資材が底を尽きそうなんです」
ヴォルフラムは次元断層へ落ちたクラウディアの救助に赴いた後、すぐに新世界探査の航海に出ていた。
その期間がかなりの日数になっており、探査中は補給も行われていなかった。
「それはアカンな・・・どこかで資材を調達せな」
「ええ、近くに資源が眠っている世界でもあればいいんですが、そう都合よくは・・・」
「艦長、ヴォルフラムの前方に惑星反応があります」
すると、タイミングがいい所にヴォルフラムの近くに惑星があるのをオペレーターが発見し、はやてに報告を入れて来る。
「おっ、それはナイスタイミングや!!」
「はい。ですが、問題はその惑星に資源があるかどうかです」
「探査も兼ねてその惑星へ行ってみるで」

惑星発見の報告を受け、はやてはブリッジへと上がった。
はやてがブリッジに上がると、ヴォルフラムの眼前には青い星があった。
「艦長、惑星の解析ですが、星全体の約９０％が海の惑星の様です」
「陸地が殆どない星やな」
「ええ・ですが、海底に十分な資源が存在しているようです。大気の成分もミッドよりも若干、酸素濃度が高いようですが、宇宙服を着用するほどのレベルではありません」
「ほんなら、その惑星で資材を調達するか。ひとまず前方の惑星へ降下や」
「了解」
ヴォルフラムは前方の青い星へと向かった。
そして、惑星に広がる海へ着水する。
空は快晴で波は穏やかで仕事でなければ海水浴や釣りでもやりたい環境だ。
「ほな、さっさと資源回収をやろうか？」
「はい」
管理局の艦は戦闘よりも調査がメインの艦なので、潜水行動も可能であり、資源が海底にあると言う事でヴォルフラムは海へと潜水して、海底に眠る資源を取りに行く。
そして海底にて無事に航海に必要な資源を入手することに成功した。
「艦長、資源確保終了しました」
「どうします？このまま引き続きこの惑星を探査しますか？」
「せやな、次いでやしやっておこうか」
必要な資源は入手したが、こうして資源が眠り、ミッドと対して変わらない環境な星なので、より詳しく探査を行えば本局に良い報告が出来ると思いはやては探査命令を出した。
「それにしても水の色が綺麗ですね」
「せやね・・・もしかしたらミッドの海よりも綺麗かもしれへんな」
「本局へ報告を入れましたら、此処は資源世界か自然保護世界になる

のでしょうか？」
「多分そうなるな」
　海底とは言え資源が豊富な世界を管理局が黙って見過ごす筈が無く、はやてが本局へ報告を入れればこの星は管理局が管理世界として組み込む可能性が高い。
「ん？なんだ？この反応は・・・ん？おお、これは凄く大きな魚だな」
　ソナー員が海中で大きな魚らしき反応を捉えた。
「・・・ん？って・・これは魚じゃない!!艦長!!海中に巨大な生物の反応があります!!」
　しかし、よくよく見ればそれはただ単に大きな魚という訳ではなかった。
「巨大な生物？」
「大きさは!?」
「約１８メートル!!」
「１８メートル!?」
「かなりデカいですね」
　ヴォルフラムのモニターには海中を自由に泳ぐ巨大生物の映像が映し出される。
　それも一匹ではなく複数の同一個体がいる。
　その巨大生物はクジラや鮫、シャチというよりも太古の昔に地球で繁栄していた海竜と呼ばれた首長竜に近い姿をしていた。
「どうしますか？艦長」
「あの生物が攻撃的とは必ずしも言い切れへんけど、私らを敵視している可能性は高そうや・・・まぁ、あちらさんにしてみれば私らは自分たちの縄張りにズカズカと踏み込んで来た訳やからな」
（こんな時、キャロが居てくれたら何か分かったかもしへんな・・・）
　海竜とは言え竜・そして竜と言えば、かつて機動六課に在籍していたキャロ・ル・シエルは竜を使い魔にしていた召喚士であったので、キャロが居ればあの海竜とコンタクトがとれたかもしれないとはやてはそう思っていた。
　しかし、現状そのキャロが居ないのでどうにもならない。

「とにかくあちらさんをこれ以上刺激しないようにこちらからの手出しはＮＧや」
「りょ、了解」
「しかし、もし向こうが襲い掛かって来た場合は・・・・？」
「あの巨体の体当たりを喰らえばいくらヴォルフラムとは言え、船体にダメージを負う可能性が十分にあります」
「その時はやむを得ない・・・・攻撃して相手を追っ払うが、基本こちらからの手出しは無しや」
「了解」
　ヴォルフラムは海竜たちの動向を注視しながら海中を進んで行く。
「艦長、海竜の他に別の巨大生物の反応があります!!」
　ソナー員が新たに別の生物の反応を捉えた。
「海竜とは別？」
「それは。別個体の海竜か？」
「いえ、反応が海竜とは異なります・・・・まもなく映像に映ります」
　やがてヴォルフラムのモニターには海竜とは別の生き物・・・・物凄く巨大な魚が映し出された。
「魚!?」
「それもかなり巨大な魚ですね・・・・」
「いや、それだけじゃない・・・・あの異様な姿を見ろ・・・・」
　ヴォルフラムのモニターに映る魚は、骨格上は魚なのだろうが、その大きさもさることながら、外見も異常な姿をしていた。
　魚の頭部には角の様な突起物が生えており、鱗も映像で見る限り鎧の様に固そうだ。
　口の中には鮫以上に鋭い牙が何本も生えていた。
「うわぁ～何や？あの魚・・・・」
　はやてはモニターに映る魚の姿を見てドン引きし、
「これまでの管理世界で確認された生物の中でもこれほどの大きさで異様な姿の魚なんて確認されていませんね」
　グリフィスがモニターに映る魚を見て呟く。
「あの海竜と言いこの魚と言い、この星の生態系は一体どうやっとる

んや？」
「生物学者が居たら目を輝かせていたでしょうね」
「せやけど、私らにしてみれば最悪な環境や」
　海竜や巨大な魚・・・この星の海はまるで太古の地球の海の様だ。
（まさか、クラーケンや大ウツボみたいな化け物も居らんよな・・・）
　地球における大航海時代に海には大きな船をいとも簡単に沈める巨大なイカの化け物であるクラーケンや巨大なウツボが居ると信じられていた。
　こんな地球の太古の海を再現した様な惑星の海であるならば、それらに類似した巨大生物が居てもおかしくはなかった。
　ヴォルフラムが海中を進んでいると突如、氷塊が出現した。
「っ!?な、なんだ!?これはっ!?」
　ヴォルフラムの航海長が突然現れた氷塊に思わず声を上げる。
「氷塊だ!!周囲一帯に無数の氷塊が出来ている!?」
「で、ですが、どうして突然氷塊なんて・・・」
「此処は未知なる惑星だ。何が起きても不思議じゃない」
　あんな巨大生物が住んでいる惑星なのだから、これまでの管理世界の常識は未知なる惑星には通じないのかもしれない。
「・・・すまんが海中温度の記録を表示してや」
「は、はい」
　はやてはヴォルフラムが記録したこの惑星における海の温度記録を見る。
「うーん・・・あまりにも妙や」
「と言いますと？」
「真水は零℃で凍り、海水はマイナス三℃以下で凍るモノや・・・でも、ヴォルフラムが記録したこの星の海の温度は二十五度・・・潜って多少海水が冷えてもいきなり氷塊が出来るマイナス三℃以下になるなんてあまりにも時間が少なすぎる」
「確かに・・・海水の成分はミッドとあまり変わらないので、海水が凍るとしても艦長の言う通りマイナス三℃以下で凍る筈ですね」
「もしかしたら、この氷塊が出来たのは単なる自然現象と異なるかも

しれへんな」
はやてはこの氷塊の出現は自然によるものではないと判断した。
そしてはやての判断は当たっていた。
「か、艦長!!見てください!!」
「ん?どないした?」
ヴォルフラムのモニターには例の海竜の姿が映し出されているのだが、海竜が口から青い光線を吐くと海竜の周辺に氷塊が出現する。
「あの海竜が原因か・・・」
「竜は口から火を吐くイメージが強いけど、海竜はまさかの冷気とは・・・」
この惑星に生息する海竜はただの海竜ではなく冷気を操る特質を有していた。
氷塊が突如発生したのはこの海竜が周囲に冷気をまき散らしたためだ。
「うーん・どう見ても歓迎や求愛って感じには見えへんな」
「ええ・あれは一種の威嚇行動かと思われますね」
海竜の行動を見てはやてとグリフィスはあの海竜が自分たちを威嚇しているのだと判断した。
「あの海竜は我々の侵入にたいして相当敏感になっているようです」
「やっぱり、私らを敵と認識したか・・・」
「艦長、これ以上の海中での行動は危険ではないでしょうか?」
「せやな・今は氷塊を出すぐらいやけど、体当たりやあの氷塊をぶつけて来たりしたら厄介や・・・全速で浮上するで!!いくらあの海竜や魚でも空までは追っては来れないやろう」
「は、はい」
ヴォルフラムは全速で海中からの脱出を図る。
「離水、成功!!ただちに上昇します!!」
はやての予測通り、空中へ浮上したヴォルフラムへは流石の海竜や巨大魚も襲い掛かって来る事はなかった。
やはり、彼らは自分たちの縄張りに入り込んできたヴォルフラムを追い出したいだけだった様だ。

「このままこの惑星を出るで!!」
「はい・・・惑星引力圏まもなく離脱します!!」
「いやぁ～一時はどうなることかと思いました」
「ああ、全くや・・・」
「生きた心地がしませんでしたよ・・・」
「自然保護官は普段からこんな職務をやっているんですかね」
「それで艦長、あの惑星についてどうしますか?本局へ報告をいれますか?」
　グリフィスがはやてにあの惑星について本局へ報告を入れるかを訊ねる。
「うーん・・・いや、報告は入れんでええ」
　はやてが出した結論は意外にもあの惑星については放置するという判断だった。
「えっ?それは何故です?」
　グリフィスもはやての判断に意外性を覚え、改めて何故本局へ報告を入れないのかを訊ねる。
　冷気を吐く海竜と巨大魚が生存しているとは言え、海底には莫大な資源が眠っている星をわざわざ見て見ぬふりをするとはあまりにも勿体ない。
「確かにあの星の海底には莫大な海底資源が眠っているし、本局が知ったらあの星の海に資源採掘の為の海上プラントを建設するやろう・・・」
「でしょうね」
「でもな、その海上プラントを建設するまで一体何人の作業員があの海竜と巨大魚の餌食になると思う?」
「そ、それは・・・」
　はやての問いにグリフィスは言葉に詰まる。
　自分たちの縄張りを守る為にあの海竜と巨大魚は海上プラントを建設中の作業員に牙をむくだろうし、例え大勢の犠牲を出しつつ海上プラントを完成させたとしてもその後に海上プラントへあの海竜と巨大魚が襲ってこないとも言い切れない。

作業員と海上プラントの安全の為にあの海竜と巨大魚を絶滅させる作戦を管理局ならば平気で実行する事も厭わないが、一つの種を絶滅させることによりあの星の生態系に異常をきたす可能性もある。
はやての故郷である第９７管理外世界・地球でも自然ではなく人間の手によって絶滅させられた生物は多く存在しており、残った生物の生態系に少なからず影響を与えている事例も存在する。
幼少期、図書館通いをしていたはやてはそれら人類の過去の過ちに関して、はやては本を通して知っている。
自分が本局へ報告を入れる事であの星で暮らしている生物たちを絶滅させるきっかけを作る事をはやては嫌悪したのだ。
「まぁ、そういう事や」
「な、なるほど・・・」
はやての意図を理解したグリフィスはこれ以上の事は言わずにあの星についての報告を入れないはやての判断に賛成した。
海洋惑星で資源を調達できたヴォルフラムは再び新惑星の探査を続けるために星の海を進んだ。

ヴォルフラムが星の海を航海しながら新たな管理世界になりうる惑星を探査している中、母港である本局では・・・
本局内にある建造ドックにて、一基の?き出しの大きな宇宙船のエンジンが鎮座していた。
「ようやく試作機ですが出来ましたね」
「うむ」
「うまく動いてくれれば良いんですけど・・・」
この?き出しの宇宙船のエンジンはミノフスキー、マリエル、シャーリーらが理論を立て、本局の技術者たちが建造した新型の宇宙船のエンジンだった。
「やはり、八神二佐が見つけて来た別の星間国家のエンジンが時間の短縮になりましたね」
マリエルとシャーリーがミノフスキーの助手として新型エンジン開発に加わったがそれだけでは試作機の建造まで時間がかかる所で

あったが、以前はやてが某宙域にて防衛軍と暗黒星団帝国の戦闘で撃破された暗黒星団帝国の宇宙艦艇の残骸を見つけ、管理局の回収班が無事にその残骸を回収し、ミノフスキーらが解析した事で新型エンジンの開発における時間短縮が実現した。
そして出来上がった試作エンジンを後は宇宙空間へと運び稼働実験を行う運びとなった。
出来上がった試作エンジンを次元航行艦数隻で慎重に宇宙空間へと運ぶ。
「試作エンジン、稼働五秒前・・・・四・・・・三・・・・二・・・・一・・・・零・・・・点火!!」
宇宙へ運び込まれた試作エンジンの稼働にはミノフスキー、マリエル、シャーリーの他にリンディ、レティも同席していた。
ごく限られた局員らが見守る中、試作エンジンが始動する。
「試作エンジン、順調に稼働中・・・・」
「出力レベル上昇中」
「よし、続いて急停止・・・・」
「了解」
様々な項目の実験を行い、実験が終わると宇宙服を身に纏ったミノフスキーは試作エンジンのあちこちを見て試作エンジンに損傷が無いかを確認する。
本局のドックへ運ぶのを待ち切れずにその場でチェックするあたり、ミノフスキーの技術者としてのプライドだったのだろう。
マリエルもシャーリーの二人もミノフスキーと同じく宇宙服を着て試作エンジンを確認している。
「破損や亀裂は?」
「エンジン本体に亀裂や破損個所は・・・・なし」
「熱融合による融解箇所も見当たりません」
そんな三人の様子を次元航行艦からリンディとレティは見ながら、
「試作エンジンの稼働実験はどうやら成功みたいね」
「ええ・・これで管理局は新たな一歩を踏み出せるわね」
(管理局はこれまで防衛軍にボラー連邦、ガミラス、彗星帝国に後れを

とってきたけど、これでようやく彼らに追いつけそうね）

リンディもレティも試作とは言え、新型エンジンの完成に管理局の新時代の幕開けを予感したのだった。

百七十話　惑星ファンタム上陸

ガルマン・ガミラスとボラー連邦との国境線付近にあるとされる惑星ファンタムへ向かっている最中にシャルバート教の信者たちが乗った宇宙船と遭遇し、彼らを助けた後、突如ベムラーゼの命令を受けたハーキンス率いるボラー艦隊がヤマト、まほろば、そしてシャルバート教の信者たちが乗った宇宙船を襲撃してきた。

シャルバート教の信者たちが乗った宇宙船はヤマト、まほろばのコスモタイガー隊がボラー艦隊を返り討ちにし、シャルバート教の信者たちが乗った宇宙船は無事に戦闘宙域から脱出することが出来た。

そして、ヤマト、まほろばの方もボラー艦隊を撃破し、ハーキンスは残存艦を纏め撤退した。

ヤマト、まほろばは惑星ファンタムに向けての航海を再開した。

ヤマト、まほろばはその後、二回の連続ワープは何事も起こらずに平穏な航海だった。

三回目のワープを終えたヤマト、まほろばの眼前に青く美しい星が現れた。

その星はまさしくデスラーの情報通り、地球にそっくりな星だった。

惑星ファンタムの姿を見てヤマト、まほろばの艦橋はどよめいた。

「あれが・・惑星ファンタム・・・・」

「地球そっくりだ!!」

「それにしてもよく似ている・・・・」

「ほんと、地球にそっくりだ」

「・・・・」

艦橋内で皆がどよめいている中、良馬は訝しむ様な表情をして、ギンガの方は唖然としている。

しかし、いつまでも訝しんでいる訳にもいかず、眼前の星が本当に目的地である惑星ファンタムなのかを確認する必要があるので、

「航海長、位置の確認を・・・・」

「は、はい」
　座標位置の確認を命じる。
「現在位置は球状散開星団の外れ、星間座標Ｇ三Ｙ五十一・β付近・・・間違いありません。デスラーから情報提供された資料通り、惑星ファンタムです」
「・・・」
　眼前の星はデスラーからの情報提供通り惑星ファンタムで間違いなかった。
「やった!!ついに見つけたぞ!!地球にそっくりな星を!!」
「デスラーは嘘をつかなかったんだ!!」
「これで地球人類は救われた!!」
　ヤマトの艦内でも惑星ファンタムが地球にそっくり星である事から各部署ではお祭りの様などんちゃん騒ぎとなっていた。
　そんな中でヤマトの医務室では、
「まったく、今どきの若いもんは、喜びの表現方法も知らんと見える。嬉しいときは黙って一人、酒を飲む。・・・これが本当の喜び表現じゃよ」
　そう言いながら盃を傾ける佐渡の目にはキラリと嬉し涙が光っていた。
　ただいつまでもはしゃいでいる訳にもいかず宇宙から見た表面上は地球そっくりな惑星でも大気成分や気温などの環境が地球と同じでなければ当然地球人類は住めないし、既に惑星ファンタムに知的生命体が生存していれば地球人類の移住先にする事は出来ない。
　古代は急ぎ地表のデータを集めるように命令を出した。
　ヤマトの中央コンピュータールームでは各種パネルが一斉に忙しく明滅し、惑星のチェックリストを手に技術班の坂東たちが各メカのチェックを始めている。
「データ・リンク異常なし」
「各分析回路オープン」
「探査コンピューター稼働、一号、二号、三号、異常なし」
　工作室では探査用の衛星が次々とベルトコンベヤーで運び出され

ている。
　真田、アナライザー以下のロボットたちがチェックに余念がない。
「大気探査用衛星Ａタイプ」
「Ａタイプ、作動異常ナシ」
「地表探査用衛星Ｃタイプ」
「Ｃタイプ、作動異常ナシ」
「生物探査用衛星Ｅタイプ」
「Ｅタイプ、作動異常ナシ」
「科学探査用衛星Ｇタイプ」
「Ｇタイプ、作動異常ナシ」
　探査用の衛星準備が整うと宇宙空間にヤマトから次々と探索衛星が射出され惑星ファンタム目掛けて飛行していく。
　やがて、惑星ファンタムの上空に達した探査用衛星の群れはヤマト、まほろばへ惑星ファンタムの地表の映像を送って来た。
　惑星ファンタムの地表には地球とそっくりな海、川、湖、森があった。
　そしてそこには惑星ファンタム在来の動物や鳥、魚の姿があった。
　いずれも地球に生息している生物にそっくりな姿をしていた。
　ただその中に人工物らしき建造物もなく、この星には人類のような知的生命体の姿は見えなかった。
「大気組成は酸素二十三・一五％、窒素七十五・五一％、アルゴン一・二八％、二酸化炭素〇・〇五％・・・・」
　大気の組成も地球そっくりだ。
「自転周期二十四時間五十五秒、重力〇・九Ｇ、両極に磁場が存在、地上温度二十五℃、湿度六十％、放射線許容範囲内・・・地球人類の生存は可能です!!」
（これでヤマトの航海も終わるな・・・）
　探査用衛星からのデータがヤマトへ送られ、惑星ファンタムが地球人類の居住に可能というデータが次々と舞い込んでくる。
　外見も内面も地球そっくりというデータに古代はこれでヤマトの探査任務は終わり、後は地球へ報告を入れ、地球人類の移住船の護衛

を行い、全人類をこの惑星ファンタムへ移住させれば本当の終わりだと思っていた。
　ヤマトに送られる惑星ファンタムのデータはまほろばにも転送されるのだが、データを見て良馬は首を傾げる。
「通信長」
「・・・・」
「通信長!!」
「は、はい!!」
「ヤマトに通信回路を開いてくれ」
「りょ、了解」
　良馬同様、ギンガもどこか上の空な様子だった。
「古代艦長」
「あっ、月村艦長」
「惑星ファンタムのデータを見たが、もう地球へは報告を?」
「いえ、まだです。ですが、このデータから良い報告が出来そうです。これで地球人類は救われますよ」
「・・・その件だが、地球への報告はもう少し待った方が良いかもしれない」
「えっ?それはどういう意味ですか?」
「まだ地表に降りての最終探査も終わっていないし・・・うーん・・それでも・・・やはり・・・」
「何だか煮え切らない様子ですね」
　古代が良馬の煮え切らない様子に違和感を覚えていると、
「艦長、艦長、古代サン!!」
　慌てた様子のアナライザーが古代の下にやってきた。
「どうした?アナライザー」
「貴方ハ、ヤハリ惑星ファンタムへ上陸スルノヲ命令サレルノデスカ?・ドウデス?」
「ん?当然じゃないか」
「異議アリ!!反対!!大反対!!上陸ハ危険デス!!」
「なんだって?」

アナライザーは明確に惑星ファンタムへの上陸探査に異議を唱える。
「アナライザー、言ってくれ一体何が危険なんだ？」
「具体的ナ事ハイエマセンガ、アノ・・・・ソノ・・・・惑星ファンタムハ危険ナンデス。オレニハワカル・・ナニカコウ・・・・ベールノ様ナモノニ包マレテイテ・・・本当ノ姿ガハッキリトシテイナイノデス・・・・トニカク危険ナンダ!!ワカッテクレ」
ロボットであるアナライザーにしては珍しく明確な解答を述べる事が出来ないにもかかわらず、惑星ファンタムへの上陸には強く反対している。
「アナライザーお前もか？」
「私モ？ソレハドウイウ事デスカ？」
「月村艦長も何だか煮え切らない様子だったんだ」
「ソレハ月村サンが正シイデス!!一刻モ早ク、コノ星カラ離レタ方ガイイデス!!」
「アナライザー、お前もしかして喜びのあまり壊れちまったのか？」
土門がアナライザーの頭を小突きながらからかう。
「無理もないよな。俺たちだっておかしくなる手前までいったもんな」
太田も土門同様、アナライザーをからかう。
「失礼ナ事ヲ言ウナ!!」
自分の言葉を信じてくれない事にアナライザーはキレる。
他の乗員たちもアナライザーの言動に笑っている。
「ヒ、ヒドイ!!テメェラ人間ジャネェ!!」
アナライザーはブチ切れてどこかに行ってしまう。
「艦長。アナライザーの言う危険とはどう言う意味なのだろうか？」
真田はアナライザーが意味も無くあんな事を言うには解せない様子なので、アナライザーが言った『危険』と言う部分が引っかかった。
「真田さん。未知の星である以上、予測のできない事は起こるでしょう。でも一体どんな危険があるのか上陸してみなければ分からないのではないでしょうか？」

「ま、まぁ、そうだな・・・すまん」
古代の言う事も最もであり、データではようやく見つけた第二の地球となりうる惑星なので、此処でそう簡単に諦める訳にはいかなかった。
「古代艦長、やはりあの星へ降りるのかい？」
「ええ、勿論です」
「・・・・」
良馬もアナライザー同様、惑星ファンタムへの上陸に関しては消極的だった。

ヤマトが惑星ファンタムへの上陸探査を行おうとしている最中、その惑星ファンタムの情報をヤマトへ提供したガルマン・ガミラスでは・・・・

ガルマン・ガミラス本星　デスラー・パレス

（ヤマトはもう惑星ファンタムへ着いた頃だろうか・・・・）
（惑星ファンタムが地球と同じ環境の星ならば、これで一つ罪滅ぼしをすることができただろうか・・・・？）
自分の故郷であるガミラス星を失って以後、大放浪時代と考え合わせてヤマトの今回の航海が他人事とは思えなかった。
（しかし、あの宙域はボラー連邦との国境線付近だから道中、ボラーの連中と鉢合わせをしていなければ良いが・・・・）
そんな中、
「総統、ただいま哨戒中の味方艦隊より、Ｇ一Ｙ四十九αの地点にて、ボラー艦隊の残骸を発見したと報告があがりました」
タランがガルマン・ガミラスとボラー連邦との国境線付近でボラー艦隊の残骸を発見したと言う報告があがった。
「なに!?」
（残骸が見つかった地点は惑星ファンタムへの航路上だ・・・・）
（まさか、ヤマトがボラー艦隊と接触したのか・・・・）

「残骸の調査でその中に地球製のモノが無いか調査させよ」
「はっ!!承知しました」
友軍艦艇がボラー艦隊と接敵した報告は上がっていない。
ましてや今回ボラー艦隊の残骸が見つかったのはボラー連邦の国境付近とは言え、ガルマン・ガミラス領内なので、ボラー艦隊が領内に侵入したとなれば直ぐに報告が入る筈だ。
しかし、デスラーに報告が上がってきた時は既にボラー艦隊は残骸と化していた。
故にボラー艦隊を撃破したのは友軍艦艇ではなくヤマト、まほろばではないかとデスラーは判断したのだ。
そしてすぐに彼の下にはボラー艦隊の残骸の中から地球製のミサイルの破片が見つかったと報告が上がった。
(やはりヤマトとボラーは接敵していたか・・・)
(ボラー艦隊を撃破したと言う事は、地球はボラーから敵として認識されたかもしれないな・・・)
(今の地球は太陽の核融合異常増進でボラーとやり合っている暇はない・・・)
(地球とボラーとの無用な戦闘は避けなければならない・・・)
「タラン」
「はっ!!」
「ボラー連邦とのホットラインを再開しろ」
「えっ?ボラー連邦との・・・ですか?」
「そうだ。ヤマトの調査が終了するまで、無駄な戦いに巻き込みたくはないのだ」
「承知しました」
タランは一礼した後、デスラーの命令を実行した。
デスラーがホットラインを再開しようとしているボラー連邦では・・・

ボラー連邦　本星　首相官邸
「ゴルサコフ」

「はっ!!」
「例の地球の戦艦どもの動向は?」
　ベムラーゼはゴルサコフにヤマト、まほろばの現状を訊ねる。
「はっ、例の地球戦艦は我が方のスペースデストロイヤーを破り・・・・」
「それは知っておる。その後はどうしたのだ?」
　ハーキンス率いる艦隊がヤマト、まほろばとの交戦で破れた報告は既にベムラーゼの下に入っていた。
　しかし、その報告には一部虚偽が含まれており、実際はハーキンス自らが艦隊を率いてヤマト、まほろばと交戦し敗北したのだが、ベムラーゼの下にはハーキンス自らではなく、ハーキンス麾下の艦隊がヤマト、まほろばと交戦し全滅したと言う報告が上がっていた。
　ゴルサコフからみてもハーキンスは優秀な将官なので、一度の敗北で粛清されてはボラー連邦の軍部から見ても大きな損なので、ゴルサコフはボラー連邦の将来の為に虚偽の報告を上げたのだ。
　ハーキンス自身もゴルサコフの行為には了承していた。
　これにより、ハーキンスはゴルサコフに大きな借りを作る事になったが、粛清されるよりはマシであった。
「はっ。Ｍ１６７８３散開星団の外れ、星間座標Ｇ三Ｙ五十一・βの惑星ファンタム上空に居ます」
「ファンタム・・・ファンタム上空・・・とな・・・」
「はっ・・・」
（惑星ファンタム・・・うーん・・どこかで聞いた名の星だが、どこであったか・・・）
　ヤマト、まほろばの現在位置をゴルサコフから受けたベムラーゼであるが、彼は以前惑星ファンタムの名をどこかで聞いた覚えがあったが、この時はまだ思い出す事が出来なかった。
「首相閣下、ガルマン・ガミラス・デスラーよりホットラインが入っております!!」
　ベムラーゼが惑星ファンタムの事を思い出す前に衝撃的な報告が入る。
　オペレーターの一人がデスラーからホットラインが入った事をベ

ムラーゼに報告する。
「なに!?デスラーからホットラインだと?」
「はっ・・いかがいたしましょう?」
「よし、繋げ」
「はっ」
　ベムラーゼはデスラーが自分に何の用があるのか興味があったので、デスラーからのホットラインに出る事にした。
「ベムラーゼ首相、久しぶりだね」
　モニターにデスラーの姿が映し出される。
「デスラー総統、あなたからこんな形で連絡して来るとは思ってもみなかった。それで何用で連絡を?」
「単刀直入に言う。地球・ヤマトから当分の間、手を引いてもらいたい」
「手を引けだと?・・・・フフフ・デスラー総統、あなたも老いたモノだな」
　ベムラーゼはデスラーからの頼みを聞き鼻で笑った。
「なに!?」
「既にヤマト、まほろばは我が戦隊と戦端を開いておる。戦いの最中で、手を引くとか、引かぬとか出来るものか。デスラー総統ともあろう方が知らぬ訳がないだろう。ヤマト、まほろばをガルマン・ガミラスの先鋒にしたやり方は流石と言うべきだが、はてさて、気の弱い事を・・・・」
　ベムラーゼの挑発にデスラーはカチンときた。
「分かった・・・私が老いたかはいずれ戦いで知る事になるだろう」
　そう言い残してデスラーはホットラインを切った。
(ベムラーゼの豚め!!お前がいかに無能な豚であるかその内にたっぷりと知らしめてやる!!)
　ホットラインを切った後、デスラーは怒りで拳を固めた。
　デスラーとベムラーゼとの間でちょっとしたやり取りが行われている中、惑星ファンタムの上空に居るヤマト、まほろばでは・・・・

アナライザーと良馬は惑星ファンタムへの上陸に関して否定的な態度の示している中、他に反対意見はなく、ようやく見つけた地球そっくりな星と言う事ではやく地表の探査を行い地球へ吉報を届けたい思いが古代にあった。
「これより惑星ファンタムの最終探査を開始する」
ヤマトの後部・コスモハウンドの搭乗口には惑星ファンタムの地表探査に参加する真田、雪、土門、揚羽らが集まっていた。
「コスモハウンドの整備・点検終わりました」
「いつでも発進出来ます」
整備にあたっていた係員がコスモハウンドの準備が整ったことを報告する。
「よし、各員搭乗!!気密通路のハッチ開け!!」
古代たちがコスモハウンドンに搭乗しようとしたら開いていたハッチがいきなり閉まった。
「おい、どうした?」
急にハッチが閉まったと思ったら船内の照明も消えた。
「なんだ!?」
「どうした!?」
戸惑う中、警報も鳴り響く。
敵の襲撃かと思われたが、
「大変です!!アナライザーがパワーコントロール室で暴れています!!」
「なに!?」
この異常事態は敵の襲撃ではなく、アナライザーが暴れている事が原因であった。
「アナライザーが!?ちょっと行ってくる!!」
真田、土門、揚羽たちはアナライザーが暴れているパワーコントロール室へと向かう。
パワーコントロール室ではアナライザーが室内の機器に拳をぶつけ、配線を引きちぎっていた。
アナライザーはかつてテレザート星を目指す航海でデスラーが罠

の一つとして放った宇宙ホタルに似せた鉄を食べるバクテリアに感染して艦内で暴れ回った事があったが、今回はアナライザー自身の意志で暴れている。
「やめろ!!アナライザー!!」
　パワーコントロール室へ到着した隊員たちは暴れているアナライザーを取り押さえようとするもロボットのアナライザー相手に勝てずに逆に放り投げられてしまう。
「何トシテモ上陸ハサセルモノカ!!」
　アナライザーは勢いよくパワーコントロール室の扉をぶち抜き、次はコスモハウンドを壊そうとコスモハウンドの格納庫へ向かうが、その通路に雪が仁王立ちしていた。
「アナライザー、お止めなさい!!」
「ゆ、雪サン・・・ボ、ボクハ・・・雪サンノタメニ・・・」
　アナライザーも雪に対して乱暴な行動はとれずに戸惑ってしまう。
　その隙に土門、揚羽、坂東がアナライザーを取り押さえ、鎖でグルグル巻きにして電子錠でその鎖をロックして動きを封じた。
「アナライザー、何故あんな真似をした!?」
　土門がアナライザーに暴れた理由を訊ねる。
「何故?キミタチハマダ僕ノ言ッテイル事ノ重大サガワカラナイノカ!?アンナ正体不明ナ星ヘ皆ヲイカセル訳ニハイカナインダ!!」
　アナライザーは古代たちを惑星ファンタムへ行かせないために強硬策を取ったのだと主張する。
「此奴、とうとういかれちゃったのかな?」
「マダソンナ事ヲ言ッテイルノカ!?オカシイノハ僕ジャナイ!!ヤマトノコンピューターノ方ダ!!」
　アナライザーのこの発言に真田も首を傾げる。
「しかし、アナライザー。ヤマトのあらゆるコンピューターが同じ結果を導き出しているんだ」
「確かに全てのコンピューターが一斉に故障する訳がない」
　揚羽も真田と同じ意見だ。
「と言う事は・・・」

坂東がアナライザーをジッと見つめる。
「な、ナンダ?ソノ目ハ!?」
アナライザーはロボットながらも嫌な予感を覚える。
「よし、分解して調べてみよう」
やはり、アナライザーの電子頭脳に異常があると判断し、アナライザーをバラバラに解体してその原因を調べてみようと坂東は工具を手にアナライザーへと迫る。
「ワァー!!ヤメロ!!アナライザー殺シ!!」
鎖で縛られているがアナライザーは身体をジタバタと動かして暴れる。
「なんじゃ?なんじゃ?何を騒いでおる」
そこへ佐渡が騒動を聞きつけてやってきた。
「アァ～佐渡先生～助ケテ～僕、殺サレルゥ～」
「なに?殺される?穏やかな発言じゃないの～」
「穏やかじゃないのはこっちですよ!!」
「そうですよ。アナライザーが暴れまわったせいで、惑星ファンタムの調査が遅れているんですから!!」
「まぁ、まぁ、ここは儂に任せてくれんか?アナライザーは儂の大事な友達だからのう」
佐渡は倒れているアナライザーを引き起こす。
「分かりました。では先生、アナライザーの事を頼みます」
一同はアナライザーを佐渡に任せて、惑星ファンタムの地表調査へと向かった。

アナライザーがヤマトの艦内で暴れている頃、まほろばでは・・・

まほろば　第一艦橋
「・・・」
良馬が浮かない顔でヤマトからのデータを見ながらまほろばのコンピューターで惑星ファンタムの事を調べていた。
しかし、結果はヤマトのコンピューターが導き出した結果と同じ

く、惑星ファンタムは地球と似た環境の惑星と言う結論が出た。
(やはり妙だ・・・・)
だがコンピューターの結果に良馬は納得がいかなかった。
(そう言えばギンガも惑星ファンタムを見て何だか上の空だったな・・・・)
(もしかして・・・・)
そして、ギンガが惑星ファンタムを見た際のリアクションを思い出す。
「通信長」
「は、はい」
「惑星ファンタムについて君の意見を聞きたい」
「えっ?」
良馬から惑星ファンタムについての意見を求められギンガは一瞬唖然とする。
「惑星ファンタムについて・・ですか?」
「ああ。何だか、惑星ファンタムの姿を見て君は上の空みたいだったしね」
「その・・・・」
良馬からの指摘を受け、ギンガはおもむろに口を開く。
「皆さん、惑星ファンタムの姿を見て地球にそっくりだと言っていたんですけど・・・・」
「けど?」
「私の目から見た惑星ファンタムの姿はどう見ても私の故郷であるミッドチルダに似ているんです」
「・・・・」
ギンガの目には惑星ファンタムが地球ではなく生まれ故郷であるミッドチルダに見えるのだと答えた。
(ギンガの目には彼女の生まれ故郷であるミッドチルダに見える・・か・・・・)
魔導師兼戦闘機人であるギンガが地球とミッドチルダを見間違える筈がない。

（となるとリニスにも惑星ファンタムの姿がミッドチルダに見えるのかもしれないな・・・）
　ミッドチルダ出身のギンガには惑星ファンタムの姿が生まれ故郷であるミッドチルダに見える。
　そして地球出身のヤマト、まほろばの乗員たちには惑星ファンタムが地球に見えると言う。
　良馬は念の為にリニスへ念話を飛ばす。
（リニス・・・リニス・・・）
（は、はい。なんでしょう？）
（ギンガに聞いたんだが、ギンガには惑星ファンタムの姿がミッドチルダに見えるらしい・・・）
（・・・）
（もしかして、リニスにも惑星ファンタムの姿がミッドチルダに見えるのかと思って今こうして念話で確認をとっているんだが・・・？）
（リニスにもやはり惑星ファンタムの姿はミッドチルダに見えるのかい？）
（は、はい。原田さんは惑星ファンタムの姿が地球に見えると言うのですが、私の目には惑星ファンタムの姿は、ミッドチルダに見えます）
（・・・）
　ギンガ同様、リニスも惑星ファンタムの姿はミッドチルダに見えると回答がきた。
（マスターには惑星ファンタムの姿はやはり地球に見えるのですか？）
　良馬は地球出身なので、原田と同じく当然惑星ファンタムの姿は地球に見えるのかとリニスはそう思っていた。
（いや、それが・・・）
　良馬がリニスに自分の目に映る惑星ファンタムの姿を語ろうとした時、
「艦長、ヤマトからコスモハウンドが発進し、惑星ファンタムの地表探査へ向かうみたいです」
　新見がヤマトの動きを報告する。

「あっ、うん。分かった。またボラー連邦の襲撃があるかもしれない。全方位警戒のまま待機だ」
「了解」
　良馬がリニスに惑星ファンタムの姿がどのようにして見えるのかを伝える前にヤマトの方に動きがあり、この惑星ファンタムがある宙域がガルマン・ガミラスとボラー連邦との国境線付近であるため、ボラー連邦のガルマン・ガミラス領への侵攻艦隊や国境警備艦隊と遭遇する可能性もあるので、まほろばは警戒態勢のままコスモハウンドからの調査報告を待つことになった。
（惑星ファンタムへ降りてしまうのか・・・）
（何事もなければ良いのだが・・・）
　アナライザー同様、惑星ファンタムに対して不信感が拭えない良馬は地表探査で何か危険がなければ良いと願うばかりであった。

　アナライザーの妨害があり、予定よりも多少調査に遅れたが、コスモハウンドは無事に惑星ファンタムの地上に着陸した。
　コスモハウンドの中では真田が惑星ファンタムの空気の成分の最終チェックを行い、宇宙服なしで行動できるのかを判断する。
「よし、最終チェック終了・・・この惑星ファンタムでは宇宙服なしで行動できるぞ」
　第二の地球の条件が空気の成分が地球と同じと言う事なので、惑星ファンタムの空気成分はそれをクリアしていた。
　コスモハウンドの下部ハッチが開き、古代、雪、真田、坂東、揚羽、土門の順で惑星ファンタムの地へと降りた。
　コスモハウンドの他に機材と隊員を乗せた上陸用舟艇も惑星ファンタムへ着陸し、隊員たちも機材を惑星ファンタムの地に降ろしていく。
　一同は周囲に人工物が一切存在しない大自然の風景にしばし見とれた。
　古代は胸いっぱいに惑星ファンタムの空気を吸い込む。
「空気がおいしいわね」

雪も古代の隣で深呼吸をして地球と似て異なる惑星ファンタムの空気に関して感想を口にする。
「ああ・・・地球も大昔はこんな空気だったんだろうな・・・」
人が文明を築き、その文明を発展させるために人類は地球の環境を汚染した。
しかし、この惑星ファンタムには人類の様な知的生命体が存在せずに自然のみの環境下なので、空気が地球よりも綺麗だった。
「あっ、あそこ」
雪が指さした先には地球に存在する野うさぎと同じ姿のうさぎが居た。
「おーい、こっちに小川があるぞ!!」
揚羽が近くを流れる小川を見つけ声をかける。
「おぉぉ～冷てぇ!!」
土門が小川に手を入れ水の冷たさに思わず声をあげる。
「自然を堪能するのは後だ!!これより各班事に作業をする!!技術班はベースキャンプの設営、生活班は動植物の調査、戦闘班は周囲の偵察だ!!以上!!」
古代は各班の役割を伝えると、各班員は命じられた作業を行い始める。
そんな中、揚羽と土門はエアースクーターで惑星ファンタムの森の中を走っていた。
本来ならば土門は生活班なので、惑星ファンタムの動植物の調査であったが、偵察要員の戦闘班の人数が少なかったので、土門にはそちらに回ってもらった。
森の中を走っているとまるで童話の中の森の様にうさぎや鹿などの動物が小川で水を飲んでいたり、草を食べていた。
時折、小鳥の鳴き声も聞こえ木の上にはリスに似た小動物が木の実を齧っている。
「なぁ、土門」
「なんだ?」
「綺麗な所だな」

「ああ、そうだな」
「こんな綺麗な森の中をカワイ子ちゃんと一緒にドライブ出来たら最高だと思わないか？」
「ああ、そうだな。隣に居るのが野郎じゃあ全然楽しくないからな」
「そりゃあお互い様だ」
「ハハハ・・違いない」
　軽口を叩きながら森の中を進んで行く二人。
「この星の調査が終わって第二の地球と認定されたら、当然地球に居る人たちはこの星に移住するんだよな？」
「そりゃあそうだろう。地球はもうすぐ、人が住めない星になるんだからな」
「そうなれば、またティアナやうららたちと会えるな」
「そうなるな」
「そうなると、俺たちはあいつらにとって救世主になる訳だな。何せ地球人類の移住先を見つけたんだから」
「そうだな。アイツらは俺たちに一生頭が上がらないだろうな」
「ハハハ・・・・」
　地球に居るティアナとうららに事を思い出し笑いあっている中、二人は慌ててエアースクーターのブレーキをかけ、前方を見てハッとした。
　何しろ前方に死んだ筈の土門の両親、そして地球に居る筈の揚羽の両親が微笑みを浮かべながら立っていた。
「お、親父・・・・お袋・・・・」
「そ、そんな・・・・まさか・・・・」
　揚羽と土門はギョッと目を見張る。
　しかし、二人の前方には確かに二人の両親が立っている。
　揚羽と土門の二人は思わず互いに顔を見合わせた。
　揚羽と土門の二人が森の中で互いの両親の姿を見つけた時、コスモハウンドの着陸地点の近くでは技術班がベースキャンプを設営し、テントの中では調査機器が置かれ、チェックリストを手にした真田が坂東たち技術班を指揮して調査機器のチェックをしていた。

「パワーレベル正常」
「よし」
「大気センサー一号、二号、三号、正常」
「よし」
「分析コンピューター、通信装置作動・・・正常に稼働」
「よし」
　多数の調査機器の稼働チェックを終えた真田はコスモハウンドの中の機械と連動しているかチェックしようとテントを出た時、ふと人の気配を感じそちらへ視線を向けると、そこにはこの場に居る筈のない人物たち・・・イスカンダルに居る筈の古代の兄、古代守、その妻のスターシア、娘のサーシア、友人のトチローの姿があった。
「こ、古代・・スターシア・・サーシア・・それに大山も・・・そ、そんなバカな・・・」
　真田は眼前に現れた人物の姿を見て思わず手に持っていたチェックリストを落とす。
　揚羽、土門、真田が本来ならば、あり得ない人物たちと遭遇している頃、古代と雪たち生活班の面々は惑星ファンタムに生息する動植物の調査を行っていた。
「さっきもチラッと見たけど、やっぱり水も綺麗ね・・・」
　雪が森の中に流れている小川を見つめていると、水面に雪以外の人の姿が映った。
「えっ？」
　雪が水面に映る人物たちの姿を見て、顔を上げると小川の対岸には地球に居る筈の雪の両親が立っており彼女の事を微笑みながら見つめていた。
「こ、古代君・・・あ、あれ・・・」
　雪が近くに居る古代に自分の両親が居る事を伝えようとすると、古代も信じられないと言った表情で小川の対岸を見ていた。
　雪も古代が何を見ているのか視線を向けると、
「っ!?」
　雪自身も古代同様、目を見開いて驚く。

古代と雪の視線の先には死んだ筈の沖田艦長が立っていたからだ。
「お、沖田艦長・・・」
「そ、そんな・・・こ、古代君、一体どういう事なの？」
「わ、分からない・・・」
古代も雪も眼前に居る沖田艦長の姿が信じられなかった。
兎も角、死んだ筈の沖田艦長が自分たちの目に前に立っている筈もないので古代たちは急いでその場から撤収して、ベースキャンプまで戻った。
ベースキャンプに戻るとあちこちから古代や雪同様、この星に居る筈のない人物の姿を見たと言う報告が相次いだ。
「君たちも見たのか!?」
「はい。自分は死んだ筈の両親の姿を・・・」
「俺は地球に残してきた筈の彼女の姿が・・・」
「私は昔住んでいた家を見ました」
隊員たちは口々に自分たちが見たあり得ないモノを報告する。
「家までも・・・」
報告を受け古代は思わず絶句し、雪と顔を見合わせた。
そこへ、真田も古代に自分が見たモノを口にする。
「古代・・・俺も見たぞ・・・」
「真田さんも!?一体何を見たんですか？」
「イスカンダルに居る筈のお前の兄・古代守とその妻、スターシア・・・娘のサーシアと大山の姿もあった」
「兄さんにスターシアさん・・・それにサーシアとトチローさんも・・・」
イスカンダルに居る筈の守やスターシアたちがこの惑星ファンタムに移住している可能性は極めて低い。
「真田さん、これは一体どういうことなんでしょう？」
「うーむ・・・最初のイスカンダルでの航海でサイレンの星近海で見た現象と似ているが・・・」
第一次イスカンダル航海でヤマトの乗員たちは、ガミラス領サイレンの星近海でサイレンの星に幽閉されていたデスラーの妻であり、

ジュラの母親であるジレル人のメラがヤマトの艦内で幻を見せた事があった。
今回自分たちが見た人物たちや建造物はまさにあの時の再来だ。
「この星の何処かにジレル星人が居るのでしょうか？」
「それにしてはヤマトのコンピューターで生体反応が無かったのはおかしい」
事前の調査で生物が存在しているのは確認出来ているが、知的生命体の存在は確認できていない。
ジレル星人は当然知的生命体に該当するので、ヤマトのコンピューターに引っかからないのはおかしい。
「しかし、我々はあり得ないモノを実際にこの目で見ている訳ですし・・・・」
この幻の騒動がジレル星人の仕業なのかと思われていた時、
「あっ、あれはっ!?」
誰かが悲鳴のような声を上げた。
一同が視線をある方向へ向けると、彼らの視線の先にあったのは・・・・
「そ、そんなっ!?」
「ば、バカなっ!?」
「あ、あり得ない・・・・」
「なんでこの星にアレが・・・・」
何と惑星ファンタムに絶対にありえない人工の建造物・・・・
地球のメガロポリス東京にある筈の英雄の丘と沖田艦長の銅像がそこにあった。
「え、英雄の丘・・・・？」
「どうして英雄の丘が惑星ファンタムに・・・・？」
「でも、あれは間違いなく英雄の丘だ!!」
この星に絶対にあり得ない英雄の丘の登場に一同は唖然としていたが、やがて本当にあそこにあるのは英雄の丘なのか確認しようと駆け寄ろうとしたが、英雄の丘と沖田艦長の銅像は一瞬のうちに消えてしまった。

「き、消えた!?」
「あれも幻だったのか!?」
「雪、今の見たか?」
古代は雪に先ほど自分たちの前に出現した英雄の丘を見たのかを訊ねる。
「ええ、見たわ。はっきりと・・・あれは間違いなく英雄の丘だったわ」
雪も先ほど現れた英雄の丘を見たので、どうやら自分の見間違いではない様だ。
「どうしてこんなことが・・・」
森で見た地球に居る筈の両親の姿に先ほど見た英雄の丘・・・揚羽は信じられない様子で首を振る。
「真田さん・・・」
古代は真田に視線を向ける。
「わ、分からない・・・俺にもさっぱりだ・・・古代、ここはデスラーに連絡をとって惑星ファンタムについて問い合わせてみてはどうだろう?」
この惑星ファンタムの情報を自分たちに教えたデスラーならば、何か知っているかもしれない。
デスラーに自分たちの惑星ファンタムの到着を伝えると共にこの星で起きている現象についても彼には訊ねてみる価値はありそうだ。
「そうですね。早速、デスラーに聞いてみます」
古代が頷くと、真田は坂東たちの方へと顔を向ける。
「俺たちはもう一度、調査をしてみる。坂東、ベースキャンプに戻ってこの星の再調査だ!!」
「は、はい!!」
真田と坂東たち技術班のメンバーは急ぎベースキャンプへと戻って行った。
(惑星ファンタム・・・此処は宇宙の亡霊の住処なのか?それとも昔話で人を化かす狸や狐の様な能力を有する生物が存在しているのだろうか?それともジレル人が既にこの星に居るのか・・・?)
(アナライザーの言っていた危険とはこの事だったのか・・・?)

古代は惑星ファンタムに広がる草原を見渡しながらこの星の何処かに人を惑わす正体不明な魔物が潜んでいるかもしれない事に思わず生唾を飲み込んだ。

そんな古代の緊張を煽るかのように惑星ファンタムの草原には生暖かい風が吹き抜けた。

百七十一話　幻の正体を突き止めろ

惑星ファンタムにて、調査の為に同惑星へと上陸したヤマトの乗員たちが本来ならばあり得ない人物や建造物の幻を見ている時、その惑星ファンタムの情報をヤマトへ提供したガルマン・ガミラス・デスラーは・・・・

ガルマン・ガミラス本星　デスラー・パレス　デスラーの居室

ヤマト・地球の為にと宿敵であるボラー連邦・ベムラーゼにホットラインを繋ぎ、ヤマト・地球に関して休戦を申し入れるもあっさりとベムラーゼから徴発され断られたデスラーはまさに怒髪冠を衝く勢いでベムラーゼとのホットラインを切った。

それからしばらくして冷静さを取り戻したがこのままボラーを放っておく訳も無く、

「キーリング!!キーリング!!」

総参謀長のキーリングを急ぎ呼び出した。

呼び出されたキーリングはデスラーの様子から火急の要件と判断し、慌ててデスラーの下へと向かう。

「総統閣下、何事でございますか？」

「キーリング!!各方面の司令部へ緊急伝だ!!」

「はっ!!」

「ボラー連邦の領海内へと侵攻し、奴らを挑発せよ!!」

「挑発・・・・ですか？」

「そうだ!!奴らの領内に深く侵攻しなくともよい!!国境線付近のボラー艦隊や彼奴等の基地を攻撃しすぐに引き上げさせろ!!その行為を何度もあちこちの宙域で繰り返すのだ!!」

「し、しかし、何故そのような挑発行為を・・・？」

キーリングとすれば少し前にボラー連邦領内への本格的な侵攻作戦の会議を行ったが、このような挑発行為はその作戦に含まれてはい

なかった。
「ボラー領内の至る所で我々の挑発行為が起き続ければ奴らには緊張感が生まれ、それが高まる。そうなればベムラーゼの奴は地球に・ヤマトに構っている暇は無くなる筈だ!!」
　デスラーは自身を・ガルマン・ガミラスをボラー連邦に引き付け、地球から・ヤマトから注意を逸らそうとした。
「はっ!!直ちに命令を各戦線へ伝達します!!」
　自国の利益よりも地球側にどちらかというとメリットがあるような作戦内容であるが、デスラーからの直接の命令に異議を唱える訳にもいかないので、キーリングは各戦線の司令官にデスラーからの命令を伝えに行く。
（フフフ・・・・ベムラーゼの豚が!!この私が老いたかどうか今に吠え面をかかせてやる!!）
　先ほどのホットラインのやり取りを思い出し、ベムラーゼの悔しがる姿を想像してデスラーは不敵な笑みを浮かべる。
　そんな中、キーリングがいそいそとした様子で戻って来た。
「総統閣下」
「どうした?キーリング。各戦線に命令は伝えたのか?」
「はい。伝達致しました。それで、ちょうど各戦線へ伝達した後に惑星ファンタムに居る宇宙戦艦ヤマトの艦長から総統閣下宛てに通信が入っております」
「古代から・・・・?」
　惑星ファンタムに居るヤマトから通信が来たと言う事で、デスラーはファンタムが地球に似た星であった礼の通信かと思い、パネルのスイッチを入れた。
「古代・・どうした?無事に惑星ファンタムに到着した様だが、惑星ファンタムは地球の環境とは異なる星だったのか?」
「いや、大気の組成、星の大きさ、自転周期など地球に似た星だったのだが・・・・」
　古代は何だか気まずそうな表情をする。
「ん?地球に似た星だったのであるならば、何か別の問題でもあった

のか？」
「いや、まだ本格的な問題・・・と言う訳ではないんだが・・・」
　古代は惑星ファンタムの地表探査中に見た幻の事をデスラーに伝える。
「なに？惑星ファンタムに幻が現れた？」
「ああ・・・それも本来ならば惑星ファンタムに現れる筈がないモノばかりなんだ・・・俺は惑星ファンタムの森で沖田艦長の幻を見た」
「なっ!?沖田の幻だと・・・？」
「デスラー、幻について何か心当たりがないか？」
「心当たり？」
「ああ、惑星ファンタムの情報について我々に送り忘れたデータや情報はないか？」
「いや、それは絶対にあり得ない。我々が持つ惑星ファンタムの情報は全て渡した」
　デスラーとしては惑星ファンタムについての情報でヤマトに隠すようなマズい情報などなく、ファンタムの情報について出し惜しみをする理由もない。
「古代、惑星ファンタムは地球そっくりな星だったのだろう？」
「ああ」
「・・・もしかして古代たちが見た幻は嬉しさのあまりに見た集団幻覚だったのではないか？」
「集団幻覚・・・」
「左様・今の所、幻の原因はそれ以外考えられない」
「・・・デスラー、惑星ファンタムにジレル星人が住んでいる可能性はないか？」
「ジレル星人・・・メラと同じ星の住人か・・・いや、それはない。そもそも純血のジレル星人はメラが最後の一人だった筈だ。私との混血であるジュラは今、地球に居る筈であるし、惑星ファンタムにジレル星人が居る筈がない」
　デスラーは自身の妻であるメラが最後のジレル星人だと思っていたが、ジレル星人は密かに生きており、惑星とほぼ同じ大きさの方舟

に乗り今も宇宙の何処かを放浪している。
(デスラーはジレル星人がまだ生き残っている事を知らないのか・・・・?)
古代はデスラーとの会話の中で、良馬とバーガーがシャンブロウで出会ったジレル星人の生き残りの事を知らない様子であり、ジュラもバーガーもデスラーには話していない様だ。
ジレル星人はガミラスでも魔女として恐れられている種族なので、ジレル星人の存在を知らせたら魔女狩りの様なジレル星人狩りが行われるかもしれないと思ったのだろう。
ガルマン・ガミラスでも惑星ファンタムでジレル星人の反応は探知していない様子から、デスラーの言う通り、惑星ファンタムにジレル星人はもしかしたら居ないのかもしれない。
「分かった。ありがとう・・こちらでももう一度、惑星ファンタムについて調べてみる。忙しい中、すまなかった」
そう言って古代はデスラーとの通信を切った。
「・・・・キーリング」
「はっ!!」
「君は今の話を聞いてどう思う?」
デスラーは傍に控えていたキーリングに惑星ファンタムの幻についての意見を求める。
「私にも見当がつきません。ですが、我々がヤマトに送った惑星ファンタムについての情報に誤りがあるとも思えません」
「当然だ。我々の情報に誤りなどない!!だが、古代があのような嘘をわざわざ私につく理由もない」
「おっしゃる通りでございます」
「キーリング・・・・」
「はっ!!」
「もしも・・だ・・・・もしも、此方が調査した情報に落ち度があった場合、太陽制御に次ぐ我々の大きなミスに繋がる。その様なミスは絶対に許されない。地球に・・古代に対して一生かかっても償えない大失態に繋がる。キーリング、直ちに惑星ファンタムへ調査船を向かわせ詳

しく調査させるのだ」
「かしこまりました。地質学のベテランであるヘルマイヤー少佐を直ちに惑星ファンタムへ向かわせます」
キーリングは再び急ぎ足でデスラーの居室から指令室へと向かい、ヘルマイヤーに惑星ファンタムへの調査を命じた。
それから五時間後、ガルマン・ガミラスの宇宙港から一隻の調査船が発進した。

「直ちにワープ航法に入る。目標、惑星ファンタム」
惑星ファンタムがガルマン・ガミラスとボラー連邦との国境線付近で、調査船は大した武装を装備していないので、ボラー連邦の艦隊と出くわしたらまともに戦うことは出来ない。
よって安全で尚且つ最短距離で惑星ファンタムへ行くにはワープ航法しかない。
ガルマン・ガミラスの宇宙港発進した調査船はワープにて惑星ファンタムへと向かった。

そして、デスラーが調査船を向かわせた惑星ファンタムの地表にあるベースキャンプでは・・・・

ベースキャンプに設置されたテントの中には惑星探査用の機器が所狭しと並べられており、真田たち技術班の隊員たちがその機械を操作している。
「どうですか?真田さん」
そこへデスラーとの通信を終えた古代がやってきて真田に新たな調査結果が出たか訊ねる。
「ダメだ。コレを見てくれ」
真田は首を振りながら古代に出たばかりの最新の調査結果を見せる。
「ソレを見ても分かる通り、何度調査をしても結果が変わらない・・・・

惑星ファンタムは地球と環境がそっくりな惑星である・・・その答えしか出ない」
「では、我々が見た幻は一体何ですか？惑星ファンタム自体に問題がないとすると・・・」
流石に環境が地球とそっくりな星でも幻が度々出現するようでは日常生活に支障をきたす恐れがある。
地球人類がこの惑星ファンタムへ移住するには幻が出現する原因を突き止め、それを止めなければならない。
デスラーの言葉やコンピューターの結果からこの星にジレル星人が居る気配はない。
となると、この惑星ファンタムに生息する生物にジレル星人の様に幻術を見せる生物が居るのかもしれないが、地球の建物や過去の人物をあそこまで鮮明に幻として投影する事がいくら他の星の生物・動物に出来るだろうか？
そんな疑問もある。
真田や古代たちが惑星ファンタムに現れる幻についての原因に首を捻っていると、
「もしかしたら・・・」
雪は口を開く。
「あの幻は私たち全員が思いもかけなかった地球そっくりの星に出会ったでしょう？その横小人心身の疲れからきた一種の集団幻覚じゃなかったのかしら？」
「デスラーも同じことを言っていたよ」
「デスラーが・・・？デスラーは他に何か言っていなかったか？この星についてまだ送り忘れている情報とか？」
真田の問いに古代は首を横に振る。
「自分たちが送った情報が全てだと・・・」
「そうか・・・」
「となると、やはり調査メカが何らかの不具合でみんな狂ったのかな・・・？地球でも電波障害で機械が狂った事があったし・・・」
土門が地球で起きた電波障害で地球のありとあらゆる機械が狂っ

た事があったので、今回の惑星ファンタムにおける調査でもそれに似た現象が起きたのではないかと推察する。
　その言葉に坂東たち技術班員たちが一斉に顔をあげる。
「いや、それはない」
「そうだ。電波障害なんて観測されなかった」
「ああ、調査メカは全部正常に動いていた」
　坂東たち技術班員らは地球で起きたような電波障害は起きておらず、調査メカも壊れていないと否定する。
「いや、念のためだ。全部のメカをチェックするぞ」
「は、はい」
　真田は可能性の一つを確実に潰すためにもう一度使用した調査メカ全てのチェックを行う。
　坂東たちは不承不承な様子でメカのチェックを行った。
「どんな小さな原因も見逃すな!!細心の注意を払ってチェックするんだ!!」
『はい!!』
　やがてベースキャンプのテント内に技術班員たちの声が響く。
「パワー・レベル、異常なし!!」
「各センサーの接続、異常なし!!センサー正常に稼働中!!」
「回路チェック・・・異常なし!!」
「コンピューター作動・・・順調に稼働中、異常なし!!」
　技術班員たちがメカの総チェックを行っている様子を古代たちはジッと見守っている。
　やがて、全てのメカのチェックが終わり、
「やはり、全ての調査メカに異常はありません」
「メカに異常が無いとなると他に幻の原因を探すしかないな・・・」
　機械に異常が無いとするとやはり、この惑星ファンタムに生息する生物の中に幻を見せる生物が居るのかと思われた。
「待てよ・・・アナライザーだ!!」
　そんな中、真田が思い出すかの様にアナライザーの名を口にする。
「アナライザー?」

「ああ。アナライザーだけ、此処にあるメカとは違う結果を導き出した」
「そう言えば・・・」
　アナライザーは古代たちに、
「オカシイノハ僕ジャナイ!!ヤマトノコンピューターノ方ダ!!」
　と、ヤマトに搭載されているメカが異常な結果を導き出していると言い放っていた。
「確かに、アナライザーは私たちをこの星に上陸させまいとして大暴れして・・・」
　雪も惑星ファンタムの上陸する前におけるアナライザーの言動を思い出す。
「アナライザーだけが、この星の異常を探知したんだ!!」
「よし、もう一度アナライザーを使って調査をしてみよう」
　唯一異なる結果を導き出したアナライザーにこの星を調査してみると何か幻の原因が分かるかと思い、ヤマトに通信を送った。
　その頃、アナライザーはヤマトの医務室で不貞腐れていた。
「アノ星ハオカシイノニ、何デ誰モワカッテクレナインダ!!」
「儂はお前さんの事を信じとるよ」
「先生ニ信ジテ貰ッテモ、モウ遅インデス!!」
「まっ、此処は一杯飲んで冷静にならんか?」
　佐渡はアナライザーに酒が入ったコップを渡す。
「先生、先生ハコンナ時ニ、僕ニ御酒ヲ飲メト言ウノデスカ!?」
「儂は無理に飲めとは言わんよ。だがむしゃくしゃしている時は酒を飲んで忘れてしまうのが一番じゃよ」
「・・・イタダキマス」
　そう言ってアナライザーは佐渡から酒の入ったコップを受け取り、頭から酒を浴びる。
「ヒック・・・先生、モウ一杯」
「おう、飲め、飲め」
　佐渡はアナライザーが差し出したコップに酒を注ぐとアナライザーは再び酒を頭から浴びる。

そんな行為を何度かするとアナライザーは酔い潰れた（？）のかその場に倒れた。
「やれやれ、酔い潰れて寝てしもうたか・・・」
佐渡は寝てしまったアナライザーに苦笑する。
そこへ、惑星ファンタムの地上へ降りた真田から通信が入った。
「はい、こちら医務室」
「あっ、先生、アナライザーいますか？」
「アナライザー？ああ、おるよ。だが、酔っ払って酔い潰れておる」
「酔いつぶれた!?・・・参ったな・・・」
「なんじゃ？何か起きたのか？」
「ええ・・・先生、アナライザーを起こしてもらえますか？」
「うん、ちょっと待っとれ・・・おーい!!アナライザー!!出番じゃぞ!!おーい!!起きろ!!アナライザー!!」
佐渡はアナライザーに声をかけ、ボディーを揺すり起こそうとするが、
「ｚｚｚｚ・・・」
アナライザーは起きる気配がない。
「起きましたか？アナライザーは・・・？」
「いや、声をかけたんじゃが、起きる気配が全くない」
「起きる気配がない・・・うーん・弱ったな・・・」
「真田さん、アナライザーは？」
「どうも酔い潰れてしまったらしい」
「酔い潰れた!?」
「ロボットなのに酔い潰れるのか？」
「アナライザーは何処か普通のロボットとは違う所があるな・・・」
「やっぱり、電子頭脳のどこかにバグがあるんじゃあ・・・」
まさか、アナライザーも此処に来て自分の出番が来るとは思っても居なかったので、『もうどうにでもなれ』という気持ちで酒を浴びて酔い潰れていた。
元々、アナライザーの言葉を一切信じなかった自分たちにも非があるので、無理矢理アナライザーを叩き起こしたり、酔い潰れたアナラ

イザーに文句は言えなかった。
「どうします？アナライザーが起きるまで待ちますか？」
「でも、アナライザーの奴はいつ起きるんですか？」
「それは分からん」
　調査の要であるアナライザーが使えなくなり、調査が出来なくなり頭を抱える古代たち。
　アナライザーが起きるまで待つこともできるが、地球に残された時間は有限なので出来れば無駄な時間を消費することは出来ない。
　そんな中、
「あっ・・・・」
　古代が思い出したかのように声をあげる。
「もう一つ手があります」
「なんだ？」
「月村艦長ですよ!!」
「月村艦長？」
「ええ、月村艦長もこの星の調査には消極的でした。もしかしたら、月村艦長もこの星の異常を察知していたのかもしれません」
　アナライザーが酔い潰れてしまいいつ起きるか分からない状況で、自分たちとしては惑星ファンタムの調査を少しでもはやく終わらせた古代たちは藁をもつかむ思いで今度はまほろばへ通信を入れた。

　まほろば　第一艦橋
「艦長、惑星ファンタムに降りた古代艦長から通信が入っています」
「古代艦長から？分かった。モニターに回してくれ」
「了解」
　ギンガが通信回路を開くと艦長席のモニターに古代の姿が映る。
「古代艦長、どうしました？」
「月村艦長、実は・・・・」
　古代は良馬に惑星ファンタムで幻が出現する話をした。
「幻・・・・」
「はい。当初は調査メカの不具合やジレル星人が密かにこの星に居る

のではないかと思いましたが、どれも外れで・・・」
「なるほど・・・今の所、幻以外に何か異状は？」
「まだありません」
（古代君としてもやっと見つけた地球そっくりな星を簡単に諦めたくはないのだろうな・・・だが・・・）
「それで、月村艦長にこの幻の原因を突き止めてもらいたいんです」
「えっ？俺に・・・？」
「はい。月村艦長は以前、ヤマトに侵入してきた暗黒星団帝国のロボットを本物のトチローさんをあっさりと見分けたじゃないですか。それに月村艦長はこの星への上陸にも消極的でしたし・・・」
「・・・分かった。直ぐにそちらへ向かおう」
　古代から事情を聞いた良馬は惑星ファンタムへ向かうことにした。
「あっ、艦長・・・」
　惑星ファンタムへ行く事になった良馬にギンガは声をかける。
「ん？何かな？」
「その・・・艦長には惑星ファンタムはどのように見えているんですか？」
　ギンガはリニスと同じ質問をした。
「やはり、皆さんと同じく地球に見えるんですか？」
「・・・いや、何かこう・・・毒々しい色の星に見えるんだ」
「毒々しい？」
「ああ・・・地球の海は青く、宇宙から見た地球が青く見るのはその為だろう？」
「ええ・・・ミッドチルダでも地球同様、海が青く宇宙から見たミッドチルダも青い星です」
「へぇ～ミッドチルダも青い星なんだ・・・」
「はい」
「それで、惑星ファンタム何だが、海の部分らしき箇所は青みがかった紫色をしていて、大地の部分は淡い緑色をしている感じの不気味な惑星に見えるんだ。勿論、こんな色の惑星はこれまでの防衛軍軍人の経験の中で見たことがない・・・恐らくあれが惑星ファンタムの本当の

姿なのだと思う」
「・・・・」
　良馬の話を聞きギンガは唖然とする。
「それじゃあ、行ってくる。副長、すまないが少しの間、艦の指揮を頼む」
「は、はい。気をつけてください」
　良馬は副長の新見に艦の指揮権を一時渡して惑星ファンタムへ向かった。
　良馬は念のためにバトライザーも一緒に連れて上陸用舟艇にて惑星ファンタムへと到着した。
（・・・・俺が集合体恐怖症じゃないから良かったけど、これはキツイな・・・・踏んでも大丈夫か？）
　惑星ファンタムの大地を見た良馬は踏んでも大丈夫なのかと不安になるが、古代たちは普通に惑星ファンタムの地に立っているので、大丈夫だろうと判断して惑星ファンタムの地に降り立った。
「月村艦長、わざわざ来てもらってすみません。アナライザーが使えればよかったのですが・・・・」
「いや、これも地球の為だからね。一応、バトライザーも連れて来た」
「それで、早速なんですが惑星ファンタムに出る幻の正体について調査をしてもらいたいのですが・・・・」
「分かった。ただあまり他の人に見られたくはないから、ベースキャンプのテントを使わせてもらうよ。テント内にはバトライザー以外入れないでくれ」
「分かりました」
　ベースキャンプにあるテント内に居た技術班員たちには訳を話しテントの外へ出てもらい、良馬とバトライザーがテント内に入る。
「本当に分かるのか？」
「バトライザーはアナライザーの後続機だから何とかなるかも」
　技術班員たちは良馬ではなくバトライザーがアナライザーに代わって調査するのだと思っていた。
「結果が出れば良いけど・・・・」

雪はテント内に入る良馬とバトライザーを見送りながら呟く。
「ああ・・・結果が出るまで皆、待機をして英気を養ってくれ」
『はい!!』
『了解!!』
結果が出るまでは古代たちにやるべき仕事がないので、結果が出るまでは待機となった。
待機命令が出た事で幻がまた現れるかもしれないが、一同は思い思いに惑星ファンタムの地に散らばる。
草原の一角にて揚羽と土門は二人で寝転がる。
「こうやって草っ原に寝転がるなんて何年振りかな」
「ああ・・・」
幼少期の頃はこうして草原で遊びまわり、寝転がる事もあっただろうが、揚羽は年を重ねていくにつれ、父親から将来の揚羽家を継ぐ為に帝王学や様々な習い事を無理矢理学ばされていき遊ぶ時間が減っていった。
そしてガミラスとの戦争へ突入し、人類が生活の場を地上から地下へと移した。
それから父親の反対を押し切って宇宙戦士訓練学校へ入学し、座学と訓練の日々を送っていたので、こうしたゆっくりとした時間を過ごす事も久しぶりであった。
「全く、草の感触といい、風の匂いといい、地球そっくりの星なのに・・・どういう事なんだろうな?あの幻は・・・」
「・・・」
揚羽はこの星に現れる幻について土門に意見を求めるが、土門は答えない。
「おい、土門・・・」
揚羽が土門に顔を向けると彼は転寝をしていた。
なので、揚羽も目を閉じて眠る事にした。
何かあれば古代から連絡が来るだろう。
揚羽がウトウトしだすと、
「アゲハサン・・・アゲハサン・・・」

どこからともなく自分を呼ぶ声が聞こえてきた。
「ん？」
揚羽が上半身を起こして周囲を見渡すが自分たち以外誰も居ない。
トランシーバーからの着信でもなさそうだ。
（空耳か・・・？）
揚羽が空耳かと思っていると、
「アゲハサン・・・」
再び自分を呼ぶ声が聞こえた。
「ん？」
揚羽は声がした方へ視線を向けるとハッと息を呑む。
茂みの向こうに一人の少女が立って居り手招きをしている。
「き、きみは・・・」
揚羽が少女に声をかけるが、うまく声が出ない。
彼は暫しの間、手招きする少女を唖然として見とれていたが、ハッと我に返り、
「おい、土門・おい!!」
隣で眠っていた土門の身体を揺すり起こす。
「どうした？」
「あそこ・・・」
揚羽が少女の居る方向を指さすが、その時には既に少女の姿は消えていた。
「あ、あれ？」
「何だ？何も居ないじゃないか」
「おかしいな・・・確かに今、女の子が居たんだが・・・」
「女の子？おいおい、また幻か？」
「ま、幻・・・？」
（あの子は幻だったのか？）
（いや、でもこれまで出現した幻は以前に出会った事のある人や行った事のある場所だった・・・あんな子、俺の人生の中で見た事も会った事もないぞ・・・）
揚羽が先ほど見た少女に首を傾げていると、空の彼方から轟音が聴

こえてきた。
「おい、見ろよ!!」
「あれは・・・ガルマン・ガミラスの艦か?」
空からガルマン・ガミラス所属の宇宙船が降りて来た。
「ともかく、艦長に報告しよう」
「ああ」
土門と揚羽はベースキャンプへと大急ぎで戻った。

揚羽が正体不明の少女の幻?を見ていた頃、惑星ファンタムの近くに一隻の宇宙船がワープアウトした。
まほろば　第一艦橋
「副長、近くでワープアウト反応を探知しました!!」
「ワープアウト!?数は?」
「一隻です。所属は・・・ガルマン・ガミラスです!!」
「ガルマン・ガミラスの宇宙船が・・・?通信長、通信を入れて」
「了解」
新見はワープアウトしてきたガルマン・ガミラスの宇宙船と早速コンタクトを取る事にした。
一方、ワープアウトしたガルマン・ガミラスの宇宙船の艦橋では、

ガルマン・ガミラス　調査船　艦橋
「ワープアウトを確認」
「ん?こ、これはっ!?あれが惑星ファンタムなのか?」
自分たちはデスラーの命令で惑星ファンタムを調査しに来たはずだが、今自分たちの眼前にある星の姿は出発した筈のガルマン・ガミラス本星にそっくりな色合いをしていた。
「こ、航海長、航路計算に間違いはないのか!?」
「は、はい。間違いありません!!本船の現在位置は星間座標、G三・Y五十一・B八・惑星ファンタムの星間座標です!!」
航路計算に間違いがない事を確認し唖然としていると、
「少佐、地球の戦艦まほろばより通信が入っております!!」

まほろばから通信が入る。
「よし、繋げ!!」
「はい!!」
ヘルマイヤーはまほろばからの通信を受信した。

まほろば　第一艦橋
「ガルマン・ガミラス艦、通信に出ます」
「こちらは地球連邦・地球防衛軍所属、宇宙戦艦まほろばです。そちらは？」
「こちらはガルマン・ガミラス帝国、惑星調査局所属の調査船ゾルネ号・・艦長のヘルマイヤーである」
「貴船の来訪目的をお訊ねしてもよろしいでしょうか？」
「我々はデスラー総統のご命令で惑星ファンタムの調査に来た」
「デスラー総統・・・なるほど分かりました。現在、こちらでも惑星ファンタムの地表調査が行われております」
新見はヘルマイヤーに惑星ファンタムの地表で古代たちが調査をしているベースキャンプの座標を送る。
「分かりました。そちらの調査員と合流しこちらでも調査をしてみます」
「了解です」
「・・・」
まほろばとの通信を終え、調査船は惑星ファンタムの地表へ着陸する。
惑星ファンタムの地表を見たヘルマイヤーを始めとした調査員たちは全員唖然とする。
何しろ惑星ファンタムの地表に広がる光景はまさにガルマン・ガミラス本星と何ら変わりがないからだ。
「ど、どういう事だ・・・」
「我々は間違いなく惑星ファンタムに到着した筈だ・・・」
調査員たちが困惑している中、
「つ、通信員」

「はっ!!」
「本国へ・・・デスラー総統へ通信を入れてくれ」
「了解」
　ヘルマイヤーはデスラーに惑星ファンタムの到着報告と共に惑星ファンタムがガルマン・ガミラス本星に似ている件についても報告を入れた。

　ガルマン・ガミラス本星　デスラー・パレス　デスラーの居室
「総統、只今惑星ファンタムへ調査に赴いたヘルマイヤー少佐より通信が入っております」
　キーリングがデスラーにヘルマイヤーからの報告が上がった事を伝える。
「よし、繋げ」
「はっ!!」
　モニターにはヘルマイヤーの姿が映し出される。
「ヘルマイヤー、どうした?」
「はっ、只今惑星ファンタムへ到着したのですが、惑星ファンタムは我がガルマン・ガミラス本星にそっくりなのであります!!」
「なに!?では地球にそっくりな星と言う情報は間違いだったのか!?」
「いえ、上空から観測した時には地球に似た青々とした星でした。ですが、我々が到着した時には・・・ご覧ください。こちらが惑星ファンタムの地表の映像です」
　ヘルマイヤーは艦橋から見える惑星ファンタムの地表の映像をデスラーに見せる。
　するとそこにはガルマン・ガミラス本星と何ら変わりない風景が映し出される。
　デスラーもキーリングもその光景に唖然とする。
「こ、これは・・・」
「ヘルマイヤー・・調べるのだ。徹底的にな。必要ならば、調査を始めている古代たちと協力しろ・・彼らは何か新しい情報を掴んでいるかもしれん」

「はっ!!」
ヘルマイヤーは敬礼して通信を切った。

ヘルマイヤーの調査船が惑星ファンタムに到着する少し前・・・
良馬がバトライザーと共にベースキャンプのテント内に入っていき、古代から待機命令が下り、各々が思い思いの時間を過ごしている中、坂東は良馬とバトライザーがどんな方法で調査をするのか気になり、テント周辺に人気が無い事を確認するとこっそりテントの中を覗き見た。
「ん?何やっているんだ?」
テント内に居る良馬は機械を弄る訳でもなく、地面に片手を置いている状態でバトライザーは良馬の傍で待機している。
その様子からとてもファンタムの・・幻の出現調査をしている様には見えない。
すると、突如虹色の眩い光がテント内に広がる。
「わっ!?な、なんだ?この光は!?」
あまりの眩しさに坂東は目を閉じる。
そして彼が目を開けると虹色のオーラを纏った良馬が居り、引き続き片手をファンタムの地に着けている。
幻同様、とても現実離れしている光景に坂東は急ぎその場から逃げた。
「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・な、なんだよ・・・?アレ・・・?」
良馬に訊ねたくても自分が覗き見していることがバレるので、坂東は黙っている事にした。
その後、ヘルマイヤーが乗った調査船が惑星ファンタムの地表に着陸し、出迎えるかのように調査船の傍に古代たちが集まっていると、ハッチが開きヘルマイヤーと彼の部下数名が降りて来た。
そしてヘルマイヤーは古代の前に立ち敬礼する。
古代たちも返礼し、
「ガルマン・ガミラス帝国、惑星調査局所属のヘルマイヤーです」
「宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進です。ヘルマイヤー少佐はどうして惑

星ファンタムへ？」
「私はデスラー総統の命を受け、惑星ファンタムの調査に参りました」
「それは・・・遠路はるばるご苦労様です」
「早速ですが、古代艦長」
「なんでしょう？」
「古代艦長をはじめ、地球の方々にはこの星がどのように見えていますか？」
「ん？どのように・・とは？」
「地球そっくりなのか？それともガルマン・ガミラス本星にそっくりなのか？であります」
　古代たちは訝しみながらも周囲を見渡す。
　古代たちの目にはどうみても地球そっくりな自然の風景に見える。
「我々には地球そっくりに見えます」
「・・・そうですか・・・不思議な事に我々ガルマン星人にはガルマン・ガミラス本星の風景に見えるのです」
「えっ？ガルマン・ガミラス本星に？」
「はい」
　ヘルマイヤーの返答にギョッとする古代たち。
　しかし、彼が嘘をついていたり、自分たちをからかっている様には見えない。
「するとこの星は見る人の民族、習慣、育った星の環境の違いによって姿が変わって見えると言う事ですか？」
「どうやらその様です」
「そんなバカな!?」
「それじゃあ一体、この星は何だと言うんです!?」
「まるで星自体が催眠術をかけているみたいじゃないですか!?」
　土門や揚羽たちが口々に騒ぎたてる。
　しかし、古代の指摘は事実であり、ヘルマイヤーにはガルマン・ガミラス本星の風景が・・・そして、ミッドチルダ出身のギンガとリニスにはミッドチルダの姿に見えていた。
　そこに、ベースキャンプのテントから良馬とバトライザーが出て来

た。
「あっ、月村艦長・何か分かりましたか？」
「ああ・幻の原因も何となくだが分かった。えっと・・・そちらの方は？」
古代の問いに答えた後、良馬はヘルマイヤーに気づき、古代にヘルマイヤーの事を訊ねる。
「こちらはデスラー総統が派遣してくださったヘルマイヤー少佐です。少佐、こちらは宇宙戦艦まほろばの艦長である月村良馬さんです」
「月村です」
良馬はヘルマイヤーに一礼する。
「ヘルマイヤーです。それで貴方はこの星における一連の幻覚の原因が分かった様子ですが、貴方の意見をお聞きしてもよろしいですかな？」
「簡単に言うとこの星は星であって星ではない・・・星の形をした生き物だ」
「星の形をした生き物？」
「そうだ。コスモ生命体・と言えばいいのかな？」
「コスモ生命体・・・その根拠は？」
ヘルマイヤーがこの星自体が生物であるコスモ生命体である根拠を訊ねる。
「この星からは常にスーパーサイコエネルギーが放出されている」
「スーパーサイコエネルギー？」
「バーチャルリアリティーみたいなモノだ。このスーパーサイコエネルギーによって人間の視覚、聴覚、嗅覚に影響を齎し、架空の風景を見せつけられている。しかもこれは生物だけではなく機械までもが正確なデータを導き出すことが出来ない程の強力なモノだ。このスーパーサイコエネルギーが幻の原因だろう」
「やはり催眠術の類か・・・」
「でも、何故そのような催眠術をかける必要があるんです？」
「それは宇宙の厳しい環境と外敵から自身を守る為だと思う。地球の

生物でも擬態をして敵から身を守る生物もいるからね」
「しかし、月村さん。貴方の調査は単なる憶測に過ぎません。物的証拠がない」
学者肌のヘルマイヤーは憶測だけでは信じず、物的証拠を提示しなければ信じない様だ。
「物的証拠・・・うーん・この星の地形図では足りないだろうか？」
良馬はヘルマイヤーや古代たちにファンタムの地形図を印刷した紙を手渡す。
それはマリモとウニを足したような形をしており、中心部に不思議な形の空洞が見える奇妙な地形図だった。
「これがこの星の地形図だ。肉眼で確認できる地形と異なって見える筈だ」
「ですが、これはあなた方の・地球側の証拠ですよね？私は私のやり方で証拠を掴みます」
「何をなされるのですか？」
「この星の地殻内部に探査ドリルを打ち込み探査します」
「ドリル!?ちょっと待ってください少佐。この星がコスモ生命体と分かった以上、そのような事をするのは危険だ。人間で言うなら心臓部に刃物を突き刺す行為と同じ様なモノだ!!」
万が一、地殻にこの星のコア・つまり星の心臓にドリルなんて打ち込めばどんな危険が起こるのか分からない。
短時間でこの星が自壊する可能性もある。
「ヘルマイヤー少佐、私からもお願いします。何もそこまでしなくとも、もっと別の調査方法があるのではないでしょうか？」
古代も良馬の話を信じてヘルマイヤーを止める。
「ですが私も科学者の一人です。他人の調査結果をそのまま鵜呑みにして帰る訳にはいきません。あなた方もご存知の筈です。かつて太陽制御のために地球へ赴いたフラウスキー少佐の技術にかけたあくなき執念と信念を・・・」
フラウスキーの名前を出され古代たちは強く言えなかった。
太陽制御は結果的に失敗に終わってしまったが、彼は地球を救うた

めに文字通り命を懸けたのだから・・・・
「彼は私の友人でした・・・そして私も彼と同じ科学者なのです。私自身の検証によって惑星ファンタムの正体を突き止めたいのです」
ヘルマイヤーはデスラーから現地に居るヤマトの乗員たちと協力しろと言われたが、やはり科学者故のプライドなのか自分自身の手で惑星ファンタムの正体を掴みたかった。
ヘルマイヤーはそう言い残し、部下と共に調査船へと戻って行く。
古代は黙って真田を見る。
「俺にも止められんよ。俺もフラウスキー少佐や彼と同じ科学者の端くれ・・・ヘルマイヤー少佐の気持ちも分かるからな」
真田はフラウスキーの事を思い出したのかうめくように言う。
(力任せの手段をとって大丈夫だろうか?何か嫌な予感がする・・・)
ヘルマイヤーの調査方法を聞いて良馬は不吉な予感が暗雲の様に胸中に沸き上がって来た。

百七十二話　ルダ王女

デスラーからの情報提供を受け、地球そっくりだと言われた惑星ファンタムへとやってきたヤマトとまほろば。
調査をしてみると大気の組成、惑星の大きさ、自転周期、重力など惑星ファンタムはまさに第二の地球と言える惑星であった。
ヤマト、まほろばの乗員たちはようやく見つけた第二の地球とも言える惑星の発見に歓喜するが、良馬、ギンガ、リニス、そしてアナライザーは惑星ファンタムに対して懐疑的な思いがあった。
そして、アナライザーは惑星ファンタムの地上調査を行わせないために暴れるも乗員たちの手により身柄を拘束されてしまう。
アナライザーが暴れた理由は、ヤマトのコンピューターの全てが『惑星ファンタムは地球とそっくりな惑星』という結果にロボットながら不信感を抱いたからだ。
アナライザーだけが異なる結果を主張した事から電子頭脳に異常があるのではないかと疑われ分解されそうになったが、そこを佐渡が通りがかりアナライザーの身請け古代たちは惑星ファンタムへの地上調査へと向かう。
実際に惑星ファンタムの地上を調査してみると宇宙から探査衛星で得たデータよりも詳しいデータが得られ、結論から惑星ファンタムは第二の地球と成り得る惑星と言う結果が得られるも調査をしていた古代たちの前に異星である惑星ファンタムでありえない人物や建造物の幻が出現する現状が起きた。
幻が出現する原因を調査するも調査メカには原因を解明できず、この星の情報提供をしたデスラーに訊ねるも、デスラー自身惑星ファンタムに幻が出現する事を知らなかった。
そこで、ガルマン・ガミラスでも惑星ファンタムの調査を念入りに行うことを決め、地質学のベテランであるヘルマイヤーを惑星ファンタムへと派遣した。
古代たちの方でも幻が出現する原因を調査しようとする中、唯一異

なる結果を導き出したアナライザーならば何かわかるかと思いアナライザーを惑星ファンタムに来てもらおうとするが、アナライザーは医務室にて酔いつぶれていた。
アナライザーが酔いつぶれて起きる気配がなく、調査が行き詰るかと思った中、古代は良馬がアナライザー同様、惑星ファンタムへの地上調査に消極的だったことや過去にトチローに変装した敵の変装ロボットを見抜いた事から良馬に惑星ファンタムの調査を依頼した。
そして、法術にて良馬は惑星ファンタムの正体を突き止めた。
ちょうどその時にガルマン・ガミラスから惑星ファンタムへやって来たヘルマイヤーが到着した。
良馬は惑星ファンタムの正体を古代たちヤマトの乗員、そしてヘルマイヤーに伝えた。
良馬が法術で得た惑星ファンタムの正体・・それは星の姿をした生き物・・・コスモ生命体であった。
しかし、ヘルマイヤーは科学者としてのプライドからか自分で立証すると意気込んで惑星ファンタムの地中へ調査ドリルを打ち込む調査を行うと言い出す。
コスモ生命体である以上、地中へドリル何て打ち込めば一体どんな事態になるのか分からない。
良馬はヘルマイヤーを止めるも彼は良馬の言葉を聞くことはなかった。
ガルマン・ガミラスの調査船が調査ドリルを準備している中、
「古代艦長・・・」
「はい」
「急いで撤収準備をした方が良い」
良馬は古代に急ぎファンタムから離れた方が良いと提案する。
「撤収・それはまたどうして？」
「さっきも言った通り、ファンタムは惑星に見えるが生き物だ。打ち込まれるドリルがどのくらいの大きさで、地中へどれくらいの深さに打ち込むのか分からないが、それでも十分に危険だ。万が一にもそのドリルがファンタムのコア・人間で言う心臓にドリルが達して、コア

を傷つけたらファンタムが崩壊するかもしれない」
「・・・」
　良馬の仮説に古代も真田も否定できなかった。
「ベースキャンプ・の全てを片付けるには時間がない。最低限の必要なモノを持って撤収した方が良い」
「わ、分かりました」
　まだ惑星ファンタムの正体がコスモ生命体なのかやや懐疑的なところもあるが、万が一、良馬の言っている事が事実の場合、ファンタムの崩壊に巻き込まれる可能性もある。
　取り越し苦労だったら、また戻ってくればいい。
　古代たちは急ぎ撤収準備を行った。
　ベースキャンプ全てを片付けるのは時間的余裕がなかったので、調査結果のデータが記録されているハード・メモリーを調査メカから外してコスモハウンド、上陸用舟艇へと運び込む。
　勿論、良馬とバトライザーも撤収作業を手伝う。
　急ぎ撤収準備が進められている中、揚羽が突然、フラフラとまるで夢遊病患者の様にどこかへと歩き出す。
「ん?おい、揚羽!!どこに行くんだよ!?まだ作業は終わってないぞ!!」
　そんな揚羽の様子に気づいた土門が彼に声をかけるが、揚羽はそれを無視しどこかにフラフラと歩いていく。
「彼は俺に任せて」
「し、しかし・・・」
「土門、ちょっとこっちを手伝ってくれ!!」
　良馬が土門に揚羽は自分が連れ戻すこと伝える。
　土門はやや不満そうであったが、坂東が土門に声をかける。
　時間が限られている中での撤収作業中で、相手は先輩であり他艦とは言え上官なので異議を唱えづらく更には手伝いに呼ばれてしまったので、
「分かりました。揚羽の事をよろしくお願いします」
　と、揚羽の事を良馬に託すしかなかった。
「バトライザー、君も撤収作業が終わって俺と揚羽君が戻らなくても

待たずに撤収しろ」
「・・リョーカイシマシタ」
バトライザーも良馬を残して撤収するのは不満があるのかもしれないが、良馬からの命令と言う事で了承した。
そして良馬は急ぎ揚羽の後を追う。
ただ良馬は揚羽の後を追いながらも、
(おい、ファンタム・揚羽君をどこにやるつもりだ!?)
法術によりファンタムに声をかける。
(分かっているんだぞ!!お前が特殊な波長で揚羽君を誘い出している事を・・・目的を話さないと言うのであるならば、俺の法術でお前が送っている波長を消失させることもできるのだが?)
揚羽が突然フラフラとどこかに歩き出したのはファンタムが揚羽をどこかに呼び出している事を良馬は既に見抜いていた。
そして、自身の法術でファンタムが揚羽に送っている特殊な波長を消失させ、揚羽を正気に戻すことがいつでも可能である事を伝える。
すると、
(マ、マッテクダサイ。ツキムラサン)
ファンタムが良馬に念話で話しかけて来た。
(アゲハサンヲヨンデイルノハ、『アルカタ』ヲアズカッテモライタイカラデス)
(ある方?)
ファンタムが言うにはこの星には自分たちが来る前に誰かが居るみたいだ。
(ハイ。クワシイコトハ、ワタクシノモトニキテカラオハナシイタシマス)
ファンタムは揚羽をある人の迎えとして選んだみたいであり、彼に危害を加える様ではないが、それでも心配だったので良馬は揚羽を追いかけた。
(今、ガルマン・ガミラスがお前さんの身体にドリルを打ち込むみたいだが、大丈夫か?)
良馬はファンタムにヘルマイヤーがこれから探査ドリルを打ち込

む件について訊ねる。
（ガルマン・ガミラスノヒトニ、コノカタヲワタスワケニハイカナイノデ、オヒキトリシテモライマス）
（ファンタムは何かする気だな・・・）
ファンタムはガルマン・ガミラス所属のヘルマイヤーがファンタムに来た時から既に危機感を覚え始めていた。
（それにしてもガルマン・ガミラスに渡す訳にはいかない人間って誰だ？・・・・？）
（まさか、ボラー連邦の要人とかじゃないよな・・・）
ガルマン・ガミラスと敵対している星間国家と言えばまっさきに思い浮かぶのはボラー連邦であったので、ファンタムが匿っている人がボラー連邦の要人なのではないかと思ってしまう。
ファンタムはガルマン・ガミラスと自身が匿っている人物との関係がよろしくない事は理解しているみたいだ。
そして、ファンタム周辺ではガルマン・ガミラスとボラー連邦がドンパチしている事も恐らくファンタムは理解しているのだろう。
そうした関係からコスモ生命体ながらファンタムは銀河系でナニが起こっているのかも知っているのかもしれない。
（まだボラー連邦の要人と決まった訳ではないから、ひとまず急ぐか・・・）
ヘルマイヤーが探査ドリルを打ち込もうとしているので、急ぎファンタムが匿っているとされる人の下へと向かう。
揚羽と良馬の二人が、ファンタムが匿っているとされる人の下へと向かっている頃、そのヘルマイヤーは探査ドリルの発射準備を着々進めていた。

ガルマン・ガミラス　調査船　艦橋

「探査ドリル、打ち込み準備!!」
「探査ドリル、回転出力アップ!!」
「探査機器全て正常に稼働!!」

「探査ドリル、打ち込み準備完了!!」
「よし、探査ドリル、打ち込み開始!!」
調査船の艦底部にあるハッチが開くとそこから探査ドリルが勢いよく回転しながらファンタムの地面に突き刺さるとそのまま地中へ姿を消す。
すると、地球人にとっては地球に・・・ガルマン・ガミラスの人間にはガルマン・ガミラス本星に見えていた大地が一瞬にして怒り狂ったかのように豹変する。
「ど、どうしたんだ!?」
「あ、あれはっ!?」
ファンタムの大地は植物の様な触毛がまるで生きているかのように広がりながらヤマト乗員たちのベースキャンプとヘルマイヤーの調査船へと迫って来る。
「て、撤退だ!!急げ!!」
良馬から事前に撤収準備をしていた古代たちは急ぎコスモハウンドと上陸用舟艇へと駆け込む。
「脱出だ!!緊急発進!!」
ヘルマイヤーが乗艦していた調査船の船体にも触毛が絡んできたが、調査船はエンジンをフルパワーにして船体に絡まって来た触毛を強引に引きちぎって惑星ファンタムの地表から脱出して一気に宇宙空間へと上がった。
デスラーから命じられた惑星ファンタムの正体についてはこの豹変した惑星ファンタムの様子と良馬からコスモ生命体であると言う結論が出ている。
出来れば自分の手でファンタムの正体を立証したかったが、このままファンタムに残ればどんな事が起きるのか分からない。
ヘルマイヤーは自身と調査船の乗員たちの安全の為に逃げるように惑星ファンタムから離脱したのだ。
しかし、ファンタムがこの後にどのような変化をするのか地質学者として気になったので、しばらくはファンタム近海で待機して、ファンタムの様子を観察していた。

平和そのものだった惑星ファンタムの草原は今や草原全体が威嚇する蛇のような姿となり蠢いていた。
その様子はまるでギリシャ神話に登場する怪物・メデューサの頭髪にいる蛇の様だ。
古代たちが乗ったコスモハウンドとファンタムの調査に参加したヤマトの乗員たちが乗った上陸用舟艇も無事に惑星ファンタムの地表から離脱することが出来た。
「艦長、揚羽を見ませんでしたか？」
そんな中、土門が古代に揚羽の行方を訊ねる。
「えっ？揚羽？乗っていないのか？」
「はい・・・・月村艦長が揚羽の奴を追いかけて行ったんですけど・・・・」
土門は最後に揚羽を見た時、彼はフラフラとどこかに歩いて行ったのを良馬が自分の代わりに追いかけて行った。
しかし、コスモハウンドの中に揚羽の姿は見えない。
「上陸用舟艇の方か？」
古代は上陸用舟艇の方に連絡を入れて揚羽が乗っていないかを訊ねるが、上陸用舟艇の方にも揚羽は乗っていなかった。
良馬が乗って来た上陸用舟艇もバトライザーしか乗っておらず良馬の姿も見えなかった。
「ま、まさか、二人はまだファンタムに!?」
良馬と揚羽の姿が見当たらない事に古代は二人がまだファンタムに居るのだと判断した。
（事前に月村艦長から警告を受けていたのに・・・・）
（あの時、もっと強引にヘルマイヤー少佐を止めておけばよかった・・・・）
二人を助け出したいが、豹変したファンタムの様子から今、ファンタムに降りたらどんな危険があるのか分からず、そんな危険が孕んでいるかもしれないファンタムへ、艦長としては乗員を向かわせる訳にもいかない。
後悔をしながらもコスモハウンドと上陸用舟艇はヤマトへ帰還し、

バトライザーもまほろばに戻った。
「相原、まほろばに通信を入れてくれ」
「はい」
　第一艦橋に上がった古代はまほろばの乗員たちに事態の説明をする為にまほろばへ通信を入れた。
「そんなっ!?」
「艦長がまだファンタムに!?」
「・・・・」
　良馬がまだ惑星ファンタムに居る事を古代から伝えられたまほろばの第一艦橋の乗員たちは絶句する。
　その中でもギンガは一番ショックを受けていた。
　ヤマト、まほろばの第一艦橋にあるモニターには現在の惑星ファンタムの地表の映像が映し出されている。
　惑星ファンタムの地表は触毛で覆われており、当初の自然な姿は一切見えなかった。
　そんな豹変した惑星ファンタムの様子を一同は沈鬱な表情で見守っている。
「月村艦長と揚羽の姿はまだ見つからないか?」
「は、はい。まだどこにも・・・・」
「この触毛の海では・・・・」
「主砲かミサイルを撃ち込んで、触毛を燃やしますか?」
　南部が触毛ならば、ショックカノンやミサイルを撃ち込めば燃えるかもしれないので、惑星ファンタムの地表へ攻撃をしてみるかと古代に訊ねる。
「いや、もし着弾地点に二人が居たら大変だ・・・・くそっ、一体どうしたら・・・・」
　下手に惑星ファンタムの地表へ攻撃をして着弾地点に良馬と揚羽が居たら二人は一瞬で木端微塵になってしまうので、ファンタムへ攻撃をしたくても出来ない。
(もしかして、惑星ファンタムのあの平和な風景の偽装はファンタムを訪れた者を油断させて地表へとおびき寄せ、食料とするための罠

だったのではないだろうか・・・・?)
　良馬からファンタムが惑星の姿をした生き物・コスモ生命体である事を伝えられた古代は、地球でも獲物を捕らえ、捕食する為に擬態する生物や植物の様にファンタムも平和そうな風景や故郷に似せた幻術を見せて、宇宙からの訪問者を捕食しているのではないかと今の惑星ファンタムの豹変ぶりを見るとそう思ってしまう。
　その豹変したファンタムの地表では・・・・

　ファンタムから発する周波数と偶然にもマッチした揚羽と彼の後を追う良馬は、触毛がうねる海を歩いていたが、いつの間にか触毛が絡み合う地下道の様な通路を歩いていた。
(地下に向かっているのか・・・・)
(まぁ、人を隠す定番だな)
　やがて周囲の様子がまた変わって来た。
　周囲は碁盤の目の様に区切られ、幾何学的な模様が浮かんでいる。
　だが、冷たい印象はなく全体的に温かく柔らかい印象を受ける不思議な空間だ。
　その空間まで来ると、
「はっ!?お、俺は・・・・こ、此処は一体・・・・」
　揚羽は正気に戻った。
「あっ、正気に戻った?」
　そんな揚羽に良馬は声をかける。
「つ、月村さん・・・・此処は何処なんですか?」
　正気に戻った揚羽はこの事態についていけず若干混乱している様だ。
　まぁ、揚羽のリアクションも無理はない。
　撤収作業をしていた筈なのに、気づけば訳の分からない空間に居たのだから・・・・
(ファンタム、揚羽君に事情を話す・・・・少し待ってくれるか?)
(ワカリマシタ)
　ファンタムには揚羽へ事態を説明する為に少し待ってもらった。

「此処はファンタムの地下・・・恐らくコアの近くだ」
「えっ？此処が惑星ファンタム!?」
揚羽はあまりにも様子が違い過ぎるファンタムの姿に困惑しながら周囲を見渡す。
撤収作業中、ファンタムは地球にそっくりな風景であったが、今自分が居る空間はとても地球にあるような空間ではない。
「ああ・ファンタムの正体は惑星ではなく、惑星の姿をした生き物・・・コスモ生命体だったんだ」
「コスモ生命体!?この星は生き物なんですか!?」
ヘルマイヤーにファンタムの正体を話している時、揚羽と土門は傍に居なかったので、ファンタムの正体がコスモ生命体である事を知らず、良馬からファンタムの正体を聞いて揚羽は驚いている。
「そうだ。皆がファンタムの地表で見たとされる幻はファンタムが皆に見せていたモノで、それはファンタム自身が宇宙からの脅威から自分の身を守る為のモノだったんだ」
「そ、そうだったんですか・・・それで、何故俺たちは此処に？」
「ファンタムが言うには、ファンタムが特殊な波長の信号を送っていたみたいで、その信号の波長と揚羽君の気の相性が良かったみたいで、君はファンタムに此処まで呼ばれたみたいだ。俺は君が突然フラフラと歩き出したので、追いかけたんだ」
「ファンタムが言った？それにファンタムは何のために俺を此処へ呼んだんですか？」
良馬の説明の所々に疑問を覚えつつもファンタムが何故、自分を此処へ呼んだのか良馬は事情を知っていそうだったので、揚羽はソレを訊ねる。
「なんでもファンタムはある人を匿っているみたいで、その人を我々に保護してもらいたいみたいなんだ」
「ある人・・・？一体誰なんですか？」
「それはまだ分からない。この先で待っているみたいだ。とりあえず行ってみよう」
「は、はい」

此処までの説明を終えた良馬は揚羽と共にファンタムが匿っている人の下へと向かう。
「ん!?」
「何だ!?あれはっ!?」
ファンタムのコア空間を進んで行くと、空間の中央部に網目の様なモノが張り巡らされた繭の様なモノが鎮座していた。
「アゲハサン、ツキムラサン、ヨウコソ」
すると繭が青白く点滅しながら言葉を発した。
「ま、繭から声が!?」
「おそらくアレがファンタムの本体だ」
「あ、アレが・・・・」
ファンタムは念話ではなく、直接声を発して二人に話しかけて来たのだ。
揚羽はこの現象に驚いていたが、念話でファンタムと話してきた良馬は大して驚く事は無かった。
「あ、あんたが・ファンタム・・・・なのか?」
事前に良馬から惑星ファンタムが惑星の姿をした生き物・コスモ生命体である事を知っていたとは言え、あまりにも非現実的な現象であった。
揚羽はこの声を発するモノがファンタムなのかを訊ねる。
「ハイ。ワタシガ、ワクセイファンタムノ、チュウシンセイメイタイデス」
この点滅している繭がファンタムの心臓であり脳みたいだ。
「月村さんから聞いたが、俺たちに誰かを会わせたいって・・・・」
「ソノトオリデス」
「ファンタム、アンタが匿っている人って一体誰なんだ?」
良馬がファンタムに誰を匿っているのかを訊ねる。
「ワタシガカクマッテイルノハ、『ルダ王女』ヲアナタガタニアズカッテイタダキタカッタカラデス」
「ルダ王女?ファンタムの王女なのですか?」
「イエ、ワタシドモノオウジョデハアリマセン。ワタシドモモ、オウ

ジョヲホゴシテカクマッテイタダケニスギマセン」
　ファンタム曰く、ルダ王女とやらは別の星からファンタムへ来て、ファンタムが保護していたみたいだ。
「そのルダ王女は何処の星の王女なんですか？」
「まさか、ボラー連邦・・・ではないよな？」
「ルダオウジョハ、シャルバートセイノオウケノチヲヒクオカタデス」
「「シャルバート星!?」」
　ファンタムの回答に思わず良馬も揚羽も驚いた。
「シャルバート星・・・本当にあったんだ・・・」
「驚いたな・・・シャルバート星は実在するのか・・・」
　一説にはシャルバート星は地球で言うアトランティスやムー大陸の様にその存在自体があやふやで、本当は存在しないのではないかと言われていたが、ファンタムが保護して匿っている人物はそのシャルバート星の王女であることからシャルバート星は実在するみたいだ。
「シャルバート星は何処にあるのですか？」
　揚羽がファンタムにシャルバート星の場所を訊ねる。
　シャルバート星の王女を保護しているのだから、ファンタムはシャルバート星の場所を知っていると思った。
　しかし、
「ワカリマセン。シャルバートセイノバショヲシッテイルノハ、ルダオウジョダケデス」
　ファンタムはあくまでもシャルバート星の王女を保護して匿っていただけなので、シャルバート星の座標は知らなかった。
　そして、ファンタムはルダからシャルバート星の場所を聞いたりはしなかったみたいだ。
「しかし、何故我々にその王女を託すんですか？」
　揚羽は自分たちにシャルバート星の王女を預ける理由を訊ねる。
「それは多分、ガルマン・ガミラスにファンタムの存在を知られてしまったからだと思う・・・それにファンタムが惑星ではなくコスモ生命体であると言う事も恐らくヘルマイヤー少佐の報告からデスラー総統の耳に入るのも時間の問題だろう・・・こんなことならヘルマイ

ヤー少佐にファンタムの正体を教えるんじゃなかったな・・・」
　良馬はヘルマイヤーにファンタムの正体を教えたことを後悔した。
「ソノトオリデス。オウジョハ、ココニイテハ、キケンナバカリカ、ウチュウノキュウセイシュトシテヒヤクスルコトガデキマセン」
「宇宙の救世主？」
「ソウデス。キュウセイシュデス。デスカラ、ゼヒトモ、アナタガタニオウジョヲアズカッテイタダキタイノデス」
「でも、どうして我々を選んだのですか？」
「アナタガタハ、コノホシニオリテカラ、クサヤハナヲカワイガッテクレテイマシタ・ソレニキオクヲノゾカセテモライマシタガ、ココヘクルマエニ、シャルバートキョウノシンジャノカタガタヲタスケテイタノデ、ルダオウジョヲタクセルヒトタチデアルトハンダンイタシマシタ」
「しかし、そう言われても俺たちには俺たちの事情がありますし・・・」
　シャルバート星の王女を託されても自分たちには期限内に第二の地球を探さなければならない使命がある。
　ファンタムがコスモ生命体である以上、ファンタムも第二の地球とは成り得ない。
　となれば、自分たちは急ぎ艦に戻り、第二の地球を探さなければならない。
　とは言え、ガルマン・ガミラスにファンタムの正体がバレてしまった以上、ファンタムの言う通り、シャルバート星の王女を此処に置いていくわけにもいかない。
　チラッと揚羽と良馬が繭の中に居るルダを見ると、彼女は悲しげに目を伏せた。
（ん？あの子は・・・）
　ルダを改めてまじまじと見てみると、揚羽は彼女の容姿が草原で見たあの少女であることに気づいた。
「それで何故、シャルバート星の王女が此処に？」
　揚羽がルダの事を見つめている中、良馬はファンタムにルダがシャルバート星ではなくファンタムに居る理由を訊ねる。

「ソレハデスネ・・・」
ファンタムは良馬と揚羽にルダがファンタムへ来ることになった理由を話し始めた。

ファンタムにて良馬と揚羽がシャルバート星の王女であるルダと邂逅している時、ガルマン・ガミラス本星では・・・

ガルマン・ガミラス本星　デスラーパレス　デスラーの居室
「なに!?コスモ生命体だと!?」
「は、はい」
良馬の予測通り、ファンタムから離脱したヘルマイヤーはデスラーにファンタムの正体を報告していた。
「むぅ～・・・キーリング!!」
「はっ!!」
「このデスラーと我が帝国に泥を塗ったファンタムを許す訳にはいかん!!古代たちがファンタムを去った後、ファンタムを破壊しろ!!」
自信をもって伝えた惑星ファンタムが実は地球そっくりな星ではなく幻影を見せるコスモ生命体であった事に憤慨したデスラーはファンタムの破壊命令を下す。
「はっ!!北部方面艦隊のグスタフ中将に出動を命じます!!」
キーリングはファンタムに近い戦線の艦隊へファンタム破壊の命令を伝えた。
デスラーがファンタムを破壊することを決めた事を知り由もなく、ヤマト、まほろばはファンタムの上空で待機を余儀なくされた。
第一艦橋のパネルをジッと凝視しても良馬と揚羽の姿を確認する事が出来ない。
そんな中、ギンガはある可能性に賭けてみた。
「副長」
「ん?何かしら?通信長」
「ファンタムに通信を送ってみてはどうでしょう?」
「えっ?ファンタムに通信を?」

「はい。ファンタムはコスモ生命体と言う生き物であるならば・・・私たちの言葉を理解する事が出来るなら、通信を送れば何かしらの返答をしてくれるかもしれません」
「そうね。やってみて頂戴」
「はい」
　ギンガはファンタムに向けて通信波を送信し始めた。
「それから砲雷長」
「はい」
「万が一の事を想定して、戦闘の用意はいつでも出来るようにしておいて」
「は、はい」
「ん？あっ、副長待って下さい!!」
「えっ？」
「あそこに!!」
　パネルを見ていた永倉がある箇所を指さす。
　そこには良馬と揚羽、そして見知らぬ一人の少女の姿があった。
「副長、ヤマトの方でも艦長の姿を確認したみたいで、ヤマトの方で救助するみたいです」
「分かりました。では私たちは艦長の帰りを待ちましょう」
　良馬の無事とヤマトから救命艇がファンタムへ向かうのを確認したまほろばの艦橋メンバーはホッと胸を撫で下ろした。
　ヤマトからの救援を待っている中、
「ルダ王女の事は揚羽君に任せるよ」
「えっ？」
　良馬はルダの一件を揚羽に一任した。
「ど、どうしてですか？」
　若干狼狽えながらも揚羽は理由を訊ねる。
「元々、ファンタムがコアに呼んだのは揚羽君だったみたいだし、今回の航海の主役はヤマトであり、まほろばはその護衛だからね」
「は、はぁ・・・」
　若干煮え切らない感じではあるが、揚羽はルダの件を了承した。

やがて、ヤマトの救命艇が見えて来るとファンタムの触毛は三人を優しく持ち上げる。
まほろば、ヤマトの一同がパネル越しにその様子を凝視していると、救命艇は触毛の助けを借りて無事に三人を収容することが出来た。
「救命艇よりヤマトへ、まほろばの月村艦長、揚羽隊員、他一名の収容を完了しました」
「よし、直ちに帰還せよ」
「了解」
救命艇の窓からはファンタムの触毛がまるでルダとの別れを惜しむかのように手を振っているかのように見えた。
ファンタムの触毛の群れに見送られ、救命艇はヤマトへと向かう。
良馬と揚羽の無事な姿を確認出来、ホッとしたのはヤマトの乗員たちも同じで、
(やれやれ、心配したが、ファンタムは我々に敵意を持ってはないようだ・・・)
探査ドリルを打ち込まれた時、ファンタムの触毛は自分たちに襲い掛かって来る様に見え、しかもその形状から食虫植物みたいに見えたので、ファンタムに残された二人のみを案じるのも当然であった。
ヤマトに戻った救命艇は揚羽とルダの二人を降ろした後、もう一度ヤマトを発進し、まほろばへと向かい、良馬を降ろした後でヤマトへと戻った。
ヤマト艦内の中央作戦室にて古代、真田、雪が待っていると、ルダをエスコートして来た揚羽が事情を説明する為にやって来た。
「揚羽武、ただいま帰還しました。ご心配をかけ、申し訳ございません」
揚羽は古代たちに一礼し、古代は頷き揚羽を迎える。
「それで、そちらの方は?」
古代は揚羽の後ろに居る少女について訊ねる。
「この人はシャルバート星のルダ王女です」
「シャルバート星の王女!?」

「シャルバート星は実在するのか!?」
ファンタムのコアでルダと初邂逅した時の良馬と揚羽同様、古代たちもルダがシャルバート星の王女である事に驚く。
揚羽から紹介をされたルダは貴族らしい気品のあるお辞儀をする。
シャルバート星の王女と言うのは、間違いないようで、彼女からはイスカンダルの女王であるスターシアと同じ気品を感じる。
「ヤマト艦長の古代進です」
「同じくヤマト副長兼技師長の真田志郎です」
「同じく生活班班長の森雪です」
ルダに自己紹介をした後、何故シャルバート星の王女がファンタムに居たのか?
その事情を訊ねる。
「しかし、何故シャルバート星の王女がどうしてファンタムに居たんだ?」
「ルダ王女はファンタムに保護されていたんです」
「保護?」
「はい。実はルダ王女はボラー連邦の手によって惑星ファンタムへ流刑にされていたみたいなんです」
「流刑・・・」
「はい。ボラー連邦の連中にはファンタムが極寒の氷ばかりの星に見えたので、流刑地として丁度いい様に見えたのかもしれません」
「ところが、事実は惑星ファンタムの温かい自然に保護され、匿われていたと言う事だな?」
「はい」
真田の見解に揚羽は頷く。
「分かった。詳しい事は後で伺うことにして、ひとまずルダ王女は休ゆっくり休んで下さい。雪、頼む」
「はい」
古代はルダのお世話係に同性である雪を指名し、
「それから揚羽」
「はい」

「お前は以後、ルダ王女の護衛に任命する」
「は、はい」
ルダ王女のボディーガード役に揚羽を指名した。
(月村艦長の言う通り、地球への報告をいれなくて良かった・・・・)
良馬が古代に対してファンタムが第二の地球になりうる星なのかどうかについて、最終探査が終わってから報告した方が良いと言っていたので、古代は地球へファンタムについての報告を入れていなかった。
もし最初の衛星調査の結果を地球へ報告した後で、ファンタムがコスモ生命体で地球人類の移住に適さないと追加報告を入れていたら、藤堂を始めとして、地球に居る大勢の人々をぬか喜びさせている所であった。

まほろばでも良馬が第一艦橋へと戻ると、ファンタムで一体何があったのかを艦橋メンバーに説明をした。
「シャルバート星の王女がファンタムに!?」
「それ以前にシャルバート星って本当にあったんですね」
「ああ、二重の意味で驚いたよ。それで今、ルダ王女はヤマトの方で保護されている」
(問題なのはヘルマイヤー少佐にルダ王女の姿を見られていないかだ・・・・)
(伝説とされるシャルバート星の存在はルダ王女が実在した事で、星自体も存在する証明となってしまった・・・・)
(宇宙制覇を目標としているガルマン・ガミラスならば、当然シャルバート星の技術と兵器は喉から手が出る程欲しがる筈だ)
(ファンタムもシャルバート星の座標は知らなかった・・・・シャルバート星の位置を知るのはルダ王女だけ・・・・)
(もし、ヘルマイヤー少佐にルダ王女の存在がデスラー総統の耳に入れば、ルダ王女を手に入れるために艦隊を派遣してくる可能性が高い・・・・)
(そうなれば、ガルマン・ガミラスと・・・・デスラー総統と敵対する事に

なる・・・)
(それにルダ王女をファンタムに流刑にしたのはボラー連邦だ・・・)
(そのボラー連邦がルダ王女の生存を知れば、ガルマン・ガミラスとボラー連邦もルダ王女を狙ってくるだろう・・・)
(そもそも、ボラー連邦はルダ王女を捕らえた時にシャルバート星の位置を尋問しなかったのか?)
(いずれにせよ、今後の航海はガルマン・ガミラスとボラー連邦の三つ巴の戦いに巻き込まれる可能性が高くなるな)
良馬はルダ王女を抱えての今後の航海に暗雲を覚える中、
「艦長、ヤマトから通信で次の惑星探査宙域へ向かうようです」
ヤマトから入った通信をギンガが報告する。
「やはり、ファンタムは移住候補には無理だったか・・・」
この宙域から離れると言う事で良馬はファンタムが地球人類の移住には適さない星なのだと判断した。
「コスモ生命体であり、幻を見せるのではな・・・」
井上もファンタムが移住に適さない星なのも無理はないと首を振る。
「はぁ~・・あの星が第二の地球だったら良かったのになぁ~」
フェリシアもファンタムが第二の地球と成れなかった事に対して残念そうに呟く。
「まぁ、愚痴ったところで仕方がない。新しい星探しに行くぞ。出航準備」
出航準備が整うとファンタムからヤマト、まほろばからゆっくりと動き出す。
第一艦橋のパネルには次第に遠ざかって行くファンタムの姿が映し出される。
「あっ、ファンタムの姿が・・・」
一同の眼前で、触毛の海だったファンタムの姿は見る見るうちに地球の姿へと変化し始めた。
ファンタムなりの激励のつもりなのだろう。
ファンタムを背後にヤマト、まほろばが次の探査惑星の宙域を目指

して航行していると、別方向の宙域に複数のワープアウト反応があった。
「右舷後方にワープアウト反応多数・・・艦隊反応です。艦隊はファンタムへ接近しています」
「艦籍は？」
「・・・ガルマン・ガミラスです」
「ガルマン・ガミラス？何故、ガルマン・ガミラスの艦隊がまたファンタムへ・・・？」
「・・・・」
（まさか、ルダ王女を狙って来たのか・・・？）
新見は何故、ガルマン・ガミラスの宇宙艦艇・しかも艦隊を派遣してきた理由に疑問を覚えている様子だが、良馬はヤマトに居るルダを奪いに来たのかと思った。
ヤマトでもガルマン・ガミラス艦隊の存在はレーダーで捕捉したが、その目的に対して新見同様、困惑していた。
しかし、それから直ぐにガルマン・ガミラス艦隊のファンタム来訪の目的を一同は知る事になる。

百七十三話　さらば幻の星・遺跡調査

惑星ファンタムは当初、その大きさ、重力、大気の組成、自転周期が地球とそっくりな惑星であり、第二の地球と成り得るかもしれない惑星であった。

しかし、地表探査を行ったヤマトの乗員たちの前に次々と本来であるならば、異星である惑星ファンタムではあり得ない人物、建造物等の幻が出現した。

そこで、良馬が法術により調査をしてみた所、惑星ファンタムは惑星の姿をした生き物・コスモ生命体であることが判明した。

惑星ファンタムの調査を命じ現地へ派遣したヘルマイヤーより、惑星ファンタムがコスモ生命体である事を知ったデスラーは大激怒し、北部方面艦隊所属のグスタフにファンタムの破壊命令を下した。

ファンタムがコスモ生命体である事以外にファンタムには、もう一つの秘密があった。

それは、ファンタムのコアにシャルバート星の王女であるルダがボラー連邦・ガルマン・ガミラスからバレないよう密かに匿われていた事だ。

ファンタムはその王女、ルダを地球人に託した。

ルダがヤマトに乗艦し、再び第二の地球の探索を行おうとした時、デスラーの命令を受けたグスタフが率いる艦隊がファンタム近海に姿を現した。

「っ!?」

ヤマトに保護され、用意された女性士官予備室にて、雪と共に居たルダはハッと顔を上げる。

「どうしました?」

ルダの様子に気づいた雪が声をかける。

「ファンタムに危険が迫っています」

「ファンタムに危険?」
「はい。ファンタムがガルマン・ガミラスの艦隊に狙われています。早く艦長に・・・古代さんに伝えて下さい」
「分かりました」
ルダの護衛として控えていた揚羽が急ぎ第一艦橋へと上がる。
部屋に残ったルダは祈るように手を組み、雪はそっと彼女の手に自らの手を重ねる。
しかし、雪がルダへかける言葉が見つからなかった。
ヤマト、まほろばが突如出現したガルマン・ガミラスの艦隊にどう対処すれば良いのか困惑していると、ヤマトの第一艦橋に揚羽が息を切らせながら入って来た。
「艦長!!」
「どうした?揚羽」
「ファンタムがガルマン・ガミラスの艦隊に狙われているそうです!!ルダ王女がそう言っていました」
「なに!?ルダ王女が!?」
「はい!!艦長、ガルマン・ガミラスの艦隊に攻撃中止を伝えて下さい!!」
「くそっ、やっぱりそうだったのか・・・」
真田が大きくうめいた。
「分かった。相原、ガルマン・ガミラスの艦隊旗艦に通信を繋いでくれ」
「了解」
相原は急ぎガルマン・ガミラスの艦隊旗艦へ通信を入れた。
その頃、デスラーからファンタムの破壊命令を受けたグスタフは自身の乗艦に装備されている惑星破壊ミサイルの発射準備をしていた。
「惑星破壊ミサイル発射用意!!目標、惑星ファンタム」
「了解、惑星破壊ミサイル発射用意。目標、惑星ファンタム」
「ん?・・グスタフ司令、宇宙戦艦ヤマトより司令官宛てに通信が入っております」
「ヤマトから?よし、繋げ」

「はっ!!」
　通信士がヤマトとの通信回線を開くと艦橋にあるパネルに古代の姿が映し出される。
　ヤマトがガルマン・ガミラスの艦隊旗艦へ通信を送っている事はまほろばでも傍受が出来た。
「艦長、ヤマトがガルマン・ガミラスの艦隊旗艦へ通信を送っています」
「分かった。こちらもパネルに投影して艦隊旗艦へ通信を入れられるようにしておいてくれ」
「了解」
　ギンガが通信機器を操作するとまほろばの第一艦橋にあるパネルに古代、そしてガルマン・ガミラスの艦隊司令官であるグスタフの姿が映し出され二人のやり取りを見る。
「ガルマン・ガミラス北部方面第七艦隊司令官のグスタフだ。それで、わざわざ通信を入れてくるとは一体何用だ?」
　グスタフは古代に通信を送ってきた要件を訊ねる。
「宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進です。グスタフ司令に要望します。惑星ファンタムへの攻撃を中止してください」
「なに!?攻撃を中止しろだと!?」
　古代の要望にグスタフは思わず声が裏返る。
　古代とグスタフとの通信を聞いた良馬は、
(あの艦隊の狙いはファンタムの方か・・・)
(ルダ王女を狙って来た訳ではなさそうだが、ヘルマイヤー少佐はルダ王女の存在を確認できなかったみたいだな・・・)
　グスタフの狙いがルダではなく、ファンタムである事が古代とのやり取りで判明したので、ヘルマイヤーはデスラーにファンタムがコスモ生命体である事を伝えたが、ルダの存在は確認できなかったのだと良馬はこの時はそう思っていた。
　その間も古代はグスタフへファンタム攻撃中止を要望していた。
「重ねて要望します。惑星ファンタムは貴方たちが思う様な危険な星ではありません!!」

「グスタフ司令、私からも要望します」
　良馬も古代と共にグスタフへ、ファンタムへの攻撃中止を要望する。
「貴官は？」
「地球連邦、防衛軍所属。宇宙戦艦まほろば艦長の月村良馬です。自分からも重ねてファンタムへの攻撃の中止を要望致します」
「我々はデスラー総統からの命令を受けて出撃したのだ!!地球人である貴官らの命令を受ける理由は無い!!」
「グスタフ司令の言う事は分かっております。ですから我々は命令ではなく要望をしているのです」
「もし、グスタフ司令が攻撃を撤回できないと言うのであるならば、私がデスラーと直接話をしますので、ファンタムへの攻撃を少し待ってください」
「ファンタムへの攻撃命令を受けたと言う事はデスラー総統からファンタムについては聞いている筈です。ファンタムはあのような姿ではありますが、生き物なのです。そして、コスモ生命体は、もしかするとこの宇宙でファンタムが最後の生き残りの可能性もあります。そんな貴重な生物を一個人のプライドの為に絶滅させるのはあまりにもエゴが過ぎます」
　古代と良馬が必死にグスタフを説得するが、
「御二人の要望は理解したが、我々はデスラー総統から命令の変更を受けない限り、当初の任務を果たすまでです!!」
「ですから、デスラーとは私が話をします!!なので・・・・」
「古代艦長、月村艦長、これ以上の申し出は地球からのガルマン・ガミラスに対する内政干渉と見なしますぞ!!」
「な、内政・・・・」
「干渉・・・・」
　グスタフから内政干渉と言われてはこれ以上、彼にファンタムへの攻撃中止を強くは言えなくなる。
「その通りだ。では失礼する」
　そして、グスタフは一方的に通信を切ってしまった。

「グスタフ司令!!待ってくれ!!」
古代は再びグスタフへの通信を試みるも向こうが着信拒否をしているのか、グスタフの姿が再び第一艦橋のパネルに現れる事は無かった。
「あっ、ガルマン・ガミラスの艦隊より大型のミサイルが!!」
「なにっ!?」
グスタフが座乗している艦からファンタムに向けてプロトンミサイルが放たれた。
プロトンミサイルは一直線にファンタムへと向かって行く。
「しまった!!砲撃だ!!あのミサイルを撃ち落せ!!」
「だ、ダメです!!もう間に合いません!!」
南部の悲痛な声と共に一同はただ、パネルを見ているだけしか出来なかった。
「地球がやられる・・・」
揚羽は思わず苦痛の様なうめき声を上げる。
この時のファンタムはまだ地球の姿になっていたので、ヤマト、まほろばの乗員たちには地球へ向けてプロトンミサイルが向かっている様に見えた。
やがて、プロトンミサイルがファンタムへと着弾すると、
「っ!?」
ルダは涙を流してその場に崩れ落ち、
「ぐっ・・・」
良馬は両手で両耳を抑えながらコンソールの上に突っ伏す。
法術を通じてファンタムの悲鳴が聞こえたからだ。
(こ、これが死にゆく星の断末魔か・・・)
コスモ生命体とは言え、星一つを破壊する目的のプロトンミサイルの威力には成す術もなくファンタムの大地は引き裂かれ、地表で蠢いていた触毛は燃え尽き大小規模の爆発を繰り返しながらファンタムは大爆発を起こして消滅した。
「デスラー・・・」
消滅したファンタムを見て古代は無意識のままデスラーの名を口

にする。
　デスラーの命令を実行したグスタフ艦隊はファンタムの破壊を確認すると再びワープをしてこの宙域から去って行った。
　ファンタムはヤマト、まほろばを見送る為に地球の姿に変身していたので、プロトンミサイルを受けて破壊された光景は地球がプロトンミサイルの攻撃を受けて破壊された様な光景であったので、地球人であるヤマト、まほろばの乗員たちからしてみれば縁起が物凄く悪かった。
「み、ミサイル一発で星が・・・」
　今回、初めてプロトンミサイルの威力を目の当たりにしたヤマト、まほろばの乗員たち。
　永倉は声を殺すようにプロトンミサイルの威力を見て唖然とする。
「もし、ガミラスとの時の戦いの時に、あのミサイルが使用されていたら・・・」
「一日で決着がついたのう・・・」
　ガミラス戦役時、ガミラスはプロトンミサイルを開発・保有していなかった。
　もしもガミラスが地球との戦争時にプロトンミサイルを保有していたと思うと地球との戦争は一日で終わっていたかもしれないが、元々ガミラスは地球への移住の為に遊星爆弾を使用していたので、プロトンミサイルを保有していたとしても地球に対して使用はされなかったかもしれないが、それでもあの威力は脅威である。
　フェリシアも井上も唖然としながらプロトンミサイルの威力に肝を冷やす。
「・・・相原、ガルマン・ガミラスへ・デスラーに通信を入れろ」
「は、はい」
　古代は冷たい声で相原にデスラーとの通信回線を開かせた。
「古代か？」
「デスラー、何故あのような無法な命令を下した？」
　古代はデスラーにファンタムの破壊命令の真意を訊ねる。

「無法な命令?」
　デスラーとしてみれば、古代が一体何を言っているのか理解できていない様子だった。
「何故、惑星ファンタムを破壊したんだ!?あの星を滅ぼす必要は無かった筈だ!!」
「それはどうかな?古代」
「何故!?」
「惑星ファンタムは私とガルマン・ガミラスに泥を塗った星だ。いや、それだけではない。古代を始めとして第二の地球を探している君たち、そして地球で新たなる故郷となる星を待っている大勢の地球人の信頼を裏切った不埒な星だ。私はそれがどうしても許せなかったのだ」
　デスラー古代にファンタムを破壊した理由を述べると通信を切った。
「古代、デスラーにはデスラーのプライドがあるんだ。過ぎ去った事は仕方がない。俺たちは俺たちで第二の地球となる星を探そうじゃないか」
　未だにファンタムの破壊について納得がいかない古代に対して島は割り切って新たな星を探そうと提案する。
　確かに島の言う通りであり、今更デスラーに抗議したところでファンタムはもう蘇らない。
　ならば、ここで根に持っているよりも地球で新たに故郷となる星を待っている地球の人々の為に一分一秒でも早く第二の地球となる星を見つけなければならない。
「そうだ。古代」
　真田も島の意見に同意する。
「やりましょう!!艦長!!」
「艦長!!」
　南部と相原も古代に声をかける。
「そうだな・・・これより本艦は第二の地球となる星を探すため、再出発だ」

『はい!!』
古代の号令の下、ヤマトは発進する。
「はぁ～あの星が第二の地球となる星だったら、今頃地球は歓喜の渦になっていただろうな～」
ファンタムが消滅してしまった今、ヤマト、まほろばは再び第二の地球となる星を探さなければならない。
地球にはもう残された時間が少ない。
そんな辛い現実と今回の残念な結果にフェリシアはぼやいてしまう。
「ぼやいた所で始まらないさ。この先の予定されている調査宙域に第二の地球となる星がある事に期待するしかない。航海長、ヤマトに続くぞ」
「了解」
ヤマト、まほろばは再び第二の地球となる星の探査へ本来の予定航路へと針路を戻した。

その頃、ボラー連邦本星では・・・
ボラー連邦本星　首相官邸
「なにっ!?ルダ王女だと!?」
首相官邸にてベムラーゼはハーキンスより、ファンタムにてシャルバート星の王女であるルダがヤマトに収容された報告を受けた。
ボラー連邦でもヤマト、まほろばの動向は監視されており、ファンタムにてヤマト、まほろばが待機している間、ハーキンスはファンタムへ密かにスパイ衛星を派遣しており、その動向を監視していた。
ヤマト、まほろばの動向が判明しているにもかかわらず、艦隊を派遣しなかったのは、ベムラーゼがハーキンスに艦隊派遣の命令を下していなかったからだ。
もし、勝手に艦隊を派遣して再びヤマト、まほろばに敗北するような事があれば、ゴルサコフは自分を庇う事はせずにベムラーゼの怒りを買い、粛清されると判断したハーキンスはスパイ衛星の派遣に留

まっていた。
　そんな中で、派遣したスパイ衛星がファンタムの地表にてルダの姿を捕捉して、彼女の生存確認とヤマトに収容された事実を突き止めこうしてベムラーゼに報告を入れたのだ。
「はっ!!確か首相閣下の前任者が何年か前に惑星ファンタムへ流刑にしたシャルバート星の王女です」
　ルダをファンタムへ流刑にしたのはベムラーゼではなく、ベムラーゼの前の政権の首相であった。
「そうか、思い出したぞ!!惑星ファンタムは王女の流刑地であった・・・」
　惑星ファンタムの名前を聞いた時からベムラーゼはどこかでその名前を聞いた星だと思っていたが、その時は思い出すことが出来ず、こうしてハーキンスからの報告を受け、ファンタムがルダの流刑地である事を思い出した。
「しかし・あの時の王女が生きていたとは・・・信じられん・・・」
　前政権とはいえ、その頃からボラー連邦における政治運営に関わっていたベムラーゼが過去の記憶から惑星ファンタムの事を引っ張り出すと、報告を受けた際、惑星ファンタムはボラー連邦本星よりも厳しい極寒で劣悪な環境であり、人が住むにはあまりにも過酷な環境の星であった筈だ。
　そんな環境の星へ、衣食等の生活物資も居住する家もなく、放り出した一人の少女が未だに生存していた事にベムラーゼは信じられなかった。
「いかがいたしますか?」
　仮に何らかの奇跡でルダが今日まで生存していたとして、やはり彼女の故郷であるシャルバート星の技術・軍事力は侮れない。
　もしもその技術が地球、ガルマン・ガミラスへ流れたりでもしたら、ボラー連邦は一気に窮地へ陥る。
　現にハーキンスからの報告ではルダはヤマトに収容されているのだから・・・
「もし、事実なら我がボラー連邦の命運に係わる一大事だ。ハーキン

ス中将、第八打撃艦隊は直ちにヤマトを追跡し、確認せよ。そしてもし、当の人物がルダ王女の場合は即刻引き渡しを要求せよ」
「はっ!!」
「援軍として我がボラー連邦の第一、第二主力艦隊を派遣する。ゴルサコフ、よいな?」
「はっ!!速やかに本国の第一、第二主力艦隊を出動させます!!」
　ゴルサコフはかつて管理局の武力制裁艦隊を殲滅したバルコム率いる本国の第一、第二主力艦隊をハーキンス率いる第八打撃艦隊の援軍として派遣した。
　かつて第八打撃艦隊所属のスペース・デストロイヤー部隊を破った事から、たった二隻の宇宙戦艦相手に今回ボラー連邦が派遣した戦力はまさに過剰とも言える戦力であった。
「まったく、あの弱腰のエーリッツめ・・・・あの時、ルダ王女を拷問にかけてでもシャルバート星の位置を掴んで入ればこんな面倒な事にはならなかったのだ。やはり奴には国家の主導者としての器も度量も足らなかった訳だな・・・・」
　折角捕らえたシャルバート星の王女を大した尋問もせず、ファンタムへ流刑にした前任者の事を思い出したベムラーゼは国家元首として自分と前任者との違いを比較した。
　ボラー連邦でルダの生存確認がされ、ヤマトに対して追跡隊が派遣された時を同じくして、ファンタムへ調査に赴いていたヘルマイヤーの調査船がガルマン・ガミラスへと帰還した。
「総統閣下、ヘルマイヤー。只今惑星ファンタムの調査より戻りました」
「惑星ファンタムか・・その話は不愉快だ」
　デスラーとしてはファンタムは自身の面子を潰した星の名なので、彼としてはその名前さえ聞くのも不快であった。
「申し訳ございません。ですが、一つだけ気になる事がありまして・・・・」
「なんだ?」
「惑星ファンタムが我が艦隊から攻撃される寸前、シャルバート星の

関係者らしき人物がヤマトに乗り込んだようです」
「なに?シャルバート星の関係者だと?」
「はい。はっきりと確認はできなかったのですが、その人物が身に纏っていた衣装が、シャルバート教の信者共が崇拝しているマザー・シャルバートの衣装にそっくりでしたので、おそらくシャルバート星でも高貴な地位の人物ではないかと・・・」
　ボラー連邦ではファンタムへ流刑にしたのはシャルバート星のルダ王女である事が判明しているが、ガルマン・ガミラス側ではその事を知らず、ヘルマイヤーが展開していた調査衛星で捉えたルダが着ている衣装が、シャルバート教の信者たちが崇拝し、空に姿を浮かべているマザー・シャルバートが身に纏っている衣装と似ていた事からヘルマイヤーはヤマトに乗り込んだ人物がシャルバート星の関係者・しかもそれなりに地位が高い人物であると判断し、その旨をデスラーへ報告した。
「何故、そのことを早く言わない」
「も、申し訳ございません」
「キーリング!!」
「はっ!!」
「北部方面艦隊のグスタフ中将を呼び戻して確認させろ!!」
「はっ!!」
　シャルバート星の関係者となれば、放っておくわけにはいかず、デスラーは先ほど、ファンタムを攻撃したグスタフを急ぎ呼び戻してヤマトへ確認に向かわせる旨をキーリングへ命じた。
　キーリングがグスタフへデスラーの命令を伝達して居る頃、グスタフは後方で待機させていた補給部隊からプロトンミサイルを再装填している頃であった。
「グスタフ司令、本国のキーリング総参謀長より通信です」
「キーリング閣下から?よし、繋げ」
「はっ!!」
　グスタフが乗艦している艦橋のパネルにキーリングの姿が映し出される。

「キーリング閣下、いかがされましたか？」
「実は先ほど、ヘルマイヤーより入った情報で・・・・」
グスタフは通信回線を開き、キーリングからの要件を聞く。
「・・・・と言う訳だ」
「分かりました。ヤマトが拒否した場合、攻撃し強制接舷する事になりますが、よろしいでしょうか？」
「構わん。頼んだぞ」
キーリングはヤマトに攻撃を加えれば、当然地球との関係に亀裂が生じ、地球との同盟締結のために現在、太陽系に居るジュラの心象が悪くなることが予測されたが、この時は、あの伝説の星であるシャルバート星の位置を掴めるかもしれない事にすっかり失念していた。
「はい・・・・ヤマトか・・・・フフフ・・・・相手に取って不足無し・・・・」
ガルマン星出身のグスタフはヤマトと戦ったことは無かった。
しかし、ガミラス出身の軍人からヤマトの実力は聞いていた。
そしてファンタムで出会った際、武人としてヤマトと戦ってみたいと言う思いはあった。
だが、ファンタムの時はデスラーからの命令を受けていた為にそちらを優先したが、今回舞い込んできたルダの一件では堂々とヤマトと戦う大義名分を手に入れた。
「補給作業を急がせろ!!補給完了と共に全速でヤマトを追う!!」
「はっ!!」
（ファンタムの時は総統からの勅令を受けていたから剣を交えることは出来なかったが、今度は違う。ヤマトと堂々と戦える・・・・武人としては血がたぎる思いだ!!）
グスタフはヤマトと戦えるかもしれない事実に思わず武者震いをした。
補給を終え、補給部隊と別れたグスタフ艦隊はヤマトを追尾し始める。
こうしてルダの存在はガルマン・ガミラスの方でも確認され、ボラー連邦、ガルマン・ガミラスの双方から追跡をされることになった。
ファンタムの一件でデスラーはもしかしたらヤマトと訣別をした

のかもしれない。
となると、ガルマン・ガミラスからの援助はもう期待できない。
いや、ルダ王女と言う『爆弾』を抱えてしまった事で、彼女を巡って再びデスラーが敵に回る可能性も十分ある。
デスラーもシャルバート星の伝説くらいは耳にしている筈だ。
これまでは、シャルバート星なんて実際に存在するのかもわからない星の事など、デスラーは気にも留めていなかったかもしれないが、今回、ヘルマイヤーから齎された情報から、シャルバート星の関係者の存在が確認された事で、シャルバート星が実在することが証明された。
故にデスラーもきっとルダの身柄を要求してくるだろう。
古代としては当然、デスラーに：ガルマン・ガミラスにルダを引き渡すつもりはない。
ファンタムの一件からガルマン・ガミラスの支援の期待は無いモノだと判断され、ルダを巡って例えデスラーが再び敵に回る可能性が高い中で、地球に残されている時間は少なく、その間に第二の地球となる星を見つけなければならない。
だが、ヤマトとまほろばは地球に居る人々たちの為に最後の最後まで希望を捨てずに頑張るしかなかった・・・・
しかし、第二の地球となる星を探査してからヤマト、まほろばは百三十二の恒星系を探査していた。
だが、これだけの恒星系を探査するも第二の地球となる星は見つからなかった。
こうしてみると、銀河系には地球人類が住めるような環境の星が少ないのかもしれない。
その反面、ミッドチルダ周辺は人類が居住できる星が多数あるので、地球連邦政府がその事実を知れば、もしかしたら管理局との国交が結ばれる可能性があったのかもしれない。
そして、そのミッドチルダでは・・・・
ユーノの職場である無限図書館、そこで司書長を務めているユーノの下にユーノ宛てに一通のメールが届いた。

「ん？僕宛てのメール？…どれどれ…」
　件名に『仕事の依頼』と書かれていたので、管理局のどこかの部署から資料請求のメールかと思い、ユーノはメールを開き、内容を確認する。
「ん？スピアーノ教授から？えっと、なに、なに…えっ、遺跡発掘調査の助っ人!?」
　ユーノにメールを送って来たのは先日、無限図書館を訪問して来たランティスであった。
　彼が言うには大学における考古学の実習で、とある世界にある遺跡の発掘作業を行うので、ユーノにも手伝いに来て欲しいと言う内容であった。
　そこで、ユーノはランティスに直接電話を入れた。
「もしもし、スピアーノ教授ですか？」
「ああ、スクライア君。メールは読んでくれたかな？」
「はい。それで、早速メールの件なんですが…」
「ふむ、メールで送った通りだ。今度の遺跡発掘調査に君も助っ人として手伝ってもらいたいのだよ。勿論、バイト代もちゃんと払う」
「メールでは発掘調査の世界がミッドではない事が書かれていましたが、どの世界での発掘になるのですか？」
　メールでは『とある世界』としか書かれていなかったので、ユーノはランティスにどの世界で遺跡発掘調査をするのかを訊ねる。
「バシュタールと言う世界だ」
「バシュタール・確か大昔に大規模な惨劇が起きたとされる世界ですね」
「ああ。バシュタールに住んでいた民族がその惨劇で全て滅亡してしまった為に彼らがどんな文明を築いていたのが不明であり、我々スクライア一族も度々この世界へ赴き、遺跡の発掘と調査を進めているのだが、未だに明確な答えは出ていない。だからこそ、今回私もこの世界へ赴むくことにしたのだが、君も来ないかと誘ったのだよ」
「そうなんですか…」
「それで、どうだい？君も来るかい？」

ランティスの話を聞いて、ユーノもスクライア一族として興味がないわけではなかった。
「分かりました。僕も行かせていただきます」
ユーノはランティスの誘いを受けてバシュタールにおけるかの世界の遺跡発掘に参加することにした。
後日、ランティスにバシュタールでの遺跡発掘調査に参加する為にユーノは無限図書館に有給届けを出して、ランティスたちと共にミッドチルダを後にして現場であるバシュタールへと向かった。
次元航行船に乗って、やってきたバシュタールは水と緑の美しい星であった。
「ミッドと比べると涼しいな・・・」
バシュタールの次元航行船の発着場にて初めてバシュタールの地に降り立ったユーノはバシュタールの気候の感想を口にする。
「ここは一年を通して最高気温が２５度ぐらいで、平均気温が２０度前後の世界だからね。故にミッドが夏の際には避暑地として人気のある世界みたいだ」
ランティスがユーノにバシュタールの気候を説明する。
「避暑地となるとこの世界は観光資源で成り立っている世界と言う事ですね」
「ああ、冬はウィンタースポーツも出来るから冬でもそれなりに人が来るみたいであるが、観光地として栄えるのは良いのだが、そのせいでこの世界の自然や生物の生態系、そして遺跡を壊されてはたまらないのだがね・・・」
ランティスは観光開発による自然や生態系への影響、そして観光客らが遺跡を壊したり、いたずらする事への懸念を口にする。
「確かに・・・でも、それはこの世界だけではなく、どこの世界でも言えることですね」
「ああ、そうだな」
「この光景を見ると、大昔にこの世界で惨劇があったなんてとても信じられません」
「惨劇が起きて、住んでいた人々が死滅して死の世界になった後、誰も

居なくなった世界を自然は長い時間をかけて緑の世界へ戻したのだから、自然の力は高ランクの魔導師よりも偉大なのかもしれない」
ユーノとランティスは緑の広がるバシュタールの大地を見て呟く。
いくら高ランクの魔導師でも死の世界となった星を蘇らせることは出来ない。
(もう一つの地球は高度な科学技術で蘇ったって、なのはたちが言っていたな・・・)
ユーノは以前、なのは、はやて、フェイト、クロノたちからもう一つの地球が辿った歴史をチラッと聞いており、その話の中では、もう一つの地球は異星ガミラスからの遊星爆弾の攻撃で、海は干上がり、大気中には生物に有毒な放射能塗れになるも、イスカンダルから供与されたコスモクリーナーで大気中に広がる放射能を全て除去し、人類を始めとする生物は再び地上で生活できるようになった。
その話を聞いた時は、そんなバカなことがあるかと思ったが、実際にもう一つの地球で生活したフェイトがなのはに話し、なのはからその話を聞いた時は、強力な科学技術力は魔法を上回る技術であり、まさに魔法の様な技術なのだと言う印象を受けた。
「さて、学生や他のスクライア一族の皆も待っているし、行こうか?」
「はい」
学生たちと共に車で遺跡の発掘現場へと向かうと、発掘現場には既に遺跡の発掘に集まっていたスクライア一族の人たちが来ていた。
その中にはユーノやランティスの知り合いも居た。
「おぉー!!ユーノ、ランティス、久しぶりだな!!」
「元気だったか!?」
「みんな!!」
「久しぶりだな~」
ユーノとランティスも久しぶりの再会に嬉しくなり、知り合いとハグをする。
やがて、遺跡発掘の手順や発掘箇所、注意事項を説明した後に遺跡の発掘作業が開始される。
発掘作業が開始されてからしばらくして・・・

「教授、今回の発掘でもし、ロストロギアが出たらやはり管理局へ提出するのですか？」
　ランティスの近くで発掘作業をしていた学生が質問をする。
「まぁ、ロストロギアが出たらな・・・・」
　かつて海鳴市で起きたＰＴ事件の発端であるジュエルシード・・・・
　ユーノが偶然発掘したロストロギアであるが、遺跡の発掘をしたからと言って絶対にロストロギアが出てくるとは言い切れない。
「しかし、ロストロギアとは言え本来ならば博物館やその民族の末裔、もしくは我々の様な考古学の機関で保管、保有したいのだがな・・・・」
　ランティスは発掘で出て来たロストロギアに関しては、管理局ではなく本来そのロストロギアを受け継ぐ者、もしくは考古学の研究機関が保有をするべきだと言う。
「管理局は古代からの発掘物を何でもかんでも一方的にロストロギアに指定して我々から奪っていく。そのくせ管理は不十分な所がある」
「と言うと？」
「あそこで作業をしているユーノ君・かつて彼はジュエルシードと呼ばれるロストロギアを発掘した・・・その後、ちょっとしたアクシデントがあったが、ジュエルシードは管理局が保管・管理していたが、君もＪＳ事件は知っているだろう？」
「ええ、確か広域指名手配犯が起こした大規模なテロ事件ですよね？」
「ああ。その際、そのテロリストの主犯が製作したガジェットと呼ばれるロボットの中にジュエルシードが組み込まれていたらしい」
「ジュエルシードが!?でも、ジュエルシードは管理局が保管していたんですよね？別のジュエルシードですか!?」
「いや、どうやら管理局で保管されていたモノらしい」
「でも、管理局で保管されていたジュエルシードがどうしてテロリストの手に？」
「管理局の人間が密かに保管庫から持ち出してテロリストに売り渡したのだろう」
「えええー!!それってかなり問題じゃないですか!!」
「『ロストロギアは我々管理局が管理すべきだ』とか言いながら、大金

欲しさに管理していたロストロギアを密かに売りさばいているのだからな。そう言った不正と汚職のせいで古代の貴重な研究資料がどこの誰かわからない者の手に渡っていくと思うと考古学者としては腸が煮えくり返る思いだ」
「確かに」
「全ての局員がやっているとは思ってはいないが、ロストロギアの管理を主張するならば、そうした点を厳重にしてもらいたいものだ」
「そうですね」
　ユーノの知り合いに管理局員が大勢いる事からランティスは管理局員全員がロストロギアを横流しするような者たちではないと理解はしているが、大規模な組織では様々な考えを持つ人たちがおり、中にはどうしてもそうした邪な考えを持ち、それを実行してしまう者も居ることが否めなかった。
　その後、遺跡の発掘作業が進んで行くと、
「ん?・・・・これは・・・・」
　ランティスが砂の中から何かを見つけた。
「どうしました?」
「刷毛を・・・・」
「は、はい」
　学生がランティスに刷毛を手渡すと、ランティスは丁寧に砂を払いのけていく。
　すると、黒い石の板の様なモノが出て来た。
「な、なんですか?それは・・・・」
「う～ん・・・・どうやら、粘土板の様だ」
　ランティスが発掘したのは一枚の粘土板であった。
「この粘土板、何か絵みたいなモノがびっしりと書かれていますね」
「恐らくこれはこのバシュタールの民たちが使用していた文字だろう」
　ルーペで粘土板に描かれている絵の様なモノを見ながら、この絵がバシュタールに住んでいた人々の文字であると推測するランティス。
「何て書いてあるかわかりますか?」

「流石にこの場での解読は無理だ。そもそも、ここに住んでいた人々の文字の解析はまだまだ解析中だからな・・でも、この粘土板の文字を読み解くことで、ここに住んでいた人々の生活がどのようなモノだったのかを紐解くカギになるだろう」
「まさか、この粘土板もロストロギアに認定されて管理局に持っていかれるなんてことは・・・」
　学生が先ほどの管理局の話からこの粘土板も管理局からロストロギアに認定されて持っていかれないか不安になる。
「いや、いくら管理局でも何が書かれているのか分からない粘土板をロストロギアに認定はしないだろう・・・」
　ランティスはいくら管理局でも粘土板をロストロギアに認定して没収するとは思えず、学生の意見を否定する。
「そ、そうですよね」
「兎に角、壊れない様に、慎重に搬出してくれ」
「分かりました。おーい、手伝ってくれ!!」
　ランティスが発掘した粘土板は学生、スクライア一族の手で搬出されていった。
　後に解読されたこの粘土板の一部の文章がミッドチルダに降りかかる宇宙からの厄災を根拠づけるモノになるとは発掘者のランティス自身もこの時にはまだ知る由もなかった。

百七十四話　スカラゲック海峡星団　アリゾナ発見!!

惑星ファンタムは、当初地球人類を始めとする生物が住める星と言う結果が出た・・・

惑星ファンタムが第二の地球となりえる星かと思われたが、その星の正体がコスモ生命体であり、デスラーからの命令を受けたグスタフ艦隊の手によって破壊されてしまった。

惑星ファンタムの破壊について古代はデスラーについて思う所があったが、いつまでも引きずっている訳にもいかず、ヤマト、まほろばは、当所の探査予定となっているスカラゲック海峡星団へと向かった。

このスカラゲック海峡星団はヤマト、まほろばが受け持つ最後の探査宙域であり、この星団内に地球そっくりな星が無ければ、日本担当の第二の地球探査任務は失敗で終わる事になる。

自分たち日本以外にも現在、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、ロシア、中国でも第二の地球探査が行われているが、地球との定時報告でも他国の探査状況が藤堂から伝えられているが、他の国でも第二の地球となる星が見つかったと言う報告は未だに入らない。

そして現在、スカラゲック海峡星団へと向かっているヤマト、まほろばは地球との定時報告の時間となり、相原とギンガは地球との通信回線を開いた。

ヤマト、まほろばの第一艦橋のパネルには藤堂の姿が映し出される。

「「藤堂長官」」

古代と良馬は藤堂に敬礼する。

「ヤマト、まほろば、新惑星探査の進捗状況はどうなっているか？」

「長官、残念ながら我々の方も第二の地球となる星は未だに発見には至っておりません」

「そうか・・・」
「長官、事後報告となってしまいますが、実はガルマン・ガミラスへ立ち寄った際、デスラーから新惑星の情報をもらい、調査しましたがその星はコスモ生命体と言う生物であり、その星も残念ながら人類の居住には適さない星でした」
「・・・」
　古代はファンタムが破壊されたことは藤堂には黙って、ファンタムが第二の地球となる星ではなかった事を報告する。
　もし、ファンタムが地球人類の居住が可能ならば地球へ報告を入れていたが、ファンタムは残念ながら地球人類の居住が可能な星ではなかった事からこうして事後報告になってしまった。
　藤堂は古代からの報告を神妙な顔つきで聞いていた。
「そうか・ガルマン・ガミラスの保有規模ならば、地球に似た星も知っているかもしれないと思ったのだがな・・・」
「・・・」
　デスラーがファンタムの破壊命令を出した事が脳裏を過り、今度は古代と良馬が神妙な顔つきになる。
「古代、月村、実はこの所、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカの探査船団からの定時連絡が入らず、こちらから呼びかけても応答がないのだ」
「それって探査船団の身に何かしらのアクシデントが起きたと言う事でしょうか？」
　良馬が藤堂にアメリカ、ヨーロッパ、アフリカの探査船団とのコンタクトが取れない件についてそれらの国の探査船団に何かアクシデントが起きたのかと質問する。
「まだ遭難したとは決まってはいないが・・・」
「ええ、宇宙では何が起きるか分かりませんし、宇宙気象の影響で通信不良になっているだけかもしれませんが・・・」
　遭難したと言う確固たる証拠がないので、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカの探査船団の身に何が起きたのか分からない。
　もしかしたら、宇宙気象の影響で通信障害が起きているだけかもし

れないし、ブラックホール等の危険もある。
宇宙気象の他にどこかの星間国家と遭遇して一方的に攻撃を受けて沈んだ可能性もある。
何せ、宇宙には地球以外に知的生命体の存在が確認されているのだから・・・
だが、少なくともガルマン・ガミラスがアメリカ、ヨーロッパ、アフリカの探査船団を襲ったとは思えないが、ボラー連邦は地球を敵視しているので、もし運悪くボラー連邦の艦隊と遭遇してしまったら、一方的に攻撃を受けるかもしれない。
護衛戦艦ならばともかく、非武装の探査船が攻撃を受けたら危険だ。
だが、武装し、船体を装甲板で覆われている護衛戦艦でも探査船団に付き従っている護衛戦艦は一隻なので、艦隊で襲われれば例え各国が建造した新鋭の宇宙戦艦でも多勢に無勢なので、やはり危険だ。
「既にロシア、中国は探索宙域の探査を全て終えたのだが、結果は残念なモノに終わってしまった」
「そうですか・・・」
既に探査任務を終えた国もあるが、結果は芳しくない結果で終わった。
最も成果があれば、すぐに地球から第二の地球発見の報告が入っている筈なので、結果が残念なことは簡単に予測できた。
「音信不通となった探査船団の件について何か進展が分かれば連絡をしよう」
「分かりました」
「無事ならば良いんですが・・・」
これから向かうスカラゲック海峡星団で第二の地球となる星が見つかるのか？
そして、音信不通となったアメリカ、ヨーロッパ、アフリカの探査船団の行方はどうなったのか？
様々な不安を抱きつつもヤマト、まほろばは最後の探査宙域であるスカラゲック海峡星団へと向かう。

宇宙空間を航行するヤマト、まほろばの前方に星間物質が乱雲のように飛び交う宇宙の荒海・・・
この荒海こそが、スカラゲック海峡星団の出入り口であった。
「艦長、前方にスカラゲック海峡星団が見えてきました」
「星間物質で荒れているな・・・この分だと航路には多数の宇宙塵が存在しているな・・・航海長、用心して操艦してくれ」
「了解」
「しかし、こんな星間物質が荒れている宙域に第二の地球となる星があるのでしょうか？」
新見が不安そうに訊ねる。
確かに彼女の言う事も分かる。
こんな荒海の中に存在する星が第二の地球となりえるのか不安でしかない。
「とは言え、ヤマト、まほろばの探査宙域は此処が最後なんだ・・・砂漠の中にオアシスがあるようにこの荒海の中にも地球人類が住める星がある事を祈ろう・・・」
良馬自身も正直こんな荒海の中にある星の中で地球人類が住める星なんてあるのか限りなく怪しいと思いつつも乗員たちを不安にしないよう言った。
そして、ヤマトとまほろばの二隻は探査宙域であるスカラゲック海峡星団β星の第五惑星に到着した。
「艦長、本艦及びヤマトは探査惑星のスカラゲック海峡星団β星の第五惑星に到着しました」
「ヤマトの方は早速コスモハウンドの準備をしています」
「よし、本艦はそのままヤマトの護衛に就く。周辺の警戒を厳となせ」
「了解。ただ、周囲の星間物質の影響でレーダーの感度があまりよくありません」
「レーダーを近距離モードに切り替え、あとは目視による直接警戒を行う」
「了解」

まほろばがコスモハウンドが戻ってくるまで周囲を警戒する。
(雲らしき気象物質は存在しているみたいだ。それに海らしき水も存在しているが・・・・)
惑星表面を見ると、雲と海は確認できた。
あとは地表探査の結果が送られてくるデータを待つだけだ・・・・
ヤマト、まほろばの乗員たちはこの星が第二の地球となる星である事を祈った。
コスモハウンドには土門、雪、アナライザーが搭乗して、地表探査をしている。
スカラゲック海峡星団β星の第五惑星は常に強い風が吹き荒れる星であり、その影響で海も荒れている。
大地も砂塵が舞っている。
「アッ、金属反応アリ!!」
そんな中、アナライザーが地表で金属反応を捉えた。
「金属反応?それってこの星の鉱物か?」
操縦桿を握りながら土門がアナライザーに訊ねる。
「・・・イエ、人工的ニ加工サレテイル金属ノ様デス」
「人工的?それじゃあ、この星には知的生命体が存在するのか?」
「ともかく、もう少し高度を下げて調査してみましょう」
「了解」
土門は地表に存在する金属反応の正体を探る為に高度を下げる。
コスモハウンドの映像はヤマト、まほろばにも送信されていた。
やがて、地表の映像が流れてくると、
「ん?あれは!?音信不通になっていたアメリカの探査船じゃないか!?」
スカラゲック海峡星団β星の第五惑星の砂漠の様な地表には地球の探査船が三隻、大破したスクラップ状態で横たわっていた。
そして、スクラップ状態になっている探査船の船体には所属を示す星条旗のマークが描かれており、スクラップ状態となっている探査船が地球の・アメリカ所属の探査船であることが判明した。
「ほ、本当だ!!」

「なんでアメリカの探査船の残骸が此処に・・・・?」
　このスカラゲック海峡星団はヤマト、まほろばの日本が探査担当の宙域であり、アメリカの探査宙域は別の宙域であった。
「音信不通になっていたのはやはり、遭難していたからなのか・・・・」
「しかし、何故あんな姿で・・・・」
　探査宙域ではない筈のアメリカの探査船団が此処で遭難している疑問が浮かぶ中、コスモハウンドからはこの星の大気の組成データが送信されてきた。
「艦長、コスモハウンドから惑星のデータが送られてきました」
「それで、結果は?」
　良馬が新見にこの星のデータの結果を訊ねる。
　他の乗員たちもドキドキしながら結果を待つ。
「はい。惑星の大きさ、自転周期、重力に関しては地球とほぼ同じなのですが、大気の組成は・・・酸素の含有量が地球よりも少なく、海水も重金属成分が多く含まれており、人類を始めとする地球の生物には有害物質です・・・地球人類はこの星には住めません」
「そうか・・・・」
「ここもやっぱりダメだったか・・・・」
　人類は住めない・・・・
　最後の探査惑星の結果に落胆が隠せない。
「しかし、何故、この星にアメリカの探査船が遭難していたんじゃ・・・・?」
　井上がアメリカの探査船団の遭難に首を傾げる。
「あっ、アレは!?護衛戦艦アリゾナですよ!!」
「なに!?」
　スカラゲック海峡星団β星の第五惑星の砂漠には探査船の他にその探査船を護衛していた宇宙戦艦アリゾナも探査船同様、大破した状態で横たわっていた。
「あ、アリゾナが・・・・」
「あんな姿に・・・・」
　軍艦はその国の技術の結晶である事を示す。

アリゾナはアメリカが独自に建造した宇宙戦艦であり、その能力はヤマト、アンドロメダ級に匹敵する程の強力な戦艦の筈であったが、その強力な筈の戦艦が今、自分たちの目の前に無残な姿を晒している事にヤマト、まほろばの乗員たちは唖然とする者、驚愕する者と分かれていた。
「コスモハウンドから通信です。『地表に降り、生存者が居ないか調査をする』との事です」
ギンガがコスモハウンドの動向を報告する。
「生存者か・・・居ればいいが・・・」
生存者が居ればアメリカの探査船団に一体何が起きたのか原因はすぐわかるが、この星の環境と遭難日数から、生存者が居る可能性は極めて少なそうだった。
アリゾナの直ぐ近くに降りたコスモハウンドからは土門、雪、アナライザーたちがアリゾナへと歩いて向かう。
その際、
コッ・・・
「ん？」
雪の足に何かが当たる。
石かと思って、雪は足下を見るとそれは石ではなく、ヘルメットが割れて、彼方此方が破けている宇宙服を纏った白骨死体だった。
宇宙服の胸元には星条旗のマークが描かれていた。
おそらくアリゾナか探査船の乗員の遺体だろう。
「きゃぁぁぁぁー!!」
「うわっ!?」
白骨死体を見て雪は思わず悲鳴をあげ、思わず土門に抱き着く。
「ご、ごめんなさい、土門君。乗員の遺体を見てビックリして思わず・・・」
「い、いえ、・・・」
気を取り直してアリゾナへと近づくと、アリゾナの船体にはビームやミサイルで出来たと思われる破孔がいくつもあった。

「これは酷い・・戦闘でやられたんだな」
　土門はアリゾナが宇宙気象ではなく何者かと戦った事によって大破したのだと判断した。
「じゃあ、探査船の方も・・・・」
「ええ、恐らく何者かの襲撃を受けたのでしょう。多分、襲撃を受けてワープをして逃げた際、力尽きてこの星に墜落したものと思われます」
　アリゾナがこのような状態だったので、おそらくアメリカの探査船も何者かの襲撃を受けたのだと容易に察することが出来た。
　そして、本来の探索宙域ではない筈のこの星で遭難している理由も土門は何者かに襲撃されてワープで逃げた際に偶然このスカラゲック海峡星団にワープアウトしたのだと推察した。
　護衛をしていた筈の戦艦が此処まで大破し、探査船共々逃げている事から、アメリカの探査船団を攻撃してきた襲撃者は単艦ではなくある程度の艦隊である事が予測される。
「アナライザー、被弾箇所の放射能を測定してくれ」
「アイアイサー」
「班長、俺たちは生存者の捜索をしましょう」
「そうね」
　アナライザーは破孔部分を調べ、放射能の残留成分を調べ、土門と雪は艦内に入り、生存者が居ないか捜索する。
　だが、大方の予想通り、アリゾナの艦内には生存者はおらず、全員が戦死していた。
「アナライザー、破孔部分からは何か分かったか？」
　土門が船外で調査をしているアナライザーに訊ねると、
「破孔部分カラハ『ボラーチウム１００』ガ検出サレマシタ。ソレニ、船体ニハ、ミサイルノ不発弾ガ突キ刺サッテイタノデスガ、ソノミサイルガ、先日ヤマト、マホロバヲ襲撃シテ来タボラー連邦ノ戦闘艦ガ使用シテイタミサイルト同ジミサイルデス」
「じゃあ、この護衛戦艦アリゾナを沈めたのは・・・・」
「ソウデス。ボラー連邦デス」

アナライザーの分析の結果、アリゾナを始めとするアメリカの探査船団を襲撃したのはボラー連邦である事が判明した。
アメリカの探査船団がボラー連邦に襲撃されたのだから、音信不通となっているヨーロッパ、アフリカの探査船団もボラー連邦の襲撃を受けた可能性が高い。
「ボラーの奴ら、どうして邪魔をするんだ!!」
土門がボラー連邦の所業に対して悪突く。
「地球がガルマン・ガミラスの同盟国になったと誤解しているのよ」
「そうか・・・」
地球とガルマン・ガミラスの間に同盟話は持ち上がっているが、正式な同盟締結にはなっていない。
しかし、デスラーがベムラーゼにヤマト、地球に対しての武力行為を禁じるように頼み込んできた事から、ベムラーゼは既にガルマン・ガミラスと地球が同盟関係にあると見ていた。
もっともベムラーゼにしてみれば、地球がガルマン・ガミラスと同盟関係であろうとなかろうと自軍の艦隊が手痛い目にあっている事からボラー連邦の面子を考えるならば、地球もガルマン・ガミラス同様、敵視していてもおかしくはない。
だが、このボラー連邦の横やりのせいで、アメリカの探査船団が全滅してしまい、それによって本来のアメリカ担当の探査宙域の探査が不完全のままになってしまった。
ヨーロッパ、アフリカも同様の事が言える。
もしかしたら、まだ探査していない宙域に第二の地球となる星があったかもしれない。
ヤマトはこのスカラゲック海峡星団が最後の探索宙域であったが、この後で、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカの探査船団が探査する予定だった宙域へ向かう事は時間的にも距離的にも無理がある。
「ともかく、この事を古代艦長たちに報告しましょう」
「はい」
雪はアリゾナを調査した結果をヤマト、まほろばへと送る。
「ボラーの仕業か・・・」

「アメリカの探査船団がボラーの手でこうなっていたとなると、ヨーロッパやアフリカの探査船団も・・・」
「ああ、もしかしたら、ボラー連邦の襲撃を受けて全滅した可能性があるな・・・」
「まったく余計な事を・・・」
　ボラー連邦の手によってアメリカの探査船団が全滅した報告を受けてヤマト、まほろばではボラー連邦に対する不満と怒りが沸く。
「古代艦長」
「なんでしょう？」
「アリゾナは探査船と違って大破しているがある程度の形は残している・・鹵獲を防ぐために破壊した方がいいのではないだろうか？」
「えっ？破壊!?」
　良馬は古代にアリゾナの完全破壊を提案する。
　古代はそんな良馬の提案に唖然とする。
「出来る事ならば、アリゾナを牽引して地球へ運びたい所ではあるが、此処から地球までは距離が離れすぎている。だからといってこのまま此処に放置しているとボラー連邦に鹵獲される恐れもある」
「そうですね・・・分かりました」
（ボラー連邦以外に時空管理局も同じことが言えるのだかな・・・）
　管理局がこのスカラゲック海峡星団まで来るかは分からないが、もし到達してアリゾナの残骸を見つければ必ず鹵獲するだろう。
　ギンガもアリゾナの残骸を見て、さらに良馬の『鹵獲』と言う言葉を聞いて良馬同様、ボラー連邦以外にも管理局ならばアリゾナの残骸を発見すれば鹵獲するだろうと思っていた。
「こちらからも人員を出す。まずはアメリカの探査船団の乗員たちのご遺体を宇宙葬に出した後、アリゾナを完全破壊しよう。ただ、その前にこの事を藤堂長官にも伝えよう」
「分かりました。相原、藤堂長官に繋いでくれ」
「了解」
　相原は地球の地下都市に設けられた宇宙開拓省へと通信を入れた。
「ヤマトか、どうした？」

パネルには藤堂と秘書の晶子の姿が映し出されたのだが、何だかおぼろげな映像であった。
「相原、なんだか画像が不鮮明じゃないか?」
南部が相原にボソッと耳打ちする。
「地球側の出力が弱まっているんだろう。これが精一杯だ」
相原は通信機器を操作するが、このおぼろげな姿以上の画像は出来ないと返答する。
通信のエキスパートである相原が言うのだから、地球側の環境が差し迫っている事が窺える。
「長官、現在我々は最後の探査惑星であるスカラゲック海峡星団β星の第五惑星を調査しましたが、残念ながらこの星も地球人類の居住には適さない星でした」
「・・そうか」
最後の探査惑星が地球人類の居住に適さない星と言う結果に藤堂は落胆が隠せない。
いや、藤堂だけではなく宇宙開拓省に居た職員全員が同じことが言える。
「それともう一つ、このスカラゲック海峡星団β星の第五惑星の地表にて、音信不通となっていたアメリカの探査船団の残骸を発見しました」
「なに!?残骸だと!?」
「はい」
アメリカの探査船団が残骸と化していた事に藤堂は目を見開いて驚く。
「我々が調査をした結果、アリゾナを始めとしてアメリカの探査船団には生存者は無く、遭難した原因はボラー連邦に襲撃された事によるものだと判明しております」
「ボラー連邦か・・・」
藤堂もボラー連邦に関してはジュラ経由からレベルと山南から報告を受けている。
「では、同じく音信不通となっているヨーロッパやアフリカの探査船

団も・・・」
「恐らく、それらの探査船団もボラー連邦からの襲撃を受けた可能性があります」
「・・・くっ、地球と人類は最悪の事態を迎えたと言うわけか・・・」
『・・・』
　藤堂の呟きにヤマト、まほろばの艦橋に重苦しい空気が流れる。
「長官。地球の現状はどうなっているのですか?」
　南部が思ったように古代は藤堂の姿がおぼろげだったことから地球の現状を訊ねる。
「地球は想像を越える速さで太陽が膨張を続ける高熱のため、地球各地の地下都市では冷房設備のエネルギー不足、オーバーヒートが多発してまさに灼熱地獄だ。既にケンタウロス座アルファ星への避難活動も開始している」
「そんなことが・・・」
　地球の現状を聞いてますます空気が重くなる。
「長官。話を戻しますが、月村艦長の提案で、ボラー連邦にアリゾナを鹵獲されぬよう完全に破壊したいと思います。曳航するにはここからではあまりにも距離の問題がありますので・・・」
「うーむ・やむを得ないか・・・よろしい、アリゾナの破壊を許可する。アメリカ政府にはこちらから説明をしておこう」
「御配慮ありがとうございます」
　藤堂からのアリゾナ破壊の許可が出たので、ヤマト、まほろばからはアメリカの探査船団の乗員たちの遺体収容を行う。
「この人たちも俺たちと同じく地球を救うために宇宙に出て必死に第二の地球となる星を探していたのに・・・」
　アメリカの探査船団の乗員たちの遺体を棺に納めながら土門はボラー連邦に対する怒りが沸き上がる。
　アメリカの探査船団の乗員たちのご遺体を棺に納めるとその棺を宇宙空間へと放出する。
「宇宙戦士の霊に敬礼!!」
　ヤマト、まほろばの乗員たちが宇宙空間へと放たれていく棺に対し

て敬礼をし、ヤマト、まほろばからは弔砲が放たれる。
　そして、二隻の宇宙戦艦はスカラゲック海峡星団β星の第五惑星の地表に横たわっているアリゾナに対して主砲の照準を合わせる。
「鹵獲防止とは言え、こうして友軍艦艇に砲を向けるのは、あまりいい気がしないな・・・・」
　照準を合わせながらフェリシアが呟く。
「古代艦長や南部君もきっと同じ気持ちなのだろう」
「・・・・艦長、砲撃準備完了しました」
「よし・・・・撃て!!」
「発射!!」
　ヤマト、まほろばからショックカノンが放たれ、アリゾナの船体に命中するとアメリカが誇る戦艦アリゾナの船体は木端微塵に吹き飛んだ。
（アリゾナはこうして完全破壊することが出来た・・・・）
（しかし、ヨーロッパやアフリカの探査団・・・・特に護衛戦艦群は残骸を残していたら、ボラー連邦に鹵獲されているかもしれないな・・・・）
　アメリカの探査船団はボラー連邦から襲撃を受けた際、ワープをしてボラー連邦からの追撃を逃れたが、ヨーロッパ、アフリカの探査船団の遭難状況が不明なので、ワープをして離脱できずに大破してボラー連邦に鹵獲された可能性もあったが、現状確認のしようがなかった。

　宇宙葬を終えて、アリゾナの完全破壊も終えたヤマト、まほろば。
「あの・・艦長、この後は・・・・」
　永倉は気まずそうに恐る恐るこの後の予定を良馬に訊ねる。
「・・地球へ帰還するしかないだろう」
　良馬も重苦しそうに次の予定を口にする。
　探査すべき宙域を全て回って、探査した全ての惑星の探査結果が、人類が住めない星であると判明した以上、此処に留まっていても時間の無駄だ。
　ならば、地球へ戻り、アルファ星への一時避難の護衛か連邦市民を

乗せての避難活動に従事することが予測された。
ルダの件もアルファ星に地球人類と動植物を避難させてから身の振りを考える事になるのだろう。
ヤマト、まほろばが地球へ戻ろうとしていた時、スカラゲック海峡星団β星の第五惑星の近海に多数のワープアウト反応を捉えた。
「艦長、近くでワープアウト反応を捉えました!!」
「距離は?」
「前方、約五万宇宙キロ・・艦影多数・・艦隊と思います。急速にこちらへ接近してきます」
「艦籍を調べろ!!」
「はい!!」
「総員、戦闘配置につけ!!」
地球へ帰還しようとしていた中、突如艦隊の出現により艦内には警報が鳴り響き慌ただしく移動する乗員たち。
「艦籍判明しました!!」
「どこだ?!」
「ガルマン・ガミラスです」
「ガルマン・ガミラス?・・・・何故、ガルマン・ガミラスの艦隊が此処へ・・・・?パトロールだろうか・・・・?」
「艦隊旗艦がヤマトに通信を送っています」
「様子を知りたい。パネルに映してくれ」
「了解」
まほろばの第一艦橋ではヤマトとガルマン・ガミラスとのやり取りが映し出される。
ワープアウトしてきたガルマン・ガミラスの艦隊は先ほど、ファンタムで出会ったグスタフの艦隊であった。
「あっ、アイツは・・・・」
「ファンタムを破壊したガルマン・ガミラスの軍人じゃないか?!」
「今更何の用で此処まで来たんだ?!」
「ファンタムの破壊を詫びに来た・・・・って感じじゃなさそうじゃのう」

「となると狙いは・・・ルダ王女かもしれないな」
「ルダ王女？」
「時間差ではあるが、ヤマトにルダ王女が乗艦している事に気づいたんだ」
　良馬はグスタフが再び自分たちの前に現れたのはデスラーがヤマトにルダが乗っている事に気づいたのだろうと予測する。
　そしてその予測は当たり、
「宇宙戦艦ヤマトの艦長に告ぐ。貴艦内に我がガルマン・ガミラスにとって最も重要な人物が惑星ファンタムから乗り込んだとの情報が入った。その人物はシャルバート星のルダ王女である、そのルダ王女を我々に引き渡しを要求する。もし拒否するならば我々が貴艦に乗り込む事になる。いずれか決めていただきたい」
　グスタフは古代に素直にルダを引き渡すか、それとも一戦交える覚悟はあるかを問うてくる。
（やはり、ヘルマイヤー少佐にルダ王女の姿を見られていたか・・・）
　グスタフの発言からやはり、ファンタムでルダがヤマトに乗っている事がヘルマイヤーからデスラーに伝えられたのだと察した。
「それはデスラー総統の意志ですか？」
　古代はグスタフにルダの身柄引き渡しはデスラーからの命令なのかと問う。
「そうだ」
　グスタフはデスラーからの命令である事を古代に言う。
「答えはＮＯです」
　古代は拒否した。
「それは我々と一戦交えると言う意味かな？」
「我々はあなた方との戦いを望みません。ですが、あなた方が攻撃すると言うのであるならば、やむを得ないでしょう。受けて立つまでです」
「よろしい」
　古代の態度にグスタフは納得するような様子でパネルから消えた。
（友情よりもルダ王女の方を選ぶとは・・・デスラーにとってシャル

バート星の存在はかなりの脅威と見えるな・・・）
グスタフ艦隊と交戦し、艦隊を全滅してグスタフを戦死させた場合、デスラーとの友情は完全に決裂するかもしれない。
しかし、古代としてもルダをそう簡単にガルマン・ガミラスへ引き渡す訳にはいかなかった。
「相原、まほろばに繋いでくれ」
「了解」
相原が急ぎ、まほろばに通信を入れる。
「月村艦長」
「やり取りは見ていたよ。ルダ王女の事を考えるとやむを得ないだろう。本艦が前に出る」
「分かりました」
「航海長。本艦をヤマトの前へ移動!!航空隊も直ちに発進せよ!!」
グスタフ艦隊がワープアウトした時から戦闘準備を行っていたので、すぐに対応できる体制でいた。
「副長、グスタフ艦隊の戦力は?」
「旗艦らしき戦艦を含め、大型戦艦七隻、駆逐艦クラスの小型艦が八隻の計十五隻です」
グスタフ艦隊の構成は旗艦の戦艦以外はノイ・ゼラード級航宙戦艦とリンチェント級航宙駆逐艦で編成された中規模な艦隊であった。

「第一～第三主砲、発射準備!!」
まほろばの前部主砲がグスタフ艦隊へ向けられる。
まほろばで戦闘準備が進んで行く中、ヤマトでも当然戦闘準備が進められる。
主砲、ミサイルの発射準備、そして航空隊の発進準備が進められる中、古代はふと不安になり、コスモタイガーの格納庫に艦内放送を入れた。

「揚羽!!揚羽武はいるか!?」
「はい!!いつでも発進ＯＫです!!」
　と、揚羽の返答がきた。
（まったくアイツは・・・）
　揚羽の返答を聞き、古代は若干呆れつつも、
「バカ!!お前にはルダ王女の警護の役を言っておいただろう!?」
「あっ!!」
　古代に言われてルダの護衛役を言われていた事を思い出す。
「ヤマトに万が一の事があっても命をかけてルダ王女を守れ!!分かったか!?」
「は、はい!!」
　グスタフ艦隊はヤマトに強制接舷をしてルダの身柄を確保しようとしてくるので、揚羽はビームライフルを持ってルダの部屋に向かった。
「ルダ王女、まもなく戦闘が行われるかもしれません」
「・・・」
「艦長の命令で私が貴女を警護いたします」
「分かりました」
　ルダは揚羽の言葉を聞いて頷いた。
　古代からルダの身柄引き渡しを拒否されたグスタフはヤマトに強制接舷をしてでもルダの身柄を確保しようとし、全艦に戦闘命令を下令する。
「ヤマト、まほろばへの攻撃準備。全砲門、全ミサイル発射準備!!」
「はっ!!」
「五百宇宙キロで交戦する。距離測定を間違えるな!!」
「了解!!」
　戦闘準備をしながらヤマト、まほろばに距離を詰めていくグスタフ艦隊。
　そこへ、
「司令、デスラー総統から入電です!!」
　デスラーから通信が入る。

「総統から?パネルに切り替えてくれ」
「了解」
　通信士が通信回線を開くと艦橋のパネルにデスラーの姿が映し出される。
「デスラー総統」
　グスタフはデスラーに敬礼をする。
「グスタフ、私も急いでそちらに向かう所だ」
　デスラーの通信内容はデスラー自ら親衛艦隊を率いてヤマトの下へ向かうと言う内容だった。
「総統御自ら?ルダ王女の件でしたら私にお任せ下されば・・・」
「いや、実はボラー連邦の主力艦隊がそちらに向かっているとの情報を得た」
「ボラー連邦の主力艦隊が!?」
「うむ。奴らの狙いも我々同様ルダ王女に違いない。知っているとは思うが、ルダ王女の母星、シャルバート星は昔から大銀河系最強と名高い星だ。この星がもし、ボラー連邦の陣営につけば全宇宙征服の大きな障害となる。しかし、問題はシャルバート星の所在だよ・・・」
　ガルマン・ガミラスでもボラー連邦でもシャルバート星の正確な座標は把握できていない。
　つまり、先にシャルバート星を見つけ、その星の技術を接収できた方が全宇宙の覇者に慣れると言う事だ。
「ルダ王女はそのシャルバート星の重要な鍵となる人物だ」
「分かりました。では、ヤマト艦内への臨検を急ぎます」
「いや、私が行くまで待て」
「は?」
「いいか?その前にもし、ボラー連邦から攻撃を受けた時には、何をおいてもヤマトだ。ヤマトを守るのだ」
「ヤマトを!?守る・・・?」
「そうだ。ヤマトを死守するのだ。よいな?」
「はっ!!」
　最初の命令から一転してデスラーからの命令変更が来た事で、

「ええい、ヤマトめ!!悪運が強い・全艦進撃中止!!」
ヤマトへの攻撃を中止せざるを得なかった。
ヤマト、まほろばがグスタフ艦隊との戦いに向けて準備をしていると、レーダーが新たな艦隊の反応を捉えた。
「右舷９０度、三万宇宙キロに別の艦隊が出現!!」
「ガルマン・ガミラスの援軍か!?」
こうしてガルマン・ガミラスと対峙しているので、出現した艦隊がガルマン・ガミラスの艦隊かと思われたが、
「・・・いえ、ボラー連邦の艦隊です!!」
出現した艦隊はガルマン・ガミラスの援軍艦隊ではなくボラー連邦の艦隊だった。
「何!?ボラー連邦・・・まさか、ボラーもルダ王女の存在を認識していたのか!?」
ボラー連邦の艦隊が此処へ来たのはグスタフ同様、ルダを狙って来たのだろう。
(方向は異なるが、まさに前門の虎後門の狼だな)
ヤマトとまほろばは、ガルマン・ガミラスとボラー連邦の艦隊に挟まれてしまった。
「ボラー連邦艦隊がヤマトへ通信を送っています」
「大方、グスタフ司令と同じくルダ王女を引き渡せとでも言っているのだろう」
良馬はボラー連邦艦隊の狙いがガルマン・ガミラス同様、ルダであると確信する。
そして、良馬の予測はまたもや当たる。
出現したボラー連邦の艦隊はハーキンス率いる第八打撃艦隊であり、ハーキンスは今回、自身の旗艦であるバイオン号で艦隊を率いて来た。
そして、ハーキンスは良馬の予測通りヤマトへルダの身柄引き渡しを要求してきた。
「ヤマトに告げる。そこにシャルバート星の王女が乗っている筈だ。私の任務は貴艦にいるルダ王女を貰い受ける。さもなくば、ヤマトご

と破壊するだけだ」
「・・・」
「どうなんだ!?早く答えろ!?」
「答えは決まっている。ＮＯだ!!」
グスタフの要求と同じく古代はハーキンスからの要求も拒否した。
「いいだろう。では、我々はヤマトごとルダ王女を葬るだけだ!!覚悟しろ!!」
ハーキンスはグスタフと異なり、ルダの身柄が確保できなければ、彼女を抹殺する気でいた。
自分たちの手に入らず、相手の手に入るぐらいならば、殺してしまえ・・・ベムラーゼのあまりにも極端な命令をハーキンスは実行しようとしていた。
ヤマト、まほろばがハーキンス率いる第八打撃艦隊を捕捉したようにグスタフの方でもボラー連邦、第八打撃艦隊を捕捉していた。
「グスタフ司令、ボラー連邦の前衛艦隊と思われる艦隊がヤマト、まほろばへと接近しています!!」
「なに!?」
艦橋のパネルには第八打撃艦隊の艦影が映し出される。
「ボラー連邦前衛艦隊の方位を確認!!」
「了解!!」
オペレーターは機器を操作してボラー連邦の動きを調べる。
「方位二百九十五度、速度六十宇宙ノットでヤマト、まほろばへと急接近!!」
艦橋中心部にある三次元レーダーに自軍、ヤマト、まほろば、そして侵攻するボラー連邦の艦隊図が映し出される。
それを見るだけでもボラー連邦の艦隊が自軍よりも数が多いことが窺える。
ボラー連邦の艦隊がこの宙域に出現するのは予想外の出来事であった。
デスラーが掴んだボラー連邦の主力艦隊がヤマトの下へ向かっている情報がグスタフの下に入っていれば、彼は艦船を補充して来てい

た。
「凄い数だ・・・くそっ、全艦全砲門をボラー連邦前衛艦隊に向け発射準備!!」
「了解!!」
とは言え、デスラーから『ヤマトを死守せよ』と言う命令を受けた以上、グスタフは現有戦力でその命令を実行しなければならなかった。
ヤマト、まほろばに向けていた砲塔を全て第八打撃艦隊の方向に転換するグスタフ艦隊。
こうしてスカラゲック海峡星団にてルダを巡り、ヤマト、まほろばの地球陣営、グスタフ艦隊のガルマン・ガミラス陣営、第八打撃艦隊のボラー連邦陣営と三つ巴の戦いが始まろうとしていた。

百七十五話　スカラゲック海峡星団会戦

スカラゲック海峡星団にてヤマト、まほろばは日本地区が担当する最後の探査惑星を探査するもその惑星は人類の居住には適さない星と言う最悪の結果で探査任務は終わる事になった。

ただ、探査を行う前の地球との定時報告にて、他の宙域で惑星探査を行っていたアメリカ、ヨーロッパ、アフリカの探査船団が相次いで消息不明となる事態が起きていたことを知ったヤマトとまほろばの乗員たち。

宇宙には地球の常識が通じない特殊な宇宙気象が起きるので、それらの探査船団は運悪くそう言った特殊な宇宙気象に巻き込まれてしまった可能性もあるが、他の星間国家に所属する宇宙艦隊からの襲撃を受けた可能性もあった。

そして、ヤマト、まほろばが担当する最後の探査惑星：スカラゲック海峡星団β星の第五惑星の地表にアメリカの探査船団及び同探査船団の護衛にあたっていた戦艦アリゾナが大破したスクラップ状態で横たわっていた。

調査の結果、それらの探査船団には生存者はなく、アリゾナの船体には戦闘で出来たと思われる破孔がいくつもあった。

そして、被弾箇所の放射能測定から『ボラーチウム１００』とボラー連邦のスペース・デストロイヤーの主武装である『スペース・ロック』の不発弾が確認された。

この結果から、アリゾナを始めとするアメリカの探査船団はボラー連邦の艦隊からの襲撃を受けた可能性が非常に高かった。

アメリカの探査船団と異なり、残骸が確認されていない事から宇宙気流による遭難も勿論考えられるが、アメリカの探査船団がボラー連邦の艦隊から襲撃を受けた結果を鑑みて、行方不明になったヨーロッパ、アフリカの探査船団もボラー連邦の艦隊に襲撃された可能性も十人に考えられた。

大破したとはいえ、アリゾナは比較的にその形を保っており、ボラー連邦及び時空管理局からの鹵獲防止の為、殉職したアメリカの探査船団・アリゾナの乗員たちの遺体を宇宙葬で見送った後、ヤマト、まほろばはアリゾナへ艦砲射撃を加えて自沈処分にした。

最後の探査惑星の探査が終わったヤマト、まほろば。

地球人類をケンタウロス座アルファ星への避難任務にでも従事することが予測される為、地球への帰還行動に入ろうとした中、ファンタムを破壊したグスタフ艦隊がワープアウトしてきた。

グスタフの目的はヤマトに乗り込んでいるルダであり、グスタフはヤマトに対してルダの身柄引き渡しを要求してきた。

デスラーからの命令を受けたグスタフは自身の命を懸けてでもルダを奪いに来るだろうし、此処でグスタフ艦隊と砲火を交えたらデスラーとの友情は決裂する。

古代はそのリスクを承知でルダの身柄引き渡しを拒否した。

スカラゲック海峡星団でヤマト、まほろばの地球陣営とグスタフ艦隊のガルマン・ガミラス陣営が砲火を交えようとした中、グスタフの下にデスラーから通信が入る。

それによると、ボラー連邦の方でもルダがヤマトに乗り込んでいる情報を使い、自分たちと同じくルダの身柄を奪おうとヤマトの下に主力艦隊を派遣したとの事だ。

ガルマン・ガミラスとしてボラー連邦にルダ・・・正確にはルダの母星、シャルバート星の技術がボラー連邦に渡るのは何としてでも阻止しなければならない。

そこで、デスラーは最初の命令を撤回し、自身が赴くまでグスタフにヤマト警護の命令を下した。

武人としては不本意な命令ではあるが、デスラーからの命令では逆らう事は出来ず、グスタフはヤマトとの交戦を断念した。

そんな中、ボラー連邦の艦隊がヤマトに迫っていた。

ボラー連邦の先遣隊はハーキンスは率いる第八打撃艦隊であり、彼もまたヤマトにグスタフ同様、ルダの身柄引き渡しを要求してきた。

勿論、古代はこの要求も拒否をした。

するとハーキンスの決断と行動は早かった。

ボラー連邦　第八打撃艦隊　旗艦　バイオン号　艦橋

「全艦総攻撃開始」

バイオン号の艦内には警報が鳴り響き、乗員たちは駆け足で配置について行く。

「目標、ヤマト、まほろば。前方４５０宇宙キロ」

バイオン号の主砲斉射と共に第八打撃艦隊の艦船は一斉にヤマト、まほろばへと砲撃を加えて来た。

ヤマトとまほろばは当初、正面に展開しているグスタフ艦隊を迎え撃つつもりでいたので、側面からやって来た第八打撃艦隊に横っ腹を見せている形であったので、側面にいくつもの主砲を浴びる結果となった。

まほろば　第一艦橋

「くそっ、景気よくばかすかと撃ちやがって!!」

永倉が回避行動をとりながら第八打撃艦隊に対して毒づく。

「ボラー連邦の艦隊数は!?」

「約六十隻前後!!」

良馬は新見に第八打撃艦隊の戦力を訊ねると、新見は直ぐに第八打撃艦隊の戦力を報告する。

（ボラー艦隊はグスタフ艦隊よりも四倍近い数か・・・）

（厄介さで言えばグスタフ艦隊よりもボラー艦隊だ）

（ヤマト、まほろばの航空隊でどこまで防げるか分からないが、グスタフ艦隊の方も無視する訳にはいかない・・・）

（せめて敵をどちらか一方に絞ることが出来れば良いのだが・・・）

「コスモタイガー発進!!攻撃目標、前方ガルマン・ガミラス、グスタフ艦隊!!」

「了解!!」

「グスタフ艦隊の動きは!?」

「それが、接近してきたと思ったら急に進撃を止めて静止しています」

「止まっている？」
「はい。攻撃してくる様子もありません」
（ボラー艦隊が来る前は交戦する気満々だったのにボラー艦隊が襲来した途端、進撃を止めて静観しているだと？）
（我々とボラー艦隊が食い合って両方が弱った頃合いを見て、双方一気に叩いて漁夫の利をえようとしているのか？）
グスタフ自身も第八打撃艦隊と自身が率いる艦隊の戦力差は当然承知している筈だ。
第八打撃艦隊はルダ一人を目的にしているので、グスタフ艦隊には全く眼中には無い様子だ。
それならば、敢えて火中の栗を拾うリスクをせずにヤマト、まほろばに第八打撃艦隊の相手をさせて艦隊数を減らしてもらい、頃合いを見て、両陣営に攻撃をしかけて味方の損害を極力少なくしてルダを強奪する気なのだろうか？
「艦首、右舷反転九十度、第一～第三主砲、艦首ミサイル発射準備!!目標ボラー連邦艦隊!!」
グスタフ艦隊の思惑は分からないが、このままでは第八打撃艦隊の手で沈められてしまうので、良馬はグスタフ艦隊の相手をコスモタイガー隊に任せて、まほろば自体を艦数が多い第八打撃艦隊で対処する事にした。
古代も同じ判断の様でヤマトから発艦したヤマトのコスモタイガー隊はグスタフ艦隊へと向かって行き、ヤマト自体も艦首を第八打撃艦隊へと向け始めた。
「主砲発射準備完了!!」
「艦首ミサイル発射準備完了!!」
「撃て!!」
まほろば、ヤマトから主砲とミサイルが第八打撃艦隊へと向かって行き、前衛部隊に命中して被害を与える。
しかし、第八打撃艦隊は怯むことなくヤマト、まほろばへと攻撃をしてくる。
しかも第八打撃艦隊はラザレフ級航宙戦闘艦を多数保有している

艦隊なので、例の誘導ミサイル、スペース・ロックも当然ヤマト、まほろばへと襲い掛かって来る。
「敵の誘導ミサイル接近!!」
「波動爆雷及び囮ミサイルを射出!!」
まほろば、ヤマトが第八打撃艦隊へ反撃をしている頃、グスタフ艦隊の方も攻撃準備が整い、
「全艦全砲門、ボラー連邦前衛艦隊に向けて発射!!」
グスタフ艦隊も第八打撃艦隊へと砲撃を始める。
だが、グスタフ艦隊の位置から第八打撃艦隊への距離があるので、攻撃出来たのはグスタフが座上している艦とノイ・ゼラード級航宙戦艦だけであった。
「艦長、グスタフ艦隊がボラー艦隊へ砲撃を始めました」
「なに?!」
新見からの報告を受け、グスタフ艦隊の様子を見ると、確かにグスタフ艦隊は第八打撃艦隊へ砲撃を行い、第八打撃艦隊の側面に展開している部隊に被害を与えている。
(まだ、油断は出来ないが、此処はグスタフ司令を信じてみるしかない・・・・)
「コスモタイガー隊は至急、ボラー艦隊へ攻撃目標を変更!!攻撃を開始してくれ!!」
「了解」
グスタフ艦隊が静観、ヤマト、まほろばへ攻撃せずに第八打撃艦隊へと攻撃を仕掛けている事から、良馬はコスモタイガー隊の攻撃目標をグスタフ艦隊から第八打撃艦隊へと変更した。
グスタフ艦隊の戦艦群が第八打撃艦隊へ攻撃を始めても元々戦力の差が有り過ぎる事で、ヤマト、まほろばは次々と被弾していく。
被弾によりヤマトの船体が揺れ、ルダは不安そうな表情だ。
「ルダ王女、大丈夫です。ヤマトは決して負けません」
揚羽はルダを宥める。
「は、はい」
ルダ本人はヤマトのスペックをよく知らないが、ヤマトの乗員であ

る揚羽が言うのであるならば、ルダは揚羽の言葉を信じるしかなかった。

「ヤマト、まほろばに敵主砲による被弾で被害が出ています!!」

パネルから見てもヤマト、まほろばは第八打撃艦隊の弾雨に晒されている。

一応、まほろばがヤマトの前面に立ち、ヤマトを守っているが、何せ相手の数が多いので、全ての敵弾を防ぐことは出来ず、ヤマトにも敵弾の被害が出ていた。

(デスラー総統からの命令だ・・・ヤマトを守らねば・・・)

「全艦、ボラー連邦前衛艦隊の前に立ち塞がり、総攻撃だ」

グスタフ艦隊は艦隊を前進させて、まほろば同様、ヤマトの前面に立ち塞がり第八打撃艦隊の攻撃からヤマトを守ろうとする。

そして、グスタフ艦隊は全速前進をして、まほろば、ヤマトと第八打撃艦隊との間に砲撃しながら割って入っていく。

グスタフ艦隊のこの一連の動作を見て古代は、

(デスラーがグスタフ司令にヤマトを守りように命じたに違いない・・・)

第八打撃艦隊が来る前までは、ヤマトと一戦を交えてでもルダの身柄を強奪しようとしていたグスタフ艦隊が突然進撃を止め、第八打撃艦隊が進撃して来ると、ヤマトを守るような行動をとった事からグスタフの下にデスラーから新たな命令が下ったのだと判断したが、

(いや、それともデスラーはルダ王女を生きたまま手に入れたいのかもしれない)

ルダの存在は幻と言われながらも最強の軍事惑星とも言われているシャルバート星の存在を幻から現実にする事実であり、そのシャルバート星の座標を知るのは今の所、ルダだけであり、シャルバート星へ行くにはルダの協力が必要不可欠である。

ボラー連邦の場合は、ルダの身柄が手に入らなければ、シャルバート星の秘密諸共ルダを抹殺しようとしているが、デスラーの方はボラー連邦・ひいては全宇宙制覇の為、是が非でもシャルバート星の軍

事技術を手に入れたいのではないかと古代はそう勘繰る。
古代がグスタフ艦隊の動きを見てデスラーの心理について考察している中、第八打撃艦隊は自分たちを攻撃してくるグスタフ艦隊を目障りだと判断したのか、グスタフ艦隊の艦船にも攻撃をしかけ始める。
巨大な船体を誇るノイ・ゼラード級航宙戦艦も第八打撃艦隊の凄まじい砲撃の前にたちまち被弾して、蜂の巣状態となり爆沈する艦、機関部に著しい損傷を受けて航行不能に陥る艦が続出し始める。
コスモタイガー隊も第八打撃艦隊へ攻撃をしかけるが、その戦果は焼け石に水の様な微々たる状態だ。
ただ一つ幸いなのは第八打撃艦隊には空母が含まれず、敵艦隊の周囲には直掩機や迎撃機が居ない事だ。

(敵は集中砲火をする為に密集隊形をとっている)
(波動砲を撃って殲滅したいところだが、この集中砲火では波動砲へエネルギーを充填する間もない・・・)
(何か相手の密集隊形を利用できる手は無いか・・・)
良馬は相手が密集隊形をとっている事からそれを利用して一気に第八打撃艦隊を殲滅出来ないかと考えを巡らせる。
そんな中、自分たちと同じく第八打撃艦隊へ攻撃をしているグスタフ艦隊が視界に映る。
(そう言えば、グスタフ司令の艦は・・・)
(あの大型ミサイルを再装填している・・・ならば・・・)
「通信長」
「はい」
「グスタフ司令に通信を入れてくれ!!」
「えっ?ガルマン・ガミラスの艦隊に・・ですか?ヤマトではなくて・・・?」
「そうだ」
ギンガは一瞬、良馬が何を言っているのか理解できなかったが、良馬の事だから何か考えがあるのだろうと思いグスタフの艦に通信を

入れ始める。
　そのグスタフは、今一つの決断を下そうとしていた。
　やはり数の差はどうしても埋められず、グスタフ艦隊は確実に数を減らしている。
　相手の第八打撃艦隊の方も減っている筈なのだが、こちらも減っているので相手が減っている実感がわかない。
（このままでは全滅だ・・・それではヤマトを守れない・・・くそっ、こうなれば決死の覚悟で一艦一殺するしかない・・・）
　グスタフが体当たりによる特攻を決意した。
　そんな中、
「グスタフ司令、まほろばより通信が入っています」
「まほろばから？この大変な時に一体何の用だ？」
　煩わしいと思いながらもグスタフは通信回線を開く。
「月村艦長。一体何の用かね？現状、呑気に会話をしている余裕などないと思うが？」
　グスタフは苛立ちや焦りから皮肉を込めて良馬に言い放つ。
「グスタフ司令、貴官の艦にぶら下がっているプロトンミサイルは遠隔操作による無線起爆は可能でしょうか？」
　一方の良馬はグスタフの皮肉などどこ吹く風で、グスタフ艦が搭載しているプロトンミサイルの性能について訊ねる。
「そんな事の為だけに通信を送って来たのか!?」
　グスタフとしては良馬の質問はあまりにもくだらない内容だった様だ。
「前方の敵を壊滅する重要な案件です」
「・・・遠隔操作だったな・・・出来る」
「では、プロトンミサイルを敵艦隊に向かって撃って下さい」
「プロトンミサイルをか!?」
「ええ、敵艦隊は集中砲火をする為に密集隊形をとっています。プロトンミサイルの威力はファンタムで確認済みですからね」
「だが、いいのか？」
「と、言いますと？」

「前方の艦隊は前衛艦隊だ。後続にはボラーの主力艦隊が控えておるのだぞ？」
　プロトンミサイルの威力は確かに凄まじく、良馬の言う通りにすれば第八打撃艦隊を殲滅する事は可能かもしれない。
　しかし、第八打撃艦隊はあくまでも前衛艦隊に過ぎず、その後続には第八打撃艦隊よりも強力なボラー連邦の主力艦隊が控えている。
　その主力艦隊の規模も戦力も不明な中で、切り札とも言えるプロトンミサイルを第八打撃艦隊相手に使用しても良いのかと言う疑問が浮かぶ。
「確かにグスタフ司令の仰る通りですが、その前衛艦隊を殲滅しなければ、此処で終わりです。後先のことよりも今は眼前の敵に集中しましょう」
（最後まで希望を捨てず、後の事は考えず、まずは眼前の敵に集中する）
（沖田艦長や土方提督ならきっとこうする筈だ・・・）
　ガミラス戦役、そして太陽系へ侵攻してきた白色彗星との戦いを沖田艦長や土方提督と共に戦った良馬としてはもし、この場に沖田艦長や土方提督が居たらきっと自分と同じ選択をする筈だと判断した。
「分かった」
　良馬の提案を受けてグスタフは特攻を断念してプロトンミサイルの発射準備をする。
「プロトンミサイル発射準備!!目標、ボラー連邦前衛艦隊!!」
「はっ!!プロトンミサイル発射準備!!目標、ボラー連邦前衛艦隊!!」
「起爆はこちらの無線誘導で起爆させる!!敵艦隊のど真ん中で起爆させるぞ!!」
「はっ!!」
「安全ロック解除、プロトンミサイル発射準備完了!!」
「発射!!」
「発射!!」
　グスタフ艦の下部に吊るされていたプロトンミサイルが放たれ、第八打撃艦隊へと向かって行く。

「コスモタイガー隊を直ちに戦闘宙域から離脱させろ!!」
「は、はい!!」
プロトンミサイルの爆発に巻き込まれない様に良馬は第八打撃艦隊を攻撃しているコスモタイガー隊を戦闘宙域から離脱させた。
「敵戦艦より、プロトンミサイル接近!!」
「迎撃しろ!!」
第八打撃艦隊の方でもグスタフ艦から放たれたプロトンミサイルを認知しており、プロトンミサイルを破壊しようとプロトンミサイルへ砲撃をするが、元々プロトンミサイルはかなり分厚い装甲で造られており、ボラー連邦の宇宙艦船の砲撃ではビクともしない。
「今だ!!プロトンミサイルを起爆させろ!!」
「了解!!」
グスタフはタイミングを見計らいプロトンミサイルを第八打撃艦隊の中心で起爆させる。
「ぜ、全艦、回頭!!回避〜!!」
ハーキンスは回避命令を下すがその命令は少々遅かった。
「ぐあぁぁぁぁぁぁー!!」
ズガーン!!
プロトンミサイルはバイオン号を含め、第八打撃艦隊の艦船を巻き込み眩い光と共に爆発した。
「ふぅ〜・・・あんな爆発に巻き込まれたらコスモタイガーじゃああっという間にお陀仏だぜ・・・」
プロトンミサイルの爆発に巻き込まれた第八打撃艦隊の艦船を見ながら加藤は呟いた。
「ん?」
そして、アステロイドの向こう側に此方に接近して来る大艦隊の姿を見つける。
「こちら加藤。前方六十度方向、距離２０００宇宙キロにボラー連邦の主力艦隊を発見!!」
「おいでなすったか・・・副長、パネルにまわしてくれ」
「了解」

ヤマト、まほろば、そしてグスタフ艦隊の一同はパネルに映るボラー連邦の主力艦隊を様々な思いで見つめる。
パネル越しではあるが、先ほど戦った第八打撃艦隊の倍以上の数が確認できる。
「ワープをしてあの敵艦隊振り切れませんかね？」
第八打撃艦隊を破ったすぐ後で、それ以上の数の艦船と第二ラウンド・・・・
冥王星基地のガミラス軍や彗星帝国本土と戦った時とは異なる絶望感が込み上げる。
永倉が此処はワープをして相手を振り切れないか提案する。
「いや、此方のパネルで既に捕捉している様に相手も此方を既に捕捉しているだろう・・・・此処でワープをしても航跡をトレースされてワープアウト後の空間に相手もワープアウトしてくるだろう・・・・」
「・・・・」
「暗黒星団帝国のワープ技術には航跡を消す機能もあったが、残念ながら我々のワープ機関には航跡を消す機能はまだ開発されていない」
「では、ガルマン・ガミラスの方はどうでしょう？連続ワープ機関はガミラスからの技術提供でしたし、グスタフ艦隊の艦船ならば、ワープの航跡を消す機能を有しているかもしれません」
新見がグスタフ艦隊の艦船ならばワープの航跡を消す機能を有しているかもしれないので、グスタフに訊ねてみてはどうかと提案する。
もし、グスタフ艦隊の艦船にワープの航跡を消す機能があれば、同調ワープをしてボラー連邦の主力艦隊を振り切れるかもしれない。
「そうだな・・・・通信長、グスタフ司令にもう一度通信を繋いでくれ」
「はい」
ギンガはグスタフ座上の艦に通信を入れる。
「グスタフ司令。司令も眼前のボラー連邦の艦隊の存在は既に捕捉していると思いますが、戦端を開く前にお聞きしたいことがあります」
「何かな？月村艦長」
「グスタフ司令、麾下の艦船にはワープの航跡を消す機能は有してい

ますか？」
「残念だが、本艦を含めワープの航跡を消す機能は有していない。デスラー総統の旗艦や親衛隊の艦船ならばあったかもしれないが・・・」
「そうですか・・・」
グスタフ艦隊の艦船にはワープの航跡を消す機能は有していなかった。
その為、ワープでボラー連邦の主力艦隊を振り切るのは無理みたいだ。
「それよりも月村艦長、どうする？今度の主力艦隊は先ほど倒した前衛艦隊よりも数は倍以上だぞ。勝算はあるのか？」
「・・・分かりません。でも、物事は何事もやってみないと分かりませんから」
「貴官という男は・・・」
良馬の返答にグスタフはやや呆れていた。
「艦長、ヤマトがボラー連邦主力艦隊へ通信を送っています」
そんな中、古代はボラー連邦主力艦隊の司令官であるバルコムの下へ通信を送った。

ボラー連邦第一主力艦隊　旗艦　アーバル
「バルコム提督。宇宙戦艦ヤマトの艦長より、通信が入っております」
「よし、繋げ」
通信士が古代からの通信を繋ぐと艦橋のパネルに古代の姿が映し出される。
「宇宙戦艦ヤマト、艦長の古代進」
「第一主力艦隊司令のバルコムだ。我が軍の前衛艦隊をガルマン・ガミラスの手を借りて倒したみたいだが、その少ない戦力でまだ我々と砲火を交えるつもりか？」
戦友である筈のハーキンスや大勢の同胞が散ったにも関わらず、バルコムは悲しむ様子もヤマト、まほろば、グスタフ艦隊に対して怒りのような感情も無く、バルコムは余裕な態度だ。
彼としては、将来自分の地位を脅かしかねないハーキンスが死にさ

らに相手は自分が率いる戦力で十分に叩き潰せる相手であることから、この任務に成功すれば昇進も出来る絶好のチャンス故の余裕だった。
「・・・・要件を聞こう」
緊張した面持ちでバルコムの目的を問う古代。
最も、彼が何を欲しているのは大体予想が出来る。
「ハハハ・・・・随分と気が強いではないか。我が艦隊は前衛艦隊の五倍の戦力があるのだぞ？最後まで言わせるな・・・・ルダ王女を引き渡すのだよ」
「くどい、いかなる要求もＮＯだ!!」
「もうよい!!通信を切れ!!」
先程の余裕とは打って変わって古代からあっさりと要求を拒否されたバルコムは怒気を含む声で古代との通信を一方的に切り、
「全艦、十秒以内に総攻撃を開始せよ!!」
バルコムが下した総攻撃の命令一下、主力艦隊の前衛部隊は主砲の照準をまほろば、ヤマト、グスタフ艦隊へと向ける。
「古代艦長、まほろばはこれより拡散波動砲の発射準備を行います。十分で良いので、何とか時間を稼げますか？」
良馬は古代に拡散波動砲を撃つので、エネルギー充填中の時間稼ぎを頼む。
「拡散波動砲を?!しかし、いくら拡散波動砲でもあの数の敵を全て殲滅することはできないのでは？」
収束波動砲ではなく、拡散波動砲は確かに対艦隊戦では強力な武器だ。
しかし、距離と数の問題からいくら拡散波動砲でもあの大艦隊全てを殲滅するのは無理があるのではないかと古代は思い、良馬に訊ねる。
「敵全てを殲滅する必要はない。ある程度の数を減らせれば多少なりこちらにも勝機はある筈だ」
これまでのボラー連邦の戦闘からボラー連邦は波動砲の類を持つ戦艦はおらず、また火炎直撃砲の様なワープで弾丸を打ち込んで来る

特殊艦艇も存在していない。
ならば、波動砲の威力を見せつける事により数を減らすのは勿論の事、例え全てを殲滅できなくとも残った相手に対して心理的ダメージを与える事も可能なのではないだろうか？
「分かりました。コスモタイガー隊と共に何とかしてみます」
「よろしく頼む」
コスモタイガー隊はまほろばの拡散波動砲発射までの時間を稼ぐために高速推進ポッドを点火して、急速に敵艦隊へ近接戦闘をする。
しかし、第八打撃艦隊との戦闘を終えたばかりでコスモタイガー隊でも強化対艦ミサイルの数も減っており、逆に敵は第八打撃艦隊よりも多い為、対空砲も濃密であり、被弾して撃墜されるコスモタイガーもちらほらと出始める。
そして、第一主力艦隊はその数の多さを活用してコスモタイガー隊の戦闘網を突っ切ってヤマト、グスタフ艦隊へと砲火を向ける。
「凄い砲撃だ・・・」
「まだか・・・まだ、まほろばの波動砲は準備が整わないか・・・」
ヤマトやコスモタイガー隊としてはこの波動砲のエネルギーを貯める十分の時間がとてつもなく長く感じとれた。
グスタフもただ黙っている訳ではなく、残存艦を纏めヤマト、コスモタイガー隊と共にボラーの主力艦隊へ攻撃をする。
デスラーから言われた『ヤマトを守れ』と言う命令は相手が第八打撃艦隊から第一主力艦隊へ変更されてもデスラーからの命令は有効だ。
「残存艦は集結、こちらも密集隊形をとり、ボラーの主力艦隊に向けて集中砲火!!」
既に第八打撃艦隊との戦闘でグスタフ艦隊の総数は半数以下になっていたが、グスタフ艦隊は怯むことなくボラーの第一主力艦隊へ砲撃を行う。
「波動砲の準備完了!!射線軸から退避を!!」
「全艦、全機、波動砲の射線軸から退避!!」
まほろばからヤマト、コスモタイガー隊、グスタフ艦隊へ退避勧告

が送られると各々は急いで射線軸から退避行動をとる。
「拡散波動砲、発射!!」
まほろばから拡散波動砲が放たれ周辺の岩塊と共にボラー連邦の第一主力艦隊の艦艇を飲み込んで行く。
しかし、良馬や古代の予想通り、ボラー連邦の第一主力艦隊全てを殲滅する事は出来なかったが、一斉射で第一主力艦隊の三分の二を葬ることが出来た。

ボラー連邦　第一主力艦隊　旗艦　アーバル　艦橋
「な、なんだ!?あの兵器は!?」
バルコムのアーバルは後方に居たので、拡散波動砲に巻き込まれることは無かったが、あれだけの艦船が一瞬のうちに消滅した事でバルコムが動揺するのも無理は無かった。
「わ、我がボラー連邦が誇る主力艦隊が一撃で・・・・」
「て、提督、いかがなさいますか?」
副官がバルコムに指示を仰ぐ。
撤退か?それとも徹底抗戦か?
最もこれだけの被害を出しておめおめと本星に帰れる筈がない。
戻れば敵前逃亡罪で粛清されるのは目に見えている。
「狼狽えるな!!戦力ではまだ我々の方が上だ!!こうなれば総力戦だ!!全艦砲門開け!!突撃だ!!」
バルコムが取った選択肢は一つしかなかった。

「敵艦隊、急速接近!!」
「焦りだしたか?」
あれだけの被害を出したにもかかわらず、ボラー艦隊は撤退せずに向かってくる。
ガミラス戦役や彗星帝国との戦いでも防衛軍の撤退は地球人類の絶滅に繋がる事態であったが、ボラー連邦の場合は一度の戦で撤退したところでボラー連邦の存亡に繋がるとは思えない。
ルダの身柄確保または抹殺を何としてでも行わなければならない

のか？
　それとも撤退すれば『死』に繋がるような国家体制なのだろうか？
「古代艦長、此処は波動カートリッジ弾で一気に殲滅しよう!!」
「ええ!!敵の数も減り、向こうから向かってくるこの機会は絶好のチャンスですね。島、頼むぞ!!」
「ああ、任せろ!!」
「航海長、こちらも頼むぞ」
「了解。ヤマトに遅れは取りませんよ」
　島、永倉、両艦の航海長は操艦桿をギュッと力強く握る。
　ヤマト、まほろばは反転また反転とボラー連邦主力艦隊の攻撃を躱しつつ、こちらからも接近し、波動カートリッジ弾と波動爆雷の必中距離まで距離を詰めると、波動カートリッジ弾と波動爆雷がボラー連邦主力艦隊へと襲い掛かった。
　命中したボラー艦は船体がグニャグニャに捻じ曲げられ、変形し、眩い閃光と共に切り裂かれ、宇宙空間から消滅していく。
　波動カートリッジ弾の威力は波動砲と比べると１０００分の１だが、それでも一つ一つの艦には凄まじい効果を発揮する。
「直撃、来ます!!」
「か、回避～!!」
「だ、ダメです!!回避、間に合いません!!」
「そ、そんな・・・」
　次々と殲滅されていくボラー艦の中にはバルコムが乗艦するアーバルも含まれていた。
「ぐあぁぁぁぁぁぁー!!」
　アーバルは波動カートリッジ弾の一撃を受け粉々に吹き飛ぶ。
「よし、とどめだ!!敵艦隊下部へ潜り込み、煙突ミサイル発射!!」
　ヤマト、まほろばは逃げ腰になっているボラー主力艦隊の残存艦に対して煙突ミサイルと波動爆雷をぶつける。
　スカラゲック海峡星団が、ボラー連邦第一、第二主力艦隊の終焉の地となった。
「か、勝った・のか？」

「ぼ、ボラーの主力艦隊・・ぜ、全滅です」
グスタフ艦の艦橋でオペレーターがボラーの主力艦隊が全滅した事を報告する。
「こ、これが地球の戦艦の力なのか・・・・」
一武人としてヤマトとは戦ってみたいと言う思いがあったが、こうしてその力を間近で見て、今グスタフはヤマトと敵対しなくて良かったと思った。
「通信士」
「はっ!!」
「総統閣下に通信を・・・・」
「了解」
通信士はデスラーが乗艦しているガルマン・ガミラス総旗艦、ノイ・デススーラ二世に通信を送る。
「グスタフ、どうした?」
「はっ、ボラーの前衛艦隊並びに主力艦隊はヤマト、まほろば、そして我が艦隊が何とか殲滅することが出来ました」
「ほう・・それは何よりだ。ベムラーゼも今頃はさぞかし悔しがっている事だろう」
「はい。ですが、我が艦隊は当艦を含め、大きな損害を受けました」
「やむを得ない。君が指揮をする艦隊とボラーの前衛艦隊、主力艦隊との数があまりにも違い過ぎた。しかし、君たちは良く戦い、その職務を全うしてくれた」
「ありがとうございます。ですが、被害状況を鑑みて、残念ながらこれ以上のヤマト護衛の任は・・・・」
「分かっている。ボラーの主力艦隊を殲滅し、ヤマトを守ったのだ。これ以上君たちに無理強いは出来ぬ。直ぐに近くの基地へと向かい補修と補給を受けるといい」
「はっ!!」
グスタフ艦隊はこれ以上のヤマト護衛は不可能だと判断したデスラーはその任を解いた。
続いてグスタフは古代と良馬に通信を送る。

「古代艦長、月村艦長」
「グスタフ司令」
「いかがされました？」
（まさか、ボラー艦隊を殲滅したから、次は我々の番だ・・・とか言わないよな？）
　ボラー艦隊は襲撃する前はグスタフ艦隊と砲火を交えるつもりだったので、共通のボラー艦隊が居なくなったことで、次は自分たちがルダの身柄をかけて砲火を交えるつもりなのかと警戒してしまう。
「我が艦隊は著しくダメージを受け、これ以上の同行は不可能だ」
「ルダ王女の件ついては？」
「確かにルダ王女の件について、私は身柄を要求する任務を受けていたが、これ以上砲火を交え、部下を殺す訳にはいかない。ただ、デスラー総統はルダ王女の事は諦めていはいない。古代艦長、月村艦長。ルダ王女の件について総統とは砲火ではなく対話によって解決してもらいたい」
「分かりました。デスラーは私にとっても友人でありますから・・その友情を出来れば破るようなことはしたくはありませんから」
「では、古代艦長、月村艦長。さらばだ」
　グスタフとの通信が切れるとグスタフ艦隊は反転して近くの基地がある星へと向かって行った。
「古代艦長」
「はい」
「この後はどうする？」
　良馬は古代に今後の方針を訊ねる。
　良馬としては地球へ帰還して、地球人類・動植物をケンタウロス座アルファ星への避難任務に従事する為に地球へ向かうのかと思っていた。
「・・・月村艦長。私自身もこの後どうすればいいのか分からないんです」
「・・・・」
「ヤマトが探査すべき星は全て探査して人類は住めないと分かりまし

た。しかし、まだ時間が残されていない訳ではありません。ですが、どこを探査すればよいのか・・・・」
「アメリカの探査船団の全滅が確認されたので、アメリカの探査船団が探査する宙域を我々が代行して探査をするか・・・・地球へ帰還してケンタウロス座アルファ星への避難任務に従事するか・・・・」
良馬は自身が予測したケンタウロス座アルファ星への避難任務を含め、アメリカの探査船団が探査する宙域の探査をするかを提案する。
「・・・・」
地球には時間が残されていないが、まだゼロではない。
古代は良馬があげた二つの提案の内、どちらかを採用するか？
その判断をしている時、
「艦長」
ヤマトの第一艦橋にルダと共に揚羽がやって来た。
そして揚羽は古代に驚くべき提案をしてきた・・・・

百七十六話　シャルバート星の秘密

スカラゲック海峡星団においてルダの身柄をめぐっての地球、ガルマン・ガミラス、ボラー連邦における三つ巴の戦いはグスタフヘデスラーからの命令もあり、地球とガルマン・ガミラスの連合艦隊とボラー連邦との戦いになり、ボラー連邦は第八打撃艦隊、本国の第一、第二主力艦隊の全滅と言う手痛い結果で幕を下ろした。

しかし、生き残ったグスタフ艦隊も残存艦がわずかとなり、旗艦であるグスタフが座乗する戦艦を含めて残存艦は全て損傷が酷く撤退することになった。

グスタフ艦隊からの支援があったとは言え、ヤマト、まほろばも艦隊戦を二戦繰り広げただけあって当然無傷と言う訳はなく、両艦は現在、技術班を中心として全部署の乗員たちの手によって応急修理が行われている。

戦いに勝ち、ルダの事を守り通したヤマトであったが、既に自分たちが探査する惑星はもうない。

周辺に輝く銀河の星々のどれもが地球人類を受け入れてはくれなかった。

これだけ広い宇宙には地球と同じような星くらい一つは見つかるだろうと楽観視していた部分もあったが、いざこうして実際に探してみると限られた探索範囲とは言え地球にそっくりな星は存在しないと言う辛い現実を突きつけられてしまった。

艦の修理が進められる中で、この後の方針について艦橋で古代と良馬が意見交換をしていた時、揚羽は古代からルダの警護の任を命じられ、戦闘中はルダと行動を共にしていたがこうして戦闘が終わるとルダは今回の戦闘による戦死者たちの為に祈りを捧げたいと揚羽に嘆願してきた。

ヤマトの艦外へ出る訳ではないので、揚羽はルダを展望室へと案内した。

展望室にて床に両膝をつき、手を組んで祈りを捧げるルダ。
すると、宇宙空間にマザー・シャルバートの姿が映し出される。
「マザー・シャルバート・・・・」
宇宙空間に浮かび上がったマザー・シャルバートはまるで何かを語りかけるかのように揚羽の事を暖かく見つめている。
「マザー・シャルバート・・・マザー・シャルバート・・・・」
揚羽はシャルバート教の信者ではないが、マザー・シャルバートの姿を見て彼はいつしか片膝をつき、マザー・シャルバートへの祈りの言葉を唱えていた。
「マザー・シャルバート、お助けください!!マザー・シャルバート、どうか地球を助けて下さい!!」
揚羽の言葉を聞いてルダはゆっくりと振り向く。
それと同時に宇宙空間に浮かび上がっていたマザー・シャルバートの姿は消える。
立ち上がったルダはニッコリと笑みを浮かべて片膝をついている揚羽の手を取ると、
「参りましょう・・・・」
「えっ？」
「シャルバート星へ・・・・ご案内いたします」
「シャルバート星は今でも実在している星なんですか!?」
「はい」
ボラー連邦もガルマン・ガミラスも・・そしてシャルバート教の信者ですら、所在が分からず探し求めている星、シャルバート星・・・・
シャルバート星の王女であるルダが存在するのだから、存在するのかもしれないが、その一方でもしかしたら、シャルバート星は既に滅んでしてしまい、ルダはそのシャルバート星から脱出したところをボラー連邦に捕まってしまった可能性もあったがルダの言葉からシャルバート星はちゃんと存在するみたいだ。
「どうしてもっと早く言ってくださらなかったんですか!?」
思わず声が裏返る揚羽。
「気を悪くしないでください。私はあなた方を見ていたのです」

「・・・我々はルダ王女の信用を得られたと言う事ですか?」
「それ以上です。感謝をしていいます。だからこそあなた方をシャルバート星へご招待したいのです。私を古代艦長の下へ連れて行ってください」
「は、はい!!」
ルダの言葉の意味を理解した揚羽はルダを第一艦橋へと案内した。
その第一艦橋では古代が良馬と意見交換をして、地球へ帰還する事に決まりかけていた。
「古代艦長」
「揚羽・それにルダ王女も・どうしたんですか?」
「艦長、ルダ王女が我々をシャルバート星へ案内してくれるそうです」
「えっ!?シャルバート星に!?」
揚羽の言葉に古代は驚愕する。
パネル越しではあるが、良馬もこれには驚いた。
「・・・ルダ王女の御厚意はありがたいと思いますが、我々には時間が残されていないのです」
古代としてはルダを故郷の星があるのであるならば、彼女を故郷の星へ還さなければならないが、今の地球は時間が残されていない。
であるならば、良馬が言うように今は地球へと戻り、地球に居る人類と動植物をケンタウロス座のアルファ星へと避難させなければならない。
「・・・いや、古代艦長。此処はルダ王女の招待に乗ろう」
そんな中、良馬はルダの招待を受けてシャルバート星へ行こうと言う。
「えっ?ですが、地球には時間が・・・」
「分かっている。でも、俺たちはファンタムからルダ王女の事を託された。これまでは第二の地球探査を優先してきたが、探査担当宙域には第二の地球になりうる星は存在しなかった。地球は滅亡を待つだけだ・・・それならば、ルダ王女にはそんな地球の厄介事に巻き込まないようシャルバート星へ送り届けた方がいいのではないか?それに、もしシャルバート教の信者の人たちが言うようにシャルバート星が

技術に優れている星ならば、太陽の制御方法を知っているかもしれないし、もしくは地球にそっくりな星の位置も知っているかもしれない」
　良馬は敢えて古代との会話でシャルバート星の事を『技術に優れている星』と評した。
　ガルマン・ガミラスもボラー連邦もルダを欲しがったのは、シャルバート星の位置というよりはシャルバート星の軍事技術であることは先ほどの戦いで明白であった。
　それにルダ本人の前で彼女の故郷の星を『軍事技術が優れた星』と言うのはいささか失礼に当たる事も含まれる。
　ガルマン・ガミラスが行った太陽制御の様にシャルバート星がガルマン・ガミラスよりも技術に優れている星ならば、ガルマン・ガミラスとは異なった方法や技術で太陽制御が出来るかもしれないと言う可能性も秘めていた。
「・・・そうですね。地球にとっては悲しい事ですが、月村さんの言う通りですね・真田さん、島・・・」
「分かっている。俺たちに出来る最善の勤めを果たそう」
「そうだな」
　古代同様、真田も島も納得した。
「ありがとう。真田さん、島・・・ルダ王女、シャルバート星へ行くにはどこに向かえば良いんですか？」
　古代は改めてルダにシャルバート星の位置を訊ねる。
「宇宙の難所を通らなければなりません。まずは私が指定する座標までワープをしてください」
「分かりました。まほろばはヤマトにワープを同調させて下さい」
「了解」
　ルダの指示の下、まほろば、ヤマトはワープ準備に取り掛かった。
　まほろば、ヤマトの両艦はワープ準備が整うとルダの指定した座標まで二隻の宇宙戦艦はワープを行った。
　そして誰もいなくなったスカラゲック海峡星団であったが、ボラー連邦の宇宙艦船の残骸の中で小さく点滅する光点があった事にヤマ

ト、まほろばの乗員たちの中で気づく者は誰も居なかった。

ボラー連邦　本星　首相官邸

「ゴルサコフ」

「はっ!!」

「ルダ王女の一件であるが、どうなっておる？ハーキンスからもバルコムからも連絡が無いようだが？」

「はっ・・・その件につきまして首相閣下には不愉快な情報をお耳に入れる事をご容赦ください」

「むっ？それはどういう事かね？」

「ハーキンス中将の第八打撃艦隊、そしてバルコム提督率いる第一、第二主力艦隊・共に全滅です」

「な、なにぃ!?全滅だと!?」

ゴルサコフの報告を聞き、ベムラーゼはそれこそ目玉が飛び出るほど驚愕した。

そしてその驚愕は直ぐに憤怒へと変わる。

「何故だ!?我がボラー連邦が誇る精鋭艦隊に本国の主力艦隊を二個艦隊も投入した結果、地球などと言う田舎戦艦相手に小娘一人奪い返すことも出来ず、全滅するとは何たることか!?」

ハーキンスとバルコムに命じた時は、たかが戦艦二隻に対して過剰戦力であると思っていたが、ゴルサコフからの報告を受け、過剰戦力どころか戦力不足だった事実について、ベムラーゼを始めとしてボラー連邦の誰もが驚愕する事実であろう。

実際にゴルサコフ自身も今回の結果には驚きが隠せない。

「して、何故そのような結果となった？」

いくら憤慨したところで結果は変わらないので、ベムラーゼはひとまず、今回の戦いにおける敗因をゴルサコフに訊ねる。

「はっ、どうも接敵したスカラゲック海峡星団にてガルマン・ガミラスの艦隊も居たようです」

「なにっ!?ガルマン・ガミラスの艦隊だと!?」

「はい。連中の狙いも恐らく我々と同じく・・・」

「ルダ王女だな？」
「御賢察の通りです。ガルマン・ガミラスの艦隊は地球の戦艦と協同し、我が艦隊を殲滅した様です」
「くぅ～デスラーめ・・・どこまでも私の邪魔を～・・・」
　ゴルサコフからスカラゲック海峡星団における戦いの報告を受けてデスラーの予想通りベムラーゼは悔しがる。
「それで、地球の戦艦は何処へ向かっておる？彼奴等の母星である地球か？」
「それが、どうも地球とは異なる空間へワープをした様でして・・・」
　バルコムは自身の艦隊がまほろばの拡散波動砲を受けた時、心のどこかで敗北を察していたのか、乗艦が撃沈される前に密かにスパイ衛星を射出しており、戦闘後のヤマト、まほろばの行動は逐次ボラー連邦へ筒抜けとなっていた。
「どこだ？」
「おそらくですが、ルダ王女の母星、シャルバート星と思われます」
「なんだと!?シャルバート星!?」
「はい。バルコム提督が戦場に残したスパイ衛星から地球の戦艦が行ったワープの空間トレースは出来ています。かくなる上はこの私自ら、シャルバート星へと赴き、かの星を占領してみせます」
　ゴルサコフ自身もこのままでは自分に今回の敗戦の責任を押し付けられると感じ、自ら志願してシャルバート星へ向かう旨をベムラーゼに伝える。
「よろしい。君がそこまで言うのであるならば、此度のシャルバート星に関する作戦はゴルサコフ君。君に一任しよう」
「はっ。では、早速出撃の準備を致します」
　ゴルサコフはベムラーゼに一礼してその場からいそいそと去って行った。
（ルダ王女の身柄は抑えられなかったが、シャルバート星の位置さえ摘めれば、十分だ）
（シャルバート星を手中に収めた後はガルマン・ガミラスも地球も一気に滅ぼしてくれるわ）

何度も自分に煮え湯を飲ませて来たガルマン・ガミラス。
そしていきなりポンと出て自分の貴重な戦力を削った地球。
ベムラーゼにとっては報復するには十分な理由だった。

ゴルサコフがヤマト、まほろばを追いかけ、シャルバート星を目指している中、先にルダの案内の下、シャルバート星を目指しているヤマトとまほろばは、ルダに指定された座標にワープアウトをするとその空間には暗褐色の冷たい印象をうける小さな星が眼前に現れた。
「前方に惑星を確認」
「あれがシャルバート星なのか？」
幻の星と言うにはあまりにも質素と言うかあっけない印象であり、パネル越しに見る星の様子から人が住んでいる様な星には見えない。
誰もが『あの星がシャルバート星なのか？』と言う疑問を抱いていると、
「いいえ、あれはシャルバート星への門です」
「門？」
星が門とはどういう事なのか？
ルダの言葉の意味が分からず、一同がルダの言動に注目する。
しかし、肝心のルダ本人は詳しい事は言わずに両手を胸の前に組み、静かに祈り始める。
すると、暗褐色の星がまるで蘇生するかのように輝きだした。
「星が・・・」
「光りだした!?」
「まるで星が生き返ったみたいだ」
そして次の瞬間、星全体が収縮し、亜空間へと反転し始めた。
反転した後、亜空間へのトンネルのような不思議な空間が宇宙空間に生じた。
「なるほど、あれがシャルバート星の入り口・・・これじゃあ誰も分からない筈だ」
ここまでの現象を見てルダの言葉の意味を理解し、同時にシャルバート星が幻の星である意味も判明した。

シャルバート星へ行くにはシャルバート星人の協力がなければシャルバート星へ辿り着くことが出来ない様だ。
まほろばとヤマトは亜空間トンネルへと吸い込まれるように入った。
亜空間とは言え衝撃や船体に何らかの異常はない。
どれだけの距離を通過するのか分からないがこれが人の手によって造られたのであるならば、驚くべき技術だ。
かつて暗黒星団帝国がヤマト、まほろばの乗員たちを欺くため、地球（偽）を太陽系から他の星系に移動させたと言う嘘もシャルバート星の技術なら可能かもしれない。
（シャルバート星の技術はジレル人の技術と同等かそれ以上かもしれないな・・・）
シャンブロウで出会ったジレル人も地球より高度な技術を有していた。
この門の技術からシャルバート星の技術力はジレル人の技術と同等かそれ以上のモノだと予測する良馬。
（ボラー連邦とガルマン・ガミラス共にシャルバート星の技術を恐れ、ソレを手に入れたいと思う訳だ）
それと同時にボラー連邦、ガルマン・ガミラスの両陣営がシャルバート星の技術を欲するのも理解した。
やがて亜空間トンネルから出たヤマト、まほろばの眼前には淡い光に包まれた一つの星が見えた。
「見えました。あれがシャルバート星です」
「あれがシャルバート星・・・」
眼前の星こそルダの故郷であり、幻の星、シャルバート星であった。
「これより着陸態勢に入る」
ヤマト、まほろばは応急修理をしたとはいえ、痛んだ船体をギクシャクさせながらシャルバート星へと降下していく。
パネルにはシャルバート星の地表の光景が映し出され、エーゲ海近辺のギリシャを思わせる美しい環境であるはあるが、宇宙戦艦が着陸できるようなドック等の施設は確認できなかったので、地表に流れる

大きな川へと着水する事にした。
　そんなヤマト、まほろばの姿をシャルバート星の人たちは当然空の彼方から降りて来た二隻の巨大な宇宙戦艦の存在に気づく。
　しかし、ヤマト、まほろばが侵略者ではないとまるで分かっているかのようにシャルバート星の人たちは狼狽える様子もパニックになる様子もなく、逆に手を振っている人たちもいる。
　やがてヤマト、まほろばが川へと着水し、暫くすると一隻のボートが岸からヤマトへと向かってくる。
　そのボートには数名の男性が乗っていた。
　やがてボートはヤマトが下ろしたタラップに接舷して長老らしき老人とお付きの若者二人がヤマトの甲板へと上がる。
　ヤマトの方も古代、雪、真田がルダと共に甲板で彼らを出迎える。
「姫!!よくぞご無事で?!」
「貴方も元気そうでなによりです」
「いえ、姫様が行方不明となってから幾年月・・・・不安と心労と戦う日々でした」
「ごめんなさい。ご心配をおかけしました」
「いえ、こうして無事に戻って来て何よりです」
「こちらはシャルバート星をおさめる長老です」
　ルダは古代たちに長老を紹介する。
「外遊の為にシャルバートの外へ出た姫様がボラー連邦と言う無法者の衝撃を受け、絶望しておりました。姫様をお連れいただきまして、心より感謝いたします」
　長老は深々と頭を下げて礼を述べる。
「いえ、私たちは当然の事をしただけです」
「姫様を連れ戻してくださったのです。あなた方は大事なお客様です。どうぞ、シャルバートで旅の疲れを癒していってください」
　こうして一同はシャルバート星にある王宮へと招かれた。
　もっとも王宮と言っても地球のバッキンガム宮殿やイスカンダルの王宮とは違い、古代ローマ時代にアテネやギリシャ、ローマにあった大理石で出来た様な宮殿であった。

（これがシャルバート星なのか？本当に・・・？）
ファンタムでも一部の乗員しか上陸できなかった事からガルマン・ガミラス以降久しぶりの上陸・・・
しかも環境が地球そっくりな星と言う事でシャルバートへ上陸した乗員たちは祝賀会を楽しんだ。
（マスター・・・）
そんな中、ギンガのデバイスであるブリッツ・キャリバーがギンガに声をかける。
「ん？何？ブリッツ・キャリバー」
（この星の人たちですが、個人差はありますがほぼ全員が魔力を秘めております）
「えっ？この星の人全員!?」
（はい・・・）
魔法文明発祥の地とされるミッドチルダでも魔力保有者と非魔力保有者が入り乱れている。
現状大きな対立は生じていないが、非魔力保有者と比べてやや魔力保有者が優遇されている面がある。
そんなミッドチルダと異なり、このシャルバート星では住人のほぼ全員が魔力保有者だと言うのだから驚愕だ。
『ほぼ』が付くのはこの宮殿にシャルバート星の住人全員が集まっている訳ではないので、確証がないのだが、宮殿にいるシャルバート星人全員が魔力保有者なので、ミッドチルダと比べ魔力保有者の人口はシャルバート星の方が多いと予測される。
ギンガがこの星の住人のほぼ全員が魔力保有者である事に驚愕している中、古代は祝賀会をこっそりと抜けて宮殿のバルコニーから眼前に広がるシャルバート星の外を眺める。
（此処は本当にシャルバート星なのか？）
古代は信じられない様子で外を見ていると、
「信じられないって顔をしているね」
「ん？あっ、月村艦長」
良馬が古代に声をかけた。

「はい。デスラーやシャルバート教の信者が言うシャルバート星の印象とは全然違います」
「ああ・・・シャルバート星に関する噂やシャルバート星への門の技術を見た後でこの星の光景を見るとな・・・」
「・そうですね・・・それに見た所、地球の様な多国籍国家ではなく、ガルマン・ガミラスの様にシャルバートは一つの統一国家として成り立っているようですが、イスカンダル同様人口はそんなに多くは感じられません」
「それならば、どうしてこの星が銀河系最強の星だなんて噂が立ったのか・・・」
「やはり気になりますか？」
「ああ・・・火のない所に煙は立たないからね」
　当初はシャルバート星の現状を見てギャップを感じた良馬であったが、やはりあの門の技術を見るとどうしても目の前の光景に対してシャルバート星には何か秘密があるように思えてしまう。
「暗黒星団帝国は我々を騙すために偽物の地球を用意していたが、シャルバート星に関しては、悪意は無いみたいだが、やはり何か大きな秘密を持っているのだと思う」
「秘密・ですか？」
「ああ。シャルバート星に入る為の門の技術・・・それに、ルダ王女は宇宙へ外遊している最中にボラー連邦に捕らわれた・・・となるとシャルバート星には宇宙空間を航行する能力がある宇宙船がある筈だ」
「なるほど・・・」
　良馬の指摘を受け、古代はシャルバート星は地球よりも文明が劣る星・・・と言う印象が変わる。
　だとすると表向き、文明が遅れた星の様に振舞うのはやはりシャルバート星には何か秘密があるのだろう。
「艦長」
　古代と良馬がシャルバート星の外を眺めていると土門が来た。
「土門か」

「艦長、これが宇宙のいたる所で救いを求めて信仰を集めている星ですか？地球よりもずっと文明も技術も遅れた・・・力なんか何にもなさそうな星じゃないですか」
「うむ、そうだな」
「艦長、このままシャルバート星を占領しましょう。そしてシャルバートを第二の地球に・・・」
「土門君、それはダメだ。惑星探査の規定で知的生命体が存在する星は第二の地球候補として除外されている」
　良馬は慌てて土門に物騒な事は控えるように窘める。
「月村艦長、何をそんな綺麗ごとを!?地球にはもう時間が無いんですよ!?」
「土門。恥ずかしながら俺もそんな考えが脳裏を過ってしまった。だが、そんな事をしてしまったら、俺たちはかつてのガミラスや白色彗星の様な侵略者に成り下がってしまう」
「だったらどうすれば!?移住先が無ければ地球人類は終わりなんですよ!?」
「それは分かっている。ただ占領はダメだ。どうしてもシャルバートに地球人類を住まわせには、ルダ王女と会談して地球人類の移住先として土地を提供してもらうとかの平和的な移住案を提示するとかだ」
　良馬は土門に妥協案を言うが、
「そんなのんびり会談だなんて・・・」
　時間がおしている中で、会談ですんなりと決まらなければそれだけでも貴重な時間をロスする。
「まぁ、実際にルダ王女らシャルバート星の人たちが地球人類を受け入れてくれるのかも不明だ。仮に移住案を受け入れて地球人類をシャルバート星へ移住させた後、シャルバート星人と地球人類との間に土地や鉱物等の物資、宗教を巡って確執が生まれないとは言い切れないしな」
「・・・」
　良馬の提示する地球人類のシャルバート星への移住案もやはり、短期間で決められるモノではなく、移住後も地球人類とシャルバート星

人との間で様々な問題が起こる可能性を示唆する古代。
地球でもアメリカの先住民と入植してきた白人との間に大きな確執を生んだ。
南米では侵攻してきたスペイン人を神の使いと間違えたアステカ文明とインカ帝国は疫病と略奪の憂き目に遭い滅んだ。
こうした地球の歴史から地球人類がシャルバート星へ移住した後、シャルバート星人と地球人との間に確執が生まれない確証もない。
ましてやシャルバート星の人口は流石にイスカンダルよりは多いが、小国並みの人工しかいない印象があり、彼らを少数民族としてカテゴリーに入れそうだ。
故に惑星探査規定に知的生命体が住んでいる星は除外されていた。
ファンタムとは異なり今度こそ見つけた第二の地球にそっくりな星は既に先住者が居たので地球人類の移住は不可能・・・
目の前にお宝があるのにそれを手に入れることが出来ないもどかしさがある中、古代が持っていた携帯通信機が受信を知らせる。
「相原か？古代だ。どうした？」
「デスラーの艦隊が亜空間トンネルを通ってシャルバート星に近づいています。あっ、今、デスラーから通信が来ました。そちらに転送します」
携帯通信機のモニターにはデスラーの姿が映し出される。
「古代」
「デスラー」
「古代、その星は本当にシャルバート星なのか？」
「そうだが・・・どうして？」
「その星の何処に宇宙最強に君臨する程の軍事力がある？」
「どうやらそれはただの伝説に過ぎなかったらしい。僕たちも驚いている」
古代は携帯通信機でシャルバート星の地表の様子をデスラーに見せる。
良馬が予測しているようにシャルバート星には何らかの秘密がありそうではあるが、それは確証を得ていないし、古代としてはシャル

バート星の軍事技術をガルマン・ガミラスへ渡したくは無いと言う思いもあった。
「ふむ・私もボラーも誤解していたと言う事か・・・」
「どうやらその様だ」
　シャルバート星の地表の光景を見たデスラーもシャルバート星が自分たちの星や地球よりも文明が遅れている星と言う印象を持ち、シャルバート星の宇宙最強伝説はシャルバート教の信者たちが勝手に膨らませた妄想であったと言う認識を持つ。
　そんな中、デスラーが乗艦しているノイ・デウスーラ二世の艦橋に警報が鳴る。
「そのボラーがいよいよお出ましだ。我々同様、亜空間トンネルに入って来たようだ」
「デスラー総統!!ボラー連邦の艦載機群が接近してきます!!」
「なに・・・?」
　デスラーは冷静であったが、タランの報告を通信機越しに聞いた古代は思わず空を見上げる。
　デスラー艦隊の後方に出現したボラー艦隊はゴルサコフ率いるシャルバート星制圧艦隊であった。
　ゴルサコフの方でも前方にデスラー率いる艦隊の存在は認識していたので、第一次攻撃隊の艦載機群はデスラー艦隊へと襲い掛かる。
「フフフ・・・電撃作戦で一気にシャルバート星を制圧する!!別働隊、攻撃開始!!」
　第一陣の艦載機群がデスラー艦隊の足止めをしている間にゴルサコフは第二陣の艦載機群と地上制圧の為の上陸用舟艇をシャルバート星の地表を目指して降下させる。
「デスラー総統は兎も角、ボラー艦隊が来たとなると此処が戦場になる可能性があるな」
「ええ、すぐに戦闘準備をしないと!!」
「それとシャルバート星の人たちも避難させないとこの星の人たちにも被害が出る」
「そうですね」

スカラゲック海峡星団でボラー艦隊の物量を目の当たりにしていることから今回もボラー連邦はかなりの大軍をシャルバート星へ送り込んで来る可能性がある。
直ぐに戦闘準備とシャルバート星の人たちを避難させなければならない。
古代は長老に事態の説明をして、良馬はギンガから通信機を借り、ヤマト、まほろばに戦闘準備をさせると同時に会場に居るヤマト、まほろばの乗員たちにシャルバート星の人たちを避難させるように指示を出す。
ヤマト、まほろばは一度川から浮上してコスモタイガーを発進させて大気圏外で戦っているデスラー艦隊の支援に回る。
コスモタイガーが上昇をしていると、シャルバート星の地表に降下していくボラー連邦の艦載機群と上陸用舟艇の姿を捕捉した。
「隊長、アレは!?」
坂本がボラー連邦の地上攻撃部隊に気づき、山本に報告する。
「地上攻撃の部隊か!?」
「どうしますか?」
「隊を二つに分ける。ヤマトのコスモタイガー隊はこのまま上昇してデスラー艦隊を支援、まほろばのコスモタイガー隊は地上に向かっているボラーの艦載機を相手にしてくれ」
「了解」
山本が指示を出すとヤマト所属のコスモタイガー隊は上昇し続けデスラー艦隊の支援に向かい、まほろば所属のコスモタイガー隊は上昇を取りやめて反転し、地上攻撃に向かっているボラーの地上攻撃部隊の迎撃へと向かう。
「来た・対空戦闘用意!!」
「パルスレーザー砲一斉射撃!!」
ヤマト、まほろばはパルスレーザー砲でボラーの地上攻撃に向かう艦載機群を迎撃するが、何せ数が多い。
パルスレーザー砲の迎撃網を掻い潜った艦載機群はヤマト、まほろばを攻撃するよりも地上への攻撃と制圧を優先とする。

逃げ惑うシャルバート星の人たちに対してボラーの艦載機群は上空から機銃斉射や爆撃を行い、民間人を次々と虐殺していく。
更に上陸用舟艇からも降下兵が次々と地上に降下して行き、艦載機同様、逃げている人たちをまるで狩猟でもするかのように手にしたレーザー銃で射殺していく。
「あいつら民間人を!?」
「ボラーめ!!」
「くそっ、一機も還すな!!」
ボラーの地上攻撃隊に追いついたまほろばのコスモタイガー隊はボラーが行っている虐殺行為を見て、腸が煮えくりかえる思いで、ボラーの艦載機群や上陸用舟艇へ攻撃を加える。
上空でボラーの艦載機群とまほろばのコスモタイガー隊が戦っている中、地上でも既に降下したボラーの兵は宮殿に迫って来た。
「撃て!!」
古代や良馬たちはコスモガンで応戦する。
「やめなされ!!」
そんな中、長老が両手を振りながら丸腰でボラー兵の前に立ちはだかる。
「ちょっとおじいさん!!何をしているんですか!?」
長老の行動を見た良馬が急ぎ、長老を柱の陰へと引っ張る。
「丸腰で武器を持った相手に・・一体何を考えているんですか!?」
ボラーはどう考えても話し合いで理解して分かる相手ではない。
「私たちシャルバート人は戦いを捨てたのです」
良馬の問いに長老は自分を含め、シャルバート人の決意を口にする。
「何を言っているんですか!?このままだと殺されてシャルバートの文明が滅んでしまうかもしれないんですよ!?」
「かまわん」
「えっ？」
長老は自分たちが殺され、シャルバートが滅んでも良いと断言した。

彼の言葉に思わず良馬は唖然とした。

シャルバート星の大気圏外では、デスラー艦隊とゴルサコフ艦隊が激しい戦闘をしていた。

ただデスラー艦隊は空母を有していなかったのか艦載機相手に苦戦をしていた。

ヤマトのコスモタイガー隊はゴルサコフ艦隊の艦船ではなく、艦載機を主に相手をしていた。

そんな中、ゴルサコフ艦隊がデスラー艦隊へと接近してきた。

一気にデスラー艦隊と決着をつけようとしていたのか？

それとも地上制圧部隊から戦況が不利であると言う連絡が入ったからなのかは不明であるが、デスラーはこれを好機と見た。

「ボラー連邦にガルマン・ガミラスの真の力を見せてやろう・・・ハイパーデスラー砲用意」

「はっ、ハイパーデスラー砲用意」

ノイ・デウスーラ二世の艦橋にハイパーデスラー砲のトリガーが床下よりせり上がって来ると、デスラーはその照準を近づいてくるゴルサコフ艦隊へと合わせる。

「ハイパーデスラー砲・・・発射!!」

「ガルマン艦隊より高エネルギー反応!!」

「か、回避を!!」

「だ、ダメです!!艦隊が密集して回避できません!!」

「そ、そんな・・・こ、こんなところで・・・」

ノイ・デウスーラ二世の艦首からはハイパーデスラー砲が放たれ、それはゴルサコフ艦隊を飲み込む。

「うわあぁぁぁぁぁー!!」

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁー!!」

「ぬわぁぁぁぁぁぁー!!」

ハイパーデスラー砲に飲まれたゴルサコフ艦隊はゴルサコフ艦を含め壊滅。

当然、ゴルサコフも戦死した。
「艦長、デスラーがボラーをやりました」
「よし、コスモタイガー隊は地上に戻って救命活動を手伝ってくれ」
「了解」
戦いが終わり、ヤマト、まほろばの乗員たちは負傷者の救命活動を始める。
デスラーはボラーの増援を危惧して亜空間トンネルのシャルバート星側出入り口付近で警戒態勢をとっている。
宮殿の近くにはテントが幾つも張られた野戦病院が出来あがり、負傷者が次々と運ばれ、佐渡とリニスが応急処置や手術を行い、医療班と生活班は忙しそうに駆け回っている。
「負傷者の収容ほぼ完了しました」
「よし」
「次はご遺体の埋葬か・・・」
「ボラーの連中も含まれているのは何か癪ですが、このまま遺体を放置しておくわけにはいかないからな」
戦後処理をしていると、
「古代さん、月村さん」
ルダが二人に声をかけて来た。
「ルダ王女」
「お怪我はありませんでしたか？」
「はい。揚羽さんのおかげで・・・そして、シャルバート星を守っていただき、ありがとうございます」
「いえ、そんな」
「我々は当然の事を下までですから」
「古代さん、月村さん。これから私についてきてください。お見せしたいモノがあります」
ルダは踵を返して長老と共に歩き出す。
「「・・・」」
古代と良馬は顔を見合わせながらもルダの後を追う。
川辺に係留されているボートに乗り、川を遡っていきボートを降

り、山合の道を抜け、しばらく歩くとそこにはエジプトの王家の墓を思わせるピラミッド群が姿を現す。
「此処は？」
「一体・・・？」
「此処はシャルバートの代々の王族が眠る王家の谷です」
ルダがこのピラミッド群の説明をし、とあるピラミッドの前に立ち手をかざすと、ピラミッドの扉が開く。
中に入ると床の一角がそのままエレベーターになっており、地下深くに降りる。
そして、地下にも大きな扉があり、ルダが手をかざすとその扉が開く。
「着きました」
そこはとてつもなく大きく広い空間であり、そこには圧倒するような沢山の兵器がまるで博物館の展示品の様に置かれていた。
「こ、これは!?」
「ハイペロン爆弾にプロトンミサイル・・・いや、地球の科学技術では作れなければ説明も出来ない兵器ばかりだ・・・」
背筋がゾッとする思いで古代と良馬は並んでいる兵器を見つめる。
「あなた方はこんなにも立派な武器があるにもかかわらずそれを使わなかった・・・何故です？」
そして、古代は長老にこれらの武器を使えば簡単にボラーを追い返せたにもかかわらず使用せずにただ無抵抗にやられるだけであった疑問を長老に訊ねる。
「そちらの方にも申し上げましたが、私たちシャルバート人は戦う事を止めたのです。この星は昔、これらの兵器を使い銀河系に君臨していました。宇宙のあちこちには未だにその頃のシャルバートの力が伝説となって残っています」
(やはり、シャルバート教の信者やデスラー総統やボラーの連中が思っていたシャルバート最強伝説は事実だったのか・・・そしてその力を信仰するのがシャルバート教って訳か・・・)
長老の説明とこれらの兵器を見ると伝説だと思われていたシャル

バートの力は事実であった。
（これがシャルバート星の秘密か・・・）
　何らかの秘密がこのシャルバート星にはあると思ったが、この兵器の性能と秘匿がシャルバート星の秘密なのだと古代と良馬は判断した。
「しかし、私たちは気づいたのです。武力で戦争をすることによって平和や幸せは訪れない事を・・・相手に恐怖を与えるだけの空しい行為であると言う事を・・・それ以来、私たちは武器をこの王家の谷に埋葬し、封印したのです。そして他の惑星からの干渉を防ぐためにシャルバート星を亜空間に移動させました」
「ですが、今回の様に亜空間の外から敵が攻めて来たらシャルバート星が滅んでしまいます。そうなってしまっては意味がないではないですか？」
「構いません。例え私たちが滅んでも私たちの考えは銀河系の人々の間に伝えられて残ります。そしていつの日か第二、第三のシャルバートとなる星が現れる筈です。そうなった時、初めて宇宙に真の平和が訪れるのです」
「私たちはいつも平和の為に戦ってきました。でも平和を得る為の本当の戦いは敵と戦うのではなく、自分との戦いと言う訳ですね？」
「その通りです」
「ですが、今の我々にとっては難しい事です」
　誰もが幸福・平和を願う事は間違いではない。
　しかし、他者を見下し、羨み、妬む感情をあるまではシャルバートの考えは理想論でしかない。
　シャルバートの人たちが望む平和はあまりにも困難過ぎる道のりだ。
「誰もがすぐに出来るとは思いません。いつかそうなるよう、努力していただければそれでいいのです」
「しかし、地球にはもはやその時間も残されてはいません」
「ルダ王女よりその話は聞きました。故に皆様を此処へ案内したのです。太陽の核融合を制御できるハイドロコスモジェン砲・・・これが

あれば太陽を制御できるはずです。持って行ってください」
「えっ!?」
「太陽制御が可能!?」
長老は一門の砲台を指さしてその砲台の能力を説明する。
(あの砲台一門で太陽制御が可能って・・・・)
(まさにオーバーテクノロジーじゃないか・・・・)
地球、そしてガルマン・ガミラスの技術をもってしても制御できなかった太陽があの砲台一門で出来ると言うのだからまさに驚愕だ。
「感謝いたします」
「ありがとうございます」
古代と良馬は深々と頭さげてルダと長老に礼を述べた。

百七十七話　あの太陽を撃て

ルダの案内の下、宇宙最強の星と言われているシャルバート星へやって来たヤマトとまほろば。

シャルバート教の信者やガルマン・ガミラス、ボラー連邦からは宇宙最強の軍事惑星国家と噂されていたが、実際にシャルバート星の地へ降り立ってみると、そこに広がる文明は古代ローマ時代並みの文明だった。

一同が困惑する中、ルダをシャルバート星へ送り届けた礼にと宮殿では歓迎会が開かれる。

歓迎会が進む中、デスラー率いる艦隊がシャルバート星の出入り口である亜空間トンネルへとやって来た。

デスラーもシャルバート星に伝わる最強の軍事技術を目的としていたが、古代からシャルバート星の地表の様子を見て肩透かしをくらった様子だった。

更にシャルバート星へ来たのはデスラーだけではなく、ゴルサコフ率いるボラー連邦の艦隊もやって来た。

ボラー艦隊はシャルバート星が伝説の軍事技術を持つ星だろうが、そうでなかろうが、構わずにシャルバート星を攻撃し、地上に兵を降下させて民間人を虐殺する行為を行う。

その後、デスラー艦隊とヤマト、まほろばがゴルサコフ艦隊を殲滅し、負傷者の救助活動も一区切りついた時、ルダは古代と良馬にシャルバート星の秘密とも言える王家の谷に眠る超兵器を見せる。

シャルバート星に伝わる宇宙最強伝説は事実であったが、シャルバート人は戦争の勝利から来る虚しさに気づき、同時に戦う事に対して嫌気がさし、戦いを捨てた民族となり、戦う術である兵器を全て王家の谷に封印した。

その封印された兵器の中に現在、太陽系の太陽に起きている核融合の異常増進を食い止めるハイドロコスモジェン砲を譲ってくれた。

このハイドロコスモジェン砲を使えば地球を救うことが出来る。

しかし、ハイドロコスモジェン砲をヤマトに搭載する作業、ボラーとの戦闘で負傷して、野戦病院に収容されている負傷者を艦に移送する作業は夜間ではリスクがあるので、夜が明けるまで待つことになった。
王家の谷から運ばれたハイドロコスモジェン砲には防水シートがかけられる。
もっとも地球やガルマン・ガミラスよりも優れた科学技術を持つシャルバートが作り上げた兵器が雨で濡れた程度で壊れる訳がないが念のためと言う承知だ。
地上に降下してきたボラーは一掃したが、万が一にも敗残兵が居た場合、折角手に入れたハイドロコスモジェン砲が破壊されたり、動かす事が出来ない負傷者の身が危険なので、夜は交代制でヤマト、まほろばの戦闘班が武装して歩哨活動を行う。
「歩哨なんて訓練校以来だぜ」
レーザーライフルを手に周囲を見渡しながら揚羽は隣にいる土門に声をかける。
「まぁ、懐かしいって言えば懐かしいが、まさか宇宙に出てもやるとは思わなかったぜ」
「でも、本来ならばお前は生活班所属だから歩哨なんてやらなくていいのになんでわざわざやっているんだ？」
揚羽は戦闘班飛行科所属なので、こうして歩哨を勤めているが、土門は生活班炊事科所属なので、本来は歩哨に参加しなくても良い部署にもかかわらず、彼はこうして歩哨活動に参加している。
揚羽はそれが気になり、土門に理由を訊ねる。
「元々、俺は戦闘班志望だったし、ちゃんと艦長からの許可も貰っている」
「全く物好きな奴だな」
「それにちょっとお前に聞きたい事もあったしな」
「聞きたい事？なんだよ？」
土門が敢えて歩哨に参加したのは揚羽に何か聞きたいことがあったからだ。

「明日にはヤマトはあのハイドロなんとか砲を積んで地球に戻るみたいだ・・・」
「ああ、あの砲台は太陽の核融合を制御できる何かスゲェ能力を大砲みたいだな。坂東の奴が言っていたよ。原理は分からないみたいだがな」
「それで、お前は良いのか？」
「ん？何が？」
「あの王女様の事だよ」
「・・・」
「お前、あの王女様にホの字なんだろう？」
揚羽とルダの行動から、土門は揚羽がルダに惚れていると判断していた。
これも訓練校からの付き合いが深い土門だからこそ分かっていた。
「いいのか？告らなくて・・・」
「おい、おい、相手は王女なんだぞ？それに俺と彼女とでは住んでいる星も違う・・・」
自分とルダの身分が違う点、住んでいる星が異なる点から、揚羽はルダに対する思いを口にすることなくこの思いを自分の胸の内に封じ込めるつもりだった。
古代の兄である古代守も今の揚羽と同じ境遇であり、彼は地球への帰還よりも愛する人と生涯を共にする選択を選んだが、揚羽も土門もそんな守の事は知らない。
もし、知っていたら揚羽はこの星に残留する選択をしたかもしれない。
しかし、守と揚羽の違いは家族環境である。
守はガミラス戦役時、家族は弟の古代だけになっていたが、揚羽には経営者の父親に病気の母親が居り、地球に残した病気の母親の事が心配なのも揚羽がシャルバート星に残留する選択を消していた要因でもあった。
「・・・」
揚羽は口では諦めている様に言っているが、それが無理に強がって

いる事を土門は察していた。
　そんな中、
「揚羽様ですかな？」
「えっ？」
　トーガの様な服を纏った一人のシャルバート人の男が揚羽と土門に声をかけてきた。
「揚羽は俺ですけど、何か用ですか？」
　突然シャルバート人が声をかけて来たので若干訝しむ揚羽。
「私は宮殿で働かせていただいている者です。ルダ様が揚羽様をお呼びなので、私が揚羽様を迎える用を仰せつかりました」
「ルダ王女が？」
「はい」
「いや、でも・・・」
　いくらルダからのお呼びでも今は公務中であり、おいそれと持ち場を離れる訳にはいかない。
　揚羽はチラッと土門へ視線を向ける。
「いいって、行って来いよ」
「えっ？でも・・・」
「歩哨の件は、俺が何とか誤魔化しておくよ。そもそもお前、艦長からルダ王女の護衛の任を解かれていないだろう？そんで、その護衛対象の王女様からのお呼び何だから行くのは問題ないだろう？」
「それって屁理屈じゃあ・・・」
「いいから、早く行って来いって!!」
　土門は揚羽の背中を押すと、彼は宮殿の使用人と共に再びルダが待つ宮殿へと向かった。
「こちらの部屋でルダ様はお待ちしております。それでは私はこれで・・・」
　使用人は宮殿内にあるルダの部屋の前まで揚羽を案内するとススッとその場から立ち去る。
「よ、よし・・揚羽です。ルダ王女がお呼びとの事で参りました!!」

揚羽は緊張した面持ちでルダが待つ部屋の扉をノックする。
「はい。どうぞ」
すると部屋の中からルダの声がして揚羽は部屋の中へと入る。
「どうぞ、こちらへ・・・・」
「は、はい」
ルダは部屋に備え付けのテーブル席へ揚羽を誘う。
「明日、地球へ戻られるとお聞きしました」
揚羽が席に着くとルダは揚羽に明日の朝にヤマトが出航する事に間違いないかを問う。
「はい。頂いたあのハイドロコスモジェン砲があれば地球を救えます。ルダ王女を始め、シャルバート星の人々の御厚意には感謝いたします」
「これで、あなた方をこの星へお連れした目的は全て果たしました・・・・お別れ・・・・ですね」
「ルダ王女・・・・」
ルダに対する思いを必死に堪えてきた揚羽であったが、こうして目の前にルダ本人がいるとどうしてもその思いが込み上げてきてしまう。
彼女から明日には別れる事を言われるとその感情は我慢できなくなる。
「ルダ王女・・・・ぼ、僕は・・僕は貴女を愛しています」
そして、揚羽はルダに対する思いを我慢できず、彼女に告白する。
「私もです。揚羽さん」
一方、ルダの方も揚羽に対して恋愛感情を抱いていた。
二人はそのままお互い駆け寄り抱き合う。
「いつまでも、いつまでも、こうして貴方と一生を送りたい・・・・でも、私には出来ない。私はシャルバート王家の娘・・・・全ての人の心の中に生きなければならないのです・・・・でも・・でも、今夜一晩だけ・・私はシャルバート王家の娘ではなく、一人の女として貴方と・・・・」
ルダは潤む目で揚羽を見つめる。
「本当に良いんだね？・ルダ」

「はい・・・」
ルダの言葉に揚羽は彼女の覚悟を問うとルダは頷く。
そして、二人はそのまま寝台へと向かうのだった・・・

此処で少し時間を巻き戻し、視点をボラー連邦の本星にてシャルバート星制圧の吉報を待つベムラーゼへと移る。

ボラー連邦　本星　首相官邸

「ゴルサコフからの連絡はまだ入らんのか？」
「はっ、先ほど定時連絡にて、『これより亜空間トンネルを通り、シャルバート星へ向かう』と連絡が入ってから未だに連絡は・・・」
「ぬぅ～ゴルサコフめ、何をモタモタしとるか・・・」
ゴルサコフからシャルバート星制圧の連絡が無い事にベムラーゼは段々とイライラしてくる。
しかし、シャルバート星は宇宙最強の伝説がある星・・・
いくらゴルサコフが率いる艦隊でも少々てこずると予想はしていたが、あまりにも連絡が遅い。
イライラしながら待つベムラーゼの下へ彼にとっては凶報とも言える報告が齎された。
「しゅ、首相閣下、ゴルサコフ艦隊所属の通報艦ペチュンガより入電です!!」
「ようやく来たか」
この時、ベムラーゼはゴルサコフがシャルバート星を制圧した報告かと思っていた。
しかし、報告を入れて来たのがゴルサコフではなく、彼の麾下の通報艦であった事にベムラーゼは違和感を覚えていなかった。
「ペチュンガ艦長のオゾネフ大佐であります」
「御苦労、それでシャルバート星は制圧できたのであろうな？」
「そ、それが、我が艦隊はシャルバート星に辿り着くもガルマン・ガミラスの新兵器の前に壊滅!!ゴルサコフ閣下も戦死なさいました!!」

「な、何だと!?」
　通報艦ペチュンガの艦長、オゾネフ大佐から齎された報告にベムラーゼは血管がブチ切れる程の凶報であった。
「我が艦隊の残存艦は僅かとなっており、これ以上の戦闘続行は困難となっています。首相閣下、撤退の許可を求めます!!」
「何っ!?撤退だと!?ならぬ!!撤退などあり得ぬ行動だ!!現有戦力で作戦を続行し、シャルバート星を制圧せよ!!以後の通信は作戦達成以外の通信は受け付けん!!良いな!?・・・・くぅぅ～デスラーめぇ～」
(しかし、シャルバート星にデスラーが既に存在しているとなると、ガルマン・ガミラスにシャルバートの技術が既にわたっている可能性もある・・・・)
(こうなれば、せめてデスラーの命だけでも・・・・)
(うまく事を運ぶことが出来れば、地球もデスラー共々滅ぼす事が出来るな・・・・)
　ベムラーゼはオゾネフからの通信を聞き、シャルバート星の軍事技術が既にガルマン・ガミラスの手に渡っている事を考慮して、この星間戦争が今後、ガルマン・ガミラスに有利な形で進んで行くと踏んだ。
　ならば、国家元首であるデスラーを葬ればガルマン・ガミラスは混乱し、多少は時間を稼ぐことが出来るかもしれないと予測し、ついでに自分たちに散々煮え湯を飲ませて来た地球を滅亡させる事も出来ないかと画策する。
「衛星軌道上にあるゼスパーゼの整備は整っておるか?」
　ベムラーゼはオペレーターにボラー連邦の切り札とも言える機動要塞、ゼスパーゼの状態を訊ねる。
「はっ、ゼスパーゼは既に整備を終え、自走及びワープは可能となっております。勿論、搭載されている兵器も全て使用可能です」
「よろしい、ではゼスパーゼにありったけの艦載機を搭載させろ。それとゼスパーゼの随伴として本国の第三主力艦隊を同行させる。至急出撃準備をさせろ!!」
「はっ!!」
　ベムラーゼはシャルバート星に展開しているゴルサコフ艦隊の残

存艦にあまりにも無茶難題な事を命令するが、これは自らの出撃準備が整うまでの時間稼ぎと同時にシャルバート星の占領と言うガルマン・ガミラスとの星間戦争における天王山とも言える重要な戦いで敗北した敗残者たちへの粛清を兼ねた一罰百戒でもあった。
シャルバート星近海でゴルサコフ艦隊の残存艦隊が絶望的な戦いをデスラー艦隊へ挑む羽目になっている中、ベムラーゼは自らが出陣する準備を進めていた。

そして、翌朝・・・
「ん?・・朝か?」
ルダの居室にある寝台で揚羽は目を覚ます。
彼の隣には一糸まとわぬ格好のルダが静かに寝息を立てている。
かく言う自分もルダ同様、服を身に着けていない。
(そうか、俺は昨夜ルダと・・・)
自分とルダの現状から揚羽は昨夜の事を思い出す。
揚羽が昨夜のルダとの一夜を思い出していると、
「んっ・・・」
ルダが身をよじりながら目を覚ます。
「あっ・・ルダ王女・・・その・・お、おはよう」
揚羽もルダが目を覚ました事に気づき、声をかける。
「お、おはようございます。揚羽さん・・・」
目を覚まし、揚羽の姿を見て、ルダも昨夜の事を思い出したのか頬を赤く染める。
そんなルダの姿に揚羽はますますルダを愛おしく思い、次第に二人の顔は近づいていき・・・
「「んっ・・・」」
唇を重ねた。
とは言え、いつまでも寝台に居る訳にはいかないので、揚羽もルダもこの時間が永遠に続けば良いと思いつつも互いに服を身に着ける。
「揚羽さん、私は決して貴方の事を忘れません」
「ルダ王女・・・僕も愛した貴女を忘れません・・・永遠に・・・」

二人は夢の様な一夜を過ごした後、揚羽はヤマトに戻った。
「よお、朝帰りとは随分と遅かったな」
そんな揚羽に土門は声をかける。
「ん？あ、ああ・まあな・・・」
揚羽は土門に曖昧な感じで返答する。
「あれ？お前、何か様子が変わったか？」
「えっ？どこが？」
揚羽は内心、ドキッとしながらも土門に自分の何処が変わったのかを訊ねる。
「いや、明確に何処がって言えないけど、何か雰囲気が変わった様に見えるんだが・・・」
「そ、そうか？ま、まぁ、俺たちも今回の航海で一皮剥けたって事だろう？」
「そうなのか？」
土門は何か煮え切らない様子ではあるが、揚羽の何処が変わったのか明確に答えられなかったので、揚羽の言葉に一応、納得した。

日が昇り、ハイドロコスモジェン砲は早速真田たちヤマトの技術班の手によってヤマトの艦首部にあるカプセル状の突起内に搭載され、射撃回路は応急の管制コンピューターを通して艦橋の波動砲発射システムと連動するように設定された。
負傷者たちも生活班を中心に手空きの乗員たちがストレッチャーと内火艇に乗せて艦内の医務室へと運ぶ。
作業が行われている中、亜空間トンネル内にてボラー連邦の残存艦を追撃、殲滅にあたっていたデスラー艦隊へ古代は通信を入れる。
古代はデスラーにシャルバート星の秘密を語る。
「そうか、そういう星だったのか・シャルバート星は・・・」
デスラーはシャルバート星の秘密を聞き、複雑な表情で頷く。
「どうする？我々が立ち去った後、この星を侵略するか？」
「いや、私も栄光あるガルマン・ガミラスの総統だ。丸腰の者を攻めたりはせぬ。古代、太陽制御の成功を祈る」

デスラーはシャルバート人の心情を理解し、攻め込めばシャルバートの超兵器を楽に入手できるにもかかわらず、敢えてシャルバート星には手を出さない事を古代に誓う。
プライドが高いデスラーなので、一度言った言葉は必ず守る男であると古代はデスラーの人となりを理解しているので、彼の言葉を信じた。
「では、さらばだ。古代」
シャルバート星周辺に居たボラーの残存艦隊を完全に殲滅したデスラー艦隊は去っていく。

まほろば　第一艦橋
「デスラー艦隊、亜空間トンネルを通り、通常空間へ戻って行ったみたいです」
「ヤマトの方でもハイドロコスモジェン砲の搭載が終了しました」
「当初の目的とは異なりましたが、これで地球を救う事が出来ますね」
「ああ。シャルバート星に来た時は、色々と考えさせられたけど、最終的に地球を救うことが出来るのであるならば、シャルバート星に来たかいがあったよ」
第二の地球を見つけると言う任務は達成することは出来なかったが、太陽制御が可能なハイドロコスモジェン砲があれば地球を救うことが出来る。
目的が異なっても地球を救うことが出来るのであるならば、結果オーライである。
「本艦、及びヤマトの発進準備整いました」
「よし、では急いで太陽系に戻るぞ!!通常空間へ出た後、連続ワープをし、全速で太陽へと向かう!!」
無事に地球を救うことが出来る事実に艦内では新たな活気がみなぎりヤマトとまほろばは急ぎ地球を救うため太陽系へと戻る。
「さようなら・私の揚羽・・・」
川から浮上し、太陽系へと戻るヤマト、まほろばの姿をルダは宮殿のバルコニーから見送りながら揚羽に別れの言葉を呟く。

一方でヤマトの展望室では、揚羽が段々と遠ざかるシャルバート星を眺めており、
「ルダ・・・さようなら・・・」
揚羽もルダに別れの言葉を呟いた。

その頃の太陽系では、太陽の核融合異常増進はいよいよ高まり、地球滅亡まで残り二週間と迫っていた。
太陽は視直径が四倍に達し、地球の表面はガミラス戦役時には放射能汚染されていたが、今回は別の意味で生物の生存を許さない灼熱地獄の環境下になっており、地表の都市は荒廃・廃墟と化し、人類を始めとする動植物は地下都市及び他の惑星へ避難していたが、地下都市の方では刻一刻と最後の時が迫っていた。
地下都市にある防衛軍司令部では宇宙移民局の業務も兼務しており、職員たちは半袖の制服に汗まみれになりがなら通信と観測作業をしていた。
中央の席には宇宙移民局の責任者でもある藤堂が居たが、彼の様子は憔悴していた。
そんな藤堂を心配するかのように傍には秘書である晶子の姿もあった。
「地上温度１４０度を記録」
「地下都市の温度、３４度」
地表はもとより地下にもかかわらず、地下都市の温度は真夏日並みの気温になっており、病院には脱水症状や熱中症の患者が運び込まれている。
「冷却装置のエネルギー残量は？」
「フル運転であと十日、三分の一に節約しても一ヵ月が限度です」
「その後は此処も７０度越えの灼熱地獄となるか・・・人類も・もはやここまでか・・・」
「その事ですが、長官。悪い知らせが・・・」
「なんだ？」
「太陽の膨張スピードが予想よりも増しており、この分ではあと十二

日ほどで冷却装置を使用しても地下都市は人類の生存に適さない温度になります」
　観測手からは地球があと一ヵ月もたない報告が入る。
「・・・他の地下都市の・様子は？」
「各地下都市共に冷却装置への運転を優先している様で、エネルギーをそちらに回しているためか交信が出来ません」
　他の国の地下都市の様子が不明の為、不安感が増す。
　もしかしたら、地球人類で生き残っているのは自分たちだけなのではないかと言う不安が・・・
「ヤマト、まほろばはどうしている？」
「それが、通信を送っておりますが応答がありません」
　シャルバート星は通常の空間と異なる亜空間にあった為、地球がヤマト、まほろばに通信を送ってもヤマト、まほろばは応答することが出来なかった。
　同じ亜空間内に居た場合は通信が可能だったので、デスラーは古代に通信を送ることが出来、ヤマト、まほろばもコスモタイガー隊へ通信を送ることが出来たのだ。
「・・・送り続けろ・・通信を・・・」
　藤堂が通信士にヤマト、まほろばへ通信を送るように指示を出した時、藤堂の息遣いが荒くなり、彼は前のめりに倒れた。
「お爺様!!」
「長官!!」
　晶子が悲鳴のような声を出し、職員の一人が慌てて藤堂を抱き起した。
「お爺様、少しお休みにならないと」
　この真夏日並みの気温に職務の責任から藤堂は精神的・肉体的疲労が蓄積して倒れてしまったのだ。
　晶子はそんな藤堂の身を案じ、休むように進言するが、
「市民が・・・大勢の市民が苦しんでいるというのに私一人、休むわけにはいかん」
　藤堂は無理をしてでも休む事は無く、職務を全うしようとしてい

た。
　そんな中、オペレーターがある反応を捉えた。
「ワープアウト反応を確認!!ワープアウトしたのは戦艦クラスの宇宙船です!!数は二隻!!地球へ接近してきます!!」
「パネルに投影しろ!!」
　地球の近海に突如、ワープアウトして接近して来る宇宙船の正体を知る為、衛星の映像をパネルに映すと、そこに映っていたのはヤマトとまほろばであったが画像はカラーからモノクロになったり、カラー状態でも画像が乱れて映る。
　しかし、それでも地球に接近して来る艦影がヤマト、まほろばであることは何とか確認出来た。
「ヤマトとまほろばです!!」
「無事に帰って来たのか!?」
「ヤマトより通信が入っています」
「通信回線を開け」
「しかし、エネルギー不足で映像がはっきりと映るか分かりません」
「音声だけでもいい!!」
「了解」
　ヤマトとの通信回線を開くがやはり、地球側のエネルギー不足のためかパネルは真っ黒な映像しか映らない。
「地球防衛軍司令部、こちら宇宙戦艦ヤマト艦長の古代進。地球防衛軍司令部へ、本艦はシャルバート星にて太陽の核融合が制御可能なハイドロコスモジェン砲を受領した。これより太陽へと向かい、核融合制御作業を行う」
「太陽の制御が可能!?」
「出来るのか?そんなことが・・・」
　地球、そしてガルマン・ガミラスの技術をもってしても不可能だった太陽制御をヤマトはこれより行うと古代は言うのだから、その場に居た職員たちの困惑は当然の反応だ。
「諸君・信じよう・・・ヤマトを・・・」
「は、はい」

地球にはもうはや時間も事態を収拾させる手段も残されていない。
ならば、最後の賭けにヤマトがこれから行おうとしている太陽制御の成功を祈る事しか自分たちに出来る事がないのも事実であった。

シャルバート星を出航し、亜空間トンネルを通った後、連続ワープを行う強行軍で太陽を目指した。
途中、地球へ太陽制御を行う旨を伝え太陽に向かった。
そして金星付近までやって来ると膨張した太陽はまさに水星を飲み込む勢いの大きさとなっていた。
白色彗星は人工物であり、別の意味で脅威を覚えたが、眼前の太陽の姿は自然の神秘というよりは自然の驚異であった。
そしてヤマトはハイドロコスモジェン砲を使用しての太陽制御を行うための準備に取り掛かった。

ヤマト　第一艦橋
「父さん、母さん、俺は戻って来たぜ・・・・」
土門は自身の両親が眠る太陽を見て、あの日の事がこみ上げてくる。
古代はそんな土門の肩にそっと手を置く。
「土門、お前の両親の御霊がきっと導いてくれる。ハイドロコスモジェン砲のエネルギーは一発分・・・つまり射撃は一回だけだ。しっかり射撃準備をやってくれ」
「はい!!」
「ハイドロコスモジェン砲、最終チェックに入る」
「機関室。エネルギー・ジェネレータの作動状態は?」
エネルギー調整を行っている機関室にエネルギー状況について徳川に山崎が訊ねる。
「エネルギー・ジェネレータ問題なく作動中、システムオールグリーンです!!」
「ハイドロコスモジェン砲、作動用意よし」
ヤマト艦首部にあるカプセル状の突起が左右に開き、ハイドロコス

モジェン砲がせり上がって来る。
「中央コンピューター室、データの再計算をして弾道のチェックをしてくれ!!」
「了解」
　コンピューター室ではアナライザーと技術班員たちが激しく明滅するコンピューターをチェックし始める。
「エネルギー・ベント、オープン」
「ハイドロコスモジェン砲ジェネレータ作動開始!!」
「ヤマトの艦首を太陽中心部へ向けろ!!」
「了解、艦首角度調整」
　島の巧みな操艦でヤマトの艦首は太陽へと向けられる。
「エネルギーゲージ上昇、内圧限界へ!!」
「ハイドロコスモジェン砲発射準備完了!!秒読みに入ります」
　いよいよハイドロコスモジェン砲の発射準備が整い後は太陽に向けて放つだけとなる。
　ヤマトでハイドロコスモジェン砲の発射準備が進められている中、まほろばはヤマトの後方でその作業を見守っていた。
「いよいよ・・ですね」
「何だかこっちも緊張します」
「・・・」
　時間、エネルギー等の関係からハイドロコスモジェン砲の試射は行われておらず、シャルバート星の技術を完全に信用しての一発勝負となっている。
　もし、このハイドロコスモジェン砲の砲撃が失敗、もしくは効果が無ければ太陽制御の失敗に繋がり、地球は滅ぶ。
　いや、それどころか核融合異常増進とは異なる現象が起きて太陽付近にいる自分たちの身も危険な可能性さえある。
　粛々とハイドロコスモジェン砲の発射準備を見守るまほろばの一同。
　そして、いよいよ発射準備が整い秒読みが開始された時、
「っ!?本艦の後方にワープアウト反応多数!!」

新見がまほろばの後方でワープアウト反応を探知した。
「なに!?すぐに船籍を調べろ!!」
「・・・ボラー連邦の艦隊です!!ワープで至近距離に出現しました!!」
「ボラー!?くそっ、大事な時に!!」
ワープアウトしてきたのはボラー連邦の艦隊であり、ワープアウト後にまほろば、ヤマトへ攻撃を仕掛けて来た。
「反転!!迎撃しろ!!コスモタイガー隊、緊急発進準備!!」
まほろばは急ぎ艦を反転させてボラー艦隊の迎撃に向かう。
ヤマトの方でも当然ボラー艦隊の存在を探知した。
「ボラー連邦の艦隊がまほろばの後方にワープアウト!!」
「なに!?うおっ・・・」
ボラー艦隊の砲撃はまほろばだけではなく、ヤマトにも向けられる。
「いかん、土門、ハイドロコスモジェン砲を格納しろ」
「は、はい」
流れ弾でハイドロコスモジェン砲に命中すれば、太陽制御が不可能になってしまう。
古代は急ぎ土門にハイドロコスモジェン砲を格納するように命じる。
「島、反転だ!!まほろばと共にボラー艦隊を迎撃する!!」
「了解」
「コスモタイガー隊発進用意!!」
まほろばに少し遅れながら、ヤマトもボラー艦隊を迎撃する。
「アルファ星を攻撃するは、惑星探査を妨害する、シャルバート星では民間人を虐殺し、そして太陽制御までも妨害するとはボラーの奴ら、絶対に許さん!!」
これまでのボラー連邦の所業からまほろば、ヤマト乗員たちはボラー連邦に対する怒り、苛立ちを覚えるのは当然の事であった。
ボラー艦隊を迎撃していると、これまでの艦船のワープアウトとは桁違いのワープアウトがあった。
「艦長、敵艦隊後方に大型のワープアウト反応を確認!!・・・機動要塞

です!!機動要塞がワープアウトしてきました!!」
「なに!?パネルに映せ!!」
「はい!!」
まほろばの第一艦橋にあるメインパネルにはまるで巨峰のような形状の機動要塞が出現した。
「何だ!?ありゃ!?」
「でっかいブドウだ!!」
永倉は機動要塞の出現に驚愕し、フェリシアはボラー要塞の色と形状から見た感想を口にする。
(彗星帝国はマトリョシカ、暗黒星団帝国のゴルバは蛸壺、そしてボラーは巨峰か?)
これまで戦ってきた星間国家の要塞が思わず脳裏を過る良馬。
なお、良馬は知らないが、ガミラス戦役時にバラン星手前に配備されていたマグネトロンウェーブを放出していたガミラスの宇宙要塞13号を古代は『宇宙に浮く軽石』と表現したが、その形状は緑色のサツマイモのような形状だった。
ボラー艦隊を迎撃しながらも突如、ワープアウトしてきた機動要塞、ゼスパーゼにヤマト、まほろばの一同が驚愕している中、そのゼスパーゼの指令室では、
「ハハハハハ・・・アハハハハハハハハ・・・ヤマト、まほろばよ、地球の最後へボラー連邦からのプレゼントをやろう。ブラックホール砲発射!!」
ベムラーゼが高笑いをしながら、ゼスパーゼの主砲とも言えるブラックホール砲の発射を命じる。
「はっ。ブラックホール砲発射!!」
要塞に存在する多数の球体上の構造物の一つから砲身が出てくると、その砲身から一発のエネルギー砲が発射される。
そのエネルギー砲はヤマト、まほろばの頭上を通過して行き、花火の様に弾けるとその空間に小型のブラックホールが突如出現する。
そして出現したブラックホールは周囲の星の欠片などを吸い込み始める。

「推進力低下!!」
「どうした!?機関部に被弾したのか!?それとも機関に何か異常が起きたのか!?」
「いえ、ブラックホールです!!」
「ブラックホール!?」
「はい。ブラックホールが突然出現しました!!」
「どういう事だ!?どうしていきなりブラックホールが・・・・」
ヤマト、まほろばの乗員一同が信じられないのも当然だ。
ついさっきまでこの宙域にブラックホールなんて存在していなかった。
だが、現実にブラックホールは存在しており、ヤマト、まほろばを飲み込もうとしている。
このゼスパーゼの主砲であるブラックホール砲こそが、かつて管理局の武力制裁艦隊を壊滅に追い込んだ切り札であった。
「機関出力最大!!ブラックホールに飲み込まれたら終わりだぞ!!」
「は、はい!!機関長、エネルギー増幅を願います!!」
「うむ。機関室エネルギー増幅!!」
永倉は必死に操舵桿を操作してブラックホールの吸引区画からの脱出を図り、井上も脱出の為に機関室にエネルギーを増幅させる。
「しかし、何故何もなかった空間にいきなりブラックホールが・・・・」
「あの砲台だ。あの砲台から射出されるエネルギー砲はショックカノン等のエネルギー弾ではなく、ブラックホールを生成する特殊エネルギー弾の様だ・・・・エネルギー弾を敵に当てるのではなく、生成したブラックホールへ相手を飲み込ませる兵器なんだ・・・・」
「何とも恐ろしい兵器ですね」
これまで戦ってきた星間国家には独自の超兵器が存在してきたが、ブラックホールを生成する兵器は地球では当然初邂逅であるが、強力な超兵器にはかわらない。
ブラックホールに飲み込まれたら終わりなので、ヤマト、まほろばは必死に抗うが、そんなヤマト、まほろばをボラー艦隊が放っておく訳もなく、ボラー艦隊はブラックホールの死角から攻撃を加えて来

た。
　戦艦のヤマト、まほろばが必死でブラックホールの吸引から抗っているにもかかわらず、未だにブラックホールの吸引圏内から離脱出来ていないので、推進力が戦艦よりも低いコスモタイガーでは発艦した途端ブラックホールに吸い込まれてしまうので、コスモタイガーを発進させて援護に出したくても出せない。
　被弾の衝撃で次第にヤマト、まほろばはブラックホールへと追いやられていく。
「くそっ、ボラーの奴ら調子に乗りやがって・・・・」
「本艦及びヤマト、敵の攻撃でブラックホールへ追いやられています!!」
「艦長、このままではブラックホールに吸い込まれてしまいます!!」
「くっ・・・・」
　幸いヤマトもまほろばも機関部への被弾は未だに無いが、このまま攻撃を受け続けたらいつかは敵のラッキーパンチを受ける可能性がある。
　現状で、未だにブラックホールの吸引圏内から脱出が出来ていない状況下で機関部に被弾でもしたらあっという間にブラックホールの餌食になってしまう。
　戦況はヤマト、まほろばにとってまさに絶望的だった。

百七十八話　終息

シャルバート星にて太陽の核融合を制御することが出来るハイドロコスモジェン砲を受け取ったヤマトは急ぎ太陽系へと向かい、破滅寸前の地球を救うために太陽にハイドロコスモジェン砲の砲口を向けた。

その時、ボラー連邦の艦隊が突如ワープアウトと同時にヤマトとまほろばへ攻撃を仕掛けて来た。

襲撃してきたボラー艦隊の迎撃と太陽制御の要であるハイドロコスモジェン砲が破損しないようにするため、ヤマトはハイドロコスモジェン砲を一時格納して、まほろばと共にボラー艦隊の迎撃にあたる。

なおも攻撃を仕掛けて来るボラー艦隊の後方にはボラー連邦の首相であるベムラーゼ自らが指揮する機動要塞、ゼスパーゼが出現すると、ゼスパーゼの主砲でもあり、切り札とも言えるブラックホール砲を斉射してきた。

ブラックホール砲から生成されたブラックホールに落ちまいと必死に脱出を試みるヤマトとまほろば。

そんな二隻の戦艦に対してボラー艦隊はブラックホールへ落とさんと言わんばかりに攻撃を仕掛けてくる。

太陽の核融合異常増進で破滅寸前の地球、ブラックホールへと追いやられるヤマトとまほろば・・・・

地球人類はまさに二重の危機を迎えていた。

「推進力が上がらない・・・・このままでは・・・・ブラックホールに・・・・」

「か、艦長!!」

「なんだ!?」

「約百隻の艦隊が出現しました!!」

「まさか、ボラーの援軍か!?」

金星軌道の戦闘宙域に突如、百隻程の艦隊が出撃した事でヤマト、まほろばの一同は更なる緊張感と絶望感を覚える。

もし、これがボラー艦隊の第二陣だった場合、ボラー艦隊の攻撃は更に苛烈となる。
ブラックホールに吸い込まれそうになっているこの状況下では回避行動など取れる訳も無く、また機関部に被弾でもしたらあっという間に推進力を失いブラックホールに吸い込まれてしまう。
ボラー艦隊の攻撃が今よりも苛烈になれば機関部への被弾の確率はぐんと上がる。
(地球人類も・・・我々もこれまでか・・・・)
ヤマトとまほろばの一同が絶望しかけたが・・・
「全艦、デスラー砲発射。目標ボラー艦隊」
ボラー艦隊の第二陣と思われた艦隊はデスラーが率いるガルマン・ガミラス艦隊であり、デスラーはデスラー砲を搭載しているフォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦へデスラー砲の一斉射撃を命じる。
多数のデスラー砲を受けたボラー艦隊は一気に壊滅状態へと陥る。
ボラー艦隊はヤマト、まほろばへ攻撃を集中し、デスラー艦隊は先ほど自分たちが行ったようにワープアウトと同時にデスラー砲を放って来たので、ボラー艦隊の多くがデスラー艦隊に対して対処出来なかった。
デスラー艦隊の出現の他にヤマト、まほろばにとっての転機はまだあった。
「あっ、推力が戻り始めました!!」
ヤマト、まほろばの後方にあったブラックホールが次第に縮小していったのだ。
「そうか、あのブラックホール砲で生成されたブラックホールには時間制限があったのか!?」
「じゃあ、あのブラックホールは・・・・」
「ああ、間もなく消滅する」
ゼスパーゼのブラックホール砲は確かに強力であるが、生成したブラックホールには時間制限と言う大きな弱点があった。
しかし、これはブラックホール砲を乱射した場合、友軍艦艇やゼスパーゼ自体もブラックホールに落ちてしまう危険性があった事から

開発者が生成したブラックホールに時間制限を設けたのだろう。
やがて、ブラックホールは消滅してヤマト、まほろばは窮地を脱することが出来た。
「デスラー・・・・」
ヤマトの第一艦橋にあるパネルにはデスラーの姿が映し出される。
「古代、あの要塞には我々ガルマン・ガミラスの宿敵、ボラー連邦首相のベムラーゼが居る。戦闘は我々に任せろ。ヤマトは早く太陽を制御して地球を救うのだ」
「デスラー・・・・ありがとう」
「では、再会は勝利の後で・・・・」
そう言ってデスラーは通信を切った。
「先に地球とヤマト、まほろばを撃滅しデスラーを悔しがらせてやろうかと思ったが、まんまとやって来おったわ・・・・フフフ・・此処で地球もろともブラックホールの餌食にしてやる」
ヤマト、まほろばの援軍としてやってきたデスラー艦隊を見ながらベムラーゼは不敵な笑みを浮かべた。
「首相、ヤマトは太陽へと向かっているようです」
「ふむ、彼奴等が何をしようとしているのかは分からぬが、このまま手を拱いて彼奴等の思い通りになるのも癪だ。ゼスパーゼに搭載されている艦載機全てを出撃させろ」
「はっ!!艦載機隊全機出撃!!」
ゼスパーゼにある全ての艦載機射出口からは次々と艦載機が出撃していく。
デスラー砲の一斉射を受け、艦隊戦力に大ダメージを受けるが、そのハンデさえもベムラーゼはゼスパーゼの力があればデスラー艦隊、ヤマト、まほろばを殲滅することが出来る自信があった。
「敵機動要塞より艦載機の射出を確認!!物凄い数です!!」
「コスモタイガー隊発進!!」
敵艦載機の迎撃の為、ヤマト、まほろばからはコスモタイガー隊が出撃する。
ブラックホールも消滅し、ゼスパーゼはヤマト、まほろばに対して

ブラックホール砲を斉射してこなかった事からコスモタイガー隊は無事に発進することが出来た。
「通信長、デスラー艦隊の旗艦・デスラー総統へ通信をいれてくれ」
「は、はい」
　コスモタイガー隊を出撃させた後、良馬はデスラーへ通信を入れる。
「デスラー総統」
「月村か？なんだ？」
「敵の要塞はブラックホールを生成する特殊な砲台を装備しています」
「ブラックホールを生成する砲台だと？」
「はい。生成されたブラックホールは時間制限があり、しばらくすれば消滅しますが、その吸引力はヤマト、まほろばでもギリギリでした。故に推進力が弱い艦や損傷した艦はブラックホールの餌食になってしまいますので、敵がブラックホール砲を撃つ前に退避を促してください」
「ふむ・ブラックホールか・・・・やむを得ないな・・・・」
　戦力の低下はデスラーとしては不本意ではあるが、ゼスパーゼが搭載するブラックホール砲の餌食になってしまえば同じ事であり、艦船そして国民にいらぬ犠牲者を出してしまう事になる。
　デスラーはフォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦以外の艦をワープで戦線から離脱させた。
「タラン、デスラー砲第二斉射。目標、ベムラーゼ首相、機動要塞」
「全艦デスラー砲第二斉射!!目標、ベムラーゼ首相旗艦!!」
　フォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦からはゼスパーゼに向けてデスラー砲を放つ。
　しかし、ボラー艦隊は殲滅することが出来たフォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦のデスラー砲であったが、ゼスパーゼの表面装甲は多数のデスラー砲の直撃に耐えきった。
「アハハハハ!!」
　デスラー砲を耐えきった事にベムラーゼは機嫌よく高笑いをする。

「デスラーに通信を繋げ」
「はっ!!」
　そしてベムラーゼはデスラーへと通信を送る。
「デスラー君。ようこそ、見えられた。我々は地球の戦艦どもなど、どうでも良かったのだ。貴方をおびき出すのが目的だった。罠にはまったな、デスラー君」
　ベムラーゼは不敵な笑みを浮かべてデスラーを挑発する。
「大将同士の決闘にご招待とは光栄だ。念のため聞いておきたい・・・貴方のお葬式は何宗で出せば良いのかな？ベムラーゼ君」
「葬式を出してやるのはこっちだ!!ブラックホール砲発射!!」
　デスラーのこの一言にカチンと来たベムラーゼはデスラー艦隊に向けてブラックホール砲を放つ。
「来たな。アレが例のブラックホールを生成する特殊砲か・・・全艦散開せよ!!」
　良馬から事前にゼスパーゼのブラックホール砲について聞いたデスラーはブラックホールが生成される前に密集隊形から艦隊を散開させた。
　これによってブラックホールへ吸い込まれる被害を少しでも防ごうとしたのだ。
　ヤマト、まほろばよりも巨大なノイ・デウスーラ二世は当然推進力もヤマト、まほろばよりも優れていた。
　しかし、そのノイ・デウスーラ二世をもってしてもブラックホール砲から生成されるブラックホールからの吸引力は凄まじく、またヤマト、まほろばの時は一つであったが、ベムラーゼはデスラーを確実に殺そうと、ノイ・デウスーラ二世の周辺にいくつものブラックホール砲を打ち出した。
「推進力低下!!」
「機関最大出力だ!!」
「このノイ・デウスーラ二世をもってしてもこの現状・・・他の艦ではブラックホールに吸い込まれていたな・・・」
「はっ、しかし、これ以上周辺にブラックホールが生成されれば、強力

な推進力を誇る本艦でも危険です」
　艦隊が既に壊滅状態となっていた事からベムラーゼはブラックホール砲の連射でデスラーを仕留めようとしていたがギリギリでノイ・デウスーラ二世はブラックホールへは落ちていなかったが、これ以上周辺にブラックホールを生成されてしまえばいくら強力な推進力を持つノイ・デウスーラ二世でもブラックホールへ吸い込まれてしまう。
　デスラーが必死に打開策を考えている中でベムラーゼは・・・
「ハハハハハ・・・無様だな、デスラー」
　ブラックホールに吸い込まれまいと必死にスラスターを吹かしているノイ・デウスーラ二世の様子を悦に浸りながら高笑いをしていた。
「楽には殺さんぞ。じわじわと苦しめ、恐怖を与えた後でブラックホールの餌食にしてやる」
　ベムラーゼはブラックホール砲をノイ・デウスーラ二世の周辺に連続して斉射しなかったのはデスラーをじわじわと苦しめて、恐怖を与えた後にブラックホールへ落としてやると意気込んだ。
　ブラックホール砲が生成したブラックホールに時間制限があるのは当然運用しているベムラーゼも理解している。
　なので、ブラックホールが消滅すれば再びブラックホールを打ち込む。
「ベムラーゼの奴め、調子に乗りおって・・・」
　ベムラーゼの真綿で首を締めるような行為にデスラーは怒りを募らせる。
　デスラーがヤマト、まほろばと同様、ブラックホールの対処に苦戦している中、ヤマトは太陽に向かいハイドロコスモジェン砲を打ち込もうとしていた。
　そんなヤマトに対してボラーの艦載機隊は襲い掛かるが、コスモタイガー隊が迎撃に回るが、大型の要塞に搭載されているだけあってボラーの艦載機数は一個機動部隊かそれを若干上回る機数であった。
　ボラー艦載機の迎撃にあたっていたヤマト、まほろばのコスモタイ

ガー隊であるが敵機の数に苦戦を強いられていた。
　そんな中、山本玲の背後から三機の敵機が迫る。
「くっ、しつこい!!」
　玲はスピードを上げ、スラスターを吹かして機体を捻って敵の攻撃を回避して、敵機を振り切ろうとするが、相手のパイロットたちもそれなりの腕なのか、玲の背後にぴったりとついて離れない。
　今は何とか敵の攻撃を上手く躱しているが、このままではいつ撃墜されてもおかしくはない。
　そんな中、玲の背後から迫る敵機の上方からパルスレーザーの雨が降り注ぎ、玲の背後をとっていた敵機が撃墜される。
　玲は味方のコスモタイガーが撃墜したのかと思ったが、敵機を撃墜したのはコスモタイガーではなく、赤く塗装されたツヴァルケだった。
　赤いツヴァルケ以外にも緑色のツヴァルケが複数、コスモタイガー隊の援軍としてボラー艦載機との戦闘を始める。
「ツヴァルケ!?」
「一体何処から!?」
　デスラー艦隊はシャルバート星へ来た時同様、空母を有していなかった。
　フォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦は艦載機を有していない。
　ツヴァルケ以外にも突如、ゼーアドラーＩＩＩがワープアウトしてツヴァルケ同様、ボラー艦載機と戦闘を始めた。
　艦載機にワープ機能なんて有していない。
　ならば、このツヴァルケとゼーアドラーＩＩＩが何処から来たのか？
　その答えは地球側の金星沖にあった。
「ツヴァルケ隊、第二陣。ワープ光線のエリアに入りました」
「照射」
　地球側の金星沖には月基地から発進したジュラが座乗するガミラシアが搭載していた艦載機で、第一陣で戦闘宙域にワープアウトしてきたのはメルダ率いるツヴァルケ隊で、ゼーアドラーＩＩＩの方は

・・・・
「瞬間物質移送機、連続発射」
「はっ!!」
　ジュラが地球へ来た際、ガミラシアの護衛として随行していた第十七空母艦隊所属の二連三段空母もガミラシアに同行しており、二連三段空母の発艦甲板に埋め込まれていた瞬間物質転送機から転送された艦載機隊であった。
　コスモタイガー、ツヴァルケ、ゼーアドラーＩＩＩからなる地球・ガルマン・ガミラスの連合航空隊でボラーの艦載機隊と十分にやり合える展開となった。
「ガルマン・ガミラスの航空隊です!!」
「一体何処から来たんだ!?」
「多分、ジュラさんだ」
「ジュラって言うとデスラーの娘で、ガルマン・ガミラスからの特使ですよね?」
「ああ。地球が滅びそうにもかかわらず、ギリギリまで地球圏に居たんだ・・・この機を逃すな!!ボラーの連中にヤマトの太陽制御作業の妨害はさせるな!!何としてでも食い止めるんだ!!」
『了解!!』
　ヤマトは太陽制御のため、太陽へと向かいデスラーはブラックホールの対処に戸惑っている中、まほろばは対空戦闘を行いながらフォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦と共にボラー艦隊の残存艦の対処をしていた。
　デスラー砲の一斉射撃で艦隊が壊滅状態とは言え、全滅したわけではなくヤマトへ再び襲い掛かり、太陽制御の邪魔をされては困る。
「デスラー艦、ブラックホールに捕まってしまったようです!!」
「牽引ビームで助けたいが下手に近づくとこちらまでブラックホールに吸い込まれてしまう・・・」
　ノイ・デウスーラ二世の周辺にあるブラックホールを懸念して近づけない中、ボラーの残存艦隊はヤマト、まほろばにしたようにノイ・デウスーラ二世を攻撃してブラックホールへと追いやろうとしてい

る。
　フォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦の乗員たちも自分たちの国家元首であるデスラーを救助したい気持ちで一杯なのだが、やはりブラックホールのせいで近づけない。
「ボラー艦隊の残存艦、デスラー艦へ接近!!」
「あいつら、デスラー艦をブラックホールへと追いやるつもりか・・・・ガルマン・ガミラス艦隊と共にボラー艦隊の残存艦を殲滅する」
（ブラックホール砲も厄介だが、あのブドウ要塞は多数のデスラー砲を喰らっても無傷だった・・・つまり、防御面に関してもかなり堅い）
（暗黒星団帝国のゴルバは波動エネルギーとの融合反応で倒す事が出来たが、あのブドウ要塞にもソレが通じるだろうか・・・？）
（しかし、波動カートリッジ弾を使うにしてもあの要塞に接近しなければならない）
　波動カートリッジ弾は波動砲と異なり、実弾なので射程距離が短い。
　仮にゴルバ同様、波動カートリッジ弾がゼスパーゼに有効であっても使用するにはゼスパーゼに接近しなければならないが、当然接近すればゼスパーゼは後退し距離をとりながらあのブラックホール砲を撃ってくるだろう。
　下手にゼスパーゼに接近すれば自らブラックホールへ突っ込んでしまう結果になりかねない。
　良馬は、ひとまずゼスパーゼの対処は後にしてまずは、ボラー艦隊の残存艦隊と艦載機の対処に集中することにした。
　金星宙域にて、大規模な戦闘が行われている中、ヤマトはハイドロコスモジェン砲を太陽に撃つため再び発射準備を行う。
　しかし、此処で大きな問題が生じた。
　太陽制御を行うためのハイドロコスモジェン砲が出てこない。
「土門、どうした？ハイドロコスモジェン砲が出てこないぞ?!」
　土門は必死に操作盤を弄るが一向にハイドロコスモジェン砲は出てこない。
　ボラー艦隊が出現する前は確かに出て来たはずなのに格納ドーム

のハッチが開かない。
「艦長、格納ドームが開口しません!!」
「なに!?」
「ボラーの攻撃を受けてどこか回路が破損したのかもしれません。調べてきます」
土門は第一艦橋からエレベーターへと走っていく。
「土門、今は危険だ!!戻れ!!」
航空隊、まほろば、デスラー艦隊が奮戦しているとは言え、外ではまだ戦闘が続いている。
そんな状況下で甲板へ出るのはあまりにも危険だ。
古代は土門を呼び止めるが彼はエレベーターに乗り第一艦橋を降りてしまう。
甲板に降りた土門はハイドロコスモジェン砲が格納されている艦首の格納ドームへと急ぐが、航空隊の防空網を突破した一機のボラー艦載機が甲板を走っている土門を見つけると、機銃斉射をしてきた。
「古代君!!土門君が危ない!!」
「なに!?」
艦首部では土門がボラー艦載機からの機銃斉射を何とか躱している光景があった。
「土門!?」
ボラー艦載機と戦闘をしていた揚羽がその様子に気づき急ぎヤマトの艦首へと向かう。
揚羽は土門を狙っているボラー艦載機を攻撃しようとするが、土門とボラー艦載機の位置関係から、パルスレーザーを斉射した時、土門に当たってしまう懸念があった。
揚羽が攻撃を戸惑っていると、ボラー艦載機の機銃が土門の背中に命中する。
土門を殺したと判断したボラー艦載機はヤマトから離れるが、揚羽は当然それを許す筈もなく、
「くそっ!?土門の仇だ!!」
揚羽は逃げようとしたボラー艦載機を撃ち落した。

そして、土門の様子をコックピットから窺うと、土門はかろうじて生きており、必死に這い起きてハイドロコスモジェン砲が格納されているドームに取り付く土門の姿があった。
次いで揚羽はゼスパーゼを睨みつける。
「このままでは勝ち目がない!!あのブラックホール砲を破壊しなければ・・・・」
今はノイ・デウスーラ二世を狙っているブラックホール砲であるが、ノイ・デウスーラ二世がブラックホールへ吸い込まれたら、ゼスパーゼは再びヤマト、まほろばへブラックホールを差し向けてくるだろう。
揚羽は機首をゼスパーゼに向け、そのまま突進していく。
「揚羽!!戻れ!!揚羽!!」
揚羽の行動を見て、山本は揚羽機に通信を送り、戻る様に命じるが、揚羽は止まることなくゼスパーゼに接近していく。
「宇宙の平和の為にお前は存在してはならない!!」
揚羽は鬼気迫る表情でゼスパーゼのブラックホール砲を目指す。
「敵機一機、急速接近!!」
「対空戦闘はじめ!!」
「ゼスパーゼに近づく前に撃ち落せ!!」
揚羽機の接近を察知したゼスパーゼは対空砲で撃墜しようとパルスレーザーを撃ってくるが、それを縫って揚羽機はなおもゼスパーゼへと接近する。
「何故、撃ち落せない!?もっと弾幕を張れ!!」
揚羽の眼前ではそれらの対空砲火がまるで花火の様に散り始める。
一方で揚羽機をなかなか撃ち落せない事にベムラーゼは怒気を荒げる。
「ルダ・・・このままでは貴女から頂いたハイドロコスモジェン砲で太陽を制御することが出来ません。ルダ・・・ルダ・・・」
揚羽は祈るようにルダの名を何度も口にする。
すると、ゼスパーゼに重なってルダの姿が現れる。
それはまるで自分をブラックホール砲へ導いているように見えた。

「ルダ・・・ルダーっ!!」
揚羽機はそのままゼスパーゼのブラックホール砲の砲口内部へ突っ込んだ。
ブラックホール砲は揚羽機が搭載していたミサイルとブラックホールを生成するエネルギーの融合で爆発し、爆炎の大輪を咲かせる。
「敵機がブラックホール砲に激突!!」
「ブラックホール砲使用不能!!」
「なんだと!?すぐに修理しろ!!」
「はっ!!」
揚羽機の特攻によりブラックホール砲は砲内部で大きな損傷が出来、使用不能となる。
その事実にベムラーゼは慌てふためき、ブラックホール砲の修理を命じる。
「揚羽・・・揚羽!!」
揚羽の特攻を目撃した山本は揚羽の名を絶叫する。
もしかしたら、かつて彗星帝国との戦いの最中で、自らも行ったようにベイルアウトして宇宙を漂流しているのかと思ったが、揚羽はベイルアウトせず最後までコックピット内に留まり、コスモタイガー自体を一つの有人ミサイルとしてブラックホール砲まで導いていた。
「艦長、味方のコスモタイガーがブラックホール砲に・・・」
「・・・」
「敵のブラックホール砲、完全に沈黙・・・」
「デスラー艦周辺のブラックホールも消滅し始めています」
「・ガルマン艦と共に牽引ビームでデスラー艦を救出する」
良馬はグッと握り拳を固めながらデスラー艦を牽引ビームで救助する。
まほろばとフォルヴァルツ級一等航宙巡洋戦艦の牽引ビームによってブラックホールから引力圏から脱出したデスラーはハイパーデスラー砲の発射準備を行う。
「見たかタラン・・・地球の少年が命をかけて咲かせた美しい華を

・・・・」
「はい」
デスラーの問いに神妙な表情で頷くタラン。
「あの華を・・・・あの華を無駄に散らせるわけにはいかない・・・・ハイパーデスラー砲・発射!!」
ノイ・デウスーラ二世から発射されたハイパーデスラー砲は破損したブラックホール砲が搭載されている区画に命中。
ハイパーデスラー砲が命中し、内部から誘爆が広がりゼスパーゼは大爆発をする。
「こ、こんな・こんなバカなぁぁぁぁぁぁー!!」
ベムラーゼはハイパーデスラー砲が命中する直前、指令室の椅子から立ち上がりその場から逃げ出そうとするが当然間に合う訳も無くゼスパーゼと運命を共にした。
「敵要塞・消滅」
「分かった・・・・コスモタイガー隊に敵の掃討を下令」
「了解」
まだ残っているボラーの残敵を掃討する中、ヤマトの艦首では瀕死の土門が故障個所を見つけ、修理をしていた。
「ここだ・・・・ここが断線していたのか・・・・」
断線していたコードを繋ぎとめるとハイドロコスモジェン砲が格納されているドームがゆっくりと開口し始めた。
ハイドロコスモジェン砲が出てきた事を確認した土門はその場にパタリと倒れる。
古代は急ぎ発射レバーに手をかける。
「ハイドロコスモジェン砲秒読みはじめ!!」
「了解!!ハイドロコスモジェン砲発射まであと十秒!!九・・・・八・・・・七・・・・六・・・・五・・・・四・・・・三・・・・二・・・・一・・・・」
「発射!!」
古代が引き金を引くとハイドロコスモジェン砲の砲口からは虹色のビームが太陽に向かって放たれる。
虹色のビームが太陽に命中すると太陽全体がゆっくりと柔らかい

七色の光に包まれ始めた。
まだ視直径は大きいが太陽は急速にコロナが収まりながら七色の光の中で柔らかさを取り戻しつつあった。
「はっ!?土門!!」
太陽に変化に一時目を奪われていた古代であったが、ハッとして甲板で倒れている土門に気づき、雪と共に急ぎ甲板へと向かう。
「土門!!」
「土門君!!」
甲板に出た古代は倒れている土門を抱き起す。
「先生!!」
古代と共に甲板に来た佐渡に土門の容体を訊ねるも佐渡は首を左右に振る。
それは既に土門が手遅れである事を意味する。
「艦長・・・太陽は・・・?」
「よくやった土門!!太陽は制御出来た!!これで地球は救われる!!さあ、一緒に地球へ還ろう!!」
「良かった・・・これで・安心して・・・俺も両親の下へ・・・」
「何を言うんだ!!土門!!」
「そうよ、みんなで一緒に地球へ還りましょう!!」
「艦長・・・生活班長・・・お世話になりました・・・」
土門はそう言ってゆっくりと瞼を閉じた。
彼が再び目を開ける事は無かった。
「土門!!」
「土門君!!」
眠るように安らかな土門の死顔を見て、古代と雪は涙を流す。
「立派な若者じゃった・・・土門も揚羽も・・・もっとヤマトで・・・もっと地球の為に働いて貰いたかった・・・」
佐渡も目に涙を浮かべ、鼻を啜り上げながら若くして命を散らした土門と揚羽の死を悔やむ。
揚羽の遺体はブラックホール砲の爆発で残らなかったが、土門はこうして残っていた事からヤマトでは土門の宇宙葬が行われた。

「土門竜介の霊に・・・敬礼・・・」
第一艦橋のメンバー、そして坂東たち訓練校の同期生が宇宙葬に参列し、土門の死を悲しむ。
土門の宇宙葬が終わると、ヤマトの直ぐ傍にはノイ・デウスーラ二世が横付けする様な距離で停止する。
やがて、ノイ・デウスーラ二世の甲板にデスラーが現れる。
「デスラー・・・・」
「古代、おめでとう。これで地球は再び蘇るだろう」
「ありがとう。君も宿敵を倒したな」
「ああ・・これで銀河系統一にまた一歩近づいた・・・・」
「そうか・・・・」
ベムラーゼは倒したが、ボラー連邦全てが完全に滅んだわけではない。
今後、ボラー連邦内ではベムラーゼの死に伴う混乱が起きるだろうし、その隙を突いてガルマン・ガミラスはボラー連邦の領土内へ本格的な侵攻を行うだろうが、相手はガルマン・ガミラスと銀河系を二分する一大星間国家・・・恐らく一筋縄ではいかないだろう。
銀河系では今後もガルマン・ガミラスとボラー連邦との激しい戦乱はしばらくの間続くことになる。
しかし、地球はシャルバート星のおかげで未来を手にすることが出来た。
掴み取った未来を平和の実現の為に今後も地球人類は努力を惜しまないだろう。
「さらばだ、古代。いつの日かまた会おう・・・」
デスラーはマントを翻し、ノイ・デウスーラ二世の艦内へと戻ると艦隊と共にガルマン・ガミラスへと帰還していった。
太陽制御を終えたヤマト、まほろばも地球への帰還の途についた。
ただし、太陽が通常に戻ったとは言え、すぐに地球全体の温度が直ぐに下がる訳ではなかったので、地表の気温が戻るまでは地下都市の生活が続く。
また、今回の異変で地上の都市部も津波や火山の噴火によって壊滅

した都市もあり、地球はまたもや復興を行わなければならない。
「地球はまた復興作業ですね」
「ああ・・・でも、人類はこれまで何度も文明を破壊されながらも文明を復興してきた。今度も必ず復興出来るさ、人類が存在し続ける限り・・・・」
「ええ、そうですね」
ガミラスとの戦争から今日まで地球人類のしぶとさをちゃんと自覚しているし、平和の尊さとソレを勝ち取る難しさも知っている。
だが、人類が存続するかぎり、地球は何度も復興し、平和を勝ち取ってみせると信じていた。

地球人類の滅亡を目の前にして太陽は人類に再び希望を与える姿を取り戻した。
地球へ帰還後、坂東は訓練校へと赴きティアナとうららに揚羽と土門の訃報を伝えた。
「そんなっ!?嘘でしょう!?」
「あの二人が死んだなんて・・・・」
「俺も信じたくはないが事実だ。ヤマトの甲板で行われた土門の宇宙葬に俺も参列したし、ヤマトの飛行隊隊長の山本さんも揚羽の最後を見たって言っていた」
「・・・・」
当初は坂東の話が信じられないティアナとうららであったが、土門と揚羽の死は紛れもない事実であった。
「そう・・・・全く先に宇宙へ行って、多少のハンデはあげるって言ったけど・・・・」
「戦死して二階級特進なんて・・・・バカよ・・・・アイツら・・・・」
「ホント、バカね・・・・アイツら・・・・」
「ああ、本当にな・・・・バカな奴らだったよ・・・・」
揚羽と土門・二人の戦死に対してティアナとうららら、坂東は口では悪態をつくもその目からは涙が流れていた。

百七十九話　管理局の闇

ガミラス、彗星帝国、暗黒星団帝国と三つの星間国家からの侵略を退けるも太陽の核融合異常増進と言う自然相手にガミラス戦役から四度目の危機を迎えた地球。

第二の地球となる星を求めて銀河系の彼方此方を各国の探査船団が惑星探査を行うも、第二の地球となりうる惑星は見つからず、探査中にアメリカ、ヨーロッパ、アフリカの探査船団からの連絡が途絶え、アメリカの探査船団は担当宙域にてボラー連邦の襲撃に遭い、スカラゲック海峡で遭難している事が判明した。

未だに連絡もつかず、また船体も見つからないヨーロッパ、アフリカの探査船団も宇宙気象かボラー連邦の襲撃に遭った事が予測される。

第二の地球となる新惑星が見つからず、地球に残された時間が刻々と失われていく中でかつて銀河系最強と噂されるシャルバート星へ辿り着いたヤマトとまほろば。

そのシャルバート星で太陽の核融合異常増進を止めることが出来るハイドロコスモジェン砲を受け取り、それを使用する事で太陽の核融合異常増進を止めることが出来、地球は救われた。

しかし、その代償は勇敢で若い宇宙戦士二人の戦死と言うあまりにも大きな代償を払う事になった。

なお、余談であるが今回の新惑星探査の任務に参加することになった際、ギンガはケンタウロス座アルファ星にて、出航前に生活必需品や消耗品をショッピングモールにて購入していたが、その中で避妊具も密かに購入しており、その避妊具は航海前と航海後では数が減っていた事は当人同士の秘密である。

ヤマトがハイドロコスモジェン砲を使用し、更にコスモクリーナーを使用して荒廃した地球の気温が数ヶ月の時間をかけて戻し、人類が地下都市から地表へ戻った某日・・・

四度地球を救ったヤマト、そしてまほろばはドックにその身を横たえ、乗員たちも暫しの休息となった。
そんな中、月村家に一本の電話が入った。
「はい。月村でございます・・・・はい、在宅中でございます・・・・はい、少々お待ちください。忍様」
電話の相手は忍に用があるみたいで、電話に出たノエルは忍を呼ぶ。
「はい、お電話代わりました。月村です・・・・はい・・・・はい・・・・そうですか・・・・分かりました・・・・はい・・・・では・・・・」
忍が電話を終えたタイミングで良馬がその場に来た。
「あれ？忍さん、電話？誰から？」
電話を終えた忍が何だか神妙な顔つきだったので、電話の相手と電話内容が気になったので、訊ねたのだ。
「ああ、揚羽財閥の人よ」
「揚羽財閥・・・・」
（この前の戦いで戦死した揚羽君の実家か・・・・）
『揚羽』と聞いて真っ先に思い浮かぶのが、揚羽武の実家だ。
「ええ・揚羽さん、どうやら会社の経営権を親戚の人に譲って、奥さんと一緒に田舎へ隠居するみたい」
「隠居・・・・それって財界から引退するってこと？」
「そうよ。揚羽さん、確か先日息子さんを亡くしたのよね？」
「はい。金星宙域での戦いで・・・・」
電話の相手は揚羽財閥の関係者であり、その内容が揚羽財閥の総帥である揚羽蝶人の引退だった。
蝶人はまだまだ経営者としては持病等の病気も無く現役バリバリの年齢であるにもかかわらず、突然の財界からの引退・・・・
彼の電撃引退は政財界では困惑や多少の混乱も起きるだろうが、良馬は蝶人が何故引退を決めたのか心当たりがあった。
先日の金星宙域での戦いにおいて蝶人は一人息子を失った。
敵の要塞へ特攻をした事で息子の遺体さえも見つからない。
そして蝶人の奥さんが病弱である事を良馬は知っていた。

当然、奥さんも蝶人も一人息子を失った事にショックを受けただろう。
息子を失ったショックでただでさえ病弱だった奥さんの症状が悪化してもおかしくはない。
それ故に蝶人自身もこれ以上、会社を経営していく意欲を失ったので、会社の経営権を親戚へと譲り渡して自身は奥さんと共に田舎へ隠居する事に決めたのだ。
あの戦いに参加していた良馬としては蝶人の気持ちも理解できると共に揚羽を戦死させてしまった事に間接的ではあるが、責任を感じてしまう。
(忍さんも俺が防衛軍へ入隊した時も揚羽さんと同じ気持ちだったんだろうな・・・)
今回の蝶人の引退であの時の忍の気持ちが分かった。
今日まで自分が生きているのは艦の能力や自らの指揮の他に運も含まれている。
一歩間違えれば自分も何時死んでもおかしくはない環境に居る。
「忍さんは、もしも俺が戦死したら・・・やっぱり、ショックを受ける?」
「えっ?どうしたの?急に?」
「いや、今回の揚羽さんの事でちょっと・・・」
「・・・そうね・そりゃあ貴方が死んだら当然悲しいわ。それでも私は、私の意志で今の座からは下りたりはしないわ」
忍は蝶人と異なり、例え良馬が戦死しても月村グループの総帥の座からは自らの意志では引退しないと明言する。
「それはどうして?」
「月村グループの総帥の座は、私の両親から受け継いだ大事な椅子だもの・・・これまで多くの者が私を総帥の座から引きずり下ろそうと暗躍してきたわ。そんな中でもあの人は、私の事を守り続けてくれたの・・・両親とあの人の為にも・・・そして私を慕ってくれる会社の人たちの為にも私は総帥の座からそう簡単に降りる訳にはいかないの・・・」

「・・・・」
忍が言う『あの人』は大昔に死別した忍のパートナーを差している事を良馬はすぐに分かった。
昔から、事あるごとに惚気話を聞かされていたからだ。
忍は例え良馬が死んでも蝶人とは違い総帥の座からは下りないが、良馬もそう易々と死ぬつもりは無いと心では決めていた。

地球において今回の太陽異常における地球本土の復興作業、蝶人の財界からの電撃引退、そして地球が復活した事によりガルマン・ガミラスとの同盟締結についての話し合いが再開される等の出来事が起きている頃、ミッドチルダでも動きがあった。
ミノフスキーの指導の下、次元航行艦の新型エンジンの開発に置いて既に試作型のエンジンは完成して、稼働試験も無事にクリアーする段階まで来て、あとは細々な改良点の追及と同時に新型エンジンが搭載可能な新たな次元航行艦の設計段階へと移った。
次世代の次元航行艦の設計にあたり、一応ミノフスキーはボラー連邦の技師であり、当然ボラー連邦が運用していた宇宙艦艇の形状は知っていた。
しかし、管理局はボラー連邦に手痛い目にあっていたので、鹵獲した艦艇は兎も角として、新たに建造する次世代の次元航行艦の艦影がボラー連邦と同じ艦影なんて絶対にしないだろうが、参考資料としてミノフスキーにボラー連邦が運用している宇宙艦艇の設計図を知っている限りで提出させた。
〝陸〟の方でも装甲車や戦車、〝陸〟所属の局員たちの為の装備である携行型の光学武器・防衛軍で言う所のコスモガンの制作と整備が進められていた。
そんな管理局がボラー連邦への武力制裁失敗から、新型エンジンと新たな次元航行艦の建造と再建を始めている中で、ミノフスキーの下で助手として働いていたマリエルとシャリオの二人が突然人事部への出頭を命じられた。
「突然の人事部への出頭・・・私たちに一体何の用があるのでしょう

？」
　通路を歩きながらシャリオは人事部から呼ばれる見当がないので、人事部が一体何の用で自分とマリエルを呼ぶのか不思議そうだ。
「そうね、新型のエンジンも正式に製造が決まって、造艦部でもその新型エンジンを搭載する次世代の次元航行艦の設計が始まったみたいで、私たちの仕事も本番はこれからって言う時に・・・」
「あっ、もしかして新型エンジンの開発を手伝った功績で昇進の話かもしれませんよ」
　シャリオはミノフスキーの助手とは言え、新型エンジンの研究に関わり、開発に成功した事からその功績により昇進するのかもしれないと思った。
「うーん・・・私としては別に昇進は興味ないんだけどね・・・」
　昇進話かもしれないと思いシャリオは嬉しそうだが、マリエルは別に興味がなさそうだった。
「そりゃあマリーさんは佐官じゃないですか。私はまだまだ下っ端の一士なんですから、昇進試験なしで昇進できるなら儲けものですよ」
　ミノフスキーの下で助手として新型エンジンの開発業務をしていたので、昇進試験の勉強も出来なかったので、試験を受ける事も出来なかった。
　その為、試験なしで昇進することが出来るのなら、非魔導師であるシャリオにとってはまさに棚から牡丹餅だ。
　機動六課卒業後、エリオとキャロは自然保護官になりミッドチルダから他の管理世界へ向かい階級はその若さゆえか二等陸士のままであったが、スバルは特別救助隊へ入隊を果たすと二等陸士から士長へ昇進して、ティアナは執務官補佐となり、一気に准尉へと昇進した。
　最もティアナは管理局を辞めてもう一つの地球にて、宇宙戦士訓練学校へ入校したので、准尉から再び訓練生になり下がったが、シャリオとしては年下のスバルやティアナが階級で上回った事に焦りみたいなモノを感じていたのだろう。
　幼馴染みであるグリフィスは六課時代には准尉であり、現在は二尉になっており、非魔導師ながらもエリート街道まっしぐら・・・

これは彼の母親であるレティが本局の人事を含む本局運用部の提督なので、息子であるグリフィスも勿論本人の努力もあるだろうが、やはりレティ・ロウランの息子と言う事で忖度のようなモノがあるのだろう。

と、昇進に期待するシャリオと一体どんな要件なのかと思うマリエルの二人は人事部へと出頭した。

「マリエル・アテンザ技術官、出頭命令を受け参りました」

「同じくシャリオ・フィニーノ一士、参りました」

出頭命令があった人事部の部屋に行くとそこに居たのはレティではなく、別の人事部所属の局員であった。

まぁ、人事部の仕事をレティ一人でやっている訳でもなく、また彼女は人事部以外の仕事もあるので、別の人事部の局員が対応するのも不思議ではない。

「それで、私たちに一体どういった御用でしょうか？」

マリエルは早速人事部の局員に自分たちを呼び出した要件を訊ねる。

「ふむ、今日二人を呼び出したのは他でもない。マリエル・アテンザ技師を三佐から二佐へ、シャリオ・フィニーノ一士を士長へと昇進する」

やはり要件は自分たちの昇進であった。

昇進が書かれた辞令書を二人に受け渡す人事部の局員。

辞令書を受け取り、これで要件が終わったかと思ったが、まだ要件は終わっていなかった。

「それとだ。今回の昇進に伴い、マリエル・アテンザ二佐は本局第四技術部へ、シャリオ・フィニーノ士長は本局艦隊司令部付き通信士へと異動を命じる」

「「えっ？」」

昇進の他に異動命令もあり、二人は唖然とする。

「ま、待ってください!!」

「何故、この様な時期に異動命令が出るんですか!?」

「『この様な時期』とは？」

人事部の局員は二人の言葉の意味が分かっていないのか首を傾げ

る。
「新型エンジンの開発は確かに成功しました。ですがまだまだ試行錯誤してより完璧に、そしてより高性能に発展させていく必要があります!!」
「それにこの新型エンジンを搭載する為の新造艦の設計もあるんです!!」
「分かっている。君たち二人が開発・研究し完成させたＭＳ機関の研究・開発は今後も局内の技師、研究者たちが引き継ぐ事になっている」
「ＭＳ機関？」
「それに私たち二人って・・・」
　人事部の局員の発言に違和感を覚える二人。
「ＭＳ機関は開発者である君たちの名前のイニシャルを取った名である。君たちは管理局の歴史に名を遺す偉大な貢献をしたのだよ。あのプレシア・テスタロッサ以上の功績だ」
　大魔導師であるプレシア・テスタロッサはｐｒｏｊｅｃｔ　ｆａｔｅ　にて愛娘であるアリシアのクローンを生み出し、第９７管理外世界においてＰ・Ｔ事件を起こした張本人であるが、その事件前の彼女は大魔導師でもあり、優れた技術者であった。
　愛娘のアリシアを失う切っ掛けとなった大型魔力駆動炉ヒュードラーの開発もプレシアほどの頭脳をもってしても開発成功には至らなかった。
　しかし、今回開発成功した新型エンジンはヒュードラー以上の性能を有していたので、管理局：本局が歓喜するのも理解できる。
　だが、納得出来ない所もある。
「ちょっと待ってください!!一体どういう事ですか!?」
「そうですよ!!」
　人事部の局員からの説明を聞き思わず大声をあげるマリエルとシャリオ。
「確かに私たちは新型エンジンの開発に携わりました。ですが、あくまでもミノフスキー博士のサポートであり、実際に新型エンジンの開発の中心だったのはミノフスキー博士です!!」

「そうですよ!!それなのに私たちがまるで博士の功績を横取りするみたいじゃないですか!!」
「開発者の名前をつけるなら、ミノフスキー博士の名前をつけてください!!」
ミノフスキーの功績が一切表に出ない事に二人は憤慨する。
最もミノフスキー本人は恐らく気にしないだろうがマリエルとシャリオは他人の功績を横取りしたかのような行為に対して恥辱を感じていた。
「この判断は当然私一人の判断で行なったものではない。今回のこの判断は管理局の意向であり総意なのだ」
「管理局の・・・・」
「総意・・・・」
管理局の総意・・・それは管理局上層部がミノフスキーの存在を表に出さないような姿勢に絶句するマリエルとシャリオ。
今回の昇進もミノフスキーの存在を表に出さない件についても管理局の総意であるならば、一管理局員の自分たちが騒いだところで撤回されることは絶対にないだろう。
マリエルとシャリオは黙って今回の件に従うしかなかった。
しかし、今回のミノフスキーの件について、マリエルとシャリオが予想外の事が起きていた。
マリエルとシャリオが人事部からの出頭命令が出て部屋に向かっている時、ミノフスキーとヴィータはミノフスキーの居住スペース兼研究室に居た。
ヴィータとシグナムはミノフスキーの護衛と言う名の監視役であったが、彼が本局へ来て新型エンジンの開発をしてから、スパイ行為をする気配もなく、黙々とエンジンの開発・研究を行っている事から監視役と言うよりも表向きの護衛に専念している形であった。
二人の内、ヴィータの方は海鳴に居る頃、地元のゲートボールクラブに参加していた事から近所のおじいちゃんとおばあちゃんからまるで孫の様に可愛がってもらい、管理局に入った後、三提督の紅一点であるミゼットの護衛を経験した事からミゼットからにも目をかけ

て貰った事からヴィータ自身も高齢者には好印象を抱いていた。
　そんなヴィータだからこそ、ミノフスキーに対しても周囲がボラー連邦に対する憎しみの感情を抱いている中で、亡命して周囲は自分を敵視している人間ばかりの環境だったからこそ、自分だけでもミノフスキーの味方でいたいと思い話し相手や食事を共にしたりした。
　そんなミノフスキーの部屋は相変わらず書類やら様々な機械や模型が置かれており、ヴィータには書類に書かれている内容も空間ディスプレイに映し出されている事も何一つ分からなかった。
　ただ、ホワイトボードに貼られている紙にはかつてミノフスキーが所属していた星間国家、ボラー連邦の宇宙艦船の設計図が描かれていた。
　管理局によるボラー連邦への武力制裁失敗の際、ヴィータはボラー連邦がどのような方法で管理局の次元航行艦隊を返り討ちにしたのかしらず、ボラー連邦の宇宙艦船も見ていない。
　よって、ヴィータがボラー連邦の宇宙艦船を見たのは実物ではないが、このホワイトボードに貼られている設計図が初めてであり、流石のヴィータもこれが宇宙船の絵であることは理解することが出来た。
「なぁ、ミノフスキーの爺さん」
「ん？なんだね？」
「このホワイトボードに貼られている船みたいなのが、ボラー連邦の宇宙船なんだろう？」
「ああ、そうじゃ。新しく開発した宇宙船のエンジンを搭載するのに管理局でも新しく宇宙船を造るみたいじゃから、参考に覚えている限りで良いので設計図も製作してくれと言われたので、図面に起こしておいたんじゃ」
「でも、この丸っこい姿で本当に戦えるのか？武器らしいモノを積んでいるようには見えねぇんだが？」
　ヴィータは管理局が保有している次元航行艦は勿論の事、フェイトとティアナが乗っていたテリオスを攻撃したククルカン級襲撃型駆逐艦、同じく自然保護世界であるプレオを破壊した彗星帝国が保有していたゴストーク級ミサイル戦艦は全身がハリネズミの様にミサイ

ルで武装しており、強力な印象を受けた。
　そしてそのフェイトたちを助けたもう一つの地球が保有している防衛軍所属の宇宙戦艦ヤマトも砲身付きの砲塔や対空砲を装備しており、何よりも従来の管理局が保有している次元航行艦の切り札とも言えるアルカンシエルよりも何十倍の威力を持つ波動砲を装備している事から強力な印象を持っていた。
　これらの星間国家が保有している宇宙艦船と比較してボラー連邦の宇宙艦船は何だか頼りない感じに見える。
「ボラー連邦の宇宙艦船の武器はほとんどが格納式であり、単艦ではなく主に多数の艦隊戦を想定している造りになっておるんじゃよ」
「艦隊戦ね・・・・」
(管理局の艦は主に少数での行動ばかりだからな・・・・)
(一対多数じゃあ、管理局に分が悪いな・・・・)
(そもそも管理局は艦隊行動なんてあまりとらない・・・・そして艦隊行動は一朝一夕で出来るモノじゃねぇから、管理局が艦隊行動の得意なボラーに戦いを挑んで負けるのも無理はねぇな・・・・)
　ミノフスキーからボラー連邦が運用する宇宙艦船の話を聞いて管理局が負けた理由を察するヴィータであった。
　そんな時、突如ミノフスキーの部屋の扉が開くと数人の局員が入って来た。
「あん？なんだ？お前たちは？」
　入って来た局員はヴィータの騎士としての直感から何だか陰湿な印象があった。
「我々は保安部の者だ」
「保安部？保安部が何の用だ？爺さんの護衛ならアタシがいるからこれ以上の護衛はいらねぇぞ」
「違う。護衛の件で来たのではない」
「じゃあ、何の用だよ？」
「ミノフスキー博士、貴方に研究費用の横領容疑がかかっている。大人しく我々についてきてもらおう」
　保安部に所属していると言う局員は懐から一枚の書類を取り出し、

ミノフスキーとヴィータに見せる。
　局員が提示した書類はミノフスキーに対する逮捕状であり、容疑の欄には『横領』と書かれていた。
「はぁ？この爺さんが横領だ？ふざけてんのか？」
　容疑者であるミノフスキーよりもヴィータの方が怒りを露にしていた。
「おい、この爺さんは一日のほとんどをこの部屋で過ごしているんだぞ!?そんな爺さんがどうやって研究費を横領するって言うんだよ!?」
「『ほとんど』と言う事はこの部屋を出る事もあったと言う訳ですな？」
「それに貴女は四六時中、ミノフスキー氏の傍を絶対に離れていないのですか？」
　ミノフスキーの護衛はシグナムと二交代制で行っているし、常に彼の傍に居る訳ではない。
「くだらねぇ揚げ足を取ってねぇで、調べ直したらどうだ？爺さんの仕事の邪魔だ。さっさと失せろ」
　しかし、そんな保安部の要求などヴィータには関係なく、内に敵意を含めながら保安部の局員に退室を促す。
「我々も証拠も無く、此処へ来ている訳ではありません。ミノフスキー氏の口座には不明な入金が確認されている。これが何よりの証拠だ」
　保安部の局員はヴィータとミノフスキーに彼の口座のコピーを見せつける。
「それとも、ミノフスキー氏以外の関係者がミノフスキー氏の口座に入金していると言うのか？」
「この研究室でミノフスキー氏以外の関係者と言うと・・・・」
「はぁ!?マリーやシャーリーがそんなバカな事をする訳ねぇだろう!!勿論、爺さんもだ!!」
　マリエルとシャリオの人となりを知っているヴィータは、あの二人がミノフスキーに横領の濡れ衣を着せるような人物ではない事を知っているし、当然研究バカのミノフスキーが研究費の横領をする事

も信じていなかった。
「だいたい、爺さんの口座なんて言うが、いつそんなモノを爺さんが開設したんだよ？」
「さあ、そこまでは我々は把握しておりません」
「爺さんは身に覚えがあるのか？」
「いや、儂は開設をした覚えはないが、もしかしたらこちらに亡命した際に誰かが開設したのかもしれん」
　ボラー連邦からミッドチルダに亡命し、新型の宇宙船のエンジン開発と研究を行う際に誰かがミノフスキーの給料を入れる為の口座を開設したのかもしれない。
「だったら、爺さんやマリー、シャーリーを疑う前に爺さんの口座を開設した奴を探し出せよ。怪しいのはソイツなんだから」
「では、その件も含めて事情をお聞きしたいので、ご同行をしてもらえますね？」
「まぁ、そういう事なら・・・・」
「ちょっ、おい、爺さん!!」
「大丈夫じゃよ、ヴィータちゃん。儂は後ろめたい事など一切しておらんのだから」
「・・・・」
　事情聴取と言う事でミノフスキーは保安部の局員たちと共に部屋から出て行った。
　ヴィータは不安な顔でそれを見送るしか出来なかった。

　ミノフスキーが保安部の局員たちと共に部屋を出て行ってからしばらくして不機嫌な様子のマリエルとシャリオがやって来た。
「ん？どうした二人とも、何か不機嫌そうな顔で・・・・人事部で何かあったのか？」
「聞いてくださいよ!!ヴィータさん!!」
　シャリオは先ほど人事部であった出来事をヴィータに話す。
「ホントなのか!?それは!?」
「ええ。全く、管理局が新型エンジンを開発できたのは全部ミノフス

キー博士のおかげなのに、その博士の存在をまるで無かったかのような扱いをするなんて恩を仇で返す行為ですよ・・って、ヴィータさん、どうしたんですか？そんな険しい顔をして？」
　シャリオは人事部での出来事を話した後、今度はヴィータが険しい顔をしている事に気づき、ヴィータに訊ねる。
「そう言えばミノフスキー博士が居ませんね？お手洗いですか？」
　そして、マリエルがミノフスキーの姿ない事に気づく。
「ん？爺さんなら・・・・っ!?」
　ヴィータはシャリオの話とついさっき此処で起きた出来事から何かを察し、急ぎミノフスキーの部屋から外に出て行く。
「えっ？ちょ、ヴィータさん!?」
「一体どうしたんでしょう？」
　慌てて部屋を出て行ったヴィータにシャリオとマリエルは首を傾げた。
　本局の通路を走っているヴィータの中にはある推測が成り立っていた。
（さっきのシャリオからの話じゃあ、管理局は爺さんの存在をまるで居なかったように扱っている）
（それにさっき爺さんの部屋に来た保安部の連中・・・・）
（間違いねぇ、管理局は爺さんに冤罪をきせようとしているんだ!!）
　ヴィータは、管理局は新型エンジンの開発が終わったミノフスキーを用済みと判断し、研究費の横領と言う濡れ衣を着せようとしていると判断した。
（管理局が爺さんに濡れ衣をかける前に何とか助け出さねぇと!!）
　ヴィータはミノフスキーが逮捕・送検される前に彼の身柄を保護しようと保安部の下に急いだ。
　ボラー連邦からの亡命者なんで弁護士の弁護だってあまり期待は出来ない。
　送検されたら１００％有罪にされる。
「おい、さっき事情聴取の為に連れてこられたミノフスキー博士の身柄だが、やっぱり、こっちで預からせてもらう!!」

声を上げてヴィータはミノフスキーの身柄引き渡しを要求する。
「八神三尉、困ります。たった今、事情聴取が始まったばかりです」
「事情聴取とか言って本当は爺さんに横領の濡れ衣を着せようって魂胆じゃねぇのか？」
「何を訳の分からない事を」
保安部の局員はヴィータの言動に対して小馬鹿にしているような態度だ。
「いいから、さっさと爺さんの身柄を渡せ!!」
「八神三尉、これ以上騒ぐようならば、威力業務妨害で貴女の身柄を拘束しなければなりませんよ」
「威力業務妨害だと!?ふざけるな!!」
今にも保安部の局員に掴みかかりそうな勢いのヴィータ。
そこに、
「ヴィ、ヴィータさん!!落ち着いてください!!」
ヴィータの様子に違和感を覚えたシャリオとマリエルがあの後、ヴィータの後を追いかけてきて、ヴィータを宥める。
「ど、どうもお騒がせいたしました」
マリエルが引きつらせた笑顔で保安部の局員に詫びの言葉を言いながらシャリオと共にヴィータを引きずって行った。
「おい、何で止める!?このままだと爺さんがやべぇんだぞ!?」
「何言っているんですか!?あのままだとヴィータさんが身柄を拘束されていたかもしれないんですよ!?」
「そもそも一体何があったんですか？博士も戻ってこないですし・・・」
「ついさっき、お前たちが戻ってくる前に・・・」
ヴィータはマリエルとシャリオに保安部の局員がやって来てミノフスキーに研究費の横領容疑がかけられ事情聴取のために連れて行かれた事を話す。
「研究費の横領!?」
「ミノフスキー博士が!?」
ヴィータの話を聞いてマリエルもシャリオも驚く。

「あの博士が横領何て・・・・」
「あり得ないですよ!!」
　マリエルとシャリオもミノフスキーの人柄から研究費の横領なんてあり得ないと言い切る。
「それとお前らの人事部での話を聞いて、管理局は用済みになった爺さんに濡れ衣を着せようとしているんじゃないかと思ってな」
「ま、まさか・・・・」
「管理局がそんなことを・・・・」
　ヴィータが推測した管理局がミノフスキーに冤罪をかけようと画策している事についてはマリエルとシャリオは半信半疑であった。
「いずれにせよ爺さんの安全確保のため、保安部から爺さんの身柄を引き渡してもらわねぇとヤバい気がするんだよ」
「でも、私たちじゃあ、保安部から博士の身柄を引き取らせるには権限が足りませよ」
「それじゃあ、ミゼットばーちゃんからなら引き渡してもらえるな」
　保安部とは言え、ミゼットからの要請ならば逆らえない筈だ。
　ヴィータは急ぎミゼットにコンタクトを取るが、
「クローベル閣下は現在、お風邪をめしており療養中なので、お取次ぎは受け付けできません」
　と、ミゼットの秘書から彼女の現状を知らされ、力になれそうにない事が伝えられる。
「ミゼットさん、風邪なんだ・・・・」
「早く治ってくれればいいけど・・・・」
　マリエルとシャリオも風邪をひいたミゼットの身を案じる。
「それもあるが、ミゼットばーちゃんが風邪で休んでいるとなると・・・・」
「リンディさんかレティ提督はどうでしょう?リンディさんは本局の統括官で、レティ提督も人事と運用に関係しています。博士は今後も管理局には必要な人材ですから、今回の件を聞けば何とかしてくれる筈です」
「そうだな」

ヴィータたちは早速、リンディとレティの下に向かい事の次第を話した。
「博士が・・・」
「そうなんですよ」
「御二人の力で何とか博士の身柄を保安部からこちらに引き渡してもらえませんか？」
「あの爺さんが横領なんてする訳がないんだよ」
ヴィータたちはリンディとレティにミノフスキーの潔白を嘆願する。
「博士の引き渡しを要求するにしてもまずは本当に博士が研究費の横領をしていない事を証明する必要があるわ」
「そうね。疑いがあるままだと保安部から釈放されても監視がついたり、また身柄を拘束されるかもしれないしね・・・」
リンディとレティはミノフスキーの身柄の保護は彼に掛けられた容疑を晴らしてからと言う。
「だったら急いで調査してくれよ。誰かが爺さんが亡命してきた時に爺さんの生活費様に口座を開設したみたいなんだ」
「きっとその人物が博士に横領の濡れ衣を着せた犯人ですよ!!」
「分かったわ。その辺も調査してみるわね」
「お願いします」
「なるべく急いで調査してくれ、リンディさん」
ヴィータたちはミノフスキーの事をリンディとレティに任せ、この日は解散となった。
「むっ？ミノフスキーの姿が見えないがどこかに出かけているのか？」
ヴィータと交代でミノフスキーの護衛役を務めているシグナムがミノフスキーの部屋に来ると、部屋の主であるミノフスキーの姿が見えない事に気づき、ヴィータたちにミノフスキーの行方を訊ねる。
「それが・・・」
ヴィータたちは事情を知らないシグナムにこれまでの経緯を伝える。

「あの男が横領？あり得んな」
　シグナムもミノフスキーの容疑を否認する。
「シグナムもそう思うだろう？」
「ああ、研究一筋のあの男が横領何て真似は考えられん」
「今、リンディさんとレティ提督が調査を始めてくれましたが・・・」
「私たちは今日付けで配置転換になりました。ヴィータさん、シグナムさん、博士の事、よろしくお願いいたします」
「お願いします」
　昇進と同時にミノフスキーの研究室から去る配置転換の辞令を受けたマリエルとシャリオはヴィータとシグナムにミノフスキーの事を託すしか出来なかった。
「おう、任せろ。爺さんは必ず助け出してみせるからな」
　こうして、マリエルとシャリオはミノフスキーの研究室を去り、マリエルは元の職場である本局第四技術部へ・・・
　シャリオは本局の指令室に通信士として新たな職場へと向かった。

　それから数日後、ヴィータはリンディに調査状況を訊ねた。
「リンディさん、爺さんの件についての調査の進展はどうなっているんです？」
「それがまだ調査中なのよ」
「えっ？まだ？・・・そんなっ!?リンディさんもレティさんも動かせる人間は沢山いるんだろう？口座の開設や金の流れ何てすぐに分かる筈じゃあ・・・？」
「お金の流れを追うって言うのは意外と難しいモノで、慎重に追わないと証拠を隠滅されてしまうのよ。もし、証拠が無くなれば、博士を救う事が難しくなるわ」
「・・・」
　六課に出向する前、ヴィータは〝空〟の特別捜査官補佐と言う役職についていたが、その時は詐欺、背任、横領等の知能的犯罪捜査とは縁が無く、こういった金銭に関わる捜査と言うのがどういった捜査なのか分からないが、ミノフスキーを助ける為に今の自分が出来る事は

リンディとレティを信じ待つ事だけだった。
しかし、調査が一向に進展せず無駄に時間が過ぎて行き更には、
「はぁ!?何だよ!?この辞令は!?」
「ふむ、この辞令は確かにおかしい・・・・」
この日、ヴィータとシグナムの下に人事部から通達された辞令に対して二人は思わず声を上げる。
人事部からの通達は、ヴィータを航空戦技教導隊、シグナムをミッドチルダ首都航空隊・・・・つまり、六課卒業後の原隊へ復帰するようにとの通達であった。
「まだ、ミノフスキーの爺さんの件に方が付いていねぇのに『原隊へ復帰しろ』だ!?ふざけているのか!?」
辞令書を破く勢いでヴィータは憤慨していた。
「こんなふざけた辞令を出した人事部に殴り込みに行ってやる!!」
「待て、ヴィータ」
「なんだよ!?シグナム。お前はまさか、こんなふざけた辞令に従えって言うのか!?ついさっき、言ってたじゃねぇか!!『この辞令はおかしい』って!!」
「私自身もこの辞令に納得したわけではない。しかし、組織に属している以上、指示には従わなくては主に迷惑がかかるぞ」
「くっ・・・・」
人事部で騒動を起こせば、はやてに多大な迷惑がかかる事をシグナムに指摘され、ヴィータは苦虫を噛み潰したように顔を歪め、渋々辞令に従った。
しかし、ヴィータは定期的にリンディとレティに捜査についての進展を訊ねていた。
そんな中でヴィータにとって衝撃的な出来事が起きた。
「そんな!?爺さんが死んだ!?」
「ええ・・・・」
ある日、ヴィータがリンディに捜査の進捗を訪ねた際、リンディから衝撃的な事実が齎された。
保安部で事情聴取中のミノフスキーが亡くなったと言うのだ。

「な、なんで爺さんが・・・まさか保安部の連中、爺さんに拷問を!?」
「いえ。私も事情聴取に参加していた訳じゃあないけど、博士の死因は急性心不全らしいわ」
「リンディさん、アンタは保安部の連中が言う事を信じているのか!?」
　ヴィータはミノフスキーの死因について不信視していた。
「勿論保安部からの通達を全て信じている訳じゃあないけど、確認したくても博士のご遺体は既に荼毘に付してしまった様で、もう確認が出来ないのよ」
「それじゃあ、捜査の方は?」
「博士自身が亡くなったので、捜査も打ち切りの見通しが立ったわ」
「・・・・」
　ヴィータにとっては納得のいかないばかりの出来事であったが、一番納得がいかなかったのはミノフスキーの死と死因の追及、そして彼の名誉を回復することが出来なくなったことだ。
　新型エンジンの開発成功と言う管理局にとって新たな改革と偉業を成し遂げたミノフスキーは研究費の横領と言う不名誉な汚名を着せられ、葬式も挙げられることなく人知れず葬られた。

　ミノフスキーの死は彼の存在を知っているごく一部の局員たちにしか知らされず、死因も保安部からの通達通り急性心不全とされた。
　ミノフスキーの死が知らされた中、本局の一室では・・・・
「ふっ、あの野蛮人め、ようやくくたばったか・・・・」
「はい。その様です」
「何でも死因は急性心不全だとか?」
「まぁ、ご老体でしたからねぇ～突然の病死も起こりうるとの事ですね」
「それで死体は始末したんだろうな?」
「はい。既に荼毘に付して処分したとの事です」
「よろしい。まぁ、あんな野蛮人でも我々管理局の役には立ったようだな?」
「ええ、新型エンジン・ＭＳ機関のノウハウは既に技術部で設計・製作

技法も共有されており、後は量産するだけとなっております」
「よろしい。このＭＳ機関が量産されたあかつきには管理局は以前の勢いを取り戻し・・いや、それ以上の勢いで次元の海全てを管理できる力を手に入れることが出来るぞ!!」
本局の管理世界拡大派の局員たちは近い将来、管理局の次世代型の次元航行艦が宇宙を支配する未来図を思い浮かべ高笑いをした。

時空管理局の歴史は輝かしい戦果と活動だけでなく、謀略と言う闇の部分もあり、管理局によって謀殺の手に倒された者の数は正確には分からぬほどである。
これら一切は管理局の歴史の闇に封じ込められて、末端の局員や一般人には決して知られることはなかった。

百八十話　訪問者

ミノフスキーと言うボラー連邦からの亡命者が居り、その彼が管理局へ多大な貢献をした後、研究費の横領容疑がかけられたまま急死した事を多くの局員が知らないまま、管理局はそのミノフスキーが研究・開発に成功した新型エンジンを搭載した次世代の次元航行艦の設計・開発を行おうとしていた。

その頃、フェイトはもう一つの地球から戻った後、向こうでの経験から次元航行艦乗りを目指す為に士官学校へ入り直していた。

フェイトの士官学校への入校と同時にナカジマ家に養子入りしていたチンクも同時期に士官学校へと入り、フェイトと肩を並べて学んでいた。

そんなある日・・・

「ハラオウンさん、ハラオウンさん」

士官学校の事務員が、フェイトが在籍するクラスにやって来てフェイトを呼ぶ。

「あっ、はい。何でしょう？」

「ハラオウンさんにお客様が来ています」

「えっ？お客さん？私に？」

「はい。第一応接室で待っています」

「分かりました」

誰かがフェイトを訪ねて来た事を事務員はフェイトに知らせ、フェイトは自分を訪ねて来たと言う訪問者が居る第一応接室へと向かう。

（私にお客さんって誰だろう？）

（はやてかなのはかな？）

士官学校に入校してからフェイトは士官学校の寮で生活しており、なのは、はやてとは連絡が取れない程、毎日勉学や演習に勤しんでいたので、フェイトはもしかしたら、なのはかはやてが自分の様子を見に来たのかもしれないと思いながら客人が待つ応接室へと向かう。

しかし、応接室で待っていたのは、なのはでもはやてでもなく、本

局の制服を纏った一人の男性局員であった。
（えっ？誰だろう？この人・・・・）
（まさか、また査察部の人!?）
　見慣れない若い男性局員の姿を見てフェイトはまた査察部の局員かと思い警戒する。
「はじめまして、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンさんですね？」
「ええ。そうですけど・・失礼ですがどちら様でしょうか？」
　男性局員の事を警戒している為かフェイトの声は若干トーンダウンしており冷たい感じだ。
「失礼しました。自分は艦政部造艦科所属のフランソワ・エミール・ヴェルタンと申します」
　男性局員こと、ヴェルタンはフェイトに自身の身分証明書を提示しながら自己紹介をする。
「艦政部造艦科？」
　取り敢えず査察部ではないことにフェイトは若干警戒心を解くと同時にこれまでの局員生活の中で一切関りがない部署の局員が一体自分に何の用かと疑問を抱く。
「あの・・艦政部の人が私に一体何の御用でしょうか？」
　自分に何か用があるからこそ、ヴェルタンはわざわざ士官学校へ来たのだからフェイトはヴェルタンに訪問目的を訊ねる。
「その前に・・・・」
　ヴェルタンは周囲に結界を張り、サーチャーや盗聴器の類がないかを調べる。
「ふう～・・盗聴の類はないか・・・・あっ、すみません。少々まだ発表前の事項を含む内容なので・・・・」
「はぁ・・・・」
「申し訳ございませんが、今回の話の内容も公式に発表されるまで、どうか内密にお願いします」
「え、ええ・・・・」
（何か勝手に巻き込まれているよね？私・・・・）
（だとしたら勝手に巻き込まないでくれるかな？）

フェイトは例えヴェルタンが査察部所属の局員でないにしろ、彼の冒頭の内容からもしかしたら厄介事かと思う。
しかし、実際にこうして会ってしまった以上、今更ここで退室する訳にもいかないのでとりあえずフェイトはヴェルタンの話を聞くことにした。
「それで話とは一体何ですか？」
応接室に備え付けの椅子へ互いに座り、フェイトは改めてヴェルタンに話の内容を訊ねる。
「ハラオウンさんは確かマリエル・アテンザ技師とシャリオ・フィニーノ士長とは面識がお有りでしたよね？」
「ええ、マリエルさんは機動六課時代に六課で・・・シャーリーは六課稼働前から私の補佐役として一緒に仕事をしてきましたから・・・」
（士長？シャーリー、昇進したんだ・・・）
ヴェルタンの話の中でシャリオの階級が上がっていた事からシャリオと会っていない間に彼女は昇進したのだと知った。
「それで、マリエルさんとシャーリーがどうかしましたか？」
「実はお二人が先日、次元航行艦の新型エンジンの開発に成功されまして、現在艦政部ではその新型エンジン・ＭＳ機関を搭載した次世代の次元航行艦の設計を始めています」
「新型のエンジン!?それに次世代の次元航行艦って・管理局はいつの間にそんな代物を!?」
（そう言えば、マリエルさんもシャーリーも私がミッドに戻ってきた時、何か忙しそうだったけど、次元航行艦のエンジンを造っていたんだ・・・）
「自分もつい最近知ったばかりで正確な開発日時は分かりませんが、結構前から極秘裏に進められていたようです」
ヴェルタンは実際に新型エンジンの研究・開発を行っていたのはボラー連邦からの亡命者であるミノフスキーであると言う事を知らなかったので、後々に管理局から公式発表される新型エンジンの開発者がマリエルとシャリオであると言う情報を信じていた。
そしてフェイトもヴェルタン同様、ミノフスキーの存在をはやてた

ちから知らされていなかったので、彼から伝えられた情報を信じ、新型エンジンを開発したのがマリエルとシャリオの二人なのだと信じた。
「しかし、新型のエンジン開発だなんて‥それは本当に成功しているんですか？」
　自分がもう一つの地球へ行っている間、管理局はボラー連邦に対して武力制裁を行い、失敗して艦船と人材に大きな被害を受けて管理局‥特に〝海〟は次元航行艦の再建に奔走していた筈だ。
　そんな中、時期的にも短い期間でマリエルとシャリオが次元航行艦の新型エンジンの開発に成功していたとはフェイトとしては俄かに信じられなかった。
「開発に成功したのは事実です。自分も艦政部造艦科の所属と言う事もあり、今後の次元航行艦に搭載予定のエンジンと言う事で、稼働実験の映像（編集でミノフスキーの姿が消されている）を確認しましたので間違いありません」
「は、はぁ‥‥」
　次元航行艦の設計・開発に関わる部署の局員が言うのだから管理局が新型のエンジンの開発に成功したのは事実なのだろう。
「エンジンに関しては別部署の局員が製造・増産体制を整備しており、自分はそのエンジンを搭載する次世代の次元航行艦の設計を担当してすることになりました」
「それで何故、私の所へ？私はこれまで事件の捜査は行ってきましたが、次元航行艦の設計の仕事なんて携わった事はないですよ」
　フェイトはヴェルタンに次元航行艦の設計について、自分は畑違いの素人である事を告げる。
「それは承知しております。ですが、自分はハラオウンさんの体験談から、設計のヒントを貰おうと本日、ハラオウンさんを訪ねて来たのです」
「私の体験談？」
「はい。実は次世代の次元航行艦の設計について就役を迅速にする為、ボラー連邦の艦を参考にしようと言う意見があるのです」

「ボラー連邦の艦を!?」
管理局が次世代の次元航行艦を少しでも早く就航させるためにボラー連邦の艦を基に設計し、就役させようとしている事にフェイトは思わず声をあげる。
しかし、応接室に張られている結界の為にフェイトの声は外に漏れる事は無かった。
「ええ」
「でも、ボラー連邦は管理局に対して酷い事をしたじゃないですか!!」
「自分たち艦政部の人間も同じ意見を持つ者が居るのですが・・・」
管理局の上層部としてはボラー連邦への武力制裁失敗から一日でも早く次世代の次元航行艦を就役したがっている事から艦の外見など関係ない様だ。
「従来の艦にその新しいエンジンを取り付ける事は出来ないのですか?」
フェイトはボラー連邦の艦を基にしなくても管理局がこれまで就役させて来た既存の次元航行艦のデザインを採用すればよいのではないかと訊ねるが、
「何でも現在の艦の構造上からＭＳ機関を搭載すると衝撃波やエンジンの振動等の影響から艦がバラバラになる可能性がシミュレーション結果から出ていて・・・それに〝海〟の上層部は『管理局の新たな門出だ』とか言ってこれまでにないデザインの艦を求めているみたいです・・・」
これまでの次元航行艦とＭＳ機関の相性はどうやら悪いらしく、既存の設計図は使えなかった。
スカリエッティを向かい入れるために暗黒星団帝国は管理局の艦をもした偽装艦で局員たちを騙した経緯があるが、暗黒星団帝国のエンジンはボラー連邦で採用しているエンジンとは異なる事から管理局の次元航行艦を偽造することが出来た。
実際に暗黒星団帝国の残骸を手に入れた管理局はミノフスキーにその残骸を見せたが、ミノフスキーは『見覚えが無い』と言っていた。
ボラー連邦出身のミノフスキーではなく、暗黒星団帝国からの亡命

者であれば既存の設計図をそのまま使用できたのかもしれない。
「だからってなにもボラー連邦の艦なんて・・・そもそも、ボラー連邦の艦のデータなんてあるんですか？武力制裁の際、鹵獲出来たとか？」
「いえ、ハラオウンさんの兄でもあるクロノ・ハラオウン提督が指揮をするクラウディアを始め、あの武力制裁で運よく生き残った艦が撮影した映像を解析してボラー連邦の宇宙船のデータをとったみたいです」
「クロノたちが・・・」
　ヴェルタンが言うボラー連邦の宇宙艦船のデータについては、当然彼が言う通り、あの武力制裁から命からがら生き残った次元航行艦の記録からとったモノもあるかもしれないが、その大半のデータは管理局がミノフスキーに要請したボラー連邦が運用している宇宙艦船のデータであった。
　ヴェルタンは当然、この事実も知らない。
「次元航行艦を揃えるのは確かに現状の管理局としては急務であるのは分かります。ですが、そもそもの原因であるボラー連邦の艦に似せるのはミッドの住民はどう思うか・・・」
「管理局への不信を増々高めるかもしれない・・・と？」
「ええ。なので、ハラオウンさんに協力を求めに来ました」
「？」
　先程もヴェルタンはフェイトに自身の体験談を聞きに来たと言っていたのだが、フェイトとしては未だに話が繋がらない。
「テレビで見ましたが、ハラオウンさんは管理局よりも宇宙技術が進んでいるもう一つの第９７管理外世界へ一時滞在していたと拝見しました」
「ええ・・・」
「出来る限りで良いんです。もう一つの第９７管理外世界で運用されていた宇宙船の構造を教えてもらえませんか？」
「えっ？」
　ヴェルタンの目的を聞き、フェイトは思わず唖然とし、目が点にな

る。
「ハラオウンさんはもう一つの第９７管理外世界の宇宙船に乗艦していたんですよね？それでしたら、その宇宙船はどんな姿をしていたんですか？」
「え、えっと・・・・」
　目を輝かせながらずいずいと来るヴェルタンにタジタジなフェイト。
（この人、ルキノと同類なタイプだ・・・・）
「以前ハラオウン提督がもう一つの第９７管理外世界から得た情報ですと、かの世界ではタキオン粒子を用いた機関を採用していると聞きました。今回のＭＳ機関もハラオウン提督が言うタキオン機関とは若干の違いがありますが、概ねに多様な技術なので、ハラオウンさんが一時滞在していたもう一つの第９７管理外世界で運用されていた宇宙船とも相性がいい筈です!!」
「ひとまず、落ち着いてください」
「あっ、失礼しました。それで、教えていただけますか？」
「それについて、ヴェルタンさんはテレビを見て私がもう一つの第９７管理外世界に滞在していた事を知ったんですよね？」
「はい」
「それなら、テレビの記者会見で見た様に私はマスコミの質問に対して当たり障りのない感じで答えました。ヴェルタンさんはその理由は分かりますか？」
「い、いえ・・・・」
　ヴェルタンも流石にフェイトがもう一つの地球での滞在についての記者会見時のフェイトの心情を理解できるはずがない。
「私は管理局がもう一つの第９７管理外世界に興味をなるべく示さない様に当たり障りのない回答をしたんです」
　フェイトはヴェルタンにあの時の記者会見における自身の態度の理由を話す。
　しかし、見方を変えると管理局は益々もう一つの地球に興味を示してしまう可能性も秘めていたが、フェイトとしては素っ気ない態度を

取れば管理局は諦めると思い、記者会見の際、あのような態度を取ったのだ。
「興味を示さない様に？それは何故です？」
「もう一つの第９７管理外世界に滞在して分かりました。あの世界の人たちの強さを・・・それはただ単に軍事力、科学力が管理局より優れているだけではなく、もう一つの第９７管理外世界の人々の精神の強さと士気の高さが管理局の人よりも勝っていました。管理局の上層部の一部は『魔法も使えない蛮族』と思って見下している様子だけれど、魔法が使えない＝弱いと言う考えは大間違いだよ。私は管理局がやったボラーへの武力制裁を詳しくは知らないけど、少なくともボラー連邦は管理局の様に魔法を使って戦う訳ではなく、質量兵器を主力としていたんじゃない？」
「は、はい」
「ミッドでも魔法素質がある人も居れば、無い人も居るし、魔法素質がある人でもランクによって分けられている・・・一部の特権階級みたいな人だけで戦争なんて出来ないよ。でも、もう一つの第９７管理外世界もボラー連邦もそんな魔法素質やランクなんか関係なしに戦う人がいる・・・」
「つまり、宇宙船の技術以外、兵力においても士気においても管理局はそれらの勢力に劣っていると？」
「私はそう思っているよ。現にもう一つの第９７管理外世界は母星が危機的状況になっても、敵の勢力に本土が占領されても諦めずに最後まで戦って勝っているからね。そんな勢力を相手に管理局がちょっかいをかけても手痛い目に遭うのが目に見えているからね」
「ボラーに対する武力制裁の時の様に？」
「ええ・だからこそ、私はあの時の記者会見ではあんな素っ気ない態度を取ったし、質問に関しても当たり障りのない回答ばかりした。管理局にはもう一つの第９７管理外世界について興味を持ってもらいたくは無いの・・・かの世界に残ったランスター元補佐官はもしかしたら滞在中に管理局を見限ったのかもしれない」
　もう一つの地球にちょっかいや喧嘩を振れば管理局は当然手痛い

目に遭うのは当然の事で、あの世界にはあの世界のなのはの子孫である紅葉やティアナが居るので、管理局がもう一つの地球に手を出さなければ自分とティアナは互いに戦い合う事がない筈だ。
「なるほど・・・・ハラオウンさんの心情は分かりました。しかし、今後の管理局の為、ボラーとの一件やソレを上回るような悲劇を回避する為に今はハラオウンさんの経験を役立ててもらいたいのです!!」
　ヴェルタンはフェイトに深々と頭を下げてフェイトが知りうる限りの防衛軍が運用している艦艇の外見だけでも教えてくれと頼み込む。
「・・・分かりました。ですが先程言ったように、私は艦の設計については素人なので、大まかな事しか覚えていないのですが、それでもいいですか?」
「はい。最初の切っ掛けでもあればこちらでなとかしてみせます」
　フェイトとしては管理局が防衛軍に喧嘩を売るような愚行は勘弁して欲しいが、ボラー連邦に対しての武力制裁の失敗の様な大惨事を繰り返さない為・多くの局員が犠牲にならない様に協力した。
「それじゃあ・・・」
　フェイトはヴェルタンが用意した製図紙に自身が覚えている限りの記憶の中でヤマト、まほろばの絵を描いた。
「もう一つの第９７管理外世界の宇宙船は水上船舶を意識した設計なんですね」
「元々、このヤマトはかの世界に存在した水上艦船を基に作られたみたいですからね。でも、他の艦艇に関してはあの世界独自の艦影をしていました。とは言え、軍艦の設計は軍の中でも機密事項なので、私が印象深く覚えているのは救助され、乗艦したこのヤマトとまほろばだけです」
　フェイトはもう一つの地球にてその地球が辿った歴史とルキノの土産用に防衛軍のプラモデルから防衛軍の艦船の外見は知っていたが、やはりもう一つの地球の情報をあまり提示したくはなかったので、ヴェルタンに教えるのはあくまでも自身が乗艦経験があるヤマトとまほろば、そして防衛軍と暗黒星団帝国との戦いで見たコスモタイ

ガーだけに留めた。
「なるほど・・・大きさもそれなりにあったでしょう？」
「確か３００メートル以上でした」
「３００メートル以上・それは大きい・・・」
ヴェルタンはフェイトが描いたヤマト、まほろばの絵を興味津々で眺めている。
「ん？ハラオウンさん、こちらは？小型の航空機ですか？」
ミッドにおける航空機は地球同様、大勢の旅客や貨物を運送する為の大型か中型の航空機または輸送ヘリであり、戦闘機と呼ばれる航空機は存在していない。
〝空〟に関する守りは〝空〟所属の空戦属性を持つ魔導師が務めているからだ。
なのでヘリコプターに関しても機銃やミサイルを装備した戦闘ヘリもミッドには勿論存在していない。
「ええ、これら小型の航空機もヤマト、まほろばの装備の一つでもあり、強力な兵器の一つでもあります」
「強力な兵器・ですか・・・」
小型の航空機の絵を見てヴェルタンは何だか訝しむ。
（こんな小さな一人乗りの航空機が強力な兵器・ね・・・）
戦闘機をこれまでの人生で見た事もないヴェルタンにとってはどう見ても戦闘機が強いとは思えなかった。
「ヤマト、まほろば自体も管理局の次元航行艦以上の性能を持つ強力な兵器であり軍艦・戦うために生まれた艦で、この小型の航空機もミッドの空でお客さんや荷物を乗せている航空機ではなく、やはり戦うための航空機ですから」
「戦うための航空機・・・ですか・・・空戦属性のあるハラオウンさんから見て、この航空機はどう見えましたか？」
「この航空機は、空は勿論の事、真空の宇宙空間でも運用が可能でしたし、速度に関しても空戦魔導師の比ではありません。当然、彼らに救助されて一時行動を共にしていた私もこの航空機の活躍をこの目で見てきました。この航空機は確かに空戦属性の魔導師にとってはそ

の立場を危うくする代物です」
「やはり・・・」
「ですが、管理局の将来の為を思うと私は戦闘機は必要不可欠なモノと思っています」
「それは何故です？もしこの航空機が管理局に広まったらハラオウンさんの立場もある意味では危ういのではないのでしょうか？」
「そうでしょうね。しかし、いくら高ランクの魔導師でも真空の宇宙空間ではバリアジャケットだけでは活動は出来ませんし、大気圏内と同等の動きが出来るかと問われれば、個人差はありますが、難しいと思います。それに・・・」
「それに？」
「空の守りは〝空〟所属の空戦属性の魔導師のみと言う限られた人だけですが、戦闘機は魔導師だろうが、非魔導師だろうが、本人の努力と適正だけで空を守る防人になれます。常に人手不足な管理局にとっては救世主になると思っています。最もヴェルタンさんの言う通り、空戦属性の魔導師からは反発があるでしょうけど・ですが、管理局は近い将来大きな選択をしなければならない時が必ず来るでしょう。その時、こうした戦闘機の導入に関しても選択肢を突きつけられると思っています」
「そ、そうですか・・・」
「それに次元航行艦の運用に関してもこれまでの運用方法以外にも改革が必要になるでしょう」
「と、言うと？」
「管理局の艦は主に単艦で行動をしてきました。一応、ＪＳ事件の折、聖王のゆりかごを破壊する際は複数で行動を共にする艦隊行動をとっていましたが、ごく短時間の事でした。ボラーに対する武力制裁の時が本格的な艦隊行動でした。ボラーの宇宙艦船が管理局の次元航行艦よりも優れていたと言う点もありますが、これまで艦隊行動をとった事の無い管理局としては統一された動きを取ると言う行為は難しかったのでしょう。ボラーの一件を教訓とするならば、今後は艦隊行動の訓練も必要です。勿論、この士官学校でもそう言ったカリ

キュラムの導入も同様の事が言えます」
「・・・・」
ヴェルタンはフェイトの意見をジッと聞いていた。
「今日は貴重なご意見、どうもありがとうございました」
「いえ、今後の管理局の為に役立ててもらえれば何よりです」
フェイトからもう一つの地球に関しての意見とヤマト、まほろばのデザイン画を持ってヴェルタンは士官学校を後にした。

その日の夜・・・・
「フェイト、どうだ？士官学校の生活にはもう慣れたか？」
士官学校に入ったフェイトの様子が気になったクロノが連絡をしてきた。
「カリキュラムは訓練校以上に難しい事ばかりだけど、何とかなっているよ。それにチンクも頑張っている。この前も一緒に課題をやったんだ」
「そうか」
フェイトの士官学校での生活を聞いてホッとするクロノ。
「あっ、そう言えば今日、艦政部の人が来たんだ」
「艦政部の人間が？一体、何の用だったんだ？」
クロノとしてみれば、艦政部の人間が士官学校に何の用があるのか疑問に思った。
ＯＢとして士官学校を訪問したのだろうか？
それとも身内が士官学校に在学中だとしても今の自分の様に連絡すれば良いだけの事なのだが、その艦政部の局員がよほどの過保護なのだろうか？
「もう一つの地球について聞かれた」
「あの世界の事をか!?フェイトはその局員にあの世界の事を話したのか!?」
「う、うん。でも、盗聴防止やあまり周りに話さない様に忠告はしたよ」

「盗聴防止は兎も角、口約束だけではどれほどの効力があるかどうか・・・それで、その艦政部の局員に何を聞かれた？」
「私が見て来た防衛軍の宇宙艦船について聞いて来た。なんでも今度、次元航行艦の新型エンジンが完成したから艦政部でも次世代の次元航行艦を設計しているみたいで・・・」
「新型のエンジン？」
「うん。あれ？クロノは知らなかったの？」
「ああ、初耳だ」
　フェイトとしてはリンディ経由かクロノ自身が新型のエンジンの存在を知っていると思っていたが、クロノは知らなかったみたいだ。
「あっ・・・」
　フェイトはヤバッと思ったが、既にクロノに話してしまった後なのでもう後の祭りだ。
「ご、ゴメン。新型のエンジンについてはまだ解禁されていない事だから発表されるまで黙っていて」
「それは良いが、艦政部の局員は防衛軍の宇宙艦船だけ聞いて来たんだな？もう一つの地球の座標とか軍の気密に関する事は聞いて来なかったんだな？」
「う、うん」
　軍艦についてもある意味で軍事機密にあたるかもしれないが、ヤマト、まほろばの外見については管理局の一部の局員たちに目撃されているので、軍事機密度は低いと思いたい。
（近々、フェイトを訪ねて来たと言う艦政部の局員と接触してその目的を問う必要があるみたいだな）
　クロノとしてもフェイト同様、あまりもう一つの地球に対して興味を抱き、あの世界に変なちょっかいを出したり、〝海〟の上層部を焚き付けられても困るので、後日フェイトを訪ねて来たと言う艦政部の局員と会い、その目的とどんな人物なのかを確かめる事にした。
「まぁ、今回は不可抗力としてだ。今後はあまりあの世界の事を不用意に第三者へ話すのは控えてくれ」
「う、うん。分かった」

「それじゃあ、フェイト。勉強頑張れよ」
「うん、ありがとう。クロノもお仕事頑張ってね」
「ああ。それじゃあ・・・」
クロノから警告を受けつつも彼はフェイトの士官学校生活を気にしつつ通信を切った。

後日、ヴェルタンはフェイトが描いたヤマト、まほろば、コスモタイガーの絵を持ち造艦部の庁舎にて上司にこの案件を採用してもらおうと掛け合った。
造艦部庁舎の設計室では、やはり次世代の次元航行艦の就役を急務とし、建造に関しても時短目的でミノフスキーが遺したボラー連邦の艦とこれまで管理局が建造した艦を合わせ持った艦影の設計が主流となっていた。
そんな中でフェイトが折れてヴェルタンにヤマト、まほろば、コスモタイガーの絵を描き渡した行為が無駄になってしまう可能性が高い。
しかし、フェイトからもう一つの第９７管理外世界での宇宙艦船についての話を聞き、無駄にはしたくないと言う思いと同時に設計士として絶対に沈まない強力な艦を造り上げたいと言う思いが募った。
だが、現実は厳しく・・・
「何故ダメなのですか!?」
ヴェルタンは上司にボラーではなく、フェイトが一時滞在していたもう一つの地球における防衛軍の艦影を基にした設計を提案するが、
「君は今の管理局の現状を理解していないのか?ボラーとの戦いに敗れ、〝海〟は現状の戦力で手一杯の状況で活動をしているのだ。〝海〟が欲するのは直ぐに就役できる強力な艦だ。幸いＭＳ機関が既に実用段階となった今、我々造艦部は一日でも早く次世代の次元航行艦を就役しなければならないのだ。君の提案では一から艦の設計図を造らなければならない」
「だから言ってそもそもの原因であるボラーの艦の設計を流用するのはいかがなものかと・・・」

「何もすべてをあの野蛮人共の真似をする訳ではない」
「ですが・・・」
「兎に角、君の提案は既に却下だ」
　彼の提案は却下されてしまった。
「・・・」
（あの分からず屋め!!）
　ヴェルタンは不機嫌オーラ全開で庁舎の通路を歩いていると、
「ん？」
　資料室にて人の気配を感じて扉を開ける。
　この資料室は普段から人の出入りが無い部屋なので、ヴェルタンは気になって資料室の扉を開ける。
　すると資料室に備え付けのテーブル席には一人の若い男性局員が座っており、何かを描いていた。
「ん？なにか・・・？」
「あっ、いえ、この部屋から人の気配があったので、気になって・・・」
「ああ、普段からこの部屋は使われていませんからね。ですが、私にとって此処はまさにプライベートオフィスなので、ちょくちょく使用させてもらっているんですよ」
「そうなんですか・・・」
　ヴェルタンはふとこの局員が資料室で何をやっていたのか気になって近づいてみると、テーブルの上には巡航艦らしき艦の絵が描かれた製図紙があった。
「これは？」
「コンペに落ちた巡航艦の設計図です」
「コンペに落ちた？」
「ええ・・・失礼ですが、お名前を聞いても？」
「失礼、フランソワ・エミール・ヴェルタンです」
「自分はルイ・レオンス・ヴェルニーと申します」
「さきほど、コンペに落ちたと仰っていましたが・・・」
「ええ、貴方も艦政部の人間なら知っているでしょう？現在、造艦科が次世代の次元航行艦の設計と就役を急いでいる事を・・・」

「はい。存じています」
「しかもその設計をボラーの艦影を基に設計されている事も・・・」
「ええ。元々の発端がボラーとの武力衝突ですからね。〝海〟も当初は此処までの被害を想定していなかったのでしょう」
「まぁ、理由はどうあれ、新たな艦を設計・就役することが出来るなら、造艦技師としてやりがいを覚えるのですが・・・」
「コンペに落ちてしまった・・と・・・」
「元々今回のコンペは出来レースだったんですよ」
「出来レース・・・か・・・」
「はい。それで、上司とやり合いましてね。大体あいつらは知性と教養のカケラもない。親の七光りで高い地位にいるくせにそれに見合う実力もなく、口では『管理局の為だ』とか言っているが、その実態は保身と出世欲しかない俗物ばかり・・実に不愉快だ。あんな奴らと同じ空間に居るのも、出来レースで採用された艦の仕事をするのも耐えられない。だからこの部屋に逃げ込んだんです」
　ヴェルニーがヴェルタンに資料室に居た理由は不貞腐れながら話す。
（言い分は理解できるところもあるが、何だか精神的に未成熟で感情的過ぎる）
（しかし、コンペに敗れたとは言え、巡航艦の設計を任ぜられる程の才能があると言うなら、実力もある筈・・・）
「艦が好きなんですね」
「ええ、よく父親と一緒に模型や雑誌を買って部屋で眺め、自分で絵を描いていました。それで自分は艦政部へと入りました」
（この人も艦が好きなんだな・・・）
　ヴェルタンはヴェルニーに対して親近感を覚える。
　もっともフェイトからしてみれば、今の二人を見たら、きっとルキノ、ヴェルタン、ヴェルニーの三人は類友に見えただろう。
　ヴェルニーはその後、コンペに落ちたとされる巡航艦の設計図にペンを走らせる。
　既にコンペに落ちているので、製図紙に描かれている巡航艦が世に

出る事は無いが、それでも彼の頭の中にはこの巡航艦の完成図や様々なバリエーションがあるのだろう。
　そして、巡航艦のデザインを描いている時の彼の表情はまるで無邪気な子供のように輝いていた。
「ん？・まだなにか？」
　巡航艦のデザインの続きを描いていたヴェルニーは未だに自分の傍に居るヴェルタンの存在に気づき、まだ自分に何か用があるのかを訊ねる。
「あっ、いや・・その、自分も先ほど上司とやり合いましてね」
「ほぉ～貴方も・・・」
　ヴェルタンはヴェルニーに自分も彼と同じ境遇である事をボヤく。
「ええ。貴方と同じく次世代の次元航行艦の設計案を出しましたが、あっさりと却下されましてね」
「どんな案件を出したんですか？」
「やはり、次世代の次元航行艦の設計についてボラーの宇宙船を基にする案件について自分も思うところがありまして・・・ですが、自分の上司も次世代の次元航行艦の就役を優先すると言って自分が提案した案件は却下されました」
「そうですか・・案件が却下されたと言う事は貴方も何か設計したと言う事ですか？」
「ええ。まだ本格的な設計はこれからなのですが、ある人と出会いアイディアをもらってきまして・・・ボラーの艦ではない別の世界の宇宙船を基にしようかと思いましてね・・・」
「ちなみにどんなデザイン何ですか？」
　ヴェルニーは宇宙船のデザインと言う事で興味を示す。
「こちらです」
　ヴェルタンはヴェルニーに先日、士官学校にてフェイトが描いたヤマト、まほろばのデザインを見せる。
「ふむ、水上船舶を意識して描いたような印象ですが、何だか古臭い・全然垢抜けない。まるで素人が描いたようなデザインですね。一体誰が描いたのですか？」

ヴェルニーはフェイトが描いたデザインを小馬鹿にした様に言う。
「管理局の関係者・としか今は言えません。ですが、その人は確かに造艦に関しては素人でしたが宇宙船の見聞に関しては恐らく管理局随一かと思います」
「へぇ～・・これを描いた人がねぇ～・・・・」
ヴェルタンの言葉をヴェルニーはあまり信じてはいない様子だ。
「今はまだ無理かもしれませんが、近い将来、このデザインの艦を建造し就役したいと思っています。・・・もし、貴方がこのデザインを基に艦を設計するなら一体どんなデザインにしますか？」
ヴェルタンはヴェルニーにヤマト、まほろばのデザインを基に新たな次元航行艦を設計するならどんなデザインにするのかを問う。
「これを基に？そうですね・・・・」
ヴェルニーは新しい製図紙を取り出し、フェイトが描いたヤマト、まほろばのデザインを基に次元航行艦のデザインを描き始めた。
「これらの艦の大きさはどれくらいなのですか？」
デザインを描きながらヴェルニーはヴェルタンにヤマト、まほろばの大きさを訊ねる。
「全長は３００メートル越えらしいです」
「ほぉ～・・３００メートル以上とは・・・・」
艦の大きさを聞いた後、ヴェルニーはヴェルタンに質問をすることなく、一心にデザインを描いていく。
「・・・・」
（もう集中している）
（彼の次元航行艦に対する設計への情熱はもしかしたら私以上かもしれない）
（彼とならボラーを基にした次元航行艦ではなく、新たな次元航行艦を造れるかもしれない）
（もっとも設計班として集団を形成した時、人間関係の問題は増えそうだが・・・・）
艦の設計・建造は一人ではできない。
幾人もの設計士が艦の様々箇所の設計をして様々な意見を話し合

い、取り入れて設計図を製作し、大勢の工員が艦を造り上げる。
しかし、此処までの会話と彼の態度からヴェルニーは人付き合いが得意とは言えない印象がある。
大勢の人との協調性が必要になった際、きっと一悶着が起きる可能性が高い。
だが、今はボラーではなく、もう一つの地球の宇宙艦船のデザインを基にした艦の設計図だけでも見てみたいと言う思いがヴェルタンにはあった。
ヴェルタンとヴェルニーのこの出会いはまさに運命的な出会いであった。
そして、クロノとフェイトも後々にこの二人と交流する事になるのであった。

百八十一話　ミッドと地球での出来事　パートⅡ

フェイトとチンクが通っている士官学校に艦政部所属の局員が来てから数日後、フェイトから件の話を聞いたクロノは士官学校へ訪問したと言う艦政部所属の局員の目的を訪ねるために艦政部所属の庁舎へとやって来た。

「失礼、本局次元航行部のクロノ・ハラオウンですが、造艦科のフランソワ・エミール・ヴェルタン氏に面会を頼みたいのだが・・・・」

受付にてクロノはヴェルタンとの面会を求める。

「少々お待ちください」

受付嬢はヴェルタンに連絡を取る。

（アポイント無しで来たから無理か？）

クロノは今日の訪問について事前にヴェルタンにも艦政部にもアポイントをとっていなかったので、もしかしたらヴェルタンとは会えないかもしれないと思った。

しかし、クロノの思惑とは異なり、

「連絡が取れました。ヴェルタン技師は現在、七階の資料室におります」

「どうも」

ヴェルタンからの面会が叶ったので、クロノはヴェルタンが居ると言う七階の資料室へと向かった。

「資料室か・・・何だってそんなところに居るんだ？」

ヴェルタンの居る部屋に対してクロノは若干の疑問を覚えた。

コン、コン、

そんな疑問を覚えつつも兎に角、ヴェルタンに会わなければ話が始まらないので、クロノはヴェルタンが居ると言う七階の資料室の扉をノックする。

「どうぞ」

資料室の中から返答があったので、クロノは部屋の中に入る。

「失礼します・・・って、何だ？こりゃ？」

資料室とは聞いていたが、その部屋の前には沢山の製図紙が溢れていた。
「いらっしゃい、ハラオウン提督」
資料室の奥から声が聞こえたので、クロノが向かうとそこには製図板に置かれた製図紙にペンを走らせる二人の男が居た。
「あ、あの・・・・」
「あっ、すみません。少しだけ待ってもらえますか？もう少しで区切りが良いので・・・・」
「は、はい」
二人の内、一人の男がクロノに少しだけ待つように言うとクロノはその男の言う通り近くにあった椅子に座り待つ事にした。
やがて、ペンを置いた男がクロノの下へとやって来た。
「お待たせしました。私がフランソワ・エミール・ヴェルタンです」
「クロノ・ハラオウンです。本日はわざわざ面会をしてもらいありがとうございます」
「いえ、他の部署とは異なり此処は若干の暇がありますから・・それで本日は一体どんなご用件で来られたのですか？」
「実は先日、士官学校に通っている義妹と話す機会がありまして、その際に貴方の話を聞きましてね」
「ほぉ～、私の事を・・・・」
「ええ。その時、貴方はやけにもう一つの第９７管理外世界に興味を抱いたとの事ですが・・・・？」
「はい。間違いありません」
「・・・・随分とすんなりと認めるのですね」
「取り繕っても仕方がないので・・それにもう一つの第９７管理外世界に対して興味を抱いたのは事実ですから」
「それで、貴方は一体、もう一つの第９７管理外世界の何に興味を抱いたのですか？」
「私が興味を抱いたのはあの世界で運用されている宇宙艦船です。ハラオウン提督はあの世界の宇宙艦船をご覧になった事や義妹であるハラオウンさんから何か聞いた事はありますか？」

「・・・まぁ、人並み以上には・・・」
クロノとしては迂闊に防衛軍についてあまり周辺に吹聴してはならないと警戒していた。
それはフェイト同様、管理局内部にもう一つの地球に興味を抱きすぎて、ちょっかいを出される事を恐れたからだ。
実際にクロノはテレザート星付近にてヤマトの切り札とも言える波動砲の威力を管理局の中でも初めて目の当たりにした人物のひとりであり、その防衛軍の機関の原理も端的とは言え教えてもらった。
そういった点からも管理局の次元航行艦と防衛軍の宇宙艦船の技術の差は越えられないくらいの差があったのだとひしひしと感じていた。
そして、ボラー連邦への武力制裁・・・
『法の番人』『次元の海の管理者』なんて御大層な名目を言っておきながら、管理局は井の中の蛙か宇宙の道化であった。
「人並み程度でもあの世界の宇宙艦船の技術を知っていれば、お分かりになるでしょう？管理局の現状の技術の差を・・・」
「ええ、それについては痛いほどに・・・ですが、この話も義妹から聞いたのですが、なんでも今度新たなエンジンを採用するとか？」
「ハラオウンさんが？話したんですか？」
「その点については義妹を責めないでやって下さい。彼女は私も既に知っていると思っていたみたいですから・・・」
「まぁ、貴方のお母さまの点を鑑みると確かにハラオウン提督が既に知っていると思い込んでも不思議ではないですね」
フェイトが新型のエンジンの話をクロノに話した件についてはクロノの母親は統括官であるリンディならば、リンディ経由でクロノに新型のエンジンの話が来てもおかしくはないとヴェルタンも納得した。
「新型のエンジンの話を知っているならば、話が早い」
「と言うと？」
「今回、士官学校に通っているハラオウンさんを訪ねたのはその新型のエンジンが関係しているのです。これはハラオウンさんにも話を

しており、近々艦政部が公式に発表する内容ですが、管理局はその新型のエンジンを搭載した次世代の次元航行艦を就役する予定となっています」
「次世代の次元航行艦・・・」
「ええ。ですが、我々としてはその話について一つの懸念と言うか、造艦技師として納得が出来ない事がありまして・・・」
「なんです？」
「・・・その管理局が就役させようとしている次世代の次元航行艦の設計がボラーの宇宙艦船を基にした設計となっています」
「ボラーの!?」
　ヴェルタンから次世代の次元航行艦の設計についての話を聞くとクロノはフェイトと似たようなリアクションを取る。
「はい。私も管理局の人間ですからね。ボラーとの関係はあの武力制裁の話を聞いて知っております。ハラオウン提督は当事者でしたよね？」
「ええ・・・あれはまさに生き地獄の様な体験でした・・・あの時の戦い・・いや、虐殺では大勢の同僚を失いました。それに大切な恩人とも言える人も・・・」
「私はあの時の武力制裁には直接的に関わってはいませんが、同じ管理局に所属する者として・・艦を設計・製造する者として弱い艦を造ってしまい、大勢の同僚を殺すことになった事を悔やんでいます。新たなる機関、ＭＳ機関が開発に成功した知らせを聞いた時、これで管理局は強力な艦を手に入れられると思ったのですが、その艦影がボラーを模した艦なんて、センスのカケラもない悪い冗談ですよ」
「た、確かに・・・」
「当初、次世代の次元航行艦を就役すると言う事で、私はハラオウンさんの体験を元にもう一つの第９７管理外世界で運用されている宇宙艦船を参考にしようと先日、士官学校へ赴いたのです。しかし実際に案を纏め、私と彼・・・ルイ・レオンス・ヴェルニーはボラーとは異なる艦影の設計を上司に掛け合ったのですが、今の管理局は一日でも早く次世代の次元航行艦を就役させたいみたいで、我々の設計案を却下

してきました」
「〝海〟の上層部からの考えではそうなるでしょうね」
「管理局の現状そうせざるを得ないのは分かりますが、管理局はボラーと戦争をしている訳ではありません。確かにいつボラーが攻めて来るか警戒は必要です。それでも原因であるボラーの艦を模してそれを運用するのは管理局の人間として完全に受け入れられますか？」
「・・・・」
「故に私と彼は例え時間がかかってもボラーを基にした艦ではない別の艦を設計し就役させるつもりであります」
　ヴェルタンとヴェルニーの二人はその志から本来の設計部門から自ら降りて資料整理と言う仕事に回り、資料室に籠りこうしてボラーを基にした次元航行艦とは異なる別系統の次元航行艦の設計をしていた。
「御二人が設計をしている艦はもう一つの第９７管理外世界の宇宙艦船を基にしているんですか？」
「はい。ヴェルニーが全体の主な設計を担当して艦内や装甲等の細かな設計は私が担当しております」
「もし、差し支えなければ一体どんな艦を設計しているのか見せてもらえますか？」
　クロノとしてももう一つの地球で運用されている艦船・・・防衛軍の宇宙艦船を基に二人が一体どのような艦影に設計しているのか気になった。
「・・・いいでしょう」
　ヴェルタンはあっさりとクロノに設計中の艦の設計図を見せる。
　クロノは〝海〟の現役提督であり、彼の母親は本局の統括官・・・
　もしもクロノが自分たちの設計を推せば、彼がリンディにも推薦し、本局の統括官からの推しも貰えるかもしれないと言う打算があった。
「どうぞ、こちらです。とは言え、まだ完全な完成図ではありませんが・・・・」

「拝見します」
　ヴェルタンから渡された設計図には横図ながら防衛軍の宇宙艦船にそこはかとなく似た宇宙艦船の図が描かれていた。
（もう一つの地球の宇宙艦船を基にしているだけあってヤマトに何となく似ているな・・・）
（ヤマトか・・・）
　クロノの脳裏にはテレザート星付近でハリネズミの様にミサイルで武装した彗星帝国の艦に対して一歩もひるまずに進み、強力な戦略砲の一撃で敵を粉砕した時の姿が蘇る。
　ボラーへの武力制裁の時、ヤマトの様な艦が一隻でもいればボラーに勝つとまでは言わなくてもあそこまでの被害を出さなかったかもしれない。
「今はまさに絵に描いただけの艦ですが、我々はその艦を実現させたいと思っております」
「・・・」
「ハラオウン提督？」
「いつ頃になれば、この艦は絵から実体のある艦になる？」
「我々二人で設計をしているので、この調子ですと設計だけで数年、そこから造艦の許可が下り、建造を始めるので三年～四年かかります」
「そんなにか!?」
　ヤマトを模した艦が建造される日数を聞き、思わず声が裏返るクロノ。
「ええ。ただしそれは最短の時期であり、一番の難点は建造の許可が下りるか・・です」
「と言うと？」
「ボラー型の次世代の次元航行艦が結果を残せばその艦影を多少の改良をした艦を優先にするでしょう」
「た、確かに・・・」
「そうなれば、建造どころかこの艦はそのまま絵に描いた想像図だけで終わります」
「・・・分かった。この件についてこちらでも前向きに検討が出来るよ

うに取り計らう。艦政部も現場の人間の言葉なら少しは耳を傾けてくれるだろう」
「ありがとうございます」
　クロノはヴェルタンの目的とその先にある目標を聞いて、彼がもう一つの地球に対して〝海〟を扇動する様な人物ではない事が確認出来たので、その日は引き上げて行った。
　クロノが去った後もヴェルタンとヴェルニーは設計作業を進めていたが不意に、
「ハラオウン提督はどうやら憑りつかれたようだな」
「憑りつかれた？一体何に？」
「艦の魅力だよ」
「艦の魅力？」
「ああ。こう言った艦は人々を魅了する不思議な力がある。実際に我々もそうだろう？」
「まぁ、確かに・・・・」
「第９７管理外世界では船を女性に見立て扱っているらしい」
「船を女性に？」
「ああ。そういう意味では、まさに艦は人々を魅了する美魔女なのだろう」
「美魔女・ねぇ・・・・」
　ヴェルニーはヴェルタンが言う艦が美魔女と言う言葉を聞き、自分たちが設計している艦の設計図を見て、
「そうですね・此奴はまさしく人を魅了し、惑わせる美魔女だ・・・・」
　ボソッと呟きながら口元を緩めた。

　此処で視点は管理局からもう一つの地球へと変わる。
　管理局にて、〝海〟が次元航行艦の再建の目途が立ち、再建に進んでいる中、もう一つの地球でも太陽の核融合異常増進騒動からの復興へ進んでいる中、
　ヤマト、まほろばはドックにてあの過酷な航海の疲労を癒していた。

そんな中、今回の地球の救世主であるハイドロコスモジェン砲はヤマトから取り外され、科学技術局にて技術調査が行われることになった。
地球、ガルマン・ガミラスでも成功しなかった太陽制御を成し遂げたシャルバート星のハイドロコスモジェン砲はまさに地球にとってはパンドラの箱並みのお宝である。
「このハイドロコスモジェン砲の原理って一体どういうモノなんですか？」
ヤマトから取り外されたハイドロコスモジェン砲を触れながら良馬は真田に原理を訊ねる。
「うーむ、今の地球の科学力で解析できるか分からんが、いつかは解明できるはずだ」
真田でもハイドロコスモジェン砲の解析は難しいと言うが、地球に人類が居る限りハイドロコスモジェン砲の解析が出来る日がいつかは来ると言う。
「真田さんも大変ですね。ハイドロコスモジェン砲の解析や潜宙艦の解析もあるのでしょう？」
「あぁ～確かにやる事が山積みだな。大山の奴が居てくれれば多少は楽だったのだがな・・・・」
真田と並ぶ頭脳を持つ奇才、大山敏郎ことトチローはイスカンダルで同惑星の再生事業に親友の古代守と共に着手しており、地球には不在。
トチローならば真田とは違う観点からハイドロコスモジェン砲や潜宙艦の解析をしていたかもしれない。
「あの、一つ思ったんですけど・・・・」
「なんだ？」
「このハイドロコスモジェン砲も名前に『砲』がつくからには兵器にあたりますよね？」
「まぁ、そうなるな」
「で、思ったんですけど、あの時は太陽が核融合の異常増進が起きていたからこそ、中和されて太陽が元に戻りましたけど、通常状態の太陽

にハイドロコスモジェン砲を撃った場合、太陽が収縮して周辺の星は凍結してしまうのではないでしょうか？」
「そうだな。そうなるとハイドロコスモジェン砲も波動砲同様、人類が使用するには過ぎた武器なのかもしれないが、地球人類は保有してしまったからには絶対に間違った使い方をしてはならないと言う責任がある」
「となれば、ハイドロコスモジェン砲はこのまま解析されないか解析できない方がいいのかもしれませんね」
「・・・」
良馬の言葉に真田は神妙な面持ちだった。
身の丈に合わない力はいずれ、自分たちに牙を向けて自らを滅ぼすかもしれない可能性を孕んでいる。
地球人類は既に波動砲と言う強力な兵器を保有しているが、それに次いで太陽の騒動でハイドロコスモジェン砲を保有する事になった。
何時の日かハイドロコスモジェン砲の原理が解析される日がくるのかもしれないが、その時、地球人類がシャルバート星の人たちみたいな精神に成長していれば、ハイドロコスモジェン砲を間違った使い方をする事は無いだろう。
今の自分たちには未来の地球人類の成長に期待するしか出来なかった。

太陽の核融合異常増進騒動が終息し、地下都市に避難していた人類は地表へ戻り、復興をしつつ騒動の前の生活へ戻りつつあった。
それは宇宙戦士訓練校も同様の事で、騒動で遅れたカリキュラムを取り戻そうとしていた。
揚羽と土門の戦死の報を受けたティアナとうららであったが、二人の事は忘れないが、いつまでも引きづっていても二人は蘇らないで、ある程度は割り切って宇宙戦士になるための訓練と座学を送る日々に戻っていた。
そんな宇宙戦士訓練校の飛行科演習場にて、
一機の訓練機が物凄い速度で上昇したと思ったら次は急降下し、地

上に設置されているゲートの間を高速でくぐっていく。
「おぉぉー・・・・」
「すげぇ・・・・」
「揚羽並みの飛行センスがあるな」
練習機の動きを見ている他の訓練生たちも感嘆の声を上げる。
やがて練習機は駐機場へと降りて来た。
機体が完全に停止し、エンジンが切れた事を確認すると、コックピットのキャノピーが開き練習機からパイロットが降りてくる。
「お疲れ、大分上達したじゃない」
練習機のパイロットに声をかけてきたのはうららであり、その練習機のパイロットは・・・・
「ふぅ～でも大気圏と宇宙じゃあきっと勝手が違うから宇宙空間でも慣らしたいわ」
ヘルメットを取ると頬に魚の骨の様な傷が特徴的なオレンジ髪をした女性・・・ティアナだった。
「でも、意外だったな」
「ん？何が？」
「いや、ティアナって射撃が得意じゃない？だから砲術科に進むのは当然だとして、併用して飛行科のカリキュラムも受けるなんて」
「あぁ～・・空にはそれなりに憧れもあったのよ」
「へぇ～」
ティアナの死んだ兄、ティーダには空戦属性があったからこそ、彼は〝空〟に所属し、執務官を目指していたが、妹のティアナには残念ながら空戦属性は受け継がれなかった。
そのため管理局の士官学校の受験要項を満たしていなかったので、受験すらできなかった辛い経験がある。
しかし、この地球では大気圏・宇宙空間の両方で使用可能な戦闘機が存在しており、実力と本人の努力次第では空を飛ぶことが出来る。
元々バイクを趣味にしていたティアナにとってスピード感と空を飛ぶことの出来る戦闘機はまさにティアナには憧れる乗り物であり、ミッド時代と異なり折角戦闘機に乗ることが出来る絶好のチャンス

だったので、ティアナは砲術科以外に飛行科も受講していた。
次世代の宇宙戦士たちは着実に育っていた。
騒動の最中にガルマン・ガミラスからの使者として地球圏へやってきたデスラーの娘であるジュラたち特使団一行。
太陽の核融合異常増進騒動が終息したので、特使団一行と地球連邦政府代表との間でガルマン・ガミラスと地球との同盟締結についての会談が再開された。
公にされてはいないが、あの太陽の核融合異常増進騒動の原因がガルマン・ガミラスのプロトンミサイルの流れ弾である事を地球連邦政府のごく一部の者たちは知っていた。
それ以前にガミラスによる地球への遊星爆弾による戦争行為などガルマン・ガミラスとの同盟については大きな壁があった。
しかし、太陽の核融合異常増進騒動についてガルマン・ガミラスは地球の為に太陽制御を行った。
結果的に太陽制御は失敗に終わってしまったが、優秀な技術士官は命を懸けてまでこの作戦に挑み、地球を救おうとした行動に関しては敬意に値する。
それに今現在もガルマン・ガミラスと交戦しているボラー連邦・・・
第二の地球探査の最中で、地球はボラー連邦から完全に敵視されており、今後も太陽系外にある地球の植民惑星や太陽系へ侵攻して来る可能性もある。
外宇宙からの侵略に関してガルマン・ガミラスとの同盟は両国間で技術交換を行い軍の装備強化も夢ではない。
ガルマン・ガミラスでは既に次元潜航艦も運用しているので、地球の潜宙艦技術も進む。
地球の未来を考えるのであるならば、過去の遺恨を断ち切るべきなのだろうが、そう簡単に断ち切れるものではないのも事実であった。
会談に臨んでいる地球連邦政府の代表団も連邦市民による反ガミラス感情を何とか抑える必要があった。
ガルマン・ガミラスとの同盟締結に関してはまだ先になりそうだった。

ヤマトとまほろばがその船体をドックにて整備をしている中、乗員たちの一部の人事に異動辞令が下る。
まほろばの機関長の井上は年齢も考慮されてまほろばの機関長から宇宙戦士訓練校の機関科の教官職に異動し、通信長を務めていたギンガもまほろばから司令部付きオペレーターに異動となった。
「はぁ～・・・・」
「ん？どうしたの？ギンガ」
中嶋家にて、異動辞令が書かれた書類を見ながらギンガはため息をつく。
そこへ、地球におけるギンガの養母である加奈江が声をかける。
「あっ、お、義母さん・・・実は今日軍から辞令が来て・・・・」
ギンガは自分がまほろばから地上勤務に異動になった事を話す。
「なるほど・・・でも、これまでの航海でギンガは何度か危ない目にあったんでしょう？地上勤務になったのだからそうした危険な部署から安全な部署に移ったんだから、本来なら喜ぶべきなんじゃない？それに司令部勤務なんて女性軍人にしてみればエリートじゃない」
「私は別に昇進とか興味ないし・・・それに多少の危険があっても星の海を渡る艦に乗っている方が何だか生きがいを感じていたのに・・・・」
「でも、私としてはやっぱり、ギンガが無事な事の方が大事よ」
良馬しか知らないが、クイント・ナカジマからの転生者である加奈江としてはこうしてギンガと再会することが出来た奇跡に心の中で感謝したのだが、ギンガが危険な防衛軍の軍人となり、しかも宇宙艦隊勤務になってからはその身を案じていた。
再びギンガの養母となり、例え血の繋がらない養母であっても娘の心配をしない母親が居るだろうか？
本来ならば軍人になる事に対しても反対したかった。
しかし、ギンガが軍人を志した時、地球はガミラスの手によって滅亡寸前となっていた。
ミッド出身のギンガにとってはあの時、軍に志願しなくても良かった筈だ。

それにもかかわらず、ギンガは軍に志願して士官学校へと入って行った。
そんな娘の成長した姿に加奈江は心を打たれた。
それ故に自分はギンガを強く止めることが出来なかった。
他にもギンガとスバル、ゲンヤを残して死んでしまい、転生したこの世界で家庭を築いた事に対してギンガに負い目を感じていた事も要因の一つだった。
「それは分かっているけど・・・・」
「・・・・もしかして、好きな人と離れる事も関係しているのかしら？」
「そ、それは・・・・」
「あらあら、何だか顔が赤いわよ。もしかして図星だったのかな？」
「うぅ～・・・・」
「それで、彼氏とはどこまで行ったの？もうキスくらいは済ませたの？それともその先までやっちゃった？」
「・・・・」
加奈江の追撃にギンガは顔を真っ赤にして俯く。
とは言え、加奈江は既にギンガが良馬と関係を持っている事を察していた。
こうしてギンガに直接訊ねているのは加奈江がギンガをからかっているのだ。
「ほら、ほら、母さんに言って楽になっちゃいなさい」
「そ、それは秘密!!」
我慢できなくなったギンガは脱兎の如くその場から駆け出して中嶋家の自分の部屋へと駆け込んで行った。
「フフフ・ギンガもまだまだ初心ね～」
そんなギンガの様子を加奈江は微笑みながら呟いた。

地球が四度目の復興作業に追われつつも人々が元の生活を取り戻そうとしている中、軍に関しても今回の騒動から宇宙艦船の見直し案が検討された。
ヨーロッパ、アフリカの探査船団は相変わらず音信不通で未だに地

球へ帰還していない。
第二の地球探査において各国の戦艦喪失は軍としても建造・保有していた国に関しても威信が傷つけられた。
航続距離については戦艦群は問題なく、武装について協議された。
喪失した戦艦群の内、遭難確認が出来たのがアリゾナだけだった事もあるが、アリゾナは比較的に原型を留めていた事から戦艦は既に完成形に近いと言う結論が出ていた為、また管理局同様、すぐにでも就役させたいと言う軍の事情から戦艦クラスに関してはアリゾナ、ヤマトを基に設計されることになった。
そして大規模な見直し設計をされたのが、巡洋艦、駆逐艦クラスであった。
これまでの巡洋艦、駆逐艦クラスは主に太陽系内の防衛活動を主体にしていたが、今回の騒動と今後の宇宙開拓を見越して、航続距離の長距離化と武装の強化に着眼点を置き、巡洋艦、駆逐艦クラスもこれまで防衛軍が建造してきた巡洋艦、駆逐艦よりも船体を大型化する事となった。
更に駆逐艦クラスに関しては従来の雷撃主体の戦闘スタイルから大型化に伴い防空戦闘を意識する艦影となった。

ギンガが新たな辞令を受けてから数日後・・・
ギンガの姿は地球防衛軍本部庁舎内にあるレストランにあった。
ギンガの向かい側の席には良馬も居り、二人は少し早めの昼食を摂ろうとしていたのだ。
「そうか、ギンガは今後地上勤務か・・・」
「はい・・・出来れば私自身はまほろばで勤務したかったです」
「とは言え、軍の人事に関して口は出せないからな・・・まぁ、軍に所属している以上、こうした異動辞令は決して珍しい事ではないからな・・・」
良馬もギンガも今後、配置部署が異なる件について残念そうだ。
(でも、古代艦長と森さんも何度か異なる部署になっていた事もあったな・・・)

（それでも互いの気持ちが離れていない様子から二人の思う気持ちは強いんだろうな・・・）
（でも、俺とギンガの気持ちも二人には負けない筈だ・・・）
「義母さんは、女性軍人にとって本部勤務はエリートだと言っていましたけど、私は別に昇進とか興味ないし、地球で働くよりも星の海を航海していた方が色んな体験を出来て自分自身の経験にもなっていたんですけどね」
「でも、地球勤務になって加奈江さんたちはホッとした様子だったんじゃない？それに桜花ちゃんも長い間、ギンガが宇宙で働いていたから構ってもらえる時間も無かったわけだし地球勤務なら休日は家族で過ごせる時間も取れるでしょう？」
「まぁ、その点だけは宇宙勤務よりも地球勤務の方がマシですけど・・・」
家族と時間を共に出来る点が唯一の利点ではあったが、ギンガは宇宙勤務でなくなった本当の理由を恥ずかしくて話せなかった。
やがて注文した料理が二人のテーブルに届くと愚痴は止めて二人は料理に舌鼓を打つ。
「そう言えば、まほろばはドック明けになったらやっぱりアルファ星に戻るんですか？」
食事も一区切りがつき、デザートを待っている中、ギンガはまほろばについて良馬に訊ねて来た。
太陽の核融合異常増進騒動前にまほろばはケンタウロス座アルファ星の警備として駐留していた。
その最中、第二の地球探査に出るヤマトの護衛としてアルファ星を離れた。
騒動が沈静化した今、整備を終えたまほろばは再びアルファ星へ向かってもおかしくはない。
「まだ正式な辞令が来てはいないけど、恐らくね・・・ボラー連邦と言う星間国家が確認出来、その国家が地球に対して牙を向ける事がこの前の騒動で確認出来た。それにアルファ星は既に一度、ボラー連邦からの攻撃を受けているし、アルファ星は地球圏に関しての最前線だか

らね」
「そうですか・・・その・気をつけてください」
「ああ。ギンガも元気で・・・・」
食事が終わり別れる際、互いの空気は若干の哀愁があった。
良馬は引き続き、まほろばの艦長職であったが、ギンガは地球勤務・・・・
何光年も離れた遠距離恋愛となってしまったが二人の気持ちは古代と雪同様、どんなに離れても良馬とギンガの絆は固いモノとなっていた。

百八十二話　八雲　就役

太陽の核融合異常増進騒動から数年後・・・・
人類は再び生活の場を地上に戻し、本土を復興させることに成功した。
外交面においても紆余曲折があったが、地球はガルマン・ガミラスとの間に同盟を締結させた。
ガルマン・ガミラスとの同盟締結後に両星間国家は技術交換を行い、その結果地球はガルマン・ガミラスから次元潜航艦の技術を得て地球独自の次元潜航艦を就役させた他航空機技術についてもガルマン・ガミラスより学び、運用する機種を広める事となった。
一方、地球はガルマン・ガミラスに対してアンドロメダ級を基にした戦艦と空母のライセンスを一部譲渡し、ガルマン・ガミラスはそれらの艦艇を建造した。
ただし、ガルマン・ガミラス側はクーデターを警戒しているのか、ガルマン・ガミラス仕様のアンドロメダ級戦艦を五隻、空母型を五隻の計十隻のみの建造に留まった。
そんな中、防衛軍司令部勤務となっていたギンガはいつでも宇宙艦隊勤務に異動しても良いようにシミュレーションで勘を鈍らせないよう日々の鍛錬は欠かさなかったのは真面目な彼女らしいと言えば彼女らしい。
良馬の方は変わらずに、まほろばの艦長職でケンタウロス座のアルファ星と地球を行ったり来たりして、地球へ訪れた日はギンガと夜を共にして、遠距離恋愛状態ながらも逢瀬を重ねていた。
ただ、安全であり家族と常に会うことが出来る環境下ではあったが、ギンガは今の生活に物足りなさを感じていた。
しかし、そんなギンガの願いが叶ったのか、ギンガに昇進と共に新たな辞令が下った。
新たな配属先は宇宙艦隊勤務であったが、配属先はまほろばではなく、防衛軍が次世代の宇宙艦船として建造・完成したばかりの試作型

の巡洋艦で役職も通信長ではなく副長と言う艦のナンバー2にあたる役職であった。
「わ、私が副長!?」
当然この辞令を見たギンガは驚愕した。
養母である加奈江が言ったように司令部勤務は確かにエリート街道であったようだ。
人事部にこの辞令が間違いないかを確認した後、ギンガは宇宙艦隊勤務に復帰した後にいきなり艦のナンバー2になった件について理由を訊ねた。
軍としてもこれまでの戦役にて人材不足のままとなっており、やっと再建しかけた時に起こった太陽騒動におけるアメリカ、ヨーロッパ、アフリカの探査船団全滅の被害は軍にとっても手痛い被害であった。
ギンガは早速辞令に書かれた役職を承諾すると、数年の間に着慣れた司令部勤務の制服から宇宙艦船の為の新しい制服を受け取った。
そして今回から副長職と言う事で新しい制服と共に水色の軍帽も支給された。
宇宙戦士になりたての時、まほろば副長の新見を見て軍帽を忘れたかと思った頃を思い出し、微笑しつつ軍帽を眺めるギンガ。
まさかあの時はこうして軍帽を被る地位に昇り詰めるとは思ってもみなかった。
宇宙に出れば、まほろばにも・良馬とも出会える機会も増えるだろう。
心機一転の気持ちで新たな勤務地で励もうとするギンガであった。

ギンガが司令部勤務から再び宇宙艦隊勤務へ異動したのと時を同じくして、宇宙戦士訓練校も正規の卒業時期を迎えようとしていた。
「うららはどこか勤務希望とかある？」
「うーん・・・私はとりあえず宇宙艦隊勤務になれればいいかな」
卒業式前に訓練校卒業予定者は勤務先の希望書を訓練校側に提出することになっている。

訓練校の卒業予定者の中には軍に任官せずに一般企業に就職する者も居る。
（そう言えば、管理局の訓練校に入学したての時・・・）
ティアナの脳裏には管理局の訓練校に入りたての頃、訓練生たちの在学中の希望と卒業後の配属先の希望を調査する進路調査の書類を書いた時の事を思い出す。
（あの時、スバルは備考欄に『在学中はティアナ・ランスター訓練生とのコンビ継続を希望します』って書いていたわね）
（結局スバルとは訓練校～六課卒業までコンビを組むことになったけど・・・）
（うららはまさか、『任官先はティアナ・ランスターと同じ配属先を希望します』・・・なんて書いていないわよね？）
スバルと言う前例がある為、ティアナはうららが書いている配属先希望書にかつてスバルが書いたような内容を書いていないか気になった。
「・・・」
うららの背後に立ち気配を殺して、うららの配属先希望書を覗き見るティアナ。
しかし、うららはスバルと異なりスバルが書いたような事は書いていなかった。
「ん？なに？」
ホッと一息ついた際、うららに気配を読まれ気づかれた。
「あっ、いや、うららの希望が気になって・・・」
「いや、さっき言ったじゃん。宇宙艦隊勤務だって」
「ええ、そうね・・・」
「？」
ティアナの言動に首を傾げるうららであった。
「さて、私も書いちゃおう」
訓練校の卒業まで期間が迫っているので、ティアナも配属先希望書にペンを走らせた。
そして・・・

「諸君らは日々厳しい訓練をこなし、本日無事にこの宇宙戦士訓練校を卒業する。先の太陽騒動で繰り上げ卒業をした同期生の中には無念にもその任務の過程で命を落とした同期生も居る。諸君らが進む道は決して平坦で安全な道ではない。しかし、君たち宇宙戦士は地球人類を守る重要な防波堤であるのも事実である。諸君の今後の活躍と無事を祈る。卒業おめでとう!!」

講堂の壇上では訓練校の校長である榎本が卒業する訓練生たちに祝辞を述べ、訓練生を卒業した証である卒業証書授与が行われる。

卒業式が終わった後、卒業前に記載して提出した配属先希望書に則った訓練生たちの配属先が掲示板に表示された。

「うららはどこに配属されたの?」

「私は火星基地所属の護衛艦勤務で役職は砲術員ね。ティアナは?」

「えっと、私は・・・ん?えっ?なにこれ?」

ティアナは自分の配属先を見て困惑する。

彼女の配属先は・・・・

配属先　第四艦隊、第ゼロ戦隊所属巡洋艦、八雲

役職　戦術長

と、書かれていた。

「えっ?戦術長!?」

「戦術長?すごいじゃん!!ティアナ!!いきなり配属先で戦術長なんて!!もしかしたら、卒業生の中で一番の出世頭なんじゃない?」

「・・・・」

うららはティアナの配属先に称賛を送るが、肝心のティアナ本人は困惑していた。

(えっ?えっ?なんで?)

(士官学校じゃなくて訓練校の卒業生の生徒がいきなり艦のチーフ職なの?)

しかし、管理局の訓練校同様、ティアナは宇宙戦士訓練校でも優秀な成績を残しており、更に訓練校入校前に暗黒星団帝国の占領軍相手にパルチザン活動を行っていた事も今回の配属に多少なり影響しているのかもしれない。

「まぁ、今更配属先を変えてもらうのも難しいし、頑張りなさい」
「うらら・アンタ、他人事だと思って・・・・」
「まぁ、実際に他人事だし、私自身も役職と職場は違うけどティアナと同じ宇宙艦隊勤務なんだし、似たようなモノよ」
「うーん・それでも何か違う気が・・・・」
うららの返答に納得できず、モヤモヤした気持ちを抱きつつもティアナは宇宙戦士訓練校を卒業した。
それから数日後・・・・
ティアナの姿は指定された宇宙船ドックにあった。
「これが巡洋艦、八雲・・・・」
ドックには巡洋艦と言う艦種の割には大きな艦影の巡洋艦が一隻鎮座していた。
これまで防衛軍が就役させていた巡洋艦が軽巡洋艦とするなら今、自分の目の前に停泊している巡航艦はまさに重巡洋艦である。
ティアナが視線を下げながら巡航艦、八雲を見ているとその視線の先に見慣れた後ろ姿を見つける。
「ん?・あの後ろ姿はもしかして・・・・」
ティアナはその後ろ姿の人物に心当たりがあり、声をかけてみた。
ティアナが、八雲が停泊しているドックに来る少し前、ギンガも自身が副長を務める事になった巡洋艦が停泊しているドックへと向かった。
「これが次世代の巡航艦・・・・」
ギンガの目の前にはこれまでの防衛軍が採用していた巡洋艦とは大きさも艦影も異なる姿の巡洋艦が停泊していた。
(これまでの防衛軍の巡洋艦と全然形が違うし、大きい・・・・なんだかヤマトを意識しているような形ね・・・・)
(今日からこの艦の副長か・・・・)
(艦長は一体どんな人なんだろう?・)
ギンガが新たなる職場である巡洋艦を見上げていると、
「もしかしてギンガさん?・」
ギンガは後ろから声をかけられた。

「えっ？」
　彼女が振り向くとそこには・・・
「えっ!?ティアナ!?」
　ティアナの姿があり、ギンガは目を見開いて驚いた。
「ティアナこそ、どうして此処に!?」
「わ、私は先日訓練校を卒業してこの艦に配属になりまして・・・」
「あっ、そっか、そろそろ訓練校の卒業時期だったわね」
「はい。ギンガさんもこの艦に配属ですか？」
「ええ。この艦の副長をすることになったの・・・ティアナは？」
「私は戦術長をやる事になりました」
「戦術長？凄いじゃないティアナ」
「でも、訓練校を卒業したての私が務まるかちょっと不安です」
「大丈夫よ、ティアナなら。六課の時もセンターガードを務めていたんでしょう？戦術や作戦を立てる仕事だったし、ティアナは射撃も得意だから戦術長っていう役職はティアナにはピッタリじゃない？」
「そうでしょうか・・・六課の時と今の状況はプレッシャーの度合いが全然違いますよ」
　六課にスカウトされた時も隊長陣はすべてＳランク以上の魔導師で構成されたエリート部隊で、同僚も魔力保持量や特殊技能が自分よりも優れている者ばかりであり、そんなエリートばかりの部隊で自分はやって行けるのかと言う不安があった。
　ただ六課と今の状況の違いは、六課の時は勤務地がミッドチルダの地上であったが、今回の勤務先は真空の宇宙空間。
　自分の戦術・作戦ミスが自分の命は当然の事、ギンガを始めとする巡洋艦乗員全員の命を奪う事になりかねない。
「もしも、私の作戦指示のミスが原因になったら、私もギンガさんも死んでしまうと思うとプレッシャーが大きくて・・・」
　ティアナはギンガに自身の立場による不安を伝える。
「ティアナが抱いているその不安は分かるわ。私も初めての宇宙艦隊勤務になった時もちゃんと自分の仕事を熟せるか不安だったし、宇宙へ出れば一体どんな事が起きるのかと言う不安もあったわ。でも、艦

は一人では動かない・ティアナが立てた作戦だって艦長や私もちゃんと検討して判断するし、今防衛軍はどこかの星間国家と戦争をしていないし大丈夫よ」
「そ、そうでしょうか・・・・」
「少なくとも太陽系内は基地や他の友軍艦艇も居るから安全よ」
「・・・・」
一抹の不安を抱きつつもティアナはギンガと共に八雲へと乗艦した。
八雲へ乗艦した後、各部の長は会議室にて集まる。
会議室に集まったギンガ以外の乗員たちはティアナの顔を見てギョッとした。
その理由は他ならぬティアナの頬に走る傷のせいであった。
やがて、会議室に艦長服を着た老人が入って来た。

一同は椅子から立ち上がり敬礼する。
そして、老人の方も返礼し、椅子に着席すると一同も椅子に座る。
「諸君、儂がこの度八雲の艦長を拝命した瓢仁だ。本艦は新鋭艦とは言え次世代の試作艦であり、儂も艦長と言う立場ながらも民間会社から軍への途中入隊で、実務も主に空間輸送ばかりを熟してきた事で実戦経験が乏しい退役寸前の老いぼれだ」
まずは八雲艦長の瓢が皆に挨拶をする。
「こんな頼りない艦長であるが故に儂は諸君らの安全を完全に保証することは出来ない。そこで儂は諸君らに選択の機会を与える。退艦したい者は退艦を許可する。司令部には儂の方から伝え、退艦者にも新たな配属先を用意してもらえるよう頼んでおく」
瓢は周囲を見渡し退艦者が居ないかを確認する。
勿論この後で瓢は艦内放送を通じ、この場に居ない下士官、兵にも同じことを伝え、退艦者の希望を募るつもりだ。
『・・・・』
瓢の言葉に各部の長はどうするべきかと戸惑っている。

（確かにあの艦長が言うように何か頼りない艦長ね・・・この艦も試作艦って言うし・・・）
（ギンガさんはどうするんだろう？）
降りるか？それとも残るか？
その選択肢を瓢から言われティアナは迷い、ギンガの方をチラッと見る。
初めての宇宙艦隊勤務になり、いきなり戦術長と言う地位について不安になりつつもギンガと言う顔馴染みが居た事で多少はこの不安は和らいだ。
しかし、艦や艦長に役職だけでなく不安度が増したので、もしギンガが降りるなら自分も降りようかと思うもギンガは退艦しようという感じがしない。
（ギンガさん、もしかして腹を括っている!?）
（ギンガさんだって腹を括っているのに、此処で逃げたら女が廃るわよ、ティアナ!!）
（土門や揚羽たちだってそうだったじゃない）
（逃げたりしたらあの二人があの世で馬鹿笑いするわね）
ギンガが降りる気配がなく、うららたち同期も頑張っているのだから自分だけ逃げ出す訳にもいかなかった。
それに訓練校を自分よりも先に繰り上げ卒業をして宇宙へと旅立っていった土門と揚羽だって逃げずに職務を全うした。
彼らに恥じない宇宙戦士になろうと二人の訃報を聞いた時にうららと共に誓った事も事実なので、ティアナは退艦せず残る事を決めた。
一方のギンガは、
（副長と言う立場上、此処で逃げる訳にはいかないし、やっと宇宙艦隊勤務に復帰出来たんですもの、退艦するなんて選択肢は無いわね）
（それに宇宙に出れば、まほろばとも・・・良馬さんとも会えるかもしれないしね・・・）
と、自らの立場と宇宙に出ればまほろばと出会える可能性を考慮して退艦はしなかった。

ギンガ、ティアナを含め、試作艦とは言え新鋭艦のチーフ職と言う事で他のメンバーも退艦はせずに残る事を決めたようだ。
その後、瓢が艦内放送にて下士官、兵に対してギンガ、ティアナたちと同じ内容の放送をして退艦する者の退艦を許可した。
退艦者の有無の確認後、八雲はいよいよ出航準備となる。
「波動エンジン、異常なし。補助エンジンエネルギー充填８０％」
波動エンジンが起動し始め振動と唸りを上げ始める。
「か、艦長、出航準備整いました」
機関部、航海部からの報告を受け、ギンガが瓢に八雲の出航準備が整った事を報告する。
「微速前進０．５」
「微速前進０．５」
八雲はゆっくりとドックを離れる。
「出航水路へ進入」
「波動エンジン内へエネルギー注入」
「補助エンジン、第二戦速へ・・・・」
ドックから海へと出て波動エンジンのエネルギーが充填されるまでは海上走行をする八雲。
「波動エンジン内エネルギー上昇、エネルギー充填９０％」
「補助エンジン最大戦速へ・・・・」
「波動エンジン内エネルギー充填１００％」
「現在、補助エンジンの出力最大」
「エネルギー充填１２０％、フライホイール始動」
「波動エンジン点火十秒前・・・・九・・・・八・・・・七・・・・六・・・・五・・・・四・・・・三・・・・二・・・・一・・・・接続」
「点火」
「八雲、浮上」
八雲は後部の噴射口から勢いよく火を噴射し、艦首を持ち上げて海から浮上する。
「大気圏脱出・・・・」
「波動エンジン、大気圏外出力へ・・・・」

地球圏を脱した八雲。
「本艦はこれより太陽系内で乗員の熟練訓練を行いつつ、艦の性能試験も兼ねてケンタウロス座アルファ星へと向かう。この艦には宇宙戦士訓練校を卒業したばかりの乗員たちも含まれる。儂も実戦経験が少ないが彼らもまた少ない。宇宙での生活を一日でも早く慣れてもらいたい」
瓢が艦内放送にて、今後の八雲の針路と行動を八雲全乗員に伝える。
八雲の目的地がケンタウロス座アルファ星と知り、ギンガは・・・
(アルファ星だとまほろばが居る・・・)
(良馬さんとも会える・・・)
と、アルファ星に居る良馬と会える事に心の中で歓喜した。
ただ、新鋭艦ならではとも言うべき問題、初期不良による主砲や機関、通信機器による故障が起きる可能性もあり、乗員たちもそれらアクシデントに対する処置や八雲の装備を使いこなす必要がある。
幸いなことに太陽系内ならば万が一、故障を起こしても各惑星や衛星の基地、友軍艦艇がすく近くにあるので、救助に来てくれる。
しかし、第十一番惑星〜ケンタウロス座アルファ星までの宇宙空間には防衛軍の基地がないので、太陽系内に居る内に乗員の慣熟訓練と艦の性能と不備がないようにしなければならなかった。
「艦長、間もなく月軌道を離れます」
「よし、これより火星圏までのワープテストを行う。総員ワープ準備」
「了解、ワープ自動装置セット!!」
「機関チェック」
「メイン・エンジン、異常なし」
「エネルギー上昇中」
「スーパー・チャージャー・チェック」
機関室では、機関員が慌ただしく機関チェックを行う。
ワープの際、機関の調整が何よりも重要な作業である。
これを怠り、万が一にもワープ中に事故が起きれば亜空間から脱出できなくなる。

「従事しながら聞け、特に新人たち。言うまでも無くワープは時間の波の頂点から頂点へと飛んで、本来あら何光年もかかる距離を一気に航行する技術だ。訓練校で充分な訓練を積んだと思うが、実際のワープはシミュレーションとは違う。つまらぬミスは許されない。迅速に正確に行うのだ!!」
それ故に機関長は新人の機関部員に激を飛ばす。
「ワープ姿勢。各自、ベルト着用」
やがて、ワープ態勢が整う。
「カウント開始、十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、ゼロ・・・・ワープ!!」
八雲周辺の空間がグニャリと歪み、通常空間から亜空間へ放り込まれる巨大な圧迫感がドッと全身に襲って来た。
髪の毛が総毛立ち、全神経細胞がキリキリと苦痛の声を上げる。
苦痛がフッと消えたかと思うと再び全身を凄まじい圧力が来る。
(まほろば、ヤマト、そして訓練校の疑似体験システムで何度も体験したけど、やっぱりこの感覚に慣れるにはまだ時間がかかりそうね)
ワープアウトをした八雲の眼前には赤く輝く火星の姿がうつった。
「ワープアウト成功」
「現在位置、艦の損傷の有無の確認」
「了解」
航海班、技術班、機関部は瓢の指示に従い八雲の現在位置と艦の状態確認を行う。
「機関部、異常なし」
「船体に異常なし」
「現在位置、火星宙域ＰＴ―７７地点、誤差０．０２５、許容範囲内です」
「ふむ、これでまたひとつ自信がついただろう」
「しかし、艦長。あまり無茶はなりませんよ」
ギンガは瓢に乗員のメンタル面も考慮しなければならないと忠告する。
火星までのワープ試験を行った八雲は、引き続き航行しながらかつ

てヤマトが訓練校の繰り上げ卒業者たちの慣熟訓練を行った同じ宙域にて、八雲も慣熟訓練を行っていた。
慣熟訓練の中には八雲は軍艦なので当然、戦闘訓練も含まれていた。
「総員戦闘配置!!」
艦内には警報が鳴り響く。
砲塔には砲術員たちが配置につく。
ガミラス戦役後の防衛軍の宇宙艦船は人員不足から砲塔や機関部には乗員を乗せず、機械による自動管理方式を採用していた。
しかし、八雲以降の次世代の宇宙艦船では、ヤマト、まほろばの様に砲塔、機関部には乗員を配置する有人管理方式に変更されつつあった。
本来ならば、コスモタイガーを出して強襲した後に砲撃で仕留めるのが通常のセオリーなのだが、八雲の航海はあくまでも艦の性能と訓練校を卒業したばかりの新米乗員たちの熟練訓練と言う事で、敢えて今回の航海にコスモタイガー等の艦載機は搭載されていなかった。
「標的アステロイドベルトα—２３５６まで距離三百宇宙キロ、方位左舷十五度!!」
「主砲斉射!!」
「右舷、二十五度に敵艦接近!!距離五百宇宙キロ!!」
「二番砲塔旋回!!」
「敵艦、ミサイル発射!!」
「パルスレーザー砲射撃用意!!」
砲術員は標的用のアステロイドベルトや射出したダミーを標的に砲撃する。
また砲術員以外でも、
「左舷艦尾付近に命中弾!!」
「技術班!!応急修理に向かえ!!」
被弾を想定した応急修理訓練、
「重傷者はストレッチャーへ!!」
「軽傷者は応急手当てを!!」

生活班・医療班は負傷者の搬送と応急手当ての訓練を行った。
「ふぅ～疲れた・・・」
「まぁ、実戦がないだけ幾分ましだろう。先輩の中には卒業したばかりで雷王作戦にいきなり実戦投入された先輩もいるみたいだし」
「飯食ってさっさと寝ちまおう」
新人たちがヘトヘトになりながら食堂へと向かうと・・・
「な、なんだ!?あれ!」
「すげぇ・・・」
「あんなに沢山食えるのか!?」
食堂にあるテーブルの一角を見て、唖然とする乗員たち。
そのテーブルに居たのはギンガとティアナの二人で、ギンガの前には物凄い量の料理が置かれていた。
ティアナはギンガが沢山食べる事を知っていたので、ギンガの前に置かれている料理の量に関しては驚いてはいないが、ギンガと初めて同じ艦になった者は新人でなくとも驚いている。
そんな驚愕した乗員たちの視線に晒されてティアナは気まずいと言うか恥ずかしい思いがあるが、当のギンガ本人は何処吹く風と言った様子で料理を食べていた。
「まだ乗艦一日目だけど、大丈夫?やっていけそう?」
「え、ええ・訓練の時は、アドレナリンのせいか興奮していて不安なんか覚える余裕はありませんでした」
「私も同じ・数年くらいブランクがあって、いきなり副長なんて役職が務まるか最初は不安だったけど、ティアナの言う通り、訓練中はそんな事を気にしている余裕なんて無かったわね」
「ギンガさんは何度も戦闘に参加していますが、それでも慣れませんか?」
「慣れるところもあれば未だに慣れないところもあるわね。ティアナはワープとか大丈夫だった?」
「あぁ～確かにあれは中々慣れないですね」
月軌道で行ったワープを思い出してティアナは未だにワープに慣れていない事をギンガに伝える。

酔わなくなったので、多少ワープには耐性がついてきたのだろうが、あの衝撃を受けるのはやはり慣れないみたいだった。
八雲はこうした訓練を行いながらケンタウロス座アルファ星へと近づいていた。
この頃にはギンガが物凄く沢山の量を食べる人なのだと認識されていたので、食堂で彼女の食事に対して驚く者は居なくなっていた。
「そう言えばティアナは、アルファ星に来るのは初めてよね？」
「はい。ギンガさんはアルファ星に滞在した経験があるんですよね？」
「ええ。でも、地球勤務になってからはアルファ星の情報を調べてはいなかったけど、きっとこの数年の間に開拓も進んでいるんじゃないかしら？」
「上陸許可が下りれば良いんですけどね」
「うーん。一応、アルファ星が今回の目的地でもあるし、多分下りるんじゃないかしら？」
アルファ星到着後の予定は特に聞いていないので、アルファ星に上陸後は補給をした後、乗員の休養の後、地球へ戻るのではないかとこの時はそう思っていた。
ギンガが数年ぶりに見るアルファ星は最後に滞在していた時と比べ、地球の様に青い星に代わっていた。
地表には青い海が広がり、木々らしき緑も確認する事が出来た。
ギンガが最後に見たアルファ星はまだまだ未開拓地の惑星で、宇宙から見ても雲と赤茶けた大地が広がる惑星であったが、その姿が今は見違えるようだ。
八雲がケンタウロス座アルファ星へと接近すると、
「こちらは地球防衛軍・ケンタウロス座アルファ星駐屯基地、接近中の艦船に告ぐ、所属と艦名を申告せよ」
アルファ星にある防衛軍基地から八雲へ通信が入って来た。
「こちらは地球防衛軍第四艦隊所属、試作巡洋艦、八雲。地球からの試験航海の為、当惑星への着陸許可・入港許可を求む」
八雲の通信長がアルファ星へと返信を送る。

「・・・確認した。巡洋艦、八雲の入港を許可する。貴艦は第三ドックへ着陸せよ」
「了解。第三ドックへと着陸します」
アルファ星への着陸許可が下りると八雲は速度を絞りつつ降下していき、指定されたドックへと無事に着陸する。
(あっ、まほろば・・・)
八雲の艦橋からは別のドックに停泊しているまほろばの姿が確認できた。
(まほろばが居るってことは良馬さんが居る・・・)
まほろばの姿を見てギンガは良馬がアルファ星に居るのだと確信した。
ドックに着陸した後、主電源を八雲自体の機関から地上電源に切り替える。
そして瓢は艦内放送を入れる。
「諸君、慣れない艦、厳しい訓練をよく耐えた。諸君らの努力により本艦は無事にアルファ星へとたどり着くことが出来た。今後の予定は未定であるが、これまでの厳しい訓練を熟してきた諸君らには感謝している。故に諸君らには半舷上陸を許可する」
ギンガの予想通り乗員たちにはアルファ星の上陸許可が下りた。
瓢の艦内放送を聞くと、艦内の彼方此方で歓喜の叫びが響く。
「やった!!これで良馬さんに会いに行ける!!」
上陸に喜んだのはギンガも例外ではなく、艦から降りたら良馬に会いに行こうと決めた。
やがて、上陸側の乗員たちは制服から私服に着替え、上陸準備をしていく。
そんな中、
「ギンガさんはもうどこに行くのか決めてありますか?」
ティアナから声をかけられてギンガは、
「えっ?ああ、うん。一応ね・・・」
「そうですか・・・」
ギンガからの返答を聞き、ティアナは少し困った顔をする。

「ん？どうかしたの？」
「あっ、私この星には初めて来たので、どこに何があるのか分からなくて・・・・」
「なるほど・・・・そうだ、私はちょっとまほろばに顔を出そうと思っているの・・まほろばの人ならティアナも知っている人が居ると思うけど、どうかな？」
「そうですね。では、お願いします」
　ギンガの提案を聞いて納得したティアナはギンガと共にまほろばへと向かった。
「あっ、通信長!?久しぶりです!!」
　まほろばに行くとギンガの事を知っていたまほろばの乗員が声をかけて来た。
「もう、通信長じゃないよ」
「あっ、そうですね。でも、我々にとっては通信長って印象が強くて・・・・」
　ギンガとまほろばの乗員は互いに苦笑しつつも談笑する。
「さっき来た艦に乗っていたのって・・・・」
「私たちよ」
「やっぱり・・・・見た事の無い艦影の艦だったんで『何だ？』って思いましたよ」
「ぎ、ギンガさん、あの・・・・」
　まほろばの乗員との談笑に花を咲かせているギンガにティアナは恐る恐る声をかけた。
「あっ、そうだったわね。ごめん」
「ん？どうかなさいましたか？」
「実は今、半舷上陸で私たちは艦を降りたんですけど、こっちの子・・ティアナって言うんだけど彼女、この星に来たのが初めてでどこに何があるのか分からなくて・・・・」
「なるほど、確かにこの星は少し前に比べると随分と開拓されましたからね。ガイドをするならやはり女性の方がいいですよね？」
「は、はい。そうしてもらえるとありがたいです」

ティアナとしても初めて来た星のガイドを務めるのであるならば、なるべく異性ではなく同性の方が安心できる。
誰をティアナのガイドにつけようか迷っていると、
「ん？どうかしましたか？」
そこにリニスがやって来た。
「あっ、医務長」
「リニスさん」
「あら？ギンガさん。久しぶりね」
「はい」
「それで、どうしたの？」
「実は・・・・」
まほろばの乗員がリニスに事情を話す。
「なるほど・・では、ティアナのガイドは私が務めましょう」
ティアナのガイドにリニスが名乗りを上げた。
「えっ？でも、良いんですか？」
「大丈夫よ。まほろばはまだ出航予定はないから・・ただその前に艦長へ事情を話す必要があるけどね。ギンガさんも艦長に用があるのでしょう？」
どうやらリニスにはお見通しだったみたいだ。
「は、はい」
リニスは内線で良馬にギンガが来たこと、そして自分はティアナのガイドで外に出る事を伝えた。
「えっ？ギンガが来た!?」
「はい。どうやら先ほど来た巡洋艦に乗艦していたみたいです」
「そうか・・・・」
（ギンガ、地球勤務から艦隊勤務に復帰していたのか・・・・）
地球勤務のギンガが輸送船でわざわざアルファ星に来るとは思えなかったので、彼女が此処に来たのはやはりギンガが艦隊勤務に復帰したからこそ、アルファ星に来たのだろうと判断した。
「他にもランスターさんも一緒みたいで、私は彼女を案内しますね。ランスターさん、アルファ星に来たのは今回が初めてみたいですか

ら」
「あ、ああ。分かった」
リニスに外出許可を出し、良馬はギンガがアルファ星に・・まほろばに来ているとの事なので、急いでギンガを出迎えに行く。
良馬がギンガの下に来ると既にリニスとティアナは既に出かけていた。
「ぎ、ギンガ・久しぶり」
「は、はい」
まほろばが地球に来た際は会っていたのだが、こうして再会するとなんだか互いに気まずくなってしまう。
その後、二人はまほろばの艦長室にてお茶と茶菓子を前に互いの身の上話をした。
艦長と言えど、そう簡単に艦を離れる事は難しかったからだ。
「それでギンガはやっぱり地球勤務から宇宙艦隊勤務に復帰したの？」
「は、はい。あそこに停泊している巡洋艦の副長になりました」
「副長!?それは凄い出世だな」
地球勤務から宇宙艦隊勤務に復帰したが役職が通信長から副長への昇進なのだから大した出世だ。
「それにしてもあの艦が巡洋艦か・・見慣れない艦影だし、大きさもこれまでの巡洋艦よりもデカいな」
「なんでも防衛軍が建造したばかりの次世代型の艦みたいです」
「次世代の艦か・・・」
管理局で次世代の次元航行艦の建造が進められている様に防衛軍もイスカンダルから波動エンジンの恩恵を受け、Ｍ―２１８８１式雪風型宇宙突撃駆逐艦から０１式宇宙突撃駆逐艦、巡洋艦もＭ―２１７０１式宇宙巡洋艦から０１式宇宙巡洋艦、戦艦はＭ―２１７４１式宇宙戦艦からドレッドノート級、アンドロメダ級と進化していった。
地球人類が存在する限りこの先、人類の技術は停滞する事なく、進化し続ける。
ギンガたちが乗艦してきた巡洋艦もそうした進化の過程で建造さ

れた巡洋艦なのだろう。
　その後も良馬はアルファ星での生活、ギンガは地球での生活についての身の上話をしていると時間はあっという間に過ぎてしまった。
「あっ、もうこんな時間か・・・・」
「ホント、時間が経つのが早かったですね。どおりでお腹がすくわけです」
　互いに時計を見て時の流れの早さに驚く。
「あっ、良馬さん。今夜時間は取れますか？」
「今夜？まぁ、何とか都合をつければ」
「じゃあ・・・今夜・二人で出かけましょう？」
「あ、ああ・そうだな」
『何処へ？』なんて質問はあまりにも野暮である。
「それで昼食はどうする？ウチの食堂で食べて行く？」
「はい。久しぶりにディアーチェさんの料理を食べたいですから」
「わかった」
　二人は少々遅めのランチを食べにまほろばの食堂へと向かった。
「おっ？ギンガではないか!!久しいな!!」
　食堂に入るとディアーチェがギンガに気づき声をかけてきた。
「はい。お久しぶりです、ディアーチェさん」
「ギンガが此処に居ると言う事は宇宙艦隊勤務に復帰したのか？」
「はい。先日・・・」
「そうか。所属はどこだ？また此処か？」
「いえ、別の艦です。ちょうど航海の目的地がアルファ星で、艦長から半舷上陸が許可されたので、来ました」
「それで、此処に来たと言う事は食事か？」
「は、はい。久しぶりにディアーチェさんの料理を食べたくて」
「ハハ、嬉しい事を言うではないか。それで、何を食す？」
「とりあえずまずは日替わりランチを下さい」
　ギンガの言葉に気をよくしたディアーチェは腕によりをかけて料理をふるまった。
　ギンガがまほろばを降りて二年・・・・

乗員の中にはギンガの事を知らない乗員も当然いた訳であり、それらの乗員たちは食堂に来た際、唖然とする。
何しろ見慣れない女性が物凄い量の料理を食べているのだから・・・・
ティアナがこの場に居たらきっと八雲における航海初日の食堂の光景とデジャヴを覚えただろう。
「ふぅ～・・・・ごちそうさまでした」
「相変わらず、食べるな・・・・」
実際に料理を提供したディアーチェでも久しぶりに見たギンガの食欲には圧倒される。
「それじゃあ、良馬さん・・・・夜に・・・・」
「あ、ああ・・・・」
ギンガからの誘いに対して良馬は緊張した面持ちで頷いた。
八雲の外出許可の門限は二十四時間あったので、ギンガはこうして良馬を夜に誘ったのだ。
ティアナはそのような相手が居なかったので、夜間には八雲に戻った。
「あれ？ギンガさん、戻って来てないんだ・・・・」
ティアナはギンガが戻って来ていない事に首を傾げるが、
「あっ、まほろばが居るってことは・・・・」
瞬時にギンガが戻ってこない事を察した。
翌朝、ギンガは門限前にはちゃんと戻って来たが、その顔色は物凄くツヤツヤとしていた事をティアナは見逃さなかった・・・・

百八十三話　バース星へ・・・フェイトの士官学校生活

防衛軍の次世代型宇宙艦船として建造された試験巡洋艦、八雲は地球からケンタウロス座・アルファ星までの空間を乗員たちの熟練訓練を行いながら無事にアルファ星へと到着した。
その八雲には数年前の人事異動にてまほろばを降り、地球勤務だったギンガが副長に・・・
宇宙戦士訓練校を卒業したティアナが戦術長として着任した。
アルファ星に到着したばかりの八雲の乗員たちに半舷上陸の許可が下りると乗員たちは順次アルファ星の大地へと足を踏みしめた。
半舷上陸二日目、八雲の艦長である瓢はアルファ星基地の司令部から呼び出された。
「瓢仁、出頭いたしました」
アルファ星の基地司令部に入室して、敬礼し出頭に応じた事を口にする。
「待っていたよ、瓢艦長。実は君たち八雲にある任務を託したい」
「任務・・ですか？」
八雲は目的地であるアルファ星に到着後、てっきり地球へ帰還するのかと思っていた。
それは艦長である瓢も例外ではなかった。
「それは一体どんな任務なのでしょうか？」
瓢はまず、アルファ星の司令部が自分たちにどんな任務を与えようとしているのか？
その任務内容を訊ねた。
「うむ・・瓢艦長はバジウド星系の現状は知っているかな？」
「バジウド星系・・・此処から近くにある恒星系で、確か少し前まではボラー連邦系の星間国家ばかりでしたね」
「ああ・最も今はガルマン・ガミラスが手中に収めているが、完全に・・というわけではないようだ」
「まだ親ボラー勢力が潜んでいると？」

「バジウド星系の第四惑星、バースからの報告ではどうやらそうみたいだ」
バジウド星系第四惑星のバース星は、元々は独立していた星間国家であったが、十数年前に周辺の星間国家からの侵略の危機に遭っており、そこをボラー連邦が保護国と言う名の支配を受ける事になった。
しかし、ガルマン星がデスラーたちガミラスの生き残りとボラーからの解放を目的とするレジスタンスたちの手により解放され、銀河系中心部をガルマン・ガミラスが手中に収めるとバジウド星系はボラー本国からも孤立した点となり、ガルマン・ガミラスの侵攻を受け、次々と降伏していきバース星も宇宙艦隊が壊滅して、ガルマン・ガミラスに降伏した。
降伏後、ガルマン・ガミラスはバース星の自治は認めるも当初は総督府を置き、更にバース星にガルマン・ガミラスの駐屯艦隊の基地も建設された。
ガルマン・ガミラスと同盟を締結させた地球もガルマン・ガミラス本星への中継地としてバース星に防衛軍の駐屯基地を建設し、空間騎兵隊が第十一番惑星基地の様に基地と駐在大使の護衛の為の守備にあたり、宇宙艦隊に関しても無人艦隊を中心にホワイト艦隊の一個艦隊が駐屯していた。
だが、バジウド星系では未だにガルマン・ガミラスに反発する勢力はある様で、ガルマン・ガミラスとしてもバジウド星系の治安維持に関しては東部方面軍でも頭を悩ませている。
「そんな中ですまないが、バース星に向けて急遽補給船を向かわせる事になった」
「急遽と言う事は本来の輸送物資ではないと言う事ですね？」
「うむ、どうもバース星にてインフルエンザと似た症状の疫病が流行りだした。幸いなことにこの流行り病のワクチンはインフルエンザのワクチンでも効力がある事が証明された。よって今回、補給船に乗せるのはその病気に効くワクチンとその製造機だ」
「しかし、本艦は試作艦であり、乗員たちもまだ完全に八雲を使いこなしているかは疑問なところがあります。バース星への物資輸送が急

務でしたら本艦よりも、まほろばの方がこの任務には適しているのではないでしょうか？」
「まほろばは昨日、地球へオスニウム鉱石を積んだ輸送船護衛の為に地球へ向かっている。航続距離や武装の観点からこの任務を託せるのは貴官たちだけなのだ」
「それは分かりました。ですが、護衛に就く艦は本艦だけなのでしょうか？」
「うむ、まほろばは地球へ行ってしまったし、アルファ星配備の艦は小中型の艦艇ばかりで、航続距離と防御面に関してもやや不安な所がある。だが、情報面に関してはアルファ星、バース星でしっかりと貴官たちのバックアップを行う」
「・・・分かりました。最善を尽くします」
　渋々ながらも瓢はバース星への輸送船護衛の任務を承諾した。
　艦の性能や乗員たちの技量に関して瓢としては若干の不安があるものの今回の任務にはバース星に居る大勢の人々の健康・ひいては命に係わる事なので、瓢としては受けざるを得なかった。
　八雲に戻った瓢は直ぐに各部の長を会議室に集め、司令部からの任務についての話し合いを行った。
「諸君、突然であるが先ほどこの基地の司令部へと呼ばれ、本艦へある任務を命じて来た」
「ある任務？」
「それはどういった任務なのでしょう？」
　補給をしたら地球へ帰還すると思っていたので、瓢から新たな任務と言われ、艦の幹部たちは顔をしかめたり、首を傾げたりしている。
「それはバジウド星系第四惑星のバース星へ物資を届ける輸送船の護衛任務だ」
「護衛任務・・・」
「しかも行き先はバース星か・・・」
「あそこ極寒の惑星なんだよな」
　この中でバース星へ行ったことがあるのはギンガだけの様で、他の幹部たちはバース星へ行くことに対して若干の不安がある様だ。

「艦長、今回バース星へ輸送する物資とは一体何を輸送するんですか？」
ギンガが瓢にバース星へ輸送する物資が一体何なのかを訊ねる。
「ふむ、どうやらバース星にてインフルエンザに似た流行り病が流行っているようだ。今回輸送する物資はそのワクチンとワクチンを製造するための医療機器だ。現在、バース星には元々バース星に住んでいる住人の他にガルマン・ガミラス、そして防衛軍・地球連邦政府の大使も駐在している。それ故に今回バース星に輸送する物資は極めて重要なモノだ」
バース星への輸送物資について瓢から説明が入ると今回輸送する物資の重要性が窺えた。
「本艦以外に護衛につく艦は居るのでしょうか？」
ティアナが瓢に八雲以外に輸送船の護衛に就く艦が居るのかを訊ねる。
「いや、本艦だけだ」
「八雲だけ・・・・」
単艦ではなく、護衛対象が居り、しかもその護衛をするのが八雲一隻だけ・・・・
「しかし、情報に関してはアルファ星、そしてバース星からのバックアップは保証してくれるとの事だ」
ワクチンとワクチンを製造する医療機器を輸送する事からアルファ星とバース星からは情報が八雲に送られ、航路に関する情報をバックアップして、更にはバジウド星系をパトロールしているガルマン・ガミラスのパトロール隊も協力する旨が伝えられていた。
「まぁ、ガルマン・ガミラスのパトロール隊も協力してくれるなら・・・・」
「実質単艦ではないな」
ガルマン・ガミラスのパトロール隊も協力してくれると言う事で安堵感が漂うが、
（ガルマン・ガミラスのパトロール隊も協力してくれると言うけど、そのパトロール隊が一緒に行動する訳じゃないでしょう）

（それに万が一の事があって周辺のパトロール隊に遭難信号を出しても直ぐに来てくれるとは限らない・・・パトロール隊の到着まで時間はかかる）
　ギンガの脳裏にはあの第二の地球探査の際、ボラー相手に奮戦虚しく遭難したアリゾナの残骸が過った。
（それなら、どこかの宙域でガルマン・ガミラスのパトロール隊と合流した方が良いんじゃないかしら？）
　ギンガはガルマン・ガミラスの協力に関してもう少し具体的な協力を求めるべきであると思った。
「あの一つよろしいでしょうか？」
「なんだね？」
「ガルマン・ガミラスの協力が得られると言うのであるなら、どこかの宙域でガルマン・ガミラスのパトロール隊と合流した方が確実ではないでしょうか？」
「ん？」
「万が一と言う事があります。それなら、本艦だけの単艦護衛ではなく、ガルマン・ガミラスのパトロール隊と合流し、そのままバース星へ向かうのはどうでしょう？もし、海賊ないし親ボラー派の艦船に襲撃された際、遭難信号を出しても距離によりますが、すぐに到着する保証はありませんし・・・」
　ギンガは自身が抱いた疑問と代案を瓢に提案する。
「ふむ、副長の言う事も最もだな・・・急ぎアルファ星の司令部からガルマン・ガミラス側へ打診してもらおう」
　瓢は急ぎアルファ星の司令部にギンガが提案した内容をガルマン・ガミラス東部方面軍へと打診してもらう。
　しばらくした後、ガルマン・ガミラス東部方面からの返答が来た。
　だが、その内容は八雲の乗員たちが期待していた内容とは異なっていた。
　ガルマン・ガミラス東部方面からの返答は、
『アルファ星～バース星への航路は十分に安全が確保されており、地球の輸送部隊へ護衛に割くほどの余剰戦力は当方には存在せず』

であった。
（その自信は一体何処からくるのよ!?）
ガルマン・ガミラス東部方面からの返答内容を聞きギンガは心の中で突っ込んだ。
ギンガ同様、ガルマン・ガミラス東部方面からの返答に顔をしかめる八雲の幹部たち。
とは言え、一度受けてしまった任務を今更放棄する訳にはいかない。
不安はありつつも八雲はバース星へ向け、輸送船の護衛として出航する事になった。
幸いなことに今回の護衛対象である輸送船はドレッドノート級戦艦を輸送船に改造したタイプの輸送船なので、通常の輸送船よりは耐久性と航続距離がある。
八雲が輸送船護衛の任務に就くと言う事でアルファ星の基地から八雲に補給が行われた。
明日には八雲の乗員たちの半舷上陸も終わる。
そして、今回八雲の護衛対象である輸送船、おおすみ　にも補給と輸送物資が積み込まれる。
八雲、おおすみで補給作業が行われている中、八雲の艦橋では・・・
「ギンガさん」
「ん？何？ティアナ」
ティアナがギンガに声をかける。
「今回の任務についてどう思いますか？」
「うーん、ガルマン・ガミラスからの支援に関しては主に情報のみの支援で艦隊による支援はあまり期待できないわね」
「ですよね」
「それに情報だって、『航路上の安全は確保されています』　なんて、根拠のない情報だけじゃあ鵜呑みには出来ないわ」
「航路上に親ボラー派の勢力が現れない事を祈るしかありませんね」
「こればかりは運だからね・・・でも、今回輸送する物資が物資なだけにどうしてもバース星に届けなければならないけど・・・」

ギンガは顎に手を当てて考え込む。
「何か懸念が？」
「さっきの会議で、バース星で流行り病が流行している事は分かった・・・でも、その情報がバジウド星系で暴れている反ガルマン勢力も知っていたら・・・そして、今回輸送する物資がその病気に効くワクチンとワクチンを作る為の機械であると言う情報が何処からか洩れたら・・・」
「・・・まっさきに襲い掛かってきますね」
「ええ・・・でも、流石に考え過ぎかな？」
「そう・だと良いんですけど・・・でも、アルファ星からバース星への通信が傍受されていないとは言い切れませんからね・・・」
「ガルマン・ガミラスでもパトロールや治安維持だけじゃなくてワクチンの輸送をして欲しいものだわ」
「そうですよね。元々ガルマン・ガミラスが半ば統治している星なんですからね」
ワクチン輸送をする件についてギンガとティアナは懸念の他にガルマン・ガミラスへの対応について愚痴った。
「そう言えば、ティアナは昨日の半舷上陸、どこに行ったの？」
ギンガは話題を変えて、昨日ティアナがリニスの案内の下、初めてのアルファ星の街の何処を見に行ったのかを訊ねた。
「昨日は、リニスさんと一緒にショッピングモールに行って買い物をして、お昼はそこのフードコートで食べたんですけど、夕飯はリニスさんお勧めのお店で夕飯を食べました」
ティアナはギンガに昨日の出来事を話す。
「ギンガさんの方は何をしていたんですか？」
ティアナはギンガにアルファ星で何をしていたのかを反射的に訊ねてしまう。
（あっ!?やばっ!!）
しかし、訊ねた後にティアナはこの質問をしたことを後悔する。
「えっ？私？・えっと、私はあの後、良馬さんとお茶会をして互いにあったことをお話して・・・そしたら何か物凄く時間が過ぎるのが早くて

ね、夕飯はまほろばでディアーチェさんのご飯を食べて、その後は・・・って、もう!!ティアナ、何を言わせるのよ!!」
と、顔を若干赤らめてティアナから顔を逸らして照れ隠しをしながらティアナの背中をバンバンと叩く。
「イタっ!!イタっ!!ちょ、ちょっとギンガさん!!痛い!!痛いです!!」
管理局の訓練校から機動六課卒業までギンガと同じ戦闘機人であるスバルとコンビを組んでいたためかギンガから背中をバンバン叩かれてもそこまで大きなダメージを受けていないティアナ。
だが、それでも戦闘機人からの強打は痛い。
「あっ、ごめん」
ティアナの痛がる声を聞きギンガはティアナを叩くのを止める。
「それで、まほろばでディアーチェさんが作った食事を食べた後、月村艦長と一体ナニをしていたんですか?帰りも遅かったみたいですし・・・」
もうこうなれば自棄なのか?
それともギンガから叩かれたから腹いせなのか?
ティアナはギンガの恥ずかしい一夜を暴露させてやろうと思い此処は敢えてギンガに夜、良馬との間で何があったのかを訊ねた。
「そ、それは・・・い、言える訳ないでしょう!!」
「つまり、月村艦長とギンガさんは言えないような事をしていたんですね?」
「うぅ〜・・・」
ジト目でギンガを見つめると彼女は顔を真っ赤にして俯いてしまう。
「そ、それより、ティアナの方はどうなの?」
「ん?どうとは?」
(急に話題を逸らしてきたわね・・・)
ギンガの態度にティアナはギンガの意図が簡単に読めた。
「ティアナもこっちの世界に残って随分と経つじゃない?だから、ティアナにもいい人が出来たのかな?って、思って」
ギンガはティアナに彼女の異性関係を訊ねてきた。

（チっ、リア充め!!）
ギンガの問いにティアナは心の中で毒づく。
「『こっちの世界に来て』って言いますけど、この世界に来てから直ぐに暗黒星団帝国に地球が占領されて、その後は宇宙戦士訓練校に入学したので、特に出会いらしい出会いはありませんよ。訓練校の同期は異性と言うよりはライバルでありましたし・・・」
一応、宇宙戦士訓練校にて土門や揚羽とは出会ったが、彼らは異性と言うよりは学友・ライバルとして見ていたし、何より彼らはもうこの世にいない。
パルチザン活動の時に出会った古野間と北野は異性と言うより、上官と自分に戦闘技術を教えてくれた先生・戦友と言う認識であるし、向こうも自分の様な小娘を異性として認識しているとは思えなかった。
「えっ?そうなの・・・その・・・ごめんなさい」
「いや、謝らないでくださいよ!!ギンガさん!!何だか余計に惨めになるじゃないですか!?」
羞恥と彼氏が居るギンガへの嫉妬からティアナは思わず声を上げた。
翌日、八雲の乗員たちの半舷上陸が終わり、物資の積み込みも終わった。
瓢は昨日半舷上陸の乗員たちが居た事から八雲の今後の予定を艦内放送にて通達する。
「諸君、艦長の瓢だ。先日、アルファ星司令部より本艦にある任務が通達された」
昨日、半舷上陸をしていた乗員たちは突然この後に任務があると言う事にざわつく。
「その任務とはバース星へ向かう輸送船の護衛任務である。そして輸送される物資は、現在バース星で流行している病のワクチンとワクチンを製造する為の医療機器である。この任務にはバース星に居る大勢の人の命がかかっている。なお、向かう先のバジウド星系では今なお政権が安定しておらず、航行中に反政府組織からの攻撃もありえ

る」
　戦闘が起きるかもしれない事に乗員たちの間に動揺と緊張が生じる。
「諸君たちにはこれまでの訓練の成果をこの任務で存分に発揮してもらいたい。発進はアルファ星標準時、１２：４５時である。以上だ」
　瓢が艦内放送を終え艦橋を見渡すと、艦橋員たちは皆、緊張した面持ちをしていたが、覚悟は出来ている様子であった。
　そして、出航時間となり八雲とおおすみはバース星に向けて発進した。

　ここで時間をギンガがまだ地球勤務中の頃まで巻き戻し、視点を地球からミッドチルダへと移す・・・

　クロノは以前よりリンディに対してボラーへの武力制裁失敗の教訓から管理局でも艦隊行動の重要性を説いており、士官学校でも艦隊シミュレーションや艦隊行動に必要な戦術等を学ばせる必要性を説いた。
　武力制裁での戦場経験者であるクロノからの説得にリンディも納得し、フェイトとチンクが入校してから直ぐに士官学校では艦隊行動についてのカリキュラムが新たに新設され、設備でも艦隊戦を行うためのシミュレーション装置も設置された。
　そして、ボラーへの武力制裁失敗後に生き残った次元航行艦の提督や艦長が士官学校に臨時講師として赴き、艦隊戦の重要性を講義や演説として士官学校に通う生徒たちに説いた。
　そんな某日・・・
　この日は士官学校にて初めての艦隊戦シミュレーションバトルがカリキュラムで行われようとしていた。
　シミュレーションバトルとは言え互いに使用されるのは管理局がこれまで使用していた次元航行艦であったが、常に情報が更新されるたびに士官学校のシミュレーション装置内にあるデータもアップデートされていた。

「次の対戦は・・・この学年の主席だな・・・」
「スー候補生か・・・」
「親父さんが管理局の高官で入学当初は親の七光りなんて言われていたけど・・・」
「七光りもあり、実力もある・ってか？」
「ああ」
「それで、そんな主席様の餌食になるのは一体誰だ？」
「スー候補生の相手は・・・ハラオウン候補生だ」
「ああ、あの人ね。でも、ハラオウン候補生も主席・までにはいかないけど、成績は上位じゃないか？」
「そうそう、それに魔力レベル、実績、そして家柄もまさにスー候補生よりも上だな」
「おまけに容姿も体付きも女としては上位だな」
「確かに・・・あぁ～あんな美人とお近づきになりてぇ～」
「無理、無理、いくら士官学校に入れたからって俺たちみたいな平凡家庭の人間には高嶺の花さ」
「だよな～」
「まぁ潔く諦めなって」
「でも、それを差し引いてもこの試合はこりゃあ見ものだぜ・・・士官学校の主席と実戦経験のあるエリート・・・」
「だが、あの人の実績はあくまでも捜査とかだろう？捜査で実績があってもソレが艦隊戦のシミュレーションに直結するとは言い切れないんじゃないか？」
「ま、まあな・・・」
　観戦している候補生たちは一部に下世話な内容も含まれてはいたが、フェイトと学年主席の候補生とのシミュレーションバトルにてどちらが勝つかを話していた。
　どちらが勝ってもそれはそれで自分たちの今後の戦術論の糧になる。
　候補生たちは両者の戦いを見逃さないよう、モニターをジッと見つめた。

『黒陣、メアリー・スー候補生、白陣、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン候補生。両者共に同数の次元航行艦・次元巡航艦が主力として配備されており、艦隊後方には補給・工作船部隊が居り、損傷した艦艇、エネルギー不足となった艦艇はこれらの後方支援部隊と接触すればダメージとエネルギーが回復し、再び戦闘に参加することが出来る。それらの艦をどういった陣形で動かすか・君たちの指揮官としての技能を十分この演習で発揮してもらいたい』

「「はい」」

『なお、勝敗に関しては全滅、もしくは降伏・撤退するかだ。では、演習開始!!』

教官から演習開始と言われ、フェイトとメアリーの艦隊シミュレーション演習が始まった。

フェイトは現状確認の為、自身の戦力の確認をする。

(戦力は・・・・次元航行艦と巡航艦・・・・そして、工作艦と補給部隊か・・・・)

(もし、ここに防衛軍が使っている艦載機があれば・・・・)

(まずは索敵攻撃の為の艦載機隊を出す。艦隊同士の撃ち合いはその後・・・・)

(艦隊数が同じなら、当然相手も同じ数の艦載機を有している筈・・・・)

(幸いこの周辺には有人世界やある程度の大きさの小惑星は確認できないから、敵基地の存在は無いと見て良いわね・・・・)

(とすると、敵基地からの敵機の襲来は無い・・・・)

(・・・・って、何を考えているのよ!?大事な演習中に・・・・)

(そもそも無いもの強請りをしたってどうしようもないじゃない!!)

(現状、管理局じゃあ艦載機の使用構想何て机上の空論・・・・)

(そんな机上の空論を建前にした作戦何て実行不能ね)

(相手は学年主席のメアリー・・・・油断は出来ないわ)

もう一つの地球において防衛軍の戦いを見て来たフェイトとしては艦隊戦に感化されていたので、艦載機の運用を考えてしまった。

しかし例え今の管理局にとって机上の空論であっても実戦を目の当たりにしたフェイトの方が対戦相手よりも有利だった。

そんなフェイトに対して、対戦相手のメアリーはと言うと・・・・
（相手はあのフェイト・テスタロッサ・ハラオウン・・・・）
（ふっ、相手にとって不足無しね）
（今更になって学歴コンプレックスでも抱いて士官学校に編入してきたみたいだけど、畑違いな現場ばかりでエリートを気取っているおばさんの鼻っ面をへし折ってあげるわ!!）
メアリーはフェイトに対する印象を今の年齢になって学歴コンプレックスを抱いて士官学校に入り直してきたと思い込んでいた。
更にフェイトの方が数年、設定年齢が上なだけでおばさん扱いしていたりもしている。
メアリーとしてもフェイトの実績、家柄、そして容姿に嫉妬していた面があったのかもしれない。
フェイトが士官学校に入校してからも男子候補生はフェイトに対して様々な視線を向けていた。
メアリー自身も自分の容姿にはそれなりの自信はあった。
それにもかかわらず殆どの男子候補生は自分ではなく、フェイトを見ているのだから女子としては当然、それは面白くはない。
ならばこのシミュレーションバトルにてフェイトをボコボコにして自分の有能さを周囲にアピールしようと言う思いがメアリーにはあった。
「艦隊を紡錘陣形に編成。全艦、敵艦隊に向け突入」
「陣形ヲ紡錘陣形ニ編成シマス」
「全艦突入シマス」
サポートＡＩがメアリーの命令を復唱して艦隊をメアリーの指示通りの動きをする。
（一気に中央突破してあの学歴コンプレックスおばさんの艦隊を粉砕してやるわ!!）
メアリーは意気揚々と艦隊を前進させる。
（メアリーは中央突破を仕掛けるつもりか・・・・）
（それなら・・・・）
フェイトはメアリーの艦隊の動きを見て自分の艦隊に指示を出す。

「左翼の第二、第三部隊を側面に展開し応戦、右翼の第五部隊を別働隊として編成し、敵の後方へ進め・・・」
「左翼ノ第二、第三部隊ヲ側面に展開シマス」
「右翼、第五部隊、敵ノ後方二進ミマス」
(どうもメアリーは短期に決着をつけようとしている・・・)
(その為、後方に展開している補給・工作部隊と大きく距離を広げすぎた・・・)
(それなら、メアリーの補給部隊を潰せばメアリーは補給できず、撤退するしかない)
　フェイトはメアリーの艦隊動きを見て、相手が短期決戦にこだわると言うのであるならば、それを逆手にとることにした。

「敵艦隊ノ一部、別働隊ヲ編成シマシタ」
「ふん、小賢しい・・・」
「コマンドヲ入力シテクダサイ」
「艦隊はこのまま前進!!まずは右の二個部隊へ集中砲火!!」
(別動隊と言っても一個分隊・・・私の後ろから狙うにしても数が少なすぎる。そんな少数でナニが出来ると思ってんの?学歴コンプレックスおばさんは数も数えられないのかしら?)
(それなら、別動隊が背後を突くよりも先にまずは側面に展開している二個分隊を殲滅した後、中央、そして後方と各個に殲滅してやる!!)
　メアリーはフェイトの艦隊がいくつかの分隊へ分散したので、各個撃破する作戦に切り替えた。

「敵艦隊、左翼ノ部隊ニ攻撃ヲ集中シテイマス」
「コマンドヲ入力シテクダサイ」
「左翼部隊は応戦しつつ後退」
「左翼部隊、応戦シツツ後退シマス」
　メアリー艦隊から攻撃を受けたフェイトの左翼側に展開していた第二、第三部隊はじりじりと後退していく。

「敵部隊、後退シマス」
「コマンドヲ入力シテクダサイ」
「攻撃を続行しつつ前進!!・・・・ふん、ハラオウン候補生は空戦魔導士としては最高クラスのスピードを誇るって聞いた事はあるけど、逃げ足も速いのかしら？」
　既にフェイトの艦隊は左右に大きく分断されており、今メアリーの艦隊から攻撃を受けている第二、第三部隊は更に後退している。
　メアリーはこの時すでに勝利を確信していた。
　しかし・・・・
　突如、メアリーの居るブースにて警報が鳴る。
「な、なに!?事故!?」
「後方ノ補給部隊ガ敵ノ別動隊ノ攻撃ヲ受ケ、壊滅シマシタ」
「補給部隊壊滅ニヨリ、行動ニ制限ガカケラレマス」
「なっ!?」
　サポートＡＩからの報告にメアリーは絶句する。
「本艦隊後方ヨリ、敵艦隊接近」
「コマンドヲ入力シテクダサイ」
　分断されたフェイトの艦隊の本隊がメアリーの艦隊の背後から迫る。
「後方の部隊は反転し、これを迎撃!!前衛は引き続き前方の敵を攻撃!!」
　補給部隊が壊滅したことにより、メアリーの艦隊は損傷を受けた艦を修理する事も、エネルギーを補給する事も出来なくなり、当初とは異なるが、フェイトの艦隊を短期間で撃破しなければならない状況に陥った。
「前方ノ敵部隊、尚モ後退」
「くっ・・・・」
　前方に居るフェイトの第二、第三部隊は応戦しつつ後退している事からメアリーの艦隊へ艦とエネルギーの消耗を強いていた。
　メアリーの顔からは段々と余裕がなくなっている事が窺えた。
　やがて、補給部隊を攻撃した別動隊も戻って来ると側面から攻撃を

してきた。
「こうなれば、こっちも相手の補給部隊に攻撃をしてやる!!全艦再集結、攻撃目標変更!!目標、敵補給部隊!!」
メアリーは此処に来て攻撃目標を敵部隊から敵の補給部隊へと変更するが、既に勝敗は決していた。
メアリーは結局、補給部隊も壊滅した事から撤退も不可能となり、最終的に体当たり攻撃を敢行して全滅した。
体当たりをしてきた際、フェイトはまさかメアリーがこんな暴挙に出てくるとは思ってもおらず驚きはしたが、冷静に対処して後退と反撃を繰り返し、メアリーの艦隊を全滅させた。
『黒陣、全滅!!よって勝者、白陣　フェイト・テスタロッサ・ハラオウン』
教官が演習終了を宣言するとフェイトは一息つく。
(それにしても最後の体当たり攻撃・・・あれは驚いたな・・・)
(私はメアリーが撤退できるようにわざと隙を作った・・・)
(でも、メアリーは撤退をせずに体当たり攻撃をしてきて艦隊は全滅した・・・)
(バーチャルシミュレーションだから自分は傷つかないと思っているとしたら、将来危険じゃないかな?)
(自分の命を預ける艦や大勢の部下や仲間を駒として見なくなる)
(今回の演習は初めてのシミュレーションだから良いけど、今後もこんな無茶苦茶な作戦が続くようなら、正直に言ってメアリーは指揮官には向かない・・・)
フェイトはメアリーの戦術に対する危険性を予感していた。
一方、フェイトとのシミュレーションバトルに負けたメアリーはと言うと・・・
演習終了の宣言と共にブースを駆け足で出て行くとトイレに駆け込んだ。
ダン!!ダン!!
ダン!!ダン!!

ダン!!ダン!!

トイレの壁を思いっきり叩いていた。
「認めない・・・認めない・・・あんな卑怯な戦法・・・私は主席なんだ・・・天才なんだ・・・それがあんな年増に負けるなんて・・・許さない・・・絶対に許さない・・・フェイト・テスタロッサ・ハラオウン・・・」
壁を叩くのを止めたメアリーはギリッと歯を食いしばってフェイトに負けた悔しさを滲ませた。
クロノは次元断層からの脱出における事件において二コラウフ・ロガンの父親であるイヴァノヴァ・ロガンから恨みを買い、リンディも管理局におけるタカ派からは目障りな女狐として密かにマークされていた。
そして、今日士官学校で行われたシミュレーション演習にてフェイトはメアリーからの恨みを買う事になってしまった。

メアリーからまさか逆恨みを買っている事を知らないフェイト。
そんな彼女の下にクロノから連絡が入った。
「あっ、クロノ。久しぶり」
「ああ」
「クロノ、実は今日、シミュレーションの演習があったんだけど・・・」
「ん?どうした?」
フェイトは今日メアリーとのシミュレーションバトルでの出来事をクロノに話した。
「そうか・・・しかし、今日がシミュレーション演習の初日だからな・・・初日の事だけでは全てを判断するのは早計だ。今後の結果に注目するしかないな・・・」
「でも、もしも今後、彼女の姿勢が直らないまま士官学校を卒業したら彼女の下に就く局員があまりにも可哀そうに思えるよ」
「ふむ・彼女の名前はメアリー・スー候補生なのだな?」
「うん」
「となると、彼女は恐らくスー大将の娘さんだな」

「スー大将？」
「ああ、本局のアンソン・スー大将・指揮官としても魔導士としても優秀な将校だ」
「そうなんだ・・・・」
　士官学校に入って以降、本局内の人事等はクロノを通じてしか情報が入らないので、フェイトは今日、初めてメアリーの父親について知った。
「まぁ、あの人は人格者だから、もしも娘さんがフェイトの言うように部下や艦を替えの利く駒の様に思い続けてもスー大将ならば改善してくれるはずだ」
（クロノに此処まで言わせるなんて、スー大将って凄い人みたい・・・・）
　フェイトはメアリーの父親が人格者ならば、メアリーの今後の性格も変わるかと思っていたが、メアリーは後々『味方殺しのメアリー』『血塗れメアリー（ブラッディ・メアリー）』の異名を管理局内に轟かせる事になる。
「そう言えば、士官学校でも噂になっているけど、管理局はもう次世代の次元航行艦を運用し始めたって聞いたけど？」
「ああ、事実だ。実際に僕も先日、試乗した」
「それで、どうだった？」
「まるでサラブレッドの様だった。次世代艦と比べるとこれまでの次元航行艦が鈍足なロバの様に感じたよ」
「そこまでの性能が・・・・」
「ああ。これらの艦が建造されていけば、これまで運用していた艦は練習艦か除籍・解体となっていくだろう」
「・・・でもさ、そうなると私としてはある懸念があるんだよね」
「ん？ある懸念」
「うん。管理局がいずれ次元航行艦の数をボラーへの武力制裁前・・・・ううん、それ以上の数を揃えた時、管理局がボラーやもう一つの地球に対して報復行動をするんじゃないかと思って・・・・」
「確かに、それは僕も思った」
　ボラーに関しては武力制裁の失敗時、多くの次元航行艦と乗員を失

う結果となり、もう一つの地球に関しては、管理局は煮え湯を飲まされたり、今後の軍備を鑑みるといずれは管理局にとっては大きな脅威になり得る存在だ。
「次世代の次元航行艦ならボラーや防衛軍と十分に戦えると思う？」
「今のボラーや防衛軍の戦力は分からないが、多分・・・」
「そう・・・」
　クロノは次世代の次元航行艦ならば、ボラーや防衛軍の宇宙艦船と十分に戦えるのではないかと予測する。
「だからこそ、フェイトの言った行動を管理局が取る可能性が高く思えてしまい、将来が不安だよ。元々管理局には管理世界を望んでいない世界に対しても管理条件を満たしていると言う理由で無理矢理管理世界にした事例も多々あるしな・・・」
「そこはリンディ母さんやレティ提督、クロノ、はやてが何とか止めないと・・・管理局は法の番人ではなく侵略者に成り下がっちゃうよ」
「母さんか・・・うーん・・・」
（既に侵略者になりかけているがな・・・）
（それにあの時は両者の艦船技術の差がありすぎたが、今はどうだろう・・・）
（はやては何とかなるだろうが・・・）
　ボラーへの武力制裁時や防衛軍との邂逅時、それらの星間国家と管理局では、宇宙艦船の技術の差が大きく、リンディもレティも三提督も管理局におけるタカ派を抑えつけていたが、その技術の差が縮まった今、果たしてリンディやレティ、三提督らが穏健派を続けているか疑問を覚えるクロノ。
「ん？どうしたの？」
「い、いや、何でもない」
　そんなクロノの様子にフェイトは何かあったのかと思い声をかける。
　そもそもクロノとリンディの両者は公人としては淡々と業務を熟していたが、私人としては会話もない生活をしていた。
　親子間の溝は深まってはいないが、埋まってもいないが未だに関係

修復は叶ってはいなかった。
「フェイトも士官学校を卒業して手伝ってもらいたいぐらいだ」
「流石に学校は通う年月が決まっているから・・・・」
「そうだな。それまでは管理局がバカな行動をとらないように僕やはやてがしっかりと注意していくしかないか・・・・」
冗談めいた言葉を言うクロノであったが、その言葉が決して冗談ではない事をフェイトはちゃんと自覚していた。
クロノが言う通り、管理局は次世代の次元航行艦の建造ノウハウを手に入れた事でボラーへの武力制裁前以上の力を手にするのも時間の問題かもしれない。
その時、クロノや自分が予想した様な未来が来るかもしれない。
確かにクロノが言う通り、士官学校を卒業したらより一層フェイトには厳しい環境がまっているかもしれなかった。

百八十四　バース星へのお届け物

バジウド星系、第四惑星のバース星にて流行り病が発病した事態を受けて、地球連邦政府は同惑星に駐屯している防衛軍、ガルマン・ガミラス、そして元々バース星に住んでいるバース星人の為にアルファ星よりワクチンとワクチン製造機を積み込んだ輸送船、おおすみの護衛のため八雲は、おおすみと共にバース星を目指してアルファ星を出航した。

現在、バース星はある程度の自治は認めているとは言え、実質ガルマン・ガミラスの属国となっているが、バース星周辺では未だに親ボラー派の勢力が存在しており、バジウド星系の航路は決して安全とは言えなかった。

だからこそ、バース星へ向かう　おおすみ　に護衛が必要だったのだ。

一応、バジウド星系の治安維持を担うガルマン・ガミラス東部方面軍からの知らせではアルファ星～バース星の航路の安全は確保できていると言う報告は受けてはいるが、現状を確認出来ていない事から情報を鵜？みにして進むのは危険である。

不安を抱えながらも八雲とおおすみはアルファ星の防衛圏を離脱した。

なお、流行り病が蔓延している星に行くと言う事で八雲とおおすみの乗員全員はワクチン接種が義務付けられていた。

（これで、完全に地球の勢力圏を出たわね・・・）

（この先は、ガルマン・ガミラスからの情報を頼りに進まなければならない・・・）

（正直に言ってどこまで信じられるか疑問だけど、ひとまずガルマン・ガミラスからの情報を信じて進まなければ何も始まらないわね）

八雲副長のギンガは眼前に広がる星の海を見つめながら今回の航海に一抹の不安を抱いていた。

だが、それは八雲、おおすみの乗員たち全てが抱いていたのかもし

れない。
八雲とおおすみは急ぎつつも慎重にバース星を向かう。
「艦長」
「ん？なんだね？副長」
「此処から先はある意味で未知の空間になります。本艦のみでしたら、特に問題はありませんが、今回は輸送船も同行しています。万が一にも親ボラー勢力の艦隊に遭遇すれば、輸送船の護衛は困難です」
「うむ」
「故に此処からさきはビーコンとレーダーの出力は下げて、おおすみへの通信も発光信号として、索敵はパッシブセンサーと見張り員を増やしての有視界で進んでみてはどうでしょうか？」
ギンガは瓢に親ボラー派の艦隊と遭遇した際のリスクを鑑みて少しでも発見されにくくするための行動を提案する。
「ふむ・・・索敵機能が著しく低下するがやむを得ないか・・・」
瓢もこの先の航海を考えギンガの提案を採用した。
「艦長、暗号通信が入りました」
ガルマン・ガミラスのリレー衛星より、航路に関する暗号通信が入ったのだ。
「Ｓ１１宙域からＴ１２宙域の空間は安全が確保されているみたいです」
「そうか・・・航海長、航路をＳ１１宙域からＴ１２宙域へ設定せよ」
「了解」
「後方のおおすみにも発光信号。『我に続け』と・・・」
「了解、発光信号送ります」
ガルマン・ガミラスからの情報を基に八雲とおおすみは安全が確認された航路を進む。
「艦長、前方にアステロイドベルト帯を確認」
「速度を落とせ」
「了解、アステロイド通行速度に落とします」
バース星を目指す八雲とおおすみの前にアステロイド帯が出現し、両艦はアステロイドとの衝突を防ぐために速度を落とした。

そんな中、
「ん？艦長、パッシブセンサーに反応があります。多数の航行物体がこのアステロイドの近くを航行しています」
「ガルマン・ガミラスの艦艇か？それとも親ボラー派か？」
「この反応はボラー型の艦艇かと思われます」
「・・・」
ボラー系惑星が多かったバジウド星系であるが、ガルマン・ガミラス進出後に降伏した惑星国家の内、駐留していたボラー艦船はそのままガルマン・ガミラスに接収された。
接収の後、一部はガルマン・ガミラス本星へと回航され技術調査が行われたが、それ以外の艦船はそのままガルマン・ガミラスの艦船と同じ艦首部を黄色に、その他の船体を深緑に塗装されて使用された。
これはボラー、ガルマン・ガミラスの宇宙艦船の操縦系統に若干の違いがあり、ボラー系の宇宙艦船に乗り慣れていた乗員たちへの育成時間を短縮する目的と建造・回航の時間を短縮する事を目的として、更に味方からの誤射を防ぐ目的で船体の色と味方識別信号の変更を行い運用していたのだ。
故にバジウド星系にてボラー系の宇宙艦船が航行しているからと言って親ボラー派とは言い切れない。
だが、親ボラー派を警戒して進んでいる八雲とおおすみとしてはガルマン派なのか？
それとも親ボラー派なのかを判断するには相手が自分たちの視覚範囲まで待つしかないが、もしも親ボラー派で合った場合、危険が伴う。
「戦術長、反重力感応機の準備だ!!」
「は、はい」
接近中のボラー系艦船がガルマン派だろうと親ボラー派だろうとまずは自分たちの安全確保をしなければならない。
瓢はティアナに反重力感応機の準備をさせた。
「反重力感応機準備完了!!」
「反重力感応機発射!!」

「反重力感応機発射します!!」
八雲の主砲から反重力感応機が発射され、アステロイドへと突き刺さる。
「岩盤装着」
「岩盤装着」
八雲から放たれ、アステロイドへと突き刺さった反重力感応機へ無線指令が伝達され、アステロイドの岩塊が八雲とおおすみの船体周辺に密着する。
ヤマト副長兼技師長である真田志郎が生み出した反重力感応機によるアステロイドシップは相手から見ればアステロイドを密着させた艦は一見すると大き目なアステロイドにしか見えないので、こうして敵をやり過ごすにはうってつけの戦法であった。
「接近中のボラー系艦船、まもなく通り過ぎます」
艦橋にある八雲のモニターには接近して来るボラー系艦船の姿が映し出される。
接近してきたのはガルマン色に塗装されたボラー系艦船ではなく、ボラー系特有の紫と深青色で塗装されたボラー系艦船であり、それは親ボラー派の艦船である事が窺えた。
「接近中のボラー系艦船は親ボラー派の艦船と思われます」
「くそっ、何でこんな所に・・・・?」
(まさか、ギンガさんが言うように情報が漏れていたんじゃあ・・・・)
ティアナはアルファ星出航前にギンガと話していた内容が脳裏を過る。
アルファ星からバース星へワクチンを輸送している事が親ボラー派に無線傍受等でバレているのではないかと言う懸念だ。
そうでなければ、親ボラー派の艦船がこんな所をウロウロしているとは考えにくい。
そう思ったティアナは、
(ギンガさん、ギンガさん)
念話にてギンガに話しかける。
(ん?・どうしたの?・ティアナ)

（出発前に話していた事で、無線傍受されているかもしれないって話したじゃないですか）
（うん）
（やっぱり、無線傍受・・されていたんじゃないでしょうか？）
（ん？それはどう言う事かな？）
（まだ推測の域を出ていませんし、偶然・・かもしれませんが、こんな所に親ボラー派の艦船がうろついていた事に違和感があったので・・・）
まだ一度っきりの邂逅であり、この広い宇宙なので此処で敵である親ボラー派の艦船と遭遇したとしても偶然として片づけられるかもしれないが、やはり懸念は残る。
（そうね、ティアナの言う通りだけど、まだ今回の一件だけじゃあ判断はつかないわ。でも、この先も親ボラー派の艦船と遭遇するなら、やっぱり無線傍受されたと見た方がいいわね）
（はい）
ギンガもやはり一度の邂逅では判断できず、様子見とした。
今回の親ボラー派の艦船との邂逅はアステロイドシップにて相手を誤魔化すことに成功した。
ガルマン・ガミラスに親ボラー派の艦船と邂逅した件を通報しても良いが、その通信をやはり親ボラー派に無線傍受されては八雲とおおすみの位置を相手に教えることになるので、通報は見送り、一路バース星を目指して出発する。
すると八雲とおおすみの前に次の試練が立ち塞がる。
「艦長、前方に宇宙気流があります」
「減速、気流の状態を確認せよ」
「了解、減速します」
八雲は早速前方の宇宙気流の観測を行う。
気流の速度、流れてくる方向と流れていく方向を・・だ。
「宇宙気流はかなりの速度と規模の気流みたいです」
「航行は何とか可能ですが、気流内を航行中に航海計器にダメージを負った場合、操艦不能になり気流に流されてしまいます」
「艦長、やはり気流の横断は断念した方がこの場合、賢明かと思いま

す」
　気流の観測データを見てギンガは瓢に気流を迂回する旨を提案する。
「ふむ・・・」
　瓢がギンガからの提案を受け、迂回路の検討をしようとした時、
「艦長、気流の反対側に艦隊反応をキャッチしました!!」
「なにっ!?」
「モニターに映せる!?」
「はい」
　八雲艦橋のモニターには気流を挟んだ反対側に展開している艦隊の映像が映し出される。
　これがガルマン・ガミラスの艦艇ならばギンガとティアナは懸念を抱かなかったが、気流の対岸に居たのは・・・
「青いボラー系艦船・・・」
「親ボラー派か!?」
　親ボラー派かと思われる艦隊であった。
（ギンガさん・・・）
（うん）
　此処まで親ボラー派との邂逅が重なり、更に宇宙気流の対岸で八雲tとおおすみをまるで待ち受けているかのように展開していることからギンガとティアナの懸念は確信へと変わった。
「艦長」
「ん？何だね？副長」
「実は私とランスター戦術長は、出航前にある懸念を抱いていました」
「ある懸念？」
「はい。アルファ星とバース星との間での超光速通信が親ボラー派に傍受されているのではないかと言う懸念です」
「ふむ・・・」
「アステロイド帯での親ボラー派との邂逅は最初・・と言う事で偶然ではないかと思いましたが、宇宙気流の対岸で待機しているこの状況を見て懸念から確信に変わりました。親ボラー派は我々の行動を知っ

て待ち伏せしています」
「・・・確かに副長の言う通り、相手の動きを見る限りその可能性が高そうだな。無理に気流を通過しようとすればかなりの被害を覚悟しなければならない。それでは気流を抜けても満足には戦えない・・・ましてや此方は護衛任務中の身だ・・・」
「それにこの宙域に留まるのは危険です。背後から親ボラー派の別動隊が迫ってくる恐れがあります」
ティアナも瓢にこの宙域に親ボラー派が集まって来る危険性も指摘する。
そんな中、
「艦長、まもなく彗星がこちらに接近してきます」
「なに?」
「計算によればこの彗星は宇宙気流を通過していきます」
「それだ。彗星の内部に飛び込めば彗星のガス体に守られ宇宙気流を通過できる。それに対岸に展開している親ボラー派の連中の目を誤魔化す事も出来るだろう」
「彗星が此方に接近してきます!!」
「よし、おおすみにも発光信号!!全速で彗星の内部へ飛び込め!!」
八雲とおおすみは近くを通過する彗星の内部へと飛び込んだ。

その頃、宇宙気流の対岸に展開していた親ボラー派の艦船では・・・
「ふむ、気流の向こう側に居るのが、例の情報にあった輸送船と護衛の艦だな?」
「はい。その様です」
宙気流の対岸に展開していた親ボラー派の旗艦である戦艦の艦橋にあるモニターには八雲とおおすみの艦影が映し出されている。
「地球とか言う星がまさかこんなにもはやく対策をうってくるとは・・・折角のバース星奪還の機会をむざむざと失わせてなるものか・護衛の艦は破壊しても構わぬが、あの輸送船だけは出来るだけ拿捕せよとの命令であるが、護衛の艦一隻・しかもこの位置ならば、赤子の手をひねるよりも簡単にこの命令を達成できそうだな」

この艦隊を率いるゲラーシモ・ナタレンコフは不敵な笑みを浮かべる。
バース星へ向かう航路で、この宙域に来たと言う事は眼前の宇宙気流を通過しなければならない。
この気流の影響でワープは事実上不可能。
であるならば、バース星へ向っている地球艦はこの気流を通り抜けて来る。
しかし、気流を無理に通れば艦にダメージを負う。
気流を抜けてヘロヘロになった相手などいとも簡単に撃沈出来ると思っていた。
そもそも、今回バース星で流行り病が流行したのは親ボラー派の工作員がバース星にてウィルスをまき散らした事が原因であった。
致死性の高いウィルスではなかったのは、致死性が高いとウィルスを撒いた工作員自身の身に危険があり、奪還作戦の際にも侵攻した仲間に感染する恐れがあるため、致死性が抑えられたが、感染力が高いウィルスが使用された。
そして、ナタレンコフたち親ボラー派がこうして待ち構えていたのはギンガとティアナが懸念した通り、彼らはアルファ星とバース星との通信を傍受してバース星で流行っている病に効くワクチンが輸送される事を知った。
バース星にいる敵対勢力をウィルス感染させて士気を下げたのだが、ワクチンなんて持ち込まれたら折角の作戦が台無しになる。
それにワクチン・ワクチン製造機を自分たちが手土産してバース星の自治政府へ自分たちへの協力を要請すれば、バース星を占領しているガルマン・ガミラスと地球連邦政府の勢力を一掃できると考えたのだ。
宇宙気流の対岸に居る八雲とおおすみを捕捉していたナタレンコフの艦隊であったが、
「な、ナタレンコフ隊長!!」
「ん?・なんだ?どうした?」
オペレーターが慌てた様子でナタレンコフに声をかけてきた。

「レーダーから輸送船と護衛艦の反応が消えました!!」
「なにっ!?間違いないか!?」
「はい!!間違いありません!!」
(くっ、まさか一か八かの賭けでワープをしたのか?)
「ワープの反応はないか?」
　ナタレンコフは反応が消える前にワープの反応があったかをオペレーターに訊ねる。
「いえ、ワープの反応はありません」
(ワープでもなく、反応が消えた・・・・?)
(どういう事だ?)
「周辺にある反応は彗星だけです」
「・・・・」
「彗星は宇宙気流を通り抜けて我が艦隊の左下方を飛んでいきます」
　オペレーターから報告があがったように宇宙気流からは彗星が飛び出てくると漆黒の宇宙空間を流れていく。
「奴らはまだキャッチできんのか?」
「はっ、未だに・・・・」
(連中は一体何処へ・・・・はっ!?まさかっ!?)
「レーダー、急ぎさっきの彗星の動きを追え!!」
「は、はい!!」
　ワープ反応もなく、通常空間からも突然姿を消した八雲とおおすみ。
　変化があったのは近くを彗星が通り過ぎただけ・・・・
　ならば彗星を怪しむのは当然の事だった。
「あっ、何かが彗星の中から飛び出してきました!!」
「くそっ、まんまと逃げられたか!?後衛の部隊を急ぎ向かわせろ!!」
「は、はい!!」
　ナタレンコフは急ぎ後衛の部隊へ八雲とおおすみの追撃を命じた。

　八雲　艦橋
「艦に異常はないか?」

「はい。本艦、おおすみ、共に艦に異常はありません」
彗星の核に潜むと言う防衛軍でも初めての回避方法をとったので、艦の何処かに被害を受けたかもしれないと思われたが、八雲とおおすみは無傷のまま彗星の核から離脱をして、宇宙気流を無事に渡り切り、親ボラー派の目を一時的には撒くことに成功した。
「そうか・何とか親ボラー派を撒けたか・・・」
「ですが、敵も直ぐに気づき追ってくるでしょう」
「うむ。此処からは親ボラー派の追撃を受けるやもしれん。陣形を変更する。おおすみを先行させろ」
「はっ、発光信号用意!!」
八雲はおおすみに先行するように発光信号を送るとおおすみは速度を上げて八雲を追い越す。
「後方よりボラー艦、接近してきます!!」
「やはり、来たな・・・敵の動きは?」
「散開してこの彗星付近の探索を図るようです。あっ、敵艦二隻こちらに接近してきます!!」
「敵艦より停船命令がきています!!」
「無視しろ。針路を付近のアステロイド帯へ向けろ!!それと突発性事態に備え第三砲塔及び後部ミサイル管発射準備!!」
「了解、後部第三砲塔、ミサイル発射管発射準備」
「敵艦発砲!!」
八雲とおおすみを追いかけて来た親ボラー艦が撃って来た。
しかし、警告射撃なのか?それとも相手艦の砲手の腕が未熟なのか、八雲の船体ギリギリをかすめる。
「第三主砲撃て!!」
八雲が放ったショックカノンは追跡してきた親ボラー艦二隻の内、一隻に命中し爆沈した。
残るもう一隻は僚艦の爆炎を利用して八雲との距離を詰めて来た。
「近距離に接近する事で主砲とミサイルを封じて来たか!?前には出すな!!このまま並走しろ!!」
「りょ、了解!!」

八雲は追い抜かれまいと速度を上げるが相手も速度を上げて来た。
やがて、二隻の艦は・・・
ズドン!!
親ボラー艦は八雲の右舷側に接触した。
「うっ・・・」
「うわぁ!!」
「くっ・・・」
ガリガリ・・・
二隻は離れつつ、ぶつかり合う。
「か、艦長、この状態は危険です」
「分かっておる。だが、もう少し・・・」
瓢は何かを狙っているかのようにチキンレースを続ける。
「・・・今だ!!敵艦にぶつけろ!!」
瓢が声を上げると航海長は親ボラー艦へ八雲をぶつける。
すると、八雲がぶつかった衝撃を受けて親ボラー艦は大きく右側へと針路がズレる。
そして、親ボラー艦の眼前には小惑星があり、親ボラー艦は逆噴射をして制動をかけるが、先程まで八雲とチキンレースをしていた為、急に制動をかけても止まる事は出来ずに親ボラー艦は小惑星に衝突する。
「敵艦、小惑星に衝突。爆沈しました!!」
「よし、このまま敵を振り切るぞ!!」
「了解」
ひとまず追っ手を振り切ろうとするも親ボラー派は追撃を止めない。
「敵の増援を確認!!アステロイド帯へと突入してきます!!」
「熱感知機雷を放出、三分毎に三発ずつ段階を置いて足止めを図る」
「了解、熱感知機雷放出」
八雲の艦底部にある機雷発射口から機雷が放出される。
親ボラー派の艦はアステロイドを躱しながら八雲とおおすみを追いかけて来る。

「敵艦、機雷の第一波と触接!!」
後方で機雷の爆発を確認した。
「敵艦大破!!」
「これで少しは足が止まるか・・・・」
「機雷、第二波放出!!」
三分が経過し、ティアナは機雷の第二波を放出する。
「アステロイド帯、まもなく出ます。アステロイド帯出口に敵影無し」
「よし、残る機雷をアステロイド帯の出口付近に放出」
「了解」
アステロイド帯の出口に機雷をばら撒き、航路を簡易的にだが封鎖する。
しかし、追手を振り切ろうとする八雲とおおすみにとっては十分な時間である。
アステロイドと機雷によって八雲とおおすみを追いかけて来た親ボラー派の艦は機雷に接触した事で被害が大きくなり、無事な艦は被弾した艦の救助やら機雷を恐れて停止したことで八雲とおおすみの追撃を断念せざるを得ない状況となる。
「追撃に向かった味方の艦がアステロイドと敵の機雷によって足止めされています」
「被弾した艦からは救難信号が発信しています」
ナタレンコフの下には八雲とおおすみを追いかけて行った味方から救難信号が絶えず送られてきた・・それは追撃に向かった艦が撃沈されたか大破したと言う事だ。
「くっ、たかが一隻だと思って侮っていたか・・・・」
宇宙気流の対岸で八雲とおおすみを捕捉した時は簡単におおすみを奪取できるかと思っていたが、蓋を開けてみれば奪取に苦戦をして味方に損害が出る事態となっている。
「隊長、このままあの二隻を追跡するは少々危険ではないでしょうか?」
すると副官がナタレンコフに現状を鑑みて忠告をいれる。
「ん?・どういう事だ?・それは?」

「既に我々の存在が、ガルマン・ガミラス側に通報されている可能性があると言う事です。このままあの二隻の追跡を続けたらガルマン・ガミラスの警備部隊と遭遇する可能性があります。そうなれば、数で劣る我々が不利です」
確かに副官の言う事も一理あった。
ガルマン・ガミラスの警備艦隊はバジウド星系で活動している親ボラーの息の根を完全に潰す為に警備艦隊の艦数を増やし、捜索範囲を広げている。
それに警備艦隊の中で、次元潜航艦を繰り出されたらその対処も難しい。
今の自分たちは艦隊と言ってもあまりにも艦数が少なく、もし次元潜航艦を繰り出されたら相手の位置を探知する前に全滅させられる可能性が高い。
「此処はガルマン・ガミラスの警備艦隊が来る前に撤退した方がよろしいかと・・・・」
「ぬぅ～・・・・やむを得ない・・・・救助が終わり次第、撤退だ。全艦にそう伝えろ」
「はっ!!」
ナタレンコフは副官の意見を採用し、撤退を決めた。
(この借りは必ず返すぞ!!)
(次こそは貴様らは必ず宇宙の藻屑に変えてやる!!)
撤退する中、ナタレンコフは八雲ヘリベンジを誓った。

八雲　艦橋
「親ボラー派の連中は諦めたのだろうか?」
親ボラーからの追っ手を返り討ちにした後から親ボラー派からの追撃はなくまもなくバース星宙域へと差し掛かろうとしていた。
「前方に艦影を捕捉!!」
「親ボラー派の艦か!?」
「・・・・いえ、味方識別信号が送られてきました!!ガルマン・ガミラスの警備艦隊です!!」

「何とか安全圏まで来れましたね」
バース星に駐屯するガルマン・ガミラスの警備艦隊と合流できた八雲の艦橋に安堵感が漂う。
きっとおおすみの方も同じだろう。
「艦長、ガルマン・ガミラスの警備艦隊より通信です」
「うむ、繋いでくれ」
「はい」
八雲の艦橋にあるメインモニターに一人のガルマン・ガミラス士官の姿が映し出される。
「ガルマン・ガミラス東部方面軍、バース星駐留警備艦隊所属のゲルトハルク・メレンティウスであります。遠路はるばるご苦労様です」
「地球防衛軍第四艦隊所属、八雲です。バース星の現状については既に聞いております。ワクチンについては無事に輸送出来ました」
「それは・・ありがとうございます。これで、バース星の流行り病を収束することが出来ます」
「早速ですがバース星への入港許可をバース星の自治政府へと求めて下さい」
「承知しました」
ガルマン・ガミラスの警備艦隊を通して八雲とおおすみはバース星への入港許可を求めた。
おおすみの積荷が流行り病に効くワクチンとワクチン製造機と言う事でバース星への入港許可はすんなりとおりた。
ギンガにとっては二度目のバース星訪問であったが、それ以外の乗員たちとっては初めてのバース星の訪問であった。
「どこまでも広がる雪の世界・・・見るからに寒そうですね」
眼下に広がる雪の世界・・バース星の姿を見てティアナは若干顔を引き攣らせる。
「このバース星は一年を通して雪に包まれている極寒の星よ」
そんなティアナにギンガはバース星の情報を伝える。
「バジウド星系にある他の星間国家から何度も侵略を受けていたらしいわ」

「こんな極寒の星を侵略・・・この星を狙った奴らは一体、この星にどんなモノをみいだしたんでしょうね？」
　ティアナとしてはバース星の様な極寒の星に一体どんな利用価値があるのか分からなかった。
「極寒の環境でも人が住める星と言う事で、勢力拡大を狙う星間国家としては、人が住めると言う理由だけでも征服する理由になるんじゃないかしら？」
「侵略者の考える事はよくわかりません」
「そうね・・それで、十数年前に銀河系東部に進出したボラー連邦はバース星の状況を鑑みてこの星を保護国に指定したの」
「保護国って・・・それって体の良い支配じゃないですか？
「うん。私もそう思う…だけど、それは管理局でも当てはまるんじゃないかな？」
「・・・」
　ギンガの指摘にティアナは特にコメントは差し控えた。
　実際にティアナも六課卒業後に本局勤務となり、その後にこうしてもう一つの地球で過ごしている中で、ギンガの指摘が的を射ていたからである。
「それで、ボラーまでがこの星を手に入れて領土拡大の悦に浸っていたわけですか？」
「それもあるけど、ボラーはこの星に大きな強制収容所を作って政治犯とかを収容していたみたい」
「強制収容所・・・まぁ、確かにこの極寒で劣悪な環境なら刑罰になりますからね」
（流石に管理局でもこんな極寒の星に刑務所は作らないから、その点では管理局は幾分ましね）
　主に無人世界に刑務所を作っている管理局ではあるが、その無人世界もバース星の様に極寒の星と言う訳ではないので、ボラーと管理局を比べると管理局の方が犯罪者に対する扱いはマシに思えたティアナ。
　やがて、宇宙船の発着場に降りた八雲とおおすみ。

おおすみでは早速荷卸しの作業が行われた。
一応ワクチン接種は済ませているが、それでも用心をして荷卸し作業をしているおおすみの乗員たちはヘルメットに手袋、ブーツを着用している。
「ワクチンが製造されてバース星の人たちに接種していけば、この流行り病も収束してくでしょう・・・でもこの後は、おおすみをアルファ星に送り帰す仕事もあるからまだまだ困難な航海は続くよ」
「そうですね。せめて帰りは途中まででいいからガルマン・ガミラスの警備艦隊に護衛を頼みたい所です。実際にアルファ星までの航路はガルマン側の情報と異なり実際に親ボラー派からの襲撃を受けたんですからね」
「そうね。その点は瓢艦長や基地の司令官からガルマン・ガミラス側へちゃんと伝えてもらわないと」
アルファ星を出航する前はガルマン・ガミラス側からバース星までの航路は安全だと言いながら実際には無線傍受されており、親ボラー派からの待ち伏せを受けた。
ならば、復路はちゃんとガルマン・ガミラスには責任をもって護衛してもらいたいと思うギンガとティアナであった。
しかし、二人の思いとは裏腹に八雲はしばらくこのバース星に留まる事になるのをこの時の二人はまだ知る由も無かった。

此処で視点はミッドチルダへと移り、時間も過去へと巻き戻す。
管理局が次々と次世代の次元航行艦を建造・就役している中、本局にある次元航行艦のドックでは・・・
「・・・」
はやては、自身が艦長を務めるヴォルフラムの艦長席に座り独り、物思いにふけっていた。
「考え事ですか？艦長」
そこへ、グリフィスがはやてに声をかけてきた。
「ん？ああ、グリフィス君か・・・近々このヴォルフラムとお別れと思

うとな・・・」
「・・・」
はやての言葉にグリフィスも思う所があった。
次世代の次元航行艦が就役して行き、これまで管理局が就役させていた次元航行艦は次々と廃艦か練習艦に払い下げとなっていった。
そしてそれは、はやてのヴォルフラムも例外ではなく、先日はやての下にも人事異動命令が来た。
命令の内容は、はやてをヴォルフラムの艦長から他艦への艦長にするというモノだった。
はやての異動後は、乗り手が居なくなったヴォルフラムは解体処分されて、解体によって出来た部品は他艦の建造や修理部品に回す事が決まった。
当初はやては何とかヴォルフラムを解体せずに、ヴォルフラムの機関を次世代の次元航行艦と同じ機関への換装を願った。
しかし、換装作業を行うとその間、ヴォルフラムは長期の・年単位のドック入りとなり、乗員たちも換装期間は持て余す事になる。
次世代の次元航行艦が就役した管理局はこれまで停滞していた管理世界への拡大路線を再開しており、局員や艦を換装作業で管理世界への拡大作業を停滞させる余裕はなかった。
機動六課設立時は聖王教会の協力もあったが、ヴォルフラムの件については、聖王教会は完全に畑違いなので、流石に協力は出来ず、本局上層部もいくら実績があるとはいえ、管理局が組織である以上、一個人の頼みを一々かなえていてはそれこそ他の局員たちに示しがつかず、不満が募ってしまう。
その為、はやての要望は却下された。
ヴォルフラムの艦長になって僅か数年であるが、はやてにとってヴォルフラムは家でもあり苦楽を共にした仲間でもあったので、今回の人事異動は彼女にとって思う所があったのだ。
ＪＳ事件の決戦時にはやては破壊された六課の隊舎の代わりにアースラで指揮を執った。
このアースラもはやてはある意味で世話になった艦であったが、自

身が指揮をとった長さではヴォルフラムの方が長かった。
とは言え、次元航行艦乗りにとっては艦を乗り移るのは当然の出来事ではあるが、はやてにとっては初めての経験だったであり、しかも艦長を務めていた艦が自分たちを降りた後に解体される辛い現実を突きつけられたのだから考えさせられる。
（さよなら・・・ヴォルフラム・・・）
その後、はやてはヴォルフラムとの別れを惜しみ、ヴォルフラムを後にした。

百八十五話　バジウド星系哨戒任務

バース星で流行した病気の鎮静化の為にアルファ星から流行り病に効くワクチンとワクチン製造機をバース星に輸送する為の輸送船の護衛任務に就いた八雲。
その道中にて未だにバジウド星系に潜む親ボラー派の待ち伏せに遭うも何とか無事に輸送船を守り切ってバース星へと到着した。
問題は往路よりも復路が困難と予想された。
いくら荷物を積載していないとは言え、武装を搭載していない輸送船を再びアルファ星まで護衛しなければならない。
アルファ星から地球までの航路は地球の領海なので、親ボラー派も手出しはしてこないので比較的安全だが、バース星からアルファ星までの航路は往路同様、親ボラー派の待ち伏せや襲撃も考えられる。
バース星にある艦船ドックにて八雲は整備・補修・補給が行われている間、八雲艦長の瓢はバース星の防衛軍司令部へ呼ばれた。
「瓢艦長、今回の輸送船護衛の任、ご苦労だった。これでこの星で流行している病も収束に向かうだろう」
「いえ、お役にたててなによりです。それに今回の任務では乗組員たちにも十分な経験になったことでしょう」
イレギュラーな任務ではあったが、八雲の乗組員たちにとって実戦を交えた良い経験になったと瓢は判断した。
それに瓢自身も経験を得ることが出来たので、今回の任務は受けて正解であったと思っていた。
「・・・そうか・瓢艦長」
「はっ」
「そんな貴官にすまないが、もう一つ貴官に新たな任務を頼みたい」
「ん？新たな任務・・ですか？」
「うむ。いくらワクチンが来たとは言え、すぐにこの病が沈静化するには暫し時間がかかる」
「でしょうね」

「君たちもこの星に来るまで親ボラー派の妨害を受けたと思う」
「はい。輸送船を連れての出来事だったので、ヒヤヒヤした場面が何度かありました」
「うむ、それで君たち八雲にはこの病が沈静化の目途が経つまで、この星周辺の哨戒任務を任せたいのだが・・・・」
「哨戒任務ですか？」
「ああ、この流行り病の影響でバース星に駐屯している軍の戦力は落ちている。それはガルマン・ガミラス側も同様だ」
「・・・・」
「今は一隻でも多くの軍艦が必要なのだ。それと情報だ。親ボラー派の戦力が現状どれくらいの規模であるのかもだ」
「なるほど」
　バース星に未だに親ボラー派の総攻撃が無い所を見ると、そこまでの戦力は無いと判断されるが、それでも航路を脅かすゲリラ活動や通商破壊をされては地球、ガルマン・ガミラス、ガルマン派の惑星国家にしては厄介であり目障りだ。
「頼めるか？瓢艦長」
「分かりました。準備が出来ましたら、八雲はバース星周辺の哨戒任務に就きます」
「では、この宙域周辺の航路情報も後でそちらに送ろう。それに偵察機もそちらに搬入できるよう手配する」
「ありがとうございます」
　軍人である以上、命の危険もあるがイレギュラーな任務もある。
　子供みたいに『休みたいから嫌だ』『仕事内容が気に食わないので嫌だ』なんて対応は出来ないし、許されない。
　八雲は再びイレギュラーな任務に就くことになった。
　その八雲では、ギンガが今回の航海における報告書を作成していた。
「ギンガさんの報告書は、やっぱり丁寧で見やすいですね。内容も分かりやすいですし・・・・」
　そこへ、ティアナがパソコンの画面を覗き込んでギンガが作成して

いる報告書を褒める。
「報告書に関しては管理局時代から作っていたからね。ティアナやスバルはどうだった？」
　ミッドチルダ西部にある陸士１０８部隊時代から報告書の作成をしてきたので、ギンガとしては報告書の作成は手慣れたモノだ。
　ギンガはティアナとスバルの書類作成能力について訊ねる。
　ティアナやスバルも管理局の訓練校を卒業後にスバルと共にミッドチルダ南部にある陸士３８６部隊へ配属となり、そこから機動六課へスカウトされた経緯を持つ。
　機動六課を含め、局員を経験したのであるならば書類作成は絶対につきまとっていた。
「私もスバルも当初は四苦八苦していましたが、数を熟すうちに慣れていきました。スバルはああ見えて丁寧で物覚えも良かったですから・・・」
「そうね。姉の私が言うのもなんだけど、確かにスバルは意外な所があったからね」
　スバルは普段の言動から一見バカっぽく見えるが、ティアナの言う通り物覚えが良く管理局の訓練校における成績は上位だった。
　それに、ギンガとスバルがナカジマ家に保護された後、ギンガは養母であるクイントからシューティング・アーツを習い始めたが、当初、スバルは『殴るのも、殴られるのも嫌だ』と言ってクイントからシューティング・アーツを習わなかった。
　その後、クイントは追っていた事件の捜査中に殉職するもギンガはシューティング・アーツの訓練は欠かさずにやっていた。
　そして、新暦７１年四月に起きた空港火災事故により、スバルはなのはに助けられ、なのはと管理局に憧れ、管理局員を目指すようになると同時に自分も強くなりたいと言う思いからギンガからシューティング・アーツを習い始めた。
　教えていたギンガ本人もスバルの成長を早く感じていた事から勉学以外の覚えについてもスバルは優秀だった。
「それにしても今回の航海でまさか彗星の核内部に隠れる事態になる

なんて思いも寄りませんでした」
「そうね。でも、今回のこのデータは今後の航海で役に立つ筈よ」
ギンガの言う通り、八雲とおおすみが彗星の核内部へ隠れた実績は防衛軍の歴史の中でも今回が初の事例だ。
ギンガもそうであるが、ティアナも・・・『元』が付くとは言え、管理局関係者でも初の実績だ。
なので、ギンガたちもこの事例の成功に対しては驚いている。
当然この事例は防衛軍司令部へ報告がいくだろう。
そして彗星内部の安全が実証された訳なので、今後敵を撒く際に近くを彗星が通り過ぎる際はこの回避方法も行われるかもしれない。
「それで、この後はやはり、アルファ星か地球へ還ると言う事でしょうか？」
「うーん・・・どうだろう」
ティアナはバース星に届ける物は届けた訳だし、もうこの星には用は無いので、てっきりアルファ星か地球へ還るのかと思っている様だが、ギンガはこのまますんなりと帰還するとは思えなかった。
「えっ？どうしてですか？」
「ワクチンはバース星に搬入された・今後はこの病気の規模も収束するだろうけど、ワクチンを打ったからといって病気は直ぐに治るモノではないでしょう？」
「た、確かに・・・」
「だから、この病気が沈静化するまではこの星に留まる事になるんじゃないかしら？軍の人たちも感染しているみたいだし、私たちもワクチンは打っているけど、それが絶対に感染しないとは言い切れない・・・感染者が居ない事が初めて分かってからこの星を出ないとアルファ星や地球でこの病気を流行らせてしまう事になるでしょう？」
「はい。そうですね」
ギンガの予測はまさに的中していた。
瓢が八雲に戻った後、八雲は暫らくの間バース星周辺の哨戒任務に就くことが伝達された。
（ギンガさんの予想通りになったわね・・・）

（でも、今回は輸送船が同行しないから、多少は楽なのかしら？）
（でも、親ボラー派は多数でこちらは八雲一隻・・・）
（包囲されればタコ殴りにならないと良いけど・・・）
「なお、今回の哨戒任務にあたってバース星駐屯基地より、偵察機が譲渡される」
　瓢が先ほどバース星駐屯基地における司令官とのやり取りの内容を八雲の艦橋員たちに説明する。
　その中で駐屯基地から偵察機仕様のコスモタイガーが搬入される旨も伝えられた。
「偵察機が譲渡されるという事は、その機体のパイロットも補充される言う事でしょうか？」
　ティアナが瓢に新たに偵察機のパイロットも八雲に乗艦するのかを訊ねる。
「いや、司令官からはパイロットについては聞いてはいない」
「・・・えっ？と言う事は機体のみと言う事でしょうか？」
「そうなるのかのう」
（えっ？ちょっ、大丈夫なの？）
　ティアナは瓢の対応に不安を覚える。
「ま、まぁ、搭乗員に関しては私とランスター戦術長はパイロットスキルがありますし、乗員の中には同じスキルがある乗員が代わる代わる搭乗する形にしましょう」
　ギンガが偵察機の搭乗員についての案を出し、その案が採用された。
　それから直ぐにバース星駐屯基地より偵察機仕様のコスモタイガーが八雲に搬入された。
　その機体はギンガにとっては見た事のある機体であった。
　暗黒星団帝国との戦いの最中、真田とトチローが三席タイプのコスモタイガーを改良した機体で、その時は物資や時間、状況等の関係からヤマトに一機のみ搭載されていたが、暗黒星団帝国の戦いの後、この偵察機仕様のコスモタイガーは防衛軍でも正式採用されて、真田の監修の下で生産されていた。

ギンガはこの機体は見た事はあるが、実際に乗った事はない。
今後の哨戒任務ではもしかして、この偵察機に搭乗するかもしれなかった。
ティアナも訓練校において砲術科以外に飛行科のカリキュラムを受講していたが、その飛行科のカリキュラムでも単座型の操縦訓練はもとより、古代、山本、椎名、ギンガたちと同じく、複座型の操縦訓練も受講していた。
よって、少なくともギンガとティアナはこの偵察機の操縦は出来る。
こうして偵察機を含めて、補給物資を積み込み、艦の補修が終わった八雲はバジウド星系の哨戒任務の為にバース星駐屯基地から飛び立った。

八雲がバース星駐屯基地を出航した頃、バジウド星系にある某宙域では・・・
「ナタレンコフ隊長、本部より電文です」
「ん？内容は？」
「はっ、輸送船団の護衛任務です」
「なに？我々にか？」
「はい」
八雲とおおすみがアルファ星からバース星へ向かう中、妨害してきた親ボラー派のゲラーシモ・ナタレンコフの下に輸送船団の護衛任務が舞い込んで来た。
まさか、今度は自分たちが輸送船の護衛をするとは皮肉な展開だった。
「くそっ、輸送船団の護衛だなんて面倒な仕事を・・・」
ナタレンコフは任務内容を聞いて愚痴を零す。
「ですが、輸送船団護衛は同志たちへの大切な物資です。この物資が届けば同志たちの士気もあがることでしょう」
「・・・やむを得ない・か・・・」
ナタレンコフ本人にしてみれば、面倒な任務ではあったが、ガルマ

ン・ガミラスからの解放の為に戦っている同志たちの為にもやむを得ないと思い、ナタレンコフは渋々護衛任務を引き受けた。

八雲　艦橋

「艦長」

「ん？なんだね？副長」

「哨戒中に親ボラー派の艦船を発見した場合、攻撃は許可されているのでしょうか？」

「ふむ・状況・そして、親ボラー派の戦力にもよるな・・・副長は以前、まほろばに勤務していたのだろう？」

「はい」

「ヤマトと共に銀河系中心部への航海にてボラー連邦との戦闘も経験した筈だが、ボラー連邦の強みはその物量であったと聞いた。バジウド星系に潜んでいる親ボラー派がボラー連邦の艦隊と同規模の艦隊を運用しているとは思えないが、それでも此方は八雲一隻で相手は多数とみて良いだろう」

瓢はヤマト、まほろばが行った第二の地球探査任務の際に邂逅し、交戦したボラー連邦との報告書には目を通していた。

それはやはり、このバジウド星系にはボラー派の勢力が存在していたからである。

そもそもこのバジウド星系で暗躍している親ボラー派・・・・

以前、バース星を統治していたボローズはガルマン・ガミラスの東部進出を受け、本国への退路を断たれた事により、統治していたバース星を捨てて新天地を求め同志を募り、オリオン腕方面へと逃亡した。

その際、バース星を始めとして周辺の惑星国家にも自分と志を共にする者たちを集めていた。

ボラー関係者はもとより、ボラーからの統治を受け入れてボラーからの特権を貰い、同じ星の住民たちを虐げた権力者も同胞からの報復を恐れてボローズと共に逃亡した者たちも居た。

しかし、彼らはオリオン腕方面へ逃亡の際、ケンタウルス座・アル

ファ星を見つけ、一方的な攻撃をしかけるもまほろばを中心とする警備艦隊に返り討ちに遭い、最終的にバーナード星の戦いにて終幕を迎える結果となった。
だが、バジウド星系にはこの時のボローズと行動を共にせず、反ガルマン・ガミラス感情を抱いたまま、祖国防衛の為に戦っている者たちも居た。
その者たちこそが親ボラー派だった。
既にボラー本国からの支援は皆無に等しい中、親ボラー派は惑星国家間で独自のネットワークを構築し、ガルマン・ガミラスと戦っていた。
「仰る通りです。それにボラー連邦は誘導ミサイルを装備している厄介なミサイル艦や次元潜航艦も保有しています。このバース星付近での戦闘では、群狼戦術により、まほろばの月村艦長が負傷する事態に陥りましたから・・・」
ギンガはあの時の航海を思い出しながらボラー連邦の艦船情報を瓢に伝える。
「群狼戦術か・・・次元潜航艦に対して全く対処出来ない訳ではないが、多数で攻め込まれるとやはり、厄介な相手だな・・・」
「艦長、此処は親ボラー派と鉢合わせをする前に艦の装備を熟知しておく必要があると思います。なので、早速ですが搬入したばかりの偵察機の試験飛行を兼ねて偵察機の先行偵察を具申します」
「ふむ、よかろう。副長の意見を採用しよう」
「はい。ありがとうございます」
「では、偵察機に乗る搭乗員についてだが・・・」
瓢が偵察機に乗る搭乗員について応募をかけると、
「私が乗ります!!」
ティアナが志願した。
「では、オペレーターには私が乗ります」
偵察機型のコスモタイガーは二人乗りなので、もう一人の搭乗員にはギンガが志願した。
「むぅ～しかし、艦の幹部二人が抜けた後、君たちの身に万が一の事が

あると・・・」
　瓢としては副長のギンガ、戦術長のティアナが艦を留守にして、偵察中に何かあった時の事を危惧する。
　瓢としては当然の懸念であった。
「艦長の懸念は当然でありますが、艦の装備を確認するのは戦闘面では戦術長は適任ですし、通信・戦術アドバイスに関しては副長の私が適任です」
「むぅ・・・」
　ギンガの返答に瓢は強く断れず渋々ティアナとギンガの二人を搭乗員として偵察機の搭乗を許した。
　瓢の懸念は当たっていたが、ギンガの返答も今後の八雲の事を考えると当たっていたからだ。
「気密チェック完了、エネルギー問題なし」
　偵察の許可が下りると二人は宇宙服を身に纏い、格納庫にて機体のチェックを行う。
「エンジン異常なし、発進します」
「うむ、くれぐれも気をつけてな」
「了解!!」
　ティアナとギンガを乗せた偵察機は八雲を発進した。
「ギンガさん、通信・探知機器の状態はどうですか?」
　操縦桿を操作しながらティアナは後部座席に居るギンガに機器の状態を訊ねる。
「機器はこれまで扱って来たモノと大して変わらないから大丈夫よ。広域レーダードーム作動開始・・・相違差探知式センサー始動・・・探査用シェイブビーム調整完了・・・問題ないわ。ティアナこそ操縦は大丈夫?複座機の搭乗は訓練校卒業以来なんじゃない?」
　ギンガは機器を操作しながら逆にティアナへ操縦について訊ねる。
「勘が鈍らない様にシミュレーションで復習はちゃんとしているので大丈夫ですよ」
　ギンガもティアナも今の所、問題なく機体を操作していた。

その後も二人が乗る偵察機は先行偵察を続けていると、
ピコン!!
「ん？」
レーダーの反応をギンガは見逃さなかった。
「ギンガさん？」
「十時方向、距離一万五千で何かが反応したわ!!ティアナ!!」
「はい!!分かっています!!」
ティアナはレーダー反応があったとされる宙域へ機首を向けた。
偵察機が目標の方向へと近づいていくにつれて、レーダーの反応も強く、明確になっていく。
「ギンガさん、レーダー反応の正体は一体何なんですか？」
偵察機のレーダーが捉えた反応・それは惑星か流星、アステロイドの類か？それとも・・・
「分かったわ!!艦船反応よ!!」
「艦船?!それってまさか親ボラー派ですか?!」
バース星に来る途中で親ボラー派に妨害されたので、反射的にレーダーに反応した艦船は親ボラー派だと思ってしまうのも無理はない。
「もう少し近づいてくれる？そうしたら、確実に分かるわ。ただし、慎重にね」
「りょ、了解」
親ボラー派かもしれないと言う事でティアナは慎重に機体を接近させていく。
「分かったわ!!エネルギー反応からボラー型の艦船よ。ただ、これがガルマン派なのか親ボラー派かは流石に分からないわ」
「そうですよね」
バジウド星系におけるガルマン派の惑星国家の中にはバース星同様、ボラー連邦に支配されていた惑星国家もあり、これらの惑星国家がガルマン・ガミラスの手によって解放された後もボラー連邦の宇宙艦船をそのまま使用している惑星国家もあるので、レーダー反応からはボラー型の宇宙艦船だと言う事が判明しただけで、このボラー型宇宙艦船が親ボラー派なのか、ガルマン派なのかは分からない。

「味方識別信号で確認できれば一番早いけど・・・・」
「もしも、親ボラー派の場合、此方の存在と居場所を教える事になりますからね」
「ええ・・でも、親ボラー派だったら八雲に伝えないと・・・・」
「・・・・此処は危険ですが、更に接近して確かめますか？」
「・・そうね。ただ、艦隊を見つけた報告は八雲へ入れないと・・『こちら、先行偵察機、中嶋。ポイント○○地点にて、ボラー型艦船の艦隊らしき反応を捕捉・・・・』・・・・ん？」
　ギンガは艦隊反応を捉えた事を八雲へと報告するが、何故か顔を顰める。
　そんなギンガの様子に気づきティアナは何かあったのかと訊ねる。
「どうしました？」
「何か通信状況が悪くて・・・・」
　ギンガが八雲へ通信を入れた際、インカムからはノイズ音がした。
「えっ？でも、この辺りは大きな惑星もありませんし、濃厚な電離ガスも見当たらないので、通信の妨げになるような要因は無いと思いますが・・・・？」
　ティアナは周囲を目視にて、通信の妨げになる様なモノが存在していない事を確認する。
「・・・・もしかしたら、見つけた艦隊が妨害電波を流しているのかも」
「だとすると余計に怪しいですね・・・・」
「うーん・・でも、ガルマン派の艦隊が無線封鎖で行動中なのかもしれないけど・・・・」
「やっぱり此処は接近して確認しましょう・・・・」
　ティアナとギンガは危険を承知でボラー型艦船の艦隊へと接近した。

　ティナアとギンガが乗る偵察機が接近しているボラー型艦船の艦隊は、ナタレンコフの艦隊が護衛を務める輸送船団であった。
「ナタレンコフ隊長」
「なんだ？」

「未確認飛行物体らしき反応をキャッチしました」
「なに!?数は!?」
「一機です」
「一機?それは艦船ではなく、航宙機か?」
「はい。エネルギー反応からみて艦船ではありません」
「一機と言う事はガルマン・ガミラスの偵察機でしょうか?」
副官が意見を述べる。
「味方識別信号は?」
「反応ありません」
「隊長、味方識別信号が送られないと言う事は、接近中の未確認飛行物体は、やはりガルマン・ガミラスの偵察機とみて間違いないでしょう」
「それに通信妨害電波は流しているので、例え我々を発見できたとしても母艦には連絡をすることは不可能・・・撃墜してしまえば我々の存在が明るみになる事はありますまい」
「うむ、迎撃機を出せ」
「はっ!!」
ナタレンコフが乗艦しているヴォルグは、セヴァストー級航宙戦闘艦でこの艦型は戦艦よりも空母に近い造りとなっており、かつてはバルコム率いるボラー連邦本国の第一主力艦隊の旗艦を務めるなど、ボラー系の艦隊では旗艦を務める程の能力があった。
ヴォルグからは戦闘機が未確認飛行物体の迎撃の為、三機が発進した。
この時、ナタレンコフは偵察機相手に戦闘機三機はあまりにも過剰戦力かと思う程の余裕があった。
とは言え、元々搭載している艦載機自体そこまで多くはなかったが、搭乗員の良い訓練になると言う思いもあった。
迎撃機が迫っている中、ティアナとギンガが乗っている偵察機は高性能のレーダーを供えている機体だったので、迎撃機の反応は直ぐに探知することが出来た。
「艦隊から迎撃機らしき飛行物体を捕捉・・・どうやら親ボラー派の艦

隊だったみたいね」
「妨害電波が出ている時点で薄々そうじゃないかと思っていましたが、迎撃機がお出迎えと言う事は、間違いなさそうですね」
「此処はあまり長居すると危険そうね」
「はい。通信が妨害されているとなると報告はもっと八雲に近づかないとダメですからね」
　迎撃機に追いつかれる前にティアナは八雲に戻る事にした。
　しかし、機体の上部に装備しているレドームのせいでこのままでは迎撃機に追いつかれてしまいそうだ。
「ギンガさん、このままだと敵の迎撃機に追いつかれてしまいます。勿体無いですが、レドームをパージします」
「うん。分かった」
　ティアナはレドームをパージするレバーを引くと、機体上部に装備されているレドームが弾き飛ばされ、機体の質量が軽くなり速度が上がった。
　しかし、親ボラー派の迎撃機も速度を上げて偵察機を追いかけて来る。
「くっ、しつこい」
（このままだと振り切れないかもしれないし、送り狼で八雲に連れて行ったら、連中に八雲の場所を教える事になる）
　後方から追いかけて来る親ボラー派の迎撃機を振り切ろうとティアナは針路を左右に変更しながら振り切ろうとするが、此方が偵察機と言う事で情報を持ち帰らせないと言う思いからしつこく追撃して来る。
　その反面、このまま敵の迎撃機を八雲へ連れて行くと親ボラー派に八雲の居場所を教える事になる。
　今は三機であるが、その後に攻撃機の大編隊を八雲へ送って来る事も考えられる。
「ギンガさん!!後部機銃の用意をお願いします!!」
　ティアナは振り切れない事態を考慮してギンガにレドームの下に装備されている三連装パルスレーザー砲の準備を任せる。

「了解、任せて!!」
ギンガも現状を理解していざという時は相手を撃墜する事も顧慮にいれなければならないと思いパルスレーザー砲の準備を行う。
そして、追いついて来た迎撃機はパルスレーザー砲の掃射を浴びせて来る。
「くっ・・・・」
ティアナは機体を上方へ捻り込ませて相手の後ろにつくとお返しと言わんばかりにパルスレーザー砲を撃ち、まずは一機を撃ち落す。
「まずは一機・・・・」
残る二機も撃ち落さなければ、親ボラー派の追撃は振り切れそうにないので、残りの迎撃機も撃ち落すつもりだった。
一方の親ボラー派の迎撃機のパイロットたちは『敵の偵察機を撃墜しろ』と命じられて出撃した時、偵察機なので、大した武装は施されていないだろうから、追いつくことが出来れば簡単に撃墜することが出来るだろうと予想していた。
そして実際に追いついた時、
「ん?ガルマン・ガミラスで使用されているスマルヒとは全然違う型だな」
「ガルマンの新型か?」
当初、迎撃機のパイロットたちは『敵の偵察機』と言われた際、相手はガミラス時代から偵察機として使用されているＦＧ１５６　スマルヒかと思っていた。
しかし、実際に遭遇した機体がスマルヒとは全然違う機影をしていた。
まさか地球の偵察機型のコスモタイガーだとは思わず、ガルマン・ガミラスの新型偵察機かと思った。
例え新型機であろうとなかろうと自分たちの任務は敵の偵察機を撃墜する事なので、攻撃をしないという選択肢はない。
すると、敵の偵察機は機体の一部をパージしたかと思ったら、速度がさらに増した。
「こいつ、ただの偵察機じゃないぞ!!」

「は、早い!!」
「慌てるな!!例え早くても偵察機は偵察機だ!!大した武装はない!!こちらも速度を上げろ!!何としてでも撃墜するぞ!!」
「了解!!」
親ボラー派の迎撃機も速度をあげて敵の偵察機へ攻撃をしかけるが、相手は捻り込みをかけ、逆に自分たちの後方へとつけると友軍機を一機撃ち落す。
「ダロス!!くそっ!!」
友軍機を撃ち落され、親ボラー派の迎撃機側も絶対にあの偵察機を撃ち落してやると意気込む。
「後ろを取れば・・・・」
偵察機、戦闘機と言えど、背後をとれば攻撃は出来ないと思いきや、ダダダダダダ・・・・
後部にある銃座からパルスレーザー砲を撃って来た。
「ぐわっ!!」
「ステリス!!くそっ!!」
突然の後部からの攻撃で更に友軍機が落とされた。
「あと一機!!」
「ナイス攻撃です!!ギンガさん!!」
残る迎撃機は一機・・・・
迎撃機は正面と後部に武装が施されている事に警戒して横から回り込んできた。
「ティアナ!!十時方向から来たわよ!!」
「了解!!」
ギンガから敵機の来る方向を聞いたティアナは、機首を反転させ、旋回し相手の後ろにつく。
「ランスターの弾丸は全てを撃ち抜くってね!!」
ティアナは照準器で捕捉した敵の迎撃機に向けてパルスレーザーの発射ボタンを押す。
するとティアナが撃ったパルスレーザーは吸い込まれるかのように敵の迎撃機へと命中する。

「ラスト!!」
　三機の迎撃機を全て撃墜した。
「もう、追ってはこないわね・・・」
「ええ、追加の迎撃機の反応は無いわ。八雲へ帰還しましょう」
「了解」
　親ボラー派の迎撃機からの追撃を振り切ったと判断したティアナとギンガは八雲へと戻った。
　格納庫へと戻って来た偵察機の姿を見て、整備担当は、
「あれ?レドーム、パージしちゃったんですか?」
　出撃した時と帰還した時の偵察機の姿が違っていたので、パイロットを務めていたティアナに訊ねる。
「ええ、途中で親ボラー派の艦載機に追われてね」
「えっ!?えええええー!!」
　ティアナの返答を聞き整備員は驚く。
「大丈夫よ。追って来た敵機は全部撃墜したから」
　そんな整備員を尻目にティアナはあっさりと追手を返り討ちにしたことを告げる。
「私たちはその件について艦長に報告を入れて来るから、替えのレドームを付け直しておいてくれるかしら?」
「分かりました」
　ギンガはレドームを偵察中にパージしてしまったので、バース星で偵察機と共に搬入したレドームを付け替えておくように頼み、整備員は了承した。
　その後、ティアナとギンガは瓢に先ほどの偵察行動における報告をいれた。
「なるほど、親ボラー派の艦隊か・・・」
「はい。ただこちらの映像を見ると、武装している艦の存在も確認できますが、大半がガルマン・ガミラスからの情報で得たボラー型の輸送船である事が確認できます」
　ボラー型宇宙艦船の武装は格納式なので、一見すると非武装艦に見える。

管理局もこの特徴を見誤った結果、返り討ちに遭い更にその先の大敗北を招いた。
そのボラー連邦と銀河系を二分する戦いをしてきたガルマン・ガミラスはボラーの武装艦なのか非武装艦なのかは区別がついており、その情報は同盟国である地球連邦にも共有されていた。
ガルマン・ガミラス側の情報から先ほどティアナとギンガが発見した親ボラー派の艦隊は大半が輸送船で構成されている事が偵察機で撮影した映像から判明した。
「輸送船で構成されている艦隊・・・輸送船団か・・・」
「恐らく」
「それで、この輸送船団はガルマン派の輸送船団ではないのだな？」
「はい。迎撃機を飛ばして此方を攻撃してきましたから間違いありません」
「艦長、この情報をガルマン・ガミラスに通報しますか？」
「そうだな。輸送船団と言う事は、どこかの戦線へ運ばれる戦術物資と言う事だろうからな」
瓢はティアナとギンガからの報告を受け、ガルマン・ガミラス東部方面軍へ輸送船団を発見した旨を通報する。
するとガルマン・ガミラスからは次元潜航艦を援軍として派遣するので、その艦と共に親ボラー派の輸送船団の殲滅を依頼された。
「援軍が次元潜航艦って・・・戦艦や空母の援軍はないの？銀河系を二分する勢力なのに・・・」
ガルマン・ガミラスからの返答を聞き、愚痴を零すティアナ。
「今のガルマン・ガミラスはボラーとの戦いを激化させているから、辺境の抵抗勢力なんて真面目に取り合わないのかもしれないわね」
ベムラーゼが金星宙域で戦死してからボラー連邦内は当然、大混乱となる。
ベムラーゼの他に総参謀長のゴルサコフ、バルコムを始めとする第一、第二主力艦隊、ハーキンスを含む第八打撃艦隊とボラー連邦宇宙軍の中核をなす指揮官と艦船を喪失している事から政治的以外に軍事でも混乱が起きていた。

ガルマン・ガミラスとしては当然そのチャンスを見逃す手はなく勢力拡大を一時停止してボラー連邦の殲滅へ切り替えた。
その為、北部方面軍と東部方面軍は競い合うかのようにボラー連邦領土への侵攻をしており、東部方面軍としてはバジウド星系の抵抗勢力の相手などに貴重な戦力を投入なんて出来なかった。
事実、ダゴン率いる第十八機甲師団も今はボラー連邦領内への遠征をしている。
地球側としてはバジウド星系の治安維持は今後のバース星、ガルマン・ガミラス本星への航路安全に関わる事態だ。
「まぁ、バース星への航海と違って今回はちゃんと援軍を送ってくれた事だけでもありがたいじゃない？」
「それはそうですけど・・・」
何か納得できはしないが、援軍を送ってくるだけギンガの言う通りマシなのだろう。
こうして八雲はガルマン・ガミラスから送られてくる次元潜航艦と共に親ボラー派の輸送船団を攻撃する事になった。

此処で視点はバジウド星系からミッドチルダへと移し、時間も過去へ遡る。

ミッドチルダ　無限図書館
「あっ、そう言えば教授、あれから調査は進んだのかな？」
ユーノは以前、ミッドチルダの大学で考古学を教えている同じスクライア族のランティスから他の管理世界における遺跡調査のバイトに誘われて久しぶりの遺跡調査をした。
滅んだ文明で文献も乏しいと言う事で、その言葉の解読には時間がかかるとランティスはユーノに言っていたが、自分も調査を手伝ったので進捗が気になったのだ。
ユーノは大学に居るランティスへ連絡を取った。
「教授」
「おお、スクライア君か。久しぶりだな」

「はい。それで教授、この前の遺跡調査ですが、何か分かった事はありましたか？」
「ああ、あの後色々と伝手や伝承を調べて来たが、やはり記録が乏しいだけに中々調査は進まない」
「そうですか・・・・」
　ランティスの返答にユーノは少々がっかりな様子。
「だが、全く進んでいない訳ではない。いくつか解読が出来た単語はある」
「えっ？本当ですか!?」
「ああ、あの時発掘した粘土板に記された文字らしき単語で『水』と言う言葉があった」
「みず？・・・・ですか？」
「うむ、まだ全ての単語の解読が出来ている訳ではないが、この粘土板は水に関係する事が書かれているのだと推測される」
「水に関する事・・・・水路の設計図や水害の伝承って事も考えられますね」
「ああ。今後もこの粘土板に書かれた文字の解析は続けていくつもりだ。あとは・・・・」
「ん？まだ何かあるんですか？」
「実は先日、第六管理世界のアルザスにある洞窟で壁画が発見された」
「壁画・・ですか・・・・」
（ん？第六管理世界のアルザスって言えば、フェイトが後見人を務めている子・・・・確かキャロって言う子の故郷だ・・・・）
　第六管理世界アルザスと聞いて、ユーノの脳裏にはフェイトが後見人を務めている元機動六課に所属していた桃色髪の少女の姿が思い浮かんだ。
「それで教授。どんな壁画だったんですか？」
「私も実際にこの目で見た訳ではないが、発見した際の画像はこちらに送られてきている。コレだ」
　ランティスはユーノに、タブレットに保存されているアルザスの洞窟で見つかった壁画の画像を見せる。

「こ、これは!?」
　その画像を見てユーノは思わず声をあげる。
「これは・・・もしかしてヴォルテール？」
　壁画に描かれていたのはキャロの使役竜の一体であるヴォルテールにそっくりな黒い竜の姿が描かれていた。
「ああ、あのＪＳ事件の際、クラナガンに現れた巨大な竜の一体にそっくりだろう？」
「ええ・・・でも対に描かれているもう一体の灰色の竜・・・こちらは見覚えがありませんね」
　ＪＳ事件における決戦時、キャロは当時、スカリエッティ陣営に所属していたルーテシアと戦い、キャロはヴォルテールを・・そしてルーテシアは巨大な昆虫型の使役獣である白天王を召喚し戦った。
　白天王の姿は文字通り、白を基調とした巨大な昆虫に似た使役獣であるが、壁画にヴォルテールのついと成すように描かれているのは灰色の竜なので、白天王とは似ても似つかない姿なので、灰色の竜は白天王とは違う様だ。
「この壁画についてはアルザスの民に聞けば何かわかるだろう」
「それについては知り合いが後見人を務めている子にアルザス出身の子が居ます。それにその子は壁画に描かれている竜にも関係している子なので、何かわかるかもしれません」
「そうなのかい!?」
「はい。近い内に後見人を務めている知り合いとコンタクトを取ってみますね」
「ああ、頼むよ」
　アルザスの洞窟に描かれていたヴォルテールともう一体の竜の壁画・・・
　キャロならば、きっと知っているだろうとユーノは確信があった。
　果てして壁画に書かれているもう一体の竜の正体とは？
　ユーノとランティスがその竜の正体を知るのはもう少し先の出来事であった。

百八十六話　アルザスの竜伝説

フェイトが士官学校へ入校してからクロノとはちょくちょく連絡を取っていたが、今日フェイトに連絡をいれてきたのは、はやてであった。

はやてもフェイトが士官学校へ入り直したのは知っていたが、ここ最近は仕事が忙しくフェイトの様子を聞くため連絡が出来ない状態が続いたが、本局がはやてに乗艦している艦の変更を打診してから宇宙へ行く事がなくなり、引き渡しの書類仕事となり、ようやくその仕事が終わり、時間が出来たので、士官学校へ入り直した友人の様子を知る為に連絡を入れたのだ。

「フェイトちゃん、久しぶりやな」

「はやても元気そう・・・・じゃないね」

フェイトから見たはやては何だかげっそりとしており、彼女の顔色を見ただけではやてが疲れている事が窺える。

「うん・・・・最近、仕事が忙しくてな・・・・」

「そ、そうなの？た、大変だね。ゆっくり休んでね・・・・でも、はやてが元気ないのってただ仕事が忙しいだけじゃないんじゃない？」

「・・実は・・・・」

はやてはフェイトにヴォルフラムが廃艦処分になり、自分は別の艦へ異動になった事を告げる。

「そっか・・・・ヴォルフラムが・・・・」

「いくら、次世代の次元航行艦が完成したからってなにも直ぐになんて・・・・」

はやてとしてもヴォルフラムは初めて自分が艦長を務めた艦なので思入れがあったのだろうが、それが短期間の間で異動となりヴォルフラムは解体処分と言う現実は、はやてにしてみれば残酷だった。

「・・・・でも、はやて。視点を変えてみれば、艦の性能が上がったのなら、乗員の生存確率が上がるって事じゃない？」

フェイトは、はやてに視点を変えた観点で語る。

「クロノから聞いたけど、ボラーへの武力制裁はまさに生き地獄だったみたいだし、私とティアナもあの世界で宇宙空間での戦闘を見たけど、艦の性能が低かったりするとそれは乗員の死を意味しているんだよ。あの世界もガミラスって言う星間国家と戦争している時、当時の防衛軍の宇宙艦船じゃあ、ガミラスの宇宙船に全然歯が立たなくて一方的にやられていたのを私は映像で見たよ」
「・・・」
はやてはボラーへの武力制裁に参加していないし、防衛軍が経験した戦争の様な激戦の経験もない。
一応、太陽系に侵攻してきた彗星帝国残党と防衛軍の戦闘映像を見てはいるが、それはガミラス戦役時のモノとは比ではない。
一方でフェイトは第二次イスカンダル航海で生死が掛かった宇宙での戦いを経験しているし、もう一つの地球が辿って来た歴史も映像を見てその凄まじさを知っている。
確かにはやての気持ちは分からない訳でもないが、それでも自分を含めて大勢の乗員の生命が守られるなら割り切るしかない。
「そうやな・・・フェイトちゃんの言う通りや・・・私は艦長なんやから乗員の生命を守らなあかんな・・・」
「うん。例え艦が変わっても乗員は変わらないならそれだけでもありがたい事だよ」
「ありがとな、フェイトちゃん。フェイトちゃんの言葉を聞いてなんだかやる気が出て来たわ」
「それは良かったよ」
フェイトの助言ではやてはやる気を取り戻せたようだ。
その後フェイトは、はやてに士官学校での出来事を話し久しぶりの友人との会話を楽しんだ。
「はやては、もう次世代の次元航行艦には乗ったの？クロノはこの前乗ったって言っていたけど？」
「あぁ～私はまだ乗っていないんや」
「そうなんだ・・・クロノが言うにはこれまでの次元航行艦とは雲泥の差みたいだよ」

「そうなんか・・・それだと訓練も大変そうやな」
「うん。それ以外に私としては将来的にある懸念があるんだけどね」
「懸念？」
「うん。これはクロノも同じ懸念を抱いていたけど、管理局が力をつけた時、ボラー連邦やもう一つの地球に対して報復をするんじゃないか？って・・・」
「あぁ～・・・それは確かにあり得そうやな・・・」
クロノとフェイトが抱いた懸念を聞き、はやても二人が抱いた懸念はあり得ると同意する。
「それに管理局が得た技術が外部に流出する可能性だってあるしね」
「管理局がようやっと得た技術を外部に流すやろうか？」
フェイトのこの懸念については、はやてはやや懐疑的である。
「私は十分にあり得ると思っているよ。海鳴で回収した筈のジュエルシードがスカリエッティのガジェットに使用されていた事例があるからね。大金欲しさにマリエルさんとシャーリーが開発したエンジンの設計図を盗んでテロリストや海賊に売り渡すかもしれないでしょう？」
「うーん・・・言われてみるとあり得ないとは言い切れへん」
はやて自身、六課の隊長を務め、撃破したガジェットからジュエルシードが出て来た経緯から見るとあながちフェイトの言う事もあり得ないとは言い切れない。
「でも、残念なことに技術が大きく広がっていくとすれば、いずれはその技術は遅かれ早かれ外部に流出してしまうだろうから、管理局はその時に備えてそれなりの力を蓄えないといけないし、今後はテロリストや海賊たちも同等の力をつけてくると思った方が良いだろうね」
「そ、そうやね・・・」
フェイトの未来予測にはやては顔を引き攣らせる。
「それにしてもマリエルさんもシャーリーも何時から次元航行艦のエンジンの研究をしていたんだろう？」
次元航行艦のエンジンの研究・開発なんて膨大な時間がかかる。
自分の生みの親であるプレシアも管理局側の無理な要求があり、研

究・開発をしていた魔導炉のヒュードラが暴走してしまいその結果、研究所へ見学に来ていたアリシアを失う結果となった。
　マリエルもシャーリーも技術者としては確かに優秀であるが、贔屓目を抜きにしてもプレシアの方が優秀な印象がある。
　そんなプレシアでさえ、開発に時間がかかり更に失敗に終わったのだから次元航行艦のエンジンの開発は時間がかかり難しいモノだ。
　フェイトがもう一つの地球に居る間に研究開発をしていたのかもしれないが、それにしても時間が足りない様に思えた。
「えっ？ま、まぁ、フェイトちゃんも知っての通り、マリエルさんもシャーリーも優秀な技術者やし、当然の結果ちゃうんかな？」
　ミノフスキーの存在は管理局の中でもトップシークレットだったので、はやてもいくらフェイトが親友でも教える事は出来なかった。
　そもそも管理局が新開発した次元航行艦のエンジンもマリエルとシャーリーよりもミノフスキーが中心になって開発したモノだ。
　それを管理局がボラー連邦出身であるという理由からひた隠しにし、ミノフスキー本人も不審死している。
　彼の死については未だにヴィータ、マリエル、シャーリーの三人は疑問視している。
　はやての態度から彼女が何かを隠している事を察したフェイトであるが、隠さなければならない事情があるのだから、そこは敢えて聞かなかった。
「ほな、フェイトちゃん。勉強頑張ってな」
「うん。はやても仕事頑張ってね」
　はやては新たな艦の艦長として乗員たちと共に訓練、そしてフェイトは士官学校での勉強や試験と互いにやる事がまだまだあり、切りが良い所で通信を終えた。
（はやても色々と大変そうだけど、私も士官学校を卒業したら、そう言う世界に行くんだから、今の内から頑張らないと!!）
　はやての姿を見てより一層勉学に励もうとするフェイトであった。
　それから数日後・・・
　再びフェイトに連絡を入れて来た人物が居た。

その時、連絡をいれてきたのはクロノでもはやてでもなく、フェイトにしてみれば意外な人物であった。
「フェイト、久しぶり」
「あっ、ユーノ。久しぶり」
今日、フェイトに通信をいれてきたのはユーノであった。
士官学校の生徒になる前、もう一つの地球に居る間は無限書庫にこれといった用がなかったので、フェイトはユーノとはしばらくの間、交流がなかったので、こうしてモニター越しとは言え、ユーノと会うのはフェイトとしても久しぶりであった。
「クロノから聞いていたけど、士官学校の生活はどうだい？」
「色々と学ぶことがあって大変だけど、卒業したらもっと大変そうだから今は修行中って感じかな？」
フェイトはユーノに先日、はやてと連絡をとった事を話した。
「そうか・はやてとも最近会っていなかったけど、はやてもはやてで色々と大変そうだね」
「うん。それで、今日はどうしたの？」
フェイトはユーノが世間話をするためにわざわざ連絡を入れて来たんじゃないと分かっていたので、ユーノが一体何の用で連絡を入れて来たのかを訊ねる。
「うん。実はフェイトが後見人を務めているキャロって言う子についてなんだけど・・・」
「ん？キャロ？」
「ああ、実は用があるのはキャロなんだ」
「キャロに？一体キャロに何の用があるの？」
フェイトも自分が後見人を務めているキャロにユーノが一体何の用があるのか気になった。
「先日、僕の知り合いの大学教授の下にアルザスの洞窟で見つかった壁画の鑑定依頼が来たんだ」
「アルザス・・・キャロの生まれ故郷だね・・・」
「ああ、それでその壁画にキャロの使役獣であるヴォルテールそっくりの竜が描かれていたんだ」

「ヴォルテールの壁画!?」
「うん。もしかしたら、ヴォルテールそっくりの竜であって、壁画に描かれている竜がヴォルテールとは限らないかもしれない。いずれにしてもキャロにその壁画を見てもらって意見をもらわないと何とも言えないんだ」
「そう・・・分かった。キャロには私の方から言っておくよ」
「そうかい?ありがとうフェイト」
「ただ、私もその壁画が気になるから出来れば私もその場に立会いたい。キャロにもしばらく会っていないし・・・」
「分かった。日程調整はそっちに任せるよ」
「うん。分かったらユーノに連絡をいれるね」
「ああ。それじゃあ」
ユーノとの連絡を終えたフェイトは次にキャロへと連絡をとった。

自然管理世界　ポルテ

「ル・ルシエ一士」
「は、はい」
「ミッドチルダのフェイト・テスタロッサ・ハラオウンさんから連絡がきています」
「えっ?フェイトさんから?」
同僚にフェイトから連絡が来たことでキャロは驚きつつも久しぶりにフェイトと会えると言う嬉しさから急ぎ対応する。
「キャロ、久しぶり」
「フェイトさん!!フェイトさんも久しぶりです!!・・・って、あれ?フェイトさん制服が・・・」
モニターの向こうに居るフェイトはキャロが見慣れている本局の執務官の制服ではない別の制服を身に纏っていた。
「どこか別の部署に異動したんですか?」
六課の時は〝陸〟の制服を着ていたので、今回のそれと似たようなモノかと思いキャロはフェイトに訊ねる。

「ううん。異動じゃなくて、士官学校に入り直したの」
「えっ!?士官学校!?」
(あっ、そう言えばキャロとエリオには士官学校へ入り直した事、言うのを忘れていた・・・・)
あまりにも周囲で色々とあり、士官学校に入り直した際も勉強や演習やらで、後見人であるエリオとキャロに自分が士官学校に入り直した件について伝え忘れている事を思い出したフェイト。
キャロの方も、もう一つの地球から戻って来たフェイトが執務官から士官学校の学生になっていた事に驚いていた。
「ど、どうして士官学校に入り直したんですか!?フェイトさん執務官なのに・・・・」
キャロとしては既に執務官となっているのだからわざわざ士官学校へ行く理由が分からなかった。
「もう一つの地球で過ごして色々と思う所があってね・・・・ティアナも私と同じでもう一つの地球に残ったんだよ」
語れば長くなりそうなので、一言で片付けるフェイト。
「それで、キャロ。今日はキャロに協力して欲しい事があるの」
「えっ?私に?何でしょう?」
「実はさっき、ユーノから連絡があって、アルザスの洞窟である壁画が見つかったらしいの・・・・」
「あ、アルザス・・・・」
フェイトの口から自分の生まれ故郷の名前が出て来てキャロの表情がやや沈む。
「キャロにとってアルザスにいい思い出が事は分かっているけど、話を聞いてほしい」
キャロの後見人を務めているフェイトはキャロの境遇を当然知っていた。
「は、はい・・・・」
フェイトの言葉にキャロは頷く。
キャロが何故、生まれ故郷の話を聞くのが嫌なのか?
それはキャロの生まれに関係していた。

第六管理世界アルザスのル・ルシエと言う土地でキャロは生を受けた。
そしてその地にて、彼女は竜を使役する巫女としての類い稀なる素質を持っていた。
しかし、『出る杭は打たれる』『触らぬ神に祟りなし』『危険の芽を摘む』これらの言葉に当てはまるかのようにその力を恐れた村の長老からキャロは集落を追放されてしまった。
新暦７１年に追放されたのだが、この時キャロは六歳の子供であった。
彼女の両親も村の長が決めた事は逆らえなかったのか、キャロと共に村を出る訳でもなく、まだ六歳と言う幼子であるキャロを捨ててその後、連絡も一切寄越していない。
尤もル・ルシエにおいて、ミッドチルダからの情報が遮断されている可能性もあり、キャロが管理局員として働いている事を知れば両親は連絡を寄越すかもしれないが、一方で生活苦であった場合、捨てた自分の子供に生活費の援助を頼むかもしれない。
何せ長老の命令とは言え、キャロの両親は六歳の我が子を捨てたのだ。
集落でも肩身の狭い思いをしているに違いない。
両親も近所の人たちから我が子を捨てた毒親として白い目で見られているかもしれないが、キャロ本人はもっと悲しく苦労したのだから、肩身が狭い生活を強いられるのも両親の自業自得である。
故にキャロにとって、アルザスは自身の生まれ故郷ではあるが、同時に悲しく辛い過去のある世界なのだ。
「それでアルザスにある洞窟で、壁画が見つかったんだけど・・・・」
「壁画・・・ですか？」
「うん。それでその壁画に描かれている竜がヴォルテールにそっくりみたいなの」
「えっ？ヴォルテールの壁画!?」
ヴォルテールと契約して、アルザスである一定期間過ごしたキャロもまさか自分の使役獣の壁画があるなんて知らなかった。

「それでユーノの知り合いの大学教授がその洞窟で見つかった壁画の画像を持っているみたいで、キャロの意見を聞きたいって言っているんだけど、キャロに協力して欲しいの・・・・」
「・・・・」
キャロは暫し考え込む。
「私自身もその壁画とヴォルテールの関係性は気になっている。もしかしたら、今後キャロの将来に何か関係してくるかもしれないから」
「わ、分かりました。協力します」
幼いときに故郷を追放された悲しい過去があるが、その後フェイトやエリオを始めとする大勢の出会いを経験して今の自分があり、キャロは今の環境に満足している。
それが今後、何かに巻き込まれ今の生活環境が大きく変化するかもしれない。
そうなる前に打つべき手は打っておかなければならない。
そうした未来への不安からキャロは今回の件について協力することにした。
その後、キャロとフェイトは日程調整を行いフェイトの休校日に合わせてキャロがポルテから一時的にミッドチルダへと戻り、二人でユーノの知り合いが居るとされる大学へ行く事になった。
「ごめんね。キャロ・嫌な事を思い出させちゃって・・・・」
「いえ・確かにアルザスでの出来事は辛くて悲しい事でしたが、今の私はあるのはそんな過去を経験して乗り越えた結果ですから・・・・もし、故郷を追放されなかったらフェイトさんやエリオ君とも会えなかったですし・・・・」
「キャロ・・・・」
「では、ミッドで会えるのを楽しみにしています」
「うん。私もだよ、キャロ」
キャロとの通信を終えたフェイトは再びユーノへ連絡を入れて、日程を組んだのだった。
それから暫くして・・・・
士官学校の休校日、フェイトの姿は次元航行船の発着乗り場にあっ

た。
「あっ、キャロ!!」
「フェイトさん!!」
到着口の近くにてフェイトは待ち人であるキャロの姿を確認すると声をあげる。
キャロの方も自分を迎えに来てくれたフェイトに声を上げて駆け足で彼女の下へと向かう。
ただ同僚であるエリオの姿はなかった。
確かにエリオはキャロの相棒ではあるが、今日用があるのはキャロであったので、エリオとキャロの使役獣であるフリードはポルテで留守番だった。
フリードは卵の時からキャロと一緒だったのだが、何か最近は自分よりもエリオと一緒に居る時間が多い気がするキャロであった。
「キャロ、元気だった!?大きく・・・・なった?」
モニター越しではなく実際に出会った頃と今日のキャロの身長はあまり変わっていない印象を受けたので、フェイトは身長の件に関しては疑問形になっていた。
「・・・いえ、身長は相変わらずです」
どうやらキャロはフェイトと最後に会った頃とは変わっていなかったようだ。
同年代のエリオはまぁ、男性と言う事で身長が伸びているが、キャロは相変わらず身長が伸びずにいる。
身長が伸びない自分と異なり、同性であるルーテシアの方は身長も胸も成長しており、キャロとしてはちょっとしたコンプレックスとなっている。
(そう言えば、チンクも身長に関しては何か悩んでいたな・・・・)
今は士官学校の同期であるチンクもノーヴェやディエチ、ウェンディの姉なのだが、身長が反比例して一番低い現実に対してキャロ同様コンプレックスを抱いている事をフェイトは士官学校での生活で何度か目撃した事があった。
キャロとチンクにとって身長の話題は地雷みたいだ。

その後、フェイトとキャロはユーノの知り合いが居るとされる大学へと向かった。
本音を言えば、久しぶりに会ったキャロとショッピングや食事をしたかったが、今日の主目的は大学教授と会い、アルザスの洞窟で見つかった壁画の意見交換なので、キャロとのお出かけはソレが終わった後だ。
恐らくキャロ本人もフェイトと同じ気持ちなのだろうが、自分の未来に関係するかもしれない事なので、まずは大学での仕事を終えてからフェイトと出かけようと決めていた。
「あっ、フェイト!!」
大学の校門ではユーノが待っていた。
「あっ、ユーノ!!」
「君がキャロちゃん？」
「は、はい。キャロ・ル・ルシエです」
ユーノとキャロは何気に今日が初代面でであった。
六課が稼働している中、なのはとはホテルアグスタで会ったりしたが、六課のＦＷ陣とは会ったり交流したりはしていなかった。
「僕はユーノ・スクライア。今日はわざわざ来てくれてありがとう」
「い、いえ、私で良ければ・・・」
「この大学に勤めている教授は僕の知り合いでね。考古学に情熱を傾けるちょっと変わり者だけど、怖くはないから緊張しなくても良いし、壁画について何も分からなくても構わないから」
「は、はい」
「それじゃあ、行こうか」
ユーノはフェイトとキャロをランティスの研究室まで案内した。
「教授、先日お話をしたアルザスの出身の方を連れてきました」
「ご苦労様、スクライア君。そしてようこそ、我が研究室へ!!私はこの大学で考古学を教えているランティス・スピアーノです」
「初めまして、キャロ・ル・ルシエです」
「キャロの後見人を務めているフェイト・テスタロッサ・ハラオウンで

す」
「よろしく」
「それでスピアーノ教授、早速ですが、キャロに見せたい壁画と言うのはどんな壁画なのでしょう？」
「ふむ、では早速見てもらおう。見やすいようにそこのスクリーンに投影する」
　ランティスは部屋の電気を消し、暗幕カーテンを敷くと研究室は暗くなるが、パソコンとスクリーンを作動させると青白い光が灯り、やがてスクリーンには例の壁画が映し出される。
「これがアルザスの洞窟で見つかった壁画だ」
「これは・・・・」
「・・・・」
　壁画に映し出された壁画には確かにキャロの使役獣の一体であるヴォルテールにそっくりな竜が描かれて来た。
　その姿にフェイトは驚き、キャロ本人は唖然としていた。
「どうだろう？この竜に見覚えはないかい？」
「こ、此処に描かれている竜の内、一体は間違いなく私の使役獣であるヴォルテールで間違いありません」
「そうか・・・・」
　キャロは壁画に描かれている竜の一体はヴォルテールで間違いないと断言する。
「それで、一体はヴォルテールで間違いないとして、もう一体の竜について何か知っている事はないかい？」
「うーん・・・・」
　キャロはヴォルテールと対を成すように描かれているもう一体の竜をまじまじと見るが、
「いえ、この様な姿の竜は見たことはありません。そもそもこの様な壁画がある事、事態今日初めて知りました」
「そうか・・・・」
　もう一体の竜についてキャロは身に覚えがなかった。
　キャロが見た事も無い竜ならば当然、フェイトも見たことが無い。

「それともう一つ、この壁画には二体の竜の他に文字らしきモノも描かれていたんだ」
　ランティスはパソコンを操作して壁画の画像をズームして竜以外に文字らしきモノが描かれている部分を大きく見せる。
「アルザスの洞窟で見つかったからアルザスの文字だろうと思い、私はアルザスにある様々な地方の文字を調べた・・・君の生まれ故郷であるル・ルシエの文字もだ・・・しかし、どの地方にもこのような文字は存在していなかった・・・この文字については何か分かる事はないかい？」
「この文字は死滅した古代のル・ルシエ文字です」
　もう一体の竜については見覚えがなかったキャロであったが、文字らしきモノについては見覚えがあった。
「古代ル・ルシエ文字・・・しかも死滅した・・・」
「なるほど、私が調べたのはアルザスの現代語ばかりだったからヒットしなかったのか・・・」
　ランティスは自分が解読できなかった理由を知り、納得した様子。
「それで、キャロ。貴女はこの文字は読める？」
　フェイトがキャロにこの死滅した古代文字を読むことが出来るかを問う。
「うーん・・・」
　キャロは昔の記憶を掘り起こす。
　キャロがル・ルシエに居たのは僅か六年間と言う極めて短い期間であり、この文字見たのも自分の家にあった古い古文書であり、その古文書自体も全てを読んだ訳ではない。
（あれ？何だかこの絵を見ていると頭がボォっとしてくる・・・）
　しかし、この壁画を見ていると何だか意識が遠のいていく様な感覚となっていく。
「・・・」
「キャロ？」
　キャロの様子が何だか変な事にフェイトは気づき、声をかけるもキャロはボォッとしているように見えた。

やがて、キャロの目から光が消えると彼女は徐に口を開いた。
「アルザスの守護竜ヴォルテール・・・その大いなる力を持ちアルザスの民を守護するモノなり・・・」
「えっ？」
「キャロ？」
突然言葉を走ったキャロにユーノ、ランティス、フェイトは唖然とする。
「アルザスの破壊竜ヴォルデモート・・・アルザスに災いを齎す者を青き破壊の光によって滅ぼすモノなり・・・」
「ヴォルデモート・・・それがこのもう一体の竜の名前か・・・」
「キャロ、本当に大丈夫？」
「えっ？」
フェイトに再び声をかけられてキャロはハッと正気を取り戻した様子。
「わ、私・・・今、何を・・・」
キャロには先ほど発した言葉を全く覚えていない様だ。
「キャロ、貴女覚えていないの？」
「えっ？私、何かしたんですか？」
「・・・」
キャロの返答にユーノとランティスは先ほど自分たちの目の前で起きた事に説明できず、唖然としている。
「えっとね、キャロ・・・」
フェイトがついさっき、キャロに起きた出来事を彼女に話す。
「私がそんなことを・・・」
フェイトから話を聞いたキャロだが、やはり覚えていない様だ。
「それで、さっきキャロの話の中に出て来た破壊竜ヴォルデモート・・・この名前に聞き覚えはない？」
「破壊竜・ヴォルデモート・・・いえ、ありません」
先程の出来事同様、ヴォルデモートの名前にも心当たりはない様だ。
「でも、破壊竜って何か物騒な名前ね」

「さっきのキャロの言葉から敵対者を破壊して排除する様な内容だったな・・・」
「ヴォルテールを盾とするなら、ヴォルデモートは剣か矛と言う感じかな」
「キャロがヴォルテールを使役獣として契約している様にヴォルデモートも誰かと契約して使役獣となっている可能性はないだろうか？」
　ランティスはヴォルテールが既にキャロの使役獣となっている経緯からヴォルデモートもアルザスに住む現地の召喚魔導師が使役獣として契約している可能性を示唆する。
「どうでしょう・・・少なくとも私はル・ルシエの集落に居る時、集落に居る人たちの中にはそのヴォルデモートと契約をした人は居ないと思います」
　そんな強力な竜を自分以外に使役獣として契約している者が居れば、自分は集落から追放されることはなかっただろう。
「キャロが生まれる前とかは？」
「いえ、それも無いと思います。もし、そんな強力な竜を使役獣として契約した人がル・ルシエに居たとしたら集落で噂になりますから・・・私はそんな噂を聞いた事がありません。もっとも私が追放された後の事は分かりませんが・・・」
「ふむ、となると実際にアルザスに住む人たちに聞き取りをした方が良いだろうか？」
「でも、教授。教授にはやるべき仕事が沢山あるでしょう。それにヴォルデモートの件については若干考古学からかけ離れていませんか？」
「う、うむ。そうだな・・・」
　ユーノの指摘を受けて口ごもるランティス。
「でも、教授の言い分も分からない訳じゃないかな」
「えっ？」
「フェイト？」
「ヴォルテールの力はＪＳ事件でも証明済みでしょう？」

「あ、ああ・・・」
「うん」
「勿論ルーテシアの白天王もそうだけど、きっとそのヴォルデモートも凄い力を持った竜である事は間違いない筈だよ」
　壁画に描かれているヴォルデモートはヴォルテールとほぼ同じくらいの大きさで描かれている事からヴォルデモートもヴォルテールや白天王と同じ大きさだと推察される。
「まぁ、キャロの言葉通りなら・・・」
「もし、そんな強力な力を持った竜の契約者がテロリストとかだと・・・」
「その竜の力がテロ等の破壊活動に使われるかもしれない・・・と？」
「うん。この件についてはクロノやはやてにも伝えるけど、いいかな？」
　一見、眉唾みたいな話みたいではあるが、実際にヴォルテールが存在しているのだから、ヴォルデモートも想像上の生き物とは言い切れない。
「そうだね。少なくともヴォルデモートが誰かの使役獣となっているのか、いないのかだけでも判明しておきたいね」
　ユーノもフェイトの意見に賛同する。
　ひとまずヴォルデモートの件については管理局が密かに調べる事になり、この日は解散となった。
「何だか大変なことになりましたね」
「うん。でも、キャロの将来に大きく関係する事じゃなくて良かったよ」
「そうですね」
「さて、まだ時間があるし、どこかに出かけない？」
「えっ？いいんですか？」
「うん。元々大学での用件が終わったらそのつもりでいたし」
　フェイトはキャロがポルテに戻る次元航行船の時間までキャロとの時間を楽しんだ。
　ショッピングモールで一緒に買い物をしてレストランで食事をし

た。
　勿論ポルテに居るエリオとフリードの為のお土産も忘れなかった。
「それじゃあ、フェイトさん。お元気で・・・今日は楽しかったです」
「私もだよ、キャロ。エリオにもよろしくね」
「はい」
　フェイトは次元航行船の発着乗り場までキャロを見送りに来て、搭乗口にてキャロと別れた。
　ポルテ行きの次元航行船の搭乗口へと消えていくキャロの後ろ姿を見ながらフェイトは寂しさを覚える。
　きっとキャロも同じだろうが、仕事がある以上文句は言えない。
　キャロを見送った後、フェイトは士官学校の寮へと戻ると早速クロノとはやてにコンタクトを取った。
「どうしたんや？フェイトちゃん」
「何かあったのか？」
「うん。実は今日ね・・・」
　フェイトは二人に今日、大学であった出来事を話した。
「ヴォルテールと対を成す存在か・・・」
「まさか、キャロの生まれ故郷にヴォルテール以外にそんな竜が居るなんてな・・・」
「一見信じられない話かもしれないけど、ヴォルテールはキャロの使役獣としてちゃんと存在している点を見ると対を成す存在である破壊竜ヴォルデモートも存在してる可能性は十分にあると私は判断するけど、二人はどう思う？」
「まぁ、確かにキャロのヴォルテールはＪＳ事件の時に見たけど・・・」
「そのヴォルテールの対を成す存在か・・・しかし、フェイトの言う通りヴォルテールの件を鑑みてもその破壊竜が居ないとも結論できないな」
「そ、そうやね」
「しかし、キャロのヴォルテール、ルーテシアの白天王は兎も角、今回のアルザスの壁画で分かった破壊竜・・・世の中には未確認ながらも巨大な使役獣となる竜や獣がまだまだ居ると言う事か・・・」

「それらの巨大な使役獣全てを管理下に置くは事実上不可能だろうね」
「せやね。せめてその巨大な使役獣の契約者が管理局との敵対者ではない事を祈るしかないわな・・・・現状は・・・・」
「一応、アルザスの駐在局員には現地調査をさせて、その破壊竜についての情報を集めてもらおう」
クロノは情報収集を行う旨をフェイトとはやてに伝える。
「そうだね。未確認ながらも分かっている事から調査していこう」
アルザスに駐在している局員たちにはご苦労な事だが、彼らは破壊竜ヴォルデモートについての調査をする事になった。

フェイトと次元航行船の発着乗り場で別れたキャロは自分が今赴任しているポルテ行きの次元航行船に乗り、ポルテを目指していた。
(今日は久しぶりにフェイトさんに会えて楽しかったなぁ・・・・)
(それにお出かけもしたし、ご飯も一緒に食べたし・・・・)
(お土産、エリオ君とフリード喜んでくれるかな?)
(・・・・それにしてもヴォルテールの他にアルザスにはあんな竜が居たんだ)
今日一日でフェイトとの再会の他に様々な出来事がありキャロにとっては慌ただしい日であった。
ミッドチルダからポルテまでは半日はかかるので、ポルテに着くのは明日になり、今日の夜は次元航行船の船室で過ごす事になる。
(ポルテに着くのは明日になるし、今日は疲れた)
(夕ご飯食べてお風呂に入ってもう寝ちゃおう)
キャロは急ぎ船のレストランで食事を済ませ、船室に備え付けのシャワーを浴びるとベッドの中に潜り込んだ。
ベッドの中に潜り込むとキャロが思っていた通り身体は疲労が蓄積していたのか彼女は直ぐに眠りについた。

(ああ、これはきっと夢だ・・・・)
キャロはこれが夢の中であると自覚できた。

何故ならば彼女の眼前に広がる光景は生まれ故郷であり追放されたル・ルシエの集落だったからだ。
周囲の光景は鮮明に広がっているのに・・・
「なんで・・なんでお前なんかがヴォルテール様に選ばれるんだ!!」
自分に対して声を荒げている人物の顔はモヤがかかっているかのようで思い出せない。
「たまたま竜の卵を見つけて、魔力レベルが高いからって調子に乗るなよ!!」
「大体前からお前は気に入らなかったんだ!!」
「俺は将来この村を導く者なんだぞ!!」
目の前に居る人物は自分に対して罵声を浴び続ける。
「お前なんかこの村で暮らせないようにしてやるからな!!」
その言葉が決め手になったかのようにキャロは眼を覚ました。
「っ!?」
(な、なんであんな夢を・・・)
目を覚ましたキャロの目に映っているのはポルテ行きの次元航行船の船室でありル・ルシエの集落ではない。
(昨日、アルザスの話題が出たせいかな)
ランティスが務める大学にて、アルザスの話題で出たせいで、昔ル・ルシエの集落から追放される前の事を思い出して夢に見たのだろう。
(それにしても私に声を荒げていた人・・・一体誰だったんだろう?)
自分の事を知って、罵倒してきたのだから夢の中に出て来た人物は同じル・ルシエの集落出身者なのだろうが、顔にモヤがかかっていたようにその人物の名前も誰なのかも思い出せない。
夢の中で罵倒されていたようにきっと自分はその人物に対して好印象を抱いていなかったからこそ、無意識的にその人物を思い出したくないから顔にモヤが掛かっていたのかもしれない。
『まもなく本船はポルテに到着いたします』
キャロが夢について考え込んでいると、船内放送で船がもうすぐポルテに到着する放送が流れた。
「あっ、もう着くんだ」

放送を聞きキャロは下船準備を整えて船を降りた。
「あっ、キャロ!!おかえり!!」
「キュクルー!!」
隊舎に戻るとエリオとフリードがキャロを出迎えた。
「ただいま!!エリオ君!!フリード!!」
キャロは自分を出迎えたエリオとフリードに満面の笑みで答えたのだった。

百八十七話　敵輸送船団殲滅作戦

　此処で時系列は現在に戻し、視点はミッドチルダからバジウド星系へと移る。
　偵察機型のコスモタイガーからの報告で親ボラー派の輸送船団を発見した。
　その報告をバース星の防衛軍駐屯基地へ送るとガルマン・ガミラスより輸送船団への攻撃要請がきた。
　ただ八雲一隻だけでは護衛艦船も居る為、キツイと言う事からガルマン・ガミラスからは次元潜航艦が援軍として派遣されることになった。

　八雲　艦橋
「会合地点は此処か？」
「はい。バース星から送られて来た座標はこの宙域です」
「・・・レーダーに反応は？」
「ありません」
「・・・・」
「艦長、早く会合しないと輸送船団との距離が開いてしまいます」
「・・・あと五分待ってこなければ我々で対処するしかない」
　瓢はこれ以上の時間のロスは輸送船団との距離の問題が発生する為、会合に時間制限を設け、その時間を過ぎたら八雲一隻で輸送船団に対処する事にした。
「・・・あっ、亜空間ソナーに反応!!」
　会合する艦艇が次元潜航艦と言う事でレーダー以外に亜空間ソナーを使い周囲の様子を探査していた。
　すると亜空間ソナーに反応があった。
「戦術長。波動爆雷の用意だ」
「波動爆雷ですか？ですが、ソナーに反応しているのは会合予定の次元潜航艦かもしれませんよ」

「油断は禁物だ。ボラーにも次元潜航艦は存在しているのだからな」
「りょ、了解」
瓢の言う事も尤もであったので、ティアナは波動爆雷の準備を進めた。

一方、八雲近くの亜空間では潜望鏡からその様子を窺っていた人物が居た。
「ほぉ～瞬時に臨戦態勢をとったな」
「バース星からの報告では地球の艦船でも試作型の艦みたいです」
「艦が試作でもああして、我々の存在を確認した後、すぐに臨戦態勢を取ったと言う事はなかなか優秀な人物が指揮を執っているのだろう。浮上だ!!」
「了解。メンタンブロー」
亜空間に潜んでいた次元潜航艦は通常空間に浮上した。

八雲　艦橋
「亜空間より次元潜航艦、浮上!!」
「艦影はガルマン・ガミラスのＵＸ型次元潜航艦です」
「会合予定の次元潜航艦か・・・・」
「援軍を寄越したのは良いが、それでもたった一隻か・・・・」
「他の次元潜航艦の反応はないか？」
亜空間に他の次元潜航艦の反応が無いか瓢は観測員に訊ねるが、
「いえ、亜空間ソナーに反応はありません」
亜空間に浮上した次元潜航艦以外に次元潜航艦が居るかもしれないと思ったが、どうやら本当に援軍に来たのは浮上した次元潜航艦一隻だけの様だ。
「浮上した次元潜航艦より通信が入っています」
「うむ、繋いでくれ」
「了解」
八雲に次元潜航艦から通信が入り、通信士は通信回路を開く。
すると八雲艦橋にあるメインモニターに次元潜航艦の乗員らしき

人物の姿が映し出される。
『ＵＸ―２３４艦長のクロイツ・ストロネストロです』

援軍として来たガルマン・ガミラスの次元潜航艦の艦長はガルマン・ガミラス星人特有の青い肌ではなく、地球人と同じ色の皮膚の色をしていた。
ストロネストロの姿を見て一瞬、唖然とする八雲の艦橋部の乗員たち。
「ストロネストロ艦長、私が八雲艦長の瓢仁です」
とは言え、向こうが挨拶をしたのだからこちらも挨拶をしなければ失礼だ。
瓢はストロネストロに自らの役職と共に自己紹介をする。
『よろしく、瓢艦長。ん？ああ、もしかして私がガルマン・ガミラス人と皮膚の色が異なると疑問にお思いでしょうか？』
「ええ、まぁ・・・」
ストロネストロは瓢を含む八雲の乗員たちが抱いていた疑問に気付き、その訳を話し始める。
『私たちの母星である惑星国家ゼスはガルマン・ガミラスの同盟国なのです。よって本艦を含め、ゼスで使用している宇宙艦艇についてはガルマン・ガミラスからの供与がありましてね』
「そうですか・・・」
（なるほど・だから青い肌ではなく、私たちと同じ肌の色だったのか・・・）
ストロネストロの説明を聞き納得する一同。
「それで、早速ですが親ボラー派の輸送船団についてですが・・・」
『バース星の基地から報告は受けております。敵輸送船団の位置については、我が軍が展開しているスパイ衛星により位置は掴んでおります。予想航路と現在位置はそちらに送ります』
「ありがとうございます。ストロネストロ艦長」
『では、お互いに頑張りましょう』

親ボラー派の輸送船団の予想航路と現在位置の情報が八雲に送られてくると八雲は輸送船団の予想航路へと向かい、ＵＸ―２３４も亜空間へ潜航して現場へと向かった。

親ボラー派　輸送船団　ヴォルグ　艦橋

「・・・・」

ヴォルグの艦橋ではナタレンコフが神妙な顔つきで眼前の宇宙空間を見ていた。

「ナタレンコフ隊長、どうしました？」

心配になった副官が声をかける。

「先ほど接敵した例の偵察機の動向がどうも気になってな・・・・」

「ああ・・・・確かに迎撃に向かわせた艦載機も戻りませんしね」

「あの偵察機には我々が輸送船団と言う事もバレているだろう・・・・もし、母艦に戻って報告をされたら・・・・」

「ガルマン派の艦隊が来るかもしれない・・・・と・・・・？」

「ああ・・・・各艦に通達。周囲の警戒を怠るな。輸送船にも同様の命令を通達しろ。それと陣形も輸送船を中心に護衛の艦は船団の周囲を固めるのだ」

「はっ!!」

副官はナタレンコフの命令を各艦、輸送船すべてに通達した。

しかし、ナタレンコフの不安は直ぐに的中にすることになる。

「我が船団に接近する物体アリ!!」

「なにっ!?まさかまた例の偵察機か!?」

「いえ、レーダーの反応から戦艦ないし大型の巡洋艦かと思われます!!」

「数は!?」

「一隻です!!」

「一隻だと!?間違いないか!?」

「はい!!」

「くっ、一隻とは我々も随分と舐められたモノだな・・・・」

「いかがなさいますか？ナタレンコフ隊長」

「輸送船団は散開し、護衛艦船は戦闘用意!!返り討ちにするぞ!!」
「了解!!」
警戒態勢をしていた親ボラー派の輸送船団であったが、八雲の存在を探知すると、八雲を迎え撃つために非武装の輸送船を散開させて護衛にあたっている武装艦を集結させた。

ボラー連邦護衛艦

八雲　艦橋
「前方に艦隊反応・・・間違いありません。例の輸送船団です」
「数は？」
「輸送船・護衛の船を合わせて約三十隻」
「針路このまま・・・戦闘用意」
「ん？船団に動きあり!!陣形を崩して散開しています!!」
「バレたか・・・戦術長」
「主砲射撃用意!!」
八雲の主砲が旋回し、仰角を上げる。
「撃ち方はじめ!!」
やがて八雲の主砲がショックカノンを放つ。
八雲の撃ったショックカノンは武装艦ではなく、散開していた輸送船に命中した。
八雲としてラッキーパンチであったが、相手にしてみればたまったものではない。
「十一時方向に敵の護衛艦!!」
「敵輸送船、空間煙幕弾を放ち、逃走を図る模様!!」
戦闘宙域はまさに混乱の渦となる。
「くそっ!!味方の護衛は何をやっているんだ!!」
八雲のラッキーパンチを受けた輸送船の乗員たちの一部は運よく

脱出ポッドにて、爆沈した輸送船から脱出するが、
「えっ？」
「み、味方の護衛艦が!!」
脱出ポッドに向かって味方の護衛艦が突っ込んでくるとミサイルを多数放つ。
その内の一発が近くに居た脱出ポッドに命中する。
フレンドリーファイアを行った護衛艦が放った残りのミサイルは八雲へと迫っていく。

八雲　艦橋
「敵ミサイル三発、接近!!」
「別方向へ囮ミサイルを放て!!」
「面舵一杯!!」
八雲は迫るミサイルに対して囮ミサイルを使い別方向へと向け、更に船体を右舷側に向ける。
「輸送船の陰から別の護衛艦!!」
「主砲発射!!」
撃沈した輸送船の陰から護衛艦が現れる。
八雲は主砲を放ち、敵の護衛艦も主砲を撃ってくるが、敵の護衛艦は速力を上げて八雲の攻撃を回避する。
しかもその敵護衛艦は輸送船を盾にするかのように輸送船の横を通り抜けていく。
「あいつら、この船を盾にしやがった!!」
護られるはずの輸送船が護るべき護衛艦の行動により被害を受けているあたりこの護衛部隊の練度の低さが窺える。

ヴォルグ　艦橋
「ええい!!なに同士討ちをしておるか!!」
この味方の行動にはナタレンコフも憤慨する。
「たった一隻の敵艦にあんなにも取り乱しおって!!」
「た、隊長!!」

「なんだ!?」
「敵艦が前に!!」
「なにっ!?」
　ナタレンコフの眼前には八雲の艦影があった。
「お、面舵一杯!!」
「面舵一杯!!」
　ヴォルグは迫る八雲をギリギリで回避する。
　八雲が親ボラー派の輸送船団相手にドンパチを行っている中、この宙域の亜空間では・・・・

　ＵＸ－２３４　艦橋
「上は派手にドンパチと賑やかだ・・・・我々は八雲が追い散らした獲物を狩るぞ!!魚雷戦用意!!」
「了解!!」
　亜空間からの襲撃者の牙も親ボラー派の輸送船団へ向こうとしていた。

　ヴォルグ　艦橋
「反転!!敵艦を追え!!」
「た、隊長？」
「このまま奴、一隻にこれ以上滅茶苦茶にされてたまるか!!アイツさえ沈めれば・・・・」
　ナタレンコフとしても味方・特に輸送船をこれ以上失ったり、傷つける訳にはいかない。
　輸送する物資が少なくなればなるほど、反ガルマン派の同志の戦況は悪くなるのだから・・・・

　八雲　艦橋
「敵の護衛旗艦らしき艦、反転します!!」
「あの艦だけ形状と大きさが他の護衛艦と大きく違うと思っていたけど、やっぱりアイツが親玉みたいね」

（アイツさえ沈めれば、敵輸送船団は指揮系統を失い更に混乱する筈・・・）
「敵旗艦、左舷上方より発砲!!」
「右舷へ回避!!」
八雲は右側に船体を捻りヴォルグの攻撃を躱すが。左舷側に敵のショックカノンが掠った。
「三番砲塔撃て!!」
八雲も後部にある三番主砲で応戦する。

ヴォルグ　艦橋
八雲の反撃を受け、ヴォルグは船体下部中央あたりに被弾する。
被弾の衝撃で艦橋は大きく揺れる。
「うおっ!!」
「うわっ!!」
「船体下部中央に被弾!!」
「機関、推進力に影響が!!」
「くっ、なかなかやる・・・」
反撃を受けナタレンコフは悔しさに顔を歪ませる。

八雲　艦橋
「推力上昇!!上げ舵一杯!!今度は本艦が敵の後方上部へつけろ!!」
「了解!!」
瓢の指示を受け、八雲の航海長は操艦レバーを目一杯手前に下げて艦を持ち上げる。
そして大きく旋回してヴォルグの後部上方につける。

ヴォルグ　艦橋
「敵艦、本艦の後部上方に居ます!!」
「こちらも反転し、艦首を奴の正面に向けろ!!」
ヴォルグはスラスターを吹かし、艦首を上方から迫る八雲へと向ける。

「主砲撃て!!」
回頭を終えるとヴォルグは八雲へ主砲を撃つ。
しかし、八雲は今度、回避行動をとらずにヴォルグへと突っ込んできた。
「な、何て奴だ!?かわさずに突っ込んでくるとは!?」
八雲の行動にナタレンコフは驚愕する。
ヴォルグは主砲を撃ったが、八雲はヴォルグに向けてミサイルを放つ。
「ミサイル、高速接近!!」
「右方向へ回避!!躱したら直ぐに反撃に移る!!」
ヴォルグは右方向へ船体をずらし、ミサイルを回避するが、
「あっ!!またミサイルです!!」
「しまった!!こちらの回避行動を読まれていたか!?全力加速!!」
ヴォルグの回避行動を読んだティアナは最初のミサイルを囮にして本命のミサイルをヴォルグが回避するであろう方向へ放っていた。
ナタレンコフは、方向転換は既に間に合わないと判断し、このままの針路で速力をあげてミサイルを回避しようとしたが間に合わず、ミサイルはヴォルグの後部に多数命中した。
やはり最初の被弾時に機関部に影響が出ていた事が致命的であった。
「わああっ!!」
最初のショックカノンの命中よりも更に大きな衝撃がヴォルグ全体を襲う。
その衝撃でナタレンコフも指揮席から放り出される。
「ウっ・・・お、俺としたことが・・・」
指揮席から放り出され身体を打ち、痛みを我慢しつつ起き上がるナタレンコフであるが、身体の痛みよりも此処まで手酷くやられた事の方が悔しくその怒りが勝っている状態となっている。
「ひ、被害は・・・?」
起き上がり、艦の被害状況を訊ねる。
自分以外の艦橋員たちも席から放り出されている者たちが居た。

「機関部被弾!!推進力が低下しています!!」
「艦のコントロールも不安定です!!」
「くっ・・・生きているスラスターを使い、何とかして艦首を奴にもう一度向けろ!!体当たりをしてでも奴を仕留める!!」
「りょ、了解・・・」
「このままむざむざやられる俺ではないぞ・・・」
ナタレンコフは刺し違えても八雲を沈める覚悟でいた。

八雲　艦橋
「ミサイル第二波、敵艦後部に命中!!機関部に損傷を与えたと思われます!!」
「敵艦態勢を整え。再び本艦に艦首を向けています!!」
「敵も最後の勝負に出たか・・・砲撃用意!!目標、敵護衛旗艦!!」
「了解!!砲撃用意!!目標、敵護衛旗艦!!」
八雲の第一、第二主砲がヴォルグへと向けられる。
そして、二隻はほぼ同時に主砲を放つ。
ヴォルグの主砲は八雲の波動砲と左舷の船体部に命中する。
「うわぁっ!?」
「きゃっ!!」
「くっ・・・」
敵の主砲が命中したことにより八雲の船体は大きく揺れる。
一方、八雲が放った主砲はヴォルグの艦首にある艦載機の発進口の中と艦橋部に命中した。
艦橋部の命中により、ナタレンコフを含め艦橋の乗員全員が戦死し、艦載機の発進口に命中したショックカノンは、格納庫にあった艦載機のミサイルや爆弾、燃料に引火して大爆発を起こし、ヴォルグは轟沈した。
「敵旗艦の轟沈を確認!!」
「艦の被害状況は!?」
「左舷船体部と波動砲付近を損傷!!」
「艦長、念のため、波動砲の使用は控えて下さい!!」

波動砲付近に被弾し、装甲板が変形したかもしれないので、波動砲を撃てば不具合が起きる可能性があるので、ティアナは瓢に波動砲の使用を控えるように進言した。
と言ってもこの混戦状態で波動砲を撃つ余裕もないのだが、念のためである。
「うむ、諸君、敵の旗艦は撃沈できたが、敵はまだ残っている。波動砲と言う切り札が封じられてもまだまだ本艦の戦闘能力は残されている。戦いはまだ続くぞ!!最後まで油断せずに行くぞ!!」
「はい!!」
「了解!!」
瓢は艦長席より乗員たちを鼓舞し、乗員たちもそれに応えるかのようにキビキビと動くのだった。

ヴォルグと八雲が戦っている時、他の護衛艦がヴォルグの援護に回らなかったのは、二隻が戦っている中、亜空間からの刺客が輸送船団に襲い掛かっていたからだ。

ＵＸ－２３４
「艦首魚雷発射管、一番から六番まで装填!!」
ＵＸ－２３４の艦長、ストロネストロも攻撃準備を行う。
「亜空間魚雷、一番から六番まで装填」
ＵＸ－２３４の艦首部にある魚雷発射室では亜空間魚雷が魚雷発射管へ自動装填されていく。
「亜空間魚雷、一番から六番まで発射準備完了!!」
「潜望鏡を出せ」
ストロネストロは潜望鏡で敵との距離と方向を確認して、諸元入力をさせる。
「発射!!」
「発射」
ＵＸ－２３４から亜空間魚雷が輸送船団に向けて発射される。
八雲とヴォルグが一騎打ちに近い形で戦っているので、護衛艦は

ヴォルグを援助しようとしたら、突如どこからか魚雷が迫り、輸送船、護衛艦の船体に命中する。
「魚雷だ!!」
「どこから来たんだ!?」
「敵艦はヴォルグと戦っている筈なのに・・・」
どこからともなくやって来た魚雷に親ボラー派の将兵たちは困惑する。
「第一波命中・・・続いて第二波、発射用意。それと次は魚雷と共にミサイルも撃て」
「了解」
ストロネストロは次に魚雷の他に艦首上面にあるミサイルでの追加攻撃を下令する。
ＵＸ－２３４が護衛艦の相手をしていたので、八雲はヴォルグとの戦いに集中できたのであった。
「艦長、地球艦がどうやら護衛艦隊の旗艦を沈めたみたいです」
「ほぉ～地球の艦もなかなかやるではないか。我々も負けてはならぬぞ。あの輸送船団の艦、全てを喰らいつくす勢いでゆくぞ!!」
『おう!!』
ヴォルグの撃沈は親ボラー派の輸送船団にしては士気を低下させ、逆に八雲とＵＸ－２３４の士気を上げる結果となった。
旗艦が撃沈され、通常空間からは見えない亜空間からの魚雷とミサイル攻撃で親ボラー派の輸送船団は反恐慌状態となり、隊列も秩序もあったものではなく、非武装の輸送船は逃亡を開始し、護衛艦も逃亡する艦、旗艦の敵討ちだと言わんばかりに八雲へ戦いを挑む艦など戦場は大混乱となる。
「逃げる艦は放っておけ、まだ交戦して来る敵艦のみ攻撃しろ!!」
瓢は逃げ散る敵を追いかけてはＵＸ－２３４との連携が難しくなると判断したからだ。
八雲は交戦意思がある親ボラー派の護衛艦を片っ端から撃ち落していく。
敵の護衛艦は被弾しコントロール不能となり、味方と衝突する艦も

あった。
　その内の一隻が火を噴きながら体当たりで八雲へ突っ込んで来た。
「あ、危ない!!」
「航海長!!取舵一杯!!」
「と、取舵一杯!!」
　八雲の航海長が必死に操艦し、回避行動に移る。
　しかし、八雲の懸命の回避行動もむなしく、敵の護衛艦は八雲の横っ腹に激突し、敵艦の艦首部が八雲の船体に突き刺さった。
　敵の護衛艦の衝突で八雲は被弾した時よりも大きく船体が揺れた。
　八雲の横腹に食い込んだまま、敵の護衛艦は猛煙に包まれ爆発が続いている。
「うわぁぁぁぁぁぁ!!」
「ぐぁぁぁ!!」
　敵護衛艦の艦橋は爆発に巻き込まれ、天井部分が崩落し艦橋員たちはその瓦礫の下敷きとなっていく。
「しょ、諸君、良く戦った・・・そ、祖国万歳・・・」
　そして、護衛艦の艦長も瓦礫に飲み込まれた。
　八雲の艦橋では非常事態を示す赤色灯が灯り、艦内には警報が鳴り響いている。
「左舷、中央部に敵艦、艦首追突!!」
「後部連絡通路破損!!」
「艦尾ミサイル発射室炎上中!!」
「技術班、第一戦闘武装にて現場に急行!!衝突部の隔壁は緊急閉鎖!!敵艦を切り離せ!!」
「艦尾ミサイル発射室、緊急消火装置を作動させろ!!」
「艦内戦闘用意!!戦闘班も第一戦闘武装で技術班と共に現場に急行せよ!!」
「医療班、生活班は負傷者の救助と応急手当てを!!」
　表の戦闘は終わったが、敵艦の突入と言う事態に艦橋を含め、八雲の艦内はてんやわんやの大騒ぎであり、そんな中で衝突した敵艦の乗員たちが八雲に白兵戦を仕掛けてくる可能性を考慮してティアナは

戦闘班にも武装をして現場に向かわせる。
「艦長、私も現場に向かいます!!」
「うむ、頼んだぞ」
「気を付けてね、ティアナ」
「はい!!」
　そしてティアナもヘルメットを被り自らも現場に行く旨を伝え、腰にあるホルスターからコスモガンを抜き、敵艦の衝突現場に向かった。
　敵艦との衝突現場では、既に八雲と敵護衛艦の乗員たちとの銃撃戦が繰り広げられていた。
　敵の艦種が護衛艦で追突するまでに乗員の大半が既に戦死、もしくは負傷していた事で八雲の艦内に侵入して来た敵の人数はそこまで多くなかったのが幸いした。
「負傷者の退避を優先に!!戦闘班は技術班と医療班を援護!!」
　現場に到着したティアナは戦闘班の指揮を執りつつ白兵戦を繰り広げる。
　やがて、艦内に侵入してきた敵兵を全て倒し、
「艦長、侵入してきた敵は全て排除しました。現在、負傷者の集計と医務室へ運んでいます」
「御苦労だった。念の為、敵がまだ潜んでいないか周辺区画の探索を念入りに行ってくれ」
「了解」
　敵艦衝突現場から負傷者の移送が終わるまで、ティアナたちは敵兵の生き残りが居ないか探査を行う。
　そして、負傷者の移送と周辺探査が終わると、
「艦長、負傷者の移送及び周辺の探査終了。生き残った敵は確認できません」
「うむ、分かった。これより敵艦を切り離す。全員を現場から退避させよ」
「了解。これより敵艦を切り離す。この区画は完全隔離する。総員、退避!!」

ティアナは衝突現場に居る戦闘班と技術班は一時退避させる。
「機関室、直ちに制御スラスターを逆噴射、敵艦を切り離せ」
「了解」
戦闘と負傷者の移送、敵の残党の確認が済み、八雲は突き刺さった敵艦との切り離しを行う。
バキバキ・・・と、金属が擦れるような音と共に八雲に突き刺さった敵艦は離れる。
敵艦との距離を取ると敵の護衛艦は爆発をして消滅した。
「副長・・・」
「はい」
「・・・人的被害の確認を・技術班は応急修理を急げ」
「はい」
「了解」
ギンガは医務室へと向かい、負傷者たちの状況を確認する。
戦闘が行われた事で医務室は血塗れの負傷者で溢れていた。
(やっぱり、この光景だけは慣れないわね)
まほろば時代から戦闘で負傷者した乗員の手当ても手伝ったことがあるが、手当ての甲斐空しくそのまま戦死してしまう乗員たちも見て来た。
彗星帝国戦役の時はギンガも任官したてで要塞都市の攻略戦時は特に負傷者が続出していたことで今でも強烈に脳裏に焼き付いている。
あのような経験は管理局員ではほぼ体験することはないと思ったくらいだ。
ギンガも医療班と共に応急手当てに参加した後、医務長から人的被害についての結果を集計した。
「艦長、負傷者の集計、終了しました」
「そうか・・・それで、被害は?」
「・・・戦死者九名・・・重軽傷者十七名です」
「・・・分かった。ありがとう」
戦闘が行われたのだから被害は当然出る。

八雲の本格的な戦闘により、初の戦死者が出る結果となった。
先程までドンパチ賑やかな宇宙空間は、先ほどの戦闘が？のように静まり返っている。
八雲の前部上甲板には祭壇が設けられ、戦死者たちの身柄が納められた棺が置かれた。
整列している乗員たちの前でおごそかに宇宙葬が始まった。
瓢は艦長として弔辞を述べる。
「任務の為に命をかけ志半ばで斃れたた全ての勇姿に送る。君たちの心は我々の心に蘇り、明日の地球の力となるだろう。我々は決して君たちを忘れはしない・・・・忘れない・・・・」
「敬礼!!」
ギンガが号令をかけると乗員たちは戦死者に敬礼を捧げ、
「撃て!!」
ティアナの合図でビームライフルを持った戦闘班員たちが宇宙に向けて弔砲を放つ。
その中を戦死者が納められた棺を持った乗員たちが歩みを進め、次々と船弦から棺を宇宙空間へと流していく。
八雲の隣にはＵＸ－２３４が航行しており、その甲板には艦長のストロネストロ以下、十数名の乗員たちの姿もあり、彼らも敬礼して戦死者たちの棺を見送った。

宇宙葬を追え、技術班が傷ついた八雲の船体を応急修理している中、
「艦長、ＵＸ－２３４より通信が入っています」
「繋いでくれ」
『瓢艦長、任務ご苦労様でした。それと戦死者に対し、お悔やみを申し上げる』
「ありがとう。ストロネストロ艦長」
『当初の目的である敵輸送船団は大半を撃沈することが出来た。殲滅は残念ながら出来なかったが、上々の結果だろう。それで、貴艦は先ほどの戦闘で随分と損傷したが、今後の予定はどうなっている？』

「バース星での流行り病が沈静化するまでは哨戒任務を続けなければなりませんが・・・何分、敵艦が突き刺さった事と波動砲付近での被弾が致命的ですので、一度ドックで本格的な修理を行いたいところです」
『そうですか・・・それなら、我が母星ゼスにて修理補給を行ってはどうだろうか？』
　流行り病がまだ沈静化していないバース星に戻るより惑星ゼスで修理を受けた方が、乗員の健康面では安全である。
「よろしいのでしょうか？ストロネストロ艦長」
『ええ、あなた方は共に戦った戦友ですから』
「分かりました。御厚意に感謝いたします」
　こうして八雲はストロネストロの厚意により、応急修理と補給の為、ストロネストロたちＵＸ－２３４乗員の故郷である惑星国家ゼスへ向かうことにした。
　勿論、向かう前にバース星の司令部へ一報を入れる事も忘れはしない。
『そうか、初の哨戒任務で戦死者が・・・』
「はい。八雲の船体と波動砲にもダメージを負いました」
『まさかそこまでのダメージを負うとは・・・』
「そこで、今回作戦を共にしたＵＸ－２３４のストロネストロ艦長の御厚意により、惑星ゼスへ赴き、艦の補修を行いたいと思います」
『分かった。任務ご苦労だった』
　バース星の司令部からの了承を受け、八雲はＵＸ－２３４の案内の下、惑星ゼスへと向かった。
　八雲一隻が数日の間、哨戒任務から離れるのは正直支障をきたすかもしれないが、流石に壊れたままの八雲でバジウド星系の哨戒任務はキツイだろうと言う判断であった。
　それに八雲一隻でこのバジウド星系の哨戒を行っている訳ではない。
　ＵＸ－２３４の様に親ガルマン派の同盟国もあり、ガルマン・ガミラス東部方面軍も全てがボラー連邦領へ遠征に向かっている訳では

ない。
八雲が補修中、此処は彼らに頑張ってもらう事になるだろう。
ワープを行い八雲は惑星ゼスの近くまで進出した。
「前方に惑星反応・・・目的地の惑星ゼスです」
「あれが惑星ゼスか・・・」
「地球やイスカンダルみたいに青い星ね」
ギンガは惑星ゼスを見て、その青さから地球・イスカンダルと似た印象を受けた。
八雲は惑星ゼスへと降下して行き、ストロネストロが指定した艦船ドックへと着陸した。
バース星は極寒の星であったが、惑星ゼスは地球で言う所の沖縄の様な気候の星で一年を通して住みやすい温度の星であった。
海も宇宙から見た様に水平線へどこまでも続く青く澄んでいる綺麗な星であった。
「機関停止」
「ガントリーロックの固定を確認」
「各部総チェックを行え。特に波動砲部分と敵艦衝突部分は念入りに頼む」
瓢が艦内放送で修理作業を命じ、技術班を中心として八雲の乗員たちは修理と点検に入るのだった。

バジウド星系で八雲がイレギュラーに継ぐイレギュラーな任務を行っている中、ケンタウロス座アルファ星産のオスニウム鉱石を満載した輸送船の護衛でアルファ星から地球へ向かったまほろばは間もなく、地球へ到着しようとしていた。
「火星を通過した。通信長、輸送船団の現在位置と地球到着時間を防衛軍司令部へ報告せよ」
「了解」
良馬はギンガの後任で新たに通信長の役職に就いた武部沙織が防衛軍司令部へ通信を送る。

そして、輸送船団を無事に地球へ送り届けたまほろばはドックへと着陸し、輸送船はこの後に荷下ろしがあるので、指定された港湾地区へと着陸していった。
まほろばが着陸した隣のドックにはヤマトの姿があった。
「おっ、まほろばが帰って来たみたいだな」
ヤマトの整備をしていた真田がドックへ入港してきたまほろばに気づく。
「まほろばは最近、ケンタウロス座アルファ星を中心に活動をしていましたからね」
真田と共にヤマトの整備状況を確認していた艦長の古代もここ最近のまほろばの行動を思い出すかのように呟く。
「そう言えば真田さん。今更ながらなんですけど・・・・」
「ん？なんだ？」
「まほろばはどう言った経緯で建造されたんですか？」
古代は本人も言ったが、今更ながらまほろばの建造経緯が気になり、真田に訊ねた。
真田ならば、まほろばの建造経緯を知っていそうで、何ならその建造にも関わっていそうだからだ。
「本当に今更だな」
真田は苦笑しながら古代にまほろばの建造経緯を説明する。
「以前、アンドロメダの艦橋でアンドロメダの建造経緯を話したことがあっただろう？」
「ええ、確か『お偉いさんはヤマトの勝利を機械族の勝利と錯覚している』・・でしたっけ？」
「そうだ。まほろばの建造経緯もそれに似たようなモノで、『ガミラスに勝利した機械族のヤマト・・それを発展強化した艦こそ地球の新たなる守護神となるだろう』・・・・そんなコンセプトでまほろばの設計・建造されたんだ」
「でも、あの時の連合艦隊旗艦はアンドロメダが務めていましたよね？」
「そうだ。まほろばが建造されてから、途中でコンセプトが変わった

んだ」
「変わった？」
「ああ、『ヤマトの勝利のカギは波動砲であり、その波動砲を単発式から連装式に備えた艦の方が強いのではないか？』とな」
「確かにあの時の軍令部や政治家の連中なら考えていそうなことですね。それでアンドロメダ級を建造したんですね。でも、そうなるとまほろばの建造は中止になるんじゃあないんですか？」
「その時はまほろばは既に六割程建造されていたし、防衛軍としても軍の再建は急務だったからな。まほろばは連合艦隊旗艦の座に就くことはなかったが、建造されて月村が艦長になった訳だ」
「そんな経緯が・・・・」
古代は真田からまほろばの建造経緯を聞いて当時の政府・軍部の思惑に納得した。

まほろば　艦橋
「本艦は第二ドックへ到着しました」
「ガントリーロック固定確認」
「電源を機関から陸上電源へ切り替え」
「・・・・切り替え完了」
停泊準備が着々と進み、乗員たちは久しぶりの地球の地へ足を着ける。
「さて、俺も降りるか・・・・」
良馬は艦長と言う立場から一番最後にまほろばを降りた。
その際、良馬の視線の先に古代の姿が見えた。
「古代艦長!!」
「ん？ああ、月村艦長」
「ちょっと折り入って話したいことがあるので、少々お時間を貰ってもいいかな？」
「えっ？俺に？まぁ、いいですよ」
良馬は古代に話したいことがあったので、彼に声をかけたのだ。
古代から了承を得た良馬はドックの近くにあるファミレスに入る。

飲み物を頼み、注文した品が届くまで古代は若干気まずさを覚える。
（月村艦長が俺に話って一体何だろう？）
それと同時に良馬が自分に一体どんな話があるのかも気になった。
やがて注文した飲み物が来て、ウェイトレスが去っていくのを確認したら良馬が口を開いた。
「古代君は森さんといつ頃結婚するの？」
「ゴフッ!!・・・・ゴホッゴホッ」
良馬の質問に古代は飲んでいた飲み物を盛大に吹き、気管支に入ったのかせき込む。
「と、突然なんですか!?」
「いや、第二次イスカンダル遠征前に英雄の丘で飲み会をした時、結婚を延長するって言っていたけど、あれから数年が経つし、そろそろかと思って・・・・」
「・・・・」
良馬の言葉を聞き、古代は気まずそうに視線を逸らす。
「ん？どうしたの？」
「いえ、多分、雪も月村艦長と同じだと思います」
「ん？」
「その・・・俺との結婚について・・・本来ならば、俺と雪はとっくに結婚をして子供の一人か二人ぐらいはいたと思うんだけど・・・」
古代と雪は本来、彗星帝国戦役直前に式を挙げる予定であったが、アンドロメダ星雲より飛来してくる巨大彗星と謎のメッセージの解明から地球が新たな侵略者に狙われていると思い改装が終わったばかりのヤマトを半ば奪取するような形でメッセージの発信元であるテレザート星へと向かった。
その後、彗星帝国戦役後に二人は結婚を延期し、第二次イスカンダル遠征、暗黒星団帝国の地球襲来、太陽の核融合異常増進に伴う第二の地球探査とあまりにも色々な出来事がた手続きに起きた事で古代と雪の結婚は延期し続けている。
「何だか、結婚の事を具体的に考えようとすると必ず何か事件が起

こって・・・それも地球の存亡にかかわるような大事件ばかり・・・」
「なるほど、その様な経緯が重なると結婚に対して消極的になってしまうと・・・」
「はい。そう言う月村艦長の方はどうなんですか？」
「ん？」
「そろそろ身を固めなくていいのですか？」
「うん、実は話したいと言うのはその点であって・・・」
「えっ？」
「周囲で婚約者が居るのって古代君だけなんで、結婚のタイミングとか聞きたくてね」
「ああ、そういう事ですか・・・」
「うん。余談だけど、プロポーズの言葉やシチュエーションとかはどんな感じだった？」
「・・・俺が雪の事を異性と意識したのはガミラスとの戦いで地球を目前にしている時でした・・・あの時、デスラーは放射能ガスをヤマトの艦内に送り込んで白兵戦を仕掛けてきました。そんな時に雪はヤマトの艦内工場で造られたばかりのコスモクリーナーを作動させて放射能ガスを消しました。ただその副作用で周囲の空気まで消滅させてしまい、雪は仮死状態になりました」
「コスモクリーナーにそんな副作用が・・・」
「はい。雪が動かした事によって判明した副作用であり、後に真田さんが修正してくれました。ですが、あの時俺は雪が本当に死んでしまったのかと思いました。それと同時に雪の大切さと自分が抱いている雪への好意に気づきました」
　本当に大切なものは失ってはじめて気付く・・・そんな言葉の通り、古代は雪の大切さをあの時に思い知らされたのだ。
「それからヤマトが地球へ戻った後、俺は直ぐに雪に思いの丈をぶつけ、雪もそれに応えてくれました」
「なるほど、二人の間でそのような事が・・・」
　古代と雪の馴れ初めを真剣に聞く良馬。
「月村艦長の方はどんな経緯があったんですか？」

古代も当然良馬とギンガとの間でどんな経緯があったのかを訊ねて来た。
こちらが聞いて答えてくれたのに、答えないのは失礼にあたるので、良馬と古代に自分とギンガの馴れ初めに至る経緯を話し始めた。

百八十八話　結婚相談・ディエチの捜査

バジウド星系にて八雲が哨戒任務に就いている頃、アルファ星から鉱物資源を積載した輸送船団護衛を務めていたまほろばは地球へと帰還した。

地球へ帰還後、良馬はたまたま古代と出会いちょっとした人生相談に乗ってもらった。

現状、古代と良馬の立場が似ていたからだ。

共に戦艦の艦長であり、婚約者持ちと言う共通点が・・・・

良馬は古代と雪の馴れ初めを聞き、古代が雪との結婚になかなか踏み切れない事情を知った。

そして次は良馬の番となった。

「これから話す事だけど、決して第三者に他言しないでもらいたい。勿論、俺自身も先ほど古代君から聞いた馴れ初めは自分の胸の内に秘める」

「わ、分かりました」

古代も良馬に自分の馴れ初めを話した後で気づいたが、確かに自分たちの馴れ初めを他者に触れ回れるのは恥ずかしい。

きっと良馬もその類なのだろうと古代はこの時、そう思った。

「今のこのご時世だから言うが、俺の婚約者は地球人ではないんだ」

「えっ？」

「２１９９年の冥王星会戦は覚えているだろう？」

「はい・・・・あの時の戦いで兄さんは死んだと思っていましたから・・・・それに火星では島と一緒にスターシアさんの妹のサーシアさんの救助や宇宙船の調査を行ったりと色々と印象に残っていますから」

（姪も同じサーシアだからイスカンダルの風習ってややこしいな・・・・）

イスカンダル王家は代々襲名制なので、王家の女性はスターシア、サーシア、ユリーシャの名を代々継いできたので、古代が思っているようにややこしい。

話を戻して、２１９９年にあったあの冥王星会戦で防衛軍宇宙艦隊は壊滅するもイスカンダルからの使者がもたらした波動エンジンの設計図が地球を救う結果となった。
そして、死んだと思われていた古代の兄、守はイスカンダルで生きていた。
「そうか、あの時火星で合流した探査艇に乗っていたのは古代君たちだったのか？」
「はい」
「となると、君も多分見ただろう？火星付近の宇宙空間で防衛軍、ガミラス、イスカンダルでもない正体不明の宇宙船を・・・」
「ええ・・チラッとですがあの時、探査艇のコックピットから見ました」
「その時の宇宙船に乗っていたのが、俺の婚約者であるギンガだったんだ」
「えっ？それって・・・」
「つまり、彼女は地球人ではないって事だ」
「・・・」
古代は、ギンガとは何度かの面識があり、肌の色などを含めて地球人と容姿は変わらない。
まぁ、イスカンダルやシャルバート星などを含めて宇宙には地球人と同じ肌の色を持つ星の人が居る事がこれまでの航海で判明しているのでそこまで驚くことではない。
「あの頃はガミラスとの戦争状態で地球以外の人だと知れたらどんな目に遭うか大体想像がつくだろう？」
「ええ。だからこそ、俺と島もサーシアさんのご遺体は当初、俺と島以外に分からない場所へ葬りました」
古代もあの頃は良馬と同じことを思っていた。
だからこそ、火星の地に葬ったサーシアの墓が暴かれないようにした。
「それで、ギンガは地球人と変わらない容姿をしていたから、宇宙船で彼女を救助した後で、俺が軍に入りたての頃にお世話になった人に頼んでギンガの後見人になってもらったんだ」

「彼女の後見人って言うと・・・」
「防衛軍作戦五課長の中嶋さん。今はギンガの養父になっている」
「月村艦長の婚約者さんにそんな経緯が・・・」
「ああ」
「それで、彼女を助けたことが切っ掛けで彼女と婚約を？」
「いや、切っ掛けはその事じゃなかったんだが・・・」
「？」
　良馬がギンガを助けた事はあくまでも出会いの切っ掛けであり、彼女を救助した事によって婚約に繋がった事でない。
　しかし、その時の事を話す良馬が口ごもる事に古代は首を傾げる。
「でも、月村艦長の実家は南部や揚羽の家の様にお金持ちでしたよね？これまでそう言った見合い話とかなかったんですか？」
　古代は金持ちの家ならば、ギンガと婚約関係になる前にどこか別の金持ちの家の娘と婚約関係を結ばなかったのかを訊ねる。
「幼少期から忍さん・・・ああ、俺の育ての親の人がね、『異性関係には十分気を付けなさい!!』って言われながら育って来たから、学生時代は異性に対してそこまで興味はなかったかな。それにガミラスとの戦争になり、軍に入ってからは異性に現を抜かす・・・暇はなかったしね」
　小さい頃から良馬は忍からは異性関係について口酸っぱく注意を受けてきた。
　その理由は、忍がこれまでの人生の中で一族の者たちが忍に婚約者を紹介してきた際、その婚約者が月村家の莫大な財産目当ての者、月村家の人間が夜の一族の血を引く者・普通の人間ではない事を知るや否や化け物扱いして捨てる者を見て来た。
　そう言った経緯から忍は月村家の人間になるには厳しい基準を設けたのだ。
　ギンガの場合、彼女自身も普通の人間ではない事、ギンガ自身が自らの出生に対してコンプレックスを抱いていた事もあり、ギンガに対する忍の審査基準も若干緩かった。
「あれ？今、少し間がありませんでしたか？」

「ま、まぁ、これまでの人生で一度だけ・・・ギンガが来る前に一目惚れってやつをしたことがあるんだが・・・」
「ええっ!?月村艦長が一目惚れ!?」
　ギンガが地球へ来る前の出来事とは言え、良馬が一目惚れした女性がどんな人なのか当然古代は気になる。
「い、一体どこの誰に一目惚れをしたんですか？」
「・・・まぁ、今はギンガと婚約関係にある以上、結果は分かっている通り、俺の初恋は失恋で終わった事を理解しているうえで言おう・・・勿論他言無用で頼む」
「勿論ですとも」
「・・・中嶋さんの奥さんだ」
「えっ？中嶋さんの奥さんって、月村艦長は上官の奥さんに一目惚れしたんですか!?」
「・・・あ、ああ・・・でも流石に既婚者の人に対して恋愛感情を抱くのは良いが、それ以上の先は不味いだろう？」
「え、ええ、そうですね。それでどういった経緯で火星付近に現れた宇宙船からギンガさんを救助してからどうしたんですか？」
　恋愛感情を抱くだけならばいい。
　だが、それ以上先の関係は色々と世間的に不味い。
　ましてや良馬は日本でも有名な家柄の人間であり、マスコミに知られれば大スキャンダルになりかねない。
　勿論、良馬はちゃんとその辺の分別は理解していたので、加奈江に対してそのようなリアクションは当然起こしてはいない。
「ギンガと中嶋家の皆さんとは当然、血は繋がってはいないがギンガの容姿は中嶋さんの奥さんとそっくりだった。だからこそ、当初ギンガを救助した後で、中嶋さんの家ならば周囲から怪しまれないと踏んだんだ」
（まぁ、加奈江さんにも大きな秘密があって、ある意味で加奈江さんとギンガは親子なんだけどね）
　良馬は加奈江の秘密を知る唯一の人物であり、その秘密を知った時は当然驚いた。

「な、なるほど・・・・それで、その後どうやってギンガさんとの仲は進展したんですか？」
　ギンガは古代よりも年下ではあるが、一応年上で上官の婚約者なので、ギンガの事を『さん』付けで呼ぶ。
「ギンガを救助した当初は、中嶋さんの奥さんに似ているって感じぐらいしか意識していなかったんだ・・・・」
　加奈江に一目惚れしていた良馬であったが、ギンガを救助した際、加奈江に似ていたギンガには一目惚れはしなかった。
　その時は、加奈江との事は失恋として割り切っていたからだ。
「だが？」
「・・・・ガミラスとの戦争は精神的に来るモノがあって・・・・」
「分かります」
「ある晩に無理矢理にでも寝ようとして酒を無理に飲んでいる時にギンガに見つかって・・・・」
「・・・・」
「それで、彼女に窘められたんだ・・・・そこからかな？ギンガを意識し始めたのは・・・・ヤマトが地球へ帰還して、彗星帝国が攻めて来る前・・一時的に地球が平和になった時、ふとした切っ掛けでギンガの俺に対する気持ちを知る機会があってね・・・・そこからだ・・ギンガと婚約関係になったのは・・・・」
（俺としては月村艦長とギンガさんの『ふとした切っ掛け』の部分を詳しく知りたい所なんだけど、そこまで聞くのは野暮ってやつだな）
　良馬としても流石に恥ずかしかったし、ギンガの名誉もあるので、古代にはギンガと初めて関係をもった経緯は大きく省いた。
　ただ、この場に雪が居たら、深く聞いて来たかもしれない。
　雪も古代との結婚で悩んでいる女子なのだから・・・・
（古代君と雪さんはそう言った関係には発展していないのかな？）
　自分とギンガとの関係は恥ずかしくて言えない一方、良馬は古代と雪がその様な関係になっていないのか？いるのか？気にはなったが、古代同様、聞くに聞けなかった。
「それで、俺自身いつまでも婚約関係の現状に甘んじると言うのもど

うだろうかと思って今回、古代君に声をかけて相談に乗ってもらったんだよ」
「なるほど・・・」
　良馬からギンガとの馴れ初めを聞きお互いに結婚のタイミングについての意見を交わす事になる。
「古代君の経緯だと確かにいざ結婚のタイミングで外宇宙からの侵略者の襲来が重なると結婚に対して変なジンクスがあるんじゃないかと勘繰ってしまうな・・・」
「ええ。自然災害の様にいつ外宇宙から侵略者が来るのか分かりませんが、先ほど言ったように俺と雪が結婚式を挙げようとしたら侵略者が来るんじゃないかと変に勘繰ってしまいましてね・・・」
「彗星帝国の時は、侵略の予兆があったけど、暗黒星団帝国の時はいきなりの電撃戦を仕掛けられたからね」
「暗黒星団帝国との戦いでは、雪を地球に残してしまった事で、彼女の事が常に脳裏を過っていました・・・勿論、雪は生きていると信じてはいたんですが、雪の事を思うばかり、姪のサーシアには辛い思いをさせてしまいました」
　暗黒星団帝国の本星、デザリアム星におけるサーシアの古代に対する思いは決して味方を油断させる方便ではなく、サーシア自身の本心であることは、古代本人は気づいていた。
　しかし、古代とサーシアは叔父と姪であり、雪と婚約している。
　サーシアの初恋は残酷ではあるが、最初から決して実る事はなかったのだ。
「そ、そうか・・・」
「そう言えば、サーシアの双子の妹でえっと・ユリーシャでしたっけ？彼女は兄さんたちと一緒にイスカンダルへは行かずに地球へ来たんですよね？」
「ああ、彼女は今も家で預かっている」
「月村艦長はユリーシャから何かアプローチみたいなことはされていますか？」
「アプローチか・・・うーん・・・家に帰ると子犬みたいに抱き着いて来

り、寝室に忍び込んで来る事はあるが、直接本人から告白みたいな事はされていないな」
（えっ？抱き着いたり、寝室に忍び込むって・・・）
　古代は良馬から説明されたユリーシャの行動に何かを察する。
「ユリーシャの方もきっと寂しいんだろうね。見た目は兎も角、実年齢はまだまだ子供だし、家族とも離れて暮らしている訳だからね。彼女には寂しい思いをさせないようにしていくつもりだよ」
「えっ？あっ、いや・・・ん？そうなんでしょうか？」
　何だかユリーシャに対する古代の印象と良馬の印象に食い違いが生じている。
「あ、あの・月村艦長はユリーシャの事をどう思っているんですか？」
　この際なので、古代は良馬にユリーシャについての印象を訊ねてみた。
「えっ？ユリーシャについて？うーん、古代先輩は俺を信頼して娘を預けた訳だからその信頼に応えなければならないと思っているし、さっきも言ったように抱き着いたりする仕草はホント可愛い妹みたいな感じかな？」
「い、妹・・・ですか？」
「ああ、俺は一人っ子だからね。ユリーシャともう一人・ガミラスとの戦いで戦死した友人の妹の紅葉ちゃんは俺にとっては大切な妹だな」
「・・・」
（月村艦長の話から察するにユリーシャは月村艦長に気があるのではないだろうか？）
（しかし、当の月村艦長本人はユリーシャの事を妹として認識している・・・）
（それに月村艦長には既に婚約者が居る・・・）
（うーん、兄さんとスターシアさんの娘たちは失恋する運命にあるのか？）
　自分と良馬の婚約環境が似ている様にサーシアとユリーシャの初恋関係も似ている事に何だかユリーシャが気の毒に思えてしまう。

「しかし、いつまでも待たせるのも相手にも失礼になるな・・・」
「えっ？」
「あまり長く待たせると自分は愛されていないのではないかと思ってしまうかもしれない」
「そ、そんなことは・・・」
「『ない』と言い切れるかい？」
「・・・」
良馬の問いに古代は口ごもる。
彗星帝国との最終決戦時、古代は負傷者を退艦させ自身はヤマトと共に巨大戦艦、ガトランティスへ特攻しようとした。
しかし、全員退艦させたと思ったら雪が残っていた。
その時、雪は古代との結婚に未練がある様に見えた。
ガトランティスがテレサの力により、消滅し地球へ帰還した後、古代と雪は結婚を延期したが、今となってはあの時延期して良かったのかと思う事がある反面、これまでのヤマトの航海を鑑みると結婚をしていなくて良かったと思う所もあった。
だが、これ以上雪を待たせるのも失礼だろうし、雪自身も何かを察するかもしれない。
自分は本当に古代から愛されているのだろうか？
自分ではなく他の誰かに靡いてしまっているのではないだろうか？
古代がなかなか自分に結婚の申し込みをしないのはそのせいなのではないだろうか？
それとも雪は自分以外の誰かが好きになっているのだろうか？
（い、いや・・ま、まさか、雪に限ってそんな事は・・・）
古代はネガティブな考えが脳裏を過る。
「古代君が雪さんとの結婚に踏み切れない理由も分かるし、他人である俺が言うのも変だけど、やっぱり雪さんと結婚について話し合っても良いんじゃないかな？」
「・・・」
良馬の言葉に古代は表情を硬くする。

「そうですね。月村艦長の言っていることは尤もです。近いうちに雪と話し合ってみます」
「そうか・・・」
「それで、月村艦長の方は？」
「ギンガは新型巡洋艦の副長を務めていて今、地球を留守にしている。しかし、もし地球かアルファ星で会うことが出来たら将来についての話をしてみるさ」
「そうですか・・・お互いに良い未来が来るといいですね」
「ああ。そうだね。ただ、我々の仕事は命の危険はもとより、任務によっては長期間家を空ける事がある」
「そうですね」
「もし、家庭を持ち、子供がいたら奥さんに負担をかけるから両親や義実家にも協力を仰がなければならないが、何か困った事があれば遠慮なく相談に乗ってくれ。協力はするから」
「はい。ありがとうございます」
古代の両親はガミラスとの戦争の初期時に遊星爆弾によって命を落とし、残された唯一の肉親である兄の守は１４万８千光年の先にあるイスカンダルに居るので、子育てに協力を仰げるのは雪の実家だ。
一人娘を育てた実績があるのだから雪の両親は、子育てに関しては慣れている筈だ。
一方で子育てをするとしたら自分も雪も初心者であり、雪の両親には何かと世話になるだろう。
だからと言って子育ての全てを雪の両親に丸投げする訳にもいかないし、子供も一人とは限らない。
自分たちにも子育てスキルは必要だ。
勿論、それは良馬とギンガも同様の事が言える。
これまでの星間戦争によって地球全体の総人口は減っている。
なので、子供は将来の地球における宝なので、大切に育てていなければならない。
ならば、状況が似ている者同士、協力していこうと良馬は古代に言うと古代も礼を言う。

そして、古代は自分の分の伝票を持って喫茶店を出て行った。
（結婚か・・・）
（そう言えば古代君を見かける前まで仕事にかまけて意識していなかったな・・・）
（いずれにせよ、ギンガと話さないと何も始まらないな・・・）
古代と良馬はお互いの婚約者との結婚に前向きに進む事となった。

地球にて良馬が古代と将来について相談をしている頃、バジウド星系の中にある惑星ゼスにて整備・補修をしている八雲では・・・
哨戒任務にて破損した部分はゼスから補修に必要な銅材、鉱石を分けてもらいそれらを使用してしっかりとした補修を行うことが出来た。
機関部でも機関部と技術班が波動エンジンを大掛かりなオーバーホールを行った。
更に乗員たちには半舷上陸が許可され、港付近のみだが右舷、左舷に勤務する者たちが交代で休養をとった。
周囲が綺麗な海だった事からゼス側の許可を得て多くの者が海水浴や釣りを興じて久しぶりの海を楽しんだ。
水着は流石に地球、そしてアルファ星へ出航した際、用意はしていなかったので、八雲艦内にあるオートソーイングマシーンによって主計科が製作した。
デザインに関しては個人の要望を一々聞いて作る暇はなかったので、性別以外は全て同じデザインとなっているが、色に関しては各科の制服と同じ色に分けられた。
ギンガとティアナも海水浴を楽しむために更衣室にて制服から水着に着替えている際、
「・・・」
ギンガはティアナをチラッと見る。
「ん？どうかしましたか？ギンガさん」
「えっ？あっ、うーんと・・・」
「？」

ギンガがティアナの姿を見て口ごもり、ティアナは首をかしげる。
「えっと・・・前々から思っていたんだけど・・・」
「はい」
「・・・ティアナの胸って綺麗な形をしているよね」
「えっ？」
ギンガはティアナの胸をジッと凝視していた。
ギンガの言葉にティアナは一瞬フリーズする。
「えっ？あっ、いや、ギンガさんも胸がある方じゃないですか？少なくともはやてさんやなのはさん以上はあると思いますよ」
さりげなくギンガをフォローしつつもはやてとなのはをディスるティアナ。
「うーん・・・でも、ティアナの方は形も整っているし・・・スバルもあったのよね・・・」
一方でギンガはティアナがはやてとなのはをディスった事をスルーしている。
「ああ、確かに・・・今は分かりませんが、訓練校、六課時代でもスバルは年の割に胸はありましたね」
「あの子、今も成長しているのかしら？」
「さ、さあ・・・」
スバルの胸について語っている時、ギンガの表情が一瞬、暗くなったように見えた。
「あ、あの、ギンガさん」
「ん？なに？」
「スバルの成長になにか問題でもあったんですか？」
ティアナはギンガが一瞬、表情を暗くした事について思い切って訊ねてみた。
今はもう会うことはかなわないが、かつての相棒であった事もありティアナは気になったのだ。
「・・・」
ギンガはティアナの言葉にギュッと口を紡ぐが意を決したように話し始める。

「あの子、十三歳の頃から、事あるごとに『ブラが小さくなった』って相談してきたのよ」
「そ、それで・・・？」
「・・・それで、私のブラを渡したら、『小さくてつけられない』って言ってきたのよ・・・」
「うわぁ～・・・」
（スバルの奴、バカ正直だからな・・・）
（そう言った部分はスバルの長所なんだけど、その長所が時には空気を読まない事態になりかねない所があるのよね・・・）
「それで、機動六課の稼働前・・・私がもう一つの地球に次元漂流する前に行った健康診断で、私の数値は変動が無かったのに、あの子は・・・あの子は・・・私に数値が上がった検査表紙を見せびらかしてきたのよ・・・!!」
「も、もういいです！もういいですから！」
ティアナは慌ててギンガを宥める。
「す、スバルの事は一旦、忘れて今は海水浴を楽しみましょう!!」
互いに着替えが終わっていたので、ティアナはギンガの背中を押しながら更衣室を後にした。
八雲の前甲板では・・・
「やっほーい!!」
ザプーン!!
「うわぁぁ!!」
ザプーン!!
「超気持ち!!」
八雲の乗員たちが前甲板から海に飛び込んでいた。
ギンガとティアナも海水浴と日光浴を楽しんでいる中、
「副長、制服の上からだと薄っすらしか分からなかったけど、水着姿だと身体つきが一目瞭然で、良い身体つきだ・・・」
「ほんと、容姿も良ければ面倒見も良いし、まさに理想の女性だよな・・・」
「戦術長も身体つきは良いんだけど・・・」

「ああ、やっぱりあの顔の傷が‥な‥‥」
男性の乗員たちがギンガの水着姿を見て鼻の下を長くしていたが、ティアナに関しては身体つきは男性にとっては理想的だったのだが、やはり顔の傷がネックであるみたいだった。
「男ってバカばっか」
「ホント」
そんな男性乗員たちの姿に他の女性の乗員たちは呆れていた。
とは言え、この休養で八雲には穏やかな時間が流れ、乗組員たちは緊張と疲労から解放されていたのは間違いなかった。

此処で視点は、ミッドチルダへと移り、時間は過去へと巻き戻す。

元ナンバーズのディエチ。
彼女はＪＳ事件の決戦時、聖王のゆりかごにてなのはと正面からの撃ち合いになるが、ブラスターリミットを解放したなのはに敗れた後に確保された。
事件後に管理局からの司法取引を受け、海上隔離施設で更生プログラムを受けた後にナカジマ家に引き取られた。
ナカジマ家に引き取られた後、彼女は主にナカジマ家の家事を担当していた。
ギンガが居た頃は殉職したクイントに代わってナカジマ家の家事をしていたが、表向きギンガが殉職した後、スバルは機動六課の寮生活をしていたので、ナカジマ家はゲンヤ一人となっていたので、食事は主に外食となり生活水準は下がっていたが、元ナンバーズの面々を迎え入れてからはナカジマ家の生活水準はクイントやギンガが居た頃のように戻った。
それは新たにナカジマ家の家事担当となったディエチの存在が大きかった。
そして、今日もディエチはナカジマ家の家事に勤しんでいた。
「あっ、父さんお昼のお弁当忘れている」

そんな中、養父であるゲンヤが昼食の弁当を忘れている事に気づく。
ディエチは急ぎ、その弁当を持ってゲンヤの職場である陸士１０８部隊の隊舎へと向かった。
受付にてディエチがゲンヤに弁当を渡しに来たことを伝えようとした時、
「もう少し捜索を続けてください」
「奥さん・・・・」
「私の主人は生きている筈なんです」
一人の女性が受付係に食ってかかっている。
女性の話の内容から察するにどうやらご主人が行方不明になっているみたいだ。
「奥さん、ご主人が行方不明になってから既に一ヶ月以上が経過しており、こちらとしても捜索範囲を広めましたが、ご主人の足取りが一切不明でお手上げ状態なんです。大変申し上げにくいのですが、ご主人は既に・・・・」
受付係言いにくそうに女性のご主人は既に他界にしている事を伝える。
「・・・・」
女性はグッと唇を噛む。
「あ、あの・・・・」
ディエチは気まずそうに受付係に声をかける。
いつまでも受付で待ちぼうけを喰らう訳にはいかず、養父であるゲンヤに弁当を渡したかったのだ。
「は、はい」
「ディエチ・ナカジマです。父が昼食のお弁当を忘れたので、渡しに来たのですが・・・・」
「は、はい。ナカジマ部隊長の娘さんですね。少々お待ちください・・あっ、受付ですが、部隊長。娘さんが忘れ物をとどけにきたみたいなんですが・・・ええ・・はい、分かりました。では、お部屋にお通しいたしますね。ディエチさん、部隊長は執務室に居るみたです」

「分かりました」
受付係から入館証を受け取り、ディエチはゲンヤが居る部屋へと向かう。
そんなディエチの後姿を先ほどの女性はジッと見つめていた。
コン、コン、コン、
「おう」
「失礼します」
扉をノックして中からゲンヤの返答を聞きディエチは部屋の中に入る。
「父さんお昼のお弁当、忘れて行ったでしょう？持って来たよ」
「ああ、すまないな。わざわざ持ってきてもらって」
ディエチがゲンヤに弁当を渡す際、視界の中にゲンヤのデスクが映る。
彼のデスクは書類やら現場写真やらで一杯になっていた。
「お仕事大変そうだね」
「ああ、ここんとこ妙な事件やら行方不明事件やらで立て込んでいてな」
「そう言えばここ最近、父さん帰りが遅いもんね」
（行方不明事件・・・そう言えばさっきも受付に・・・）
ゲンヤはどうやら最近、この１０８部隊の管轄内で起きている事件の捜索で忙しいみたいだ。
そしてその事件の中に行方不明事件が含まれている事にディエチは先ほど受付で受付係と女性が押し問答をしていた事を思い出す。
「父さん、お仕事が大変そうなら手伝おうか？一応、私も嘱託局員だし・・・」
管理局との司法取引の際、条項の中に『有事の際は嘱託局員として管理局の任務に従事する事』と言う内容があり、実際にディエチは自分と同じくナカジマ家に養子入りした他の姉妹たちと共にボラー連邦の攻撃を受けて被弾し、第七海上支部に激突したタイタンと第七海上支部、ボラー連邦の鹵獲艦によって攻撃を受けたコスパ・コンコルド号の救助活動にも参加していた。

そう言った経緯があるので、ディエチはゲンヤがこうして仕事で大変ならば、自分も協力して事件の解決の手助けをしようと言う。
毎晩遅く帰って来るゲンヤの事を思う行為である。
「いや、大丈夫だ。お前さんの力を借りなくてもこの事件はこちらで解決する」
しかし、ゲンヤはディエチからの協力を断る。
「でも・・・・」
「大丈夫だ」
「・・・・」
ゲンヤから断られてしまったので、ディエチは渋々ながらも引き下がるしかなかった。
しかし、元々人手不足な環境下で戦闘力があるディエチの協力は本来ならばありがたい事なのだが、ゲンヤが頑なに協力を拒んだのは、もう一つの地球に次元漂流してしまったギンガの件の様に今回の事件はやや危険な事件だったからであり、ディエチの安全確保の為であったのだ。
ディエチがゲンヤに弁当を渡して、陸士１０８部隊の隊舎を出た時、
「あの・・・・」
「ん？」
ディエチは声をかけられた。
声がした方を向くとそこには先ほど受付にて夫の捜索を頼んでいた女性が立っていた。
「貴女は・・さっき、受付係に居た人・・・・」
ディエチが唖然とした表情で女性を見ると、女性はディエチに一礼した後、
「貴女、此処の隊長さんの娘さんなんですって？」
「は、はい・・・・」
「貴女からお父さんである隊長さんに頼んでもらえないかしら？主人は今もどこかで生きている筈なんです。私には根拠があるんです。主人が生きていると言う・・・・」

「根拠？」
「はい。これまで管理局へ提出しようか迷っておりましたが、今日、その根拠を持参して参ったのですが、受付で半ば門前払いを受けてしまい困っていたところに貴女が来たので、こうして声をかけたの」
（この人の旦那さんを見つければ、父さんの仕事の一つは解決する・・・）
（ちょっとは父さんの役に立てるかもしれない）
ゲンヤの心配を他所にディエチはディエチなりに養父であるゲンヤの役に立ちたいと思っていた。
「分かりました。ただ、父さんは今、抱えている仕事が忙しいみたいなので、私が代わりにお話を聞きます」
「えっ？貴女が？」
「はい。嘱託ですが、私も管理局の人間なので・・・」
ディエチは女性に嘱託局員の身分証明書を見せる。
女性も嘱託ながらもディエチがゲンヤの娘であり、局員と言う事で納得してディエチに話す事にした。
しかし、流石に隊舎の前では第三者に聞かれるかもしれなかったので、二人は近くにあったカラオケボックスにて話し合いをすることになった。
カラオケボックスの個室ならば、防音とプライベートがしっかりとしていたからだ。
「まずは自己紹介を・・私はエレーヌ・マクトリンと申します」
「初めまして、ディエチ・ナカジマです。それで、行方不明になっているのが、貴女のご主人と言う事ですが・・・」
「はい。行方不明になっているのは、私の主人、ロナウ・マクトリンです」
エレーヌはディエに捜し人である夫、ロナウの写真を見せる。
「失礼ですが、ご主人はお医者さんか科学者なのですか？」
「はい。生物学と脳科学を主に扱っている学者です」
エレーヌが見せた夫の写真は白衣を纏っている姿だった。
ディエチにとって白衣を纏った男性と言うと真っ先に思い浮かん

だのが、自らの生みの親であるスカリエッティだった。
彼が収監先の刑務所から脱獄した時は、管理局中が蜂の巣をつついたような騒ぎとなり、元ナンバーズの自分たちや聖王教会の下にも管理局の執務官らが事情聴取を取りに来るし、またテロ活動をするのではないかと疑われてしばらくの間、複数の局員から監視されるしで、窮屈な思いをした。
自分たちをこの世に生み出したことは感謝しているが、今となってはもうスカリエッティに対して恩義なんて感じてはいないし、仮に今、目の前にスカリエッティが来て、
『もう一度、私の下で働いて欲しい』
と、言われても協力する気なんてサラサラ無い。
(生物学に脳科学・・・・)
(ますますドクターと同じ様な職種だな・・・・)
行方不明になったロナウがスカリエッティと同じ生物学・脳科学の学者と言う事でますますスカリエッティと被る。
(まさか、ドクターみたいにテロを考えているとか・・・・?)
あまりにもスカリエッティと被る為、ロナウがエレーヌの前から姿を消したのはテロ活動の準備をしている為ではないかと勘繰ってしまう。
「それで、先ほどご主人が生きている根拠があると仰っていましたけど・・・・」
「はい。主人の行方の手掛かりはこの中にある筈なんです」
エレーヌは鞄の中からタブレット端末を取り出してディエチに差し出す。
「タブレット端末?」
「はい。主人は研究過程や考察、データ、そして日々の出来事を日記としてこのタブレット端末に保存していました」
「もしかして、今日はソレを見せようと?」
「はい。ですが、プロテクトがかかっており開けず、管理局の人に見てもらおうと思ったのですが・・・・」
(うーんそれなら、さっさと訳を話してせめてタブレット端末のプロ

テクトを解除してもらえれば良かったような気が・・・)
受付に居る時は、気が動転していたのか、興奮していたのか、タブレット端末の件には触れる前に門前払いされてしまったのだ。
「主人や私の誕生日、結婚記念日などの思いつく数字や文字を入力してみたのですが、どれもヒットしなくて・・・・」
ディエチもとりあえずタブレット端末を手にして適当に数字や文字を入れてみるが、エラー表示される。
「分かりました。私の知り合いに技師官が居るので、そこ人に解析を頼めばこのタブレット端末のプロジェクトも解除出来ると思います。このタブレット端末、お借りしてよろしいでしょうか?」
「ええ、構いません。主人が見つかるのなら・・・・お願いします。あの人を見つけて下さい」
「分かりました」
エレーヌはディエチに深々と頭を下げてロナウの行方をディエチに託した。
「さて、まずはこのタブレット端末のプロテクトの解除からか・・・・マリーさんなら出来るよね?」
ディエチは貸し出されたタブレット端末のプロテクトを解除する為にマリエルに協力してもらおうと考えた。
(クア姉が居たら、この場であっという間に解除出来るんだろうな・・・・)
タブレット端末のプロテクト解除をしてもらおうとした際、ディエチはかつてナンバーズの中でも行動を共にする機会が多かった姉の姿が脳裏を過る。
実際にクアットロは地上本部襲撃の際、本部ビルのメインコンピューターをハッキングした実績がある。
そんなクアットロにしてみれば、タブレット端末のプロテクト解除なんてあっという間に出来るだろう。
そう思いつつディエチはマリエルと連絡をとった。
マリエルはこれまでギンガとスバルの体調管理や健康診断を行って来た。

スカリエッティが捕まり、刑務所へ収監された後は、ナカジマ家に養子入りしたチンクたち、聖王教会へ引き取られたセインたち元ナンバーズ組の体調管理や健康診断はマリエルが担当していた。
それは彼女がミノフスキーの下で次世代の次元航行艦のエンジンを研究・開発している間も時間の合間を見つけて元ナンバーズの健康診断を行っていた。
そんな関係なので、ディエチとマリエルは決して知らない関係ではないし、ディエチ本人もマリエルが優秀な技術者である事を認識している。
「あっ、マリエルさん？」
『あら？ディエチじゃない。どうしたの？』
「実は・・・・」
ディエチはマリエルにこれまでの経緯を話す。
「それで、マリエルさんにタブレット端末のプロテクト解除をして欲しいんだ」
『分かったわ。それじゃあ、先端技術医療センターに来て』
「分かった」
こうしてディエチはマリエルが待つ先端技術医療センターへと向かった。

百八十九話　ディエチの捜査そのⅡ

ある日、ディエチが養父、ゲンヤが忘れた弁当を勤め先である陸士１０８部隊の隊舎へ届けに行くと、受付で行方不明になった旦那を捜して欲しいと懇願する女性と出会った。

女性の話では、旦那が既に失踪してから一ヶ月の時間が経っており、１０８部隊の局員は既に女性の旦那の生存は絶望視していた。

しかし、関係者である女性は旦那の生存を信じていた。

関係者ならば当然の心情である。

それに女性には旦那が生きていると言う根拠があったのだが、１０８部隊の受付係は女性の話をまともに聞いてくれず、追い返されてしまった。

ただ女性が１０８部隊の受付係と問答を繰り返している時に弁当を届けに来たディエチの姿を見た彼女はディエチにゲンヤと執り成してもらえるように頼む。

ただ、ゲンヤもゲンヤで仕事が多忙だったようなので、ディエチ本人が女性の頼みを聞き、彼女の旦那の行方を捜す事にした。

そして、女性が言う旦那の生存を確信する根拠は、旦那が愛用していたタブレット端末であった。

しかし、彼女の旦那が研究職をしているらしくタブレット端末には厳重なプロテクトがかかっていた。

その為、手掛かりを掴むにはまず、タブレット端末のプロテクト解除をしなければならなかった。

そこで、ディエチは自分たち姉妹の健康診断を行っているマリエルにこのタブレット端末のプロテクトを解除してもらうことにした。

そして、マリエルにアポイントメントを取って、現在マリエルの職場である先端技術医療センターへと向かった。

先端技術医療センターに着き、受付でマリエルにアポイントメントがある事を伝えると受付係はマリエルと連絡をとり、ディエチにマリエルが居る部屋の場所を伝える。

「こんにちは、マリエルさん」
そして、ディエチがマリエルの下を訊ねると、
「ああ、いらっしゃい。ディエチ」
マリエルがディエチを迎え入れてくれたのだが・・・・
「また、部屋をこんなに汚して・・・・」
マリエルの研究室は物が散乱していた。
「ああ、ごめんなさい。いつか、片付けようと思っていたのだけど、どうしてもやる気が起きなくてね・・・・」
マリエルはなんだか気だるそうに言う。
(マリエルさんは変わったな・・・・)
ナカジマ家に養子入りしたばかりの頃、マリエルは出来る女と言う印象があった。
しかし、彼女が先端技術医療センターから一時別の部署へ異動し、再び先端技術医療センターへ戻って来てから彼女は何だか仕事に対して意欲を失っている感じがした。
現に眼前に居るマリエルは髪の毛がボサボサで服も皺だらけでヨレヨレだ。
マリエルが別部署から先端技術医療センターへ戻って来た当初は、(これが燃え尽き症候群と言うやつ何だろうか?)
と、思っていたがどうやら違うみたいだが、その理由はディエチを含めてナカジマ家姉妹全員は知らない。
特に自分たちよりも付き合いが長いスバルがマリエルの変貌に一番驚いていた。
それにマリエルとシャリオが次世代の次元航行艦のエンジンを開発したと聞き、祝福の言葉を言った際、マリエルはあまり喜んでいる様子は無く、
「その話はしないで」
と、話題に出されたくない様子だった。
彼女自身、ヴィータ同様ミノフスキーの死について納得できず、また彼の功績を自分が横から掻っ攫うようなことを決めた管理局に対して若干の嫌気があった。

彼女がすさんだ生活を送っているのはそうした経緯があった。
「それで、見てもらいたいタブレット端末は？」
「これです」
「ん・・・・」
ディエチからタブレット端末を受け取り、パソコンに繋がっているコードに繋げるとマリエルはキーボードを操作する。
「それにしてもディエチ、今回の件はナカジマ三佐から頼まれたの？」
解析中、マリエルはディエチに訊ねる。
「ううん。私の独断・父さん、仕事で忙しそうだから」
「独断？いいの？勝手にそんなことをして」
「一応、私も嘱託局員だから・それに少しでも父さんの役に立ちないし・・・・」
「そう・でもあまり危険な事はダメよ。ナカジマ三佐もこれ以上家族を失いたくはないだろうし」
「分かっています」
ディエチはゲンヤが奥さんを亡くしている事をナカジマ家に養子入りする前に知っていた。
特にチンクは物凄く責任を感じていた。
何しろ彼女はゲンヤの奥さんであるクイントが殉職したゼスト隊事件の当事者であったのだから・・・・
ゼスト隊事件の際、チンクはゼストと対峙していたので、クイントを手にかけてはいないが、あの事件現場に居たのだから責任を感じてしまうのも当然だった。
それにナカジマ家にはかつて自分以外に姉妹が居た事も聞いていた。
ゲンヤとスバルが言うには機動六課稼働前にある任務中に事故で殉職してしまったらしい・・・・
スバルの姉と言う事で、殉職した彼女も戦闘機人なのだったのだろう。
写真で見たが、確かにスバルとそこはかとなく似ている印象があったが、それ以上に彼女はクイントと似ていたので、親子と言われれば

親子で通じる。
　しかし、マリエルやゲンヤ、そしてスバル本人が言うにはスバルと殉職した姉は元々クイントのＤＮＡデータからスカリエッティ以外の何者かが生み出した戦闘機人らしい。
　スカリエッティ以外の人物が戦闘機人を生み出した事に当初は驚いたが未だにその人物が誰なのかは判明していない。
「さっき、仕事が多忙って言っていたけど、ナカジマ三佐も年だし、あまり無理をしないように貴女からも言っておいてあげてね」
「はい・・・その仕事関連ですが、最近１０８部隊の管轄内でどうも行方不明事件があるみたいですけど、マリエルさんは何か知っていますか？」
「行方不明？・・・・ああ、そう言えばそんな話、聞いたわね。テレビでもニュースとかやっていたけど、ディエチは見ていないの？」
「ノーヴェとウェンディがチャンネル争いをしているから基本、私はテレビを見ていない」
　ディエチはナカジマ家でのテレビにおけるチャンネル争いの場面を思い出す。
　チンクは士官学校に行っており、スバルは実家を出て一人暮らしをして、現在ナカジマ家は家主のゲンヤ、ディエチ、ノーヴェ、ウェンディの四人で暮らしているが、夜のテレビではノーヴェとウェンディがバラエティー番組、ドラマ、歌番組などでチャンネル争いが起こっており、ゲンヤとディエチは基本テレビを見ず新聞や本を読んでいる。
　それにディエチは、昼間の間は掃除や洗濯、食事の用意、買い物など家事で忙しい。
「マリエルさんはその行方不明事件、何か知っているの？」
「ん？何か行方不明になっている人って研究者や学者みたいで、私も『気をつけろ』って注意を受けたわ」
「研究者や学者が行方不明・・・」
（そう言えば行方不明になったあの人の旦那さんも生物学者だったな・・・）

（うーん、もしあの女の人の依頼が今回の行方不明事件に関係しているとしたら・・・）
ディエチは今回の依頼と１０８部隊の管轄内で起きている行方不明事件に関係性があるように思えてきた。
「・・・解析出来たわ」
そんな中、マリエルはタブレット端末のプロテクトを解除した。
「中身見てみる？」
「はい」
パソコンの画面にタブレット端末の内容が表示される。
「このタブレット端末の持ち主ってどんな人なの？」
今更ながらマリエルはディエチにタブレット端末の持ち主が誰なのかを訊ねる。
最初、ディエチがマリエルにアポイントメントを取る際に事情を説明する時、ディエチはマリエルに調べて欲しいタブレット端末の持ち主が誰なのかは伝えていなかった。
「ロナウ・マクトリンって言う学者」
「学者・・・その人も行方不明になっているのよね？」
「うん。依頼人はその人の奥さん。でも、奥さんはそのタブレット端末の中身には旦那さんが生きている根拠があるって言っていたけど・・・」
マリエルとディエチはとりあえずタブレット端末の中身を見てみた。
「・・・流石、学者なだけあってファイルのほとんどが研究データや資料、報告書だらけね」
「ここら辺のファイルは、事件と関係なさそう・・・」
流石に研究データや資料が行方不明事件に関係しているとは思えなかった。
「こっちのファイルは？」
「これ？」
ディエチが別のファイルを開いてもらうとそれはロナウが記録した日記の様だった。

「日記・みたいね」
「奥さんが言う根拠ってこれの事なのかな？」
「でも、他人の日記を見てもいいのかしら？奥さんが言うには日記の中には奥さんにも見られては困る私生活の内容も書かれているかもしれないし・・・」
「一応、奥さんには許可を得ているし大丈夫じゃないかな？」
マリエルは他人の日記の内容を盗み見るような行為に抵抗を覚える。
もしかしたら、不倫などの奥さんが知らない旦那の裏の顔が抱えているかもしれない。
とは言え、日記ならば奥さんが知らないロナウの私生活が書かれているだろうし、その内容から行方不明になった原因も分かるかもしれないと思いディエチは日記に目を通した。
マリエルも抵抗感はあったが、やはり気になるのかディエチと共にパソコンの画面に顔を向ける。
その日記には以下の様な事が記されていた。

○月○○日
今日の午後から妻は生け花の稽古に出かける。
帰りの時間も把握しているので、私も出かける事にした。
今日の姿は女装だ。
周囲の人間は私が男であると言う事に一切気づいていない。
これも日々の鍛錬の賜物であり、化粧と服装の選択もまさに完璧だ。
髪についても様々な髪型、髪の長さのウィッグを購入し、帽子、イヤリング、ネックレス、指輪、香水についても情報を収集して最新のトレンド調査も抜かりはない。
そして入った映画館にて、わざと隣席の男客に身を摺り寄せる。
男客は突然、私に摺り寄せられてドギマギしている。
例え暗闇の中でもはっきりとわかる。
そんな様子を見ていると自分の変装の完璧さに自画自賛を送りた

くなるし、快感を覚える。

○月○×日

この日は妻に研究会といつわり、港湾地区へと向かった。

今日は船乗り姿に変えて船員酒場へと入る。

嘘八百の船幽霊や未確認生命体の話で酒場に居る女たちを笑わせた。

ただ、この日は調子に乗り飲みすぎた。

夜十時に帰宅。

妻には研究会が終わった後、飲み会となりそれに参加したと誤魔化した。

×月△日

この日は休日だったので、朝からホームレスの姿で橋のたもとに座り込む。

誰も彼もが私が学者であることに気づかすに通り過ぎていく。

中にはまるで私をゴミでも見るかのような目で見て来る者も居た。

若い女たちは嫌悪するように私から距離を取り、小等部の学生たちは怯えながら私の前を駆け足で通り過ぎて行く。

例え嫌悪感を抱かれても私は一切気にしない。

何しろ学者のロナウ・マクトリンではなく、名も無きホームレスとして・・・他人の目で世の中の人間を観察するのは実に愉快である。

だが、この日の夕方、私は驚愕する。

朝から十分に人間観察を堪能して帰ろうとした時、あの男が現れた。

(あの男?)

ロナウの日記の中にある登場人物が出た事にディエチは眉をひそめる。

『失礼、アナタ。生物学と脳科学の学者、ロナウ・マクトリンではナイですか?』

と、話しかけられて来た事には驚いた。
話し方に独特の訛りがあったので、その男はミッドチルダ出身の人間ではない。
正体がバレそうになったので、私は慌ててその場から逃げた。
これまで私の変装がバレた事は無いのに・・・・
あの男は一体何者なのだろうか？
（ミッド外出身の謎の男・・・）
（この男が依頼人のご主人の失踪に関わっている事は間違いなさそうだ・・・）
（それにしても依頼人のご主人がこんな趣味を持っていたなんて・・・）
（確かにこんな事、奥さんに教えられないな・・・）
（もし、この人がドゥーエ姉の事を知ったら羨ましがるだろうな・・・）
ディエチの脳裏にＪＳ事件において唯一の死亡者である姉の姿が過る。
性別と体形は変えられなかったが、容姿を替えることが出来る偽りの仮面（ライアーズ・マスク）の能力を持っていた姉・・・
かつてコンビを組んでいたクアットロからは「究極の戦闘機人」として尊敬されていた。
ディエチが思ったように容姿を変えられるロナウが知ればその能力を羨ましがっただろう。
（兎に角、この男がどこの誰なのか、日記の続きに書かれているかもしれない）
ディエチはロナウに接触してきた謎の男の正体を探る為、日記の続きに目を通した。

×月○△日

その日、私は旧再開発地区に建てられた新市街地の街中を散策していた。
すると、背後から私に声をかけて来る者が居た。

あのミッドではなかなか聞かない独特の訛りがある声・・・
そう、あの日私の正体を見破ったあの男だ。
『その後ろ姿。やっぱり、ソウだ。マクトリンさんではアリマセンか？ワタシ、すぐにワカッタ。ワタシの前デ、ごまかしきかないヨォ』
まさか再会してしまうとは運が無かった。
更に言えばこの日、私は女装をしていた。
そして靴は踵が高いヒールを履いており、走る事が出来なかった。
『ワタシ、ちょっとアナタとオハナシしたいネェ』
逃げる事も出来ず、この男に騒がれては私の学者としての社会的地位、そして妻にもバレる恐れがあったので、この男の誘いを断る事が出来なかった。
私はその男の誘いで新市街地に出来た『亭酒堂』と言う名の料理屋に入った。
その料理屋はミッドには無い酒や料理を出す店で、この男の出身世界の郷土料理を出す店らしい。
テーブルについて私は男と話した。
『それで、いくら欲しい？いくら出せば黙ってくれる？』
私は当初、この男が私の密かな楽しみを世間にばらそうとする代わりに金を集りに来た不埒な輩かと思い口止め料の額を訊ねた。
しかし、意外にもその男は、
『誤解よくないネェ。ワタシ、ゆすり、集り、お金目当てじゃないヨォ。ワタシ、貴方の良き理解者あるネェ』
『理解者？』
『ソウネェ。人は誰も変身願望あるヨォ。自分以外の人になって、世の中みてみたい。コレ、自然の欲求。当然の摂理、恥ずかしがることないネェ。特に貴方のような有名人、社会的地位がある人、優秀な人はそんな願望が強い。ワタシも故郷では上流階級人、だから貴方の気持ち、良くワカル』
『な、なるほど・・・』
『でも、変装は所詮変装。いくら変装上手くても完全に他人にはナレナイ。出来ナイ』

『・・・・』
男の言葉に私はぐぅの音が出なかった。
確かにこの男が言っている事は当たっているのだ。
いくら変装しても元がロナウ・マクトリンでは完全に他人になったとは言えない。
『変装は見破られる。私の様な気配に敏感で目が鋭い人間には見破られる。人間ミンナ、私の様な人ジャナイ。ゆすり、集りスル人、多いネェ。そうなれば、貴方、身の破滅、笑い者、社会的地位落ちる』
そうだ・・この男の言う通りだ。
この男は私の変装を見破った。
もしかしたら、世間にはこの男以外にも私の変装を見破る者もいるかもしれない。
確かにこの男以外に私の変装を見破る者が居たら・・・
そして、ソイツが私の趣味を世間にバラすと脅してきたら?
金を払ってもまた金を集ってきたら?
それが続いたら?
私の行動に妻が不審を抱くかもしれない。
そうなれば私の趣味がいつか妻にバレるかもしれない。
そうなる前に止めるには私の趣味に気づいた者をこの世から抹殺しなければならない。
だが、その犯罪がバレた時、私の地位は?立場は?学者としての名声は?
完全に終わってしまうだろう。
『だから?』
表向きは冷静に対処していたが、内心私の心臓は波を打つかのように酷く動揺していた。
私の心の中で未来に対する不安が過る。
『ワタシが提案スルのは、完全に他人にナレルちょっとした外科手術ネェ』
『整形手術でもしろと言うのか?』
『チガウ。整形も変装も大して変わらないネェ。ワタシの言う完全に

他人にナレル方法、ソレハ・・・・「脳交換手術」ネェ』
『脳・・交換手術・・・そ、そんな方法が本当にあるのか？』
『あるヨォ。もし、興味があるなら・・・・』
私はその男の言う『脳交換手術』に興味を持った。
そして、その男・王・東風（ワン・トウフウ）が指定した日時に脳交換手術をしたと言う人たちと会うことにした・・・・
一体どんな人たちなのか今から会うのが楽しみだ。

（脳交換手術・・・・）
（そして、能を交換した人たち？）
（そんな人たちが本当に居るのだろうか？）
ディエチが日記の内容に疑問を覚えていると、
「うっ・・なんか想像したら気持ち悪くなってきた・・・・」
ディエチと同じくロナウの日記を見ていたマリエルは顔を青くしてお手洗いへと向かった。
「此処から先はマリエルさんには見せない方がいいかも・・・でも、謎の男の名前は分かった。もしかしたら、偽名かもしれないけど調べてみる価値はあるかもしれないな・・・・」
（脳交換手術・・・もしそんな方法があって、依頼人のご主人が誰か別の人の身体に自らの脳を移植しているのだとしたら、奥さんの下に戻らず今も他人の姿でどこかで生活をしているのだろうか？）
（しかし、手術と言う事は失敗する可能性もある筈だ・・・・）
（ましてや脳なんて最もデリケートな部分を扱うのだから・・・・）
（いずれにしてもこの日記は最後まで見てその後で、父さんと相談した方がいいかもしれない）
（でも、いくら父さんでも信じてくれるかな？）
ディエチはこの日記の内容をゲンヤに伝える事にした。
しかし、内容だけでは眉唾物か頭のいかれた変態の妄想日記として片づけられるかもしれない。
（話すにしてももう少し情報と証拠が必要かな？）
そう思いながらもディエチは日記の続きに目を通した。

△月○×日
あの料理屋で王氏に言われた脳交換手術・・・
それがどんな手術なのか？
はたして本当にそんな手術が存在しているのか？
私はその好奇心が抑えきれず今日の夜、脳交換手術をしたと言う人たちと会うことにした。
妻には研究で遅くなると言って家を出た。
そして、約束の時間・・・
場所は王氏と会食をした例の料理屋だ。
その店の地下が会場だ。
料理屋の地下は上の店の様相と異なり、木造とセメントで造られている簡素な造りな部屋だ。
『マクトリンさん。紹介するネェ、此処に居るヒトタチ皆、脳交換手術をしたヒトタチネェ』
会場には数人の男女がテーブル席に居た。
『こちらは外科医の華晨（かしん）。凄腕の外科医。普段は上の店の料理長をしているネェ』
王氏が部屋に居た大柄な男を紹介する。
王氏が言うには彼は凄腕の外科医らしい。
多分、彼が脳の交換手術をしているのだろう。
『貴方も脳交換手術に興味があるの？』
テーブル席に居た一人の女性が私に話しかけて来た。
『え、ええ・・・まぁ・・・』
『素敵よ、他人の肉体、他人の顔、他人の生活は』
『私はこの前、十八の小娘の肉体に脳を移植していた。若い肉体はいいのだが、いかんせん異性の肉体は勝手が違うので、今はこうして若い男の肉体にしているが、貴重な体験だったよ』
すると別の男が自身の経験談を話してきた。
『もちろん、この体験をするにはそれ相応の金が必要になるがね』
『でも、手術は簡単よ。いつでも好きな身体になれて飽きれば元の身

体に戻れるし、別の身体にも慣れるわ。コレを繰り返して行けば永遠に生きられるのよ』
『傷痕も大して残らないわ。ホラ』
別の女性が前髪を手で額を私に見せて来た。
すると、女性の額には薄っすらと手術痕があったが、確かに彼女が言う程、気にするような痕ではない。
その後も脳を交換した人たちから経験談を聞き、私の興味は益々強くなった。
『どうネェ？貴方も脳を交換して別の人の身体になってみないカ？』
王氏が私に脳の交換手術を提案してくる。
『ちょっと考えさせてくれ』
興味はあったが、流石に即決できる内容ではなかったので、この日は猶予をもらった。

（日記は此処で終わっている・・・）
（日記が終わっていると言う事は依頼人のご主人は日記にあった脳の交換手術をしたのか？）
（姿を変えた事で今でも他人の肉体で生活をしているから依頼人の下へ帰っていないのか？）
（それにしても、脳を交換して他人の肉体で永遠の命を得よう・・か・・・）
（ドクターのスポンサーだった管理局の最高評議会の連中みたいだ・・・）
旧暦の時代に世界の平定に尽力し引退後も評議会を設立して強大な影響力を持つ三人の元魔導師たち・・・
彼らは死を恐れ、年老いた身体を捨て脳髄のみの姿で、生命維持ポット内にて生き長らえていた。
だが、長い月日が経ち、時代も考えも変わっていく中、生命維持ポット内が世界の全てとなった彼らの思考は硬直、先鋭化して自分たちの思惑で世界を動かそうと考えるようになり、アルハザードの技術を元に「無限の欲望（アンリミテッド・デザイア）」ことジェイル・スカリ

エッティを生み出した。
そして、スカリエッティにクローン技術・ＰＲＯＪＥＣＴ・Ｆａｔｅ、戦闘機人を生み出す理論を考えさせ、戦闘機人・ナンバーズを誕生させた。
スカリエッティがディエチたちにとって生みの親であるならば、最高評議会のメンバーはディエチたちにとって生みの祖父にあたる。
そんな彼らもＪＳ事件の折、スカリエッティの命を受けたナンバーズＮｏ．２ドゥーエにより全員抹殺された。
（やっぱり、権力者って老いと死を恐れ、永遠の命を求めるモノなんだ・・・）
元々スカリエッティの下に居たのだから、ディエチも最高評議会について実際に会った事はないがその存在と正体は知っていた。
日記の内容を見てディエチは最高評議会のメンバーと日記に出て来る登場人物が被った。
「ふぅ～・・・吐くモノ吐いたら、少しスッキリ出来たわ」
お手洗いでお腹の中のモノを出すだけ出したマリエルが戻って来た。
「ん？ディエチは平気なの？」
「うん。大丈夫。もう、日記は全部見たけど、マリエルさんも見る？」
「ううん。私はもういいよ」
「そう？」
マリエルは日記をこれ以上見ないと言う事で、コンピューターとタブレット端末を繋いでいるコードを外し、預かったタブレット端末をカバンに詰めた。
「それじゃあ、私はもう帰ります。ありがとうございました」
「ううん。良いのよ。ここ最近は大して研究もしていないし」
「そう？でも、少しは生活態度を改めた方がいいよ」
「ま、まぁ、考えておくわ」
ディエチはマリエルに生活習慣の見直しを忠告して先端技術医療センターを後にした。
（父さんに伝える前にまずは王・東風と華晨がいるかもしれない料理

屋に行ってみるか・・・・）
（でも、嘱託とは言え、局員として行くと警戒されるだろうし、証拠隠滅をされるかもしれない）
（となると、此処はやはりお客として偵察をした方が良いな・・・・）
　ディエチは脳を交換が行われている、もしくは脳を交換した人たちが集まる王がオーナーを務める店にお客として偵察へ行く事にした。

　そして、その日の夜・・・・

　ミッドチルダ西部地方　エルセア　ナカジマ家

「ノーヴェ・・・・」
「ん？なんだ？」
　ディエチは周囲を確認して、ノーヴェが一人でいる時に彼女へ声をかけた。
「明日のお昼さ、一緒に外食しない？食事代は私が持つから」
「珍しいな。ディエチから誘うなんて」
「知り合いの人からちょっと変わった料理屋を教えてもらったんだけど、どんな味なのか気になって・・・・ノーヴェ、ジムの資格の勉強で栄養学もやっているでしょう？ノーヴェから見て、その料理屋の味の感想とか聞きたいからさ・・もし、美味しかったら次は父さんやスバル、ウェンディも一緒に連れて行けるし・・どうかな？」
「いいぜ。ディエチの驕りだしな」
「う、うん。ありがとう」
（貯金、どれくらいとんじゃうかな・・・・）
（後で領収書を見せれば経費で落ちないかな？）
　ノーヴェはナンバーズ組の中でギンガ、スバル同様、その誕生にはクイントのＤＮＡデータが使用されているので、ノーヴェも結構食べる方なのだ。
　そんな彼女を食事に連れて行き、食事代は自分がもつのだから、ディエチの財布の中身がかなり吹っ飛ぶのは目に見えていた。

しかし、情報収集するための必要な犠牲だとディエチは割り切った。

翌日・・・

ディエチとノーヴェの姿はロナウの日記の中にあった王がオーナーを務める料理屋、『亭酒堂』にあった。

『亭酒堂』は地球で言う所の中華料理屋であり、独特の内装をしていた。

ミッドチルダで中華料理は珍しい類の料理みたいで、利用客のほとんどは王と同じ世界の出身者らしき人ばかりで、ミッドチルダ在住の人は全くいない訳ではないが、まばらであった。

「へぇ～変わった店だな。出されている料理もミッドじゃあ、あまりなじみのない料理ばかりだ」

「ミッドではない他の世界の料理を出す店だからね。でも、栄養学を学ぶ者としてはミッドの料理だけでなく、他の世界の料理にも目を向けても良いんじゃないかな？」

「ま、まあな」

ディエチの言葉に頷きながらメニュー表へ目を通すノーヴェ。

ミッドチルダではなく他の世界の料理と言う事で、ミッドチルダの人たちでも分かりやすいように料理の写真の隣にはその料理が一体どんな料理なのか？使用されている食材はどんなモノなのか説明が書かれていた。

やがて注文した料理が届くとディエチとノーヴェは食べ始める。

「うーん、やっぱり、他の世界の料理だからか、使っている食材、調味料がミッドのモノとは違うからか、不思議な味だ。でも、食べられない訳じゃないな」

「でも、使用している食材は凄いね。こっちの料理は亀を使っているみたい」

「か、亀!?」

「うん。それでこっちは、カエルだって」

「カエル・・・」

使用されている食材にやや引いているノーヴェであるが、味については不味くはないので、ゆっくりと咀嚼して味を確かめるように食べている。
一方のディエチは視線を動かしながら周囲を見渡している。
(この料理屋にはオーナーの王と料理長の華晨が居る筈だ)
(それに依頼人のご主人が脳を交換した人とあった地下室も・・・・)
(でも、日記には地下への出入り口が何処なのか書かれていなかった)
(店の出入り口近くにある案内図にも地下は書かれていなかった・・・・)
(となると、地下への入り口は従業員しか立ち入れない所か・・・・)
(厨房かバックヤードか・・・・)
(とりあえず調べてみるしかないな・・・・幸い私には特別な目があるし・・・・)
戦闘機人として生まれたナンバーズの中で、ディエチは狙撃手タイプの戦闘機人であり、両目に仕込まれた機器によって優れた望遠能力と解析能力を有していた。
なので、怪しい箇所があれば分かると思った。
「ノーヴェ、ゴメン。私、ちょっとお手洗いに行ってくるね」
「ん?ああ、いってらっしゃい」
ディエチはノーヴェに一言声をかけた後、席を立った。
しかし、ディエチはお手洗いではなく、『従業員以外立ち入り禁止』とプレートがついた扉の前に居た。
そして周囲を確認した後、その扉の中に入る。
扉の向こうはバックヤードになっており、従業員の休憩室兼更衣室になっていた。
今は昼時で従業員たちも多忙だった為かバックヤードには誰もいなくなった。
しかし、その状況はディエチはとっては好都合だった。
「・・・・」
ディエチは両目の機能を駆使して怪しい所が無いか確認する。
しかし、怪しい箇所は見つからなかった。

「此処は異常なし‥か‥‥でも、念のため‥‥」
ディエチはこのバックヤードにサーチャーを仕掛けてバックヤードを出た。
（次は‥‥）
バックヤードの次に怪しいのは厨房であるが、厨房は従業員が沢山居るだろうから確認するのは難しい。
（こういう時、クア姉だったら簡単に潜入出来たんだろうな‥‥）
（あっ、ノーヴェじゃなくてセインを連れて来るべきだったな‥‥）
此処でディエチは連れて来たパートナーの人選ミスに気づく。
セインのＩＳ能力、『ディープダイバー』ならば潜入と秘密工作に特化したＩＳ能力故に人が沢山居る厨房でも怪しまれずに確認する事が出来ただろう。
（今更後悔しても仕方がない）
（短時間しか見る事が出来ないだろうけど、やらないよりはマシか‥‥）
ディエチは迷子の振りをして厨房へと向かった。
「‥‥」
厨房の扉の隙間から厨房の様子を窺っていると、
「チョットお客サン、此処は厨房ネェ。お客サンは入れないヨォ」
ディエチは背後から声をかけられた。
その店員はガタイの良い大男な店員だった。
「す、すみません。お手洗いを探している途中で、迷ってしまって‥‥」
「お手洗いは向こうネェ」
店員はある方向を指さす。
「ど、どうもありがとうございます」
ディエチは礼を述べ、お手洗いがある方向へ向かう。
しかし、ディエチはあの短時間で見逃さなかった。
厨房の奥に木製の大きな床下扉があることに‥‥
（厨房だから収納庫かもしれないけど、業務用の冷蔵庫も確認できたから十中八九、厨房に地下への扉があるとみていいだろうな）

お手洗いへ続く通路を歩きながらディエチは厨房に地下への扉がある事を確信した。
一応、厨房にもサーチャーを残す事も成功しているので、概ね目的は達成することは出来た。
それから直ぐにディエチはノーヴェの居るテーブル席へと戻る。
すると、テーブル席からは大量の空皿を厨房へと運んでいく従業員の姿が見えた。
それと反対に厨房から料理が乗る皿をテーブル席へ運んでいく従業員の姿も見えた。
（ま、まさか・・・）
ディエチは嫌な予感がしてノーヴェが居るテーブル席へと向かう。
するとそこには一心不乱に料理を食べるノーヴェの姿があった。
「の、ノーヴェ、何をやっているの？」
「おう、ディエチ。遅かったな。いや～あれから気になる料理を片っ端食べているんだよ。最初は食材に抵抗感があったが、食べてみれば意外とうまくてな。箸が止まらねぇんだよ。すみません!!これ二つ追加でお願いします!!」
「ちょっ、ノーヴェ、頼みすぎ!!」
昨夜に食事代は自分がもつと言ったが、流石にこれほど食べられては払いきれないかもしれない。
「分かっているよ。一応、あたしも幾らかは持ってきているから、足りない分はあたしも払うよ」
「当たり前じゃん!!これだけ食べたんだから、絶対に私の手持ちだけじゃあ足りないからね!!」
ディエチは冷めた目でテーブルの上にある皿を眺めた。
そして、会計では案の定・・・と言うか当たり前でディエチの手持ちだけでは足りなく、ノーヴェとの割り勘となった。
ディエチにとっては手痛い出費となったが、確認することは出来た。
後は明確な証拠だけとなった。
（此処までの事を一応、父さんに伝えよう）

流石に全てを独断専行でするほどディエチは無鉄砲ではなく、元来の真面目さからゲンヤにロナウの日記と『亭酒堂』の厨房に地下への出入り口がある事実を伝える事にした。
その為、料理屋を出るとディエチとノーヴェは別れ、ディエチは108部隊の隊舎へ・・・
ノーヴェはエルセアにあるナカジマ家へと戻った。
そして自宅に戻ったノーヴェは今日、ディエチと共に行った料理屋の事をスバルとウェンディに自慢していた。
勿論、スバルはナカジマ家を出ているので通信画面の画面越しとなっている。
「それで、今日の昼にディエチと行った料理屋なんだけどよ、ミッドチルダじゃない他の世界の料理を出す店で、食材は亀やカエルを使っている料理もあったんだよ」
「えっ？亀やカエル!?」
「うげぇ・ノーヴェ、そんなモンを食べたんっスか？」
スバルもウェンディも料理の食材に亀やカエルを使った料理と聞いて引く。
自宅に居たウェンディは物理的にノーヴェから距離を取っていた。
「いや、そのリアクションは分かるぜ。あたしもメニュー表を見た時は『こんなモン食えるのか？』って思ったけど、実際に食べてみると意外と美味かったんだって!!」
「えぇ～本当にぃ～」
「まぁ、ノーヴェは何を食べても上手いって言うっスからね」
「いや、いや、マジで美味いんだって!!そう思うなら、今度みんなで行こうぜ」
意外にもノーヴェは今日食べた他の世界の料理が気に入っている様子であった。
「今日食べた亀だって何か肌に良い成分がふんだんに含まれていたみたいだし、カエルの方も鶏肉に似ている味だけど、メニュー表にあった説明だと鶏肉よりもヘルシーなんだ。栄養学的にもささ身よりもカエル肉の方が良いかもしれないな」

（えっ？それってヴィヴィオたちにカエル肉を食べさせるつもりじゃあ・・・）
ノーヴェの言葉にスバルはヴィヴィオたちのトレーニング食にカエルを出してソレを食べさせるのかと予測する。
（もし、ヴィヴィオにカエルを食べさせたなんて、なのはさんやフェイトさんが知ったら、ノーヴェの命が危ないんじゃあ・・・）
それと同時にノーヴェの身を案じるのであった。

百九十話　ディエチの捜査そのⅢ

ディエチの養父であるゲンヤが部隊長を務める陸士１０８部隊の管轄内で起きている行方不明事件・・・

その事件の一件に関わる事になったディエチ。

彼女はその件について重要な手掛かりを手に入れ、ゲンヤに伝えに向かった。

そのディエチが向かっている陸士１０８部隊の隊舎では・・・

「失礼します。ナカジマ三佐」

ゲンヤは執務室にて管轄内での事件の報告書に目を通していた。

そこへ、同じく１０８部隊に所属する捜査官、ラッド・カルタスが追加の報告書と事件の鑑定書を持ってゲンヤの居る執務室に来た。

「ナカジマ三佐。追加の書類です」

「はぁ～・・・またかよ・・・」

追加の書類と言われげんなりするゲンヤ。

「それで、何か分かった事はあるか？」

１０８部隊の管轄内では行方不明事件の他に川辺に人間の骨、臓器、肉片が漂着している奇妙な事件も起きていた。

事件に大なり小なりはないが、１０８部隊では行方不明事件よりもこの川辺に漂着している人の破片の事件の方を重要視していた。

行方不明事件では被害者の生死が不明であるが、川辺の事件では確実に人が死んでいる事が判明しているからだ。

「ＤＮＡ鑑定の結果、被害者は一人ではなく多数いるみたいです」

「それ以上は？害者の身元とかは？」

「いえ、あまりにもバラバラにされていたので、身元の判明は未だに分かりません。ただ前科者データに該当する者が居ないので、被害者の中には前科者が含まれていないと言うことだけしか分かっていません」

「はぁ～・・・」

事件の進展も手掛かりもないので、八方塞がり状態。

そんな状況とカルタスの報告を聞いてゲンヤは深いため息をつく。
そんな中、
「ナカジマ三佐、ディエチさんが受付にお見えになっており、三佐との面会を求めています」
受付係からディエチが来ているとの内線が入る。
「ディエチが？」
「はい。なんでも三佐にお話があるみたいです」
「・・・・」
「いかがいたしましょうか？」
（うーん、ディエチが一体何の用なんだ？）
（今日は特に忘れ物をした覚えはねぇし・・・・）
（しかし、ディエチがこれまでこんなことをしてくるなんて初めての事だ・・・・）
「分かった。執務室に通してくれ」
「承知しました」
ゲンヤは一体ディエチが何の用で来たのか？
そして、自分に何の話があるのか気になり、受付係にディエチを執務室に通すように指示を出した。
それからすぐにディエチがゲンヤの居る執務室にやって来た。
「おう、ディエチ。どうした？」
「父さんにちょっと見てもらいたいモノがあって・・・・」
「見てもらいたいモノ？なんだ？」
「コレ・・・・」
「タブレット端末？ディエチが買ったのか？」
「ううん。これはこの前、父さんにお弁当を届けた時、受付に来ていた女の人のご主人が持っていたタブレット端末」
「ん？受付に来ていた女の人？」
ディエチの説明にゲンヤは首を傾げる。
彼女の言葉の意味が分からない様だ。
「その女の人のご主人が行方不明になっているみたいなんだけど、此処に居る局員の人たちは『もう、亡くなっているだろうから捜す意味

がない』みたいなことを言って捜す素振りがなくて・・・・」
「そうか、それはその人にすまねぇ事をしてしちまったな・・・ただ、こっちは沢山の事件を抱えちまっていてな・・・・」
「マリエルさんから聞いているけど、今父さんの管轄内で行方不明事件が沢山起きているって・・・・」
「ああ、確かに起きている。ただ、今ウチが抱えている事件はそれだけじゃなくて、もう一つの事件に人員を割いていてな。失踪者の捜索がどうしてもおざなりになっちまっているんだ・害者家族には本当にすまねぇがな・・・・」
〝陸〟はただでさえ人手不足なので、こうした大きな事件が起きると人員の割き方に偏りが生じてしまう。
「もう一つの事件？」
「ああ・・・詳しい詳細は言えねぇがな」
「そう・・・それで、その女の人が、私が父さんの家の娘だって聞いていたみたいで、私も嘱託局員としてその女の人の相談を受ける事にしたの」
「お、お前、勝手に・・・・」
「ご、ごめんなさい。でも、あの女の人が物凄く困っていたから・・・それに大切な人が行方不明になっている中、その人の帰りを待つ気持ち、父さんなら分かってくれると思って」
「・・・・」
ディエチの言う事は分かる。
実際に一部の者しか知らないが、死んだと思われていたギンガは実際にもう一つの地球で生存している。
その事実を知るゲンヤとスバルであったが、ギンガとはもう事実上会うことはかなわない状況だ。
しかし、ゲンヤもスバルも何時かはギンガと再び会えることを信じている。
だからこそ、行方不明者を捜そうとしているディエチの行動を強く非難することは出来なかった。
「分かった。その件は咎めない。それで、そのタブレット端末に何か

手掛かりがあったのか？」
「うん。コレを見て」
　そう言って、ディエチは昨日、マリエルにプロテクトを解除してもらったタブレット端末の中に記録されていたロナウの日記を見せる。
「こ、こいつは・・・」
「この日記を書いた人の変装趣味は放っておいて、日記の中に出て来た脳交換手術を進めて来た料理店オーナーの王って人は少なくとも、この日記を書いた人の失踪に関わっていると思う」
「ああ、そうだな」
「それで、さっきノーヴェを連れてこの王って人がオーナーを務めている料理屋に行ってきた。勿論、お客としてね」
「そこまでしたのか!?」
　ディエチの行動力に驚くゲンヤ。
「で、怪しい所はあったのか？」
「バックヤードにはサーチャーを飛ばして、厨房もチラッと見た。それで、厨房に怪しい床下扉があるのを確認した」
「そうか・それじゃあ、その店に強制捜査をして・・・」
「でも、一歩間違えれば証拠を隠滅される可能性もあるから、逃れられない状況で確保しないと・それに怪しいのは店のオーナーだけじゃなく、日記の中にある料理長も絶対に関係しているから、確保するなら二人いっぺんに確保しないと・・・」
「そうだな」
「だから、まず私がもう一度、王の店を調査する。それで、確実な証拠が揃ったら二人を逮捕してほしい」
「うーん・でもな・・・」
　ディエチの提案は彼女一人を虎穴に立ち入らせる行為だ。
　ギンガがもう一つの地球へ次元漂流させた状況と似ている。
　そんな経験をしているので、ゲンヤとしては当然そのような危険な行為を簡単に許可させるわけにはいかない。
　しかし、ディエチの言う事も尤もであり、逮捕しても証拠不十分で釈放なんてされたら逃げられてしまい真相が永久に分からなくなる。

「・・・分かった。お前さんに任せる。ただし、少しでも身の危険を感じたら連絡をしろ。今回は多少人員をお前さんの方に割くように手配しておく」
「分かった。ありがとう」
「それと・・・」
　ゲンヤはディエチの捜査に対して何人かの捜査員を支援として回してくれるように手配しれくれ、更に・・・
「此奴を持っていけ」
　デスクの中から一丁の拳銃を取り出し、ディエチに渡す。

「拳銃？でも、これって管理局で言う質量兵器にあたるんじゃない？」
「いや、此奴が出すのは鉛玉じゃなく、ガジェットの武器と同じビーム・・つまりこの銃はレーザー銃って事だ」
「レーザー銃・・・」
「そうだ。レーザーだから火薬銃と違い発射の反動はねぇし、出力調整をすれば非殺傷制定にも殺傷設定にも変えられる」
「管理局がそんなモノを・・・」
「法改正とこの銃の配備が始まったのは最近の事だからな。危険な場所に行くのに丸腰は不味いだろうし、お前さんのバズーカじゃあ目立つからな」
「な、なるほど・・・」
（バズーカじゃなくて、大型狙撃銃なんだけどな・・・）
　ゲンヤのバズーカ宣言にディエチは心の中で自分の愛銃はバズーカではなく大型狙撃銃なのだと心の中で修正を入れる。
　ディエチの愛銃とも言える固有武装である大型の狙撃砲『イノーメスカノン』はまさにバズーカのような形状をしているので、これから潜入するのだからそんなバズーカみたいなモノを持って行けば一発でバレてしまう。
　だからといって丸腰のままで行くのはリスクがある。
　なので、ディエチはゲンヤから渡されたレーザー銃を受け取り持っ

ていく事にした。
とは言え、ディエチも銃器を扱うプロなので、いきなり手渡された銃をいきなり現場で使用するのはリスクがあるので、ディエチは１０８部隊の敷地内にある射撃場にて試射をした。
バキューン!!
バキューン!!
バキューン!!
ある程度の距離へ離した的に向かってレーザー銃を撃つディエチ。
（ふむ、確かに父さんの言う通り、レーザーだから火薬の爆発による反動はない）
（音もそこまで大きくはない）
（でも、魔導師が放つシューターじゃないから銃口から的まで真っ直ぐの弾道しか撃てない・・・・まぁ、当然だけどね・・・・）
（・・・この銃、私のＩＳ能力でも適用できるかな？）
ディエチのＩＳ能力は、体内で生成したエネルギーを本来ならばイノーメスカノンから砲撃として放つ「ヘヴィバレル」。
自身の体内でエネルギーを生成するのは問題ない。
放つのが生まれた時から使っているイノーメスカノンか、ついさっき渡されたレーザー銃かの違いだ。
（流石にフルパワーだと銃が私のエネルギーに耐えられないだろうし、なによりＩＳ能力には非殺傷なんてないから、エネルギー調整が重要だ）
イノーメスカノンは大口径のバズーカみたいな大型狙撃銃なので、蓄えられるエネルギー量もその耐久力もレーザー銃とは雲泥の差である。
さらにエネルギー調整もあるが、イノーメスカノンから放たれるヘヴィバレルはＳクラスの破壊力を誇る威力がある。
それを防げるのはせいぜい、なのは、はやて、フェイトクラスの高ランクの魔導師ぐらいだ。
王や華晨が魔導師なのかはロナウの日記の中から魔導師なのか、非魔導師なのかは不明であるが、生きて逮捕は管理局の鉄則なので、万

が一彼らと交戦するようなことがあれば相手を非殺傷設定で倒さなければならない。
（潜入するまえに装備は万全な状態にして使いこなさないと・・・）
ディエチはそう思い、目を閉じて集中する。
エネルギー調整を間違えれば、手にしているレーザー銃が暴発する恐れがある。
そうなれば、捜査する前に再びマリエルの下を訊ねなければならなくなる。
手を治している間に事態が動くことも十分に考えられる。
（集中・・・集中・・・）
集中しながら体内のエネルギー調整をしながら手にしたレーザー銃にエネルギーを貯める。
エネルギーが溜まり、レーザー銃の周りにバチ、バチと小さなスパークが生じる。
そして、ディエチがカッと目を見開き、レーザー銃の引き金を的に向かって撃つ。
バシューン!!
先程のレーザーとは異なり、物凄い速さの光の線が的へと向かい、的に命中すると、
ドカーン!!
的はもとより、射撃場の壁の一部を撃ち抜いた。
「ヤバッ・威力が強すぎた・・・うーん、調整が難しいな・・・あっ、銃は・・・うん、壊れていない。意外と頑丈だ」
魔導師の魔法はデバイスやリミッターで調整が可能だが、戦闘機人のＩＳ能力の調整は使う本人の力加減に左右される。
それを含めて調整されていたとはいえ、ディエチのヘヴィバレルに耐えたこのレーザー銃はかなりの強度な事が窺える。
それもそのはずで、このレーザー銃そしてビームライフルはロールスロイスたち〝陸〟の上層部が開発費を得た後、心血を注いで〝陸〟で働く非魔導師局員たちのために威力・耐久性、携行しやすい形状など様々な観点や意見を取り入れて開発をした光学武器なのだ。

（通常のレーザー銃の使い方は分かった）
（でも、この銃でヘヴィバレルを撃つには少し訓練が必要みたいだ・・・）
（いつ踏み込むか分からない中で、どこまで調整が出来るだろう・・・？）
（もし使いこなせなかったら、精密射撃でいくしかないけど、使える手は一つでもあった方がいいよね）
（よし、そうとなれば訓練あるのみだ!!）
　ディエチは再び目を閉じて体内でエネルギー調整を始めた。
　その後、ディエチがレーザー銃とヘヴィバレルの鍛錬をしていると、王の店に仕掛けてきたサーチャーに動きがあった。
「ん？」
『華晨、商品が随分集まったネェ。今夜、オークションをするからお客に連絡を入れるヨロシ』
『了解ネェ。オーナー』
（オークション？料理屋の店で？）
（一体何をオークションに出すんだろう？）
　料理屋に関係なさそうな単語である『オークション』という言葉に違和感を覚えるディエチ。
（これはもしや、何か手掛かりが掴めるかも・・・）
　そう思ったディエチは早速ゲンヤにこの旨を伝えた。
「確かにディエチの言う通り、料理屋でオークションって単語は妙だが、どこかの好事家かオークションの運営会社がオークション会場にその料理屋を貸し切った可能性もあるがな・・・」
　かつて機動六課が稼働中にホテルアグスタでロストロギアのオークションが行われたことがあった。
「な、なるほど・・・」
　ゲンヤの可能性を聞き、ディエチは納得する。
「でも、本当にただのオークションなのかは実際に行ってみないと分からないから・・・」
「そうだな。でも、気をつけろよ。ディエチ」

「うん」
　こうして、今夜ディエチはオークションが開かれる王がオーナーをしている例の料理屋に潜入る事になった。
　潜入前、
「では、ナカジマさん。服の内側に集音マイクを仕込んで下さい」
　１０８部隊の指令車の中でディエチは店内の様子を他の捜査員に知らせるための集音マイクを手渡され、服の内側に仕込む。
「それと通信インカムです。こちらと連絡が取りやすい様に耳へ着けてください」
「・・・ありがとう」
　続いてディエチは捜査員と連絡をとるための通信インカムを耳に着ける。
「集音マイク・通信インカムの起動を確認・店内の状況はこちらで音声として聞いていますし、何かあればインカムでこちらと連絡が取れるようになっています。勿論、録音もしているので、安心してください」
「例の店を監視していた別動隊からの連絡では例の店に多数の人間が入っていくのが確認されています。あの店で今夜何か行われるのは間違いありません」
「了解。それじゃあ、行ってきます」
　服の内側に集音マイクを仕込み、そのマイクの稼働を確認した後、ディエチは王の料理屋へと向かう。
　正面出入口では見張りが居るだろうし、もし正式なオークションが行われるのであるならば、招待状が必要だ。
　なので、ディエチは裏口からの潜入を試みた。
（・・・裏口の向こう側に人の気配は・・・なし）
（よーし）
　ディエチはまず扉の向こう側に人の気配が無い事を確認し、裏口のドアノブをゆっくりと回す。
　しかし、扉にはカギがかかっていた。
（そりゃあそうだよね）

（仕方ない）
　問題行動であると自覚はしているが、ディエチは内ポケットからピッキングツールを取り出し、それを使い裏口の扉を開けて店の中に潜入した。
（おかしい人の気配がない・・・・）
（此処に来る前の情報では、確かに店の中に多数の人が入っている筈・・・・）
　店内は必要最低限の明かりが灯っているだけで、人の気配がない。
　オークションが店内で行われているのであるならば、人の気配があり人の声がする筈だ、
　しかし、店内は何故かシーンと静まり返っている。
（店内に入った人たちは一体何処へ・・・・）
（はっ!?確か依頼人のご主人が記した日記では、『地下で脳交換手術をした人と出会った』って書いてあった・・・それならオークション会場は地下か!?）
　ロナウの日記が書いた日記の文面からディエチはオークション会場が厨房の床下扉の下・・・・
　店の地下と判断し、急ぎ厨房へと向かう。
　厨房は綺麗に整理整頓されていたが、誰もいない。
　しかし、明かりは点いており、床下扉は開いていた。
「やっぱり、会場は地下か・・・・」
　ディエチは地下へと続く床下扉の中を覗く。
「こちら、ディエチ・ナカジマ。オークション会場は厨房の地下にあると思われます」
　そして、ディエチはインカムにて外で待機している捜査員たちに現状を報告する。
「店内には誰も居なかったのか?」
「はい。裏口付近、厨房を含め、人の気配はありません。残るはこの地下のみです」
「そうか・・分かった。一度戻った方が良いのではないか?」
「いえ、まだオークション内容を確認していません。オークションの

出品内容が美術品とかの普通のオークションなら、このまま撤退しますが、もし問題のある品を競売していたらそのまま摘発します」
ディエチは外の捜査員に地下へ行く旨を伝えた後、地下へと降りて行った。
地下通路を進んで行くと、奥の方から人の声が聞こえて来た。
（やっぱり、会場は此処か・・・）
ディエチは気配を殺し、オークション会場となっている地下に設けられている一室の扉を少し開けて、室内の様子を窺う。
「では、次の競売品はコレネェ」
室内に設けられた舞台の上には店のオーナーである王が一つの生体ポッドをテーブルの上に置く。
その生体ポッドの中には一つの脳髄が入っていた。
「お買い得、早い者勝ちネェ。生物学の権威、ロナウ・マクトリン氏の脳ミソ!!百万から!!」
「百二十万!!」
「百三十万!!」
「百四十万!!」
ロナウの脳ミソをオークションにかけて値段を入札する参加者たち。
人の脳ミソを平気で購入しようとしている事からこのオークションの参加者たちも普通の人間たちではないのだろう。
「お客さん、もっと気前良く値を張るヨロシ」
思ったよりも値段が吊り上がらない事に王はやや不満気だ。
「お国の軍事用生物兵器、細菌兵器研究に役立つ事請け合いネェ!!脳ミソ状態でもちゃんと生きているネェ。かさばらないから出国の時、怪しまれない。とても便利ネェ。ミナサンの国の役立たずの脳ミソを取り出して、ソイツの身体に移植しればヨロシネェ」
王がロナウの脳ミソの使い道を嬉々として話す。
「百五十万!!」
それでも値段はあまり上がらない。
新しい体にロナウの脳ミソを移植しても王の言う様に生物兵器の

研究をしてくれるのか？
　脳ミソの移植手術が成功するのか？
　そうしたリスクがあるので、例えロナウが優秀な生物学学者でも値段が吊り上がらないのだ。
（ロナウ・マクトリン・・・依頼人のご主人の名前だ）
（やはり、この店のオーナーが依頼人のご主人の失踪に関わっている事に間違いない様だ）
「百五十万!!百五十万!!それ以上は居ないアルカ？」
　オークションの内容を聞いて黒と判断したディエチは・・・
「そこまでだ!!全員手を上げろ!!」
　レーザー銃を構えながら室内に突入した。
「な、ナンネ？お前は？」
「時空管理局　嘱託局員、ディエチ・ナカジマ」
「アイヤ～管理局の局員カ？でも、残念ネェ」
　王はディエチの姿を見て、リモコンを取り出し、
「この装置を動かせば、魔導師なんて怖くないネェ」
　ボタンを押す。
　すると、何かが作動した。
「？」
「気づかないカ？身体の違和感に・・・」
「別に何も・・・」
　しかし、ディエチは違和感なんてない。
「この部屋にはＡＭＦ発生装置が仕掛けて有るのヨォ～これでお前たち魔導師は魔法が使えなくなるネェ」
　この部屋にはスカリエッティが作ったガジェットの機能の一つ、ＡＭＦ発生装置が仕込まれていたようで、王はそのＡＭＦ装置を作動させたみたいだが、戦闘機人であるディエチにＡＭＦは何の意味もない。
「残念ながら、私は魔導師じゃないからＡＭＦは関係ないんだよ」
「アイヤ～非魔導だったカ・・・しかし、それでも関係ないネェ。このオークションを見られたからには死んでもらうネェ!!」

王は懐から拳銃を取り出す。
他のオークション参加者たちもこのままだと自分らが管理局に摘発される事から自らの保身のために王と同じく拳銃やマシンガン等の質量兵器を取り出し、その銃口をディエチへと向ける。
「お前、迂闊だったネェ。一人で来るなんて・・・大人しく死ぬヨロシ」
ディエチを確実に口封じ出来ると確信したのか王はニヤリと笑みを浮かべる。
「一つ質問」
「なんネェ」
「脳ミソを取り出した後のロナウさんの身体はどこに？身体もとってあるの？」
「あんな年老いた身体なんて不要なモノ。だからミンチにしたあるヨォ。お前もそうなる」
「ミンチ？」
「ソウネェ。細かく刻んで川に捨てる。肉は魚が食べてくれるからとってもｅｃｏネェ」
１０８部隊の管轄内で起きている人の肉片や骨が川原に打ち上げられている事件の犯人も王たちの仕業のようだ。
「さあ、此処で撃ち殺されるか、それとも生きたままミンチになるかドッチがいいカ？」
万事休すかと思われたが、ディエチは此処に来る前に集音マイクとインカムを装備しており、更に店のすぐそばには捜査員たちが待機していた。
先程の王とディエチの会話の内容は当然、集音マイクで捜査員たちに聞かれていた。
なので・・・
「全員動くな!!」
外で待機していた捜査員たちが突入してきた。
勿論、突入して来た捜査員たちの手にはディエチ同様、レーザー銃が握られていた。
「くそっ、捕まってたまるか!!」

「こうなれば自棄だ!!」
オークション参加者たちは捜査員たちへ発砲し、オークション会場はたちまち銃撃戦の戦場となった。
「アイヤ～これは不味いネェ」
「お、オーナー待って～」
銃撃戦のどさくさに紛れて王と華晨は地下に設置されている隠しエレベーターに飛び乗って逃げて行った。
「あっ、逃げた!!」
その様子に気づいたディエチは銃撃戦が起きているオークション会場から急いで出た。
隠しエレベーターから逃げた王と華晨は屋上に隠していた小型のヘリコプターに乗り、空へと逃亡した。
今回の事件は〝陸〟の１０８部隊の管轄内で起きていた事から〝空〟へ応援要請をしていなかったので、空の警戒はしていなかった。
尤も〝空〟に応援要請をしたところで、〝空〟が空戦魔導師の応援を寄越したとは思えない。
「いや～まさか管理局にバレるとは予想外ネェ～でもワタシ、どさくさに紛れて逃げるのとても得意ネェ」
「オーナーこれからどうするネェ」
「しかたないネェ。ひとまず、他の世界に高飛びするヨロシ」
王と華晨はこのまま次元航行船の発着場へと向かい他の世界への高飛びを画策する。
しかし、そうは問屋が卸さない。
「お、オーナーあれ!!」
華晨がビルの一角を指さす。
「ん?あ、アレは!?」
王も華晨が指を差した方向を見て思わず驚愕の声を漏らす。
華晨が指を差し、王が驚愕の声を出したその先に居たのはレーザー銃を構えたディエチだった。
「あ、アイヤ～!!」
バシューン!!

ディエチは王と華晨が乗った小型ヘリコプターに向かってレーザー銃からヘヴィバレルを撃つ。
ヘヴィバレルは見事二人が乗った小型ヘリコプターに命中した。
「アイヤ～!!」
二人は墜落していく小型ヘリコプターと共に川へと落ちた。
オークション会場に居た参加者たちも１０８部隊の捜査員たちの手で全員逮捕された。
しかし、川に落ちた王と華晨の身柄は確保できず、死亡したのか逃亡したのか不明となり、その生死の確認が急がれる事になった。
それから数日後・・・
ディエチの姿は１０８部隊の部隊長室にあった。
彼女はゲンヤに事後報告を入れに来たのだ。
「それで、お前さんに旦那の捜索を依頼したご婦人はどうなった？やはり、旦那を亡くした事を気に病んでいたか？」
「いえ、彼女は未だでもご主人と一緒に生活をしています」
「ん？一緒に生活？でも、旦那の身体はバラバラにされたんだろう？」
ディエチの回答に首を傾げるゲンヤ。
「はい。確認はとれていませんが、あの事件の首謀者である王が言うには、ロナウさんの身体はバラバラにされたみたいです」
「だったら・・・」
「しかし、脳ミソは無事でした・・・」
「ん？」
「認めたくはありませんが、あの華晨と言う外科医は凄腕の外科医だったみたいです。それに脳ミソを保存する生体ポッドも精巧に作られたモノみたいでロナウさんは脳ミソの状態で生きています・・・かつての最高評議会のメンバーみたいに・・・ね・・・」
「・・・」
「でも、依頼人は例え脳ミソだけの存在になってしまっても心の底からご主人を愛しているみたいで、嬉々として引き取っていきました」
ディエチの回答にゲンヤは絶句した。
ＪＳ事件の後日に判明した正体不明の管理局最高意思決定機関の

メンバーたち。
彼らは旧暦の時代、未だ統制の取れていなかった数多の次元世界を平定した英雄たちであったが新暦となった今では、死を恐れるまま脳髄だけとなり、管理局を陰から牛耳っていた過去の亡霊と言える存在だった・・・。
ロナウはそんな最高評議会のメンバーと同じ状態であるとディエチは言う。
しかし、エレーヌはそんな状態でもロナウの事を愛していたので、生体ポッドに入った脳ミソ状態のロナウを引き取って行った。
「でも、ＪＳ事件の時はまだ華晨の脳交換手術の術式は確立されていなかったけど、もし確立されていたら、あの脳ミソの老害たちは身体を交換して生き続けて管理局をずっと陰から牛耳っていたかもしれないね・・・その場合、管理局のエースや夜天の書の主、ハラオウン候補生も狙われていたかもしれないね」
「・・・」
ディエチ曰く、もしＪＳ事件前に脳交換手術の手法が確立されていた場合、最高評議会のメンバーはなのは、はやて、フェイトの若い肉体、魔力に目をつけていたと推測する。
ゲンヤもディエチがたてた推測を否定する事が出来なかった。
「しかし、そんな手術が出来る外科医を確保できなかったのは痛かったな・・・」
「その点についてはごめんなさい。あのまま逃亡を許す訳にはいかなかったから・・・」
二人が乗ったヘリコプターを撃ち落したディエチ自身もまさか、ヘリコプターが川に墜落して王と華晨が生死不明になってしまったのは想定外の事態だった。
「ああ、流石にヘリで逃亡した後の事はお前さんの不可抗力だ」
ゲンヤもその点は理解してディエチに罰則を与える事はなかった。
とは言え、現状・燃えながら墜落していくヘリコプターの中からパラシュートも飛行魔法も確認できずに王と華晨の二人はヘリコプター諸共、川へ墜落した事から二人の生存を疑問視している捜査員は

多かった。
その頃、今回ディエチに旦那の捜索を依頼したエレーヌと被害者であるロナウの自宅であるマクトリン邸では・・・
「アナタ、今日はいい天気よ」
エレーヌが脳髄の入った生体ポッドを両手で大切そうに持ちながら庭に出て微笑んでいた。
すると生体ポッドからはまるで返事をするかのようにゴポッ、ゴポッと気泡が出ていた。

また今回の事件の余波は意外にもナカジマ家でもあった。
「うそ!!あの店が潰れた!?マジかよ!?」
「うん。店のオーナーが犯罪に関わっていたみたいで・・・」
「そっか・・・あの店の料理、美味かったのになぁ・・・」
意外にも王の料理屋で出された料理が気に入っていたノーヴェが、王の店が閉店した事に驚き、残念がっていた。
「あっ、でもね・・・」
がっかりしているノーヴェに対してディエチは、とある紙の束を見せる。
「ん?なんだ?この紙の束は?」
「あの後、お店の家宅捜索があって、事件とは関係ないって事で、あの店にあった料理のレシピを父さんの許可を貰ってコピーさせてもらったの。だから材料があれば家でも作れるよ」
「ほんとうか!?」
「う、うん。全部って訳にはいかないかもしれないけどね」
「じゃあ、今度作ってみようぜ!!材料があれば作れるかもしれねぇんだろう?」
「わ、分かった。その前にレシピを見て、作れそうな料理のピックアップと材料の調達をしよう。父さんは今日、飲み会で遅くなるみたいだけど、今日の料理の反応を見て後日、父さんの分も作ろう」
「おう!!」

もうあの店の料理が食べられないと諦めたノーヴェであったが、ディエチの機転であの店で提供していた料理のレシピを手に入れた事で、材料と手間、調理器具があれば作れるかもしれないと言う事実にノーヴェは喜んだ。

後日、朝早くからディエチとノーヴェはあの店があった新都心地区の市場へと赴き材料の調達をした。

新都心地区には他の世界での食材を扱う店があった。

だからこそ、王はこの新都心地区で店を構えたのだ。

ただ、この市場に行く前、ノーヴェがウェンディに、

「ウェンディ、これからあたしとディエチはちょっと市場で食材を仕入れてくる。今日の夕食は期待していいぞ!!」

「えっ?わざわざ市場に?近くのスーパーじゃあダメなんっスか?」

「あの店の料理を再現するにはスーパーの食材じゃあ揃わないんだよ」

「ん?あの店?それってもしかして、ノーヴェとディエチがこの前行ったカエルや亀を出す料理屋っスか!?」

「ああ。あの店、何か潰れちまったみたいなんだが、ディエチがレシピを手に入れて、今日はその料理を再現しようって事になったんだよ」

「・・・・」

ノーヴェの言葉を聞き、ウェンディは絶句。

(なんで好き好んで亀やカエルを食べなきゃならないっスか!?)

ウェンディにしてみれば強制的にゲテモノを食わされることになるので、心の中でノーヴェに対して文句を言う。

「スバルやヴィヴィオ、アインハルトにも伝えてあるから、今日の夕食は賑やかになるぞ」

(ええ、そりゃあ、ある意味で賑やかになるだろうっスね!!)

嬉しそうなノーヴェと異なりウェンディはげんなりとしていた。

それからしばらくして、タクシーに沢山の段ボールを詰め込んだディエチとノーヴェが帰って来た。

「うわぁぁ~本当にカエルや亀を買って来たっス・・・・」

二人の帰宅の様子を見たウェンディは引いていた。

やがて、食材を台所に運び込んだ二人は下ごしらえを始める。
「・・・」
ウェンディは顔を引き攣らせてキッチンに居るディエチとノーヴェを見ている。
そんな中、
「ただいま～」
ノーヴェに呼ばれたスバルが帰省した。
「あっ、スバル・・・」
「ん？どうしたの？ウェンディ」
「今日の夕飯の事、聞いているっスか？」
「えっ？今日の夕飯？うーんと、ノーヴェから『凄いご馳走を作るから帰ってこい』としか聞いていないけど・・・一体何を作るんだろう？」
そう言いながらキッチンをチラ見すると、
「ん？もう、作り始めているの？」
「あぁ～うん。ノーヴェもディエチも張り切っているみたいで・・・」
「そうなんだ・・・じゃあ、今日の夕飯は期待できるね!!」
「そ、そうっスね・・・」
（スバル、聞いていないみたいっスね・・・）
（まさか、亀やカエルを食わされることを知らないみたいだし、此処まで嬉しそうなスバルをがっかりさせるのは気が引けるっス・・・）
スバルはどうやら今日の夕飯のメニューを知らされていないみたいだ。
しかもスバルはディエチとノーヴェの様子から今日の夕飯を楽しみにしている。
そんなスバルを絶望の淵に叩き落すのはあまりにも可哀そうだったので、ウェンディは今日の夕飯のメニューを伝えない事にした。
夕方になり、ノーヴェが呼んだヴィヴィオとアインハルトもナカジマ家へとやって来た。
「こんにちは」
「おっ、二人とも来たな」
ノーヴェがキッチンからひょいっと顔を出す。

「はい。今日はお招きありがとうございます」
「ありがとうございます!!」
ヴィヴィオとアインハルトを招き入れ夕食に向けてラストスパートをかけるノーヴェ。
「ヴィヴィオ、アインハルト、今日はノーヴェから夕食について何か聞いているっスか?」
「ううん、何も聞いていない」
「私も・・・」
スバル同様、ヴィヴィオとアインハルトも今日の夕飯のメニューは聞いていないみたいだ。
やがて、夕飯の準備が整い、リビングのテーブルに料理が並び始める。
「柔甲魚(スッポンみたいな亀)の姿煮」
「「「・・・」」」
皿の上に亀が一匹まるまると乗っている料理を見て目が点になるスバルたち。
「それとこれ、水鶏(食用カエル)のから揚げ」
「こっちは川魚と山菜の味噌粥だ。いやぁ~この粥はマジで手間がかかって作るのに苦労したぜぇ~」
テーブルに並ぶ料理の数々であるが、スバルたちは亀には手を出さず他の料理を食べている。
「ん?なんだ?ヴィヴィオもアインハルトも姿煮は食べねぇのか?」
「さ、流石に・・・」
「亀はちょっと・・・」
「まぁ、見た目はグロいかもしれねぇが、この亀は肌に良い成分がふんだんに含まれているんだぜ。それにアミノ酸から作られるタンパク質は体内で筋肉や酵素、ホルモンの材料になるため滋養強壮の効果があるし、リノール酸は、コレステロール値や中性脂肪を抑える働きがある」
「えっ?この亀にそんな効果が!?」
「意外かも・・・」

ノーヴェから効果を聞きヴィヴィオとアインハルトは恐る恐るだが、姿煮に箸を伸ばす。
スバルもやはり、効果が気になったのか姿煮に箸を伸ばした。
続いてノーヴェは唐揚げに箸を伸ばす。
「ノーヴェ、それは？」
「水鶏の唐揚げだ」
「水鶏の唐揚げ・・・？」
「それってなんの肉なの？」
食材に聞き覚えがなかったアインハルトとヴィヴィオは水鶏が一体どんな生き物の肉なのか気になった。
「水鶏は食用カエルの一種だ」
「か、カエル!?」
「気持ち悪っ!!」
「ほら、ほら、それがいけない。確かに食材の正体を聞けば気持ち悪いと思うが、味は鶏の唐揚げよりも美味い。上品且つタンパクで奥行きが深い味だ」
「そ、それじゃあ・・・」
「一つ・・・」
ヴィヴィオとアインハルトは恐る恐る箸を伸ばし、一口食べてみた。
「意外とあっさりしている・・・」
「確かに奥行きがある味・・ですね」
カエルと聞いて最初は気持ち悪がっていたヴィヴィオとアインハルトであるが、味を知るとパク、パクと食べた。
スバルとウェンディもヴィヴィオとアインハルトの様子から恐る恐る水鶏の唐揚げを食べてみたが、カエルと言う割にその味を気にったのかスバルが食べる唐揚げの消費はノーヴェと競い合うかのようだった。
この日の夕食でスバルたちの食に対する見方が変わったのは言うまでもなかった。

百九一話　救援任務

此処で時系列は元に戻し、視点はミッドチルダからバジウド星系へと移る。
バジウド星系内にある惑星ロッサ。
この星はボラー連邦系の星間国家であり、反ガルマン感情が強い星であった。
ガルマン・ガミラスとしては当然そのような星を放置しておく訳も無く、東部方面軍はこの惑星ロッサ攻略の為に陸戦部隊を派遣して地上よりロッサを占領しようと作戦をたてた。
しかし、ロッサの軍は東部方面軍が予想した以上に激しい抵抗を見せ、逆にロッサへ派兵したガルマン・ガミラス側の軍が窮地に陥っていた。

惑星ロッサ　地表
「敵機!!来襲!!」
「退避!!塹壕内へ退避しろ!!」
ガルマン・ガミラスの陸戦部隊の拠点で対空レーダーが敵機の存在を探知し、地上に居た士官が部下たちに塹壕へ避難するように声を上げる。
するとボラー系の航空機が低空飛行をしながら爆弾を投下しながら接近して来る。
「左三十度!!敵爆撃機!!」
「撃て!!」
対空砲が敵の爆撃機を迎え撃つように火を噴く。
しかし、敵爆撃機は対空砲をものともせずに地上を爆撃して行き悠々と引き上げていく。
敵の爆撃機が完全に引き上げていくのを確認した士官は、
「大丈夫か!?怪我はないか!?」
部下たちに怪我がないか？

負傷者の有無を確認する。
「ほ、補給はどうなっているんですか!?来るのは敵ばかりであります!!」
すると、震えながら小銃を握りしめた一人の兵士が士官に訊ねてくる。
「保存食もエネルギーも底を尽きかけているのに、補給も援軍も来る気配がありません!!」
「・・・・」
拠点の周囲には破壊されたガルマン・ガミラスの陸上主力兵器であるサルバーＳ―ＶＩ型重戦車を始めとして、メルバーＭ―ＩＩＩ型装甲兵員輸送車、野砲型光線砲の残骸があちこちにある。
勿論、対戦相手であるロッサ軍の戦闘車両・・・ボラー連邦本国及びボラー系の領内で使用されているボラー系統の戦車も残骸と化して放置されている。
そんな惨状から既にこの部隊には満足に戦える戦闘車両や野戦重砲、それらを動かすエネルギーさえも残り僅かとなっているのだ。
先程、敵の爆撃機を迎え撃った対空砲のエネルギーもいつまで持つのか心もとない。
更に自分たちの食料さえも補給が来ないために備蓄が少なくなっている。
残っている兵器はコスモガンであるモルドラＰ―８８やライフルぐらいだ。
一方、ロッサの軍は先ほどの爆撃機や戦車、ミサイル戦車などの戦闘車両はまだまだ豊富に残されている。

ロッサの軍はガルマン・ガミラスの陸戦部隊を真綿でじわじわと首を締めるように長期戦を仕掛けているのだ。
「大尉!!司令部はこの星を忘れたのでは!?みんな、我々の事を忘れた

のではないでしょうか!?」
　援軍も補給も来ないこの絶望的な状況に兵士は震えながら士官に訊ねてくる。
「大丈夫だ。少なくとも敵は我々の事を忘れてはない。今、踏みしめるこの地はボラー連邦の領土だ!!俺たちは今、ボラー連邦を占領しているんだ!!」
「・・・・」
「負傷者を収容するぞ!!」
「は、はい!!」
「各隊!!被害状況を報告!!負傷者は後方へ移送するぞ!!」
　士官は部下数名を引き連れて友軍部隊の被害状況と負傷者の有無と収容を行った。

　惑星ロッサでのガルマン・ガミラス陸戦部隊の苦戦は東部方面軍司令部でも知る所となっていた。
「ガイデル提督、惑星ロッサに展開中の部隊状況ですが・・・・」
　副官がガイデルに戦況報告書を手渡す。
「うむ・・・・戦況は・・・・芳しくない・・か・・・・」
「はい。部隊の方からは補給と援軍の要請が来ております」
「現状はこの報告書から分かったが・・・・今はボラー連邦領内への侵攻作戦中だ。バジウド星系へ援軍を送る余裕はない」
「・・・・やはり、上陸作戦は早急過ぎましたな。周辺惑星を十分に制圧し、補給路を断ち、軌道上からの艦砲射撃をして地上の敵勢力を粉砕した後に上陸作戦を展開した方が賢明でした」
　ベムラーゼが死にボラー連邦領内への作戦が決まった事でガイデルはまだガルマン・ガミラスに反抗するバジウド星系内のボラー連邦系の惑星国家に対して短期決戦を行い、その後にボラー連邦領内侵攻作戦に集中したかったのだが、ロッサの軍からの思わぬ抵抗に上陸部隊は苦戦し強いられていた。
　しかし、現状ボラー連邦領内への侵攻作戦が既に実施されている中で、バジウド星系へ大規模な援軍は送れない。

「提督。此処は意地を捨ててロッサからの撤退を行ってはいかがでしょうか？」
「なに!?撤退だと!?」
「はい。援軍も補給もが送れない以上、ロッサに展開している陸上部隊だけではこれ以上の戦果は期待できませんし、このままですと上陸部隊をみすみす犬死にさせてしまいます」
「・・・・」
「最後に送った援軍の中には本土の親衛隊の部隊も含まれていました。総統閣下の親衛隊を全滅させてしまっては、提督のお立場も・・・・」
「分かっておる・・・・くっ、此処はロッサの陸戦部隊救助を本国に頼み込むしかないか・・・・」
　東部方面軍では現状、ボラー連邦領内侵攻作戦で手一杯なので、ロッサに展開している陸上部隊の救援を本国の艦隊に頼み込むガイデルであった。
　ガイデルが本国にロッサの件を伝えると、ロッサでの苦戦はデスラーの耳にも当然入った。
「キーリング」
「はっ!!」
「バジウド星系の惑星ロッサでの苦戦と撤退についてだが・・・・」
「はっ、ガイデル提督もボラー連邦領内侵攻作戦前に何とか決着をつけたかったようですが、ロッサ軍の思わぬ抵抗と反撃を受けたみたいです。本土の親衛隊の一部を援軍に送りましたが、それでも形成は覆せなかったようです」
「ふむ・・それでガイデルが、部隊の撤退を決め、その救援を求めて来た」
「現状の東部方面軍の状態では確かに厳しいですからね」
「まぁ、百戦して百勝とはいかぬと言う事だ。キーリング、本土の艦隊よりロッサへの救援部隊を選出せよ」
「承知しました」
　デスラーはキーリングに本土艦隊よりロッサ救援艦隊を選出する

ように命じた。
デスラーがロッサに展開している陸上部隊の救援を決めた中、バジウド星系のボラー派でも動きがあった。
八雲とＵＸ―２３４が殲滅した輸送船団は元々ロッサへ送られる軍事物資であった。
その軍事物資がロッサへ届かない事実にバジウド星系のボラー派は焦り、方針をこれまでの長期戦からロッサに展開しているガルマン・ガミラスの陸上部隊を早期に殲滅する方針へと変更した。
周辺のボラー派の惑星国家より、連合陸戦隊が結成され、護衛兼攻略支援艦隊も同じく結成された事でロッサの救援任務は困難が予測されることになった。

ボラー派のとある惑星にて、輸送船に次々と乗り込んでいく将兵たちを見る一人のボラー派軍人が居た。
「あれがロッサへ向かう攻略部隊か・・・」
「はい。アルゲイ・メランコフ少将を指揮官とする混成師団、一万七千名。まさに陸戦部隊の精鋭であります」
輸送船には陸戦部隊の将兵の他に戦闘車両や野戦重砲などの陸戦兵器も積み込まれていく。
「まぁ、補給を絶たれたガルマン・ガミラスの部隊など一日でもあれば方は付くでしょう。それに陸上前には我がツェザレー以下の艦隊が軌道上より艦砲射撃を行います。上手くいけばそれだけで終わる可能性が高いでしょう」
「そうだな。この最新鋭艦、ツェザレーがあれば例えガルマン・ガミラスの戦艦が来ても後れを取る事はないな」

（問題はあの輸送船団を無傷のままロッサへ連れて行く事だ）
ツェザレー艦長のアクセラ・ノヴォッキーはロッサの攻略よりもロッサまでの道のりを心配していた。
そんなノヴォッキーが率いる艦艇が以下の通りとなっている。

スオロフ級航宙戦艦　×１
アポストロ級航宙戦艦　×２
ロスチラフ級航宙戦艦　×４
護衛艦　×６
輸送船　×３

ロッサを巡るガルマン・ガミラスとバジウド星系のボラー派との間で新たな戦いが起きそうな中、ボラー派の輸送船団殲滅作戦にて損害を受けた八雲は共闘したＵＸ－２３４艦長のストロネストロの母国である惑星ゼスにて補修と乗員たちの休養を行っていた。
そんな中、八雲の艦橋にて、
「補修が終われば、八雲は再び哨戒任務に戻る事になりますが、どの宙域を哨戒するのですか？」
ギンガが瓢に次の哨戒宙域を訊ねる。
「バース星の司令部からは特に指定はされていないからな・・・」
バース星、惑星ゼスから提供のあったバジウド星系の宇宙海図を見ながらギンガと瓢は惑星ゼスを出航後、どの宙域の哨戒を行うか検討していた。
そんな中、ガミラス時代から使用されていた宇宙艦船が惑星ゼスへ降下して来た。
しかし、この惑星ゼスはガルマン・ガミラスと同盟関係にあるので、ガルマン・ガミラスの宇宙艦船が惑星ゼスに来るのは大して珍しくもなく、ガルマン・ガミラスの次元潜行艦を惑星ゼスの軍が使用していたように、もしかしたら惑星ゼスの軍人が使用しているのかもしれない。
降下して来たガルマン・ガミラスの宇宙艦船は惑星ゼスの軍基地へ着陸し、基地司令官と面会する事となった。
この艦隊を指揮していたのは、旧ガミラス軍にて第８警務艦隊司令官・兼任・『ミランガル』艦長を務めていたネレディア・リッケであった。
ネレディアが今回、艦隊を率いて来たのは、彼女が指揮する艦隊が

ロッサの陸上部隊救援の任務を担う救援艦隊であったからだ。
そしてネレディアはその救援艦隊の司令官として艦隊を率いて来たのだ。
今回、ネレディアが率いて来た救援艦隊の全容は以下の通りとなっていた。
惑星ロッサ　陸上部隊救援艦隊　第一戦隊
旗艦　ミランガル　（ゲルバデス級航宙戦闘母艦）
ゼルグート級一等航宙戦闘艦　（陸上部隊収容のため）　×1
デストリア級航宙重巡洋艦　×3
クリピテラ級航宙駆逐艦　×5
リンチェント級航宙駆逐艦　×6
そして、第二戦隊にはフォムト・バーガーが副司令兼第二戦隊司令官として別動隊を率いて来た。
惑星ロッサ　陸上部隊救援艦隊　第二戦隊
旗艦　ランベア　（ガイペロン級多層式航宙母艦・重武装ユニット装備）
ケルカピア級航宙高速巡洋艦　×1
クリピテラ級航宙駆逐艦　×5
ネレディアとバーガーは寄港した惑星ゼスの基地司令官の下へと向かい、今回の寄港目的を伝えた。
「そうですか・惑星ロッサの救援へ・・・・」
「はい。出来れば今回の救援を伝えるために惑星ロッサへの伝令の為に次元潜航艦を派遣して頂きたいと思っています。何分、我々は次元潜航艦を有していないので・・・・」
本来ならば、次元潜行艦を多数派遣して、惑星ロッサの上陸部隊を救援しても良かったのだろうが、次元潜航艦自体そこまで大型な艦艇ではないので、派遣しても陸上部隊全員を乗せることは出来ない。
それに陸上部隊全員を乗せる程の次元潜航艦は残念ながらガルマン・ガミラスでも建造されていない。
故に通常の宇宙艦艇で救援へ向かわなければならなかった。
そこで、陸上部隊全員をすんなりと乗せる事が出来るように救援艦

の中にゼルグート級一等航宙戦闘艦が採用されたのだ。
一方で惑星ロッサに居る陸上部隊は救援がこれから向かう事を知らない。
なので、ネレディアは惑星ゼス所属の次元潜航艦でまずは救援が来ることを知らせてもらいたいと基地の司令官へと頼んだ。
基地の司令官は惑星ロッサの状況を知り、同惑星が危険であると判断しつつも同盟国からの頼みであり、大きな技術の差もあることから了承するしか選択肢はなかった。
司令官の命を受けてＵＸ－２３４が惑星ロッサへ伝令として派遣された。
ただ、メッセンジャーとして行くだけでなく、救援が来るまでのせめての繋ぎとして、惑星ロッサへ向かうＵＸ－２３４には軍事、医療物資と食糧が積み込まれた。
危険な地への伝令をしてもらっただけでもありがたい事なので、ネレディアもバーガーもそれ以上の事は頼まず、惑星ロッサへ派遣されたＵＸ－２３４の帰還を待つ事となった。

補修の場と物資を提供してもらったお礼に惑星ロッサの司令部へ瓢とギンガは向かいその通路にて、
「あら？」
「ん？」
「えっ？」
ネレディア、バーガー、ギンガの三人は久しぶりの再会を果たした。
「貴女は・・・・」
「ナカジマ？」
「ネレディアさんにフォムトさん!?どうして此処に!?」
「お前さんこそ、どうして・・・・」
「ん？副長、知り合いかね？」
「は、はい。第二次イスカンダル遠征の時に・・・・」
「ふむ・・・久しぶりに出会ったのであるならば、積もる話もあるだろうし、司令部には儂が赴こう」

「えっ？で、ですが・・・」
「かまわん、かまわん。ハハハ・・・」
　瓢はネレディアとバーガーがギンガの知り合いであり、三人のリアクションからこの広い宇宙で奇跡的な再会をしたのだから会話も華が咲くだろうと思い、司令部への礼は自分が行くので、ギンガには暫しの間、再会と談笑に浸るよう気遣った。
　瓢からの気遣いでネレディアとバーガーに再会し、時間を貰ったギンガは基地内のラウンジにてネレディアとバーガーと会話の一時を過ごした。
「改めて久しぶりね。元気だった？」
「はい。ネレディアさんもフォムトさんもお元気そうで何よりです」
「そう言えばツキムラの奴はどうした？一緒じゃねぇのか？」
　バーガーはギンガが居るのだから良馬も居るのかと思いギンガに訊ねる。
「私は今、良馬さんと別の艦に乗艦しているので、良馬さんはこの星には居ません」
「そうか・・・」
　バーガーとしてはヤマト、まほろば　がガルマン・ガミラス本星に来て以来会っていないので少々残念そうだった。
「それで、お二人はどうしてこの星に？」
「私とフォムトは本国からある任務を受けてこの星に立ち寄ったのよ。貴女は？」
「私は現在、このバジウド星系の哨戒任務を行っておりまして、先日こちらの星に所属している次元潜航艦と共に輸送船団の攻撃任務を行い、戦闘で艦が損傷してしまったので、補修の為にこちらの星で受ける事になりまして・・・」
「輸送船団を攻撃って事は、ボラー派の連中か・・・」
「はい」
「ったく、あの連中のしぶとさには敬服するぜ・・・」
　バーガーはバジウド星系におけるボラー派のしぶとさを吐き捨てるかのように吐露する。

「まぁ、そのしぶとさのおかげで今回の任務が私たちに来た訳だけど・・・」
「あの、差し支えなければお二人がどんな任務を受けたのかお聞きしてもよろしいでしょうか？」
「救援任務よ」
「救援・任務・・・」
「ええ、この近くにあるロッサって言う星に私たちの軍が上陸部隊を派遣したのだけれど、ロッサに展開しているボラー派の軍が意外にもしぶとくて、こっちが押されているみたいなの・・・今東部方面軍は、ボラー領内侵攻作戦をしていて、ロッサに援軍を送る余裕がなくて・それでロッサからの撤退が決まって、私とフォムトの艦隊が上陸部隊を迎えに行くのよ」
　ネレディアから任務の内容を聞いたギンガは、
「あ、あの・・・」
「ん？何かしら？」
「その任務、私たちにも協力させていただけませんか？」
「えっ？」
「はっ？」
「あっ、勿論、この後艦長と話し合って許可が出ればですが・・・」
「私たちとすれば、戦闘艦が一隻でも多く来てくれるのは嬉しい事だけど・・・」
「ガルマン・ガミラスの方々には太陽制御やシャルバート星、金星宙域での戦闘でも協力をしてもらいましたし、地球と同盟国でありますから、それに困っている人を助けるのも軍人の務めですから」
「そ、そう？それじゃあ、お願いできるかしら？」
「はい!!」
　ギンガは瓢にネレディアとバーガーが行う任務の参加を具申する為にラウンジを後にした。
　ネレディアとしてはギンガからの協力は正直ありがた申し出であった。

地球の艦の強さは実際にこの目で見たシャンブローを始めとしてこれまでガルマン・ガミラスの軍部内でも噂されていたからだ。
ネレディアはギンガの性格から今回の任務の協力を申し出てくることを読んでいたのだろうか？
その為、自分たちの任務内容をギンガに教えたのではないだろうか？
地球とは同盟関係で任務はロッサの上陸部隊の救援とは言え、任務内容を第三者にベラベラと話すのは軍人としては失格だ。
そんな疑問がバーガーの中にあった。
そこでバーガーは直接ネレディアに真意を訊ねてみた。
「おい、ネレディ」
「何かしら？」
「お前、こうなる事を読んでナカジマに任務内容を教えたのか？」
「まさか、そこまで考えてはなかったわ」
「・・・・」
ネレディアはバーガーの質問内容を否定する。
「救援任務とは言えこれから行くのは戦場よ。本音を言えば、そんな場所へ好き好んであの子を巻き込みたくはなかったわ」
「・・・・」
そこまで言われバーガーはネレディアの内心を悟った。
「フォムト・・・・」
「ん？」
「・・・・メリアと同じ結末は避けないとね」
「当たり前だ」
ネレディアとバーガーはギンガが去っていった方向をジッと見ていた。
その後、ギンガは司令部から戻って来た瓢にネレディアとバーガーが請け負った任務に就いて話、八雲もその任務に協力する旨を具申した。
まだ次の哨戒宙域が決まっていない事やこれまでガルマン・ガミラスから受けた協力、地球とガルマン・ガミラスが同盟関係である点を

考慮して瓢はネレディアとバーガーの任務に協力することを決めた。
その為、瓢は八雲の乗員たちに次の任務についての説明を行い、次いでミランガルにて今回の救援任務についての説明を受けた。
今回の任務地である惑星ロッサはバース星同様、極寒の惑星であった。
惑星ロッサが極寒な惑星となっている大きな理由は、ロッサの近くにガス状の暗黒星雲が存在しており、宇宙気流の流れによってこの暗黒星雲より、暗黒ガスがロッサへと流れそれが太陽を遮る事でロッサは極寒な惑星となっているのだ。
当然、このロッサの環境、近海の宇宙海図情報はネレディアから瓢に共有された。
「ガス星雲が近くにある星か・・・迂闊に入り込んでレーダーを潰されたら頼りになるのは肉眼となるか・・・」
「ええ、しかしこの暗黒ガスを上手く利用できれば、敵の目を眩ませる事が出来ます」
「ロッサ付近にボラー派の宇宙艦隊の存在は確認されているのでしょうか？」
「今の所、ロッサ周辺に敵の宇宙艦船の存在は確認できていません。しかし、敵がいつ艦隊を派遣して来るのか？それは流石に情報がないので、上陸部隊の撤収は一日でも早くに実行をしたい所です。ですが、現在かの地にはこのゼス所属の次元潜航艦が伝令と補給に向かっているので、その帰還を待っている形で、なんとも歯痒い事です」
伝令なしにロッサへ向かっても迅速に撤収作業が出来るか分からない。
もしも撤収作業中に敵襲を受ければ、陸上部隊は勿論の事、撤収に来た艦隊にも大きな被害が及び、撤収どころか救援艦隊もロッサに取り残されてしまう恐れもある。
とは言え、敵の増援がいつ来るのか分からない状況で、いざ救援へ向かってみると既に敵の攻撃を受けて全滅していたという可能性もあったので、何もかもが時間との勝負となっていた。
その伝令任務を帯びたＵＸ－２３４はワープにワープを重ねて惑

星ロッサへと急いで向かった。
　そしてロッサの近海にて、今後の任務成功の確率をあげるために使い捨てのスパイ衛星を放出し、暗黒ガスがロッサに掛かるタイミングを見計らいロッサに展開する上陸部隊の拠点に向かった。
　久々の友軍艦艇の到着にロッサの陸上部隊は歓喜した。
　そして、少ないながらも物資を運ぶ傍ら、ＵＸ－２３４艦長のストロネストロは司令部にて司令官との面会をして撤収の為の救援艦隊が間もなくこのロッサへ派遣されることを伝える。
　しかし、この撤収について反対してきたのは親衛隊であった。
「撤退だと・・・!?モノは言いようだな。早い話、尻尾を巻いて逃げると言う事ではないか!?」
　ロッサに派遣された親衛隊の副官が陸上部隊の司令官とストロネストロに噛みつく。
「・・・・」
「我が親衛隊に『撤退』『退却』の二文字はあり得ぬ!!そもそも我々は貴様ら上陸部隊が敵に押されていると言うからこの星に駆けつけたのだ!!それを今更ろくに戦いもせずに引き返せと言うのか!?」
「・・・やむを得ません。敗北を認める事になっても・・・短期間でロッサを占領できず、こうして戦線が長期化し、頼みの綱である東部方面軍は現在、ボラー連邦領内侵攻作戦中となった今、このロッサはもはや孤立した点に成り果てました。今後の補給も援軍も難しくなることが予想される一方で、敵は長期にわたって我々と戦うことが出来、更に援軍も送り込まれる事も予想されます」
　上陸部隊の司令官は親衛隊員を前に今後の戦線の泥沼化を指摘する。
「総統閣下からも敗戦の責はとらぬと明記された撤退命令書も届いております。生きていれば再び国の為に・総統閣下の為に戦うことが出来ます」
　上陸部隊の司令官とストロネストロの説得を聞き、親衛隊の隊長は・・・・
「ふむ・・・作戦終了・・・と言う事でよかろう」

「・・・・」
ロッサからの撤退を了承した。
本国からの伝令任務を終えたＵＸ－２３４は負傷者を乗せてゼスへの帰還行動へ入った。
「それではＵＸ－２３４は惑星ゼスへと帰還します。皆様のご武運と撤収成功を祈ります」
「うむ、貴官もゼスまでの航海の安全を祈る」
伝令としてＵＸ－２３４は何としてでもゼスへと戻り、ゼスに居るネレディアたちへこの事実を伝えなければならない。
ＵＸ－２３４は往路同様、急ぎ惑星ゼスを目指してロッサを出航して行った。
ロッサからの撤退は上陸部隊の将兵の間に瞬く間に広がった。
「やはり、此処を放棄して撤退するのですか？」
「ああ、そうらしい。まぁ、地上はこの雪だから、宇宙では暗黒ガスが漂っているだろう。気候が好転するまでは敵の定期爆撃は来ないだろう」
「じゃあ、安心して撤退することが出来ますね・・・あっ、でも親衛隊の連中はどうなんでしょう？意地を張って『此処で戦い続けるからお前たちも残れ』・・・なんて言い出してこないでしょうか？」
士官と撤退について話していた兵士は親衛隊が出しゃばって撤退話を蹴り、全員玉砕の道をたどるのではないかと不安になった。
「どうだろうな・案外、親衛隊の連中も内心ホッとしているんじゃないか？本音を言えば、こんな星からはさっさと放棄して本国へ帰りたいだろうよ。こだわっているのは面子か体裁だけだろうさ」
「そんなもんでしょうかね？」
兵士は一般兵だったので、親衛隊員の面子や体裁なんて分からなかった。
「まぁ、お迎えが来るまでは敵の陸上攻撃隊が来るかもしれない。久々に来た補給物資だ、撤退の日まで大事に使うぞ」
「了解」
兵士はＵＸ－２３４が持って来た物資の整理を始めた。

そのＵＸ－２３４は往路同様、次元潜行とワープを重ね惑星ゼスを目指した。
ＵＸ－２３４が惑星ゼスへ帰還し、ネレディアと司令部へ報告を入れると救援艦隊と八雲は直ちに惑星ロッサを目指して出航して行った。
ロッサを目指していく中、ＵＸ－２３４が置き土産に残してきたスパイ衛星の一基がロッサへ向かう敵の援軍らしき艦隊の姿を捕捉した。

ミランガル　艦橋
「リッケ司令。スパイ衛星Ｇ０１４がロッサへ向かう敵艦隊らしき艦影を捕捉しました」
「敵艦隊？それで規模は？」
「はっ、新型の戦艦を旗艦として、アポストロ級航宙戦艦二、ロスチラフ級航宙戦艦四、護衛艦、輸送船で構成されている艦隊です」
「輸送船が居ると言う事は、ロッサへの増援とその護衛艦隊か・・・・」
「おそらく・それにこれまで確認されていなかった新型戦艦を投入してきたと言う事はただの護衛艦隊と言う訳ではなく、本格的なロッサの攻略部隊ではないでしょうか？」
スオロフ級戦艦の映像を見ながら副官がネレディアにこの艦隊の本当の任務の予測をたてる。
「戦力に関しては地球の八雲を含めて五分と五分と言った感じであるが・・・・気象状況は？」
「ロッサ本土は降雪で、暗黒ガスもロッサ方面へ流れているようですが、まだ薄いみたいで、濃厚になるのはあと三日ほどかかるみたいです」
「ロッサ本土へ行く前に第二戦隊のフォムトと八雲と話あう必要がありそうね」
救援艦隊はロッサの手前にある無人惑星に停泊し、ロッサに敵の攻略部隊が接近中である情報を共有した。
「攻略部隊か・・・・こんな時に厄介だな」

「しかも相手は新型の大型戦艦か・・・・」
今回初めて確認されたボラー派の新型戦艦、スオロフ級・・・
このスオロフ級の能力がどれほどの能力なのかが不明な点が不安要素となる。
「映像からじゃあ詳しい大きさは判別できねぇが、ノイ・ゼラード級とほぼ同じ大きさか・・・・」
「制宙権をとられるとロッサからの撤退は至難の業となるな・・・・」
「敵が来たとなると、此処は艦隊を二つに分け、救援部隊と敵の注意を引き付ける揺動部隊にしてみてはどうだろうか？」
瓢が艦隊の分散と役割を提案する。
「作戦の成功率を上げるにはその方がいいか・・・・」
成功を期する為に瓢の案が採用され、親衛隊員と陸上部隊を収容するゼルグード級を率いる第一戦隊がロッサの地表に降下して陸上部隊を収容し、第二戦隊と八雲が敵艦隊を陽動する役目を担う事となった。
第一戦隊は暗黒ガスに隠れてロッサの地表へ降下し、陸上部隊を収容。
第二戦隊と八雲は第一戦隊がロッサの地表へ降下する前に敵艦隊をロッサ近海から引き離す必要がある。
更に暗黒ガスの影響と同時に作戦上、隠密を要する。
その為、無線封鎖は絶対条件となる。
重武装ユニット装備しているとは言え、ランベアは元々空母だったので、今回の作戦でも通常のガイベロン級より艦載機の数は減らしているが、ちゃんと艦載機は搭載されている。
その為、ランベアには陽動の他に第一戦隊との連絡役も担ってもらう。
「しかし、無線封鎖は艦載機も同じだとして、暗黒ガスと無線封鎖下の中で、誘導機なしで第一戦隊までたどり着けるか？」
「その点につきましては八雲より早期警戒機を誘導機として飛ばし、連絡機を導きます」
「だったら、その早期警戒機を連絡機としてロッサへ向かわせた方が

手っ取り早いのではない？」
「成功率を高める事と暗黒ガスの中での飛行と電子機器操作に集中したいので、ガルマン側にも連絡機を飛ばして頂きたい」
「なるほど、分かったわ」
この任務には大勢の人の命がかかっているので、失敗は許されない。
無駄かと思われる行動でも成功率を上げるには積極的に採用し実行しなければならない。
作戦内容が決まり、ネレディア率いる第一戦隊とバーガー率いる第二戦隊と八雲はそれぞれ別行動をとった。

八雲　艦橋
「ミランガル以下の第一戦隊、離れます」
「作戦は暗黒ガスの濃度が上がり、ロッサへ向かうまでだ。それまではランベアには休んでもらおう」
「了解」
「艦長、陽動を確実にするために威力偵察を行ってみてはどうでしょう？」
ティアナが瓢に威力偵察を具申する。
ミランガル以下の第一戦隊が敵に見つかる前に敵に自分たちの存在を認識させようと言う思惑もあった。
「・・・よろしい、やってみるか。通信長、ランベアに発光信号」
「はい」
瓢はティアナの意見を採用し、八雲単艦で威力偵察を行う旨を伝える。

ランベア　艦橋
「艦長、八雲より発光信号です」
「ん？八雲は何と言っている？」
「はっ、『本艦はこれより敵艦隊へ威力偵察を行う。各艦は所定の宙域にて待機されたし』・・・以上です」

「威力偵察だと？」
「単艦で威力偵察とは・・・地球の軍人は無茶をしますな・・・」
「・・・」
単艦で威力偵察へと向かう八雲をバーガーは神妙な面持ちで見つめていた。

その後、八雲はわざと敵に見つかるような行動をとった。
当然敵としては八雲の迎撃をする。

八雲　艦橋
「敵弾、来ます!!」
「左舷砲雷撃戦用意!!牽制で良い、無理に宛てる必要もないが、出来れば敵に多少のダメージを与えたい!!」
「左舷、本艦より二十度方向に敵戦艦一、護衛艦二隻接近!!」
「攻撃準備良し!!」
「撃て!!」
八雲が撃ったショックカノンは二発、敵戦艦に命中したが距離があった為、かすり傷程度のダメージしか与えられなかった。
「気象状況はどうか？」
「ロッサ付近の宇宙気流の流れが強まり始めました」
「よし、敵勢力の注意は十分に掴めた!!艦首反転、百八十度。最大船速。逃げるぞ!!」
八雲は敵が包囲する前にこの宙域から撤退して行き、ボラー派の艦隊も輸送船団の護衛中と言う事で八雲に追撃の艦を送る事も無く、八雲は無事にこの宙域を離脱した。

ミランガル　艦橋
ミランガル以下の第一戦隊は第二戦隊と八雲と分かれた後、ロッサ付近のアステロイド帯で待機していた。
艦橋ではロッサのスパイ衛星を通じてロッサ付近の宇宙気象を注意深く監視していた。

「司令、ボラー派の通信を傍受しました」
「内容は？」
「はっ、どうも例の艦隊が襲撃を受けたようです」
「フォムトがもう仕掛けたの？」
「いえ、通信の内容から襲撃を掛けたのはどうやら地球の艦みたいです」
　もし、バーガーが襲撃を仕掛けたら通信の内容では『ガルマン・ガミラスの艦隊』と出てくるはずだが、ボラー派の艦隊からは『ガルマン・ガミラスの艦隊』という単語は出てこなかった。
　その為、ミランガルの通信士は襲撃を仕掛けたのが八雲であると判断した。
「暗黒ガスの状況は？」
「宇宙気流が強くなり始めました。ガスが晴れるまでは少なくとも三日はかかるでしょう」
「よし、各艦に下令、全艦ロッサへ全速急行!!我に続け!!」
　ミランガル以下の第一戦隊はロッサへと全速で向かった。
　一方で八雲から威力偵察を受けたボラー派の艦隊は陣形の再編成と被害状況の確認で進撃の一時中断を余儀なくされた。

　ツェザレー　艦橋
「どこの星の艦か分からないが、まさか本艦にキズを負わせるとは・・・」
「攻撃もさることながら、操艦も大したモノだ」
「まさか、先日の輸送船団を壊滅に追い込んだと言う例の戦闘艦ではないでしょうか？」
「しかし、今回の奴の動きからして本気で我々を攻撃してきたわけではなさそうだ」
「とすると、威力偵察・・・って事ですか？」
「ああ・だが、これで奴らの目論見が読めたぞ」
「目論見？」
「ああ。囮を使って我々をロッサ近海から誘いだし、その隙に別動隊

が動き、ロッサにいる上陸部隊を撤収させるつもりだろう」
「ロッサの上陸部隊を撤収？」
　ノヴォッキーは八雲の不自然な行動から別動隊が居り、その別動隊の目的がロッサに居るガルマン・ガミラスの上陸部隊の撤収だと見抜いた。
「しかし、あのガルマン・ガミラス軍が撤収するとはどうも考えにくいのですが・・・」
　副官は撤退を良しとしないガルマン・ガミラス軍はそう簡単に撤退をするのか疑問だった。
「いや、ロッサでの作戦は既に戦略上の重要さを失っている。東部方面軍は今、ボラー連邦領内への侵攻作戦を行っており、バジウド星系での戦闘はガルマン・ガミラス本国軍よりもむしろ、裏切り者のガルマン派の同盟軍が行っている。自国民を見捨てるようなことがあれば、国民、同盟軍に不信を招きかねないからな」
「な、なるほど・・・」
「国民の不信が募れば、シャルバート教の信者がテロを扇動しかねない。そうなれば国内平定でボラー連邦領内侵攻作戦なんて頓挫する」
「しかし、敵の目的が判明したのであるならば、みすみすロッサの上陸部隊を敵の本国へ還すのですか？」
「まさか、そんなことはさせん。敵の目的が判明したのであるならば、そこを利用する」
「と言うと？」
「輸送船は一時、後方に下げて艦隊を二分する」
　ノヴォッキーは機器を操作してモニターに自身が立てた作戦を表示して説明する。
「囮の艦はロスチラフ級と護衛艦部隊で足止めをし、本艦を含めて残りの艦隊で側面と後方から挟み撃ちにして、短期間で殲滅した後、ロッサの上陸部隊を収容した救援部隊を上陸部隊諸共殲滅して潰す」
「承知しました」
「行くぞ!!全艦発進!!敵艦隊は上陸部隊諸共すべて宇宙の藻屑にしてやるのだ!!」

ボラー派の艦隊もガルマン・ガミラスの救援艦隊＋八雲の殲滅の為に行動を開始し始めたのだった。

百九十二話　救援任務そのⅡ

バジウド星系にてボラー派の輸送船団を攻撃し、壊滅させるも被弾して補修が必要となった八雲。

八雲と敵輸送船団の攻撃を共闘したガルマン派の惑星ゼス所属のＵＸ－２３４の母星である惑星ゼスにて補修と乗員たちの休養を行う八雲。

そんな中、バジウド星系内にあるボラー派の惑星、ロッサにて同惑星に上陸したガルマン・ガミラスの陸上部隊はロッサ軍の思わぬ抵抗と反撃を受け、旗色が悪く戦況はガルマン・ガミラスにとって不利となった。

東部方面軍、ガルマン・ガミラス本国はロッサからの撤退を決め、直ちにロッサ上陸部隊の撤収の為に救援艦隊が編成された。

その救援艦隊はロッサへ向かう前に惑星ゼスに立ち寄った。

救援艦隊の指揮官はかつてシャンブローにて、まほろばと共闘した経験があるネレディアとバーガーであった。

ネレディアとバーガーに再会したギンガは二人が何故、惑星ゼスに立ち寄ったのかを訊ねると、ネレディアはギンガに自分たちの任務を話すと、ギンガはその任務の参加協力を申し出た。

八雲艦長の瓢もギンガからの提案を受け、八雲はガルマン・ガミラスの救援艦隊と共に惑星ロッサへと向かった。

その惑星ロッサでは、ガルマン・ガミラスが上陸部隊の救援を行おうとしている中、ボラー派でも惑星ロッサへ増援を行おうとしていた。

ボラー派の動きは救援へ向かったガルマン・ガミラス側もキャッチしていた。

その為、救援艦隊はロッサ上陸して上陸部隊の収容を行う部隊とボラー派の艦隊の注意をひく陽動部隊の二手に分かれた。

しかし、ガルマン・ガミラス側のこの作戦についてボラー派の艦隊側もガルマン・ガミラスの目的に気づいていた。

ミランガル　艦橋
「僚艦を見失うな!!全艦見張りを厳にせよ!!」
　惑星ロッサ近くの暗黒星雲から宇宙気流の影響でロッサ付近の宇宙空間には暗黒ガスが漂っており、ミランガル以下の第一戦隊はその暗黒ガスへ突入し、敵の目を欺いく秘匿行動をとる。
「左舷に味方艦!!」
「面舵一杯!!」
　ミランガルの左舷側・至近距離をクリピテラ級航宙駆逐艦が通り過ぎていく。
「ふぅ～・・・・間一髪でしたね」
「ああ、味方艦のロストもそうだが、衝突でもすれば二重遭難になってしまう。操艦、見張りには十分に注意しろ」
　しかし、第一戦隊が暗黒ガスへ入っていく姿はボラー派の偵察機によって捕捉されていた。

ツェザレー　艦橋
「偵察機より、入電!!『ゲルバデス級航宙戦闘母艦、ゼルグート級一等航宙戦闘艦以下の中、小艦艇が暗黒ガス内へ突入を確認す』：以上です」
　通信士はツェザレー艦長のノヴォッキーへ報告をいれる。
「フフ・読み通りだな。ガルマンの連中、何処かの同盟国の軍艦も援軍に来ているみたいだが、先ほどの艦は別動隊でゲルバデス級とゼルグード級の艦隊をロッサへ向かわせるつもりだな。しかし、小細工をしても無駄だ。ロッサの上陸部隊もこのロッサ近海に展開しているガルマン・ガミラスの艦隊は全て葬るぞ!!」
　ノヴォッキーはまず、ロッサへ向かった第一戦隊をロッサの軌道上で待ち伏せを行い、ロッサに展開していたガルマン・ガミラスの陸上部隊諸共殲滅しようとしていた。
　ボラー派の艦隊に動きが読まれているとは知らず、陽動を担う第二戦隊では・・・・

ランベア　艦橋
「バーガー司令。八雲より発光信号です」
　無線封鎖中なので、艦隊内でも連絡は発光信号にて行われており、八雲がランベア宛てに発光信号を送って来た。
「内容は？」
「はっ、『本艦はこれより敵艦隊を強襲し、攪乱す。ランベアは当宙域に留まり連絡機発進態勢を整えられたし』・・・以上です」
「ったく、威力偵察の件と言い、今回の強襲と言い、そう言う役目は本来、俺の役目なんだけどな・・・」
　ドメル幕僚団に居た頃から、戦線における切り込み隊長を務めて来たバーガー。
　その時は手柄と同時に自身の死に場所を捜していたが、今となっては大勢の部下を指揮する一司令官の立場となっているので、そう簡単に以前の様な行動はとれなかった。
「飛行長、スヌーカーの準備だ。連絡機以外にも艦載機を展開する必要もある。ランベアに搭載されているスヌーカー全部をいつでも出せるようにしておけ」
「了解」
　バーガーはランベアに搭載されているスヌーカー全機の出撃準備をさせた。
　しかし、ランベアはガルマン星解放戦役後に大改装を行っており、第二甲板には４８０ミリ三連装陽電子カノン砲塔を二基、３３０ミリ三連装陽電子ビーム副砲を六基、そして甲板自体を改造し、魚雷発射管を二十四門、ミサイルランチャーを三基兼ね備えたガイベロン級の戦闘空母と言える改装をしたが、第二甲板に砲塔を乗せた為、従来のガイベロン級と異なり、搭載機数は大きく減らしていたが、火力に関しては戦艦並みで機動力についても機関を改装した為、通常のガイベロン級よりもあり、切り込み攻撃を得意とするバーガーとしてはこのランベア重武装ユニット搭載型は使い勝手が良い艦であった。
「とは言え、暗黒ガスがこの辺まで流れてきていやがる。これだと

レーダーも役には立たねぇな・・・おい、スマルヒは積んでいるだろう？」
「はい」
「よし、八雲の前方に搭載している全てのスマルヒを展開して援助してやれ」
バーガーは急ぎスヌーカーよりも先に偵察機であるスマルヒを出撃させる。
「何かあれば、ランベアよりも八雲に情報を送ってやれ」
そして、出撃させたスマルヒには敵の情報はランベアよりも先に八雲へ情報を送るように指示を出した。

八雲　艦橋
「暗黒ガスが此処まで来ている」
「近距離レーダー使用不能」
「早期警戒機を出せれば良いんですが・・・・」
バース星で受け取ったのは、早期警戒機は一機だけであり、その早期警戒機はランベアからの連絡機をロッサに居る第一戦隊への案内機の役割があるので、飛ばすに飛ばせない。
「ランベアより艦載機の発艦を確認!!」
「なに？もう連絡機を出したのか？」
「・・・いえ、艦載機より発光信号。どうやらランベア所属の偵察機の様で、哨戒活動で本艦をサポートしてくれるみたいです」
「そうか・・・偵察機へ返信。『索敵に感謝する』だ」
「了解」
八雲はランベアの偵察機に感謝の言葉を発光信号で送った。
その後、スマルヒは八雲から先行して哨戒活動を行い、その内の一機がボラー派の艦隊を発見する。
「偵察機、三号機より発光信号。敵艦隊を発見したとのことです」
「艦数は？」
「ロスチラフ級四隻と護衛艦六隻を中心とした小規模の艦隊です」
「例の新型戦艦の姿は？」

「確認できていません」
「艦数がミランガルから送られて来た艦隊数よりも少ないとなると、まさか残りの艦はロッサへ向かった第一戦隊を攻撃に向かったのでは？」
「こちらが戦力を二分していることに気づかれたか・・・・敵には鋭い勘か頭のキレる者が居る様だ」
「どうしますか？無線封鎖を解除してミランガルに警告を送りますか？」
「いや、だとしたらこちらは尚更派手にやるぞ。第一戦隊へ向かった敵艦隊が慌てて引き返すくらいにな」
　瓢はこのまま偵察機が捕捉した艦隊を短時間で殲滅し、第一戦隊へ向かった新型戦艦を含む残りの艦隊が第一戦隊よりも自分たちへ引き寄せる策をとった。
「総員に告ぐ、本艦はこれより敵艦隊との戦闘に入る。本艦を囮として第一戦隊のロッサ突入の援護を行う。偵察機各機へ通信『敵艦隊の方位を送ってもらえ」
「通信?通信封鎖を解除なさるんですか？」
「我々は囮だからな。敵さんにはついてきてもらうぞ!!全艦、砲雷撃戦用意!!」
　八雲はショックカノン、ミサイル、魚雷をいつでも撃てる状態にして敵艦隊へと向かう。
　敵の動きはスマルヒから逐次送られる。
「敵艦、右舷方向。距離一万六千宇宙キロ、T字を描いています」
「くっ、暗黒ガスで良く見えない・・・・空間照明弾発射!!」
　ティアナは偵察機からの情報では敵の姿が見えないので、まず空間照明弾を放ち、敵の姿を確認しようとする。
「右砲戦、第一～第三主砲撃て!!」
　空間照明弾で敵の姿がチラッと見え、ティアナは主砲を一斉射する。
　当然ボラー派の艦隊も八雲の空間照明弾から、八雲の姿を確認し、応戦して来る。

「敵艦発砲!!」
「面舵一杯!!最大船速!!」
「敵はT字を描いて来る。ならば敵の前面を駆け抜け、艦尾に向かって突っ走る」
「敵弾、通過!!」
「命中弾なし!!」
いくら空間照明弾やシックカノンの光源からボラー派の艦隊も八雲の存在を確認するも正確な位置ではなかったので、八雲に命中弾を与えることは出来なかった。
「続けて撃て!!どんどん撃て!!」
ティアナは主砲制御室へ連続射撃の命令を下す。
「戦術長、敵の後方に出たらもう一度空間照明弾を撃て、それと探照灯も照射しろ」
「探照灯も・・ですか?ですが、それだと的にされませんか?」
常に光源をつけていると夜間で懐中電灯を振り回し、相手に自分の位置を教えている様なモノだ。
ティアナは瓢にその危険性を指摘する。
「かまわん。敵も照明弾くらいは持っているだろうし、第一戦隊の方に敵の新鋭戦艦がいるならなるべく派手にやって敵には慌ててもらわないとな」
「敵艦、距離を詰めてきます!!」
敵艦隊は先ほどの砲撃で八雲に命中弾を与えられなかった事から八雲に急接近して近距離戦に持ち込もうとする。
「このまま引き付けて仕留めるぞ」
「了解」
「撃て!!」
相手が近づいて来た事を利用して八雲はショックカノンを接近して来るボラー派の艦隊に向かって放つ。
すると、八雲が撃ったショックカノンはロスチラフ級航宙戦艦に命中する。
「うわぁぁー!!」

「艦尾に命中!!」
　被弾したロスチラフ級航宙戦艦の船体には大きな衝撃が走る。
「か、艦長。敵は単艦ですが、この暗黒ガスの中を高速で我が艦隊の後方へ抜けようとしています!!」
「電撃戦はガルマン・ガミラスの専売特許かと思ったが、ガルマン・ガミラスの同盟国にも無茶苦茶な星間国家があるようだな」
「敵艦、探照灯を照射!!」
「なんだと!?この暗黒ガスの中で探照灯を着けただと!?一体奴らは何を考えているんだ!?」
　八雲の動きにロスチラフ級航宙戦艦の艦長は戸惑う。
　しかし、別の艦では、
「敵は自分の居場所を俺たちに教えている。チャンスだ!!光源に向かって攻撃しろ!!」
　八雲が点けた探照灯を攻撃のチャンスと見て攻撃を仕掛けてくる艦もあった。
「左舷、後部に敵弾命中!!」
「技術班、応急修理に迎え!!」
　案の定、八雲に敵弾が命中する。
「ミサイル撃て!!」
　ティアナは敵弾が来た方向へミサイルを放つ。
「ミサイル命中!!敵護衛艦、撃沈!!」
　八雲のミサイルは敵の護衛艦を撃沈した。
「続けて主砲撃て!!」
　探照灯で見つけた敵に対してショックカノンも撃つ。
「命中弾を与えているのに、反撃してきたぞ!!」
「味方の護衛艦が沈んだ!!」
　八雲の防御力と反撃能力を見て驚愕する。
「くそっ、一時艦列を解け!!固まっていると危険だ!!」
　敵は艦列を解き、分散する。
「敵艦、分散し始めました」
「よし、今の内にランベアへ連絡機の誘導の為、早期警戒機を発進させ

ろ!!」
敵が分散行動を取り始めたのを確認し、瓢は早期警戒機の発進を命じた。
「では、艦長。行ってきます」
早期警戒機の操縦にはギンガが志願していた。
ティアナとしては自分が操縦士を務めたかったが、ボラー派艦隊との戦闘がある事からティアナは戦闘指揮をしなければならなかったので、操縦士を務める事は出来なかった。
その為、ギンガがパイロットを志願して通信科から一人、オペレーターとして搭乗する事となった。
ギンガと通信科の隊員は急ぎ格納庫に向かい早期警戒機へと乗る。
「発進!!」
そして、ランベアに向かって早期警戒機は発進した。
「私は操縦に専念するから、レーダーや通信関係については貴方に全ての信頼を寄せるから、頑張ってね」
「は、はい!!」
ギンガは後部座席に居る通信科の乗員を励ましつつランベアに向かった。
「早期警戒機の発艦を確認」
八雲から離れていく早期警戒機の姿が確認され、
「よし、本艦は引き続き、全火器を大盤振る舞いしつつ之の字運動!!敵艦隊をロッサとは別方向へ誘引する!!機関、全速!!」
八雲は引き続き、ボラー派の艦隊を挑発しつつロッサから引き離そうとする。
ボラー派側も当然八雲が陽動を行っていると分かっているが、このままむざむざと逃がしては今後の自分たちの活動に支障をきたす恐れもあり、何より此処まで挑発されて尻尾を巻いていては軍人としてのプライドが許さない。
「全艦に告ぐ、敵艦の動きは明らかに我々をロッサから引き離そうとする挑発行為であるが、このまま敵の好き勝手にしては我々の軍人としての誇りが汚れる。これより本艦隊は追撃を行う!!護衛艦部隊は

前面に展開し、奴を追え!!他の戦艦部隊は我に続け!!」
分散していたボラー派艦隊は陣形を再編成しつつ八雲に追撃戦を仕掛ける。
「いいか、奴を見つけ次第、全力で叩け!!」
「了解!!」
「暗黒ガスのせいで近距離レーダーは使えない。遠距離。中距離レンジに切り替えろ!!ただし、レーダーだけに頼るな!!見張り員を増やして少しでも奴を捕捉する時間を短縮するのだ!!」
暗黒ガスの中を護衛艦部隊は八雲を追っていく。
ボラー派の護衛艦部隊の艦橋では見張り員を増やして八雲を捜し始めた。
その頃、八雲を発進した早期警戒機はランベアの近くまで来ていた。
誤射を防ぐために発光信号と共に味方識別の為に翼を左右に振る、バンク行動をとる。
「地球機を確認!!」
「事前に決めてあった連絡機を誘導する早期警戒機みたいです」
「・・・副長」
「はっ!!」
「しばらくの間、艦と艦隊の指揮を執れ」
「は?」
バーガーは副長に一時的に指揮権を譲渡する。
「ふぉ、フォムト司令、いきなり何を・・・」
副長は当然驚愕するし、何故行きなり指揮権を譲渡するのかを訊ねる。
「地球の艦が頑張っている中で、司令官の俺がランベアの艦橋で突っ立っているだけじゃあ、立つ瀬ないだろうが」
「えっ?あっ、ちょっと、司令官・・・」
そう言ってバーガーはランベアの艦橋を後にする。
バーガー自身最初から連絡機のパイロットは自分が務めるつもりだったらしく軍服の下には既にパイロットスーツを着ていた。

そしてランベアの第一甲板にバーガーとオペレーターが乗ったスヌーカーがエレベーターにて上げられる。
「フォムト・バーガー、発艦する」
そして、連絡機であるバーガーが乗ったスヌーカーはランベアを発艦した。
スヌーカーの発艦を確認したギンガはそのスヌーカーの右隣につけ、スヌーカーへ通信を入れる。
「こちら、八雲所属。早期警戒機、機長の中嶋です」
「えっ？ナカジマ!?お前が操縦しているのか!?」
スヌーカーを操縦していたバーガーは早期警戒機のパイロットがギンガだった事に驚く。
「えっ？フォムトさん!?」
一方でギンガも連絡機のパイロットがバーガーであることに驚く。
「フォムトさん、司令官ですよね!?艦を離れて大丈夫なんですか!?」
「副長に指揮権を一時任せて来た。ウチの副長は優秀だし、いざという時に指揮を執れなかったら、困るだろう。これも成長するための一環だ」
「そ、そうですか・・・」
異星の軍艦の指揮権なので、ギンガには深く突っ込めないし、時間がもったいないので、ギンガはそのまま任務に専念する事にする。
「しかし、俺の方も驚いたぜ。まさか、ナカジマが艦載機の操縦を出来るとはな・・・」
「地球では意外と女性のパイロットって多いんですよ。今回は私がフォムトさんをネレディアさんの下へ案内します」
「ああ、頼んだぜ」
早期警戒機とスヌーカーは敵に見つからないように暗黒ガスの中へと入っていく。
「航空灯の調整には気を付けてね。派手につけ過ぎれば敵に気づかれるし、消し過ぎるとフォムトさんが私たちを見失ってしまうから」
「は、はい」
後部座席に居る通信科の乗員に灯火の調整についての注意をする。

「灯火とレーダーは、何とかなっていますが、副長こそ、操縦は大丈夫ですか？周囲は暗黒ガスですけど・・・？」
通信科の乗員はギンガに操縦について訊ねる。
周囲は暗黒ガスで真っ暗であり、この暗黒ガスの中にアステロイド帯があれば、小さな艦載機など衝突すればあっという間に潰れる。
「ええ、大丈夫よ。私、目の良さには自信があるから・・・」
「は、はぁ・・・」
操縦について『大丈夫』と答えるギンガ。
そんな彼女の眼は普段のエメラルドグリーンから金色に変わっていた。
しかし、ヘルメットのバイザーを降ろしているし、後部座席からはコックピットのギンガの様子を窺う事は出来ないので、ギンガの目の色が変わっていることに気づけるのはギンガ自身だけであった。
（戦闘機人モードなら、暗黒ガスの中でも平気で操縦することが出来る・・・）
（こういう時だけ、自分が普通の人じゃなくて戦闘機人である事が良かったって思うけど・・・）
ギンガはかつて、暗黒星団帝国本星への航海の途中、暗黒銀河を通過する際、ユリーシャと競い合うかのように迫りくる岩塊の位置を報告し合ったが、今回も戦闘機人モードとなった事で、暗黒ガスの中でも迷うことなく早期警戒機を操縦し、尚且つバーガーが乗るスヌーカーを誘導している。
（でも、それって戦闘機人が兵器としての能力を有している事の照明になるんじゃあ・・・）
自分もスバルもクイントから保護された際、クイントから、
「戦闘機人は確かに兵器として研究・開発されたけど、貴女たちは決して兵器ではなく、一人の人間として生きていきなさい」
と、兵器ではなく『ギンガ』と言う人間として生きていくように諭した。
勿論スバルにもだ・・・
だからこそ、自分もスバルも自分たちの出生に対してコンプレック

スを抱きつつも自分たちは人間なのだと強い信念を持ち、これまでの生活の中で魔導師としての力は使っても戦闘機人としての力は使わなかった。
しかし、ギンガはこの世界で軍人となり、大勢の命を守る為にこれで二度目の戦闘機人としての力を使った。
（ううん、魔導師としての力も戦闘機人としての力も破壊する事じゃなくて、守る為の力なんだから、母さんだってきっと分かってくれる筈・・・）
自分が忌み嫌う戦闘機人の力も破壊する兵器としての力ではなく、守る為の力ならば、クイントだって理解してくれる筈だと心の中でそう思い、ギンガはひたすら操縦桿を握りしめ、バーガーのスヌーカーを誘導し続けた。

その頃、ロッサの地表では・・・
陸上部隊、親衛隊が撤収の為の準備を行っていた。
「通信機は念のために最後の間でとっておけ!!」
「機密書類・暗号書類は焼却処分。念入りにな!!」
「生き残っている戦車は最後尾に回せ!!」
「各隊、人員チェックを急げ!!」
ロッサの空には暗雲が広がり、小雪がチラホラと降り始めた中、士官たちの大声と沢山の人が動き回る足音が辺りに響いていた。
「今日が撤退行動日なのだが、本当に大丈夫なのだろうな?」
親衛隊の隊長が陸上部隊の司令官に訊ねる。
隊長が言うように今日がロッサからの撤退日なのだが、未だに撤収用の艦艇がロッサに到着していない。
撤収作業に入っている兵士たちも何だか焦りの色が窺える。
「分かりません。兎も角、輸送艦が無事ならば、地表に降下しつつ決行の打電が入る筈ですが・・・」
「我々は何もできずにただこうして待つだけか・・・何とも歯痒いな」
親衛隊隊長は悔しそうに暗雲が漂うロッサの空を見つめる。
そのロッサに居る陸上部隊を救うべく、ロッサの近海ではボラー派

の艦隊と八雲が暗黒ガスの中で戦っていた。
「集団で一隻を叩くのは武人として気が進まんが、ロッサに展開しているガルマン・ガミラスの勢力を排除する為にやむを得ないか・・・・」
「艦長、前方二千に何か動いています」
「アステロイド帯ではないな?」
「はい、かなりの速度でこちらに接近してきます!!」
「なに!?」
「味方艦が暗黒ガスで針路を見誤ってはいないか?」
敵である八雲は自分たちの先を航行している。
それが反転して戻って来るなんて数においてあまりにも無謀である。
この護衛艦の艦長は友軍艦艇が暗黒ガスで針路を見誤ったのかと思ったが・・・・
暗黒ガスの中からはボラー派の艦とは異なる白い船体をした艦が姿を現した。
「っ!?て、敵だ!!攻撃・・・・」
攻撃命令を下そうとするが、護衛艦よりも先に八雲のショックカノンが火を噴いた。
八雲のショックカノンは護衛艦の艦橋部に被弾し、爆沈する。
「前方に爆炎らしき光源を確認!!」
爆沈した護衛艦の後部を航行していた別の護衛艦が爆炎によって生じた光源を発見する。
「アステロイドにぶつかったのか?それとも敵に命中弾を・・・・」
艦橋員が確認を急いでいると、
前方から艦橋に向かって青白い光が飛んできたと思うと・・・・
凄まじい衝撃は護衛艦を襲う。
艦橋に居た者たちは自分たちの身に何が起きたのかを知る前に一瞬の内に絶命した。
「敵、護衛艦らしき小型艦二隻を撃沈」
「だが、護衛艦はまだ居るぞ。それにほぼ無傷の戦艦部隊も・・・・気を

引き締めていけ」
八雲の艦橋では状況報告があがる。
敵艦隊の捜索には八雲以外にランベア所属のスマルヒが協力しており、引き続き敵艦隊の捜索と攻撃を続けられる。
二隻の護衛艦の爆沈はボラー派の艦隊でも確認された。
「前方に二つの爆炎らしきモノを確認!!」
「先行していた護衛艦の内、二隻と連絡が取れません!!」
「恐らく二隻は追っていた敵にやられたか、同士討ちをしたかのどちらかでしょう」
「・・・」
「前方より高速移動物体がこちらに接近してきます!!」
「っ!?」
護衛艦隊の包囲網を突破して暗黒ガスの中から姿を見せたのは白い船体をした宇宙艦船であった。
「だ、第一、第二砲塔射撃用意!!」
ロスチラフ級航宙戦艦が主砲の照準を八雲に合わせようとした時、それよりも先に八雲の艦首魚雷発射管からは魚雷が発射され、先頭を航行していたロスチラフ級航宙戦艦に命中。
混乱している隙を突き、八雲は艦隊の中に高速で入り込んで来た。
「か、各艦、発砲するな!!同士討ちになるぞ!!」
事態を把握した陽動部隊の指揮官は味方艦に発砲を禁止する命令を下すが、
八雲はお構いなくボラー派の艦に砲撃やミサイルを撃ち込んでくる。
そうなれば、このまま黙ってやられてたまるかと思う艦も当然居る。
「見張り員、敵艦を視認しているか?」
「はい。敵は本艦前方右舷五十度の位置を高速で航行中」
「よし、主砲発射用意!!」
「待ってください、艦長。旗艦より発砲禁止の指令が・・・」
「その一瞬のためらいこそが奴の狙いだ!!このまま無抵抗のままやら

れてたまるか!!此処は奴の裏をかいてやる!!攻撃だ!!」
「距離、千二百!!主砲発射準備完了!!」
「あっ、待ってください!!味方艦が射線上に!!」
「撃て!!」
　射撃命令と味方艦が射線上に入って来たのはほぼ同時のタイミングだったので、放たれたショックカノンの発射中止命令は当然間に合う筈も無く、この砲撃をしたロスチラフ級航宙戦艦のショックカノンは別のロスチラフ級航宙戦艦に命中してしまい、同士討ちをする事となった。
「敵艦、我が艦隊の側面を全速力ですり抜け、暗黒ガス帯より離脱を図る模様!!」
「くそっ、このままではすまさんぞ!!全艦追撃!!」
　護衛艦を複数撃沈され、同士討ちと言う無様な醜態をさらし、その上逃げられたとなれば、粛清モノだ。
　ボラー派の艦隊は再び八雲を追って暗黒ガス帯の外へ出始めた。
　暗黒ガス帯の中で八雲が奮戦して居る頃、ランベアでは・・・
「・・・飛行長」
「はっ!!」
「スヌーカー隊の出撃は既に完了しているのだな?」
「はい。全機、発進準備は既に完了しています!!」
「よし、全機発艦させろ」
「えっ?」
「このまま何もせずに待機していては地球の艦にも司令官にも合わせる顔がない。味方を救う為、本来ならば我々が行う筈の仕事を地球の艦が行っているのだ。ならば、我々もこのまま此処で待機しているだけでなく、戦線に参加して味方撤退の援護にまわるぞ!!」
「りょ、了解。攻撃機隊、全機発艦せよ!!」
「攻撃機発艦後、本艦も前進し、帰還する攻撃機隊を迎えに行くと同時に戦闘にも参加するぞ!!全艦我に続け!!」
　ランベア以下の第二戦隊は八雲が引きつれてくるボラー派の艦隊へ向け、前進を開始した。

八雲、ランベア以下の第二戦隊がボラー派の陽動艦隊との戦闘に入ろうとしている中、ランベアを発艦したバーガーのスヌーカーと案内を務めた八雲の早期警戒機はミランガルの近くまで来ていた。
「近くにゲルバデス級の艦影を確認!!」
「ネレディアさんのミランガルで間違いなさそうね」
早期警戒機がミランガルを確認したのと同じようにバーガーの方でもミランガルを確認した。
「ネレディ、俺だ」
「フォムト?貴方が来たの!?」
ネレディアはギンガ同様、連絡機のパイロットにバーガー自身が来た事に驚く。
「ボラーの奴ら、どうやらこちらの作戦に気づいているみたいで、艦隊を二分している。ロッサに近くには例の新型戦艦も含まれている可能性が高い。大半は第二戦隊の方に行ったが、一隻とは言えあの新型戦艦の能力が分からないから油断は出来ねぇぞ」
「分かったわ。連絡ありがとう・・・連絡機からの情報ではこの近くに例の新型戦艦がいるみたいね」
「いかがいたしますか?」
「今更此処で見捨てる訳にはいかないわ。ロッサには収容用のゼルグード級と護衛の駆逐艦数隻をロッサに降ろして、ミランガルを含めて残りはロッサ近海で警戒態勢」
ネレディアは上陸部隊の撤収と共に新鋭戦艦を迎え撃つ態勢をとる。

一方で、八雲を追ったボラー派の艦隊が暗黒ガスを出るとそこには複数のスヌーカーが待ち受けていた。
「敵機です!!」
「くそっ、ガルマンの奴らにはめられたか・・・対空戦闘用意!!」
ボラー派の艦隊は対空戦闘を行うが、そんな中で彼らに更なる追撃者が現れる。
ランベア以下の第二戦隊が現場に到着したのだ。

スヌーカー隊は護衛艦よりも戦艦であるロスチラフ級を真っ先に狙い、ランベアも同様にロスチラフ級へ４８０ミリ砲を撃ちこんで来る。
「ノヴォッキー艦長、陽動部隊より救援要請が入っております」
「なんだと？本艦はこれよりロッサの上陸部隊諸共ガルマンの奴らを叩きに行くのだぞ!?」
「ですが、艦載機が襲来し、苦戦中とのことです」
「くっ、やむを得ん。取舵十度、味方艦隊の救援に向かうぞ」
ツェザレーと二隻のアポストロ級航宙戦艦はロッサの近海から友軍艦艇救援の為に向かう。
「本艦上方より爆撃機、急降下!!」
ノヴォッキーが救援に向かっている最中もボラー派の艦隊はスヌーカー隊の急降下爆撃に晒されていた。
「面舵一杯!!躱せ!!」
「ツェザレーはまだ来ないか!?」
「現在、全速でこちらに向かっている様です!!」
「くっ、それまで此方が持つだろうか・・・」
スヌーカー隊の急降下爆撃、ランベア、八雲の砲雷撃で友軍艦艇は次々と数を減らしていた。
そして、ロスチラフ級航宙戦艦が二隻にまで撃ち減らされた時、ようやくノヴォッキー率いるツェザレーと二隻のアポストロ級航宙戦艦が現場に到着した。
「味方が・・・」
「来るのが遅かったか・・・」
（やはり艦隊を二分したのは間違いであったか・・・）
最初から艦隊を二分せずに八雲、ランベアの第二戦隊かロッサへの救援に向かった第一戦隊のどちらかに的を絞り込むべきだったと今更ながら後悔するノヴォッキー。
「こうなればせめて一矢報いてやるぞ!!戦闘用意!!」
ノヴォッキーが戦闘命令を下令した時、後方からショックカノンが

飛んできた。
「後方より砲撃です!!」
「なに!?」
ノヴォツキーは思わず後ろを振り向く。
後方からは戦闘甲板を開いたミランガルと三隻のデストリア級航宙重巡洋艦、二隻のクリピテラ級航宙駆逐艦、三隻のリンチェント級航宙駆逐艦が砲撃をしながら迫って来た。
ツェザレー以下の艦艇が友軍艦艇との合流を図ろうとした際、バーガーからの連絡を受けたネレディアは警戒態勢から追撃態勢へと変えてツェザレーを追いかけたのだ。
送り狼となった第一戦隊は後方よりボラー派の艦隊を砲撃して来た。
更にミランガル以下の砲撃だけではなく、
「行くぞ!!ナカジマ!!」
「はい!!」
ギンガは早期警戒機に装備されている機体上部のレドームと下部のレドームの両方をパージして、バーガーの乗るスヌーカーと共にツェザレーに対して急降下爆撃をしかける。
「くらえ!!」
「強化対艦ミサイル発射!!」
二機の艦載機の急降下爆撃を受けたツェザレーに大きな振動が襲い掛かる。
「うぉっ!!」
「うわぁぁー!!」
「ひ、被害状況を報告せよ!!」
「エンジン出力３０％低下」
「補助エンジン機能停止!!」
「艦が傾きつつあります!!コスモジャイロがうまく働きません!!」
「砲塔動力伝導機能６５％低下!!」
「艦内の各所で火災が起き始めています!!」
「か、艦長、我が艦隊は前後両方向から挟み撃ちにされてしまいます

!!」
艦のコンディション、戦況共にボラー派にとっては不利となっている。
「て、撤退だ・・・」
ノヴォツキーは苦々しく撤退命令を下し、ボラー派の艦隊は大破したツェザレーを庇うように撤退し始めた。
「敵艦隊、撤退行動に入りました」
「追撃しますか？」
「いや、我々の本来の任務はロッサに居るガルマン・ガミラスの上陸部隊の撤収支援だ。敵艦隊の殲滅ではない。それに、手負いの艦隊は何をするか分からない。此処は敵の増援が来ないか警戒態勢のみで良い」
瓢は、追撃戦は無用とし、警戒態勢だけとした。
ネレディアとバーガーも瓢と同じ判断であり、追撃命令は下さなかった。
やがてロッサから陸上部隊と親衛隊を乗せたゼルグード級が上がって来ると友軍艦艇と合流し、この宙域から撤退した。
そして、八雲へ帰還したギンガは・・・
「あぁ～!!またレドームをパージして!!って、しかも機体下部のレドームまでパージをして!!」
帰還した早期警戒機の状態を見た整備長は絶叫する。
「副長!!どういうことですか!?先日の哨戒任務の時よりもヒドイことになっているじゃないですか!!」
「ご、ごめんなさい。でも、急降下爆撃を仕掛ける際、レドームがあると速度が上がらなくて・・・」
「そもそもこの機体は早期警戒機であって通常のコスモタイガーではないんですよ!!」
と、整備長からお説教を受ける羽目になってしまった。
ロッサ救援艦隊はひとます惑星ゼスへ向かう航路をとった。
「今回は何とか無事に切り抜けられたわね」
ゼスへ向かう途中、ネレディアはバーガーに通信を入れた。

「ああ、今あのゼルグード級には大勢の仲間が生きている。新型戦艦を含む敵を殲滅することは出来なかったし、この報告を聞いて文句を垂れる奴も居るかもしれねぇが、俺は断言できる。この戦いは俺たちの勝ちだとな」
「それにしても連絡機で来た時はホント驚いたわ」
「地球の艦が俺たちの仲間の為に戦っていたんだ。多少の無理をしてでも動かなければ立つ瀬ないだろう？」
「それってやっぱり、地球の艦にあの子が乗っていたから？」
「さあな、そこはお前さんの想像力に任せるよ」
「もう、肝心なところは、はぐらかすのね」
　そう言うネレディアであったが、バーガーとの付き合いが長い彼女だからこそ、バーガーの照れ隠しなのだとちゃんと察していたのだった。